ハイスクールD・

K／K

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦い、散っていった一人の悪魔
記憶を無くし、力を無くした世界で
再び、戦いへと身を投じる

・この作品は、ハイスクールＤ×Ｄと真・女神転生Ⅲとのクロスオーバーです

目次

旧校舎のディアボロス編

悪魔、再誕 ―― 2
日常、転機 ―― 26
邂逅、認識 ―― 51
妖精、参上 ―― 74
楽観、痛感 ―― 99
鉄拳、電撃 ―― 125
休養、次戦 ―― 148
祈願、氷息 ―― 172
覚醒、思惑 ―― 209
幕間　魔法、少女？ ―― 239

戦闘校舎のフェニックス編

特訓、不安 ―― 258
低頭、参戦 ―― 284
合宿、傍観 ―― 312
雪精、登場 ―― 339
王様、号泣 ―― 369
試合、開始 ―― 417
撃破、乱闘 ―― 448
魔剣、譲渡 ―― 481
脱落、決意 ―― 508
熱波、抜剣 ―― 535
完敗、本音 ―― 563
禁手、新月 ―― 600
幕間　妖精、探検 ―― 653

月光校庭のエクスカリバー編
聖剣、復讐 681
原点、亀裂 715
暗躍、神父 747
斬傷、口車 777
交渉、懐夢 804
双剣、決闘 836
決断、賭博 869
召集、集合 906
行動、惨状 938
番犬、夢幻 972
光弾、襲来 1001
心眼、外道 1028
記録、不屈 1064
払拭、旧知 1096
情報、新植 1128
統合、歪愛 1155
左眼、聖魔 1197
両断、業火 1230
圧倒、助力 1261
視線、勝敗 1272
区切、新入 1363
幕間 召喚、??? 1408
停止教室のヴァンパイア編
会議、馬鹿 1467
鈍感、白龍 1501

風評、僧侶 ―― 15
南瓜、面妖 ―― 34
講義、強制 ―― 45
談笑、虐殺 ―― 60
会談、急襲 ―― 83
強者、激突 ―― 93
魔人、襲来 ―― 117
黄金、混戦 ―― 139
横槍、悪化 ―― 189
巨象、因縁 ―― 194
激突、解放 ―― 199
才能、凌駕 ―― 204
覚醒、爆発 ―― 209
終戦、授名 ―― 214
異界合宿のヘルキャット編
友人、先生 ―― 247
適当、出発 ―― 322
冥界、防衛 ―― 324
修行、地獄 ―― 360
興味、異変 ―― 418
焦燥、再起 ―― 532
連携、前兆 ―― 591
休憩、宴会 ―― 642
交流、逆鱗 ―― 647
焦炎、焦土 ―― 704
責務、岐路 ―― 751

決意、闘志 ―――― 33
会場、奇襲 ―――― 61
選択、進路（前編） ―――― 33
選択、進路（中編） ―――― 21
選択、進路（後編） ―――― 32
信頼、戦闘 ―――― 78
攻防、不退 ―――― 32
継戦、勝敗（前編） ―――― 23
継戦、勝敗（後編） ―――― 33
尽力、全力 ―――― 19
試合、終了 ―――― 33
一歩、暗澹（前編） ―――― 15
一歩、暗澹（後編） ―――― 83
幕間　もしも、可能性 ―――― 30
体育館裏のホーリー編
天界、吹奏 ―――― 28
歓迎、幻痛 ―――― 29
上面、食事 ―――― 88
食事、不穏 ―――― 29
頂点、前夜 ―――― 55
包囲、参戦 ―――― 29
歴戦、一線 ―――― 03
王母、淫母 ―――― 28
愛壊、穢獣 ―――― 47
応用、勇猛 ―――― 27
巡合、右足 ―――― 99
37993753371836793650359835523518348434533418　3395

平行、吸血 ―――― 28
傀儡、冷怒 ―――― 38
復活、吸血 ―――― 60
神罰、力尽 ―――― 90
汚染、素裸 ―――― 138
二重、愉快 ―――― 239
怨念、虚飾 ―――― 372
哄笑、罵声 ―――― 400
悪意、邪笑 ―――― 404
出演、競争 ―――― 408
幕間　会食、裏話 ―――― 418
放課後のラグナロク編
鑑賞、襲撃 ―――― 4237
覗見、盗聞 ―――― 265
失笑、失望 ―――― 442
返礼、高慢 ―――― 432
悪神、魔狼 ―――― 357
申出、切断 ―――― 438
無理、難題 ―――― 134
異名、傷心 ―――― 441
師事、私怨 ―――― 445
劣化、模倣 ―――― 498
開始、先制 ―――― 454
二人、秘密 ―――― 353
相思、相殺 ―――― 460
凍結、引継 ―――― 4668

覇龍、仕込 ―――― 487
雷光、囁声 ―――― 348
戦友、王権 ―――― 444
終幕、弁当 ―――― 804
幕間　少女、求友（前編） ―――― 476
幕間　少女、求友（後編） ―――― 947
修学旅行はパンデモニウム編 ―――― 344
決闘、隠形 ―――― 701
京都、強襲 ―――― 508
忍者、英雄 ―――― 150
歴代、話合 ―――― 495
挑戦、相談 ―――― 015
不穏、有名 ―――― 497
宣戦、布告（前編） ―――― 749
宣戦、布告（後編） ―――― 344
亜種、弦奏 ―――― 903
演奏、強敵 ―――― 549
難戦、参戦 ―――― 654
心折、壊可 ―――― 665
不明、仮名 ―――― 438
白亜、幻夢 ―――― 540
不折、追加 ―――― 953
爆音、静寂 ―――― 805
修羅、合流 ―――― 342
人間、成長 ―――― 530
聖痕、騎士 ―――― 652
―――― 695
―――― 237
―――― 520
―――― 855
―――― 175
―――― 514
―――― 114

聖輝、交換 ―――― 569
意地、助人 ―――― 456
切羽、降臨 ―――― 555
三叉、三変 ―――― 625
死闘、終了（前編） ―――― 558
死闘、終了（後編） ―――― 555
学園祭のライオンハート編 ―――― 565
密約、著名 ―――― 527
闘気、終了？ ―――― 585
大王、疑惑 ―――― 758
準備、不調 ―――― 275
男女、結論 ―――― 801
相談、夕飯 ―――― 577
古傷、既知 ―――― 257
疑心、再戦 ―――― 455
呼水、覚醒 ―――― 717
待機、黒犬 ―――― 623
襲撃、待機 ―――― 662
裁定、黒蠅 ―――― 036
死蠅、拳魔 ―――― 175
魔拳、闘気 ―――― 615
大群、投擲 ―――― 061
魔槍、威圧 ―――― 226
獅子、戦斧 ―――― 096
光明、暗雲 ―――― 660
心傷、克服 ―――― 646
―――― 034
―――― 600
―――― 259
―――― 715
―――― 942
―――― 591
―――― 158
―――― 885

赫龍、再現 ―――― 632
紅拳、王拳 ―――― 863
学祭、日々 ―――― 016
幕間　続・魔法、少女？（前編） 272
6362
幕間　続・魔法、少女？（後編） 6392
進級試験とウロボロス編
自主、朝練 ―――― 655
片鱗、首領 ―――― 0652
脱走、追走 ―――― 2264
乱戦、四巴 ―――― 9064
対話、対談 ―――― 656440
日々、下宿 ―――― 666
特訓、特訓 ―――― 6663
問題、製造 ―――― 7660
受験、試験 ―――― 46576
SLASHD・G編
SLASHD・G―彷徨えるマネカタたち― ―――― 6705
SLASHD・G―四凶と四騎士たち― ―――― 6729
SLASHD・G―クロスオーバーSD・― ―――― 67756752
ハイスクールD・　EX ――――

旧校舎のディアボロス編

悪魔、再誕

闇と光との狭間。
彼が最後の一撃を放ったとき、自らが消失していくのを悟った。
死力を尽くしてもなお足りず、肉体や魂すらも削り尽くしての一撃。
相手に届いたのは分かった。しかし、相手を倒したのかは分からなかった。
すでに彼の五感は失われ、その肉体は崩壊し始めていく。肉体の崩壊に合わせ、魂も壊れ始め、彼という人格もまた崩壊の一途を辿る。
消えていく彼の脳裏に浮かぶのは、いままでの彼の軌跡。
戦いがあった。
喜びがあった。
悲しみがあった。
苦しみがあった。
怒りがあった。
暴力があった。

理不尽があった。
そして、共に歩むナカマたちの姿があった。
泡のように浮かび、消えていく記憶の残滓。消え行く度に一つ一つ彼の中から失われていく。
だが、不思議と彼に後悔の感情は無かった。
消え行く先に天国も無ければ、地獄も無い。そこにあるのはただ純粋な消滅。
やがて、最期の記憶の欠片は失われ、彼の姿もまた一欠片の魂へと変わり果て、この世界から完全に消え失せようとする。
「まだ、失うには惜しいな」
闇の中で、声が響く。
老人とも青年とも少年ともとれるような響きを持つと同時に、何人も膝を屈する程の厳かさを秘めた声。
闇から現れたソレは消え行く魂を包み込む。
「決着をつけることは出来なかった。だが、いずれまたこの戦いは始まることになるだろう」
闇は光を見つめる。
「そのときが来るまで、いまは傷を癒し、眠るといい……来るべき大戦の日まで」

光は離れ、闇は奥底へと沈んでいく。
「暫しの別れだ……『人修羅』よ」
光は消え、闇もまた消えた。

◇

少年は、窓の向こうを見ていた。
外を見ると大きな雲が風によって流れ、その下で小鳥たちが群れを作り羽ばたいている。どこにでもあるような当たり前の日常の風景。しかし、時折考える。
この光景は本当のものなのか、視界を通し映るものは現実的なものでは無く、自らの願望が脳内に映し出して作った虚偽のものではないか――――などと退屈な授業の気分を紛らわせる為に、使い古されたＳＦのような妄想をしてみた。
「……薙……おい、……薙……聞こえているのか！　間薙！」
「……はい？」
教師の声に窓の外を見るのを止め、少年は教師の方へと視線を向ける。
「ぼうっとしてないで、教科書を開く！」
「すみません」

少年は教師に軽く頭を下げて謝罪し、教科書を開いた。
授業が再開され、青年は黒板に書かれた文字をノートに写しながら、いつも通りの日常を過ごす。
少年の名は間薙（まなぎ）シン。
私立駒王学園に通う、ごく一般的な一年生である。

◇

下校時刻となり、シンは教科書や文房具を手早く鞄へとしまい、帰宅の準備をする。
周囲の生徒は部活動の為の準備をしているが、帰宅部であるシンには関係のないことであった。
「やあ、もう帰るのかい？」
シンの耳に爽やかな声が入ってくる。
声の主に目を向けると、そこには学園一の美男子が立っていた。
木場祐斗（きばゆうと）。シンのクラスメイトであり、学園女子の憧れの的とも言うべき存在である。
甘く整った容姿、それに似合った爽やかな笑み、スポーツ万能、成績優秀、男の求め

るものを嫌というほどに詰め込んだ男であった。
　こうしてシンに話し掛けているだけでも、教室の各所から熱烈な女子の視線が木場へと向けられている。
「まあな、他にすることもないしな」
　あまり愛想のいい態度ではないシンであったが、木場は気分を害した様子もなく、いつもの笑みを浮かべ、他愛もない会話をシンと続けた。
　シンはあまりクラスで目立つ存在ではない。また、表情も豊かではなく常に無表情を顔に張り付けているため、話し掛けてくるクラスメイトも少ない。
『大人しいが何を考えているか分からない』
　それが、クラスメイトから見たシンの印象であった。しかし、そんな彼に対して木場は普通に話し掛ける。社交的な性格故に分け隔てなく接する木場。シン自身もそんな木場を邪険に扱うことなく素直に応じ、今のように短いながらも雑談をするのであった。
「それじゃあ、僕は部活があるから。また明日」
「ああ、じゃあな」
　別れの挨拶を済ませ、シンは教室から出ていった。
　教室を出ると、窓の外で三人の男子生徒が複数の女子生徒に追い掛け回されているの

が見えた。必死の様子で逃げる男子生徒たちに、悪鬼のような形相で手に様々な武器を持つ女子生徒たち。

三人の男子生徒には見覚えがあった。クラスは違うがシンと同学年である。いつも三人で行動し更衣室などを覗き見していたり、教室で堂々とエロ本やらＤＶＤなどを交換しあっているなどの話をよく耳にしていた。

女子生徒からは蛇蝎の如く嫌われているらしいが、シン自身は、その直球的な欲望に対する行動は嫌いではなかった。尤も尊敬もしてはいないが。

三人が女子生徒たちから逃げていくのを何となく見届けてから、シンは学校を後にするのであった。

◇

家までの道を歩きながら、シンはぼんやりと空を見上げる。陽が落ち始め、夕陽の赤と夜の黒が混在する空。それを見ながらシンは、機械のように一定のリズムで歩を進めていく。

いつもの通い慣れた道。見慣れた景色に見慣れた空。

『当たり前の日常』

いつものようにそんな言葉がシンの頭に浮かぶ。そして、いつものようにその言葉に言い様の無い違和感を覚えてしまう。今の生活に特に不満も不安も無い。何かとんでもないことを望むような願望も無い。なのに当たり前の日々を過ごす度にシンはいつも言葉に出来ない感覚、まるで異物のようなものを感じていた。

この感覚は物心が付いたときから付き纏い、未だに根付き続ける。

持病のようなこの感覚に内心うんざりしながら道を歩き続けるシン。だが、その足が突然止まった。

コッチダ……

「ん？」

止まった場所のすぐ側には、細い道。人通りが少ないのか雑草が至るところに生え、空き缶などのゴミも散乱していた。

理由もなければ、まず立ち寄る必要の無い道。それなのにシンの足は何故かその道に向けられ、歩き始めた。

自分自身の行動に驚き、止まろうとするが、どういう訳か足は止まらず、シンの意思とは正反対に道の奥へと進んで行く。

「どうなってる……」

コッチダ……

自身に起きた異常に取り乱すことはなかったが、抵抗することも出来ず、どんどんと人気の無い場所へと移動していった。

ある程度の距離を歩いたとき、シンの鼻がある異変を感じた。

錆びた鉄のような臭い。無機質さだけでなくどことなく生々しい臭いも混じり、より一層不快なものと化していた。その臭いが鼻を通って肺に届く度に、シンの顔色は悪くなり、不快さから眉間に皺が寄っていく。

やがて、道は開けた空間へと辿り着く。そこには古ぼけた一軒の家だけがあった。他に民家は無く、臭いはその家から漂ってくる。

コッチダ……

シンの足が今度は、その屋敷に向かって歩き出す。明らかに危険だと理解しているにもかかわらず、シンの四肢は主の意思を無視して動き続け、一歩、また一歩と屋敷との距離を縮めていく。

そして、玄関の前に立つとシンの手はドアノブを勝手に握り、ドアを開く。

開けた瞬間、外とは比べ物にならないほどの悪臭が放たれた。一息吸うだけで、胃を裏返しにでもされたかのような吐き気、肺が腐り落ちそうな錯覚すら覚えるほどであった。

そんな空間にシンの足は無理矢理進まされ、ドアを潜ったとき勢いよく扉が閉まっ

た。それと同時にシンを操っていた力は消え、体の自由が戻る。
すぐにシンは閉まったドアを開けようとするが、どういう理由かドアノブは全く動かない。扉自体を蹴り飛ばしてみるが、蹴った足に返ってきたのは空気でも蹴ったかのような、手応えの無い不可思議な感触。蹴った反動など無く、力のみを吸われたかのような、気味の悪い余韻だけが足へと残った。
立て続けに起こる不可解な現象に暫しの間立ち尽くすが、気持ちを切り替えてドアを開けるのを断念し、仕方なくシンは別の脱出場所を探すべく玄関を上がり、廊下を進んでいく。人が住んでいないのか、電気が点かずかなり暗い。シンは携帯電話を取り出し、その明りで周りを確認する。廊下と二階へ上がる階段。廊下には白い埃が溜り、天井には蜘蛛の巣がいくつも張ってあった。しかし、不思議なことに廊下には、シンが歩く前に何人かが歩いていたのを示すように、大きさが別々の足跡がいくつもあった。足跡の上に薄らと埃がかぶっていることから、ほんの数日前に誰かがいたことを証明していた。
いくつもの足跡を見て、シンの表情が若干険しくなる。
カタン
足跡を見ていたシンの顔が勢いよく上がる。
廊下の奥から物音が聞こえた。

「誰かいるのか……？」

声を掛けてみるが反応はない。しばらく様子を見ていたが変化はなく、シンは物音を確かめるために廊下の奥へと進む。

廊下の奥にはドアがあった。物音の原因を確かめる為、ドアノブを回し僅かにドアを開いた瞬間、全身から一斉に冷や汗が流れ始めた。

ドアの隙間から漂う臭い、既に悪臭で麻痺している筈の嗅覚を通して、シンの本能に危機的信号を発信させていた。何か大きな変化があったわけではない、だが臭いに含まれる僅かな変化がシンに危険を告げていた。

この場から去ってしまいたい衝動に駆られるも逃げ場所は無く、シンは奥歯を強く噛み締めると勢いに任せてドアを開いた。

ドアの向こうにあったのは居間であった。明りのない中、携帯電話の光と目を凝らし周囲を確認する。窓は雨戸まで閉めているため外の光は全く入らず、入り口のすぐ近くにはスイッチがあり、試しに点けてみるが、廊下と同様に明りは点かなかった。

居間へ一歩二歩と慎重に進むシンであったが、三歩目にして足が何かにぶつかった。携帯を向けてみるとそこにあったのはソファーの端。さらに照らしてみると明りの先に人の足が入り込んだ。

「……あの、すみませんが……」

驚きの声を飲み込み、声を掛けてみるが、返事はない。携帯の明りを徐々に下から上へと上げていく。照らされていくことで相手の恰好から女性であることが分かる。
「すみませんが……」
再度、声を掛け女性の顔を見ようとしたとき、シンは絶句した。
女性の首から上は切断されていたからだ。
「ッ！」
心臓の鼓動が恐ろしく速まり、携帯を握る手が汗ばんでいく。
およそ生涯でまず見ることのない、人の惨殺死体。
この時、シンは何故この部屋に入る前に、あれほどまでに動揺したのかを理解した。この部屋は外の廊下とは比べ物にならないほどの、ある臭いによって満たされていたからだ。
人の本能を脅かす臭い『死臭』によって。
死体などというものを発見した以上、悠長なことなど出来ず、携帯電話に素早く警察への番号を入力し、繋がるのを待つ。二回、三回のコール音の後に相手へと繋がった。
「もしもし！　警察で――」
『コッチダ……』
シンの体が凍りつく。それは警察に繋がらなかったからではない。

携帯電話から聞こえた声が、同時に頭上からも聞こえたからだ。
殆ど反射的に前方へと飛び出す。と同時に先程までシンが立っていた場所に、床を粉砕しながら何かが降り立った。
飛び出した勢いのまま素早く立ち上がり、そのまま降り立ったものを目にし、言葉を失った。
化物、怪物。そんな言葉が似合うような人間ほどの大きさの蜘蛛。長く体毛に覆われた八本の足にまだら模様の腹部。だが、その頭部は蜘蛛のものではなく、人間の女性のものであった。
「冗談みたいだ……」
辛うじて漏らした言葉が、非現実的な光景を目の当たりにしてのシンの心情を表していた。
「アア……美味ソウナ人間ダ！」
その異形の言葉を聞いた瞬間には、シンは駆け出していた。そんなシンの姿を見て異形は鳥肌の立つような声で笑い声を出す。
「逃ゲロ！　逃ゲロ！　人間ハ狩ッテ喰ラウ方ガ美味イ！」
居間のすぐ隣の部屋に駆け込むシンであったが、そこで立ち止まってしまう。
そこには新たに三人ほどの遺体があった。その体は無残にも蹂躙されており、あるべ

きものは無く、体の内にあるものが外へと引きずりだされ、人としての原型を辛うじて留めているものであった。

「くっ！」

躊躇うのは一瞬、背後から来る気配を感じ、その場を急いで離れる。逃げ込んで入った場所は暗くて見えにくいが、闇に少々目が慣れたシンは、そこがキッチンであることに気付く。何か使える物は無いかと素早く確認するシン。その近くでは愉快そうに笑う怪物の声がしていた。だが、追いつこうと思えばすぐに追いつける距離にもかかわらず、怪物の追いかけてくるスピードは非常にゆったりとしている。

狩る獲物に対してわざと猶予を与えて足掻きを愉しむ。そんな怪物の意図を察し、その悪意に吐き気を覚えながら、シンは怪物が姿を見せる前にキッチンを離れた。

「ククク。イイゾ、イイゾ！　モット逃ゲロ！」

キッチンを離れ、再び廊下へと出た。シンは急いで周囲を確認、そこで玄関から入った時に最初に見つけた階段を見つけ、二階へと駆け上がっていった。

◇

怪物の耳に階段を昇っていく足音が聞こえた。その足音を聞き、妖艶な顔に悪意に満

ちた笑みを貼り付け、階段の下へと移動する。

「ココカァ?」

挑発するようにわざとらしい声を出し、相手の恐怖を煽るように一歩一歩階段を踏み、二階へと上がっていく。階段を上がり終えた怪物の前には三つの扉。この家を根城にしている怪物は当然、三つの扉の先に何があるのか知っていた。一番右端の扉は子供部屋、この家の家主の一番下の子供が使っていた部屋。真ん中の部屋も同じく子供部屋、一番上の子供が使っていた部屋である。

怪物は、二人の子供を喰らった時のことを思い出す。

動けないように少々傷を負わせた両親の前で、散々嬲ってから生きたまま子供たちを喰らった。あの時は人の世に出てきて間もない頃だった為、中々人に対する加減が分からず、子供たちを喰らった後に両親たちが死んでいることに気づき、人間の脆さに嘆いた。たかが両手足を落としただけで死ぬことはないだろうに、と。そんな子供の両親が使用していた寝室が一番左端の部屋である。

「サテ、ドコニ隠レタノヤラ」

怪物が一番右端の部屋の扉の前に立つ。

「ココカァ……?」

扉を開くが、そこには誰もいなかった。だが、怪物に落胆の色は無い。何故なら、ど

の部屋に獲物が逃げ込んだのか、もう既に判っていたからだ。ならば何故にこのような無駄なことをするか、一言で済ませるならば『演出』である。一つ一つ逃げ場が潰され、真綿で首を絞めるようにじっくりと獲物の恐怖を煽る。それがこの怪物の狩り方であった。

「ナラバ……ココカァ！」

真ん中の部屋の扉を開けるが、当然そこには誰もいない。怪物は寒気を与えるような笑い声を上げながら最後の部屋の前にたった。

「ドウヤラ、ココミタイダナァ……」

ドアの向こうに居る獲物が今頃浮かべている恐怖と絶望に歪み崩れた表情を想像し、怪物は下卑た笑みを浮かべ、ドアに前脚を触れさせると中の人間を煽る為にわざと音を立てて擦る。

「ハハハハハ！　狩リノ時間ハモウ終ワリダ！」

ドアを開け勢いよく中へと入る――ことは出来なかった。何故なら開けたドアのすぐ前には、狩るべき獲物が待ち構えるようにして立っていたからだ。

怪物の想像に反し、獲物の表情に恐怖も絶望の色も浮かんではいない。無表情ともいうべき感情を廃した顔、だがその瞳は紛れもない怪物に対する敵意が轟々と称するほどに満たされていた。

予想外の獲物の行動。いままで無抵抗の人間を狩ってきた怪物に驚きを与え、僅かな思考の空白を生み出させた。獲物はその僅かな隙を狙い、怪物の濁った眼に己の牙を突き立てた。

◇

「ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！」

鼓膜を震わす、怪物の不快な絶叫。激しく頭部を揺らし、自分の眼に突き刺さった凶器を取り去ろうと必死に抗うが、刺すシンもそうはさせまいと床を蹴り、更に凶器を押し込む。

シンが密かにキッチンで手に入れた包丁を使った起死回生の反撃。上手くはいったが、眼球に刃先が三分の一程入っていても怪物の抵抗は弱まらず、ますます激しさを増していく。

シンも最後の機会を逃すまいと、怪物の頭部と掴むと渾身の力で引き寄せ、それと同時に包丁を持つ手を捻り、傷を激しく抉る。一際高い声で怪物は苦鳴を上げ、傷口から重油のような黒く粘性のある血らしき体液を流し、シンの手を汚す。

「アガァァァッァァッァァ！　調子ニ乗ルナ人間ガァァ！」

怪物の絶叫を聞いたと同時にシンの体が一直線に飛び、寝室の壁へと叩き付けられた。壁面は大きくひびが入り、一部が壁から剥離する。その壁の破壊がシンの受けた衝撃の強さを物語っていた。

「……ッ！」

怪物の放った、たった一撃でシンは声も出ないほどの痛みを受けていた。突き出された怪物の前足の一撃は胸部へ叩き込まれ、容易にシンの骨を砕き、内部の臓器に多大な損傷を与えていた。張り付けられた壁から、膝から崩れ落ちる様にして仰向けに倒れる。壁に叩き付けられた衝撃で頭も強く打ち、目の焦点もままならない。

「喰ッテヤル！　足ノ先カラ順番ニ喰ラッテヤル！」

聴力だけは健在で、怒り狂う怪物の声はしっかりと聴こえてくる。

（ここで……終わりなのか……）

怪物と自分との圧倒的な力の差、自由の利かない体。ただ喰らわれるのを待つしかない現状。

自らの最期が怪物に喰い殺される、そんな冗談の様な言葉を頭に浮かべ、内心笑う。だが間もなくそれが現実となる。

「悪魔ニ傷ヲ負ワセタコトヲ後悔サセテヤロウ！」

（……悪……魔……？）

『恐れ……坊ちゃまは……興味……』

聞き覚えのない老婆の言葉が脳内で木霊する。怪物の言葉を引き金に突如として記憶に無い光景が浮かぶ。

『人に過ぎない……特別な……』

『……動いてはいけません……痛いのは一瞬だけです』

シンを見て話す、見知らぬ二人の人物。片方は喪服を着て顔を隠した老婆、向けられた言葉が途切れ途切れに聞こえてくる。もう一人は老婆と手を繋ぐ、黄金の様な髪に人形を思わせる整いすぎた容姿をした少年。両者とも一度たりとも会ったことも無い。にもかかわらず、シンはこの光景に強い既視感を覚えた。

（走馬灯とは違う……覚えが無い筈なのに……何故知っている……）

少年が何かを掴み、シンの眼前へと垂らす。それは生物のように蠢く物体。

『……これでキミはアクマになるんだ』

最後にはっきりと少年の声がシンの脳裏に響いた。

「悪魔……」

気付くとシンは右手に何かを握り締めていた。軽く開くと、そこには一見すると『マガタマ』のような物体、しかし、持つ手にはその『マガタマ』から生物のような鼓動が伝わってくる。

前触れもなく現れた物体。だが、意外にもシンはこの物体に対し、恐れも不気味さも抱かなかった。

「悪魔か……」

シンは握る『マガタマ』を口元まで運び――

「それも選択か……」

――躊躇うことなく飲み込んだ。

この日、この刻、この瞬間。

悪魔は再び生まれ落ちた。

◇

「……ん？」

シンは気付くと、家の前で呆然として立っていた。すっかり日は落ち、空には月と星が浮かんでいる。

（何をしていたんだ？）

少なくとも日が落ちる前には、学校を出て家に帰っていた筈だが、日が落ちたまでの記憶が一切ない。

「……今何時だ――」

携帯を取り出そうとして、あることにシンは気付く。自分の手にべったりと付着した黒い液体の存在に。

いつの間にか付いた液体に全く心当たりが無かったシンであったが、いつまでも付けておくわけにもいかず、洗い流す為に家へと入っていくのであった。

色々と首を傾げるようなことがあったが、こうしてシンの一日は終わった。

◇

同時刻、某所。

リアス・グレモリーは、その高貴な顔立ちに困惑を混ぜ、目の前に広がる光景を見ていた。

事の発端は、大公から届いたはぐれ悪魔――主を裏切り、野犬同然の害獣へと成り下がった存在――の討伐依頼だった。標的となったはぐれ悪魔は、民家を巣にし、そこに獲物を魔力を用いて呼び寄せ捕食をするという手口であった。

依頼を受けたリアスは下僕の悪魔たちを連れて、その民家へと向かい、内部へと入っていった。しかし、ここで予想外なことに、はぐれ悪魔の縄張りに侵入したにもかかわ

らず、一切の敵の行動は見られず、リアスは、下僕の一人を二階へと向かわせ、後の二人を連れて一階を調査した。

一階の犠牲者の惨状に、リアスは痛みに耐えるかのような表情を浮かべ、まだ見ぬはぐれ悪魔に怒りを燃やす。供にいた二人の下僕――姫島朱乃（ひめじまあけの）と塔城小猫（とうじょうこねこ）――もまた、主であるリアスと同様の気持ちであった。

「部長。……ちょっと来てくれませんか」

二階を調査していたもう一人の下僕がリアスを呼ぶ。その声には驚きが含まれていた。

二人を引き連れ二階へと上がり、一番左端の部屋の中を見たとき、一瞬息を呑む。

そこにあったのは、標的であるはぐれ悪魔――だったものであった。蜘蛛のような足は、全て胴体から離れ、部屋中にばら撒かれてあり、腹部と胴体、そして頭部も全て分離されて部屋に無造作に放置されてあった。

「祐斗……これは……」

二階を最初に調査した下僕――木場祐斗は、目線を鋭くして現場の状況から冷静に分析し、自分の考えを述べた。

「恐らくこれは、全て素手で行ったみたいですね……切断された部分は力尽くで捩じ切ったみたいです。断面部分がそのせいで無茶苦茶になっています。そして――」

木場は半壊した頭部を見る。
「――あの頭部、分かり辛いかもしれませんが、よく見ると拳で殴打した跡がありました」
「素手でここまで……でも、どうしてわざわざ……？」
リアスの知る限り、はぐれ悪魔を敵視する者は少なくはないが、どの戦い方にも当てはまらない。現場の状況からリアスは、恨みや憎しみといった負の感情を感じられず、そういったものとは無縁な、どこか本能的なものを感じていた。
「一体誰なのでしょうね？　手掛かりも無いみたいですし」
「それなんですが、手掛かりがないわけじゃないみたいです……」
朱乃の言葉に木場は困惑した表情を浮かべて、手に持った物を皆の前に出す。
「これは……！」
「出来れば……ただの偶然であって欲しいです」

◇

「やあ、おはよう、間薙君」
朝、登校途中に木場がシンへと挨拶をする。シンは、そんな木場を見て、僅かに目を

見開いた。
「……ああ、おはよう」
　いつもと様子の変わらない木場の姿。だが、シンは木場に対して今まで感じたことのない、形容し難い違和感のようなものを覚えた。つい昨日までの木場からは感じなかったもの、他に周りにいる人間からは全く感じられない、言葉に出来ない違いであった。
「なあ、木場――」
「ん？　何だい？」
「――いや、なんでもない。気にしないでくれ」
　雰囲気が変わったな、と言うつもりであったが、あくまで個人的な感覚であった為、変に思われると予想し言うのを止め、言葉を濁す形となった。
「あっ！　そうだ君に渡すものがあったんだ！」
　そう言うと木場は鞄からあるものを取り出し、シンへと渡す。
　それは駒王学園の校章が描かれた生徒手帳であった。思わずシンは学生服の上着のポケットに手を当てると、そこには有るはずの感触が無かった。
「いつの間に……すまないな。木場」
「間薙君……これが何処にあったか知っているかい？」
　その一瞬、木場の視線が鋭いものとなる。浮かぶ笑みは変わらない。だが、その量る

ような眼だけは、普段の木場祐斗とは異なるものであった。

「……教室とかじゃないのか？」

その視線にほんの僅かの間、言葉を詰まらせるものの、シンは真正面から受け止め、言葉を返す。

「……正解！　昨日は体育の授業があったからね。そのときに落としたのかもしれないね」

そう言って笑う木場からは、鋭さが無くなりいつもの木場祐斗へと戻っていた。

「そうか……礼に何か奢る。何がいい？」

「えっ！　悪いよそんな……」

「借りは返す主義なんだ」

二人は、そのまま会話をしながら校舎へと入っていく。その後ろ姿をリアスは離れた場所で見定めるようにその碧眼で静かに見つめていた。

間薙シンの運命は、ここで一旦静止する。次に運命が動き始めたのは、ここから数か月後のことであった。

日常、転機

季節は変わり、学年も変わり、そしてクラスメイトの面々も大きく変わった。そして、シン自身にも大きな変化があった。

幼い頃より彼を悩ませていた謎の違和感、それがある日を境に突如として消失した。このことはシンにとって喜ばしいことであったが、それに代わる新たな悩みも出来た。

今度は、何故か人に対して奇妙な違和感、あるいは気配といっていいものを感じるようになった。この新たな感覚で分からないのは、全ての人間ではなく、極一部の人間に対してのみ感じていた。シンの身近な人間でその気配を感じたのは元クラスメイトであり友人ともいえる木場、そして、木場と同じオカルト研究部へと所属しているリアス・グレモリー、姫島朱乃、塔城小猫、他にも複数の生徒からも感じていた。

名を挙げた人物は、学園でも知らない人間はいないほどの有名人であるが、そういった人を引き付けるオーラといったものは全く異なる、どこか人とは擦れた超越的なものであった。

一体自分の身にどんな変化があったのだろうか、表面上は静かに、しかし、内側では重く悩むシン。そんな彼の考えを遮断するかのように男の歓喜の声が、耳へと飛び込ん

でくる。

「すげぇ！　これは！　おおおおぉぉぉぉ……！」

声の方向に目を向ければ、どう考えても教室で見るようなものではない本を広げ、興奮に鼻息を荒くしている三人の男たち。机には戦利品のように卑猥なＤＶＤなどが山積みとなっている。丸刈り頭の男の名は松田（まつだ）、眼鏡を掛けているのは元浜（もとはま）、そして、最初に声を挙げ、三人の中で最も名の知れた男が兵藤一誠（ひょうどういっせい）。三人とも悪い意味でこの学園で有名な人物たちである。

男女の比率が３：７のほぼ女子が占めるこの学園において、一切周りを気にせずにエロ本や１８禁ＤＶＤの貸し借りをする、その神経の図太さには、シンも呆れ半分感心半分であった。一応、クラスメイトになる前に何回か噂を耳にしていたが、実際に見ると何とも言えない気分へとなる。

ふと、シンの視線に気付いたのか、一誠は見ていたエロ本から目を離し、シンの方を見る。

「あぁと……見る？」

「気持ちだけ受け取っておく」

エロ本を指差す一誠にシンは軽く手を振り、丁重に断る。その途端、クラスの女子たちの怒声が響く。

「木場君のお友達の間薙君がそんな本、読むわけないでしょ！」
「このど変態ども！　変態の道に引きずり込もうとしないで！」
「エロガキ！」
「ほんと！　最低！」
容赦の欠片もない女子の罵声。それに対し、今度は松田が吼えた。
「木場の友達がどうしたぁ！　エロ本を回し読んで友情を深めるのはなあ！　古来から日本に伝わる由緒正しい男の儀式だ！　それが理解できないような女子は去れ！　去れ！　それとも無理矢理理解させてやろうか！」
その後もギャアギャアと女子たちと松田たちが口論していたが、シンはそんな騒がしい光景を見ながらも、このクラスも悪くはないな、と密かに思う。
少しだけ、シンの胸の奥にある悩みは忘れられた。

◇

ある日の放課後、いつも通りに学校を後にするシン。校門を出た辺りで、一誠、元浜、松田のいつもの三人と、見慣れない制服を着た女性が何やら会話をしていた。女性の隣に立っている一誠は顔をだらしなく緩ませ、勝ち誇ったような余裕に満ちた表情をし、

対照的に松田と元浜はこの世の理不尽を嘆くかのような、驚愕と絶望に満ちた悲壮な表情をしていた。

「なんでこんな美少女がイッセーの彼女なんかにいいいい！」

「世の中のシステムが反転したとしか思えない……。イッセー、まさか犯罪でも起こしたのか？」

とても友人に向けて言うものとは思えない言葉を叫ぶ松田と元浜。しかし、一誠にとっては負け犬の遠吠えに等しいらしく、お前らも彼女作れよ、と余裕の言葉を返し、彼女を連れてその場を離れていく。後に残された松田と浜松は、死人のような目で去って行く二人を見ているのであった。

共に歩く二人とすれ違うシン。シンの姿に気付いたのか、一誠の方からシンへと声を掛ける。

「よぉ！　帰りか？」

「まあな、そっちは……彼女か？」

シンが尋ねると一誠は顔を破顔させ、機嫌よく隣に立つ女性を紹介する。

「そう！　俺の彼女！　夕麻ちゃん、こっちはさっきの奴らと同じ、俺のクラスメイトの間薙シンっていうんだ！」

「そうですか、初めまして！　イッセーくんの彼女の天野夕麻（あまのゆうま）です」

そう言い笑顔で軽く頭を下げる夕麻。黒く長い髪にバランスのいい肢体、艶と初々しさを両立させた顔立ちは、十人に問えば十人が美少女と答えるであろう。しかし、シンが夕麻に感じた第一印象は、それらとは異なる真逆のものであった。

容姿や態度が気に入らなかったわけではない。夕麻という女性が纏う見えない感覚に対し、シンは強い拒否感を覚えた。学園で見てきた人たちとは質の異なる感覚、内に毒を含んでいるかのような、触れることを躊躇わせるものがあった。

「じゃあ！　俺は、これから夕麻ちゃんと行くところがあるから、またな！　引き止めて悪かった」

「さようなら。間薙くん」

二人はその場を去ろうとし――

「兵藤」

――シンの言葉で足を止める。

「ん？」

「気をつけろよ……いろいろと物騒だからな」

「え？　ああ、うん」

「大丈夫ですよ。いざというときなったらイッセーくんが助けてくれますから。ねぇ、イッセーくん？」

「も、もちろんだよ！　夕麻ちゃん！」
微笑み、腕を絡ませる夕麻に興奮する一誠。二人はそのままシンに別れを告げ歩き去っていった。
去り行く二人の後姿を見るシン。その胸には言いようのない不安がざわめいていた。

◇

数日経ったある日、登校途中のシンは、同じく登校中の一誠の姿を見て、内心大きく動揺した。数日前まで一般の生徒たちと変わらない筈であったのに、今の一誠は、木場やリアスなどといった人物たちと同じ気配を纏っていた。
唐突な変化に一体何があったのかと気になり、シンは一誠に近づく。一誠は異様に日の光を気にしながら歩いており、何度も空を見上げては露骨に顔を顰めていた。その為、シンの接近にも気付いていない。
「兵藤」
「うお！　な、なんだ、間薙か！」
「おはよう」
「あ、ああ、おはよう」

突然声を掛けられたことによほど吃驚したのか、若干声が裏返っている。そんな一誠をシンは観察するようにジッと見る。心なしか顔色が優れないように見えた。
「少し、雰囲気が変わったな」
「えっ!?」
シンの探るような言葉に一誠の顔色が変わる。それは、シンの言葉に心当たりがあることを示していた。
「あのな、実は――ゴメン！　やっぱ、なんでもない！」
「そうか、分かった」
シンと一誠は特別親しいという間柄ではない、顔を会わせれば挨拶ぐらいはするといったぐらいの関係である。それゆえにシンは話すことを躊躇い、隠そうとする一誠の様子にそれ以上踏み込んで質問することはしなかった。
「まあ、話す気になったら、いつでも話に来ればいい。解決は出来ないかもしれないが、気晴らしぐらいにはなる」
「わりぃ、サンキューな！」
その後、一誠は確かめたいことがあると言い、一人先に教室へと去っていった。
再び一人となったシン。すると今度はシンに声が掛かる。
「やぁ、おはよう。間薙くん」

「木場か、おはよう」
朝に相応しい爽やかな挨拶をしてくるのは、シンの元クラスメイトの木場であった。シンとは一年の時からの付き合いであり、二年になってクラスが別々になっても交流が断たれることはなく、互いに友人と呼べる立場にあった。
「今、走っていったのって間薙くんのクラスメイトかい？」
「ああ、兵藤一誠……知っているか？」
似たような気配を持つ木場に対し、あえて一誠の名前を出し、相手の反応を確かめるように尋ねるシン。
「知っているよ。彼って結構、有名人だから」
しかし、木場に目立った反応は無くあっさりと躱された。尤もシン自体、一誠のある意味での有名人ぶりは知っているのでこうなることは予想の範疇であった。
「おはようございます。木場先輩、間薙先輩」
声をする方に目を向けると、そこには一見、小学生かと見間違える程の小柄さの少女がお辞儀をしていた。
「おはよう、小猫ちゃん」
「おはよう、塔城」
少女は木場と同じ、オカルト研究部に所属し、一つ下の学年である塔城小猫であった。

その体格、容姿からなる小動物的な可愛さから、一部の特殊な趣味を持つ男子生徒や女子生徒に絶大な人気を誇っている。シンとは木場を通じて知り合っており、少なくとも顔見知り以上の関係だった。

「そういえば、兵藤くんと一緒に話していたけど、彼とは結構親しいのかい？」

「意外です。間薙先輩と兵藤先輩が知り合いなんて」

木場のシンに対する質問に、小猫は無表情ながらも多少の驚きを混ぜた声を漏らす。

「そこまで親しいわけじゃない。まあ、よくある世間話みたいなものだ」

詳しい話の内容ははぐらかし、三人で下駄箱の前まで適当な話をしながら歩いていく。やがて下駄箱前で小猫と別れ、木場とは教室前で別れた。

教室に入ると一誠がいつもの友人二人と話しているが、少々様子がおかしい。一誠が困惑して話しているのとは逆に、二人は冗談でも聞いているかのように軽く笑っている。

席に着いたシンに一誠が気付くと、困惑した表情のまま近づいてきた。

「な、なあ間薙……お前って、天野夕麻ちゃんってしっているよな……？」

「この間紹介してきた、お前の彼女の名前だろ？　それがどうし――」

シンの言葉が終わるよりも早く、一誠はいきなりシンの両肩を掴んだ。

「やっぱり！　やっぱり居たよな！　俺の彼女！」

必死な様子で叫ぶ一誠。その声でクラス中の視線がシンと一誠に集まってくる。
「元浜も松田も知らないって言うし！　携帯番号も消えてるし！　それに――」
「分かった。とりあえず落ち着け」
興奮する一誠を宥めるシン。そんな両者を見て、クラスのあちこちでは何やら女子たちがヒソヒソと話し合い、キャーキャーと言い合っている。
「ホームルームも始まるし、話の続きは休憩時間に聞く。それでいいだろ？」
「わりい……頼む」
さっきと打って変わって、声が弱々しい。天野夕麻という少女の件で、一誠自身かなりショックな出来事があったのが見て取れた。
一誠がシンから手を離すのとちょうど同じタイミングで担任教師が教室へと入ってきて、朝のホームルームが始まった。

◇

休憩時間になるとシンと一誠は共に教室を出ていく。教室内で話せば先程のように周囲の注目を集めてしまうことを危惧してであった。目指す場所は、屋上付近の階段の降り口、そこならば今の時間、人が来る可能性が少ない場所であった。

屋上付近まで移動すると、シンは階段へと腰掛け、一誠もまたシンと同じく腰掛けた。
「改めて話を聞くが、彼女と何があったんだ？」
「実は――」
一誠はシンに自分の身に起こったことを全て話す。初めて天野夕麻とデートをしたこと、そのデートの終わり際に彼女から『死んでくれないかな』と言われたこと、その彼女の背中から何故か黒い翼が生えたこと、彼女が自分の持つ何かを危険視し、彼女によって命が絶たれたこと、そして、死んだと思ったらいつの間にか蘇ったことを。
「夕麻ちゃんと連絡を取ろうにも携帯番号やメールアドレスとか全部消えてるし、元浜や松田に夕麻ちゃんのことを聞いても知らないってよ……初めはふざけてるのかと思ったけど、どうやらマジっぽいし……」
シンも一誠が二人に彼女を紹介し、嫉妬で悶えている姿を目撃している。また、元浜と松田の性格上、彼女という存在を無視するという行為は似合わないと考えていた。
「どうりで、あんなに必死だったわけか」
「正直、間薙が知ってるって言わなかったら、俺は自分が異常者になったと思ったかもしれない」
「少なくとも、俺はお前が彼女を紹介したのを覚えてる。お前は正常だ」
少しだけ、一誠の顔に生気が戻った。

「一体、何が起こったんだろうな？」
「正直、話を聞くだけだと全く分からないな」
「ああ……初めて出来た彼女だったのに……夢のハーレムへの記念すべき第一歩だったのに……せめて、せめてエッチなことの一つもしたかった……！」
「お前の頭の中もよく分からん」
　煩悩に塗れた泣き言を漏らす一誠に流石に呆れた様子のシン。
「まあ、そんな事を言えるぐらいなら、大丈夫だろう。これからどうする？　彼女を探すのか？」
「ああ！　このままじっとしてられないしな！　片っ端から調べてやる！」
「当てはあるのか？」
「とりあえず、夕麻ちゃんが着てた制服の学校を探す！　元浜や松田に大体の制服の情報を教えれば、すぐに特定出来るはず！」
「そうか……手を貸そうか？」
「いや、大丈夫だ！」
　シンの提案を一誠は断る。
「話を聞いてくれただけでもスッゲェー楽になったし、これ以上頼ったら流石に悪い。後は自分で何とかするよ」

「分かった」
　一誠の決意にシンはこれ以上することは相手の決意に水を差すと判断し、簡素な答えを返した。
「まあ、何かあったらいつでも話は聞くさ、前にも言ったが解決することは出来ないが、話し相手ぐらいにはなる」
　そういうとシンは立ち上がる。
「そろそろ休憩時間も終わりだな」
「よし！　じゃあ行くか！」
　一誠も立ち上がり、二人は教室へと戻っていくのであった。

◇

　一誠の天野夕麻探しは、それから数日間は特に目立った進展は無かった。制服から学校を調べ上げて実際に行ってみたらしいが、在校生の中に天野夕麻という少女は存在せず、この結果、天野夕麻への手掛かりは呆気なく断たれてしまった。その後は地道に足で探していたらしいが、厄介なことに天野夕麻に関する記録は写真一枚も無いため案の定上手くはいかず、結局の所、完全に停滞した状態へとなってしまった。

そんな状態の一誠は現在、教室内で悪友二人に囲まれ、二人が持ってきたご自慢のお宝を机の上に積まれていた。

シンも横目で一誠たちの様子を見ていたが、テンションの高い二人に比べ、一誠は今ある悩みのせいか表情に明るさは無い。そんな一誠を励ますためか、松田が自宅で秘蔵のコレクションの鑑賞会を提案、元浜もそれに賛成し、二人そろって実にいやらしい笑みと笑い声を出していた。

初めは乗り気でなかった一誠であったが、二人に触発されたのか、声を張り上げ『今日は無礼講だ！』と言って二人の提案に賛同するのであった。

（さすがだな）

盛り上がる三人を見ながら、シンは内心、松田と元浜の二人に感心する。もし、自分が二人の立場であったのなら、あのように奮い立たせることも出来ずに終わっていたと思えた。長年の友達だからこそ、互いの性格を知っているからこそ出来る励まし方であった。

思春期特有の欲望によって更なる結束を得た三人。だが、その三人が窓の方を向いたとき、時を止められたかのように停止した。

三人の目線につられて、シンもまた窓の外に目を向けた。

窓の外にあったもの、それは真紅の美であった。

リアス・グレモリー。この学園に通う者なら知らないものは誰一人いないと言っても過言では無い、学園の象徴とも言っていい存在であった。腰まで伸びた、見るものを振り向かせる鮮やかな真紅の髪、その対となるかのように白く汚れのない無い肌、見るものに嫉妬を通り越して、羨望を覚えさせる高貴な美貌、持つもの全てが桁外れであった。現に彼女が通学しているだけで周囲の人間は、男女関係なく動けなくなり、リアス・グレモリーの時間が動いていた。

シンは、リアスを見て目を細める。確かに容姿は人間離れしている。しかし、それだけではない。身に纏う気配もまた人間離れをしていた。シンがこの学園の中で、何人か気配を持つ人間を見てきたが、その中で、リアスという存在が持つ気配が最も大きく、最も濃いものであった。リアスとも木場を通じて面識があるが、片手で数えられるぐらいの挨拶しかしていない。リアスの持つ巨大な気配にシンが危機感を覚え、意識的に避けてきた結果であった。

不意にリアスが淡く微笑んだかのように見えた。何気なく、その微笑みが向けられた先にあるもの目で辿る。

そこには一誠の姿があった。

（まさかな……）

引っ掛かるものを感じたが、今のシンにはその答えを導く術はなかった。

◇

「ありがとうございました！」

コンビニ店員の声を背に受け、シンは店を出る。その手に持ったレジ袋には大量の缶コーヒーが入っていた。

携帯電話を取り出し、時刻を確認すると、もう十時を過ぎていた。

シンがわざわざ夜に買い物をすることになったきっかけは、自宅の冷蔵庫を開けたことであった。

シンは、いつも冷蔵庫の中にお気に入りの缶コーヒーを何本か買い置きをしていた。いつものように飲もうと冷蔵庫を開くとそれが一本もない。今朝見たときには、まだ一本あったと記憶していたが、それが無くなっていた。

恐らくは、自分がいない間に親が勝手に飲んでしまったのだと推測し、軽く肩を落とす。

落とす。

そのまま諦めるのも一つの選択であったが、毎日の日課のように飲んでいるため、いざ飲めないと分かるともどかしいものを感じてしまう。

――買いに行くか。

そうと決まると、シンは上着を羽織り、近くのコンビニへと足を運び、現在へと至る。

少し冷たい夜風を身に受けながら、散歩がてらにマイペースで歩くシンであったが、その足が突如止まる。

見えたのは、反対側の道を全力疾走する学生服の少年。

「兵藤か……？」

夜の暗がりの中、ハッキリと顔を見ることが出来なかったが、一瞬だけ感じた気配に一誠の姿がシンの頭に浮かぶ。

そのとき、頭上から更なる気配を感じた。一誠の持つ気配とは違い、感じた瞬間に寒気を覚える冷たい気配。ちょうど、天野夕麻と初めて会ったときの気配と酷似していた。

その気配もまたすぐに消え去ってしまったが、代わりに不穏な空気が場に残る。

このまま何も見なかったことにして家へと帰るのは、至って簡単である。シンと一誠は友人という関係ではない、それに不吉な気配を感じたとしてもただの杞憂で終わるかもしれない、行かない理由ならば山ほどある。

だが、それでもシンは走り去って行った一誠の跡を追い、走る。

ただ、黙って何もしないことが出来ない。

それがシンという人間の性分であった。

◇

どれぐらいの距離を走ったのかは分からないが、シンの足はとある公園の前で止まった。その公園からは、一誠と、あの冷たい気配が微かに感じられた。

シンは、迷うことなく公園の中を突っ走る。噴水と思しきオブジェが目に見えた、と同時に目的の人物もそこにいた。

黒いスーツを着て、どういう理由か背中からカラスのような艶の無い黒い翼を生やした男。その男の前で蹲る一誠の姿。

シンは走りながら、手に持ったレジ袋から缶コーヒーを一本取り出し、大きく振り上げ――

「兵藤！」

――投げ放つと同じタイミングで一誠の名を叫ぶ。

シンの声を聞き、今まで背を向けていた黒スーツの男が振り返ろうとした瞬間、男の側頭部にシンの投げた缶コーヒーが直撃した。

「ぐおっ！」

予期せぬ攻撃に男は悶絶する。その隙にシンは男の脇を抜け、蹲る一誠へと駆け寄った。

地面に膝をついた一誠の腹部には、光り輝く槍のようなものが突き刺さり、それが臓器を傷付けているのか、口からは鮮血が溢れている。

「大丈夫か？　俺の声が聞こえるか？」

「ま、間薙か……なんで……ここに……」

途切れ途切れではあるが、会話することが出来るのを確認し、すぐにこの場から逃げ出す為に肩を貸して、立たせようとする。

次の瞬間、シンの耳のすぐ傍を何かが高速で通り過ぎた。

目線だけを背後へと向けると、地面には一誠に突き刺さっているのと同じ、光の槍が突き立てられていた。

「仲間の気配がないと思っていたが――おまえ、その『はぐれ』の仲間か？」

手に光の槍を持ち、敵意と殺気を漲らせる黒スーツの男。未だに痛むのか、空いた手で側頭部を押さえている。

「さあな」

答える気が一切ないシンの態度に、男はより一層怒気を滾らせる。が、何かに気付いたかのように眉を顰める。

「おまえ……人間か？　一体、どういうつもりでそいつを庇う」
「さあな」
変わらないシンの態度に男は短く舌打ちをし、手に持った光の槍を構える。
「まあいい、そいつを庇うならばおまえも同罪だ」
まとめて葬る気か、男の構えた光の槍はより光を強め、輝きが増す。
「逃……げろ」
「……俺に気を遣っている場合か」
一誠の前にシンが一歩踏み出す。
「盾のつもりか？　無駄だ」
男の手から光が放たれる。
眼前へと迫りくる『死』、自分の命を摘む為に輝く光。
だが、それを前にしても不思議とシンの内に恐怖心が湧かない。体は動かず、奔る光も目で追えていないにも関わらず――。
――いつかどこかで感じたような既視感がシンの体内を走る。
『それ』は危機を前にしてシンの命を守る為、本人の意志を無視して無理矢理その体を動した。
胸の奥で何かが蠢いた。

「……なに」
　男の戸惑う声。
　槍はシンへと届かなかった。
　シンの額から数センチ離れた場所で、シンの右手によって掴まれ、その勢いを完全に殺されていた。
「おまえ……」
　男の視線がシンの右手へと注がれる。先程まで変哲の無いただの右手であったはずが、今では指先から手首まで刺青のような紋様が浮かび上がり、それをなぞるように淡い蛍光を放っていた。
　シンは握りしめた槍を地面へ投げ捨てる。握っていた手からは白煙が立ち昇っていた。
「さっきまで……おまえは、間違いなく人間だった……だが、今は――」
　男の声はそこで中断された、いつの間にかシンの隣に立つ人物によって。
「その子たちに触れないでちょうだい」
　夜の中でも、陰ることのない真紅の髪。
「……グレモリー先輩？」

「こんばんは。意外なところで会ったわね」
リアス・グレモリーが何故かこの場に現れた。
「……やはり、グレモリー家の者か……」
リアスの存在を知っているのか、男は怨嗟に満ちた声で呟く。
「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう堕ちた天使さん」
浮かぶ笑みはいつもと変わらない。しかし、その碧眼は絶対零度の如く冷たく、普段の彼女を知っているならば、別人かと思わせる程であった。
堕ちた天使と呼ばれた男は嫌味交じりの忠告をするが、リアスも次は容赦しないと釘を刺す。
去り際に男は自らの名をドーナシークと名乗ると、黒翼を広げ空へと消え去った。
ドーナシークが去ると、リアスは一誠の側へと近づく。このとき一誠の意識があったが、緊張の糸が切れたのか徐々に瞼が閉じていく。
「あら？　気絶してしまうの？　確かにこれは少しばかり危険な傷ね。ねえ、あなた――」
一誠を運ぶのを手伝うよう、シンに頼もうとしてリアスは声を掛けようとするが、シンの顔を見た瞬間、声が止まる。
シンは無表情ではあるが、息遣いは荒く、顔色は青白く染まり、冷や汗が絶え間なく

出続けている。
「……はい……何ですか……」
　手の紋様が消えると同時にシンの膝が折れる。
「ちょ、ちょっと！　大丈夫なの！」
「……大丈夫です」
　近寄って来るリアスを手で制し、体勢を戻して気遣いは無用であることをアピールするが、その死人のような顔色では全く説得力が無い。
　実際、口では強がってみるものの、シンの体内では心臓が今まで体験したことのない早さで鼓動を刻み、肺は何十キロも走った後のように、急速に酸素を欲して過剰に動き続ける。動かす舌すら鉛のように重い。先程まで体中を駆け巡っていた力は消え、後に残ったのは味わったことの無い疲労感のみ。
　徐々に力が抜けていく足を擦るようにして動かし、倒れている一誠の下へと行くが、その動きは蝸牛のように鈍重で、仔鹿のように弱々しい。
「あなた、本当に――」
「大丈夫……大丈夫ですから……」
　頑なにリアスの気遣いを受けないようにするシン。何故それほどまでに彼女を拒むのか。

このような状況にあっても、いまだにシンの根底は彼女を危惧していた。彼女が苛烈なまでに強い力を持つ故に、シンの中にある本能のようなものが、彼女に後を委ねることを拒否する。

獅子に寝姿を守らせる兎は居ない。

しかし、どんなに気丈に振る舞っても、所詮は悪あがき。刻一刻と力が抜け落ちていく自らの体をどうにかする方法は、シンには無い。

「大丈夫――」

シンの視界が暗転する。

最後まで言い切ることは出来ず、糸が切れたかのように崩れ落ち、シンの意識は途絶えた。

地面に転がる、二人の男子高校生。

「仕方ないわね……」

それを見てリアスは短く溜息を吐くのであった。

◇

瞼越しに映る光で、シンは朝だと認識する。

目を開け、起き上がる。買い物に行ったままの服装でいつの間にかベッドで寝ていたらしい。
見知らぬ数々の物。少なくとも自分の部屋ではないことは分かる。半分寝惚けた目で隣を見る。
何故か全裸で眠るリアスの姿。思わず目を逸らす。
同じく全裸の一誠と目が合った。
その場の空気が凍る。
「……ええと……おはよう？」
「……おはよう」
そこには、現状に似つかわしくない挨拶を交わす、間の抜けた二人の男の姿があった。

邂逅、認識

朝。太陽が昇り、夜の間に冷えてしまった空気をその光で暖める。ある者は、一日の始まりに気合を込めているだろう、ある者は、一日の始まりに暗澹とした表情を浮かべているだろう、ある者は布団の中で、いまだに微睡んでいるだろう。

そんな誰もがそれぞれの朝を過ごしていく中での、とある一家のとある一室。

「……」

「……」

「……うぅん……すーすー……」

真ん中に真紅の髪を持った美少女が甘い寝息をたて、両脇には二人の少年――片や全裸――がベッドの上で重苦しい沈黙を作っていた。

「……てかなんで、俺のベッドにリアス先輩と間薙がいるの！　俺裸だし！　先輩も裸だし！　も、もしかして！　お、俺はもう卒業を……！」

ようやく現状を認識し始めたのか、一誠が混乱の勢いのまま、喋り続ける。

「とりあえず落ち――」

「卒業自体は悪くない！　悪くないが――最初が三人でなんて……思い出としては、

ちょっとハード……」

「――よく見ろ。俺は服を着ているだろうが。少なくともお前の考えているのとは違うはずだ」

気を落ち着かせるように言うシンであったが、追い討ちをかけるように次の困難がすぐそこまでやってくる。

「イッセー！　起きなさい！　もう学校でしょ！」

恐らく階段下から聞こえてくる女性の声。続けて男性らしき声も聞こえ、何やら階段付近で会話をしている。声の持ち主は、察するに一誠の両親であることは間違いない。

やがて聞こえる、階段を駆け上がってくる音。一誠の顔色が変わる。

「待ってくれ！　俺なら起きてる！　いま起きるから！」

一誠の必死の声にも聞く耳持たず、容赦なく部屋に迫ってくる。

シンの顔色は変わらなかったが、全身から諦めの色を出し、これから起こることを予想し大人しく受け入れる心構えをしていた。

「うーん……。朝？」

この土壇場において、恐らくこの状態を作った張本人であるリアスが目を覚まし、上体を起こしてその裸体を陽の光の下に惜しげもなく晒す。

それと同時に勢いよく部屋のドアは開かれた。

「おはようございます」
「……初めまして、おはようございます」
リアスは一誠の母を見て、笑みを浮かべた挨拶。シンは目を伏せ、視線を逸らして挨拶。流石にシンも、この現場を目撃した他人の母親を直視することは出来なかった。
時間が停まったのではないかと錯覚してしまうような沈黙。
「アラ、オトモダチモキテタノネ……ハヤク、シタク、シナサイネ」
沈黙を破る、一誠の母の呆けたような声。そのままぎこちない動きで部屋の外へと出て、ゆっくりと扉を閉めた。
一瞬の間の後、凄まじい勢いで階段を下って行く。
「お、お、お、お、おおおお！　お父さん！」
混乱極まった一誠の母の絶叫。気遣うような一誠の父の声も聞こえたがそれでも止まらない。
「イッセーがぁぁぁぁ！　男二人とぉぉぉぉ！　が、外国のぉぉぉ！」
「か、母さん！　母さんどうした！　イッセーがまたなにかしてたのか！」
「国際的三身合体いいいい！　イッセーがぁぁぁぁ！」
「か、母さん！　何があった！　母さん！　母さぁぁん！」
階段下で行われる夫婦の混沌とした騒動。一誠は両手で顔を覆い、シンもまた会って

間もない一誠の両親に深く同情するのであった。
「随分と朝から元気なお家ね」
そう言うとリアスはベッドから離れて、一誠の机の上に置いてあった自身の制服を取り、その場で着替え始める。男子二人がいる空間の中で、その裸身を一切隠さず。不用心とも取れる行動であったが、当の男子は、一人はその裸身を見詰め、まるで神仏にでもあった僧侶の様に神々しいものを前にするかのようであり、もう一人は完全に顔を逸らし、頑なに見ようとはしなかった。
しかし、やはり年頃の女性の裸体を見続けることに罪悪感を抱いたのか、一誠もまた顔を逸らし、遠慮がちに着替えていることを注意するが、返ってきた答えは『見たいなら見てもいいわ』であった。
その言葉を聞いた瞬間、神託をうけたかのように一誠の顔に衝撃が走り、その言葉の意味を深く噛み締め、言葉の感動を涙という形で表現した。
「お腹、平気？　あなたの右手も？」
リアスの言葉に、一誠は反射的に腹部を触り、シンも自分の右手を見る。一誠の腹部はシンが見たときには確かに槍のようなものが貫通し、大穴を開けていたが一誠の様子からそれが塞がっているのがわかる。シンの右手もその槍を掴んだときに白煙を上げていたが、掌には火傷一つない。

傷のことに触れられたことで、一誠は完全に昨日起きた出来事を思い出したらしく、リアスも昨日の出来事は夢ではなく事実であることを告げた。
「き、傷を負ったはずなのに……」
「私が治したわ、致命傷だったけど、意外なほどあなたの体が頑丈だったから私の力でも一夜かけて治療できたの」
「俺の右手もグレモリー先輩が治したんですか？」
ここで初めてシンがリアスに言葉を掛ける。
「いいえ、あなたの右手に関しては、なにもしてないわ。私は、ひどく体力を消耗していたあなたをここに連れてきただけ、あなたの右手はここに連れてきた段階で、もう治り始めていたわ……不思議ね、あなたの体は。彼の治療は私の眷属だからできたの。裸で抱き合って魔力を分け与えてね」
リアスの言葉に聞き捨てならない部分があったのか、一誠の顔が一気に紅潮する。
「大丈夫よ。私はまだ処女だから」
しかし、見透かすような一言で一誠の顔から赤みは消え、変わりにどことなく安堵したような表情が浮かぶ。筋金入りのスケベである一誠ではあるが、それなりの貞操観念を持つがゆえに、知らないうちに一線を越えることにいささか抵抗があった。それを否定されたことへの安堵であった。

「えっと…その……先輩って何者ですか？」
「私はリアス・グレモリー。そして悪魔よ」
悪魔という言葉に反応し、シンはリアスの方へと顔を向ける。リアスは一誠の前に立ち、その白い指で一誠の頬を撫でていた――下着姿で。再び、シンは顔を背けた。
「そして、あなたのご主人さま、よろしくね、兵藤一誠くん。イッセーと呼んで良いかしら？」
リアスの言葉を上手く飲み込めず、冗談なのか本気なのか分からないまま、目を白黒させる一誠。
「そっちの間薙シンくんもね。あなたも下の名前で呼んでいいかしら？」
「どうぞ、お好きなように」
リアスの方を見ずに答えるシン。表情は変わらないが、その頬は一誠ほどではないが朱に染まっていた。
「さあ！　とりあえずの自己紹介も終わったことだし、イッセー、早くあなたも着替えなさい！　お母様やお父様を待たせてはいけないわ」
軽く手を叩き、切り替えることを促すリアス。一誠もリアスの言葉に釣られて返事をすると、ぎこちない動きで着替えを始める。
「あー……すみません。俺は一旦自宅に帰っていいですか？」

場の空気が若干纏まったときに発せられたシンの言葉にリアスと一誠が同時にシンの方を見る。
「ああ、そうね、ごめんなさい。本当ならあなたは家まで帰すべきだったけど、イッセーも危険な状態だったから、帰す余裕がなくて」
リアスとの会話の中、シンは自分自身に『恥』を感じた。
自分を助けた理由、目的はこの際、どうでもいい。肝心なのは助けられたという事実。
あの場において、差しのべられた手よりもシンは自らの印象で抱いた危機感を優先させた。人の中身は、蓋を開け、触れるまで知ることが出来ない。だが、その結果がこれならば、素直に自らを恥じるしかない。
「……気にしないで下さい。助けてもらって文句なんてありません。兵藤、ここの住所を教えてくれるか?」
「ああ、ここは……」
今いる場所を確認するシン。聞かされた住所は自宅からさほど離れた距離ではないことを知る。
「とりあえず、俺は一度、家に帰ってきます。また、詳しい話は学校で聞いていいですか?」
「かまわないわ」

シンはベッドから降り、扉の前に立つ。
「それじゃあ、グレモリー先輩、兵藤。学校で」
「ええ、また」
「ああ、またな」
挨拶をし、一誠の部屋を出て階段を下りていくシン。その途中――
「あっ」
『あっ』
――一誠の両親と対面。その場に気まずい空気が流れる。
「……失礼しました」
「イ、・イイエ。マ、マタ、イラッシャイネ」
面と向かって話すことが出来ず、誤魔化すように深々と頭を下げ、その場から逃げるように立ち去るシン。一誠の両親も顔面に引き攣った笑みを浮かべて、それを見送るのであった。
一誠の家を出て、足早に家へと帰るが、歩いている間、リアスの言葉を思い出していた。
リアス・グレモリーは悪魔だと自ら言った。シンは、この言葉を自分でも驚くほどあっさりと受け入れていた。彼女に対して、人とは違う気配を感じていた為、心のどこ

かで普通ではないと思っていた部分があったからであった。ならば、彼女と似た気配を持つ者全てが悪魔だということなのだろうか。一誠は勿論のこと、木場、小猫、朱乃、他にも何人もの学園の生徒の顔が浮かぶ。

彼女が言う悪魔がどういうものなのか。本や小説に描かれたような存在なのか。

疑問はそこだけに止まらない。昨晩出会った黒いスーツの男は何者なのか、彼女と敵対する者なのか、敵対する目的は、理由は、一誠を狙った訳は、自分の右手に起きた変化は。考えれば考える程また新たな疑問が湧く。

早朝の人気の無い道を黙々と考え、鬱屈とした状態のシン。独り考える彼の耳に、誰かの声が入ってきた。

あれ？　やっぱり、人間かな？

「――誰だ？」

反射的に周囲を確認するが、周りには誰もいない。周囲の住宅から漏れてくる会話などではなく、明確に自分へと向けられた鈴のような声。

その場で少し立ち止まってみたが、それ以上声は聞こえず、少々の疑問を持ちながらも再び歩き始める。

シンは、このとき気付かなかった。

自分の頭上高くに飛翔する小さな観察者の姿に。

◇

駒王学園の校門を潜り、教室へと向かう生徒たちの中にシンの姿があった。あの後、家に帰ったが、幸いにも両親が不在であった為、朝帰りであることがばれずに済み、無事に登校することが出来た。仮に両親がいたら下手をしたら一日中家に閉じ込められ、家族会議をしていたかもしれないという、もしもの想像をして軽く身震いをする。

学園内を歩いていく中、ちらほらと気になる光景がシンの目に入ってきた。複数の女子や男子が固まり、ひそひそと何かを話している。

内容は断片的にしか捉えることが出来なかったが、『なんであいつが！』『信じられない！』『お姉さまが穢された……』など悲壮や嫉妬、怒りなどが込められた表情を浮かべていたので、余程否定したい事がこの学園で起きたということが容易に想像できる。

教室へと入ると、無数の視線がある一点へと収束していた。視線の中心にいるのは一誠、何故かその足元では、松田と元浜が涙を流し、虚ろな表情で床に四つん這いになっていた。

「よお！　間薙！」

シンに気が付いた一誠が声を掛ける。同時に視線が今度はシンへと移る。その視線

に若干の居心地の悪さを感じながらもシンは一誠の側に寄る。
「おはよう。随分と注目されているみたいだな」
「まあ、今日はリアス先輩と一緒に来たからな……」
「なるほど」
一誠の言葉にすぐさま納得をする。
リアスと言えばこの学園の生徒にとっては高嶺の花。それが悪い噂ばかり先行している一誠とともに登校したとなれば、全ての生徒にとって青天の霹靂に違いない。シンが教室に来る途中で見かけたあの男女のグループは、その現場を目撃した者たちであることを理解した。
「朝、あれからどうなった？　お前の両親は相当取り乱していたが――」
「まあ、その、一応何とかなった……と思う」
曖昧な感じで返す一誠。
「一応？」
「リアス先輩が誤魔化してくれた――悪魔の力で」
他の人間に聞かれないよう悪魔の部分は小声で喋る一誠。何やらリアスが一誠の両親と話し始めた途端、リアスのとんでもない嘘にあっさりと納得していき、何事もなかったかのような状態へとなったという。

とりあえずは大事にならなかったことに安堵し、シンの中で悪魔の力は随分と便利な力であるという認識がされた。
「ああ、それと使いを出すから放課後に会おうって先輩が言ってたな。お前も呼ばれてるぞ」
「分かった」
使いという言葉に誰がここにくるのか、なんとなくではあるがシンには心当たりがあった。
「あと、これ」
一誠からシンにレジ袋が渡される。中を見てみると昨日買った缶コーヒーが入っていた。
「これは……」
「先輩がお前に渡してくれってさ」
昨日のいざこざのせいで今の今まで、すっかりこのことをシンは失念していた。これが目的で買い物に行ったはずなのに。
「悪いな」
そう言って袋から缶コーヒーを一本取り出すと、一誠へと放る。反射的にそれを受け取り、驚いたようにシンを見る。

「礼だ」
「……ハハハ！　ありがとな」
いつの間にか仲良くなっていたシンと一誠の姿にクラスメイトは、誰もが意外なものを見たかのようにポカンとした表情をしているのであった。
時間は経過し、その日の放課後。
シンと一誠の前には学園一の美男子、木場裕斗が立っていた。その姿に一誠は露骨なまでに不機嫌な表情を作り、感情を隠そうとはせずにそのままの態度で、何の用かと木場に尋ねた。
「リアス・グレモリー先輩の使いできたんだ」
「なんとなく、お前が来ると思ってたよ……」
「……僕もなんとなくだけど、君がこちら側に来ると思ってたよ」
互いを見る姿に何故か教室や廊下から、様子を見ていた女子たちの黄色い声が上がる。
「……で？　俺たちはどうしたらいい？」
「僕についてきてほしい」
今度は女子たちの悲鳴。
「いやー！　間薙くん×木場くんのカップリングが汚れてしまう！」

「木場くん×兵藤なんて許せない！」
「いえ、待って！　兵藤×木場くんかも！」
「青いわね……何故、間薙くん×木場くん×兵藤の発想が出ないの！」
シンには理解出来ない言葉を並べ、議論し始める女子たち。
「何を言ってるんだ？　彼女らは」
「知らん！　知る必要もない！　無視だ、無視！」

◇

木場に連れられてやってきた場所は校舎の裏手にある、現在使用されていない旧校舎であった。シンは以前、木場との会話でこの場所に木場が所属しているオカルト研究部の部室があると聞かされていたが、実際ここに来るのは初めてである。場所を聞かされて当初は、何故こんな場所に、と些か疑問に感じたことを思い出す。
先頭を歩いていた木場の足が止まる。木場の立った教室には、『オカルト研究部』という名札がつけてある。
「部長。連れてきました」
到着を告げる木場に教室の中から、入室を促すリアスの声が聞こえる。木場が中に入

ると、続けてシンと一誠も中に入る。
「失礼します」
「ええと、失礼しま……す！」
中に入るとそこには、別世界が広がっていた。天井、壁、目につく所には奇妙な文字が描かれ、中央の床には魔法陣と思しき巨大な円陣が刻まれていた。他にも一部室とは思えない豪華なデスクやソファーなどがいくつもある。そこで二人は、ソファーに座る少女に気付く。
「ああ、お前も部員だったな。塔城」
「こんにちは、間薙先輩」
黙々と羊羹を運んでいた手を止め、シンの方へと向き頭を下げる。
「こちら、兵藤一誠くん」
木場の紹介で小猫が頭を下げ一誠も頭を下げると、再び小猫は羊羹を食べる作業を再開し始めた。
「……なんか俺と間薙との態度に差がないか？」
「日頃の行いの差だろ」
そう言い合う二人の耳に水の流れる音が聞こえる。音の方へと自然と目を向ける二人が見たのは何故か部室内に有るシャワーカーテン。よく見ると女性らしき陰が映っ

ていた。
陰の形からカーテンの向こうにいるのはリアスで有ることが分かったが、リアスが水を止めると、リアスとは別の女性の声が聞こえる。シンには聞こえてきた女性の声に覚えがあった。
カーテン一枚の向こう側でおそらく着替え始めたリアス。じっと見ているのを悪いと思い、誤魔化すように部室のあちこちに視線を向けて時間を潰すシン、それとは逆にリアスの着替えに朝の記憶が刺激され、目を閉じて今朝の思い出を堪能する一誠。その姿に小猫は、いやらしい顔、と呟いた。
「……やっぱ俺の扱い酷くないか？」
「日頃の行いの差だろ」
小声で聞いてくる一誠にシンはどうでもいいように返すのであった。
二人の会話が終わると同時にカーテンが開き、中から制服を着たリアスともう一人の女性が現れる。
姫島朱乃、それがもう一人の女性の名である。長く伸びた黒髪を後ろで束ね、その艶のある顔にはいつも母性に満ちた笑みを浮かべている。年齢以上の色気を纏ったその容姿は、リアスと和と洋の対極の位置にありながらも同じ高みにあり『二大お姉さま』と呼ばれている。

「あらあら。初めまして、私、姫島朱乃と申します。どうぞ、以後お見知りおきを」
艶のある朱乃の声に身を固くして、一誠が挨拶を返す。
「こ、これはどうも。兵藤一誠です。こ、こちらこそ初めまして！」
「うふふ。そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。間薙くんもお久しぶりですね」
「どうも。姫島先輩」
顔を合す機会はそれほど多くはなかったが、シンも朱乃との面識があるため改まった挨拶はせず、軽く頭を下げるのであった。
全員が挨拶を終えたのを確認すると、リアスは歓迎の言葉を述べる、悪魔という立場から。
そして、一誠とシンにソファーに座るよう指示し、それに従って座ると絶妙なタイミングで一誠とシンの前に朱乃が茶を置いた。
「粗茶です」
「あっ、どうも」
「いただきます」
一誠は茶を一口飲み素直に、うまいですと朱乃に言う。シンも飲むが、茶自体あまり飲まないので、美味いのか不味いのかという基準自体が出来ておらず、味がよく分からない。缶コーヒーばかりに慣れた舌を少々情けなく思いながら無難に、おいしいですと

感想を言う。
二人の茶の感想を聞いて嬉しそうに笑う朱乃に罪悪感を覚えるシンであった。
茶を配っていた朱乃もソファーへと座り、部室内の空気が先程とは変わって緊張に満ちたものと化す。
リアスは、一誠とシンを見て言う。自分たちは悪魔だと。
悪魔。一誠もシンもこの短い間に何度も聞いてきた言葉。一誠は半信半疑な表情を浮かべ、シンは表情は変わらないものの、その目は更に真剣味を帯びた。
リアスは次に昨晩会った黒スーツの男を話に出した。
男の正体は堕天使。天使が邪な感情を持ってしまった為に地獄に堕ちて生った存在。太古より地獄で悪魔と覇権と領土を巡って争い、更にそこに共通の敵である天使も含めて、滅ぼし合う因縁のある敵だとリアスは語る。
話があまりに荒唐無稽過ぎるせいか、一誠は話を鵜呑みに出来ず、オカルト研究部の一環と思い、疑いを言葉にするが、次のリアスの言葉でその顔色を変えた。
「天野夕麻」
突如として消えた一誠の彼女。その名が面識の無い筈のリアスの口から出てきた。
一誠の纏う空気が苛立ちを帯びたものへと変わる。彼女が消えてまだ数日しか経ってない一誠には禁句に近く、あまり触れたくも、触れられたくもない話題であった。

リアスは朱乃に指示を出すと、朱乃は懐から一枚の写真を取り出し、その写真をデスクへと置いた。写真に写る人物を見たとき、シンは一誠の息を呑む音を聞いた。

シンの記憶が確かならば、その人物は間違いなく天野夕麻であった。彼女として一誠に紹介されたときよりも写真に写る天野夕麻は大人びて見え、背中には昨晩の男と同じ黒い翼が生えていた。

リアスは言う。彼女は堕天使という存在で、昨晩の男と同類であることを。続けて、彼女の目的は一誠の殺害であることも告げた。

身に覚えのない殺意に理不尽を覚え、一誠は言葉を荒げてソファーから立ち上がり、何故自分がとリアスへと問う。

落ち着くようにリアスは一誠を窘め、天野夕麻が一誠を殺害しようとした理由を口にする。

『神器〈セイクリッド・ギア〉』

それが、一誠を殺害しようとした動機。リアスたちは『神器』とは如何なるものか説明を始めた。

神器とは特定の人間に宿り規格外の力を与える武器であり、悪魔や堕天使を脅かす可能性を秘めたモノ。歴史上の人物も所有していたといわれ、また現代でも世界に名の知れた人間が所有しているという、歴史に名を刻むことができるかもしれない力。

説明が終わると、リアスは一誠に手をかざすように指示をする。リアスの言葉の意図が分からないまま、疑問符を顔に張り付けたまま、とりあえずは指示に従う。次に目を閉じさせ、一番強いと思う存在を想像するように指示した。

「い、一番強い存在……ドラグ・ソボールの空孫悟かな……」

一誠の出した名前は、シンにも聞き覚えがあった。漫画をあまり見ないシンでも知っている程の有名なキャラクターである。

リアスは、そのキャラクターの最も強いと思う姿を想像するように言い、そしてその姿をこの場で真似るよう言った。

その言葉に一誠は、愕然とした表情で周囲を見る。誰もが真剣に一誠を見ている中で、一人漫画のキャラクターの真似を全力でする。一般的な神経を持つ者にとっては精神的拷問に等しい。

「ほら、早くなさい」

催促するリアス。一誠も覚悟を決めたのか、開いた両手の手首を上下に合わせ、腰だめの形を取り、全身全霊の叫びと勢いで両手を前へと突き出す。

「ドラゴン波！」

人が、人という三次元の存在が全力を込めて二次元の存在を真似するとき、笑いを誘うのではなく涙を誘うものだということをシンはこのとき初めて知った。

しかし、次に起こる光景にシンの目が見開かれる。

突き出した一誠の左腕が、真紅の光を放ち肘辺りまで覆っていく。放たれた光は徐々に形を成していき、光が完全に消えたとき、赤い籠手が一誠の左手に装着されていた。指先まで真紅の金属が覆い、手の甲の部分には宝玉がはめ込まれ、戦闘に使用する物としては絢爛な印象を受ける装飾が施されていた。

自分の左腕の変わりように、驚きの声を出す一誠。

「それが『神器』あなたのものよ。一度ちゃんとした発現ができれば、あとはあなたの意志でどこにいても発現可能になるわ……そして、次はあなたよ」

リアスの視線がシンへと移る。

「次はって、間薙も『神器』を持っているんですか！」

「それは分からないわ、彼を調べて見たけど彼が『神器』を所有しているかは分からなかったわ。唯、一つだけ分かっていることがあるの……シン、あなたは『悪魔の力』を持っているわ」

「悪魔の……力」

無意識にシンは自分の右手に触れる。確かに昨晩、シンの右手には得体のしれない力が宿っていた。

「え、え？　『悪魔の力』って……」

「イッセー、覚えてないかしら？　あなたを襲った堕天使の前で確かに彼は悪魔の力を使っていたわ」
「じゃ、じゃあ、間薙は悪魔……なんですか？」
「いいえ、いまの彼は人間よ」
「一体、どういうことですか？」
　リアスの言葉の意味が理解できない一誠。
「正確に言えば、彼は悪魔の力を使う人間、ということでいいですね。部長」
　説明の補足をする木場。
「それが正しいわね。……シン、あなたの力ここで見せてくれるかしら？」
　皆の視線がシンへと向かう。
　沈黙は一瞬。
「いいですよ。――昨日のように出来るか分かりませんが」
　シンは一誠がしていたように右手を持ち上げ、軽く拳を握り、目を閉じる。
「あなたは、もう既に発現をしている。さっきも言ったように必要なのはあなたの意志」
　視界を閉ざしたシンの意識にリアスの声が響き渡る。
「認識をしなさい。あなたの奥にある力を。あなたの存在の一部を」
　自らの奥にある悪魔、それを強く呼び起こすように念じる。やがて胸の奥底が、熱と

痛みに似たような感覚で沸き立つ。

「力を使った後にあなたは倒れてしまったけど、推測するにそれは必要以上の力を引き出した結果による消耗だと思うわ。だから少しずつ、ゆっくりでいいから力を出していきなさい」

リアスの助言に従い、沸き立つ感覚を鎮めながら、それを絞り出して徐々に右手に流し込むような想像を脳内に描く。その想像に従い、流れるマグマのように緩慢な速さで右手へと力が収束をし始める。

胸の奥にあった熱が右手へと完全に移ったとき、シンは閉じていた目を開く。

右手に刻まれた、昨晩と変わらない淡く輝く紋様。

「それが、あなたの力よ」

「これが――――俺の『悪魔』……」

この日、シンは初めて自らの体に宿る『悪魔』を認識した。

妖精、参上

手に持ったチラシをポストの中へと入れ、シンはポケットから携帯機器を取り出す。そこに映っている何かを確認すると前篭にチラシを入れた自転車に乗って、近くにある自動販売機まで移動すると缶コーヒーを一本買い、飲んで一息を吐く。

現在、彼が行っているのは簡単に言ってしまうと勧誘である。悪魔は、人と契約をしてその人の願いを叶える。その代償として、それに見合った代価を得ることを生業としている。

しかし、近代化が進む昨今、態々魔法陣などといった正式な儀式などを行う人間は殆どいなくなり、結果として悪魔側が人間に歩み寄ることとなった。それが、シンが今配っているチラシである。

チラシには『あなたの願いを叶えます』と書かれた上に奇怪な魔法陣が描かれており、そのチラシを使えば誰もが、悪魔を呼び出して簡単に契約を行えるというものであった。一誠も堕天使――天野夕麻に襲われ、瀕死の状態となった際、このチラシをたまたま持っていたことでリアスを召喚し、命を救うために悪魔へと生まれ変わり九死に一生を得た。

しかし、一誠のようなケースは稀であり、ただチラシだけでは、一般人の心を動かして悪魔召喚を行わせるのは難しい。実際、一誠やシンが初めてチラシを見たときの印象は怪しいオカルト、性質の悪そうなカルトといったものであった。

その問題を解決するために使用するのが、シンが見ていた携帯機器である。この機器の画面には欲望を強く持った人間の居場所が表示される。欲望の強い人間を選別することで、配ったチラシから悪魔の召喚を行う可能性を高めるようになっている。

現在シンが小休憩を取っているのは、先程画面を見たとき強い欲望を持った人間を表示するマークが無かったため、そのマークが出るまでの待機である。

何故、シンが悪魔の仕事を行っているか、それは数時間前まで遡る。

◇

一誠、シン、両者の力を示し、リアスから悪魔について軽く説明をされた後、オカルト研究部の面々が改めて自己紹介をすると同時に、悪魔ということを証明するかのように背中から蝙蝠のような羽を生やした。一誠もまた、悪魔の力に触発されたのか背中からオカルト研究部と同じ羽を生やし、それを見て驚いていた。

一応人間のシンは、当然羽を生やすことは出来ず、変わりに一誠の生やした羽を興味

深そうに見て、その羽を掴んでみた。掴んだ羽からは人肌と変わらない温かさがあった。

「や、やめてくれ！　く、くすぐってぇ！」

「悪い」

悶える一誠に謝罪の言葉を言い、シンは掴んでいた手を離した。すると、羽は一誠の体内に納まるように消えた。

悪魔となったことを一誠に自覚させたリアスは、次に悪魔へ転生をした者の義務を話す。それは、転生をさせた悪魔に対する忠誠である。転生をした悪魔は主となる悪魔、一誠の場合、リアスの下僕として生涯を生きなければならない。

望まずに悪魔となった一誠にしてみれば、いきなりのリアスの話に腑に落ちない様子であったが、心の中では短い時間ではあるが、下僕になったという不満に思う心とリアスの下僕となったことを満更悪くないと思う心が吊り合っていたのは彼だけの秘密である。

不満そうな様子の一誠に悪魔になることで爵位を得られ、誰もが成り上がっていくことが可能だという利点を説明するが、一般的な学生のため地位というものに対し、いまいちピンとこない一誠の心を動かすには足らない。

「やり方しだいでは、モテモテな人生を送れるかもしれないわよ？」

誘惑するかのように囁くリアスの言葉。この言葉を聞いた瞬間に一誠の顔付きと目の色は劇的なまでに変わり、隣に座っていたシンが一人分離れる程の迫力が全身から迸る。

詳しい説明を強く求める一誠の様子を楽しげに見ながら、リアスは最初に人間を悪魔にするようになった経緯を軽く説明する。

そもそもの原因は、天使、堕天使との戦争による純粋の悪魔と呼べる存在の激減である。悪魔と悪魔の配合による出生率は人に比べれば著しく低く、このままでは天使、堕天使に対応できなくなることを危惧し、穴埋めとして素質のある人間を取り込むようになった。

しかし、ただ下僕となるだけでは数や質を保つことは出来ない。そこで考え出されたのが実力ある転生悪魔への爵位の贈与。それにより成功や出世をする機会を得たことで転生悪魔を希望する者が増加。世間には正体を隠した転生悪魔が多く存在するような状態となった。

「じゃ、じゃあ！　やり方しだいでは俺も爵位を！」

興奮して尋ねる一誠に、リアスは相応の努力と年月が必要ではあるが可能だと答えると、部室の窓を震わすほどの叫びが一誠から放たれた。

更に興奮した様子で一誠は畳みかけるように、本当に自分にハーレムは可能なのか、

それにいやらしいことをしていいのか、という質問を投げかける。
リアスの答えは、自分の下僕なら可能。
最早、一誠の興奮は限界を突破し、部室外の窓を揺さぶるほどの咆哮を上げる。
その様子に朱乃は頬に手を当て面白そうに、木場は苦笑を浮かべ、小猫は引いた様子で各々見ていた。
「悪魔、最高じゃねぇか！　何、これ！　チョーテンション上がってきたよ！　聞いたか間薙！　俺の夢が！　男のロマンが！　手に届く！」
「少し落ち着け」
目を煩悩で血走らせ、シンへと詰め寄る一誠。その勢いは以前、教室で天野夕麻の話をしたときを上回っていた。
「いまなら秘蔵のエロ本も捨てられ――いやエロ本は駄目だ。アレは駄目だ」
上昇し続けるテンションのまま口走るが、即座に否定。いくら高揚していたとしていてもそういった関連の方では、変に冷静になれるらしい。
一人はしゃぐ一誠の姿に、リアスは楽しげな表情で面白いと評し、朱乃もそれに同意する。
一誠の興奮が上がりきったと見越して、リアスは改めて自分の下僕になるかの同意を尋ねる。

「はい！　リアス先輩！」
　迷いの一切無い一誠の返事。
「違うわ。私のことは『部長』と呼ぶこと。あなたも分かった？」
　一誠、そしてシンにそう指示をする。とここで一誠――
「『お姉さま』じゃダメですか？」
　――と提案。それを聞き、シンは横目で、何を言っているんだこいつは、といった視線で一誠を見るが、当の本人は至って本気の様子。聞かれたリアスも何故か本気で悩んでいるような表情をし、少し間を空けてから、一誠の提案を満更でもない様子で断り、しっくりくるからという理由で『部長』の方の呼び方を選んだ。
「分かりました！　では、部長！　俺に『悪魔』を教えてください！」
　意気込む一誠の姿に満足し、リアスは一誠に寄ると官能的な手つきで、一誠の顎を撫でながら耳朶を溶かすような声で『私が男にしてあげる』と一誠に告げる。
　傍から見ていても分かるほどに、一誠のモチベーションが上がっていく。
「ハーレム王に俺はなる！」
　その上がったモチベーションのままに自らの夢をこの場で宣誓する。その清々しいまでの欲望に満ちた願いに、シンは色々と思うことよりも先に、素直に賞賛したいとさえ思うほどであった。

「それでシン。あなたのことなんだけど――」
「俺もオカルト研究部に入部をしたいんですが、いいですか？」
　リアスの言葉を遮り、あっさりとした態度で入部を希望するシン。躊躇いのないその言葉に、流石にリアスも面を食らった顔となる。
「……随分、返事が早いわね」
「……もしかして、勧誘の話じゃありませんでした？」
「いいえ。あなたさえよければ、私の力になってくれるか尋ねるつもりだったけど……そんなに早く決めていいのかしら？」
「悪魔になって眷属になれという話だったら時間が欲しいですけど、一協力者という立場ならすぐにでも大丈夫です」
　シンの言葉にリアスは嘘を感じず、一瞬考える仕草をした後にシンを見た。
「あなたが私に協力する『目的』は何？」
「まあ、兵藤と同じですね……」
「え！　お前もハーレム王に……」
「そっちじゃない」
　驚く一誠の言葉を真顔で一蹴。
「『目的』はこれです」

シンは、すでに紋様が消えた右手を自分の眼前へと持ってくる。
「俺はこの『力』について詳しく知りたいんです。これが何なのか、どうして俺が使えるのか、その理由を。……俺も『悪魔』を教えて欲しいんです」
「悪魔に協力して、得られるメリットがそれだと少ないと思えるけど」
「構わないです。このまま、独りこの『力』と向き合っていても何も分かりません。なら、少しでもこの『力』を理解するには、『力』と同じ『悪魔』と関わらなければならない――と俺は考えています」
「……本当にいいのね？」
リアスの碧眼が、シンの僅かな心の揺れを見逃さないように射抜くように見ながら、最後の確認をする。
「ええ、今後ともよろしくお願いします」
それを揺らぎの無い眼と言葉でシンは返した。
「……分かったわ。あなたもこれからよろしくね、シン」
笑みを浮かべ、歓迎の言葉を送るオカルト研究部のメンバーにシンは頭を下げる。
「それじゃあ、さっそく悪魔としての初仕事をして貰おうかしら」
リアスが、パチンと指を鳴らすと木場と小猫が立ち上がり、部室の奥へと歩いていく。少し時間が経つと、二人が帰って来る。その両手には大量に積まれた紙の山を持って。

そして、それを一誠とシンの前に置いた。
一誠が紙の山から一枚手に取る。そこには『あなたの願いを叶えます』の文字。
「部長……これは？」
すでにチラシのことについての説明を受けていた二人であるが、その心の中に嫌な予感が走る。
その両者の予感を裏付けるかのように、今度は朱乃がそのチラシの山の上に、携帯機器を置き、簡単な操作方法を説明。
「はい」
最後にリアスから二人に自転車の鍵が手渡される。
「契約は足と数よ。二人とも頑張ってきなさい」
小悪魔めいた笑みで言葉を送るリアス。
「ははは……ええい！　やってやる！　やってやるぞ！」
「……まあ、こういうのは新入りの仕事だな……」
大量のチラシを前にして、一誠はヤケクソ気味に自らを鼓舞し、シンは小さく溜息を吐く。
一誠はチラシの束を一気に抱えると一目散に部室を出て、自転車が置いてある場所を目指す。シンもそれに続くかと思いきや、持っていた鞄を開き、中から缶コーヒーを一

本取り出すとリアスの前に置いた。
「あら、これは?」
「安いものですが、助けてくれた一応のお礼です」
虚をつかれたような表情を浮かべるリアスにシンは一礼し、チラシの束を持つと部室を後にする。シンが部室からいなくなって、僅かな間の後に、艶なる声が小さく笑う。
「うふふ。部長は兵藤くんを面白いと言っていましたけど、彼も負けないくらい面白い子ですね」
「フフフ。ええ、そうね」
リアスは置かれた缶コーヒーを手に取り、新たに入った部員二人の顔を浮かべ、おかしそうに笑うのであった。

◇

缶コーヒーを飲み終えたシンは、空き缶をそのままゴミ箱へと捨てず、右手へと持ち替えると、『悪魔の力』を呼び起こす。
何故、彼はそんなことをするのか。
紋様が浮かび上がった右手で軽く缶を握る。缶は音を立てて握り潰され、下半分が完

全に掌の中に隠れた。
（紙コップでも潰しているみたいだ）
呆気なく潰れていく空き缶に、悪寒に似たような冷たさがシンの背中を奔っていく。
彼が行っていたのは、自らの力を測る為の一種の実験であった。
自転車を漕いでチラシ配りをしていた時も、今と同様に力を使用して作業を行っていた。結果として疲労感はあったものの、全力で漕ぎ続けたと思えないほど軽い。また、ペダルを回し続けた脚は運動した後の怠さを全く感じられず、日常的に運動を行っていないシンの身体能力を考慮すれば、『悪魔の力』による能力の上昇は劇的なものであった。
シンは空き缶を片手で弄びながら、リアスへ言った言葉を思い出す。自分に宿っている『悪魔の力』を知りたい、その言葉に嘘は無い。しかし、それが全てではない。
シンがリアスたちに協力を願い出たのは、この力を独りで持ち続けることに、先の見えない不安を感じたからだ。もし、誰にも頼らず、誰にも知らせず、独りこの力を持ち続けたとして、自分は果たしていつまで自制をしていられるか、シンは自分の精神の限界を知らない。
人並み外れた力を持って、それを思いのままに振るう誘惑に耐えられるか。この力がいずれ消え去る可能性も考えられるが、いつ消えるか分からなければ、確実に無くなる

可能性もない。
今は普通に使えるこの力も、いずれはコントロールが出来なくなり暴走する危険性もある。あらゆることが出来てしまうほど万能ではない、だが何もしないでいられるほど弱い力ではない。考えれば考える程、不安は積もり続ける。
（我ながら格好だけの言葉を言う）
さも立派な言葉を盾にして、恥と感じた言葉を覆い隠す。結局の所シンの本音は、独りだと不安だから頼れそうな貴方達の仲間になって自分を安心させたい、というものに近い。
いつの間にか手の中に納まる程潰され、丸くなった空き缶をゴミ箱に捨てると、携帯機器を取り出して、画面を見る。そこには新たなマークが映されていた。
小休憩が終わりだと分かると、シンは自転車に跨り、次の目的地に向けて勢いよく漕ぎ出した。
シンがこの場を去って間も無く、小さな影がその場に現れる。
「やっぱり、悪魔だ」
小さな影は、そのまま空中を音も無く羽ばたき、シンがチラシを入れたポスターまで飛ぶと、中からシンの入れたチラシを取り出す。
「成程ね」

そのチラシを見て、影は楽しげに笑うのであった。

◇

チラシ配りを続けて何日かした後、シンは部室へと訪れる。部室はこの間と違い、光は遮断され、代わりの明かりに蝋燭が、床に置かれていた。

室内には一誠を除くメンバーが集まっており、シンが来たのに気付くと、リアスは床に描かれた魔法陣を指差す。

「来たわね。早速だけど、あそこの中央に立ってくれる」

「分かりました」

リアスの指示に従い、シンは魔法陣の中央に立つ。すると朱乃がシンへと近寄ってきた。

「じっとしていて下さいね」

朱乃の手がシンの制服の襟元に触れる。髪の香りすら分かる密着すれすれの位置に立つ朱乃に対し、シンは照れ隠しのように明後日の方向を向いて、指先一本動かさないほどの不動の姿勢をとる。朱乃は、そんなシンの初心な態度を微笑ましげに見ながら、離れる。シンは朱乃が触れていた襟元を見る。そこには駒王学園の校章が描かれた

バッジが付けられていた。
シンから二、三歩程離れた位置に立った朱乃は目を瞑り、聞きなれない言葉を呟き始める。すると朱乃の呟きに連動し、足元の巨大な魔法陣が輝き始めた。
「これは?」
「魔法陣にあなたの刻印を記憶させているの。あなたに付けたその校章は刻印の代わりよ。本来なら眷属の体に書き込むものだけど、あなたは協力者という立場だからそれは出来ないわ。あと、それには転移用の魔法陣も書き込まれているわ。」
リアスの言葉に反応して、今度は校章が青白い光を放つ。
「今日は、あなたとイッセーには本格的に悪魔の仕事をしてもらうわ」
「それはいいですが……俺にできますかね?」
本来、正式な悪魔では無いシンであるが、協力者という立場上、他の悪魔が行けなくなった場合の穴埋め要員として現場に向かったり、サポート役として同行するなどの仕事を主に任せたいとリアスから言われ、シンはそれを了承。
今回の初仕事は、身を以て内容を体験するためのものである。チラシ配りの最中に悪魔の仕事の内容については一誠とともにマニュアルを渡され、レクチャーなどを受けていた。
しかし、いざ本番となるとシンは柄にもなく緊張をする。悪魔の力を使えるといって

も、シン自身は自分の持つ『悪魔の力』を万能的なものとは思っておらず、契約をするにしても精々力仕事ぐらいにしか役に立たないと思っている。
「大丈夫よ。最初だから、難易度の低い仕事だから、そう難しく考えなくてもいいわ」
「間薙くん。そう緊張しなくても大丈夫だよ」
「間薙先輩……頑張ってください」
　木場や小猫から少しでもシンの緊張をほぐそうと言葉を掛ける。初めてお使いに行く幼児にでもなったかの様な気分になんとも言えない恥ずかしさを覚え、返事の代わりに軽く手を振ってそれに応えた。
「校章とその魔法陣があれば、一瞬で依頼者のもとに移動できるわ。そして契約が終われば、この部室に戻してくれるわ」
　便利な魔法陣の効果に、自分の力と比べて心の裡で感心した。リアス等が使用する『悪魔の力』の多様性を見る度に、自分の力の単純さを実感する。
　やがて、刻印の記録が終わった朱乃が魔法陣の外へと移動する。間も無く下の魔法陣が更に強く輝き始めた。
「魔法陣が依頼者に反応したみたいね。今日は、あなたとイッセーの初仕事よ。頑張ってきなさい」
「精一杯やってきます。それでは」

シンの右手の紋様が浮かぶと魔法陣の光が最大まで輝き、その光量でシンは自然と目を細める。視界が光で完全に見えなくなったとき、足下が消え去ったかの様な浮遊感を覚える。

ほんの数秒ほど落下したかのような感覚を味わった後、どこかへと着地をした。光によって細めた目よりも先にシンの鼻が、周囲の空気の匂いを感じる。

（屋外……？）

土の湿った匂いと木々の青々とした匂い。明らかに室内から漂うものではない。細めていた目を開いたとき、シンの嗅覚が正しかったことが明らかとなる。

周囲には木々が生え渡り、シンが立っていたのはその中の開けた空間。屋内を予想していたシンをいきなり裏切る展開であった。

一瞬何かの手違いかと思ったが、足下を見るとシンらがあちこちに配ったチラシが置かれ、間違いなくこの場で召喚したことを示している。

「あ、来た来た！」

少女を彷彿とさせる高く幼い声が、シンの頭上から聞こえる。顔を上げ、声のした方へと向けると、そこには小さな少女が、羽を動かし飛んでいた。

どう見ても数十センチ程の高さしかない身長、短く纏められた栗色の髪に、青いレオタードの様な衣服、手には衣服と同じ青の長手袋に太腿辺りまで覆う青のサイハイソッ

クス、そして、背中から生えた半透明の二対の羽。
明らかな人外。
その人外は、器用に羽を動かして、シンの目線の高さまで降りてくると、その場で止まる。
「……」
「うん！　上手くいった！　ねえ、キミがあたしの呼んだ悪魔でいいんだよね？」
予想の斜め上をいく展開に、シンも黙り込んでしまう。
「ねえねえ、聞いてる？　キミ、悪魔だよね」
「……一応、そうです」
話を先に進めようとする小さな少女に、辛うじて返事だけを返すシン。この時点で、リアスから教えられたことが全て無に帰した状態であった。
「……先に確認させてもらってもいいですか……一体、あなたは何ですか？」
「あたし？　あたしは妖精のピクシー。知ってる？」
自らをピクシーと名乗った少女。その名にシンは覚えがあった。
シンの記憶が確かならば、ピクシーとはイングランドの伝承に出てくる妖精の名前である。家具などを揺らしたりする軽い悪戯から、人間の赤子を盗んだりするという悪質な行為をする妖精。

「その名は知っていますが、妖精が何故、悪魔の召喚を？」
「そんな固い言葉でしゃべらなくてもいいよ。あたし別に人間じゃないし」
クスクスと笑いながらピクシーは、シンの言葉遣いを改めるように言う。少しの間、シンは黙ったが、次にピクシーに話しかけたときには、普段の彼の口調となっていた。
「……それじゃあ、もう一度聞くが、何故悪魔の召喚を？」
「そんなの叶えて欲しい願いがあるからにきまってるじゃん」
「その願いは？」
「あたしを使い魔にして欲しいの」
「……なんだって？」
ピクシーの願いにシンは、思わず聞き返してしまう。
「だから、あたしを――」
「いや、待て。いきなりなんだ」
「そのまんまの意味だけど？　ダメなの？　キミが配ってたそれには『あなたの願いを叶えます』って書いてあるのに？」
ピクシーが足下に落ちているチラシを指差す。
「キミが配ってたって……もしかして、見ていたのか？」
「うん。見てたけど？」

あっさりと認めたピクシーの態度にシンは額に手を当てる。
「キミって不思議だよね。悪魔だったり人間だったり、コロコロ気配が変わるんだもん」
「……色々と事情があるんだ――あっ」
この時になって、シンは一誠の家から出たときに声を聞いたことを思い出した。よくよく思い出してみると、あのとき聞いた声と今、聞いているピクシーの声、全く同じ声であった。少なくともあの時からピクシーに見られていたらしい。
「堕天使に襲われたときも、いきなり人間から悪魔になってたし、あれはビックリしたなー」
「あのとき、居たのか……」
愉快そうに言うピクシーであったが、襲われていたシンの心境としては正直、笑い事で済むものではなく、表情には出さないものの心の中では渋面を作っていた。
「で？　なんで俺を見張るような真似をしていたんだ？」
「うーん……初めは、面白そうだからだったんだけど、途中でそのチラシを見つけてチャンスだと思ったの」
「チャンス？」
「うん。強そうな悪魔に近づくチャンス」
「どういうことだ？」

ピクシーの意図が分からず、シンの眉間に皺がよる。
「だって、キミの使い魔になったら、あの強そうな紅髪の女悪魔の知り合いになれるでしょ？　あれだけ強そうな悪魔の知り合いなら、変な奴らも寄ってこないだろうし」
「そっちが目的か……」
シンはピクシーの真意を悟る。ピクシーの本来の願いは、リアスの庇護である。恐らくは堕天使との一件で、リアスの存在が大きな力を有しているのを知り、その傘下に入ることで、外敵から身を守る術を手に入れたいのではないかと、シンは考える。しかし、直接的に求めるのは危険だと判断し、間接的に求めようとした結果、口添えをする者を必要と考え、自分が選ばれたのであろうという考えも浮かんだ。
「呼んだ悪魔なら誰でもよかったわけか」
「ううん。出来ればキミがよかった」
「何故？」
「一番、弱そうだったから」
「……」
歯に衣着せぬピクシーの言葉に、流石のシンも閉口する。
「あの紅い髪の悪魔は強くて無理そうだし、黒い髪の方も厳しそうだし、一番小さい悪魔も駄目っぽそうだし、綺麗な顔をした男悪魔も難しそうだし、公園でキミと一緒にいた

男悪魔は、何か怖そうな気配がしたし――」
「それで残ったのは俺だったと？」
「うん」
「いざ使い魔になって危ないことをされそうになっても、自力で何とかなりそうな相手だと思ったと？」
「うん」
「……まあ、いい」
　全く、悪びれた様子も無く頷くピクシー、シンとしても自覚があるだけに反論することも出来ない。強く否定したところで、後々惨めになるのは自分だけである。
「……取り敢えず、使い魔になりたい理由は分かった。もう一つ聞きたいことがある」
「まだあるの？」
　先程からの質疑応答の繰り返しに、ピクシーも飽きてきたのか、口調と表情が露骨に退屈だといっている。
「これで最後だ。もし、俺の使い魔になって、グレモ――紅髪の女悪魔の知り合いになって、お前の言う変な奴らが近寄らなくなったら、お前は何がしたい？」
「ケーキとかいうのが食べてみたい」
「……」

ピクシーの即答に思わず黙り込み、ピクシーの顔を凝視してしまう。ピクシーの表情にふざけた様子は無く、その真摯な瞳のせいで否応無しに、本気の言葉だということが分かってしまった。

「理由聞きたい？」

「頼む」

シンは少ない言葉から、その裏に秘めたモノを感じ取れるほど達者な人間ではない。それ故に、何故それを求めるのかは素直に本人の口から聞くしか無い。

「あたしってさ、森の中で生まれて育ったんだけど、生まれてからずーっと森の中で暮らしていくのが面白くなくて、飛び出してきたんだよね。それで人の居る世界に飛び込んだけど、あたし達って結構珍しいらしくって、毎日変な服着た人間たちが追いかけてきて、何かの材料にしようと捕まえに来たり、標本やコレクションにしようとしたりして大変だったんだよね」

口調自体は軽いものであったが、表情には並々ならない嫌悪感があった。あまり詳細に内容を語らないのは、思い出したくもない記憶なのであろう。

「で、逃げているうちに船の中に隠れたり、荷物の中に隠れていたりしてたら、ここに着いたの。それで、初めてここに着いたときに見つけた美味しそうな食べ物がケーキ。一度でいいから、周りを気にせずに食べてみたいの」

「……意味が分からない。そんなに食べたければいくらでも方法が――」
シンのこの一言にピクシーの顔が一気に紅潮した。
「だーかーら！　こそこそしたり！　隠れたり！　いつ襲われたりしないかビクビクしながら食べたいんじゃないの！　堂々とゆっくり落ち着いて食べたいの！」
感情を爆発させたピクシー。異性を怒らせるという経験が皆無のシンにとっては、対処の方法が思いつかない。よく見れば、段々とピクシーの瞳の端に光るものが溜まっている。
「軽率だった。頼むから落ち着いてくれ」
「……じゃあ、使い魔にしてくれる？」
とりあえず昂るピクシーを宥め、少し落ち着いたところで最初の願いの内容へと回帰する。
シンは、短く溜息を吐いた後――
「ああ」
――と一言告げた。
シンの言葉を聞いて、ピクシーの拗ねていた表情は花が開く様に喜びの表情へと変わり、嬉しそうにシンの周りを飛び回る。
シンが了承したのはピクシーへの同情か、それとも悪魔の仕事に対する義務感か、正

直なところよく分からない。だが、ピクシーの願いを叶えると決めたとき、胸の奥が少し軽くなったような気がした。

まるで、ピクシーを通して誰かに借りを返したかのような不可思議な感覚。

どうしてそのような気持ちになるのか、シンには全く分からなかった。

「――まあ、まだいろいろと知らないことがあるが、とりあえず今日から『仲魔』だ」

飛び回るのを止め、シンの前で浮かぶピクシー。その顔は不思議そうな表情をしていた。

「『仲魔』？　使い魔じゃなくて？」

「ん？」

言ったシン本人もピクシーに指摘され、そこで初めて気付いた。意識して言った訳ではなく、自然と口から滑り落ちるかのように無意識にその言葉が出てきた。

「……使い魔よりもその呼び方がしっくりくるだけだ」

「ふ―ん。『仲魔』か……うん！　悪くないかも」

照れを隠すように頭を掻くシン。それを見てキャハハと笑った後にピクシーがシンの肩へと腰掛けた。それと同時に足下に置かれていたチラシが発光し、魔力を放ち始める。契約が完了したという合図である。

「あ、そうだ。まだ名前聞いてなかった」

「間薙シンだ」
「ふーん。シンっていうだ」
　チラシから放たれる光がシンたちを包み込んでいく。
「じゃあ、改めて。あたしは妖精のピクシー！　今後ともよろしくね！　シン！」
　この場から離れる前にピクシーは微笑み、シンに向かってウィンクをするのであった。

楽観、痛感

朝、シンは欠伸を噛み殺しながら、生気の薄い顔で学園へと続く道を歩いていく。何故、こんなにも彼は陰鬱な気を纏っているのか。その原因は、彼の肩に腰掛けて無邪気な瞳でシンを見る、小さな妖精が原因であった。

「やあ、おはよう二人とも」

シンの陰鬱さとは反対に、全ての者に癒しを与えるような爽やかな挨拶と共に木場が現れる。

「おはよう」

「やっほー！　ゆーと」

シンはいつものように、ピクシーは長年の友人にでも声を掛けるかのような軽やかさで挨拶を返す。

「随分と眠そうだね？」

あまり良いとは言えないシンの顔色を心配し、木場が尋ねてくるが、シンはいつものように軽く手を振り、そんなに心配することではないと口に出さずに示す。

「睡眠不足の原因はこいつだ」

「ピクシーが？」
シンは、ピクシーを指差し、昨日のことを話し始めた。

◇

ピクシーを仲魔にした後、シンは転送用の魔法陣の力で部室へと戻された。部室に戻って最初に見たのは、シンが無事に仕事を終えて戻ってきたことを安堵するリアスたち――一誠を除く――の笑みであったが、シンの肩に乗っている見知らぬ存在を見たときには、その笑みは困惑の表情へと変わっていた。
シンは、ピクシーの事情を伝え、仲魔にしたことをリアスへと伝えると、一応は、契約を取れたことを労ったが、前例のない事態だったらしく、その表情は笑っているのか呆れているのか何とも言えないものであった。
「今日は、前代未聞が多いわね……」
「どういう意味ですか？」
呟くリアスに同意するように、朱乃は困った様に笑い、木場も苦笑を浮かべ、小猫は、あれは無様でした、と言う。
事情を知らないシンは、リアスに何があったのかと尋ねる。

「イッセーがね――」

聞けば、シンが転送された後に一誠が現れ、シンと同様の準備を行った後に、いざ転送という矢先にまさかの転送失敗。原因は、あまりに低すぎる一誠の魔力のせいらしい。だが、呼ばれた以上行かないわけにもいかず、一誠は自力で依頼者の下へと向かうことになった――自転車に乗って。

今頃、インターホンやドア越しの依頼者に対して、呼ばれた悪魔です、と挨拶をする一誠の姿を想像し、不憫に思うシンであった。

「……それはそれとして。あなたもいきなり使い魔を持つことになるなんてね。機会を見て、イッセーと一緒に持たせる予定だったけど。まあ、早いに越したことないわ。……そういえば、あなた、使い魔の契約儀式を済ませたのね」

そう言われて、シンは目を瞬かせる。肩に座っているピクシーを見ると、ピクシーもまた同じような表情をしていた。二人の様子を察し、リアスは眉を顰める。どうやら、それほどまでに基礎的な知識であるらしい。

「儀式って……『使い魔になる』って言うだけじゃダメなの？」

「当たり前でしょ。そんな口約束だけならとんでもないことになるじゃない。シンは知らないのは仕方ないとして……あなたから使い魔になるって言ったのに知らないの？」

「だってあたし、使い魔って悪魔と一緒に行動するってことぐらいしか知らないもん」

ピクシーの悪びれた様子のない態度に、リアスは呆れて息を吐く。
「仕方ないわね……ここで、儀式を行うわ。そんなに時間の掛かるものでもないしね。朱乃、準備を」
「はい、部長」
リアスの指示で、朱乃は魔法陣の中央に立つと、シンたちも来るように手招きする。それに従い、魔法陣までピクシーを連れて移動する。朱乃は、メモ用紙を一枚取り出すと、持っていたペンを走らせ、書き込んでいく。十秒ほどで書き終わると、そのメモ用紙をシンへと手渡した。
「はい。これが契約の儀式を行うための詠唱です。この通りに詠んで下さいね」
手渡されたメモ用紙に目を通す。細く達筆な文字で書かれた簡素な詠唱。口の中で何度か暗唱した後、リアスに準備が完了した合図をする。
「初めてだから、朱乃がサポートするけど、そんなに難しい儀式じゃないわ。詠唱を間違わなければ、すぐ終わるわ」
「使い魔を選ぶのに比べたら、儀式なんて一瞬だよ」
「……ちゃちゃっと終わっちゃいます」
不安を払拭するような優しい顔で、リアスたちがシンたちに微笑む。
「こっちも準備できました」

「さあ、始めましょう」
朱乃が短く詠唱すると、床の魔法陣が輝きを放ち始める。転送したときの光とは異なる光であった。転送をされたときよりも魔力の光が落ち着いているかのように見えるのは、朱乃が外部から補助しているおかげなのだろう。
「シン、詠唱を」
リアスに言われ、メモ用紙に書かれた文字を思い出しながら、シンは詠唱を始める。
「間薙シンの名において命ず、汝、我が使い魔として、契約に応じよ」
シンの詠唱に呼応し、魔法陣が最大限の光を放った――かと思いきや、突如として光は霧散。あれほど高まっていた魔力は、何処かへと消失してしまい、残ったのは魔法陣の上で棒立ちをしているシンとピクシーのみ。
「……」
「あれ？」
「あら？」
「まあ？」
「え？」
「？」
場に沈黙が訪れる。シンは思わず、周りを見る。

全員が、この状況に対して、目を丸くし不意打ちでも貰ったかのような表情をしていた。

「……これは……失敗ですか……？」

意を決したシンの言葉が、最初に沈黙を破る。話しかけられたリアスは、二、三度瞬きをしたのちにこう返す。

「あなた、もう契約を済ませているわ」

リアスの言葉に今度は、シンが不意打ちを貰う。ピクシーと出会い、部室へと戻ってくるまで、ほんの数十分程しか経過していない。その中で、シンは今のような儀式など行っていない。そもそも契約の儀式すら知らなかった。

「失敗ではなくて、もう終わっていたんですか？」

「ええ、そうよ。一度契約をした相手に対して契約の儀式を重ねることは出来ないわ。それにただの失敗なら、魔力の暴発があるし。そもそも朱乃がサポートしている時点でまず失敗はありえないわ」

朱乃の能力をどれほど信頼しているかが、リアスの言葉から感じ取れる。シン自身も契約の儀式を行っている最中、力の安定を感じていた。完了間際の魔力も制御できずに消えたというよりも、空回りをして何処かへ行ってしまったという印象であった。

「あなた、本当に儀式をやっていないのね？」

「ええ、特に何もしていません」

リアスは顎に手を当て、考える姿勢を取る。その端麗な顔が、現状の疑問に対して険しいものとなる。その険しさが、今起こったことが異例であることをシンに感じさせていた。

「シン。申し訳ないけど、あなたの紋様を見せてくれるかしら?」

顎から手を離し、リアスがシンの右手を見たいと言う。シンは『悪魔の力』を右手に浮かび上がらせると、それをリアスへと差し出した。リアスは、シンの右手首を掴み、空いた方の手で、シンの浮かび上がった紋様の一つ一つを確かめるように指でなぞる。

手首から伝わってくるシンよりも低いリアスの体温、なぞられる度に感じるこそばゆさ、オカルト研究部及びピクシーから来る視線、これらの要素がシンに緊張感を与え、意識をしても心臓の鼓動は早まっていく。早く終わることを願うも、触れられている間は一秒を何倍もの長さに引き延ばされたかの様な錯覚を覚えていた。

やがて、リアスの確認は終わり、シンに礼の言葉を掛けると、触れていた手を放す。意識していたことを悟られないように、平常時の態度で差し出していた手を戻すが、肩に乗っていたピクシーにはシンの緊張や鼓動が伝わっていたらしく、ニヤニヤと笑みを浮かべてシンの頬をからかうように指で突いてくる。

「あなたの右手を見てみて感じたことは、もしかしたら、あなたの右手に浮かんでいた紋

様が、契約の儀式を行う効果を持っていたのかもしれないわね」
「契約の魔法陣を直接体に刻み込んであるようなものですか？」
「そういう解釈でいいと思うわ。だからこそ、互いの同意のみで使い魔の契約が出来たのかもしれない」
「へぇー！　もしかしてシンって意外とスゴイ？」
そう言いながらも未だに頬を突いてくるピクシーに流石に鬱陶しさを感じたのか、シンの人差し指がピクシーの小さな額を容赦なく小突く。いたーい、というピクシーの悲鳴の後、シンの頬は突かれなくなった。
「まあ、儀式を飛ばしていきなり使い魔になるなんて、前代未聞だけど、取り敢えずその子が、あなたの使い魔になっていることは分かったわ。……そういえば、ちゃんとこの子に名乗っていなかったわね。わたしの名前は、リアス・グレモリーよ。よろしくね、ピクシー」
ピクシーに手を差し出すリアス、ピクシーはシンに叩かれて赤くなった額を涙目で押さえていたが、リアスの手に気付くと、握手の代わりにリアスの指を両手で掴み、軽く振った。
「よろしく」
リアスの自己紹介の後に、朱乃、木場、小猫の順に自己紹介を済ます。

「もう一人、イッセーという子がいるんだけど、まだ仕事から戻ってこないみたいだし、彼の紹介は明日にしましょう」

ここでリアスからシンに帰宅するように言う。既にシンの初仕事が完了したこと、朱乃、木場、小猫の仕事のサポートはシンにはまだ荷が重いことから、これ以上部室内に留めるのは、シンにとって時間の浪費とリアスが判断したからであった。

シンは、リアスの指示に不満の色を見せることなく応じ、ピクシーを連れて部室を出ようとする。

「シン、ちょっといい？」

そこで、リアスはシンだけを呼び止める。シンは、ピクシーを肩から降ろし、ドアの前で待つよう指示する。リアスはシンの近くへと歩み寄ると、シンの耳元でシンにしか聞こえない声量で囁く。

「ピクシーのことを大事にしてあげてね。妖精は、この世界では希少な存在よ。だから、よくない輩が彼女を狙ってくることもあるわ。わたしの方でも手は打っておくけど、それでも止まらない相手もいる。……だから、もしものときはあなたが守ってあげて」

「やれることはやるつもりです……『仲魔』にしたからには」

「？……『仲魔』？」

シンの口から出た言葉にリアスは、言葉の意味よりも先にそのような言葉がシンから

でたことに軽く驚いた。
「……ああ、その……使い魔よりも『仲魔』という言葉の響きが、個人的に気に入っているというか……」
　つい口を滑らしてしまったことに、シンは気まずそうに明後日の方向を見て、言い訳の言葉を並べていく。その姿を見て、リアスは、優しげな微笑を浮かべ、シンの頬をその細く白い手で触れる。
「フフ、あなたの『仲魔』、大切にしてあげてね」
　最後にそう言うと、リアスはシンから離れていく。
　シンはリアスたちに一礼をすると、ピクシーを連れて部室から去っていった。
　部室を出て、旧校舎を後にし、校門を潜るまで、シンとピクシーの間に会話は無かった。代わりに何度かピクシーが、額を押さえて呻く声だけがあった。
「うー……」
「……悪かったよ。叩いて」
　呻くピクシーに根負けしたのか、軽く溜息を吐いた後にシンが謝罪の言葉を述べる。ピクシーは頬を膨らましてそっぽを向くと、ボソリと言葉を洩らした。
「……ケーキくれたら許してあげる」
「残念だが、もうケーキを買える時間じゃない」

既に時計が示す時間は、店の閉店時間を過ぎていた。
シンの言葉を聞いて、ピクシーの頬がますます膨らんでいくが、次のシンの言葉を聞いたとき、一気にピクシーの興味が向く。
「ケーキの代わりの甘いものを食べさせてやるから……」
「本当？」
「家についたら、食べさせてやるさ」
「じゃあ、早く行こう！」
ようやく機嫌が治ったのか、ピクシーはシンの制服の袖を引っ張り、急いで帰るようにせかすのであった。

◇

「――で、プリンを食べさせて機嫌を治させたのはいいんだが、その後、部屋のあちこちに置いてあるものを片っ端から聞いてくるから困った……あれは何か、どう使うのか、実際に使ってみてくれないか、と。結局寝たのは、日の出間近の時間だった……」
「それは、大変だったね」
シンの言葉に、木場は苦笑を浮かべる。

「だって、見たことないものだったり、知らないものがいっぱいあったし……」
　シンの愚痴にピクシーは頬を膨らます。純粋な好奇心から尋ねたことを咎められるようなことを言われて不満に思ったからだ。シン自身は咎めるつもりで言ったのでは無かったのだが、ピクシーが拗ねてしまったのを見て、内心で溜息を吐く。
「今日、ケーキを買いに行くから、拗ねるな」
「本当！」
　シンの言葉を聞いて、ピクシーは不満そうだった表情を一転して、喜悦に満ちたものへと変わった。
　そんな二人のやり取りを微笑ましく見る木場。
「ふふふ、間薙くんも大変だね」
「あっちに比べたらまだ軽いと思うがな」
　シンが背後を指差す。指した方向へと目を向ける木場とピクシー、そこには、目の下に隈を作り、シン以上に眠たげな様子をした一誠の姿があった。
「昨日間薙くんが帰った後、部長たちとかなりの時間、部室で兵藤くんを待っていたけど戻ってこなくて……もしかしたら、一晩中、依頼者の相手をしていたのかな……」
「あの様子じゃ、その可能性が高いな」
「あの人間が、イッセーっていうのでいいんだよね？　遠くで見たときは怖そうだった

けど、近くで見ると、スケベそうだね」
　ほぼ初対面と言っていい相手に対してのピクシーの容赦ない感想。
「あまり、印象だけで人を判断するのはよくないよ」
「じゃあ、違うの？」
『……』
　残念なことにその感想が概ね間違っていない為、シンも木場もピクシーの一誠に対しての印象を否定することが出来なかった。
　そうこうしているうちに、一誠の方もシンたちの存在に気付き、声を掛けようと近寄って来るが、挨拶をする前にシンの肩に乗っているピクシーを発見し、目を見開いて驚いた表情でピクシーを指差した。
「うおっ！　なんだそれ！」
「大きな声を出すな。こいつは一般人には見えないから変な目で見られるぞ」
　驚愕する一誠を小声で注意するシン。思わず一誠は口を手で押さえ、周囲を見渡す。案の定、複数の生徒の視線が一誠たちに向けられていた。
「……ははは……なーんてな！　お、おはよう！」
　かなり強引な誤魔化し方ではあったが、周りの生徒たちも特に興味を持っていたわけでもないらしく、怪訝そうな顔をしていたもののすぐに一誠への興味を無くし、変わり

に木場の存在に気付いた女生徒たちが、黄色い歓声を上げ始めた。
「これだけ見られていると、間薙くんもその子を兵藤くんに紹介できないね。僕は先に行っているよ」
　木場がシンたちよりも早足で学園へと向かうと、蜜に誘われた蝶のように女生徒たちも後を追って移動し始めた。
「相変わらず人気者だな」
「ちくしょう、イケメンめ！」
　木場の人気っぷりを改めてシンは実感し、一誠は僻みの言葉を放つ。
「で？　それは？」
　目でピクシーを指し、さっきとは違ってシンにしか聞こえない大きさの声。シンは、とりあえず昨日起こった出来事を簡潔に話した。
「――まあ、そういうわけでこのピクシーを『仲魔』にした」
　話を聞き終わった瞬間、一誠の目から滂沱の涙。その様子にシンは一歩引き、ピクシーは呆気にとられた表情をする。
「す、素晴らしい……！　悪魔になって毎日、毎日、チラシ配りばっかでファンタジーの欠片もない日々を過ごしていたが。まさか……まさか、幻想の産物だと思っていたものが……！　可愛らしい妖精が――サイズはあれだが――いたなんて……！　俺のハー

レムの夢にまた一つ光が差した！……そして、それをゲットしたお前が妬ましい！」
最初は涙と歓喜、最後は嫉妬と羨望の目でシンとピクシーを見る一誠。シンの耳元でピクシーが、イッセーって変な悪魔？　と聞いてきたが、時折とだけ返しておいた。
「いいよな……初仕事でそれなんて。それに比べて俺は……」
自虐的な笑みを浮かべる一誠。シンは木場から一晩中、一誠が戻って来なかったのを聞かされている。一体何をしていたのか、好奇心から一誠に聞いてみた。
「兵藤、お前は一晩中、契約者の所に居たみたいだが、何をしていたんだ？」
「……ドラグ・ソボールごっこ」
「お前は、本当に何をしていたんだ」

◇

その日の放課後。
オカルト研究部の部室の中、憮然としたリアスの前で、処刑を待つ死刑囚のように顔を蒼褪めた一誠が、昨日の契約であった内容を事細かに説明する。内容を短く纏めると、依頼者と好きな漫画の話で盛り上がり、契約まで至りそうになるが本人の希望と契約内容が吊り合わず破談、落ち込む契約者を慰めるため一晩中、漫画の場面を再現した

遊びをしたという内容。
　あまり他人には聞かせたくない内容ではあるが、契約者との契約までの流れを報告も眷属悪魔としての義務である故に仕方がない。報告をする一誠は、シンの目から見ると羞恥から泣きそうな顔に見えた。
　説明し終えると同時に深々と頭を下げ、反省と謝罪の言葉を述べる。一誠自身もこの結果でリアス達に申し訳ないという気持ちがあった。次にリアスからどんな怒りの言葉を落とされるか覚悟をしていたが、一誠の予想に反し、リアスは配っていたチラシを取り出し、チラシには依頼者の契約についてのアンケートをとることが出来ると語った。その声は怒りというよりも弟に話し掛ける姉のような優しさが含まれていた。
　リアスはそのアンケートの内容を読み上げる。
『楽しかった。こんなに楽しかったのは初めてです。イッセーくんとはまた会いたいです。次はいい契約をしたいと思います』
　一誠の顔が感極まって赤くなっていくのが分かる。自分から見ても失敗だったと思われた仕事が、これでもかと絶賛されて胸にくるものがあったのであろう。
　前例の無い結果ではあるが、次の契約の布石を打つ結果ならばリアスも叱るはずは無く、むしろ今までにない結果に楽しげな笑みを浮かべ、一誠に激励を飛ばす。
「はい！　頑張ります！」

一誠も感極まった声でそれに応えた。
「それで次はシンのアンケートだけど……」
「え？」
リアスに言われて、シンは思わずピクシーの方を見る。依頼者からのアンケートであるならば、必然的に書いたのはピクシーしかいない。
いつの間に書いたのか、と考えるがすぐに答えは出た。今日は、ほぼ一日中シンのクラスで飛び回り、消しゴムなどを床に落としたり、授業中居眠りをしている生徒の頭を突っついたりするなどの小さな悪戯を繰り返して、一部の生徒に『ポルターガイストだ！』と騒がせ、シンや一誠をどぎまぎさせていたが、昼放課の数分の間、その姿を消していた。恐らくはその間に、オカルト研究部の誰かが接触し、アンケートを取ったのであるとシンは考えた。
「ピクシーもアンケートが必要でしたか？」
「勿論、今はあなたの使い魔という立場でもあなたの依頼者だったということには変わりないわ」
そうリアスに言われてしまえば、シンもこれ以上口を挟むことは出来ない。
『ありがとー。あとケーキお願い』ですって……そう言えば、その子、使い魔になったらケーキが食べてみたいって言ってのよね。もう食べさせてあげた？」

「いえ、まだです」
「なら、買ってきてあげなさい。仕事の時間まで、まだ余裕があるわ」
ちらりとピクシーを見る。ピクシーの目はリアスの言葉を聞いて爛々と輝いていた。このような状態の相手を失望させるような行為は流石に気が引ける。
シンは、ソファーから立ち上がると、いますぐ行ってきます、と言ってピクシーを連れて部室を後にする。
目指すは洋菓子屋。

◇

いくつものケーキが並ぶガラスケースの前で、一人の男が無言かつ無表情で、商品を眺めていた。ケースの前に立つこと彼是三十分、立った場から動かない変わりに、その感情の色を映さない瞳だけは、並べてある商品の質を測るかのように一点を見つめては動き、また別の一点を見つめては動くという繰り返しであった。
営業スマイルを浮かべている女店員も男の無言のプレッシャーにその笑みを段々と引き攣らせていく。周りの客たちも場違いな雰囲気を持つこの男を横目で何度か見ていた。

無言で立つ男――シンは、そんな周りの状況に頓着せず、並べてある商品、正確に言えばその商品の前で、せわしなく飛ぶピクシーを見ていた。
「うーん……どれにしようかな、これにしようかな?」
ケーキを前にこの言葉を繰り返しては、別のケーキに目移りさせていくピクシー。当然ながらその悩む姿も言葉もこの店の中にいる一般的な人間には、見えもしないし聞こえもしない。代わりに見えるのは、仏頂面をした男子高校生のみ。
優柔不断なピクシーに急かすような言葉を言いたくなるシンであったが、店に入る前にピクシーから、自分で選びたいから口出ししないでね、と念を押されている。シン自身もピクシーの初めて食べるものに対しての心境をある程度理解できる為、喉元にある言葉を飲み込み、心の裡で溜息を吐き黙ってそのときを待つ。
「うん!　やっぱりこれにする!」
それから十分後、ようやくピクシーが食べるケーキを指差し決断した。指差したガラスの向こうにあるのは、黄金色のスポンジを純白のホイップクリームで覆い、赤く瑞々しいイチゴを頂点へと乗せたショートケーキ。
「……意外と無難だな」
ケーキの代名詞とも言えるものを選び、ぽつりと言葉を洩らす。最もピクシーの選択にケチをつけるつもりも無く、店員に頼んで商品を取り出してもらう。数十分も粘って

ショートケーキ一つだと気が引けるので、ついでにオカルト研究部のメンバーへの差し入れとして、他にもいくつか買う。

会計を済ませて、店の外に出るシンたち。ピクシーは興奮冷めやらぬ様子で、早く食べたいとシンにせがむが、部室まで待つように言うと、今度はシンの袖を引っ張る。

「じゃあ、早く帰ろ！」

「分かったから離せ、袖がほつれる」

急かすピクシーに内心呆れながらも、どこかこういったのも悪くは無いと思い、部室へと帰る足を早めていった。

「ほう？」

そんな二人の様子を遠くから眺めていた人物がいた。

その人物の目は、一般人には捉えることの出来ないピクシーの姿を認識し、その二人の微笑ましいとも思える様子を侮蔑と嘲りを含めて鼻で笑う。

二人が視界に入らなくなると、その人物もまた姿を消す。

その足元には、光を飲み込むかのような漆黒の羽根が一枚落ちていた。

◇

その日の夜、前日と同じように部室で待機をするシン。そのシンが座るソファーの前に置かれているテーブルの上では、自分の大きさの半分ほどあるケーキ相手に両手で持ったフォークで奮闘するピクシーの姿があった。

昨日とは、違って部室にはメンバーが全員揃ってはいない。今、部室にいるのは、シン、一誠、木場、リアスの四名。小猫、朱乃は、予約の契約が入っていた為、そちらに向かっているため現在不在。

依頼者が呼び出すまでただ待つしかないので、買ってきた差し入れと他愛のない雑談をして時間を潰す。シンは会話の最中、いつのまにか一誠が、朱乃と小猫を下の名前で呼んでいることに気付く。シンの知らないうちに他の部員との仲を一歩進めているようであった。

「あー、美味しかった!」

雑談の中、ピクシーがケーキを食べ終わり、満足そうな笑みを浮かべる。自分の身長ほどあるフォークを使っていたため、その衣服はケーキの残骸がいたる所に付着していた。

ピクシーの視点から見たら巨大とも言えるケーキを一つ平らげた割には、ピクシーの体型は食べ始める前と後で全く変わりなく、スリムなものであった。

「ねえ、もう一個食べていい?」

「駄目だ。余りは無い。食べ過ぎると太るぞ」
「妖精がいくら食べても太るわけないじゃん」
　世の女性が聞けば絶句するような台詞を言うピクシー。人間と妖精、見た目が似ているが体内の構造は全く違うのか、とシンは考え、それならば悪魔もそうなのだろうか、とリアスを見たが、ピクシーの発言に衝撃を受けている顔からしてどうやら違うらしい。
　やがて、依頼者から呼び出しが来る。それを一誠が応じることとなり、一誠が気合を入れている所に、リアスがシンを同行させるように言うが、一誠はそれを快諾はせず、返事を渋る。
「どうしても、最初の契約は自分の力だけでやり通したいです」
　それが、一誠のシンを同行させるのを渋る理由であった。リアスを失望させたくないためにも仕事を成功させたいという思いもあるが、人に頼らずにこなしてみたいというプライドもある。
　傍から見ても一誠が葛藤しているのが分かり、シンの方からも一誠を一人で行かせられないか願い出た。自分が同行しても成功率が跳ね上がるわけではないなどと理由をつけて。
　リアスも一誠の様子を察していたらしく、軽く溜息を吐くとシンに待機しているように指示をした。

「よし！　見てろよ間薙！　俺も契約を成功させてくるからな！」
「ああ、頑張って行ってこい……自転車で」
「う、うわぁぁぁぁぁ！」
シンの一言に心の傷を抉られた一誠が涙と共に部室から出ていく。
この日も一誠は部室に戻って来なかった。

◇

翌日、授業を終えた後に部室へと向かい、オカルト研究部のメンバーと一緒に一誠の報告を聞いていた。結果はまたしても失敗であったが、何故か前回と同じく依頼者からの評価は最高のものであった。
部室に来る前にシンは事前に一誠にどんな依頼人であったか聞いたが、一誠曰く、ゴスロリの衣装と猫耳を着け、『魔法少女』になることを夢見る、純粋無垢な瞳を持った筋骨隆々の男だったらしい。
一誠の口から語られる想像を絶するような容姿をした依頼人、シンは一瞬その姿を想像したが、すぐに掻き消した。一誠から、もし次にその人物から依頼があったら手伝ってくれと懇願されるが、シンは即答せず、その時が来たら、と曖昧な返事をするだけで

あった。
その日の部活は、一誠の報告で終了し、悪魔の仕事が始まるまでシンは自宅で待機をしていた。
相変わらず、家の中で騒がしいピクシーを適当にあしらいながら、シンは時計を見る。仕事の時間までは少し早い。
「ねぇ、シン。あたし、またケーキ食べたいなー」
「昨日食べたのに今日も食べるのか？」
「いーじゃん、もっと別のも食べたいなー」
ねだってくるピクシーを無言で見詰めるが、態度が変わる様子は無い。シンは、再度時計を確認する。この時間ならば、まだ店は閉まってはいない。
「この前の店でいいんだな？」
「うん！　ありがと！」
喜ぶピクシーを見て、内心甘い自分に対して溜息を吐くシンであった。
それから少し時間は経ち。前回来た洋菓子店でシンは商品の会計を行っていた。
今回は、ピクシーがすぐに食べたい商品を選んだので時間は掛からず、長居をせずに済んだ。
商品を持って、店の外で待たせているピクシーを探すが姿が見えない。ほんの数十秒

の間だけ目を離していただけで、そう遠くには行けない筈であるが、少し歩いて左右何処を見ても姿が見当たらなかった。
いくら落ち着きの無い性格であっても、自分の好きなものを置いて何処かへ行くとは考え辛い。
シンの胸の奥に焦燥が生まれる。
とりあえず、念のためにリアスへと連絡を取ろうとし、携帯電話を取り出そうとした瞬間――
「探し物はこいつか？」
背後から聞き覚えのある声と共に冷たい悪寒がシンの体を走る。
首だけ後ろに向けたシンが見たものは、黒のスーツを着た見覚えのある男と、その男に掴まれている意識を失ったピクシーの姿。
この時、シンは自らの考えの甘さを痛感した。ほんの数日、日常を過ごしていただけで呆けていたことを嫌でも気付かされた。
心のどこかで思っていたのかもしれない、自分が狙われることはないと。
「……ドーナシーク」
シンはその黒のスーツの男の名を呟き――
「覚えていたのか、結構。悪魔に二度も名乗るのは流石に不快だ」

――黒のスーツの男、堕天使ドーナシークは敵意と殺意を持ってそれに応えた。

鉄拳、電撃

「そいつをどうするつもりだ……」
　シンの口から発せられた言葉は、自分でも驚く程低く、獣の威嚇のような敵意が含まれていた。しかし、シンの言葉にもドーナシークは涼しげな顔色を変えることは無い。そもそも、この時点で格下と認識をしているシンに対して、怯むことはまずあり得ることではなかった。
「なに、街の散策をしていたら、偶然にも珍しい羽虫が飛んでいたのでな、ついつい手を伸ばして捕まえてしまった。これが貴様のものだったとは驚きだ、この偶然も神のお導きか」
　本音とは思えない、わざとらしさを感じる口調。この言葉をシンは鵜呑みにするつもりは毛頭無かった。どこかでピクシーと共にいる場面を見られ、このようなことを行ったのではないかと考えたが、結局の所は、自分の不注意が原因である。
「しかし、どうしたものか。この者自体に罪は無いとはいえ、悪魔と関わる存在。逃がすわけにはいかないな」
「一応、言っておくが、俺もそいつもグレモリーの協力者だ」

「ほう、そうか。なら、グレモリーの悪魔に助力を求めたらどうだ？」
　こんなことをする相手にシンは無駄だと思っても、リアスの名前を出してみるが効果は皆無に等しい、それどころか余裕すら感じる。
　仮にここで馬鹿正直にリアスへと助けを求めたとしても、リアス達が来る間までピクシーが生き残っている可能性は絶望的である。ドーナシークは文字通りピクシーの命を握っている状態。リアスへ連絡をしたら最後、すぐにピクシーの命を奪い、その場から去ってしまうだろう。協力者の使い魔が堕天使に殺された、という事実だけでは、リアス達が堕天使と徹底的に争う理由としてはあまりに弱すぎる。シン自身も堕天使との小競り合い程度で片づけられると思っていた。
　だが、逆にこうも考えられる。
　ピクシーを見捨てれば、この場は流れる。
　使い魔を失ったとしても悪魔にとって痛手になるわけではない。ただ、目や耳となるものを失うだけだ。わざわざ、代替できるものの命を懸ける義理は無い。
　そもそもシンとピクシーは、出会って三日しか経っていない。たったの三日で自分の命を危険に晒してでも救う関係に、普通ならなれるわけがない。
（何を躊躇っている……）
　このまま相手に背を向けて走り去るか、ポケットの中にある携帯電話を取り出してリ

アス達に連絡すれば、この場はすぐに終わる。
シンの手がポケットへと伸ばされようとする。
（たった数日の付き合いだ……）
『うん！　上手くいった！　ねえ、キミがあたしの呼んだ悪魔でいいんだよね？』
『じゃあ、改めて。あたしは妖精のピクシー！　今後ともよろしくね！　シン！』
『うん！　やっぱりこれにする！』
（たった数日……）
『フフ、あなたの『仲魔』、大切にしてあげてね』
伸ばした手を止め、拳を作る。
（数日でも……見捨てるのは寝覚めが悪いか――）
この時、シンの中から見捨てるという選択肢は完全に無くなった。代わりに『仲魔』を取り返すという選択肢のみがシンの中に残った。
「それで、こんな人目がつく場所で殺すのか？」
「ついてこい」
これと言って抵抗する意思を見せないシンの姿をドーナシークは鼻で笑い、自分の指示で動くようにシンに命令をする。
下手な真似をさせない為にシンを先頭にして、二人はこの場から離れていく。

歩きながらシンは、落ち着いて考える。これから相手は何処に向かうのだろう、と。まず、人目が付かない場所であることは間違いない。

移動する距離にしても相手は、一刻も早く自分を消し去りたいと思っている為、そんなに遠くまで移動することは無く、また時間を掛け過ぎるのも相手は好まないと推測する。リアスなどの悪魔に感づかれる可能性が高まる危険がある。

移動した先に他の堕天使たちが集まっている可能性もあるが、この周囲はリアスの縄張りである為、堕天使が集まれば、自ずとリアス達が動く危険性がある。今回の行動は、動きの悟られない可能性を少なくさせるため、ドーナシーク個人の可能性が考えられた。

ここまで考えたシンは、内心自分の考えを自嘲する。どれもこれも推測の域を出ず、どの予想も自分にとって、そうであって欲しいという願望に塗れたものであったからだ。

所詮、数日前までただの学生であった自分に、戦いについての思考など備わっていない。故にその未熟さを補う為に必死にならなければならない。この先に起こること全てを耐えて、飲み干し、己の糧にしなければピクシーを救うことは出来ない。

初めてドーナシークと対峙した時とは違い、今度はリアスの助けはまず望めない。ドーナシークに戦いの場所へと誘導されていくなか、シンは己の裡で覚悟と意志を研ぐ

ように昂らせていく。
シンは生まれてこのかた喧嘩というものは何度かしたことはある。しかし、いまからシンは生まれて初めて生死を賭けた戦いをする。

◇

ドーナシークに指示されて着いた場所は、寂れた公園であった。そこそこの広さはあるが、遊具の数は少なく、手入れをされた形跡も無く、殆どの遊具に錆が浮いている。時間のせいもあるだろうが、公園からは全く人気が無かった。
公園で始末しようとするのは、初めてシンと会ったのが公園であり、仕留め損ねたのもまた公園であったゆえにこの場所を選んだのか、それとも単なる偶然か。数メートル離れて向かい合うドーナシークの表情からは、それが読めない。
シンは、目だけを動かして周囲を探る。公園に入ってからドーナシーク以外の堕天使が現れる様子は無い。この時点でシンが想定する最悪の事態は免れた。
そのとき、ドーナシークの空いた手が光を放ち、その手の中で伸びて槍を形作る。思わず身構えるシンであったが、予想に反し、ドーナシークは作り出した光の槍を頭上へと投げ放つ。

光の槍は頭上高く飛ぶと、空中で静止し、その身を四つに分けて四方へと散りながら落下していく。

ちょうど公園を囲むようにして分かれた槍がそれぞれ地面へと突き刺さったとき、公園内の空気が一変する。つい先程まで何も感じなかった筈なのに、肌に触れる空気はざらつくような不快感をシンへと与え、吸う空気は腐臭でも混じっているかと錯覚さえ覚えるほど気持ちが悪い。

「この一帯に結界を張った。少なくとも貴様の頼りのグレモリー家の悪魔には、そう易々とは察知できまい」

助かる可能性の一つであったリアスたちの登場は、ドーナシークの言葉でほぼ絶望的になったと考えられる。詳しい仕組みはシンには分からないが、ドーナシークの張った結界というものは、索敵を妨害する効果があるらしい。

「ふっ、顔色が悪いな。まあ、貴様たち悪魔には結界内の浄化された空気は毒に等しいからな」

尋ねてもいないのにペラペラと結界について説明をするドーナシーク。この有利な状況に優越感でも感じているせいか口が軽い。尤も、シンは結界の能力を聞いてもこれを破壊や無効化する術は無い。もし、自分にもっと力があったならばどうにか出来たのかもしれないが、今のシンの『悪魔の力』は、精々相手を殴り飛ばすぐらいにしか使え

ない。

気分が悪くなっていく結界の中、ピクシーも影響はないかと見てみるが、まだ瞼を閉じて気絶をしている。目立った傷はなく一定の間隔で上下する胸で、ただ意識を失っているだけだと若干安堵するが、軽いとも考えられない。

この状況を打破する鍵の一つは、ピクシーの意識を覚ますことであることは間違いないと、ドーナシークに悟られないよう、シンは表情を変えず静かに考える。

「では、そろそろ駆除するとしよう」

ドーナシークの手が再度、光を放つと今度は、槍ではなく杭と表現するような長さの形となる。それを握り、シンに目掛けて放つ。シンは咄嗟に頭部と胸部の前に腕をかざすが、放たれた光の杭は、そのどちらにも命中はせず、シンの右太腿に突き刺さった。

最初に感じたのは指で押されたかのような軽い衝撃であったが、すぐにそれは熱のようなものへと変わり、そしてすぐに激しい痛みへと転じる。

「ぐ、あああああああああ！」

貫通はしなかったものの表情の無かったシンの顔が苦痛で歪み、公園の中で絶叫が響く。痛みに耐えかねたのか、シンはその場でしゃがみ込み、刺された右太腿を手で押さえる。

「この間の悪魔のように逃げ回られたら少々厄介なのでな、まずは足から潰させても

らった」
痛みに悶えるシンを冷めた表情で睨むドーナシーク。悪魔の苦痛の叫びなどでは、彼の同情を誘うことはなく、むしろ耳障りでしかない。
「ふん、苦痛であろう。冷めた表情をしていてもその痛みには耐え切れまい。少々風変わりな悪魔だと思ったが、所詮は下級か」
シンを見下すドーナシークの言葉。
それを聞き、その言葉を否定するかのように立ち上がるシンであったが、その姿は弱々しく、痛みからか両脚は細かく震えている。
「ま、まだだ……」
小さく呟くシンの右手が淡く輝き、紋様を浮かび上がらせる。それを見てもドーナシークは脅威を感じず、再びその手に、今度は光の槍を形成する。
両手をだらりと下げ、構えらしい構えをとらず無防備なシンに光の槍の先を向ける。ドーナシークが槍を掴む手を放すと、空中で急加速し、光の軌跡を描きながらシンの左脇腹を穿つ。一息遅れて反応したシンの右手が光の槍を掴み、これ以上突き刺さるのを阻むが、その弊害として掴んだ手から白煙を上げさせられる。
槍の勢いは辛うじて止めたものの、突き刺さった衝撃でその場から数歩後退し、背後にあったジャングルジムにぶつかり、それに背を預けるようにしてなんとか立っていら

れている様子のシン。
「く……ぐう……！」
新たに生まれた痛みで悶え、呻きながらも刺さった槍を無理矢理引き抜き始める。深くは刺さっていないが、傷口から槍を抜いていくたびに白煙が上がり、シンの顔に汗が滲んでいく。
「あああああああ！」
痛みを誤魔化すかのように獣のような声を上げ、一気に槍を引き抜くと地面へと投げ捨てる。光の槍を抜かれた脇腹からは、鮮血が湧き出し、光の槍を掴んでいた右手も赤く爛れていた。
「ちっ、あのときの反省を踏まえて、強めの光を込めて放ったつもりだったが、この間の悪魔といい貴様といい、最近の悪魔は随分と頑丈だな」
光の槍を防いだシンに対する感心は無く、面白くない、といった不快の感情を隠そうとはしないドーナシーク。
俯き、荒い息を吐くシンであったが、右手に拳を作ると、もたれているジャングルジムに無言で拳を叩きつけた。
公園内に響く甲高い金属音。その音にドーナシークは不快そうに表情を歪めた。
叩きつけられたジャングルジムは激しく揺れ、シンが拳を打ちつけた部分は、右拳の

形が分かるほどに変形し、シンの腕力がどれぐらいのものかを語っている。
「……頑丈さと力が数少ないとりえだからな……どれほどか試してみるか？」
「……つまらない強がりにつまらない挑発だな。くだらない戯れも、もう十分だ。次で終わりだ」
ドーナシークの掌から今までの比では無いほどの光が溢れ出す。殺すつもりで放った一撃で死ななかったことがドーナシークのプライドを強く刺激した。ドーナシークにとって不本意ではあるが、確実に始末するために全力を込めて光の槍を形成していく。
溢れていく光はやがて明確な形を作っていく。長さは先程の槍と変わらないものの、その太さは数倍になっており、槍ではなく柱を持ち上げているようであった。
その光の激しさは、離れた場所にいるシンの目を強く刺激し、太陽を直に見ているかのように、目をぎりぎりまで細めなければ直視できないほどのものであった。
全力を込めた光の槍を構え、滅するべき標的を睨むドーナシーク。シンは観念したのかその場から動こうとはせず、背後の遊具に持たれたまま立っている。
「終わりだ」
光の槍を投げ放つ――
「ねえ？」

――前に第三者の声がドーナシークの動きを止める。
「いつまで掴んでるの？」
ドーナシークの意識が、シンからその声の主へと向く。
自らの手を見るとそこには、不機嫌そうな表情を浮かべてドーナシークを見る妖精。
「はーなーしーてッ！」
妖精――ピクシーの体に青い火花のようなものが散る。と同時に爆ぜるような音が響き、ドーナシークの手から腕にかけて青白い火花が蛇のように走ると、次の瞬間、ドーナシークの腕が凄まじい速さで跳ね上がった。その勢いで掴まれていたピクシーが空中へと投げ出される。
痛みを伴う腕の震えを感じたかと思うと、それが一気に痺れとなって全身へと広がり、ドーナシークの体も腕同様に一瞬跳ね上がったかのように震えた。そのショックで収束させていた光の槍は霧散し、手の中から消える。
『電撃』
それが、ピクシーの思わぬ反撃を受けて、ドーナシークが最初に思った言葉であった。
不測の事態にしばしの間、ドーナシークはこの原因となったピクシーの姿を探してしまった。この時、彼の意識は完全にシンから離れてしまっていた。そして、我に返り標的であるシンへと目を向けたとき、ドーナシークの目に映ったのは自分に向かって拳を

振り上げるシンの姿。シンの顔は、ついさっきまでの痛みに悶えていた表情が、嘘であるかのように能面に徹している。

顔面目掛けて放たれるシンの左拳。ドーナシークは咄嗟に腕を眼前に出して、それを防御する。骨と骨とが衝突する感触に、シンとドーナシークは互いに痛みを感じ、奇しくも両者は同じ感想を抱く。

軽い。

ドーナシークは今まで戦ってきた悪魔たちと比べて、シンの拳を軽いと評価し、シンは勢いのまま振るった自分の拳を当てたときの不十分な手応えを軽いと感じた。

踏み込んだシンの右足、そこには未だにドーナシークの放った光の杭が刺さっている。ドーナシークが逃亡を妨げるように放ったものが、結果としてシンの攻撃を放つための溜めを不十分とさせ、絶好の機会を逃すこととなった。

不意をもらってしまったが、今までのことでシンの力が削がれていることに気付くドーナシークは、好機と言わんばかりにもう片方の手に光の槍を形成し始めるが――

「っが！」

ドーナシークは痛みに驚き思わず声を上げる。

シンは槍の形成よりも先に、右手でドーナシークの胸倉を肉ごと掴み、成人男性一人の体重を右手一本で持ち上げる。

爪を突き立てるようにして持ち上げたドーナシークを無事な左足を軸に、靴底で地を強く踏み締めると同時に足首から腿の付け根まである関節を稼働させ、力を込めて筋肉が膨張した右腕を大きく振るう。力を込めたことで、脇腹からは一層血が溢れ出すが、それに構うことなく背後にある、さっきまでもたれ掛かっていたジャングルジムに向けて、力の限り投げ飛ばす。

一直線に飛ぶドーナシークの体は、背中と頭を鉄製のジャングルジムに強打して止まる。その際、ドーナシークの口から苦悶の声が漏れる。

シンとドーナシーク、二人の立ち位置がさっきとは逆になる。

シンは追撃を掛けようとドーナシークに向かって駆けるが、その動きは鈍い。片足を負傷している状態だと考えれば速いとも言える速度ではあるが、ドーナシークとの離れた距離は数メートル。ピクシーの攻撃に意識が向いた後の不意を突いて縮めた数メートルとは違い、いまの数メートルの間は確実にドーナシークの意識はシンへと向けられる。その間を駆けるには致命的とも言える速度であった。

ドーナシークとの距離約四メートル。

ドーナシークの注意が痛みからシンに向けられる。シンも走る速度を緩めない。

ドーナシークの右手に光が収束していく。

ドーナシークとの距離約三メートル。

収束していく状態のままドーナシークは、右手を持ち上げて投擲の姿勢をすぐさま取り、迫るシンを迎撃する準備を急速に整える。ドーナシークが、自分を迎え撃つ姿を見てもシンは速度を緩めず、腕を交差して突き出し、頭部だけを守れるように最低限の防御を行う。

ドーナシークとの距離約二メートル。

光の収束が終わり、ドーナシークの手の中に光の槍が握られる。シンの走るスピードはそれでも緩まず、速度を維持したまま、左足の踵が地を踏みつけ、離れた瞬間、足の指先を発条のようにして蹴りつけ、ドーナシーク目掛けて飛び込んだ。

両者の距離約一メートル。

飛び込んでくるシンに光の槍を持つドーナシークが、シンの心臓にその槍を突き立てる為の刺突が繰り出された。

槍と素手、どちらに分があるかは一目瞭然。シンが後数歩まで迫る必要がある距離をドーナシークの槍は、瞬時に零とする。

槍の先端が、シンの胸へと迫ったとき――

雷鳴が轟き、閃光が奔った。

閃光はドーナシークを貫き、自らの意志に反してその体を仰け反らせ、動きを硬直させる。そのとき、ドーナシークの視線に入るピクシーの姿。一瞬ではあるがドーナシー

クには、ピクシーがこちらに向かって舌を出していたように見えた。
ドーナシークの光の槍はピクシーの横槍により力の供給を断たれて、ただの光へと戻る。シンを阻むものは無くなり、仰け反って無防備なドーナシークに全体重を乗せて、体ごと突っ込んだ。押し込まれる衝撃は背後にある遊具によって押し止まれ、行き場を失った力は、ドーナシークの体の内側を蹂躙するかのように圧迫。骨は激しく軋み、肺も胃も、その他の内臓全てが本来の形を歪められた。
技術など一切ない、ただ身体能力と自分の重さだけを使った、技とも言えないただの『突撃』。
しかし、シンの全体重を受けたドーナシークは、その衝撃で目は限界まで見開かれ、口も目と同様に大きく開き、苦鳴の代わりに圧迫されて肺から絞り出された空気が吐き出される。苦悶に満ちた表情のドーナシーク、だが意識は失ってはいない。
ドーナシークの見開かれた目とシンの冷めた視線が交差する。
シンの右手が、整えられたドーナシークの髪を掴むと腕力にものを言わせて、強引に引っ張る。何本も髪が抜ける音が聞こえてくるが、構わず手前に引くと、地面に向けてその手を振り下ろした。
「ッ！」
後頭部から地面へと土埃が舞うほどの速度で叩きつけられ、そのショックで意識が混

濁したのかドーナシークは呆けたような表情を浮かべる。
シンは、その顔を真上から見下ろし、容赦なくその中心に右拳を振り下ろした。
鈍く、響かない潰れた音。
ドーナシークの顔面の中心に血の華が咲く。未だドーナシークの意識は途切れてはいない。現状の消耗した状態のシンの一撃には、意識を断つほどの威力は無い。それが不幸にもドーナシークを苦しめる。
シンは血の糸を引く右拳を振り上げる。
「ま、まて――」
手を突き出して、止めるよう懇願しようとするドーナシークの言葉を最後まで聞くよりも先に拳を振り下ろした。
再度、聞こえる鈍い音。
「く……あ……」
めり込む拳の隙間から僅かに聞こえたドーナシークの悶える声。それを聞き、シンは躊躇うことなく拳を振り上げた。
その後に聞こえる鈍い音。ただし今度は、それだけであった。

◇

顔面を真っ赤に染め、顔の形を変えて大の字で倒れているドーナシークの側で、シンは腰を下ろす。表情はいつもと同じ無表情であるが、呼吸は荒く、顔には汗と疲労の色が浮かんでいる。

この時になってシンは、初めてドーナシークの状態を確かめた。完全に白目を剥いているが、胸は上下に動いているのでまだ生きているのが分かる。気付けば、公園内を漂っていたざらつくような空気は無くなり、足に刺さっていた光の杭も消えている。ドーナシークが気絶したことで結界などの力が消失したのが分かる。

先程までは何も考えず、とりあえずは動かなくなるまで殴り続けたが、戦いの熱が冷めてきた今、自分の行いを冷静に振り返ると少々背筋が冷たくなってくる。

ドーナシークが生きていたことに少々安堵する。もし、殺めていた場合、その責任は自分に留まらず、リアスなどの周りに飛び火する可能性があったからだ。シンも自分の行いで他人に悪影響を及ぼすのは不本意である。尤も、ドーナシークを殴っている最中にはそんな考えなど浮かばず、一切の手加減も慈悲も加えずに殴っていた。ドーナシークが生きていたのは、単純にシンの力量不足の結果である。

そんなことをシンが考えている間にピクシーがシンの近くまで来ると、黙ったまま怪我をしている右太腿に両手をかざす。すると両手から光が溢れ、傷口に注ぎ込まれる。

光が注がれた傷口は、ついさっきまで激しい痛みを訴えていたが、ピクシーの出す光によって和らいでいき、出血も徐々に納まり、目に見える速度で傷口を新しい細胞が埋めていく。
「電撃といい、これといい随分と芸達者だな」
　素直に褒めるがピクシーの反応は無い。
「――ねえ」
「何だ？」
「ぼんやりと覚えてるんだけど、何度かシンって叫んでたよね？　あれってやっぱり、あたしを起こす為に叫んでたの？」
「まあな……久しぶりに腹の底から声を出したな――おかげで喉がひりひりする」
「じゃあさ……」
　俯いていたピクシーが顔を上げる。いつもの明るい表情は無く、暗く、申し訳なさそうな表情であった。
「あいつの攻撃をわざと受けてあたしを――」
「それは違う」
　最後まで言い終わる前に、ピクシーの考えをきっぱりと否定する。
「大げさに叫んだのは事実だが、あいつの攻撃は正直反応しきれなかったし、痛みも本物

だった。ああいう状況じゃなきゃ、立っていられなかったかもしれない。それに俺はお前を起こしただけだ。あいつから逃れられたのはお前自身の力だ」
「でも――」
なおも食い下がろうとするピクシー。しかし、シンはピクシーの額を人差し指で軽く小突いてそれを拒絶した。
「いたーい！」
「元はと言えば、俺が目を離したのがそもそもの発端だ。ピクシー、お前が責任を感じる必要はない。――それでも責任を感じるなら、いまので無しだ」
明らかに吊り合わない内容であるが、シンはこれ以上この話はするつもりはない、と態度で示す。額を押さえ涙目でシンを見るピクシーであったが、先程までの暗さは幾分か消え、いつもの表情へと成りつつあった。
「ああ、そうだ。まだ言ってなかったな」
シンはピクシーを真っ直ぐ見つめる。
「さっきは助かった。ありがとう」
シンは生き延びられたのはピクシーの助けがあったからこそだと思っている。それがなければドーナシークとの戦いで二、三回は死んでいた。
だからこそ、その思いを言葉にして口にする。一切の他意なく、純粋な感謝の言葉を。

しばしの間、シンの口から聞いた言葉にぽかんとしていたピクシーであったが、やがてピクシーは笑みを浮かべ。
「うん！　あたしも助けてくれて、ありがとう」
お互いに感謝の言葉を交わす両者。が、次の瞬間、シンの表情は一気に険しいものとなり、ピクシーをやや乱暴に掴むと、あらん限りの力で地を蹴り、倒れているドーナシークから急いで離れる。
「え？　え？　なになに？」
事態が飲み込めず、されるがままになっているピクシーの耳に入る二つの羽ばたき。
倒れているドーナシークを挟むように二人の人物が降り立った。一人はフリルの付いたゴシックローリータと呼ばれる格好をした幼い容姿の少女。もう片方は胸元を大きく開き、体のラインが浮かぶ挑発的な衣服を纏った妙齢の女性。
どちらもシンが初めて見る顔であるが、二つの共通点があった。一つは、背中から生えた堕天使であることを示す黒い翼、もう一つは、こちらを見下している視線であった。
堕天使の援軍。シンが考える限り最悪の事態である。堕天使二人を相手に、こちらは消耗したシンとピクシーの二人。数では互角であるが、戦力差は掛け離れている。
「様子がおかしいと思って見にきたら、なにやってんのよドーナシーク！　悪魔に伸されるなんてうちら堕天使としての恥よ」

甲高い声でそう言って気絶しているドーナシークをつま先で軽く蹴る。
「よせ、ミッテルト。いまは、ドーナシークの失態を責める前にやるべきことがある」
「はいはい。カラワーナはせっかちね。で、あんたがドーナシークを伸した悪魔？　なんだ、もうボロボロじゃん」
いまだ脇腹から血を流すシンの姿を見て、ミッテルトが嘲笑う。
「それじゃあ、とっとと消えてね！　うちらも暇じゃないんで」
ミッテルトは、ドーナシークと同様に光の槍を作り出し、それをシンへと向けた。しかし、シンもそれに応じるかのように右手を差し出す。その手の中には何かが握られていた。
「……何のつもり？」
「その携帯電話がどうした」
差し出した右手の中には携帯電話。
「分からないのか？　もう既に助けは呼んである」
シンの言葉に、ミッテルトたちの様子が変わる。見下していた視線は、警戒をするような鋭いものとなる。
「別に不思議なことじゃない。いまの状態ならすぐにでも助けを求めるのは当たり前のことだ。あと数分もすれば、俺の刻印から場所を探知して、転送してくる」

「へぇ、じゃあ、あと数分であんたを殺せばいいだけのことじゃん」
「出来るか？　俺はお前たち二人に勝つことはできないが――負けないことは出来る」
射抜くような堕天使二人の睨みを怯まず、真正面から受け止め、睨み返しながら挑発的な言葉を口にし、いつでも戦う準備が出来ているのを示すように拳を握る。
血は未だ流れ続け、顔色も悪い。堕天使二人でかかれば、倒すのは容易であるに違いない。だが、堕天使二人は、何故か躊躇う。
それは、目の前にいる悪魔に得体のしれないものを本能が無意識に感じ取った。勝てるかもしれないが、手痛い反撃をもらうかもしれない、そのような利己的な判断が決断を鈍らせる。
「ふん！　マジになっちゃってバカみたい」
「つまらない小競り合いをするほど我々も愚かではない。この場は不本意だけど見逃してあげるわ」
あくまで、シンを下に見ている態度を崩そうとはしない二人。
気絶しているドーナシークを二人で持ち上げると、さっさと離れていってしまった。
堕天使たちが去り、数十秒が経ったのちシンは大きく息を吐いて、座り込む。
「大丈夫？」
疲れた様子のシンを心配するピクシーの声、シンは軽く手を振って大丈夫であること

を示す。
緩慢な動作で右手に握った携帯電話の電話帳から番号を選び連絡をする。
シンは、ようやくリアスたちに救助を求めることができた。
「……今日は、慣れないことばかりする日だ」

休養、次戦

「無茶をしたわね」

それが、ドーナシークとの戦いの後、リアスから最初に言われた言葉であった。

そして、その言葉を見下ろされる形で、今度は安堵と心配を含んだ声で再び言われる。

今、シンがいる場所は、シンの自宅であり、現在シンは寝間着に着替えて自分の部屋のベッドで横になっている。その額には熱を冷ます為の冷却シートが貼ってあった。

ドーナシークとの戦いの後、リアスに連絡を取ると、すぐさま転送用の魔法陣でシンの居た公園に現れ、それを使って部室まで転送し、そこからシンの希望で自宅まで送ってもらっていた。

リアス、そして部室に寄った際、たまたま朱乃も居たので、シンの身を案じて自宅まで付き添うと言われたが、異性を自宅に招き入れるのに抵抗感と気恥ずかしさを覚え、付き添われるのを少々渋るシンであったが、

「そんなこと考えている場合じゃないでしょう！」

というリアスの至極真っ当な一喝により、首を縦に振らざるをえなかった。

自宅に転送され、玄関を潜ったとき、家にたどり着いたという安心感により今まで意

識の奥底に閉じ込めていたものが一気に噴き出したのか、体が鉛にでもなったかのような疲労感と、体が無意識に震えるほどの寒気がシンを襲う。

玄関を上がるとき掛けてある鏡に自分の姿が映る。そこには血の気が失せ、見たことの無い顔色をした自分がいた。

血や穴が開いた制服を脱ぎ、なかなか言う事を聞かない体を無理に動かして着替えると、リアスたちに支えられる形で、二階にある自分の部屋にまで移動する。シンの部屋は、シンの性格を表すかの様に、強い個性を感じないごく一般的なものであった。勉強用の机にテレビ、パソコンに本棚、特徴のないことこそが特徴と言える模様であった。

そして、シンはその部屋に置かれたベッドの上に崩れるように倒れこんだ。

横たわるシンを心配して、ピクシーは少しでもシンの苦痛を和らげようと、左脇腹に出来ている傷に、右太腿の時と同様に光を注ぎ込む。既に右太腿の傷の出血は止まっているが、脇腹の方の傷は不完全であり、一度部室に寄ったときに応急処置として包帯を巻いた程度の治療しかしておらず、巻いた包帯には血が滲んでいた。

傷の痛みが和らいでいく中、ピクシーの治癒の力にリアスたちは感心した様子を見せる。どうやらピクシーの能力は、リアスたちにとっても未知数のものであるらしい。しかし、傷は回復していくものの体調は回復の兆しを見せない。寒気は収まらず、だんだんと風邪のときのように体が熱を帯びてきた。

「堕天使に受けた光がだいぶ体内に残っているのね」
シンの症状を見て、リアスはそう判断した。
悪魔にとって『光は毒』。それは、一誠と共にリアスから聞かされたことであった。天使や堕天使の使う光によって悪魔が傷を負えば、治癒の阻害を受けたりなどの悪影響を及ぼす。シンは悪魔として中途半端な存在故に光に対して過敏な反応が起きず、ピクシーの治癒の効果を受けられたが、それでもやはり悪魔として影響が及ぶ部分もあったらしく、今の様に風邪に似た症状が起こっていた。
「その状態だと一、二日は安静にする必要があるわね」
「そうですか……すみません」
「何故、謝るの？」
「理由はどうあれ勝手に堕天使と戦った上に、こんな風に怪我で迷惑――」
そこでシンは言葉を止める。何故なら、シンの言葉を聞いていたリアスの顔に明らかな怒りが浮かんでいたからだ。
「シン」
「はい」
「あなたは、私がそれを理由に責めるような悪魔だと思っていたの？」
低く抑えられたリアスの声、それは静かな怒りに満ちていた。

「あなたは協力者という立場だけど、私は他のグレモリー眷属と同様にあなたを守る義務が有るわ。今回のことは私が招いた失態よ。あなたに咎はないわ」

リアスは確かに怒っていた。しかし、それはシンに対しての怒りではなく、今回の事態を未然に防げなかった自分に対しての怒りであった。

それを察したのか、シンは失言したと内心思った。必要以上に自らに責任があるように言い過ぎたため、返って相手を見くびっているような結果となってしまった。相手に責任を一切乗せず一人で背負い込むということは、逆に言えば、相手を信頼していないともとれる。

意図せず言った言葉が相手の傷口を抉るという結果に、どう言葉を返したらいいのか内心で考えてみるものの、いい言葉は浮かんでこない。必死に頭を回転させるシンに助け舟が出される。

「あらあら、部長。間薙くんは真面目だから私たちに心配を掛けたと思って、謝っているだけですから、あまりカッカしちゃダメですよ?」

落ち着いた朱乃の声が、張り詰めた空気を和らげる。

「ああ、そうですわ、間薙くん。お腹は減っていませんか? よろしければ台所と材料を使わせて頂ければ、何か作りますが?」

朱乃の言葉を聞いて、シンの体は素直に栄養を求める。体の不調は有るが、食欲まで

は不調ではない。
「お言葉に甘えていいですか？」
「うふふ。それじゃあ、さっそく作ってきますね」
朱乃が料理の支度をしに一階へと降りていく。
部屋に残されたのは、シンとリアス、そしてピクシー。
今更、先程の話を蒸し返す訳にもいかず、苦し紛れに何か適当な話題を考えてそれを口に出す。
「あの部――」
「あー……もう限界……」
シンの言葉を遮り、今まで黙々とシンの治療を続けていたピクシーが消え入りそうな声を出す。リアスとの会話ですっかりと忘れてしまっていた――正確に言えば、忘れてしまうほど痛みが消えた――脇腹の傷は、ピクシーの治癒の甲斐あって出血も止まっている。
「ごめん……あたし……疲れたから……寝る」
瞼を重たげにして、ピクシーはシンにそう告げると、シンの腹の上で横たわり、力を限界まで酷使したのかそのまま寝息を立てはじめた。
「小さな体で、頑張る子ね」

幾分和らいだリアスの声。
「ええ、こいつのおかげで今日は命拾いしましたから」
「ふふふ。でも、その子もあなたのおかげで助かったわけだし、お互い様じゃない？」
「そうなりますかね？」
「あなたたち、結構相性がいいのかもしれないわね」
リアスは慈愛に満ちた微笑みで、眠るピクシーの頭を優しく撫でる。いつもの凛とした表情とは違う一面を見たような気がして、珍しいものでも見るかのようにシンはまじまじとその顔を見る。
「どうしたの？」
「いえ、別になにも」
シンの視線に気付いてリアスが尋ねてくるが誤魔化す。普段のリアスから想像できない表情だったので珍しいから見ていました、と正直に口にするのは相手に対して失礼が過ぎる。
ここで会話が途切れた。理由としては、ピクシーを起こさない様に会話を控えたことが原因の一つであるが、根本的な理由はシンの会話能力であった。基本的には聞き手側であるシンには、今の空気でリアスとどのような会話をすればいいのか内容が思いつかない。先程話題にしようとした内容も冷静になって考えれば下らな過ぎる話題であっ

た。

部屋に飾られた、時計の秒針が進む音がやけに大きく聞こえる。

（兵藤と木場が居ればな……）

この場に二人が居ないことが悔やまれる。

「おまたせしました」

沈黙を破る声。朱乃が、盆を持ってシンの部屋へと戻ってくる。盆の上には茶碗が一つ。

「とりあえず、軽く食べられるようにお粥をつくってきました」

シンは、眠るピクシーを起こさないようにそっと動かしてから、上体を起こし、朱乃から盆を受け取る。盆に置かれた茶碗の中には白い粥と、赤い梅干し。至ってシンプルなものであったが、シンはそれを見て、口の中に唾液が溜まっていくのを自覚する。

「いただきます」

茶碗と一緒に置かれていたスプーンを使い、煮られて柔らかくなった米を掬い、口の中へと入れる。口の中に入れたとき、最初に感じたのは熱さだった、だが、火傷するような熱さではなく、味を損なうようなぬるさも無い、適温という言葉がよく合う絶妙な熱さであった。次に感じたのは、粥の塩気であった。薄くも無く濃くも無く、熱さと同様に適量という言葉がこれほど相応しいものはない。一緒に入れられていた梅干しは、

食べる人間のことを考えて種を抜いてあり、その梅干しからの酸味がシンの食欲を一層煽る。

シンは手を休めず、一心不乱に粥を体内へと流し込む。

数分後、手に持った茶碗を盆へと置く。その茶碗には米粒一つ残ってはいなかった。

「ごちそうさまでした。美味しかったです」

「うふふ。お粗末様です」

美味しかった、そうとしか表現できないほど絶品の粥であった。学園内で大和撫子と称される朱乃であったが、ここまでの料理の腕を持っているのは、シンとしては尊敬の念を覚えずにはいられない。

空になった食器をシンから受け取ると、洗う為に朱乃は再び下の階へと降りていく。

「そう言えば、今日、あなたが着ていた制服は私たちの方で処分しておくわね」

シンが食事を終え、一息吐えたところを見計らってリアスは言う。リアスの言葉を聞いて、そのことを失念していたことにシンは気付いた。

今日のドーナシークとの戦いで、制服には大小二つの穴が開き、おまけにシンの血がかなり付いている。自分で洗って取れる量ではなく、下手に捨てるわけにもいかない。

「助かります」

「新しい制服は、明日には届けるから」

「お願いします」
　返事をした後、シンは眠気を覚えた。今までの肉体的な疲労と、空腹が満たされたことで、シンの体は休眠を要求し始める。
「眠たそうね。安心して眠っていいわ。誰か護衛として――」
「それはダメです」
　最後まで言い終わる前にハッキリとした声でリアスの提案を拒否した。
「迷惑を掛けた自覚はあります。ですけど、これ以上迷惑や足を引っ張るような真似はしたくありません。俺のせいで本来の仕事を疎かにさせたくありません」
　シンは、リアスや他の面々が自分を護衛するのを迷惑とは考えないだろう、と内心思う。そこまで深い付き合いではないがオカルト研究部のメンバーは、変な話ではあるが善人的な悪魔だと思っている。だからこそ必要以上に甘える様なことをしたくなかった。一度その寛容さに慣れてしまえば、それ以降無様な自分を許してしまうような気がして。
　我ながらつまらない拘りとプライドだと自覚し、そんな意地を張ること自体が迷惑であると、自らの考えの矛盾を理解しながらも拒否の態度を緩めない。
　結局の所、シンという存在は不器用な人間であった。
　リアスの碧眼の視線とシンの揺るがない視線が衝突し、再度部屋内に重い沈黙を作り

上げ、その状態がしばらく続く。
「……はぁ……あなたって、イッセーに負けないくらい変わった子ね」
折れたのはリアスの方が先であった。シンの瞳から意志を変えさせるのが無理であると悟ったらしい。
「なら、代わりにこの子なら文句はないわね？」
リアスの手元から、軽い音と上げて真紅の蝙蝠が現れた。
「使い魔は主と特別な繋がりがあるから、あなたのように堕天使の結界内に囚われても情報を伝達することが出来るわ」
そう言い終えると手元にいた蝙蝠はリアスの手から飛び立ち、近くにあったカーテンレールに逆さまに止まってシンを見下ろす。
「私の使い魔をあなたに預けておくわ。これで緊急の場合もすぐに駆けつけられるわ」
「……ありがとうございます」
話が終わると共に瞼の重みが、秒数ごとに増していく。
「もういいわね？　なら、早く寝なさい。学校のことは私がやっておくから」
「……はい……ありがとうございます……」
数十秒後、瞼は完全に閉じシンは寝息を立てはじめた。
リアスは、ピクシーと同様に眠るシンの頭をそっと撫でる。

「お疲れ様。いまはゆっくりと眠りなさい」

◇

「あ、起きた」

目覚めたシンの耳へ最初に入ってきたのは、ピクシーの声であった。

昨日に比べ、体の熱っぽさは既に無い。しかし、体のあちこちの筋肉は痛み、傷を負った場所も突っ張った感覚が残っている。それでも体を支障なく動かすことが出来るまでには回復をしていた。

寝起きでやや視点が定まらないが、声のする方へと目を向ける。

ピクシーが居たのはシンの机の上。そこで、リアスから預かった使い魔の蝙蝠の両頬を引っ張って遊んでいた。蝙蝠は頬を引っ張られてキーキーと鳴いている。

「そいつは、グレモリー部長から預かった奴だ。あまり苛めるな」

「ええー。でも、この子楽しんでるよ」

予想に反しあの鳴き声は抗議の声では無く、楽しんでいる声であるらしい。ピクシーのでまかせかと考えたが、蝙蝠からは抵抗する意思が見えないのであながち嘘ではないらしい。

そこでシンはいきなり片手で顔を覆い、天を仰いだ。ピクシーと蝙蝠とのやり取りを見ていて、眠りに就く前のリアスとの会話を唐突に思い出して羞恥心が込み上げきたからだ。いくら余裕の無い体調であったからといって、今思い起こせば自分の言っていたことは殆ど子供の我儘であった。

（他に言い方は無かったのか……）

相手に気を遣わせたことを考えれば考える程に羞恥心は増し、あの時の自分の行動、言葉全てに対して、恥と疑問を持ってしまう。

気を紛らわせる為、時計を見ると、ちょうど昼を過ぎていた。そう認識すると寝る前に食べていた粥をすでに消化し終わった胃が、新たな栄養を求めて、食欲を刺激してきた。

「――ピクシー、何か食べるか？」

「食べるー！」

蝙蝠から手を放し、シンの提案に即答をする。すると蝙蝠の方も鳴き声を上げ、何かを訴える。

「この子も何か食べたいんだって」

「分かった」

ベッドから降りたシンの肩にピクシーが乗る。ピクシーを乗せたまま食べるものを

探しに、二階から一階のキッチンへと降りていく。蝙蝠はその跡を追い、飛んでついてくる。

一階のキッチンへと着くと、テーブルの上に一枚の紙が置いてあることに気付く。手に取ってみると、それは朱乃からの書き置きであった。

『間薙くんへ。起きたときにすぐに食べられるように、勝手ではありますが、何品か作っておきました。台所と材料を使わせていただいてありがとうございます。焦らず体の方を治して下さいね。朱乃より』

コンロの上に鍋が二つ置いてある。蓋を開けてみると、片方は味噌汁、もう片方は煮物であった。炊飯器を確認してみると、中には炊かれたご飯。冷蔵庫の中も調べて見ると、煮魚、御浸しなどがラップを掛けて置いてある。意識せずにシンは唾液を飲み込んだ。数品の料理を前に、空腹はより強くなっていく。

この気遣いを心の底から感謝しつつ、コンロや電子レンジをフル稼働させ、一秒でも早く料理を温めなおす。

数分後、温まった料理を皿に移す。ピクシーの分も皿へと移すが、それでもまだ結構な量であった為、夕飯の分は残しておく。炊飯器からご飯を茶碗へとよそい、テーブルの上へと置く。

途中、使い魔の蝙蝠には何を食べさそうと考えるが、蝙蝠は、自分から冷蔵庫まで飛

んでいくと、中にある果物の缶詰を要求するように足で突く。リアスの使い魔だけなこともあって相手の考えに気付き、自分の考えを伝える程の知能があるようであった。
蝙蝠のリクエストに応え、シンは缶詰から果物を出すと適当な大きさに切り、皿へと盛ると、キーキーと喜んでいるような鳴き声を出して、果物に噛り付いた。
シンも目の前に置いてある料理を前にして、手を合わせる。
「いただきます」
これほどまで、気持ちを込めていうのは、いつ以来だろうと考えるが、最初に箸をつけた煮物を口に入れた瞬間、そんな考えは彼方へと消え去り、その後は機械の様にただひたすら箸を動かして料理を口へと運ぶ。
時間を忘れ、周りに一切気を配らず、ただ食す。空腹が満たされていく度に力も満ち、体中の細胞が蘇っていくかのような感覚を覚える。
数分後、目の前に置かれた食器は全て空になった。
「ごちそうさまでした」
手を合わせ、ここには居ない朱乃に対して感謝の念を送りながら食事を終えると、食器を流し台の中に一旦置いて、シンは台所から離れようとする。
「どこいくの？」
いまだ食事を続けているピクシーが尋ねてきた。

「風呂だ」
寝ている間に結構な量の汗をかいたのか、肌がべたついていた。シンはそれを不快に思い、洗い流す為に風呂場へと向かおうとしていた。
「一緒に入る？」
「一人で入る」
ピクシーの提案を一蹴し、シンは風呂場の方へと消えていった。
それから十数分後。
汗を湯で流し、新しい寝間着へと着替えたシンは、自分の部屋へと戻っていた。既にピクシーもシンの部屋に先に戻っており、使い魔の蝙蝠とじゃれあっている。
机の上に置かれた携帯電話を手に取り、履歴を確認すると、何通ものメールが送られていた。差出人たちは、オカルト研究部のメンバー全員から。
内容は共通して、シンの安否を気遣うものであったが、リアスは厳しくも優しさを感じさせる内容、朱乃は暖かさを感じさせる内容、木場は誠実さを感じさせる内容、小猫は簡素ながらもこちらへの心配を感じさせる内容、一誠は情の篤さを感じさせる内容、それぞれの性格が滲み出る文面であった。
メールのやりとりなど、両親か偶に木場とするくらいなものであった為、こうも送られてくると胸に来るものを感じる。

（返信をどうしようか……）

シンはベッドの上で寝そべり、返信の内容を思考する。頻繁にメールをする習慣が無い為、こういうときに限って良い文面が浮かばない。

「なんか嬉しそうだね」

「……そう見えるか」

「うん。笑ってないけど嬉しそうに見える」

無表情で携帯電話と真剣に向かい合うシンを見て、ピクシーはそう感じた。シンもピクシーの言葉を否定することは無く、携帯電話と向き合い続ける。

文面をどのようにするか四苦八苦しつつ、シンがメンバー全員に返信し終えたのは、それから二時間後のことであった。

◇

ピンポーン、と来客を告げるチャイムが鳴る。その音で、シンはベッドの上で目を覚ました。メールの返信後、シンはそのまま眠ってしまっていた。上体を起こすと、シンの枕のすぐ横で、ピクシーが蝙蝠を抱き枕の様にして眠っている。

起こさない様に静かに下の階へと降りて行き、玄関を開けると、そこには紙袋を持っ

た一誠が立っていた。
「よお」
「――どうした、何か用か？」
「これ、部長から」
　一誠が紙袋を差し出す。寝起きで若干回転の悪い頭で、これは何なのかという答えを導き出すのに、十秒ほどの時間を要した。
「……ああ、替えの制服か」
「それにしても大変だったな。怪我は大丈夫か？　堕天使に襲われたんだろ？」
「まあ、何とか生還できたがな……お前も知っている相手だ」
「マジ？」
「あの黒スーツの堕天使だ」
　げっ、という声を出して一誠は反射的に腹部に手を当てた。ドーナシークの顔を思い出して、ついでにそのとき受けた傷の痛みまで思い出したのかもしれない。
「でも勝ったんだろ？　……ありがとな」
「礼を言われるようなことはしていないぞ」
「俺が勝手に思っただけだけどさ、なんか代わりに一発返してくれたみたいな気がして……自分で言ってて変な感じだけど」

苦笑を浮かべる一誠にシンは内心首を傾げる。どことなくではあるが、一誠の表情に翳りを感じられた。

「ホント凄いよな……リアス部長の眷属悪魔じゃなくても俺に出来ないことが出来て……それに比べて――」

口の中で何か呟くがシンには聞き取れなかった。一誠はシンが凝視しているのに気付き誤魔化すように笑みを浮かべた。

「はっはっは！　何でもない！　いつまでも怪我人引き止めてて悪かった！　俺はもう帰るよ。じゃあな！」

そのまま、シンに背を向け一誠は帰っていった。

去って行く一誠に何か言葉を掛けようするが、何を言えばいいか思いつかない。一誠が言い淀んだ話題にもっと踏み込んで聞くべきだったという思いもあったが、結局は無暗に相手の心に踏み込むべきではないという大人ぶった思考が勝り、ただ見送るしかなかった。

明日聞けばいい。

そういった考えが、いまのシンと一誠との関係を示すものであった。

◇

翌日、体調は完全に回復したので登校の準備をする。渡された新しい制服に袖を通すと、理由もないが気分が高揚してくる。

学園に着き、教室に入る。そこにはまだ一誠の姿が無かった。しばらく待ってみるが一向に姿を見せない。やがて担任の教師が教室へと入ってきてホームルームが始まった。

そのまま一限目が始まっても姿を見せず、二時限、三時限が終わっても来ない。四時限目が終わり、昼休憩の時間になるとシンは教室を出てある場所へと向かう。

「木場。ちょっといいか？」

「やあ、もう大丈夫みたいだね」

同じ階にある木場の教室。シンは確認の為に訪れた。

「少し聞きたいことがある。兵藤のことなんだが――」

「ああ。ちょっと場所を移そうか……」

昨日、一誠に会ったシンとしては今日休んだことに少々の疑問を持ち、自分の身に起こったことも考慮して木場に何か知っているか聞きに訪れたが、その判断はシンの杞憂ではなかったらしい。

誰が聞き耳を立てているか分からない為、わざわざ旧校舎の部室まで足を運ぶと、木

場は昨日起こったことを手短に話し始めた。
昨晩、いつものように一誠が仕事で依頼者のもとに行くと、そこで『はぐれ悪魔祓い〈エクソシスト〉』と遭遇。『はぐれ悪魔祓い』とは本人の危険性からヴァチカンから追放されたエクソシストが利害の一致から堕天使の加護を受けて、より凶悪性を増した存在だと木場は語る。昨晩会った『はぐれ悪魔祓い』はその典型例であったらしい。
「……何度も会いたいとは思わない神父だったよ」
木場はいつもの笑みが浮かべつつも、言葉と目に敵意を滲ませる。普段の木場を知っている者からしたら想像出来ない程の暗い感情。それは昨晩の『はぐれ悪魔祓い』にだけ向けられたものではなく、もっと別の何かに向けられたものに思えた。
木場とはそれなりの友好関係を築いてきたと思っていたシンであったが、まだ自分は一つの側面しか見ていなかったことを知る。
すぐに木場は何事も無かったかのように話の続きを喋り、シンも先程の変貌に何も言わず黙って聞く。
『はぐれ悪魔祓い』に傷を負わされた一誠であったが、すぐにリアスたちが魔法陣を使用し一誠を救助した。木場曰く、シンが堕天使に襲われた一件があった為、すぐに気付き救助が出来たという。そのとき受けた傷のことを考えリアスが一誠に休むように指示を出した為、今日は欠席となった。

話を聞き終え納得し、木場に礼を言うと教室へと戻る。木場の教室前で別れるとシンは自分の教室に向かう。

「――まだまだだな、俺も」

小さく呟いたのは、話の途中に見せた木場の知らなかった側面を思い出したからであった。疑問に思ったことを聞きにいったらまた新たな疑問を持つ結果となった。

あの場面で何故あれだけの敵意を露わにしたのか、理由を聞こうと思えば聞けた筈であるがシンは聞かなかった。

一歩踏み込むことを躊躇った理由はいくらでも思いつくが、その理由をずらずらと並べることこそ自分の未熟さだと実感する。

「……まだまだだ」

◇

旧校舎へと向かう途中に、校舎の外で使い魔の蝙蝠と戯れているピクシーを回収した。ドーナシークの一件からなるべく近くにいるようピクシーに言い聞かせていたが、一か所から動かずに居させるのは流石に酷だと思い、窓の外の見える範囲でピクシーと蝙蝠を遊ばせていた。おかげでシンは授業中、外で飛び回って遊んでいる姿から目を離

すことが出来なかった。
ピクシーはいつもの様にシンの肩に乗り、蝙蝠の方はその習性からかシンの上着のポケットに入り込んだ。
シンが部室に入ると、既に一誠を除く全員が集まっていた。
「あら、もう体調は良いみたいね」
「はい。おかげさまで」
そう言いソファーへと座るシン。シンの前に朱乃が淹れた茶が置かれる。礼を言って一口飲む。
「そう言えば、まだあなたに言って無かったことがあるわね」
リアスがシンの居なかった間にあった出来事を語る。
リアスの話では昨日の夜、悪魔の大公からはぐれ悪魔の討伐依頼が届き、一誠も経験の為にリアスたちに同行したという。
はぐれ悪魔とは、稀に発生する爵位持ちの下僕の悪魔が何らかの理由で主を裏切り、逃亡あるいは主の殺害を起こして主無しとなった悪魔のことを指す。基本的に他者に対して害しか与えない為、三勢力からも危険視され、見つけたら即排除が基本のルールとなっているとリアスは説明する。
昨日、排除したバイサーというはぐれ悪魔も町外れの廃屋を住処とし、そこに人を誘

い出しては食らっていたという。その話を聞いてシンは何故か既視感を覚える。はぐれ悪魔などという存在に出会った記憶はないにも関わらず。

そして、バイサーとの戦いで一誠はリアスたちの戦い方を目の当たりにしたらしい。本来ならシンも見物をさせ、実戦で悪魔の戦い方を説明したかったらしいが、シンの事情からそれが出来なかった為、この場で口頭での説明となった。

悪魔は三つ巴の大戦をした後、大きな変革があった。軍団などの戦力を持てなくなった悪魔は、代わりに少数精鋭の戦力を保持する形となった。そして悪魔たちはその精鋭たちに、以前から流行していたチェスの駒の名と特性を与えることで軍団の代わりに競わせるようになり、悪魔としての新しいステータスとしたらしい。

それを『悪魔の駒〈イーヴィル・ピース〉』と呼ぶ。

聞く相手によっては、不快感を覚える内容かもしれないと素直にシンは思った。文字通り悪魔の『手駒』になるという訳だから。

「案外悪魔も俗っぽい考え方をするんですね」

「否定はしないわ」

率直なシンの感想に、リアスは機嫌を害する様子も無く素直に肯定する。

「それで各駒の能力なんだけど――」

そのとき、部室の扉が突然開く。部室に居る全員の視線がそこに集まった。

立っていたのは今日休んでいた筈の一誠であった。だが、一誠のいつも纏う陽気な空気は無く、怒りや悲しみといった負の感情が混在したものを纏っていた。

「部長……」

一誠の口から出た声は泣き叫んだ後の様に枯れ。

「話があります」

その目は今まで見たことが無いほどの真剣さが込められていた。

シンは一誠のその姿に、次なる戦いの予兆を感じた。

祈願、氷息

一誠がここに来るまでの間に起こった出来事をリアスに報告する。リアスから休養を言い渡されていた一誠は、することもなく児童公園で時間を潰していたところ、ある少女と偶然出会う。その少女の名前はアーシア。

シンにとっては初めて聞く名前であった。小声で木場にアーシアという少女について知っているか尋ねた所、木場自身詳細は知らないものの先日、一誠がはぐれ悪魔祓いに襲われた場所にいたシスターであり、その前から一誠との面識があったという。はぐれ悪魔祓いと共に行動をしていたということは必然的にそのシスターも堕天使側の人間である。

一誠は更に語る。その少女と共に今日一日共に行動していたことを。そしてその少女は一誠と同じく『神器』を持ち、その力で先日受けた傷を治癒してくれたことを。そして最後に、あのレイナーレという堕天使の前に成す術なく敗れ、アーシアのレイナーレへの懇願によって救われた自分のことを血を吐くように語った。

一誠は真っ直ぐにリアスを見つめ、レイナーレの居る教会へアーシアを助けに行くことを提案する。が、リアスは断固とした態度でその提案を却下した。

しかし、一誠の方もそのまま諦めるはずも無くリアスに食い下がる。リアスは返答の代わりに一誠の頬を叩いた。乾いた音が静まった部室によく響く。だが、それでも一誠は怯まない。

一誠は堕天使が去り際に言った『儀式』という言葉に胸騒ぎを覚え、アーシアの命が危機に瀕するのではないかと思い一人でも教会に乗り込むと言い放つが、リアスは冷静な声で一誠の無謀さを諭し、一人で行けば確実に死ぬだけだと言う。リアスの話し方は最初の方こそ冷静ではあるが、徐々に言葉に熱を帯びていく。

一誠はその言葉を聞き、迷いなく言う。自分を眷属から外してくださいと。

「そんなことができるはずないでしょう！　あなたはどうしてわかってくれないの！」

リアスの熱が一気に爆発する。シンがついこの間見た静かな怒りとは正反対の爆炎のような怒り。そのような怒りの感情を真正面から受けても一誠の意志が揺らぐ気配はない。

その表情でシンはもう既に一誠の答えは決まっているということを悟る。たとえ最後の命の一片を使い切ってでも事を成す、そんなすでに決定した意志を変えるというのは至難の業である。一誠がリアスに対し、ことの顛末を言ったのはある意味自分のことを切り捨てて貰う為に言ったのかもしれない。

（頑固な二人だ）

意見を曲げずリアスと睨み合う一誠の姿を見て、シンはそう思う。シンの考えとしてはリアスの言うことは真っ当であり、この場で間違っているとすれば一誠の方であるのは分かっている。だが、不思議と一誠に対して不快感を覚えなかった。

一誠は断固とした意志で、自分はアーシアという少女と友達になったこと、そしてそれ故に彼女を見捨てることが出来ないと言い放つ。リアスは、臆せずにそのようなことを言う一誠を褒める一方で、悪魔と堕天使の関係は一誠の想像以上に薄氷のように脆く、危うい関係であることを説く。

「敵を消し飛ばすのがグレモリー眷属じゃなかったんですか？」

返す一誠の言葉にリアスは閉口し、反論の代わりに一誠を睨みつけるが、一誠も怯まずにその碧眼から放たれる射抜くような視線を真っ向から受け止めた。

堕天使側に居るアーシアを悪魔が救う義理など無いと、あくまで悪魔側のスタンスを崩さないリアス、その考えを拒絶し自らの意思を曲げない一誠。話は完全に平行線を辿る状況となった。

停滞したかと思えた状況。それを動かしたのはいつの間にか席を外していた朱乃であった。朱乃はリアスに近づくと何かを耳打ちする。朱乃が何を言ったのかは聞かされたリアスにしか分からないが、それを聞いてリアスの顔色が変わり、ただでさえ険しかった表情は、その上で苦虫でも噛み潰したかのような表情となる。朱乃のもたらした

報告はよほど聞き捨てならないものであったらしい。

「大事な用事が出来たわ。私と朱乃はこれから少し外に出るわね」

そう言って一誠との話し合いを打ち切ると、外へと出る準備を始める。当然、話が終わっていない一誠は納得するはずも無く、去ろうとするリアスに食い下がろうとするが、その前にリアスは一誠の口に人指し指を押し当て静かに黙らせる。

「イッセー、あなたにいくつか話しておくことがあるわ。まず、一つ。あなたは『兵士〈ポーン〉』を弱い駒だと思っているわね？　どうなの？」

リアスの問いに一誠は頷く。ここで初めてシンは一誠の駒が『兵士』であることを知り、この間一誠と会ったときに表情に翳りがあったのかを察する。あの時点で一誠は自分の駒が『兵士』であることを知り、周りと比べて劣等感を持っていたのであろうとシンは推測した。

リアスは頷く一誠の考えを否定する。そして、『兵士』には他の駒にはない特殊な力『プロモーション』という力を秘めていると語る。このときリアスの視線が、一誠から一旦離れてシンに向けられた。恐らくは一誠と共にこの場で『兵士』について能力を聞くようにというリアスの合図の様なものであろうと考え、シンは一字一句聞き逃さない様に聴覚に神経を集中させた。

『プロモーション』とは『王〈キング〉』が敵の陣地と認めた場所の最奥に着いたとき、

実際のチェスと同様に昇格し『王』以外の駒の能力を得るというもの。リアスの言った通りならば、一誠は使い様によっては眷属の中で最強になれる力を秘めているということになる。尤も現在の一誠の実力では負担が掛かりすぎるため、『女王〈クイーン〉』以外の駒にしか昇格出来ないとリアスは付け加えておく。

敵地に乗り込もうとする一誠に対して態々、『兵士』という駒の有効活用の仕方を教える。それの示す意味をシンは察する。

（それはつまり、そういうことでいいんですね？　グレモリー部長）

リアスの意図をシンなりに解釈しつつ両者の会話を聞き続ける。

リアスはその白い手で優しく一誠の頬に触れ、自らの『神器』を使う際に強く想う様、言い聞かせる。その強い想いに『神器』が応えてくれると。

そして、最後に『兵士』でも『王』を取れることを告げると、朱乃を連れて魔法陣の中に入り、何処かへ転送されていった。

木場や小猫に何も言わずに行ったという事実に、シンは自分の解釈が間違っていなかったことを確信する。そして、シンはリアスに対して間違った認識をしていた。

（頑固じゃなくて、素直じゃない……か）

少しの間、リアスから言われた言葉の意味を噛み締めていた一誠であったが、覚悟を決めたように大きく息を吐くとシンたちに背を向け、部室から去ろうとする。

それを木場が呼び止め、改めて一誠の意志を確認するかの様に現実的な問いを投げかける。『神器』を持とうと『プロモーション』が使えても、はぐれ悪魔祓いや堕天使の集団を相手に一人で戦うのは無謀という正論。

「それでも行く。たとえ死んでもアーシアだけは逃がす」

自分でも無茶だと自覚していても、絶望的な状況だとしても一誠の決意は揺るがない。

「いい覚悟といいたいところだけど――」

「行っても無駄死にだな。目的の前に死ぬのが目に見えている」

ここでシンが口を挟む。一誠の決意に水を差すような言葉に流石の一誠も一気に頭に血が昇る。

「だったら!」

一誠が怒鳴る前に木場が割り込んだ。

「僕も行く」

思いもよらない木場の言葉に一誠の興奮は急激に冷め、目を丸くする。シンの方は特に表情を変えず、参戦を希望する木場の横顔を見ていた。

木場は一誠を『仲間』だと思っている故に一誠の意志を尊重し、手助けをしたいと語る。そして、本音を隠さず、今回の件に関わっている堕天使や神父の存在も気に入らな

いと、負の感情を込めて言う。そのときに浮かべていた顔は、昼休憩のときにシンに見せたあのときの顔であった。

一誠も初めて見る木場の一部分に軽く息を呑むが、当の本人は特に気にした様子も無くいつも通りの口調で、付いていく理由はそれだけではなく、『プロモーション』の説明を語ったことでリアス自身も、遠回しであるが一誠のこれから起こす行動を認めていることを一誠に説明をした。そのとき、木場の顔に普段の笑みでは無く苦笑が浮かんでいたのは、シンと同じくリアスに対して、素直ではないな、という気持ちがあったのかもしれない。

木場の説明でリアスの真意に気付かされた一誠は、顔を紅潮させてリアスへの心遣いに感激をしている。そんな感動している最中の一誠に小猫が近づき、いつもの無表情のまま、私も行きます、と告げた。

「感動した！　俺は猛烈に感動しているよ、小猫ちゃん！」

大げさではないかと思える程に喜ぶ一誠の姿。木場が参戦したことよりも嬉しそうにしているので、木場も自分の存在が忘れ去られているのではないかと引き攣った笑みになっていた。

「それじゃあ、行くとするか」

そう言ってソファーから立ち上がるシンの姿に三人の視線が集まる。

「え……間薙も来てくれるのか？」
「行かないとは一言も言っていないだろ」
意外そうな表情をする一誠にシンは、少々感情を込めた言葉を返した。この場を黙って見送るような人間だと少しでも思われたのが、彼にとって心外であった。
「理由は……まあ、木場や塔城と殆ど変わらない。アーシアという見ず知らずの人間を助けたいと思うほど俺は聖人君子じゃないが……兵藤、お前の手助けならしてもいいと素直に思えたからな」
決してはぐれ悪魔祓いや堕天使の存在を軽視し、自分が死ぬかもしれないという未来の想像を欠如させての考えではない。それら全てを混ぜ合わせて考えた結果、兵藤一誠という存在に対し助力してもいいというものが残った。この女好きで、考え無しで、いろいろ厄介なことに首を突っ込んで、それでも意志を曲げず、真っ直ぐに生きようとする一誠という一人の悪魔を、シンなりに気に入っている故の結果であった。
「間薙……」
一誠からは感謝するような目を向けられ、木場や小猫からも好意的な視線が向けられる。そういったものに慣れていないシンは、誤魔化すように肩に乗るピクシーへと目を向けた。
「そういうわけで、ピクシー――」

「うーん。じゃあ、シンも行くならあたしも行く」
ここに居ろ、という言葉を言い終える前にピクシーは付いていくことを宣言する。これには一誠たちも驚く。ほんの数日前に堕天使にさらわれたことを知っているからであった。
「いいのか？」
「うん、危なくなったらあたしを守ってね！　そしたらあたしもシンを守ってあげる！」
短くも意志を確認するシンの問いにピクシーは迷いも無く答える。ピクシーの答えは一度だけではあるが共に戦い、勝った相手への信頼が含まれていた。
「ピ、ピクシー……！　お前はなんて出来た妖精なんだ！」
再度、感無量といった様子の一誠。シンが行くと言ったときよりも心なしか感激しているように見えたのはシンの錯覚であろうか。なんとなくではあるが、先程の木場の心情を把握してしまうシンであった。
「んじゃ、五人でいっちょ救出作戦といきますか！」
気合を込めて宣言をする一誠。我先にと部室から出ていこうとするが、ここで木場は少し準備したいことがあると言う。それを聞いて一誠は校門前に指定した時間までに集まるように言い、最初に部室を出て行った。
木場は部室に残り、シンと小猫は一誠に続いて部室から出ていく。

「塔城。少し聞きたいことがあるんだが」
「はい。何ですか？」
シンが小猫から聞いたのは、この学園から目的地となる教会までの距離。今から出発すればどのくらいで着くかという確認であった。おおよその把握をするとシンは小猫に礼を言い、自分も少し準備があると言って小猫を先に行かせる。
小猫が先に行ったのを確認すると、シンは上着のポケットからリアスの使い魔の蝙蝠を取り出した。本来なら部室に入ってすぐに返すつもりであったが、色々とあってタイミングを逃してしまい返すに返せなかった。しかし、このような状況になったことを考えれば、偶然とはいえ返さないことは正解であった。
掌の上でリアスの使い魔はシンとピクシーを見て、キーキーと鳴く。シンは蝙蝠に教会に着く大体の時間を告げると、廊下の窓を開けた。
「部長によろしく」
「またねー！」
蝙蝠の翼を軽くつつくと、主へと向かって蝙蝠は掌から飛び立っていった。万が一のことを考え、一応リアスたちへこちらの情報を送っておく。相手がどのような反応を示すのかは分からないが、少なくともこちらにとっては悪影響を及ぼすことはない、とシンには思えた。

「先輩」
　突然話しかけられシンの動きが硬直する。声の方へと目を向けると行った筈の小猫が立っている。
「いまのはリアス部長の使い魔ですね」
「……ああ」
「そうですか」
　間違ったことをしていないつもりだが、黙って一人でやったことを見られ、後ろめたさが心の裡で滲み出てくる。だが、小猫はそれ以上詮索をせず、行きましょうとシンを促し共に一誠の待つ場所に向かう。
「ねーねー、こねこ。さっきのこと詳しく聞かないの？」
　ピクシーが疑問を素直に口にする。
「……間薙先輩が間違ったことをするような人には見えませんから」
「ふーん」
　シンと小猫は入部前から交流があったが、それでも浅いとも言える程の交流であった。普段から無表情で感情の起伏が少ない小猫から、そこまで評価されていたことはシンにとって初耳であった。
「じゃあ、イッセーを助けるのもシンと同じ感じ？　嫌ってそうに見えたけど？」

「……えっちな部分は嫌いです。でも、兵藤先輩がしようとすることは嫌いじゃないです」

いつものような平坦な口調ではあるが、シンにはそれが紛れもない小猫の本音のように聞こえた。

「成程……塔城」

「……はい」

「お互い、死なないように頑張らないとな」

「はい」

死地になるかもしれない場所へと赴く前の会話としては短く、簡素なものであったが、その短さの中には言葉だけではないものが込められていた。

（出来ることなら死にたくもないし、死なせたくもないな）

共に戦う者たちの顔を脳裏に浮かべながら、その気持ちを静かにシンは強めていくのであった。

◇

教会に着く頃には日が落ち、空には星の光が見え始めている。教会に近づく度に感じ

ていた悪寒は、教会を前にして最大限まで高まり、シンは不快な感覚を覚えずにはいられなかった。隣では一誠も同様の感覚を覚えていたのか、頬には日が落ち気温が下がっているにも関わらず汗が垂れている。それがこの場の空気の悪さによる冷や汗であるのは明白であった。

この感覚は何度か味わったことのある堕天使の気配であることをシンは不本意ではあるが理解していた。

教会に注意を払いながら、木場が制服から何かを取り出し地面に広げる。それは教会の内部を描いた図面であった。

「まあ、相手陣地に攻め込むときのセオリーだよね」

当たり前のように言う木場に対し、同意の言葉を口にする一同。ただし、一誠だけ話に置いて行かれたかのように忙しなく周りを見ていた。

「……一応俺は気付いていたぞ」

「私もです」

「あたしもー」

「……」

部室に残った木場が何を準備していたか大体の察しがついていたシン、それに同意する小猫とピクシー、一誠のみ完全に思考の外にあったらしく口を閉じて沈黙をしてい

た。

木場は苦笑を浮かべながら、アーシアが現在囚われていると思われる図面に描かれたある場所を指で示す。

そこは教会の聖堂。それを見て、他の場所は無視してもいいのかという疑問を一誠が述べるが、木場は『はぐれ悪魔祓い』の組織は聖堂の地下で怪しげな儀式を行うのが大体の行動であると答えた。どうしてそのようなことをするのか、一誠は再度疑問を口にした。

木場曰く、最も聖なる場所で邪悪な呪いを行うことで神を否定し、穢し、冒涜することで恍惚に浸る。神に捨てられたと思っている者たちの一種の復讐であるらしい。

それを聞いて、一誠は不快そうな表情をする。その感情が向けられたのはそのようなことを行う連中か、もしくはそのような連中を生み出した神か、あるいは両方か。

シンはそれを聞いても正と負どちらの感情も湧くことはなかった。あえて感想を言うならば、それほどまでに神という存在を嫌悪し否定し冒涜しながらも、決して無視することも忘れることも出来ず憎悪という形で神と向き合い続ける連中は、結局骨の髄まで神に浸され、縛られた存在なのであろう、というものであった。

（ある意味では、これも神の奴隷なのか？）

そんなことを考えているうちの話は先へと進んでいく。救出のプランは至って単純

なもので、入口から聖堂まで最短で駆け抜け儀式を行う場所の入口を探す。当然、その間にある相手の妨害を考慮しなければならない。

作戦とは言えない作戦ではあるが、相手が儀式を完了した時点でこちらの負けであり、相手がこちらの都合など考える筈もないので、内容よりもこちらの行動の迅速さが重要である。

教会の入口付近まで近づくが、相手の反応は無い。罠という可能性が捨てきれないが躊躇をしている時間もあまり無い。

最初に一誠が入口に入り救出の口火を切る。その後に続いて、他のメンバーも教会の中へと突入していく。入口に入った瞬間には相手にこちらの動向を把握されているのは間違い無い筈であるが、妨害しようとする気配が見えない。

そのまま何事も無く入口を抜け、聖堂前の扉へと辿り着く。先手を切って一誠が両開きの扉を勢いのまま開いた。

中に入ると、シンの目に最初に入ったのは頭部を破壊された聖人の像。唯でさえ不気味と感じるものが微弱な電灯の灯りと蝋燭の炎の揺らぐ灯りで、より不気味さに拍車を掛けていた。

そのとき、聖堂内に拍手が響く。その音の主は、柱の陰から笑みを浮かべて現れた。

「ご対面！　再会だねぇ！　感動的だねぇ！」

自分たちとさほど差の無い年齢的な容姿をした白髪の青年。シンは初対面であるが、口ぶりから一誠を襲ったはぐれ悪魔祓いと推測した。木場の説明からシンはもっと年のいった人物を想像していたが、現物は大分若い。容姿も整って美青年とも称してもい顔立ちであるが、その顔に浮かべる歪んだ笑みがそれを台無しにしていた。

「俺としては二度会う悪魔なんていないってことになってたんだけどさ……って何か新顔さんがいるじゃないですかヤダー！　どうも快楽と殺戮の悪魔祓い、フリード・セルゼンでぇす！　趣味は悪魔解体ショー、座右の銘は悪魔はマジクソ。そして、すぐにグッドバーイ！　何故ならそれが俺の生きる道だからでぇす！　つーわけで死ね！　マジでさあ死んでくれよぉ！　このクソで屑な悪魔どもがよぉぉぉぉぉ！」

支離滅裂な自己紹介と共にいきなり情緒不安定に激昂するはぐれ悪魔祓いのフリード。シンがフリードの言っていることで理解できたのは精々名前ぐらいであった。この神父のことを語っていた木場が嫌悪している感情を浮かべていたことや、いま一誠が顔を顰めている理由がシンにはよく理解できる。

「なんか、バカっぽそうな喋り方をする人間だね」

小声でボソリと言うピクシー。その意見にはシンも同感であった。

フリードは懐から棒のようなものと拳銃を取り出す。すると、棒状のものの先から空気を震わすような音と一緒に光が噴き出し、その光が剣身を形成する。この力こそがシ

ンが説明を受けた、はぐれ悪魔祓いが堕天使から授けられているものである。
戦闘態勢を取るフリードに一誠たちも構える。五対一という圧倒的に不利な状況でもフリードの歪んだ笑みは消えず、挑発するようにアーシアという少女のことを罵倒し、死んだ方がいいとさえ言う。それが聞き捨てならなかったのか、一誠は怒りを露わにし、アーシアの居場所を問い質すと、フリードは拍子抜けがするほどあっさり答え、隠し階段のある祭壇を指した。
余裕かあるいは何も考えていないのかは分からない。ただ、分かることがあるとすれば、ただではそこには行かせないというものであった。
「セイクリッド・ギアァ！」
一誠が叫ぶとその手に赤い籠手が装着される。それを見たピクシーは軽く呻いて、シンの背後へと隠れた。一誠の赤い籠手には、ピクシーの苦手と感じるものが秘められているらしい。
木場もいつの間にか手に握っていた鞘から剣を抜く。シンの記憶が確かならばここに来るまでの間、木場は手ぶらであった筈であった。そして、小猫は聖堂内に置かれてある自分の何倍もの重さがある長椅子を軽々と持ち上げる。
ここに来るまでの間に『兵士』以外の駒の特性を聞いていたが、目の当たりにすると何とも現実離れをした印象を受ける。

小猫の持つ駒は『戦車〈ルーク〉』その特性は怪力と防御力の特化。小猫はシンの前でそれを遺憾なく発揮している。

「成程」

シンはそれを見て右手に紋様を浮かべる。小猫に倣い近くにあった蝋燭の燭台を掴んだ。そのとき、胸の奥で何かが蠢いた。痛みではなく、その何かがシンに、言葉の代わりに自らの存在を報せるかのように脈動する。ちょうど初めて『悪魔の力』を使ったときと似た感覚であった。ただ、違う点を挙げるとするならば、あのときは突き破るような衝動だったが、今回は蓄積していくかのような感覚であった。

（何だ……）

シンがそれについて確かめるよりも前に小猫が行動に移る。シンは詮索を後回しにし、目の前のことに集中し、手に持った燭台を構えた。

「……潰れて」

小猫が神父目掛けて長椅子を放る。しかし、神父は重量のある長椅子を手に持つ光の剣で軽々と両断する。が、その両断した長椅子の陰から燭台がフリードの顔面目掛け、投槍のように高速で襲いかかる。

「しゃらくせぇ！」

長椅子を斬り払った状態から、超人的な反射神経で上体を後ろに逸らしそれを躱す。

狙いが外れた燭台は壁に激突し、深々と突き刺さる。

間髪入れず、今度は木場が動く。木場の持つ駒は『騎士〈ナイト〉』その特性は速度の特化。シンの視点で木場が、右足が地を踏みしめたのが見えた次の時には、その場から木場の姿が消え、離れた場所にいるフリードの前に剣を振り下ろす構えを取っている。一足で距離を瞬時に縮めた木場、『騎士』の名に恥じぬ機動力であった。

だが、フリードはそれにも反応し振り下ろされた木場の剣を光の剣で切り払う。どういう理屈か両者の剣は火花と金属音を散らして弾かれあうが、すぐさまフリードは反対の手に握る拳銃を木場の眼前へと突きつける。しかし、引き金を引くよりも先に木場もまた空いた手に持った鞘を下から振り上げ、フリードの手首に打ちつけた。その衝撃で拳銃を持つ手は跳ね上がり、天井へと光弾が撃ち込まれる。

木場はその場で片足を軸にしてフリードに背を向けるように回転。それによってフリードの視点から剣が木場の体で隠れる。その間に逆手に持ち替えた剣を、鞘の一撃で空いた胴へと向けて突き出す。だが、フリードは片足を上げ、その靴底を突き出された剣先に向ける。靴底に金属でも仕込んでいたのか、甲高い音を上げ木場の突きを靴底で受けると、その力を利用して後方へと飛び、その最中狂気染みた笑みのまま、狙いを定めていないかのように腕を激しく振るい、拳銃から光の銃弾をばら撒いた。

木場は持ち前のスピードでそれを避けるが、いくつもの弾丸が一誠やシンたちにも襲

いかかってきた。咄嗟に身を低くしてそれを避ける。
「アハハ！　残念、無念！　邪魔くせぇから何匹か仕留めてやろうとしたが、目論見外れてショボボンですたい！　しゃらくせぇ！　屑が生意気に避けてんじゃねぇ！　殺すぞ！」
　気色が悪いくらいに感情を瞬時に変えていくフリード。だが、言動とは裏腹に実力は相当なものであり、木場の速さに付いていく所か、こちらを牽制する攻撃まで加えてきた。
「やるね。かなりキミ強いよ」
「あんたもやるねぇ！『騎士』か！」
　突き刺すような視線をフリードに向けながらも素直な賞賛を送る木場、フリードはフリードで楽しんでいるようであった。互いの言葉に焦りは無く、両者共に余裕が感じられた。
「じゃあ、僕も少しだけ本気を出そうかな」
　そう言い、手に握る剣を眼前まで持ってくると祈るように構える。
「喰らえ」
　その言葉を合図とし、剣身の根本から霧のような黒い靄が現れ、剣身を包み込んでいく。やがて剣は漆黒と称する様な光一つ反射しない、闇に形を与えたかのような剣身へ

と変わった。
　木場はその剣を構え、地を蹴る。先程のようにフリードの前に姿を現した木場は横薙ぎに剣を振るう。それに反応し、フリードは光の剣を縦に構えそれを防ごうとする。が、剣と剣が触れ合った瞬間、金属音は鳴らず、木場の振るった闇の剣は光の剣の半ばまで食い込み、なおかつ染め上げる或いは喰い尽くすように光を蝕んでいく。この光景にフリードも余裕を保てなくなり、動揺の声を上げた。
「な、なんだよ、こりゃ！」
「『光喰剣〈ホーリー・イレイザー〉』、光を喰らう闇の剣さ」
　律儀に答えた木場からもたらされた情報にフリードの表情は変わり、いままでの無茶苦茶を表現するような感情では無く、素の感情なのではないかという声で叫ぶ。
「て、てめぇも『神器』持ちか！」
　そうなのか、とシンは言葉にせず心の裡で思うが、そのことについては後で確認すればいいと考え、木場が『神器』を持っていたという事実は頭の隅に退ける。
　フリードは木場の剣に対抗し、手に持つ光の剣を更に輝かすが、それは闇の浸食を僅かに遅らせる程度であった。フリードの意識は、完全に木場へ向けられ一誠たちから離れている。
　シンは一誠に視線を向ける。一誠はそれに気づき軽く頷く。

次の瞬間には二人は駆けだしていた。
「『神器』！　動けぇぇぇ！」
『Ｂｏｏｓｔ！』
一誠の叫びに呼応し、籠手の宝玉から音声が発せられる。
一誠の叫びに気付き、フリードは舌打ちすると後方へと下がり木場と距離を取ろうとする。
「逃がさないよ」
フリードが離れた瞬間、木場は持ち手を柄頭にまで移動させ、それによって広がった間合いを使い、光の剣の鍔元を斬る。光の剣は完全に力を失い剣身が消滅する。今のフリードの手元に残る武器は拳銃しかない。
「あああ！　うぜぇうえに！　しゃらくせぇぇ！」
激怒したまま拳銃を駆ける一誠とシンに向けた。このとき一誠がシンの一歩前に飛び出す。
「プロモーションッ！『戦車』ッ！」
拳銃から吐き出された光弾は、一誠の体に触れると同時に弾かれて霧散し光へと還る。フリードはこの時点で一誠の駒が『兵士』であることに気付き、驚いた表情を浮かべる。

「肩を借りるぞ」
　シンは一誠の返答を聞くよりも先に飛び上がると、一誠の肩を足場にしさらに高く飛ぶ。フリードは、迎撃しようと拳銃を向けようとするが、目の前に迫る一誠の存在を無視することが出来ず、どちらを先に対処しようか迷い僅かな隙が生まれる。その瞬間を狙い、フリードが見落としていたシンの肩に止まるピクシーが指先をフリードへと向ける。
「えーい！」
　軽い声とほぼ同時に指先から放たれた青白い電光が、フリードへと直撃する。
「あばばばばばばば！」
　感電し体が硬直するフリードの側にシンが降り立つと、拳銃を構えていた腕を両手で掴み、足下をしっかりと踏み締め、一誠目掛けて力の限り振るう。
「兵藤、合わせろ！」
「おう！　戦車の特性！　ありえない防御力と！」
　床から足が離れ、人形のように軽々と振るわれたフリードの顔面に勢いをつけた一誠の左拳が迫る。
「――マジですか？」
「バカげた攻撃力だ」

激突。

生々しい激突音を上げて、フリードの顔面が仰け反る。その衝撃はシンの両手にも伝わり手を放しそうになるほどであった。フリードの体を振るった勢いを殺さず、シンはそのまま振り抜いて背後の壁目掛け手を放した。フリードの体は宙を舞い背中から壁に衝突し崩れ落ちる。

このとき、シンの胸の奥の蠢きが更に強くなる。その感覚にシンは周りに悟られない程小さく、眉根を寄せる。自分でも訳の分からない身体の異常程不安を煽るようなものは無い。

「ナイスパンチ!」

「おお、ありがとな。おかげでアーシアの殴られた分、キッチリ返せた」

褒めるピクシーに礼を言い、倒れたフリードにも違う意味での礼を返すように敵意を込めた笑みを向ける。

このまま倒れているかと思えたが、フリードは口から血混じりの唾を床へと吐き捨て、意識をハッキリと保った状態で立ち上がる。吐き捨てた血混じりの唾の中にはいくつか白い物が混じっている。それはフリードの折れた歯であった。

そしてもう一つ、よく見るとフリードの足下に砕けた光の剣の柄が散らばっている。あの僅かな間にピクシーの電撃の硬直を解き、それを盾にして一誠の攻撃を軽減させた

となると、フリードの身体能力と反応速度は人外の領域である。

「……」

何やらボソボソと呟いているが、シンの耳には何を言っているのか聞こえない程小さい。

「ふざけんなよっ！　クソがあああああ！　＃$％&&&☒#！＊＋？#！　＃$％&&☒#＊＋？#！　殺す！　絶対にだ！　ぶっ殺す！」

今までの比では無いほどに怒り狂う。殴られて頬が腫れ、形が歪となった顔を更に歪めて怒声と罵声を張り上げる。正直、あまりに感情を込め過ぎ、聞き取れないほどの速さと滑舌で捲し立てるせいか、言っている内容の半分も理解できない。

感情を吐き出し終えると、憤怒の表情のままフリードは二本目の柄を取り出し再び戦闘態勢に入ろうとするが、自分の周りに立つ一誠たちの姿を見て、自分の状況を理解したのか、急激に感情を冷やし、代わりにこちらを小馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「おーおー。これはピンチですねぇ！　俺の聖書には悪魔は殺せって書いてあるんですけど、悪魔に殺されるってのは書いてないんですねぇ！　と、いう訳で！　色々心残りが有りますが、悪魔に殺されるのはＮＧなんで！　ここはバイビー！」

ここでフリードが柄を握っていた手を開くと中から球状の物体が落ち、それが床に接触すると同時に聖堂内が光に包まれる。瞬間的な光に視力が一時的に低下し、フリード

の姿を見失う。
数秒後、点滅する視界でフリードの姿を探すが、どこにもいない。すると姿を消した代わりに声が聖堂内に響く。
「おい。そこの雑魚悪魔と中途半端野郎……イッセーくんと……何くんだっけ？　まあいいや。　俺はお前たちにもうゾッコン。絶対にお前ら殺すから。絶対に、絶対に。殴るとか痺れさせてくれるとか、ぶん回すとか、いろいろハードで許せないことしてくれたからねぇ。この代償キミたちに償わせてあ・げ・る。それじゃあ、グッナイ」
感情の起伏も無い声で、捨て台詞を吐き、完全に逃亡したフリード。
衝動と感情の赴くままに行動せず制御が出来る辺り、シンの中で頭の螺子が欠落した狂人という印象から、経験と本能で生きる野生動物のような印象へと変わる。どちらにせよ近寄りたくはないという考えは変わらないが。
「厄介な奴に目を付けられたな」
「お互い様だろ」
「あいつ、キラーイ」
「二人とも大変だね」
「気持ち悪い人でした」
フリードに対する各々の感想を言い終えると、気持ちを切り替え、祭壇に隠された階

段へと向かう。
一誠たちの本当の戦いはこの先に有る。

◇

地下へと降り立つと、延々と続く一本道があった。一定の間隔で電灯が付けられている為、視界を制限されることはなかったが、両脇にも一定の間隔で扉が付いていた。
「たぶん、この道の奥……。あの人の匂いがするから……」
小猫が一本道の先を指差す。埃とカビの匂いしか感じられないこの地下で、小猫は正確にアーシアという少女に匂いを嗅ぎ分けたことになる。動物のような特技に内心感心しながらも一同はそれを褒める時間も惜しんで走り出す。
少しの間走ると、奥に両脇にあった扉よりも一回り程大きな扉が見えてくる。全員その扉の前に立ち止まった。
「おそらく、奥には堕天使とエクソシストの大群が存在すると思う。覚悟はいい？」
決戦を前にして、木場が最後の確認をする。先程の数で有利な戦いとは違い、今度はこちらが数で圧倒的不利になるのは間違いない。だが、ここまできて今更退くという選択肢は無く、木場の問いに全員が頷いた。

そして、いざ突入しようかと扉に手を掛けようとしたとき、扉は一誠たちを招き入れるように開いた。

「いらっしゃい。悪魔の皆さん」

内部を見た一同に最初に声を掛けたのは、この儀式の首謀者であるレイナーレであった。部屋の内部には埋め尽くすようにいる、はぐれ悪魔祓いの神父たち。その神父たちの先には十字架に磔にされた少女。腰まである長い金色の髪に、通常ならば愛らしいと思える容姿と翡翠色の瞳。しかし、それは衰弱によって生気を失い見るものに悲壮感を与えるものとなっていた。その側にはレイナーレが一人立っている。それを見て僅かな疑問がシンの中で生まれる。シンがあと三人の堕天使を見たが、この場にいない。その三人はいまどこにいるのか。

その疑問は、一誠の叫びで中断される。

「アーシアァァァ！」

確かめる必要も無く、磔にされた少女こそが今回救出の目的となるアーシアであった。

一誠の声が届き、生気の無かった目に再び生気が宿り、救いに来た一誠の姿に涙を流す。

「イッセーさん……あぁあ、いやぁぁぁぁぁぁぁ！」

「感動の対面を邪魔してごめんなさいね。もう儀式は終わったの」
一誠の名を呼ぶアーシアの声は、途中から絶叫へと変わり、それをレイナーレが笑う。アーシアの体から光が溢れ、その光が強まるほど絶叫もより強くなっていく。光がレイナーレへと流れ込んでいくと高揚したレイナーレが狂喜混じりの哄笑をあげる。
「これよ、これ！　これこそが長年欲し、求めていた『神器』！　アハハハハハ！」
「アーシア！」
その姿を一誠が黙って見ている筈は無く、アーシアの下に走り出す。だが、神父たちもそれを黙っておらず、フリードのように光の剣を取り出す。
「邪魔は、あがぁ！」
神父が言い終えるよりも先に同じく駆けだしていたシンの拳が顎に突き刺さる。それを見た別の神父がシンに刃を振り下ろそうとするが、頭上から降り注いだ電撃でその動きを無理矢理止められる。その隙に小猫がその神父の胸元に飛び込むと、その小さな拳を鳩尾に叩き込む。体をくの字に曲げながら殴り飛ばされた神父は他の神父たちを巻き込んでいき地に倒れこんだ。
神父たちの包囲に出来た穴に一誠は飛び込み、包囲から抜ける。それでもまだ残っている神父たちが一誠の前に立ち塞がろうとするが、一誠の前に割り込んだ木場が、フリードのときに見せた闇の剣を一閃させ光の剣を破壊し、返す刃で神父たちを斬り伏せ

る。

「サンキューな！　みんな！」

包囲を完全に抜けた一誠は礼を言い、アーシアへと駆け寄ったが、アーシアから放たれていた光は消え、代わりにその光をレイナーレが放っていた。

十字架からアーシアを解放し呼びかけるが、返ってくる声に生気を感じられない。

レイナーレはその姿を笑いながら、さらに追い詰めるように絶望的な事実を一誠に告げる。

『神器』を抜かれた者は死ぬ。

『神器』を返せと激怒する一誠に冷笑して、それを断る。

「……くそ、夕麻ちゃんの姿が憎いぜ」

一誠のその一言にレイナーレの顔が嘲笑によって歪む。獲物を嬲る蛇のような顔であった。

一誠が夕麻という少女との思い出を一言語る度にレイナーレはそれを踏みにじる。

一誠の本気であった恋を伝える度にレイナーレはそれを壊す。

一誠が一生の思い出にしようとしたことを明かすとレイナーレはその傷を抉る。

「レイナーレェェェェェェェェ！」

限界を超えた怒りのまま、一誠は叫ぶ。

「アハハハハハ！　腐ったクソガキが――っ！」
　一誠に侮蔑の言葉を返そうとしたレイナーレは、突如として翼を広げて宙へと飛ぶ。そのとき高速で回転する物体が先程までレイナーレの立っていた場所を通過し、壁に刺さって止まる。壁に刺さっていたのは神父たちの持っていた光の剣であった。
「あら、久しぶりに会ったのに酷い挨拶をするのね。間薙くん」
「そうか、十分だったと思うが」
　上から見下ろしながら初めて会ったときのような声色を使うレイナーレ。それを下から睨みつけるシン。
「兵藤、コレと話し合っても時間の無駄だ。その娘を連れてここを出ろ」
「間薙……」
「逃げ道は木場と塔城が作ってくれる。この堕天使を倒すことじゃなくその娘を救うのが目的だった筈だ」
「間薙……でも……」
「大丈夫だって！　あたしもいるし。……だからさ、イッセーはその娘を守ってあげてね」
　シンとピクシーの言葉に一誠は唇を噛み締めると、アーシアを抱き上げて出口に向かい走り出す。

「……それでいい」
「へぇ……意外と仲間思いなのね。面白みのない顔をしている割には」
シンの行動を嘲笑うレイナーレ。しかしシンの表情に変化は無い。そんなとき、背後から一誠の声が聞こえる。
「木場！　小猫ちゃん！　間薙！　帰ったら、絶対に俺のことはイッセーって呼べよ！絶対だぞ！　俺たち、仲間だからな！」
シンは振り向かず、その言葉の応えの代わりに片手を挙げ軽く振る。それだけで十分伝わると思って。
「まあ、神にも堕天使にも人間にも節操なく尻尾振ってすり寄る阿婆擦れに比べれば……確かに俺は面白味の無い人間かもな」
シンの罵りにレイナーレから嘲笑が消えた。
「……そういえば、あなたにはドーナシークを可愛がってくれた礼をしてなかったわね……死ね！　この半端者が！」
レイナーレの濁流のような殺意を受けながらもそれを風の様に流し、シンは拳を強く握りしめる。
胸の奥の蠢きが更に強さを増した。

◇

地下室を出た一誠はアーシアを抱えたまま、全力で走る。心臓の鼓動は限界まで早まり、肺は酸素をもっと寄こせと訴えるようにキリキリとした痛みを一誠に与え、喉の奥からは血の匂いが感じられた。だが、それら全てを無視して一誠は走り続ける。

酸素を求める口は、刻一刻と弱まっていくアーシアを励ます為に使い続け、その手は冷たくなっていくアーシアの体を暖めるように強く抱き締める。

自分の為に道を作ってくれた仲間の為に、自分の傷を何度も癒してくれたアーシアの為に、必ず救うと心の裡で強く想う。

だが、そんな決意を蝕むように一誠の耳にはレイナーレの言葉が呪詛のように残っていた。

『『神器』を抜かれた者は死ぬしかないわ。その子、死ぬわよ』

頭を振ってその言葉を打ち消す。認めたくは無い、だがそれでもゆっくりと衰弱していくアーシアの姿は紛れもない事実であった。

「アーシア！　もうすぐ外に出られる！　だから頑張ろうな！」

「は……い……イッセー……さん」

弱々しく答えるアーシアを見て、自分の言った言葉が空しく思え、涙が出そうになる。

（クソ！　クソ！　畜生！　あああああああああっ！）

声に出してこの思いを吐き出してしまいたい衝動にかられる。一誠は唇を血が出る程噛み、それを飲み込む。

（なあ……神様……もう十分アーシアは苦しんだじゃないか……これ以上苦しむ必要が有るなら、俺が全部引き受けるからさ……頼むよ、アーシアを助けてくれよ……お願いします、お願いします……）

心の中で必死になって神に祈る一誠。

だが、その祈りに何も返ってくることは無かった。

◇

シンの足下に突き刺さった光の槍が爆発し、その衝撃で後方へと吹き飛ぶ。そのまま地面へと倒れるかと思えたが、背中に何かがぶつかりシンを止めた。振り向くと小猫が、両手でシンの体を受け止めていた。

「塔城――しゃがめ！」

シンの言葉に反応し、小猫が身を低くする。小猫の背後から飛び掛かる神父の腕を振り向きざまに掴むと、頭から地面へと打ちつけた。

「ありがとうございます……」
「先に礼を言うのはこっちだ」
短く言葉を交わすが、それ以上会話は出来なかった。再度、頭上から光の槍が降る。
「させないよ」
横から現れた木場が闇の剣で槍を両断して、シンたちを守る。
「フフフ、やるわね。でもいつまで持つかしら」
その姿を滑稽そうに眺めながら、天井付近でレイナーレが笑う。接近戦は神父たちに任せ、自分は長距離から攻撃を行う。その戦いはシンとしては悔しいが効果的なものであり、その証拠にシンや小猫、木場の体には所々に傷を負っていた。致命傷となるものは無かったがそれも時間の問題である。
レイナーレとの距離の差を攻略するのはかなり難しく。唯一この場で遠距離まで届くピクシーの電撃も当たる前に光の槍で弾かれ、当たっても身に纏った光が瞬時にその傷を癒してしまう。
「少し、厳しいね」
額から汗を流しながら言う木場。木場の洩らした言葉をシンは責めるつもりはない。木場が多くの神父たちを相手にしていてくれたお蔭で、シンやピクシーは未だ無事であった。今、この場で最も弱いのは自分である、シンはその不甲斐ない事実を認めるし

かなかった。
「アハハハ！　まだまだこっちには兵がいるわ。そろそろ諦めたら？」
見下した口調でシンたちを嘲笑うレイナーレ。その言葉を証明するようにシンたちの前にはまだ大量の神父たちの姿があった。
「まだまだ……――っ！」
言い返そうとするシンは突如、胸を押さえ、苦しむような声を出す。
「間薙くん！」
「先輩！」
「シン！」
戦いの最中、胸の奥で脈動し続けていたものが、暴れ始める。
この時になってシンはようやく理解した。この胸の衝動は何か、何をシンに訴えていたのか。
シンは胸を押さえたまましがみついているピクシーを優しく剥がし、小猫へと渡す。
「……少しの間預かってくれ」
「先輩……」
「木場……塔城。俺の後ろに……回れ……俺より……前に出るな……！」
だんだんと余裕の無くなっていく口調。木場も小猫も心配するような素振りを見せ

るが、シンは目でそれを断る。
木場、小猫がシンの背後へと移動した。これでもうシンが気にすることは何もない。
シンはその場で大きく息を吸い込み始める。
レイナーレも異変を察したのか、神父たちに指示を出すが、もう遅い。
肺の限界まで吸引した空気は、肺の中で媒体となってシンの生み出した魔力により超常的な変化を起こす。魔力の影響で肺の中の空気は急激に温度を下げ始め、一瞬にして零度までいくと更に下降し続け、常人では耐えられないほどのものとなる。その余波でシンの口の端からは白い靄が漏れ出し、背後にいた木場たちは肌寒さを感じ始める。
これこそが胸の奥にある何かが訴えていたことである。シンに報せたかったのだ。シンの中で、新たな能力〈チカラ〉が産み落とされるということを。
右手に刻まれた紋様が一際輝きを放つ。それを合図にシンの中で限界まで下げた空気は、肺を引き絞るようにして口から吹き出す。
内と外の温度差により白く染まった極低温の息は、迫りくる神父たちを飲み込み傍観していたレイナーレにまで届く。白い靄の中で神父たちの叫びが聞こえるが、どういった状態になっているのか木場たちには見えない。
十数秒間吹き続けた後、白い靄が消え去ると靄の跡は全て凍り付き、シンたちの前には凍結した世界が広がっていた。

覚醒、思惑

新たに使えるようになった能力を存分に使い切ったシンは、目の前に広がる氷の世界を前にして、足をもつれさせその場で転倒しそうになった。あの氷の息を吹き出している最中、ずっと体力が削られていくような感覚を覚え、吐き切った後には体全体に錘を吊るされたかのような疲労のみが残る。それが自分でも完全に把握していない力に払った代償であった。

地に倒れるかと思えたシンの体が途中で止まる。木場が倒れていくシンの腕を掴み、転倒を防いだからであった。細い腕からは想像出来ない力強さでシンの体を引き上げようとする。シンもそれを見て、いつまでも支えて貰う訳にもいかず、力の入りきらない足に鞭打って無理矢理立つ。

「大丈夫かい?」

「ああ……」

木場の気遣う声を聞き、最近の自分はこのようなことばかりをしていると改めて思い、この戦いが終わったら本格的に体力を付けようと、このとき心に誓った。

「それにしても凄いね、間薙くん。さっきのは悪魔よりも悪魔らしかったよ」

そう賞する木場たちの目には氷が張っている床や霜の付いた壁、その床の上ではシンたちに襲いかかろうとした神父たちが氷漬けとなって倒れている。だれもが血の通いが少ない青白い顔色をし、寒さを耐えるように体を激しく震わせ、救いを求めるような呻き声を出している。一応は生きているらしいが、誰もが立ち上がるほどの体力は残っていない様子であった。ほんの十数秒程の冷気に当てられていただけでこのような状態なら、自らの放った先程の氷の息には凍結だけではなく、体温を急激に奪う効果もあったのかもしれない。

「怪獣みたいでした……」

「いつもよりも悪魔らしかったよ！」

木場も小猫もピクシーもシンのことを褒めているのだが、言葉が言葉なだけに素直に喜べない。

「……褒め言葉として受け取っておくよ」

とりあえずは皆の賞賛をそのように返し、地下室一帯を見回す。神父は全員倒したことが確認できたが、肝心の人物の姿が見当たらない。

「塔城」

小猫の名を呼ぶシン。シンの意図を察して小猫はすぐに行動に移る。

「……あの女の人の匂いはこの部屋からもうしません」

数秒後に返ってきた答えがそれであった。この場に居続けることに危機感でも覚えて去って行ったのかと木場たちは考えた。

このときシンは珍しくその場の誰もが苛立っていると分かるほど、腹立たしげに舌打ちをした。その苛立ちは逃げたレイナーレに対してだけではなく、自信満々に力を皆の前で使い、その機に乗じられてまんまと敵に逃げる機会を与えてしまった自分の間抜けさにもあった。敵を倒すことは倒したが肝心の頭を潰さなければ意味がないし、そして一瞬でも全て一人で片づけようと心の隅で思った自分の過信に嫌気が差す。

そんな自己嫌悪に陥っている最中、誰かが肩に手を置き、袖を引っ張り、頬を掴んだ。考えるのを止めて、それが誰なのかを確かめると、木場がシンの肩に手を置き、小猫が袖を引っ張り、ピクシーがシンの頬を掴んでいた。

「敵はもういないのに肩に力が入っているよ？　間薙くん」

剣を納めた木場が、いつもの爽やかな笑顔で窘める。

「……間薙先輩。顔が怖いです」

袖を掴む小猫。その表情はいつもの無表情では無く、相手を気遣う色が浮かんでいた。

「そーそー。その顔似合わないよ？」

いつもの無邪気な態度で、ピクシーはからかう様に更にシンの頬を引っ張った。

シンが最近気づいたことがある。リアスとの件といい、この件といい、自分は誰かに気付かせられないと、必要以上に物事を背負い込もうとする気があるらしい。自分なりの善意からそれを行って相手に心配を掛けさせているのだから、改めて質の悪さを実感してしまう。

シンは大きく息を吸い込み、心の裡に溜まった黒いモノと一緒に吐き出すようにイメージしながら一回深呼吸した後、木場たちの方を向き、悪いと一言謝罪をした。

そのとき、突如地下室に魔法陣が現れる。全員咄嗟に構えようとするが、その魔法陣にはこの場に居る誰もが見覚えがあるものであった。

その魔法陣が誰のものか真っ先に木場、小猫が先に戦闘態勢を解く。続いてシンも構えを解く。

魔法陣の中から現れたのは、用事の為出掛けていたリアスと朱乃であった。

「一足遅かったみたい、残念ね」

「あらあら、凄いことになっていますね」

凍結した部屋を見渡し、リアスと朱乃は少々の驚きを込めそう言った。

「部長。思ったよりも早い到着でしたね」

リアスがいずれここに来ると分かっていたのか、木場は特に驚いた様子も無く尋ねる。

「そうね。あなたたちが、いつ教会に到着するのかは分かっていたから急いでこっちに来たけど、どうやら余計な心配だったみたいね」
事情を知らない木場はリアスが教会に着く時間を知っていたことに疑問符を浮かべ、リアスは悪戯っぽくシンへと視線を向ける。そのリアスの肩にはいつの間にか使い魔の蝙蝠が止まっており、シンとピクシーの姿を見てキーキーと嬉しそうに鳴き、ピクシーもそれに応えるように手を振っていた。
リアスの視線を辿って木場もシンを見るが、当のシンは視線を逸らし、話題も逸らす。
「もう用事は終わったんですか？」
「ええ、もう終わったわ」
そう言ってリアスは二枚の黒い羽根を懐から取り出し、シンたちに見せる。
それは紛れも無く堕天使の羽根であった。
「部長としては、出来れば話し合いで終わらせたかったんですが、女二人で行ったのは少し失敗でしたわ。そのせいで見くびられてしまいましたから」
「でも、そのおかげで最近この辺りに出没していた堕天使の計画を知れたわ。こういうのを怪我の功名って言うのかしら？」
痛い目にあったのが相手で、なおかつ怪我所で済んでいない点に目を瞑れば、概ねリアスの言った通りなのであろう。

もっと詳しい話を聞きたかったのだが、居なくなったレイナーレの存在が気になり、先に一誠と合流することを決め、互いの情報交換は移動の間にすることとなった。

移動の最中。

最初にリアスたちの方から、ここに来るまでにあったことを言う。この町での堕天使たちの不穏な動きを察知していたリアスは、何かしらの計画を立てていると睨んでいたが、それが堕天使全体の計画だと思い、大規模な戦いを避ける為に手を出さずにいた。しかし、最近起こったシンとドーナシークとの戦いで、その考えに些かの疑問が生じたという。いくら背後に大勢の堕天使がいたとしても、ドーナシークの行動は軽率過ぎ、下手すれば計画内容を悪魔に知られる危険性があった。それでも確信に至る程の証拠が無かったため、リアスは一誠の救出作戦に難色を示した。リアスが一誠たちを教会へと向かわせたのは一種の賭けに近かったらしい。

根拠は僅かな相手側の不審な点と自分の勘。外れれば眷属及び自分の命の危機、当たればアーシアの救出、まさに一か八かの決断であった。

そのときになって堕天使たちが動き出したという情報が入り、その場へと向かうと居たのは、レイナーレの協力者の堕天使。その協力者の堕天使たちはリアスたちが少し下手に出たら、調子に乗ってベラベラと計画の内容、何故自分たちが計画に乗ったかという理由、おまけに、一番言ってはいけない上の堕天使たちには知らせずに行動していた

ことまで喋ってくれたという。

「おかげで、気兼ねなく消し飛ばしてあげられたわ」

ハッキリというリアス。シンの頭の中に、シンを襲ったドーナシーク、それを連れて行ったカラワーナ、ミッテルトが消滅していく光景が浮かぶ。リアスの言葉で死んだ三人の堕天使を嗤うような気持ちは湧かなかったが、同情する気持ちも微塵も湧かない。

所詮、敵は敵というシンの認識が心動かすようなことをさせなかった。そのせいかリアスの命を奪う行為にも嫌悪感を覚えない。この事実は、シンに自分のドライな精神部分を認識させるものであった。

リアスたちの話が終わり、今度はシンたちがリアスにこれまであったことを話す。説明するのは木場、シンはこういった説明が苦手であった。

聖堂内でのフリードとの戦い、アーシアの儀式が既に完了したこと、レイナーレとの戦いなど、簡潔ながらも要点をしっかりと押さえた木場の説明、初めは普通に聞いていたリアスであったが、アーシアの下りから表情に険しさが混じり始め、一誠とレイナーレの話を聞いた後は、それらが表情と共に一切消えた。その代わりに、全身からは怒気が発せられ、見る者に寒気を与える。

「儀式は終わって、『神器』は奪われたのね」

「……はい」

真剣な口調でリアスは尋ね、木場は重々しく頷く。
「……それは、かなりまずいことですか？」
「……『神器』を奪われた人間は、同時に命まで失ってしまいます」
シンの問いに、朱乃が悲しげに答える。初めて聞かされた事実にシンはその場で足を止めてしまった。肩に乗っているピクシーもそれを聞いて動揺し、周りをオロオロと見ている。
一誠自身この事実を知っているのか、という疑問が浮かんだが、レイナーレという堕天使の性格上、そのことを伝えている可能性が高い。そう思うと、如何なる心中でアーシアを抱えてこの道を走っていったのか。
「だけど、まだ希望はあるわ」
リアスの言葉にシンは顔を上げ、リアスの方を見る。リアスの顔には確かな自信があった。
「……希望ですか？」
「それには、どうしてもレイナーレからアーシアの『神器』を取り戻さなければならないわ」
リアスが何をしようとするのか、この時点でシン以外のメンバーはリアスの意図を察していた。

リアスは続けて話す。
「そして、みんなに予め、聞いておいてほしいことがあるわ」
リアスは落ち着いた口調で自らの意思を皆に伝える。全員が意識をそちらに向けられる。
「もし、ここを出たとき、イッセーがレイナーレと戦っていたら――手出しをしないでほしいの」
まだ、新米の悪魔に過ぎない一誠に堕天使と一対一の勝負をさせるように指示するリアス。いくら『神器』を持っているとは言え、戦いの経験がゼロに等しい一誠にとっては酷とも言える戦いを強いるということである。
「……それはあいつに敵討ちをさせるためですか？」
最初に口を開いたのはシンであった。リアスの指示を咎めるためのものではなく、純粋にリアスの考えを聞きたいがための問いであった。
「それも理由の一つね。でも、もう一つ理由があるわ。それは一誠に自分の力を自覚させること」
「……自分の力？」
「『神器』には様々な力を秘めているわ。でも、『神器』の力を決めるのはその力だけじゃないわ。肝心なのは、それに込める想い。その想いがあれば神ですら屠れる」

『神すら屠る』大袈裟とも言えるリアスの言葉。だが、冗談を言っている様子は無い。『神器』にはそれを可能とする明確な根拠があるのだろう。
「あの堕天使と戦わせて、それが起きる切っ掛けを作るわけですか……賭けですね」
「大丈夫よ。あの子は強い気持ちを持っている。強い気持ちは強い想いを生み出す。その想いは絶対に『神器』に届く」
リアスは確信を持って言い切る。
「それに賭けだとしても、分の悪い賭けじゃないわ」
「ああ――それには同意します」

◇

微笑んだまま動かないアーシアの前で、一誠はただ涙を流す。ほんの数十秒前まで生きていた彼女はもういない。今、一誠の目の前にあるのは物言わぬアーシアの亡骸であった。
膝をついたまま一誠は動かない。否、動くことが出来なかった。味わったことのない虚脱感が全身を奔り、指一本動かすことが出来なかった。そのくせ頭だけは正常に動き、目の前の理不尽に対し、ただ問いを投げかける。

何故、彼女が死ななければならないのか、何故、傷付いた者を助けたことが罰なのか、何故、彼女を救う者がいなかったのか、何故、自分は彼女を救えなかったのか、何故何故何故

一誠の目から見れば、その行為はアーシアを辱めているかのように見え、怒りは更に燃える。

その後にもレイナーレは陶酔したかの様に何かを言っていたが一誠の耳には届かない。一誠にはレイナーレの言う事全てが戯言でしかなかった。

「もう目的を果たしたからこのまま去って行ってもいいけど、悪魔たちに逃げたと思われるのも癪だし、そう思われない為にもここは奪い損ねたあなたの命を取っていこうと思って――」

「知るかよ」

レイナーレの言葉をその一言で切り捨てる。話を中断されたレイナーレは不機嫌そうに一誠を睨むが、一誠はそれを上回る感情を乗せてレイナーレを睨み返す。

頭の中で言葉を考えるよりも先に、気持ちが言葉として一誠の口から吐き出される。アーシアという唯の少女は、神にも悪魔にも堕天使にも振り回されるような存在ではなく、ただ一人の少女として静かに暮らすべきだったと。

しかし、レイナーレは一誠を無知だと嘲って、その考えを否定する。『神器』をその身に宿した時点で平穏など望めず、異質な力を持った故に人間たちから弾かれ、疎まれるのが常であると人間を小馬鹿にしながら冷笑する。

「……なら、俺が。俺がアーシアの友達として守った！」

それを聞いた瞬間、レイナーレは哄笑する。死人を守るという一誠の言葉の矛盾を指摘し、以前にもアーシアに助けてもらったことを持ち出して過去の傷を抉りながら道化でも見ているかのように笑う。

レイナーレの笑い声を受けながらも、一誠は怒り狂うことは無かった。何故なら自分自身でも理解していたことだからだ。アーシアの命と『神器』を奪ったレイナーレを許せないという気持ちはある、そして、それと同じくらい無力な自分を許せないという気持ちもあった。

力が欲しい。

そう強く想う一誠の脳裏に戦いの前に言われたリアスの言葉が蘇る。リアスは言った――想いなさい。『神器』は想いの力で動き出すの、と。

――神様に祈る時間はもう終わりだ。

「返せよ」

――いまからはただ一つのことを強く想う。

「アーシアを返せよおおおおおお！」

『Ｄｒａｇｏｎ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』

◇

異変に最初に気付いたのは、シンであった。突如顔を跳ね上げて、地下通路の天井を見上げる。それに続くかのようにピクシーが大きく体を震わせてシンの肩を強く掴んだ。

「どうしたの？」

二人の反応にリアスが心配そうに尋ねると、ピクシーは体を震わせたまま、か細い声で言う。

「……上に怖いのがいる」

警戒するピクシーの言葉に全員が足を止め、天井を見上げた。この場に居る全員もそれを感じたからだ。

「シン。あなたも感じたのね？」

「……はい」

尋常ではない存在感が、天井を隔てた向こう側から伝わってくる。動物的な本能が危機感を知らせる程『濃い』存在であった。だが、その存在感も気付けば空気の様に霧散し、幻だったかのようにその気配は消えた。

「――どうやら、そろそろ決着がつきそうね」

一瞬感じた力にリアスは、そう確信したかのように呟く。

止めていた足を再び動かし、聖堂へと繋がる階段を昇りきったとき、一同が目にしたのは、長机の上で横たわるアーシアの姿と、鳥肌が立つほどの力を左腕の籠手から放ちながら、レイナーレに拳を振るおうとする一誠の姿であった。

「うおりゃぁぁぁぁぁー!」

渾身の叫びと共にレイナーレの顔面に左拳がめり込む。めり込んだ拳は、その威力を衰えさせることなく殴り抜くと、レイナーレの体は藁屑のように宙へと舞い、壁に叩きつけられると、勢いそのままに壁を突き抜けて、砕けた破片と一緒に壁の向こう側へと消えていった。

殴り飛ばした格好のまま一誠の体が崩れ落ちそうになる。それを見た木場が、誰よりも早く飛び出して、一誠の体を支える。支える人物を見て、一誠は疲れ切った表情ながらも軽い笑みを浮かべ、続いてやってきたシンの姿も視界に収めた。

「よー、遅ぇよ、お前ら……ってボロボロじゃねぇか」

「それをお前が言うか?」

一誠の両足はレイナーレの光の槍で貫かれたのか、向こう側が見えてしまいそうな程の大穴が開いている。未だ絶えず血が流れ、足下に血溜まりを作っている一誠の頬には涙が流れた跡があった。少なくともシンにはそれが痛みから来るものであったとは思えなかったが、その涙の意味は問わない、木場もシンと同様であった。

そして、よくよく見ると一誠の赤い籠手に細やかながらも変化があった。シンの記憶では以前は紅玉以外特に目立つ部分が無かった籠手であったが、金属部分に龍と思しき紋様が浮かんでいた。その部分について気にはなったが最優先することではなく、すぐに頭を切り替えて今すべきことをする。

「ピクシー」

シンがピクシーの名を呼ぶと、シンの肩から降りて一誠の傷口付近まで飛んでいく。一誠の籠手を見て刹那の間顔を顰めたが、すぐに気を取り直し傷口の前に両手を翳すと以前見せた淡い光が手からこぼれ、傷へと注がれていく。初めて見たピクシーの能力に一誠は驚いた表情を見せた。

「やっぱり、あなたなら堕天使レイナーレを一人で倒すことができたわね」

一誠は驚いた表情そのままで声の方へと顔を向ける。そこには笑顔で自分の方へと向かって来るリアスの姿があった。

「部長――どこから？」

地下室に魔法陣で直接転送したことを教え、なおかつそれが初めての試みであったことも教えるリアス。その話を聞くとシンは、確かに魔法陣から現れたリアスと朱乃の表情は普段よりも硬いものであったと、今更思う。

そんなことを考えていると、いつの間にか姿を消していた小猫が何かを引き摺る音を

出しながら、持ってきました、と言ってリアスの前に現れた。小猫の手に持っていたのは黒い翼、そこから少し目線を移動させると、そこには気絶したレイナーレがいた。

完全に意識を失っているレイナーレの頬には痛々しい殴られた跡がくっきりと残っている。その跡を見て思ったのは、自分も一撃でこれ程の跡を残せるかどうか、というもの。シンは男女平等を唱えるような思想も無ければ、フェミニストでも無かった。

気絶したレイナーレの前でリアスが朱乃に指示を出すと、朱乃は手を上に翳し、魔力を使用して何も無いそこから水の塊を生み出す。そして、その水の塊をレイナーレの顔面に落とした。

顔面に水を浴びたレイナーレは気管に入った水を吐き出そうとむせながら覚醒する。そんなレイナーレの視界に最初に入ったのは、冷たく自分を見下ろすリアスの姿であった。

「ごきげんよう、堕天使レイナーレ」

それを見たレイナーレは、グレモリー一族の娘か、と吐き捨てるが、そんなレイナーレの態度にも余裕といった感じで、初めましてと改まった挨拶をする。笑顔を浮かべているがその瞳は極寒の冷たさがあった。

レイナーレの方も取り乱すことなくリアスを殺気に塗れた目で睨んでいたが、すぐに口の端を吊り上げ笑みを形作ると、まだ自分には仲間が控え、いざとなれば助けに来る

と言う。ここにくるまでの間にリアスたちが何をしていたか知らされていたシンには、それが意味の無い勝算であることと分かっていた。

リアスはレイナーレの言葉を聞き流し、その頼みの綱の堕天使たちを葬ったことを告げ、シンたちに見せた堕天使の羽根を取り出すとレイナーレの方へと放る。

それを手にしたレイナーレの表情が凍りつく。

リアスは地下通路でシンたちに聞かせた内容をレイナーレにも聞かせる。それを聞いたレイナーレの表情は見る見るうちに変わり、屈辱と悔しさに耐える様なものとなっていった。

リアスの話を後ろで聞いていた一誠の表情も変わっていた。リアスのことを少しでも悪く思ってしまった過去の自分から来る罪悪感と陰で支えてくれたことに対する感動から、泣き出す前の子供のような表情となっていた。

「うふふ、部長は別名『紅髪の滅殺姫〈ルイン・プリンセス〉』と呼ばれる程の方なのですよ」

リアスの実力を補足する朱乃の説明。その禍々しい呼び名に一誠が目を剥く。すると、一誠の傷の応急処置をしたピクシーがシンの耳元に飛んできた。

「ねえ、るいんぷりんせすって、どういう意味？」

小声で聞いてきたのは場の空気にそぐわない間の抜けた質問。後で教えるから少し

静かにしていろ、とシンも小声で呆れたように言う。不満そうではあったが、ピクシーは大人しくシンの肩に腰を落とした。

そんなやりとりをしているうちに、リアスもまた一誠の籠手の変化に気付き、レイナーレに一誠の『神器』が普通の物ではなく、それこそが一誠の勝因であったと教える。『神滅具（ロンギヌス）』『赤龍帝の籠手（ブースティッド・ギア）』

それが一誠の左腕に宿る力の正式な名。十秒ごとに力を倍にし、極めれば神すら葬る力を持つ可能性を持った武器。

そういった肩書きを持っていたのを知ったシンは同時に、ピクシーが怯えていた理由も理解する。本能でこの籠手に秘めていたものに感付いていたのであろう。

「部、部長」

一誠がリアスの側に移動すると、そのまま頭を下げてリアスに謝罪をする。アーシア救出前に無礼とも言える態度をとったこと、そして、そのままアーシアを救うことの出来なかった悔恨、それを涙を流しながら語る。

そんな一誠の姿にシンは顔を背ける。男であれ女であれ泣いている人物を見続けるのは無粋だと思ったシンなりの気の使い方であった。

そんなシンの耳にリアスの慰める声が入ってくる。と同時に視界の端にある窓の向こう側に見逃せないモノが映り、シンは眉根を寄せる。

「木場」
「えっ」
「少し席を外す」
「――何かあったのかい？」
「ただの確認だ。すぐに戻る」
　隣にいる木場に小声で話し、危険が有ったらすぐに知らせると言って背後にある扉からひっそりと出て行く。幸いにも最後尾に居たため、隣に立っていた木場以外に気付かれることは無かった。
　扉の外に出ると一気に駆けて外に出る。そして聖堂の方面へと足を進めたとき、そいつはいた。
「おい」
「おんやぁ？　わぁーお！　どこかで見たことがあるかと思えば、さっきのクソ悪魔くんじゃないですか！」
　逃げた筈のフリードが変わらない歪んだ笑みを浮かべて、そこに立っていた。
「何をしている」
「うーん？　んー上司の天使様を助けちゃおうかなぁーと……ごめーん！　嘘でぇす！　救うなんて無理無理！　状況マックスで不利だし！　あのあったまの弱ーい天使様

の最後見るのとイッセーくんにラブコールでも送っちゃおうかと思って参上しちゃおうという算段でござんしたが、まあ別にいいや、代わりにチミが聞いてくれる？」

言葉の軽さとは裏腹にフリードからは隠す気も無い殺意が沸き立っていた。

「イッセーくんとチミは、俺の殺したい悪魔ランキングトップ５にワンツーでランキングしてるから、そのうち殺しにいくからシクヨロ！　あ、そうそう、まだチミの名前を知らなかった！　おせぇーて頂戴！」

シンは答える代わりに、地面に落ちていた拳大の教会の破片を拾い上げると、無言でフリードに投げつける。言葉ではなく行動で『失せろ』という意思を伝える為に。

フリードは首だけを動かしてその場から動かずに回避すると、口が裂けたのではないかと思える程口の両端を吊り上げ、他者に生理的な嫌悪を与える笑みを浮かべる。

「んっんー！　中々好みの答えだよん！　じゃあ、バイなら！――あっ、ちなみに今のでイッセーくんとのワンツーから同位なったから、そこんとこよろしく」

嬉しくも無い言葉を残し、フリードは近くにある雑木林の中に消えていった。

「あいつやっぱ気持ち悪い」

フリードが消えていった雑木林の方に舌を出していたピクシーが、嫌悪感を隠さずに言う。シンは、そうだな、と同意し教会の中へと入っていった。

聖堂内へと戻ってきたシンが最初に見たのは、先程まで死んでいたと思っていたアー

シアが上体を起こしている姿と、それを抱き締めている一誠であった。アーシアは事態を飲み込めずに視線を忙しなく動かしている。
「えっ？　えっ？」
　肩に乗っているピクシーもアーシアの様に驚いている。そこにシンの姿に気付いた木場が近寄って来る。
「確認は済んだのかい？　どうだった？」
「瑣末なことだ。それよりこれはどうなっている？」
「ああ、部長が彼女に『僧侶〈ビショップ〉』の駒を使って転生させたんだ」
　『僧侶』その駒の特性は魔力の向上、主に他の駒を補佐する役割を持つ。これがリアスが言っていた『希望』なのだろう。一誠もまた駒の力によって九死に一生を得たことを思い出す。
「色々と彼女にとって不便なこともあるけど、多分大丈夫だよね？」
「大丈夫だろ。死ななきゃ安い。未来〈さき〉のことを考えられるのは生きている奴の特権だ。それに――」
　そこでシンは一旦言葉を止める。言葉を止めたシンの目の前に漂う物体、それを反射的に掴む。掴んだ指先にあったのは一枚の黒い羽根。視線を動かし、レイナーレの居た所に向けるとそこには大量の羽根が散っている。それがレイナーレという堕天使が居

たという唯一の名残であった。
命を奪った者が最後に死に、命を奪われた者が最後に生き返る。皮肉な結末だと思いながら掴んでいる羽根をじっと見つめる。レイナーレという存在の死を悼む程、シン自身人間が出来ていないという自覚はある。だが、せめて死んだ存在の名前ぐらいは覚えておこうと心の中で思う。それ自体に意味が有るわけではない、敢えて言えば生きているからこそ出来ることがそれなのであろう。
「それに？」
「――支える存在〈イッセー〉もいる」
指先で掴んだ羽根を爪先で弾き、ひらひらと地に落ちるのを見ながら、シンはハッキリと言った。

◇

深夜を回ろうとする時刻。一人の男が、戦いによってボロボロとなった教会へと現れた。男の顔には包帯が巻かれ、表情を読み取ることが出来なかった。
教会からリアスたちは既に去り、ほんの数時間前まで激戦があったことが嘘の様に静まり返っている。

男は教会の中に入ると、聖堂内まで足を進める。そして、聖堂内に散らばる黒い羽根を見つけると慌てて走りだす。散っている黒い羽根の一枚を震える手で拾い、それを凝視した途端、両膝を地面に着けた。

「バカな……」

呆然とした様子で声を洩らし、顔に巻かれた包帯を解いていく。

月光の下、素顔を晒したのは堕天使ドーナシーク。

「バカな……」

もう一度同じ言葉を繰り返す。

ドーナシークは今まで傷の治療をしていた。だが、正確に言えばそれは治療と称した監禁であった。悪魔に敗れた罰として、治療も行われずに拠点の一室に閉じこめられ、出てこられない様に多重の結界が張られていた。しかし、その結界は突如として破られ、胸騒ぎを覚えたドーナシークはもう一つの拠点に行くと、そこでカラワーナとミッテルトの残骸を発見、顔を蒼褪めさせながら教会に行き、今に至る。

ドーナシークの胸中にあったのは絶望であった。上の堕天使たちに秘密裏の行動をしていたせいで、堕天使側に戻ることが出来ない。仮に戻ったとしても不必要に悪魔と争ったことを理由に処罰されることは明白である。

彼はほんの少しの間に縋る者、帰る場所の両方を失ったのである。

動揺し続けるドーナシークの顔に鋭い痛みが走り、思わず蹲る。
（痛い……痛い……痛い痛い痛い痛い……痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！）
和らがない痛みと絶望にドーナシークの精神はゆっくりとその形を歪なものにしていく。
何故自分がこんなに苦しんでいるのか、何故自分は全てを失ったのか、何故自分がこんな思いをするのか。
歪んでいく思考が、一人の人物を思い浮かばせる。
（そうだ……お前だ……全てが狂いだしたのはお前が居たせいだ……）
全ての元凶に思い至り、ドーナシークは嗤う。
可能ならば今すぐにでも殺したいという気持ちを抑え、今は機会を見る為に身を潜ませる選択を取る。
「殺してやる……必ずお前を殺してやる！　ははははははははははははは！」
狂ったような哄笑を上げ、ドーナシークはレイナーレの残骸を撒き散らしながら夜の闇の中に飛んで行った。

◇

朝、シンは他の生徒よりも早く学園へと登校する。昨晩、リアスから早朝から集まりを行うという指示があったからであった。シンは鞄ともう一つの物を手に持って部室へと向かう。

部室に入ると全員が既に集まっており、シンが最後であった。そのときシンの視界にあるモノが映る。その途端、シンの表情は険しくなり、手に持ったもう一つの物を後ろに隠す。

シンの様子を不審に思ったのかアーシアがシンの側に寄ってくる。その格好はシンと同じで駒王学園の制服を纏っていた。

「あ、あの、どうしました？」

若干シンを怖がりながら尋ねてくるアーシア。

「……アルジェント、すまないがそのテーブルの上にあるケーキは？」

「え？　あの、これはリアスさんが作ってくれたケーキみたいです。あと、私のことは名前で呼んでくれても構いません」

「――そうか、手作りか……」

言葉を尻すぼみにしながら、困ったようにシンは頭を軽く掻く。その肩ではクスクスと可笑しそうにピクシーが笑っている。

「……アーシア」
「は、はい！」
意を決したシンは、後ろに隠していた物をアーシアの眼前へと突き出す。
「甘いものは沢山食べられるか？」
かぶってしまったケーキの箱を見せながら、少し恥ずかしそうにシンはアーシアに質問した。

◇

某時刻某所
音の無い空間の中で、一つのテーブルに二人の人物が座っていた。片方は腰まである黒髪に同じ色のワンピースを着た少女、精巧とも言えるバランスの容姿をした美少女であるが表情には感情が乏しく、人形のようであった。
もう片方は肩まである金髪に黒のスーツを纏った少年、こちらは少女よりも幼い容姿をしている。顔立ちは少女と同様に緻密とも言える配置がされた美しいものであったが、こちらも感情を映さない無機質な表情をしていた。
両者ともに会話は無く、機械の様に一定の間隔でティーカップを口へと運んでいる。

そんな気が狂いそうになる静寂の中で、最初に言葉を発したのは黒髪の少女であった。
「ルイ、遅い」
「済まない。あと、出来ればこの姿のときはベルと呼んでほしい」
　金髪の少年の側にいつの間にか灰色のスーツを着た一人の青年が立っていた。年の頃は十代後半、ハンチング帽を被り、帽子の端からは少年と同じ金髪が見えていた。そして、髪の色と同じく容姿もまた少年と酷似したものであった。
「今のルイは彼なんだ」
　未だに紅茶を飲む少年にベルと名乗った青年は目を向ける。
「我不思議に思う。ルイはベル、ベルもルイ。二人は一つ、でもいまは二人、何故？」
「君にとっては不思議だろうね。そんなに深い意味はないさ。ただ今は居ない彼の名残だよ。それに一人よりも二人の方が動きやすいからね」
　そこに紅茶を飲み終えた少年が、青年にしか聞こえない声量で何かを言う。
「そうだね。ようやく全員が揃ったということだね。そして、これを『きっかけ』に彼らは動き出すだろうね。彼とはいずれ接触する」
　青年はそう言って席に着く。
「だけど、まだ僕らが動く刻ではない。『きっかけ』によって生まれた事象がやがて僕らと彼を引き合わせる。それまでは待つとしよう。オーフィス、僕にも一杯紅茶を貰える

かい？」

オーフィスと呼ばれた少女はティーポットを傾け、青年のカップに注ぐ。

「それまで君との再会を待つとしよう。期待をしているよ『人修羅』」

そう言って青年は静かにカップに口を付けた。

◇

何体もの死体が積み重なり、血で覆い尽くされた大地の上で、『殺戮者』の名を持つ者が最後の一人の心臓に剣を突き立て、ふと空を見上げる。

黄の法衣を纏った一人の僧侶が英雄たちの名残と共に言葉を交わしていたが、その途中で黙り込み、遠くを見つめ始める。その側らに居て、黄金の杯を傾けていた婦人もまた同じ方向へと目を向ける。

地獄の最下層にある永久凍土の中、『地獄の天使』と呼ばれた存在の目に炎のような光が微かに灯る。

この世界の何処にも無い場所で、四頭の馬とそれに跨る四人の騎士が同時に目を覚まし、言葉を交わす前にある一点を見つめる。

天界の最奥において、鎖で何十にも巻かれて十字架に磔られた『笛を吹く者』は静か

に俯かせていた顔を上げた。
様々な場所に居ながらも彼らは遠く離れた場所に現れた同類の存在を確かに感付いていた。
三界に居る者は彼らという存在をこう呼んだ。
『魔人』と。

幕間　魔法、少女？

ある日のオカルト研究会の教室内。

シンは、周囲に他のメンバーがいる中、魔法陣の上に立っていた。肩にはいつものようにピクシーが乗っかっている。

悪魔の協力者という立場であるシンは、主に悪魔の仕事の補佐をすることがメインであったが、最初のピクシーとの契約以来、久しぶりに単独で仕事を行うこととなった。

理由は、新しく入部してきたアーシアという少女にある。最近転生を果たし、グレモリー眷属の一員となった彼女。そんな彼女にも一誠やシンが入部したときに行った通過儀礼となるチラシ配りの仕事を任せることとなった。

だが、ここで少し困った問題が発生。

アーシアという少女は、シンや他のメンバーから見ても少々危うい傾向が有る。危ういと言っても人格面が危ういという訳では無い、むしろ逆に高潔とも言えるような慈悲深い性格をしており、非常に親しみ易い。しかし、やや世間知らずで無垢過ぎるという点があり、彼女が堕天使側に付いてしまったのも、シスターでありながら敵対する悪魔を自らの治癒の『神器』『聖母の微笑〈トワイライト・ヒーリング〉』によって傷を癒し

たことで、教会から『魔女』の烙印を押され、追われる身となり行き場を無くした所を『はぐれ悪魔祓い』の組織に拾われた経緯があったからである。

そして、もう一つ。これは彼女の性格とは関係の無いことであるが、アーシアという少女は、率直に言えばドジであった。特に出っ張りも段差も無いところで意味も無く転び、呻いている姿をシンはたびたび目撃している。

そんな不安要素がある少女を一人で夜道を歩かせるわけにはいかない。ましてやアーシアの容姿は美少女と言っても差し支えないものである為ますます放っておくわけにもいかず、彼女を補佐する存在が必要となった。候補に挙がったのはシンと一誠であったが、ここで一誠が、アーシアのチラシ配りの手伝いをしたいと進言した。

一誠の方もついこの間まで契約を取ることが出来ずにやきもきしていたが、最近になってようやく初契約を取ることができ、その代価として映画でしか見たことの無いような円錐状の形をした突撃槍を貰ってきた。

重量や材質から見ても本物であり、シンも一体どんな相手から貰ったのかが気になり一誠に尋ねた所、一枚の写真を手渡される。そこには西洋甲冑とその腕に手を回す鎧武者の姿が写っていた。それを見て、思わず「何だこれは?」と一誠に聞き返したのは記憶に新しい。

何はともあれ悪魔としての最初の一歩を踏み出し、少し余裕の出来た一誠を見て、シ

ンも反発することはなかったので、アーシアの補佐を一誠がすることとなり、シンは一誠に依頼が来たとき、代わりに依頼者の下へと行くという形となった。

そして、現在一誠に対しての依頼が来たのでシンが代わりに行くこととなり、魔法陣の中央でピクシーと二人、立っているという状況となっている。一誠とアーシアはチラシ配りの為、この場には不在である。

シンは残っているメンバーに出発の言葉を告げると、光を放った魔法陣の中で転送されていった。

魔力の光を抜け、依頼者の下へとシンが辿り着いた。前に屋外で召喚されたときと違い、足下から床だと思われる硬い感触があった。

光で閉じていた目を開くと最初に映ったのは女性の部屋と思える数々の内装。フリルやピンクなど可愛げのある装飾を施された物がいくつも置いてあった。そして、そこでシンは何らかの影が自分を覆っていることに気付く。何気なく振り向いたシンは、そこで人生でも一、二を争うほどの衝撃を受けた。

「によ？　前の悪魔さんじゃないによ？」

おおよそ日常生活では聞くことの無い語尾が付けられた野太い声、それを喋っている人物も又、日常生活ではまずお目に掛かるような存在ではなかった。

シンを背でも幅でも上回り、影が出来る程の巨躯を持ち、腕や足は女性の胴体を彷彿

とさせる程の太さを持った筋骨隆々とした男性。しかし、身に纏っているのは男性と対極に位置するようなゴシックロリータ調の洋服。少女が着る様なことを想定したそれはこの男性が着ることによって限界まで生地が伸ばされ破れる寸前となっており、見る者に服の苦鳴と悲鳴を感じさせ、拷問でも受ける罪人を見ているかのような印象を与える。

そして、頭部には一体どういった心境で付けるに至ったのか猫耳を着けたカチューシャを装着しており、それによって生まれる男性との不協和音は、壮絶の一言であった。

そんな人物がまるで無垢な少女のような瞳でシンの頭上から見下ろしている。

「……」

絶句という意味を今日、身を以て知るシン。本来なら依頼者の前で黙り込んでしまうのは失礼に値するものであろうが、いまの彼の状況を知った者がいたのならば誰も彼を責める様なことにはならないであろう。それほどまでに目の前の存在の視覚的な衝撃は逸脱したものであり、一種の暴力であった。

「新しい悪魔さんッ!」

黙っているシンを不審に思ったのか、女装をしている男性が声を掛けるが、その声量は尋常なものではない。特殊の呼吸法でも習得しているのか声だけにもかかわらず、声と共に発せられた見えない圧力がシンへとぶつかり思わず仰け反る。

「わわ！」

肩に乗っていたピクシーも吹き飛ばされそうになり、慌ててシンの服を掴む。声の余波は部屋全体を揺るがし、目の前の存在の見た目以外の恐ろしさの片鱗を知ることとなった。

「大丈夫かにょ？　何だか様子がおかしかったにょ？」

それは、あなたのせいです。という言葉が喉まで出かかったが辛うじて胸中に留め、目の前の現実を受け止め、依頼者の要件を聞く。

「……大丈夫です。……それで願いの内容なんですが……」

動揺と混乱で言葉が震えなかったのが奇跡だとシンは思った。

「前の悪魔さんにも言ったけどにょ、ミルたんを魔法少女にしてほしいにょ」

鍛え抜かれた肉体を持つ男性からの斜め上を行く願い。そして、依頼者の名前を聞いて前に一誠が疲れた顔で話した依頼者だということを思い出した。見た目がシンが一誠から聞いた姿そのままであったが、現物のインパクトが強すぎたので今の今まで忘れていた。

「ねえねえ？　シン。まほうしょうじょって？」

「にょッ！」

ピクシーがシンに魔法少女という言葉の意味を尋ねた瞬間、ミルたんの目が一瞬閃光

を放ったかのような鋭さとなり、その強すぎる眼光をピクシーの方へと向けた。
「い、いま……その妖精さん……喋ったかにょ?」
　ミルたんの言葉にシンは内心驚く。ピクシーの姿は一般人には見えず、見えるとしても悪魔などの特殊な存在などに限られる。たしかにミルたんはどう言い繕っても一般人とは程遠い格好をしている。しかし、逸脱をしているのが格好だけでなかったのはシンにとって予想外であった。
「あっ、見えるんだ」
「か……」
「か?」
「感動だにょッ!」
　おそらくミルたん本人は、ただピクシーという存在に会えたことを純粋に感動として表現しただけなのであろう。だが、シンの視点から見るとミルたんが刹那の間、沈黙したかと思えば、次のときには全身からは闘気のようなものを爆発させ、部屋の壁に触れずして罅を入れるという人間離れをした芸当を見せつけられた。シンもその圧力に吹き飛ばされない様に必死に両足に力を入れ、耐える。
「おっとっと」
　ミルたんの感動の咆哮にシンにしがみついて耐えていたピクシーが、姿勢を直してシ

ンの肩から飛び上がると、ミルたんの目の前へと飛んでいく。
「こんばんはー」
ミルたんの姿に物怖じせず、いつもの無邪気な笑顔を浮かべて手を振る。よく普通に接することが出来るな、と思ったが改めて考えると、人間であるシンと妖精であるピクシーでは感覚や認識が全く違う部分があるのだろうと思い至り、しばらく二人の様子を見ることにした。
「こ、こんばんはにょ」
「あたし、妖精のピクシーっていうの。あなたはミルたんでいいんだよね？」
「そ、そうだにょ！」
臆面もなく自己紹介をするピクシー。妖精という存在に話し掛けられ若干の緊張をしているミルたんであったが、その頬は興奮で赤く上気し、控えめに見ても仁王像を彷彿とさせた。
「ねー、ミルたん。まほうしょうじょって、なあに？」
「妖精さん。魔法少女はにょ――」
ピクシーの質問にミルたんは嬉々とした様子で答える。シンの目の前で凄まじい早さで打ち解けていくピクシーとミルたん。一方は魔法少女〈ファンタジー〉に憧れる人間、もう一方は好奇心旺盛な幻想世界〈ファンタジー〉の住人、この二人の相性は存外

に良いのかもしれない。

すっかり蚊帳の外となってしまったシンの前で、ピクシーとミルたんの会話はどんどんと弾んでいく。ピクシーが疑問に思ったことを聞くと、ミルたんはピクシーにも分かる様に非常に丁寧に教える。正直、ミルたんの話は外から聞いていたシンも興味を煽られる程引き込まれるものがあり、人間の物に強い興味を持つピクシーはどんどんと関心を寄せていく。

ミルたんとの話が進むにつれて、ピクシーの目が魔法少女というものに興味を持ちキラキラと輝かせていき、それに合わさって魔法少女の話をしているミルたんの目も輝きを増していく。その輝きは心臓の弱い人間が見たら鼓動を止めるのではないかと思わせるほどであった。

和気藹々としているピクシーとミルたんとの話。ピクシーもあらかたの質問を終え会話に一旦の区切りが出来る。するとミルたんはやや顔を俯かせ、何かを言うのを躊躇っているのかしきりに両手の指先を付けては離すという動作を繰り返す。

やがて、覚悟を決めたような表情へとなると視線をピクシーからシンに向ける。

「悪魔さんッ!」

「――はい」

今日何度目かの咆哮の様な呼び声。物理的な威力を持ったそれに耐えながらシンは

ミルたんに答える。
「お願いの変更をしてもいいかにょ？」
ミルたんの言葉に一瞬、虚を衝かれる。言った本人は両手を組みながら真摯な瞳でシンを見つめ続ける。
「……構いませんが、どんな内容にするんですか？」
目を逸らしたくなる衝動を抑えながら、そう聞き返す。
「ミルたんを……ミルたんを……」
少しの間が空いた後。
「妖精さんのお友達にして下さいにょッッッ！」
今夜、最大の咆哮が嵐のように狭い一室に吹き荒れる。桁外れの声量により、空間が歪んだような錯覚を覚える。窓ガラスは割れる寸前まで震え、天井は軋みを上げ、床は直下型の地震でもあったのかと思わせる程揺れる。この願いにミルたんの気持ちがどれほど込められているのかが見て取れる。尤も、気持ちを物理的な破壊から計るというのは間違った見方であることは確定的であるが。
「お願いだにょ！」
シンの眼前まで迫り、今にも泣きだしそうな顔で懇願をするミルたん。シンが返事を中々しないことに、自分の願いを叶えることを渋っているのではないかと本人は考えて

いるが、シンは単純に顔の手前数センチまで迫ったミルたんの視覚的な暴力に言葉を詰まらせているだけであった。

悪意のある威圧であればシンも対処のしようがあるが、どう見ても本人には悪意は無く無自覚な威圧であるだけにシンも強くは出られなかった。

「べつにあたしはいいよー」

シンが答えるよりも先にピクシーが答える。

「ほ、本当かにょ！」

「うん」

シンに迫るのを止め、ピクシーに向き直るミルたんに頷いて了解の意志を示すピクシー。ここでミルたんの圧力から解放されたシンも口を開く。

「本人がいいと言っているので、問題無いです」

「ありがとう！　ありがとうにょ！　妖精さん！　悪魔さん！」

ミルたんはピクシーを両手でそっと掴むと、嬉しさからかその場で回転し始める。床が摩擦で炎上するのではないかと思える程の速度で回っているのだが、ミルたんと一緒に回っているピクシーはアトラクションでも楽しんでいるかのようにキャハハと笑い声を出している。

自分の『仲魔』の胆力にシンはただ脱帽する。

興奮して回っていたミルたんは、突如回転を止めて部屋の隅に移動し、置いてある小道具入れを探り始める。数秒後には目当ての物が見つかったのか、小道具入れから離れてシンの前にやって来た。

「お願いするにょ！」

そう言ってシンの顔すら余裕で覆える程大きく分厚い掌で隠された何かを渡そうとする。とりあえずシンは手を差し出すと、その手にあるモノが置かれた。

そのあるモノはデジタルカメラであった。

それを手渡された時点で、この先自分が何をするのか大体の理解をする。その考えを肯定するようにミルたんはシンから少し離れた場所で片足で立ち、上げた足は直角に曲げ、右手には魔法のステッキ、左手はピースサインを作って額に当て、軽く舌を出す。

「可愛く撮ってにょ！」

シンは最早何かを言うこと自体無駄だと悟り、無言でカメラを構える。レンズ越しに見える光景は、筆舌に尽くしがたい程奇妙なものであり、おそらく自分の理想とする魔法少女のポーズを取るミルたん、舌を出してはにかんだ笑顔は獲物を嬲る肉食獣を思い起こさせ、そのミルたんの逞し過ぎる肩に乗って呑気にミルたんと同じポーズを取るピクシー、両者のあまりに違い過ぎる落差は現実の許容量を超え、二人の間で次元が歪むような錯覚がシンには見えた。

そして何よりもそれに向かってカメラを構える自分の姿は、第三者の視点から見て非常にシュールなものであり、シンは自分のこの姿が永遠に闇に葬られることを祈りながらシャッターを押した。

撮影音の後に撮影された画像が画面へと表示される。

（……ピクシーはカメラには写るのか）

新たに知る事実。しかし、それは画面に写る強烈な絵面から目を逸らすための現実逃避の様なものであった。

撮影した画像をミルたんにも見せる。それを見て嬉しそうにはしゃぐミルたん、その度に床板が捲り上がりそうな程の足踏みをする。

ようやく終わった。そう思っていたシンの前でミルたんは再び小道具入れの前に移動する。

このとき、シンは自分の察しの良さを呪った。

「妖精さん！　次はこれを着て欲しいにょ！」

満面の笑みを浮かべて振り返るミルたんの手には、人形が着る様な小さな衣服。

まだ撮影は終わらない。

◇

一体自分はどれほどシャッターを押したのであろう。十を超えた辺りで思考を停止させ、二十を超えた辺りで押した数を数えるのを止めた。

自分はカメラの一部だと無理矢理言い聞かせ、三脚になりきったつもりでひたすらシャッターを押し続けるが、未だに撮影が終わる様子を見せない。

ミルたんが、いつかファンタジーなお友達が出来たときの為の御揃いの衣装は想像を超える量があり、いくつかピクシーのサイズに合わないものもあったが、見た目にそぐわない手先の器用さと速さでピクシーの羽を出す為の部分を作ったり、サイズも合うものへと改修し、ほとんど途切れることなく撮影は続いていた。

色々と着せ替えられているピクシーは嫌な顔をせず、むしろ様々な衣装を身に纏うことを楽しんでおり、ミルたんもまたピクシーを着せ替えるのを楽しみ、自分もまた同じ衣装を纏う。何時間も経っているが二人に疲労の色は無く、逆に初めのときよりも生気が漲っており、シンはその反対に目は死人のように光が無くなって殆ど喋らなくなり、機械的な動作でひたすら単調に動いていた。

奈落に落ち続けるような気分を味わいながら、ただただ時間が過ぎていくのをシンは待つ。

「これでラストによ！」

シンの祈りが届いたのか最後の衣装を纏ったミルたんがそう宣言する。その言葉を聞き、目に再度光が灯りはじめたシンが見たのは、最後という言葉に相応しい精神的にきつい衣装であった。

淡い紺色の生地を使い、星形の刺繍が施され、赤い帯を巻いた広袖の簡素な振袖であったが、裾は膝上数センチ程の短さしかなく、ミルたんの丸太のような太腿が衝動的に眼球を抉り出したくなる程に大胆な露出をしていた。本来和服から感じる涼やかさや慎ましさは全て消え去り、劇物のような魅力と震え上がるような威圧感が醸し出されていた。

ミルたんの隣で、同じ衣装を纏うピクシーと見比べる。右を見てから左を見、今度は左を見てから右を見る。

(……頭が痛くなってきた……)

視覚から得られる情報の差に脳の処理が誤作動でも起こしたのか、軽い頭痛がした。

コンマ数秒でも早くこの状況から逃れるため、シンは息を止め、思考を止め、心を凍り付かせ、最後のシャッターを押した。

撮影した画像もミルたん本人に確認させ、長い、本当に長いと思えた仕事が終わる。そう思ったとき、ミルたんは突然顔を両手で覆い、泣き始める。

「によおおおおお!　によおおおおおお!」

「どうしたの？　どこか痛いの？」

泣くミルたんを心配し、ピクシーは声を掛ける。ミルたんは首を左右に振ってピクシーに違うと示した。

「にょぉぉぉぉ！　そうじゃないにょ……ミルたん……ミルたん……」

涙で鼻声になった言葉で自分の今の気持ちを正直に曝け出す。

「ミルたん――嬉しいんだにょぉぉ！」

ミルたんは涙で何度もしゃくりあげながら、自らの胸中を溢す。本当に心の底から魔法少女に成りたかったこと。その為に様々の方法を試みたがどれも上手くいかなかったこと。それでも諦めきれず、本来なら宿敵である悪魔に頼み込もうとしたこと。そして今日、妖精のピクシーと友達になれたこと。

一歩一歩ではあるが自らの夢に近づいていることが、堪らなく嬉しくてしょうがないこと。

胸の中にあった思いを言い尽くして、ミルたんは再び号泣する。そんなミルたんの頭をよしよし、と撫でながらピクシーがシンに目を向けた。無言ではあったが、向けられた目が語っている『何か言ってあげて』と。

一瞬、眉間に皺を寄せるシンであったが、遠雷のような声で泣くミルたんと催促する視線を向け続けるピクシーを見て、聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな溜息を吐く

と、床で蹲っているミルたんに側で片膝を突き、肩に手を乗せる。
「少しずつですが、あなたの願いを叶えていきましょう。今はまだこれくらいの願いを叶えるのが精一杯ですが、きちんと本来の願いが叶うまでお付き合いしますよ。――『イッセー』……と自分が」
さりげなく一誠の名前を強調し、自分のことは目立たないぐらいの声量で言う。
シンの言葉を聞いてミルたんが顔を上げる。
その瞬間、強烈な悪寒が背筋を奔った。
「悪魔さん……悪魔さぁぁんッ!」
ミルたんが感極まって叫ぶと同時に、その両腕が霞む。それと同時にシンの左右から迫る風を斬るような音、残像を残して迫ってくるシンとの抱擁を求める両腕。獲物に襲いかかる羆を彷彿とされる剛腕を思考するよりも早く紋様を発動させたシンの両手が防ぐ。
鉄柱にでも打ち付けられたかの様な衝撃が両手から肩にかけてまで伝わる。耐える為に筋肉は限界まで酷使され、それを支える骨は軋みを上げる。
『死ぬ』
冗談では無く、本気でそのような言葉が脳裏に浮かぶ。僅かでも力を抜いた次の瞬間に待っているのは肉体と精神の『死』。

「落ち着いてー」
シンの危機を見過ごせなかったのか、ピクシーがミルたんの額を軽く叩く。一応、主の危機ではあるがピクシーの声に緊迫したものは無く、いつもの軽い声であった。
「――あっ！　ミルたんったら、男の人に抱き着こうなんてはしたない子にょッ！」
シンに向けていた両手をそのまま自分の頬に当て、恥ずかしそうに赤面する。シンはその様子にもう何も言う気力も湧かず、静かに心の中であることだけを思う。
（……早く帰りたい）

◇

翌日。
「ふっふふーん！」
上機嫌に鼻歌を歌いながら、ピクシーはオカルト研究部内を飛び回る。
「わぁ！　ピクシーさん、可愛いですね！」
「でしょでしょ！」
アーシアに褒められ更にピクシーは機嫌を良くする。
ピクシーは今、いつもと同じ格好をしていない。あの後願いを叶えた代償としてミル

たんは撮影のときに着た衣装の中で好きなものを持っていっていいとピクシーに言った。ピクシーがその中で特に気に入ったのが撮影最後に着ていた『小さな振袖』である。

そして現在、それを着て皆に披露をしていた。

その姿を疲れた様子で見ていたシンに一誠が労いの言葉を掛ける。

「――聞いたぞ。……ミルたんのとこに召喚されたんだな……お疲れさん」

「……まあ、見た目はアレだったが、悪い人ではなかったな……」

「確かに、悪い人――というより悪い漢ではないな……見た目は雄々しいというか……変態的というか……」

「世の中の広さと深さを感じた気分だ――ん?」

一誠との会話の最中にシンの携帯電話が振動し着信を知らせる。携帯電話をポケットから取り出して画面を見るとメールが一通届いていた。

差出人の名前はミルたん。何故連絡先を知っているのかは、昨夜部室への帰り際にミルたんから定期的にピクシーとの連絡を取りたいという願いがあった為、連絡機器を持たないピクシーの代わりにシンの携帯電話とアドレスを教えることとなった。聞かれたときは返答に詰まったシンであったが、毒を食らわば皿までと半ば開き直った結果である。

題名に『友情の証によ』と書かれたメールを開くと、しばしの間シンは画面を凝視し

続けた。
「どうした？」
「いや……たまにはこういったものも悪くはないのかな？　と思っただけさ」
ピクシーとミルたんが満面の笑みを浮かべて一緒にピースサインをする画像を見て、シンはよく見なければ分からないぐらいの淡い苦笑を浮かべながら、そう呟いた。

「ねえねえ、今度シンの家にミルたんを呼んで一緒に遊ぼうよ！」
「――考えさせてくれ」

戦闘校舎のフェニックス編

特訓、不安

荒い息を吐きながら学校指定のジャージを着たシンは住宅街を走り続ける。疲労と酸素不足で顔を何度も上げそうになるが、その度に顎を引き何とか顔を正面に向くように固定する。そんなシンの隣で走る一誠もまた似たような状況であり、息を切らしながらもシンと並走を続けていた。

「ほらほら、二人とも速度が落ちているわよ。今のままのペースで全部こなしていたら学校に遅刻するわよ」

そんな二人の後ろからリアスの叱咤の声が飛ぶ。今のリアスは見慣れた制服では無く、髪の色と同じ赤いジャージを纏い自転車に乗って背後から二人を監視していた。

「がんばれー」

今度飛んだのはピクシーの激励の声。いつものシンの肩という定位置にはおらず、リアスの肩に乗って、走る二人を面白そうに見ていた。

「あと五百メートルほど走ったら公園まで競争ね。負けた方はいつものようにダッシュ十本追加だから」

笑顔でサディスティックなことを言うリアスにシンはいつものポーカーフェイスながらも顔色を悪くし、一誠は露骨に表情を引き攣らせた。

二人がこのように体を鍛えることになったのか、事の発端は一誠であった。

一誠という転生悪魔の夢は自分の周囲に女性を侍らすハーレム王になるというもの。常人が聞いたら距離を取るか、正気を疑うかどちらかであろうが、本人は至って真面目であり本気である。そんな無謀とも言える夢であるが、幸か不幸か一誠は偶然悪魔になったことで不可能な夢では無くなった。

悪魔の中で実力を見せ、爵位を取る。それさえ出来れば一誠でも夢のハーレムを築くことが出来る。だが、ここで致命的な問題が発生した。上を目指す一つに知力、交渉力などの頭脳面を必要とするがお世辞にも一誠は頭が良くない。もう一つに高い魔力なども求められたが、一誠は悲しいことにその魔力も悪魔の子供以下という悲惨な状態であった。

そんな一誠に唯一残された道は『力』であった。悪魔は強ければ上に昇れる。力＝権力に繋がる世界であった。幸いにも一誠には『神滅具』と呼ばれる希少な『神器』をその身に宿し、他の選択肢に比べればのし上がる可能性は格段に高い。

そこでリアスは、その『神滅具』の実力を十二分に発揮できるように一誠を鍛えることとなる。そこには、自分の下僕が弱いということを甘んじさせることをよしとしない

考えも含まれていた。
一誠の特訓が決まったその日にリアスはシンにも声を掛けた。先の戦いに於いて自分の体力不足で何度も周りに迷惑を掛けていたことを痛感していたシンは、リアスの誘いを二つ返事で了承した。一人で特訓するよりも競い合う相手が身近にいればより特訓の質が増すと密かに考えていたリアスにはシンの承諾は嬉しいものであった。また眷属では無く協力者という立場上、一誠とは違い強制的に参加させるのは気が引けたという理由もある。
そして二人は現在汗だくとなりながら、基礎体力を付ける為にランニングを行っている。
二人の視界の先に残り五百メートルの目印にしている看板が見えてきた。そして、競争の開始を告げるピクシーの声が聞こえる。
「よーい……」
一誠とシンの視線が一瞬交差する。それは相手に対し、勝ちを譲らないという意思表示。
「どん！」
合図と同時に両者はほぼ同時に駆けだす。
既に二十キロ近く走ってきた二人の体は疲労困憊であり、足は前に進もうとする持ち

主の意志に反して中々持ち上がらず、速度も想像を下回る程度。
内心では死にもの狂いで走っているが、二人の隣で涼しい顔をして軽く自転車を漕いでいるリアスと、正面で後ろに向かって飛ぶという器用な真似をするピクシーの余裕な表情を見れば、彼らの体が気持ちとは裏腹に如何に鈍重かが分かる。
奥歯を噛み締めたシンの右手が淡い光を増す。特訓にするに至ってシンは常時『悪魔の力』を発動し続けるようにリアスから指示をされた。理由としては通常のシンと転生悪魔の一誠とでは身体能力に大きな差がある為、それを埋めるのが一つ。
もう一つは、シンの体に『悪魔の力』というものを馴染ませる為であった。この馴染ませるという行為は半ばリアスの独自の考えで、シンがより『悪魔の力』を使い、回数を重ねれば新たな能力〈チカラ〉が開花するのではないかというものであった。シンもこの考えに同意した。実際、何度かこの力を行使していたことで、レイナーレとの戦いの最中に口から『氷の息』を吐き出すという事が出来たからだ。
しかし、あくまでこれは推測であり確証はない。何故ならシンの『悪魔の力』は、他の悪魔とは異なる性質を持っている。
まず一つにシンは教会、祈り、十字架、聖水などの悪魔が拒むものが効かない。以前アーシアが今までの習慣から部室内で誤って祈りを捧げたとき、アーシア自身を含むメンバーが頭に痛みを感じたがシンには特に変化は無く、頭を押さえる皆を不思議そうに

見ていた。
もう一つに朝日を苦手としてはいない。
それゆえにシンは朝日を苦手としている一誠との競争にも、徐々にではあるが差を広げている。しかし、同時に夜の恩恵も受けないので、もしも今が朝では無く夜であったならば、お互いの立ち位置は逆転をしていたのかもしれない。尤も、精神を鍛える為にあえて悪魔の苦手な朝を選んだリアスが、夜に特訓を行う可能性は低い。
シンは右手の紋様から伝わる力を足に集中させるイメージをしながらひたすら前を見て走る。一誠も負けじと追い越そうとするが、朝の日差しで万全では無い体調では今一歩及ばない。
心臓の鼓動は張り裂ける寸前まで高まるがシンは、それでも走る速度を緩めない。もし、一瞬でも気を緩めたらすぐに追い越される。そう感じさせる圧迫感が後ろを走る一誠から伝わってくる。
流れる汗を拭う暇なく懸命に両手を振り、両足を前に押し出す。流れる汗で視界が狭まるシンの目にゴールとなる公園の入り口が見えてきた。
「ほら、一誠！　もうすぐシンがゴールするわよ！」
「くぬ……おおおおおおおお！」
リアスの声に応えるように一誠の気合を込めた雄叫びが背後から聞こえてくる。

「シーン！　あとちょっとだよー！」

すでに公園の入り口まで飛んでいたピクシーがレンガ塀に腰掛けながら、シンを急かすよう言葉を掛ける。無論、シンは最後まで力を抜くつもりは無い。

最後の一滴を振り絞るような気持ちで、地を蹴る。

ゴールまで残り十メートルを切るが、背後から聞こえて靴音も大分近くにから聞こえてくる。

振り向いて距離を確認する余裕も無く、全力で前へと進み続けるシン。残りは五メートルも無い。

残り三メートル、まだ後ろから抜かれることは無い。残り二メートル、息遣いがより近くなる。残り一メートル、視界の端に何かが映ったような気がするが、気にする余裕どころかそれについて思考するほどの脳を動かす酸素が無い。

残り零メートル――

「ゴール！　シンの勝ち！」

公園の入り口を抜けると同時にピクシーの勝者を告げる声がするが、それを聞く余裕はシンには無かった。

顔は赤く染まり、汗は滝の様に流れ、少しでも呼吸しやすいように天を仰いで、赤子の歩みよりも遅い速さで公園内を歩く。一分程そのような状態を続けていたシンは、呼

吸が落ち着いたのを実感するとようやく自分の背後に目を向けた。
そこでは一誠がシンと同じような状態で、両膝に両手をつき大きく息を切らしていた。
「……今回も……俺の……勝ち……だな……」
「はーはー……ああ、くそ！　はーはー……あと一歩だったのに……」
お互いに苦しそうにしながら切れ切れに言葉を紡ぐ。特訓を始めてそれなりの日数が経つが、こうやって会話をするだけでも大きな進歩である。最初の方など走り終わった途端にお互い公園内で崩れ落ちていた頃に比べれば。
シンは頬から顎に伝って流れる汗を拭う――とシンは拭った右手を見て動きを止め、右手に浮かぶ紋様を凝視した。
シンが最初にこの紋様を発動したとき、蛍光色を纏った線は指先から手首の辺りまでしかなかった。しかし、今のシンの右手に浮かぶ紋様は手首から更に伸び、前腕の半ばまで来ていた。きっかけに心当たりが無い訳では無い、レイナーレとの戦いの最中に自身の体の変調を感じていた。この変化に気付いたのはレイナーレ戦後のことであった。
紋様の変化で体に強い違和感を覚えることはなかった。むしろ逆に今までぎこちないと感じていた体内の力の流れが、変化後は滑らかに巡るような感覚となっていた。
ゆっくりとではあるが着実に変わりゆく自分の肉体。この紋様が全て浮き出てきた

そのとき、果たして自分は自分のままでいられるのか。
まだ見ぬ未来に一抹の不安を抱く。
「さあ、二人とも、休憩は終わり。次はダッシュね」
「キャハハ！　まだまだ終わりじゃないよーー！」
だが、それについて真剣に考えるよりも先に目先にある過酷なトレーニングと向き合わなければならない。
シンは溜息を交えながら了承を込めて軽く手を上げ、一誠は二人が向けてくる晴れ晴れとした笑顔を引き攣った笑みで返すのであった。

◇

「八十九……！」
「……九十」
「あ、あの重くないですか？」
「大丈夫、大丈夫！　シンは頑丈だから」
「ほらほら、イッセー。腕が伸びてないわよ」
公園内に二つの唸るような声が交互に回数を数え、鈴のような三つの声がそれぞれ気

を遣ったり、叱咤したりする。
一誠とシンはいまだ公園内で特訓を続けている。一誠の背中にはリアスが座り、シンの背中にはアーシアが座り、頭にもピクシーが座っている。
トレーニングの締めに行う腕立て伏せは、いままでは一セットごとにリアスが一誠とシンの背中を乗り換えていたが、今回は偶然にもアーシアが用があって公園に来た為、リアスのあなたも乗りなさい、という一言でこのような状況となった。
シンは顔を朱に染めながら一定のリズムで回数をこなす。時折、アーシアが申し訳なさそうに声掛けるが、シンが気にするなと言うか、ピクシーが陽気にアーシアの言葉を否定するかのどちらか。一誠の方も回数をこなしているが、リアスが背中に乗っているというシチュエーションに煩悩が沸き立つのか、下半身の辺りがたまに妙な動きをする。その度にリアスに臀部を叩かれるか抓られていたりするが、そのときの一誠の顔は何故か喜色が混じった苦痛の表情をしていた。
それから十数分後、規定の回数を終えたシンと一誠が、タオルで汗を拭きながらアーシアが持参した水筒から注がれた茶で喉を潤していた。アーシアはリアスにも茶を渡し、ピクシーにも渡そうとするが丁度いい容器が無くオロオロとし始めたので、シンは持参して飲み終えたペットボトルのキャップを渡して、それに入れるように言う。
容器でもないそれを使うことに戸惑いを覚え、アーシアは困ったような表情をする

が、ピクシー本人が気にしないと了承したので、アーシアはキャップに注ぎピクシーに手渡す。ピクシーは喜んだ表情で両手で持ったキャップから茶を飲み、アーシアは喜ぶピクシーの姿を見て表情を綻ばせた。

一時の間の穏やかな休憩が済むと、シンは座っている一同の中最初に立ち上がる。ピクシーもシンが立ったのを見て、手にキャップを持ったままいつもの場所であるシンの肩に腰を掛ける。

「それじゃあ、俺は学校へ行く準備があるので先に失礼します。部長」

「ああ、あとでな」

「間薙さん、お疲れ様です。」

一誠、アーシアはすぐに応じたが、肝心のリアスからの反応は無い。リアスは何かを考えているのか手に茶を持ったまま微動だにせず、よほど根を詰めて考えているのかシンの声が届いていない様子であった。

「部長」

先程よりやや声を大きくしてリアスに呼びかけると、そこで初めてシンに声を掛けられていることに気付く。

「――ッ！　ええ、もう帰るのね。気を付けて帰りなさい」

何事も無かったかのように振る舞うリアスの姿にシンは違和感を覚える。

それは具体的にどのようなものかは説明できない程細やかものであったが、一誠もリアスのことが気になったのか怪訝な表情をしていた。

シンは皆に軽く頭を下げ、ピクシーも手を振って別れの挨拶をし公園を後にする。

帰宅中、リアスの何かを考えていた表情が、シンの記憶の中で小さな棘として刺さっていた。別段、あの表情自体珍しいものではなかったが、何故かシンの印象に残る。

すっきりとしないものを感じながら、家へと向かう足を速くする。一刻も早く、体中の汗と共にこのもやもやとした気分を洗い流す為に。

◇

数日経ったある日の登校途中。

シンはいつものように肩にピクシーを乗せ、歩き慣れた学園への道を歩いていた。ここ最近、学園ではある話題で持ち切りになっており、道を歩く度に周囲の学生からその話題に対する怨嗟に満ちた声が嫌でもシンの耳に入ってくる。

「……どうして……何故？　アルジェントさんと兵藤が……！」

「アーシアさんが……アーシアさんまでがあいつの毒牙にかかるなんて！」

「リアスお姉さまも朱乃お姉さまも……そしてアルジェントさんも……」

「――うん、そうだ、兵藤を殺そう」

男女混合で口々に漏れ出すのは世の理不尽さへの嘆きと嫉妬と怨念。

そんな憎悪の念を一身に浴びるのは、シンの前方数メートルを歩く一誠。隣にはアーシアが並び楽しげに会話をしている。シンにとっては見慣れた光景であった。

学園でも一、二を争う悪評を持つ男と学園に新たに入ってきた清楚な元シスターの美少女。そんなアンバランスな二人が共に毎日登校することでさえ、他の学生にとっては珍事であり、それゆえのこの騒ぎである。もし、一緒に登校する理由がアーシアと一誠が一つ屋根の下で一緒に暮らしていることだと知れば、どのような結果になるのか。

（……まあ、少々騒がしくなるだけか）

真剣に考える程、シンが興味を持つようなものではなかった――実際、一誠からこのことを聞いた際も、「そうか」の一言で済ませていた――あっさりと考えを打ち切ると、シンは少し早足になって前を歩く一誠たちに近付く。

「おはよう」

「おはよー」

「よお！　二人とも」

「おはようございます、間薙さん、ピクシーさん」

シンとピクシーの挨拶に機嫌よく一誠は挨拶を返し、アーシアも清廉な笑顔を浮かべ

朝の挨拶をする。
「随分と人気者だな?」
「ふっ……嫉妬の視線が逆に心地良いくらいだ」
「あー、イッセー、調子に乗ってるでしょー!」
シンの軽い皮肉にも一誠は余裕に満ちた態度を崩さない。それを指差してピクシーはからかうように指摘するが、一誠は笑いを堪えるように顔をにやけさせるだけであった。
「何か面白いことがありましたか?　イッセーさん」
含み笑いのような表情をするイッセーの顔を覗き込むアーシア。それを見た途端にさっきまでの余裕は嘘のように消え去り、赤面しながら慌てて今の学園生活の様子を尋ね、話を逸らして誤魔化す。ピクシーはその慌てる様が可笑しかったのかケタケタと笑い始める。
「普段の素行の割には初心な奴だな、お前は」
「うるせぇよ!」
一同はアーシアの学園生活の話を聞きながら、教室へと入る。そこで待っていたのは一誠の悪友である松田と元浜。二人は慣れた様子でアーシアに挨拶をすると、アーシアも微笑んで挨拶を返す。その途端に二人の表情は蕩け、アーシアの挨拶の余韻に浸り始

めた。
　そんな二人の様子を勝ち誇った表情で見る一誠。それに勘付いたのか余韻に浸る表情を一瞬で消した松田の拳が一誠の腹部にめり込む。苦悶の声を上げる一誠の背後に音も無く元浜が近寄ると、後ろから羽交い絞めにして動きを拘束、その隙に松田の拳が再度腹部を抉る。
　抗議の声を上げる一誠であったが、松田と元浜は嫉妬に満ちた笑みを浮かべ、何故いつもいつもアーシアと一誠が一緒に登校しているのかを尋問する。
　その問いを聞かされた一誠の顔に勝者の笑みが浮かぶ、同時にシンにはそれが罪人に首を斬り落とす処刑人のような顔にも見えた。
「それはな、俺とアーシアが一つ屋根の下で暮らしているからだ。なあ、アーシア、間薙」
　あまりに切れ味の鋭過ぎる言葉に松田と元浜は少しの間、一誠が何を言っているか脳が理解できずにいた。だが、徐々に言葉の意味を理解し始め、二人の顔から血の気が引いていくと共に絶望の色が広がっていく。そして、その言葉が嘘であると願う様に、アーシアとシンへ神に縋る信者のような眼差しを向ける。
「はい。イッセーさんのお家でご厄介になっています」
「本当だ」
「ほんとだよー」

しかし、帰ってきたのは残酷な真実。頬を染めて肯定するアーシアに二人の精神は引き裂かれ、おおよそ冗談を言わない人物であるシンからも真実であると認められ、更に精神が穿たれる。そして、姿の見えないピクシーも態々聞こえない筈の肯定をする。

松田はその場で悔し涙を流し、元浜も一誠から手を放しよろよろと後退すると、松田のように涙は流さないものの、手足は立っているのも不思議な程震えはじめる。

止せばいいものの松田と元浜は一誠が美少女と同棲しているのを頑なに認めようとはず、少しでも一誠の言葉が嘘である可能性を求めるように一誠とアーシアに次々と質問をするが、返って来るのは優越感に満ちた一誠と顔を赤くし照れながらも嬉しそうなアーシアが話す真実のみ。その度に二人の表情は悪鬼のようになっていく。

傍から見ていたシンも、自らの傷を抉るような松田と元浜に軽く同情する。

やがて、一誠の言葉が真実であると認めたくなくても認めてしまった松田が、現実の理不尽さに耐えきれず叫び始める。

「いやだー！　ふざけんなぁ！　リアス先輩といい！　姫島先輩といい！　小猫ちゃんといい！　今度はアーシアちゃんといい！　なんでお前は可愛い子と仲良くなれてんだよ！　俺が可愛い子とどうやってキャッキャッウフフするかシミュレーションしているうちに世界は一度崩壊して再構築されたのか！　でなきゃこんなのおかしいだろ！　助けて！　誰か俺を助けて！　このままじゃ俺、世界の理不尽さに壊されちゃう

！」

魂の絶叫とも形容できる松田の言葉。悲しいことにその言葉に心揺さぶられているのはこの場では側にいる元浜だけで、一誠は相変わらず勝ち誇った表情を崩さず、アーシアは突然叫び始めた松田に目を白黒させ、そしてクラスの大半の女子が白い目を向けていた。シンはいつもの発作の様なものだと軽く流し、ピクシーは松田の必死さを腹を抱えて笑っていた。

元浜は幽鬼のように一誠へと近付くと、腹の奥底で様々な感情を煮え滾らせているような声で、一誠に女子を紹介してくれるように頼み込む。その声は相手の拒否を一切認めない必死さがあった。

一誠は少しの間、考えているような表情をしていたが、携帯電話を取り出して部屋の隅へと移動する。そこで数分間会話をするとこちらに戻って来て、松田たちにこの相手を紹介すると言って自分の携帯電話を差し出した。

シンは一誠の言葉に密かに眉を寄せる。シン自身悪いとは思ったが、一誠がいくら悪友だからといって他人に女性を紹介するような余裕は全く無い。シン自身の記憶の中でもオカルト研究部の面々以外での女性との交流など皆無に等しい。

なんとなくシンも一誠の携帯電話の画面を覗き込もうとする。

「あっ！　間薙！　お前も狙ってるのか！」

「駄目だぞ！　これは兵藤先生から俺たちへの贈り物だ！」
　手早い動きで相手の番号とアドレスを入力する二人。先程までの悲壮な表情はあっさりと消え、敵意を向けていた一誠にも露骨なまでに掌を返す。一誠とシンの仲が良くなったことで、間接的にこの二人の態度もシンに対して幾分親しいものとなっている。
「ただの好奇心だ。あいつが女性を紹介するなんて珍しいと思ったからな」
　そう言って画面を見てシンは表情を凍らせた。そのまま無言でその場を離れ一誠の近くへと寄っていく。
「お前も残酷な奴だな」
「紹介出来る子を紹介しただけなんだけどなー」
「後でどんなことになっても俺は知らないからな」
「ええー！　『ミルたん』良い子じゃん、シン」
　何も知らず幸せそうに笑う松田と元浜に今度はシンも心の底から同情した。

◇

　その日の深夜、悪魔の仕事を終えたシン、ピクシー、一誠、アーシアは家路にと着いていた。途中まで同じ道を通る為、一緒に帰宅しようという一誠からの提案であった。

アーシアの隣はいつものように一誠では無くピクシーが代わりを務めており、その二人の数歩後ろを一誠とシンが並んで歩いていた。
ピクシーとアーシアが何らかの談笑をしている。話の断片からピクシーがアーシアの悪魔としての初仕事の感想を聞いているらしい。ピクシーが何かを話し掛けるとアーシアは微笑んで楽しそうに言葉を返す。アーシアの今までの環境から考えると、話し相手となる同性がいることが嬉しいのであろう。
そんな二人の様子を一誠は微笑ましく見ている。普段の異性を見る様な煩悩めいたものではなく、娘を見る父のようなやけに落ち着いた眼差しであった。
「嬉しそうだな」
「うん？　まあな。アーシアの仕事も無事に済んだし、少し安心したかな」
一誠は軽く背筋を伸ばし、その疲労感を心地よく感じながらシンに歯を見せて笑う。シンもそんな一誠を見て、微かに表情を和らげた。
「頑張れよ。俺も手助けはするが、アーシアが一番頼っているのはお前なんだからな」
「ああ、分かってるって！――そうだ。間薙、ちょっといいか？」
一誠は途中で声を抑えて前を歩く二人に聞かれないようにし、シンだけに喋り始める。
「部長のことなんだけどさ……最近、少し変じゃないか？」

「具体的には、どこが変だ？」
　一誠はこのところ毎日のように声を掛けても気付かない程に考え事をしているリアスの様子に心配を抱いていると語る。シンも何度かその光景を目の当たりにしており、今日もアーシアが初仕事に行く前にその姿を見ていたし、帰宅前も何やら思い詰めたような真剣な表情をしていた。
「まあ、部長のことだから俺なんかが心配しても無意味なんだろうけど……やっぱり気になって……」
「心配するに越したことはない……俺も正直気になる。明日ぐらいにそれとなく聞いてみるか？」
「うーん……部長が素直に答えてくれるか？」
「駄目だったら、他のメンバーに心当たりがないか聞いてみるだけだ」
「……そうだな。駄目もとで聞いてみるか」
　結論が出ると同時にアーシアとピクシーの二人からの呼ぶ声が聞こえる。いつの間にか自分の家に続く別れ道の前まで来ていた。
「じゃあな。おやすみ」
「バイバーイ」
「ああ、また明日な！」

「間薙さん、ピクシーさん、お休みなさい」
一誠とアーシアに別れの挨拶を済ませて、シンたちは自宅への道を歩きはじめる。
「ねえねえ、イッセーとなに話してたの？」
「大した話じゃない。世間話みたいなものだ」
「ふーん」
特に意味も無く聞いたのか、それ以上ピクシーはシンを追及せず、いつものようにシンの肩へと腰掛け、眠そうに欠伸をする。
シンは船を漕ぎ始めるピクシーを落ちない様に片手で支えながら、一誠との会話と最近の物憂げリアスの表情を思い出す。
（大事の前触れじゃなきゃいいんだがな……）
自らの内に芽生えた一抹の不安。このシンの予感は翌日的中することとなる。

◇

翌日、目覚まし時計のアラームと同時にシンは目を覚ます。寝起きでやや固くなった関節を軽く回しながら、シンはベッドから降りた。
ピクシーはまだシンの枕の横で猫のように体を丸めて眠っている。そんなピクシー

を起こさない様に静かに動くシンであったが、そのとき机の上に置いてある携帯電話の画面が点滅をしていることに気付く。
手に取って確認をしてみると、リアスからのメールが一通届いていた。内容を確認してみると簡素な文章で今日の訓練は中止にするという報告のみ。中止にする理由などは一切書いてはいなかった。
昨晩、一誠とリアスの様子について疑問を抱いていたせいか、シンの表情は硬いものとなっていく。
特訓が中止となったからといって二度寝をするような気分でも無く。シンは登校時間までの間、晴れない感情を胸に物思いにふけていた。
朝の通学路、そこでシンはアーシアと一誠の姿を発見する。
アーシアの方はいつもと変わらない様子であったが、一誠の方は妙にやつれた表情で、疲労感が体中から滲み出ている。
「おはよう」
「おはよー」
「あ、間薙さんにピクシーさん！　おはようございます」
「……よお」
見た目の通りに一誠からの返事に生気が足りなかった。シンは一誠の袖を軽く引っ

張り、近くに寄せると小声で一誠と話し始める。
「昨日、あれから何かあったのか？」
「えっ！　ああ、その……」
「部長絡みか？」
　言葉を濁していた一誠であったが、シンの一言で完全に言葉を詰まらせる。シンの言葉が確信を突いた証拠であった。一誠は言葉を選ぼうとしているのか表情を何度か変え、視線もシンに向けたり、アーシアの方に向けたりなど忙しない。
　短い時間考えていた一誠であったが、話す気になったのか閉じていた口を開く。
「――間薙、実はな」
「待て」
　一誠が何かを喋り始めようとするがシンはそれを制した。
「ここだとお前が聞かせたくない相手に聞かれるかもしれない」
　シンはそう言ってアーシアを顎でしゃくる。何度か一誠がアーシアに目を向けていた為のシンの判断であった。
「わりぃ……休みの時間に前に話した場所でいいか？」
「構わない」
「ねえねえ、さっきから何話してるの？」

仲間外れにされていたことに痺れを切らしてピクシーが口を挟んでくるが、シンはそれを軽くあしらう。ピクシーはシンの性格を理解してこれ以上聞くのは無理と判断し、代わりに頬を膨らまして抗議を示しながらシンの肩に座るのであった。

教室に向かう廊下に着いたとき、怒りと嘆きの混じった声で一誠の名が大音量で叫ばれる。その声は廊下中に響き渡り、声のした方を見れば、通路の先に般若のような形相をした松田の姿。

その姿で大体の事情を察したシンは早歩きで廊下を進む。そんなシンの隣を松田が全速力で駆け抜けていく。背後では元浜の怒号も聞こえ、その後に一誠の呻くような声が聞こえたが、振り返らずにそのまま進んでいく。

十数秒間の松田と元浜の怒りの声の後に一誠がシンの名を呼ぶのが聞こえたが、シンは正面を向いたまま背後に手を振って、助けるのを拒否。

数秒後、鈍い音と歩いているシンの足下に小さな振動が伝わってきた。

◇

放課後、シンは最早常連になりつつある洋菓子屋で、いつものようにケーキを数個買っていた。理由は、シンの肩に乗る小さな同行者にある。

あの後、放課後までずっと頬を膨らませて拗ね続けていたピクシーに流石にシンも精神的に疲れてきたので、手っ取り早く機嫌をとる為にピクシーにケーキを買い与えることとなった。効果は抜群であり、不満を露わにしていた表情は花のような笑みへと変わり、上機嫌で鼻唄まで唄うぐらいであった。

そんな現金なピクシーに内心呆れつつ、シンは再び学園へと足を運ぶ。その道中、休み時間に一誠から聞かされた昨晩の出来事について思い出していた。昨晩、突如として一誠の部屋にリアスが押しかけ、何らかの要求をしたという。何らかという曖昧な表現になるのは、シンがそのことについて詳しく聞いても一誠が頑なに話すのを拒んだ為である。

しかし、その要求が通る前にリアスの家の使いの女性――グレイフィアに阻まれる結果になったという。

リアスの家が関わってくる問題。正直、シンは自分がどこまで踏み込んでいいのかが分からない。個人的にはリアスの味方でありたいという気持ちがあるが、他人の家の問題に土足で入るべきではない、といういつもの大人ぶった考えも生まれてくる。

考えがはっきりとしないまま、シンが部室のある旧校舎に足を踏み入れたとき、シンの表情に険しさが混じる。

シンの感覚で少なくとも十を超える悪魔の気配が、部室の方角から感じ取れた。その

内の二つはリアスと同等、もしくはそれ以上の存在感を持つ。
ピクシーも気付いたのか、肩を強く掴んでくるのをシンは感じた。
廊下を早足で駆け、部室の前に立つ。扉一枚の向こう側からは多くの悪魔の存在がハッキリと感じられる。
軽く息を吸い、数秒かけて吐き出すと、シンは扉を開く。
「失礼します」
入室の挨拶と共に部屋の中を見渡す。部室内ではリアスと見慣れない男性が対峙し、一誠たちがそれに加勢するように背後で構え、男性の背後にも同じく十数人の女性が佇んでいた。そして、その間に挟まれるように居る見慣れない銀髪の女性。
シンが最初に注目したのが見慣れぬ男性であった。リアスと同等の存在感を放つ男性の見た目の年齢は二十代前後、軽く後ろに撫でつけた金髪、切れ長で我の強そうな眼をし、甘く、それでいて野性味のある整った容姿をした美男子。上質そうな真紅のスーツを纏っているが、下に着たシャツはボタンをキッチリと止めず胸元を大きく開けて着崩している。一見だらしなく見えるそれもこの男性が着ると様になり、男性の魅力を十二分に発揮させるものとなる。
その男性の背後には男性に従うように並ぶ十五人の女性。多種多様な格好をしているが全員から悪魔の気配を漂わせている。そして、全員が美女と称してもいいほどの容

姿をし、男性の趣味が窺える。
（あいつが泣いて嫉妬しそうな面子だな）
場違いとも言える感想を抱いているシンに、部室内全員の視線が刺さる。
「何だ？　リアス、いつから人間を飼う趣味なんて始めたんだ？」
露骨なまでに見下した口調の男性にシンの代わりにリアスが怒りを露わにする。
「ライザー！　彼は私の協力者よ！　侮辱は許さないわ！」
「協力者ねぇ……」
ライザーと呼ばれた男性はリアスの怒りを受けても見下した笑みを崩さず、値踏みをするかのようにシンを見る。
「ふっ、まさかキミが人間の手を借りるとはな。面白い、一応名を聞いといてやる」
上からの目線で尋ねるライザーにシンは一ミリたりとも表情を変えない。
「人に名前を尋ねるときまず自分から名乗るのが礼儀では？　話はそれからです」
慇懃無礼なシンの態度にライザーの視線が見るから睨みつけるに変わる。シンもその視線に怯まず、射抜くような視線を返した。

低頭、参戦

「ふん、俺に対して礼儀を語るか……人間が大きく出たな！」
「ただの人間かどうか、試してみますか？」
紅蓮の怒りを露わにするライザーと、対照的に氷の様に冷たく感情を露わにしないシン。両者の間で見えない火花が散る。
「なら……試させてもらおうか」
ライザーの右手から肘に掛けて炎が奔る。その炎は右手の中に収束し始め、拳大の炎球と化す。
「ライザー・フェニックス。この名をその頭に刻んでおけ！」
「待ちなさい！　ライザー！」
リアスの制止よりも早く、ライザーは手の中の炎球をシンに向けて投げ放った。空気の焦げる匂いと共に迫る炎に対し、シンはその場から動こうとはしない。
直撃する。誰もがそう思った瞬間、シンは動いた。
「ほお？　人間風情と思っていたが、成程随分と面白い力を持っているな」
最初に言葉を出したのはライザーであった。

「自己紹介どうもありがとうございます。俺はグレモリー部長の協力者――」
紋様を輝かせた右手が、直撃するかと思われたライザーの炎球を掴み取っていた。
「間薙シンです」
シンも名乗ると共に手の中の炎を握り潰す。潰した拳の隙間からは白煙が上がる。
「ライザー！　あなた――」
「部長、いいです」
ライザーの蛮行とも思える行動に抗議をしようとするリアスをシン自ら止める。シンは右手を開き、掌を埃でも払うかのように左手で払っていたが、開かれた右手には火傷一つ付いていなかった。
「あれは、見せかけだけでしたよ。たいして熱くも無かったです」
皆に見えるように右手の掌を見せ無事であることを証明した後、シンはライザーの方を見るが、ライザーは詰まらなそうな表情となる。
「せいぜい、慌てふためかせてやろうとは思ったが、顔色一つ変えないな。全く面白みの無い反応をする奴だな。お前は」
「よく言われますよ」
「ライザー様。あまりお戯れはよして下さい。リアスお嬢様の機嫌を損ねるだけです」
「失礼。つまらない挑発に乗ってしまったようです。以後は自重しますよ」

銀髪の女性の窘める言葉にライザーは肩を竦め、軽く謝罪をする。勿論、シンへの謝罪の言葉は無い。

視線をライザーへと向けたまま、シンはリアスたちの方へと足を進める。

「それで、一体どういう状況だ？」

部室に入って殆どその場の流れと相手の態度に反応して行動していたシンが、改まって今どういうことが起こっているのかの説明を木場に求める。

「手短に説明すると、彼は魔界の名家、フェニックス家の三男のライザー・フェニックス。部長と同じ上級悪魔で部長の一応の婚約者らしいよ。でも部長はそれを拒否している」

「それじゃあ、後ろの女性たちはライザーという奴の眷属か」

「……そうです」

木場の代わりに小猫が同意する。

「この様子だと穏やかに話し合いという雰囲気ではないな……あの女性は？」

シンはそう言って銀髪にメイドの格好をした女性を目で指す。

「あの人は両家の立会人で部長のお兄さんの『女王』のグレイフィアさんだよ」

「あの人が、か……」

今日、一誠に聞いた覚えのある名であったが、目の前にいるグレイフィアという女性は測りきれない存在感を持っていた。見た目は二十代前半、編んだ銀髪を一つに束ねた

髪型に冷たさと鋭さを感じる眉目秀麗な顔立ち。しかし、シンにはその内側から隠すことの出来ない程の力を肌で感じていた。グレイフィアという女性はこの場に居る全員の中で頭一つ抜けた存在感があった。

「立会人というと……」

「部長は今、ライザー・フェニックスにレーティングゲームとの対決を了承したところさ」

木場の表情はいつにも無く真剣であり、笑顔など無い。シンと会話していても意識はライザーの方へと向けられていた。

（勝てば婚約破棄、負ければ部長は結婚か）

相手の眷属の数とリアスの眷属の差は一目瞭然。この対決自体、この婚約を望む者にとって都合のいい展開であることが分かる。

「ふん、詰まらない横槍が入ったが話を戻そう。この俺と俺の可愛い下僕たち相手に、たった五人の下僕で挑むわけか。精々対抗できるのは『雷の巫女』ぐらいだな」

聞き慣れない単語に疑問符を浮かべるシンであったが、ライザーの目線は朱乃へと向けられている。先程口にしたのは朱乃の異名であるらしい。

そして、もう一つ気になったことはライザーが言った『五人の下僕』という言葉。考えなくても分かる。ライザーはシンの存在を眼中には入れていないらしい。

ライザーは嘲笑を浮かべて、側に並び立つ眷属の女性たちの何人かを両手で抱き寄せ、その体を慣れた手付きで弄る。女性たちも嫌な顔を一つ見せず、むしろそれに喜んでいるようであった。

シンの耳に擦りあわせるような音が聞こえてくる。その音がする方へ目を向けると、一誠が嫉妬心を全開にして悔しそうに歯軋りをしている。その隣ではアーシアが目の前の光景に赤面し、顔を抑えて照れていた。

「ねえねえ、シン。なんであいつみんなの見ている前でベタベタし始めたの？」

「そういうのが好きなんだろ」

ピクシーが純粋に疑問に思ってシンに問い掛け、シンは殆ど適当に答える。婚約者がいる前で態々、他の女性とじゃれ合う神経など、今まで普通の環境で過ごしてきたシンには理解できない。ましてや、感覚が大きく違うピクシーから見れば、今の光景はさぞ不可思議なものであろう。

しかし、ライザーの行為は止まることを知らず、魔術師のようなローブを纏った女性を抱き寄せると、その女性の顎に手を当て唇を重ねようとする。

この行為にとうとう一誠の我慢が限界に達したのか、自らの『神器』の名を叫び、左腕に『赤龍帝の籠手』を装着する。

「てめー！　いい加減にしろ！　お前みたいな女ったらしは部長に相応しくない！　不

釣り合いだ！」
「ああ？　さっき俺の眷属たちを見て泣いて羨ましがっていた奴が言う台詞か？　お前の夢だってハーレムだろうが」
ライザーの反論に一誠は言葉を詰まらせる。責めるつもりが手痛い反撃を食らう結果となってしまった。
「泣いて羨ましがってたのか……」
ボソリと呟いたシンの言葉に一誠は反応。慌てた様子で弁解を始める。
「いや！　その羨ましがったというか……憧れたというか……泣いたというよりも感動したというか……間薙！　あいつの言葉を信じるのか！」
シンは躊躇う事無く首を縦に振る。
「うん！　だってイッセーだし」
ピクシーも駄目押しに肯定する。
「と、とーにーかーく！　そんな部長の前で他の女に手を出しているような奴を認められるか！　ましてやそれが結婚相手ならなおさらだ！」
強引に話を打ち切って、ライザーを指差し一誠が糾弾するが、それにライザーは顔色一つ変えずにせせら笑い、ただの下僕とのスキンシップだと言い切る。だが、一誠はそれでも納得はいかない。一誠の持つ性格か、ライザーへの嫉妬か、あるいは同族嫌悪か、

それとも別の理由かは知らないが、一誠にとってライザーの在り方は認めがたいものであるらしい。
「英雄、色を好むという人間のことわざがあるよな？　まあ、今の俺の現状は必然のようなものさ」
「お前のような種鳥野郎のどこが英雄だ！　お前なんて焼き鳥で十分だ！　フェニックスだしな！」
一誠の言葉にライザーの笑みは転じて、怒りに染め上げられる。格下と思っていた相手からの挑発に許せないものを感じたのであろう。
「種鳥に焼き鳥だと！　あんまり舐めた口をきくんじゃねぇぇ！　お前には目上に対する礼儀を知らないのか！　下僕の躾がなってないぞ、リアス！」
ライザーはリアスへと抗議するが、そんな抗議もリアスは鼻で一笑して話す必要も無いと言わんばかりに顔を背ける。
シンの肩ではピクシーが一誠の挑発とライザーの激怒した様子に吹き出し、指を差してケラケラと笑っている。その笑い声も癪に触ったのかライザーが凄まじい目つきで睨んでくるが、ピクシーは舌を出してさっさとシンの背後へと隠れてしまった。
「お前も使い魔の教育がなっていないようだな」
「すみません。正直者なもので。焼き鳥だのフライドチキンなど言われたのが面白かっ

たのでしょう」

謝罪の念を感じない謝罪をして、さらりと言われていないことを付け足すシンの姿にライザーの頬が怒りで吊りあがる。

「お前――――！」

「おい、焼き鳥野郎！　てめぇの相手は俺がしてやる！　ゲームを態々する必要もねぇ！　この場で全員倒してやらぁ！」

一誠の気合と共に籠手に填め込まれた宝玉が紅い光を放ち、能力の倍加を告げる『Ｂｏｏｓｔ！』という音声が部室内に鳴り渡る。

構える一誠の姿をライザーは一笑し、ミラという名前を呼びながら指を鳴らす。ライザーの眷属の中から、手に棍を持った中華系の服を着た小柄な少女が一歩前に出る。身長は小学生並みであり、持つ棍は身長の倍近くある。

ミラと呼ばれた少女が棍を慣れた様子で構え、その先を一誠へと向ける。一誠は出てきた少女に一瞬困惑した表情を浮かべるがすぐに真剣なものへと変える。

（これは……）

二人の対峙を見たとき、シンの脳裏に一誠の敗北する映像が浮かぶ。ミラという少女が構えを取ったとき、その小柄な体が何倍に大きく見え、逆に一誠の姿が縮んだような錯覚を覚えた。戦いというものに対し、素人であるシンの目からでも感じ取ってしまう

二人の実力の差。
皆が見ている前で一誠が行動に移ろうと重心を前に移動させ、それを見抜いたミラの足下の床が、足から伝わる力により微かに軋む音を上げる。一誠が拳を上げ、ミラがその力を解放しようとした瞬間――
「少しいいですか？」
場の空気を乱すシンの一声。僅かにタイミングが遅かったのかミラは既に行動を起こし、一誠の鳩尾の前で棍を寸止めしていた。一誠、そしてシンも始動からその突きに至るまでの動きを見切れることが出来ず、一誠は突如腹部に突き付けられた棍に驚愕し、同時に頬から一筋の冷や汗を流す。
「さっきといい今といい、つくづく空気の読めない奴だな、お前は」
勝負に水を差したシンにライザーが蔑むような視線を向けてくる。同様にライザーの眷属一同からも同じような目線が突き刺さる。シン自身、自分の行動の無粋さを理解している。
「それについては申し訳ないと思っています。それでも一つ気になっていることがあって……いいですか？」
少しの間ライザーはシンを睨んでいたが、やがて嘆息し、言ってみろと続きを促す。
「悪魔同士が戦うレーディングゲーム。それに人間である俺が参加しても構いませんか

？　一応、悪魔と同じ力を持っていますが」

シンの質問に全員が目を丸くする。ライザーたちは勿論、リアスたちもシンの参戦希望に驚いている様子であった。

「シン、あなた……」

「本来なら、悪魔同士のレーディングゲームに人間が参加するなど論外です。例え悪魔と同じ力を持っていようと――ですが、これはあくまで公式ではなく非公式のレーディングゲーム。双方が合意すれば不可能ではございません」

シンの問いにこの場で唯一表情を変えていないグレイフィアが答える。グレイフィアの答えはシンにとって望ましいものであった。

「という訳なんですが、駄目でしょうか？」

リアス、ライザーの双方を見て、シンが改めて参戦の有無を聞く。リアスの表情は迷いが混じったものとなり、ライザーは一瞬真顔になって何か考えていた様子であったが、すぐに口の端を吊り上げ笑みを形作る。

「私は――」

「俺は構わないぜ」

以外にもライザーの方がリアスよりも早くシンの参戦を認める発言をする。これにはリアスたちも驚きを露わにした。

「――ただし、こういったものにはそれなりの誠意ってものを見せるのが人間界の習わしだろ？　そうだな――せめて頭の一つぐらい下げたらどうだ？」

挑発を込めたライザーの言葉にリアス一同の顔色が変わる。シンは眷属ではないが共に行動してきた仲間故にライザーの言葉はシンを辱めるようなものであった。

「ライザー！　あなた――！」

「どうかお願いします」

リアスがライザーへ怒りを当てる前にシンは深々と頭を下げ、ライザーへと頭を垂れる。リアスはシンの行動に二の句を継げなくなり、ライザーも一切の迷いも躊躇いも無く頭を下げるシンの姿に毒気を抜かれたような顔となり、短く舌打ちをするもそれ以上の要求をしてくることはなかった。シンはその沈黙を了承の代わりと受け取った。

「参戦を認めて頂いてありがとうございます」

ライザー自身、相手が少しでも躊躇うことを期待しての条件であったが、予想以上に簡単に頭を下げられ、逆に一杯喰わされたような気分であった。先程の言葉を反故にして、更なる屈辱的な行動を相手に強いるという選択もある。しかし、仮にも自分が出した条件ではあるが、相手が誰であれ軽々しくそれを自ら破るという事は、彼のフェニックスという名のプライドと沽券に関わるものであった。そして、なによりライザーは、相手を嬲るような趣味を持ち合わせていなかった。

「部長もいいですよね？」
「え、ええ」
頭を下げた状態のままリアスへと問い、リアスのシンの意志を汲み取り参戦の許可を出す。
「それでは、両家が認めたので例外ではありますが、あなたのリアス様方への参戦を許可いたします。改めてお名前を窺ってもよろしいですか？」
「間薙シンです」
下げていた頭を上げ、グレイフィアに自らの名を名乗る。この瞬間にシンのレーティングゲームの参戦が決まった。
ライザーはそれを聞いて鼻を鳴らし、軽く指を鳴らす。それを合図にして今まで一誠に棍を突き付けていたミラは棍を引き、どういう理屈は分からないがその小柄な体に自分の身長以上の棍をしまい込み、ライザーの下へと戻っていく。
「ま、待てよ！　まだ終わってないだろうが！」
吼える一誠に再びミラが構えようとするがライザーはそれを制し、眷属では無く今度は自らが一誠に向かっていく。
面と向かう一誠とライザー。ライザーは身構える一誠を一笑し、その顔を覗き込むように見る。

「さっきのミラの一撃、お前には見えたのか？」
「――ッ！　それは……」
「ふん。ミラは俺の『兵士』だ、お前と同じな。俺の下僕の中ではまだまだ未熟な方ではあるが、実戦を何度も経験している」
ライザーの語る事実に一誠は言葉を挟む余裕も無く、歯噛みし、ただ黙って聞く。
「分かるか？　お前が『神滅具』なんて大層な物を持っていても相手よりも劣っていたら、そんなものはただの飾りだ。確かに『神滅具』は神や魔王を屠る力を秘めている。だがな、実際にそんなことを成し遂げた奴なんて一人もいない」
ライザーは一誠の右手を掴み上げる。
「弱かったんだよ。誰もが『神器』の力を完全に引き出せない程にな。お前と一緒だよ！」
突き付けられた言葉が、刃のように一誠の心に深く突き刺さる。ライザーの言葉を否定すること自体は簡単である。しかし、一誠はそれをしなかった。
何故なら、一誠も認めてしまっていたからだ。ライザーのお前は弱いという言葉を。
悔しさで表情を歪め、屈辱で震える拳を奥歯を噛み締めて、一誠は耐える。ここでライザーの手を振り切り、殴り掛かることも出来る。だが、それをしないのは一誠の精一杯の意地であった。

「はっ！　自分の弱さを受け入れるぐらいの度量はあるってことか。――少しは可能性というやつがあるわけだな」

ライザーは掴んでいた手を放し、嘲笑を潜め、思案する表情になる。

「――そうだな。リアス、レーティングゲームの開始は十日後ということにしないか？」

「……どういうつもり？　私たちに猶予を与えるなんて」

「別にそちらが望むなら、今日明日でもいいんだぜ？――ここは素直に俺の案に乗っていた方が得策だと思うが？」

無表情ではあるが怒りを潜めるリアスに、ライザーは子供に言い聞かせるような口調で接する。

「感情ってやつも大事だが、それだけでゲームに勝てる程、現実は甘くはないぞ。才能があろうと素質があろうと、キミたちは所詮ゲームの初心者だ。初心者相手ならそれなりの期間を与えるのがスジというものだ。じゃなきゃゲームも面白くなくなる」

ライザーはリアスたちに背を向けて歩き始め、ある程度離れると床に手を向ける。すると床に魔法陣が現れ、魔力の光を放ち始めた。

「十日の間にどれくらい仕上げられるか楽しみにしている。リアス、俺はキミを高く評価している」

リアスに言いたいことを言い終えると、ライザーの視線は一誠とシンに向けられる。

「リアスの『兵士』、覚えておけよ。お前の行動は全てリアスへと通じる。お前の恥はお前だけの物じゃない。――リアスの恥でもある」
　ライザーの言葉は、一誠の胸に深く刺さる。だが、先程のライザーの言葉の様に抉るように刺さるのではなく、心の中に沈み込むように刺さった。ライザーがリアスの名誉の為を想っての言葉。一誠は認めたくないものの少しだけ、ライザーへの印象が変わった。
「そして、そっちの協力者。例え、特殊な力を持っていようとお前は人間だ。人間相手でも容赦はしない、今のうちに覚悟を決めておくんだな」
「お気遣いどうも」
　シンは言葉だけの礼を送る。
「リアス、次のゲームでまた会おう」
　最後にそう言い、ライザーは眷属の女性たちを連れて魔法陣の中に消えていった。
　ライザーが魔法陣の中に消えた後も沈黙は続き、部室内の空気は重いものとなっている。
「今日はこれで解散ね」
　最初に口を開いたのはリアスであった。メンバーの視線は自然とリアスの方へと向けられる。

「私は今からレーティングゲームに向けての対策を練るわ。あなたたちは今日はもう帰りなさい。考えが纏まったら各自に連絡をするわ」

リアスは、場の空気や不安を払拭するかのように快活な口調で皆に告げる。リアスの言葉で少しではあるが、部室内に明るさが戻る。

「イッセー、いつまでもライザーの言葉を気にしていたらいけないわ。彼がなんと言おうとあなたは私の『兵士』。私は、自信を持ってあなたを選んだ。だから、あなたも自信を持ちなさい。あなたの行動、決して私は恥だとは思わないわ」

部室内で恐らく、最も悔しさを感じている一誠にリアスは励ましと奮い立たせる言葉を掛ける。負の感情に包まれていた一誠は一瞬目を丸くし、その後ぐっと堪えるかのような表情を浮かべるが、すぐにリアスに深々と頭を下げ、その顔を隠した。

「――すみません……ありがとうございます、部長」

若干震えた声で謝罪と礼の言葉を言う一誠、下げた頭を上げたときそこには、少しだけ晴れた表情があった。

リアスは一誠の顔を見て軽く頷く。そして、朱乃に部室に残るよう指示し、他のメンバーに帰宅を促した。

「シン、少しいいかしら」

皆が帰ろうとしたとき、リアスがシンを呼び止める。一誠たちは先に出ると言い部室

を出ていき、部室内にはシンとピクシー、朱乃、リアスが残る。
「朱乃も少し席を外してもらってもいいかしら」
「ええ、分かりました、部長」
　リアスが朱乃の退室を頼む。シンはこのとき直感ではあるが、リアスが一対一で話したいのではないかと思った。側近であり、自らの片腕である朱乃を退室させるという行動からそういった考えに至る。例え思い違いであっても支障をきたさないと思い、シンは肩に乗っていたピクシーに手を伸ばす。
「ピクシー、お前も少し外に出てくれないか？」
「うん、いいよ」
　特に嫌な顔をせずに了承をすると、ピクシーはシンの肩から手に乗り移る。そして、手に持ったピクシーを朱乃へと差し出す。
「すみませんが、こいつと一緒に行ってもらえますか？」
「ええ、いいですよ」
　いつもの笑顔で快くシンの願いを聞き入れた朱乃は、渡されたピクシーを両手の上に丁寧に乗せ、部室の外へと向かう。
「あけのの手って、柔らかくってすべすべしてるね」
「うふふ、ありがとうございます」

そんなやりとりをしながら二人は、扉の向こうへと消えていった。

部室に残った二人は互いに向かい合い、目を逸らさない。

「シン、あなたに一つだけ尋ねたいことがあるわ」

「何ですか？」

「あなたは、協力者。あなたの個人の意思で動くことができるし、私もあなたに強制はしない。そんな、あなたが何故自分から危険へ向かう真似をするの？　ライザーもあなたをレーティングゲームに参戦させる意志は無かったわ」

「興味があったので」

「嘘ね。その為に頭まで下げるの？」

「下げて価値の下がる程、立派な頭ではありませんよ。それに頭を下げて軽蔑する様な知り合いもいません。それに頭一つ下げただけで手駒が一つ増えるなら、部長にとって悪い話だとは思えませんが」

シンの言葉にリアスは少しだけ目を伏せる。

「……そういう言い方は好きじゃないわ」

「――すみません」

リアスは知りたかった。自分から悪魔同士の戦いに挑む理由を知りたかった。その為に態々皆の前で、頭を下げる行為までして参戦するシンの意志をどうしても知りた

かった。
「部長がこの婚約に乗り気ではなくて、それを破棄する勝負をするから――という理由では駄目ですか？」
　リアスは何も答えず、ただシンの顔を真剣な眼差しで見る。僅かの間、部室内で物音一つの無い状況が続いたが、やがてシンは軽く溜息を吐いた。
「出来ればこのことは誰にも言わないでくれますか？」
　リアスは黙って頷く。
「さっき言った理由は決して偽りの気持ちで言ったわけではありませんが、本音とも少し違います。――簡単に言ってしまえば、俺はまだオカルト研究部の一員で在りたいんです」
　シンはリアスを真っ直ぐ見つめ、感情の起伏は無いが確かな意思を感じさせる口調で言う。
「俺は、今の状況を居心地の良いものと思っています。色々と大変なこともありますが、皆が居るオカルト研究部で悪魔の仕事の手伝いをすることが結構好きです」
　一誠が何かを失敗し、それをアーシアが急いで助けに行き、木場はそれを見て苦笑し、小猫は無表情で手厳しい言葉を言って、朱乃があらあらと頬に手を当て、リアスがそれを厳しさと優しさを兼ねた評価を下す、そんな光景や日常をシンは気に入っていた。

「いずれは部長たちも卒業して居なくなります。ただ、それまでの間に今の部が無くなるようなことがあるなら全力で防ぎたいし阻止したい、それだけです――どうしようもない位個人的な理由です」

シンは言い終えるのと同時に顔が熱くなっていくのを自覚した。心の裡にある本音というものを包み隠さず語るということには常に気恥ずかしさが伴う。

「……そう、分かったわ」

シンの理由を黙って聞いていたリアスが口を開いた。心なしかその表情は嬉しさが含まれているようにシンには見えた。

「――それじゃあ、俺も帰ります」

恥ずかしさ故に一刻も早くこの場から立ち去りたいシンは頭を軽く下げ、そそくさと扉に向かう。ドアノブを握ったときリアスから声を掛けられた。

「シン、あなたが個人的な理由だと言っても私から言うことがあるわ……ありがとう」

リアスの礼の言葉にシンは再度頭を下げ、部室から出て行った。

部室から廊下に出て、曲がり角を曲がったとき、シンは足を止める。そこには帰ったと思っていた一誠たちと朱乃、ピクシーが一緒に居たからであった。

「……お前たち、帰ったんじゃないのか?」

「あはは、先に帰るのも薄情だと思ったからね」

「……木場先輩の言った通りです」
　木場、小猫の言葉にシンは目を細める。
「お前たち……盗み聞きしていただろ」
　シンの言葉に一瞬、場の空気が凍り付く。
「いや、知らないよ」
「……間薙先輩、思い過ごしです」
「あらあら、そんなはしたないことしませんわ」
「そんなことしないよー、シン」
「勘違いだって、間薙！」
「そそそそそ、そんなこと、わわわ私たちしてません！」
　約一名の激しく動揺する声。声の主であるアーシアを見ると、目は右往左往し頑なにシンと目を合せようとはしない。嘘の吐くことの出来ないアーシアの様子にシンは軽く息を吐き、先へと歩き出す。
「――まあ、いい」
　シンはそれ以上の追及をすることはなかった。先程、リアスに対して話したことをこの場で蒸し返すのは、自分で自分の傷を抉るに等しい。この場で誰も何も言わなければ、シンにとってそれでよい。言葉にして色々と言われるのよりも頭の中であれこれ

思っているだけの方がまだましと判断した。
「なあ、間薙」
「何だ？」
一誠の声にシンは足を止める。
「絶対に勝とうな」
「――ああ」
決意に満ちた言葉にシンは同じく決意を込め、短くも力強くそれに応えた。

◇

一夜明け、シンは自宅のリビングで静かに考え事をしていた。シンの前に置かれたテーブルの上では、昨日買ったケーキをピクシーが呑気に食べている。
帰り際、シンは木場から今回の婚約騒動について詳しい内容を聞かされていた。ライザー・フェニックスは悪魔の中でも特に貴重な悪魔と悪魔から生まれた純血の悪魔であり、リアスもまた同様の存在である。今回の婚約の原因はその血にある。
リアスには兄が存在するらしいが、現在何らかの事情で家を出ており、リアスが次期当主という立場にある。つまり、リアスに後継者が出来なくなった時点でリアスの家

系、グレモリーの血は途絶えるということになる。ライザーの方には二人の兄がいる為、血が途切れる心配も特に無いという。

その状況を危惧し、リアスの父と兄が今回の婚約を強引に進める展開へとなった。

シンはこの話を聞いて正直な気持ち、婚約には強い否定をすることが出来なかった。古くから伝わって来たものを後世に伝わるようにする。その考えは決して間違ったものではない。伝わって来たものに尊敬と誇りを持ち、それを絶ってしまうことに先人に対する申し訳なさと無礼と思う考えからきたものであることは分かる。

だからといって、個人の未来を犠牲、あるいは糧にしてそれを紡ごうとすることには賛成できない。

どうも自分という人間は、他人が他人の運命〈みち〉を決めつけ、それを無理矢理歩かせようとすることに嫌悪に近い感覚を覚えるらしい。

「そんな経験なんて無い筈なんだがな……」

ボソリと小声で呟く。割かし自由な人生を歩んで来た自分にはそんなことは知らない筈であるが、婚約の話を思い出す度に、苛立ちの様な感覚が胸の奥で小さな火となって精神を炙るような気がした。

「シーン、誰か来たよ」

ケーキの破片でべたべたになった顔でピクシーがシンを呼ぶ。そこでシンは初め

て自宅のチャイムが鳴っていることに気付く。どうやら余程深く考え込んでいたらしい。
「どちらさまですか？」
インターホン越しではなく、直接玄関の扉を開けながら来訪者の姿を確認した。
「私よ、シン」
そこにはジャージを身に纏ったリアスの姿。その後ろには同じくジャージを着た一誠とアーシアの姿もある。アーシアや一誠の手や肩には荷物用の大きめのバッグが持たれ、掛けられたりしている。
「あなたも外泊用の準備をしなさい」
その言葉と格好でこれから何をするのか、シンは大体の把握をする。
「合宿ですか？」
「ええ、山でね」
シンはそれだけ聞くと、十分程時間をください、と言い玄関の中に戻ると、急いで自分の部屋から大きめのバックを取り出し、その中に着替えなどを詰め込んでいく。
「慌てて、どうしたの？」
準備をしているシンにピクシーが不思議そうな顔で尋ねて来るので、手短に内容を説明。聞き終えたピクシーは好奇心に満ちた顔で当然の様に自分も付いていくと主張、シ

ンも置いていくつもりはなかった。
「行く前に、そのケーキ塗れの顔を洗ってこい」
「はーい」
　十分後準備を終え、荷物を持ちジャージに着替えたシンが玄関から出て来る。
「お待たせしました」
「さあ、行きましょう。他のみんなは部室で待っているわ」
　皆と合流する為に一旦学校へと向かうリアス一行。その途中、何やら神妙な顔付きでアーシアがシンに声を掛けてきた。
「間薙さん。私、間薙さんに聞いておきたいことがあります」
「何だ？」
「あの……間違っていたらすみません」
　アーシアは真顔でシンを見つめる。
「間薙さんも狼なんですか？」
「……はあ？」
　このアーシアの突拍子の無い質問に流石にシンも若干間の抜けた声を出してしまうのであった。

「いくら……心配だからと言って……男は狼だなんて……教えるのは……極端じゃないのか……？」

「しょうが……ないだろ……アーシアは……少し無防備過ぎるんだ……危機管理能力を……上げておかなきゃ……アーシアみたいな……純粋な子は……すぐに危ない奴らの……餌食になっちまう……！」

共に顔中に汗を流し、土肌の斜面を大量の荷物を担ぎながら一誠とシンは山道を登っていた。荒く息を吐き、そして今度は息を吸い込むと、空気中に漂う青々とした木々と土の混じった匂いが肺の中に取り込まれていく。

部室に着くとすぐに魔法陣で移動し、着いた先が現在登っている山であった。そこで部長や朱乃などの荷物を手渡され、訓練の一環としてそれを運ぶように指示される。渡された荷物をシンと一誠で二つに分け、それぞれ持ち運ぶ。日頃の訓練の成果が出ているのか、運びながらの会話をするぐらいの余力は残っており、シンは朝、何故アーシアがあのようなことを聞いてきたのか、一誠に問い質していた。

「……過保護だな……正直……意外だよ……」

「……アーシアが悪魔になった責任は……俺にある……だから、せめて……アーシアが

◇

……笑って暮らせるようにしたいんだ……」

言葉だけでないものが伝わってくるのをシンは感じた。あの件について一誠なりの責任の取り方。アーシア本人にこのことを伝えれば、一誠自体に責任は無いと言い赦すのであろう。それ故に一誠はその想いをアーシアに語らず、胸に秘める。一誠の求めるのはアーシアの赦しではなく幸せなのだから。

それについてシンはとやかく言うつもりは無い。

ただ、これだけは伝えておく。

「まあ……ほどほどにな……あまり気を張るなよ……」

「ああ……サンキューな……」

「……お先に」

言葉を交わす両者の横を小猫が、二人を超える量の荷物を持って走り抜けていく。その荷物の頂上ではピクシーが腰掛け、足を揺らしながら山の景色と小猫の速さを楽しんでいた。

「キャハハ！　こねこ速ーい！　シンとイッセー遅ーい！」

この言葉が一誠の闘争心に火を点ける。

「負けるか！　うおりゃあああ！　間薙！　お前も負けるなよ！」

荷物をしっかりと持ち直し、山の斜面を全力で一誠が駆け出していく。それを呆れた

様子で見ていたシンであったが、やがて大きく息を吸い、吐き出した後、一誠の後に続いて駆け出して行った。

◇

山道を登っていくリアスたちの姿。それを生い茂った草木の中から覗く双眸。リアスたちの姿が映る瞳には好奇心が満ち、興味深そうに斜面の向こうへと消えていくリアスたちを最後まで目で追っていた。

やがてそれは草木の中から飛び出し、去って行った一同が向かって行った方向を見て歩き始める。

先程までそれが覗き見していた場所に生えている草木には、春が過ぎ夏を迎えようとする季節の中、不思議なことに白い霜が降り立っていたのであった。

合宿、傍観

「ふっ」

短く吐かれた息と共に、小猫の小さな手から作られた拳が下から突き上げられる。小さな拳にもかかわらず、シンの目にはその拳が何倍もの大きさに見える程の迫力がある。

咄嗟に両腕を交差し、防御の構えをとるシン。シンの両腕と小猫の拳が接触をした瞬間、シンの両足は地面から浮き上がった。

軽く見てもシンの体重は小猫の倍以上ある。そんなシンの体が浮き上がった理由は、単純に小猫の腕力から来るものである。以前も小猫は両手で長椅子を持ち上げ、なおかつ放り投げるという芸当をシンたちの前で見せた。それに比べたならばシンの体重など紙切れに等しい。

「ッ」

両腕から伝わってくる衝撃と痛み。筋肉は潰され、骨に響く打撃に奥歯を噛んで耐えても、僅かであるが声を洩らす。

そのまま後方へと三、四メートル程飛ばされ、足から何とか着地するものの、このと

きシンの視線は小猫から外れ、着地した足下を見てしまう。次にシンが顔を上げたときには小猫の姿は眼前にあった。

反射的に後ろへ跳び、距離を広げようとするも途中でその動きは急停止する。小猫の手がシンのジャージの胸元を指先で摘むようにして掴んでいた。実質、親指と人指し指、中指の三本でシンの動きを止めたことになる。

「……遅いです」

そのままシンの体を引き寄せると、反対の手でシンの腕を掴み、片足でシンの両足を蹴り払う。投げられるシンの視界が上下逆さまとなり、その後背中から地面へと叩きつけられ、肺の中の空気を無理矢理吐き出された。

その状態のままシンは数秒間、放心したかのように空を見上げる。背中だけでなく体中から聞こえる悲鳴にしばし動くことができなかった。

「……大丈夫ですか」

動かないシンを心配してか、見上げるシンの顔を小猫が覗き込んでくる。その顔はいつもの無表情では無く、少しだけ変化があり此方の安否を気遣うものであった。

「大丈夫だ……もう立てる」

いまだ体は痛みを訴えているが、それを無視してシンは立ち上がる。そして、体に異常がないか軽く確かめ、小猫の方へと向き直る。

「……間薙先輩、どんな状況であれ相手から目を離してはダメです。相手の動きが分からなければ、相手より一手以上遅れます」

普段の無口ぶりが嘘の様に言葉をつらつらと並べていく小猫に、シンも真剣な様子でその助言を聞く。

山での合宿が始まり、リアスから最初に命じられたのが実戦訓練であった。基礎体力を鍛える訓練も勿論怠らないが、一誠もシンも眷属の中で圧倒的に技術と経験が劣っている。ほんの少し前までただの学生であった二人だと考えれば仕方の無い話ではある。

そこで少しでも経験を積むために、一誠と木場、シンと小猫に別れ、時間交代制で実戦及び技術指導を受けることとなった。小猫と木場は、はぐれ悪魔との戦いを何度も経験し、実戦での実力もアーシア奪還戦のときに一誠もシンも確認済みである。

小猫との実戦形式の訓練が始まって既に七度も地面へと叩きつけられているシン。自分の背丈よりもはるかに小さな女子にいいようにやられていた。普通ならば学ぶ意識よりも先に屈辱感の方が芽生えそうなことであるが、そういった感情に対して鈍重であるシンは、今の動作の何が悪かったのかを叩き伏せられる度に聞き、少しずつではあるが自分の糧としていった。

本日、八度目となるシンと小猫との立会い。シンは紋様の浮かぶ右拳を握り締め、小猫に左半身を前にした構えをとる。この構えをすることによって小猫の拳打の当たる

面積を最小限にし、尚且つ右拳を隠す状態となる。対する小猫は左拳を前に出し、右拳を引いたオーソドックスな構えをとる。特筆した点の無い構えではないが、代わりに弱点らしい弱点の無い構え。

構えたまま睨み合う両者。場に静寂に満ちる。

その状態のまま、一分、二分と時間が過ぎていく。しかし、両者に動きは無い。より正確に言えば、このときシンは小猫を攻めあぐねていた。相手から視線を逸らさず、僅かな動きすら見落とさない様にしていたシンであったが、小猫の単純であるが堅牢な構えに攻めて勝つ方法が見いだせていなかった。

経験不足から来る発想の貧困。どこから攻めるか、どこを狙うか、本来なら短時間で導き出す答えをシンは未だ出せずにいる。

小猫から攻めてこないのは、その考えを導く為の猶予であり、この時点でシンに対して手加減をしていることが分かる。

その事実にはシン自身も気付いており、時間が経過していく度に自身の未熟さを嫌でも実感させられていくのを理解する。

（失敗も勉強か……）

このままただ睨み合っても埒が明かず、悪戯に時間を消費していくだけである。このときシンはあえて迎撃をされるのを覚悟で行動に移る。

シンは軽く息を吸い、吐くと同時に右足で地面を蹴り飛ばす。その反動で小猫に向かって地面を滑る様に飛んでいくとともに、浅く握った左手を小猫の顔面目掛け、牽制の意味で放った。無駄に力を込めず殆ど威力は無いが、速度だけは充分なものがあり、相手の体勢を崩すことを狙った攻撃。

しかし、小猫はそれが分かっていたのか体を後ろに引いて躱すのではなく、逆に前へと飛び出し、顔面へと直撃するかと思えた瞬間に体を沈め、それを回避する。

そして、それと同じタイミングでシンの右脹脛を右足で蹴りつけた。右足から伝わってくる鋭い痛み、シンが狙った様に小猫がシンの体勢を崩す。

それでも助言通りに小猫から目を離さなかったシンであったが、体勢を崩された状態で小猫に右腕を掴まれ、小猫はその状態で跳びあがると両脚をシンの右腕に絡め、その状態で小猫は体全体を捻る。小猫の力に逆らえば右腕を破壊されると思い、咄嗟にシンもその回転に合わせる。結果、シンは今日で八度目となる背中からの地面への着地をし、瞬く間に小猫に関節を極められる状態となった。

シンは右腕ごと小猫を持ち上げようとする。今の状態のシンならば、不安定な状態でも小猫ほどの重量など苦にならない。実際、小猫の体が地面から浮き上がるが、その瞬間に肘の関節が悲鳴を上げた。

当然、小猫もシンの抵抗を見逃す筈も無く、掴む手に少しだけ力を加えてシンの関節

を軋ませるのであった。

「……間薙先輩。最初の牽制にパンチは良かったですが、今度は狙う場所を注視し過ぎです。経験のある人ならすぐに先輩の狙いが見破られます」

腕ひしぎを極められた状態のまま、小猫はシンの良かった点と悪かった点を挙げ、先程のシンの行動を評価する。

「――肝に、銘じておく」

自分よりも小さな女の子に関節技をもらっているという、客観的に見て非常に滑稽な姿のまま、シンは小猫の教えを噛み締める。

「……次です」

そう言って小猫はシンを解放した。シンは極められていた肘の部分を擦りながら立ち上がり、文句も弱音を言う事無く小猫と適当な距離を離れ、戦う姿勢を見せた。

本日、九度目となる実戦訓練を開始する――かに思えた。

「……む」

「……」

小猫とシン、二人同時に同じ方向に視線を向ける。視線の先にあったのは鬱蒼と緑が生い茂った草木の壁。

「……間薙先輩」

「ああ、分かっている」
　その草木の向こう側からシンたちは確かに誰かの視線を感じた。野生動物のものとは違う、こちらを監視するかの様な感情を感じさせるかのような視線。
　シンと小猫は一旦訓練を中断し、視線を感じた方向へと足を運んでいく。壁の様に立ち塞がる草を素手で掻き分け、向こう側に抜けるがそこは既にもぬけの殻であった。しかし、確かにそこには誰かがいたのか、地面から生える雑草の一部が踏まれて折れており、シンたちの見ている前で元の形に戻ろうとしている。
　小猫はその場所で二、三度鼻を動かし、傍観者の痕跡を探ろうとするが、無表情な顔の眉を寄せる。
「……すみません、追跡は出来ないです。ただ――」
「ただ、何だ？」
「――確実に動物などではありません。……匂いが全くしません」
　レイナーレのとき、黴臭い地下道でアーシアの匂いを判別した小猫の人外の嗅覚で追えない相手。悪魔ですら固有の匂いがあると語る小猫の言葉から考えるに、相手は動物でも悪魔でも無いということになる。
「……どうしますか？」
「一応、部長たちの耳にも入れておこう」

小猫の問いにシンは無難な回答を出す。
「……この辺りを探し回りますか？」
「まだ、こちらに対して敵意があるかどうか分かってはいないからな。下手に刺激するのは止めておこう」
「……そうですね。私、一旦部長に話してきます」
小猫も元々追う意思が無かったのかシンの考えを肯定し、このことをリアスに報告する為にこの場から離れていく。
残されたシンは周囲を軽く見回すが、特に変化も無く木々の葉が擦れる音だけが耳に入ってきた。
「ピクシー」
仲魔の名を呼ぶ。しかし、返事は無い。
「ピクシー」
今度はさっきよりも声を大にして仲魔の名前を呼んだ。すると、シンの近くにあった木の葉が何枚か落ち、その後に寝起きなのか半眼のピクシーが目を擦り、欠伸をしながら現れた。
「ふぁぁ……何？　シン」
熟睡している所を起こされたせいかピクシーの機嫌は悪いらしく、声のトーンも若干

低い。ピクシーも最初はシンの特訓を見ていたが途中で見飽き、近くの木の枝の上で昼寝をすると言ってシンのもとから離れていった。その寝ていた木が、ちょうど謎の傍観者が居た近くにあったのだ。
「ピクシー、ここで変な奴を見なかったか？」
「うーん？　あたし、ずっと寝てたから見てないよー」
　殆ど駄目元で聞いたことであったが、結果はやはり駄目であった。シンは大人しく小猫の帰りを待とうとしたとき、ピクシーがふらふらと傍観者が居たと思わしき場所に飛んでいく。
「あれ？　うーん」
　ピクシーはその場で止まり、考える様な表情となる。
「どうした？」
「あのね、ここにいたのはあたしと同じかも」
　ピクシーの発言にシンは軽く目を張る。
「分かるのか」
「うん。あたしと似た匂いがするし」
「塔城は何も感じなかったぞ」
「分かるわけないよー。妖精の匂いは妖精にしか分からないし」

ピクシーの言葉で、この場居たのが間違いなく妖精であることが判明する。そして、次に湧いた疑問をシンはピクシーに問う。

「同じというと、お前と同じピクシーか？」

「違うよ」

シンの疑問をあっさりと否定する。

「同じ妖精でもあたしも初めての匂いだもん。絶対にあたしと同じピクシーじゃないよ」

一つの疑問が解決し、また新たな疑問が浮かび上がる。この場に居たのは間違いなく妖精であるが、ピクシーとは別の妖精。その妖精が一体何の目的でこちらをみていたのか。合宿初日にもかかわらず、また一つ厄介なことが起きるのではないかと思い、シンは心の裡で溜息を吐くのであった。

◇

「おりゃああ！」

気合だけは十分と感じさせる一誠の叫びに合わせ、上段に構えた木刀を木場の頭上目掛けて振り下ろす。剣術に関しては初心者である一誠の剣戟ではあるが、悪魔の力に

よって降ろされる速度は熟練者のそれに匹敵する。
直撃すれば脳天が割れるだけでは済まない一撃を、木場はいつもの爽やかの笑みを浮かべたまま、その場で半歩だけ後退をする。ただそれだけの動作で、一誠の攻撃は木場の鼻先をかすることなく外され、木場に対して出来たことと言えば、剣の風圧で僅かに前髪を揺らしただけであった。
狙いから外れた木刀は勢いよく地面に打ち下ろされ砂利と土を巻き上げ、その反動を前のめりになっている一誠の腕へと伝えていく。
「いっ！」
その衝撃に一誠が痛みを訴えようとするよりも速く木場の木刀が、一誠の木刀を握っている利き手ギリギリの部分を打ちつけ、一誠の手から木刀を叩き落とす。
「余分な力は、相手に反撃をする機会を与えるよ」
木場は一誠への助言と共に木刀の切っ先を一誠の喉元に突き付けた。
あっさりと敗れてしまった一誠、その顔には悔しさが滲みでているが、それと同時に木場の技量を素直に驚いている部分もあった。
「ああ、くそ！　また負けた！」
片手で髪の毛を激しく掻き乱しながらも、もう片方の手で落とされた木刀を拾い上げる。技量の差を見せつけられながらも、放棄することなく自分を研鑽しようとする一誠

の態度に、木場は感心をする。
何気ない態度でその人間の物事に対する気持ちが浮き彫りになって見えてくることがある。一誠は何度も木場にあしらわれながらも、その度に頭を捻りながら文句を言わずに練習の続行を促す。そういった姿勢に木場は好感を持つのであった。
「まだ終わりじゃないよ。次、いくよ？」
「かかって来い！」
木場に勇ましく応える一誠。木刀を握りしめ、変わらない気迫を見せる。
「いくぞ！　うりゃあああ――」
「ごめん、待って」
「――りゃああ！　……ああ？」
いざ開戦と言わんばかりに飛び込もうとしてきた一誠に待ったをかける木場。その視線は一誠から外れ、近くの茂みに向けられていた。視線を向ける木場には笑みは無く、威圧を込めた真剣な表情となっている。
「どうしたんだ？」
「視線を感じたんだ。あそこからね」
木場の視線は依然、茂みに固定したまま。只事ではない雰囲気に一誠の表情も緊張を帯びたものになり、木場と同じ場所に視線を向ける。

「そこにいる誰かは分からないけど、今から三つ数えるよ。それまでに姿を現さなかったら少々手荒な真似をさせてもらう」
茂みに向かい警告をする木場。しかし、変化はない。
「一つ」
茂みに変化は無く、その向こう側にいる相手は出て来る気配を見せない。
「二つ」
自然と一誠の木刀を握る手に力が入り、固唾を飲んで見守る。
「三つ」
数え終えた瞬間、茂みは激しく揺れ動き、左方向へと葉を揺らし何者かが駆けていく。それを見た木場は即座に行動を始める。『騎士』の能力を最大限にまで生かし、葉の揺れ行く先に先回りをすると、その木刀で隠れている存在を曝け出す為に茂みを薙ぎ払う――が、葉を宙に舞わすだけの結果に終わり、剣戟によって裂かれた茂みの中には誰も居ない。
「んー、一杯喰わされちゃったかな」
木場から先程の真剣な表情は消え、困った笑みを浮かべて木刀の先を動かして、茂みから何かを出してくる。
「何だこりゃ?」

「氷の塊だね」
木場の言う様に茂みから出てきたのは拳ほどの大きさの、丸く固められた氷であった。これで派手な音を出し、注目を集めてその隙に逃げたんだろうね、と木場は氷の塊からそう推測した。
「氷って……今の季節じゃありえないだろ」
「そうだね。ただ、作るのは不可能という訳でもない。僕らみたいな存在だったらね」
木場の言葉にハッとした様な表情になりながら、一誠は目の前に広がっている森へと目を見る。
「この山には何かがいるね」

◇

グレモリー家所有の別荘の前で、一誠、シン、アーシア、ピクシー、朱乃は座り、朱乃から直々の魔力についての説明を受けていた。
この場には居ないリアス、木場、小猫は、木場や小猫たちから聞かされた不審者の話を聞き、リアスが念の為にその存在を探す為に山の中を探索している。
ただし、あくまでこの山での目的は訓練の為であり、探索自体朱乃の訓練で空いた時

間が出来たために、とりあえず行っている。
向こうがこちらに対して、明確な悪意を持った行動をとらない限り、こちらも本腰を入れて行動はしない。それがリアスの考えであり、皆も特に反対することなくその意見に賛成した。気にはなるが、今の所はただ見られていたというだけに過ぎない。
あくまで優先するのはライザーとのレーティングゲームに向けての特訓である。
「あらあら、そんなに乱暴に魔力を集めてはだめですよ」
顔を真っ赤に染め、唸りながら左手に力を込める一誠の様子を見て、やんわりとした口調で朱乃は注意をする。
「魔力には流れというものがあるのよ。それに沿って意識を集中させ、一点へと集める。イッセーくんのやり方だと、例え集められても魔力が止まり続けることが出来なくなって暴発してしまいますよ。肝心なのは魔力の流れをイメージすることですよ」
「ぼ、暴発ですか」
「はい、下手したら死にますわ」
朱乃の物騒な発言に一誠から冷や汗が流れる。そのせいで赤く染まっていた顔は逆に青褪めていた。
何度も朱乃から魔力の扱い方のコツを聞かされていた一誠であったが、なかなか感覚を掴むことが出来ずに苦戦をする。そんな中、アーシアが出来ましたと声を張った。

一誠たちの見ている前で、アーシアの手の中に緑の光を放つ魔力の塊が作り出される。大きさは拳大程であり、揺らぎなどなく一定の形を維持し続ける完璧なものであった。

上々の出来に朱乃はアーシアを褒め、ピクシーもまた朱乃と一緒に褒める。

その様子を見て一誠も負けじと魔力の塊を作ろうとするが、出来たのは目を凝らさなければ見えない程の極小で今にも消えそうな魔力の塊であった。

「ダメダメだね」

それを見ての直球なピクシーの評価。その言葉に一誠は肩を落とし、その拍子に魔力の塊も消える。

「ピクシー、お前も朱乃さんみたいにアドバイス出来ないのか？」

「無理！　だって生まれたときから出来て当たり前のことなんて一々説明できないよ」

ピクシーは右手の人指し指を立てそこに魔力を容易く集めると、それを簡単に青白い火花へと変え、小規模な雷を生み出す。普段から特に考えずに行っている呼吸の仕組みを正しく理解し、なおかつそれを他人に完全に理解させるのが至難の技の様に、ピクシーは魔力というものをほぼ無意識に理解して使用しているため、それを上手に扱う才は有ってもそれを教えるという才は無かった。

ピクシーの言葉に脱力する一誠が横目でシンの出来も確認する。シンは黙って右手

を見ていたが、やがてその掌から白色の光を放つ魔力の塊が現れる。アーシアとほぼ同等の大きさのそれを睨む様に見詰め、更に何かをしようと集中し額から汗が流れ落ちるが、魔力の塊に変化は無く、シンもこれ以上は無駄だと思ったのか掌の魔力を掻き消してしまった。

「あらあら、間薙くんも出来ましたね」

「――はい、一応」

朱乃が褒めるが、シンの反応は若干薄く、歯切れも悪い。

シンは少し考える様な仕草を見せた後、軽く息を吸い込み一誠たちから顔を背けると誰もいない方向へと向かい吸った息を吐き出す。吐き出された息は冷気と化して白く染まり、どのようにして飛んでいくかを宙に軌跡を描いて示す。軽く吐き出した為、冷気は二、三メートル程の距離で霧散した。

「うおっ！　いきなり何してんだ！　ってお前、そんなことが出来たのか！」

突然の奇行とも取れるシンの行動に一誠、アーシアが目を丸くする。今更ながら、この力を二人に見せていないことをシンは思い出し、どういった経緯で使える様になったのかを軽く説明をした。

「やるなら事前に何か言えよ、いきなり吹き出すから吃驚しただろ。……何かお前、俺よりも悪魔らしくないか？」

「凄かったです、いまの！　私も出来るようになるんでしょうか？」
既視感を覚える両者の反応。そこに朱乃が自分の頬に手を当て尋ねてきた。
「私も使う所を見るのは初めてでしたから驚きましたわ。でも、何故いきなりその力を使ったんですか？」
「少し、確認したいことがあったので――」
シンは皆に何故この様なことをしたかの説明をする。シンは、先程魔力の塊を生み出した際その魔力を冷気に変換できないか、試していた。が、予想に反して魔力は塊のまま一切の変化は無く、その後以前の様に吸い込んだ息を冷気に変えて吹き出してみたが、こちらの方は拍子抜けがする程簡単に出来た。
魔力の変換と操作には強く、明確な想像が必要となる。これにより先程のピクシーの様に魔力を電撃に変えたり、火や水を何も無い場所から生み出すことが出来る。だが、シンの場合、何故か体内で取り込んだ空気を冷気に変換することは可能なのにもかかわらず、魔力そのものを冷気には変換できなかった。
「もしかしたら、間薙くんの体内でそういう風に変化する仕組みが出来上がっているのかもしれませんね」
シンの説明を聞いての朱乃の意見、その意見には非常に心当たりがあった。実際、この力を身に付ける前にあった体の不調、その不調の間に自分の体が内側から知らないう

ちに改造されているたのかと思うと、ますます自分が人間離れしていくのを嫌でも実感してしまう。

「でも、それが出来るならいずれ魔力を変化させることもできますわ。まずは焦らずに魔力の操作から始めましょう。何事も段階を踏むのが一番ですわ」

そう言って朱乃も右手の人指し指を立てる。すると、ピクシーの指の先で火花を散らせていた雷が朱乃の指先へと伸びていき、ピクシーと朱乃の間に雷の線を作り出した。

「すげぇ……」

その光景に素直に一誠は驚き、アーシアも感動した表情となる。二人の羨望の眼差しが心地よいのかピクシーは自慢げに胸を張るが、実際に凄いのは朱乃であり、自分の手柄の様にしているピクシーにシンは呆れた視線を向けた。

そして、シンとアーシアは魔力操作の練習の為に朱乃から水の入ったペットボトルを渡され、それの中の水を操作するようにと指示を出された。

言われた通りに練習を開始するシンとアーシア。その最中、ふとシンは一誠の方へと目を向けた、そこでは何故か一誠が朱乃から様々な種類の野菜を手渡されている。

「それで何かするつもりか？」

気になりつい声を掛ける。

「ふふふ、今は秘密だ」

そう言って笑う一誠の顔が邪念に塗れて見えたのは、決してシンの見間違いではなかった。

その後、リアスたちが探索を終えて戻ってきたが成果は無しであった。広い山の中で探すのは人数的にも時間的にも限界があり、この件は直接的な被害が出るまで一旦保留するという形になり、喉に引っ掛かるものを感じつつも目の前の訓練に集中することとなった。

◇

「はいはい、二人ともっと速いペースで登りなさい！」

手を軽く叩きながら、シンと一誠を叱咤するリアス。その声を聞いて二人はペースを上げるが、その変化は微々たるものであった。しかし、それは無理も無いことであった。一誠は背中に巨大な岩を縄で括りつけられ、シンの方は手頃な岩が無かったので代わりに水が満タンに入ったポリタンクを体に幾つも巻きつけられた状態で山を登っている。

荒く息を吐き、絶え間なく汗を流しながら、黙々と山を登っていく二人。その甲斐あってか二人は途中で潰れることなく頂上に着くことが出来た。

「頂上に着いたわね。シン、とりあえずあなたはその状態で腕立て伏せね」

シンのみに指示を出すリアス。当然、指示の無かった一誠はリアスの顔を見る。

「あの、部長。俺は？」
「あなたの相手はこの子」
　リアスが指差すと、そこにはいつの間にかピクシーが飛んでいた。
「思いっきりやればいいんだよね？」
「ええ、でも少しだけ手加減してあげてね」
　リアスとピクシーのみに通じる会話に一誠は疑問符を浮かべるが、次に起こしたピクシーの行動にその疑問も吹き飛んだ。
「えい！」
　ピクシーが指を向けると、そこから電撃が発せられ一誠の足下に直撃。土の一部は焦げ、穴が開く。
「え…えっ！　ちょっ、ちょっと待てピクシー！」
「一誠、そのままピクシーに追い掛けられながらさっきの山道を往復してきなさい。それとその間、ピクシーが適当なタイミングで電撃を飛ばしてくるから避けてね」
　容赦の無いリアスの言葉。一誠の顔が青白くなっていくが、それすら許そうとはしないピクシーの二発目の電撃が否が応にもリアスの言葉に従わなければならないということを示した。
「い、い、いってきまーす！　おりゃあああああ！」

「きゃははは！　待て、待てー！」

ヤケクソな一誠の叫びとピクシーの楽しそうな笑い声が、夜の山道の中へと消えていく。

「シン、あなたの腕立て伏せもイッセーが戻ってくるまでの間だから。その後はイッセーと交代よ」

「――はい」

実に悪魔らしい容赦の無い訓練にシンは首を縦に振って従い、運んできたポリタンクを全て背中に乗せられた状態で黙々と腕立て伏せを行い始める。

数十秒後、一誠と思わしき悲鳴が夜空に木霊した。

◇

「美味ぇぇぇ！」

一日中続いた特訓を終えた一誠が、夕食の川魚の塩焼きに噛り付いた一声がそれであった。

シンの方も一誠の様に言葉に発しなくとも、テーブルの上に置かれた数々の料理に舌鼓を打つ。心なしかその表情はいつもの無表情ではなく、分かる者にしか分からない

が、幾分か柔らかい表情であった。
シンは川魚の塩焼きを齧る。養殖の魚とは違い油は少ないが、野生で育った無駄の無い引き締まった身が心地よい歯ごたえを感じる。次に更に盛られている焼かれた肉を箸で摘み、口へと放る。リアスが山の中で仕留めたという猪の牡丹肉は、きちんと血抜きをしてあるのか獣臭さは感じず、胃の中に流れ落ちるかの様にさらりとした脂身に、豚肉とは違う赤みの味わい、塩というシンプルな味付けのおかげで、猪の旨味を直に感じられた。
一誠は箸を止めず、ひたすら目の前の料理を食らっていく。小猫は淡々としたペースで箸を進めているが、食べた量はいつの間にか一誠を超えていた。木場はマイペースで箸を進め、リアスはがっつく一誠を微笑ましく見ている。
この数々の料理を作った朱乃は美味そうに食べる一誠を楽しげに見て、一誠のお椀が空になりそうになったら、椀にご飯を盛っていく。その様子をどこか寂しげに見ていたアーシアが何やら二、三言一誠に言うと、一誠は何かに気付いた表情となりテーブルに置かれているオニオンスープを手に取って一気に飲み干し、賛辞をアーシアに送ると アーシアは赤面した顔でおかわりを空いた容器に注ぐ。それを見ていたピクシーは小分けされた山菜のサラダを食べる手を止め、アーシアに声を掛ける。
「アーシア、あたしもちょうだい！」

「はい！　少し待ってて下さいね。おかわりは十分にありますから！」
騒がしくも楽しい夕食を終え、食後のお茶を朱乃が淹れると皆の前に置いていく。リアスはそれを一口飲むと、一誠、シンに話し掛けた。
「さて、二人とも。今日一日の特訓はどうだった？　率直な意見を聞かせて」
シンは持っていた茶をテーブルへと置き、一誠はそれを一気に飲み干してからそれぞれの思いを言う。
「色々と足りない部分が多すぎでした」
「……俺が一番弱かったです」
一誠の言葉に、微かにシンの眉が跳ねる。しかし、それは微弱なものであった為、誰も気付くことはなかった。
「確かにそうね」
二人の意見にリアスは頷き、肯定をする。
「朱乃、祐斗、小猫はゲームの経験は無くても実戦の経験は豊富だから、ゲームとの間に有る差はすぐに埋められる筈だわ。シン、あなたはイッセーとアーシアよりも実戦を経験しているけど、まだまだ技量は足りないわ。でも、未熟な状態でも窮地を生き抜くことができる力や技量以外のものを持っている。それは、中々身に付けることができないもの、あなたにとっての武器になるものよ」

力や技量ではない武器。その言葉がシンの頭の中に残る。
「イッセーとアーシアは実戦経験は皆無だけど、二人とも『神器』を持っているわ。アーシアの『聖母の微笑み』、あなたの『赤龍帝の籠手』。その二つは相手にとっても無視できないもの。最低でも、それを活用して逃げるぐらいの力は欲しいわね」
逃げるという言葉に少なからず抵抗感を覚える一誠であったが、リアスは逃走も戦術の一つであり、相手から逃げ切ることも実力であると丁寧に説明する。逃げる時に逃げずに戦い、反撃の機会を失う方が無謀であり、強敵に背を向けてただ逃げるのもまた無謀。
この合宿の間にきちんとした逃走の方法を教え、そして、真正面から戦う術も教えるとリアスは言う。一誠とアーシアはその言葉にきちんと頷き、了承の意志を言葉にする。それを見てリアスも満足そうに頷いた。
「じゃあ話も終わったから、お風呂でも入りましょうか。ここは温泉だから素敵よ」
その一言で、今まで神妙な顔をしていた一誠の顔が一気に煩悩で染まる。
「僕は覗かないよ」
「同じく」
その表情から一誠の内心を悟り牽制をする。一誠の煩悩に染まった顔が今度は動揺一色となった。

「あら、イッセー。一緒に入りたいの？」
どこか悪戯っぽく聞いてくるリアス。内心を聞かれた一誠は縮こまるが、別に構わないわ、というリアスの言葉に愕然とした表情になる。
続いてリアスが朱乃に混浴することを聞くと、あっさりと了承、一誠の表情が喜色に染まる。その次にアーシアに聞くと、恥ずかしながらも了承、喜色の色が更に濃くなる。三番目に聞いたのはピクシー、即答で了承。ついでにシンも一緒に入るよう誘ってくる。一誠の喜色は更に増し、シンは顔を顰めた。
そして最後に聞いた小猫の返答は――
「……いやです」
――断固とした拒否。
喜色に染まりきっていた一誠の表情は、亡者の如く全てを失ったかの様な絶望一色となった。
それでも諦めきれない様子の一誠であったが、覗いたらどうなるかを言外に示した小猫を前に呆気なく消沈。女子一行が温泉へ行くのを指を咥えて見ているしかなかった。
落ち込む一誠の肩に木場が手を置く。
「イッセーくん、僕と裸の付き合いをしよう。背中を流すよ」
「――木場、マジで殺すぞぉぉ！」

「許してやれ。木場は冗談のセンスだけは皆無なんだ」
怒り狂う一誠を宥めながら、シンたちも汗を流す為に温泉へと向かう。
そして、誰もいなくなり静まった食事の場。
それを見計らって木陰から何かが出て来る。その何かは置かれていたクーラーボックスを開ける。その中からキュウリやナスなどの野菜を両手一杯に持つと、何かは独特な歓声を上げてその場から去って行ったのであった。
「ヒーホー！」

雪精、登場

初日の特訓が終わり、二日目の朝。その日一番の特訓はシンと一誠の実戦形式の訓練から始まった。

しかし、実戦形式とは言ってもお互いに制約が掛けられ、一誠は『赤龍帝の籠手』の使用禁止。シンは『氷の息』の使用禁止を始める前に告げられていた。

両者が互いに睨み合う光景を、少し離れた場所でリアスたちが見物をしている。

一誠は左手を引き大きく足を開いた我流の構えをとり、それとは反対にシンの方は構えらしい構えをとらず、両手を脱力した状態で垂らしていた。

「それじゃあ、始めて」

リアスの開始の声と同時に一誠がシンへと一直線に突っ込んでくる。その迷いの無い行動は一誠の人格を良く現していた。だが、シンの方もその迫力に怯むことなく、後方へと下がって一誠との距離を開けるのではなく、逆に前へと飛び出した。

懐へと一気に距離を詰めたシンの行動に完全に攻撃のタイミングを外された一誠は、その場で急停止すると同時に左手の甲をシンの頭部目掛け振るう。その反撃を読んでいたのかシンは振るわれた左手の甲に突き出した肘を当て、防御と同時に一誠の左手に

ダメージを与えた。
その痛みに僅かに硬直する一誠のジャージの襟元を片手で掴むと一気に引き寄せ、膝を一誠の鳩尾に叩きつける。が、その攻撃は一誠の右手が受け止め、直撃を辛うじて回避する。しかし、シンはその状態で一誠の左手を掴み、動きがままならない様にすると立て続けに膝を何度も打ち込み始めた。
最初の方は防御が出来ていた一誠であったが、徐々に片手で防ぐことに限界が見え始め、遂にはシンの膝が一誠の鳩尾に突き刺さった。
「ぐっ！」
苦鳴の混じる一誠の声。その声で相手が怯んだと確信した瞬間、シンは一気に勝負に出た。
シンは掴んでいた左手を離し、そのまま左拳を先程膝を入れた鳩尾に容赦なく叩き込む。手加減無しで放った拳は一誠の体を少しの間だけ宙へと浮かせた。シンの耳に再度一誠の苦痛に満ちた声が聞こえたような気がしたが、シンの動きは止まらない。
左の拳の次は右の拳を同じ場所へと捩じ込み、その右を引けば左を突き入れる。その左右の繰り返しを、息と体力が続く限り全速力で行う。
暴れまくる右と左の拳撃。
やがて息が続かなくなり限界が見えたと同時にシンは強く踏み込むと、両腕を交差す

るように構え、そのまま一誠の胸元に飛び込む。

だが、一誠も黙ってやられる訳も無く、飛び込んでくるシンに対し防御ではなく、迎撃をすることを選択。左手を拳の形に固めると向かってくるシンの顔面へとそれを放った。

交差する二人。しかし、それは瞬き程の間だけであり、一誠の拳はシンの頬を浅く切り裂いただけに留まり、一誠の胸元にはシンの交差した両腕が深々とめり込んでいた。

一誠の体は後方へと飛び、そのまま近くの木に背中から衝突、そのまま崩れ落ちた。

この瞬間にシンの勝利が決まった。

「あー、いってー！」

アーシアの『神器』で治療を受けている一誠が集中的に狙われた腹部をさすっている。ジャージを捲り、外気に触れさせている一誠の腹は、シンの拳の痕がいくつもの青痣となって視覚的に痛々しく映る。

一誠が怪我を回復させている間にシンはリアスたちから、先程の戦いの良かった点、悪かった点について指導をされる。リアスからは基礎体力の不足を指摘され、実戦ならば長期的な戦いは無理であると言われる。その後に戦いの中で冷静な判断は出来ていたことを褒められた。木場は、足運びの基礎を学べば更に素早く動けると言い、小猫は肘や肩の動きをもっと連動させれば疲労を抑え、威力を高められるとアドバイスした。

全員からの指摘が終わると、一誠の方も治癒が終わったらしくアーシアを連れてリアスたちの方へと歩いてくる。

一誠が合流するとすぐさまリアスたちからの指摘の嵐。思いっきりはいいが、その後が続かないのはダメ、動きが直線的で読みやすい、などなどの目立った点を指摘され、一誠は一つ一つどの様に改善していけばいいのかを聞いていく。

その光景を少し離れた場所でピクシーと見ていたシンであったが、いつの間にか側にアーシアが近づいていた。アーシアは、そのままシンに何かを言いたそうな表情をしながら視線を往復させていた。

「どーしたの？」

「あ、あの――」

アーシアの様子に肩に乗っているピクシーが尋ねる。シンはこのとき内心で、一誠を殴り飛ばしたことに文句があるのではないかと思っていた。アーシアにとって一誠は大事な人であり、自分のことを救った存在である。そんな一誠を訓練とはいえ目の前で殴り続けるのを見ていて気分など優れる筈など無い。

文句や罵声の一つを覚悟していたシンであったが、アーシアの言葉はシンの予想を裏切るものであった。

「間薙さん！　頬を怪我していますよ！」

「……ん？」

アーシアに言われて反射的にシンは頬を指先で触る。触った指先には確かに少量の血が付着し、怪我が有ることを示していた。怪我の存在を認識すると、今まで感じなかったひりひりとする痛みが頬から伝わってくる。

（ああ、あのときか）

シンの脳裏にかすっていく一誠の左拳の映像が浮かぶ。戦いの中で高揚していた精神のせいで、傷の痛みを全く認識などしていなかった。

「すぐに治しますからね」

「ええ、こんな傷で『神器』使うの？　あたしが治すよ？」

「すみません、ピクシーさん。皆さんの傷を治すのは私の役目ですから」

そう言って笑うアーシアに、シンは何とも言い難い気持ちになる。あえてこの気持ちを言葉にするならば『恥ずかしい』というものに近かった。

アーシアは『神器』を発動させると手から緑色の光が溢れ出し、その魔力をシンの頬へと当てる。元々、大した傷では無かったので一秒もかからずに頬の傷は消え、痕一つ無い状態となっていた。

「すまないな」

「いえ、気にしないでください」

シンとしては傷を治してもらったことに対する礼の意味での言葉ではなかったが、アーシアはそう捉え、童女を思い起こす様な純真な笑みをシンへと向ける。
「ねえねえ、アーシアはシンがイッセーのことボコボコにしたこと怒ってないの？」
シンが聞き難かった質問をあっさりと口にするピクシー。正直、シンもそのことについて詳しく聞きたかった為、ピクシーのことを咎めることが出来ない。むしろ、その質問をしたことに感謝する気持ちもあった。
ピクシーの質問にアーシアは目を伏せ、困惑とした表情になる。流石に直球過ぎる質問だったとシンは思い、アーシアに答えなくてもいいという言葉を掛けようとする前にアーシアが口を開いた。
「本当のことを言えば、イッセーさんが傷付くのを見たくありません。でも、間薙さんが傷付くのも見たくありません。……特訓の為だから仕方ないことは分かっています。お二人が強くなろうとするのは部長さんのためですし、私も部長さんの力になりたいと思っています。イッセーさんや間薙さん、部長さんたちも私を助けてくれた大事な人たちですから」
アーシアの言葉を聞いていく度に先程の『恥ずかしい』と似た気持ちが強くなっていく。シンは、今更であるがあることを認識した。
（自分はどうやら、とことん人を見る目が無いらしい）

心の裡で自分を嘲笑する。

「だから、私は私の出来ることをします。皆さんが傷付いたら必ず私が治して見せます。それが私の唯一出来ることですから……」

アーシアが思いを語り終わるとパチパチと小さな拍手が鳴る。

「アーシア、カッコいい！　ねえ、シンもそう思うでしょう？」

「――ああ、確かにカッコいいな」

二人から褒められたことにアーシアは照れから赤面し、あたふたとし始める。

「そ、そんな、わ、私なんてカッコよくありませんよ！」

「ええー、さっきのアーシアカッコよかったよ！　アーシアカッコいい！　カッコいいアーシア！」

「も、もう！　ピクシーさん！　からかわないでください！」

カッコいいと連呼するピクシーにアーシアは赤面した顔で抗議する。ピクシー本人は囃し立てるつもりではないと思えるが、言い続けられる言われ慣れない言葉にアーシアは顔だけでなく耳まで朱に染めるのであった。

その時、リアスたちからの指摘を終えた一誠がこちらへと歩いてくる。赤面をしているアーシアに一誠は不思議そうな顔をして、どうしたんだと尋ねたが、アーシアはしどろもどろとなって言葉を濁すばかり。それを見ていたピクシーが意地悪な笑みを浮か

べ、先程のやりとりを一誠に話そうとする。しかし、普段の行動からは想像出来ない程の素早さでピクシーの口を押えると、その場からピクシーを連れて離れていってしまった。

その光景を一誠を口を開け、ポカンとした様子で見送る。

「なあ、何かあったのか？」

「別に大したことじゃない。ああ、それと」

シンもまたその光景を見ながら一誠に言うべきことだけを言っておく。

「部長のこともいいが、あの娘も大事にしてやれよ」

「ん？　おう、そりゃ当たり前だけど」

「それならいい」

改まって言ったシンに一誠は当然の様に答え、そのままそそくさと歩いていくシンの後姿を首を傾げて見ていた。

シンは愛だの恋だの、そういった類の感情から今の台詞を言った訳では無い。ああいった存在にはそれ相応の幸福な結末があって欲しい。

ただ、それだけの願いである。

◇

早朝の実戦形式の特訓が終わり朝食を食べることとなったが、そこで小さな事件が起きた。朝食の準備をしていた朱乃がクーラーボックスを開いたとき、小さくではあるが疑問を持った声を出したからだ。

その声をたまたま聴いたリアスがどうしたのかと訊くと、朱乃は野菜が数本無くなっていると告げた。

料理の材料を仕入れたのは朱乃とリアスであり、購入の際にどれほどの量を買ったのかをしっかりと記憶していると朱乃は言う。念の為にリアスの方も確認をするが、やはり昨日の時点の本数と今朝の時点での本数に誤差があった。

「野菜泥棒ですか？　部長」

「確定はしていないけど、多分そうね」

「野生の動物の仕業とかの可能性は……」

「……動物の匂いはしません」

全員が誰の仕業かに心当たりがあった。

シンはピクシーの名を呼ぶ。ピクシーはシンの肩から降りるとクーラーボックスの前まで飛び、そこで鼻を動かす。

「うん。やっぱり昨日と同じ匂いがするよ」

「そう、なら決まりね」
ピクシーの言葉で、やはり野菜を盗んでいったのが昨日の正体不明の傍観者であることが確定する。が、決まった所で一体どうするのか、全員の間に微妙な空気が流れる。
害があれば謎の存在を探す、リアスはそう決め、皆もそれに同意した。確かに害らしい害があったが、あまりに小さな被害である。盗まれたのは野菜がたった二、三本、正直これぐらい無くても飢えることなど無いし代用できる山菜などが山に大量にある。わざわざこれ位の被害で限りある時間を消費し広大な山から犯人を捜すのは割に合うものではない。
「――もう少しだけ、様子を見ましょうか」
訓練と犯人捜しを天秤に掛け、リアスの天秤は訓練の方へと傾いた。皆もその決定に反対することはなかった。
午後からは昨日と同じ木場と小猫からの直接指導という予定で、午前はリアスたちから悪魔などについての知識を学ぶ勉強会を行うこととなった。
少しでも実力を付けなければならない時に態々勉強などをしていていいのかと言う意味を含んだ言葉をリアスに問い掛ける。
「あら？　あまり強がりを言っちゃ駄目よ」
返ってきた答えにシンは返す言葉が無かった。その一言で、シンの現在の体調につい

て見抜かれていたと言ってもいい。昨日の深夜まで及ぶ特訓で、シンの体はあちこちで筋肉が痛みを訴えていた。シンの体調がこうであるならば、必然的に一誠の方も似たような現状であると思われる。

朝一の実戦形式の特訓ではその痛みを押し殺して戦っていたが、やはり分かる者にはシンと一誠の動きのぎこちなさが分かるらしい。

抜けきっていない疲れを取る為、ただしその間に出来た時間を無駄にしない為の勉強会。そんなことをしていていいのかと問い掛けたシンではあったが、内心休む時間を得られたことに喜ぶ節があったのでリアスの言葉を大人しく聞き、ノートを広げてシャープペンシルを手に持つとリアスたちの悪魔についての話を聞くのであった。

それから一時間後。

数分で勉強に飽き、テーブルの端で眠るピクシーを余所に今までのおさらいをする。

「じゃあ、イッセーくん。天使の最高位とそのメンバーは？」

「最高位は『熾天使（セラフ）』だろ……で、メンバーはミカエル、ラファエル、ガブリエルに……あとウリエルか」

「正解」

眉間に皺を寄せながら、蓄積させた知識の中から正解を取り出す一誠。答えが合っていたことに問題を出した木場は満足そうに頷く。

「続いて僕らの『魔王（サタン）』さま。『四大魔王』さまの名前を言ってみてくれるかな」
「おう！　ルシファーさま、ベルゼブブさま、アスモデウスさま、そして紅一点のレヴィアタンさま！」
「うん、正解」
　続けて正解を言った一誠に木場は小さく拍手を送る。側で聞いていたアーシアも木場に倣って拍手を送った。その拍手に一誠は照れた笑みを浮かべ、少しだけ恥ずかしそうに頭を掻く。
「では、今度は間薙くんの番だね。堕天使の組織名と幹部を全部言ってくれるかな？」
「組織名は『グリゴリ（神の子を見張る者）』。幹部は、一番上がアザゼル、その次がシェムハザ。その他の幹部はアルマロス、バラキエル、タミエル、ベネムエ、コカビエル、サハリエルだろ？」
「正解」
　さっきと同じく木場とアーシアが小さな拍手を送る。今度は一誠も加わって三人からの拍手。人から素直に褒められると、何ともこそばゆい気持ちが心の中に湧いてくる。一誠が少しだけ恥ずかしそうにしていた気持ちが分かる。
　天使、悪魔、堕天使についての勉強が済んだ後、今度は先程まで一緒に学んでいたアーシアが前に出て、少し緊張した面持ちで『悪魔祓い（エクソシスト）』についての講義を

始めた。

基本的に『悪魔祓い』には二種類有り、聖書、聖水などを用いて人の体に憑りついた悪魔を祓う、人に聞かれたならば真っ先に思い浮かぶのが『表の悪魔祓い』。そして、以前戦ったフリードの様な堕天使から力を授かり、その力で捻じ伏せにくるのが『裏の悪魔祓い』である。

『悪魔祓い』について教え終わると、次に講義することとなったのは悪魔が苦手とする聖書と聖水についてであった。聖書はアーシアが持参したバッグから何冊か取り出し、聖水はリアスが慎重な手付きでどこからか持ってきた。アーシアの説明を聞く限り、リアスが持ってきた聖水はアーシア自作のものであるらしい。

「持ちますよ」

シンはリアスから聖水の入った小瓶を受け取る。シンが体質で聖水が効かないことを知っていたリアスは小瓶を渡し、一言礼を言った。一秒でも長く持っていたくないという気持ちが見て取れる。上級悪魔でも聖水の効果はやはり脅威であるらしい。実際に見たことはないが、悪魔が聖水に触れると人間が劇薬に触れた様な反応を示すとシンは聞かされていた。

アーシアの講義を聞きながら持参した聖書の一つを手に取り、シンはそれに目を通す。一誠たち悪魔は聖書の文自体を読むことでもダメージがあるらしく、一文でも目に

入るものなら目に強力な光を当てられた様な状態となる。更に運悪く脳内に記憶として刻まれようものなら、延々と頭痛に苦しむ羽目になるという。

悪魔の持つデメリットに同情しながら、手にしている聖書の一節を試しに声に出さず口だけ動かして読んでみた。

その瞬間、シンを除く全員が頭を殴られた様に頭を押さえる。

「悪い」

その光景を見てシンは反射的に謝るのであった。

アーシアの講義も終わり、午前の勉強会から午後の特訓へと移ろうとしたとき、朱乃がリアスを呼び止めた。

「部長、あの『存在』については教えないのですか？」

「アレのこと？――教えても良いことなんてないわ」

「僕としてはもう少し後でもいいかと思いますが……」

「……私は早めに知っておいた方がいいと思います」

珍しく意見が割れる。リアス、木場は朱乃が口にした『存在』というものに関してあまり良い感情を持っていないことが見て分かる。だが、教えることを進める朱乃と小猫も決して良い感情を持っていない。共通して嫌悪の感情が持たれていた。

「あの、部長。俺、悪魔になってまだ日が浅いですけど、少しでも早く悪魔やそれに関す

ることを知りたいです。……部長が良ければですけど」
おずおずと手を挙げ学びたいという意思を伝える一誠、アーシアも一誠の意見に賛成、シンも特に何も言わず、態度で聞く意思があることを示す。
リアスは難しい顔をしていたが、やがて溜息を一つ吐き、一誠たちに向き直った。
「出来ればもう少し後で教えるつもりだったけど――分かったわ。あなたたちの意志を尊重するわ」
「ありがとうございます！　それでアレってなんのことですか？」
一誠はリアスに頭を下げた後に気になった言葉の意味を尋ねた。
「あなたたちも悪魔として生きるなら決してこの名前は忘れてはいけない。覚えておきなさい『魔人』という名を」
その言葉を聞いたとき、シンの心臓は理由も無く跳ね上がるかの様に鼓動を増した。リアスの口から出てきた初めて聞く言葉。その筈にも関わらず、黒く纏わりつく様な既視感がシンの心の裡に湧いて出てきた。
「『魔人』ですか？　それって何です？」
「悪魔、天使、堕天使、共通の敵の呼称みたいなものよ。詳細については一部の存在にしか知れ渡っていないけど、『魔人』という存在の恐ろしさだけは全てに伝わっている。――小さい頃にお母様に叱られたときによく言われたわ、『悪いことをすると魔人が攫い

に来ますよ』って」
「それって、おとぎ話の存在ってわけじゃないですよね……」
「『魔人』の存在は昔の戦争で確認されているわ。それ以降も度々目撃されている。現在で確認されている数は九体よ」
「どうしてそんなに恐れられているんです？」
「彼らが敵味方なく全てを殺しにかかるからよ。戦争のときも三つの陣営に襲いかかったり、『魔人』同士が争って周りに被害を与えたり、存在そのものが死を撒き散らす害悪そのものだから」
　ごくりと唾を飲み込む音が一誠の喉から鳴った。アーシアもリアスの言葉にただならぬ恐ろしさを感じたのか、一誠の服の端を掴んでいる。
「現在、九体の内の四体は戦争以降姿を見せていない。そして、天使側と堕天使側も共に一体ずつ『魔人』を封じている。でも残りの三体の行方は不明、三体の内の二体は数年に一度くらいしか確認されていないけど、この残りの一体は今でも活動し続けている」
「今も……ですか？」
「そう、いまだに悪魔や天使、堕天使を見境なく殺し回っている」
　リアスの言葉にアーシアは身震いする。服の端を掴まれている一誠の顔色も優れない。その様子にリアスは軽く息を吐く。

「怖がらせたみたいね。だからあんまり教えたくなかったのに、聞いていてあまり気分が良くなるはなしじゃないでしょ？」
「ま、まあそうですね、なあ、間薙」
一誠が同意を求め、声を掛けるが返事が無い。一誠がシンの方に顔を向けるとシンは思い悩むように、微動だにせず考え込んでいた。
「間薙？」
「――ん？　ああ、そうだな」
どこか気の抜けた返事をした後にシンは、再び沈黙する。その姿にしばし疑問を持つ一誠であったが、リアスが午後の訓練を開始する号令を出した為にそちらの方へと意識が向けられ、疑問の方は頭の隅に追いやられてしまった。
シンもリアスの声に従い動き始めるが、思考の方は未だ『魔人』という言葉について考えていた。寝ていたピクシーを揺すり目を覚まさせながらも、心の一部は何処か別の場所に移されたかのように答えの分からない思考を繰り返す。
その日、一日の訓練中、シンの中から『魔人』という単語が消えること無かった。

◇

ソレは、昨日の様に草木の陰から覗いていた。
二日前からやって来た、見慣れない存在。ソレが何度か見てきた人間とは違った気配を纏い、その気配からは何故かソレは引き付けられるものを感じた。
昨日は草叢から覗いていたが、危うくばれそうになったので、今は少し離れた高い木の枝の上から覗いている。
彼らと接触し、近くで見るという選択肢もあったが、ソレは未知に対する好奇心と共に彼らについて何も知らないという怖さを胸の中に抱いていた為、直接的な接触にはやや慎重な態度を取っていた。
昨日は違い、長い棒を持った男が手に不思議な模様を刻んだ男と戦っている。男が振るう棒を模様の男が素手で受け止め、空いた手で殴り返していた。
ある程度見ると、それは木から降りて別の場所に歩いていき、目的の近くまで着くと再び木によじ登っていく。
ソレの視界の先には小さな女性と声の大きな男性が戦っていた。男性は力一杯に拳を振り下ろすが、小さな女性はその腕をあっさりと掴むとそのまま近くの木の幹に男性を背中から叩きつける。叩きつけられた男性は背中を押さえて悶絶し、痛みのせいで体が反り返っている。
「ヒホホホホー」

その姿が面白かったのかソレは腹を押さえて笑っていたが、少々笑い声が大きかったのか小さな女性の目がソレのいる方向に向けられた。

「ヒホー」

慌ててソレは木から降りると一目散に走り、その場から逃げた。

短い足を動かしどれほどの距離を移動したのかは分からないが、ソレは限界まで走りきった後に後ろを振り向く。背後からは誰かが追いかけてくる気配は無かった。

ソレは安堵の息を吐くとそこから周囲を見渡し、目印になるものでも見つけたのか再び走り出す。

生い茂った草木を抜けた先にあったのは、山壁に空いた横穴であった。大人が入るには少々窮屈な大きさではあるが、ソレが入るのには十分な大きさである。

ソレが、横穴の中に入ると壁面を眺め始める。横穴の壁面には石か何かで描いたのか、子供の落書きの様な壁画がいくつも描かれていた。壁面の絵は共通して、丸を二つ縦に並べた二頭身の二又に分かれた帽子を被った雪だるまの絵、それが何十も描かれていた。

ただ、一つだけ違う絵もあった。その絵は多くの雪だるまたちの中心に描かれ、帽子では無く、王冠を被っている。

ソレは少しの間その絵を眺めていたが、やがて絵から目を離すと徐に短い手を前に突

き出し、それを引くと共に反対の手を突き出した。
　それは先程まで見ていた者たちの真似であった。その行為が何を意味するのかは、やっている本人にしか分からないことである。しかし、何度もそれを繰り返すソレの黒い瞳には強い決意が確かにあった。

◇

「あー、生き返るー」
　二日目の夜。訓練で流した汗を温泉で洗い流す男子一同。湯船に浸かり頭に手拭いをのせた一誠は、溜まった疲労を吐き出すかの様に声を出していた。
「ふふふ、お疲れ様」
　いつもの爽やかな笑みのまま、木場は一誠の苦労を労うのだが、一誠は目を細めて木場を見る。
「何がお疲れ様、だよ。涼しい顔しやがって……お前に喰らった箇所が未だに青痣になって残ってるぞ」
　そう言って一誠が右肩を指差すと、そこには長く縦に伸びた痣の痕。よく見れば他にも円形の痣がいくつもあった。おそらく円形の痣は小猫の拳によるものと思われる。

「ははは、ゴメンね。特訓と分かっていてもたまに寸止めが出来ないことがあるからね」
　申し訳なさそうな表情になる木場。シンも午後の特訓の最中に木場から、脇腹に強烈な一撃を貰い、一誠と同じくその箇所は青紫色に変色をしていた。尤も一誠やシンも悪魔の力があってこそ、その程度の怪我で済ますことができた。
　しばらく談笑していた三人であったが、その耳にある声が入ってきた。
「うーん、やっぱ広いね！」
「あらあら、はしゃいじゃ駄目ですよ」
「ふふふ、急がなくても温泉は逃げないわよ」
「ピクシーさん！　せめてタオルぐらい巻いて下さい！」
「……その格好は、はしたない」
　男湯と女湯を隔てる木の壁一枚向こうから聞こえてくる女子たちの楽しげな声。その声に反応し、一誠の顔は湯以外の原因で朱に染まっていく。
「こ、これは……」
　血走った一誠の目は向こうを見透かすかの様に壁を凝視し、生唾を飲み込む。
「イッセーくん、駄目だよ」
　木場が一誠の内心を見通した上での一言。
「ば、ばばば馬鹿野郎！　お、俺は覗きなんてしないぞ！　そ、そんなことをしたら嫌わ

れるだろ！」
「落ち着け」
　覗きなどという言葉など一言も言っていないのに、動揺して要らぬことを口走る一誠。しかし、初日に小猫に釘を刺されていたせいか、ある程度の自制は出来ている様子であった。
　悶々としている一誠に木場は苦笑し、シンは黙って目を瞑り温泉を堪能する。すると
――
「おーい！　そっちはどう？」
　――隔てた壁の上からピクシーが男湯を覗き込みながら声を掛けてきた。
「うおっ！　やめろ！　今の俺を見るな！」
「あはは……ちょっと恥ずかしいね」
　慌てて頭に乗せていた手拭いを湯船に突っ込む一誠と、異性に覗かれているということに少し羞恥心を見せる木場、シンは片目だけを開け、少々面倒くさそうにピクシーの方を見た。
「ピ、ピクシーさん！　そんなことしちゃ駄目です！」
　壁の向こう側からアーシアの驚く声。
「えー、いいじゃん別に。あたしは恥ずかしくないし」

「それでも駄目ですー！　降りてきて下さい！」
「じゃあ、あっちに降りるね」
「それはもっと駄目です！」
　男湯に入ってきそうになるピクシーを必死に呼び止めるアーシア。しかし、その努力の甲斐も空しくピクシーは壁を飛び越えようとする。
「きゃん！」
　しかし、寸での所でピクシーの顔面に湯が当たり、そのまま女湯の方へと戻してしまった。
「風呂場で騒ぐな」
　シンがぴしゃりと言い放つ。その右腕は軽く曲げられ、さきほどの湯を当てたのがシンであることを示していた。
「お前も容赦ないな」
「確かに」
　一誠と木場の二人が軽く笑う。シンは肩まで湯に浸かり直すと再び目を閉じる。
「風呂場ではしゃぐ方が悪い」

◇

三日目の朝も前日と同じく、シンと一誠の実戦訓練から始まった。一進一退の攻防であったが、一瞬の隙を突いてシンは一誠に勝利をした。

昨日の様に悔しがる一誠であったが、シンの目にはその顔に陰のようなものが見えた。

そして、その後に朝食の時間であったが、その際にあるものの確認を行った。前日と同じくクーラーボックスを外に出していたが、今回はあえて外に出していた。

中身を確認すると、やはり野菜が数本無くなっている。今回は野菜の他にも菓子類や肉などを入れてあったが、手を出していたのは野菜のみであった。

「ベジタリアンなのかしらね」

リアスの率直な感想。得体の知れない存在が山の中に潜んでいるという割には、やや緊張感が欠けたものであったが、何となくではあるが皆、野菜を持っていく存在からは悪意というものを感じ取れなかった。

「今日も試してみましょう」

笑顔で提案するリアス。本来の目的からずれ始め、殆ど野生動物への餌付けのようなものへとなっていた。

その日の特訓の最中にも視線を感じたが、特に誰も追うことも無く訓練に集中をして

いた。そうすれば、いつの間にか視線の主は何処かへと行ってしまうのが分かったからであった。

四日目の朝、お決まりとなった三回目の実戦訓練が始まる。

「おりゃあああ！」

踏み込んで突き出してくる一誠の左の拳を右に滑る様にして回避するシン。そのまま前のめりになった一誠の側頭部に狙いを付け右拳を繰り出すが、一誠はその瞬間を予め狙っていたのか、重心となっている足を軸にして九十度回転し、右腕でその攻撃を防ぐ。そして同時に左拳をシンの顎目掛けて突き上げた。

シンは数歩後ろに下がってそれを回避するものの、足を止めた先にあった大きめの石を踏みつけてしまったことで体勢が揺らぐ。その隙を逃さず一誠は、距離を一気に縮めて仕掛ける。

僅かな間に回避は無理と判断したシンは、己の右手に意識を集中させる。するとそれに反応して魔力が右手の中に収束し、始めは球状であったものが形を変え、一メートル程の長さの剣の様な形となる。

シンはその剣状になった魔力を躊躇う事無く、向かってきた一誠の腹部へと突き刺した。

「いっ！」

「イッセーさん！」
シンの凶行に一誠は驚愕の声を出し、見学をしていたアーシアも悲痛な叫びを出す。が、すぐに一誠の表情は驚愕から困惑へと変わった。
「あれ？」
その間にシンは一誠の胸元を掴むと両足を払い、宙に浮いた一誠の体を背中から地面へと叩きつけた。衝撃に息を無理矢理吐き出させられる一誠の顔面に拳を振り下ろすが、当たる直前で寸止め。それを見ていたリアスから特訓終了の合図が出されるのであった。
終了と同時に血相を変えたアーシアが駆け足で一誠に近付き、刺された部分を見たがそこには傷一つ無く、それどころか服に穴すら無い。
「驚かして悪いが、これじゃあ傷なんて付けられない」
シンはもう一度手から剣状の魔力を作り出すと、自らの左腕に振り下ろした。魔力の剣が腕の中心まで届き、骨まで達しているかの様に見えたが、シンの表情には苦悶一つ無い。
シンは振り下ろした魔力の剣を上げる。剣が食い込んでいた筈の左腕には何も無く、代わりに剣の方が、腕の形に合わせて抉れていた。
「見ての通りの張りぼてだ」

この技は木場との特訓での際に編み出したものである。一誠とは違い、木場からは剣術ではなく武器を持っている相手に対して素手で戦う方法を学んでいた。この点は自分の可能性を知ろうとする一誠と、可能性を絞って研鑽するシンとの違いであった。

木場が木刀に魔力を纏わせていたのをヒントに、シンは魔力を剣の形に変えるという技術を身に付け、相手の意表を突くという考えの下、木場との実戦にも使ってみた。

結論から言えば大失敗であった。

まず魔力の剣自体に攻撃力が無く、触れれば剣の方が消失するほどに脆い。木場曰く、もっと魔力を圧縮すればそれなりの硬さにはなるらしい。次に維持し続けるのに魔力をかなり必要とする。常に手の平に魔力を送り続けなければ、剣の形を留めることが出来なくなる。

使用方法に難が有り過ぎ、先程の一誠の様に怯ませる程度にしか使い道が無く、しかも同じ相手には見てくれだけと理解されているので二度以上使えない。編み出した本人すらも使い道に悩む技であった。

シンは一応、この魔力の剣について一誠に説明をしたが一誠は軽く笑い、それでも大したもんだ、とシンを褒めた。が、シンにはその一誠の表情に昨日以上の陰を感じ、どこか無理をしている様子に見えた。

シンは声を掛けようとするが、一誠は足早に特訓場所へと移動していく。結局この

日、シンは一誠に話し掛けることは出来なかった。
その日の深夜。シンは喉の渇きを感じ、目を覚ました。
疲労で重くなった体を慎重に動かし、周りで寝ている木場と一誠を起こさない様に水のある場所を目指す。
キッチンに着き、水を一杯飲むとそのまま寝室へと戻ろうとするが、そのときシンの耳に物音が入ってくる。
音の場所は恐らく外、何かを漁るような音であった。シンの脳裏に連日の謎の存在の姿が浮かび上がる。
シンは出来るだけ音を殺しながら移動し、別荘の外に出る。悪魔と違い、あまり夜目が利き難いシンであったが、クーラーボックスの付近で確かに何かが漁っているのが見えた。シンは気配と息を殺し、それとの距離を詰めていき、届く間合いまで接近すると一気に飛び掛かった。

◇

『イッセー、いらっしゃい』
それを見たとき、一誠は夢であると認識した。何故なら、目の前に一糸纏わぬ生まれ

たままのリアスがいたからだ。
（ああ……まだ、あれが記憶に残っているのか……）
いつぞやのリアスが迫ってきた光景を思い出す。その記憶を元に再現された目の前のリアス。自分のエロ方面の記憶力の良さと日常生活での応用の出来なさを実感してしまう。
そんなことを考えているうちに目の前のリアスが一誠の両手を掴み、そのまま自分の胸にと持っていく。
夢であると分かっていても一誠はやはり興奮し、出来ればまだ醒めないことを祈る。
『触ってもいいのよ』
その言葉を合図に一誠は煩悩に身を任せ、両手で思いっきり目の前の物体を掴む。しかし、返ってきた感触は柔らかい、すべすべしている、ではなく。
（冷たっ！）
その感触で一誠は夢から醒めた。
「んん……？」
起きた一誠の目に最初に飛び込んできたのは、アーモンド形の黒い目。続いて三日月形の大きな口とそこに見える八重歯。次に見えたのは丸々とした白い二頭身の体と、その頭に乗っている二又に分かれた青い帽子と同色の前掛け。

それが一誠の布団の上に座っている。一誠はそこで初めて、自分がその物体の顔を両手で挟んでいることに気付く。
「……誰？」
「オイラ、ジャックフロストだホー！　よろしくだホー！」
寝惚け半分の声で尋ねるとそれは元気よく応じる。
「……」
「ヒホ？」
一瞬の間、その後――
「だあああああああああああああ！」
「ヒホオオオオオオオオオオオオオオ！」
完全に覚醒し、ジャックフロストと名乗った存在に驚き一誠は絶叫。その絶叫に驚いてジャックフロストも絶叫。
早朝の別荘の中に二つの絶叫が響き渡った。

王様、号泣

二つの絶叫が別荘内に響き渡ったとき、一誠を除く他のメンバーはリビングに集まっており、全員が一誠の起床を確認した。
「あら、驚かせちゃったみたいね」
「あらあら、凄い声ですね」
「だ、大丈夫でしょうか……」
「へーき、へーき！　アーシアは心配し過ぎ」
「……うるさかったです」
「イッセーくんは朝から元気だね」
「あいつを行かせたのは失敗だったか……」
朱乃の淹れたお茶を口にしながら、各々が感想を洩らす。数十秒後、がちがちと歯を鳴らしている一誠が両手でジャックフロストを掴んだ状態でリビングへと駆け込んできた。その体には至る所に薄い氷が張り付いている。
「ぶ、ぶぶぶ部長！　へ、へへへ変ないいい生き物ががが！」
一誠は両手で持ったジャックフロストをリアスに突き出し、寒さから歯の根が合わず

舌もあまり回らない様子で必死に目の前の存在について訴える。
「変な生き物じゃないホー、オイラはジャックフロストだホー」
「そそそ、それはささささっき聞いた！」
「今更遅いが、そいつは驚いたり興奮したりすると体から冷気を噴出するぞ」
「み、身を以てけけけ経験したわ！――って」
シンの遅い忠告に歯を剥いて怒る一誠であったが、そこでようやく周りと自分の反応の差に気付く。見たことも無い生物だというのにリアスたちに驚いた表情は無かった。
「その子のことは、今朝シンから聞かされたわ。イッセー、その子が私たちのことを見ていたり野菜を盗んでいたりしていた犯人よ」
リアスの言葉に一誠は目を丸くし、突き出していたジャックフロストを自分へと向き直す。
「ヒホ」
片手を挙げて独特の言葉で挨拶をするジャックフロストを見た後に今度はシンの方を見た。
「お前が捕まえたのか？」
「昨日の深夜に偶然な――頭からクーラーボックスに突っ込んでいたから思わず捕まえた」

◇

昨晩、シンが見たのはクーラーボックスに顔を入れて中の野菜を拝借しようとしている動く雪だるまの姿であった。正直、抵抗をするなら手っ取り早く二、三発程殴って大人しくさせようと考えていたシンであったが、頭を突っ込んで短い足をじたばたさせている雪だるまの姿にその気は萎え、仕方なく首根っこを掴んで持ち上げた。

その際、驚いて体から冷気を噴き出させた雪だるまであったが、逃げられる、と思ったシンがすぐに人指し指で雪だるまの額を弾くと、低く威圧感のある声で――

『やめろ』

――と一言。額を押さえて涙目になったジャックフロストはすぐに冷気の噴出を止める。おかげで、シンの手が氷漬けになることを防げた。

その後にシンは雪だるまを一旦地に降ろし、改めて素性を尋ねようとするのだが、ここで予想外のことが起きた。

「ご、ご、ごめんなさいだホー！　――ヒホォォォォ！　ヒホォォォォ！」

まさかの号泣。この事態には流石にシンも内心で動揺した。

幼子をあやす術を知らないシンの中で、ピクシーと初めて会ったときの記憶が蘇る。

目の前の酷似した光景にただ棒立ちしながら、必死に泣き止ます方法を考える。
「何をしているの？」
そこに泣き声を聞きつけたリアスが、朱乃を連れて現れた。
「――あー、その――」
咄嗟に何かを言おうとするが言葉が思いつかない。リアス、朱乃の目には小さな雪だるまを泣かすシンという奇妙な構図が映っているのは間違いなく、この状況を説明するのにどういった風に説明すればいいのか、流石に悩んでしまう。
「間薙くん、とりあえずその子とここで何があったか話してくれますか？」
落ち着いた態度の朱乃に空回りする考えがやや落ち着く。そこでシンは思考を一旦止め、軽く深呼吸をした後に起きてから雪だるまを捕まえた経緯を順番に話した。その間に朱乃は泣いている雪だるまの頭を撫でて、気持ちを落ち着かせていた。
「そう、分かったわ」
リアスはシンの話を聞き終わると、朱乃にあやされ落ち着きを見せ始めた雪だるまに近寄ると、目の前でしゃがみ目線を同じ高さにする。
「ねえ、あなたが野菜を盗んでいたの？」
「ご、ごめんなさいホー！　山の木の実以外の食べ物があったから美味しそうに見えたんだホー！」

頭を押さえて、小鹿の様に身を震わせる雪だるま。その姿は愛らしく保護欲を誘うものがあり、質問しているリアスや側にいる朱乃も徐々に表情が柔らかくなっていく。
「最近、私たちを見ていたのもあなた？」
「そうだホー、この山で人間以外を初めて見たからだホー」
いつ怒られるかという恐怖心から終始ビクビクしている様子の雪だるま。その姿に怯えさせる原因となったシンは罪悪感を覚え始め、雪だるまに近付きリアスの様にしゃがむと片手を前に出す。
それに驚いて体をびくりと跳ね上げる雪だるまであったが、出されたシンの右手に胡瓜が握られていることに気付くと、不思議そうにシンの方を見た。
「俺が言うのもなんだが、そう怖がるな。俺たちはお前に危害を加えるつもりはない。ただ、お前のことを知りたいだけだ……それとさっきは叩いて悪かったな」
しばらくの間、差し出された胡瓜とシンを交互に見ていた雪だるまであったが、やがてその胡瓜を受け取ると、ぽりぽりと食べ始めるのであった。
その様子をしばし見物する三人、そのうち雪だるまも胡瓜を一本食べ終えてシンたちの方を見る。その体からは先程の震えは消えていた。
「おいしかったホー！　ごちそうさまだホー！」
きちんと礼を言う雪だるま、その無邪気な姿にシンは仲魔のピクシーを連想した。

「じゃあ、落ち着いたところで聞かせてくれる？　あなたの名前を」
「オイラはジャックフロストだホー！」
聞かされた名にリアス及び朱乃は目を丸くして驚きを示した。シンは聞かされた名よりも二人の驚きの方に注目してしまう。
「有名なんですか？」
「それは……」
「なんて言ったらいいんでしょうか……」
シンの問いに二人は口籠り、何やら言いにくそうに互いに目配せをする。その様子を不審に思うシンであったが、それについて質問するよりも早く新たに木場、小猫、アーシア、ピクシーの四人がやって来た。
「どうしたんですかこんな夜更けに？」
「ふぁぁ……外でごちゃごちゃうるさいよー」
アーシアやピクシーまだ眠気が残っているのか目を擦りながらシンたちに尋ねてくる。後に続いてきた小猫と木場もいつもの表情ではあるが、やはり眠気を感じているのか目尻が二人とも下がっている。
四人はシンたちの側にいるジャックフロストとの存在に気付き、驚きの表情を浮かべた。

ジャックフロストは新たに増えた人物にやや緊張した様子で忙しなく交互に見ている。立て続けに人が現れて軽いパニックを起こしているらしく、その影響からかジャックフロストの足下に霜が降り始めた。
「とりあえず、外で話し続けると体を冷やすわ。一旦中に入りましょう?」
リアスの言葉に従い、皆が別荘の中に戻っていく。シンは状況を把握しきれていないジャックフロストを持ち上げると、そのまま別荘に連れて行く。
「悪いが、あそこでもう少し話を聞かせてくれないか?」
「ヒーホー!」
ジャックフロストはシンの提案を快諾し、元気の良く返事をするのであった。

◇

「……で、俺が寝ていた間にそいつの話を聞いてたのか、俺も起こしてくれてもいいんじゃないのか?」
一人仲間外れにされていたのが不満らしく、一誠は唇を尖らせ同室で寝ていた木場に咎める様な視線を送る。
「ごめんね。あんまり気持ちよさそうに眠っていたから起こすのも悪いと思ったんだ。

イッセーくんも毎日頑張ってたから疲れていると思ったし」
　爽やかかつ思いやりが込められた木場の言葉に、一誠の返す言葉が無い。ばつの悪そうな表情をする一誠は、話題を変える為にジャックフロストに話し掛けた。
「なあ、お前が今まで俺たちの特訓を見てたんだろ？　何で見てたんだ？」
「ヒホ！　強くなるためだホー！」
　一誠の質問にジャックフロストは素直に答える。
「強くって――どういうことだ？」
「オイラは元々、強くなるために山に入ったんだホー！　でも、入ったのはいいけど強くなる方法がよく分からなかったんだホー！　そしたらリアスたちの姿を見つけてこっそり見てたらオイラ思ったんだホー、これを真似したら強くなれるかもしれないとホー！」
　すでにリアスの名を呼ぶぐらいに打ち解けているジャックフロスト。いまいちジャックフロストの話を理解できないのか、小声でシンに話しかける。
「なあ、何で強くなる為に山に入ったのに特訓とかしなかったんだコイツ？」
「恐らくだが、山籠もりのことを曲解したんだろう。口振りから察するに山に入れば自動的に強くなれると勘違いしていたみたいだ」
　あまり賢いとは言えないジャックフロストの思考に一誠は困惑と呆れを半々とした

微妙な表情となる。
「すいません、部長。俺、ジャックフロストなんて名前初めて聞きましたけど、どんな存在なんですか？」
「ジャックフロストというのはね――」
ジャックフロストはピクシーと同じくイングランドの伝承の中で語られる寒さ、霜、雪などの妖精と伝えられている。悪戯好きではあるが基本的に無害な存在と言われているが、一度でも怒らせるとその相手を生きたまま凍らせるという怖い一面を持つ。
リアスからの説明を聞いた一誠は、やや恐れを持った目でジャックフロストの方を見る。
「生きたまま氷漬けって……可愛い顔してエグイことをするんだな、お前」
「ヒーホー！　オイラそんなことしたことないホー！」
一誠にジャックフロストは目を吊り上げて怒った表情で一誠の言葉を否定する。怒っていてもその容姿は可愛らしく、普段無表情の小猫さえもジャックフロストの怒る姿を心なしか柔らかい表情で見ている。
「じゃあ、お前の仲間はするのか？」
「それは、その……ヒホー……」
そのことを聞かれた途端、怒っていたジャックフロストは冷水でも浴びせられたかの

ように大人しくなり、それどころか言葉から勢いと元気が無くなる。一誠の質問に答え辛そうにし、はぐらかす態度を取っていた。
その態度を不審に思った一誠は踏み込んだ質問をジャックフロストに投げ掛けようとするが、それの前に朱乃が突然ジャックフロストを抱き上げた。
「ごめんなさい、イッセーくん。まだ、この子について体調などを調べないといけないの。その質問はまた後でして下さいね」
微笑んで一誠に頼む朱乃であったが、その微笑みには相手に有無を言わせない威圧が込められていた。それを察した一誠は勢いよく首を縦に振り、朱乃に従う。
「じゃあ、少しだけ私と付き合ってくださいね？」
「ヒホ、分かったホー。でも、痛いのは嫌だホー」
「大丈夫です。酷いことはしませんよ……部長、あとは任せます」
朱乃とリアスの視線が交差する。その僅かなことで相手の考えを悟ったのか、リアスは分かったわ、と朱乃に告げると朱乃は再度微笑み、ジャックフロストを連れてリビングを後にした。
「少し、みんなに聞いてほしいことがあるわ」
朱乃が去ると、リアスは真剣な面持ちとなる。
「あの子のことで知っていてほしいことがあるの」

「ジャックフロストのことですか？」
「ええ、そうよ」
真剣なリアスの態度に触発されたのか、聞いた一誠の表情も硬い。
「妖精のジャックフロストはね――」
少し間が空く。
「――既に絶滅したと言われている妖精なの」

◇

木場の横薙ぎの一閃がシンの顔に迫る。辛うじて目で追える速度のそれをシンはギリギリまで引き付け、直撃するかと思われた瞬間に上体を後ろへと逸らした。しかし、それでも完全に避けきることが出来ず木刀の切っ先が額をかすり、浅い切傷を付けられる。
額から目蓋に伝わってくる暖かい血の感触も、目の前に立つ木場に集中しているシンには気に掛ける余裕は無い。シンは剣戟を外されたことで僅かに体勢が揺らいだ木場に対し、胴体を狙って右の爪先を穿つように放つ。だが、それも木場にとって予想の範囲内だったのか、木場は流れる様な足運びで体勢を変えると、シンの蹴りは空しく先程

まで木場の立っていた位置を通過するだけであった。
突き出されたシンの足の側面へと移動していた木場は、シンの右足の脛部分を柄頭で強打する。右足から脳まで突き抜けていく激痛と叩きつけられた衝撃で宙にあった右足は地面へと落ち、大きく足を開いた状態になったシンは前のめりの体勢になる。慌てて体勢を戻そうとするシンが見たのは、自分の首に木刀を押し当てた木場の姿であった。
「僕の勝ちだね」
「ああ、そうだな」
清風の様な声で勝ちを告げる木場、それにやや悔しそうな声音でシンは自らの敗北を認める。合宿も六日目に入り、期限まで半分が過ぎる。シンもそれなりに技術を吸収してきたという自覚はあるが、未だに木場、小猫に勝てなかった。一矢報いることもあるが、結局は手痛い反撃を受けそのまま敗けるというのが、この頃定番となりつつある。
「また敗けたか……」
「でも、最初に比べれば間薙くんもイッセーくんも強くなってきたと僕は思うよ。さっき僕の剣を避けたけど、合宿に入って初めのときの間薙くんだったら当たっていたはずだ」
敗北を噛み締めているシンに木場は励ましの言葉を掛ける。シンが自覚はしていな

くても、敗けという結果に気分が暗くなっているのを言葉に滲ませていたのを敏感に木場が悟った故の行為であった。

シンの方も、相手に気を遣わせていることを理解しており、自分を情けなく思う。既に何十もの敗北を重ねているというのに、まだ敗けるということに開き直れず悔しがる自分、シン自身この合宿で、自分の負けず嫌いな一面に初めて直面した。

そして、もう一つ敗北以外でシンを悩ませることがある。

「それでさっきのことなんだけど――」

「ヒホ！」

「ああ、確かにそれで――」

「ヒホ！　ヒホ！」

「うん、だから――」

「ヒホホホホ！」

「――少し静かにしてろ」

木場の助言の最中に聞こえてくる気の抜ける掛け声。声の方を見ると、シンと木場の特訓を見学していたジャックフロストが、その辺りに落ちていた木の枝を手に持って上下に振る素振りらしきものをしている。

既に皆から認知されたジャックフロストはこそこそと隠れて特訓の様子を見ること

は止め、堂々と見学をしていた。出会って最初の日は視界の隅にチラチラと映り気になったものの、一日中そうしていると案外早く慣れてしまった。オカルト研究部の面々の性格とジャックフロストの意外と人懐っこい性格で打ち解けるのも早く、シンも五日目の中ジャックフロストがアーシア、小猫、朱乃、リアスの膝の上で撫でられているのを一誠と共に目撃をしている。それを見て一誠が、凄まじく羨ましいが絵になる、と嫉妬の感情と可愛いものを愛でる美少女という構図に胸を熱くする感情とが合わさった奇怪な表情となっていた。

木場との特訓を始めて二時間近く経つが、偶にジャックフロストの方を見ると今の様に木場の真似をしていたり、シンの真似をして短い手足で構えをとっている姿が映る。同じ妖精であるピクシーとは違い、飽きずにずっとこの行為を繰り返している。ピクシーの方はと言うと、木陰の下で夢の世界の中に入り浸っていた。

「オイラも特訓だホー！　少しは強く見えるかホー！」

手に持った枝を地面に置き、両手を腰と思わしき部分に当て胸を張ったポーズをする。その姿を木場は少し困った様に微笑み、うーん、もう少し特訓が必要かな、と律儀に答える。

「分かったホー」

その言葉にジャックフロストは素直に従い、置いた枝を拾うと再び素振りを始めた。

シンはその姿を何気なく見ながら、近くに置いておいた水筒で水分を補給しようとし水筒を持つが途中で手が止まる。何度かこまめに水分補給をしていたせいで、水筒の中が空になっていることに気付いたからであった。

「取ってくる」

「ああ、それなら僕が行くよ。ちょうど僕のも空になっていたみたいだしね、間薙くんは少し休憩してくれるかな」

木場の申し出にシンは一瞬断ろうと考えたが、あまり汗をかいていない木場の顔を見て、あくまで水を取ってくるのは建前であり、本当の目的はシンを休ませることであることを悟る。思い返してみれば、水分を補給した回数は圧倒的にシンの方が多く、木場が水を飲んでいる姿は僅かしか見ていない。そんな差があるのに同じタイミングで空になることは考え難い。

相手の思いやりを無下にすることも出来ず、素直にシンは木場に水筒を渡す。別荘の方へと歩いていく木場の後姿を感謝と申し訳なさが混在した瞳で見送ると、シンは近くにあった大き目の岩に背をもたれさせて座った。

（足りないな……）

シンは自分の現状を考え、決定的に不足しているものを実感していた。それは切り札となる武器である。木場の『神器』に小猫の逸脱した腕力、朱乃の魔力、一誠の『神滅

具』、アーシアの様な非戦闘員を除けば、皆強力な武器を備えている。しかし、今のシンに出来ることは氷の息を吐き出すことと、見た目だけの魔力の剣を創り出すことしかない。戦いの中で使うことを考えれば、いまいち心許無い。

使える手札は多ければ多いほどいいが、肝心の手札を増やす術をシンは思いつかない。身体能力、技術が伸びていく一方で、それに反比例するように、このことに対する焦りの気持ちは日々大きくなっていくのであった。

そんなことを独り考えているシンの視界の端で、ジャックフロストは最早聞き慣れた掛け声で木の枝を縦や横に振っている。強くなるという理由の為に一生懸命に行動をするジャックフロストを見て、シンは朝にリアスから聞かされた内容を思い出していた。

妖精という種族は、未だに人の住む世界に生息をする数少ない存在である。だが、昨今その数は減少の一途を辿っていた。原因として挙げられたのは、生息をしている環境の変化により妖精が自然発生する確率が激減している、とのことだった。

その中でジャックフロストという妖精は、数年前に悪魔たちの調査の結果、その存在は完全に絶えたという報告がされた。事前に悪魔たちは、人の世界では無く悪魔の棲む冥界に移住するように呼び掛けていたが、ジャックフロストたちはその提案を拒否し人間界に留まり続けることを選択したという。

そんな存在が現在、自分の目の前にいる。そう考えると奇妙な気持ちがシンの心の中で生まれてくる。

「なあ」

「ヒホ?」

その奇妙な気持ちに後押しされてシンはジャックフロストに声を掛ける。ジャックフロストは素振りを止めて、小首を傾げながらシンの方を見た。

「何でお前は強くなりたいんだ?」

胸の中に湧いた奇妙な気持ちの名が、好奇心であることをこの質問をしたときにシンは確信をした。そして、口に出してしまったことを今更ながら後悔した。相手の心中に踏み込むことはシン自身好むことではない故に。

聞かれたジャックフロストは少しの間沈黙し、シンから目線を外すと木の枝を振る動作を続ける。

気分を害してしまったかと思うシン。そのときジャックフロストはぽつりと呟いた。

「……オイラ、王様になりたいんだホー」

「王様?」

シンは思わずジャックフロストの言葉を復唱する。純粋というよりは子供染みたといった方が適切なジャックフロストの願い。だが、それを呟いたジャックフロストの横

顔は子供というには余りに切ないものを含んでいた。
「オイラの王様が言ってたんだホー、強くなればいつか王様になれるってホー。――そして、王様になったらオイラがジャックフロストたちを……」
そこまで言ってジャックフロストは振るっていた手を止め、俯いた。その様子を訝しげに見ていたシンであったが、ジャックフロストの足下に出来ていく雫の痕で、初めてジャックフロストが泣いていることに気が付いた。最初にあったときとは違い、静かに耐える様に泣くジャックフロスト。
シンは涙を止める方法を知らない。だからシンは泣いているジャックフロストに何も問わず黙って見守る。ジャックフロストが泣き止むまでシンが側から離れることはなかった。
しばらくの後、ジャックフロストは俯いていた顔を上げる、既にその顔に涙は無かった。
「ごめんだホー、ちょっと悲しくなっちゃったんだホー」
泣いたことを恥じているのか、ジャックフロストの声は消えてしまいそうな程小さいものであった。
「泣き虫だな、お前は」
「違うホー！　オイラは泣き虫じゃないホー！　さっきのはたまたまなんだホー！」

涙を流した理由は聞かず、代わりにからかう様な言葉を言いながらシンは立ち上がる。ジャックフロストは泣き虫と言われたことを強く否定し、手足をじたばたさせながらシンに抗議をする。

そんな二人の様子を帰ってきた木場は初め不思議そうな顔をしていたが、微笑ましく映る両者のやりとりを見ているうちに穏やかな笑みへと変わり、その笑みのまま帰ってきたことを二人に告げるのであった。

◇

日も落ち始めた夕方、シンは独り川辺に立って自分の右手を見つめていた。木場、小猫との特訓が終わり夜に行う特訓までの合間の休憩時間、ピクシーやジャックフロストはリアスたちに預け、シンは体を休めることなく戦う術について考えていた。

木場との特訓で身に付けた魔力を剣状へと変える技術、シンはその見た目だけの技術をどうにか実戦でも使える様に出来ないか思案していた。

触れるだけで消える脆い魔力の剣、木場は強い魔力を込め続ければある程度は実戦に使用できるかもしれないと言っていたが、今のシンの技術では込めることはできても維持し続けるのは難しいという意見も述べていた。

この魔力の剣が出来る様になってから、幾度か木場の言っていた様に魔力を込め続け、剣に攻撃力を付与する試みをしてみたが、底の空いた容器に水を流し込むかの様に送った魔力は剣に留まらず、空気中へと霧散し悪戯に消費をするだけであった。

シンは右手に紋様を浮かばせると、右手の中に魔力を集め剣の形にする。そして、それに更に魔力を送り込むが剣に変化は全く無く、白く発光した光のままであった。繰り返す失敗に流石に少々苛立ってくる。

今まで一定の量の魔力を送るという方法で剣を形創っていたが、シンは半ば投げやりで一度貯め込んだ魔力を一気に剣に送るという強引な方法をとった。その結果――

「――あっ」

右手に集まった魔力は一瞬だけ剣の形となったがその形はすぐに揺らぐ。不味いとシンが判断した瞬間、剣の形は崩れ、解放された魔力が音も無くシンの体を吹き飛ばした。

視点が激しく変わっていくなか、朱乃の言っていた魔力の暴発という言葉をシンが思い出したと同時に、頭から川の中へ着水するのであった。

数秒後、川の中からシンが現れる。ずぶ濡れとなっていたシンはそれに構う事無く、川の中から急いで出るとある場所を目指して勢いよく走る。

失敗に思えた先程の出来事、それはシンにとって思いもよらぬ天啓であった。

走り続けたシンが辿り着いたのは別荘、そこで目当ての人物を探そうとするとタイミングよくその人物の方からシンの前に現れた。
「あらあら、どうしたんですか、間薙くん。びしょ濡れですよ?」
シンの目当ての人物――朱乃は、未だに水を滴らせているシンの姿に目を丸くし、驚いた様子で話しかけてきた。
「すみません、姫島先輩。少し聞いてほしい話があるのですが」
魔力に対しての見識が深い朱乃に、シンは自らの脳裏に閃いた考えを朱乃へと聞かせる。初めはいつもの笑みを浮かべていた朱乃であったが、話が進むにつれ笑みは無くなっていき、最後まで聞き終えた朱乃の顔は難しい表情となっていた。
「間薙くん、はっきり言います。あまりその方法はお勧めできません」
教え子の行為を叱る教師を思い浮かばせる、感情からではなく常識を逸脱した行為を窘める口調。思いついた本人も口に出し、実際に人に聞かせていくうちに自分の発想の危うさを自覚していったせいか、朱乃の否定的な言葉に対し強い反抗心は湧かなかった。
しかし、危険であると分かっていても他の方法は思いつかず、合宿の残り日数を考慮してもこれが唯一といって言い程の考えであった。
「確かにその方法ならば、強力な武器になります。でも、同時にあなたを傷付ける諸刃の

剣にもなる可能性があります。……ですから、それに拘らずもっと別な方法を――」
「危険は覚悟の上です。先輩は言っていました、魔力の源流は想像であると、残された日数で俺は必ずその想像を形にしてみせます。――だからお願いします。俺にその為の助言を下さい」
　自らの意思を示し朱乃に頭を下げて頼むシン、そこには鋼鉄を連想させる、いかなる言葉や説得でも曲げない意志の不変さを感じさせた。その姿に朱乃は複雑な表情をしていたが、やがて溜息を吐き、シンに頭を上げるように言う。
「分かりました。これ以上言っても間薙くんの意志が曲がらないようですね。ですが、私の言ったことはきちんと守ってください。それがあなたに私が教える上での条件ですわ」
「はい」
　シンは念を押す朱乃に首を縦に振る。その言葉を聞き、いつもの笑みを浮かべる表情となった朱乃はいくつかの助言をシンへと聞かせた。シンはそれを真剣に聞き入れ、全て覚えると実践の為、先程の場所に戻ろうとする。が、そこで朱乃が呼び止めた。
「間薙くん。熱心なのはいいですが、とりあえず着替えましょうね」
　その言葉で今更ながら自分の全身が濡れていることを思い出す。
「……了解です」

「うふふ、素直で結構です」

◇

その日何度目の失敗であろうか。

シンは、川の中で沈みながら少しずつ遠くなっていく水面をそう考えながら見つめていた。背中に川底に石が当たる感触が伝わると、シンは両手を川底に強く叩きつけ、その反動で水面へと飛び出した。

まだ入るには冷たすぎる川の水であるが、そこに浸っているシンに寒がる様子は無い。それに気を掛ける時間をも惜しみ、再び練習を始めた。

シンは朱乃から指示された様に、右腕全体に魔力を纏わせるイメージを頭の中で作りながら、体の中に流れる魔力を操作する。そのイメージの通りに魔力が動き出したのならば、今度はそれを収束させ、礫のように小さな魔力を一つの塊にする想像へと切り替える。そして、塊になったそれを一気に押し出し、右の掌の中に留めずにそのまま剣の形へと変換した。

ここまでは朱乃から指示された様に出来る様にはなった。問題はこの後、それを維持し、自分の決めたタイミングで使用できるようにすること。

一気に力を流し込んだことで形が不安定になる魔力の剣を押さえようとするが、努力の甲斐も空しく、僅か一秒程で魔力は形を失い暴走するただの力と化す。シンの前の景色は魔力の影響で揺らいだかと思えば、突風の如き衝撃がシンの全身を打ちつけて再度シンを川底にと沈めた。

「……ふぅ……」

川底から自力で川辺へと上がったシンは、その場で仰向けとなり軽く息を吐く。仰向けとなったシンの目に映るのは無数の星。明るすぎる街ではまず見られない程、はっきりと輝いていた。

「無茶するねー」

「ヒホー」

そんな光景に突然影が覆ったかと思えば、仰向けになったシンの顔をジャックフロストとその頭に乗ったピクシーが覗き込んでいた。

「夜の特訓終わったのにまだ特訓するの？」

「シンは頑張り屋さんだホー」

「一応、部長から許可は貰っている」

夜の特訓の後にも特訓をしたいという申し出にリアスはあまり良い顔をしなかった。それは過密な特訓でシンの体が壊れるのではないかという心配故。それでも熱心に頼

み込むシンにリアスの方が折れ、条件として活動時間の指定と、もしもの為に監視をする存在をつけるように言ってきた。その監視役に立候補したのが、その会話を偶然にも聞いていたピクシーとジャックフロストである。ピクシーの方はシンの仲魔であるという理由、ジャックフロストの方は特訓という言葉に惹かれたという理由で志願をしてきた。

そして現在シンはピクシーとジャックフロストの監視の下、先程の様な特訓を出来る様になるまで何度も繰り返している。

「もうそろそろ時間だよ」

ピクシーが適当な岩の上に置いておいた腕時計を指差す。腕時計が示す時刻は後数分でリアスが指定していた時間を超えることを指示していた。シンは短く息を吸って吐いた後に立ち上がる、その時になって今更ながら水を吸って肌に張り付くジャージを不快に思いおもむろに脱ぎ捨てると、上半身を晒したまま濡れたジャージを手に持って別荘へと戻っていった。

その道中、シンは朱乃からの助言と、その助言を貰う際に絶対に守るよう言われた約束について思い返す。特に念を押されたのは、特訓に使用する場所と特訓の方法についてであった。場所は周りの被害が少なくシン自身にも危険が及びにくい条件を満たす所、シンは衝撃で飛ばされることを想定して、太腿位までの深さがある川の中を選んだ。

次に特訓方法であるが、朱乃はシンが見つけた方法を行う際、必ず溜め込んだ魔力は外部で形成し、決して体内で行わない様に忠告した。そうしなければ、精密な魔力の操作が出来ないシンでは、制御に失敗をすれば内側から弾けると言われた。

半ば思いつきでやった方法が、知らず知らずのうちに片手が無くなるか否かの瀬戸際であったことを朱乃に聞かされてシンは初めて知った。

「ヒホ、シン。ちょっと聞いてもいいかホー？」

「――何だ」

ジャックフロストの問い掛けに、シンの意識が内から外に向けられる。

「どうして、シンは強くなろうとするんだホー？　シンだけじゃないホー、他のみんなも強くなろうとするんだホー？　みんなも王様になりたいのかホー？」

何故強くなろうとするのか、単純であるが答え難い質問であった。シンは少しの間、考えの為黙っていたが、やがて口を開く。

「皆が王様になりたいって訳じゃない。月並みな言い方だが、今よりも強くなければ大事なものを失ってしまうから、強くなろうとしているんだと俺は思う。――本当ならそんなことをしなくても守れればそれが一番なんだがな……だが、それは通じない。どんなに高尚な考えを持っていても、どんなに優れた人格でも、結局争う力を持っていなければ意味がないんだろうな……」

考えを言い終えたシンはジャックフロストの方を見るが、当のジャックフロストはあまり言っている意味を理解していないのか首を傾げていた。
「ヒホー、じゃあ、やっぱり王様になるには強くなければいけないのかホー」
「それが全てとは言わないが、まあ、必要なものの一つなんだろうな」
「てかさー、ジャックフロストってなんで王様にこだわるの？」
何度も王様、王様と連呼するジャックフロストにピクシーも気になったのか疑問をぶつける。ジャックフロストはその場から数歩移動した後に足を止めた。
「……オイラが生まれたとき、溶けていく王様が言ってたホー。『お前が最後のジャックフロストだホー、お前が最後の希望だホー、お前はこれから旅をし強くなっていずれ王様になるんだホー。お前が王様になったとき、ジャックフロストたちは再び生まれるホー』。オイラは生まれたときから他のジャックフロストを知らないんだホー……オイラは、どうしても自分以外のジャックフロストに会いたいんだホー。だから、オイラはどうしても王様になりたいんだホー！」
もし、生まれた瞬間に自分が孤独であると知らされたとき、どのような気持ちになるのであろう。悲壮、絶望、恐怖、そういった負の感情に塗れてもおかしくは無い筈なのに、目の前の雪精はそれに屈せず、泣きながらも前に進もうとしている。その姿はシンには眩しく見えた。

「……そうか」
「……ふーん、意外と頑張ってるんだね」
　ジャックフロストの背中を見ながら、シンとピクシーはそれぞれ短く言葉を述べるだけであった。同情や悲しみの言葉を掛けるのをなんとなくであるが無粋と判断した為である。
「なら、さっさと休むとするか。明日も早いからな」
「ヒホー！」
「ふぁーい」
　シンの言葉を欠伸を噛み殺してピクシーは賛同し、ジャックフロストも変わらない元気の良さで返事をする。
　深夜の特訓を終えたシンの心の中には上手くできないことに焦りという感情があった。しかし、ジャックフロストとの会話を終えたシンの心の裡は不思議なことに、その焦りは穏やかな波の様に静まっていた。
（我ながら現金だな）
　単純ではあるがシンはジャックフロストの話に触発されているのを実感していた。頑張っている奴がいるから、自分も頑張ってみよう、そう考えるシンの足取りは少しだけ軽いものとなっていた。

◇

合宿が始まって一週間以上が経とうとする深夜、シンはいつもの様にピクシーたちとの追加練習を終えて、別荘へと戻ってきた。成果は順調とは言えないものの、確実にではあるが形となっていた。

濡れた上着を肩にかけ、静かに別荘内を移動していくシンたちであったが、リビングに近付いたとき、会話らしきものが耳に入ってくる。

リビングを覗き込んでみると、中は薄暗くキャンドルの灯りしかない状態であった。リアスたち悪魔程の夜目は持っていないシンではあるが大体の輪郭で把握でき、そこにいたのがリアスと一誠の姿であることを確認する。声でも掛けようかと思うシンであったが、次に聞こえてきた声にその動きを止めた。

「部長…、俺ダメです。……山に来てからてんでダメです」

それはシンが初めて聞く程、弱気に満ちた一誠の言葉であった。それを皮切りに一誠は内側に押し込んでいた自らの弱さを相手へと曝け始めた。

山の特訓で初めて知った小猫、木場、朱乃との圧倒的な差、アーシアやシンとの成長の差、今までひた隠しにしてきたが時間が経てば経つほどにその差を実感し、それを埋

めることが出来ない自分の実力を恥じ、そして悔しく思う。一誠の声は震え、涙声となっていくのが分かる。

シンはこの時間に戻ってきたことを後悔した。一誠の弱音に側にいたピクシーも笑うようなことはせず神妙な顔付きとなり、ジャックフロストも目尻を下げ心配そうな表情となっている。

「不安なのね、イッセー。大丈夫、あなたは弱くないわ、ただ今の自分に少しだけ自信が無いだけ。イッセー、私がそばにいてあげるから今は少しでも休みなさい」

優しく、慈しむリアスの言葉、リアスは泣く一誠を抱きしめる。その包み込む優しさに一誠の方も落ち着いたのか、リアスの言葉以降、一誠の声は聞こえてはこない。

どれほどの時間が経ったのかは分からない。シンは、その場所から一歩たりとも動かないまま、リアスたちの様子を静観していた。あまり趣味のいい真似ではないが、下手に動いてばれるのを警戒した上での結果であった。

やがて、一誠はリアスから離れるとリビングから部屋に戻ろうとする。それを察知したシンはピクシーたちを連れて身を隠した。一誠が部屋へと戻ったのを確認すると、シンも部屋へと戻ろうとする。

「立ち聞きは趣味が悪いわよ？」

既にシンたちの存在に気付いていたリアスがからかう口振りで密かに移動しようと

するシンたちに声を掛けた。
「……気付いてたんですか」
「一応ね、でもイッセーのこともあったから黙っていたけど」
シンはばつの悪そうな表情でリビングに足を運ぶ。キャンドルの灯りの近くまで移動すると初めてそこでリアスが眼鏡を掛け、真紅のネグリジェの姿であることを知った。暗い中で細かい部分を把握していなかった為シンは軽く驚き、自分がいま上半身を曝け出していることを思い出して急いで濡れた上着を着る。
「ふふふ、そんなこと私は気にしないのに」
「――俺が気にするだけです」
少し慌てていた様子のシンの姿が面白かったのかリアスは軽く笑う。
「……正直に言えば、あいつがあれだけ精神的に参っていたなんて知りませんでした」
「イッセーも男の子だからかしら、あなたや祐斗にはそういった所を見せたくなかったんでしょうね」
「まあ、それはそうでしょうね」
同性として相手に見せていい一面と見せたくはない一面があることはシンも理解している。先程の一誠の弱音は間違いなく後者であった。
「ねえねえ、リアスも何でこんな時間まで起きてたの？　眼鏡なんてしてたっけ？」

「ふふふ、これは習慣みたいなものよ、ピクシー。起きていた理由はこれ」
「ヒホ？　なんて書いてあるホー、オイラ読めないホー」
　リアスがテーブルの上を指差すと、いくつかの資料が置かれている。そのどれもこれもがレーティングゲームに向けてのものであることが見て分かる。
「ゲームへの対策ですか」
「そういうこと。……でも一番の悩みどころはフェニックスの力よ……なにせ『不死身』の能力を持っているから」
「そうですか」
　不死身、それを聞かされてのシンの感想は非常に淡白なものであり、ことの重要性が分かっていないのかと思わせるものであった。
「――随分とあっさりとした反応ね」
「慌てた所で相手が不死身じゃなくなるわけではありませんから。それに部長も敗けるつもりはないですよね？」
　挑発とも取れる言い方であったがリアスは特に機嫌を害した様子は無く、小さく笑った後表情を真剣なものへと変えた。
「明日、イッセーに『神滅具』を使用させるつもりよ。……でも、戦う相手はあなたではなく祐斗にさせるわ」

その言葉でシンはリアスの言葉に含まれた意味を察する。それは『赤龍帝の籠手』を使用した一誠にシンが敵わないことを示していた。
「分かりました」
「あなたにとってショックなものを見るかもしれないわ。……それでもいいのかしら」
「だとしてもいずれ追い付きます……負けっぱなしは趣味ではないので」
確認するリアスにシンは自らの意思を告げる。リアスはそんなシンに、そう、と一言だけ言った。
「もう寝ます。お邪魔をしました」
「そんなことはないわ――おやすみなさい」

◇

合宿も後二日で終わろうとしている早朝、陽が昇り始める時刻にシンは誰よりも早く起きて特訓場所で特訓を始めていた。その様子をいつもの様にピクシーとジャックフロストが見守っている。
朝食までの時間の間に少しでも感覚を掴む為に訓練を何度も繰り返すが、その成果は芳しくは無い。最初に比べれば制御する時間は長くなっていたが、それでも実戦に使え

るものとしては程遠いものであった。
本日三回目の制御の失敗で、頭から川の中に突っ込んでいったシンが川辺から陸に上がる。水を吸って重くなったジャージに、特訓の疲労のせいもあって本来の重量以上の重さを感じながら、足底を引き摺る様に移動して近くの岩に背を預けた。
（全然だな）
自らの実力を客観的に評価するシンの脳裏には、一誠がこの合宿で初めて『赤龍帝の籠手』を使用した映像が浮かんでいた。
連日の特訓で『赤龍帝の籠手』を能力を発揮するのに必要な器を作り上げてきた一誠の実力は、木場に一撃は与えられなかったものの均衡していると言ってもおかしくはないほどに喰らい付き、最後の一撃として放たれた魔力の塊は、外れたものの離れた山の形を一瞬にして変えてしまう程の威力を見せた。
一定時間経たなければその実力は発揮できないものの、チーム戦ということを考えればその弱点を補うことが出来る。
リアスからチームの要と称された一誠の表情からは暗さが抜け、並々ならぬやる気が満ちていく。自信を取り戻した一誠の姿にリアスは淡く微笑んだ後にシンの方を見た。シンはそのリアスの視線に自分は心配ないと示す様に片手を軽く振る。
そもそもシン自身、『赤龍帝の籠手』を使用する一誠には勝てないかもしれないという

考えがあった為、はっきりとした実力の差を見せつけられても左程の衝撃は無かった。
焦ってもしょうがないという考えもある。しかし、現状を楽観視することも出来ない。シンは独り行き詰っていた。
「大丈夫?」
「ヒホー……」
もたれたまま動かなくなったピクシーとジャックフロストの声で、シンの脳裏から過去の映像が消える。
「――ああ、少し疲れただけだ」
心配させないように言うシン。実際、ここ数日の早朝と深夜の特訓で肉体が参っているのを実感しており、今も瞼が重く体が睡眠を欲していた。
「あんまり無理せずに休んだら?」
「そうだホー」
「……そうだな、少しだけ休憩する。十分経ったら起こしてくれ」
そう言って瞼を閉じた瞬間、強烈な眠気がシンを襲い、瞬く間にシンを眠りの世界へと引き込んでいった。
自分は夢を見ている。現実と夢の狭間にある曖昧な意識の中、シンはそう感じていた。

シンは、特訓をしている川の岸からぼんやりと流れる川を見つめていた。そんなシンの横を誰かが通り過ぎ、川の中へと足を進めていく。

その人物に明確な形は無かった。ただ、白い靄の様なものが集まり辛うじて人らしき輪郭を作っているだけの存在。

それは川の中心まで歩くと、シンに見せつけるかの様に己の右腕を高々と掲げる。不思議なことにそれの右腕だけは曖昧な形では無く、ちゃんとした人の腕をしている。

それの右腕が目を瞑りそうになるほどの閃光を放つと、それの右手の中にはシンが理想として描いたものと寸分違わぬ魔力の剣が握られている。シンとは違い制御の不十分さで揺らがず、しっかりとその形を固定し続ける。

それは完成した魔力の剣をおもむろに水面へと突き刺す。その瞬間、飛ばされそうになる程の突風が襲い掛かり、思わず身を固めてそれを耐える。その突風はシンの周りを覆っていた景色をガラスの様に砕き、剥がれ落とさせる。剥がれた景色の中から現れたのは光の無い闇の世界。

それはいつの間にかシンの目の前に立ち、自分の右手をシンへと差し出す。それを見ていたシンの体がシンの意志を無視して動きその手に触れた瞬間、それの靄が薄れていき中から人が現れる。

現れたその人物の顔は――

「ッ！」
「ヒホッ！」
「うわ！　ビックリした！」
　突然跳ね起きたシンにジャックフロストとピクシーは驚きの声を出す。シンはしばしの間周りを確認していたが、やがて軽く息を吐いて、置いてある腕時計を手に取る。示していた時間からシンが眠っていた時間は五分にも満たない。
「急にどうしたの？　変な夢でも見た？」
「――夢は見たな……」
　夢は見たという記憶はある。だが、肝心の内容の方は全く覚えていなかった。何か衝撃を受けた様な記憶だけがシンの頭の中に残っている。
「大丈夫かホー？　汗が一杯で出てるホー」
「大丈夫だ……心配するな」
　シンの顔を覗き込んでくるジャックフロストの肩を軽く叩いて、シンは立ち上がり特訓の再開を始める。
　川の中心まで移動したとき、シンは奇妙な既視感に捉われた。
（何だ……？）

理由は分からない。しかし、シンの頭の中に自分がどう動くべきかという考えが浮かび上がってくる。それは数分前までにはありえないことであった。
「ピクシー、ジャックフロスト」
岸で待機している二人の名を呼ぶ。
「少しここから離れていてくれないか」

別荘内で疲れから熟睡している一誠を起こしたのは、下から突き上げてくる振動であった。地震かと錯覚する程の揺れに一誠は、ベッドから転がるようにして慌てて起き上がる。
「な、何だ!」
別荘はその振動で未だに揺れ、柱や天井の板が軋む音を上げている。
「木場、間薙、地震だ」
「間薙くんならいないよ」
慌てる一誠とは対照的に落ち着いた声で現状を伝える木場。木場の言ったようにシンのベッドは空であった。
「え、あいつ何処行ったんだ？　もう逃げたのか？」
「この時間なら彼はもう外にいる筈だよ」

木場はリアスから聞かされているが、一誠はシンが時間外に特訓していることを知らない為、安否を確認する為に別荘の外に向かう。その途中でこの揺れで起きたリアスたちとも合流し外に出ると、一誠は真っ先にシンの名を呼んだ。

「おーい！　間薙！　無事か！」

しかし、返答はない。もう一度呼ぼうとする一誠をリアスが制した。

「彼のいる場所なら知っているわ」

事前に訓練場所を教えられていたリアスは他の部員たちを連れ、シンが訓練をしている場所に急行する。数分程走ったきたリアスたちが見たものは、大きく円形に抉られた大穴の中に一人佇むシンの姿であった。本来なら川であった場所は跡形も無く失われ、大中小の石が並んでいた川底も地肌が露出し、飛ばされた石は周囲の木々にめり込んでいたり貫通したりなどし、完全に地形が変化していた。

「シン……これはあなたがやったの？」

静かに立っているシンにリアスが声を掛ける。

「――ああ、すみません。起こしましたか？」

そこで初めてリアスたちの存在を認識したのか、どこか力の無い言葉でシンは返事をする。

「間薙くん、成功したみたいですね」

「ええ、まあ」
　朱乃の言葉にシンは肯定するが、その顔に喜びの色は無い。代わりにあるのは戸惑いに近い感情であった。
「あー、びっくりした！」
　リアスたちの側にある岩の陰からピクシーが両耳を押さえた状態で顔を出す。
「お前もいたのか、てか間薙の奴、一体何したんだ？」
「知らなーい、岩に隠れてたからあたし見てない」
「じゃあ、ジャックフロストは？」
「こっちも知らない。だって、気絶してるし」
　一誠が岩陰を覗き込むと、そこではジャックフロストが目を回して倒れている。
「びっくりし過ぎてこうなっちゃった」
「仕方ねえな」
　一誠は気絶しているジャックフロストを抱え上げる。
「とりあえず詳しい話は別荘でしましょう。シン、いいわね？」
「――はい」
　やや歯切れの悪い返事をしつつ、抉れた穴からシンはリアスたちの方へと歩き出す。
　そのシンの心の中は、ずっと成功させようとした技の成功に対する喜びは無く、代わ

りにあったのは正反対の不快感であった。
つい先程まで出来なかったものがあまりにも呆気なく出来る様になる。都合がいいというにも限度がある。体の一部が入れ替わったかのような不快感、以前『氷の息』を使えるようになった時の比では無い。シンは自分に起きた事態が、ただただ不愉快であった。
（気持ちが悪いな……）
その感覚は中々消えることはなかった。

◇

合宿最終日の夜、普段は女性陣が夕食を作っていたが、今回はそれの礼の意味を込めて男性陣が夕食を作っていた。主に調理を担当するのは自炊経験のある木場とシン、一誠とジャックフロストは下準備を担当をする。
「はいだホー」
「おっ、サンキュー」
ジャックフロストから手渡された大根を一誠が礼を言って手に持ち、少しの間大根を集中して見ていると、どういう理屈か大根の皮が一瞬にして剥かれた。一誠はその結果

に満足そうな笑みを浮かべ、大根を木場へと手渡す。
「ほいよ」
「ありがとう、イッセーくんもいつの間にか器用なことが出来る様になったね」
「まあな――だが、本来の使い方は別にあるんだぜ……ふふふ」
いつか見せた煩悩が前面に押し出された一誠の含み笑い、それだけで碌な使い方はされないことが見て分かる。
「本来の使い方……対戦相手の生皮でも剥ぐのか？」
「ちげーよ！　発想がグロイわ！」
半ば本気で言ったシンの考えを力の限り一誠が否定する。その間にも三人は手を休めることなく料理の準備を続けていた。
「それはそうと……あいつはどうするんだ」
一誠は手に持った人参の皮を剥きながら、少し離れた場所に移動しているジャックフロストを横目で見つつ声を潜めて尋ねてくる。
「どうだろうね……少なくともこの山はグレモリー家の縄張りの一つだから他の悪魔がやってくる心配も少ないし、このままにするという選択肢もあるけど」
木場はまな板の上で手慣れた手付きで大根、人参、牛蒡などの野菜を切り、切り終えた野菜をシンへと渡す。

「どうするかを決めるのはあいつ次第だ。……ただ、ここから降りる前にあいつの意思を聞かなくちゃいけないがな」

シンは野菜を沸騰した鍋に入れ、おたまで適当に掻き回す。ある程度野菜が柔らかくなったら、リアスが獲った猪肉を味噌を入れ味を整える。

「ヒーホー！　美味しそうだホー！」

匂いに釣られたのか、いつの間にかジャックフロストが鍋を口の端から涎を垂らして見ていた。流石に火や湯気に近付くのを嫌ってか少々離れた位置に立っていたが。

「味見してみるか？」

「するホー！」

シンはお椀に具と汁を注ぐとジャックフロストへと手渡す。ジャックフロストが現れたからの数日間、ジャックフロストもメンバーと一緒に食事を摂ることがあったがそのときはいつも生野菜を齧っていた。その為、温かい食べ物はどういう風に食べるのかという好奇心がその場にいる全員に芽生え、ジャックフロストが食べる姿を注視してしまう。

「ヒホー」

お椀を受け取った瞬間にそのお椀に向けてジャックフロストの口から息が吐き出され、その息が掛かったと同時に湯気が出ていた汁は凍結し、湯気の代わりに冷気が立ち

昇っている状態となった。
「いただきますホー！」
　ジャックフロストは大口を開いてお椀の中身を口の中に滑らせ噛み砕く。しゃりしゃり、がりがり、ごりごりといった、およそ汁物を食べているとは思えない咀嚼音。
「ヒーホー！　美味しかったホー！　――どうしたんだホー？」
　満足そうなジャックフロストとは反対に三人は何とも複雑そうな表情を浮かべているのであった。
　その日の夜、風呂上がりのシンはジャックフロストが別荘の外に出ていくのを見かける。気になって跡を追うと別荘のすぐ近くで膝を抱えて座っていた。
　シンはその隣に立つ。
「どうした、そんな場所で」
「……シンたちは、明日山から下りちゃうんだホー？」
「――ああ」
「そうかホー」
　小さく呟く声は微かに震え、泣くことを耐えているようであった。
「……一緒についてくるか？」
「……」

返事は無い。シンも即答できるものではないと思っていた。
「……オイラ、王様になりたいんだホー」
「ああ、知ってる」
「シンたちについていったら王様になれるホー？」
「それは分からない。ただ――」
「ヒホ？」
「――どうやったらお前が王様になれるか一緒に考えることは出来る」
「オイラ……オイラ……」
ジャックフロストは立ち上がり、その場から逃げるようにして走り去っていく。シンはそれを止めようとはせず、独り呟く。
「迷えばいいさ。だが、やっぱり独りは寂しいと思うがな」

◇

ジャックフロストはある場所を目指し、一生懸命に走っていた。途中転ぶこともあったが、それでもすぐに起き上がり走っていく。
ジャックフロストが辿り着いたのは、今まで寝泊りをしていた横穴であった。ジャッ

クフロストは転ぶようにして中に入り、いくつものジャックフロストが描かれた壁の前に立つ。
「ヒホー……ヒホー……」
乱れた息のままジャックフロストは壁に両手を付けた。
「みんな……ごめんだホー……みんなを蘇らせるのは少し遅くなるかもしれないんだホー……」
ジャックフロストの瞳から涙がこぼれ始める。
「いろんなことが初めてだったホー、凄く楽しかったし、面白かったんだホー……オイラは王様にならなくちゃいけないのは分かっているんだホー。でも、でも……」
ジャックフロストは自分の中にある正直な気持ちを思いの丈を全て吐き出す。
「やっぱり、独りは寂しいんだホー！」
横穴の中でジャックフロストは赤子の様に泣き続けるのであった。

◇

「みんな、帰りの準備は出来た？」
リアスの確認に皆が完了の返事をする。決戦を明日に控え、それぞれが様々な思いを

内に込めていた。
　その中で一人、シンだけは先程から周囲をひっきりなしに見渡している。
「いたか、あいつ」
「いや」
　昨日の夜から姿を見せないジャックフロストの安否を心配しているシンや一誠たちであったが、明日のことを考えたのならば探す時間も無く、また居なくなったということはそれがジャックフロストの選択であると考えていた。
　別荘を後にし、山道を下っていこうとしたとき、脇の茂みががさがさと揺れ始め、中から飛び出すようにジャックフロストが現れた。
「ヒーホー！　置いてくなんて酷いホー！」
「あ、来た」
　ピクシーは突然現れたジャックフロストに目を丸くしていたが、すぐにいつもの悪戯っぽい笑みになる。
「どこにいってたのー！」
「ごめんだホー！　少し考え事をしてたんだホー！　引っ張っちゃダメホー！」
　ジャックフロストの頭に乗って帽子を引っ張るピクシー、それに必死に抵抗するジャックフロスト。それを見兼ねたシンがピクシーの首根っこを掴み上げる。

「ここに来たってことは、一緒についてくるんだな」
「色々考えたホー、オイラはやっぱり王様になりたいんだホー、でもオイラだけじゃ王様になる方法が思いつかないんだホー、だから――」
ジャックフロストの短い手がシンに差し出される。
「一緒に考えてくれるかホー」
「俺だけじゃないさ」
差し出されたジャックフロストの手をシンの手が握る。その手はひんやりとした感触であったが、不思議と暖かみが感じられた。
「ここにいる全員が一緒に考えてくれる」
ジャックフロストはオカルト研究部全員の顔を見渡す。そして――
「オイラ、ジャックフロスト！　今後ともよろしくホー！」

試合、開始

レーディングゲーム当日。シンはいつもの様に授業を受け、そしていつもの様に帰宅をする。しかし、これから数時間後には一人の存在の人生を賭けた戦いが始まろうとしていた。

シンは帰宅をするものの特にすることも思い浮かばず、ピクシー、ジャックフロストを連れて集合場所となる部室に赴いていた。合宿の帰りに仲魔になったジャックフロストは自分が最初に一緒についてくるように誘ったという理由からシンの家で預かっていた。シンはピクシー、ジャックフロストは置いていくつもりであったが、あまりに強く反発するため渋々ながらレーティングゲームの会場へと連れて行くこととなった。

事前にリアスから集合時間と好きな格好で来るように指示をされていたが、シンは特にこれといってする格好も思いつかず、無難に駒王学園の制服を纏っていた。

シンは壁に掛けてある時計を見ると時間は十時を少し回っていた。集合時間の二時間も前にやってきたという事実に、知らず知らずの内に自分が緊張をしているということを悟る。

しかし、そのシンの緊張をよそに連れてきた妖精二体は普段通りの様子で、シンが前

もって買っていたケーキを二人仲良く食べている。
「もーらい！」
「ヒホー！　取っちゃダメホー！」
　目の前でショートケーキのイチゴの取り合いをしているのを見ていると緊張が解れる所か萎えてしまい、ついさっきまでの自分が馬鹿らしくなってしまう。
　それから暫くして部室のドアが開く。
「あら、一番乗りだと思っていたけど早いのね」
「あらあら、間薙くんもやる気に満ちていますね」
　入ってきたのは、リアスと朱乃の二人。二人ともシンと同じく制服を着ていた。
「ヒホ！」
「やほー！」
「あら、その二人も連れてきたの？」
「あまりにうるさくて……」
「だって、家に居たってシンが居なかったら暇なんだもん」
「ヒホー！　仲魔外れは嫌だホー！」
　無邪気な様子のピクシーとジャックフロストにリアス、朱乃は微笑み、戦いの前という殺伐とした空気を浄化されているようであった。

「ふふふ、元気ね。あなたたちを見ていると癒やされるわ」
「うふふ、そうですね」
リアスはそのままソファーへと座り、朱乃はお茶の準備を始める。少しの時間が経った後、リアスと朱乃、そしてシンの分が注がれたティーカップがテーブルの上に置かれる。
「どうぞ」
「いただきます」
シンがカップに口を付けるとほぼ同じタイミングで部室のドアが開かれた。扉の前に立っていたのは木場であった。格好は制服であるが両腕には手甲、足には脛当て、そしてその手には鞘に入った一本の剣が握られていた。
「やあ、こんばんは。皆、早いですね」
物々しい格好をしている木場は既に既視感すら感じさせるような程見慣れた笑みを部室内にいる全員に向ける。
「こんばんは、木場くん。どうです？　木場くんもお茶でも」
「それじゃあ、お言葉に甘えて」
剣を壁に立て掛けると木場も皆に倣ってソファーへと座る。
「いよいよだね」

「ああ、そうだな」
「緊張はしているかい」
「ああ」
「あまりそうは見えないけど？」
　木場はシンの顔を眺める。そこにはいつもの無表情が張り付けられてあった。
「表面上は、な。あまり気分は落ち着いてはいない」
　未だシンの体内では、臓腑が下から押し上げられるかのような感覚が断片的に続いている。それは、時間が進むにつれて心なしか強くなっているようであった。
「おかげで集合時間より二時間も前に来てしまった」
「ふふふ、僕も同じだよ」
「あらあら、なら私たちも一緒ですね。ねえ、部長？」
　お茶を持ってきた朱乃がテーブルの上に置きながらリアスに話し掛ける。リアスは少しだけ照れた表情をしつつ、シン、木場から目線を逸らしながらぽつりと呟く。
「もう……言わないでよ、朱乃」
　普段、超然としている三人が揃って緊張をしているという事実を口にする。秘密の共有とは少し違うが、内にある感情を相手に見せるという行為によって、僅かながらこの場に居る全員の空気が和らいだ気がした。

「……こんばんは」
　そんな空気の中に現れる小猫。木場が部室に来てから数分後の到着である。この時点でまだ集合時間まで一時間半以上余っている状況である。格好は皆と同じく制服であったが、両手には拳を保護するためなのか、黒革のオープンフィンガーグローブが着けてあった。
「早いな、塔城」
「……みなさんこそ早過ぎです」
「こねこも緊張して早く来ちゃった？」
「ヒホ？　こねこちゃんもかホー？」
　イチゴの取り合いを止め、つい先程までシンたちの会話を真似て妖精二人組が悪気も無く直線的に尋ねる。この質問に小猫も一瞬言葉を詰まらせ、他のメンバーの顔を見た後にか細く小さな声で「……はい」とだけ言った。この時、珍しく小猫の無表情に照れや羞恥心が色濃く出ており頬が朱色になっていた。
「恥ずかしがるな、塔城。この時間で恥ずかしがるなら俺が恥知らずになってしまう」
　シンは小猫をフォローする様な言葉を言って、扉の前でいつまでも立っておらずソファーに座るよう促す。それに従って小猫がソファーへと座るとほぼ同時に、朱乃は小猫の前にティーカップを置く。

「……ありがとうございます」
「うふふ、大丈夫。みんなも小猫ちゃんと同じ気持ちですから」
小猫が置かれたお茶に口を付けると、しばしの間全員お茶を飲むことに意識を向けたせいか無言が続く。その中で相変わらずピクシーとジャックフロストはわいわいとはしゃいでいる。一応、これからなにをするかシンから伝えられているが、それでも皆の緊張した空気に感化されることなく普段通りでいる二人は、凄まじいまでに肝が据わっているか、ただ単にそういうことに対し鈍いだけであるかのどちらかである。シンの個人的な感想としては後者に属すると思っている。
皆がそれぞれに注がれたお茶を飲み終えると、各自各々のやり方で時間を過ごし始める。リアスと朱乃はそのままお茶会を継続し、木場は立て掛けていた剣を手に取り念入りに手入れを始める。小猫は一旦ソファーから離れるものの、何処からか持ってきた本を手に持って再びソファーへと座る。シンも特にすることもなかったので軽く腕を組み、目を閉じて瞑想の様な格好をしたまま微動だにしなくなった。
ピクシー、ジャックフロストはケーキを食べ終わると、暇を持て余したのか部室内をうろちょろし始める。ピクシーはリアスたちのお茶会に参加し、いつの間にか作られていたピクシー専用のティーカップにお茶を注がれ、朱乃に礼を言ってから飲み始める。
ジャックフロストは剣の手入れをする木場を興味深そうに見た後に本を読んでいる

小猫に近付き、本の内容についてあれこれ質問をしていた。その際、ちゃっかり小猫の膝の上に乗って読み聞かされている様な状態となっていたが、特に小猫の方も嫌がる素振りを見せず、ジャックフロストの質問にも言葉の数は少ないもののきちんと答えていた。

深夜十一時半。最後のメンバーが部室に現れる。

「こんばんはーっす！　ありゃ？　もしかして俺たちが最後ですか？」

「こんばんは！　あ、あの、もしかして私たち来るのが遅かったですか？」

部室に入って早々の一誠とアーシアの言葉。アーシアの方が皆がもう既に揃っているという事態に不安になったのか、恐る恐る尋ねる口調であった。

「そんなことはないわ。イッセーにアーシアも時間通りよ。ちょっと私たちが早く来過ぎただけ」

アーシアの不安を払拭させるようにリアスは優しげな話し方をする。

一誠、アーシアが来たことで部員全員が揃うと、シンは今まで閉じていた目を開け二人に視線を向ける。一誠の服装はやはりというべきか学園の制服であった。一方アーシアの方は制服では無く、シンが初めてアーシアとあったとき以来久方ぶりに見るシスターの格好であった。ただし、あのときとは違い、胸には悪魔に害を及ぼす十字架は下げてはいない。

「思ったより落ち着いているな」
「ん？　ああ、アーシアのことか？　アーシアは結構根性ある子だからな」
ソファーに座ろうとする一誠にシンが話し掛ける。アーシアのことを褒める一誠の横顔はシンから見て自分のことのように誇らしげであった。
「それもあるが、お前もだよ」
「へ？」
本番前ではあるが、シンには一誠が必要以上に緊張していない風に見えた。全く緊張が無いわけではないが一誠の一連の動作には無駄に力が入っておらず、日常を送っているかのように滑らかに動いている。シン自身余り自慢できるとは思っていないが、合宿の間嫌という程に相手の動きを見てきたからこその感想であった。
「そういうお前だって、緊張してる風には見えないぞ」
「面の皮が厚いだけだ」
軽い冗談で返すシン。あと十数分経てば戦いが始まるにしては些か軽い空気が部室内に流れていたが、シンはそれで良いと内心思う。焦り、緊張というものは本人が自覚しなくても他人に伝播していくものであるとシンは考えていた。スポーツのプロなどに於いて、緊張を楽しむことでより実力を発揮できるという話も聞くが、シンや他のメンバーはまだそれに至るまでの精神構造が出来上がっていない。

過度の焦りと緊張は自分の動きに制限を与える。ならば、開始直前までどんな形であれそういった空気を生み出さない空間が出来るならばそれにこしたことはなかった。
時計の針が進み、時刻は十一時五十分となる。
それを合図に部室内に描かれている魔法陣が輝きを放ち、その中から迎えの使者であるグレイフィアが姿を現した。
魔法陣から現れたグレイフィアが準備の確認をすると、準備が出来たことを示す為に皆が立ち上がる。ついでにピクシーとジャックフロストも一緒に。
「申し訳ありませんが、そちらの御二人は？」
「ただの見学者です」
当然起こるグレイフィアの質問にシンが何食わぬ顔でさらりと言う。しかし、シンの予想に反してグレイフィアの表情は若干険しいものとなった。
「念のために確認をさせて頂きます。そちらは希少種の妖精であるピクシー、もう片方は絶滅種の妖精であるジャックフロストで間違いないでしょうか？」
リアスや朱乃もジャックフロストが名乗るまで正体を知らなかったが、グレイフィアはあっさりとジャックフロストの存在に気付いた。
「そうですが……何か問題でも」
「あまり言いたくはありませんが、その御二人は常に目の届く場所に置いておくべきで

す。その妖精は悪魔にとっても価値があるものです。参戦者以外の方は魔法陣を移動すれば自動的に観覧席の方へと移動します……不名誉なことですがレーティングゲームの最中にさらわれる可能性も零ではございません」

あくまでグレイフィアは万が一の可能性を示しているものに過ぎない。だが、それはピクシー、ジャックフロストの身を案じた上で話していることをシンは理解していた。それでなければ態々悪魔の印象を悪くするような話を口にする必要も無く、ピクシーたちのことも口に出さず見て見ぬ振りをすればいいだけの話。少なくともグレイフィアの話を一笑することはシンには出来なかった。

どうしたものか、そう思いながらシンはピクシーとジャックフロストの方に目をやる。ピクシーとジャックフロストは共に置いていくなという共通した意志を宿した目でシンを見返す。

「どうにかならないのかしら」

「……無くはございません。今回の一戦は魔王ルシファー様も拝見されておられます。お嬢様の関係者ならば快く同じ場所で観戦することを引き受けて下さると思われます」

「お兄様が?……そう」

リアスとグレイフィアの短い会話の中で聞き捨てならないことが幾つかあった。グレイフィアの提案はよりにもよって悪魔のトップに子守紛いのことをさせようとする

こと、そして、その魔王を兄と呼ぶリアス。一誠も我が耳を疑った様子でリアスの兄のことについて呟くと、それを聞き間違いではないと木場が答え、駄目押しにリアスも肯定をする。

そのままの流れで木場がリアスと魔王ルシファーとの関係を説明する。元々個人名であった四大魔王の名は、大戦によってその名を持つ者が亡くなったことにより強大な力を持つ悪魔の肩書きへと変化した。そしてその中でルシファーの名を受け継いだのがリアスの兄であり『紅髪の魔王〈クリムゾン・サタン〉』と呼ばれる、元サーゼクス・グレモリーであり、現サーゼクス・ルシファーである。ルシファーの後を継いだために家督権はサーゼクスからリアスへと移り、リアスが家を継ぐ立場となった。凄まじく穿った見方をすれば今回のレーティングゲームの発端とも言えるであろう。

「シン、どうする?」

リアスはシンにグレイフィアの提案を受けるかどうか尋ねてくる。しかし、シンは答えずにピクシーとジャックフロストにグレイフィアの提案を受けるか聞く。シンはあくまで自分の意志では無くピクシーたちの意志を最優先するつもりであった。

「別にあたしはいいよ」

「ヒーホー!　魔王は悪魔の王様なんだホー!　オイラは会ってみたいホー!」

気が抜けそうになるほどあっさりと了承。むしろ魔王という存在に会うことを楽し

みにしている様子であった。
「だそうです」
「なら決まりね。お願いするわ、グレイフィア」
「かしこまりました。責任を持って預からせて頂きます」
恭しく頭を下げるグレイフィア。すると、魔法陣が再び輝きを放ち始め、今度は陣に描かれた文字が入れ替わるようにして別の文字へと変化する。
「そろそろ時間の様です。皆さま、魔法陣への移動をお願いします」
一同揃って魔法陣へと移動としたとき、あっ、と一誠が何か思い出したような声を洩らす。何事かと皆が一誠の方を見た。
「ああ……こんな土壇場ですみません、部長。もう一人の『僧侶』の人は来ないんですか？」
一誠が口にするまでシンもすっかりそのことを失念していた。リアスにはアーシア以外にもう一人『僧侶』がいる。しかし、一誠もシンもその存在には入部してから一度も会ったことが無い。合宿の際にも姿を見せなかった為、完全にその存在について忘れ去っていた。
以前、リアスにその人物について尋ねたところ、諸事情の為に姿を見せないと言っていたが、主であるリアスの将来を賭けた戦いにも姿を見せないことに少々疑問に感じず

にはいられない。
　その人物について知っているリアスたちの態度は微妙なものであった。分かっているが呼び寄せる訳にはいかない、そういったあえて見て見ぬ振りをしていたという反応。
「もう一名の『僧侶』はこの戦いには出ないわ。そのことについてはいずれ説明するわ」
　如何にも訳ありといった感じの口振りであったが、どちらにせよもう呼び寄せる時間は無い。一誠の方も深くは追及せず、分かりましたと頭を軽く下げて大人しく下がる。
「よろしいですか？」
　改めて準備の確認をするグレイフィア。それに応じて皆が少し早足で魔法陣の中へと入っていく。
「それでは参ります」
　魔法陣から強い魔力の光が溢れ出し、シンたちを戦いの場へと誘う。

◇

「あれ？」
「ヒホ？」

光が消え、あたりを見回したピクシーとジャックフロストの一声。そこは豪華絢爛とした装飾が施された見知らぬ場所。先程まで一緒に居たシンやリアスたちの姿はそこには無い。
「ほう、その二人がリアスの協力者の眷属か？」
二人が声の方へと目を向けると、そこには重厚な鎧を身に纏った、リアスと同じ真紅の髪を持つ見目麗しい青年が立っている。
「んー？　もしかしてキミがリアスのお兄さん？」
「ヒホ！　悪魔の王様なんだホー！」
もし、他の悪魔がこの場に居たのならば卒倒し兼ねない程に軽く、馴れ馴れしいと言える言動。事前に説明を受けて目の前の存在が如何程の実力を秘め、ピクシー、ジャックフロストなど一秒も掛からず塵と化せる差があるのかを知っていてのこの態度。
「ははは、無邪気かつ元気な子達だ。キミたちの主が少々羨ましい」
気分を害した様子も無く、逆に上機嫌といった様子で笑いながら二人を見る。
「あとね、あたしたちシンの眷属じゃないよ」
「そうだホー、オイラ達はシンの『仲魔』だホー」
「成程、それは失敬した。ふむ、『仲魔』か――悪くない響きだ」
独り頷く魔王ことサーゼクス。他にも何かを聞こうとするが、口を開いた瞬間に頭部

でも殴られたかの様に顔を僅かに顰める。
「キミたちとはもう少し話をしてみたいが、グレイフィアが急かすのでな。話の続きは場所を移してからにしよう。ついてきたまえ」
先導の為に先を歩くサーゼクスの後ろをちょこちょことついていく二人。目的の場所に着いたサーゼクスは足を止め、それに合わせてピクシーとジャックフロストも止まる。
そこには金の装飾に幾つもの宝石が散りばめられた派手な見た目の玉座、そしてその前方にはリアスたちとライザーたちの現状を映し出した映像が宙に投影されていた。
「あ、シンたちだ」
「ヒホ？　あそこは部室じゃないのかホ？　シンたちはまだこっちに来ていないのかホ？」
「いや、彼らはこちらへとちゃんと来ている。今回の戦いの舞台はリアスの通う『駒王学園』を参考にして造ったレプリカだ」
ジャックフロストの素朴な疑問にもきちんと応じるサーゼクス。魔王という肩書を持つ者とは思えない親しみ易さであった。
「ああ、もうそろそろゲームが始まる時間のようだ」
サーゼクスは玉座へと座り、ピクシーたちの方を見る。

「すぐにキミたちの席も用意しよう。少し待っていてくれないか？」
「オイラはここでいいホー」
「じゃあ、あたしはこっち」
　ジャックフロストは座っているサーゼクスの膝の上に座り、ピクシーはサーゼクスの肩に腰を下ろす。この光景を他の悪魔に見られた瞬間には二人ともその場で処刑されていてもおかしくは無いほどの態度。だが、サーゼクスは少し驚いた顔をしたもののすぐに表情を綻ばせ、その状態で観戦をする姿勢となる。
「そういえば、あのグレイフィアって女の人はここにはいないの？」
「彼女は今回のゲームの審判役なのでね。共にリアスの奮闘を見たかったが仕方あるまい。もう一人連れてきてはいるが少し離れた場所で見ている。頼れるが少々頭が固いせいか、自分がいると私に悪い噂が立つかもしれないと言ってこちらの言うことを中々聞こうとはしない」
　軽く肩を竦ませるサーゼクスの姿にピクシーはくすくすと笑う。すると宙に浮かぶ映像の中からグレイフィアの声が聞こえてきた。グレイフィアは校内放送を利用し、リアス陣営とライザー陣営にゲームを行う場所、基本ルールを一通り説明をする。
　その説明の中、ジャックフロストは何を思ったかサーゼクスの衣服の一部を引っ張り、自分の方に意識を向けさせる。

「どうかしたかい、雪の精くん」
「オイラ王様に会ったら聞いてみたいことがあったんだホー！　聞いていいホ？」
「構わないよ」
「どうやったら王様になれるんだホー？」
「王にか……ふむ、難しい質問だ」
「もう、誰彼構わず聞き過ぎじゃない？」
「しょうがないホー！　オイラも王様になりたいんだホー！」
　短い距離でぎゃあぎゃあと言い争いを始める二人。しかし、サーゼクスはそれを咎めることはせず、顎に手を当て真剣な表情でジャックフロストへの答えを考えている。
「すまない、質問を質問で返してしまうがキミは何故王様になりたいんだい？」
「ヒーホー！　オイラが王様になればジャックフロストたちを生み出すことが出来るんだホー！　そしてみんなと遊ぶんだホー！」
「――ああ、そうか。すまない、軽率な質問だった」
「大丈夫だホ。少しさみしいけど、今は前よりもさみしくはないホー」
「そうだよね、きっと前だったらメソメソ泣いてたもんね」
「泣かないホ！　オイラは泣き虫じゃないんだホー！」
「はいはい」

再び言い争う二人であったが、サーゼクスは微笑み、二人の頭を実の子に接するかのように優しく撫でる。
「雪の子くん。さっきの質問の答えなんだが――」
「ヒホ！　どうやったらなれるんだホ！」
「キミの中にある想いを決して忘れないでくれ。そして、王様になってからもずっとそれを持ち続けて欲しい」
「ヒーホー？　それだけでなれるんだホ？」
首を傾げるジャックフロストにサーゼクスは優しく微笑みかける。
「簡単なようでとても難しいことさ。――大丈夫だ、キミには王になれる素質がある」
三人の前に浮かぶ映像の中からチャイムの音が聞こえる。それはレーティングゲームの開始を告げる合図であった。

◇

シンの耳にゲームの開始を告げるチャイムの音が入ってくる。この場にいないピクシーとジャックフロストのことが気がかりであったが、一先ずの間開始されたゲームの方に意識を集中させることを選ぶ。

木場がテーブルの上に学校の全体図を広げ、朱乃も数枚の写真を机に置いた。全体図にはマスの区切りと縦横には数字と英文字が描かれチェス盤に見立てた風になっており、写真の方には見覚えのある人物が映っており、写真の隅には与えられた特性を示す為にチェスの駒が描かれている。

ライザーとの眷属たちとは一度顔を会わせているが、場所と状況のせいで余り容姿の方を覚えていない為、改めて見直す。

写真には写るのは、フード付きのローブを目深に被ってあまり顔の見えない『女王』の女性、全身に鎧を着こんだ女性、それと対称的に軽装で固め大剣を背負った『騎士』の女性二人、一誠と一戦交える寸前となったミラと呼ばれていた少女、容姿の幼い双子の少女に頭に犬か猫の耳を生やした少女が二人、大人びた容姿の女性二人に薄い布の様な服装の女性、それら全員が『兵士』。どういった理由でつけているのかは分からないが顔半分に仮面を付けた女性とチャイナドレスを纏った二人の女性は『戦車』。着物を着た日本人と思える容姿をした少女に金髪で西欧のお嬢様といった出で立ちの少女は二人とも『僧侶』。

まじまじと写真を見ているとライザーという悪魔の広い趣味が露骨なまでに浮き上がってくる。およそ大半の人はこの眷属の一覧を見て、主が女好きであることを悟るのは間違いなかった。

ちなみにシンは今回のレーティングゲームでは仮の駒として『戦車』の役割を与えられていた。何らかの駒が当てられていないと不便であるという理由からであり、特にシンも不満に思うことも無くそれを事前に承諾していた。

シンは写真に目を通しながらも耳ではリアスたちの会話を聞いている。リアスたちの本陣である旧校舎のオカルト研究部部室からライザーの本陣である新校舎の生徒会室に行くにはどうするか、主にリアスと木場、朱乃が中心となって戦略を立てていた。自分でも戦うことしか役割が無いと自覚しているシンは口を挟むことなく、ただ三人の話を一字一句聞き逃さない様に頭へと叩き込んでいく。

最初にやるべきことは決まり、木場と小猫はライザーの眷属たちの足止めをする為の罠を設置に、朱乃も同じく足止めの為に大掛かりな幻術を張る為に部室の外へと行く。部室に残ったのはリアス、一誠、アーシアとシンの四人。

何かをしたいという気持ちがあったが、現状のシンでは特にするべきことも無く何とも歯痒い気持ちのまま部室内で待機をする。

するとリアスが一誠を手招きし、自分の太腿の上に横になるように指示をする。それを聞いた一誠は落雷でも受けたかのような反応を見せた後に、錆びついた機械の様にぎこちない動きでリアスの下に移動をしていく。そんな一誠を見た後にシンは横目でアーシアの方を見る。そこには案の定、頬を膨らませて嫉妬の表情をするアーシアの姿

があった。
シンはさりげなくアーシアに近づく。
「今度やってみたらどうだ？」
「ええっ！　その、私……」
「――多分、あれぐらいの反応はしてくれる筈だ」
シンが指差す方向にはリアスの膝枕の上で感涙を流す一誠の姿。素直に感情を示すことは別に悪いことではないが、その極端な反応にはシンも内心では呆れていた。
リアスは一誠を膝枕した状態で一誠の頭を撫でたとき、一誠の纏う魔力が高まったのをシンは感じた。一誠本人も自分の体の変化を感じ戸惑った視線をリアスに向けるが、安心させる様にリアスは一誠の頭を撫でたまま、『兵士』の駒に施されていた封印を解いたと告げる。
その言葉に一誠は訝しげな表情となる一誠にリアスは丁寧に封印を施していた理由を説明し始める。一誠が『神滅器』を持っていた為、悪魔に転生するのに『兵士』の駒を八つ消費する必要があったが、ただの人間が八つも『悪魔の駒』を用いて転生することに危険性を感じていたリアスは駒の力を押さえた状態で一誠を転生させた。
結果としてはリアスの判断は正しいものであった。悲しいことに一誠という元人間は、悪魔としての素質が全く無いというのが後日分かったからである。もし通常の駒で

転生をさせた場合、転生した瞬間に一誠という悪魔は消滅していた。その封印を解放したということは、一誠の悪魔としての器が少し成長したという証拠である。
「部長！　俺、絶対に部長を勝たせてみせます！」
「ええ、期待しているわ。私の可愛いイッセー」
戦意を高揚させ、新たに勝利を決意する一誠とそれに微笑んで応じるリアス。この部分だけを切り出せば絵になる光景ではあるが、シンの横で既に涙目になって嫉妬しているアーシアの存在が、少なくともシンの視点からそれらを締まらないものとする。
このまま放っておくことも出来ず、シンは周囲に聞こえないぐらい小さな溜息を吐くといまだ膝枕をされている一誠に近寄る。
「ちょっといいか」
「何だよ、人が英気を養ってる最中に」
「話がある」
「話……まさか……！　この場所を譲れと言うつもりか！」
「違う」
縄張りを荒らされた肉食獣の様な目で見る一誠に即答で否定する。
「――アーシアが膝枕してくれるらしいぞ」
「えっ」

「ええ！」
　リアスの膝に頭を乗せたまま一誠は器用に首を動かしてアーシアの方に目を向ける。アーシアの方もシンの突然の言葉に赤面し、あたふたし始めていた。
「ま、マジか！　アーシア！」
「ええ……その……イッセーさんが良ければ……」
　恥ずかしさを押し込め、消え入りそうな声で了承の意志を示すアーシアに一誠は上体を起こす――かに思われたが、リアスの膝枕にも未練があるのか、頭は膝に乗せた状態で首から下が持ち上がった不気味な体勢となる。
「くっ……部長の膝枕……だが、アーシアの膝枕……！　俺は、俺は……！」
　一誠は血管が千切れそうな苦悶の表情で真剣に頭を悩ます。究極の二択を突き付けられ迷うその姿は滑稽、不気味、というよりもシュールといっていいものであった。
　シンは本日二度目となる小さな溜息を吐く。その溜息はどちらの膝枕にしようか悩む一誠の姿――にでは無く、戦いの最中に態々他人の恋路の手伝いなどをする自分にであった。
（我ながら緊張感が無いな）
　苦悩する一誠の姿を見て、あれと自分に差はないと思いながらシンは三度目の溜息を吐くのであった。

◇

体育館の裏側。そこに一誠、シン、小猫が息を潜ませて近づいていた。目的は体育館の奪取及び新校舎への道の確保の為である。

ここに来る途中に既に木場と別れ、朱乃、アーシアは本陣でリアスと共に待機をしている。シン個人としては戦力を均等にする為に木場と行動する考えもあったが、シンの速度と木場の速度では明らかな差が有り結論としては断念。大人しく体育館の占領を指示された一誠と小猫の手助けをするということとなった。

シンが裏口のドアノブを回し一歩中に入った瞬間、肌を差すような気配が中から漂ってくる。合宿の成果か、あるいは緊張のせいでやや神経質になっている為か、その気配を感じたと同時に頭の中に四人という数字が浮かぶ。

「――いるぞ」

二人にしか聞こえない程の抑えた声で敵の存在を告げると一誠、小猫の顔が引き締まる。

リアスから事前に敵もここに配置をしていると推測をしていたが、その考えは的中していた。

「……どうしますか？」
「どうせ戦うんだから先手必勝！　――ってのは駄目か？」
「あまり時間も掛けられない。単純だがそれで行くか」
一誠の考えにシンは賛同し、小猫も特に異論を唱えることは無かった。
「よし！　行くぞ！」
掛け声と共に一誠が『赤龍帝の籠手』を顕在させ先陣を走る、その後にシンと小猫も続く。一気に演壇まで駆け抜け、演壇から体育館内にあるコートへと降りようとしたとき、そこに敵はいた。
「来たわね、グレモリーの下僕さんたち！」
コート内に居たのはシンが思い浮かんだ数字の通り四人。チャイナドレスを着た『戦車』にミラと呼ばれていた『兵士』と双子の『兵士』。
「……イッセー先輩と間薙先輩は『兵士』をお願いします。私は『戦車』を押さえます」
「ああ！」
「分かった」
演壇から降りると小猫は一直線に敵の『戦車』へと向かって行く。相手もシンたちと同じ考えなのか、『戦車』は構えて小猫を迎撃する姿勢となり、他の『兵士』は小猫を無視してシンたちに迫る。

『Ｂｏｏｓｔ！』

戦いの始まりを合図するかの様に一誠の『赤龍帝の籠手』から倍加が告げられる。それと同時に耳障りな音がシンたちの鼓膜を震わす、見るといつの間にか双子の手にはチェーンソーが握られており、激しいエンジン音を唸らせて迫ってきている。

『解体しまーす！』

物騒な宣言と共に双子は分かれて一誠とシンにチェーンソーを振り下ろす。だが、その速度は合宿で何度も見せられた木場の剣速に比べれば遥かに遅い。

一誠は身を捩じらせてその攻撃を躱すが、シンは逆に前へと踏み込んで右腕を突き出す。シンの右手首が双子の片割れのチェーンソーを握る手に押し当てる形となって攻撃を未然に防ぐ。だが、それでもチェーンソーの視覚的な威圧感は拭い消えるものではなく、防いだシンの背中には冷たい汗が流れていた。

「あー、もう！」

上手く攻撃を決められなかった双子の片方が苛立った声を出してシンとの距離を開けようとするが、それよりも早くシンの左手が胸倉を掴む。

「あ」

その先を言う前にシンは双子の片方の足を払う。瞬く間も無いシンの行動に事態についていけないのか呆けた顔をしていたが、それをまじまじと見る間も無くシンはもう

片方の双子へと投げ飛ばす。
「避けてー！」
「えっ？　きゃあ！」
双子同士が衝突し地面へと倒れ込む。シンは持った武器による同士討ちも狙っていたが、相手の方も上手い具合に体勢を変えて最悪の事態は避けていた。だが、そのせいで無理な体勢になってしまったせいか双子はすぐに立ち上がることはできない。
その隙を逃さず一誠が追い打ちを掛けようとするが、そうはさせまいとミラの棍が一誠に振るわれた。しかし、一誠も特訓成果を発揮し棍の間合いに入る前に床を踏みしめて急停止、棍はその風圧で一誠の前髪を微かに乱す程度であった。一誠も避けられたと分かると前へと踏み出し左手を突き出すが、ミラの方もそれに反応し後方へと下がる。一誠の反撃はミラに指先が触れる程度で終わってしまった。
『Ｂｏｏｓｔ！』
二度目の倍加が完了した合図。一誠は追撃してくるミラの棍が何処を狙っているのかを視認し、その場所に左手を翳す。
響く衝突音。その音の後にあったものはミラの棍を掴み、動きを止めている一誠であった。
「むっ！」

最初に対峙したときは微動だに出来なかった一誠が、相手の動きを完全に見切り、なおかつ受け止める。それは、一誠の成長を確かのものとする場面であった。
「しっかり掴んでいろ」
「お前もしくじるなよ！」
横から現れたシンの言葉に一誠は軽口で返し、棍を握る手に更なる力を加える。シンも右拳を強く握りしめると、それに呼応し浮かびあがる紋様の蛍光が更に輝きを増す。気合いの声も無く無言で拳を棍へと振り降ろす。静かな動作から入ったにも関わらず、拳が触れたと同時に棍は二つに砕け、破片が当たりに散っていく。
「っ痛！」
戦う者としてのプライドか最後まで棍を手放さなかったミラであったが、拳の威力は棍を通じてミラにも伝わり、棍を握っていた手が細かく震え、直ぐに戦える状態ではない。
「くっ！」
別の方向からも女性の痛みに耐える声が聞こえる。声の方ではチャイナドレスの女性が片膝を着き、荒い息を吐いている。その女性の両腕にはいくつか青痣が出来ていた。それを造った小猫も表情は変わらないものの衣服が何箇所か裂かれており、その下から下着が露わになっているが傷などは無い。

「もう！　よくもやったわね！」
「絶対、ぜーったい！　バラバラにしてやる！」
苛立ちを露わにして双子が再度チェーンソーを振りかざす。
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』
「よっしゃあ！　いくぜ！」
三度目の倍加を告げられると一誠は力の倍増を一旦止め、その状態を維持する。これにより積み重なっていく負担を抑え、しばらくの間能力が数倍に上昇した状態で戦うことが出来る。
一誠が床を蹴りつける。それによって前に踏み込むがその速度は双子の数段早い。難なく双子の片方の懐に入り込むと一誠はチェーンソーを握る手に手刀を当てる。
「ううー！」
倍増した一誠の手刀の威力は一瞬にしてチェーンソーを握る手から握力を奪い、床へとチェーンソーを落とさせてしまう。床に落ちたチェーンソーは床板を抉りながら不規則な動きをしていたが、すぐにその動きを止めて沈黙する。
片割れを傷付けられたことに怒りを燃やすもう片方の双子が、一誠の背後から胴体に向けて横薙ぎにチェーンソーを払う。一誠はそれを避けようとする気配を見せない。
グァンという音と共にチェーンソーを持っていた手が上に跳ね上がる。

「ああ！」
動揺する双子の目に入ったのは自分のチェーンソーを下から蹴り上げたシンの姿であった。一誠から一歩遅れて距離を詰めたシンは、横薙ぎに振るわれるチェーンソーに躊躇うことなく右足を振り上げ、刃が高速回転するチェーンソーのガイドバーを蹴り上げた。それは、並みの人間には出来ない決断と精神である。
シンのサポートを見越していた一誠は素早く背後へ振り向くと掌打を繰り出す。それは双子の肩へと当たり、後方の床へと倒れ込ませた。
それを見た一誠の顔に笑みが浮かぶ。その笑みは合宿中、シンが何度か見た善からぬ笑みである。シンの直感がこれから起きることに警鐘を鳴らす。
「ふふふ、準備は整った！　くらえ！　俺の新必殺技！」
一誠が高々と左腕を掲げる。
「『洋服破壊〈ドレス・ブレイク〉ッ！』」
体育館に良く響く程の音量で一誠が指を鳴らした瞬間、シンの思考は戦闘中では有るまじきことではあるが完全に停止した。しかし、それは無理も無いことであった。何故なら一誠が指を鳴らしたと同時に双子とミラの衣服が下着も残さずに弾けて消え、裸体を堂々と晒すという事態になったからだ。
刹那の間の後に体育館に響く少女たちの羞恥心に染まった悲鳴。服を消し去った本

人はそれを見て満足そうな笑みで鼻血を流し、高らかに自らの能力を説明し始める。
『洋服破壊』。一誠が元々低い魔力を如何にして上手く活用するかという考えの回答であり、ひたすら頭の中で女性を裸にする妄想を延々とし続けて出来るようになった努力と煩悩の結晶。
その説明を側から聞いていたシンは完全に引いていた。あの合宿で延々とそんなことを考え続けられる執念。そして、それを妄想で終わらせずきちんと形にする努力。凄いとは思うが何一つ尊敬できない。
(凄まじいを通り越して恐ろしい奴だ……)
このときシンは初めて一誠に恐怖に近い感情を覚える。
「お前のサポートで上手くいったぜ!」
一誠がシンの方を向き、達成感に満ちた表情で親指を立ててシンを労う。それに対するシンの返答は――
「済まないが気安く話しかけないでくれ。――仲間だと思われる」
「えっ!」
「……私にもあまり話しかけないでくださいね」
「小猫ちゃんも!」

撃破、乱闘

「最低！　女の敵！　変態！　変質者！」
「ケダモノ！　欲望の権化！　煩悩の化身！　淫乱悪魔！」
裸に剥かれた被害者が加害者に向かって容赦ない罵倒を繰り返し続ける。当の本人はその言葉を受け止め、それでも満足仕切った顔をしているが、この場に居る仲間二人からは、罵倒は無いものの冷たい視線を向けられていた。
そのとき耳に直接リアスの声が入ってくる。それは戦う前に全員に配られた通信機からの音声であった。
安否を確認するリアスに一誠が代表して無事であると伝え、戦況もこちらが有利であることも報告する。
双子とミラの『兵士』は全裸にされ羞恥心からその場を動くことが出来ずにおり、小猫と戦っていたチャイナドレスの『戦車』は腹部を押さえて蹲った状態でこちらを睨みつけているが、あくまでそれが虚勢であることが見て取れる。
一誠の報告に満足したリアスは準備が整ったと告げる。それは一誠たちがこの体育館に向かう前に言われた本当の作戦に移ることへの指示。

満足に行動できないライザー達の眷属を尻目に一誠たちは体育館の出口を目指す。
「逃げる気！――っきゃあ！」
一誠たちの行動の意図が掴めず、驚愕した表情の少女たちにシンは駄目押しの『氷の息』を吹きかける。万が一の可能性で追ってくる危険がある為、相手の行動を未然に防ぐ為の措置であった。
「容赦ねえな」
「そういう性格なんでな」
シンの追い討ちに呆れた顔をする一誠であったが、シン本人はさらりと流す。
三人が体育館から飛び出した時、一瞬の空白の後大気を震わすほどの凄音が鳴り、視界を白一色に染める閃光が放たれ、体育館が光に飲み込まれたかと思った次のときには黒く焼け焦げ、廃墟と化していた。
「撃破〈テイク〉」
一誠たちの作戦の成功を告げる声が頭上から降り注ぐ。そこには黒い翼で宙に浮いている朱乃の姿があった。
リアスから事前に告げられていた作戦、それは重要拠点の奪取と見せかけての敵の撃破であった。体育館は今回のゲームに於いて旧校舎と新校舎を繋ぐ無視できない場所であることは全体図を広げたときから把握をしていた。当然、ライザー側もそのことに

気付くことを予測し、その逆手を取ってこの場所諸共撃破するというかなりの強硬策であった。それに必要なのは場所の破壊まで威力を高める時間と相手の足止めである。それの役割を担ったのが一誠たちであった。相手も約半数の人員を割いてきたことで下手に疑うことなくこちらの思惑通りに動いてくれた。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』三名、『戦車』一名、リタイヤ』

審判役であるグレイフィアが相手の脱落を告げる。体育館一つ廃墟にする雷をその身に受けて無事でいられることは無理であったらしい。

『雷の巫女』。その異名を遺憾なく発揮した朱乃の姿に、一誠は唖然とした表情で廃墟となった体育館を見ていた。その後、微笑む朱乃に笑みを返していたが、シンから見てその笑顔は若干引き攣ったものとなっていた。

何はともあれ無事作戦が成功し、相手を四体も撃破したことは喜ばしいものであり、一誠は喜びを分かち合おうと小猫の肩を叩こうとする。しかし――

「……なあ、間薙。なんで俺の手を掴むんだ」

「つい、反射的にな」

一誠の手が小猫の肩に降ろされる前に、シンの手がしっかりと一誠の手首を掴む。

「……ありがとうございます、間薙先輩」

「なんでお礼を言うの！　使わないから！　俺は絶対に味方に使わないから！」

小猫の冷たい態度に必死の形相で例の技を使う意思はないことを示すが、小猫の表情は変わらない。やはりというべきか敵であろうと同性を全裸にするという技は、小猫にとって許容できるものではないらしく、そのせいか小猫は一誠から距離をとる。

通信機越しにリアスの声が聞こえてくる。それは作戦成功の労いと現在の状況の確認であった。

それを聞きながらシンはあることに気付く。自分でも場違いな考えであると自覚をしつつ、小猫の方へと足を進める。

相手の『戦車』との戦いで制服が所々裂け下着が見え隠れする小猫、少なくとも年頃の少女がする格好では無い。

無視すればいいことだが、一度気になり出すと口に出して言わなければならないという焦燥感に似たものがシンの中で燻り始め、気付けば行動を起こしていた。

「塔城」

こちらに背を向ける格好となっていた小猫に声を掛ける。

「……はい？」

歩む足を止め、シンの声に反応し振り向いた瞬間――小猫のすぐ背後で紅蓮の火柱と聴覚が一時的に麻痺する程の爆音が起こる。

突然の出来事に一誠は音の方へと振り向いて驚愕し、シンの方もその爆発に僅かの間

硬直してしまう。この場で一番早く危機に対して反応したのは、爆発のすぐ側にいた小猫であった。

爆風で前のめりになるも小猫はすぐさま敵の存在が近くにいると推測し、倒れそうになる体を無理矢理立て直して前に走り出し、硬直しているシンの手を掴んで逸早く爆発付近から離れる。

「……間薙先輩！」

「――分かった」

小猫の言葉に含まれた意図を察し、シンは体育館で吐き出したときとは違い、限界まで空気を吸い込むと周囲全てが白一色となる程の広範囲に『氷の息』を吐き出す。

敵への目くらましで放った『氷の息』はシンたちの思惑通りとなり、二度目の爆発は起こらない。小猫も視界が遮られている状態であるが匂いで一誠の位置を把握すると、そこまで全速力で駆け、白い靄の中で忙しなく周囲を見回している一誠を見つけると、空いた方の腕でラリアットでも喰らわすかのように一誠の首に引っ掛ける。カエルが潰れたかのようなグエッという一誠の声が聞こえたが、小猫は構う事無くそのまま引きずっていく。

『イッセーくん、間薙くん、小猫ちゃん聞こえますか』

通信機から朱乃の声が聞こえてくる。

「姫島先輩ですか、今俺たちは攻撃を――」
『分かっています。仕掛けたのは相手の『女王』です――今、目の前に居ますから』
危うく聞き流してしまう程、さりげない口調で敵と相対していることを告げる朱乃に、少しの間言葉を失ってしまう。
「姫島先輩」
『ここからは私の仕事です。皆さんは祐斗くんの下に向かってください。彼女は私がここで足止めします』
その言葉の直後、寒気を感じる程の二つの魔力が場を支配し、白い靄の向こう側で腹の奥底まで届きそうな爆音と雷音が鳴り響く。それは二人の『女王』が交戦状態に入ったことを示していた。
「あ、けの、さん」
喉の絞まった状態の一誠が必死になって朱乃の名を呼ぶ。
『大丈夫です。皆さんも頑張って下さいね』
戦っている最中だというのに朱乃は穏やかな声で、こちらを安心させる為の言葉を残す。
一誠は悔しそうに顔を顰め、小猫は無言であったがシンの手首を掴む手に無意識に力が入る。シンもこの場に居ても何の役に立てることが無いと自覚しつつ唇を噛み、その

無力感を心の奥底へと沈める。
「……行きます」
小猫は二人にそう告げると靄の中、走る速度を速める。向かう先は木場のいる運動場、そこに一秒でも早く辿り着くことが、朱乃に対する数少ない自分たちの出来ることであった。

◇

爆炎と雷。その二つの力が空中で衝突し、互いの威力で掻き消し合う。
「ふふふ、運悪く『戦車』は取り逃してしまったけど、それの穴埋めが出来る獲物が掛かってくれて良かったわ『雷の巫女』さん。あなたの噂は聞いているわ、だからこそあなたと戦って見たかった」
「あらあら、私も知らないうちに有名人になったみたいですね、ユーベルーナさん。それとも『爆弾王妃〈ボム・クイーン〉』と呼んだ方が良かったかしら？」
ライザー側の『女王』ユーベルーナは朱乃が異名を口にすると、微かにではあるがその表情に不快感を混ぜる。
「二つ名なんて自分で名乗る訳にもいかないから、一度付けられると撤回するのが大変

ね。あなたが口にした二つ名、正直私は好きじゃないわ。センスを感じられない」

ユーベルーナは軽く指を鳴らす。すると朱乃の周囲に無数の魔法陣が浮かび上がる。

「尤も、爆発は嫌いじゃないのだけれどね」

宙に描かれた魔法陣が赤く発光し、そこから紅蓮の爆炎が噴き出す――かと思えた瞬間、魔法陣の変化を事前に察知した朱乃が手を一振りする。すると手の軌道の後に青白く光る球体が発生、そこから周囲の魔法陣に向かって幾つもの稲妻が放たれ、魔法陣を砕く。

続けて朱乃は頭上へと手を掲げると、その手から数本の雷が空に向かって放たれる。それを見たユーベルーナは表情を険しくすると両手を広げ、自分を包み込む魔力の膜をそこから発生させる。膜がユーベルーナを包み込むと一秒も間も無い間隔でルーベルーナの頭上に雷が降り注ぐ。

最初の雷でユーベルーナを守る魔力の膜が激しく揺さぶられるが、その雷はユーベルーナには届かなかった。だが、最初の一発目のすぐ後に容赦なく二本目の雷が降り注ぐ。それは魔力の膜に罅を造りすぐに消えたが、間髪入れずに三本目の雷が降る。

これ以上防御することに危険性を感じたユーベルーナは少しでも雷に脅威から逃れる為に移動しようとするが、移動した場所をあらかじめ知っていたかの様に四発目の雷が魔力の膜に直撃し、膜を砕く。

咄嗟に空中で身を捩り回避しようとするが僅かに避けるタイミングが遅く、降り立つ雷はユーベルーナの左手をかすり、そこから電撃が浸透しユーベルーナの体内を蹂躙する。雷の強烈な電力はユーベルーナの肉体を焦しローブ越しに白煙を上げさせる。掠っただけの左手の被害は特に酷く、炭化している箇所すらあった。

「くうっ！」

苦痛を帯びたユーベルーナの声。朱乃の雷の威力は彼女の想像を上回るものであったらしく、鋭い目つきで朱乃を睨みつける。しかし、そんな敵意に満ちた視線を受けても朱乃は柳に風といった感じでいつもの笑顔で受け流していた。

「……流石、『雷の巫女』。噂に違わぬ威力ね」

「あらあら、ありがとうございます。それで、まだ続けます？　続けるなら私は全く構いませんが」

見せつける様に掌から青白い雷を見せつける朱乃。しかし、ユーベルーナはそれに恐れる様子も無く、むしろ朱乃の態度を鼻で笑う。

「まだ、勝ちを確信するには早計過ぎない？　『雷の巫女』さん」

そう言ってユーベルーナは右手の袖の下から小瓶を取り出すと、自分の頭上で握り潰し、その中から零れ落ちる透明な液体をその身に浴びる。すると液体に触れた箇所の怪我が瞬く間に塞がり始め、一番怪我の大きかった左手もまるで怪我など最初から無かっ

たかの様に治り、白く滑らかな肌を朱乃に見せつける。
「……フェニックスの涙ですか」
「ふふふ、そうよ。これで振り出しに戻ったわね」
笑顔を潜め、苦い物でも噛み潰した様な表情となる朱乃。
フェニックスの涙。それは伝承の中で不死鳥の涙がいかなる傷も治すという記述があるように、どんな傷もすぐに癒す最高峰の治療薬。
与えた傷が全快するという事態も想定の内という考えはあったが、実際に目の前で行われると、その精神的負担は朱乃の想像を上回るものであった。ましてや朱乃は先程の大規模な魔術を使用した為、ユーベルーナには悟られない様にしているものの、肉体的にも余裕は無い状態であった。
「それにしてもやるわね。私の障壁を力押しで破るなんて、ライザー様以来だわ」
「あらあら、お褒め頂き光栄ですわ」
ユーベルーナの言葉に朱乃は笑顔で礼を言う。しかし、その笑みには華やかさの裏に相手への敵対心を潜ませ、見る者に威圧感を与えるものであった。
「その齢で本当に見事だわ。……流石、混血であるけれど血筋が良いだけのことはあるわね」
その言葉に朱乃の笑顔は瞬時に凍り付き、そして剥がれ落ちる。笑みの下から現れた

のは朱乃という人物を知っていたのならば別人かと錯覚する程、感情を排した能面の様な表情であった。

「――いま、何て言いました？」

「あら、聞こえなかったのかしら？　ならもう一度、今度は丁寧に言ってあげましょう。混血であるけれど素晴らしい力ね。流石はバラ――」

言葉を言い終える前に朱乃の全身から夥しい程の電光が奔り、空間を青白い光で染めていく。

「ふふふ、あなたはもっと冷静そうだと思っていたけど意外と青いのね」

「私の前でその名を出すなぁ！」

オカルト研究部のメンバー誰もが聞いたことが無い朱乃の激昂の叫び。ユーベルーナの頭上まで飛翔すると雷が発光する両手を重ね合わせ、嘲笑を浮かべるユーベルーナに突き出す。

「本当に青い」

全てを飲み込む程の巨大な光の柱と化した雷がユーベルーナの体を掻き消し、それでも威力を衰えさせることなく地面を穿つ。体育館を消し去ったのと同等以上の雷を受けた地面はその衝撃で土砂を巻き上げ、大きく、深いクレーターを造られ数え切れないほどの亀裂を刻みつけられる。

巻き上がった土砂が砂埃となって視界が悪くなった空中で、朱乃は肩で息をしていた。その顔は疲労の色が濃く出ており、汗も滝の様に流れている。只でさえ消耗していた体を酷使し、限界ギリギリまで魔力を振り絞った朱乃。今、空中で飛んでいることも辛うじてといった状況であった。

「……はぁ、はぁ……早く、イッセーくんたちと合流を――」

「それは無理ね」

朱乃の言葉を遮る声。それと同じくして朱乃の体は球体上の障壁に包み込まれてしまう。

「そんな――」

朱乃が目にしたのは、倒したと思っていたユーベルーナの無傷の姿であった。

「ふふふ。言ったでしょ、あなたは未熟〈あおい〉って。あなたが攻撃したのは魔力で創った私の囮〈デコイ〉よ。もう少し冷静だったらすぐに見抜けた筈なのにね」

朱乃の失態を笑うユーベルーナ。朱乃はその屈辱に唇を噛み締める。

「あなたは本当に才能がある悪魔だわ。でもね、それでも私には勝てなかった」

ユーベルーナが指を鳴らす、すると朱乃を閉じ込めている障壁に魔法陣が描き始められる。朱乃はそれを見て脱出を試みようとするも、消耗した体から放たれる雷は見る影も無い程に弱々しく、障壁を破ることが出来ない。だが、ユーベルーナは僅かな可能性

すら摘み取る為に、包み込む障壁に更に二重、三重と障壁を張る。
「少し予定とは違ったけど、まあいいわ。一人目――」
障壁に魔法陣が完全に描き終わる。そして魔法陣に描かれた文字が赤い輝きを放ち始める。
力を削がれ、逃げ道を絶たれる。最早朱乃に成す術は無かった。
（みんな……ごめんなさい）
障壁の中が紅蓮の爆炎によって埋め尽くされ、その中に朱乃は覆い被さられその姿が見えなくなる。
『撃破』

◇

運動場近くまで走ってきた小猫は周囲を確認した後、掴んでいたシンの手と一誠の首を放す。首が絞まった状態から解放された一誠はしばしの間喉の手を当てて咳き込み、涙目になった顔でシンたちの方に顔を向ける。
「……朱乃さん、大丈夫だよな？」
「信じるしかないだろ、今は」

合宿で朱乃の実力は把握はしているが、肝心の相手の実力の方については未知数であった。故にどうしようもない不安が一誠の言葉に含まれていた。シンの方も安心させるような言葉の一つでも言っておくべきという心境もあったが、自分の中の楽観視を許さない部分がその言葉を言うのを阻む。

「……私は朱乃先輩のことを信じます」

この中で最も朱乃との付き合いが長い小猫は、小さな声ではあるが確固たる信頼を持って言う。それは同時に一誠とシンの不安を払拭させようとする気遣いも含まれていた。

「小猫ちゃん……分かった！」

一誠は唇を真一文字に引き締めている姿を見た後に己の頬を両手で張る。赤くなった両頬のまま一誠は気持ちを切り替え、自分のやるべきことに意識を傾けた。

「塔城」

シンが小猫の名を呼ぶ。シンの方を見た小猫が目にしたのはシンが制服の上着をこちらに差し出している姿だった。

「とりあえず羽織っておけ」

「……あっ」

そこでようやく小猫は、自分の格好が客観的に見てどういった状態であるのかを認識

する。小猫は無表情ながら少し恥ずかしそうに頬を赤め、素直にシンの制服の上着を受け取った。

「……すみません。……それとありがとうございます、間薙先輩が声を掛けてくれた御蔭で助かりました」

「……只の偶然だ。礼を言う様な事じゃない」

小猫の格好が気になって偶々声を掛けたことで起こった、偶然の産物でしかない先程の出来事。理由が理由だけに礼を言われるとシン自身どういった反応をすればいいのか迷ってしまい、結果としてそっけない態度となってしまう。

『ライザー・フェニックス様の『兵士』三名、リタイヤ』

聞こえてくる校内アナウンス。チャイムが鳴った瞬間一誠たちの心臓は不安から跳ね上がったが、続く報告によってその不安も一気に消え去る。

敵が一気に三名脱落。これによりライザー側の戦力は約半数となったことを示している。消去法からいって相手を脱落させたのは間違いなく木場であり、一誠たちは改めて木場の実力を実感する。

しかし、敵の数が減少したということは相手の方にも余裕が無くなり、これまで以上に必死になって戦ってくるということを暗示していた。徐々にこちらの勝機が増えていくことがプラスに作用するかマイナスに作用するか、実戦経験の少ないシンにとって

は未知数の領域の話である。
アナウンスを聞き終えるとその場に居る全員は木場の勝利を追い風にしようと急いで運動場へ向かい駆け始めるが、すぐに小猫が立ち止まる。
「……待ってください」
小猫の制止に一誠とシンは足を止めた。すると運動場からやや離れた位置に建てられている体育準備室の物陰から木場が姿を現す。いつもの爽やかな笑みを浮かべる木場には目立った外傷も無く、精々制服の一部に裂傷や土の汚れが付いている程度であった。
「なんだ、こっちにいたのか」
「うん。みんな特に怪我も無さそうで安心したよ」
「……木場先輩も無事で何よりです」
「さっきの放送の相手はやっぱりお前がやったのか？」
「まあね。偵察だと思われる『兵士』を一気に片づけたけど、肝心のリーダー格が中々こっちに出向いてこないんだ」
もしかしたらあの『兵士』三人は自分の実力を測る為に寄こされたのかもしれない、と最後に付け加える。自分の駒を使って相手の実力を測る、もしかしたら先の体育館内の戦いについても相手に筒抜けとなっているかもしれない、という危惧が小猫、一誠、シ

ンの中で共有される。
「ちなみに相手は残り何人か知っているのか？」
「『騎士』、『戦車』、『僧侶』の三人だよ。でも、イッセーくんたちが来てくれたおかげで数の不利は無くなった。だから、僕たちの方からも仕掛けられる」
　四対三。数だけを見ればこちらが上回っているが相手にはまだ余力が有り、こちらの方はほぼ全兵力を注ぎ込んだ状態。朱乃と交戦中の敵方の『女王』が新校舎への侵入ルートである運動場に向かっていることを仲間に連絡していることを想定するならば、時間も掛けられない。
「……一気に攻めるか」
「何か案はあるのかい？」
「作戦なんて立派なものじゃないがな。木場、相手がどこに居るか大体分かるか？」
「おそらくあの辺だと思うけど」
　木場が野球部のグラウンド辺りを指差す。
「分かった。……お前の出番だな」
　シンが一誠の肩を軽く叩く。
「えっ！　俺？」
「……イッセー先輩がですか？」

いきなりの指名を受け、一誠は驚いた顔でシンの方を見る。
「あの辺りに向かって、合宿で見せた魔力の塊を撃ち込んでくれ」
山を消し飛ばす一誠の魔力波。現状の戦力を考えるならばこの中で一番の火力を誇っているのは間違いなく一誠であった。
『ドラゴンショット』をか……」
「……まあ、名前の方はいいとして、校舎を巻き込まない程度の魔力でグラウンドに放ってくれ。それを合図に残りの三人が攻める。――どうだ？」
「うん。相手の出鼻を挫いてこちらのペースに持ち込むのなら、それかな。僕は特に異論は無いよ」
「……私も無いです」
木場、小猫はシンの案に賛成する。最後の一人である一誠の方を見ると若干ではあるが顔色が悪い。
「おい」
「んっ！　ああ、別に俺もふ、不満は無いぞ！」
「緊張しているのかい？」
「あ、当たり前だろ！　戦闘経験なんて無いに等しい俺が、いきなり作戦の要みたいなもんになるんだから」

図星を木場に突かれ、顔を紅く染めながら一誠はそれを誤魔化す様に一気に言葉を並べていく。

「それは当たり前のことさ、僕だってほら」

そう言って木場は剣の柄を握っていた手を皆に見せる。その手は汗で濡れ、細かく震えていた。

「イッセーくんに比べたら僕の方が戦闘の経験はあるのは間違いない。でもね、レーディングゲームは君や間薙くん、小猫ちゃんと同じで初めてだ。初めてのゲームなのに部長の為にも負けられない……正直言うとね、僕の人生で一、二を争う程の緊張を感じているよ。だけどね同時に思うこともあるんだ、この戦いを終えた後自分はどうなっているのかなって。僕はね、きっとこの経験は自分の糧になると思っている。だからねイッセーくん、成功しても失敗しても構わない、その全てを受け入れて強くなってくれるかな――お互いにね」

木場が言い終えた後、一誠は一瞬体を震わせた。だが、それは恐怖から来る震えではない。何故なら、緊張に満ちていた筈の一誠の顔は、木場に刺激され決意と闘志に染まっている。あの震えは戦う者としての武者震いであった。

「んじゃあ、期待に応えるとしますか、……一分待ってくれ。一分後にはでかいの一発かましてやる。その後の展開を決めておいてくれよ」

気合を込めて一誠は『赤龍帝の籠手』を起動させ、倍加を開始する。
「それじゃあ、僕と間薙くんが一気に攻めるから小猫ちゃんは少し遅れて来てくれるかな。もしもの場合もあるし」
「……分かりました」
「木場と間薙のコンビか……女子が喜びそうだな」
「うーん、でも両方『攻め』だよ？」
一誠の場違いな感想に木場も何故か真面目に返す。
「――お前ら何言っているんだ」
「……木場先輩、毒され過ぎです」
シンと小猫はそんな二人に呆れた様子で見るのであった。
『Ｂｏｏｓｔ！』
三回目の倍加を告げる声が一誠の籠手から聞こえてくる。まだ三十秒程しか経っていないが、ただ時間が来るのを待つという行為は時間の感覚を遅延させる。
残り三十秒の中、一誠はただひたすら時間が経つのを待ち、木場は何度も柄を握って放すということを繰り返し、入念に剣を握る感触を確かめている。小猫は両手を固く握り拳をつくったまま表情と同じく微動だにしない、そしてシンは軽く指先を曲げて指の関節を一本一本鳴らしていく。

『Ｂｏｏｓｔ！』

五回目の倍加。後十秒後には突入することとなる。皆の自然に頭の中で残り秒数がカウントされていく。

１０……９……８……７……６……５……４……３……２……１――

「リアス・グレモリーの『騎士』！　そして近くに居る筈の他の眷属たちよ聞いているか！」

残り０となるかと思われたその瞬間に、野球グラウンドから聞こえてくる勇ましい女性の大声。最大まで高まった緊張を一気に破裂させるその行為に、誰もが弾かれた様に野球グラウンドを見る。

「私はライザー様に仕える『騎士』カーラマイン！　互いに探り合うのにはもう飽きた！　リアス・グレモリーの『騎士』よ！　お前にも剣を持つ者としての誇りがあるのならば尋常に勝負！　もし出てこられないのならば我が侮蔑は避けられないと思え！」

野球部のグラウンドの上で古の戦場に出て来る様な甲冑を身に纏った、ライザーの『騎士』ことカーラマインは、その出で立ちに沿う様な古めかしさを感じさせる口上でこちらを挑発する。

相手方の大胆不敵な態度に一誠、シン、小猫は、感心するべきか呆れるべきか何とも複雑な感情を抱いた表情をしたが、唯一名指しで呼ばれた木場だけは笑みを浮かべてい

る。しかし、その笑みはいつも浮かべている爽やかな笑みでは無く、口の両端を吊り上げて笑う好戦的な笑みであった。
「ああ言われたら、『騎士』としても剣士としても黙って隠れているわけにもいかないかな」
そう言って木場はシンの方へと顔を向ける。その顔は笑みを潜め、代わりに申し訳なさそうな表情となっていた。
「ゴメン。間薙くんの考えた策を僕が台無しにしてしまう」
「素人が考えた三流の策如きで一々謝る必要も無い。――それでもまだ悪いと思うなら勝ってこい」
「……うん。僕の剣に誓って勝ってくるよ」
木場が建物の物陰からグラウンドへと向かって行く。
「全く、カッコつけやがって。これだからイケメンは……」
一誠の口調は木場の行動を非難する様なものであったが、口元には笑みの形が作られており、あくまで建前であり本心では木場の行動を認めている様子であった。
「人には人の矜持ってやつがあるということだ。俺たちも出向くとしよう」
「……私が先陣を切ります」
小猫が一誠とシンの前に出る。背後から見れば小さな背中であるが、その背には頼も

しさが感じられた。
「まだ倍加は続いているか？」
「ん？　ああ、続いているけど。でも、そろそろ止めないと俺の限界ラインを越えちまいそうだ」
「出来るだけギリギリまで持たせておいてくれ――万が一、相手がこっちを嵌めてくる様な真似をしてきたのなら、お前の力で消し飛ばしてやれ」
「偶に思うけど、お前っておっかない奴だな……」
「……いきます」
シンと一誠の話を区切って、小猫が体育準備室の陰から出ていく。それに遅れない様に残りの二人も後を追う。
グラウンドに着くとカーラマインは四人の顔を見て満足そうに笑う。
「ふふふ、私の呼び掛けに応えて、まさか全員姿を現すとは……自分でやっておいて言うのもなんだが酔狂な者たちだ。レーティングゲームを知る者ならおまえたちの行為は異常とも言えることだ……だが、その精神、私にとっては非常に好ましい！」
カーラマインは嬉々として目を細め、手に持った鞘から剣を抜き放つと一誠たちに突き付ける。
「名を、聞かせもらえるか？」

それに応えて木場もまた鞘から剣を抜き放つ。
「リアス・グレモリーの眷属、『騎士』木場祐斗」
木場が名乗ると同時にカーラマインは一歩踏み込む姿が見えたとき、その身は霞み閃光の速さで木場の眼前へと現れた。
「リアス・グレモリーの『騎士』よ！　この一時愉しませて貰うぞ！」
振り下ろされる斬撃を木場の剣が受け止める。互いの均衡は一瞬、次の時には両者の間に無数の火花が散り出す。二人の剣を振る速度は人外の目を持ってしても完全に追うことが出来ず、剣戟が止んだかと思えば次は互いの身体の速度を競い始めた。
切迫した『騎士』同士の戦い。残った三人が介入しようにも、無粋という以前にその速さに入る余地が無かった。
黙って戦いを見ているしかない三人に背後から声が掛けられる。
「暇そうだな」
「全く、頭の中にまで剣が詰まった輩はこれだから困りますわ。レーティングゲームは個人の力では無く『王』としての実力と戦略を競うものなのに、カーラマインったらそんなに戦略というものがお嫌いなのかしら？　お好きな剣だって腕力だけで振るうものではなくって？」
顔半分に仮面を付けた女性と西欧風のドレスを纏い、金髪を縦に巻いた髪型をした少

女。
仮面の方は『戦車』、そして金髪の少女は『僧侶』。木場が言っていた相手の眷属が、全員この場に姿を現したことになる。
金髪の少女はよほど『騎士』の女性の行動が納得出来ないのか、姿を現した後も一誠たちのことを眼中に入れず、ぶつぶつと文句を言っている。しまいにはそれに応じた木場のことも文句を言い始めた。
ある程度文句を言い終えると、一誠たちの方を値踏みするかの様な視線で見る。
「そっちの『兵士』さんがリアス・グレモリーさんが可愛がっている眷属でしたわね。正直、少々趣味が悪いというのが感想ですわ。そっちの『戦車』代理さんは綺麗な顔立ちをしていますわね。でも、なんでしょうか、あまり心惹かれるものを感じませんわ」
部室であっていたとはいえ、ほぼ初対面の相手に対する容赦ない言葉。シンの方は大して気にはしなかったが、一誠の方は若干頬を引き攣らせる。
「……余裕ですね」
他人の容姿を評価している敵の『僧侶』に小猫が距離を詰め、小さく握りしめた拳をその身体に突き出そうとする。
「そういう野蛮なのは主義ではないので。イザベラ」
避ける動作も見せずイザベラという人物の名を呼ぶと、小猫の横から現れた仮面を付

けたライザーの『戦車』が小猫の拳を振るおうとする腕に瞬時に数発の拳を当てた。
幼い体型ながらも屈強な肉体を持っている筈の小猫の拳はそれによって無理矢理止められ、小猫も一旦距離を取る。距離を取った小猫が構えをとる、構える腕には青痣が数か所浮かんでいた。
「ふむ。折るつもりで数発叩き込んだが、その程度で済むか。うん、同じ『戦車』としては複雑だが、少し誇らしい気持ちにもなるな」
ライザーの『戦車』イザベラは、半分だけ見えている顔に微かな笑みを浮かべると、左手を軽く拳を握った状態で力を抜いた感じで垂れ下げ、振り子の様に揺らす。
「次はキミを潰すつもりで叩き込むとしよう」
イザベラが間合いを詰める為に歩を進める。しかし、小猫は相手にペースを握られない為に小猫の方からも距離を詰め、イザベラよりも先手を放つ。
捻りを加えられた小猫の拳がイザベラの顔面を破砕する為に最短の直線距離を突き進む。が、イザベラはその拳が到達する前に鞭の如くしなる左拳で瞬時に小猫の腹部、側頭部、胸部へと三発拳を叩き込む。先程の宣言通り、一撃の重みが増したのか攻撃を喰らった直後に小猫の体勢が崩れ、突き出していた拳も引いてしまう。
『戦車』としての速度は小猫よりもイザベラの方が優れていた。
その隙を逃すことなく小猫の無防備となった脇腹に蹴りを放つ。だが、小猫もすぐさ

ま体勢を戻し、片膝を上げ脹脛付近でその蹴りを防いだ。
「良い反応だ」
　相手の動作を褒め、すぐにイザベラは左手の甲を小猫の横顔目掛けて振るった。小猫はその動きを冷静に観察し、最小限の動きで避けた後に反撃に転じようと考え、イザベラの左手が小猫の頬に触れるか触れないかの寸前で、首から上を後ろに逸らす。
「……うっ！」
　小猫は小さく呻くと反射的に目を押さえる。小猫が避けたと思った直後、イザベラは握っていた手を開き、指先を小猫の両目に掠らせていく。目を攻撃されたことで反射的に閉じてしまった瞼のせいで、イザベラを完全に見失ってしまうという形となってしまった。
「すまない。少々姑息とも言える手段であったが、まあ、これが勝負というものだ」
　既に背後へと回っていたイザベラは軽く握っていた手を強く握り直すと、小猫の後頭部に向けて振り下ろす。
「やめろぉぉ！」
　だが、その一撃は間に入った一誠の籠手によって阻まれた。イザベラの拳を叩きつけられた一誠の左腕はその威力に跳ね上がるが、イザベラの左腕もまた一誠の籠手に当てた反動で跳ね上がる。

「小猫ちゃん！　大丈夫か！」
「……イッセー先輩――ありがとうございます」
目を押さえたまま一誠へと礼を言う小猫。目を押さえる小猫の前に一誠が立ち、イザベラと対峙する。イザベラの方は左手を何度か開き状態を確認した後、一誠に向けて薄く笑う。
「先程の一撃、並みの『兵士』だったのならば防いだ腕ごとその『戦車』も潰せたが、どうやら私は『戦車』どころか『兵士』も侮っていたらしい」
イザベラは構え直し、一誠へと殺気を放つ。
「小猫ちゃん、バトンタッチだ。こいつの相手は俺がする」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ』
一誠は倍加を止め、限界まで高まった身体能力を維持した状態でイザベラへと拳を向ける。
「……イッセー先輩」
閉じた目のまま小猫は一誠の名を呼ぶ。その声には一誠を心配する気持ちと満足に戦えない自分の現状を悔やむ気持ちが混ぜられていた。
「大丈夫！　任せとけって！」
小猫を安心させるように明るい声を出した後、すぐさま表情を引き締めイザベラを睨

みつける。
「ふふ、『戦車』を守る『兵士』か……面白い」
イザベラを一誠のその姿を楽しげな表情で見ると、一足で自分の間合いの中に一誠を引き込む。
「どれほどのものか見せて貰おうか」
「来い！」
『兵士』と『戦車』の戦いが始まった一方でシンは、近くに居るライザーの『僧侶』を見ていた。シンの存在が眼中にないのか『僧侶』は特に行動を起こす仕草を見せず、戦っている『騎士』と『戦車』を眺めていた。
「戦うつもりは無いみたいだな」
「ええ、私は一対一なんて泥臭い戦いは好きじゃありませんの。それに私と戦ってもあなたにメリットはありませんわ。『不死身』と戦うなんて体力の無駄な浪費ですし」
「――お前、ライザー・フェニックスの身内か？」
『不死身』という単語と目の前の『僧侶』の容姿の特徴から推測し、自分の直感を後押しにして尋ねる。
「レイヴェル・フェニックスと申します。ライザー・フェニックスは私の兄、以後お見知りおきを」

身内を眷属にするライザーの趣味を内心疑うシンであったが、すぐにレイヴェル本人から特殊な方法で眷属という立場になっただけで、兄とはそういった関係では無いという否定が入る。レイヴェルにとっては、シンが内心思った感想を心の裡に抱かれることは不本意らしい。

「それで？　――話を戻すが――そんなことを言って相手が素直に引くと思っているのか？」

「その握った拳があなたの答えですか？　野蛮ですわね、女性を殴る気ですか？」

口に手を当て軽蔑するような視線でシンを見るレイヴェルであったが、シンの方はその視線に意を解せず、表情に何一つ変化はない。

「そんな些細なことがこのゲームでは重要なことか？」

シンの言葉にレイヴェルは軽蔑する様な視線を止める。

「いいえ全く。この場でフェミニストを気取っていたのならば興ざめしている所でしたわ」

にこやかに笑いシンの意見を肯定する。その態度の変化は先程までの言動がシンを試す演技であったことを示す。

「なら……始めようか」

「さっきも言いましたけど、私、あなたと戦う気はありませんので」

笑うレイヴェルの様子に訝しむシンであったが、次の瞬間にレイヴェルの背後から現れた二つの影によってその態度の意味を知った。

◇

「みんな、頑張れホー！」

声が届かないと知っていながらも、ジャックフロストは声を大にして声援を送り続ける。

「うーん、どうなるんだろ？」

ピクシーは声援を送ることはなかったがシンたちの行動から目を離さず、行動する度に一喜一憂をしていた。

「ふむ。ライザー側は七人が落ち、リアス側は一人だけか……数だけを見ればリアスの方が圧倒的に有利ではあるが、一概にこのまま勝つとは言えないな」

状況を分析し、戦いの状況を見通してのサーゼクスの感想。例え身内の戦いであっても情を入れない冷静なものであった。

「お前はどう思う？」

ピクシーやジャックフロストではない相手に尋ねるサーゼクス。返答はすぐにあっ

た。
「大体は魔王様と同じ意見だと思いますが」
背後から突如聞こえた声に驚いてピクシーとジャックフロストは背後へと目を向ける。二人とも気配の察知においては並み以上のものを持っているが、その感覚を以てしてもその存在が声を出すまで気付かなかった。
振り向いた二人の目に映ったのは、白く雪の様な白い肌をした青年であった。黒く艶のある髪を短く切り揃え、顔の下半分を青のマフラーで隠す青年。それでもマフラーから上の容姿は綺麗かつ整ったもので、青年が並はずれた容姿を持っていることを示していた。
身に付けているものは灰色の皮鎧、そして青年の肌と同じ白い色の具足と手甲を付け、その手には装飾が施されていない簡素な作りの槍が握られていた。
「誰？」
「もう一人の連れだ。ようやく顔を見せてくれたな」
サーゼクスの言葉に青年は目を細める。その目には微かに怒りの色が混じっていた。
「何度も何度もしつこく念話でこちらに来るように指示したのは貴方でしょうに……全く、私のような輩が魔王様の側に居ることを誰かに見られたのならばどうするのです」
「相変わらずお前は頭が固いな。この観戦席で見ているのは私とこの子らしかおらん

よ」
「万が一があります」
　頑なな青年の態度にサーゼクスは嘆息する。
「この人は魔王様の何だホー？」
「ああ、私の眷属ではないが信頼できる友の一人だ。こうやって私の護衛などをしてくれる」
　ピクシーとジャックフロストはまじまじと青年を見つめる。その視線に気付いた青年は頭を下げ、自らの名を名乗り始めた。
「申し遅れました。私の名はセタンタと申します。御二人方、どうぞよろしくお願いします」

魔剣、譲渡

襲い掛かる二つの影に、シンは咄嗟に腕を交差し防御の構えをとる。その後に襲ってくる両腕への痛みと衝撃。その場に立っていることが出来ず後ろへと飛ばされたシンは、背中から地面へと落ち、勢いはそれでも弱まらず、更にそこからグラウンドの土を背中で巻き上げながら二メートル滑っていく。

止まると同時にシンは両手を強く地面へと叩きつけ、その反動で立ち上がるが、立ち上がったシンは誰にも悟られない程微かに目元を震わせた。

左腕から感じる断続的な痛み。試しに左手の指を少し動かしてみると、その痛みは一気に倍増しシンの脳に異常を訴える。左腕を上に右腕を下にして交差させた構えで受け止めたせいで、左腕が思った通りに動かせる状態では無くなっていた。骨折などの経験が無いシンから見て、左腕の症状を正確に把握することは出来ない。

（――利き腕よりはましか）

自分を納得させる様に、半ば無理矢理に前向きな考えへと内心で切り替えると前方を見る。そこには新たにライザーの眷属が四人現れていた。背中に大剣を背負った軽装の女性は『騎士』、そしてシンに襲い掛かった頭に動物の耳を生やし、人外と思われる『兵

士』の少女が二人、そして着物を纏った『僧侶』の女性。朱乃と戦っている『女王』を除けばライザーの眷属が全てこの場に揃っていることとなり、最初の方は有利であった数の差も、今では一転して不利な状態となっていた。

「シーリス、思ったよりも早い到着ね。結構なことだわ」

シーリスと呼ばれた『騎士』の女性はレイヴェルに軽く頭を下げ、背負っていた大剣を抜き放つ。

「ユーベルーナから念の為にと言われ、少し早めに行動を起こしました。それで私はあの『騎士』を倒せばいいのですね？」

「さすがは『女王』ね、良い判断だわ。聞きましたかしらカーラマイン、決闘はここでお終い。今からはシーリスと二人でその『騎士』を倒しなさい」

レイヴェルの言葉に木場と鍔迫り合いをしていたカーラマインは木場を後方へと押しやると、自分も後方に下がり距離が開いたのを見計らってレイヴェルに異を唱える。

「お待ちくださいレイヴェル様！　私も奴もまだ全力を出し切ってはいません！　どうかあと少しの猶予を！」

「駄目よ」

懇願するカーラマインの言葉を一刀で拒否するレイヴェル。

「私の強さを……信じては頂けないのですか？」

「信じてはいるわ。でも、貴方には不必要な決闘を黙認する譲歩までしましたわ。これ以上のことはただの貴方の我儘。それとも貴方は『王』の名誉よりも『騎士』として、個人としての名誉を取るつもりなのかしら？」

レイヴェルの威圧を込めた言葉、それに対しカーラマインは悔しそうに唇を噛んだが、レイヴェルの言葉に反論することは無く、レイヴェルもそれを肯定と受け取った。

「もう一度言いますわ。カーラマイン、シーリス、貴方達二人でその『騎士』を倒しなさい」

「御意」

「――心得ました」

納得し切れた様子ではないカーラマインであったが、一度だけ木場の方へと謝罪の念を込めた視線を送り、剣を構え直す。木場の方もその視線に込められた意味を把握し、気にするなという言葉の代わりにいつもの笑みを返した。

「二対一で戦うのは気が引ける……だが、こうなってしまった以上全力で倒させてもらうぞ、リアス・グレモリーの『騎士』よ！」

雄々しい声を上げるカーラマイン。するとその声に反応し、剣から炎が吹き上がりその剣身全てを包み込む。燃える炎を熱量は離れている木場どころか、一誠、シン、小猫の肌にも熱いと感じさせる程の熱を放っていた。

だが、その高熱の中心にいるカーラマインはその熱で炎上することはなく、それどころか汗ひとつかいていない。それは近くにいるシーリスも同様であった。

そして、シーリスの方も大剣の周囲の空気が歪み始め、剣身の周りをいくつもの輪らしきものが高速で回転し始める。シーリスが地面へと剣先を下げた瞬間、グラウンドの土が抉られ、その破片を辺りに撒き散らす。

「フェニックスの眷属になることで得られる炎と風の力、あなたに耐えられて?」

レイヴェルは本気を出したカーラマインとシーリスの姿を満足気に見た後に、視線をシンの方へと向ける。そして、指を鳴らすと獣人の『兵士』二人が前に出た。

「ニィ、リィ。貴方達はそちらの『戦車』代理の方を倒しなさい。あの方、中々人への助力がお上手ですわ。他の眷属たちと協力し始めると厄介なことになるので、その前に素早く倒しなさい」

「にゃ」

「にゃにゃ」

気の抜けるような返事をした二人の獣人がシンの方へと目線を向けたとき、その場から突如姿がシンの視線から消失する。

脳から鳴り響く危機を知らせる信号。それに従い、半ば反射的に右腕を顔の右側面へと持ち上げる。すると、そこに現れた獣人の片方の拳が叩きつけられた。骨と骨がぶつ

かり合う感触、それによって起こる痛みを押し殺し、反撃へと転じようとする。が、シンの呼吸が突如止まった。それは、もう片方の獣人が一息の間を入れてから、シンの脇腹へと足の甲を打ちつけられたことによる弊害である。

止まった呼吸により脳の動きも一時的に鈍くなる。それによって起こる身体への影響は、シンを二人の獣人にとってのただの的へと変える。

痛む脇腹を庇うように、右肘を先程蹴りつけた方の獣人に向けて振るうが、あっさりと回避されたばかりか、それによって生じた無防備をもう片方の獣人に付け込まれ、背中に強烈な打撃を貰う。

それでも、シンは相手が攻撃したことによって出来た僅かな硬直を感じ、思考するよりも早く右手を伸ばし、獣人の衣服の一部を掴むと左腕を振り上げる。だが、そのときに奔る左腕の激痛。それにより、シンは無意識に左腕の動きを止めてしまい、左腕を中途半端な高さに持ち上げた状態となる。

（不味い）

敵を前にしての不自然な停止。ただ、隙が出来ただけの認識ならばシンにとってましであった。しかし、シンの目は確かに、二人の獣人がシンの動きを見て、唇の端を吊り上げたのを見てしまった。

「にゃー！」

掴んでいるシンの右腕に、高々と跳んだ獣人の片方が右足を振り上げて、踵を振り下ろそうとする。咄嗟に掴んでいる手を放し右腕を引き寄せるが、今度は掴んでいた方の獣人が一気に間合いを詰めてきた。距離を詰めた獣人はそのまま右足を跳ね上げ、シンの左から攻める。

（流石に気付かれたか）

僅かな隙を見せてしまったことで、露呈してしまった現在の自分の状況。それについての反省をする暇も無く迫る右の蹴り。

「――っっ」

それを激痛が続く左腕で無理矢理受け止めた。衝撃とそれにとって誘発される痛みに、シンの頬から冷たい汗が流れる。

短い思考時間でシンの下した判断は、左腕の放棄であった。どうせ狙われるのならば、左腕を庇うことは一切せず防御に徹底させ、攻撃はそれ以外でするという考え。

それによって左から攻めた獣人もシンの行動に目を丸くし、驚いた表情となっている。間髪入れずシンの右腕がその獣人の喉元を鷲掴みにする。

掴んだと同時に手加減一切抜きで、全力を持ってその喉を締め上げるシン。獣人の方も顔色を一気に変化させられるも、抵抗するように掴んでいるシンの右手にその鋭い爪を立て、皮膚と肉を裂いていく。

シンはそこから一歩踏み出し、獣人の隣に立つような状態となると、右手を下方向に向けて押し出し、獣人の体を無理矢理仰け反らせる。そして、そこから九十度右に回転すると、仰け反る獣人の後頭部に左膝を叩きつけた。

十数年の人生の中でなんとなく知識にある人体の弱点、そこをどうしたらどうなるのか、そういった知識は全く無く、ただ下手をしたら死ぬかもしれないというぐらいの浅い知識と認識の中、シンは危険性を無視し全くの躊躇も無く、全力で後頭部から首筋にかけての間を膝で蹴り上げた。

膝で強打された獣人の目の焦点が、素人目に見ても合わなくなっている。そこで気を抜く暇も無く、シンは迫るもう片方の獣人の気配を感じると右手を振るい、自分とその獣人との間に遮る壁の様にして、手で掴んでいる獣人を持ってきた。

シンのこの行為に、走る相手は速度を緩め衝突を避けようとするが、そんな彼女に対し、壁として扱われていたもう片方が突如として迫る。

遮られていたことで相手の方からは見ることは出来なかったが、シンは壁にしていた獣人の背中を勢いよく蹴りつけ、互いに衝突することを狙っていた。

だが、予想に反し迫ってくる獣人はその持ち前の反射神経を駆使し、それを背後に跳びあがることで回避、シンの目論見は崩れる。

「リィー!」

相手の名前を呼んだことから恐らくニィと思われる獣人は、倒れ伏せたリィに近寄るが、その前にリィの体は光に包まれていき、最後には消失をしてしまった。一定以上のダメージ及び戦闘で再起不能の状態と判断されたことによるリタイヤ。リィという『兵士』が強制的にフィールドから転送されたことを示している。

「よくも……リィを……！」

獣の耳の毛を逆立て、親の仇でも見るかの様にシンを睨みつけるニィ。転送先は医療設備が整えられた場所であり、命に別状はないと分かっているが、目の前で行われたシンの行為は見過ごすことも許せるはずも無く、ニィの怒りを燃え上らせる。

やった本人であるシンからしてみれば、その怒りは当然のことであり、躊躇なく行った自分の姿は、客観的に見ても『善』とは言い難い。だからといって、謝罪の意味を込めて相手に勝ちを譲るということをする気は微塵も無く、怒りを向けるニィにシンは、まともに上げられなくなった左腕をぶら下げながら、右手の拳を固く握り締めた。

一方、小猫の代わりにイザベラと戦うこととなった一誠。相手の持つ技量に押されながらも喰らい付いていた。

「ぐうっ！」

右頬と右脇腹に重い拳が瞬時に二発刺さる。三発目が鳩尾に入るかと思われた時、一誠は両腕を交差し三発目を防ぐ。が、すぐさま左の側頭部に拳が入り、一誠の上体がぐ

らつく。だが、その状態で踏みとどまり、不安定な体勢から限界まで倍加した拳を突き上げる。イザベラは四発目を放とうと拳を引くが、その際にほんの少しだけ一誠の拳が掠る。イザベラが拳を引いたことで出来た、攻撃の止まる瞬間を見極め、一誠は後方へと数歩分飛び、間合いを開かせた。

「――しぶといな。かなりの数撃ち込んだが潰れる気配を見せない。成程、良く鍛えこんでいるな。少しプライドが傷ついたよ」

左手を軽く振りながらイザベラは一誠を見る。その手には先程掠ったことで出来たとお思われる裂傷があり、一誠の拳の威力を如実に現していた。

「だが、大体の動きはもう見切った。次で終わりとしよう」

そう告げるイザベラに対し、一誠は不敵な笑みを浮かべていた。

「終わりなのはどっちかな?」

「なに?」

押されている筈の一誠から出た勝利を確信した声。その声に眉を顰めるイザベラ、そのイザベラに見せる様に一誠は左腕を持ち上げ、中指を親指に押し当てる形を作る。

「弾けろ! 『洋服崩壊』!」

発動の宣言と同時に指を鳴らす。すると前に体育館で見せたときと同様、イザベラの衣服や下着など、身に付けているもの全てが細切れになって崩壊し、中から白い裸体を

曝け出される。

「な！　こ、これは！」

突然の事態に思わずイザベラの手は、胸などの部分を隠す、人並みの羞恥心を持つ者ならば当たり前の行動である。しかし、戦いの最中であることを考えるならば、イザベラの行動は自ら両手を塞ぐということにしかならない。

生み出した最大の反撃の機会、これを見過ごす一誠では無い。自らの最高の一撃であると自負している技を放つ為に両手の手首を上下に合わせ、そこに魔力を流し込む。

間も無く、両手の中に小さな魔力の塊が生まれ、その塊を『赤龍帝の籠手』の力によって瞬間的に数倍へと高める。

「いっけぇぇぇ！」

イザベラへと放たれたそれは、イザベラの体を飲み込む程巨大な魔力の塊と化し、着弾と同時に地を消滅させ、その余波で激しい突風を辺りへ巻き起こす。

魔力の光が消えた後、中心地は跡形も無く消滅しており、大きな穴を地面に刻み込んでいた。

シンたちとの会話の中で言っていた一誠の『ドラゴンショット』。放つのは二度目となるものの、手加減をした上での目の前の威力に、流石に一誠も言葉を失い、改めて自分の『神滅具』の強さを実感、そして、同時に消えてしまったイザベラへの不安が心の

中に湧く。

『ライザー・フェニックスさまの『戦車』一名、『兵士』一名、リタイヤ』

アナウンスから聞こえるグレイフィアの報告。相手の安否を確認出来たことによる安堵と、初めて単独で敵を倒したことの喜びが、一誠の胸の内に満たされていく。

「よおっし！　小猫ちゃん！　俺勝ったよ！」

離れるよう言っておいた小猫に、一誠は自らの勝利を伝える。小猫は負傷していた目を微かに開き、一誠の勝利する姿を見た。

「……おめでとうございます。そして、助けてくれてありがとうございます……でも」

「でも？」

「……スケベなのは駄目だと思います」

「……ごめんなさい」

素直に謝る一誠、その耳に二つの音が飛び込んでくる。一つは鈍い打撃音、もう一つは甲高い金属音。音のする方へと目を向けた一誠が見たのは、ライザーの『兵士』に殴り飛ばされ背中から地面へと倒れていくシンの姿と、二人の『騎士』の剣圧で後方へと吹き飛ばされる木場の姿であった。

その姿を見て慌てて助太刀に入ろうとする一誠であったが、一歩前進をした瞬間に目の前で突如青白い火花のようなものが爆ぜ、見えない力で押し戻されその場で尻餅をつ

いてしまった。
「な、なんだ！」
　驚く一誠が左腕を前に伸ばすと再び青白い火花が爆ぜ、反射的に手を引いてしまう。
「……結界です」
「結界だって！」
　現状を把握した小猫が一誠へと目の前の現象について説明をする。続いて結界ならば術者が近くに居るという小猫の言葉に従い辺りを見回すと、一誠たちの頭上に着物を着た『僧侶』が上空でこちらに対し何かを呟いているのが見える。
「あれか！　くそ、こんな壁なんて――」
　『ドラゴンショット』の構えをとり、結界を無理矢理破壊しようとする一誠であったが、無情な音声が左腕から聞こえてきた。
『Ｒｅｓｅｔ』
　その途端、一誠の中からあれほどまで漲っていた力は煙の様に消え、残るのは途方も無い疲労感のみ。固定していた倍加状態がこのタイミングで解け、その反動で一誠の動きが見違えるほどに鈍重となる。
「チクショウ……！　こんなときに！」
　すぐさま倍加を開始するが、結界を破壊するに至るまでには数十秒掛かる。その時間

をもどかしく感じる一誠の横を小猫が通り、結界の前に立つ。
「小猫ちゃん」
「……今度は私の番です」
小猫は拳を握り、腰を落として構えると全力で前方に拳を放つ。小猫の拳が結界へと接触したと思った途端、青白い火花が花火の如く周囲に飛び散り、いくつもの種類の金属を同時に叩きあったかのような、耳障りな騒音が結界内で響く。思わず一誠が耳を塞いでしまう程に、不快かつ喧しい音であった。
リアスの眷属の中で最も腕力を持つ小猫の一撃は、結界内に波紋を浮かび上がらせたがそれだけに止まり、小猫の方にも、結界を力尽くで破壊しようとした反動が襲い掛かった。
「小猫ちゃん！」
正拳を放った小猫の手を見たとき、悲痛に満ちた声を一誠が上げる。小猫の手に装着していたオープンフィンガーグローブは、結界の反発によってぼろきれの様な姿へと変わり、その中にあった小猫の白い手は赤く爛れ、水泡が出来ており火傷に酷似した状態であった。
「無駄ですわ。その結界は『戦車』の腕力を以てしても簡単には崩せません。そこで大人しくお仲間の様子を見ていて下さい。ニィ！　シーリス！　カーラマイン！　あと一

分以内に決着を付けなさい！　その時間まで『赤龍帝の籠手』の倍加をしなければ結界は壊すことはできませんわ！」

的を射たレイヴェルの言葉に一誠は歯噛みするが、小猫はそんなレイヴェルの言葉など無視し再び拳を結界に叩きつける。

先程と同じ轟音。レイヴェルも自分の言葉を全く意に介さない小猫の態度に唖然とした表情となる。

「なんのつもりですか？　言ったはずですわ、『戦車』の力でもその結界を壊せないと――」

「……あなたの忠告なんて知ったことじゃありません」

「なっ！」

レイヴェルの言葉を一言で切り捨て、何度も拳を叩きつける小猫。その後ろ姿を見ながら一誠は、同じ場所で同じことを出来ない自分の非力さをこのとき恨めしく思う。

皆が必死になって戦っている光景。その光景を見て、もっと力が欲しい、このときの一誠はそう強く想っていた。

◇

カーラマインとシーリス、二人の『騎士』を相手取り、木場は苦戦を強いられていた。技巧と速度で攻めてくるカーラマインと、力と速度で押してくるシーリス。この二人の連携は木場を防戦一方の状態とさせていた。

「くっ！」

短く呻く木場。いまの木場の格好は制服が何箇所も切り裂かれ、あるいは焼け焦げているという現状であり、いつもの甘い顔には汗が絶え間なく流れている。

カーラマインが踏み込み横薙ぎに剣を振るう。木場はそれを受けるのではなく、大きく後方へと下がることで避けるが、その燃える剣身から発せられる熱波は木場の体を炙り、その熱によって新たに額から汗が流れ落ちる。

木場が後方へと下がり、地に足を着ける瞬間を狙って、間合いを詰め、大剣を上段に構えたシーリスがその大剣を振り下ろす。回避は不可能であると判断した木場は、握る剣を自分に向かって振り下ろされる大剣の側面へと押し当て、火花を散らしながら軌道を逸らす。軌道が外れた大剣が地面を抉り、その破片を撒く。そしてそれと同じくして、大剣に宿った風の加護が暴れ狂い、その余波が木場へと襲い掛かった。

胸部を強く押されたかの様な衝撃を感じながら数メートルも飛ばされる木場、着地と同時に今度はカーラマインが剣を振るってきた。

繰り返される絶え間ない敵の連撃。木場は完全に自分の攻めるタイミングを潰され

ていた。剣の腕ならば二人相手でも問題は無い。だが、何よりも厄介なのは二人が剣に宿した、フェニックスの加護による炎と風の力である。その力は剣の間合い以上の範囲を持ち、着実に木場の体力を削っていった。

少しの時間があれば、この現状を打開する策は木場の中にある。しかし、その僅かな時間すら生み出す余裕を、目の前の『騎士』二人は与えてはくれない。

木場の視界の片隅では、シンがライザーの『兵士』を相手に押されている状況が見える。先程のアナウンスで相手の『戦車』と『兵士』を倒したのは知っているが、一誠たちは囚われた状況となり、シンの方も不自然に左腕を垂れ下げていることから、負傷して十全に動けないことが見て分かる。

数では互角であるが戦況的に不利な状況、焦燥感が木場の胸の内で燻り始める。だが、そんな焦りを秘める木場の耳に突如轟音が飛び込んできた。

思わずその方向へと目を向ける木場。シンも同じくその音の方向を見る。

そこには自分を捕えている結界に拳を叩きつけている小猫の姿があった。小猫の行為を無駄と断じるレイヴェルの言葉を全く聞かず、何度も拳を叩きつける小猫。その拳は結界のせいで傷付き、拳を振り上げる度に血が舞う。

その姿を見たとき、木場は猛烈な恥を感じた。この現状を招いたのは元を辿れば自分であるということ、招いた本人が傷付かず、巻き込んだ自分を助ける為に仲間が血を流

していること。それは『騎士』という自分に与えられた役目にそぐわないものであった。

「ごめん、みんな」

小さく謝罪の言葉を口にし、いま自分がするべきことに全ての神経を集中させる。相手の『騎士』二人との距離は、現在数メートル程離れている。『騎士』の速度を以てすればその距離は実質零と言っても過言では無く、その距離を縮めるのに一秒もかからない。

その距離と時間は、木場が自らの切り札である『神器』の能力を発動させるのにギリギリで足りるという、一切の余裕の無いもの。一歩間違えたのならば、相手の剣により自分が倒れてしまう可能性があった。

だが、いまの木場の中には失敗をさせるという選択肢も引くという選択肢も無い。カーラマインとシーリスも木場の心境の変化を機敏に察知したのか、その表情を一段と厳しいものとする。

「何を企んでいるかは知らないが、次で終わりだ」

「散れ」

二人の『騎士』が一歩踏み込むと、一気に最高速度で木場へと迫る。対する木場は両手で握っていた剣を何故か片手に持ち替えると、同じくして視界では追い切れない速度で動く。一秒も無い刹那の交差、あまりの速度に複数の剣戟音が重なって一つに聞こえ

る。

「バカな……！」

「こ、これは！」

　互いの位置を入れ替えて現れたカーラマインとシーリスの表情には、驚きが張り付けられてあった。その驚きの視線の先にあるのは自らが持つ剣、カーラマインの持っていた炎を宿した剣は、剣身から柄の部分まで氷が張り付き纏っている炎は消され、シーリスの方の大剣もまた風が掻き消され、刃の一部が欠けていた。

『炎凍剣〈フレイム・デリート〉』――そして、『風凪剣〈リプレッション・カーム〉』。この短時間で二本も魔剣を出すのは初めてだから冷や冷やしたよ」

　背後の二人に向き返る木場の両手には異なる二本の剣が握られており、片方は剣身が氷で覆われた剣であり、剣身から鍔元まで白い冷気が漂っている。もう片方の剣は剣身部分に大きな円状の穴が形成されており、その中心では唸るような音を上げて高速で何かが回転をしている。

「バカな……二つ以上の『神器』だと！　まさか、他人から『神器』を奪った後天的な『神器』所有者――」

「それは違うよ」

　カーラマインの推測を否定すると、木場は手に握っていた魔剣の柄を口に咥え、片手

に空きを造る。するとその手から魔力の光が放たれ、それが一瞬にして剣の形を形成する。稲妻の様なジグザグとした形の剣の柄を握ると、それを一誠たちが捕えられている結界の壁へ投げ放った。

その剣が見えない結界の壁へと接触する。だが、結界が放った火花などものともせずに剣は結界の壁に深々と刺さり、そこを中心として空間に無数の亀裂が生じ始める。

『そんな！』

驚愕の声を出したのはレイヴェルと結界を張った『僧侶』の二人。結界の強度を知っている者からすれば、目の前の光景は悪夢でしかない。

「今のは対結界用の魔剣さ。僕はこうやって想像した任意の魔剣を『創る』ことが出来る」

『創る』……だと」

木場の言葉の意味を理解し、『騎士』二人の顔色が変わる。

「そっちが正々堂々と名乗りをしたからこっちも正直に言わせてもらうよ。あらゆる魔剣を創り出す、それが僕の『神器』『魔剣創造〈ソード・バース〉』の能力さ」

木場の説明が終わるのとほぼ同じタイミングで、木場の魔剣によって脆くなった結界が小猫の拳によって叩き割られる。抜け出す筈がないと高を括っていたレイヴェルは、それを悔しげな表情で睨んだ後、上空を飛ぶ『僧侶』にカーラマインたちに協力するよ

うに指示を出す。いくら結界を張っても木場の力のせいで無と帰すことを考えた上で、この場で最も危険な敵と認識した為である。

　そして、ついでに――

「その方にも気をつけなさい！　その方の手に触られたら問答無用で衣服を剥ぎ取る破廉恥極まりない技を使いますわ！　イザベラもそれで全裸の辱めを受けた上で倒されています！」

　レイヴェルの忠告に残りのライザーの眷属は皆、ぎょっとした視線を一誠へと集中させる。

「なんと恐ろしい技を……」

「中々狡猾な技を持っているな」

「女の敵！」

「最低」

　口々に感想を洩らすライザーの眷属の面々。

「僕も今日までどんな技か知らなかったからね。いやー、うちのイッセーくんがスケベでゴメンなさい」

「本当になんであんな女の羞恥心を抉り出す様な技を編み出したのか……」

「やめろぉ！　木場、謝るなぁ！　間薙、まじまじと考えるなぁ！」

剣を握って対峙している状態で一誠に代わって謝る木場と、殴打によって口腔内を切ったのか、唇の端から流れる血を拭うシンが場の空気にそぐわない程、至ってマイペースに思ったことを口にする。
「と、とにかく数では互角になったんだ！　手を貸すぜ！　二人とも」
「いや、いい」
「へ？」
意気込む一誠の意志をあっさりとシンが断ったせいで、一誠は言葉の意味を一瞬理解することが出来なかった。
「いいってお前！　ここは――」
「僕も間薙くんと同意見だね」
「木場！　お前も――」
「……分かりました。後はお任せします」
「小猫ちゃん！」
シンと木場、二人から言われた助力の拒否。それに対し一誠は動揺をするが小猫の方はいち早くその言葉に含まれている意味を理解していた。
「……イッセー先輩、ここは木場先輩と間薙先輩が食い止めてくれます。だから私たちは少しでも早く本拠地を目指します」

相手に聞こえないよう通信機に向けて小声で話す小猫。小猫の言葉で二人の真意を知った一誠の表情は悔しそうに歪む。心の裡では共に戦いたいと思っているが、二人の意志も無下にすることが出来ない。少しの間立ち止まる一誠であったが、意を決して二人に背を向け、ライザーの拠点である新校舎の生徒会室を目指そうとする。だが、次に通信機から聞こえてきた言葉に事態は急変する。

『皆さん！　聞こえますか！』

通信機の向こう側に居るのはアーシア。切迫した様子の声色に堪らず一誠は、何があったのかを強い口調で尋ねる。

『い、今、部長とライザーさんが一騎打ちを始めました！』

それは想定していなかった事態であった。もたらされた予想外の情報に、皆の顔色が緊張を帯びたものに変わる。

事前にリアスたちも単独で動くことを聞かされていたが、この展開はシン個人としての考えでは好ましいものではない。上級悪魔同士の戦い、控えめに見て両者の実力を五分と考えても、ライザーの持つ『不死鳥』の力はそれを簡単に覆す。時間が掛かれば掛かる程、リアスは不利になっていくのは容易に想像できた。

「場所は？」

『は、はい！　新校舎の屋上です』

その言葉にメンバー全員が屋上の方へと目を向ける。するとそれを合図にしたかの様に、屋上付近から天に逆昇っていく炎の柱と、真紅の魔力の柱が衝突し合い、一つとなって空に浮かぶ擬似の雲を吹き飛ばす。

「あらあら、お兄様ったらあんなにはしゃいでしまって、『王』らしく最後まで拠点で構えておいで欲しかったのに。――もっとも貴方たちが意外なほどに出来るから少しだけ、本気を出して下さったのかもしれませんわね。お兄様が前線に出れば負けはありえませんから、ホホホ！」

最後に、それではせっかくハンデとして行うレーティングゲームの意味が有りませんけど、と挑発と笑いを混ぜた言葉を一誠たちに投げる。その態度に真っ先に怒りを露わにしたのは一誠であった。

「だが、フェニックスだって弱点がある！」

一誠の言うフェニックスの不死を打破することが出来る策は、それは再生の度に精神力を消耗することを利用して精神を折ること、もう一つは一瞬で再生できない程のダメージを与えること。

フェニックスであるレイヴェルもそのことを重々承知しているのか、一誠の言葉を聞いて憐れむような笑みを見せる。

「あら？　それはもしかして不死鳥の心が折れるまで攻撃するということかしら？

中々の名案ね。『都合よく』お兄様が一切反撃をせず一方的に攻撃出来たり、『都合よく』あなたが全力を出し切ったらちょうどお兄様の精神力が削りきれたり出来たらの話ですが。それとも貴方は一撃でフェニックスの不死を破る、神に匹敵する力を持っているのかしら、それだったら、まあ怖いですわ」

一の言葉に十の言葉が返って来る。正論に聞こえるレイヴェルの言葉を上手く返すことが出来ず、悔しそうに歯を噛み締める。

「いつまでもこんな所で喋っている場合か」

レイヴェル側の余裕を切り裂く様なシンの鋭い声。一誠は思わずシンの方を見た。

「行くか、行かないか、必要なのはそれだけだ。後のことは着いた後でも考えておけ」

「そうだね。イッセーくん、例え無謀だと分かって行くのがキミだろ？　早く行くんだ、僕たちは部長の為にも負けられない」

一誠を奮い立たせる二人の戦友の言葉。その言葉を噛み締めた後に一誠は両手で頬を張り飛ばし、自らの内にあった弱気を吹き飛ばす。

「ああ、そうだな！　こんな鳥娘とペチャクチャ話してる場合じゃなかったな！　木場！　間薙！　俺は行ってくる！　だけどその前に――」

「聞こえてんだろ、赤龍帝さんよ。俺の中にある想いが！　部長の為にも！　他の仲間の為にも！　俺に力を貸しやがれ！」

そのとき、シンは以前廃教会の地下で感じた、凄まじい気配を再び感じた。肌が総毛立つその感覚、それは何かが起こる前触れであった。

「ブーステッド・ギアァァァァァ！」

『Ｄｒａｇｏｎ　ｂｏｏｓｔｅｒ　ｓｅｃｏｎｄ　Ｌｉｂｅｒａｔｉｏｎ！』

極限まで放たれる赤い閃光の中で、一誠の叫びに応えるように『赤龍帝の籠手』はその姿を変化させていく。変化した籠手は装甲がより攻撃的に、より重厚的な形状へと変わり、手の甲の部分だけでなく腕の部分にも、新たな宝玉が形成される。

輝く閃光の中で新たに目覚めた力に一誠は笑みを浮かべ、その光の中で声高々に叫ぶ。

「第二の力！『赤龍帝からの贈り物〈ブーステッド・ギア・ギフト〉！』

『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』

眩い光が収まったときレイヴェルたちが見たのは――校舎へと向かって走っている一誠と小猫の姿であった。

「ちょ、ちょっと、お待ちなさい！　あれだけ格好をつけていたのに私たちを無視して進むつもりですか！　貴方、一体何をしたの！」

「うっせー！　態々敵に言う訳ないだろ、この焼き鳥妹！　木場！　間薙！　さっきのはな――」

　レイヴェル達に聞こえない様に通信機に向かって小声で話す一誠。通信機から伝わって来た言葉で、シンと木場はあの光の中で一誠が何をしたのかを理解した。
「へぇ、そういった使い方もあるんだね」
「分かった」
　シンと木場はそれぞれ頷き、後を追おうとしているレイヴェルたちの前に立ち塞がる。
「邪魔ですわ！」
「なら力尽くで退かすんだな」
　レイヴェルは短く舌打ちをし、側に居る者たちに指示を出す。その中で真っ先に飛び出したのは『兵士』のニィであった。今だ片割れを倒された怒りが冷めないのか、シンに向かって全速力で襲い掛かる。
　シンが自分の間合いへと入った瞬間、幾度もその身体に打ちつけてきた拳を、シンの喉元目掛けて繰り出す。
「成程、良く見える」
　ニィの繰り出した拳はシンの右脇へと挟まれ、あまりにあっさりとその動きを拘束した。何度も放ち、その度に相手の体に傷を刻み込んできた自分の拳の動きを簡単に見切られ、ニィの表情に動揺が浮かぶ。なにより、ついさっきまでシンはニィの動きについ

てこられなかった為、その動揺は一入であった。
シンがニィの動きを見切れたその理由、それこそが一誠の新たに目覚めた力『赤龍帝の贈り物』の効果であった。籠手によって高められた倍加の力を自分以外の者あるいは物に譲渡し、与えられた側の力を向上させる能力。
この能力によって身体能力を著しく向上させたシンの目には、ニィの動きを目で追うことが出来、なおかつ反応することも出来た。
片腕を挟まれ、必死になって抜け出そうとするニィであったが、締められた部分はびくともしない。
そして、シンの方もこのまま何もする訳も無く、首を後ろに仰け反らせると、ニィの脳天目掛けて全力で額を叩きつける。響く肉と肉、骨と骨の衝突音。その凄絶な音は周囲の人物の顔を引き攣らせ、肌に鳥肌を立たせるものであった。
シンは掴んでいた腕を放す。ニィはその場から二、三歩後ろへ下がると白目を剥いて崩れ落ち、光に包まれて消える。
『ライザー・フェニックス様の『兵士』一名、リタイヤ』
アナウンスが聞こえてくる中、シンは軽く首を鳴らすと、レイヴェルたちに向けて右手で手招きをし、挑発的な態度をとる。
「次はどいつだ?」

脱落、決意

挑発をするシンの態度に、レイヴェルは頬や瞼を細かく震わし苛立ちを露わにする。どう足掻いても結果は自分たちの勝利であるというのに、まるで弱者を見下す強者の様な振る舞い方、兄同様高いプライドを持つレイヴェルにとっては許せるものではない。

「貴方――！」

レイヴェルがシンへと罵倒を返そうとすると、それを遮るようにカーラマインとシーリスが前へと出る。

「言わせておけばよろしいのです、レイヴェル様。私たちがあの自信諸共切り裂いてしまいますから」

勇ましいシーリスの言葉に、暫しの間シンと二人の『騎士』に視線を行き交いさせていたが、シーリスの言葉に怒りの溜飲が下がったのかレイヴェルは腕を組み、表情から苛立った気配を消し、その上に薄らと笑みを浮かべる。

「分かりましたわ。いけませんわね、私としたことが安い挑発に乗るところでした。シーリス、カーラマイン、貴方たちに任せるわ」

余裕を取り戻したレイヴェルが二人に指示を出すと同時に、地を蹴り『騎士』特有の

超高速で残像すら残らない速度で走る。現在の強化されたシンの視力でも速いと認識する二人に迎撃の構えをとろうとするが、その前にシンの横から疾風が駆け抜けていく。

響く剣戟の音。

レイヴェルとシンその両者が立つ、ちょうど中間地点に於いて、三人の『騎士』が再度刃を混じり合わせる。上段から振り下ろされたカーラマインの剣を木場の右手に握る『炎凍剣』が受け、中段から胴体に向けて払われたシーリスの大剣を左手に持つ『風凪剣』の鍔を大剣の鍔に押し当て、均衡した状態を創る。

「先走ってごめん。でも、この決着は僕の手で着けたいんだ」

背を向けたまま謝罪の言葉を述べる木場。その状態でも互角の力がせめぎ合い、剣を握る手が細かく震え続けていた。

「真面目な奴だな、お前も」

そう言ってシンは握っていた右の拳を開き、そのまま垂れ下げる。それは全て木場に任せるという証であった。

「最初に言った通りだ、勝ってこい」

「ああ、任せてよ」

視線は鋭くも口には笑みを浮かべる木場。すると木場は何を思ったのか突如、両手に

持つ剣から手を放す。

『なっ！』

戦いの最中に自らの武器を手放す行為に、一瞬カーラマインとシーリスの脳内は驚愕に満ち溢れてしまう。

だが、その後に思い出す。木場の持つ『神器』の能力を。

二本の剣を手放した木場はそのまま両手を後ろに下げ、勢いをつけて地を掬い上げるように、両手を地面すれすれを滑る様に走らせる。すると地面から左右に間隔を広げて二本の柄が生え、それを握り締めてから引き抜くと共に形状の違う魔剣が現れる。木場はその二本の魔剣で、カーラマインとシーリスを下から斬り上げる。

コンマ一秒前に木場の『神器』について思い出していた二人は半ば条件反射で身体を動かし、下から迫る二つの斬撃をそれぞれが受け止めた。

そこで一旦木場は距離を取る。追い詰められていくカーラマインとシーリスであったが、二人の顔には現状に対する恐怖や焦りが浮かんではおらず、カーラマインにいたっては凄絶な笑みすら浮かべている。周囲を詳細の分からない魔剣が覆っている状況である中、その胆力は見事なものであった。

「これほどまでとは――魔剣使い、これほど冷や汗を流す相手は久方ぶりだ」

「へえ、それは光栄だね」

「尤もその相手はお前と同じく特殊な剣を使っていたがな。――『聖剣』と『魔剣』、これも因果か」

特に深い考えがあった訳でなく、ぽつりと洩らしただけのカーラマインの言葉。それは木場に劇的とも言う変化をもたらした。

「……その話、ぜひとも詳しく聞きたいな」

尋常ならざる殺気と敵意。感情を押し殺そうとする声は低く、獲物に飢えた獣の唸り声を彷彿とさせた。強い意志が込められた瞳は、抜き身の刃の様に温度を感じさせず、目に映る者全てを傷付けようとする危うさが秘められている。その表情は、以前シンが見た木場の踏み込めなかった側面であった。

あのときは一歩踏み込まず、ただその顔を見ていただけであった。だが今は――

「その様子只事ではないな……だが、敵に対しそう易々とは塩を送れないな」

「……そうかい、なら――」

『木場っ！』

続きの言葉を紡ごうとした瞬間、木場の鼓膜を揺さぶる爆音のような音が、突き抜けるようにして脳内へと入ってくる。それが声であると認識出来たのは少し間を置いた後であった。

校舎の窓ガラスが細かく震える程の大音量に、この空間に居る誰もが反射的にそちら

の方へと顔を向けてしまう。戦いを見物していたレイヴェルは咄嗟に耳を手に押し当てて目を白黒させ、屋上を目指している小猫と一誠はその声に足を止め何事かと窓の外を見、屋上で戦っているライザーとリアスは戦いの手を止め、アーシアは体が跳ね上がるようにして驚いていた程であった。その発生源となっていたのは今まで静観をしていたシンであり、普段のシンを知っている木場からすればあのような大声を出す姿など見たことも聞いたこともなく、驚きで目を丸くする。叫んだシンは態度に怒りなどは見せず、あれほどの声量を出したのが嘘の様に静かに佇んだ状態で木場を見て口を開く。

「その『聖剣』とどんな因縁があるのかは知らないが、とりあえずそれは後にしてくれ。今はそれが目的じゃ無い筈だ」

「だけど――！」

「頼む、木場。その感情は後回しにしてくれ。お前にとって見過ごせない重要なことかもしれないが、それが今最優先するべきことなのか？」

怒声とは一転して相手を宥める為に静かな口調で話すシン。一方で木場の方も頭の中の冷静な部分が現状を自覚しているのか、幾分態度が落ち着く。しかし、その表情には割り切れないものが含まれていた。

「それでもそれを優先するなら好きにしてくれ。ただ、願わくば俺はお前がリアス・グレモリーの『騎士』としてあってほしい」

ほんの一瞬の間に木場の表情がいくつも変化する。怒り、悲しみ。後悔、それらの感情が過ぎ去ったとき、いつもの木場祐斗の顔がそこにあった。

「……ゴメン、頭が冷えたよ」

申し訳なさそうに眉を下げ小さく笑うと、シンは来ているぞ、とだけ言葉を返した。

木場が視線を戻すとすぐ側までカーラマインとシーリスが距離を詰めていた。それを見ても慌てることもなく、すぐさま手に持つ魔剣を二本とも投げ放つ。

相手が受け止めるのを確認するよりも早く、木場は再度剣から手を放すと両手が空いた状態で剣を振るような動作に入る。

木場の軽く握られた手の中に、地面から飛び出してきた両手持ちの魔剣の柄が完璧なタイミングで納まり、舞う土埃を切り裂いてカーラマインとシーリスへと迫る。

同じ『騎士』から見ても異常に映る木場の武器の換装。瞬きをする暇も無く変わる剣の形状や長さに反応が追い付かなくなっていき、木場の振るう魔剣を二人で辛うじて防ぐものの、その威力に押され体勢がよろめき、崩れた姿勢のまま後方へと飛ばされたせいで着地するものの二人とも膝が折れ、致命的な隙を自ら生み出してしまう。

「『魔剣創造』！」

『神器』の名を叫び、手に持った魔剣を投げ放つとカーラマイン、シーリスを分断するかのように二人のいる位置の中央へと刺さる。しかし、事態はそれだけでは収まらず、

突き刺さった魔剣が赤い魔力の輝きを見せたかと思えた次の瞬間には、カーラマインとシーリスを囲むように数え切れない程の魔剣が地面から現れる。

金属と金属が擦れ合う耳障りな音と共に完成された魔剣の檻、それは一誠から木場に譲渡された力を全て『魔剣創造』に込めたことによる、限定的ではあるが能力の完全開放であった。

自分たちを囲む魔剣の威圧。それに対して息を呑む『騎士』の二人であったが、本当の脅威はこの後にやってきた。

無数の魔剣が跋扈する中、最速を以て飛び込んでくる木場。二人の『騎士』はその姿に気付き握る剣を振るうが、木場はそれを跳躍して回避し二人の背後へと回る。

木場の姿を追い、即座に振り向いた二人が見たのは二本の魔剣を振るおうとする木場の姿。その剣先はシーリスへと向いている。振り下ろされた魔剣を咄嗟の反応で防ぐシーリス、だが、それによって空いた胴を木場のもう一本の魔剣が貫いた。

「ぐっ……負けか――」

貫かれたシーリスは自らの敗北を認め、その身体は光に包まれていく。が、シーリスは最後の抵抗として突き刺さった魔剣の剣身を両手で掴み、自らに固定をする。シーリスの足掻き、それはほんの僅かであったが剣を引き抜こうとする木場の動きを緩める結果をもたらした。消え行く『騎士』の片割れの姿を最後まで見る前に、カーラマインの

剣が木場の足下から頭部を目指して振るわれる。木場はシーリスを貫いた剣を手放し、もう一本の魔剣を両手で握ってそれを防ごうとするが、カーラマインは防がれるよりも早く、もう一方の手を木場の顔目掛けて突き出した。その手には振るっている剣の半分程の長さの短剣が握られている。

木場は顔を逸らしそれを避けようとするが、僅かにタイミングが遅れ、頬を掠らせそこに切傷を創る。しかし、木場はそのまま後方へと大きく跳ぶと、背後に突き刺さる魔剣の柄を片足で踏みつけ足場にするや、突き刺さる別の魔剣を両方の手で抜き放ちながら、カーラマイン目掛け、溜め込んだ脚の力を爆発させた。

直線的な動きではあるが今までの戦いで見てきた中で最も速く、同じ『騎士』であるカーラマインの動体視力でもその影を追うことしか出来ない。

カーラマインは奥歯を噛み締め、木場が魔剣を振り下ろすよりも先に、唯一の逃走場所として開いていた上空へと跳びあがる。僅差で木場の斬撃から身を守ることは出来たものの、カーラマイン自身この場所に逃げたことを失策だと感じていた。だが、そうしなければ木場の攻撃を防ぐことは敵わず、少しでも時間を稼ぎ事態の打破するのを狙う苦肉の策であった。

しかし、木場も相手の狙いを既に把握しており、そして次で終わらせる方法は既に頭の中に描き終えてある。

カーラマインの回避と同時に木場は地面に魔剣を突き立て、両足で地面を踏みしめて急停止をすると、もう一方の魔剣を深々と地面に突き刺す。
すると、その魔剣から伝わる木場の魔力に呼応し、周囲を囲む魔剣たちが一斉に震え出すと、上空目掛けて一気に噴き上がる。
「なっ！」
「これで終わりだよ」
木場は空にいるカーラマインに開いた掌を見せ、それをきつく閉じるとそれら全ての魔剣が剣先をカーラマインへと向け、放たれた。
四方八方から迫る魔剣の群れを両手の剣で打ち降ろしていくが、手数を上回る魔剣の数にその抵抗は刹那の間だけカーラマインに猶予を与えたに過ぎず、やがて肩や腕、脚、胴体を魔剣が刺し貫き、その抵抗に終止符を打った。
「……完敗か」
「急所は外してあるから、命までは奪わないよ」
「残酷なのか甘いのかよく分からない『騎士』だなお前は――」
最後にそう言った後にカーラマインは小さく笑い、光に包まれていく。
『ライザー・フェニックス様の『騎士』二名、リタイヤ』
木場の勝利を告げるアナウンス。そして、その直後――

『リアス・グレモリー様の『女王』一名、リタイヤ』

――勝利の余韻を吹き飛ばす朱乃の敗北のアナウンス。それを聞いたシンと木場の表情は凍り付き、思わずアナウンスが聞こえた方角に顔を向けてしまう。

その直後、背後から伝わってくる空気の振動と炙る様な熱、そして聴覚を蹂躙する爆発音。振り返るシンが見たものは、先程木場が立っていた場所から上がる黒煙であった。

「――木ッ」

「僕なら大丈夫だよ」

黒煙の向こう側から聞こえた木場の生存を知らせる声。安堵の溜息を吐き、黒煙の中から姿を見せた木場を見てシンは頬を震わせ、そして奥歯を噛み締めた。

木場の左膝から下は黒く焼け焦げた状態となっており、肉の一部が吹き飛ばされたのか絶えず血が流れ続け、背後に赤い線を造り続けていた。

「はは、少し逃げ遅れちゃったよ」

困った様に笑う木場。しかし、その顔には幾筋の汗が流れており、今も神経を蝕む激痛に耐えていることが容易に想像できた。浮かべる笑みも放った言葉も、全て心配を掛けまいとする木場なりの気配り。

足を引き摺る木場に肩を貸さそうと近寄ろうとするが、本日二度目となる上空から聞

こえてくる艶のある声にその足を止めた。
「残念ね、また失敗。でも、全くの無駄にはならなくて良かったわ」
『女王』ユーベルーナは不満そうな言葉を述べているものの、ローブの下から笑みを覗かせている。撃破までいかなかったものの、『騎士』にとって命とも言える機動力を奪ったことは大きいと考えている様子であった。
「うふふ、来てくれたわね、ユーベルーナ。リアス様の『女王』を撃破し『騎士』の力も削ぐなんて流石だわ」
「お褒め頂き光栄でございます。レイヴェル様」
頭を垂らすユーベルーナ。レイヴェルの方も『騎士』二体を倒されたときは不機嫌な気配をありありと出していたが、自分たちの中で最強の駒であるユーベルーナの援軍と、その手土産とも言える成果にすっかり機嫌を良くする。
「このままライザー様の下へと向かいますか？」
「……いえ、まずは彼らから撃破しますわ。お兄様への助力はそれからでも遅くはありませんわ」
僅かに思案した後に下したレイヴェルの決断。左腕が使い物にならなくなったシンと左足が使い物にならない木場、現状は最悪と言っても過言では無い。
「間薙くん」

通信機から小さ囁く木場の声が聞こえる。
「返事はせず、そのままの状態で聞いてほしい。今から僕が君を逃がす為の隙を作る。その間に校舎へ向かい、イッセー君たちと合流してくれ。――安心してくれ、彼女たちは僕がここで抑える」
「木場、お前――」
「動けない『騎士』でも壁ぐらいにはなれるさ」
それは出来ない、という言葉をシンは口にすることは出来なかった。木場の案自体を肯定する自らの冷静な部分がそれを阻んだからだ。満足に動けない木場と走るだけなら十分に動けるシン。供に逃げると言う選択肢はすでに無く、一人の為に一人が贄になるしかこの場を抜ける術がない。
「大丈夫、みんなの背中を守るのも『騎士』の役目さ」
こちらの心中を察してか、木場は頼もしい笑みをシンへと向ける。シンは寸刻沈黙を続けた後、軋む程奥歯を噛んでから首を小さく縦に振る。
それを木場は満足そうに頷き、三秒後に走るように指示を出す。
「三……二……一……」
零と木場が口に出すと同時にシンは校舎に向かって全速力で駆け出す。それを見たユーベルーナはすぐさまその足を止めようとするが、それを飛来する木場の魔剣が阻

む。

「邪魔を……！」

「それ以上はやらせないよ」

続け様に無数の魔剣をユーベルーナに放ち続けるが、『女王』であるユーベルーナも魔術による障壁を張る。無数の魔剣の直撃は避けるものの、幾本かは障壁に突き刺さるのを見て場に留まることを危険視し、翼をはためかせると空中を高速で移動し始め、木場の魔剣の狙いが定まらないようにする。

その間にもシンは新校舎へと到達し、木場も新校舎に近付かないよう魔剣を弾幕のように張り巡らせ、妨害を出来ないよう手助けをする。

シンは最後に木場の方へと振り返る。木場は只頷き、シンを鼓舞するように剣を高々と掲げた。

その姿を目に焼き付け、シンは屋上へと向かって全力で走り出す。疲労した体に階段を昇り続けさせることは酷であったが、一瞬たりとも速度は緩めることは出来ず、コンマ数秒でも早く辿り着く為に肉体を酷使し続ける。

それが、自ら死地に残った木場に対してのシンが出来る唯一のことであった。

◇

「一人……逃がしてしまいましたね」
「はは、大丈夫。貴女の相手は僕がしますから」
「手負いの『騎士』一人で何が出来ますか？」
「うーん。そうだね……」
木場は手に握る魔剣を地面へと今残る力を行使し、グラウンドを刃と魔剣の大群へと変える。これにより木場は譲渡された力を全て出し切ったことを感じた。そして同時に今の木場の魔力ではこれ以上の魔剣を創造することが出来ないことも自覚する。
周囲に群れなす魔剣たち、それが木場の最後の力であった。
「……貴女を倒す、ぐらいかな」
いまだ傷口から血が溢れていく現状でも翳りを見せない木場の笑顔。木場が挑発めいた言葉を口に出した瞬間に木場の足下に魔法陣が描かれる。
だが、既にその身にそれの脅威を刻まれていた木場は、魔法陣が爆炎を上げるよりも早く、片足とは思えない程の瞬発性を以て魔法陣の中から抜け出すと、その直後に魔法陣から爆風と炎が昇る。
その風圧に髪は乱され、熱によって頬の炙られていく感触を味わう木場。両足が健在ならば影響の少ない場所まで移動することが可能であったが、いまは直撃のみを避ける

ので精一杯であった。
　地面を転がるようにして、グラウンドから突き出ている魔剣を握り、周囲の魔剣をユーベルーナへと投擲。だが、ユーベルーナは風を裂いて進むそれらを指一本動かして、創り出した魔法陣から発生する爆発で撃ち落とす。
　全ての魔剣を撃ち落としたユーベルーナは木場へと目を向けるが、そこに居る筈の木場の姿は無い。魔剣と爆発との打ち合いに乗じて姿を消した木場の姿をレイヴェルらが探そうとしたとき――
「きゃあっ！」
　悲鳴が上がる。すぐさま声のする方へと目を向けると、そこには背後から二本の魔剣で貫かれている『僧侶』の姿、『僧侶』はそのまま光に包まれ、退場となる。そして、消えた『僧侶』の背後から現れたのは姿を消した木場であった。
「――やってくれるわね、『騎士』の坊や。私を倒すなんて言っていた癖に最初から狙いは別の駒だったなんて」
「残ると言った以上少しでも相手の戦力を削らなきゃ、『騎士』としても剣士としても名折れだからね」
　品の良い唇を悔しげに歪めるユーベルーナ。そして、レイヴェルも相手の狙いに気付けず、本当の意味での傍観者と成り下がっていたことを思い知らされ、ユーベルーナと

同じような表情となる。

だが、それでも木場の危機的状況は変わらない。むしろ先程よりも悪化しているといってもいい。流れる血は足を無理に動かしたせいでより量を増し、木場の顔から血色を奪い蒼白と化していき、多くあった魔剣も既に創造時の三分の一程の本数へとなっていた。

これ以上時間を掛けることは出来ず、次の攻撃が木場にとって最後の攻撃となる。木場は残った魔剣の群れを見て、その中から最後に使用する魔剣を心の中で選択し、最後の勝負を前に軽く息を吐く。

不思議なもので、このグラウンドで戦う前は緊張で震えていた手はすっかりと納まり、心臓の鼓動も平常時の様に穏やかで、口の中が緊張で枯れるようなことも無かった。

木場は何故こうも落ち着いていられるかを考え、そしてその答えはすぐに導き出された。それは自分が倒れても意志を託せられる存在が背中にいるという安心感。初めは頼りなかった一誠も相手の『駒』を倒せるほどの実力となり、無口で感情をあまり表に出さないが優しく仲間思いの小猫、いつも無愛想で冷めているといっても過言では無いが頼れるシン、それらのことを考えると精神〈こころ〉が強くなっていくような気がした。

木場は笑みを浮かべる。自分と仲間の勝利を信じて。

「いくよ」

突き刺さる二本の魔剣を引き抜き、決戦の言葉を口にすると残り全ての魔剣がユーベルーナに向かって突貫する。

すぐさま迎撃をするユーベルーナであったが、数本を撃ち落としたとき目の前に影が現れる。それが剣を振り上げる木場の姿だと認識した瞬間、ユーベルーナは自らの勝利を確信した。

飛び込んでくる木場との距離なら、いくら最速の動きを持つ『騎士』であっても、ユーベルーナが魔法陣を描く速度の方が上回っている。勝負を急ぐあまり捨て身の戦法を使わざるをえない状況になったと判断し、ユーベルーナは瞬時に自分と木場との間に魔法陣を形成した。

展開は一瞬、そしてその発動も一瞬。空中に描かれた魔法陣が真紅の光を放ったかと思われた次のときには、紅蓮の爆炎が木場を開かれた口の様に飲み込もうとしていた。

それを見て、木場は笑った。賭けが自分の勝ちであると確信した為に。

迫る爆炎に向けて己の両手に握られた二本の魔剣を交差させて振り抜く。それによってもたらされた現象にユーベルーナは絶句した。

圧縮された力を熱に変えて荒ぶる炎は、粉雪の様な小さく儚い氷の礫たちに変り果て、唸りながら全てを飲み込み砕く筈の爆風は、ただ髪を揺らすだけのそよ風に成り果

てる。

そんな、という言葉の動きをユーベルーナの唇がする。

木場が振るった二つの魔剣は『炎凍剣』と『風凪剣』。前もって『騎士』たちの炎と風の加護を無効化したことから、ユーベルーナの爆発を抑えられるのではないかという推測からこの剣を選択した。その結果は木場の目論見通りとなる。

大技を使ったことで出来る隙、それを狙い残りの魔剣が群れを成してユーベルーナへと襲い掛かった。それを障壁を張り防ごうとするが、それよりも先に数本の魔剣がユーベルーナに突き立つ。右肩、左足大腿、左脇腹、左上腕、それらを貫き、ユーベルーナの纏うローブに血を滲ませ苦鳴を上げさせる。

「ううっ！」

複数の魔剣に貫かれたユーベルーナの動きが完全に止まる。木場は躊躇う事無く二本の魔剣をその胴体へと貫こうとした。しかし――

「っ！」

木場の側面から強襲する真紅の炎。それが誰が放ったものかを考えるよりも先に『炎凍剣』を振り抜く。だが、凍らせることが出来たのは表面の僅かな部分、すぐに凍りきらなかった炎が凍った炎を飲み込み一つとなる。

木場は決して軽んじている訳では無かった。自分の『炎凍剣』ならば多少は持ちこた

えることは出来るという考えはあった。しかし、結果は無残にも木場の予想を裏切る。それほどまでにレイヴェルの放った不死鳥の炎は強力なものであった。

迫る炎に魔剣を捩じ込み、その勢いで体勢を捻りなんとか躱す木場であったが、その咄嗟の行動で生まれた相手の突き入る隙。木場が僅かの間ユーベルーナから目を離し、再び戻したとき眼前にはユーベルーナの姿。

木場が剣を振るうよりも先に、ユーベルーナの掌打が木場の左胸に討ち込まれる。その一撃は大したものではなく、木場の肺を少しだけ押し、僅かな酸素を外に押し出した程度の威力しか無かった。

だが、ユーベルーナの狙いはそれでは無い。

「――まいったね」

苦笑する木場が見たものは自分の体に張り付かされた魔法陣の輝き。すでに描かれた文字は赤く発光し始め、爆発は秒読みの段階へと入っている。

制服を切り裂いて直撃を避け、至近距離での爆発を魔剣で防ぐという案が一瞬浮かんだが、それはすぐさま消えた。木場の持つ二本の魔剣のうち『炎凍剣』が先程のレイヴェルの炎によって融解し始めていたからだ。炎をも凍りつかせる魔剣も不死鳥の炎には完全に敵わなかった。

「……ごめん」

自然に口に出た言葉。それが誰に対しての謝罪であるかを木場自身が気付く前に、その身体は爆炎の中に飲み込まれた。

その爆炎の中、零れ落ちた二本の魔剣。落下していく二本の魔剣はその最中に剣身が折れ、銀色の塵となって消えていくのであった。

◇

『ライザー・フェニックス様の『僧侶』、リタイヤ。リアス・グレモリー様の『騎士』、リタイヤ』

グレイフィアのアナウンスが脱落した二名の名を告げる。

両者殆どの眷属が集結して争ったグラウンドも戦いの喧騒は消え去り、静寂だけが残った。

そのグラウンドに立ち尽くすレイヴェルの姿。強敵であった『騎士』を倒したにもかかわらず、その顔には喜びも勝利して当然という傲慢さも無く、ただただ悔しげに唇を噛み締めているだけであった。

その様子を心配げに見るユーベルーナ。レイヴェルは無言で懐に手を入れると、中から『フェニックスの涙』が入った小瓶を取り出し、それをユーベルーナへと手渡す。

「使いなさい」
「ですが、それはレイヴェル様の……」
「いいから、使いなさい」
　静かではあるが威圧するレイヴェルの言葉に負け、ユーベルーナは小瓶を開けると、木場との戦いで貫かれた場所に振るい傷を癒す。その傷が治っていく最中、レイヴェルはユーベルーナへと独り言のように話し始めた。
「……私、最後までこの戦いに手を出すつもりはありませんでしたわ。相手がどんなであろうとフェニックスが負ける筈がないという自信がありましたから」
「レイヴェル様……」
「だけど、彼らの戦いを見ているうちにだんだんと不安が込み上げてきましたの。もしかしたら、もしかしたら、という考えが嫌になるほど浮かんできて……そして、ついにはあの『騎士』との戦いで、貴女が負けるかもしれないという思いが抑え切れず、手を出してしまいましたわ……」
　自己嫌悪するレイヴェル。自らの決めたことを自らの手で反故にしたことが、勝利を上回る敗北感となってレイヴェルを蝕んでいた。
「お気になさらず、そのおかげで私は敗北をせず、リアス様の『騎士』も撃破することができました。全てはレイヴェル様の判断の結果です」

その言葉を聞いてもレイヴェルは俯いたままであったが、やがて何かを決心したかの様に面を上げる。その表情は最初にあった傲慢さもついさっきまであった弱々しさは無く、戦う意思を露わにした戦乙女を彷彿とさせる凛々しさがあった。

「私、決めましたわ」

不死鳥の名に恥じない強い決意の炎を瞳に宿し、放たれる言葉の重みは突風の様な圧力を感じさせた。

「お兄様に辿りつく前にあの三人を倒します。付いて来てくれるかしら、ユーベルーナ？」

「お望みとあらば何処へでも付いていきます。レイヴェル様」

並々ならぬ意志を秘め、レイヴェルは本当の意味での参戦をこのとき決意した。

◇

屋上へと向かい走っていく一誠と小猫。一誠は疲労の色と共に痛みに耐えるかの様に背一杯歯を噛み締めて走り、小猫の方もいつもと変わらない無表情の筈であるがその顔にはどこか悲痛の色があった。

ここまで来る道中いくつもの情報がアナウンスと共に流れ、一誠はその度に足を止め

グラウンドへと戻りたい衝動に駆られていた。ライザー側の眷属が倒されたという情報をもたらされた歓喜の後に仲間が倒されたという悲報、実際朱乃と木場が撃破された際足を止めてしまうことがあったが、その度に小猫から小さくも鋭い声で正気に戻され、心の中で錘のように圧し掛かったまま、衝動を断ち切るかの様に無理矢理足を動かしていく。

「くっそおおお！」

胸の中にある嫌な感情を忘れたいが為に、無理矢理大声を出して走る速度を上げる。もし、自分がいたらという可能性の話が頭を過ぎる度に、声を出し払拭する。

「……誰がいても結果は変わらなかったと思います。……イッセー先輩がいても私がいても」

並走する小猫の慰める言葉。その言葉には小猫自身の悔しさも込められているのを一誠は感じ取り、そんな風に気を遣わせた自分を殴り飛ばしたい衝動に駆られながらも、それらを飲み込んで無理矢理笑顔を張り付ける。

「心配かけてゴメン……さっさと部長のとこに行って、朱乃さんや木場の分までライザーの奴をぶん殴ってやろうぜ！」

「……はい」

「残念ですけど、そういう訳にはいきませんわ」

あと少しで屋上という場所まで来て、聞こえる敵の声。一誠―たちの進む廊下の正面にレイヴェルとユーベルーナが立ち塞がっていた。
「なっ！　お前はグラウンドに居たはずだろ……何でもうここにいるんだよ！」
「もしもの時を想定してこの校舎の至る所に転送用の魔法陣を張り巡らせておきましたの。……只の保険のつもりでした筈でしたけど」
足下に目をやるレイヴェル、そこにはレイヴェルが言ったように魔法陣が描かれていた。先回りをしていたレイヴェルに注目していた一誠であったが、ここでレイヴェルに付き添うユーベルーナの姿に気付く。
「お前は……てめぇが朱乃さんや木場をやったのか！」
体育倉庫付近で接触したライザーの『女王』の姿を見て激昂する一誠。ユーベルーナはその怒りを浴びても表情一つ動かさず、冷淡な顔で言う。
「そうですが、それが何か問題でも？」
一誠の拳に自然と力が入り、それが震えとなって籠手を小刻みに揺らす。ユーベルーナの冷徹な肯定は一誠の怒りに火を注ぐには十分であった。
「だったら！　この場で木場と朱乃先輩の仇を取ってやる！　俺の『神器』の力思う存分叩き込んでやるから覚悟しやがれ！」
「こちらもそのつもりです。お嬢様、赤龍帝は私が相手をします」

「ええ、私はそちらの『戦車』の相手をいたしますわ」
　レイヴェルの背中から蝙蝠を彷彿とさせる翼ではなく真紅に燃え上る炎の翼が広げられ、そこから舞う火の粉は散っていく羽根の様であったが、注目すべきなのは漂う火の粉がいつまでも小さく燃え盛り、鎮火する気配がない。通路にも幾つも落ちるがその場で燃え続け、薄暗い廊下をレイヴェルと共に照らす。まさに不死鳥の名に相応しい不滅の炎であった。
　小猫も臨戦態勢に移る一誠を制することなく、自らも拳を握り構えをとる。この様な状況であっては戦闘の回避は難しく、仮に抜けることが出来ても態々ライザーの下へ二人の増援を連れていくという結果になってしまう。
　出来ることならば体力の温存が望ましいが、相手は眷属最強の『女王』と、『僧侶』ではあるがフェニックスの血族。手を抜いた戦いはまず出来ない。
　一刻を争う状況で互いに緊張感を高めていくとき、一誠、小猫の通信機からある人物の声が届く。
『二人とも無事か』
「間薙！　お前は大丈夫なのか！
『そういった話は後だ。もう屋上には着いたのか？』
「……その手前で眷属二人に足止めされています」

『――分かった。今から十秒後、全力で走って飛べ。そいつらは俺が引き受ける』

思わぬ言葉に一誠、小猫が目を見合わす。その様子を不審に思ったのかユーベルーナはすかさず魔法陣を空中に描くとそこから二人目掛け爆炎を放つ。すぐさま廊下の隣にある教室に飛び込む二人。ユーベルーナの爆炎の余波で廊下や教室のガラスが一斉に砕け散っていく。

「一体何するんだ！」

『説明をしている暇は無い。あと五秒だ』

「……イッセー先輩。間薙先輩の言葉を信じて一気に行きます」

「ああ、もう！　頼んだぞ！」

小猫と一誠が同時に逃げ込んだ教室から飛び出し、一直線でレイヴェル達に突っ込んでいく。

無謀とも言える二人の行動に多少の疑問を持ちつつも、絶好の機会と言わんばかりにレイヴェルは両手に炎を生み出し、ユーベルーナは巨大な魔法陣を形成する。

一誠と小猫が頭の中で数えていたカウントがゼロとなったと同時に、両者は背中から黒い翼を広げ、天井ぎりぎりを飛翔する。

それを追い、見失わないよう天井を見上げ、すぐさま撃ち落とそうとするレイヴェルとユーベルーナ――その身体が突如沈む。

見下ろしたユーベルーナが見たものは轟音を上げながら崩れ落ちていく廊下。それを認識した途端、重力の力で廊下の下へと落下していくユーベルーナ。あまりに突然の出来事に翼で飛翔する余裕も無い。

周囲の落下物でユーベルーナの体勢が崩れ、瓦礫と一緒に頭から下の階へと落ちていく。そこに現れる――

「また会ったな」

――上下逆さまに映るシンの姿。

落下していくユーベルーナの胴体に狙いを定め、舞う土煙を切り裂きながらシンの蹴りが襲い掛かる。

熱波、抜剣

放たれたシンの蹴りがユーベルーナに触れるか触れないかという直前、両者の間に火花が飛び散る。正確に言えば、それは火花では無く魔力の礫であった。

足の先から感じる違和感にシンは目を凝らして接触箇所を見ると、そこには掌ほどの広さしかない魔力の壁によって阻まれているのが見えた。最速で展開した故に、十分な魔力で形成することの出来なかった魔力壁ではあったが、ユーベルーナ自身の技量によって、狙った箇所にピンポイントで張ることでそれを補う。それは幾度も戦いを経験した者にしか出来ない離れ業であった。

防いだのを確認したユーベルーナはようやくそこで翼を広げ、地面に接触する前にその場で停止、そのままシンとの間に形成した魔力壁を変換し、攻撃用の魔法陣へと変えるとすぐさま反撃へ転じる。

相手が攻めに入ったことを嗅ぎ取ったシンは、突き出した足を急いで引くと同時にもう一方の足で地を蹴りつけ、正面に描かれる魔法陣の攻撃の範囲外へと逃れる。ユーベルーナもそれを見て無駄な魔力を消費するのを嫌がったのか、展開した魔法陣を消し去った。

その光景を見て、シンの視線が魔法陣からユーベルーナへと向けられる。目の前の危機が消え、次の危機へと注視すること自体は間違っていなかった。もし、間違っていることがあるとすれば、それを全体を見ずに行ったということであった。

背中に駆ける突如の悪寒。間も無く鼻孔に入ってくる焼けついた空気の匂い。その悪寒が指し示す方向へと視線を向けたシンが目にしたのは、目の前を覆い尽くす炎の塊。避けようにも迫る炎の大きさのせいで不可能、『氷の息』で少しでも威力を削ぐという考えも浮かんだが、そんな間など最早ない。

残る策は出来るだけ炎のダメージを最小限にして、炎の中から抜け出す方法のみ。息を吸い込み四肢に力を込めるシンであったが、前触れも無くシンの眼前で、突如として壁が現れた。

突然の出来事に暫し立ち呆けていたが、炎を遮る壁が徐々に赤熱化していくのを見て、すぐに後退し炎の範囲から遠ざかる。

壁が現れた方向へと目を向けると、上から下を覗き込む小猫の姿が見えた。

「お前がやったのか、塔城」

「……はい、瓦礫は先輩がいっぱい作って下さったので」

「先に行けと行ったんだがな……とりあえず礼だけは言っておく、助かった」

「……本当なら先に行く予定でしたが、アレに邪魔されました」

顎で指す小猫。その先には炎の翼をはためかせたレイヴェルが居た。廊下を崩した影響で舞った土埃のせいで金髪も衣服もくすんだ色となり、怨敵でも見るかの様な視線をシンと小猫に向けてくる。

「よくもやってくださいましたね……！　貴方も、そしてそこの貴女も！」

怒声を上げるレイヴェル。心なしか、シンに向けられた怒りよりも小猫に向けられた怒りの方が大きく感じられた。

「何かしたのか？」

上から降りてきた小猫に事情を尋ねる。

「……あの人が妨害してきたので――」

廊下が崩壊していく最中、事前に翼を広げていたレイヴェルは落下に巻き込まれず、一誠と小猫に対し先に行かせまいと攻撃を仕掛けようとしたが、それに気付いた小猫はその場から反転し、一誠を先に行かせて自分はその未然に攻撃を防いだという。

「その割にはひどい剣幕だな」

お嬢様といった気品ある顔立ちは烈火の如き怒りに染まり、触れる者全てを焼き尽くそうという程のものであった。事実、仲間のユーベルーナもその怒り様に、どう声を掛けるべきか躊躇っているように見える。

「……思いっきり頭を踏みつけて邪魔したので」

小猫の言葉にシンはレイヴェルの頭部をじっと見つめると、確かに靴跡らしき縞模様の汚れが金髪に描かれていた。

「成程」

「何が成程なのかしら！」

シンの視線に気付き、怒りのまま炎を生み出しそれを肥大させていく。その光景は腕全体が炎と一体化でもしているかのようであった。それよりも先にシンと小猫は、足下にある拳大の瓦礫らを蹴り飛ばし牽制を入れる。数キロはある塊がサッカーボールの様に軽々と蹴り飛ばされ、散弾の様に散らばってレイヴェルへと迫るが、間髪入れずにユーベルーナの創り出した障壁がそれを防ぎ、レイヴェルも怒っている様で芯の部分は冷静であったのかそれを見越した上で、先制したシンたちの動きが戻る前に炎と化した腕を振るう。その軌跡に合わせて帯状となった炎は、現在シンたちが居る通路の幅全体にまで広がり、かなりの速度で進んでくる。

シンは一歩踏み込んで、右腕を左肩の上にまで持ち上げた形の構えになると、帯状の炎に向けてその右手を鞭の様にして薙ぐ。高速で振るわれた右手の甲が炎に触れると、音も無く掻き消され帯状の炎に裂け目を生じさせる。しかし、振り抜かれたシンの右手も、触れたのはほんの僅かの時間でしかないのに、皮膚の一部分は焼け爛れ白煙を上げていた。

だが、それに構う事無く更に踏み出して、レイヴェルたちとの距離を狭めようとするが、その一歩を踏み出したとき、爆竹の様な小さな炸裂音が響きシンの動きが止まり、踏み出した方の膝が折れる。

見れば足の甲に数センチ程の直径の穴が開かれ、そこから夥しい血と焼けた匂いと共に煙が上がっていた。足の裏から甲まで貫通した傷の奥には赤黒く染まる廊下の床が見え、傷口の周囲には筋組織が纏わりつく白いものが見えた。認識してから襲い掛かる激しい痛み、それによって思考が中断されそうになるのを耐えながらも、その傷の状態からユーベルーナの爆破によるものであると判断する。

動きが止まったシンにレイヴェルは炎の翼から無数の火球を生じさせ、その狙いをシンと小猫に定めていく。

肌から汗が滲みでてくる感覚を覚えながら、小猫は急いでシンの下に寄り、この場から後退をしようと背後に一歩足を下がらせようとする。すると、いきなり足下から魔力の気配を感じることに気付き、小猫と共にシンは自分の足下に視線を向ける。そこに有るのはユーベルーナが描く魔法陣と酷似した小さな魔法陣、それが廊下の至る所に展開されつつあった。

よくよく見れば、踏んでいる箇所の文字の色が赤く変化していき、輝きが放ち始めていることに気付く。それが何を意味するのか、既に結果を知っている二人の行動は迅速

なものであった。
通路脇の教室に目を向ける。そこには足下にある魔法陣と同様の物が壁やドアに張り巡らせてある。先に見た通り廊下には逃げ道はない。
残る箇所は一つのみ。
シンのせいで既にガラスが吹き飛んでいる窓に、躊躇う事無く飛び込む。窓の外には足場などは無く、そしてシンは空を飛ぶことは出来ず、何もしなければ落下するのみ。だが、窓の外に飛び出したシンがしたことは、右手を伸ばしたことであった。
やがてシンの体が下へと落下し始めたとき、伸ばした手を掴む小さな手。黒い翼を羽ばたかせている小猫の手であった。シンは小猫が手を掴んだのを確認すると壁面に足を着け、まるで地面の上でも走るかの様に地面に対し水平に疾走する。ユーベルーナもすぐさま対応し、魔法陣をいくつか窓際に展開するが、それが爆発を放つ前に小猫がシンを持ち上げて高く跳び上がり、上の階の廊下が崩れていない場所に着地をする。その直後に複数の爆発音が響き渡り、立っている場所から振動が伝わって来た。
上の階に逃げたのはいいが、シンと小猫はこれ以上相手との距離を放すことが出来なかった。これ以上距離を取って姿を隠す様なことがあれば、敵の矛先は自分たちでは無く、屋上にいるリアスたちに向けられる可能性がある。また、必要以上に時間を掛けて戦ってしまうと、戦う意思は無く時間稼ぎ目的と判断され、そのまま無視をされてしま

う危険性もあった。故に、シンと小猫は短時間でこの戦いを終わらせなければならない。

「このまま屋上に行ってもいいんだぞ」

「……そんな顔色をした人は放っては置けません。それにもう私も標的にされています」

シンが気遣って口にした言葉に、小猫は少々ムッとした表情で反論する。事実、シンの顔色は指摘通り優れてはいない。ユーベルーナから受けた傷からは絶えず血が流れ続け、連戦による肉体的疲労、負傷の痛みによる精神的疲労、そして廊下を崩す際使用した『あれ』のせいで、シンの疲労は限界に近づきつつあった。

一誠の『赤龍帝の譲渡』による身体能力の向上で自らを騙しながらここまで来たが、その力の影響も刻一刻と弱まっている為、その反動が蒼白しつつある顔と熱以外で流れ続けている汗という形で目に見える段階まで来ていた。

「……勝つ方法はありますか？」

「――可能性が一つある。だが……」

そこでシンは口籠る。その先の言葉を言うことに躊躇いがあった。

相手を打倒する為の可能性。合宿の際に身に付けて現在のシンが使える最大の武器。完全な状態では全力を込めて放った場合、二回が限度の技ではあるがそれを補う程の威

力を秘めてある。廊下を崩す際に味方を巻き込まない様に手加減をして一回放ったが、その御蔭で二回目の余力は辛うじて残っていた。

だが、それ故に欠点もある。

「……少なくとも十秒以上は集中しなければ使えない」

めまぐるしく変わる戦場の中で、一切周りのことを気にせず十秒間以上集中し続ける。その無防備な姿を晒しつづけることが最大の欠点。

「……分かりました」

小猫は頷き、下の階に居るレイヴェルたちの方向に歩き始めた。

「……その時間、私が稼ぎます。先輩は準備を始めてください」

十秒以上時間を稼ぐ。言葉にすれば簡単にも思えるが、片方は自在な距離で爆破を操ることが出来る魔術のエキスパート、もう片方は不死の肉体に全てを灰燼と化す炎を生み出す不死鳥。一人で相手をするにはあまりに分が悪すぎる。

「塔城――」

「……ゲームの始めに助けて貰ったお礼が返せますね」

その言葉を聞いてシンは喉まで出かかった、止めろという言葉を無理矢理胸の内に留めた。こちらに背を向け、その状態で見せる小猫の横顔は、いつもの無表情では無く淡く微笑んでいるように見えた。

「――まさか、その為にお前は残ったのか？」

レイヴェルが妨害した為に屋上に行かず、シンの助太刀をするという形となったが、その真意はユーベルーナの爆破から偶然とはいえ、シンが小猫を救ったことに対する借りを返す為だったのではないかとシンは思いそれを尋ねる。

「……秘密です」

小猫は真意を語らず、代わりに冗談のような言葉を言うとレイヴェルたちに向かって走り出していった。更に小さくなっていく小猫の背中を見ながら、シンは自分を守る為に他人に体を張らせているという現実に、自分の力の未熟さを実感した。

（我ながら情けない奴だ）

自嘲する心中で言葉を吐いた後、気持ちを切り替え小猫が創り出してくれる時間を信じ、最大の一撃を放つ為の準備を始める。

シンは右腕の袖を引き千切り、それを負傷した足に強く巻きつけ始める。流血を少しでも抑える為に、目の奥で白い光が見えるような痛みによる錯覚を感じながら縛り、簡素の応急処置を施す。

その状態でシンは流れていく冷たい汗を拭い捨てると目を瞑り、右手に意識を集中し始める。それに込められた意志と力に呼応し、シンの右手の紋様は輝きを増していくのであった。

◇

小猫が崩れ落ちた通路付近まで来たとき、下の階からレイヴェルたちが姿を見せる。それを見た瞬間に有無を言わずに小猫は走る速度を緩めずに跳び上がり、レイヴェルの顔に拳を放つ。その時点になってレイヴェルは小猫の視界に収めるが、小猫の強襲にも焦りや驚きによる表情の変化は無く、小猫一人が現れたことを疑問に思う冷静な表情があった。

小さな拳が数倍にも膨れ上がって見える圧力を持った正拳はレイヴェルの顔に直撃するかと思われたが、その間に割って入りレイヴェルを守護する魔力の障壁。小猫の拳が障壁に叩きつけられると一瞬波打ったかの様な振動が入るが、それだけに終わり障壁にはヒビ一つ入らない。

ユーベルーナが守ることを予め見越していたレイヴェルは、炎の翼を広げるとそこから無数の火の粉を放つ。空中を漂うように現れた火の粉たちの速度は皆無に等しかったが、展開される範囲は広く、レイヴェルたちの周りを埋め尽くすように覆う。

小さくとも不死鳥の炎。相手が怯むことを狙っての防御と攻撃を兼ね添えたものであったが、小猫は唇を強く引き締めると火の粉の壁に飛び込み、レイヴェルたちとの距

離を最短の直線で縮める。
『戦車』という眷属としての最強の防御力を持つ小猫の体であっても不死鳥の炎は熱く、そして苦しい。眼前で手を交差し目などに火の粉が入らないよう注意を払うが、漂う火の粉が僅かでも衣服や体に触れると一瞬でその箇所を灰にしてその奥の肌を焼き、そのまま弱まる事無く燃やし続ける。
その焼けつく痛みは無表情の小猫の顔に見て分かる程の変化を与えるものであったが、それでも苦痛の声を洩らさず、レイヴェルたちを自らの拳が届く範囲に捉えようとする。
火の粉の壁を突き破って小猫の拳が現れた。だが、それを見てもレイヴェルは眉一つ動かさず避ける動作も見せない。直後にレイヴェルの前方に現れた障壁が小猫の拳を弾き返し、その反動で小猫の体は後ろに仰け反るような形となる。
「ユーベルーナ！　もう一人の姿が見えませんわ！　何か企んでいるかもしれません、速やかに探知しなさい！」
「お任せを」
小猫の単独行動を疑問視したレイヴェルは僅かな可能性を摘み取ろうと、ユーベルーナへ索敵の指示を飛ばす。それに応じユーベルーナが口笛の様な澄み切った音を口から洩らすと、全身から魔力が発せられ、それが壁や床を伝わり校舎中へと広がっていく。

「見つけました。ここから数メートル先の物陰に居ます……お気を付け下さい！　何やら魔力を集中させています！」

ユーベルーナの報告によりレイヴェルは鋭い目で小猫を睨みつける。それはシンの居場所と小猫の狙いが同時に看破された瞬間である。

シンが欲した時間の半分程しか稼いでない小猫の頬から、一筋の汗が流れ落ちた。それは無表情の顔から滲み出た焦燥の証。

「ユーベルーナ！　この『戦車』は無視しなさい！　貴方はもう一人の方を狙いなさい！」

レイヴェルの指示でユーベルーナは指先を妖しく蠢かせながら独特な軌道を描く。遠距離にいる相手を狙う為の遠隔操作用の魔法陣を出現させる為の動作であった。同時刻、集中するシンの目の前に魔法陣が描かれていく。右手に意識を集中させながらも自分の前方で形成されていく魔法陣の気配を感じていた。

この場から逃げ出すことは簡単ではあるが、もしもここから動き出せば、その瞬間に右手の集中が途切れてしまうことをシンは感じていた。あまり多くは残っていない魔力を消費して準備を進めている『あれ』が不完全に終わることがあれば、そのときシンにはもう『あれ』を放つ魔力は残っていない。故にシンはその場から一歩も動かず、近距離で完成しつつある魔法陣の前で自分のすべきことをし続ける。

自分の為に体を張っている仲間の存在を信じて。

「……すみません。先輩」

魔法陣を描くユーベルーナとそれを守護する為に立ち塞がるレイヴェルを前に小猫は小さく謝罪の言葉を呟いた。

その謝罪が何を意味するのか。時間を稼ぐという約束を守りきれなかったことに対する謝罪か、あるいはこれから散ろうとしているシンへの謝罪か、この言葉の意味が明らかにしたのは次の小猫の行動であった。

小猫が前に踏み出そうとする。それを見たレイヴェルは両の手に炎を生み出し、いつでも迎撃出来る姿勢をとる。

小猫が一歩を踏み出した時、その脚力に込められた『戦車』ならではの怪力で小猫を中心にして校舎が揺れる。既にシンによって至る所に罅や破壊が生じている通路に、更なる衝撃が加えられた。その結果、小猫の足下からレイヴェルの足下まで一筋の亀裂が生じ、亀裂の右半分が陥没を起こす。そして、その陥没にレイヴェルの片足が巻き込まれてしまう。

小猫に意識を向けていたレイヴェルの身に起こる突如のバランスの崩れ。片足が伸びきった状態を支える為にもう片方の膝を曲げ、何とか転倒を堪えるも、その隙を突かれて小猫の突破を許してしまう。だが、レイヴェルも黙っている訳も無く上半身を無理

矢理背面に捻り、それと同時に殆ど狙いを定めずに手の中に生じる火球を放つ。
「っ！」
だが、闇雲に放った火球は小猫の背中へと直撃し小猫を前のめりにする。小さな背中からは燃え上がり衣服の奥にある肌を焼き始めるが、小猫は苦しむ声を出さず、崩れた姿勢を辛うじて立て直し、爆破の準備を進めるユーベルーナに飛び掛かった。
「残念ね」
ユーベルーナはその場から一歩引き、小猫の手を体に掠らせる程度で終わらせる。完全に勝利の芽を摘んだことを確信し、離れた場所に居るシンを爆破しようする。このときユーベルーナもレイヴェルも見ていなかった、小猫の顔が失敗の絶望に染まっているのではなく、自らの使命を全うした者の表情であることを。
「これで撃……！」
その瞬間ユーベルーナは自分の心臓を押さえ、青白い顔をして言葉を途中で止める。ユーベルーナの変調、それは離れた場所で展開している魔法陣にも影響を与え、シンの目の前にある魔法陣は音も無く崩れていく。
魔法陣から感じられる重圧が消える。シンは小猫の成果であることを確信し戦いの後に礼でも言おうと密かに誓う。
蒼白となっていたユーベルーナであったが、それもほんの僅かの出来事であり、すぐ

に体調が戻ったユーベルーナは射殺す様な視線を小猫に向けると、背中に大火傷を負い、まともに動ける様子ではない小猫を中心にして魔法陣を展開する。それは先程の症状を起こしたと思える小猫の力を警戒しての行動。

小猫も最早逃走は叶わないと悟ったのか、シンの居る方向と一誠たちの居る屋上へと視線を向けた後――

「……頼みました」

――と呟き、その身を爆炎の抱擁を受ける。

この瞬間、十秒を経過する。

炎と煙は消え、爆破跡に倒れ伏した小猫。その身体は『戦車』の頑丈さ故、まだ光に包まれてはいないが、それも時間の問題であった。

一戦が終わりレイヴェルは気遣う様な視線をユーベルーナへと向ける。その視線に気付き大丈夫である、と言おうとするユーベルーナであったが、何かに気付き、弾かれた様に視線を前方へと向ける。それにつられレイヴェルも同じ方向へと目を向けた。

そこには右手に爛々と白光を放つ魔力の剣を握り締めるシンの姿。その魔力の剣は魔術に長けたユーベルーナの視点から見て、余りにも不安定かつ無謀な形成が施されており、いつ暴発してもおかしくは無い。彼女から見れば今のシンは火の点いた爆弾を手に持っているのに等しい。

そのシンがその手に持つ剣を振りかざし、それをレイヴェルたちに向けて振り下ろす――ことはせず、振りかざした状態でその動きが止まる。それを不審に思うレイヴェルたちであったが、その疑問はすぐに氷解した。

それはレイヴェルたちのすぐ側に未だ消えずに残っている小猫の存在であった。倒れ伏した小猫を巻き添えにするという考えがシンの動きを制止させているのだと二人は瞬時に悟る。

おそらくはシンの持つ魔力の剣を創り出す為に小猫は身を挺して時間を稼いでいたのであろうが、皮肉にもその小猫がそれの使用を踏み留めさせる足枷となってしまった。

小猫の体が光に包まれ始める。あと数秒もすれば小猫はリタイヤとなるがその数秒さえあればシン一人屠るには十分。

ユーベルーナは腕を振るうとシンの足元に魔法陣が描かれる。しかし、それを見てもシンはその場から動かず、そしてレイヴェルたちからも視線を逸らさない。

ユーベルーナの乾いた指を鳴らす音。それに合わせ、シンの足元からは爆炎が噴き上がった。

◇

切り札を使用する直前に見た傷付き倒れた小猫の姿。小猫ごとレイヴェルたちに力を行使するという選択は非常に簡単なものである。だが、その選択をシンは選ばなかった。

『あれ』を使用する為に身を削った小猫を更に踏みにじるという行為、少なくとも恩義を仇で返すというものはシンにとっては望むことではなく、それを含ませた安易な選択を選ぶということは自らの心の裡に陰りを落とすということを自覚していた。

ならば自分の取るべき選択は何か。

それは、あえて厳しい選択を選ぶということ。

ユーベルーナの魔法陣が足下に描かれたとき、リスクは承知でシンはその選択を選んだ。容易く勝てるなど最初から思ってはいない。勝つという行為にはそれ相応に必要な物が出て来る。

（……上等だ）

シンは歯を食いしばり、次に来る衝撃に備える。

噴き上がる炎に視界が遮られた。轟く爆音に聴覚は音を拾えなくなった。焦げた匂いが鼻に突く、それが自分の焼ける匂いであることを理解した。

（……間違ってはいない）

爆炎に包まれながら、シンは自らの選択に後悔をしていなかった。そして、同時にこの場にはいない仲間たちに感謝をする。

（礼を言う、お前が譲渡してくれたおかげで意識を失わずに済んだ）

屋上でリアスを助けに行った一誠に。

（お前が時間を稼いでくれたおかげで集中することが出来た）

身を張って時間を稼いだ小猫に。

（お前が戦ってくれたおかげで二人の手助けが出来た）

一人残り、自分を先に行かせた木場に。

（貴方が奮戦したおかげで強敵の足止めが出来た）

最強の『女王』に一人で戦った朱乃に。

（――そのおかげでこの場に俺が居る）

灼熱の中、シンの右手の紋様が、心情を露わにするように更なる輝きを放つ。焼けていく体の引き攣る感覚を千切り飛ばす様にして、右手を再度振り上げる。

視覚も聴覚も嗅覚も遮られ、シンが五感で相手の居場所を知ることは出来ない。だが、それ以外の感覚がレイヴェルとユーベルーナの位置を正確に伝えてくる。

（……そこだな）

既に小猫の気配はこの場には無い。ならば、もう振り上げた右手を下ろすことを躊躇

う理由は無い。

握られた魔力の剣が、振り下ろされ地面へと接触したとき――

世界が歪んだ。

剣状の形をした魔力を器とし限界まで圧縮した魔力を、意図的に暴発させることによって起こす現象は、解放されて行き場を得た魔力を広範囲に拡散させ、そのどれもが定まった方向には向かわず、上下左右不規則な軌道をしながら狭い通路を蹂躙する。

窓はガラスどころか壁ごと吹き飛び、教室内にあった机や椅子などは全て四方八方へと飛ばされ、ある物は壁に突き刺さり、更に魔力の暴風に押し潰され原型を留めなくなり、またある物は外へと飛ばされ、風に舞う枯葉の如く数十メートル程飛翔した後に落下し破砕する。

人物もまた例外ではない。

「レイヴェル様！」

彼女たちが見たものは、熱を帯びた大地が発するときに見える陽炎の如き空間の揺らめき。その波の様な揺らめきが通り抜けていく度に、その跡は無残に破砕されていく。必死の声を出しユーベルーナはレイヴェルの前に出ると魔力の障壁を創り上げ、それを防ぐ構えをとる。

揺らめきが障壁と接触したとき弾かれた力が床や壁に逃げ、それらを瓦礫へと変えて

いく。障壁を創り続けるユーベルーナであったが翳す両手は細かく震え、徐々に押されていく。

完全な状態のユーベルーナであればまだ防ぐことは出来たかもしれない、だが今のユーベルーナは度重なる連戦により体力も魔力も消費した状態。耐えられたのも僅かの間だけであった。

均衡は周囲の建物ごと崩れる。許容範囲を超える衝撃でこの階の全ての床が下の階へと落下し一つの階が消滅する。足下が崩れたユーベルーナは直前に何かを呟いていたが、その甲斐も空しく障壁は破砕され、ユーベルーナの体は魔力の激流に飲み込まれ、弄ばれているかに様に宙で目まぐるしく体勢を変えられ、最後に下層の壁面へと叩きつけられる。

背中から壁にめり込むユーベルーナは喀血し、虚ろな目で何かを見ていたが、やがて満足した表情を浮かべると目を閉じる。その身体は光に包まれて消えて行った。

ここではない何処かにおいて『ヒートウェーブ』と呼称される技を放った後、崩落した瓦礫の上でシンは両膝を着き、天を仰ぐ。自分の技による崩落に巻き込まれながらも何とか無事であったが、既にその全身はユーベルーナの爆破により満身創痍であった。

今すぐにでも横になってしまいたい衝動に耐えつつ、震える膝にシンは力を入れて立ち上がる。未だ戦いは終わってはおらず、そしてまだ戦っている仲間もいる。

爆破の影響で霞んでいた視力も徐々に回復をし始めていくが、聴覚の方は未だに回復する兆候はない。その影響か、心なしか右手の紋様の光も輝きに陰りが見えた。
不安な要素はあるが、回復の『神器』を持つアーシアの手を借りようと考え、シンは上へと昇る通路を探そうと振り向く。
その目に映ったのは目の前を覆い尽くす紅蓮の炎であった。

◇

大きく肩で息をするレイヴェルは目の前で立ち昇る炎を見ながら、倒されたユーベルーナに心の中で、仇をとったことと助けられた礼を述べる。
あの魔力による破壊の中、ユーベルーナは残り少ない魔力をレイヴェルの為に使用し、シンの攻撃の範囲外へと転送をさせていた。
思いの外、遠くへと飛ばされたレイヴェルは急いで元の場所へと戻ったが、そこで見たのはリタイヤをするユーベルーナの姿と、重傷を負うシンの姿であった。
疲労困憊とし全身をユーベルーナの爆破によって焼かれたシンをみすみす見逃す筈も無く、一瞬の隙を突いて焼き払うことに成功をする。
真紅に包まれ倒れ伏そうとするシンの姿を見た後、レイヴェルは宣告通りに一誠も倒

そうと屋上に向けて翼を広げる。
そのとき、レイヴェルの耳に何かを踏み砕くような音が聞こえた。その音が聞こえた場所は自分の背後。
咄嗟に振り返るレイヴェル。だが、先程とは変わらずそこにあったのは炎に焼かれているシンの姿。
思わず溜息を吐く。知らず知らずのうちに神経が敏感になっている、自分への呆れが含まれていた。
どう考えても、もう決着はついている。不死鳥の炎に焼かれて助かる術は無い。こうやって未だに彼は炎の中に居る。
そこまで考えたとき、レイヴェルは自分の考えに違和感を覚えた。彼は間違いなく炎の中に居るのに、何故リタイヤをしていないのか、既に瀕死であってもおかしくはない筈なのに、強制転送は発動していない。
（どういうこと？　転送に何かトラブルが？　早くしなければ彼が死んでしまいますわよ！　……それとも……まさか――）
――未だ再起不能には至っていないのでは？
そう頭の中で思ったとき、炎を突き破って出てきた甲から肘まで蛍火の輝きを放つ右手が、レイヴェルの右肩を恐ろしい力で潰すように掴む。

激痛にレイヴェルは表情を歪ませる。そしてその右手の持ち主を睨みつけようとし凍り付いた。

何も感情を滲ませない無貌の表情。しかし、それに相反して苛烈なまでに殺意を双眼から放ち続ける。その眼をレイヴェルが見たとき、全身からありとあらゆる力が恐怖によって抜け落ち、抗う気力を根絶させられる。

掴む右手の輝きは蛍光から赤黒いものへと変化すると、シンはそのまま動けないレイヴェルを片手で持ち上げ、倒壊した壁へと向けて走り出す。壁の向こう側は足場など無く、ただ落下するだけしかない。

しかし、シンは躊躇うことなくそこから宙へと飛び出すと、レイヴェルを地面の方向へと向け、その喉元に肘を押し付け急降下する。

このまま落下し、その衝撃で相手の首の骨を折ろうとする。だが、起死回生の反撃はここまでであった。

突如、糸が切れたかの様にシンの体は脱力し、そのまま光に包まれ強制転送をされてしまう。残ったレイヴェルはシンが居なくなると正気に戻り、すぐさま翼を動かして落下を防ぐとそのまま地面へと降り、その場で座り込んでしまった。

「な……なんでしたの……い、いまの……」

震える唇を動かし懸命に言葉を出す。その身体は唇と同様に震え続け、しばらくの間

そこから動くことは出来なかった。

◇

「部長オオオオオッ！　アーシアアアアアッ！　兵藤一誠！　ただいま参上しましたぁぁぁぁっ！」

屋上へと辿り着くと同時に声高らかに宣言をする。全身が汗に濡れ、荒い呼吸をしているものの張り上げた声からはそれを感じさせない力強さがあった。

リアスはライザーとの戦闘で常に整えられた髪は乱れ、制服も裂けた部分や焼け焦げた部分もあり、顔色からは隠し通せない程の疲労が有る。アーシアはリアスに守られていたのか、あるいはライザー自身が攻撃する意思が無かったのか、目立った怪我などは無かった。共に一誠の登場に屋上に居たリアスとアーシアは歓喜の表情を浮かべ、その登場を心の底から喜んでいる。

対照的にライザーは眉を顰め、不機嫌そうな表情となっていた。

「ここまで無事に辿り着いたのか、ドラゴンの小僧。レイヴェルが見逃したのか？　――いや、ユーベルーナが付いていてそんなことを見過ごす筈が――」

「お前の妹も『女王』も間薙と小猫ちゃんが足止めしている！　あの二人もすぐにここに

来るから覚悟しておけよ！」
一誠からもたらされた情報で、思っていた以上に自分の眷属の戦況が良くないと理解したのか、ライザーは短く舌打ちをする。
「部長！　まだ行けますよね！」
「ええ！　もちろんだわ！」
この場には居ない仲間たちの奮闘にリアスの闘志は高まっていく。それは主として眷属に恥じない戦いをする為の決意から来るものであった。
次の瞬間、校舎に激しい揺れが起き、下の階から次々と机や教卓、窓ガラスや瓦礫などが外の校庭まで吹き飛び落下していく。
「な、何だこりゃ！」
驚く一誠。アーシアもその場に座り込んで揺れに目を丸くしている。リアスとライザーは共に自分の足元へと目を向け、共にこの揺れの発生源の場所を見ていた。
数秒間の揺れの後、アナウンスが鳴り響く。
『リアス・グレモリー様の『戦車』二名、リタイヤ』
それを聞き、リアスたち全員が呆然とする。特に一誠は、ほんの少し前まで一緒に居て自分を先に行かせる為に戦ってくれた二人のリタイヤがショックであったのか拳を強く握りしめ、その眼の端からは涙が滲んでいた。

「どうやら二人の参戦は不可能のようだな」
　嗤いつつ揶揄するライザーの態度。それは敵を倒した自分の眷属への誉れが込められている。しかし、次のアナウンスが聞こえたときその表情は一変する。
『ライザー・フェニックス様の『女王』一名、リタイヤ』
「なに……」
　自分の最強の駒の敗北。それはライザーにとって予想外のことであったのか、表情が驚愕に染まる。そして、リアスたちは敗北した仲間の残した希望を知り、沈みつつあった表情に光が差しこんでいく。
「行けます……行けますよ！　部長！　皆がここまで繋いでくれたんだ！　俺も最後まで全力で戦います！　この拳が握れなくなるまで絶対！」
「わ、私も皆さんの治癒しか出来ませんが、最後まで逃げ出したりしません！」
「よく言ったわ、イッセー！　アーシア！」
　リアスは最高潮まで高まった戦意をそのまま貫くかのようにライザーへと向け、言い放つ。
「ライザー！　聞いての通りよ！　私には頼れる『兵士』と『僧侶』がまだ残っている！　チェックメイトには程遠いわ！」
「……たしかにそうだな。リアス、予想以上の強さだ」

怒りもせず、焦りもせず、ただ淡々と賞賛を述べるライザー。その思わぬ反応にリアスも鼻白んでしまう。
「正直、ここまで追い込まれるとは思わなかった。俺の予想では最悪でもユーベルーナとレイヴェルが残る筈だったが……まさか、俺の『女王』まで倒すとはな」
ライザーが微かに笑う。余裕とは違う、事実を一つ一つ認めていく殊勝な態度。傲慢な一面しか知らない一誠たちから見れば裏があるのではないか、と疑ってしまう程のものであった。
「そっちのドラゴンの小僧――いや、赤龍帝も良く見れば目立った外傷も無いな。十日前までは俺の『兵士』に手も足も出なかったが……成程、良い成長だ」
「お、おお」
いきなり褒められ調子が崩れてしまう。一誠の中でのライザーという悪魔はこのように冷静かつ大人びた印象は無かった。
「素直に認めよう、キミたちは強い。だが、同時にキミたちも認めなければならないことがある」
「認めなければならないこと？」
笑みが消え、その下から滾る程の闘志を秘めた顔が浮かび上がる。
「俺の方がまだ強いということをだ」

刹那、屋上全体が紅蓮の炎によって囲まれる。一切の予兆も無い、瞬間の出来事。瞬く間に屋上は業火の園と化す。

同じ上級悪魔であるリアスすら感知出来ない程の高次元での炎の発生。それはリアスにある事実を知らしめた。

「ライザー……！　貴方は今まで手を抜いていたのね！」

「未来の花嫁の身体に傷を付けるのは忍びなかったからな」

侮辱と判断し睨むリアスをライザーは焦熱の中、涼しげな態度で受け流す。

「だが、安心してくれ。それももう終わりだ」

ライザーの背中から炎の翼が噴き上がる様にして顕現する。レイヴェルの翼とは違い、常に形を変えて燃え盛りその熱は空気を焦がす。

「リアス、そして赤龍帝。俺を……」

——今、この場に

「本気にさせたな」

——真の不死鳥〈フェニックス〉が舞い降りた。

完敗、本音

業火を纏い、部室で見せたときの比では無い程の威圧感と殺気を合わせ、場の空気が一瞬に支配された。このときになってようやく、一誠はライザーという悪魔を恐ろしいと感じた。女好きで傲慢な表情の更に奥にある悪魔の表情、その一端を一誠を含める全員が触れていた。

だが、その脅威を前にしても一誠は自らを奮い立たせ、周りに少しでも自らの意志が伝わる様に腹の底から声を張り上げる。

「『赤龍帝の籠手』！」

『Ｂｏｏｓｔ！』

籠手の宝玉から音声が生じ、倍加が始まる。続けて一誠は、相手の本陣へと到着したことで発動できる『兵士』の能力を解放した。

「『プロモーション』！『女王』！」

実戦では初めて試みる『女王』へのプロモーション。以前の一誠ではその力に耐えられる器が整っていなかったが、日々の特訓と合宿の成果によって、それに至れるまでに成長をした。

「仕掛けるわよ！　イッセー！」
「はい！」
　リアスの手の中で紅い魔力が発生し、それが球状に変化する。リアスは一度一誠に視線を送ると、一誠はその視線に込められた意図を察して頷く。
「先手はこちらが貰うぞ」
　ライザーは翼を広げると、屋上から両足が浮き、空中へと飛翔し始める。ただ飛び上がっただけであるというのに、ライザーの周囲では炎が渦巻き、その熱によって屋上の床の材質が変色を始める。
　地面から数メートルの高さまで上がると、そのまま一気にリアスたちに向かって急降下を開始した。
　それを見たリアスはすぐに手の中の魔力の球をライザーへと向かって放つが、それを見てもライザーは回避する動作をせず、そのまま真紅の魔力に頭から突っ込んでいく。その二つが接触したとき、真紅の発光と炎が辺りに散っていく。
　ライザーの行動に驚く一誠であったが、次に見た光景に更なる驚きを覚えた。真紅の魔力と紅蓮の炎の中から飛び出してきたライザー。しかし、その下顎から上が完全に消失しており、並びの良い白い歯と赤い舌が外気に晒されていた。それにも関わらず飛翔するライザーの速度は一向に緩まず、リアスと一誠の間を迅速に通り抜けていくと、リ

アスたちの背後に回り込む様にして再度高く上がる。
リアスが振り向いてライザーの位置を確認したとき、それが意味することを一瞬にして悟り、なりふり構わない大声を出す。
「アーシア！　その場から急いで逃げなさい！」
「えっ！」
ライザーの居る位置、それは危険が少ないよう後方へと待機させていたアーシアとリアスたちとの中間点であった。
顔を消失したライザーの右手が持ち上がると、そのまま自分の足元に向かって横薙ぎに一閃。少しの間の後にアーシアとリアスたちを区切るかのように、橙色の線が屋上の端から端まで走る。
地響きを彷彿とさせる重い音が屋上に響き渡り、そして思わず耳を蓋ぎたくなるような擦れる音。そこから先はまさに瞬きの間の出来事である。
突如としてアーシアの立つ位置が低くなる。何が起きたのか理解できない一誠であったが、アーシアの身に危険が迫っていると判断し、急いでアーシアの下に行こうと走り出すが、その目の前でアーシアの居る一角が下へと滑り落ちる。
橙色の線は良く見れば屋上の床が赤熱化して変色したものであり、そこが飴細工の様にコンクリートの糸を引きながら下の階へと崩落していく。

ライザーの一振りによって屋上が焼き切られた。
「アーシア！」
「イッセーさん！」
一誠は咄嗟に手を伸ばし、アーシアも一誠に手を伸ばすが僅かに届かず、アーシアは落ちていく屋上の一部分と共に、落下によって舞う土煙の中へと消えて行った。
「悪いな。力の無い相手、ましてや女に手を出すのは個人的には趣味ではないんだが――あまり長引かせると手痛い反撃を貰いそうだからな、取り敢えずキミたちの『回復』を断たせて貰った」
一誠は怒りを込めた視線を声の方へと向け、唖然とする。先程まで下顎から上が消失していた筈であったが、まるで最初から何事も無かったかのように頭部は元の状態に戻っており、屋上を焼き切った方の手で髪を撫でつけ形を整えている。
「てめぇぇぇ！　よくもアーシアを！」
「吼えるなよ、赤龍帝。まだリタイヤの放送はされていないぞ？　何なら助けに行ってやったらどうだ？　リアスを置いてな」
激昂を挑発で返すライザーに一誠は拳を握りしめ、今にも飛び掛かりたくなる衝動に駆られるが、同時にライザーから聞かされたリタイヤをしていないという言葉がそれを急速に冷ます。

「その怒り様、お前にとっても大事な娘なんだろ？　それなら救いに行くのが筋じゃないのか？　それとも見捨ててリアスを選ぶか？」

この台詞全てが自分を惑わす為の言葉であることは一誠も分かっている。確かにアーシアは自分が守ると心に誓った少女であり、今すぐにでも助けに行きたい。だが、リアスも一誠にとって守るべき存在であるのも事実。ここでアーシアを助けに行けば、消耗しているリアスに一対一で戦わせるという状況になってしまう。それに背を向けてアーシアを助けに行くことは出来ない。

苦悶し、答えの出ない答えを探す一誠。そこにライザーは追い打ちとばかりに更なる揺さぶりを掛ける。

「赤龍帝。あんなか弱い『僧侶』の少女を独り――」

その先を言う前にリアスの手から放たれた紅い魔力がライザーの頭部へと炸裂し、今度は下顎から上だけでは済まず、首から上が完全に消し飛んだ。

「ライザー、戦いの最中におしゃべりとはいい度胸ね」

不快感と軽蔑を隠そうとしないリアスに、ライザーの首の無い体がからかうように指を一本立て左右に振る。すると首から炎が吹き出し、頭部があった部分にまで昇ると、そこで炎が形を変えていく。揺らぐ炎が骨と肌となり、目、鼻、口、耳、頭髪を次々と作り上げ、炎の揺らぎが無くなったときには、傷一つ無いライザーの顔がそこにあった。

軽く首を回し、噛みあわせを確かめるように顎に手を当て動かす姿を、一誠は信じられないものでも見るような視線で見る。事前に不死身であると聞かされていたが、一誠の常識の中で頭を欠損して生き返る存在などまず居ない、それなのにライザーはそれを二度も実践している。目の当りにしてみて初めて理解する不死鳥の再生能力の異常さ。

「イッセー！　アーシアの下に急ぎなさい！」

思いもよらないリアスの言葉に、ライザーの再生に驚愕していた一誠はその上に更なる驚愕を重ねる。リアスはこの場から離れろと言っているのだ。

リアスの指示にはライザーも反応し目を細める。ライザーにとってリアスの指示は悪い意味で予想外のものであった。

「部長！　それだと――」

「少しの間なら私一人でもライザーは抑えられるわ。その間にアーシアを助けてきなさい、イッセー。……彼女は今の私たちの要、無くてはならない存在よ」

リアスの言葉に一誠は迷う。このままリアスの好意に甘んじてしまえばアーシアを助けることが出来る。だが、それが本当に正しいことなのか。正しければ何故自分はこんなにも迷うのか。胸の奥の表現し難い感情が一誠の想いを締め上げる。

「部長……俺は……！」

『部長さん……イッセーさん……』

通信機から聞こえるか細いアーシアの声。
「アーシアか！　無事なのか！」
『私は……大丈夫です……』
痛みに耐えているのか話す言葉に所々不自然な間が開く。明らかに何らかの怪我を負っている。
「アーシア！　俺が――」
『イッセーさんは……そこで……部長さんの為に……戦って……下さい』
助けに来ることを拒み、リアスと共に戦うことを懇願する。
『私も……すぐに……そちらに……向かいます……だから……だから……』
「……分かった、アーシア。俺はここで部長と一緒に戦う！　そしてアーシアが来るまで待つ！」
アーシアの願いを受け止め、一誠はそれに応じた。
一誠の口の端から血が流れる。それは強く唇を噛み締めたせいで破れたせいであった。
『はい……待っていて……下さい……』
最後にそう言ってアーシアは通信を切った。
「アーシア……本当に強い子だよ……」

尊敬の意を以って呟いた一誠は、頬を挟むようにして両手で強く叩く。それは自らの気持ちを切り替える為のものであった。
「部長、聞いての通りです……すみません、迷ってしまって」
「いいのよ。イッセー……アーシアの為にも戦いましょう」
そんな二人のやり取りをライザーはただ静観する。戦いの場に相応しく無いやりとりに呆れているという訳では無く、言葉一つ一つから何かを得るといった、観察者を彷彿とさせる淡々としたものであった。
「自分のことより眷属のことを優先させようとするか……」
言外に何かを含ませる。リアスはそれを嘲りと感じたのか視線を鋭くしライザーを睨みつける。ライザーはリアスの視線を受け、おどけるように肩を竦めると薄い笑みを浮かべた。
「リアス、レーティングゲームの経験者として一つ忠告しておこう。ゲームに於いて『優しさ』を持ち出すのは決して悪いことじゃない。だが、使い所を見誤ってはいけないな。見誤ればそこにつけ込まれる。こんな風にな！」
言い終えた途端ライザーの右手から炎が巻き起こり、螺旋を描きながら一誠へと襲い掛かる。一誠が身構えるがそれよりも早くリアスが放った魔力の弾が炎を相殺した。しかし、それに安堵する暇も無くライザーが一気に一誠との距離を縮めると、紅蓮の炎

に包まれた左手の掌打が繰り出される。それを咄嗟に左腕の籠手を突き出し防御する。
鈍い打撃音。一誠の倍加はまだ完全ではない状態であるが『女王』にプロモーションしたことで『兵士』のときとは比べものにならない程身体能力は向上している。それでもライザーの一撃は重く、骨まで貫かれていく衝撃があった。
そして、燃え盛る炎は籠手越しでも、皮膚が爛れていっているのではないかと感じてしまう熱が込められており、防ぐ一誠の額には痛みと熱さによって汗の玉が浮かんでくる。
一誠はこの状態のまま反撃に移ろうと右手に力を込めようとした瞬間、それを見越していたのかライザーの左手が籠手を鷲掴みにする。
「熱ッ！」
「フェニックスが司る炎と風。その意味を知れ！」
風が動き始める。その勢いは激しく一誠とリアスの髪を靡かせるが、その中心にいるライザーには無風の中に居るかの様に全くの影響がない。動く風がライザーの掴んでいる左手に一気に収束していった、次の瞬間――
一誠の左腕を中心にして爆炎が放たれる。
周囲を包み込む炎の中から飛び出してきた一誠が背中から屋上のフェンスへと叩きつけられ、フェンスの形が激しく変形した。

一誠の左腕の『赤龍帝の籠手』自体には変化は無いもののその隙間からは白煙が昇り、その下の被害を暗示していた。

ライザーも炎の中から飛び出し、追撃の蹴りを放つ。

『Ｂｏｏｓｔ！』

一誠の籠手から更なる倍加を告げる音声が流れ、向上した力でその蹴りを両手で真っ向から受け止めた。その姿をライザーは意外そうな表情で見ていたが、すぐに表情を引き締めると、背後に向かって己の右腕を振るう。すると、隙を見て放ったリアスの魔力と接触し、その右腕は肘から下が粉砕されるものの、すぐに肘から炎が噴きだし無くなった腕を再生した。

その間にひしゃげたフェンスから身を起こした一誠の拳がライザーの頬にめり込む。その威力によって首が真横に折れるが、その眼は揺らぐことなく一誠を凝視し離れない。しかし、今度はリアスの方がライザーへと接近すると、その両手の中で紅く煌めく魔力をライザーの胸部へと直接押し込む。

ライザーの背中から魔力が突き抜けていくと、正面から背後の景色が見える程の大穴が胸部に開く。それでもライザーの表情に苦痛の色は無く、折れた首のまま胸部へと両手を押し付けているリアスの手を掴むとそのまま適当な場所へ放り投げ、一誠の方は防御の甘い脇腹に爪先で蹴りつけ、そのまま捩じり込むようにして蹴り抜く。それにより

一誠は二転、三転と屋上の床の上を跳ねていき、リアスとの距離が離れていく。

離れた二人の中間点に立つライザーは、自分の手で自分の顔を掴むと、折れた首を真っ直ぐに直すのではなく、爆炎を放ち自ら頭部を爆砕した。

ライザーの行動に息を呑む二人であったが、数秒も経たずしてライザーの頭部は元通りに復元される。

「この方が早い」

不死ゆえの治し方に一誠とリアスも流石に戦慄した。それと同時に考えてはいけないことを考えてしまう。本当に倒しきれるのか、ということを。

二人の反応はライザーにとって狙い通りの反応であった。肉体だけでは無く精神も攻める戦い方、一筋縄ではいかないレーティングゲームにおいてそれは重要な要素であり、不死というメリットを最大限に生かせる戦い方であった。積み上げてきたものを一気に崩す再生能力は、奮い立つ戦意を折るのにこれ以上無い程の威力を発揮する。

「だったら何度でもやってやらぁ！」

それ故に戦意を失う事無く向かって来る一誠の姿はライザーにとっては意外なものであった。

顔目掛けて大振りで放たれる左のフックを後ろに顔を逸らし紙一重で避けると、お返しと言わんばかりに一誠の鳩尾に拳を捩じり込む。体内の酸素を強制的に吐き出され、

それに苦鳴を混ぜたものが一誠の口から洩れるが、それでも膝を着くことなく今度は右腕を下から突き上げてくる。

拳の握り具合から皮膚の皺まではっきりと目視出来るライザーの動体視力を以ってすれば、それを避けるのは先程と変わらず造作も無いこと。

『Ｂｏｏｓｔ!』

しかし、それを覆す天啓の様な音声が籠手から再び鳴り響く。現段階から更に倍となった身体能力から繰り出された拳は途中から急加速し、見事ライザーの顎を打ち抜く。

「……厄介だな」

顔面を仰け反らした状態でライザーは一誠をそう評価する。

「へっ!　『赤龍帝の籠手』を甘く見るなよ!」

一誠はライザーの言葉を『赤龍帝の籠手』を指したものであると解釈したが、実際は違う。ライザーが評価したのは一誠の精神であった。圧倒的不利な状況でも消極的にならない態度、痛みや苦しみを恐れず立ち向かってくる無鉄砲ともとれる直情性。それは想いを力に変える『神器』を持つ者にとって、最高とも言える逸材である。

そして、その精神や足掻きは仲間にも伝播し、心を奮い立たせ、傾く流れを引き寄せようとする引力があった。

ライザーは猛禽類を思わせる瞳でリアスを見る。奮戦する一誠を見て、自分もするべきことをしようとする気迫があった。それと同時に、その気迫の中に潜む僅かな陰りを、ライザーは見逃さなかった。

ライザーは首を仰け反らせた体勢のまま、一誠の胸板に靴底を叩きつける。前方からの強い力に押された一誠は屋上の床を滑るように飛ばされ、ライザーとの距離が数メートル離れるとその場で胸を押さえ、乱れた呼吸をする。

ライザーの視線が一誠を離れ、再びリアスへと向けられる。一誠の傷付く様子を見てさっきの陰りがより濃いものとなる。

その反応を見たときライザーはこのゲームの勝利を確信する。

戦う前にライザーは本気で戦うことを宣言した。それはただ単に力で捻じ伏せるということではない。戦いの進め方によって与える相手への精神の圧迫、ライザーは力によって一誠を下し、精神によってリアスを下す。

一つの戦いで二つの勝利を得る。それこそがライザーにとって手加減を一切抜いた戦い。

『この勝負はリアス・グレモリーの投了〈リザイン〉によって幕が落とされる』

それが勝利を確信したライザーの未来図であった。

◇

あれからどれほどの時間が経ったのであろう。

床へと垂れていく自分の血の雫を見ながら、一誠はぼんやりと考える。

観戦している側からすれば、一誠が屋上に到達してから十数分程しか経過していない。だが、その渦中にいる側からすればその何倍もの密度を感じていた。

既に『赤龍帝の籠手』の倍加も限界値まで到達し、一誠の能力を最高にまで高めている。しかし、それでも一誠の力はライザーには及ばない。

「ぐわっ！」

振り下ろされたライザーの拳が一誠の頬にめり込み、その口から血を飛ばす。倒れまいと踏ん張る一誠の脚を容赦なく蹴りつけ、前かがみになって倒れていく一誠の髪を掴みそれを止めると、今度は左頬を殴り飛ばし、床に血反吐の線を描いて一誠の身体が転がしていく。

転がり終わって仰向けになっている一誠の腹部に、ライザーは踵を踏み下ろし、その奥にある臓器を痛めつける。

「ぐあっ！」

「ライザー！　狙うなら私を狙いなさい！　『王』の私が負ければあなたの勝ちでしょう

！」

痛めつけられていく一誠の姿に耐えられなくなったリアスが叫ぶ。ライザーとの戦いの中、全ての魔力を消費してしまったリアスにはもう抗う術は無く、今も玉の様な汗を浮かべながら、困憊した様子で乱れた呼吸をしている。

ここでリアスを下すのが定石ではあるが、ライザーはそんなリアスの言葉を無視し無表情のままもう一度踵を踏み下ろし、更なる苦痛を一誠に与える。

ライザーはレーティングゲームの最中にリアスと決闘したときから、一切リアスを傷付けようとはせず、魔力によるいかなる攻撃も炎と再生能力で完封する均衡状態を作り、持久戦に持ち込もうとしていた。リアスは最初、それを上級悪魔同士、互角の実力を持っている為であると思っていた。

しかし、現実は違う。ライザーは単に手を抜いていただけ。その事実が分かり激怒するリアスであったが、それ以降に見せるライザーの本当の実力に焦燥感を覚え、本気になっても今なお自分に危害を加えようとしないライザーに焦燥感は、敗北感へと変わりつつあった。

「ライザー！」

「……部、部長……駄目です……そんなこと言っちゃ……」

悲痛なリアスの声を、一誠が途切れ途切れの言葉で制す。

「イッセー！　もう十分よ……貴方はよく戦って……」
「まだ……です……！」
一誠は歯を食いしばり、踏みつけているライザーの足首を掴む。それを振り払おうとするが、その手は離れようとしない。
「まだ……まだ、俺は拳を握れます！　おおおおおおお！」
気迫の叫びが木霊し、一誠の掴んでいる手に更なる力が加えられると鈍い音と共にライザーの足首から先が九十度に折れ曲がる。足首をへし折られたライザーは、掴む手を振りほどこうと倒れている一誠の顔に拳を向ける、が仰向けの姿勢から寝返りを打つように腹這いの姿勢へと変えた一誠の動きに巻き込まれ、顔面から床に叩きつけられる。
すぐに起き上がろうとするライザーであったが、一誠の方が素早く立ち上がり、掴んでいる足にもう一方の手を添え、両手持ちにするとそのままライザーを力の限り振り回す。
「ぬがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
声をあらん限りに張り上げ、激しく旋回する一誠。成人男性であるライザーの重量など、合宿で鍛えているときに当たり前のように背負っていた岩に比べれば、風船のような軽さである。
振り回されているライザーも大人しくしている筈も無く、短く舌打ちをすると全身が

炎に包まれた。当然、掴んでいる一誠の両手も無事では済まず、掴む手の隙間から白煙が上げる。しかし、それでも掴む手から力が抜けず、寧ろその熱さに抗うように掴む力は増していく。

回転の勢いが最高潮まで達したとき、一誠はライザーを持つ手を床に向けて振るう。ライザーの顔半分が床へとめり込むと、そのまま床を削りながら地面を引き摺られていく。地面が抉れていく度にライザーの顔も削れ、その削れた部分が再生しようと炎を噴き上げるが、再生よりも削れていく速度の方が上回っている。

このままライザーを擦り下ろしていくかと思われたが、攻撃されているライザーも反撃に移る。

再びライザーの身体が炎に包まれ、一誠の手を焼くが先程と同じように一誠はその手を放さない。次の瞬間目の前に閃光が弾けた。

衝撃と熱に押され吹き飛ばされていく一誠。その手には千切れたライザーの足首が握られ、傷口からは炎が燃え上がっている。

閃光が爆ぜる前の一瞬の間、一誠は見た。ライザーの身体が膨張し、内側から爆ぜて爆炎を撒き散らす様を、スローモーションのように遅延した時間の中で。

まさか自爆するとは思わず、身体中に造られた火傷のことを忘れしばし呆然とした姿でライザーがいた場所を見ていた。離れた場所で見ていたリアスも同様にあまりに呆

気ないライザーの終わりに呆けた様子であった。
　散った炎の残滓が、雪のように空から舞い落ちていく。
「何だその顔は」
　屋上に響くライザーの声。しかし、その姿は見えない。
「くっ！」
　一誠が突如、首を押さえ苦しげな声を発する。押さえている首には纏わりつくように炎の残滓が巻き付いている。その炎は段々と大きさを増していき、一つの炎と化すとその中から人の手が現れる。
「例え灰の中からだろうと不死鳥は蘇る。覚えておくことだな」
　現れた手の先から炎が迸っていくとそれが徐々に人の形へと変わっていき、最後に地面に落ちているライザーの片足を炎で巻き込んで内へと取り込むと、そこには皺一つないワインレッドのスーツを纏うライザー・フェニックスが立っていた。
「中々の粘りだな。流石に『神滅具』を持っているだけのことはある。だが、そろそろ終わりにさせて貰う」
　ライザーはそう宣言すると一誠の首を掴んだまま、宙へと放り投げる。地面から数メートルの高さまで軽々と投げられた一誠。何とか空中で体勢を変えようとするも、炎による傷と疲労で思う様に動かない。

頂点まで達した一誠の身体が重力に従い落下をし始める。地面へと落下していく最中、一誠の瞳が落下地点にいるライザーの姿を捉え、それに息を呑む。ライザーの右足が激しく燃え上がり、地面を熔解させながら一誠が降りてくるのを待っている。

自由の利かない一誠に回避する方法は無く、落ちていく数秒の間に様々な考えが頭の中を通り過ぎていく。そしてある考えに至ったとき、一誠は今までに無い程の真剣な表情となり、覚悟を決めたように胸の前で両手首を合わせるという独特な構えをし、次に来る一撃の防御に備える。

一誠の身体がある点を通過したとき、文字通りライザーの右足が火を噴いた。

周囲から取り込んだ風を右足へと圧縮させそれに自身の炎で点火したとき、圧縮された風はロケットの噴射推進器のように定められた方向に爆発的な加速を与え、その反動でライザーの右足が目で追うことが不可能な速度で放たれた。

一誠が気付いたときにはライザーの右足は深々と自身の両腕に食い込み、籠手を持って入る左腕は辛うじて無事であったが、右手は完全に粉砕され、そこから突き抜けてきた衝撃が、その奥にある肋骨を軽々と砕いていく。骨の奥にある臓器は激しく形を変えられながら痛めつけられ、それから伝わってくる痛みは声に出すことも出来ず、目の前が真っ白に染まった状態で、一誠はライザーの蹴り上げた方向へと飛ばされていく。

白く染まった視界が色と形を取り戻したとき、一誠は先程の十数倍の高さにまで蹴り

上げられていた。
筆舌尽くしがたい痛みと嘔吐感に堪える一誠の視界に飛び込んできたのは、上空から見下ろす形で飛翔しているライザー。
「終わりだ」
ライザーの手が一誠の額を掴む。ここから急降下して地面へと落とすことが狙いだと理解した一誠であったが、その顔に焦りも恐怖も無い。そう、この最大の危機こそ同時に残された一誠の最後の反撃の機会であった。
一誠を掴むライザーも負の感情を見せない一誠の表情に一抹の疑問を覚える。何か仕掛けて来る前に素早く終わらせようとするライザーであったが、そのとき軽い衝撃がライザーの胸を打つ。見ると一誠の左手がライザーへと押し付けた形となっていた。精一杯の足掻きと判断し、視線を外そうとしたとき、微かな違和感がライザーの脳裏を過ぎた。
ライザーは視線を戻すのを止め、押し付けた一誠の左手を凝視する。そのとき彼は見た、左手の隙間から僅かに零れる魔力の光。自分の魔力の大きさで気付かない程の極小の魔力であったが、それを見た瞬間にライザーの直感が凄まじい勢いで警鐘を鳴らす。
「お前っ！」
ライザーは咄嗟に一誠の手を引きはがそうとするが、僅かに遅い。

「ドラゴン……ショット……！」

蹴り上げられる直前に準備をしていた一誠が全ての魔力を注ぎ込んで放つ零距離ドラゴンショット。押し付けられていた極小の魔力の塊は一瞬にしてライザーを飲み込むが、至近距離で放った一誠もただで済まない。

ライザーの炎を吹き飛ばす爆風と爆発をまともに受けて、嵐の中で舞う木の葉のように錐揉みしながら落下していく。そのまま幸運にも屋上の端に落ちたものの、背面から落ちた衝撃で屋上の床は蜘蛛の巣状に割れ、砕けた破片などが一瞬だけ浮き上がった。一誠も無事では済まず、傷付いた体に更なる追い討ちを掛けられたせいで血塊を吐き出し、その場で大の字となって動かなくなる。

「イッセー！」

悲痛に満ちたリアスの声。

「……だ、だいじょう……ぶ……です……」

辛うじて聞き取れる程か細い声で、一誠がリアスの声に応えた。

『Ｒｅｓｅｔ』

そのタイミングで増幅の終了を知らせる音声が籠手から聞こえる。最大まで高まった能力と『女王』へのプロモーションによる力の底上げ、そして一誠の持つ天性の打たれ強さのおかげで、辛うじてリタイヤを免れる一誠であったが、これ以上の戦闘は不可

能な状態であった。
「へ……へへへ……やってやりましたよ……部長」
「ええ、見ていたわ。貴方は本当によくやってくれたわ」
倒れる一誠を抱き起そうと歩み寄り始めるリアス。しかし――
「本当に大したものだ」
――その声によって足は止まる。
「……久しぶりだ。本当に久しぶりだ……」
一誠の胸元に礫のような炎が灯り、それが一気に燃え広がっていく。
「ま……さか……ぐっ！」
最初に形になった足が一誠の胸を踏みつけ、動けない様に地面へと縫い付けた。既にライザーの蹴りによって骨も臓器も傷付けられている一誠には地獄の苦しみであったが、消耗し切った体力ではそれを払うことはできなかった。
そのまま炎は人の形となりその中から無傷のライザーが現れる。
「戦いの中でここまで冷や汗を流したのはな」
現れたライザーは言葉通り、額や頬から汗を流し、足下で動かない一誠を見下ろしながらも賞賛の言葉を掛ける。
「いくら『神滅具』持ちだったとはいえ、『兵士』一人相手に心底驚かされた。だが同時

にお前が『兵士』であることが詰めの甘さに繋がった。……お前の元々の魔力は相当低いな」

一誠の基本能力の低さを見抜くライザーに一誠も反論が出来ない。仮に反論があったとしても、体中の痛みでそれどころでは無かった。

「ライザー！　その足を退けなさい！」

「断る――と言ったら？　ああ、下手な真似も止してくれよ、リアス。俺の下にはこいつがいる」

視線を向けたままライザーはリアスに警告をする。それを聞きリアスは唇を噛み、悔しさを隠そうとはせずにライザーを睨むがそれ以上のことはしなかった。

ライザーはそれを見て、前のように目を細める。

「それだ、リアス。何故キミは俺の忠告を無視して攻撃をしない」

思わぬライザーの言葉にリアスは眉を顰める。

「それは、どういう意味？」

「キミは気付いている筈だ。一見俺が有利に見えるこの状況、実際の所は俺もキミも全く有利不利の差は無い。何故なら俺が捉えているのはあくまで『兵士』、ゲームを決定付ける『王』と比べればただの一つの駒に過ぎない」

「……私にイッセーを『犠牲〈サクリファイス〉』をしろと言うの？」

激しくでは無く見る者を凍てつかせる怒りを静かに見せるリアスにライザーは首を横に振る。
「犠牲という言葉に惑わされるなよ、リアス。この場にこの『兵士』が来るまでどれだけの犠牲が出たと思っているんだ？　自分の視界の中ならば嫌だが、外なら別に構わないのか？」
「違うわ！　彼らが託したことでイッセーはここに来ることが出来た！　その託した想いと一緒にイッセーを犠牲にすることは出来ないわ！」
「ぶ……ちょう……」
痛みに耐えながら一誠はリアスの想いに心を震わせる。ただ言葉にしてくれただけでも心の奥底に響くものがあった。
「――優しいな、リアス。だからこそもう一度言おう。優しさの使い所を見誤ればそれに付けこまれる。――こんな風にな」
ライザーは仰向けに倒れている一誠の胴体を蹴りつけ、うつ伏せにすると左腕を捻りながら持ち上げ、籠手と腕との境目に手刀を当てる。
「リアス、今から三十秒以内に投了〈リザイン〉をするんだ。でなければこの左腕を焼き切る」
ライザーの脅迫にリアスは顔色を変える。脅すライザーの表情には一切の喜怒哀楽

は無く、淡々とした表情がその言葉に込められる本気を現していた。
「ライザー……貴方……！」
「例えゲームと言う名が付いていようとこれは遊びじゃないんだ。リアス、キミが相手をしているのは誰だ？　キミの婚約者であるライザーか？　違うだろ？　キミと同じ悪魔であるライザー・フェニックスだ」
　あと二十秒と最後に付け加え、ライザーは手刀に炎を灯す。それがどれほどの切れ味を持っているのかは、校舎を切り崩したときに嫌と言う程見せつけられている。
「……ライザー、私の――」
「駄目です！」
　自らの敗北を認めようとするリアスに一誠が大声を出して止める。既に満身創痍の状態で声を出すことにも激痛が走るが、一誠はそれに構わず血反吐を吐きながらも声を出し続ける。
「大丈夫です……！　俺は勝ちますから……！　ライザーだって……ぶっ飛ばして見せます！　だから……！」
「まだそれだけの声を出す余力があるか……赤龍帝、ここでリアスが答えを出さずお前が左腕を失ってもそれが最後じゃない。次は右腕、足、目、耳、鼻と失っていくことになるぞ」

「それが……どうした！　全部……くれてやらぁ！」
威圧を込めて次はどの箇所を焼き切るか説明するライザーに一誠が啖呵を切る。その眼は二人とも間違いなく本気であった。
「リアス、キミは面白い奴を眷属にしたみたいだな。――赤龍帝、その言葉が嘘じゃないか確かめてやる、あと十秒だ！」
無慈悲にも時間は経過していきライザーの手刀は赤熱化し、鉄すら容易に切断することが出来る程の威力を秘める。一誠も歯を喰いしばり数秒後に訪れる痛みに備える。
やがて十秒を経過しようとしたとき、その直前にリアスが口を開いた。
「ありがとう、イッセー」
その言葉の意味を理解し、一誠が再度声を張り上げて止めようとするが、それよりも先にリアスが決定的な言葉を口にする。
「ライザー、私の敗けよ。投了します」
それを聞いたライザーは炎を消し、押さえつけていた一誠から離れていく。
「黙り込まずにきちんと決断したか――賢明な判断だ」
擦れ違い様、ライザーはリアスの行動をそう称したがリアスは何も言わず、倒れている一誠を起こし、そのまま抱き締めた。
「ありがとう、朱乃も祐斗も小猫もアーシアもシンも、そしてイッセーも不甲斐ない私の

為に戦ってくれて、頑張ってくれて本当にありがとう」

頬を伝わって流れるリアスの涙が一誠の頬へと落ちていく。

「部長……俺は……」

その言葉の続きを口にすることは無く、急速に一誠の視界は狭まり黒く染まっていく。一誠が最後に記憶していたのは頬から伝わってくるリアスの涙の暖かさと。

――あなたの為に最強の『兵士』になりたかった。

という口に出来なかった想いであった。

この日、リアス・グレモリーはライザー・フェニックスに完敗を喫した。

◇

シンが目を覚ますと、自分が清潔感のある白いシーツのベッドの上で寝ていることに気付く。周囲はシーツと同じシミ一つ無いカーテンで覆われており、横になっているシンからは天井しか見えない。

シンは体をベッドの上で起こす。すると、全身に引き攣ったような痛みが走った。そこで初めてシンは、自分の体の至る所にガーゼや包帯が巻かれていることに気付く。それを見て自分がリタイヤをしたことを悟り、この場所がリタイヤをした者の為の治療施

設であることを知る。
　シンは自分が敗北したことよりもゲーム自体の結果を一刻も早く知りたいが為、身体の痛みを無視し白いカーテンの外へと出ると、そこでアーシアと会う。
「あっ！　間薙さん……」
　シンが現れたことに驚いた表情をするアーシア。そんなアーシアにも頭部や腕に包帯が巻かれている。
「駄目です！　まだ完全には治っていないんですよ！　お願いですから横になって下さい！」
　普段のアーシアからは想像が出来ない程強く懇願する。よく見ればその眼は赤く充血しており、つい先程まで泣いていたことが容易に想像が出来た。そして、そのアーシアの泣いた跡から彷彿とさせる事実にシンは、胸の奥に鉛を流し込まれたかの様な重い感覚を覚えた。
「他の皆は？」
「まだ眠っています。私の『神器』で治療をしていますが……まだ、目を覚ます気配は無いです」
　幾つもある白いカーテンの区切りの向こう側に他のメンバーがいて、取り敢えず命に別状が無いことに安堵する。

「部長は？」
「部長なら――」
アーシアの言葉よりも先に部屋にある扉からリアスが現れる。その眼はアーシアと同じ眼をしており、シンの顔を見た瞬間に昏くなる表情から、推測の域を出なかった考えをより確実なものとした。
「……シン、私は――」
「すこし外の空気を吸ってきます」
リアスの言葉を最後まで聞かず、アーシアが止めてくるのを無視してシンは扉の外に出て、目的も無く通路を歩き続ける。
（もっとましな理由を思いつかなかったのか）
歩きながらシンは、逃げるように去っていった時の台詞を思い返して自嘲する。
リアスの言葉を最後まで聞く気にはなれなかった。分かりきった事実を更に聞かされることは、ただの苦痛でしかない。
胸の奥にある鉛の重さは内から苦みを出し、シンの精神を鬱屈とさせる。シンは早足で通路を歩く。その度に痛みが体中を走るが、今は考え事をしたくないシンにとっては、思考を中断するその痛みに有難味すら感じた。
「そんなに急いで何処にいくんだ？」

不意に背後から掛けられた声にシンは足を止めた。振り返るとそこにいたのはライザーとその『女王』であるユーベルーナの二人。
「別に、特に意味なんて無い」
「ふん、相変わらず愛想の無い奴だ。……まあ、ここで会えたのは都合がいい。お前に用があったからな」
ライザーの言葉にシンは眉を顰める。少なくともシンにはライザーが自分に用がある理由が思いつかなかった。
「単刀直入に言おう。今から二日後に行う俺とリアスとの婚約パーティー、お前には出席を控えて貰いたい」
「理由は？」
「婚約パーティーに集まるのは転生悪魔と純血悪魔のみ、そしてお前は人間。ここまで言えば分かるな？」
例え悪魔の力を使えようと、シンという存在は人間でしかない。それが上級悪魔、それこそ七十二柱に名を連ねる、純血の悪魔同士の婚約の場に於いてはただの異物でしかない。ライザーの処置は、シンが参加することで起こるかもしれない場の雰囲気の害を未然に防ぐものであった。
「……了解した」

「ふっ、敗けた直後だというのに中々冷静な態度だ……と言いたいところだが隠しきれてはいないな」

視線を落とすライザーの眼には、強く握り続けたせいで血の気を失い、白くなったシンの拳が見えていた。

「まあ、敗けてへらへらしている奴よりはましだがな」

シンは何も答えない。

ライザーの申し出を強く拒否する選択もあったが、それは子供のする八つ当たりであるとシンは考えた。相手に屈服するようで不本意ではあるが、自分の不満や後悔の内にある感情を他者に押し付けることはするつもりも無く、いつもの大人ぶった思考で無難な選択を選ぶ自分に自己嫌悪を覚えながら、大人しくライザーの申し出を受け入れる。

ライザーはシンの返答に満足した表情を浮かべると指を鳴らす。その合図にユーベルーナがシンの前に進み、一つの小瓶を手渡した。

「こちらの都合で不参加をしてもらうんだ、詫びの品ぐらいなら用意する。その『フェニックスの涙』は自由に使ってくれ。自分で使うのも良し、リアスたちを通じて金に換えるのも良しだ」

手渡された『フェニックスの涙』を見つめるシンであったが、そこにユーベルーナが声を掛けてきた。

「人間界で貴方の名前を名乗っていましたが、もう一度だけお名前を窺ってもよろしいですか？」
「――間薙シンだ」
「その名前、今度はしかと記憶させて頂きます。まさか人である貴方に敗れるとは思いませんでした。大したものです」
　まさか敵だった相手から褒められるとは思っておらず、シンはどう返せばいいのか考えていたが返事を返す前にライザーがユーベルーナの名を呼び、この場から去って行く。
「それでは御機嫌よう。間薙様」
　ユーベルーナは最後にそう言ってから一礼し、去って行くライザーの後ろへと付いていった。
　一人残されたシンは、手の中にある無色透明の『フェニックスの涙』を意味も無く眺める。シンの心境はその液体と同じだった。怒りたくも哀しみたくも憎みたくも暴れたくも泣きたくも無い。
　今はただ何も考えず、頭の中を何色にも染めたくなかった。
「あ、いた」
「ホントだホーー！」

ぼんやりと眺めていたシンに聞き慣れた声。声の方向にはピクシーとジャックフロストがおり、こちらへと向かってくる。
「――よくここが分かったな」
「ん？　ああ、あのね魔王の付き添いの人に送ってもらったの。えーと、名前はなんだっけ？」
「確か、セタタンじゃなかったかホー？」
「そうだっけ？　セセンタじゃなかった？」
いきなりシンを置いてきぼりにして、送ってきた人物の名前がなんだったかをあーだこーだと喋り始める。そんな二人にシンはいつもの様に呆れた表情をする。
「お前ら、人の名前ぐらいちゃんと覚えておけ」
「まあ、いいじゃん！　次に会えた時に覚えたらいいし」
「そうだホー！　次覚えたらいいホー！」
いつものマイペースな二人の様に、シンは呆れながらも同時に感謝をしていた。励ますでも慰める訳でもなくいつもの様に振る舞う。
ただ、そんな当たり前なことに、少しだけ胸の奥の重さと苦みが薄まった。

◇

「御二人を送ってきました」
「ご苦労、セタンタ」
　サーゼクスの労いの言葉にセタンタは頭を下げ、そのまま部屋の外に出て行こうとするが、それをサーゼクスが呼び止める。
「セタンタ、キミはこの決着をどう思う？」
「……悪魔の血が守られる結果となって喜ばしいことであると私は思いますが？」
　サーゼクスの質問にセタンタはそつなく応えるが、心なしかその表情には幾分の険しさが含まれる。
「そういったグレモリー家に仕える者としての意見を聞いている訳じゃない。私の一人の友人として、あの子を幼い頃から見守ってきた者の一人としての声を聞きたい」
　しばし沈黙するセタンタであったが、真剣に見詰めてくるサーゼクスに嘆息した後言葉を吐き出す。
「『サーゼクス』、正直に言えば『俺』はこの婚約に対して心の底からは祝福は出来ない」
　一人称が『私』から『俺』へと変わり、魔王であるサーゼクスを呼び捨てにするセタンタ。その口調は先程までの固さは無く、友と接するような親しみと柔らかさが込められていた。

「あの子には血など関係なく普通に恋に落ち、自分で選んだ相手と添い遂げて欲しい。そう簡単にはいかないのは分かっている。血を受け継ぐということは様々な枷が着けられるということにも等しいからな」

そこで一拍置く。

「……だが、それでも俺はあの子には幸せになって欲しい」

「兄としてはそこまで妹のことを思ってくれて喜ばしいな」

「からかうな、サーゼクス」

軽い口調にセタンタは目を鋭くするが、サーゼクスは肩を竦めるだけであった。

「それほど思っているなら父上に直談判すればいいものを。キミの言葉なら父上も耳を傾ける筈だが？」

「言える筈がない。旦那様と奥方様は、俺のような過去の記憶が無い得体の知れない者に、居場所と役割を与えてくれた恩人だ。俺はあの御二人の決定に口を挟むつもりは無い」

言い切るセタンタにサーゼクスは微笑む。悪魔の頂点としての笑みでは無く、サーゼクスという存在が持つ本来の笑み。

「なら、その父上の気が変わるようなことが起きたならどうする？」

セタンタは眉を顰めた後、詐欺師でも見るかのような眼差しをサーゼクスに向ける。

「――何か企んでいるな」
「キミもあのドラゴン使いくんの力をもっと見たくないかい？　特に大きな場所で」
「まさか……」
「例えばドラゴン対フェニックスのリベンジ対決なんて催し物として最高だと思うんだが？」
「……サーゼクス、俺はお前のそういった部分を尊敬しているが同時に嫌いだ。どうせもうグレイフィアには伝えているんだろ？」
　セタンタは心底呆れた眼でサーゼクスを見た後、話はこれで終わりだと言って部屋を出て行こうとする。
「最後にもう一つ質問していいかい？」
「――何だ？」
　途中で呼び止められ若干ぞんざいな返事をするセタンタ。
「キミはあの人間を見たとき何を思った？　彼の姿を見たとき珍しく動揺をしていたみたいだったが」
　シンのことを尋ねるサーゼクスにセタンタは背を向けたまま答える。
「……あの姿を見たとき何故か不思議と懐かしいと思えた。……全く知らない初対面の相手の筈なんだがな」

「キミの失った記憶に彼は関係しているのだろうか？」
「さあな。別に失ったものを取り戻したいとは思ってはいない。あの少年が俺の中にある何かに触れたのかもしれないな」
「成程」
「もういいか？　俺は別の仕事があるんだが」
「ああ、済まない。時間を取らせたね」
「それでは『私』は失礼します。何かあったらお呼び下さい『魔王』さま」
　口調を戻してから退室していくセタンタにサーゼクスは面白そうに笑っていたが、その笑みはすぐに消えた。
　サーゼクスはセタンタにシンについて思ったことを聞いたが、サーゼクスもシンの姿を見たとき脳裏に浮かぶ者たちがいた。それはシンがレイヴェルに最後の抵抗をしたとき、より確信的なものへと変わる。
　サーゼクスは記憶の中で、数度に渡り命のやりとりをしてきた宿敵たちの名を呟いた。
「『魔人』か……」

禁手、新月

微睡む意識の中で、一誠は夢を見ていた。それは『神滅具』を覚醒させたときから度々見る赤い夢。周囲を真っ赤な炎で染め上げる中心には必ずソレが存在した。

人が一人入れそうな程大きく真っ赤な瞳を持ち、頭部には真っ直ぐ伸びた角、その四肢は大木を何本も合わせたかの様に太く、そこから伸びる爪はどんな刀剣よりも鋭く、そして恐ろしい。その巨体を覆う程の両翼を広げ、それら全てに紅玉の様な眩さと溶岩のような荒々しさを備え、それが持つ生命力自体で輝いていると錯覚させる程の生物。

――ドラゴンが一誠の夢の中で、その連なった牙を見せつける様に嗤っていた。

『少しは歯向かうことが出来たが、それでもまだまだだな。そんなんじゃおまえはいつまでたっても殻から出たばかりの雛のままだ。強くはなれない』

言葉では無く赤いドラゴンの意志が一誠の頭の中に響く。それは目の前のドラゴンから発せられたものでは無く、自分の左腕から伝わってきたのを一誠は感じた。

一誠は頭の中で思ったことを言葉にする。お前は何者なのか、ライザーとの一戦の中で新しい力を使えるようにしたのはお前がやったのか、と

赤いドラゴンはその長い首を動かし一誠の眼前まで動かした。

『ああ、だが俺だけじゃない。お前自身の望みと『白い奴』の望みも重なった故の結果だ。だが、新しい段階に入った戦績としてはイマイチだな。こんなことじゃあ『白い奴』に笑われるか失望されるぜ？』

赤いドラゴンの言う『白い奴』という単語に一誠は心当たりなど無く、その疑問を意志にして赤いドラゴンに伝えるがドラゴンは一笑する。

『いずれは出会う宿命だ。今すぐ知る程焦る必要はない。そいつらと俺たちは戦うことは決定づけられているからな』

知りたいことをはぐらかし抽象的な言葉で伝えてくるドラゴン。言っていることを理解できない一誠は、笑うドラゴンに思わずある意志を伝えた。

――お前はいったい何なんだ？

ドラゴンは笑うのを止め、真っ直ぐに一誠を見つめてこう言った。

『『赤い龍の帝王〈ウエルシュ・ドラゴン〉』、ドライグ。鈍いな、お前の左腕に宿っているものだぜ、兵藤一誠――いや、相棒』

自らの身に宿る強大な存在にしばらくの間言葉を失い、告げられた名を自分の中に刻み込む様にひっそりと呟く。

『今回の戦いは負けたが、なに心配をするな。本当の敗北というのは戦う意思を完全に失うか死ぬかのどれかしかない。お前の意志は完全に折れてはいないどころか、滾って

いるぐらいだ。その滾りがお前の力の糧になる。その意志の褒美として俺の力、その本来の使い方を教えてやる』

本来の力、まだ自分の知らない力がこの左腕の籠手に眠っていることを聞かされ、思わず自分の左腕を見つめる。

『千回負けても千一回目には勝て。その千回の戦いを折れずに戦い抜くなら俺がお前に力を分け与えてやる。だが、それには相応の犠牲も必要だということを忘れるな。まあ、犠牲の価値に見合ったものだということは保証してやる』

赤いドラゴン――ドライグが喉の奥で笑う。

『屈せず戦い続けろよ相棒。そうすれば奴と出会い戦う……ああ、その前に『奴ら』にも目を付けられるかもしれないな』

一誠は『白い奴』以外の指す『奴ら』という言葉が気になり、その意志をドライグに伝える。

『気付いてないのか？　気を付けろよ、『奴ら』の同類はお前のすぐ側にいる。あの間薙という小僧、あれは『魔人』だ』

◇

シンはジャックフロストとピクシーと共に自宅の一室で時間を潰していた。この二日の間でリアスとライザーとの婚約の準備は完了しており、既にリアスは朱乃たちを連れて会場へと向かっている。シンはライザーとの約束をしていた為、それを理由に参加を断り、アーシアはリアスの願いによってグレイフィアの付き添いの下、一誠と共に残った。余談ではあるが同行を断る際、ライザーとの約束のことを言う前に拒否の言葉を言ったせいで、リアスは治癒施設での一件も合わせて、シンから愛想を尽かされたと思いショックを受けていた。すぐさま誤解を解くことは出来たが、言い方が悪いとリアス以外から非難を受けるという結果になった。

その間、ライザーとの戦いで消耗し切った一誠を、アーシアとグレイフィアが付きっきりで看病を続けていた。怪我自体はシンと同じくアーシアの『神器』によって完全に治癒されているが、その後はどういった訳か、一向に起きる気配を見せなかった。

一誠が自宅へと送られたとき様子を見に行ったが、そのときシンは眠る一誠から、何度か感じた強大な力が胎動しているのを感じた。

それを幼虫が成虫へと至る蛹のようなものと感じ、命に別状はないと悟って、気配に震えるピクシーとジャックフロストを連れて看病をあとの二人に任せるという形をとった。その後もちょくちょくと一誠の状態を見に行ったが全く変化は無く、そうこうしている内に今に至る。

シンの部屋にあるテーブルの上で、ピクシーとジャックフロストは日課となっている洋菓子を食べ舌鼓みをうち、シンはベッドに座って本棚から出した本を適当に流し読みをしている。このページが捲れる度に、ここから遠く離れた場所で知り合いが結婚式を挙げているのかと思うと、何とも形容し難い複雑な気持ちになる。

自分で残ると言い切ったが、それでもただ時間が経過していくのを感じることを拒否し、少しでも気を紛らわせる為に何度も目を通した本を見続けていた。

そんなことが今日が終わるまでずっと続くかと思っていた矢先、シンの携帯電話が着信があることを知らせる。携帯電話を開くと液晶画面に写っているのは一誠の自宅の番号。

「もしもし」

『あっ！　間薙さんですか！』

電話に出ると向こう側から興奮した様子のアーシアの声が聞こえてくる。

「どうした？」

『イッセーさんが目を覚ましました！　それで、あの……部長さんを助けに行きます！』

「分かった。すぐそっちに行く」

なんとなくではあるが、一誠が目を覚ました後の行動について予想していたシンはケーキを食べている最中のピクシーとジャックフロストに電話の内容を伝え、食べるの

を中断させる。
「じゃあ、行こう」
「ヒーホー！」
普段なら不機嫌さを出して渋々といった様子でフォークを置く二人ではあるが、今回はすんなりと応じる。少なくともこの二人にとっては一誠はケーキを食べることよりも重要であるらしい。
そんな二人の態度を好ましく思いながらシンは二人を連れて部屋から出る、かに思えたが、扉の前で何かを思い出して机の前にまで移動すると、そこに置いてあったある物を手に取った。
「それ、どうするの？」
「念の為にな」
それを懐へと仕舞うと今度こそシンは一誠の自宅を目指し、悪魔の力を解放して全速力で駆け出し始める。当然ピクシーとジャックフロストの羽と足ではシンに追い付かない為、ピクシーはシンの上着のポケットに入り、ジャックフロストはシンの肩に腰を下ろし肩車の体勢となる。
初めは普通に道路を走っていたシンであったが、このままだと間に合わなくなる可能性があると考え、回り道をするのを止めて一誠の自宅への最短ルートを走ることにし

た。
「しっかり掴まっていろ」
「うん」
「分かったホー！」
　ピクシーがポケットの口の端を強く掴み、ジャックフロストがシンの額辺りに回している手の締め付けが強くなったのを確認すると、シンは走っている速度を殺さずにそのままの速さで、隣に並ぶ自分の背よりも高い塀の上に飛び乗ると、そこから更に跳び上がり今度は一気に家の屋根に飛び乗る。
　そこから再び屋根の上を疾走し、屋根が途切れたならば次の家の屋根に飛び移るといった行為を繰り返す。中には十メートル近く離れた家もあったが、悪魔の力を解放したシンには距離など無いに等しく、水たまりでも飛び越えるかのように軽々と飛び越え、一誠の自宅まで一直線に向かう。
「早い、早ーい！」
「ヒーホー！　ヒーホー！」
　次々に景色が変わっていくのを愉しむ二人。シンの方は周りに気を遣う暇も無く一秒でも早く目的地に着く為に足を動かす。
　やがて一誠宅の屋根が見えるとそのままそこに飛び移る――ことはせず、一々下まで

降りてから玄関のインターホンを鳴らして、一誠が居るか居ないのかを確かめるのであった。
「普通に窓から入ればいいのにね」
「ホントだホー」
「好きなように言ってくれ」
こんなときにまで日々行っていることを欠かさないことに、自分でも馬鹿馬鹿しいとは理解をしているが、しないならしないでどうにも気分が悪くなる。
インターホンの音が一誠宅内に響き渡り、間も無くしてインターホンから女性の声が聞こえてくる。それは一誠の母でもアーシアでも無く、グレイフィアの声であった。
『お待ちしておりました。どうぞ中へ』
グレイフィアの言葉に合わせて、一誠の家の扉が人の手も無く開く。シンはピクシーをポケットから出し、ジャックフロストを肩から降ろすと中へと入って行く。
玄関を上がってすぐにある二階への階段の側でグレイフィアが直立不動で立っており、シンたちの姿を視界の端の捉えると優美な動作で頭を下げた。
「まだアイツは居るんですか?」
「はい。アーシア様と少しお話をしていますが、もう暫くしたらライザー様とリアス様の婚約パーティーの会場へと向かわれると思われます」

「そうですか」
　全力で走ってきた甲斐を感じシンは階段に一歩踏み出すと、そこで今度はグレイフィアの方から声が掛けられる。
「申し訳ございませんが、もし一誠様に同行して、リアス様を奪い返す為にここに来たのならば前以てご忠告させて頂きます。それはできません、と」
「出来ないとは？」
「現在一誠様には婚約パーティーの会場へ転移出来る魔法陣が描かれた符を渡してあります。ですが、それはリアス様の眷属のみに反応する仕様となっています。その為リアス様の協力者である貴方がその魔法陣を使用することは出来ません」
　冷淡と与えられた台詞を音読するような抑揚のない口調で喋るグレイフィアに、シンは軽く頭を下げ、説明に対する礼を払う。
「ご忠告ありがとうございます、が大丈夫です。俺はアイツの手助けに来たつもりですがそこまでするつもりはありません。……一応、ライザー・フェニックスとは約束したので」
「そうですか、差し出がましいことを言ってしまい申し訳ございません」
　謝罪を込めた低頭にシンはお気になさらず、とだけ言い階段を上がって行くが二、三段上った所でグレイフィアの方に振り返る。

「最後に一つだけ聞いてもいいですか？」
「何なりと」
「会場への転送魔法陣、手助けをしているのは部長のお兄――魔王様なんですか？」
「左様です」
シンの質問を肯定で返すグレイフィア。シンはその答えを聞き、そこから思いつく考えに目を細めた。
「魔王様がアイツの手助けする理由は一体何なんですか？　以前聞いたときは部長の婚約には賛成側だったと思いますが」
「サーゼクス様はイッセー様の活躍を見て素直に『面白い』と称しました」
「『面白い』？」
「悪魔らしからぬ程感情に素直で、行動もそれに合わせて思った通りに駆け抜ける。それは今まで見たことのない初めての方です。私も主と同じくそれを『面白い』と思いました。そして同時にイッセー様の行く先を見てみたいとおしゃっていました」
冷徹な表情が消え、確かな暖かみを感じさせる小さな笑みをグレイフィアが浮かべる。
シンはグレイフィアの言葉を聞き思わず納得してしまった。シンの目から見ても一誠と言う存在は見ていて飽きない。同時にあのレーティングゲームでの敗北は決して

無駄にはならず、最後のチャンスに繋がらせることが出来たのを実感した。
「それを聞いて納得しました。万が一ですが見世物目的で招いているという考えがあったので」
「――もし、それが目的としたらどうしました？」
「殺す」
　全ての音が消え、あらゆる動きが停止したかと思える程の一瞬の静寂。
　躊躇の無い一言で場の空気は凍てつき、互いに無表情なシンとグレイフィアの視線が音も無く衝突する。シンの言葉には何一つ偽りを感じさせず、グレイフィアもそれが戯れで言ったことではないと理解する。
　突如、緊迫した空気と化した階段下。だが、そんな空気にも構わずシンの仲魔二人が難なくそれを打ち破る。
「こら、シン！　サーゼクスはいい悪魔だったんだからそんなこと言っちゃダメ！」
「そうだホー！　あの王様はオイラのこと褒めてくれだヒーホー！」
　怒るピクシーがシンの右頬を両手で引っ張り、同じく怒るジャックフロストがシンの膝の辺りをポカポカと殴り抗議する。
「――と言うところですが、この二人は魔王様に良くしてもらったことを聞いていましたからね。すみません、不快になるような言葉を口にして」

先程の空気がすっかり霧散した場の中でシンは表情をやや和らげ、自分が言った言葉に対する謝罪をする。
「いいえ、お気になさらず。間薙様は良い『仲魔』をお持ちですね」
「――その言葉を何処で」
「サーゼクス様がその御二人から聞かされ、私もサーゼクス様から聞かされました。『仲魔』、好ましい響きですね」
優し気に笑うグレイフィア。いつの間にか広がっている自分の言葉を出されたシン。
「……あー、いろいろ聞いてしまってすみません。もう上に行きます」
照れ隠しの様に頭を下げると怒る二人を宥め、二階へとやや早足で登っていく。グレイフィアはシンの姿が見えなくなった後、その顔に浮かべていた微笑を消す。笑みの後から出てきたのはいつもの冷淡な表情では無く、警戒する様な、余裕を感じさせない真剣味を帯びた表情。
グレイフィアは一つだけシンに伝えていないことがあった。それは一誠と同様にシンもまた、サーゼクスに興味を持たれ、ある評価をされているということを。
『興味深い』……貴方は彼をそう評価しました。そして、私も貴方の感想に賛同します」
あの緊迫した空気の中でシンが見せた眼光。それはかつて敵対したある者を彷彿とさせる。

七頭十角の赤い獣に跨り、汚れと淫欲を愛し、神を嘲笑い、天使を堕天させる『魔人』の姿。それがシンを間近で見たグレイフィアの感想であった。
「ドラゴンと『魔人』、如何なる勢力に属さなかった存在が一つの場所に集う……これは単なる偶然なのでしょうか……あるいは……」
そこから先は言葉にしなかった。この想像を言葉にすることに躊躇いを覚えたからだ。
「――貴方がたの行く末、見届けたくなりました」

◇

「失礼する」
そう言ってシンが一誠の部屋に入ると真っ先に視界に入ってきたのは、一誠を抱きしめて涙を流すアーシアとその頭を撫でる一誠の姿であった。
声に二人が反応し、シンの方を向くと視線が合う。
「――失礼した」
思わぬ現場を目撃したことでシンは握ったままのドアノブを今度は引いてドアを閉めようとする。しかし、それを慌てて離れた一誠が声を掛けて止めた。

「お、おおお！　ま、間薙か！　ど、どうして来たんだ！」
「あ、あの！　私がさっき下の階に言われた物を取りに行ったときに電話したんです！　で、でも早かったですね！」
「ああ、おかげで邪魔したな」
　シンの登場に顔を真っ赤にして動揺する一誠とアーシア。下手な言い訳をせず話を逸らそうとしているのを感じたが、シンは先程の二人の様子と、以前アーシアがシンに話した、一誠が傷付くのを見たくないという言葉から、大体の事情を推測していた。恐らくは死ぬかもしれない可能性がある場所に一誠が行くということに対する悲しみと不安からの行動であると考えていた。
「そ、そうか」
「ヒーホー？　何で二人は赤くなっているんだホー？」
「あれじゃない、あれ。えーと、シュラバってやつ？」
「ヒホ！　シュラバかホー！……それって何だホー？」
「取り敢えず、お前ら少し外に居ろ」
　部屋を覗き込みながら、テレビか何かで知った言葉を致命的なチョイスで最悪のタイミングで言うピクシーを、ジャックフロスト共々部屋の外に追い出し、先程のことは最初から無かったかの様に仕切り直す。

「少し間を置いてからまた来る」
「あ、あの気を遣わなくても大丈夫です。私のするべきことは終わりましたから」
　涙を拭いながら微笑むアーシアの気丈な態度。
「……あー、アーシア。すまないけどちょっと間薙と二人で話をさせてくれるか」
「はい、分かりました」
　理由は聞かずアーシアは一誠の願いを快諾すると、未だに部屋の中を覗こうとしているピクシーとジャックフロストを連れて一誠の部屋を出ていく。アーシアとのすれ違い様、シンにしか聞こえない小さな声で囁いていく。
「イッセーさんの力になって下さい」
　囁く声は確かに震え、それはアーシアの心情を現している様であった。
　アーシアが出ていくとシンは部屋の中へと入りドアを閉める。そこでシンはあることに気付き、その眼を鋭くさせた。
「お前、それは――」
「はは、まあ切り札の為の代償ってやつかな」
　一誠の左腕は人の物ではなくなっていた。左肘から下が赤い鱗に覆われ、生物独特の光沢を放ち、その指先は鉤爪の様に湾曲した長い爪が生えている。その形状は、一誠の『赤龍帝の籠手』と酷似しているものであった。

『ドラゴンの腕』、それが初めに抱いたシンの感想である。
「全く算段が無い状態で再戦する訳じゃないみたいだな」
「ああ、俺はもう負けない！　あいつをぶっ飛ばせるなら代償なんて幾らでも払う！　そして今度こそ部長も約束も守ってみせる！」
「約束？」
「最強の『兵士』になるっていう約束……俺みたいな才能が無い奴が言ったら笑うか？」
「少なくとも俺は笑わないな。――なら、その約束を守れるよう俺からの餞別だ」
シンはそう言って懐からある物を取り出すと一誠に向けて放り投げる。放られた物を受け取った一誠はそれが何なのか首を傾げる。すると、一誠の手の甲辺りが宝玉の形の光を放って点滅し、一誠は驚いた様にシンの方を見た。
「そいつは――」
「ああ、今教えて貰ったから何なのか分かる」
「教えて貰った？　誰に？」
「え！　えーと、その……」
何か言い訳でも考えているのか目線が忙しなく動き、ちらちらと自分の左腕に視線を向けている。一誠の落ち着きの無い態度を不審に思うシンであったが、この場で追及するのも時間の無駄だと考え、まあいい、といって自分から話題を切り上げた。

「とにかく、それがもしかしたらお前の役に立つかもしれない。保険代わりにでも持って行け」
「おお、分かった！　……でも、これどうやって手に入れたんだ？」
「……戻ってきたら教えてやる」
　一誠が何らかの事情を隠しているのに対する意趣返しと言わんばかりに出所を秘密にするシン。一誠は自分のこともあってか深くは詮索しなかったが少しの間の後、ニッと笑う。
「じゃあ、戻ったら教えて貰うぜ！　部長と一緒にな！」
「ああ、待っている」
　一誠は手に持った用紙を広げる。そこには細かい文字で形成された魔法陣が描かれていた。一誠が目を瞑り念じ始めると、それに反応し魔法陣から魔力の光が溢れ始める。
「アーシアに別れの挨拶ぐらい言わないのか？」
「絶対に生きて戻ると約束した。戻ってくるのに別れの言葉なんて必要ないだろ？」
　確かに、と言ってシンは小さく笑う。笑みと分かるには表情の変化は微々たるものであったが、シンは確かに笑っていた。
「勝ってこい、『イッセー』」

「えっ！」
一誠が驚き目を丸くしてシンの方へと向こうとした瞬間に、一誠は魔法陣によって婚約パーティーの会場へと転移していった。
転移する直前に見せた一誠の驚きの表情。何故名を呼んだだけであれほど驚いたのか。
（そういえば……）
周りが一誠をイッセーと呼び始めてから、シンがイッセーと本人の前で呼んだのはこれが初めてのことであった。シン自身、その名で呼ぶことに躊躇いがあった訳ではなかったが、ただ単に面と向かって呼ぶ機会がなかったのであった。
一誠を見送ったシンは部屋の外に出ると、ドアのすぐ側でアーシアが立っている。その肩にはピクシーが乗り、ジャックフロストもアーシアに寄り添うようにして立っていた。
「イッセーさんは？」
「部長を取り返しに行った」
「そうですか」
悲しむかとシンは予想していたが、それに反してアーシアの態度は穏やかなものであった。

「俺が見送る形になったがそれでよかったか？」
「大丈夫です。イッセーさんと約束しました、必ず戻って来てまた変わらずに一緒に過ごすって、そして部長さんと必ず帰るって」
「そうか」
本来なら恋敵である筈のリアスの帰還を願うアーシアにシンはそれ以上何も言わず、アーシアの隣に立つ。
「なら二人の帰りを待つとしよう。俺もあいつに『勝ってこい』と約束したからな――一方的にだが」
「はい！」
微笑んだ後アーシアは手を組んで目を閉じ、祈りを始める。祈っても苦痛に襲われない様子を見るに、その祈りは神に対してのものでは無い。一誠の勝利を願った祈りか、あるいは無事に帰って来ることを願う祈りか、その内容はアーシアにしか分からない。
それを見ていたピクシーとジャックフロストも、アーシアの格好を真似して祈りを始め出す。それは決して茶化している訳ではなく、二人ともこの場にいる自分たちが出来る数少ないことと分かっての行動であった。
三人の祈りを見ながらシンも、密かに心で願う。
叶うならば、またいつもの部室で、いつものメンバーで、いつものように時間を過ご

す日常が戻ることを。

◇

魔法陣が転移させた場所に着くと、一誠は去り際にシンに言われた言葉を思いだし、軽く笑うとすぐに表情を引き締めて走り出す。そこは見上げる程の天井と人が十数人並んで歩ける程の幅の廊下であった。

走りながらも一誠は周囲を見ては軽く驚いた表情をする。今まで生きてきた中で廊下にずらりと並ぶ蝋燭の照明も、数メートルもの大きさがある巨大な絵画も、一度も見た記憶は無い。

その豪華さに圧倒されながらも走る速度は緩まず、やがて廊下の先に緻密な獣の彫刻が施された巨大な扉が現れる。その扉の先からは無数の声が飛び交い、時折笑い声が混じっていた。

この先が婚約パーティーの会場と確信し、自分の左腕を見つめた後、勢い良く扉を開く。扉の先に広がる光景はまさに社交場というに相応しい眩い世界であった。見たことも無い程の大きなシャンデリラの下で、自慢のドレスや宝石で着飾る女の悪魔たちや、宝石の代わりにその身が放つ威厳で自らを飾る男の悪魔たち。

しかし、そんなものには目もくれず、一誠はリアスを探す為に目を激しく動かす。
そして見つけた。真紅のドレスに身を包み、長い髪を上げて結い、いつもよりも魅力が増したように見えるリアスの姿。そして、その隣に立つリアスとは対照的に純白のタキシードを着たライザーの姿。
「部長おおおおおお！」
その姿を見たとき一誠は大声で叫んでいた。その声でこの広場にいる全ての悪魔の視線が一誠へと注がれ、当然リアスとライザーも一誠の存在に気付く。リアスは一誠の姿に感極まった様子で一筋の涙を流しながら一誠の名を呟く。ライザーはそのリアスの涙と呟きを見逃さず、小さく舌打ちをすると敵意を持って一誠を睨みつけた。
不審、好奇、疑問など様々な視線の中心で一誠は自らの名とリアスを奪還しに来たことを堂々と告げると脇目も振らずリアスの下へと進んでいく。しかし、上級悪魔同士の婚約の場で乱入してきた不審者同然の一誠を黙って見過ごす筈も無く、会場の至る所に待機していた衛兵たちが一斉に一誠の方へと駆け寄ってきた。
多勢に無勢という一誠にとって不利な状況。だが、それを見過ごさない者たちもこの場に居た。
「イッセーくん！　ここは僕たちに任せて！」
「……遅いです」

「あらあら、やっと来たんですね」

白のスーツに魔剣を握り締める木場、小さな拳を造りドレス姿で構える小猫、美麗な和服を纏い、その手には魔力による雷を留めている朱乃、婚約パーティーに参加していたメンバーが一誠の進む道を開く。

その姿に一誠は礼を言い開かれた道を行くが、その途中この会場では場違いな白い鎧を装い顔半分をマフラーで隠した青年――セタンタが現れる。その手に持つ槍に一誠は警戒をしたが、セタンタからは襲い掛かってくる気配は無く、セタンタの方から一誠へと歩み寄り、何もせず、そのまますれ違うかに思えた。

「あの娘のことを頼む」

「えっ？」

通り過ぎていく直前に聞こえた小さく呟く声に、一誠はそのとき初めてセタンタの眼を直視した。その眼は一切の揺らぎも無く一誠を見つめ、その瞳から放たれる眼光は言葉が偽りのものではないと一誠に確信を与える程であった。

一誠はセタンタの言葉に頷くと、少しだけセタンタは表情を和らげる。そのまま一誠が離れていくのを見届けはせず、その場で一気に跳躍をすると衛兵たちに囲まれている木場たちの頭上まで跳び上がる。そして、セタンタは落下していく同時に片手に持った槍を一払いする。

音も無く払われた槍の穂先に合わせて、磨かれた鉱物で出来た床が一瞬にして削られ、その破片と細かく粉砕された粉塵が会場内に舞う。
『うわあああ!』
衛兵の誰か、あるいは会場にいる誰かの悲鳴が上がる。槍によって出来た傷は木場たちを衛兵たちから守るようにして円形に刻まれ、その中心にセタンタは降り立つ。
新たな乱入者に木場たちは勿論のこと衛兵たちも一瞬警戒をしたが、降り立った人物が誰なのかが分かったとき、全員が一斉に驚く。
「セタンタ様ですか!」
「まあ!」
「……お久しぶりです」
「祐斗、朱乃、小猫、久々の再会に挨拶の一つもしておきたいところですが、後回しに致しましょう」
木場たちがセタンタの名を呼ぶとその名を聞いてざわめきが起こり、会場のあちこちから驚きと憧憬を含んだ声でセタンタの名が呟かれていく。
「い、一体何の真似ですか?」
衛兵たちのリーダー格にあたると思われる人物が一歩前に出てセタンタの行動を咎める。その声は緊張からか震えていた。

「この者たちは私が仕えるグレモリー家の血族であるリアス様の眷属。グレモリーに関わる全ての者を守るのが私の使命であり役目です。もし、その眷属に危害が加わることがあればそれを防ぐのは必然」

涼しげな口調で答えるセタンタは槍を旋回させる。それによって起こる旋風が舞う粉塵を裂き、吹き飛ばすと槍を両手に持ち直したセタンタが衛兵たちにその矛先を向ける。

「なので出来ることならばこの場から誰も一歩たりとも動かないで貰いたい。もし、動くことがあれば害意があると判断し、こちらもそれ相応の手段を取らせて頂く」

誰もが息を呑んだ。口調こそ丁寧であるが内容は完全な脅迫。この場に居る誰かがセタンタの言葉に反論し、行動を起こせば脆くも崩れそうな脅迫であるが、この場に居る誰もがその言葉に呑まれ動くことは出来なかった。

何故なら槍を構えたその人物は魔界に居る者ならば殆どの者が知っている存在。表舞台には滅多に出ないものの、類稀なる武芸の腕で長年の間グレモリー家の守護を務め、その中で数多の逸話を生み出し、魔王サーゼクス・ルシファーが眷属以外で絶大な信頼を置く唯一無二の人物。

そんな相手を前にして、誰も下手な真似をすることは出来る筈が無かった。動かない周囲を前にしてセタンタは微笑む。

「ご理解していただき感謝します」
その微笑みを見ても誰も安堵することはできず、この一帯の緊迫は晴れる兆しを未だ見せなかった。
木場たちやセタンタの援護を貰った一誠はライザーの真正面まで進み、両者とも面と向き合ってお互いを睨む。
「部長――リアス・グレモリー様の処女は俺のもんだ！」
凄まじいまでの迷いの無い一言。この場に居ないシンがそれを聞いたのであれば盛大に呆れ、そして言い切る姿に逆に感心すらしていたであろう。その発言をまともに聞いたライザーも呆れているのか驚いているのか衝撃をうけているのか、表現し辛い表情を浮かべたが、少なくとも怒りの方は一誠の発言で忘れ去られていた。
乱入者の突飛のない発言に周囲の身内関係は狼狽し始めるが、一人の男性の声によってそれは静まる。
「私の用意した余興ですよ」
発言した男性はサーゼクス。魔王自身の差し金である横槍行為に、ライザーはやや批難する様な目線でその言葉の真意を確かめるが、サーゼクスは底の見えない笑みであっさりと流す。
リアスの兄であるサーゼクスを目の当たりにして驚いている一誠の前で、少し離れた

場所に居たサーゼクスと同じ紅髪の男女二人が近寄って来る。片方は中年の男性ではあるが、見た目の年齢に反して引き締まった体型をしており、それがスーツに良く映えている。整えられた髭と経験を積んで刻まれた皺は、男性の老いを示すのでは無く、高級酒の様な熟された魅力を放っていた。女性の方は、リアスが数年経て成長したらこうなると思える程に良く似た容姿をしており、男性に比べるとその年齢の半分にも満たない程の若さであったが、その色気は若さとは不釣り合いなほどに濃密であった。

サーゼクスの行動に疑問を投げかける男性の方を一誠はリアスの父であると予想し、それを黙って見ている女性の方をリアスの姉と予想した。

リアスの父からの疑問に笑顔を浮かべたまま、すらすらとこの現状について説明を始める。サーゼクス曰く、大切な妹の婚約の場で生涯の思い出になるようなことをしたいと思った。そこで思い出したのがレーティングゲームで見たライザーとリアス、イッセーとの戦いである。龍と不死鳥という伝説の生物の本気の戦い。それはこの上なく会場を盛り上げ、忘れられない催しになるであろう、と。

演出にしては余りに一誠側に肩入れしていると思われるサーゼクスの案。この催しに関してはライザーが得るものなど殆ど無い。だが、四大魔王という立場のサーゼクスの案を撥ね、蹴る存在などこの場には居らず、全員が沈黙をする。唯一例外としてはセタンタだけが凄まじい目つきでサーゼクスを睨みつけており、その漏れ出す怒気に周囲

の悪魔たちは、自分に向けられているものだと錯覚し怯えていた。
そんな視線を向けられていてもサーゼクスの表情はびくともせず、一誠に対して戦いの許可が下りたことを告げる。そして、ライザーに対し戦う意思があるかどうかを尋ねた。
ライザーは今までサーゼクスを、リアスの父と同じく婚約に関して賛成派であると思っていた。魔王という立場上、悪魔の未来を考えるのは当然であるため。しかし、今までの流れを見る限り、本心はそうではないということが見て取れる。そのことに対しライザーはサーゼクスに失望などはしない。寧ろこの勝負こそが、真の意味で自分がリアスの婚約者であることを認めさせる試練であると解釈した。
ライザーはサーゼクスの言葉に了解の意を告げる。続けざまにサーゼクスは一誠にあることを尋ねてくる。それは勝った場合、君は何を代価として貰うのかという内容。
このサーゼクスからの質問で、ただの催しものから互いに何かを賭けた決闘へと変わる。相手が何を望むかなど、ここに入ってきた段階で既に分かっている。ライザー側とリアス側の身内はその言葉に顔色を変え、非難する。下手をすればこの婚約自体が破綻する可能性があった故に。
が、サーゼクスの決定は覆らない。
「さあ、君は何を望む？　爵位かあるいは沢山の財宝かい？　悪魔なのだからその行為

にはそれ相応の報酬を払うよ？」
「リアス・グレモリー様を返して下さい」
「分かった。君が勝ったら、リアスを連れていけばいい」
迷いの無い一誠の返答。それにサーゼクスは満足し、ライザーの方を見る。
「君も何を望む？　戦わせる以上は君にも代価を払うよ？」
「……僭越ながら申し上げます。もし私が勝った場合――」
そこで言葉を切り、真っ直ぐにサーゼクスを見る。
「私とリアスの子が産まれたとき、その子にグレモリー家の当主の座を与えて頂きたい」
その言葉にサーゼクスを除く誰もが驚愕の表情となる。ライザーの申し出はグレモリー家の内情を知る者がいれば恐れ知らずもいいところであり、それをサーゼクスの前で発言したならば即抹殺されても可笑しくは無い。
「ふむ、了解した。――中々の野心家だね、君は」
騒然とする会場の中、表情一つ変えずに受け入れるサーゼクス。
「それでは双方の求めるものを出し合ったことなので、決闘の準備をするとしよう」
失礼するといってサーゼクスは準備を進める為に会場の奥へと消えて行った。
魔王が去った会場でライザーと一誠が再度睨み合う。だが、言葉は発さずともに譲れない意志だけを衝突させ合うと、お互いに背を向けて歩き始める。

歩く一誠の背中にリアスが声を掛ける。
「イッセー……」
「部長……必ず、必ず貴女を取り戻します！」
「――ええ、待っているわ」

◇

「死ね」
決闘の場の準備を進めているサーゼクスにセタンタが会って、最初の一言がそれであった。
「ははは、手厳しい言葉だね」
「笑い事か……態々あの場で旦那様や奥方様に恥をかかせる真似をしやがって……」
「そういう君もあの騒ぎに割と乗っかっていたと思うんだが？」
痛いところを突かれたのか、槍を持つ手を少し緩め、舌打ちをするセタンタ。不本意ではあるがセタンタ自身、この婚約が駄目になることを心の片隅で望んでいたのも事実である。
「……お前はいいのか？　あの小僧、リアスだけじゃなくミリキャスの座も狙っている

んだぞ？」
「いやはや、流石に驚いたよ。彼も中々大胆なお願いをする」
「いつも通りの反応をしやがって……お前の子供の将来もかかっているんだぞ」
現在のグレモリーの当主の座はリアスが受け継いでいる。サーゼクスがルシファーの称号を受け継いだため自動的に長女であるリアスに譲られているが、グレモリーにはもう一人、当主の権利を持つ人物がいる。年齢が若い為、当分の間リアスが代行と言う形になっているが、本来の受け継ぐ人物、それがミリキャス・グレモリー。魔王サーゼクス・ルシファーの嫡男である。
リアスがライザーの下に嫁げば今度はミリキャスがグレモリーの当主となるが、ライザーが勝ったのであればそれはライザーの子が産まれるまでの間に過ぎない。
ミリキャスの遊び相手や子守をすることもあるセタンタにしてみれば、子供の将来を賭けるサーゼクスの行動は素直に受け入れ難かった。
「重々理解はしている。このことを知ればあの子は私を軽蔑し、彼女や彼らも私から離れていくかもしれない。勿論、君にも愛想を尽かされるかもしれないね。だが、それも含めて私は彼に賭けてみようと思う」
「随分とあの子供に入れ込むな。――賭ける根拠は何だ？」
「勘だ」

　言い切ったサーゼクスにセタンタは呆れた眼差しを向ける。
「一重に勘と言っても思いつきで賭けている訳じゃない。私が生きてきた記録の中で初めて見る『面白い』少年だ。その少年がどんな結末を生み出すのか……私はそれを見届けたいと思った」
　サーゼクスの言葉を聞き終わったセタンタは溜息一つ吐き、サーゼクスに背を向ける。
「お前がそうしたいならば、そうすればいい。俺もこれ以上は口を出さない。あと一つ訂正しておきたいことがある」
「何だい」
「たとえどんな結末だろうと、ミリキャスもグレイフィアもあいつらも俺も見捨てて離れては行かないさ」
　セタンタの言葉にサーゼクスは穏やかな笑みを浮かべ、ありがとうと親しい友人に感謝の言葉を送る。
「――死ねは言い過ぎたな。それも訂正しておこう」
　背を向けていたセタンタが振り返り、サーゼクスに一言。
「くたばれ」
「ふむ。言葉は変わったが内容は大して変わっていないと思うのだが？」

◇

会場内で急いで創り上げられた即席の魔術による空間。その中の中央でライザーと一誠は互いに向き合い、戦いの音が鳴るのを待ちわびている。一誠は極限まで戦意を高めた戦う者の顔付きをしており、ライザーはそれを不敵な笑みを浮かべて見ていた。

向かい合う二人を空間の外から会場に招かれていた上級悪魔たちは興味深そうに見物し、リアスと木場、小猫、朱乃はサーゼクスとセタンタと同じ席で心配そうに見つめている。その席の丁度反対側にはライザーの身内と眷属たちが見物している。その中にはレイヴェルの姿が有り、不安そうな表情で、ライザーではなくリアスたちの席に何度か視線を送っており、目的の人物が居ないことを確信すると安堵の息を吐いていた。

空間中央の両者の準備が整ったのを見計らって、審判を務める男性の悪魔から開始が告げられると、ライザーはすぐさま炎の翼を顕現させ上空へと飛翔する。

見下ろすライザーの表情からは笑みが消えてはいるが、態度からは余裕の色は消えてはいない。その理由は彼に負けた一誠だからこそよく分かる。あの戦いにおいて一誠はライザーに全ての手の内を見せ尽くしていた。倍加による身体上昇の限界、最大の攻撃技である『ドラゴンショット』、ライザーに直接は見せてはいないが、恐らく眷属から

伝え渡っているであろう『赤龍帝からの贈り物』。それらを全て行使してもライザーは倒せなかった。

だが、それは二日前の時点での話である。

「部長」

一誠がリアスの方へと向き力強い笑顔を浮かべる。

「この勝負、十秒でケリをつけます」

大胆不敵としか言いようのない一誠の発言に会場の皆がざわつき、一聴すれば余裕とも解釈出来る言葉であったが、普段の一誠ならばまずしない宣言にリアスたちは困惑した表情をする。唯一、サーゼクスとセタンタのみ言葉の裏に隠された真意を理解したのか、サーゼクスから笑みが消え真剣な面持ちとなり、セタンタの方も眼差しを鋭くし一誠の一挙一動を見逃さない構えとなる。

「十秒だと？　どういうつもりだ赤龍帝」

その宣言を聞いたライザーはそれを一笑するのではなく疑問を覚えた。負けることの許されない場所に似つかわしくない一誠の大口。それがどんな意味を持っているのか思考する。

「部長！　この場でプロモーションをすることを許して下さい！」

一誠の叫びにリアスは頷くと、すぐに一誠は『女王』へとプロモーションし、基礎能

力を向上させる。そして、この空間を通り越し全ての人物に聞こえる程の声量で大きく叫ぶ。

「部長ッ！　俺は木場みたいな剣の才能も朱乃さんみたいな魔力の才能も小猫ちゃんみたいな力もアーシアの様な治癒の力も間薙の様な冷静な頭も全部ありません！」

一誠は自らの弱さを改めて口にする。傍から見れば滑稽かもしれない、嘲笑の対象にもなりうるかもしれない。だが、それでも一誠は胸の奥にある想いを口にせずにはいられない。

それこそが誓いであり、二度とこの想いを裏切らない為の決意であった。

「俺は貴女を守りきれずに負けました！　勝つべき戦いで勝てなかったどうしようもない男です！　でも！　それでも許されるならもう一度貴女の為に最強の『兵士』を目指させて下さい！　貴女がそれを望んでくれるならば俺は神様だってぶっ飛ばし、貴女を守ります！」

真っ直ぐな感情を乗せた一誠の言葉がリアスの胸の奥へと飛び込み、その想いに頬を紅潮させながらリアスは力強く頷く。その頷きを見たとき一誠の高まりは最高潮を迎えた。

「よっしゃあああ！　輝きやがれッ！　『赤龍帝の籠手』！　『限界突破〈オーバーブースト〉』！」

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　ｏｖｅｒ　ｂｏｏｓｔ！』

一誠の魂の奥底からの叫びと籠手から発せられる音声が重なり合い、会場を真紅の光が覆い尽くす。赤い光を見た上級悪魔たちはその光から感じられる根源的恐怖に身を震わせ、自分たちの身体に起こった現象に戸惑いの色を浮かべる。

サーゼクスは一誠の身に起こった変化に真摯な眼差しを向け、やはりかと口の中で呟き、側に居たセタンタは無意識に槍を持つ手に力を込める。

赤い光が生み出す力の余波は会場のみに留まらず、この場所以外にも伝播していく。

一誠の自宅でアーシアたちと共に一誠の帰宅を待っていたシンは、どこからともなく伝わって来た力に閉じていた目を開き、しきりに周囲を見回し始め、とある一室に居た十二の黒翼を持つ男性とその側に立つ銀髪の青年はその変化に気付き、青年は口に端を吊り上げ獰猛な笑みを浮かべ、『魔人』の名を持つ存在達は各所で龍の目覚めを感じ取り、ある魔人は歓喜の笑いを上げ、ある魔人は薄暗い嘲笑を発した。

あらゆる場所へその存在を知らしめる力の光の中から一誠が飛び出す。しかし、飛び出したその姿は大きく変化していた。頭部から足の先に至る全身を『赤龍帝の籠手』と同じ赤い金属で形成された鎧で覆い尽くし、体の関節部分の各所と胴体の中心に緑の宝玉が埋め込まれていた。神々しさと荒々しさを均一に表現したその姿はドラゴンを彷彿させた。

「鎧だと……それがお前の奥の手か！」
溢れ出る一誠の力を目の当たりにしてライザーから余裕の色は完全に消えた。それと同時に未知への凄まじい警戒心が露わになる。
赤い鎧を纏った一誠の背部が隆起し、その下から噴射孔らしきものが左右に一つずつ現れると、そこから一気に魔力を噴出、ライザーに向かって一気に加速する。背後が爆発したのかと錯覚する程の魔力を一気に放つことで得た加速は、まともに目で追うことが出来ず、炎を生み出そうとしていたライザーの右腕を右半身ごと消失させる。
「この速度と力は……！」
消え去った右半身を見て驚くライザー。ついこの間とは比べものにならない力量の上昇に、戸惑いを隠しきることは出来なかった。
「これが『禁手〈バランスブレイカー〉』、『赤龍帝の鎧〈ブーステッド・ギア・スケイルメイル〉』だ！　龍帝の禁じられた力、見せてやるぜ！」
言うと一誠は再度加速して接近するとライザーの胴体に右拳を放つ。それをライザーは再生し終わった右腕で炎を盾のようにして今度は防ぐが、それを見越していた一誠は右腕に魔力を収束し始める。
『X』
突如聞こえくる十を知らせる音声。間近でそれを聞いたライザーは訝しげな表情と

なるが、次に起こる事態にその表情はすぐに消え、焦る顔付きとなった。
尋常では無い量の魔力の一点集中。このことに気付いたライザーはすぐ一誠から離れるが、一メートルも無い距離で一誠の右手から魔力が放たれた。
「でかい！」
ライザーの前で生み出された魔力は圧縮から解放され、本来の大きさを取り戻そうと急速に膨張し始め、その大きさは戦いの場となっている空間の半分以上を占める大きさであった。ライザーも炎の翼から勢いよく炎上させ、少しでも早くこの魔力の塊から逃れようとするが、完全に逃れることは出来ず左膝から下が魔力に飲み込まれ消失してしまった。
『Ⅸ』
また聞こえてくる九を告げる音声。その音声の方へと目を向けたライザーが見たものは、衰えなく急加速で迫る一誠の姿。
「なめるなぁ！」
戦いの主導権を奪い返す為にライザーが吼える。加速する一誠に向けライザーも炎の翼を爆発させ、一時的な超加速を得ると一気に懐へと潜り込み、肩から突進するとそのままライザーは一誠の胴体にしがみついた。
「くそ！　男に抱き締められる趣味はねえぞ！」

「ああ、俺も無いさ。だから――」

ライザーの背中で燃え盛る翼がその大きさを倍以上のものとし、自分ごと一誠を翼で包み込む。

「すぐに放してやる」

覆い尽くされた翼の隙間から閃光が洩れたかと思えば、その内部で爆発が起きる。その爆発は一度では止まず、立て続けに二発、三発目と連続して起こった。

しかし――

『Ⅷ』

――という音声の後、ライザーの身体は後方へと吹き飛び、張られた空間の壁に背中から激突して、血塊を口から吐き出す。一方、包まれていた翼から解放された一誠は地上へと落下していき、そのまま頭から衝突するかと思えた次の瞬間、体勢を咄嗟に戻して両足から着地をした。だが、狭い空間の中で爆炎をその身に受けて無事では済まず、着地してすぐに片膝が折れかける。それを気力で持ちこたえ、真っ直ぐ立つ一誠の鎧の隙間からは、幾つもの白煙が上がっていた。

背中を空間の壁に預けるような形でライザーは呆然とした様子で口から流れる血を拭い、そして陥没している胸部へと手を当てる。本来ならすぐにでも再生出来る筈の傷が、未だにライザーへと痛みを与え続けていた。自らの不死性に自信と誇りを持つライ

ザーにとって、自分に起きた現状に理解が追い付かず、久方振りに味わい染み込んでくる苛烈な痛みに思考は空白となった。

『Ⅶ』

だが、そんなライザーを黙って見ている程一誠には甘さも余裕も無く、一気にライザーの目の前に立つとその右拳を大振りで繰り出す。一誠が目の前に現れたことでようやく正気に戻ったライザーは、反射的に一誠の右手首へと両拳を討ちつけて軌道を変えるが、その隙を狙った一誠の左拳がライザーの頬を殴り飛ばす。

二度目の激痛。口内に溜まった血を吐き出しながらライザーはこの痛みに何処か既視感を覚えていた。不死とも呼ばれる再生を阻害し、痛みを与えるこの効果。かつて一度だけ、幼少の頃に親の命により身を以って知る為に触れたことのある、とある物体。

「貴様！　聖具を持っているなッ！」

一誠が握っていた左拳を開くと、そこには銀の十字架がぶら下がる。『赤龍帝の鎧』によって高まった能力を『赤龍帝からの贈り物』によってその効果を極限にまで引き延ばした、アーシアから借りた一誠の切り札の一つ。その効果の絶大さはライザーが身を以って証明しており、空間の外に居る悪魔たちも効果の高まった十字架の反射する銀光に至る所で引き攣った声を出し、魔王であるサーゼクスでさえもその光に目を細める。

およそ悪魔同士の戦いで、まず使われる可能性が極端に低いとも言える道具。卑怯、

卑劣というよりも、使う方にとっても十字架など諸刃の刃に過ぎず、相手どころか自分すら傷つけてしまう代物である。

それ故にライザーは混乱する。自他ともに認める程の力を持つ自分にすら多大な悪影響を及ぼす十字架を握る一誠に影響を及ぼさないのか。そして、初めて気付く。一誠の左腕と鎧との差異に。

「その左腕……それが鎧の……！　この強さの代償か！」

「ああ、そうだよ！」

加速の勢いに乗せて一誠の左がライザーの側頭部に向けて振るわれる。その手に握られる十字架に細心の注意を払いながらライザーは片足を蹴り上げ、一誠の左肘部分を強打し腕を跳ね上げさせる。それでも一誠は食い下がり空いた方の右を真っ直ぐ突き出す。大気との摩擦が発生するような速度の拳を避けようともせず、お返しと言わんばかりにライザーも拳を突き出す。一誠の拳はライザーの頬にめり込み、ライザーの拳は一誠の顔面中央へと突き刺さる。

『Ⅵ』

互いの拳の威力に顔を仰け反らせ、血が宙へと舞う。一誠の方は鎧のおかげで流血はしなかったが、ライザーの方は十字架の影響からか再生する速度は鈍り、口の端から新たに血の筋が流れていた。

「……俺に言った啖呵は伊達じゃなかったようだな。――怖い奴だ」
口腔に溜まった血を吐き捨てるライザー。その中には白い歯も混じっていた。
「部長を取り戻すには安い代償だ」
はっ、と一誠の言葉をライザーは鼻で笑う。しかし、その浮かぶ笑みは妙に清々しさを感じさせるものであり、不思議と一誠は不快感を覚えなかった。
一誠は構え、ライザーも構える。
『Ⅴ』
音声を合図に両者は再び激突する。ぶつかり合う力は閃光の様に空間内を照らし、衝突し合う拳の衝撃は観覧している悪魔たちの肌を震わせるものであった。
一秒の何百分の一の間、一誠とライザーの攻防が繰り返される。振り下ろした拳を防ぎ、蹴り上げた足を叩き落とし、裂く肘を受け止め、突き上げた拳を撃ち返す。圧倒的な力の渦がたった数メートルという狭い間で吹き荒れる。
やがて、秒数がⅤからⅣへと至るとき一誠は更なる切り札を用いることを決意する。
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』
その音声と共に一誠の右腕から何かがライザーへ向けて放り投げられる。反射的にそれを目で追ってしまったライザー。それは小瓶に入った透明な液体。
それが何なのか一瞬判断が遅れたライザーであったが、事前に眷属から知らされた一

誠の能力を思い出し、同時にその液体が何なのかを悟るが一歩遅い。一誠の繰り出す左拳がその小瓶を割り、中に入った液体が飛沫となってライザーへと降り注ぐ。
液体が触れた瞬間、ライザーの身体から白煙が一気に噴き上がる。
「がぁぁぁぁぁぁぁ！　くそ！　聖水なんかで！」
ライザーの苦しむ声。本来の上級悪魔ならただの聖水を浴びた所で軽傷で済むが、『赤龍帝からの贈り物』の効果により高まった聖水の効果は、上級悪魔であるライザーの炎を弱らせ、その身を焦され激しく消耗させるほどであった。
『Ⅳ』
しかし、ライザーは聖水による浄化で爛れていく顔を手で押さえながらも、その指の隙間から見せる未だ鈍ることの無い闘志を覗かせ一誠を睨みつける。
「フェニックスと称えられた我が一族の業火！　この程度で消し去れると思うな！」
弱まった筈の炎が再び炎上し、ライザーの全身を包み込むとライザー自身が巨大な業火へと変貌する。そしてその業火は形を変え火の鳥へ化すと、燃え盛る炎で形成された嘴が一誠の身体を飲み込んだ。
「うおおおおおおおおお！」
荒れ狂う炎の中、耐える一誠であったが押さえこんでくる力を跳ね返すことが出来ない。

「あと残り時間はどれくらいだ！　ドラゴン使い！　その時間が過ぎ去った時がお前の最後だ！」

既にカウントダウンの意味を知られている。このまま時間が経過すれば一誠にとって勝ち目はない。そして更に悪い情報が内に居るドライグからもたらされる。

『鎧が解除されるぞ』

（な、まだ十秒経っていないぞ！）

『傷を受け過ぎて力を消耗したな。代価は十分だが弱まったお前の力じゃこれ以上の制御は出来ない。お前の基礎能力の不足だ』

絶望的とも言える窮地。だが、一誠は思い出す。戦いの前に渡されたある物の存在を。

一誠はシンから渡されたそれを取り出すと、それを握り潰してその身に浴びた。

◇

『Ⅲ』

残り時間が三秒であることを告げる音声。このまま一誠を咥えたまま時間を経過させようとするライザーであったが、その計算は内側から上下に引裂かれる火の鳥の嘴と

共に崩れ去る。

「おおおおおおおおおお！」

業火の中から現れる一誠の姿にライザーは驚愕する。確かに抑え込んでいたはずなのにそれを跳ね除ける膂力を持っていたことに。

姿を現したと同時に一誠の右手から赤い魔力が放出される。今度回避する余裕は無くライザーは炎の密度を高め、それを盾にして一誠の放つ魔力を受け止める。

接触と共に巻き起こる空間内全体に広がる炎と魔力の爆発。その中でライザーは一誠の魔力によって纏っていた炎を全て吹き飛ばされ、無防備な姿を晒してしまう。

『Ⅱ』

ライザーの顔面に一誠の拳が抉り込まれる。軋む音を立てて骨が歪んでいく感触を覚えながら、ライザーの身体が空中で捩じれ舞う。

聖水と十字架の影響で再生能力は働かず、脳髄を焼く様な痛みのみがライザーの中で蓄積していく。

『Ⅰ』

白く染まりつつある光景の中、ライザーはゆったりと歪んでいく周りを見ながら、頭の中はそれに相反して目まぐるしく回転し続ける。婚約のこと、リアスのこと、悪魔の未来のこと、戦いの後についてのこと、などが駆け抜けていくが、ライザーが最後に思っ

たことは、あの炎の中で一誠がどうしてあれほどの力を出すことが出来たのかということ。少なくとも捕えた時点での感触で、一誠の力では逃れることは出来ないという確信があった。それなのにどうして逃れられたのか。

しかし、最後まで考える暇は相手は与えてはくれず、一誠の十字架に握り締めた左拳が迫ってくるのをライザーは見た。消耗し切ったライザーにはそれを目で追うことしか出来ず、その拳が腹部に捩じ込まれていくのを見ると、体内から込み上げるものを感じそのまま血反吐を吐く。

炎の翼は消え、落下していくライザー。そのときライザーは、一誠の手の中から何かが零れ落ちていくのを見た。透明な液体と見覚えのある小瓶の破片。

（あれは……『フェニックスの涙』か……！）

その考えに至ったとき全てが合点した。あの炎の中で一誠は『フェニックスの涙』によって完全に回復した状態となったことで跳ね除けることが出来たということに。

ならば、いつ一誠は『フェニックスの涙』を手に入れたのか。それについてはすぐに思いつく。

（あの人間か……）

自分の渡した物で自分の首を絞めるというまさかの結果に、ライザーは皮肉を感じる。正直、笑いたくても笑えない結末であった。

「こんなことで、俺が……」
最期にありったけの悔しさを込めてそう呟き、ライザーは意識を失った。

◇

音声が０を告げると一誠の鎧は解除される。一誠は倒れ伏すライザーが完全に気絶しているのを確認してから、異形と化した自分の左腕を見つめた。
最期の一撃は木場からの教え、朱乃の教え、小猫からの教え、アーシアの教え、シンへの感謝、そしてリアスへの想いを込めて放ったもの。そう易々と立ち上がれるほど軽いものではない。
『とりあえずは勝ったか、まあ及第点と言った所だな』
言葉は厳しいが楽しげな雰囲気を含んだドライグの声が内から響く。その言葉に全力を出し切って疲労し切った顔で一誠は軽く笑った。
そのまま重くなった足を引き摺りながら一誠はリアスへと向かって歩を進める。その途中ライザーの下へ向かうレイヴェルとすれ違うが、レイヴェルは一瞬だけ一誠を睨んだ後すぐにライザーの介抱へと向かう。一誠に文句を言うことよりも兄の方が重要であることが分かる。

一誠はそのままリアスの前に立つと疲れた様子を押し隠して笑みを浮かべる。
「部長、帰りましょう」
「……イッセー」
差し伸べる一誠の手をリアスが取る。その状態で一誠は近くに居たリアスの父に歩み寄ると、リアスを連れていくことと、場を乱してしまったことに対する謝罪を口にし頭を下げる。リアスの父は沈黙を保ち、感情を見せることは無かった。
一誠は続いてサーゼクスの姿を探したが姿は見えず、次に会う機会が有れば礼を言うことを心の中で誓い、グレイフィアから貰った魔法陣が描かれた紙を取り出す。
その紙を裏返すとそこから光が発せられ、魔法陣から何らかの生物の前足が飛び出て来る。猫類の動物を彷彿とさせる体毛を生やした前足、やがて全身が魔法陣から出て来ると一誠たちの前に鷹の頭と翼に獅子の胴体を持った生物――グリフォンが現れる。
グリフォンは頭を振って自分の背中に乗る様に一誠たちに指示し、乗ったのを確認すると甲高い声で鳴き、一誠とライザーの戦いの余波で崩れた壁から外へと飛び出す。
「皆！　部室で待っているからな！」
グリフォンの背から一誠は手を振る。木場たちも手を振りそれを快く見送っていた。
その光景を離れた場所でサーゼクスとセタンタが見つめている。
「父上のあの態度、今回の婚約の話は無かったことになったかな？」

「かもしれないな」
視線を移すと、そこではリアスの親とライザーの親が何かを会話をしている。両者の表情は穏やかなもので、縁談が失敗したことへの怒りは無い様子であった。
「これで『赤い龍〈ウエルシュ・ドラゴン〉』は目覚めたといってもいいのかな。――『白い龍〈バニシング・ドラゴン〉』との邂逅も近いだろうね」
「……それだけで済めばいいがな」
「ああ、彼らも動き出す可能性も高いね。特にあの戦いを求める『魔人』ならなおさらだ」
そう言ってサーゼクスは自らの肩に手を置く。
かつて戦った一人の『魔人』を思い起こす度に、そこに刻まれた古傷が疼く故に。
一度は勝ち、一度は敗け、一度は引き分けた、『魔人』の中でも最も戦いに飢えた存在。
「――あるいはもう既に接触しているのかもしれないな」

◇

「おーい！」
外から一誠の声がしたとき、アーシアとシンたちは急いで一誠の自宅から飛び出し外へと向かう。玄関から出るとそこには一誠と、赤いドレスを着たリアスの姿があった。

「イッセーさん……！　部長さん……！」
　無事戻ってきた二人にアーシアは感極まって涙を流す。
「ただいま。アーシア」
「心配かけたわね。アーシア」
「おかえり……なさい……！」
　涙混じりの声でアーシアはそう言うと帰ってきた部長に抱き付き盛大に泣き始める。そんなアーシアをリアスは優しく抱き締め、あやすように頭を撫でた。それをピクシーとジャックフロストは茶化すことなく黙って見ており、ピクシーは暖かい笑みでそれを見つめ、ジャックフロストは貰い泣きでもしたのか目を潤ませてそれを見ている。
　シンはそれを微笑ましく見ている一誠へと歩み寄る。
「勝ったか」
「ああ、お前やみんなの手助けのおかげでな」
「……付いているぞ」
　シンが自分の口の端を指差す。それを見て一誠は慌てて指先で自分の唇を撫でる。
「何だ、本当にしてたのか」
「あっ」
　カマを掛けられたことを理解し赤面をする一誠。自分がリアスとキスをしていたこ

とをシンにばらしてしまったことへの照れであった。
「まあ、それは一旦置いとくとして、お疲れ様」
シンが左手を挙げる。それを見て一誠も手を挙げるが途中で動きが止まった。
一誠は思い出していたドライグから教えられたことを。間薙シンという人物は『魔人』という存在であることを。
『『魔人』をあまり信用するな。いずれは戦う運命だ』
『それに例外は無い』
『遅かれ早かれ、お前はあの間薙という小僧と戦う。それもただの戦いじゃない『殺し合い』だ。覚えておけ』
ドライグの忠告を無視するつもりは無い。だが、それでも一誠は想う。間薙シンとは自分は間違いなく仲間であるという事実を。
一誠は止めた左手を動かし、シンの左手に打ちつけ、小気味よい音を鳴らす。
今この瞬間だけは、仲間と勝利を分かち合いたかった。

◇

某時刻某所。

　周囲は生い茂る木々に覆われた場所。明かりになるものは近くには無く、空に浮かび上がっている筈の月も、今宵は新月の為にその姿を隠していた。
　そんな光の無い暗闇の中、一人の青年の銀髪だけが、まるで闇の中から浮き上がっているかの様にその存在を示していた。
『ようやく目覚めたようだな』
「ああ、だが俺が求める力には至っていない」
　夜の静けさの中に木霊する二つの声。一つは青年のものであることが分かるが、もう一つの声の主の姿は見えない。
「もっと強く、もっと高みに昇ってくれなければつまらない。そうだろ？　アルビオン」
『どう戦うかはヴァーリ、お前に全て任せる』
　『赤い龍〈ウェルシュ・ドラゴン〉』ドライグと対をなす存在『白い龍〈バニシング・ドラゴン〉』アルビオン。そしてその存在を封じた『神滅器』を要する現白龍皇・ヴァーリは、この先の戦いに思いを馳せ、愉快そうに笑う。
　そんな中、背後の茂みが激しく音を鳴らし、中から何かが現れた。しかし、ヴァーリは特に警戒することも無く、一瞥しただけですぐに視線を元に戻す。
「なんだ、ジャックフロストか」
「違うホー！　何度も間違うんじゃないホー！　オレ様はジャ『ア』クフロストだヒー

ホー！　あんなよわっちいジャックフロストと一緒にするなホー！」
　怒りを露わにするそれは紫の二又に分かれた帽子を被り、全身を真っ黒に染め上げた雪だるまであった。その黒い体は闇に溶け込んでおり、一般人が見たのならば赤い目と口が浮かんでいるかの様に見える。
「それで、何の用だ？」
「ふん！　アザゼルがお前を呼んでいるから態々オレ様が来てやったんだホー！　感謝するホー！　そして感謝の印にオレ様と戦うんだホー！」
　言い終えたジャアクフロストは挑発するように両手を持ち上げて、ヴァーリに向けて拳を振るって見せる。
「分かったよ。だが、少し遅れるとだけ伝えてくれ。こんなに静かな夜だ。あいつらもおちおちと眠ってはいない。　なあ、そうだろ！」
「その通り」
「ヒホッ！」
　闇に向けて声を放つと闇の中から声が返ってきた。
「太陽の激しい光も月の静かな光も私には少々眩しすぎる。故に今夜は戦うには良き日だ。貴公もそう思うだろう？」
　闇の中で最初に現れたのは白い骸骨。そしてそこから更に金糸刺繍を施された翠玉

色の闘牛服と同じ装飾がされた闘牛帽子が見える。白骨の手には闇を裂くかのような銀色の剣が握られ、反対の手には鮮血の様な赤のカポーテを持つ。
「ちょうど倒すべき相手が目覚めて昂っていたときだ。お前が来てくれて助かったよ。お前ならそう易々とは壊れない。この衝動を抑えられるのはお前だけだ『マタドール』」
「考えることは貴公も同じか、私もこの戦いへの飢え、貴公で満たす為に来た」
　現在確認されている『魔人』の中で最も好戦的且つ活発的に行動しあらゆる勢力から恐れと恨みをかい、見た目の衣装から名付けられた存在『魔人マタドール』
　ヴァーリとマタドールは互いに殺意と戦意を衝突させながら一歩一歩と近付き、両者の間合いが零になるまで近づく。
「さあ――」
「――愉しむとしよう」
　たった一人の観客を前にして、白い龍と殺戮の魔人の戦いが今この場で始まろうとする。

幕間　妖精、探検

シンはいつもの様に授業を終え、そのまま部室へと足を運んでいた。いつもならば一誠、アーシアらと合流し一緒に部室へと向かうのが当たり前の様になっていたが、今回シンは授業後に係としての仕事があった為に、一誠たちには先に行くよう指示していた。

「遅くなりました……」

約一時間程遅れて部室へ着いたシンが扉を開くと、いつもならば全員揃っているオカルト研究部の教室に誰も居ない。急遽中止になったのかと思い、携帯電話を開いて連絡があったかどうか確かめてみるが連絡はない。

どうしたものか、と考えるシンの目にテーブルに置かれた一枚の紙。手に取って見るとそれはリアスからの置き手紙であった。

『今日は、イッセーとアーシアを連れて彼らの使い魔をゲットしてくるわ。もしかしたら遅くなるかもしれないから、今日の部活動も悪魔の仕事も中止にする予定よ。

シン、貴方も今日はゆっくり休みなさい』

置き手紙の内容を見た後にシンはソファーへと腰を下ろす。確かに悪魔として使い

魔を持つことは基本中の基本であり、主の目や耳の変わりになるなど臨機応変な扱いが出来る存在である。たまに部員に代わって人に変化しチラシ配りまで出来る程の万能さである。

リアスの使い魔は以前見せて貰った蝙蝠、朱乃は手の平に乗れるほど小さな鬼、木場は小鳥、小猫は子猫とそれぞれ所有している。

シンも傍から見れば使い魔とも呼べる仲魔のピクシーとジャックフロストがいるが、使い魔とは違って平然と我儘を言ったり、こちらの言うことに文句を言ったりなど、忠誠心という言葉が空しくなるほどに自由であった。

現に今も、約束した時刻が過ぎるまでに部室へと集合するようにと授業が始まる前に言っておいたが、その約束の時間は既に過ぎ去りピクシーとジャックフロストは未だに学園内のどこかで遊んでいる。絶対に学園の外には出るなと念を押しておいた為、少なくとも学園の外で遊び呆けている筈は無いと思えるが、ピクシーはジャックフロストが仲魔になって以降、遊び相手が増えたこともあり、度々時間を無視することがあった。

一般人には見えない二人ではあるが、この学園にはオカルト研究部以外にも悪魔は存在することをシンは確認している。リアスの方からそちらの悪魔たちには事前にピクシーたちの存在を知らせていることもあり大丈夫だとは思っているが、シンが一番懸念していることはピクシーとジャックフロストが被害にあうことではなく、ピクシーと

ジャックフロストが被害を出すということの方が心配であった。
シンは深々とソファーに座り直すと背中を背もたれに預け、一気に脱力する。そのまま軽く目を閉じるシンであったがその途端強烈な睡魔が襲い掛かってきた。だが、シンは特にそれに抗うことはせず、久しぶりに独りになったせいかその眠気に身を任せて仮眠へと入っていくのであった。
そしてシンは奇妙な夢を見る。

◇

部室内でシンは未だに二人が遊んでいると思っていたが、実際の所シンがオカルト研究部の教室に入る数分前までピクシーとジャックフロストは教室内でシンを待っていた。
リアスたちから一緒に使い魔探しに同行するかを尋ねられたが、シンを待つと言って断り二人で教室内でシンが来るのを待っていた。
しかし、元々二人が持つ飽き性と堪え性の無さが時間の経過と共にその表情を見せ始め、ある一定の時間を過ぎたときそれが爆発する。
「ひーまー!」

「退屈だホ！」
　待つことに飽きた二人はそのまま教室の外へと出ていき、そして現在面白いものがないかと旧校舎内を探索している。
「なにかあったー？」
「なにもないホー」
　パタパタとピクシーが先に飛び、その後ろをキョロキョロと周りを見ながらジャックフロストがついていく。
　普段は新校舎で探検紛いのことをして時間を潰している二人であったが、この旧校舎は新校舎と比べてあまり探索などを行っておらず、それが二人の好奇心を刺激し旧校舎の奥へ奥へと足を進ませていく。
　だが、中々興味を引くものが見つからず別の階へと移動する二人。そこでも面白いものは見つからず、仕方なく二人は一階まで降りていく。
「なにかあったー？」
「なにもない――ヒホ？」
　ジャックフロストの足がある場所で止まる。
「どうしたの？」
　ピクシーが振り向くと、足を止めたジャックフロストはある一点を見つめて動こうと

しない。その目を向けている先にピクシーも目を向けると、そこには不可思議な扉があった。
「うーん、なにこれ？」
「ヒーホー、なんだろうホ？」
扉には『ＫＥＥＰ　ＯＵＴ』と書かれた黄色いテープが至る所に張り巡らせ、扉自体にも不可思議な文字が刻み込まれており、いかにも立ち入ることを禁止していることがよく分かる。
「ためしに入ってみよ！」
「ちょっと怖いけど、ドキドキするホー！」
しかし、目の前の扉の厳重な警戒にも目もくれず、持ち前の好奇心を十二分に発揮する二人は躊躇う事無く扉のノブに手を掛け思いっきり引っ張る。
「あれ？」
「開かないホ」
だが、扉はびくともせずノブも固く回る気配を見せない。何度かガチャガチャとノブを引っ張ってみるが結果は初めと変わらなかった。
「誰かいないのー？」
「開けてホー！」

扉を自力で開くのを諦めた二人は、ならば内側から開けて貰おうと中に誰か居ないかを確認する為、扉をノックし始めた。

ダンダンとノックしてみるが返事は無い。もう一度ノックをしてみるがやはり返事は無い。これで反応が無ければ諦めようと三度目のノックをしようとしたとき――

『ヒィィィ

「ねえねえ、いるんでしょ？　ここ開けてちょうだい」
「ヒーホー、オイラたちと遊ばないかホ」
　外から呼びかけてみるが、相手の反応はあまり良くない。
『ほらほら～、君のこと呼んでるよ～、勇気を出して外に出てみたら～』
『嫌ですぅぅぅ！　お外怖い！　僕から外に出るなんて無理ですぅぅぅぅ！　ここがいいんですぅぅぅぅ！』
　間延びした声の方が外出を促すが、甲高い声の方はそれを強く拒絶し断固として受け入れない。その後も何度か同じ話を繰り返していたが、やがて甲高い声の方が耐え切れなくなったのか嫌だぁぁぁぁぁぁぁ！　という絶叫の後にがさごそと何かを漁る様な音を出して沈黙してしまった。
『また、そんなところに引きこもる～。君は本当に臆病な奴だな～』
　若干の呆れを含んだ声でそう言った後、間延びした声の方が扉まで近づいてくる。
『という訳だからここには誰も居ないよ～』
「居るじゃん！」
「居るホー！」
『居るけどいないよ～、だから見なかったことにしてこのまま大人しく帰ってくれると助かるヒ～ホ～』

「ヒホ！　オイラの喋り方真似しちゃダメホー！」
『なんかこの喋り方面白いから真似しちゃうホ～』
　扉の前でのジャックフロストの抗議を無視して、ジャックフロストの口癖を真似する間延びした声、声を震わせながら何度もヒ～ホ～と連呼するのであった。
「何かこれ以上は無駄そうだね。別のとこ行こう？」
「ヒーホー！　オイラの話はまだ終わってないホー！」
『ヒ～ホ～、ヒ～ホ～』
「はいはい、また今度決着つけてねー」
「あっ！　引っ張っちゃダメホー！」
　ピクシーはジャックフロストの帽子の先を掴み力尽くで扉から離していく。二人が完全に扉から離れたのを感じたのか、扉の向こう側で再び会話が始まる。
『ほら～、もう二人はいっちゃったよ～。そろそろ出てきたらヒ～ホ～』
『ほ、ほんとに、ほんとに行っちゃった？　僕のこと騙していない？』
『君も疑り深いな～、あんまりしつこいようだとその引きこもっている段ボール箱ごと燃やしちゃうホ～』
『ヒィィィイイイイ！　熱いの嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』

◇

「うーん、暇だねー」
「ヒホー」
退屈そうにピクシーが呟き、引っ張られて伸びた帽子を直しながらジャックフロストは同意をする。
結局あの後、旧校舎では興味を引くものは見つからずそのまま新校舎へと足を運んだ二人。このときの二人の頭の中ではシンとの待ち合わせのことなど綺麗さっぱりと忘れていた。
大分遊び慣れた新校舎でピクシーは物珍しいものはないかと目を光らせているが、ジャックフロストの方はあまり探すことに集中できてはおらず、しきりに帽子を直すことに気を取られていた。
「ねえねえ、いつまでも帽子いじってないでキミも何か見つけてよ」
「ダメホ！　いまいち帽子の位置が決まらないんだホ」
後ろを振り向いた状態で飛ぶピクシーがやる気を感じさせないジャックフロストの態度を批難するが、ジャックフロストは態度を改めない。ジャックフロストにとって帽子の位置にはそれなりのこだわりがあるらしい。

「あのね――きゃん！」
「ヒボッ！」
　更なる文句を言おうとしたピクシーであったが、後ろを向いていた為に背後の障害物に気付かずに衝突、その反動で前へと飛ばされジャックフロストの額に頭突きを喰らわす形となった。
「何だ？」
　障害物と思われたものは生徒の足であり、何かに接触したことで足下を確認する。
「いたーい！」
「ヒホー！」
　頭を押さえて痛がる二人。一般人には声も姿も見えない為、その場で痛みが治まるまで動かずにいようとしていたピクシーとジャックフロストであったが、ここで予想外のことが起こる。
「お前ら、誰の使い魔だ？」
「えっ？」
「ホ？」
　見えない筈の二人を認識しているとしか思えない声の掛け方。痛みを忘れてそちらの方へと目を向けると、そこに立って見下ろしている目付きのやや悪い髪を染めた男子

生徒。
二人は目配せをすると同時に振り返り一目散に逃げようとするが、最初の一歩目を踏み出したとき二人は猫の様に首根っこを掴まれ、その状態で宙吊りにされる。
男子生徒はその状態の二人を自分の方へと向かせた。
「何逃げようとしてんだ」
やや剣呑な目付きで尋ねてくる男子生徒。
「うーん、つい？」
「ヒ、ヒホー」
笑って誤魔化そうとするピクシーと男子生徒の目付きにやや怯え震えた声で同意するジャックフロスト。その返事を聞いて男子生徒の目付きはますます悪くなる。
「ああん、ついで――って冷てぇ！」
その男子生徒の態度にジャックフロストの緊張が一定のラインまで高まった為、ジャックフロストの身体から冷気が漏れ始め男子生徒の持つ手を冷凍し始める。
「その子、脅かしたり怖がらせたりすると冷たくなるよ。というかアタシも寒い！」
近くにいるピクシーもジャックフロストの冷気の影響を受け、自分の身体を抱きしめて震えはじめる。
「落ち着け！　別にとって食ったりもしねえし殴ったりもしねえよ！　てか早く冷気を

止めてくれ！　凍傷になる！」
　徐々に肌の色が変色してきた片手を見て男子生徒は必死の様子でジャックフロストを宥める。その様子がジャックフロストに届いたのかジャックフロストの冷気がやや弱まる。
「……離してくれるのかホ？」
「逃げずにこっちの話を聞いてくれるんだったらな」
「じゃあ、聞く」
　男子生徒はピクシーとジャックフロストを床へと降ろす。そして、ジャックフロストを掴んでいたせいで悴む手を息で暖める。この間、ピクシーとジャックフロストは約束を守りその場から動く気配を見せない。
　手の温度が戻ったのか男子生徒は何度か片手を開閉した後、改めてピクシーとジャックフロストに質問をする。
「それで？　最初に聞いたがお前たちは誰の使い魔なんだ？　使い魔なら主をほったらかしにしておいていいのか？」
「アタシたちは使い魔じゃないよ、『仲魔』だよ」
「は？　『仲魔』？」
　初めて聞く単語に男子生徒は怪訝そうな表情となる。

「そうだホ、オイラたちはシンの『仲魔』だヒーホー！」
「シン？　苗字は？」
「えーと、たしかマナギだったっけ？」
「間薙シン？　あー、あいつか。――ということは会長の言ってた奴らはお前らのことか」
　ピクシーたちの話を聞いて一人納得をする男子生徒。口振りからするに事前にどこかでシンやピクシーたちの情報を聞かされていたことが窺える。
「あのな、いくら学園内で自由にしていいって言われてもなあんまりウロチョロするなよ？　今回、事情を知ってる俺だったからいいがお前達って一応レアな妖精なんだからな」
「えー、ここ色々あって暇つぶしになるし」
「オイラも王様になる為の勉強をしてるんだホー！」
　言い聞かせようとする男子生徒にピクシーとジャックフロストは露骨に不満を示す。その幼さを感じさせる態度にこれ以上強く言っても無駄だと悟り、男子生徒は溜息を一つ吐くと話題を変えた。
「……まあいいや、説教なんて俺の柄じゃないしな。とりあえずお前らは今からリアス先輩の所に連れていくからな？」

「リアスなら今居ないよ」
「他のみんなも居ないホ」
「マジかよ。間薙も居ないのか？」
「シンは何か用事があるって言ってたらしいから、居るか居ないか分かんないよ」
　ピクシーの言葉を聞いて男子生徒は少しの間眉間に皺を寄せて何かを考えていたが、結論に至ったのか二人の前にしゃがみ目線を合わせる状態となる。
「とりあえずお前らを生徒会室を連れて行く。会長ならリアス先輩とも連絡を取れるだろうしな」
「生徒会室？　うん、行く。アタシまだそこには行ってないから」
「ヒーホー！　オイラも楽しみだホ！」
　あっさりと了承する二人に男子生徒は呆れた眼差しで二人を見る。
「あのな、いくら学園内で俺が眷属悪魔だからってお前らに危害を加えないとは限らないんだぞ？　それなのに簡単に付いてっていいのか？」
　二人の不用心さを窘める男子生徒。しかし二人は――
「うん？　だってキミって別に悪い奴には見えないし、本当に悪い奴だったらアタシすぐにわかるし――って言うかキミって悪魔だったんだね」
「イッセーたち以外の眷属悪魔に会うのは初めてだホ！」

男子生徒を善人である評するピクシーと無垢な瞳で見つめてくるジャックフロストに、男子生徒は照れたのか目線を逸らしてしまう。
「ま、まあいい。今から生徒会室に行くから離れずに付いてこいよ」
「うん」
「ヒホ！　あ、そうだホ」
何かに気付くジャックフロスト。
「どうした？」
「オイラの名前はジャックフロストだホ！　よろしくヒーホー！」
自らの名前を名乗るジャックフロスト。ピクシーと男子生徒もそこで互いに自己紹介をしていないことを思い出す。
「そういえば言ってなかった。アタシはピクシー、よろしくね」
「確かに自己紹介ぐらいはしておかないとな。俺の名前は匙元士郎（さじげんしろう）、シトリー眷属の『兵士』だ」
匙の自己紹介を聞いてピクシーとジャックフロストは納得したかの様に頷く。
「ああ、何となくだったけど『兵士』って聞くとますますイッセーと似た雰囲気がするね」
「少しだけイッセーに似ているかもホ」
「ああっ！　イッセーってあの変態三人組の一人で最近眷属になった奴か？　どこが似

てるっていうんだよ！」

一般的な評判のよろしくない一誠に似ていると言われ不満を露わにする匙に、ピクシーとジャックフロストはビシッと指差しタイミングを計ることなく同時に思っていることを口にする。

『スケベそうなところ！』

「おい！」

◇

「失礼します」

挨拶と共に生徒会室に入る匙。生徒会室の内部はリアスたちのオカルト研究部の部室と似通った内装が施されており、オカルト研究部と違いやや質素な印象を受ける。その生徒会室の奥では二人の女子生徒が書類を見ながら、何やら打ち合わせをしていた。一人は生徒会長と役職が刻まれているプレートが置かれた机に座る、ショートカットの黒髪で眼鏡を掛けた女子生徒。その容姿は全てが完璧と言っても過言では無い程の整った造形をし、鋭く近寄り難い気配を纏うものの同時に知的な雰囲気も醸し出し、それらがその女子生徒の魅力を更に高めていた。

もう一人は生徒会長の側で書類について説明をしており、生徒会長席に座る女子生徒と同じく黒髪に眼鏡をしているが髪型は対称的に長髪である。容姿はショートカットの女子生徒と比べるとやや曇りがちにはなるが、それでも紛れも無く美人と言える顔の造りをしていた。

「サジ、遅かったですね」

話が一段落したショートカットの女子生徒は、鋭い視線と声を匙へと向ける。声自体に怒りなどは含まれていないものの、その言葉自体に刃の様な鋭さが秘められていた。

「す、すみません！　会長！　ちょっとこいつらを連れて来るのに手間取って」

「こいつら？」

「まあ」

そこで匙の背後から顔を覗かせるピクシーとジャックフロスト。珍しい来訪者に生徒会室にいる二人は少しだけ驚いた表情となる。

「サジ、私の記憶が確かならば、その子たちはリアスの協力者である男子生徒の使い魔だった筈ですが、何故ここに連れて来たのですか？」

「えー、あの順番に説明しますと――」

匙がピクシーたちをここに連れて来た経緯を軽く説明をする。会長と呼ばれた女子生徒は聞き終えると軽く頷く。

「――という感じで連れて来た訳なんですが……」
「よく分かりました。それならば暫くの間二人をここで預かることにしましょう。リアスの方へは私が連絡を入れておきます」
「ありがとうございます」
　快諾をしてくれたことに匙が頭を深々と下げて礼を言う。
「貴方達もしばらくここで大人しくしてくれるかしら？」
「うん。ここは初めて来るしアタシはいいよ」
「ヒーホー！　確かカイチョーって学校で一番偉い人だった筈ホ！　カイチョーは学校の王様なんだホ？」
　きらきらとした瞳で会長席に座る女子生徒に熱い視線を送るジャックフロスト。その視線を受けて会長席にいる二人は軽く微笑む。
「――残念だけど会長と王様は違うわ。私はこの駒王学園の平和の維持を務める生徒会長の支取蒼那（しとりそうな）、悪魔としての名はソーナ・シトリーよ。好きな方で呼んでくれて結構よ。そして、こっちは生徒会副会長の真羅椿姫（しんらつばき）」
「初めまして」
　紹介された椿姫が軽く頭を垂らす。
「リアスから貴方たちのことは聞いているわ。ピクシーとジャックフロスト――そして

同時に貴方達にも言っておきたいことがあるわ」
ソーナから微笑みが消える。
「最近生徒会宛てにある苦情が入っているわ。何でも置いてある物が急に動きだしたり、宙に舞ったり、この季節ではありえない程に冷たくなっていたり……申し出をした生徒たちは怪奇現象だの幽霊の仕業だのポルターガイストなどと言って不安になっているわ」
冷たく厳しい目つきとなるソーナにピクシーとジャックフロストは視線を合わせようとはせず、その目はしきりに泳いでいる。
「貴方たちの仕業ね」
追い詰めるソーナの言葉。
「え、えーと、そのね。あのー」
「ヒホ、ヒ、ヒホー」
しどろもどろな言葉と態度が全てを物語っていた。
「はっきりと言いなさい。やったのか、やっていないのか」
声の大きさこそ普通であるものの、それを放つ人物の迫力に二人はすっかりと呑みこまれてしまい、そして――
「ご、ごめんなさい……」

「ごめんなさいホー」

自らの罪を認めソーナへと謝罪をした。

「貴方がたの出自を知れば、この学園はとても興味深く映るのかもしれないわ。でも、だからと言って自分たちが楽しむために他人に迷惑をかけることは許容できるものではないわ。少なくとも私が許さない」

ソーナのお叱りの言葉にすっかりとしょげてしまいいつもの明るさに影が差す二人。

「――ですがきちんと自分たちのやったことを認め、謝ったことは素直に感心します。これ以上強く言うつもりはないわ」

ソーナの言葉から厳格な気配が薄まり、子を諭す親のような暖かみを感じさせるような言葉へと変わる。

「あまりはしゃいだら駄目よ二人とも」

「はーい」

「ヒホ」

頷く二人にソーナは微笑みかける。そんな二人に匙は身を低くし二人にしか聞こえない声量でぼそぼそと話しかけた。

「お前らこの程度で済んで良かったな。普段の会長なら今の三倍の迫力で叱られてたぞ。何せ会長は厳しい上に更に厳しいからな……」

何か思い出したくも無い記憶を呼び起こしたのかやや表情を蒼褪めさせる。
「サジ、何かありましたか？」
「い、いえ何も」
血色が悪くなった匙を気遣ってのソーナの言葉であったが、当の匙は低い姿勢から跳び上がようにして俊敏に立ち上がり、そのまま背筋をまっすぐにして直立不動の体勢のまま愛想笑いで誤魔化す。
「そう？　まあいいでしょう。私たちの仕事も一区切りついたから少し休憩をしましょう。貴方達もそこにずっと立っていないで、そこのソファーでくつろいでいてくれるかしら」
「はーい！」
「ヒーホー！」
ソーナに言われた通り二人はソファーへと移動するとそこに座る。それを見たソーナは次の指示を椿姫へとした。
「椿姫、彼女たちにお茶を入れてくれるかしら？」
「分かりました、会長。ついでに何かお茶請けを持ってきます」
「その必要は無いわ」
「えっ？」

ソーナが側に置いてある学生鞄を開き、中から青色の包装紙で包まれ白いリボンで口の部分を縛った包みを取り出す。
「私が家で作ってきたから」
心なしか誇らしげな様子のソーナ。
「中身はなに？」
「クッキーよ。二人ともお菓子は好き？」
「わーい！　好き！」
「ヒホ！　大好きホ！」
心の底から喜ぶ二人に嬉しそうに微笑むソーナであったが、その暖かな空気とは反対に椿姫と匙は動きが固まり、表情を蒼褪めさせ額から汗を流し無言で目配せをし始める。
「どうしたの椿姫？　さっきから黙って立っていて」
「い、いえ何もあ、ありません。……お茶を……淹れてきます……」
両足に鉄球の枷でもはめられたのかの様な重い足取りで動き始める椿姫。匙の方もどうしたらいいのか迷っている顔付きとなっておりソーナとピクシーたちを交互に見ていた。
「あ！　も、もしかしたらもうオカルト研究部に誰か来てるかもしれないな！　よし！

行って確かめてみよう！　二人も来るよな！」
必死な形相で二人をオカルト研究部の部室に連れて行こうとする匙であったが、二人からの答えは拒否であった。
「いーや！　アタシはここでお菓子を食べてくの！」
「オイラも食べてから行くヒーホー！」
「サジ、そんなに焦る必要は無いわ。貴方も座って食べていきなさい。貴方の分もあるから」
匙は言葉を詰まらせる。が、何故か覚悟を決めた顔付きとなり無言でソファーへと座る。その表情は死地に向かう兵士を彷彿とさせる勇気と諦めが混在したものであった。
間もなくして椿姫が紅茶のティーポットを持ってきた。そして小刻みに震える手付きで、ソーサーをソファー前にあるテーブルに置いていく。置く度にカタカタとテーブルとソーサーが接触し、椿姫の心情を現しているかのような不協和音を奏でていた。
ソーナが椿姫の持ってきた大皿の上に持参したクッキーを並べていく。狐色に焼け、甘いバニラエッセンスの香りが生徒会室内に広がっていく。
「さあ、どうぞ」
「いただきまーす！」
「いただきますホー！」

ピクシーとジャックフロストが同時に大皿の上に置かれたクッキーを手に取る。それを見た匙と椿姫は諦観したような表情を浮かべ、ソーナはそんな二人の表情には気付かず食べようとする二人を暖かく見守っている。

クッキーが二人の口に入るか入らないかの刹那の瞬間、ピクシーの視界の端に時計が映り込む。それはほんの気紛れであったが、時計を見たときピクシーはほんの少しだけ心の片隅にある想いが浮かぶ。

（あ、こんな時間だ。シンは……ま、いっか！）

◇

実に変な夢であるとシンは想った。

随分と低い視点から校舎の中を歩き回っていると思っていたら突如視点が変わり、今度は見下ろす様な視点で校舎の中をさまよい続ける。

視点が変わる度にジャックフロストの姿が映ったり、ピクシーの姿が映る。二人の視点から周囲を見るというやけにリアリティのある夢であった。

その夢の中で何やら怪しげな旧校舎の扉の前で声だけの人物と揉めたり、新校舎で顔や名前程度は知っている人物に連れられて入ったことの無い生徒会室に入ったり、そこ

で生徒会長からお叱りの言葉を受けたりと、寝ている筈なのに異様に疲労感を覚える内容が続いていた。

そして、生徒会室でソーナから菓子を振る舞われ、それを食そうとしたときピクシーの視点から今の時刻が分かる。

とっくに集まる時間は過ぎている。ただ忘れているだけならばまだ許容できる範囲内であった。しかし、内なるピクシーの声がシンの脳裏に木霊する。

（あ、こんな時間だ。シンは……ま、いっか！）

分かっていていての菓子優先。思わずシンは夢の中で声を出していた。

（分かっているなら早く来い）

その瞬間、腹部に軽い衝撃が走りそれによりシンは目を覚ます。開いた目で自分の腹部を見るとそこには手に何かを持ったジェスチャーをしながらポカンとした表情をするピクシーとジャックフロストが座っていた。

「あれ……あれ？」

「ヒホ？」

事態が呑みこめずキョロキョロと周りを見ている二人に、寝起きのシンは気だるげに話しかける。

「人の腹の上で何をやっているんだ？」

◇

「うおっ！」
クッキーを食べようとした瞬間に突如として消えた二人に匙は驚きの声を出す。二人が消えたせいでクッキーはテーブルの上に落ち、僅かに欠ける。
「あいつらどこに――」
「落ち着きなさい、サジ。おそらく彼らは召喚をされたのよ。少しだけ魔力の残滓を感じるわ」
その説明を聞きホっとする匙であったが、それとは逆にソーナの表情は暗い。
「せめて、もう少し遅かったらね」
欠けたクッキーを大皿に戻しながらソーナは寂しげに呟く。だが、匙と椿姫はその寂しげな表情のソーナに申し訳ないと思いつつ、内心ではこの結果になって良かったと思っていた。
何故ならピクシーとジャックフロストが食べようとしたソーナ手製のクッキー。その味はおそらく筆舌に尽くし難い程の不味さを秘めているからである。
あらゆる分野で非凡な才能を見せるソーナ・シトリー。その彼女が唯一持つ趣味で有

り、唯一才能が欠落しているのがお菓子作りであった。
どういう手順で作ったかは誰も知らないが、彼女が作り出す菓子はとにかく不味い。
「最初に全身の汗腺が開き、続いて胃に穴が開きそうになり、最後に瞳孔が開きそうになる」
ある生徒会役員の食べた後の感想。
「一定量食べたら確実に寿命が縮む」
別の生徒会役員の食べた後の感想。
などなどの意見が出る程の壊滅的な腕を持つソーナであったが本人にはそう言った自覚は無い。原因は二つあり、一つは彼女の身内、もう一つは生徒会役員全員がソーナに対し尊敬と敬意の念を持っている為、不味いと言ってソーナを傷付けることを避けているためであった。
そんな周りの事情を知らないソーナは匙へと大皿を差し出す。
「どうぞ、サジ」
一瞬、匙の顔色は死人に酷似した色へと変わったがすぐにそれを消し去り、実に爽やかな笑顔を浮かべこう告げる。
「いただきます、会長。それを全部」
全ての苦しみを受け入れる覚悟の意志を見せる匙。

このときの彼はまるで武士（もののふ）のようであったと後に椿姫は他の生徒会役員に語るのであった。

月光校庭のエクスカリバー編

聖剣、復讐

男が一人、光と人気の無い道を全力で走っていた。

息する暇すらも惜しむ程の必死の走りを続ける男の両足は既に限界に近い状態となっており、徐々にだがその速度は緩まっていく。しかし、男はそんな疲労困憊の状況でも首から下げた十字架を握り続け、ひたすら神への救いの言葉を呟き続けていた。

「主よ……！　我らが父よ……守りたまえ！　我が身をあの悪魔の手から……！」

もうどれほどの距離を走ったのかすら男は覚えてはいない。それでも男は背後から迫ってくる何かの気配に怯え、後ろを振り向かずにただ前を見て走り続ける。

やがて走る男の前方に木々が生い茂る雑木林が広がるのを見つけ、男はそれを好機と捉えた。雑木林の中に飛び込むとひたすら奥へと進み、男はそこで隠れやすい茂みを見つけるとその中に身を潜め、ただひたすら心の裡で神に祈りを捧げる。

幸いこの夜は月の光も雲によって遮られ、その他に照明となる物は周囲に一切無い。当然、雑木林の中は黒の絵の具で塗り潰したかの様に暗闇に覆われていた。

がたがたと震えながら祈りを捧げる男の耳に、草の踏み潰す音が聞こえてくる。間隔

を置いて聞こえる草同士が擦れ合う音は紛れも無い追跡者の足音であり、その音が聞こえる度に男の心臓の鼓動が早まる。
時間が過ぎていく度に足音は大きくなり、確実に自分の方へと近付いて来ることを理解し男は自分の服の袖を強く噛んだ。こうでもしなければ、追い詰められていく恐怖から絶叫を上げてしまいしまいそうになる為である。
足音が男の潜む茂みのすぐ近くで止まる。
男の心臓の鼓動は限界にまで達し、雑木林の中で喚く虫たちの羽音よりもうるさく聞こえてくる。
足音はその場から左右に動いて周囲を探っている様子であったが、この場に男が居ないと判断したのかすぐに足音が遠ざかっていく。
男は止めていた呼吸を戻し、足音の主に聞こえない様に深く、ゆっくりと息を吸い込む。
足音はもう既に聞こえないものの男は慎重に慎重を重ね、朝日が昇るまでこの場から動かないことに決め、時が過ぎていくのをひたすら待つ。
長時間動かないことと緊張が解けたことによる眠気に耐える男。その程度の苦痛は追いかけられていたときに比べれば遥かに楽なものであった。
やがて空が薄明るくなってきたとき、男は安堵の溜息を吐いて茂みの中から動き始め

る。長時間同じ体勢をしていたことで、動く度に軋む音が体の内側から響いてくるが、今の男の心境ではそれですら心地よかった。

男は十字架を両手で握り締め、何度もしてきたように神に祈りの言葉を捧げる。

「主よ、救っていただいたことを感謝します」

「――と思うだろ？」

背後からの声。振り向こうとした男の頭に背後の存在が手を乗せる。ただ軽く乗せただけにしか見えない筈だが、男の首はその乗せられた手によって微動だにしなくなり、背後の存在を視界に入れることすら叶わなかった。

成人男性の頭が容易く収まる手を乗せられただけで悟った。この手には、一秒もかからずに自分の頭など容易に捩じ切る力が秘められていることを。

「そう怯えるなよ。一晩中追いかけっこをした仲じゃねえか」

口調は軽く、友人にでも話し掛けるような気さくなものであったが、男にはそんな言葉などで心を落ち着ける訳も無く、震える声で喉を恐怖で痙攣させながら一つ一つ言葉を紡いでいく。

「何が……狙いなんだ……！　私を殺しても……お前が得る物など……何も無い筈だ……」

「私を殺しても、か……へへへ」

賢明な様子の男を背後の存在は笑う。それは話した内容を笑っているのか男の無様とも言える様子を笑っているのか、歯の根が合わない程怯える男には理解できなかった。

「安心しろよ、苦痛なんてねえぜ。すぐに楽になるからなあ……」

「やめろ！　やめろぉぉぉぉ！　主よ！　主よ！　この悪魔から私を守りたまえぇぇぇぇぇぇ！」

神への救いの言葉を絶叫するが、その甲斐も空しく男の体は背後の存在に引きずられ、男がさっきまで潜んでいた茂みの中に連れ込まれる。僅かの間、茂みは激しく揺れ動いていたがやがてそれも納まり、雑木林の中に静寂が訪れる。

すると再び茂みが音を鳴らすと、その中から引きずり込まれた男が姿を現す。だが、その男の態度は引きずり込まれる前と後では別人であった。

怯えて青褪めていた表情は、ふてぶてしさを感じさせ、口角を吊り上げて笑う顔は粗野な印象を受ける。そしてなにより如何なる時も肌身離さず持っていた十字架を、指先に鎖部分を引っ掛けて回すという雑な扱いをしていた。

男は軽く首と肩を回しその場で二、三度足踏みをして、体の状態を確かめる動きをする。

「借りてくぜ、色々とな」

男は十字架を回すのを止め、その十字架を自分の首に架け纏っている神父服の上にぶら下げる。
「さて、一仕事といくか」

◇

「それでこれがイッセーが小学校に入学したときの写真。このときから同級生の女の子のスカートをめくったりして大変だったわぁ」
「ちょ、母さん！　そんなこと言わなくてもいいから！」
「あらあら、小さい時からイッセーくんは女の子に興味深々だったんですね」
「……三つ子の魂百まで」
「幼いわねイッセー」
「イッセーさんの小さい頃可愛いです！」
嬉々とした様子でオカルト研究部の女子たちに一誠の幼い頃のアルバムを見せ、一つ一つ思い出のエピソードを語っていく一誠の母。その横では一誠が写真を見せられる度、思い出を語られる度に顔を真っ赤にし羞恥心から身悶えしていた。
和気藹々とする女子一同の中にはさり気無く木場とピクシーも混じっており、木場が

一誠のアルバムを微笑ましく見ているのに対して、ピクシーの方はアルバムをめくる度に出て来る写真を見てはケラケラと笑う。それを見て木場からアルバムを奪おうとし、ついでにピクシーの頭にはたきの一つでも入れようと一誠が動くが、木場とピクシーに軽々と避けられ、おまけにピクシーから舌を出されて馬鹿にされていた。

そんな光景を横目に見ながらシンは何故か一誠の父親と向かい合っては世間話をしており、時折一誠の学園の様子を聞かれていたりしていた。

（気不味い）

会話をしながらそんなことをシンはずっと考えていた。

正直な話、特に用事が無い限り、シンは一誠の家に足を運ぶつもりはなかった。しかし今回、リアスの鶴の一声によりオカルト研究部の会議を一誠の自宅で行うことが決定し、シンはそれを当日のオカルト研究部部室にて知らされ、一誠の家へと来ることとなった。理由をつけて断ろうかと考えもしたが、一度部室に来てしまった以上下手な嘘を吐くことも出来ず、大人しく従うという結果になった。

「ははは。いやー、父としては木場くんや間薙くんのような大人びた子がイッセーの友達でいてくれて良かったと思うよ。私も松田くんや元浜くんのことも気に入っているが、どうにもあの二人とイッセーは相性が良すぎてね……部屋に集まって猥談をしたりエッチなビデオを鑑賞したりばっかしていて親としては、それだけの青春でいいのかと

思うところがあってね」
「――心中お察しします」
ほぼ初対面ながらも親しげに話してくる一誠の父にシンも悪い気はしなかったが、会話をする度に頭の隅で初めて一誠の家に来たときのことが蘇っていく。当の本人たちはリアスの魔力によってそのときの記憶が曖昧になっているが、あの階段を降りたときに会った一誠の両親の極限まで引き攣った笑みは、中々忘れることが出来ない。
一誠の父親と会話し無難な返事をしていると、シンはズボンの裾を引っ張られているのを感じる。するとシンは自然な動作で、座っているテーブルの上にある包み紙に入ったお菓子を手に取って中身を取り出し、一つは自分の口に運びもう一つはさりげなくテーブルの下へと向ける。そうするとテーブルの下から白い手が伸び、お菓子を受け取ると咀嚼音の後、満足した声がテーブル下から聞こえてきた。
「ヒホー」
テーブル下に隠れたジャックフロストと、この家に入ってから既に何度か行われたやり取りである。この手間のかかる行為は、ジャックフロストたちの姿は見えないと分かっていても念の為にという措置であったが、ジャックフロストも特に不満は見せずかくれんぼでもしているつもりなのか、楽しんでいる様子であった。
「最近になってイッセーにもようやく女の子の知り合いが出来てくれたし、何よりも未

来の花嫁候補となってくれる娘が二人も出来てくれて親としては早く初孫の顔が見たくてね。……ふっ、女の子がいっぱい……若い時の夢をまさか自分の息子が叶えてくれるとはね。私も年を取ったという訳だ」

「――ええ、本当に将来が楽しみですね」

やや目を潤ませて自分の家の現状に感極まっている一誠の父に、シンは内心でやはり一誠の肉親なだけはあると思っていた。

会話からも滲み出て来るが、人柄は両親とも悪くない。むしろ良い人と称してもいいほどである。身寄りのないアーシアを引き取っただけでなく、アーシアからも自分たちの娘同然に可愛がってくれて感謝しているという話も良く聞く。

そして、最近ではライザーとの婚約破談後一誠の自宅に同棲し始めたリアスも暖かく迎え入れているほどお人好しである。

ちなみにではあるが、一誠からその話を聞かされたシンはその後に続いた、上級悪魔の考えってよく分からないよな、という台詞を聞いて、一誠という男は心底バカであることを確信するのであった。

色々と思うことはありながらも暖かみを感じさせる時間を過ごす一同であったが、ある瞬間、その空気に線を引かれたかのようなある意志が部屋の中を奔る。今まで日常生活を送ってきた一誠の両親たちは気付かなかったが、それ以外の人物はその意志が敵意

であることを敏感に察知し、談笑しながらもその敵意を放つ人物に全員が視線を向けていた。

その視線の中心にいたのは木場であった。木場は一誠のアルバムのとある写真を凝視し、隠しきれない程の感情を内から外へと放っている。

「これ、見覚えは」

写真を指差す木場にシンもその写真に目を向ける。そこには幼稚園児、あるいは小学校低学年頃と思わしき一誠と、栗色の髪をした、男か女か一見しては分からない、中性的な容姿の同年代の子供。そして、その子供の親。

木場が指していたのはその親が持つ鞘に入った西洋の剣。造りは至って簡素な物であり、目立つような装飾は一切無い。

だが、木場がその剣を見る目は尋常では無く、瞳の中に殺意と敵意、更に憎悪が入り混じり、濁っているかのようであった。

質問をされた一誠は小さい為覚えがないと言っていたが、木場はそれを聞いて特に残念がる事無く、いつもの様な笑みを浮かべて指差す剣の名を言う。

「これは聖剣だよ」

木場の口から出た言葉に温度は感じられず、ただひたすら負の感情が込められている。

その言葉を聞いたとき、シンはいつかのライザー戦で見た木場の顔を思い出していた。その後もいくつか質問をする木場であったが、一誠の回答は昔のことであり曖昧なものであった為、木場を満足させるようなものではなかったが、一通り聞いた木場は誤魔化す様に微笑し、自分から別の話題に切り替えた。

そんな木場の背に、シンは訝しむ視線を向けるのであった。

◇

手に持つ金属バットの重みを感じながらグリップを絞るようにして握り、石灰で描かれたバッターボックスの上でシンはバットを振り子のように左右に揺らした後、顔面の側面近くに立てる。

鋭く尖った視線の先に立つのはピッチャーマウンドで堂々と構えるリアスの姿。リアスは構えた状態で二度ほど首を横に振る。それはキャッチャーである小猫の示したサインでは投げることが出来ないという合図。

しかし、三度目のサインには納得いったのか首を縦に振ると投球姿勢へと移行し、その細く長い脚を高々と上げ、下ろすと同時に全力を込めた投球がシンへと迫る。

細身の女性とも思えぬ剛速球であったが、シンも怯むことなく目を細め唸る速球に対

し目を凝らす。集中して見るシンの目には段々とボールの回転が緩やかに見え、やがてボールの縫い目までもはっきりと見えるにまで至る。

同時にシンは左足を軽く上げ身体を捻り始める。そしてボールがバットの届く範囲まで来たとき、身体に込めた力を一気に爆発させた。

上げた足を周囲の土が跳ね上がる程の勢いで踏み下ろし、それによって得た力を腰にまで伝わらせ、その力を発条にし捻った腰を逆方向へと回転させて握り締めたバットを振るう。金属バットとボールが接触するとボールは大きく変形し、そのまま晴天の空へと高々と舞い上がる。

「あー」

「ヒーホ」

観客として打ちあげた白球の行方を追っていたピクシーとジャックフロストから同時に気の抜けた声が出る。上がったボールの落ちていく先、そこにはグローブを構えた一誠の姿があったからだ。

一誠のグローブの中にボールが落ちるのを見て、シンは特に残念がることはなく手に持ったバットを地面に置いた。

「ナイスキャッチよ、イッセー。シンも初めて野球をした割にはいいバッティングセンスよ」

上機嫌な様子でリアスは二人を褒める。
現在、オカルト研究部の面々は来週行われる球技大会の為の練習を行っていた。球技大会にはクラス対抗と男女別競技の他に部活対抗戦というものもあり、シンもオカルト研究部に名を置く身として練習に参加していた。
「さあ！　次いくわよ！」
リアスが部員の中で誰よりも闘志を見せる。リアスを良く知る朱乃曰く、リアスはこの手のイベントが大好きであり同時に負けず嫌いを発揮すると、球技大会の練習を始める前に一誠とシンに語っていた。
その言葉通りリアスは誰よりも積極的に動き、誰よりも大きな声を張り上げて皆に檄を飛ばしていた。そんなリアスの態度に知らず知らずのうちに引っ張られていくメンバーであったが、そんな中唯一人例外がいた。
「おい、木場！」
「え？」
守備をしていた一誠が声を出す。その声に反応して木場が一誠の方へと顔を向けるが、一誠が声を出したのは自分の方へと向かせる為ではない。
木場のすぐ側をリアスが打ったボールが転がっていく。ボールが背後まで転がって行ったときになってようやく木場はボールの存在へと気付いた。

普段の彼を知るならば考えられない程の鈍さである。通常の木場であったならば、仮に一メートル内の場所からボールを飛ばしたとしても軽々と捕球出来る程の反射神経を有している。そんな彼が、十数メートルも離れた場所から打ったボールに気付かないのは異常なことであった。

切れの無い動きで木場がボールを拾いリアスへと投げ返すが、その狙いは外れリアスへの球出しをしていたシンの方へと大きく逸れていく。シンは向かって来る球を無言で取った後に木場の方を見るが、既に木場の視線はリアスたちから離れ、一人考え込むような表情で虚空を見つめていた。

掴んだ白球をリアスへと渡すときリアスと目が合う。互いに考えていることが分かったのかシンの顔を見ながらリアスは溜息を吐き、眉間へと皺を寄せた。

練習が始まったときから何度か見る木場の気の抜け様、その度にリアスから注意を受けているが一向に止める気配は無い。木場の異変は練習だけに留まらず学園生活やオカルト研究部内でも見られ、そのらしくない態度に誰もが心配をしていた。

実際、リアスたちも木場に何かあったのか尋ねることがあったが、木場は何も答えず、曖昧な笑みと曖昧な言葉でその場を誤魔化すのであった。

その日の練習が終わり、帰宅をしようとするメンバーであったが、一人木場だけが誰よりも早く帰り支度をし、急ぎ足で部室を出ていく。

「お先に失礼します」
　止める間も無く姿を消す木場を、ピクシーはシンの肩で頬杖をした状態で不思議そうな目で見ていた。
「ねえねえ、ゆーとってさ、最近ずっとあんな感じだよね？　ボーッとしたりせっかちだったりでさ」
「まあな」
「やっぱあれが原因か？」
　一誠の言う、あれとは一誠の自宅で見た『聖剣』の写った写真のことである。しかし、シンはそれのみが原因であるとは思えなかった。確かにその日の木場の態度は不審に思えるものであったが次の日にはいつもと変わらない様子であり、それを見て自分が感じたことは考え過ぎであったと軽く安堵した記憶がある。木場の様子が本格的におかしくなったのはこの日から少し経った後のことであった。
　木場に対しコンプレックスや邪見な態度をとる一誠であるが、その実力には憧れとライバル意識を持つ故に、木場の腑抜けている様子を心配していた。
「部長は木場と『聖剣』との間に何かあったのか知っているんですか？」
　純粋な疑問から出た言葉に部室内の空気が一瞬張り詰める。朱乃と小猫はリアスの方へとどうするのか、という視線を向けたが、リアスは考える様に目を瞑り、暫くした

後首を横へと振る。
「イッセー、ごめんなさい。私たちは祐斗と聖剣にどんな因縁があるかを知っているわ。だけどね、それを本人がいない場所で許可なく易々と口には出せないの」
問いへの答えは回答の拒否であった。リアスからの思わぬ返答に、一誠は驚く顔をするが納得しきれないのか、少しでも情報を得ようと食い下がる。
「それって、やっぱ嫌なことが木場の過去に――」
「やめておけ」
一誠の言葉をシンが遮る。
「木場が居ない所で過去を掘り返しても意味なんて無いだろ。仮に聞いて同情を増した所で、当の本人にとってはいい迷惑になるのが落ちだ」
「だけどよ……」
表面化するシンと一誠の考えの差。実際の所、内心ではお互い相手の考えも一理あると思っている節があるが、それを口に出来ないのは長年に渡って染みついてきた自らの性格の為であった。
「イッセー」
リアスの一声が、険悪には至らないが張り詰め出した空気を消し去る。
リアスが一誠の名を呼び、もう一度首を横に振る。それをこれ以上言うつもりは無い

というサインと解釈し、釈然としない表情のままであったが一誠はそれに従い、深く問うことを止めた。

その日の放課後。

夜の悪魔の仕事まで空いた時間を利用し、一誠とシンは日頃行っている実戦方式の訓練をしていた。

「よっ！」

「うおっ！」

ピクシーの指先から放たれた電撃を一誠の『赤龍帝の籠手』で弾く。散った電撃は空気中へと拡散され威力を失うが、それを見届ける暇も無く一誠は視界の片隅でジャックフロストに動きがあるのを感じ、急いで視線をそちらの方へと向ける。

「ヒホー！」

それを大口を開けて待っていたジャックフロスト。底の見えない口の中から、吹雪を思わせる極寒の息が一誠目掛けて吐き出された。一瞬で視界全体が白く染まるのを見て防御は不可能と判断し、冷気に包みこまれる前に両足で地面を押し出し反動で範囲外へと逃れる。しかし、それすら予測していたのか第三の攻撃が一誠へと迫る。

一誠の移動した場所には既にシンが待ち構えており、ジャックフロストの攻撃から逃れた一誠の肩を掴むと自分へと引き寄せ、同時にその脇腹に拳を叩き込む。

「ぐうっ！」

体が『く』の字に折れる一誠に追い打ちの膝を腹部に叩き込もうとするが、脇腹の痛みを押し殺して防御へと転じた一誠の左腕がそれを阻む。一誠はシンの攻撃を受け止めると同時に、右拳をシンの胸部に密着させその状態で押し出す。威力自体はあまりないが、シンとの間合いを広げるには十分な威力を持っていた。

後ろへと押し出されるシンだが、そのまま大人しくはせず間合いが広がる前に左足を軸にして体全体を捻ると、一誠の顔面目掛け、右による後ろ回し蹴りが放たれた。

一誠の目には片足を上げたかと思えば、その足が顔のすぐ側まで接近している程の速度。反射的に首を後ろへと仰け反らせると風圧が顔を叩き、足が掠めた髪が何本か宙へと舞う。

紙一重で回避した一誠が視線を蹴りからシンに戻すと、蹴りが当たらず避けられたせいで体勢が崩れたのか、自分の方へと背を向ける形となったシンの姿があった。

この機会を逃さまいと一誠が一気に距離を狭めようとした瞬間、眼前で魔力の光が降り注ぎその中心から突如ピクシーが現れる。驚く一誠の表情を悪戯が成功した子供の様な顔で笑うピクシー。そしてその笑顔のまま指先を一誠の顔に向ける。

咄嗟に腕を交差し電撃に備える一誠であったが、想像していた衝撃は来ない。何故かと考えた次の時に顎下から突き上げる様な衝撃が来た。交差した腕の隙間から突き上

げられた掌打はそのまま一誠の首を限界まで伸ばす。
一誠は首筋が軋む音を感じながら倒れまいと両足で地面に踏ん張ろうとしたが、力を入れた途端足から力が抜け空中へと放り出される。このときの一誠には確認することが出来なかったが、少し離れた場所でジャックフロストが両手を地面に着け、一誠の立つ一帯を凍結させていたのだ。
「痛っ！」
一誠の体が背中から地面へと押し倒される。固い地面と押し出す力が合わさり、呼吸が止まる程の痛みが生じたが何とか起き上がろうとする一誠の視界一杯に、靴底が映し出される。顔を潰す勢いで放たれたそれに一誠は次に来る痛みと衝撃に身を固くするが、寸での所で靴底は止まり、僅かに鼻先が触れる程度であった。
「あー……参った」
「オイラたちの勝利だホー！」
「イエーイ、連勝！　連勝！」
一誠の降参を聞いて高らかに勝利を祝うジャックフロストとピクシー。そんな中倒れている一誠の下に観戦をしていたアーシアが走って近寄って来た。
「イッセーさん、大丈夫ですか！」
「ガー、ガー」

寄ってきたアーシアの腕の中で蒼い鱗を持った小さなドラゴンが、一誠の様子を見て鳴き声を上げる。それは以前使い魔を手に入れに行った際、アーシアが使い魔として契約した蒼雷竜（スプライト・ドラゴン）の子供であった。ラッセーとアーシアに名付けられたそれは、本来なら悪魔とは契約しない希少且つ高位な存在であるが、アーシアという少女の心の在り方が気に入ったか例外中の例外として契約をした。しかし、この蒼雷竜も困った点が一つある。

「立てますか？」

「ああ、大丈夫、あがぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃ！」

倒れている一誠に手を伸ばすアーシア、その手を握ろうとした一誠にラッセーから電撃が繰り出される。

倒れている一誠の体から白煙が上がり、傷付いた体は更なる傷を負う。

「だ、大丈夫ですか！　ラッセーくん！　駄目です！」

「ガー」

一応叱るがあまりラッセーから反省の色は感じられない。この様にラッセーだけに限らずドラゴンの雄は他生物の雄に対し非常に攻撃的であり、一誠が電撃を浴びせられるのが日常と化しつつあった。

「キミも容赦がないねー」

「程々にしないとダメホ」
「ガー」
　先程の行為を窘めつつも笑みを浮かべながらラッセーの頭を撫でるピクシーとジャックフロスト。ラッセーが来てからすぐに意気投合したのか、他の使い魔と同様によく遊んでいる光景を目にする。ピクシーは異性である為攻撃はせず、ジャックフロストも生物という分類に入らない為か攻撃はされない。そして、シンもこの二人にラッセーが懐いているせいかその恩恵からか、今まで攻撃を受けずにいられた。
「少し休憩だな」
　そう言ってシンが一誠の側に行くと、手に持った缶コーヒーを一誠へと差し出す。上体を起こし礼を言って受け取るとプルタブを開け一口飲み、そして渋い表情を作る。
「ブラックかよ……」
「慣れれば意外と飲めるものさ」
　休憩の間、アーシアの『神器』による治癒を受けながら横目で一誠はシンを見ていた。訓練の際、一対三という自分にとって圧倒的不利な状況で戦うように頼んだのは一誠の意志であった。現在、シンと一誠の実力の差は『神滅具』の能力を最大限にまで活用した場合一誠の方に軍配が上がるが、互いに能力を使わず対等な条件で戦った場合、シンの方が一誠を上回っていた。

一誠が合宿のときから実感していたことであったが、戦いの才に於いてはシンの方が自分の二歩三歩前を行っている。ほぼ同じ時期に戦いのある世界へと足を踏み込んだが、先を行くシンに嫉妬の感情を覚えないと言ったならば嘘になるが、同時に木場と同じライバル意識も持っていた。相手が一歩先を行く度に自分も追い付こうと必死に一歩前に踏み出そうと努力する。この一対三の訓練もその努力の為のものであった。

しかし実際の所、中々上手くはいかない。いつの間にかシンが手に入れた能力、仲魔の召喚によっていいように振り回されているのが現実であった。

「ふふーん！　アタシたちのコンビは最強だねー！　ほらほらもう一回勝負しよ！」

「ヒーホー！　戦うホー！」

「ガー」

連戦連勝し調子に乗り始めるピクシーとジャックフロスト、それに合わせてラッセーも機嫌が良さそうに鳴く。

「うぬぬぬ！　そう何度も負けてられるか！　次は勝つ！」

治癒の終わった一誠は勢い良く立ち上がり、残った缶コーヒーの中身を一気に流し込むと気合と共に構えをとる。

「イッセーさん、無理しないでくださいね」

「おう！　心配するなアーシア」

気を配るアーシアの頭を撫で快活な笑みを向ける一誠に、アーシアは心配と喜びを半々に混ぜ赤面する。

一見すると仲睦まじい光景。だが、それに対し露骨に不満を持つ存在がこの場に居た。

「じゃあ、そろそろ始めるか」

「おう！　さあ、来い――ってアレ？」

一誠の前に並ぶのはシンとピクシー、ジャックフロスト、そして何故かラッセーの姿が。

「ガー！」

「うん？　キミも戦いたいの？　いいよ、いいよ。イッセーも多い方が戦い甲斐があるだろうし」

「オイラたちの強さをイッセーに見せつけてやるホー！」

「シンもいいよね？」

「俺は別に構わないが――」

そう言いながら横目で一誠の方を見るシン。そこには一誠の意志を確かめるものが含まれていた。

「あ、あの無理しない方が……」

「……ええい！　まとめて掛かって来い！」

一誠がややヤケクソ気味に叫ぶ。それを聞いてピクシー、ジャックフロスト、ラッセーが質の良く似た笑みを浮かべるのを視界の端で見ながらシンは戦いの構えに移る。

数分後、どこまでも広がっていく赤みかかった空に一誠の悲鳴が木霊していった。

◇

次の日の放課後。シンたちが部室へと入室しようとしたとき、部室内からリアスたちとは違う悪魔の気配を感じた。その気配に眉を顰めるものの特に悪意や敵意というものが含まれていない。それどころかその気配には身に覚えがあった。シンはやや慎重になりつつも部室のドアを開く。

中に居たのはリアス、朱乃、小猫の姿。ただし、やはりと言うべきか木場の姿はそこには無かった。

そして、その他にも見慣れない人物が二人いる。その二人がシンの方へと顔を向けたとき、ピクシーとジャックフロストが声を揃えて上げる。

『ソーナとサジだ！』

嬉しそうに笑う二人に、ソーナこと支取蒼那は普段の冷徹な表情から想像がつかない

程柔らかな微笑を浮かべ、サジこと匙元士郎も口の両端を上げて笑みを形作る。
「久しぶりね、二人とも。相変わらず元気そうで安心したわ」
「よお、チビども。いきなり姿消しちまったから結構心配したんだぜ？」
親しげに話す両者にリアスたちも軽く驚き二人と何があったのかソーナへと尋ねると、ソーナはリアスたちが一誠とアーシアの使い魔探しで不在であったときの出来事を説明した。
「間薙くんは名前は知っていますが、この場では悪魔としての名前を紹介させていただきますね。この方の本当の名はソーナ・シトリー。部長と同じ七十二柱の上級悪魔であり、シトリー家の次期当主ですわ」
学園での生活の中で何回か廊下をすれ違い、その度に尋常では無い気配を感じていたが、リアスと同等であると聞き納得した。
「どうも初めまして……でいいですか？」
「リアスから貴方のことを聞かされているけれど、ちゃんと話をするのはこれが初めてね」
頭を下げるシンに先程と比べ若干感情が薄い笑みを浮かべる。ピクシーたちに見せる一面が例外であり、本来の笑みがこれなのかもしれないという考えがシンの頭の中に過ぎった。

そのとき、アーシアを迎えに行っていた一誠がアーシアを連れて遅れて部室の中に入り、そこにソーナたちの姿を見て驚く。
「せ、生徒会長……」
驚く一誠たちを見て、匙はリアスに自分たちとの関係性を教えてないか尋ねるが、その質問をソーナが静かに窘める。
「サジ、私たちは表向きは一般生徒と同じよ。悪魔となってそれ程月日が経っていない彼らならば当然の反応よ」
会話の中に出てきた悪魔という単語に、一誠とアーシアの驚きが増す。その反応を見てシンは、ふたりがこのオカルト研究部以外に悪魔が存在することを想像していなかったのであろうと推測した。
二人の驚きが引いたのを見計らって朱乃が再びソーナの紹介をし、そしてソーナはリアスと共にこの学園の実権を分担して握っていることも説明をする。
「ソーナも偉いんだねー」
「羨ましいホー！　オイラも実権というのを持ってみたいホ！」
言葉の意味を詳しく知らなくとも何となくではあるが凄いことであると理解したピクシーとジャックフロストがソーナを褒める。すると何故か匙の方が嬉しそうに胸を張り、我が事のように喋り出す。

「だろ？　会長や俺たちシトリー眷属の悪魔が日夜学園の平和維持の為に努力しているから楽しい学園生活を送れるんだぜ？　感謝しろとまでは言わないが、覚えてくれておいても損はないぜ？」
「サジ、凄いホー！」
「サジ、凄ーい！」
パチパチと拍手し匙に賛辞を送る二人。一見すると馬鹿にしているようにも見えなくはないが、本人らは至って真面目であり、褒められた匙も満更ではないのか頬を少し赤らめ照れていた。
「まあ、そう褒めんなって。あ、そうだ名乗りが遅れたが俺の二年の匙元士郎。『兵士』だ」
匙の自己紹介を聞き、一誠が嬉しそうな表情となる。自分と同じ学年で同じ『兵士』であることに親近感が湧いた様子であった。が、匙本人は全く嬉しそうな顔はせず、逆に悪い意味で有名な一誠が同じ『兵士』であることを恥じていることを態度と言葉で表す。
流石にこれには一誠も絶句し、友好的な笑みがどんどんと怒りで顔が吊りあがっていく。
「で、そっちが間薙シンだったな。結構こっちじゃ有名だぜ？　変な力を使う人間として」

「そうか。こっちも何度かそっちの名前は聞いたことがある」
「へっ、碌でもない話と一緒にだろ？」
「想像に任せる」
　特に尾を引くことなくあっさり二人の自己紹介が終わる。続いてアーシアも匙へ自己紹介をするが、一誠、シンのときとは打って変わってにこやかな笑顔でアーシアの手を取ると両手でその手を握り握手を交わす。やや刺々しさを含んだ態度もすっかり軟派なものへと変わり果てる匙であったが、その行為を黙認出来ない一誠がその手を離させ、代わりに自分が匙と握手をする。
「ハハハ！　匙くん！　僕への暴言は、まあ百万歩譲って許すとしてもさっきのは頂けないなー！　というかアーシアに手を出したら殺す」
「おやおや？　殺る気ですか兵藤くん！　こんな金髪美少女と仲が良いだけでも死刑ものなのにその人物との細やかな交流すら許さないなんて君も狭量な男だね！　っていうかやれるものならやってみろ、こう見えても駒四つ消費の『兵士』だ。お前なんかに負やしねぇよ」
　互いに笑顔であるが交わす握手は血管が浮き出るほど力を込めている。そんな中、シンは匙が何気なく言っていた言葉を、目の前の光景を我関せずと放っておいて考える。
（駒の四つ消費……匙は『神器』持ちか？　あるいは悪魔として高い素質があるのか？）

握手する二人の熱が徐々に上がっていくのを見かねたのか、ソーナが溜息を一つ吐く。

「サジ」

鋭く睨むソーナを見て、流石にこれ以上は不味いと思ったのか匙の方から手を離す。それを見た後でソーナは釘を刺すように、一誠が駒を八つ消費して転生したこと、ライザー・フェニックスを倒したことを話す。

その事実に匙は、目を丸くした状態で一誠を見た後に悔しそうに表情を歪める。匙にしてみれば、戦わずして敗北感を味わらせられた心境であった。

「それでも、俺以外の生徒会メンバーはリアス部長たちの眷属よりも強いからな」

それでも納得し切れないのか他のメンバーを引き合いに出す。自分自身の負けず嫌いというよりかは、自分のせいでソーナの実力が低く見られたくないという意地の様なものを感じさせるものであった。

それを理解したのかリアスは匙を微笑ましく見て、何やらソーナにしか聞こえない声量で小さく喋る。聞き終えたソーナは、まだまだですという言葉だけを残した。

「それでは私はこれで失礼します。リアス、球技大会を楽しみにしているわ」

「ええ、私もよ」

互いに微笑みながら言葉を交わした後、リアス以外のメンバーに軽く頭を下げる。匙

もまた主に倣いやや不満そうな表情で頭を下げた。それを見たメンバーも非礼が無いように頭を下げてそれに応じる。
「じゃあねー!」
「バイバイホー!」
例外としてピクシーたちは手を大きく振って別れの挨拶をするとソーナも小さく手を振り、匙も軽く手を挙げて応じ二人は部室を去って行った。
「……そう言えば、木場の奴はまた遅刻か?」
二人が去った後、一誠はこのときになって木場の不在に気付く。
「……木場先輩は今日は来ないそうです。……そう連絡を受けました」
一誠の疑問に小猫が答える。今までは部活への遅刻だけであったが、不参加にまで悪化してきたことに一誠は不安を覚える。
「あいつ、一体何をしているんだろうな?」
「さあな。――出来ればこっちの心配が杞憂であって欲しいがな」
誰もが木場のことを考えていたとき、木場は一人、人ごみの中を歩き続けていた。
その瞳には穏やかさなど無く、視線を向けられた誰もが一瞬歩みを止めてしまう程の険呑とした暗い光を放っていた。
彼が尋常では無い様子で周囲を探るようにして見ているのは、ある目的の物を見つけ

る為。
それを見つけるのは復讐の為、果たすべき仇を討つ為。
暖かな日々を送り続けたことで、その想いに瘡蓋のような膜が出来て心の奥で眠っていたが、あのとき一誠の家で写真を見つけたとき、その瘡蓋に僅かな亀裂が生じ、奥から血膿のように濁った感情が溢れ始めた。
それでも周りの仲間たちへ心配を掛けまいと何とか押さえつけ、少しの間は木場祐斗として振る舞うことが出来た。
決定的な亀裂が生じたのはそれから間もなくのことであった。

◇

「どうもこんばんは」
ある日の放課後自宅へと帰る木場の前に一人の神父が現れる。年の頃は三十前後、茶色の髪に特に特徴の無い目鼻の造り、無理矢理特徴を上げるとすれば外国人であるという点だけの地味な外見をしていた。
木場はその服装と首から下げた十字架に内心嫌悪感を覚えながらも、一介の神父と判断し、軽く会釈をしただけで通り過ぎようとする。

「たしか……木場祐斗さんでしたっけ？」
　その際、神父の口から出てきた自分の名に、木場は一切の躊躇いも無く手の中に魔剣を創造すると、流れる様な動作でその喉元に突き付けた。
「教会の『悪魔祓い（エクソシスト）』かい？」
　口調は変わらないものの、負の感情で冷めきった双眸は見る者に悪寒を与えるほど冷え切っていたが、その目を向けられた男は口の端を吊り上げ、まるで木場の行動を愉しんでいるかのようである。
「おお、恐ろしい恐ろしい。やめて下さい。俺――じゃなくて私は貴方を祓いに来た訳ではありません」
「それを信じろと？」
　台詞自体は恐れをなしているかのようであったが木場の目から見て、少なくともそれが演技であることは丸分かりであり、小馬鹿にされていると感じた木場は剣を持つ手に力を込める。
「あまり言いたくはないが、僕は君たちのような存在が大嫌いだ。命が惜しければ早々に消え失せた方がいい」
「『聖剣計画』」
　男から出てきた思いがけない言葉に、木場から顔色が消える。

「まあ、あんなことがあれば教会、いや神そのものも憎んでも仕方はないでしょうねぇ」
　沸々と血が煮え滾っていく感覚を木場は覚えた。次の瞬間、思考よりも体が勝手に動き、木場は男を背中から近くの壁へと叩きつける。
「何故それを知っている！　一体何が目的だ！」
「落ち着いて下さいよ木場さん。私は貴方にとって得になる情報を持ってきたんですから」
「情報……？」
　感情を昂らせる木場を前に全く動揺も見せず、自分のペースで話し続ける男。その男が発した次の言葉に、木場は頭から冷水を浴びせられたような錯覚を覚えた。
「いま、この町に聖剣――それもエクスカリバーが存在していますよ」
「なっ……！」
　言葉に出来ない程の衝撃。そのあまりのショックに男から手を離し、そしてあろうことか握っていた魔剣も落としてしまう。
「聖剣が……この町に……」
　呆然と呟く木場の前で男は乱れた服装を正し、軽く埃を払うと何事も無かったかのようにその場から離れようとする。
「……待ってくれ」

「はい？」
「……その情報を僕にもたらして一体、君に何の意味がある。君はキリスト教側の人間の筈だ」
その言葉を聞いて男は歯を剥いた笑みをつくり、へっへっへっと下卑た笑い声を出した。
「まあ、それは秘密ということで。ああ、そうだ。この際一応名乗っときましょう」
男は十字架を指先で弾きながら木場へと向き直る。
「私の名は『アダム』と申します。もう会うことは無いかもしれませんが、一応覚えておいてください」
「……偽名かい？」
「まあ、似たようなものです。それでは御機嫌よう」
アダムと名乗った男は、言うだけ言って木場の心を荒らして去って行った。
一人残された木場は俯き、ぽつりと言葉を洩らす。
「僕は……」
両手を強く握る。その強さに血が通いにくくなり手が白く染まっていく。
「僕は……」
握る手の強さは緩まることは無く、更なる力によって爪が掌の肉を裂き、指の隙間か

ら血の雫が垂れ落ちる。
「僕は聖剣（エクスカリバー）を許さない――」

原点、亀裂

球技大会当日。快晴の空の下でその晴れやかな天気に反し、暗くどんよりとした空気を纏う男子生徒が二名。

「なあ……世の中ってやつはとことん不公平だとは思わないか？」

「ああ、よく分かる。今なら断言できる、この世に神など居ないということが……！」

目の前に広がる光景を見て、元浜と松田は今にも血涙を流しそうな、悪鬼と見間違うばかりの嫉妬の凶相を浮かべている。

嫉妬の視線の先、そこにあったのは彼らの悪友である体操着姿の一誠が、地面へと座って両足を開き、前屈するという軽いストレッチを行っているものであったが、その手伝いとして同じく体操着を着たアーシアが一誠の両手を手前に引き、同様の格好の朱乃が胸を押し当てる様な形で背中を押していた。

朱乃が一誠の背中を押すたびに、その胸は背中に張り付きその弾力を背中越しに一誠へと伝える。その度に一誠の表情は締まらないものと化していき、今この状態が天国であることを言葉にせずとも態度で周囲に知らしめていた。

「なにかな？　あれはなにかなぁ？　俺の目が狂っていなければ金髪美少女のアーシア

ちゃんと学園二大お姉さまの一人である姫島先輩に挟まれて素晴らしい天国を味わっている畜生がいるようだが」
「奇遇だな。俺の目にも同じ光景が見えるよ。あー、どうしよう、何だか妬みの感情が凄すぎて周りの景色が歪んで見える。あーやばい、あーやばい。元浜、どこかに固くて人を殴るのに適したものはないか？」
「いいタイミングだ、松田。ちょうど俺たちの近くにいる間薙が金属バットを持っているからそれを使え」
「という訳で間薙、それを貸してくれ」
「何がという訳でだ。これを使ってどうするつもりだ？」
　元浜たちの近くで、本日行われる球技大会の手伝いをしていた間薙が、呆れた目で嫉妬の炎を燃やす二人を見る。
「決まってんだろ！　あの野獣の頭をかち割るんだよぉ！」
「死ねやぁ！　淫獣！」
　一気に怒りのボルテージを上げて怒声を放つ二人であったが、対照的にシンは冷め切った様子であり、心中では面倒だと思いつつも怒れる二人を鎮めようと、少しだけ気を遣った声色で話し掛けた。
「せっかくの学校行事で流血沙汰なんて止めておけ。――それに、日頃からあいつの悪

い噂を流しているのにまだ足りないのか？」

一誠への女子たちの集まりの良さに二人は、どす黒い嫉妬心を行動力へと変換し、あることないことを交え、尾ひれ背びれをふんだんに盛り込んだ悪い噂を学園中へとばら撒いているのを最近本人たちから聞かされていた。

とにかく内容は酷いものであり、リアス、朱乃の秘密を握りそれを脅迫のネタにしてその身体を貪っているという話から始まり、学園のマスコットアイドル的存在である小猫を腕力にものをいわせて蹂躙しか細い悲鳴を上げさせていると続き、日本の文化を全く知らない無垢なアーシアに間違った知識を植え付け猥褻な行為を強要させているなど跡を絶たない。終いには同性である木場とも関係を結んでいるという話も流しており、流石にそれを聞かされたときはシンも軽く顔を顰めた。

今の所、噂自体はそこら中へと広がっているようではあるが、それを本気にして直接的な行動にでる生徒たちが出る様子も無く、あくまで噂は噂の範疇で止まっていた。仮にもし噂のせいで悪質な行動や害を及ぼす行動に他生徒が出た際には、流石に噂の火の元である松田と元浜が鎮火するであろうとシンは考えていた。

口が悪く妬みもするが、一誠本人が胸を張って悪友であると答える二人である。彼らにとって不本意な行動が起きえることは望まないと思っていた。

「なんかいつ見ても変わらない光景だね」

シンの背後から女性の声が聞こえてくる。首だけ後ろへと向けると、そこには二つの下げた髪を三つ編みに束ねた髪型をしている眼鏡をかけた体操着の女子生徒が、どことなく一誠、松田、元浜を彷彿とさせる笑みを浮かべて立っていた。

「桐生か」

「どうも間薙くん。こうやってちゃんと話すのは二回目ぐらいだっけ？」

桐生藍華（きりゅうあいか）――アーシアと友人関係、シンとは同じクラスメイトでもある。一誠、元浜、松田と同じレベルで争えるぐらいのそっち方面の知識が豊かな女子生徒であり、その豊富さ故『匠』という異名すら持つ。シンとは一誠の付き添いでアーシアの下へ行った際、そこで仲良く話していた桐生と軽く挨拶をした程度の面識しかない。

「まあ、松田も元浜も嫉妬するのは無理ないか。なんせあんな美少女で良い子がイッセーさん、イッセーさんって慕っているぐらいだし。それにここ最近のあいつって何か異様にモテてるよね？　まさかあのグレモリー先輩も陥落させるとは思わなかったわ」

そういった方面に知識を傾けているせいか他人の色恋沙汰には敏感で有るらしい。その話をする桐生の顔は生き生きとしたものを感じさせるが、一般的に恋を語る女子学生の様な頬を赤く染めて恥ずかしげに語る姿は無く、底なしのいやらしさを含んだ性的な欲望を前面に出した、何とも言えない笑みを浮かべている。

「それでさ、間薙くんから見てどうなの？　兵藤はアーシアと付き合っているの？　そ

れともグレモリー先輩？」
「どっちとも付き合ってはいないし、手すら出していないみたいだな」
「へぇー、意外。兵藤ってもっとがっつくタイプだと思ってたけど結構ピュアなの？　あたしはてっきりアーシアやグレモリー先輩と合体だの複合合体なんかを堪能してると想像してたのに」
　さり気無く会話の中で下の話を混ぜてくる桐生に内心辟易するが、それに対しての口を挟む真似はしない。言った所でそれを皮切りにして、聞きたくも無い話が芋蔓式で出て来るのが容易く想像できたからだ。
「せっかく私が直々に『裸の付き合い』を教えてあげたのにいまいち成果がなかったのかな？　っていうかさアーシアが兵藤のことどう思っているか兵藤本人は知ってるでしょ？」
「俺の推測では『自分に優しくしてくれる数少ない女子』というぐらいの認識だな。常日頃から飢えているのを主張している癖に、いざそういった立場になったらあいつは相当鈍いぞ」
　シンの感想を聞き、桐生は驚きと呆れを含んだ表情で一誠の方へと向いた後、そのままシンの顔を見返す。
「え？　マジなわけソレ？　あんだけ露骨なのに本人の中じゃ『いい娘』ぐらいなわけ？

あー、それは鈍いわ」

そこで桐生は顎に手を当て何かを考え始める。

「うーん。間薙くんの見立てだと、どうすれば『いい娘』から『恋人』までランクアップすると思う？」

「人の恋愛事情には深入りするつもりは無い。当人の自由にさせたらどうだ」

あっさりとした態度で回答を拒むシンであったが、桐生はそれでも引き下がらずシンの前で両手を合わせ拝むようにして食い下がる。

「少しだけでもいいから知恵を貸してくれない？　いっつも二人でいて仲睦まじいのを見てたらさ、やっぱハッピーエンドで終わって欲しいと思うじゃん？　兵藤とアーシアの共通の友達として手を貸してくれない？」

いつものいやらしい笑みが消え、どこか真摯さを感じさせる微笑を浮かべる桐生の態度を見て、少なくともアーシアのことを思う気持ちに嘘は無いとシンは感じた。しかし、先程シンが言ったように、彼自身人の恋愛に関してあれこれ口出しすることを快くは思っていない。その為、今から口に出すことはあくまで推測を重ねたものであり、効果的な成果が得られるとは限らないと自分に言い訳をしてから口にする。

「……あくまで俺の個人的な考えだが、あいつは小細工の裏にある真意には鈍いから、小さなことを重ねるよりも直接思いを口にしなければ通じないタイプの筈だ。思いを気

付かせるには、相手の方から好きとか付き合って欲しいと態々言わなきゃならないと思う」

言った後で、自分が女子相手に異性の落とし方を説明しているという構図を客観的に見てしまい、内心で後悔する。どう考えてもそういった方面を語るような人格ではないという自覚があった為に。

桐生の方は思ったよりも丁寧な意見を言ってくれたことに感心し、楽しげな容貌で目を細める。

「殆ど話したことなかったけどさ、間薙くんって意外と世話焼き?」

「さあね。自覚は無いな」

そっけなく返すシンではあったが、桐生は特に気分を害した様子も無く、楽しげな表情のまま口角を上げ、粘着質な印象を受ける笑みを口元に浮かべる。

「ふむふむ。間薙くんの意見を参考にするならばアーシアには告白させるしかないのか……あー、でもあの子シャイだから告白なんて無理か……いやいや待てよ。あの子のピュアな部分をそのまま性的なものへと昇華できたならば——例えば、前に私がアドバイスした『裸の付き合い』ではなくいっそ『裸の突き——』」

「手伝いと準備があるからもう行っていいか?」

桐生の口から零れそうになる卑猥な言葉を途中で遮り、心底興味の無い表情でシンは

その場を離れようとする。しかし、そこで桐生はシンの体操着の袖を掴み行くのを阻む。
「まだ何かあるのか？」
「ちょっとね。正確には私が間薙くんに伝えたいことがあるんだけど。聞いておいて損は無いよ？」
耳を貸してという桐生に訝しげな表情を浮かべるものの素直に従い、桐生の口に耳を寄せる。そこで小さく呟かれる声を聞き、最初は訝しげだったシンの表情は眉を眉間に寄せた嫌悪感を露わにした表情となり、聞き終わった後には能面のような表情となっていた。
「で、どう？　噂の感想は」
「……」
悪戯めいた表情の桐生の質問に答えず、シンは無言で手に持っていた金属バットのヘッド部分を地面へと落とす。乾いたグラウンドの上で小さく跳ね、僅かな砂埃を起こす。
桐生から聞かされた噂、それは木場と一誠との良からぬ噂を改変し木場の部分をシンへと置き換えたものであった。しかも丁寧なことに桐生がその噂の内容については頭の中で嫌でも想像出来る程懇切丁寧に語ってくれた。そのおかげでシンは先程から臓

腑が沈んだかと思える様な気持ちの悪さを味わっている。
どこからそんな噂が流れたのか、その答えはとうに知っている。
「まあ、人の噂も七十五日なんて言うしすぐに消えるって」
「――その前に噂の火の元を消すか……」
ぼそりと呟きながら、やや物騒な瞳で手に持つ金属バットを見つめる。
視線がバットから元浜たちへと移ったとき、タイミング良くオカルト研究部を招集するアナウンスが聞こえてくる。
アナウンスが聞こえてきた方向と元浜たちに視線を二往復していたが、やがて短く溜息を吐き、金属バットを引き摺りながらアナウンスが指示した場所へとやや重い足取りで向かって行く。
そんなシンの背中を見て、桐生はぽつりと言葉を呟いた。
「間薙くんって思ったよりも良い人かな?」

◇

「死ねぇ!　死んでしまえ!」
「殺せぇ!　奴を亡き者にしろ!」

「お願いだから逝ってくれよぉ！　頼むから逝ってくれよぉ！」
「地獄に堕ちやぁぁぁぁ！」
部活対抗戦の種目であるドッチボールの中で、およそスポーツの大会に相応しくない怨嗟に満ち満ちた罵声を繰り出しながら、一誠目掛け次々とボールが投げられていく。
「ふざけんな！　やめろ！」
恨みつらみが込められたボールをことごとく躱していく一誠であったが、息吐く暇も無く四方八方からボールが襲い掛かる。
コート内には一誠以外にもオカルト研究部のメンバーが居るにも関わらず、それには目もくれずにひたすら集中して一誠を狙う対戦相手。シンに至っては始まったときから数歩だけ移動しただけであり、その場でただ立っていてもボールなどは来ず開始から数分が過ぎようとしていた。
目の前のスポーツマンシップの宣誓が空しく思えてくる行為を見ながら、シンは視界の端で木場の様子を見る。木場の態度は相変わらず腑抜けたものであり、心ここに非ずと称してもいい程、目の前のことに意識を向けていなかった。
球技大会が始まる前日までそのことをリアスから度々指摘されていたが、大会当日になっても改善する兆しは無く、試合の最中も焦点の定まらない瞳で虚空を見ているだけであった。

「うおっ！」
　そのとき一誠が回避したボールが同じ射線上へと立っていた木場に向かって迫る。
「木場ッ！」
　ボールの行く先を見て咄嗟に一誠が避けるように木場の名を呼ぶが、木場の反応はあまりにも鈍く、俯いていた視線を一誠の方へと向けただけであり、一誠の大声の甲斐も無く木場の肩に当たり、高く上にボールが上がるとオカルト研究部内のコートの中へと落下し一、二回ほどバウンドする。
「……あ、うん。アウトみたいだね」
　ボールが接触してからワンテンポ遅れて木場は自分の現状に気付いた様子であり、そのままコートの外へと出ていく。その様子を部員たちは訝しげに見ていたがリアスだけは厳しい視線を送り、木場の態度に僅かな怒りを抱いている様子であった。
　落ちたボールを拾った小猫はコートの外にいる木場に無表情ながらも目に心配の色を浮かべていたが、気を取り直し小さな体から放たれる剛速球で木場をアウトにした相手を狙う。その速度と威力は相手が気付いたときには胸部を強打され、その勢いで身体が縦に半回転し地面へと仰向けの状態で倒れ伏す程であった。
　周囲の人間がその破壊力に観客たちはどよめき、対戦相手は慄く。その一球を切っ掛けとして次々と小猫が相手をアウトへと追い込み、試合の流れをリアスたちの方へと引

き寄せ始めた。
小猫のボールが更に相手へと当たり、残りの人数は一人となるがボールは相手の手に渡ってしまう。
「チクショー！　せめてお前だけでも！」
残りの一人が半ば自棄になってボールを持つ手を振り上げる。その狙いは当然とも言うべきかやはり一誠であった。
「おし！　最後くらい決めてやる！」
回避を選択するのを止め、腰を落とし両腕を左右に軽く開き受け止める体勢を取る一誠に相手が渾身の力を込めた一球を投げ放つ。
その球の軌道を正確に把握し、いざ捕球しようとしたとき一誠の視線が突如ボールから離れ別の場所へと向けられた。それと同じくしてシンもまた一誠と同じ行動をとる。視線を外した理由、それは何者かの視線を感じた故の反射的な行動であった。
「ッ！」
その直後、目を離したシンの耳にボールが当たる音と蚊の鳴く様な苦鳴が聞こえてくる。視線を一誠の方へと向けるとそこで一誠が地面に両膝と額をつけて倒れ込み、その両手は股間を押さえている。そして近くには転がっていくボール。
その光景を見て事情を察したシンは一誠へと近付く。首を絞められた雄鶏のような

悶え苦しむか細い悲鳴が一誠の口からは発せられていた。
「……大丈夫か？」
「た、玉に……球が……」
「――そんな冗談を言えるなら大丈夫だな」
「いや……冗談じゃなくて……」
一誠の事態を重く見たリアスが小猫とアーシアに指示を出す。小猫はいまだ苦しむ一誠の襟首を掴み物のようにして引き摺り、アーシアは一誠を気遣いながら何度も心配そうに声を掛けていた。
そのまま体育館裏の方へと消えて行く三人を見送ると、リアスが気合の入った声を繰り出す。
「さあ、数は減ってしまったけど気持ちを込めていくわよ、二人とも！　一誠の敵討ちよ！」
「あらあら、部長のやる気に更に火が注がれましたね」
「了解しました」
理由が理由なだけにいまいちやる気が高まらないシンは、気持ちはドッチボールへと向けるものの頭の隅では先程の謎の視線のことを考えていた。視線自体に敵意など害あるものを感じはしなかった。あの視線に含まれているものを敢えて言葉にするのな

らば――

（――好奇の目？）

そんな言葉が頭に浮かぶのと同時に、最後の一人をリアスが倒す。グラウンドのアナウンスからオカルト研究部の勝利を告げる声が響いた。

◇

「だっはっはっはっはっはっは！」

学園から数キロ離れたとある建物の屋上の上で座るアダムは、人指し指と親指で作った輪を覗き込みながら、膝を叩いて爆笑をしていた。

その輪の向こう側に見えるのは悶絶した状態で引き摺られていく一誠の姿。その姿がよほど面白かったのか中々笑いが収まらない。

「ははははは！　くくく、今回は中々面白そうな奴に憑いたじゃねぇか、いいセンスだ赤龍帝……ぶふっ！」

笑いながらも空いた手で近くに置かれていた赤ワインのボトルを手に取ると、コルクの栓がしてある部分へと親指を押し当てると、まるで木の枝でも折るかのように軽々と先をへし折ってしまう。アダムはそのまま大口を開くとボトルの中身を一気に注ぎ込

み、数秒も掛からずに空にしてしまった。
空になったボトルを適当な場所へと放る。放られたボトルは地面を転がっていくが途中、何かに接触し動きを止める。空になったボトルを止めたのは同じく空になったボトルであり、その数は十を超えていた。大量のアルコールを摂取している筈であるがアダムの顔は赤み一つ無く、素面のままであった。
「へへへ、活気があるねぇ。こいつは良い肴だ」
一人上機嫌そうに笑いながら新たな赤ワインのボトルへと手を伸ばすが、それを掴むと突如動きが止まり、アダムは軽く顔を顰める。
「――いきなり話し掛けてくんなよ。驚いちまうだろうが」
アダムがこの場に他の誰かが居るかのように話し始める。
「まあ、首尾は上々だ。そう慌てなさんな」
止めていた動きを再開し、ボルトを開けると中身を飲みはじめる。
「ああ？　酒を飲んでるかって？　いや、飲んでねえよ。今飲んでるのは神の血だよ」
赤ワインのボトルを揺らしながら相手を皮肉るような冗談。神父という格好をしているが、そこには敬虔さなど皆無であった。
「へへへ、そう呆れるなよ。ちゃんと仕事は全うするからよぉ。まあ、多少のアドリブは入れさせてもらうが、最終的にはそっちの描いた図にはなる筈だ。――ところでよぉ」

アダムの視線が連れられていく一誠からシンの方へと向けられる。
「ちょいとばっかし気になる奴がいるなぁ。お前が見せてくれた情報には無い奴だ。あの赤龍帝と同じでここ最近、グレモリーの嬢ちゃんの所にやっかいになってる奴だと思うんだが……」
既にアダムの表情からは薄ら笑いは消えており、獣性を内に秘めた真剣な表情となっていた。
「直接視ていた赤龍帝だけじゃなく、あいつも俺の目に気付きやがったなぁ……それによぉ、あいつを見てるとどうしても奴らの顔が頭の中にチラつくんだよ……『魔人』どもの顔がなぁ……」
苦いものを噛み潰したような表情となった後、それを消し去る為に手に持ったワインを一気に喉へと流し込む。口の端から零れていく僅かな量を袖で拭い去ると、アダムは立ち上がり学園へと背中を向けた。
「もしもあの坊主が『魔人』と関わる奴だったら、少々面倒なことになるかもなぁ……『あいつ』もあの一件以来『魔人』に拘るようになったみたいだしな」
アダムにしか聞こえない姿無き相手からの返答を聞き、アダムは口を左右に大きく開いた笑みをその顔に張り付けた。
「なあに、心配することはねえよ。お前はそこでどっしりと構えてな。――それじゃあ

切らせてもらうぜ」

そう言うとアダムは一瞬だけ顔を顰める。それが相手との会話が切れたことを示していた。

アダムは大量の飲酒をした後でもしっかりとした足取りで建物の屋上から後にしようとする。鼻唄を唄いながら数歩ほど歩いたとき、首だけを後ろに向けて駒王学園を見る。

「……やっぱ、少しだけ接触してみるかぁ。聖剣絡みでもうちょい人手が欲しいと思ってたしなぁ……」

アダムは薄ら笑いを浮かべながら、建物の上から見える街のあちこちに視線を移動し続ける。視線を向ける先、そこには彼にしか見えないものが映り込んでいた。

「あの爺の仕業かねぇ？　早めに手を打っておかないと消えるかもな、この街」

◇

黒い雲に覆われ薄暗くなった空の下で、リアス一行はある場所を目指し移動をしていた。目指す場所は街から少し離れた場所にある、とある廃屋。そこを目指す目的は、そこに住むはぐれ悪魔の討伐の為であった。

球技大会が終わったすぐ後に冥界からはぐれ悪魔の討伐の通達が届き、すでに何人かが犠牲となっているのを聞き一刻も早く動くこととなり、球技大会優勝の余韻に浸る暇も無く行動を開始した。

転生魔法陣を使用すればすぐにでも行くことの出来る距離ではあるが、使った場合転送先のはぐれ悪魔に気付かれ身を隠される危険性を考え、足を使っての移動となったが、その道中の空気は非常に重たいものであった。

その原因となっているのが、今も感情を露わにせず昏い気配を纏ったまま黙々と歩く木場の存在であった。球技大会での木場ははっきりと言えば周りの士気を下げかねない程、非協力的であり集中力も欠けた動きが目立っていた。その度にリアスが注意し一誠も叱咤するが態度を改める様子は最後までなく、木場への不審が多少なりともオカルト研究部のメンバーの中に生まれていた。

そのせいか道中は会話も少なく、同行しているいつもはお喋りのピクシーとジャックフロストもその空気のせいで沈黙をしていた。

「着いたわよ」

長い沈黙を終えて目的の場所へと辿り着く一向。廃屋は元は豪邸であったのか普通に一軒家の二倍以上の大きさがあるが、外から見ても至る所の窓ガラスが割られており辺りには雑草が好き放題に伸びていた。

到着すると、重い空気から解放されたことを喜ぶように、一誠は我先にと『赤龍帝の籠手』を顕現させる。
「よし！　いつも通り俺と間薙と小猫ちゃん、そして木場が先行していきますね、部長」
「ええ、頼むわ」
「木場も気合入れろよ！」
悪くなった空気を払拭させようと明るく振る舞おうとする一誠であったが、木場はその気持ちに気付いていないのか生返事で答えた後に、そこで初めて魔剣を創造した。
その態度に一抹の不安を覚えながらも今ははぐれ悪魔の討伐を優先することにし、廃屋の扉の前に小猫が立つ。
その細い腕から繰り出される剛力によって扉は一瞬にして粉砕され、それと同時に一誠、木場、シンが中へと走り込んでいった。
扉から入ったすぐ先にはホールとなっており空間が広がっていく。奥には二階へと上がる為の階段が左右に分かれて作られている。
「とりあえずは探索だな」
「――いや、その必要は無い」
階段近くまで入り一誠が提案をするが、シンは却下する。
「もうここにいる。散れ！」

シンの言葉を聞き木場と一誠は反射的にその場から跳び去り、続いてシンもその場から離れる。すると天井から何かが落下し、その衝撃で床に張り巡らされて板が一気に砕け散り、長年積もっていたと思われる埃が舞い上がる。

「みんな、大丈夫!?」

安否を気遣うリアスの声が聞こえたが、それに返事をしている余裕は無い。砕けた板の中から巨大な鋏が一誠とシン目掛けて突き出されてきたからだ。

それを一誠は上体を捻って辛うじて躱し、シンの方も紋様が浮かんだ右手を鋏の側面へと叩きつけ軌道を力で逸らす。

奇襲の失敗を悟ったのかその姿を開いた穴から見せるはぐれ悪魔であったが、その姿を見た一誠が思わず嫌悪感を帯びた声を出した。

「うげ……」

這い出てきたはぐれ悪魔、上半身は成人男性の見た目であり、容姿も栗色の髪に甘い顔立ちと、決して悪いものではない。問題なのはそこから下の下半身の部分であった。腰から下は節足動物の蠍の様な形をしており色は黄土色、上と下との繋ぎ目部分には円形状の大きな口があり、そこからは喉の奥まで隙間なく牙が生え揃っている。そしてその口に両端からは先程一誠たちを襲った大きな鋏が生え、カチカチと音を鳴らして開閉している。

はぐれ悪魔の見た目のアンバランスさは独特の嫌悪を与えるものであり、長いこと討伐を行っていたリアスたちは見慣れているのか平然としているが、アーシアはその姿に表情を青くしていた。

はぐれ悪魔の討伐には初めて参加するシンは表情を変えることはなかったが、人外の姿をした目の前の存在に何故か既視感を覚える。以前何処かで似たような存在と対峙したことがあるようなというおぼろげな感覚であった。

『#$%&☒〝#%%！　$%%&＊＊&%##！』

はぐれ悪魔が上の人の部分と下の大口から同時に言語と認識出来ない叫びを上げる。悪魔となるとあらゆる言葉を理解することが出来る能力を得ることが出来るが、シンにはその能力が備わっていない為何を言っているのか全く分からない。しかし、はぐれ悪魔が激怒していることだけは理解することは出来る。

「；＊#$%&☒＊／？＋＋！」

意味不明な咆哮を廃屋内に響かせながら、はぐれ悪魔がその蠍の胴体の先端にある長い尾を鞭の様にして振るう。一般人ならば直撃すれば間違いなく分断される速度と重さを秘めた攻撃、だがこの場にいるのは全員一般人と程遠い人外であった。

振るわれた高速の尾を、扉から入ってきた小猫が床の板に両足を叩きつけて、その身で受け止める。自分の体よりも大きな尾を受け止めた小猫は何枚も床板を砕きながら

尾に押されていくが、ある程度の距離まで動かされると尾の力を完全に殺し、微動だにしなくなる。

「……軽いです」

振り払おうと尾を左右や上下に激しく動かすが、小猫は先端をしっかりと両手で掴んだままで引きはがすことが出来ず、無駄な抵抗へと終わる。

「ナイス！　小猫ちゃん！」

『Ｂｏｏｓｔ！』

小猫が抑え込んでいる間に倍加の時間が経過し、身体能力が向上した一誠がはぐれ悪魔へと向かって走り出そうとする。それを見たはぐれ悪魔は大口を一旦閉じ、蠍の腹部波打たせると閉じた大口から緑色の粘液を吐き出した。

それを慌てて躱す一誠。粘液が壁に触れると激しい音を立てて壁が溶解していく。吐き出されたものが強酸性の液体であることを理解した一誠は額から冷や汗を流すものの、表情は落ち着いている。それは眷属悪魔になってから積み重ねてきた訓練と実戦によって出来た自信であり、少なくとも目の前の存在に恐ろしさは感じつつも、負けるという考えは浮かぶことは無かった。

はぐれ悪魔が再び腹部を波立たせる。もう一度同じ攻撃が来ると思い身構える一誠であったが、その大口の向きが吐き出される直前になって移動し狙いが一誠から外れ

る。
　その大口の向かう先へと視線を向ける一誠。そこにあったのは、剣を構えずに立ち尽くしている木場の姿。その目は攻撃をしようとするはぐれ悪魔が入っておらず、戦いの場であるまじき無防備を曝け出していた。
「木場ッ！　馬鹿野郎！」
　気付いた一誠が木場に向かって飛び掛かり、叩きつける様に地面へと押し倒す。そのまま木場の上に覆いかぶさるようにして放たれる攻撃に身を盾にしようとする一誠であったが――
『％＆＃ッ！』
　悶絶した声を出すはぐれ悪魔。伏せていた顔を上げた一誠が見たのははぐれ悪魔の腹部に拳を突き刺すシンと、全身から燃え立つような紅い魔力を放ち、はぐれ悪魔の上半身の半分を消し飛ばしたリアスであった。
「イッセー、祐斗をしばらく押さえつけていなさい」
　冷たく響くリアスの指示。それだけで一誠はリアスが完全に怒っているのを理解、その迫力に無言で何度も首を縦に振る。
　殴られた痛みと消し去られた痛みで嘔吐のように大口から絶え間なく溶解液を垂れ流し、床から白煙を立ち昇らせる。

「……えい」
　動きの鈍くなったはぐれ悪魔を見て、小猫は掴んでいた尾を勢いよく持ち上げる。初めは四肢で耐えようとしたはぐれ悪魔であったが、床に引っ掛けた足の先は無理矢理剥がされ、巨体が浮き上がる。そして小猫はその身体を地面へと叩きつけ、はぐれ悪魔の全身を強打した。
『＄＃％＆……』
　苦鳴らしき音を洩らすはぐれ悪魔であったが、それを聞きながらもシンは躊躇う仕草は一切見せず、俯く様な状態となった人型の上半身の顎を拳で下から突き上げる。口内から血を撒き散らしながら仰向けに倒れるはぐれ悪魔、その下半身の肢はピクピクと痙攣してもがく。
「朱乃、止めは貴女にまかせるわ」
「はい。部長」
　リアスの指示を聞き、朱乃がはぐれ悪魔に向けて手を振るう。それを見て一同がはぐれ悪魔から離れ、部屋の隅へと移動する。すると仰向けに倒れたはぐれ悪魔の上に魔力の塊が複数形成され、爆ぜる音と共に青白い光を放ち始めた。
「さようなら、化け物さん。今日は少し楽しむ気分じゃないので」
　別れの言葉を告げると形成された魔力の光が最高潮にまで達し、それらが幾本の雷と

なってはぐれ悪魔の体を貫く。激しい閃光の中ではぐれ悪魔が悲鳴を上げるが、それらは雷の轟音に飲まれ消えていった。

閃光が収まり落雷場所に目を向けるとそこには、ほんの数秒まで醜悪な姿をしたはぐれ悪魔の焼け焦げた姿が残っている。

皮肉にも、生きていたときの姿よりも死んだ後の姿の方が嫌悪を感じることがなかった。

◇

乾いた音が廃屋の前で響く。その音の中心では頬を赤く腫らした木場と、平手打ちをした格好のリアスがいた。

「祐斗……いい加減にしなさい。ここまでしないと貴方の目は覚めないのかしら?」

語気に明らかな怒りが含まれる。祐斗の行動に何度か怒ることはあったが、今回の行動は限度を超えていたらしくリアスの手が出た。しかし、それを貰った木場の反応は非常に薄く冷めた表情のままであった。

「戦いの中で気を抜くなんて貴方らしくないわ。もし、イッセーやシンが貴方を助けようとしなかったら死んでいたのかもしれないのよ!」

「僕らしくない……ですか」
　木場の顔に自嘲する笑みが浮かぶ。だが、次のときにはそれは消え、いつもの様な爽やかな笑みを浮かべていた。
「すみません。最近体調が悪いもので気を抜いてしまいました。イッセーくん、間薙くん、今日のことはありがとう。ああ、もう遅いですし僕は帰りますね」
　早口で喋り終えると、一刻もこの場から去りたいのかさっさと背を向ける。そんな木場に一誠が声を掛ける。
「おい、待てよ」
「……何だい？」
「本当にどうしたんだよ。俺たちは仲間の筈だろ？　お前みたいに今まで引っ張ってきてくれた奴がそんな様子じゃ心配しちまうよ」
　諭すような一誠の言葉。今までならその役目は木場が行っていた筈であるが、その木場が諭されている。これを見て一誠が成長したととるか、木場が衰えたととるか、悩ませる光景であった。
「心配……仲間……か。イッセーくん、それを臆することなく言えるなんてやっぱり熱いねキミは。でもね、心配をしなくてもいいよ。今まで見ていた僕は僕じゃない。今、ここにいる僕が本来の僕なんだ」

暗い陰のある笑みでそう告げる木場に一誠は困惑した表情となる。
「ただ戻っただけなんだ……本来在るべき僕に……聖剣（エクスカリバー）を破壊し復讐する為に生きる僕に」
強く、暗く、冷たい決意に満ちた木場の声に誰もが言葉を失う。それを見た後に、それじゃあと言って帰ろうとする木場だったが、その右肩を強く掴まれ動きが止まる。
「――キミも僕に何か用かい？」
「ああ、一言な」
肩を掴むシンに木場が冷たい視線を向ける。
「放してくれないかな？　今日はもう誰とも会話する気にはなれないんだ」
「断る、と言ったら？」
「……力尽くでも放してもらうことになるよ？」
「そうか……なら、断る」
刹那、背を向けた格好から木場は片足を軸にして掴まれた手を弾くように旋回。その間に手の中で一本の魔剣を創造し、背後に立つシンへと向かって横薙ぎに払う。
「祐斗！」
その凶行にリアスが溜まらず叫ぶが、シンの方も右手の紋様を輝かせ剣を振るう木場の頭部に向かい拳を放つ。

払われた木場の魔剣はシンの首筋数ミリの所で停止し、シンの振るわれた拳もまた木場の側頭部の数ミリ手前で寸止めされている。
「このままだとキミの首が宙へと舞うことになるよ」
「やってみたらどうだ。そのときはお前の頭の中身が地面に零れるだけだ」
互いに温度を感じさせない喋り。それが周りの心臓を凍り付かせる。
「やめろ！　木場に間薙も！」
冗談では済まされない両者の行動。仲間である二人の殺し合い寸前の空気に一誠が声を張り上げた。二人は互いに冷めきった視線を衝突させていたが、それ以上は動くことなくあっさりと離れ、背を向けあう。
そのまま無言で去り、夜の中に消えていく木場の姿をシンは一度も見ることは無かった。
一触即発ともいえる状況が終わり、張り詰めていた空気が弛緩していく。先程の出来事があっても特に感情の色を見せないシンにリアスが近付く。
「ごめんなさい。主としてあの子に代わって私が謝るわ。……失望しないであげてね。祐斗にも事情があるから……」
「気にしないで下さい。――あいつも本気じゃなかったみたいですから」
シンが知る本来の木場の速度ならば、こちらが動くよりも早く剣と突き付けることが

出来ると思っていた。しかし、実際はほぼ互角の結末。その結果にシンは木場の手加減を感じていた。

「……雨、降ってきましたね」

シンが呟くとリアスは頬に雨粒が跳ねるのを感じた。次第にその量が多くなり小雨となっていく。

「俺ももう帰ります。お疲れ様でした。行くぞ、二人とも」

一礼し木場と同じく帰ろうとするシンの後ろに、ピクシーとジャックフロストが付いていく。

「じゃあねー」

「バイバイホー」

別れの挨拶も皆に済ませ、歩き始めようとしたとき、一誠がシンへと声を掛けた。

「……なあ、間薙」

「何だ？」

「お前も……本気じゃなかったよな……？」

一誠の問いに僅かな沈黙がシンに生まれる。そして、シンは顔だけを一誠たちへ向け、一言だけ言った。

「……ああ、勿論だ」

◇

小雨の勢いが増していき本格的な雨へと変化していく中、シンは傘を差さず、逃れる為に走ることもせず、ただその雨滴を全身に浴びていた。

一誠たちへ言った言葉。それに含まれる意志は決して嘘では無い。だが、根本的に間違っていることが一つだけあった。

シンは木場に拳を振るう気など全く無かったのだ。剣を振るうその手を掴もうと頭の中で考え行動に移したはずが、気付けば拳を固く握り締め、それを木場の頭部へと躊躇う事無く振るっていた。

意志と無関係に動いた自らの肉体。今日に至るまで少なくともそのようなことがあったことなどシンの記憶には無い。

（これの影響か……）

無言で自らの右腕を見つめる。初めは手の甲だけであった紋様も既に肘の辺りまで伸び、シンの右腕の中で成長、あるいは浸食していく力に言葉に出来ないものを感じていた。

（今更ながら悪魔の力という以外は何も知らないな、俺は）

自分の無知さ加減を内心で嘲笑する。
「あっ」
「ヒホッ」
二人の声の後に軽い衝撃が肩に走る。見るとそこには傘を差す神父の姿があった。
「おお、申し訳ない。御怪我は有りませんか？」
「いえ、少し当たっただけなので。こちらこそすみません」
「いえいえ、こちらの方こそ……おや？　よく見れば傘を差していませんね。お詫びというのは何ですが、私の傘を使っては――」
大げさな神父の態度にシンはお気持ちだけで結構であると告げる。神父は残念そうな表情をしていたが、すぐに微笑を浮かべ胸に下げた十字架を握り締める。
「その殊勝な態度はいつも我らの主が見ています。貴方に神の祝福があらんことを」
「……どうも」
ここまでくると流石に戸惑いを感じてしまい、シンは軽く頭を下げた後に少し早足で神父の下を離れていく。その後ろを置いていかれまいとピクシーとジャックフロストが駆けていった。
「いやいや、本当に申し訳ないことをしたなぁ」
先程まで微笑のまま神父は服の袖の下からある物を取り出す。革製のカバーが施さ

れた手帳、それを開くと中にはシンの顔写真と学年、そして現在の住所が記されている。
「成程、間薙シンという名か。近いうちにこれを届けに挨拶しに行かせてもらおうか」
神父――アダムは片方の口角を上げて笑う。その笑みから微かに覗くのは、異様なまでに鋭いものであった。

暗躍、神父

シンが自宅へと帰宅している中、木場は家の方向とは逆の方へと歩を進めていた。あの日、アダムと名乗る神父から聖剣がこの街に潜んでいると聞かされた時から、彼は学校で過ごす時間以外を全て聖剣の発見に費やしていた。

小雨であった雨は雨脚を早くし、傘をささない木場を濡らす。制服は水気を吸って重くなり、髪は雨のせいで額などに張り付くが、木場はそれに対して何も反応は示さず、ただ雨にされるがままの状態であった。

いつもならば射抜く様な瞳と寒気立つ程の気配を纏って聖剣を探す木場であったが、今夜の木場にその鋭さも危うさも感じられず瞳は陰り、纏う雰囲気は迷子のような弱々しさがあった。

（今の僕は最低だな……）

球技大会から先程までのはぐれ悪魔討伐までのことを振り返り、心の裡で自らを罵る。

自分の命を救い上げ、暖かな居場所と誇るべき名を与えてくれたリアスには、終始反抗的な態度で接し、自分を思って叱ってくれたことに対しても、一切聞く耳を持たな

かったこと。

不甲斐なくなってしまった自分の穴埋めをするように、誰よりも一生懸命に動いてくれた一誠、本来ならば悪魔として新人である彼を、先輩である自分が導く、あるいは守る立場にあるにもかかわらず、はぐれ悪魔との戦いで致命的な隙を見せてしまい、そんな自分を身を挺して庇う一誠には、冷め切った対応をしてしまった。

ライザーとの戦いでは互いに背を預けて戦い、過去のしがらみに振り回されそうになったときそれを制してくれたシンには、剣を突き付けてしまうという蛮行。あの行動で、木場は完全にシンからは愛想を尽かされたと考えていた。

リアスの眷属として長い付き合いのある朱乃と小猫。人一倍他人に優しいアーシア。いつも楽しそうに話しかけてきてくれるピクシーとジャックフロスト。

（僕はそれをみんな踏み躙ったんだ……）

罪悪感が無いというならば嘘になる。だが、今の木場にはその罪悪感すら押し殺して進まなければならない想いがあった。共に笑い、共に泣き、共に苦しみ、共に祈り、共に歌い、共に分かち合い、共に耐え、共に夢を見、そして共に生きたかった今は無き同士の無念を晴らす為に、その生や死が何一つ無駄ではなかったことを証明する為に――

――聖剣を破壊する。

それを成すには駒王学園の生徒であり、リアス・グレモリーの眷属『騎士』である『木

場祐斗』では駄目なのだ。それに相応しいのは独りであり、復讐者であった『木場祐斗』である前の自分。

（これでいい……これで良かったんだ）

そう自分に言い聞かせる木場。そのとき木場の耳に地面の雨が跳ねる音が入ってくる。溜まった雨水を踏みつけて鳴ったのであろうその音に木場の目は気だるげな眼差しで鳴った方を見る。

そして、その眼差しを気だるげさから嫌悪へと変え、そのまま驚きへと変える。

音源に立っていたのは木場が心底侮蔑する神父の姿だった。この間会ったアダムと名乗る神父と全く同じ格好から『悪魔祓い』と推測するが、アダムと服装が唯一違う点がある。

その神父の腹部から下が赤黒く変色しており、そこに押し当てている手の隙間からは、流れていく血液と臓器らしき異物がはみ出していた。

神父は木場の姿を見て、救いを求める様に空いた方の手を震えながら伸ばす。一歩、二歩と力無い歩みで雨に濡れたアスファルトの上に流れ落ちた血液で足跡を残すが、そのたった二歩が神父にとって残された力であった。

三歩目を踏み出そうとした神父は青白い表情から何かが抜け落ちたかのように一瞬苦痛に満ちた顔から表情を失うと白目を剥き、木場の前で倒れ伏す。

流石に無視することなど出来ず倒れた神父の首筋に指先を当てるが、そこからは命の鼓動は感じられない。聴力を集中させ呼気の反応も確かめてみるが結果は同じであった。

木場はうつ伏せに倒れた神父の体を起こし傷口を確認する。腹部の端から端まで一直線に裂かれた傷、その真一文字の傷は明らかに包丁などといった身近な刃物で出来たものでは無く、剣を扱う身である木場の目からしてそれは剣、もしくは刀によるものであった。

（……衣服の上から斬られているのに切断部分の傷が綺麗すぎる。振るわれた武器は相当な業物……そして振るった人物は相当斬り慣れている）

傷の具合からそう推理する木場。その瞬間、前触れも無く木場の首筋が粟立つ。外部から迫る危機に木場は脊髄反射で魔剣を創造すると、間髪入れず背負うような形で魔剣を背後へと回す。

雨音の中に澄み渡る金属音。背後から迫る正体不明の力を、木場は魔剣の腹で受け止めていた。そしてこの段階になって木場は背後の人物の顔を見る。

「やっほー。おひさ。クソ悪魔のクソ『騎士』君」

その人物は他人の神経を逆なでする甲高い声を出しながら、挑発するように長い舌を口から出し、舌先を蛇の様に左右へと揺らす。

「……まさか、まだこの街に居たとはね」
「ヒャハハハハ！　ウフッ！　あのときの火照った感触が忘れなくて居座っちゃったでございます。……なーんてウッソだよーん！　実は最近来たばっかなのでしたよーん！　でも、でもこうやって運命の再会が出来るなんて、俺達赤い糸で結ばれた関係？　あひゃひゃひゃひゃ！　だとしたら今すぐその糸使ってチミのこと縊り殺してぇー！」
　返り血を浴びたのか、赤い斑点が所々に出来た神父服を纏った白髪の少年――『はぐれ悪魔祓い』のフリード・セルゼンが、再び木場の前へと姿を現したのであった。
「ふむふむ。周りにはお前さん以外にはだーれも居ないみたいでございやすな？　あっ、その足元に転がっている生ごみはノーカウントなんで。ありゃ？　でも死んでる奴が『生ごみ』て少し変ですねぇー、うん、訂正！　その『死ごみ』はノーカウントなんで」
　舌にモーターでも入れているのか凄まじい程の早さで言葉を並べていくが、そのどれもが意味不明かつ常人には理解できない内容であり、木場もまたフリードのその饒舌さに目に見える嫌悪を現す。
「相変わらず、良く喋るね……キミは！」
　押し付けられていた剣を力で強引に跳ね返すとそのまま体の向きをフリードへと向け、その勢いのまま魔剣を振るう。剣を払われたことで剣を掲げる格好となり、胴体を

大きく開いた形となったフリードだが、その表情からは他者を嘲笑う笑みは消えず木場の魔剣が届くよりも前に地面を両足で蹴りつけ後方へと滑る様にして後退した。
「おやおやぁん？　どうしちゃったのかなぁ？　前のキミはもうちょっとクールだったはずだったけどなー、何だか激しく怒ってごさりませんことよ。ああ、そうかもしかしてあの日でございますか？」
　絶えず他人を罵倒し続けるフリード。そのふざけた態度と口調は只でさえ精神的に過敏になっている木場に更なる怒りを募らせる。
「……キミはもう少し口数を減らした方がいいと思うよ？　今の僕は至極機嫌が悪くてね」
「へえ、そいつはご愁傷様でやんすね。こっちはつまんない、つまーんないストーカー神父たちの駆除をしていたところに殺ってやりたい悪魔ベストテンに入るあんさんが現れてくれてとーっても気分が良いんだぴょーん！　だからさ、死にやがれよクソ悪魔がぁ！」
　鋭い目で怒気と殺気を纏う木場に対し、最初はにやついていたフリードも喋り終わりになるころには目を極限まで見開き血走った眼で殺意を吐き出すという情緒不安定さを見せる。
「あ、そうだ」

するとフリードは一気に感情を冷まさせ、激情に満ちた表情から元の癇に障る笑みへと戻る。
「ぜひとも試したかったことがあるんだよね」
片手で持っていた剣を木場へと見せつける様にして水平に構える。フリードの持つ剣は特に目立つ装飾の無い一般的な形をした両刃の剣、それが突如として剣身から光を放ち始める。その光は太陽、または月を彷彿とさせる一切の濁りも無い澄み切った光であり、ただ輝くだけで周囲のものが浄化されていくと錯覚させる程の神秘的なものであった。
その光を目の当たりにして木場の表情から冷静さは完全に奪われる。目は限界まで見開かれ、動揺から手に持つ魔剣を細かく震わせた。
（その光……！　その気配……！　その輝き……！）
忘れられる筈がない、忘れることなど決してない。一度はその剣に人生を捧げ、そしてその剣によって人生を奪われた。
「エクス……カリバー……！」
怒りで噛み締めた唇から血を流しながら、この世で最も忌むべき名を口にする。
「ご名答！　そうでーす！　あの有名なエクスカリバーさんでーす！　チョー有名なコレとお前さんの魔剣、どっちが強いか是非とも試して――およ？」

最後まで聞き終わる前に木場がフリードの懐に潜り込み、その首を刈り取る為に魔剣を首目掛け振り上げる。だが、木場の先手に対しフリードは背中と地面がほぼ平行になるまで上体を逸らしてそれを回避し、仰け反った形から体を起こす反動でエクスカリバーを木場の頭上へと叩き伏せるようにして降ろす。

雨の中でも突き抜ける様に響く二つの金属音。鍔迫り合いの形となった両者は至近距離で、互いの瞳に映る感情を相手へとぶつけていた。

木場の瞳に映るのは怒りと憎悪、フリードの瞳に映るのは狂気と殺意。

「やっと……やっと見つけた！」

「んん？　その口振り、もしかしてこのエクスカリバーがこの街にあるの知ってたのん？」

「キミに教える義務は無い！」

木場は両手で持っていた魔剣から手を片方放すと、一秒に満たない時間で新たな魔剣を創造する。剣身が闇に形を与えた様な黒一色に染まっているそれはかつてフリードを追い詰めたときに用いた『光喰剣〈ホーリー・イレイザー〉』。エクスカリバーの放つ光に対抗する為に創造をした。

木場は『光喰剣』をフリードの首筋に向けて振るうが、その斬撃を鼻で笑うとエクスカリバーの剣身を滑らせ、刃先でその一撃を軽々と受け止める。だが、木場にとっては

受け止めさせることが目的であり、真の狙いは『光喰剣』の持つ光を吸収する能力によってエクスカリバーの放つ輝きを浸食させることだった。

「――喰らえ！」

接触した部分からエクスカリバーに『光喰剣』の闇が触手の様に伸びていく。しかし――

「ハッハー！　チミィ、聖剣を舐めすぎじゃねぇ！」

そのフリードの言葉通り『光喰剣』の闇がエクスカリバーの光を吸収した途端、内側から爆ぜる様にして闇が消滅する。

「ちぃ！」

事態はそれだけでは収まらず、触れ合っていた部分も闇が錆の様に剥がれ落ちていき『光喰剣』が逆にエクスカリバーの光によって崩れ落ちていく。

（これでも……届かないのか……！）

数年間一度たりとも手を抜いて鍛錬をしたことはない。今にも綻びていく魔剣『光喰剣』は木場が最初に創造し銘々した魔剣であり、数ある魔剣の中でも最も手に馴染み、最も練度上げてきた魔剣、それが脆くも崩れていく。動揺が無いと言えば嘘になる、それは木場にとって自らの努力が崩れていくかのような錯覚に見えた。

微かに揺ぐ精神の中でそれでも今まで培って出来た精神の芯が、これ以上の崩壊は不

味いと判断させて木場は『光喰剣』をエクスカリバーから離すが、その際に木場の裡に生まれていた細やかな精神的動揺を、フリードは見逃さなかった。
　木場が魔剣を離すと同時に、フリードも握っていた両手の片方をエクスカリバーから離す。するとカチンという金属音がフリードから聞こえたかと思うと、袖下から拳銃が滑る様にして現れフリードの手の中に納まる。
　そして、ほんの一瞬ではあるが木場の意識がフリードからエクスカリバーへと注視した隙を狙い、手に持つ拳銃の銃身をエクスカリバーの剣身へと乗せ、銃口を木場へと向ける。
「フッフーン！　考えがスウィーツだねぇ！　死ねや」
　殺意を引き金に込め撃鉄が下ろされる。このとき木場の意識がようやくフリードへと向けられる。そのときには銃口から微かに見えた光に木場は回避することは不可能と判断し、両手に持つ魔剣を交差し次に来るであろう衝撃に備えた。
　撃鉄の下ろされた音の後に銃口から光が放たれる。だが、それはかつての弾丸の形状では無く、レーザーのように一直線に進む光線と化していた。光線が木場の魔剣へと接触したとき、均衡することなく易々と重ねられた魔剣を貫き彼方へと光は消えていく。
　幸いにも魔剣によって僅かに軌道を逸らせることが出来たおかげで、木場の耳のすぐ側を通っただけで済み木場に怪我一つ無いが、思わぬ攻撃により木場の表情に明らかな

動揺が混じる。
「どう？　どう？　驚いちゃった？　聖剣の光を受けたこの破壊力！　いやー、すんばらしいですねぇ！　今のは外しちゃったけど次は外さないよーん！」
　嬲るような笑みを浮かべ舌舐めずりをしながら銃口を木場へと向ける。木場もまた使命を果たす為に屈する訳にはいかず、再び左右の手に魔剣を創造した。
「面白い見世物だとは思うよ」
　吐き捨てる様に言う木場。それに対してフリードは歪な笑みを浮かべたまま片手に拳銃を袖の中へと仕舞う。
「なら次はすんごーく驚いちゃうか・も・よ！」
　不審な眼差しで見る木場の前でフリードは空いた方の手を腰の横へと持っていくと剣を抜くジェスチャーをする。
「はい！ちゅーもく！」
　ふざけた態度でフリードが見えない剣を突き付ける構えをとると、何も無い空間から滲み出てくるように新たな剣が姿を現す。
「まさか……！」
　息を呑む木場の前でその剣はエクスカリバーと同じ輝きを放ち始めた。
「そのまさかでーす！　これもエクスカリバーどぅえーす！　いいねぇ、その表情！

最高にそそられるわー！」
　二本目のエクスカリバーを前に木場は驚きを隠せない。フリードは哄笑しながら二つのエクスカリバーを交差し、その先端を木場に向ける。
「ウェックスカリヴァー！　とウェックスカリヴァー！　最高に贅沢な二刀流でございましょう！　奥さん！　さあ！　その気になる切れ味は目の前の悪魔を生け造りにしてご証明を！――あり？」
　意気込むフリードの耳元に直径が数センチ程の小規模な魔法陣が発生する。木場はすぐにそれが通信用の魔法陣であることに気付き、フリードの背後には少なくとも協力者、それもかなりの実力者が潜んでいることを暗示していた。でなければ、本来なら天使直轄の教会が保持している筈のエクスカリバーを、フリードが所持している説明が出来ない。
　エクスカリバーを木場に向けたまま、フリードは何やらぼそぼそと聞き取れない声で魔法陣の向こう側の人物と囁き合っていたが、一度だけ木場へと視線を向けた後、興醒めした表情で向けていた切っ先を下げた。
「はいはい。用事が入ったのでお楽しみ終了の時間でございます。名残惜しいですがまた来週！」
　フリードの袖口から黒い球体がいくつも零れ落ちそれが地面へと接触した瞬間、夜の

帳が真っ白に染め上げられるほどの閃光が発せられた。反射的にその光の前に腕を翳し防いでしまう木場。閃光は数秒後に消え、辺りはもとの暗い景色へと戻っていた。

木場は周囲を見渡すが、既にフリードの姿は無い。

逃げられた、そう考えた木場であったが即座にそれを否定する。

（――いや、違う）

二本目のエクスカリバーを出された時点で木場の勝率は限りなく低いものとなっていた。それを自覚しているが為に耐えがたい敗北感が心の中で重く圧し掛かる。

「見逃されたんだ……僕は……！」

激しく降り注ぐ雨。体中に降るそれは、木場には膝が折れてしまいそうになるほど重く感じられた。

◇

旧校舎のとある一室で制服の上着を脱いだシンはシャツの両腕の袖を捲り、両腕を突き上げる様にした状態で目を閉じ静かに魔力を集中させる。集中する意識が強い為か額からは汗が流れ、それが伝わって顎先から床に落ちる。その汗の後は床に幾十も跡を残している。

現在シンの居る部屋は、リアスたちの魔術によって防音と多少の衝撃に耐えられるよう強化されており、人気の無い山奥で合宿していたときのように少しだけ無茶な特訓が出来る環境を整えられていた。

ある程度まで魔力が両腕に溜まったのを感じ、シンは目を開けて己の両腕を見るがそれを見て若干表情を曇らせた。

シンの紋様が浮かぶ右手にはシンが想像していた通りの魔力が蓄積されており、右手全体が蛍火を思わせる魔力で輝いている。一方で左手の方は右手の半分以下の魔力しか蓄積されておらず、右手との露骨な差を現していた。

紋様の形状が変化する度に、シンは日々の訓練以上に精密な魔力の操作が出来る様になってきたが、最近になって紋様の無い左手との魔力操作の差が出始めてきていた。右手と同じぐらいの魔力を左手に送ると途端に留めるのが難しくなり暴発しそうになる。このせいでいまだに魔力剣の生成は右手のみでしか出来ず、それから派生させて生じさせる衝撃波も使用できない。

今までも右手や『氷の息』を主な武器として使用してきたが、これから先も右手のみで戦っていけるという楽観的な考えも無く、また新たな手札が欲しいと考え左手の魔力の操作を、出来れば右手並みにまで引き上げたいと思っていた。

そんなことを考えながらシンは壁に掛けてある時計を見る。シンがこの部屋に入っ

てから既に一時間以上が経過していた。
額の汗を拭いながらそろそろ部室へと戻ろうとしていたとき部屋の扉が開かれ、そこからピクシーとジャックフロストが顔を出す。
「シン、終わったかホー?」
「そろそろ帰ろうよ。アタシ、お腹すいたー」
「ああ、すぐ帰る準備をする」
シンが近くの椅子に掛けてある上着を着ながら二人に返事をする。シンは二人がこの特訓を見ていても暇であろうと判断し部室に預けていた。リアスたちの使い魔たちと戯れたり、アーシアや小猫と遊んでいる方が、訓練を見ているよりも二人にとっては有意義な時間であるとシンは考えていた。
制服を着たシンは一旦部室の方に顔を出してから帰ろうと扉を出ると、そこにリアスの使い魔である赤い蝙蝠が飛んできて、キーキーと何かを伝えてくる。シンには理解不能であったが、ピクシーが代わりに内容を通訳する。
「あのね、リアスがついでにイッセーを呼んできてほしいんだって。今、イッセーはあけのと一緒に居て、二人ともここからすぐ近くのあけの専用の教室に居るらしいよ」
ピクシーの通訳を聞いて分かったと使い魔の蝙蝠に伝える。リアスの蝙蝠は嬉しそうに鳴いた後、ピクシーとジャックフロストの側を飛んでから部室の方に帰って行っ

た。
「また明日も遊ぼうねー！」
「ヒーホー！　みんなにも伝えてホー！」
手を振って挨拶をし終えたのを見て、シンは頼まれた仕事をしに二人が居るという教室に足を向ける。その最中に何故あの二人が一緒なのかと一瞬考えたが、すぐに答えが浮かび上がった。
一誠がライザーとの一戦で、今持っている能力以上の力を引き出した代償として、自らの左腕を差し出すということがあった。その結果、一誠の左腕は赤い鱗に覆われた異形の腕と化し、日常生活に於いて支障をきたすものと思われていたが、あるとき一誠が朱乃に何処かへと連れられていき、戻ってきたときにはその異形の腕は元の人の腕に戻っていた。リアスと朱乃が説明するに、一誠の左腕の『神滅具』に宿る『赤龍帝の籠手』、その核である『赤龍帝・ドライグ』の魂から伝わってくるドラゴンの力が作用し、その左手を異形のものと変えていたという。
そこで何故、代償として肉体を異形化させるのかという疑問が部員たちから挙がるが、リアスはあくまで様々な文献から得た情報を合わせての推測だという前置きをしてから、自らの考えを語り出した。この異形化という現象は一誠の裡にいるドラゴンが自分たちの力を十分に発揮させることが出来る様にする、いわば改造行為ではないかとい

うものであった。如何に強力なドラゴンであろうと宿主が力を持たねばその脅威は発揮することは出来ない、ならば宿主の器を自分の力に適したものに変えればいい。しかし、そこには神器という枷と制約が付く、その二つを外す為には宿主の同意が必要であり、その同意を得る為に宿主に強力な力を与え、その代償に肉体の支配権の一部を得るのではないかと述べた。

最終的には全身が異形と化せば、宿っているドラゴンの力も十二分に発揮出来るかもしれない、とリアスは最後にそう付け加える。

話を聞き終わった直後の一誠は、異形化していた腕が治ったとき何故か浮かべていたニヤケ面を消して青い顔をした後、ちょっと待ってくださいと言って部室から出ていくと、何やら小声で言い争うのが聞こえてくるのであった。

その日より一定期間が経過しており、リアスからは一定の頻度でドラゴンの力を抜き出さなければならないという言葉をシンが覚えていた為、今はその最中であると考えていた。

シンが朱乃と一誠の居る教室の前に立つ。そのとき中から一誠と思わしき声が聞こえてきた。

「うひっ」

興奮して上擦った声。正直な感想として鳥肌が立つような声色であった。中で何が

行われているのか半ば嫌な予感がしつつも、とりあえず扉を二、三度ノックした後に二人の名前を呼ぶ。すると朱乃から入ってもいいという許可の返事が来た。

シンが扉を開くと中に居たのは上半身半裸状態の一誠に肌の色が透けて見える程薄い白装束を着た朱乃が抱き付いている光景であった。

「なになに？　どうしたの？」

「ヒホ？　なんで扉の前から動かないんだホ？」

その光景に思わず固まっているシンを不審に思い、ピクシーとジャックフロストが中を覗こうするが、それよりも早くシンは教室内に入り素早く扉を閉める。

「いい、お前らは入らなくていい。先に部室へ行っていろ」

「ええー、そう言われると気になるじゃん！」

「中で何があったんだホ！　気になるホー！」

「いいから先に行っていろ。部室の棚にお前たちの好物があるぞ」

「なら行く」

「お先にだホー！」

シンの話を聞くとあっさりと二人は引き、一目散に部室へと去って行った。ピクシーたちが居なくなったのを確かめると、いまだ入ってきた状態のままの一誠たちにぼそりとシンは言葉を洩らす。

「……場所を考えてくれ」
「いやいやいや！　そういうのじゃないから！　ドラゴンの力を抜く為の儀式だから！」
「そうですわ。誤解しちゃ駄目ですよ。いま、イッセーくんからドラゴンの気を抜いているんです。――こうやって」
そういって朱乃は徐に一誠の左手の指を口に咥え、明らかにわざとだと思える程の吸引音を立ててそれを吸う。一誠の顔は一気に紅潮し、その感触に声を出しそうになるが横で見ている友人の感情の起伏の無い視線を受け慌てて声を押し殺す。
「……もう少し時間が掛かりそうですか？」
「いいえ、もう終わっていますから」
一誠の指から口を離し、微笑む朱乃。先程の行為は儀式の内容を実践してみせるのではなく、一誠の反応を窺う意味合いが含まれているものに感じられた。ただの悪戯心、あるいはサディスティックな性格からくる行為か。シンは以前、朱乃は天性のサド気質を備えていると聞かされたことがあるので、恐らくは後者であると考える。
「部長が呼んでいるから早く行け」
「お、おお！」
てきぱきとした動きで上着を着ると、一誠は慌てた様子で教室の外へと飛び出してい

く。

「ああ、なんていうか、うーん……」

教室から出た一誠はしばらく歩いた後に、先程の光景を思い出し軽く頭を抱える。異性に先程の光景を見られても気不味いが、同性に見られてもやはり気不味い。ましてや日頃から自分と比べても真面目とも言える相手に見られ、なおかつ木場の一件があっただけに薄情な奴であると思われたかもしれないと考えていた。

『いちいち女とイチャついていたのを見られたぐらいで気を滅入らせるなよ、相棒』

「そう言ってもな……」

『はっ！　このままされても別にいいと考えていた癖にか？』

「うっ！　くっ！　自分の煩悩が憎い！」

誰も居ない廊下で言葉を交わし続ける一誠。しかしそれは独り言では無く、一誠の内に宿る『赤龍帝・ドライグ』と会話をしているが為であった。ライザーとの戦いで『禁手化〈バランスブレイク〉』を使用して以降会話をする機会が無かったが、最近になって今のように会話を交わすぐらいまでの友好関係、あるいは繋がりが二人の中で出来ていた。

「にしても腕が治るのはいいけど……本当に俺、ドラゴンになったりしないよな？」

『くどいぜ、相棒。確かにリアス・グレモリーの言っていることに特に間違いは無い。だ

けどな、一つだけ間違っていることがある。それはな、俺が自分を強くさせるために宿主を踏み台にはしないことだ』

真摯な響きを持つドライグの言葉にそれ以上は一誠も言えなかった。左腕を代償にしたのは一誠自身も了解したことであり、それに見合う以上のものを得ることが出来た。

『まあ、身体の一部を代償にするのは『神器』の特性みたいなもんだ。俺だけじゃなく他の『神器』もそういった特性を持つものもある。なるべく早く俺の力に慣れるようにしろよ？　気付いたら首から下がドラゴンになっていたなんて、笑い話にもならないからな』

ドライグはからかいつつも宿主を気遣うようなことを言う。その言葉に一誠は改めて気を引き締め、胸の内にある己の今の目標を口にする。

「分かっているさ、ドライグ！　俺もこのままを甘んじるつもりはない！　そう全ては部長のおっぱいを吸う為に！」

『……ああ、うん、気合だけは伝わってくるな』

「ああ！　吸うさ！　絶対に吸ってやる！」

「何を吸うの？」

「何を吸うんだホ？」

「えっ？　うお！」
　廊下の曲がり角からひょっこりと顔を出すピクシーとジャックフロストに一誠は裏返った声を出し驚く。その後も一体何を一誠が言っていたのかしつこく聞いてくる二人に、しどろもどろな言葉を出しながら目を泳がせる一誠。
　そんな一誠の頭の中でドライグの溜息だけははっきりと聞こえるのであった。
「うふふ、貴方じゃなくてリアスだったなら一体どんな反応をしていたんでしょうね？」
　一誠が去って行った後、朱乃はクスクスと小悪魔のような笑みを浮かべる。普段は年齢以上の艶がある朱乃であるが、このときは年相応の幼さが感じられる。しかし、格好自体はとても幼さを感じさせるものではなく、シンはじろじろと見る訳にもいかず適当な方向に顔を向け、視線を逸らしつつ朱乃に言葉を返す。
「きっと部長はやきもちを焼いて、一誠はそれを見て困惑しているんじゃないですか？」
「あら？　間薙くんもそう思います？　さっきイッセーくんから聞きましたけどまだ進展は無いみたいですね。イッセーくんもそうですけど本当、リアスやアーシアちゃんも奥手ですね、うふふ」
　朱乃との会話の中、シンは朱乃がリアスのことを普段読んでいる『部長』ではなく『リアス』と呼んでいることに気付く。そして改めてそこで思う。リアスと一誠以外の眷属はどれほどの年月の付き合いがあるのか、と。

「姫島先輩は部長との付き合いは長いんですか？」
　思いついた疑問を口にする。
「うふふ、そうですわね。私が十歳のときからの付き合いですわ。長いと言えば長いのかもしれませんね。眷属になったのはジュニアハイスクールに入る前ぐらいでしたけど」
　その記憶には善き思い出と悪い思い出が混在しているのか楽し気であった微笑みが、やや湿っぽい笑みへと変わる。
「それから少し経ったぐらいですね……祐斗くんがリアスの眷属になったのは」
　その言葉に、シンの軽く握っていた拳の指先が意図せず動く。朱乃に気付かれない程度の動きであったが、それはシン自身にしか分からない微かな動揺であった。
「今の彼は初めて会ったときの彼とよく似ているわ……思い詰めていて、常に張り詰めた顔をしていたときの彼に」
「……そうですか」
　短い言葉を呟くように行った後、シンは教室の扉に手をかける。
「でも、あの頃と今の彼とでは違うものがある。リアスや私も含めた眷属、そして貴方もよ、間薙くん」
　シンは何も言わず視線だけを朱乃へと向けた。

「きっと彼が苦しんでいるときがあったら、貴方も支えるのを手伝ってくれるかしら?」
朱乃の言葉にはからかうような喜色も試すような色も無く、ただ純粋に木場を思って発せられた願いが込められていた。
シンはそれを聞いた後、無言で教室の扉を開き外へと一歩踏み出す。そして扉を閉める間際――
「そうなったときは、そうなればいいとは思っています。――あと早く着替えないと風邪を引きますよ」
――そう言葉を残して、教室の扉を閉めるのであった。

◇

その日の部活動を終えピクシーたちを連れて帰路に着くシンであったが、その道中どこか見覚えのある人物が待ち構えていた。
「どうも。今、お帰りですか?」
神父服を纏った男性。その親しげに話しかけて来るがシンにはその人物の名に心当たりはなかった。
「ああ、自己紹介がまだでしたね。私の名はアダムと申します。今日はこれを届けに参

りました」
　アダムは懐から生徒手帳を取り出してシンへと渡す。中身を確認すると間違いなくそれはシンの生徒手帳であった。アダムはこれを貴方とぶつかってしまったときに拾ったのだと説明をした。そこでシンはどうして目の前の神父に見覚えがあるのか合点がいく、確かに雨の時誤って接触してしまった人物であった。
「どうもありがとうございます」
「いえいえ。神に仕える身として当然のことをしたまでです。此方こそ、住所を調べるためとはいえ貴方の生徒手帳を勝手に覗いてしまいましたから」
　頭を下げるシンに謙遜した態度を取るアダム。しかし、次の言葉で場の空気が一転する。
「――だからそこの御二人も私に礼なんて不要ですよ」
　不意に掛けられた言葉にピクシーとジャックフロストの肩が跳ね上がる。適当に言ったのではなくアダムは態々目線を下げて二人を見ながら喋りかけていた。
「珍しいですね。こんな人の大勢いる地に妖精と雪の妖精も居るなんて、それをひき連れているあなたも珍しいですが」
　人の良さそうな笑みが消え、にやにやと相手を挑発する底意地の悪さを感じさせる笑みを浮かべるアダムに、シンは穿つ様な眼差しを向ける。そのとき、シンの目の前の人

物に対しある種の違和感を覚える。
　その違和感は――
「教会の『悪魔祓い』か？」
「フフ。さあ、どうなんでしょうねぇ？　そこら辺の想像はお任せします」
　質問に真面目に答える様子は見せず曖昧な言葉を返してくる。
「ここで立ち話もなんですし少し場所を変えませんか？　これからのことで貴方に聞かせたい話が有るので。損はさせませんよ」
「それが罠じゃない証拠があるのか」
「それなら態々危険を冒してまで貴方にそれを届けに来ませんよ。それよりも貴方が帰宅したと同時に家ごと吹っ飛ばした方が遥かに楽なので」
　接触してきたことこそ罠でない証拠と言うが、それを簡単に鵜呑みにするほどシンもお人よしでは無い。しかし、何かしらの情報をもたらすということを無視することも出来ない。しばし考えた後、シンは答えを出す。
「いいだろう。話だけは聞く」
「賢明な判断です。決して聞いておいて損はしない話ですよ」
　そこから十数分程歩いて移動をする。付いた場所はどこにでもあるような公園であった。そんなに広い公園ではない為、すでに人の気配は無く今この場に居るのはシン

とアダムの二名のみ。
「それで、お前が言う損はしない話はなんだ？」
　両手をズボンのポケットに入れながら、やや横柄とも言える態度でシンは尋ねた。実際にはこの格好にも意味が有り、手を入れているポケットの中には携帯電話が握られており、いざというときにはリアスと即連絡がとれる状態となっている。
「間薙さん。貴方は聖剣というのをご存じで？」
「――いや」
「対悪魔にとって絶大な効果を発揮する武器。人間が悪魔を打倒する為の数少ない兵器の呼称とでもいいますか……実はね、その聖剣がこの街に在るんですよ」
「何……？」
「正確に言えば持ち込まれているというのが正しいですかね。現在三本、ああ今日新しく二本追加されるんで合計五本ですね。教会側から聖剣持ちの人間が派遣されるらしいので」
　アダムの言葉にシンの眉間に皺が寄る。悪魔にとって有利とも言える情報をぺらぺらと喋ることを不審にしか捉えられない。嘘であっても真実であっても、このことを話すアダムに何のメリットがあるのか理解できなかった。
「それを俺に教えて何になる」

「知れば動くかもと思いまして……あの木場という青年みたいに」
　シンの視線に剣呑としたものが含まれ、纏う空気に肌を差すようなものへと変わり始めた。
「どういうつもりだ」
「いろいろと貴方方に動いてもらった方がこちらとしては有り難いので」
「目的はなんだ。聖剣と悪魔の共倒れか？」
「そんな物騒な物じゃないですよ。平和の為です」
「陰でこそこそしている奴の言うことを信じろと」
「表で堂々としてようが陰でコソコソしてようが、言っている内容が同じなら結局信じるのは貴方次第ですよ。別にいいですよ、無視して黙っていても」
「挑発のつもりか」
「気になさったのなら謝りますよ。何せこういった口調には慣れていないもので」
　威圧する様に言ってもアダムはその笑みを崩さず、全てを受け流してシンの問いに答えていく。シンにしても多少の変化を求めて言葉にやや感情を乗せていたが、これ以上は無意味と悟り口を閉ざす――かに思えたが最後にある疑問を口にした。
「もう一つ聞きたい」
「はい。何なりと」

「お前……本当に人間か？」

　その問いに虚を衝かれたのか、アダムの顔から貼り付けられた笑みが消え、少しだけ驚いた様に目を丸くする。そして、その後に出てきたのはまるで質の違う笑み。口を三日月状の形に変え目も同じく弧を描くように細まる。その笑顔を出した途端、足下に居たジャックフロストはシンのズボンを掴みがたがたと震えだし、同じく肩に座っていたピクシーも全身を大きく震えさせる。かくいうシンもその笑みを浮かべられた瞬間から背中に冷たい汗が流れ始め、目の前の人物の姿が何倍にも大きく見える様な錯覚を覚えた。

「お前、面白いな」

　丁寧だった口調から粗野な口調へと変わる。目踏みするかの様にシンを見ていたがやがてその笑みは消え、元の張り付けられた笑みへと変わる。

「くくく、すみません。つい愉快なことを聞かれたので……ああ、そうそうもう一つお伝えすることがあるんです――――が、その前にあちらの方からお話がありそうですね」

　アダムがシンの背後を指差す。そこでシンが振り返る。

「うげ」

　そこには記憶にある人物にピクシーは嫌そうな声を洩らす。

「おおう！　最近は何てついているんでございましょう！　あのクソすかした『騎士』く

んに一杯喰わせたと思ったら、今度は神父を血祭りパーティーにしようとした矢先に俺様のぶち殺した[×]悪魔ランキング一位の中途半端悪魔君に出会えるなんて！　これも日頃の行いの良さですか！　それとも神の思し召し！　それなら神様にお礼を言おう！　せーの！　[×]×」

夕焼けの中で白い頭髪を朱色に染め、狂気を撒き散らしながら『はぐれ悪魔祓い』フリード・セルゼ[×]が現れる。

「何だかお喋りしている最中に俺様登場！　アーンド　俺様キリングタァーイム！　という訳で死んじゃってくんね？　ひゃはははははは！」

斬傷、口車

「いやー、随分と賑やかなお知り合いがいるようですね」
「そんな間柄じゃない。ただの敵同士だ」
フリードを前にして態度は変わらず冗談を口にするアダムだが、シンの方はそんなアダムに素っ気なく応じる。
「ちょうどそこの神父さんで僕てぃんのノルマは達成ですねえ！　つーわけで早く死んでくんない、とっとと殺されてくれよぉ！　あ、そこの中途半端くんも一緒にね」
ころころと表情を変えながらもその口からは獲物を嬲る蛇のように唾液で光る舌を垂らし、いまかいまかと飛び掛かるタイミングを計っているかのように忙しなく動かしている。その形相の生理的嫌悪は人すら越え人外にまで悪影響をもたらし、前回会ったピクシーは勿論のこと、初めて会うジャックフロストもフリードのそれに悪寒を感じていた。この域に来れば最早才能の一つと言っても過言では無かった。
「うわぁ……やっぱ気持ちわるい、この人」
「ヒ、ヒホ！　背中がゾクゾクするホー！」
「お褒めの言葉ありがとうね！　羽根虫ちゃんに不細工雪だるまくん！　お礼と言っ

ちゃなんだが、その羽根虫ちゃんはホルマリン漬けにして棚に飾って、そっちの不細工雪だるまくんはかき氷にして喰ってあげるよ！　あ、シロップはイチゴ味で」

誰彼かまわず狂気を撒き散らすフリードの姿は、以前の堕天使勢と戦ったときから何一つ変化は見受けられない。ただ、よく見るとフリードの腰には実剣がベルトで固定されており、以前の堕天使の力による光の剣は見当たらない。そして、シンは先程のアダムとの会話からその実剣に対しある程度の予想が出来ていた。

「気をつけて下さいね。あの腰にある剣、間違いなく聖剣ですから」

シンの予想を確実にするアダムの言葉。正直な所、予想通りの言葉よりも予想を裏切る結果になって欲しかった。

「はい！　そこの神父さんの言う通りです！　ただちょっと訂正部分がありますよーん！」

良く聞こえるらしい耳でアダムの言葉に反応したフリードは玩具を自慢する子供のように腰に差していた聖剣を鞘から抜き放つ。実際の所、どんな聖剣であろうとフリードの認識にしてみれば蛇蝎の如く嫌う悪魔を簡単に葬れる楽しく愉快な玩具でしかなかった。

「聖剣は聖剣でもスペシャァァァル！　な聖剣、エクスカリバーでございまぁす！」

掲げた聖剣の剣身から閃光が奔る。その光を見た途端、軽い頭痛がシンに起こる。目

を細めても太陽を直視しているかのような目の痛みを感じ僅かに顔を顰めた。ピクシーとジャックフロストもその光が放たれた瞬間に、本能が危険を悟ったのか慌ててシンの背後へと周りその影の中で光を免れようとする。それほどまでにその光は危ういものであった。

「エクスカリバー？　そんな大層な武器があいつの手の中にあるのか……世も末だな」

木場が自らの存在理由に挙げていた武器の名。武器の知識に疎いシンであっても、人生の中で何度か耳にしたことがある程に有名である。もし、フリードの言った通りそれが本物ならば少しは感動的な気持ちになるかもしれなかったが、肝心の持ち手が狂人なだけ感動も薄れるどころか微塵も感じず、放たれる光すらも曇って見えてきた。

「くくく、そう言わないで下さい。アレが衆目に晒されるだけでも教会の恥なのに、ましてや教会を離反した『はぐれ悪魔祓い』が持って入ることが知れたら、信心深い教会の人間は憤死してしまいますよ」

「その割には楽しそうな顔だ」

「生まれつきこういった顔なんですよ」

「そうか……ちっ！」

シンが突然、アダムの右肩を突き飛ばす。このとき同時にピクシーとジャックフロストに自分から離れる様に指示を出す。

「おっと？」

後方へとよろめきながら後ずさるアダムとシンの中間点に黄金の閃光が奔る。その閃光を放つのはエクスカリバーを上段から振り下ろしたフリード。

「はい！　お喋りタイム終了！　今からはバトルタァァイムだじぇい！」

振り下ろされたエクスカリバーは地面に叩きつけられるかと思われたが、その直前にフリードは手首を返し斜め上へと斬り上げる。その刃が狙う先に立つのはシン、与えられた仕事よりも個人的感情を優先しての結果であった。

シンは迫る刃の輝きに目を細めながらも決してそこから目を離さず、息をするような感覚で悪魔の力を引き出し右腕の紋様を輝かせる。

そして、シンは自分の顎下から入り後頭部へ抜けていくであろうエクスカリバーの軌跡を読み取り、その場から一歩後方へと体を引く。シンの思い描く軌跡通りにエクスカリバーはシンの眼前を通り過ぎていくが、そのとき微かにエクスカリバーの剣先が頭部に触れ、何本かの頭髪を散らす。その感触に自分の読みの甘さを感じつつも、シンは空振ったことで大きく体が開いたフリードの懐に飛び込んだ。

「甘ぇ！」

しかし、フリードは振り上げられるエクスカリバーを強引に振り下ろす。並はずれた筋力と技量によって為すフリードの反撃。シンが接近している状態の為、最も力が乗る

刃先では無く柄本の部分による斬撃となってしまうが、触れればそれだけで致命傷にとなりかねないエクスカリバーには十分であった。

衝突する肉と鋼の音。

振り下ろされたエクスカリバーの刃はシンへと食い込むことは無かった。シンが降ろされる直前に掲げた右腕がエクスカリバーの柄に押し当てられてそれを防いでいたからだ。

「やるねぇ！」

戦闘による高揚感から表情を歪ませるフリードに対し、シンは僅かに目を細めるだけで特に表情の変化は無い。互いの顔付きがそれぞれの内面を如実に現していた。

フリードの両手で握られていたエクスカリバーから素早く片手が離れる。その片手にシンはほぼ条件反射で左手を動かしその手首を掴み上げる。それと同時にフリードの袖口から拳銃が現れた。そこでフリードの手首を握り潰せたのならシンにとって有利に働く展開となったが、生憎力が不十分な左手ではそれも叶わず、自らチャンスを潰したことに内心舌打ちをする。

互いに両腕が封じられた膠着状態。しかし次の瞬間には両者迷う事無く力の限り額を衝突させ、鈍い音を木霊させながら零距離で睨み合う。

「ハハハ！　頭の抜けた堕天使様のときはほぼ外野だった癖に随分と手ごたえあるじゃ

ない！」

先程の一撃でフリードの額は割れ、そこから鼻筋にかけて鮮血が流れていくが、当の本人はそれに対し一切痛がる素振りは見せない。シンの方も大したダメージは受けていないが、悪魔の力を使っても怯まないフリードを見て、中身も外身も人外であると認識をした。

「んん？　どうしたのかなぁ！　さっきから無口なんだけどぉ？　一人でお喋りしてもつまんないー！」

フリードは饒舌に喋りながらも周りの存在の動きに注意を怠らない。狂人であっても戦闘に関してはまともな思考が働くらしい。だが、それでもフリードの認識はこの瞬間まで甘かったと言わざるを得なかった。

フリードの言葉に反応したのか閉口していたシンの口が軽く開く。それを見て何かを言うのかと思っていたフリードの眼前が突如白一色と染まった。

「んだそりゃぁ！」

シンから至近距離で『氷の息』を吹きかけられたフリードは一瞬で氷付いていく肉体の感覚に素早くその場を離れようとするが、エクスカリバーを持つ手は放れるがもう一方の手は強く握られ放すことが出来ない。

フリードは持つ手を斬り裂こうとエクスカリバーを振るう。手応えはなかったが振

るわれたエクスカリバーを避けたのか手首からの圧迫感は消え片手が自由となる。
「あああ！　くそがぁ！　どこだぁ！　見えねぇ！」
至近距離から放たれた冷気の影響でフリードの瞼は瞳の水分によって凍り付き閉ざされた状態となっていた。闇雲に聖剣を振るうが当たる気配は無い、それどころか移動しながら様々な場所で冷気を吐きかけフリードに場所を悟らせずかく乱をする。
体の芯まで凍てつかせる冷気がフリードの体を蝕んでいく。徐々に体の動きが鈍くなっていく現実にフリードの心の奥底にある感情を奮い立たせる。
「……な」
常に声を張り上げているフリードからは想像もつかない程のか細い声。
「……んな……ざけんな」
体中を覆い尽くす氷の膜の中でフリードの動きがついに止まるがその口と舌はいまだ動き続ける。
「ふざぁけんなぁ！　このクソ悪魔がぁぁぁぁぁ！」
シンの一方的な攻撃に於いて、フリードの怒りが頂点へと達し感情が爆発する。
フリードにとって悪魔もそれに連なる者も所詮は嬲り、苦しませ、殺すという、自分の気持ちを高揚させる玩具であり、それ以上もそれ以下でも無かった。そういった一方的な関係は、自分が死ぬその瞬間まで永遠と続くと言う考えがフリードの中にあった。

それにケチがつき始めたのは赤龍帝との邂逅。悪魔の分際で自分に対し偉そうに説教を噛ましただけでなく、薄汚い手で自分の頬を殴り飛ばしたという事実、執念深いフリードにとっては忘れたくとも忘れられない屈辱であった。

それから暫くしてある協力者の手によりエクスカリバーと言う強力な武器を得て、その力によって一誠と同じくグレモリーの眷属であり一度は剣を交え、そして追い詰められた、気に入らない『騎士』に恥をかかせることが出来た。

屈辱の傷を癒すほどのものではなかったが、それでも晴れやかな気分となるには十分なものであった。そして、今度はあの戦いでの別れ際に有無を言わさず石を放り投げてきた生意気な半端者と鬱陶しい教会の人間を見つけ、気分よく切り裂いてしまおうかと考えていたが、その結果が今の状態である。

前回の勝利で高揚していた頭に文字通り冷たいものを掛けられたことでその感情の振り幅は大きく、元々感情の沸点が低いフリードが限界を迎えるのは無理も無いことであった。

「殺す殺す殺す

まっていた。それ以外の感情を不純物としその殺意のみを滾らせる。その行動は現状にある変化をもたらした。

フリードの持つエクスカリバーが、その感情に答える様に刀身の輝きを増し始める。それによって放たれる光がフリードを守るようにして包み込み、凍り付いていくフリードの肉体を徐々に解凍させていった。

「あの白髪の意志に反応したか……いやいや人は皆平等という言葉があるが実際に見ると理不尽にしかみえねえな」

フリードを包む光が膨張し続けていくのを見て皮肉った笑みを浮かべながらアダムは誰にも聞こえない程の声量で独り呟く。その間にもエクスカリバーの光は冷気を押し戻していき遂にはそれを相殺した。

それを見てシンは冷気を吐くのを止め、若干険しい表情となる。

「ひひ、ひひゃはははは！　こいつは何の冗談ですかぁ！　あいつぶっ殺してぇと思ったら何と聖剣様が手を貸してくれましたよー！　やだ！　俺ってもしかして奇蹟起こしちゃった？　死んだら聖人に祭り上げられちゃうかも！」

服に張り付く薄い氷を落としながらフリードの口調は元の軽薄なものへと変わる。それは精神的余裕を取り戻したという証でもあった。

「キミィ、少し追い詰められたけど御蔭様でコイツのコツが分かった気がしますぜぇ。

どうもあざーっす！　お礼に殺してやるよ！」
　エクスカリバーを片手に構え剣先を地面へと向ける。
「次の一撃、回避に徹しなければ死にますよ、間薙さん」
　フリードの動く直前にアダムの声が耳に入ってくる。
　フリードが一歩を踏み出した瞬間、数メートルあった両者の距離は一気に零となる。先程までとは比べものにもならない踏み込みによって、フリードにあっという間に懐へと潜り込まれていた。
「死ねやぁ！」
　木場とほぼ互角と言ってもいい程の高速の動き、そしてそこから繰り出される斬撃もまた木場に勝るとも劣らない。
　首を狙った横薙ぎの斬撃をシンは頭を下げ辛うじて回避する。それは事前に掛けられたアダムの声と、それによりシンが予め狙う場所に当たりをつけていたことによる回避であった。
　シンが低い体勢から拳を突き上げるがその速度によってフリードは易々とそれを躱し、躱しづらい胴体に向けてエクスカリバーを振るおうとする。が、それをさせまいと横からピクシーの電撃がフリードに横槍を入れる。フリードは舌打ちして剣身で電撃を受け止めるが今度は幾つもの巨大な霜柱がフリードを足元から突き上げた。そのま

ま宙へと放り出されたフリードは素早く体勢を変え、シンから離れた場所に着地する。
「ああ、あ゛あ゛！　鬱陶しいねぇ！」
相手を殺す機会を奪われフリードは言葉を吐き捨てるが、それに動じることなくピクシーとジャックフロストがシンの横へと並ぶ。
「随分と頼りになるマスコットじゃないですかぁ？　はっはー！　クソッタレがぁ！」
「生憎、伊達や飾りじゃないんでね。仲魔〈こいつら〉は」
毒吐くフリードに表情一つ変えずにシンは答える。しかし、彼という人物を知っているのならばその無表情が何処か誇らしげに見える印象を受けるかもしれない。
「おかげで助かった」
「ふふ……どういたしまして」
「ヒ、ヒホー！　オイラたちにだってこれぐらい出来るホー……」
シンの礼の言葉にピクシーたちは言葉を返すがその声に力が無い。ピクシーの表情は青褪めており、ジャックフロストも汗の様に体表から雫が垂れていることはシンはこのとき気付く。シンは比較的に軽い症状で済んでいるがピクシーとジャックフロストにはエクスカリバーの放つ光はかなりの負担になるらしくこの場に立っているだけでも体力を蝕んでいく。
このときシンの脳裏に二つの選択肢が浮かび上がるが、シンは迷わず片方の選択を選

ぶ。
シンがその選択を成功させる為にジャックフロストに向け小さく自らに考えを伝える。ジャックフロストは少し驚いた顔をしたが、すぐにその首を縦に振った。
しかし、その考えを実行させまいと動く存在がこの場にいる。
「なぁーに相談してんですかぁ！　オレッチも混ぜて頂戴！」
どういう理屈かその場で跳び上がったフリードが、シンに向かって矢のように一直線に飛び込んでくる。踏み込む速度や剣速だけでなく、フリードの動きそのものが何らかの力によって加速をしている様子であった。
シンの体を縦に両断せんと力の限りエクスカリバーを振り下ろすが、それを片足を軸にし半身になって避ける。外れたエクスカリバーは地を割り砂塵を巻き起こす。そのまま隙が出来るかと思われたが、その土埃を切り裂いてフリードの追撃がシンへと迫る。
フリードが回避しづらい足首を狙った横薙ぎの斬撃。既に間合いにいるシンの逃れる道は一つしかなく悪手と思いながらも両足を地から離して跳び上がる。正確に言えばフリードによって跳び上がらせられた。
「イヤッハー！」
狂喜を露わにしながら宙で回避行動のとれないシンにフリードの更なる追い打ちを

繰り出す。その刃の向かう先はシンの胴体。
が、そこで横からジャックフロストによる無数の氷柱が、フリードを妨害する為に放たれていた。フリードの視線はシンへと向けられていたが、迫る危険にフリードの本能が察したのか、反射的に刃の先がシンから氷柱へと変更される。
無数にある筈の氷柱の砕ける音が一つに集束して聞こえる程の高速の斬撃。それらを打ち払ったフリードの表情は狂喜から顰め面へと変わっていた。今の迎撃によりシンを両断する機会を失った為である。
シンは爪先が地面へと触れた瞬間、一気に前へと飛び込む。その間に右手は拳を作り、狙う先をフリードの頬へと決めていた。エクスカリバーを持つ手は氷柱を撃ち落としたために横へと伸ばされ、シンを迎え撃つには間合いを広げ過ぎている。
シンはこの攻撃をフリードと再度距離を開こうと考えてのものであったが、次のフリードの行動によりその考えが浅はかであったことを身を以て実感することとなる。
フリードのもう片方の手が腰の部分へと触れる。その一見すると意味の無いように見える行為。しかし、それを見た瞬間シンの第六感が凄まじい警鐘を鳴らす。
「ッチ!」
その警鐘に従い両足で地面を踏みしめ急停止をするが僅かに遅かった。フリードが腰に当てた手を下から上へと突き上げる動作をしたとき、シンの右腕の肘から手首にか

け赤い筋が刻まれる。

（――斬られた）

熱の様な痛みを感じながらそうシンは実感する。それが正解であるかを示す様に赤い筋からは血が零れ出し、同時にそれ以外の何かが抜け出ていくような脱力感がシンを襲う。

聖剣に斬られるということ。望まずにそれを知ったシンであったが、次なる危機はもう既にそこまで迫っている。

「これでジ・エンドでございますですよぉ！　悪魔ちゃぁぁん！」

フリードの手に握られている見えざる剣。それが聖剣であることは既に身を以て理解をしている。傷に手を当てる暇も無く迫る不可視の聖剣。振るわれるタイミングが判り辛くその剣身の長さも幅も判らない。姿が見えることと見えないこと、ただそれだけの違いではあるが、実際に目の当たりにすると視覚が効かないということが非常に厄介であることを知る。

危機的状況。だが、それを打破するのはやはり仲魔の存在であった。

「あぶない！」

ピクシーが思わず放った電撃。その雷が吸い込まれるようにして不可視の聖剣へと直撃をする。だが、その電撃も聖剣の持つ光によって阻まれフリードに伝わる前に霧散

する。フリードに被害は無い。しかし、ピクシーの電撃が聖剣へと触れた僅かな一瞬紫電の光が剣身を奔り、その光が見えざる姿を刹那の間だけ形作りシンの前へと曝け出す。

シンはピクシーによって得られた情報から瞬時に判断しその場で後ろに大きく仰け反る。その直後、顔面上を不可視の聖剣が通過した。剣圧によって前髪は揺れ、巻き起こる風に頬が叩かれるがそれ以上のことは起きない。

シンは後方に倒れていく勢いを利用し、更に爪先で土を蹴りつけると大きく跳び上がる。宙に舞うシンの視界は上下逆さまとなり、そこで跳ぶシンを呆けた顔をしたフリードと目が合った。

その瞬間二度目の『氷の息』をフリードへと吹き付ける。だが、これだけでは終わらない。

「ヒーホー!」

シンの攻撃を合図にジャックフロストもまた大きく口を開き、そこから冷気を吹き出し始める。二つの白い冷気は急速に公園内に広まっていきフリードの視界を遮ってしまう。

「またその手ですか？　芸が無いぜぇ!」

フリードのエクスカリバーに力を込められその輝きが増すが、あくまで自身の周囲の

冷気から身を守るだけに留まり一向に視界が晴れない。思っていたよりも濃い二重の冷気による煙幕にフリードは舌打ちをする。

そのときフリードは背後に何かが迫る感覚を覚えた。

この視界の聞かない中、奇襲を仕掛けようと考えていたのであろう、相手の考えを内心で嘲笑しながら、背後に振り向くと同時にエクスカリバーを振るう。刃は背後のそれに容易く食い込み、そのまま切り抜けて上と下とを切り離すが、切り裂いたフリードの顔に浮かぶのは訝しげな表情であった。

これまで数え切れない程の人を斬ってきたフリードだからこそ分かる手応えの違和感。そんなフリードの足元に先程切ったものが転がってくる。

それは氷の塊であった。目も鼻も口も無いが楕円形に形作られたそれからは、辛うじて頭部を連想出来る程お粗末な出来。

相手に騙されたという事実にフリードのこめかみに青筋が浮き上がる。口元をひくつかせながら周囲を良く見ると白い靄の中に浮かび上がるいくつもの影。それを見たフリードは感情に任せ大きな怒声を上げる。

「何の冗談ですかねぇ、これは……お人形遊びは趣味じゃねえんだよ！」

一番近くにある影にエクスカリバーを振るう。影は斜めに切断されずり落ちた上の部分が地面へと落下するがそれもまた氷の塊であった。

「いつまでふざけてんだぁ！　早く殺りに来て頂戴よ！」
更に聖剣を薙ぐと一気に三体の影が斬り倒される。だがそれら全て氷で出来た人形の出来そこないであった。
口元をひくつかせていたフリードは今度は瞼も震わせ、両手に持つ二本の聖剣も腕からの伝わる震えによって小刻みに剣身を揺らす。
「とっとと姿を見せろやぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
フリードの持てる力を可能な限り注ぎ込まれた二本の聖剣が夕暮れを白夜へと変える程の輝きを放つ。その光によって周囲の冷気は一掃され視界が回復していくが、晴れた先にあったのは自分以外の誰もいなくなった公園と殆ど溶け、それによって出来た水たまりの上に浮かぶ氷の礫のみであった。
「あは……あはははは。もしかして逃げちゃいました？」
周囲を見渡すがシンもピクシーもジャックフロスト、そしてアダムの姿も消えている。それを意味するのは一つだけ。相手の逃亡であった。
「はっはっはっはっ。いやー、まだ余力がありそうなのに逃げちゃいますかぁ。そうですかーマジですかー、はっはっはっはっはっはっはっはっ」
夕暮れで紅く染まる公園で一人笑うフリード。だが――
「ふっ！　ざけんなっぁぁぁぁぁぁぁぁ！　あのクソッタレ悪魔と神父

がぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

――唐突にフリードは感情を爆発させ、この場に居ない相手を口汚く罵る。それでも納まりきらない怒りが暴力という形となり公園内にある遊具にエクスカリバーを叩きつけ、八つ当たりをし始めた。鉄製のジャングルジムは聖剣の切れ味によってその二度と遊べない形となり、滑り台やブランコなども唯のガラクタへと変えていく。

斬るものが無くなってもフリードはまだ滅茶苦茶に剣を振り、最後にはその剣の勢いでバランスを崩し背中から倒れてしまう。

「あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、っ！」

仰向けに倒れたフリードは荒く息を吐きながら、内にある感情を吐き出す様に公園内で獣の様な叫びを上げるのであった。

◇

フリードが叫びを上げている一方でシンの方は肩にピクシーを持ち右手でジャックフロストを抱えて公園から離れていた。

「あのー、助けて貰っておいてなんですがこの運び方は止めて貰えません？」

空いた方の左手で襟首を掴まれ、靴の踵が地面に勢いよく削られているアダムが小さ

く抗議の声を上げるが、シンは後回しだと言わんばかりに走る速度を上げる。それにつられて引き摺られるアダムも両足がその勢いで何度も跳ね上がる。

公園からかなりの距離が開いたところでシンは走る速度を緩め、近くに腰を掛けられる場所はないかと辺りを見回す。するとちょうどバス停が近くにあり、そこに何年も雨ざらしにされていたせいで塗装の剥げたベンチもあったので、そこに皆を連れて座り一息を吐く。

幸い近くに民家は少なく、日も落ちた為人の姿も見当たらない。一応、周囲を確認してからシンは制服の右袖を捲り、血を含んだシャツも捲る。

フリードに付けられた傷は深さも長さもそれほど大したものではなかったが、傷口からは絶えず鮮血が流れ続け、斬られてから時間が経っているにもかかわらず、今この瞬間に斬られたような生々しい傷であった。

そしてなによりも、先程からシンの体調は優れず虚脱感と倦怠感が体に纏わりついている。この症状は以前堕天使の光で怪我を負ったときの症状と似ていた。だが。あのときは腹部に穴が開く程のものであったが、聖剣の傷はそれに比べれば遥かに軽傷である。

シンはピクシーの名を呼び、腕に治癒魔法をかけて貰う。仄かな光がピクシーの両掌から零れ傷口へと注がれていく。しかし、いくら光が注がれても傷からの血は止まらず

治る気配を見せない。
「無駄ですよ。聖剣は対悪魔の兵器です。聖剣の傷は聖痕のようなものゆえ、少なくともその妖精の御嬢ちゃんの治癒魔法ぐらい無効化できますよ」
　乱れた服装を正しながら変わらぬ笑みを浮かべ同じくベンチに腰を落とすアダム。その言葉を聞いてピクシーは意地になって更に光を強めるが傷の状況は変わらず。不甲斐ない結果になってしまったことでピクシーはすっかり気を落としてしまう。
「ごめん……アタシじゃ無理みたい……」
　シンは気にするなといって弱々しく飛ぶピクシーを手に乗せ、心配そうな顔をしているジャックフロストへと頼んだと言いながら手渡す。ジャックフロストはシンの言葉にしっかりと頷き、魔力を大量に消耗したピクシーを守る様に大事に両手に乗せた。
「あの見えない剣も聖剣か……あの神父、エクスカリバー以外の聖剣も所持しているのか」
「いえ。あれも多分エクスカリバーですよ」
「なに？」
　アダムの答えにシンは疑問を覚える。フリードは確かに最初自分が持っている聖剣をエクスカリバーだと言った。そしてシンに傷を付けた不可視の聖剣もエクスカリバーだと言う。二本も存在するエクスカリバーにシンは頭に浮かぶ疑問を率直に口に

する。
「いったいエクスカリバーは何本あるんだ？」
「全部で七本です。ちなみにこの街に現在ある聖剣、全部エクスカリバーですから」
あっさりと言われた事実に流石に絶句する。伝説の武器というものはいつの間に複数になっているのか。
「混乱するのはおかしくはないです。正しく言えば伝説上のエクスカリバーは一本しか存在しません。そして、いまこの街にあるのはその伝説の一本から生成された限りなく原典〈オリジナル〉にちかい複製〈コピー〉ですよ」
アダムはそうなった経緯を簡潔に話し始める。
おとぎ話や伝記の中で存在するエクスカリバーは遥か昔にその刃を砕かれ、無数の破片と化してしまっていた。しかし、砕けた刃でもそれに宿る力は簡単に諦められるものではなく、当時の錬金術によってそれらを再利用し、新しい聖剣へと造り直したと語った。
「そして、その盗まれた聖剣がこの街にあり、あの白髪神父さんが使っている訳です。ちなみに聖剣は普通の人間には使えません。使うには聖剣に適合する因子が必要になるからです」
「ならあいつはその因子を持っているのか？」

「可能性としてはありますが、まあ、推測ですが彼は後天的な因子持ちですね。先天的因子持ちならもう少し上手く聖剣を扱える筈ですが、あの神父からはまだ手探りな感じがしますし、なによりその聖剣と因子に関して最も詳しい人物が彼の協力者ですから」
　アダムはここからが本題ですと前置きを入れる。
「あなたに話したかったもう一つのことなんですが、その協力者――バルパー・ガリレイという人物はもう一人の協力者と共謀してこの街にある仕掛けをしています」
「仕掛け？」
「簡単に言えばこの街全てが吹き飛ぶ術式ですね」
　突拍子も無い台詞をあまりに簡単に言うアダムに、しばしシンも沈黙してしまう。
「その協力者――というよりも今回の一件の首謀者がかなり厄介な人物でしてね。なんせ堕天使が組織する『神を見張るもの〈グリゴリ〉』の幹部コカビエルですから」
　シンの表情が険しくなり眉間に皺が寄る。以前学んだことのある堕天使の組織の名と堕天使の名。未知の存在故にその実力は想像もつかない。
「そのコカビエルの力とバルパーの教会仕込みの術式が、現在この街のあちこちに仕込まれています。ここまで言えば私が何を貴方に頼みたいか分かりますよね」
「その術式を壊すのに協力しろと？」
「ご名答」

小さく手を叩きシンを褒めるアダムだが、当然そんなことをされても気分が良くなる訳も無く、寧ろ小馬鹿にされているような印象を受ける。

「その術式というのがかなり量があってとても複雑なものでしてねー、魔術などに長けた人物の協力もついでに欲しいんですよ……例えば真紅の髪をした女性の悪魔だったり、眼鏡を掛けた知的な女性の悪魔だったり……」

シンの左手がアダムの胸倉を掴み上げる。

「――俺に巻き込めと言うのか？　そんな口車に乗ると思っているのか」

激しい怒りを露わにはしなかったがその声色は感情を一切感じさせず、相手にシンがどんな心境であるかを悟らせないものであった。それ故に何を考えているのか分からないという緊張感を生み出す。

だが、胸倉を掴まれているアダムは怯えも竦みもせず、そしてその軽薄な笑みを決して変えようとはしない。

「暴力は止めましょう。そう力を込めるとエクスカリバーの傷に障りますよ」

顔色の優れないシンを前に話を逸らすアダム。シンは少しの間無言でアダムを睨み合っていたが、やがて右腕を自分の口元まで上げる。そして、徐に聖剣の傷に喰らい付いた。その光景にピクシーたちは酷く驚き、アダムは軽薄な笑みを消しその代り感心するような表情となる。

シンは喰らい付いた腕を勢いよく離すと、その部分は聖剣の傷ごと抉れ中の組織を外気に触れさす。シンはアダムの前で口から噛み切った部分を地面へと吐き捨てた。
「これで問題はないと思うが」
「くくく、確かにそういった方法もありですね」
第三者が見れば異常ととれる行為の中、当人は一切表情は揺れず、もう一人の方も愉快そうな笑いを浮かべていた。
「貴方が断るなら私が直接交渉に行けばいいですし、さっき私の話した内容についても聞かなかったことにして忘れればいいだけの話です。――ただ、多くの被害が出るかもしれないという情報を知って貴方は傍観者になれますかね？」
「俺がまるでお前の話に首を縦に振る口ぶりだな」
「振ると思っていますよ。だってあの神父との戦いのとき見捨てれば楽なものを、態々私まで連れ出していく貴方をお人よしだと思っているので」
アダムの指摘にシンは内心で舌打ちをした後、掴んでいた手を離す。そしてポケットからハンカチを取り出すと抉れた部分に巻きつけ止血を施す。
「とりあえず今日はここでおさらばさせて貰います。返事は近々伺いに来ますよ」
アダムはそう言ってベンチから腰を上げる。
「ああ、そうそう。私から貴方に個人的な質問があるんですがよろしいですか？」

「……何だ」
見下ろす形で話かけられるシンは突き放す様な口調で一応は応じる。
「白髪の神父も言っていましたが貴方、人としても悪魔としても異なる力を持っていますね？　単刀直入な話、どんな気分ですか？　そんな力を持つ気分は」
好奇心を隠そうとはせず直球的な質問。それに冷めた視線を向けるシンだが、アダムは笑みを張り付けたままその視線を真っ向から受ける。
「――良い気も悪い気もしない。ただそれだけだ」
シンの質問の答えはそれだけであった。だがアダムはその答えに満足したのか頷いた後、シンの背後へと周りその右肩を二、三度軽く。
「それでは後日」
最後にそう言い残してアダムは去って行くのであった。
「行っちゃったね」
「ああ」
「また、あの人と会うのかホー？」
「どうだろうな」
人を食ったような態度に良い印象を持てない神父であったが、その話の内容については聞き捨てならないものがあった。そのことについてリアスたちに相談をしようかと

いう考えも浮かんだが、そのこと自体相手の思惑に乗ってしまうという形になってしまうので躊躇いが生じる。
「……少し考えるとしよう」
シンもまた朽ちたベンチから腰を上げる。このとき考えに没頭していたシンは気付くことは無かった。ハンカチを巻きつけ止血していた傷口が、アダムに肩を触れられた時から既に完治していることに。
そして、去り際のアダムの影から伸びた一条の影が自分の影の中に潜り込んで来たという事実を。

◇

「あれは達観をしているというよりも、乾いている印象だったな。年の割には興味深い性格をしてるぜ、あいつ」
『お前に任せるとは言ったが、少々今回のことは目に余るぞ。あまり女子供を巻き込むなよ』
「過保護なのは結構だが少しは相手の実力ってのを信じてみたらどうだ？　次代の要になるグレモリー家の当主とシトリー家の次期当主、それに赤龍帝が加わるなら、コカビ

エル相手にもいい線行くと思うんだが？」
『それは上手くいった場合の話だろうが。今回のお前の話を聞く限り相手を挑発し過ぎだ。しくじるぞ？』
「へへへ、いや成功するね。その為に『アイツ』を張り付けておいたんだ。なんなら賭けてみるか？」
『……お前とは賭けはしねぇよ。勝った記憶がないからな』
「まあ、ようやく準備が完了する状態になろうとしてんだ。こっから忙しくなるぜ」
『気をつけろよ』
「心配か？　へへへ、らしくねえな。必ずいい結果になるさ、そう心配せずともな……まあ、大船に乗った気でいな女好き総督様」
『お前に女好きと言われる筋合いはない。そっちこそ酒の飲み過ぎでヘマをするなよ、酔っ払い野郎』

交渉、懐夢

翌日の早朝、シンはやや重たい足取りで学校へと向かっていた。あれから家に帰り、ひたすら自分の選択について思考していたが、幾通り考えても結局はリアスたちに昨日の出来事を話すという結論に達してしまっていた。

アダムの言った通り、シンは既にこの街に起ころうとしていることについて聞かされている。そのことが自分の性格と相まって、他の選択肢をことごとく消してしまい先の結論へと至ってしまう。もし仮にその情報を伏せられていたとしても、そのことを後に聞かされてしまったのならば、恐らく自分は選んだ選択を破棄し、今の選択に移るであろうという自覚もある。結局の所、関わってしまった時点でシンは詰みの状態になってしまっていた。

アダムという神父の思惑に乗るのは非常に癪ではあるが、何も言わず自分一人で消化するには自分の実力は圧倒的に足りず、ましてや術式には魔術関連の知識が必要であると言われている為頼らざるを得ない。

一方的にいいように扱われている事実に苦いものを感じながら、いつもよりもやや険しい顔と早足で学校に急ぐ。シンの後をついてくるピクシーたちもシンの機嫌の悪さ

を敏感に感じ取ったのか、いつもの騒がしさは鳴りを潜めていた。
「よう、おはよう」
背後から聞き慣れた声が掛けられる。早足の速度を緩め後ろを振り向くとそこには一誠とリアス、アーシアの三人の姿があった。
「おはようございます。間薙さん、ピクシーさん、ジャックフロストさん」
「おはよう。三人とも」
挨拶する二人にピクシーとジャックフロストはいつもの様に挨拶を返し、それにやや遅れてシンも朝の挨拶をする。
「おはようございます」
その挨拶を聞き、一誠は眉を顰める。
「ん？　何かあったのか？」
シンの声色の具合から違和感を覚えたのか一誠が尋ねてくる。恋愛関係に関しては筋金入りで鈍いが、こういった些細な変化には意外な程鋭い感性を持っているらしい。
「いや、べつに――」
そこまで言ってシンは内心自分の失態を悟る。今の流れで昨日のことを話せば良かったのに、自分からその機会を潰したばかりか、わざわざ話し辛いような状況にしている。完全なるミスである。

「ん、そうか……」
一誠の方も自分の勘違いと思ったのかあっさりと引いてしまう。
逃してしまった機会。次はどのようなタイミングで言うべきかと考えているとき、今度はリアスからシンに話し掛けてきた。
「シン、今日放課後の予定はある？」
「いえ、ありませんが――何かあるんですか」
「今日部室に二人の客人を招くわ」
客人という単語を発したリアスからは少なくとも好意的な感情は感じられず、どちらかといえば敵対心が滲み出ていた。そのことから部室に来る客人は招かれざる客であるとシンは考える。
「その二人は、少々問題があるんですか？」
「ええ、教会側の人間よ」
リアスからもたらされた情報にシンは表情をやや険しくする。リアスはそれを見て自分と同じく危機感を覚えたと思っていたが、実際はシンがアダムの情報の信憑性が増したことに対するものであった。アダムは確かにシンに、教会関係者が二人この街にやってくると教えている。
ならばその二人はエクスカリバーを所持しているということになる。悪魔にとって

は最悪というべき兵器、それを自分の陣地に招くというのはあまりに危険である。そのことについてリアスは承知しているのかシンには測りかねる。

「そうなんだよ。昨日家に帰ったらいきなり居たんだぜ。……正直言うとな、扉入ってすぐに教会独特の雰囲気が漂ってきて心臓が飛び出すかと思った……」

あのフリードって奴の例があるからな、と最後に一誠は付け加える。ちょうどその頃にそのフリードと命のやり取りをしていたシンにとっては笑えない話である。

一誠とアーシアが帰宅したときに居たのは二人の少女であり、一人は以前シンたちが一誠の自宅でアルバムを鑑賞していたとき聖剣とともに映っていた子供――紫藤イリナという少女であり、もう一人は名前を名乗ることはなかったがイリナと同じぐらいの年齢の少女であったらしい。

そのまま一誠の母親を交えて過去や今の話で盛り上がった後、特に何もせずに帰っていったらしいが、一誠の自宅を訪れる前にすでにソーナと接触をしており、自分たちが活動をしたい領域の縄張りを持つリアスとの交渉の場の設置を依頼したという。

また教会から派遣された二人は護身用に聖剣を所持していることも明かしており、敵対組織である以上下手に揉めて小さな火種を大きな大火へと変わるのを良しとしない。ソーナはこれを了承し今日、オカルト研究部室内で交渉が行われるということとなった。

そこまでの話を聞き、リアスやソーナがあっさりと了承をした理由を理解した。おそらく教会側の人間は自分たちが聖剣を持って入ることだけを教え、その聖剣がエクスカリバーであることを明かしてはいない。

万が一の可能性としてアダムの言ったことが出鱈目で、教会から派遣された二人の少女は本当にエクスカリバーを所持しておらず、シンの考え過ぎであるということもあるが、あまり認めたくはないが今この街に潜伏をしているフリードの存在と、それが持っていた二本のエクスカリバーという現実が、シンの儚い願望を嘲笑していた。

ここまで聞かされてなお黙っている訳にはいかず、もし黙秘を続けるのならば自分の我儘で仲間の命を危険に晒すということになる。

いくらなんでもそれはただの恥知らずでしかなかった。

「ちょっといいですか？」

シンの声に三人の足が止まる。

「どうかしたの？」

「少し話しておきたいことが有ります」

シンは声を若干潜める。その様子に話の重要性を感じられたのか、リアスはこの場では無く部室で詳しく話すことを勧め、それをシンは承諾する。一誠とアーシアも二人の真剣な空気に触れたせいか、少し緊張した動きで先に行くシンたちの後についてくる。

「それで話したいことはなにかしら？」
部室に入ると早速リアスがシンに話すよう促す。
「恐らくですが今日来る教会の二人は聖剣――エクスカリバーを所持していると思われます」
シンの言葉に一瞬でリアスの顔色が変わる。一誠とアーシアもシンの言葉に驚いてはいたが、リアスに比べるとその驚きは軽く、それが双方の聖剣に対する認識の違いを露わにしていた。
「……どういうことかしら？　何故貴方がそれを知っているの？　一体どこでその情報を知ったの？」
険しい表情でリアスが問い詰めてくる。だがその表情に焦りの色はあっても怒りの色は無く、純粋にことを重く見ていることから来る厳しさの為の態度と思われた。
「エクスカリバーっていったら木場の奴が言ってたあのエクスカリバー？　マジで！　そんなのあいつらが持って……あっ」
何かを思い出したのか一誠は言葉を途中で区切り、表情を少々青褪めさせる。
「……そういや、イリナじゃないもう片方の女の子が自分の身長ぐらいあるでかい布で巻いた長い得物を持ってたけど……あれか、あれがエクスカリバーだったのか？　確かに見た途端背筋が寒くなったり、鳥肌が立ったけど……」

「わ、私もあれを見ただけで心臓が止まるかと思いました……」
　思い起こせば心当たりがあったらしく、自分たちのすぐ側に自分たちを滅ぼすモノが置かれていたという事実に、今更ながら恐怖を覚えたらしい。
「イッセー、アーシア、お願いだから少しでも危険だと思ったら私に報せなさい。どんなに些細なことでもいいから。教会の人間がイッセーの家に居たということでも最悪の事態を覚悟したのに……それ以上の危険が側にあったなんてね……」
　リアスの安堵と恐れが混じった複雑な笑みに一誠とアーシアは素直に頭を下げ、これからは必ずそうします、と誓う。
「――それで話を戻すわ。貴方はどこでその情報を手に入れたの？」
　笑みを消し真剣な表情で尋ねてくるリアスに、シンは昨日起こった出来事についてなるべく詳細に語る。ただしこの街にバルパーが術式を施していたことや、それに対応する為リアスやソーナの参戦を求めていたという話を今はするつもりはなかった。それは必然的にエクスカリバーと対峙することを意味し、悪魔である彼女らにとっては命懸けのことであり、気軽に喋ることは出来ない。この街ごと吹き飛ばす術式があるのならばそんな気遣いは無駄の一言に終わるが、今の所シンはアダムに対し今一歩信用が出来ない部分があった。確かにアダムからの情報は正確なものであったが、果たしてそれ以外の情報は本当のことなのか、嘘を信じさせるのにいくつもの真実を混ぜるのは詐欺師

の常套手段である。せめてこのことを話すのはもう一度アダムと接触し見極めてから判断するつもりであった。

最初は黙って聞いていたリアスたちであったが、フリードにエクスカリバーによって斬られた件を話すと、いきなりリアスがシンの右腕を掴み制服の袖を強引に捲り上げる。

「傷は……無いみたいね……」

シンの傷一つ無い右腕を見てリアスは安堵の溜息を吐いた。触れれば高位の悪魔でも死にかねない聖剣、ましてやその聖剣の中でも格の高いエクスカリバーに斬られたのならば一生消えない傷が残るかもしれないという。それでもエクスカリバーによる傷跡や後遺症が無かったのは、シン自身が悪魔とも人ともはっきりと言えない境目を右往左往している為と、アダムが去り際にした何かが原因ではないかとシンは考えていた。

「それにしてもまたあのイカレ神父か……エクスカリバーなんて似合わないものを振り回してたなんてな……」

「もしかしてフリードさんは聖剣に選ばれるぐらいの改心を――」

「無い、それは絶対に無いぞアーシア」

「改心どころか悪化していたようにしか見えなかったな」

「そうですよね……」

もしやという可能性を口にするアーシアであったが即座にシンと一誠が否定。アーシアもその可能性を微塵にしか感じられなかったのかすぐにその考えを引っ込めた。優しい、人が良いと評価されるアーシアでもフリードという人間に改心の可能性を見出すのは至難の技であるらしい。最も可能性を見いだせられる人間がいるとすればそれは余程現実が見えないか、底抜けの博愛主義者のどちらかであろう。

「エクスカリバーに『はぐれ悪魔祓い』フリード、『元教会関係者』バルパー、そして『堕天使』コカビエル。……状況としてはかなり最悪の事態ね。特に『神を見張る者〈グリゴリ〉』の幹部自らが出て来るなんてね。ここまで来ると笑うしかないわね」

苦笑を浮かべるリアスであったがその陰を含む笑みに、今回の件が如何に厄介なものかを現していた。

「それにしてもそのアダムという神父は何が目的なの？　聖剣を奪還するにしても悪魔の協力を仰ぐような真似をしたり情報を流したり……もし悪魔と堕天使の共倒れを狙っているのだとしても私たちに対して弱みを見せすぎだわ」

聖剣の強奪という話は教会にとっては他者に見せることが出来ない恥部であり、闇に葬ってしまいたい事件である。

それを敵対する相手に流して得られるメリットは何か、それを最初に尋ねたときは平和の為と言っていたが、シンは素直に信じることが出来なかった。初めに見たときは胡

散臭い神父という印象であったが、真正面から向き合った時にその身体から仄かに漂う未知の気配と、シンの腕を瞬時に治した不可思議な力、そして会話の中で僅かに覗かせたアダム本来のものと思える顔が、底知れない印象をもたらす。

「でも、そいつが原因で木場の態度がおかしくなったんだろ？　きっとあいつの過去を知っていて巻き込むような真似をしたんだろうし」

まだ見ぬアダムという神父に一誠は嫌悪感を込めた言葉を吐く。木場の過去、それに対し感情を露わにして口にするということは、少なくとも一誠は過去に聖剣と木場の間にどんな因縁があったのかを知っているということを示している。

「その神父からは木場に聖剣の話をしたということしか聞いていませんが、過去に聖剣――エクスカリバーと木場にどんなことがあったんですか？」

「……そうね。貴方も知っておいた方がいいわね」

シンの疑問に答えるのはやはり木場との付き合いが長いリアスであった。

「祐斗はね、聖剣計画という教会の計画の生き残りなの」

「聖剣計画……」

「本来なら数十年に一度現れるか現れないかと言われている聖剣に適応した素質を持つ存在を、人為的に生み出すという計画よ。適応する可能性を持つ子供たちに強化、改造、訓練、投薬、その他のあらゆる要素を用いて養成をするの」

計画の内容を喋るリアスの表情は苦いものを噛み砕いたようであり、自ら語る言葉に不快感を抱いていた。

「結果を言ってしまえばその計画は失敗。それによってその子供たちに下された決定は子供たちの『処理』だったの。……そしてその中で唯一生き残ることが出来たのが祐斗というわけよ」

木場の過去を聞き、成程と心の隅で納得をする。本人でなくリアスから聞いた為ある程度内容を省いたものであるが、それを実際体験した木場にとっては、もっと陰惨で絶望的で憤怒に満ちた、救いの無い経験であったのであろう。それによって心の奥底にへばりついた黒い感情を拭い去るには、それを生み出した元凶を自らの手で葬ることも納得出来る。

最もシンからすれば教会関係者を理性を無視して無差別に襲いかかって殺害するような矛先がぶれる真似はせず、エクスカリバーを憎み、教会には嫌悪で留める木場に砕けない理性があることが感じられた。

「……今回の交渉、私は祐斗を立ち会わせるつもりよ」

リアスから告げられた言葉に一誠とアーシアは酷く驚く。二人がエクスカリバーに強い敵意を持つ木場を参加させまいと思っていたからであった。

「でも、部長それって……」

「言いたいことは分かるわ、万が一の危険があることもね。だから出来る限り私たちの目の範囲の中に祐斗を置いておきたいの。今の不安定な祐斗を抑えられるのは私たちしかいないから」

もし木場を省いた状態で交渉をし、それが友好的に終わったとしても、木場がそれを簡単に容認することは考えにくい。力尽くで木場の復讐心を押し込めても、それは一旦止まるだけでいつ爆発するか分からない不発弾に変わるだけである。あえて参加させることで木場がどういった行動をとるか知り、仮に実力行使に移った場合でもそれを防ぐように周りのメンバーが対処する為でもある。

「だから貴方達も気を抜かないようにね。教会の二人だけでなく……祐斗にもね」

最後に付け加えた言葉に悲哀が感じられる。それがリアスにとっても不本意な願いであることを意味していた。

「……その交渉には俺も出ていいんですか？」

「ええ、出来ればお願いするわ」

「別に聞かなくてもいいんじゃないか、それ？」

「良くはないだろ。あくまで俺の立場は協力者だからな」

普段から共に活動をしているせいで慣れてしまったのか、参加の有無を尋ねるシンに一誠は違和感を覚えたらしい。そんな一誠の様子にシンは嘆息する。

シンは悪魔の力を使うが一応は転生を行っていない人間であり、ましてや誰かの眷属でもない。悪魔やその他の勢力のいざこざには頼まれぬ限り進んで首を突っ込むことは考えてはおらず、以前のライザーや今回の件は例外で在り、知り合いが巻き込まれているからという動機で動いているにしか過ぎない。

自分の本来の立ち位置は部外者であるとシンは想っていた。

「それで今回の交渉のことは私から祐斗に――」

「俺が伝えておきますよ」

リアスの言葉を途中で遮り軽く片手を挙げてシンは自ら立候補する。

「でも貴方達は」

「前のことは気にしてはいませんよ。俺も……多分、木場も」

言外に躊躇する響きが込められる。リアスは球技大会後のはぐれ悪魔の討伐のときにあったシンと木場の一触即発の件のことを思い出し不安そうな表情をするが、当の本人のシンは乾いた態度でそれに対しての負の感情は無いと言う。

「そう、分かったわ。この話、朱乃と小猫には私の方から伝えておくわ」

「お願いします」

僅かな沈黙後口を開いてそう言い、リアスたちとの話し合いはこれで終わりとなった。シンはその足で木場のいるクラスへと向かう。木場のクラスに着き、中を覗いてみ

ると既に木場は登校しており、自分の机に独り静かに座っている。その目には周囲の景色など映ってはおらず、ただ意味も無く虚空を見ていた。

シンは躊躇う事無く木場のクラスへと入る。木場のクラスメイトの何人かは、見知らぬ生徒が自分たちのクラスに入ってきたことに疑問や好奇の目を向けていたが、シンはそれを無視して木場の机の隣に立った。

「……何か用かい？」

隣に立つシンの存在に気付き木場はいつもの笑みを浮かべるが、やはりその笑みには陰りしか感じられない。目線も向けたのは一瞬でありすぐにそれも伏せてしまっていた。

「伝えることがある。ここでは言えないがな」

ボソリと言うシンの態度で察したのか木場は何も言わずに席から立ち上がる。それを見たシンは木場へと背を向け、人が少ない場所へと先導をしていく。

着いた場所は同じ階にある視聴覚室前。一限目から使用するクラスは無く、人の出入りも少ない為話すのには好都合な場所であった。

「それで話はなんだい？　早くしないとホームルームが始まっちゃうよ？」

相変わらず張り付けたような笑みをする木場、思えばシンはここ数日その笑みばかりしか見た記憶が無い。だがその笑みに若干のぎこちなさも感じるのは、少し前にあった

いざこざの影響が出ていると考える。実際、シンも表面上は無表情を張り付けているが、内心では気不味さを確かに覚えていた。
「今日の放課後に部室でリアス部長とある相手との交渉がある」
「へえ、そうなのかい」
　木場の返事から交渉に対しての関心は感じられなかった。そもそもその交渉の場に出る意志も感じられない。
「申し訳ないんだけど、僕は私用があるから辞退してもいいかな？　夜の仕事には出るつもりだけど」
「そんなにエクスカリバー探しが大変か？　まあ、あの神父が相手なら分からなくもないがな」
　シンの不意打ちの言葉に木場の顔から一気に笑みが消え、一切の情を排した顔となる。ただその瞳には、隠しきれない激情が渦巻いていた。
「……なんで君が……そのことを……知っているんだい」
　溢れ出しそうな感情を必死に抑え込んで喋っているのか、途切れ途切れに言葉を紡ぎ出していく。シンが下手な言葉を返せば一気に決壊しそうになるほどの感情を抑制しながら、木場は睨む様にしてシンを見ていた。
　シンはその視線に対して、涼風でも浴びているかのような冷ややかな表情で木場の言

葉に答えていく。
「お前と会ったというアダムという神父から聞いた。それとフリードとも昨日戦っている」
「戦ったって……大丈夫なのかい！」
冷水でも浴びせられたような顔となった木場の口から真っ先に飛び出した言葉は他人を気遣う言葉であった。復讐というものに憑りつかれている人物が口にするにはあまりに優し過ぎる言葉である。
「大丈夫だ。特に問題は無い」
「そうかい」
安堵の溜息を吐きそうになる木場だったが、すぐに自分の態度を思い起こし吐く筈の息を呑みこみ、数日前までの木場の顔付きから最近の木場の顔付きへと戻る。
「理由が分かっているなら僕を放っておいてくれるかな。僕が戦う意味、君も知っている筈だから」
これ以上話し合うつもりは無いと言外に示すように木場はシンに背を向けた。その背中に向けてシンは相手の態度を一切無視して話を続ける。
「今日の部長の交渉相手は教会側の人間だ」
歩もうとした木場の足が止まり、その肩が軽く震える。首を後ろに回し、肩越しでシ

ンを見る木場の目は初めの内は驚きの色で染まっていたが、時が過ぎるにつれて怒りと怨恨の色へと変わっていく。
「何だって……」
「人数は二人、その二人とも聖剣持ちだ。――そして聖剣の名はエクスカリバー、ここまで聞いてまだ辞退する気持ちはあるか？」
シンの問いに木場は応じず、ただその表情から温度を消し去っていく。エクスカリバーという単語が耳に入ってからそれ以降のシンの言葉は聞こえない様子であった。
「伝えることは伝えた。後の判断はお前に任せる」
それだけ言ってシンは木場の横を通り過ぎる。視聴覚室から離れながらも時折視線は背後の木場へと向けるが、木場はその場で佇むばかり。その胸中ではどのような感情が渦巻いているかはシンには分からない。
「ヒホー、本当にゆうとは来るんだホ？」
廊下の曲がり角の先からジャックフロストが顔を出し、一人佇む木場を心配そうに見つめる。
「ちらほら聞こえたけどさぁ、シンってゆーとのこと怒らせるような話し方じゃなかった？」
そのジャックフロストの頭の上に座るピクシーが先程の会話について指摘する。あ

のような殺伐とした空気の中に二人を置いても良いことなど無いと思い、少し離れた場所で待機させていたが、会話の内容自体は聞こえている様子であった。ただピクシーの指摘はシンを批判するというものではなく、素直に疑問に思ったことを口にしているだけの様子であった。

「……かもしれないな」

内容を端的に話せばいいものを、一々相手の知られたくないことを暴いてから喋るのは、改めて考えても趣味が悪いと言うしかない。無意識の内にではあるが、ここ最近の木場に対して覚えていた不満が、相手の事情を知り尚且つ相手の一歩先の情報を知るという優越感に似た感情に刺激され、思わず漏れ出したのかもしれない。

そう考えると脳内の中で何度もさっきの会話が繰り返し流れ始め、その度に自己嫌悪の感情を沸々と胸の中に湧き、同時に羞恥の感情もまた湧き上がってくる。

（我ながら器の小さいことをするもんだ）

内心で自分の底を見つめながら、先程よりもやや早足でその場からシンは去って行くのであった。

◇

その日の放課後。リアスと朱乃を除く部員たち全員が部室へと集合し、来訪者が現れるのを待っていた。小猫、シンはいつもの無表情のまま静かに待っていたが、一誠とアーシアは静かすぎる空気と木場の放つ剣呑な空気が落ち着かないのか辺りを見回したり、退屈そうにしているピクシーたちをあやしたりなどして気分を紛らわせている。そしてこの場で一番危うい気配を纏う木場は部屋の片隅で腕を組んで立ち、部室に入ってからずっと沈黙を貫き通していた。

穏やかとは言えない空気の中、部室の扉が開きそこからリアスと朱乃、そしてシンが初めて見る少女二人の順に中へと入ってくる。共通してフード付きの白いローブを纏っているが、フードの端からはそれぞれの容姿が見えた。片方の栗色の髪をした少女は以前写真で見たことのある紫藤イリナであることは間違いない。長く伸ばした髪を二つに括り、快活な印象を与える容姿をした少女であった。もう一方の少女はイリナとは対照的に涼し気とも無愛想とも言える大人びた雰囲気を纏い、髪型もまたイリナとは対照的にショートヘアーであり、何らかの理由があるのかその髪の一房は緑色に染められており、容姿以上に目を引いた。

二人が部室へと入り込んだ瞬間、元々暖かくなかった部室内は更なる冷気を帯びる。それは実際に温度が下がったのでなくイリナ、そして緑のメッシュの少女が持ち込んだ白い布で巻かれた得物から発せられる清浄な気配のせいであった。その気配はシンが

フリードと対峙した時と酷似しており、紛れも無く二人がエクスカリバーを所持していることを証明している。同じくエクスカリバーと対峙した木場もシンと同じ考えに至ったのか、ただでさえ鋭かった眼差しをより鋭利なものと変え、殺意を隠すことなく二人の少女を睨みつける。

イリナたちは部室に入って早々の木場の殺意に一度は目を向けるものの、すぐに興味を無くしたように視線を戻すと、リアスに言われてソファーへと腰を下ろす。リアスと朱乃もその正面にあるソファーへと座った。

あまり広くはない空間の中で張り詰めていく空気。それがエクスカリバーの気配と合わさり悪魔にとっては最悪とも言える一室へと成り替わる。長時間待機すれば体を壊しそうな場で、最初に会話を切り出したのはイリナからであった。

「単刀直入に言います。先日、ヴァチカン、プロテスタン、正教会から管理されていた聖剣エクスカリバーが盗まれました」

イリナは前置きも無く自分たちの弱みを話し始める。事前に知らされて心の準備をしていたとはいえ、いきなりそれを持ち出してきたことにリアスと朱乃は少々目を丸くする。仮に知らされていなかったら驚きは今の何倍に跳ね上がり絶句していたであろう。同時にせっかくシンがもたらした情報が早速意味の無いものに変わる。相手がこの事実を隠し通す素振りを見せていたのならば有効なカードとなっていたが、開示して

しまえばただの白紙に過ぎない。
「随分とあっさり言うわね。それほどの事件を私たちに易々と喋っていいのかしら？」
「何事も信頼関係が大事ですから。悪魔の皆さんも私たちが何故ここに来たか気になるでしょうし」
少し皮肉るようなリアスの口調もイリナにはあまり効果は無いらしく軽く微笑んで流される。今、この交渉の場の流れはイリナたちの方へと流れている。
「それを奪い返すにもエクスカリバーが必要なのか……」
小さく呟いた一誠の言葉にイリナは耳聡く反応する。
「イッセーくん、その口振りだと現在のエクスカリバーの状態を知っているのかな？」
突然イリナから話を振られ、一誠は少々驚きつつも首を縦に振る。
「なら話が早いね。ゼノヴィア、この際だから私たちのエクスカリバーを見せてあげましょう？」
緑のメッシュが入った少女――ゼノヴィアは少しの間顎に手を当て考える仕草を見せる。それは悪魔相手に聖剣を容易く見せていいかを考えるものと思われたが、その仕草もすぐに解かれる。見せたとしても別に自分たちにとって不利に働かないという結論が出た様子であった。
ゼノヴィアは持ち込んできた布に包まれた得物から布を解き始める。地面へと垂れ

さがっていく布の裏地には細かい文字が大量に書き込まれ、それが今から現れる聖剣の凄まじさを物語っているようであった。

「四散した聖剣は生まれ変わり七本に分かれた。――これが今のエクスカリバーだ」

布の中から現れたのは両刃の大剣であった。成人男性の腕よりも広い幅の剣身は部室の照明を反射し鈍色に輝きその光にイリナ、ゼノヴィアを除く全員の眉間に皺が寄る。真っ直ぐに奔る刃は鍔の部分にまで及び、握りの部分を除けば全て触れれば斬れる凶悪な造りとなっていた。

「七本の内、カトリックが保管する聖剣『破壊の聖剣〈エクスカリバー・デストラクション〉だ』

自分の剣の紹介を終えるとゼノヴィアはすぐエクスカリバーに布を巻いていく。シンは目の奥に痛みを感じながらもそのゼノヴィアのエクスカリバーを観察していた。フリードとの一戦でエクスカリバーには固有の能力が備えられているのをシンは知っている。フリードが見せたのは自身の速度強化と剣本体の透明化、そうなるとゼノヴィアのエクスカリバーにも何らかの能力が備えられている筈である。

最もこの場でそれを言及するつもりは全く無く、さっさとエクスカリバーを仕舞うゼノヴィアも説明する気など微塵も感じられなかった。

ゼノヴィアがエクスカリバーに布を巻き終わるのを見ると今度はイリナがローブの

中に手を入れると中から一メートル弱程の紐を取り出した。その紐は皆の見える前で生き物のように蠢き形を変化させていく。最初は指ぐらいの太さしかなかったがすぐにその倍以上の幅になりその代わりに厚みが半分以下になる。イリナが掴んでいる部分は硬化し始め色が変わり始めると瞬く間に柄が出来上がる。そしてその柄から上が膨れ上がり鍔を形作るとそこから先が直線状に伸び刃を形成した。

数秒もかからずイリナの手の中には片刃の剣が握られていた。

「これがプロテスタントの私の聖剣『擬態の聖剣〈エクスカリバー・ミミック〉』。能力は見ての通り自由自在に形を変化させることが出来るの。だからね、別の国に行くときはとっても便利だよ。さっきみたいに隠すことが簡単だから」

誇らしげにエクスカリバーとその剣の保有する能力を語る。それを横目に見ていたゼノヴィアはやや目を細めイリナの行動を少し咎めた。

「あまり喋りすぎるな。悪魔に教えても私たちにはなんの利益も無い」

「でもこういうのって内緒にしているよりも素直に話した方が円満に交渉が進むんじゃない？　それに私のエクスカリバーの能力とゼノヴィアのエクスカリバーの能力が負けることなんてありえないと思うし」

そのイリナの自信に満ちた言葉に場の空気が一気に冷え込むのを感じた。同時に朱乃、小猫、一誠、シンの目線が木場の方にさり気無く向けられる。皆が同時に思ってい

たことは的中していたらしく、先程まで悪鬼を思わせる表情であった木場は感情が振り切れてしまったのか表情が消えてしまい、怖気を感じる無機質な顔で教会の二人を見ていた。

いつ爆発するか分からない木場に誰もがいつでも抑え込めるように準備をする。この場において最速を持つ木場を取り押さえるのは至難の技であるが、交渉の場でリアス側にも教会側にも血を流させる訳にはいかなかった。

話が進むにつれて悪化していく空気ではあるが、この重苦しさを感じさせないような淡々とした口調でリアスは交渉を進めていく。その後イリナとゼノヴィアが語ったのは概ねシンがアダムから聞いた情報と変わらないものであった。

エクスカリバーを奪ったのは『神を見張る者』であり、事件の首謀者はその幹部であるコカビエルであるということ。ただ少し齟齬があるとすればコカビエルには下級の堕天使たちが複数従い、フリードの存在とバルパーという存在については語られることは無かった。それは相手が意図的に隠しているのかそれとも知らなかったのか、判断するにはまだ情報が足りない。

その中でゼノヴィアはこの街に『悪魔祓い』を派遣していたということを明かす。しかし、送り込んだ『悪魔祓い』全てと連絡が断たれたと語っていた。

シンの脳裏に軽薄な笑みを浮かべる例の神父の姿が浮かび上がる。アレもその送り

込まれた『悪魔祓い』の一人なのかもしれないが、その行動は教会の思惑に反するものであり、ゼノヴィアたちも既に亡き者として扱っている。

（もしかしたら、あいつは教会側ではないのか？）

その言動と不気味な存在感から浮かび上がる疑問。しかし、仮に尋ねたとしてもはぐらかされる未来しか想像出来なかった。

そうこうシンが考えている内に、ゼノヴィアはこの交渉における自分たちの要求を話し始めた。その内容は自分たちがエクスカリバーを奪還、最悪の場合消滅させるまでの悪魔側の一切の不干渉。

告げたと同時にリアスの全身から不快感を露わにする。自分の縄張りに敵である堕天使、エクスカリバー、教会の人間が跋扈している状態を指を咥えて見ていろという要求、否、注文であった。

その後ゼノヴィアは上司から言われた託をそのままリアスへと告げる。内容を簡潔に纏めるなら『堕天使と手を組むような真似をしたら滅ぼす』という物騒なものであった。天使側からすれば悪魔を滅ぼすのに有効な手段であるエクスカリバーを抹消するには、またとない好機という判断であろう。

リアスもあえて危険に踏み込むことを良しと判断しなかったのか自らの名に懸けて堕天使と組まないことを宣誓する。悪魔側からすれば天敵である天使側と堕天使側が

潰し合うという見方もある為、それが一番無難な決断であった。
　ただし、とリアスは言葉を繋げる。
「もし私の縄張りの中で人が死ぬような事態が起これば、先程の言葉は一切反故にして貴方達も堕天使側も強制的にこの街から退場してもらうつもりだから覚えておいて」
「肝に銘じておこう。私たちとて不必要な犠牲は好まない」
　特に不服な態度を見せずゼノヴィアとイリナは小さく笑い、誓いについて簡潔な礼を言う。
「それで教会側から派遣される戦力はあとどれくらいのなのかしら？　不審な輩に潜り込まれて余計な混乱を起こされたくないしせめて人数を把握しておきたいわ」
「あいにく戦力は私とイリナの二人だけだ」
　予想外の答えにリアスも呆気に捉われる。相手の戦力をきちんと分かった上で送り込んだのが二名だけとするならば無謀もいいとこであった。
「貴女たちは自殺願望者なの？　そちらの宗教だと自殺は大罪のはずだけど」
「失礼ね。死ぬ覚悟は出来ているけど進んで死ぬつもりはないわ」
「こちらも同意見だ。まあ仮に死ぬとしてもせめて使命は全うするつもりだよ。仮に回収できなければ、私たちの手で破壊する。その方が堕天使たちの手の中にあるよりも遥かにましだ。上の方も許可を出している」

「相変わらずね、貴女たちの信仰心は――呆れるわ。はっきりと言わせて貰うけどコカビエルが相手となると良くて犬死にがせいぜいかしら」
「それはどうかな？」
　不敵な態度をするゼノヴィアにリアスは探るような眼差しを向ける。
「その態度、何か切り札でもあるのかしら？」
「素直に言うとでも？」
　それ以上言葉を交わすことはなかった。それを見て朱乃が席を立ち戻ってくると、テーブルの上にお茶を置いていく。やや固い声で朱乃がお茶を飲むことを勧めると、イリナとゼノヴィアはほぼ同時にティーカップを手に取り一気に中身を呑み干してカップをソーサーに置くと同時に、ソファーから立ち上がった。
「ではそろそろ去るとしよう」
「そう、なんならもう一杯ぐらい飲んでいったら？　お菓子もつけるわよ」
「一杯でも十分です。ごちそうさまでした」
　木場が行動を起こさす前に交渉が終わることに胸を撫で下ろすシンであったが、去ろうとする二人の足が止まりその視線がアーシアへと注がれる。この瞬間嫌な予感が頭の中を過ぎった。
（何も言うなよ、この場で。そのまま何も言わずに帰ってくれ）

しかし、その想いとは裏腹にゼノヴィアは口を開き、よりにもよってアーシアの過去の行動から付けられた『魔女』という言葉を飛び出させる。

シンは反射的に舌打ちをしたくなるのを無理矢理止め、組んでいた腕を解き両手がいつでも動くような状態とする。少なくともこの事態を黙って見ている筈がない人物がこの中に居る。

二人から淡々と言葉で責められ、悪魔の身に堕ちたことを嘆かれたアーシアの表情は青褪め傷付いたものとなっていく。それでも言葉を止めないゼノヴィアはとうとうその手に持つエクスカリバーをアーシアへと突き付ける。かつては信仰心を持った者に対するせめてもの情けとして。

空気の中に感情が混じっていくのをひしひしと感じる。部室のメンバーから沸き立つ怒気が場へと帯びていく証であった。それを感じるシン自体もまた二人の言動に面白くないものを感じていたが、より鮮烈な怒りを出す存在のおかげで否が応にも感情が冷えていく。

やはりと言うべきかこの行動に真っ先に怒りの声を上げたのはアーシアを家族として迎え入れている一誠であった。

「それ以上一言でもアーシアを傷付けてみろ。そのときは俺があんたたちと戦うことになる」

「『魔女』を庇い立てするのか？　悪魔らしいと言えば悪魔らしいが言葉に責任を持った方がいい。教会を敵に回すことになるぞ？」
「それがどうしたっ！」
「分からないな。かつては『聖女』と呼ばれていた彼女がこれ以上堕ちる前にせめて『聖女』の名残があるうちに断罪しようとする慈悲が理解できないのか？」
「理解できるか！　勝手に崇めて勝手に貶して最後が断罪だと？　ふざけるな！　どんだけ苦しませれば気が済むんだ！」
「それが神の定めた彼女の運命だ」
「神が何だっていうんだ！　どれだけ祈ってもアーシア一人救わない神なんて信じられるか？」
「真面目に神に祈りを捧げたことのない悪魔が神を語るのか？　彼女が救われなかったのは信仰が足りなかったせいだ。救われぬ信者は皆ただそれだけのことだ」
　互いに意見を譲らぬ両者。一誠の口調には激しい熱が込められるが対するゼノヴィアの話し方には一切感情のぶれがない。そしてその口論の外ではいままで黙していたもう一つの感情が音も無く爆ぜる。
「お前！」
「止めろ」

「間薙、止め――」
「止めろ、木場」
「えっ、木場？」
　気付けば部室内の天井を覆い尽くすほどの魔剣の群が出現をしていた。その切っ先全てが教会の二人へと向けられている。
「色々と我慢したつもりだけど限界だったよ。僕は僕を抑えられそうにない」
　殺意を笑みの形にしながら木場は話す。
「随分と物騒な真似をする。君は何者だ」
　激しい殺意と憎悪を鋭敏に感じ取ったのか、アーシアに向けていたエクスカリバーを木場に向けゼノヴィアは問う。
「僕かい？　君たちの先輩だよ」

◇

　夢を見ていた。
　地獄の炎が大地も空も燃え上げていく中、その炎で燃え尽きようとしていく自らの右腕を押さえ一人の堕天使がソレを見続けていた。

鋼鉄の馬に跨り、灼熱の車輪を回し続けるソレが通った後には、何人もの堕天使たちが炎に包みこまれ、その身を灰にしていく。

ソレが鋼鉄の馬を嘶かせると、それによって生み出される見えざる力が、光の槍を構える多くの堕天使たちの体を捩じ切り、あるいは切り裂いて元の身体を何十の肉片へと化していった。

翼を失い、這いつくばるようにして逃げる堕天使の頭部を、灼熱の車輪で慈悲も無く押し潰し、ソレは何百の堕天使たちの中心で声高く叫ぶ。

『俺とコイツの怒り、お前たちに止められるか！』

再びソレは轟音を上げ、堕天使たちの中に飛び込んでいった。その光景を見ながら燃え盛る右腕の痛みを忘れ、ただ一瞬たりとも見逃さないように凝視する。

そのときの堕天使の顔は確かに――

「コカビエル様」

下級の堕天使に名を呼ばれコカビエルは閉じていた目を開く。開かれた瞼の下にあったのは、白目の部分が全て赤く染まった瞳であった。

「何の用だ」

上質な皮で出来た椅子に頬杖をついた状態でやや不機嫌そうに問う。それを見て萎縮する堕天使であったが、一刻もこの場から去りたいのか口早に要件を伝える。

「バ、バルパーが呼んでおります。術式の件で話しておきたいことがあるそうです」
「後で行くと伝えておけ」
「りょ、了解しました」
　足早に去って行く名も知らぬ堕天使の背中を詰まらなそうに見た後、コカビエルは頬杖を突くのを止め虚空を見る。
「つまらん、実につまらんな」
　事を起こすまでの準備の時間はコカビエルにとっては酷く退屈なものであり、その退屈に体が腐り落ちていくような気さえもする。
「しかし、久しぶりにあの夢を見るか」
　コカビエルは己の右腕を掲げる。黒のローブで手首から上の部分しか露わになっていなかったが、その右手にも黒の手袋によって覆われている。
「これは予兆か？　ならばまた一つ楽しみが増えるな」
　自らの右腕を眺めるコカビエル。その顔は確かに嗤っていた。

双剣、決闘

静まり返る部室の中。そこでは一触即発の状況が続いていた。
木場は無数の魔剣を宙へと創造しつつその両手には一本ずつ魔剣を握り締め、絶対零度の瞳でイリナとゼノヴィアを睨みつける。対する二人もその手の中にエクスカリバーの柄を握り締めいつでも迎え撃つ準備をしていた。
「先輩と言ったがどういう意味かな？　少なくとも君からこのような殺気を向けられる記憶がないのだが」
「言葉通りの意味さ。最も僕は聖剣を扱うことの出来なかった失敗作だったけどね」
自嘲気味に笑う木場。
木場の言葉に心当たりがあったのか、イリナとゼノヴィアは目配せし小声で呟く。
「ゼノヴィア、もしかしたら――」
「ああ、私も同じことを考えていた」
短い会話であるが、その内容から木場の素性についてある程度の認識があることが窺える。だが、それが分かった所で両者の剣先は揺れることなく、絶えず相手の急所へと向けられ膠着した状態が続く。

「剣を引くんだ、木場」
　その膠着を破ったのは両者の間に割って入る一人の男、シンであった。エクスカリバーを背中にし、無数の魔剣の射線を遮るようにして立ち塞がる。
「――どういうつもりだい？　そこをどいてくれないかな。じゃなきゃ君を巻き込むことになる」
「頭を冷やせとまでは言わないが深呼吸の一つでもしたらどうだ。今のお前は冷静じゃない」
「自分でも怖いくらい僕は冷静だよ。――その上で彼女たちに剣を向けている」
「冷静？　頭に血が昇り過ぎて、そういった感覚が麻痺して錯覚しているだけだろが」
　互いに口調は淡々としたものであったが、どちらも引く様子は見せない。木場も殺気を向けることは無かったが強烈な敵意を当てシンの意志を挫こうとするが、その敵意を受けてもシンの顔色は何一つ変わらない。
「相手がどんな言葉を吐こうとも、交渉の場で血でも流させたらその時点でこっちが悪だ。お前は部長に恥をかかせるどころか顔に泥まで塗るのか？」
　そう言われ、僅かに木場の敵意がほんの少しではあるが緩まる。完全には納得していないが、恩義のあるリアスの名前を出されたことに多少なりとも罪悪感を覚えたらしい。

「ふむ。中々面白い展開になってきたな」
　他人事のように言うゼノヴィアの一言に流石にシンも腹立たしさを覚え、首だけ背後に向けた。
「少し黙っていろ。この馬鹿二人が」
　元はと言えばゼノヴィアとイリナが不用意な言動をしたことが原因である。あのまま帰っていればこのような事態にはならなかったのかもしれないと思うと、シンは思わず直球の罵声を浴びせてしまった。
「どうやら揃いも揃って悪魔として教育不足のようだな、グレモリー。彼らの寿命が縮むことになるぞ」
「祐斗は私の眷属だけれどシンは違うわ。彼は人間よ。少し特殊な事情があって私の協力者になってもらっているの。言っておくけど、眷属でなくとも私は彼のことは重宝しているから、下手なことは考えないでね」
　シンという人間がグレモリーの庇護の下にいることを告げる。リアスの言葉が思ってもいないことだったのか、僅かに目を丸くしたイリナとゼノヴィアがシンを凝視する。
「人間が悪魔に協力をするか……嘆かわしいな」
「貴方って『悪魔崇拝者〈サタニスト〉』なのかしら？」

「生憎、悪魔に祈りを捧げたことはない。勿論、神様にもだ」
言い切ったシンは視線の圧力が僅かに増すのを実感する。教会の教えを遵守して生き、神に祈りを捧げることを当たり前として生きてきた人間から見れば、自分と言う存在はさぞかし不真面目な存在に映るのかもしれない。
「無神論者か……この国特有だな」
(別に神様に祈りはしないだけでその存在を否定はしていないがな)
今心の裡で思ったように、シン自体は神という存在について不思議と信じていた。自分の性格からして真っ先に否定をするようなものであるが、空想の産物と言って切り捨てず、ただ漠然とどこか高みにいて、自分たちを見下ろしているのではないかと思っていた。
「十数年間、まともに祈らず生きてきたんだ。今更手の平を返して祈り始める方が不敬じゃないか?」
「神に祈るのに遅いも早いも無い。どれだけ深いかが重要だ」
「そうよ。必要なのは絶えず神への愛を感じ祈ること。ここで貴方のような存在と会ったのも神が与えて下さった試練! さあ、今すぐ悪魔と手を切って私たちと共に主への信仰を行いましょう!」
まさかこの場で宗教への勧誘をされるとはシンも想像出来なかった。二人の顔は一

切茶化している様子は無く至極真面目なものだ。特にイリナの方は目をぎらつかせながら鼻息を荒くして誘っている。
「だから――」
「そこまでにしてもらおうかな」
　言い掛けたシンの言葉は木場の声とシンとゼノヴィアたちを間を塞ぐようにして並び立つ数本の魔剣によって中断される。
「ああ、そう言えばこういった状況だったな。私としたことがうっかりしていたよ」
「……挑発のつもりかい？」
　本気か冗談なのか、真顔で木場の存在を忘れていたというゼノヴィアの言葉。それは木場の神経を逆撫でするには十分なものであり、より殺気を凝縮し零下の瞳で二人を射抜く。が、ゼノヴィアとイリナの態度は微動だにせず、それがより木場を苛立たせた。
「気分を害したのか？　教会に身を置くものとして闇に囚われている哀れな子羊が居れば、それに救いの手を差し伸べるのは当然のことであり優先すべきことだと思うが？」
「それは僕の存在が眼中にない、という解釈でいいのかな？」
「君の想像に任せる」
　最早互いが衝突するのが、秒読み段階に入ってきたことが分かる。今の木場の形相は鬼と称してもいい程であり、荒れ狂う感情が部室の中を満たしていく。対するゼノヴィ

アとイリナも表情は最初の時と変わらないものの、二人ともいつでも構えられるよう手がエクスカリバーへと置かれており、微塵も油断が無い。

「祐斗！　そして貴女たちも待ちなさい！」

この張り詰めた空気の中それを打ち砕こうと声を張り上げたのはリアスであった。その声に反応しゼノヴィアとイリナは視線をリアスへと向けたが、木場の視線は二人に固定されたまま動こうとはしない。

「何かなグレモリー？　今、君の眷属に勝負を挑まれている最中なのだが」

「それは……分かっているわ……」

止めに入ったリアスであったが、非常に苦しい立場にあった。この件の発端は間違いなく教会の二人のアーシアへの言葉から始まっているが、一誠がそれに反論していた段階ではまだ口論の内であった。だが、そこに木場が魔剣を無数に携えて危害を加えようとした為に、リアスは分の悪い立場となってしまう。

この場を切り抜ける方法としては、二人の前で主自らが眷属に制裁を加えるという方法もある。しかし、木場の過去を知っているリアスとしては木場に対し制裁を加える気は起きず、またリアス自身そういった方法を好まない。

この場を切り抜けるにはどうすればいいのか、制止の声を出したリアスは、頭を全力で回転させ方法を考える。思考するリアスの沈黙はほんの数秒ほどだったが、その間絶

対零度の空気が場に漂い、その中でリアス以外の眷属たちは、各々が思いつく限りの最悪の事態を想定しつつ、木場の挙動を逐一見ていた。
部室に掛けられてある時計の秒針が１２の文字を通過したとき、考えが纏まったのかリアスが口を開く――
「一つ提案があるのだが？」
――前にゼノヴィアが口を開いた。
「何かしら？」
「このまま何もせずに帰っても彼らとの遺恨が残るだけだ。ここは一つお互いの気持ちを整理するために『決闘』を行ってはみないか？」
思わぬゼノヴィアの提案。しかしリアスの渋面は変わらない。
「あくまで私とイリナ個人が行う私闘という形での決闘だ。このことは教会には一切話さないし、そちらの眷属を殺さないことを誓おう。なんならきちんとした効力を発揮するように契約の書面を書いてもいい」
リアスにしてみれば都合のいい展開であったが素直に喜ぶことは出来ない。相手の真意が分からない為慎重に言葉を選ぶ。
「本当の目的は一体何かしら？」
「そうね。もしこの決闘で私たちが勝ったら、貴女の縄張りに関する情報を全て提供す

るというのはどうかしら？　万が一私たちが負けた場合は、貴女の縄張り内では貴女の指示に全て従います。ああ、それとアーシアという子に言った言葉を全て訂正して謝罪するのも付け加えるわ」

ゼノヴィアたちが勝ったのなら縄張り内の行動の黙認から全面支援へと繰り上げられ、敗ければ行動の指揮権を得られるという。悪魔としては教会を全面的に助けるという行為はあまり快いものではないが、反面好き勝手されないように制限を与えることも出来る。

リアスの出す答えは――

「受けるわ、その決闘。祐斗、貴方もいいわね？」

ゼノヴィアとイリナの提案を了承し木場に意志を尋ねる。少なくとも木場が望む、エクスカリバーと真正面から戦える権利を得たことになる。

木場は無表情を続けていたが、やがて宙に留まる魔剣の群を消し、両手に持った魔剣も消す。それは木場もまた、ゼノヴィアたちの提案を呑んだ証であった。

「リアス・グレモリーの眷属の力、試させてもらおう。――そして『先輩』の実力の程もな」

「そういうこと、さあ私と勝負をしましょう！　兵藤一誠君！」

「……え？」

　イリナから決闘の相手として名指しされた一誠は呆けた声を出す。話の流れからゼノヴィアと木場の決闘だと思っていたのか、自分も参加することは予想できていなかったらしい。
「え……え？　俺も戦うのか？」
「兵藤一誠君……いいえ、昔の幼馴染としてイッセー君と敢えて呼ばせてもらうわ。イッセー君、時間の流れってとても残酷よね。かつては一緒に日が落ちるまで、泥だらけになるまで遊んでいた友達と再会をしたら、まさか主の敵である悪魔に堕ちていたなんて。そして、その悪魔を滅ぼせる聖剣が私の手の中にあるなんて……」
　戸惑っている一誠の前でイリナは瞳を潤ませ、過去を懐かしく思いながら自分と一誠との立場の違いを嘆くように喋り出す。
　一誠としても、アーシアについて口論した敵対関係になる前は友人関係であった、幼馴染の少女の心境に同情を覚えたのか、何も言えず口を閉ざしていた。
　だがそんな一誠の前でイリナは突如弾ける。
「だからね、これは主が私に与えた試練だと思うの！　悪魔として堕落してしまった昔の友達を私の手で救うという厳しい試練！　イッセー君、今は悪魔となってしまっても貴方のことは嫌いじゃなかった――でもそれはそれ。私は主によって与えられたこの試練を乗り越えなければならないの！　それを乗り越えてこそ私が日々積んできた信

仰を更なる高みへと押し上げていく筈だから！　イッセー君！　私と決闘し、そして悪魔となってしまった罪を裁きましょう！　安心して、私の思い出の中のイッセー君はあの頃のままの綺麗なイッセーくんのままだから……アーメン！」

　口早に出て来るイリナの言葉。当の本人は自分の置かれた状況を嘆き、悲しみ、そして乗り越えようとしていると思っているが、第三者からすれば自分の言葉と信仰に酔っている風にしか見えず、先程まで同情していた一誠も明らかに可笑しいと思ったらしく引き攣った表情をしていた。

「……イタイ」

「塔城、思っていても口にしないほうがいい」

　無口の小猫から思わず出た感想は実に的確なものであったが、聞かれたら厄介なのでシンが軽く窘める。部室のメンバーの大半は小猫と似たような感想を抱いていたが例外としてゼノヴィア、そして何故かアーシアもイリナに同情するような視線を送っている。

「イリナ、君の気持は痛い程分かる。乗り越えようこの試練、供に」

「ゼノヴィア……」

「イリナさん……」

「ありがとう。私の為に悲しんでくれて……貴女の『聖女』という名、伊達じゃなかった

わね」
　同じ信仰をしていた三者によって形成される微妙な空気。失礼とは承知でこのときシンの脳裏に、寸劇という言葉が浮かんでいた。

◇

　木場、そしてなし崩しに参加することとなった一誠の決闘前に準備が欲しいとリアスはゼノヴィアたちに言い、それをゼノヴィアたちは了承し三十分の準備時間が設けられることとなった。
　ゼノヴィアたちは一足先に決闘を行う場所に向かい、木場は風に当たってくると言って部室の外へと出て行ってしまった。今の木場の不安定さに不安を覚えていたリアスは小猫と朱乃に木場の監視を命じ、二人はそれに応じて木場が部室出て少し間を置いてから退室をしていった。
　今の部室に残っているのはリアス、アーシア、一誠、シン、ジャックフロスト、ピクシーの六名である。
「時間も余り無いから手短にこれを見て聖剣について学びましょう」
　リアスが机の引き出しからＤＶＤのケースを一枚取り出す。そのケースにはゴシッ

ク体の黒文字で『聖剣の恐怖特集!』とタイトルらしきものが書かれえていた。
「何ですか、それ?」
「魔界でも数少ない聖剣所有者と、上級悪魔が戦っている場面を録画したものよ。これを見て聖剣が如何なるものかをイッセーに学んでほしいの」
あくまで口頭でしか聖剣の恐ろしさを知らない一誠に見て学ばせようとするリアス。戦う前に見るのは逆効果ではとシンは一瞬考えたが、知らないよりも斬られたらどうなるか予め知っていた方が必死になって回避するかもしれないと思い、特に口を挟むことは無かった。
「それじゃあ見るわよ」
リアスはケースからＤＶＤを取り出し、部室に置かれてあるプレイヤーの中に挿入する。
それから十数分後。
「これが聖剣よ。分かったかしら」
「……はい」
中身を見終わった一誠は、青白い顔をしてリアスの言葉に一応返事をする。そのまま気分転換でもしようとしたのか置かれていたティーカップを手に取るが、心なしかカップが小刻みに震えて見えた。一誠の隣に座っているアーシアも蒼白な表情となってお

り、口元を押さえ言葉が出せない様子である。
　それほどまで彼らに聖剣の恐ろしさが刻まれていた――と思われるが、実際は違う。
「うう……気持ち悪かった……」
「ヒーホー……今晩ご飯が食べられないホー！」
　全員が青褪めているのは聖剣の恐怖もさることながら、兎に角ＤＶＤの中身が徹頭徹尾非常にグロテスクな内容であったからだ。始まって早々から血飛沫が飛び交い、どこに収められていたのか分からない内臓が外にこぼれ出し、吐瀉物が撒き散らされる等々、一秒たりともそれらが映らなかった場面は無いと言っても過言では無い血生臭い内容。
（まるでスプラッター映画だったな……まあ、殺し合いの場面を映しているから仕方の無いことか）
　聖剣の効果を教えるものであったが、それ以外のものが強烈過ぎて印象は薄い。確かに聖剣で斬られた部分が煙を立てて消滅する場面があったが、血などが出ていないせいで健全にさえ見える。
　リアスは慣れているのか表情は変わらないものの、耐性の無い他の一同の精神は戦う前からこれでもかというぐらい疲弊していた。
「そろそろ時間ね。皆、場所を移動するわよ」

時計を見たリアスがそう指示すると、先程の映像を吹っ切るように一誠は勢い良く立ち上がる。それを見たアーシアもまた一誠を見習い、頬を軽く叩いた後に同じく勢い良く立つ。

リアスを先頭にして、戦いの場所となる球技大会に向けて練習をしていた旧校舎の裏手を目指し歩いていく。

その道中、一誠がシンの隣に移動し小声で話し掛けてきた。

「なあ、実際の所俺って彼女たちに勝てると思うか？」

少しだけ不安を覗かせた一誠の声。リアス、アーシアなど女性の前では馬鹿みたいに体を張る一誠であるが、心のどこかに不安を覚えているらしく弱音らしきものを見せる。それを見せるのはシンの性格と、普段から共に実戦形式で戦っていることで培われた信頼から来るものであった。

「勝てる、とは断言しないが少なくとも――紫藤イリナだったか？――にお前が負ける姿はあまり想像出来ないな。お前には『切り札〈ロンギヌス〉』がある訳だしな」

そう言ってシンは一誠の左腕を見る。今は姿を見せていないがそこには『赤龍帝の籠手〈ブーステッド・ギア〉』というエクスカリバー以上の武器が眠っている。

「胸を張れ。お前が最強の『兵士』になるのを諦めない限り、お前とその籠手は強い」

「間薙――ああ、そうだな」

（フッ、分かっているじゃないか、小僧）
「……何か言ったか？」
「いや！　何も！」
背中を後押しするシンの言葉に、幾分緊張が解れた様子の一誠。だが、シンは一誠よりも心配とする人物がいた。
「問題はあいつの方だな」
「あいつって……木場か？」
シンは首を縦に振って肯定する。
「間薙は木場とゼノヴィア、どちらが勝つと思っているんだ？」
「木場」
迷わず即答する。が、その言葉の後に、ただしと語句を続ける。
「普段の木場だったらの話だ」

◇

旧校舎の裏手に着くと、既にそこではゼノヴィアとイリナが戦闘準備を完了した状態で立っていた。纏っていた白のローブを脱ぎ捨てた二人は、黒革のような材質で出来

た、体型が一目で分かる程密着した戦闘用の装束を一誠たちの前に晒している。
「どうやら全員揃ったみたいだな」
エクスカリバーに巻き付いた布を取りながら視線をリアスたちから離し別の方向へと向ける。そこには既に『魔剣創造』を発動し周囲に何本もの魔剣を浮遊させた木場が立っていた。その顔には歪な笑みが浮かんでおり、普段の木場を知る者ならば想像出来ない程の不気味さを放っている。
木場が現れてから間もなくして朱乃と小猫も姿を見せ、禍々しい敵意を放ち続ける木場を不安そうな眼差しで見ている。数年間同じ屋根の下で暮らしてきた故、兄あるいは弟を心配する身内の心境なのであろう。
現れた朱乃にリアスは目線で指示を出す。朱乃は頷くと小声で詠唱を始め、魔力を集中し終えると軽く手を払う、すると周囲一体を膜の様に覆う結界が形成された。外部にこの戦いが洩れないようにする為の処置である。
そんな光景が拡がっていく中、一誠は現れた木場の様子から目を離すことが出来ずにいた。
「木場……お前……」
いつも異性から黄色い声援を送られ、それに絶えず爽やかな笑顔を送っている木場の見せる憎悪に塗れた顔に、一誠は何とも言えない気分となる。普段からはモテる奴は絶

滅してしまえばいいと思い、その中の筆頭である木場に対してもそれを言葉にして何度もぶつけていた。今の木場の顔を見れば、彼に対し熱い視線を送っていた女生徒たちの気持ちも冷めるかもしれない。だが一誠は、正直今の木場をこの場に居るメンバー以外見せたくは無かったし、自分も見たくは無かった。

「――嫌な顔だ」

一誠と同じくしてシンもまた小さく呟く。それは一誠と同じ気持ちから呟いた言葉であり、高校一年の頃からという長いとは言えない付き合いであるが、それでも友人として接してきた存在が見せるあのような笑みは見たくはない。

「それは思い違いだよ」

二人の声が耳に届いたのか、木場の視線が一誠たちの方へと向けられる。

「これが僕の本当の顔なんだ。ずっと……ずっと待っていた。打ち倒したくて、壊したくてたまらない聖剣が現れるのを……それがいざ目の前に現れたら君たちだって笑うだろ、……嬉しくってさ？　だからこれが僕の本当の顔なんだ……そう、この顔でいいんだ僕は……」

初めは他者に聞かせるようであったが、言葉の後半になると、まるで自分へと言い聞かせる独白のように聞こえてくる木場の言葉。それが今の木場の精神の不安定さを示しているかのようであった。

「あの場でも見たが成程、『魔剣創造〈ソード・バース〉』か……話には聞いていたが目にするのは初めてだ。魔剣系神器の中でも希少なもの。あの計画から生き延びたのも頷けるな」

一人納得するゼノヴィアに木場の殺気が密度を増す。教会の人間が木場にとって最大のトラウマである計画に少しでも口にするだけで感情が高まるらしい。

木場が歩み出しゼノヴィアたちの方へと近付いていく。一誠もまた木場の跡を追って小走りで駆けだしていくがその途中、後ろへと振り返りシンたちに意味ありげな視線を送った。視線の中に混じっていたのは不安の色であり、その不安は試合形式で行う筈の決闘の中で木場が暴走し、殺し合いに発展させるかもしれないという所から来ているものであった。

リアスたちも一誠の感じた不安を共通で抱いており、代表してリアスが力強く頷く。それは、もし木場が思わぬ行動に出ても自分たちが止めるという言葉の代わりであった。一誠もその頷きの意味を理解できたのか、少しだけ不安を和らげてから前を向く。

一誠と木場の二人がゼノヴィアとイリナの前に並び立つ。

「さあ、イッセーくん、裁きの時が来たわ……ぐすっ、本当に運命というものは残酷ね。幼馴染が記憶を交えて過去の思い出話に花を咲かせるではなく、互いに力を交えて血の華をさかせることになるなんて……ああ！　でもそれこそがエクスカリバーを手にし

た者にこそ訪れる試練！　イッセーくん！　私は貴方の屍を乗り越え信仰の道を進むわ！」
「あれ？　これって殺し合いじゃなくて試合だよね？　部室のときもそうだったけど俺のことを殺すことが前提になってない？」
「『擬態の聖剣〈エクスカリバー・ミミック〉』よ！　今こそ私に試練を打ち破る力を授けたまえ！　アーメン！」
　感極まって瞳から涙を流すイリナ。完全に自分の世界に入ってしまっており、一誠の言葉も碌に耳に入っていない様子であった。
「頼むからこっちの話も聞いてくれ！　ああ、もう！『赤龍帝の籠手』！」
　泣いているがどこか喜色も混ざって見えるイリナの姿に一誠は半ばやけになりながらも『神滅具』を発動させ自らの左手に『赤龍帝の籠手』を出現させる。
　この戦いの場に『神滅器』が現れたことにゼノヴィアとイリナも素直に驚きの感情を見せた後、表情を厳しいものと変える。
「……まさかイッセーくんが『赤い龍の帝王』の力の所有者だなんてね……本当にあなたには驚かされるわ」
「『魔剣創造』に『聖母の微笑〈トワイライト・ヒーリング〉』か……悪魔とドラゴンは力を引き寄せるという話はどうやら眉唾物ではないらしい」

警戒の色を強くする二人の前で『赤龍帝の籠手』の固有能力である能力の倍加が発動し、一誠の力が倍となる。そして、それと同時に一誠の隣に立つ木場の姿が消え、次に現れたときにはゼノヴィアと剣を交える状態となっていた。
「だからこそ悪魔になったこともイッセーくんが現れたのも感謝しないといけない。想像していたよりも早くエクスカリバーが僕の前に現れたのだから！」
擦れ合う金属音の中で、木場は思いを吐き出しながら二本の魔剣を交差して押し付ける。だがゼノヴィアも悪魔の身体能力に勝るとも劣らない力を見せ、その場から一歩も動かずに止まる。
「執念深いな。このエクスカリバーを君の同志たちの墓に捧げるつもりかな？」
「笑わせてくれるね。同志たちの墓に折れた聖剣なんて相応しくない！」
「そちらも笑わせてくれる」
ゼノヴィアの口の端が微かに吊りあがり、木場の口元にも似たような笑みが浮かび上がる。
木場は鍔迫り合いの中、周囲に浮かぶ魔剣の群の先端をゼノヴィアへと向けると、それぞれタイミングを僅かにずらしながら発射する。相手が回避し難いよう行動の隙を突く様な魔剣たちに、ゼノヴィアは表情一つ変えず後方へと一気に飛ぶと、迫る魔剣の一本を横薙ぎに振り払う。甲高い音によって魔剣は剣身の半ばからへし折られるがそ

れだけでは終わらず、折れた部分が後から押し寄せてくる魔剣たちへと接触すると、それすらも容易に砕いてしまった。これには木場も驚き、軽く息を呑む。
　直撃だけではなくそれによる余波だけでも破壊してしまう、ゼノヴィアのエクスカリバー『破壊の聖剣〈エクスカリバー・デストラクション〉』。ゼノヴィアはその先端を木場へと向けてこう告げる。
「このエクスカリバーの前では数など無意味。全て破壊し無に変えるだけだ」
「……それでも押し切る！」
　木場は魔剣を構え直し、ゼノヴィアへと向かうのであった。
　木場とゼノヴィアの戦いが激しく始まったのとは対照的に、一誠とイリナの戦いは静かに幕を開ける。
「いくわよ、イッセー君！……そして思い出をありがとう！」
「やっぱ殺すこと前提にしているよな！」
　『擬態の聖剣』を構えたイリナがエクスカリバーの間合いになる距離まで一気に飛び込むと、上段の構えから振り下ろす。一誠は右に大きく跳びそれを回避するが、イリナもまた倍加した状態の一誠を凌ぐ程の身体能力であっさりと距離を詰めると、下から斜め上に斬り上げる。
「なんの！」

今度は回避するのではなく籠手をエクスカリバーの前に出すと、腕から手の甲の上を滑らす様にして力を流す。一誠の狙い通りにエクスカリバーを大きく振り上げた格好となったイリナに左腕を突き出そうとするが、そのとき見えたイリナの顔に焦りがないことに気付き左腕を動かすのを止め、殆ど勘任せでその場から離れる。

その直後、振り上げられていたエクスカリバーが初撃をはるかに上回る速度で振り下ろされ、地面を深々と斬り裂いた。

それに目を剥く一誠であったが、そのまま驚き続ける暇も無くイリナは地面へと刺さったエクスカリバーを引き抜くと、間合いの外に立つ一誠にそれを振るう。その瞬間、『擬態の聖剣』が使い手の意志を反映して剣身を変化させる。固い筈の剣身はいきなりしなり始め、そのまま剣身の半ばから伸び始めると鞭の様になって一誠へと襲い掛かる。

首元目掛け迫る白刃に、一誠は咄嗟に身を低くして避ける。すると弧を形作る『擬態の聖剣』の剣身の一部が隆起し、そこから第二の切っ先が現れしゃがむ一誠を狙い射出された。

「うらあっ！」

『Ｂｏｏｓｔ！』

隠し刃に意表を突かれるが、それでも日々鍛えてきた一誠の反射神経は主の命を守る

為に全力で稼働し、倍加の後押しもあって一誠の左腕を拳を突き上げる形で刃の前に持ってこさせる。しかし――

「重っ！」

　重量など感じられない『擬態の聖剣』の先端が籠手へと直撃すると、一誠はそのまま弾かれて数メートルの距離を後転していく。全身の至る所に土埃や草を纏わせながらも後転の勢いを利用し立ち上がる一誠。押されてはいるが未だに無傷の一誠に、イリナは感心した様な眼差しを向けた。

「やるわね。さっきの攻撃は当たると思っていたんだけどね。生半可な鍛え方はしてないようね、イッセー君」

「いろいろと周りに手伝ってくれる人たちがいるからな。だから聖剣相手でも粘るよ、俺」

『Ｂｏｏｓｔ！』

　三度目の倍加により一誠の能力はさらに上昇。これを機に反撃に移ろうと一誠は考えているのか表情が一層引き締まる。が、すぐにその表情に煩悩めいたものが混じり始める。

「……狙っていますね」

「……狙っているな」

その表情と左腕に集束していく魔力を見て一誠が何を狙っているのかすぐに察する。山での合宿で一誠が身に付けた対女性用限定技『洋服崩壊〈ドレス・ブレイク〉』。その名の通り女性の衣服を剥ぎ取る為に編み出した技である。

「……気をつけてください。その人の手に触れると服が全部弾け飛びます」

「小猫ちゃん！」

練っていた作戦が小猫の一言で全て水泡に帰した一誠が、裏切られたような顔でシンたちの方を見たが、小猫はしれっとした表情のままである。

「イ、イッセー君！　堕落していることは分かっていたけどまさかそこまでの最低な変態に！　そんな色欲の権化のような技は最低よ！」

顔色を変え、身を守るように自分を抱きしめるイリナ。

「ああ、主よ！　この哀れな変態悪魔に慈悲を……」

「人を可哀そうな奴扱いするな！」

「実際、可哀そうだろ」

「うるせぇよ！　味方まで俺の心を傷付けないでくれ！」

「イッセーさん！　そ、そんなに女性の裸を求めているのなら！　私が……！」

「……アーシア先輩にここまで言わせるなんて……最低です」

「二人の心が嬉しくも悲しいよ！」

若干生温い空気に染まっていく場。だがそれを断つかのような轟音と地響きが起こり、ゼノヴィアと木場が戦っていたであろう場所に大量の土煙が舞う。その土煙を破り、中から転がり出て来る影があった。

何度も地面に身体を打ちつけてから立ち上がるその影は木場であり、鍔の根本から砕けた魔剣と、剣身を半ばで砕かれた魔剣を握り締めている。

目立った傷は無いが荒く息を吐く木場。その態度には明らかな苛立ちが混じっている。

「さっきも言ったはずだ。数など無意味、とな。どんな特性を持つ魔剣であろうとこの『破壊の聖剣』の前では全ての有象無象は塵と化す」

土煙の中から歩いて出て来るゼノヴィアに木場は唇を噛み締める。歯が唇を破り、一筋の血を流すも木場は拭うことなくゼノヴィアを睨みつける。

「それがどうしたんだい？　その言葉を聞いて僕が諦めると思っているのかな？　エクスカリバーを破壊することが楽な道ではないなんて最初から分かっていることさ……だけど僕は成し遂げねばならない！」

木場の頭上、そして足下から無数の魔剣が顕現する。今の木場が持てる魔力ほぼ全てを注ぎ込んで作り上げる魔剣の園。

「僕は二度とエクスカリバーには負けない！　数が無意味？　ならその数の力で押し切

らせてもらう！」

無手の木場が駆け出すと共に浮かぶ魔剣たちも突貫する。

「二度？……まあいい、全て破壊するのみだ」

木場は走りながらも後方から飛んできた魔剣を二本掴むとそのままゼノヴィアに斬り掛かる。軽く振るったようにしか見えないゼノヴィアのエクスカリバーが魔剣へと触れた瞬間、二本の魔剣はあまりに簡単に砕かれるが、木場は構わず何も握っていない状態で剣を振るう構えをとる。するとその手の中に新たな魔剣が収まり続け様にゼノヴィアへと斬撃を繰り出した。

「ほお？」

軽く感心するゼノヴィアは新たに握られた魔剣も砕くが、すぐに地面から突き出してきた魔剣の柄を握り、木場は下から斬り上げる。

砕ける度に魔剣を補充し絶えず攻撃をし続ける木場。ゼノヴィアもその度に破壊していくがどちらも一歩も譲らない展開となる。

それを見ているシンであったが、どうしても木場が勝つ姿が浮かばない。普段の木場ならもっと足を生かした戦法を使う筈だが今の木場は正面から聖剣を破壊することに固執しており動きが直線的に見えた。

いざというときには恨まれるのを覚悟で戦いを中断させるよう見学という立場を

とったが、それは木場が命を奪う為では無く木場の命を守る為に止めるという目的に変わりつつあった。

「もらったぁ！」

一方で一誠とイリナの対決も互角の勝負となっていた。イリナの動きについていき尚且つ相手の動きの先を読みながら攻撃を行っている。イリナは小猫からもたらされた情報で必死に触れまいと回避し、距離も開こうとするがそれにも喰らい付き、一定以上の距離が開けられない。

そのとき、がくんとイリナの膝が折れる。元々碌に整備をされていない土の上である為、運悪く窪みに足をとらわれたことによって出来てしまった隙。それを鷹の目の様な眼光をした一誠は見逃さず、その場で大きく跳び上がり倒れそうなイリナへと突っ込んでいった。

しかし、このときイリナはその場で踏みとどまるのではなく後方へと倒れるという行動をとる。そして倒れる勢いで足を振り上げると巴投げのような形で一誠の腹部へと押し付け、そのまま背後に向けて投げ飛ばす。

「なっ！」

勢いを殺せぬまま一誠は結界を通り越し、その先に立っている小猫とアーシアの下に向かっていき、その手が彼女たちに触れる。

「ぐっふ！」

――かに思えたが、突如として一誠と小猫たちの間を遮るように分厚い氷の壁が出来上がり、一誠はそこに頭から衝突し蜘蛛の巣状の罅を氷壁に刻んでから頭を押さえて悶絶する。

氷の壁の根本、そこには両手を地面に着けたジャックフロストの姿があった。

「……ジャック君ナイス」

「ヒホ！」

親指を立ててジャックフロストの行動を褒め称える小猫に、ジャックフロストも親指を立てて応じる。

「大丈夫ですか、イッセーさん！　今すぐ治療を……！」

「だ、大丈夫だから……これは決闘だし……アーシアが『神器』を使ったら反則になる……」

悶えている一誠の近くにシンが近寄る。

「よかったな仲間に手を掛けずに済んで。俺もお前を軽蔑せずに済んだ。ジャックフロストに礼を言っておけよ」

「こ、心遣い感謝するが……首が縮まるかと思った……」

「事故と思って諦めろ。それとそのままの状態で聞いてくれ」

シンは声を潜めだす。
「この戦い、木場は負ける可能性が高い」
悶えていた一誠の動きが止まる。
「お前も気付いているだろ？　木場の動きのおかしさに。あの状態が続けば遅かれ早かれ木場は打ち負ける……だからこの勝負お前は勝ってくれ」
一誠が顔を上げ、シンの方を見る。
「お前が勝てば引き分けに持ち込めるかもしれない。そうすれば勝ち負けに代償も無しになる。お前だって部長が教会の人間にいい様に使われるのは嫌だろ？　……だから勝ってくれ、頼む」
真摯に頼むシンに一誠は唇を固く結び、力強く立ち上がる。
「任せろ」
一言、言ってイリナと対峙する為に歩き始める。
「イッセー君、そんな卑猥な技ばかり使っているといつか天罰が下るよ？　悪いことは言わないからあの技を使うのを止めた方がいいよ？」
「分かった」
「えっ？」
呆れた様子で忠告をするイリナであったが、その言葉を一誠はあっさりと了承したこ

とで呆けた声を出す。外野一同もイリナと同じく驚いた様子で一誠を見始める。
「どうしたのイッセー！　急に！」
「まさかさっきの衝撃で頭が！」
「……ショック療法」
「イッセーさん！　やっぱり治療を！」
（やっぱりこういった認識なんだな）
　何気に酷い言葉が飛び交う中、一誠の籠手が倍加を告げる音声を出し、一誠はその状態で倍加を停止させる。
『洋服破壊』の代わりに密かに特訓していた、とっておきの新技を見せてやるぜ。驚くなよ、イリナ！」
　一誠がイリナの前で両手の手首を合わせた構えをとる。それは一誠がドラゴンショットという魔力波を放つ構えと同じであったが、新技というからにはドラゴンショットを放つ為のものではない。
　手首を合わせた状態で右手と左手の指を組ませて閉じるとその中で魔力を収束させ始める。その魔力の密度にイリナは頬から汗を流し警戒の色を強める。
　そして閉じた両手を開くとそこには直径五センチ程の魔力の塊が出来ていた。一誠はそれを左手で掴み、突き出しながらイリナへと投げ放つ。

『Ｄ２ショット』！

技名らしきものを叫びながら放たれた魔力の塊は、ドラゴンショットのように巨大化することなく、硬球を投げた程度の速度でイリナへと向かい真っ直ぐ飛んでいく。

「この程度！」

避ける必要も無いと言わんばかりにイリナがエクスカリバーをその魔力の塊に向けて払う。エクスカリバーと接触した瞬間、魔力の塊は爆発どころか音も無く、煙を散らすかのようにあっさりと霧散し消えてしまった。

これには見ている方も消し去った本人もあまりの呆気なさに戸惑う。そんな中、シンは一誠を見る。そこには不気味で不敵な笑みを浮かべる一誠がいた。

（嫌な予感がする）

そう直感で思ったとき、ビリッという何かが裂ける音がした。音源の方を見るとそこには戸惑う顔をしたイリナの姿。

再びビリッという音がするとイリナの手首辺りから何かが地面へと落ちる。落下した物体を見るとそれはイリナの戦闘服の切れ端であった。

「ま、まさか……」

引き攣った顔をし始めるイリナの耳に今度は連続して裂ける音が聞こえ始める。見れば手首から腕にかけて衣服が次々と崩壊をし始めていた。

「きゃあ！」
破れた部分を押さえるが効果は無く、今度は腕から肩にかけて崩壊し始める。
「いやあ！」
「隙あり！」
衣服の崩壊に意識を傾けていたイリナに接近した一誠は、手に持っているエクスカリバーの柄頭を拳で突き上げ、高々と宙に放らせた。
「しまっ、きゃん！」
そのままの流れで一誠はイリナの腹部に体当たりして地面へと押し倒すと、馬乗りになってイリナの身動きがとれないようにする。
「ふっふっふ！　見たか！　俺の新技『ドラゴン・ドレスブレイクショット』略して『D2ショット』の威力を！」
「どいてぇ！　このままじっくりと脱がされていくなんて嫌ぁ！」
「安心しろ。この技はまだ未完成だから全部剥ぎ取られることは残念だが無い」
一誠の言った通り衣服の崩壊はイリナの肩までで止まっており、そこから浸食していく気配は無かった。
「やっぱりエッチな技じゃない！　本当に天罰下るよ、イッセー君！」
「ふはははは！　何とでも言ってくれ！　『洋服破壊』はいつか見ただけで衣服を壊すま

で昇華させるつもりなんだ！　この技はその為の汗と努力による偉大な一歩だ！」
高笑いをしながら自らのドラゴンショットと『洋服破壊』の合わせ技を誇らしげに語る。そんな姿にリアス、朱乃は苦笑しアーシアは微妙な顔付きとなり、ピクシーとジャックフロストは爆笑していた。
「……最低です……最低過ぎます」
「……あいつ、いつか訴えられるだろうな」
小猫は軽蔑の言葉を口にし、シンはほんの数分前のやりとりは何だったんだろうかと思いながら、笑う一誠の姿を見ているのであった。

決断、賭博

「勝負って奴は本当に残酷だよな、イリナ。お前が言ったように数年ぶりに会った幼馴染と戦う羽目になって……そしてその服を剥ぎ取るだなんて」
「嫌ぁぁぁぁ！」
犯罪染みた言葉を吐きながら、煩悩に塗れた笑顔で自分の下にいるイリナを見下ろしながら、両手を見せつける様に手を開閉してみせる。年頃の少女なだけに、衣服を剥かれる恐怖と羞恥は計り知れないものがあるらしく、絹を裂いたような悲鳴をイリナは上げる。
「ふはははは！　叫んでも無駄無駄！　行くぞ！　『洋服――』」
悪役のような台詞を言って左手をイリナに触れさせようとするが、その直前となって頭に何かが乗った感触を覚え、それを気にして中断してしまう。
「はい。そこまで」
「ん？　ピクシーか」
一誠の目からは見えなかったが頭の上にピクシーが腰掛け、足をぶらつかせながら一誠に止まるように言う。

「リアスからの伝言『戦いの中で女の子の服を剥ぐのは百歩譲って大目に見るけど、勝負がついている相手にそれをやるのはいけません。やったらお仕置き』だって」
「お、お仕置きって……」
「こういうこと」
一誠の頭の上でバチバチという音が鳴り始める。見えなくとも音だけで判断できた、ピクシーが自分の頭の上で電撃の魔法をいつでも放てられる準備をしていることに。
「これを直接頭に叩きつけろって、シンが」
「お、恐ろしいことを……」
「で、どうする？」
ピクシーの問いかけに血の涙を流しそうな程の顔付きになる。そして一度見学しているメンバーの方へと視線を向けた。リアス、朱乃はいつも通りの表情で小猫は開始前よりも厳しい視線を向けられているが、これもほぼいつも通り。だがその中で潤んだ瞳でこちらを見るアーシアの姿が目に入ってしまい、このとき一誠の中の煩悩は一気に萎えてしまう。
「……分かったよ」
「そっちもいい？」
「うう……分かったわよ」

悔しそうに唸るも、裸を曝け出すことが嫌であったのもあるが、実際この勝負は非公式な戦いである為一切記録に残らないこともあってか、割とすんなり敗北を認める。しかし、それを簡単に認めるもう一つの理由としては、もう一人の聖剣使いである相方が敗北をしないという自信があり、教会側の実力は決して悪魔側に劣らないという確信があった為であった。

「はあああああああああああー」

木場の叫びとそれに続く破砕音に誰もの視線がそちらの方へと向けられ、見た先にある光景にリアスたちは表情に焦りの色を浮かばせ、イリナは小さく笑う。

いくつもの折れた魔剣たちの残骸、どれも使い物にならない程砕かれていた。その中で地面を滑る様にして後退した木場。その両手に持つ二本の魔剣の内一本は刃の部分が大きく欠け、もう片方は先端部分が砕かれた状態となっていた。

「もう止せ。勝負は決した。これ以上はただの醜態だぞ」

悠然と歩きながら諭すように喋るゼノヴィアに、木場は強く奥歯を噛み締めながら両手の魔剣を地面に突き刺して立ち上がる。

「そんな言葉で止まるぐらいなら最初から復讐なんてしないよ」

肩で息をする木場の姿は一誠やシンも初めて見る程消耗しており、限界が近付いていることを示していた。

「そうか……警告はしたぞ？」
「まだ僕は全力を出し切ってはいない！」
　吼える様な木場の言葉の後、地面に転がる魔剣の残骸が砂の様に一斉に崩れだし全てが魔力へと還元されていく。立ち昇っていく魔力は上下に重ねた木場の拳の中へと集い始め、やがて集まった魔力が実体を持ち始めた。黒々と輝く重厚な艶を放つ剣身は幅も厚さも長さも通常の木場が創造する魔剣の数倍あり、斬馬刀を彷彿とさせる片刃の剣が創造される。
　ゼノヴィアの『破壊の聖剣』をも上回る程の魔剣を握り締める木場。しかし、それを見たゼノヴィアの表情には焦りなど無く、落胆、失望を込めた嘆息を吐く。
「それが君の全力か？　正直に言わせてもらう。それは悪手だ」
　全力を以って魔剣を振り下ろす木場に、ゼノヴィアは一歩踏み込んで両手で握り締めたエクスカリバーを振るう。魔剣の先端がエクスカリバーの鍔元辺りと接触をした瞬間、重厚な金属同士が衝突したとは思えない程の軽い金属音が鳴り響き、宙へと何かが回転しながら舞う。それが落下し地面へと突き刺さったときになって、初めて木場の魔剣の折れた先端部分であることが分かる。
「くっ！」
「何を悔しがる？　なるべくしてなった結果だ」

表情を歪ませる木場に、この結果を冷淡な声でゼノヴィアは評する。そして交差した状態からゼノヴィアは木場を強く押し出すと、木場の身体が一瞬宙へと浮き三メートル程後方へと無理矢理後退させられる。

後退させられた木場はバランスを崩さない様に着地をするが、押し出すと同時に駆け出したゼノヴィアが抜刀するような腰だめをした構えで、木場のすぐ側まで接近をしていた。咄嗟に魔剣の腹でゼノヴィアの攻撃を受け止めようとする。だがその防御にもゼノヴィアは不敵に笑い、構えた状態からエクスカリバーを突き出す。このときゼノヴィアはエクスカリバーを振り抜くのではなく、柄頭を相手に向けた状態でエクスカリバーを放つ。

柄頭が魔剣の腹に当たったかと思えば瞬時に打ち砕き、その先にある木場の鳩尾に深々と食い込むと衝撃が背中を突き抜け、木場が着地の際に舞い上げた土煙を一瞬にして晴らす。

受けた木場は耐え切れず胃から内容物を吐き出しながら膝を着くが、最後に残る一抹のプライドからか折れた魔剣を決して離さず、そしてゼノヴィアに対し頭を下げる様にして倒れ伏すことだけはしなかった。

「意識を保っていたことは褒めておこう。だがそれ以外はとても褒められたものではなかったがな」

ゼノヴィアはエクスカリバーを構えるのを解き、すでに戦う気は無いことを示す。その状態で苦しむ木場に冷めた視線を向けた。

「『先輩』、君と戦っていて思ったことだが今の戦い、『騎士』の特性を全く生かしていなかったな。数で押すのはいいが、どれもこれも正面から挑むばかりの直線的な攻撃。自慢の足を生かしてこちらの隙を突く様な踏み込みもなければ、俊足によるかく乱も無い」

ゼノヴィアは木場の悪手について淡々と述べていく。木場は鳩尾を押さえ乱れた呼吸をしながら、憎々しげな視線でゼノヴィアを見ていた。ただ、ゼノヴィアの言葉に反論しない辺り、木場自身自覚のあることだったのかもしれない。

「そして最後の全力で創り上げた魔剣については論外だ。はっきり言おう、君がどんな魔剣を創り上げようと聖剣には勝てない。君だって分かっている筈だ、魔剣の持つ邪は聖剣の持つ光の前では力を削がれ只の剣へと成り果てる。最後の魔剣、あれは単なる君の意固地の塊だったな」

言うだけ言うとゼノヴィアは踵を返して木場の前から去って行く。それを見た木場は待つように擦れた声を出すが、ゼノヴィアの歩みは止まらない。木場の伸ばした手は力なく地面へと落ち、悔しさからか地面へと爪を突き立て土を強く握りしめるのであった。

「油断したな、イリナ。まだまだ信仰が足りないみたいだな」
「うう……ごめんなさい」
既に一誠から解放されたイリナの側にやってきたゼノヴィアがイリナの敗北について軽く咎める。非公式な戦いとはいえ、教会側の人間が悪魔に敗けるということは決してほめられることではないが、ゼノヴィアの口調自体に怒りらしきものが含まれていなかったことから、強く責める気はないらしい。イリナも悔しそうに唸った後、蚊の鳴く様な声で素直に自らの失態について謝罪をする。
「まあ、『神滅具』相手に傷一つ無く済んだ分だけ大したものだ。その分少々服が破けてしまった様だがな。余程鋭い攻撃をしてきたわけだな」
「あ、うーん……鋭いというかエロいというか……」
木場との戦いに集中していた為に両者の間でどのような戦いが繰り広げていたか詳しく知らないゼノヴィアに対し、イリナは口の中で言葉を濁す様にして、どんな内容であったかは詳しく語ろうとはしなかった。
「何故言い淀んでいるんだ?……まあいい」
ゼノヴィアが白のローブをイリナに手渡し、自分もそれを纏いながら顔を一誠の方へと向ける。
「『赤い龍〈ウエルシュ・ドラゴン〉』も順調に力を取り戻しつつあるようだな。少々、不

謹慎ではあるが『白い龍〈バニシング・ドラゴン〉』との邂逅が気になるな」
ゼノヴィアから出てきた言葉に、一誠が息を呑むのをシンは見た。
「イリナに勝った褒美という訳ではないが君に教えておこう。――『白い龍』は既に目覚め、行動を起こしている」
今度は一誠だけでは無くリアスたちもその言葉に身を固くする。『白い龍』という存在が如何なるものかシンは知らないが、周りの反応からして余程の存在であることだけは理解出来た。
「いずれは出会うことだが、それまでに対抗できる力を備えておくことだね」
「先に行かないでよ、ゼノヴィア。……イッセーくん！　今日のところは素直に負けを認めるけど、次に戦うことがあったら絶ッ対に！　負けないからね！　次こそはそのスケベな魂を裁いてあげるんだからね！」
イリナは悔しさからか顔を紅潮させながら去り際の台詞を置いていく。そして足早に去って行くゼノヴィアの背中を小走りで追い駆けていくのであった。
「引き分け……ということかしら」
二人が去っていった方向を見ながらリアスは小さく呟く。イリナと一誠の戦いは一誠が勝利し、ゼノヴィアと木場との戦いはゼノヴィアが勝利した。一勝一敗という結果になったがゼノヴィアたちはきちんと結果をつけることはしなかった為、自動的に賭け

も無効となってしまった。

最も、決着を付けるとなると一誠とゼノヴィアとの対決になり、相性的に考えて一誠のほうが不利と考えられる為、この結果になったほうがリアス側としても被害が少なくて済んだ。

残された問題は敗北の苦汁を舐める結果となってしまった木場の存在。リアスたちもどう声を掛けていいか分からず、膝を着いた状態の木場を遠巻きから見守るしかなかった。

木場はしばらくの間ゼノヴィアたちが去った方角を見ていたが、やがて立ち上がり見守るリアスたちに背を向け、この場から離れようとする。

「待ちなさい！　祐斗！」

去ろうとする木場に感情が高ぶったリアスの声が飛ぶ。

「どこに行くつもり？　もし私の下から離れようというつもりなら私は許さないわ！　貴方は私の――リアス・グレモリーの『騎士』なのよ！　お願い、私は貴方に『はぐれ』になって欲しくないの。だからこの場に居て」

叱咤と悲哀の言葉。それを聞いて木場の足が止まるが、振り返った木場の顔をリアスが見たときリアスは哀し気な顔となる。

振り向く木場の表情にあったのは儚げな笑み。

「部長。僕が今まで生きてこられたのは、あのとき救ってくれた部長や朱乃さん、小猫ちゃんたちのおかげだと思っています。……でも救われる程の命が残っていたのは、同志たちの犠牲であそこから逃げ出せたからなんです」

静かにだが良く響く声で木場は喋り続ける。

「だからこそ、彼らの散っていった命に報いる為に、その哀しみを晴らす為に。彼らの無念を背負い、それを込めた僕の魔剣を以って聖剣を打ち破らなければならない――だから」

その言葉に宿る決意は炎の様な激しさを感じさせながらも、すぐに掻き消えてしまいそうな蝋燭の灯りを思わせる弱さも感じられた。

「ごめんなさい。そして、ありがとうございました」

最後に木場は一礼をすると消える様に走り去っていってしまった。

「……祐斗」

止める暇も無く行ってしまった木場の名を、哀しみの感情を乗せて小さく呟くリアス。ただ、仮に木場が去っていなかったとしても、リアスは木場の言葉を聞いた後に去るのを止めることが出来るか分からなかった。

リアスの横顔を見ていた一誠は口を強く結び、何かを決意した表情となると、自らの考えについて相談しようと後ろを振り返る。しかし、振り返った先には目当ての人物が

いなかった。
「……どこに行ったんだ？　間薙の奴も」
シンだけではなくピクシーもジャックフロストも姿が無い。周囲を確認してみるがどこにも姿は見えず、一誠の呟きによって、一同はシンも姿を消したことに気付いたのであった。

◇

駒王学園の校門から木場が出て来る。思い詰め、晴れない表情を浮かべて学園から離れようとしたとき、背後から声を掛けられた。
「そんなに急いで宛てはあるのか？」
驚き振り返ると壁に背中を預け、いつもの無表情を浮かべたシンが腕を組んで立っている。その肩にはこれもいつものようにピクシーが腰掛け、足下にはジャックフロストがシンと並ぶようにして立っていた。
「……僕を連れ戻しにきたのかい？　なら無駄なことだよ」
「生憎、そんなつもりは一切ない」
シンは組んでいた腕を解き、木場の方へと歩み寄っていく。木場はシンの態度に警戒

をしていたが、シンはそのまま近寄り木場の真正面に立つ。
両者の距離は手を伸ばせば届く程になる。
「一体、何のッ！」
木場の言葉が中断される。何故なら話の途中でいきなり、シンが無言で木場の鳩尾を弾くように叩いたからだ。
顔から血の気が引き、冷や汗を浮かべた木場が、睨む様な眼差しでシンの方を見る。
「軽く小突いただけでそれか。そんな体で聖剣を探してどうする」
ゼノヴィアから受けた最後の一撃によるダメージは木場の体から抜けきっておらず、悪魔の力を使っていないシンの拳でも先の様な反応をする有様であった。
「それが……どうしたって言うんだ……！」
これ以上痛みがある素振りを見せたくないのか、木場は苦痛を浮かべた顔を奥へと隠し、無表情となる。
その気丈な振る舞いを見て、シンは短く溜息を吐くと肩に乗るピクシーを横目で見る。ピクシーは頷くとシンの肩から飛び立ち、先程シンが拳を当てた木場の鳩尾付近で滞空すると、両手を翳し治療の魔法を施し始める。
ピクシーの行動に驚く木場。そんな木場に対しシンは言う。
「せめてその治療が終わるまでの間、少し話さないか？」

そう言うとシンは再び壁に背を預けた。木場は僅かな間悩んでいたのか眉間に皺を寄せていたが、やがてシンと同じように壁へと背をもたれさせる。それはシンと会話をするという証であった。

「それで話って何だい？」

「お前、あの白髪神父にも負けただろ？」

いきなり躊躇なく言われた内容に、木場の表情どころか体も凍りついた様に動かなくなる。そんな木場の反応に自分の考えが間違っていなかったと思いつつ、そのまま話を続けていく。

「昨日、あの神父がケタケタ笑いながら言っていた、『騎士』に一杯喰わせた、と。そしてさっきの戦いで『二度とエクスカリバーには負けない』と言っていたな」

横目でシンは木場を見る。顔には感情を現していなかったが、木場の拳は爪が強く食い込む程握り締められ、込められた力で小刻みに震えている。それだけ見れば、どれほどの屈辱と敗北感を押さえこんでいるか一目で分かった。

この世で最も嫌悪する存在から与えられる敗北。ライザーとのレーティングゲームに於いて敗北を味わったことのあるシンであるが、そのとき受けた敗北とはまた違う質の敗北なのであろう。今の木場がどれほど重く、暗く、冷たく、臓腑が爛れる様な敗北感を裡に秘めているかシンには分からなかった。

「……負けた僕を笑うかい？」
肯定と取れる木場の言葉。そこには激しい感情では無く、どこか自嘲を感じさせる枯れた響きがあった。
「負けたことについてはどうでもいい。肝心なのは二度も負けたのにまた一人で聖剣を相手にするつもりか？」
言外に『今のお前では聖剣に勝てない』という言葉を匂わせる。木場もシンの言葉に含まれるものを十分理解しているのか、シンの耳に届くほど強く奥歯を噛み締める。
一度目の敗北はフリード側の都合によって見逃された。二度目の敗北は殺し合いではなかったが、自分の力が全く通用しない完敗であった。
どれほどの怒りを込めても、どれほどの憎しみを込めても、どれほどの悲しみを込めても、自分の魔剣は聖剣に届かない。
聖剣の前で軽々と砕け散っていく魔剣を見る度に、それが背負ってきた同志たちの命と重なって見える為。残酷なまでの無力感。それを噛み締める度に、死んでいった同志たちに言葉に出来ない程の悔恨の念が湧きあがってくる。
「……例え手足を失おうと、目や耳が無くなろうとしても構わない。でも死ぬつもりは無い。仮に僕の命が尽きる時が来ようともそれは七本のエクスカリバーを破壊したときだ」

勝てる、勝てないではなく、諦めるつもりは無いという木場の意志。それの根深さを感じつつも、シン自身は木場の復讐という行為を止めるつもりは無かった。悪魔としての二度目の生を受けたからといって、今まで自分の根幹を成してきた想いを折ることなど容易なことでは無いし、他者がやるものではないという考えもあった。
「そうか……まあ、一人じゃなきゃそれも出来るだろうな」
「えっ？」
シンの言葉に木場は驚き、慌てたようにシンの方を見る。
「幸いにもお前に力を貸してくれるお人よしが何人かいる。その何人かの力を借りれば無謀な話じゃないな」
「ちょ、ちょっと待ってくれないか！　聖剣は自分の力で――！」
「今まで培ってきた力だけじゃなく関係もお前の力じゃないのか？」
「そうことじゃなくて！　僕は僕一人の力で」
「僕一人？　お前言っていたよな、『彼らの無念を背負い』って。僕一人と言うんならその無念とやらも関係ないのか？」
「どうしてそう揚げ足を取るようなことを……！」
木場の言葉に熱が入り始める。勝手に話を進めていくシンの態度に、明らかに苛立ちを覚えている様子であった。

「僕は――！」
「俺でもイッセーでも誰でもいい、いいから人に頼れ」
　声を荒げようする木場にシンはその言葉を投げかける。それを聞いた途端、冷水でも頭から浴びせられた様に木場の顔から苛立ちによる熱が消え去り、気不味そうな顔となる。
「それは……」
「躊躇うのは迷惑を掛けたくないとか、自分のやっていることに他人を巻き込みたくないという考えからか？　はっきり言えば今更だな」
　木場は一旦口を開き何かを言いそうになるも、そのまま閉じて沈黙する。図星を突かれたのか、次の言葉が浮かばないらしい。
「……どうして君は僕を手助けするんだい？」
　再び口を開いて出てきた言葉は、シンが今こうやって木場を助力することの理由を問うものであった。
「大した理由じゃないさ。なんだかんだで一年以上の付き合いだし、出来る範囲でなら手は貸すさ。――同じ部活に入っている『仲間』だからな」
　『仲間』という単語を聞き、木場は軽く笑う。しかし、浮かぶ笑みは爽やかさや晴れやかさなど清々しいものは感じられず、何処か自嘲を含むものであった。

「間薙くん。覚えているかい？　僕が君に初めて缶コーヒーを奢って貰ったときのことを」
「……ああ。俺の生徒手帳を拾ってくれた礼にな」
「それ以来君と話す回数も増えたし、僕を通じて何度か部活のメンバーを紹介するようになったよね」
「何が言いたい」
　今になって過去のことを話す回りくどい木場の喋り方に、シンはあまり良いものを感じられず、さっさと本題に入る様に言う。
「不自然だとは思わなかったのかい？」
「……どういう意味だ」
「君との接触は意図したものだったんだよ」
　シンは木場を横目で見ることを止め、顔ごと木場の方に向ける。木場もまたシンの方を向いており、両者とも無表情で睨む様にして視線を交わす。
「君がオカルト研究部に入ってから何度か話をして確信したよ。君はイッセー君を助けたときにその『悪魔の力』を覚醒させて、リアス部長に保護されていたと思っているけど実際には違う。君はそれの数か月前にはその力を既に使い『はぐれ悪魔』を一体殺害している」

初めて聞かされた事実に、今度はシンの方が沈黙する。だが、木場に指摘されたことで、自分の身に起こった不自然な出来事を思い出していた。学園を出てから帰宅までの間にあった数時間の記憶の欠如、そしてそのとき手に付着していた、黒い重油の様な粘液。そして木場がシンの生徒手帳を届けたのは、その翌日のことであった。

「『はぐれ悪魔』を倒した筈の君自身からは悪魔の気配が全く無かった。だげど、それだけじゃあ君のことを放っておくには根拠が弱すぎる。だから僕がリアス部長に進言して、君が害ある存在かどうか『監視』をしていたんだ。……その為に友人という立場になって君に近付いた」

そこで一息置いた後、木場は壁から背を預けるのを止めて歩き始める。いきなり動き出す木場に、ピクシーは慌てて離れる。

「ありがとう。もう怪我の具合は良いよ」

ピクシーに礼を言った後、木場はシンへと背を向けた。

「分かっただろ？　僕と言う存在がどういうものか？　……君と僕は『仲間』じゃなかったんだ」

未だに沈黙を続けるシンに木場は心底軽蔑をされたと思いながらも、これでいいと自分に言い聞かせる。この選択は間違っていないと、後悔はしていないと思い続ける。

木場が一人歩き始めようとしたとき――

「木場」

――シンの声が掛かる。足を止め、振り向いた木場が目にしたのは、軽蔑も侮蔑も拒絶も無い、いつもの冷たいとも大人びいているとも言える、シンの感情の色が薄い表情があった。

「お前はもう少し我儘に生きた方がいい」

それだけ言うと、シンも木場に背を向けて去って行く。木場には、シンがどういう意味を含めてその言葉を言ったのか分からなかった。ただその言葉は、木場の頭の中に根付くようにして残るのであった。

◇

「ねえ、ゆーとの言ってたことって本当かな?」

「あの様子じゃ本当だろうな」

「ヒーホー……じゃあ、ゆうととシンは友達じゃないんだホー」

「それはどうかな」

不確定要素な存在に監視を目的とし近付いたという話は、シン自身にも身に覚えがある為、木場が吐いた嘘である可能性は低く考えられる。ただ問題なのはそれを話したタ

イミングである。
あからさまにこちらを突き放そうとする木場の態度に、シンは軽く呆れると同時に小さな怒りも覚える。
（嘗められたものだ）
自分に対し裏切られたという思いや失望感を覚えさせようとした木場の言動。今まで隠していた後ろめたさを暴露したのであろうが、シンにしてみればその言葉だけでオカルト研究部と共に今まで活動してきた全てを不意にして、手の平を返すと思われているというのならば、そちらの方にこそ不快感を覚える。
オカルト研究部に入って間もない時期にそのことについて話されたのならば、多少なりとも不信感を覚えていたかもしれない。だが、それなりに同じ時間を過ごしてきた今となっては、『ああ、そうだったのか』程度の感想しか抱かなかった。
一応はリアスにも確認する為に部室の方に一旦戻ろうとするが、そのときポケットの中で携帯電話が振動するのを感じ、手に取る。液晶画面には一誠の名が浮かんでいた。
「もしもし」
『おお、間薙か。どこに行ってたんだ？　急にいなくなってよ』
電話の向こう越しに聞こえてくる一誠の声。内容の通りこちらの安否を気遣うような話し方であった。

「少し……な。それで何の用だ」
『お前に頼みたいことがあるんだ』
　一誠が声を少し潜める。その様子からなるべく他人に聞かせたくなく、そして周囲にはまだリアスたちが居ることが予想できた。
「聖剣絡みの話か」
『分かるか？』
「まあな」
　このタイミングで思い浮かぶ話はそれぐらいしか思いつかない。
『俺はイリナとゼノヴィアに協力をする代わりにエクスカリバーの破壊の許可を貰うつもりだ』
「相変わらず大胆なことをいう奴だな、お前」
　つい先程まで戦っていた相手と共闘し尚且つその相手が回収しようとする物を破壊する。普通に聞けば、どれほど無謀なことを言っているかすぐに分かるが、一誠にはそれが可能であるという自信、あるいは根拠を感じられた。
「お前の言う通りに事が進むのか？」
『間薙も聞いていただろ、あの二人の目的は堕天使の手からエクスカリバーを奪うことだけど、場合によっては破壊してもいい、って』

一誠の言葉でリアスとゼノヴィアたちとの会話を思い起こす。
『仮に回収できなければ、私たちの手で破壊する。その方が堕天使たちの手の中にあるよりも遥かにましだ。上の方も許可を出している』
確かに一誠が言ったようにゼノヴィアはリアスにそう言っていた。また、ゼノヴィアたちは自分たちの力が、聖剣強奪の諸悪の根源であるコカビエルよりも劣っていると自覚している節もあった。そうなれば奪還と破壊、与えられた使命を全うしたい二人が選ぶ選択がどれか見えてくる。
「自分の実力を売る訳だな」
『まあ、そういうことになるかな』
使命の為ならば敢えて殉教の道を往く信仰者の二人であるが、使命も果たせずに逝くのは不本意の筈。それならば少しでも確率を上げる為に、こちらの力を利用しようと考えるかもしれない。
「お節介だな、お前も。木場の為にエクスカリバーと堕天使を相手にするのか。只で済むとは思っていないだろう？　それにお前、顔の良い奴は嫌いじゃなかったのか？」
『それとこれとは話が別だろう。木場とは同じ眷属だし助けて貰ったことも何度かある。俺はあいつに借りを返したいだけだ』
聞き覚えのある言葉が耳の中に入ってくる。その言葉を聞いて、自然と口の端が吊り

上がってくるのをシンは自覚する。
　その言葉はかつて木場に言った言葉であり、今思えば、いつもの日常から少しだけ前に踏み出す切っ掛けとなった言葉であった。
「……ふふ、成程な」
『何だよ。おかしなこと言ったか？』
「いや別に。そういう考えは嫌いじゃない」
　このときシンは一つの決断をする。
『という訳で間薙、明日時間は空いているか？』
「……悪いな。俺は参加出来そうにない」
『えっ！』
　電話越しからでも一誠の動揺が伝わってくる。せっかく考えた計画の第一歩から躓いたのであるから、仕方のないことであった。
「少し手の離せない厄介ごとがあるんでな」
『それって木場の件よりも優先なのか？』
「正直に言えば聖剣の件とも関わりのあることだ」
『そうなのか？』
「聖剣のことにも手を出したかったが、お前がやるというならお前に任せたい。俺はそ

の間にもう一つの件を片付ける」
　シン言葉を聞き、少しの間両者の間に沈黙が流れる。そして、電話の向こう側から一誠の声が聞こえてくる。その声はシンに断られた失望はなく、寧ろ覇気に満ちたものであった。
『分かった、任せろ』
「ああ、頼んだ」
　二人の返答は短いものであったが、そこには何事にも揺らがない強固な意志が確かに含まれていた。
「それで、俺以外にも誘う相手はいるのか？」
『ああ、匙の奴を呼ぼうかと思っている』
　意外な人選にシンは軽く眉を顰める。一誠と匙はこれといって繋がりはなく、シンの記憶が正しければ、初めて部室生徒会長と会って以降、数回程ぐらいしか接触していなかった筈である。
「匙か……選んだ理由はなんだ？」
『俺の知っている範囲で部長との繋がりが薄くて強そうなのが匙ぐらいしか思いつかなくって……『神器』持ちだし』
　一誠が言っているように匙は『神器』を持っている為、『兵士』の駒を四つ消費して悪

魔へと転生した転生悪魔である。一誠の会話から察するに、今回の件についてはリアスの耳に入らない様に進めたいというのが分かる。少なくともリアスから止めが入るのは間違いなかった。

「連絡したとして来るのか？　相手は天敵のエクスカリバーだぞ？」

『エクスカリバーを破壊することはきちんと伝えるさ……当日に』

「……お前も悪い奴だな」

半ば呆れるシンであったがそれで匙が来たとしても人数は二人、まだ不安は拭いきれない。そこでシンは頭の中に浮かんだ一誠の考えに協力するであろう心当たりを二人、一誠に推薦する。

「塔城にも連絡をとっておけ」

『えっ、小猫ちゃんにもか？』

「木場との付き合いは長いし、口も固い、そして実力もある。誘っておいて損は無い筈だ」

小猫を計画に誘うように推薦するが、電話越しの一誠の反応はイマイチ良くない。電話の向こう側からは唸るような一誠の悩む声が聞こえてくる。

『小猫ちゃんか……うーん、どうしようか……』

「そんなに悩むことか？」

『間薙、俺……小猫ちゃんの連絡先知らない……』
「なんだそれは」
　あまりに間の抜けた返事に思わずシンも気の抜けた声を洩らしてしまう。
『しょうがないだろ！　前に連絡先を聞いたら真顔で『嫌です』って言われたんだぞ！　その『嫌です』にどれほどの破壊力があったのかお前に分かるかぁ！　あんなこと言われたら聞くのを躊躇っちまうだろうが！』
　電話を耳から離してしまう程の大音量で喚く一誠。もう周囲にリアスたちが居ないのか鬱憤を晴らすかのように騒ぎ続ける。
「分かったから落ち着け、話が進まなくなる。塔城の連絡先は俺が教える」
『なんでお前は知っているんだよぉ！　畜生！』
　火に油を注ぐ結果となったが構わず、シンは小猫の携帯電話の番号を言い始める。その途端、電話の向こうは環境音が聞こえる程静まり返る。この電話の向こうで今頃必死になって電話番号をメモしている一誠の姿が頭に浮かび、何とも言えない脱力感を覚えるのであった。
「記録したか？」
『おっしゃあああ！　ありがとうございます！』
　高揚する一誠の声に呆れながらもシンはもう一人、推薦する人物の名前を口にする。

「あとアーシアにもこのことを話しておけ」
言葉を聞いた瞬間、シンは電話越しからでも一誠が息を呑むのが分かった。
『それは……』
一誠が言葉を詰まらせる。その声の調子からシンは一誠がアーシアを連れていくことを快く思っていないことを察するが構わず畳み掛ける。
「何か都合の悪いことがあるか？　アーシアの『神器』はエクスカリバーとの戦いにも役立つ。程度はあるかもしれないが、聖剣で出来た傷を治療することが出来る数少ない方法を持っているんだ。誘っておいて損は無い筈だが？」
『えーと、ああ、そうだ！　あの教会の二人、アーシアのこと『魔女』とか言って傷付けていただろ？　アーシアを連れて行ったら今度は何を言われるか――』
「ほう？　お前はアーシアが目の前で貶されているのを今度は黙って見ているのか。過保護な奴だと思っていたが、案外薄情な面もあるんだな」
『そんなことするわけないだろうが！　二度とあいつらにアーシアを『魔女』なんて呼ばせはしない！……あっ』
「問題は無いみたいだな」
煽るようなシンの言い方に怒る一誠であったが、自分の言動を振り返り一気に怒りを冷ます。

「お前がアーシアを大事にしているのは重々承知だ。嫌な言い方かもしれないが、アーシア自身に戦う力は無い。だが、アーシアの『神器』の力は味方を何度でも戦わせることが出来る」

アーシアの持つ『聖母の微笑み』があれば、いかに重傷を負おうとも助かる可能性が格段に上がる。これから戦いに赴くにしたがって決して無視できないものである。

『アーシアを態々危険の中に連れ込むのかよ……』

身を守る力が無いと分かっていて平然と戦いの渦中へと送り込むことを勧めるシンに、一誠は不満を感じ声に若干険が混じる。一誠の不満は最もだと思いながらも、シンは妥協する気は無かった。先程、一誠を悪い奴と言っていたが、自分も相当な悪党であると自覚しつつ話を進める。

「お前にとってアーシアは守るべき存在なのは知っている。だがな、俺の目から見ればアーシアという存在は既に『戦力』なんだ。それを分かっていて腐らせるつもりは毛頭ない」

自分の意見を言った後、小猫のときとは違い重い沈黙が流れる。シンも一誠も一切喋らなくなりただ時が過ぎていく。電話を耳に当てた状態のまま、ひたすらに事態が動くのを待つシン。

沈黙を先に破ったのは一誠であった。

『……とりあえずこのことは話してみる。話した後、少しでもアーシアが迷っていたなら俺は……』

「それでいい。……悪いな」

鉛でも呑みこんだような声で提案を受けた一誠にシンは礼を言う。元々少数で行く筈だった計画に、次々と責任という重石を乗せていったことへの謝罪も混ぜた礼であった。

「今度何かを奢る。缶コーヒーとかどうだ？」

『ははっ！　安いな！』

最後に互いに軽口を言い合った後、別れの言葉を言って携帯電話を切る。

「人を信用したり信頼したりするのって『賭け事』みたいに難しいと思いませんか、間薙さん？」

前触れも無く背後から掛けられる声。何故このタイミングで現れたのか、どこから話を聞いていたのか、などの疑問が脳裏に浮かぶが、背後に立つ人物に一々それを尋ねることも億劫であると思い、携帯電話を仕舞うついでだと言わんばかりに後ろへと目を向ける。

「自分で出来ないことを全て相手に委ね、尚且つ自分にとって価値のあるものも預けるって訳ですからねぇ。日々の交流から性格などの情報を仕入れ、そこから出来るか出

来ないかを判断する。まあ、『賭け事』に比べれば遥かに健全ですけどね」
　日が沈む時間とはいえ、人目が付く外でコルクを空けたワインボトルを片手にアダムは喉の奥で笑っていた。
「いきなり出てきて何の用だ」
「いやいや、せっかく間薙さんがこちらの話に本格的に乗って下さったので、その感謝と祝杯を挙げに参上した次第ですよ。へへへへ、ついでにちょっとした青春も拝ませてもらいましたがね。若いってのはいいもので」
　感心しているのか小馬鹿にしているのか判断が付かない絶妙な喋り口に、シンもある程度の苛付きは覚えるものの怒りに転じる程では無かった。
「私もねぇ『賭け事』が大好きなんですよ。ただ、私の賭け方ってやつは前情報なんてのは一切仕入れずに自分の勘だけで賭けるってのが特に好きでね」
　アダムは薄ら笑いを浮かべながらシンへと近付くと神父服の中から一枚の紙を取り出す。シンは取り敢えずそれを無言で受け取ると、中には携帯電話の番号が書かれていた。
「御二人を誘うことが出来たらこちらに連絡を下さい。後日、会う場所と時間を教えますので。では後ほど」
　伝えることが終わったのか、アダムはワインを喉へと流し込みながらとっとと去って

行ってしまった。
いい様に利用されている感じは拭えないものの、自分で選択したことに対し後悔はするつもりは無い。
シンはアダムに背を向け、この場を去って行くのであった。

◇

部室に着いたシンは少し扉を開け、中を確認する。中に居たのはリアス一人のみ、部長用の机に座り思い詰めた表情をしていた。明らかに気分が沈み込んでいる状態と分かるが、シンは悪いとは思いつつも絶好の機会だと思い、ピクシー、ジャックフロストに部室の外で待つように指示し中へと入る。
誰かの入室に気付きリアスは下げていた視線を上げる。それがシンだと気付くと、リアスの表情は少しだけ柔らいだ。
「……どこに行っていたの？　急に居なくなるから驚いたわよ」
「すみません。少し話をしていました……木場と」
リアスの目が僅かに丸くなるがすぐに元に戻る。
「止めは……しなかったのね」

「ええ」
　シンが木場を連れて現れなかったことで察し、沈んだ声を出す。
「少なくとも、今日一日ぐらい無理はしない筈だと思いますよ。肉体的にも精神的にも疲労していると思うので」
「……そうだといいわね」
　シンの気休めの言葉。最もその肉体的疲労は既にシンの指示によってピクシーの手により回復しているが、あの少し冷めていた頭なら無茶しないだろうという考えからの言葉であった。
「手を貸そうかと言ったら断られました」
「……そう」
「『僕と君は仲間じゃない』とも言っていましたね」
「あの子ったら……」
「一年間ずっと俺を『監視』していたとも言っていましたね」
「……」
　リアスからの声は戻っては来なかった。黙っていたことをいきなり本人から言われたせいで、絶句していた様子であった。
「……そう。貴方に言ったのね、祐斗は」

「ええ」
　リアスは静かにシンの目を見つめる。真っ直ぐ見つめているようで僅かに揺らぐ瞳、それは内心でのリアスの動揺を現していた。
「祐斗の言っていたことは間違っていないわ。正体不明の力を持った貴方を監視する様に『私』が指示を下したわ」
　リアスの言葉を聞きシンはそうですか、と一言だけ言う。
　木場が言っていたときの言葉、そして今のリアスの言葉、その二つを比較しシンは内心で苦笑する。従者が従者なら、主も主ということに。
「だから全ての責任は私――」
「ああ、すみません。俺から出しておいてなんですが詰まらない話はここまでで、本題に入ります」
「――え？」
　いきなり話を打ち切られたことにリアスは思わず戸惑う。
「部長。俺は悪魔の協力者という立場ですが、俺自身が悪魔と契約することは可能ですか？」
「え、ええ。可能だけど……」
「そうですか。なら今、手伝って欲しいことがあるので契約してください、部長」

「私と？」
「ついでにソーナ会長とも契約したいので、連絡をお願いします」
「ソーナとも？」
　唐突に変えられた話題に上手くついていけず、シンの言葉に辛うじて返事をするしか出来ない程動揺しているリアス。
「ああ、代価についてなんですが前以て報せておいても大丈夫ですか？」
「え、あの、ええ」
「そうですか。なら俺が出す代価なんですが――」
　そこで一旦区切る。次に言う言葉の前にシンは少しだけ柔らかい表情となる。
「『これまで通りリアス・グレモリー及びその眷属と良き協力関係を続ける』というのはどうですか？」

◇

「そうですか。グレモリーとシトリー両家の協力を得られましたか。流石ですね」
　すっかり日も沈み、街灯の光しかないとある丘の上でアダムは携帯電話片手に上機嫌そうに話す。街を一望出来る丘に備えられたベンチに腰を下ろし、街の灯りを肴にしな

がらワインを呷る。電話の向こう側に居るシンから協力を得られたという連絡を受けてからは、その呷る速度は格段に増していた。

「それで早速なんですが、明日ッ」

そこから先を言う前に一瞬アダムの体が震える。アダムは携帯電話を耳に当てた状態で視線を落とすと、そこには胸の中心から下斜めに向かって突き出す光の槍があった。

「ふん。我らの周りを嗅ぎまわっていた報いだな」

夜の空で滞空する堕天使。侮蔑の言葉を吐きながら背中から突き刺されたアダムを見下す。

致命傷とも言える場所に槍を受けたアダム。彼は――

「え？　別に何もないですよ。そうそう、場所と時刻なんですが」

――一切気にすることなく会話を継続。

「なっ！」

あまりに平然とした態度に堕天使は驚くも、自分のことなど眼中に無いアダムの様子に怒りを覚え、再び光の槍を投げ放つ。今度は左胸を貫通するも、先程と同じように殆ど反応を示さず、せいぜい言葉に間が開く程度であった。

「何故だ！　何故死なん！」

動揺する堕天使の前で、連絡を伝え終わったアダムがゆっくりとした動作でベンチから腰を上げる。
「マナーがなってねぇな。電話で会話中の相手にちょっかいをかけちゃあいけないって堕天前に神様から教えて貰わなかったのか？」
刺さった光の槍を引き抜く。抜いた跡には傷一つ無い肌が現れる。
「あーあー、借り物の服に穴が開いちまったよ」
刺されたことよりも服が破れたことの方を気にするアダムに堕天使は言い様の無い脅威を感じ、その場から離れようとする。が、その思いとは裏腹に、突如として堕天使は地面へと落下していった。
地面へと全身を叩きつける堕天使。すぐに立ち上がろうとし足を動かすが、足は何度も地面の上を滑るだけ。腕を使い身体を起こそうとするも、地面に着いた手は激しく震えた後で力無く崩れる。
「なん……これ……！」
自分の身に起こった異変を驚き声に出そうとするも、その声すらはっきりと出すことが出来ない。堕天使は完全に体の自由を奪われていた。
「大人しくしてろ。悪いようには扱わねぇよ。へっへっへっ」
アダムは地面に倒れ伏す堕天使の顎を掴むと、片手でその身体を持ち上げる。

「な……に……のだ……！」
「知りたいか？　まあ『コレ』を着けたままだと裂けちまうし、いいか」
アダムは片手で堕天使を掴んだまま自分の顎の下辺りに親指を押しあて一気に――
「あ……ああ……！　きさ……ま！　……だ！」
「暫く大人しくしているんだな」
数十秒後、何事も無かったかのように、アダムは一人ベンチの上で片手にワインを持って飲み続けていた。
そのとき、アダムは軽く眉を顰め、何やら口内に違和感があったのか、頬の内側で舌を動かし始める。少しの間それが続いたが、やがて原因が取れたのか口からソレを吐き捨てる。
出てきたのは漆黒の羽根。それは風に乗り、夜の街の方向へと溶け込むようにして飛んで行くのであった。

召集、集合

一誠とアーシア、小猫、匙は、ただただ目の前に広がっている光景を呆けた様子で見ていた。彼らが現在居るのは街の一角にあるファミレスのチェーン店、メニューの種類が豊富、味もそこそこ、量もそこそこ、値段も良心的ということから、家族連れや所持金の少ない学生たちなどからも良く利用されている。

本来なら家族や学生たちの雑談でざわめいている店内であるが、何故かその雑談によるざわめきは少なく、代わりにひそひそと耳打ちをする声が聞こえてくる。

耳打ちをする皆の視線はある一点へと収束されており、その視線の中心にいる一誠たちは、無遠慮に浴びせられる視線に居心地の悪さを感じつつも、この場から動くことは出来なかった。

何故なら――

「美味い！　美味いぞ！　この料理！」

「おいしー！　あ、ゼノヴィア！　それ頂戴！」

「なっ！　横取りとは恥を知れ、イリナ！　なら代わりにこれを頂く！」

「ああ！　それはとっておいたやつなのにー！」

――目の前で大食いの競争でもしているのかと思える程大量の皿を積み上げていくイリナとゼノヴィアが居たからであった。

フォークとナイフあるいはスプーンが止まることを知らずに動き続け、料理が置かれていく度に獲物を喰らう肉食獣のような獰猛さで貪り付きあっという間に空にしていく。

なまじ二人の容姿が優れているだけに、容姿と行為の大きな差で人目に付いてしまっていた。あるいはその清々しさまで覚える激しい食事行為にある種の官能さでも見出したのか、大人や学生を含め、幾人もの男性が鼻の下を伸ばしてこちらを覗き込んでくる姿もある。

「こ、こちらハンバーグステーキセットとなります。御注文した方は――」

「私だ！　あとついでにこれも追加でお願いする」

「あ、私もこれ追加でー」

料理を運んできたウエイトレスが引き攣った笑みで注文を運んでくると、イリナとゼノヴィアは嬉々とした様子で追加注文をする。

それを聞いた一誠は渋い表情をしながらこっそりと自分のポケットから財布を取り出して中身を確認し、密かに溜息を吐いた。

「あ、あの。足らないなら私も出します！」

「……私も出します」
「ふ、二人に出して貰うことなんて出来ない！　大丈夫だって！　女の子に奢るのが男の甲斐性だし！」
　ははは、と乾いた笑いを洩らすが、実際の所一誠の財布の事情はぎりぎりに等しい。だが、男としてのプライドが女性にお金を出して貰うということを拒んでしまう。
　ましてやアーシアは一誠の両親からお小遣いを貰っているが、それをコツコツを貯金しており、いずれ一誠の両親にお礼として温泉旅行でも送りたいという話を聞いているだけに、一誠がアーシアからお金を借りるという選択はまずあり得なかった。
　一誠はチラリと向かい側に座る匙を見る。本音を言えばお金を借りることを頼むのは別のプライドが邪魔をするが他に方法は無く、背に腹は変えられない。
「なあ、匙」
「断る！」
「まだ何も言ってないだろうが！」
「野郎に貸す金なんぞ無い！　寧ろこっちの方が何か貰いたいぐらいだ！」
「こ、この野郎……」
「ああ、畜生ぉぉぉ！　こんな状況を会長に見られたらもう言い訳のしようがないんだぞ！　こうなったら俺も喰う！　すみません！　スペシャル和牛ステーキセットを一

つ下さい！」
「ふざけんなぁ！　これ以上俺の財布を責めるなぁ！」
「うるせぇ！　腹いせだぁぁぁ！」
　互いに薄らと涙目になりながら胸倉を掴み合って言い争いを始める。アーシアはオロオロとしながらも必死で喧嘩を仲裁する為にか細い声を出し、小猫は水を口に含みながら二人の言い争いをいつもの無表情な瞳で眺め、一切止める素振りを見せない。そして、イリナとゼノヴィアは我関せずとばかりに、黙々と出された料理を口に含んでいく。
　ファミレスの一角で形成される混沌とした空間の中、その中心に居る一誠は匙と罵り合いながらも頭の片隅で考える。どうしてこのような事態になってしまったのか、と。
　ここに至るまでの過程、それは十数時間程逆昇る。
　シンとの会話の後、アーシアと共に家に帰宅する。アーシアと同じく同棲している筈のリアスが居ないのは、少し考えることがあると言って一人部室へと戻ってしまったからであり、そこから各自解散という形になった結果がこれであった。
　一誠は帰宅中、何度かアーシアを横目で見て、シンに言った通り自らの計画を話そうと口を開くが、視線に気付いたアーシアと目が合う度に喉まで出かかった言葉を呑みこんでしまい、何度も機会があったにもかかわらず、それらを全て不意にしてしまった。
「あの……どうかしましたか、イッセーさん？　さっきから少し様子が変ですが……」

一誠の態度を流石に不審に思ったのか、アーシアの方から気遣う声を掛けられる。
「あ、いや何でも無いさ」
反射的に誤魔化してしまう一誠であったが、それでもアーシアから不安は拭いきれず、それどころか更に心配の色を濃くさせてしまう。
「もしかして……木場さんのことですか？」
アーシアに図星を的確に突かれ、一誠は表情を凍らせてしまった。慌てて話を逸らそうと話題を考えるが、上手く頭が回らず別の話題を出すことが出来ず黙ってしまう。それを肯定と受け取ったアーシアは、ポツリと言葉を洩らし始めた。
「私は……今の木場さんのことが怖いです」
「……まあ、確かにあいつことを少しでも知っているなら想像出来ない程危ない顔をしてたしな……」
「私が怖いのはそこじゃありません」
「え？」
一誠の考えとは違い、ここ数日の間、触れれば斬れるような、冷徹で近寄りがたい表情をしていた木場のことをアーシアは怖くないという。
「私が怖いのは……このまま木場さんが居なくなってしまうことなんです」
ゼノヴィアとの戦いの最中に見せた、自分の全てを代償に払ってでも戦おうとする木

場の姿。その苛烈ぶりとは裏腹にその存在は余りに脆くて儚げに見え、燃え尽きる前の蝋燭、あるいは薄氷の剣のような、いつ消えてしまうか分からない危うさをアーシアは感じていた。

「悪魔になってからも主への信仰を捨てきれない私が主や教会を憎む木場さんの心配をするなんて烏滸がましいかもしれません。……でも、木場さんが居なくなるのが怖いんです」

アーシアにとって木場は一誠と同じく、自分にとって新しい居場所をくれた恩人の一人である。故にその存在は既に無くてはならない存在となっていた。しかし、その木場がもしいなくなってしまったら。その『もしも』を考えたとき、アーシアの心は奈落へと沈んでいくような冷たさを感じる。

「……イッセーさんは……どこかに行きませんよね？」

どこか童女のような悪戯っぽい微笑みを浮かべながらアーシアは言うが、一誠にはそれが、言葉に出来ない不安を押し返そうとする精一杯の強がりのように見えた。

一誠はアーシアの言葉に答えるよりも先にアーシアの手を握り締める。一誠の手の感触に一瞬驚くアーシアであったが、すぐにその頬に朱が差し込む。

「俺は何処にもいかないさ。アーシアを守るのは俺の役目だからな」

「……はい！」

一誠の手をアーシアは握り返す。二人はそのまま家に帰るまでの間、その手を離すことは無かった。

そして帰宅後、家事の手伝いをするアーシアと別れ、一誠は自分の部屋に戻る。そして部屋の扉が閉まると同時に頭をベットに押し付け、そのまま頭を抱える。

「言える訳がねぇぇぇぇぇ！」

一誠は先程のアーシアの姿を見てしまったせいで、聖剣を破壊する計画をアーシアへと伝える意志が殆ど折れてしまっていた。あんな風に人を思いやる心清らかな少女を、触れれば消滅してしまう聖剣や何をしでかすか分からない頭の中の螺子がダース単位で外れているイカレ外道神父、そして実力未知数の堕天使組織の大幹部の前に連れていくかと思うと、話す気になどなれる訳が無い。

『それでどうするんだ、相棒？　あの小僧には格好つけて話すと言ったがそれ以前の問題だぞ？』

「……分かってはいるんだけどな」

左手から聞こえてくるドライグの声に力無く応える。

『このまま言わずに先延ばしにするつもりか？　あの娘は駄目で、他に誘う奴らは危険に晒すという訳だな。まあ、それも間違っちゃいない選択だがな』

ドライグの口調は責める様なものでは無かったが、一誠にしてみれば耳の痛い話であ

る。確かにこのまま何も言わずアーシアを蚊帳の外にすれば、危険が及ぶ可能性は低くなる。しかし、それはアーシアの命を優先し他の命に順位を付けるということとなる。他人が聞けば面白くない話ではあるし、何よりも一誠自身そのようなことは望んではいない。

「……とりあえず、とりあえずは匙や小猫ちゃんに連絡をとってからにする。二人の返事を聞いてから……最後にアーシアに話す」

『相棒の好きにしな。お前の選択が俺の選択だ。相棒っていうのはそういうものだろ？』

『赤い龍の帝王〈ウエルシュ・ドラゴン〉』という仰々しい異名からは想像がつかない程、親しみを感じさせる気さくな対応。少しでもその名を知っている者ならば、想像と現実との差に戸惑いを覚えたであろう。

「まずは匙からだな……」

携帯電話を開いて登録している番号の中から匙の電話番号を探す。ソーナたちとの自己紹介の後にもしもの場合に備え、非常連絡先として生徒会役員全員の番号を教えられていた。まさかその中でも、永遠に埃を被っているだろうと登録時に思っていた匙の番号を一番初めに掛けることとなった現実に皮肉を感じながら、一誠は携帯電話を耳に当てる。

３回のコール音の後に電話が匙の電話へと繋がった。
『もしもし、匙ですが。どちらさんで？』
ぶっきらぼうな話し方で電話に出る匙。本来なら匙たち生徒会役員の皆もリアスたちの連絡先を登録している筈である。誰かと問うということは、少なくとも匙の携帯電話には一誠の番号は登録していないということであった。その事実に気付き若干腹が立つものの、冷静を保ちつつ一誠が名乗る。
「匙、俺だ。兵藤だ」
『御掛けになった電話番号は違います』
いきなり会話を打ち切ろうとする匙に、一誠は慌ててそれを止める。
「待て！　いきなり過ぎるだろうが！」
『こっちの台詞だ！　なんでお前が俺の携帯に連絡してくるんだよ！　嫌がらせか！』
「何で俺が電話しただけで嫌がらせなんだよ！　だいたいお前、俺の番号を登録してないだろ！　部長や会長はきちんと登録しておけって言ってただろうが！」
『リアス先輩や朱乃先輩、アーシアさんに小猫ちゃんなら百件だろうが千件だろうがいくらでも登録してもいい。だがな！　何が悲しくて野郎の、それも片やイケメン爽やか野郎の木場、片や学園に轟く変態三人組の一人、兵藤の番号を登録しなきゃいけないんだよ！　メモリの無駄以前の問題だ！』

「こ、この野郎……」
話し合うどころか罵り合いに発展しそうになる中、左手のドライグが溜息まじりの声で一誠に呼びかける。
『相棒、熱くなっている所悪いが言い争うのが目的じゃないだろ？　このままいったら出そうとしている話も出せなくなるぞ』
ドライグの言葉を聞いて言い掛けようとした言葉を喉の途中で止め、そのまま胸の内に飲み込む。ドライグの言う通り、一誠には匙の手助けが必要であり、このまま不毛な言い争いをしていても何一つ良いことなどありはしない。
一誠は一度大きく息を吸い込んだ後、自分の内に篭る熱を吐き出すイメージをしながら深呼吸をする。少しだけ気分を落ち着けた一誠は改めて匙に話し掛けた。
「……お前の言いたいことはよく分かった。それでもこの話だけはちゃんと聞いてくれ」
『ああ？　……まあ、聞くだけなら』
急に落ち着いた態度で喋り出す一誠。その変化に熱くなっていた匙も戸惑ったのか、急速にその熱を冷ましていく。
「明日の休日手伝って欲しいことがある」
『なんだそりゃ？　学生にとって大事な休日の時間をお前に割けっていうのか？』

「頼む」
一誠が真摯な態度で行う頼みに電話越しの匙は黙る。普段は碌な話を聞かない一誠がこうまで真剣に頼ってくることに、匙は何か動かされるものを感じていた。
少し間が開いた後に匙の溜息が聞こえてくる。
『――しょうがねぇな。分かった、行くよ』
「おお！　ありがとな！」
『なんか奢れよ』
その後、匙に集まる時間と場所を伝えて電話を切る。そして、次に連絡するのは小猫の番号であった。
少々緊張しながらシンから教えられた小猫の番号を入力し発信する。コール音が数回鳴った後、小猫が電話に出た。
『……もしもし』
いつもの平坦な口調で小猫が応じてくる。
「あ、小猫ちゃん？　俺、俺。イッセーだけど」
『……なんでイッセー先輩が私の番号を知っているんですか？』
いきなり不信感を露わにして一誠の声に応える。
「いや、これは別にやましい方法で取った訳じゃなくて――」

『……ストーカー行為は犯罪ですよ？』
「してないから！　そんなこと絶対にしないから！　きちんと間薙から番号を聞いて掛けているだけだからね！」
『……間薙先輩がですか？』
一誠に番号を教えた相手が意外だったのか、小猫の声に若干であるが驚きが混じったのが一誠には分かった。
『……それで私は何をすればいいんですか？』
「え？」
先読みする小猫の言葉に一誠は思わず間の抜けた声を出してしまう。
『……間薙先輩が理由も無く、イッセー先輩に私の連絡先を教えるとは思いません。……きっときちんとした理由、おそらく祐斗先輩のことで私の力が必要なんじゃないですか？』
「……よく分かったね。小猫ちゃん」
『……私も祐斗先輩のことが心配ですから』
小猫の勘の良さに舌を巻きながら、一誠は教会の人間と結託し聖剣を破壊しようとする旨を伝える。
『……大胆なことを考えますね』

小猫の呆れたような反応が返ってくるが、その声の響きに否定的なものは感じられない。
『……他の人にこのことを伝えてはいないんですか？』
「一応、匙には伝えてある」
『……匙？　……ソーナ会長の眷属の人でしたか？』
「うん、合ってる。今の所は小猫ちゃんと匙だけだ」
『……間薙先輩には伝えてないんですか？』
「教えたけど断られた。聖剣絡みで別の仕事があるらしい」
『……そう、ですか』
本来なら真っ先に手を貸してくれるであろうと思っていたシンの不在が余程意外であったらしく、小猫の声にほんの少しだけであるが掠れる様な動揺が感じられた。一誠にもその気持ちがよく分かる。
しかし、手を貸せないのなら仕方ない。後ろ向きになりそうな気持ちを吹っ切るように明るめな口調で集合場所と時間を小猫に伝え、そのまま切ろうとするが一誠はふとあることを思い、最後に話し掛ける。
「なあ、小猫ちゃん。間薙の名前を出した時あっさり信じてくれたけど、もし俺が木場の名前を出しにして聞き出していたら――」

『――それは無いです』

簡潔であるが確信に満ちた声で、一誠のもしもを切り捨てる。

「ハッキリ言うんだね」

『……イッセー先輩は女性絡みになると確かにスケベで女の敵で変態です。……でもそれ以外は最低でも最悪でもありません。……少なくとも間薙先輩はそんな人に力を貸したりしません』

一誠、シン、両方への信頼を現す小猫の言葉。今までの共に行動してきたことが無駄ではないということを実感し、一誠は胸の内に熱いものを感じた。

「ありがとう。小猫ちゃん。絶対に成功させよう」

『……はい』

一誠は礼を言ってから電話を切った。これで匙、小猫に明日会うことができるが、次はいよいよアーシアにこのことを話さないといけない。そう考えると気が重たくなる一誠であった。

「……イッセーさん」

一誠が悩む最中いきなり部屋のドアが開き、そこからアーシアが現れる。アーシアの前触れの無い登場に一誠は思わず跳び上がってしまいそうになる身体を無理矢理抑え込み、勤めて冷静な声を意識しながらアーシアへと話しかける。

「ど、どうしたんだ、アーシア？　何か用でもあるのか？」
「イッセーさん。……木場さんのことで何かをするつもりですか？」
心臓が一瞬鼓動を止めたような錯覚を一誠は覚えた。アーシアの口から出てきた言葉は、まだ一誠が伝えていないことであったからだ。
「……さっき小猫さんと電話していましたよね？　はしたないことと分かっていますが私、それを聞いちゃいました」
小猫との会話に集中していたせいでアーシアが近付いて来る気配を完全に見落としていた自分のミスを内心で罵倒しつつ、どう話すべきか言葉を考える一誠の側にアーシアが近付き一誠の隣に座る。
「私も参加してもいいですか？」
アーシアから出てきたのは聖剣の破壊に参加する意思。真っ直ぐと一誠を見つめて揺るがない瞳で一誠に伝える。
「……危険なことだぞ？」
「分かっています」
「死ぬかもしれない」
「それも分かっています」
「教会から更に敵視されるかもしれないんだぞ？」

「例え忌み嫌われようと私は信仰を捨てる気はありません。それに今の私にはそれと同じ、いえそれ以上に大事なものがありますから」

明るく微笑むアーシアの顔を見て、一誠はこれ以上言うことは野暮であることを悟る。今思えばこうなることは最初から分かっていたのかもしれない。アーシアと初めて出会ったときから何度か見た彼女の強い意志、それを見て一誠は何度も感嘆を覚えたのだから。

「……分かった。アーシア、力を貸してくれ」

「はい！」

こうして三人の協力を得た一誠は、翌日待ち合わせ場所へ皆と集まったのだが、当日になって聖剣破壊を告げられた匙は案の定嫌がって参加を辞退しようとしたが、それを小猫が無理矢理引き止めることとなった。

半泣きで不参加を訴えてくる匙に一誠は黙っていたことを詫びた後で、匙の力が必要であり、本当に嫌ならばこのまま帰ってしまっても仕方ないという旨を伝える。匙は非常に複雑そうな顔をしてから肩を落として半ばヤケクソ気味に参加することを告げた。

かくして聖剣破壊の為のメンバーが揃ったところで次にするべきことは、最も重要な要素であるイリナとゼノヴィアとの交渉であった。彼女たちがどこに居るか未だ判明していない状態であるが、その間にもどうやって自分たちの要望に沿った結果になるか

を普段勉学ではあまり用いない脳を高速で回転させつつ二人の探索を始めた。
　人数がそれなりに居るため、二手に分かれてイリナとゼノヴィアの捜索を始めたが、探し始めてから僅か数十分ほど経って、匙から二人を見つけたという連絡が入ってくる。好調な滑り出しに喜びつつも、後のことを考え緊張で僅かに身を固くする一誠であったが、連絡をしてきた匙からは困惑した様子で、しきりに二人の容貌を尋ねてくる。一誠はきちんと二人の特徴を教えるが、その度に匙は電話から離れて何度か確認をしている様子であった。
『あれでいいのか？　本当にあれで？　うーん、あれでいいのか……』
　戸惑っている匙の声が何度か聞こえてくる。その様子を不思議に思いながらも、一誠は匙から教えられた場所を他のメンバーにも告げて目的の場所へと向かう。
　二人が居ると言われた場所に立っている匙を見つける。それとほぼ同じタイミングで、他の面々もこの場所に集まった。
「匙、二人は？」
「……多分、あれだ」
　指差す方向を見て、全員同時に呆気にとられる。
　白いローブを纏い、片方は背負う程の巨大な物体を持っている姿、そしてその顔から間違いなくイリナとゼノヴィアであることは分かる。しかし、肝心の二人がやっている

ことは、簡潔に言えば物乞いであった。祈りの言葉らしきものを言いながら通行人たちに訴え、お金を恵んで貰おうとする様は間違いなく物乞いそのものであった。
「なあ？　何度も聞くがお前が言っていたエクスカリバーの使い手ってあの二人でいいんだよな？　聞いていた話とは大分違うんだが」
「間違いない……はず」
　つい昨日までは『主に為に心血を賭す誇り高き使徒』を地でいこうとしていた二人であったが、今の姿はまるで真逆であり『路頭に迷う哀れな子羊』にしか見えない。一日で変化した落差に軽く混乱しそうになる。
「……ホームレスシスター」
「あ、あのやはりこういった場合には御二人にお金をあげるべきでしょうか？」
　二人の様子を辛辣に表現をする小猫に大真面目に考えるアーシア。
　このまま見ていても埒が明かないと思い、全員を代表して一誠がいまだに恵みを求めている二人へと近付く。
「あのー」
「あ！　イッセー君！」
「むっ！　赤龍帝！」
　声を掛けると同時にやや情けない顔をしていた二人は一瞬ではあるが驚きの表情を

浮かべていたが、すぐにその驚きは消し去り昨日会ったときのような凛々しさを感じさせる顔付きになる。
「こんなところで奇遇ね。一体何用かしら？」
「見てのとおり我々はこの信仰に疎い国で新たに信仰の根を降ろそうと忙しいのだが」
　先程のまでの貧しさを前面に出していた態度が嘘と思える程の面の厚さである。遠目から見ていた一誠としてついさっきまで物乞いをしていた姿を見ていたが、二人のいじらしさすら感じさせる強がりに呆れるよりも先に同情心の方を覚えてしまっていた。こうなってくると見ていたなどとても言えない。
「ちょっと二人に話があって、探していたんだ」
「話？」
「我々にはそんな暇など無いことは知っている筈だが？」
　『嘘付け』、という言葉が喉まで出かかるのを我慢しながら一誠は話を続ける。
「大事な話なんだ。聖剣にも関わることだ」
　イリナとゼノヴィアが視線を交わすが表情は厳しい。一誠の話を聞くことに難色を示している様子であった。
「私たちと悪魔が関わることがあるとすればそれは戦いのみだ。ハッキリと言わせて貰おう、君と話をするつもりはない」

「ゼノヴィアがこう言ってるし私も反対かな」
「頼む！　あそこのファミレスで数分だけでも話を聞いてくれないか？　話を聞いてくれる礼とは言わないが何でも好きなものを注文してもいいから！」
「――と本来の立場なら言うが今は特例の任務の最中、何事にも例外が付き物だ！」
「――ゼノヴィアもこう言っているし私は賛成よ！」
　見て分かる程露骨なまでに二人の瞳の色が変わり、手の平をあっさり返す。一誠もまさか食べ物でこうも簡単に釣れるとは思わなかった。頭の中で息詰まり、切羽詰るような交渉シーンを思い浮かべていた一誠は脱力感を覚えながらも、二人を連れてメンバーの下に戻る。
　そして、そこから現在へと至る。
「ふぅー、ここまでにしておこうこの国の言葉で腹八分目がいいらしいからな」
　明らかに数人分は食べたであろう皿の山を前にしてゼノヴィアが満足そうな表情で冷えた水を飲み干す。
「しかし、悪魔に食事の施しを受けるとはな。人生何があるか分からないものだな」
　凛とした顔で小さく笑うゼノヴィア。とても数十分前まで贋作の絵画に手を出したせいで路銀が一切無くなり、飢えてひもじい思いをしていた人物とは思えない。
「持つべきものはかつての縁なのですね、主よ。この心優しき悪魔たちに深き慈悲を」

その贋作に騙されたイリナが、神と一誠たちに礼の言葉を言ってから胸の前で十字を切りそうになるが、皆が慌ててそれを止める。
「それで私たちにする話とやらは一体何だ？」
机に置かれた伝票の金額に目を丸くしている最中の一誠にゼノヴィアが本題に入るように言ってくる。とりあえず支払いのことは後に考えると決めた一誠は生唾を呑みこみ喉を鳴らしてから頭の中で何十も考えていた言葉を口にする。
「エクスカリバーの破壊に協力したい」
一誠の言葉にイリナとゼノヴィアはすぐには反応せず、その内容による驚きからか口を閉ざしてしまう。店内の喧騒の中で突如訪れた一角での沈黙、一誠たちも次にゼノヴィアたちが何を喋り出すかで緊張し、物音一つ上げようとはしない。
この沈黙の中、最初に口を開こうとしたのはゼノヴィアであった。その口から出て来るのは拒絶の言葉か、あるいは承諾の言葉か、コンマ数秒の間で一誠たちの緊張は一気に上昇する。
「構わない」
出てきたのは承諾の言葉。切り出した一誠本人もあまりに躊躇した様子も無く言ったゼノヴィアに驚きの目を向ける。それはゼノヴィアの隣に座っているイリナも同様であった。

「ちょっとゼノヴィア。そんなにあっさりと……」
「合理的に考えたまでだ。イリナ、私たちの目的はエクスカリバーをコカビエルの手から放れさすことだ。だが、正直に言えばかなり困難と言える。私が『アレ』を使ったとしてもコカビエルの手を掻い潜って一本、運が味方に付いたとしても二本が限界だ」
　破壊を前提とした場合はな、と最後にゼノヴィアは付け加える。客観的に自分たちの戦力を判断するゼノヴィアに対し、イリナの表情は決して好い顔をしない。悪魔の手助けを受けるということ自体、神に祈りを捧げる身として拒否感を覚えるらしい。だが、それが本来の正しい反応とも言え、むしろゼノヴィアの判断の方が異端とも言うべきものであった。
「例え自分たちの力が届かなくても、主の為に身を捧げるのが私たちにとっての本懐じゃないの」
「自己犠牲――信徒としてそれが全うできたのなら、命尽きたとしても主の下へ召されるだろうな」
「だったら！」
「ただ、主の為に例え自らが穢れようとも使命を全うして生き、何度でも主の為に戦う。それも信仰だと思うのだが？」
「……前から思ってたんだけど、私とあなたの信仰って微妙に反りが合わないわね」

「君は主の為に命を捧げる覚悟で信仰をしている。私は主の為に人生を捧げる覚悟で信仰をしている。似て非なるがどちらに優劣があるわけでもない。そうだろ？」
　ゼノヴィアの言葉にイリナは言葉を詰まらせる。ややリアリスト寄りのゼノヴィアの考えとややロマンチスト寄りのイリナの考え、双方の考えが完全に重なることはないが交わる点もある。それはゼノヴィアの言い分に対してイリナがある程度の理解を示しているということであった。
「それでも悪魔の力を――」
「安心しろ。借りるのは悪魔ではなくドラゴンの力だ」
　ゼノヴィアの視線が一誠の左腕に向けられる。その視線とゼノヴィアの言葉にイリナはハッとした表情で何かに気付いた様子であった。
「悪魔の力ではなくドラゴンの力を借りるなら上も納得してくれる筈だ。形式状、教会の人間が悪魔と組みしたわけではないからね」
「詭弁よ、それ。仮に借りるとしても周りのこの人達はどうするの？　皆、悪魔でしょ！」
「ドラゴンは力を集めるのは周知の事実だ。かってに集まって成り行きでたまたま共闘してしまった、とでも報告しておけばいい」
　イリナの指摘もどこ吹く風と言ったように、眉一つ動かさずにあっさりとした様子で

答える。このゼノヴィアの返答に暫しの間、口を開けて驚いていたイリナであったが、短い溜息を吐くとそれ以上ゼノヴィアと揉める事無く大人しくなってしまう。

それはイリナがゼノヴィアの考えを認め、一誠たちに協力するということであった。

「一応は納得してくれたみたいだ。では力を借りるぞ、赤龍帝」

「了解。交渉成立だ。俺の――ドラゴンの力を貸すぜ」

二人の言葉で緊張に満ちた空気は解け、場は安堵した様子となる。

「おまたせしました。こちらイチゴパフェとなります」

そんな空気の中、ウエイトレスがデザートを一誠たちの前へと置いていく。一誠がイリナとゼノヴィアの方を見るが頼んだ覚えがないのか二人は揃って首を横に振る。今度はアーシアたちの方に目を向けるがこちらもイリナたちと同様の反応であった。

間違えて運ばれたのかと誰もが思ったとき、頭上の照明から鈴の様な声がした。

「あー、やっときた！」

一斉に目線が照明の方へと向けられるとそこには照明に腰掛けているピクシーの姿があった。

「なんでここに？　間薙と一緒じゃないのか？」

「シンがこっちを手伝っておいてくれだってさー」

照明から飛び降りたピクシーは、そのままイチゴパフェの前に移動すると添えられた

スプーンを器用に使い食べ始める。
「あまーい」
「これは……お前たちの使い魔か？」
「改めて見て思ったんだけど、もしかしてピクシー？　物凄く貴重な妖精じゃなかったけ？」
　ピクシーの登場に軽く驚く二人。
「使い魔っていうか……今はここに居ないけど間薙の『仲魔』だ」
「間薙……ああ、あの勧誘し損ねた彼か。『仲魔』……変わった表現をするんだな、その彼は」
「こんな希少な存在を身近に置いておくなんてね。そういう筋のコレクターだったら０を７つか８つぐらい付けてでも欲しがるのに」
　改めてピクシーの希少さを教えられ、軽く目を丸くした一誠はイチゴパフェと格闘し続けるピクシーに目を向ける。
「お前って本当に珍しいんだな」
「そうみたいだね。あたしって凄いねー」
　少し自慢げに胸を張るピクシーであったが、金額云々について理解している様子は無くただ希少、珍しいという言葉を褒め言葉と勘違いして受け取っている様子であった。

「あ！　そうそうシンから伝言があったんだっけ」
　スプーンを動かす腕を止め、ピクシーは一誠の耳元に近寄る。
「伝言？」
「あのね、『部長たちのことはこっちで何とかするから気にせず自分たちのことに集中してくれ。あと会長の方もどうにかするから匙にも伝えておいてくれ』だって」
「間薙……それであいつは今は何をしているんだ？」
「うーん……内緒！」

◇

「この場所でいいのね、シン」
「その筈何ですがね……」
「その肝心の人物は見当たりませんね」
　人気のある場所から少し離れた所に造られている広場。周囲を木々で覆われているせいか、休日にもかかわらず全く人が居ない。所々に置かれてある休憩用の無人のベンチが、より広場の悲壮感を漂わせていた。
　そんな無味乾燥とした場所をアダムが待ち合わせの地点とし、そこにシンはジャック

フロスト、リアス、朱乃、ソーナ、椿姫を連れてやってきたのだが、そのアダムの姿が見えない。
「遅刻なのでしょうか？」
「集合時間の１５分も前に来ているのに呼んだ本人が姿を見せないとは感心しないわね」
少しだけ目つきを鋭くしたソーナが、まだ見ぬアダムに対し静かな怒りを仄めかす。そんなソーナに椿姫は同感ですね、と相槌を打っていた。
そんな二人を見て、リアスはこっそりとシンに話し掛けてくる。
「貴方から聞いた話の規模のことを考えると無視できないものではあるけど、よくソーナを動かせたわね。それも生徒会全員の協力付きで」
もしもの場合を想定しての待機ということでこの場に居ないが、残りの生徒会メンバーも今回の件について全面的に協力する言質を取っている。
「一体、間薙くんはどんな対価を払ったんですか？」
「ああ、まあ、何と言うべきか――」
朱乃の質問に言葉を濁すシン。それを見て不思議そうに見る二人であったが、更に追及する前にソーナの声が飛ぶ。
「間薙くん。そのアダムという人物に連絡を入れてくれませんか？　彼の言っていたこ

とが本当なら、一分一秒も無駄には出来ないので」
「――そうですね」
ソーナに従いシンは携帯電話を取り出すとアダムの番号に掛ける。すると林の方から着信音が鳴るのが皆の耳に入ってきた。悪魔の聴力を以てしてもかなり小さく聞こえることから、それなりの距離にアダムは居ることとなる。
「向こうからか」
何度も鳴らしているが一向に出ないので、直接本人が居る場所へと向かう。日光が遮られた木陰はやや涼しく、湿った空気が漂い緑の匂いに溢れている。そんな中から聞こえてくる着信音を頼りに歩を進めていくが、ある程度進んだとき着信音以外の音が聞こえ始めてきた。
「あら？　何かしら」
「音……というよりも声？」
朱乃が指摘した通り、よくよく聞けばその声は女性と思わしきものであった。途切れ途切れでありどこか押し殺したような声。
更に奥へと進んでいくがその声は徐々にはっきりと聞こえ、次第にその声がどんな種類の声か分かり始め、全員の歩みが重いものとなり女性陣の頬にも赤みが差していく。
「……ねえ、これって……」

「……その……何と言うか……」
「……ええっと」
「……喘ぎ声ですわね」
「何だそれホー？」
悶え艶のある女の嬌声。何とも言えない空気が場に漂い始める。そしてその中でも数少ない男性であるシンは居心地の悪さを感じていた。ジャックフロストに至ってはこの声がどういうものか、シンのズボンを引っ張りながら何度も尋ねてくる始末。
「――とりあえず、俺が先に行って見てきます」
「……大丈夫？」
「居るか居ないか確認してすぐ戻ります」
「オイラもいくホー」
「お前は留守番だ」
そう言ってシンは奥の方へと一人進んで行く。
そして数分後、心底うんざりした様な空気を纏ったシンが戻ってきた。
「……どうだった？」
「……想像していた通りのことをしていましたよ」
呆れ果てたといった口調でシンはどんなものを見てきたか教える。シンの言葉に自

然と女性たちの目が林の奥へと向けられる。
「あちらもこちらのことには気付いたことですし、一旦戻りましょう」
「……ええ、そうね。あれだけ携帯を鳴らしていれば嫌でも気付くわね」
「違います」
「えっ？」
「最中のあいつと目が合いましたからね。――それでも続けてましたけど」
広場に戻ってから数分後、シンたちが入っていった林の中から、襟元を直しながらアダムが歩いてくる。
「やあ、みなさん。集まって頂き感謝します」
晴れ晴れとした顔で皆に挨拶をするが、リアスたちの反応は冷めたものであった。
「貴方がアダムかしら？　初めまして。貴方がもたらした情報が無視できないものだったから来てみたんだけど、随分と愉しんでいたみたいね？」
「くくくく、愉しむだなんてそんな。ただ男女特有の会話をしていただけですよ、私は。ああ、ちなみに相手の女性は別の道から帰らせたのでご心配なく」
特に誤魔化すつもりもなく笑みを崩さないアダム。その面の厚さは並ではないらしい。
「まあいいでしょう。集合の時間きっかりに来ていますから。それで彼から聞いていま

すが、そのバルパーが施した術式について貴方から詳しく聞かせて頂けますか？」
　無駄な話はするつもりは無いらしくソーナは冷徹な声で話を先に促す。
「それなら実際に見た方が早いですね。その為にここに呼んだわけですから」
　アダムはそう言って広場の奥に進んで行く。全員がその後についていくが約２００メートルほど歩くと近くに立つ木の側で立ち止まる。そしてその木の幹を指先で叩き目当てのものであることを示す
「これです」
「朱乃」
「はい」
　リアスの指示で朱乃がその木の幹に手を触れる。すると朱乃の手から魔力が発せられ、それに反応して幹から円形状の陣が浮き出す。そのまま朱乃はその陣に触れるとガラス細工の様に粉々に砕け散ってしまうが、砕いた朱乃本人は眉間に眉を寄せ険しい表情となる。
「……これは」
「どうしたの？」
「この術式はかなり巧妙に作られた偽物です」
　朱乃は言う。表面上は本物の術式と何ら変わりないが、本物とは違い効力を発揮する

力は無く、描かれている式も、本物の匂いを出す為の偽装に過ぎないと。
「流石、将来有望なリアス・グレモリー様の眷属ですね。一目で見破るとは」
手を叩き賞賛の拍手を送るが、そんな拍手一つで場の空気が変わる筈もない。
「一つ聞いていいか？」
「何でしょうか？」
「この偽物を含めてこの街には一体どれくらいの術式が施されているんだ？」
シンの問いにアダムはにこやかな笑みを浮かべこう告げる。
「そう大した数じゃありません。私が数えた所ざっと見ても３００程ですから」

行動、惨状

一誠はゼノヴィア達との交渉が終わるとすぐ木場の携帯へと連絡を入れた。そして、聖剣の破壊についての話と、今ゼノヴィアたちと共に居て、木場にもこの場に来てほしいと頼む。

昨日のこともあり木場も難色を示すかと一誠は思っていたが、予想に反して『分かったよ』の一言で了承し、あっさりとファミレスに来ることとなった。

三十分もしないうちに木場はファミレスの店内へと顔を出し、一誠たちの顔を見ると少し翳りのある微笑みを浮かべた後、ゼノヴィアとイリナの姿を目に入れその微笑みを消す。会うことは了承したが、まだ割り切れない部分がある様子であった。

木場はゼノヴィアたちと向かい合う様にして座る。そこにウエイトレスがやって来たので、木場はコーヒーを注文した。

木場のコーヒーが来るまでの間、木場、イリナ、ゼノヴィアとで会話が発生する事無く、重苦しいとまではいかないがやや固い空気が場に満ちる。数分後、木場の注文したコーヒーがテーブルの上に置かれ、それを一口飲んだ後、木場から話を切り出した。

「エクスカリバー使いがエクスカリバーの破壊を承諾するとは正直意外だったよ。で

も、意に背くものなら何でも切り捨てるのは君たちらしいと言えるかな」
「いきなり言ってくれるな。まあ切り捨てられた者特有のものの言い方だ。僻みに満ちているな」
木場とゼノヴィア、互いに毒を吐き出す。二人の容赦ない言い様に空気は一気に殺伐としたものとなり、木場と教会の二人を引き合わせた一誠は、いますぐここで戦いでも始めるのではないかと心配し、両者の顔を何度も往復して見る。
「どんなに年月が経っても『聖剣計画』への恨みは消えないみたいね。中心となったエクスカリバーと、それを行った教会への憎しみも」
「当然だよ。年月が経てば全て忘れられるほど、僕は割り切った性格はしていない。あの日起こったことは今でも鮮明に覚えている」
「非人道的に思える計画だけど、それによって得られたものもあるわ。あの計画で聖剣使いの数は一気に伸び、それによって救われた命もある。無駄な犠牲じゃなかった」
「それがどうしたっていうんだい？　今の幸福が過去の不幸を帳消しにするのかい？　同志たちに君たちの犠牲は無駄じゃなかったと報告して彼らが救われるのかい？　本当に彼らが救われたかったのは今の言葉でじゃない、あの日、あの時なんだ。どんなことがあろうと、失敗作と断じて被験者全てを処分しようとしたことは、許すことは出来ない」

態度、口調は至って平坦なものであったが、その瞳には尽きぬ憎悪が渦巻いている。既に木場の中では言葉で終わるような復讐ではなく、行動と結果でしか晴らせぬ復讐と化していた。

イリナを突き放す木場の言葉と態度。真っ向から飲み込むような木場の敵愾心に、イリナは言葉を詰まらせてしまい木場の言葉に反論できずにいる。それに助け舟を出したのはやはりゼノヴィアであった。

「言っておくが、私たちだって計画に関しては全面的に肯定していない。はっきりと言えばあれは忌むべきものだ。しかし、イリナの言葉は犠牲になった命に少しでも意味を持たせたいという考えから出て来たものだ。イリナの言葉の意味を知ったとしても無意味と言い切れるのかな、君は？」

今度は木場が言葉を詰まらせる。木場が聖剣を破壊するということは散って逝った同志たちの命、人生に意味を持たせる為のものである。ゼノヴィアの言葉を聞いてなお否定する言葉を吐くことは木場には出来なかった。

「……今のは意地の悪い言葉だったな。すまない、忘れてくれ」

意外にもゼノヴィアの方から詫びを言って自らの言葉を訂正する。一瞬見せた木場の表情の変化に、多少なりとも罪悪感を覚えたのかもしれない。

「……話を戻すが、教会でも『聖剣計画』は忌むべき事件として我々の記憶に刻まれてい

る。被験者の処分を決定した責任者は異端者の烙印を押され、本来ならそのまま処分される筈だったが……奴は生き延びた」
「生き延びたって……何でだよ」
「その異端者は今までの実験を手土産にして、堕天使側に保護を求めたのよ。そして彼は堕天使の手によって教会の追手から逃れ、今では堕天使側の住人」
　ぴしりという罅割れる音が響く。その音源へと全員の目が向けられる。そこには木場が手にしているコーヒーカップがあり、その取っ手の部分に細かい亀裂が入っていた。木場は指先の力だけで陶器を割ろうとしている。それほどまでに今の木場の感情は昂りつつあった。
「その逃亡した異端者の名は？」
「……バルパー・ガリレイ。『皆殺しの大司教』という忌み名で呼ばれた男だ」
『えっ？』
　木場以外にその名で反応を見せる人物がこの場に二名いた。一人は一誠、もう一人はアーシア。ゼノヴィアが出した名前は、昨日シンから聞かされた名でもあった。
「そいつ……今この街にいるぞ」
「何だって！」
「それは本当か！」

「イッセー君！　冗談じゃないよね！」
　木場、イリナ、ゼノヴィアの三人が一誠の言葉に激しく反応し詰め寄ろうとする。
「ま、待て！　あくまでこの街に居るっていうのだけ聞いただけだ！」
「一体誰に！」
「昨日、間薙さんから聞かされました。間薙さんが言うにはアダムという神父の方からその情報を貰ったそうです」
　アダムの名を聞き、木場は神妙な顔となる。初めてアダムと接触した時点でバルパーの存在について知っていたのは間違いない。しかし、あの場で言わなかったのは何故か、という疑念が木場の裡に芽生える。もしかしたら今の様に第三者を通じて木場に伝わると見越して敢えて言わなかったのではないか、という考えが木場の中で浮かんだ。ならばこのように他のメンバーを交えてエクスカリバーを破壊すること自体、アダムの筋書き通りに進んでいるのではないかと一瞬考えたが、すぐにその考えを停止させる。
　木場自身一回しか接触していないので、これ以上間接的に得た情報を継ぎ接ぎにして一つの推測に纏めたとしても、それは憶測の域を出ない。例え誰かの手に導かれていようとしていても、木場のすべきことは一つであった。
「エクスカリバー以外にもすることが増えたね」
「待て、そのアダムという人物は誰だ？　そんな神父がこの街に潜伏しているとは聞い

ていないぞ」
「そうよ。この街に派遣した教会の神父は全員連絡が途絶えているのよ」
「僕は会ったよ。……その彼に」
　木場にイリナとゼノヴィアの目が向けられる。
「バルパーという人物を教えて貰った代わりに、僕も君たちに情報を提供する。アダムという神父とは君たちが部長や会長と交渉するよりも前に会っている。そのときにこの街にエクスカリバーがあるという情報を貰った」
「馬鹿な……聖剣が堕天使の手に落ちたこと自体ごく限られた者にしか伝えられていないのだぞ。ましてやその奪還任務に参加する者なら人並み外れた信仰心を持つ選りすぐった者だ」
「例え拷問されようとも死ぬ瞬間まで黙っていることが出来る、とっても口の堅い人しかなれないのよ」
「教会を見限った人間とかじゃねえのか？」
「そんな人間を選別する程、上の目は曇っていないぞ」
「君、流石にそれは失礼だよ！」
　匙が思ったことをうっかりと口に出すと、二人からかなり強く反発されてしまう。その迫力に少したじろぎつつ、一応機嫌を損ねてしまったことを軽く謝ってから木場の話

の続きを聞く。
「初めに聞いたときは僕も半信半疑だった。でも、軽々しく無視も出来なかった僕はその日からエクスカリバーの探索をし始めたんだ。そして先日、僕はエクスカリバーを所持した人物と一戦交えた。そのときに教会の神父が一人殺害されてしまっていたよ、その人物の手によってね」
「何だと……」
「そのエクスカリバーを持っていた人物は――」
「待って」
　話そうとする木場をイリナが制する。それに対し木場は少し怪訝そうな表情となるが、イリナの言葉を継ぐように今度はゼノヴィアが口を開く。
「それは後回しでいい。その前に聞かせてくれ。殺害された神父はその後どうなったんだ？」
　思いもよらない言葉だったのか木場は少しだけ目を丸くしたが、すぐに気を取り直してゼノヴィアに答える。
「警察には連絡しておいたよ。遺体はきっと丁重に扱われている筈だ」
「……そうか。礼を言う」
「なら良かった……」

ゼノヴィアは微かにとイリナははっきりと安堵の表情を浮かべる。その二人の表情を見て木場は思ったことを素直に口にした。
「君たちも仲間を思いやるんだね」
「当たり前だ。共に戦ってはいないが同じ目的の為に集った同志だ。……他の連絡が途絶えた者たちの遺体を回収することは恐らく不可能だろう。それでも一人だけでも国に帰すことが出来て良かった」
「自分の家で死ぬことが出来ないと覚悟はしている人達だけど、せめて葬るのならば故郷の土で埋葬してあげたいからね」
二人の言葉に場の空気が少し湿ったものとなった。一誠、匙は鼻をすすり、小猫は無表情ながらも心なしか眉が下がり表情を曇らせているように見える。アーシアは悲しげな表情となり、ピクシーはデザートを食べる手を止めていた。
そして、木場は非常に複雑そうな表情をしている。毛嫌いしている教会側の人間ではあるが、考え自体には賛同や同情が出来る部分が有り、そのせいで木場の心の裡に感情の正と負が混在していた。
「後で教会本部に連絡をしておこう。そうすれば彼の遺体を無事彼の故郷に届けてくれるだろう。……正直に言えば、教会を憎む君ならば遺体のことなど無視すると思っていた」

「死んだ存在を冒涜したり、辱める程落ちぶれた真似をするつもりは無いよ、例え相手が誰であろうとね。僕は、僕の信条に従ったまでさ」

そうか、と小さく笑うゼノヴィア。心なしか最初にあった険が少しだけ和らいだようであった。木場も同様であり、互いに結論からすれば嫌ってはいるが、それでも認めざるを得ない部分があると分かったからなのかもしれない。

「疑問も消えたことだし話の続きをしよう。僕が戦った者の名はフリード・セルゼン。彼は二本のエクスカリバーを所持していた」

木場の出した名に場に居る殆どが表情を顰める。唯一、例外だったのはフリードという名を初耳であった匙だけであった。

「フリード・セルゼン……成程。随分と厄介な奴の手に渡ったというわけか」

「若干13歳にしてエクソシストとなったヴァチカンの法王庁直属の元エリートよ」

「あいつそんな大層な肩書きを持った奴だったのか……」

理解の範疇を超えた言動と不安定とも言える感情の移り変わりを直に見てきた一誠からしてみれば、イリナの言葉を素直に受け入れることが出来ない。そういったものとは一切縁の無い存在にしか見えなかった。

「当時は天才という言葉はフリードを指すというぐらい彼は抜き出た存在だった。単独での悪魔討伐、数匹もの魔獣の駆逐、大量の人間を生贄とした邪教徒の殲滅、数えたら

きりが無い程の功績を出していたわ」
「その実力から未来のヴァチカンを担う存在として期待されていた……だが、奴の本性は周囲が思い描いていたものとは程遠いものだったよ」
「最初に不審に思われたのは彼と共に行動したエクソシストの死亡率の高さだったの。フリードはその実力から危険な任務に赴くことが多々あったから事故と考えられていたけど、だんだんとそれが事故とは思えない程の確率となっていたの」
「教会も流石に見て見ぬ振りが出来なくなり、あるときフリードの任務に監視を付けた。そして分かったんだよ、何故フリードと共に行動したエクソシストが死んでいくのか」
「彼が殺したのよ」
　ごくりと匙が唾を飲み込む音がやけにはっきりと聞こえる。匙以外のメンバーはイリナとゼノヴィアの話を聞き、匙程の反応を見せなかったが心の裡でやはり、と納得していた。
「そのときの任務は魔獣を使役する邪教徒たちの捕縛であった。使役する魔獣を倒したフリードは残った邪教徒たちを捕縛ではなく殺害し始め、それを咎めた同胞に手をかけた。……そこからは悲惨なものだったらしい。男たちは拷問まがいな方法で殺害され、女はフリードに凌辱される。このことを報告した監視も途中でフリードに見つかり致命傷を受けて、死に際の言葉から分かったことだ」

「その危険性、何処に向くか分からない殺害意識、信仰心の欠如から、すぐにフリードを異端者として処理しようと動いたけど、本人もすぐにそれを察知してヴァチカンから逃亡したの」
「処理班数十人も編成し、フリードを討伐しようとしたがその結果が今だ。処理班の三分の一が返り討ちに遭い、フリードは今もこうして同胞に手をかけている。不始末のツケをまさかこういった形で払うことになるとはね」
　あからさまな侮蔑を込めたゼノヴィアの言葉。その名を口にすること自体忌々しいとでも言わんばかりであった。彼女たちからすればフリードという存在自体未だ拭えない汚点そのものである。
「エクスカリバーを奪還する理由が増えたな。一刻も早くその穢れた手からエクスカリバーを解放しなければならない。アレが容易に振るえる程、聖剣の名は軽いものではないからな」
　決意を新たにした様子のイリナとゼノヴィアの二人。ゼノヴィアは机に置かれている紙ナプキンを手に取るとその上にペンを走らせる。
「私たちの連絡先だ。これから共同戦線をするなら必要になるだろう」
「分かった、ありがとな。なら、こっちの番号も――」
「あ、それならおばさまからイッセー君の番号聞いているから大丈夫よ」

「マジかよ！　母さん！　勝手なことを――」
そう言い掛けたとき、一誠はあることに気付く。ゼノヴィアから手渡された連絡先に書かれた番号。そこに携帯電話の番号もあった。
「なあ、お前らって携帯電話は今、持っているのか？」
「持っているが、それがどうかしたか？」
「それってやっぱり教会の本部の番号も登録されているのか？」
「まあ、一応ね」
「金が無かったときにそこに連絡して事情を話していたら、なんとかなったんじゃないか？」
しばらくイリナとゼノヴィアは黙っていたが同時に『あっ』という顔をする。
「では、さらばだ。食事の礼はいつかしよう。赤龍帝、いや兵藤一誠」
「じゃあね、イッセー君！　ごちそうさまでした！」
足早に去っていく二人をそのまま見送ってしまった一誠。居なくなった後になんとも言えない脱力感を覚えてしまう。
結果的にそれのおかげで交渉の場を設け、相手からエクスカリバー破壊の許可を得ることが出来た、これで良かったのだ。と無理矢理でも思わなければ、これから軽くなるであろう財布の中身のことを忘れられない一誠であった。

「イッセー君」
　一人心の裡で悶える一誠に木場が声を掛ける。
「どうしてこんなことを？　それに他のみんなも……」
　エクスカリバーへの復讐に対し皆が積極的に力を貸してくれることが、木場は不思議でしょうがなかった。得る物は何もなく、もしかしたら命を失うかもしれないことなのに、何故自分の手助けをしてくれるのかということに。
「ま、悪魔の仲間だし同じ眷属だからな。お前にはいろいろと世話にもなっているからな」
「私も同じです。私が捕らわれたとき、イッセーさんと木場さんは助けてくれる為に戦ってくれました。私は少しでもそのときの恩を返したいんです」
「俺は成り行きだよ……でも、まあ多少なりとも事情を知っちまったんだ。今更引くのも格好悪いしな」
　それぞれが口々に参戦する理由を言う。だが、それでも木場は快諾する様子は無く難しい表情をしていた。
「今回のことは部長には話しているのかい」
「正直に言えば俺の独断だ」
「部長が知れば怒ると思うよ？」

「そんなのは分かっているさ。きっと部長には迷惑かけることになる。怒らせたり、嫌われたりするかもしれない……だけどよ、お前が『はぐれ』になるのを黙って見ているよりはきっとましな筈だ」

一誠の言葉を聞き、木場は口を堅く結んだ。そうしなければ皆に対し、ありがとうという言葉を吐き出してしまいそうになるからだ。

一誠たちの心遣いが痛い程に染み渡ってくる。だからこそ木場は自分の私怨に巻き込むわけにはいかないという思いが込み上げ、その思いを言葉にしようと席を立ちあがる。そのとき服の袖を引っ張られる感触を感じた。

見れば、いつの間にか俯いている小猫が木場の側に来ており、立ち上がった木場の袖を掴んでいる。だが、その掴んでいる手からは小猫の持つ怪力は伝わっては来ず、振りほどけばすぐに放してしまいそうになるほどの華奢な力しか感じなかった。

「……祐斗先輩」

俯く顔を上げる。そこには普段の無表情は無く、瞳を潤ませ寂しげな表情をしていた。

「……私は、先輩がいなくなるのは寂しくて嫌です。……だからいなくならないで下さい。……お願い」

か細い声で懇願する小猫の姿は、余りに健気で可憐であった。その姿に一誠は勿論の

こと匙も頬を紅潮させ、同性であるアーシアも紅くなっている。

（不思議なものだね……）

小猫の姿を見ながら、木場の記憶は過去を振り返っていた。初めて彼女と出会ったとき、木場と小猫の間に会話など一切なく、ただ怯えられ警戒されていた。処分から免れてから間もないこともあり、教会の教えが抜けきらず、また精神的にかなり荒んでいた当時の木場に対する反応としては決して間違ってはいない。尤も、当時の小猫も精神的な問題から、リアスと朱乃以外には懐くことはなかったが。

まともに会話することだけでもそれなりの時間が掛かった木場と小猫の関係。それが今では面と向かって会話し、あまつさえ居なくなることを拒否され、寂しいとまで言われている。

袖を握る小猫の手を振りほどくのは簡単なことであった。だが、今の木場にはそれが出来ない。否が応にも小猫と過ごしてきた過去を思いだし、その積み重なった年数を実感してしまった木場には、その手を振り払うことなど出来る筈が無かった。

（本当にいいのだろうか？　僕の目的に彼女たちを巻き込んでいいのだろうか？　小猫ちゃんたちの厚意に甘えていいのだろうか？）

そのとき木場の脳裏にある言葉が思い浮かぶ。

『お前はもう少し我儘に生きた方がいい』

シンが木場の去り際に言った言葉。それが何故、今になって思い出していた。

（……困ったな。許されるのかな？　今の仲間を守りながら過去の同志たちの魂を救うなんて虫のいいことが。そんな選択を選んでもいいのだろうか）

新たに生まれた選択に対し木場は答えをすぐに見つけだすことは出来なかった。だが――

「ははは。小猫ちゃんにそんな風にお願いされたら断るに断れないよ。分かったよ、皆の力を貸してもらう。そして、必ずエクスカリバーとバルパーを打ち倒して見せるよ」

木場は安心させる様に小猫に微笑みかける。それは数日振りに見せる木場本来の笑みであった。その微笑みを見て小猫も小さく笑う。

未だ木場の中で自分が選んだ選択が正しかったのか、答えは出ていない。だが、皆と共に戦う意思を言葉にしたとき、不思議と心が微かに軽くなったような気がした。

◇

「これで七個目ですね」

そう言いながら朱乃は電柱の陰に刻まれた術式を破壊した。破壊された術式は剥がれ落ちるようにして消えるだけであり、それが偽の術式であることを示していた。

「お疲れ様です」
「お疲れだホー」
「うふふ、まだまだ先は長いですわね」
　シンとジャックフロストの労いの言葉に、朱乃は苦笑を浮かべる。シンは懐から折りたたんだこの街の地図を取り出し広げる。そこにはいくつもの丸が描かれており、その内の一つにペンで×印を書き込んだ。
「次はあっちの方角ですね」
「ちょっと待ってください。街一つを破壊するのなら、もっと効率の良い場所に術式を刻み込むと思います。私が同じ立場だとしたらこの辺りに術式を設置しますわ」
　朱乃が地図を覗き込み、その細くしなやかな指でシンが行こうとした場所の真逆を指す。
「なら、そこに行きましょう。こういった分野の知識は俺には一切ありませんからね。姫島先輩に従います」
　シンと朱乃とジャックフロストが地図の場所を目指し歩き出す。
　アダムから街を破壊するバルパーの術式の話を聞いた後、少しでも早く本物の術式を見つけ出す為に三組に分かれて行動することになり、シンとジャックフロストは朱乃と組み、ソーナは椿姫と組み、そしてリアスは話したいことがあると言ってアダムと組む

ことになった。
　それぞれの組がアダムが見つけた術式の場所を印した地図を手渡され、手分けして行動することになったが、掛かった時間を考えても成果はイマイチ悪い。だからといって最短でいくような方法も無く、今の様に一つ一つ地道に潰していくしかなかった。
「リアス――いえ、部長は大丈夫かしら？」
　向かっている最中、ぽつりと朱乃が言葉を洩らす。その心配はシンも理解できることであった。得体の知れない男と共に行動をする、更に最初に与えた印象からその心配は更に増すものがあった。下手をすればリアスの貞操が危機に晒される。
「まあ、あちらからこっちの協力を仰いでおいて馬鹿な真似はしないでしょう。……多分、きっと」
　断言ができず曖昧な感じな言葉を残したのは、シン自身がアダムという存在に対し思うところがある証拠であった。最初に会ったときから胡散臭く何を企んでいるのか分からない人物であり、良い印象は一度たりとも受けていない。今回の件についても裏で何を考えているかは分からない。
　だがそんなシンの側を、追い駆けっこをしていく子供たちや赤子を抱えた夫婦が通り過ぎていく。もし、これらが一瞬で消えてしまうのかと考えると黙っていることは出来ず、動かざるを得ない。

「――そうですわね。不思議なものですね。あの方もイッセーくんと同じ相当な女好きという印象を受けますけど、イッセー君と比べたらどうしてもあちらの方が女性として危険だと感じてしまいますわ」
「その感覚は間違っていないと思いますよ。あっちはなんだかなんだ言っている割にはヘタ――意外と純情ですから」
「うふふ、そこが可愛らしいと思いますけどね」
「ヒホ？　イッセーはアケノには可愛く見えるのかホ？」
「ええ、そうですね」
「オイラは面白く見えるホー」
「あらあら、それも確かですわね」
　シンたち一行が新たな術式の場所に向かっている一方で、そこから数キロ以上離れた場所ではリアスとアダムがシンたちと同じく術式を探していた。こちらはシンたちとは違い会話が少なく、並んで歩くことはせずに、常にアダムを数歩先に歩かせ、その後ろをリアスが歩くという形となっていた。正体も目的も不明な相手に背中を見せる訳にはいかないリアスの考えからである。
　それを知ってか知らずか、アダムは背中から受ける不信感に満ちた視線を受けながらも、絶えず口角を吊り上げた笑みを浮かべつつ黙々と作業を行っていく。

「少し聞いていいかしら？」
　リアスが五個目の術式を破壊したとき、リアスは胸の内にあった疑問を確かめるべくアダムに声を掛ける。アダムは眉を片方上げ、リアスから声を掛けてきたことに僅かながら驚いた様子を見せたが、すぐにそれは胡散臭い笑みの下に隠れてしまう。
「なんでしょうか？　答えられる範疇ならいくつでも質問に答えますよ？」
「まどろっこしいことは抜きにして言うわ。貴方が私やソーナを巻き込もうとした理由は何？」
「何と聞かれましてもね……私自身見つけるのは得意なんですが、術式の破壊や解呪といった複雑なものは苦手なんですよ。どうしても強引な手段に移らざるをえないので。陰で動く身としてはあまり目立つことは避けたいので」
「本当にそれだけかしら？」
「と、いいますと？」
　リアスは目を細める。その目から放たれる視線には明らかな敵対心が込められていた。
「本当は私とソーナの背後にある力が目当てなんじゃないかしら？」
「ええ、そうですよ。背後の力、つまり魔王の力が目当てです」
　次に言う言葉を詰まらせてしまう程、あっさりとアダムはリアスの言葉を肯定する。

リアスが態とはぐらかして言った部分もあっさりと口にするとは予想外であった。
「……随分と簡単に認めるのね」
「駆け引きでもしたかったですか？　止めときましょう、時間を掛けても得られるものなんておまけのようなもんです。せいぜい自分の知識に対する満足感ぐらいでしょう？」
　軽くあしらわれたことにリアスのプライドが多少なりとも傷付くが、それは表情には出さず務めて冷静に言葉を続ける。
「だとしたら今回の貴方の目論見は外れたわね。今回の件はお兄――魔王へと報告するつもりはないわ。全て、私とソーナたちで解決する」
　毅然とした態度のリアス。だがアダムはその話を聞いても薄ら笑いを消さず、寧ろ笑みを深くする。
「ええ、そうして下さい。決して魔王を呼ばない様にして下さいね？　だって私が貴方たちの近くに居たいのは『魔王を呼ぶことを妨害したい』からです」
　またしても予想を上回るアダムの返答にリアスは絶句してしまった。
「きっと貴方が魔王を呼ばない理由は、自分の領土で起こった問題に身内を巻き込むことを避けたい為でしょうねぇ。ただでさえフェニックス家との婚約を破談させて自分の家に迷惑を掛けたばかりですし、これ以上身内の手を煩わせるのは避けたいですよ

ねぇ？　いやいや実に家族思いじゃないですか」

言葉だけ捉えれば賞賛になるが、その語り口は皮肉気で嫌味に満ちたものが含まれており、リアスを言外に『小娘』と小馬鹿にしている風にも捉えることが出来るものであった。だが、それ以上に気になることもあった。それは、アダムが最近の冥界の事情を知っていることである。少なくとも、一介の神父などが知ることは出来ない情報であった。

リアスはアダムの言葉で生まれた怒りを押さえこみ、一つでも相手の情報を得る為に会話を続ける。

「お褒めの言葉として受け取っておくわ。それで？どうして魔王を呼ばれるのが貴方にとって不都合なのかしら」

「簡単なことです。それが相手の望むことなのですから」

「ッ！　コカビエルの狙いは魔王の命だというの！」

リアスの声が震える。聖剣の奪取も街の破壊もそれに繋がるものでしかないと分かった上での動揺であった。

「まあ、手に入れるならそれも手に入れたいのでしょうが、コカビエルの目的とは少しずれますね」

「……一体何が目的だというの？」

「余談ですがこの街でコカビエルと魔王が戦ったとしたら、街に住む人々はどうなるんでしょうかね？」
「そんなの……多くの命が失われるに違いないわ」
「そう。天災でも人災でもなく多くの命が失われる……もし、そうなったらどうなるとおもいますか？」
「どうなるって……」
「この世にはね、悪魔や堕天使、そして天使によって人の命が沢山失われていくことに黙ってられない、おっかない人たちが居るんですよ」
　そのような存在がいることを初めて知ったリアスは一体どのような存在か気になり黙ってアダムの話を静聴する。
「人が滅ぶ日まで人々を守護するこわーいこわーい四人の騎士たち。きっと動くことになるでしょうねぇ、自分の先約している獲物を横取りされるなんて腹が立つでしょうから」

◇

「ってなことがあったよ」

「そうか」
　その日の夜、自宅でシンは一誠たちとの交渉の場に参加していたピクシーから、そのときの様子について聞いていた。少々適当な感じのする報告であったが、どのようなことがあったか概ね知ることが出来た。
「このままアタシはイッセーたちについてればいいんだよね？」
「ああ、そうしてくれ」
　一誠たちの聖剣破壊に参加出来ない代わりにピクシーを送ったのは、戦力だけではなく互いの連絡を結ぶ為のパイプ役としての意味が有る。ピクシーから情報を貰ったシンは、逆にピクシーを通じて一誠たちに伝えておくべき内容を教える。
「うん、分かった。でも本当にリアスやあけのにばれずに出来るかな？」
「……まあ、任しておけ」
　実の所、シンは一誠たちが既に聖剣破壊の為に独自の行動をしていることをリアスたちにばらしていた。理由としては長期的に隠し通すことはまず無理であり、いずれ分かってしまうことならいっそのこと早い段階で報せた方がいいと判断しての行動である。
　それをリアスたちに教えたときは流石に顔色を変え、凄まじい怒気を放つという状態であった。

『イッセーが発端なのね。それに小猫、アーシアまで、あの子たちは……！』
『匙……お仕置きが必要ですね』
『部長、あいつが肝心な時に部長の言うこと聞きましたか？　会長、匙については契約した内容の延長ということで勘弁して貰えませんか？』
　あれこれ言葉を重ね一応は怒りを抑えて貰い、当分の間一誠たちの行動を黙認してくれる形となったが、いつまで黙っていてくれるか分からない。もしも聖剣破壊の際に怪我人が一人でも出たら、すぐに二人が行動に移るのは明白であった。眷属に対する態度は正反対であるが、想う気持ちは良く似た二人である為、シン自身そうなった場合は口を挟むつもりは無い。出来ればこの薄氷のような口約束が終わりまで持つことを願うだけであるが、きっとそんなに都合よく物事は動かないと冷めた考えもあった。
「もう報せることはないか？」
「うーんとね……あ、そうだ」
　最後にピクシーに尋ねると少し考えた後、思い出したことがあったらしい。
「ゆうとがね、昔のことを話してたんだ。あのね――」
「いや、そういった話なら別にいい」
　話し始めようとするピクシーに、シンはやんわりと断りを入れる。恐らくは木場が昔の実体験を語ったのであろうが、シンとしてはそれを又聞きするつもりは無かった。そ

れが相手に対し失礼な気がしたからだ。そして聞いてしまえば、無意識な同情心が湧いてしまいそうになるのを嫌った為である。自分のことながら面倒なことを考えると思いつつも、あくまで対等な立場で手を貸したいというのがシンの考えである。

過去に何があったかは詳しく知らないが、シンが木場に手を貸そうとしたのは少なくとも過去が理由では無い。シンが手を貸すのは『過去』の木場では無く『今』の木場にである。

「ふーん、分かった」

聞かない理由を特に詮索はせず、ピクシーはあっさりと了承する。その後、背を伸ばし欠伸をすると半眼になり、もう寝るねとシンに告げて自分の寝床へと飛んで行こうとするがその直後、何かを思い出したようにピクシーが振り返る。

「ねえねえ、聞きたいことがあるんだけどいい？」

「何だ？」

「デキちゃった結婚てなーに？」

「……はあ？」

ピクシーの口から出てきた言葉が予想の斜め上をいったものであった為、シンの口から呆けた声が出る。

「ゆうとの話を聞いた後、サジが泣きながらソーナとデキちゃった結婚したいって言っ

てたから」
「……どういう話の流れだ」
「そしたらイッセーも泣き出してリアスの胸を揉んで吸いたいってさ」
「……本当にどういう流れなんだ」
　恐らく木場の真面目な話の後にそのような会話が出てきたのであろうが、前後の繋がりが一切分からない、想像するだけでも恐ろしい。
「そしたらイッセーもサジもすごく仲良くなってたの」
「……似た者同士か」
　さぞかしその場には何とも言えない空気が流れていた筈であろう。というよりもアーシアや小猫、木場の前でよくそのような会話が出来たものである。間接的に聞いても酷い脱力感に襲われるが、その場で聞いた三人の心中は如何なものであったのであろう。
「ねえねえ、どういう意味か教えてよー」
「……」
「教えてったらー」
「……」
　この日、ピクシーが疲れて眠るまでの間、シンはひたすら沈黙を守り続けるのであっ

た。

◇

某日某所。

「待て、フリード！」

「はいはい、何ざんしょ？」

堕天使の隠れアジトからふらふらとした足取りで出て行こうとしたフリードを数人の堕天使が呼び止める。その誰もが険しい顔と不快感を露わにしていた。

「どうしたんですかー？　皆さん全員集まってー？　え、もしかして集団告白！　やだ！　俺、心の準備が出来ていないの！」

「ふざけるな！　いいか、良く聞け！　お前の勝手な行動は認めない！」

歪んだ笑みを浮かべるフリードに対し、激昂した堕天使の一人が糾弾する。その言葉にぴくりとフリードの眉が跳ね上がる。

「勝手に動いては勝手な真似をする。コカビエル様が連れてきたとはいえお前の行動は目に余る！」

「お前の持つエクスカリバーはお前の欲求を満たす玩具では無い！　それなりの責任感

を持ったらどうだ！」
「お前が動けば計画に支障が出る。お前は黙って我々の指示通り動いてればいい」
「へーへーそうですかぁ」
　侮蔑と罵声を浴びてもフリードの笑みは変わらなかったが、そのときある堕天使の一言が耳に入ってくる。
「大人しく堕天使の庇護に入っていろ。所詮、下級の悪魔一匹に退散したぐらいの実力だ」
　フリードの笑みの質が変わる。だがそれに気付いたものはこの場に居ない。
「うん、分かった。皆さんのおっしゃるとおーり！　ワタクシ、今までの行動を猛省する次第であります！　つきましては皆さま方のお耳にいれたいことが！」
　神妙な態度となり声を潜めるフリードに堕天使たちは訝しげな表情をするが、手招きするフリードに一人の堕天使が近付く。
「どんな話だ？」
「かなり重要なことなので、出来れば声を潜めたいのです」
　口に手を当てるフリード。堕天使はその口に耳を寄せる。その瞬間、顎の下に鉄特有の冷たさを持った固いものを押し付けられる。
「天井に脳みそへばりつけろ」

堕天使の顎下に押し当てた銃口から光の弾丸が発射され、顎を突き抜け、口蓋から頭蓋骨まで弾丸は走り、頭頂部を貫き砕くと同時に抜け出た余剰の力が堕天使の脳漿と脳を一気に引き摺り出し、フリードの言葉通り天井へとへばり付かせる。

突然のフリードの凶行に誰もが言葉を失うが、その隙にフリードは聖剣を抜き放ち一番近くにいた堕天使の肩から胴体の中心目掛け斬り裂く。

「血迷ったか！　フリードォオ！」

仲間の血飛沫を浴び、正気に戻った堕天使の一人が光の槍を形成し、それをフリードに向けるが、そのときには既にフリードは堕天使の懐へと飛び込んでおり、光の槍を持った手を掴み捻り上げると、その先端を別の堕天使の心臓に向け突き刺す。

「がああああ！」

「ひーはははは！　意外と良い声がでるじゃあーりませんか！」

「き、きさまぁぁぁ！」

「あ、すみません。うざいんで黙ってくれます？」

捻り上げていた腕に聖剣を一閃させ切断する。濁流の様に流れ出す血に堕天使は苦鳴を上げようとするが、それよりも先にフリードの爪先が顎を蹴り上げた。堕天使が血と歯を撒き散らして跳び上がる内にフリードの聖剣は次々と残りの堕天使たちを血祭りへと上げ、堕天使が地に落ちたときには通路は鮮血と堕天使だった者たちの部位で出

来た血の沼が出来上がっていた。
「ひ、ひが……！」
　砕けて顎で何とか喋ろうとする堕天使であるが言葉にならない。それを見たフリードは盛大に嘲笑う。
「あれれ？　どうしたんでしょうか？　きちんと喋れないようですねぇ！　これは何とかしないと！　聖剣よ、今こそ奇跡を！」
　聖剣の光の軌跡を描いたと思った次の時には堕天使の膝から下が両断され宙に舞う。
「あああああああああああああ！」
「おお！　喋れた喋れた！　流石聖剣！　何と言う奇跡！　ひゃはははははは！」
　心底楽しそうに嗤うフリード。そのとき通路の奥から足音が聞こえてくる。
「何の騒ぎだ？」
「随分と派手にやったな、フリード」
「ありゃ？　コカビエルの旦那とバルパーのじいさん？　どうしたの？」
　姿を見せたのはコカビエルとバルパー・ガリレイであった。二人は目の前に出来た惨状を見ても眉一つ動かさない。
「こ、コカ、ヒエルさま……！」
　芋虫の様に這いつくばってコカビエルの下に移動する堕天使。コカビエルはその堕

天使を見て膝を折ると、すがるようにして伸ばした手を掴む――のではなく砕けた顎を鷲掴みにして右手一本で持ち上げた。
「なんだその情けない顔は？」
「ん――！　ん――！」
コカビエルの行動、そして激痛によって堕天使の目は大きく見開かれる。
「戦争を求めて俺の下に集ったのだろう？　なら少しはそれなりの顔をしたらどうだ？　つまらんぞ、その顔は」
コカビエルは悶える堕天使に冷めた表情で見下す。そこに同じ堕天使という意識は皆無であった。
「痛み、苦痛は戦う者としては当たり前だ。縋るような顔、救いを求める顔、そんな顔など俺はいらん。哂え、哂ってみろ。それぐらいの気概を俺に見せて見ろ」
掴む手に力が更に込められ、指先が皮膚を突き破っていく。その痛みに堕天使はくぐもった絶叫を上げる。
「哂えないか――ならお前は不要だ。つまらん」
心底面白くないという表情をした後、掴んでいる手に光が灯り出す。それが何を意味するか理解した堕天使は更なる絶叫を上げようとするが、その声もコカビエルが放った光に飲み込まれ消え去る。頭部が消失した堕天使の身体をゴミの様に放り捨てた。

「やれやれ、駒となる堕天使は全て消えたか。もったいないことをする」
「ひゅー！　流石は旦那！　スマートだねぇ！」
「フリード、好きなように動け、お前の行動すべてを許容する。お前は少なくともこいつらよりかは面白いからな」
「アイアイサー、ボス！　旦那のそういう所最高に素敵！」
　堕天使たちに向けたのとは違って、心底愉しそうな笑みを浮かべるフリード。そのとき血だまりから呻き声が聞こえてくる。声の方にはフリードが最初に斬り裂いた堕天使、まだ息がある様子であった。
「詰めが甘いな、フリード」
「さーせん！　きちんと今からトドメさっしまーす！」
「待て」
　聖剣を振り上げたフリードをバルパーが制止する。
「何だよ、じーさん」
「無駄なことはするな」
　止められたフリードが不愉快そうな顔をするが、反抗はせずバルパーの言葉を黙って聞く。
「そいつらが用済みになったら私の研究に使うことになっている。最後の一体まで殺さ

れたら堕天使を使った貴重な実験が出来なくなるのでな」
「あ、そうだったの？　じーさん、ゴメンね！　お詫びにこいつをじーさんの部屋まで届けるわ」
倒れ伏す堕天使の髪を掴みそのまま容赦なく引っ張る。
「やめろぉ……やめてくれぇ……」
救いを求める声。だが誰もその声に手を差し延ばすことはない。
「まあ、一体あればそれなりの実験が出来るな。コカビエル、コレを使っても構わないな」
「好きにすればいい」
「じっけっん！　じっけっん！　たのしー実験！　解剖かな？　改造かな？　薬品かな？　それともそれ以上かなー！」
立ち去るコカビエルとパルパーの後を、鼻唄を唄いながら堕天使を引き摺っていくフリード。
この場に正常な判断をする者は誰も居ない。いるのはそれぞれ方向性の違う、三人の狂人のみ。
「やめてくれぇぇぇぇぇぇ！」
渾身の叫びは誰に届く筈もなく。堕天使は通路の闇深くへと消えていった。

番犬、夢幻

術式破壊を続けて数日後、未だシンたちは本物の術式を見つけられずにいた。既に破壊した術式の数は三桁を超えているもののどれも空振りであり、意味の無い数となっている。

リアスたち曰く、術式の基点に成りやすい場所を重点的に探してはいるものの、仕掛けた方もそれを熟知しているのか、そういった場所には大量の偽の術式が施されており、虱潰しに破壊して全て偽物だったという徒労が何度もあった。

一つの街を滅ぼす程の術式ならば、単発で効果を発揮するものではなく連鎖して破壊するものを使用することが多い為、本物の術式を一つでも発見することが出来たのならばそこから探知して残りの術式の場所を見つけることが出来ると聞かされているが、未だその最初の一歩が踏み出せていない状況であった。

「これも偽物ですね」

「今日で何個目だホー？」

「八個だ」

その日の学業を終えた放課後、シンはいつものようにジャックフロストを連れて術式

の探索をしていた。今回シンたちが共に行動しているのは副会長の椿姫であり、リアスは朱乃、ソーナはアダムと共に行動をしていた。

椿姫がシンと行動するのは契約の内容にかかわるものであり、術式探しをしつつ椿姫はシンが提示した契約に沿うものか見定める立場として今回一緒に行動をしている。

アダムに関してはリアスとソーナが私たちが見張るといって、シンや朱乃、椿姫と組ませるようなことはしなかった。だが、探索中に余計なことをアダムが言っているのか、探索が終わって集まる度にリアスとソーナは不機嫌そうな表情をし、対照的にアダムはニヤニヤと底意地の悪そうな笑みを浮かべていた。

それを見かねた朱乃が小声でリアスたちに、何かセクハラのようなものをされたのかと聞いたが、答えは何故かアダムから返ってくる。

「ああ、大丈夫ですよ。私は処女には手を出さないことにしているんで――色々面倒臭いですし」

その場の空気が凍結したのは言うまでもない。

「このままで大丈夫でしょうか？」

「まあ、何だかんだ言っても今日まで続いていることですし、ソーナ会長なら割り切ってくれる筈だと思いますが」

「その心配もありますが、私は敵の妨害が一切無いことが少々気になりまして」

椿姫に言われ、確かにとシンは思う。ここ数日行動しているが、敵の気配が全くしないのは不審に思うには十分であった。探索前はコカビエルの配下の堕天使、あるいはフリードが攻撃を仕掛けてくるかもしれないと思っていたが、それらが一切無かった。ピクシーからの報告では一誠たちの方にも仕掛けてはおらず、その敵の沈黙が少し不気味に感じられた。

だが、今はそのことを考えていても仕方がない。妨害が無いなら無い内に、可能な限り術式を破壊をするだけのことである。椿姫に言われたことを頭の片隅に置きつつ、シンはポケットから地図を取り出し次なる場所を模索する。随分と×印が多くなった地図を見ながらシンが注目したのは、ここから近い場所にある工場の名であった。

椿姫に次に行く場所の名を告げると椿姫はそれを了承し、三人はこの場から移動し始める。地図に記された場所に着いたのは歩いて三十分後のことであった。

地図にはきちんと工場の名が書かれていたが、シンたちが辿り着いた正門にあたる場所から見ただけで、工場から人の気配が無いことが分かる。また工場名を示す看板が無く、壁にはそれが取り外されたのか長方形型に変色した部分が有った。

「すでに潰れているみたいですね」

「人目に付かなくて、逆に有り難いです」

正門から一歩中に入ると立ち入り禁止の看板と侵入を拒む為のテープが張り巡らせ

てあったが、それを掻い潜って奥へと進む。進んだその先にはいくつもの建物があり、手分けして探すだけでも相当な時間が掛かることが分かる。とりあえずシンは近くの建物から探索することを考え、そのことを椿姫に伝えようとしたが、それよりも先の椿姫がその場で膝を突き、地面へと手の平を当てる。

「副会長?」

「少し待ってもらえますか」

椿姫は軽く息を吸った後、手の平から魔力を放出する。それは地面を波紋状に伝わり、工場の敷地内全土に一気に広がっていく。十数秒程それを続けていたが、何か分かったことがあるのか、椿姫は地面に押し付けた手を離し立ち上がる。立ち上がった椿姫は軽く息を吐き、僅かに疲労した様子を見せた。掛けた時間は大したものではなかったが、それなりに消耗をする行動であったらしい。

「分かりましたわ、場所が。あそこです」

椿姫が指差す方向にあったのは一番奥にある建物であった。

「今ので分かったんですか?」

「ええ、少しだけ強引な方法でしたが」

椿姫が先程の行動を説明するに、この場一体に魔力の波をぶつけることで、その波が伝わった先にある同じく魔力を帯びたものに接触させ、そのとき起こる魔力同士の反発

を潜水艦のソナーのように探知することで場所を把握したらしい。人が近くに居る場所などでは反響するものが多すぎて使えない技術らしいが、魔術関連では素人であるシンからしてみれば殆ど神業のようなものである。『女王』の駒を与えられるに相応しい実力の片鱗を確かに感じることが出来るものであった。

「ヒーホー！　ツバキ、凄いホ！」

子供の様な無邪気さで椿姫の技術を褒めるジャックフロスト。普段はソーナと同じく冷静であまり表情の変化の無い椿姫は少し頬を赤く染めながらも、いつもの大人びた表情で、ありがとうございます、と礼を返していた。

「さあ、行きましょう」

「ええ」

「ヒホ！」

椿姫の言葉に従い一同は術式が刻まれている建物を目指す。建物の前に到着するとシンは入口のドアノブを回してみるが、やはりというべきか鍵がきちんと掛かっていた。

「――今からすることを黙ってもらえると助かります」

「はい？」

シンは、一言椿姫に言った後、悪魔の力を呼び起こし右手に紋様を浮かばせ、燐光を

放つ。このときシンは初めて椿姫の前で自らに宿る悪魔の力を見せた。
「それは――」
椿姫が言い終える前にシンの拳がドアノブ付近へと叩きつけられた。金属製で出来たドアは大きく凹み、それによってロックしていた部分が壊れて外れ、ドアが開けられる状態となった。
「これで中に入れますね」
「……あまり褒められた方法ではありませんね」
「自覚しています」
「と言っても私も共犯のようなものです。とやかく言うつもりはありません」
「助かります」
「オイラ、先に入っちゃうホー?」
こじ開けたドアから中に入ると、かなりの広さと高さの空間が広がっていた。しかし、本来なら大量生産用の機械などが置かれていたであろうこの場所には殆ど何も置いてはおらず、かつての名残なのか、埃を被ったヘルメット、床に散らばった工具、恐らくこの工場で造ったものだと思われる何かのパーツなどが点々と落ちているだけであった。
「先程の感触からして、術式はこの建物の奥にある筈です」

椿姫が建物の奥へと進む。シンはその背後を守るようにして付いて行き、ジャックフロストはせわしなく周りを見ながら小走りでシンの後を付いて行く。椿姫が建物の一番奥まで着くと、壁に手を当て魔力を伝わらせる。するとそこから数メートル程離れた壁から、椿姫の魔力に反応し術式が浮かび上がった。

椿姫がその術式の下に移動し、いつもの様に破壊する為に魔力を流し込む。だが、魔力を流し込んだ瞬間、椿姫の顔色が変わる。

「どうやら……当たりのようです」

椿姫の言葉にシンは思わず拳を強く握りしめる。数日間費やしてきた時間が報われた瞬間であった。

「解除できそうですか?」

「かなり複雑で緻密な術式ですが、これなら何とか出来そうです」

その言葉に一抹の安堵を覚えながら、シンはこのことをリアスたちに報告しようと携帯電話へと手を伸ばした。

そのとき――

「え?」

椿姫の動揺する声と、ガラスが割れるような破砕音が建物内に響く。シンが椿姫の方に目を向けると、椿姫の触れている術式から回路図のようなものが一斉に伸び始め、建

物内を浸食し始める。
「これは――」
「迂闊でした……！　解除と同時に発動する罠です！　こんな初歩的なミスをするなんて！」
冷静な表情は崩れ、悔しそうに表情を歪める椿姫。その間にも浸食は進み続け、やがて工場内を覆い尽くした。
「ヒ、ヒホ！　一体どうなるんだホー！」
「恐らくこれは術式の破壊を試みた者をこの工場内に捕える為の結界です。……そして、閉じ込めるということは――」
表情を険しくする椿姫がある一点を見つめ始める。ちょうど建物内の中心部にあたる部分。そこからどす黒い光が放たれるとそれが自動的に動き始め、地面に陣を描き始める。円形の陣の中に細かい文字が描かれ始め、それが終わると陣の中心から黒い光の柱が天に向かって伸び始めた。
そして、その光の中から聞こえてくる動物の唸り声。それは一つでは無く三つ重なって聞こえてくる。光の中から何かが飛び出してきた。
黒い体毛に覆われ、鋭い爪を持った太い動物の右前足。足の太さだけでも人一人分の幅が有り、その先に着いた湾曲状の爪は成人男性の腕の太さ程もある。その前足が地面

へと踏み出すと、その衝撃でコンクリート製の床に蜘蛛の巣状の罅が走り、窓ガラスは激しく揺れ、天井からは埃が降ってくる。続いて左前足が光の中から飛び出す。

次に現れたのはその生物の頭部であった。赤く濡れる紅玉色の双眸、長く伸びた口吻から見えるのはずらりと並び白い牙、その隙間からは唾液が絶えず滴ってきている。犬と酷似した容貌、ただ人が飼っているような犬にはない飢えと凶悪性を秘めた、醜悪とも言える凶相を三つ持った生物。

「ケルベロス……！」

椿姫が召喚された生物の名を見上げながら、戦慄した声で呟いた。

ケルベロス、『地獄の番犬』とも呼ばれ、冥界の門を守護していると言い伝えられている神話上の存在。

「これが……」

シンもまた現れた黒い巨体を見上げる。体長は軽く見積もっても十メートル近くあり、口を開けば人一人など容易く飲み込んでしまいそうな程の体格差がある。術式を守る為に仕込まれた文字通りの『番犬』であった。

ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！

何十、あるいは何百匹の犬が同時に鳴けばこのような咆哮になるのではないかと思える程の大音量、そして鉄錆のような臭いと生物特有の生臭さが混じった臭いが建物内に

広がっていく。この咆哮に椿姫は両手で耳を塞ぎ、ジャックフロストは驚いて爪先から背筋まで真っ直ぐ伸びる。シンは耳を塞ぐことはなかったが、鼓膜を突き刺すようなケルベロスの咆哮に、眉根をやや寄せ若干の不快感を見せていた。

「かなり不味いことになりました……この結界のせいで外とも連絡が取れないようです。これを相手に私たちだけで対処しなければならないみたいです」

既に外部との連絡を試したのか、椿姫が建物内に広がった結界の性質についてシンに教える。シンはケルベロスから視線を離さないままそれを聞いていた。

「――副会長」

「何ですか？」

「ケルベロスの頭って……三つでしたっけ？」

「え？　あの、どういうことですか？」

シンの口から出てきた疑問に、椿姫は戸惑ったような声を出す。このような場面でそのようなことを言い出すような人物とは思えなかった為、その驚きは殊更なものであった。

「ケルベロスはあんな風に黒かったか……？　そもそもこんなに――」

「間薙くん、世間一般的な認識ならケルベロスの頭は三つだと思うのですが……」

「――そうですね、その筈ですよね……さっきの言葉は忘れて下さい」

目の前の存在に腑に落ちない点があったのかブツブツと何かを呟いていたが、椿姫の言葉に我に返り、自分の発言を取り消そうとする。そのとき、三頭の内の一頭の口内から紅蓮の炎がこぼれ始める。
「来ます！　逃げて下さい！」
椿姫は副会長という立場からか、自分よりもシンやジャックフロストに逃げる様に促すが、その言葉に反する様に二人はその場から動こうとはしない。
シンは上着のボタンを外し、近くへと脱ぎ捨てると下のシャツの右袖を肘の辺りまで捲り始める。
「間薙くん！」
「副会長、逃げる必要は無いです。副会長はこのままその術式の破壊に専念してください」
務めて冷静な態度を取りながら、シンの右手から肘にかけて紋様が浮かび始める。しかし、ケルベロスは紋様が完全に浮かび上がるよりも先に口内で圧縮し、形成した火球をシン目掛け放った。
人一人分程の大きさを持った火球がシンの眼前へと迫るが、シンに焦る様子は無くそれどころか隣に立っているジャックフロストへと視線を送り、自分の背後に回る指示を出す程の余裕すらある。

やがて火球がシンを包みこもうとしたとき、シンは一歩だけ前に踏み込むながら膝を落とすと同時に右手を下から掬い上げるように突き上げ、轟々と燃え盛る火球へと躊躇する事無く突き刺す。

シンの拳が触れた瞬間、質量を持たない火球はその球体を大きく変形させられるとシンの拳の軌道に沿い、天井に向かって迫る方向を無理矢理変更させられる。火球はそのまま天井へと衝突するが術式によって張られた結界の方の強固さが上回っていた為、天井は破損せず代わりに火球の方が火の粉となって上から降ってきた。

シンは火球に触れた右手を二、三回ほど軽く振るう。高熱の物体に触れたにもかかわらず、シンの右手は炭化している部分や焼け爛れた部分はなく、僅かに赤くなっているだけで済んでいた。

「不死鳥の炎に比べれば温いな」

一度全身にフェニックスの炎を浴びた上でのこの感想。

平然とした態度で無茶苦茶なことをしたシンに椿姫は呆気にとられた様子で見ている。実の所シンは知らなかったが、椿姫はソーナと一緒にライザーとのレーティングゲームを外から観戦していた。そのときに垣間見せた実力もあって今回の件をすんなりと了承したという、シン自身知らない経緯があったのだ。それでもここまでのことをするとは椿姫にも予想することが出来なかった。

「副会長、これは抑えておきますから早く術式の方を。このまま放っておいたらまた何か別の機能が発動するかもしれません」
「まさか一人でケルベロスと対峙するつもりですか？」
「一人でではないです」
　そういうとシンの隣にジャックフロストが並び立つ。
「オイラも居るホー！」
　たった二人で『地獄の番犬』を倒そうということに椿姫は思考を高速回転させて考える。確かにシンがさっき言った様に術式の罠を作動させ続けることは得策ではない。時間が経てば相手の援軍を呼び寄せる可能性があり、結界内に捕えた存在を抹消する機能もあるかもしれない。それならば一刻も早く建物内に蜘蛛の巣の様に張り巡らせてある結界を解くことを優先すべきであるが、だからといってケルベロスの相手を全てシンたちに任せることは得策なのか疑問が生じてくる。
　レーティングゲームの一件や先程の炎を払う姿でシンの実力が並みではないことは分かっているが、果たしてその実力はケルベロスに届くものなのか、ここ数日共に行動をしてきているが未だにシンの実力の底を知らない。
　素直に自分も参戦し共闘して一刻も早くケルベロスを倒すことが第一ではないか、だがその間に術式に何らかの動きがあったのなら、今一番優先すべきことは何なのか。

椿姫の脳内で一秒にも満たない時間で凄まじい勢いで様々な思考が巡っていく。だが、結論に至るにはあまりに時間が足りない。そんな椿姫の苦悩を見越してかシンは最後に念を押す様に言う。

「『俺達』がケルベロスを倒します」

言葉自体に熱や感情と言った込められたものは感じられなかった。ただ脅威を前にしても震えることの無いしっかりとした言葉に椿姫は思う、彼らを信じてみようと。付き合いが長い訳ではなく、内面をしっかりと理解している訳でもない。それでも椿姫はこの現状を打破する為にシンたちに賭ける。

「――お任せします」

自分の性格からしてらしくない選択をしてしまったと考えながら、椿姫は結界を展開している術式に近付き分析と解除を試みる。

背後でケルベロスの咆哮と何かが砕ける音を聞きながら、椿姫は自分のすべきことをしつつ内心で二人の無事を祈る。

（どうか無事生き延びて下さいね……）

◇

その日の放課後、一誠たちはいつもの様にフリードたちを探していたが成果は無く、

集合地点である公園に集まっていた。皆それぞれがフリードを釣る為に神父やシスターの格好をし教会側の人間を装っていたが、中々上手くはいかなかった。

ここ数日この作戦を使っていたが相手の反応は全く無く、いまいち手応えを感じることが出来なかった。また全員主に黙って行動している為、活動時間の幅がそれほど長くは無く思ったように行動は出来ない。今の活動時間でも、リアスやソーナにあれこれ言い訳をして無理矢理作った時間でもある。

「そうそう簡単には釣れねえな」

「だな」

首からぶら下げた模造品の効果の無い十字架を外しながら匙は残念そうに呟き、それに一誠が同意する。聖剣探索において一番乗り気でなかった匙ではあるが、いざ探索が始まれば誰よりも多く歩き、一番遅くに戻ってくるなどメンバーの中で一番のやる気を見せていた。このことについて一誠も好感を持ち、また似たような性格からか活動の度に仲が良くなっている様子であった。

「そろそろ部長さんたちの所に戻らないといけませんね」

「……長居は無用ですね」

自前のシスターの衣装を着たアーシアと、アーシアから借りた衣装を纏った小猫。それを横目で見ながら一誠と匙がひそひそと小声で会話し始める。

「やはり、華があって良いですなぁ、兵藤君」
「そう思うかね、匙君？　いやいや最近アーシアもシスターの格好を着る機会が減ったから着ている所を見ると新鮮に感じられるし、ましてや小猫ちゃんのシスター姿なんてレア中のレアだからな！」
「ああ、分かる！　分かるぞぉ！　コスプレなんて言葉と縁が無い小猫ちゃんがあんな格好をするなんてな……二人のあの姿を見ただけでもこの作戦に参加した価値はある！」
　意気投合する二人を傍から見ているのは木場とピクシー。
「やっぱりあの二人って似てるよねー？」
「うーん。まあ、そうだね」
　自分の肩に腰を下ろしているピクシーの言葉に苦笑を浮かべながら木場は同意する。
　一誠、匙、木場は公園内で神父の衣装を脱ぎ始めるが、アーシアと小猫は人目に付く場所で着替えるのは避け、近くにあるトイレ内で着替えようとその場から移動し始めようとした。
「――小猫ちゃん、アーシアさん。止まるんだ」
　そのとき木場の鋭い声が場の空気を裂くようにして響く。その声に一誠と匙は着替える手を止め、アーシアと小猫もその場で立ち止まる。続いて小猫も何かに気付いたの

か木場の声に驚いているアーシアの手を引き、急いで一誠たちの側へと駆け寄る。
「あれぇ～？　もう気付いちゃった？　勘が鋭いねぇ！」
甲高く、そして軽薄な声。その途端、空気が纏わりつくように重くなり、そして外気に晒している部分から急速に体温が奪われていくような錯覚を皆が覚える。
ソレが所構わず撒き散らす狂気と殺気が場に満ちつつあった。
「ぶふぅー！　一体何の冗談でしょうかねぇこれは。何とあのにっくき悪魔の皆様方が神に仕える神父様やシスター様の格好をしているじゃありませんか！　すいませーん、今ってコスプレ大会の最中ですかぁ？　受付ってどこです？　飛び入り参加ってオッケーですかぁ？」
「フリード！」
初めて会ったときから変わらず一切ぶれないふざけた言動を続ける『はぐれ悪魔祓い』のフリードが一誠たちの前に姿を現す。
「やあやあ、イッセーくん！　おひさー！　君との再会首をながーくして待っててありんすよぉ。おやおや？　そこにいるのはアーシアちゃんかい？　元気してた？　もうイッセーくんとはしちゃった？　ハハハハ！　どう？　今度は俺様のエクスカリバーで貫かれてみない？」
口の両端を限界まで吊り上げた歪な笑みを一誠からアーシアへと向ける。その底が

分からないフリードの瞳を向けられアーシアは言葉も無く震えだすが、すぐに一誠がアーシアを庇う為二人の間へと入り、フリードの視線を遮る。
「お前が殺したいのは俺だろう！」
「ヒハハハハハ！カッコウィィィィ！　頼れる騎士――いや、ドラゴン様ですなー！安心してくれよ！　チミをぶっ殺したらすぐにアーシアたんもぶち殺してあ・げ・る！」
「どっちもさせねえよ！」
一誠たちは纏っていた衣装を脱ぎ捨て制服の姿になると各々の戦闘準備へと入る。木場は魔剣を創造し、一誠は『赤龍帝の籠手』を発現させ、そして匙も彼の神器と思われる手の甲にトカゲと酷似した黒い生物を装着する。
「おお！　おお！　豪華だねぃ！　『神滅器』を含めて四人の神器使いがワタクシの相手でございますか！　いやー、最近モテすぎて困りますなー！」
人数的にも戦力的にも圧倒されているにも関わらず、この余裕。フリードの態度にこの場に居る全員が不審感を抱く。
「と・こ・ろ・で、俺様はいつからおたくらの行動に気付いていたと思う？」
突然振られたフリードの質問に一同眉を寄せて困惑に近い表情を浮かべる。フリードの口振りから察するに少なくとも昨日今日のことではないことは分かった。フリードの質問に対し誰も口を開こうとはしなかったが、そんなことは気にすることなくフ

リードは自分が投げ掛けた質問を自分で答える。
「正解はあんたらが餌釣りしている当日に気付いてましたー！　ホントならすぐにでもキィルゥしてやりたかったんですけどねぇ、俺様の頼れる味方様が俺様の為にとっておきのものを創って下さるというからここ数日辛抱してたのよねん！　あー！　ホント溜まってしょうがないわー、主に悪魔ぶっ殺したい欲が！」
　口早く喋るフリードの言葉の中に聞き捨てならないことがあったのか、木場が険しい表情でフリードを睨む。
「その頼れる味方と言うのは……バルパー・ガリレイかい？」
「おんやぁ？　既にじいさんの名前はご存じなの？　そうでーす！　正解ですぜ！」
　特に隠すことなくあっさりと認めるフリード。その言葉を聞き木場の瞳が怨嗟に満ちる。その木場の態度にフリードは目聡く気付く。
「あれあれ？　ちょっと目の色変わってません、貴方？　バルパーのじいさんに並々ならない憎悪を持っていらっしゃる」
　そこで何か思い当たる節があったのか、一瞬の間歪んだ笑みが消え納得したような表情となるが、すぐにそれは獲物を嬲る様な残酷性に満ちた笑い顔となった。
「……ああ、そうかそうか、成程成程！　前にそんな目でエクスカリバーを見ていらっしゃったねぇ、『騎士』の悪魔君！　この世でじいさんと聖剣使いにそんな憎悪を向ける可

能性があるとしたら、『アレ』しかないよなぁ！」
何かに気付いたフリードは可笑しくてしょうがないといった感じで腹を押さえ、笑いを噛み殺しながら木場を嬲るような目で見る。
「じいさんの実験はそんなに苦しかったかい『モルモット』くん？　ハハハハハハハハハハハ！」
木場の背景を悟った上で心底楽しそうに嘲笑う。
「てめぇ！　何が可笑しい！」
堪らず一誠が怒声を上げ哂い続けるフリードに殴り掛かろうとするが、それを制したのは哂われている張本人の木場であった。
「イッセー君、僕の為に怒ってくれてありがとう。でも、ここは堪えてくれないかな？」
「だけど、木――！」
そこから先は声に出すことが出来なかった。止められたことに対し不満を言いたかった一誠は今、自分が何を言おうとしたのか忘却してしまい心底震えてしまうほど、木場の表情は恐ろしいものであった。木場の背後にいる小猫たちには見えないが、今の木場は例えるならありとあらゆる負の感情を煮詰めた、あるいは脳の細胞一つ一つから掻き集めた殺意を凝縮させたような筆舌し難い表情。
恐らく今までの生涯で誰にも見せたことの無い顔を一誠とフリードに晒しながら、不

気味なほどに淡々とした口調で喋る。
「君は僕が斬る」
「へっ！　優男くんだと思っていたら思いの外、肉食系でござんしたね。その表情見てたら何だかお友達になれそう！　親近感が湧いちゃう！」
「ありがとう。吐き気がするよ」
　辛辣な言葉を浴びせる木場。フリードは嘲笑を潜め、今度は野生動物のように犬歯を剥き出しにした笑みを浮かべると、どういう訳か右手を後ろに回し襟首の中に突っ込む。
「それじゃあいっちょ始めますかぁ！」
　襟首から右手を持ち上げると、フリードの背後から後光のように光が放たれ始める。その光を見た途端、一誠たちの目に細い針で刺されたような痛みが奔り、一同の表情に苦痛の色が浮かび上がる。そして、同時にその光が何の光であるか理解する。
「まさか、エクスカリバー！」
「ご名答！」
「三本目のエクスカリバー……」
　背中から抜き放たれた聖剣の剣身からは不規則な光が放たれ続け、それによって剣身が歪んで見え長くなったり、短くなったり、太くなったり、細くなったりと忙しなく形

を変えて見せる。
「さあさあ！　この日の為に夜は寝ないで昼寝した成果の結晶を見せる時がやってまいりましたぁ！　バルパーのじいさん設計作成のとっておきの術式エァーンドこの聖剣『夢幻の聖剣〈エクスカリバー・ナイトメア〉』の夢のコラボを見せてやんよ！　幻の中で彷徨って逝けや、悪魔ども！」
　手にしたエクスカリバーを勢いよく地面へと突き刺す。その瞬間、公園内は真っ白な霧によって覆い尽くされ、数十センチ先すら見えない程の濃霧となる。
「なんだこりゃあ！」
「みんな！　離れるなよ！」
　匙が驚き、一誠が声を出して周囲に警戒を呼び掛けるが反応が無い。
「匙！　居るか！」
「ここに居るぞ！」
「アーシア！　木場！　小猫ちゃん！　ピクシー！」
「アタシはここだよー」
　四人の名を叫び、ピクシーの声だけが返ってくる。残りの三人はどこに行ったのか、一誠の中で焦りが生じ始める。するとあれほど濃くかかっていた霧が晴れ始め、視界が元に戻りつつあった。

間も無くして霧は完全に晴れ、一誠はすかさず周囲を見渡す。そこは先程までいた場所では無く同じ公園内ではあるものの更に奥へと進んだ場所にある東屋の前であることに気付く。今に至るまでの間、殆ど移動していないのにもかかわらず自分が大きく移動したことに対し一誠は困惑をする。

「マジかよ、空間転移か」

匙の声が聞こえそちらの方へと一誠が目を向けると、同じく困惑した表情の匙が立っていたが一誠と比べ幾分か自分の置かれている状況を理解している様子であった。

「匙、無事か！」

「ああ、怪我はないがやられたな……戦力を分散されちまった」

「一体何が起こったんだ？」

「きっとさっきのフリードっていう奴がこの公園に予め仕掛けておいた術式を発動させたんだろ。おそらくこの公園内のあっちこっちに俺らをばら撒くように調整した術式だ」

匙が悔しそうに表情を歪める。相手の策にまんまと嵌ってしまったことへの憤りを現していた。

そのとき頭上から別の声が聞こえてくる。

「サジ、イッセー」

「ピクシー！　お前も無事だったんだな」
「うん。アタシは平気だよ。あのね、ちょっと聞いてほしいの」
「何だ？」
「さっき空からみんなを探そうとしたんだけど、途中で見えない壁にぶつかって行けなかったの。もしかしたらアタシたち閉じ込められたかも」
「空間転移に内側に閉じ込める結界か……厄介なことになってきたな」
「なら早くアーシアや木場や小猫ちゃんを見つけないと！」
　木場や小猫がフリードともしも交戦しても生き延びる可能性はある。だが戦闘力を持たないアーシアと会ってしまったのなら間違いなく殺されるか、あるいはそれ以上の目に遭わせられるかもしれない。嫌でもそんな可能性が浮かんでしまう一誠はそれを振り払うように一刻も早く動くことを促す。
「そうだな、急ぐぞ！」
「とりあえずさっきの場所に戻るぞ！　あそこはここから右だ！」
　そう言って三人は急いで動き出すが、何故か一誠は左方向に走りだし、匙は真後ろに向かって走り出す。
「おい！　どっちに行くつもりだ！」
「お前こそ何処行くつもりだ！」

いきなり別方向へと走り出したことに驚き、相手の行動を咎めるような声をお互い出すがお互いに間違っていることに気付いていない。
「二人とも何処行くつもりだったの？」
『右だよ！』
「右ってどっち？」
『こっちが右だ！』
一誠は真上を指差し、匙は真下を指差す。
『はあああああああ？』
全く見当違いな方向を指差すお互いを見て、声を揃えて驚いてしまう。空間転移、そして外部と遮断する結界、そして更にもう一つの術式の効果に二人は完全に嵌ってしまっているのであった。
一方、時を同じくして一誠たちが最初に場所の霧が晴れていく。白い霧の中から現れたのは木場一人であった。
「おほほ！　残ったのはあんさんですかい。色々と縁があるじゃないの」
そしてもう一人、先程の現象を引き起こしたフリードもまたこの場所に居り、地面へと突き刺していた三本目のエクスカリバーを引き抜いていた。
「……他のみんなはどこにいったんだい？」

「教えなーい！　自分で探してみたらどうですかい？」
「そうさせて貰うよ。……君と君の持つエクスカリバーを倒してからね」
　低い声と剣呑な眼差しを向けながら、木場は片手で持っていた魔剣を両の手で握り締める。フリードもまた手に持っていたエクスカリバーを背中に納めると腰に差していた方のエクスカリバーを抜く。
「一つ勝負としゃれ込もうぜ。俺様の持つ『天閃の聖剣〈エクスカリバー・ラピッドリィ〉』の速さと『騎士』の速さ、どっちが上なのかよぉ！」
　フリードが吼え、姿勢を低くして構える。その構えから一歩踏み込んだときゼロだった速度は一気に最大速度まで加速し、フリードは木場の視界から瞬時に消えた。
　聖剣の力によって得られた速度は元々のフリードの身体能力と合わさり、人外の領域に容易く踏み込められるほどのものであったが、このとき木場はフリードの動きを完全に捉えていた。
　異様なまでに冷めた木場の思考がフリードに気付かれないように最低限の目の動きで得られた情報を正確に分析し相手の行動の先を読む。
（……怒りも度を超えれば意外と落ち着くものなんだね）
　フリードの侮辱によって生まれた怒りは木場に焦りや冷静さを奪うのではなく、逆に目の前の敵に対する集中力と冷淡さを木場に与えていた。

木場はフリードが右側面から斬り込もうとしているのを目で捉えた。だが既にその動きは予想されていたものであり、木場は出来るだけフリードを引きつけ攻撃に合わせて反撃をするつもりであった。

残像すら見える速度のフリードが木場の右側面から木場の首目掛け斬り掛かる。この攻撃を防ぎ反撃に転じようとしたとき、木場の直感が左側面からひりつくような殺気が迫ってくるのを感じる。

このとき木場はほぼ無意識に魔剣を右から左へと向ける。それは幾年も剣を振るってきたことで身に沁みていたが故の行動であった。

縦に構えた魔剣から火花が散る。そのとき起こった甲高い音で初めて木場は自分が全くの別方向へと構えたことに気付き、そしてそこに居る筈の無いフリードの姿を見て驚愕する。確かにフリードは右から攻めてきた筈であるがどういう理屈か今は左側へと居る。

「おいおい、初見で避けるってマジですか?」

ふざけた態度をするフリードであったがすぐに木場を後方へと押し飛ばすと、地を這う様な姿勢から木場の両膝下を狙い聖剣を振るう。木場もすぐに対処しようとしたが、そのとき木場は下からでは無く上から迫る別の気配を感じる。またしても体がそれに反応し、その気配の方へと魔剣を振り上げると、重い衝撃が魔剣から手へと伝わってく

る。
　衝撃の先にあるのは聖剣とそれを上段から振り下ろしたフリードの姿。明らかに異常な事態が起きていることを木場は察する。
「これは……！　まさか僕が見ているのは……」
　視界から得た情報と実際に起こったことに対する矛盾。そしてフリードが戦いの前に見せた三本目のエクスカリバー。それらことから木場は一つの考えに至る。
「ちょっとー、顔もいい剣の腕もいい勘もいい頭もいいなんてちょっと設定盛り過ぎじゃない？　折角時間やタイミング計ってたのにすぐにばれたら悲しいですよー」
　木場が気付いたことを察したのかフリードはそれを肯定するような発言をした後、木場から距離を取る。
「お察しの通りでーす！　この公園一帯はバルパーのじいさんが創った特製術式結界で覆われていまーす！　『夢幻の聖剣』を媒体として作った結界の中では見えるものすーべーてでらためなんだぜ」
　あっさりと種を明かすフリードに木場は冷めた目を向ける。
「随分と簡単に喋ってくれるね。大した自信――いや過信かな」
　わざわざ敵に情報を与える真似をするフリードに木場は棘のある口調で話すが、フリードはそんな木場を鼻で笑う。

「過信ねぇ……ところで君さ、『どこ見て喋ってんの？』」
　木場は右足に灼熱のような痛みを覚える。痛みで声を洩らすよりも先に木場自分の右足に目を向けた。そこには足首に直径五センチ程の穴が開き、傷口からは白煙が上がっている。銃痕、それも悪魔の苦手とする光の力を帯びたものであった。
「言ったはずだぜ、見えるもの全てでたらめだってな」
　木場の背後から姿を見せるフリード。右手には聖剣、そして左手には拳銃が握られている。
「ッ……！　そこに立っている君も幻なのかい……」
　銃撃の痛みを飲み込み、平然とした態度をする木場だったが、状況は非常に不味い方向へと動き始めている。『騎士』の特性を生かす足を負傷してしまった、考えるまでも無く狙ってされたことであった。
「ハハハハハ！　さてさてどうなんでしょうねぇ！　探し当ててごらんなさーい！　俺様は何処にいるのでしょーか！　外れてしまったらこの聖剣の一太刀をプレゼント！　もしも当たったならば――」
　フリードは拳銃の銃口の先を木場へと向ける。
「この弾丸で豪華なあの世ツアーをプレゼント！　気になる正解はＣＭの後で！」

光弾、襲来

風を切りながら迫りくる巨大な前足。ただでさえ大きなその足は殺気を纏い、何倍にも膨れ上がって見えるような錯覚を覚える。巨大な図体からは想像出来ない程の俊敏さを持ったそれを、シンは後方へと大きく跳び去って回避しようとする。しかし、振るわれた前足から伸びた爪がシンの想定よりも深く間合いへと入り込み、その先端が微かにシンの右の二の腕へと触れた。

そのままケルベロスの前足はコンクリートが張られた地面へと叩きつけられ、爪の部分によって深々とした傷跡が刻まれ、前足の部分でコンクリートが捲れ上がる程粉砕される。

シンは直撃を避けたものの自分の右腕を見て、僅かに表情を険しくする。ケルベロスの爪先が触れた部分は肉が裂けたのではなく抉られており、五センチ程の傷口からは血が少々大目に流れ出し、腕を伝わって指先から地面へと垂れ、床に幾つもの血の斑点を作っていく。

（かすっただけでこれか）

ケルベロスから受けた傷により、自分と相手との差を客観的に思考し始める。まず少

なくともシンは、この戦いにおいてケルベロスからまともな一撃を貰うことは許されない。もし直撃してしまった場合、相手の攻撃力の高さはシンの耐久力を上回っていると考えられ、そのまま死を迎えてしまう可能性が高いからだ。

そして、次に動きが制限されるような負傷も負ってはいけない。ケルベロスは巨大な体ではあるが動き自体は鈍重では無く、むしろ速いと言ってもいい動きをする。そんな相手からの攻撃を逃れる為には、骨折あるいは大量の出血が伴う様な傷を受けることは絶対にならない。シン自身痛みに対してはある程度許容出来る自信はあるが、咄嗟に動く場合に生じた痛みが反射的に動きを鈍らせる可能性が高く、それは最初に挙げた相手の攻撃をまともに貰ってしまうことに繋がる。

つまりこの戦いはほぼ無傷で切り抜けなければならない。それもこの場から少し離れた場所で今も術式の解除を行っている椿姫から注意を逸らしながら。改めて考えると相当難易度の高い戦いとなる。

ケルベロスは六つもある赤い瞳をシンへと向けながら、その内の真ん中にある頭部が口を開き、そこから火球を吐き出す。

「ジャックフロスト！」

シンはジャックフロストの名前を呼びながら放たれた火球を左右に避けるのではなく、火球に向かって走り出す。

そのときシンの背中に飛び乗るようにして、離れた場所にいたジャックフロストがシンに召喚された。

「ヒーホー！」

気合を込めた声を上げるとジャックフロストは指先をシンの走る先に向け、そこから魔力を発生させる。発生した魔力は水へと変化し、更にそこから急速に温度を下げられることによって、状態変化を起こして固体と成り、シンの前方に何枚もの氷壁を造り出す。

幾重にも重なった氷壁にケルベロスの吐き出した火球が直撃する。火球が秘めた熱はジャックフロストの造り出した氷壁をあっさりと融かし、二枚三枚と続け様に撃ち抜いていく。シンの前を守る氷壁もついに最後の一枚となり、それすらも火球が容易く蒸発させていく。だが、それこそがシンの狙いであった。シンは最初から身を守る為にジャックフロストに氷壁を造り出すように指示を飛ばしたのではない。

ケルベロスの熱によって融かされた氷壁は液体から一気に気体まで変化し、周囲一帯に高温の蒸気が発生する。その水蒸気を顔に浴びるのを嫌がりケルベロスが目を細める。それはつまり視界を狭めるということであった。

この瞬間シンは、迫る火球と床との隙間に潜り込み身を低くし地面を滑る様にして避けると、そのまま蒸気の中へと突っ込む。高温の蒸気に蒸されない様にジャックフロス

トによって生み出された冷気を纏いながら、シンはケルベロスの胴の真下に潜り込んだ。

文字通り相手の懐に忍び込んだシンは右手に魔力を収束し始め、それが剣を形作る。以前ライザー戦で使用した『熱波剣』であるが、あのときとは違い魔力を溜め込む為の器となる剣の魔力を調整することによって、短時間で準備を整えることが出来る。しかし、その反面威力と攻撃の範囲は格段に下がり、直接相手に刺し込まなければ十分な威力が発揮できない。故にシンはケルベロスの懐へと入り込んだのである。

白光色を放つ右手の魔力剣をシンの姿を見失ったケルベロスの胴体に刺し込もうとしたとき、水蒸気の中に影が映る。シンがそれに気付いたとき、水蒸気の中から飛び出してきた影が一瞬にしてシンの体に絡みつく。喉を締め上げる圧迫感と胴体が絞られていく苦痛、魔力剣を持った右腕も胴に押し込むようにして締められ、使用することが出来ない。

脳へと送られていく酸素が遮断され、視界の端が徐々に黒い色によって浸食され始める。辛うじて動くのは左手の指先のみであり、それを可能な限り伸ばして絡みつくそれに爪を立て引き離そうとするが、爪の先から返ってくる感触はまるで鋼線を束ねたものに触れたかのようであり、温度を感じさせない冷たく滑る様な感触。

鬱血し顔色が変化していくシンの耳に空気が抜ける様な音が聞こえてくる。無理矢

理顔を動かし、音の方に目を向けるとそこにはあったのは黒い鱗に覆われた大蛇の姿。大蛇はしきりに長い舌を動かし、先程聞こえた空気の抜けるような音を立てている。それが大蛇の鳴き声であるらしい。

初めてケルベロスを見たときは体毛に覆われた尾であったにも関わらず、いまはこの様に鱗をもった蛇となり、シンを絞殺しようと長い胴体に力を込めている。

ケルベロスが自らの意志で尾の形を蛇に変化させるという能力をシンは知らなかったために、相手を嵌めたつもりがまんまと自分が嵌められるという失態を犯してしまう。

急速に視界が暗くなっていく。このままでは不味いとシンが途切れ途切れになる意識の中で思ったとき、耳元で意識を覚めさせるような声が聞こえた。

聞き慣れた仲魔の声。近くに居る筈であるが、遠退いていく意識のせいで離れた場所に居るかのような微かな声であった。

その途端、シンの締め上げる力が緩まるのを感じた。脳への供給が断たれていた酸素が一気に血中の中を駆け上がり、脳へと到達する。暗く、狭まった視界が元に戻ったとき、シンは何故力が緩まったのかを知る。

「ヒホー！　ヒホー！」

シンを締め上げていた大蛇の顔に、ジャックフロストがしがみ付いていた。短い手足

を必死になって伸ばし、大蛇の頭を上から押さえつけるようにして抱き、体中から冷気を放ち続けている。ジャックフロストの冷気は瞬く間に相手を冷却し、黒い鱗を霜で白く染め上げていく。大蛇もジャックフロストを振り払おうと頭を激しく左右に振るうが、ジャックフロストは断固として離れない。

ジャックフロストに意識を傾けたことと放たれ続ける冷気のおかげで、シンを縛っていた胴の力が完全に弱まる。シンは自由になった両腕にあらん限りの力を込めて、絡みつく大蛇の胴を内側から引き伸ばし空間を作る。その出来た空間の中で片膝を高々と持ち上げると、渾身の力で伸びた大蛇の胴体に靴底を叩きつけた。

踏みつけられた大蛇の胴体は地面と靴底の間で挟まり、その圧迫によって胴体からは鱗を突き破って血と肉が噴出し、辛うじて皮一枚で繋がっている状態となる。

ギャオオオオオオオオオオオン！

シンの行為に大蛇ではなくケルベロスが苦しむ声を上げる。姿は違えどこの二匹の感覚はやはり繋がっているらしい。胴体が千切れかけている大蛇は口から泡を出し、痙攣を起こし始める。

掴まっている大蛇の動きが大人しくなったのが分かると、ジャックフロストは大蛇の頭からシンの方へと飛び移り、シンはそれを左手で受け止める。

「助かった」

「ヒホー」

礼を言うシンにジャックフロストは誇る様な声で答える。

胴体が千切れかけている大蛇が最後の抵抗を試みたのか、口を１８０度開くと、長く伸びた牙と毒液に濡れる口腔をシンに晒しながら、頭からシンを飲み込もうとする。

だが所詮無駄な足掻きであると証明するように、シンはその口腔内に右手に展開させている魔力剣を捩じり込んだ。魔力剣の先端が大蛇の上顎に突き刺さる。しかし、魔力剣自体に相手を殺傷する威力は無い。刺し込んだ本当の目的は、狙いを外さないようにする為であった。魔力剣内部に溜め込まれた魔力が、刺し込まれると同時に解放される。破裂することを今か今かと待ち望んでいた魔力は、一気に解き放たれたことを歓喜するかのように、一瞬にして大蛇の口内を蹂躙する。圧縮された魔力は大蛇の身を引裂き、吹き飛ばし、肉が無くなったことによって露出した骨も瞬時に砕く。

大蛇の頭部はシンの魔力剣の威力にあっという間に粉砕され、頭部と繋がりがあった部分は断面と晒し、一呼吸遅れて鮮血が噴き出す。

倒した。この瞬間シンはそう考えてしまった。この考えが僅かにシンの判断を遅らせる結果となる。頭部を失った筈の大蛇の胴体が死に体の状態から身体を動かし、その丸太のように太い胴体をシンへと叩きつける。油断をしてしまったシンには躱す余裕は無く、咄嗟に右腕を前へと出した。

重い衝撃が奔り、シンの体が地面と水平にして飛ぶ。痺れるような感触が右手に残るが、魔力を十分に纏わせてしたことと、相手の力が殆ど残っていなかった為重傷を負わずに済むことが出来た。

シンは水蒸気の中から飛び出した時、そこで自分の睨む六つの瞳と目が合う。その瞳のどれもが怒りと殺意を滾らせており、尾の大蛇を殺したことへの復讐心に燃え盛っていた。

ケルベロスは咆哮を上げるとシンに飛び掛かる。シンは左腕に抱きかかえているジャックフロストを出来るだけ遠くへと投げ飛ばし、自分はその反対側へと移動する。

「ヒホッ！」

投げ飛ばされたジャックフロストが地面に顔から着地して痛そうな声を上げていたが、今はそのことに構っている暇はない。幸いケルベロスの怒りの矛先はシンへと向かっていた為、危機からジャックフロストを遠ざけることには成功した。

走るシンの目に、口を大きく開き、噛み殺そうと飛び掛かるケルベロスの姿が見える。一番左の頭の噛みつきは回避することは出来た。中央の頭の噛みつきも回避することが出来た。しかし、一番右端の頭の噛みつきを回避することはタイミング的に不可能であることを察する。

シンは右の頭の牙が自分へと届くその前に、その上顎を両手で掴み、そして下顎も片

足で踏みつけ閉ざされる前に閉ざすことが出来ないようにする。
生臭い息が顔に当たる。
空いた足で地面を踏みつけながら耐えるがケルベロスは顎に力を込め、抵抗するシンをそのまま噛み砕こうとする。じりじりと後方へと押されながら、シンも両手片足に力を込めて抗う、犬歯程ではないが鋭く尖った他の牙が手や足に突き刺さり、血が流れていくが、その痛みに構う暇はない。
そのときシンは、右頭の喉の奥から橙の光が漏れ出していることに気付く。それは火球の放つ準備をしていることを示すものであった。この状態ならば確実にその火球を喰らい、炭と化してしまう。一刻の猶予の無い状況にシンは次の行動に移る。
地面と踏み締めていたもう一方の足を持ち上げ、下顎の牙を踏み砕きながら押し込むと両手両足に持てる全て力を注ぎ込み、そして一気に力を爆発させる。上下に加わる力にケルベロスの顎はみしみしと音を立て、それが限界を迎えたときガコンという大きな音と共に下顎が力無くぶら下がったような状態となった。ケルベロスの右の頭の顎が外れたのである。
自らに起きた事態にケルベロスは喉の奥から苦鳴らしきものを洩らすが、未だ奥にある炎の灯りは消えない。シンは大きく息を吸い込むと、閉じることの無いケルベロスの口内に向かって『氷の息』を吹き出した。白い冷気はケルベロスの喉の奥へと入り込み、

触れるもの全てを凍てつかせていく。
　これには堪らなかったのか、ケルベロスは頭を激しく左右に振り、口を掴んでいたシンは振り払う。シンもその勢いに乗じて手を離し、ケルベロスと数メートル程の距離を開けた。
　ケルベロスの右頭の閉まらない口から長い舌が垂れさがる。その舌には霜が付着しており、口内からも未だに吹きかけた冷気が漏れ出していた。三頭ある頭の内の一つは当分の間使い物にはならないことになる。
　まだ動く残りの二頭が明確な殺意を持ってシンを睨みつけ、喉からは恨みが込められた唸り声が重い響きを場にもたらす。
（これでいい）
　相手の狙いが完全にシン一人に絞られたことに内心満足する。これでますます椿姫が狙われる確率が低くなったことになる。シンはケルベロスを警戒しつつも、視線をさり気無く椿姫の方へと向ける。椿姫は壁に浮かんだバルパーの術式に手を翳し何かを呟きながら、徐々にではあるが術式から放たれている魔力の光を押さえこんでいた。
　時間がどれほどかかるかはまだ分からないが、この調子であれば、あと数分もあればここから抜け出せる可能性が高いとシンは判断する。場合によっては、結界が解呪されると同時にここから脱出する考えもあった。あくまでシンの目的は時間稼ぎであり、目

の前で殺意を滾らせるケルベロスを始末することではない。しかし後のことを考えると、この場で戦闘不能な状態にするか命を奪うかという選択肢が出て来る。

ならば取るべき選択はすでに決まっている。後へと繋がる危険を断つため、そして目の前の敵の命のことを考えて戦える程自分に十分な強さが無い故に。このとき既にシンは割り切っていた。

ケルベロスの二頭が口を開く。再び火球を放つ体勢に入ったことを理解し、シンはなるべく火球の余波が椿姫に届かない様に、椿のいる位置から反対側へと走りながら移動しつつ、ケルベロスとの距離を縮める。

ケルベロスの牙の隙間から炎が漏れ出したのが見えると、そこから一気に火球が吐き出される。だが、吐き出された火球は一つしかない。ケルベロスの左頭は火球を吐き出さず、左目を閉じ、眉間に皺を寄せて苦悶の表情を浮かべていた。見ればケルベロスの左目の周囲にはいくつもの氷柱が突き刺さっている。それは火球が吐き出される直前にジャックフロストが放った氷柱であった。

「いくホー！」

埃に塗れた顔をしたジャックフロストの声援を背中に受け、シンは生じた攻撃の隙間へと踏込み、左頭の死角からケルベロスへと接近する。そのとき放たれた一発の火球が床へと接触し、炎を噴き上げる。そのとき生じた爆発によって床一面に積もっていた埃

が一斉に舞い上がり、ケルベロスは目に入るのを嫌がり反射的に瞬きをしてしまう。このとき中央の頭部は、シンの姿を刹那の間見失ってしまう。

相手をほんの僅かな時間見失ってしまったケルベロス。だがすぐに視覚で追うことを止め、嗅覚で追うことに切り替える。そこで近付いて来るシンの匂いに気付くが、シンの居る場所は既にシンの拳が届く範囲内、左頭の真下であった。

気付いたケルベロスが後方へと飛び退さるよりも早く、シンの握り締めた右拳が左頭の顎を下から殴り上げる。口の中で歯と歯が激しくぶつかり合いその衝撃で数本の歯が折れる。突き上げた勢いで仰け反りそうになる頭を左手で口吻を掴んで押し止めると、間髪入れず今度は爪先で蹴り上げた。折れた歯が今度は凶器となってケルベロスの口の中を裂き、あるいは突き刺さって激しく傷つける。口の隙間からは夥しい血が流れる。その零れ出た血で汚れた口吻を今度は両手で掴むと、再びケルベロスの顎を蹴り上げる。

蹴り上げた爪先から伝わってくるのは、固くも柔軟性のある骨の感触と、それが砕ける感触の二つであった。砕かれた顎は弛緩し下顎がただ皮膚と肉のみで繋がっている状態となり、歪んだ下顎は大きく口を開いた状態となる。絶え間なく血は流れ続け、ケルベロスの足元を汚していく。

三頭ある内の二頭を潰されたケルベロス。頭は三つでも一つの胴体の為か痛みも共

有している様子であり、真ん中の頭は明らかに痛みを堪えているように顔に深い皺を刻み、全身を細かく震わせている。最初のときと比べてケルベロスから感じられる殺意は明らかに薄まってきており、度重なる痛みに怒りよりも恐怖の方が増しつつあるのか、いつでも飛び掛かれる様な前のめりの体勢も、腰が引けたものへと変わっている。

このまま行けば相手の命を奪うよりも相手の心の方が先に折れそうになるという展開は、シンにとっては誤算であった。だが決してシンにとって不本意な展開では無い。方法が無ければ殺生も致し方ないという考えはあるが、好き好んで殺す趣味などは無い。少なくとも命を奪うことに喜びを見出していないシンには、願ってもいない状況であった。

完全に折るにはどうするべきか、先程までの殺す前提の考えを切り替え、相手を屈服させる為の方法を考える。

だが、ケルベロスは衰えた闘志ながらも一瞬思案するような表情をしたシンの姿に隙を見出したのか、後ろ足で地面を蹴ると前足を大きく振り被りながらシンに向かって飛び掛かる。

数メートルの距離など無いと等しいと謂わんばかりにシンの間合いの中へ強引に入れてくる巨大な爪。

それがシンへと振るわれたとき、シンの頬に真紅の血が飛び散った。

（……終わりだな）

全身に掛かる血を見ながらシンの心の中でそう呟いた。最初に考えていた様にケルベロスの巨体から繰り出される攻撃を耐えることはまず不可能であり、もし貫ったのであればシンの勝ち目は零になり、すなわち自らの死を意味する。ただし――

（あれをまともに受けていたら）

――それが直撃していた場合である。

振るわれた前足の間合いの外へと立つシンの体には傷一つ無かった。シンの体の至る所に付着している血液は、ケルベロスが先程から流している血であり、前足に付いていたものが振るった拍子に付着しているだけに過ぎなかった。

攻撃が外されたケルベロスがすぐさま二撃目を繰り出そうとしたとき、シンがそれよりも先にケルベロスに向かって跳ぶ。

跳んだシンはケルベロスの中央の頭の眉間を踏み台にして中央の頭の後頭部に移動すると、その首を両足で挟み込む。中央の頭は何とか振り落とそうと頭を揺するがシンの体は微動だにせず、固定しているかのように動かない。

ケルベロスが抵抗する中、シンは右掌をケルベロスの後頭部へと押し付ける。その状態でシンは右手の中に魔力を集め出した。かつて朱乃に体内で魔力を集中させてはいけないという言葉を貰っていた。それはそのときのシンの実力では魔力を正確に操作

する技術が無く、それをした場合、溜め込まれた魔力が暴発して溜め込んだ箇所が吹き飛ぶ危険性があったからだ。

しかし、それは既に過去のことである。シンの右手の紋様が肘の辺りまで浸食して以降、魔力操作の正確性は明らかに上昇し、危険とされていた魔力の体内集束を容易に行える程にまでなっていた。新たに増えた技術からシンはそれを使用し、新たな技が出来ないかと考える。そこで注目したのが、一誠の持ち技である『ドラゴンショット』であった。

倍加によって得た膨大な魔力を一つの形に留め、相手に向かって放つ。それは『氷の息』や『熱波剣』といった、狙いを一点に絞って放つことが出来ないシンの技とは対称的なものであった。

今まで得た要素を束ねて一つの形にしたシンの新たな技。まだシンが納得する段階には至ってはいないが、それでも十分な威力を秘めている。

血管の一本一本に、熔解した鉛でも流し込まれたかのような熱を帯び始める。魔力自体に質量などないが、大量の魔力が右手へと流れ込むたびに血管が拡がっていくような錯覚を覚える。魔力を流し込まれる度に熱く滾り、内側から爆ぜそうになる右手の中の魔力を、意志の力で捻じ伏せるように抑え込み制御する。

やがて右手に限界寸前まで魔力を送り込んだとき、シンの右手は内に溜まった魔力が

出口を求めて激しく暴れ、痙攣を起こしたかのように震え続ける。それをシンの左手が右手首を掴み強引に震えを止め、狙いを定められるようにしたことによって、ようやく技を放つ準備が整う。

「これを使うのはお前が最初だ」

そう告げたことにシン自身、特に意味を考えていなかった。言語が通じるかどうか分からない相手、ましてや敵に対して言う必要のない言葉。しかし、自然と口から出てきた言葉。あえて意味を付けるならば、これからすることに対しての謝罪の言葉の代わりの様なものであった。

右手を掴んでいる左手に、僅かな魔力を流し込む。それを一旦左手の中に留める。そしてそれが一定の量まで溜め込まれたとき、右手に向けて溜め込まれた魔力を一気に流し込んだ。右手の中の魔力が、更に流し込まれた魔力によって決壊寸前までいくと同時に、右手の魔力を全開放する。撃鉄を叩き込まれた銃弾のように内部で小規模な爆発が起こり、その勢いによって全ての魔力が右掌から放出された。

右手の紋様と同じく蛍光の色を持った球状をした魔力の塊は、押し付けていたケルベロスの頭を一瞬にして飲み込み、鳴き声すら出す暇も無くケルベロスの頭部は塵すら残さず消失させた。

それでも威力が衰えない光弾はそのまま地面へと接触し、そこから地面へと沈み込ん

でいく。床が砕ける音も土が掘り起こされて舞うこともなく、ただ進む方向にあるものを消し飛ばしていく。だが、床から二、三メートル程沈み込んだとき光弾は解れ始め、そのままただの無害な魔力となり、空気に溶け込むようにして消え去ってしまった。

中央の頭を失ったケルベロスの体が、地面へと倒れ込む。シンはそれよりも先に飛び降り、倒れたケルベロスの方を見た。中央の頭が在った場所は、断面をさらけ出す首しかない。そこからの出血は無く、骨、血管、筋肉組織が綺麗に見える。

生物に対して初めて使用した技の為、今後の参考にと観察した後に、シンは先程の光弾であけた穴を見る。

深さは約二メートル、それを見てシンは軽く嘆息する。折角編み出した技ではあるが、これには欠点があった。込める魔力は『熱波剣』や『氷の息』をも上回るが、それに反して射程距離が致命的に短いものであった。シンが望む形では、少なくとも自分の持つ二つの技ほどの範囲が欲しかったが、それに至るまでにはまだ研鑽が必要であった。

「ヒホー　シン！」

そのとき、ジャックフロストの警戒する声が聞こえてきた。ジャックフロストの方へと目を向けると、ジャックフロストが何かを指差している。シンは指差す方を見ると、倒れていたケルベロスが立ち上がろうとする姿があった。

（大した生命力だ）

頭を一つ失い、残り二つの頭も重傷を負っているがそれでもケルベロスはまだ屈するつもりはないらしい。あるいは自分の命の限界を見越して、せめて一矢報いるつもりなのかもしれない。

左右に激しくぶれる四肢に力を込めて身体を起こす。その最中、消失した中央の頭が在った場所の断面から血が吹き出し始めるが、それでも動きを止めようとはしなかった。

まだ戦いは終わっていない。改めて今行っていることが命のやりとりであることを実感する。命の一片を尽くして足掻くケルベロスを相手に自分がすべきことは何か。

結論はすぐに出た。

シンの右手に、また魔力の光が灯り出す。今度は、先程見せた魔力剣の比では無い程の全力で右手に送り込み、魔力剣を形成していく。右手の中で造り出されていく魔力剣の光は、前の光と比較すれば電灯の光と太陽の輝きという程の差が有り、直視出来ない程の閃光を放っていた。

ライザー戦の一件以来、劣化版ともいえる『熱波剣』の習得と共に、本来の『熱波剣』の威力の向上にも務めていた。あのときはまだ片手で数える程しか使用していなかったこの技も、連日魔力が空になる寸前まで使用し続けた結果、両手両足で数え切れない

程の使用回数を熟してきた。使う回数が増えるにつれ、それを使用する際のコツともいうべきものを掴み始め、徐々にではあるが大量の魔力を込めた魔力剣の制御に慣れ、込める魔力の量は増え、またそれに伴い、準備から使用までの時間を僅かに縮めることも出来た。最初は十秒かかっていた『熱波剣』も、今ではその半分以下の時間で使用することが出来る。

シンが形成した魔力剣の内部で極限まで圧縮された魔力が、行き場を求めて暴れ狂う。

死に行く者に全力を以って相手するのが敬意――などというのは自己満足であり、敬意を以って殺したとしても殺されたものが納得する筈も無く、またそれで殺した者への怨みや憎しみが消えるなどと都合のいい考えをシンは持たない。有るのは今ここで命を奪う自分は、いずれ誰かに命を奪われるのだろうという考えであった。

横薙ぎに払われた魔力剣。その内に篭る魔力が殻を破り、暴力となって一斉にケルベロスに襲い掛かる。魔力の暴風はケルベロスの巨体を軽々と浮かせるとそのまま壁へと叩きつけ尚もその肉体を圧する。四肢は別々の向きに折れ曲がり、そこから更に捻じ曲げられ肉を突き破り骨が姿を見せる。胴体は魔力と壁に挟まれ耐えきれる限界以上の圧力を受けて骨の砕ける音を鳴らしながら変形し始め、折れた骨が近くの臓器を裂き内側を血の海と化す。既に半分程の厚さまで圧縮された胴体、それによって大量の血液

が二頭の口から噴出し始める。結界でも許容できない程の破壊を生み出しているのか、壁の一部に亀裂が生じ始め、はめ込まれたガラス窓が耐え切れずに窓枠ごと外に飛ばされていく。

やがて魔力の暴風は収まり、その後に湿った引き摺る音と、液体が跳ねる音がする。それは壁にへばりついていたケルベロスだった肉塊が地面へと落ちた音であった。元の形がどんなものであったのか、想像することが難しく思える肉体の破壊。

蹂躙。その言葉が相応しく思える程の一方的な破壊。今までシンが裡で考えてきたこと全てが白々しく思える程の無慈悲と残酷がそこに存在していた。

自分が起こした惨状に目を背けずに眺める。物言わぬ躯となったケルベロスを見ながら、想像以上に罪悪感を抱かない自分の冷めた心情と、それどころかこの死体をどう処分しようかと考え始めている自分自身に内心驚く。比べるには難が有るかもしれないが、昔は犬も飼ったことのある身としては、似たような生物を殺めたことにもう少しは人間味のある感情が湧き立つと思っていたが、終わってみれば特にそんなことは殆ど無い。そもそもこうやって客観的に自分を見ていること自体、ある種の異常であった。

我ながら碌でもない成長をしていると、内心自嘲する。

昔はもっと人間味がある性格であったなと過去に思いを馳せつつ、シンは床に横たわるケルベロスの亡骸を見ながら、ある疑問を抱いていた。それは冥界の生物であるケル

ベロスを、堕天使側がどうやって手に入れたのかというものである。
現状でこれを入手することが出来る可能性を持つ人物は、この騒動の発端であるコカビエル、そしてそれと協力関係にあるバルパーであった。一応フリードも候補に考えたが、あの壊滅的な人格と不快感そのものと言っていい社交性から即座に却下した。
この二人のどちらかがケルベロスを手に入れたとして、一番重要なのはどういった方法で手に入れたのかということである。いくら強力な力を持っていたとしても、敵対関係にある悪魔側のケルベロスを、誰にも知られずに手に入れられるとは考え難い。
少なくとも悪魔側に、コカビエルたちと繋がっている存在がいる可能性が高いとシンは推測する。堕天使と悪魔、本来なら殺し合う立場であるが、何らかの共通する目的があるとしたら、互いにメリットのあることならば、手を結ぶことも無きにしも非ずと考えられた。
尤も、この考えはあくまで邪推のようなものであり、飛躍して考えているに過ぎないこともシン自身自覚していた。だが、捨てきれない考えでもあるので、戻ったらリアスたちに今の悪魔の現状――あまり表に出したくない事情――などを詳しく聞いてみようと思うのであった。
「まさか本当に二人で倒してしまうなんて……」
驚きを含んだ言葉が聞こえてくる。振り返ると、普段の冷静な表情ではなく、目を丸

くしている椿姫がシンの方へと歩み寄ってくる。
「終わったんですか？」
「ええ、間薙くんたちが時間を稼いでくれた御蔭で、ここの術式の改変をすることができました」
椿姫が指を鳴らすと壁一面に伸びていた結界の網が一斉に剥がれ落ち始め、力を失ったせいか床に落ちる前に塵の様になって消える。
「大したものですね」
「その言葉はそっくり返させて頂きます。本当なら私も戦いに参加するべきでした……強いですね、御二人は」
崩壊していく結界を見ながら感心した言葉を口にすると、椿姫の方からも賞賛の言葉が出て来る。
「ヒーホー！　オイラも毎日一杯動いているから強くなっているんだホ！」
両手を腰に当て胸を張るジャックフロスト。椿姫は淡い笑みを浮かべながら、偉いですねと言って頭を撫でる。撫でられたジャックフロストも満更でない表情であった。
各自の戦いを終えた二人の姿に場の空気は暖まりつつあったが、それに浸かる前にシンは聞くべきことを聞く。
「副会長、もうここの術式は無害なんですね」

「はい、この場所の術式にはもうこの街を破壊する効果はありません。それと改変の最中に分かったことがあります」

術式を解析する最中、椿姫はその術式から別の場所へと繋がる魔力の線〈ライン〉を発見したという。その線を辿ってみた先に有ったのは、別の場所にある術式だったと語る。椿姫が分析するに、この術式自体が一種の爆薬のようなものであり、それに繋がっている線は導火線であるという。何処かにある点火装置から魔力を流すことによって、線を伝わり次々と術式を作動させ、大規模な破壊を生み出すというものであった。

「その線を使って、逆にここから他の場所の術式は破壊できないんですか？」

「その方法は危険です。遠隔から魔力を流した場合、それに反応して誤作動を起こす可能性があります」

何事も都合のいいようには出来ていないらしい。それでも、今回の術式の発見によって、残りの場所にある術式の在処を把握できたことは大きな収穫であった。これによって、探索に費やす時間は大幅に短縮することが出来る。

「このことを早く部長や会長に報せないといけませんね」

「はい。ここには長居無用――」

椿姫の表情が一瞬にして凍り付く。血の気が引いた唇は震えだし、動揺で揺れる瞳がシンを、より正確に言えばその背後に視線を向けていた。明らかな恐怖、ジャックフロ

ストも椿姫と同様の反応を示している。
（……どういうことだ）
シンは二人のような反応はしなかったが、二人が何故怯えているかは理解出来ていた。前触れもなく現れた強力な圧力を背中から感じる。それは、全身の温度を奪われたのではないかと思える程の重圧を与え、それなのに背中から冷たい汗が絶えず流れ続ける。
二人が呆然と見る自分の背後。シンも振り返るつもりであったが、肉体がそれを拒否するように硬直し抵抗する。それでもこのまま立っている訳にもいかず、全身を無理矢理動かし背後を見た。
「ほう、想像していたのとは随分と違う顔をしているな」
黒いローブを纏う長身の男が嗤っている。
最初に印象に残ったのはその双眸であった。白目の部分は血を流しこまれたかのような真紅であり、その目の輝きはケルベロスと似たような光を放っていたが、ケルベロスと比較出来ない程の濃い殺気でぎらついている。艶の無い黒そのものといっていい長髪、そして全身を覆う黒いローブのせいもあって、その目は異様な存在感を放っていた。
「そんな……こんなに簡単に接近を許すなんて……」

「それは冗句で言っているのか？　悪魔の目を掻い潜る方法などごまんとある。本気で言っている様なら悪魔も随分と鈍くなったようだな――笑えん」

椿姫は震える声で、これほどの存在感を持った相手が目の前に来るまで気付かなかったことに動揺するが、男はそんな椿姫の反応を侮蔑する。

「つまらんなぁ、つまらん、あまりにもつまらん！　戦争が終わればこれほどまでに質というものは低下するのか？　悪魔しかり天使しかり――堕天使もしかりだ」

自分以外の全てを罵る男の言葉。そこには隠そうとはしない狂気と飢餓感が込められていた。

「まあそれでも、この退屈を紛らわせるかもしれない者は存在するらしいがな」

男の視線がシンへと向けられる。期待、飢餓、殺意、歓喜、いくつもの感情を織り交ぜた、穿つような視線を受け、軽い嘔吐感を覚えた。

「お前は俺の血を滾らすことが出来るか？」

答えるよりも先にシンは行動を起こす。躊躇うことなく椿姫の胸元を掴み上げると、窓枠が外れた壁に向かって全力で投げ飛ばす。

椿姫は突然の事態に付いて行けずそのまま外へと飛び出すが、地面に落下する前に悪魔の羽を広げて宙へと飛翔した。

「間薙くん――」

「ヒホー！」
　椿姫が何かを言う前に、今度は椿姫目掛けてジャックフロストが飛んでくる。慌てて受け止めると、工場の中からシンの大声が聞こえてくる。
「二人はこの場から離れて部長たちの下へ」
「ですが！」
「早く行け。犠牲が増える前に」
　椿姫は強く唇を噛み締めると、工場に背を向けて飛び始める。それを抗議するようにジャックフロストが暴れるが、それでも椿姫はジャックフロストを強く抱き締めたまま、無言で飛び続けた。
「頼みましたよ」
「ハハハ、自分よりも仲間を優先するか。――甘いな」
「お前の狙いが俺一人なら他を逃がす確率が高いと思って逃がしただけだ。そうだろ？」
「成程、そういう考えは嫌いではないな」
　男は嗤いつつ、自分の右手をシンへと見せる。黒い皮手袋を着けた右手を見て、シンは胸の奥がざわめくような感覚を抱く。
「この右手の疼き、お前を前にして一層激しくなってきた。どうやら俺の勘は鈍っては

いないようだな」
　男の背中から黒い翼が飛び出し、周囲に黒い羽根が舞う。その数は十。男の正体に薄々は気付いていたシンであったがこれを見て確信する。
「――お前がコカビエルだな」
「その通り。今度はこちらが訊ねる番だな」
　コカビエルは笑みを深くする。
「お前の名は何というんだ？『魔人』よ」

心眼、外道

「ヒャハハハハハァァァァァァ！」

戦いはまだ終わっていないにも関わらず、勝ち誇ったフリードの哄笑が公園内に響き渡る。陶酔感、優越感といった余裕に満ちた態度に皮肉の一つでも口にしたい木場であったが、現実はそのような余裕を木場に与えない。そもそもフリードがこのようにして哂うのは、木場が一瞬見せた焦りの表情からであった。

相手に幻覚を見せる『夢幻の聖剣〈エクスカリバー・ナイトメア〉』と、その効果を拡大させ、対悪魔用の結界内に閉じ込めるバルパーの術式について教えられた際に、僅かの間ではあるが木場の冷静な仮面は剥がれてしまった。そんな自分の未熟さを恥じつつもどうすべきであるか、木場は不本意ながら出来た、限りある時間の中で思考する。

『騎士』としての特性を生かすための脚は、片方負傷しているものの動けないことは無い。木場は密かに負傷した足の方へと力を込める。その途端、脳髄まで貫く様な痛みが走り、傷口からの血の流れが増すが、それによって、現状の自分が大体どれぐらいの速度を出せるか把握する。

（おおよそ三割減といった所かな）

傷の痛みを隠しながら、木場は冷静に今後の戦い方について考える。今の状態で仮にフリードに対して速度勝負を仕掛けたとしても、十中八九自分が敗北すると悟っていた。フリードの持つ三本の聖剣の内、自らの速度を高める『天閃の聖剣〈エクスカリバー・ラピッドリィ〉』と、この結界内の効果が加わることによって、フリードの剣戟全てが死角から攻め込んでくるという、反則的な攻撃と化す。最初の二回の攻撃は何とか回避したものの、これが続けば確実に致命傷に至る傷を負うのは明白であった。

悔しさで臓腑が焼け付くような感覚を覚えるが、今の木場にとってフリードを正面から破る術がない。倒すべき聖剣を目の前にして自分の体たらくに怒りすら込み上げて来る。しかしだからこそ、今は冷静にならなければならない。

燃え盛るような怒りの熱を心の奥底に無理やり押し込み、刃の様な冷たい熱を持たせた思考を動かさなければならない。それはかつて師から教えられた、肉体の技術では無く心の技術であった。今は如何に剣を振るうのかではなく、如何にして相手の隙を突くか、そのことのみを考える。

「んふっふーん！　さっきから黙りこくってどうしたんですかい、悪魔くぅーん！　……あ、もしかして遺言でも考えてた？　それなら俺にもおせぇーてくんないかしら、チミの仲間に俺様からきっちり伝えておくから！　……うっそー！　やっぱり伝えませぇーん！」

黙する木場に対し、フリードがいつもの様に嘲笑と罵声を重ねて煽ってくるが、木場は一切反応しない。そのことに若干不愉快に思ったのか、フリードは手に持った拳銃の銃口を向ける。尤もこの結界の内部では、フリードが拳銃で狙いを定めていることすら木場には認識出来ず、そのこともフリードは重々承知で、敢えて声を出して木場に宣言する。

「今から五秒後に人のことを無視する、いけない悪魔くんに光の鉛玉をぶち込んでやりたいと思いまーす！　黙ってねぇで命乞いの台詞ぐらい叫んでみろやぁ！」

罵声を浴びせるが木場一切の反応を示さない。その態度にフリードは舌打ちをした後、銃口を向けたまま木場の周囲を歩き始める。

「カウントダウンスタート！　ゴォーー！」

宣言通り秒読みを始めながら、フリードは己の位置が悟られない様に常に動き続ける。尤も、幻の檻に閉じ込められている木場にはフリードの位置は全く別方向に映っている為、あまり意味の無い行為である。

この行為自体の目的は、今の様に動き続けることで相手の精神に重圧を掛ける為の嫌がらせに過ぎず、やっている本人の性根の曲がり具合を示しているものであった。

「ヨォーン！」

水平に構えた拳銃を見せびらかすようにして木場の周りをうろつくフリードであっ

たが、相手が全く行動を起こさないことを疑問に思い、若干眉間に皺を寄せる。木場は魔剣を構えたまま、負傷した足を庇うように片膝を突き俯いたままの姿勢で微動だにしない。

「サァーン！」

それでも圧倒的有利である状況に立っているフリードにしてみれば、木場がどう抵抗しようと、この状況を打破するのは不可能であるという確信を持っていた。悪魔である木場には、『夢幻の聖剣』と術式の効果は十分過ぎる程効いている。

フリードには、木場を殺すことは決定事項であるという自信があった。故に面白くない。このような危機的状況でも取り乱さない態度が。その静かな様子に、もしかしたら何か策があるのではないか、と一瞬であるが考えさせられてしまったことが、ただ自分に殺されるだけの存在の筈の悪魔が、自分の心の裡に不安というものを過ぎらせたことが、全て気に入らない。

引き金に触れる人指し指に自然と力が込められ白く変色し、指先で触れた引き金が僅かに擦れた音を出す。

フリードの足が木場の背後で止まる。銃口の狙う先は木場の後頭部。

「ニィィー！」

五秒後に撃つといったが二を数えると同時にフリードは引き金を引く。フリードは

宣言したが、その通りに撃つつもりなど最初から皆無であり、ゼロという前には発砲するつもりであった。ならば何故残り二秒で撃ったのか。それは相手の態度にイラついたからという、余りに一方的で自分勝手で我儘な理由であった。

銃口から放たれた光の弾丸が、木場の後頭部へ一直線に向かって飛ぶ。かぎりなく零に近い時間で弾丸は木場の後頭部へと着弾し、その内部を破壊する。目の前で咲き誇る血の華を想像し、自然と頬が吊りあがる――そうフリードはこのとき考えていた。

その考えは、水滴が爆ぜたような音と共に覆される。

「――ああん？」

頬を歪ませ、左右非対称な表情をしていたフリードは、このとき素の表情となる。目の前の光景に僅かな時間ではあるが、呆気にとられた為の反応であった。

目の前に広がるのは、倒れ伏す木場の姿とその頭部に広がる血の華ではなく、片膝を突いて座ったままの木場と、背負うような格好で背後へと回した、武骨な魔剣の姿であった。

「おいおいおいおい、何ですかそりゃ？」

剣身の幅が広く厚みのある魔剣の鍔元付近から白煙が立ち昇るのを見て、フリードは先程まで吊り上げていた頬を今度は小刻みに震わす。

フリードは見ていた。銃弾を発射した直後に木場が背後に向けて魔剣を移動させ、そ

の剣の腹で銃弾を受け止めた瞬間を。
だからこそ納得が出来ない。
確かに木場はこの術式の影響を受けている。その証拠に、先程まで見当違いな方向を見て自分と会話しているつもりでいたし、その隙を突かれて銃弾で撃ち抜かれていた。先程と全く変わらない状況にも関わらず、今度はその銃弾を防いだ。フリードの性格からして、そのようなことを簡単に納得できる筈がない。
「ちょっと忌々しいにも程があるんじゃないの？　こっちは折角楽勝ムードでとっておきの初見殺しを用意してんのにさぁ、普通ならここでズタボロになって口から血とか流して『くっ！　……強い！』という場面じゃございませんかぁ？」
相変わらずの早口で言葉を重ねていくが、その積み重ねていく速度は若干ながら早く感じられる。それは思い通りに事が進まなかったことに対する、戸惑いと苛立ちが無意識に出てきた為のものであった。軽口を言いながらフリードは再び木場の周囲を移動し始める。今度は最初よりも動く速度を上げていた。
「いくら強くってもさー、たまには負けた方がいいと思うんだよ私的には！　だって強すぎるキャラクターだとスンゴイ早さでインフレしていくだけだからね！　オレツエエエエエエなんて万人受けじゃぁございませんことよ？　という訳で負けて下さい！　つーか死ねぇ！」

今度は正面へと回ったフリードが、俯く木場の顔目掛けて数回引き金を引く。数発の光の弾丸が吸い込まれるように、全て狙いを違わず、木場の顔へと飛来する。
しかし、木場は背後に回していた魔剣を自分の正面へと掲げ、その全ての弾丸を凌ぎ切る。明らかに攻撃が来ると分かっていての反応であった。
「チッ！　何で防げんだよぉ、てめぇ！　こっちが折角用意してきたもんぶち壊すじゃねえよ！　空気読めやぁ！」
「生憎、空気を読んで死ぬつもりはないよ」
苛立ちを隠さないフリードに、木場は涼しげな声で答える。戦況的にはフリードが有利な状況ではあるが、今の時点では精神的に木場の方へ軍配が上がっている状況であった。
「――君の殺気は強すぎる」
俯いていた木場が顔を上げる。その顔を見たときフリードの頬がひくつき、口に端が痙攣を起こしたかのように動き出す。
「どういう冗談なんですかねぇ、それは？　あれ？　僕チンも幻にかかっちゃった？」
正面から見た木場の顔、その両目は固く閉ざされている。
「見るもの全てが出鱈目なんだ。だったら最初から使わなければいい」
つまり今までの攻撃は、全て目を閉ざしていた状態で防いでいたことを示す木場の言

葉。その単純とも言える解決策にフリードが噛みつく。
「んだそりゃぁ！　一体どこの格闘漫画の主人公だ！　目を瞑って相手の気配や殺気だけ頼りによけてたっていうのかよ！　ぶっつけ本番で？　やだわー！　そういった主人公みたいな補正、ホントいやだわー！　次は何っすか？　血統っすか！　それとも才能っすか！」
「勝手に言っているけど、別にいきなり出来たわけじゃないさ」
「ああん？」
「僕の師匠なら、殺気だけで実体の無い刃を無数に造り出すことが出来る。そこに無い筈なのに、触れれば斬られたと錯覚してしまう程のものを、ね」
　その無数に貫いてくる刃の中から、木場の師匠が振るう本物の剣戟を見極める修行を何年もの間行ってきた為、木場の感覚は同じ悪魔の中でも頭一つ抜けたものとなった。
「それに比べればキミの放った数発程度の弾丸なんて、大したことはないよ」
「……言ってくれるじゃないの、悪魔くぅーん」
　言い終えると同時にフリードは、立て続けに五回引き金を引く。五発の弾丸が木場の頭部、腕、胴体、脚と別々の方向へと迫って来るが、木場は目を閉じたままで手に持つ魔剣を一閃させる。頭部、胴体、脚を狙った弾丸は魔剣によって打ち消され、腕を狙った弾丸も肩の上を通過し、その際僅かに衣服をかすめる程度であった。弾丸を全て躱さ

れたフリードであったが、撃ったと同時にその場から駆け出し、あらゆる角度から木場へと弾丸を降らす。

「数発で駄目だったら百発でも千発でも撃ち込んでやるよお！」

周囲から迫る光の弾丸。しかし、木場の挑発のせいで元々欠けていた冷静さを更に欠けさせた上での行動は、フリードから複雑な思考と精密な動作を奪い、鈍らせる。感覚のみで判断する木場には、迫ってくる弾丸を肌で感じ取り、無数にある内の自分に直撃するものだけを選別して魔剣を振るう。魔剣によって二つに裂かれ力を失って消失するものもあれば、剣の腹を滑り全く別の方向へと逸らされるもの、その逸らされた弾丸に衝突し相殺されるなどといった方法で次々と回避する。

これが実体を持った金属の弾丸だったのならばこのようにして防ぐことが出来なかった。斬り裂いても二つに割けて手傷を負う場合があり、弾いたとしてもその衝撃などで次の動作へ移るのに支障をきたすなどの可能性があった。だがフリードが放っているのは、堕天使の力の一部を授かって放つ、対悪魔用の光の弾丸。当たれば実弾よりも重傷を負うが、その質量はゼロであり、剣で払ってもシャボン玉を弾いた程度の手応えしか返ってこない。ましてや木場の持つ『魔剣創造〈ソード・バース〉』はその名の通り、あらゆる特性を持った魔剣を創りだすことが出来る。

聖剣には敵わないものの只の堕天使の光では木場には到底届かない。

「マジ、うざってぇーぜ！」

フリードはその場で跳び上がると、木場に向かって銃撃を繰り出しながら、もう片方の手に持つ聖剣を振り被る。木場は弾丸を全て撃ち落とすが、その間隙を狙いフリードは聖剣を振り下ろす。

聖剣が向かう先は木場のうなじ部分。まるで処刑人が罪人を斬首するような図であったが、鳴り響く金属音がそうではないと否定するかのように公園内に木霊する。

木場は首に刃先が喰い込む前に、木場の左手の中に新たな魔剣が創造した。真っ向から聖剣を受け止めたのであれば間違いなく自分の魔剣が折れてしまうことは、ゼノヴィアとの戦いで既に承知している。その為、木場が創りだしたのは聖剣を受ける為の魔剣では無く、聖剣を受け流す為の魔剣。剣身が弧を描くそれは西洋剣ではなく刀に近い形状をしていた。しかし刀とは違い刃紋は無く、また剣身に光沢も無い。

創り出した魔剣が聖剣と触れ合うと、互いに火花を散らし噛み合う様な金属の音を奏でるが、そのまま拮抗することはなく、剣身の形に添って聖剣が刃の上を滑る。

「ちょいちょいちょい！」

自分の意と反する聖剣の動きにフリードは抗議の声を上げるが、聖剣は止まらない。

新たに創り出した魔剣には攻撃の為の特性は付けていない。その代わり、刃が触れた部分に掛かる力の流れを自在に変化させるという能力を付与させていた。

その効果によって聖剣は魔剣の刃の上を移動し、魔剣の刃先が向けられた地面に叩きつける様な格好となる。その際にフリードも前屈みの姿勢となり、大きな隙が出来た。

聖剣が魔剣から離れたと同時に、木場は上半身を捻る。力の入らない下半身の代わりに腰の動きから生まれた力をそのまま肩へと伝え、そこから更に腕へと繋げて各部位で生まれた力を一つに連結させる。手に持つ魔剣の刃を横にし、地面と水平にすると柄の先端を握り締め、生み出した力を全て込めた突きを放つ。

音すら追い抜かしてしまいそうな程の速度で放たれた木場の突きは、フリードの胴体目掛けて進む。普通ならばまず確実に心臓を穿たれるか、あるいは心臓には刺さらないものの胴体を貫通されそのまま内側から骨と肉を斬り裂かれるか、例え左右に避けたとしてもそこから刃を切り返すことも出来る。貫かれるか斬り裂かれるかどちらかの末路しかない状況。だが狙われるフリードは、文字通り普通では無かった。

フリードは、突きが放たれたのを視界で捉えた瞬間にそれが危機であることを思考よりも体が判断し、体だけが先行して防御を行う。迫る刃の先端と胴体との狭間に割り込むようにして、フリードの持つ拳銃がグリップの底を木場に向けられる。突きの先端が通過点に置かれたグリップの底に僅かに触れたと同時に、フリードの両足が地面から離れた。

木場の突きが込められた威力を発揮したときには、支えの無いフリードの体はその威

力に押され、突きを受け止めたことで破損した拳銃の破片を撒きながら、後方へと大きく吹き飛ばされる。左右どちらかに避けるのではなく真正面から受け、そのまま逃げへと転じたのである。

飛ばされたフリードは背中から地面へと着地し、そのまま十数メートル程の距離を滑った所で止まった。

（……やられた）

認めたくはないが、人の身でありながら無傷で先程の状況を切り抜けたことには、見事と思うしかない。伊達に『天才』と持て囃されたことがある人物なだけのことはあった。

そして木場にとって、さっきの攻撃を避けられたのは非常に痛手であった。あの一撃で仕留めるつもりで放ったがまんまと逃げられてしまった。これによって、フリードが木場の間合いには入ってくることは二度と無いと考えていい。何度かの戦いで分かっていたことであるが、少なくともフリードという存在は、戦いを愉しむ性格をしているが、重点を置いているのは戦いそのものではなく、戦いによって相手を殺すことである。

「あーあー、今更分かった」

大の字で倒れていたフリードはそう言うと両足を上げ、それを降ろした反動で立ち上がる。服に着いた土を払いながら不敵な笑みを木場に向けていた。

「前に見せた魔剣だけじゃなく他にも複数の魔剣を所持する……これってアレだろ？　おたくの神器って『魔剣創造』でしょ？」
「だったらどうしたって言うんだい？」
「ハイ！　その態度！　正解ってことでよござんすね？　レア神器じゃあーりませんか！　そんな神器を持っているなんてうらやましい限りでございますよ！　ぜひとも記念に僕チンにも魔剣を一本下さらない？」
「お望みなら一本でも十本でもあげるさ。ただし、君の体に突き刺して贈ることになるだろうけどね」
「わーお！　そいつ怖い！」
　フリードはケタケタと笑いながら手に持っていた拳銃を放り捨て、懐から新たな拳銃を取り出す。
「でも大したもんじゃないの？　俺様のエクスカリバーちゃんの一撃を受け止めるなんてさ。普通の魔剣なら一発で砕けても可笑しくないのに」
「僕もそれなりに聖剣への対策を考えているってことさ」
　実際先程想像した魔剣には、込める魔力を普段の倍以上注ぎ込んで創り上げている。それによって強度を上げ、聖剣でも一撃では砕けない程の代物に仕上げていた。それは前にフリードと戦ったときと、ゼノヴィアとの戦いを経てのものであった。

「うんうん！　実に大したもんですわー、聖剣を受け止める魔剣を創るなんてマジリスペクトですわー！　だ・け・ど――」

フリードの言葉が続く前にピシリという亀裂が生じる音がする。音の発生源は木場の左手の方からであった。それが何を意味する音なのか、木場は既に承知している。フリードのエクスカリバーを一度受け止めたときに伝わってきた手応えから既に悟っていた。

再び音が鳴り、その後地面にあるものが落下する。落ちたそれは、木場の手に握られている魔剣の剣身部分であった。鍔元から折れているそれは、破壊されたことによってただの魔力へと戻り、空気に溶け込む様にして消えていってしまった。左手の中にある柄の部分も同様に消えてしまう。

「――一回受け止めるのがやっとのようでございますねぇ？　いくら神器から創り出した魔剣でも聖剣の相手じゃございませんよぉ？　せめて聖剣と同じくらい名が通った魔剣じゃなきゃねぇ」

一言一言に神経を逆撫でする悪意を込められたフリードの言葉に木場は、態度には見せなかったものの奥歯を強く噛み締めていた。出来れば否定してしまいたかったが、フリードの言っていることは間違ってはいない。聖剣と魔剣との相性の差は多少の魔力を込めたところで覆されるものではなく、僅かな延命の手段に過ぎない。そのことは木

場自身、誰よりも認識していることであった。

「ノーコメントってことは僕ティンの言っていることは正しいってことっすか？　はい！　正しいってことですね、決定！　そんなにクールな顔しなくっても正直に冷や汗ダラダラ内心ビクビクな必死の表情したらどですか？　そしたらほんのちょっとだけ手を抜いてもよくってよ？　０．００００００００００００１パーセントぐらい」

長々と喋るフリードに木場は一笑する。

「相変わらずよく回る舌だね。そんなことに力を割く位なら、もう少し戦いの方に力を入れた方が良いんじゃないかな？　折角、こんな大層な結界を造ったりエクスカリバーを三本も所持しているのに、僕に与えたのは不意打ちの一発だけ。……宝の持ち腐れにしては程度があると思うよ」

相手の心臓を突き刺すように放たれた木場の言葉。言葉の響きに侮蔑や嘲りといったものは含まず、フリードとは対称的に淡々と語るそれは、対象に氷の刃を彷彿とさせる感情の痛みを与え、尚且つ毒の様に染み渡っていく。

フリードは反論をすることなくただ沈黙する。フリードという人物を僅かでも知っていたのならば、その静けさを不審な眼差しでみるか驚愕の眼差しでみるかのどちらかであろう。

フリードは沈黙を保ったまま聖剣を地面と平行にして構え、その鍔元部分に銃身を重

ねる。ちょうど十字を作る格好となった状態でエクスカリバーが輝きを放ち始める。溢れ出す輝きはそのまま銃身へと伝わり、拳銃そのものもエクスカリバーと同じ輝きを放ち始める。

木場はこのとき相手の殺気の質が変化しているのに気付く。先程までは熱狂、狂喜、狂気といった方向性の定まらないごちゃごちゃした感情の群であったが、今のフリードが放つのはそれらを一切排した殺意のみ。その冷たい感情に木場の背筋が粟立つ。

「――死ね」

高揚とした口調ではなく、別人かと思える程の静かな声。それを合図にフリードが引き金を引いたとき、銃口から一筋の閃光が放たれる。

木場の脳裏にフリードとの二度目の戦いの記憶が蘇る。弾丸とは比にならない速度で向かってくるそれに対し、木場は魔剣を盾の様にして構えると同時に当たる面積が最小限になるように身を捩る。

（間に合え！）

魔剣と閃光が接触する。均衡したのは瞬きも満たない時間であり、閃光は易々と魔剣を貫通しその奥にある木場の身に襲い掛かった。通常ならばまず直撃していたはずであろうそれは、以前見たことのある攻撃である為身体が反射的に動いたことと、盾として用いた魔剣によって僅かに射線がずらされたという二つの要素が重なり、直撃を回避

することが出来た。狙いをずらされた閃光は木場の脇腹を掠め、公園の奥へと光の尾を残して消え去っていった。

（……また厄介なことになってきたね）

息を吸い込みそれを吐くと、閃光が掠めて行った脇腹に鋭い痛みが奔る。焼けた鉄串を押し当てられたような熱さのような痛みに反射的に手で抑えそうになるが、それを堪えて務めて冷静な態度を続ける。相手に少しでも弱みを見せない為の措置であった。

それにしてもと胸の裡で呟きながら、木場は片目を僅かに開く。開いた先には、拳銃とエクスカリバーを重ねて立っているフリードの姿が見えたが、この結界の特性を考えればそこに立っているフリードは幻であり、実際気配もそこからは感じられなかった。

拳銃とエクスカリバーの合わせ技も気になったが、なによりも気になったのはフリードの表情である。歪んだ笑みも侮蔑の笑いも嘲りの表情も無く、口の右口角を真横に引っ張ったように吊り、こめかみに青筋を浮かべて右瞼を痙攣させている。

これまでの表情とは一線を画すものであったが、先程感じ取った気配からフリードがどんな意味でこのような表情をしているのか、おおよその察しがついていた。

（もしかして本気で頭に来たのかい？）

だとしたら呆れるしかない。散々人のことを罵倒し嘲り続けていた人物が、ほんの二三言、反撃を貰ってこれなのであればその狭量さに辟易するしかない。だが、結果的に

事態は悪化しつつあるので笑う気も起こらなかった。

ついさっきまでのフリードには絶対的有利な状況ということから油断という隙を生んでいたが、今のフリードが同じ轍を踏むとは考え難い。何より、エクスカリバーの威力を上乗せした銃撃という、木場にとって非常に不利な戦法を取っていることから、本気で殺す気であることが窺える。

幸い追い打ちを掛けてこないことから連射は出来ないという可能性が高く、回避のみに専念するならば持ち堪えることが出来る自信があった。しかし、それは限られた時間ではあるが。

この場を移動するという考えが一瞬木場の頭に過ぎるが、すぐにそれを却下する。この場から離れて、もしも他のメンバーとフリードを引き合わせるような事態になれば、目も当てられない。信用をしていないつもりはないが、現状でフリードの攻撃から生き延びる可能性が高いのは、他のメンバーでは小猫ぐらいしか居らず、一誠たちの実力ではまず厳しいと考えられる。だからこそ、木場はここでフリードを足止めしていなければならなかった。

木場の肌が再び迫り来る脅威を感じ取る。新たな魔剣を両手の中に創造しつつ、未だに終わりの見えない木場の孤独な戦いは続く。

◇

「ああ！　どうなってんだこりゃ！」
　道の真ん中を真っ直ぐ走っているつもりがいきなり現れた木に行く手を遮られ、一誠が思わず叫ぶ。その木はどう見ても道の端に植えられた木であり、思っていた道と実際の現実との食い違いに脳が焼けそうになる。
『落ち着け相棒。お前は真っ直ぐに走っていると思っているがさっきから蛇行して走っているんだ。道から逸れてしまうのは仕方ない』
「ドライグ！　お前は平気なのか？」
『恐らくこれはあの白髪の聖剣の効果だ。悪魔の視界に影響を与え、幻と現実との境界を曖昧にしているんだ。まあ、聖剣の影響なんぞドラゴンである俺にはあまり意味がないがな』
　左手から聞こえてくる言葉に一誠の焦りが幾分か和らぐ。少なくともドライグはこの出鱈目な幻に影響を受けてはいない為、ドライグの言葉に従っていれば道に迷う心配がなくなると思ったからである。そしてドライグの言葉を聞いたとき、一誠の中である疑問が生まれてくる。
「ピクシー！　ちょっと聞いていいか？」

「なーに？」
「お前にはこの中がどんな風に見える？」
一誠の記憶が正しければ、この結界に閉じ込められた時、ピクシーは上から降りて来て尚且つ、上の方にも結界が張られていることを報告してきたことから、上下左右をきちんと把握していると推測できた。
「何か変な感じに見える。普通の景色にぼやぼやとした別の景色が被さった感じ。目が気持ち悪くなってきちゃう」
顔を顰めていうピクシー。悪魔ではなく妖精ということから、ピクシーは多少影響を受けているものの一誠たち程では無く、ドライグ同様に正しい方向を認識しているということとなる。
「だったら――匙！」
近くに居る匙に声を掛ける。匙の方もこの結界の影響を完全に受けているらしく、一体どういった幻を見ているのかは分からないが、公園に置かれているゴミ箱の中に頭を突っ込んでいた。
「どうした！　他の皆を見つけたのか！　俺の方はさっぱりだ……クソ！　この道、異様に暗くて狭いぞ！」
「何やってんだ、匙！　そこは道じゃねえ！」

そう言って頭を突っ込んでいる匙を揺すり正気に戻そうとするが、そこに呆れた様子のドライグに呼びかけられる。
『はぁ……相棒、よく見ろ。そいつは匙じゃない』
「――あっ」
ドライグの声に従い一誠は匙と思っていたものを集中して見ると、自分が先程からベンチを必死になって揺すっていることに気付き、間の抜けた声を出す。本人以外が注意し意識を改めさせない限り、すぐに幻の区別がつかなくなってしまう。
「ピクシー！　とりあえず匙を正気に戻してくれ。俺だと匙に近寄る前にすぐ幻覚を見ちまう」
「りょーかい。じゃあ、手っ取り早く――」
ピクシーは人差し指を匙に向けると、そこから青白い電撃を放つ。背中にそれを受けた匙は海老反りになって跳び上がり、頭にゴミ箱を被せたまま地面を転がり始めた。
「イッテェー！　敵の攻撃か……って何だこりゃぁぁぁ！」
ようやくゴミ箱を被っていることに気付いた匙が、慌ててゴミ箱を頭から外す。
「気付いたか、匙。実はな――」
この結界の齎す影響について口早に説明すると、匙はすぐに納得し嫌そうな目で地面に転がっているゴミ箱を見る。

「成程な、じゃなきゃこんなときにあんな場所に頭なんて突っ込んでいる筈が無いな……でもどうするんだ？　このままだとここから動けないぞ」
「分かっている。だからピクシーに協力してもらう」
「うん？　私？」
「ピクシーは俺達と違って幻と現実との区別がついているから、ピクシーに先導してもらって木場とアーシアと小猫ちゃんを探す」
　ピクシーに先導して貰うにあたって何かピクシーと自分たちを結ぶ紐の様なものがないか、と一誠は呟いた。それを引っ張ってもらうことで迷わずに進もうというのが一誠の考えであった。その考えを聞き、匙がニヤリと笑う。
「なら御あつらえ向きなものがあるぜ」
　匙が、自分の手の甲に出現している、黒い蜥蜴の姿をした『神器』を見せる。すると蜥蜴の口が開き、そこから体色と同じ色をした舌が伸び出てきた。
「俺の神器『黒い龍脈〈アブソーブション・ライン〉』ならちょっとやそっとじゃ切れないし、かなりの距離まで伸ばすことができるぜ」
　自分の『神器』について軽く説明をした匙は、伸ばした舌の先をピクシーに掴むように指示する。言われた通りピクシーは舌を両手で掴むと、舌の先がピクシーの片腕に巻きつく。その状態で、匙に掴んだことを知らせる為に舌を軽く引っ張った。

「おし、掴んだな。とりあえず飛ばされる前に居た場所に戻ろうぜ」
「ちょっと待ってくれ。俺もそれに掴ませてくれ」
　一誠もピクシーと同じように匙の『神器』を掴む。しかし、その手は舌を掴むことなくすり抜けてしまった。
「わりぃ。このラインは巻き付いている部分以外実体が無いんだよ」
「そうなのか？　どうやって跡を追うか……」
　ドライグに誘導して貰うという手も考えられたが、一誠が幻に惑わされる度にドライグの声で正気に戻っていたら時間が掛かってしまうため、あまり使いたくない案であった。何か方法は無いかと考えている二人に、ピクシーがあっけらかんとした口調で一つの考えを出す。
「サジとイッセーが手を繋げばいいじゃん」
　至極真っ当な考えであり、何故それが思いつかなかったのかと思える程単純な解決策であった。
　それを聞いた二人は――
「俺と？」
「こいつが？」
『手を繋ぐ？』

互いの顔を見た後――

『……ええええ』

――心の底から嫌そうな顔をする。

内心ではピクシーの提案について思いついていた。しかし、思春期男子としての思考がそれを頭の片隅へと無理矢理押し込んでしまい、見て見ぬ振りをさせてしまっていたのだ。

「いいじゃん別に。早く早く！　急ぐんでしょ！」

二人の心境など無視してピクシーは事を急がせる。二人も『何が悲しくて男と手を繋がなきゃいけないんだ』『どうせ繋ぐなら女の子の手の方が良かった』などという雑念をかなぐり捨て、半ば自棄になって叫ぶ。

「う、うおおおおお！　匙！　俺の手はお前に預けたぁ！」

「ああ！　しっかり握ってやるから転ばずに付いてこいよ！　畜生ぉ！」

心が挫けてしまいそうになるのを気合の声で支え、一誠と匙はしっかりと手を握り合う。

「大丈夫？　ならいくねー」

ピクシーが二人の前を飛び先導する。そのときに引かれるラインの感触で匙は進む方向を把握し、匙に引かれる手によって一誠も把握する。

「だあああああああああああ！」
「らあああああああああああああ！」
　その間中、一誠と匙は叫び続ける。そうしている間だけは、同性と手を繋いでいるという事実から目を背けられるからだ。
「二人ともうるさいよー」
『まあ、あれだ……逞しく生きろよ、相棒』

◇

　何回目の攻撃か、既にそのことを数える余裕が無い状態の木場は、両手に持った二本の魔剣を交差し襲い掛かってくる閃光の前に翳す。閃光が魔剣に触れると魔剣の触れた部分が赤熱し熔解していくが、その僅かな時間の間に閃光の射線から身を逸らす。
　一秒にも満たない時間稼ぎが終わると閃光は二重に重ねた魔剣の刃を貫き、狙いを外されたことで地面へと着弾して消える。
　今回の攻撃も回避した木場であったが、その身体からは至る箇所から白煙が立ち昇っており、閃光によって受けた負傷の箇所を示していた。致命傷となる傷はまだ受けてはいないが、光に触れたことで出来た傷はじわりじわりと木場の体を蝕み、燻った火の様

に静かに木場の身を焼いていく。

その傷の具合に徐々に冷静を装った仮面は剥がれつつあり、時折身を動かしたことで生じる痛みに僅かに顔を顰める。それでも相手に悟られないごく微小な表情の変化であったが、拭いきれない冷たい汗は誤魔化しようが無かった。

フリードとの戦いは最早一方的に木場が耐える状況が続いている状態であり、遠距離から仕掛けてくるフリードは決して木場の剣が届く範囲に入ってこようとはしない。先程の一件が余程頭に来ていたらしく、フリード特有の甲高く不快感を齎す笑い声は一向に聞こえてはこない。一手一手こちらを確実に潰す為に行ってくる攻撃。愉しむことを止めて、殺すつもりで繰り出してくるそれに、木場は避けることで精一杯であった。

次の攻撃が来るのを肌で感じ取る。すぐに壊された魔剣の代わりを創造し、攻撃に備えなければならなかったが、このとき木場は急激な嘔吐感に襲われる。

それは今まで受けてきた光の毒が蓄積して、木場の神経を蝕んだ為に起こった現象であった。胃が裏返しになったのではないかと錯覚してしまうほどの感覚を何とか耐えて魔剣を創造しようとするが、既に相手の攻撃準備は整っている。

一手遅れた。

そう思ったときには、既にフリードの銃口から閃光が放たれた後であった。

避けることが出来ない。そう悟った木場は、せめて戦闘続行が不可能になる場所を避

けることに全力を尽くそうと考えたが、そのとき突如背中を押され込まれ地面へと突っ伏す形となる。それによって閃光は目的を失い、木場の上を通過していく。

前方のフリードに集中していた余り、背後からの気配に気づかなかったが、押さえ込んできた存在は木場が知っている気配を纏っている。木場が閉じていた目を開き背後を見ると、そこには居たのはやはり一誠と匙の姿であった。

「ピクシー！」

匙がピクシーの名を叫ぶ。すると上空へと上がっていたピクシーが一気に降下し、地面すれすれを低空飛行しながらフリードの足下目掛けて突撃していく。足下に辿り着いたピクシーはフリードの片足の周囲を飛び回り、自分の手に巻き付けていたラインを今度はフリードの足に巻きつける。フリードは現れた匙と一誠の姿に目を奪われており、ピクシーの存在に気付いたときには既にピクシーは事を終えていた。

「いいよ！」

「よし！　おらぁ！」

合図と同時に匙は『神器』から伸びるラインを両腕を使い、背負うような形で渾身の力で引っ張り上げる。

「うおい！」

片足を吊り上げられた格好となったフリードは驚きの声を上げながらも、咄嗟に持っ

ていた聖剣を地面へと突き刺して抵抗しようとする。だが、突き刺したまでは良かったが、匙の引き上げる力にフリードの聖剣を掴む指はあっさりと引き剥がされ、その身を宙へと投げ出される。

あっさりと聖剣を手放してしまったことに唖然とするフリードの表情。フリードは知る由も無かったが、匙の持つ『黒い龍脈』には繋げた相手の力を吸収するという能力を持っていた。更に事前に能力について聞かされた一誠から、倍加した能力を相手に譲渡する『赤龍帝の贈り物〈ブーステッドギア・ギフト〉』を受けており、その効力は向上していた。それ故に、フリードの現在の力はまともに剣を握り締められない程に低下している。

そして、宙へと浮くフリードに追撃の一撃が飛ぶ。

「角度はこれでいいのか？」

『ああ。その位置だ……今だ』

「ドラゴンショット！」

狙う位置とタイミングをドライグに計ってもらった一誠が、裡から聞こえてくるドライグの言葉に合わせて、両掌から集中させた魔力を放つ。既に匙に譲渡していた為に数倍程しか倍加を行っていないが、放たれた魔力の塊は直径一メートル程の球体であり、フリード一人を昏倒させるには十分な威力を持っている。

地面に足が着いていない状態のフリードに、ドラゴンショットを空中で躱す術は無い。

「何ですかぁ！　この鬼畜コンボはぁ！」

先程まで静かに怒り狂っていたフリードであったが、この事態にいつものような捲くし立てる口調へと戻る。あるいはこれこそが素のフリードなのかもしれない。

目元を引き攣らせ、明らかに焦りの表情をするフリード。だが、その目はまだ死んではいない。

フリードは持っていた拳銃を放り捨てると、ほぼ同じタイミングで空いていた方の手を背中へと回し、そこから『夢幻の聖剣』を引き抜くと、そのままドラゴンショットへと斬り付ける。力を吸われ弱体化しているフリードの抵抗はすぐに押さえ込まれ、前髪の先がふれそうになる間近まで接近を許すが、拳銃を捨てたことによって空いた手が、今度は腰に差してあったもう一本のエクスカリバーを抜剣し、押さえられているもう一方のエクスカリバーと重ねる。

十字に交差した二本のエクスカリバーが互いに干渉し合うようにして輝きを強め、その光が一誠のドラゴンショットと反発しあいフリードへの直撃を拒む。その隙にフリードは、ドラゴンショットにエクスカリバーを押し付けたまま魔力の塊の側面を体ごと捻るようにして受け流し、ドラゴンショットの狙いから自分を外す。しかし、その直

後に背面でドラゴンショットは爆発し、その衝撃を背中に浴びて地面へと叩きつけられた。
「うぐふっ！」
　体の前面から地面へと突っ伏したフリード。かなりの勢いで落下したにも関わらず、すぐに立ち上がろうと顔を上げるが、その眼前に飛び込んできたのは鈍色の輝きを見せる剣の先であった。
「うん、その位置！」
「ここかい？　ありがとう」
　剣を突き付けているのは木場、その肩にはピクシーが座っている。ピクシーが木場の目の代わりとなってこの場へと誘導したのである。
「あーらららら……」
「……こういった結末は正直に言えば不本意だよ。だけどキミの存在は余りに危険過ぎる」
「いいんですかぁ？　タイマンで勝ったんじゃなくて三対、いや四対一という状況で勝って満足っすか？　プライドは満たされるんですかい？」
「僕一人ならキミの挑発に乗ったかもしれないね……でも、ここには僕の他にも命を懸けてくれる皆が居るんだ、自分のエゴを押し通すつもりはないよ」

フリードの挑発にも冷静に対応する木場。これ以上の揺さぶりは無駄だと思ったのか、フリードは溜息一つ吐き、一誠たちが思いもよらない行動に移る。
「――さん」
「何だって？」
「降参するよん」
フリードは手に持った二本の聖剣を地面へと置く。
「……どういうつもりだい？」
「だから降参するって言ってんでしょうが。四対一だと流石に俺様でも勝てる見込みはないですわ……足にこんなのも巻き付いてるし」
フリードが片足に巻き付いているラインを見せる。
「そんな言葉を信じるとでも？」
「ならこの結界も解きますよー」
フリードが小声で何かを呟くと公園内を満たしていた霧が晴れ始める。変化に気付いた一誠たちはしきりに周囲を見回し、お互いに方向などを確認してみたが上下左右全て一致し、確かに結界は解除されていた。
「これで本当に参ったってわかるでしょ？　だから命だけは勘弁してもらえませんでしょうかね？　ほら、ここにある『夢幻の聖剣』と『透明の聖剣〈エクスカリバー・ト

ランスペアレンシー〉』、あそこに刺さってる『天閃の聖剣』もお返しするんで、何ならコカビエルやバルパーの居場所も吐きますぜぇ？」

両手を上に挙げ丸腰であることをアピールするフリードであったが、その態度を一誠たちは鵜呑みにはしない。何かを企んでいる、この場に居る全員が共通してそう思っていた。

そのとき、公園の脇にある植え込みの木の葉や枝が擦り合い音を立てる。その音に一誠と匙、ピクシーは反射的に音の方へ向き、フリードの伏兵かと思い木場もほんの僅かではあるが意識がそちらに傾く。

その刹那、フリードの袖口から手の平に収まる程の小型拳銃〈デリジャー〉が飛び出し、意識を逸らした木場に向ける――

「やっぱりね」

――前に喉元へ剣を突きつけられた。剣先は僅かに皮膚を破り、そこから一筋の血が流れる。隠し持っていた小型拳銃は木場に向けることは叶わず、あらぬ方向を向く形で動きを止めていた。

フリードの行動を見越していた木場は冷徹な眼差しでフリードを見るが、フリードは焦ることなく寧ろ不敵な笑みを浮かべている。

「木場」

「大丈夫。彼にもう打つ手は無いよ」
「そうじゃない……木場、やばいぞ……」
　明らかに動揺している一誠の声に木場は不審に思う。先程の植え込みに何があったのかまだ木場はまだ見ていない。
「子供……」
　ポツリと漏らしたピクシーの言葉に、木場の額から冷たい汗が流れる。フリードへ細心の注意を払いつつ横目で植え込みの方へと目を向けると、そこには小学校低学年ぐらいの男の子がサッカーボールを両手に持った状態で、目の前の光景を驚いた様子で見ていた。それを見た木場の全身が震える、度を超えた怒りによって。
「最初に言ったじゃーん。時間とタイミングは計ってたって」
　喉の奥で笑うフリード。あらぬ方向に向けていたと思われた拳銃の銃口の先は間違いなく、植え込みにいる男の子に狙いを定めていた。
「キミって……奴は……！」
　怒りの余り言葉が詰まってしまう。そんな木場を前にして、フリードは心底愉快そうな表情でこう告げた。
「はあい！　形・勢・逆・転！」

◇

「早い帰りだったな、コカビエル」
　アジトへと戻ってきたコカビエルに、バルパーの迎えの言葉が掛けられる。コカビエルは目線を一度バルパーに向けただけで、そのままいつも腰掛けている自分の椅子に背を預けた。
「それで何か収穫でもあったのか？　珍しく行動を起こしたのだからな」
「術式の一つが破壊された」
「ほう、番犬を下したか。思っていたよりも実力があるようだな」
　自分の術式が壊されても特に慌てた様子も無く、寧ろ相手の実力を感心する余裕すらバルパーにはあった。
「じきに他の術式の場所も分かる筈だ。少し計画を早める、フリードを呼べ」
「フリードなら今はここにはおらんよ。グレモリーの眷属たちにちょっかいをかけに行った」
「連れ戻して来い……ああ、ついでにエクスカリバーの力を派手に振り撒いてこい。そうすれば教会の走狗どもが釣れるだろう」
「了解した。計画を早めるのはいいが、お前の方の用事はいいのかね？　何やらこの街

に気になる存在が居ると言っていたが」
「もう既に会ってきた。外れ――とまでは言わないが、当たりと言うには程遠いな」
　つまらなそうに言った後、コカビエルは少しだけ口角を吊り上げ笑みを浮かべる。
「まあ、そのおかげで分かったこともあった。――やはりと言うべきか、俺の舞台劇に横から口を挟もうとする不届きな演出家どもがうろついているな」
　比喩的なコカビエルの表現。バルパーは思い当たる節があるのか、コカビエルの言葉が何を意味しているのかは聞かず、黙ったまま話の先を聞く。
「誰かが動くまで動こうとはしなかった愚図どもが図々しい……まあいい、せいぜい高みの見物でもしているがいいさ。そのうちそんな余裕も無くなる」
　コカビエルは脳裏に浮かび上がる存在達に罵声を浴びせながら冷笑する。そのときバルパーはあることに気付く。
　コカビエルの軽く握られた手から血が滴り、点々と床に染みを作っていく。
「手傷でも負ったか？」
「手傷？　ああこれか。欲しければくれてやる」
　コカビエルは置かれた机の上で手を開く。軽い音を立て手の中から落ちたそれは、机の上を転がってバルパーの正面まで移動する。
「所謂戦利品のようなものだ」

白く、所々赤い血管が張り巡らされ、その中心には黒い瞳。
それは紛れもなく人の眼球であった。

記録、不屈

「お約束な台詞を言わさせてございますが、あの子の命が惜しければ抵抗しないで頂けますかねぇ？　悪魔御一行さん」

事態を把握できず、おろおろとしている男の子に銃口を向けながらフリードは、見る相手は血液が沸騰するのではないかと錯覚させるほどの腹立たしい笑みを向け、勘に障る口調で一誠たちに要求を告げる。

その態度に臓腑が焼け爛れそうな怒りを覚える一行であったが、そのまま怒りに身を任せてフリードに歯向かう訳にも行かず、知らずの内に人質となっている男の子の安否を優先してただ沈黙を続ける。

相手の反応から抵抗する意思が無いと判断したフリードは突き付けられた剣を手で押しのけ、落ちている二本のエクスカリバーを拾いながら立ち上がる。

「とりあえずこの鬱陶しい舌を外してくんない？　さっきから力が抜けてしょうがないんで。ほら、さっさとしろや！　腐れ悪魔がよぉ！」

匙の『神器』を巻きつけられた足を見せつけながら声を荒げるフリード。匙は虫唾が走る程の腹立たしさから無意識に唸るような声を出して強く拳を握りしめるが、それ以

上のことはせず屈辱から身が震えそうになるのを必死に堪えつつ巻きつけていたラインを解き、『神器』の中へと回収する。
「次はキミにお願いしたいんだけどぉー、悪魔の『騎士』くぅん。その物騒な魔剣をとっとと仕舞って俺から離れてくんない？　近くに立っていられると危なっかしいのと目障りだから」
　匙の『神器』から解放されたフリードは次に木場に対し要求をする。しかし、フリードの要求を聞いても微動だにせず、憎悪を込めた目で睨み続けていた。
「木場！」
　木場の態度に思わず一誠が呼びかけるが、木場はそれすら耳に入らない様子で皆が見ている前で魔剣の柄を手の色が白く変色する程握り締めた。
「……そんな言葉で僕が怯むと思っているのかい？」
「へぇー、殺る気満々なの？　このまま俺様斬っちゃう？　人質を無視して？　それはそれは悪魔の鑑なことで」
「言った筈だよ。――僕はキミを斬るって」
「おい！　待てよ、木場ッ！」
　このまま人質を無視して斬りかねない木場に一誠が咎める様に叫ぶが、木場は払われていた剣先を再びフリードへと向ける。

「ふぅーん……」
剣先を向けられたフリードは特に驚いた表情は無く、探るようにして木場の瞳を覗き込んだ後、突如発砲した。
フリードの凶行に一誠たちはすぐさま男の子の方へと顔を向けるが、弾丸は男の子には当たらず近くにあった木の幹へと着弾しており、刻まれた銃痕から白煙が立ち昇っていた。男の子はいきなりの銃声と着弾の衝撃に恐怖したのか、持っていたサッカーボールを落としてしまい、そのまま地面へと座り込んでしまっていた。
「ボクゥ、あんまりキョロキョロしないでくれるぅ？　今どんなことが起こっているのか意味不明なのはよぉーく分かっているけど鬱陶しいから。次に一ミリでもそこから動いでみろ額に穴が開くぞ、クソガキがぁ！」
恐らく人生で初めて味わうであろう殺気を受けて、男の子は双眸から涙を流しつつ全身を震わす。
フリードの蛮行。そんな光景を見せられて怒りを見せる一誠たちであったが、その中でも特に激昂する人物がいた。
「てめぇ！　ふざけた真似してんじゃねぇよ！　ガキ相手に自分が何してんのか分かってんのか！」
その人物は匙であった。その剣幕は凄まじいものであり、同じく怒りの言葉を発しよ

うとしていた一誠と木場が思わず言葉を飲み込んでしまう程であった。
「理解してるつもりですけどぉー？」
「だったらそんな物騒なものを向けてんじゃねえよ！　あまつさえぶっ放しやがってトラウマになったらどうするつもりだ！　……代わりに俺が人質でも何でもなるから見逃してくれ、態々無関係な子供を巻き込まないでくれ……」
「匙……」
「匙君……」
　相手が望むなら土下座でもしそうな程、真剣な表情で譲歩を求める匙であったがフリードはそんな匙の態度を鼻で笑う。
「キミらがそんな反応をするからこそ、人質の価値ってのが上がるってもんですよぉ？　あんがとねー、そこの茶髪の悪魔君。あんさんのその反応で人質のことを見限らないってのがよぉーく分かり申した」
　真摯な願いも悪意を以って斬り捨て、真剣な態度も嘲笑を以って答える。フリードという人間が悪魔という存在と一切相容れるつもりはないという意思の表示であった。
「それでぇー、木場くんだったけかなぁ？　いつまでこの剣を僕チンに向けている気かなぁ？」
「……君をこの場から逃したら、より大きな被害を生む」

「ふむふむ。よーく理解していらっしゃる」
「……その為に必要な犠牲だったら――」
「本気で言っているのか、木場……！」
子供を見捨てることを匂わす発言に匙が噛みつくが、そんな匙に対し木場は反応を全く示さずフリードの喉元に剣を突き付ける。
「おー、なんてこったい。このままじゃやられてしまうー、くそーてきにこんなひじょうになれるやつがいたなんてー」
感情を込めず棒読みで怯えた芝居をするフリード。それは木場に向けたメッセージであり、『お前には出来ない』ということを暗に告げるものであった。
「どうした？　掻っ切ってみろよ」
フリードはあくまで余裕に満ちた態度で笑う。その言葉に木場は奥歯を強く噛み締めると同時に踏み込み、その切っ先をフリードの喉に突き立てようとする。
「やめろ、木場！」
「早まるなぁ！」
一誠、匙が同時に叫ぶ。そして――
「やっぱりねー」
――貫いたかと思われた木場の剣はフリードの喉元僅か数ミリ手前で止まり、それ以

上動くことは無かった。

「くっ……！」

悔しそうに唇を噛み締める木場。その剣を握る手は傍から見てもこれ以上ない程力を込めているのが理解出来るものであったが、それが止まってしまうのは偏に木場の良心による働きのせいであった。

幼い子供の涙、震え、恐怖、理解しきれない現状への動揺、それがかつての自分と重なって見えてしまい木場から見捨てるという選択肢を消し去ってしまう。

そんな木場の心情を知ってか知らずか、フリードは口の両端が裂けたのではないかと錯覚するぐらい吊り上げた笑みを浮かべた状態で、刺せなかった木場を呷るように顔を覗き込む。

「あれれれ？　どうしたんでしょうかねぇ、さっきまで人質なんて関係無いなんてクールなことを言ってたのに、いざ本番となったらダメダメって……滅茶苦茶ウケるんですけどー！」

フリードの馬鹿にした笑い、しかしそれを木場は甘んじて受ける。人質を見捨てないという選択肢を残したときからこうなる展開を予測できていた。ならば相手の気が済むまでやらせよう、と木場は思う。今耐えることでこの先にほんの僅かでも隙が生じることを考えて。

木場は無言のまま突き付けていた魔剣を下ろし、そのまま消す。それを見たフリードは突如木場の髪を鷲掴みにし、顔を寄せた。
「最初から素直にそういてりゃあ良かったんだよ、このクソ悪魔が。無駄な時間と手間かけさせやがって」
至近距離から罵声を浴びせるフリードを睨みつけたまま木場は無言を貫く。それが面白くなかったのかフリードは木場の髪を掴んだまま負傷している木場の足を容赦なく蹴りつけた。その拍子で足から血が飛び散るが、木場は呻くことも苦痛で顔を歪めることなくただフリードを睨みつける。
「あのガキに銃を突きつけたときからわかってたぜぇ、お前があのガキを見捨てられないなんてなぁ。自分でも理解してたかぁ？　明らかに俺様への殺気が薄れて、あのガキの方へ意識が向いてたって……甘すぎて正直クソつまんねぇぜ！」
掴んでいた手を離しながら木場を乱暴に押し飛ばす。片足を負傷している木場はその拍子でバランスを崩しかけるが、それを見た一誠が背後からすかさず腕を掴み木場を支えたことにより転倒は免れた。
「ありがとう……」
「礼なんていい。お前の方こそ大丈夫なのかよ？」
フリードが木場の足を蹴りつけていたときに初めて怪我の存在に気付いた一誠が気

遣う様な声を掛ける。相手が神父であり更には聖剣も所持している為、負傷の具合がどれほどのものか、一誠も以前フリードから怪我を負わされた身としてその痛みを知っているだけに余計心配をしてしまう。

「はは、見た目ほど酷くはないさ」

「……そうか」

それが強がりの言葉であると一誠は分かっていたが、同じ男として自分の弱さを見せない木場の心情が理解出来た為、意志を尊重しそれ以上深く聞くことはなかったが、せめて少しでも負担を軽くしようと支える手からは力を緩めなかった。

「ちょっと待ってね」

フリードが近くに居たせいで下手に動けなかったピクシーが木場の肩から降りてすぐに傷口に手を翳す。その手から光が放たれると光の当たる部分から徐々に痛みが消えていくのが分かった。

「木場、わりぃ。あんなことされて……」

匙が小声で謝罪する。木場一人屈辱的な行為をされ、それを黙って見ていたことに対する詫びと人質のことを考えて黙って耐えてくれたことに対する礼もそれには込められていた。

「気にすることはないさ」

木場は軽く微笑み、重く考える必要は無いと言外に告げる。
「はいはいはいはい！　青春活劇お涙頂戴友情茶番劇はそこまでいいでしょうかぁ？　ぜひともこっちの話も聞いて頂きたいんですけどねぇ」
一連の流れを悪意の言葉を以って切り捨てるフリードに全員の目が向けられる。
「最初の要求通り君から離れた。……次は何をすればいい」
フリードの理不尽な内容の要求を想像し、次に発せられる言葉に身構える一同であったが、フリードはキョトンとした顔をする。
「え？　次？　無いよそんなの」
思わぬ言葉に一誠たちは唖然とする。付き合いは短いがフリードという半狂人の性格を考慮すれば無理難題を押し付けてくると考えていた為、フリードの口から出てきた台詞は予想外なものであった。
「……どういうつもりだい？」
「あー、それにしてもツイてないなー」
疑問を投げかける木場の言葉を無視し、フリードは芝居がかった台詞で喋り始める。
「たまたま今日この公園で遊んでいて、たまたまそこに悪魔御一行さんがいて、たまたまそこにハイパーで素敵無敵なエクソシストがいて、たまたまそのエクソシストに目を付けられたなんてついてないわー」

独り喋り続けるフリードの姿に、言い様の無い不安感が一同の胸の中に湧いてくる。
「うん、でもねよくよく考えてみたら一番悪いのってやっぱイッセーくんたちだよねー、こんな公園に居たのが悪い、あの時間に居たのが悪い、俺様に見つかっていたのが悪い、地球温暖化も人口爆発も税の値上がりも物価の上昇も最近、枝毛を見つけたのも全部全部全部全部全部全部全部全部！　悪魔が悪い！　……そしてちっちゃな子供が死んじゃうのもねー」
粘つく様な悪意と恍惚に満ちた笑みをフリードが浮かべたとき、一誠たちはフリードという存在の持つ悪意についてほんの一端しか理解していなかったことを知る。
「おい……何考えてやがる！」
「あーかわいそ！　悪魔が近くにいたせいで今日が命日になるなんて」
人質という優位に立っている状況を捨て、ただ一誠たちの心に傷を負わせる為だけにフリードは銃口の先にいる子供を射ち殺そうとしている。大義名分など何もないただ自分の中に溜まった苛立ちを解消する為の殺害。
一誠たちはその狂気に表情を蒼褪めさせ、フリードに飛び掛かろうとするも間に合わない。肝心の子供も未だ恐怖によって身動きがとれない状態であり、例え動けたとしてもフリードの腕前からしてまず外すことは無い。
「バイバーイ！」

一誠たちの必死な姿を笑いながらフリードは引き金を引く。銃口から飛び出した光の弾丸は着弾点として定めた子供の額目掛けて一直線に飛ぶ。

誰もが子供の命が失われるかと思ったとき、風を斬り裂く音と共に真横から巨大な長得が旋回して現れ、地面に粉砕しつつ突き刺さり、子供の前に壁となって銃弾を防いだ。

「あ〝あ〝っ？」

突然の横槍、そして思い描いていた予想図とは違う展開にフリードはドスの効いた声を上げる。一誠たちも突如飛来した物体に驚くも、その突き刺さった物体には見覚えがあった。剣身が幅広く厚みのあり、柄の部分まで刃と一体と化している大剣、その名は

――

「『破壊の聖剣〈エクスカリバー・デストラクション〉』！　ってことは！」

「外道もそこまで極まればいっそ清々しいな。フリード・セルゼン」

聖剣が投げられた方向から現れたのは白いローブを纏ったゼノヴィアであった。

「ゼノヴィア！」

「少し遅れた。だがいいタイミングだったようだな」

最悪だった状況を打破してくれた助っ人に、一誠は嬉しそうな声でその名を呼ぶ。ゼノヴィアも名を呼ばれたことに応えるように軽く手を挙げた。

「どういうこったですかコレ？　まさか教会の人間、よりにもよって聖剣使いが悪魔と

タッグ組んでいるわけ？　なんつー冗談！　それでいいのか君たち！」
「言いたいことはそれだけか？　フリード・セルゼン、反逆の徒としてその命、神の名の下に断罪する！」
「はぁ――！　これだから大人は汚い！　目的の為なら多少のルール破りは黙認しちゃうんだから！　神の名の下にって何すかぁ？　そんな器が伸縮自在な神様の名なんて出してんじゃねぇよ！　犯って殺ろうか、この教会のパシリがぁ！」
　言い終えると同時にフリードはゼノヴィアに向けて発砲。聖剣を手放しているゼノヴィアには現状防ぐ手は無い。しかし、ゼノヴィアに焦る様子は無かった。
　何故なら、ゼノヴィアにはこの攻撃が当たらないことが分かっていた。その考えを肯定するように、背後から現れた無数に枝分かれした刃が放たれた全ての光弾を防ぎ、ゼノヴィアの身を護る。
「先行しすぎよ、ゼノヴィア」
「悪い。だがそのおかげで最悪の事態は避けられた」
　ゼノヴィアの登場からやや遅れてイリナが姿を現す。手には『擬態の聖剣〈エクスカリバー・ミミック〉』が握られており、光弾を防いだのがイリナだということを示していた。
「最悪の事態？」

ゼノヴィアの言葉に疑問を持ったイリナが周囲を見渡す。拳銃を構えるフリード、そのフリードから距離を取り不自然に固まっている一誠たち、そしてゼノヴィアの聖剣の陰で涙を流して震えている子供。それらを見て何があったのかおおよそ把握したイリナの目がスッと細まる。
「がんばってたんだね、イッセーくんたち」
「イリナ……」
「ここからは私たちに任せて」
明るい笑みを一誠たちに向けた後、イリナは冷めた表情でフリードを睨みつける。
「噂通りの外道みたいだね、フリード・セルゼン」
「簡単に噂を信じちゃいけないってパパ、ママから教えられなかった？」
「貴方を神の名の下に断罪するわ！」
「聞き飽きたぜぃ！　その台詞は！」
枝分かれしている『擬態の聖剣』から新たに二本の刃が生えると、その新たな刃は子供の方へと伸び、一本は『破壊の聖剣』の柄へと巻き付き、もう一本は直前で形状を変化させ紐のような形になると、子供の腰へと巻き付いてそのまま自分たちの方へと引き寄せる。
「ゼノヴィア！」

「助かる」
　聖剣の方はゼノヴィアへと投げ渡し、ゼノヴィアは手に取りながら礼の言葉を言い。子供の方は一誠たちの方へと渡す。
「任せたよ、イッセーくん」
「ああ、分かった」
　エクスカリバーを構えた二人が同時にフリードへと斬り掛かる。フリードはニヤリと笑った後に背中に納めていた『夢幻の聖剣』を抜くと、一誠たちを惑わした時のように再び地面へと突き刺し術式を発動しようとする。
「急いで彼の動きを止めてくれ！」
　察した木場が慌てて声を飛ばすが、二人の距離からして既に届かないことは明らかであった。
「おっそいよーん！」
　嘲笑いながら地面へとエクスカリバーを突き刺すフリードだったが、一誠たちのときとは違い霧が一切発生せず変化が起こらない。
「あれ？　……ぶほっ！」
　術式が発動しないことに首を傾げるが、その間にもゼノヴィアが距離を詰めており間合いに入ったと同時にフリードに横薙ぎの一撃を放つ。真正面から首を刈る為に繰り

出された斬撃を慌てて抜いた『夢幻の聖剣』の腹で防ぐが、七本あるエクスカリバーの中で最も破壊力のある『破壊の聖剣』とゼノヴィア自身の膂力が合わさってフリードの防御は簡単に崩され、振り抜かれた衝撃で防いでいた筈の『夢幻の聖剣』の腹をまともに顔面から受け止めた状態で吹っ飛ばされた。

十メートルも飛ばされたフリードは背中から着地する瞬間に体を捻り両足で地面に降り立ち、全力で剣の腹を叩きつけられたことで赤く腫れた顔でゼノヴィアたちを睨む。よくみれば鼻から鼻血も流れている。

「このビッ――ておおお！」

罵声がフリードの口から出る前にイリナの振るった『擬態の聖剣』が無数に分裂した状態で斬りかかる。その場からすぐさま飛び去ったフリードの背後に刃が突き刺さり、その刺さった刃から更に分裂して出来た新たな刃がフリードに迫る。それを腰に差していた『透明の聖剣』で振り払うと一気に駆け始める。

それを追撃するイリナの『擬態の聖剣』であったが、フリードは両手に握った二本の聖剣を用いて巧みに払い、ある場所を目指す。フリードの狙いに気付いた二人であったが、既にゼノヴィアでは距離が遠く間に合わない、イリナの方も刃を増やして妨害するがフリードは致命傷になる攻撃だけを防ぎ、それ以外の傷は無視して駆け抜ける。

頬、肩、腕、脚などに切創を造るが速度は緩まず、目当てのものに近付いたとき大口

を開いて飛び掛かる。その瞬間を狙ってイリナは分裂させていた刃を一斉に集めるが、フリードが『ソレ』を咥えたと同時にその姿は霞の様に消え、目的を見失った刃が盛大な金属音を奏でる。

「はっはほれははふっちゃへー『やっぱ、これがなくっちゃねー』」

聞き取りにくい声を出しているフリード、その口には『天閃の聖剣』の柄が咥えられている。その状態で聖剣の能力である加速を得ると一気に距離を開け、ゼノヴィアたちが迂闊に手を出せない状況を造る。

移動したフリードは効力を発揮しなかった『夢幻の聖剣』を背中に納め、代わりに口に咥えた聖剣に持ち替えた。

「ちょびーとだけヒヤリとしやしたぜぇー、おたくらここに来るまでの間に何かいらないことをしてたんじゃないの？」

「ここの公園一帯に描かれていた術式のことか？　それなら全てイリナが破壊した」

ゼノヴィアの言葉でイリナが遅れてきた理由が明かされる。

「おいおいマジですか？　折角じいさんがこつこつと創ってくれたものをぶっ壊しちゃいましたかぁ！　何たる無慈悲！　こんな血も涙も無い大人には成りたくないと俺様ここで誓いたいと思います！」

顔を顰めて大声で叫ぶが、それを見たゼノヴィアが一笑する。

「大方、聖剣の力を拡大させる術式だっだのだろう？　最も私たちにはそんな小細工は通用しなかっただろうがな」
「生憎、聖剣の加護を受ける私たちには同じ聖剣の効果は薄いからね」
「へいへい、勉強になりまーす！」
　皮肉を込めた台詞を吐くがその表情に歪んだ笑みは無い。いつもの様な態度は振る舞っているものの、それは口調だけに留まっている。それだけ余裕の無い状況であることをフリードが認識している証であった。
　そして状況はフリードにとって好ましくない方へと進んで行く。
「イッセーさん！」
「……無事ですか？」
　術式が解かれたことでアーシアと小猫が一誠たちへと合流する。治癒の『神器』を持つアーシアと、一度戦ったことで大体の実力を把握している小猫。戦力の維持と増加が同時に来たことになる。
　この場に於いて流れがあるとしたら確実に一誠たちの方へと向いていることを感じ、フリードは短く舌打ちをする。如何にしてこの場を乗り切るか、それに思考を巡らせようとしたとき、新たな声がその場に響く。
「遊びが過ぎたな、フリード」

　フリードの側に前触れもなく現れたのは、神父の格好をした初老の男性。頭髪は全て白く染まり、顔にはひび割れたような皺が無数に刻まれているが、何処か年や老いを感じさせない雰囲気を纏っていた。
「バルパーのじいさん？　……どしたの？」
「コカビエルからお前を連れ戻す様に言われてきた。……全く、私の術式まで使っておいてこの様か」
　フリードの現状に呆れを露わにするバルパー。その二人のやりとりに堪らず口を挟む者たちがいた。
「ようやく姿を見せたな……」
「お前が……バルパー・ガリレイッ！」
　木場に名を呼ばれたことで、初めて視線がフリードから木場たちの方へと向けられる。
「騒がしいな。大声で名を呼ばずとも聴こえる。それほど耄碌はしていない」
　感情を感じさせない乾いた声。それはバルパーが木場たちにさほど関心を示していない為であった。
「初めまして、とは少し違うかな……久しぶり、と言った方が正しいのかな？　最も覚えてはいないだろうけどね」

　木場は憎々しげな口調で皮肉を言う。バルパーは一瞬木場の言葉に考え込むような仕草を見せたがすぐにそれは解かれ、口元に軽い笑みを作る。
「――ああ、見覚えのある顔だと思ったが私の『計画』の残骸か」
　思いがけない言葉に木場は激しく動揺する。まさか相手が自分のことを覚えていたとは予想外のことであった。
「何だね、その顔は？　私が自分の研究で使った貴重なサンプルの記録を怠っているとでも思ったのかね？　だとしたらそれは研究者への侮辱というものだな。何なら私が使った彼らの名前を今からここで暗唱でもしようか？　どんな内容の実験を行ったかということも添えて？」
「……やめろ」
「例えば『×・×』、彼は『神器』を所有していた為、まずはその『神器』の能力を完全に引き出す為、手始めに五日間の絶食と不眠を行った。四日目で衰弱状態になった為実験は途中で中断されたがね」
「やめろ……！」
「次に『×・×』、彼女は因子を高める為の実験として精神と肉体を徹底的に追い詰めた。手っ取り早い方法として集めてきた浮浪者共の慰――」
「やめろぉぉぉ！」

バルパーの口から齎される聞くに堪えない実験の内容。遂に感情を爆発させた木場が魔剣を創造しながらバルパーへと飛び掛かる。魔剣がバルパーを脳天から股下まで斬り裂く為に上段に構えられる。フリードはそれを防ごうとするが、バルパーは何故かそれを手で制した。やがて剣の届く間合いまでバルパーへと迫る。

「落ち着け『――――――』」

直後、バルパーの口から出たある名前。一誠たちには届かず、木場にしか聞こえない声量で呟かれたその名に、木場は心臓が硬直したのではないかと思える程の衝撃を受けた。

木場が『木場祐斗』と名付けられる前に持っていた名前。人から悪魔へと転じたときに捨てた名前。かつて純粋に神を敬愛していたときの名前。

木場の動きがこのとき止まってしまう。

「何事も記憶しておくものだな」

そう言ってバルパーが軽く手を鳴らした瞬間、上から押さえつけられるような重さが一誠たちに圧し掛かる。

「こ、これは！」

「お、重てぇ！」

体が前屈みに成りそうな程の負荷に呻く様な声を洩らす。皆なんとか抗おうとする

が、重みでその場から一歩も踏み出せない状況であった。
「う、うう……！」
「動けない……」
華奢なアーシアや非力なピクシーは四肢を地面に着けて何とか耐えている状態であり、この場で一番の力を持っている小猫も歯を食い縛り何とか移動しようとしていたが、やはり重さで動くことが出来なかった。
「く、苦しい……」
人質にされていた子供もアーシアのように四肢を着いた状態で苦しがっていたが、動けない状態の一誠たちでは助けることも出来ず、子供の方に首を向けるだけでも精一杯であった。
「バルパー……！」
唯一、木場だけが剣を杖にした状態で一歩だけ踏み出すことが出来たが、それ以上は体が言うことを聞かず、怨敵を前にした状態で無力を晒してしまう。
「ほう！　この術式の中で動くか……大した身体能力――いや、執念といったところか」
木場の形相を少しの間だけ興味深く観察していたバルパーであったが、横からの声にそれを中断し視線を移動させる。
「流石、バルパーのじいさん！　――と言いたいところなんだけど、俺っちまでえ、影響

受けているんですけど……？」
　両手に持ったエクスカリバーを地面に突き立てて、辛うじて体を支えるフリード。その膝は力を込めている為激しく震えていた。
「生憎、発動者以外は効果の対象内なのでな。力を抜けフリード、これは力を込めた分だけ負荷が掛かる術式だ」
　一応、助言はするがおいそれと出来るものでは無く、バルパーもそれを見越した上で説明をしているようであった。
「くっ……！　まだこれほどのものが仕込まれていたとは……不覚！」
「うう……！　全部壊したと思ったのに……」
　悔しそうに唇を噛むゼノヴィアと、罠を見過ごしてしまうという失態を犯してしまったことで声が弱々しいイリナ。そんな二人をバルパーは一笑する。
『『詰め』が甘かったな、聖剣使いの娘たちよ。常に二重、三重に保険を掛けておくものだ。まあ尤も、簡単に見抜けるようにするほど私も伊達に長生きはしていないのでね』
　余裕を持ったバルパーの発言に、二人は言い返すことが出来なかった。見抜けなかった時点でどう反論してもただの負け惜しみにしかならないことが分かっていた為に。
『フリード、五秒後に術式を一旦解く。それと同時に離脱するぞ……なるべく追跡しやすい痕跡を残してな』

バルパーは術を使いフリードにしか聞こえない指示を出す。フリードは返事をせずに目線だけを送る。

『残りのエクスカリバーはコカビエルが直々に回収する。その為に奴らを我らの根城までおびき寄せる』

バルパーの指示にフリードは口を歪ませて笑みを作り、アイアイサーと声を出さず口だけを動かして了承した。

フリードの脳内でバルパーの秒読みが始まる。一誠たちは未だに術式の中で足掻いている状況が続く。

ゼロ、という合図と共に体に掛かっていた負荷が一気に消失し、必死になって足掻いていた一同はその反動で大きく体勢を崩してしまう。事前に知らされていたフリードもよろけるものの、一誠たちに比べれば軽いものであった。

バルパーによって生み出された隙の中で懐から発光する球体を複数取り出すと、辺り一面に放り投げる。

「じゃあな、教会悪魔連合諸君！」

フリードの言葉の後に球体は光を放ち、周囲が白一色に染まって見えなくなる。一誠たちの視力はそれによって一旦奪われ、数秒後には光が収まったものの目の前で光が点滅を繰り返す状態が続き、万全とは言えない状況であった。

「追うぞ、イリナ」
「うん！」
そんな中、ゼノヴィアとイリナは去って行ったバルパーたちを追い、一誠たちが声を掛ける暇無く走り去っていく。
「お、おい！」
一誠が呼びかけたときには既に背中が小さくなっており、声は届いてはいなかった。仮に届いていたとしても、その足を止める程の効力は無かったかもしれないが。
そして気付けば木場の姿も無い。いつの間に居なくなってしまったのか分からなかったが、先程の木場の様子を見ていると一人で動くことに危うさを感じていた。しかし、後を追うにしても姿が無ければ追うことも出来ない。
「うたく！　……畜生」
勝手な行動とそれを止めることの出来ない己自身の弱さに、やや苛ついた声を洩らす一誠。匙もアーシアも小猫もピクシーも、どうすればいいか半ば途方に暮れていた。
「ここにいたのね」
聞き覚えのある声に一誠たちは振り返る。そこにはリアス、朱乃、ソーナ、椿姫、ジャックフロストが揃って立っていた。
「か、会長！　副会長！　あ、あのこれは！」

思いもよらない登場に匙の顔が一瞬にして蒼褪める。一誠たちも匙と同様であった。しかし皆あることに気付く。主の指示を無視して勝手な行動をしたことに対し激怒してもいい筈であるが、リアスたちの表情に怒りは無く、反対の感情といっても言い哀しみ、焦燥、後悔といった感情が浮かんでいた。

「……落ち着いて聞いて」

リアスが重い口調で話し始める。心なしか声が震えて聞こえた。

「シンがコカビエルと接触したわ」

一誠たち誰もが息を呑んだ。それは晴天の霹靂といってもいい報せであり、激しい動揺が広がる。

「あ、あいつは無事なんですよね？　部長！」

「彼がコカビエルと戦った場所に行ったわ……残っていたのは戦闘後の破壊痕と夥しい血の跡だけだった……」

一誠は言葉を失ってしまう。リアスの言葉が本当ならばシンは――

「……認めたくはないけど彼は恐らく――」

「生きてると思うよ」

リアスの言葉を遮ったのはピクシーの言葉だった。

「ピクシー、お前分かるのか！」

「ん？　全然。ただ何となくそう思うだけ」
慌てて問う一誠であったが、返ってきた答えは曖昧なものであった為脱力してしまう。
「何となくって、お前……」
「いいじゃん別に。アタシがそう思ったからそう言っただけだもん」
ピクシーはそう言って俯いているジャックフロストの側まで飛んで行く。
「だからアタシを信じてメソメソしない、分かった？」
ジャックフロストの帽子を軽く叩く。俯いていたジャックフロストは顔を上げた。その黒々とした瞳からは氷の礫が零れ落ちている。それがジャックフロストの涙であった。
「また泣いてる、本当に泣き虫だね？」
「オイラは……泣き虫じゃないホー……」
弱々しくも反論するジャックフロストにピクシーは軽く微笑んだ。
「言い返せるんだったら大丈夫だね」
ピクシーはジャックフロストの頭に腰を下ろし虚空を見上げる。
「今は信じよう？　シンが戻ってくることを……」

◇

視認出来ない程の速度で放たれた光の槍が肩を貫く。刺さった光の槍は勢いを失速させず、人一人を吊ったまま後方の壁へと突き刺さる。

焼け付く痛みを堪えそれを引き抜こうとするも追撃の槍がそれを阻み、無数の槍が体を貫いて壁に張り付けにした。両手両足は固定され腹部も貫通している。呼吸をする度に言葉に出来ない程の激痛が体を奔る。だが、そのことに対して苦鳴を上げることもままならない状況は続いていた。

槍を放った人物は目の前のことに対し酷く詰まらなそうな眼差しを送り、最後の仕上げとばかりに頭部に向けて光の槍を放とうとしている。

手足は動かず避けることは不可能。しかし、唯一頭部だけは動かすことが出来る。激痛に耐え肺の許容限界まで息を吸い込みそれを冷気に変え、今まさに槍を投擲しようとしていた人物に全力で吹き当てる。

視界は冷気によって白く染まり姿が見えなくなるが槍が迫ってくる気配は無い。これで終わりとは到底思えず今の内に何とか刺さっている槍を引き抜こうとしたとき、冷気の中を突き破って黒い手袋に覆われた右手が現れた。

痛みは一瞬だった。右手が引かれると何かが千切れる音が体内に響く。そして同時に視界の半分が黒く染まり何も映さなくなった。

「……ああ」

そこで唐突に目が覚めた。仰向けになって見上げた場所には白い天井と照明がある。シンは鈍痛で頭の回転がいまいち良くない状態で身体を起こし、はっきりとしない意識のまま視線を周囲に向けた。

目の前にはあるのは、値が張りそうなテーブルの上に置かれた中身が詰まったビニール袋、周りの壁には絵画がいくつか掛けてあり、高そうな花瓶も置かれている。ただそういった芸術品はシンの視点からして無造作に置かれている印象を受け、これを飾った人物は芸術に対してさほど関心が無いという印象が生まれた。

寝かされていたベッドから両足を降ろす。そのときになって今自分がどのような格好をしているのかに気付いた。学校指定の白いシャツとズボンには幾つもの大きな穴が開いた状態であり、その穴の周りは血で汚れていた。かなり時間が経っているのか血は黒く変色しており、触ると固い感触が伝わってくる。

血液が大量に流れたことでぼーっとしてしまう思考を必死に動かし、穿たれた筈の箇所に手を当てた。そこには光の槍によって出来た貫通痕は無く、皮膚が張られ元通りになっている。一体誰がこれを治療し、ここまで運んだのか疑問に思うシンであったが、このときビニール袋の上に二つ折りにされた手紙が置かれていることに気付く。

シンは手紙を開き中を見る。そこにはお世辞にも丁寧とは言えない、書き殴られた文

章が書かれていた。内容をざっと流し読みしたシンは手紙をテーブルの上に置き、ビニール袋の中を覗く。袋の中にはコンビニで売っている弁当、おにぎり、サンドイッチ、飲み物、デザートなどがぎっしりと詰め込んである。

この手紙を書いた人物は、やはりというべきかアダムであった。文章の初めは不手際でシンとコカビエルが戦ってしまったことに対する謝罪が書かれ、次にそれを治療したこと、目を覚ましたのならばとりあえず間に合わせではあるがこれで空腹を満たし、大人しく体力の回復に努める様に書いてあった。そして最後に書かれていたのは――

シンは意識を失う前のことを少しだけであるが記憶している。目の前が暗くなる前に自分とコカビエルとの間に立ち塞がるようにして、突如影色の壁が現れた。それが何だったのかは分からないが、少なくともそれの御蔭で命を繋ぐことが出来たと考えている。

シンは手近にあった袋へと手を伸ばす。その中に入っているおにぎりを手にしようとしていたのだが、その手は何故か空を掴む。僅かな間、空を切った手を見ていたが、やがて再び手を伸ばして袋の中からおにぎりを一つ手に取った。

それを手に持ったまま反対の手で、自分の顔の左半分に触れる。包帯が幾重にも巻かれ視界が半分遮られた状態であったが、最初に触れた頬から順に上へと移動しやがて左目の位置まで移動すると、指先で軽く押す。本来なら返って来る筈の眼球の感触、だが

今の左目にはそれが無く、指先は瞼の奥へと沈んでいくのであった。
コカビエルによって抉られた左目、その喪失感を今になって味わう。アダムからの置き手紙の最後に書かれてあったのは、今ある傷は治せたとしても、失った血や目を元に戻すことは出来ないということであった。
取り返せないものは失った衝撃、それを実感しながらシンは内心自嘲する。
(馬鹿だ)
己の実力も弁えず、遥か格上の相手と一人戦った。
(どうしようもない)
手も足も出ず半死半生となり一方的な敗北を喫し、その結果片目を奪われてしまう。
それでも――
(……この借りを返すことばかり考えているなんてな)
手に持ったおにぎりの包装を一気に剥がすと噛り付く。それを数秒で平らげると、袋の中から手当たり次第食べ物を取り出して、無言のまま凄まじい勢いで食べ始めた。失った体力を回復する為にはまず元を摂取しなければならない。
大敗をしても未だ戦う意思は折れることなくシンの中で激しく燃え盛る。無謀、無茶は本人が一番理解している筈だが、それでも止まることは出来ない。
食を進めていく度に脳裏では負けたときの記憶が次々と蘇ってくる。戦いの痛み、相

手の嘲笑、敗北感、無力感。思い起こす度に胃の中に重石が乗せられるような感覚が奔り嘔吐しそうになり、それをペットボトルのお茶で無理矢理押し込む。

敗北という事実、今は甘んじてそれを受け入れなければならない。己の糧にしなければ今よりも強くなれる筈がない。故にこの食事と共に自分の敗北を噛み砕き、呑み込む。二度とこの想いを忘れない為に。

◇

胎児が身を縮めているような格好をした『ソレ』は宿主の心を敏感に察知していた。根の様に張り巡らした触手から流れ込んでくる強く、熱く、激しい渇望。今よりも『強くなりたい』という激しい想い。

激しい想いは触手を通じて『ソレ』へと流れ込んでくる。その想いを糧にして『ソレ』を少しだけ目覚め、体を震わす。

より強い力を得るには、今の力を張り巡らせた触手から流し込むだけでは足りない。もっと強い力、もっと怖い力、もっと壊す力を得るには今の体ではなく『本来』の体が必要である。

しかし全てを替えるには未だに力が馴染んではいない。だが、丁度いいことに今は失

われた箇所があった。
『ソレ』はそこだけを替えることにする。失われた箇所を新たに創り出し、そして改めて変化させる。
『人』から『悪魔』の肉体へと。

払拭、旧知

公園でフリードとの交戦を終えた一誠たちは、いつまでもここに居る訳にもいかず、公園から離れることとなった。木場たちやシンの動向が気になるも、今優先すべきこととしては、匙に背負われている幼い子供を家へと帰すことであった。

おぶられた状態の子供は朱乃の魔術によって寝かしつけられており、その間に魔力によって家の場所について聞き出し、ついでに今回巻き込まれたことへの記憶を完全に消去しておいた。他人の記憶を本格的に弄ることに対し、少々抵抗を覚えた一誠であったが、狂気と殺気に塗れたフリードの笑みなど、記憶していてもトラウマにしかならない。結局の所は記憶を消すのを素直に見守っていた。

無事子供を家に送り届けた後、今後について一旦話し合う為、子供の家から一番近い場所にある一誠の家を話し合いの場として一同はそこを目指す。その道中リアスとソーナは、今回一誠たちが独断で行っていた、エクスカリバー破壊についての話を振ってきた。子供やシンのこともあった為、あの場では怒られることはなかったが、改めて怒られると思い一誠たちは一同に頭を下げ、謝罪の言葉を口にし出した。

「あ、あの勝手に動いてすみませんでした、部長」

「すみません、部長さん」
「……ゴメンなさい、部長」
「あ、主のきょ、許可無く動いてしまい、本当に……本当にすみませんでしたぁ！　会長ぉ！」
　皆が頭を下げて謝る中、匙だけは頭を地面へと打ちつける程勢いよく土下座する。その震えながらソーナの次の言葉を待つ姿に、心底恐れているのが伝わってくる。ソーナはそんな匙の土下座を見た後、椿姫の方に視線を送る。首を横に振るのを見ると、眉間に皺を寄せたまま軽く溜息を吐いた。
「サジ。頭を上げなさい」
「で、ですが会長……」
「サジ、今回エクスカリバーの破壊に参戦したことは不問にします」
　思わぬ言葉に匙は驚き、顔を上げる。
「え、え？　でも俺は独断で――」
「独断ではありません。聞いていないのですか？　私は貴方のエクスカリバー破壊について参加することを許可しています」
　ソーナの言葉に匙は困惑した表情をする。
「正直に言います。私やリアスは、貴方たちがエクスカリバーを破壊しようと、陰で独自

に動いていたことを把握していました」
　一誠たちは目を丸くする。リアスたちにばれない様に秘密裏に行動していた筈であるが、まさか今回の件で知られたのではなく事前に知られていたとは思わなかった。
「ど、どうして？」
「イッセー。エクスカリバーを破壊するという計画、この子たち以外にも話さなかったかしら？」
「このメンバー以外で話したのって――あっ」
　脳裏に浮かんだのは最初にこの話を持ちかけた人物、シンだった。聖剣絡みで他にすることがあるという理由で参加しなかったが、そのことにリアスたちが関わっていたとは思わなかった。
「確かピクシーからの伝言で、間薙が部長や会長のことはこっちで何とかするって言ってたな」
「おい、兵藤。……それは初耳なんだが」
「……悪い。言うのをすっかり忘れた」
「ふっざけんなぁ！　こっちは寿命が縮まるかと思ったんだぞ！」
「悪い！　本当に悪かった！」
　立ち上った匙が一誠の襟首を掴んで激しく揺さぶりながら恨み言を言う。自分のミ

スである為、されるがまま一誠はとにかく謝るのであった。
「そこまでにしなさい」
「ですけど――」
「サジ。今回のエクスカリバー破壊について不問にしておくと言いましたが、それ以外で私に対して黙っていることはないですか？」
その一言に真っ赤になっていた匙の顔は青白くなり、滝の様な冷や汗を流し始める。明らかに心当たりがある様子であった。
「エクスカリバー破壊を優先して、随分と生徒会の仕事を溜めこんでいるようですね？あろうことか、下手な嘘をついて他のメンバーに仕事を頼むようなことをして」
「あの……その……それは……」
匙の目は泳ぎ、口が回らなくなる。
「この件が終わったら速やかに溜まっていた仕事をすること。追加として反省文を原稿用紙１００枚に書くこと。――分かったわね？」
「……はい」
匙は項垂れ、力の無い言葉で了解した。
「それで部長たちは間薙と一体何をしていたんですか？」
リアスはここ数日間あった出来事を一誠たちへと話す。話が進むにつれて皆、神妙な

表情へとなっていった。
「――そんな危ないものがこの街に仕掛けてあるんですか？」
「ええ、そうよ。……シンと椿姫、ジャックフロストのおかげで、他に仕掛けられた術式の場所はもう分かっているわ。後はそれを破壊するだけ」
「部長さん、そのアダムという人はどこにいるんでしょうか？　公園に来た時にはいなかったはずですが？」
　アーシアの疑問に答えたのはソーナであった。
「彼なら、椿姫とジャックフロストの二人がコカビエルが現れたことを報せる少し前に、突然姿を消したわ」
「いきなり？　一体どうして」
「理由については詳しくは分からないわ。でも――」
　ソーナ曰く、姿を消す前のアダムは普段浮かべている薄ら笑いを消し、険しい表情を浮かべていたらしい。そして何か小さく呟いていたという。言葉は完全に聞き取れなかったが『早い』『動け』と独り呟いていたらしい。
「もしもそれが間薙くんとコカビエルが戦い始めたことを感知してのものだったのなら……」
「シンはアダムが救い出したということ？」

「あくまで推測にすぎないわ」

希望的観測だけに目を向けるのではなく、冷静に状況を判断しながらソーナは発言する。仮にソーナの推測が一見正しいものだとしても、それを裏付けるには根拠が足りなかった。アダムという人物と行動を共にしたことのあるリアスやソーナから見て、掴み所のない人物であることは分かっているが、如何程の実力を秘めているのかは未知数であり、それがコカビエルと同等あるいはそれ以上である可能性は低いと見てもいい。少なくとも、現代でコカビエル以上の実力の持ち主を探すのであれば、上から順に探した方が早い。

先程の公園内でもあった重い空気が一同に再び蔓延する。しかし、それは無理もないことであった。シン、木場、ゼノヴィア、イリナ、行方の分からない人物たちの安否について、誰もが胸の中に不安を抱えていた。

『あまり自分のことで心配されるのってシンは嫌がると思うからあんまり深く考えないでね』

シンが死亡しているかもしれないという考えを否定したピクシーがその後でこの言葉を付け加えていたが、やはり簡単に割り切ることは出来ない。あくまで外面上はいつものように振る舞っているものの、どこか空回りしている様な感覚を皆、胸中で覚えていた。

特に椿姫とジャックフロストはかなり重症であり、公園に現れたときから殆ど喋る事無く、常に重い雰囲気を纏っている。理由はどうあれ、目の前でシンを置き去りにしてしまったことに対し、かなりの罪悪感を覚えている様子であった。

時折、深く落ち込んでいる二人にピクシーやソーナが声を掛けているものの、返って来る声は生気の無い虚ろなものであり、返事の内容も簡単なものであった。

「参ったな……」

「しょうがねえよ」

誰もが暗い雰囲気でいる中、前向きとも言える姿勢であったのは一誠と匙であった。二人は小声で言葉を交わしつつも、重苦しい空気をどうにかする方法はないか相談する。

「会長も副会長も責任感が強いからな……会長も冷静に見えるけど、間薙のことは相当応えている筈だぜ」

「うちの部長も多分そうだな。木場がはぐれになるかもしれないってときもかなり落ち込んでいたし……正直、周りがこんなんじゃなきゃ俺もあんな風になってたよ」

友人とも戦友とも言える存在が行方不明になる。今まで生きてきた中で初めての経験であるが、これほど精神的に重く圧し掛かるとは想像出来なかった。

『そう深く考えるな』

一誠の脳内にドライグの声が響く。そっけないドライグに対し、一誠はそれを咎める様に頭の中で言葉を返した。
（そう言っても簡単に平然とは出来ないだろ？）
『するだけ杞憂だ。力は他の奴にはまだ及ばないが『魔人』は『魔人』。そう易々とくたばる筈がない』
ドライグの言葉には『魔人』という存在に対して嫌悪を感じさせるものが含まれていたが、その反面『魔人』という存在が持つ強さに関して、信頼とも言えるものが感じ取れた。
（『魔人』のことは嫌っているように見えるけど、死んでくれて嬉しいって訳じゃないんだな）
『奴らのことは嫌いだ、相棒。俺の所有者だった者の中には『魔人』の手によって命を落としている者もいる。……それでも相棒の言った通り死んで素直に喜ぶ所か否定してしまうのは、少しばかり関わり過ぎたせいかもしれないな』
自嘲するようなドライグの小さな笑いが左手から伝わってくる。ドライグの心境は、一誠が完全に理解するには、経験も年月も足りないものであった。それは、長い時間の中で命を削り合った者にしか得られない心境なのであろう。
「さっきから何をボーっとしてんだ？」

一誠が急に黙り込んだことを不審に思った匙が話し掛けてくる。不意を突かれて驚く一誠に、匙は呆れた眼差しを向けた。
「黙ったままころころ表情変えてどうしたんだお前？　あの神父たちの術式で変な後遺症にでもなったのか？」
「いや、大丈夫だ！　えーと、ああ！　あれだ！　ずっと張り詰めていたから今になって緊張の糸が切れて、な！」
いまいち説得力が無かったのか、『何を言っているんだ、こいつは？』という感想を顔に書いた匙から思いっきり疑いの視線を向けられるが、それ以上は深く追求することはなく『人の話はちゃんと聞けよ』と注意されるだけに留まった。
「ああ、ゴメン」
軽く謝った後に一誠はこれからのことを考える。今の所、相手に振り回されている状況であり、後手に回ってしまっていた。仲間の安否が不明なことで、メンバー内の精神状態は良好とは言えない。正直、この状況を和ますような台詞が頭に浮かばない。隣で同じことを考えているらしい難しい表情をした匙も同様である。
最初はエクスカリバーを破壊するという内容だったものが、いつの間にか仲間の一人が生死不明となり、そしてこの街全員の命が掛かった戦いへとなっていた。重圧を感じないと言えば嘘になる、だがその重さで立ち止まる訳にはいかない。

「おおおしッ！」

いきなり大声を上げながら一誠は自らの両頬を叩く。その突拍子の無い行為に一誠を除く誰もが目を丸くし驚いてしまう。

「ど、どうしたのイッセー？」

リアスが戸惑った声を出すのも無理はない。一誠自身も、客観的に見て奇行の類であることは承知している。

皆の視線が集まる中、頬が赤くなった一誠がはきはきと喋り出す。

「部長！　とぼとぼ歩いていないで早く俺の家に行きましょう！　エクスカリバーやコカビエルたちへの対策の為に今は一分一秒も惜しいです！」

ある意味で場の空気を読まない行動であったが、そんなことを気にしているような状況では無い。一誠の心情を理解したのか匙もまたこれに便乗してくる。

「そうですよ、会長！　このままやられっ放しなんて俺は御免です！　今度はこっちがコカビエルの鼻っ柱をへし折ってやりましょう！」

一誠が匙を横目で見ると、それに気付き口の端を吊り上げてにやりと笑う。

しばしの間、急に熱くなった『兵士〈ポーン〉』たちを見ていたリアスとソーナだったが、互いに目配せした後に苦笑を浮かべる。それは突拍子の無い行動をとった一誠たちに呆れたのではなく、眷属の二人に気を遣わせてしまった自分たちの未熟さを笑った為

のものであった。
「そうね、そうしましょう」
「ええ、その通りですね」
　リアスとソーナが互いに頷く。そしてソーナはそっと椿姫の背に手を当てた。
「サジはああ言っているけど、貴女はどうするかしら？」
「……大丈夫です。私もここで折れる訳にはいきません」
　俯いていた表情を上げる椿姫。まだ陰りはあるものの、いくらか自分を取り戻したのか気丈な表情となっている。
「みんな頑張ろうとしてるよー、キミはどうするの？」
「ヒーホー……」
　ジャックフロストの頭に座っているピクシーが、叱咤するようにジャックフロストの額をぺちぺちと叩く。
「別に落ち込むなっていわないよ。でも王様になるんだったらいつまでもメソメソしてるわけにはいかないじゃん？」
　挑発的とも言えるピクシーの言葉に、次第にジャックフロストの体が小刻みに震えだす。それでも言葉を止めないピクシー。やがてジャックフロストの震えが限界まで達したとき一気に噴き出す。

「ヒーホーッ！」
　ジャックフロストが両手を天に突き上げて雄叫びを上げる。ヤケクソになって叫んだというよりは、自らの内にある暗い感情を吹き飛ばす為の気合のように感じられた。その勢いに頭からずり落ちそうになるピクシーであったが、それに構わずジャックフロストはその場から駆け出した。
「イッセーの家に行くんだったらオイラが一番乗りだホー！」
「行け行けー！」
　走るジャックフロストの帽子を掴みながらピクシーは声援を送る。一同走り去って行くジャックフロストの姿に虚を突かれた様子であったが、次第にその気合が伝播したのか最初に口を開いたのはリアスであった。
「あの子たちには負けてられないわね。なら私たちも急ぐとしましょう！　最後に着いた人はお仕置きよ。ハイ、スタート！」
　そう言ってリアスが走り出す。
「あらあらズルいですよ、部長」
　続いて朱乃が後に続く。
「正直、この様な状況ではあまり相応しい行動とは思えませんね、リアス？　――ですが気持ちを切り替えるには必要かもしれませんね」

「私もお供します、会長」
苦言を呈しつつも、いつもの冷静な表情を取り戻したソーナと椿姫が、並走してリアスたちの後を追う。
「……負けません」
「わ、私も頑張ります！」
一言呟いた後、走り出す小猫。少し遅れて、あまり運動が得意ではないアーシアも一生懸命駆け出していった。
「何だか全部持ってかれたみたいだな」
「だけどこうなりゃいいって思ってたんだろ？」
最後に残った一誠と匙は小さく笑う。
「……きっと木場も間薙もあの聖剣使いの二人も無事だよな？」
「ああ、無事だと俺は信じてる」
「だな。俺もそう思っている」
示し合わせた訳でなく互いに拳を突出し、それに合わせると二人はその場から走り出すのであった。

◇

「じーさーん！　後始末はまだぁ？」
　アジトへと戻ったフリードは、バルパーの研究用に使っている部屋の前で待機していた。アジト周辺で追手を上手く巻いた二人は、すぐにこのことをコカビエルへと報せる。コカビエルから戻ってきた答えは簡素なものであり、今まで使用してきたアジトを破棄するので、痕跡となるものを一切残すなというものであった。
　フリード自身特に荷物になるようなものは所持していない為すぐに後始末は出来たが、バルパーの方は膨大な研究資料が有る為、それなりの時間が必要であった。
「別に私を待つ必要は無い。コカビエルの下に行っても構わないぞ」
　バルパーはそう言いながら分厚い資料の束を手に持つ。すると資料は手の中で発火し一瞬にして灰となって崩れ去った。
「じいさん、いいの？　それってあの堕天使を使って実験してたときの資料じゃなかったっけ？」
「問題ない。全てここに納めてある」
　手に付いた灰を払った後、自分の頭を人差し指で軽く叩く。
「流石はじいさんだことで。で、ホントに先に行っていいわけ？」
「構わんよ」

「んじゃ、お先に失礼しまーす！」
フリードがバルパーの部屋の前から立ち去って行く。完全に居なくなったのを確認してから、バルパーは資料の廃棄を止めてその場から移動する。バルパーが立ち止まった先にあるのは壁であったが、そこで手を一振りすると壁に術式が現れ、発光すると壁の中心が左右に開かれ、そこに新たな空間が現れる。
術式によって形成された数メートル四方の狭い空間。その内部には装飾などなく、床壁天井全て白一色であった。そしてその中心部には、長方形の物体が一つ置かれている。箱と思わしきその物体は長さが二メートル程あり、成人男性が一人入れるぐらいの大きさがある。その箱の前で密かに嗤う。
「くくくく、エクスカリバーの実験が終わればコカビエルにはもう用は無い、フリードも同様にな。尤も、簡単にはこちらを見逃してはくれる筈がないがな。――そのときになったらお前の出番だ」
箱の表面を撫でながら中に話し掛ける。そこで何か思い出したのか一旦空間の外に出る。そして数分後戻ってきたバルパーの手の中には筒状のケースがあった。
「ついでにこれも置いておこう。――何の役に立つのかは今の私には分からない。だが長年の勘が囁くのだ。コレを手元に置いておけ、とな」
箱の側にケースを置く。中は液体によって満たされており、そしてその液体の中には

「さて、私の準備をすすめるとしよう。全ては私の『夢』の為に」

◇

「この辺りの筈だけど……」

廃墟が連なる場所で、イリナは表情を険しくして辺りを探っていた。エクスカリバーが放つ独特の気配を感じ取りながら、フリードとバルパーの追跡をしていたイリナとゼノヴィアであったが、この地区へと逃げ込まれたのと同時にプツリと痕跡が途絶えてしまい、二人を完全に見失ってしまっていた。

廃屋、廃工場などが無数にある為、時間を惜しんだイリナとゼノヴィアは手分けして探すこととなり、今に至る。

イリナが今居る場所は、何処かの工場が使っていたと思われる従業員用の駐車場である。長年放置してあったせいか、アスファルトの隙間から雑草がいたる所に生えており、それによって地面が凹凸としていた。

いつ奇襲されるか分からない為、既に『擬態の聖剣〈エクスカリバー・ミミック〉』は剣の状態で構えており、常に周囲に神経を張り巡らせている。

いつ相手が来ても戦える。身も心も戦う準備が出来ているイリナ。そのとき――
「まるで子犬だな」
蔑むような声と共に、コカビエルが空から舞い降りる。
「コカビエルッ！」
「初めまして、教会から遣わされた哀れな走狗、聖剣使いよ」
いきなり現れた首謀者を前にしてイリナはその名に怒気を込めて叫ぶが、対照的にコカビエルは冷笑を浮かべるだけであった。
「ああ、こうして目の前に立ったのはいいが、もっと質の良い人材が居ないのか教会は？　期待外れもいいとこだ。欠伸が出そうになる」
イリナの実力を一瞬にして判断したコカビエルの口から出たのは侮蔑の言葉。エクスカリバーを前にしても、明らかに見下し軽んじていた。そのような態度にイリナも黙ってはいられない。
「古の堕天使にして『神を見張る者〈グリゴリ〉』の幹部、コカビエル！　聖剣と仲間の命を奪った罪、神の名の下に断罪する！」
「神の名の下に、か。ククククク」
イリナの言葉に気になる部分があったか、コカビエルは喉の奥で笑う。それを挑発と捉えたイリナは、構えていないコカビエルに向かって、躊躇う事無くエクスカリバーを

振るった。
明らかに聖剣の間合いから外れた位置からの一振り。しかし、イリナの持つエクスカリバーなら、すぐさまそこは間合いの中と化す。エクスカリバーの先端が使い手のイリナの意志を感じ取り伸びる。一メートル程の剣身は数倍の長さとなり、鞭のようにしなりながらコカビエルの首を狙う。
しかし、コカビエルはそれを鼻で笑うと、振るわれた聖剣に左拳を叩きつける。エクスカリバーの剣身が大きく湾曲しながら地面へと叩きつけられる。その衝撃はエクスカリバーを通じてイリナの両手まで伝わり、その痛みと痺れをもたらす。
「所詮は砕けた聖剣の欠片か」
失望を漂わせるコカビエル。恐るべきことに、手の甲を聖剣の腹ではなく刃に当てられたにも関わらず、傷一つ付いてはいない。並みの悪魔ならば触れるだけで消滅する危険が有り、耐性がある天使や堕天使でもそれなりの効力を発揮する聖剣の光。それに触れても一切傷を負っていないということは、単純に考えて、コカビエルの内包する力がエクスカリバーを軽く凌駕しているということである。
エクスカリバーを以ってしても掠り傷を負わせられない。イリナは焦る気持ちを押さえながらどうするべきか考える。
（一旦引いてゼノヴィアと合流する？　ゼノヴィアの『破壊の聖剣』、もしくは『アレ』な

ら何とかなるかも……と思ったけどまずここから引くのが無理みたい）

地面に刃を立てているエクスカリバーを引き戻しながら、頭にいくつもの策を立てる。そんな心情を見透かしているのか、険しい顔をするイリナに対し、コカビエルは悪意を込めた笑みを向けた。

「色々と考えているな？　何を考えている？　ここからどうやって離脱する方法か？　この俺の首を落とす為の戦略か？　それとも自分の状況をばれないように相方へと伝える方法か？　考えろ考えろ、その方が戦いの質が上がる」

上から目線で話し掛けてくるコカビエルに内心苛立ちを覚えるが、言っていることのどれもこれもが的中している為、下手に言い返すことは出来なかった。少なくとも戦いにおいては、赤ん坊と大人以上の年季の違いがある。言葉一つでも墓穴に繋がる危険があった。

「さっきから難しい顔ばかりしているな、どうせなら笑えばどうだ？　神に仕えながらも欲に溺れ堕落した天使が目の前にいるんだぞ？　使命感で震えてこないか？　神の名の下で信仰を積めて幸福感に包まれないか？　神に殉じて笑ってみせろ聖剣使い」

「生憎、堕天使に見せる笑顔はないわ、残念ね。そろそろ口よりも手を動かして見せたら」

イリナの挑発を混ぜた言葉にコカビエルは小さく笑い、長く伸びた髪を手櫛で軽く撫

でる。
「舌戦を好みではないか？　まあ、俺も好かんがな。――ああ、そうだ。なら最後に一言だけ言っておこう」
　コカビエルは赤く染まった瞳でイリナを見る。その目には獲物を嬲るような光があった。
「――紫藤イリナ」
　その一言にイリナの真剣な表情は崩れ、下から信じられないという驚きと動揺に満ちた顔が露わになる。聖剣使いの情報は教会にとって機密というべきものであり、イリナたちも上からの許可が無ければ、外に漏らすことなどまず出来ない。今回は牽制という意味も含めて、悪魔側であるリアスたちに名と身分を明かしたが、イリナの名を口にしたのが堕天使側であるコカビエルとなれば話が違ってくる。いつ、いかなる状況で情報が相手側に流れたのか。そのことが激流のような勢いで、イリナの頭の中で目まぐるしく動く。
「どうした？　何をそんなに混乱している？　たかがお前の名前を呼んだだけだろう？　もう少し気をしっかりもったらどうだ。自分の故郷の一つで無様を晒したくはないと思うが？」
　イリナの混乱を更は加速する。名前だけではなく、イリナがこの街で育ったという個

人の詳細な情報まで把握していたからだ。コカビエルが名を知っていたのは、この街に派遣したエクソシストたちの誰かを、術によって吐かせたと最初に考えた。だが、名だけではなくこの街で育ったことがあるという情報まで知っていた筈がない。

（なら一体どこから――！）

「どうやって知ったのかなんて少し考えれば辿り着くだろうが、お前たちのような人種だと難しいかもしれないな」

「……どういう意味？」

「自分の視点から見た信じるもの全てが正しい、教えられたこと全てが正しい、といった輩だよ」

勿体ぶった言い方に、言い様の無い苛立ちを覚える。堕ちた天使の言うことなど全て戯言、こちらを惑わす為に、意味深と捉えてしまう言葉を並べているに過ぎない。そう自らに言い聞かせると、イリナは胸の前で十字を切り気持ちを切り替える。

「これ以上貴方の戯言に付き合うつもりはないわ。私は私の使命を果たすだけ」

「所詮、狗は狗か」

侮蔑の言葉に耳を貸さず、イリナは再びエクスカリバーを振るう。相手が同じことを繰り返してきたことでつまらなそうに鼻を鳴らし、コカビエルも同じように左手を掲げたとき、その目が軽く見開かれる。

先程まで迫っていた筈の剣身が消えていた。イリナの手には鍔も柄もある。しかし剣身だけが見当たらない。フリードの所持しているエクスカリバーの能力ならば容易いことではあるが、イリナの持っているエクスカリバーにそのような能力が備わっていることなど情報には無い。

何処から来るのか。このときコカビエルは、考えるよりも先に行動に移っていた。瞬時にその場から数歩程後退する。それは長年戦ってきた者としての経験が肉体に働きかけた結果であった。後退したコカビエルは頬に違和感を覚える。触れてみると指先に血が付着していた。数センチ程の裂傷がそこに刻まれていたのだ。

指先に付いた血を見て口の端を歪めて笑うと、舌でそれを舐め取る。そしてその笑みをイリナの方に向けた。

「今のは中々面白かったぞ。たかが聖剣使い一人相手に、血を流すとは思わなかった」

「次は頬の皮一枚じゃ済まないわよ」

「その意気だ。もっと殺気を滾らせろ、もっと俺を殺す想像を働かせろ、俺の命に手を届かせてみろ。でなければ俺の退屈は紛らわせられない」

手招きをして相手の攻撃を誘うコカビエルに、イリナは背中に冷たい汗が流れるのを自覚した。イリナの持つ、とっておきの一つを使っても、皮膚を少しだけ裂いた程度で済まされたことですら凄まじいのに、その斬られた本人は、正体不明の攻撃を受けても

怯むどころか、初めに会ったとき以上の重圧を放って、次の攻撃が来るのを待っている。狂人のそれと言ってもいい相手に、攻めている筈が精神的な劣勢を感じさせられていた。

汗が滲み出て来る手でエクスカリバーの柄をしっかりと握ると、鍔と地面とが水平になるようにして構え、剣身が未だに消えているそれを横薙ぎに振るう。

一見すれば滑稽に見えるイリナの動作。だが確実にその刃は音も無くコカビエルへと迫っていた。コカビエルもそれを理解しているのか、イリナが剣を構えたときには浮かべていた笑みを消し去り、一瞬たりとも見逃さない様に目を細めていた。

エクスカリバーの持ち主であるイリナだけが把握している、見えざる剣の軌跡。コカビエルの目を掻い潜り目標へと辿り着くと、振るった剣を今度は手首を返して切り返す。これにより、コカビエルの首は宙へと舞う。

この時まではそう思っていた。

「成程」

納得したように呟いた声の後に、振るったエクスカリバーから強い抵抗が伝わってくる。信じられないといった表情で見るイリナ、その目に映ったのは、左手を喉元の前に持ってきていたコカビエルであった。

「見えないのではなく見え難いのか」

左手にはいくつもの頬の傷とよく似た赤い線が出来ており、そこから血が滲みだしている。手に刻まれた傷を感心した様子で眺めた後、コカビエルはイリナに目を向ける。『擬態の聖剣』は変幻自在に姿を変えることが出来ることは知っていたが、ここまで姿を変えられるとは少々驚きだ。蜘蛛の糸よりも細く、目視することが困難になる程の極細の刃、実際にこの手で触れているのに殆ど感触が無いぞ」

この戦いで初めて侮辱以外の、賞賛とも言える言葉を聞いたイリナであるが、全く嬉しくはない。それどころか、内心では強い屈辱を感じていた。コカビエルが言った様にイリナの奥の手として使ったのは、『擬態の聖剣』の特殊能力を最大限まで活用した、剣身の極細化である。通常の相手ならば、自分が斬られたことすら理解出来ずに消滅させられる程のものであり、まず初見では見抜かれないものであった。だがコカビエルは初撃を回避したどころか、二撃目を回避するのではなく態々首に巻きつけられるまで待ち、イリナがエクスカリバーを引く瞬間を狙って、手で絡め捕るという芸当まで見せつけた。

教会から授かり、今日の日までひたすら研鑽して得た力を容易く捌かれたことによって、言い様の無い哀しみが胸の裡に広がっていく。それはイリナにとって、致命的な隙を生みだした。

コカビエルが掲げていた左手を握り締める。手に巻き付いていた刃が更に深く肉へ

と喰い込み、流血を激しくするが一切構わない。そして右手を持ち上げ虚空を掴む。肉に喰い込んでくる感触が伝わって来る、その手の中には、確かにエクスカリバーの刃が握られていた。

両手で掴んでいることを確認すると同時に、コカビエルは両手を一気に引く。下手すれば手や指が千切れ飛ぶ危険性があるにも関わらず、行っているコカビエルの顔には、それすら楽しんでいる余裕さえあった。

コカビエルの引き寄せる力に、イリナの両足が簡単に地から離れる。単純な膂力の差故の結果である。このときイリナの両手は頑なにエクスカリバーを掴んだままであり、決して離そうとはしなかった。それは使命を受けた身としての意地であり、このままエクスカリバーが敵の手に落ちるのを黙って見ていることなど出来なかった為である。

その確固たる信念がこの先イリナを苦しめることへと繋がっていく。

イリナが自分の手の届く範囲まで引き寄せたとき、コカビエルは刃を掴んでいた右手を放し、今度はエクスカリバーの柄の部分を掴む。そしてそのままの流れで容赦なくイリナの腹部を膝で突き上げた。

呻き声を上げることすら出来ない程、イリナの体はくの字に折れ曲がる。だが、コカビエルは攻撃の手を休めることなく、そのまま同じ箇所に同じ威力の膝を再度叩き込んだ。

イリナの口から吐瀉物が吐き出され、コカビエルの黒のフードにかかるが、それには一切の関心を示さずにもう一度蹴り上げる。

それを何度も繰り返す。最初の方は吐いていたイリナも、終わりの方になると胃液すら吐き出せなくなり、呼気が抜けるだけの音が口から出て来るだけであった。だが、それでもエクスカリバーを掴む手は緩まず、意識も途絶えてはいない。

「くくくく、いい執念だ。やはりこれぐらいの覚悟が見えなければ殴り甲斐がないというものだな。――だが哀しいかな、それが戦う力に繋がっていたらもっと面白かっただろうに」

コカビエルの声も殆どイリナには届いてはいない。半ば意識は失いかけており、意識と無意識との境界を彷徨っている状態であった。ただそれでも、エクスカリバーだけは死守しなければならないという思いだけは、消えることは無かった。

柄を掴んでいた右手がイリナの顔を鷲掴みにする。既にエクスカリバーを振るう力も無いのか、両手が聖剣を握ったままだらりと垂れ下がる。

「まあまあ退屈は紛れた――これで戯れも終わりだ」

「あ……！　うう……！」

右手で頭蓋を締め上げ続ける。その痛みに途切れ途切れに悶える声がするが、やがてそれが聞こえなくなったときイリナの膝から力が抜け、エクスカリバーの柄から手が抜

け落ちていく。持ち主の意識が完全に途絶えたせいで元の形状へと戻った『擬態の聖剣』を奪うと、コカビエルはその辺りにゴミでも捨てる様に、イリナを放り投げた。
「あれぇー、もう終わっちゃったの？　コカビエルの旦那」
　腰に三本のエクスカリバーを差したフリードが、このときになって姿を現す。しかし既に相手が敗北しているのを見て、若干気の抜けた様な表情をしていた。
「何をしに来た？」
「ボスの手伝いでもしてろってじいさんが言ってたもんで」
「要らぬ気遣いだったな」
　そのまま無言で、フリードに『擬態の聖剣』を投げ渡す。それを器用に受け取ると、フリードは他の聖剣と同じように腰へと差した。
「で、これはどうすんですかい？」
　地面に横たわっているイリナをフリードが指差す。微かに胸が上下していることから、まだ息が有ることが分かる。
「好きにしろ。もう俺には用がない」
　既に興味を失ったのかどうでもよさそうな返答。それを聞いてフリードは下卑た笑みを浮かべた。
「んじゃあ、味見してもよろしいってこって？」

「二度も言わすな。好きにしろ」
そう言うとコカビエルはイリナやフリードに背を向けて、その場から離れ始める。
「お許しも頂いたから、ちょちょいっと愉しんで！――後でバラそ」
ニタニタと笑いながら気絶するイリナの側に近寄り、纏っている戦闘服を両手で掴み引裂こうとした瞬間――
「おい」
「へ？　おぼっ！」
呼び声に反応し顔を上げたフリードが見たものは眼前に広がる靴底であり、そのまま踏みつけられると同時に蹴り飛ばされた。本日二度目となる顔面への痛打を受け、鼻血を撒き散らしながらフリードが飛ぶ。やがて臀部から地面に接触するが勢いは止まらず、そこから一回転して今度は後頭部を地面に接触し、更にもう一回転してコカビエルの横を跳ねていき、最後は背中から壁に衝突した。
「男女の情事に口を挟む趣味は有りませんが、流石に強姦は見過ごせないもので」
片足を上げて状態でイリナの側に立つ男、それはアダムであった。
「こ、この腐れ神父野郎がぁぁぁぁ！」
「結構強く蹴ったんですが頑丈ですね。あとその言葉、そっくり返しますよ」
鼻を押さえつつ聖剣を抜いて立ち上がるフリードに、アダムは冷笑を浮かべて挑発す

る。
「こいつが教会から派遣されたエクソシストの最後の一人か……」
「はい。どうも初めまして、アダムと申します」
　コカビエルを前にしても飄々とした態度を崩さないが、コカビエルの方はアダムの挨拶を聞いた瞬間、哄笑し始めた。
「初めまして？　アダム？　ククク、ハハハハハハハハハハハハハ！」
　声を出して笑うコカビエルの姿に、訝しむような表情でフリードが見ていたが、やがて笑いは止み、コカビエルはフリードにある命令を下す。
「その聖剣を持ってさっさとここから去れ」
「はぁ！　一体どういう――」
「お前ではどう足掻こうとこいつには勝てん。無駄死にする前にとっとと行け」
「ああ？　知り合いなの？」
　コカビエルは答えず、威圧を込めた視線だけをフリードに送る。これ以上詮索することは得策では無いと理解したフリードは、肩を竦めると二人に背を向けた。
「わっかりましたぁ！　素直にここからドロンとさせて頂きまぁす！」
　最後に一度、アダムを殺気を込めて睨むと、壁を越えて離脱していくのだった。
「いやいや、彼も帰ったことですし私も彼女を連れてここから御暇を――」

「下らん演技は止めろ、三流役者が。ここまで近づいて俺がお前に気付かないと思っているのか？」
　その言葉にアダムは薄ら笑いを止め、代わりに悪鬼を連想させる様な獰猛な笑みを浮かべる。
「やっぱりバレたか。相変わらず鋭いねぇ」
「ふん。数十年ぶりに会っても変わらんな、お前は。その姿は変装しているつもりか？　それにアダムだと――下らない言葉遊びだ」
　互いに友好的な気配は無く、ひりつく様な殺気だけが場を支配する。
「冷たいねぇ。仮にも打倒『魔人』で肩を並べて戦った仲だっていうのに」
「どうでもいいことだ。この件に首を突っ込んできたとなると、アイツの指示か」
「アイツ？　誰だそれ？」
「惚けても無駄だ。チッ！　どいつもこいつも俺を利用しようと陰でこそこそとしているな」
　露骨に不快感を示すが、アダムの方もそんなコカビエルの態度が気に入らないのか、笑みを潜め真剣な表情となる。
「テメェがつまらない理由で戦争を起こそうとしているのが悪いんだよ、このエゴイストが」

「三勢力の誰もが内に秘めていることを、俺が代表してやってやっただけだ」
「白々しい。もっとマシな言い訳が出来ねぇのか？」
　コカビエルは辛辣なアダムの言葉を鼻で笑う。コカビエル自身そのようなことを全く考えていないことを自覚していた。
「今更となってはどうでもいいことだ。……あの『魔人』の小僧が仕留めきれなかったのはお前の仕業か」
「大したもんだろ？　俺のペットは」
　コカビエルの脳裏に、シンに止めを刺そうとしたときの光景が浮かび上がる。
　四肢を光の槍で貫いて壁に張り付け、その状態で左目を抉り取った後に、光の槍を心臓に突き立てようとした。だがその直前、シンの足元の影が盛り上がり、巨大な壁となって二人の間を遮った。
　コカビエルは一旦距離を取り、そのまま槍で黒い壁ごとシンを貫こうしたが、壁の一部が真横に裂け、そこから大きな眼が現れた。その眼に見られた瞬間、コカビエルの体は麻痺し動きを止めてしまう。その隙に黒い壁はシンを覆うと影の中へと潜り込み、姿を消してしまったのであった。
「――まあいい。殺せなかったとしても大した問題では無い。……それでどうする？　このまま俺と戦うか？」

「生憎、テメェを倒すのは俺の役目じゃない。テメェの言った通りこのまま裏でこそこそとさせてもらう」
そう言ってアダムは気絶しているイリナを抱え上げる。
「なら誰の役目だというんだ？」
「決まってんだろ」
イリナを抱えた状態でアダムは指を三本立てる。
「『悪魔』と『龍』と『魔人』が倒すんだよ」

情報、新植

フリード、バルパーを追っている中、イリナと一旦二手に別れて行動していたゼノヴィアであったが、ある建物を前にして足が止まる。数階建ての廃ビル、そこから微かにではあるが、聖剣が持つ固有の気配が感じられた。

イリナを呼び寄せてから内部を探索しようかと考えたが、その間にバルパーたちが姿をくらます可能性があったために、そのまま内部へと突入することを決め、ガラス戸が半壊している入口を開き、中へと侵入する。

侵入者への罠を警戒していたゼノヴィアであったが、拍子抜けしてしまう程何も無く、そのまま一階でバルパーたちを探すも、痕跡は無い。そのまま二階へと上がり、そこでも一階と同じように探してみるも、手掛かりは無かった。

（情報によれば堕天使も複数従えていた筈だが……）

ゼノヴィアも、侵入に対して敵が何もしてこないどころか、気配すらないことを疑問に思いつつ、三階を目指して階段を昇る。しかし、三階付近になって、ゼノヴィアの足が止まった。

（いるな）

三階の階段側にある通路、分厚い壁一枚隔てているが、その向こう側に誰かがいる気配が感じられた。かなり器用に気配を消しているものの、戦いの中で磨かれたゼノヴィアの感覚は、相手を確かに捉えていた。

階段を音を立てないようにして一段上がる。すると、壁向こうの気配もそれに合わせて僅かに移動する。

（向こうもこちらに気付いているな）

ゼノヴィアは背負っていた『破壊の聖剣〈エクスカリバー・デストラクション〉』を抜き、封印の為に施していた布を解きながら、階段を一段一段上がっていく。

相手の出方を窺って行動することはゼノヴィアの性格には合わず、攻めるならば常に相手の先手を行くような気質があった。

エクスカリバーに巻き付いていた布が完全に解かれる。ゼノヴィアが立っている位置は三階まで残り三段の位置、そこからゼノヴィアは先手を仕掛ける。

「ふっ！」

エクスカリバーを肩に担ぐような構えをし、息を吐き出しながら、階段横の壁にエクスカリバーを叩きつける。エクスカリバーの刃が壁に触れると、一瞬にして罅が全体に奔り、次の時には数え切れないほどのコンクリートの破片となって、周囲に撒き散らされる。咳き込んでしまうような土埃の中で、ゼノヴィアはエクスカリバーによって破壊

した壁の穴に飛び込み、向こうにある通路へと移動する。舞う土煙の中、視界の悪くなった状況で周囲に瞬時に見渡すと、微かに見える人の姿。

ゼノヴィアはそれに向かって踏み込むと同時に、振り上げたエクスカリバーを振り下ろす。相手もゼノヴィアの存在に反応し、漂う土煙を裂きながら繰り出したのは、異なる刃を持った二本の西洋剣。

それが目に映ったとき、ゼノヴィアは振り下ろしたエクスカリバーを急停止させる。重量のある大剣を無理矢理力で止めたことで、両腕の筋肉が内側で悲鳴を上げて痛みを訴えて来るが、僅かに眉間に皺を寄せるだけで苦痛の声一つ洩らさない。

対して迫ってくる二本の剣も、ゼノヴィアの喉と心臓に、切っ先が触れる直前で寸止めしている状態であった。

「やれやれ。危うく敵と勘違いしてしまうところだったよ。いるならいると先に言ってくれ」

「――有無も言わずにいきなり壁を破って現れたら、誰だって反撃の一つぐらいはすると思うよ？」

土煙が収まり始め、輪郭だけの姿が鮮明になっていく。土煙の中から姿を現したのは木場であった。木場は手に持った二本の魔剣をゼノヴィアに突き付けているが、木場自身の額付近にエクスカリバーの刃を向けられている。

正体が分かり、お互いに向けていた剣を引く。
木場は制服に付着した汚れを払いながら話し始めた。
「どうやらこの建物にはもう誰も居ないみたいだよ」
「ならここは外れか」
「いや、そんなことはないさ。誰かがここに居たっていう痕跡はあったよ……でもそれ以外はいっそ清々しく思えるくらい残ってはいなかった。だから僕もここを後にしようとしていたんだけどね」
「コカビエル、バルパー、フリードの姿も無ければ、付き従っている堕天使たちの姿も無しか……どうやら間に合わなかったみたいだ」
ゼノヴィアが唇を噛む。みすみす相手を逃してしまったことへの悔しさが、全身から滲みだしていた。
「……もう一人の彼女はどうしたんだい？」
好ましい相手とは思っていないが、それでも傷つき、苦しむ姿を見て、悦に浸るような下卑た感覚を、木場は持ち合わせてはおらず、気を逸らすように別の話題を振る。
「……イリナとはこの建物に入る前に二手に別れた」
「なら早く見つけて合流した方が良い。もしかしたらまだ近くに敵がいるかもしれないからね」

探すのを手伝うよ、と言って階段を降り始める木場であったが、数段ほど降りたとき、足を止めて背後を振り向く。そこには軽く目を見開き、驚きの表情をしているゼノヴィアが棒立ちしていた。
「どうかしたかい？」
「……いや、手助けしてもらうことは有り難いが、あまりにあっさりとした態度で少し、ね。キミたち悪魔とは一応同盟を結んでいるが、正直キミの過去からして、ただ『赤龍帝』に義理立てして協力していたと思っていたからね」
木場とゼノヴィアたちを結んだ一誠たちの存在が居ないにも関わらず、協力的な態度をとることに疑問を思っての言葉であった。
「君の言いたいことはよく分かる。はっきりと言わせてもらうけど、今でも君たちのことを好ましく思ってはいない。……これがただの八つ当たりだっていうことは、自覚しているけどね。それでも、中々割り切れないんだ」
困った様に眉を下げ自嘲する笑みを浮かべる。
「ならなおのこと、私たちに手を貸す理由が理解できないな。今から彼らの下に行っても、私は別に構わないぞ？」
「それもちょっと出来ないかな」
木場の言葉にゼノヴィアは不審な目を向ける。親しいとは言えない相手のため、意図

が全く理解で出来なかった為に。
「皆と協力するって言っておきながら、バルパーに過去を触れられただけで頭に血が昇って、勝手な真似をしてしまったからね。……我ながら、自分の未熟さが痛々しいよ」
あのとき公園でバルパーが呟いた木場の過去の名。それを耳にした途端、憎しみも怒りも刹那の間だけ忘却し、頭が真っ白に成る程の動揺をしてしまった。そして次に起こったのは、過去の忌まわしいとも言える記憶の再生。日々、行われる実験という名の拷問。身も心も苦しみ悶えながらも耐え、いつか報われる日が来ることを夢見た時間。独りならばとっくに壊れてしまっていただろう毎日を、一緒に乗り切り、励まし合い、時には聖歌を口ずさんでお互いを慰め合った同志たち。そして、その同志たちが死に蝕まれ、果てていく姿。
それら全てが再生し終えたとき、木場の中に溢れたのは、身を焼き尽くしてしまうのではないかという激情。それを抑え切れることが出来ず、一人で先走った行動を取ってしまった木場であったが、時間が経過するにつれて、徐々にではあるが冷静さを取り戻していき、この建物の探索を終えてバルパーたちを逃したと悟ったときには、自己嫌悪だけが残った。
「同志たちが犠牲になる理由になったエクスカリバーも一人じゃ破壊することは出来ず、仇であるバルパーを目の前にしても指一つ触れることさえ出来なかった。おまけ

に、危険を承知で協力してくれた仲間たちを放って勝手な行動をする。……過去の同志たちにも今の仲間たちにも、僕は会わせる顔が無い……」
顔を掌で覆う木場。忌み嫌う相手の前で弱みを見せてしまう程に、その精神は参っていた。ゼノヴィアも、そんな木場の姿に掛ける声が見つからず、両者の間で沈黙が流れ続ける。
「そう自分を追い詰めるものじゃないですよ、木場さん。勝ち負けっていうのは、結局最後の最後で決まるものですから」
木場の耳に、聞き覚えがある声が入ってくる。そして、カツカツという足音を立てながら、階段を誰かが昇ってくる。
「――と私は思っています」
階段を昇ってきたのはアダムであった。にこやかに微笑む彼の背中には、目を閉じ、動かないイリナが背負われている。
「貴方は」
「イリナ！」
ゼノヴィアが声を荒げ、イリナの名を呼ぶが反応は無い。
「アダム神父、どうしてここに？　何故貴方がその娘を――」
「アダム？　彼がそうだと言うのか？　どういうことだ貴様！」

木場の言葉を聞いて、明らかな敵意を剥き出しにして、ゼノヴィアがアダムを睨みつけながら問い質す。
「おや、どうしたんですかゼノヴィア？　私はただ彼女が倒れていたのを発見したので、この建物で介抱しようとしただけです。――ああ、先程彼が言っていたアダムというのは、この地で私が使っている偽名です。流石に本名を――」
「見え透いた芝居はそこまでにしたらどうだ。私もお前のことは知っているが、少なくとも彼は、私たちのことを名で呼ぶことは一度たりとも無かったぞ……貴様は何者だ」
ゼノヴィアの指摘にアダムは微笑みを消し、口の端を吊り上げて人を食ったような笑みを浮かべる。
「やれやれ、すぐにばれちまうな。さっきも演技が下手だって言われちまったし、本当にショックだ。これが終わったら芝居の勉強でもするかねぇ」
あっさりと態度を崩すアダムに、木場も目を丸くする。少なくとも、初対面のときの飄々とした様子とは打って変わって、まるで別人のような荒々しさがあった。
「彼は本当に教会が派遣した神父じゃないんだね？」
「姿形は本人そのものだが、口調も雰囲気も態度もまるで違う。……彼は、私たち聖剣使いのことを恐れていたからな。真っ直ぐ目を向けられたことすらなかったよ」
それがこんな形で生かされるとはな、とやや自嘲めいた言葉を呟き、ゼノヴィアは背

負っているエクスカリバーの柄に手を伸ばす。
「ああー、最初の人選びから失敗だったって訳か。へっへっへっ、何事も思った通りに進まないもんだなぁ」
「彼に変装しているのか、それとも憑りついているのか！」
「どっちだと思う、お嬢ちゃん？　そのどっちかが正解だぜぇ？」
「下らない応答をするつもりはない。貴様が姿を模している彼は生きているのか死んでいるのかさっさと答えろ。そしてイリナもすぐに解放しろ！」
　見破られても動じる様子は無く、寧ろこの状況を愉しんでいる余裕すら窺える。そんな相手の様子に底知れないものを感じながらも、毅然とした態度でゼノヴィアは言う。
「そうカッカしなさんな。この顔の主は生きてるぜ。ちょいと身ぐるみ剥いで、何日かまともに喋られないようにしてあるが、命に別状はねぇよ。今頃、病院のベッドの上で良い夢見てる筈だ。このお嬢ちゃんも気絶はしているが命に別状は無い、傷の方の治療はこっちで済ませてあるぜ。このままグレモリーの御嬢さんのとこ――『赤龍帝』の家に運ぶつもりだったんで、その前にお前さんらに一言済ませてからにしようと思ったんでね」
「傷、だと？」
「コカビエルの奴と戦ってたみたいだぜ、このお嬢ちゃん」

その言葉にゼノヴィアと木場の顔色が変わる。
「イリナ！」
「おいおい、そう怒鳴りなさんな。寝る子を無理矢理起こすのはあまり感心しねぇぞ」
「黙れ。貴様の言葉を簡単に私が信用すると思っているのか？　今すぐイリナを降ろせ。でなければ斬る」
「待つんだ。今の状況で脅しをかけたとしても逆効果だ」
エクスカリバーの柄を握り締め、今にも抜き放ちそうになるゼノヴィアの肩を押さえ、木場が冷静になるように呼び掛ける。ゼノヴィアも状況を理解しているものの、エクスカリバーを構えることは無かったが、柄を握り締めた手から力が抜けることは無かった。
「僕からも貴方に質問をしていいかな？」
「何でも聞きな」
冷静さがやや欠けている状態のゼノヴィアに代わり、木場の方がアダムに話し掛ける。アダムは喉の奥で笑いながら、現状を愉しんでいた。
「貴方の言葉を信じ、彼女がコカビエルと戦っていたとしよう。彼女のエクスカリバーは今は何処に？」
「それなら奪われたぜ。コカビエルが白髪の神父のガキに渡して、どっかに持っていっ

ちまった」
「……そうかい」
　木場の顔に苦いものは走る。これで敵側に、過半数のエクスカリバーが揃ったということになる。イリナの持つエクスカリバーの能力を知っているだけに、更に厄介な相手になることは明白であった。
「エクスカリバーが相手の手中に収まるのをみすみす見逃したというのか、貴様は」
「そうだぜ。生憎、俺にとって聖剣は特に優先することじゃないんでね。まあ、御宅ら教会の人間にとっちゃ、面子に関わることだけどなぁ」
「そのへらへらとした笑い、今すぐに出来なくしてやろうか」
　イリナを人質にとっている為の余裕というよりも、本来の性格からくるものなのか、相手をからかう口調で喋り続ける。その言動にゼノヴィアは段々と苛立ちを増していき、話し方も恫喝するようなものへとなっていく。
「落ち着いてくれるかな。――そして、貴方もあまり彼女を刺激しないでくれると助かるかな」
「へへへっ、わりぃ。他人との会話が好きなもんでね。特にお前さんたちみたいな若い奴と話すとついつい楽しくなって長く話したくなっちまうぜ」
　ゼノヴィアを窘めつつアダムを注意する。自分以上に感情を昂らせている存在が側

に居る為か、冷静な対応をする木場。あるいは先程の、バルパーとの件を反省しているが故の態度なのかもしれない。
「単刀直入に聞きたい。貴方の目的は何なんだい？」
「まあ、こっちの都合で色々と振り回したしな……特にお前は最初に巻き込んだし、話せるだけ話しておくかぁ」
少しの間だけ笑みを潜め、思考するような表情となっていたが、すぐに木場の質問に応じる態度を示す。
「俺が聖剣強奪の件に関わっているのは、ある人物から頼まれたからだ。――先に言っておくがそれが誰なのかは言えねぇ。今は、な」
「……続けてくれるかな」
「そいつから頼まれたことは二つ。一つは、コカビエル討伐の件に、この街を縄張りにしているグレモリー家・シトリー家の跡取りであるリアス・グレモリー、ソーナ・シトリーのどちらか、あるいは両方を関わらせること」
「何だって？」
「と言ってもがっつり関わらせろって訳じゃねぇがな、調べれば名前が少し出て来る触り程度ぐらいが丁度良い」
木場の目が鋭さを増す。

「……僕に聖剣が来ることを話したのは、間接的に部長を巻き込む為のものだったのかい？」
「否定はしない。誤解の無いように言っておくが、上からの指示じゃなく、あくまで俺の独断だがな」
　告げられたのは、リアスを釣る為の餌にされていたという事実。復讐という感情を利用された木場。だが周りの予想に反し、アダムを睨みつけるだけで、それ以上のことはしなかった。
「そうかい」
「俺が言うのも何だが、もっと怒っても罰は当たらねぇと思うが？　こっちも半殺しにされても釣りがくることはしてる自覚はあるんだぜ？」
「……言いたいことは山ほどあるさ。でもそれは後回しだ。先に話が聞きたい」
　話の先を促す木場に、アダムは少々バツの悪そうな顔をする。内心では、利用していた相手が怒りから手を出してきた方が、利用していた側としてけじめをつけられスッキリすると考えていたが、冷静な対応をされたことで、気まずい消化不良な結果が残ってしまっていた。
「あああ、話の続きなんだが、頼まれたことの二つ目は、その上で今回のコカビエル討伐をグレモリー、シトリーが解決したということにする、ということだ」

「『神を見張る者』の幹部の退治を一悪魔にさせようと言うのか？　無茶なことを……いや、グレモリーとシトリーならば魔王の手助けがあると踏んだのか」
「そいつは違うぜ。魔王が出てきたら、それこそコカビエルの思い描いた脚本通りの展開になっちまう。あくまでリアス・グレモリー、ソーナ・シトリーのみの戦力で、コカビエルを倒したということにするのが重要なんだぜ。――それが一番丸く納まる結果になる」
　最後に付け加えた一言に、木場とゼノヴィアは訝しげな表情をする。確かな血筋は持っているものの、若手の悪魔がコカビエルを破ることで、一体誰にどういった得が生まれるのか。
「コカビエルによる今回の聖剣強奪は、お前さんらが想像しているよりも遥かに厄介な波紋を、あちこちに広げている。上の連中が予想していたよりも、下の奴らが考え無しの鬱憤を溜め込んでいたせいだな。これに便乗して行動に移ろうとしている、奴らの陰がチラついてしょうがねぇ……だが、コカビエルにとっちゃ都合のいい展開なんだろうがな」
「都合がいい？」
「コカビエルぐらいの相手を抑制するには、それと同等以上の力が必要だ。……コカビエルは、敢えてそれが現れることを望んでいるんだよ。そして目を付けたのが魔王であ

り、その実妹たちが縄張りを張っているこの街だ。コカビエルはなぁ、魔王を巻き込んで盛大な殺し合いがしたいんだよ」
「――馬鹿げている」
「その馬鹿げていることを本気でしたいんだよ。魔王を無理矢理呼び出し、それで『奴ら』も起こし、大戦争の狼煙を上げる――きっと止まらねぇだろうなぁ、『戦争〈それ〉』を待ち望んでいる連中はあちこちに潜んでやがる」
　鬱陶しそうに顔を顰めるアダム。だが木場はアダムの言葉を聞き、表情を凍り付かせる。聞かされた情報から、ある推測が頭に浮かんだからだ。
「……出来れば僕がこれから言うことを否定して欲しい」
「言ってみな」
「今回の聖剣強奪……堕天使以外にも、悪魔、天使の勢力の一部が手助けをしている」
「馬鹿な！　悪魔と堕天使が力を貸していたのならまだ分かる！　だが敵対している筈の天使までもが手を貸すなど――！」
　木場の推測をゼノヴィアは強く否定した。天使側までコカビエルに助力していたとなると、その下に就いている教会までも組んでいるということになる。もし仮に木場の推測が正しければ、今回の聖剣が奪われた件は――
「察しの良い奴は好きだぜ」

だがそんなゼノヴィアの言葉を打ち砕く、アダムの肯定。それを聞き、ゼノヴィアは立ち尽くしてしまう。
「信じられん！　私は！　もしそれが真実ならば私たちは……」
「悲観するのは早計だぜ、お嬢ちゃん。聖剣を取り返すことを望まない奴がいるのは事実だが、同時に取り返すことを望んでいる奴もいるのも事実。色々とめんどくさいことになってんだよ、外野は」
動揺するゼノヴィアを宥めながら、肩を竦めるアダム。それでも、ゼノヴィアの顔色は良くはならない。
「なら、貴方は三陣営の誰か、それもかなり上位の存在から、今回のことについて依頼されたということでいいですか？」
「まあ、そういうことだな」
表面上は冷静を保っていた木場であったが、内心ではかなり焦っていた。単なる争奪戦と思っていた今回の事件が、大規模な争いに繋がるかもしれないという事実は、かなりの衝撃である。
「コカビエルの奴も相当派手な前哨戦にしたいのか、あれこれ細工していてこっちも手一杯だぜ、本当によぉ。本来ならもっと別の形でグレモリーやシトリーのお嬢ちゃんに接触したかったんだがなぁ……こんな変装までしたのによぉ」

自分の頬を軽く引っ張るアダム。まるで造り物でも触っているようであった。
軽口を言うアダムを余所に、ゼノヴィアは冷静さを保つことが出来ないのか、唇を震わしながら動揺している。聖剣を握る手も解かれ、体の震えを押さえる様に、その手を強く握っていた。
「……今回の事件に教会も関わっているとしたら、一体何処まで関わっているんだ」
「聖剣の強奪に関しては最初から知っていて敢えて見逃したのか、本当にただ奪われたのかは知らねえ。分かっている範疇で言うなら、派遣した聖剣使いとエクソシストの情報を、コカビエル側に横流ししたことだ」
ゼノヴィアは固く唇を結ぶ。この街に潜入した時点で顔が相手にばれているのならば、この街で命を落としたエクソシストたちは犬死したということとなる。
「……そこまでして、一体何を望むというんだ」
「きっかけが欲しいんだよ。現状が把握できず、空気の読めない馬鹿な連中は。今度こそ共倒れになるかもしれない、戦争のきっかけがな」
口を歪めて笑うアダムの表情。そこにどんな感情が込められているのか、二人には分からなかった。
「その為には、是非ともコカビエルに大暴れして欲しいんだよ。堕天使たちはコカビエルに続けとばかりに戦火を広げ、悪魔は戦争を起こす大義名分を手に入れそれらを迎え

撃ち、天使は神の裁きと言って横槍を入れる。……まあ。格好つけて言っているが、結局は『俺たちが一番なんだよ』っていうのを証明したいんだぜ、きっと」

アダムの話に、二人は暫しの間呆然と立つ。話の内容が飛躍していき、気付けば大事の中心に立たされていることになっていた為に。

「……イリナが眠っていて助かったよ。私よりも信仰心が強い彼女には毒が強すぎる。それなりに割り切っていると思っていた私でもかなりくる」

力無く呟くゼノヴィア。信じたくないと言っていた彼女ではあるが、心の何処かでアダムの話す内容を否定し切れない自分がいるせいか、精神にかなりのダメージを受けていた。

「――取り敢えずここまでが話せる内容って所だな。後のことはお前さんら次第ってことで」

アダムはそう言うと二人に背を向け、上がってきた階段を降りようとする。

「待ってくれるかな」

「ああ？」

木場の呼び掛けに応じ、アダムは足を止める。

「貴方が僕たちを利用しようとしているのは分かった。……でも僕は、例え戦争の引き金となる戦いだったとしても、僕は僕と死んでいった同志の為に、聖剣への復讐を優先

すると思う」
「別に構わないぜ。……ていうか話してて思ったんだが、お前って本当に真面目だなぁ」
　世界よりも自分のことを優先すると宣言する木場に、アダムはあっさりと肯定する。むしろそのことを態々言ってくる生真面目さに、心配そうな眼差しまで向ける始末であった。
「全部が全部こっちの都合で動くなんて思っちゃいねぇぜ。このことも別にリアスのお嬢ちゃんたちに話しても構わねぇ」
「その結果、貴方が望まない展開になったとしても？」
「俺は神様じゃねぇんだ。結果が分かってから動くかぁ？　俺はしねぇ。このことを話して今までのことが全部無駄になっちまったとしても、それを選んだのは俺だ。――やることは粗方やったし、後は流れに任せるだけだ。簡単に言えば賭けだな、賭け」
　無責任とも取れるアダムの言葉であったが、木場はそのことに対し異を唱えることはしなかった。木場は思う、あのとき彼から聖剣の話を聞かされていなかったら、今の自分はこのような立場になっていたかどうか。
　答えは否であった。
　聞かされていようといまいと、遅かれ早かれ自分は聖剣のことを知り、それを追い続け挑んでいただろうと思う。今、自分がここに居るのは、目の前の人物によって良い様

に操られていたのではなく、自分の意志で選択して立っている。
　アダムの行為を咎め、全ての責任を擦り付けるような真似をして、自分の意志と、そんな自分に手を伸ばしてくれた仲間の意志を汚すようなことは、木場には出来なかった。
「――話してくれてありがとう」
「立場的にはこっちが礼を言う側だと思うんだけどなぁ。といっても、言ったら言ったで嫌味にしか聞こえねぇな――ああ、それと」
　眉間に皺を寄せて少々困った表情を造っていたが、急に真剣な表情となる。
「コカビエルの連中、今夜中に大きく動くらしいぜ」
「それは確かな情報なのかい？」
「本人が言ってたからな。このお嬢ちゃんを拾ってきたときに」
　あっさりと衝撃的なことを口にする。つまりアダムは先程までコカビエルと会って、尚且つ生きて戻って来たということである。二人ともてっきり、アダムが隙を突いてイリナを助けたとばかり思っていた。
「……よく生きて戻ってこれたな」
「こっちに全く戦う気が無かったから、興味なくして言うだけ言って帰っちまったよ」
「そんな簡単に。……それにしても今夜か」

「場所は言っていたのかい？」
「そこまでは流石に言わなかったな。だが相手は派手に動くつもりなんだ。動けば一発で分かると思うぜ？」
詳細とは言えない情報であったが、少なくともいつ動くか把握していれば、それなりの対応をすることは出来る。
「……分かった。こっちで調べられるだけ調べてみるよ」
「それじゃあ一旦おさらばだ。次に会うときは、コカビエルを倒したときにでも会おうぜ」
アダムはニヤリと笑う。すると、突然その身体が背負っているイリナごと炎に包まれた。思わぬ事態に木場とゼノヴィアは唖然とし、顔面にいきなり叩きつけられた熱波に、反射的に顔を背けてしまう。
そして再びアダムたちの方へと目を向けたとき、そこには誰も立っておらず、先程までの炎も幻であったかのように消え、周囲には焦げ跡一つ無かった。
「消えた……」
唐突な展開に、二人は思わず立ち尽くしてしまう。が、いつまでも無駄に時間を浪費しているわけにもいかず、何とも言えない気分を押し込んでから、これからのことについて話し始めた。

「――これからどうする？」
「とりあえずキミはイッセーくんの家に向かってくれるかな。場所は知っているよね？」
「イリナが本当に届けられているのかを調べるためか」
「それもあるね。キミだって彼の言葉を完全に信じたわけじゃないだろ？　念のために確認しに行った方が良い。バルパーたちは僕が追う――それに今のままじゃ、彼女のことが心配でキミに足を引っ張られるかもしれないからね」
突き放す言葉を混ぜる木場に、ゼノヴィアは苦笑する。強く否定したかったが、木場の言葉はあながち的外れでは無かった。
「ふっ、ならその言葉に甘えさせて貰おうか『先輩』。ついでに、さっきのアダムという偽神父の言葉を伝えておけばいいのかな？」
「お願いするよ。……今の僕じゃ、部長たちと面と向かって話せる自信がないからね」
「了解した。イリナの安否の確認と先程の情報を伝え次第、私もコカビエルを探す」
ゼノヴィアはそう言って、階段を素早く降りて行く。ゼノヴィアの姿が完全に見えなくなったとき、木場は壁に背を預け、嘆息した。
「――こんなことになるなんてね」
露骨な態度は見せなかったものの、アダムの話を聞いて、木場自身もそれなりの

ショックを受けていた。一度は捨てた教会の教え、その教会内の一部の存在が今回の悪事に関わっていることに、多少なりとも心を揺さぶられ、未だ完全に信仰を捨てきれない自分の青さを自覚させられ、更に心を揺さぶられる。

一誠の家に向かったゼノヴィアも、今の自分以上の動揺を抱えているのではないかと木場は思い、ゼノヴィアが走り去って行った方向に、自然と目を向けた。

しばらくそうしていた木場であったがやがて背を壁から離し、一段一段階段を降りて行く。その間木場は、アダムからの情報を頭の中でまとめていた。

（堕天使の幹部でも、コカビエルの行動は他の幹部の意に反するものだったのかな？協力する下級堕天使は何人かいたみたいだけど……天使側も教会の人間を指示して動かしていたのか……コカビエルと同じ単独？それとも複数？……そして悪魔側にも協力する存在が居ると言っていたけれど……）

悪魔側で天敵である堕天使に協力する可能性がある存在。その存在について、すぐに思い当たる節があった。

（まさか『旧魔王派』が関わっているのか？）

◇

場所は変わり、とあるマンションでの一室。そこの寝室では、怪我の養生をしていた筈のシンが独り悶え苦しんでいた。

用意されてあった食事を全て平らげ、いざこの部屋から出ようとしたとき、突如体に異変が起こった。生涯で味わったことの無い激しい頭痛、そしてその痛みからくる猛烈な吐き気、顔色は一瞬にして死人の様な土気色へと変わる。

右目から見える視界が溶けたように歪んで見え、まともに立つことも困難な状況で、シンは胃から込み上げてくるものを押さえ込みながら、何とか立ち上がろうとする。震える手を伸ばして、近くにある机に爪を立てるようにして、体を持ち上げる。それだけの動作に体中から汗が吹き出し、額に浮き出た汗が床に落ち、黒い染みを造る。

歯を食い縛り、辛うじて立ち上がったシンはふらつく足で、そのまま倒れ込む様にして、扉近くの壁に勢いよくもたれ掛かる。その際、かなり強くぶつかってしまったために壁の一部が陥没してしまったが、今の状態ではそれに気を配ることも出来ない。

頭痛に表情を歪めながらドアノブを回し、扉を開く。ただそれだけのことなのに、今のシンには、扉が異様に重く感じられた。

壁にもたれながら、這うようにして歩く。何処にどんな部屋があるか全く分からない為、手当たり次第扉を開き、中を確認しながら奥へと進む。やがて目当てである洗面所を見つけたとき、倒れ込むような形で洗面台にもたれ掛かると、今まで我慢していたも

のが一気に決壊した。
洗面台の蛇口を捻りながら、胃から込み上げて来るものを吐き出す。不思議なことに、嘔吐した吐瀉物には先程食していたものが混じってはおらず、ただ胃液のみが吐き出され、次々と出されていく水に流され、排水口へと消えていく。本来ならば疑問に思うべきことであるが、吐き続けるシンにはそれについて深く考える余裕は無く、吐き気が収まるまでひたすら吐き続けていた。
それから十数分が経過する。最早胃液すら出せない状態となって、ようやくシンの吐き気は薄れた。しかし未だに頭痛は弱まらず、それどころか、抉られた左目の奥が熱を帯び始めた。
思わず巻きつけてある包帯を解く。左目が有った場所の違和感はどんどんと増していき、蠢いているような感触へと変化していく。衝動的に左目の中を掻き毟りたくなるのを堪えながら、少しでも気を紛らわせる為に、出続ける水を両手で掬い、叩きつける様にして顔を洗う。滲み出ていた汗を全て洗い流したシンは、そこで顔を上げる。
「……なっ」
そして言葉を失った。
洗面台に設置された鏡。そこには映るべくして映るシンの姿は無く、替わりに人の輪郭をした影が映っていた。

あまりに激しい頭痛から憔悴し、幻覚でも見ているのかと最初に思ったが、その影には何故か既視感があった。

シンが立ち尽くして見ている中、鏡に映る影は一人でに動き始めた。垂らしていた右手を持ち上げる。その右手は影とは違い、肘の辺りまで人の形をしており、シンと同じ紋様が妖しく輝いていた。

右手が顔の前まで移動したとき、影の左目にあたる部分に線が走り、その線が上下に開くと、そこから眼が現れた。

黒い影の中で一か所だけ、白色の光を爛々と放つ眼。シンはその場から動くことが出来ず、ただ黙ってその眼を見返していた。

右手の指先が、影の左目に伸びていく。そのまま指先は眼の周囲に沈み込み、右手が引かれると、音も無く左目が影から抜き出される。

左目を失った影は、眼を掴んだ右手を見ているシンの方へと伸ばし始めた。影の右手が鏡に触れる。すると、そこから外へと飛び出し、見ているシンの目の前にまで伸びてくる。

シンは黙ってそれを見ている。何故か恐れは無かった。自分でも気づくことが出来ない程、それを当たり前のように受け入れていた。

左目を失った場所に、影から抜き出された眼が触れる。

そして――

統合、歪愛

夕日も完全に落ち、夜というべき時間帯。星の光が見え始めても一誠の自宅のある一室、正確に言えば一誠の部屋からは絶えず会話が続いていた。

一誠の部屋の中には、一誠を始めとしてリアス、朱乃、小猫、アーシア、ピクシー、ジャックフロスト、ソーナ、椿姫、匙と合計十名も集まっており部屋を圧迫していた。幸い体の小さなピクシーとジャックフロストはスペースを取らない様にピクシーはジャックフロストの頭の上、そのジャックフロストは小猫の膝の上で抱えられていた。

公園での戦いが終わった一行はそのまま一誠の自宅で、今後の方針について話し合いをしていた。このとき大人数で帰宅してきた一誠に、一誠の父と母も最初は目を丸くしていたが、すぐに快く招き入れ、夕飯までごちそうするという懐の大きさまで見せていた。ちなみに招いた理由として学園で今度行われる行事について生徒会と共同して行うこととなったが、完了していたと思っていた打ち合わせに漏れがあることが発覚し、急遽それを埋める為に集まったのだという即興のでっち上げであった。

その際、偶然一誠が聞いてしまった会話であるが――

「まさか、あのイッセーがリアスさんやアーシアちゃん以外でこんなにもたくさんの女

の子を連れてくるなんて……！　母さん！　今夜は赤飯だ！」
「ええ！　当然よね！　――いやだ私ったら何だか目頭が熱くなってきちゃった……」
「ふふ、その気持ち分かるよ。俺も正直泣きそうだ」
――という、息子として女子を家に招き入れたことで、親をこれほど感激させたことに、喜ぶべきか哀しむべきか何とも言えない気持ちとなっていた。その晩、テーブルの中心に置かれた大量の赤飯を見て、一誠以外は疑問符を浮かべていた。
そして一同は夕飯を終え、話し合うこととなったが、内容が内容であった為に一般人である一誠の両親に話を聞かせる訳にもいかず、居間では無く一誠の部屋で話し合うこととなった。
主に話し合った内容は、椿姫が感知した術式の場所の確認とそれを破壊する為のメンバーの割り振り。リアス、朱乃、ソーナがアダムから断片的に得た情報を、他の皆との共有。万が一敵の妨害があったときの為に、緊急脱出用の簡易転送魔法陣を刻んでおくなどをしていた。
今後についての方針や対策が粗方決まったとき、一誠の自宅にチャイムの音が響く。日も落ちてそれなりの時間が経過している為、来客の訪問を皆が珍しく思いつつも、話し合いの方へと意識を傾ける。
一階では廊下をスリッパで走る足音と一誠の母のハーイという返事が聞こえてきた。

そのままインターホンに出てチャイムを鳴らした人物と一言二言交わした後、二階に居る一誠に向かって階段下から呼びかける。

「イッセー！　あなたにお客さんよぉー！　アダムっていう人からぁー！」

思わぬ人物の来訪に、全員驚いた様に一誠の母がいる方向に目を向けてしまう。

「わ、分かった！　今すぐ行く！」

慌てて一階へと下りて行く一誠の後を何人か付いてくる。玄関のドア前まで移動し、軽く息を吐いて深呼吸をするとドアを開けた。

しかし、予想に反してそこには誰も立っていない。思わず拍子抜けしてしまうも近くにまだ居ないかと視線を動かしたとき、玄関のすぐ側で、壁に背を預けて座り込んでいる状態のイリナの姿を発見した。纏っていた白のローブは無く、戦闘用の衣装には汚れが目立つ。

「イリナ！」

一誠は目を閉じているイリナの肩を揺する。するとイリナは目を開けなかったものの、それに反応して声を洩らす。少なくともまだ命があることが分かり、一誠はとりあえず安堵の息を吐くと、座り込んでいるイリナの体を持ち上げて家の中に入った。

このとき一誠は気付くことが出来なかったが数軒離れた家の屋根にそれを見ていた人物がいた。

（それじゃあ、その娘のことは頼んだぜ『赤龍帝』。直接渡したらまた正体がバレそうなんでね、流石に三度目は御免だ）

胡坐をかき頬杖を突いていたアダムは立ち上がる。

「会うときはこんな面じゃなくてきちんとした面で会おうぜ、ドライグ」

そう言い残しアダムは屋根の上から姿を消すのであった。

「イリナさん！　一体どうして！」

「シッ！　アーシア！　シッ！」

一誠がイリナを抱えて戻ってきたことに驚き、付いてきたアーシアが声を上げてしまった。すぐに静かにするように促すが僅かに遅く、居間に居る両親が何事かと尋ねてきた。

「んー？　何かあったのかぁ？」

「イッセー？　お客さんと何かあったの？」

居間の方から近付いて来る足音。一誠たちの背中に冷たい汗が流れる。今この状況を両親に見せる訳にはいかない。

何かいい方法はないかと考えたとき、真っ先に動いたのは同じく付いてきたリアスであった。リアスは居間から出て来る前に自分から一誠の両親の方へと向かう。

「お父様、お母様、ちょっとよろしいでしょうか？」

「あら？　どうしたのリアスさん？」
「やっぱり何かあったのかい？」
「いえ、それとは関係無いことなんですが、まだ少し話しの方が長引きそうなので何か軽い料理を作って差し入れしたいと思いまして、そこで何かいい料理はないかお母様に相談したくて」
「あらあら、それじゃあ何品か教えてあげるわ。うふふ、やっぱりこういうのっていいわね」
「料理が出来たらお父様に味見をしてもらいたいのですが、構いませんか？」
「おおぉ！寧ろこっちの方からお願いしたいぐらいだよ。いやーこんな日が来るなんて幸せだなぁ！一日の疲れが吹き飛ぶどころか明日の活力まで湧いてくるよ」
　両親の興味が一誠たちの方からリアスの方へと傾く。この瞬間を逃さず一誠は、イリナを抱えたまま居間の前を走り抜けて一気に階段を駆け上がり、両親の目が届かない範囲まで逃れた。
　部屋に入ると、イリナを抱えた一誠の姿に部屋に残っていた面々が目を剥く。だが一階であったように声を出すことは無く、一誠が通るのに邪魔にならない様に部屋の隅に素早く移動し道を作る。
　一誠は意識を失ったイリナを自分のベッドの上に置く。すぐにアーシアもベッドの

側に移動し自らの神器『聖母の微笑〈トワイライト・ヒーリング〉』を発動させ、治癒を始めるが開始してほんの十数秒程で神器から放たれる光は収まってしまった。
「どうした、アーシア？」
「イリナさんに怪我は無いみたいです。ただ意識を失っているだけみたいです。良かったぁ……」
緊張した面持ちが一気に解放され、安堵の表情となる。それにつられて一誠も安堵の溜息を吐いた。
「イッセーくん、彼女はどうしてここに？」
「それが俺にも分からないんです。例のアダムって神父が来たっていうから見に行ったのに居たのはその神父じゃなくてイリナだったんです」
「ならアダムという人がここに運んできたということかしら」
「多分、そうなりますね」
朱乃の質問に若干困惑した様子で答える一誠。
「ちょっと失礼しますわね」
一誠の言葉を聞いた後に朱乃が眠っているイリナに一言断ってから、その身体を触り始める。その弄る手付きにどことなく官能的な印象を覚えながらも、触っている朱乃本人は至って真剣な表情であった。やがて粗方触り終わった朱乃は険しい表情を一誠た

ちに向ける。
「彼女、エクスカリバーを所持していないみたいですわ」
「ってことはイリナが気絶している理由って――！」
「コカビエルたちと一戦交えた可能性が高いと考えていいと思います。そして敗れた彼女をアダム神父が救い出してイッセーくんの自宅まで運んだ、と考えられますわ」
「なら何で姿を見せずにイリナだけを置いていくんでしょうか？」
「私にも分かりません。数日程行動しましたが、いつも読めない態度で笑みを浮かべているだけで、こちらに一切内心を見せようとはしていませんでしたから」
「私も同じ意見です。今回の件に関して深い事情を知っている様子でしたが、いくらこちらが聞いても答えを曖昧にしてはぐらかすだけでしたから……底が見えない人でした」
　朱乃、ソーナが苦い顔をしながらアダムに関しての印象を語る。その表情には相手を探りきれなかった自分に対しての不甲斐なさが込められているようであった。
「まあ、でもここにイリナを連れてきたってことは取り敢えず俺たちの敵じゃないってことでいいんじゃないですかね？」
「そうですよ、会長。ただでさえコカビエルたちに手を焼いているっていうのに、これ以上敵が増えるかもって考えると気が滅入るだけですよ！　それにそのアダムって奴、こ

の街に仕掛けられた爆弾、というか術式について態々教えに来たぐらいだし、こっち側の味方じゃないですか？」
「――あまり楽観的に考えるのはどうかと思いますが、逆に悲観的に考えるのもどうかということですね。とりあえず彼については後回しにしましょう」
「それがいいわね」
　ソーナの言葉を継ぐリアスの言葉。扉の方を見ると、大皿に山になったおにぎりを持って立っている。
「ひとまずこれでも食べて一息つきましょう。明日からはコカビエルたちが造った術式を破壊するのに忙しくなるから」
　部屋の中央にある話し合い様の運んできたテーブルの上に大皿を置く。
「……随分な量ですね」
「こういったときにはこういったシンプルな料理が良いってお母様がおっしゃっていたわ。冷めないうちにどうぞ」
　このとき一誠、匙の脳裏にほぼ同じ言葉が浮かび上がる。
『女性が、それもとびっきりの美女が作ったおにぎり』
　要らぬところで二人の観察眼がいつも以上の力を発揮する。
　三角形であるが均等な形で作られていないおにぎり、つまりそれは茶碗などという無

粋な道具を使わず、手で作っていることを示している。美女が素手で握ったおにぎり、それだけのことで金銭が発生しそうになる程の価値が付く。だがしかし直接素手で作ったとは考えにくい。まだ湯気が立つのが見えるおにぎり、つまり熱々のごはんの状態で握ったこととなるが、この際に少しでも熱を抑える為に包装用ラップを使用したかもしれない。

そう考えたとき一誠、匙はあることに気付き衝撃を受ける。皿を置いたリアスの手、袖を捲ったその腕に付着している水滴の数々。つまりそれが指し示すことは、リアスは熱いごはんを握る為に何度も手を水で冷やし、その度にごはんをおにぎりにしていたという事実。

その光景を思い描き、二人の目の端に熱いものが込み上げて来る。

「部長……！　有り難く、有り難く頂きます！」

「ええ、どうぞ。……どうしたのそんな泣きそうな顔をして？」

「俺も……頂きます！」

「匙もどうしたんですか？　兵藤君と同じような顔をして？」

真心込められたおにぎりにいざ手を伸ばそうとしたとき、窓ガラスを叩く音がした。皆が一斉に音の方を見ると、窓の向こう側には肩で息をする険しい表情のゼノヴィアが張り付いていた。

一誠は手を伸ばすのを止め、急いで窓を開ける。
「お前、どうして窓から！」
「それについては後だ。済まないが中に入れさせてもらうぞ」
驚く一誠の質問に答えるよりも先にゼノヴィアは一誠の部屋へと入る。そこでベッドの上で眠っているイリナの姿を発見し、安堵したように息を吐いた。
「どうやら……奴の言っていたことは本当だったらしいな……」
「奴ってアダムのことか？」
「ああ。……半信半疑だったが、とりあえずイリナが無事で安心した」
「なあ、バルパーたちを追っていたときに何があったんだ？　木場は一緒じゃないのか？」
「安心してくれ、そのことについても今から話すつもりだ。イリナの安否と、私たちがアダムから今回の件について新たに聞かされたことを話す為に私は戻ってきたんだ」
アダムが齎した新しい情報。その言葉に一誠たちの表情は真剣味を帯びる。周りの表情を見渡しゼノヴィアも語ろうとしたとき、彼女の視線がある一点で止まる。目線の先にあったのは大皿に盛られた大量のおにぎり。ゼノヴィアの喉がごくりと鳴るのを全員が見逃さなかった。
「……あの、食べます？」

気を利かせたアーシアが大皿をゼノヴィアの前に持ってくる。
「いや……それよりも……私が知ったことを……報告するのが……」
気丈な態度でそう言いつつも、視線は何度もおにぎりの方に向けられていた。明らかに意識している。一誠たちは知らないことであるが、ゼノヴィアもイリナもコカビエル探索の為に今日一日殆ど食べ物を口にしていない。戦闘や追跡による緊張状態の継続によって今の今まで忘れ去られていたが、目の前にある食べ物を見てしまったせいで沈まっていた飢餓感が一気に目覚め、本能を容赦なく刺激し始めていた。
「行儀が悪いけど、食べながらでいいから話してくれる？」
作った本人であるリアスがやや呆れながら言った瞬間、おにぎりの山の一角は目にも止まらぬ早さで崩れる。
「そういう――ことならば――私は――そうしよう――」
両手にいつの間にかおにぎりが持たれており、ゼノヴィアは頬をリスの様に目一杯膨らまし、咀嚼しながら離れて行動していた間どのようなことがあったのかを話し始めた。

◇

イリナを運び終えたアダムはその足で、この街で拠点としているマンションへと戻って来た。このマンションは今回の件について依頼してきた人物の所有物であり、アダムはそれを一時的に借りている。尤も所有者本人はこのマンションを借りてから一度も足を踏み入れてはおらず、実質アダムの為に買ったと言っても過言では無かった。

ドアノブに手を掛けたとき、一瞬であるがアダムは目を細める。

「お体大丈夫ですかぁ?」

そして、何事も無かったかのようにドアを開けながら、中に休ませているシンの安否を確認するよう呼びかけた。既に何人かには素の表情を見せているアダムであったが、取り敢えずは一応最後までアダムという存在を演じることに決め、不慣れな言葉遣いを使い続けている。

アダムの呼び掛けに返事は無かった。

そのまま寝室の方へと移動するとそこに寝かせていた筈のシンの姿は無く、近くにある机に置いてあった大量の弁当などは何処かに消えていた。

シンが居ないことにアダムは特に焦る様子は無く、部屋の中を隈なく探すということもしなかった。ドアを開ける前からシンがこの部屋に居ないことは大体察しがついていた為であった。それは出掛ける前に締めておいた鍵が開かれていたこともあったが、短い関わりの中でおおよそ把握したシンの性格から、いつまでもこの場所に留まっては

いないだろうという考えもあったからだ。
「若いっていうか、危なっかしいというか」
やれやれといった表情でベッドの上に腰掛けると、懐からシガーレットケースを取り出し、そこから煙草を一本口に咥える。そして煙草の先端に一指し指を押し付けると紫煙が立ち昇り始める。煙草に火が点くと指を離し、しばらく吸わずに口の端にぶら下げていた。
コカビエルとの一戦で死の瀬戸際まで追い込まれたシンを、事前に仕込んでいた『アレ』が救いだし、アダムがここまで運んで治療を施したが、正直シンが助かったのは、偶然に等しいと言っても良かった。監視目的で仕込んだ『アレ』については殆ど気まぐれであり、深い考えなど特にあった訳では無い。まさに偶々であった。
結果として命は救えたものの片目を失うという、中々でかい代償を払わせてしまうという事態になったが、これはコカビエルの行動を読み切れなかった自分の失態という自責の念がアダムの中にはあった。
そのときアダムは机の上に置かれている二枚の紙に気付く。一枚は自分が書いた置き手紙、もう一枚の折られた紙には記憶が無い。
それを手に取り開いてみる。開かれた紙には文章が書かれており、それに目を通したアダムはしばらく言葉を失っていたが、やがて喉の奥で笑い始めた。

紙に書かれていた文章はシンからアダムに宛てて書かれたものであり、そこには助けられたことに対する礼と食べた食料の代金についてのことが書かれていた。相手の几帳面さというべきか真面目過ぎるというべきか、相手の思わぬ書き置きに堪らず笑いが零れてしまう。

「くくくく。あー、あの木場って奴といいこいつといい真面目過ぎだろぉ。やっぱ若い奴って面白れぇなあ」

愉しげに笑うアダムは口の端に乗せていた煙草を一気に吸い込む。瞬時に巻紙部分が灰となり今にも下に落ちそうになるが、そうなるよりも先にアダムは舌を伸ばすと、まだ火が完全に消え終わっていない煙草を舌の上に乗せ、そのまま口の中に運ぶと躊躇いも無く嚥下してしまった。

「目ん玉一個無くしてるけどコカビエルたち相手にどこまでやれるかねぇ……まあ、『魔人』なら一個無くてもどうにかなるか」

脳裏に浮かぶのはかつて戦ったことのある魔人の姿。戦いの最中に腕一本を失っても構う事無く戦い続けていたのを鮮明に覚えている。

「色々と拝見させてもらうとするかぁ」

◇

夜も大分更けこんできた中、一誠は自室で制服を纏い壁に背を持たれて座り、ひたすら時が過ぎるのを待っていた。一誠の両端には同じく制服を着たリアス、そしてシスター服を着たアーシアが緊張した面持ちで静かに座っている。そこから少し離れた場所にあるベッドの上ではイリナが寝息を立てて眠っており、それを見守る様に側にはゼノヴィアが座っていた。

戻ってきたゼノヴィアが一誠たちにもたらした情報。今夜中に行動を起こすということに一誠たちは眠る訳にもいかず、いつでも臨戦態勢が取れるように準備をしていた。

話し合いをしていたメンバーは一誠の両親への迷惑を考慮し、全員一誠の自宅で泊まる訳にもいかず、今はこの場に居ない朱乃、小猫、ピクシー、ジャックフロストも朱乃の家で一誠たちの様にして待機し、ソーナたちもまた同様に、ソーナ宅で眷属全員を集合させ待機しているのであった。

「……部長、少しいいですか？」

「何かしら？」

一誠の呼び掛けに応えるリアス。その声はいつもよりも上擦った様に聞こえた。だが無理もないと一誠は内心思う。今回の件が想像以上に陰謀渦巻くものだと聞かされ

てから、一誠は胸の裡に留まる錘のような緊張感を味わっていた。ましてやこの街を縄張りとしている立場、間接的とは言え堕天使を引き寄せた魔王の妹という立場、一誠が感じているものとは比べものにならない程の重圧を感じているに違いなかった。

「本当にサーゼクス様を呼ばなくていいんですか？」

「……貴方も反対なのかしら？　私もアダムから念を押されていたけど、私たちがお兄――魔王を呼んだ時点で相手の思う壺なのよ？」

今回のコカビエルの討伐に、リアスはサーゼクスの力を借りないことを皆に言っている。冷静に考えれば、たかが若手悪魔が何人か集まったところでコカビエルとの実力差は埋められるものではない。相手は怪物級の実力の持ち主である、しかしそれでもリアスはサーゼクスを呼ぶことを拒んだ。

この決定にソーナは渋面を作り、朱乃は珍しく怒りの表情を見せてリアスの決定に反対をしていた。だが二人ともリアスの内心を理解していての反対であった。

前回のライザーとの揉め事で、少なからずともサーゼクスの行動に不満を持つ者たちが出ていた。そしてそれに重なるようにして起きた今回の騒動。もしリアスが頼めば、サーゼクスは立場を顧みずリアスに手助けするのは、リアス自身容易に想像出来ていた。しかし、仮にそれが結果として多くの住民の命を救うということとなったとしても、魔王が独断で動き、ましてや戦争の火種となりかねない幹部級の堕天使と一戦交え

ることとなれば、それは致命的な弱みを作るということとなる。
魔王としても兄としても敬愛するサーゼクスの未来を自分が閉ざしてしまうかもしれない、エゴだと理解していてもそれだけは避けたかった。そしてシンのこともある。悪魔の力を持っているという特殊な立場にあるが、シン自体は人間である。それが自分たちのいざこざで生死不明の状況になってしまったことに強い責任を感じていた。
ソーナや朱乃たちとの言い合いは半ば強引に打ち切るようにして終わらせたが、二人とも完全には納得した様子は無く難しい表情のまま帰宅をしていった。
長年連れ添ってきた親友たちに失望されたかもしれないと怯えのような感情を覚えつつも、リアスの決心は頑なであった。それは自らの命を犠牲にしてでも今回の件を終わらせるという、悲壮なものであったが。
「いや、俺は部長の決めたことを全力でやるだけです――でも」
「……でも？」
「部長は絶対に何があっても俺が守ります！　必ず！」
リアスの手を握り、自らの決意を伝える一誠。リアスの決めた決意を見透しての発言ではなく、正直な気持ちから出てきたものであった。その言葉にリアスは頬を赤く染め、柔らかな笑みを浮かべた。
「……ありがとう、私のかわいいイッセー」

　リアスが一誠の頬に触れる。
「じゃあ、もし私と貴方が生きてここに戻れてきたらご褒美にいろいろと私がしてあげようかしら」
「い、いろいろ……！」
「そう、いろいろと」
「そ、それはどこまで可能なんでしょうか……！」
「いろいろはいろいろよ、貴方が望むといろいろ」
「マ、マジですかぁ！」
　頭どころか全身の血液が沸騰するような感覚を覚える。もしリアスが言っていることが本当ならば以前匙に涙ながらに語った夢に手が届くということである。
「つ、つまり！　そ、それは！　いいんですね！　吸っても！」
「え？　吸うってなにを？」
「そそそれは……！　それは……！」
『おい、落ち着け相棒！　どうなってるんだ！　これ以上興奮すると力が暴発するぞ！』
　慌てた様子のドライグの言葉が一誠の脳内に響き渡る。想いを力に変えるのが『神器』であるが、際限なく煩悩を昂らせる一誠に、使用する本人が許容できない程の力が発生していた。それをドライグが必死になって制御しているが、これ以上昂るとドライ

グが言った様に暴発する危険があった。
そんなことは露知らず一人昂り続ける一誠。そんなとき服の袖が引っ張られているのに気付き、視線をリアスから反対にいる人物に向ける。
そこには目を潤ませ、頬を膨らませるアーシアが居た。
「ア、・アーシア。どうした？」
「わ、私も生きて帰ったらイッセーさんにいろいろしてあげます！」
「え？」
「部長さんに言った様に私も吸ってもいいです！」
それが何を意味しているのか知らずにアーシアは言うが、一誠は金槌で頭を殴られた様な衝撃を受けていた。
（吸うって……アーシアのを……吸う……）
一瞬脳裏に浮かび上がるビジョン。それを思い浮かべたとき、どこかに頭を叩きつけて記憶を消し去りたいような衝動に駆られた。一誠にとってアーシアは純粋、純潔の象徴のような存在であり、自分の欲望で穢してはいけない聖域、守るべき少女であった。それを脳内であれ辱めてしまうと、相対的に自分が酷く汚れた人間に思えてしまう。自分自身清らかではないと自覚はある――夢はハーレム王である為――しかし、そんな自分に優しくしてくれたアーシアに欲望を向けてしまうとなると、凄まじい自己嫌悪を感

じてしまう。
　そしてこのときある姿が頭の中を過ぎる。その姿は――
「アーシア……大丈夫だ……いろいろしてくれなくても大丈夫。部長もさっき言ったことは忘れてください……」
「イッセー、大丈夫？　表情が虚ろよ？」
「本当にいいんですか？」
「俺は大丈夫ですよ、へへへ……」
『おい、相棒！　どうなっている！　これ以上力が低下したら神器も発動出来なくなるぞ！』

◇

　何十段もある石段の上に造られた朱色の鳥居。その向こう側には年月を重ねたことによって風格を纏った神社の本殿があった。そして拝殿の前に座る四つの影、それは朱乃、小猫、ジャックフロスト、ピクシーの姿であった。
　この神社、先代神主が死去した為に無人になっていたのをリアスが目を付け、現在は朱乃の住居として使用していた。その際、悪魔でも入れるように特別な仕掛けを施して

おり、今の様に朱乃と小猫は表情一つ変えることなく居座ることが出来ていた。
「少し席を外しますね」
そう言って立ち上がる朱乃。小猫とは違い制服ではなく、紅白の巫女装束を纏っていた。
「……はい」
頷く小猫の膝の上ではジャックフロストとその頭の上にピクシーが座っており、コカビエルたちとの戦いが始まるかもしれないというのに寝息を立てて眠っていた。二人の太い神経を微笑ましく思いながら、神社の奥に茂る林の中へと消えて行った。
林の中に入った朱乃はある場所を目指して歩き続ける。しばらくすると林の中に拓けた空間が現れた。
朱乃はその拓けた場所の中心に立ち何かを呟く。すると地面の土が削れ始め、地面に紋様を刻み込んでいった。数分も掛からず朱乃を中心にして魔法陣が出来上がる。朱乃はそこで再び呟き始める。
「なにしてるのー？」
「してるホー？」
重なる無邪気な声に思わず詠唱を中断してしまう朱乃。声の方角にはピクシーとジャックフロスト、そして少し遅れて小猫が現れた。

「……すみません。ピクシーさんとジャックくんが朱乃先輩を探しに――」
小猫は途中で言葉を止める。それは地面に描かれた魔法陣を見つけ、そして朱乃が何をしようとしていたのか気付いたからであった。
「……サーゼクス様に連絡するつもりなんですね」
「――ええ、そうよ」
「……部長は呼ばないで欲しいと言っていました」
「これは私の独断。この件はリアスや私たちの手に負える範疇じゃなくなっている。魔王の力を借りなければ無理よ」
互いに真剣な表情で視線を交わす朱乃と小猫。その様子を微妙な表情で交互に見ているピクシーとジャックフロスト、居るのはいいが特に何を言っていいのか分からず困惑していた。
「……リアスの気持ちは理解出来るわ。前回の事と今回の事で、サーゼクス様の立場を危うくしているのをどうしても避けたいのを……それに間薙くんのこともあるわ。リアスのことだから、全部自分のせいにして責任を全て背負うつもりよ」
家族同然の付き合いをしていたからこそ分かるリアスの心情。それは同じく一緒に暮らしていた小猫も深く理解していた。
「……分かりました」

「止めないのね」
「……部長のことも大切ですが朱乃先輩も大事な人です。……怒られるなら一緒に怒られましょう」
「うふふ、ありがとう」
　二人が笑みを交わす中、蚊帳の外になっているピクシーたちは地面に描かれた魔法陣の方へと興味を移し、手でぺたぺたと触っている。
「ふーん、これでサーゼクスと話せるんだ」
「オイラもサーゼクスと話したいホー！　あれから王様についていくつも聞きたいことが出来たんだホ！」
　魔王を呼び捨てにする妖精二人に思わず朱乃、小猫は驚いてしまう。いくら悪魔では無いとはいえ、軽々しく名を呼べるような存在では無い。
「あの、御二人につかぬことを聞きますが、サーゼクス様と一緒に観戦していたとき何て呼んでいました？」
「え？　サーゼクスだけど」
「オイラもそう呼んでたホ！」
「……そうですか」
　改めて妖精二人の神経の太さを知り、朱乃は冷や汗を描いた笑みを浮かべる。だから

こそ、彼女らにとって最も近しい存在であるシンが行方不明になってしまっても取り乱すことはないのではないかと納得もした。
　故に朱乃はこんな質問をした。
「御二人は気丈ですね。だからこそ間薙くんが生きて戻ってくることをずっと信じていられるんですね？」
「――うーん、全く根拠が無くて信じているわけじゃないんだよねー」
「そうなのですか？」
　思わぬ言葉に聞き返してしまう。
「何となく、ほんとすっごく微かな感じだけど、まだシンと繋がっている気がするんだよね。どういう風にとか詳しく言えないんだけど、まだアタシとシンを繋ぐ何かが途切れていない感じ。キミも分かるんじゃない？」
「ヒーホー……そう言われてみると繋がっているなような繋がっていないようなやっぱり繋がっているようなホー」
　腕を組み、首を左右に傾げながら曖昧な感じで答えるジャックフロスト。明確なものではないが言われてみれば微かに分かる、極微小の感覚なのかもしれない。
「……それでも間薙先輩が生きている可能性が高まった感じがして私は嬉しいです」
「ええ、そうですわね」

いつもの無表情な小猫ではあるが、このときは彼女を良く知る人物以外でも分かるぐらい安堵で和らいだ表情をしていた。
「早くこの戦いを終えて、間薙くんを迎えに行かないといけませんわね」
「そうだね。いっつも隣にいる人が居ないと……少し寂しいかな」
朱乃の言葉にピクシーは少しだけ眉を下げた笑みを浮かべていた。

◇

日が変わる直前、大気が揺れ動いているかのような重圧によって、一誠たちは跳び上がる様にして立ち上がった。
「来た！」
実際には揺れていない筈であるが、そう錯覚してしまう程の激しい魔力が大気中に蠢いている。
「部長！」
「ええ、分かっているわ……相手はこちらを誘っているわ」
明らかな相手側の挑発。不必要なまでに魔力を拡散して自分の位置を相手に教えているのが分かる。

一誠は窓を開き、そこから一気に屋根へと飛翔する。そこで一誠が見たのは空へと昇っていく四本の光の柱。そしてその方向には心当たりがあった。
「コカビエルの奴、俺達の学園で！」
「イッセー！　朱乃たちやソーナたちと連絡をとったわ！　これから彼女たちと落ち合う、ついてきなさい！」
言うと同時にリアスは窓から翼を広げて飛び立つ。その後ろから慌てた様子のアーシアが追ってきたが、一誠と同様に光の柱を見て言葉を失っていた。
「エクスカリバー……」
奥歯を噛み締める音と静かに怒る声が混じって一誠の耳に届く。気付けばすぐ側にゼノヴィアが立っており、静かに怒りを燃やしていた。
「エクスカリバーってあの光がか？」
「そうだ。私には分かる。あれは間違いなくエクスカリバーの光だ。くっ！　バルパーめ、どこまでエクスカリバーを弄ぶつもりだ！」
冷徹な一面しか見ていなかった一誠が初めて見るゼノヴィアの激情。その烈火の如き怒りに思わず声を掛けるのも躊躇ってしまう。
「イッセー！　早くしなさい！」
リアスの急かす声に一誠はすぐに後を追う準備をするが、このときゼノヴィアをどう

するか、ということに気付く。
「ゼノヴィアはどうやってついてくるつもりなんだ？」
「――ああ、そうだな。流石に足では君達を見失ってしまう可能性がある。済まないが運んでくれないか？」
「俺が？」
「この場に君以外が居るのかい？」
さあ、と言って自分を運ぶように促すゼノヴィア。どう運ぶのか瞬時に考えた末、取り敢えず背中と太腿を後ろから持ち上げる、いわゆるお姫様抱っこという形でゼノヴィアを抱え上げた。
「ふむ」
「なんだよ？」
「いや、今まで女性として扱われてきたことが片手で数える程しかなかったからね。中々新鮮な体験だ」
そんな台詞を真顔で言われてしまうと、意識しないよう頑張っていた一誠の五感がゼノヴィアの方へと向けられてしまう。思ったよりも軽い体重、手の平全体に伝わってくる女性の柔らかな肌の感触、鼻孔をくすぐる香り、正直これから命懸けの戦いをするにも関わらず再燃してくる煩悩に内心呆れつつもこのままではいけないと思い、あること

をゼノヴィアに頼む。
「ちょっと頼みがある」
「何だい？」
「俺を殴ってくれないか？」
「……いきなり何を言っているんだ」
「気持ちを切り替える為だ！　頼む！」
「……よく分からないが了解した」
突拍子もない一誠の頼みにゼノヴィアも理解出来ないといった表情をしていたが、とりあえず了承する。
「いくぞ？」
「来っお！」
下顎を撃ち抜く衝撃に一誠の目の前が反転する。予想外に重かったゼノヴィアの一撃、平手ではなく容赦の無い握り締めた拳、的確に急所を穿つ冷静な判断、抱え上げた体勢で無かったら膝でも付いていたかもしれない。
「――あ、ありがとう。取り敢えず目が覚めた」
「殴った相手に礼を言うのか……世の中は私が思っているよりも広いな」
要らぬ誤解を招くこととなったが、一応気持ちを切り替えることが出来た一誠は、左

右にふらつきながらもリアスたちの後を追うのであった。
　それから数分後、リアスたちは学園から少し離れた場所にある公園に到着していた。既に朱乃、小猫、ピクシー、ジャックフロストの姿、そしてソーナを含む生徒会全員が揃っていた。
「リアス先輩！　とりあえず学園の外に影響が無いように結界を張り巡らせておきました！　これで中でどんなに派手に暴れても外には洩れない筈です！」
　降り立ってくるリアスたちの姿を見て匙が現状について報告する。
「分かったわ、ありがとう。ソーナ、コカビエルたちに動く気配は無いの？」
「学園内で特殊な術式と聖剣を使用して何らかの儀式しているのは分かっているけど、詳細は不明だわ。こちらが結界を施している最中も相手はこちらのことを一切気にしていなかった。……本気を出せばこの学園ごと結界を破壊するなんて造作もない筈だけれど」
　冷静に語るソーナの眼は鋭く、声もいつもよりも低い。コカビエルたちが学園内で好き勝手していることに相当怒りを覚えている様子であった。
「リアス、ちょっといいかしら」
　朱乃がリアスの名を呼ぶ。
「何か用？　朱乃」

「貴女の気持ちは理解しているわ。だけど今回の件、サーゼクス様に報告しました」
　その言葉に、一瞬リアスは眼つきを鋭くし何かを言いたげな様子で口を開いたが、真っ直ぐに見詰めてくる朱乃の顔を見て口を閉じる。言葉を交わすことはなくても表情で相手の心情を汲み取ることが出来る程の付き合いから、朱乃が自分のことを思って独断したということを悟った為であった。
　自分が考えている以上に意地を張り過ぎたのかもしれない。自分の行動を振り返り、そう反省したリアスの表情は静かなものとなる。
「……手間を掛けたわね」
「いえ、理解していただいてありがとうございます。部長、ソーナ様、サーゼクス様の援軍が到着するのにまだ時間が掛かるとのことでしたが」
「ここにお兄様が来るのね……出来れば相手の思惑に乗らない様にしたかったけど、やはり無理そうね」
　自分の力量の不足を恥じる様に呟くがそんなリアスに対し朱乃は首を横に振る。
「来るのはサーゼクス様ではなくセタンタ様です」
　予想外の名前だったのかリアスが弾かれたように朱乃を見る。
「セタンタが？」
「今回の件についての詳細を報告したら、自分が出た方がサーゼクス様への害を抑えら

れると言って名乗り出てくれました。出来る限り早く駆けつけるとのことです」
「そう、セタンタが……彼の実力ならコカビエルに引けを取らない筈だけど……」
喜ぶ反面、腑に落ちないこともあるのかリアスの表情は険しい。
「なあ、小猫ちゃん。セタンタって誰？」
突然出てきた人物の名。リアスの口振りからかなり信頼を寄せている人物であることが分かる。それが気になって一誠は近くにいた小猫に小声で尋ねた。
「……昔から部長の家を護っている人です。……祐斗先輩のもう一人の師匠で私にも戦い方を教えてくれました。……イッセー先輩も会ったことが有る筈です」
「え、何処で？」
「……婚約式の会場で」
そう言われ記憶を振り返ってみると、思い至ったのがすれ違い様にリアスを頼むと言っていた、マフラーを巻いた青年の姿。
「あの人か……」
一人納得している間にリアスやソーナたちの方針は決まったらしく、この場にいる全員に呼びかける。ソーナたち生徒会メンバーは学園に施した結界をセタンタが来るまで維持する。リアスたちオカルト研究部メンバーは結界内にいるコカビエルたちを学園内で足止めし続けるというものであった。

「内容は以上よ！　この戦いは命を懸けたものになるわ！　でも死ぬことは許されない！　コカビエルたちを打倒し私たち全員が生還することが本当の勝利よ！　皆、また学園で会いましょう！」
『はい！』
　全員の意志を高めるような覇気を込めた声で全員がそれに返事をする。
「負けるなよ、そんで帰って来い！　兵藤！」
「わーってるよ！　これが終わったらカラオケでも行こうぜ！　木場や間薙も呼んでさ！」
「いいな、それ！」
「アーシアとかも呼んでさ」
「あー……うちの生徒会は異性交遊禁止なんだよなぁ……」
「そんときゃあれだ、悪魔間での交流とか親睦会とか言って誤魔化そう」
「ははは！　まっ、楽しみにしてるぜ」
　別れ際に軽口を言い合いながら一誠たちは学園の中、匙たちは結界の維持に向かって走り出した。

◇

「――来たか」
宙に浮きあがった状態で足を組み、見えない何かに腰掛けているコカビエルが閉じていた目を開く。
「バルパー、あとどれぐらいで余興を始められそうだ」
「もう間もなくだ」
学園の校庭ではバルパーが描いた魔法陣の上で四本のエクスカリバーが浮き上がり、激しい光を放っている。それは常人でさえ目に痛みを覚える程の輝きであった。
「こりゃ凄いことになっておりますなぁ！　ワタクシ今からこれを使うことになるという名誉で感動と震えが止まりませんよぉ！　ささ、じいさんハリーハリー！」
「急かすな、フリード」
落ち着きなく囃し立てるようなフリードの態度。しかし、バルパーは構う事無く作業を続ける。
「これは……！」
学園内に入ってきた一誠たちは目の前に描かれた魔法陣とその中に浮かぶエクスカリバーに言葉を失う。
「やれやれ、また気が散る要因が増えたか」

　リアスたちの登場にバルパーは眉を顰め、露骨に不快感を見せる。
「バルパー、エクスカリバーをどうするつもりだ！」
「不完全なこれをより完全に近づけるだけだ。コカビエル、これ以上の雑音は叶わん。貢ぎ物のアレがもう一頭いた筈だ。それで奴らを黙らせてくれ」
「残念だがよくよく考えてみて俺にはペットを飼う趣味は無かったのでな、学園の外に放ってきた」
「――ならお前が時間を稼げ」
「まあ、主催者として余興の進行を手助けするのも務めか」
　コカビエルは座ったままの体勢で見下すような視線を一誠たちに送る。その眼は寒気がする程に冷たく、虫けらでも見るかのようであった。
「よく来た、グレモリー家の娘よ。グレモリーの紅髪、いつ見ても美麗だな。君の兄君を思い出して殺意が湧いてくる」
「初めまして、堕ちた天使の幹部――コカビエル。リアス・グレモリーと申すわ。……どうやら貴方には私の友人が世話になったらしいけど」
「友人？　ああ、あの小僧のことか」
「彼は無事なの？」
「知らん。四肢を貫き片目を抉り取ってやったが、最早どうでもいいことだ」

誰もが声を失った。興味が無さそうに言ったコカビエルの言葉はあまりに残酷なものであった。
「お前たちが来たということはサーゼクスたちは来ないということか？　それともお前たちが相手をするということか？」
「貴方は……！」
仲間にした仕打ちに怒りに震えるリアスであったが、そんなことに構うことなく会話を進めていく。
「どうなんだ？　答えろリアス・グレモリー」
「答える義理は無いわ！」
「そうか、なら消えろ」
コカビエルが指を鳴らすと、周囲に鏃の形をした光が十以上現れる。そしてそれらはリアスたちに向かって一斉に発射された。唐突とも言えるコカビエルの攻撃に反応が一瞬遅れてしまう。
しかし、そんなリアスたちを守る様に背後から飛び出してきた無数の影が、真正面から光の鏃たちとぶつかり合う。影と光は相殺し合い、光は霧散し影は砕けて散っていく。砕けていく影を注意深く見ると剣の形をしており、それはリアスたちの良く知るものであった。

「『光喰剣〈ホーリー・イレイザー〉』ってことは……」
「少し、遅れたみたいだね」
背後から現れたのは、リアスの『騎士』である木場であった。皆の視線が集まる中、少し困った様な笑みを浮かべている。
「――おせぇよ。全く登場の仕方までかっこつけやがって！」
「はは、狙ったわけじゃないんだけどね」
頬を掻きながら笑う木場。そこにリアスの声が掛かる。
「祐斗……」
「……部長、遅れてすみません」
「色々と言いたいことがあるけど後回しにするわ。今はコカビエルたちを止めることが最優先よ！」
「……はい！」
そのとき乾いた拍手が校庭に響く。拍手を送っているのはコカビエルであった。
「加減はしたとはいえ、俺の力を真っ向から防いだのは大したものだ。その齢で随分と神器の扱いに長けているな。くくく、中々良い人材を揃えているな」
「――賞賛として素直に受け取っておくよ」
コカビエルは木場の魔剣について褒めてはいるが、木場としては内心冷や汗をかいて

いた。エクスカリバーといった対魔に優れたものではなく、純粋に力を変換して生み出される堕天使の光。その光に対して最も相性の良い魔剣『光喰剣』を使用しても、手加減をした光を相殺するだけで精一杯であることに戦慄を覚えていた。否が応にも相手との実力差を感じさせられてしまう。

「さて十分な時間を稼いで貰った。――見よ、より完全に近づいたエクスカリバーを」

バルパーがどこか高揚した声で完了の声を上げる。誰の眼もそこに注視された。バルパーの目の前には、眩い輝きを放つ一本の聖剣が浮かんでいた。バルパーは新しい玩具を前にした子供の様な眼差しでそれを見つめた後、その柄を両手で握り締める。その途端、統合されたエクスカリバーの輝きは鈍る。

「――分かっていたことだがな」

このとき、エクスカリバーを握るバルパーの表情に、先程の喜色は無かった。ただ失望の色を一瞬だけ覗かせたがすぐにそれは消え、元の研究者としての顔に戻っていた。

「受け取れ、フリード」

「あいあい。いやこれまた素敵仕様になったエクスカリバーでございますねぇ！　これでこれから悪魔たんたちをぶった切るって考えると……うーん！　エクスタスィー！　ということで僕ちゃんエクスカリバー入手記念としてちょっと殺されてみない？」

嫌悪感しか覚えない、狂気を含む笑みをリアスたちに向けながらはしゃぐフリード。

それを見てリアスたちの中から因縁のある二人が前に出る。
「前は向かい合って戦ったが今回は肩を並べて共闘するか……先のことはよく分からないものだな」
「同感だね。あのエクスカリバーは破壊する。それで構わないね？」
「アレが所持している時点で最早聖剣では無い。これ以上穢れる前に破壊してでも奪い取る」
　木場、ゼノヴィアが言葉を交わす中、それに好奇の視線を送る者がいた。
「かつての研究の名残とその成果が共に私の前に立つか……運命というものを感じるな。そう思わないか？『――――』」
「……その名で僕を呼ばないで貰おうか……！」
　飛び掛かることはしなかったが怒りに染まった目で木場がバルパーを睨みつける。しかし密度の濃い殺気を浴びてもバルパーは顔色一つ変えない。
「勘違いしては困るな。寧ろ私は君たちのことを敬愛しているのだよ？　いや、君達だけじゃない。聖剣を扱う可能性を持つ者全てを私は尊敬している」
「どういう意味だ」
「私はね、心の底から聖剣という存在を愛しているんだよ。幼い頃からずっとその気持ちを曲げることなく一途に想ってきた。特にエクスカリバーをこの手で振るうことが、

私にとっての唯一無二の夢だった。――だが現実というのは残酷だ。私はこの世の誰よりも聖剣を望んでいたが、聖剣使いとしての素質は皆無であった。……だからこそ聖剣を扱える者には尊敬の念を禁じ得なかった」

自らの思いを語るバルパーの口調は次第に熱を帯びていく。だが尊敬しているという言葉とは裏腹に、木場たちを見る目にあるのは、深く暗い嫉妬の情であった。

「少しでも聖剣と関わりを持つ為に私は研究の道へと進んだ。そしてその過程で私は見つけたのだよ。持たざる者を持つ者へと変える手段を！　その研究の完成の結果が『聖剣計画』だ」

「完成？　『聖剣計画』が？」

バルパーの言葉に戸惑う。木場は失敗という結果から当時の仲間ともども処分されたと思っている為無理のない反応であった。

「聖剣を扱うにはある一定の数値を満たした因子が必要だった。私が注目したのがそれだ。個々の数値では聖剣には届かない。なら個々ではなく一緒くたに纏めることが出来たのなら？　その答えがこれだ」

バルパーが懐から取り出したもの、それは聖剣の輝きに良く似た光を放つ球体であった。それを目にした木場の眼が見開く。

「まさか……それが皆の……」

「フリードに使用して最早エクスカリバーを扱う程の因子は残っていない残り滓のようなものだがな。一番効率の良い取り方をするには因子を持つ人間に生きていられると面倒だった。何せ本人が抵抗すればするほど因子は本体にしがみつき取れにくくなり、無駄に残ってしまう。死者として黙らせれば完全に抜き取ることが出来る」

聞いてもいないのにベラベラと因子の抜き方について喋り続けるバルパーにゼノヴィアは侮蔑の視線を送る。

「外道が……！」

「くくくく、その外道の技術で今日まで聖剣使いを量産してきたことを忘れるな。ミカエルは私の研究を認めなかったが、それでも捨て去るには惜しかったようだな。尤も、私のように効率の良い因子の抜き方はしていないみたいだ。人道的な方法を重視するあまり、手緩いと不満を持つ天使たちも居るようだがな」

嘲笑をこの場にいない人物に向ける。自分を否定した存在が否定されることに優越感を覚えている様子であった。

「バルパー・ガリレイ……！　その欲望を満たす為にどれほどの命を犠牲にした！」

「数が重要かね？　私が研究で奪った命などたかだか一日で埋まるほどのものだ。寧ろ恥すら覚えるよ、数字にしてみたら『たったそれだけか』と実感してしまってね」

罪悪など微塵に感じさせない言葉。怒りよりも吐き気を覚えてしまうほどの自己の

みの考え。バルパーは既に人としての善悪が破綻していた。
「まあ、良くここまで生き延びたということで、これを貴様にくれてやる。さっきも言ったが既に因子は欠片しか残っていないものだ。無価値に等しいからな」
木場の足下に因子の結晶を放る。木場はしゃがみ込み両の手でそれを掬い上げる。
「皆……」
呟く木場の頬に涙が伝わる。そのとき、結晶が先程とは異なる光を放ち、結晶から零れる様に光が落ちていく。
誰もがその光景に驚く中、バルパーのみが予想外の反応に喜色を浮かべていた。
「ほう！　因子にも生前の記憶が宿るのか。中々に面白い反応だ。この反応を応用し研究内に組み込めば――」
死者の魂すら一研究の対象としか見ない下衆の思考。木場と魂たちの邂逅にその汚れた眼差しを向けることが我慢出来ない人物が居た――否、現れる。
「フリード」
最初に反応したのはコカビエル、その言葉に気付いたフリードが眺めているバルパーの頭を掴み、地面に押し付けるようにして無理矢理引き倒す。
その瞬間、バルパーが立っていた場所を通過する高速の物体。それはそのまま地面へと盛大な音を立てて刺さり、数メートル程抉りながら進んだところで止まった。

投げられたのは校門に設置してあるはずの鉄の戸。大人一人で持ち運べるような重量では無く、ましてや投擲することなど不可能に近い。
「これ以上視るなら、それなりの代価を払ってもらおうか」
闇に浮かぶ二つの光。一つは紋様の形をして浮き上がり、もう一つは白色の光が宙に浮いている。
その光を見てコカビエルは嬉しそうに嗤いながら闇へと尋ねる。
「ほう、なら何を払えばいい？」
闇の中から姿を見せた人物。その右手は妖しく輝き、その左目は文字通り爛々と輝いている。
「お前らの首、と言うつもりだったが止めだ――安すぎる」
間薙シン、決戦の地に馳せ参じる。

左眼、聖魔

「あいつら大丈夫だよな……」

何回目になるか分からない呟きを匙は洩らした。学園周囲を覆う結界を維持する為に生徒会のメンバーは散り散りとなって、各所で魔力を送り込んでいるが、その間一人になるとどうしても不安が心の中に芽生えてくる。

最古参の堕天使、そういった肩書きだけでも不安を煽られるが、一誠たちも切り札ともいえる『神滅具』を所持しているため、そう簡単には負けないであろうという希望も持っていた。

（俺も参加したら……って言っても足手まといか……）

そう考えて、途中でその考えを捨てる。攻撃よりも補助に向いている自分の神器では、コカビエルたちと戦っても役に立つビジョンが見えてこない。ならばせめて最初に言われた通り、周囲の被害を最小限にするために結界の維持に努めるだけである。

そんな決心をしていた匙の耳に、ある音が入ってくる。

「んん？」

初めはただの空耳であると思った。だが次の瞬間、更なる音が聴こえてくる。聞き間

違いでなければそれは音では無く動物の唸り声、それも一つでは無く複数重なって聞こえてくる。

（まさか……）

急速に体温が失われ、背中からは夥しい量の冷や汗が流れていく。気を抜けば膝が震えてしまいそうになる中、匙はあることを思い出していた。

副会長の椿姫が最初の術式を発見したとき、罠として召喚された一匹の魔獣。シンとジャックフロストの二人でそれを撃退したと聞いたとき、素直に匙は凄いと思い、感動すら覚えていた。有名な魔獣を倒す、それだけでどこかの英雄のようなカッコよさがあり、一男子として自分もそうなってみたいという純粋な憧れを覚える。

だが、実際それを目の当たりにして自分はどんな行動がとれるのか、迫り来る地響きのような足音を前にして、匙は自問自答する。

「……あー」

そんな間の抜けた声が思わず出てしまう。しかしそれは無理もないことであった。自分の前に現れる、見上げる程の黒い巨体。三つもある頭の口からは生臭さと鉄の匂いが混じった唾液が零れ、足下を濡らしている。

六つの紅い瞳を向けられ、匙は心底縮み上がっていた。魔獣ケルベロス、それがどういった因果か、匙の前に立ち塞がっているのだから。

「勘弁してくれ……」
ケルベロスを前にして思わず弱音を洩らす。だが、ケルベロスは相手の心情など一切汲まず、ずらりと並んだ白い牙を見せ、今から匙を喰い殺そうとしていた。
「ああ、畜生……」
もしこのとき、この場所で無かったならば、匙はこの敵を前にして逃亡していたかもしれない。だが今このとき、別の場所では友人が命懸けで戦い、最愛の人も懸命になって結界を維持している。そしてこの場所は自らが育った街であり、そして学ぶ学園である。
これを野放しにすればそのどちらか、あるいは両方を傷付ける危険があった。
だからこそ匙は決断する。恐怖に怯える心を無理矢理奥にしまって。
匙の手に神器である『黒い龍脈〈アブソーブション・ライン〉』が装着される。
「俺が遊んでやる。掛かって来いよ！　犬っころ！」
迫る脅威を前にして匙は啖呵を切る。

◇

「間薙！」

「シン、やっぱり生きていたのね！」
「無事でなによりです」
「……信じていました間薙先輩」
　現れたシンに一誠たちは、戦いの最中ではあるが喜びの声を上げる。しかしそれは無理もないことであった。つい先程、コカビエルによって重傷を負わせられたことを告げられたこと、そして重傷であった筈のシンが無傷で戻って来たことであった。
「おかえりー」
「また会えたんだホー！」
　ピクシーはいつもと変わらず、ジャックフロストは瞳を潤ませながらシンの帰還を労う。
　そんな中、唯一シンが行方不明であったことを知らなかった木場は、シンの格好に驚いた様子を見せていた。学園指定の白シャツには所々穴が開き、赤黒い血痕がかなりの量付着している。なによりシンの左眼が、今まで見たことの無い光を放っていたことが、戸惑いを生んでいた。
「間薙くん……」
「色々と話したいことがあるが後回しにしてくれ。俺よりもそっちの方と話すのが先じゃないのか？」

シンが顎で指すと木場の周囲には、いつの間にか青白く輝く少年少女たちの姿があった。その体は半分透き通っており、体の向こう側の景色が見えている。その放つ輝きは因子の結晶から溢れた光と同じことから、因子の中に眠る魂と考えられた。
「皆……久し……ぶりだね」
自分を見上げる少年少女たちに、木場は言葉を詰まらせながら呼びかける。かつては同じぐらいの身長であった。しかし今では見下ろし、見上げられる程の身長差となっている。それが時の流れを顕著に現していた。
シンはそれに背を向けるとバルパーたちの視線を遮るようにして、木場たちの前へと歩を進める。旧友との再会。それを下卑た連中の眼に触れさせないようするために。
「くくくく。生きていたどころか傷すら完治して戻るか。そしてその左眼……いいぞ、中々面白い展開だ」
「お前を喜ばせる為に来た訳じゃない」
「ほう、なら何のために現れた」
「借りを返す為に」
一度は失われた左眼をシンの指先がなぞる。コカビエルは笑みを深くし、良い答えだと言って笑う。
「フリード」

「なんでさぁ、ボス？」
「試し切りだ。その小僧を斬ってみろ」
「りょーかーい！　いやあボスも人使いが荒い！　って言おうとしましたが意外と僕チンノリノリでございますですのよ。こんの鉄仮面君にはものすごーくコケにされた記憶がありんすので」
　長い舌を伸ばしてから舌舐めずりをするとフリードは統合されたエクスカリバーを肩に担いで前に出てくる。
「いよー、こんばんわ！　ま・な・ぎくぅーん！　あんときチミに逃げられたことを思い出すと腸が煮えくりかえってしかたのいのよねぇ。あん！　もう最低な気分だわ！　てめえ見てたらそんときの記憶が蘇ってきちゃう！　ああ、早くこの想いをリフレッシュしたい！」
「相変わらず良く喋る。そんなに俺に会えて嬉しいか？」
　顔面が横に裂けたような凶笑を浮かべながら話す言葉にどんどんと熱が込められていくフリードに対し、シンの態度は酷く冷めたものであり、二人を対照的に現していた。
　その態度はフリードの癇に酷く触るものであったが、すぐにあることを思い出したのか、不快感を与える笑みがどす黒い輝きを見せる。
「聞いたぜぇー、なんでもうちのボスにぼろぼろに負けたっていう話じゃないですかぁ。

そんで目ん玉まで無くしちゃったって聞きましたけどぉ、何で新しい目があるんだ？
しかも変な光まで放っちゃって！　あれですか思春期特有の病気が発病しちゃった？
ちょっと痛すぎませんかぁ？」
嘲笑と挑発をするフリードに流石にシンも態度が変わる。
「……はぁ」
本当に心の底からつまらないと感じさせる嘆息。たったそれ一つだけを吐いただけであったが、その行動は今まで調子に乗っているフリードの頭に、血を逆流させるほどの威力があった。
「なん、だ。その、反応……」
フリードの問いにシンは答えない。
「何だって聞いてんだろうがぁぁぁぁぁぁ！」
激昂するフリード。だがそれでもシンは一切答えない。それを見てフリードの怒りが一気に臨界点まで達する。
フリードがその場から一歩踏み込んだ瞬間、初速から最高速まで瞬時に加速する。『天閃の聖剣』の能力によって生み出されるスピードは、瞬きするよりも早くシンを剣の間合いに捉えた。
殺気を乗せたフリードのエクスカリバーが狙うのはシンの顔上半分。間合いを詰め

られているシンは、未だ回避行動一つとらないでいる。
横薙ぎに振るわれるエクスカリバーがシンの左耳にその刃を埋め込もうとしたとき、エクスカリバーが空を斬る。
振るった本人は一瞬何が起こったのか分からなかった。だが返って来る手応えの無さが、狙いを外したことを如実に現しており、そして気付けばシンの姿は、エクスカリバーの間合い僅か外に移動している。
動揺を押し殺しつつ、フリードは再度斬りかかろうとエクスカリバーを振り上げる。そのときフリードは瞬きをした。文字通り一瞬だけ遮られた視界、次に開かれたときには、間合いの外に居たはずのシンが、今度は逆にフリードを自らの間合いに入れた。
「チッ！」
次々と起こる予想外の展開。思い通りに進まないことにイラついた様子でフリードは舌打ちをするが、近接するシンの左腕が微かに動くのを見て、反射的に後退をしてしまう。再度開かれる両者の距離、だが後退したフリードは、自分の行為に信じられないといった表情をする。
「何だよ……この展開はさぁ！　俺は無敵のエクスカリバーを！　それも四本も統合させた奴を持っているんだぜ！　おかしいんじゃねぇの！　今頃だったらてめぇは地面にばらばらになって転がってるだろぉ！　なんで俺の攻撃が見切れてんだよぉ！」

　駄々をこねる子供のように喚き立てるフリードに、シンは呆れも怒りも見せず、ただ確認するように自分の左眼を指先で撫でる。まるでフリードの言葉など耳に入っていないかのような態度であった。
「人の話――！」
「――無敵のエクスカリバーと言っていたが、そんなもの何処にある？」
「あ゛、あ゛、あ゛！　目の前にあんだろうがよぉ！　目ん玉腐ってんの？」
「お前の持っているその鈍のことを言っているのか？」
　あまりに容赦のない台詞にフリードも言うべき言葉を忘れてしまったのか、沖に上がった魚のように口を開閉する。
「聞き捨てならないな」
　シンの言葉に異を挟んだのはバルパーであった。先程言っていた通り、エクスカリバーという存在に対して並々ならぬ情を持っている為に、シンの述べたことを無視することが出来なかった。
「少々腕が立つようだが、エクスカリバーに対してのその侮辱は取り消して貰おうか。貴様のようなたかが十数年しか生きていない小僧が、エクスカリバーを鈍呼ばわりするには数百年早い、口を慎め」
　言葉の端々に見え隠れする昏い感情。いかにエクスカリバーという存在を偏愛して

いるか、いかにそれを貶すものを許さないか、それらが嫌でも伝わってくる。だが、バルパーの歪んだ感情を突きつけられてもシンは態度を改めようとはしなかった。
「鈍は鈍だ――いや、正しく言えばお前たちがエクスカリバーに携わった時点で、ソレはただの棒切れよりも劣る存在になったかもな」
シンは謗る言葉を止めない。バルパーの瞳の中に殺意が灯りはじめる。
「口を慎めと言った筈だが」
「お前たちの様な連中に言い様に振り回されるなら、エクスカリバーの方もいっそ鈍と呼ばれた方が有り難いかもしれないな。――エクスカリバーという名に泥を塗られるくらいならな」
自分たちの存在自体がエクスカリバーを汚す。そう辛辣に評するシンにバルパーは外面上平静を装っていたが、内面では溶岩の様に煮え切った怒りを抑え込んだ状態であった。対照的にコカビエルの方は愉快といった様子で哄笑している。
「ははははは！　言ってくれるな」
笑うコカビエルを一瞬ではあるが忌々しげに睨むバルパー。それを見逃さなかったシンは内心で、思っている以上に両者には信頼関係といったものはなく、ただ共通の目的があっただけの利益目的の関係ではないかと推測した。
笑うコカビエルを余所に、冷めた声でフリードに告げる。

「その小僧を殺せ」
「言われなくたってわかってんよぉ、じいさん！」
こちらもシンに対して限界まで怒りを溜め込んでいる様子であるらしく、絶えずこめかみや口の端が、痙攣を起こしたかのようにひくついている。
バルパーの言葉を乱暴に返したフリードは、エクスカリバーを剣先をシンに向けた状態で水平に構えると、距離が開いた状態のまま突きを繰り出した。すると剣先がそこから一直線に伸び始める。
『擬態の聖剣』の能力である形状の変化。更にそこに『天閃の聖剣』の効果も上乗せされている為、変化する速度も格段に上がっている。一般人の目なら、形状の変化の最初に目が追い付かない程の速度を有した、長距離の突き。
だが、その突きもそこから半歩足を下げて、半身となったシンにあっさりと躱されてしまう。しかしフリードも先程のことから、想定の範囲内の行動であった。
「ひょいひょいと避けるがこいつはどうだぁ！」
その言葉を合図に伸びた剣先が、紐を解くかのように無数に枝分かれする。上下左右逃げ場の無い、縦横無尽の合計十の刃が同時に襲い掛かる。
迫り来る多数の攻撃を前にしても、シンの心は乱れることは無かった。一つでも掠めれば、通常の治療では回復不可能の傷を負うエクスカリバーの刃、しかしそれに対して

今のシンは恐怖を感じない。焦り、恐れを感じない理由、それは新たに芽生えた左目の存在があったからだ。

左目が十の刃全てを瞳に納めたとき、シンの肉体は動き始める。最初に狙ったのは足下を狙う三本の刃、同時に迫る内の一本の腹を蹴りつけると、刃はそのまま残り二本と衝突し纏まった状態となる。その纏まった刃を今度は、上半身を反らしながら上へと蹴り上げた。

左右、上空から突き立てようとしてくる刃の群の集合点。それが最初から分かっていたかのようなタイミングで蹴り上げられた刃たちが、下からかち上げるようにして衝突する。甲高い音を鳴らし、四方へと散らされる。

その光景は、まるで一枚一枚場面を抜き出したフィルムのように、緩慢な動きとしてシンの左目に映っていた。その未体験の感覚に、シンは無意識に体を合わせる。

左目に何かが映ったと思えば、思考するよりも早く動き出す肉体。あらゆる過程を省いているのではないかと思える程の反射。ほんの少し前の自分であったのならばまず考えられない程の、状況把握からの最速の行動をとっていた。そこには神経、脳といったごく当たり前に使用する部位すらも行動の妨げとし、可能な限り認識と反応の差をゼロにすることを目指すかのようであった。

見てから動く。それらの必要な要素を、全て左目が補っているかのような感覚。全て

の動きが左目によって突き動かされているかのような、不可思議なものであった。
方向を無理矢理外された刃の群は、狙いを見失って地面へと突き立てられそのまま沈黙をするが、既にシンの左目は次の動きを把握していた。
一呼吸置いてから、シンはフリードの方に向かって一気に跳ぶ。その直後にシンが立っていた場所に、何十といった刃が突き破るようにして生える。それは地面に突き刺さっていたエクスカリバーが、更に枝分かれして出来たものであった。
奇襲を絶妙なタイミングで外されたフリードの表情が歪むも、すぐに伸ばしたエクスカリバーを手元に戻そうと操作するが、現状が僅かにそれを遅らせる。その間に駆けるシン、枝分かれしたエクスカリバーも元の形に戻り、素早くフリードに引き寄せられる。
速度はエクスカリバーの方が速い、だがもたついているときに稼いだ距離によって、その不利は打ち消されている。
シンがフリードの目の前に立つと同時に、フリードの手に伸ばしていたエクスカリバーが収まる。
繰り出される右手。払うエクスカリバー。両者は一瞬交差した後にシンはそのまま駆け抜けていき、二人の間に再び距離が開いた。
立ち止まったシンの指先からは、赤い血の雫が垂れていく。だがシンの表情に苦痛の色は無く、相変わらずの無表情——と思えたが、心なしか何かを成し遂げたかのような、

すっきりとした表情にも見えた。
シンは閉じていた指先を離す。するとそこから、血に塗れた布とそれに包まれた赤黒い物体が下へと落ち、地面に赤い円を形作る。
「かへへ、かはははははは！」
背後からフリードの狂った笑い声が聞こえてくる。しかしそれはいつもの嘲笑うようなものではなく、何処かやけくそといった響きが含まれていた。
「何だろねぇ、こういった展開……普通の奴には耐えられずに死んじゃう因子を入れて結構スペシャルな俺様になってその上でエクスカリバーを四本も使って出来たこれまたスペシャルなエクスカリバーを手に入れてスペシャルの上、うーん、なんつうのスゥプェシャァアアルゥな俺様が完成していたっつうのにさ……」
エクスカリバーを振るった後の形で固まり続けるフリード。その右腕の一か所が袖ごと抉られており肉と共に骨の一部が露出していた。
「こんな風にされちまったら俺様がかませじゃねぇぇぇかぁぁぁ！」
怒声を張り上げ、額には血管が浮き出ている。
あのときの一瞬の交差、シンは振るわれたエクスカリバーよりも早くフリードの右腕を親指と人差し指で挟むと同時に捩じり、衣服ごと肉を千切ると同時に駆け抜けていった。

だが、フリードの怒りが向けられているのはそのことではない。多くの命を殺めてきたフリードだからこそ分かる感覚、それはあのとき、奪おうと思えば自分の喉元へと手を伸ばし、命を奪えたという事実であった。しかし、結果は右腕の肉の一部が奪われただけである。

「どういうつもりなんだるらぁ！　情けでもかけてんのくぁ！　クールに見えて実は命に対して人一倍の優しさを持つ、なんてキャラ付けは流行りませんよぉぉぉぉ！」

フリードが喚き続けているが、シンはそれを雑音以下として一切耳に入れていなかった。シンの耳は今、木場を取り囲む陽炎のような少年少女たちの歌に意識が注がれていた。

聞こえてくる歌はおそらく聖歌。本来なら神へ捧げる歌であり、悪魔が聞けば祈りの言葉と同様に悪魔を苦しめる効果がある。だが聖歌に包まれた木場の表情に苦しみはなく、寧ろ安堵と安らぎを感じている様子であった。歌の届く範囲にいる一誠たちも同様である。

直観的ではあるが、シンには何故そうなっているのか大よそ理解出来た。この聖歌は神ではなく、友に捧げる為の歌。

優しさ、温かさ、慰め、願い、それらが込められた言葉通りの魂の歌。そんな歌が他を苦しめることなど考えられなかった。

「……うおい！　ちょっと聞いているんですかぁ！　おたく！」
何も反応を示さないシンに、苛立った声でフリードが話し掛ける。そこでようやくシンはフリードの言葉に応じるかのように首を横に向け、目だけをフリードの方に向けた。
「――借りは返した」
そう言って右腕を掲げる。
「ああん？　何だそ――」
言い掛けた言葉を途中で飲み込む。フリードの頭に浮かんだのは、最初にシンと戦ったときの光景。そのときにシンの右腕を斬りつけたのを思い出した。
「これで終わりだ」
「……はぁ？」
無意識で気の抜けた声を出してしまう。そのような声が出てしまう程、相手の言っていることが理解できなかった。
「もしもぉーし、ちょっとおっしゃっている意味がわからないんですがぁー？　『これで終わり』って『これで終わり』って……あのぉもしかしてもしかしなくてもこれ以上俺様と戦うつもりは無いってことでございますかぁ？」
「お前を倒すのは俺の役目じゃない」

早口で捲し立てるフリードの言葉にシンは一言だけ返すが、それでも背を向けたままである。その無愛想、まだ自分がエクスカリバーを手に持っているにも関わらず、一切こちらに注意を向けない態度、その二つがフリードの質問を肯定しているかのようであった。

「ああ。そうですか、そうですか……」

頭の奥で何かが千切れる音が聴こえる。それも一本や二本ではない。何十にも重なって聴こえ頭の奥で鳴り響く。フリードが生を受け、今まで生きてきた中で、これほどまでに虚仮にされた記憶は無かった。故に初めて聴くかもしれない。自分の理性の緒が千切れ飛ぶ音を。

「ふ……」

下げていたエクスカリバーの切っ先をシンの背中に向ける。持ち上げた際、抉られた部分から血が溢れ出て来るが、感情が振り切れた今のフリードには、その痛みなど感じていなかった。

「ざけんなぁぁぁ！　この#$%&?@#!」

人の言語とは思えない叫びを上げてフリードが地を蹴りつける。踏み締めていた土が宙へと舞う間に、フリードは既にシンの背後に迫っていた。

エクスカリバーの光が霞む程の殺意を練り込んだ凶刃が背後で振り上げられている

にも関わらず、シンはその場から動かないどころか振り向こうともしない。
その余裕と言える態度にフリードの怒りは、天井知らずで上がり続けた。
「開きになりやげれぁ！」
頭頂部から股下まで一気に裂こうとして振り下ろされる聖剣の一撃。だがそれは――
「させないよ」
横から現れた一振りの剣によって遮られた。過度の装飾は無い、簡素とも言える白銀と黒の金属で出来上がった剣。しかしその輝きは、白い光と黒い光が混ぜあった複雑な光を放っており、見る者に眩さと恐れといった、相反する感情を抱かせるものであった。
防がれたフリードの目が限界まで見開く。それは自分の一撃を防いだ人物に向けられたものであった。
「なんで……なんで無敵の聖剣が魔剣使いに防がれるんだよぉぉぉ！」
「答える義務は無いね」
そう言って木場は好戦的な笑みを浮かべながら踏み込むと、鍔迫り合いをしているエクスカリバーごとフリードを後方へと突き飛ばした。
「間薙くん、いくら余裕があるからって敵に背を向けるのは感心しないな」
「大丈夫だろ。こっちには背中を守ってくれる頼りになる『騎士』様がいるからな」

数日ぶりに交わされる両者の言葉。良好とは言い難い状態でお互いの進むべき道を歩いていた二人であったが、久しぶりに交わした会話は存外軽いものである。だが二人にはそれだけで十分であった。

「――ははは！　うん、そうだね。それが僕のすべきことだ」

「その剣は？」

「僕と同志たちの魂の剣。聖と魔を有する禁手『双覇の聖魔剣〈ソード・オブ・ビトレイヤー〉』

『禁手〈バランス・ブレイカー〉』、『神器』を持つ者が至ることが出来る、その名が示す通りの禁じ手とも言える段階。かつて一誠が『禁手』に至った際は自らの左腕を糧にしたことで至ったが、木場はかつての友の魂をその身に宿すことでそれに至る。

「成程。色々と吹っ切れたという訳か……カッコいいじゃないか」

「ありがとう」

「くっちゃべってんじゃねぇよ！」

戦いの最中に自分を無視して会話しているシンと木場に向かって、いつの間にか接近していたフリードがエクスカリバーを振るう。だが、振るわれたエクスカリバーは聖魔剣によって払われ、弾かれたエクスカリバーの軌道をすぐに修正したフリードは再び振るおうとするが、それよりも早く切り返した木場の聖魔剣が、エクスカリバーに十分な

力が込められるよりも先に斬り上げた。
剣を振り上げた格好となり大きく胴を開けるフリードに、シンの追撃の右拳が脇腹にめり込む。脇腹に拳が触れた瞬間、僅かにシンは眉を寄せるがそのまま振り抜く。フリードの体はそのまま殴り飛ばされると数メートルほど宙を飛び、やがて地面に接触するが、そのままの状態で更に三メートルほど地面を転がっていく。
飛ばされたフリードは思ったよりも早く立ち上がるが、すぐにその場で膝を折り激しく咳き込む。その拍子に神父服の内側から何かが零れ落ちた。落ちたのはフリードが愛用している拳銃であったが、その形状は拳銃としての機能を奪うほど大きく変形し、拳銃の側面には拳の痕らしき凹凸がある。それが殴った際にシンが眉を寄せた理由であり、殴られたフリードのダメージが思いの外軽かった理由でもあった。
「げほっ！　げはぁ！　……さっきおたく借りは返したって言ってたのにこの一発はどゆことですかぁ？」
「ツケにでもしてくれ」
咳き込みながら嫌味のように言うフリードに対し、シンはそっけなく応じる。
「木場、そっちは任せても大丈夫だな？」
「ああ、君だって最初からそのつもりだったんだよね。気を遣わせちゃったね」
「気にするな。俺の借りは返した。次はお前の番なだけだ――後は任せた」

シンが軽く木場の肩を叩く。そこから伝わってくる僅かな熱、それが体の芯へと伝わり、自分と同志たちの魂へと伝導していくのを木場は確かに感じた。
「任せてくれ」
振り返りながら答えた木場が見たのは、僅かに口角を上げ、微笑を浮かべるシンの横顔であった。出会ってから今までの間で木場が初めて見る、無表情以外の表情だった。
シンが離れる足音を聞きながら木場は、立ち上がろうとしているフリードと、険しい表情を浮かべているバルパーへと視線を戻す。
「へ、へへへ！　いいのかい？　今なら俺様切り捨てアタックチャーンスなんだぜ？　それにわざわざ一対一にならなくも良かったんじゃないの？」
口の端を吊り上げ、フリードは戦力を割いたことと自分が立ち上がるのを待っている木場の甘さを嘲笑う台詞を述べていたが、木場は眉一つ動かすことは無かった。
「甘いのは重々承知だよ。正直今回のことで嫌というほど自分の甘さ――いや未熟さを知ったからね」
「言ってることおかしくないですかぁ？　それならなおのことズバッといくものだとおもいますがぁー」
「けじめだよ」
「ああん？」

「打倒エクスカリバーを胸に刻んだ今までの僕とリアス・グレモリーの眷属、『騎士』としてのこれからの僕と決着をつける為のけじめさ。だからこそ君には全力を以ってエクスカリバーを振るってもらう」

木場の言葉にフリードの嘲笑は固まる。エクスカリバーを手にしてから過去に二回木場と戦い、いずれもきちんとした勝敗は付いていなかった。だが今回は過去二回に比べれば最も強い力を手にしている状態と言っても良かった。それなのに相手から情けを掛けられるという。それはひどく癇に障るものであった。

「本家本元の聖剣に勝てるっていうのか、御宅の駄剣が？」

「勝つさ。僕の、僕たちの剣は」

言い切った木場の聖魔剣はその言葉に応じるかのように月光を反射し、一層輝きを増す。その輝きを見てバルパーは、誰にも聞こえないほどの声量で何かを呟き続けていた。

「聖と魔の融合……聖魔剣……『魔剣創造』だけでは理論上ありえん……もう一つ『神器』を……『聖剣創造〈ブレード・ブラックスミス〉』……だとしても……反発する……何故だ？……どういうことだ……」

淡々と言葉を並べながらも、その表情には明らかな焦燥があった。バルパーがこの世で絶対という存在として崇拝に近い感情を抱くエクスカリバー。それが――

「しゃらくせぇんだよぉ！　エクスカリバーに勝てるかよぉ！　この腐れ悪魔がよぉ！」

立ち上がる動作の流れから瞬時に加速し、背筋を伸ばす勢いと共に木場の顎下を狙ってエクスカリバーを斬り上げる。

「エクスカリバーになれないエクスカリバーじゃ、僕たちを断つことなんて出来ないよ」

聖魔剣の腹がエクスカリバーの刃を受け止める。木場の創造していた魔剣ならば容易く両断出来たであろう斬撃を受けても、聖魔剣に罅どころか、一切の綻びが生まれることはなかった。

――一介の悪魔によって真っ向から突き崩されそうとしていた。

◇

フリードのことを木場に託し、シンはリアスたちの下に寄る。するとピクシーとジャックフロストが真っ先に近寄り、ピクシーはシンの肩に腰掛けジャックフロストは足下にしがみついてきた。

「おかえりー。うん、やっぱりここが一番座り心地がいい」

「ヒーホー！　生きてるってオイラは信じてたホー！」

対照的な態度でシンの帰還を喜ぶ二人をそのままとして、視線を一旦リアスたちの方に向き直す。
「――よく生きてくれたわ」
「心配かけました」
簡素な会話であったが、現状を考えれば満足な内容であった。まだリアスの言葉が続きそうであったが、上空から聞こえてくる羽ばたきの音に喜びの色は一瞬にして消し飛び、真剣な表情が代わりに張り付けられる。
「さて、エクスカリバー統合という余興とそのデモンストレーションも終えたことだ。そろそろ俺も楽しむとしよう」
傍観をしていたコカビエルが周囲の空間が歪んで見えるような重圧を纏って地に降り立つ。
「小僧。エクスカリバーを持ったフリードを手玉に取るとは大したものだ。素直に賞賛の言葉を送ろう。――くくく、一度は興味が失せたが、その眼を見て考えを改めた」
コカビエルは血が溜まり込んだかのような眼でシンの左眼を注視する。
「似ても似つかないその眼、最初に出会ったときよりも更に色濃く『奴ら』を彷彿とさせる。翼の羽が総毛立つような気分だ。ははは！　気まぐれで抉って正解だったようだな」

肩を震わせて上機嫌といった様子で笑う。心底愉快だといわんばかりの笑い声は、聞く者にとってひどく耳障りなものであった。事実、無表情を続けていたシンもその笑い声を聞いた途端、不快そうに目を細める。尤も、シンの場合別の感情もあって、いつもよりもやや過敏に反応してしまったという理由もあるが。

「――間薙」

笑うコカビエルを余所に、いつの間にか近付いていた一誠が小声で話しかけてくる。シンは顔をそちらの方に向けた。

「お前は――大丈夫なんだよな？」

シンの左眼を見た後に掛けられた言葉。そこに含まれているのは、コカビエルと一戦交えたことによる戦闘への影響と、抉った筈の眼が異様な輝きを放って再生していることで、シン自身の肉体に何らかの影響が出ていないかという、二つの心配が込められたものであった。

「左眼を生やすコツって知っているか？」

「はぁ？　何だよそりゃ」

「適度な睡眠と食事を摂ると自然と生えてくるらしい」

一誠には本気か冗句かよく分からないものであったが、このとき珍しくシンは軽くおどけたような喋り方をしていた。

「――そんな冗談言えるなら、一応大丈夫ってことでいいんだな？」
「ああ……」
今はな、という台詞は言葉にせず、胸の裡で呟く。現段階ではどのような影響があるかシン自身も把握出来ておらず、要らない心配を周りに掛けない為の措置であった。
「では開幕の鐘を鳴らすとしよう。頼むから開始早々で幕引きという結末にはならんでくれよ」
コカビエルの左腕を掲げる。そして人差し指を一本だけ立てると指先に光が灯る。直径にして数センチ程の光球、それを指先で弾くと、コカビエルの頭上まで浮き上がる。すると光球は一瞬にして膨れ上がり形を変えた。
堕天使たちが得意とする光力で形成された光の槍。だがコカビエルが創り出す槍は幅も長さも下位の堕天使の比では無く、もはや光の柱であった。
「さあ、全力で抗ってみせろ！」
コカビエルが掲げた左腕を振り下ろそうとしたとき、四人の人物が一歩前に踏み出る。
リアス・グレモリーが全身から放たれる真紅の魔力を両掌へと収束させ。
姫島朱乃は内包する魔力を雷に変換し、その身から紫電を散らす。
兵藤一誠は『赤龍帝の籠手』によって限界まで倍加した魔力を左手に集め。

間薙シンはその右手に魔力剣を造り出す。
コカビエルの手から光の槍が撃ち出されると同時にリアスの魔力が、朱乃の雷が、一誠のドラゴンショットが、シンの熱波剣が迎え撃つ為にその手から放たれた。

◇

「この！　大人しくしやがれぇぇぇ！」
暴れるケルベロスの背中にしがみつきながら、匙は何とか無力化しようと必死に足掻いていた。ケルベロスの真ん中の首には『黒い龍脈』が巻き付いており、それによって背中から落ちずにいられたが、肝心の締め付ける力が弱く、ケルベロスの意識を断つには不十分であり、それが暴れる原因ともなっていた。
獣特有の臭いと一本一本が針金のような硬質な体毛のせいでしがみ心地は最悪であったが、このまま振り落とされれば、確実にその牙や爪の餌食になってしまう自分の姿が容易に想像出来る為、必死になって匙は喰らい付く。
しかし、いくらしがみついていても匙自身にはケルベロスを倒す力は現状無く、ただ両者ともいたずらに体力を消耗しているだけであった。
（畜生！　啖呵切ってこのザマか！）

自分の非力さに怒りすら覚える匙であったが、匙の『神器』の能力上、決定打となるものが無い。あるとすれば少しずつであるが『黒い龍脈』を通じてケルベロスから力を吸い取っていく方法のみであるが、それはあまりに時間の掛かる攻撃手段であった。

ケルベロスが跳び上がる。それによって匙の体も跳ね上がった。背中に張り付く異物を何とか取り除きたいケルベロスはそこから体勢を１８０度回転させ、背中から地面へと着地しようとする。

「嘘だろぉ！」

視界が反転すると同時に頭上に固いアスファルトが見える。このままではどう考えても圧死は免れない。

咄嗟に伸ばしていたラインを縮めると、匙の体がケルベロスの頭部の方へと引き寄せられる。そしてケルベロスの後頭部付近まで移動すると、巻き付いている部分を軸にして素早くケルベロスの喉元へしがみ付いた。

それと同時に盛大な音が夜の帳に響き渡る。陥没するアスファルトがどれほどの重量があるのかをよく現していた。幸い学園付近には民家などは無い為、住民などを集めることは無かったが、この音のせいで事態は匙の望まない方向へと進んで行く。

『サジ、そちらで大きな音がしましたが何かありましたか？』

頭の中に直接響いてくるソーナの声。ケルベロスの起こした音が離れた場所に居る

ソーナの耳に届いてしまったらしい。
『会長！　その……うお！』
どう返そうかと一瞬迷う匙であったが、現状は匙にそのような暇を与えない。地に伏せていたケルベロスが立ち上がり、今度は匙を喉からぶら下げた状態とする。
『どうしました、サジ？　今の声は――』
『会長！　こっちに来ちゃダメです！　こっちは危険です！』
『何が――』
そこでソーナの言葉が途切れる。正確に言えば、ソーナの言葉を聞いていられない程の脅威に匙の意識が向けられたせいであった。
向けられた左右の顔。その口から橙色の光が漏れ始めている。
焼き殺される。その言葉が匙の頭に浮かんだ。
（どうする……！　どうする……！）
ここで離れたとしても、今の匙はケルベロスから逃げ切る自分の姿は想像出来なかった。それどころか自分が炎で焼かれ崩れ落ちていく姿は、はっきりと想像出来た。
どうにかしようと頭を働かせるが、一向に妙案など浮かばない。それどころか頭が真っ白になっていくだけである。
頭を空回りさせている匙の都合など構うことなく、ケルベロスの炎はどんどん喉から

口へとせり上がっていく。そしてケルベロスの口の端から火の粉が零れたのを見たとき、焦りが限界に達して匙の逃げる為の思考は完全に停止、代わりに別のことを考え始めた。

（思えば泣かせてばっかだったな……）

脳裏に浮かぶのは、幼き頃の自分が今の自分へと成長していく過程であった。それが走馬灯と自覚しつつ、匙はお世辞に真面目とは言い難い、荒れていた頃の自分を振り返っていた。

行き場が無く、空回りする力を他人にぶつけ、夢も希望も特に無く、宛てもなく生きていた匙。そのせいで他人から白い眼で見られ、よく母親を泣かせていた。

そんな匙に転機があったのはソーナとの出会いであった。ソーナと出会ったことで『兵士』という自分のするべき役目、『神器』という力、生徒会という居場所、シトリー眷属という仲間、そして何より、心の底から好きだと言える女性に巡り合えた。

いろいろと苦しいことも厳しいことも多々ある。それでも匙は今この時を胸を張って幸福であると言える。だが――

（それでも死ぬときは死ぬか）

徐々に炎の熱も感じてきた。残る時間も少ない。

（でももし死ぬって言うんだったら……）

それはある種の諦観であったが、その域に達したとき、爆発するかのように胸の奥底から、強い想いが溢れ出て来る。
（死ぬんだったら……！）
強い想い。それは『神器』を動かす為の力であり、成長させる為の糧である。
「お前も道連れにしてやらぁぁぁぁぁ！」
吼える匙に呼応し、手に装着された『黒い龍脈』から新たなラインが発射され、撃ち出す寸前の左右のケルベロスの口吻に巻き付き、無理矢理閉じさせる。行き場を失った火炎はケルベロスの口内で爆発し、内側からの圧力で牙が折れて、口を貫通しながら外へと飛び出ていく。
自爆させられたケルベロスの頭部からはあちこちから白煙が立ち昇り、白眼を剥いた状態となっていた。
「へっ、ざまぁみやがれ」
左右の頭を何とか戦えない状態にした匙であったが、そのとき視界の端でケルベロスが前足を振り上げるのが見えた。まだ意識のある真ん中の頭が匙の胴体を引き裂こうとしている。
『黒い龍脈』を使って何とか躱そうとした矢先、前触れもなくケルベロスの体が倒れ伏す。

「ぐえっ！」
　喉の辺りにいた匙は、いきなり地面に叩き伏せられたことで呻き声を上げてしまう。ケルベロスの頭一つ分の重量を何とか押しのけて下から這いずり出てきた匙が見たのは、手足を投げ出した状態で伏せているケルベロスと、その上に胡坐をかいて座っている男性の姿であった。
「そこに居たのか。わりいな、怪我は無いか」
「へっ？　ああ、無いです……」
　思わず男の質問に答えてしまった匙であったが、それは目の前の光景を見て思わず反射的に答えてしまった。どう見ても成人男性程の男の体格、しかしその男に座られているケルベロスはまるで重しを載せられているかのように苦しみ、何とか振り払おうと懸命に足を動かしているが地面を削るだけで一向に立ち上がれない。
「大人しくしてろ。『伏せ』だ」
　男が一言言った瞬間、ケルベロスの体に更に男の体が沈み込む。その結果、真ん中の頭は口から白い泡を吹き出し、そのまま意識を断ってしまった。
「おお、おお。大人しくなったな」
　陽気に笑う男に匙もポカンとしてしまう。明らかに人間離れの所業、普通なら警戒心の一つも抱いてしまうが、今の匙は事態に頭が追い付いていない為、ただ茫然とするし

かなかった。
「懐かしい匂いがすると思って寄り道したが、ヴリトラの奴は元気か？」
「え？　あー……ヴリトラって？」
「あん？　お前が持っている――って何だあいつの一部か、そりゃ目を覚ましてるわけないか。へっへっへっへ！」
一人で納得し一人で笑い始める。理解出来ない為、匙は目の前の男に付いて行けなかった。
「というか……誰？」
辛うじて出てきた匙の質問。男は声を出して笑うのは止めたが、その顔には野性的な笑みを浮かべていた。
「なぁに、ただの通りすがりの『怪物』さ」
通りすがりの『怪物』ことアダムは、自らをそう称するのであった。

両断、業火

巨大な光の槍とリアスたち四人の技が触れ合ったとき、学園全体が白一色に染まる程の閃光が発せられる。リアスたちの攻撃はコカビエルに届かなかったが、コカビエルの攻撃も又リアスたちに届いてはいない。

お互いの先制は互角。だがまだ戦いは続いている。光が周囲を満たす中を走る二つの影。光が収まると同時にその影は左右から同時に飛び掛かっていた。

右から迫るのは小猫。その小さな体躯から繰り出される渾身の一打がコカビエルに放たれる。左から攻めるのはゼノヴィア。振り上げた『破壊の聖剣〈エクスカリバー・デストラクション〉』をありったけの力で振り下ろす。

片や『戦車』の一撃、片や『聖剣』の一撃。並みの存在ならば絶命は確実。だがそれを見たコカビエルの反応は――

「温い。その一言に尽きる」

一笑。小猫の正拳を左掌で容易く受け止め、ゼノヴィアのエクスカリバーを右手の指二本で挟んで防ぐ。あまりに簡単に防がれたことに二人は驚愕した表情となるが、コカビエルはそんな二人の心の隙を逃さず、まず手始めに掴んでいる小猫の拳を光力で蒸発

させてしまおうと考え、力を込めようとしたときに迫る気配を感じ取った。
掴む手を放し引いた瞬間、先程までコカビエルの腕があった場所を高速で通過する人の踵。目を向けるとそこには、いつの間にか接近していたシンが立っていた。
近付く手間が省けたと言わんばかりにコカビエルは笑みを深め、踵落としなどという派手な蹴りを使用して、体勢を戻す為に隙を生じさせたシンに向けて手を伸ばそうとしたが、今度は右側から狙われていることに気付く。
背中から生える五枚の左翼を束ねて防御の姿勢を取ると、一瞬遅れて左翼全体に衝撃が走る。攻撃の主は『赤龍帝の籠手』を突き出した一誠であった。
倍加を限界まで高めた一誠の拳はそれなりの威力があったらしく、コカビエルの表情は変えられなかったものの、その場から二、三歩ほど後退させることが出来た。この間にシンは小猫の肩を掴んで後ろへ下がり、一誠もまたゼノヴィアを後ろから羽交い絞めするような格好で力の限りひっぱり、掴まえられていた聖剣をコカビエルの指から強引に引き離して、シンたちと同様に下がる。
シンたちが一定の距離を開けたのを見計らって、後方で待機していたリアス、朱乃、ピクシー、ジャックフロストが、一斉に溜め込んでいた魔力を放つ。滅びの力を持つというリアスの魔力弾、朱乃とピクシーが、共に得意とする雷の力を合わせ、空から落雷のようにして雷を触らし、大口を開いたジャックフロストの口からは絶対零度の息が吐き

出された。
それらを一身で受け止めるコカビエル。しかし拮抗する間も無く、胸の前で交差した腕を勢いよく振るうと、その腕の動きに沿って力は左右に割れ、校庭に大穴を開けた。
「甘い、甘い」
嘲笑を浮かべながら肩を揺らすコカビエル。口では一連の動きを見下すような発言をしていたが、内心では思った以上の手応えを感じていた。
最初に受け止めた小猫の正拳。若輩の悪魔であるが『戦車』の特性と合わさって、中々の膂力であった。実際、受け止めた左手には微かに痺れを感じている。そして受け止めた際に微かに感じ取った小猫が放つ魔力、例えるならそれは獣のニオイのようであった。少なくともリアスの『戦車』が、人から成りあがった悪魔でないことにコカビエルは気付く。
（ライカンスロープ、あるいはこの国固有の獣人か……）
伸びしろを感じさせるが、少なくとも今の自分を倒すにはまだ実力も経験も不足していると コカビエルは評価する。
次に右手でわざわざ挟んで受け止めたゼノヴィアの『破壊の聖剣』。相手との実力差を見せ付ける為ではなく、右腕で受け止めること、すなわち直接刃を受けることを危険と察したがゆえの咄嗟の行動だった。以前に受けたイリナの『擬態の聖剣』を上回る程

の威圧感を放つ『破壊の聖剣』、まともに受ければそれなりの傷を負うことを良しとしなかった、コカビエルの判断であった。

そしてその後、ほぼ同時に攻め込んできたシンと一誠の連携。小猫にコカビエルの意識が傾いた絶妙のタイミングでシンが仕掛け、否が応にもそちらに注意が向けられた瞬間に攻撃の第二波が襲い掛かる。両者とも連携自体は悪くなかったが、どちらも存在感を完全に消し去ることが出来ず、事前に察知出来ていた。少なくとも幹部級の堕天使には通じないが、それ以下ならば一撃ぐらいは完全に入っていただろうという評価を下す。

最後にまとめて放ってきた魔力の同時攻撃。現魔王の妹であるリアスの実力は若手の悪魔として申し分の無いものであったし、もう一人のそれなりの因縁がある悪魔、朱乃の雷もそれなりの威力があった。

コカビエル自身は直接の面識は無いが、風の噂で朱乃の素性は把握していた。直接顔を見て、その魔力から繰り出される雷を受け、確かにその技から同胞の顔を思い浮かべる。

(これを殺せば奴も怒り狂うだろうか……ああ、彼奴と一戦交わすのも一興だな。そのときお前はどんな顔をする？　バラキエル！)

仄暗い感情を胸の奥に宿しながらコカビエルは、まだ見ぬ未来を思い喉の奥で笑う。

暇つぶしと言えどこうも粒揃いとなると、自然と心が躍り『殺意』が滾ってくる。
そのとき、コカビエルの耳にある異音が届く。金属が衝突し砕ける音。それを聞きコカビエルは、別の戦いに終止符が打たれたことを悟った。

◇

リアスたちの魔力とコカビエルの光の槍が衝突するほんの少し前。木場の振るう聖魔剣と、フリードの振るうエクスカリバーが火花を散らし合っていた。
フリードが上段からエクスカリバーを打ち下ろすが、それを難なく聖魔剣で受け止める木場。すると受け止められたエクスカリバーが分裂し鞭のようにしなりながら、木場の首を刈り取る為に空を裂いて迫る。だが木場は眉一つ動かさないどころか眼球をフリードに向けた状態で、迫る刃が当たる直前に姿勢を沈め、数本ほど頭髪が宙に舞うが紙一重で避ける。
そしてその状態からフリードの脛を爪先で蹴りつける。その痛みでフリードの動きが一瞬硬直したのを見ると、受け止めている聖魔剣の刃をエクスカリバーの刃の上で滑らせながら向きを変え、柄頭の部分でフリードの胸の中心を強打した。
「ごっ！」

柄頭がめり込みフリードの目は見開かれるが、フリードの次にとった判断は早いもので、押される勢いを殺さず、その勢いに乗ることで威力を削ぎ、骨へのダメージを軽減させた。

「チィー!」

露骨に舌打ちをするフリードに、木場は間髪入れずに追撃を繰り出す。股下から上に向けて聖魔剣を振り上げると、それに反応しエクスカリバーの腹で防ぐが、胸部に一撃を受けているせいか反応が僅かに鈍い。常人から見れば殆ど差が無いものに見えるが、刃を交えている木場の視点から見れば明らかな遅れであった。ただその反応の遅れは数十分の一程度のものであり、まともにダメージを受けた直後の動きとしては敵ながら木場も大したものであると密かに感心させた。

斬り上げた聖魔剣が防がれるとすぐに木場は持ち手を返し、刃の向きを変えるとそのままフリードの大腿部に斬りかかる。狙われた箇所をすぐさま把握したフリードは、脚を後ろに引くと同時にエクスカリバーを地面に突き立てる様にして防ごうとするが、それこそが木場の狙いであった。

ダメージを負った体。それによる動きの遅れ。その為少しでも遅れを埋めようと反射的にいつも以上の力が肉体に負荷される。しかし、その負荷は次の動きに移る為の重荷に繋がる。

木場は大腿部に向けて放った聖魔剣を急停止させるとそのまま直角に振り上げる。木場のフェイントに乗せられたと知ったフリードは焦燥とも呼べる表情を浮かべ、すぐに防御の体勢に移ろうとするが、大きく引いた脚や無理に構えたエクスカリバーがそれを阻害する。

木場が聖魔剣を振り下ろす。剣先が服へと喰い込み、容易くそれを斬り裂くと、その奥にある肉体に刃が沈んでいく。特殊な加工を施し、防弾防刃に優れた神父服をも裂く聖魔剣の刃の前では、人の体など紙よりも簡単に裂いてしまう。

自分の体に沈んでいく刃の冷たい感触が脳へと流れ込んでいく。そしてそれがフリードの生存本能に強く訴えかけたとき、フリードの体は生きる為になりふり構わずに動く。

地面に付いている部分である両足、地に接着しているエクスカリバー。それをとにかく我武者羅な力で動かし、少しでも早く体から刃を遠ざけるようにする。両足はあらん限りの力で地面を蹴飛ばし、エクスカリバーの先端を地面に勢いよく刺し込み、その反動で体を後方に動かす。

体に沈む刃が深く食い込む前に、フリードは後方へと倒れ込む様にして体から刃をむりやり離すと、そのまま後転して何とか木場との距離を稼いだ。一見すると無様とも言える回避方法であるが、斬った瞬間に手応えを感じていた木場からすれば、体が裂かれ

る前に逃げ延びたフリードの反射神経と生への執着は、舌を巻くものであった。

校庭を転がり土で髪も服も汚れた状態となったフリードは、片手でエクスカリバーを向けたまま空いた方の手で傷口を押さえ、何とか乱れた呼吸を整えようとしている。座った状態ですぐに立たないのは、木場から受けた傷が決して軽くないものであることを示していた。

向けられたエクスカリバーは最初の方と比べれば、その剣身から放つ輝きが鈍くなっている。原因としては聖魔剣との打ち合い、あるいは使い手であるフリードの消耗などが考えられる。

フリードは屈辱で奥歯が割れるのではないかという程強く噛み締めながら、このまま木場の聖魔剣と延々打ち合い続ければどうなるかを考えていた。木場は息一つ乱れておらず、汗もかいていない。対する自分は荒い呼吸、そして焦燥と重圧からか絶えず汗が流れ続けている。

フリードは横目でバルパーとコカビエルの様子を見た。バルパーは木場とフリードの方へと顔を向けているが、視線はどこを向いているのか分からず、何かしきりに呟きながら自分の世界に入り込んでいた。一方のコカビエルは完全にこちらの方を意識しておらず、リアスたちの方を注目していた。今の自分に外野からの手助けは一切無い、そのことを深く理解する。

「あー、いやだいやだー、何が悲しくてクソ悪魔相手に血塗れ泥まみれの屈辱塗れにならないといけないんですかねぇー？」

短い時間で嫌と言う程に味わう敗北感と屈辱。ここまで来ると怒りも飽和し、変な笑いが込み上げてくる。その衝動に逆らう事無く笑みを浮かべるフリードであったが、その笑みを向けられた木場は警戒を強める表情をした。

フリード本人は笑っていると思っているが、実際に浮かんでいる表情は笑みなどとは表現できるようなものではなく、顔の至る所が細かく痙攣して、左右非対称の形容しがたい歪な表情を造り上げていた。

「……はは、ははは。木場きゅーん、ちょっとこの展開は酷すぎません？　俺様この無敵の聖剣様を手に入れて一度も無双シーンが無くてどれもこれも負けっぱなしが続いてるんだけど？　ちょっとボクゥかませすぎじゃありません？　……ということで最初からやり直しましょう！　すいませーん！　テイク２お願いしまーす！」

「例え何度やり直そうとも同じだよ」

道化のような芝居をするフリードに冷たく突き放すような木場の声が刺さる。

「百回だろうと千回だろうと君は同じ結末を辿る。君とそのエクスカリバーでは僕たちの剣は折れない」

フリードはぴくりとも動かなかったがその眼だけは異様な輝きを放っており、血走っ

た眼力を木場に向けてから呪詛の様に重々しくしゃがれた声を出す。
「――図に乗ってんじゃねぇよ、このクソが……僕たちの剣？　悪魔と死人の青春ごっこにゃあ反吐が出るぜ……もういいや」
決心したようにフリードはポツリと言葉を洩らす。
「もういい、もういい！　もういい！　この後間薙くんもイッセーくんも斬り刻んでやろうと思ったけど全部ボスに譲るわ。もうお前だけのことしか考えねぇ」
普段の甲高い声で早口で捲き立てるフリードの口調とは違い、ひどく平坦な喋り方をしながら立ち上がると、傷口を押さえていた手を放しそのままエクスカリバーを握る。
「ありったけ、ありったけ注いで、てめぇは殺す！」
その宣言と同時にエクスカリバーは再び輝き始める。それも最初のときを大きく上回る程の光。それはフリードに組み込まれた因子を全て流し込んだことによって生まれた光であった。後先のことを考えず、ただ木場を斬り殺すことのみに全てを集中させるフリード、その尋常ならざる殺意は、放つ光を通じて木場へと伝わってくる。
（ここまで誰かに殺意を持たれたのも初めてかもね）
渦巻く殺意を一身に浴びながらも、木場の視線はフリードから外れない。冷たく肌に突き刺さる殺気、常人ならば意識を手放してしまいそうになる恐怖を体験するであろうその中で、木場はひたすら心を静め、次に来るフリードの攻撃に備えていた。

「伝説って大層な言葉で飾られてるんだからちったぁその部分見せてみろやぁ！」
　エクスカリバーの光がフリードを包み込む。そして、そのフリードの言葉に応じる様に、エクスカリバーがその内に秘めた能力を完全に開放する。
「これは……」
　言葉を失う木場の前で、光に包まれたフリードの体が、焦点がずれたかのように何十にも重なって見える。その重なった部分は左右に展開すると、そこに新たなフリードが立っていた。更にそこから数を増やしていき、やがてフリードの数は二十に達する。
「……厄介だね」
　フリードの分身に囲まれながら木場は苦い表情をした。おそらく分身を生み出したのは『擬態の聖剣〈エクスカリバー・ミミック〉』と『夢幻の聖剣〈エクスカリバー・ナイトメア〉』の能力を掛け合わせたもの。ただの分身ならばともかく、目の前に立つ分身一つ一つからは、本人と区別がつかない気配が放たれている。そしてこの状況を悪化させているもう一つの要因として、目の前に立つ分身の数以上の気配を木場が察知していたことである。
　少なく見積もっても、見える分身と同じ数程の、姿の見えない気配が取り囲んでいた。二つの聖剣の能力に『透明の聖剣〈エクスカリバー・トランスペアレンシー〉』を上乗せした不可視の分身。それら全て『天閃の聖剣〈エクスカリバー・ラピッドリィ〉』の速度

が備わっているのかと想像すると、意識せずとも額から汗が流れてくる。
フリードは今、全てのエクスカリバーの能力を完全に操っていた。
『こんだけてんこ盛りしたエクスカリバーに斬られるなんてお前はしあわせもんだぜぇ！　涙流して感謝しろぁぁぁぁぁ！』
声が重なり合い反響したように聞こえる。フリードたちはそれぞれ違う構え方をし、今まさに木場へと斬りかかろうとしていた。
（この中のどれかが本体だけど、見極めることが出来るのか……）
フリードが襲い掛かる直前の限りなくゼロに近い時間の中で、木場の思考は熱を帯びる程の速度で回転する。目に見えるフリードと見えないフリードの剣戟を切り抜けて本体を斬る方法。それは何か、そんな手段はあるのか、窮地というべき瞬間であっても木場の思考は停止せず、勝つ為に生き残る為にあらゆる可能性を探り続ける。
やがて限られた時間がゼロに至ろうとした、そのとき――
『――――』
「ッ！――いくよ！」
先に動き始めたのはフリードでは無く木場の方からであった。重心を低くした体勢から『騎士』特有の脚力を全開にして一気に加速、群れなすフリードたちに向かっていく。

エクスカリバーを構えたフリードの一人が、突っ込んでくる木場に向かって聖剣を振り下ろす。しかしその聖剣は体を通過するだけであり、木場が傷を負うことはなかった。

フリードの幻であることは間違いなかったが、その刃が通過する直前まで本物と何一つ変わらない存在感を放っている。幻だと分かっていても、木場の心臓は無意識に鼓動を早めてしまう。肉体への損傷は皆無であるが、精神の摩耗は想像以上のものであった。

また別の刃が体を突き抜けていく。あまりに現実味が有り過ぎて、本当に刺されているのではないかと脳が錯覚してしまう程の分身。それだけに留まらず、不可視の分身から繰り出される斬撃も気配の察知に長けた木場には鮮明に感じられ、冷たい感覚を浴びる程体感していた。

それでも木場は、その身に幻影の刃を受け続けても脚を動かすことを止めず、狙い定めたかのように複数存在するフリードのうちの一人に向かって最短距離で迫っていた。

最奥にいるフリードの一人。その右腕には前の戦いで、シンによって刻まれた傷が刻まれている。他の分身も同じ傷を負っているが、他の分身とは異なる点が一つだけあった。それは右腕から流れる血、それが地面に点々と染みを作っていく。

どんなに精巧な分身であっても負った傷の流血までは再現できないらしい――

やがて無数の刃を掻い潜り木場はそのフリードの前に立つ。

（――なーんていうこと考えてんじゃないの？）

そんなことを考えながらフリードは、木場が正面に立つ流血をしている分身の近くで、身体を透明にしながら息を潜めていた。

木場の前にいる分身は、わざわざ本物と見間違えるように細かい調整を加えた、ただの分身の一つに過ぎなかった。本物はそのすぐそばで、木場が偽物を斬るときに出来る最大の隙を狙い姿を隠している。

本物も偽物と同じく流血をしているが『透明の聖剣』ではそれすらも見えなくし、『擬態の聖剣』と『夢幻の聖剣』の分身は限りなく本物に近い偽物を生み出す。フリード自身ここまで繊細に能力を使いこなせるとは思ってもいなかったが、そのことについて今は深く考えるつもりは無かった。この後すぐに起こるであろう木場を斬殺する光景の方が、フリードにとって重要であった。

（お友達が作った抜け道に感謝しながら死ねるんだから幸せだろう？　だって君達大好きだろう友情青春遊びがさぁ！）

聖魔剣を振りかざした木場が囮の分身に斬りかかろうと一歩踏み込む。最大の一撃を放つために出来る大きな動き。この瞬間をフリードは待っていた。

（青臭い友情ごっこでぶっ殺されな！）

釣られる木場に侮蔑の言葉を胸の裡で吐きながら、フリードはエクスカリバーで木場の首を斬り飛ばそうとした――

――そのとき聞こえる砂利の擦れる音。あろうことか側面を向いていた筈の木場が、本物のフリードを正面に捉えていた。

虚を衝くつもりが、突然木場が踏み込んだ足を軸にして向きを変え、見えない筈の自分をまるで見ているかのように動いたせいで、逆にフリードが虚を衝かれる。

（なんで？　何故？　Ｗｈｙ？　どうして？　どうやって？）

頭にいくら疑問を並べても答えは出ない。木場は軸足の回転と同時に横薙ぎに聖魔剣を振るう。

何も無い空間で散る火花と響く金属音。そしてエクスカリバーを握るフリードには、それ以外の音が剣を伝わって体の芯に響いてくる。

耳を凝らさなければ聞こえない小さな音。だがあってはならない音。エクスカリバーの亀裂音。それが体の奥に響くと、狂気によって浮かされた熱が一気に奪われていく。

（マジかよ……マジかよ！　マジですかよおぉぉぉぉ！）

どんなに現状の否定を望んでも変わらない現実。フリードの絶叫も空しく消えるだけであった。

木場が高々と聖魔剣を掲げる。月の光を浴びて輝くそれは、フリードの握るエクスカリバーの輝きが霞む程の光を放っていた。

そして木場は剣を振り下ろす。そこにかつての自分と同志たちへの無念を込めて、今の仲間への感謝の意を込めて、自分を支えてくれた全ての者への祈りを込めて。

木霊する破砕音。

その直後に透明化していたフリードが姿を現す。

「……かぁー、酷い結末だ」

毒づくフリード。その右腕は肘から下が無く、切断面からは夥しい量の血が流れ続け、足下に血の池を作っていた。そして出来た血の池に横たわるフリードの右腕。その手にはエクスカリバーが握られているが、エクスカリバーの剣身は半ばで折れていた。

やがて木場の足下に、旋回しながら落ちてきた物体が突き刺さる。それは折られたエクスカリバーの残りの部分であった。

木場は空を仰ぐ。

「僕らの力がエクスカリバーを超えたよ……」

「浸っている……ところ悪いが……一つ聞いていいですかい?」

話し掛けたフリードの顔は大量の血液を失っている為、血の気は無く死人のような顔色をしていた。

「何で……俺っちの居場所が分かったの……」
「――聞こえたんだよ」
「聞こ……えた？」
「『ここにいる』って誰かの声が。もしかしたらエクスカリバーが僕を呼んだのかもね」
「……はっ！　なんだそりゃ」
フリードは鼻で笑うと、自ら作った血溜まりの中に倒れ伏す。
「自分の武器すら……敵だったら……勝てる訳無いっつーの。あーあ……折れたものを……再利用したのが不味かったかねぇ……じいさん……こいつはとんでもねぇ不良品だったよ……まあ、これで……俺様も……一つ大人に……」
最後まで言い切ることはなくフリードは沈黙した。最初から最後まで軽口を止めない男であった。
木場は折れたエクスカリバーを一瞥してからバルパーの方に向かう。超えるべき聖剣を超えた達成感に浸るよりも先に、まだ木場にするべきことが残っていた。
当のバルパーはフリードが敗れたことも、エクスカリバーが破壊されたことすら眼中に無いのか、ひたすら自分の世界に入り、独り考えに没頭していた。
「聖と魔の同一……それが意味するのはあるべきバランスの崩壊……つまりそれが意味するのは……」

木場が目の前に立っていてもバルパーは見向きもせず、ひたすら独り言を呟いていた。
「バルパー・ガリレイ……覚悟してもらう」
殺気と共に聖魔剣の先を向ける木場であったが、バルパーがそれに対し見せたのは恐怖では無く、自分の思考を妨げる雑音を放った、木場への怒りの表情であった。
「静かにしろ。考えが途切れる。今一番良いところなのだ。この考えが正しければ私の研究はより飛躍し、更なる良質の聖剣使いを生み出すことが出来る」
窮地に立っても考えるのは聖剣のことのみ。最早全ての事柄、自分の命すら二の次であり、何時如何なる時でも聖剣のことしか考えない。それは狂気と表現していいものであった。
「どうしてそうも聖剣のことしか考えない！　どうしてその為に軽々と命を犠牲に出来る！　何故……何故、お前の為に多くの悲劇が生まれる！」
怒りを露わにしてバルパーを批難する木場であったが、返ってきた答えは恐ろしく平坦で、冷めきったものであった。
「それは私が本当に欲しかったものを手に入れられなかった『持たざる者』だからだ」
「『持たざる者』だって……？」
「どんなに手を伸ばしてもどんなに他のもので埋めようとも決して満たされない。――

理解出来ないと思ったかね？　それで結構。恥も外聞も無く言おう、君のような存在を例え千、万、いや億生み出してでも私は満たされない部分を満たしたいのだよ。分かるかね？　君達は所詮私を満足させる為の道具。ただそれだけだ」

後悔、罪悪感、後ろめたさ。そういった感情の一片も感じられない無慈悲な言葉の羅列。

臆面も無く言い切ったバルパーの前で、木場は無言で剣を振り上げた。これ以上言葉を交わすことの無意味さ、その口から吐かれる毒で同志たちの死をこれ以上汚されるのに耐え切れなかったからである。

振り上げた聖魔剣。バルパーを斬る直前に感じる剣の重み。それは木場が今まで生きてきた中で経験したことが無い程軽いものであった。

そして木場が剣を振り下ろそうとしたとき――

「木場ッ！」

殺意で滾る脳を一気に冷ます声。誰の声か分からなかったが、それは木場の行為を咎めるものではなく、何か危険を伝えるものであった。

声が耳に入った瞬間、それに応じるかのように体は動きを急停止させる。その直後、バルパーの胸から突如光の槍が飛び出してきた。持ち前の反射神経で咄嗟に上体を後ろへと逸らす。そのおかげで槍の先は木場の制服に触れるか触れないかという、寸での

ところで止まっていた。
光の槍で貫かれたバルパーは胸から光の槍を伝わって大量の血を流しながらも、背後へと顔を向ける。
「コカ、ビエル！」
「お前との暇潰しもそれなりに楽しかったがここまでだ。せめてお前の自慢のエクスカリバーを砕いた奴を葬ってやろうとしたが、中々都合よくはいかないな」
血を吐きながら悪鬼の形相で睨むバルパーであったが、コカビエルは特に悪びれた様子も無く、薄らと笑みを浮かべていた。
「貴様の、せいで思考が三秒も、止まってしまった……だが考えは纏まった、聖魔剣の存在、魔王も神も――わけ、だな。どう、だ？」
「一つのイレギュラーでそこに至ったか。死ぬ間際でも思考を止めないお前のその執念と狂気、人間にしてはかなり気に入っていたぞ。褒美に教えてやる、正解だ」
何かの答えに到達したバルパーは血を吐きながら結論を言う。肝心な部分は聞き取れなかったが、コカビエルはその答えを知っていたのか、どこか愉しそうな表情でバルパーの結論を肯定する。
それを聞いたバルパーは限界に達したのか、そのまま地面へと倒れ動かなくなった。木場が動かなくなったバルパーの首筋に手を当て生死を確認しようとしたとき、いきな

りバルパーの手が木場の腕を掴む。腕から伝わってくるのは、死に掛けの老人とは思えない程の力であった。
「また……会おう……」
最後にそう言い残し、掴んでいる手から力が抜ける。倒すべき仇敵であるバルパーの死。それは木場にとってわだかまりが残るものであった。
「バルパーは貴方の仲間じゃなかったのかしら？」
仲間を切り捨てる行為そのものに対し怒りを露わにし、全身から赤い魔力を噴き出すリアス。だがコカビエルは怒るリアスを一瞥すると一笑する。
「仲間？　隣に立ち同じ目的に向かえばお前の基準で仲間なのか、リアス・グレモリー？　成程、情に厚く慈悲深いことだ。あまりの慈悲深さに涙が出そうだ、片腹痛くてな」
リアスへの愚弄。咄嗟に言い返そうとするが、有無も言わさないコカビエルの重圧が場を押さえ込む。
「俺もバルパーも所詮は互いの利益で動いていたのみ。そもそも最初からエクスカリバーの統合までが俺の手助けする範囲でな、それ以降は俺の範囲の外のことだ。まあ、統合したエクスカリバーの出来が良かったのならばもうすこし付き合っても良かったが、それも折れてしまったらこれ以上付き合う義理も無い」
尤もあいつの残したものは有効に使わせてもらうがな、と言ってコカビエルは指を鳴

らす。するとバルパーがエクスカリバーを統合させる為に使っていた魔法陣が再び輝き始めた。
「その魔法陣はこの街の各所に仕込んだ術式と繋がっている。そして魔法陣の媒体には俺の力が混ぜ込んである。つまり俺と魔法陣とも繋がりがあるという訳だ。これが何を意味するか分かるな？」
　考えるだけでも最悪に近い展開である。術式を造り出したバルパーは死んだ、だがそれを起動させる鍵はコカビエル自身に移ったということとなる。
「フハハハハ！　安心しろ。少なくともお前たち全員が動けなくなるか、戦意を喪失させるまでは術式は発動しない。つまりお前たちが死ぬまでに俺を倒せばいいということだ。やる気が出て来ただろう？」
　コカビエルは手招きし、リアスたち全員を挑発する。
「さあ来い！　死力を尽くしてみろ！　己の限界を全て絞り切ってみせろ！」
　開かれた十枚の黒翼が羽ばたき、校庭の砂が舞い上がる。
「俺を燃えさせろ！」
　撒き散らす圧倒的な戦いへの渇望。コカビエルの周囲が歪んで見える。
「小猫、シン」
　臨戦態勢に移ったコカビエルを見てリアスは、小猫とシンの名前を呼びながら二人の

顔を見る。それが何を意味するのかを悟りながら二人は同時に頷くと、コカビエルに向かって走り出した。

先鋒となった二人が動き出したタイミングでリアスは一誠の名を呼び、自分の考えを伝える。

一誠がその案に同意したとき、既にコカビエルとシンたちとの戦いが始まっていた。

先に仕掛けたのは小猫であった。踏み込むと同時にコカビエルの腹部に向け、下から拳を突き上げる。だが今度は受け止めることなく、移動のみで回避する。

大きな動作で隙を造る小猫であったが、コカビエルはその隙を狙おうとはしない。何故なら小猫の動き自体が囮であることを読んでいたからだ。それを証明するように、視界の端からコカビエルに迫る影を捉える。腕を持ち上げてそれの前に出すと、直後に肉と肉が衝突し合う音がした。

自分の蹴りをあっさりと防がれたシンであったが焦る事は無く、今度は息を吸い込み至近距離からコカビエルに向けて『氷の息』を吹きかけた。

コカビエルの体を白い冷気が覆い尽くすが、次の瞬間には冷気を突き破って光の槍が飛び出してきた。

既視感を覚える光景。だが至近距離で放たれたそれを、今度は貫かれる事無く両手で挟んで受け止める。両掌が焼けるような感触を覚え、槍の勢いに押されながらも刺す勢

いを殺していく。そして背中から地面に着地する間際、完全に止めた光の槍をコカビエルに向かって投げ返した。

再び冷気の中に消える光の槍。直撃した音は聞こえない。

相手の視界を奪っていると思えるこの間に、今度は小猫が冷気の中にいるコカビエルに拳を叩き込む。しかし――

「つぅ!」

殴った方の小猫が表情を険しくし、突き出した拳を引いた。現れた拳には至る所に裂傷が刻まれ、血が流れている。

「甘いな!」

白い靄の中からコカビエルが姿を現す。至る所に霜が張り付いているが、目立った損傷を受けているようには見えない。そして現れたコカビエルの翼は羽が逆立っており、刃の様な艶があった。恐らくはその翼で小猫の拳を裂いたのであろう。

コカビエルは投げ返された光の槍を持ち、それを小猫に突き立てようとする。コカビエルの速度に小猫は反応が遅れ、回避出来ない。

しかし、その槍が突き立てられる前に小猫の背後から木場が飛び出し、コカビエルの脳天に向けて聖魔剣を振り下ろした。しかしそれも、コカビエルの光の槍によって防がれる。不完全とはいえエクスカリバーも断ち切る聖魔剣を、最初の魔剣のときのように

自らの光力のみで抑える。
「聖魔剣……近くで見ると中々良い造形をしている。センスがいいなリアス・グレモリーの『騎士』」
「お褒めに預かり光栄だよ」
皮肉か本心か分からない言葉に律儀に答えながら、木場は一方の手を放すと新たな聖魔剣をその手の中に創造する。そして着地と同時に首、足を狙い上下別々の箇所に向け同時に斬撃を放つ。
木場の同時攻撃を前にコカビエルは頬を震わせて笑うと、手に持った光の槍を片手で素早く回し、首と足を狙った聖魔剣に叩きつけて簡単に捌いてしまう。
純粋な力もさることながら技量も並以上持つことに木場は唇を噛む。だが木場の本当の目的は小猫を援護することでもコカビエルを斬り付けることでもない。出来る限り自分に注目させることであった。
木場の動きによってコカビエルの死角。そこから『破壊の聖剣』を構えたゼノヴィアが一気に飛び掛かる。
「丸分かりだ」
その行動さえ見通していたのか、コカビエルは空いている手の方に光を集めると、そこから槍では無く剣を創造した。コカビエルにとって自在に形を変化させるのは容易

なことであるらしい。
　ゼノヴィアのエクスカリバー、コカビエルの光の剣。同じ光に属する力を持つ同士が衝突したとき、互いの力が反発しあう。眩い輝きの中、上下左右あらゆる角度から斬るゼノヴィアに対し、コカビエルは片手でそれらを受け流していく。この間に木場も二本の聖魔剣を用いて攻撃を繰り出すが、こちらも片手、しかも扱い辛い槍で難なく防いでいた。
　右半身と左半身が独立しているかのように器用に動かしながら、三本の剣を防ぐコカビエル。一見すると均衡しているように思えたが、コカビエルが翼を大きく広げたとき、校庭の土が捲り上がる程の衝撃がコカビエルを中心にして放たれた。
　飛ばされる木場とゼノヴィア。二人が宙に舞うのを見計らい、コカビエルは手に持った得物を木場たちへと投擲する。一直線で向かって来る光の槍を、木場は聖魔剣を交差することで辛うじて防ぐが、その威力に一本手から離してしまう。ゼノヴィアは空中で体勢を立て直そうとするが、それよりも早く光の剣が突き立てられようとしていた。だがこのとき横から飛び掛かった小猫が、覆い被さるようにして地面へと押さえ込み、間一髪直撃を避ける。
「くぅー！」
　しかし完全に避けることが出来なかった為、小猫の背中には小さな切創が出来てい

た。制服に切れ目が入り、そこから見える白い肌が微かに赤くなっているが、堕天使の光が猛毒である悪魔にとっては軽視できない傷であった。

速やかにアーシアの治癒を必要とする状況。だがそう簡単にことを進めさせまいと、コカビエルは追撃の体勢を取る。そのとき、木場たちとコカビエルの間にシンが立ち塞がった。

シンはコカビエルの前で片足を軽く上げ、それを後ろに引くという奇妙な構えをする。その行為に一瞬眉を顰めるが、その構えの意味はすぐに知ることとなった。

頭上から聞こえてくる風切り音。その音は段々と大きくなっていく。それが何かと見上げるよりも早く、シンの眼前へと落下してきたのは、先程弾かれた木場の聖魔剣。勢いよく回転するそれを躊躇う事無く、引いていた足で蹴りつける。

聖魔剣の柄頭が足の甲に当たり、そのままありったけの力を込めて蹴り飛ばす。放たれた聖魔剣は、白と黒の光を彗星の尾のように伸ばしながらコカビエルの胴体に向かって迫る。意表を突く様なシンの攻撃であったが、コカビエルはさして驚くことはなく、その器用さを愉しむような表情をしていた。

聖魔剣が当たる寸前、コカビエルの右手が聖魔剣を掴み取る。そして手に握る聖魔剣をあっさりと握り砕いた。持ち主の意志に反応して性能を高める『神器』故、木場の手から離れれば、例え『禁手』であろうと十分な性能を発揮出来ない。

しかし、コカビエルの反応は想定の内のことである。
シンは聖魔剣を蹴り飛ばしたときには既にコカビエルに向かって駆け出しており、聖魔剣を砕いたのと同時に右手の中で魔力剣を造り出しており、走りながらその中に魔力を充満させる。左眼を失い再生して以降、いつも以上に魔力の操作がスムーズに行えるようになり、右手限定ならば簡略化した『熱波剣』と同じ速度で全力の『熱波剣』を放てられるようになっていた。
右手を振りかざしながら、シンは今まで余波で攻撃していた全力の『熱波剣』を、初めて直接相手に叩き込む。コカビエルも迎え撃つように左手に光の剣を造り出すと、振り下ろした魔力剣に向かって斬り放つ。
白色の魔力と光力が零距離で衝突し合う。暴風の様に押さえ込まれていた荒れ狂う魔力が一斉にコカビエルに牙を剥くが、そうはさせまいと光の剣から放たれる閃光が次々とその魔力を相殺していく。だが、それでも相殺し切れない魔力が、逃げ場を求めてコカビエルの周囲を破壊していく。地は無作為に抉られ、大小様々な石が魔力の衝撃で飛ばされ、コカビエルの背後に立つ木々を穿ち、やがてへし折る。
そんな暴風の中心でもコカビエルは愉快そうに笑い、狂気に近い感情をシンへと向ける。
「いいぞ、いいぞ！　もっと抵抗してみろ！」

「お前の期待に応えるつもりは無い」
荒れ狂う魔力の渦の中でコカビエルは右手で拳を作る。それを見たシンもまた左手を固く握り締めた。
破壊の中心でお互いの握り締めた拳が衝突し合う。周囲の破壊音に掻き消されない程生々しい肉と骨がぶつかり合う音。
シンはこのとき不可思議な感覚に捉われる。
コカビエルの黒い手袋に覆われた右手から伝わるのはただ衝撃だけではなく、何か本能を揺さぶり、脳まで突き抜けるような、激しくも底知れない熱のようなもの。具体的にどういったものであるかは表現出来ないが、何故かシンはコカビエルの拳から、コカビエル以外の存在を幻視した。
「その顔、何か勘付いたか？」
一瞬の戸惑いが伝わったのか、コカビエルは肉食獣のような笑みを浮かべる。そこには、シンが何故戸惑っているのか、理解しているかのような含みがあった。
シンは答えずに拳を押し込む。それと同じくして荒れ狂う魔力は収束していった。やはりというべきか、中心にいた二人は大きな怪我はないものの、衣服の一部が裂けていたり、千切れていたりなどの箇所が目立つ。
左手はコカビエルの右手を押さえ込んでいる状況。ならば次にとるべき行動は何か。

シンは自由になった右手で拳を作り、コカビエルの腹部に向けて殴り掛かった。
だが、この攻撃も同じくして空いたコカビエルの左手が受け止め、拳を潰すといわんばかりに握り締めた手から光を放つ。掴んだ手の隙間から白煙が立ちあがるが、シンはこのときを、相手の両手が塞がっている状況を待っていた。
「ヒホ」
「――何？」
前触れもなくシンの背中から顔を出すジャックフロスト。いきなりの登場に流石のコカビエルも虚を衝かれた様子であった。つい今まで死力を尽くすように戦っている場にそぐわない、良く言えば愛らしい、悪く言えば間の抜けた表情をしているジャックフロストの登場は、ほんの少しの戸惑いを生み出すのに十分であった。
ジャックフロストが指先を向ける。その先に魔力が集まったかと思えば、瞬時に変化して最速で氷柱を形作ると、コカビエルの顔面目掛けて発射された。
惚けた表情をして容赦ない攻撃を繰り出すジャックフロストに内心で感心しながら放たれた氷柱は避けられない速度では無いと評価する。両手を使って防ごうにも、今はシンの手を押さえている為に使えない。ならば体を動かして回避しようかと足を動かした時、動きが止まる。
コカビエルが動き出すその瞬く間も無いときに、シンの足が全力でコカビエルの足の

甲を踏みつけ、その動きを無理矢理制止させていた。
「小賢しいな」
　次のときには氷柱が命中し、コカビエルの顔が大きく仰け反っていた。しかしこのときシンは一矢報いたことを喜ぶのではなく、すぐに次の行動に移っていた。踏みつけていた足をどけ、そのままコカビエルの腹部に押し当てる。
　そのとき、仰け反っていたコカビエルの顔が起き上がり始めた。一見すれば貫いたかに見えた氷柱は、コカビエルの歯によってしっかりと受け止められている。尤も、シンからすればそう易々と思い通りにことが運ぶとは思っていなかった。
　歯で受け止めた氷柱が噛み砕かれたのと同時に押し当てた足に全力を込め、それを一気に爆発させる。脚部の力でシンの体が後方へと跳ぶ。コカビエルもまたシンと同じく、後方へと蹴り飛ばされた。
　互いの距離が十数メートルほど開く。腹を蹴り飛ばされたコカビエルは特にダメージを負った様子は無い。
「まだま――」
「イッセー、今よ！」
「はい！」
　コカビエルが言い終えるよりも先にリアスが合図を出す。その声の方へと目を向け

たコカビエルが見たのは、リアスと朱乃の肩に手を置く一誠の姿であった。
コカビエルの見ている前でリアスと朱乃の魔力が瞬時に膨れ上がる。見ている者の肌が粟立つ程の力の波動。
そして二人はその力をすぐに形にしていく。リアスはコカビエルに両掌を向けると、グレモリーが持つ滅びの力を収束させ、あらゆるものを塵へと変える魔力を生み出す。朱乃は翼を広げ飛翔すると、天に向かって手を掲げる。空が瞬く間に輝き始め、轟音が絶えず鳴り響き続ける。
それを目の当たりにしたコカビエルの反応は――
「――素晴らしい！　若いと思っていたがこれほどの素質を秘めていたのか！　最上級の悪魔にも見劣りしないこの力！　一体どうやって生み出した！　……ああ、成程、『赤龍帝』の力か！」
焦るのではなく喜び、賞賛しながらコカビエルの視線がリアスと朱乃から一誠に向けられる。
「『赤龍帝の籠手』が持つ譲渡の力。見る分には初めてだが何度か耳にしたな！　他人に自分の力を分け与える腑抜けた能力だと蔑んでいたが、どうやらその認識は改めた方がいいな！　ここまですれば上等だ！」
コカビエルの見解は当たっていた。一誠が『女王』にプロモーションし、その状態で

限界まで高めた『赤龍帝の籠手』の力を二人に送っていた。『赤龍帝の贈り物』で複数に力を与えると譲渡する力の倍増分がやや落ちるが、質の異なる攻撃を同時に繰り出すことで防ぎきれない様にするという考えから、リアスと朱乃に与えるという選択となった。

哄笑を上げながらコカビエルは大地を踏み躙る、あるいは地に根を張るように左右一歩ずつ地を踏むと、左右の手と共に十枚の翼も大きく広げる格好をする。

「来い！　その力、この身で存分に試してやる！」

真っ向から受け止めようとするコカビエル。その身から溢れ出す鬼気は、魔力を放とうとするリアスたちを呑み込まんとするものであった。

リアスと朱乃が目配せをする。そして共に大きく息を吸い込んだ後、纏わりつく様なコカビエルの鬼気を祓うかのように、覇気を込めた掛け声と共に最大限まで高めた力を解き放った。

「消し飛べェェェェェッ！」

「天雷よ！　鳴り響け！」

消滅の力を秘めた紅の魔力がリアスの手から放たれる。コカビエル一人など軽く覆い尽くしてしまう程の魔力の塊が、校庭の土を消し去りながら向かって行く。

朱乃が振りかざしていた指をコカビエルへと向けると、空から青光りする雷光が降り

注ぐ。雷を数千も束ね柱のように巨大となった雷光は、リアスの魔力よりも先にコカビエルに直撃する。

――かに思えた。

「ハハハハハハハハ！　この貫くような感覚！　バラキエルそのもの、いやそれ以上かもしれないな！　血というものはやはり重要だな！」

雷光が直接コカビエルに触れることはなかった。全身に纏うコカビエルの光力が雷を弾き、四方へと散らせていく。

「私とあの者に何の繋がりも無い！」

コカビエルの言葉が朱乃の触れてはならない部分に触れてしまった為か、降り注ぐ雷は更に勢いを増す。コカビエルの足がその衝撃で地面に沈み込むが、コカビエルの表情から笑みは消えない。

そこにリアスの放った全力の魔力が、追い打ちを掛けるように衝突する。

コカビエルはこれを突き出した両手で受け止める。コカビエルの光とリアスの魔力は反発し、魔力の塊から光力で押された魔力が周囲に飛散していく。

両方の力と拮抗しているかのように見えるがリアスの魔力、朱乃の雷を同時に防ぐのはやはり難しいらしく、僅かながら纏っている光力の膜を突き破り、本体へと損傷を与えていった。

突き抜けた雷撃が纏っているローブを貫きその下から煙を立ち昇らせ、リアスの魔力を押さえている両手は浮き出ている血管の一部が裂けてそこから血が流れ、指先は受け止めている衝撃で爪が何枚か剥がれ落ちていた。
無傷では済まない。だが同時にリアスたちはあることも悟る。
これではコカビエルを倒しきることは出来ない。
その証拠に降り注いでいた雷光はその光を弱め、段々と細まっていく。魔力の塊もまた徐々にその形を縮めていき、徐々に崩れ始めている。
どちらも消え去るのは時間の問題であった。
「面白かったがここまでのようだな！　サーゼクスの妹！　バラキエルの――」
見下しつつも労うようなコカビエルの言葉が止まる。そしてその視線は背後へと向けられた。
「――やってくれるな」
背後の人物に話し掛けるコカビエル。リアスたちの方からはコカビエルが壁となってその姿が見えなかったが、注意深く見ると居る筈の場所に居ない人物に気付く。そこには替わりといわんばかりにジャックフロストが座っていた。
「魔力の隙間を縫ってここまできたか、命知らずめ」
「見えているからな。おかげでここまでこられた」

コカビエルの伸ばした黒翼の一枚に手を掛けるシンは、いつものように冷めた声で応じる。

コカビエルの言った通りシンは、リアスと朱乃の同時攻撃の最中にコカビエルへと接近を試みていた。弾かれ四方に散る魔力の合間を通り抜けていくという、文字通りの命懸けの行動。下手をすれば消滅の魔力と雷光を浴びて、戦闘不能状態になるどころか、味方への精神的動揺すら招きかねない独断行動であった。

それが出来たのは左目のおかげであった。この眼のおかげで周囲の魔力の動きを把握し、適した動きによって命や身を護ることが出来た。

未だに二つの魔力は消え去っていない。下手にシンに対応しようとすれば魔力を直接もらう危険性がある。

ならばコカビエルがどういった選択を取るか?

それはすぐにコカビエルの口から齎された。

「命を賭した賭けに成功した報酬だ。持っていくだけ持っていけ!」

不敵に笑うコカビエルにシンは言うまでも無いと言わんばかりに、左手で翼の半ば部分を持ち右手で付け根部分を掴む。覆っている光の膜のせいで掴んでいる手が焼かれるが、苦痛の色を一切見せず、力に任せてコカビエルの翼を引き千切った。

付け根部分から鮮血が噴き出し、服や顔にかかる。

「ぐうう！　どうした！　こそばゆいぞ！」
右翼の一枚をもがれて僅かに表情を歪めるものの、魔力の相殺の手は緩まず、それどころか挑発の言葉さえ掛けてくる。
シンは手に持った右翼を放り捨てるとすぐにもう一枚の翼を掴み、一枚目と同じように引き千切った。
「く、ハハハハハハ！　何だ？　遠慮でもしているのか！」
それでも哂って見せるコカビエル。もう間もなくリアスと朱乃の力が打ち消されるのが見えたシンは、今度は右手と左手で一枚ずつ掴み取り、コカビエルの背中を蹴りつけると同時に二枚もぎ取り、その勢いのままコカビエルと距離を取る。
やがてリアスと朱乃の力は完全に消え去り、その場に残ったのは右翼を四枚ももがれ、左右非対称となったコカビエルの姿であった。
「褒美はここまでだ！」
二人の力を掻き消したコカビエルは左手に光の槍を出すと、振り向きながら背後にいるシンへと振るう。そのとき背から流れる血が飛散し、宙に弧を描いていた。
払われる槍を、手に持っているコカビエルの黒翼を斜めにして構え、そのまま受ける。同じ堕天使の一部ということもあり、もがれた翼は光の槍に対して抵抗力を見せ、羽根一つ光で焼かれない。

斜めに受け止めたことで軌道をずらし、その間に構えた翼の下に潜り込み、手を放すとその状態で駆け出す。

シンはコカビエルの脇を抜ける形で通り過ぎると、そこから一気に距離をとってリアスたちと合流した。それと同時に離れた場所にいるジャックフロストも手元に召喚して安全を確保する。

「――無茶し過ぎよ」

「すみません。後でいくらでも説教を受ける覚悟です」

戻って来たシンを迎えるリアスの言葉は怒り、呆れ、安堵という感情が含まれていた。予想通りの反応であったが、取り敢えず先程の無謀についてのお叱りは後回しにするように頼んだ。

手痛い損傷をコカビエルに与えたが、リアスたちの陣営も決して万全とは言えない。リアスと朱乃は膨大な力を一気に消費した為に呼吸が荒く、疲労のせいか顔色も優れない。小猫はコカビエルの光の傷をアーシアの『神器』とピクシーの治癒魔法で回復してもらっているが、光の影響で若干蒼褪めた表情をしている。

今のところ無傷なのは木場、ゼノヴィア、一誠の三人のみである。ただ木場も一誠も『神器』を使用している為、リアスたち程ではないが消耗をしている。

そしてシンもまた魔力を消耗し、傷を負っている状態であった。両方の手とも拳を

作っている為見えないが、両掌はコカビエルの光の槍に触れたせいで皮膚が爛れ、一部皮が捲れあがっている部分もあった。火傷のような状態であるが、幸いシンは普通の悪魔と違って、光に対してそれなりの免疫のようなものがある為、素手で掴んでも即毒には至らず、その程度で済んでいた。

「俺の翼がここまで無残なものになるとはな……長生きはするものだ」

翼をもがれたコカビエルは、黒のローブの右半分が血で染まりながらも止血することなく、放置しながらリアスたちに笑みを向ける。

「リアス・グレモリー、全くお前は愉快な眷属を揃えている。赤龍帝、聖剣を得る為の残滓、バラキエルの落とし児。そして――」

コカビエルの視線がシンに向けられた。

「お前たちを温いだの甘いだの言っていたが、気付かぬうちに俺も随分と生温くなっていたようだ」

自嘲するような笑みを浮かべた後に、コカビエルは最後に残った右翼の一枚を掴む。

「こうも左右非対称だと流石に格好が悪い。整えるとしよう」

そう言って掴む手に力を込めて引く。凄絶な表情を浮かべながらコカビエルは、象徴といえる黒翼を自ら引き千切ろうとしていた。その愚行とも言える行動に誰もが絶句してしまう。

夜の静寂に肉が千切れていく生々しい音が木霊していく。そして一際大きな音がした後に、コカビエルは最後の右翼を地面へと放り捨てた。
「ハハハハハ……これで少しは様になったな」
片翼となったコカビエルはその顔に血がついた顔で満足気に笑う。
「一体どういうつもり……」
「見ての通りのつもりだが？」
コカビエルの行動を理解出来ず、リアスは咎めるような問いを投げかける。その声は少しだけ震えており、コカビエルの行動に動揺している様子であった。
「自ら不利になるようなことをするなんて……その血の量、貴方はじきに満足に動けなくなるわ！」
リアスの指摘した通りコカビエルの足元は、翼の千切れた痕から流れる血によって血溜まりが出来上がっていた。顔色も最初のときと比べれば、白く変色している。
コカビエルはリアスの指摘を鼻で笑って返す。
「流れるなら流れてしまえばいい、こんな温い血はな！　俺に必要なのは身を焦すほど煮え滾るような熱を持つ血だ！」
コカビエルは咆哮のように叫びながら右肩を掴むと、黒のローブの右袖を引き破り、右腕を露わにする。ローブの下から出てきた右腕は、肉が赤く盛り上がり変色している

状態で、それが手首から肩にまでかけて続いており、まともな皮膚がない。
「火傷の……痕？」
「違うな、リアス・グレモリー。これは痕では無い。未だに癒えることのない『傷』だ」
　コカビエルは否定しながら左手を右手の手袋に伸ばす。
「かつてある『魔人』と戦ったときに俺が受けた『傷』。それはその『魔人』を封じ込めても消えることなく俺の右手に残り続けていた」
「『魔人』……」
「周りはありとあらゆる方法で、この右手に残り続ける『魔人』の力を消し去ろうとしたが、どれも全て無駄に終わった。――だがな、俺はこれを消し去るつもりは全く無かった。あのとき、あの『魔人』と戦ったとき、俺の心はかつて無い程に高揚した。そんな素晴らしい記憶がこれを消すことで薄れていくのが、耐え難い程に嫌だったからな」
　まるで恋人との思い出でも語るような口調で話すコカビエルに、周囲はどう反応するべきか戸惑う。
「だから消し去る代わりにこの右手の中に封じることにした。いつでもあのときのことを思い出せるように、あのときの燃え尽くすような血の高ぶりを思い出す為に」
　コカビエルの左手が手袋を剥ぐ。その下から出てきた右手は腕よりも更に酷く、皮膚や筋組織が剥き出しとなって爛れており、まるで今出来たかのような生々しい火傷で

あった。
「この『地獄の炎』の残り火を、な！」
剥き出しとなった右手から蒸気のような白い煙が立ち昇ったかと思うと、突如として発火し右手全体が燃え始める。
「そう、この感覚！　この熱さだ！　蘇るぞぉ！　俺の中の血が再び熱を帯びていく！」
燃え盛る右手を見ながら昂揚した声を上げる。それに応じるかのように炎は激しさを増し、コカビエルの右腕を浸食するように焼いていく。
「ハハハハハハハハ！　さあ、戦争をしようか！　ここまで俺を見せたんだ、頼むから俺を冷めさせてくれるなよ？」

圧倒、助力

時折考えることがある。
自分の命はあとどれぐらいの年月持つのであろうか、と。
せいぜい百年程度の人とは違い、定められた命の期限を明確には知らない。人は老いや病で死ぬことがあっても、堕天使である自分にとって、それは当て嵌まるものではなかった。
老いることの無い肉体。それは聞く者にとってはさぞかし羨むものであろう。不老不死という言葉は、どんなに月日が経とうとも人の中から消えることの無い言葉である。
だが、もし不老を持つ者がいたのならば、それを求める者に対して口を揃えてきっとこう言うだろう。
『やめておけ。ただ退屈なだけだ』と。
老いずに存在し続ける。それによって最も変化するものがあるとすれば、それは恐らく精神である。
余りある時間、その過程に於いて精神というものは知らず知らずの内に蝕まれ、本人

が気付いたときにはその形を歪なものへと変えている。
少しでもそれを和らげたければ精神に強い刺激を与えることだが、心を揺さぶる程の刺激に出会うには自分は少し強すぎた。
しかしあるとき、退屈な日常を破壊する程の刺激が突如として起こった。
神を筆頭とした天使、魔王が擁する悪魔、そして自分が属する堕天使たちによる三つ巴の戦い。
老いや病で死ぬことの無い堕天使も、天使や悪魔の力ならばその命を落とすこともある。空前絶後の戦いに、錆びついていた心が久々に踊った。
悪魔が天使の光によってその身を塵に変えたかと思えば、その天使は堕天使が放つ同じ光によって刺し貫かれて天から堕ち、その様を見ていた堕天使は悪魔の魔力によって消滅させられる。
死が死を呼び、その死が別の死によって覆い尽くされる。まさにこの世の終わりが形を見せたような一連の流れ、その流れの中で自分は大いに生を全うした。
かつての同胞であった天使が視界に入れば、手に持った槍でその翼を貫き、落ちた所を今度は剣で斬り伏せる。顔見知りとも何度か会い、その度に『何故こんなことをするのか』と問われることがあったが、その度に自分は笑みを浮かべ『愉しいからだ』と答えていた。

天使たちを殺すのに飽きれば次に悪魔を殺す。悪魔は天使と違い、その身に光に対しての抵抗が無い為に、まるで雲を斬るかのような手応えの無さが逆に面白く思い、何十、何百の悪魔をこの世から消し去っていった。

まさに生を謳歌していると称していい戦争であったが、それでも不満に感じることもあった。

一つは同じ仲間である幹部堕天使の存在であった。他の堕天使の幹部は自分とは違い、敵味方とも最低限の犠牲で済ませようとしている為、降伏した無抵抗の相手でも殺害すること、また自分が派手に動くことで下の堕天使たちも動くので、それによって不要な犠牲も出ていることを何度も咎めてきた。

不満を持たなかったと言えば嘘になるが、そのときは渋々ながらその言葉に従った。長い年月を共に過ごしてきた数少ない存在故、一抹の仲間意識があった為である。

しかし同時にこうも思った。

『こいつらと殺し合うのも悪くは無いかもしれない』

信頼、友情といった時間を掛けて積み上げて来たものを自分の手で破壊する。それを想像する、と熱を失いかけていた心に再び火が灯るような昂揚を覚えた。

だが実際の所、それを実行することは無かった。否、出来なかった。

三つ巴の大戦の中で予期しない異分子が紛れ込んできたからだ。

一つは二天龍と呼ばれる存在。『赤い龍〈ウエルシュ・ドラゴン〉』、『白い龍〈バニシング・ドラゴン〉』と後に呼ばれるようになる、ドラゴンたちの介入であった。正直なところ介入などという丁寧な言葉ではなく、ただ戦場の中心でその龍たちが私闘を繰り広げただけであったが。

しかし、そのドラゴンたちの戦いはあまりに激しく、神も魔王も入り込めない程の力を持っていた為、三勢力の戦争は無理矢理中断される羽目となった。

そしてその存在を疎ましく思った三勢力は戦争を継続させる為、急遽同盟を組み二天龍を倒そうとしたとき新たな乱入者は現れた。

それが『魔人』という存在である。

このとき現れた魔人の数は全部で九体。『殺戮者』『大僧正』『獄天使』『白騎士』『赤騎士』『黒騎士』『蒼騎士』『大淫婦』『吹奏者』と自ら名乗った。

突如として現れた魔人たちは暴れ狂う二天龍の戦いに介入し始めた。自分たちの戦いを邪魔されたドラゴンたちは怒り狂い魔人たちと戦い、それらは互角の勝負を続けていた。只でさえ規模の大きかったドラゴンの戦いは、魔人が加わったことで更に規模と被害を大きくする。

魔人とドラゴンの戦い。それは七日七晩も続く苛烈なものとなった。

そして八日目にして事態は動く。互いに消耗が見えたところで三勢力がこの戦いに

参戦し、それによってドラゴンを封印したのだ。
これによって邪魔者であったドラゴンの存在は消え、ようやく三勢力の決着がつけられる。しかし事はそう上手くは運ばなかった。
今度は魔人たちが三勢力に襲い掛かってきたのである。
元々戦争で疲弊していた三勢力はこれによって戦争の継続が出来ない程の大打撃を受け、結果として失うだけの戦果のない戦争となった。
二つ目の不満があるとすれば、決着が着かないまま終わってしまった戦争である。優劣が決まる事無く、振り上げた拳が振り下ろす場所を見失い、勝ちも負けも無い結末。行き場の無い感情だけが残った。
そして最後に不満、否、後悔として残ったのは、あのとき二天龍と魔人たちとの戦いに入ることが出来なかった、己の不甲斐なさであった。輪に入ることすら出来ず、外から終わるのを眺めていた。
戦争の結果を考えればあのとき、指を咥えて見ているのではなく、命を捨ててでも参戦すべきであった。そうすればその後に続く怠惰で無味乾燥な年月を過ごすことは無かった。
この日から次に心震わすときが来るまで、長い間があった。
大戦が終わり、堕天使側に限られた戦力しか残らず、二度目の戦争が困難であること

を知らされた後、世界が灰色に染まったかのような詰まらなさだけが残った。
思えばそのときから、他の幹部たちとの間に意識の差というものを感じていたのかもしれない。特に堕天使の頭であるアザゼルには、戦争は無いという宣言をされた瞬間から殺意に近い感情を抱いていた。
天使も悪魔も戦争を起こす程の戦力も気概も無い、平和と言う名の退屈な日々。落ちた錆が再び精神に張り付き、感情を鈍らせていく。
これがいつまで続くのか。途方も無い未来を想像し、その刺激も昂揚も無い反吐の出る未来絵図に絶望を覚えたとき、思いもよらない出会いがあった。
堕天使たちに襲撃を仕掛けてくる『魔人』の存在である。
大戦時『獄天使』と名乗った魔人は、理由も目的も無く、突如として『神を見張る者』へと強襲を掛けてきた。
多対一。傍から見れば絶望的な戦力差であるが、実際の所追い詰められていたのは堕天使側であった。
下級の堕天使ではまず相手にならず、近寄る前にその魔人が持つ炎で焼き尽くされ、運よく免れた堕天使も魔人が跨る見たことも無い乗り物、鋼の馬と呼べるような代物に轢殺された。
結局の所まともに戦えるのは幹部級の堕天使のみであり、魔人は幹部全員と相対し、

互角以上の戦いを繰り広げた。

魔人との戦い。それは自分にとってあのとき駆け抜けていった戦場を彷彿とさせる程の高まりを覚えた。焼け付いた亡骸、むせかえる血と臓腑のニオイ、怒り、悲しみ、憎しみが混ぜかえった叫び、生にしがみつこうとする足掻き、死を与えるための暴力、それらが全て混ぜ合わさり混沌と化したもの。

まさしく戦場と呼べるものであった。

あの日に残った後悔を消し去るように、死に物狂いで魔人と戦い続ける。骨が折れ、血が流れ続けても戦うことを止めなかったが、最後に浴びせられた炎によって、望まない戦線離脱をしてしまった。

死ぬことは免れたが、いっそ死んでしまいたいような後悔が再び心の裡に残る。

居場所も死に場所を同時に失ったような気分であった。

そしてそこから幾月日が流れ、ある決意をする。

起きないのならば自ら戦争を起こそう。あの日の続きを、あの日の記憶を蘇らせるために。例え独りであっても、例え命を散らすとしても。

この手でもう一度、あの時の『俺』を蘇らせよう。

◇

燃え盛る右手を掲げながら、コカビエルは息が詰まる程の重圧を発する。もとより狂気的な輝きを放っていた眼はより一層輝きを増し、その眼を見るだけで心臓の鼓動が無意識に早まる。

コカビエルは注目される中、下げていた左手を挙げる。その動作一つだけでリアスたちの緊張が高まっていく。

左手に光が灯り始め、掌に収まるほどの光球が形成されたとき、コカビエルはそれを無造作に突き出す。

すると光球から鎖の形をした光が幾つも伸び、リアスたち目掛けて一斉に襲い掛かる。

光の槍と同等の速度で迫る光の鎖。至近距離ならばまず避けきることの出来ない速さであったが、幸い距離があった為に回避に移る間があった。

リアス、一誠、木場、ゼノヴィアはそれを何とか避けきり、空中にいた朱乃も身を翻して躱す。シンも側に居たジャックフロストを抱きかかえてから地を蹴り、同じく躱した。

「小猫さん！」

しかし、ここでアーシアの悲痛な叫びが聞こえる。その声に皆が視線を向けると地面

に横たわるアーシアとピクシー、そして光の鎖が足に巻き付いている小猫の姿があった。

リアスたちが避けていく中、補助を主としているアーシアにはコカビエルの鎖を回避する程の身体能力は無く、反応できずに立ち尽くしてしまっていた。そのとき咄嗟に動いた小猫が自らの身を挺してアーシアとピクシーを光の鎖の範囲外へと突き飛ばし、代わりにその身に受けるという結果となってしまった。

光の力によって巻き付いた部分が焼かれていく。普段は無表情の小猫も声は洩らさなかったものの、その顔に苦痛の色を浮かべていた。

「釣れたのは一匹か」

コカビエルは口の端を吊り上げながら笑い、左手を引く。その勢いで小猫の体は地面を引き摺られ、コカビエルの方へと引き寄せられていく。

小猫も抵抗しようと地面に爪を突き立てて抗うが、『戦車』の力を上回るコカビエルの膂力が、嘲笑うかのようにその爪を地面から引き剥がす。

「小猫さん！　私の手に！」

引き寄せられる小猫にアーシアが手を伸ばす。が、次の瞬間に小猫の姿が消えた。

「えっ！」

驚くアーシアは小猫の姿を急いで探す。

右を見る、いない。左を見る。こちらもいない。
「上！　上！」
アーシアから離れた場所にいたピクシーの声に上を向く。そこには十数メートルの高さまで振り上げられた小猫の姿があった。
「小猫！」
リアスが悲痛な声で叫ぶ。しかしコカビエルは無情にも振り上げていた左腕を、今度は背後に向けて振り落とした。
宙に浮かぶ小猫の体はコカビエルの腕の動きに合わせて勢いよく引っ張られ、そのまま校庭に背中から叩きつけられる。離れた場所で立つリアスたちでも、足から微震が伝わってくる程の速度での落下であった。
叩きつけられた小猫の体に合わせて校庭の土は凹んでいた。仰向けで倒れている小猫は微かに動いているものの呻き声一つ洩らしておらず、かなり危険な状態と言えた。そもそも高い防御力を持つ『戦車』の特性を持っていない小猫でなければ死んでいたかもしれない。
「小猫ちゃん！」
容赦の無い攻撃に一誠が思わず名を大声で呼ぶ。
「心配か？　ほら返すぞ！」

　コカビエルはそのまま小猫に巻き付いた光の鎖を引くとリアスたちの方に向かって振るう。あろうことか小猫を武器の様にして扱って攻撃を行ってきた。
　しかし、これはある意味で効果的な戦い方ともいえる。避ければ繋がっている小猫の命の保証は無く、まともに受け止めれば両者ともに大きなダメージは免れない。だが、この場には少なくとも前者を選択する人物は存在しなかった。
「させないよ!」
　怒り露わにして真っ先に飛び出したのは木場であった。木場は振るわれた小猫の前に向かって構えずに身を晒す。
「ぐぅ!」
　その行動に応じるかのようにコカビエルは鎖を操って木場の胴体に小猫を衝突させる。木場は激痛の奔った表情をするものの歯を食い縛って耐え、叩きつけられた小猫の体を両手で強く抱き締める。コカビエルに良い様に弄ばれない為に。
「この子は返してもらう!」
「なら二人まとめて空を飛んでみるか?」
　片手ではなく今度は燃える右手も鎖に添えて持ち上げようとするが、横から現れたシンが持ち上げる前に鎖を掴み取る。
「むっ」

コカビエルは力を込めるが鎖は上がらず、その場で張るだけに終わる。シンは害あると分かっていてもその手に鎖をしっかりと絡ませて動きを固定し、コカビエルの狙いを阻止する。

「少しそのままにしていてくれ」

張られた鎖を縦に振るわれた光が断ち切る。切断したのはゼノヴィアの『破壊の聖剣』であった。

「助かる」

「礼はいい。一時の同盟とはいえ、当然のことをしたまでだ」

最低限の会話であったが二人の素の性格を考慮すれば十分な内容であった。

「小猫ちゃん！　小猫ちゃん！」

小猫を取り戻した木場が必死に小猫の名を呼ぶが小猫は僅かに瞼を震わせるだけで、それ以上の反応を示さない。もう一度名を呼ぼうとした木場であったが何かに気付き、小猫の後頭部に回していた手を離す。

その手は血で真っ赤に染まっていた。

「アーシアさん！　頼む！」

小猫を抱きかかえると、木場はすぐにアーシアのもとに走り寄り小猫の治癒を頼んだ。名を呼ばれたアーシアは泣きそうな顔をしながらすぐに『神器』を発動させ、小猫

の治療を始める。
暖かみのある光がすぐに小猫を包み、その傷を癒していく。だが、それを悠長に眺めている相手では無かった。
『聖母の微笑み』か……『神滅具』といい希少な『神器』をよくもまあ揃えたものだ。アザゼルの奴が見たら目の色を変えるかもしれんな。俺には全く興味が湧かないが」
治癒するアーシアの姿を見ながらコカビエルは何を思ってか鼻で笑う。侮蔑ではなく呆れの混じったそれは、少なくともアーシアに向けられたものではなかった。
コカビエルは左手にすぐさま光の槍を造り出す。そしてその先をアーシアたちに向け、投げ放つ構えをとったとき、何かを感じ取ったのか、視線がアーシアたちではなくその頭上に向けられた。
そこには紫電を纏う朱乃の姿。
「雷よ！」
その両掌が向けられるとそこから雷が放たれた。
コカビエルは手に握る光の槍を雷の方に向けてその形を変化させる。槍は紐が解けるようにして解かれ、それが光の膜となってコカビエルの周囲を包み込む。
雷が光の膜に触れるとその場から消失していく。全力で放てば体育館一つ簡単に消し飛ばされる雷を受けても、光の膜を突き破ることが出来ない。先程とは違いリアスと

の同時攻撃ではなく、また『赤龍帝の籠手』の能力上昇も切れた状態で放っている為仕方ないとはいえ、二人の力量の差をまざまざと見せつける。
「どうした、そんなものか？　もっと必死になったらどうだ！　バラキエルの名が泣くぞ！」
「言った筈よ！　私とその者に何の関係も無いとッ！」
朱乃の神経をわざと逆撫でするコカビエル。普段の大人びた姿からは想像出来ない程に朱乃は感情的に叫ぶ。
「もっと魔力を込めてみろ！　血の全てが蒸発する程の怒りと殺意で俺を貫いてみろ！　それが全力か？　もっと足掻いてみろ！　足掻け！　足掻け！　足掻け！」
降り注ぐ雷光の中でコカビエルが焦熱する右手を開く。そしてその五指を鉤爪のように曲げ、一本一本が細かく震える程の力を押し込む。
「そうでなければ！」
コカビエルの放つ光と燃え続ける炎が入り混じり、橙色の光と化した右手を後方へと引き、次の動作の為の準備をする。
「死ねッ！」
腕だけでなく体全体を大きく捻りながら振るわれた、五指から放たれる五つの閃光。降り注ぐ雷光を斬り裂き、天に向かい逆らうかのように昇っていく。

放たった雷が紙のようにあっけなく裂かれていくのを目の当たりにした朱乃は、すぐに避けようと羽を動かすが、コカビエルの放った橙色の光はそれよりも早かった。
「きゃああ！」
「朱乃！」
五つの光の内の一つが朱乃の脇腹を掠め、光はそのまま天に向かって消えていった。光を受けてしまった朱乃は堕天使の持つ光の毒に侵されたのか、空中で体勢を崩し羽ばたこうとしないまま、地面目掛けて頭から落ちていく。
その姿に思わず冷静さを失って一誠は名を叫んだ。
「朱乃さん！」
走り出した一誠が勢いよく飛び込み、朱乃が頭を地面に打ち付ける前に両手で受け止める。大事に至らずに済んだが、朱乃の負った傷の箇所を見て表情を蒼褪めさせる。
掠めた部分からは血が流れているということは無かったが、衣服の裂け目から覗く傷は前面から後ろにかけて大きく抉れており、傷口が炭化しているのか黒く変色していた。元々の肌の白さとの対照のせいで、その傷はより無残なものに映る。
「イッセー……くん……」
弱々しい朱乃の声、そして尋常ではない汗の量に、一誠の心臓は鼓動を早める。只でさえ悪魔にとって堕天使の光は有害であるのに、その上であの得体の知れない炎まで受

けている。一刻も早くどうにかしなければ、朱乃の命に関わるのは明白であった。
『相棒、早く治癒の神器でこの娘を治療しろ』
「ドライグ！」
話し掛けてきたドライグに一誠は自分の左腕に目を向けた。
『残り火とはいえあの喧しい魔人の炎だ。見た目からじゃ分からないが、今もこの娘の体の内側に向かって燃えている。俺たちの力を使って傷を治さなければ、その内体の内側が焼け爛れるぞ』
「――マジかよ」
一誠は恐ろしい未来を想像し、それ以上の言葉が出なかった。そしてすぐに朱乃を持ち上げると小猫を治癒しているアーシアの下に走る。
「アーシア！　俺の力も貸す！　だから小猫ちゃんと一緒に朱乃さんも頼む！」
「はい！　お願いします、イッセーさん！」
治癒をしているアーシアの左手に一誠の左手が重なる
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』
『赤龍帝の贈り物』によって一誠からアーシアに力が送り込まれ、アーシアの持つ『神器』の能力を一気に高める。
アーシアが放つ翠色の光はその輝きと範囲を更に増し、負傷している小猫と朱乃を包

み込んだ。光の中で朱乃の負った傷が徐々に小さくなっていき、血の気を失っていた顔も血色を取り戻していく。
「借りものとはいえ、この炎の傷を癒すか。ハハハハ！　やはり『神滅具』は侮れないな！　いいぞ、早くそいつらを治して立たせろ、そしてもう一度掛からせて来い！」
二つの『神器』による負傷者の治療を、妨害するのではなく寧ろ催促させる。
コカビエルは想像を上回る治癒の速度を見て、このまま潰すのもつまらないと思い、相手が何度でも戦える様に手を出そうとしなかった。
「同時に仕掛けるぞ」
シンと木場に聞こえる程の声量で、ゼノヴィアはコカビエルに挑むタイミングを合わせようとする。
木場とシンは声に出さず、軽く頷いてゼノヴィアの言葉に同意を示した。
「戦いの中で私も『切り札』を使用する。そう覚えておいてほしい」
そう言うと同時にゼノヴィアが駆け出す。木場とシンも反応し、すぐにその後を追った。
駆けていくゼノヴィアはその最中に、両手で握っていた『破壊の聖剣』を左手へと持ち替え、そしてある言葉を紡ぎ始めた。
「ペトロ、バシレイオス、ディオニュシウ、そして聖母マリアよ」

挙げられたのは教会の歴史に携わる偉人たちの名。
それが何を示しているのか明かされない状態のままゼノヴィアは『破壊の聖剣』を振り上げ、コカビエルに斬り付けようとする。
一度は軽くあしらった聖剣を懲りずに振ろうとするゼノヴィアを鼻で一笑しながら左手を挙げようとしたとき、コカビエルの目が細める。
ゼノヴィアが飛び掛かるとほぼ同じタイミングでコカビエルの周囲に無数の聖魔剣が出現し、その切っ先を一斉に向けた。
「数で押すか」
それを無駄な足掻きと笑い、コカビエルは左右に掌を向けた。
「我が声に耳を傾けてくれ！」
続きの言葉を言いながらゼノヴィアは聖剣を振り下ろす。それを見計らって聖魔剣の群もまたコカビエルに向かって降り注いだ。
迎え撃つコカビエルは斬り下ろされた聖剣を残る左翼で受け止め、聖魔剣には両掌で放つ光の塊を衝突させた。
しかしこのとき、コカビエルにとって予想外のことが起こる。弾き返す目的で放った光によって、射出された聖魔剣が次々と砕け散っていく。いくら力を込めて放ったからといって、あまりに脆すぎた。

（見てくれだけの張りぼてか！）

そこで木場に一杯喰わされたことに気付く。コカビエルの考えの通り、木場の創造した聖魔剣全て形だけの偽物であった。

「この刃に宿りしセイントの御名において我は解放する！」

ゼノヴィアの右手の先に在る空間が歪む。その歪みの中心にゼノヴィアは、躊躇いも無く右手を入れた。

「――デュランダル！」

右手を引き抜き、その手に握られているのは『破壊の聖剣』を上回る両刃の大剣。青みがかった金属の剣身に黄金の刃が施されている。その輝きは統合された四本のエクスカリバーを超えていた。

「デュランダルだと！」

これにはコカビエルも瞠目する。

ゼノヴィアは引き抜いたデュランダルをそのまま、翼を斬りつけているエクスカリバーに重ねる様にして振るおうとしたが、コカビエルはこれを真正面から防ごうとはせず、後ろに身を引き回避を優先とした。二つの聖剣をまともに受け止めるのは少々不利と考えての行動であった。

だがこのとき、コカビエルの意識が目の前のことに最も集中している隙を狙い、追い

打ちが仕掛けられる。
下から囲むようにして突出する魔剣の群。まるで地がコカビエルに牙を向くような光景であった。
デュランダルのせいで僅かに反応が遅れた為、逃げ場のない状況にされたコカビエル。軽く舌打ちをしながら両手に光の剣を造り、二本の剣で群れなす魔剣を次々と砕いていく。
ほぼ同じタイミングで放たれたにも関わらず、魔剣たちはコカビエルに触れる前に破壊されていった。
砕けた魔剣の欠片たちが宙に舞う中、全てを迎撃したコカビエルの視界に映り込んだのは、飛び掛かる二人の人物、シンと木場であった。
二人の内最初に仕掛けたのは木場、その手に持つ聖魔剣をコカビエルの頭部に向けて振り下ろす。しかし、その斬撃をコカビエルは左掌で受け止め、そのまま剣身を握り締め固定する。だがこれによってコカビエルの片手はすぐに動けない状態となる。
そこにすかさずシンが右拳を放つ。それを魔炎で包まれた右手で掴み取ろうとしたとき、下から突き上げるシンの左拳がコカビエルの右手首に打ちこまれた。元より狙いをコカビエルの右手に絞っていたらしく、咄嗟ではなく予定調和を感じさせるシンの動き。

魔炎に触れた部分が瞬時に焼け爛れていくが、左手を捨てる覚悟で構う事無く砕くつもりでシンは拳を振り抜こうとする。

ここまではシンの考え通りであったが予期せぬことが起こる。振り抜く筈の拳が、打ちつけたまま上がらない。コカビエルの腕力に力負けをしていた。

「こんなものか?」

コカビエルの右足が僅かに浮いたように見えたかと思えば、シンの背筋に悪寒が走る。何が来るかと考えるよりも先にその場で素早く身を捩った。直後に胸の前を吹き抜けていく風、その風に触れた衣服の一部は千切れ飛びその下の皮膚に赤い裂傷を刻む。

風の正体はコカビエルの繰り出した蹴りであった。風が巻き起こる速度で放たれた蹴りは目立った予備動作も無く、動き始めから終わりまで殆ど誤差を感じさせないものだった。

木場はその間、片手を離しそこに新たな聖魔剣を創り出すと、コカビエルの胴体に斬りかかる。

「甘いわ!」

蹴りつけた右足が元の位置に戻ると同時に今度は左脚を持ち上げ、それに合わせて左腕を下げる。聖魔剣の腹が、下から突き上げた左膝と上から落とされた左肘によって挟

まれた。
木場は斬撃を封じられたのを見て別の箇所を狙おうとするが、コカビエルの突き上げられた左脚がそのまま伸び、痛めている木場の脇腹に足裏を埋没させる。
無理矢理肺から空気を押し出されながら木場は、これ以上踏み留まると骨が折れることを察し、あえて脱力して攻撃の流れに逆らわず、そのまま蹴り飛ばされる。
横目で木場が飛ばされようとしているのが見えたシン。そこを狙ってコカビエルの右手がシンに突き出された。五指を揃えた貫手が額を貫こうと迫る。
触れれば焼き尽くされる炎に何度も接触する訳にもいかず、シンは上体を後ろに逸らしてそれを回避し、それと同時にコカビエルの顎目掛けて右足が蹴り上げられる。
それもコカビエルは見切って足の間合いから後退し、左手に掴んでいる聖魔剣を放り捨て、代わりに光の槍をその手に握る。
このままシンの攻撃が空振り、コカビエルの反撃を受けるかと思われたそのとき、周囲を舞っていた魔剣の欠片がシンの右足へと集い、そこで新たな聖魔剣が再構築される。
それによってシンの間合いは聖魔剣の剣身の長さほど伸び、足の甲に吸いつくように張り付かれた聖魔剣が、コカビエルの顎から右頬までかけて裂傷を刻んだ。
血が滲む程度の傷であるが、反射的に避けたことでコカビエルの体はよろめき、その

場から後退する。シンは蹴り上げた勢いでそのまま後転。両手を地面に着けると、木場たちのいる方へと大きく飛び後退した。
　下がった場所にいる脇腹を押さえた木場は痛みからか頬に汗が伝っているが、してやったりといった微笑を浮かべていた。
「僕たち三人でダメージ十、といったところかな？」
「作戦も無い行き当たりばったりでやってそれなら上等だ」
　シンは右足を上に向けて軽く振り上げると、張り付いていた聖魔剣があっさりと剥がれて宙に飛び、そしてそれは木場の手に収まるのであった。
「まさかこの場にデュランダルまで出て来るとは……予想外だった。そんな大層なものを持っているならさっさと見せて欲しかったがな」
「デュランダルはお前が思っている以上に暴君でね。通常の空間に置いてあったら触れるもの全て斬り刻む恐れがある」
　斬られた箇所を指でなぞりながら、コカビエルの目がゼノヴィアの持つデュランダルに興味深そうに向けられる。
　以前、部室で交渉していたとき会話の中で漂わせていた、切り札の正体がこれであるらしい。
「バルパーの話だと聖剣の因子はデュランダル程の聖剣を扱える段階まで至らなかった

筈だが？」
「生憎、私は人工の聖剣使いではなく生まれつきの聖剣使いだ」
それを聞いた途端、コカビエルは火が点いたかのように笑い出した。まるで最高の冗句で聞いたかのようである。
「フハハハハハハハハ！　ハハハハハハ！　アハハハハハハハ！　そうか！　天然の聖剣使いか！　しかも上位の聖剣を扱える程の因子を持つ！　ハハハハハハハハハ！　いやいや、どうやら俺がバルパーの命を奪って正解だったみたいだな！　これを聞いていたらあいつは憤死していたかもしれん！　ハハハハハハハ！」
心底可笑しい、楽しいというのを現すかのような爆笑。
「死してなお哀れな奴だよ、バルパー。お前が超えたかったもの、手に入れたかったものがすぐ近くにあったとはなぁ。まだ魂がここらにさ迷っているなら見えるか！　お前が望んだものはここにあるぞ！　ハハハハハハハ！」
コカビエルは宙へと視線を向け、バルパーを嘲笑う。
未だに血は流れ続け顔色は悪くなる一方であり、右手の火は肘近くまで浸食されながらも、その表情に焦りなど微塵もなく、他者への罵倒に時間を割く程の精神的余裕すらあった。
「――私の存在が、バルパーが望んだものだと？」

「クハハハ！　その通りだ。バルパーの目指すべき場所、すなわちこの世のあらゆる聖剣を操る程の因子を持った聖剣使いの量産だ」
　初めて聞かされたバルパーの目的。何処までも私利私欲で研究を進めてきた男の終着点。
「そんなことをして一体何になる！　自分を追放した教会への復讐か！」
「『復讐』――恐らくそれは間違いないな、ところで」
　コカビエルはそこで話を切り替える。
「お前たちは何故、バルパーは聖剣使いに『なる』のではなく『造る』側になったと思う？」
「奴の言葉が正しければ聖剣を扱う程の『因子』を持っていなかったからだ……」
「その答えは間違いじゃない。だがこの世で最も聖剣を愛していると豪語するほど崇拝している男が、自らの体に自分の研究成果を施さなかったと思うか？　それこそ危険を減らす為ならば何百の死体も喜んで重ねる男が」
　そこまで言われてゼノヴィアたちは言葉を詰まらせる。バルパーとの邂逅は短いものであったが、触れた狂気の一端は並々ならぬものであり、聖剣の為ならば他者も自分も平気で犠牲に出来るような男であった。
　答えの出ないゼノヴィアたちを見てコカビエルは口の端を吊り上げて笑い、これから

最高の冗句でも言いたげな表情なる。
「あいつには自ら生み出した成果を自分に活かすことが出来なかった。何故ならあいつは『因子』を受け付けることが出来ない特殊な体質を持っていたからな。娘、お前とあいつは対極の存在だ。お前が生まれながらにして聖剣使いになることが約束された存在なら、バルパー・ガリレイは生まれながらにして絶対に聖剣使いにはなれないことを約束された存在。バルパーの方法ならそこいらにいる一般人ですら最低でも1パーセントの確率で聖剣使いになることが可能だが、あいつ自身が同じ方法で聖剣使いになれる確率は天文学的数字以下だ」
　そこまで言い終えると、こらえきれなくなったのかコカビエルは額を押さえ、再び哄笑する。
「全くもって愉快な話だとは思わないか？　恐らく最も聖剣に執着した男が、最も聖剣から離れた場所にいるとはな！」
　コカビエルの言葉を聞いて木場は、死に際のバルパーの台詞を思い出す。
『それは私が本当に欲しかったものを手に入れられなかった『持たざる者』だからだ』
　あの言葉は自らの先天的欠損からくる言葉であったらしい。
「復讐。娘、お前の言った通りバルパーはきっと復讐をしたかったのだろう。だが本当に復讐したかったのは教会でも天使でもない」

　コカビエルはゼノヴィアが握る二本の聖剣を見て喉を震わせ、押し殺した声で笑う。
「あいつはきっと、いくら自分を捧げようとも応じず報いなかった、聖剣そのものに復讐したかったのだろうな」
「聖剣への復讐……」
「選ばれた存在しか扱えない聖剣を高みから引き摺り下ろし、凡百な者たちでも扱えるようにする。聖剣が持つ高潔を悪徳で穢し、尊厳を凌辱したかったのだろうな、恐らく」
　バルパーの本心を推測で語るコカビエルの顔には常に笑みが浮かんでいた。ただ、それはバルパーの人生を憐れむような笑みではなく、その愚行を嘲るものであった。
「ただの逆恨みだ……そんなことで多くの犠牲が――！」
「信仰、信奉、愛といった感情は、捧げている本人が裏切られたと感じたならばすぐに反転する。理解できるだろう？　お前も教会に捨てられたとき、似たような感情を抱いた筈だ」
　的を射たコカビエルの言葉に木場は、咄嗟に反論することが出来なかった。コカビエルの指摘は決して間違いでは無く、現にそれが理由で教会に属しているゼノヴィアやイリナに、敵意を持って接触していたことがある。
「まあ、尤も俺が言った例はすぐに実物となって見えるかもしれないがな――」
　加虐的な笑みを含ませ、コカビエルの視線がゼノヴィア、そして治療を続けている

アーシアへと向けられる。コカビエルの言葉の意味、そしてその視線の意味が何をしめしているのか今はまだ定かではないが、コカビエルはそこで一旦言葉を区切り、左手をゼノヴィアの方へと向けた。

「お前がデュランダルの継承者ということは分かった。次は使い手としての実力を見せてもらおうか」

ゼノヴィアに向けた左手の人差し指と親指が重なり、弾きあって乾いた音を鳴らした瞬間、閃光が一直線に走る。放たれた閃光にゼノヴィアはエクスカリバーとデュランダルを十字に重ね合わせた。

二つの重なった聖剣は互いの光が影響し合い、その輝きを更に深めていくとゼノヴィアの体を包み込む程になるが、コカビエルの光はそれを薄紙でも破るかのように軽々と貫き、構えている二つの聖剣に直撃した。

金属がたわむような音が響き、防いだゼノヴィアを数歩後退させる。

それを見たコカビエルは次に右手に槍を形成しようとするが、動き始めようとするシンと木場の二人が目に入り、虫を払うような仕草で左手を振るう。振るった左手から無数の光の鎖が飛び出し、変則的な動きで二人に襲い掛かる。

下から伸び上がってきた鎖がシンたちの頭上まで行くと、そこから急角度で降下する。シン、木場と共に最小限の動きで躱そうとするが、降ってきた鎖が今度は直角に曲

がり二人の首元を狙ってくる。
　しつこく動き、狙いを変えてくる光の鎖に二人は、相手の思惑通りに動いていると理解しつつもその場から大きく移動させられ、ゼノヴィアとの距離が開いてしまった。
　そこにすかさずコカビエルの光の槍がゼノヴィアに投げ放たれた。開戦時に見せた柱のような太さを持った光の槍を前にゼノヴィアは回避するという選択はせず、エクスカリバーとデュランダルを頭上で交差する。
「聖剣たちよ！　その輝きを以って堕ちたる天使に神罰の一撃を！」
　干渉しあっていた輝きはより一層激しくなる。そしてその輝きを維持したままゼノヴィアは迫る光の槍に双剣を叩きつけた。
　光と光が反発し、互いを削り合う様にして、光が粒子の様に場へと散らばっていく。その光に触れないようにシンと木場は光の範囲外まで逃げた。
　最初にあれを防いだときは四人の魔力で相殺するのがやっとであったが、今は同じ光に属する力を持っているがゼノヴィア一人で拮抗している。これだけ見ればまだこちらにも勝てる要素があるかも知れないと思えたが、不意にシンがコカビエルの方に目を向けたときその考えが曇りを見せる。
　コカビエルは自らが放った槍と聖剣とが拮抗する光景を見て、酷く不服そうな表情をしていた。先程のまでの狂気で輝かせ見開いていた眼は冷めたものとなっており、ただ

詰まらなそうに目を細めている。
やがて、交差した聖剣が光の槍を×の字に斬り裂き、完全に消失させたとき、コカビエルはそのまま冷め切った視線をゼノヴィアに向ける。
「娘、どうやらデュランダルに選ばれただけで使い手に至る程の経験も技量も無いみたいだな。全く使いこなせていないのがよく分かる」
思わぬ指摘にゼノヴィアは一瞬何かを言い掛けたが、そのまま閉口した。相手の挑発に乗らないようにする為か、あるいは図星を突かれたか。苦いものを噛んでいるような表情から後者の可能性が高いが。
「先代のデュランダルの使い手を知っているが、お前とは強さの格が違うな。常軌を逸するとはまさにあれのことをいうのだろう。少なくとも先代ならば先程の一撃、拮抗する間も無く斬り裂き、そのまま俺に刃を届かせていただろうな！」
失望、期待外れといったものが言外に含まれていた。敵に未熟さを指摘されゼノヴィアは感情を露わにすることはなかったが、その頬が少しだけ膨らむ。奥歯を強く噛み、感情を抑えている為であった。
「もっと経験を積めば俺に刃を届かせる程の逸材になったかもしれないが、出会うのが早過ぎたな！　ここで散れ！」
コカビエルは大きく左手を振り上げ、そのまま弧を描く形をとる。構えた左手は指先

から肩に掛けて発光し、力が集まっているのを露わにする。
コカビエルはその状態の左腕を、残光が見える速度で足下に振り下ろす。三日月の形をした光が地面に触れると、そこから数十メートル程の長さの横の亀裂が生じた。
コカビエルの行動に誰もが疑問を覚えるが、その数秒後に行動の意味が形となって現れる。
地面から伝わってくる細かな震動、それを感じ取った次の時に刻まれた亀裂から光が噴き出す。高さ、幅と共に亀裂と同じ大きさの光で出来た壁、それがそびえ立ったかと思えばシンたちに向かって迫り始める。
光の槍に比べればやや遅いと思えるがそれでも並みの速度ではなく、地面を抉りながら向かってきた。
左右どちらに避けようとしても間に合うか間に合わないか判断がし辛い範囲を持った攻撃。ましてやこちらには怪我をして動けない仲間が二人もいる。
悩む時間は殆ど無いにも関わらず、助けるべきかどうかの二択が頭の中で過ぎる。
そのとき――
「三人とも急いで逃げなさい！」
リアスの凛とした声が響く。
「この子たちは私が守るわ！」

リアスはアーシアたちの前に立ち、その全身に真紅の魔力を纏っていた。
リアスの言葉に躊躇しようにもシン、木場、ゼノヴィアでは、後ろにいる一誠たちを救う術は無い。全てをリアスに託し、迫ってくる光の壁を避ける為にその場から全力で駆け出す。
「いい？　私の後ろから絶対に離れては駄目よ」
正面を向いたままリアスは背後にいる一誠、アーシア、ジャックフロスト、ピクシーに忠告する。
「部長！　少しだけ、少しだけ耐えて下さい！そうすれば俺の『赤龍帝の籠手』で！」
リアスと朱乃に力を贈与した為倍加の状態が既に解けてしまい、再び倍加を開始し始めたが倍加するよりも光の壁が来る方が速い。
「大丈夫よ。私の下僕は私が守るから」
僅かの間だけリアスは振り向いて微笑む。そして正面に向き直り、辛うじて光の壁の範囲から抜け出せたシンたちの姿に安堵の息を吐いた後、その表情を引き締め、纏っていた魔力を両手に集め、迫る壁に向けてその両手を撃ち付けた。
「くううー！」
体に残る全ての滅びの魔力を光の壁にぶつけたことにより、リアスの周囲が壁を突き破るようにめり込んでいく。ゴムに針を刺す様に、一点だけが動き続ける壁に反して逆

らった動きをするが、光の壁もまた反する動きを押し戻すように強引にリアスの力と反発する。
色も質も異なる力がぶつかり合うが、一見互角かと思えた両者の力は徐々に片方に傾いていく。
魔力を放出し続けているリアスの両手から、白煙が立ち登り始めていた。未だ放つ魔力に衰えを見せてはいなかったが、リアスの魔力を掻い潜りコカビエルの光がその白い肌を焼いていく。きめ細やかなリアスの手の至る所に赤い火傷のような跡が出来始める。肌の白さと赤い傷が対照的なせいで、より一層痛々しく見える。
「部長！」
「部長さん！」
リアスの手が傷だらけになっていくのに耐え切れず一誠とアーシアが名を叫ぶ。
「早く！　早く！」
一誠は倍加までの時間を異様に長く感じられた。急かしても焦っても無意味であることが分かっているが、それを口にせずにはいられなかった。
『Ｂｏｏｓｔ！』
待望の倍加の声が響き、すぐさまそれをリアスに譲渡しようとするがリアスの鋭い声がそれを制止する。

「駄目よ！　まだ倍加を続けなさい！」
「そんな……！」
　思いもよらない指示に一誠は愕然とする。
「貴方の力は私に渡すのではなく、コカビエルにぶつける為にとっておきなさい！」
　それは必ず皆を守るというリアスの意思表示であった。それを理解してしまった一誠は、血管が浮き出る程、体中に力を込める。そうでもしなければ、すぐにでもリアスの意志に反して力を渡してしまいそうになる。
「わかり……ました……！」
　左手を強く握りしめながら、絞り出すような声でリアスの言葉を受け入れる。
「力を渡されなくてもよく粘る。『魔王〈サーゼクス〉』の名を汚さない素質だな！　だが辛かろう！　苦しかろう！　どうだ？　とっととその背中にある足手まといな荷物を捨てて逃げたらどうだ？　今ならお前一人でも逃げ出せるかもしれんぞ？」
　堕ちているとはいえ天使が悪魔に甘言を弄する。その言葉にリアスはコカビエルを睨みつけた。
「私の下僕への侮辱は万死に値するわ！」
　リアスは怒り、放つ魔力はそれに応じてより勢いを増す。
「なら見せてみろ！　サーゼクスだけでなく『紅髪の滅殺姫〈ルイン・プリンセス〉』の

名に恥じぬ力を！」
　コカビエルの左手が何も無い空間を押す。すると光の壁の圧力が増し、更なる負担がリアスの両腕に負荷された。
「この、程度で！」
　押されるリアスもその圧力に耐えるが、光の壁によってリアスの手は増々傷付いていく。火傷のみならず手の至る所から血が皮膚を裂いて流れ出し、その血も雫となって地面に落ちる前に光の力によって蒸発していく。
　血のニオイを纏いながら必死になって耐えるリアスであったが、その抵抗を妨げる事故が前触れもなく起こった。
「きゃあッ！」
　リアスが相殺していった筈の光力が弾かれ、運悪くリアスの膝に直撃する。貫く程の威力は無かったが接触した箇所は赤く腫れ、そして光の毒によってその箇所から力が抜けていく。
　膝に力が入らないことでリアスの体勢は崩れ始め、光の壁に押し込まれつつあった。何とか力を込めようとするが、どんなに力を送り込んでも、生まれたての草食動物のように震えるだけでまっすぐ立てない。
　このままでは光の壁を突き破ることも出来ず、それどころか背後に居る一誠たちの命

も危機に晒してしまう。
「私が、この子たちを――！」
しかし、無情にもリアスの膝が折れていく。完全に防ぐ構えが崩れこのまま自分の下僕の命をみすみす失ってしまうのかと思い、救えなかった自分の不甲斐なさに涙が浮かびそうになったとき――
（――冷たい）
折れそうになった膝を支えるひんやりとした感触。
（――暖かい）
倒れそうになる背中を押さえる暖かな感触。
「まだです部長！」
「ヒーホー！」
押し切られそうになったリアスを支えたのは一誠とジャックフロストであった。ジャックフロストは両手を使って傷付いたリアスの足にしがみつき、頭で後ろから支える。一誠は両手でリアスの背中を押さえ、崩れそうになる体勢を支えていた。
「――二人とも！　前に出るのは危険よ！　巻き添えを貰うわ！」
いきなり現れた二人にほんの少し呆然としてしまったが、すぐに二人に下がる様に言う。

「力を送らない代わりにここで部長を支えます！」
　リアスの言葉を一誠は拒否し、両肩を掴んでその華奢な体の隣に並ぶ。
「嫌だホー！　オイラはここに居るホー！　守られているだけの王様なんてカッコ悪いホ！　王様っていうのはカッコ悪くちゃいけないんだホ！」
　ジャックフロストもリアスの足にしがみつきながら首を横に振った。
「いいから早く離れ――」
「聞こえない、聞こえないホー！　オイラは王様になるんだから少しぐらい我儘だって良いんだホー！　ここからオイラは動かないホ！」
　リアスの言葉を遮り、ジャックフロストは断固として動かないという意思を示す。
「死ぬかもしれないわよ」
「死にませんよ、部長も俺もこいつもアーシアたちも」
　リアスの最後通告にもはっきりとした言葉で一誠は断言した。
「俺のご主人様があんなイカレ堕天使なんかに敗ける筈が無いです！　それに――」
「それに？」
「俺もハーレム王という夢をあいつに邪魔される訳にはいかないんで！」
　生死を賭けた場面においておよそ似つかわしくない煩悩溢れる台詞であったが、それを聞いた途端リアスの疲労一色であった顔に笑みが浮かぶ。

「フフフ。本当にスケベな子ね、イッセー。でもそんな貴方だからこそ――」
その言葉の続きは口にしなかったが、リアスの顔付きは凛々しいものへと戻る。
支えてくれる二つの存在。それが萎えかけていた意志に活力を注ぎ込む。
「今は主人として道を切り開くわ！」
呑まれつつあった紅い光がコカビエルの光を逆に呑みこみ始めていく。光の壁の中に紅い光が逆流し、血管のように光の壁の中に浸透していく。
「ごめんなさい。後は任せたわ……」
その言葉の後に目が眩むような紅い閃光が学園を照らす。そして紅い閃光の中でそびえ立っていた光の壁が一気に崩壊していく。
「部長！」
支えていたリアスの体から一気に力が抜け、掴んでいる一誠の両腕に全体重が圧し掛かってきた。一誠はそのまま抱きかかえ、ゆっくりとリアスの体を地面に寝かす。
完全に魔力が枯渇したらしいリアスの体は至る箇所に光によって出来た傷があり、特に光の壁を押し留めていた両腕の傷は一段と酷く、見ている一誠も思わず血の気が引いた。
「アーシア……部長も頼む」
一誠は慎重にリアスを運び、アーシアの『神器』で治癒を頼み、そのまま向き直って

コカビエルの方へと歩き出す。
「ヒホー……」
「お前も部長のことを頼んだぞ」
心配そうにしているジャックフロストの帽子に手を置いた後、左手を固く握りしめ拳を作る。
『Ｂｏｏｓｔ！』
「コカビエルゥゥゥ！」
倍加の声を合図として、一誠は倒すべき敵の名前を叫びながら一気に駆け出した。その左腕の『赤龍帝の籠手』は一誠の感情に反応し、甲の部分にある宝玉が赤く夜の闇を消し去るような光を放つ。
飛び出した一誠は脇目も振らず、左腕を振り上げながらコカビエルに殴り掛かった。
決して速いとは言えない動きであったが一誠の拳はコカビエルの頬に叩きつけられ、そのまま殴り抜ける。
殴られた衝撃で中を切ったのか、コカビエルの口から血が飛沫となって飛び出るが、殴られた当の本人は殴られた頬を歪ませながら、どこか正気の抜けた笑みを浮かべている。
しかし、そんな表情を介することなく一誠は感情のまま、二発目の拳を繰り出した。

持ち主の想いに応じるのが『神滅具』で在る為、最高潮まで感情を昂らせた一誠は普段以上に『神滅具』の能力を引き出している。

二度目の打撃音。しかし続いて上がったのはコカビエルではなく一誠の呻き声であった。

「中々重いな。芯まで響いたぞ」

一誠の左拳に肘が当てられていた。二発目の殴打に合わせ、コカビエルの右肘が叩きつけられたのだ。一誠の拳が最大の威力を発揮する一歩前に振り下ろしたコカビエルの右肘は、一誠の人差し指と中指を的確に狙い、『赤龍帝の籠手』越しに中の骨を折っていた。

痛みで一誠の体が硬直した間に、手慣れた動作でコカビエルの炎上する右手が一誠の左手首を掴み、左手が喉を掴む。

「く、そ……！」

掴む手に爪を立て必死に抵抗しようとするが『神滅具』を装着されていない方では抵抗もたかが知れていた。

「さっきハーレム王になりたいと騒いでいたが、女をはべらかせることを目標にでもしているのか、赤龍帝？　煩悩をここまで力に昇華出来るとはな、稀に見る赤龍帝だ」

感心しているのか馬鹿にしているのかはっきりとは分からないコカビエルの言葉で

あったが、受けた拳の一撃の重さについては正直な感想らしく、その証拠に喋りながらも何度か噛み合わせを確かめるように、下顎を左右に動かしていた。
「その眼、随分と活き活きとした輝きを持っているな。ククククク、そうした眼をする奴を見ると戦争のときを思い出す。昂ってくるな――お前たちにも理解できるか？」
一誠に語りつつもシンたちの僅かな動きを察し釘を刺す。一誠が捕らわれている状況でこうも簡単に察知されてしまったのならばシンたちも下手に動けない。
「知っているか？　怒りの声、哀しみの慟哭、むせかえる血のニオイ、死体から沸き立つ死臭、昂揚していく心臓音、絶え間なく続く痛み、それすらも消し去る快感、それらが全て混ざって出来上がるのが『戦争』だ。ハハハハ！　いいなぁ！　欠けたピースが埋まりつつありどんどん戦争らしくなっていく！　ククク、ハハハハハハ！　混ざれ混ざれ混ざれ混ざれ混ざれ混ざれ混ざれ混ざれ混ざれ混ざれぇぇぇ！」
常人には理解出来ない狂人の境地。吐き気を催す邪気を当てられながらも一誠は気力を奪われる事無く真っ直ぐコカビエルを睨みつけ――
「この、サイコ、野郎！」
――悪態を吐く。
「そう言えばまだこの戦争に欠けたピースがあったな……」
未だ闘志を失わない一誠を好ましくも嬲るような目線を向け独り呟く。

「それはお前に埋めてもらおう――『断末魔の叫び』をな！」
一誠を中心にして光が集まる。そしてそれらは束ねられ光の一柱と化し、一誠の体を光の中へと閉じ込めた。

◇

静寂に満ちた空間。その中で語る事無く目の前に置かれたカップの紅茶を飲む三人の姿。
ただカップがソーサーに置かれる音が時折響くだけであり、この空間はほぼ完璧と言っていいほどの無音であった。
その静けさがいつまでも続くかと思われたとき、ハンチング帽を被った金髪の青年――ベル――がその静寂を破る。
「このままでは彼は消えるね」
呟いた声に反応するかのように、カップに摘んでいた金髪の少年――ルイ――が、カップの中で揺れる琥珀の波紋を感情が浮かべていない瞳で眺めていた。
只一人ゴシックロリータ調の黒いドレスを着た少女のみ、この場において特に関心を寄せることなく、他の二人とは違い、紅茶のカップを口に運んでいた。

「君はこのままでいいのかい？　オーフィス」
「ここで消えても、ドライグ、いつか蘇る。いつものこと。だから、何もしない。いつもの天龍。でも、ヴァーリだったら、手を貸す、かも。ヴァーリ、アルビオン、少しずつ、違っている。我、不思議」
　オーフィスは一旦手を止めて答えた後、すぐに元へと戻る。
「君はどうする？」
　ベルがルイに尋ねる。ルイは紅茶のカップを見つめたまま口だけを動かした。何か喋っているのは分かるが殆ど言葉になっておらず、擦れたような音しか聞こえない。しかし、ベルは彼が何を言っているのか理解し頷く。
「そうだね。旧い友人が目を掛けた存在だ。少しだけ手助けをするとしよう」
　ベルは、目の前に置かれていたカップの端を指先で軽く弾く。その衝撃で中の紅茶は波打つ。
　その紅茶の表面には一誠の姿が映り込んでおり、その映像を中心に向かって波が集まっていくのであった。
「頼んだよ。君の友人もまた、僕の友人であるからね」

◇

最初に異変に気が付いたのはコカビエルであった。光の中に閉じ込めた一誠を掴んでいるが、その中からいつまでも感触が消えない。
通常の悪魔ならば数秒も経たずに消滅する光の中で、いつまでも形を留めている。
それを不審に思い更なる力を注ぎ込もうとしたとき。光の柱が内側から崩壊する。
そして代わりに赤い光の柱が中から現れた。
「何だと――」
意外な展開に僅かに戸惑うコカビエル。掴んだ手を引き、光の中から一誠を引き摺り出そうとしたとき、爆ぜる様な音が響く。
その音が鳴ると同時にコカビエルは光の中から左手を抜く。掴んでいた筈の手は五指全て、本来向く筈の無い方向を向いていた。
そして、光の柱の中を突き破り飛び出してくる存在。頭から爪先まで覆う龍の意匠が施された紅い鎧。
「『禁手化〈バランス・ブレイク〉』……だと！」
代償を払いライザー・フェニックスとの戦いで見せた、『赤龍帝の籠手』の更なる発展系『赤龍帝の鎧〈ブーステッド・ギア・スケイルメイル〉』が、再びこの戦場に姿を現した。

視線、勝敗

龍を模した兜の下で一誠は独り自分に起こった事態に戸惑っていた。『禁手化〈バランス・ブレイク〉』である『赤龍帝の鎧〈ブーステッド・ギア・スケイルメイル〉』を纏うのは初めてではないが、最初のときとは違い、一誠は何も代償を払っておらず、勝手に纏っていることに驚きを禁じ得なかった。

（どうなってんだ、これ！　ドライグ！　もしかしてお前がやったのか？　何か俺から代償を貰ったのか!?）

原因として真っ先に思い浮かんだのが、自分よりも遥かに『神滅具』のことに詳しく『神滅具』自体に宿っているドライグであったが、返ってきたのは一誠と同じく戸惑いに満ちた言葉であった。

『こんなことは俺も初めてだ……相棒の意志でも俺の意志でもなく強制的に『禁手化』だと……まさか、外部から『神滅具』を動かすような奴がいるのか？』

想像を上回る展開に思考が中々追い付かない一誠は、コカビエルに消し去られようとしたときのことを思い出す。

あのとき全身が光に包まれ、体が消滅していくのかと半ば覚悟したとき、聞こえる筈

の無い声が頭に響いた。
幻聴かと思ったが、その声は恐らくこのようなことを言っていた。
『少しだけ手を貸そう』
その直後に体中に魔力が漲り、気付けば鎧を纏っていた。
（声……聞こえたか？）
『……微かに聞こえたな。聞き覚えの無い声が』
お互いに聞こえたことを確認し合ったことで、幻聴では無いことを確信する。なら誰の声であるかと考えにふけそうになったとき、断ち切るような閃光が目の前に映る。
コカビエルの投擲した光の槍、それも樹木を何本も束ねた程の大きさであった。
『相棒！』
「分かってるさッ！」
『Ｂｏｏｓｔ！』
鎧の各所に付属している宝玉たちが輝き始め、一斉に倍加の音声を鳴り響かせる。一瞬にして桁違いの魔力を生み出した一誠。その魔力は一誠の周囲を膜の様にして包み込む。膨大な魔力と膨大な光力が接触したとき、反発し合う力が暴風の様に荒れ狂い、混ざりあった二つの力が辺り一面に弾け飛ぶ。
それでも競り勝ったのはコカビエルの光の槍であった。いくらか力を削がれたが膜

を突き破って、中心にいる一誠の身にその穂先を埋め込もうとした。
　しかしその先端は一誠の両手が受け止め、そのまま微動だにしなくなる。巨木の様なコカビエルの槍を掴む一誠の姿。だがよくよく考えればおかしくは無い光景である。一誠の周囲を覆っていた魔力の膜は意図して出したものではなく、制御し切れなかった魔力が漏れ出したことで防御壁のような状態になっただけであり、それよりも遥かに多く濃い魔力は一誠の裡に蓄積されたままであるからだ。
　一誠は左手を離すとそのまま握り拳を作り、光の槍の穂先に拳を打ち込む。やがて殴られた箇所から亀裂が生じると一気に端までそれを伸ばし、全てに亀裂が刻まれたとき、槍は粉微塵となって消え去った。
「まさか『禁手化』まで使えるとはな……ヴァーリに遠く及ばない器と思っていたが違ったらしい」
　自分にしか聞こえない声量で独り呟くコカビエル。放った槍を打ち砕かれても特に焦った表情を見せなかった。
　光の槍を潰した一誠はそのままシンたちの側へと移動する。ゼノヴィアは禁手化を使用した一誠の姿を見て明らかに驚いた様子であったが、シンと木場は対照的にあまり歓迎した態度では無く、眉間に皺が寄った険しい表情をしている。
「『禁手化』に至るまで『赤龍帝の籠手』を極めていたとはな……私の切り札に勝るとも

劣らないな」
「まあ、何と言うかな……」
勝手に発動した手前、褒められてもどう返せばいいのか分からず言葉を濁す。
「本当に大丈夫なのかい？　また何か対価を払って――」
コカビエルを警戒しつつ木場は鎧を纏った一誠に心配そうな声を掛けた。以前『禁手化』した際に、左腕を代償にして発動していることを知っている為、当然とも言える反応であった。
「いや、今回は特別っていうか、その俺もよく分からない。わりぃ、詳しく説明出来ないけど何か『禁手化』出来た」
いい加減に聞こえる一誠の言葉であったが、本人も何が起こったのか分からずに鎧を装着している為、どうにも上手く説明することが出来ない。
そんな中、シンは真っ直ぐコカビエルを見ながら一誠に話し掛けた。
「今度は十秒以上持つのか？」
「ああ、多分だけどライザーのときよりも使えると思う。何というか鎧が漲っている感じがする」
「分かった」
少なくとも、継続して鎧の力を使用することが出来るというのは大幅な戦力の向上が

望まれる。リアス、朱乃、小猫が倒れ、その治療にアーシアも専念している。まともに戦うことが出来るのは一誠、木場、ゼノヴィア、シンの四人。
　誰が最初に攻めるか、いつまでもコカビエルが黙っている筈も無く、短い時間でどう戦うか決めなければならない。そんなとき木場が口を開く。
「イッセー君、君に先駆けを頼んでいいかい？」
　その言葉に躊躇なく一誠は頷く。
「了解！」
「ありがとう。それで――」
　口早にその後の戦い方を周りに大雑把に説明をする。そして――
「間薙くんも頼んだよ」
　木場はシンの方を見て軽く微笑んだ。シンも頷いてそれに肯定の意を示す。
『相棒』
　木場の案を言い終えると同時に一誠の頭の中にドライグの声が響いてくる。
（どうした？）
『こいつの話を聞いていて、多分一度しか通じないが、あいつに一撃を喰らわす方法を思いついた。試してみるか？』
（マジで！　どんな方法だ？）

手短に説明するドライグ。聞き終わった一誠は意外そうな表情をする。
（そんなことも出来るのか？）
『相棒は意識を集中していればいい。細かい部分は俺がフォローする』
（分かった。頼りにしてるぜ）
脳内でもドライグとの会話を終えた一誠はコカビエルに向かう直前、木場に話し掛けた。
「木場、手伝ってもらいたいことがある」
一誠たちが小声で会話している中、コカビエルはそちらへの注意よりも自分の左手に注目していた。一誠によってあらぬ方向に折れ曲がった指、それを戻す為にある方法を使うことにする。
コカビエルの左手に光が帯びたかと思えば突如として消える。その直後、折れ曲がっていた指の内の一本が、音を立てて変形し始めた。断続的に続く骨の折れ曲がる音、それに合わせてコカビエルの指は左右に動き、曲がりを修正していく。そして数秒後には、複雑に折れていた指が元の形に戻っている。
折れた指を戻すのにコカビエルが行ったのは、光の力を使い無理矢理指の形を戻すという荒業であった。手の内に光力を流し込み、それを上手く操作することによって、捩じれるようにして曲がった指を内側から矯正する。これによって右手を使わずに指を

戻すことが出来るが、これは治療ではなくただ元の形に直しているに過ぎず、戻している最中も痛みは発生し続け、骨も折れたままの状態である。それでも指を直しているコカビエルは苦悶の表情を浮かべず、一本目が直るとすぐに二本目を直すことに取り掛かる。

この戦いの中で本領を発揮してから、コカビエルは目立った致命傷といえる傷は負っていない。しかし、シンによって毟られた右翼があった場所から流れ出る血は勢いを弱めることは無く、また、封が解かれた炎はコカビエルの身を焼き尽くすことを止めない。最初と比べれば明らかにコカビエルの肉体は消耗し、弱ってきている。だが、肉体とは裏腹にその精神は一層高揚し、肉体が死に近付くことに反比例してますます昂っていく。

肉体を精神が凌駕している故、本来なら感じる筈の痛みもあまり感じず、既に肘を通り越して肩付近まで燃え移っている魔人の炎もむず痒く感じていた。

この先のことを考えれば力を温存し、悪魔や天使たちとの戦争の為に残しておくべきであるが、今のコカビエルにはそのような考えが微塵も残っていない。ただこの刻を存分に愉しもうとする、狂気的なまでの戦いへの渇望のみが存在していた。

五本目の指が元の形へと戻ったとき、コカビエルは意識を一誠たちの方へと傾ける。時間にすれば一分も満たない両者の停滞であったが、仕切り直すには十分過ぎる時間で

あった。
「『禁手化』した『赤龍帝の籠手』と戦うのはこれが初めてだな……来い、如何程のものか試してやる。俺を愉しませてみろ」
わざわざ折れていた方の手で手招きするコカビエル。元より先手で行くことになっている一誠は構える。そして鎧の背中に備わっている魔力噴出口から赤い魔力の光が零れ出した。
「ふざけんなよ！　お前の独りよがりの愉しみの為に何人傷付いていると思ってんだ！　それだけじゃねぇ！　この町を破壊するなんて勝手な真似、ここでお前と一緒にぶっ飛ばす！」
一誠の怒りに呼応し、纏う光が強くなる。一誠の想いは魔力という形となり、『赤龍帝の鎧』に注がれていく。
「いくぜ！　コカビエル！」
背中の噴射口から一気に魔力が噴出され、それによって生み出された推進力により一誠が飛ぶ。
地面を矢のように駆ける赤龍帝の姿にコカビエルは、口元に邪笑を浮かべながら左翼を前方に出し、盾の様に掲げた。
駆けながら振り上げた一誠の拳が、コカビエルの左翼とぶつかり合う。一誠の破壊力

が翼の防御力を上回り、接触した翼の内の一枚がくの字に折れ曲がる。
その勢いで防御を突き破り、その奥のコカビエルの胴体に突き刺さるかと思ったが、翼の防御によって軌道を僅かに逸らされたのか、一誠の拳は脇腹を掠めるだけに留められる。
そしてその空を切った腕をコカビエルは左腕と脇腹で挟み、捕らえた。
「狙いが甘いな！　赤龍帝！」
燃え盛る右手が橙色の光を放ちながら拳を作る。
「砕けろぉ！」
「舐めんなぁ！」
頭部目掛け振り下ろされた拳。しかし一誠はそれに怯むことなく、自分からコカビエルの拳に向かって額を叩きつけた。金属が軋む音と生々しい破砕音が重なる。一誠の頭部を覆う鎧には罅が生じ、コカビエルの右手は殴りつけた衝撃で指の骨が折れ、肉を突き破り外へと飛び出している。
一見すれば一誠の方に軍配が上がる。だが外から見ているには分からなかったが、鎧の下では一誠の意識は半ば飛びかけていた。
『相棒！　おい！　気をしっかり持て！』
ドライグの呼び掛けに辛うじて意識を保つことが出来たが、それでも視界は回り、嘔

吐感が込み上げて来る。
首が縮み、頭の中で脳みそが上下左右あらゆる角度でぶつかった様な錯覚を覚えながら、上手く定まらない視線でコカビエルの方を見る。
視界全体に広がる炎。避けるよりも先にコカビエルの右手が、一誠の顔面を鷲掴みにし締め上げる。骨の折れた手とは思えない程の握力であった。
罅割れた箇所が擦れ、耳障りな音が鎧の内側で木霊する。魔人の炎を受けても龍の鱗と同等の耐熱性を持つ装甲が溶解することは無かったが、徐々に熱が伝わってきているのが分かる。
「このぉ！」
『いつまでも掴まえられていると不味いぞ。あの不死鳥の小僧の炎よりも厄介な炎だ！』
「言われなくても！」
一誠は密接した状態から自由の利く左拳をコカビエルの無防備な横腹に叩き込む。体勢は不十分でありきちんとした技術も納めていない為、放たれた拳の威力は十分に発揮されていないが、有り余る力で強引にそれを補う。
拳が触れた箇所から一気に肉を潰し、その奥にある骨も圧によって強引にへし折る。一誠もその感触を拳から確かに感じ取っていた。通常なら骨折の苦しみで七転八倒し

ていてもおかしくない。
だがそれでもコカビエルの締め付ける力は弱まらない。
（痛みを感じないのかよ！）
『痛覚を意識的に消しているか、さもなくば痛みを感じない程戦いに夢中になっているか。どちらにしろ面倒な相手だ』
理解の範疇を超えた相手の強靭さに驚くも、すぐにどうにかしなければと頭を働かせる一誠。そして唐突に閃き、躊躇うことなくそれを実行する。
「だったら！」
背中にある魔力噴射口に再び光が灯る。そしてそこから魔力が噴き出したかと思えばそのまま噴射口が下へと向き、コカビエルが張り付いたまま真上に飛び上がる。
「むう！」
いきなりの上昇にコカビエルは軽く呻くが、取り乱す程の驚きは無く、未だに一誠から手を離さない。そのまま一誠はある程度の高さまで昇ると再び噴射口の向きを変え、今度は真横に向ける。
膨大な量の魔力を吐き出すことによって一誠の体は空中で横転。その腕を掴んでいるコカビエルもまたその動きに巻き込まれる。
当然噴射口は下を向いていない為、二人は横転しながらも地面へと落下していく。視

界が三百六十度高速で回転し、目に映る光景はただの螺旋状の色に過ぎない。
もつれ合う中、一誠は左拳を引き、コカビエルを引き離そうと殴り掛かった。
その動きを見逃さず、突き出した一誠の拳を止めようとコカビエルの左手が伸ばされる。放った拳がコカビエルに触れる前に手首を掴まれ止められる。だが掴まれた一誠は、鎧の下で小さくその名を呼ぶ。
「ドライグ！」
『Ｂｌａｄｅ』
音声と共に掴まれた左手の甲から白と黒が入り混じった光が伸びる。その不意の一撃にコカビエルは咄嗟に回避出来ず、光の先が右肩へと突き刺さった。
一誠の左手甲から突き出た刃、それは木場の神器で在る筈の聖魔剣の刃であった。
「器用な真似を！」
舌打ちしコカビエルは一誠から手を離すと、突き刺さる聖魔剣の腹に掌底を打ち込む。それにより剣身が半ばで砕け散り、元の魔力へと還元されていく。
この一撃こそドライグが提案した案であった。一度きりの奇襲、技量の無い一誠では初見の相手にしか当てることが出来ず、尚且つ木場自身の手から離れている『神器』であるため、木場以上に能力を引き出すことが出来ない。使い捨てを前提とした策であったが、何とか一撃を入れることが出来た。

肩へと突き刺したことにより、顔面を握り締めるコカビエルの握力が弱まるのを感じる。

一誠はその状態で更に速度を上げる。

三半規管が悲鳴を上げる中で一誠は両膝を折り曲げ、足をコカビエルの腹部に押し当てると膝を発条の様に瞬間的に伸ばす。回転の中で意識を無理矢理逸らされていたコカビエルは反応するのに一歩遅れ、二人は空中で離れる。

片翼となったコカビエルには前の様に自在に飛翔する力を失っており、錐揉み状態で上から下へと落ちていく。

景色が無茶苦茶に映る中、コカビエルの姿を視界に入れたとき、一誠は力の限り叫んだ。

「木場ぁぁぁぁ！」

そしてそのまま離れた一誠は、魔力の噴出の勢いや方向感覚の狂いのせいで窓を突き破り、校舎の中へ突っ込んで行った。

それを聞いた木場は手に持つ聖魔剣を地面に突き刺す。そこから地中を伝いコカビエルが落下する地点まで力が届くと、そこから剣山の様に無数の聖魔剣が落ちる。コカビエルに向かって全ての刃を向け、一斉に射出された。

無数の聖魔剣が迫るのを捕捉したコカビエルは迎撃しようとするが、片翼を失ったこ

とによって思い描く様に身を動かせない。
短く舌打ちをするとコカビエルは一誠の拳を防いだときと同じく、翼を前方に掲げ防御の姿勢をとった。
放たれた刃がコカビエルへと襲い掛かる。頭、喉、胴体などといった戦いを継続するのに必要な器官を重点的に守るが、それ以外の疎かになっている部分を容赦なく刃が裂き、削り取っていく。大腿部を掠め、横腹に刃を僅かに喰い込ませ、肩の上を擦るように通過し、肉が裂けると血が溢れ、錐揉みするコカビエルの動きに合わせて血を撒き散らす。
意図せず細かく刻む様にコカビエルの体を削いでいくが、削がれている本人は特に苦痛の色を見せず、代わりに削っていく刃に対し、小蝿でも纏わりついているかの如く不快な色を浮かべていた。
聖魔剣の群を掻い潜り、地面に両足で降り立つ。顔を上げたコカビエルが見たものは、撃ち落とすときの倍以上の本数の聖魔剣が周囲に浮かび、自分を取り囲む光景。
「針の筵――いや、剣の筵といった所か?」
圧倒されるような光景を前にしても怯まず、冗談を口にする。
「これで囲ったつもりか?」
コカビエルの片翼が大きく広げられ、羽の一枚一枚に光が灯る。その光が溶け込むと

同時に、光沢の無かった羽に金属の様な反射光が映る。
そしてコカビエルはその翼を体ごと振るった。翼に聖魔剣が触れるとその剣身に罅が生じ、そのまま振り抜くと砂糖菓子の様に砕け散る。数を増やしたことで強度が脆く、容易く打ち砕かれていく聖魔剣たち。
コカビエルの周囲に砕けて破片と化したものが舞う。
「こんなものか！」
「こんなもんじゃないさ」
コカビエルの恫喝に冷水でも浴びせるかのような、シンの冷めた言葉が被さる。
翼を振り回した後のコカビエルの正面に立つシン。その姿が目に入ると同時に、コカビエルは光の剣を発生させて斬りかかった。
するとそれを読んでいたかの様にシンが上へと跳び上がる。ならば降りてきた所を斬ろうと思い上を向いたコカビエルが見たのは空中で更に跳ね、自分の頭上を越していくシンの姿。
悪魔の翼など生やさずに飛ぶシンに一抹の疑問を覚えるが、すぐに追撃しようと振り返ると、既に間合いを詰めたシンが拳を振り上げていた。
「くっ！」
それを咄嗟に光の剣で受け止める。シンの左拳は光に触れたことでその箇所から白

煙を上げるが、シンはその状態のまま、今度は右拳を剣に叩き込んだ。
最初の左拳よりも魔力を多く纏わせていたらしく、右拳が剣に衝突するとその威力に光の剣が一瞬波打ち、形がぶれたかと思った次の時には形を失い崩壊していく。
明らかに一撃の重さが増している。コカビエルはその急な身体能力の上昇について、すぐに一誠の『神滅具』の仕業であると理解した。コカビエルの気付かぬ裡に、倍加した分の力をシンに譲渡していたらしい。
それなりに高かった力がより強まることを厄介と思いつつ、光の剣が消えると同時にコカビエルの前蹴りがシンを襲う。シンは殴り抜けた姿勢のまま、横滑りでそれを回避した。
さっきも見た不可解な動き。その謎はコカビエルがシンの足元を見たときにすぐに判明する。
シンの両足は地面に着いておらず、代わりに地面すれすれを浮く木場の聖魔剣へと乗せられており、それが乗り物の様にシンを運んでいた。
その状態で跳び上がると今度は空中に浮く聖魔剣を踏み台にし、そこから跳ねる。曲芸のような動きを目で追うコカビエルであったが、背後から迫る気配にその場で身体を沈める。その直後、首があった場所に二つの光が交差した。
振り返らずともそれがゼノヴィアの聖剣であることが分かっていたコカビエルは、沈

めていた身体を起こしながら片足を軸にして振り向き様に、ゼノヴィアの側頭部に向け肘を繰り出す。

だが、振り向きながらコカビエルが見たのは、首を横に傾けているゼノヴィア。その不自然な格好の意味を瞬時に解すと、肘の向きを横から下へと急転換し、その勢いを利用して上体を仰け反らせる。するとコカビエルが先読みした通り、ゼノヴィアの耳横を聖魔剣が通り過ぎ、先程まで肘があった場所を通過していった。コカビエルがぎりぎりで避けたのを見てゼノヴィアが追撃を試みようとするが、そうはさせまいとコカビエルの掌が空を押す。するとそこから見えざる衝撃波が放たれ、ゼノヴィアの腹部に手の形が浮かぶとそのまま押し飛ばされた。

流石に周囲の聖魔剣が鬱陶しく感じたのか、コカビエルはそれらを全て吹き飛ばそうと力を全身に込め、いざ解き放とうとしたとき――

「ぐっ！」

紙一重、あるいは絶妙と言えるタイミングで、シンの拳がコカビエルの背中に叩き込まれた。通常の状態ならば防ぐことの出来る攻撃であったが、コカビエルの意識が防御から攻撃へと傾く、刹那の意識の間を見破っての一撃。その重みは肺、心臓へと伝わり、痛みに対し鈍感になっているコカビエルの攻撃への意識を無理矢理遮断し不発にさせる。

それによりコカビエルの膝が僅かに折れる。その隙を狙い木場が現れ、両手に持つ聖魔剣を振り下ろす。

それを業炎の右腕が受け止める。黒く炭化しつつある腕でもコカビエルの力、あるいは魔人の炎の影響か、聖魔剣を以てしても刃を僅かに埋める程度で押し止められる。

「ッ！　抜け目ないな――！」

コカビエルの身体が一瞬震えた後、木場を褒める様な言葉を口にする。

いつの間にか脹脛に突き立てられた聖魔剣。それは振り下ろすと同じタイミングで足を器用に扱って木場が刺し込んだものであった。

脚が傷付けられたことで十分に力を伝えることが出来ないのか、木場の剣力に押されてコカビエルの腰が沈む。

押さえ込んでくる木場を払おうとコカビエルは左腕を掲げ、そこに光の槍を造り出そうとするが、飛び掛かったシンがその腕に手を回し、関節を無理やり逆方向へと伸ばそうとする。

「ぬうううう！」

筋や腱を千切ってしまおうとする程の力で腕を曲げていくシンに、コカビエルも体の内で聞こえるミシミシという音を聞きながら抵抗するが、能力が向上しているシンの力に押され気味であり、へし折られそうになる時間を引き延ばすぐらいの抵抗であった。

両腕の自由を奪った今、コカビエルに吹き飛ばされたゼノヴィアが好機と見て、すぐに体勢を立て戻し聖剣を構えて走り出す。
「その命、神に返す時が来たな、コカビエル！」
追い込まれた状況。だがコカビエルはゼノヴィアの言葉を聞き一笑する。
「死んだ者にどう命を返すと言うんだ？」
「な、に？」
返された言葉があまりに予想外なものであったのか、明らかな動揺がゼノヴィアに広がる。それはゼノヴィアほどでは無かったが、他の皆も聞き捨てならないものであった。
「仕えるべき主を失った子羊たち、哀れで無知で滑稽だ」
「耳を貸すな。はやくこいつを斬れ」
嫌なものを感じ、シンはゼノヴィアに急かす言葉を掛けるが、その耳は既にコカビエルの言葉に傾けられている。
「この期に及んで、そのような戯言を――」
「戯言？　そう思うのは自由だ。だが神は既にあの時の戦争っ！」
コカビエルの頬にシンの肘が叩きつけられる。こちら側にあった流れを変えられるのを防ぐ為、物理的にコカビエルの口を封じる。

「黙っていろ。ゼノヴィア、早く斬れ。迷うのは後にしろ」
「くくく、焦ったか？」
「口を閉じていろ」
口の端から流れる血を舌で舐め取りながら嘲笑をシンに向けるが、それを冷徹な言葉で一蹴する。
信仰を持たないシンや既に信仰するのを止めた木場には、コカビエルの言葉はあまり意味を成さないものであったが、未だ信仰心を持つゼノヴィア、そしてアーシアには絶大な効果があるらしく、目に見えて心が揺れている。もし普段のゼノヴィアやアーシアであったのならば、激しく動揺することが避けられたかもしれないが、運悪く事前にアダムから聞かされた天界側の黒い一面のせいで、根付いてしまった僅かな不信感が『もしかしたら』と強く揺さぶりをかけてしまう。
ゼノヴィアが握る聖剣の光が目に見えて弱まっていく。それが露骨にゼノヴィアの現在の心情を現していた。
斬れと急かしていたシンもその状態で斬りかかるのは流石に危険と判断し、先に自分で行動しようとしたときゼノヴィアが動き出す。
呼び止める前に振り翳した二本の聖剣が、動きを制限されたコカビエルの両肩目掛け振り下ろされる。

しかし、その後に聞こえたのは剣が肉を裂く音では無く、鈍く篭った音であった。ゼノヴィアの二本の聖剣はその刃をコカビエルの肩に食い込ませる程度で押し止まり、皮一枚切れていない。切れ味が著しく衰えていた。

「内に有る支えが揺らいだな。最早、お前の振るう聖剣は只の鈍刀だ」

コカビエルが一際強く地面を踏みつける。同時に悪寒が走った木場とシンは拘束を解き、一目散にコカビエルから離れようとするが、ゼノヴィアは二人の様に気配を感じ取ることが出来なかったのか、反応が遅れる。

それを見た木場はコカビエルから離れるよりも先に、棒立ちとなっているゼノヴィアへと体当たりするようにして担ぎ上げると、全速力でその場からの離脱を試みた。

だがその直後、コカビエルが踏みつけた場所を中心にして円状に地面が輝いたかと思えば、地面を突き破って無数の槍状の光が現れた。

シンは回避出来たもののゼノヴィアと一緒に離れようとしていた木場は逃げるのが遅れ、突き出した光の槍が内腿を深く抉られる。それでも転がる様にしてその場から辛うじて逃げ延び、半ば担いでいた物を放り出すような形で地面を転げ回る。周囲を囲んでいた聖魔剣も光の槍によって次々と破壊されていく。

「つう……！」

抉られた箇所を押さえる木場。指の間からは光の毒によって肉体が焼け、煙と血が漏

れ出している。
「戦争というものはかくもおかしいものだとは思わないか？　常に予期せぬことが起こり続ける。あのときの大戦もそうだ。誰もがまさかと思っただろうな。神が戦いの中で命を失うなど」
天を仰ぎ、自由の身となったコカビエルは周囲に向け独り語る。
「バルパーは聡い奴だったよ。三勢力の一部しか知らない事実を、たった一つのイレギュラーから推測したのだから。『聖魔剣』、天秤が崩れ、混沌と化していくこの世をよく表したイレギュラーだ」
倒れ伏す木場の聖魔剣を見ながら喉の奥で笑う。奇しくも味方の存在によって、敵の言葉を裏打ちするような事態となっていた。
「死んだ神に祈りを捧げるのはどんな気分だ？　底が開いた瓶に延々と水を注ぐようなものだと知らされてどんな気分だ？」
煽る様にゼノヴィアやアーシアへと尋ねる。敬虔な信者である二人は答えることが出来ず、その全身からは生気が失われつつあった。
「いっそ殉教でもしてみるか？　この世の果てならば神も待っているかもしれないぞ？」
光の剣を出しながらコカビエルは、立ち上がろうとしないゼノヴィアの下へと近寄

る。そしてその頭上に光の剣を振り上げようとしたとき、横から伸びた手がコカビエルの手を掴む。
「己を支える柱が無くなった信者など、いっそ殺してしまうのが慈悲というものだとお前は思わないのか」
　手を掴むシンを見てコカビエルは嘲笑混じりの言葉を掛ける。シンは無言で地から片足を上げると、コカビエルに叩きつける――のではなく、項垂れているゼノヴィアの胸部に容赦なく撃ち込んだ。
　ゼノヴィアの身体が宙に浮き、ボールのように飛んで行く。
　蹴られたゼノヴィアは勿論、それを見ていた木場も突然の蛮行に目を丸くする。
　ゼノヴィアはそのままアーシアの近くまで蹴り飛ばされ、二度三度地面を転がった後に止まった。
「間薙くん！」
「邪魔だ」
　シンは軽く首を振った後、木場の言葉を最後まで聞かず一言で会話を終わらせると、蹴りつけた脚をそのままコカビエルに振るう。それは脚で難なく受け止められる。
「助けるつもりで蹴ったのならばもう少し手加減するべきだったな。あれは骨が折れている。治癒しなければまともに動けんぞ」

「それがどうした」
　掴んでいた手を捻り、腕ごと捩じ折ろうと試みるも、その動きにコカビエルも素早く合わせ、その場で宙返りをする。
「これ以上絶望する前に葬ってやろうとしたのだがな。そんなに救いたかったか？」
「興味無い。あの様子ならばほっとけば舌でも噛むか、首でも括る」
「白々しい。あの娘の宗派を知っての台詞ではないな」
　着地と同時に右の手刀が、掴んでいる腕目掛け繰り出される。止むを得ず手を離してそれを空振らせると、お返しとばかりにシンの拳が開いた胴体へと放たれる。だがコカビエルは解放された左肘を手の甲へと叩きつけて防いだ。
「神は死に、四大魔王も死んだ！　あるべき秩序が壊れた今、天使も堕天使も悪魔も緩やかに死滅していくだけだ！　ならば時に殺されるのではなくいっそ互いの手で滅ぼし合った方がましじゃないか？　だからこその二度目の戦争だ！」
「一人でやっていろ」
「言葉にせずとも俺の意志に賛同する奴らは必ず存在する！　三勢力の中に必ずな！」
「ならそいつら諸共あの世で戦争ごっこでもしているんだな」
　両者とも瞬きよりも早く己の四肢を動かして、付かず離れずの近距離で互いの命を獲りあっていた。

◇

「げほっ！　ごほっ！」
遠巻きでそれを眺めながらゼノヴィアは、シンに蹴られたことで咳き込んでいた。その度に胸の内側で鋭い痛みが奔る。経験から骨に罅が入っていることを悟った。
正直、ゼノヴィアの心の中ではシンに蹴り飛ばされたことに対して怒りを抱いてはいなかった。ただ信仰していた神が既にいないという信じがたい事実に、感情が浮かぶ気力すら湧かなかった。
「大丈夫かい？」
いつの間にか近くに来ていた木場が話し掛けてくるがゼノヴィアは応えない。木場は片足を引き摺りながら側まで寄ると、うつ伏せになっているゼノヴィアを起こす。
「すぐにアーシアさんのところまで運ぶよ」
「……あの男の手助けをしなくていいのか？」
昏く擦れた声でゼノヴィアは木場に尋ねる。
「――悔しいけど、この足じゃ間薙くんの枷になってしまうだけだからね。それに間薙くんも君の所へ行けって合図を出していたし」

木場がシンの行動に驚き思わず声を掛けようとしたとき、シンは口では聞く気など無いと示していたが、さりげなく顎でゼノヴィアを指し、その後にアーシアの方を指すという動作で密かに木場へ指示を出していた。それが上手く伝わったことにより木場はゼノヴィアの介抱をしている。

「……コカビエルが言ったことは……」

「恐らく本当のことだろうね。神を見限った堕天使が罰せられず、今の今まで存在してこられたのは、神という罰を下す存在が居なくなったからかもね。それに――」

木場はコカビエルが指摘した、自分の手に握られている聖魔剣に目を落とす。確かに禁手化で生み出されたこの剣は、この世ではありえない矛盾の塊だった。

コカビエルの言葉を否定せず逆に肯定する。あれほどまでに戦いの中で己を曝け出しているコカビエルが、口先だけで惑わすような戯言を言うとは思えない。

「……この場で一番信じるべき私はだ……なのに私は誰でもいいから嘘であると言って欲しいと願っている……自分の背を押してくれる様な言葉を望んでいる……」

否定し切れないゼノヴィア。その震える姿を見て木場はかつての自分を重ねた。信じるものを失い、何で自分を支えればいいのか分からずに絶望した自分。

「――ゼノヴィア。居ようと居まいと君自身を救う都合のいい神様はここには現れないし、救いの手を差し伸べることはない」

　木場自身信仰を捨てた身。この場で慰める為に耳触りのいい言葉を並べるつもりは無く、ただ残酷とも言える言葉を突き付ける。
「例え降りしきる雪の中を独り走っていようと、例え血反吐を吐いていようと、例え命の灯火が消えかけていようと、手を差し伸べる神様は現れたりしないんだ」
　かつての自分の経験から出て来る言葉。ゼノヴィアはただ生気の無い瞳でそれを黙って聞いていた。
「このまま死んでしまいたいというのなら僕は止めない。――でも、もしほんの一欠片でも生きたいという願いがあるなら」
　木場はまっすぐゼノヴィアを見つめた。
「君を助ける手はここにある」
　その言葉にゼノヴィアの瞳が微かに揺れる。
「……何故そうまで助けようとする？」
「ただの僕のエゴさ。生きることを諦めさせたくないんだ」
　木場は微笑を浮かべ、ゼノヴィアを立たせようとする。が、木場の支える手をゼノヴィアは掴んだ。
「大丈夫だ。……まだ私は独りでも歩ける」
「そうかい」

木場は問い返すことなく掴んでいた手を離す。ゼノヴィアの目が完全に生きる気力を失っていないことが分かったからであった。
「だったら――」
次に心配すべきは、悪魔になっても変わらずに神への信仰を積んでいるアーシアのことであったが、木場の予想に反しアーシアは、ゼノヴィアの様に震えていたりショックを受けていたりせずに、ひたすらリアスたちの治癒を続けていた。
「彼女のことも頼むよ。アーシアさん」
「はい！」
胸を押さえているゼノヴィアがアーシアの側まで行ったのを見て、木場は胸の裡にあった疑問を投げ掛ける。
「アーシアさんは……平気なのかい？」
その問いで懸命になっているアーシアの表情が一瞬曇ったのを見て、つい口走ってしまったことを後悔しながら、すぐに自分の言葉を訂正しようとする。
「ごめん。やっぱり聞かなかったことに」
「主がいないこと、私たちの信仰が全て無意味であったこと、そして主から与えられる愛が無いこと……本当は凄く苦しいです」
でも、とそこで区切り、アーシアの視線は横たわるリアスたち、傷付いた木場、ゼノ

ヴィア、コカビエルと息つく暇も無く接戦を繰り広げているシンの姿、そしてコカビエルと揉み合ってそのまま校舎を突き破っていた一誠が造った大穴の方へと次々に向けられる。

「私は皆さんの様に戦えません。だからせめて、自分の与えられた役目だけは見失わずに全うしたいんです」

そう言い切るアーシアの姿を、ゼノヴィアはじっと見つめていた。その目がどんな感情を映しているかは木場に分からなかったが、少なくとも最初のときに見せたような、『魔女』として軽蔑していたときのものではなかった。

「えらい、えらい」

ピクシーがアーシアの側まで飛んでくると、アーシアを褒めながら頭を撫でる。

「あの、私のことよりもピクシーさんは間薙さんのことを心配した方が……」

「シン？　きっと大丈夫でしょ？」

あっけらかんと言うピクシーの態度に誰もが絶句してしまう。シン自身の実力はそれなりに高い方であるが、相手は堕天使の幹部であるコカビエルであり、今も一人で戦い続けている。

「そんな簡単に……」

「シンが死ぬ時があったとしたらきっとアタシも死ぬときだと思っているし、でももし

今日がその日だったら――まあそのときは仕方ないかな」
口調は軽いが、その内容は非常に重いと言えるものであった。普段から無邪気で飄々としているピクシーであったが、生死を共にする覚悟があったことを、この時誰もが初めて知った。
「――なら僕も自分の役割を果たそうかな」
木場は足を引きながらアーシアたちの前に立つ。
『騎士』としてここに居る皆を守らないとね」
負傷をしている木場は今も戦っているシンのように十分な力で戦えない。ならば少しでもシンが気兼ねなく戦えるようにこの場を守る。それが木場の選択であった。寧ろゼノヴィアの下へ木場を行かせたことを考えると、シン自身そのような形になることを望んでいたのかもしれない。
「ヒホー!」
前に立つ木場の横にジャックフロストが並ぶ。
「オイラもゆうとと同じことをするホー!」
意気込むジャックフロストに木場は苦笑する。
「危ないかもしれないよ?」
「オイラはまだシンみたいにあんな風に戦えないホー。だったら自分の出来る範囲から

少しづつやっていくホー！　それが強くなる方法だってこの間シンに聞いたらそう教えてくれたホー！　これで防御力が上がったホー！」

胸を張って言うジャックフロスト。危険に首を突っ込まない様にそれっぽい様なことを言ったのではないか、と木場は思ったが、口には出さなかった。

「王様になるんだったら『騎士〈ぼく〉』に任せてもいいと思うんだけど」

「王様を『騎士』が守るんだったら王様が『騎士』を守ったっていいホー！　二人で守り合えば倍強いホー！」

子供の様な理屈と一蹴するのは簡単であった。だが木場はこの隣に立つ小さな雪精の存在に、見た目以上の頼もしさを感じられた。

「そうかい。じゃあ僕のことは任せたよ」

「ヒホ！　オイラのことも任せたホー！」

普段は冷静な木場であったがこのとき、天に向かって思いっきり、声を大にして叫びたくなった。天に昇って行ったかつての同志たちに届く様な、大きな声で伝えたい。

『これが今の僕の仲間たちだよ』と。

◇

短い時間の中で幾度なく続く命の奪い合い。両者とも近い距離でお互いを顔を見ながら、異なる表情を浮かべていた。コカビエルはこの戦いの中に喜びと歓喜を見出し、実に愉しそうな表情を浮かべ、シンは目線のみ動かすだけでそれ以外の表情筋は微動だにせず、無表情を貫いている。

だが、それでも共通している部分もあった。それは、相手を死に至らせてやろうという殺意を込めた目であった。

シンの左拳がコカビエルの鳩尾へと深くめり込む。コカビエルの口の端から唾液が流れ落ちる。しかしその状態からコカビエルは頭蓋を砕く勢いで肘を降ろした。それを捉えたシンは身を引いて躱す。

その動きを読んでいたかのように振り下ろされた肘は途中で急停止し、顔面目掛け真っ直ぐ突き出された。先読みされたことで見切るのが微かに遅れたシン、それでも回避しようと無理を承知で身体を強引に動かす。

内側の筋肉や筋が無茶な動きに、痛みという名の悲鳴を上げるが、それを無視する。突き出したコカビエルの指先の先端が左瞼の上に触れる。その瞬間、噛み合わなかった身体の動きがようやく噛み合い最速、最少の動きでそれを避ける。

直撃を受けることは避けられた。だが最初に受けた指先の部分は触れた箇所を抉り、そこから血が流れ出す。流れた血はシンの左眼へと流れ込み反射的にシンは左眼を閉

じてしまった。
　しまったと心の中で思った次の瞬間、衝撃が腹部に走る。コカビエルの爪先がシンの腹へ捩じ込まれていた。痛みを堪えコカビエルの足を掴もうとするが、それよりも先にその状態から蹴り飛ばされ、コカビエルと距離を開けられてしまう。
　天に掲げたコカビエルの手。そこから光が迸ると光は巨大な槍と化す。シン一人を葬るにしては過剰といえる力が込められていた。
　対するシンもすぐに体勢を整え、蹴られた痛みなど無いように平然とした態度で右手に魔力剣を生み出す。巨大な光の槍を前にしてシンの持つ魔力剣はあまりに小さく感じられた。
　コカビエルは頬を痙攣させるかの様に嗤う。
「愉しかったがこれで幕引きだ！」
　シンに向けて放たれる光の槍。しかし、シンは魔力剣を握り締めたままそれを振るおうとはしない。
　一見すれば諦めているかのように見える態度。シンは待っていた。このような危機的状況、それに黙っていられない存在がこの場にいる。それが都合よく現れる根拠など何一つ無い。敢えて根拠を挙げるとしたら、只の『勘』という具体性の無いものであった。

だがシンはその『勘』に命を賭ける。他人が知れば狂気の沙汰であるが、少しでもコカビエルを倒す確率を上げる為にその狂気に己を投じる。

そしてその賭けは――

「させねぇよ！」

第三者の声と共に放たれた赤い閃光が、光の槍に真っ向からぶつかっていったことで勝ったことを告げる。

赤い閃光ことドラゴンショットを放ったのは、勿論というべきか校舎の大穴から両手を突き出した構えをとっている一誠であった。

堕天使の光と赤龍帝の魔力、その二つは拮抗し合い、やがて一つになったかと思えば眩い閃光と衝撃となって、校庭内に広がっていった。

その強烈な光に誰もが目を閉じてしまう中、ただコカビエルだけが瞳を閉じ切ることなく前方を睨みつけていた。このような状況の中、敵が黙ったまま何もしない訳がない。

そしてコカビエルの予見通り、光の奥からこちらの方に向かって迫る、陽炎のように揺らぐ人影の姿。

完全に消えきっていない魔力の中を突っ切って来たのか、光の中から姿を見せたシンは、体の至る所に魔力や光力で生じた傷を負っている。だが本人はそれを気にすること

なく、コカビエルへの懐へ一気に飛び込むと、限界まで高めた魔力剣を振るった。
しかし、シンの動きを既に把握していたコカビエルはその全身から光を放ち、前に防いだときのように光の膜を纏う。
シンの魔力剣が光の膜へと触れる。それと同時に魔力剣の内に溜め込まれていた魔力が解放されるが、解放された魔力は光の膜の上を滑り、コカビエルの体まで届かない。
「フハハハハ！　どうやらここまで――」
シンの攻撃が届かないのを見て、そのまま反撃へと転じようとしたコカビエルは、その続きの言葉を吐くことが出来なかった。
振り上げられる左腕、そこには右手に握られたものと同じ魔力剣が形成されていた。
シンがどうして先程のコカビエルの攻撃の時、反撃する素振りを見せなかったのか。それは左手で創り出す魔力剣の為に、魔力を確保しておきたかった為である。
戦いの中で初めて試みる二本同時の『熱波剣』。どのような結果になるか、成功するか否かは最早問題では無い。既に体の中にあるありったけの魔力を掻き集めて創り出している故、二度目が無いのである。
これを使えばシンの攻撃手段は、この戦闘中全て使えなくなるかもしれない。その覚悟を持ってシンは、左手に創りだした魔力剣を交差するように、既に振るった右の魔力剣へ叩きつけた。

二つの重なった魔力剣は爆ぜる様に、その中に眠る暴風の如き力を一気に吐き出す。光の膜を滑るように弾かれていた魔力に更なる魔力の波紋が重なり、光を激しく揺らしていく。元より無茶苦茶な軌道で相手を蹂躙する魔力の余波は、新たな魔力の波を受けて更に凶悪さを増し、触れるもの全てを引き千切るような暴力の塊と化す。

最初は耐えていたコカビエルの光も荒れ狂う魔力の波に喰らい付かれ、綻びが生じたかと思えばそこから急速に食い破られる。

「これほどとは。やはり貴様も魔人――」

そこから先を聞く前に、光を突き破った白色の魔力がコカビエルの身体を飲み込む。防ぐものを壊した魔力の波はそれに歓喜するように暴れ狂い、校庭の土などを巻き上げてその中に取り込んでは、破壊し尽くし塵すら残らないようにする。

その破壊の渦の中に取り込まれたコカビエルもまた、蹂躙され、その身を破壊し尽くされる。そう誰もが思った。

一人を除いて。

コカビエルが光力と魔力が交わる閃光の中でシンの存在に勘付いたのと同様に、シンもまた目の前の魔力の渦の中にコカビエルの消えぬ存在に勘付く。

白色の光の中に只一点揺れる灯火の様な橙の光。それは遠ざかる事無く逆に近づき、その灯りを徐々にはっきりとさせていく。やがてその光が最も強く感じられたとき、シ

ンは己が放っていた魔力剣から手を離した。
「来い」
『熱波剣』の渦を突き破り、そこから飛び出してくるのは、地獄の業火を宿すコカビエルの右手。破壊の渦の中でもその炎を絶やすことはなく、折れぬコカビエルの意志を反映するかのように一層激しく燃え盛り、既に右腕は炭化を通り越し、気化し始めているのかその形を細めていった。
真っ向から破って現れたコカビエルの姿は無傷ではなく、纏っていた黒のローブも殆ど体に張り付く程度の布切れにまで裂かれ、その下から覗く肌は元の色が分からない程血に塗れていた。
コカビエルは長い髪を振り乱しながら、赤い瞳に込めた殺意をありったけシンに叩きつけ、今にも崩れてしまいそうな右手で拳を形作りシンに振るった。
あらゆる物を焼き尽くしてしまう程の炎を前にシンは左手を翳す。それは万が一の場合利き手を残す為であった。
シンの左掌にコカビエルの右拳が叩き込まれる。左手から肩にまで抜ける様な重い衝撃が奔り、受け止めた左手から割れるような音が伝わってくる。それでもシンは怯まず相手の拳を手で覆う。
炎が左手に燃え移っていく中、その灼熱の痛みに耐えつつ半ば自爆覚悟で左手に魔力

を送り込もうとする。だがやはりと言うべきか、いくら送り込もうとしても体の中から湧き立つような衝動が起きない。

完全に魔力が切れていた。

ならば奪い取ればいい

突如聞こえてくる声。それは外からではなく内から聞こえてきた。

足りないなら奪え。

頭に響く声。紛れも無く自身の声であった。

奪え奪え奪え奪え。自分の不足は相手を糧にして補え。

囁く言葉。何故、こんな言葉が頭を過ぎるか分からない。

目の前に在る力はお前の力だ。奪い、取り込み、己のものにしろ。

言っていることが分からない。第一そんな方法自分は知らない。

いや知っている。お前は知らなくてもお前の力がソレを知っている。さあ、奪え奪え奪え奪え奪え奪え。

既にその方法を知っている？

魔人の力は全てお前の力だ。

「奪う――」

その言葉を呟いたとき変化が起こる。燃え盛っていた筈のコカビエルの炎、それが突

如として火の粉の様に舞い上がり、シンの左腕の中へと吸い込まれていく。
「馬鹿な！　俺の炎を取り込んでいるのか！」
どんな方法でも封じることしか出来なかった魔人の炎がシンによって引き剥がされ、それどころか体内へと納めていく。
体の奥へ途方も無い熱が流れ込んでくる。血が全て蒸発し、臓器が融解し、肉体が炎上していくかのような錯覚。だが吸い込む炎はシンの身体の中で炎から魔力へと変換され、空になった器がそれによって満たされていく。
炎を取り除かれたコカビエルの腕は燃え尽きた木の枝の様に細まり、ひどく脆そうに見えた。だがその細まった腕からは想像出来ない圧力を、シンは掴んでいる左手から感じ取っていた。
「返せ！　ソレは俺のものだ！」
今まで身を焼いていた炎が消えたことに、安堵するよりも先に奪われたことに激怒するコカビエル。そこには、常人には到底理解出来ない執着があった。
シンは左腕を右手で掴み固定するような構えをとる。体を満たす魔力により今ならばあの技が放つことが出来る。
奪った魔力を左腕、右腕へと充填させる。未完成故、本来ならばもっと時間を掛けて魔力を流し込み調整をするが今は、そんな悠長な時間は無く半ば勘で調整する。

それによって白色の魔力光を帯びた両腕は、左腕を主として膨大な魔力が蓄積されていく。右腕もまた魔力を帯びているがその輝きは左腕に比べれば鈍く、浮かんでいる紋様が発光する程度のものであった。

急速に溜め込まれた魔力は左腕の内側で圧縮され、出口を求めて暴れる。それを押さえつつ充填が完了したと判断すると同時に、掴んでいる右手から更なる魔力が流され、それによって勢いを得た左腕の魔力は掌から一気に放出された。

掴んでいるコカビエルの拳に直接叩き込まれるシンの魔力の塊。それは触れると同時に焼け焦げたコカビエルの右腕を消滅させる。

拳が消え、肘が消え、肩の部分まで消失したとき、コカビエルは咄嗟に体を動かし、右腕の消失のみで被害を抑える。そのままであったのならば右半身が消滅していた。

「おおおおおおおおおおおおおお！」

吼えながらコカビエルは右腕を消し去られてもなお闘争心を揺るがさず、右腕を失ったと同時に左手に光の槍を作りそれを握り締める。その展開の速度は今まで見たことが無い程早く、最初から右腕を捨てる覚悟で左手に力を集めていたことが窺える。

シンの頭部に向けて振るわれるそれをシンは目で捉えることが出来ていても、既に攻撃の体勢に移っていたコカビエルと違い、魔力を放った反動からか、咄嗟にシンは身体を動かすことが出来ない。

どう足掻いても一手遅れてしまっている状況。そんな中でただ思考だけが無意味に高速で働き続ける。

どうするどう避ける体の動きが遅い鈍い反応できない視ろ回避は不可能考えろ相手の動きに追い付けていない読み敗けた視ろ考えろ考えろ足は動かない手を伸ばせばそれも間に合わない間に合わない視ろ間に合わない視ろ反応しろ反応しろ視ろ視ろ動け動け動けそうじゃない視ろ視ろ視ろ視ろ何の為の左眼だ視ろ視ろ視ろ視ろその眼は伊達じゃない視ろ視ろ視ろ視ろ。

万分の一秒の中で動く思考の中、雑音の如き囁き、浮き出てくる言葉。

（眼？　左眼？　これで視る？）

シンの左眼の視線が、光の槍を振るうコカビエルの左手に焦点を合わせられる。

そうだ視ろ視ろ視ろ視ろ。お前の眼もまた己の武器だ。視ろ、相手を視ろ。

頭の中に響く声に従いシンの眼は、迫り来る凶刃ではなくコカビエルの手を凝視し続けた。すると左眼の奥から左目を突き出すような圧迫感を覚えたかと思えば、左眼が焼けるような熱を感じる。それはシンが魔力を集束させるときと、似たような感覚であった。

それでいい。狙うべき場所を視ろ。そして――穿て。

熱や痛みが限界まで達したとき、シンはある光を見えるはずの無い左眼の奥で幻視し

た。まるで蛇の様に絡み合い一つの束へとなっていく光の姿、それが一際強く光ったと同時に視界が消える。正確に言えば視ていた筈の左眼から見える光景が白色へと染まり、何も映さなくなった。

だが視えなくなった左眼の代わりに、シンの右眼がしっかりと視ていた。光の槍を振るっていたコカビエルの左手が、突如として千切れ地面へと落下していく光景を。

断たれた左手を見てコカビエルは驚く。反応も知覚も出来ないうちに左手を切断されたからだ。目の前にいるシンが何かしたのは明白であった。だが何をしたのかが分からない。

それは視認も反射も出来ない視えざる一撃であった。

「まだやるか」

右腕と左手を失ったコカビエルにシンは問う。コカビエルはそれを一笑し、答える。

「愚問だな」

コカビエルは大きく口を開け、その歯をシンの喉へと突き立てようとする。他者から見れば原始的かつ尊厳すら捨てた攻撃。だがその方法は最後まで相手を殺すことを止めない、コカビエルの生き様を表しているかのようであった。

だが――

「お前の戦争はここで終わりだ」

　その牙が突き立てられる前にシンの拳が、コカビエルの顔面へと叩きつけられた。叩きつけた拳をそのまま振り抜くとコカビエルの体はそのまま飛ばされ、背中から地面へと着地すると数回跳ねた後、地面の上を滑っていった。
　数十メートルも殴り飛ばされたコカビエルはそのまま仰向きに倒れる。その場で身体を起こそうと試みていたようであるが、体が痙攣したかの様に震えるだけでそれ以上動くことはなかった。
　殴られたコカビエルの顔面に刻まれたシンの拳の痕。奇しくもそれは、抉られた左眼に報いるかのように、顔の左半分に刻まれているのであった。

◇

「終わったみたいだな」
　何かに気付いたアダムは口の端を吊り上げて笑う。そのアダムの下ではケルベロスが、血混じりの泡を吐き出しながら悶え苦しんでいた。
「へっへっへ。賭けはこっちの勝ちだな」
「あんたさっきから何一人で喋ってんだ？」
　一人楽しそうにしているアダムを匙は、不審者に向けるような眼差しで見る。尤も、その匙の態度は決して間違っておらず、アダムと言う謎の人物をソーナから聞かされて

いるものの、いきなり現れてケルベロスを押し潰して、身動き取れなくする姿を見て警戒しない訳にもいかない。だがそのおかげで助かったということもあり、匙の心中は複雑であった。

「色々と動いた甲斐があったっての実感してんだよ、黒龍〈ヴリトラ〉の坊主。俺の仕事もそろそろ締めだなぁ」

感慨深そうに言っているが事情を知らない匙からすれば、何一つ意味が分からない。ソーナの話で聞いたときは慇懃無礼な人物だと言っていたが、実際に会ってみて匙が受けた印象は真逆と言ってよかった。

「サジー！」

背後からの声。振り返るとそこにはソーナが立っている。最初は厳しい表情をしていたが、ケルベロスの姿とアダムの姿を見て、軽く驚いた表情へと変わった。

「何度も呼び掛けて応じないと思っていたら……」

「すみません！　会長！　いろいろとトラブってしまって……」

ソーナが何かを言う前に匙の方から頭を下げる。心配してわざわざソーナから足を運んでくれたことへの謝罪であった。

「怒んなよぉ、シトリーのお嬢ちゃん。そっちの坊主はコレを一人で抑えようとしてたんだぜぇ。頭の一つでも撫でてやったらどうだ？」

「別に叱るつもりはありません。――そっちの喋り方が貴方の素ですか？　もう別の人物を演じる必要は無いという判断ですか？」
　アダムは応えず、ニヤリと笑った。
　そのとき、上空から流星のような白い光が、尾を描きながらソーナたちの造った結界を突き破り、学園内へと侵入する。それを見たソーナと匙は驚くが、アダムは逆に笑みを消して眉根を寄せた。
「あの野郎、予定と違うじゃねぇか……」
　その呟きはソーナの耳にも届き、思わず振り向く。だが大の字に倒れ伏すケルベロスの上にアダムは居らず、辺りを見回すと百メートル先でこちらに背を向けて歩いていた。
「最後の仕事も今無くなったし、俺は帰るよ。色々動いてもらって礼を言うぜ。この埋め合わせは必ずさせてもらう」
　そのまま帰ろうとしているアダムに、慌てて匙が声を掛ける。
「おい！　あれも放っておくしこれも放っていくのかよ！」
　あれとは先程の白い光を指し、これとは倒れているケルベロスのことを指す。
「あれのことは中のお嬢ちゃん方に任せておいても大丈夫だ。その犬っころの方は……まあ頼んだ。ああ、それと」

何かを思い出したのか、足を止め振り返る。
「頼まれついでにあの教会のお嬢ちゃんたちとシンって坊主に伝えておいてくれねぇか？」
アダムは頬を引っ張りながら、ある病院の名前を口にする。
「そこにこれの持ち主が眠っているっていうのと、詫びとして『ソレ』はお前に預けておくってな」
ゼノヴィアたちへの伝言の内容は分かるが、シンへの伝言は全く内容の意味が分からないものであった。
「何だよ『ソレ』って！」
「そのうち分かる」
もう伝えることは無いのかアダムが再び去ろうとしたとき、今度はソーナが呼び止める。
「最後に一つだけ質問してよろしいかしら？」
「何だい？」
「貴方は結局何者なのですか？」
アダムは少し考えた後、こう答える。
「アダムって言葉をアルファベットで書くとどうなるか知っているか？」

「はぁ？　Ａ、Ｄ、Ａ、Ｍ、Ｕじゃねえのか？」
「ハハハ！　Ｕは余計だぜ、坊主」
　匙の回答にアダムは笑うが、ソーナは何かに気付く。
「まさか……貴方は……」
「じゃあな。『この顔』で会うことはもうないだろうぜぇ」
　背後に立つ匙たちに手を振りながら今度こそ、その場から立ち去るアダム。その姿は闇夜に消えていくがどういう訳か、夜目に優れている悪魔でもその姿を追うことが出来なかった。

区切、新入

コカビエルが起き上がる気配が無いのを見てシンは大きく息を吐いた。立て続けに魔力を使用したことと蓄積した疲労のせいで、膝が震え全身が重く感じられる。
「しゃあ！　やったな！」
校舎から降りてきた一誠が走り寄ってくるのを感じ、シンは振り返る。いつの間にか禁手化で出した鎧は解除されていた。
振り返ったシンの表情を見て一誠はその場で急停止し、不意打ちを貰ったような顔をしながらシンの顔を指差す。
「お前……眼が！」
「これか……」
シンの左眼は瞼で閉ざされそこから血涙が流れていた。
コカビエルへ攻撃を放ったときから、左眼から映る光景は白くぼやけており、まともに機能していない。
「安心しろ。潰れてはいない。時間が経てばもとに戻る筈だ」
「一体何があったんだ……？」

「少しばかり身の丈に合わないことをした。その結果だ」
シンは左眼から流れる血を拭いながら心配しない様に言うが、相手は納得し切れていないという表情であった。
「ふふふ、面白いな」
初めて聞く男の声。それは頭上から聞こえてくる。
一斉に空を見上げる。それと同時に白い光が結界を突き破り中へと飛び込んで来るのを目撃した。
目撃と同時に光が着地をする。その速度は凄まじく、間すら無い程のものであった。
着地の衝撃で地面は大きく窪み、校庭の土や小石が巻き上がる。巻き上がった土煙の中、やがて姿を見せたのは龍を模した白い全身鎧。
細部は一誠の『赤龍帝の鎧』と異なるが、大まかな形は酷似していると言っていい白い鎧。最も異なる点を挙げるとすれば、その背から生える八枚の光の翼であり、それが神秘的且つ神々しい印象を他者へと与える。
突如として現れた乱入者。しかしその姿を見て誰もがある存在の名を思い浮かべる。
「『白い龍〈バニシング・ドラゴン〉』……」
それを代弁したのが意外にも、戦闘不能になっている筈のコカビエルであった。『白い龍』と呼ばれたそれは無言で倒れたコカビエルの側に歩いていく。

度々聞かされる『赤い龍』と争う宿命を持つ対となる龍、『白い龍』。
約束された宿敵がいきなり現れた一誠は唾を呑む。気付かぬうちに緊張からか、喉がからからに乾いていた。
シンの方もいつでも戦う準備を備えているが、どうにも目の前の存在から敵意というものを感じられない。こちらは意識しているが向こうはこちらに対して無関心であることが窺える。
「派手にやられたな、コカビエル」
「……俺を笑いに来たか？　ヴァーリ」
見下ろす白い鎧を見て忌々しげに名を呼ぶコカビエル。一度その名を出していたが、どうやら目の前の人物がそうであるらしい。
『白龍皇の鎧〈ディバイン・ディバイディング・スケイルメイル〉』……お前の禁手化を見るのは初めてか……『白龍皇の光翼〈ディバイン・ディバイディング〉』などとっくに極めていた訳だな……流石に器が違う……忌々しい」
吐き捨てる様に言うコカビエルに一瞬ヴァーリは身体を揺らす。どうやら鎧の下で笑っているようであった。
「俺にそこまで露骨に敵意を見せるのは堕天使の中でもお前ぐらいだ。まあ俺自身は別に不快とも思わないが。しかし――」

　両手を失い、堕天使の象徴でもある黒翼も片方失ったコカビエルの姿を改めて眺める。
「半死半生という言葉が相応しい程の傷だな。余程激しく戦ったみたいだ」
「……それがどうした。無様に見えるか？」
「いや、逆だよ。今のお前の姿、最高に美しく見える。お前の黒翼を見る度に鴉の抜羽を束ねたような不細工な羽だと思っていたが、今はどうだ。アザゼルの漆黒の羽に優るとも劣らない輝きを感じる。鬱屈した感情を解き放ったせいか？　それとも極限まで命を賭けて戦ったせいか？　どちらにしても少しお前のことを見直した」
　賞賛の声を掛けるヴァーリ。だが掛けられたコカビエルは特に表情を変えず、掛けられた言葉を鼻で笑う。
「世辞を言う為にここに来たのか？　ならばとっとと失せろ。それとも赤に惹かれてやって来たか？　ならば勝手に戦っていろ」
　コカビエルはあくまで邪険な態度を崩さない。しかし次に聞いたヴァーリの言葉に態度を一変させた。
「どちらも違う。俺はお前を回収しにきた」
「――ふざけるなぁ！」
　命を救いに来たと知って最初に出てきた言葉が罵声であった。そして今まで冷めて

いた表情を憤怒一色に染める。
「俺の命を助けに来たというのか！　この俺が命を惜しんでこのようなことに及んだと思っているのか！　誰だ！　誰がそんなふざけた命を出した！」
　死に掛けとは思えない程の怒鳴り声を出しながらコカビエルは地べたで蠢く。まともに動けないにも関わらずその身から迸る殺気は、それだけで他人の心臓を止めてしまいそうな重圧が込められていた。しかしそんな殺気の奔流の中でもヴァーリの態度は至って平静そのものであり、浴びせられる殺気など露ほどにも感じていない様子であった。
「どうこう騒いでも無駄だ。命が在る内にお前を連れて戻ってくるようアザゼルに言われているんだ。我儘を言うな」
「やはり……やはり貴様か、アザゼル！　俺から奪うのはやはり貴様かぁぁぁぁ！」
　激しい憎悪を剥き出しにしコカビエルが吼える。
「この俺から死に場所すら奪うかぁぁぁ！　全てがお前の思い通りに行くと思うな！ならば――」
　コカビエルが大きく口を開く。だがその口が閉じるよりも先にヴァーリの手が下顎を掴み、閉じらせなくする。
「『ならばいっそ俺自身の手で俺を終わらせてくれる』と続くのか？　その先は？　俺の

前で自害なんて出来ると思ったかい？」
　口を押えられ喋ることの出来ないコカビエルが、目だけでも反抗の意志を示す。その眼を見たヴァーリは軽く肩を竦める。
「まだそれだけ抗う力があるのなら仕方ない。使うつもりは無かったが致し方ないな。奪わせてもらうぞ、コカビエル」
『Ｄｉｖｉｄｅ！』
　『赤龍帝の籠手』の様な音声が響くと同時にコカビエルから何かが抜け落ちていく様な光景が見えた後、ヴァーリの背中に備わった八枚の翼がその輝きを高める。
『よく見ておけよ、相棒』
「えっ？」
『あれが白龍皇の能力だ。触れた相手の力を半減させ、それによって奪った力を自らの力に加える。――俺たちと真逆の能力だ』
　初めて見る白龍皇の力を食い入る様に見る一誠であったが、別の方の視線に気付き思わずそちらの方を見る。視線の主はシンであり、珍しく目を丸くしていた。
「――その籠手、喋るんだな」
　今まで一誠の頭の中でのみ語りかけていたり、他にメンバーがいない場所で会話していた一誠とドライグであったが、このとき初めて人目が在る場所で会話をしてしまっ

た。
何か言おうかと一誠が考えるがそれよりも先にドライグが話す。
『そう長いこと隠すつもりは無かったからな。この際俺自身の存在についてばらしておこうと思ったまでだ。初めまして、でいい筈だな？』
どこか含みがある言い方であり、微かにだが敵意らしいものを感じさせる。それが何からくるものかは何となくであるが予想できたが、この場において明言する必要も感じなかったので敢えて流す。
「そうだな。初めまして、だ」
若干、空気がひりつくような挨拶が両者で交わされた中、ヴァーリは未だにコカビエルから力を奪い続けていた。やがて十分な力を奪ったのか、掴んでいた手を離す。
手を離されたコカビエルは息をするのもやっとといった具合に疲弊し切っており、残っていた力は生きるのに必要な最低限の分を残しほぼ全て奪い尽くされた様子であった。
「これで下手な真似は出来ないな」
「こ……の……」
まともに動かない口で何か罵声を繰り出そうとするが呂律が回らず、声というよりも音が漏れ出しているようであった。

「さんざん好き勝手やって来たんだ。自分の結末ぐらいは他人に好き勝手やらせてみたらどうだ？」
「き……さ……」
　ヴァーリは軽く拳を握る。
「とりあえず眠っていろ」
　握られた拳が躊躇なくコカビエルの額に叩きつけられた。死なない様に手加減していると思われるが、打ちつけられた衝撃でコカビエルの四肢が跳ね上がる。叩きつけた拳を引くと、コカビエルは完全に意識を断たれたらしく呻き声一つ洩らさない。
　ヴァーリはそんなコカビエルを肩に担ぎ、そのまま立ち去ろうとした。
『せっかくの再会に挨拶の一つも無しか、アルビオン』
　それを止めるドライグの声。
『再会を祝するような間柄ではないと記憶しているが？　ドライグ』
　答えたのはヴァーリの鎧に埋め込まれた宝玉であり、一誠の籠手の様に声を発している。
『いずれ戦う運命だと思っていたが思っていたよりも早い再会だったな』
『誰であろうと運命を計ることなどできぬさ。だが今日は互いの運命が一瞬交差したに過ぎない。まだその日ではない』

『随分と丸くなった発言をするな。お前もお前の宿主共々敵意が薄い』
『お前がそれを言うか？　似たようなものだろう？　少なくともヴァーリの意志を尊重した結果だ。ヴァーリはまだそちらとの決着に興味が持てないのでな』
　ヴァーリは肩にコカビエルを担いだまま一誠の方を見るが、特に何かを言うわけでも反応するわけでもなくすぐに目を離し、次に側に立つシンの方へと目を向けた。
　このときも特に何かを言うわけでも無かったが、何故か僅かに肩を震わせる。鎧を纏っているせいで表情が分からないが。何となくであるがヴァーリが笑った様な気がした。
『それではな、赤いの。いずれまた相まみえよう』
『そのときまでじゃあな、白いの』
　そしてそのまま翼を広げ飛び立とうとするが、直前になってヴァーリが振り返る。一誠たちに何かを言うのかと思ったが視線が明らかに外れており、校舎の上、虚空を眺めているようであった。
『ヴァーリ。またの機会にしておけ』
「――そうだな」
　アルビオンに急かされ少々名残惜しそうにしながらも振り返るのを止め、乱入してきたときのように白い光に包まれてそのまま空へと飛び立っていった。

本当に終わった。そう実感するには少々引っ掛かるものを感じたが、この街を破壊する魔法陣も発動せず、コカビエルたちも戦闘不能に追い込み、エクスカリバーも破壊してしまったが何とか回収することも出来た。
長い戦いは兎に角終わったのだ。
「本当に終わったんだな……俺たちの勝ちで」
「だろうな」
余韻を噛み締める訳では無いが、今まで張り詰めていたものが緩んでいくのを感じる。
「そうだ！　部長たちを――」
「心配いりませんよ」
怪我を治療中のリアスたちのことが気になり、慌てて振り返った一誠の正面に立つ、色白の美青年。マフラーで顔を半分隠し、軽装であるが鎧を身に付け、手には長槍を持っている。
シンにとっては面識の無い人物であった為、警戒しようとするがそれよりも先に一誠が反応をする。
「あ、あなたは！」
「あのときは名乗れませんでしたが改めて自己紹介させていただきます。私の名はセタ

ンタと申します」
　セタンタと名乗る青年。初めてその姿も名も知った筈であるが、何故か既視感を覚える。それはピクシーやジャックフロストと初めて邂逅したときのものとよく似ていた。
「あなたとは『初めまして』でよろしいですね？」
「――ああ、『初めまして』」
　つい先程似たような挨拶したなと心の中で思う。
　どこか探っている印象を受けたがセタンタはそれ以上聞いてくることはなく、シンと一誠に懐から取り出したガラスの小瓶を渡した。
「フェニックスの涙です。いざというときの為に人数分用意して来ました。既にリアス様たちには渡しておりますのでご安心下さい」
　そう言うとセタンタは二人に頭を下げる。その行為に一誠は慌ててしまう。話に聞けばかなりの大物であるセタンタに、そのような真似をさせてしまうことを恐れ多いと感じてしまった。
「あ、頭を上げてください！」
「いえ、もっと私が早く着いていればもっと被害を少なくできたかもしれない。若い貴方達に命を張らせてしまったことを謝罪させて下さい。そして感謝します。リアス様やあの子たちを死なせずに済んだことを」

真摯とした態度での謝罪と礼。こういった態度に慣れていない二人は反応に困ってしまう。
「これに生き残れたら何でも――いや！　その！　部長の眷属として当然のことをしただけです！　なあ、間薙！」
何か引っ掛かる言葉を言い掛けていたが取り敢えず追及はせず、一応頷き同意を示す。
「そう言ってくれるのであれば幸いです。校舎等の後始末は全て私やソーナ様が行いますので皆さま方は休んでいて下さい」
もう一度一礼すると、セタンタは倒れているリアスたちの方に向かって行った。
「何か改めて喋ってみると威圧感というか、気配が違うというか……」
『相当の手練れだな。今の相棒だったら瞬殺されるぞ』
一誠がセタンタに抱いた感想について、シンもまた概ね同意であった。ただ会話しているだけで言い様の無い緊張感を覚える。それは本人がきっとあれでも抑えているのであろうが、抑えきれず無意識に滲み出て来る強者としての気配に触れたせいであった。
去り際にヴァーリが校舎の方を見たのは、もしかしたらセタンタが現れるのを感じ取ったせいなのかもしれない。

「終わったんだね……」
　リアスたちの側に木場が二人に歩み寄ってきた。コカビエルの戦いで負った負傷はセタンタから渡されたフェニックスの涙で治っていたが、光の毒までは完全に消え去っていないらしく、少し片足を引き摺っている。
「いよ、色男。色々援護してもらって助かったぜ！　にしてもこれがお前の禁手化か……改めて間近で見ると不思議な色をしてるなー、綺麗なもんだ」
　戦いの中ではじっくりと視えなかった聖魔剣をまじまじと眺める。
「イッセーくん、それに間薙くん。僕は――」
　木場が言うよりも先にシンが右手を差し出す。それを見て木場は驚いた様子でその手を見た。
「これは……」
「色々と言いたいことがあるんだろうけど、全部ひっくるめてこれで水に流そうってことだ。仲直りの印みたいなもんだろ？　握手ってさ」
　木場は聖剣のことで数々の自分勝手な行動について謝罪をしたかった。独り苛立ち仲間を護る為の刃をその仲間に向けてしまったこと、独断専行し周りに心配を掛けてしまったこと、突き放すつもりで自分と相手との信頼関係を否定したこと、まだまだ挙げればたくさんあったが、それを聞かず、ただ今まで通りの関係に戻ろうとシンは無言で

示す。
「――ありがとう」
　木場は差し出された手を握り握手を交わす。
「その言葉は部長にも伝えておけ。――心配していたみたいだしな」
「ふふ、そうだね」
「なら間薙も部長にちゃんと謝っておけよ。お前が行方不明になって滅茶苦茶責任感じていたみたいだからな」
「――分かっている」
　交わした握手を離し、木場は二人から視線を動かし別の方へと向ける。その視線の先には横たわるバルパーの死体があった。
　過去の悪夢の象徴のような男。散々好き勝手なことをしたあげくにコカビエルの手で葬られた。その死に様に同情を覚えることは無かったが、聖剣への妄執に憑りつかれた結果、今のように地面へと転がる死体となった老人に、言い様の無い空しさの様なものを覚えた。
　木場は一度溜息を吐いた後、バルパーから視線を外し別の人物に向けようとする。だがどういう訳か木場の視線は左右に何度も往復していた。
「――居ない」

木場の呟きにシンと一誠が反応する。木場の視線の方向へシンたちも目線を向けた。そこには血溜まりと砕けた聖剣の残骸が地に残っている。そう、血の跡と聖剣の残骸しかその場にない。

木場によって片腕を切断され、倒れていた筈のフリードの姿だけが無かった。

「逃げたか……」

自分たちの明らかな失態にシンは眉間に皺を寄せた。フリードが倒されてそれ以降、コカビエルのみに注目していたことが裏目に出てしまった。恐らくは全員の意識がそちらへ向いている内にこの学園から去ったのであろう。

戦いは終わった。しかし、完全に終わった訳では無い。半死半生の深手を負っているフリードの逃亡。それは次の戦いへの予兆に思えた。

◇

「はあ……はあ……はあ……い、いひひひひ！　今頃あの悪魔ちゅわんたちは……どんな顔をしているんですかねぇ……」

今このときに死んでしまってもおかしくない顔色をしながらも、フリードは蛞蝓が這う様な歩みで学園から離れていた。

斬られた右腕を左手に持ち、切断された部分を適当な紐できつく縛り付けていることで大量の出血は抑えているものの、逃げる前の段階で既に多くの血を流しているため、フリードの視点は殆ど霞んだ状態であった。
「ああ……いてぇ……いてぇ……くそったれの……悪魔どもがぁ！　俺様の大事な右腕……斬りおとしやがって……死んだらどうすんだぁ？　もしも死んだら悪魔どもを……ぶっ殺してやらぁ……！」
支離滅裂なことを独り口走りながらただ逃げ続けるフリード。
「殺す殺す殺す

聴こえてくる声を無視して先に進もうとする。幻聴と思わしき声は短く息を吐くとフリードの側を通り、正面に回る。
「死ぬ間際まで口が減らんのか、お前は?」
「あー、やっべー。幻聴の次は幻覚だよー。……死んだ筈のバルパーのじいさんが見えるよー。……やっべー棺桶に片足突っ込んじゃってるよー」
「――ならこれでも幻覚と言えるか?」
バルパーがフリードの腕を掴む。しかもそれは切断された方の腕であった為、それによって脳まで貫くような痛みが襲い、はっきりとしていなかったフリードの意識が一気に覚醒する。
「イッデェェェェ!　ぶち殺すぞ!　クソ爺ィィィ!　――って本当にじいさんじゃん……死んで無かったけ?　ボスに殺られて?　でも足はあるし」
一度は激昂仕掛けるが、死んだと思っていたバルパーが生身であることにようやく気付き、怒りが醒めるが代わりに何故生きているのかという疑問が湧く。
「前にも言っていた筈だ。『常に二重、三重に保険を掛けておくものだ』と」
「保険って、それが……?」
「私が死んだとき全ての記憶を引き継いで動く予備の肉体だ。とある奴らに協力する見返りとして何体か頂いた」

「何それ。そんな便利な物持ってたの？　つーか本人が危険冒して前に出て来るよりもその体使って隠れてたら良かったんじゃないの？」
　フリードが柄にもなく尤もな指摘をする。しかし言われた本人は真顔でこう言い返した。
「記憶〈ここ〉さえ残っていればそれでいい。本人か複製かなど些細なことだ」
　生というものに対してあまりに無頓着な台詞にさしものフリードも呆れる。過去の所業から他人の命に関心が無いことは分かっていたが、まさか目的の為ならば自分の命すら投げ捨てる人物であるとは思わなかった。
「……ボスもイカれてたけどさぁ、改めて思うわ。じいさんも大概」
　元より真面では無いと思っていたが、その度合いが自分の想像を上回るものであったことをこのとき初めてフリードは知った。
「それでそのとある奴らって？」
「すぐに分かる」
　その言葉に合わせたかのように頭上から羽ばたく音と聞き覚えのある声がフリードの耳に入ってくる。
「迎えに来た――まさか、お前まで付いているとはな」
「あんらぁ？　懐かしい声だこと」

降り立ったのは黒のスーツに黒の山高帽をかぶった男性。その背からは堕天使の象徴である黒い翼が生えていた。
「とっくの昔にくたばってたと思ってましたよん、ドーナシーク」
「それはこちらの台詞だな」
フリードのからかう台詞を能面のような表情で返すのは、かつてフリードと手を組んだことのあったドーナシーク。
だが、どちらも再会を喜んでいるように見えなかった。
「コカビエル様ではなくよりにもよってこいつを連れて来たか、バルパー」
「流石にあれを引き入れるのは無理だな。質は大分落ちるがこれもそれなりに戦力になる。戦力の増強は必要であろう?」
露骨な嫌悪を露わにし不満を漏らすが、バルパーは言葉を聞いて渋々といった感じで了承する。その際、フリードに聞こえる程の大きさの舌打ちをした。
「ねぇねぇ、何か勝手に話が進んでいるんですが。じいさんってボスと組む前に別の誰かと組んでたの?」
「その通り。コカビエルも引き入れようと思っていたが……まあ、事はそう思った通りに進まないな」
苦笑するバルパー。フリードはその顔を見て生気を失っていた顔に再び活力を宿す。

「すると、このワタクシめもそこに連れてってくださるということで」
「お前にはまだ利用価値があると思ってな。嫌ならばここに置いて――」
「行きます！　行きます！　今後ともよろしくお願いしやーすッ！」
バルパーが最後まで言い終える前にフリードは即答する。その勢いは先程まで死に掛けていたとは思えない程、溌剌としたものであった。一方、その返答にドーナシークは露骨に嫌そうな表情を浮かべていた。
「――まあいい。バルパー、お前が望むものは全て揃えてある。その頭脳、生かして貰うぞ」
「場所が何処だろうと関係ない。私は私の研究を究めるだけだ。そして――」
そこで言葉を区切り、バルパーは駒王学園のある方向へと顔を向ける。
「今度こそ私は必ずエクスカリバーを手に――いや、エクスカリバーすら凌駕してみせる。必ずだ」
バルパーのエクスカリバーを打ち破った者に対しての戦線布告。それは伝説と言われた聖剣に敗北という泥を被せたことに対する怒りか、あるいは自分が超える筈であったものを先に越されたという嫉妬か、言葉で言い表せない感情をその目に混ぜていた。
「それでじいさんたちが入っている組織ってなんてー名なの？」
バルパーの様子を気にすることなくフリードは尋ねる。その言葉に昂らせていた気

持ちも醒めたのか、フリードの方へと顔を向け、組織の名を口にした。
「ようこそと言っておこう。無限が支配し混沌を望む者たちが集う『禍の団〈カオス・ブリゲード〉』へ」

◇

気絶するコカビエルを抱えたヴァーリは、そのまま一直線で『神の子を見張る者〈グリゴリ〉』に戻るのではなく、途中とある寂れたビルの屋上に降り立った。
ヴァーリたち以外人の気配など無い暗闇に満ちた場所であったが、ヴァーリはそこで確信を持って呼び掛ける。
「いるんだろう？」
その声に応じる様に、闇の中から月光の下に姿を見せる一つの影。まるで闇から浮き出てきたその人物を見て、ヴァーリは纏っていた鎧を解除した。
「こんな島国にあんたが態々足を運ぶなんてな」
「戦いのニオイを感じたのならば赴く。貴公ならば私のこの心情をよく理解していると思うのだが？」
金糸が施された翠玉色の衣装、それと同じ装飾の闘牛帽子。そしてその帽子の下から

覗かせる顔は白骨そのもの。先程まで静かだった夜の闇はその人物が現れたことでその質を一変させ、奈落へと引きずり込まれるような恐ろしい闇へと変わる。
『殺戮者』の名を持つ魔人マタドールがこの場に現れた。
「『神を見張る者』の幹部も随分と痛めつけられたものだ。いずれは手合わせを、と思っていたがその様子では当分無理のようだ」
「幹部の何人かに手を出しているというのに欲張りだな」
「そう簡単に満たされるものでは無い。勝利への渇望というものは」
客観的に見れば親し気とも言える両者の掛け合い。だがその場に満ちていく互いの覇気が、その捉え方が間違っていると説明していた。
「コカビエルがこんな風にズタボロだったせいで満足に戦えることすら出来なかった。色々と鬱憤が溜まっているんだ。ここで一戦交える気にはならないか？」
「会って早々の台詞がそれか。だからこそ私は貴公を気に入っているのだがね。まだ私から受けた傷は完治していないようだが？」
マタドールが指摘したように鎧を解除したヴァーリの身体には、前回の戦いのときに受けた傷が未だに残っていた。頬にはガーゼが貼られ、衣服から覗く肌には包帯が巻かれており、決して軽い傷ではないと分かる。
しかし、ヴァーリはその言葉を聞き鼻で笑う。

「だからどうした？」
「期待通りの返答だ。素晴らしい」
即座に出てきたヴァーリの言葉を褒め、称えるように軽く拍手を送る。
「そう言えば宿敵の『赤龍帝』と会ったみたいだがどうだった？　ドライグは息災かね？」
『見ていたのか？』
「直接ではないが懐かしい赤い龍の魔力を感じた。赤と白、二つの龍が並び立つ姿はさぞ荘厳だったであろう」
期待する様に聞くマタドールであったが、ヴァーリの反応は冷めたものであった。
「言う程のものじゃない。はっきり言えば期待外れもいい所だ」
「ほう？」
「力が足りない。魔力も足りない。気迫も足りない。あれが俺の好敵手となる予定の男ならば泣けてくるな」
「そこまで扱き下ろすか。そこまで言うと彼らに同情したくなってくるな」
肉の無い白骨の顔からでは表情が読めないが、その動作から笑っている様であった。
「今の所は戦っても面白くも楽しくも無さそうだ。――そう言えば少し気になる奴が居たな」

「貴公の興味を引くか、どのような相手だ？」
「姿形は普通の人だった。ただその纏っている気配がそっくりだったよ、あんたに」
「――ほう」
　マタドールの声のトーンが下がる。
「恐らくそれは私が以前感じた存在。十人目の『魔人』だろうな」
『お前がそう確信しているのであれば、私たちが感じたものは間違っていないのであろうな』
「大戦から長い年月をかけてまさか十人目の魔人が誕生するなんて……ははは！　愉しくなってきたじゃないか！　マタドール、あんたもそう思うだろ？」
　昂揚するヴァーリとは対照的にマタドールは、顎に手を当て何か思案している。その姿は初めて見るものであったが、ヴァーリは直感的にマタドールが当惑している風に見えた。
「十人目……十人目……」
「どうかしたのか？」
「……『人修羅』」
「何だって？」
　初めて聞く言葉にヴァーリは聞き返す。

「十人目の魔人の名は『人修羅』というのか？」
『出会ったことがあるのかお前とそいつは？』
聞き返されたマタドールはそこでハッとしたように顔を上げる。
「――『人修羅』？　一体なんだそれは？」
「――あんたが自分で言ったんだろう？　どうした？　様子がおかしいぞ？」
マタドールはそこで天を見上げる。そこには眩しく輝く月があった。
「少し月光の下に身を出し過ぎたようだ……『人修羅』、知らない筈の名なのにどういう訳か聞き覚えがある。……記憶に齟齬があるな」
そこまで深い付き合いがある訳ではないが、明らかに混乱しているマタドールの態度にヴァーリは訝しげな表情となる。マタドールはそれ以上人修羅について語る事は無く、ヴァーリへと背を向けた。
「どうも今夜は興が乗らないみたいだ。折角の誘いではあるが今宵はこのまま下がらせてもらいたい」
「あんたがそう言うのなら別にいいさ」
何度か戦ったことのあるヴァーリからすれば、戦いを断るマタドールを意外に思った。仮にこのまま戦いを仕掛けたとして、マタドールは気が乗らないとしても応戦してくるのは間違いない。だが、きっとそれはヴァーリが望むような戦いにはならない。

ヴァーリにしても質の無い、空虚な戦いに時間を割くつもりは無かった。
「感謝する。まあ、今日戦わずともいずれ大きな戦いが来るだろうがね」
　ヴァーリはその言葉でマタドールの方に顔を向けた。月光から闇の中に消えようとしているマタドールの横顔、それは哂っているかの様に見えた。
「それがここに来た理由か？　大きな戦いとは何のことだ？」
「さて？　そんな気がすると思ってここまで足を運んだだけのこと。私の『直感』に過ぎない」
　本気なのか冗談なのか分からない。この時ばかりはヴァーリもマタドールから感情を読み取ることが出来なかった。
「ではそのときまで。御機嫌よう『白龍皇』」
　月光を遮って出来た影の中へと全身が入り込んだと思えば、すぐにそこから姿が消える。闇の中に溶け込むようであった。
　先程とは違い、この辺り一帯からはマタドールの気配が感じられなくなった。
『奴め……もしや勘付いているのか？』
「さあね。演技かはたまた本当にただの勘か。まあ、どちらにしても関係無いな」
　マタドールの言った大きな戦い。その言葉が何を意味するのか二人には心当たりがあった。

「また一つ楽しみが増えたな」

◇

コカビエルとの戦いが終わって二日ほど経過した。

この二日間、シンを含むオカルト研究会の一同は、コカビエルとの一戦が原因で全員体調を崩して、皆が自宅で横になっていた。怪我などはアーシアの神器やセタンタが持ってきたフェニックスの涙で問題無かったが、戦いの中で蓄積した疲労、もしくはコカビエルの使う光の毒のせいか以前経験したような風邪のような症状となっていたので、大事をとって休んでいた。

その間にセタンタやソーナたちがコカビエルによって破壊された校舎や校庭を修復してくれたらしく、またバルパーがこの街に仕込んだ術式も全て無力化してしまったらしい。そして消えたフリードの探索もしてくれたらしいが、残念ながら痕跡を見つけることは出来なかったという。

何日かぶりにみる駒王学園。心なしか前よりも綺麗に見えた。

「よお、間薙」

「おはようございます、間薙さん」

背後から掛けられる聞き慣れた声。シンも振り返りながら挨拶を返す。
「おはよう」
「おはよー」
「おはよーだホー！」
ついでに肩に腰掛けているピクシーとジャックフロストもシンに倣って挨拶をする。
振り返った先に居る一誠とアーシア。二人の様子は以前と変わりなく元気そうであった。
「部長はどうした？」
アーシアと同じく一誠の家に同棲している筈のリアスの姿が見えない。
「何か用事があるからって先に学校に行った。あーそうだ、部長からの伝言で今日の放課後に部室に集まるようにだってさ」
「分かった」
頷き了承すると今度は別の方向から同じく挨拶が掛けられる。
「やあ、おはよう。みんな」
「……おはようございます」
小猫はいつもの様に無表情、そして木場はここ数日の陰のあった表情ではなく、前と変わらない爽やかで、周りの女子たちは黄色い歓声を上げる二枚目な顔で挨拶をしてき

た。
「ああ、おはよう」
「その眼はもう大丈夫なのかい？」
　木場が聞いてきたのはシンの左眼につけられている眼帯のことであった。コカビエル戦で自分でも加減を知らず放った攻撃のせいで、少しの間片目が見えなくなってしまっていたが、この二日間の間に視力の方は殆ど回復していた。眼帯を付けているのは大事をとって、念の為にというぐらいの気持ちである。
「少しぼやけるが問題は無い」
　そう言って眼帯をずらし回復した左眼を見せる。それを見て木場は安堵したように息を吐いた。
「良かった。……本当に良かった」
　心底嬉しそうに微笑む木場にシンは、良く見なければ分からない程微かであるが笑みを返す。
　そんな光景を見て、先程までキャアキャアと歓声を上げていた外野の女子たちは急に黙り込み、ひそひそと小声で話し始める。
「ねえ……よね？　ねぇ」
「いいわ……あれ……」

「やはり……よりも……の方が鉄板……」
「私はどちらかと言えば……の方が……」
どこか湿気を感じさせる囁き声。何を言っているのか聞き取ることは出来なかったが、話しこむ女子たちの表情を見るだけで碌な内容で無いことが分かる。
いつまでもここにいるのも居心地悪いだけなので、他のメンバーを促しさっさと教室に向かうのであった。
その日の放課後、リアスの指示通りに皆がオカルト研究部の部室へと集まる。部室内には既にリアスと朱乃、ソーナ、そして設置されているソファーに見覚えのある人物が、見慣れない格好で座っていた。
「やあ」
気軽に挨拶をしてきたのはソファーに座っているゼノヴィアであった。コカビエルの戦い以降姿を確認していなかったが、何故か駒王学園の制服を着ている。
その姿に一誠やアーシアが驚いているが、追い打ちを掛ける様にゼノヴィアは更なる驚きを見せる。
全員が見ている前でゼノヴィアの背中から悪魔が持つ黒い翼が生えたのだ。
その時点で大体のことを悟ってしまう。つまりここにいるゼノヴィアは――
「私も悪魔に転生した」

さらりととんでもない発言をする。信仰者が悪魔へと転じる、アーシアという前例があるだけに決しておかしいという訳では無いが、あのときは命を救うという非常事態であった為というやむを得ない事情があった。確かにコカビエルとの一戦でゼノヴィアは負傷――主にシンが原因で――していたが、命を落とすようなものでは無かったはずだ。

ということは、ゼノヴィアの転生は己の意志で行ったということとなる。

「ど、どういうことだ！」

「神の不在がを知ってしまった今、以前のように神を信仰することが出来なくなってしまってね。ならばいっそのこと堕ちるところまで堕ちてみようと思い、破れかぶれで転生してみた。幸いリアス・グレモリーから『悪魔の駒』の『騎士』を貰うことが出来たんでね」

皆の視線が一斉にリアスへと向けられる。

「デュランダル使いの眷属なら『騎士』として不足が無いどころか頼もしいと思ったのよ。これで聖と魔を持つ二翼の剣士が誕生したわね」

上機嫌そうに言うリアス。リアスの性格からしたら元教会側の人間だとしても特に気にすることもないし、聖剣としても上位にあるデュランダルも手に入ったことで申し分の無い結果なのだろう。

「そういうことだ。今日から駒王学園の二年生でオカルト研究部所属だ。よろしくね！　皆ぁ！」

まさに作り声というのが分かる、媚びると言うべきかわざとらしいと言うべきか困る声を真顔で言い放つゼノヴィアに、全員どういう反応をしていいのか戸惑う。

「おや？　変だったかな。イリナの真似をしてみたんだ。警戒している相手には大体効く筈なんだが……」

（女の真似がここまで下手な女は初めて見る）

思ったよりも反応が悪いことにゼノヴィアは首を傾げ、シンは内心でその真似を酷評する。

「まあ、いろいろ思うことがあるかも知れないがもうすでに私は悪魔だ」

きっぱりとした態度で宣言するように言うゼノヴィア。その態度を見てシンはゼノヴィアが悪魔に転生したことについてあれこれ考えるのを止めた。神というものを支えとして生きてきた人間がその支えを失ったことによって、初めて突き付けられる神の意志では無く己の意志での選択。その結果、悪魔として生きることを決意したとあれば、それなりの思いがあって転生したことになる。他人があれこれ考えるのは無粋とシンは考えた。

「……そう、悪魔なのだ。……振り返って考えてみるとこれで良かったのか？　流石に

一気に堕ちすぎてしまったのではないか？　神の使徒がいろいろの手順を省いていきなり神の大敵に降るというのは冷静に考えてみれば、かなりアレのような……」

ゼノヴィアの口からダラダラと未練や後悔が漏れ始めてきたが聞こえない。それなりの思いがあって転生したと思っているシンの耳に入ってきているが聞こえない。決して聞いてはいけない。

「と、ところでイリナはどうしたんだ？　戦いが終わってすぐに家から出て行ったからさ」

ぶつぶつと愚痴のようなものを吐き出しているゼノヴィアの気を変える様に別の話題を持ち出す一誠。途端、ゼノヴィアは陰気な顔から自嘲する顔となる。

「イリナなら既に教会へと帰ったよ。この街で死んだ神父たちとバルパーの遺体、そして回収した私の『破壊の聖剣』と統合されたエクスカリバーのかけらを持って」

「イリナには何か言ったのかよ」

「この地に残ることは告げた。怒られてしまったよ、きっとエクスカリバーを返却したことで私がもう教会に戻る意志が無いことが伝わったみたいだ。理由も聞かれたが答えることは出来なかった」

「教会には何も言わなくていいのかよ」

「既に連絡しているさ。神の不在についても、ね。電話越しでも息を呑む音は聞こえる

と初めて知ったよ。まあ、これで晴れて私も異端だな。何せ『神は死んだ』と主張するような輩だからな」

神の不在についてイリナは戦線離脱をしていた為に知ることが出来なかった。だが、それで良かったのではないかとシンは考える。ゼノヴィアと比べイリナの方が教会の教えに深く傾いていた為、仮に知ってしまった場合、どれほどの反動がその精神にダメージを与えるか計り知れない。尤もそのせいで、共に戦った仲間と喧嘩別れをしてしまうという、イリナにとって後味の悪い任務となってしまったが。

「あと付け加えておくなら、そのイリナという方は独りで帰国していません。この街で唯一生き残った先遣の神父も連れています」

捕捉するようにソーナが口を挟む。

「生き残り……ああ、彼か……」

心当たりがあるが口調はそっけない。ゼノヴィア自身はその生還した神父にはあまり良い感情を持っていないらしい。

「それはあのアダムという人物が変装していた神父ですか？」

「そうです。去り際に入院している病院の名前を告げられたので行ってみました。そこでその神父は恐らくここに派遣された直後から入院していたみたいです」

「入院……そんなにひどい怪我だったんですか？」

「いえ、無傷です。その神父が入院したとき全裸でとんでもない酩酊状態だったらしく、まともに会話が出来ない様子だったそうです。身元を調べようにも身分証明書の類は全て奪われていたので全く素性が分からなかったらしいです」
「え？　じゃあここに来てからイリナと帰るときまでずっと酔っぱらった状態だったんですか？　そんなことが出来るんですか？」
「きっと彼ならば簡単に出来るでしょうね」
　アダムのことを指して言っているのだろうが、何故かソーナの言葉にはアダムに対しての敬意が含まれていた。それはソーナがアダムの正体について知っていることを示唆している。
「その口振り、あの男の正体に見当がついているのね？」
「ええ。彼の名は恐らく――」

◇

「おい、『マダ』。それはがぶ飲みするような酒じゃねえぞ」
「だからどうした？　酒は酒だ」
　以前、シンが治療の為に寝かされていたマンション。その一室で二人の男が酒を酌み

交わしている。一人は軽く後ろに撫でつけた黒髪に顎髭を生やした異国の男。年齢は二十代ぐらいではあるが、齢以上の雰囲気を持つ顔付きは男として熟したどこか危なげな色気を持ち、異性の方から寄ってきそうな女慣れをした二枚目という印象を与える。ただ格好は何故か日本風の浴衣を着用し、飲んでいる酒も冷酒と見た目とはギャップのある行動をしていた。

もう一方の男性は浴衣を着た男から『マダ』と呼ばれてはいたが、その姿はシンたちの知るアダムであった。異なる名前を呼ばれ、それに反応したことから、それが彼本来の名前なのであろう。

男と違い、マダの前には酒瓶がいくつも転がっており、酒に詳しい人物が居ればその銘柄と価値に驚き、そしてその豪快な飲み方で二度驚くことになろう。

マダは空になった瓶をテーブルの上に置くと、別の酒瓶を手に取る。見た目からしてワインの瓶であるが、それをボトルキャップでも外すかのような仕草で付いているシールやコルクごと先端を捩じ切ると、そのまま瓶を掲げてから口の中に直接流し込んだ。

「一本、何十万すると思ってんだ？　年代もんだぞ？　少しは味わいながら飲めよ」

呆れた様子の男を言葉を無視し、ほんの数秒で一気に飲み終えたマダは、全く酔いで変化しない表情のままワインの瓶をテーブルの上に置く。

「飲んで酔うことこそ酒の真価だ。鑑賞や美術品じゃねえんだよぉ。昔のものだろうが

今のものだろうが酒は酒だ」
「飲んで酔うって――お前の酔った所なんて見たことねえぞ。はぁ……だからお前に酒を奢るのは嫌なんだよ。奢り甲斐がねぇ。ソムリエみたいな感想とまでは言わないが年代物の酒を飲んだなら少しは言うことあるだろう？　人間だったらもっと薀蓄とか語ってくれるぜ？」
　高級な酒が湯水のように飲まれていく惨状を見兼ねて男は言うが、マダはそれを一笑する。
「歴史を取り込んで酔っぱらうことが出来るのは人間ぐらいだ。俺のような存在にはあんまり分からん感覚だな。歴史に酔うってのは」
　お前はそうだろうよ、愚痴りながら男はチビチビと冷酒を飲む。
「で？　いつまでそんな〈神父の〉恰好をしているつもりだ？」
「そういや、そうだったな。長い時間着てきたせいで少し慣れたみたいだ」
　へっへっへっとマダが笑った途端、その身が炎に包まれる。部屋中へと散る火の粉。だがその火は不思議なことに周りには引火せず、向かいに座る男は動じず酒を飲み続ける。やがて炎に包まれた体が崩れていくが、それは被せられたものが剥がれ落ちていく様であった。そしてその剥がれ落ちていくものの中から別の姿が現れる。
　その下から現れた者の頭部に頭髪は無い。替わりに燃え盛る炎が逆立っていた。

その者に顔が無い。まるで石を彫って造られたような荒々しい瑠璃色の肌を持ち、目と鼻は無く大きく裂けた口が一つだけある。

その者には他の者には無いものがある。左右にある大きな腕、そこに更に一本ずつ加えられており、合計四本もの腕がある。背には大きな車輪のようなものを背負い、台座の様な横幅の広い腰からは篝火のように炎が燃えている。

まさに異形という容姿。これこそマダの本来の姿であった。

『マダ』。その名が意味するのは『酩酊者』。かつてある聖仙がとある神を追い払う為に創り出した阿修羅。口を開けば宇宙すらも呑みこめるとまで言われた存在。

つまりは神を超えていながらも神では無い怪物である。

しかし、神を追い払った後に生みの親である聖仙にその身を四つに分けられ、神話の中から姿を消した存在であった。

「ああー、この解放感、くせになりそうだ。お前の作った変装用の皮は出来がいいが俺には少し小さいな」

首を軽く回しながら褒めつつも文句を言う。

「お前は体の大きさある程度変えられるだろうが」

「元よりでかくなるのよりも元より小さくなるのとじゃあ、労力が違うんだよ」

そう言いながら首を軽く回す度にマダの身体が大きくなっていく。先程まで成人男

性の平均値ぐらいの身長が既に二メートルを超え、三メートル近い大きさまでなっていた。それによって増加した重みで座っているソファーが悲鳴を上げる。
「壊したら弁償な、それ」
「さっきからケチくせぇことばっか言ってるな。素直に俺を労えよ。お前の為にあれこれ動いてやったんだからよぉ、アザゼル」
『神を見張る者』、その頂点に立つ者こそ現在マダが向かい合って座っている男の正体であった。名を呼ばれたアザゼルは眼つきを鋭くする。
「結果上手くいったのは感謝するが、少しばかり好き勝手し過ぎだ。魔王の妹たちを堂々と戦いの中に放り込みやがって……下手したら悪魔と堕天使の間に一生ものの溝が出来てたぞ」
「元より仲なんて最悪だろうが」
「昔よりはましな方だ。特に今は天使も悪魔も、このいがみ合いの不毛さが身に染みてきた所だからな」
「俺にはあまり関係の無い話だがな」
心底どうでもいいといった様子でマダは再び酒を呷り始める。
「この苦労知らずめ」
その態度に悪態をつきながらも釣られたようにアザゼルも酒を呷った。

「でもまあ、これでお前の思い描いた展開になったんだろう？」
　マダの言葉に酒を注ぐ手が止まる。
「コカビエルの独断を許してしまった堕天使側、そのコカビエルにまんまと聖剣を奪われた天使側、そしてその両方の失態を取り戻してくれた悪魔側。堕天使も天使も悪魔に借りを作った構図になるわけだ」
　マダは酒を飲むのを止め、アザゼルに顔を向ける。
「これで三勢力『和平』への布石が整ったわけだ」
「……まだ確定じゃないがな」
「嘘つけ。頭ん中じゃ大体は上手くいくと思ってんだろ？　神が不在、これ以上増えることが無い天使側、その天使が増えないせいで減少の一途を辿る堕天使側にとっては致命的だ。そして三勢力と言われているが悪魔側の戦力は他の二勢力よりも劣る。この件の借りを悪魔側がちらつかせれば仕方ないと言ったふうに堕天使も天使も賛同できる形になるしなぁ」
　アザゼルは無言でマダの話を聞く。
「だがそれでも不満を持つ奴は必ず出る。だからこその膿出しをしなきゃならない。コカビエルという過激派の代表は処罰され、他の奴らは黙らざるを得なくなった。天使側も今回の件で不正に関わった天使や教会の人間を皆追放したらしいじゃねぇか。悪魔

側のそういった連中はとっくに端に追いやっている。これで障害も無くなった。それにしても――」
マダはそこで刃の様な歯を見せながら口の端を吊り上げる。
「上手いことやったもんだなぁ。コカビエルの奴を利用してよ」
マダの言葉にアザゼルは表情を変えることは無かったが眉が一瞬動く。
「あいつがお前に叛意を持ってたのを知ってただろう。それを上手く利用して今回の和平に繋げたんだから大したもんだ」
白々しさを感じさせる態度で褒めるマダ。アザゼルは静かに笑う。
「まあな」
「おまけにコカビエルの奴も処分出来たしまさに一石二鳥。やるねぇ」
「あいつは戦争に興味があったが俺には無いからな。とっとと退場してもらった」
「おお、おお！　冷徹だ、策士だ。よっ！　悪の首領！」
「ハハハハハ！　もっと褒めてもいいんだぜ」
高らかに笑うアザゼル。
「――なーんてことが事実だったら本当に策士だったんだけどな」
「あん？」
不意を突くような言葉を投げ掛けるマダ。

「本気で邪魔者だと思っていたら『地獄の最下層〈コキュートス〉』の氷の中にコカビエルを突っ込む前に首でも刎ねていただろうが。本心じゃあ死んで欲しくないと思っているのが透けて見える。そもそも今回のことだって、叛意を持っていた奴らを知ってながら、情けを掛けて放置していたのが原因だろうが」

アザゼルは声を出して笑うのを止め、自嘲気味な笑みを浮かべる。

「今じゃあんなんだが、あれでも昔は結構いい奴だったんだぜ」

「相変わらず仲間には甘い奴だな、お前は」

「仮に俺が本当にそんな奴だったらどうした？」

アザゼルの質問に少しの間、考えるような動作をしていたが、答えはあっさりと出された。

「こうやって飲んでもいないし頼み事も聞いちゃいねえ。希少な飲み仲間が一人減ってたかもな」

「結局酒絡みかよ」

マダの答えにアザゼルは思わず笑う。マダも肩を揺らして笑い、しばし二人の間で笑い声が交わされた。

「そういや、聞きたいことがあるんだが」

「何だよ」

急に笑うのを止め、今度はマダがアザゼルに質問する。
「何で最後に白龍皇を差し向けたんだ？　コカビエルの回収までが俺の仕事だろうが」
「最近、悪い奴とつるむようになってきたからな。自分の本当の相手が誰か目をむけさせるのが目的だったんだが……効果はあったかどうか」
子の心配をする親の様な表情で嘆く。
「大概は言うことを聞くが、肝心な部分は聞かないところがあるからな、あいつは」
「子育てが下手くそだな。――悪い、昔からずっとだったな」
「うるせぇ。気にしていることを言うな」
皮肉を言うマダにアザゼルは顔を顰める。本人にとってかなりデリケートな問題らしい。
「――まあいい。で、話は戻るがあちら側にはすでに会談の意志を伝えてある。ようやく一区切りが付けられる」
「そう都合よくことが運ぶといいがな」
水を差す懸念が含まれたマダの言葉にアザゼルは反論をしなかった。アザゼルにもマダと同じ懸念すべきものがあったからだ。
「敵がいなくなったとしても別の敵がいるもんだ。特に俺らみたいな連中は、な」
「分かっている。だから言っただろう？『一区切り』だと」

◇

「では私はそろそろ失礼します」
そう言いながらソーナは立ち上がる。
ゼノヴィアのこと、アダムの正体のこと、今度この学園で行われる三勢力の会談についてのことなど、短い時間の割に濃い内容の話が展開していたがようやく話す内容も尽きた。
そのままソーナが部室をあとにして、久しぶりにオカルト研究部全員での部活動再開かと思われたとき、入り口付近でソーナが突如立ち止まる。
「そう言えば私たち生徒会にも新しいメンバーが入ったのを紹介するのを忘れていました」
「え、いつの間に？」
リアスも初耳であったのか軽く驚いた表情をする。
「ここで挨拶をしてくれますか？」
リアスたちの方に向けて言うソーナに一同意味が分からないという顔をするが、そんな中に一人例外がいた。

ソーナに言われてオカルト研究部のメンバーの中から一人歩みだし、ソーナの隣に移動するのを見て誰もが唖然とする。
「……まさか、貴方がソーナと契約したときに払った代価って……」
「では自己紹介をお願いします」
ソーナに言われその人物はオカルト研究部全員を見回し、こう自己紹介をした。
「今日から生徒会役員『補佐』兼ソーナ・シトリー及び眷属の『協力者』を務めさせて頂きます間薙シンです。今後ともよろしくお願いします」

幕間　召喚、???

どんな分野においても、人の何倍もの成果を生み出すいわゆる『天才』という人物が存在する。

同じ時間で人並み以上のものを造り出すか、あるいは創り出す。限られたもので最高のものを生み落す。停滞していたものの時間を動かし、そこから更なる発展をさせる等々、『天才』という存在はどのような形ではあれ必要であり、また希少な存在なのである。

故に今、思い起こすとあの日あった人物は、紛れも無く『天才』であった。ただ、本当の天才というものは凡人の思考ではまず理解出来ないものであり、そしてこの上なく厄介な存在であることを同時に思う。

◇

「では私の番だな」

夜のオカルト研究部内、その中央に描かれた魔法陣の中にゼノヴィアが入って行く。

リアスの眷属になり、チラシ配りという雑用もとい契約者勧誘活動を終え、今日が初めての悪魔としての仕事であった。

よく見る鉄面皮な顔にも、若干であるが緊張の色が見える。今まで教会に仕えてきて、あまり世間を知らないゼノヴィアにとって、これからのことは全く未知の出来事であった。

「そんなに緊張しなくてもいいわ、ゼノヴィア」

「大丈夫ですよ。あなたをサポートしてくれる人がちゃんとついていますから」

リアス、朱乃がゼノヴィアから視線を横にずらす。そこにはいつものようにシンが無表情で立っており、これもまたいつもの様にその肩にはピクシーが座り、足下にはジャックフロストがいた。

「初めてでもきっと間薙くんが上手く手助けしてくれる筈だから、あまり焦らないようにね」

「……間薙先輩、ピクシーさん、ジャック君、頼みます」

木場は緊張を解すような言葉を言い、小猫はサポートする三人にゼノヴィアのことを頼む。

本来ならばこの後に一誠やアーシアの言葉も続く筈であったが、既に二人は呼ばれているので姿は無かった。

「すまない。まだ悪魔としては未熟な私だ。色々と世話を掛けることになるだろう」
「気にするな」
　シンの対応はそっけなく短いものであったが、その態度が逆に安心感を相手に抱かせるような頼もしさがあった。
「頼りにしている。ふふ、初めての日にこれほど頼もしい相手が助力してくれるなら私も大分肩の力が抜ける。これも主のお導きか」
　そんな台詞を言うゼノヴィアを咄嗟にシンは止めようとするが、時既に遅く胸の前で十字を切り――
「アーメン……うっ！」
　祈りの言葉を捧げると同時に、急に殴られたかのように頭を押さえる。悪魔になって日が浅く、教会に居た時間が長かった為に習慣と化しているのか、ことあるごとに神に感謝し祈りの言葉を口に出しては、悪魔の弱点のせいで悶絶している。
　頭を押さえるゼノヴィアを見て、シンは不安な気持ちになってくる。
「……大丈夫か？」
「だ、大丈夫だ。日に何度かやっているせいか最近、少し慣れてきた」
（慣れるよりも止める方が先だと思うんだが……）
　本気か冗談か。恐らくは本気で言っているのであろう。ゼノヴィアとの関わり合い

はそう多くは無いが、接してきて少し分かってきたことがある。環境から真面目に育ってはいるが、その真面目の軸が一般人よりも少し横にずれているらしく、そのせいか度々ずれた行動をすることがある。

そこで真新しい記憶が脳裏を過ぎる。

昼休みどきクラスでアーシア、桐生とゼノヴィアが会話していた際、いつもの様に下ネタ混じりの会話をしてアーシアをからかっていた。そしてその矛先がアーシアからゼノヴィアへと向けられたときそれは起こった。

「で？　アーシアはまだまだみたいだけどそっちの方はどうなのかなー？　ゼノヴィアはそういった準備とかしてるの？」

「ふっ、当然だ」

振られたゼノヴィアは心なしか自慢げな表情をして、ポケットからあるものを取り出す。

「見ろ」

出されたものを見てアーシアはどういったものか理解出来ず首を傾げていたが、桐生の方はそれが何なのかを知っていた為、絶句する。

「そ、それって……」

「淑女としての嗜み。相手である男性に恥をかかせない為に常に所持するべき、と私が

呼んだ本には書いてあった」
　誇らしげに見せるそれに桐生はただただ唖然としていた。
「あの、ゼノヴィアさん。それっていったい何なんでしょうか？」
「ああ、これはコ――」
　最後まで言うよりも先に、ゼノヴィアの脳天に手刀が打ち落とされ無理矢理止められる。
「真っ昼間から何を出しているんだ。お前は」
　手刀の主はシンであり、たまたまゼノヴィアたちの方を向いたときそれを取り出したのを発見し強制的に止める。
「い、いきなり何を……！」
「こっちの台詞だ。それを早くしまえ。先生たちに見つけられたら問答無用で職員室に連行されるぞ。文化の違いなんていう言い訳は通じないからな」
「私はただ嗜みと心得を――」
「それよりも先にモラルと恥じらいについて学べ」
　頭を手で抑え痛がっているゼノヴィアを急かして手に持ったものをさっさと仕舞わせる。
「会話の邪魔をして悪かったな。ただ少々特殊な環境にいたせいか人とは違う反応をす

るから気をつけろよ」
「あー、うん」
若干、動揺した様子で桐生は返事をする。普段下ネタなどでアーシアや一誠をからかって遊んでいるが、ゼノヴィアから思わぬカウンターを貰ったせいで少し反応がおかしい。
「結局、あれは何だったんですか？」
無垢な瞳でアーシアは尋ねる。本当のことを伝えるべきかと桐生は横目でシンを見るが、これ以上話をややこしくする必要は無いと軽く首を横に振るう。
ならば何というべきか、言い訳を考えているのか桐生は十数秒程黙った後、アーシアへ質問の答えを返す。
「……ゴム風船？」
（苦し過ぎる）
「へー、変わった形をしていますね」
（鈍過ぎる）
何て無理な言い訳だと心の中で思いつつも、アーシアの純真さでこの場は何とか誤魔化すことに成功するのであった。
そんなことがあった為に消えない不安が残るが、基本的には勤勉的であることをとり

あえず信じることとする。
　もし万が一のことがあったとしても近くに居れば止めることも出来る。
「では行ってくる」
「行ってきます」
「また後でねー」
「ヒーホー」
　魔法陣が一際輝きその光に包まれると、一瞬の浮遊感の後に固い地面の感触が足から伝わって来た。
「着いた様だな」
　ゼノヴィアとシンは周囲を見回すとそこには並べられた靴や靴箱、その上に置かれた花瓶、壁には絵画が飾られている。玄関に呼び出されたらしいが、簡単に見ても塵一つ無い敷き詰められた床の綺麗さ、長く幅のある廊下に高い天井と輝くシャンデリア、そして整えられた広い玄関など、相当裕福な家であることが分かる。
　ただ少しおかしい。ゼノヴィアは初めて召喚された為に知らないが、本来依頼人から呼び出されると、ほぼ間違いなく呼び出された直後に依頼人と顔を合わせることになるが、どう見ても近くに依頼人の姿は無く、また簡易召喚用の勧誘チラシも無い。
　普段とは違うことに違和感を覚えていると、廊下の方から小走りで走ってくる足音が

聞こえ、また少し経つと足音の主が姿を見せる。
体型は中肉だがかなり背が高い。彫りが深く、高い鼻、そして整えられたブロンドの髪型から、外国人であることが分かる。年は見た目からして三十代後半から四十代前半といった感じではあるが、その全身から放つ雰囲気は年相応というよりも、落ち着きが感じられない少年のようなものであった。
「やあやあ！　よく来てくれたね！」
爽やかにシンたちを迎え入れる男性。シンは悪魔では無い為、外国語を自動的に翻訳されることが出来ないが、男性が喋った言葉は間違いなく日本語、それも日本人と遜色ないほど流暢な言葉遣いであった。
「夜分遅くに失礼する。私たちは悪魔グレモリーの使い――」
「うんうん！　大丈夫、大丈夫！　リアス・グレモリーさんの眷属さんたちだね？　二回目だから知っているよ。固っ苦しい挨拶は後にして、ささ！　どうぞどうぞ！」
二回目という言葉に引っ掛かるものを覚えたが、相手の有無を許さない勢いに乗せられ取り敢えず玄関から廊下へ上がる。
そのときふと、玄関に並べられている靴が目に入った。履き慣らしたスニーカーと女性ものと思われる革靴。どちらにも見覚えがあり、革靴の方に至っては駒王学園指定のものである。

（先に来ているのか……？）

靴のことから脳裏に二人の人物の姿が浮かび上がった。

目の前の人物に不穏なものを感じつつ、様子を見ながら後ろについていく。

「いやいや！　まさかこんなに大勢来てくれるとは思わなかったなぁ！　何せ最初に呼び出したときはすぐに出てこなくてね！　あれ、失敗しちゃったかな？　とか思っていたんだけど何と二十分もしてから現れたんだよ！　どうやって現れたと思う？　何とわざわざ呼び鈴を鳴らして玄関先に現れたんだよ！『こんばんは。呼び出された悪魔ですがー』という感じで！　今まで何度か悪魔の呼び出しをしてきたけどあんな風に出てきたのは初めての経験だったね！　しかも一度に二人も現れたんだから何というか一石二鳥というのかな？　貴重な経験だったからね。思わず何で玄関から来たのか、とかどうやって来たのか、とか色々質問しちゃったよ！　でも質問し続けたら何だか泣きそうな顔になっていたね。ボクは触れちゃいけない部分に触れちゃったのかな」

捲し立てる早口かつ間が全くない長い話をする依頼者に内心辟易してしまうが、それでもいくらか情報を聞くことが出来た。

まず依頼人が呼び出した悪魔は間違いなく一誠とアーシアである。世の中広しと言えども自力で依頼者の下に向かう悪魔など一誠ぐらいしかいない。そしてどうやらこの依頼者は、悪魔を呼び出すことを既に経験している人物だということも分かった。

「でも二人だけというのも寂しいからもう少し増やそうと召喚してみたけど次の召喚も少し失敗しちゃったね。本来だったら僕の前に現れる筈だったんだけど、召喚先の位置固定がずれていたみたいだ。うーん、あの手の魔法陣は何度か弄くっているんだけどね。外面の術式に気を取られ過ぎて、肝心の組み合わせの部分が疎かになっちゃたかなー。まあまあ過ぎたことは仕方ないよね。こうやってまた沢山来てくれたんだから二人と――その小さな子たちは何て数えたらいいだろうか？『匹』だと虫みたいで感じ悪いね。うん『人』で数えさせて貰うよ――今度は四人も来てくれたからね」

息継ぎをしているのか不思議に思えてくる長い喋り。だがその中には聞き捨てならないことがいくつも含まれている。

召喚用の魔法陣に手を加えていたという事実。最近ではまともに悪魔を召喚する技術は人の中で廃れてきていると前にリアスから聞いたことがあるが、目の前の人物はそれらについて一定以上の知識を有しているということになる。そしてこの人物、ピクシーとジャックフロストの姿まで見えている。一般人には見えない二人であるが、たまにではあるが見える人もいる。悪魔の仕事で見える相手には殆どあったことが無いが、見えている人物は決まって常識から外れた人間が多い。

シンの頭の中に某自称魔法少女の姿が浮かび背筋が軽く寒くなった。見えるということは最低でも同等、もしくはそれ以上である。

「間薙シン。彼は大丈夫なのだろうか？」
　話の内容から流石にゼノヴィアも少々不安になってきたらしい。
「何度か悪魔を呼び出している口振りだ。もしも生粋の『悪魔崇拝者〈サタニスト〉』だとしたら私はどうするべきか。生贄を捧げる手伝いでもさせられたら……取り敢えず斬るか？」
「何だその物騒な結論は」
　教会に務めていたときの性分が抜けきれないのか、危うい発言をするゼノヴィアをシンは嗜める。ただ本当にゼノヴィアが言うような人物では無いと言い切れず、そのような手伝いをさせられる可能性もゼロでは無い。
　だがその不安は本人の口によって否定された。
「いやいや！　ボクはそのようなタイプの輩ではありませんので！」
　かなり声を抑えて喋っていたが聞こえていたらしい。凄まじい地獄耳である。
「喚び出すっていうのは一口に悪魔だけでは無いです！　降霊や精霊を喚び出そうとしたりしていますからねボクは！　一つのことに拘らず広く深く知ることをモットーとしているんだ！　どちらかといえばボクは『悪魔崇拝者』じゃなくて『召喚士〈サマナー〉』といった所かな？　でも最近はそれらの知識も手に入り難いんだよね！　たくさん知りたいんだけでねー！　その点では君達悪魔の魔法陣は重用させて貰っている

よ！　一見すると複雑そうに見えて誰もが扱えるようなシンプルな使い易さ！　何よりもこうやって用紙に直接描いているのがいいね！　グッドだ！　ボクは生粋のアナログ派だからね。　ボクの友人はデジタル派だけど」

首だけ後ろに向けながら饒舌に喋り続ける。口数の多い方で無いシンやゼノヴィアは間も無く突き詰めて喋る彼に対して一応の頷きを見せ、話を聞いているという態度を見せるぐらいしか出来なかった。

一体この短い間にどれほどの文字を吐き出したのか分かり辛い程に喋り続けていたが、やがて目的の場所に着く。

ドアを開くとそこは居間であり、本棚などが周囲に置かれている。中央にはテーブルとソファーが置いてあり、そこに見知った二人が座っていた。

「あっ」

「間薙たちも来たのか？」

一誠とアーシアは現れたシンたちに驚くも、少しだけ安堵した表情となった。恐らくはシンたちが呼ばれる前にも、似たような話を依頼人から聞かされていたのであろう。そこに知り合いが現れたのだから不安が和らぐのも分かる。

「さてさて。悪魔の皆さんにこんなにも集まって頂いて嬉しい限りだね！　前はせいぜい一人か二人程度だったんだけどね。でもそのせいで――いや、なんでもない、詰まら

ない話は置いといて、そうだ！　自己紹介がまだだったね！　ボクの名前はマニー・カターというんだ、マニーでもカターでも好きな方で呼んでくれていいよ。で、集まってもらって早々悪いんだけど場所を移動しましょう。付いて来てくれるかな？」

マニーはそういって近くに置かれていた本棚の側に寄ると、そこからそこに並べてある本を数冊手前に倒す。すると歯車が噛み合ったような音がし、本棚が動き始める。

並んでいた本棚が動き終わると、下に続く階段が本棚の向こうに現れる。

「じゃあ、行こうか」

笑みを浮かべながらマニーは階段を降りて行く。その後ろを不安を感じながらもシンたちは付いて行く。

居間とは違い冷えた空気が流れる石造りの階段。照明も電気では無く燭台に刺さった蝋燭と、妙に拘りを感じさせるものであった。

「どうしてこんな隠し部屋を？」

思わず一誠がマニーへと尋ねる。正直な話、あんな大掛かりな仕掛けを作らなくとも、普通に地下への階段を設ければいいと思ってしまう。

「ボクの趣味だよ。雰囲気あるだろう？」

ある意味、身も蓋も無い答えであった。そんなことを言われてしまえば変に突っ込むことも出来ない。現に尋ねた一誠も『そ、そうですか』と言って口を閉ざしてしまった。

ある程度階段を降りると、やがて前方におどろおどろしい装飾が施された扉が現れる。所々、苔が生え爪で引っ掻いたような傷が無数にあり、赤黒い染みが両開きの扉に点々と付き、中央には古めかしい大きな錠前が付けられていた。
「さあさあ。この先だよ。ところでこの扉を見てどう思う？　そこのキミ」
いきなり話を振られたシン。数秒沈黙した後に質問の答えを返した。
「――良い趣味をしていますね」
「ありがとう。キミもいいセンスしているよ」
それだけ言って仕舞っていた鍵を取り出し始めた。
（何だ今の質問は……もしかしてこの扉を褒めて貰いたかったのか？）
皮肉にしか聞こえない返答に満面の笑みを浮かべ嬉しそうに笑うマニーを見て、理解が深まるどころかますます分からなくなっていく。
「こっちだよー」
シンの悩みを無視しマニーは趣味の悪い扉を引いて開く。趣味の悪い扉の先には更に趣味の悪い空間が広がっていた。
かなり広々とした部屋の中心に描かれた魔法陣。その周囲には様々の物が置かれていた。毒々しい色をした花に動物の剥製、それぞれポーズの違う四つの人形が置かれた壇など様々。不気味なものをこれでもかと置いてあるせいか、部屋の外と中では空気が

まるで違い、いわゆる瘴気というものが漂っていた。
「じゃあ、とりあえずここで待っていてくれるかな？　ボクは正装に着替える準備があるから」
　マニーはそう言って、部屋の奥にある別の扉の中に入っていた。
　マニーの姿が消えると同時にシンたちは一斉に喋り始める。
「なあ……大丈夫、だよな？」
「悪い人には見えませんでしたが……」
　不安を示す一誠にアーシアは一応マニーのフォローを入れていたが、どうにも歯切れが悪い。傍から見ても当人の人間性、そしてこの部屋の状況、それらから導き出せる答えは危険人物しかない。
「うーむ、これが私にとって初仕事なんだが……皆から見てもあの人物は危なそうか？」
「まあ……何度か喚び出されたことがあったがああいうタイプの人間は初めてだな」
　喚び出す人間の大概は逸脱した様な人格を持っている者――ただし見た目は別とする――はあまりおらず、叶える願いにしてもそう危険なものはない。今回の依頼人からの仕事内容についてはまだ聞いていないが、本人の言動からどうしても不穏なものを感じずにはいられない。
「うぅー、どうもアタシはああいう人間って苦手……」

この家に入ってから黙り続けていたピクシーが弱々しい口調で意見を言う。普段陽気な彼女を見ている側としては意外な反応だった。
「どういうことだ？」
「昔さー、アタシのことを捕まえようとしていた連中と目付きや雰囲気が似てるんだよねー。こう、何ていうの、物凄くぎらぎらとした感じが。　何だか寒気がしてきたー」
追い回されたときの記憶が蘇ったのかピクシーはシンの肩を強く掴む。
「取り敢えず仕事の内容を聞くまでは判断できないか。……流石にこの魔法陣の中で生贄になってくれとかいう依頼だったら断るけど」
「そうならないことを祈るしかないな」
一誠の挙げた可能性を否定し切れず、シンは少し適当なことを言う。
「おまたせしましたー！」
扉から着替え終わって出てきたマニーの姿を見て、一同ギョッとしたように目を丸くする。
出てきたマニーは、頭頂部から足首まで覆い尽くす一枚の灰色をした厚地の粗末な布を巻きつけていた。腰にはベルトの代わりに荒縄で締められており、とてもじゃないが綺麗とは言い難く、どちらかと言えば小汚い印象を受ける格好である。
「それが……正装ですか？」

「そうだよ」

数少ない露出している箇所である顔の部分。そこに浮かべられるマニーの顔。さっきと同じ笑みだというのに服装が変わった途端、不気味に感じてしまう。

「おやおや？　君達、ボクのこの格好を汚いと思っていないかい？　まあ答えずとも分かるよ。大体の人はそういった第一印象を受けるからね。だけどね！　この汚さはただの汚さでは無いんだよ！　この生地が灰色になっているのはとある川の奥底で採れた泥を染料にしているからなんだ。その川っていうのが昔から枯れずにずっと流れ続けているといわれている川でね、そこではあらゆるものを川に流し続けていたんだ。だからその川の奥底に眠る泥には多くの歴史が含まれていてね、この泥を体に塗ることでその地域では魔除けになるという言い伝えがあることに目を付けたボクは、それを染み込ませた衣服を纏うことで、あらゆる状況下においても魔に憑りつかれる危険から身を護る効果があるんだ。そしてこの腰に巻きつけた一見ボロく見える縄も――」

「すみません。大変申し上げ難いのですが、そろそろ仕事の内容について教えてくれませんか？」

止まらずに喋り続けるマニーに気分を害させるかもしれないのを覚悟してシンは口を挟み、話を先に進めようとした。途中で話を遮られたマニーは特に感情を荒立てることはせず、シンに言われてそこでようやく依頼内容に触れていないことに気付いた様子

であった。
「ごめんごめん。会話がすぐに脱線してしまうのがボクの悪い癖なんだ。済まなかったね。それで依頼の内容なんだけど今からここでボクが召喚術を試すから、君達にはそれの観客兼護衛を頼みたいんだよね」
「観客兼護衛ですか……？」
「そうそう。召喚のときに自分以外の誰も見ていないと何というか詰まらないだろ？だから君達にボクが召喚術を使って呼び出す姿を見ていて欲しいんだ。何せ、こういった人には言えないことがボクの趣味だからねー、見てくれる友人が殆どいないから寂しいんだよ。ああ、でも一応共通の趣味を持つ友達は一人いるけど彼は遠いところに住んでいるし、少し体が不自由だからね。そう簡単に招くことも出来ないんだ」
　この趣味のおかげで未だ独身だよ。はっはっはっ、と朗らかに笑うが周りはあまり笑えない。観客の意味は概ね理解したがもう片方の護衛ということに関して誰もが疑問に思い、代表して一誠が質問をする。
「観客の件に関しては分かりましたが……その、護衛というのは一体どういうことで？」
「偶にね、あるんだよ、喚び出したものが襲い掛かってくることがさ。いやね、一応この魔法陣を通った対象には強制的に従属させる術式も施してあるんだけど、強い力や意志を持っているのを喚び出しちゃうと、その力と反発し合って暴走するんだよね。それで

一回死に掛けて病院送りにされちゃったから、今は喚び出す度に護衛をつけているのさ」

死に掛けて懲りたのならば、護衛を付けるよりも召喚の儀式そのものを止めた方が遥かに安全だというのに、それでも止めないということは根本的に反省していないことの証明であった。

というよりも話の中に聞き捨てならない言葉がある。

「きょ、強制的に従属……？」

アーシアが若干怯えた様子でその聞き捨てならなかった箇所を口に出す。アーシアに指摘され言った本人も意識せずに言っていたのか、ハッとした表情となり慌てて言い直す。

「いやいや！　ごめんごめん！　嘘嘘！　そんな相手を無理矢理従わせることなんてしないよー！　ちょっと日本語が間違ってキツイ表現になっていたね！　いやー、日本語って難しいね！　本当は喚び出した側にほんのすこーし親しみが湧く程度のものだからさ！　本当だよ！　決してボクが命令したら死ねる、なんて強力なものじゃないよ！」

日本語は難しいと言いながら流暢な言葉で喋り、喚び出した相手と仲良くなりやすくなるとマイルドな表現に変えてみても、結局は洗脳の一種にしか聞こえない。如何にも

言い繕っているという姿に不安が膨れ上がっていく。
「まあまあ！　言いたいことは山ほどあるかもしれないけど結局の所はどうなの？　受けてくれるの？　駄目なら潔く諦めるよ」
そう言われてしまえば呼び出された側としては契約するかどうか調べるしかない。シンはゼノヴィアに言ってこの内容で契約できるかどうか調べて貰う。ゼノヴィアはポケットから悪魔用の携帯機器を取り出し、やや覚束無い手付きで情報を入力していく。それによって代価が表示されるが、それはかなりの額の金品の要求であった。
「代価としてこれを払ってもらうが……」
「うんうん！　了解了解！　契約は出来るってことだね。じゃあ早速頼むよ」
画面に映された額を見て、驚くことなく即了承。この家の大きさや地下室の存在からかなり裕福だと思ってはいたが、実際その通りだったらしい。
「じゃあじゃあこの魔法陣の側まで来てね」
手招きしながら軽い足取りで魔法陣に向かうマニー。対照的にシンたちの足取りは重い。契約出来ると相互で分かってしまった以上従わなければならない。
魔法陣の側まで移動した一行はこれから召喚を行う魔法陣を実際に見てみて、皆が怪訝な顔をする。魔法関連については一通り学んできたが、魔法陣に描かれている文字は初めて見る形をしていた。

「おーおー。この文字に目を付けちゃう？　君達は良い観察眼を持っているね。これは既存の図形や文字をボクが独学でより効果を発揮するようにアレンジしたものさ。この魔法陣は自然や人が無意識に洩らしている魔力を掻き集めることで、ボクのように少ない魔力の者でも召喚可能なようにするんだ。これによって召喚者の力量に対し一定のレベルのものしか呼べなかったのが、力量以上の存在を喚び出すことが出来るんだ――理論上」

不安になる一言を最後に付け加える。確かに図形などは見たことのない形が多かったが、文字の方をよくよく見てみると、崩してはあるが既存の文字を使っている。ただ、その文字がアルファベットだのギリシャ文字だの梵字だのと、無秩序かつ多国籍であり統一性など皆無に等しかった。

（書いた本人にしか分からない法則でもあるのか……？）

見たり聞いたりする度にどんどん怪しさが増していく。

「じゃあ、あれは何ですか？」

一誠が気になったのか壇に置かれた人形を指差す。色と格好が違う四種類の人形。マニーはその内の一体を手に取る。不思議なことに、その人形には表情などが無いが、何故か怒っているような印象を受ける人形であった。

「いやいや。良い目の付け所いいね。これもボクの持論なんだけど、こういった儀式を

行う際、喚び出す側は喜怒哀楽どれかの感情を昂らせていた方が成功率が上昇するということがあるんだ。感情が昂ったときに出るある種の波長が魔法陣に作用して成功率を変動させていると睨んだボクは、各種の感情の波を放つ人形を作り出したのです！それがこの四体の人形というわけさ！」

自慢げに人形を見せるがどうにも胡散臭さが目立つ。持論自体も眉唾ものにしか聞こえない。

「へー、どうやって感情の波なんてものを放つようになるんですか？」

マニーの言葉に一誠は興味を持ち、同時に疑問が浮かんだのか素直にそれを口にする。シンもそれに関しては同じ疑問を抱いていた。

「ああ、簡単だよ。こうやるんだ。ッザケンナオラぁアアアアアアアアアアアア！」

『なっ！』

いきなり態度を豹変させ、怒声を上げながら手に持った人形を勢いよく地面へと叩きつける。眉や目が吊り上がり、顔も一気に紅潮させ、般若のような顔になりながらドスの利いた大声を出すマニーに一同驚いてしまう。

「舐めてんのかぁぁぁぁ！　このオレを舐めてんのかアアアアア！　×この××の××人形×　×　×　

叩きつけられ地面へと転がる人形に対し、唾を撒き散らしながら聞くに堪えない卑猥且つ汚い罵声を浴びせ続けるマニーの姿に一誠、ゼノヴィア、シンは唖然。アーシア、ピクシー、ジャックフロストらに関しては完全に怯えていた。

血管が切れるのではないかと思える程力の限り罵倒し続けたかと思うと、前触れも無く表情を戻しニコリとした笑みをシンたちに向ける。その表情を向けられた途端、アーシアたちはびくりと一瞬震えていた。

「とまあこんな感じにありったけの感情を人形に向けることでその感情を感染〈うつ〉すことが出来るんだよ。大体、これを一年ぐらい毎日やれば結構いい具合に仕上がるね」

「一年も……」

想像してみて欲しい。一年三百六十五日欠かさず人形に向かって本気で喜び、怒り、哀しみ、楽しむ。

誰がどう見てもまともじゃない。

（本物だ……色々な意味で本物だ……）

全員シンと似たような感想を抱いているせいか、笑うマニーに対しこちらも笑えばいいのか、それとも素直に引いてしまえばいいのか分からず沈黙してしまう。だが当の本人は特に気にした様子は無く、他の人形への感情の移し方を実演しようとしていたので皆で丁重に断っておいた。

「それじゃあ、時間もいい具合になってきたことだしそろそろ召喚に取り掛かろうか。ではでは、皆さんは一応ボクの背後に立っておいて下さいね」

マニーの言った通り時刻は深夜近くを指していた。全員、マニーの指示に従い一旦魔法陣から離れる。そしてマニーも魔法陣の中から外に出るとそこで目を瞑り、意識を集中し始めた。

そして――

「イイイイイエエエエエエルオイムエッサイイイイイイイムウウウウ！」

「だ、大丈夫ですか！」

奇声を上げ、痙攣したように身体を細かく震わすマニーの姿を見て、思わずアーシアが声を掛けてしまう。相手の行動を妨げになるのは分かっているが、その明らかな異常行動を見ればアーシアの性格上、寧ろ人並みの感覚の持ち主ならば気を掛けずにはいられないだろう。

「え？　大丈夫だけど」

奇声を止めてキョトンとした表情でアーシアを見るマニー。その顔から何を一体心配そうにしているか全く理解出来ていない様子であった。何処までも客観的に自分を見ない男である。

「ご、ごめんなさい。いきなり震え出したので何か異常が起きたのかと思って……」

「ああ、この細やかな動きは魔法陣から出て来る魔力の波長に合わせているんだよ。こうやってボクと魔法陣の波を合わせることによってより大きな効果が得られるのさ」
「そ、そうですか……」
「じゃあ、気を取り直して……イィィィィィエエエエエエルォイムエッサイィィィィィィムゥゥゥゥ！」
　再び奇声を上げながら細かく震え出すマニーを見て一同は、まだ何もしていないのにも関わらず重い疲労感を覚えていた。低音と高音、金切り声を巧みに操りながら唱える詠唱は不協和音そのものであり、聞く者にとんでもない不快感を与える。現にシンの側にいるピクシーとジャックフロストは、耳を押さえて表情を蒼褪めさせていた。
「……すまない、何だか気分が……」
「耐えろ、とにかく耐えるんだ」
　新手の拷問のようなものを味わいながら兎に角黙ってマニーの奇行を見守る。激しい揺れと不協和音の詠唱は約十分程続けた後、ぴたりと動きを止める。
　そしてマニーは魔法陣の前で首を傾げていた。
「うーん……」
「……どうしたんですか？」
　考えている様子のマニーに一誠が声を掛ける。先程の儀式に一誠も相当応えている

のか、若干声に張りが無い。
「失敗だね……手応えがないや」
「え、じゃあ……」
「うん。少しパターン変えて次をやってみよう！」
　このまま中断かと思えた希望を潰す無慈悲なマニーの言葉に、一同肩を落とす。そんな一行の様子など気にすることなく、マニーは再度奇声を発しながら身体を震わし始める。非常にどうでもいいことであるが、震えが横揺れから縦揺れになっていた。
　そして十分後。
「また失敗だ……次のパターンも試してみよう」
　めげることも無く再度挑戦。あれほど動きっつ叫んでいるにも関わらずマニー本人は元気そのもので息切れ一つしていない。その姿を見てこれが延々と続く未来を幻視し、シンたち全員の顔色が一層悪くなったのは言うまでもない。
「；．：#$%&☒！．？〈＿＝！#$%&☒＋＊」！〃＃#$！」
　儀式を初めて丁度二時間が経過しようとしていた。相変わらずマニーは最早人の言語とは思えない呪文を叫びながら身体を斜めに震わせている。
　そんな光景を二時間も見続けていたシンたち一行の精神状態は、ほぼ底辺を這いずるように下がりきっており、メンバーで会話する元気すら枯れ果てていた。

いつまでこの頭の螺子が飛び散ったような儀式を見なければならないのかと考えていたとき、今まで淡く輝いていた魔法陣が一気に発光し出す。
「あ、釣れた」
召喚する者の台詞としてはどうかと思えるような言葉を吐きながらマニーは動きを止めて、変化し始めた魔法陣を注視する。
「いよいよ来るぞー！　もしもの場合に備えて皆さん頑張ってくれ！」
「え、あー、はい」
マニーは嬉々とした様子でいるが、精神的疲労が溜まりきった一同は気合を入れようにもその値まで持ってくるのに少々時間が掛かるのか、言葉を返したイッセーは生返事であった。
「来るぞー！　来るぞー！　ん……？」
魔法陣の上で赤黒い光が稲光の様に奔り、何度も魔法陣の上に落ちていく。その魔法陣の様子を見ていたマニーは急に振り返り、シンたちの方に顔を向け一言。
「ごめん。たぶん失敗した」
あまりにあっさりと言うので最初何を言いだしたのか理解出来ず、皆二度、三度と瞬きをする。その後、シンはつい聞き返す。
「すみません。もう一度言って貰えますか？」

「これから喚び出した奴はきっと暴れる。ボクの洗の――もとい術式が上手く決まらなかったようだね。まえに病院送りにされたときと全く同じ現象が起こっているよ。いやー、まいったね。手応え的には結構な大物が引っ掛かったと思ったんだけど大物過ぎたかなー。ボクの術式が効かない相手だからね、かなり強いのだろうね今から現れるのは」

他人事のように笑うマニー。それを聞いたシンたちの行動は迅速なものであった。

「アーシア！　今すぐこの部屋から退避してくれ！　いいか、俺が大丈夫って言うまでこの部屋には入らないでくれ！」

「は、はい！」

「ついでにこいつらの様子も見ていてくれ。相手によっては手を借りるかもしれないが、とりあえず呼び出したモノがどういう相手か判断してからだ」

「は、はい！」

一誠の指示にアーシアは頷き、シンからピクシーとジャックフロストを手渡される。

その間にも魔法陣内では魔力が嵐の様に荒れ狂い、近くに置いてある人形を祭壇ごと吹き飛ばしている。

「いやいや、大荒れだね」

他人事のように呑気でいるマニーの台詞に思わずシンは殴りたくなってくるが、何と

か理性を働かせその衝動を押しとどめた。
やがて荒れ狂う魔力は一つに集束し、魔法陣が強い光を放つ。その光の強さから反射的に目を逸らしてしまう。やがて光は収まり、一同が魔法陣の方に目を向けたとき。
『それ』は居た。
現れた『それ』を見てシンと一誠は絶句。ゼノヴィアは目を丸くし、マニーはおー、と歓声を上げていた。
魔法陣から出て来たモノは全体が黒みかかった緑色をしている。目は無いが代わりに口が付いており力無い様子で半開きになっている。だがその様な些細なものなど殆ど意味を成さないような特徴がそれにはあった。
あまりに見たままであり、ある種の力強さ。ある種の繁栄の象徴。男を現すシンボルであり、男に生を受けた者ならば必ず目にするような形。モラルが重視される時代の中直接言えば社会的に抹殺されかねないその卑猥且つ逞しい形は――
「……これってあれだな……」
「……まあ、そうだな……」
×
「まるで×だな」
×
『おい』
直球かつ飾りの無いゼノヴィアの発言に、シンと一誠は思わず咎めてしまう。男です

ら時と場合によっては言い淀むことを平然と⊠に出す。
「何かおかしなことを言ったか？　それとも××と言った方が良かったか？　もしくは××、または××、あるいは――」
「やめろ！　言い方変えても全部同じ意味だろうが！」
各種読み方を披露するゼノヴィアを一誠が必死になって止める。
「どうした？　こういうことを女性に言わせると殆どの男性は喜ぶと本に書いてあったんだが……」
「俺にそんな趣味は無ぇ！」
ずれた返答をするゼノヴィアとそれに振り回される一誠は一旦置いておき、シンは改めて召喚された物体を見た。見れば見る程、男性のそれに酷似した相手であるが、元からあるいは召喚の儀式が不完全なせいか体が半液体のようになっており、上から下に垂れるように流れて行ったかと思えば形を戻そうと突然隆起をする。
『グ……ギ……グゴゴ……』
『それ』から声らしきものが洩れるが、殆ど聞こえない上に言葉になっていなかった。
『……もしかしたらこいつは『マーラ』か？』
今まで沈黙を続けてきたドライグが、召喚された存在の正体に心当たりがあったのか口を開く。

「知り合いか？」
『俺もあったことは無いが存在については聞いたことがある。見ての通り特徴のある姿をしているからな、すぐに思い至った。だがこいつは自分で創り出した世界の中に閉じこもっていた筈だが……』
　ドライグは少し考えているのか短い沈黙が挟まれる。
「そんなに凄いのか……アレ」
『一応、神と呼ばれる存在だ』
「神っ！　見た目がアレでもっ！」
『アレでも神だ』
　素っ頓狂な声を出し、信じられないといった様子で一誠はマーラを見る。マーラは魔法陣の中で相変わらず伸び縮みしていた。
『……どうやらマーラはマーラでも少し違うようだな。力が弱すぎる。不完全体どころか、恐らくアレはマーラの力の一部が漏れ出してマーラの形になっているだけのようだ』
「力の一部？」
『ああ、多分あの魔法陣が偶然にもマーラの住む空間と繋がり、そこからマーラの力のみが喚び出されたんだろう。もし本物のマーラだったのなら、今のオレ達ならば一秒も満

たずに終わるはずだ』
　状況を冷静に分析するドライグ。その言葉が本当だとしたならば、もしかしたら召喚した本人ならばこれを逆に送り返すことが出来るかもしれない。そう思いシンはマニーの方を見た。
「マニーさ――」
「なんて、なんて御立派な姿なんだ！　素晴らしい！　美しい！　麗しい！　そしてなりより逞しい！」
　マニーが膝を地面に付き、全身全霊を込めてマーラを崇めていた。その崇め方は尋常ではなく、感極まって感涙しながら激しく崇拝している。
「この日、この時、この瞬間！　ボクは貴方様に出会う為に生まれてきたのですね！　ああ、マーラさまぁぁぁぁぁ！　御立派さまぁぁぁぁぁぁぁ！」
　その余りの心酔っぷりに全員言葉を失ってしまう。
『あのときアーシアたちを後退させたのは正解だったな……』
「え？　どういうことだ？」
『あいつはマーラの魔力によって完全に魅了されている。あいつの姿、もしくは魔力に触れただけで、あいつを心の底から尊敬、信仰、崇拝する信者へと早変わりするみたいだ』

心底嫌な話である。
「あれを崇拝って……まあ、ある種の憧れを抱くかもしれないが……」
「何を言っているんだ、お前は」
「そうだぞ。私の見た本にも書いてあったがでかければいいという訳じゃない」
「悪いことは言わない。その本捨てろ」
『話を戻すぞ。オレ達が影響を受けないのは神滅具や聖剣の加護、そこの小僧は……まあ特殊な成り立ちをしているから影響されないんだろう』
その言葉で一誠の脳裏に恐ろしい未来図が過ぎる。
「――もしアーシアが見たらどうなると思う？」
『十中八九、あの男みたいにマーラを崇め称えているだろうさ。通常の神器では防ぎきれない筈だからな』
「……マジかよ」
ドライグの言葉に一誠は戦慄するしかない。一誠の中で聖域、清純の象徴としているアーシアがあのような卑猥な存在を崇め称える。ただの妄想でもその光景はあってはならないものであり、滝の様な冷や汗が一誠の顔から流れ滴り落ちていく。
『言っておくが魔力の一部のみであれだからな。本体が出てきたら今のオレ達ならば見た瞬間に速攻でアイツの信者だ。それどころかこの周囲、いやこの都市全体が瞬時にア

イツを崇めるようになるだろう。きっと身を粉にしてアイツを祀る為の塔でもつくるんじゃないか？』

想像をしてみる。誰もが疲労困憊でありながらも、顔には喜色と恍惚の笑みを浮かべ、一心不乱となって働き続ける。労働者の口からは愚痴などは吐かれず、出て来るのはひたすら讃える言葉のみ。そしてその中心にそびえ立つはあのマーラ。

地獄絵図以下の光景であり、悪夢という言葉すら生温い。

「あの、もう入ってもいいでしょうか？」

そのとき扉越しから、中に入ってもいいか了承を求めるアーシアの声がする。激しい音を立てていた魔法陣が静まったので、様子を窺っている様であった。

「駄目だ！　アーシア！　絶対にこの中に入っちゃ駄目だ！」

ドライグの言葉もあって一誠はアーシアの申し出を強く拒絶する。だがその言葉の強さが返ってアーシアの心配を煽る。

「ど、どうしたんですか？　そんなに大きな声を出して……今、中はどうなっているんですか、イッセーさん！」

「シーン。アタシたちも入っちゃダメ？」

「ヒーホー。待っているのは退屈だホ」

アーシアに続き、ピクシーたちも中に入りたがり始める。

「悪いがもう少し待ってくれ。今の状態で入られると困る」
「ふーん。分かったー」
「ヒーホー。了解したんだホー。アーシアももうちょっとだけ待つんだホー」
　しかし、シンの言葉を聞いてピクシーたちはあっさりと引き下がり、ついでにアーシアも宥める。その後にピクシーたちとアーシアは数言会話を交わしたが、アーシアも取り敢えず待つこととなり、中に入ってくる事態は一応避けることが出来た。
「それでこれはどうするんだ?」
「退治するしかないだろう。召喚に関しての詳細な知識なんてこの中で持っているのは居ない。唯一持っている人物も……」
「Ｍａｒａ　ｉｓ　ＧＯＤ！　Ｂｅｃａｕｓｅ　Ｍａｒａ　ｉｓ　ＧＯＲＩＰＰＡ！」
　意味不明な英語でマーラを讃えている。気のせいか若干崇拝の度合いがおかしくなっているような気さえした。
「ふむ。力尽くであれば私の得意な方だな」
　ゼノヴィアが詠唱をすると空間の一部が歪み、そこから剣の柄が現れる。それを掴み引き出すと、ゼノヴィアの愛剣にして聖剣デュランダルの剣身が露わとなった。
　そのとき魔法陣の中にいたマーラに変化が起こる。今まで呻き声の様な音を洩らし

ながら讃えられるがままであったが、聖剣の登場と共にその意味の無い筈であった呻きが意味を成すこととなった。

『グギギ……ゴゴゴ……キサマラ……』

呻き声に混じって聴こえるこちらを指す言葉。それが耳に入ると同時にシンたちは一斉に臨戦態勢に移る。

『ゴアアアアアアアア!』

こちらの敵意に反応したのか、明確な意志があるように見えなかったマーラは咆哮と同時に、自重で潰れたような形をしていた姿が一瞬だけであるが元となる姿を彷彿させるように大きく伸び上がる。元々大きな姿をしていたマーラがそれによって何倍も大きくみえるが、同時によりソレっぽくも見える。

だがそんなことを考えている暇も無く、マーラの全身に赤黒い魔力が波打ったかと思えば、シンたち目掛け地を這うようにして濃密な魔力が襲い掛かる。

このとき最初に動いたのはシンであり、残りの二人を護るようにして先に出ると、既に紋様の力によって溜めていた魔力で魔力剣を形成し、這い寄ってくるマーラの魔力に向けて『熱波剣』を放った。

這う魔力と歪む様に迫る魔力。その二つが衝突したかと思えばシンの魔力がマーラ

の魔力を裂き、それによってシンたちを避けるようにマーラの魔力が流れていく。結果的に見ればシンの勝利に見えるかもしれないが、シンの表情は明るくは無い。寧ろ苦みを噛み締めているような表情をしていた。

ほぼ加減無しで放った『熱波剣』であるが、やれたことといえばマーラの魔力の軌道を逸らしたのみ。それだけで殆どの魔力が相殺し尽くされ、マーラ自身にはそよ風程度の魔力波しか届いていない。肝心のマーラの魔力は消えずにまだ現存し続けている。

洩れだした力であるとは言え、やはり神に数えられる存在。そう易々とは事が運ばないらしい。

「ならば今度は私が」

裂けたことで生まれたマーラまでの道を、ゼノヴィアが聖剣を構え駆け抜ける。『騎士』の『悪魔の駒〈イーヴィル・ピース〉』の特性により転生前よりも速度を増し、一足でマーラの懐まで潜り込むと同時に、手に持つデュランダルを一閃させた。

頭部付近から地面近くの部分まで斜めに斬り裂く。魔力で出来た存在故に血を噴き出すことはなかったが、裂かれた部分が大きく開き、マーラの上体が後ろに倒れる。かに思えたが、すぐさま倒れた上体を引き起こし斬られた部分を密着させたかと思えば、瞬きよりも早く接合し元の姿へと戻る。聖剣であるデュランダルで傷付けられたにも関わらず、掠り傷以下と言わんばかりの傷が治る速度だった。

桁外れの再生能力を見せ付けられたゼノヴィアは眉間に皺を寄せると、続けざまに三度ほど斬るがどれも同じ結果となり、三度目の傷が治るよりも先に後退しシンたちの下へと戻った。
「手応えが全く無いな。斬った側からすぐに治ってしまう……ん？　どうした兵藤一誠。内股になっているぞ」
「いや、なんか、見ていたら、こう、何と言うか……」
「感情移入している場合か」
軽く一誠の頭を叩きながら、シンはマーラの動向から目を離さない。そのときシンはマーラを見てある違和感を覚えた。
「――よし！　気を取り直していくぜ！　ドライグ！」
『Ｂｏｏｓｔ！』
音声が鳴り一誠の力が倍加したのを告げると一誠は床を蹴り跳び出す。マーラは身体を脈打たせているが、先程の攻撃には溜める時間が必要なのか、あっさりと一誠の接近を許すどころか回避の為に移動すらしない。
「おりゃあ！」
そこに叩き込まれる『赤龍帝の籠手』の一撃。その威力でマーラの身体が波打ち、撃たれた箇所が大きく凹むも、すぐに膨張し元の形に戻ろうとする。一誠はすかさずそこ

に拳を撃ち続けた。撃ち込まれる度に大きくマーラの体は曲がっていくものの、特に痛がっている様子は無くされるがままになっている。

『どうやらこいつは魔法陣の中でしか動けないようだな』

一切の回避を見せないマーラの様子を見てドライグはそう判断した。ドライグの言った通りマーラの身体は魔法陣一杯に広がっているものの、垂れていく末端は決して魔法陣の外に出ようとはせず、近付く度に縮こまっている。

『自由に動き回られたら厄介だったが、動けないならばでかい的だ。このまま押し切れ相棒。……ところで』

一誠に助言をしていたドライグの声が急に改まる。

『相棒はさっきからなんで左手〈オレ〉でしか攻撃しないんだ?』

ドライグの指摘した通り一誠はずっと左拳のみをマーラに撃ち続けている。それを聞かれ一誠は――

「すまん……すまん！　ドライグ！　もしも……もしもこれが！　女性のおっぱいだったなら躊躇う事無く両腕、いや両足を使ってでも攻撃をしていたさ！　だがな！　これはおっぱいじゃないんだよ！　それどころか男のアレじゃねぇか！　例え死んでも、死ぬとしても素手では触りたくない！　すまない、本当にすまない！　ドライグ、オレの代わりに犠牲になってくれぇぇぇぇ！」

『いや、別に俺は気にしていないからいいんだが……泣く程のことか？』

涙どころか血の涙すら流しそうな一誠の慟哭に、ドライグは呆れながらも寛容さを見せる。

「こんなのを素手で触ったら死ねる！　この状態でも結構がりがり心が削れていく！」

『あ、ああ、そうか』

「そんなことを言っている場合か」

呆れた声を出しながら遅れて飛び出したシンが、前方に居る一誠の背を踏み台にしながら跳躍、マーラの額と思わしき場所を蹴り飛ばす。見事に靴底の跡が刻まれたマーラはそのまま大きく上体を仰け反らした。

「ついでだ」

蹴り飛ばした反動で大きく宙返りをしながらマーラへ開いた左手を向ける。その左手を右手でしっかりと固定し狙いを定めると、蛍光の球弾が左手から射出される。それは仰け反った状態のマーラの胴体に大きな風穴を開けた。

『ゴゴゴ……ガガ……ギギ……』

それでもマーラは損傷に対して堪えた様子も無く、身体を細かく震わしながら仰け反った上体を戻していく。それと同時に開いた穴も縮まっていき、最後には元の姿へと戻っていた。

シンと一誠はマーラが再生を終える前に距離を取る。
「くそ！　不死身かよアイツ」
「……縮んでるな」
『――確かに小さくなっている』
相手の再生能力の高さに焦りと苛立ちを見せている一誠であったが、反対にシンは何か気付いたかのように呟き、ドライグもその呟きによってその何かに気付いた様子であった。
「一体どうした？」
「ゼノヴィアが斬ったときから思っていたが、アイツの身体が徐々にだが小さくなっている」
「マジで？」
『こいつの言っていることは間違いじゃないな。確かに小さくなっている。成程、アイツ自身は魔力の塊に過ぎない。恐らくは再生や攻撃をする度に魔力を消費しているんだろう。その結果、体が小さくなっているんだ』
「――つまりこのまま攻撃したりされたりし続ければ自然とアイツは萎えていくと……」
「その表現は止めろ。……多分、消滅するんじゃないのか」

どれほど時間を掛ければ倒せるのかは分からないが、取り敢えずの目標が出来た一行。だがその一行の前でマーラが再び不穏な気配を見せる。

今度は先程の赤黒い魔力を纏うのではなく、体色と同じ緑色の魔力を纏い始めた。

その姿を警戒する三人。魔力を纏ったマーラが小刻みに震え始め、やがて大きく身体を隆起させると全身から緑色の炎が噴き出した。

「うわっ」

引き攣った声を出し、一誠は大袈裟な程身体を動かして必死な様子で緑色の炎から逃げる。シンも左目を使い、飛んでくる炎の動きから直撃しない位置を見極めて回避した。そしてゼノヴィアは迫り来る炎に向かってデュランダルを振るうが、炎とデュランダルが接触すると炎は包み込むよう剣身に纏わりつく。デュランダルの力でも炎を消し去ることは出来ず燃え盛っているが、そんなことよりも気になったことが、三人にマーラの放った炎が普通の炎でないことに気付かせる。

デュランダルと接触した際に鳴った湿った物体と、壁に叩きつけたような粘着音。明らかに炎が触れて出る音ではない。

その考えが間違っていないと肯定するように、デュランダルに纏わりついていた炎が糸の様な尾をひきながら剣身から地面へと垂れる。よく見れば壁に張り付いた炎が、ゆっくりと炎を広げながら下へと垂れ下がっている。

「何だ……これ……」
　露骨に嫌そうな表情をする一誠の前でゼノヴィアは炎に手を近付ける。
「触るな、ゼノヴィア。ばっちいぞ！」
「不思議な炎だ。燃えているが熱くない」
　手を近づけたゼノヴィアはそのような感想を告げる。確かに炎が触れている床や壁の部分は焦げ跡が出来ているが熱さを感じない。熱くないのに燃える。矛盾しているが、今確かに起こっていることであった。
「しかし、中々取れないな」
　ゼノヴィアはデュランダルに付いたマーラの炎を振って払おうとするが、いくら払っても聖剣から取れない。それを見て、先程回避したことが正解であったとシンは内心思った。張り付いて取れない炎となれば、一度でも付着すればその周囲を切り落とすなどの荒療治をしなければならず、顔などに付けば即致命傷となる。特殊の炎に水などの消火はほぼ効果が無いと思ってもいい。
「このっ」
　そんなことをシンが考えている間に、片手から両手に持ち替えたゼノヴィアは更に勢いよくデュランダルを振るう。いい加減周りに被害が出るかもしれないので咎めようとしたとき、デュランダルの剣身に纏わりついていた炎が剣速に敗けて、糸を引きなが

ら離れていく。
　その軌跡を何となく目で追っていたシンであったが、その行きつく先に気付き一瞬呼吸が止まった。近くに居た一誠も同じく何処に飛んで行くのかに気付き、阻止しようと駆け出し始めるがもう間に合わない。
　べちゃりというあるまじき音を出しながら扉へと付着する炎。そしてその衝撃によって閉ざされていた扉が開く。扉の先には張り付くように中の様子を気にしていたアーシアたちの姿。一誠が制止するよりも先にアーシアたちはマーラの姿を直視してしまった。
「遅かったか……」
「その……すまない」
　これから起こる惨劇を予想しシンは天を仰ぎたい気持ちになる。一誠に至っては今すぐ死んでしまうのかと思える程蒼い顔をしていた。これにはゼノヴィアも反射的に謝ってしまう。
「ア、▪アーシア……？」
　震えた声でアーシアの様子を尋ねる一誠。だが予想に反しアーシアは一誠の声に笑顔で応じた。
「何ですか？　イッセーさん」

「アーシア！　正気――」

「私、イッセーさんと出会ってから色々なことを経験しました。嬉しいこと悲しいこと楽しいことを。人だった時には経験できなかったとても素敵なことを、悪魔に転生してから沢山出会うことが出来ました。そして主の死を知っても挫けずに生きることができたのは、そういった『支え』となる思い出を一杯得ることが出来たからだと思うんです」

「ア、・アーシア？」

いきなり過去を振り返り始めるアーシアに、折角顔色が戻りかけていた一誠の顔が今度は困惑の色に染まる。

「でも私分かったんです。その全ての経験や思い出を経て、一体何の為に生きてきたかということを」

そこでアーシアは浮かべていた笑みを一誠からマーラへと向ける。そしてあろうことか頬を赤く染め、初恋に恥じらう乙女の様な表情を浮かべ――

「今日、この日にこの御立派なお方に全てを捧げる為だったんですね！」

「こんなアーシア見たくねぇぇぇぇぇぇぇ！」

一旦上げてから地に落とされた一誠は頭を抱えて絶叫する。一誠にとって清純の象徴であるアーシアが、あんな卑猥なモノ相手に恋する乙女のような表情を浮かべている

こと自体認めがたい事実であり、例えそれがマーラの魅了する力であっても耐えがたい現実であった。

「ああ……何て大きくて逞しいんでしょう……あれこそが真に信仰すべき御方なんですね……私、目が覚めました！」

「心が……心が死んでしまいそうだ……！」

『おい！　気をしっかり持て相棒！　このままだと本当にオレが使えなくなるぞ！』

気力を根こそぎ奪われた一誠を何とか励ますドライグ。そんな一誠を余所にアーシアは軽やかな足取りでマーラの下へと走り去っていく。

「イエー！　マーラ！　イエー！」

「ヒーホー！　王様よりも御立派様だホー！　オイラも将来御立派様になるホー！」

いつの間にかピクシーとジャックフロストも魅了されており、マーラの側でマニーと仲良く一緒にマーラを讃えている。

「Ｉｓ　ｔｈｉｓ　ａ　ｐｅｎ？　Ｎｏ！　ｔｈｉｓ　ｉｓ　Ｍａｒａ！　Ｍａｒａ　ｉｓ　Ｇｒｅａｔｅｓｔ！」

新たな信者を加えたことによってマニーの熱狂も増していく。そのせいか讃える言葉も支離滅裂で意味不明なものへと化していく。

「こんなことになるとは……私の不注意で……！」

「……まあ、気にするな」

悔やむ様子のゼノヴィアに、シンは一応軽い慰めの言葉を掛ける。シンも仲魔を奪われた状態であるが、あの様な姿を見ていると怒る気力も湧かない。それに気付いたことであるが、あのマーラが攻撃の対象としているのはマーラに対して敵意を向ける相手のみらしく、先程から広範囲を攻撃しているが敵意の無いマニーには攻撃の対象外として避けている。この戦いにおいてはマーラに魅了された状態の方が、戦闘能力が皆無に等しいアーシアや低いピクシーたちにはとってはある意味で安全であった。

『マーラ！　マーラ！　マーラ！　マーラ！　マーラ！』

魅了された状態の全員から送られるマーラコール。そのコールに合わせてマーラも左右に揺れたり伸び縮んだりしている。滑稽というよりも、シュールと表現していい空間が地下室内に広がっていく。

「間薙いいいい！　ゼノヴィアァァァァァ！」

今まで悶絶していた一誠がいきなり顔を上げ二人の名を叫ぶ。その顔は今にも血管が千切れそうな程鬼気迫るものであった。

「一秒でも早く、あの卑猥物体からアーシアたちを解放する！　ドライグ！　アレが消えたらアーシアたちも元に戻るんだろ！　そうだよなッ！　そうだと言ってくれッ！」

『あ、ああ。恐らくな……魅了状態から解放される筈だ……』

必死過ぎる一誠の様子に若干圧倒されるドライグ。ドライグの言葉を受けて一誠は雄叫びを上げる。

「この公然猥褻物野郎ぉぉぉ！　よくもアーシアに卑しい台詞を吐かせてくれたなぁぁぁ！　あの、あのアーシアがあんな言葉を……何でよりにもよって、てめえなんかに向かって言わされてるのを見なきゃいけないんだッ！　それならいっそのこと俺の方が言われたいわッ！」

心底悔しそうに言いながらもその心の底からの本音による怒声に比例し、神滅器から放たれる魔力が増大していく。

『この力の増加は……！　気になっている女が卑猥な台詞言わされたぐらいでここまで感情が爆発するのか……！　――色々と馬鹿すぎるぞ！』

「お前は絶対この先苦労すると思うぞ」

一誠のあまりに馬鹿馬鹿し過ぎる理由での力の増加に、ドライグは改めて宿主である一誠に戦慄を覚え、その二人の様子を見てシンは不吉な予言をする。

マーラも一誠の激しい怒りと敵意を向けられたことで信者たちと戯れるのを止めて、その体に再び赤黒い魔力を充填させていく。マーラの身体が赤黒い魔力光で満たされていく度にその身体は縮み続け、最初の頃と比べると既に二回り以上小さくなっている。

「神様がなんぼのもんじゃぁぁぁ！　そうだろ！　間違！　ゼノヴィア！」
「ま、まあ。そうだな」
「……」
　感情が振り切れている一誠の問い掛けに少し付いて行くことが出来ないのかゼノヴィアは戸惑いが混じった返答をし、シンに至っては最初からその勢いに付き合うつもりはないらしく沈黙をしていた。
『グゴゴゴゴゴ……！』
　地響きのような咆哮を上げ、マーラの全身から赤黒い魔力の波が放たれる。最初のときのようにシンが『熱波剣』で軌道を逸らそうとしたが、それをゼノヴィアが制止しシンのように前方へと出る。
「こういった禍々しい魔力が相手ならばデュランダルの方が相性がいい」
　ゼノヴィアは手に握るデュランダルを床へと突き刺す。すると剣身が輝き赤黒い魔力の波に対抗するように眩い閃光が下から噴き上げる。閃光と赤黒い魔力が接触すると互いに互いの色を塗りつぶす様に混じり合い最終的には無となって消えていく。干渉しあった結果による消滅であった。
「今だ」
　デュランダルの力によりマーラの攻撃を完全に消し去ったことで開かれるマーラへ

の道。一度攻撃を行えば力が溜まるまで無防備を晒すマーラに攻撃を加える絶好の機会である。

爆発した感情で『赤龍帝の籠手』からドラゴンの力を引き出した一誠は、倍加が続いている状態で両手を合わせ、魔力をそこに込める。シンもまたマーラへ左掌を向け、何処となく一誠と似た構えをとった。

「一気に行くぜ！　合わせろよ、間薙！」

「タイミングはお前に任せた。いつでも準備は出来ている」

一誠の合わせた両手の中に赤い魔力が収束され、突き出したシンの左掌には蛍光の魔力光が充満する。

「とっとと元の持ち主の下へ帰りやがれッ！　この御立派野郎ッ！」

突き出された一誠の両手から放たれる赤い魔力の波動。そしてシンの左掌から繰り出される蛍光の魔弾。シンの光弾はマーラの頭部を吹き飛ばし、その破片を魔法陣内に四散させ、胴体に直撃した一誠のドラゴンショットは根元からマーラの胴体を突き破り、上体と下体へと分割させ元の形から大きく破壊した。

だが破壊された頭部の破片は個々に意志があるかの様に、床を活き活きとした様子で這いずり千切れた上体へと吸収され、床に根付いているかの如く動いていない下体は断面部が勢いよく伸びると横たわる上体の断面部と癒着し、そのまま引っ張って起こすと

元の場所へと納めた。
「マジで不死身だなこいつは……」
「だがかなり消耗したみたいだな」
　折角の大技でダメージを与えてもまるで無かったことのように再生するマーラを見て、呆れたように呟く。しかしシンの言っていることも正しく、攻撃と再生に大量の魔力を使ったせいもあってその身体は更に小さくなっており、最初は見上げる程の大きさであったマーラも目線を下げる程の大きさになっていた。
『せいぜいあと一発でも食らわせれば魔力の消耗も合わさって自滅するだろうな』
「なら！」
　ドライグの言葉を受け、一誠は止めを刺すべく構えるとその場から大きく踏み出した。マーラまでの距離は数メートルあるも、強化された一誠の身体能力ならば二歩ほどで辿り着く距離である。
　一歩目で加速し、二歩目で更なる速度を加え、その勢いのままマーラを殴り飛ばそうと考えていた一誠は、予定通りに二歩目を踏み込む。
　だが、ここで想定外のことが起こる。
　何度かあったマーラの魔力による衝撃、それを迎え撃ったシンの『熱波剣』やゼノヴィアのデュランダルの力。これによって地下室の床はかなりのダメージが蓄積されてい

た。そしてそこに加わる一誠の強力な踏み込み。これによって起こる事態は――

「へっ？」

一誠の身体が突如前のめりになる。一誠はこのとき気付いてはいなかったが、背後で見ていたシンとゼノヴィアは一誠が踏み込んだ拍子に床が破損し、それに躓くのを見ていた。

躓いた一誠の身体が生み出された加速によって投げ出されていく。矢のような勢いで低空を飛ぶ一誠の向かう先にあるのはそびえ立つマーラの姿。

『あっ』

それは誰が発した声なのかは一誠には分からなかった。何故なら迫り来る最悪の結末を前にして一誠の脳が現実を拒否し、逃避するように勝手に走馬灯を流し始めていたからである。

幼い頃の自分、まだ若かった父と母、色々と訳合って他人よりも早く性に目覚めた少年時代、思春期特有の持て余す力に鬱憤としていた中学時代、そして大きな出会いと変化のあった高校時代、特に思い出すのがリアスの――

そこまで考えたとき顔面に伝わってくる今まで感じたことのない触感。それが何なのかと認識するよりも早く、脳が危機を感じて無理矢理意識を断ち切る。

『生温かい』

それが意識が途切れる前に一誠の中で最後に残った記憶であった。

◇

「――さん。マニーさん」

名を呼ばれ誰かに体を揺すられていることに気付き、マニーはいつの間にか閉じていた瞼を開く。初めに目に入って来たのは天井。そこで自分が仰向けになって倒れていることにも気が付いた。

「おやおや?」

身体を起こしたマニーが周囲を確認する。儀式に使っている地下室はこれでもかというぐらい破壊されており、壁や床には無数の罅割れ、儀式に使用した道具一式は全部二度とは使えない程に壊されていた。

「気が付きましたか」

まだはっきりとしない思考で声の方に目を向ける。そこにはシンが立っていたが、何故かその背には白目を剥いて気絶している一誠が背負われていた。

「あー、どうなったんだっけ……ボクは失敗しちゃったってことでいいのかな?」

魔法陣から何かを喚び出したまでは記憶に残っているが、それ以降の記憶が殆ど無

い。唯一覚えていることがあるとすれば、何やら物凄いモノの前ではしゃいでいたという記憶ぐらいであった。

「まあ、そうですね。ですが一応依頼の方は完了しました」

何があったかは深くは言わず事務的な対応でシンは契約の完了を告げる。マニーの方も怪我の無い身体を見て護衛はきちんとこなされていたのだと思った。前にも似たようなことがあったときは病院のベッドの上で目を覚ましていたので、そのときに比べれば遥かにマシである。

「ちょっと待っててね」

そう言ってややふらついた足取りでマニーは立ち上がり、着替えをしていたときに入って行った扉の中にもう一度入って行く。その途中、アーシアとピクシーたちの姿が横目に入って来たが、どういった訳か今のマニーと同じく寝起きの様な表情をしている。

マニーが扉に入ってから数分後、その手に分厚く年季の入った表紙の本を持って戻って来た。

「はいこれ」

それをゼノヴィアに手渡す。するとシンたちの足元に転送用の魔法陣が浮かびあがった。それは渡されたものが提示した代償と吊り合っていたことを示す帰還用の魔

法陣である。

「最後に聞きたいんだけどさ。ボクが喚び出したモノってどんなのだった？」

魔法陣から出て来る光に包まれていくシンたちにマニーは肝心なことを聞く。

聞かれたシンは余り思い出したくないのか、少しだけ表情を顰めた後にこう答えた。

「凄く立派なものでしたよ」

皮肉混じりに聞こえる答えを言った直後、シンたちは魔法陣の中から姿を消し、魔法陣も消失した。

一人残されたマニーは瓦礫だらけの地下室で腰を下ろし暫し呆けたように動かなくなる。だが何かに気付いたのか衣服の中に手を伸ばした。出てきた手にはマナーモードで震動する携帯電話が握られている。

液晶画面に映った相手の名を見て通話ボタンを押す。

「やあ、君か」

電話の向こうの人物と親しげに会話し始める。

「儀式？　うん半分成功半分失敗と言った所かな？　良い線は行っていたとは思うけどまだまだ改良の余地はありだね。これからも精進しなきゃね。え？　ボクに君の手伝いをしろっていうのかい？　前にも言っただろうボクは根っからのアナログ派で君みたいなデジタル派じゃないんだ。旧いものに魅力を感じるのさ、ボクは。まあ、君のや

ろうとしていることにも魅力を感じるけどね。でも最初に成功するのならばそれはきっと君の方が最初だろうね。だって君は天才だから」

マニーはニヤリと笑いながら電話越しの相手の反応を窺う。

「謙遜するなよ。それじゃあ、ボクはまだまだすべきことがあるんでここで切らせてもらうよ。またね、スティーブン」

通話相手の名を言ってからマニーは電話を切るとその場で大きく背を伸ばした。

「さーて！　次はどんな方法で喚び出そうかなー」

◇

次の日の放課後。オカルト研究部の部室では、昨晩シンたちが手に入れた報酬の本を眼鏡を掛けたリアスが目を通していた。

リアス曰く入手した本は、古今東西ありとあらゆる悪魔や怪物、精霊、妖精などといった、この世ならざる存在についてを文章や絵で詳細に説明した貴重な資料であり、扱っている内容が内容だけに当時は危険視され、焚書により殆ど現存していないと言われる作者不明の謎の本『悪魔全書』と呼ばれるものらしい。

そんな本を所持していたマニーは何者か、と考えられるがこれもリアスからシンたち

が聞いた話であるがマニーという男、悪魔の中では悪い意味で有名らしくブラックリストにも載っている程の契約者だという。

本人自身には悪気は無く報酬の払いもいいが、マニーのすることに巻き込まれた悪魔の多くが多大な被害を被っており、その為悪魔から出禁ならぬ呼禁を受けている唯一の人間であるらしいが、あの手この手を使ってはその禁止の網を掻い潜り、悪魔たちを巻き込んでは騒動を起こしているという。

そのことを聞かされて改めて自分たちが無事戻って来たことの幸運を噛み締めた――と言いたいところではあるが、この件に関しては一人深刻な傷を負っている人物がいる。

「ねえ……本当にイッセーは大丈夫なの？　戻って来てからずっとあの調子よ？」

本に目を通していたリアスは顔を上げ近くにいるシンに小声で尋ねる。

「……今は放っておきましょう」

部室に置かれたソファーの上で一人体育座りをしている一誠が、死んだ魚のような目をしたまま動かず、時折何かを思い出しては涙を流している。

「放っておいても大丈夫なんでしょうか……？」

「昨日からずっとあんな感じだよ？」

「……色々と死んでいます」

朱乃、木場、小猫がそれぞれ気遣うが、本人があまりに昏く塞ぎこんでいるので、下手に慰めることも出来ない。
「本当に覚えていないの？　アーシア」
「……ごめんなさい。本当に何も覚えていなくて……気付いたらイッセーさんは気絶していて目を覚ましたらずっとあの調子なんです……私が覚えていることといったら何か凄いモノを見たというぐらいで……」
「うーん、アタシも何も覚えていないんだよねー」
「ヒーホー、オイラも全く覚えてないんだホ……」
アーシアとピクシーたちは首を傾げながら昨日のことを何とか思い出そうとするが、その部分だけは穴が開いたように思い出すことが出来ずにいた。
「シンたちも何か思い出せない？」
リアスの問いにシンは一瞬だけゼノヴィアに目配せをした。
「――いえ、全く」
「……残念だが私もだ」
両者口を揃えて思い出せないという。
だがそれは嘘である。本当は何があったのかをしっかりと覚えているが、一誠の名誉の為にもこのことは黙っていることと決めて口裏を合わせていた。

言える筈など無い。巨大なアレに顔面を盛大に押し付けたなどという事実は。シンはこのことを墓場まで持っていく秘密とした。

『まあ……あれだ……月並みな言葉だが元気を出せ』

独り静かに泣く一誠に、相棒であるドライグが慰めの言葉を掛ける。

「俺……俺……汚れちゃった……」

そう呟き一誠は静かにまた泣いた。

停止教室のヴァンパイア編

会議、馬鹿

「皆も知っての通りだが今度の三勢力の会談、新しく『禍の旅団〈カオス・ブリゲード〉』へと加入した旧魔王派が宣戦布告を兼ねて強襲をするみたいだ」

学生服の上に漢服を羽織るといった少々変わった格好をした黒髪の青年が、集まったメンバーへと告げる。

「ついては俺達にも手を貸せと言ってきた。そこで皆の意見を聞きたいのだが？」

「皆と言うがレオナルドの姿が見えないが？　あと新入りたちの姿も」

漢服の青年に質問をしたのは白髪の整った容姿をした青年。黒髪の青年とさほど年齢は離れておらず、腰には剣と鞘が納められていた。

「彼ならばマザーと一緒に出掛けているよ。彼は片時もマザーと離れたくないみたいだ。一人は研究室に閉じこもって、もう一人はそれの手伝いだ。あと一人は何処に行ったのかすら分からない」

白髪の青年の質問に答えたのは、こちらも制服にローブという出で立ちをした眼鏡を掛けた青年。眼鏡の青年の答えに納得したのか白髪の青年は頷き、話を戻す様に促し

た。
「それで話は戻るがどうする？」
「俺は反対だな。新参者の奴らなんぞにわざわざ手を貸す義理もねぇ！　どうせ自分たちの立場をみせびらかしたいだけだ。くだらねぇ、関わるだけ時間と労力の無駄だ！」
「私も反対。こっちはまだ人材集めに忙しいし、別に会談を襲うのは旧魔王派の人達の好きにやってと思うけど、別に私たちが力を貸す理由は無いわ」
　反対意見を出したのは大柄の青年と金髪の女性である。大柄の青年の方は、衣服越しでも筋骨隆々と分かる程鍛えられており、纏う服が筋肉によって張り詰められていた。金髪の女性は大人と子供の狭間に立つような艶やかさと無邪気さを兼ねた容姿をしており、うっすらと浮かべる微笑みは実年齢よりも若く見える。どちらも年齢がさほど離れていない。
「ここで旧魔王派に貸しを作っておくのも一つの選択だが、彼らの動向を見ると『禍の団』も自分たちの復権の為の足掛かりに過ぎない印象を受ける。ここは放っておいて三勢力と争わして消耗させるのも手だ」
　眼鏡の青年の意見に他のメンバーは同意を示す。
「それも手だね。今はまだだけどいずれ『彼ら』も『禍の団』に入ってくる。主導権を握るには少しでも他の派閥を消耗させておかないといけないね」

白髪の青年の差す彼らという言葉を聞き、黒髪を青年は軽く笑う。
「出来ればこっち側に取り込めれば良かったが、あの性格を見るとどうやら無理そうだ。まあこちらの邪魔をしなければ放っておいてもいいかな」
『彼ら』についての印象を述べ、取り敢えず放置する考えを示す。特に反対の意見は出ずその方針でいくことが決まり、旧魔王派の要請も無視するという形になったとき、一つの声が奔る。
「その会談、拙僧が出よう。よいな?」
年月を感じさせる老人の声。皆が一斉に声の方へと顔を向けた。光の無い闇の中、姿は見えないが、声だけが闇の中から聞こえてくる。
「本気か? 参戦してもあなたには何も得など無い。無意味に奴らを調子づかせるだけだ」
「得る物などなくとも構わぬ。全ては仏の導くまま」
一室に涼やかな鐘の音色が響く。ただ聞くだけでありとあらゆる負が浄化されるような心地良い透き通る音であった。
「宣戦布告どころか奴らを潰すのか、じいさん。そのつもりなら俺も手を貸してやってもいいぜ」
「はいはい。おじいちゃん、私も!」

意気込む大柄な青年と金髪の女性。その二人の意志を受け、闇から押し殺した笑いが漏れてきた。
「カカカカ。その心配り感謝致すがあくまでワシ一人で充分じゃ。構わぬな？」
再度漢服の青年に尋ねる。漢服の青年は顎を指で触れ、考える仕草をした後に闇へと問い返す。
「あなたがどう動こうがオレが止める権利などないさ。ただ聞きたい。旧魔王派の要望を受ける真意を」
「彼奴らのことなど微塵も関係ない。ワシがあの地へ行くための理由、ただそれが欲しいだけじゃ」
「あの地……そこに何があるというんだ？」
闇はしばらく沈黙した後にこう答えた。
「新たに目覚めた『同類』の顔を一目みたくなってのう」

◇

「ちっ！」
匙が腕を振るう。振るった腕には相手の力を奪う能力を持つ『黒い龍脈〈アブソーブ

ション・ライン〉』が装着されており、愛らしいトカゲの形をした手甲からは三本の黒いラインが、それぞれ鞭の様にしなり対象へと迫る。

その複数のラインの先に立つのはシンであり、その右手は悪魔の力によって紋様が輝き、同時に左眼もまた似た光を放っていた。

シンは不規則に動くラインを左眼で視ると、その場から踏み出す。頭部目掛け襲い掛かるラインは首を傾けて簡単に躱し、胴体を狙った二本目のラインは、移動しながら身体の向きを正面から側面に向けることで狙いを外させた。そして腕に絡みつこうと蛇のように巻き付いてきた三本目は、巻き付く直前に腕を引き、紙一重と言えるタイミングで避ける。

三本のラインをあっさりと避けられた匙の顔は驚きに染まるが、その間にもシンは間合いを詰め続ける。

そしてシンが腕を伸ばす距離まで詰め寄り右手を突き出そうとしたとき、匙の驚きは一変し僅かに口角を吊り上げる。すると回避された三本のラインは一斉に向きを変え、シンの背後から襲い掛かる。

前方に注意が向けられた状況を狙っての奇襲。匙は直撃を確信した次の瞬間、シンはそれを予期していたかのように強く踏み込み、匙との距離間を一気に縮めると、『黒い龍脈』が装備された腕を掴み取り、それをあらぬ方向へと無理矢理振るう。

腕を捻られたことでラインの軌道がずれ、三本ともシンの側を通り抜けていくが、最初から分かっていたかのようにシンは見向きもせず、そのまま匙の踵を蹴り払う。
「いっ！」
匙の身体が宙へと浮く。体全体に掛かる浮遊感。だがそれもシンが匙の胸に手を押した次のときには霧散し、今度は背中から突き抜けていくような衝撃が奔った。
「かはっ！」
浮いた体を地面へと叩きつけられ、その威力に肺が痛み空気が意識せずとも吐き出され、後頭部を地面にぶつけたせいで目の前に火花が散る。
それでも立ち上がろうとする匙であったが、眼前に勢いよく突き出された何かと、それによって巻き上がる前髪に、体は硬直しそこで動きが止まってしまう。
目の前で止まったものが、寸止めされたシンの拳であることをそのときになって気付いた。
「――参った。降参」
悔しそうに溜息を吐きながら匙は負けを認め、その証として神器を消し両手を上げる。それを見たシンは突き出した拳を開き、そのまま倒れている匙に向けて手を差し伸べた。
「兵藤と同じくらいに悪魔の力を手に入れたっていうのに、やっぱ強いなお前」

負けたことに対する悔しさを感じさせながらも相手の実力を素直に認め、暗さの無いすっきりとした態度で匙は差し伸べられたシンの手を掴み、服に付いた汚れを払いながら立ち上がる。
「そこそこ死線のようなものを歩いている成果かもな」
謙遜するわけでも無く素直にその言葉を受け入れる。言っていることは間違いでは無く、シンは悪魔の力を手に入れてからは頻繁に命のやりとりをしていたし、つい最近も死に掛けたばかりである。
「オレも会長の特訓とかで結構死にそうな目に遭わされているんだけどな……もっと死に掛けないと駄目なのか……」
ソーナとの特訓を思い出したのか匙の表情は蒼褪め、身震いを起こしている。余程恐ろしい記憶であるらしい。
シンは制服から携帯電話を取り出し、時間を確認する。液晶画面に映る時間は決められた時刻に迫るものであった。
「そろそろ行くぞ。遅れる」
「あれ？　もうそんな時間か」
匙も現在の時間を確認して、少し焦った声を洩らした。もう間もなく生徒会室で仕事を始める時間となる。

シンがソーナとの契約で生徒会役員『補佐』という仕事に就いてから、それなりの時間が経過していた。

シンが行うことは文字通り生徒会役員を補佐する仕事であり、簡単に言ってしまえば雑用である。指定された用紙のコピーや荷物の運搬、資料の整理など、急ぐ必要は無いがあまり人員の割けない仕事を主に行っている。それと同時にリアス達の悪魔の仕事を補助しているように、ソーナ達の悪魔の仕事の手伝いも行っている。

そして今まで匙としていたのは、匙からの要望で実戦形式の特訓である。幸か不幸か、現在のソーナの眷属は殆どが女性で構成されており、男性は匙しかいない。こうなってくると色々と不都合なことが発生する。

その一つが、今シンと匙で行った一対一での訓練である。匙自身フェミニストという訳では無いが、根っからの性格故か顔見知りの女性相手に本気で戦うことが中々出来ず、いまいち訓練の成果が上がらないという。匙もそれが失礼なことであると自覚しているものの、いざ始まってしまうと気付いたら加減をしていることが何度かあったという。

このまま身にならない訓練を続けても駄目であると匙は考え、どうにかしなければならないと思ったときシンの生徒会入りを知り、シンに頼み込んで生徒会での時間の合間に実戦訓練の行う時間を設けてもらっていた。このことは一応ソーナにも許可を貰っ

ている。
場所は旧校舎付近にある開けた土地であり、そこならば一般生徒はまず踏み入れない。
しかし、いざ訓練が始まると匙にとって予想外なことがあった。
シンが匙の思っている以上に強かったのである。
コカビエルとの戦いを生き延びた点からそれなりの実力があると踏んでいたが、最初の特訓では容赦無く叩きのめされ、十秒で地面に崩れ落ちていた。兎に角攻撃が当たらず、こっちの頭の中が見えているのではないかと思える程軽々と回避される。特訓が始まってから匙は一度も、シンに攻撃らしい攻撃を与えたことはない。唯一、闇雲に振るった指先が服を掠めたことがあったが、それは避ける必要もないという判断だったものらしく、その直後に脳天に拳を叩きつけられ、眼球が飛び出すかと思うような痛みを経験した。
正直、同年代の相手に手も足も出ないという事実に、屈辱を感じなかったと言えば嘘になる。一般人ならばそのまま腐ってしまうかもしれないが、匙は持ち前の精神力で何としてでもシンを超えようと努力し続けており、結果的には今まで以上にソーナの与えた訓練等をこなす様になっていった。
匙は知らないが、このことに関してはソーナも密かに喜んでおり、密かにソーナから

シンは礼の言葉を受け取っていたが、この事実は隠す様に言われている。知ったら気が緩むかもしれないという理由で。

シンと匙は先程の訓練での改善点の意見を交換しながら生徒会室へと向かう。

「止まれよ」

曲り角へと差しかかったときシンは足を止めて、隣にいる匙にそう注意する。

「え？」

いきなりそんなことを言われた匙は、顔をシンに向けたまま先に歩いてしまった。すると軽い衝撃が体に走り、小さな悲鳴が上がる。

顔を戻した匙が見たのは、曲がり角から現れた女子生徒が転倒していく姿であった。日直かあるいは掃除の当番であったのか、手には花瓶を持っていたらしく、転倒した拍子に手から離れて、宙にその中身を溢そうとしていた。

このとき匙は転倒していく女子生徒へと手を伸ばす。女子生徒が尻餅をつく寸前にその手を掴み引っ張りあげる。

「悪い。前を見ていなかったせいで」

起こされた女子生徒は、金髪の匙に一瞬怯えた様な表情はしたものの、助け起こされたことから見た目通りの人物ではないと判断したのか、おずおずといった感じで礼の言葉を言う。

「あ、ありがとうございます……こっちも不注意でした……あっ」
そこで自分の両手が空いていることに気付いた女子生徒は、慌てて花瓶が何処にないか探す。視線が床の方を向いているのは、既に割れてしまっていると考えているからであった。
「探し物はここにある」
視線を下げていた女子生徒はその声で視線を戻す。すると放り投げてしまった筈の花瓶がシンの手の中に握られていた。
「どうぞ」
「え！　あ、はい」
花瓶を手渡された女子生徒は、狐に抓まれたといった表情で、渡された花瓶を見回していた。床にも水は零れておらず、花瓶にも罅割れなどない。
「じゃあ。悪かったな。時間取らせて」
「あ、いえ」
匙が詫びの言葉を言ってその場を離れる。シンもまた軽く頭を下げて匙の後を付いて行った。
女子生徒は戻るのが遅くて心配して様子を見に来た同級生が来るしばらくの間、首を傾げながら頻りに花瓶を眺めているのであった。

「物凄いことするな、お前」
場を離れてから少しして、先程のことを思い出しながら匙はやや呆れた様子でシンを見た。女子生徒は見ていなかったが、匙はあのとき何があったのかをしっかりと見ていた。
花瓶が宙を舞い、その口から花や水を外へと放出していたとき、シンはその花瓶は宙で素早く掴むとそのまま花瓶を動かし舞う花を納める。通常ならばそれだけでも離れ業であるが、シンはそのまま身を低くすると、床に向かって降り注ぐ水の塊を花瓶を巧みに扱い、中へと納めたのである。
この間、数秒の出来事である。
匙は自分には出来ないことをやってのけたシンを褒めるが、シン本人は特に照れることなくは無く。
「これで大道芸が出来るな。食うに困る心配が無くなった」
さらりとそんな冗談を口にした。
そしてそのまま生徒会室前へとやってきたとき、シンにある変化が起こる。生徒会室の扉を前にして、ドアノブに手を伸ばした状態で突如として固まったのだ。
「どうした？」
その姿を見て心配そうな声を掛ける匙であったが、今のシンの耳にはその言葉が入っ

て来ない。正確に言えば聞く余裕が無かった。
扉の向こうから感じる桁違いの存在感。この階に来るまで気付きはしなかったが、近くまできてようやくその巧妙に隠された力を感じ取ることが出来た。気配は三つ、そのどれもが遥かに自分を上回っている。
何故、そんな力を持った存在が生徒会室にいるのかは分からない。だが、少なくともこの学園を襲うつもりで来たのではないとシンは推測する。でなければ、この三つの気配が来た時点で学園は壊滅している筈であるから。
意を決し、シンは扉を開く。
するとそこには見覚えのある人物が二人と、初めて見るが何処か既視感を覚える紅髪の人物が、ソーナと会話をしていた。
銀髪にメイドの格好をした美女、ライザーとのいざこざのときに出会ったグレモリー家に仕え、現魔王の『女王』を務めるグレイフィア。そしてもう片方はグレモリー家の護衛を務め、以前見たときは胴当て、籠手などの軽装備を纏っていたが、今は灰色のスーツを着た青年セタンタ、どういう訳か青地のマフラーだけは外してはおらず、もう夏だというのに顔半分を隠す様に巻いている。
「やあ、君が間薙シン君だね？　こうやって顔を合わせるのは初めてだが、君のことはあの子たちから聞いているよ」

にこやかであるが威厳、カリスマなど、他者が見惚れ、あるいは畏怖するような存在感を纏ったスーツの青年。グレイフィアの存在、セタンタの存在、見覚えのある紅髪、あの子たちという言葉、そして自分が面識の無い存在。それらの欠片を繋ぎ合わせると答えは一つしかない。

「リアス部長の兄――『サーゼクス・ルシファー』様でよろしいでしょうか？」

「ああ、その通りだ。君とは一度会ってみたかった」

シンがその名を口にした途端、匙は唖然とした表情をした後、否定をしない相手を見て反射的に跪こうとするが、苦笑を浮かべたサーゼクスがそれを制する。

「今日はプライベートで来ているから畏まる必要ないよ。間薙くん、君も様付けで呼ばなくてもいい。君は悪魔ではないんだからね」

気さくな様子で喋りかけてくるサーゼクス。以前ピクシーやジャックフロストが、魔王であるサーゼクスに世話になったとき優しくしてもらったと後日聞いたが、確かに纏う雰囲気は上に立つ者特有のものを感じるが、態度は親しげなものであった。

「ご無沙汰しております。間薙様」

「あれから日数が経ちましたがお体は大丈夫そうですね。左眼も完治したみたいですし」

グレイフィアが丁寧にお辞儀し、セタンタはシンの身体を気遣う。セタンタが指摘し

たようにシンの左眼は完全に回復しており、低下していた視力も元に戻っていた。
　こちらこそと言ってシンも頭を軽く下げる。畏まる必要は無いと言われたが相手の態度にこちらも触発され、何となく丁寧なものとなってしまう。
「……それでサーゼクスさ――んは今日はどういった用件で？」
「これだよ」
　サーゼクスはスーツの内側から一枚のプリントを取り出してシンへと渡す。そのプリントにはこう書かれていた。
『授業参観のお知らせ』
　しばらくそれを黙って見ていたシンは顔を上げサーゼクスに――
「本気ですか？」
　――と問いたい衝動に駆られたが、どう見ても大真面目な表情をしているサーゼクスの顔を見てその言葉を寸前になって飲み込み、代わりに目線をサーゼクスの側に居るグレイフィアたちに向けた。
　向けられた視線の意図を察した上でなのかそれとも気付いていないのか、グレイフィアとセタンタ両者とも無表情を貫く。
（……まあ、それほどまでに妹思いなんだろう）
　例え魔王という身分にあろうとも身内のことを思う。外野が聞けばあれこれ文句を

言ってきそうであるがシン個人としては嫌いでは無い、寧ろ好ましいともいえる。
「とは言ってもこの授業参観は偶然が重なった結果なのだけどね」
「偶然？」
「そのことについてはリアスたちも交えて話そう。すまないが彼を借りてもいいかい？」
「ええ。今日はさほど忙しくありませんので構いません。間薙くんもよろしいかしら？」
「仕事が無いのであれば」
「なら決まりだ」
　サーゼクスはその場で指を鳴らす。するとシンの視界が溶ける様に流れていき、次の瞬間には見覚えのあるオカルト研究会の部室へといた。
「相手は堕天使の総提督。下手に接することも出来ないわね」
　既に部室にはシン以外のメンバーが全員揃い、皆が皆深刻な表情をして話し合っている。会話に神経を注いでいる為か、音も無く現れたサーゼクスたちやシンの姿に誰もが気付かずに話を続けようとしている。
　だがその中で、シンが邪魔になるからとオカルト研究部部室に置いてきたピクシーとジャックフロストが真っ先にシンたちの存在に気付く。二人が会話の輪に入れずに暇

そうにしていた為であるが。
「あーシンと――」
「サーゼクスだホー！」
「やあ。二人とも元気そうでなによりだ。ジャックフロストくん、あれから王様になる勉強は続けているかい？」
「ヒーホー！　オイラは王様に一歩一歩近づいて居るホー！」
「それはよかった」
　ピクシーとジャックフロストの声を聞き、皆が一斉にサーゼクスたちの存在に気付く。
「お、お、お、お兄様！」
「やあ、我が妹よ。しかしあまり感心しないな。年頃の娘が眉間に皺を寄せて険しい表情をしているのは」
　突然現れた実兄であるサーゼクスにリアスが目を丸くして驚く。リアスにしては珍しい表情であった。
　朱乃たちは反射的にその場で跪こうとするが、そこで何故かサーゼクスたちと一緒に居るシンの姿を発見し、その動きを中断した。
「グレイフィアはいいとしてセタンタまで……というか何故シンも一緒に居るの？」

「……私は来る気は無かったのですが、事情があって……」
「――ここに来る前に会ったので」
シンは淡々と説明し、セタンタは何処か乗り気ではないといった口調で事情を説明する。
「それにしてもアザゼルが既にこの町に来ているのか。思っていた以上に早い来訪だな。口振りから察するに誰かが接触でもしたのかい？」
サーゼクスの登場にリアス達がやや浮き足立っている中、この状況を招いた本人は至ってマイペースを貫いている。そんなサーゼクスのペースに乗せられたのか、リアスは戸惑いが抜けきらない様子で昨日あったことを話す。
リアスの話では昨晩、アザゼルが一誠の契約相手として接触があったという。先程までそのアザゼルの意図について話し合っていたらしい。シンは数日前に一誠から、かなり払いの良い契約相手が出来たという話を聞いていた。それがアザゼルだとしたら、素性を隠した状態で何度も一誠を契約相手として呼んでいるということとなる。
「いくらこの町で三勢力の会談が執り行われるからといって私の縄張りに無断で侵入したあげく、私の眷属にちょっかいをかけるなんて――！」
「そう深刻に考える必要はないさ。アザゼルという男は昔から人をからかったり悪戯したりすることがあるからね。それに赤龍帝――兵藤一誠くんと接触したのも考えが

あったのだろう」
「考え？　……というよりもお兄様はどうしてこの学園にいるのですか！　魔王という仕事はそんなに簡単に放り出せるものではありませんわ！」
　サーゼクスの調子に流されていたリアスであったが、ようやくここで本題へと話を戻す。
「安心しなさい。仕事を放って来た訳では無い。寧ろ私は今も仕事をしている。私がこの学園に来た目的はここで行う三勢力の会談。その下見を行っている。ことについてはシトリー家の彼女には話し済みだ」
　寝耳に水な話である。三勢力が会談を行うことは聞いていたが、まさかこの学園で行うとは思わなかった。というよりも先程生徒会室で聞いたときは授業参観が目的だと言っていた筈であるが、あれは自分をからかう冗談だったのかとシンは内心考えてしまう。
「この会談が行われる切っ掛けとなったのはこの学園であった聖剣とコカビエルの一件だが、それ以上にここには様々な力が集約しつつある。神器、赤龍帝、聖魔剣、聖剣、我が妹リアスに魔王セラフォルー・レヴィアタンの妹」
　サーゼクスが挙げたセラフォルー・レヴィアタンの妹というのはソーナの事を指しており、シンも生徒会に入った後に初めて知った。どんな人物かと試しに聞いてみた所、

口を噤み難しい表情を浮かべていたので、もしかしたら両者の関係はあまり良くないのかもしれないとシンは考えていた。
「そして――」
一瞬ではあるが、サーゼクスの目がシンへと向けられた。確かに悪魔側から見れば悪魔の力を持つ自分は異端であり物珍しい存在である。
だが、それだけではない。リアス達にはまだ言ってはいないが、コカビエルと最初に出会ったとき、彼はシンを見て確信を持った態度で『魔人』と呼んだ。悪魔だけでは無く三勢力にとって害を生す存在『魔人』。自分もそれと同類と称されたがシンには自覚など全く無い。生まれてきてから今まで人として生きてきた記憶しかなく、自分がその『魔人』となった経緯など無く、気付けばいつの間にか不可思議な力を使えていたに過ぎない。
（……いつかは言わなきゃならないがな）
独りそんなことを考えている内にリアスとサーゼクスの会話は進んで行く。
「そんな重要な会議をここでだなんて……」
「卑下するものじゃないぞ、リアス。この学園も立派な建物じゃないか。会議を行うには十分だと私は思うのだがね」
「それはそうですけど……」

「まあ、それが人間界に来た四つの目的のうちの一つだ」
「四つ？　なら残りの三つは……？」
「三つの内の一つはこれだよ」
　そう言って、シンに見せたときと同様に授業参観を知らせるプリントをリアスに見せる。
「我が妹ながら冷たいな。グレイフィアが報せてくれなければ見過ごしてしまうところだったよ。こんな重大なことがあるならば魔王の仕事を続ける訳にはいかない」
（やっぱり本気だったのか……）
　改めて授業参観に出る意志を見せるサーゼクスを見て、シンの最初に抱いていたイメージが変わり始めていく。もっと堅苦しい人物だと思っていたが、いい意味で意外と軽い。何となくであるがピクシーやジャックフロストが好感を持った理由が分かる気がした。
「グ、グレイフィア、お兄様に伝えるなんて……」
「些細なことであろうとも学園の情報は私に届きます。そして私はサーゼクス様の『女王』でありますので私の得た情報は全て主へと渡ります」
　冷静な顔をして悪びれた様子も無くあっさりと話す。そのグレイフィアの態度を恨めしそうに見た後に今度はセタンタへと目を向ける。

「セタンタ、貴方ならば椅子に括りつけてでもお兄様を止めていた筈よ。それなのに貴方まで人間界に来るだなんて……」
「……私もサーゼクス様一人が行かれるのであればお止めました。……ですが今回参加するのはサーゼクス様一人ではございませんので……」
「まさか……」
　その言葉にリアスは察する。
「勿論、父上もお越しになる」
　リアスが絶句して固まる。身内がいるせいか今日はやたらと珍しい反応を見せる。
「そして三つ目の目的、それは君に会うためだよ。ゼノヴィア」
　名指しされ、一瞬驚いた表情をするもののすぐにその顔を引き締め、ゼノヴィアが皆よりも一歩前に出る。
「初めまして、魔王という存在と話すのは些か緊張をするが、既に名を覚えられていると思うと同時に光栄に思う」
「御機嫌よう。改めて名乗らせて頂こう。私の名はサーゼクス・ルシファー。君の名はリアスから報告を受けて知っているよ。君の場合、少し――というか、かなり変わった前歴だからね」
　元教会側の人間が悪魔の眷属となったという稀なケースのせいで、ゼノヴィアの名は

サーゼクスの記憶にはっきりと残っている。
「君の存在に偏見や憎悪を向ける悪魔もいるかもしれない。だが我が妹ならばそんな眼から君のことを守ってくれると信じている。その代りとは言わないが君がリアスを支えてくれることを願っているよ」
「魔王ルシファーにそこまで言われるとは……」
「いや、これは魔王としての願いじゃない。一人の妹を持つ兄としての願いさ」
先程まで浮かべていた微笑とは違い、どこか子供っぽさを感じさせる純真な笑み。その笑みを向けられたゼノヴィアの頬が少し赤くなる。大人の笑みと子供の笑み、その差から来るギャップは、如何なる女性すら見惚れさせる魅力が秘められていた。
「さて話はここまでにして、早速仕事に掛かるとしよう。今日中にこの学園を見学したいのだが誰か案内役をしてくれないかな?」
「あ、なら俺が」
案内役として一誠が立候補する。
「ありがとう、兵藤一誠くん。出来ればもう一人欲しいんだが……」
周囲を見回すサーゼクス。その視線がシンへと向けられる。
「すまないが、君も頼めるかい?」

◇

「――という訳で、先程紹介した場所はここの階段から昇ってでも行けます」
「成程。ありがとうございます」
シンの説明にセタンタは頷き、そこで会話が終わる。そして両者の間で何度目かになる沈黙が降り立つ。
（……気不味い）
現在、シンとセタンタは二人で学園内の見学をしていた。そうなったのはサーゼクスの一言からの始まりであり――
『大人数で歩けば目立つし時間もかかる。ここは二手に別れて見学するとしよう』
――ということから一誠がサーゼクスとグレイフィアを案内し、シンがセタンタを案内するという形になった。
その結果。
「……」
「……」
両者の間には幾度と無く沈黙が続き、お互いに何とも言えない空気となっていた。元よりあまり口数の多い方では無いシン、そしてシンと同じくそこまで饒舌ではないセタ

ンタ。必要最低限の会話のみしてそのまま会話が終わり、次の場所までひたすら沈黙が続くという悪循環に陥っていた。相手も顔半分をマフラーで隠しているせいで表情が読めず、真剣に聞いているのか退屈しているのか全く分からない。

（何か喋るべきだが……何を言えばいいか）

こういったときにピクシーやジャックフロストという存在の有難味が分かる。あの無邪気な二人ならば今の様に会話が途切れることも無かったであろうが、今は部室で残ったメンバーと時間を潰している最中であろう。

いっそのことこの場に喚ぶことも出来るが、喚んだら喚んだで妙に勘の鋭い二人ならば何故喚び出されたか察し、そのことで何日もからかってくるのが容易に想像出来た。

（結局、自分でどうにかするしかないか）

これも自分への試練だと割り切り、シンは何気なく話を振る。

「そう言えば、セタンタさんはグレイフィアさんと同じサーゼクスさんの眷属なんでしょうか？」

思いつきで振ったとはいえ、冷静になってみればかなり突拍子も無い質問をしていることに気付き内心後悔する。セタンタはシンから急に話し掛けられ、少し目を丸くしたがすぐに質問に答えてくれた。

「いえ。私はサーゼクス様の眷属ではございません」

「ならリアス部長の御父上の？」
「それも違います。そもそも私は悪魔ではありませんので」
　意外な答えが返ってきたせいで今度はシンの方が軽く驚く。
「悪魔では無い……ならセタンタさんはどういった存在なんですか？」
「……それは私にも分かりません」
　自分で自分を知らないというセタンタ。そこまで聞いてあまり深入りするべきものではないと判断したシンはこの話を打ち切ろうと考えたが、それよりも早くセタンタが話を続ける。
「私にはグレモリー家に仕える以前の記憶はございません。私は瀕死の重傷を負った状態でグレモリー家の土地で旦那様と奥方様――つまりはリアス様の御父上と御母上のことですが――に発見されました。そのときに私が覚えていたことと言えば、戦いの技と自分のセタンタという名のみ。それ以外の記憶は一切ありませんでした」
　過去の記憶が無いというセタンタ。だがシンは最初にセタンタを見たとき既視感を覚えた。以前にも似たような存在を見たような気がするという曖昧なものであったが。
「旦那様と奥方様は死に掛けていた私を治療し、それどころか行く当ての無い私に暮らす場所を。戦う術しか無かった私に護衛と言う役目をも与えて下さいました。護るべき御方たちであるサーゼクス様もリアス様もこのような私に大変良くして頂きました」

言葉から敬意の念が伝わってくる。それほどセタンタがリアスの両親を尊敬しているのが分かる。

だからこその一つの疑念が湧く。

「それほどまでに慕っているのなら何故眷属にならないんですか？」

「先程も言った様に私には過去がありません。もしかすれば大きな罪や大罪を犯した悪人であるかもしれない、今の私の人格も過去が消えたせいで出来た仮のものに過ぎないかもしれない。そのような者を眷属にしたというグレモリー家に不名誉を齎すことを避けたかったのです」

慕いながらも超えてはならない一線を引く。それがセタンタと言う人物が不器用に見せる情というものかもしれない。

その在り方にシンは不思議と共感を覚える。

「――尤も私の過去を知る人物が現れれば全て解決することではありますが」

このときセタンタは目を細め、シンに視線を定めた。シンも無言でそれを見返すが、思いの外あっさりとセタンタは視線を外す。

「つまらない話をしましたね。それでは説明の続きをお願いできますか？」

「――はい」

何事も無かったかのように二人は学園見学を続けていく。

やはりというべきか、その後も二人の間に会話が増えることは無かった。

◇

「やあ、そちらも終わったようだね」
集合地点では先に見学を終えたサーゼクス、グレイフィア、一誠が待っており、シンとセタンタの姿を見て手を挙げる。
「無事終わりました。間薙様、ありがとうございました。そして兵藤様もサーゼクス様の案内ありがとうございました」
「あ、いえ！　そんな大層なことをしてないですって！」
深々と頭を下げるセタンタに一誠は慌てて謙遜する。セタンタの逸話を聞いている一誠からしてみれば恐れ多い行為であった。
「私はサーゼクス様に得た情報をお教えしなければなりませんので、御二人は先に部室の方へと戻っては如何ですか？　こちらも少し遅れますが部室の方に向かいますので」
そう言われシンと一誠は目を見合わす。いくら頼まれたとはいえ、魔王を放って先に戻っていいものかと。
「私のことは心配いらないよ。セタンタが言った通りちゃんと部室には顔を見せるさ」

魔王であるサーゼクスにまでそう言われてしまうとシンたちも断ることが出来ず、頭を一度下げるとサーゼクスたちを置いて部室に戻っていった。
シンたちの姿が完全に見えなくなった瞬間、セタンタは前置き無くサーゼクスの脇腹目掛け手刀を叩き込む。それも肋骨と肋骨の隙間を狙った的確な一撃であった。
「ふぐっ！」
サーゼクスの身体が真横に折れ、その後に叩き込まれた場所を手で押さえ、目尻に涙を浮かべながらも笑みを浮かべ、殴ったセタンタを見る。
「いきなり痛いな、セタンタは」
「黙れ、この阿呆」
外向きの喋り方を止め、本来の口調に戻ったセタンタは主である筈のサーゼクスを罵倒する。
「いらん気遣いしやがって……御蔭で終始気不味くてしょうがなかった」
「でも、もしかしたら君の記憶が戻る切っ掛けになるかもしれないと思ってね」
「それがいらないと言っている。グレイフィア、お前も知っていて止めなかっただろう？」
「いつものことですので」
魔王であるサーゼクスを殴ったばかりか暴言を吐くセタンタに対し、グレイフィアは

日常茶飯事であるかのようにいつもの態度であった。そしてサーゼクスの方もそれを咎めず寧ろ楽しんでいる。
「私としてはいつまでもグレモリー家というものに縛られ続けていないで、もっと自分の生きたいように生きて欲しいと思っているんだけどね。父上も母上も同じ願いを持っている」
「……俺の命は既にグレモリー家に捧げている。俺がグレモリー家を離れる時は俺が死んだときだけだ」
「まったく最初に出会ったときからずっと変わらないね、その真面目さは」
「爪の垢を煎じてサーゼクス様に飲ませたいものです」
「無駄だ。こいつの軽さは魔王特有の病気だ」
「ははは、ひどいな二人とも」
　色々と付き添いに言われるサーゼクスだがそれでも朗らかに笑う。傍から見れば自分の主をぞんざいに扱っているように見えるかもしれない。だが当人の間には長年付き合ってきた者たちだけが言わずとも分かち合えるものがそこには確かに存在した。

◇

「それじゃあ電気を消します」
「ああ、頼むよ」
一誠の自宅であり一誠の部屋では一誠、サーゼクス、セタンタが、それぞれ布団に入り寝る準備をしていた。
何故こうなったかと言えば、見学を終えたサーゼクスたちが部室で何気なく今日泊まる宿泊施設のことを話していたとき、一誠が自分の家に泊まりに来ないかと誘ったからである。当然リアスは嫌がったが、サーゼクスが半ば強引に説得しそのまま決定してしまった。
突然の来訪者であったが一誠の両親は特に嫌な顔をせず、リアスの兄ということでサーゼクスを暖かく歓迎した。
自己紹介のときにサーゼクスはルシファーではなくグレモリーの姓を名乗り、セタンタはリアスの従兄と紹介、そしてグレイフィアは自分の妻と紹介していたがグレイフィアは自らメイドであると否定し、ついでにサーゼクスの頬を抓っていた。
その軽い感じが受けたのか一誠の両親は酒を振る舞い、そのまま宴会へと突入。夜が深くなってきたのでそこでお開きとなり就寝の準備に入った。
そこでリアスがいつもの様に一誠と共に寝ることを誘ったが、このときセタンタが一瞬であるが凄まじい目付きで一誠を見る。その目付きに思わず一誠は震えあがったが

すぐにサーゼクスがセタンタを宥め、グレイフィアと一緒に就寝するよう勧めその場がそれ以上荒れることは無かった。

　電気が消え、真っ暗となった一誠の部屋。そんな中サーゼクスは一誠に話し掛ける。

「兵藤一誠くん――ああ、そうだここは妹に倣ってイッセーくんと呼ばせて貰ってもいいかい？」

「は、はい！　光栄です！」

「君とリアスは本当に仲が良いね。君達二人を見ていて如何に妹が君を大事にしているか分かるよ。きっと君のおかげでリアスは毎日楽しく過ごせているだろうね。妹のことをこれからも頼むよ」

「それは、その俺はリアス・グレモリー様の『兵士』ですから……」

「ふふふ、眷属の立場としてではなくイッセーくんに頼んでいるんだ。ああ、セタンタのことなら気にしないでくれ、彼もリアスのことを本当に大事に思っているんだ。リアスの選んだことならば彼も尊重する筈だ。なんなら今から私のことをお義兄さんと呼んでも構わないよ」

「は、はぁ？　お兄さんですか……？」

　一誠の内心を見抜いた発言をするが後半の意味がよく理解出来ないのか曖昧な返事をする。

「ところで話は変わるが、イッセーくん。君の『赤龍帝の籠手』には倍加した力を譲渡する能力があるのは知っているね？」
「はい。知っています」
「そして我が妹リアスの胸は、兄である私から見ても豊かなものであることは知っているね？」
「はい！　知っています！」
「そしてイッセーくん。君は胸の大きな女性が好きだね？」
「はい！　自覚しています！」
「余談なのだが『赤龍帝の籠手』で高めた力をリアスの胸に譲渡したら一体何が起きるんだろうね？」
「なっ！」
　その言葉に一誠は絶句してしまう。まさに考え付かなかった、と言わんばかりに。
「ただ大きくなるのか、艶が増すのか、張りが良くなるのか、あるいは――セタンタ、君はどう思う？」
　話をセタンタに振ってみるが返事は返ってこない。
「どうやら寝ているみたいだね。まあ、イッセーくん。私の戯言だと思って聞き流しておいてくれ。お休み」

そのままサーゼクスは眠ってしまったが、聞かれた一誠はまるで神から与えられた命題を解こうとする信者の様に、布団の中で聞かれたことに対する答えの無い回答を、延々と妄想という形で考え続けていた。

一方、既に眠っているかに思われたセタンタは護衛という立場から二人よりも先に眠る筈も無く先程の会話も起きていたが内容が内容なだけに無視をしていた。

そして一誠の左手に眠るドライグもまた一誠が眠るまで眠る筈も無く、先程の二人の不毛な会話をしっかりと聞いていた。

奇しくもセタンタとドライグは二人の会話に同じ感想を抱く。

『何て馬鹿な会話なんだ……』

鈍感、白龍

翌朝、一誠は昨晩出された命題に一晩中悩み続けた結果、寝不足と脳細胞の一片まで使い切って妄想に深け込んでいたせいで重くなった頭を枕から持ち上げる。少しの間だけ睡眠を取れたが、それでも眠気や疲れは抜けきらない。

起き上がった一誠は近くに寝ている筈のサーゼクスたちに目を向けるが、既に起きているらしく丁寧に布団が畳んであった。

一誠も目を擦りながら立ち上がると、眠気を取る為に洗面所へと足を運ぶ。するとそこには既に先客がおり、鏡越しに一誠の姿を見ると振り返り、丁寧に頭を下げる。

「おはようございます。兵藤様」

「あ、おはようございます。セタンタさん」

挨拶を終えるとセタンタはその場から一歩横へと移動し、一誠の為にスペースを作る。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

礼を言い、セタンタの隣に立つと、一誠は水を出し洗顔をし始めるが、その間ずっと

近くに立つセタンタの存在が気になってしょうがなかった。
（物凄い目付きで睨まれたよな……）
　リアスと一緒に眠れなかった昨晩、いつもリアスと一緒に寝ていると知った途端、射殺すような目でセタンタに見られたが、正直全身の細胞や内臓から熱が奪われていくような寒気を感じていた。木場の師匠の一人であることもあり、戦っているときの木場以上に研ぎ澄まされた殺気をもろにぶつけられ、その場で震え出さなかったのが今思うと奇跡だと一誠は思う。
　その後にサーゼクスから聞いた話によると、セタンタはリアスが幼い頃から、遊び相手やお守りなどをしてとても可愛がっていたらしく、リアスもセタンタを二人目の兄のように慕っていたという。
　その話を聞いたとき、一誠はセタンタが目を光らせる理由に納得はしたが、同時にある疑問も生じた。リアスの幼い頃から知っていると同時に、サーゼクスとの付き合いも長いとのことだが。
（一体、この人は今、いくつ何だろうか……？）
　そんなことを考えながら、洗顔を終えた一誠は顔を水から顔を出す。
「どうぞ、タオルです」
「すみません。ありがとうございます」

手渡されたタオルを受け取り、それで水気を拭いた一誠が鏡を見ると、鏡越しにセタンタと目が合う。咄嗟に何か言おうかと考えたが、思うような言葉が思い浮かばない。すると両者の間で沈黙が流れ始めてしまう。時間にすれば一秒、二秒程度であるが、若干セタンタに対して苦手意識を持ってしまった一誠にはその一秒、二秒が何百倍にも感じてしまった。

（な、何かを言わなければ！）

間に耐え切れず必死になって話題を考える一誠。セタンタの姿をよく見て何か話題にすることは無いかと考えた挙句、出てきた言葉は――

「そ、そのマフラー素敵ですね！」

『いきなり何を言ってるんだ……相棒』

ドライグも呆れる程、突拍子の無い言葉。そもそもマフラー自体、出会ったときからセタンタは巻いているので、今更過ぎるものであった。

ただ自分から言っておいてであるが、四六時中マフラーを巻いているセタンタの姿は確かに気になっていた。夏に入り熱くなってきているにも関わらず、セタンタはマフラーを外さず、食事のときも汚さず器用に、マフラーの下からものを食べるという、奇怪な行動をとっていた。マフラーの下に傷などの、人前に見せるのが余程嫌なものを隠しているのであろうと一誠は考えていた。

「――別に特別なものはありませんよ」
　そんな一誠の心を簡単に読み取って、セタンタは巻いていたマフラーをずらす。するとセタンタが言った様に傷などの目立つ者は無く、形の良いすっきりとした唇があるだけであった。上から半分見ただけでも中性的な色白の美青年であったが、顔全体を見るとその整った容姿はより完成度を見せる。
　一誠の中で二枚目の代名詞というべき顔は木場であったが、それと互角以上の顔の持ち主であった。
「あ、すみません！」
　突拍子も無いことを言った挙句無遠慮に眺めてしまっていたことを謝罪するが、セタンタはマフラーを戻しながら気にしないで下さい、と頭を上げる様に言う。
「旦那様に拾われる前からこのように身に付けていたせいか、無いと落ち着かないのですよ」
　セタンタの目が細まり目尻を下がる。苦笑している様子であった。そんなセタンタの姿を見ていると、生まれた苦手意識が徐々に弱まっていく。故に一誠は一大決心をして、セタンタにある質問をした。
「セタンタさんは、その、サーゼクス様とはかなり長い期間一緒に居る訳ですよね……？」

「ええ、まあ」
「なら……やっぱり、リアス部長のことも小さい時から知っているんでしょうか？」
昨日、一誠の家にサーゼクスたちが泊ったときに見せた、リアスの表情。サーゼクスは実の兄であるから、毅然とした顔の中にも、身内にしか見せない柔らかさの様なものがあった。だが、それをセタンタにも向けて見せているのを、一誠は何度も目撃している。
一誠自身、リアスから可愛がられており、そのときにしか見せない甘い表情を毎晩、毎朝見ているが、それでもセタンタに見せる顔は初めて見るものであった。
みっとも無いと自覚しているが、それを見て嫉妬に近い感情を覚えてしまう。もしかしたらセタンタはリアスにとって身内以上の存在なのでは、と下衆な勘繰りをしてしまい、自己嫌悪もしてしまう。
ならばいっそ、セタンタの口からこの疑問の答えを聞こうと思い、今口にしてしまった。が、やはり直接聞くには勇気が足りず、遠回しな質問へと変化してしまったが。
「そうですね……確かに知っています」
一誠の不自然な質問に対し、セタンタは特に聞き返すことなく素直に話し始めた。
「昔から聡明な方でした。自分が生まれた家の名の重さや兄であるサーゼクス様の存在を理解し、それに恥じない様に自分を鍛えることが出来る子でした」

「へぇ、やっぱりそうだったんですか」
昔も今もあまり変わらないリアスに一誠は納得する。
「――ですがその反動と言いますか、少しでも早く成長したいと願っていたこともあって、あまり旦那様や奥方様、そしてサーゼクス様に年相応に甘えることが少なかったですね」
甘えるリアス。そう言われると一誠は自慢の妄想力を以てしても、はっきりとその姿を思い描くことが出来なかった。どちらかと言えば一誠の方が甘える側であるため。
「そのこともあってかリアス様は自分の眷属には友人、あるいは兄弟、姉妹のような感覚で接していますね。このようなことはあまり声にして出したくはないのですが、置かれている立場もあって自分の齢に近しい友人が中々出来なかったものですので」
セタンタの言葉を聞いて一誠は意外だと思ったが、よくよく考えてみるとリアスが友人として接している姿を見たのは朱乃かソーナぐらいしかいない。他は遠くから憧れや尊敬の眼差しで見ている連中、偶にリアスから話しかけられていることもあったが、誰もが恐れ多いといった様子で、目も合わせず口早に会話を済ませ、逃げる様に去って行く。聞かれた立場からすればきっと、喋りかけられた名誉でその日一日有頂天でいられるであろうが、リアス側からすればどう映るのか。
かく言う一誠もほんの少し前までは遠巻きから眺めている連中の一人に過ぎず、リア

スなど雲の上の様な存在だと思っていた。
（あのときともう違うけど、なら俺も大事な弟の一人ってことかなー、それはそれでいいけどちょっと残念というか、でもな……）
　出来ればそれ以上になりたい、という思いはあるが、今の自分には遠い未来だと考える。実際にはその願っている枠の中に既に納まっているのではるが、煩悩は人一倍所ではないが恋愛経験に関しては動植物にすら劣る一誠はまだ気付いてはいない。
「ですが本当は誰かに優しく接するのではなく、自分の方が甘えられる相手を求めているのかもしれません。リアス様の御守りをしていたときにそのようなことを度々感じていましたので」
（部長が甘えられる相手か……）
　それはきっと、心も体も優れている相手でないと務まらないと一誠は考えた。そして同時に、その二つは自分にとって足りないものであるという自覚もある。リアスを振り向かせるにはまだ遠い道のりだと思い胸中で溜息を吐いた。
「俺も朱乃先輩や木場、小猫ちゃんみたいに部長に可愛がられているだけですから……程遠い話ですね」
「はあ？」
「え？」

一瞬、セタンタは一誠が何を言っているのか理解出来ないという表情をし、一誠も何故そんな顔をされるのか分からず戸惑う。そのままセタンタは眉間に皺を寄せて考えるような仕草を見せた後、一誠に向かってこう言う。
「今の部分は無かったことにしましょう。私も忘れますので貴方も忘れてください。いいですね？」
「は、はい」
「では話は戻して――ですが本当は誰かに優しく接するのではなく、自分の方が甘えられる相手を求めているのかもしれません。リアス様の御守りをしていたときにそのようなことを度々感じていましたので」
「えーと、ならセタンタさんは部長にそんな相手が出来たらどうします？」
強引に会話を戻されるが、一誠も何故かと深くは追及せず、取り敢えず何気ない好奇心から出てきた質問を出した。
「リアス様が選んだ相手ならば私は文句など言いません――ただし」
口調が変わった訳では無い。だがその『ただし』という言葉をセタンタが口にした途端、背筋が凍り付くような恐怖が一誠の中で渦巻く。目に見えざる凄まじい圧力が、先程まで穏やかであったセタンタから発せられていた。
「その選んだ相手の行い次第ではこちらもそれ相応の態度をとるかもしれませんね。例

えば唇を奪う、これは別に仕方の無いことです。恋愛にとってそれは付き物ですから。身体を交える、これも愛し合うものならば避けては通れない道ですのでしょうがないです。別の女性と付き合う、あまり感心はしませんが悪魔には異性を囲む風習があるので一概に切り捨てることはできません。なによりもリアス様が納得していればとやかく言うつもりはありません――百歩譲って」

淡々と並べられていく言葉に一誠はただ慄く。言葉を挟むことすら阻んでしまう程の圧迫感。薄皮一枚越しにそれを浴びせられているせいで下手なことも言えない。言ってしまうとその薄皮を裂いてしまいそうな気になる。

「ですが今挙げられたことを全部行った挙句にリアス様を捨て、あまつさえ泣かせることがあったならば……」

「……あったならば？」

一誠は思わず息を飲み込む。

「私の手で直々に去勢して差し上げますよ」

「そ、そうですか……」

体のある一部分が縮まっていくのが分かる程、セタンタの言葉は深く重く凄みのあるもであり、一誠もただ形式的な言葉をいうことしか出来なかった。

「……まあ、そんな男が現れたら、という仮定の話ですので特にお気になさらず」

「は、はい！　そんな奴が現れなければいいですね！」
「――では失礼します」
　顔色を蒼褪めさせている一誠に一礼した後、セタンタはその場から去って行った。しばらく移動し、一誠の母、グレイフィア、リアス、アーシアたちが朝食の準備をしている居間付近で足を止める。
「彼との会話はどうだったかい？　セタンタ」
「……俺の想像していたのとは違っていた」
　身だしなみを整えたサーゼクスが壁に背を預け、先程まで一誠と会話をしていたセタンタに感想を問う。
「と言うと？」
「ハーレム王になりたいなんていう阿呆みたいなことをほざいている割には肝心のリアスの好意にてんで気付いちゃいない。女をはべらせたいくせに何なんだあの鈍感さは……」
「やれやれ……セタンタ、君は肝心なことを理解していないみたいだね」
　額に指を当て、察しの悪い相手に頭を痛めるような動作をするサーゼクス。その姿に若干腹立たしいものを感じて顔を顰めるが、セタンタは大人しくサーゼクスに自分が見落としていることについて聞いた。

「……で、何だ？　その肝心な部分と言うのは」
「いいかいセタンタ、彼はね……」
妙に溜めた後にサーゼクスは言い放つ。
「モテたことがないんだ！」
真顔でそんなことを言い切られ、セタンタは反応できず黙ってしまう。
「彼は女性に対して人一倍の関心を持っている。だがモテたことが無い、それ故に多くの女性を囲むという夢を持った、恐らくモテなかった反動で。しかし運命が巡り巡って彼にもその夢を叶える機会がやってきたが、当の本人は全くそのことに気付いてはいない。何故なら他者から恋愛感情を向けられたことがないから、すなわちモテたことが無いから！」
「……お前、実はあいつのこと嫌いなんじゃないよな？　本人が聞いたら確実に傷付くぞ」
あまりにモテたことがないと強調するサーゼクスに、流石のセタンタも一誠に対して同情的になる。
「寧ろ好ましく思っているよ。リアスの恋の成就も応援したいと素直に思っている。君だってあまり口にはしないけど、ライザー・フェニックスとの結婚を白紙にしてくれたことに内心感謝している筈だよ」

実際に助力もしていたこともあり、痛い所を突かれたセタンタは憮然とした表情となる。

「……それでもリアスの好意が空回りしているようで気に入らない」

「君は本当に生真面目だね。あれこれ心配するのは間違ってはいないけど、だからといって外野が必要以上にどうこうするのは頂けないな。どうなるか長い目で見ようじゃないか、私も君も」

妹の色恋について、自分たちは必要以上に関わってはいけないと主張するサーゼクス。セタンタも自分が過保護なことをしていると自覚があるのか、溜息を一つ吐く。

「お前とリアスの意志を尊重するよ。これ以上はあいつには何も言わない。――ただし、俺はやると言ったのなら必ずやる。あいつが泣かせるような真似をしたのならな」

「そのときは君の好きなようにすればいい。まあ、私はそんな事態は来ないと予想するがね」

◇

夏へと入り、空から降り注ぐ太陽の光もより強くなってきた。何もせずとも皮膚から汗が滲み出て来る程の暑さを感じ、夏の訪れをより実感する。

そんな燦々とした太陽の光が照らす下で、シンは生徒会の仕事である花壇の花への水やりを行っていた。

本日は休日であり、本来ならば担当の係がいるが、偶々今日はオカルト研究部がプールを先に使用してもいいという条件で生徒会からプールの掃除を頼まれており、ならばついでにということでシンがそれを引き受けていた。

ここ数日はサーゼクスたちの見聞という名の人間界観光に付き添っており、ようやくそれも一段落したところである。

後からプールに来るようにとリアスから言われ、シンはピクシーとジャックフロストをリアスたちに預け、独り黙々と、花壇に植えられた花々にホースから出る水を与えていく。

ただ水を撒くという行為でも既に額からは汗が流れ落ち、背中も汗で服が張り付き不快感が伴う。

大きな学園である故に水を与える場所が多く、かなり時間をとられてしまうが、それでもシンは愚痴一つ溢さずに作業を続けていた。

「こんな暑いのに精がでるな」

ホースで水を撒いているシンの横に、麦わら帽子を被り、浴衣を着た男性が話し掛けてくる。一見すると用務員のような男。その男はシンの側でしゃがみ、花壇に生えた雑

草を毟っていた。
「まあ、仕事なので」
　無難な返事を返すシンに、男は麦わら帽子の下で笑う。
「しかし日本って国は湿気が強いな。時間つぶしには持って来いな娯楽は沢山あるのに、この暑さだけは慣れねぇな」
　男の口振りから、日本以外の国に住んでいた経験があるようだった。
「確かに慣れていないと日本の夏は蒸し暑くて厳しいかもしれませんね」
　花壇に撒いた水もすぐに気化し、熱を持って蒸発していくので、より湿気を帯びた暑さを感じる。
「ところで貴方は何処の出身なんですか？」
「ん？　ああ、日本の夏に慣れていないって言ったからか。まあ確かに外国生まれではあるが……」
「そうじゃないですよ」
「へぇ、じゃあどういうことだ？」
「天使か堕天使、どちらなのか聞いているんですよ。悪魔と堕天使には会ったことはありますが、少なくとも貴方からは悪魔の気配はしないんで」
　天使は会ったことないのでまだどういう気配かは知りませんが、とさも世間話でもす

るかのように尋ねるシンに、麦わら帽子の男は肩を震わせる。帽子のせいで表情は見えないが笑っているようであった。

「くくくくく。お前の知り合いは何度も会っても俺の正体に気付かなかったっていうのにな」

知り合い。何度も。正体は天使かあるいは堕天使。それらのことを組み合わせると一人の人物が浮かび上がってくる。

「……貴方がアザゼルか」

「ご名答。初めましてだな。俺が堕天使たちの頭をやっているアザゼルだ」

麦わら帽子を指で押し上げる。そこでシンは初めてアザゼルの顔を見た。シンが想像していたよりもずっと若く、どう見ても二十代ぐらいの若者にしか見えない。ただ、顎に生やした髭や後ろへ軽く撫でつけた髪型のせいで少し年齢が増して見え、それすら無くしてしまうと更に若く見える。

「何をしにここに？」

顔は花壇の方へと向けながら目線はアザゼルに向けられ、片手はホースを掴みながら、シンは相手の見えない位置で固く拳を握りしめ、いつでも振るえる準備をする。

「そう固くなるなよ。ただ、うちのやんちゃ坊主が俺の言うこと聞かずにこの学園に行きたいって我儘言うから、勝手な真似をしないか見に来ただけだ。別に争う気は無い」

にやりと悪戯小僧のような笑みを浮かべながら、シンが戦う準備をしていることを見透かしての言葉。
「そう簡単に信じると？」
「当然の反応だ。見た目通り冷静だな。仮にも堕天使の総大将を前にして」
「それはどうも」
アザゼルの言葉を一応褒め言葉と受け取り、口だけで礼を言う。
シンは顔を動かさず目だけを動かし周囲を探る。アザゼルが言った様に堕天使を纏めるという立場、護衛が付いていてもおかしくは無いが。
「今は俺一人だけだぜ」
考えを先読みしたアザゼルが笑いながらそれを否定した。相手の言葉をそう易々と鵜呑みにはしないシンであったが、どういった訳かアザゼルの言葉には、根拠は無いが説得力の様なものが感じられる。それこそ長く生きた者に与えられる貫禄と言葉の重みなのかもしれない。
「……それで貴方はここで何をしているんですか？　貴方の言うやんちゃ小僧の付き添いなら俺に話し掛ける必要は無いと思いますが？」
「あいつみたいにつれない態度をするなよ、傷付くぜ。こんな炎天下に一人黙々と作業している若者がいるからつい老婆心で手伝ってやろうとしたまでよ」

「信じられないですね」
「かー、嫌だね。今時の子供は素直に相手を信じる心が失われている。これがゆとり教育の弊害って奴か」
「貴方がそう思うならそうじゃないですか」
わざとらしく嘆くアザゼルに、シンは冷え切った声で素っ気なく対応する。
「本当につれないな。俺が何て言ったら信じてくれるんだか……」
「例えば……コカビエルの敵討ち、と言うなら信じるかもしれませんね」
『神を見張る者』の大幹部であるコカビエルとアザゼルは長い付き合いがあり部下でもある。
シン、リアスと眷属たちでコカビエルと戦った。戦闘不能に追い込んだのはシンである。おまけに象徴というべき黒翼を引き千切り、両手も使用不能にした。何らかの感情を持たない筈が無い。
直後、真夏の空気が瞬時に冷気と化す。
「ほう……」
薄く笑うアザゼルを中心にして、場が一気に支配されるような錯覚を覚えた。外気など気にならなくなるほどの存在感、そして威圧感。それは闘争と狂気に憑りつかれたコカビエルと同等以上のものであった。

「もし本当に俺の目的がそれなら、お前はどうする？」
「戦うでしょうね。今、この場で」
　迷いも無く答えるシン。それを聞いたアザゼルの反応は――
「はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！」
　――爆笑であった。このとき、先程までの雰囲気が演技であったことを悟る。
「敵討ちね……寧ろ俺としてはあいつを叩きのめしてくれたことに感謝しているぐらいなんだけどな」
「感謝？」
「最悪な事態は避けられたからな」
「全面戦争の回避ですか？」
「それもあるが、俺個人にとっての最悪の事態さ。まあ、もう罰せられた奴には関係の無いことだがな」
　あのとき、白龍皇を差し向けてでも、コカビエルをあの場から強引にでも救い出すのが目的だと考えていたが、どうやら少し想像と違っているらしい。
「……コカビエルはどうなったんですか？」
「地獄の底の底で凍り付けになって眠っているさ。自力では永久に起きることのない眠りにな。――せめてもの情けに『アイツ』の近くで寝かせてやっている」

最後の部分だけはシンの耳にも届かない程小さく、殆ど口を動かしているだけであったが、それを呟いているときだけはアザゼルの顔から笑みが消えていた。
「まあ、最期に追い求めていた奴の『同類』と戦えたんだ。少しぐらいは鬱憤も晴れていただろうな」
何気なく言ったアザゼルの言葉に、シンは鼓動が早まるのを自覚した。コカビエルの追い求めていた存在の『同類』。それについては一つしか心当たりが無かった。
「それは……どういった意味ですか……？」
「既に自覚はあるんだろう？　『魔人』の間薙シン」
手に持ったホースが無自覚に籠った力で潰れ、放水していた水が拡散していく。今まで視線は花壇から離さなかったが、聞き捨てならない言葉にシンは初めて、アザゼルを正面から見た。
「惚けようが誤魔化そうが意味ないぜ。過去に『魔人』と会った奴ならきっとお前の正体に気付く。忘れようとも忘れられないアイツらとお前は同じ気配を纏っているからな」
有無を言わさないアザゼルの断言。シンはそれを聞いても沈黙していたが、やがてアザゼルから目を離す。いつの間にかホースを握っていた手も緩められていた。
「意外と冷静だな」
「コカビエルに言われたときからある程度は。……それでもあまり自覚は無いですけ

ど」
　ふーん、と取り乱さないシンの横顔をアザゼルは眺めていたが、そのうち立ち上がり、そのままシンに背を向ける。
「さて、俺の下らない話に付き合ってくれてどうもありがとよ。そろそろ御暇させて貰うわ。やんちゃ坊主に目を光らせておかないといけないしな」
　アザゼルは振り向かず、後ろに立つシンに手を振りながら離れていく。
「では、また」
　いずれ顔を合わせるかもしれないと予感しての、再会を暗示させる別れの言葉。
「おう、またな。――ああ、そうそう言い忘れていたが一応周りに注意を払っておけよ。『魔人』って奴らは色々な相手に怨みをかっているからな。」
　アザゼルも似た予感があったのか同じような挨拶をし、そして不穏な言葉を残して去って行った。
　姿が見えなくなってから、シンは深く長い溜息を吐く。一応は冷静な表情を努めていたが、サーゼクスと同様の上に立つ者特有の存在感のせいで、それに触発された緊張で口の中が乾いていた。ホースもアザゼルと話しているときからずっと動かず、同じ場所ばかりに水を撒いていたせいで一か所だけ大きな水溜りになっている。
　無意識に入った体の力を緩めながらシンは、こうも短期間で立て続けに大物たちと出

会うものかと考える。
大きな力に引き寄せられているのか、あるいは少々自惚れた考えではあるが自分が引き寄せているのか。どちらにしろ、幸不幸を感じるより先に疲れを覚える。
（少し頭を冷やすか……）
リアスの誘いを思いだし、シンは体から滲み出る汗と共にこの重い気分を流そうと考え、仕事も一段落終えたのでリアスたちのいるプールを目指す。
その道中の間、シンはアザゼルと会ったことをどう話そうか考えるのであった。

◇

「あら、やっと来たのね」
プール場に来たシンに出迎えの言葉を掛けたのはリアスであった。プール場に居るので格好は制服では無く、学校指定外の赤いビキニタイプの水着を着用し、プールサイドに置かれているビーチチェアの上に腰掛けていた。
「遅くなりました」
「あらあら、間薙くん。汗が凄いですよ」
つい先程まで炎天下にいたシンを見て朱乃がいつもの笑みを浮かべている。やはり朱乃の格好も水着であり、リアスと同じタイプの水着を着用していたが色は対照的な白

であった。リアスと朱乃、年齢離れした二人の色気ある格好は、シンの知り合い兼一誠の悪友である二人が見れば即昇天するであろう。

「――とりあえず一時休戦としようかしら？」

「――私は構わないですよ」

二人笑みを浮かべているが纏う気配は刺々しく、どうやらシンが来る少し前まで何らかが原因で揉めていた様子であった。

視線を少し動かすと、同じくビニールシートの上にアーシアがいた。二人とは違いこちらは、学校指定のスクール水着を着ている。既に泳いだ後なのか髪が濡れて体に張り付いており、そしてアーシア自身も泳ぎ疲れたのか無防備な姿で眠っている。

その近くでは日陰で小猫が本を読みながら座っていた。こっちもアーシアと同じ格好をしている。シンの視線に気付き、小猫は軽く頭を下げて挨拶をしてきた。

「あ、やっとシンも来た」

声の方に目を向けると、プールの端でピクシーが、アーシアの使い魔である蒼雷竜のラッセーと一緒に泳いでいる。正確に言えば、犬かきで泳ぐラッセーの背にピクシーが乗っているだけであるが。

「ヒーホー！　お先に楽しんで居るホー！」

更にその近くには、特別に用意されたビニールプールに浸かっているジャックフロス

トが居る。どこで手に入れたのかお子様用のサングラスを掛け、いつもの二又に分かれた帽子では無く水泳帽を被っている。
「一緒に入るかホー」
「……遠慮しておく」
ジャックフロストの誘いをシンは断る。別に子供用のビニールプールに入るのが恥ずかしいからではない。理由はジャックフロストの入っているプールから立ち昇る白い煙。それは湯気ではなく冷気である。
常温の水に入るのすら嫌がるジャックフロスト。彼が水などに体を浸かるとき、必ずその水は零下を下回り、凍り付く寸前の温度まで引き下げられる。現にジャックフロストの入っているビニールプールにはいくつもの氷が浮かんでおり、触れれば凍てつくような温度であることを明確に示していた。
「そうかホ」
断られたジャックフロストは特に気にした様子も無くビニールプールに背を預け、気持ちよさそうに冷水を堪能する。
「やあ、間薙くん。お仕事ご苦労様」
労いの言葉を掛けるのは木場であった。下は学校指定の水着を履いているが上は白のパーカーを着ている。

「今日は日差しが強いね。早く間薙くんも着替えて泳いだらいいよ。あ、そうだ。日焼け予防にオイルでも塗ろうか、僕が」

何処か嬉々とした様子で、普通同性から同性へと言わない様なことを提案する木場にシンは黙ってしまう。

一誠も言っていたことであるが、聖剣絡みの事件以降木場の態度がおかしい。共に命懸けの戦いをし、過去を乗り越えたせいか一層親しげになってきた。別にそれ自体悪いことではないが、流石に面と向かって木場から『君は僕の大事な仲間だ。君の為なら僕は何だって出来る』と真顔且つ熱く宣言されたときには、シンはどう反応していいか内心戸惑ったものである。一誠も似たようなことを言われ、全身から鳥肌が立ったという。

「……いや、日焼けし難い体質だから大丈夫だ」

「そうなんだ……」

シュンとした様子で何故か残念そうな表情となる木場。他人に対して献身的になること自体、決して悪いことではなく寧ろ褒められるべきこととではあるが、どうにも木場の献身さは度が強い気がしてならないとシンは思う。

（変なことにならなければいいんだがな……）

拭いきれない不安を覚えながら、シンは着替えようと男子用の更衣室に向かおうとし

たとき、あることに気付く。
見回した面々の中に足りない人物が二人、一誠とゼノヴィアである。
その組み合わせにあまり良くない予感を覚えつつ、何処に行ったのか取り敢えずピクシーとジャックフロストに尋ねる。
「んー？　イッセーとゼノヴィア？　ゼノヴィアなら見たよー」
「オイラもイッセーは見たホー！」
「二人はどうしたんだ？」
「ゼノヴィアはプール掃除が終わった後、何か一人で水着を着る為に更衣室以外で着替えてたよ。ちょっと覗いてみたけど腕の通すとこから頭通してたりして苦労してた。それを見られるのが恥ずかしかったのかも」
「イッセーはリアスにペタペタ塗ってたら朱乃が来て言い争いになったホー。それでイッセーは怖がって逃げたんだホー」
リアスと朱乃が来た時に刺々しい雰囲気だったのはそれが原因であるらしい。
「それでゼノヴィアは何処で着替えているんだ？　イッセーは何処に行ったんだ？」
『あそこ』
同時に指差すジャックフロストとピクシー。その二人が指した先にあったのはプール用具室であった。

良くない予感が嫌な予感へと変わる。
シンはあまり気乗りはしなかったが、一応の確認と用具室前へと移動する。シンの様子を見て何か面白いことでもあると判断したのか、その後ろをピクシーとジャックフロストが付いて来る。
扉の前へと立つシンたち。耳を澄ますと聞き取りにくいが、確かに中から二人分の会話が聞こえてくる。
ドアノブを握り一気に引く。
「抱いてくれ」
用具室の中に入った瞬間、耳に入ってきたのがその一声であった。
「ん？」
「あっ」
中で待っていたものは、顔を真っ赤にしているどころか鼻から血を流している一誠と、上半身を露わにしているゼノヴィアであった。
入って来た時に聞いたゼノヴィアの声と今の格好。そして一誠の間の抜けた顔、大よその察しはついたが一応念の為にシンは聞いておく。
「……何をしているんだ？」
「こ、これは！」

「見ての通りだ。今から私とイッセーは子供を作ろうとしている」
　言い訳の言葉でも並べようとしていた一誠の足掻きも、直球過ぎるゼノヴィアの言葉で軽々と粉砕される。
「その理由を聞いても……？」
「今まで私には宗教という枷を掛けて生きてきた。別にそれ自体を後悔している訳では無い。だが今はそれを捨て去り悪魔となって転生を果たした。ならば今まで出来なかった女としての本分を全うしようと思ったんだ。そう、女として正しく生きてみたくなった」
　上半身を恥ずかしげも無く晒しながら『女として生きる』ことを語るゼノヴィア。今の彼女は言っていることとやっていることがずれていることに気付いているのであろうか。
（前に恥じらいやモラルなどを学べと言ったんだがな……）
　そんなことを考えているシンを余所に、ゼノヴィアは聞いてもいないのに話を先に進めていく。
「そして生まれる子には強く立派になって欲しいとも思っている。だからこそここは伝説の存在である赤龍帝が適任だと思い誘ったんだ。もしかしたら『赤い龍』の力の一端を授かるかもしれないからな」

名案でも語っているかのように一人喋るゼノヴィア。シンはちらりと一誠の左腕を見た。
「種馬ならぬ種龍か……」
『おい。今、お前なんて言った？』
ぼそりと呟くシンの言葉に、一誠の左腕に宿るドライグが噛みついてくる。
「別に何も」
『嘘付け！　聞き捨てならないことを言っただろう！』
「褒め言葉だ」
『絶対に嘘だ！』
プライドを揺るがされるような一言を言われて怒るドライグを無視し、シンは一誠の方に顔を向ける。
「それでお前はここで誘惑されていたという訳か？　――流されやすい奴め」
「――面目ない」
「とりあえずその鼻血を拭け」
自分の断りきれないスケベな性根を実感しているのか、脱力した様子で流れ出ている鼻血を手で拭う。
そこにやってくるピクシーとジャックフロストの二人。二人はにんまりと口の端を

大きく吊り上げて笑うと一誠の顔を覗き込むようにして尋ねる。
「ねぇねぇ。イッセーとゼノヴィアはここで何してたの？」
「ヒーホー！　教えて欲しいホー！」
「なっ！」
　止せばいいのにわざわざ詳細について尋ねる。用具室の中で何が起きていたのか察してはいないだろうが、こうすることで相手がどんな反応を示すか楽しんでいる。特に一誠は反応が大きく愉快なので、ピクシーとジャックフロストにとって格好の玩具となっていた。
「ねぇねぇ何してたのー？」
「何をしてたんだホー？」
「そ、それは……」
「ねぇねぇ？」
「教えてホー」
「止めろぉ！　止めてくれぇぇぇ！　そんな純真な眼で今の欲望に染まりきった俺を見ないでくれぇぇ！」
　映画かドラマの悪役を彷彿とさせるセリフを言いながら悶える。ああやって律儀に反応して見せるせいで二人が面白がって更に悪戯をするのだが、当の本人は気付いては

いない。それが一誠の良い点なのかもしれないが。
「まあ、そういうことだ。済まないがここは空気を読んではくれないか？」
　このような状況になってもまだ続きをしようとするゼノヴィアに、シンは深く溜息を吐きながら持っていた水着などが入っているバックを開き、中からロングタオルを取り出す。
「まずは上を隠せ」
　そしてそれを躊躇う事無くゼノヴィアの顔面に投げつけるのであった。

◇

「はぁ……」
　何度目か分からない溜息を吐きながら、シンはピクシーとジャックフロストを連れて校舎の見回りをしていた。
　あの後、用具室の騒ぎを聞きつけリアス、朱乃、小猫、アーシア、木場が現れ、一層騒ぎが激しさを増した。特に女性陣の反応は凄まじく、笑顔で嫉妬の怒気を放ったり、涙目になって何かとんでもないことを言い掛けたりなどし、収拾がつかなくなったのでシンは全てのことを一誠とゼノヴィアに放り投げて、一足先にプールから退散をした。

流石に色恋沙汰などに首を突っ込む気にはならず、取り敢えず自覚の無い当人に全て背負ってもらうことにした。

（まあ、きっとあいつは何で怒られているか自覚はないだろうがな）

問題の原因となっている一誠の鈍感さは、本人以上にシンは理解している。ハーレム王になると息巻いている本人がそれに限りなく近くにいて気付かないのは滑稽というべきか、哀れというべきか、それとも阿呆というべきか。

結局、プールにも入らずごたごたのせいでアザゼルのことについても話しそびれた。だが今晩、悪魔の仕事も入っているのでそのときにでも話そうと思い、校舎の見回りを続ける。

そのとき正面から、一人の少年がこちらへと向かって歩いてくる。

一目見てその少年は異質であった。銀髪の髪に蒼い目といった異国の色を出していたが、そんなことが些細に思える程、ありとあらゆる顔の作りが黄金比で出来ているのではないかと思わせるぐらいに完璧なものであった。

現実世界から一つ上に浮き出たような存在。それが少年を見たシンの第一印象であった。

向かって来る美少年はシンを見て微笑むと軽く頭を下げる。それを見たシンも同じく頭を下げ、両者そのまますれ違っていく――かに思えた。

　刹那、背から心臓へと突き抜けていく悪寒。それが何度も浴びたことのある殺気だと判断し、瞬時に反応したシンは一気に力を解放すると、同時に踏み込んでいた右足を軸にして背後へと半回転しながら拳を振るう。
　だが振り向くと同時に一切構えず背を向けたままの少年の姿が目に入り、拳は少年の側頭部を撃ち抜く直前に急停止をした。寸止めをされた拳圧で少年の髪が揺れる。
「良い反応をするじゃないか」
　突如殴り掛かったシンに怒りを向けるのではなく、シンの行動を讃える少年。
　シンは理解する。自分がこの少年の殺気のみで動かされたことに。
「綺麗な色だ。そして輝きも強い。近くで見ると改めてそう思う」
　少年を振り返り、寸止めしていたシンの手を掴み、シンの手に浮かび上がる紋様をそう称する。
　一瞬、腕を引っ張ろうと考えたが、掴む手からは想像出来ない凄まじい膂力が込められ、それを阻む。
「君とも一度、こうやって素顔で話してみたかった」
　その言葉にシンは目の前の人物が誰であるか大よそ見当がついた。
「アザゼルが言っていたやんちゃ坊主はお前か」
「やんちゃ坊主？　ふふふふ、とっくにそう呼ばれるような齢じゃないんだがな。アザ

ゼルらしい」
　愉しげに笑う少年。きっとこの少年の名は――
「俺にはヴァーリという立派な名があるんだがな」
「――お前が白龍皇か」
「そう。俺が現白龍皇――『白い龍〈バニシング・ドラゴン〉』だ」
　シンと白い龍、このとき初めて邂逅する。

風評、僧侶

「遅れました」
　シンはそう言いながらオカルト研究部の部室の扉を潜る。その肩にはピクシーがいつものように居座り、シンから少し遅れてジャックフロストが後を次いで入る。
　悪魔の仕事を始めるにはかなり早い時間ではあるが、見回りを終えた後にリアスから連絡を受けてシンはオカルト研究部に来ていた。特に断る理由も無く丁度学園内にいたのですぐに足を運んだが、部室内には既に全員揃っている。
　そして全員が真剣な表情をしていた。
「ごめんなさいね。時間を割いてもらって」
「構わないです」
「どうしても貴方の耳に入れておきたいことがあったの」
　険しい表情をするリアス。それを見ただけで愉快な話題では無いことがすぐに理解出来た。
「実は――」
「白龍皇に会ったんですね」

リアスが言うよりも先にシンが内容を先読みして話す。シンの予想は的中していたらしくリアスを含め、メンバー一同驚いた様に目を丸くした。
「どうしてそれを――まさか貴方も？」
「ええ。俺も会いました。ついでにアザゼルとも」
白龍皇――ヴァーリと既に出会ったことと、言いそびれていたアザゼルと出会ったことをついでとばかりに言うシン。リアスは驚くよりも先に呆れたのか、額に手を当て頭痛でも我慢しているかのような顔となる。
「……そういったことはなるべく早く話してちょうだい」
「すみません。言うつもりだったんですがプールでのゴタゴタのせいで言いそびれてしまいました」
嫌味で言った訳では無いが、先程のプールでの一件のことを思い出して恥ずかしくなったのか、リアスの頬が少し赤くなる。ついでに一誠、朱乃、小猫、アーシアも似たような反応を示すが、唯一ゼノヴィアは平然としていた。プールでのことの発端であるが中々の神経の太さである。あるいは羞恥というものを自覚していないのかもしれない。
「こほん！　それは取り敢えずおいといて大丈夫だったの？　何か変な真似はされていない？」

わざとらしい咳払いをしながら話題を元に戻し、二人と会ったときの話を尋ねてくる。
「アザゼルは大した理由でこの学園に来た訳ではありませんでした。白龍皇の動きを監視する為だと言っていました。まあ、会話も少ししましたが特にこれといって内容のあることは喋ってはいません。世間話程度のものです」
正確に言えば自分の存在に関わることであったが、シンはそれを伏せる。まだ話すようなタイミングでは無いと考えた為であったが、同時にいつが話す絶好の機会なのかと自嘲するような考えも浮かんできた。どちらにせよ、まだシンは自分自身のことについて話す気にはなれなかった。
「ヴァーリとも特に意味のある会話をしたわけではありません」
ほんの少し前のことを思い出しながら、シンはヴァーリとの会話の内容を語り出した。

◇

「その『白い龍』がわざわざ何の用だ？　お前の宿敵は『赤い龍』じゃないのか？」
「よく勘違いをされるが別に俺もアルビオンも血眼になって赤龍帝やドライグを倒した

いと思っている訳じゃない。あくまで俺にとって倒すのは目的の一つに過ぎない」
シンの問いに少し笑いながらヴァーリは言葉を返す。
「なら何故、この学園に来た？」
そう言いながら掴まれていた手を引く。今度は先程とは違いあっさりと手を離された。
執着をしていないならいちいちことを荒立てる可能性があるかもしれない行為をしているヴァーリに質問を重ねる。ただでさえ三勢力の会談のせいで緊張感が増しているというのに、堕天使側にいるヴァーリが魔王の妹たちの縄張りである学園に、断りも無く顔を出すこと自体かなりの問題であった。
「アザゼルに付いて折角来たのにきちんと挨拶しなければ失礼だろ？　あのときはきちんと顔を見せていなかったからな」
あのときとはヴァーリがコカビエルを回収していったときのことである。確かにあのときヴァーリは禁手化によって全身に鎧を纏っていた。
「赤龍帝――兵藤一誠が出て来るまで暇潰しを兼ねて学園の見学をしていたら、偶然にも君と会った。君とも一度話をしてみたいと思っていたから丁度良かったよ」
「俺に話すことは無いが？」
「つれないな。コカビエルごときとはいえ勝った君には色々と興味があるんだ」

さりげなく言ったコカビエルごときという言葉。少なくともヴァーリにとってコカビエルは格下の存在であることを明言している。数名がかりで必死になって倒したシンにとってみれば良い気のしない言葉ではあるが。
「コカビエルごときか……」
「気に障ったか？　正直に言えば、リアス・グレモリー眷属が総出で挑んだところでコカビエルに勝つとは思ってはいなかった。寧ろ、コカビエルを本気にさせずに終わると予想をしていたんだ。だが君達は勝った。それも全力を出し切ったコカビエルを相手に。嬉しい誤算だったよ」
「単純に見る目が無かっただけじゃないのか？」
シンの皮肉にヴァーリは気を害するどころか肩を揺らして笑う。
「ははは。それは否定できないな。俺の見る目もまだまだということかな」
素直に自らの未熟さをあっさりと認めるヴァーリに、シンの方が言葉を続けられなくなってしまう。まだ怒ってくれた方が反応も返しやすい。
「だが見る目が足りない俺でも確実に分かることが一つだけある」
微笑みが変わる。口の両端を吊り上げて笑っているような形ではあるが、覗かせる整った白い歯は威嚇する獣の牙の様に見え、好戦的なものであった。
「――それは何だ？」

「君は……」
そこまで言い掛けてヴァーリの言葉が止まる。それと同時に好戦的な笑みは消え、虚を衝かれたような表情となった。
急に変わった相手の態度に、シンは怪訝そうな表情を浮かべる。よく見ると、ヴァーリの視線がシンの足元付近へと向けられていた。
シンもその視線を辿ると、そこに居るのはヴァーリの殺気に怯えてシンの影に隠れているジャックフロストと、その帽子にしがみついているピクシー。
「これは……」
『そいつは『ジャックフロスト』の方だ』
ヴァーリから聞こえてくる良く響く低い声。それは一誠の体内に宿るドライグと似たような響きを持っている。以前にも聞いたことのある声、シンはこの声の主がヴァーリの『神滅具』に宿っている龍の声だと密かに思い出していた。
「ああ。成程」
その声に言われて一人納得した様子で頷くヴァーリ。ヴァーリ個人にジャックフロストに関して何らかの思うことがあるらしい。
「驚かせてしまったかな、済まない。知り合いに良く似ていたものでね」
「ヒ、ヒホ！　オイラ以外のジャックフロストを知っているんだホー？」

自分が最後の一人であることを知っているジャックフロストはヴァーリの言葉に、怯えることも忘れて前に飛び出す。
「ちょ、ちょっと！」
飛び出したジャックフロストを咎める様にピクシーは帽子を引っ張るが、構うことなくジャックフロストはヴァーリに近付くとそのズボンを引っ張りながら、自分以外のジャックフロストについて教えて貰う様に懇願する。
「教えてホー！　教えてホー！　オイラは一人じゃないんだホー？」
両手で掴み必死になって頼むジャックフロスト。相手がどのような存在か分からないのに、そのような態度を取ることは危険だと考えたシンは、すぐにジャックフロストを引き寄せる為に動こうとするが、直前になってヴァーリが手を翳して制する。
目の前にいきなり突き出された手に思わず動きを止めてしまったが、その間にヴァーリは身を低くし、目を潤ませながら頼むジャックフロストと同じ目線の高さにする。
「言葉が足りなかった。俺が知っているのは君に良く似た存在だがジャックフロストでは無いんだ」
その言葉を聞いたジャックフロストは空気が萎んだかのように項垂れる。
「そうなのかホー……」
もしかしたら他に生き残っている仲間がいるのではないかという淡い期待。しかし

それが期待のままで終わってしまったことにジャックフロストは落ち込む。
「ヒホー……」
すっかり元気を失くした様子のジャックフロストにヴァーリも何か声を掛けようとして口を開くが、直前になって言い留まるという行為を何度かする。決してヴァーリに非がある訳では無いが、妙に気を遣わせてしまっていた。
落ち込むジャックフロストの両脇にシンの手が触れそのまま持ち上げる。持ち上げられたジャックフロストは見上げ、見下ろしているシンと目が合う。
「残念だったが別に独りになるわけじゃない」
言葉は多くは無いが励ます言葉を掛ける。
「そうそう。それともまた泣き虫のジャックフロストに戻っちゃう？」
それに便乗しピクシーが囃し立てた。
「オイラは泣き虫じゃないホー！」
ピクシーの言葉に反応し両手を突き上げて怒った態度を見せる。
「どうかなー？　どうかなー？」
「違うホ！　絶対違うホー！」
からかうピクシーとジャックフロスト。それは見慣れた光景。怒るジャックフロストから少しだけ陰が消えたように見えた。

「迷惑をかけたな」
「いや。原因はこっちにある」
　謝罪するシンにヴァーリは自らに非があると言う。意図しないジャックフロストの行動によって、良くも悪くも先程の緊張感に満ちた空間は和らいでしまっていた。
『絶滅したかと思っていた雪精に滅多に人前に姿を見せない妖精か……随分と珍しいものを眷属にしているんだな』
　再度聞こえてくる声。ジャックフロストやピクシーについて詳細な知識を持っているらしい。
「それが宿っている『白い龍〈バニシング・ドラゴン〉』の――」
『アルビオンだ。そう言えばきちんと名乗っていなかったな』
　自らの名を明かすアルビオン。声から受ける印象はドライグに比べるとやや冷めたものであった。
『ドラゴンは力を引き寄せるがお前も希少な存在を手元に置いてある。ドラゴンと似たように力を引き寄せているのかもしれないな。――納得は出来るが』
　アルビオンの最後の一言で、シンはアザゼルから言われた忠告を思い出す。
『過去に『魔人』と会った奴ならきっとお前の正体に気付く。忘れようとも忘れられないアイツらとお前は同じ気配を纏っているからな』

含みのある言い方。長年存在してきた白い龍ならば過去に魔人たちと接触していてもおかしくは無い。すると必然的にドライグもまたシンの正体について察しており、その宿主である一誠もまたシンの正体について知らされている可能性が高い。

今の所、態度に目立った変化は見られないが、あえてことを大きくする気が無いのか、ただ知らないだけなのか、どちらにせよ今のシンにそれを判断することなど出来なかった。

「さて。一応の挨拶は済んだしそろそろ立ち去らせてもらうよ。まだ赤龍帝との挨拶があるんでね。このままだとすれ違いになるかもしれない」

ヴァーリはそう言いシンたちに背を向けようとする。

「いいのか？　最後まで言わなくて？」

「何を？」

「さっき言っていた『確実に分かること』についてだ」

「ああ、それか。別に改まって口にするほどのことじゃない。――それに、君は言わなくても何を言うか大方予想はついているだろう？」

ヴァーリの言葉にシンは反論せず口を閉ざしたまま沈黙する。その態度こそシンの心の裡で思っていることを表していた。

「俺の時間潰しに付き合ってもらってありがとう。ではまた。そっちの御二人も」

軽く手を振りヴァーリは完全にシンへと背を向ける。それを見たシンもまたヴァーリに背を向けて歩き始めた。
「ばいばーい」
「急に引っ張ってごめんホー」
言葉を返さないシンの代わりに、ピクシーとジャックフロストは離れていくヴァーリへ律儀に別れの言葉を掛けるのであった。

◇

リアスたちとの緊急招集も終わりシンは自宅へと向かって歩いていた。帰る際には何かあったら必ず連絡するようにと皆に念を押してから解散をし、途中までは全員一緒に帰宅するということとなった。
そして途中で木場、朱乃、小猫、ゼノヴィアと別れ、またその後にリアス、一誠、アーシアたちと別れ現在の様にシンとピクシーたちが残ったという形となった。
ピクシーとジャックフロストがじゃれ合っている中、シンは淡々とリアスたちとヴァーリについてのことを考えていた。
シンがリアスたちに報告した後に、リアスたちとヴァーリとが接触したときの話を聞

いたが、内容は概ねシンのときとあまり変わらないものであった。突然の出現にリアスたちが臨戦態勢の構えをとったものの、ヴァーリに戦う意思など全く無く、忠告だけ言うとさっさと立ち去って行ったという。

その忠告というのは『兵藤一誠はきちんと育てておけ』というもの。シンとの会話では、さほど興味など無く、白い龍の神滅具を持った義務感で戦っているような口振りであったが、やはり対となる存在である以上、それなりの意識があるらしい。

尤も当の本人はいまいち自覚が無いらしく、因縁云々に関して渋い表情をしていた。『赤い龍』と『白い龍』は争わねばならないのが宿命であり運命、と周りが決めている中で、何故そんなことをしなければならないのか、という疑問を持っているのが見て分かる。

一誠の反応は間違ってはおらず、過去から今に至るまでそうであったから自分もそうしなければならないという訳では無い。

（ハーレム王になりたいと言っているあいつには迷惑な運命だろうがな）

恐らく否応無しに迫ってくるであろう未来を想像し密かに同情しながらも、自分も似たようなことが起きるかもしれないと思い、小さく溜息を吐く。

そんなことを考えている内にシンは家へと到着し、いつもの様に鍵が閉まっている扉に鍵を差し込み開けようとする。

「ん？」
しかし予想に反して扉が開かない。そこでもう一度鍵を差し込んで回すと今度は開いた。どうやら既に鍵が開けてあったらしい。
玄関を潜るとそこに見慣れた靴が二束揃えて置いてある。それを珍しそうに眺めながら居間へといくとそこに居た二人の人物へと声を掛けた。
「もう帰っていたんだ。珍しい」

◇

本日駒王学園の授業参観日。より正確に言えば公開授業日であり、生徒の保護者のみならず将来この学園を受験するであろう中学生が保護者を同伴し見学する日である。そんな日である為、普段とは違う姿を大勢の人々に見られるせいか、学園内の生徒たちはやや浮き足立った状態となっている。
シンが教室の中に入ると既に一誠とアーシアが席に座っており、その近くには見慣れた光景となった松田、元浜、桐生がいる。
「よお」
いち早くシンの存在に気付いた一誠がシンに向かって声を掛ける。それによって

アーシアたちもシンの存在に気付き挨拶をした。
「おはようございます」
「よっ」
「うす」
「おはよう」
挨拶を交わしてシンは鞄を置いて一誠たちに近付く。
「間薙のところは誰が来るんだ？」
「二人とも来る。こういった行事にはきっちりと出るんだ」
「へー、何かお前の両親って聞くと少し興味が湧くな」
本日の公開授業に誰が来るのかという話で、シンは両親が来ると言ったが、一誠の家も父と母の二人が来るらしい。尤も一誠曰く、アーシアを観に来る為だと言って苦笑していたが。
「そういやいつもの二人は？」
声を潜めて姿の見えないピクシーとジャックフロストの所在を尋ねてくる。
「部室にとりあえず置いてきた。人が多いとあいつらはしゃぎ始めるからな」
こんな人の多い時に悪戯などをされたら堪らないと考え、二人には大人しく部室で留守番をするように言っておいた。一応、暇にならない様にシンはわざわざリアスたちに

頼んで、使い魔を遊び相手として置いておくという配慮はしていた。
「にしても珍しいな。間薙がイッセーたちよりも遅く来るなんて」
「……はっ！　あれかもしかして噂のアレか！」
松田の言葉に元浜は何かを察し、途端妬みに満ちた声を吐く。
「噂は噂だ。事実じゃない」
「本当か？　本当だよな？　本当だったら……いや！　本当であってくれ！」
念を押す様に聞いてくる元浜だったが、後半は殆ど願望を垂れ流している。
元浜が言った噂と言うのが今、学園内に密かに流行っているものであり、この噂というのがシンにとって非常に迷惑なものであった。その内容というのが、どうもシンが生徒会の女子たちに手を出しているらしい、という事実無根なものである。
噂の発端となったのは、どうやら先日のコカビエルたちとの一件で街に施された術式を探しているときで、たまたまシンが生徒会副会長の真羅椿姫やソーナと行動している姿を一般生徒に見られ、その後に生徒会に入ったことで爆発的に広まった。
この噂が広まったせいで、時折シンを見ては何か小言で話し合う男女の姿を見たり、今の元浜みたく憧れの対象に手を出したとして男女問わず妬みの視線を受けることが多々あった。尤も睨まれたら睨み返すようなことをしていたので、シン相手に直接何かを言ってくるような輩は殆どいなかったが。

「お前まで……お前までイッセーのように遠い存在になったらどうしようかと。何だかんだ言って近しいものを感じていたのに……」
「モテそうなくせに女っ気の無いお前はある意味で俺らにとって希望みたいなものなんだ……」
侮辱同然の褒め言葉である。というよりもそんな風に他人から評価されていたなど初耳であった。当然、嬉しくも何ともないが。
「朝からにぎやかだな」
集まりに声を掛けてきたのはゼノヴィアであった。ゼノヴィアの登場に松田、元浜の頬がだらしなく緩む。中身は置いておいて容姿は間違いなく一級品であるゼノヴィアの存在は、男女間において非常に人気があった。
ゼノヴィアは一誠に近付くといきなりその頭を下げる。
「先日はすまなかった。どうやら私はことを急ぎ過ぎたようだ」
先日と言われて松田、元浜、桐生は当然疑問符を浮かべるが、事情を知っている一誠とアーシアはそのときのことを思い出して赤面し、シンは二人と違って判り辛い程微妙に顔を顰めた。
「よく考えてみればキミの方が準備出来ていても私の方がきちんと準備出来ていなかった。気持ちだけが先行して初歩的なミスをしてしまったようだ」

独り反省し謝罪するゼノヴィアに見ていたシンは、謝罪の言葉から不穏な気配を察する。
「さしあたってまずは予行練習の方をしようと思う」
「は？　予行練習？」
ゼノヴィアの言葉が何を意味しているのか分からず一誠は眉根を寄せる。
「まあ簡単に言えばこれを――」
スカートに備えられたポケットに手を入れ、中を探り取り出そうとしたとき、その腕をシンが掴む。
「ん？　どうしたのだ、間薙？」
「ちょっといいか？」
その状態のままシンはゼノヴィアを教室の隅まで引っ張ると小声で何かを言う。ゼノヴィアはそれに応じてポケットの中のものをシンにしか見えない角度で取り出して見せる。直後、無言でシンに頭を叩かれ、頭を押さえて身を屈めた。
「あ、何かデジャビュ」
いきなりのシンの行動にクラスがざわめくが、そんな中そのやりとりで大体察したのか、桐生は苦笑いを浮かべている。
何事かという好奇の視線を浴びながらも平然とした様子でシンは、一誠たちの下に心

なしかしょんぼりとしているゼノヴィアを連れて戻って来た。
「一体何を見たんだよ？」
至極真っ当な一誠の疑問に対し、シンは――
「まるで反省していない」
――と半ば呆れた様に呟くのであった。

◇

とある御節介二人の会話。
「で？　やっぱりゼノヴィアっちが持ってきてたのって……」
「言わなくても分かるだろう？」
「直接間薙くんの口から聞いてみたいなー」
「避妊具だ」
「……やっぱり間薙くんってアーシアや兵藤と違って反応が淡白だね」
「面白みの無い性格なのは自覚している」
「いやいや、ネタ振っても無視しないできちんと返してくるから私は好きよ。そういった方面のネタに大袈裟なリアクションする人も好きだけど。あー、そうかゼノヴィアが

ソレを取り出したときの反応、ちょっと見てみたかったなー。そしたら今度はきちんとアーシアに何の為に使うのか教えてあげるのに」
「……前から思っていたが随分とアーシアのことを押すな」
「んん？　まあ、あんだけ如何にも清楚です！　って子が恋する乙女のオーラを出してるもんだからなんかこう背中を押してあげたくなるのよね。それで意中の相手が如何にも下半身が自由そうな男でしかも周りには難敵揃いときたもんだから、ああいった感じの奥手な性格だと一歩遅れるって分かってるもんだから猶更ね」
「だから隙あらば、という訳か」
「そうそう。きちんとモーションをかけておかないと兵藤から他の女のニオイが漂い出すかもしれないし、美味しく頂かれちゃっているかもしれないでしょう？　喰らわれる前に喰えってことよ！」
「発破を掛けること自体悪くは無いが、今の所はお前の考えている程、他との進展は無いな」
「えー、そうなの？　てっきりだいぶ進んでいると思ったのに」
「行為自体は進んでいるかもしれないが肝心の中身が伴ってはいないな」
「へー、兵藤のことだから切っ掛けさえあればずぶずぶ深みに嵌っていくもんだと思ってたわ」

「何だかんだ言っても一線は引いているみたいだ」
「何それ兵藤に似合わない言葉。生意気ー」
「まあ、そう言ったこともあるせいかあまりアーシアの背を強く押しても空振りに終わるかもしれないぞ」
「ふっふっふ！　甘いわね。こういったときにこそ押しの一手！　手数の勝負よ！　押して押して押しまくって兵藤の理性の鎖が引き千切れるまで押して、逆に押し倒されたらアーシアの勝ちよ」
「……程々にな」
「そう言う他人の心配している間薙くんの方はどうなの？　きちんと色恋沙汰はしてるの？　あ、そう言えば最近ゼノヴィアに色々と気遣っているけどもしかして――」
「全く無いな」
「……凄いよね、間薙くんって。普通なら『あれ、照れ隠しー？』とか言ってからかうところだけど声と表情だけで本気で言ってるんだって思うもん。説得力があるね色々と」
「意識してやっているわけじゃないんだがな」
「あはははははは！　それで結局何でゼノヴィアに気を遣うの？」
「……見ていてどうにも危なっかしく感じるからつい、だ。知り合いにああいった感じであちこちに興味を持ってふらふらする世間知らずがいるから余計にな。この間や今

日の一件と言い周囲の目に対して鈍感過ぎる。変な噂でも立ったらどうするつもりなんだ」
「別にゼノヴィアっちはあんまり気にしないと思うけどね」
「どうだろうな。目に見えて分かりやすい悪意には毅然と立ち向かうかもしれないが。形が曖昧な悪意に耐性があるかどうか」
「心配性だねー」
「勘違いしないで欲しいが、ゼノヴィアがどうこうというよりも俺自身がそういったものを見過ごせないだけだ。結局はただの自己満足だ」
「ふふふ。まあ、そういうことにしておこうか」
「――別に嘘は言っていないぞ」
「分かってるって。……ふふふ」
閑話休題
◇
「よくできてるわね」
そう言いながらリアスは一誠の手にある紙粘土の自画像を眺めていた。
本日の公開授業、何故か英語の授業で何を意図しているかは分からないが、紙粘土で

の図画工作を行うこととなったが、その最中要らぬ妄想に深け込んでいた一誠が自分でも良く理解出来ないうちに内なる才能と魔力、その両方を器用に発揮させて一瞬にして作り上げたリアスの像である。

あまりの出来の良さにクラス中が湧いて、保護者の目を無視して金に物を言わせた争奪戦が開始されたが結局、一誠は誰にも渡すことはなかった。

余談であるがこの像を完成させたとき一誠の脳内で『二度とこんなことに俺の力を使うなよ!』と珍しく怒った声のドライグの声が響く。その声は心なしか疲れている様にも聞こえた。

そして昼休みとなって未だに像について諦めきれない連中から像を護る為、逃げる様にアーシアと一誠が教室の外に出たとき、偶然会ったリアスと朱乃に持っていたリアスの像を見せるのであった。

最初は授業中にそんなものを作った一誠に呆れた様な目を向けたが、見せられた像の完成度の高さに驚き感心していた。側にいた朱乃も似た表情をしている。

「ところでサーゼクス様は来たんですか?」

「ええ、父と一緒に。グレイフィアとセタンタも付き添ってね」

頭痛でもあるかのように額を押さえる。相当恥ずかしかったらしい。

「ああ、それとシンのご両親とも会ったわね」

「え、そうなんですか？」
「学園内を迷っていたところで会って、案内のときに少し話してみたらシンのご両親だって分かったのよ。ねえ、朱乃？」
「はい。でもよく見れば間薙くんの両親と言われて納得しました。よく似ていましたので」
「確かに似ていたわね」
「ええ」
「父方に」
「母方に」
「……ん？」
　似ていると言ったが違う意見を言う二人に一誠は戸惑ってしまう。そこにおずおずとアーシアが口を挟んでくる。
「あの……私も間薙さんのご両親と会いました」
「アーシアもか？　いつの間に」
「教室を出る前に少し。間薙さんが生徒会に呼び出されて教室を出て行ったときに話している姿を見たので少し挨拶を」
「へぇー、それでアーシアはどっち似見えたんだ？」

「えーと、言い難いんですが……どっちも似てなかったです」
　三者三様の答えを聞いて一誠は無性にシンの両親を見てみたいという衝動に駆られる。そこまで人によって評価が違う顔とは一体どんなものであろうか。
「あ、部長に皆」
　するとこの場に木場も姿を現す。
「よお。なあところで間薙の両親が――」
「ああ、さっき僕も会ったよ。何度か僕も会ったことがあるからね」
「マジで！　ちなみに間薙の顔ってどっち似ていた？」
「どっち似？　間薙くんの顔ってご両親の顔を足して丁度二で割った様な顔をしているからどっち似かと言われると難しいかな」
「本当にどんな顔をしているんだ……物凄く気になってきた」
　全く食い違う感想を聞いて未だ会ったことの無いシンの両親に対しての好奇心が募っていく。
「それで祐斗もここへ休憩に？」
「いえ、何やら学園内で撮影会を行っているって話を聞いて。ちょっと見に行こうかなと」
「撮影会？　有名人でも来ているの？」

「いえ。何でも魔女っ子が来ているとか」
「魔女っ子って……」
「僕も気になってそれを見に。ああ、でも早く行かないと終わっちゃているかもしれませんよ。無断でやっているから生徒会が動くみたいですし」
それを聞いてシンが生徒会に呼び出されたのを思い出す。恐らくはそれの為の人員なのであろう。
「でも学園でそんな恰好しているなんてよっぽど変わった人なんでしょうね？」
一誠がリアスにそう話しかけるが、リアスの方は難しい表情をして何か考えている様子であった。
「部長？」
「その魔女っ子なんだけど……何となく心当たりがあるのよね……」

◇

生徒会からの連絡でシンは撮影会場となっている場所に来ていた。そこでは大きな人だかりが出来ており、カメラのフラッシュが絶えずたかられている。
「すいませーん！　こっちお願いします！」

「あ、こちらもお願いします！」
「はい！　撮りまーす！」
撮影をしているのは、明らかに保護者関係に見えない人物たちが半数以上。残りはこの学園の生徒たちと、人垣を何事かと思って野次馬をしている保護者と思わしき人たちであった。
「はーい☆」
その声に応える甘ったるい少女の声が人垣の向こう側から聞こえてくる。その声の主がこの騒動の原因であるらしい。そしてどういう訳かこの中心からは、人とは違う気配を複数感じる。
「じゃあ、こっちを向いてねー☆」
「はーい」
「ヒホー」
そして続けて聞こえてくる耳慣れた声。耳に入ってきた途端、眩暈の様な感覚に襲われる。
（大人しくしてろって言っておいたんだがな……）
内心で愚痴るが心の何処かでしょうがないという気持ちもあった。あの二人は使い魔という使役する立場ではなく、仲魔という対等の関係である。こちらの言うことを聞

くか聞かないかの選択は、結局あの二人に委ねられている。
シンは小さく溜息を吐くと、少々強引な方法で意識を向けさせることとした。
肩幅まで両腕を広げると刹那のときだけ悪魔の力を使い、それによって生まれた力で両掌を胸の前で叩きつける。すると手を打ち鳴らしたものとは思えない程の爆音が廊下へと響き渡り、その音の大きさにカメラを構えた人物たちが一斉にシンの方を向いた。
「生徒会のものです。すいませんがここは撮影の会場ではありません。ましてや今日は授業公開の日です。できれば速やかに解散してくれませんか？」
学校側から注意を受けたせいかカメラを動かす手を止め名残惜しそうに去って行き、撮影会が終わったのを見て野次馬も退いていく。
そして残されたのは何時ぞやの魔法漢女が紹介していたアニメキャラと同じ格好をした少女と、やはりと言うべきかその少女の側で同じポーズをとっているピクシーとジャックフロストであった。
何故か少女の容姿は不思議と既視感を覚える。何処かで見たことのある顔立ちであるが、その何処かが思い浮かばない。
ピクシーとジャックフロストはシンが現れたのを見て『しまった』という表情をする。そのままシンに背を向け逃げ出そうとするが、それよりも早くシンが二人の首根っこを

掴み、持ち上げた。
「大人しくしておけと言った筈だが？」
「ごめんごめん。やっぱりこういった人の出入りが多い日だと部屋で遊んでいるより外に出たくなっちゃって……」
「ヒーホー。ごめんホー！　でも別にイタズラとかはしてないホー。怒っちゃやだホー」
一応は謝る二人。シンも叱るもそれ以上は強くいうつもりは無かった。
「あなたジャックちゃんとピクシーちゃんのお知り合い？」
魔法少女の格好をした少女が小首を傾げながらシンの顔を覗いてくる。出会ってそう時間は経っていないと思うがもう二人を『ちゃん』づけで呼ぶ仲らしい。ただそれよりも注目すべきは少女の持つ気配、人垣の中から感じた悪魔の気配は明らかに彼女のものであった。
「そうだホ。オイラたちの仲魔だホー。『レヴィアたん』」
「シンっていうんだよ『レヴィアたん』」
「へー、じゃあシン君って呼ぶね！」
和やかにシンを紹介するピクシーとジャックフロスト。それに対し親しみを込めて名を呼ぶ魔法少女ことレヴィアたん。だがシンは聞き捨てならないことを聞き、独り固まる。

「……すみませんがお名前を窺ってもいいですか？　できればフルネームで」
「え！　もしかして私ってナンパされてる！　――でも聞かれたからにはちゃんと答えないとね☆」
そういうと手に持っていたスティックをくるくると器用に回し、止めると同時にポーズも決める。
「愛と勇気の魔法少女セラフォルー・レヴィアタンです☆」
「――冗談ですよね？」
四大魔王の内の一人、レヴィアタンの名を受け継ぐ悪魔を前にしてシンは、柄にもなく悪魔の未来について本気で心配するのであった。

◇

どうしてこんなことになったのか。そんな言葉を幾度となく頭の中で反芻させながら重い足取りで学園内を歩いていた。
ことの発端はセラフォルー・レヴィアタンと出会った後のごたごたのせいである。
シンとセラフォルーが自己紹介をし終え、間も無くしてリアス達一行とサーゼクスたち、そしてリアスの父を案内していた生徒会メンバーが姿を現した。

生徒会のソーナが現れた途端、セラフォルーはシンには理解不能な二次元的会話でソーナに喋りかけ、ソーナの方は顔を真っ赤にして羞恥に耐える様な表情でそれに応じていた。

この二人、実姉と実妹である。

そこでシンは、並ぶソーナとセラフォルーの顔付きを見て、最初に覚えた既視感について納得した。見比べると顔の造詣が非常に似ている。だが互いの纏っている雰囲気のせいで最初は似ていることに気付くことが出来なかった。ソーナの表情は固く冷たいが、セラフォルーの表情は柔らかく緩いという印象である。

傍から見て姉妹仲は悪くは見えない。寧ろ姉であるセラフォルーは如何にも溺愛しているといった感じでソーナに接し、ソーナは努めて冷静に振る舞おうとしていたが、セラフォルーの勢いに押されているせいかいつもの冷徹な表情も若干引き攣り、言葉も詰まらせながら喋っていた。

だがそれでも限界があるのか、やがて見たことも無い程に赤面したソーナは、何故かシンの近くまで寄ってくるとシンの両肩を強く掴み懇願するかのように小声である頼みごとをする。

「間薙君。私はもう色々と限界です。というよりもう耐えられません。お願いします。お姉様を学園案内するという名目で監視してくれませんか？　私は魔王様たちを案内

するという理由でこの場を去ります」
　こんなことを言う程、ソーナは切羽詰っているらしい。
　瞳を潤ませるソーナの必死な頼みを無下にすることは流石に出来ず、気乗りはしないもののシンは首を縦に振り了承の意を示す。
　そこから先のソーナの行動は実に素早いものであった。
「申し訳ありません。お姉さま。私はただいまサーゼクス様たちに学園の案内をしている最中ですのでそろそろ――」
「えええええ！　折角お姉ちゃんとソーたんが姉妹仲良く再会したんだよ！　もう少しゆっくりしてもいいと思うよ！」
「ふむ。私たちのことは別に後回しでも構わないですが」
「そうそう。グレモリーのおじさまもこう言っているんだから！」
　セラフォルーのことを思い、リアスの父がソーナにとっていらない助け船を出す。だがそこで別方面から手助けをする人物が現れた。
「旦那様。確かにそれも大切なことではありますが、ソーナ様は未だ生徒会長として仕事を務めている最中です。ここはセラフォルー様の妹としてのソーナ様では無く駒王学園の生徒会長であるソーナ様の顔を立てては？」
　ソーナを手助けするのはリアスの父の背後に立つセタンタであった。ソーナの心境

を汲み取り、ソーナの望む展開に持っていこうとする。
「だが――」
「セタンタ様の言う通りです。皆の規範となる生徒会長として職務を投げ出したり疎かにすることは出来ません」
「そんな……！　お姉ちゃんよりも仕事を取るの！　ソーたん！」
涙目になってショックを受けたような表情をするセラフォルー。
「……きちんとお姉さまと再会を喜び合う時間はとりますから安心してください。ただそれまでの間は、そこにいる間薙君たちがお姉さまに学園等を案内して下さるように頼んでおりますので」
「本当に？」
「――本当です」
一瞬言葉を詰まらせたのは返答を躊躇ったのではないと信じたい。
「分かったわ！　ならお姉ちゃんはピクシーちゃんとジャックちゃんとシン君と見学してくるね！　ソーたん」
「分かって下さってありがとうございます。……あと出来れば人前で『たん』付けで呼ぶのは止めてください」
セラフォルーの了解を得て、シンたちが学園を案内することが決定し、ソーナもサー

ゼクスたちの案内という名目でこの場から逃れることが出来たが、その別れ際にソーナが近寄り、シンの側で周りに聞こえない様に小声で話しかけてきた。
「あとはお任せします。間薙君なら万が一ということは無いと思いますがくれぐれもお姉様の扱いには注意してください。……冗談を抜きにしてお姉さまならば国一つ一日で滅ぼせますので。……では」
なんとも有り難くない情報を残してソーナたちが去っていく。
シンはこれから、魔法少女もどきと時間を潰すのではなく、生きた殲滅兵器と時間を潰すのだと認識し直した。
「……」
去り際にセタンタとグレイフィアが無言でこちらを見つめてくる。シンには何故かその眼が『ご愁傷様です』と語っているようにしか見えなかった。
「……まあ、大変だろうけど頑張れ」
匙がそう言い残してこの場から立ち去る。残りの生徒会のメンバーもご愁傷様といった目を向けながら帰っていく。
「いい、シン？　これが現四大魔王なの。想像の斜め上を行く位軽いけど、実力も想像の斜め上を行く位あるわ。色々と酷いけどお兄様やレヴィアタン様はまだ比較的ましな部類だと思うから」

リアスはそう言い、サーゼクスと話があるという理由からソーナたちの後を追って行った。

そして最後に一誠が近付いてきて、シンに真顔を見せながらこう言う。

「今度、お前の両親を紹介してくれ」

あまりに意味不明で唐突な台詞に、さしものシンもただ沈黙するしかなかった。

などなどと少し前のことを思い起こしながら、シンは背後で戯れる三人に目を向ける。その三人は当然、ピクシーとジャックフロスト、そしてセラフォルーであった。

魔法少女という存在に憧れているということもあり、ピクシーとジャックフロストを大層気に入ったのか、セラフォルーはピクシーを被っている帽子に腰掛けさせ、ジャックフロストを抱きかかえながらご満悦といった表情で、シンの説明をそっちのけで愉しそうに会話をしていた。

別に話を聞いてもらえないこと自体特に不愉快でも無いし、寧ろシンにとっては有り難いことであった。何せ格好や話す内容から自分とは正反対の人物であることは重々承知であった為、下手な会話をしてセラフォルーの機嫌を損ねるよりも遥かにましである。

ちなみにセラフォルーとピクシーたちが出会ったのは全くの偶然であり、たまたま撮影会をしていたセラフォルーの所に人ごみが気になってピクシーたちが顔を出したと

ころ、その姿にセラフォルーが一目で気に入り一緒に撮影することを進めて、ということらしい。

　常人には見えない二人であるがカメラやビデオ等には姿が写る筈なので、撮影していた人たちは現像したとき居もしない存在が写りこんでいて、さぞ驚くだろうとシンは思う。同時に魔法少女の格好をした少女の写真を、人目に見せびらかすようなことはしないであろうとも考える。流石に魔法少女、雪だるま、妖精という組み合わせで心霊写真というのも、客観的に見ておかしな話である。

「――でね。ソーたんが今日の授業参観のことを教えてくれなかったの！　お姉ちゃんとってもショックで傷付いちゃった！　もしも気付かなかったらこのショックを力に変えて天使や堕天使を纏めて抹☆殺してたかも！」

「へえー、レヴィアたんは行動的だねー」

　言い方は冗談の様に聞こえるが、恐らくはきっと可能であろう物騒な発言に対し、ピクシーもジャックフロストも引くことなく、逆に感心したり興味を持ったりしていた。大物を相手にしてのその神経の太さ、正直大したものである。

「小さい頃のソーたんも活発な子だったのにいつの間にかクールな子になっちゃって本当に寂しい！」

「ふーん。そう言えばソーナとレヴィアたんっていくつ齢が離れてるの？　というかレ

ヴィアたんって今、いくつ？」

恐らくこの世界に存在する悪魔たちが、口が裂けても言えないような質問を、ごく自然に口にするピクシー。あまりに軽く言うのでさり気無く聞いていたシンも、思わず聞き流してしまうところであった。

『この手の人物にそんなことを聞いてはいけない』

衝動的にそんなことを口走りそうになるのを押さえる。ここで下手に口を挟めば、火に油を注ぐ結果にしかならない。

「レヴィアたんはいつだって魔法少女適齢期です☆」

対するセラフォルーの対応は至って普通なものであり、直接言わずに冗談で誤魔化す。

「そんなのあるんだー」

「あるんだよ☆　レヴィアタンは永遠の魔法少女適齢期なんだから☆」

特大の地雷を踏み抜いたかと思えば、意外とあっさりとした形で収束する。これはピクシーたちだからこそ許されるのか、あるいはセラフォルーの器の大きさによって許されたのかは判断できない。シンも試しに聞くような敢えて自分から危険に飛び込むような愚行をしなかった。

「ヒホー！　オイラもレヴィアたんの真似したら王様になれるかホー！」

「ゴメンねー！　私は魔王だけど真の目標は魔法少女なの！　だから私の真似をしても魔法少女にしかなれないよ、ジャックちゃん！」
「ヒホ！　王様よりも魔法少女の方が上なんだホ？　じゃあオイラも魔法少女を目指せばいずれは王様になれるんだホ！」
　ジャックフロストの言葉を聞いてシンの脳裏にセラフォルーと同じ格好をしたジャックフロストの姿が描かれる。愛嬌のある顔のせいか意外と似合っていた。
「うーん。ジャックちゃんの魔法少女姿も可愛らしいけどピクシーちゃんの魔法少女姿も素敵だよね」
「アタシも？」
「そう！　二人の姿を見たときビビッと来たの！　この二人の愛らしさは魔法少女になれる器だって！　――と言う訳でいきなりだけど私と一緒に『マジカル☆レヴィアたん』に出てみない！」
「何それ？」
「何だホー？」
　初めて聞く言葉にピクシーとジャックフロストは揃って首を傾げる。シンも話を黙って聞いていたが、何とも言えないその名に心中で困惑をしていた。

「今、冥界で絶賛放送中の私が主役の特撮番組！　天使、堕天使、ドラゴン、悪魔祓い、その他諸々、悪魔の敵を全部まとめて粉砕！　滅殺！　するのがメインのお話しよ！」
　話を聞くだけでプロパガンダのニオイが漂ってくる物騒な内容の番組である。自分が主役なのは魔王としての特権なのか、もしくはこれすらも魔王としての仕事なのか判断に困るものがあった。
「君達なら私の相棒兼マスコット的存在になると思うの！」
「ふーん。どうしようかなー」
「ヒーホー……」
　雰囲気からして二人とも決して乗り気が無いわけではない。基本的に楽しいことや面白いことが好きな二人だが、二人にとって番組にでるということは未知なることなので、色々と即決しにくいのであろう。
「シン。どうする？」
「ヒホ。オイラたちは出てもいいんだホ？」
　話をシンへと振って来た。振られたシンも正直こういった場合、どうすれば正解なのか分かりかねる。ただセラフォルーがやたらと潤んだ目で、こちらに無言の圧力を掛けて来るのが気になってしょうがなかった。
「出たいならば出ればいいさ。決定権はお前たちにある」

「うん。分かった。レヴィアたーん、アタシたち出てもいいよー」
「ヒーホー」
「ホント！　ピクシーちゃんもジャックちゃんもシン君もありがとー！」
　セラフォルーは溌剌とした笑みを浮かべながらシンの腕に自らの腕を絡める。肩に乗るピクシーには頬を寄せ、ジャックフロストは空いている方の腕で抱き締め全身で喜びを表現していた。
「準備が出来たら絶対に呼ぶね☆　私たち『四人』なら子供たちのハートを絶対にキャッチ出来るよ！」
（……四人？）
　一人目はセラフォルー、二人目はピクシー、三人目がジャックフロストとするならば、残る四人目は――
（……もしかして俺も含まれているのか？）
　いずれ訪れるであろう末恐ろしい未来に、冷や汗を流しそうになるシンであった。
　余談ではあるが、このときセラフォルーと腕を絡めている姿を一般生徒に目撃されており、そのせいで『間薙は自分の彼女に魔法少女の格好をさせている』という碌でもない噂を囁かれることとなる。

◇

翌日の放課後、シンは旧校舎のとある場所に呼び出されていた。いつもの様にジャックフロストとピクシーも一緒である。

旧校舎一階。とある教室の前に部員一同が揃っていた。集まった部員たちの前にある教室には幾重にも立ち入り禁止と表記されたテープが張り巡らされ、おどろおどろしい文字も刻まれている。

詳細な事情を知らされずに集まったシンたちであったが、リアスが言うにこの教室の中に、長いこと姿を見せなかったもう一人の『僧侶』が居るという。

何故その『僧侶』がこの部屋に居るかというと、その『僧侶』には固有の能力が有り、リアスにはそれを制御できないということで、四大魔王を含む悪魔の中で上位の存在から隔離することとなったらしい。話だけを聞くと酷いものに聞こえるが、肝心の閉じ込められている『僧侶』自身が重度の引きこもりであるらしく、一応深夜などの限られた時間のみ封印の外に出られるが、それすらも拒み二十四時間、ずっと一室に閉じこもっているという。

そんな引きこもりである『僧侶』をこの度のコカビエルの一戦でリアスの実力が再評価されたことにより扱い切れると判断し、外へと連れ出すこととなった。

取り敢えずの説明を終えたリアスは教室の封印を朱乃に解かせ、二人で教室の中へと

入って行く。
　そんな中、説明を聞き終えたピクシーとジャックフロストは何故か首を傾げており、その状態で木場と小猫に話し掛ける。
「ねーねー？」
「何だい？」
「この中に居るのって一人なの？」
「……そうですが？」
「そんなはずないホー」
「それってどういうことだい？」
「オイラたちが前にここに来たとき、扉の向こう側から二人分の声がしたホ！」
「何だって？」
「イヤァァァァァァァァァァ！」
　耳が痛くなるほどの甲高い絶叫。少なくともそれはリアスと朱乃の声では無い。
　だが間も無くして――
『キャァァァァァァ！』
　今度はリアスと朱乃の悲鳴が上がる。
「部長！　朱乃さん！」

その悲鳴を聞いて真っ先に一誠が扉の中へと入っていく。その後を残りのメンバーも続く。

部屋の中に入るとそこには薄暗い明かりも最低限しか点いていない。可愛さを重視した装飾が施され、ぬいぐるみが辺りに置かれているのは『僧侶』の趣味らしい。そして何故か置かれている洋式の棺桶。周囲から浮いており異様な存在感を放っていた。

そして更に視線を動かすとリアスと朱乃が居り、床に座り込んで驚いた表情をしている。更にその近くには金髪で紅い眼をした『僧侶』と思われる少女の姿。

陶磁器の様な白い肌に愛くるしい顔立ちをしているが、今はがたがたと震え上がりその眼に涙を浮かべて座り込んでいる。

「部長！　朱乃さん！　そしてそこの子！　中で何が――」

そう言い掛けたとき一誠の肩を誰かが軽く叩く。それに反応し振り返る一誠の目に飛び込んできたのは――

「ばあ」

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

眼前一杯に広がるカボチャで出来た顔であった。

南瓜、面妖

「ヒ～ホホホ！」

驚き仰け反る一誠の顔を見て、宙に浮かぶカボチャがケタケタと体を揺すって笑う。

ハロウィンなどで見る機会のあるカボチャをくり抜いて出来た顔、その両眼は橙の炎の様な色で輝いており、それが瞳の様に見える。頭には頭頂部が尖った緑の帽子を被り、顔から下には藍色のローブを纏っている。だがひらひらと揺れるローブの下には暗闇が広がっており、体らしきものは見えない。唯一白い手袋を付けた左手だけがローブの袖から出されており、手には目と同じ輝きを放つカンテラが握り締められていた。

「だ、だめだよぉぉぉぉぉぉ！　ランタン君！　そんなことしてたら怒られるよぉぉぉぉ！　ぶたれちゃうよぉぉぉ！」

震えていた金髪の少女が、一誠を驚かしたカボチャをランタン君と呼びながら、自分の所に来るように激しく手招きをする。ランタン君と呼ばれたそれは、笑いの尾を残しながらそれに素直に応じ、ふよふよと金髪の少女の下へと寄って行った。

「なあ、そいつって――」

「ヒィィィィィィィ！　違うんです！　普段は良い子なんですぅぅぅぅ！　だけど

誰かを驚かせるのが好きなんですぅぅぅ！　ちょっとした出来心でやったことだから許してくださいいいいい！　いやだぁぁぁぁぁぁぁ！　殴らないでええええええ！　ゴメンなさいいいいい！　ゴメンなさいいいいい！」

寄って来たカボチャを抱きしめながら、まるで自分がやったかのように激しく怯える少女。小柄な体からは想像出来ない声量と声の高さに、シンは耳の奥が痛くなってきそうな錯覚を覚えた。ピクシーとジャックフロストに至っては、顔を顰めて耳を押さえている。

「いや、殴らないから。俺は基本的に女の子には暴力は振るわないから」

怯える少女を何とか宥めようとする一誠。だが一誠の言葉を聞いて、抱き締められていたカボチャはより声を大きくして笑う。

「ヒ～ホホホ～。女の子？　女の子？　この子が女の子？　ヒ～ホホホ～、ヒ～ホホホ～、だからいつも言っているじゃないか～格好を変えないかって～」

「だ、だ、だって女の子の服の方が可愛いんだもん。こっちの方が『僕』に合ってるんだもん」

二人の会話を聞き、ふと疑問が生じる。今もカボチャに笑われている彼女と初めて会ったシンたちは、その会話に引っ掛かるものを覚えた。

「『僕』？　女の子の服の方が可愛い？　……外国人の女の子ですよね？」

代表し疑問を口にした一誠に、カボチャに驚かされたショックから立ち直ったリアスが立ち上がりながら、その首を縦ではなく横に振る。
「見た目は女の子に見えるけど、この子は紛れも無く正真正銘の男の子よ」
「え……？」
予想外の言葉だったのか、一誠はリアスと、男の子と呼ばれた少女を交互に見る。事情を知らなかったアーシアとシンも思わず凝視し、その眼に対象の、男と呼ばれた彼女が縮み上がる。
「え？　え？　いやいやいやどう見ても女の子でしょう？　冗談ですよね？　俺のことをからかっているんでしょう？」
「残念ですが本当です。彼、女装趣味があるんです」
トドメを刺す様な朱乃の一言。それを聞いた一誠が絶叫を上げる。
「詐欺だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「ヒィィィ

体無いにも程があるだろうがぁぁぁぁ！　残酷だ！　無慈悲だ！　理不尽だ！　これがあれか！　世間で言われている『こんな可愛い娘が女の子の訳ないだろ』という奴なのか！」
「何を言っているんだお前？　――気色悪いな」
「本気で返すんじゃねぇよ！　俺だって別に理解できねぇよ！」
哀しみながら口走った言葉に思わず正直な感想を言うシンに、一誠は歯を剥いて怒りを見せる。
「畜生……いい感じの美少女なのに同じナニがついているのかよ……くそ、神は死んだっていうのか……ああ、そういや死んでたな……」
「……悲しむのは結構ですが、それ以上暴走するとギャーくんも暴走するので控えて下さい」
短時間の間に見事な喜怒哀楽を見せる一誠に、小猫は呆れた目を向けながら釘を刺す。小猫の言った通り、女装少年は涙目で一誠を見ていた。
「つーか女装趣味って何だ！　普段見せる相手がいないのに一体誰に見せる為の女装なんだ！　自分か！　それともそのお化けカボチャか！」
「ボクも正直この趣味は理解できてないんだよね～。ヒ～ホ～」
「だ、だ、だ、だって可愛い服があったらき、き、着てみたいし。可愛いぬいぐるみ

とかがあったらだ、だ、だ、抱き締めたくなるもん」
一誠が問い、カボチャも無理解であることを示す。それに対し声を震わせながら精一杯の反論をするが、それが一誠の感情に火を注いだ。
「なるもん、じゃねぇよ！　女装趣味どころか乙女趣味まであるのかよ！　ああ、ああああ、ああああああ！　何か不覚にも可愛いと思ってしまった数秒前に記憶を消してしまいたい！　男なのに、野郎なのに！　男にときめくような趣味なんてないのに！」
「……切っ掛けはいつも唐突」
「目覚めないからね！　別にそっちの趣味に走らないからね！　小猫ちゃん！」
ぼそりと洩らした小猫の台詞に心底恐怖を覚えたのか鳥肌を立てながら否定をする。
「と、と、と、ところでこの人達は誰なんですか？」
初めて顔を見せるシンたちから目を逸らすようにして、女装少年はリアスへと尋ねる。初対面の相手を直視することにすら怯えているらしい。
「貴方がここにいる間に増えた『眷属』よ。『兵士』の兵藤一誠、『騎士』のゼノヴィア、そして貴方と同じ『僧侶』のアーシア」
「も、も、も、もう一人いますが？」
「彼は私の協力者で眷属ではないわ。少し特殊な力を持っているけど人間よ。間薙シンというの」

紹介されてシンは軽く頭を下げるが、何故か女装少年は絶叫する。
「ヒィィィィィィ！　か、か、か、顔が怖いです！」
別に凄んでいるという訳では無くいつも通りの無表情であるが、その通常通りの表情さえ女装少年にとっては恐怖の対象であるらしい。恐怖に慄きながらも同時に喧嘩を相手に売るという器用なことをする。
「悪気は無いのですよ？」
「分かっていますから」
朱乃がフォローの言葉を掛けるが、この場に於いては逆効果にしかならない。
「……ふっ」
見えない所で誰かが吹き出す声がしたのでそちらの方を見てみたが、誰が犯人であるかは分からなかった。何故なら全員顔を背けている。明らかに笑いを堪えている様子であった。ピクシー、ジャックフロストに至っては腹を抱えて床を転がりながら笑っている。
「――それで貴方が抱き締めている子は誰なのかしら？　ここにはずっと貴方一人だと思っていたのだけれど？」
一応、強引に話を進めて今流れている空気を換えようとするリアス。その気遣いを察し、落ち度は全くないが、シンは何とも言えない気分となる。

「こ、こ、こ、この子はジャックランタン君です……」
拾った子猫か子犬を母親に見つかった様に、一言一言を怖る怖るといった具合に語りながら、自分の胸の前にいるカボチャを紹介する。
「ジャックランタン……そう、やっぱり」
その言葉を聞いた途端、リアスや朱乃が神妙な顔をしながら納得する。
シンもハロウィンの飾りなどで良く見るカボチャをくり抜いたランタンとして名前を知っているし、その伝承なども多少知っていた。
火の精、旅人の道案内をする霊、天国にも地獄にも行けなくなった彷徨える亡霊などの伝承を持つ、簡単に言えば幽霊といった存在である。
「そうだホ～。ボクがジャックランタンだヒ～ホ～。お姉さんたちの反応も中々良かったよ。そっちのお兄さんには負けるけど～」
身体を揺すって先程の反応を思い出しながら笑うジャックランタン。何処か子供っぽいその仕草は、笑い転げているシンの仲魔と似たような印象を受ける。
「どうしてその子と一緒に居るんですか？」
「そ、そ、そ、その最初は別に居る気は無かったんですけど――」
どもりながらも事情を説明し出す女装少年。彼の話だとある日から毎晩、決まった時間に扉を叩かれるということがあったという。最初はそのことに恐怖し悲鳴を上げな

がらも頑なに扉を開けることが無かった。しかしそれでも扉が叩かれることは止まらず、それが何か月も続いた。

ところがある晩、いつものように決まった時間に扉が叩かれると思っていたが、時間が過ぎても扉が叩かれることが無く、ほんの少しだけ気になった彼は、扉を僅かに開け外の確認をした。そのときは周囲に誰も居らず、結局そのまま閉じてしまったが振り返ったときに――

『ばあ』

『ヒィィィ

「ふらふら～と迷ったときにたまたまここを見つけてね～、こっちが驚くぐらいビックリしてくれるからついつい面白くなってね～」
　当時のことを思い出しながらジャックランタンは笑う。その度に目の奥の光や手に持ったカンテラの光が揺れる。表情が決まっているジャックランタンの代わりに感情を現しているようであった。
「新しいお友達も出来たことだし、この子と一緒に外に出ましょう？　もう封印されることも無いのよ」
「嫌ですぅぅぅぅ！　お外怖い！　僕に外の世界は無理ですぅぅぅぅぅぅぅ！　僕が出たらあっちこっちに迷惑を掛けるだけなんだぁぁぁぁぁぁぁ！　それだったら僕はここでランタン君と一緒にここにいるんだぁぁぁぁ！」
「ヒ～ホ～。ボクは別に引きこもりじゃないんだけどね～」
　優しく外に出ることを促すリアスを強く拒絶し、そんな彼の様子を胸の中にいるジャックランタンがやや呆れる。
「いいじゃん外に出たってさー」
「そうだホー！　この前誘っても出なかったんだから今度こそ一緒に遊ぶんだホー！」
　シンたちの背後からピクシーとジャックフロストが姿を現す。後方に居た為にこのときジャックランタンたちは初めてピクシーたちの存在を認識した。

「あれ～、その声ってこの前扉を叩いていた人たち～？　ヒ～ホ～、あのときは開けなかったけど同じ様なものだとは思っていなかったよ～」
「ヒーホー！　オイラのヒーホーを取っちゃダメホー！　それはオイラたちジャックフロストのヒーホーだホー！」
「別にいいじゃないかヒ～ホ～。減るもんじゃないし～。気に入ったからずっと使わせてもらうヒ～ホ～」
「駄目だホ！　減らないかもしれないけどオイラのだホ！」
「ヒ～ホ～ヒ～ホ～ヒヒホ～」
「駄目ホ！　勝手に使っちゃ駄目ホ！」
　口癖に対し妙なこだわりを見せるジャックフロストと、それを面白がってしきりにそれを使うジャックランタン。そんな二人の諍いを余所にピクシーは女装男子の方へと近付く。
「こんにちはー」
「こ、こ、こ、こんにちは！」
　どもりながらも挨拶は返す。初対面ではあるが、心なしか一誠たちを見たときよりも拒否感は弱かった。
「ねぇねぇ。この前アタシたちが来た時には何で開けてくれなかったの？」

「そ、そ、そ、それは、僕外や外の人が怖いから……」
「えー、じゃあ今見てアタシたちは怖い？」
「え、えー、えっと……」
　しどろもどろと言った感じで言葉を選ぼうとしているのかそのまま黙ってしまう。その様子を見ていた一誠が煮え切らない姿に業を煮やしたのか一誠が近寄り、やや強引に腕を掴む。
「ほら、部長たちも外に出ろって――」
「ヒィィィィィ！」
　このとき最大級の絶叫を上げる。その瞬間、シンの眼の前が真っ白に染まり気付いたときには――
「ばあ」
「……」
　何故か眼前一杯にジャックランタンの顔が映り込んでいた。シンは無言のままジャックランタンの顔を両手で挟み、離す。
「ヒ～ホ～？　ぜんぜん反応しないね～。それだけ無反応な人は初めてだよ～」
　全く反応を見せないシンにジャックランタンは珍しいといった感じの声を掛ける。シンはいきなり前に現れたジャックランタンのことを疑問に思いつつ、目の前が真っ白

となった原因と考える存在に目を向ける。すると、女装少年の腕を掴んでいた筈の一誠の手の中にはその姿が無く、一誠も突如居なくなったことに目を丸くしていた。アーシアとゼノヴィアも何が起こったのか分からず首を傾げている。

一誠から視線を離し部屋を少し見渡すと、目当ての人物が部屋の隅で、何処から調達してきたのか段ボールを頭に被って震えている姿を発見する。

その姿を見てリアスたちが溜息を吐く。態度から見て、見慣れた光景であるらしい。

「うう……またやっちゃった……ごめんなさい！　ごめんなさい！」

後悔しているかのように泣きながら叫ぶ女装少年。先程の不可解な出来事は間違いなくこの少年が原因である様子であった。

「これがこの子の『神器』の能力なんです。興奮状態が一定にまで達すると、視界に映るもの全ての時間を一時的に停止させることができるんです」

朱乃の説明に事情を知らない一同は、思わず泣いている少年の方に目を向ける。言っていることが本当ならば『神滅器』を除けば上位に入りそうな能力を秘めた『神器』である。

「この能力が制御出来ない為に大王バアル家、大公アガレス家、そして四大魔王であるサーゼクス様から他に被害が及ばない様にここに封じていたのです」

「ほ～んと何でもかんでも止めちゃうからね～。僕も最初のときは何度も停められ

ちゃったよ～。ま、面白い経験だったけどね～。ヒ～ホッホ～」
　朱乃の言葉に、封じられていた理由について納得する。正直、ここまで簡単に暴発するならば、なるべく人前には出さない方がいいと考えるのが普通である。
　シンはジャックランタンを掴んでいた手を離す。するとフワフワとジャックランタンは半べそ状態の彼の下に近寄り、そのままされるがままに抱き締められる。
「そう言えばこの子のことをきちんと紹介していなかったわね」
　リアスが涙目の少年の頭を慰める様に撫でながら言う。
「この子はギャスパー・ヴラディ。私の眷属『僧侶』。一応、この学園の一年に在籍しているわ。――そして転生前は人と吸血鬼のハーフ、ダンピールでありデイウォーカーよ」
『混血〈ダンピール〉』という言葉に再び女装少年ことギャスパーへと視線が集まる。ギャスパーはその視線に怯え、再びびくりと肩を震わせるのであった。

◇

「ほら走れ。その程度の速さならば蛞蝓の方がもっと速いぞ」
「ヒィィィィィィィ！　やめてええええええ！　こないでええええええ！」

「ヒ～ホ～。ギャスパー走れ走れ～」
「ランタンくぅぅぅぅん！　見てないで助けてぇぇぇぇぇ！」
旧校舎前で絶叫を上げながら走るギャスパー。その横ではジャックランタンが並走しながら囃し立て、背後ではデュランダルを掲げたゼノヴィアが追い駆ける。
「もうやだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「あっ」
ギャスパーが絶叫を上げるほんの少し前に、ジャックランタンがギャスパーの視界から離れる様に移動し、ゼノヴィアが一人取り残される。するとギャスパーの視界に収まっていたゼノヴィアはデュランダルを掲げた状態で固まってしまう。
「うわあああああああああん！」
ギャスパーは泣きながら隅に逃げ込むと、そこに置いてあった段ボール箱の中に素早く入り込み、閉じこもってしまった。
「また～？」
「生まれつきの箱入り息子ということで許して下さいいいいい！　ランタン君！　僕が外界で生きていくなんて無理なんだぁぁぁぁ！」
「燃やすよ～？」
「熱いのらめえぇぇぇぇぇぇぇ！」

ジャックランタンが手に持ったカンテラを近付けると、ギャスパーは段ボールの中でがたがたと震え出す。

最早何度目かになる光景を見て一誠、シンは思わず溜息を吐く。

現在の状況になったのは、ギャスパーを何とか教室の外に出した後のことが発端であった。

ギャスパーの紹介が終えた後、ギャスパーの詳細についての説明がリアスの口から話された。

『停止世界の邪眼〈フォービトゥン・バロール・ビュー〉』。それがギャスパーの中に宿る『神器』の名前である。

視界に映った対象の時間を停止させるという非常に強力な『神器』であり、未だ完全に制御出来ない状態でも数秒間相手を無防備にさせることが出来る優れた能力である。

またギャスパー自身もかなり優秀な能力を持っており、吸血鬼と人間のハーフということもあり日の光の下でもまともに行動出来るデイウォーカーであり、吸血鬼としては死活問題である血も十日に一度で済むという低燃費具合――ただし本人の感性は人間寄りで在る為、血を飲むということ自体に抵抗感がある――聖水、十字架は悪魔に転生している為に苦手であるが、ニンニクに関しては純血に比べれば多少抵抗力がある。

人間と吸血鬼の良い部分を受け継いでいるギャスパー、それどころか宿っている『神

器』との相性と本人の潜在能力が奇跡的な具合に噛み合っており、これといったことをしなくても『神器』の能力を高め続けているらしく、将来『禁手』へと至る可能性が極めて高いとまで言われている。

純粋な才能ならば朱乃に次ぐという程までに優秀な人材ならば、本来『悪魔の駒』一つで納まることが出来ない。実際、一誠も『神滅具』に覚醒する前の段階で『悪魔の駒』を八個も消費している。

それを可能とするのが『悪魔の駒』の中でも上位悪魔しか手に入れることが出来ない『悪魔の駒』を作る過程で出来たイレギュラー『変異の駒〈ミューテーション・ピース〉』を使用しているからであるらしい。その駒を使えば複数必要な相手でも一個で転生させることが出来るという。

その話を聞いたとき、思わずシンは一誠の方を見ていた。基本的なスペックは最低値に等しいが、将来的な能力を考えれば『悪魔の駒』八個で果たして足りるのか、もしかしたら消費した駒の中に『変異の駒』が混じっていたのではないか、という思いからであった。尤も、この考え自体あくまで推測でしかなく、その場で聞くことなくシンの胸の中に納まったままであったが。

大体の説明を終えたリアスは一誠たちにギャスパーの教育を任せ、三勢力会議の打ち合わせの為に朱乃を連れていってしまう。このとき木場も連れ出されていく。要件と

しては、コカビエル戦に見せた『禁手』である聖魔剣についてサーゼクスが興味を持ち、詳しく知りたいという理由であった。
　そして残されたメンバーでギャスパーの外界への恐怖及び対人恐怖症、そして神器の制御をする為の特訓を行うということとなったが、いざ特訓となると具体的に何をするか迷ってしまっていた。
　その際ギャスパーの訓練相手として真っ先に名を上げたのがゼノヴィアであり、いざ特訓が始まると冒頭のようなことが繰り返されたという。
「むっ」
　ギャスパーの神器の効果が切れたゼノヴィアは周囲を見回し消えたギャスパーの姿を探す。そして隅に置いてある段ボール箱を発見するとすぐにその側へと移動した。
「またかギャスパー」
「ヒィィィィィィィ！　もう勘弁してくださいいいいいいい！　せ、せ、せ、聖剣デュランダルが僕に当たったら消滅しちゃいますうううううう！　筋金入りのインドア派の僕にはハードルが高すぎますうううううう！」
「情けない声を上げるな。ヴァンパイアならば少しはヴァンパイアらしく振舞ったらどうだ？　基本的に奴らはプライドの塊みたいな連中だぞ？」
「僕は謙虚なハーフヴァンパイアなんですううううう！」

淡々と言うゼノヴィアに対し過剰な反応を示すギャスパー。出会ってそれ程の時間は経過していないが、すっかり苦手意識を持ってしまっていた。
「ひ弱なことを言う。健全な精神は健全な肉体からという言葉を知らないのか？」
「有名な言葉ですけどそれは原典の誤訳ですぅぅぅぅぅぅぅ」
「四の五の言うな」
「ヒィィィィィィィ！」
一体、短時間でどれほど繰り返されているであろうやりとり。するとギャスパーの隠れている段ボール箱に小猫が無言で近付いていく。
「……ギャーくん、ニンニクを食べればきっと今より強くなれる」
そう言って段ボールを突き破って中へ手に持っていたニンニクを突っ込んだ。
「ヒィィィィィィィィ！　ガーリック！　いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　小猫ちゃんのいじわるぅぅぅぅぅぅ！」
苦手なニンニクを無理矢理段ボール箱に入れられたギャスパーが中から飛び出してくると、その首根っこをゼノヴィアが素早く掴む。
「さあ、再開だ」
「誰か助けてぇぇぇぇぇぇ！　強くなる前に滅ぼされちゃうぅぅぅぅぅ！」
洒落にならない程に怯えるギャスパーの姿を見て、流石にこれ以上この特訓をし続け

ることは無理だと感じたシンが軽く溜息を吐いた後、ゼノヴィアたちの方に歩み寄る。
「少しいいか？」
「どうした？　間薙も加わるのか？」
「やめてえええええ！　二人がかりだなんて死んじゃうううううう！」
「違う。少し特訓の方法を変えないか？」
　シンの提案にゼノヴィアは少し不服そうな表情をした。
「私のやり方では駄目か？」
「お前のやり方自体否定はしない。ただ段階として早過ぎるかもしれないと感じただけだ。ハードルを少し下げてもいいんじゃないか？」
「むう。吸血鬼相手ならばこれぐらいで十分だと思ったのだが……」
「半分は人間なんだ。大目に見てくれ」
　ゼノヴィアは少し考えると掴んでいるギャスパーに話しかける。
「やり方を変えた方がいいか？」
「で、で、で、できればもうちょっと優しい方法で……」
「――了解した」
　ゼノヴィアは掴んでいた手を離す。
「それでハードルを下げるのはいいが、一体どういった方法で訓練をするんだ？」

「とりあえず、こいつたちの力を借りようと思う」
そう言ってシンが見た方向にはピクシーとジャックフロスト、そしてギャスパーの泣きっぷりを笑っているジャックランタンの姿があった。

◇

「うーす」
ギャスパーの新たな特訓が始まって暫くしてから匙が現れる。土いじりでもするのかジャージに軍手、そして園芸用のスコップを所持しての登場である。
「お、匙か」
「何か用事でもあるのか？」
「よー、間薙に兵藤。噂の『僧侶』の封印が解かれたっていうからちょっと様子見にな。野次馬だよ野次馬。で、その『僧侶』は何処に居るんだ？」
「あそこだ」
一誠が指差した先にはギャスパー、ピクシー、ジャックフロストジャックランタンがいたのだが――
「えい」

「ヒィ、バチってきた！」
「ヒホー」
「ヒィ、ヒヤっときた！」
「ヒ～ホ～」
「ヒィ、ムワってきた！」
　小走りで走るギャスパーの背後を三人が追い駆けているのだが、ピクシーは静電気程度の電撃を放ち、ジャックフロストはエアコン並の冷気を吐き、ジャックランタンはドライヤーぐらいの熱風をカンテラから放ちながら追う。それを受けながらぐるぐると走り回るギャスパーの顔も聖剣デュランダルに追い掛けられるのと比べれば天と地ほどの差がある。走っていることで疲労は見られるものの泣き顔では無かった。
「おー、リアス先輩のもう一人の『僧侶』って女の子だったのか、しかも金髪の。で、何をやっているんだ？　遊んでるのか？」
「まず二つ間違っていることがある。残念だがあの金髪の女の子に見えるのは、金髪の男の子だ」
「一応、あれは遊びじゃなくて特訓なんだがな……」
　一誠とシンの言葉を聞いた匙は目を瞬かせながらギャスパーの方を見る。
「どう見ても女の子にしか見えんし、どう見ても遊んでいるようにしか見えないんだが

？」

『それは仕方ない』

一誠、シンが口を揃えて同意する。尤も一誠は女の子にしか見えないという部分への賛同であり、シンの方は遊びにしか見えないという部分へのという意味での同意である。

「趣味が女装で引きこもりなんだ。まあ、初見じゃ分からないよな」

「うわ、嘘だろマジか……詐欺だろ色々と。つーか引きこもって女装して何か意味あんのかよ。普通は他人に見せるもんじゃないのか？」

「あいつは自己完結するタイプの女装趣味らしい」

「そっちかよ。上級者だな……にしても勿体無い。はぁ……」

可愛いと思った異性が実は同性であったという事実に匙の気分が一気に落ち込んだのか、手に持っているスコップが力無く揺れる。

「んで特訓とか言ってたけどあれの何処が特訓なんだ？」

「体力作りの為に走らせているんだがな……ピクシーたちの攻撃もあれでギリギリなんだ。あれ以上強くすると泣き始めて、力も暴発する」

「繊細過ぎるだろ……」

「さっきまではあれで追い駆け回していたんだがな」

シンが顎で指した方角にはデュランダルを肩に担いだゼノヴィアが走っているギャスパー達を見ている。
「おいおいおい、ゼノヴィア嬢と伝説の聖剣の組み合わせかよ。俺でも泣くぞ」
「流石に埒が明かなくなってきたから交代してもらったが……正直、失敗したような気もする」
ハードルが予想以上に下がってしまったことにシンは軽く頭を悩ませた。シンもそれ以外のメンバーも自分を鍛えるということに関しては努力を積めるが、自分以外を鍛えるということに関しては殆ど初心者である。唯一この場で小猫がそれなりの経験があるが、割とゼノヴィア寄りのスパルタで在る為にギャスパーを鍛えるには不向きであった。
「何かふわふわしたカボチャのお化けみたいのもいるがあれも新入りか？　お前の仲魔なのか、間薙」
「違う。あのカボチャはギャスパーの――友人みたいなものだ。名前はジャックランタンだ」
「へー、そうなのか。てっきりああいった感じの奴をお前が集めているのかと思ってた」
「それも違う。偶然だ偶然」
匙に変な印象を持たれていたことを知り、シンはそれをやや言葉を強くして否定し

た。
「うむ」
　そのとき、ギャスパーたちを静かに見ていたゼノヴィアが一人何かに納得したかのように頷くので、特訓中のギャスパーたち以外の視線がゼノヴィアに集中する。
「すまないが少し外れる」
「何かあったんですか？」
「ああ、彼が怯えずにきちんと特訓を受けさせる方法を考えていたのだが、彼らの姿を見て閃いた」
　自信に満ちた態度で出現していたデュランダルを仕舞うと旧校舎の方に向けて歩き始める。
「準備をしてくる。その間の特訓は頼んだ」
「……それはいいですが……大丈夫ですか？」
「任せろ。私に良い考えがある」
　そう言い切りゼノヴィアは旧校舎の中に姿を消していく。
　残されたメンバーは誰も口を開くことは無かったが、共通して一つの言葉が頭に浮かび上がる。
『不安』

十数分後。ギャスパーたちが騒ぎながら旧校舎近くを数周したときソレは突如として現れた。

「待たせたな……ひーほー」

間の抜けた語尾を付けるゼノヴィアの台詞に一同不審に思いながら声の方角へと目を向け、ほぼ同時に絶句する。

「初めて作ったせいか思ったよりも時間が掛かってしまった……ひーほー」

そんなことを言うゼノヴィアは恐らくやや顔に疲労の色を浮かべているであろう。何故『恐らく』という推測の言葉が付くのか、理由は現在シンたちにゼノヴィアの顔が見えていないからである。

どうして見えないのか。それは現在ゼノヴィアの顔には恐ろしい程に不細工な面がつけられているせいであった。

顔の輪郭が隠れる程の歪な楕円形を下地にして、クレヨンを使用し配色をしているが、左右非対称の黒い点のようなものが眼の部分であり、歪んだ三日月がたぶん口の部分らしい。まるで絶望の底で嘆く様なその顔は、見る者全てに凄まじい不安感を与える。青と白の配色と、長さも太さもバラバラだが二又に分かれた帽子だと考えられる部分から、何とかそれがジャックフロストを模した面であることが、本当に辛うじて分かった。

そんな不気味過ぎる面を装着した状態で片手に背丈ほどある大剣デュランダルを握っているせいで、その姿はさながらB級スプラッター映画に出て来るシリアルキラーであった。まず子供が見れば十中八九泣き出し、大人が見れば悪夢としてうなされそうである。

「何だあれ……なあ、何だあれ……？」

「――分からん」

とんでもないゼノヴィアの姿に匙が小声でシンに問い掛けて来るが、シンも明確な答えなど分かる筈もなく一言で返す。

するとゼノヴィアがシンたちの方を向く。その拍子に絶句していたアーシアが肩がビクリと跳ね上がる。

そしてそのままこちらに向かってきた。

「どうだ？」

「……何がだ？」

「これについてだ」

ゼノヴィアが面を指差す。

シンは即答出来ず黙ってしまう。それほどまでに意味不明な行動であった。

「彼らの特訓を見ていたとき、ふと閃いたんだ。私もピクシーたちのように邪気の無い

可愛らしさというものを見せれば少しは力の暴発を妨げることが出来ると。しかし、私自身あまり女としての可愛さに自信が無いし未だに勉強中の身だ。そこであの三人の姿を借りようと思い作ったのが、これだ……ひーほー」

語尾にジャックフロストの口癖を付けるのはゼノヴィアなりの物真似であるらしいが、熟練度が低すぎるせいで口癖が取って付けてあるようであった。

一応、横目で本人がどういった反応をしているかこっそりと見ると、目を丸くしてポカンとしている。隣に居るピクシーも同じ反応であり、表情の分からないジャックランタンは目を丸くする代わりにカンテラの灯りが激しく揺れ、双眸に灯る火が点ぐらいの小ささになっている。ギャスパーに至っては腰を抜かして地面に座り込み、がたがたと震え上がっている始末であった。

「中々の出来だろう？」

何故か自画自賛するゼノヴィアに『鏡を見て来い』と言いたくなる衝動に駆られるが、それを何とか呑み込んだ。形や結果はどうであれ、少し前までは異教徒や無神論者を気遣うことをしなかったゼノヴィアが、本来ならば敵対関係にある吸血鬼のギャスパーのことを考え、そして行動していることを無闇に否定できない。

「――努力は認める」

オブラートに包んだ言い方を選んでお茶を濁す。

「アーシアはどう思う？」
「えっ！　あの、その、え、え、えっと、あ、あの、あの……」
いきなり話題を振られたアーシアは、見ている方が気の毒になるほど分かりやすく動揺し、目は激しく泳ぎ、言葉もしどろもどろになる。人の良いアーシアがここまで動揺してしまう程、返答に困る代物である。
「す、すす、凄い！　――と思います！」
ようやく出てきた言葉は曖昧な言葉であったが、ある意味で的確な評価であった。
「そこまで言ってくれるか……」
それを褒め言葉と解釈したゼノヴィアの言葉に若干喜色が混じる。
「アーシア」
「は、はい！」
「よければこれを君にあげよう」
「は、はい！　……えっ！」
ゼノヴィアは面を取ると微笑を浮かべながらジャックフロストらしき面をアーシアへと差し出した。最近仲を深め始めたアーシアに対する友情の証として渡そうとしているのだろうが、アーシア本人は戸惑った表情をしている。
「で、でも、折角ゼノヴィアさんが作ったものは私が――」

「安心してくれ」
　ゼノヴィアは背中に手を回す。
「まだある。……ひ～ほ～」
　そして取り出したのは新たな面。色の配色からしてジャックランタンを模した面であった。色で判断したのは先程のジャックフロストもどきの面と非常に似た作りであり、違いを挙げるとすれば色くらいしかなかったからである。
　再び不気味な面を付けたゼノヴィア。こうなるとアーシアもその性格から断る訳にはいかなくなり渡された面を受け取る。
「遠慮せずに付けてくれ」
「は、はい……」
　最早覚悟を決めたのか、ゼノヴィアが勧めるがままアーシアもゼノヴィア手製の面を装着する。
　並ぶ二つの面。場の空気が一層混沌と化す。
「何だこれ……なあ、何だこれ……？」
「――本当に分からん」
　場合によっては笑える光景なのかもしれないが笑えない。既に笑いを通り越して恐怖の一歩手前まで来ている光景がこの場に広がっていた。

「ア、・アーシア……」
瞬時に変り果てた姿になってしまったアーシアを見て一誠は、声を震わせながらも視線を外すことが出来なかった。それ故にゼノヴィアは一誠の顔を見て勘違いを起こす。
「どうした？　そんなにアーシアを見つめ続けて？」
「どうしたって……いや、こんなものを見せられて無視できないだろう……普通」
「欲しくなったのか？」
「……え？」
何を言っているのか理解出来なかったのか一誠の反応が一瞬遅れる。
「遠慮はするな受け取れ」
取り出したのは配色から恐らくピクシーを模した面であった。それを迷う事無く一誠へと差し出す。
「いやいやいやいや！　こんなす――」
「こんなす？　何だ？」
一度は拒否しようとした一誠であったが小首を傾げ、自らの作製物に一片の疑念を持たない表情をするゼノヴィアを見て一誠は言葉をそこで止めた。
変わろうとしている相手の心を傷付けることに躊躇を覚えた故の行動であった。
「こ、こんな……こんな……す、す、す」

「す、す、す？」
「す、す、す、素晴らしいものをありがとう！」
「喜んでくれて何よりだ」
　気持ちとは裏腹な言葉を言ってしまい自分から逃げ道を塞ぐ一誠の姿を見て、シンも小猫も何とも言えない表情でピクシーの面を付ける一誠を見ていた。
「……残酷な優しさ」
「……まあ、あえて不正解を選ぶ選択もあるということだ」
　匙に至っては居た堪れない表情で一誠を見ている。
「分かる。凄まじく分かるぞ兵藤。そう言っちまう心境が痛い程分かる」
　経験があるのか共感を覚え、即席の不審人物となった一誠に哀悼の意を向ける。
「――さて、では私も訓練に参加するとしよう……ひ～ほ～」
　自作の面を手渡し終えたゼノヴィアの台詞に、腰を抜かしていたギャスパーの全身が震える。
　ぐるりと首を動かし、ギャスパーに視界を定めるとゼノヴィアは一歩一歩踏み出し始めた。
「あわ……あわわわ……！」
　迫ってくるゼノヴィアを見て絶叫すら挙げることも出来ないギャスパー。その間に

も淡々と近寄り続ける。
「ほう？　先程みたいに叫びながら逃げないのか。どうやらこの面の効果が少し出始めたみたいだな」
恐怖が飽和状態にあるギャスパーの様子を見て盛大な勘違いをするゼノヴィア。
「ひ、ひぃ……ひぃぃぃぃぃ」
腰を抜かした状態で腕や足を何とか使い距離を開けようとするが、その速度は余りに遅い。ゼノヴィアの歩む速さを下回っている。
「どうした？　逃げないということは少しは私に挑む覚悟が出来たのか？」
勘違いを継続させるゼノヴィア。ギャスパーも恐怖が臨界点近くまで達しているのか最早声すら出せない。
通常ならばこの時点で神器の能力が暴発しているのだが、こういうときに限って上手く作動しない。
見ている周囲も、ゼノヴィアがギャスパーを滅ぼすことはないと思っているものの、見てくれのせいで本当に殺るのではないかと錯覚し、いつでも飛び出す準備をする。
「へぇ。眷属さん方はここで――」
「た、助けてくださいぃぃぃぃぃぃぃ！」
「お遊戯を――はっ？」

不意に現れた声。その乱入者の声に張り詰めていた恐怖が割れたのか、藁をも縋る気持ちでギャスパーはなりふり構わず乱入してきた人物の足にしがみ付く。
「おい、いきなりどうした。落ち着――」
そのときになりその人物はこの場の異様な状況を把握する。大剣を担ぎ歪な面を被る少女、それを見守っている複数の存在。中には似た面を付けた人物が二人も居る。
「……何してたんだ、お前ら？」
至極真っ当な反応を見せながら、堕天使総督アザゼルが締まらない登場を果たすのであった。

講義、強制

何とも間の抜けた空気が漂う中、真っ先に一誠が声を張り上げる。
「ギャスパー、離れろ！　そいつがアザゼルだ！」
「……えっ？」
一誠が何を言っているのか理解出来ないといった表情をしていたが、ギャスパーの中でアザゼルという名と記憶の中にあるアザゼルという言葉が結びついたのか、流していた涙は恐怖によって逆に引っ込み、しがみついていた手を離す。
「あ、あああああ、アザゼルって……！」
「くっ付いたり離れたり忙しいヴァンパイアだな、お前」
ギャスパーの様子に呆れた眼差しを向けながら、掴まれたことで乱れた衣服を直す。アザゼルは一誠やシンと出会ったとき同様に浴衣を着ていた。
「う、ううう、うわあああああああ！」
堕天使の総督という大物を前にしてギャスパーの感情が一気に振り切れ、宿している『神器』が暴発しそうになるが、それよりも早くアザゼルの手がギャスパーの頭を押さえ、そのまま頭の向きを横へと向けた。その直後、ギャスパーの『停止世界の邪眼

〈フォービトゥン・バロール・ビュー〉』の力が放たれる。放たれた力は視界の中にあった木々に直撃し、落ちていた木の葉が空中で静止する。

「危ない危ない。噂で聞いていた通り本当に制御出来ていないな。全く、器はそれなりなのに扱う奴の容量〈キャパ〉が不足過ぎだろ。これじゃあただの害悪だな」

ギャスパーを観察しながら感想を述べるアザゼル。頭を掴まれたギャスパーは声を出すことも出来ずに震えていた。

「おい！　ギャスパーを離せ！」

『赤龍帝の籠手』を出現させ声を荒げる一誠だが、その顔にゼノヴィア手製のピクシーのお面を付けているせいでさまにならない。アザゼルもそんな一誠の姿を見て、頭痛を耐えるように額に指を当てる。

「別に危害を加えるつもりもないしお前らとやり合うつもりはないさ、下級悪魔諸君。……というかその顔に付けているのをどうにかしろ。気が散ってしょうがない」

「なら――」

「相手の言葉を鵜呑みにしてこちらが素直に動くと思っているのか？」

面を外す理由が出来たかと思えば、作った本人であるゼノヴィアがアザゼルの指示を拒否する。恐らく言葉通り相手に隙を見せない為に拒絶したのであろうが、このせいか折角面を外せるタイミングであったにも関わらず、真剣そのもののゼノヴィアの態度の

せいで逃してしまい、一誠、アーシア共に面を継続して付けるままとなった。
「――まあいい。気が抜けるがしょうがない。それより噂の聖魔剣使いは居ないのか？興味があるから少し見に来たんだが」
出鼻を挫かれて面が外されないことに対し、アザゼルの方が折れ話を再開させる。
「木場ならここにいないさ！」
「あっそう。いないなら別にいい。つまんねぇけどこっちも散歩のついでにっていうぐらいの気持ちだったからな」
あっさりと引き下がるアザゼルに、敵対心を見せていた一誠は拍子抜けしたような表情となる。しかし、アザゼルは散歩のついでと言っているが、この学園には外部から人外が来た場合に反応しリアスやソーナに報せる結界が施されていると聞いている。今の状況下では更に強化されているらしいが、それを反応させずさも当然の様にすり抜けてくることで、アザゼルの力量の断片を見せられた気分となる。
「一度会った奴も初めて会った奴もよろしく。俺が堕天使どもの頭をやっているアザゼルだ」
その言葉を証明するようにアザゼルの背からコカビエルよりも多い、十二枚の黒翼が展開される。
「おいおい！　マジかよ！」

半信半疑であった匙も漆黒の翼を見せられたことで本物のアザゼルであることを理解し、右手に自らの『神器』である『黒い龍脈〈アブソーブション・ライン〉』を出現させた。それを見たアザゼルは『ほぅ』と感心した声を洩らす。
『黒い龍脈』か。ちょうどいい『神器』を持ってるじゃねぇか。それなら不必要に動く『神器』への補助具になる」
「お、俺の神器で？」
「ああん？　『黒い龍脈』なら『神器』の力だって吸えるだろうが」
聞き返してきた匙にアザゼルは訝し気な表情をしながらも答える。その内容は思いもよらないものであったらしく匙は驚いた表情となった。
「……念の為に聞いておくがお前、自分の『神器』についてどれくらい知っているんだ？」
「え、えーと……相手の力を吸収するというのと……ああ、あとこの神器の中にヴリトラとかいう奴が眠っているとか……」
たどたどしく出てきた匙の答えにアザゼルは大きく溜息を吐く。自分が望む答えの遥か下であることを態度で示していた。
「全然理解していねぇじゃねぇか。ったく、お前あれだろ？　携帯電話やパソコンとかの説明書を全く読まずに使用するタイプだろ？　そんなんじゃあいつまでたっても『神器』を使いこなすことなんてできねぇぞ。よく覚えとけ。どんなものでも上手く使いこ

なすにはきちんとした理解が必要なんだよ」
　駄目な生徒を叱る先生のような口調で、自分の『神器』に対しての無理解を咎める。言われた匙も、相手が相手である上に間違った指摘でも無い為、口を噤んでしまう。
「特別サービスで教えてやる。そいつはあらゆる物体に接続して、そこから対象に流れる様々な力を抜き取ることも、逆に流し込むことも出来る『神器』だ」
「吸うだけじゃなくてこっちの力も流し込めるのか……？」
「熟練度が足りなければ出来ないが足りれば可能だ。二天龍には劣るものの『五大龍王』の一匹である『黒邪の龍王〈プリズン・ドラゴン〉』のヴリトラの力を宿した『神器』だぞ？……ああそうそう、お前にはまだ無理だろうけど、極限まで深く『神器』と結びつけば、ヴリトラそのものから力を借りられるかもしれんな」
「ご、五大龍王？」
　アザゼルの口にした大層な肩書を、初めて聞いたといった様子で口にする匙。それを察したアザゼルは額に手を当てて天を仰ぐ。
「か――！　これだから最近の若い奴は……こっち側の世界に居るんだったら五大龍王の名ぐらい覚えておけ」
　そのままアザゼルはシンたちをじろりと見る。
「正直に答えろ。この中で五大龍王について全く知らない奴、手を挙げろ」

いきなりの展開にシンたちは戸惑ってしまう。そこにゼノヴィアが口を挟む。
「先程も言ったが素直に動くと――」
「いいから知らないなら知らない。知っているなら知っているとはっきりさせろ。どうなんだ？」
有無も言わせない迫力にゼノヴィアは思わず口を閉じる。最初に現れたときとは比べものにならない威圧感であったが、それを発揮している状況が状況なだけに言葉に出来ない奇妙さがあった。
「アタシ知らなーい」
「オイラも知らないホー」
「ボクも知らないよ～」
先に手を挙げたのはピクシーたちであった。その素直さにアザゼルは頷く。
「素直で結構。お前らもこいつらの素直さ見習ったらどうだ？　今敢えて恥を晒すことで数年後の大恥を防ぐことだって出来るかもしれないんだぞ？」
まるで教師が教え子に話すかのような口調で再度挙手を促すアザゼル。最初にギャスパー目当てに来たのかと思えば、元の話から勢いよく脱線し始めていることをシンを含めて皆が感じていた。肝心のギャスパーはアザゼルに頭を掴まれたまま死にそうな顔をして震え続けている。

「わ、私は知りません……」
　三人に続いておずおずと手を挙げたのはアーシアであった。それを隣で見ていた一誠は渋い表情をしながらも挙手する。
「俺も……」
「お前、仮にも二天龍を宿している身だろうが。龍全部とはいかないまでも五大龍王ぐらいは押さえておけ。赤龍帝の名が泣くぞ」
「す、すみません！」
『何で本気で謝っているんだ相棒……』
「悪い……何だが先生相手にしているみたいで反射的に……」
　謝る一誠にドライグは呆れ、謝った本人も未だ敵である存在に謝ってしまったことに自己嫌悪を抱いている。
　一誠たちが手を挙げたのを見て、シンは無言で手を挙げ、五大龍王について無知であることを報せる。相手が強引に造った流れに乗るのは釈然しないものを感じるが、知らないことを知らないままでいることに比べればまだましであり、また教えてくれるであろうアザゼルは途方も無い年月を生き、長い年月をその内に刻んできた存在である。どういった意図でこのようなことをする気になったのかは判りかねるが敢えて乗る。色々と浅慮な行動かもしれないが純粋に好奇心の方がこのとき優っていた。

「よし。――それで結局お前は知っているのか知らないのか？」
シンが手を挙げたのを見てアザゼルはゼノヴィアに再度尋ねる。ゼノヴィアはしばし黙っていたがやがて手を挙げ知らないという意志を示した。それでもやはり不満があるのか手を挙げる動きがぎこちない。あの面の下で苦虫を噛み潰した表情をしているであろうことが容易に想像出来た。
「まあ、これで全員だろうな。グレモリー眷属でもそれなりにキャリアがある奴は知っているだろうしな」
最後まで手を挙げなかった小猫とギャスパーを見ながら一人納得する。尤も、ギャスパーは知っていても知っていなくても、とてもじゃないが動くことの出来ない精神状態となっているが。
「さてさっき言った五大龍王についてだが、と言っても別にそこまで詳しく説明するつもりはない。名前と異名をざっと言うから頭に記憶しておけ。――ああ、あと先に言っておくが五大龍王とか異名というのは悪魔や天使、堕天使たちが付けたもので本人たちが名乗っている訳じゃないからな。恐らく会うことは無いと思うが本人に対して異名で呼ぶなよ。変な反応されるだけだから。とまあ無駄な話はここまでにして一度しか言わないから良く覚えとけよ？」
そう言われると自然に記憶することに意識が集中するよう構えてしまう。

「五大龍王というのはさっき言った『黒邪の龍王〈プリズン・ドラゴン〉』のヴリトラ、『黄金龍君〈ギガンティス・ドラゴン〉』のファーブニル、『天魔の業龍〈カオス・カルマ・ドラゴン〉』のティアマット、『西海龍童〈ミスチバス・ドラゴン〉』の玉龍〈ウーロン〉、『終末の大龍〈スリーピング・ドラゴン〉』のミドガルズオルムのことを指して言う。更に昔は六大龍王と呼ばれていたんだが『魔龍聖〈ブレイズ・ミーティア・ドラゴン〉』のタンニーンが悪魔側に付いたことで龍王から外された」

「はい。質問」

ピクシーが手を挙げる。

「何だ？」

「その龍って今もいるの？」

「好き勝手やった奴らの半分がその力の脅威や危険性から封印され、もう半分は二度と暴れないことを誓って隠居生活のようなものをしている。今も生き延びているのは一体だけだ」

「ふーん」

「オイラも質問だホー」

ピクシーの質問が終わると今度はジャックフロストが手を挙げる。

「何だ？」

「王っていうぐらいだから凄い力があったんだホー？　どれだけ強かったんだホー？」
「ドラゴンとしての強さならば上から数えた方が早いな。単純に硬くて力が強いという分かり易い強さをもった連中だったが、それのせいで逆に弱点らしきものが殆どなくて攻略し辛いのが強みだった。こっちも質を数で補うぐらいしか戦う手段がなかったからな。例外としてヴリトラは他の五大龍王と比べて力が劣っていたものの、備わっていた特殊な能力のせいで脅威とみなされていたが」
　自分の内に宿る存在の脅威を知らされ、匙は目を丸くしながら自らの神器を凝視する。
「は～い。質も～ん」
「何だ」
　ジャックランタンがカンテラを持った手を挙げる。
「さっき匙って人の神器にはヴリトラっていう龍が宿っているって言ってたけど～、神器を上手に使えばそのヴリトラって龍を呼び出せるの～？」
「結論から言えば無理だ。ドラゴンそのものの力を操ろうとするならばかなりの力が必要になる。そもそもそいつの神器に宿っているのはヴリトラの力の一部だ。それだけじゃあ呼び出せない。……まあ、やろうとすれば方法も無いことは無いんだがな」
　最後に付け加えた言葉には若干の歯切れの悪さが感じられた。ある程度の目途は

立っているが、未だ実証されてはいないことである様子であった。
「他に質問は無いな。なければこの話はここまでだ。そしてさっきの話なんだが――」
自ら脱線した話をアザゼル自ら元に戻す。
「そいつの『黒い龍脈』をこのヴァンパイアに接続させながら練習させてみろ。神器の余分な力を吸い取ることで神器の暴走を妨げることが出来る。五感と繋がっている神器は扱い辛い傾向にあるからそれが妥当だ。あとは自分の意志で神器を繰り返し発動させて、扱いのコツを掴むのが妥当な方法だな」
度々アザゼルという存在が、神器を収集したり研究したりしているという話を聞かされたことがある。それを信じるならばアザゼルの助言は的確なものであると考えられた。
「まあ一番手っ取り早い方法なら赤龍帝の力を宿した奴の血を飲むのが早いな。これなら大概の神器使いは一段階上に到達できる。ヴァンパイアのこいつだけじゃなくそこの奴もな」
アザゼルの言葉に匙は驚きながら一誠の方を見る。一誠も匙の方を似たような表情で見返すが、同時に顔を顰めて嘔吐を我慢するような表情となった。お互いに血を飲ませるという行為を想像し、気分を悪くしたみたいである。
「あとは自分たちでやってみろ、俺は――」

そこまで言い掛けたときアザゼルの足元に複数の魔剣が突き刺さる。そして一誠たちを前にして護る様に立つ人影。
「様子を見に来たらまさかこんなことになっているなんてね……」
険しい表情を浮かべながら聖魔剣を構える木場の姿。思いもよらない木場の乱入に、アザゼルも少し驚いた表情をする。
「へぇ、聖魔剣使いの方から姿を見せるなんて思わなかったぜ」
「今すぐギャスパー君を離せ。そして――」
そこで言葉を区切り、背後に居る一誠たちを何故か沈痛な眼差しで見詰めた後、アザゼルに対し怒気を込めて叫ぶ。
「イッセーくんとアーシアさんとゼノヴィアに何をした！」
場に沈黙が降りる。
「ん？　あー……んん？」
「彼らに付けた呪具らしきものを今すぐ外せ！　場合によっては実力行使させて貰う！」
木場の台詞の意味を一瞬理解出来なかったアザゼルは困惑した様子であったが、そんなことに構う事無く木場は怒気に殺気を孕ませて更に吼える。
ギャスパーの頭を押さえるアザゼル。不気味な面を付け変り果てた――ようにみえ

る――一誠たち。客観的に見てアザゼルが何かをしたように、木場が勘違いをしていることをシンは悟る。

「木場――」

「くっ！　済まない！　もっと僕が早く来ていれば……！」

「じゃなくてあの人は――」

「分かっている。彼は堕天使総督のアザゼルだ。まさかこんな大物が現れるなんて……」

「……」

シンは木場の名を呼ぶが、心底申し訳なさそうに言う木場に続く言葉が言えなくなってしまう。一誠たちも同様であった。

「例え命を賭けてでも護ると誓った筈なのに！」

悔い、己の行動の遅さを恥じる木場。その真面目過ぎる態度が盛大に空回りしているのを見て、事情を知っている面々の涙を誘う。はっきり言って直視できない。

剣を突きつけられているアザゼルも目当ての聖魔剣が目の前にあるのにも関わらず、木場の様子から誤解が発生しているのを察し、眉間に皺を寄せ難しい表情をしている。

「えーと、あれだ。最後にこの間はヴァーリが勝手に接触して悪かったな。色々と変わった所はあるが根を真面目な奴だ。多少はギラついているがな。――という訳で

じゃあな」
　口早にそう言うとギャスパーから手を離し、逃げる様にして立ち去って行く。手を離されたギャスパーはそのまま仰向けに倒れ込む。ぴくりともしていない様子から、あまりの緊張のせいで気絶してしまったらしい。
「ちょっと待ってホー！　最後に一つだけ質問させてくれホー！」
「……何だよ」
　意外なことにジャックフロストが声を張ってアザゼルを呼び止める。アザゼルは一刻も早くこの場から去りたいのか嫌そうな表情を浮かべながらも、ジャックフロストの呼び掛けに応じて足を止めた。
「この間、ヴァーリがオイラにそっくりなのを知ってるって言ってたホー！　ヴァーリとアザゼルは知り合いなんだホー！　だったらアザゼルもそのそっくりなのを知っている筈だホー！　知っているなら教えて欲しいホー！　ただのそっくりでもやっぱりオイラ一度会ってみたいホー！」
「――悪いが俺は知らない。残念だったな。今度こそじゃあな」
　そう言い残し今度こそアザゼルは去って行く。期待した言葉が返って来なかったことにジャックフロストは肩を落とす。一方で二人の会話を聞いていたシンは、アザゼルが一瞬言葉を詰まらせたことが気になった。まるで何か隠しているかの様な間、だがそ

れを追及するよりも先にアザゼルは姿を消してしまう。
色々と唐突に現れて、あれこれ教えられ、そして来たときと同様に唐突に去って行くアザゼル。わざわざ助言をする為に現れたのか、それとも単なる気紛れか、それは本人にしか分からない。しかし今はそれを考えるよりも先にするべきことがあった。
「なんて禍々しい……！　待ってくれ！　今すぐ対呪用の魔剣を創造するから！」
「いやこれはな……何と言うかその……」
一誠たちの前で悲痛な顔をしながら魔剣を創造しようとする木場。一誠とアーシアはどう事情を説明しようか混乱している。木場が本気で身を案じているせいもあり、中々事実を切り出せないでいる。一方、この事態の元凶であるゼノヴィアの方はというと、焦っている木場を見て何故そうなっているのか分からないのか首を傾げていた。
「どうすんだこれ……」
「――どうしようか」
混沌としていた場が新たな混沌を生み出しているのを見て、匙は力の抜けた声で聞いて来るが、シンもどう解決すればいいのか分からなかった。
そのときシンは視線を感じる。視線を感じる方向に目を向けると、一誠とアーシアがシンに助けを求める目を向けていた。――面越しであるが。
それと同じくして匙に肘で小突かれる。匙も二人と同意見であるらしく、木場に説明

するように促してきた。
シンは短く溜息を吐くと腹を括る。今から友人の精神を奈落の底へと突き落とすことへの覚悟であった。
慌ただしい木場の近くに歩み寄ってから話しかける。
「木場、気をしっかり持って聞いてくれ」
「どうしたんだい？　すまないけど今は――」
「実はな――」
一方、一誠たちの下から立ち去ったアザゼルは僅かに口元を顰めて学園から離れていた。気紛れと暇潰しと趣味と好奇心を兼ねて、本来ならば敵である悪魔たちの学園に顔を出したアザゼル。戦友の堕天使が入れば軽率であると目を吊り上げて怒るであろうが、その堕天使も本来ならばアザゼルがすべき仕事を全て押し付け、『神を見張る者』の本拠地で缶詰となっている。
ギャスパーの持つ『神器』も見たし適切な訓練方法も教えた。五大龍王の系譜である匙の珍しい『神器』とその正しい使い方も教えた。ついでに変な状況であるが一番の目当ての聖魔剣も目にすることも出来た。
個人的な収穫としては上々の内容である。だが最後の最後で一つだけ、心の裡に小さいがしこりとなって残るものがあった。

聞かれたことをそのまま返せば良かったにも関わらず、小さくてつまらない嘘を一つ吐いてしまっていた。
「……あいつ、ジャックフロスト扱いされるとうるさいからなー」
ここにはいない知り合いに義理立てたことに、一人ごちるのであった。

◇

「うう……疲れて食べられないよ……」
「食べる食べる～。食べることも訓練だヒ～ホ～」
「むぐぅぅぅぅ！」
仰向けに倒れ疲労困憊の様子のギャスパーの口に、ジャックランタンが無理矢理サンドウィッチを捩じ込む。
アザゼルが去って現在に至るまでの間、彼が示した訓練方法を試し、匙の神器をギャスパーに接続した状態でギャスパーの神器を発動させる訓練を行っていた。
軽いもので宙に投げたボール、ジャックフロストが作った雪玉などを空中で停止させることから始まった。やはりというべきか最初から上手くことは進ませることが出来ず、一応ボールなどは停止させられたものの、ついでに視界に収まったものまで停止さ

せてしまうことが多々あった。
　その度にギャスパーは情けない声を出しながら訓練場所から逃げようとするも、その都度火を吐くジャックランタンに追い回されて、情けない声を出しながら訓練場所へと戻ってくることを何度も繰り返していた。
　流石に長時間神器を発動させたり、匙に力を抜かれたり、逃げたりしていたせいで大分疲労が蓄積してきたので一旦休憩をすることとなったが、そこに打ち合わせを終えたリアスと朱乃が差し入れを持って現れ、皆で差し入れのサンドウィッチを食べることとなり現在に至る。
「まだまだ先は長いわ。でもそんなに急ぐ必要も無いから少しずつ前に進んで行きましょう。一息入れながら」
　皆が食事をしながらその味に舌鼓を打つ。空腹と味の両方のせいでかなりの速度でサンドウィッチが消費されていく中、一誠は先程アザゼルと出会い、ギャスパーや匙の神器について助言を貰ったことを報せる。
「アザゼルが神器を集めていたり、それについて独自の研究を行っていることは知っているわ。――あまり認めたくはないけど神器に関する専門的な知識なら恐らく三勢力の中で堕天使が頭一つ抜けている筈よ。……だからと言ってその知識を他者に与えるのは少し理解に苦しむわ。余裕の現れと言ったらそこまでだけど……ところで」

そこで話を区切り、リアスの視線が一誠から別の人物に向けられる。
「祐斗は一体どうしたの？」
「さっきからずっとあの様子ですが……」
リアス、朱乃の心配する声。視線の先には一誠たちとは離れた場所で、膝を抱えて座りながら顔を伏せる木場の姿がある。一目見ただけで落ち込んでいると分かる程に沈んだ気を発しており、心なしか周りが黒ずんで見える。
「私たちが居ない間に一体何があったの？」
「それは……はははは……」
問われた一誠は誤魔化すように乾いた笑いを上げた。事情が事情なだけにそう簡単に話す訳にもいかない。実際一誠が同じ立場だったなら似たようなことをしているだろうと考えていた。
ちなみにことの元凶となった面は現在皆外している。余計なトラブルを起こさないという為に外したのだが、何故かゼノヴィアは外すとき非常に不満気な表情をしていた。
「取り敢えずこれでも食べて気でも紛らわせておけ」
「……間薙君かい」
その様子を見兼ねたシンが、差し入れのサンドウィッチを持って木場の側に近寄る。

説明した本人としての責任のようなものであった。
シンの声に反応し、俯いていた木場が顔を上げる。その顔は見事なまでに羞恥によって真っ赤に染まっていた。
「……あのときから今までの記憶を全部消したい気分だよ」
「……良かれと思ってやったことだ」
「今は慰められるよりも一層のこと笑い飛ばされたいね……」
盛大な勘違いをしてしまったことを恥じ力無い言葉を洩らす。木場はこう言ってはいるが、あの状況のことは正直笑い話に昇華出来なかった。痛まし過ぎて。
「状況が状況だ。お前が真剣だったのは皆も分かっている」
「ははは……文字通り痛いほどかな?」
木場の自虐的な冗談に愛想笑いの一つも出せなかった。ある意味で正解だったので。
「気を遣ってくれてありがとう。大丈夫、この時間の間にきちんと気持ちは切り替えるさ」
いつもよりも輝きのくすんだ笑みを浮かべる木場であったが、こう言っているならば大人しく切り替えるのを待つしかない。
そんなときギャアギャアとジャックフロストたちの騒ぐ声が聞こえてくる。
「絶対そんな食べ方おかしいホー!」

「君に言われたくないよ～ヒ～ホ～」
見れば、ジャックフロストとジャックランタンが面と向かい合って言い争いをしていた。部屋で語尾について言い争っていた一件からかどうにもお互いを強く意識している傾向がある。火と氷という対照的な能力を持っていることもあり、何かと反発するのを度々見る。
「僕はいつもこうやって食べてるんだホ～」
ジャックランタンが手に持っていたカンテラを器用に頭に乗せると空いた手でサンドウィッチを掴むと口元まで持ってくる。騒がしい二人に皆の目が集中していく中、ジャックランタンのくり抜かれた口の部分にサンドウィッチの角が入り込んだかと思った次の時には蒸発するように消えてしまう。
「おー」
手品でも見せられた気になったのかそれを見てピクシーは歓声を上げる。
対するジャックフロストは両手にサンドウィッチを持つとそれに向かって息を吹きかけた。すると冷気によって柔らかかったパン生地は瞬時に凍り付き固さを身に付ける。熱いものが苦手で冷たいものを好むジャックフロストのいつもの食べる前の準備である。
そしてそれを口の中に放り込むとガリガリなどジャリジャリなどの咀嚼音を出しな

がら頬張った。
「ヒ～ホ～。食欲が萎えるね～それ」
「ヒホ！　これがオイラのいつも通りだホ！」
「変だね～、変だね～　やっぱり変だね～」
「変じゃないホー！　ピクシーはどっちが変だと思うホー！」
「どっちも変」
いがみ合う二人。正直、見た目が見た目だけに喧嘩をしているというよりもじゃれ合っているようにしか見えないし、何よりも殺伐としたものを感じにくい。
ジャックフロストがピクシーにからかわれている姿を何度も見てきたシンたちにすれば、いつもの光景の延長線上にしか見えない。
しかし、唯一外の事情を知らないギャスパーから見れば、友人が一触即発の空気を醸し出しているように見えており、二人をオロオロとしながら見ていた。
「だ、だめだよ、ランタン君。け、怪我とかしちゃうかもしれないよ」
疲労が溜まった身体を起こしながらもジャックランタンを宥めようとする。声を震わせながらも必死に落ち着かせようとするが、そんな声に構う事無く二人はどんどん感情を昂らせていく。
「ヒホー！」

「ヒ～ホ～」

ジャックフロストの抑え切れない感情が冷気へと転じて、真夏にも関わらずジャックフロストを中心にして地面に霜が降り始める。ジャックランタンの方はと言うと、ジャックフロストのように怒る訳では無く、寧ろこの状況を愉しんでいるのか肩を震わせて笑っている。だがその手に持つランタンの炎は勢いを増して燃え上っており、周囲を歪める陽炎が出来ていた。

共に臨戦態勢に移った状態。ギャスパーの顔色がどんどんと蒼褪めていく。助けを求めるようにリアスたちの方を見るが、リアスたちは焦る様子も無くサンドウィッチを食べながら二人を眺めていた。一応アーシアや一誠、匙などは、動くか動かないか迷っている素振りをみせていたが。

止める気の無いリアスたちにギャスパーの心臓は鼓動を増していく。どうにかしなければという思いはあったが、では何をするかという答えが無かった。

『神器』の力を使う。その考えも浮かんだがすぐにそれを拒否した。ギャスパーにとって自分の力は忌むべき力であり、他人を自分から離れさせ自分も他人から離れさせた元凶である。過去に何度かジャックランタンのことを停めてしまったこともある。それでも恐れずに寧ろ楽しんでみせ、側に居てくれるジャックランタンの存在は、容姿の好みを抜きにしてもギャスパーにとって心安らぐ存在であった。

だからこそそんな友達を、仲間を停めることが出来ない。考えるだけで手足が前に出ない中で、ジャックランタンとジャックフロストは互いに衝突し合う

――かに思えた。

「そこまでだ」

いつの間にか二人の間に割って入るシン。そして二人に向けた両腕を伸ばすと躊躇う事無くその額を人差し指で弾いた。

「ヒホー！」

「わ～」

その威力にジャックフロストは地面を勢いよく転がり、ジャックランタンは宙を水平に飛ばされてからギャスパーに抱き止められる。

「ラ、ランタン君！」

「う～ん、思ったよりも痛い」

心配そうにしているギャスパーにジャックランタンは呑気な反応を見せた。

「ヒ、ヒーホー……」

弾かれた額を痛そうに押さえるジャックフロスト。そんな中でその身体が勢いよく持ち上げられる。

「喧嘩するなとは言わないが出すなら口までにしろ」

ジャックフロストの首根っこを掴み眼前へと運ぶシン。しかしジャックフロストも怯えることなく腕を組んで不満そうに頬を膨らませながら顔を背けた。
「ふーんだホー！　別に本気で喧嘩している訳じゃないホー！　いつかオイラは王様になるんだからこれぐらいじゃ怒らないホー！」
子供の言い訳を並べるジャックフロストにシンも呆れるが、一応これ以上ことを大袈裟にするつもりはないらしく、放っていた冷気も納まっている。
（幼いな……）
割と感情に従って動くジャックフロストであるが、昂るのも早ければ冷めるのも早いのを見てシンはそんな感想を胸に抱く。美徳とまではいかないが、思ったことに素直に動くこと自体は悪徳とも言えない。ただその率直さが将来余計な困難を招かなければいいが、とまで思ったとき、まるで子のことを思う親の様な心境だと考え思考を止めた。これ以上深く考えると、精神だけが老け込んでいくような感覚を覚えた為である。
掴んでいたジャックフロストを降ろしながら、もう一方の相手であるジャックランタンへと目を向ける。視線を向けた途端にギャスパーはビクリと怯えるも、ジャックランタンの方は腕の中で愉快そうに笑っていた。
「ヒ～ホ～。こうやって叱られるのも新鮮だね～」
「あんまりこいつをからかわないでくれ。見た目に反して熱くなりやすいんだ」

「う～ん。無理かな～、ギャスパーとは違った意味で反応が面白いからね～。何もしないなんて色々損だよ～。ヒ～ホホ～」
　あくまで態度を改めないジャックランタン。だがシンはそれ以上強く出ようとはしない。ピクシー、ジャックフロストもそうであるが、こういった精神的な幼さを感じさせる相手にはどうにも強く出ることが出来なかった。
「しっかり手綱を握っておいてくれよ」
「え！　は、はいいいいいいいい！」
　ジャックランタンを抱きしめているギャスパーにそう頼むと、声を裏返しながら返事をする。まだシンに対して若干の恐怖心を抱いている様子であった。
「さて一悶着も終わったことだし、そろそろ練習を再開しましょう？　匙君のおかげで力も大分調整された筈でしょうし、残り時間は私たちも手伝うわ」
　ジャックフロストとジャックランタンの諍いが終わるとリアスが練習の再開を告げる。最初から二人の喧嘩をシンが止めると分かっていたので傍観している様子であった。
「それとギャスパーもちゃんと後でシンに礼を言っておくのよ。貴方のお友達がもしかしたら怪我をするかもしれなかったんだから」
　また傍観していた別の理由として、ギャスパーに少しでもシンの性格を教えようとし

ていた。第一印象があまり良くなかったこともあり、それを少しでも和らげようとする措置である。

「は、はい！」

その日ギャスパーの力が空になるまで練習は続き、終わるころには日が沈み空に星が見え始めていたのであった。

◇

翌々日の放課後。シンは何故かギャスパーが封印されていた筈の教室の前に立っている。他のオカルト研究部のメンバーも同様であった。

何故ここに集まっているのか、その理由は教室の中から聞こえてくるギャスパーの泣き声にあった。

「ふえええええええええええええええええん！」

教室越しでも鼓膜が震える程のギャスパーの大声。昨晩、一誠と共に依頼主の下へ喚び出され戻って来たときからこのような状態だという。

元々ギャスパーは引き籠っていた際に、パソコンを介して契約を希望する人物と直接会わずに特殊な契約をするという、やたら先進的な方法で契約の数を稼いでいたらし

い。本人の才もあって、新人の悪魔の中では上位の契約数を誇ると説明された。
パソコンでの契約。悪魔も進んでいるというべきか、はたまた俗っぽくなっているのか、判断の難しいものである。
だが今回、本人の対人恐怖症を克服させるため、一誠と一緒に悪魔の仕事を行うこととなった。しかし結果はこの通りである。
「毒を以って毒を制する訳にはいかないか」
「人の依頼者を毒呼ばわりするなよ」
シンの呟いた言葉が聞こえたらしく、一誠が顔を顰めながら抗議する。
「ギャスパー、出て来てちょうだい」
「誰も怒ったりはしていませんよ」
扉の前でリアスと朱乃が呼び掛けているものの応答はなく、ただ泣き叫んでいるのみ。埒の開かない状態となっている。
「本当にしょうがないね～、ギャスパーは～」
呆れた声を出しながらジャックランタンはふわふわと宙を浮き、ギャスパーの閉じこもっている部屋を見ていた。
一誠とギャスパーとの仕事の際、本人の為だと言って同行を拒否したジャックランタン。その結果、教室から締め出されている格好となってしまった。

「一緒に居なくてもいいのか？」
「別に～。この際だからギャスパーの悪い部分を色々直したほうがいいんじゃないかと思ってね～。あと勘違いしないでほしいけどボク、部屋に閉じ篭もることには慣れているけど～別に閉じ篭もること自体好きじゃないんだよ～。ヒ～ホホ～」
　言葉の中で引っ掛かる部分を覚えたが、今はギャスパーのことを優先としているので、深く聞くことは無かった。
「人が怖～い、自分の力が怖～い、怖い怖～いじゃ何にも出来なくなっちゃうよ～。ヒ～ホ～」
「あいつも色々と抱えているからな」
　一誠が言う抱えているというのはギャスパーの生い立ちにある。吸血鬼の名門に生まれた妾の子という立場。追い打ちを掛ける様に純血では無く人間との混血、それによって起こる他の吸血鬼や身内からの迫害と差別、蔑視。最終的には路頭に迷った挙句、異形を狩る者たちに命を狙われて死亡。それをリアスが『駒』を使用することで命と共に拾われたというのが眷属までの流れである。
　聞く者にとってはそんな目にあったならばああなるのも仕方ないと思うか、それだけの目に遭ってあの程度で済んでいるのか、はたまた甘えるなと厳しい評価を下すのかはそれぞれである。一誠はどちらかといえば同情的な立場であった。

「でも泣いていれば解決することじゃないよ～？」
「そりゃ分かっているけどよ……何かお前、やたらとギャスパーに厳しいところがあるな」
「ヒ～ホホ～。嫌いなんだよ、ボク。ああやってどうしようもなくて泣く声が～」
　間延びしながら喋っているものの態度は真剣なものに思えた。普段、おどけたような態度を取り続けているジャックランタンなだけに、それがやたらはっきりと感じられる。
「という訳で今日もギャスパーを仕事に連れてってね～」
「でもな……普通――よりかは少しずれているけど、一般人相手でもまともに対応出来なかったしな……」
「中途半端じゃ駄目だよ～。やるならとことんやってくれるような相手じゃないと～」
「そう言われてもな……」
　そんな都合のいい相手が居るかどうか一誠が考え始める。シンもまたジャックランタンの要望に合いそうな人物について考え始める。
　条件としてはギャスパーの異能にも恐れず柔軟に対応出来る人物。またギャスパーの趣味についても差別しない方が良い。容姿はこの際無視する。どうせ誰であろうと怖がるので。出来ればそれなりに身体能力があった方が良い。ギャスパーの能力の暴

発に速やかに反応できるなどと贅沢は言わないが、せめて逃げるギャスパーを追うことが出来る程の。

条件を並べると難しいものであり、そんな都合の人物はいない――と思っていたが、それらの条件に該当する人物が唯一居た。

しかし、それはあまりに酷な選択である。

シンが一誠の方を見ると、一誠も何か思いついた表情をしていたが、すぐに顔色を変えて消し去る様に頭を振る。

「今、お前の頭に浮かんだ依頼者に頼もう」

「――正気か！」

十中八九シンが思い描いている人物であるらしく、その言葉に一誠は驚愕に満ちた顔をした。

「……責任ぐらいは持つさ」

◇

その日の夜。ギャスパーは自室で泣き疲れて寝ていた。

しかしいきなりの破砕音に寝ていたベッドから跳び起きる。

「え？　え？　何？　何？」
見れば真っ二つに割れた扉が床に転がっていた。あまりに突然のことで思考が上手く回らない。だがそんなギャスパーの混乱を無視し、教室の外から複数の影が現れる。
「ラ、ランタンくん！」
見慣れた友達の姿が真っ先に目に入った。そしてその背後からピクシーとジャックフロスト。そして――
「ま、ままま間薙先輩っ！」
苦手意識を持っているシンが現れる。
「ど、どどどどどうしたんですか？」
全身を震えさせながらギャスパーは問うが、シンは無言でギャスパーへと近付くと素早く首根っこを掴み、視界に入らないようにする。
「ヒィィィィィィィ！　何をするんですかぁぁぁぁぁぁ！」
「仕事の時間だ」
シンはそのままギャスパーを愛用している段ボール箱の中に入れて閉じ込めると、その場から持ち去っていく。
「ランタンくぅぅぅぅん！　助けてぇぇぇぇぇぇぇ！」
「ダメダメ～。これもキミの特訓さ～。今回はボクも付いて行くから。ヒ～ホ～」

喚くギャスパーを無視しオカルト研究部の部室に到着するシン。そこでは既に魔法陣の準備が整っていた。
「出すことに手を焼いていたけど……ちょっと強引過ぎるかしらね」
「憎まれ役ぐらい買いますよ」
「自分の眷属の責任は『王』である私が取るわ。さっきのも今回のも私の指示で貴方が行った」
「リ、リアス先輩！　ボク、どうなっちゃうんですかぁぁぁぁぁ！」
外が見えないギャスパーはただ不安に怯えている。そんなギャスパーを宥める様にリアスは優しげに声を掛ける。
「悪魔の仕事よ。大丈夫、向こうの依頼者は貴方を傷付けたりしないわ。それにシンが貴方をサポートしてくれる」
「ボ、ボクには無理ですぅぅぅぅぅ！」
「このままだと本格的にうるさくなるから～早く送って～」
ジャックランタンはギャスパーの叫ぶ声を無視して先に進むよう促す。
「では行ってきます」
「気をつけてね」
それを合図にシンたちの姿は魔法陣から消えるのであった。

一瞬の浮遊感の後に依頼人の下へと到着する。ただし、ギャスパーは段ボール箱の中に閉じこもっている為に外の様子を把握出来ない。
外ではシンやジャックランタンたちが誰かと会話しているらしいが、不安で震えているギャスパーの耳にはそれを聞いている余裕など無かった。
暫くして自分の入っている段ボール箱が置かれる。そして閉ざされた蓋が開かれたとき――
「によ？」
「……」
ギャスパーの思考は完全に停止した。中を覗きこむのは、猫耳を付けた魔法少女――の格好をした、自分の倍以上の体躯と彫りの深さを持った男性。恐怖や動揺以前に、目の前の存在の意味が分からなかった。
「この子がミルたんを撮ってくれるのかによ？」
「そうです」
シンは頷き、見た目の衝撃で思考が停止してしまったギャスパーの首にカメラを掛ける。
「取り敢えず撮り切るまで帰れないと思え」
その言葉に、ギャスパーは声も無く口を開閉させる。

「ギャスパ〜、お仕事の時間だよ〜」
「によ！　妖精さんだけじゃなくて新しいファンタジーなお友達の雪だるまさんとカボチャさんが増えてミルたん感激だにょ！」
「久しぶりー」
「よろしくホー！」
「ヒ〜ホ〜。よろしくね〜」
　固まっているギャスパーとは対照的に、初めて会うジャックフロストとジャックランタンは平然とした態度で挨拶をしている。
「頑張れとかお前なら出来るなんて知った様なことは言わない」
　いつまでも硬直しているギャスパーの肩に手を置き、シンは至って真面目な態度で一言。
「死んで来い」
「いやぁぁぁ

て貰った溢れんばかりの菓子。

そしてシンの両手には、開かれた段ボール箱の中で今にも口から魂が放たれそうになるほど放心しているギャスパー。それを持っているシンもまた、いつもの無表情ではあるが、一目で憔悴していると分かる顔色をしているのであった。

談笑、虐殺

「……」

オカルト研究部部室内でシンは、ソファに座りながら天井を見上げていた。その顔色は優れず、いつもの無機質な表情にも傍から見て分かるほど。

特訓という名の地獄の撮影会が終了して翌日の放課後。ほぼ一日が経過しているものの、シンは自身の体に未だ鉛を巻きつけられているような疲労感を覚えていた。

今思い出すだけでも酷い内容である。着飾ったミルたんを一目見た瞬間に神器が暴発し手当たり次第周囲のものを停めるギャスパー、それに巻き込まれない様に回避して逃げるギャスパーを追うシン、最初の内はギャスパーの神器に停められていたミルたんも、後半になると視線を向けられた瞬間に視界外に逃れて、ギャスパーの背後に回り込むという神業のようなものを披露していた。

そんな滅茶苦茶を一晩中行いもすれば、大抵の疲れはすぐに取れるシンも肉体的、精神的疲労が合わさってすぐには疲れが抜けない。今日一日、今の様に無気力に近い状態であった。

特訓に付き合っていたシンですらこんなに疲労を感じているなら、特訓を受けたギャ

スパーの方はどうなったかというと。
段ボール箱に入れられて戻って来たギャスパーは少しの間気絶をしていたが、やがて目を覚ますと『ヒィィィ

が、脳に程よい刺激を与えてくる。
「中々上手くことは運ばないもんだね」
向かい側に座る木場が思い通りにいかない現状に苦笑を浮かべる。先日の落ち込みはすっかり回復した様子であった。
「……ギャーくんはへたれヴァンパイアですから」
ギャスパーを容赦なく評する小猫であったが、その眉間には若干皺が寄っている。無表情で分かりにくいが、感情を多少表に見せることから小猫なりにギャスパーのことを思っているらしい。
「しかしどうする？　また閉じこもっていたら碌に特訓など出来ない。――デュランダルを使って引き摺り出すか？」
「……それは最後の最後の手段にしておけ」
「大丈夫だ。引き摺り出す時はあの面を装着してから引き摺りだす。効果の方は既に実証済みだからな」
「……ただの追い討ち」
「面ってなんのことですか？」
「ふむ。そう言えば朱乃はまだ知らなかったな。実はあれ以来少し凝り始めてだな――」

「知らなくていいと思いますよ。姫島先輩」
「面……くっ！　あ、あのときの記憶が……！」
「木場、切り替えろ切り替えろ」
　混沌と化してしまいそうになる場を宥めていると、ギャスパーの説得に行ったリアスとアーシアが部室へと戻ってくる。
「あら？　イッセーくんはどうしたんですか？」
　二人と一緒に一誠も同じく説得に行っていたが、二人だけが戻って来たことに朱乃が問う。
「イッセーならまだギャスパーの部屋の前で説得をしているわ。私はお兄様との打ち合わせの為に先に戻らせてもらったの。……本当だったらあの子と一緒にギャスパーの説得をしたかったけど、先輩としてせっかく出来た男子の後輩と話し合いたいと言っていたから……」
　シンは部室に掛けてある時計を見る。上の空であまり気にしていなかったが、リアスたちが説得に行って既に一時間以上経過していた。
「私もイッセーさんのお邪魔になると思って戻ってきました」
　アーシアは軽く微笑んでそう言うが、明らかに表情に陰がある。本音を言うならば思いを寄せている一誠の力になりたい。同じ『僧侶』であるギャスパーの力になりたいと

考えているのであろうが、一誠やギャスパーの意志を尊重して敢えて身を引いた行動をしていた。
「――なら、僕らも同じ先輩として後輩ときちんと向き合わないとね」
「今俺が行ったら逆効果だと思うが？」
「だからこそきちんと話し合わなきゃね。お互いをきちんと知らなきゃこのままずっと歩み寄れないよ？」
「……確かにな」
木場がソファから立ち上がりシンの方を見る。シンもまたそれに応じる様にして立ち上がった。
「あらあら、何だか青春ですね」
「ふふふ。本当ね。でも少し妬けるわ」
二人の様子を頼もしそうに、そして少し羨ましそうに眺めるリアスと朱乃。異性でしか踏み込めない領域もあれば、同性でしか踏み込めない領域もある。今回のギャスパーについては後者の方であると悟る。
「ならオイラもいくホー！」
菓子を食べるのを止め、ジャックフロストがテーブルから降りる。
「ふーん。じゃあアタシも行こうかなー」

「駄目だホ！」
ピクシーの提案をジャックフロストが拒否する。それが珍しい態度だったのでピクシーは小首を傾げ、何で、とジャックフロストへ質問した。
「ふっふっふ。ここから先は男の世界だホー！　女子供が簡単には入れないホー！　もしも入ってきたら――」
そこで一旦溜め。
「火傷するホー……」
「……何それー」
腕を組み、振り返りながら声を低くしてそんな台詞を放つ。
如何にもテレビか映画の影響を受けた様な酔った台詞を吐くジャックフロストを、ピクシーは半眼にして呆れた表情で見ていた。
「格好つけているところ悪いけど～、顔にお菓子の食べカスつけていたら様にならないよ～」
ジャックランタンの指摘通り、ジャックフロストの口の周りには菓子を食べた後がいくつも付いている。言われたジャックフロストは慌ててそれを拭い取った。
「ヒ、ヒホー！　折角男らしく決めたのに変なこと言うんじゃないホー！」
「当然のことを言ったまでだよ～。君は詰めが甘いね～。ヒ～ホホ～」

怒るジャックフロストに笑うジャックランタン。最近よく見るようになってきた光景である。このまま喧嘩に発展するよりも先にシンがジャックフロストの首根っこを掴み上げた。
「行くならとっとと行くぞ」
「ヒ、ヒホー！」
いきなり掴み上げられて驚くジャックフロストを無視してシンは部室から出て行く。その後を苦笑を浮かべた木場が続き、更にその後をケタケタ笑うジャックランタンが追って行く。
「行っちゃったねー」
「そうですね」
残された面々は丁度女性ばかり。そのとき現状を見ていたゼノヴィアが口を開く。
「ちょうどいい。実は私にはしてみたいことがあるのだが……」
「あら？　何かしら？」
「折角、女性しかいないので一つガールズトークというものをしてみないか？」
思わぬ提案に一同目を丸くする。
「それは一体どうしてでしょうか？」
「ふむ。はっきり言って私には女性らしさというものが足りない。いや無いと言っても

過言では無い」
「……間違ってはいません」
「そこで私よりも女性らしい女性と色々と会話をすることで、少しでも女らしさというものを身に付けたいんだ」
　真摯な態度で言うので他のメンバーも笑うに笑えない。唯一アーシアだけは何故かゼノヴィアの言葉に感銘を受けた様子であった。
「ゼノヴィアさん、流石です！　実は私も女性らしさというものがどういったものなのか良く理解していないんです。他に学ぶことがたくさんあって後回しにしていましたけど私もゼノヴィアさんのように積極的に自分から学ばないといけませんね」
「私から見ればアーシアは十分女性らしいと思うのだが？」
「いえ、私なんて未熟です。もっともっと学ばないといけません」
「そうか……ならこの機会に共に女性らしさを身に付けよう」
「はい！」
「ああ……共に研鑽する仲間を得たことに……アーメン」
「アーメン」
　意気投合し、感極まって神への祈りを共に捧げ、同時に頭を押さえて痛がる二人に、リアスたちは微笑ましさと呆れを半々に混ぜた表情を浮かべていた。

「うふふ。ならここはゼノヴィアの希望通り女同士で語り明かすとしましょう」
「私、お茶を淹れてきますね」
「はいはーい！　アタシの分もお願ーい！」
「分かっていますよ。砂糖はたっぷりでいいですね？」
「分かってるねー」
　女子たちが部室で会話の華を咲かせている一方で、シンたちはギャスパーの居る教室の前に到着していた。扉の前に一誠が居るとリアスは言っていたが姿は無い。よく見ると閉じてあるはずの扉が少し開いた状態であった。
　扉に近付くと中から会話する声が漏れて来た。一誠とギャスパーの声である。シンたちは漏れてくる声に耳を傾ける。
「この俺の右手を見てくれ……実はな俺はこの手で部長の胸を揉んだことがあるんだ。しかも服越しじゃなくて直にだぞ？」
　中から一誠のどうしようもない自慢が聞こえてきた。そんな自慢を聞いたギャスパーは――
「ほ、本当ですか……！　そ、そんな、まさか自分の主の、それも上級悪魔のむ、胸を揉むなんて……！　イッセー先輩は凄いです！」
　驚嘆した声を上げ、何故か尊敬する様な含みを持って一誠の名を呼んでいた。確かに

通常の悪魔の基準で考えるならば、ギャスパーの言った様にとんでもないことを一誠はしたのかもしれない。その上リアスは現魔王の身内という立場も含まれている、ここまで来ると凄いを通り越して命知らずな行為をしているかもしれない。ただ、シンの感性からするととんでもないとは思うが、あまり尊敬出来るようなことでは無かった。

「大分、馴染んでいるようだね」

会話の内容は置いておいて、木場は愉しげに会話する二人の姿を嬉しそうに見ていた。

「ヒ～ホホホ～。ギャスパーは色々純粋だね～。まあ、面白い話だとは思うけどね～」

宙に浮いているジャックランタンも二人のやりとりを見て、普段とは少し違った笑い声を出す。何処となく声の響きの中に安堵と喜色が感じられた。

「ここで立ち聞きするのも何だし、そろそろ行こうか？」

言うと同時に木場は扉の中に覗き込む様な形で入る。

「やあ。イッセーくんもギャスパーくんも見ない間にかなり打ち解けた様子だね」

「ん？　木場もこっちに来たのか？」

「僕一人だけじゃないけどね」

木場はまだ教室の外にいるシンの方を見る。それを切っ掛けにしてシンは、半開きであった扉を開いて教室の中へと入った。

「あ、間薙もジャック兄弟も来たのか」
「兄弟言うなホー！」
　変な括り方をされたことにジャックフロストが抗議するが、シンに吊るされている状態なので、短い手足をばたつかせているだけになってしまう。
「いいじゃねぇか。同じ『ジャック』が付くんだし」
「だからと言って一括りにするんじゃないホー！」
　一誠とジャックフロストが再びぎゃあぎゃあ言い争いを始めるが、シンはそれに構わずにギャスパーの方に目を向ける。すると段ボール箱の中で縮こまって顔半分を出していたギャスパーと目が合う。
　目が合ったギャスパーは目と口を丸くして、そのまま段ボール箱の中に完全に姿を隠してしまうが、十数秒後、こちらを確認するようにゆっくりとした動きで、顔の上半分を段ボール箱から覗かせるのであった。
「ギャスパ～。またいつもの場所かい～？」
　ジャックランタンはそう言いながらギャスパーの頭の上に座る。体重が無いのか頭の上に座られたギャスパーは重いといった反応を見せなかった。
「女の人の胸の話で盛り上がっているなんてね～。そんな格好をしていても男の子なんだね～。ヒ～ホ～、変な話だけどちょっと見直したよ～」

「ち、ちがうんだよ！　ランタンくん！　ぼ、僕、イッセー先輩の話を聞いていると少しだけ勇気が湧いて前向きな気持ちになれるんだ！　だ、だって先輩、『神滅具』なんている凄い神器を持っているのに物凄く卑猥なことに使っているんだよ！　僕なんかじゃ真似できない勇気と煩悩の持ち主なんだ！」
「だとさ。馬鹿にされているな」
「違う！　ギャスパーなりの不器用な褒め言葉だ！」
シンが言葉を付け加えながら話を振ると、即座にそれを一誠が否定する。言っていることだけを鵜呑みにすれば馬鹿にしているように思えるが、話しているギャスパー自身至って真面目且つ敬意に満ちた表情をしていることから一応、一誠の方が正解である。シンもそれは分かっていて、からかうつもりでやったことだが。
「――まあ、丁度ここに間薙や木場が集まったことだし聞いて欲しいことがある」
いきなり真剣な表情へと変わる一誠を見て、反射的にシンと木場の顔付きも固くなる。
「何だい？」
「重要なことか？」
「ああ。男の俺達にしか出来ないことだ。新たに考え出した連携、もしこれが出来たのならば恐らく完全無欠だ」

言い切る一誠の自信に知らず知らずの内に傾ける耳に意識が集中されていく。
「男ということはギャスパーも含まれているんだな？」
「ああ。俺の考えた連携の要はギャスパーだ。そしてその要に木場と間薙を置くことでより完璧なものへと仕上がる」
一誠の自信に満ちた様子に不本意ながらもシンは興味をそそられる。
「その肝心の連携と言うのは何だ」
「まず俺が『赤龍帝の籠手』で力を溜める」
「ああ」
「そして、それをギャスパーに譲渡する」
「成程。それで次はどうするんだい？」
「力が高められたギャスパーの能力で周囲の時を停める」
「じゅ、重要な役目ですね！」
「そしてその時が停まった間に俺が女子を触り放題する」
「――邪魔したな」
シンはそのまま躊躇う事無く教室の外に向けて歩き始めた。
「おい！　ちょっと待て！」
「今この瞬間から俺とお前は顔見知り以下の関係だ。気安く話しかけないでくれ」

「お前、本当にこの手の話に関しては俺に辛辣だな！」
「人生でここまで時間の無駄だと思ったのは初めてだ」
去ろうとするシンを一誠が引き止めるが、心底冷めた眼差しでシンは一誠を厳しい言葉を叩きつける。
一方で木場はその卑しい内容に軽く絶句し、ギャスパーの方は一誠が本気で言っているのか冗談で言っていたのかはっきりと分からず困惑していた。
「ヒーホホホホホ！　真面目な顔をしていてもイッセーはイッセーだったホー！」
「ヒ～ホホホホ～。真顔で言うようなことじゃないね～。あれだけ馬鹿なことを本気で言える人、初めて見たよ～」
一誠の話がツボに入ったのか、普段衝突している二人もこのときばかりは似たような声を出して爆笑していた。
「あははは……本当にイッセーくんはぶれないね。でもその案を本当に実行するとしたら僕と間薙君は別に役に立たないんじゃないかな？」
「木場、この話に触れる価値なんてないぞ」
「いや、二人には重要な役目がある。間薙はいつもの悪魔の力、そして木場は禁手化による聖魔剣で俺の護衛を――」
「聞くだけ無駄だったな」

時間という概念に申し訳なさすら覚え、最後まで聞かず再びシンは教室から去ろうとする。
「だからちょっと待てって！　いいじゃんかよー！　少しぐらい夢見たって！　木場はこれでもかって位モテるのは当然だとして、お前だってその気になれば女に困ることなさそうな可能性を持ってるじゃねぇか！」
「イッセー君。僕はイッセー君や間薙君たちの為なら何でもする覚悟は出来ているけど……一度、真剣に自分の力と向き合った方が良くないかな？　単純に暴力にその力を使わないのは良いけど、それ以外だとエッチなことにしか使わないなんて……ドライグが気の毒じゃないかな？」
「……別に赤龍帝らしく振る舞えとは言わないが、最低限相棒の面子ぐらい守ってやれ」
『くぅ……何故か目頭が熱くなってくる。相棒、お前の友人は良い奴らだな』
一誠の脳内に涙混じりの声が響く。
「何だよ、ドライグ！　俺が部長の乳を吸うという夢に快く賛同してくれたお前は何処に行っちゃったんだよ！」
「え……そうなのかい？」
「結局は似たもの同士か……」
「ド、ドラゴンでもそういった面があるんですね」

『相棒ぉぉ！　誤解を招くことを言うな！』
「いや、止めん！俺にはモテる要素が無いんだぞ！　可能性は間薙たちに比べたら遥かに低いんだぞ！　俺は誓う！　このドラゴンの力は必ずエロいことに使うと！」
目を血走らせて主張する一誠に木場は困った様に笑い、シンはその必死さと自分の周囲について把握していない鈍感さに呆れ、馬鹿げた作戦を聞かされるのに時間を割かれたことがどうでもよくなってきた。
それによりシンの方から折れる形となり、一応教室から出て行くのを止める。
「第三者があれこれ口を挟むのも無粋だし、ここはイッセー君が気付くまで黙っていた方がいいよね？　それに知ったら知ったでそちらの方にハマりそうだし」
「逃げ場が無い程状況が出来ていなければ手を出さないと思うがな、俺は。口や態度に比べて手が早いどころか鈍いぞ、あいつは。まあ、お前の言った通りここで俺達があれこれ言うのは無粋だな」
変わらない一誠の鈍さについて一誠の耳に届かない程の小声で話すシンと木場。木場は一誠が自分の置かれている状況を理解すれば堕落していくと危惧しているが、シンの方は仮に知ったとしてもすぐに手を出さず、寧ろ臆病な反応を示すと評した。
「何だよ。人の顔見てひそひそ話して」
「大したことじゃないさ」

爽やかに答える木場に、一誠は少し怪訝な表情をしたが追及はしなかった。
「まあいいや。さっきの話じゃないが男だけで集まったことだし肚を割って話そうじゃねぇか。――『第一回女子のこんなところがたまらなく好きだ選手権！』開始！」
唐突に言ってきた一誠に他の一同の反応は様々であった。苦笑を浮かべる者、呆れる者、笑う者。ただそれを拒む者は居らず皆がその場に残り、参加するという意思を見せている。
「という訳で発案者の俺からだな！　俺は女子のおっぱいと脚を見るね！」
身も蓋もない台詞。しかし一誠という存在を現すものとしてはこれ以上無い程のものであった。
「あ、あの……」
恐る恐るといった動きでギャスパーが手を挙げる。
「おっ！　何だ次はギャスパーが言うのか？　意外に積極的だな」
「い、いえ！　そ、そういった訳じゃなくて……」
口籠るギャスパーに対し、頭の上に乗っているジャックランタンがカンテラで軽く頭を小突く。
「黙らない黙らな～い」
「わ、分かってるよ。ランタンくん！　そ、その僕、このままの状態で参加してもいいで

しようか……？」
「そのままの状態って……」
　皆の視線がギャスパーが入っている段ボール箱に集中する。
「ほ、本当ならここからでて話すのが礼儀だというのは分かっているんです。……で、でもこうしていると普段よりは落ち着いて話すことが出来るので……」
　相手の様子を窺うように話すギャスパー。つい数日前は人と話す度に絶叫や悲鳴を上げていたりして逃げていたが、ギャスパーの言う通り、そのときと比べて段ボール箱の中に入っているときの方が、喋り方が少しだけ落ち着いている。
「そんな堅苦しい話をする訳じゃないし、お前が落ち着ける格好で話せばいいさ。別に構わないよな？」
　一誠の同意にシンと木場は肯定の意を示す。
「ありがとうございます。あー、やっぱり段ボールの中が一番落ち着きますよぉ。段ボールの中こそ僕のオアシスです」
「随分狭いオアシスだね～」
　段ボールの中で頬を緩ませリラックスするギャスパーに、ジャックランタンは呆れた声を出す。しかし何か思いついたのか、突如ジャックランタンの双眼の光が輝きを増した。

「そうだそうだ～。キミにとっておきのものがあるんだよギャスパー～」
どこからともなく出したソレをギャスパーへと被せる。
「そ、それは！」
驚愕する一誠。彼の前にはついこの間見たゼノヴィア手製の面を被るギャスパーの姿があった。
「新しいのを作ったからって貰ったんだよね～。使い道が思いつかなかったけど、こういうのならありかもね～。ヒ～ホ～」
「え？　え？　どうしました？」
自分の姿を認識できていないギャスパーはおろおろとした様子で一誠たちの方を見る。恐らくはジャックランタンを模して作られた不気味な面、その空いた目の部分からギャスパーの赤い瞳が見え、不気味さにより拍車を掛けている。
「……でも何でしょうかこの感覚……思ったよりも付け心地が良いですねぇ……これって僕に似合っていますか？」
前はゼノヴィアの面を見て腰を抜かしていたギャスパーであったが、自分が付ける側になると意外にも好意的な反応を示す。
「似合うか似合わないと言えば……似合う、と思う……」
「ほ、本当ですか？　じゃあこれを付けていれば僕も吸血鬼として少しは一人前に近付

くでしょうか？」
「ああ、うん……」
　一誠の答えは歯切れが悪い。恐怖の対象としての格は上がったかもしれないが、吸血鬼としてはやや遠ざかった存在になったとは素直に言うことが出来なかった。
　出だしから妙な空気で始まった話し合いであるが、夜が深まるにつれて。同性同士ということもあり、普段隠しているような面が露わになってくる。
「――というのが好きなんだが」
「……お前は一度生まれ変わった方が良い」
「そこまで否定するなよ！」
「イッセー君、ちょっとそれは……」
「引くなよ！」
「ほ、本当に対象はお、女の人だけにと、留まるんですか？」
「怯えるなよ！」
　想像の斜め上を行く発言に引いてしまうときもあれば――
「……ないな」
「――え？　それで終わり？」
「終わりだが」

「いやいやいや。おかしいだろ、それ！」
「ないものはないからしょうがない」
「いや、待てって男としてそれは変だろ！」
「お前には負ける」
「言ってくれるなこの野郎ぉ！」
　互いの考えの違いで言い争い。
「――だと僕は思うんだ」
「……」
「何で無言なんだい？」
「木場先輩って意外と――ですね……」
「ごめん、ちょっと聞き取れなかった箇所があるんだけど」
「木場、お前って結構スケベだな」
「えっ！」
　そんな他愛も無い会話をしながら夜は更けていき、気付けば間も無く日が昇る時間にまでなっていた。
　話し疲れたのかギャスパーは段ボール箱の中で丸まった状態で寝ており、その上に重なるようにしてジャックランタンも寝ている。また少し離れた場所ではジャックフロ

ストも大の字になって寝ており、細やかな寝息を立てていた。
　残ったシン、一誠、木場は起こさない様に出来るだけ声量を抑えながら喋る。
「……少しは気分転換にはなったか？」
「こっちはこの間のこともあったし俺を見て逃げずにちゃんと話を聞いていた分、大分落ち着いてきたとは思うがな……」
「でも……」
「分かってるよ。お前らだって気付いてたろ？　あいつの手、段ボールの端っこをずっと掴んで震えてた。話しながらもずーっとビクビクしてたんだよなぁ……いつ発動するか分からない神器に」
「……お前の血を飲ませるって話はしたのか？」
「したよ。だけどあいつ怖いって言ったよ、生きている者の血を吸うのが。自分の力がこれ以上高まるのがって。血を吸うのに抵抗を覚えるのは分かるけどな」
　生まれてから今に至るまで吸血鬼として在り続けていたのならば、そのような抵抗感は覚えなかったかもしれない。だがギャスパーは幼い頃に吸血鬼たちの中から弾き出された身、備えるべき吸血鬼の価値観を身に付けぬまま成長してきたのである。吸血鬼の血が流れているというだけで、吸血鬼としての考え方を受け入れられる筈も無かった。

「まあ、気長に待とうぜ気長に。神器を使いこなす可能性が全く無いわけじゃないんだ。これからも俺達がサポートしとけばその内使いこなせるって」

楽観視と言える一誠の言葉であったが、シンも木場もそれを否定しなかった。結局の所、使いこなせるかはギャスパー本人の積み重ねと気持ち次第である。外野が後ろ向きな言葉や態度で接しそれを閉ざす訳にはいかない為、一誠の態度自体間違いとは言えない。

『甘い見通しとも言えるがな、相棒』

しかしここで、一誠の考えに疑問を投じるドライグの声。

「何だよ。不満か、ドライグ？」

『あの吸血鬼が神器を使いこなせない最大の原因はあの性格だ。神器を操る上で強い想いというものが必要だがあいつの場合、想いを昂らせている訳では無く負の感情を爆発させることで神器を動かしている。ああいった風に心に染みついた動かし方を変えるには一朝一夕じゃあ無理だ。環境によってああいった性格になったのならば同じぐらいの年月をかけて性格を矯正しなければならないかもしれないぞ？』

「だからそれまで付き合うって――」

『相棒よりも先に吸血鬼の小僧の方が折れたらどうするつもりだ？』

冷徹なドライグの声が教室の中でやけに響く。

『相棒がちょっとやそっとじゃ折れないのは知っている。だがあの小僧はどうだ？　現に相棒たちが呼びかけるまで怖がってこの部屋に閉じこもっていた奴だ。そんな脆そうな奴がこの先折れずに生きていけるのか？』
「それは……」
　折れないとは断言できず、一誠は口籠らせる。
「そのときはそのときだ」
　一誠の代わりにシンが自らの意見を言う。
『そのときはそのとき、お前も甘いことを言うな』
「確定していない未来についてあれこれ考えるだけ無駄だ。未来のことなんて見通せる訳じゃないからな。せいぜい可能性の一つとして頭の隅にでも留めておけばいい」
　顔付きはいつもの様に無表情ではあるが、喋る言葉には僅かに感情による熱が込められている。
「確かにいつかは心が折れるかもしれない。だがそれは今じゃない。今のあいつが折れていない限り手助けはするさ」
『随分と肩入れするな。理由は何だ？』
「そんなに大層なものじゃない。たぶんとそっちの相棒と似たようなものだ」
　シンの視線が一誠に向けられると、今度は一誠がシンの言葉を継いで話す。

「あー、本当に大したことじゃないんだけどなぁ。折角出来た男子の後輩だし、出来れば一緒に笑ったり馬鹿やったりしてみたいんだよなぁ」

少しだけ恥ずかしそうに言う一誠。欲望、煩悩に満ちた言葉は平気な顔をしている一誠が照れているということは、あまり人に話すことのない本音の部分であることが見て取れた。

「というわけだ。だったら相棒がやることを最後まで見届けたらどうだ？」

『言われるまでも無い。ふっ、相棒らしい台詞が聞けて安心した』

ドライグは小さく笑うとそのまま沈黙する。一誠はそんなドライグの様子に首を傾げながら左腕を見る。

「何でわざわざあんなこと言ってきたんだ？　ドライグの奴」

「さあな……」

ほんの僅かの間、シンの眼はギャスパーたちが眠る段ボール箱へと向けられるがすぐにそこから目を離した。

「まあいいや。つーわけで話題を戻そう。結局、間薙って女子のどんなところが好きなんだ？」

「またそれか」

談笑し始める三人。その中で声を抑えたジャックランタンが密かに囁く。

「だってさ。ギャスパ～」
返事は返っては来なかった。その代りジャックランタンだけが聞こえる程小さく押し殺した嗚咽が聞こえてくる。
泣き声を聞いたジャックランタンはそれが収まるまでギャスパーの頭を赤子をあやす様に撫でるのであった。

◇

数日後。早朝からギャスパーの練習を行うということもあり、シンはまだオカルト研究部部員しか来ていない学園へと足を運んでいた。いつも連れているピクシーとジャックフロストは『眠い』という理由から早朝特訓にはついてきてはおらず、適当な時間に喚び出すことだけを告げて自宅へと置いてきた。
取り敢えず荷物を先に置いておこうと考え、部室まで行き扉を開ける。中に居るのはリアス一人。他の部員の姿は無い。
「おはよう。シン」
「――おはようございます」
挨拶が一瞬であるが遅れてしまう。何故なら、明らかに不機嫌そうな表情をしている

リアスが気になってしまっていたからである。休日前はいつも通りであったが、休日が明けた途端、体全体から負のオーラが漂う程に気が立っていた。
「イッセーたちならもう行ったわよ」
「……そうですか」
空気が重い部室の中でシンは荷物を一旦置く。リアスは一言二言言った後、口を開けようとはしない。
そのまま部室を出ようとしたとき、閉じていたリアスの口が開く。
「ねぇ」
「はい？」
「呼び方の違いって……どう思うかしら？」
唐突な質問にシンの眉間に軽く皺が寄る。リアスがこうも不機嫌になっている原因として脳裏に思い浮かんだのは一誠であった。
質問の内容である呼び方。これに一誠が他の異性を何と呼んでいるか当て嵌める。アーシアは呼び捨て、ゼノヴィアも呼び捨て、小猫はちゃん付け、朱乃はさん付け、そしてリアスは名前では無く部内の役職である部長と呼んでいる。
「――いきなり変なことを聞いてごめんなさい。忘れ――」
「呼び方と好意が必ずしも一致する訳じゃないと思いますよ。あいつにとっては」

自分の言ったことを取り消そうとするリアスの言葉にシンの言葉が重なる。それを聞いたリアスは不機嫌な表情では無くなり目を丸くする。伝わらないと考えていた質問の答えが返ってきたことへの驚きの現れであった。

少しの間シンの顔を見た後、リアスは溜息を吐く。

「貴方の察しの良さが十分の一でもいいからイッセーにあったらね……」

一誠の鈍感さを嘆くリアス。仮に一誠が相手の気持ちに機敏に反応出来る様な人物であったのならば、さぞかしオカルト研究部内は混沌とした空気が漂っていただろうとシンは思った。想像するだけで関わるのを避けたくなる。

「何かあったんですか？」

「昨日のことよ……」

普段のリアスだったなら見せないだろう、頬杖を突いた格好で喋る。精神の余裕の無さがだらしない姿として形になっている。

「イッセーが朱乃に呼ばれてね……」

リアスの話を聞くに昨日の休日、一誠は朱乃に呼ばれて、朱乃の住む家である神社へと足を運んだという。その神社はリアスが朱乃の家として確保した物であるらしく、悪魔でも入れるように特別な措置を施しているらしい。

そこで一誠は天使の長であるミカエルと会談し、今後の三大勢力での会議が円滑に進

む様に贈り物として、キリスト教の歴史の中で龍殺しとして有名な、聖人ゲオルギウスが所持していたという聖剣『アスカロン』を受け取ったという。
「……赤龍帝に『アスカロン〈龍殺しの剣〉』ですか？　嫌がらせか何かですか？」
「穿った見方はしないで。ちゃんと悪魔と堕天使側も承認しているし、何より悪魔でも聖剣を扱える様に三勢力の術式を使って調整しているのよ？」
「一個人にそこまでするんですか？」
「一応、堕天使側にも贈り物を送ったらしいわ。それに悪魔側も天使側に祐斗の造った聖魔剣を何本か送っているから」
「ああ、成程」
　この間、木場がサーゼクスに呼ばれた理由についての詳細が分かり納得する。
（にしても……日本の神社で悪魔と天使が会談して、悪魔と天使と堕天使が儀礼を施した聖剣を悪魔に送る、か……）
　言葉にすると自分でも何を言っているのかよく分からなくなる。
（欲を言えば一目見てみたかったな）
　宗教観で争う人々がさぞ滑稽に見える光景であっただろう。
「そこで何か気に障ることがあったんですか？」
「そこでは何も無かったわ……問題はその後よ」

「その後？」
「私が会談を終えたイッセーを迎えに行ったら、あろうことか朱乃がイッセーに膝枕を……！」
「それは……さぞかしだらしない顔をしていたでしょうね」
「その通りよ！」
　容易に想像出来る光景。一誠に好意を持つリアスからしてみれば、堪ったものではないのであろう。
　元々、朱乃が一誠に対してそれなりに好感を持っていることは知っている。代償として変化してしまった左腕の治癒にも協力していたのを実際にシンも見ていた。リアスと幼い頃から共に暮らしていることも知っているが、育った環境が似ていると好意を持つ男性の趣味も似通って来るのであろうか。
（しかしこの人もかなり嫉妬深いな……）
　不機嫌なリアスを見てのシンの感想。別に嫉妬すること自体悪いとは微塵も思わないし嫉妬するリアスに対し幻滅もしない。感情として間違ったものではないと考えているからである。
「悔しいのでしたら、それ以上のことでもしたらどうですか？」
「それ以上のことって……」

言われたリアスの顔が一気に赤面する。深い意味を込めて言った訳では無いが、よからぬ想像をさせてしまった様子であった。
「……駄目よ。やっぱりこういったものにはきちんとした段階が必要よ」
「――別に変な意味で言った訳じゃないのですが」
乙女らしい部分を出すリアスにシンはやや呆れ気味な声を出す。一誠から聞いているにかなり大胆な行動を繰り返しているらしいが、それでもおいそれとは踏み込めない領域というものがリアスの中にあるらしい。
「……でも普段の朱乃だったらここまで意識しなかったかもしれないわね。一目見ただけで分かったわ。――ああ、朱乃も本気になったんだって……」
「本気、ですか」
「家に戻った後、イッセーに聞いたわ。あの子、朱乃の……」
そこまで言い掛けてリアスは一瞬顔を顰めた。それは思わず口を滑らせてしまったという顔であった。
「御免なさい。さっきの言葉は忘れて――」
「そこから先は私が言いますわ、部長」
声と共に部室の扉を開けて中に朱乃が入ってくる。
「おはようございます。間薙君」

「おはようございます」
　先程聞いた話からリアスと朱乃の間に火花でも散るかと予想していたシンであったが、思いの外二人の間に流れる空気は静かなものであった。
「朱乃、あなた……」
「ふふふ。他の皆もイッセーくんも知っているのに彼だけ仲間外れにするのは申し訳ないですからね」
　真剣な表情をするリアスと軽く微笑む朱乃。微笑む朱乃からはどこかすっきりした印象を受ける。
「間薙君。貴方にも私のこれを見て貰えますか？」
　そう言って朱乃は背中から翼を出現させる。しかし出てきた翼は片方が悪魔の翼。そしてもう片方は、黒い羽根で覆われた堕天使が持つ翼であった。
　朱乃は言う。自分は堕天使の幹部であるバラキエルと人間との間に生まれた混血であると。
　コカビエルと戦った際にバラキエルの名が出てきたことから、薄々とそのような気がしていた。本人がそれを強く否定していた為に聞くことは無かったが、朱乃の話から一誠との会話である程度吹っ切れたという。
　堕天使との混血であり、悪魔に転生したことで今の様な二つの翼を得たと話すが、リ

アスたちが悪魔であると初めて知ったときには、朱乃は悪魔の翼を両翼持っていた。朱乃の話を聞くに悪魔、堕天使の翼を自由に出現させることが出来るらしい。

「こんな私の姿を見て、間薙君はどう思われます？」

朱乃の質問。如何に返答すべきか、シンの頭が高速で回転し始める。第一にシン自体は堕天使に対し、強い嫌悪感を持っている訳では無い。確かに何度か命の奪い合いをしたことはあるが、それを理由に存在を拒絶するという考えはなかった。

第二として混血という存在に偏見も持っていない。元の考え方とこちらの世界に入り込んでから少しの期間しか経過してないせいもあり、人とそれ以外の存在との間に生まれた者を見ても、これといって思うことがない。せいぜい珍しいと思う程度のものであった。

これらの二つの考え方を混ぜ合わせ、シンの口から出てきた言葉は――

「はぁ」

――という聞く側にとってはあまりに関心が無さそうに聞こえる一言であった。

それから一誠たちが特訓を終えて戻ってくるまでの間、シンはリアスと朱乃から『勇気を出して女性が告白したことに対しその態度はあんまりではないのか』という旨の説教をされるのであった。

◇

「お前も災難だなー」
　教室へと向かう途中、口では慰めつつもにやけた表情をする一誠に、シンは殴りたくなる衝動に駆られるも、ただでさえ格好がつかない場面を見られ、その上で更に八つ当たりという格好が悪いことを重ねることが出来ず、その衝動を腹の奥底に仕舞う。
「――それで、貰った聖剣の具合はいいのか？」
「ん？　ああ別に何ともないぞ」
　これ以上先程のことを話すのも不愉快なので、自分から話題を変える。
「最初は変な感じもしたけど調整やドライグのおかげで体調も万全だ」
　シンの前で左手を開閉し、無事であることをアピールする。
「会議を成功させる為とは言え、随分と希少な物を贈られたな」
「うーん。それもあるけどちょっと厄介なことが起きているらしいぞ」
「厄介なこと」
「ミカエルさんが少しだけ言ってたんだけど、本来だったらこの贈り物は会議の時に贈られるものだったそうだけど、予定を早めて昨日になったらしい」
「予定を早めた？」

『ミカエルが言うに護衛として連れて来た天使たちが何人も行方不明になっている。それも天使側だけじゃない、会議の護衛として現地入りした堕天使側、悪魔側からも行方不明者が出ている。昨日のことは自分たちがそれらの件に関して関与していないとする為のものだ』

三勢力から行方不明者。それだけで不穏な気配を感じてしまう。

会議に対し不満を持って抜けたのか、あるいはこの会議に不満を持つ別の勢力が関与しているのか。

『聖書だけが神話じゃない。他の勢力にとっては今回の話は面白くもないものだ。聖書の神が消えたことで暗黙の了解であった他勢力の不戦も消えてしまったからな』

「正直、三勢力でも一杯一杯なのに更に別勢力ってなるとな……」

『今はそこまで気にする必要は無い。――ただ会議の時はある程度覚悟を決めておけよ、相棒』

◇

空に月が輝くある晩。人気の無い場所であることが行われていた。

地面に倒れ伏す複数の人の姿。それだけでも異常な光景であるが、その人たちは誰も

が背中から白い翼を生やしている。
一目見て人ではない存在。彼らは天使であった。
連日起きる同胞の謎の失踪。それの原因を探す為に人の目が少ない時間に行動していたが、それが最大の仇となってしまう。
倒れ伏した数人の天使たちは、自分の身に何が起きたのかも分からない内に絶命した。倒れた天使たちの心臓には、血の様に赤く輝く魔力で形成された槍、あるいは銛が突き刺さられていた。
「挨拶にはやや刺激が強すぎたかな？」
生き残った三人の天使に、この凶行を行った犯人が暗闇から話し掛ける。闇の中に隠れるその姿は天使たちには見えない。それどころか最初に多数の同胞を葬った姿すらも見ることが出来なかった。
「貴様――」
そこまで言い掛けたとき、左右に立っていた天使たちの身体から力が抜け地面に倒れる。見れば先に死んだ同胞たちと同じものが心臓に突き立てられていた。
「儚い期待はしていたが、易々と思い描く様な展開にはならないものだ」
正面から聞こえていた筈の声が背後から聞こえる。
ありえないと天使は恐怖する。音も姿も、動くことによって巻き上がる風も無く、こ

うも簡単に殺しを行えることが出来る相手に。
それでも振り向こうとする天使であったが、振り向くと同時にその喉を掴まれ身体を持ち上げられる。
意識が暗く染まっていく中、初めてそこで襲撃してきた者の姿を見た。
金の刺繍が施された翠玉色の衣装を纏う白骨。
「ま、……魔、人……！」
「如何にも」
その存在を現す名を苦しげに吐くと魔人――マタドールはそれに応える。
白骨の細い手は、見た目からは想像出来ない程の怪力で天使の首を絞め続ける。天使も何とか引き剥がそうとするが微動だにしない。
「その程度かね？」
抗う天使を見ての言葉。しかしそこには嘲りなどは無い。
「同胞が殺されたのだぞ？　自分も死にそうになっている。その仇が目の前にいるのだ。もっと限界まで力を出せるだろう？　命ある者は他者と自分の死に直面したときこそ己の限界を超えられ易くなるものだ」
まるで鼓舞するかのような言葉。しかしそれでもマタドールの腕を掴む天使の手にはそれ以上の力が込められなかった。

「――残念だ。それが貴公の限界か」
マタドールは心の底から残念だと言わんばかりに重いものを含んだ声を洩らすと、吊り上げるのを止め地面に降ろす。
両膝を突いた格好で座る天使の前に空いた方の腕を持ち上げる。そこには鮮血の色をした魔力の銛が握られていた。
それを緩慢とした動作で酸素を求める様に開いた天使の口の前へと運ぶ。
恐怖の上に恐怖が重なり天使の顔色から生気が急速に失われていく。
「では、さらばだ」
迷いも無くそれを突き出す。天使の身体が一瞬震えたのを掴んでいた手から感じ取りながら、マタドールは首を掴んでいた手を放しながら振り返った。もう既に興味が無いと態度で現すように。
「求める『勝利』には程遠い……『暇潰し』もそろそろ飽いてくる」
自ら行った殺戮を暇潰しと称するマタドールの目が、ある方角へと向けられる。
「願わくは貴公らとの戦いは『勝利』に値するものであると期待させて貰おう」
マタドールの見つめる方向、それは駒王学園が建つ場所へと向けられていた。

会談、急襲

三大勢力会談前日。翌日に重大な会議があるせいか、駒王学園の中では一部の存在が浮き足立っていた。

その浮き足立っている一人であるソーナは、当日のことについて書き記した書類に何度も目を通しながら最終確認を行っていた。

一歩間違えれば再び泥沼の戦いが起こるかもしれない、重要な話し合い。その舞台となる駒王学園の責任者であることから、普段から固いソーナの表情には険しさも混じっていた。

「椿姫、これに書かれているものがきちんと揃ってあるか確認してくれるかしら？」

「はい。分かりました」

「……それとサジはどうしたのかしら？　姿が見えないけど」

「サジ君ならいつもの様にリアスさんの眷属の特訓の手伝いをしていますよ」

副会長の椿姫の言葉にソーナの眉間に皺が寄る。

「あの子ったら……」

「大丈夫です。会長が匙君に与えておいた仕事はきちんとこなしてから特訓をしていま

すから」
　そう言って椿姫は匙の机に置いてあった書類の束をソーナの机の上に置く。
　ソーナは置かれた書類の何枚かに目を通すと、自然と眉間に寄っていた皺が消えていく。少なくともこの時点で、匙の仕事に不手際が無いということを現すものであった。
「特訓もいいけど生徒会役員としての自覚はきちんと持ってほしいわ。今回はきちんと仕事が出来ているからいいものを……」
「うふふ。会長の『兵士』としての責務を果たせる為の特訓をしているのですから、大目に見てあげてください。それにサジ君も、イッセー君や間薙君という超えたいライバルのような存在が出来ましたし、大人しくしていられないのでしょう」
「意識するというのも無理はないというのは分かりますが……」
　会長と副会長が談笑している一方で噂となっている匙は――
「ふぁっくしょい！」
「うぇ！　きたねぇ！」
　盛大にくしゃみをし、その飛沫から逃げる様に一誠が大きく身体を仰け反らせる。
「悪い悪い。何か鼻がむずむずして……」
「風邪か？　移すなよ」
「別にお前は風邪なんて引かないだろう？」

「ん？　――馬鹿って言いたいのかこの野郎ぉぉ！　俺だって風邪ぐらい……ひ、引いたことがない！」

漫才のような二人のやりとりに内心呆れながら、シンは手に持ったボールをギャスパーに向かって放る。放られたボールを見開いた両目でギャスパーが凝視するが、特に何かが起こるという訳でも無く、そのままボールは地面に落ちて、跳ねながら転がっていく。

「貰いー」

「オイラが取るホー！」

「渡さないよ～」

転がるボールを犬の様にピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンが追い駆け、誰が一番に取れるか競う。暇な時間を潰す為の即興の遊びであった。

「ぐふぅぅぅ……」

重い息を吐きながらギャスパーは両目を擦る。失敗したから泣いているのではなく、何度も目を見開いたことで目が乾燥してしまった為の行動であった。

目を何度も瞬かせるギャスパーの頭には黒いラインが付けられており、それは匙の腕に出現している神器まで繋がっている。

アザゼルの助言通り、ギャスパーの特訓の際には今の様に匙が少しずつ神器の力を吸

収することで暴発を妨げていたが、最初の特訓のときと比べると、匙の神器がギャスパーから力を吸う頻度が少なくなった印象を受ける。

それはギャスパーの特訓の成果にも表れており、視界に映る範囲を一気に停止させていたギャスパーの『停止世界の魔眼』も、狙いを絞って停止させることが出来始めていた。尤も、数十回に一回という低い割合ではあるが。

「ギャスパー君、どうぞ」

目を擦るギャスパーにアーシアが濡れたタオルを差し出す。

「あ、ありがとうございます！　ひんやりするー」

受け取ったタオルを両目に当て、気持ち良さそうな声を出すギャスパー。最初の頃はアーシアと碌に目を合わせずに怯え、アーシアも同じ『僧侶』として全く会話することが出来ずに悲しんでいたが、一誠が間に入ったことと、アーシアが持つ柔らかい雰囲気や優しさに触れて歩み寄るようになり、今では大分アーシアに心を許していた。

「ギャスパー、少し休憩なぁ」

「は、はい！」

シンは一誠と交代しながらボールを投げていたが、ギャスパーの方は立て続けに神器の特訓をしている。シンも何となくボールを放った回数を数えていたが、放った回数は百を超えていた。

本来ならばリアスたちも訓練に参加する筈であったが、明日の会議の為に打ち合わせをするという理由で不参加であった。ただ特訓は中止しないようにリアスから言われた為、シン、一誠、アーシア、ピクシーたち、そして途中で合流した匙を入れたメンバーでギャスパーの特訓をしていた。

「ヒーホッホー！　オイラが取ったホー！」

「負けたー」

「次は負けないホ～」

拾ったボールを誇らしげに掲げるジャックフロスト。それを見てピクシーが少し悔しそうな表情をし、ジャックランタンはいつもの様な喋り方で一応負けたことを悔しがる台詞を言う。

「ヒホホホ！　次もオイラが――」

そう言い掛けてジャックフロストの身体が瞬時に停止する。続けてピクシー、ジャックランタンも空中で停止した状態で固まる。

「あっ」

皆の視線が当然、ギャスパーへと向けられた。休憩に入ると同時に匙が神器の接続を解いた僅かな間に、いつもの暴発が起きたらしい。

「あ、あああ！　ジャ、ジャック君！　ピクシーちゃん！　ランタン君！　ご、ごめんな

さい！」
　意図せずに停止させてしまったことで血相を変えて謝るギャスパーであるが、時間が停止しているピクシーたちの耳には当然届かない。
　土下座でもするような勢いで地面に身を屈めるギャスパー。最初のときよりも少しは明るくなったかに思えたが、やはりというべきか、心に染みついたネガティブな考え方はまだ抜けきってはいない。
　数分後、ギャスパーの能力が解除されたピクシーたちは、ピクシーたちの視点から見ればいきなり目の前で頭を下げているギャスパーに驚き小さく声を上げる。
「ヒホッ！」
「わっ！　……びっくりしたー」
「あれ？　もしかして停められた～？　ヒ～ホ～、最近停められてなかったから油断したかな～？　ちょっと不覚～」
　ジャックランタンは慣れているのか、目の前の現れたギャスパーに動じず、冷静に自分の身に起こったことを理解する。
「う、ううう……ごめん、ごめんなさい……少しだけ能力が使いこなせると思った途端これだなんて……君達だって色々と励ましてくれているのに……くぅ、ううううう、グス」
　めそめそと泣き始めるギャスパーにピクシーとジャックフロストはどうすればいい

のかオロオロし始めるが、ジャックランタンは慌てることなくギャスパーに近寄る。
「ギャスパ～」
「ごめんよ、ランタン君……また君を停めるようなことをして……」
「え～い」
「ふぎゃあ！」
　ジャックランタンが泣くギャスパーの頭を手に持ったカンテラで叩く。その痛みに泣いていたギャスパーは悲鳴を上げる。
「君と最初に会ったとき僕が何回停められたと思っているの～？　いちいちそんなことでメソメソ泣かれるのも嫌だからね～ボク」
「ランタン君……」
「だからせめて泣く理由を変えてあげるよ～」
「え？　どういう意――にぎゃあ！」
　再びカンテラを頭に打ちつけられたギャスパーは頭を押さえて悶絶する。しばらく痛みで震えていたが、やがて半泣きの顔を上げながら恨めしそうにジャックランタンを見た。
「ひどいよぉぉ、ランタン君」
「ウジウジして泣くぐらいだったらボクが殴って泣かしてあげるよ～。そっちの方がボ

クもスカッとするしね～。ヒ～ホ～」
　見せつける様にランタンを振り回す。それを見たギャスパーは裏返した声を出しながら後ずさる。
「それが嫌だったら泣くのを止めてとっとと訓練する～。イッセ～、この泣き虫吸血鬼をビシバシ鍛えて上げて～」
　名を呼ばれた一誠は面食らった表情をしていたが、すぐに切り替えて地面に座っているギャスパーに自らの気合を分け与えるように叫ぶ。
「ギャスパー！　俺もここに居るみんな全員、お前が失敗したって責めないし怒らないから安心して全力を出せ！　あんまりくよくよした姿を見せているとさっきみたいにランタンに活を入れられるぞ！」
　一誠の気合に気持ちが引っ張られたのか、ギャスパーは涙を拭い、少しだけ引き締めた表情をしながら立ち上がる。
「は、はい！　ぼ、僕、が、がんばります！」
　こういった状況に於いて一誠の性格というものは有り難いものであった。シン自身、自分の性格は冷めたものであり、人にあまり良い印象を与え辛いというのを理解している。人を奮い立たせるという点から見ればあまり向かず、それが出来るまでには長い期間を共に経る必要が有るだろう。

その点、一誠ならば思ったことと行動がほぼ直結しているので、あれこれ考えず先へ先へと進んで行く。考え無しで強引とも言えるが、ギャスパーの様にその場で足踏みして立ち止まる性格ならば、ある程度強引でも構わないので、手を掴んで引っ張っていくような相手の方が向いている、とシンは思っていた。

「おう！　その意気だ！　よっし、休憩が終わったらボールの停止を百球立て続けに行くぞ！　そして夢への道を駆け昇るぞ！」

――尤もそのやる気も、お決まりの煩悩関連が底にあると分かると、手放しでは褒めることが出来ない。それがなければかなりましだと思うが、それを失うと今の性格も消えてしまうと考えると、複雑な気分となる。

「夢って……どういう意味でしょうか？」

男子だけが集まった際に一誠が語った心底呆れた夢――と言う名のただのセクハラ――あのとき周りの反応は冷たい筈であったが、それでも捨てきれないらしい。それについては当然アーシアが知る筈も無く、それに興味を持ったのかアーシアがシンへと尋ねてきた。

「それは……」

尋ねられたシンはそこで言葉を止めた。ここで正直に話せば全て済むが、きっとアーシアは泣くか、あるいは一誠の煩悩を鎮める為に自らを贄にするかもしれない。

　アーシアは思いも寄らず大胆な行動をする。と言いながら、自分も一誠の入っている浴槽に一緒に入ったことを語るリアス。それを聞いたときは思わず『痴女ですか？』と本気で聞いてしまった。
「後で本人に聞いてみてくれ。アーシアが聞いたらきっと快く答えてくれる筈だ」
「はい！　分かりました！」
　よくよく考えなくても自分がそんなことの為に頭を悩ますのも馬鹿らしくなり、全てのことを一誠に放り投げる。
（まあ、頑張って答えてくれ）
　近い未来、己の業に身悶えする一誠の姿を想像しながら、適当な励ましの言葉を心中で呟く。
　一誠とギャスパーが再び特訓を開始する中、ボール拾いに飽きたのか、ジャックランタンがピクシーたちから離れてシンたちの方へと寄って来た。
「少しはましになったけど～、やっぱりギャスパ～は泣き虫だね～」
　ケタケタと笑いながら、投げられたボールを必死の形相で停めようとするギャスパーを眺めるジャックランタン。
「お前も可愛い顔して容赦ないなー」
　匙が先程のジャックランタンの姿への感想を洩らす。少し顔色が悪いのは、自分の主

であるソーナの厳しさを思い出したせいなのかもしれない。
「ヒ～ホ～。メソメソ泣かれるのは嫌いだからね～。まあ、ボクも前は泣き虫だったから～、少し八つ当たりが入っているかも～」
「前？」
「だってボクは元々人間だし～」
あまりにあっさりと告げられた事実に最初は何を言っているのか分からず、シン、匙、アーシアは呆けてしまった。
「え？　……ええ！」
「マジか……」
アーシア、匙がようやく声を出すが、やはり出て来たのは驚きの言葉であった。
「ホントだよ～。でも人だった時よりも今の姿の方が長いからね～」
「長いって……もしかして俺達よりも年上？」
「少なくともボクが生きていたときは今ほど便利な世の中じゃなかったね～。今みたいに車や飛行機なんてなかったから～」
少なく見ても百年以上は存在しているということらしい。
「……そんなことを簡単に話していいのか？」
「別に～。言う機会が無かっただけで隠すようなことじゃないし～」

「ギャスパーは知っているのか？」
「そう言えばまだ言ってなかったっけ？　ヒ～ホホ～、うっかりしてた～」
　軽く言うジャックランタンに周りは沈黙してしまう。そんな中で、こちらのことなどお構いなしに特訓をしている一誠たちの声が、やけにはっきりと聞こえてくる。
「随分とあっさりとばらすな」
「ヒホホ～。調べればすぐに分かることだと思うよ～。寧ろ、ボクが元人間だったと知らなかった方が驚きだよ～」
　確かに、ジャックランタンは昇天しきれずさ迷う魂が、カボチャあるいはカブに宿った姿である、という説がある。
　だからといって、そのことに対し抵抗も無く言うジャックランタンに、一同は戸惑いを覚えてしまっていた。
「その……人からその姿になったのは何か訳があるんでしょうか？」
　アーシアが恐る恐るといった態度で尋ねる。
「別に～気が付いたらこうなってたよ～。その前も幽霊やってて意味も無くフワフワ漂ってたいだけだし～」
「幽霊？　……やっぱ何か未練でもあったのか？」
「未練？　う～ん。忘れた」

「忘れたってお前……」
ジャックランタンの他人事のような答えに、匙は呆れた表情を見せる。
「長いこと幽霊やっているとね～色々と記憶が曖昧になってくるんだよ～。ボクが覚えている生きていたときの記憶って殆ど無いんだよね～。だから未練も忘れちゃった～」
どうしてこうも悲嘆も無く言えるのか。そう思わせる程ジャックランタンの声には暗さが無く、いつもの飄々とした口調であった。
「お前はそれでいいのか？」
「ん～。この姿になったら前みたいに忘れることは無くなったし別にいいかな～。割と今を愉しんでるし～。ヒ～ホ～」
「……分かった」
本人がそう言うのであれば、これ以上シンは深く聞こうとはしなかった。あれこれ言うのは簡単であるが、少なくとも今のジャックランタンの考えを改めさせる言葉は見つからず、変えさせる気も特に無かった。
「俺達だけじゃなくて気が向いたらギャスパー達にも教えてやってくれ。仲間外れにされたと思ってショックを受けるかもしれない」
「うん。分かった～」
ジャックランタンは頷く。そしてそのまま特訓している一誠たちの方へと飛んで

行った。
「みんな～、実はボクね～」
　あまりに呆気なく自らの正体を明かしにいくジャックランタンに、シンたちは再び言葉を失うのであった。

◇

　その日の訓練の終わり、シンは匙に付いて生徒会室へと向かっていた。ギャスパーの特訓に付き合うというリアス側の仕事を終えた為、次はソーナ側の仕事を手伝う為である。
「にしても、ほんの少しだけど特訓の成果が出てきているな。前はやたら暴発してたけど、今は両手で数えられるぐらいには落ち着いてきているし」
「お前の神器も操作が大分上手くなったのも理由かもしれないな」
「うーん？　そうか？」
　シンの言葉に匙は自覚が無いといった様子で惚けてみるも、その口元は僅かに緩んでいる。褒められたことに対する照れ隠しであることが良く分かる。実際にシンが言った様に、最初の時は匙も加減が上手く調整出来ず、吸い過ぎてギャスパーが途中でダウ

ンしてしまうことがあったが、特訓を重ねていく内に吸い取る神器の量の調整が精密になっていき、それに伴いギャスパーが特訓できる時間も増えていった。
シンたちが見ていない所で神器の特訓を行っていたのかもしれない。
そのときふと、脳裏にアザゼルが助言をしていったときの記憶が蘇る。ギャスパーに赤龍帝の血を飲ませれば神器の能力が向上すると言っていたが、同時に匙にも同じことを言っていた。
「お前は試してみないのか？」
「……何を？」
「赤龍帝の血を飲むのを」
「――別に」
口調も声も変わらない。だが、僅かではあるが言葉の中に棘のようなものを感じた。どうやら余計なことを聞き、匙の気分を害す結果となってしまったらしい。
だが、匙も自分の言葉の中に含まれる負の感情を敏感に察知し、慌てて弁解するように言葉を並べて行く。
「いやいやいや！　いくら強くなれるからって野郎の血を飲むのなんて生理的に無理だろう！　つーか野郎じゃなくて相手が女子でも無理だって！　俺は吸血鬼ってわけじゃないし！」

先程の言葉を掻き消すかのように冗談っぽく喋る匙。シンから振った話題であり、余計な世話をしてしまったのだが、匙の方からシンを気遣うような言葉を掛けられる。
悪いのは間違いなく自分なのにも関わらず、こちらへの配慮をされた態度を取られると申し訳ない気持ちになった。
場の空気を誤魔化す様に軽く笑う匙であったが、それも次第に乾いた笑いとなり、最後に大きな溜息を一つ吐く。
「――俺な、出来れば自分の力だけでどこまで行けられるのか試してみたいんだ」
呟く匙の言葉。シンが匙の横顔を見たとき、心の裡から湧き出る照れを覆い隠しているのか、硬い表情をしている。
「情けない話だけど、俺はあいつの中に二天龍が宿っているって知ったとき、嫉妬しちまった。同じ龍の神器は持っているけど、向こうは伝説になるような神滅器だぜ？　――劣等感の一つでも覚えちまうよ」
自嘲する匙。そこには未だに割り切れず、拭いきれない感情が浮かんでいた。
「だからアザゼルに自分の神器が五大龍王なんて大層な龍の神器の一部で、自分でもまだ知らない力があるって教えてもらったとき、正直小躍りしたいような気分だった。……あいつとの距離が少しだけ縮まったような気がして」
匙は己の神器が現れる手をじっと眺める。

「――きっと俺が頼めばあいつは俺に赤龍帝の血をくれるだろうさ。良い奴だからな。でもそれじゃあ駄目なんだよ。それを受け取った時点で俺はあいつと同じ場所に立てない。――いや、超えていくことが出来ない」

そう言いながら、拳を作り強く握る。そこに込められる並々ならない決意。自らの裡にある想いを言葉にして外に出し、あまつさえ他人に聞かせる。自らに言い聞かせ、他人にも教えることで、決意から逃げないようにする為の行為に思えた。

しばらく自分の拳を見詰めていた匙であったが、急にはっとした表情となり顔を赤く染める。

「ま、まあ、あれだ！　兵藤にも負けないけどお前にも負けないからな！　いっつも特訓でボコボコにされているが、いつかは俺が勝って終わってやるからな！　という訳で生徒会室に行くぞ！　また新しい仕事があるかもしれないからな！」

早口で言い終えると匙は、この場から逃げる様に早足で去って行く。

場の空気か、あるいは話の流れのせいか、言うつもりのないことまで口走っていたらしい。決めるときは決めるが、抜けているときとことん抜けているという落差。一誠を彷彿とさせる。

（でもまあ……）

他人から超える壁として見られているというのは悪い気がしない。そう思われてい

るのならば、それに恥じない様に、一層自分に磨きをかける気概が湧いてくる。
今度、匙と実戦形式の特訓をするときがあれば、先程の宣言に応じて力の限り殴り飛ばそうと、シンは密かに決めるのであった。

◇

三勢力会議当日。
既に深夜の時間帯。本日が休日である駒王学園では、会議を前にして静かな緊迫感に満ちていた。
本校舎を前にして陣取る黒い翼を生やした悪魔たち。その右手には白い羽を生やした天使たち。それに向かい合う様にして、対と成る黒い羽の堕天使たちが居た。
誰もが声を放つことは無かったが、長年の宿敵を前にして殺気を隠すことなく放ち、誰かが少しでも行動を起こせばたちまち今の均衡が崩れ、流れるように殺し合うような空気が校庭を満たしていた。
そんな重苦しい空気から少し離れた場所に建つ旧校舎。その中にあるオカルト研究部部室内にはいつものメンバーが既に揃っていた。
「離れている筈なのにここまで息苦しいね」

眉を下げ、少し困った様子で笑う木場。
「誰かが先走る真似をしなければいいがな」
「大事な場で自分の主の顔に泥を塗るような真似はしないさ……多分。あははは……あんな一触即発な状態を見ていなければ言い切れたんだけどね」
「怖いこと言うなよ……」
様子見ということで三勢力の軍勢を直に見てきた木場の言葉もあって、一誠は引き攣った表情をする。しかし、そんな顔をするのも無理はなかった。ことと次第によっては今から数十分後に、この学園が戦場と化すかもしれないからだ。
「大丈夫よ。悪魔も天使も――一応堕天使も望んで行う会議なんだから。馬鹿な真似をする訳無いわ。……ところでシン、本当にいいのね？」
リアスがシンに問う。シンはその問いに首を縦に振った。
「俺は部外者なので」
リアスが確認してきたこと。それは事前に話しておいた会議への不参加であった。あくまで三勢力が行う会議。その中に一応は人間である自分が混ざるのはどうなのであろうか、という考えから決めたことであるが、それを話した時リアスはいい顔をしなかった。
「貴方はコカビエル襲撃の件で大きな貢献をしてくれたわ。それにそれ以前の件もお兄

様や他の魔王様たちにも報告しているし、人間だからといって遠慮する必要なんて無いわ」
「決めたことなので」
　改めて説得してくるリアスの厚意を有り難く受けつつも、自らの考えを曲げないことを告げる。リアスもそれを聞き、シンの考えが変わることが無いことを悟り、残念そうな表情をした。
「――貴方がそう言うなら仕方ないわ……でもいいの？　不参加だけじゃなくてあの子と付き添いまでしてくれるなんて」
　あの子と言い、視線を部室の隅に向ける。そこには封が閉じられた段ボール箱が置いてあった。
『ぼ、僕のことはき、気にしないで下さいいいいい！　こ、こうやって部屋の隅でじっとしているのでま、間薙先輩には迷惑をかけません！』
　ギャスパーの言葉から分かる通り、彼もまた会議に不参加することとなっていた。
　理由としてはやはり彼の不安定な神器によるものであり、会談中に何らかの拍子で神器が発動するかもしれないのを危惧してのことであった。
「本当だったら皆揃って出たかったけど……ごめんなさいね」
『ぶ、部長は悪くありません！　つ、使いこなせていない僕がわるいんですううう！』

申し訳なさそうに謝るリアスに、ギャスパーは段ボール箱をガタガタと震わせて自分の責任であると主張する。
「貴方一人だけに任せるなんて申し訳ないけど――」
「一人じゃないよ～」
リアスの声を遮りながら、ジャックランタンはギャスパーが入っている段ボール箱の上に座る。
「ボクも残るし～」
「アタシもいるよー」
「オイラもだホ！」
ジャックランタンに続いて自分の存在を示すピクシーとジャックフロスト。
リアスはその様子に頬を緩め、身を屈めると二人の頭を撫でる。
「そうね、貴方達もいたわ。頼りにしているわ」
「任せるホー！」
元気良く答えるジャックフロスト。リアスは小さく微笑みながら、撫でていた手を離す。
「これ、渡しとくな」
一誠からシンに手提げ袋を渡される。中を覗くと携帯ゲーム機とそのソフトが数本。

菓子袋がいくつか入っていた。
「暇になったら今、間薙に渡したもので時間を潰しておけよ。まあ、ピクシーたちがいるから大丈夫だと思うが」
『は、はいぃぃ！』
「あー、あととっておきも入れておいたから寂しくなったらそれで気を紛らわせておけよ」
　とっておきという言葉が気になり、シンは手提げ袋の中を少し漁ってみる。携帯ゲーム、菓子袋の下にまで手を伸ばすと指先に何かが触れる。それを掴み引っ張ってみると中から何故かゼノヴィア手製の面が――見えたかと思った次の瞬間には、すぐさま元の場所へと戻しておく。
「それじゃあ行って来るわ。あとのことは任せたわよ」
「行ってきますね。御二人とも」
「……ギャーくんのことを頼みました、間薙先輩」
「ふむ。君ならば大丈夫だろうが一応、私からささやかな贈り物を送らせてもらった。ふふふ、中々の力作だぞ？」
「実は少し緊張しています。憧れのミカエル様にお会いできるので。終わったら色々と何があったのかお話させて頂きますね」

「イッセーくんもだけど君もやっぱり面倒見がいいよね。彼のこと大事にしてあげてね」
「同じ後輩を持つ身としてギャスパーのこと頼んだぜ、間薙」
口々にシンたちに言葉を告げた後、全員部室から去って行く。
残されたのはシンとギャスパーとピクシーたち。数人が居なくなっただけで部屋の空気から暖かみが抜けていくような感覚がした。
『あ、あ、あの……！』
段ボール箱を揺らしながら蚊の鳴く様な声でギャスパーが話し掛けてくる。
「なんだ？」
『ひぃ、ひぃぃぃ！　なななな、何でもありません！　ごめんなさいぃぃぃぃ！』
少しはこちらへの恐れが消えたかと思っていたが、一誠たちが居なくなった途端、元の状態に戻ってしまっていた。尤も、そうまで怖れる理由について心当たりが多々あるので、ギャスパーを責めることなど出来はしないが。
「ほらほら～、自分から声を掛けたんだから何か話す～」
『う、うううう……せ、せめて会議が終わる頃までには今日の天気の話ぐらいは……』
ポンポンとジャックランタンに段ボール箱を叩かれて急かされるギャスパーは、何とも小さな目標を掲げる。

「ヒ～ホ～、仕方ないな～。ギャスパ～、取り敢えずここから出ることを先にしようよ～」
『よ、よおし……うううう……ラ、ランタンくーん、せめて顔を少し出すだけじゃ駄目？』
「ダメ」
　踏ん切りが付かず妥協点を出すが、それを一蹴するとジャックランタンはピクシーたちを呼んだ。
「お～い。このひきこもりを出すの手伝って～」
「いいよー」
「ヒホー」
　呼ばれたピクシーとジャックフロストは、段ボール箱を左右から挟むようにして立つ箱を揺らし始めた。
「それそれ」
「ヒーホー」
『わ、わわわ！　ゆ、揺らさないでええええ！』
　ピクシーたちの遊びを横目で見つつシンはソファーに腰を下ろし、背を預ける。これ以上は特にすることは無く。ひたすら時間が過ぎるのを待つのみ。
（長い夜になりそうだな……）

まだ延々と続く時間を感じながら、シンは独り予感する。
この予感は後に良くない形で的中することを、このときまだシンは知る由も無かった。

◇

三勢力会議が行われる職員会議室。その前ではリアスを始め、彼女の眷属たちが緊張した面持ちで立っていた。
リアスは表情を引き締めると会議室の扉をノックし、失礼しますと言いながら中へと入って行く。
職員会議室は今回の会談に合わせて内装が一新されており、部屋の中央には見事の造形のテーブルが置かれており、それの周りには各勢力の代表たちが既に腰を下ろしていた。
悪魔側の代表として魔王のサーゼクス、セラフォルーがおり、サーゼクスは従者としてグレイフィアとセタンタを連れている。
セラフォルーの側には妹であるソーナが立っており、リアスと同様に眷属たちを連れていた。

堕天使側にはアザゼル。十二の黒い翼を最初から広げ、浴衣と言った軽装では無く、この場に相応しい上質な布で作られた黒いローブを纏う。その姿はかつて戦ったコカビエルを彷彿とさせる格好であり、それを見たリアスたちは僅かに表情を曇らせる。

リアス達の視線に気付いたアザゼルは小さく笑い、彼の背後に建つ人物『白い龍』のヴァーリに一誠たちが現れたことを告げるように目線を送るが、ヴァーリは一瞥するだけであり、それ以上は何もせず、関心がないのか瞑想をするように目を閉じた。

そして最後となる天使側には最近顔を合わせたミカエルの姿。その背には金色の翼が生やされている。他の勢力と同じく彼にも付き添いの人物がいたが、その人物を見たとき、一誠とゼノヴィアはほぼ同時に声を洩らしてしまう。

「イ、・イリナ……」

「イリナ……」

一誠は驚きの声、ゼノヴィアは気不味そうな声。彼女を裏切るような形で悪魔に転生したゼノヴィアにとっては後ろめたい再会であった。

イリナもまたゼノヴィアの方を見るが、彼女もまた気不味そうに目を伏せてしまう。

「私の妹とその眷属だ」

サーゼクスは場の空気の変化を察知したのか、リアスたちの紹介をする。その紹介にリアスは会釈し、朱乃たちもそれに続く。イリナの存在に気を取られていた一誠とゼノ

ヴィアは僅かに遅れて会釈はするものの、その眼はイリナに向けられたままであった。
「先日の聖剣奪還、コカビエルの襲撃で彼女たちが活躍してくれた」
「報告は受けています。改めて礼を申し上げます――彼女の方にもその件の当事者ということで、この場に参加してもらいました」
ミカエルが礼を言いながら頭を下げる。それに合わせてイリナも頭を下げるが、終始その表情は硬いままであった。
「うちのコカビエルが迷惑をかけたな。まあ、奴にはちゃんと灸を据えておいたが一応言っておく。悪かったな」
軽く言うアザゼルに、リアスを始め何人かの表情がやや険しくなるが、アザゼルは知ってか知らずか自分のペースで話を続ける。
「そういや、もう一人眷属がいなかったか？　少々変わり種の奴が」
アザゼルがシンの不在を指摘する。
「……彼は悪魔ではなく人間だということを理由に、今回の会談の参加を辞退しています。それに彼は私の眷属ではありません。協力者という立場です」
刺々しい敬語でリアスが答えるが、アザゼルは口の端を吊り上げ、嘲笑のような笑みを浮かべる。
「――そうかい。聞きたいことがあったがしょうがないな」

アザゼルはそう言って椅子に背をもたれさせた。どこまでも自分のペースで動くアザゼルの態度に、リアスの表情から隠しきれない苛立ちが出て来る。
「話は一区切りついたかな？　リアスたちも席に座りなさい」
サーゼクスはリアスに着席するように促す。いつの間にかグレイフィアが壁側に椅子を用意してある。
リアスは既に椅子に座っていたソーナの近くに腰を下ろし、リアスに続き他の眷属たちも席に着く。
悪魔側は、給仕を担当しているグレイフィアとセタンタを除き全員席に着いたが、天使側のイリナは立ったままの状態、堕天使側のヴァーリは設けられた席には座らず、壁に背を預けた状態のままであった。
「さて、全員が揃ったところでまず先に確認させてもらいたいことがある。ここに居る者たち全てが最重要禁則事項である『神の不在』について認知しているのかな？」
『神の不在』。コカビエルが暴露した誰にも明かしてはならない秘密。既に知っているリアスたちは黙ったままであるが、ソーナたちもまた沈黙していた。驚いた様子も無いことから事前に知らされていたらしい。
そしてイリナもまた沈黙していた。敬虔な信者であれば取り乱してもおかしくはない内容であるが、イリナはきつく口を結んだまま黙っている。恐らくはミカエルあたり

から、このことを聞かされているようだ。
本当ならば神の死など知らずに生きていて欲しかったと願っていたゼノヴィアは、元同僚の沈痛な表情を見て、居た堪れない気持ちとなる。
誰も異を唱えることを無いのを確認し、サーゼクスは会談の始まりを告げる。
「では話を始めるとしよう」

◇

ピクシーたちによって段ボール箱から出されたギャスパーがジャックランタンたちと戯れていたとき、ソファーに座っていたシンが急に立ち上がった。
「……」
無言のまま立つシンに、ギャスパーはびくびくした態度で話し掛ける。
「ど、どどどうしたんですか?」
シンはギャスパーの問いに答えず、いきなり悪魔の力である紋様を浮かび上がらせる。初めて間近に見るそれにギャスパーは悲鳴を上げそうになるが、空気を読んでか背後から伸ばされたジャックランタンの手がそれを防いだ。
「静かに聞いてくれ」

辛うじてギャスパーたちに聞こえる程度に抑えたシンの声。それは今までに聞いたことが無い程に低く、真剣なものであった。
「囲まれている」
シンの言葉にギャスパーたち全員が眼を丸くした。
（……何人だ？）
突如として現れた気配。正確な数字は分からないが、扉の向こう側と窓の下から複数いることを感じていた。
元々、悪魔や堕天使などを本能的に感じ取ることが出来ていたが、悪魔の力が浸食してきた影響からか、最近では感じ取れる範囲も拡がってきていた。
（悪魔でも無い……天使でも堕天使でも無い……この感じは……人か？）
常日頃から感じ取っていた気配ではあるが、どういう訳かそれとは少し異なる感覚。言葉にすると難しいが、敢えて言うならば気配に、悪魔の気配に似た何かが混じっていた。
「……ギャスパー、ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン」
名を呼ばれギャスパーはシンの方を向くが口を押えられている為返事が出来ない。ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンも声には出さず、代わりに真剣な眼差しを向ける。

「今からここを出る。そして部長たちが居る会議室を目指す」
シンは膝を折り、地面に座っているギャスパーに目線を合した。
「付いてこられるな？」
押さえていたジャックランタンの手が外れる。それはシンに対し明確な意志を見せろというジャックランタン言葉代わりの行動であった。
「は、は、は、はいいいい」
言葉を詰まらせ、声は震えている。だが間違いなくギャスパーは自分の意志を示した。
それを聞いたシンは頷くと、突如その場で大声を上げる。
「それで姿を隠しているつもりかっ！　とっくに気付いているぞっ！」
普段静かであまり感情を出さないシンが、窓を震わす程の声で吼えたことで、ギャスパーは怯えを通り越して呆然とした態度となる。
シンの大声に反応したのか教室の扉が開き、窓ガラスの向こうに複数の人影が現れる。
全身を覆うローブを目深に被った集団。魔道士、あるいは魔法使いと呼べるような格好をしていた。
「まさか護衛がついて――」

魔法使いのような格好をした集団の一人――声からして女性――が何を言おうとするが、そこから先を聞く前に、シンの両手に魔力剣が形成される。

薄暗い部屋の中で白く輝く魔力の輝き。それを一目見た魔法使いたちは何かを呟き始めたが、それよりも早くシンの両腕が振るわれる。

右手は扉方向に向けて、左手は窓の方向に向けて。振るわれた魔力剣の切っ先が床へと接触した瞬間、剣身に圧縮された魔力が解放され、全てを吹き飛ばす魔力の波となって魔法使いたちに襲い掛かった。

眼前に広がる魔力の波によって引き起こされる陽炎の如き景色の歪み。それが切っ先の先に居る相手を呑み込む。

扉側にいた集団は巻き上がる床の破片などと共に入ってきた扉から押し戻され、窓側に居た集団は魔力の波で砕かれた窓ガラスの破片を散弾のように浴び、地面に落下していく。

シンは剣を振り下ろした直後、シンの魔力剣によって起こった音と破壊で、目を白黒させて床に座っているギャスパーを小脇に抱え、人の気配が少ない扉側の方に向かって走り出す。その後にピクシーたちも続く。

扉を潜り廊下に出ると最初に目に入ったのは、魔力剣で吹き飛ばしたローブを纏った女性たち。全員、壁に叩きつけられて気絶しているのか動かない。

次に目に入ったのは、轟音とシンたちの登場に驚く複数のローブの集団。
シンはその中で最も近い位置にいた者に手を伸ばし、その顔を鷲掴みにすると、踏み出すと同時に腕力にものを言わせ、地面に向けて投げつける。
咄嗟のことで反応出来なかったローブの姿の人物は、自分の身に何が起こっているのか判断するよりも前に後頭部が床に叩きつけられ、その反動で一度跳ねた後、動かなくなる。
叩きつけられた衝撃で、目深に被っていたローブが捲れる。すると中から、白目を剥いた妙齢の女性が現れる。容姿からして、少なくとも日本人では無かった。
良く見れば他も、体型から女性であることが分かる。
しかし、それが分かってもなおシンは止まらず、さらに踏み込み、別のローブの女性の足を蹴り払う。
女の体はその場で一回転し、膝から床に着地する。何が起こったのか訳が分からないという顔をしていたが、ふと視線を落とすと膝から下が直角に曲がっていることに気付き、そこで這い上がってきた激痛が脳へと至り、痛みから絶叫を上げた。
その絶叫を背に受けながらシンは一秒たりとも集中を途切れさせずに、次に狙うべき相手を瞬時に定めようとする。
残りは三人。誰を狙うべきかと考えたとき、その中の一人が何かを呟き始める声を聞

いた。
　呟き自体に何の意味があるかはこのときのシンには分からなかったが、ただそれに対し本能的な危機感を覚えると、既に体が動きを開始していた。
　女性たちとの距離は数歩分開いていたが、シンは片足に力を一気に込めるとその場を蹴り、数歩分の距離を一歩で埋める。
　そして間合いが縮まると同時に呟いている女性の口を黙らせるように手で掴み、顎の関節が悲鳴を上げる程の力で締め上げながらもう一歩踏み込み、掴んでいる女性の後頭部を別の女性の脳天に叩きつけた。
　骨と骨がぶつかる鈍い音。その音の生々しさに、抱えているギャスパーが身震いする。
　衝突させられた二人の状態を確認するよりも前に、シンは踏み込んだ方とは逆の足を持ち上げ、最後に残った一人の側頭部にその爪先を叩き込む。
　蹴り飛ばされた女性は壁まで飛ばされ、再び頭を打ち、壁を伝う様にして崩れ落ちる。
　取り敢えず外に居た連中を無力化したシンであったが、息吐く暇も無く複数の足音がこちらへと向かって来るのを感じ取る。
　ついでに何か話し合っている様子であったが、襲撃してきた者たちが異国人であるため、悪魔特有の翻訳能力を持たないシンには、何を言っているのか理解出来ない。ただ、

いくつかの単語だけは聞き取ることが出来た。
その単語は『神器〈セイクリッド・ギア〉』『ハーフヴァンパイア』の二つ。
相手の狙いがギャスパーである可能性が出て来る。
「あ、あの人たち……ぼ、僕を狙って……!」
ギャスパーの耳にも聞こえたのか、顔色を悪くしながら震え出す。シンとは違って翻訳する力があるギャスパーが言うのであれば、シンの推測はほぼ確信となる。
「なら逃げるまでだ」
シンはそう言い、足音のする方向とは逆に向かって走り出す。
幸い地の利はシンたちの方に有り、上手く行けば敵と会わずにこの場から抜け出すことが出来る。
また最初の一撃で盛大に音を立てたので、それに気付いて会談を行っているリアスたちや、それの護衛に付いてきた三勢力の軍勢が気付くことを期待していた。そうなれば、最悪隠れて時間稼ぎをすれば良い。
「あ、あの人たちは一体な、何なんでしょう?」
「さあな」
殆ど出会い頭に倒してしまったせいで、相手が何者であるか全く分からない。今になって一人ぐらい捕まえておけばよかったのではという考えが浮かんだが、すぐに追わ

れている状況ならば尋問する時間が無いという考えに至り、その考えを消し去った。
「あ、あああの……！」
「何だ？」
小脇に抱えているギャスパーが更に質問を重ねる。
「ぶ、部室壊しちゃいましたけど、ど、どどどうしましょう？」
「それは……部長たちに言われたときに考えるとしよう」
このとき、珍しく歯切れの悪い返答をする。
「だ、だだだだ大丈夫でしょうか……？」
「そのときになったら――」
シンの言葉が途中で止まる。急に言葉を止めたシンにギャスパーは何事かと顔を上げた瞬間、ギャスパーは絶句する。
先程まで恐ろしくも頼もしく襲撃者を撃退していたシンの顔から血の気が引き、額から一筋の汗を流していた。
「せ、先輩？」
気に掛けるギャスパーの言葉。だがシンは返事をしない。
正確に言えば返事をするような余裕が無かった。
脳天から手足の末端まで凍てつくような感覚。なのに体中の汗腺が開き、そこから汗

が滲み出て来る。
気を抜けば全身が震え出してしまいそうになるような衝動。それらを無理矢理押し止め、シンは無意識に感じ取った気配の方向へと目を向けた。
目線の先に在るのは新校舎。気配の本はその先から漂ってくる。
今まで経験したことのない感覚。コカビエルと相対したときも、このような感覚を覚えることはなかった。
人としての本能を直接揺さぶるもの。
陳腐な表現となってしまうが、シンが感じ取ったものを言葉にすると、それは――
『とてつもなく恐ろしい気配がする』

◇

三勢力の会談。天使、悪魔は現状を維持すればこのまま滅びの道を辿って行くことを危惧する内容を話していたが、堕天使側のアザゼルは特に関心を示す態度を見せず、時折茶々の様な意見を述べ、他の勢力の顔を顰めさせていた。
尤も、アザゼルが空気を読めずに発言しているのではなく、意図的に場を惑わすような発言をしている節が有り、アザゼルの底意地の悪さの片鱗を見せているようであっ

た。
やがて会談の内容は、先日コカビエルが起こした聖剣強奪事件の話へと移っていく。
事件の詳細について直接関わったリアスから報告される。この際に天使側は聖剣の強奪に天使が複数名関わっていたことを謝罪し、それらを処罰したことを報告した。また悪魔側も、コカビエルに対し秘密裏に協力を行っていた悪魔がいたことを告げる。
「そして、アザゼル。この事件に関して堕天使総督である貴方の意見も聞きたい」
天使、悪魔が仄暗い部分を腹を割って話したことで、アザゼルに誤魔化し、保身の無い意見を求めることを暗に告げる。
サーゼクスの問いにアザゼルは、この場の空気を愉しむように笑った。
「コカビエルの刑を執行したこと自体が俺の意見みたいなものだ。はっきり言おう。『神の子を見張る者』の幹部の中でコカビエルだけが戦争強硬派だ。――だいぶ前から俺達とあいつの間には溝があった。それはお前たちも分かっている筈だと思うが？」
アザゼルの言った通り、リアスの報告の中では、コカビエルがアザゼルに敵意を向ける発言を幾つかしていたことが報告されている。
「俺は戦争に興味なんて無いが組織ってものは必ずしも一枚岩じゃねえんだ。そのことはお前らも痛い程分かっているだろうがな」
アザゼルの皮肉に空気が凍る。

「ではここ数十年の間に神器の所有者を掻き集めているのも一枚岩では無い故にか、アザゼル？」
「『白い龍』のみならず『刃狗〈スラッシュ・ドッグ〉』も手に入れたという情報を得たときはある程度の覚悟を決めましたが、貴方は……」
「仕掛けなかっただろう？　つーか信用ねぇな俺も。そんなに戦争を勃発させたいような好戦的な奴に見えるのかよ？」
「その通りだ、アザゼル」
「その通りよ☆　アザゼル」
「鏡を見てきなさい。アザゼル」
　三者三様の肯定。特にミカエルの方は、元同僚であったこともあり辛辣である。
「あーあ。俺の信用も地に落ちたもんだ」
　拗ねた様に頬杖を突いて嘆く。その姿を見て興味が無さそうに会談を聞いていたヴァーリが小さく笑う。
「ならここは俺の信用回復も狙って一つ和平でも結ぼうぜ。尤もそれがこの会談の目的なんだがな。天使も悪魔も……堕天使も」
　アザゼルの口から飛び出してきた『和平』という言葉に、この場に居るほぼ全員が驚愕の表情を浮かべる。余程思いがけない発言だったのか、いつも茶を注いでいたグレイ

フィアがカップの縁に茶を溢し、直立不動であったセタンタの肩が一瞬震える。リアスは目を見開き、その隣に座るソーナも普段の冷徹な表情が剥がれ、リアスと似たような表情をしていた。

　そして唯一この場で驚いた表情をしていないのは一誠とヴァーリであり、一誠は各陣営の因縁、歴史などに対し深く知らないため、その発言の重みが分からず、やや戸惑った表情で周囲の驚いた顔を眺めていた。それに対しヴァーリは、一誠の様に周囲を見回すようなことはせず黙したままであったが、美麗な顔の眉間に皺が寄り、腕組みをしている手が腕を強く握る。

「信用できないなら俺がここ数十年集めてきた神器の研究資料の一部も送ろうか？　悪魔も天使も人間界に俺達が居るせいで満足に研究が進んでいないようだしな」

「本気なんですね？」

「ああ、マジで言っている。人間の世界が目まぐるしく変化していっているのに俺達が過去の因縁で延々といがみ合うなんて格好悪いだろうが。いい加減どこかで落とし所を見つけないと流れる時間に追い付けない程に取り残されちまう」

　念を押すようにして聞いてくるミカエルにアザゼルは笑みを消し、会談が始まってから初めて真剣な表情を見せた。その顔を見たミカエルはやがて微笑む。

「私も貴方の様にこの会談で和平の案を出すつもりでした。――まさか貴方の方から持

ちかけられるとは予想外でしたが」
「何だよ、嫌味か？」
「そういう訳ではありませんよ。ただ貴方は昔から少し捻くれ者でしたからね」
　ミカエルの言葉にアザゼルは顔を顰め『だから昔を知っている奴は嫌なんだよ』と小さく愚痴る。
「このまま三勢力が争い続けたとしてもそれは世界にとって害にしかなりません。私の立場からこのようなことを言うのは不敬かもしれませんが、戦争の大本である神と魔王が消滅した今、私たちにこれ以上争う理由はありません」
　天使長という立場にあるミカエルの口から出たのは、神の意志を継がないという言葉。その発言に悪魔側は驚くが、アザゼルは声を押し殺しながら笑っている。
「ククク。あの堅物ミカエル様の口からそんな台詞を聞くようなことがあるなんてな」
「貴方も先程言いました。このままでは時間の流れに取り残されると。私、いや私たちセラフの意志は既に決まっています。亡き存在を偲ぶことは大切なことですが今も私たちにとって重要なのは今の人々を導くことであり、神の子らを見守ることにあります」
「とんでもねぇこというな、ミカエル。神が生きていたら即『堕天』していたぞ、お前。……まあ、神のシステムを受け継いだお前だから言えるのかもしれないがな」

旧知の間柄であるアザゼルとミカエルは、お互いの言葉を聞き小さく笑う。遥か昔ならば絶対に口には出来ない言葉を互いに交わしながら、そのような言葉を交わすことが出来るようになった今に対し、様々な感情を潜ませていた。だが、二人の顔に不快感は無い。それどころか互いに、長寿の者しか分かることの出来ない、特殊な感覚を噛み締めているようであった。

「ミカエル殿が言った様に、我々悪魔側も今回の会談で和平の案を持ち出すつもりだった。魔王の立場である私がこう言うのもおかしな話ではあるが、魔王という存在が消滅した今でも悪魔は生き永らえている。悪魔の種を存続させる為にも、これ以上無駄な争いはしたくはない。次に戦争が起こったとき、大きな犠牲を支払うのは純血の貴族ではなく無辜の民だ。そうなれば悪魔は滅びの道を辿るだけだ」

サーゼクスの言葉にアザゼルはニヤリと笑う。

「その通りだ。次の戦争を起こせば俺達に次は無くなる。今度こそ仲良く共倒れだ。運良く生き延びる勢力もあるかもしれないが、恐らくすぐに外の勢力の餌食になる。俺らだけで収まるんだったらそれでいいかもしれないが、きっとその波紋は人間界にも広がっていく。俺たちのせいで世界を一つ駄目にするなんて間違っているだろう？」

天使側も悪魔側も無言ではあるものの、アザゼルの言葉に態度で肯定の意を示している。

「今を見ろよ。神がいなくても世界は滅んじゃいないし衰退もしていない。そういう時代になったんだよ。これを良いと思うか残念に思うか、判断は任せるがな。しかし、そんな時代でも俺達はこうやって存在し、こうやって話し合いをしている」

気付けば誰もがアザゼルの言葉に真剣に耳を貸していた。

「神がいなくても世界は回るのさ」

その一言に場の空気が変わる。皆の緊張感によって張り詰めていた空気が、僅かではあるが弛緩したのだ。

「――という訳だ。これで俺の腹ん中見せた筈だぜ？　さっきよりは信用を得たんじゃないのか？」

アザゼルのおどけた態度に、魔王たちや天使長は苦笑を浮かべた。

「ええ、そうですね。さっきよりかは幾分信用できます」

「ならその信用が冷めないうちに次の話に移るとしようぜ」

そこから先は各陣営の戦力など外部にはあまり知られたくない情報を交換し、互いに意見を出し合う場面が続いた。

そして会談から丁度一時間が経とうとしたとき、話は一区切りされる。

「――というわけだ。話はまだあるがここで少し休憩を挟もう。彼女が用意してくれたお茶を無駄にはしたくないのでね」

サーゼクスが冗談を交えつつ他のメンバーに尋ねる。皆それに同意する態度を見せた。

グレイフィアが淹れた茶は魔王たちは勿論のことミカエル、アザゼル、会談を見学していた一誠たちにも振る舞われた。

「そういや魔王様方の意見は散々聞かせて貰ったが今の若い悪魔は和平についてはどう思ってんだ？」

茶を口にしながら何気なくアザゼルは言う。そんなことを言われリアス達一同、目を剥く。

「そこんとこどうなんだ？　サーゼクスの妹とレヴィアタンの妹」

代表してリアスとソーナの意見を聞きたいらしい。

「……一悪魔に過ぎない私たちに口を挟む権限などないわ」

「別に畏まった意見を言う必要も無いし、これは会談には関係の無い、ただの雑談だ。何を言われようが臍を曲げるつもりはない」

応じるつもりは無いといったリアスの態度にアザゼルは軽く笑いながら、何でもいいから意見が聞きたいと言う。

困った様にリアスとソーナは身内に視線を向ける。サーゼクスとセラフォルーは、好きなようにすればいいといった様子で軽く頷いた。

「……なら私から言わせてもらいます」
　先に口を開いたのはソーナであった。
「和平については率直に言わせてもらえば賛成です。過去の大戦のことは忘れるべきではありませんが、今の私たちにとってははっきり言えば関係の無いこと。いつまでも引き摺って今を台無しにすることなど正直ナンセンスです」
　ソーナの歯に衣着せぬ言い方にソーナの眷属たちの表情が青褪める。サーゼクス、セラフォルーは直接関係ないが、大戦を経験したミカエルとアザゼルを前にして、大胆過ぎる発言であった。
「言うねぇー」
「私には、いえ私たちには叶えたい夢がありますので今を失う訳にはいきません。――気分を害されましたか？」
　ソーナの問いにミカエルは何処か嬉しそうに微笑み首を横に振る。
「いいえ。貴女の言うことはもっともです。――ふふふ、今更ながら私も随分長生きしたことを実感します」
「何だよ、ミカエル。老け込むにはまだ早いぜ？」
「貴方はもう少し見た目相応の落ち着きをもった方がいいと思いますよ？」
　アザゼルと軽口を言いながらミカエルはセラフォルーの方に目を向ける。

「良い妹さんですね」
「そうよ☆　ソーたんは自慢の妹なんだから☆」
「……お姉さま。こういった場ではそのような呼び方は止めて下さい」
　大物たちを前にしてセラフォルーに愛称で呼ばれ、恥ずかしさを隠す為か、いつも以上に抑えた声でソーナは注意する。
「何だ？　姉妹仲は意外と悪いのか？」
　それを不機嫌から来るものととったアザゼルが茶化すが、セラフォルーは大きく首を横に振ってそれを否定する。
「そんなことないよ！　ソーたんとお姉ちゃんはすっごく仲良しなんだから！　それこそもう百合百合って関係なんだから！」
「……マジか」
「……すみません。立場上の問題で今のは聞かなかったことにします」
「お姉さま！　お願いですから時と場所を考えて下さい！」
　大人びた、きりっとした態度で語っていたソーナも、セラフォルーの発言とそれを信じかけているアザゼルとミカエルの反応で一瞬にして崩れ、赤面涙目といった、年相応の顔へと変わる。
「何だよ違うのかよ……ちぇっ」

「何故少し残念そうなのですか？　アザゼル」
　やや緩くなった場の空気の中、サーゼクスは愉快そうな笑みを浮かべ、今度は自分の妹へと話を振る。
「ではリアス、お前の意見も聞かせてはくれないかい？」
「言いたいことは殆どソーナが言ってしまいましたわ。私もこれ以上不毛な争いで血が流れるのを良しとはしません。和平で戦いが無くなり全てが解決するとは思っていませんが、各勢力で不満を持つ輩への抑止には繋がるとは思っています」
　今のこの瞬間から戦いが無くならないがこれから何年、何十年先の戦いは無くせるかもしれないというリアスの考え。それを聞いてアザゼルは意地の悪い笑みを見せる。
「とは言ってもなリアス・グレモリー。お前の下僕の中には、世界に多大な影響を与えるかもしれない奴が何人もいる。赤龍帝は勿論のこと聖と魔、相反する二つの特性を備えたバグみたいな聖魔剣の使い手にこの世で数本しかない本物の聖剣デュランダルに選ばれた者、悪魔も堕天使も関係無く治すことが出来る神器使いにこの場にはいないが将来的に禁手化に至れるハーフヴァンパイア、今だけでもこれだ。これから先、もっと増えるかもしれない」
　アザゼルの顔から不意に笑みが消える。
「強い力は他者の中に怯えを生み出し、その怯えはいずれ排除しようとする意志に変わ

る。力を持つ限りそれが火の粉となって降りかかるぞ？　そして何よりもお前自身、手元にある力に溺れない保障はあるのか？」
　試すような物言いと眼差し。リアスはそれを真っ向から受ける。
「仰りたいことは分かるわ。はっきりと言います、私は溺れません。もし降りかかる火の粉があればそれを振り払うだけです。そして振り払ったことで恨みや憎しみが生まれることになったならば全て私が背負い、私で全て終わらせます。誰にもそれを残しませんわ」
　堂々と宣言するリアスにアザゼルは真剣な表情を止め、口の端を吊り上げて笑う。
「若いて青臭い台詞だな――だが嫌いじゃない。サーゼクス、お前の所の妹も中々頼もしいな」
「ええ、うちの自慢のリーアたんなので」
「お兄様！　レヴィアタン様と変に張り合わないで下さい！」
　折角格好良く自らの考えを述べた二人であったが、身内の発言のせいで何とも締まらない結果となり、二人とも手で顔を覆い隠す。
「部長、最高でしたよ」
「会長、素敵でした」
　一応、一誠と匙が小声で二人の意見を讃えるが、リアスとソーナの羞恥は抜け切らず、

顔を隠したままこちらも小声で『ありがとう』と礼を言う。
「では次に赤龍帝殿に話を伺ってもよろしいかな？」
「赤龍帝に？　まあ、俺も意見を聞くつもりだったが。何せ俺達以外で世界に影響を与えそうな有力候補だからな」
「それもありますが。彼自身私に聞きたいことがあるらしいので」
一誠がミカエルにアスカロンを授かった際、別れ際に聞いて欲しい話があると言ったが、その約束がこの場で果たされることとなる。
一誠は傍から見ても緊張している表情をしつつ、側に居たアーシアとゼノヴィアに何かを小声で話す。
それを怪訝な顔でイリナが見ていたが、イリナの見ている中でアーシアとゼノヴィアは首を縦に振った。
二人の頷きを見て一誠は椅子から立ち上がる。
「ミカエルさんは神様に祈る悪魔ってどう思いますか？」
「といいますと？」
「アーシアもゼノヴィアも悪魔に転生してからも神様に祈ることを忘れてはいません。祈れば痛みを負うのを分かっていてもです。そもそも悪魔に転生する前のアーシアをなんで教会から追放したんですか？　アーシアの神器はそんなに間違った力ですか？」

悪魔すら治癒する神器のせいで教会から追放されたことで、アーシアは堕天使の庇護に入らなければなかった。

それがなければ死ぬことも無かったのではないか。それが無ければ悪魔に成る必要などなかったのではないか。

それのおかげでアーシアと出会えたということは一誠も承知している。しかしそれでも自分の中で拭い切れないものとして残ってしまう。

天使たちの長に向け、怒りすら感じさせる強い瞳を向ける。

ミカエルはそれを真摯に受け止め、その背後に立つイリナはオロオロとした様子で一誠とミカエルを交互に見る。

「赤龍帝殿、貴方の秘めた怒りはごもっともです。そして今から私が口にすることは本来恥ずべきことですが言わせて貰います。私たちは『保身』の為に貴女たちを異端として天界と関わる場所から遠ざけました」

ミカエルは語る。神と言う存在を失ってしまったことで、どのような歪みが起こったのかを。

神が起こす奇跡、加護、慈悲。それらは神が独自に造り上げた『システム』によって起こされていた。これにより聖水や十字架など悪魔が嫌う効果などを発生させることが出来、また強く真摯に祈り続けることで、それに相応しい慈悲や加護を与えることが

出来ていていた。
しかし、神がいなくなったことで、この『システム』を正常に動かす存在が居なくなってしまった。現在は『熾天使〈セラフ〉』たち全員によって辛うじて動かすことが出来ているものの、その機能は神に比べれば遥かに劣るものであったと言う。
故に天使たちは、その最低限の機能だけでも神が死ぬ以前のように動かす為に、『システム』にとって害になる存在を近づけさせないことを決定した。
その代表とも言えるのがアーシアの『聖母の微笑み』である。種族を問わずあらゆるものを癒す神器。治癒とは聖なる力であり、聖なる力は聖なる者しか癒すことが出来ないという考えを否定するものであった。
信者の信仰によって天界は支えられている。だがアーシアの神器はその信仰を妨げるものであり、ひいては『システム』を破壊するものとなるかもしれない。その為に教会はアーシアを追放とする処分を下した。
ゼノヴィアもまた、神の不在を知ったことで、その心に神への不信を宿してしまった。天界に最も近い場所に身を置く存在が不信の心を持つことは『システム』に悪影響を与えるものであり、また不信は不信を呼ぶ。
生まれながらにして聖剣の使い手であり、教会にとっては代えのきかない存在であるゼノヴィアすらも遠ざけること自体、『システム』というものに対しどれほど過敏になっ

ているかを示している。
「――それが私たちの『保身』であり罪です」
　ミカエルの言葉を聞き終えた一誠は複雑そうな表情をしていた。言っている内容について一定の理解をしているが感情が追い付いてはいない、そのような顔であった。
「ミカエルさんの言うことは分かります……分かりますけど！」
　一誠が声を荒げ始めたとき、誰かの手が一誠の手を握る。手を握る人物はアーシアであった。
　アーシアは驚く一誠に微笑んだ後、椅子から立ち上がる。ゼノヴィアもまたアーシアと同様に立ち上がった。
「ミカエル様、私のことを罪だと思わないで下さい」
「私もアーシアと同じ思いです」
　アーシアはミカエルの前で祈る様に手を組む。
「私は今、とても幸せに生きています。たくさんの大切なヒトが出来ました。そして憧れのミカエル様にこうやってお会いすることが出来ました。だからミカエル様に罪などありません。私は何一つ不幸など感じていません」
「教会でこの齢まで育てられた身ですが、教会から離れたことで今まで出来なかった経験を得ることが出来ました。それは今まで生きてきた人生の中で、とても鮮やかで貴い

ものだと感じています。……ですが他の信徒には申し訳無い気持ちも有ります。追放された立場でこのように満足した生活を送っていることに……」

ゼノヴィアの目が一瞬だけイリナへと向けられたが、すぐに離れてしまう。

「そっか、今は幸せなんだ……」

誰にも聞こえないほど微かな声でイリナは呟き、自らの言葉を噛み締める。

「貴女たち二人の寛大な心に感謝致します」

ミカエルは席を立ち二人に向けて頭を下げた。天使の長が一介の悪魔に頭を下げることなど前代未聞なことである。この行動にアーシアとゼノヴィアも驚き、すぐに頭を上げる様に言った。

「おいおい謝るつもりが逆に恐縮させてるぞ、ミカエル。そもそもお前が頭下げる理由がねえよ。お嬢ちゃんらが悪魔になった理由は俺ら堕天使が原因だからな」

アザゼルの何気なく言った言葉。しかしそれは一誠の記憶の奥底に押し込んでいた忘れたい記憶を一気に掘り起こす。

「そう、アーシアは堕天使に殺された！　お、俺も殺されたけど。それにゼノヴィアの件についてもコカビエルが暴走したせいだし！」

感情を昂らせていく一誠にドライグやリアスが落ち着けと言うものの、簡単には一誠

の心は落ち着かなかった。
「堕天使が将来害になるかもしれない神器所有者を殺すのは組織としては当然だ。俺も黙認している。神器ってのは感情や想い一つでとんでもない悪影響を世界に及ぼすかもしれないからな」
「おかげで俺は悪魔だ」
「悪魔になったことが不満か？　意図せずとはいえお前が選んだ選択は正しかったように見えるが？」
「それは……」
　アザゼルの言葉に一誠は口籠らせる。アザゼルが言った様に、悪魔にならなければ今のようにリアスたちとは共に行動出来てはいなかった。そもそも悪魔としてそれなりに頑丈な肉体を得ていなければ、ドライグの力も殆ど使用できず、いずれは自滅していたかもしれない。
「ふ、不満じゃないさ！　周りのヒトたちには色々良くして貰っている！　だけど！」
「納得出来ないってか？　何なら俺の顔でも殴らせてやろうか？」
　そう言いながらアザゼルは自分の頬を軽く叩く。
　そこまで言われると、噛みつく自分が子供染みているものと痛感させられ、抑え切れない感情も少しは冷えたが、それでも完全には冷めなかった。

「詫びの言葉は言わない。今更言ったとしても嫌味にしか聞こえないだろうからな。まあ何だ、その代わりと言っちゃなんだが別の形で穴埋めはさせて貰う」
「別の形？」
　アザゼルの言葉に疑問を抱く一誠であったが、それが何かをアザゼルは言わず、話題を別のものへと変えた。
「んで話は元に戻るが、お前らドラゴンを宿す者は世界に対しどういった選択で行くんだ？　この場で宣言してくれるなら各勢力も浮き足立つことなく済むからな」
　そんなことを言われ、一誠は咄嗟に答えることなど出来はしなかった。ついこの間までただの学生であった一誠に、世界などという規模のでかいことなど、簡単に答えられる筈も無い。
「俺は強い奴と戦えればそれでいい」
　答えられない一誠よりも先に、ヴァーリが答える。
「……修羅の道を行くと言うのかね？　その先には何も無いかもしれないと分かっていてもかい？」
「果てのことなんてどうでもいい」
　サーゼクスの言葉にヴァーリは、興味など一切無いと言った様子で言葉を返す。
「悪いな。うちのが愛想悪くて」

失礼な態度を取るヴァーリに代わってアザゼルが謝罪した。
「白龍皇はこう言っているが赤龍帝、お前はどうなんだ？」
「……正直、世界とか言われてもピンとこないっていうか……難しいことばかりで頭が追い付きません。ドライグの力も別に世界をどうこうする為に使おうなんて思ったことないですし……」
煮え切らない言葉にアザゼルは『ふむ』と言いながら顎を撫でる。
「難しく考える必要は無い。お前が戦争に肯定的なら戦争が起こった際には戦争に駆り出される。否定的ならこのまま和平を結んでリアス・グレモリーを抱いてればいい」
その言葉に一誠の目が見開き、いきなり名前を出されたリアスの顔が赤面する。
「和平の後は戦争の傷跡を治すのが役目ってもんだ。取り敢えずは少なくなった種の存続と繁栄が重要になってくるな。それを埋めるには子作りしかないだろ？　生めよ、増やせよってやつだ」
「そうですね和平が、平和が一番ですね。元よりこの力は仲間を守る為に使いたいと思っていましたし何一つ問題ないです、はい！　そしてその暁に部長を抱いてみたいです！」
先程とは違い即答する一誠。最後に隠しきれず漏れた本音にはサーゼクスも微笑を浮かべていたが、セタンタの方は刀剣の様に鋭い眼差しで一誠を見ている。

「……という訳です」
　言い終えた後に正気に戻ったのか、少し恥ずかしそうにする一誠。その姿を見てアザゼルが何かを言おうする――が、口を開く前に爆発音のようなものが会議室にいる皆の耳に届いた。
「な、何だ？」
「この音は……」
「方向からして旧校舎の辺りからです」
「……ギャーくんたちに何かがあったんでしょう？」
　リアスとその眷属たちが一斉に席を立つ。
　それと同じタイミングで、魔王たちやミカエル、アザゼル、ヴァーリが窓の外に目を向ける。
「どうやらこっちもみたいだな」
　リアスたちも窓に寄り校庭の方を見ると、三勢力の集団の真ん中に巨大な魔法陣が現れている。
「転送用の魔法陣……」

　ソーナの呟きの直後、魔法陣が輝き、その中から何かが姿を現す。しかし予想に反し

大勢ではなく、姿を見せたのはたった一人であった。
囲んでいる三勢力の集団もその数にざわめく。
「一人？　どういうこと？」
チリーン
透き通るような鈴の音が耳へと入ってくる。ただ聞くだけで心の裡にある不安が消え去ってしまうような、清らかな音色。
「綺麗……」
その音に思わず感嘆の言葉を漏らすアーシアであったが、その鈴の音を聞いた直後、アザゼルとミカエルは椅子を飛ばすようにして立ち上がり、窓が割れるのではないかと思える程の勢いで開けるや、そこから叫ぶ。
「お前らぁぁ！　今すぐここから離れろぉぉぉ！」
「どこでもいい！　今すぐ逃げなさい！」
冷静さを捨て、余裕の無い声を上げる。
しかしその必死な叫びも――
「喝」
――俯いたまま放つその人物の一言で掻き消された。
天使、堕天使、悪魔が、突如として現れた白と黒の光の柱によって動きが遮られる。

悪魔には白く清浄な輝きを放つ光。天使、堕天使には光明一つ無く、冷たく、どす黒い輝きを持つ光。その二つの光が一体一体を取り囲む。

チリーン

二度目の鈴が鳴り響くとき、二つの光は収縮しその幅を狭め、やがて一筋の光と化したとき、音も無く消え去る。後には何も残さずに。

「な……！」

あまりにあっさりと集団が消えてしまったことに、一誠は驚きの言葉すら出せない。

「――全滅かよ……」

怒りに震えるアザゼルの言葉。それは今までいた集団が何処かに連れ去られたのではなく、死んだということを示していた。

「まさかアレが出て来るとは……」

悔恨を含んだミカエルの声。

「あれは一体……」

現れた存在から目を離せないままリアスが問う。

「……よく見ておけ。あれが『魔人』だ」

僧侶の中でも最高位の者しか着衣することが許されない黄衣。右手には数珠、左手には独鈷鈴、正座の姿勢のまま宙へと浮いている。

「あれが魔人……？」
　まるで一誠の言葉に合わせたかのように、俯いていた顔を上げる。その顔には肉や眼球が無く、白骨と底の見えない眼窩があった。
「南無阿弥陀仏、と唱えたところで、汝らの逝くべき場所は三途の川では無いがな。されどもこの『だいそうじょう』が祈ろう、その魂に救済があらんと」

強者、激突

「い、一体何が起きたんですか？　ピカッと光ったら外のヒトたちが皆居なくなって……！　本当に死んだんですか？」

目の前で起きた光景が信じられず、一誠は隣にいるリアスへと問う。かつて自分やアーシアを襲ったレイナーレや、フリードに襲われた依頼者の亡骸を見たこともあり、死というものに関して一応の経験があるものの、目の前で起きたことはそれの数の比では無く、また悲鳴も叫びも無くあまりに静かに消え去ってしまったせいで、現実とは受け入れ難いものであった。

「破魔と呪殺の光……」

「え？」

校庭に浮かぶ魔人だいそうじょうから目を離さないままリアスは一誠の疑問に答える様に呟く。

「破魔は人が長い年月修行を積むことで出すことが出来る、天使と堕天使が持つ光と同じ性質を持つ浄化の力。呪殺はそれとは逆に相手を憎み、呪う思いを力に変え、相手の魂を汚して死へと誘う力……破魔は悪魔にとって毒であり、呪殺は天使、堕天使にとっ

ての毒」
「そ、そんなことが出来るんですか？」
「出来る訳がないわ！」
　リアスは自らの言葉を否定する。
「どんなに修行を積んだとしても破魔の力には限りがあるし本人の素質が大きく絡むわ！　人が一生を掛けて修行しても中級悪魔を滅ぼす程度よ！　それなのにあれほどの規模の力を展開するなんて本来ありえないことだわ！　ましてや呪殺と併用するなんて……相反する力を同時に使用するなんて不可能なことなのよ！」
「常識で考えるならな……残念だがあいつは適用外だ」
　魔法陣の中で浮かぶだいそうじょうを睨みつけながら、アザゼルは唸るような声を出す。
「久しぶりに面を見たが、相変わらず何考えているか分からない不気味な面をしてやがる」
　皆が見ている中、再び魔法陣が輝きを放つ。すると魔法陣の中でいくつもの光の柱が立ち、その光の中から黒いローブを着た集団が姿を現した。
「最悪の状況だな。あの爺が他人とつるんでいるなんてな……それもよりによってあの連中かよ」

吐き捨てる様に言うアザゼル。黒いローブの集団についてアザゼルには認識がある言い方であった。
「あれは――」
「テロリストだよ」
「テ、テロリスト！」
リアスが尋ねる前にアザゼルが答え、その返答に一誠は声を出して驚く。一般的な感覚に近い一誠にはテレビか、あるいは新聞紙の紙面でしか見たことも聞いたことも無い存在である。
「いわゆる魔法使いとかいう連中だ。悪魔の持つ魔力体系を独自に解釈、再構築し人間でも扱える様にした、魔術だの魔法だの言われている代物を扱う奴らだ。あの魔法陣の構築からして『マーリン・アンブロジウス』の体系を学んだ奴らだな」
そう言いながらアザゼルは窓を開くと、空に向けて手を翳す。すると、上空に星を思わせるように輝きが無数に生じたかと思えば、それらが形状を変え、一つ一つが光の槍と化し、魔法陣の上に立つ魔術師たちに向かって降り注いだ。
前触れも無く襲い掛かる光の槍の雨に魔術師たちは驚いた様子で顔を上げ、反撃の体勢を取ろうとするが、降る槍はその動きを遥かに凌ぐ。
着弾と同時に眩い光が周囲を照らし、その光に一誠たちは反射的に目を瞑ってしまう

が、槍を放ったアザゼル、天使長ミカエル、魔王であるサーゼクス、セラフォルー、付添人であるグレイフィア、セタンタなどの上位陣は目を逸らすことなく結果を見届けようとしていた。

「チッ、やっぱり無駄か」

光が収まったとき、最初に聞こえたのはアザゼルの舌打ちであった。

一誠たちも閉じていた眼を開き、魔術師たちの様子を窺うと、魔法陣の中で誰一人傷付くことなく立っている。ただ、魔術師たちも自分たちが何故助かったのか理解出来ていないのか、しきりに周囲を見回していた。

「む、無傷！」

「直前にあの爺が全部相殺しやがった……全く、天使や堕天使以上に光の扱い方が上手いなんて笑えねぇぜ」

一誠たちは見ることが出来なかったが、アザゼル達はだいそうじょうが何をしたのかしっかりと見ていた。

より正確に言えば、アザゼルの放った光の槍の雨を、だいそうじょうがその場から動かず、手足も動かさないまま、全てただの光に還すのを見ていた。

少なくともあの槍が直撃すれば魔術師たちが一掃出来たのは間違いないが、だいそうじょうがあの場に居る限りそれは最早不可能に近い。そして下手に手を出せば、登場と

同時に葬られた三勢力の軍団と同じ結末を辿ることとなる。
「魔術師たちの攻撃ならば校舎に被害は及びません。私が防壁結界を張っているので。……しかしあの魔人が前に出て来るのならば厳しいかもしれません。あの魔人が持つ力は私、いや私たち天使にとって猛毒です」
「それを言うなら悪魔も堕天使も変わらないさ。あれと相性が良い奴なんて殆どいないさ」
ミカエル、アザゼルの会話を聞きながら顎に手を当て、目を細めるサーゼクス。何か思案をしている様子であった。
「この学園には外から入れない様に三勢力が技術を合わせた結界が張られているんだが、それを無視して結界内に転送用の魔法陣を現せたとなると、誰かが外と繋がる様に内側に何かを仕込んでいたか？」
直接は言わなかったが、アザゼルの言葉には三勢力の中にテロリストと通じている者がいるかもしれないというものを含められている。
「あの魔人がやったんじゃないのか？」
この状況になっても我関せずといった態度で壁に背を預けていたヴァーリがようやく喋った。
「無いとは言い切れないが、そもそもあの爺、魔法陣が無くても神出鬼没だからな」

過去の記憶を思い出したのか、アザゼルの表情に若干苦いモノが混じる。
「ここから逃げられないんですか？」
「あまり相手に動きを見せたくない。出鼻を挫いてやったからあの魔術師共はしばらく混乱しているだろうが、そんなのは問題じゃない。一番の問題はあの爺だ。今は何もしてこないが、もし何かしてくるようなら……」
アザゼルはそこで一誠たちを見る。
「ある程度覚悟はしておけよ」
何の覚悟なのかを問い返すことは出来なかった。
脅す様な言葉であったが、ふざけた態度で言っている訳では無い。確実に起こるであろう現実を真剣な表情で語るアザゼルの姿に、誰もが口を閉ざしてしまっていた。
そんな中でリアスが一人口を開く。
「――分かりました。でもここでじっとしていることは出来ないわ。一刻も早く旧校舎に向かわないと……！」
だいそうじょうの登場のせいで皆の記憶の中から薄れがちになっていたが、リアスの言葉で思い出す。だいそうじょうが姿を見せる前、確かに旧校舎の方角から爆発音のようなものが聞こえていた。
「もしかしたらあのテロリストたちはギャスパーのことを狙っているのかもしれない。

そうだとしたらギャスパーと一緒にいるシンたちの身も危ないわ」
「……言わんとしていることは分かるぜ、リアス・グレモリー。確かにあの未熟なハーフヴァンパイアは奴らにとっちゃこれ以上ないぐらい便利な武器になる。一時的にでも無意識状態を作り出す神器なんて放っておく理由が無いからな」
リアスの言葉にアザゼルは口の端を吊り上げて笑うが、前に見たときよりも笑みにキレが感じられない。それだけ今が良くない状況であることを暗に示していた。
「外から神器を動かすことなんて出来るんですか？」
「方法なんていくらでもある。魔術を使って洗脳する方法だったり、力を譲渡する神器をあの小僧に繋げて無理矢理力を覚醒させる方法だったりな。熟練した神器使いなら難しいかもしれないが、まともに制御できないハーフヴァンパイアの小僧だったら簡単だろうな」
アザゼルの言葉を聞き、リアスの身体から赤い魔力が蒸気のように上がる。感情が昂って抑え切れない魔力の分が外に漏れ出しているのだ。
「そんなこと！　絶対に見過ごす訳にはいかないわ！」
想像するだけでも血が頭に昇ったのか言葉の一つ一つに怒気が込められている。これだけ怒りの感情を露わにするリアスの姿は珍しく、付き合いの長い朱乃たちは目を丸くし、一誠、アーシア、ゼノヴィアなど日が浅いメンバーはその怒気に触れ、軽く怯え

ていた。
「お兄さま、私は旧校舎へと向かいます。私の下僕であるギャスパー、そして協力者であり友人でもあるシンを私が責任をもって救い出します」
　真っ直ぐサーゼクスを見ながら、強固な意志を持って自らの考えを言う。
「やれやれいつまでたってもお転婆だね、リアスは」
　リアスの言葉にサーゼクスは困った様な表情をするものの、すぐにそれを微笑へと変えた。
「だがきっとそう言うとは思っていたよ。自分の妹が何を考えているのか把握出来なければ兄として失格だからね。それで新校舎から旧校舎までどういくのか策はあるのかい？　通常の転送魔法ならきっと外の魔術師たちが封じている。歩いて行くにしてもあの集団や魔人の目を掻い潜って行かなければならない」
「旧校舎にある私のオカルト研究部部室――もとい根城には未使用の『戦車〈ルーク〉』の駒が保管しています」
　リアスの言葉を最後まで聞かずにサーゼクスはリアスの考えている策を理解した。
「成程。『キャスリング』か。確かにそれを使えば魔術師たちに気付かれずに旧校舎へと行ける」
　レーティングゲームの中で『戦車』が保有している『キャスリング』という特殊能力。

それは『戦車』と『王』の位置を入れ替えるというシンプルなものではあるが、王を倒されたら終わりであるレーディングゲームの中では使い所が非常に重視されている能力である。

そして何よりこの『キャスリング』という能力は悪魔の駒そのものに仕込まれている能力である為、魔術師たちが知ることの出来ない秘匿された術式であり、その詳細な内容については一部の悪魔しか知らない。

これにより転送妨害の中を無視して転送することが出来る。

「よし。ならば何人かを同行出来る様に『キャスリング』の術式に少し手を加えよう。流石にリアス一人を送るのは無謀だ。グレイフィア、術式の用意をしてくれ。媒体は私の魔力を使用していい」

「了解しました。ですが短時間で行かれるとなりますと簡易的術式になります。恐らく送れる数は増えても一人しか……」

「ならば誰が――」

「はい！　サーゼクス様！　俺が行きます！」

いの一番に一誠が名乗り出る。自ら進言した一誠をサーゼクスが見た後、その視線を他の眷属にも向ける。一誠が立候補したことに他の眷属は特に反対の意志を見せなかった。

「ならイッセーくん――」
「盛り上がっている所悪いんだが」
　アザゼルが口を挟む。
「本音を言うとその策にはあまり賛同出来ないな。少しでも違和感を覚える様なことをすればあの爺が飛んで来る可能性が高いぞ？　仮に旧校舎に行けたとしてもそこの魔術師たちが爺に援護を請いたら、お前の妹や赤龍帝は死ぬ」
　アザゼルは、はっきりと断言する。その言葉は意気込んでいた者たちの頭に冷水でも被せるかのようであった。
　しかし――
「そんなことはさせないさ。……私が」
　サーゼクスもまたはっきりとした意志を示す。
「させないとはいうがどうやって……サーゼクス、お前まさか……」
　サーゼクスの言葉に何か気付いたのか、一瞬だけアザゼルは問う様な眼差しを向けるが、すぐに溜息を一つ吐き懐に手を入れ、目当てのものを取り出すと同時に一誠に向けて放る。
「おい、赤龍帝。受け取れ」
「ととっ！　せ、赤龍帝じゃなくて俺の名は兵藤一誠だ」

投げられたものを一誠は反射的に受け取る。それは一見すると飾り気のない腕輪であったが、外と内には幾何学的な紋様が細かく刻まれていた。
「じゃあ兵藤一誠、それを一つ身に付けておけ」
アザゼルから受け取った腕輪を不思議そうに眺める。
「これは一体？」
「それは俺が造った神器の力をある程度抑えつけ、制御する為の腕輪だ。短時間だが禁手化することも出来る。代償無しにな。その腕輪が代わりに代償になってくれる」
禁手化。それを代償無しに可能にする腕輪と聞けば、一誠や他の皆も驚きを隠せない。
「言いかよく聞け。禁手化になれると言ってもせいぜい一回が限度だ。なるにしてもタイミングは見極めろよ。禁手化に至れば魔力も体力も大幅に削られるから長い戦闘なんて無理だ。それは最後の手段だからな」
「わ、分かっているよ……」
「更に言わして貰うがお前が悪魔になったときどれほど駒を消費した？」
「は、八個」
「ならその九割はお前に宿るドライグの為に使用されているのは間違いない。お前自身は現段階では並の悪魔以下の力しか持ってないからな。腕輪を使用すればドライグの

力は解き放たれ、残りの七個分の駒の力がお前に圧し掛かってくる。振り回されるなよ？　言い方は悪いがお前の器はまだドライグを受け止めるには小さい」
　一誠自身が自覚していることではあるが、改めて他人から指摘されると、それなりの棘となって心に突き刺さる。
「……そんなこと言われなくても分かっている」
「なら良し。地力を自覚していない奴ほど自爆しやすいからな。自覚があるに越したことはない」
「それでもう一つの腕輪は？」
「あのハーフヴァンパイア用だ。取り敢えず力の暴発を抑えることが出来る筈だ」
「……もしかしてギャスパーの為にわざわざ造ったのか？」
「さてね？」
　答えをはぐらかしながら、アザゼルの視線は再び外の魔術師たちの方へと向けられた。
　アザゼルの先制で少し混乱していた魔術師たちも正気に戻ったらしく、地から魔術によって炎やら雷のようなものを放ち、空からも宙に浮いている魔術師たちが同じような魔術を新校舎に向けて放っていた。
　しかし、その攻撃の全ては新校舎に触れるよりも先に、周囲に張ってある結界に阻ま

れている。
「おお、おお。流石は天使長様の結界だ。びくともしない」
「大事な三勢力の会談の舞台、そう易々とは傷付けませんよ。――それにしても随分と神器の研究を進めているようですね、アザゼル」
　ミカエルの目が一誠の持つ二つの腕輪に向けられる。
「いいじゃねぇか。神器を造った神はいない。神のみぞ知るなんてものをいつまでも使い続けているなんて物騒だろ？　誰か解明できるような奴が必要なのさ。あんまりタブー視し過ぎると時代に置いてかれるぜ？　ミカエル」
「貴方が研究しているというのが不安なんですがね……」
「一々悪く考え過ぎなんだよ。会談のときに研究の一部を見せるって言っただろう？　本来だったらそのときにあの腕輪を渡すつもりだったんだよ」
「本当ですか？」
「疑り深いな。こんなときにつまんねぇ嘘は吐かねぇよ」
「――今はその言葉を取り敢えず信じましょう」
　ミカエルは嘆息しながらアザゼルと同じく外に目を向けた。
「お嬢様、簡易的な術式ではありますが少々時間が掛かります。しばしお待ちください」
「頼むわ、グレイフィア。できるだけ早くお願い」

「承知しました」
　そのとき壁に背を預けていたヴァーリが壁から離れ、アザゼルたちが立つ窓の前まで移動する。
「アザゼル」
「何だよ？」
「俺が前に出よう」
　ヴァーリの提案にアザゼルは険しい表情となる。
「敵の目を引くつもりか？　確かに白龍皇が出るとなれば相手を掻き乱すことが出来るが……だが外には魔術師たちだけじゃない、あの魔人もいるぞ」
「だからだよ」
　今まで無表情であったヴァーリが凄絶な笑みを浮かべる。
「まさか『別の魔人』と戦える機会がこうも簡単に来るとは思っていなかった。是非ともその強さ、この身で実感したい」
　魔人を前にして気を萎えさせる所か昂らせるヴァーリに、アザゼルを除く皆は信じられないものを見るような目をヴァーリに向ける。
「相変わらず好奇心旺盛と言うべきか、命知らずというべきか……一体誰に似たんだか」
「さあね」

溜息を吐くアザゼルに対し、素知らぬ顔でヴァーリは肩を竦める。
「――行って来い。そして死ぬなよ」
「了解」
アザゼルの許可を得たヴァーリの背中に光の翼が広げられる。そしてそこから次なる段階へと移る。
「禁手化〈バランス・ブレイク〉」
『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』
叫ぶような音声と同時に、ヴァーリの身体が光の翼に良く似た白色の光に包まれる。そして目を覆う程の輝きを放った後には、全身に龍を模した鎧を纏ったヴァーリの姿がそこにあった。
ヴァーリはリアスたちを見回した後に窓を突き破って外へ飛び出すと、そのまま空を飛翔し魔術師たちの中へと飛び込んでいった。
禁手化をして飛び立ったヴァーリの姿を見て、一誠の胸の裡に宿ったのは劣等感であった。ヴァーリ自身見せつける気など全く無いとは分かっているものの、代償も無しに容易く禁手化へと至れるヴァーリに対し、絶対的な実力差を感じていた。
「彼は大丈夫でしょうか……」
「多分、大丈夫だろう。魔人と戦うのはこれが初めてじゃない」

「彼も交戦した経験があるんですか！」
　さり気無く言うアザゼルにミカエルは驚く。戦った経験があることもそうであるが、五体満足で生き延びているということにも驚いていた。
「――流石、白龍皇ですね」
「俺は関わるなと何度も言っているんだけどな」
　賞賛の言葉を口にするミカエルに対し、アザゼルは苦虫を噛み潰した様な顔をする。
「私も出ることにします」
　ヴァーリが飛び出した後、セタンタも槍を握り直しながらサーゼクスに進言する。
「……命の保証はないぞ？――ここは」
「白龍皇殿だけに負担を強いる訳にはいきません。それに一人よりも二人の方が狙いを分散させられます。――大丈夫です、あくまで時間稼ぎに徹するつもりです」
　サーゼクスが何かを言い掛けるが、それを遮りセタンタは話を進める。
「……無理はするな」
「お心遣い感謝します」
　セタンタは頭を下げた後、ヴァーリの破った窓へと近付く。
「セタンタ……」
「リアス様。眷属を必ずお救い下さい。その為の準備ならば私は喜んで致します」

「貴方は強いから大丈夫だけど……死なないでね」
「その御言葉、万の兵を頂くよりも心強いものです」
窓際に立ったときセタンタは振り返り、一誠の方を見る。
「兵藤様」
「は、はい！」
セタンタは深々と頭を下げた。
「リアス様のことをよろしくお願いします」
「ッ！――はい！　必ず守ります！」
一誠の返事を聞き、頭を上げたセタンタは少しだけ目を細めた。顔半分がマフラーで隠れていて判断し辛いが、一誠には微笑を浮かべている様に見えた。
「では行って参ります」
セタンタもまた窓から飛び降り、校庭へと立つと、既にヴァーリの介入で激しく魔法が放たれている戦場に向かって駆け出す。
「――アザゼル。彼らが現れたとき知っているような口振りをしていたな。連中は何者だ？　魔人までも引き入れる程に強大な組織なのか？　ここ数十年の間、神滅器や神器を集め、研究していたのもあれが原因なのか？」
知っていることは洗い浚い喋ってもらう、という言葉を眼力へと変えながら、サーゼ

クスはアザゼルを見る。
　アザゼルは軽く溜息を吐いた後、喋り始めた。
「あー、別に隠すつもりはない。この会談が進めばお前らにも教えるつもりだった。しかし、本当に嫌なタイミングで出てくる。――いや、あいつらにとっちゃ自分たちの存在を知らしめるいい機会だったのかもな」
「彼らの名は？」
「『禍の団〈カオス・ブリゲード〉』」
　現れた集団の名を告げるアザゼル。その名に聞き覚えがないのかミカエルもサーゼクスも眉根を寄せている。
「知らなくても当然だ。組織名やその背景を把握したのはつい最近だからな。おまけに地上の情報は殆どうちら〈堕天使側〉が独占させて貰っている。――まあ、三すくみの害が形になったという訳だな。その害の中で息を潜めて不審な行為をする集団をうちの副総督のシェムハザが目を付けたのさ。今分かっているだけで三勢力の中から危険因子や反乱分子の奴らを集めている――うちの堕天使からも何人かそっちに行った――そして何より無視できないのが、禁手化に至った神器持ちや神滅器の所有者も保有しているってことだ」
「それは確かな情報なのですか？」

「――死んだ部下が命懸けで持ってきた情報だ」
「愚問でしたね、申し訳ありません。それで、その者たちの目的は？」
「破壊と混乱。馬鹿みたいに単純だろう？　ようは世界の安寧や平和、平穏というのが気に入らないのさ。色々と思春期が抜け切れていないテロリスト――最悪だろ？　更に性質が悪いことが二つある。一つはそれが可能な程の力が集まりつつあること」
アザゼルは指を二本立て、その内の一本を曲げる。
「そして二つ目は組織の頭が『赤い龍』も『白い龍』も遥かに凌ぐドラゴンが務めているということだ」
更に二本目の指を曲げた。
アザゼルの告白に場の誰もが戦慄するのであった。

◇

白い龍が輝く翼を羽ばたかせ、魔術師たちを圧倒する。
ヴァーリが側を通る度に、近くにいた魔術師たちの身体はまるで木の葉の様に宙へと舞っていく。その身体には共通して拳の跡が刻まれていた。
進路上に魔術師が現れて防御用の結界を張るが、一瞬の均衡も無く容易く打ち破る

と、視認出来ない速度の拳をその魔術師の胸部に叩きつけ道を開く。
魔術師たちもただ攻撃されているばかりではなく、魔術による炎や雷、氷などを放つものの、そのどれもがヴァーリの纏う『白龍皇の鎧』によって阻まれ、傷一つ与えることなく掻き消される。
避ける必要も無い攻撃をその身に浴びながら、ヴァーリは魔術師たちを蹂躙しつつ、真っ直ぐにある場所を目指して直進した。
そして、ヴァーリと同じく魔術師たちを掻き分けて進むもう一人の人物、セタンタ。
ヴァーリの様に一撃で魔術師を叩き伏せ、魔術を己の防御力のみで破るなどという力業を見せることはなかったが、流れるような動きで地を走り魔術師たちの隙間を抜けていく。
しかし、ただ通り過ぎて行くなどということはせず、手に持つ槍をその度に振るう。
何をされたのか分からず、自分たちを無視して先に進んでいくセタンタの背に魔術を撃ち込もうと振り返った途端、その場で崩れ落ちる。我が身に起こったことに戸惑う魔術師たちであったが、そのときになって初めて自分たちの身に何が起きているのかを把握する。
両脚の付け根、そして両肩の鎖骨付近から流れる血。気付いた魔術師たちの身体に激しい痛みが奔り、それが絶叫となって口から放たれる。

あの一瞬のすれ違いの間にセタンタはその槍で相手から移動と攻撃の方法を奪い、無力化させていた。

ただヴァーリとは違い、無力化した相手の意識は断たれてはおらず、地面に這いつくばり芋虫の様に蠢きながら、痛みと苦しみの泣き声を上げる。それによって他の魔術師たちに心理的な重圧を与え、『自分もこうなるのではないか』と思わせ、動きや思考を遅らせる。

これは偶然では無く意図的にセタンタが行っていることであり、ヴァーリよりも動きの荒々しさが無い分、より残酷に見える行動であった。

たった二人の人物によって魔術師たちは次々と倒れ、その数を減らしていく。しかし、そんなことには目もくれず、二人は只一人を目指して駆け抜ける。

「少し待たせたかな?」

「……」

「意気がよいな、若いの」

魔術師たちの集団を抜け、セタンタとヴァーリはだいそうじょうの前へと立つ。二人の登場にだいそうじょうは顎を震わして乾いた音を鳴らす。表情が無い為、判り辛いが笑っている様であった。

「魔人、その名を聞けば誰もが震える存在。そんなものが現れたとなれば挑まざるを得

ないな」
「無知からくる無謀では無く、己の性故の行動か……。随分と勇ましい者を依代としたな白龍よ」
　既知の間柄といった喋り方で、ヴァーリの裡に宿るアルビオンへ声を掛ける。
『久しいな。まさかお前が他者と行動するとは思わなかった。何か思うことでもあったのか？』
「さてのう？　そう言う汝は相も変わらずといった所か。せいぜい宿主の姿が変わった程度だのう」
『いつまでも私のすることは変わらない。宿主が思うが儘に奪い、戦う。それだけだ。それはお前も変わらないだろう？　だいそうじょう』
「この世は諸行無常。だが何百年経とうとも拙僧も汝も未だに揺らがずか。それでよい。長きに亘り貫いてきたものもいつかは変わるが、その時は今では無い」
　互いの現状を皮肉る様な言葉を言いながら、だいそうじょうは手に持つ独鈷鈴を鳴らす。それを聞いた魔術師たちは波の様に引き、周囲が広がる。
「さて、もう一人見知らぬ顔が居るが……」
「お初にお目に掛かります。私は魔王サーゼクス様に仕える者。名はセタンタと申します」

「魔王サーゼクス？　知らぬ名だのう」
「正しく言えば魔王サーゼクス・ルシファー様に仕える者です」
「ほう。魔王も代替わりをしたか。冥界には興味がなかったからのう、まさに先程言った様に諸行無常というものじゃな」
顎を鳴らしながら笑う。変わらぬ自分とアルビオン、変わっていく魔王。その対比に可笑しなものを感じたのかもしれない。
「してセタンタとやら。汝は何故に我が前に立つ？　この小僧と同じく拙僧に己の力を試す為かのう」
「……貴方という存在は危険過ぎる。その場に居るだけで周囲に死を撒く」
「かかかか。会って間もないというのに随分な言われようじゃな」
「――私の直感が訴えるのですよ。貴方は私の守るべき存在達に害を齎すと。故にここで死んで頂く」
セタンタは手に持つ槍の穂先をだいそうじょうの心臓の位置へと向けた。
「成程」
だいそうじょうがそう呟いたとき、弾かれる様にしてヴァーリとセタンタはその場から移動する。直後、ヴァーリが居た空中、セタンタの居た地に光の柱がそびえ立つ。
辛うじて避けた二人であったが、それだけでは終わらず移動した場所を見計らって追

撃の破魔の光が襲い掛かる。
「ちっ！」
セタンタは短く舌打ちをしながらも移動した先に見えた光に反応し、地を蹴り無理矢理方向を転換しながら一切速度を緩めずに疾走。野生の獣を彷彿とさせるしなやかな動きを見せながら、次々と繰り出される破魔の光を避ける。
「これは凄い！」
一方でヴァーリは光の翼を展開させながら、高速で空中を駆け廻る。セタンタとは違い、急加速で破魔の光が生み出されるよりも一歩先を行き強引に避け、避けた先に光があるものならば体勢を捻り、錐揉み回転をしながら光に体を掠めさせながらも無茶苦茶な回避を見せる。命知らずという言葉を体現させるような避け方であった。
掠めた鎧から僅かに白煙が立ち昇る。神滅器であり龍の魂が宿る鎧に損傷を与える程の威力を持った破魔の光、それを何の動作も見せず息を吐くように自然に繰り出して見せる。
今は使ってはいないが、呪殺も同じ威力を持っているのは考えるまでも無い。
故にヴァーリは鎧の下で笑う。これ程までの強敵が目の前に現れたことに歓喜し。
「ははははは！　本当に、本当にこの場に現れてくれて感謝の気持ちしか湧かない！」
魔人を前にしその存在を笑いながら感謝する。その感謝の言葉を受け、だいそうじょ

うは軽く顎を鳴らす。
「全く。『彼奴』を彷彿とさせる気質じゃ」
苦笑しているかの様な言葉。
「――この後のことは考えているのかのう」
意味深い言葉を小声で呟く。次の瞬間、破魔の光を避け切ったヴァーリがだいそうじょうの眼前へと現れる。
「そっちも予定外の行動をしたんだ。こっちも予定外のことをさせて貰う」
「――成程。あの女のとばっちりを拙僧が受けているという訳かのう」
だいそうじょうの顔面に向け放たれたヴァーリの拳。触れれば白龍皇の能力によりその力は延々と半減させられ、ヴァーリの糧となる。
響く殴打音。しかし、それは人を殴ったかのような音では無く、金属がたわむ様な音であった。
「危ない、危ない」
突き出された拳に合わせる様に、だいそうじょうは数珠を持った白骨の手を突き出していた。数珠と拳は触れてはおらず、接触を阻む見えざる壁が二つの間に作り出されていた。
拳を受け止められたヴァーリの周囲が破魔の力によって輝き始める。場の変化を瞬

時に察したヴァーリは突き付けた拳で壁を弾き、その反動で輝きが最高点に辿り着く前に抜け出す。
それを見ただいそうじょうは追撃を行おうと手に持つ数珠をヴァーリの方へと向け、何かを唱え始めようと口を開こうとするが、直前になって首を傾ける。
刹那、先程まで額があった位置に高速の槍が突き抜けて行く。
考えるまでも無くセタンタによる槍の投擲であった。
経の邪魔をされただいそうじょうは槍の主であるセタンタの方へと顔を向けるが、その視線の先にセタンタの姿は無い。
槍の角度からして間違いなくその場所にいなければならない筈であるにも関わらず、セタンタの姿を見失ってしまう。
そのとき背後から聞こえる摩擦音。金属と皮が擦れる音。
消えたセタンタの姿はだいそうじょうの背後にあった。それも、空中で自ら投擲した槍を自分で受け止めるという、普通に考えるならば異常と言える行動をしながら。
だいそうじょうが振り向くよりも先に、セタンタは持ち手を変えながら、だいそうじょうの心臓付近を狙い、槍を突き出した。
だが突如としてだいそうじょうの身体は霞の様に消え、突き出した槍は空を切る。
そのまま着地し、だいそうじょうが何処へ消えたのかと鋭い目で探すが一向に姿は見

せず、代わりに声だけ響き渡る。
『声を掛けられたのでこのまま失礼する。汝らとの戦いは次の機会に』
それだけ言い残すと場から寒気立つ様な気配が消える。だいそうじょうが言った通り本当にこの場から離れたらしい。
ならば次はどこに向かったのか。セタンタは大体の予想はついていたものの、その前にセタンタにはどうしても確認しなければならないことがあった。
「やれやれ。折角、盛り上ってきたというのに……」
背後でヴァーリが降り立つ音と心底残念そうな声が聞こえる。
「このままじゃ不完全燃焼だ。あなただってそう思――」
セタンタは振り向くことなく背後に立つヴァーリに向け、槍の石突部分を繰り出す。鳩尾を狙い放たれたそれを、ヴァーリは手の平で受け止める。
「……」
『何のつもりだ』とも『正気か』ともおっしゃらないのですね？」
共に戦った相手に不意打ちを仕掛けるという、蛮行に等しいことをしたセタンタは冷静な口調で問うが、ヴァーリは何も答えない。
「あのとき微かに聞こえてきた会話。もし聞き違いだったのであればこの場で土下座でも何でもして謝罪します。ですが、もし聞き間違いでないのであれば――」

槍を握る手に力が篭り、軋む音が鳴る。
「貴方が裏切り者ですね」
声は決して大きいものでは無かった。それどころか激情で声が震えると言ったことも無く、平坦とも言える口調。しかし、傍からそれを聞いていた魔術師たちはセタンタの声が耳に入ってきた途端、言い知れない恐怖を覚え、膝が意志に反して震え始める。
今宵、自分たちの存在を知らしめるが為に命など投げ出す覚悟でこの場所を襲撃しにきた筈なのに、その意志を砕くかの様な恐怖。一見すれば美青年にしかみえない存在の中にはどれほどの力が在るのか、想像することすら拒否してしまうほどの恐ろしさがあった。
見ているだけでこれほどのことを引き起こすならば、それを間近で受けているヴァーリは一体どのような感情を抱くのか。
「何を言うかと思えば――」
顔を鎧で覆っている為、表情は見えないがその代わりヴァーリの声は震えてはいない。すなわち怯えている様子は無い。
「――正解だ」
セタンタを肯定するヴァーリの言葉。
次の瞬間、互いの感情が一気に爆発する。セタンタは怒りで、ヴァーリは歓喜で。

「何を考えている！　白龍皇！」
怒声を上げると共に片足を軸にして身体を百八十度回転させる。その際に背後に突き出していた槍を素早く引き、今度は石突の部分では無く穂先をヴァーリの側頭部に向けて振るう。だがその前にヴァーリの腕が間に突き出された。
セタンタの槍と、鎧で覆われたヴァーリの手の甲とが衝突する。
金属と金属との強い接触は火花を生み出し、その光は夜の闇に慣れた魔術師たちの目に焼き付き、残像を残す。
「誤解の無いよう念の為に言っておくが、あくまで俺の独断だ、アザゼルは関係無い」
「貶めている自覚があるのならば何故敵に降る！」
側頭部への攻撃を防がれたセタンタは流れる様な動きで相手から槍を離すと、股下から頭頂部目掛けて振り上げる。
ヴァーリは予想を遥かに凌ぐ槍の速度に鎧の下で深い笑みを浮かべながら、渾身の力で地を蹴った。ヴァーリの踏み込みによって踏み込んだ場所を中心に四方に亀裂が奔り、固められた土の上に被さる砂利が一斉に舞う。
辺り一帯を土煙が覆い尽くすが、すぐにそれは霧散した。
土煙が晴れると、そこにはセタンタから数メートル以上離れた場所に立つヴァーリの姿と、振り上げていた筈の槍を薙ぎ払う形で持つセタンタ。

槍を振り抜いた格好から、漂う土煙は槍の一蹴によって散らされたのが分かる。
「降ったつもりは無いさ。あくまで協力するだけだ。色々と魅力的な提案をされたものだからな」
土煙が晴れるのと同時にヴァーリは地を滑る様に低空を飛び、間合いを一気に詰めると立ち上がる勢いのまま心臓、肺、肝臓など臓器を狙い、拳を繰り出す。その一発一発の拳速は並の悪魔ですら白い軌跡が微かに見える程の速さであったが、セタンタは初撃を半身にして避け、続く二発目をその場から半歩移動するという足捌きで回避すると最後の三発目に合わせて体を低くし、その拳を掻い潜る。
拳に髪が触れるか触れないかという程の接近にもセタンタは顔色一つ変えず、拳を振るったことで大きく開いたヴァーリの鳩尾に槍の先端を叩きつけた。
「ははっ！」
驚き、動揺などよりも先に嬉々とした声を出しながら、突き出された槍の勢いでヴァーリは大きく後退し、先程まで立っていた位置にまで戻される。
「凄い、凄いな！　神器も無しにこの鎧に傷を付けるなんて！」
笑いながらヴァーリはセタンタに突かれた鳩尾部分を撫でる。ヴァーリに言った様にそこには、ほんの僅かな亀裂が入っていた。
ヴァーリは喜んでいるもののセタンタは内心で舌打ちをする。かなりの力を込めて

突きを入れたが予想以上に神滅器の鎧が硬かった為である。仮に全力で叩き込んだとしても鎧を貫き、中のヴァーリに致命傷を与えるには至らないということが容易に想像出来る。

セタンタの見ている前でヴァーリの指先が鎧の傷に当てられ、それをなぞる。すると何も無かったかのように傷一つ無い装甲がなぞった後に現れた。

（硬い上に自己修復も可能か……仕留めるならば瞬時に息の根を止めなければならない）

鎧の力を見せ付けられてもセタンタは落ち着いたまま、冷静にヴァーリを殺す方法を考える。

「……白龍皇。魅力的な提案をされたというが一体何を提案されたのですか？」

ヴァーリが敵に協力することとなった理由を問う。強い興味があったからではない。仕留める算段を考える為の時間の引き伸ばしを狙ったもの。尤もセタンタ自身、０．０１秒でも思案する時間が稼げれば上出来だと思っている程、返答には期待していないものであったが。

『望むままに強敵と戦う機会を与える』――こんなことを言われたら断れないな。特に俺のような自分の力を試してみたいような奴は」

意外にもヴァーリから問いの答えが返ってきた。だが、その内容にセタンタの目付き

は険しさを増し、不機嫌なものへとなる。
「――でもその選択は間違ってはいなかったみたいだ。一時だがあの魔人の強さに触れることが出来たし、こうやって貴方とも戦えている」
　セタンタとは対称的にヴァーリは鎧の下で笑みを深くする。それが鎧越しでも分かったのか、セタンタの表情は反比例するように険しさを更に増す。
「聞かれていて良かったよ、あの会話は。尤もこうなることは予め考えて話しかけて来たのかもしれないが」
　ヴァーリの言葉で、セタンタはだいそうじょうの手の上で踊らされていたことを知らされ、心の中で魔人への悪態を吐く。同じくだいそうじょうの思惑通りに動かされていたヴァーリであるが、自らの意志で踊っていたか、踊らされていたかでは大きく違う。
『ヴァーリ、楽しむのは結構だが……』
「分かっている。この場での目的は忘れてはいない。――楽し過ぎて忘れそうになるがな」
　アルビオンとヴァーリの会話にセタンタはまだ目的があるのかと思ったが、これに関しては追及出来そうになかった。何故ならヴァーリが構え、いつでも戦いを始める格好へと移っていた為に。
「さあ。もっと貴方の強さを見せてくれ！」

「――ガキが」

昂るヴァーリに冷めた殺意を向けたまま言葉を吐き捨て、再び拳と槍が交わる。

◇

旧校舎内。ギャスパーを抱えながらシンは魔術師たちの目に付かない様に道を選びながら走っていたが、徐々に苦しい状況へと追い込まれていた。

断続的に聞こえてくる足音。その数が最初の頃に比べ、かなり大きく、そして多くなっていた。

次々と旧校舎内に魔術師たちが入り込み、シンたちの逃げ場や逃げ道を塞いでいく。

今もシンは外へと通じる廊下を走っていたが、そちらの方向から複数の人の気配を感じて、引き返して別の道を探している。

シン一人ならばどうにか対処できたかもしれないが、今はギャスパーやピクシーたちが側に居る。自分の身を守る余裕はあるが、周りを守る程の余裕は無いとシンは自覚していた。

現在、何が起こっているのかの詳細が分からないこともまたシンに精神的な圧力を掛けている。あのとき新校舎の方角から感じた寒気立ち、あまりに容易く心の中に入り込

んでくる恐怖に近い感覚、何故か既視感を覚えるそれについて一刻も早く知りたかったが、それを知るにはこの旧校舎から抜け出し、リアスたちと合流するしかない。

だがリアスたちはシンたちとは違い、恐ろしさをばら撒く存在の近くに居る。リアスたちの身に危険が迫っているかもしれないという可能性もまた、シンの精神に重圧を加える。

「先輩……」

周囲を敵に囲まれているという不安、そして自分がシンの足手纏いになっているという罪悪感から、か細い声で抱えているギャスパーがシンを呼んだ。

「もし……もしもボクが邪魔だったら……」

そのときパシンという音が鳴る。

「こういうときにそういうこと言わない」

ギャスパーの額にピクシーの小さな手が置かれている。先程の音はピクシーがギャスパーを叩いたために鳴ったものであった。

ピクシーの行動にギャスパーは驚いて声を止めてしまう。痛みがあったからでは無い。そもそもピクシーの力では痛みなど感じる筈も無かった。ピクシーに叩かれるという行為そのものに驚いたのだ。

「ま、不安になるのは分かるけどさー。ここはシンに任せてみたら？　大丈夫だって。

シンは結構頼りになるし」
「『結構』、か……」
「褒めてるんだよー」
　こんな状況でも軽口を言い合う二人に、ギャスパーはある種の羨望を覚えてしまう。
「それにシンが大変になったらオイラが居るホー」
「ヒ～ホ～。それって大丈夫なの～？」
　ジャックフロスト、ジャックランタンもまた危機的状況でも慌てず、恐れず、いつもの通りの態度を振る舞っている。
　ギャスパーは、その中で一人怯えている自分がひどく小さな存在に思えて仕方なかった。
「でも、でも……守られてばっかりじゃボクは先輩たちに迷惑しか掛けられません」
「じゃあ、アタシたちが危なくなったら助けてね」
「え？」
　思いも寄らない言葉だったのかギャスパーは聞き返してしまう。
「守られるのが嫌だとか迷惑だと思ったなら、アタシたちやシンが危なくなったら助けてくれるだけでいいよ。それであいこ」
「ボ、ボクにそんなこと……」

「気持ち次第じゃないの～」
　声を震わせ出来ないと言おうとするギャスパーにジャックランタンが声を被せる。
「ギャスパ～。いつまでても怖がったり、逃げたりは出来ないんだよ～。絶対にどこかで逃げられなくなる。そのとき、キミはどうする～。選択肢は二つ、そこで止まるか、逃げてきた道を引き返すかのどちらか。ヒ～ホ～、キミはどっちを選ぶ？」
　試すようなジャックランタンの問い。彼が持つカンテラと同じ灯りを宿す双眸に見詰められながら、ギャスパーは返答することが出来なかった。
「ボクは――」
　そのときシンの身体が突如として沈む。直後、隣の教室の窓ガラスを突き破って、いくつもの光弾が飛び出し、シンの頭上を通って行く。
「待ち伏せか」
　シンは僅かに顔を顰める。突き破られた窓ガラスの向こうには数人の魔術師たちの姿が見える。
　あまり広くない廊下。そして、ギャスパーたちを守りながら先程の光弾を防ぐのは得策では無いと判断したシンは、体勢を低くした状態で教室の中から放たれる光弾を避けながら廊下を走る。
　ガラス片や窓枠の破片が降り注ぐ中、走行を邪魔する為の光弾が絶え間なく撃ち続け

られる。幸いにも狙いがギャスパーで在る為、光弾はシンに集中し、それによってピクシーたちは光弾の狙いから外され、尚且つ万が一にもギャスパーに当たった場合を考慮してか、威力がかなり抑えられている。が、それでも直撃した場合、骨が折れる程の威力を秘めている。

シンはその中で身を低くし、あるいは身体を捻るなどで回避する。目の力もあって光弾の雨を擦り抜けるようにして避けて行く。

「ヒィ、ヒィアアアア!」

しかし、シンの腕に抱えられているギャスパーは冷静に回避するシンとは違い、間近に迫る光弾や激しく揺さぶられる不安定な体勢もあり、徐々に恐怖が募っていく。

既に張り詰められた風船のように緊張と恐怖が高まり、いつ破裂してもおかしくは無い状態。しかし、シンは光弾を回避することに意識を傾けているせいで、ギャスパーの精神状態に気付けずにいた。

そのとき、ギャスパーの眼前を光弾が通過する。光弾はギャスパーの前髪を微かに揺らすだけで直撃は避けていた。シンもギャスパーに当たらないと分かっていて敢えてギリギリの場所で光弾を躱してしまった。

しかし、その判断がギャスパーに限界を超えさえ、引き金を引く結果を招く。

「うあああああああああああ!」

悲鳴を上げ、ギャスパーの眼が光を放つ。
神器の暴走。それに気付いたシンはそれを避けようと身を捩るが僅かに遅い。ギャスパーの視界の範囲に右足が入ってしまう。
光が収まると同時にシンの体勢が前のめりになる。ギャスパーの時間停止能力によって右足が完全に動かなくなり、地面に張り付いてしまっていた。右足ではなく、右足が廊下を踏み込んだ瞬間の時間を停められてしまったらしい。
シンが停められた自らの足に目を落とすと同時に、顔を上げたギャスパーと眼が合う。
完全に血の気が引いた顔。目には涙を浮かべ、瞳が動揺で激しく揺れている。危険な場面で更に危機を煽る結果を生み出してしまった自分の失態に、さっき以上の恐怖からギャスパーの心がひどく不安定になっているのが一目で分かる。
気持ちを落ち着かせる言葉の一つでも言っておきたいが、そんな悠長な時間は無い。
ギャスパーが何かを言うよりも早く、シンは抱えていたギャスパーを出来るだけ遠くへと投げ飛ばす。
「ヒャアアアアアア！　ヘブッ！」
いきなり投げ飛ばされたギャスパーは悲鳴を上げながら十数メートルの距離を飛び、顔面から廊下に着地する。

「俺はここから動けない」
シンは側に居るピクシーたちに目を向ける。
「ここで足止めをする。――悪いが、あとは任せた」
ピクシーたちの返事を聞くよりも先にシンは手に魔力を集め、それを魔術師たちの方へと向けるとそれを解き放つ。
蛍光色の光弾は教室の壁に激突すると派手な音と埃を立てた。
それに乗じてギャスパーたちを逃がす為である。
「またあとでね」
「ヒホ！　オイラに任せるホ！」
「色々ゴメンね～。約束は守るよ～」
口々にシンへの言葉を残しながらピクシーたちは立ち止まるシンの側を抜け、倒れているギャスパーの下に向かう。
「頼む」
舞う土煙を破り、複数の光弾が奔るピクシーたちに迫るがシンは右腕を振るい、それらを床に叩き落とす。床に叩きつけられた光弾は足元にめり込み、やがて消失する。
光弾が接触した甲、手首、肘辺りから白煙が昇るものの、拳が握れなくなるなどの支障は無い。人の使う術は初めて受けるが、右腕に浮かぶ紋様にはそれなりの抵抗力があ

ることをこのとき実感する。
「間薙先――うぶっ！」
地面に倒れ伏していたギャスパーは顔を上げてシンの名を呼ぼうとするが、何故か再び顔面を廊下に打ち付ける。
その原因はすぐに分かった。
「ヒホ！　すぐに逃げるホー！」
「ギャスパー、悪いけどこのまま運んで行くよ～。ヒ～ホ～」
身体を起こそうとしていたギャスパーの足を一本ずつ持つジャックフロストとジャックランタン。
二人はその状態で廊下を走り出す。
「せ、先輩が！　あ、あう！　一人で！　あぶっ！　ボクのせいで！　あばばば！」
地面を引っ張られながらも、シンを置いて行く原因を生み出したことに罪悪感を覚えていたギャスパーは、何度も床に顔を打ちながらも爪を廊下に突き立て、必死に抵抗しようとする。
「今は大人しくしていて。シンの為にも」
しかし、ギャスパーはピクシーの頼む声を聞くと今にも泣き出しそうに顔を歪め、爪を突き立てていた手を緩め、されるがまま廊下を引き摺られていった。

ピクシーたちはそのまま廊下の角を曲がり、シンの視界の範囲から消える。
姿が見えなくなり、引き摺る音が遠くに行く音を聞きながら取り敢えずここから離れることが出来たことにシンは内心で胸を撫で下ろす。
だが、あくまでこの場所から去っただけに過ぎず、これからは四人だけで敵だらけの旧校舎で逃げ続けなければならない。
歯痒い想いがあるが、このときばかりはピクシーたちを信じなければならない。少なくともこの場から一歩も動けなくなった自分よりも確実に逃げ延びることが出来る。
なら、今の自分は何をすべきなのか。その答えは一つ――
シンは再び右手に魔力の光を宿すとそれを左手で抑えながら固定されている足を可能な限り捻り、それと同じぐらい上半身を背面へと回すと魔術師たちが居る方向へ特に狙いを定めず、適当に魔力弾を放つ。
ガラスが散って床に散らばる音。そのガラスの窓枠が砕けて重なり合いながら落下する音。軋む音を鳴らしながら床に倒れる扉の音。それらが束になった破壊音が旧校舎に鳴る。
――ピクシーたちへの注意を一秒でも長く自分に引きつけること。
それしかない。
舞う埃のニオイと年季を重ねた材木のニオイが鼻孔をくすぐる。

視界が不明瞭となっている中、いきなり廊下内に風が吹き荒び、漂うもの全てを校舎の外へと追い出す。

視界が晴れるとそこには咳き込んでいる者たちとそうでない者たち。明らかに先程よりも人数が増えていた。

一応ではあるがシンの行動が結果に結びついたと言える。それは自分の首を絞める結果に繋がることであるが、シン自身も重々承知していることである。

「愚かね。あのハーフヴァンパイアを守る為にわざわざ自分の身を危険に晒すなんて。そして、その結果がそのざま。あまりに憐れで思わず同情してしまいそうよ」

新たに現れた魔術師の一人がシンの格好を見て嘲笑する。周りの魔術師たちもそれに同調し、口に侮蔑を込めた笑みを浮かべた。

人数で優っているからか。あるいはシンが満足に動けない状態となっているからか、魔術師の女性は余裕に満ちた態度で攻撃を加えずに話しかけてくる。

御丁寧にも相手の言語を理解出来ない筈のシンにも分かる様に、特殊な魔術でも使用しているのか、女魔術師が喋る度にその言葉がシンの頭の中で変換され、罵りと嘲りの言葉になっていく。

「さっさと意識を奪って神器用の道具に仕立て上げればもっと有用に使えるというのに。それこそ魔術師の我々なら上手く使えるわ。旧魔王派の言った通り、グレモリーの

一族は情愛に深いせいで生温くて甘いらしいわね」

シンはそれを聞いても何も反論はしなかった。相手の言葉を無言で肯定している訳では無い。ただ、相手の言葉から少しでも情報を得ようとしていた。現状、急に襲われたというだけで特に何の情報を持っていなかったシンであったが、今の女魔術師の言葉で、敵が魔術師であることと、旧魔王派が関わっていることを知る。

シンが黙っているのを肯定とでも判断したのか、頼んでも聞いてもいないのに女魔術師は饒舌に喋り続ける。

「貴方も不運ね。ガラクタ一つ、守る為に死ぬことになるなんて。それとも私たちに降伏するかしら？　それならば命だけは助けてあげてもいいわ。　どうせハーフヴァンパイア如き命を賭けてまで守る理由なんてないでしょう？」

挑発かあるいは本心で言っているのか、自分たちに降れと言う女魔術師。しかし、シンはその取引のことよりも別の言葉の方について考えていた。

（守る理由か……）

改めて考えると、ギャスパーを命懸けで守る理由は特に思いつかない。自分の後輩だからか、自分の力に悩んでいることに親近感でも湧いたからか、人間と吸血鬼の混血という微妙な立場に同情でもしたのか。

どの理由もそれっぽく思えるがどれも違う。

（特に思いつかないな）
冷めた考えかもしれないが、本当に心の底から思える理由が思いつかなかった。
ならば何故守ろうとするのか。その答えは既にシンの中にあった。
（守る理由は思いつかないが……）
その答えは至って単純なもの。
（見捨てる理由も思いつかない）
助けない理由が無いから助ける。ただそれだけで動く。
魔術師たちがこれを聞けば、言ったシンの頭の正気を疑うであろうが、間違いなくそれが本心であった。この答えを魔術師たちに聞かせる気など毛頭無いが。
女魔術師に答える代わりに右手を伸ばす。それを訝しげな表情で見る魔術師たち。
彼女たちが見ている前で手首を返し、手の甲を見せる格好にすると人差し指を残して後の指を折り曲げる。
そして、その人差し指を魔術師たちに向け、上下へと振る。
無言のまま挑発するシンの姿に、優位に立っていると思っていた女魔術師はプライドを傷付けられたのか嘲笑を潜め、険しい顔付きとなった。周りの魔術師たちも似たような顔つきになる。
「……そう。それが貴方の答えだというのならばいいわ。ここで消えなさい」

魔術師たちの手の中に多色の光が溢れ出る。

「お前らが消えろ」

ここで初めて口を開いたシンは招いていた手を止め、その手の中に魔力の剣を形成する。

その直後、この階の窓や備品等が全て、旧校舎外へと吹き飛ぶ程の轟音が響き渡るのであった。

◇

ヴァーリ、セタンタが外へと出て間も無くした頃、会議室の床に突如として魔法陣が浮かび上がる。

それを見たサーゼクスやセラフォルーは苦渋に満ちた表情となり、ミカエルは表情を険しくし、アザゼルは失笑した。

サーゼクスはすぐさまグレイフィアに指示を飛ばし、一誠とリアスを旧校舎へと転送させる。

何が起こっているのか理解出来ずに戸惑う一誠と、床に描かれた魔法陣が何を意味しているのか悟り、驚く表情をしたリアスが、転送用魔法陣の光に包まれた直後、現れた

魔法陣から一人の人物が姿を現す。
胸や脚などを露出させた、一見すればボンテージを彷彿とさせる妖艶なドレスを纏い、その格好を見事に着飾れるほどの同じく妖しげな魅力を放つ眼鏡を掛けた女性。長く伸ばし一括りにした髪や厚めの唇、艶のある目付き、張りのある褐色の肌、男を欲におぼれさせそうな体つきをしていた。
「ごきげんよう。現魔王サーゼクス殿。……そして仮の魔王セラフォルー殿も」
現れた女性はサーゼクスには不敵に、セラフォルーには隠し切れない憎しみを込めて挨拶をする。
現れた女性の存在に正体を知らない木場たちは警戒するが、次に出てきた言葉の衝撃でその警戒心が一気に高まる。
「先代レヴィアタンの血を引く者まで出て来たか……一体、どういうつもりだカテレア」
先代レヴィアタンの血を引く者。すなわち先代魔王の直系を意味する。
「貴方方に報告があって参りました。我ら旧魔王派のほぼ全ては『禍の団』と協力体制を結ぶことを決定しました」
笑みを浮かべながらの宣戦布告に木場たちは戦慄し、サーゼクスとセラフォルーは厳しい表情となる。
「……再び戦争がしたいのか」

サーゼクスは苦い表情を浮かべたままカテレアを咎める。
そもそも旧魔王派とは、旧四大魔王が滅びたとき、その血を受け継ぐ者たちが戦争の継続を訴え、それに賛同した者たちのことを指す。
しかし、長い大戦で疲労困憊としていた悪魔側にしてみれば戦争の継続など自殺行為に過ぎず、事実大半の悪魔はその訴えに従わず、賛成派と反対派によって争いを起こし、結果として反対派が勝ち、旧魔王派は冥界の隅へと追い遣られ、以後は現四大魔王の政権に関わることは無くなった。
その内輪揉めの結果、完全に戦争を継続する力を失ってしまったというのはあまりに皮肉である。
「ここになって新旧魔王の確執が本格になったって訳か。いや、動くとしたらここしかないよな。悪魔側も大変だ」
「そんなことが無いように目を光らせていた――つもりだったがね」
茶化す様に言うアザゼルに対し、サーゼクスは自嘲気味に笑う。想定していて止められなかった己の不甲斐なさを内心で責めている顕れであった。
「……カテレア、無限の力に降ったか」
「ええ。『無限の龍神〈ウロボロス・ドラゴン〉』のオーフィスの庇護の下に入りました。彼の力は私たちの力となります」

『無限の龍神』オーフィス。禍の団の首領にして象徴。赤い龍と白い龍を遥かに上回り、その実力は神すらも恐れると言われるドラゴン。最強という称号に限りなく近い場所にいる存在である。

「彼の力を使い、世界を再構築し、その新たな世界を我々が導く。それが旧魔王派全ての意志です」

「カテレアちゃん！　どうしてそんなことを！」

セラフォルーが悲痛な声を叫ぶ。カテレアの言葉を信じるならば、彼女たちは今ある世界を滅ぼすことを目的にしていることとなる。

そんなセラフォルーをカテレアは憎しみを込めた目で睨みつけた。

「セラフォルー……！　私から『レヴィアタン』という座と誇りを奪った女がぬけぬけと……！　血を受け継ぎながら名を継ぐことが出来なかった屈辱が貴女に分かるのか！」

般若の様な形相で怨嗟の込めた台詞を吐くが、突如表情を変え嗜虐的な笑みを浮かべる。

「新たな世界では『システム』も法も理念も私たちが決め、オーフィスはそれを守護する為の絶対的存在として君臨してもらいます。だからミカエル、アザゼル、セラフォルー、サーゼクス……」

カテレアは指を鳴らす。

「貴方達の時代は終わりです。この場で死になさい」
その瞬間、カテレアを除く会議室にいる面々が光に囲まれる。それは校庭で三勢力を葬った破魔と呪殺の光。
逃げようにも既に展開している術からは逃げようも無い。
木場たちは万事休すと目を閉じ、この場に居ない一誠やリアス、シンたちに詫びの言葉を胸中で言う。
――しかし、それから数秒経っても何も変化は無い。
「ほう。見事、見事」
聞き覚えのない言葉が聞こえ、恐る恐る目を開けたとき、木場たちが見たものは驚愕した表情をするカテレア。そして、いつの間にか校庭から会議室内へと移動していただいそうじょう。
そして、自分の周囲に衛星の様に小さな赤い魔力の球体を旋回させているサーゼクスの姿であった。
「申し訳ないが、これ以上私の前で犠牲を出すつもりはない」
何が起こったのかは分からなかったが、サーゼクスが何かをしてこの場に居る全員を救ったのだけは理解出来た。
「流石は現魔王といったところかのう」

「お褒めに預かり光栄です。私が今の魔王、サーゼクス・ルシファーです。魔人殿、お名前を窺っても？」
「名は当の昔に捨てた。『だいそうじょう』、それが拙僧を表す唯一無二の言葉よ」
つい今しがた殺されかけたというのに互いに自己紹介をする二人。
「ではだいそうじょう殿――」
周囲を旋回する魔力の球体がサーゼクスの掌へと集まる。
「貴方のお相手。私が務めさせて頂く」
救済の魔人に真紅の魔王が挑戦状を叩きつけた。

魔人、襲来

魔人と魔王。

片や死を撒き散らす恐怖の存在として語り継がれ、片や悪魔の頂点として敬われる存在。ある意味で対極に位置する両者が狭い空間の中、互いに視線を交わす。

「これはこれは。悪魔でも名高いルシファーの名を継ぐ者が拙僧のような者と手合わせを願うとは。名誉なことじゃのう」

言葉だけならば好々爺という印象を受けるが、ほんの数分前には大量の悪魔、天使、堕天使を一方的に葬り、つい先程もこの会議室内にいる者たちを皆殺しにしようしていた。にも関わらず険の無い言葉を放つだいそうじょうという存在は異常であった。あれ程の殺戮をしていても昂りも無ければ後ろめたさも無い。

至って平常。それがあまりにも恐ろしかった。

「それにしても良いものを見せて貰った。我が術を真っ向から打ち破られるのは久方ぶりよ。どうやら少々変わり種の魔力らしい。まこと大したものだ」

「貴方の術を破るにはこの方法しかなかったので」

褒め称えるだいそうじょう。その口振りからして、サーゼクスがどのようにして自分

の術を破ったのか、ある程度理解しているものであった。
日常の様に言葉を交わす二人。しかし、だいそうじょうからはあらゆる生を奪い尽くす様な濃密な死の気配が漂い、サーゼクスからは静かながらも周囲が歪む程の魔力が漏れ出している。
桁違いの力同士の衝突。しかもどちらも意図的に出している訳では無く、無意識に外へ出てしまった力の一片にしか過ぎない。
天使長のミカエル、堕天使総督のアザゼル、同じ四大魔王のセラフォルー、サーゼクスの眷属であるグレイフィアといった上位陣は二人の力の余波に対し、僅かに表情が強ばるといった程度で済んでいるが、それを近くで見ている木場たちは生きた心地がしない。
（気を抜けば膝から崩れ落ちそうだ……！）
体験したことが無い圧倒的な力。自分に向けられていないのに、少しでも気を緩ませればそのまま膝を屈してしまいそうになる。
木場はそれを奥歯を噛み締めながら懸命に耐える。他の皆もまた木場同様に、懸命な様子でこの異様な場を耐えていた。
戦いに慣れていないアーシアなど顔面が蒼白になっており、いつ気絶してもおかしくない様子だった為、側に居たゼノヴィアが支えている。そのゼノヴィアもアーシアと似

たような顔色をしていた。
「あれがサーゼクスの滅びの魔力です。触れれば全てを消してしまう消滅の力。たとえ貴方でも真面に受ければ只では済まない」
「成程のう」
カテレアの説明を聞きながら、だいそうじょうは会議室内を一瞥する。
「尤もサーゼクス殿が手を出さずとも何人かは生き残れた筈じゃがの」
だいそうじょうの眼球の無い眼窩がミカエル、セラフォルー、グレイフィア、アザゼルに向けられた。
「かかかか。久方ぶりだのう。ミカエル殿、アザゼル殿」
顎を震わせて笑いながら、だいそうじょうは面識があるミカエルとアザゼルへと喋りかける。
「……お久しぶりですね」
「……全く変わらない様子だな、爺」
「相変わらず口が悪いのう、アザゼル殿」
顔見知り同士の会話であるが、そこに親しみの情など無い。だいそうじょうには敵意は無いものの、返答するアザゼルの口調には棘が有り、ミカエルもまた穏やかな表情を消して鋭い眼差しを向けていた。

「積もる話をしたいところではあるが……今はサーゼクス殿の誘いを受けるとしよう。なあに、その後で話すことが出来る」

魔王相手に遠回しで勝つことを宣言するだいそうじょう。その言葉を聞いたサーゼクスは、赤い球体が集う手の平をだいそうじょうへと向ける。

「そう容易くはありませんよ?」

サーゼクスの手の平に納まっていた十を超える魔力の球体が一斉にだいそうじょうへと向かって飛ぶ。それぞれが異なる軌道を描きながら、だいそうじょうの身体の至る箇所を狙う。

それを感知すると同時にだいそうじょうの周りが光に囲まれる。自分自身を破魔の光で包み込むことによって外界からのあらゆる力を防ぎ、同時に滅する攻防一体の結界。この力の前では浄化の力を弱点とする悪魔の力など通じない。

――その筈であった。

破魔の光に赤い球体が触れた瞬間、その箇所から光が消滅する。

綺麗な円形状に抉られた箇所に目を向けながら、だいそうじょうは胸の裡で感心を抱く。

光すら喰らう悪魔の力。直前にカテレアが説明した、サーゼクスの持つ滅びの魔力を改めて目の当たりにし、その言葉の意味をしっかりと理解する。

悪魔を滅する光を滅ぼす力。明らかに通常の悪魔とは異なる異質の力。

だいそうじょうは確信する。

サーゼクスという悪魔は悪魔でありながらその枠を超えた存在であることを。そして、自分たちに近い存在であることを。

破魔の結界を突き抜けた複数の魔力の弾は、そのまま中に居るだいそうじょうも滅ぼそうと四方から迫る。

しかし、逃げ場を埋める様にして襲い掛かるそれを見てもだいそうじょうは焦りの態度一つ見せず、手に持つ独鈷鈴を鳴らす。

音が室内に響き渡ると同時にサーゼクスの頭上に破魔の術式が浮かび上がり、範囲内にいるサーゼクスを滅せようとするが、術式の光が最高点に至る前に、その術式に先程放った魔力の弾が飛び込む。

魔力の弾が術式にある一点へと触れたとき、描かれていた筈の破魔の術式が瞬時に形を崩し、最初から何も無かったかの様に消失する。

これこそが、だいそうじょうの術から室内にいた全員を救ったサーゼクスの方法である。

術を発動するにあたって、必ず力が集束する基点が存在する。だいそうじょうの破魔や呪殺の術も例外では無い。しかし、通常の術とは違いだいそうじょうの術は展開から

発動までの間が極端に短く、それこそ始動と完了までほぼ同時である。
そんな高速の術に対し、あのときサーゼクスは瞬時に滅びの魔力を込めた球体を複数形成し、形成するまでの僅かな時間の間に展開している術の基点を全て見抜き、そこに向けて魔弾を放つ。基点と言ってもどれも同じ位置にある訳ではないが、放たれた魔弾はそれぞれが独立して動き、針の穴を通すような正確さで撃ち抜き、見事基点を消滅させた。
その時見せたことをもう一度再現して見せるサーゼクス。魔王という肩書を持つ者の底知れぬ実力の片鱗を垣間見せる絶技である。
しかし、その魔王の前に立つモノもまた魔王という存在に勝るとも劣らず、あらゆる勢力から畏怖の対象と見られている存在、『魔人』。
攻撃を放ったサーゼクスに対し、その隙を狙うつもりで破魔の術を発動させたものの、あっさりと打ち消されただいそうじょう。そうしている間にも周囲を囲んでいる破魔の光を食い破り、滅びの力が迫る。
だが、彼に焦る様子は無い。
だいそうじょうは顎関節を動かし、その口を大きく開ける。
その途端、だいそうじょうへ向かっていた魔弾の群は球体から糸が解ける様に形を変えながら崩れ、開かれただいそうじょうの口の中へと吸い込まれていく。

自分の魔力を吸収していく様に、流石のサーゼクスも目を見開く。
滅びの力を喰らい糧にする。だいそうじょうもまた、魔人という存在の異質さを存分に知らしめる。
やがて全ての魔弾は形を無くし、だいそうじょうの体内へと取り込まれていった。
滅びの魔力を吸い込んだだいそうじょう。しかし、何事も無かったかのようにサーゼクスの方を見てこう言った。
「流石は魔王の魔力。美味也」
「――お口にあったのならば幸いだ」
共に自らの業を破られているものの動揺した様子は無く、互いに軽口を言い合う。容易く相手に実力の底を見せない。
一進一退の攻防。しかし、それを理解出来たものはこの場の上位陣のみであり、他の皆は一瞬何が起きたのか分からず、瞬間的に両者の力が膨れ上がったかと思えば、次の時には終わっていた。
それでも上位の力を持つ若い悪魔の何名かは何が起こったのかを辛うじて見ることが出来たが、それは未知と言っていい領域の戦いであった。
（早過ぎる……！）
その一人である木場は、目の前で起きた攻防に戦慄を覚えていた。どちらも木場の速

度を上回る速さで術や技を展開し、その場から一歩も動かない状態で相殺し合っていた。
　もし自分が対峙していたのであれば、初撃でこの世から永遠に存在を消されていた。あまりに簡単に想像出来るＩＦの未来に、人知れず冷や汗を流す。
「ここでは互いに力も振るえまい」
　だいそうじょうの姿が消える。
「ついて参れ。カテレア殿も構わぬな？」
　消えただいそうじょうは窓の外へと姿を現し、この場から離れることをカテレアに告げる。カテレアは妖艶に唇の端を吊り上げ笑みを浮かべた。
「ええ。魔王ならば貴方にとって不足は無い筈です。頼みましたよ。この世界の変革の為にも」
　何処か白々しさを感じさせる口調。ほくそ笑むその様子から、このような展開になることはカテレアにとって都合が良いらしい。
「では参られよ」
　だいそうじょうはそのまま窓から離れて行く。
「済まないが私は彼を抑えてくる。後のことは頼んだ」
　ミカエル、セラフォルー、アザゼルに後のことを託す。魔人と戦うのならばここから

先、手助けをする余裕が無くなることが分かっていた為である。
「グレイフィア……行ってくる」
「お帰りを……お待ちしています」
恭しく頭を下げるグレイフィアを見てサーゼクスは微笑を浮かべると、ヴァーリが破壊した窓から飛び出し、翼を広げるとだいそうじょうの後を追って姿を消した。
「ふふふ。幾ら魔王であっても魔人相手ならば無事では済まない。どうやら運命の流れは私たちの方へと傾いているみたいですね」
勝ち誇るかの様に言うカテレア。実際、カテレアの頭の中で思い描いている通りの展開が続いていた。魔王と魔人の激突はカテレア自身が望んでいたこと、この二名が戦い合えば両者共に無事では済まない。
今は禍の団に協力している立場であるが、いずれ旧魔王派は禍の団の力を掌握するつもりである。その際に邪魔になると考えている派閥が二つあり、その内の一つがあの魔人であった。
他の派閥と違いたった二名しか居ないが、その力は飛び抜けたものであり、旧魔王派全ての戦力を投入したとしても勝てるかどうかは分からない。更にこの魔人たちはもう一つの派閥と繋がりを持って居る為、その戦力は考えている以上のものを持ってい
る。

その為、カテレアはあわよくば共倒れを願っていた。
それが向こうから都合良く、自分の望む流れに沿って動いていく。これには笑いを抑え切れなかった。
だが独り笑うカテレアの耳に別の笑い声を聞こえてくる。喉の奥で笑う声。その声の方に目を向ける。
笑い声の主はアザゼルであった。
「――何が可笑しいのですか？　アザゼル」
昂揚する気持ちに水を差された気分となり、笑みを潜めてカテレアは笑うアザゼルに問う。
「いやなに、笑っているお前の姿が滑稽だったもんでな。お前内心でこう思っていたんじゃないか？『このまま魔人と魔王が共倒れになればいい』って」
思っていたことをそのまま言い当てられ、カテレアは言葉を詰まらせる。それを見たアザゼルは、心底意地の悪そうな笑みをカテレアに見せた。
「おいおい図星か？　だったら分かり易過ぎだぜ、お前。まあ、世界の変革なんて陳腐なことを臆面も無く言っている奴ならやっていることと思っていることなんて直結しているだろうがな」
鼻で笑いながら先程のカテレアの言葉を嘲る。この態度にはカテレアも頬を引き攣

らせる。
「私たちがすべきことが馬鹿げているとでも言いたいのですか？」
「言いたいんだよ」
　アザゼルの即答にカテレアは絶句する。
「今時世界の改革なんてナンセンスなんだよ。理由は何だ？　世界の腐敗か？　人間の愚かさか？　地球が滅ぶか？　審判の時か？　きっとこん中のどれかが当て嵌まるんだろうがな」
　相手を先回りした言葉を並べ、口にした理由の陳腐さにアザゼルはまた笑う。
　アザゼルの言葉が当て嵌まること、そして明らかに自分を馬鹿にした態度のカテレアの顔がみるみるうちに紅潮していく。
「言っていることや考えていることは小物だっていうのに実力の程はそれなりにあるから本当に始末に負えないな。その実力の方もオーフィスや魔人を笠に着ている節があるから疑わしくもあるがな」
　その言葉を聞いた途端、爆ぜる様にしてカテレアの全身から魔力が迸る。積み重ねられていく暴言に我慢も限界に近い様子であった。
「アザゼル……今すぐにその口を閉じなさい。今ならばまだ苦しまずに殺してあげます」

怒りを押し殺したカテレアの言葉。だが、アザゼルが打ち寄せる様な魔力を浴びながらも涼風の中に居るような態度であり、カテレアの言葉も鼻で笑う。
「つまらん台詞だな。お前、レヴィアタンの末裔だとか真に魔王に相応しいとか言っているがはっきり言って――」
――器じゃねぇよ。
言われた当人以外も思わず固まってしまう言葉。旧魔王派にとっては禁句中の禁句であり、旧魔王派の怒りを煽るならばこれ以上無い程の暴言である。
カテレアは何も言わず、その全身を怒りで震わせ血が出るのではないかと思えるぐらい唇を強く噛み締める。
そんなカテレアの様子に構う事無くアザゼルは言葉を重ねて行く。
「惨めなもんだよな。血は受け継いでいるっていうのに肝心の地位までは受け継げないなんて。おまけにその場所や名を血も縁も関係ない奴に奪われたとなると正直同情するぜ。なあ？『自称』カテレア・レヴィアタン？」
アザゼルの言葉の一つ一つが、決して癒えることの無いカテレアの誇りに付いた傷を抉る。
妖艶さは全て消え、その表情はさながら般若の如き形相であった。
「アザゼル……！」

地の底から響くような怨嗟が篭った声。その言葉だけで、気の弱い人物ならば心臓の鼓動が止まってしまうのではないかと思える程、呪詛に満ちている。

しかし、カテレアの怒り、憎悪を一身に受けてもアザゼルの態度は変わらない。

「本当のことを言われて怒るなよ」

それどころか更に煽る。

瞬間、カテレアの右腕に燃え盛る様な魔力が集まったかと思えば、躊躇う事無くその腕を振るう。

アザゼルだけではなくこの会議室内にいる全ての者を屠る為に放たれた魔力。

だが、カテレアが魔力を放つ同じタイミングで乾いた音が室内響く。

直後、魔の力が突如として出現した光の壁に阻まれる。魔と光、相反する力が接触すると互いに互いの力を食い合い、相殺し切れなかった力が逃げ場を求め四方に飛ぶ。木場たちは光の壁によってその身を守られていた為無事であったが、その力によって会議室の窓際全域が壁ごと吹き飛ぶ。

「あぶねぇなー」

右手を挙げたアザゼルはカテレアに意地の悪そうな笑みを向ける。光の壁を作り出したのはアザゼルであり、先程の乾いた音はアザゼルが指を鳴らした音であった。

「貴方は私を――いえ、私たちの誇りを愚弄しました。その代償は払ってもらいます」

「誇りってのはその身体に流れる魔王の血のことか？　はやらねぇよ、今時血筋云々なんて」
　昂る感情に合わせ会議室内へと漂うカテレアの魔力。アザゼルはそれを見ながら挑発するような笑みを向けながら、仕舞っていた十二の黒翼を展開する。
「向こうはこっちを殺る気みたいだから、こいつの相手は俺がやる。お前たちは手を出す必要は無いぞ」
　ミカエル、セラフォルー、グレイフィア、そして木場たちに告げる。
「アザゼル、貴方は……」
　そこまで言い掛けたミカエルは言葉を呑み込んだ。
　先程からの執拗なカテレアへの挑発。それは敢えて自分に矛先を向ける為の演技であったのではないかとミカエルは考えた。
　だいそうじょうはサーゼクスが押さえている今、残された禍の団で最も力を持っているのはカテレアである。
　そのことが分かっていて、怒りを自分に向けさせることで周りの被害を最小限に抑えようとしているのではないか、そう問う代わりにミカエルはアザゼルに眼差しを向ける。
　それに気付いたアザゼルは悪ガキを彷彿とさせる、何処か幼さを感じさせる笑みを浮

かべた。
「まあ、どうせ戦うなら美人の方がいいしな」
惚ける様な台詞を言いながらアザゼルはカテレアに向かって手招きをする。
「『終末の怪物』の血を受け継ぐ存在。相手としちゃ不足無しだ。こいよ、カテレア。俺といっちょハルマゲドンの前哨戦としゃれ込もうじゃないか？」
「……いいでしょう。貴方は私の手で葬らなければ私の気が済まない！　ここで朽ち果てろ！　堕ちた天使の総督！」
アザゼルはその場で宙に浮き、破壊された窓際から外へと飛び出す。カテレアもまたアザゼルの後を追い、外へと飛び出した。
「悪魔の貴方たちにこのようなことを頼むのは申し訳ありませんが、転送されてきている魔術師たちの相手をしてくれないでしょうか？」
その言葉に木場たちは一斉にミカエルの方を見る。
「サーゼクス殿と魔人、そしてアザゼルとカテレアが戦っている以上被害は想像を上回るものになるかもしれません。学園、そして学園の外にも被害を出さない様に結界を維持しなければなりませんが、正直私だけの力では維持し続けることが困難です。魔王であるセラフォルー殿、貴女の力も必要になります」
「うん！　分かったわ！　暴れている人達の力を考えると私の力も必要だしね！」

ミカエルの願いをセラフォルーは快諾する。
「魔術師たちが転送されてきた魔法陣の解析は私がします。解析が済み次第、援軍が送られないように妨害用の魔術を施すつもりです」
グレイフィアの言葉を聞き、皆を代表してソーナが答える。
「分かりました。それまでの間、魔術師たちの相手は私たちがします」
「気をつけて下さい。白龍皇殿やセタンタ殿が数を減らしているとは思いますが、それでも撃ち漏らした者たちがかなりの数いると思われます」
ソーナは木場たちの方を見た。
「リアスが不在の為、代わりに私が指示を出しますが、よろしいですか？」
「構いませんわ。リアスは貴女のことを信頼していますから」
窺うソーナに対しリアスの眷属を代表して朱乃が答える。
「ありがとうございます。では校庭からこちらに向かっている魔術師の相手は――」
「僕が行きます」
ソーナが言うよりも先に、木場が先陣を切ることを希望する。
「木場祐斗が行くならば私も行かなければならないな。私もリアス・グレモリーの『騎士』だ。『騎士』の剣は二振り揃ってこそ真価を発揮する」
そこにゼノヴィアも立候補する。

「構いませんね？」
「ええ。私も貴方たちに敵を撹乱してもらおうと思っていたところです」
「なら私も行くわ」
　更に聞こえてくる声。声の主はイリナであった。
「イリナ……」
「二人よりも三人の方がいいでしょう？　大勢相手なら私のエクスカリバーもお誂え向きだし」
　そういってイリナは懐に手を伸ばすと一本の紐を取り出す。取り出された紐はイリナの手の中で瞬く間に姿を変え、一度は破壊され形を失った聖剣『擬態の聖剣〈エクスカリバー・ミミック〉』へと変化した。
「修復は既に済んでいたんだな」
「ええ。貴女の『破壊の聖剣〈エクスカリバー・ディストラクション〉』と変わらない程に新品同様よ」
「……もう私の剣じゃないさ」
　イリナの言葉に対しゼノヴィアは自嘲気味な笑みを浮かべる。
「分かりました。木場くん、ゼノヴィアさん、イリナさん、では私の方からは――」
「会長、俺が行きます」

名を呼ぶよりも先に匙が名乗りを上げた。
「お願いします！　俺に行かせてください！」
真剣な目でソーナを見詰めた後、匙は頭を下げる。
ソーナは少し悩む。自分たちの側から誰を出すか考えたとき候補として名が浮かんだのは『女王』である椿姫であった。彼女ならば魔術の腕も長けており、『神器』の能力も合わさって先陣を切る者たちの補助に向いている。
しかし、匙の能力もまた魔術師たちとの相性もいい。だが、それはあくまで『神器』の能力であって、匙自身は身を守る様な魔術など使用できない。
どうするべきかと真剣に悩むソーナであったがその最中突如として両頬を掴まれ、左右に引っ張られるという事態が起こり、思わず考えを中断して顔を上げる。
そこには眼前一杯に広がるセラフォルーの笑顔があった。
「お、おねえひゃま！　ひったいなにほ！〈お姉さま！　一体何を！〉」
「ソーナちゃんの顔がすっごく怖かったからついやっちゃった☆」
真剣な場の空気が一瞬にして緩む様なセラフォルーの行動に、ソーナは頬を引っ張られたまま抗議するが、セラフォルーは会議の場では見せなかった無邪気な笑みを浮かべ、惚ける様な態度をとる。
「ひゃのみますから、ひんけんになってくだはい！〈頼みますから、真剣になって下さい

！〉」
「私はいつだって真剣なんだからね、ソーナちゃん！　魔王のときも魔法少女の時も！」
「ほういうほとではなふて……〈そういうことではなくて……〉」
「だから自分以外のヒトが真剣かそうじゃないかって一目でわかるの。サジ君はものすごく真剣にお願いしているよ？」
　自分を後押しするセラフォルーの言葉に、匙は驚いた表情を向けた。
「でふが……〈ですが……〉」
「サジ君は神器使いだったよね？　神器を使うのに必要なのは強い想い。今のサジ君だったら十分想いがあると思うけどなー。それにサジ君を眷属に選んだのはソーナちゃんだよね？　ソーナちゃんが自信を持って選んだ眷属が『自分には出来る！』って言っているのに主人であるソーナちゃんがそれを否定するのはどうなのかなー？」
　いつもは妹をこれでもかと甘やかしているセラフォルーの口から、溺愛しているソーナに向けて明らかに挑発ととれる言葉が向けられた。
　セラフォルーの性格を知っている者からすれば珍しいことであり、事実ソーナの眷属たちは皆目を丸くしている。
　ソーナは暫しの間セラフォルーを見詰めていたが、やがて頬を掴んでいたセラフォルーの手に触れてそれを離す。それと同時にセラフォルーから目を離し、匙の方へと向

けた。
「なら匙、貴方も木場君たちと同行しなさい。――くれぐれも気を付けて」
「――はい！　絶対に無事に戻ってきます！」
願いを聞き届けられた匙は一度頭を上げた後、再び勢い良く頭を下げた。
「では残りの人員も決めましょう」
「状況が状況だったらソーたんの為だったらお姉ちゃんも一肌脱ぐつもりだったんだけなー」
悔しそうな表情をするセラフォルーに、ソーナは少しだけ柔らかい笑みを見せる。
「いえ。お姉さまの手は煩わせません」
ソーナの毅然とした態度に皆の士気が高まるのを見ていたミカエルは、頼もしさを感じていた。天使としてあるまじきことだと自覚しているが、今後の成長を楽しみに思えてしまう。
そのとき人知れずミカエルは微かに顔を顰めた。
学園と学園の外を守る為に張った結界。その外と内を隔絶する結界にまるで雑音の様な、ほんの僅かな違和感を覚えたのだ。
あまりに一瞬であった為、何が起きたのか把握出来なかった。通常ならば魔術師の放った魔術の流れ弾が当たったのか、あるいは魔王や魔人の攻撃の余波を受けたのかと

考えるところであるが、何故かミカエルの胸中には言い様の無い不安が芽生えていた。

◇

部室へと転送された一誠たちは、目の前に広がる荒れた部室に驚く。

中央に置かれていたソファやテーブルは部屋の隅にひっくり返った状態で置かれ、本棚に置かれた資料等も床に散乱し、いつもリアスが座っている部長専用の机は壁にめり込み半壊している。そして、何より破壊が目立つのは部室の入り口と、丁度反対側にある窓際である。

入口は扉が吹き飛び、壁も一部崩れ落ちて拡がっており、窓際もまた窓ガラスが窓枠と壁ごと綺麗に吹き飛んでおり、そのまま旧校舎の庭が見える。

「どうやらシンたちは魔術師たちとここで一戦交えたらしいわね」

「くそ！　俺達の部室を！」

放課後の大半を過ごしてきた部室がここまで無残に破壊されたことに、一誠は怒りを露わにする。リアスもまた表情には出していないものの、色々な思い出が詰まる場所をこのようにされたことに静かな怒りを見せる。

両者共に魔術師たちの仕業だと勘違いをしているが、実際にここまで荒らしたのはシ

ンである。しかし、それを知る術は今の二人には無かった。
「こんなのを見せられたら二人が心配です！　早く探しに行きましょう！」
「ええ。分かっているわ。でも少し外で待っていてくれるかしら？」
「どうしたんですか？」
「念の為に『悪魔の駒』を回収しておくわ。あれが敵の手に落ちたら厄介なことになるから。すぐに済むけど少しの間、見張っていてくれるかしら？」
その言葉に一誠は納得する。『悪魔の駒』には悪魔しか知りえない特殊な技術が組み込まれている。それが一つでも相手の手に渡ったら、悪用されるのは明らかであった。
「分かりました。誰が来ないか見張っておきます」
そう言って一誠は半壊した入口から外へと出る。
リアスはすぐさま壁にめり込んでいる自分の机に近寄る。幸い駒が入っている引き出しの部分は壁に入り込んでいなかった為、すぐに取り出せる状態であった。
引き出しの取っ手を掴み、短い詠唱をする。それによって引き出しに施されていた魔術が解け、引き出せる状態となる。
リアスは取っ手を引き、中に入っている塔の形をした『戦車』の駒を取り出し、無くさない様に懐の中へと入れる。
そして、そのまま一誠と合流しようとしたとき――

「美しい色をしている。――やはり赤は良い」
不意に髪を手で梳かれる感触と髪の色を褒め称える声に、リアスの動きは止まった。
何時。いったいどうやって。あまりにも簡単に後ろを取られたことにリアスは激しく動揺する。
「赤は私が最も好きな色だ。まるで鮮血を彷彿とさせる。――ふふふ。女性の髪を褒める言葉としては不適切だったかな?」
背後で囁く声。若いとも老いているとも言える声から年齢の判断が分かり辛い男の声に、リアスは答えることが出来なかった。
殺意も殺気も無く他愛も無い言葉を発しているだけなのに体、否細胞の一つ一つから熱が奪われていくような感覚。それによって生まれる悪寒にリアスは身体を震わせる。
心臓の鼓動が早まり、体の内に鼓動音が響き渡る。
背後に立つ人物の顔を見ることも、すぐ近くに居る一誠に助けも呼ぶことも出来ず、ただの少女の様に独り恐怖に身を蝕まれていく。
「そんなに怯えなくてもいい。私は貴公に危害を加えるつもりはない。ここに寄ったのも偶然だ。貴女からは私の知る人物と同じ気配を感じたのでね」
リアスに対し背後に立つ人物は優しく喋りかけるものの、声色一つでリアスの恐れが消える筈も無い。

しかし、その人物は構う事無く話を続ける。
「この真紅の髪。そして、高貴さすら感じさせる魔力の香り。グレモリーの名を持つ者だと見受けするが？」
「わ、……私、は……」
自分の家名を出されたことで僅かながらリアス自身の誇りが刺激されたのか、震え、途切れながらもリアスの口から言葉が出る。
「サーゼクスは息災かな？」
兄であり、敬愛する魔王の名を出されたことにリアスは心臓の鼓動が一段と速まったのを自覚した。
「あ、貴方は、い、一体……」
「ああ、これは失礼。私としたことが随分と浮かれていたらしい。名乗りも無くものを問うとは」
梳いていた手を降ろし、代わりにリアスの耳元に口を寄せ、囁くように自らの名を告げる。
「私の名はマタドール。貴女には『魔人』という名の方が良く伝わるかね？」
ほんの一瞬ではあるが、リアスは心臓の動きが停止したと思った。言葉の意味を理性が判断するよりも先に、生きる者としての本能がその言葉が何を意味するのかを察知

し、恐怖を知るよりも先に意識を断とうと判断した結果である。
しかし、リアスは正気を保ったまま言葉の意味を頭で理解したとき、全身から冷や汗が流れ、震えはより激しさを増す。
遥か昔より御伽噺の様にして語られてきた存在。それがあまりにも唐突に、あまりにも近くに現れたのである。
「では改めて問わせてもらおう。サーゼクスは息災かな?」
再び同じ質問をしてくるマタドール。だがリアスは声を出すことが出来なかった。喉の奥が凍てついた様に動かなくなり、声を発するどころか呼吸すら満足に出来なくなっていく。
リアスはマタドールの気配に完全に呑みこまれていた。
「先程も言っただろう? そんなに怯えなくてもいい、と。ただ私は旧友の今を知りたいだけなのだ」
答えられないリアスを気遣う様な話し方であったが、その身から生み出される死が匂い立つ気配は、決して和らぐことはなくリアスの心を蝕む。
そのとき、新校舎の方角から異なる二つの魔力が発せられた。どちらも質、量ともに異常とも言うべきものであり、遠くにある筈なのにまるで近くで起きているかのように肌で感じられるものであった。

その内の一つはリアスにとって良く知るサーゼクスのもの。もう一つの魔力の気配は覚えの無いものであったが、魔王と互角に張り合える力を持った存在などあのとき現れた魔人、だいそうじょうのものとしか考えられなかった。
「――どうやらサーゼクスの力は今も健在らしい。いや、少し丸くなったな」
マタドールもリアスと同じく魔力の気配から、持ち主の存在を感じ取っていた。
「相手は……ふん、あの偽善者か」
穏やかで紳士的とも言える口調であったマタドールの話し方に嫌悪と侮蔑の色が混じる。リアスに向けられてはいないとはいえ、聞くだけで体温が数度下がるような気分であった。
「――まあ、良しとしよう。目的はサーゼクスではないのでね」
「目、的？」
「それは後のお楽しみだ。まずは舞台を整えなければならない」
戦うにはそれ相応の舞台が必要だ、と言いながら背後に立つマタドールの気配が離れて行くのをリアスは感じていた。
「では一旦去るとしよう。向こうに居る赤龍帝にもよろしく伝えておいてくれ。御嬢さん」
そう言葉を残し、マタドールの気配は完全に消え去った。

「部長、まだですか？」
一向に部室から出てこないリアスを心配して、一誠が教室を覗き込む。時間にすれば二、三分程度のものであったが、すぐに済むと言っていい程の時間では無い。
「部長？」
返事が無いリアスに一誠は訝しげな表情をしながら近付くと、いきなりリアスに抱き付かれる。
「え？　ぶ、部長！　どうしたんですか？」
リアスの突然の行為に驚き、あたふたしながら赤面する一誠であったが、抱き付くリアスの異変にすぐに気付く。
一誠の胸に顔を押し付けながら、リアスは寒さに耐える様に震えていた。
「部長？　部長！」
一誠の声が聞こえているのか聞こえていないのかはリアス本人にしか分からない。だが今のリアスにはただ震えることしか出来なかった。
リアスが一誠に抱き付いている時を同じくして、旧校舎内を駆けながら目的の存在を探している魔術師たち。
数名が固まって行動しているが中々目的の人物が見つからず、徐々にではあるが苛立ちが募っていた。

人間が悪魔、堕天使、天使に反逆の意志を見せる。その大事な刻を自分たちの失態で穢したくないという使命感からくる焦り。それが今の魔術師たちの裡に共通してあるものであった。

先頭を歩く魔術師が廊下の窓を曲がったとき、何故かその場で急停止する。他の仲間は曲がり角付近でいきなり立ち止まったその魔術師に対し驚いた様な眼を向けるが、次に起こる展開にその眼は更に見開かれる。

角を曲がっていた魔術師がゆっくりと後退をしていく。最初は他の魔術師たちには背しか見えなかったが、徐々に姿を現していったときその魔術師の首に白骨の手が喰い込んでいることと苦しみに悶える顔をしていることに気付く。

「勝利という戦う者にとって最高の栄誉を得るには何が必要だと思う?」

魔術師の姿が露わになるにつれ、その白骨の手の主の姿も又魔術師たちの前に晒されていく。

瑪瑙色服に黄金の刺繍がされた衣服。モンテラと呼ばれる、両端が突き出た闘牛士が用いる専用の帽子。そして何よりも目を引くのが、全ての肉が削ぎ落とされ白骨を曝け出す体。

裏の世界を知る者ならばその姿を見てある単語が頭を過ぎり、そして恐怖する。

「ま、魔人!」

「魔人マタドール！」
「何故……何故ここに！」
　驚愕する魔術師たちを余所にマタドールは、魔術師たちの目の前で首を掴んでいる魔術師の心臓に、魔力によって生み出したバンデリージャ（銛）を容赦なく突き立てた。
　心臓を貫く一撃に魔術師の身体は一瞬痙攣した後、二度と動くことはなくなった。
「最高の栄誉にはそれに相応しい最強の戦士。そして至高の戦場が必要だ」
　マタドールは周囲の反応に一切構うことなく独白を続けていく。
「最強の戦士は私がいる。だが至高の戦場にするには些か邪魔なものが多い」
　そう言いながら亡骸となった魔術師を放り捨てた。
「故にご退場願おうか。我が同類を迎えるのに相応しい場を作る為に」
　マタドールの手に新たな銛が握られる。
「さあ。間引きの時間だ」

◇

「くぅ……」
　苦しげな声を出しながら魔術師が倒れていく。

（あと四人……）

それを心の中でカウントしながらシンは残る四人の姿を見ていた。

足止めし始めてからそれなりの時間が経過しているが、まだ時間を停められている片足は動かない。

あの後、何度か増援が来たせいでまだ無傷の状態の魔術師が四人も残っている。しかし、一帯には残っている魔術師たちの倍の数が地面に倒れていたり、壁に寄りかかって気絶している。

一方でシンの方は動けない程の傷は負ってないものの、右肩の一部分が制服ごと焼かれ、その下の肌が赤く爛れており、同じく右脇腹には裂傷が刻まれそこから流血をしていた。どちらも魔術によって出来た傷であり、見えてはいるが動きを制限されている為に受けた傷である。

魔力もかなり消耗しており、本来ならば接近戦を好むシンであったが、足のせいで中距離戦をしなければならなくなっており、その為の技にかなり魔力を注ぎ込んでいた。完全に空になっている訳では無いが、これから先の戦いの事を考えるとあまり芳しくない消耗である。

「何て奴！」

女魔術師の一人が独り粘るシンに、忌々しさと恐れを込めた言葉を吐いた。

ハンデを背負っている状態で、魔術師たちを魔術とは言えないような独自の魔力操作によって圧倒する。魔術に生涯を捧げてきた者からすれば屈辱以外の何物でもなかった。

このような存在を認めることは出来ない。共通した思いが魔術師たちの間で芽生える。

ならばどうするか。

魔術師たちは目配せしながら魔術によって考えを共有し、密かに策を練る。ただし仕留めるならば早くしなければならない。

偶然にも味方の神器によって動きを制限されているが、時間が延びれば延びる程神器が解放される確率が高まっていく。

故に決着は瞬時に付けなければならない。

皆の考えが統一されたのか互いに向けていた視線が離れ、シンの方へと向けられる。

シンは自分に向けられる目を見て僅かに表情を険しくさせた。顔付き自体は変わらない。だが明らかに何かを覚悟した様な表情をしていた。

魔術師たちが一斉に術を唱え始める。それを見てシンも右手に魔力を集束し始めるが、そのとき魔術師たちが意外な行動に出る。

詠唱したままその場を同時に駆け出したのだ。

今まで距離を取って攻撃してきた魔術師たちが自ら距離を詰めていく。その姿にシンの勘が警鐘を鳴らす。

魔術によって身体能力を向上させているのか走る魔術師たちの速度は常人を上回るものであり、夜の悪魔と同等以上の身体能力を見せている。

予想以上の速さで接近する四人に対し、シンは右手に創りだした魔力剣を振るう。だがこのときシンは舌打ちをしてしまいたいような衝動に駆られた。

急接近してくる四人の速さに釣られ、魔力剣の集束が甘い状態で剣を振るってしまっていたのだ。内に溜め込んだ魔力の密度が十分では無い為、剣の崩壊と共に外へと向かって放たれていく衝撃も当然弱まる。

魔術師たちも狙ってそれをやった訳では無かったが、予想に反した行動が吉と出た結果である。

前方から迫る空間が歪んで見える魔力の波に対し、他の魔術師たちよりも前に出ていた二名が両手を前方へと突き出す。

突き出した手から魔力の光が溢れ出し、それが一枚一枚繋がった壁の様な形へと変化し、身を守るための防壁と化す。

魔力波と魔力壁。その二つが衝突し合う。拮抗は一瞬。魔力波によって壁に無数の亀裂が生じ、次々と剥がれその奥にいる魔術師たちを呑み込もうとするが剥がれ落ちた

壁の向こうに更なる壁が現れた。
二枚重ねの魔力壁。一枚目で威力を削がれた魔力波では二枚目を一瞬で崩すことが出来ず、その間にも魔術師たちが距離を詰めていく。
しかし、それでもシンの熱波剣は削がれた威力でも二枚目の魔力壁に徐々に亀裂を生じさせていく。
細かい亀裂が繋ぎ合わさり大きな亀裂となり、それが壁の破壊へと至ったとき、防いでいた魔力波が亀裂をこじ開け、中にいる魔術師たちに今度こそ襲い掛かった。
前方に立つ二人の魔術師の身体を呑み込み、そのまま後方にいる残りの魔術師二人へと襲い掛かる――このときまでそう考えていた。
予想は前二人の魔術師を呑み込んだ瞬間から覆される。
魔力波にその身体を包まれると同時に魔術師たちの体から閃光が溢れ、次の時には小規模ながらも爆発が巻き起こる。
包んでいた魔力波だけでなく周囲を纏めて吹き飛ばし、視界が遮られる程の粉塵が狭い廊下に舞う。
自爆。その二文字が頭の中に過ぎる。決して侮っていた訳では無い。相手を低く見てもいない。だからこそそんな相手が身を犠牲にした行為をする現実に暫し、呆気にとられてしまう。

寧ろシン自身は自分のことを過少評価している節があり、こんな自分に対しここまでするのか、という思考がシンの行動を鈍らせてしまう。

舞う粉塵を突き破り、二人の魔術師が姿を見せる。予め爆発のタイミングを合わせていたのか仲間が自爆しても事前に防御していたのか傷を負っておらず、また取り乱すことなく冷静とも言える動きでシンに向け、魔力が充填された手の平を向けた。

距離にすれば二メートル程しか離れてはいない。だがその場から動くことが出来ないシンには絶対に届かない距離である。

それを分かっていて魔術師の一人がシンの身体の中心を狙い、渾身の魔力弾を放つ。

放たれたと同時にシンは避けきれないことを悟り、ならばどうするか一秒にも満たない時間の中で頭を働かせる。

そのとき脳裏に過ぎるコカビエルとの決着の間際の行為。思い付くと同時にシンの身体は突き動かされていた。

迫る魔力弾に向かって右手ではなく左手を突き出すシン。

左掌に魔力弾に触れた瞬間、形作られていた魔力が一気に形を崩し、シンの左手の中へと吸い込まれていく。

掻き消すわけでも無効化するでもなく、自らの裡へと取り込む『吸魔』と呼ぶべき現象。それを目の当たりにした魔術師たちは驚愕の表情と化したが、その間に吸い込んだ

左掌から今度は蛍光の魔力弾が放たれ、魔術師の胴体へと直撃するとそのまま遥か後方へと吹き飛ばされていく。

最後に残った魔術師が次は自分だと身構えるが、どういう訳か二撃目が来ない。

不審に思う魔術師の前には、何かに耐える様にして歯を食い縛るシンの姿があった。

コカビエルと戦った際、コカビエルの腕に宿る炎を吸収し自分の力へと変えた。今回も同じことをした筈であったが、魔術師の魔力を吸収した際、吐き気を覚えるような異物感が全身を駆け巡った。

何とか出せられるだけの魔力を放ったが、すぐさま視界がおかしくなり、胃袋の裏表が変わったかのような嘔吐感、悪寒などがシンの身体を襲う。

一度しか使ったことの無い技であったが、これほどの反動が来るとは思っておらず、戦いの最中にこの技に対する練度の低さを自覚させられてしまう。

魔術師の方は突如体調を崩した相手を見て、降って湧いた絶好の機会に躊躇う事無くシンの頭部を狙い、魔力の輝きを放つ掌を向ける。

言うことを聞かない体を何とか動かそうとするものの、既に避けられる間合いではなく、時間も無い。

こうも呆気なく終わってしまうのか。そう考えたとき――

前触れも無く廊下に嘶く声。

犬や猫などの小型の動物では無く、もっと大きな獣の声。
それが何の動物の声かと思うよりも先にシンの影の中から黒く、太い縄の様なものが飛び出したかと思えば魔術師の身体に巻き付く。
「何！　何なの！」
同じような心境であるシンの眼の前で、その黒い縄の様なものは魔術師の身体を一気に締め上げる。
骨の砕ける音が響き、締め上げられた魔術師の目は大きく見開かれたかと思えば白目になり、そのまま口から泡を噴き始める。
何故か既視感を覚える光景だと思いながらシンの影から現れたものは気絶した魔術師を教室の方へと容赦など微塵も感じさせない動きでゴミの様に投げ捨てる。魔術師は半壊した窓ガラスを突き破って教室の中に消えていった。
一体何が起きているのかと自分の影に目を落とした時、思わず身を固くする。
影の中心にシンを見上げる眼が一つ。白の強膜の中心に黄色の瞳が爛々と輝いている。影の中の眼と眼が合う中、流石にどう反応すればいいのか分からず沈黙が続く。
が、先に沈黙を破ったのは影の方からであった。影から伸ばした縄状の物体の先端から気の抜けた様な音がすると影の中の眼は徐々に閉じ始め、やがて縄状の物体も影の中へと収まり完全に消えてしまう。

前触れも無く現れたかと思えば、何も言わずに消えてしまった眼に対し、戸惑いつつも自分の影を爪先で軽く叩く。だが何も反応は返ってはこなかった。
（一体どうなっているんだ……）
何時の間にか自分の影の中に住みついている謎の存在に対し、シンは頭を抱えそうになるが、このとき唐突にあることを思い出す。
コカビエルとの戦いが終わり、ソーナからアダムもといマダという人物から伝言を聞かされたときのことである。
『詫びとして『ソレ』はお前に預けておく』
それをソーナから聞かされたとき、全く心当たりが無かった為に意味不明な伝言だと思っていたが、もしマダが言う『ソレ』というのが今、影の中に現れた存在だとしたら――
（……取り敢えず味方、ということでいいのか？）
詳細が判らない為、断定するのは危険かもしれないが、危機を救ってくれたことは事実ではあるので、ある程度は警戒しなくてもいいのかもしれないと内心考えた。というよりも他にやることが多すぎて、いちいち気に留めておく余裕も無い。
そのとき、今まで時間を停められて、廊下に張り付いて動かなかった足に感覚が戻ってくる。試しに軽く足を持ち上げると廊下から足が離れた。ようやくギャスパーの神

器の効果時間が過ぎたらしい。
これでギャスパーたちを探せると思い、離れているピクシーたちに心の中で呼び掛けようとしたとき――
――息が止まった。
呼吸を忘れてしまう程の圧力、そして寒気。今まで何も感じていなかったのに、突如として全身をそれらが這う。
戦いの後の余韻を全て吹き飛ばすほどの危機感。生まれた初めて味わう感覚であった。
（……見られている）
どこからかは分からないが、体全体に感じる誰かの視線。それを向けられるだけで身体が穿たれそうな錯覚を覚える。
少し前に旧校舎の方角から感じられた気配と酷似したものを感じられるが、それとは決定的に違うものがあった。
向けられたこの気配には一種の血生臭さのようなものがあった。あくまでイメージのようなものではあるが、その気配に触れるだけで体内の血のニオイが溢れるような、死が付き纏う吐き気のするイメージ。
吸魔によって崩れた体調も、それによって上書きされてしまう。

気付けばシンはその場から走り出していた。何故自分が走り出したのかは分からない。あるいは少しでも謎の視線から逃れる為に、無意識に体が動いたのかもしれない。

このような状況ではギャスパーたちを探すこともままならない。それどころか自分の身すら守れる保証も無かった。

取り敢えず合流するのは後回しにし、全力で廊下を走り、角を曲がる。視線が少し弱まるのが感じられた。

だが直後に別の方向から視線を感じ取り、向きを変えて走り出す。

移動する度に感じられる視線。それに対しシンはあることを思う。

（誘導されている）

どこに行くか導かれている感覚。未だに見えない相手によって動かされていると、何となくではあるが感じ取っていた。

しかし、分かったからといってどうすることもできずただ走るシン。そのとき前方にあるものを発見する。

無数に横たわる魔術師たちの体。誰もが血を流し、流れた血で廊下が一色に染まっている。

うつ伏せになって倒れている者。仰向けになって倒れている者。格好はばらばらであるが、誰もが心臓の位置に穴を穿たれ、そこから大量の血が流れ出ている。

まだ乾いては居らず、黒く変色していない血溜まりの上を駆ける。上履きが血を吸い、踏み込んだ勢いで血が跳ね、ズボンの裾を汚す。

それだけでも最悪な気分になるが、仰向けで倒れている者たちの顔を見たとき、更にその気分はマイナス方向へと落ちて行く。

何処を見ているのか分からない焦点の無い目。全身が弛緩したことで半開きになった口。

シンとて死んだ人間を見たことが無い訳では無い。だがそれは葬式などといった整った格好にされた死体。今の様に死んだ直後の人間を見るのは初めてのことである。

明らかに抜け落ちたと思わせる死に顔、それが否が応にも脳裏に刻まれていく。

陰鬱な気分で死体が重なる場所を抜けながらシンは駆けるが、その気持ちが晴れることは無い。

ふと目線をずらせば他の通路にもたれて息絶える魔術師たちの姿が何人も見えているからだ。

誰がやったのか、考えなくても察する。今、自分に纏わりつくような視線を向けている存在。それが行ったのだと、根拠が無いが何故か確信出来た。

気付けば旧校舎の玄関口まで来ている。しかし、そこには誰の姿も見えない。入口を抑えている者たちがどうなったのかは、ここまで来た過程でおおよそ予想が出来る。

玄関を抜けた直後、眼前に広がる黒一色。思わず後ろへと飛び去る。数歩離れたことで目の前に広がっていた黒が、十二枚の黒翼であることが分かる。
「お前は……」
十二の黒翼の持ち主――アザゼルは背後に現れたシンに少しだけ驚いた表情を向けた。
「脱出したのか？　あのハーフヴァンパイアはどうした？　リアス・グレモリーと赤龍帝とは合流していないのか？」
アザゼルの口から出てきた言葉に軽く衝撃を受ける。リアスと一誠がこの旧校舎に来ているらしいが、姿など見ていない。得体の知れない存在が居るこの旧校舎にまだ居るかも知れないと考えると、嫌な汗が背中に流れる。
「余所見をしていいのですか？」
頭上の声と共に強力な魔力が雨の様に降り注ぐ。
アザゼルは手を振るうとその軌跡に合わせて光の膜が現れ、降り注ぐ魔力から自分とシンの身を守った。
「まさか俺の方が先にお前と会うなんてな。名前、なんだったかな？」
「……間薙シンです」
「なら、間薙シン。俺から離れるなよ」

短い名乗りが終えると同時にアザゼルは再び腕を振るう。それに応じてアザゼルの周囲を守っていた光の膜は大きさを増し、魔力の雨を押し返していく。
「チッ！」
舌打ちが鳴ると魔力の雨が止む。これ以上は無駄射ちと判断した為であった。
「流石は堕天使総督。これほど手こずるとは……」
ここで初めてシンは声の主の姿を見た。
褐色の肌に扇情的な衣装を纏う妙齢の女性。どこの誰かとは言わないが、見れば喜びそうな色気のある女性である。
「あれが旧魔王派という奴ですか？」
「知っていたか。なら話は早い。旧四大魔王の直系、カテレア・レヴィアタンだ」
サーゼクスやセラフォルー並みの魔力を持つことや旧校舎内で聞いた魔術師の話から推測して、アザゼルに小声で尋ねてみたシンであったが、推測は当たりであった。尤も当たった所で何一つ嬉しいことはなく、寧ろ状況が最悪な方向へと傾いていると感じていた。
「そこの子、この建物から出てきましたが……何者かしら？　人間？　悪魔？　貴方からは何か嫌な感じがするわ」
シンを視るカテレアの眼が厳しくなる。一目見てシンの特異性に気付いた様子で

あった。
「私たちの策が上手くいかなかったのは貴方のせいかしら？」
「――さあ」
恐らくはギャスパーを拉致しようとしたことを指しているのであろうが、正直に答える義理などシンには無いので適当な言葉を返す。
「――ッ　まあいいわ。仮に貴方が原因だとしたら結果として余計な被害を生むことになったわね」
シンの態度に一瞬額に青筋を浮かべるが、すぐに加虐的な笑みでそれを覆い隠す。
「被害？」
「本来ならばあのハーフヴァンパイアの神器でこの場に居る殆どの者たちを停止させる筈だった。でも貴方が妨害したせいで不要な犠牲を出さざるを得なくなった。知っているかしら？　三勢力の軍勢、全滅したのよ」
まるで全ての責任がシンにあるかのような口振りであったが、シンとしてもそのようなことが起きていたことを初めて知ったので、少なからずとも衝撃を受ける。
関係無いと一蹴すればそこまでだが、シンの性格上そのように切って捨てる様な言葉が簡単に出ず、口を真一文字に結んでしまう。
「はっ！」

声を出さないシンの代わりにアザゼルがカテレアの言葉を鼻で笑った。
「語るに落ちるってのはこういうことを言うんだな、カテレア。自分たちのことを棚に上げてガキにその責任を押し付けるような真似するとは。まったく本当に傍迷惑な連中だぜ」
アザゼルはカテレアに嘲笑を向ける。
「もう一度言ってやるよ。お前、器じゃねぇよ」
アザゼルの一言でカテレアの加虐的な笑みは瞬時に剥げ落ち、憤怒が下から現れる。
「……いいでしょう。二度もその台詞を吐いたことを後悔させてあげます」
カテレアは懐から小瓶を取り出す。小瓶の中には宙を泳ぐ小さな黒い蛇。蓋を開けるとカテレアはそれを一気に呑み込んだ。
その途端、カテレアを中心に大気や建物が細かく震える程の圧力を持った魔力が場に生み出された。魔力の量が一気に跳ね上がり、先程の比では無くなる。
「おいおい、なんだそりゃ」
軽口を言うアザゼルであったが、僅かに表情が引き攣っている。
「素晴らしい……これがオーフィスの『無限の龍神』の力……」
自らの裡から溢れ出る力に酔いしれる様に力の源の正体を語るカテレア。
「あの爺の力を借りたと思ったら今度はオーフィスの力を借りたのかよ。――節操ねぇ

な」
「ふふふ。何とでも言いなさい。最早貴方など怖れるに足りません」
アザゼルの挑発にも余裕に満ちた態度で返しながら、その両腕に青黒い魔力の光を宿す。
「さあ、ここで――」
「その力、私も興味があるな」
場に響く軽い音。すぐに消えて無くなってしまいそうになる程小さな音であったにも関わらず、やけに耳に残る音であった。
その音が自分の身体から鳴ったことに気付いたカテレアは視線を落とす。
彼女がその時見たのは、自分の胸部から突き出す白銀の刃。
「……最悪だ」
アザゼルは吐き捨てるように言う。
シンはその光景から目を離すことが出来なかった。何の前触れも前兆も無く現れ、気付けばカテレアの背後から刃を突き立てる存在から。
皮膚も肉も眼球も無い、全てを削ぎ落とし白い骨を曝け出す異形の存在。死と血のニオイを場に満たし、見る者全てに畏怖を与える。
初めて会ったのにシンはその存在が何なのか理解した。確信を持って言えるこの存

在は――

「今宵、全ての勝利は私が頂こう。最強の戦士にこそ最上の勝利が齎される。即ち私、マタドールに齎される」

――『魔人』であると。

黄金、混戦

先端から血の雫を垂らす剣がカテレアの胸から引き抜かれる。それと同時に宙に飛んでいたカテレアの身体は地に落ち、土煙を上げながらうつ伏せの状態で着地するとそのまま動かなかった。

カテレアを背後から突き刺した本人である、闘牛士の衣装を纏った白骨――マタドールもまた、宙から地に音も立てずに降り立つ。

「――何でお前も来てんだよ」

マタドールに向かってアザゼルは苦虫を噛み潰した表情をしながら問う。口振りからして、顔見知りであることが分かる。

「戦い、それもこのような大規模なものとなれば私が駆け付けるのは必然。闘争と勝利の気配を私が見逃がすと思ったかな？　アザゼル」

マタドールはおどろおどろしい見た目とは裏腹に饒舌に喋る。が、その最中に血の付いた剣を振り払い、血や脂を飛ばす。

「……ヴァーリならここには居ないぞ」

「確かに。少々残念だが仕方ない。もっともこの場に訪れたのはそれや戦いだけが目的

ではないのだがね」
「何だと……」
　それを聞き、信じられないという表情をアザゼルは見せる。それを横目で見ていたシンだがこれほどの顔になるということは、目の前の存在は余程戦いが好きだと見える。
「この場に訪れた理由、それは新たに生まれた私の『同類』の顔を一目見ようと思ってね」
「『同類』の顔だと……？」
　その言葉を聞きアザゼルの目線が自然にシンへ向けられ、そしてマタドールの眼球の無い眼窩もまたシンへと向けながらその場から歩き始める。
「ふむ。造りは異なるがこの気配、間違いない。貴公が新たに産声を上げた魔人だな」
　マタドールの口から断言されたとき、意外にもシンの胸中は穏やかなものであった。事前に他の人物たちから言われていたせいもあるかもしれないが、『魔人』という存在から自分が『魔人』であること告げられ、変な話ではあるが『腑に落ちる』ような感覚があった。
（晴れて俺も人外か）
　あるいは、人と魔の境界を彷徨っていた自分が、マタドールの言葉を受けてようやく魔の領域に入ったことで、ある種の吹っ切れた様な気持ちになったのかもしれない。
　尤も、晴れやかな気持ちには程遠いが。

「名を尋ねてもよろしいかな？」
独りそんなことを考えているシンの耳に、名を聞いてくるマタドールの声が入ってくる。
「……間薙シンだ」
「間薙シン。ほう、まだ『人』としての名を持っているのか」
名を告げるシンにマタドールは興味深いといった声色を出す。
「『人』としての名？」
「魔人は過去の名を名乗らない。名乗るとしても魔人としての名のみだ。まさか私のマタドールという名が本名だとは思ってはいないだろう？」
軽く肩を竦めながら言う姿は、見ようによっては愛嬌を感じさせるかもしれなかったが、周囲に振り撒く瘴気のような気配が、それすらも他者への恐怖へと変える。
「貴公の気配を感じて間も無い。仕方の無いことか」
一人納得するマタドールを見ながら、シンは奇妙な感覚を覚えていた。
初めて会った筈なのに、何処か会ったことのあるかのような既視感。その挙動を見て、喋り方を聞きながら、遠い何処かでこのような対峙をしたかのような、ありえない感覚。今まで一度も魔人など見たことは無く、マタドールも今初めて会った存在にも関わらず。

「話はそれで終わりか？」
　シンの前に立つようにしてアザゼルが一歩前に踏み出す。それを見てマタドールは足を止めた。
「やれやれ。折角、新たな同類と言葉を交えているのだ。ここは静観するのが大人としての嗜みではないのかね？」
　割り込むようにして喋りかけてきたアザゼルに、マタドールは大袈裟な仕草で首を振る。
「そんなに殺気を振り撒いている奴を黙って見ている方がどうかしている。それにこっちもお前には色々迷惑を掛けられたからな」
　アザゼルの声に僅かではあるが怒気が混じる。
「前に俺の戦友〈ダチ〉の一人もお前のせいで腹に風穴を空けられたしなぁ」
「戦友――ああ、バラキエルのことかね？　ああ、彼は実に手応えのある人物だった。堕天使の幹部としても『雷光』という異名を持つ者としても素晴らしい実力の持ち主だ。あのときの感触、確かに覚えている」
　当時のことを思い出しているのか口調には僅かに熱が入り、少しだけ早口になる。思い出しながら語る表情など、無い筈の白骨の顔がシンには笑って見えた。
「彼は今、どうしているのかね？」

「知ってどうする」
「私がこの手で討ち漏らした数少ない人物だ。生きているのであれば最大の敬意を払いながら――」
マタドールは剣を持っていない方の手をアザゼルに見せつける様にして握り締める。
「この手で殺したい」
「……ここ数日の間に三勢力の軍勢の中から何人かが行方不明になったが、あれもお前の仕業か？」
「如何にも」
「目的は何だ？」
「暇潰しだ」
発言と同時にアザゼルは右手を振るう。振り払われた手から数十を超える光の槍が放たれ、それら全てがマタドールを狙い一斉に襲い掛かる。
一本一本が異なる軌跡を描き、上下左右から全ての逃げ場を奪う様に迫る光の槍の群。しかし、圧倒されるような光景を前にしても、マタドールは微動だにしなかった。
最初の槍が命中したのか、土煙と土塊が舞い上がりながら着弾音が響くと、それに重なるようにして無数に光の槍が押し寄せる。
一点へと収束するようにして着弾する槍はやがて一つに束ねられ、真夜中に太陽が現

れたかのような眩い光の塊と化す。
その眩さにシンは目を細める。
光が収まると中心には抉れた大地の跡のみ。他には何も無い。
「物騒なことだ」
その声を聞き、アザゼルとシンはすぐに目線をそちらに向ける。光の槍が集束した地点から数メートル離れた先に、何も無かったかの様に佇むマタドールがいた。
アザゼルはそれを見て、相手に聞こえる程の大きさで舌打ちをする。
「暇潰しに他人を襲っている奴に言われたくねぇよ」
「はははは。確かに」
アザゼルの嫌味を聞いても余裕な態度でマタドールは笑ってみせる。自らの異常性を自覚しているといった様子であった。
「――さて。避けたとはいえ先手を受けたのであればこちらも返すのが礼儀」
マタドールは右手に握る白銀の剣の向く先を地面からシンたちの方に向ける。曇り一点の無い銀色の剣身は空に昇る月の光を受け、その輝きが一層増す。
剣先をシンたちに向けたまま、剣を後方に引きつつも肩の高さまで持ち上げ、それと同時に左足を一歩前に踏み出し、左肩を前に出す半身の状態となると、左足のみ足踏みさせるという独特の構えをとった。

一定の間隔で鳴る二度の足踏みの音。タイミングを計っているのか、あるいは意味の無い癖のようなものか。詳細は分からない、ただ一つ言えることは、マタドールが戦闘の体勢に入ったということである。

「いざ」

構えるマタドールの姿を見ながらシンは緊張から口の中が乾き、反対に額からは汗が流れる。このとき額から流れ落ちる一筋の汗が眼へと流れ、反射的にシンは目を閉ざしてしまうものの一秒も満たない内に眼を開いた。

たった一秒未満の暗闇の中で、次に目に映る光景は劇的までに変化する。

シンの眼前に立つマタドール。その手に握られた剣は既に心臓を目掛け突き出されている。

初めは自分が引き寄せられたかと思えた。だがシンは今の場所から全く動いてはいない。

あまりに急であまりに静かな接近。まるで途中の過程を全て省かれたかのようであった。

避けなければ。そう考え咄嗟に体を動かそうとするものの、反応が無い。だというのに意識だけはマタドールの動きを見ている。

このときシンは気付いてしまった。事故などのときに一秒が何千分の一の感覚で見

えるという、言わば走馬灯。ただその間に過去を振り返るのではなく、目の前の出来事を何千分の一に引き延ばされているのであると。

たった一瞬で死地へと追い詰められている。

コカビエルとの戦いで得た新たな左眼。桁外れの動体視力を持つその眼ですら、引き延ばされた状態のマタドールの動きが止まっては見えない。実際にはどれほどの速度で動いているのかは分からないが、少なくともシンの反射神経を軽々と凌駕するものであることは間違いなかった。

脳、神経、細胞、どれでもいいので動かすことを強く念じる。このままでは、マタドールの剣が容易く自分の心臓を貫く未来しか待っていない。

どこに力を込めればいいのかなどまるで分かりはしないが、それでも最悪の未来を防ぐ為に体に動く様命令を下し続ける。

その甲斐あってか指先が僅かに動き、それに連鎖するように手、腕と徐々にだが動き始める。

しかし、その動きはマタドールの速さと比べれば蝸牛の歩みのようなもの。間に合う速さでは無かった。

突き出される白刃が胸部十数センチ手前まで接近するが、シンが出来ていることと言えば、動かした腕を僅かに曲げている程度。既に時間切れであった。

終わる。呆気なく訪れる自分の終焉を予感した次の瞬間、真横から現れた黄金の短剣の腹が迫る刃の先端を受け止める。

花火の様に火花が散る。剣を受け止めた短剣はそのまま刃を押し当て、上に向けて持ち上げる。

誰が、何が起きたか、と考えるよりも先に生み出された一筋の希望を逃すまいと、血管が血流で擦り切れるのではないかと思える程、全身の力を右腕一点へと集中させる。

刻まれた右腕の紋様は蛍光の輝きを増し、鈍かった動きを加速させ、その勢いのまま空いた空間から前方に立つマタドールに向かって拳を放つ。

だがその拳にマタドールの姿は無く空を切る。

視線を動かすと、マタドールは既に離れた場所に悠然と立っていた。

「――ありがとうございます」

「礼は後でいい」

視線をマタドールに固定したまま自分の守ってくれた人物――アザゼルに礼を言う。

アザゼルはシンの胸の前に翳していた短剣を手の中で器用に回し、逆手から順手に持ち替える。

「気を抜くなよ。少しでも油断したら即あの世逝きだ。神経をこれでもかってぐらい張り詰めさせていろ」

　真剣な口調のアザゼルにシンは無言で首を縦に振る。それを見ていたマタドールは肩を微かに上下させる。どうやら声を出さずに笑っているらしい。
「風の噂ではアザゼルは神器の研究に没頭して力を衰えさせていると聞いたが……どうやら噂は所詮、噂らしい」
「はっ。誰が流しているのかは知らないが少なくとも昔よりも弱くなったつもりはねぇよ」
「素晴らしい台詞だ。猛ってくる」
　マタドールは言葉通り、その圧力をより高める。より重さが増していく空気、底知れない相手の実力に、シンはただそれに呑み込まれない様に耐えるしかない。
「そちらの方も生まれたてにしてはまずまずといった所だ。臆せずに攻めた姿勢は評価できる。もし引いていたとしたら同じ魔人として失望していたところだ」
　マタドールの送る賞賛の言葉を聞いても、嬉しいという気持ちなど微塵も湧かない。あくまで評価する側、自分が絶対的有利な立場にある者の言葉である。だが悔しいことに、今のシンにはその立場を崩せる力は持っていなかった。
「……何で真っ先にこいつを狙った？　先に仕掛けたのは俺だろうが。魔人の世界にも新人いびりなんてあんのか？」
「あれが私流の歓迎のようなものだ。防げればそれでよし。駄目だったのであれば所詮

はそこまで。魔人の力を持つ者に弱者は不要」
「――本当にそれだけか？」
「他に理由があると思うかね？」
この場に於いて最も力が無いのはシンであり、それは本人は勿論のことマタドールやアザゼルも理解していた。しかし、それでもマタドールが最初に刃を向けたのはシンであった。
隙があったかもしれない、同類として興味があった故の行動かもしれない。だがマタドールという魔人の行動に対しアザゼルは何故か違和感を覚えていた。その違和感が何かまだ分からなかったが。
「まあ、どうとでも解釈してくれればいい。さて、次の攻撃も――と言いたいところだが、どうやらまだ場が整ってはいないみたいだな」
マタドールの言葉にシンとアザゼルは怪訝そうな表情をするが直後、咳き込む音が二人の耳に入ってくる。
「ごほっ！　くっ！　うう……」
咳き込んでいるのは倒れ伏していたカテレアであった。カテレアは咳き込む度に血を吐きながら弱々しい動きで顔を上げる。
「ふむ。オーフィスの力はどうやら魔力だけではなく生命力も強化するようだ。急所を

貫いてもまだ生きているとは。自分の未熟さを嘆くべきか、それともオーフィスの力を賞賛すべきか。まあ、オーフィスの力があの程度では無かったとがっかりさせられずには済んだがね」

顎に手を当てながら悶えるカテレアを見下ろすマタドール。

「おい待て。お前、オーフィスと会ったことがあるのかよ」

聞き捨てならない言葉にアザゼルは思わず問う。アザゼルもオーフィスとは一応面識があるものの、そう簡単に会えるような存在では無い。しかも、この戦いに飢えた魔人と『無限の龍神』とが接触していたとなると、それは大事件である。

「一度勝負を仕掛けてみたのだがね。見事に振られてしまったよ」

「――お前、やっぱりまともじゃねぇよ」

マタドールの言葉にアザゼルは心底呆れたといった表情となった。『無限の龍神』という存在がどのようなものか知っている者からすれば、マタドールがどれほど無謀なことを試みたのかが理解出来る為に。

その間にも胸を刺し貫かれたカテレアは刺された胸に手を当て、口から血を流しながら上体を起こす。

「私の不手際で不要な苦しみを貴女に与えてしまったな。すぐにその苦しみから解き放とう」

半死半生のカテレアの顔にマタドールの持つ剣の光が当たる。
「……よう」
蚊の鳴く様なカテレアの声。皆、最初にそれが現状に対する恨み言だと思っていた。
「……じょう」
二度目に聞こえる声。先程よりも声量が上がり、恨み言ではなく何かを呼んでいる様に聞こえた。
「だい、そうじょうっ！」
三度目の声。文字通り血を吐く様な叫び。カテレアが呼ぶのはこの場に居ないもう一人の魔人の名。
その瞬間、カテレアの身体が淡い輝きの光によって包み込まれたかと思えば、全員が視ている前でカテレアの胸に刻まれた刺傷が一瞬にして塞がれていく。
傷が治ると同時に、先程まで死に掛けていたとは思えない程の機敏な動きでカテレアは身体を起こすとシン、アザゼル、マタドールへと向かって、青黒い魔力の光弾を無数に放つ。
「なんだそりぁ！」
理不尽に思える程瞬時に回復したカテレアに対し、アザゼルは抗議する叫びを上げながら横へと大きく跳び、シンもまたアザゼルの後を追う様にして光弾を避ける。

シンたちが先程まで居た場所に光弾に触れた途端、不発弾でも埋まっていたかのように爆発。土を上空へ大きく巻き上げる。

爆発の余波や飛び散る砂利、土などを身に受けながらも、シンは決して目を閉ざすことは無かった。一瞬の瞬きでも即終わりとなるのは、嫌と言う程身に染みている。

宙に漂う塵すら皮膚で感じる程に、神経を集中させながら周囲に意識を配る。

視界の端にマタドールの姿を捉える。先程立っていた場所から数メートルの位置に立ち、当然のことながら無傷であり、それどころかその衣服には爆ぜた土の汚れ一つ無い。尋常では無い程の見切りを見せ付けるマタドールであったが、どういう訳か悠然とした態度を崩し、どこか苛立つ様な気配をその身に纏っている。

「折角、私が整えた場を荒らしてくれるとはな……」

静かに呟く声には並々ならない怒気が込められていた。端から聞いているだけでも、臓腑が冷たくなるような感覚が襲ってくる。

マタドールは暗闇を閉じ込めたような眼窩で離れた場所に移動していたカテレアを見た後、今度は旧校舎の方を見る。

マタドールの行動に釣られてシンもまた旧校舎の方を見る。すると旧校舎内から聞こえてくるざわめく声。先程まで静寂に満ちていた筈の旧校舎内が騒がしくなり始めた。

瀕死状態であったカテレアの復活、マタドールの台詞、旧校舎内で見た魔術師たちの亡骸。それらが合わさり、シンの脳裏に嫌な推測が浮かび始める。
（まさか、治ったのは一人だけじゃないのか？）
その考えを肯ける様に旧校舎の中から金切り声がしたかと思えば、一階の教室から外へと向かい、ガラス窓を突き破って魔術による光弾が飛び出す。見間違いでなければ光弾が飛び出した場所は、ここに来る前にシンが魔術師たちの遺体を見た場所である。
立て続けに二階、三階からも爆音が響き渡り、窓ガラスが吹き飛んでいく。
「うふ、ふふふふ。残念だったわね。仕留め損ねたのが貴方の誤算。だいそうじょうの力が在る限り私たちは何度でも蘇るわ！」
完全に回復した様子にカテレアが勝ち誇ったようにマタドールに言うが、肝心のマタドールはそんな姿を一瞥するだけであった。
「そのようだ。まだまだ私も詰めが甘い。そのせいであの偽善者にこうも易々と私の領域を侵されるとは……ところで貴女に質問があるのだが？」
「……何かしら？」
「貴女は誰かな？」
場の空気が静止したかの様な錯覚を覚える。
カテレアはマタドールの質問を聞いて陸に上がった魚の様に口を何度も開閉し、アザ

ゼルの方は頭痛を堪えるかのような表情をする。そして、シンは名前も素性も知らない相手を、何の躊躇いも無く殺しにかかるマタドールに戦慄を覚える。

「……旧魔王派、カテレア・レヴィアタン。……ここまで言えばその脳の無さそうな頭でも分かるでしょう？」

般若の如き凶悪な顔付きで、怒りを押し殺しながら自らの身分を明かす。わざわざ言う必要も無いことを言うのは、自分の素性を全く知らない相手にプライドを傷付けられた為なのかもしれない。説明の最後に付けた台詞はそれを証明するかのように、相手への悪意に満ちていた。

「旧魔王派……ああ、そうか。戦争でも勝てず、同族にも負け、冥界の端に追いやられた負け犬たちの残党のことか。失礼、私としたことがあまりにどうでもよく、記憶の隅におくことすら碌に価値を見出せない存在だったので、今の今まで忘れていた」

一の嫌味がマタドールによって十の悪意となってカテレアに戻ってくる。

本音かあるいは挑発か。答えは分からない。ただ真実があるとすれば、カテレアを激怒させるには十分過ぎる台詞であった。

瞬間、無数の光弾がカテレアから放たれ、マタドールに降り注ぐ。軽く上げられたマタドールの足が地に付くと同時に、消えるかのような速度でその場から左方向へと移動。体勢は変わらないまま、まるで空間ごと切り取られ、別の場所に張り付けられたか

のような程不自然なまでに体勢が崩れていない。
間も無くして先程マタドールが居た場所に光弾が着弾するが、既に目標が居なくなっていることを感知していたカテレアは、その血走った目で消えた対象を探す。
そして、視界の端に一瞬でも入ると、即座に次弾をマタドールに放つ。
今度の攻撃も同じような動きでマタドールは移動し回避しようとするが、マタドールがその場から居なくなると放たれた一発一発の光弾は軌道を修正し、対象の後を追跡し始めた。
「ほう」
光弾の動きを見て、マタドールの白い歯が剥き出しになっている口から面白がる様な声が漏れると、再びその場から移動する。
今度の移動した場所は左右でも後方でも無い。マタドールを狙う無数の光弾がある前方へ、自分から飛び込んでいく。
複数の光弾が周囲を取り囲む中、一切の焦りも無く平静そのものと言った様子で両腕を垂れ下げた格好のマタドール。光弾はマタドールへと反応して即座にその軌道を変えるが、マタドールは襲い掛かる光弾に視線を変えることなく、接触する直前となって上体を引いた。
マタドールの胸前を横切る光弾。すぐにこれも軌道を変えるかに思えたとき、反対側

から同じく軌道を変えて来た光弾と衝突し合い、マタドールの前で衝突し合う。
接触し合った光弾から閃光が放たれると、マタドールの眼前で大爆発が巻き起こる。しかし、その爆発の中から何事も無かったかのようにマタドールは飛び出し、その後を残りの光弾が追う。
偶然とは思えない出来事。それを証明するかのようにマタドールは光弾の中でその身を動かし、自分に迫る光弾を次々と相殺し始めていく。
僅かに動かした手の動きに反応した光弾を、体の動きに反応した光弾と相殺させたかと思えば、滑る様な足捌きで光弾を誘導し、他へとぶつける。
次々と誘発されて起こる爆発。だがどれもが至近距離で起こっているにも関わらず、引き起こした張本人には目立った怪我も汚れも見当たらない。
剣を使って払うことなど一切せず、己の見切りと動きのみで容易くカテレアの攻撃を捌く姿は、さながら舞踏とも呼べるものであった。しかし、本当の舞踏のような優雅さはそこには無く、あるのはマタドールが見せる底知れない実力の片鱗。見る者たちに魔人という存在が持つ実力を見せつける様な、挑発染みたものが感じられた。
事実、先程まで怒りを見せていたカテレアも、楽しむ様にして自分の放った光弾を消していくマタドールに慄いている。
最後の光弾が爆発し、決まりきったかのように爆発の中からマタドールが跳躍。その

まま旧校舎の壁面の上に垂直に立つ。
重力などまるで感じさせないさも当然のような格好でこちらを見ながら、マタドールは垂れ下げていた腕を持ち上げる。
相手の反撃の動作だと思いカテレアは身構え、端で見ていたシンやアザゼルも緊張感を高めていく。
――が、次に起こったのはカタカタという音。
音の正体はマタドールの拍手であった。
「見事、と言わせてもらおう。精緻な魔力の形成と操作。オーフィスの力で元々の力は増幅されているとはいえ技術まではこうも向上はしまい。研鑽と練度の高さをこの身でしかと味あわせてもらった。賞賛の言葉を送ろう。そして、先程の非礼を詫びさせて貰おう。貴女の実力は非常に価値あるものだ」
並べられていく賞賛と詫びの言葉。カテレアを罵倒した者から出て来たとは思えない程の敬意が込められていた。そして、性質の悪いことにマタドールが口にする言葉はどれも皮肉や嫌味などではなく、『本気』で相手を褒め称える響きがある。
戦いの中でこんなことを言われればただ戸惑うしかない。事実、カテレアは目を瞬かせていて、マタドールが何を言っているのか理解が追い付いていない状態であった。
「あの一撃で倒れたときは些か拍子抜けをしたが、改めて実力を見れば魔王の系譜を継

ぐ者としては十分な資質を持っている。――だが」
急速に場の空気が冷たくなっていく。賞賛していたマタドールの態度は一変し、殺意に滾るものへと変貌した。
「それが私の場を荒らしたことへの免罪にはならないがね」
マタドールは左手に真紅の魔力を集束させ、銛を形成する。それを見て周囲は構えるが、マタドールの視線は周りには向いていなかった。
彼が向けているのは上空。マタドールの存在に集中していたせいで気付かなかったが、このときシンは上空で光と赤い閃光が絡み合う様に衝突していることを知った。
その光目掛け、左手に持つ銛を投擲する。
「死ね。偽善者が」
吐き捨てる台詞と共に投げ放たれた銛は、赤い光の帯を僅かに残しながらすぐに肉眼から消える。
数秒後。雷鳴の様な轟音が天から響くが、それでも上空の二色の光は何事も無かったかのように互いを喰らい合い続けていた。
その様子を見てマタドールは舌打ちをした後、視線をシンたちの方へと戻す。
「失礼。あの邪魔者には一言物申したいと思っていたのでね。戦いを中断させてしまったことを詫びよう」

露骨なまでも嫌悪を示していた態度が、一瞬にして元の紳士といった態度の下に隠される。その変わり身の早さには不気味さすら覚えさせられる。
「ったく、勝手に始めて勝手に中断して勝手に再開させようなんてどんだけ自己中なんだよ」
「戦いの主導権というものは常にその場に於いて最強の者が握る。つまり私が戦いの流れを自由に動かすのは当たり前のことだ」
「自己中に加えてナルシストときたか。色々な意味で面倒くさい連中だよ、お前らは」
さも当然の様に語るマタドールにアザゼルは眉間に皺を寄せながら毒吐く。
「はははは。私の性分は私が良く理解している。さて、思わぬ所で役者が増えてしまったが別に構わないな？　このまま三つ巴と洒落こもう」
マタドールが構えをとる。それを見てシンやアザゼル、そしてカテレアも身構える。
「別に全員が私に掛かって来ても構わない。そちらの方も燃えるのでね」
その言葉を聞き、アザゼルはハッと鼻で笑う。
「上等だ。前々から一度お前とは全力でやり合わなきゃならないと思っていたところだ。お前、いやお前らの存在は異質だ。そしてその異質は周囲に悪影響をばら撒く。いい加減消えて無くなれ」
アザゼルは手に持つ短剣を胸の前に掲げ、シンにとっては聞き覚えのある言葉を発す

る。

「禁手化〈バランス・ブレイク〉ッ！」

その言葉を切っ掛けに握られていた短剣がその形を崩し始め、複数の欠片へと変わっていく。黄金の光に包まれた欠片はアザゼルの身体を包み込み、やがて巨大な光へと変わる。

繭の様に形作られた光を突き破る様にして光の槍の先端が飛び出し、そのまま横一文字に光の繭を斬り裂く。

裂けた繭から現れたのは、龍を模した黄金の全身鎧〈プレート・アーマー〉を纏ったアザゼルであった。

禁手化した一誠の鎧と酷似はしているが、一誠の鎧と比べるとやや生物的な外見をしており、背中から生えた一二の黒翼がそれにより拍車を掛けていた。

「――素晴らしい」

アザゼルの姿を見たマタドールから出た言葉は、心の底から籠められた敬意の言葉であった。

「神器の研究を進めていることは知っていたがまさかその段階まで踏み込んでいたとは！　神域を己の知力と探究心で入り込むとは恐れ入る！　その姿には感動すら覚える！」

興奮し、やや語気が強くなるマタドール。それだけならばまだ純真さすら感じさせるが、それに伴って場の空気そのものを入れ換える様な殺気までも昂らせていく。
凄まじい勢いで浸食していく殺気にシンは、呼吸をする度に臓腑が締め付けられるようで
あった。
「お前に褒められても何一つ嬉しくねぇよ」
それとは対照的にアザゼルは冷めた言葉を返す。
「まさかドラゴンをベースにして新たな神器を創り出すとは……」
カテレアもまたアザゼルの見せた神器に驚きを隠せなかった。
シンはこちら側のことを知って日が浅い為、アザゼルがどれほどのことを成したのか、その凄さについてイマイチ理解出来ていなかったが、二人の反応からして前代未聞なことだというのは分かる。
「神器マニアをこじらせすぎちまってな。どうにも自分でも神器を創りたくなっちまった。それで創ったのはいいが出来が良すぎるとどうにもその先を求めちまう。だからこそこの傑作が出来たのかもしれないがな」
アザゼルは空いている方の手で軽く自分の胸を叩く。
「『堕天龍の閃光槍〈ダウン・フォール・ドラゴン・スピア〉。そして、それを疑似的に禁

手状態にした『堕天龍の鎧〈ダウン・フォール・ドラゴン・アナザー・アーマー〉』。それがこの神器――いや、人工神器の名だ」

纏う神器の名を聞きながらマタドールは観察するように、上から下にかけてアザゼルの鎧を眺める。

「並のドラゴンでは持ち得ないこの力の波動……その鎧の色から察するに『黄金龍君〈ギガンティス・ドラゴン〉』ファーブニルの力を封じてあると見受けする」

「……人型の奴にだけ興味があると思っていたが」

ほんの少しの間に力の根源を見抜くマタドール。アザゼルの言葉からして正解であるらしい。

ファーブニルの名はシンもアザゼルの口から聞いたことがあった。『五大龍王』に数えられる、上位のドラゴン。それが今アザゼルの纏っている鎧に宿っていることになる。

「昔、興味本位でドラゴン狩りというものを興じてみたことがあったのでね……尤もすぐに飽いてしまった。私の本質は狩人ではなく戦士だからな」

「どこの誰にでも怨みをかってやがる」

語るマタドールにアザゼルは冷めた反応を返した。

「ふふふふ。ここに来て正解だったと改めて思う。誰を相手にするか目移りしてしま

うな」
滾る様な殺意を仄めかしながら、マタドールは鈍色に輝く剣身を皆に見せつける様にして構える。
「さあ、戦おう！　血と屍を重ねた先になる勝利を己がものにする為に！」

◇

「う、うう！　ぐすっ！」
とある教室の片隅でギャスパーは膝に顔を埋めながら静かに泣いていた。シンと別れ、ピクシーたちに引き摺られながら逃げ延びた後、ずっとこのような調子である。
「いい加減泣くの止めたら～？」
ジャックランタンがギャスパーにそう言うものの、返事は無い。いつもならば、手に持っているカンテラで頭を一つ小突いて無理矢理泣き止ませている所であるが、付き合いがそれなりに長いジャックランタンの目からして、普段の怯えて泣くのとは違い、心底精神的に追い詰められたことからくる涙であることを理解している為、今殴るのは逆効果だと判断していた。
「大丈夫だって。シンは強いからさー。きっと勝っちゃうって」

「そうだホー！　オイラが認めるくらい強いんだホー！」
ピクシーとジャックフロストも慰めるものの、ギャスパーの涙は止まらなかった。
「ランタンくん……ジャックくん……ピクシーちゃん……僕は……僕は……今日ほど自分のことが嫌になった日はないよ……」
しゃくりあげながら、か細い声が俯いたギャスパーの口から出る。
「この眼のせいで皆に迷惑ばかり……襲われたのも僕のせい……それを助けてくれた間薙先輩が敵を前に置き去りにしてしまったのも僕のせい……きっとこれからも部長や先輩たちに迷惑を掛け続ける……」
うずめた膝の隙間から涙が零れ落ち、床に点々と染みを作る。
「僕は死んでいた方が良かったんだ……あのときヴァンパイアハンターに襲われたときに……部長には部長の為に生きて、自分が満足する生き方を見つけるって眷属に転生されたときに誓ったけど……僕には見つけられなかった……生きる価値も眷属としての価値も僕には……無い」
塞ぎ込み、自分という存在に絶望するギャスパー。
「……ふ～ん」
それを聞いたジャックランタンは、いつも以上に感情を感じさせない声を出しながら、俯くギャスパーのすぐ側に近寄る。

「じゃあ今日までのことをぜ～んぶ無意味に変えるんだ～？」
ジャックランタンの問いにギャスパーは答えない。
「ヒ～ホ～。リアスや朱乃が慰めてくれたことも～、イッセーやシン、小猫、ゼノヴィア、匙、アーシアが特訓してくれたことも全部、ぜ～んぶ何の意味も無いことにしていいんだ～？」
なじる様なジャックランタンの言葉にギャスパーは答えなかったが、無視し切れないのか行き場の無い感情が言葉の代わりに震えとなって、ギャスパーの身体を小刻みに動かす。
「全部放り捨てるのは簡単だけどね～。そっちのほうが楽だっていうのも分かるけどね～。でも楽なことが良いって訳じゃないとボクは思うけどね～」
ギャスパーはそこで俯かせていた顔を上げる。涙で目が赤く腫れ、鼻水まで流してぼろぼろな顔であった。
「僕は……僕は一体どうしたらいいんだろう……苦しいんだ……悲しいんだ……辛いんだ……このまま死んだ方がいいとさえ思っている……でも、でも……」
そのとき集団の足音がこちらの方に向かって来る音がする。集団は一定の距離を走るごとに止まり、その度に扉を開ける音が聞こえてきた。
一室一室調べているらしい。根気と時間が必要な探し方ではあるが、確実にギャス

パーたちが隠れている教室に迫っていた。
「不味い不味い！　来た来た！」
「近いホー！」
　ピクシーとジャックフロストが逃げる準備をしようとする。
「待って～」
　だがそれをジャックランタンが止めた。
「ギャスパー、キミが選んで」
「えっ？」
　いきなりのことに何を言っているのか理解出来ず聞き返す。
「それってどういう――」
「だ～か～ら～逃げるかここで倒しちゃうかキミが選びなよ～」
　ギャスパーの顔がサッと蒼褪めた。
「そ、そんなこと出来ないよ！　それにジャックくんやピクシーちゃんの意見を無視するなんて！」
「だそうだけど～二人はどう～？」
　ピクシーとジャックフロストはギャスパーとジャックランタンの顔を交互に見た後、口を開く。

「じゃあ任せる」
「オイラもそうするホー」
「ええっ！」
逃げ道を塞がれたギャスパーの顔色を一層悪くなり、死人の様な肌色となる。
「ほらほら～早く選ばないと逃げる時間も無くなって戦うしか選べなくなるよ～？」
「うううぅ……うううぅ！」
急かすジャックランタン。何も言わないピクシーたち。迫りつつある魔術師たちの足音。悠長な時間は無く、ギャスパーは否応無しに選ばざるを得なくなる。
「僕は……」

◇

教室を扉が勢い良く開き、それと同時に数名の魔術師たちが中に入っていく。全員が目を血走らせながら教室内を隈なく探したとき、その人物はいた。
「ヒィィィ！」
教室の隅に背を預け、辛うじてと呼べるほど震えながら立っているギャスパー。
「ようやく見つけた」

当初の目的よりも大分遅れ、作戦の内容も変更されたが、ギャスパーを捕らえること自体まだ中断の指示は出されてはいない。既にこちらの動きは相手に知られてしまってはいるものの、ギャスパーには十分な価値があった。

「大人しくしていなさい。下手な動きを見せれば痛い目を見ることになるわ」

見せつける様に手の中で青白い火花を出す魔術師。他の魔術師も同様に手の中に炎を生み出し、白い冷気を昇らせるなどして、視覚的に分かり易く『痛い目』というのがどういったものかを表現していた。

「あう……うああ……」

がたがたと更に震えを増すギャスパー。その怯え様には滑稽さを感じたのか魔術師は含み笑いをする。

「どんなに優秀な神器を持っていても使う者がこれだと単なる宝の持ち腐れね」

魔術師の一人が怯えるギャスパーへと歩み寄った――そのとき。

「ヒホー」

背後から聞こえる無邪気な声。魔術師たちが一斉に振り向くとそこには手を挙げた格好をしているジャックフロスト。

魔術師たちの注意が全てジャックフロストへと向けられた次の瞬間、ギャスパーの履

いているスカートが風も無く翻り、その中から両手を突き出して構えるピクシーが姿を見せた。構えた両手には既に魔力が集中されており、魔力は次々と電気に変換され爆ぜる様な音を鳴らす。

その音に気付いた魔術師たちであったが、その時点で既にピクシーの準備は完了していた。

「バイバーイ」

放たれた電撃は幾筋にも分かれ、それらが魔術師たちの身体へと突き刺さる。魔術師たちの身体に触れた電撃は瞬時にその全身を駆け巡り、内と外を蹂躙する。

悲鳴を上げる事無く、怯えるギャスパー以上に全身を痙攣させた後、白目を剥いて全員床に倒れ伏してしまった。

「はい。せいこーう!」

一撃で魔術師たちを戦闘不能状態に追い込んだピクシーは上機嫌に笑顔を浮かべる。

「オイラが気を逸らしたおかげだホー!」

それに負けじとジャックフロストが自分の成果を誇るが、ピクシーはそれに意地の悪い笑みを返す。

「気を逸らしたって……机の下に張り付いて隠れただけじゃん」

「ヒーホー! 絶妙なタイミングだったホー! オイラにしか出来ない入り方だった

ホー！」
「ふ、二人とも！　あ、ありがとうございます！」
いまだに震えながらギャスパーは魔術師たちを倒した礼を言った。
「ギャスパーも囮、ありがとうね」
「ナイスな演技だったホー！」
「あ、ははは……」
一切演技などしていなかったとは言えず、ギャスパーは乾いた笑いを洩らす。
「どうでもいいけどギャスパーって下着も女の子のものなんだね」
「そ、そんなこと言わないで下さい！」
ギャスパーは反射的にスカートを押さえてしまう。
「くうう！」
そのとき倒れていた魔術師の一人が上体を起こす。
「ふざ、けた、真似、を！」
電撃の影響からか呂律の回らない喋り方ながらも、聞けばどれほどの怒りが込められているのかが分かる。
魔術師が手を伸ばす。その先に居るのはジャックフロスト。
伸ばし掌に炎が宿り、それがジャックフロストに向けて放たれる。

「ヒホ！」
驚くジャックフロスト。距離が近い為、回避する余裕も無い。
誰もが次に起こる惨状を脳裏に浮かべ、間に合わないと悟っていても思わずその場から駆け出そうとする。
「――ヒホ？」
が、何故か放たれた炎はジャックフロストに直撃する前に宙で止まり、そのまま向きを変え、別方向へと飛んで行く。
向かう先に居るのはギャスパー――より正確に言えばギャスパーの背後から出ているカンテラに向かっている。
「世話が焼けるな～」
呑気な声を出しながら、ギャスパーの背後に身を隠していたジャックランタンが顔を出す。
見えない力で引き寄せられた炎は、そのままジャックランタンの持つカンテラへと吸い込まれ、中の炎をより一層燃え盛らせた。
「ごちそうさま～」
「馬、鹿な！」
あまりにあっさりと自分の魔術が無力化されたことに驚く魔術師だったが、その隙を

狙われ接近したピクシーの手が頭に置かれる。
「今度こそお休みー」
　ピクシーの手が一瞬発光すると、魔術師の身体が陸に打ち上げられた魚の様に跳ね上がった後、口から泡を噴いて今度こそ気絶する。
「あ、ありがとう」
「礼を言うのはギャスパーじゃなくてそっちじゃな～い？」
　からかう様な口調でジャックランランが言うとジャックフロストは少し顔を顰めた後、蚊の鳴く様な声で礼の言葉を言う。
「……ありがとうだホー」
「え～？　聴こえな～い――って言いたい所だけどそんな暇も無いしとっととここから出よ～う」
　その言葉にジャックフロストとピクシーは同意を示すが、何故かギャスパーの反応が無い。
「ヒ～ホ～。どうしたの？」
「……やっぱり僕は駄目な奴です」
　背後から顔を覗くジャックランタンに対し、ギャスパーは顔を俯かせる。
「これだけ追い詰められなければ選ぶことも出来ない。選んだとしても結局は誰かの助

けが無ければ何もできない。出来ることがあるとすればただ怯えるだけ。本当に僕は役立たずだ……」

今にも泣き出しそうに声を震わすギャスパー。そんなギャスパーを見たジャックランタンが次にとった行動は――

「まあ、いいんじゃないの～。何も選ばずに黙ったまんまよりはましだよ～」

立ち尽くすギャスパーの背に手を当て、前に押し出す。

「選んで何も出来なかったから僕が背中を押してあげるよ～」

「ま、待って！　ランタンくん！」

「待たな～い。ここからとっとと出たいしね～」

無理矢理背中を押されながら、ふらふらとした足取りで前に進んで行く。

「こ、転んじゃうよ――！」

「大丈夫、だいじょ～ぶ」

そう言った直後、ギャスパーの右足が左足に引っ掛かり、体勢が前のめりになる。

「あっ！」

顔から倒れる。そう思ったとき、行き成り襟を掴まれ倒れる途中で止まった。

「おーもーいー！」

ピクシーがギャスパーの襟を両手で握り、必死になって羽を動かしその動きを止めて

いたのだ。
　その間にギャスパーは体勢を元に戻す。
「あ、ありがとう」
「足元気をつけてねー」
「こんな感じで大丈夫だったでしょ～？」
　再びギャスパーの背を押す。
「動けなくなったら背を押してあげる。転びそうになったら支えてあげる」
「……このまま前に進んでも僕は大丈夫なんだろうか？」
「前に進むのが不安になったらキミの手を引いてくれるヒトがいるよ～。キミもわかっているでしょう？」
　その言葉を聞き、ギャスパーの頭に浮かぶのはオカルト研究部のメンバーの顔であった。
「今は周りに支えてもらえばいいよ～。基本的にキミってヘタレだし」
「うう……」
「でも、その内一人で歩ける様になったら今度がキミが誰かを支えてあげればいいさ」
「ランタンくん……」
「まあ、今の所はとっととここから出て逃げること～。分かった～？」

「……うん」

頷くギャスパーを見て、ジャックランタンは押していた手を離す。

ギャスパーがその場から一歩踏み出す。誰かに押されず、自分の力で踏み出した一歩は、心なしか少しだけ力強く見えた。

◇

旧校舎内を隈なく見回し、ギャスパーやシンたちの姿を探す一誠。だがその視線は時折、自分の隣にも向けられていた。

一誠の隣には蒼褪めた顔のリアス。部室から出てきてからずっとこの状態であった。

何度か声を掛けてみるが、その度に「大丈夫、大丈夫よ……」と力の無い微笑を見せるものの、一誠にはそれが自分に言い聞かせている様に聞こえた。

その横顔を見る度に、自分への不甲斐なさで血が沸騰する様な気分になる。部室の外で見張りとしていた僅かな時間に、リアスは突如として現れた新たな魔人と接触していたという。

それを全く気付くことが出来なかった一誠は、自分の実力不足を痛感する。

（これじゃあセタンタさんにもサーゼクス様にも顔向けできねぇ）

『気を落とすな、相棒』

一誠の心の声に反応して、ドライグの声が脳内に響く。

『彼奴の存在に気付けなかった俺も同罪だ。それに本気で気配を殺した彼奴に気付くことができる奴なんて上から数える程しかいない』

（そうだとしても……）

慰めの言葉を掛けてくれるが、一誠の気が晴れることは無かった。魔人と自分との間に途方も無い実力差があると分かったとしても、それを言い訳にして隣に立つリアスの現状から目を背けることなど出来なかった。

（早く、間薙たちと合流を……うっ！）

突如として鼻孔に流れ込んでくるニオイ。鉄と生臭さが混じったそれを吸い込んだ瞬間、胃袋が一気に締め上げられる様な感覚があり、次に喉を這い上がってくる嘔吐感を覚えた。

漂うや微かに、といった生易しいものではなく、その領域へと踏み込むと同時に空気そのものが変えられたかと思う程の濃いニオイであった。

それが何のニオイかすぐに理解したが、これほど濃く臭うことから次に目の当たりにするであろう光景を想像し、その考えを拒否したくなる。

周囲を包み込むニオイ。それは間違いなく血のニオイであった。

「部長……」
「……ええ、分かっているわ」
リアスもまたニオイが何なのか理解しており、蒼い顔のまま鼻と口に手を被せている。
周りの光景が赤色に染まっている様な錯覚を覚えそうになるニオイの中を突き進む二人。
それから間もなくして――
『相棒、意識を強く持てよ』
不意に掛けられるドライグの言葉。直後、廊下の曲がり角を出た二人が見たものは、まさに死屍累々と呼ぶべき光景であった。
「くっ！　うう！」
事前にドライグに言われた通り、どんなものが目に入って来ようとも耐える様に意気込んでいたが、その意気込みが激しく揺さぶられる。
廊下には重ねる様にして倒れる魔術師たち。壁にもたれ掛かりながら息絶えている魔術師たち。誰もが共通して心臓部分が穿たれており、そこから流れる血が廊下や壁を染め上げている。
一誠とて人の死体を見ること自体は初めてではない。以前、フリードが一般人を惨殺

した現場に立ち会わせたこともある。だが、そのときは比べものにならない程の死体の数が目の前に転がっている。

初めて見た死体と比べれば横たわる魔術師たちの亡骸は、変な話ではあるが綺麗と言ってもいい。しかし、一誠の心を激しく揺さぶるのは血の量でも死体の数でも無い。場に満ちた本能が感じ取る死のニオイ、『死臭』とも呼ぶべきものに動揺していた。

「全員一撃ね……」

隣からポツリと呟やかれる声を聞き、一誠は心の裡で気合の声を上げた後、本当ならば見たくも無い死体の群を注意深く観察する。

リアスが言った通り、血で汚れているがどの魔術師も胸の傷以外、外傷は無い。つまり襲った側は一切の無駄なく、魔術師たちを一撃で葬ったということを示していた。

「これもあの魔人の仕業ね……」

顔色は悪いが、それでも一誠よりも冷静に状況を判断するリアス。一誠は魔人と直接出会った訳ではないが、目の前に並ぶ魔術師たちの死体やその手際に恐れを感じてしまう。

「……先に進みましょう。ここに居ても精神的に良くないわ」

「は、はい！　……この廊下を渡るんですか？」

リアスの言葉に頷く一誠であったが、すぐに思い直す。廊下の全体を染め上げる血。

その上を歩いていくというのは、些かというかかなりの抵抗を覚える。
「飛べば問題ないわよ」
「あ、そうか」
あっさりと解決策をリアスに出され、一誠は若干の恥ずかしさを覚えてしまう。日常生活であまり使う機会が無かった為に失念していたが、自分は羽を出して飛ぶことが出来る。悪魔にとって常識的なことを忘れていたことに、未だ死体を見た動揺が抜けきっていないことを実感した。
羽を広げ、横たわる死体の上を飛ぶ。既に事切れていると分かっているが、心情的にはあまり気分の良いものでは無かった。襲撃した敵だと分かってはいるものの、自分が何か酷く非道徳的なことを行った様な気分となる。
死体から少し離れた場所に二人は着地すると、そのまま先に進もうとする。が、そのとき二人の聴覚が足音を捉えた。
足音の数は多くは無い。聞こえてくるのは二人程度。だが決して油断は出来ない為、一誠は左手に『赤龍帝の籠手』を発現し、リアスもその手に真紅の魔力を宿らせる。
徐々に近付いて来る足音。息を潜め、それを待つ二人であったが、近付いて来るにつれ聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「うう……！　うう……！」

「はいは～い。前に進んでいるのはいいけど周りを気にし過ぎ。カタツムリよりも遅いよ～」
「ヒホ！　後ろはオイラに任せるホー！」
「じゃあ、アタシは前ー」
　この状況にも関わらず、何処か抜けている様な会話。どのような状況でもマイペースな会話に心当たりしかない。
「ギャスパー！　ピクシー！　ジャックフロスト！　ジャックランタン！」
　一誠は思わず名を呼ぶ。
　その声を聞いた途端、静かだった足音が騒がしくなった。
「イッセー先輩！」
　慌ただしい音と共にギャスパーたちが姿を見せる。
「イ、・イッセー先輩！　部長！」
「あ、イッセーとリアスだ」
「こっちから会いに行く手間が省けたね～」
「ヒーホー！　二人とも会いたかったホー！」
　無事に再会出来たことを喜ぶギャスパーたち一行。それに釣られ一誠たちも喜ぶ――かと思いきや、その中にシンの姿が見えないことに気付いた瞬間、喜びから一転して

不安げな表情となる。

「なあ……間薙はどうした？」

その問いに、ギャスパーは気不味そうに目を下に向ける。

「ま、間薙先輩は……僕たちを逃がす為に魔術師たち相手に一人で足止めを……」

その言葉を聞いた瞬間、リアスと一誠は頭を殴られたかのような衝撃を受けた。二人ともシンの実力は十分知っている。だが、それでも魔術師たちの数はこちらを遥かに上回っている。それに魔人までもがこの旧校舎内を徘徊して、手当たり次第死体を築き上げている状況である。安堵するというのが無理な話であった。

「私が……もっと注意を払っていれば……！」

あのとき旧校舎にギャスパーを置いて行くなどということはせず、もっと手に届く範囲に置いていたならば、このようなことにはならなかった。

眷属を率いる者として責任感の強さが『あのとき、ああしていれば』という仮定を考えさせ、不必要なまでにその両肩に責任と言う重圧を自ら載せる。

そんなことを考えているリアスの肩に手が置かれる。

「間薙はそう簡単にやられる奴じゃないです！」

リアスにも自分にも言い聞かせる様な言葉。

肩に置かれた熱を感じ、そのまま向けられた一誠の視線を感じる。不安ながらも精一

杯信じ抜こうとする意志、それが少しではあるが固くなったリアスの心を解かす。
「ええ……そうね」
　不安はある。恐れもある。だが今は会うことが出来た自分の眷属との再会を刹那ではあるが喜ぼう。涙を流した跡がうっすらと残るギャスパーの顔。どれほど心細かったのかは容易に想像出来る。
　自分もまだあの魔人の影に恐れを抱いている。だが、それでもその恐れや不安を他の者に伝播させる訳にはいかない。
　精一杯の気持ちを込めてリアスがギャスパーを抱きしめようとしたとき、突然ギャスパーは悲鳴を上げた。
「ヒ、ヒィィィィ！」
　その悲鳴が何を意味しているのかリアスと一誠はすぐに分かった。すぐ近くに転がる死体の群。再会時には気付かなかったが、今になってようやく気付いたんだと思った。
「まあ、気分が悪くなるかもしれないが落ち着――」
「わっ！」
「ヒホッ！」
「う～わ～」

続けてピクシーたちも驚き目を丸くする。ギャスパーが驚き、怯えるならば仕方ないがこの神経の太い三人が驚く姿には若干の違和感を覚える。
「う、ううう、後ろ！」
「ええ、分かっているわ」
「た、立とうとしてます！」
「――え？」
リアスと一誠が同時に振り向く。そこで二人が見たものは、先程まで息絶えていた筈の魔術師たちが四肢を震わせ、爪を床に突き立てながら立ち上がろうとしている姿であった。
いつの間にか纏っている淡い光の中で、穴が開いていた筈の胸の傷は塞がれ、傷一つ無い肌を見せる。
「嘘！　神器クラスの治癒を一度にこれだけ展開するなんて！」
「こ、これは……！」
『チィ！　恐らくはだいそうじょうの仕業だ！　命を奪うのも与えるのも得意な奴だからな！』
そう言っている間に、倒れ伏していた魔術師たちの殆どが完全に傷を治した状態で立ち上がる。だが、立ち上がった魔術師たちは自分の身に起こったことに戸惑うこともな

く、虚ろな目を一誠たちに向ける。
まるで機械の様に同時に向けられた人形を思わせる様な瞳。その視線に少しだけ怯んでしまう。
「な、何だ？」
一言も発さずにこちらを見る魔術師たちに疑問を覚える一同であったが、すぐにその疑問も吹き飛ぶような事態となる。
『あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、！』
魔術師たちが同時に叫び、窓が激しく揺さぶられる。それも普通の叫びでは無い。腹の底から感情の全てを載せ、血管を引き千切るようにして放たれる声は、恥や外聞などかなぐり捨て、人でありながら獣の咆哮と殆ど変らないものであった。
血走った目。口の端からは涎が流れ落ちる。全身にどれほどの力を込めているのか、体の至る所で血管が浮き出ている。
考えなくても相手が正気ではないことが分かる。
魔術師たちが一斉に詠唱を開始する。最早、金切り声と言っていい程耳障りな高音を出しながら、その手に魔力の光が集束していく。
「退くわよ！」
すぐさまリアスが指示を飛ばし、それに従い一誠たちは同時に駆け出し、すぐ近くに

ある教室へと逃げ込む。

その直後、複数の魔力が束ねられた光が先程まで居た廊下の全てを埋め尽くす。光が触れた箇所は全て塵に還り、光が通り抜けた後は半壊した廊下が残るだけであった。

「おいおい……」

魔術というもの自体、見るのは新校舎のときと今回の旧校舎とで二回しかない一誠であったが、それでも放たれた魔術の威力が、新校舎のときに見たものよりも上回っていることが分かる。

逃げたリアスたちを追って魔術師たちも教室へと入り込んでくるが、入ってきた魔術師の姿を見て一同驚愕する。

目から血涙を流す者、鼻孔から血を流す者、浮き出た血管が裂けてそこから血を流す者など、どの魔術師も戦っていないのに既に流血をしていた。

「まさか、命を魔力に変換して……！」

信じられないといった様子のリアス。

足りない魔力を他で補うというのは至極当たり前の発想ではあるが、それを命で補うというのは殆ど自殺行為に等しく、並みの神経ならばまず選ばない方法である。だが、そんな自殺行為を目の前に立つ魔術師たちは躊躇うことなく行っている。

再び詠唱が重なり合っていく。先程の一撃が来ると警戒するリアスたちであったが、

詠唱とともに魔力の輝きが増したかと思えば、魔術師の一人が血反吐を吐いて床へと倒れ伏した。
　それを切っ掛けにして他の魔術師たちも耳や鼻、目などから大量の血を流し、床へと崩れ落ちて行く。
「ど、どうして？　何が起こったんですか？」
「消耗している状態で無理に魔力を捻出したせいで限界が来たのよ……命を魔力に変えるということはこういうことなの……」
　戸惑いながら口に出した一誠の疑問にリアスは、痛ましいものを見るかのような視線を魔術師たちに向けたまま答える。
　戦う以前に呆気なく自壊してしまった魔術師たちに憐憫の様な感情を抱いたのかもしれないが、すぐにそれが要らない気遣いであったことを痛感させられる。
　血塗れの床に倒れた魔術師たちの身体が再び淡い光に包み込まれる。
「まさか……」
　力無なく横たわる体に活力が宿り、四肢を使って身体を引き起こすと体にあった傷は修復され、乾いた血が体から剥がれ落ちて行く。ほんの数十秒前に見た光景。それが目の前で繰り返される。
『あ〟、あ〟、あ〟、あ〟、あ〟、あ〟、あ〟、！』

復活の咆哮を上げた魔術師たちは、目の前に立つ一誠たちに向かって再度襲い掛かるのであった。

◇

高々と開戦を告げる声を上げるとマタドールは左手をサーベルの腹に当て、柄から剣先へと向けて白骨の指を滑らす。すると剣身の周囲が歪み始めたかと思えば、剣を中心にして宙に漂う塵が集まり渦を描く。

剣身に発生した小規模の竜巻。それを纏った剣を三日月を描くようにして振るったとき、塵を集める程度だった渦は剣身から離れ、地にある砂利などを巻き上げて巨大な竜巻へと一瞬にして変貌した。

吸い込む渦が今度は外へと向け吹き飛ばす渦へと変わり、地面に転がる砂粒や石が散弾の様に飛ぶ。

カテレアは魔術によって薄い膜の防壁を造り出してそれを防ぎ、アザゼルは纏う鎧によって防ぐ必要が無い。しかし、シンは前者の二人の様に身を守る術を持たない為、飛んで来る石礫などに敢えて生身を晒す。

腕を上下に交差させ、視界を確保出来るだけの隙間を作り、尚且つ目は瞼を可能な限

り狭める。ただ決して目は閉じない。
砂粒が入ろうが、石が入ってこようが、シンはもう二度とマタドールの前で目を閉ざす様な愚行を重ねるつもりは無かった。
放たれた旋風は巻き込んだ砂や土で灰色へと染まり、それがマタドールとシンたちを隔てる壁となる。知覚が遅れる程の速度で移動が可能なマタドールの動きが全く見えないということは、反応し切れなかったこちらの動きが更に一歩遅れるということになる。
故に一瞬たりとも気を抜くことも、集中を途切れさすことも出来ない。あらゆる細やかな変化にも見逃すことが許されない。
渦巻く壁が展開されて数秒も経ってはいないが、この場にいるものには数秒も何百倍に引き延ばされた様な心境であった。
場を満たす緊張感が時間間隔を狂わす。
間を詰めるようにして攻めるのではなく敢えて間隔を開けて、相手を焦らすことにマタドールの底意地の悪さを垣間見た様な気がした。
狭めた視界で見る渦の動き。そのとき僅かに渦が揺らいだかに見えた。別段珍しいものでは無かったが、そのとき何故かシンは無意識に身体を半歩横へとずらす。
その瞬間、脇腹に熱を感じた。何故、と思い視界を向ければ、脇腹のすぐ側には銀色

に光る剣。
体中の汗腺が全て開く。剣をなぞるようにして視界をずらしていけば見えるのは白骨の手、そこから更にずらせばマタドールの姿。
渦巻く壁が今思い出したかの様に大穴を開く。巻き上がる風すらも認識することが遅れる程の神速の踏み込み、最早驚嘆すら出来ない。
シンは半ば本能的に身を捩る。それによって裂かれた脇腹から血飛沫が飛ぶが、気になどしていられない。既にその段階では無く、自分の身よりも命を優先しなければならないからだ。
身を捩る勢いのまま地を蹴り、マタドールとの距離を取ろうとするシン。だが――
（――遅い！）
マタドールの速度と比較すれば、自分は鈍足の極みとも呼べる程に動きが遅い。なまじ知覚する能力が高いために、より強く感じてしまう。
背中から倒れ込む様な格好で徐々に離れつつあるシンとマタドールの距離。その最中、シンの眼がマタドールのがらんどうの眼と合う。
眼の無い眼がこう語る、『そんなものか？』と。
剣を突き出す構えをしていた筈のマタドールは、そのまま全身の駆動が一体化しているのではないかと思える程、無駄が無く且つ滑らかな動きで体勢を変えると、避けよう

としているシンの心臓にその剣先を向けた。
追撃が来る。そう身構えたシンであった。
しかし、その追撃はマタドールの側頭部目掛け突き出される、アザゼルの光の槍によって中断される。
顔をシンに向けたまま姿勢を低くして、それを難なく躱すマタドールであったが、アザゼルはその動きを見越しており、突き出された光の槍は途中で止まり、真下にいるマタドールに向けて振り下ろされる。が、それをマタドールは剣で受け止め、そのまま刃を槍の下で滑らせながら距離を詰め、アザゼルと鍔迫り合いする形となる。
「飛べ」
片手でアザゼルの槍を押さえたまま、マタドールの左手の中に渦巻く疾風が生まれる。剣身に纏わせていた時よりも更に激しく、風の唸るような音が聞こえるそれを、開いていたアザゼルの脇腹に直接叩き込む。
「むっ？」
竜巻を極限まで圧縮したそれを鎧に触れさせた瞬間、風が爆ぜ四方に突風が吹き抜けていくものの、直撃しているアザゼル自身は地に根を張る大木の様に微動だにしていなかった。
「硬いな」

自らの攻撃を受けても動かず、傷も負わないアザゼルの鎧を見て、マタドールはそう呟く。しかし、声色には険が無く、寧ろ予想以上の硬度を持っていたことに喜びすら感じている含みがあった。

アザゼルはマタドールの技を受け切ったと同時に、鍔迫り合いをしていた部分を基点にして、股下を狙って槍の柄を跳ね上げる。

それを一歩後退しつつ半身の格好へとなるマタドール。跳ね上げられた槍の柄はマタドールの眼前を通り抜けていった。

後退したことで剣と槍は離れ、それによって槍の動きの自由を得たアザゼルは、跳ね上げられた槍を指の動きのみで一回転させながら持ち直し、マタドールの顔面中心に向け突き出す。

しかし、その動きを読んでいたのかマタドールは避けようとはせずに、アザゼルがやったように剣の柄を向けると繰り出された光の槍の先端を、直径にして数センチ程しかない柄頭でそれを防いだ。

突きを受けたマタドールは片足を軸にし、勢いに身を任せその場で一回転すると、相手に受け切った威力をそのまま返す様にアザゼルの胸部を斬る。斬撃は内部まで届くことはなかったが、黄金の鎧の胸部には真一文字の裂傷が刻まれる。

斬撃を受け、後方へと僅かに下がるアザゼルであったが、その状態のままでマタドー

ルの四方を囲むように光の槍を生み出す。
通常ならば、その挙動を見せない動きと囲む光の槍の本数に絶望を覚えるものだろうが、マタドールはそれに対し喉の奥で笑うと、四方から突き出す光の槍が身を貫く前に後退――するのではなく、前進してアザゼルとの距離を詰めた。
黄金の仮面と白骨の面がほぼゼロ距離まで接近する。覗き込むはお互いの目。その輝き、動きで次に何をするのかを刹那の時間で探り合う。
このとき最初に動きを見せたのはアザゼルの方であった。至近距離で互いの動向を探り合う中、僅かに首を動かす。
息する間も致命的な隙になる圧倒的高密度な戦いの最中で、致命的とも言える動き。傍から見ていたシンはアザゼルのその無駄な動きを見て、内心では正気を疑った。
だが、シンの悲嘆を他所にどういった訳かマタドールはその隙を狙わず、距離を詰めたものの、先程の様な鍔迫り合いを行う。
明らかに不自然と思える行動。シンの眼からして大きな隙とも言える動作に付けこまなかったマタドールの動きに、言い様の無い不安を覚える。
拮抗する両者の力。剣と槍が交わる中心でどれほどの力が集束しているのか、想像も出来ない。
そのとき唐突にマタドールが剣を離し、後方へ退こうとする。牽制も何も無いただの

後退。マタドールという存在について詳細を知らないシンではあるが、その行動には違和感を覚えた。

それを追う様にして空の手を見せる。

手首を返すという最小限の動作で掌底の先から出るのは、枝の様に細く鋭い光の槍――というよりも、針と呼称していいものであった。

一見すれば容易く折れてしまいそうな程脆弱な印象受けるそれであったが、肝心なのは見た目では無く放たれた速度である。今まで堕天使の光を見てきたシンですら、速いと感じさせる程の構築からの射出。コカビエルと比べてもなお速いと思えるものであった。

光の針が一直線にマタドールへと向かう。もしや、という考えが脳裏に浮かぶが、その期待も０．１秒に満たない間に裏切られる。

極細の光の針をマタドールは目視し、体の中心という人体にとって回避し辛い箇所をねらった最速のそれを動作の間すら分からない動きで難なく躱す。

あっさりと避けられた攻撃。しかし、本当の狙いはここからであった。

マタドールという標的を外した光の針が向かう先に立つのは、魔術を放つ構えをとっていたカテレアであった。

マタドールの体によって隠されていた光の針がいきなり現れたことで、カテレアは思

わず驚愕する。
　このとき、シンはあのとき見せたアザゼルの不審な行動の意味を理解する。アザゼルはことあろうに、あのとき目の動きでマタドールに、カテレアを狙わないか誘いを出したのだ。
　敵と敵が秘密裏に組み、第三の敵を討つ。乱戦の中では有効な手段と考えられる。
　そして、マタドールは誘いを受け、その答えとしてあの鍔迫り合いを行ったのであろう。
　どちらも戦いというものを熟知した連携。それを殺し合いの最中で行うアザゼルとマタドールの悪辣さに寒気立つ。
　最小の動きと最速の速さで繰り出されたそれをカテレアに避ける術がない。決まったとシンは思ったとき、光の針の射線上に突如として魔法陣が浮かび上がる。
　魔法陣の中に光が溢れ、中から誰かが現れようとするが構う事無く、光の針は魔法陣の中にいる人物を貫こうとする。
　だが――
「何の断りも無く呼び出して、いきなりこれか」
　その人物は最速の光の針を指先で容易く掴み取る。
「折角、ヒトが楽しんでいたというのに召喚されたときは正直、殺してやろうかと思った

が……」

魔法陣が消えると同時に中の人物の姿も明らかとなる。

龍を模した白い鎧。その姿はシンも知っている。

「こういった状況ならば大歓迎だ」

掴み取った光の針を砕き、白龍皇ヴァーリは喜色に満ちた声を出す。

悪魔、堕天使、魔人の三つ巴の戦いの中に新たな混沌が加わる。

横槍、悪化

「派手なことになっているな」
駒王学園から数キロほど離れた場所に建つビルの屋上で数人の男女が、学園の敷地内から天に向かって昇る複数の光の柱と漆黒の光を見ていた。
通常の視力ならばまず見ることなど出来ない距離である。しかし、彼らは学園内で何が起こっているのか、その詳細について把握していた。
彼らの正面には歪んだ空間が広がっており、そこには複数の映像が映っている。
校庭で突如起こった惨劇に動揺する三勢力の姿。旧校舎内で魔術師たちに襲われ、そこから逃げ始める二名と他数匹の使い魔。三勢力の軍団を一掃し意気揚々としている妖艶な女性等々。同じ時間、違う場所の光景が映し出されていた。
「にしても結局はじいさんの力に頼るのかよ。はっ！　情けねぇな！　自信たっぷりでやった結果がこれかよ！」
複数の男女の中で筋骨隆々とした男が映し出された映像を見ながら、鼻で笑い嘲笑を向ける。
「まあ仕方ないんじゃないの？　おじいちゃんがいれば大概のことはできちゃうしさ。

あー、でもそれを自分の力と錯覚してたらどうしよう」

筋骨隆々とした男の言葉に対し、嘲笑している人物への肩を持つ様な発言をする金髪の女性であったが、言葉の端には男と同じく見下すような響きがあった。

「というかここで指を咥えて見ているよりもここはいっちょ俺っちたちも参戦としゃれこみましょうぜ！　いやー、只見ているだけだと色々フラストレーションが溜まる一方なんですよー！　更に更にー、画面には俺様が殺してやりたいランキング堂々一位のイッセーきゅんと間薙きゅんも映っているじゃあーりませんか！　ここで黙って見ているのは男じゃないですたい！　――っーか殺らせろ」

そんな中、一際高いテンションで喋り続ける男。白髪に神父服を纏った青年――はぐれ悪魔祓いフリードは自らの欲望と殺気を隠すことなく曝け出す。

「あまり勝手なことを言わない方がいいよ、フリード。それに大人しく見ているという条件で連れてきたのを忘れていないよね？　……それに参戦したところで大した成果なんてだせないさ。君、あんまり強くないし」

フリードと同じ白髪をした青年。その腰には複数の剣が帯刀されている。

「あーん？　ジーク君？　もしかして僕チンの聞き間違えかなー？　今、俺のことを『弱い』って言わなかったー？　同郷のよしみでもう一度だけちゃーんと正しく言えるチャンスをあげよう！　さっきは何って言ったの？」

「腕も良くなければ耳も良くないんだね、フリード」
「はい！　殺ーす！」
　只でさえギラつくような殺気を放っていたフリードはジークと呼ぶ青年の一言で更なる殺気を周囲にばら撒き、いつでも戦う状態に持って行ける様懐に手を入れる。
「誰が誰を殺すのかな？」
　一般人ならば呼吸が止まる程の重圧と殺気を向けられても、ジークはそよ風でも受けているかのようにあっさりと流し、それどころか口元には微笑を受かべている。
「俺様がーチミを殺るに決まってんだろうがぁぁぁぁぁぁぁ！　ちょうどいいからじいさんから貰った『アレ』の試し切りをお前さんでしてやんよぉぉぉぉ！　前々から気に入らなかったんだよねーー！　俺！　てめぇのこと！　その笑い方はどこぞのクソ騎士くんを思い出すしさぁぁぁぁぁぁ！　そして何よりその髪の色！　キャラ被ってんだようらぁぁぁぁぁぁぁ！」
　今にも飛び掛かりそうなフリード。それを見たジークも何本も帯刀している剣の内の一本の柄を軽く握る。その途端、場には肌が粟立つような闘気が満ちる。
　あらゆるものを燃やし尽くすような烈火の如き殺気と、まるで最初から無いかのような静寂な闘気。対照的な気が場を渦巻き、一触即発の空気と化す。
「そこまでだ」

そんな空気の中で響く凛とした声。声の主はフリードとジークの間に割って入り、二人に手を向け制止を促す。

場に満ちる気だけで失神しそうな程であるにもかかわらず、最も濃密な気が流れる両者の間に立つその人物は、さも何も無いかのように普段通りに振る舞っていた。

漢服を羽織った青年は二人に不敵な笑みを向ける。

「俺達はあくまでここで傍観をするために来ている。傍観者は傍観者らしく大人しく事の成り行きを見守っているものだ。それに俺達は。目的はどうあれ同じ旗の下に集う仲間じゃないか。仲間同士争うのは悲しいことだぞ？」

諭す様な口調で話し掛ける漢服の青年。それを聞いて先に臨戦態勢を崩したのは、剣の柄から手を離したジークの方であった。

「君の顔を立てるよ。僕も少々大人気なかった」

そう言ってジークはフリードから顔を離し、他のメンバーと同じように映像の方に目を向ける。

「フリード、君も――」

「あー、はいはい！　分かりました分かりましたよー！　ここであんたと争っても何の得もありませーん！　大人しく鑑賞タイムを続けさせていただきますよー！」

漢服の青年が言うよりも先にフリードは懐に伸ばしていた手を引き、争う意思は無い

ことを証明するように両手を上げると、そそくさと逃げていった。
「分かってくれればそれでいいさ」
　漢服の青年が微笑み、映像が映る空間へと戻ろうとすると、その側にローブを纏う眼鏡の青年が近付き、小声で話し掛ける。
「本当に奴〈フリード〉を我らの仲間に加えていいのか？　情緒不安定な上に今の様に誰彼構わず殺意を向ける。余計なトラブルを生むかもしれないぞ？」
「そうかい？　結構、ユーモラスがあって面白いと俺は思うがな……」
　眼鏡の青年がフリードの性格を不安視するが、漢服の青年は逆にそれを良しとする。その態度を見て眼鏡の青年は溜息を吐いた。
「……お前が選んだ相手だ。俺達には分からない何かが見えたのだろう。お前はそういった点が優れているからな。分かった、この話はここまでにしよう」
　眼鏡の青年は漢服の青年を信頼し、危険分子になりえるかもしれないフリードのことについては一旦保留し、別のことを聞く。
「さっき言っていたが本当にわざわざ観る為だけにここに来たのか？　他のメンバーを引き連れて……お前の狙いは一体何なんだ？」
　その問いに漢服の青年は口の端を歪め、愉しそうな表情を造る。
「今はただ静観するだけさ。――今は、ね」

敢えて強調する言い方であったが、眼鏡の青年はそれ以上追及することはなく、そうか、と言った後漢服の青年から離れた。その行動は眼鏡の青年が漢服の青年へと示す信頼の証とも言えるものであった。

「さて、次はどう動くかな？」

期待する様に呟きながら、刻一刻と変化する映像を見詰める漢服の青年たち。

だが、この場所で傍観している彼らも知ることは無かった。この場所より遥か高く、空より遥か遠い場所で、彼らと同じく駒王学園で起こっている戦いに眼を向けている存在について。

その存在は、肉眼では見られない程離れた距離で起こっている戦いを眺めながら、短くも強い罵倒の言葉を吐き捨てた。

「馬鹿共がっ！」

◇

新校舎校庭。そこでは二つの力が衝突し、周りの魔術師たちはその被害に巻き込まれ、戦う前から脱落させられていく。

一方の力は槍を携えるセタンタ。その速度はその身を霞ませる程であり、一瞬たりと

も実体を見せない。
もう一方の力は白龍の鎧を纏うヴァーリ。神速と言える速度で突きを繰り出すセタンタの動きについていく。
セタンタとヴァーリの距離約二メートル。ヴァーリからすれば間合いの外ではあるが、セタンタからすれば槍の範囲内である。
短く息を吸い、吐き出すと共に手に持つ槍が、地に映る影すら置いて行く速度で繰り出される。その数、刹那の間に五。額、心臓、肺、肝臓、腎臓、どれもが急所となる部位を狙っていた。
ほぼ同時に迫る突きに対し、ヴァーリは頭部を覆う鎧の下でその技量に見惚れながらも、己が四肢を全て動かす。
額狙いの突きは左の拳を刃先に接触させ軌道を逸らし、次に狙われた肝臓、腎臓は右腕を盾にして防ぐ。そして肺を狙う突きをその場でやや上体を仰け反らせつつ、振り上げた爪先で柄の側面を蹴り上げ、狙いをずらす。
最後に残るは心臓。だがこのときヴァーリは避ける動作を見せず、寧ろ迫る槍を迎え入れる様に両手を広げる格好をする。
それを見た瞬間、セタンタは神速で突き出した槍をほぼ同じ速度で手元へ引く。穂先が鎧に触れるか触れないかの瞬間、槍は同じ軌道に沿って後ろに引かれて行くが、直後

先程まで穂先があった場所にヴァーリの両掌が打ち鳴らされる。
鎧を纏う両掌が衝突し合う音はそれだけで武器になるのではないかと思えるものであり、事実、その轟音を聞かされた魔術師たちの何人かは両耳を押さえて赤子のように身体を丸める。至近距離でそれを聞かされたセタンタも、他の魔術師たちほどではないがその音が少し堪えたらしく、僅かに眉間に皺が寄る。
耳鳴りを感じながら、セタンタはヴァーリと距離をとった。
それが狙いではなかったことはセタンタも分かっている。本当の狙いはセタンタの武器を破壊することであり、先程のはただ空振っただけに過ぎない。
しかし、とセタンタは内心考える。あのとき間違いなくヴァーリは自らの心臓を囮にしていた。例え白龍皇の鎧を纏っていようとも完全に防ぎきれる保証など無い。実際、セタンタはヴァーリの鎧に傷を付けている。
それだというのに、己の身を危険に晒してまで相手を攻める姿勢には、少々納得は出来ないものの、敵ながら見事と言わざるを得ない。
これでリアスや一誠とほぼ変わらない齢だというのだから、末恐ろしさを感じさせる。
「あと少しだったかな？」
挑発するような言葉をセタンタに向けるが、セタンタは答えない。

ヴァーリとの戦いが始まってからそれほどの時間が経過しているわけではないが、短い時間で濃い内容の戦いをしてきた。
最初の方はまだセタンタの槍捌きがヴァーリの動きを凌駕していたが、戦いを重ねるにつれ槍の動きにヴァーリの動きが追い付いて来ていた。
無論、まだセタンタの方も全力を出し切っている訳では無い。白龍皇の能力を警戒し、踏み込みを浅くし、間合いも必要以上にとって戦っているが、それでもこの短時間の間にセタンタの動きを観察し、それによって得たものを自らの力に還元している。
天賦の才とも呼ぶべきもの、その才を生かす為に齢に合わない程の死線や場数を踏んできたことが、槍から伝わる拳の重みで理解出来た。
だからこそ腹立たしく思う。その力や才をこの様なことに使うことが。
「そんなに愉しいか？」
「ん？」
「思う存分、戦うことがそんなに愉しいのかと聞いている」
顔が隠れていようとも全身から放たれる闘気に喜色が混じっているので、嫌でも仮面の下の表情がセタンタには分かった。
「愉しい……本当に愉しいさ。俺にとって生きることなんてどうでもいい。生きることに命を消費するぐらいなら戦いにだけ命を注ぎたい」

「その考え、長生きしないな。その身に宿る白龍〈アルビオン〉も同じ考えか？」
『ヴァーリがその生き方を願うならば私はその生き方を見守り、力を貸すだけだ』
セタンタの問いにアルビオンは迷いなく答える。
「長生きしない、か……ははは。前にも同じことを言われたよ。だがそれでもこの性は変えられないな。戦いを求め、強敵と戦う。それだけが俺を満たす」
典型的とも言える戦闘狂思考を持つヴァーリにセタンタは辟易する。単純にその思考のみならばすぐさま排除しているところだが、厄介なことにその思考の持ち主は天稟の才を持っている。思考と素質が嫌気が差すほどに噛み合っており、それ故に短い期間で異常なまでの成長を続けている。
「あなたには感謝しているんだ。あなたは強い。その強さは俺が戦う相手に求める強さだ。『彼奴』以外にもこれほどの強者が居るのを知ると、世界の広さを感じられる」
嬉しそうにセタンタの実力を褒めるヴァーリであったが、セタンタの方は褒められても何一つ嬉しくなど無かった。こうでもしなければ白龍皇という危険な存在を足止め出来なかったことは理解出来るが、結果として彼の欲求を解消する手伝いをしていると思うと複雑な気分になる。
「もっとだ！　もっとあなたの力を俺に見せてくれ！」
『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』

宝玉から声が響き、ヴァーリの全身が白いオーラによって包まれる。
それを見たセタンタは槍を握る手に力を込め、何時でも動ける状態を維持する。
ヴァーリの手がセタンタへと向けられた瞬間――
（何っ！）
眼前にヴァーリの姿があった。
瞬きなど視界を遮るようなことは一切してはいないにも関わらず、離れた場所にいたヴァーリのとの距離がいつの間にか零となっている。
既に拳が届く範囲にまで接近しているヴァーリは、セタンタの胴体目掛け拳を突き出す。何故間合いが一瞬で詰められたのかセタンタは分からなかったが、それを考えるよりも先に目の前に迫る拳に体が動いていた。
セタンタは手に持つ槍の柄頭を地面に叩き付けると同時に、その柄をヴァーリの拳の側面へと当てる。僅かな接触で軌道が逸れたのを見たセタンタは、突き立てた槍を軸にして身体を旋回させる。
ヴァーリの拳の圧を背中で感じつつ、身体を回す勢いのままヴァーリの首に踵を叩き付けた。
踵越しに伝わる鎧の感触。鎧越しでも分かる、今恐らくヴァーリの首は鋼の如き筋肉で固められており、放った蹴りなどでは決して折れはしないことを。

首筋に当てられた足にヴァーリの手が伸びるのを見たセタンタは、もう一方の足をヴァーリの胸部に叩き付け、その勢いで後方へと宙返りする。

そのまま追撃が来ることを考え、着地と同時に更に後方へと跳んだが予想は外れ、ヴァーリの追撃は来なかった。

「今のを初見で避けたのはあなたで二人目だ」

蹴られた箇所を擦りながら、動きを確認するように軽く首を回す。その動きを見るだけで全く効いていないことが分かる。

自分の技を使用してもセタンタに触れることが出来なかったヴァーリだが、悔しさなど無く、寧ろ避けられたことを嬉しがっているようであった。

セタンタはヴァーリへの注意を向けつつも、自分が今立っている位置を確認する。見間違いでなければ、そこは先程までセタンタが立っていた位置である。ヴァーリの方も良く見ると最初に立っていた位置から前進している。

つまりあの瞬間、セタンタとヴァーリは互いに急接近していたということとなる。

先程の攻撃を辛うじて回避することは出来たが、それはセタンタの方が戦う者としての経験の厚みがヴァーリよりも上回っているからである。ここから先、同じような方法で攻められるなら今の様に回避出来る保証は無い。一度でも触れられたら、その時点でセタンタとヴァーリの実力は逆転する。

こちらは一度でも触れられたら負けに繋がるが、向こうは何度も触れられようが一切問題無い。つくづく『神滅器』の能力に嫌気を覚える。
（何をした？　相手の力を半分にして自分に加算するのが白龍皇の能力だった筈だが……まだ他に能力があるのか？）

白龍皇の詳細について知らないセタンタは、険しい表情でヴァーリを睨みつける。
「なら次はこれを――」
そこまで言い掛けた瞬間、ヴァーリの足元に魔法陣が描かれる。術式の紋様からして転送用の魔法陣であった。
「こんなときに！」
明らかに苛立った声を出すヴァーリを見て、それが強制的に呼び出されたものであることを把握する。
「――また次の機会に」
憮然とした声と共に、ヴァーリの姿は魔法陣の中へと消えて行った。対象を転送したことで描かれた魔法陣も消える。
「……こうなるとはな」
魔法陣があった場所を見ながらセタンタは一人呟く。互いに実力を完全に出しきっ

てはいない為、不完全燃焼な結末であった。
だがそれにいつまでも浸る訳にはいかない。誰がヴァーリを呼び出したのかセタンタは知らない。
『グレイフィア、聞こえるか？』
通信用の魔術で新校舎内にいるグレイフィアに脳内で呼び掛ける。まだ周りには魔術師たちが居るが、セタンタの眼中には無かった。
『どうしました？　もう間もなく魔術師転送用の魔法陣の解析が済みますが』
セタンタの頭の中にグレイフィアの声が響く。
『単刀直入に言う。白龍皇は敵と内通していた』
その報告を聞いた瞬間、グレイフィアは無言であったが、動揺していることは声を聞かずとも分かった。
『――そうですか。分かりました』
次に聞いたグレイフィアの声に動揺による揺らぎは無かった。魔王の『女王』を務めるだけのことはあり、切り替えの早さは流石であった。
『こちらからも報告します。サーゼクス様は現在、魔人と交戦状態にあります』
『――そうか』
短く答えながらセタンタは視線を上空に向ける。そこでは赤い魔力の光と閃光の様

な光が衝突しては消え、衝突しては消えを凄まじい勢いで繰り返していた。
推測出来ることではあった。魔人という存在を相手にしてこちら側でまともに戦える戦力があるとすれば魔王であるサーゼクスとセラフォルー、四大天使であるミカエル、堕天使総督であるアザゼルしか居ない。
自分が仕えるサーゼクスが魔人だいそうじょうと戦っていると知り、セタンタは気持ちがざわつくのを感じるがそれを表には出さない。出せる筈が無い。
この場に於いて最もサーゼクスの身を案じているのはグレイフィアであり、そのグレイフィアが冷徹な態度を貫いているのに、自分などが軽々しく感情を表に出す訳にはいかなかった。
不安はある。だが、セタンタはサーゼクスの力を信じていた。サーゼクスならば魔人に敗れる筈が無い、と。
『そして、今回のテロの首謀者は旧魔王派であるカテレア・レヴィアタンです。彼女はアザゼル様と交戦中です』
旧魔王派。その言葉を聞き、セタンタの眉間に深い皺が刻まれる。
いつか何らかの行動を起こす。そう思い、不審な動きが無いか監視の目を光らせていたが、こういった肝心なときにそれを見逃してしまい、このような事態を招いた己の不甲斐なさに腹の奥で怒りが煮え滾る。

『貴方の責任ではありません。このようなことになったのは悪魔全体の問題です』
沈黙から何を考えているのか悟られたらしく、グレイフィアからフォローをする言葉を掛けられた。有り難いが、男としては内心を見抜かれたことに恥ずかしさも感じられる。
『すまない。――そして、現状は把握した』
転送されたヴァーリ。可能性としてはカテレアが増援として呼び寄せた可能性が高いと考えられた。ヴァーリの裏切りはまだアザゼルには知られてはいない。戦力として、またはヴァーリをアザゼルの前に出して精神的動揺を与える為に呼んだのでは、とセタンタは推測した。
『ここ一帯の魔術師たちを一掃した後、アザゼルと合流する』
『分かりました。ならば間も無くそちらに援軍が来ると思われます』
『援軍？』
その瞬間、雲の無い場所に稲光が見える。その音と轟音に魔術師たちの視線が集中したときを狙い、三陣の影が魔術師たちの間を駆け抜けていく。
影の一人、木場はその両手に持つ二振りの魔剣を素早く振り、接近した魔術師の手足を斬る。派手な流血はしているものの致命傷には遠く、斬られた魔術師たちは絶叫を上げて地面で身悶えする。

もう一つの影、ゼノヴィアは手に聖剣デュランダルを持ち、聖剣の腹を魔術師たちへと叩き付ける。単純に斬るだけでは殺傷力が高すぎる為、斬るのではなく叩くという方法で魔術師たちを蹴散らしていくが、聖なる力は無くとも客観的に見れば金属の塊であるデュランダルを叩き付けられた魔術師たちは無事では済まず、腕に叩き付けられれば腕が曲がり、足に叩き付けられれば足が曲がり、胴体に叩き付けられた者などそのままくの字になって地面を滑空し、地面を転がるころには白目と泡を吹いて気絶していた。

そして三つ目の影、イリナがその手に持つ『擬態の聖剣』を振るえば、たちまち刃が枝分かれを起こし、イリナが正面を向いたまま背後の魔術師の脹脛を抉り、それとほぼ同じタイミングで左右に立つ魔術師たちの両膝を貫く。

閃光が起こり、消えるまでの間に半数以上の魔術師たちが戦闘不能状態に追い込まれるものの、それでもまだ残っている魔術師たちがいる。

新手の存在に気付き、すぐさま魔術を唱えようとする魔術師であったが、唱えるよりも先にその首に黒い紐状の物体が巻き付く。慌ててそれを外そうとするが、途端に体から力が抜け始める。力が急速に失われていく指先では巻き付く黒い紐を外すには無力であり、そのまま完全に力を吸い取られて意識を断たれてしまった。

三人よりも少し遅れて登場した匙は自らの神器である『黒い龍脈』を操り、その力で次々と魔術師たちの力を吸い取っていく。

だが魔術師もそれを黙って見る訳も無く、匙の神器から逃れた魔術師が匙を狙い魔術師を唱える。

しかし、その魔術師の懐に飛び込む白く、小柄な姿。それに魔術師の意識が向くと同時に懐へと飛び込んだ人物――小猫の拳が魔術師の鳩尾にめり込み、腕力にものをいわせてその身体を宙に舞わせる。

五人の迅速な動きで魔術師たちの数は既に三分の一を下回っていた。目に見える早さで仲間の数を減らされていくことに焦った魔術師たちは口早に詠唱を唱えるが、それらが完了するよりも先に再び空が光、そこから発生した無数の雷に体を貫かれ、絶叫する暇も無く地に伏し、その身体から焼けた匂いと白煙を上げる。

「これで全部ですわね」

雷を放った本人である朱乃は、地面に倒れ、呻き声を上げながら悶えている魔術師たちを見ながら地面に降り立つ。

「セタンタ様、無事ですか?」

「ええ、私は無事です。そうですか、援軍は貴方たちでしたか……」

セタンタは六人の顔を見回した後、戦闘不能になった魔術師たちを見る。

「腕を上げましたね、皆さん」

「いえ、師匠にもセタンタ様にも敵いません」

「まだ、セタンタ様には及びませんわ」
「……日々、鍛練中です」
　セタンタの賞賛に木場、朱乃、小猫は謙遜した態度を見せる。
「貴女もリアス様が見込まれただけあって、良い腕をしています。この先が楽しみですね」
「ふっ。そう褒められると少しこそばゆいな」
　初めてゼノヴィアの実力を見たセタンタはその実力を高く評価する。それを聞き、ゼノヴィアは少しだけ照れていた。
「貴方達も御助力感謝します」
　イリナと匙へ頭を下げるセタンタ。それを見た匙は慌てて首や手を振る。
「いや！　そんな頭を下げられる様なことをしていませんって！　それに噂に聞くセタンタ様の実力なら寧ろ足を引っ張ったかも――」
「いえ。助けられたのは事実です。この恩は必ず返します」
　丁寧な態度でそう言われてしまうとこれ以上、言うのは失礼と考えたのか匙は『そ、そうですか』とだけ言い、そこで会話が終わる。
「あの？」
「はい？」

イリナがセタンタに声を掛ける
「魔術師たちの命、奪わなかったんですね」
「それは貴方方も同じ筈ですが？」
「直前までは裁くつもりでしたけど、事前に倒されていた魔術師たちにまだ息があったのを見て、倒すだけに留めました。正直、貴方ならば魔術師を簡単に殺せる筈だと思いますが……」
イリナの言った通り、イリナを含め木場たちは、最悪魔術師たちの殺害も考えの一つとして含めていたが、戦闘不能になっている魔術師たちの生存を確認したと同時に気絶、もしくは戦えない状態にする方針へと決めた。理由としては木場たちがセタンタが何かを考えて魔術師たちを生かしているのに、自分たちがそれを台無しにする訳にはいかないというものである。
「大層な理想や理由がある訳じゃありませんよ。場所さえ違えば私はこの魔術師たちを殺していたでしょうし」
「場所？」
「リアス様、貴方達、そして顔も知らない生徒の方々が通う学び舎を死臭で染める気にはならなかっただけですよ。只の私の独り善がりです。貴方達には気を遣わせましたね」
「そうですか。でもその気持ち、少しだけ分かります」

イリナは横目で一瞬だけ、ゼノヴィアを見るのであった。
『セタンタ、援軍は着きましたか？』
途切れていたグレイフィアの声が再度、頭の中に響く。
『ああ。十分な成果を見せて貰った』
『それならば、良かったです。こちらも相手の魔法陣の解析が済みました。これ以上の増援は――』
そこでグレイフィアの声が止まる。
『どうした？』
『これは――新たな――こちらの魔術を――利用され――罠――気を――』
突如としてグレイフィアの声に雑音が混じり始める。通信用の魔術が妨害されている証であった。
『何だ！　何があった！』
『解析――魔法陣――逆に――送られ――』
必死になってこちらに何かを伝えようとしているが、断片的な単語のせいで正確な内容が分からない。
そこに追い打ちを掛ける様に木場の鋭い声が飛ぶ。
「セタンタ様！」

グレイフィアとの会話に傾けていた意識が自分の周囲に向けられ、そこで広がる光景に僅かに目を見開く。

地面に倒れ伏し、悶えていた魔術師たちの身体が淡い光に包まれたかと思えば、見る見る内に裂かれた傷、折れた手足が元の状態へと修復されていく。それだけでも厄介であったが、傷が治り立ち上がった魔術師たちの眼は明らかに焦点があっておらず、口の端からは獣の様に涎を垂れ落としている。

そして事態を更に悪化させる様に、新たな変化が起きる。

変化が起きたのは校庭内に浮かび上がる魔術師たちを送り込んでいた魔法陣。そこに描かれた文字が生物の様に蠢き、その形を変え別の文字へと変化していく。

「リアルタイムで魔法陣を書き換えている！　それも遠隔で！」

魔術に精通している朱乃が魔法陣の変化と何が起きているのか理解し、驚きの声を上げた。

「気をつけて下さい！　恐らく転送前の場所が変更されています！　次に出て来るのは魔術師ではないかもしれません！」

変化した魔法陣。そして四方を囲む理性を失った表情をした魔術師。先程まで勝利の雰囲気から一転し、窮地へと変わっていた。

「――来ます！」

書き換えられた魔法陣から魔力光が溢れ出す。何か出て来るのか警戒する一同。別の魔術師か、あるいは怪物か、それとも別の何かか。
緊張する一同の前で魔力光が収まる。
「あ、あれ？」
が、どういった訳か魔法陣の中には何も無く、拍子抜けしたのか匙が呆けた様な声を洩らす。
だが、一瞬の間を置いて魔法陣の中から霧が突如噴き出し、一帯全てを覆い尽くすのであった。

◇

「繋がったぞ」
「ご苦労、ゲオルク」
ビルの屋上に描かれた魔法陣の中心に立つ眼鏡の青年、漢服の青年からゲオルクと呼ばれた彼はそう言って魔法陣から離れる。
「我が霧の一部は充分にあの学園を包み込んでいる。新校舎内に居る者は誰一人旧校舎には向かえまい」

「良し良し。これで整った舞台は誰にも邪魔されることはないな――と言いたい所だが、念には念を押しておかないとな。レオナルド」

名を呼ばれ前に出て来たのは集団の中で最も幼い、まだ少年と呼べる年齢の男子。レオナルドと呼ばれた少年は無言のまま漢服の青年の側に寄る。

「何十体か向こう側に送ってくれるか？」

漢服の青年の頼みに一言も喋らずに頷く。するとレオナルドの足元に映る影が人型から大きく姿を変え、魔法陣に向かって伸びていく。

そこでレオナルドは漢服の青年の顔を見上げた。

「強さはさほど必要ない。あくまで足止めに向いたしぶとい奴がいいな。対攻撃用と言った所かな？」

何を意味した言葉なのか傍から聞けば全く理解出来ない内容であったが、レオナルドは理解したのか首を縦に振る。

それを切っ掛けに魔法陣にまで伸ばされたレオナルドの影が、沸き立つ湯の様に黒い泡を出し始める。

弾けて飛び出した黒い泡はそのまま魔法陣の中に吸い込まれ、消えていく。その数は漢服の青年が先程言った数と同じ数十程であった。

「お疲れ」

漢服の青年は労う様にレオナルドの頭を軽く撫でる。撫でられているレオナルドの表情に変化は無く、黙ったままであったが、それを拒まないことから彼自身、悪い気はしないらしい。尤も反応は極端に薄いが。
「本当に良かったのか？」
「何がだ？」
レオナルドの頭を撫で終えた漢服の青年に、ゲオルグが声を掛ける。
「俺達がここに来ていることはだいそうじょうには報せてはいない。俺の霧を見ればすぐに俺達が来ていることが分かるぞ」
「だいそうじょう殿ならば笑って許してくれそうだがな。それに付いて来るなとは一言も言われてなかったしな」
冗談っぽく言いながら、漢服の青年は愉快だといった感じで笑みを見せた。それを見てゲオルクは溜息を吐く。
「自分で大人しく傍観すると言っていたくせに……」
「はははは！　ちゃんと聞いておけ、ゲオルク。　あのときは『今は』と言っていた筈だぞ？」
「分かった分かった」
如何にも生真面目そうなゲオルグは、飄々とした態度の青年とこれ以上会話をしても

無駄だと悟り、それ以上この話については追及しなかった。
「魔人と魔王。赤龍帝と白龍皇。そして魔人と魔人。折角出来上がったこれ程上等な組み合わせの戦いに、他の奴が横槍を入れるのは興醒めだ。思う存分、心行くまで戦い合ってもらおう」
そう言いながら漢服の青年は、年に見合わない覇気に満ちた笑みを駒王学園に向けるのであった。

◇

ごく短時間で両者の間にどれほどの数の攻防があったのであろうか。
周囲に遮蔽物の無い上空。そこでは一秒たりとも途切れずに、あらゆるものを滅する赤の魔力光と、あらゆる邪を祓う破魔の光が交錯しあっていた。
破魔の光を操るだいそうじょうは相手の死角を狙い、三百六十度あらゆる角度に破魔の陣を描き、そこから破魔の光を顕現させる。それも一つや二つなどでは無く、一度に数十もの陣を生み出し、逃げ道を完全に封じる。
並どころか上級の悪魔ですら、それを見た途端心を折られ、自らの生を諦める光景を見ても、陣に囲まれたサーゼクスは顔色も表情も変えず、冷や汗すら流さない。自分を

囲む破魔の陣の位置を正確に判断すると同時に、両手から集束させた滅びの魔力の球体をその陣に向けて放つ。
放たれた魔弾は正確に幾つかの陣の核となっている部分を撃ち抜く。それにより完全に塞がれていた逃げ道が一部開き、サーゼクスは開けた場所から抜けると直後、さっきまで居た場所に多方から破魔の光が襲い掛かっていた。
破魔の囲いから抜け出したサーゼクスはすぐさまだいそうじょうに向け、魔弾を放とうとするがそれよりも先にだいそうじょうが動く。
「破ッ」
数珠を持つ手を突き出した瞬間、見えざる衝撃がサーゼクスの全身を叩く。勢いで木の葉の様に吹き飛ばされるサーゼクスであったが、飛ばされながらもその眼はだいそうじょうから離れず、錐揉みした状態で魔弾を放った。
どれもが意志を持った様に複雑な軌道を描いてだいそうじょうへと襲い掛かる。
「喝」
だが、だいそうじょうが言葉を発した瞬間、破魔の光がだいそうじょうの周囲を包み込む。
赤い魔弾が破魔の光の膜に触れると、滅びの魔力で容易く触れた部分を消し去る。しかし、だいそうじょうが展開する光の膜は一枚や二枚などという生易しいものではな

く、何百という層を造り上げていた。
破魔の力と滅びの魔力。対抗する力としては相応しいかもしれないが、結局の所、滅びの魔力は悪魔の力である。サーゼクスの力がそれら全てを滅するにはサーゼクスとだいそうじょうの力とは相性が悪く、力業で超え様にも両者の力に差は無い。故に放たれた魔弾もやがて破魔の力を消滅しきれなくなったのか、光の膜の三分の二程を貫いたときに自壊してしまった。
「怖い怖い。ここまで入り込まれるとはのう」
一度展開すれば、魔に属するものならば決して踏み込むことも出来ない絶対的な領域に深く侵入してきたことに対し、だいそうじょうは賞賛に似た言葉をサーゼクスに向ける。
対するサーゼクスは羽を器用に動かし、体勢を整えると油断無く構える。全身に魔力を纏っていた為、サーゼクスもまた無傷であった。
「もう少し『本気』であったのならば危なかったかもしれんのう」
内心を見透かす様な言葉にサーゼクスは、表面上は無反応であったが心臓の鼓動は僅かに早まる。
だいそうじょうの言った通りサーゼクスはまだ全力を出し切ってはいない。否、出せなかった。

仮に全力を出す様な真似をすれば、この学園を結界ごと消し去り、そのまま街ごと滅ぼしかねない。更にサーゼクスが本気を出せば必然的にだいそうじょうもまた本気を出すのは間違いなかった。

今は抑えた実力のサーゼクスに合わせてはいるものの、魔人であるだいそうじょうが全力を出せば、この街に住む人々を一瞬にして昇天、もしくは呪殺することなど容易い。

「わざわざこのような高い場所で戦うのも単に周りの被害を最小限にするためであろう？」

「やれやれ――老獪とはこのようなことを言うのかな？」

目論見を全て見抜いた上で敢えて相手に合わせるだいそうじょうに、サーゼクスは苦笑を浮かべる。

自分の戦い方に付き合ってもらう点では有り難いが、逆に言えば、だいそうじょうがその気になればいつでもこの戦いを破綻させることが出来る。

戦いの主導権がだいそうじょうの手に握られつつあった。

「いつまでも小技で攻めたところで拙僧には届かんぞ？」

「ふむ。――ならこれはどうかな？」

その瞬間、自壊し漂うだけであった魔弾の残滓がだいそうじょうの死角で急速に集まり、再び球体を形作る。

「む？」
だいそうじょうもそれに気付き、再び破魔の光で自身を包もうとするが、その展開よりも魔弾の方が速さを上回っていた。
背後から撃ち出された魔弾はだいそうじょうの肩部に触れた瞬間、拳程の大きさからだいそうじょうの身体を呑み込まんと一気に膨張する。
赤い魔力に触れた箇所から消失し、だいそうじょうの肩から腕にかけて消滅の魔力の中へ消えていく。
体の半身が消え去り、残りの半身も消し去ろうとするがそれよりも速く、だいそうじょうの姿が消える。
すぐさま消えただいそうじょうの姿を眼で追う。消えただいそうじょうはサーゼクスから十数メートル程距離が離れた場所に居た。
「不覚。拙僧も耄碌したかのう」
片腕を失っただいそうじょう。しかし、その声に動揺など全く無い。
「恐るべき精緻な力の操作。感服する」
例え己の魔力であろうと一度その身から離れれば、それを操作するのは至難の業である。だがあろうことかサーゼクスは遠隔で散った魔力を操り、それらを再び形にするという離れ業を、実戦の場で容易く行ったのだ。

「しかし――」

だいそうじょうは独鈷鈴を鳴らす。涼やかな音色と共にだいそうじょうの身体は淡い光に包まれた。すると消失していた部分が時を逆回しにされたかのように修復されていき、最後には元の数珠を握る白骨の手へと戻っていた。御丁寧にも黄衣の袖まで元に戻してある。

「拙僧の命を絶つには程遠い。狙うのであれば次はここにするべきじゃ」

だいそうじょうは自らの額を指先で叩く。

悪魔にとって毒そのものである破魔の力を自在に操り、重傷と言える傷を即治癒する力。底知れない相手だということは分かっていたが、これほどまでの力を難なく操るだいそうじょうという存在を前にし、サーゼクスは改めて魔人の強大さを知らしめられる。

並の精神ならばこの時点で心を折られているかもしれない。だが、魔王という悪魔を導く立場にあるサーゼクスの心には、魔人に対しての怯み、恐れなどは一切湧かない。寧ろその力を知り、相手を自分が引き受けていることに安堵すら覚えていた。少なくとも自分が魔人の相手をしている限り、その力の矛先が他に向かうことが無いと。

しかし、事態は常に動いていく。それもサーゼクスが望まぬ方向へと。

「――ふむ」

微かな呟きと共にだいそうじょうの身体が、一瞬ではあるが硬直した様な動きを見せた。その動きにはサーゼクスも見覚えのあるものであった。
脳内に念話が飛ばされたときの動きである。
「世話が焼ける」
だいそうじょうは再び独鈷鈴を鳴らし、その音色を響かせる。今度はだいそうじょうの身体は淡い光に包まれない。
ならばその音色は誰に届けたものなのか。
途端、サーゼクスは宙に無数の魔弾を生み出し、それら全てをだいそうじょうに向けて放つ。
だいそうじょうは独鈷鈴を奏でたまま短く呟くと、だいそうじょうを中心として四角に破魔の陣が描かれ、それらが光によって結びつき四角状の破魔の光を生み出す。
破魔の柱に魔弾が衝突するが、今度は滅びの魔力を以てしても奥へと侵入することが出来ない。滅びの魔力の力は確かに機能しているが、消滅した部分から即座に光が溢れ出し、抉られた傍から修復されていく。
より強固な結界の中に身を潜ませるだいそうじょう。放った魔弾も破魔の光を消滅し切れずに次々と消失していく。
「今、拙僧が何をしているのか。聡明なる汝ならばすでに気付いているであろう？」

サーゼクスの内心を見透かす様な声。だいそうじょうが言った通り、サーゼクスは奏でられた独鈷鈴の音色に魔力の波動を感じ、それが新校舎、旧校舎へと向けられていることを察知していた。

あれほどの傷を瞬時に治す程の治癒能力。それが広範囲に渡って送られている。未だにリアスたちが戦っている状況を考えれば、最悪な援護である。

一体どれほどの数の魔術師たちがだいそうじょうの力で戦線へと戻るのか。流石に死人までは蘇らせないとは思うが。

「カカカカ。拙僧の力で戻せるのはせいぜい三途の川の手前までよ。渡る者、向こう岸に居る者までは引き戻せん」

こちらの心を読んでいるかのようにだいそうじょうが語る。つまりは死んでいる様に見えても、場合によっては復活させることが可能だということである。

「現に今、呼び戻せたのは半数程度。残りは魂が既に黄泉の国へと旅立っておる。……あの狂人め。相変わらず手だけは早い」

感情の色を感じさせなかっただいそうじょうの声に侮蔑の色が混じる。そのことにサーゼクスは疑問を抱くと同時に、『狂人』という単語が耳に残る。

少なくともこの会談の場において、だいそうじょうが『狂人』と呼ぶ人物に心当たりは無い。

誰のことを指しているのか問おうとしたとき、サーゼクスの背筋に悪寒が駆け上がる。

まるで脊椎に氷柱を突き刺された様な感覚。それはかつてサーゼクスが体験した記憶のあるものであった。

「まさか……！」

サーゼクスの視線が悪寒のする方へと向けられる。その先にあるものは旧校舎。一誠とリアスがシンとギャスパーを救出に向かった場所である。

「こんなときに！」

初めて焦りに近い表情をサーゼクスが見せる。しかし、それは無理も無いことであった。最愛の妹の向かった先に最凶とも呼ぶべき敵が居る。

その焦りを加速させるように旧校舎から高速で飛来する物体。魔力で出来た銛と思わしきもの。それを見た瞬間、サーゼクスの不安は確信へと変わった。

空を裂きながら飛ぶ赤い魔力で形成された銛はサーゼクスの側を駆け抜け、その先に座すだいそうじょうに襲い掛かる。

赤い銛が破魔の光に触れた瞬間、雷鳴の様な轟音を空に響き渡らせ、互いの力が反発し合う。

銛の先端がだいそうじょうの結界へと喰い込んでいくが、そうはさせまいと破魔の力

がそれを押し返そうとする。拮抗する両者の力は火花のように周囲へと散り、その余波だけでも悪魔、天使、堕天使問わず滅せられるものであった。

それを最前線で見ていたサーゼクスは絡み合う二つの力を眩しそうに目を細めて見ていたが、やがてその拮抗が収まっていく。

結界に突き刺さった銛が徐々に魔力を失い、形を崩し始めていき、やがて塵の様な魔力の残滓を残しながら消えていった。

「誰彼構わず噛み付く癖は相変わらずのようだ」

銛の一撃を防ぎ切っただいそうじょうは蔑む言葉を吐く。

だいそうじょうに注意を向けながらも、サーゼクスは今にでも旧校舎へと駆け付けたい衝動に駆られていた。

魔人一人でも脅威だというのに現在、この学園内にはもう一人の魔人が存在している。そして、その魔人の実力はサーゼクス自身が身を以て知っている。

「マタドール……彼までもが来ているのか……！」

「その口振りからして顔見知りか？　ならば御愁傷様と言わせて貰おう。あの様な狂人に目を付けられて益などありはしないからのう」

もう一人の魔人マタドールの存在を知り、事態がより最悪な方へと向かっていることを認識したサーゼクスは、苦いものを含んだ様な表情となる。それに対し、だいそう

じょうはサーゼクスとマタドールが知り合いであることを知り、心底同情した台詞を言う。
「――貴方が彼を喚び寄せたのか？」
「冗談でもそのようなことを言わないでもらえるかのう。アレと同類であること自体、拙僧にとっては恥そのもの」
露骨な嫌悪を見せるだいそうじょう。
魔人が初めて表舞台に出て来たとき、壮絶な殺し合いをした話は有名である。仲が良いなどとは思ってはいなかったが、ここまで険悪な仲であることを初めて知る。
「――まあよい。認めたくはないが奴がここに来た理由は拙僧と同じ。同類で在るが為に新たな同類を拝見しに参った。もっとも拙僧は顔を見る程度で終えるつもりだったが、彼奴はどうやらそうではないらしい」
新たな同類。それを聞き、サーゼクスが思い浮かべる人物は一人しかいない。
「……彼に会いに来たのが本当の目的か」
「左様。正直、新たな魔人が生まれるなど全く思ってはいなかったのでのう。年甲斐も無く好奇心に駆られてしまった」
どうする、とサーゼクスは自身に問う。先程まではだいそうじょうの足止めに注力すれば良いと考えていたが、だいそうじょうと同じ脅威が現れてしまい、そのような考え

はもう出来ない。
魔人ほどの存在を相手に出来るのは自分以外でミカエル、アザゼル、セラフォルー、ヴァーリぐらいしかいない。その内、ミカエルとセラフォルーは学園の結界の為に動くことも出来ない。
脳が熱を帯びる程に思考を加速させ、一に満たない秒数の間に現状を打破する策を考えるサーゼクスであったが、目の前に座す魔人はその刹那すら与えない。
「辛いのう……魔王という立場は。治める者としての責任と重圧。伸ばし、救える手の広さは決まっているのというに皆がその手を求める。果ては無く、間違いは許されず、自身を救う手も無い。辛いのう、哀しいのう、憐れだのう」
与えられる同情の言葉。他者が聞けば心の底からサーゼクスという存在に同情を抱いていると思わせる程に真摯なものであったが、聞かされているサーゼクスにはとっては神経を逆撫でする煽りそのものであった。
「――何が言いたい」
「救われぬ汝を拙僧が救おう。我が救済によって」
だいそうじょうの白骨の手を重ね合わせ合掌の構えをとる。この戦いが始まってから初めて構えらしい構えを見せた。
「下で戦っている魔術師たちには我が祈り以外にももう一つ術を施してある。その術が

最初に汝から『魔王』という己を縛る枷を外すこととなるであろう」
合掌するだいそうじょうの身体から魔力が迸り、空一帯を埋め尽くしていく。
「己の裡を曝け出すがよい」
煩　悩　即　菩　提

◇

魔法陣から噴き出した霧が瞬く間に周囲を霞ませていく。
漂う白い霧に触れるとそこから生温かい感触が伝わり、それと同時に魔力も伝わってくる。
明らかに自然現象で発生したものではない霧にセタンタたちは警戒を強める。
「本来なら一か所に固まるのは危険ですが、この得体の知れない霧の中で孤立する方がもっと危険です。なるべく離れない様に」
霧が周りを包み込んでいく中でもセタンタは冷静な指示を出す。その冷静さは謎の霧を前にして多少なりとも動揺している他の者にとって有り難いものであった。
「それにしてもこの霧は……」
「あまり当たっては欲しくはないですが、一つ心当たりがあります」

「セタンタ様はこの霧が何か分かるんですね？」
「検討はついていますが――その前にゼノヴィア、一つお願いがあります」
「何だ？」
「貴女のデュランダルでこの霧を吹き飛ばせるか試してはくれませんか？」
「心得た」
セタンタに頼まれ、ゼノヴィアはデュランダルを頭上に掲げ、上段の様な構えをとる。
「ふん！」
気合と共に振り下ろされたデュランダルの剣身から聖なる波動を纏った斬撃が放たれ、校庭を深く抉りながら形の無い霧を裂いていく。それに巻き込まれる形で蘇った魔術師たちも宙に飛ばされていく。
「むっ」
斬撃を放ったゼノヴィアから驚く様な声が漏れる。聖剣の中でも最高峰にあるデュランダルの斬撃。ゼノヴィアが未熟な為に完全の制御は出来ず、斬撃からは縦横無尽に聖剣の波動が撒き散らされているが、漂う霧はそれを受けても霧散はせず、波動を透過し何事も無かった様に漂い続ける。
「うそ……デュランダルで吹き飛ばせないなんて……」
聖剣の力を良く知るイリナは目を丸くする。ただの霧であるならば、斬撃の余波だけ

でもこの学園全体を覆い尽くす程度なら軽々と消し飛ばせる。
「どうやら私の考えていた通りのようです。この霧は『神滅具』の一つ、『絶霧〈ディメンション・ロスト〉』」
神滅具の名に全員が戦慄する。身近にそれを扱う人物が居る為、より衝撃が強くなる。
「『絶霧』の霧が満ちた空間を操るというのを聞いたことがあります。――恐らく私たちはこの霧の中に閉じ込められています」
それを証明する様にセタンタは足元に転がる石を槍の柄で後ろへと弾く。それから間もなくしてセタンタの足元に向かって真横から何かが転がり、爪先に当たって止まる。それは後ろへと向けて飛ばした筈の石であった。
「完全に空間を捻じ曲げられているみたいですね」
事態を重く見て、セタンタの眉間に深い皺が刻まれる。
周りから隔絶され、四方を正気を失くした魔術師たちに囲まれる。どう見ても劣勢な状況。
だがその最悪は更に加速していく。
霧が噴き出してきた魔法陣が更に輝く。再び何かが転送される予兆であった。
身構える一同。やがて魔法陣から出て来たのは黒く丸まった複数の物体。

バスケットボール程度の大きさで、艶の無く、コールタールで出来ている様な黒一色に染まった球体が、魔法陣の中から転がり出て来る。

「何だありゃあ？」

思わず拍子抜けした様な声を洩らす匙。だがそれもすぐに驚きへと変わる。

転がり出て来た球体が一斉に形を変え始める。最初に変わったのは大きさであった。体積が二倍、三倍と膨れ上がり、やがて二メートル近い大きさへとなる。膨張した黒い球体の複数の部分が隆起し始めるとそれが手足を形作り、完全に生え切ると四肢を突いて身体を起こす。

眼、耳、鼻、口どころか頭部すらなく、胴体に手足を生やした異形。まるで、幼子が作った粘土細工の様な見た目をしている。大きさも足が生えたせいで今は三メートル近くあった。

冥界に住む生物などについて詳しいセタンタですら初めて見る生物である。

黒い異形達は形が整えられると同時に、セタンタたちに向かって一斉に歩み寄って来る。

「ここは僕が！」

如何なる相手か見定める為、木場が先陣を切って前に飛び出す。

感知する器官を持っていないが、何らかの方法で木場の接近に気付いたらしく、黒い

異形は手を振りかざす。だが、その動きは木場と比べれば緩慢そのものであった。
最も近い位置にいる異形に接近した木場は、二本の魔剣を異形の身に斬り付ける。が、斬り付けた瞬間木場の表情に僅かな驚きが混じる。
足に刃を喰い込ませるとそのまま刃を滑らせ、胴体まで走り最後には刃が突き抜けていく。異形の胴体は大きく裂かれ、そのまま左右に分かれた。
しかし、それを見ても木場の顔からは警戒の色は消えない。
すると分かれた断面部分から黒い触手のようなものが伸び、それらが互いに絡み合うと断たれた部分が引き寄せられてくっ付き、切断面も綺麗に消える。
それを見て木場はやはり、と納得した。刃を喰い込ませた瞬間、伝わって来たのは手応えの無さであった。水、あるいは薄紙を斬るよりも抵抗感は無く殆ど力を入れずに斬れてしまった。
最初から防御など考慮していない体の造り。剣などの物理攻撃では効果が薄いと悟った木場は、距離をとりながらすぐに次の行動を起こす。
「朱乃さん！」
名を呼ばれた朱乃はすぐに木場の意図を察し、魔力を高めると異形達の頭上に閃光が奔る。
「雷よ」

朱乃の言葉と共に異形達の脳天に落雷が降り注ぐ。直撃すればまともに動くことが出来ない朱乃の雷撃であるが、異形達に痛覚は無いらしく、雷撃を浴びたまま鈍い足取りで動き続ける。

高電圧と高電流でその身はやがて表面に泡が立ち始め、白煙を上げながら焼け焦げていくが、表面の焦げた場所から剥がれ落ち、その下から無傷の部位が現れる。破壊と再生を繰り返しながら着実にセタンタたちに接近をしていた。

その周囲では魔術師たちも魔力を火花の様に散らし、いつでも魔術を唱えられる状態となっている。

「どうしますか？」

朱乃がセタンタに戦いの指示を仰ぐ。セタンタは僅かに顔を俯かせ、朱乃たちに表情を見せないまま、それぞれがどう動くか簡潔ながらも適切に指示を出した。

俯くセタンタに若干、訝しむ様子を見せる朱乃たちであったが、すぐに各々に与えられた行動に移る。

セタンタは朱乃たちが動くのを見て、巻いているマフラーの位置を上にずらし顔を殆ど隠す。そうでもしなければ、朱乃たちに自分の今浮かべている凶相を見せてしまう為であった。

喋り方から、セタンタは冷静かつ穏和な人物であるという印象をよく受けられるが、

実際はかなり頭に血が昇りやすい性格をしており、自分でもその気性について自覚していた。
敵の襲撃、ヴァーリの裏切り、援護の妨害、度重なる出来事にセタンタの怒りは溶岩の如く煮え滾っている。
マフラーの下、威嚇する様に犬歯を剥き出しにしながら口を歪める。
怒りで滾る熱を抜く為に重く、深い呼吸をする姿は、さながら『猛犬』のようであった。

◇

「ははは！　急に呼ばれて来たが面白い！　マタドール！　何時の間に来たんだ！　アザゼル！　その鎧は初めて見る！　まさか禁手化か！　やっぱり凄いな！　アザゼルは！」
「……チッ。こんな状況下で反旗か、ヴァーリ」
「そうだよ、アザゼル」
アザゼルの光の槍をその手で砕いたヴァーリが地に降りる。
「……お前が状況を見て寝返るなんて思っちゃいない。いつからこいつらと繋がってい

た？」
「コカビエルのときに受けたんだ。協力という形で」
「目的は何だ？　自分の力を存分に試す為か？」
「そうだよ。よく分かっているじゃないか、アザゼル。『強くなれ』、俺はその言葉を実践しているんだ」
「その後に『世界を滅ぼす要因だけは作るな』とも言った筈だが？」
「覚えているよ。だが強くなるにはそんなことは必要ない。俺は俺の性を縛り付けるつもりはない」
「――本気なんだな？」
問うアザゼル。それに応じる前にヴァーリの全身が輝き、纏っていた鎧が解除され、ヴァーリの顔が露わになる。
「ああ。本気だ」
敢えて素顔を晒したのは、自らの意志に嘘偽りなど微塵も無いことを示す為なのであろう。仮面越しに言えば万が一にも何か別の考えがあるのではないかという思いを全て断ち切る為に。
「――そうか、分かった」
言葉は短く、含ませる感情も希薄。だが仮面で覆われたその顔が今、どのような表情

を浮かべているのか、誰にも分かることなど出来なかった。
ヴァーリはそのまま視線を周囲に向ける。
「赤龍帝は居ない、か……だが近くには居る」
「あいつが目的か？」
シンがそう聞くと、ヴァーリは一瞬質問の意味が理解出来ていないかのようにキョトンとした表情をするが、すぐにそれが笑みに変わる。尤もその笑みには嘲りが含まれていたが。
「白龍皇だから赤龍帝と戦うってやつかい？　正直、この因縁というのは俺には鬱陶しく感じるんだがな」
露骨なまでに興味が無いという態度を見せる。
「少し調べて見たら現赤龍帝というのは両親が魔術師だったとか特殊な能力が有った訳でも無い。育ちも普通、環境も普通、そこから出来上がった奴は当然普通でしかない。とことん普通だ。そんな相手に因縁を持ったり、興味を持つ方が難しい。本音を言えばとっととその因縁を断ち切って次の赤龍帝に期待した方がまだ愉しめそうだ」
一誠を完全に下に見た発言。それを言うに相応しい程の実力をヴァーリが持っていることを、シンは直感で感じていた。
だが、それでも口に出さずにはいられない。

「断ち切れるなら断ち切ればいい――出来るならな」
「――へぇ、キミは俺にそれが出来ないと？」
「さあな。ただ言えることがあるとすれば、あいつはしぶといぞ」
　それを聞いたヴァーリは不敵に笑う。既に嘲りは消えていた。
「なら少しだけ期待するとしよう。――その前にこの前にも言ったが、俺はキミにも興味があるんだ」
　目に好戦的な色を浮かべる。ヴァーリが自分に狙いを定めたのをシンは感じ取った。
　だが、その視線を遮る様に両者の間に銀の剣身が割って入る。
「ヴァーリ、済まないが彼は私の獲物でもある。貴公であれど譲る訳にはいかないな」
「順番なんて関係あるのか？　こういうのは早い者勝ちの筈だ。――所で」
　顔見知りなのか妙に親しげに言葉を交わす二人であったが、突如ヴァーリは不機嫌そうに目を細める。
「何で手を抜いているんだ？　俺のときはいつも『全力で来い』と言っているのに……」
「別に手を抜いているつもりなど無い。貴公は知らないが私はこういう戦い方もする」
「『アレ』を出していない時点で俺には手抜きにしか見えない。とっとと出せ。今のあんたを倒しても面白くも何ともない」
　ヴァーリは魔人相手に臆さずに物を言う。言われているマタドールは特に気を害し

た様子も無く、子供の我儘でも聞いているかのように軽く肩を竦めた。
「生意気に育てたな、アザゼル」
「知るか、気付いたらこうなってたんだよ。――それに生意気度合じゃあ、お前も似たようなもんだろ？　こっちを舐めて余裕を残して戦ってるんだから」
「誤解の無いように言っておくが、私は常に真面目に戦っている。余力を残して戦っている様に見えたのが腹立たしいかね？　ならその怒りを私に向ける前にその余裕を消し去ることの出来なかった自分の不甲斐なさに怒りでも向けたらどうだ？　それとも本当に貴公らを舐めて戦おうか？　私とてそれぐらいの『遊び心』はある」
「そうしてくれるとこっちも楽だな。それにこっちが勝った後、お前を指差して腹を抱えて笑えられる」
　その後もお互いに相手の神経を逆撫でするような挑発の言葉を交わす。傍で聞いているシンですら腹の奥が熱くなる程怒りを覚える言葉が飛び交うが、それでも両者とも声質が一切変化しないのは流石としか言えない。
「で？　出す気になったのか？」
　挑発の言い合いにヴァーリが口を挟む。
「――貴公が望むのであれば、その期待に応じるとしよう」
　マタドールはそう言って目線をアザゼルからシンへと向ける。

「出来れば貴公の強さをもう少しだけ見たかった……だが、それもここまでだ」
マタドールの右手が何もない筈の宙を掴む。その瞬間、滲み出る様にして現れる左右に伸びた金属の棒。変化はそれだけに留まらず、今度は金属棒から広がり、現れる一枚布。染み一つ無く、鮮やかな赤一色。
マタドールの姿を見たときから何かが足りないと思った。闘牛士が戦うときに欠かせない、命を絶つ為の剣、そしてもう一つ、あらゆる猛攻をいなす闘牛士の代名詞ともいうべきもの、それは――
「――赤のカポーテ」

巨象、因縁

「――赤のカポーテ」

風で靡く一枚の赤い布。ヴァーリが出せと言ったアレの正体がこれである。

何のことは無い。ただ闘牛士が迫ってくる牛の注意を引く為に使用する道具。仰々しく出した割には何の変哲も無い布切れに過ぎなかった。

（――と思えればどんなに楽か）

口の渇きに反して背中が汗で湿っていくのが分かる。悟られない様に抑えているものの、気を抜けば全身が小動物の様に震えそうになってくる。

マタドールがカポーテを取り出した瞬間、場の空気に変化が起こった訳では無い。威圧感が増した、恐怖が増した、纏う魔力の量が増した、などという分かり易い変化は無かった。

ただ、シンの眼には剣を構え、カポーテを構えるマタドールを見た瞬間『完成』という言葉が脳裏に浮かんだ。

武術や剣術などの達人が見ればマタドールの構え自体、無駄の多いものに見えるかもしれない。しかし、それでもマタドールの立つ姿はあまりにも絵になった。芸術などの

嗜好を持たないシンですらその姿に、場違いではあるがこう思ってしまう。
「相変わらず格好いいな、その姿は」
シンの内心を代弁するかのように、構えるマタドールの姿を見てヴァーリはそう評する。このときのヴァーリは年相応といった笑みを浮かべていた。
絵画や彫像といった煌びやかなものでは決してない。しかし、マタドールの構える姿は見る者の心を震わす、言葉に出来ない何かを放っていた。
「その称賛、有り難く受け取っておこう。尤も手を抜きはしないが」
「不要さ、そんな気遣い。それに本気で思っていることを口にしただけだ。この世で俺が尊敬するはあんたと――」
ヴァーリは横目でアザゼルの方を見る。
「アザゼルぐらいなものだからな」
「……戦う前に嫌なことを言うぜ」
シンは小声でボソリとアザゼルが呟くのを聞いた。アザゼルとヴァーリがどのような関係であるかは知らないが、少なくとも顔見知り以上の関係であることは分かっている。ヴァーリの方は完全に割り切って戦うつもりらしいが、アザゼルの方は若干ではあるが躊躇している様であった。
「……別に手を出すなとは言わないが、手を出すなら出すでちゃんとしろよ。つまらな

い戦い方は俺は嫌いだ」
　ヴァーリは目を向けることなく、カテレアに素っ気なく声を掛ける。この戦いで蚊帳の外に追われていたような心境であり、碌に言葉を挟むことが出来なかったカテレアは、急に話しかけられたことで一瞬硬直するが、すぐにヴァーリの言葉と態度に頬を怒りで紅潮させる。
「貴方の血とその本質は理解していますし、この作戦の準備などをしてくれたことにも感謝しています。――ですが、私は貴方のように戦いを楽しむような性分ではありません。私、いえ私たちにはするべき使命があります」
「ああ、そう」
「……乱戦となれば真っ先にアザゼルの命を狙います。終われば早々に離脱し残りの勢力のトップも。私は遊びに来た訳ではないので」
「別にそれでいいよ」
　あっさりと認めるヴァーリにカテレアは黙ってしまう。仮にも自分の育ての親の命を狙うといっているのに、まるで他人事であった。元より薄情な性格なのか、あるいはカテレアではアザゼルは倒せないというアザゼルへの信頼か。
「俺はこの戦いが少しでも楽しくなればそれでいい」
（この戦闘狂め……！）

　このような事態でも純真な輝きを目に灯すヴァーリを見て、カテレアは内心でそう吐き捨てた。白龍皇としての力、そしてヴァーリの身に流れるカテレアたちにとっては特別な『血』、その二つがなければとっくの前に危険因子として滅ぼしているところである。
「ははははは。血が滾るか、ヴァーリ！　それでこそ私が見込んだ存在！　血と戦いの先で得ることの出来る勝利の甘美さを理解出来る者！　この場に満ちた血と殺意のニオイ。肌が粟立つ気分だ！　尤も私には皮膚どころか血も肉も無いがな」
　マタドールは顎をかたかたと震わせて笑う。漂う血のニオイも他者が向けてくる殺意や殺気も、己の精神を高揚させる為のものに過ぎないと言わんばかりに。
　この場に於いて戦いに狂った者が二人居た。
「禁手化〈バランス・ブレイク〉」
　その言葉を静かに口にすると白光がヴァーリを包み込み、その下から白の全身鎧が現れる。ヴァーリもまた戦う準備を完了させていた。
　皆が戦う準備が整った途端、場に痛いほどの沈黙が流れる。先程のように軽口を言い合っていたのが嘘の様に思える程、余裕の無い空間であった。
　それぞれがいつでも動く準備は整えている。マタドールは完全に相手の出方を窺う待ちの姿勢であり、ヴァーリの方もそんなマタドールに合わせているのか、構えたまま

周囲を見ている。
カテレアはいつでも最上級の魔法を放つ準備を密かに行っているものの、その一撃でこの場に居る全員を葬るのは不可能であると考えており、魔法を放った直後の無防備な隙を狙われないかを危惧し迂闊には動けなかった。
シンはこの中で自分の実力が最も劣っていることを自覚している。故に一瞬たりとも集中を途切れさせることは出来なかった。カポーテを構えるマタドール、ヴァーリの言葉を信じるならば、次に見せられる戦い方こそがマタドール本来の戦い方ということとなる。先程までと同じ戦い方を意識すれば命を失う危険がある。
そして、新たに乱入してきたヴァーリの実力も未知数であった。コカビエルのときにその実力の片鱗を見たが、全力には程遠い。触れた相手の力を半減させて自分の力に変えるという、長引けば長引く程ヴァーリが有利になるという能力を持っている。とはいっても、そんな能力を使用されなくとも自分とヴァーリが戦えば、向こうの方が上回っているのは分かっていた。
なまじ相手の実力が感覚で分かるだけに、今の自分の状況が如何に絶体絶命的なものであるかが分かってしまう。自分にとっては何一つ有利の無い状況、唯一頼れるものがあるとすれば隣に立つアザゼルの実力という他人任せなものだけに、自分の力の無さを実感してしまう。

だがそれでも生き延びねばならない。自分の命を簡単に諦める程、己の生を全うしたつもりは無かった。

アザゼルもまた、マタドールとヴァーリの動きを最重視しつつ、カテレアから意識を逸らさない。自分が全身全霊を賭せばマタドール、ヴァーリのどちらかに致命傷を与えられることが出来るかもしれないとは考えるが、それはあくまで周りの妨害が無かった場合である。魔人と白龍皇、どちらと戦うにしても片方に完全に意識を集中させなければまず勝てない。この戦いに於いて刹那の油断も命取りになる。

どう攻めるか。そのことに思考を巡らせていたとき、爪先に何かが触れる感触に気付く。悟られない様に視線を下に向けたアザゼルが見たのは、鎧の爪先にほんの少しだけではあるが差していた影。しかし、光源の向きからして不自然と呼べる影。しかもよく見ればその影は、シンの影の一部が伸びて出来たものであった。

アザゼルは思わず声を出しそうになる。

（こいつのことをすっかり忘れていたな……）

コカビエルでの件でマダが詫びの証という意味で残してきたソレ。当然ながらアザゼルはその正体について知っている。

今度はシンの方を見た。シンの意識はヴァーリたちに向けられており、アザゼルの方に意識を回す余裕を感じられない。

（……お前、まさかまだこいつに自分のことを教えてなかったのか？）

心の裡で喋りかけると、アザゼルの頭の中に動物の嘶く声が響く。

（きちんと姿見せて名乗れよ。……一回手を貸せば、はい、終わりな訳無いだろうが）

再び響く鳴き声。それを聞いて戦いの場であるにも関わらずアザゼルは肩を落としそうになる。

（面倒だからじゃないだろうが……最初から出てればこっちの戦力が一つ増えていたって言うのに……まあいい、この状況を利用させてもらう。出来るな？――眠い、じゃねぇ！）

足下に這い寄る影と頭の中で会話しながら、今思い付いた策を伝える。その間も僅かでも不審な態度を見せないことに注意を払う。些細な変化でも敏感に悟るような者たちが、この場には何人も居るからだ。

策を伝え終わると、足下に這い寄っていた影は音も無く引き、シンの影の中へと戻っていく。

これでアザゼルも戦う準備が整った。

各々がいつでも戦える状態の中で誰が最初に動くのか、見の姿勢へと入っている。場の空気が最高潮まで達しようとした、そのとき。

――パチン

緊張に満ちた空気を爆ぜさせるようなフィンガースナップ。誰が鳴らしたのか、視線がその音源の方へと向けられる。

視線の先に立つのはアザゼル。最初に行動を起こしたのは彼であったが、攻撃でも移動でも無くただ注目を集めるという行為。何故そのような真似をしたのか、その疑問が湧くよりも先に、突如としてアザゼルを除く皆の視線が頭上へと向けられた。

夜の闇が白夜の様に明るくなる。

そこにはマタドール、ヴァーリ、カテレアたちに向け、鋭い先端を向ける無数の光の槍が宙に出現していた。

あの音を鳴らした際、ほんの僅かの間、皆の意識を自分に集中させていたとき、アザゼルはそのコンマ単位の秒数の間に、これほどの数の光の槍を発現させていたのである。

誰もが光の槍に気付いた瞬間、槍は雨の様に降り注いだ。

カテレアは咄嗟に集中させていた魔力を降り注ぐ光の槍に向けて放つ。青黒い魔力が光の槍を次々に呑み込み消滅させていくが、消滅させていく量よりも降る槍の数の方が遥かに上回っている。

完全に相殺出来ないと分かるとカテレアは魔力の放出をすぐさま止め、放出し切れなかった魔力を纏い防御を固めるとすぐにその場から離脱した。

一方でマタドールは光の槍の雨に対し、見てはいるがその場から微動だにしない。やがてマタドールに対し光の槍が降り注いだ。

そして、ヴァーリは降ってくる光の槍を振り払いながら低空を駆け、アザゼルを目指す。槍一本一本に込められた光の力は当然ながら密度が薄いが、それでも中級堕天使程度では出せない程の威力が秘められている。しかし、ヴァーリはそれを片腕で枝でもへし折るかのような軽い動きで跳ね除ける。それもただ跳ね除ける訳では無い、それによって弾かれた光の槍は別の光の槍へと接触、またその槍が別の槍に接触し次々と連鎖、それによって軌道が逸らされていき、ヴァーリが数度腕を振るっただけで、アザゼルへの道が拓かれる。

ヴァーリがアザゼルを狙うのを見てシンもまた動こうとするが、動き出す前にアザゼルが指を小さく左右に振るう。シンにはそれが『動くな』という合図に見えた。

「来いよ、ヴァーリ。相手をしてやる」

「その言葉、ずっと待っていた！」

歓喜の声を上げながらヴァーリは拳を大きく引く。アザゼルは手に持つ槍をヴァーリへと向ける。

白色の光と黄金色の光。その二つが激突し合う――かに思えた直前。

「――なーんてな」

「はっ？」

何故か構えを解いてしまうアザゼルに、ヴァーリは理解出来ないといった声を洩らす。

その直後。

パオオオオオオオオオオオオオオ。

けたたましい象と思わしき咆哮がシンの足下から響いたかと思えば、水中から浮上するかのようにシンの影が盛り上がり、不定型な状態のまま完全に意識を逸らされていたヴァーリの脇腹目掛けて突進していく。

「ぐぅ！」

不意を突かれ、苦悶の声を上げてしまうヴァーリ。そんなことなど構わずに突進していく影はヴァーリを旧校舎の方へと勢いよく押しながら、徐々にその姿を露わにしていった。

蛞蝓、あるいは蝸牛の様に這うような状態から、大木の様に太く、短くも分厚い爪を生やした四足となり、出来上がった足が一歩進む度に、地面が深く陥没していく。

ヴァーリに押し付けている頭部らしき部位は最初、目も鼻も口も無いのっぺらぼうであったが、何も無い部位に二つの隆起が出来たかと思えば、黒い膜を突き破る様にして弧を描く白い牙が現れる。すると今度は二本の牙の中心部分が隆起し始めたかと思え

ば、そのまま一気に伸び、長い鼻を形成する。
牙と鼻が出来ると、頭部部分の左右が羽の様に広がり、大きな耳を作る。
そして、顔面の中央に横一文字の線が浮かび上がるとそれが上下に裂け、そこから黄色の瞳を持つ単眼が現れる。
全身を染め上げる黒が薄れ、その下から黒みがかった青色の皮膚が外気に触れる。皮膚には皺などが無く、代わりに黒い縞が規則性なく至る所に浮かび上がっていた。
魔術師たちに襲われたときにシンはそれの一部分しか見ていなかったが、このとき初めてその全貌を見た。
単眼の巨象。
これこそがマダがシンに送ったものの正体であった。
巨象はヴァーリを逃がさない様に鼻を巻き付け、そのまま旧校舎の壁に向かうと速度を緩めずに衝突。速さと質量が生み出す破壊力には旧校舎の壁など無いに等しい程あっさりと破られ、巨象はヴァーリ共々旧校舎の中へと消えて行った。
「取り敢えず、これで厄介なのが一人足止め出来たな」
しれっとした態度で言うアザゼル。シンの影の中からあの象が現れたことに対し、一切の動揺も驚きも見せない。それどころかアザゼルの行動を振り返ってみると、あの象のことを知っていた上での行動に思えてきた。

「――知り合いだったんですか？」
あの象の存在についてはシンもつい先程知ったばかりである。それを事前に知っていたとなるとあの象自体とアザゼルが知り合いか、もしくはあの象をシンに送ったマダと知り合いかのどちらかである。
敢えて対象を出さず含んだ聞き方をすると、アザゼルはすぐに答えた。
「ま、この戦いが終わったらきちんと教えてやる」
質問の答えに関しては先送りとなったが、質問を否定したり惚けたりしていないこと自体が答えの様なものであった。
シンもそれ以上追及せず、話を変える。
「『相手をしてやる』って言ったのに……」
消えて行ったヴァーリたちの方を視た後に、シンはアザゼルに呆れた様な視線を向ける。シン自身、横槍が入るまでアザゼルが正面から戦うと思っていた。
「敵の言葉を馬鹿正直に受けとっている時点であいつの青さが出たな。戦いに騙し合いは付き物だろう？」
全く悪びれた様子の無いアザゼル。今は取り敢えず味方側として居るが、もし敵側だったらと考えると厄介そのものである。
「――それにヴァーリと戦いながらあいつと戦うのは厳しいからな」

アザゼルの視線の先に舞い上がる土煙。マタドールが居た場所に無数の光の槍が落ちて出来たものである。光の槍が降り注ぐ瞬間まで動こうとしなかったマタドール、土煙の中がどのような状態になっているかは見当が付かなかった。

そのとき舞う土煙が渦巻き、内側から膨れ上がるように周囲へと飛ばされる。土煙が一瞬にして掻き消え、その中が明らかとなる。

土に突き刺さる無数の光の槍。しかし、それがある場所を中心にして円形に並んでいた。直径にして約二メートルの空間、そこだけ光の槍が刺さってはいない。

そして、その中心に立つのはカポーテと剣を構える、無傷のマタドールであった。

その場で地を蹴る。音も無く跳び上がり、重力を感じさせない動きで突き刺さっている光の槍の一本へと同じく無音で降りる。

「今度はこちらの番だな」

そのとき、皮膚も肉の無いマタドールの顔に笑みが浮かんだように見えた。それも穏やかな笑みでは無く、禍々しいまでに飢えた凶笑が。

マタドールの膝が僅かに曲げられたのが見えた瞬間、姿が消えると同時に、地に刺さる槍の群が一斉に吹き飛ばされる。

移動の余波だけで光の槍は容易く砕けていく。

シン、アザゼルはすぐさま消えたマタドールの姿を眼で追う。シンは視界の端に僅か

に捉えた姿を追うと、マタドールはシンたちから数百メートルほど離れた位置に立っていた。

何故、わざわざ距離をとったのか。その答えはすぐに知ることとなる。

再びマタドールが足元を蹴りつけたとき、彼が現れたのはアザゼルとの距離三メートルの場所であった。

最初の時と同じ過ちを繰り返さないよう、一秒たりとも目を逸らしてなどいない。なのにマタドールが動いたかと思えば、距離というものが最初から無かったかのように移動している。

速い。その言葉で表現するのも遅く感じられる速度。

マタドールの間合いには少し遠く、アザゼルにとっては手に持つ槍の間合いの位置。

姿を見てからのアザゼルの行動は素早かった。

剣を間合いに入るよりも先にアザゼルの槍が繰り出される。踏み締める一足で大地に亀裂が生じ、槍が数ミリ動く度に空気の壁が爆ぜ、それによって生まれる衝撃が旧校舎そのものを揺らす。

神器とアザゼルの力が組み合わさったことで出来上がる未曾有の力。

光の槍の先端がカポーテに触れる。シンはこのときそのまま突き破っていく光景を幻視する。

その刹那、シンは次に目に映った光景に驚愕から息を呑んだ。
突きを繰り出したアザゼルが前のめりの体勢となっていた。まるで勢い余ってといった様子であった。そして、突き出していた筈の槍は地中に槍身を深々と埋め込んでいる。
マタドールの立ち位置は先程とは変わらず、槍を受けた筈のカポーテには綻び一つ無い。
すぐに槍を引き戻し、体勢を戻そうとするアザゼルであったが、マタドールは側面に移動すると同時に、槍を持つアザゼルの右肩と右腕の境目目掛け、その白刃を突き立てる。
胸部に斬撃を受けたときとは違い、先端が内部へと入り込む。
「ちっ!」
痛みによる苦鳴を洩らすよりも先に、鎧を突破したことに対しアザゼルは舌打ちをすると、すかさず空いた手の方に光力を集束させ、ヒトなど容易く隠れてしまう極大の光の槍を作り出すとそれを圧縮、長さは十数センチほどしかないが圧倒的密度を持った光の槍を、自分も巻き添えになるかもしれないという考えなど微塵も無いように躊躇なく放つ。
二人の距離はほぼ零に等しい。だがマタドールは避けるよりも先に、光の槍と自分と

の間にカポーテを翳す。
赤い布に光の槍が触れたと同時にマタドールはカポーテを翻す。その瞬間、一直線に向かっていた光の槍がカポーテの動きに合わせて軌道が逸れ、空目掛けて飛んで行った。
あまりに簡単に外される光の槍。だがアザゼルはそれに呆然などせず、もう一撃放とうとするものの、動く前に鎖骨付近にマタドールの靴底が押し当てられ、そのまま後方へと押し飛ばされた。その勢いで突き刺さられた剣は抜け、黄金の鎧に刻まれた刺創から鮮血を流しながら、アザゼルの身体が地面を数度跳ねながら転がっていく。
先程の光の槍、そしてその前の閃光槍もまた、あのカポーテ一枚によって軽々と往なされていた。触れた瞬間、勢いも威力も全てが吸い込まれたかのようにカポーテの動きに合わせて動かされたかと思えば、カポーテから離れた途端元の勢いと威力を取り戻し、盛大な空振りとなる。
攻めればこちらの攻撃は無効化され剣に貫かれる結末が待っており、攻撃に対し消極的になれば今度はマタドールの猛攻を受けることとなり、どちらにせよ剣の餌食となる。
攻めても守っても待つ結末は同じ。最悪の二択である。
アザゼルを蹴り飛ばしたマタドールはそこで動きを止めず、一踏みで十数メートルの

距離を滑空する様にして跳び、立ち上がるアザゼルに向かって飛び掛かる。
アザゼルもマタドールの追撃が見えたのか、すぐさま槍を盾の様にして構えた。
飛び込んできたマタドールとアザゼルが再び衝突。
槍と剣が刃を交えるのかと思ったが、響く音は無い。何故ならば、飛び込んできたマタドールは剣を振るったのではなく、その両足を揃えてアザゼルの槍を踏みつけていた。
相手がそのような真似をしたことに一瞬、アザゼルは戸惑いを覚えるが、刹那の間にその理由を悟り、声を出そうとするが、それよりも速く揃えた両脚が生み出す爆発の様な脚力で、アザゼルを再度蹴り飛ばす。
重厚な鎧を纏うアザゼルが藁屑の様に飛ぶが、マタドールの視線は既にアザゼルからシンに向けられていた。
マタドールはアザゼルの槍を足場にし、蹴り飛ばした反動で今度はシンを狙う。
あらゆるものを緩慢な動きとして捉えるシンの左眼もマタドールが動いたと判断するのが精一杯であり、そこから先の動きは半ば本能的なものであった。
迫る赤のカポーテ。既に拳の間合いである。
このときシンが放ったのは弧を描く大振りのフック。カポーテになるべく触れない様にカポーテの側面に狙いを絞り、カポーテによって隠されたマタドールの胴体を穿つ

為である。
振るった拳に軽い衝撃が奔る。それと同時にシンの視界からマタドールの姿が消えた。
すぐにシンは消えたマタドールの姿を追い、『背後』へ振り向いた。
殆ど見ることだけしか出来なかったが、拳がマタドールに触れようとした直前、マタドールは素早くその場で跳躍し、迫るシンの拳を足場にして頭上を飛び越えて行ったのである。
片足を軸にし、振り向き様に右拳を振るうシン。だが背後に立つマタドールの姿を視界に入れた途端、その動きが硬直した。
マタドールはカポーテを構えず、剣を掲げていた腕も下げ、自然体とも呼べる格好をしていた。その手に持つ剣の切っ先は真っ直ぐシンの方へと伸びており、その先端をシンの軸足の膝へと埋め込んでいた。
刺された。そう思った瞬間、灼熱の様な痛みが軸足となっていた左脚を襲う。痛みに対し我慢強い方であるシンも、思わず動きを止めてしまう程のものであった。
体重をかけているだけに刺し込まれた刃が肉と骨に喰い込む。内側から斬り裂かれる痛みは神経を通じ、脳が焼けるような警鐘を伝えていく。
「声を出さないか。偉いな」

褒め称えると同時にマタドールの剣が押し込まれ、膝裏まで貫く。
脳細胞が死滅するのではないかと思う程の痛みと言う名の衝撃が奔り、吐き気すら込み上げて来る。
力が抜け、意図せずに左脚が折れる。
マタドールは刺された剣を素早く抜く。再び痛みが襲ってくるがそのことを気にしてなどいられない。引き抜かれた剣の先が今度はシンの心臓を狙っている為に。
体勢が崩れる中、シンは右手に魔力剣を生み出す。それを見たマタドールはカポーテを掲げるがシンが放つのは攻撃の為では無い。
形成と同時にシンは魔力剣を足元へと突き刺した。剣身に閉じ込められた荒れ狂う魔力が地面の中で解き放たれると、土が一気に盛り上がり、盛り上った土を破って四方に魔力の波を撒き散らす。
魔力波に逆らわず勢いに呑まれることで負傷した脚でもその場から離脱することができ、ついでに巻き上がった土砂を煙幕代わりに使い、相手の動きをほんの僅かではあるが止める。
自分の技を至近距離で受けながら、シンは方向など分からずに吹き飛ばされていく。錐揉み回転していく中で地面の位置を確認すると、右手を叩き付けるようにして無理矢理勢いを殺しながら着地する。

すぐに立ちあがろうとするが、鋭い左脚の痛みが全身を襲う。
自分の技を自分で受けた代償はそれなりに高く、爆ぜた地面から飛び出て来た石などで体の至る所を打ちつけられているが、幸か不幸か、重傷である左脚の痛みに比べれば無視出来るものであった。
すぐに立ちあがろうとするが力を入れた途端、刺された片足に激痛が起こりその拍子で力が抜け、前のめりに倒れていく。
「無理をするな」
そのとき急に周囲が明るくなり、倒れていく体が途中で止まる。誰かがシンの腕を掴み、その身体を支えているからであった。
「――とは言っても無理しなきゃ死んじまうのが悩み所だがな」
腕を掴み、支えているのはアザゼルであった。
軽口を言うアザゼルであるが、その右肩からは絶えず流血しており、黄金の鎧が血で染まっていく。
「焦るな。呼吸を整えてゆっくり立て。それぐらいの時間は稼げる筈だ」
悠長な台詞を言うアザゼルであったが、このときシンは自分の周囲が何故明るくなったのかに気付いた。
アザゼルを中心にして囲むように光の壁が張り巡らされていたのだ。アザゼルがマ

タドールの追撃を避ける為に張った光の結界である。
シンは言われた通りに深く息を吸い、同じ間隔で息を吐きながら立ち上がる。何とか立ち上がれたものの左脚には殆ど力を入れることが出来ず、体重は全て右脚の方に掛かった状態であった。
「酷なことを言わせてもらうが、まだやれるな？」
「――大丈夫ですよ。そっちの方こそ大丈夫なんですか？」
痛みをやせ我慢しながら、逆にアザゼルの状態を問う。
「まあ、まだ動くからな」
そう言うアザゼルであったが、いつの間にか槍を持つ手が替えられていた。少なくとも右腕は戦いに使えない程の損傷を負っているらしい。
どんどんと体力を削られていく感覚に焦りを覚えつつ、シンは周囲に注意を向ける。
先程までシンが居た場所にはマタドールが、やはりと言うべきか無傷のままで立っている。そしてシンたちとマタドールの両方を視界に納められる地点には、カテレアも同じく無傷の状態でいた。
下手に手を出せば余計な痛手を負うことを理解しているのか、この戦いがどちらに転ぶか観察している様子である。マタドールの標的がシンたちに向かっていることから、それは正しい選択であった。

尤も常に変化する戦場ではそれは一時のことにしか過ぎず、カテレアも分かっているのか、いつ矛先が自分に向いてもいいように青黒い魔力を纏っている。
「悪いが庇える程の余裕はこっちには無い。なるべく死ぬなよ？」
「……善処します」
言い終えると同時に構えていたマタドールの姿が消える。次の瞬間には光の壁の前に現れ、壁に向かって剣を突き立てていた。
一突きで覆い尽くしていた壁が粉砕される。だが幾重にも重なっている構造となっていたらしく破られた壁の下から新たな壁が現れ、マタドールの進行を妨げる。
それでもマタドールの動きを止められるのは保って数秒程度。光の壁を次々と破壊しながらマタドールはシンたちに迫ってくる。
どのみち逃げるつもりなど無い二人は壁によって稼がれた数秒を使い、己の力を集束し始める。
シンは右掌をマタドールへと向け、それを左手で掴み固定すると両手に魔力を送り始める。それによって紋様は一層輝きを増す。
アザゼルも装備している槍に光力を注ぎ込む。神器の槍は眩い光を槍の中へと蓄え、静かに威力を増していく。
二人が力を溜めていることはマタドールからも見えているが、マタドールは進む速度

を緩めず、二人の攻撃に挑む様に直進する。
やがて最後の壁が破られ、マタドールが二人の前に現れたとき、シンとアザゼルは溜めた力を一気に解放した。

◇

巨象の嘶く声を間近で浴びせられながら、ヴァーリは次々と教室の壁を突き破りながら旧校舎の奥へと押し込まれていく。
止めようにも脚が地面に着かない様に持ち上げられた状態であり、両腕も巨象の鼻に巻き付けられたことで体に押し付けられるような形になっている。
何とか腕の自由を取り戻そうと力を込めるが、巻き付ける力は相当なものであり、手こずっていた。
「ならば！」
ヴァーリの身体が光に包まれると纏っていた鎧が解除され、生身の姿が現れる。普通ならば自殺行為に見えるが、ヴァーリにはある狙いがあった。
締め付けてられている鎧が消えたことによって僅かな隙間が生まれていた。この僅かな隙間が出来た瞬間、ヴァーリは素早く片腕を鼻の拘束から抜く。

「禁手化〈バランス・ブレイク〉！」
そして素早く鎧うと、自由になった片手を容赦無く巨象の単眼目掛けて叩き付けた。
このときヴァーリの脳裏には潰れていく目と、その感触を覚える未来が見えていた。しかし、その刹那の思考の後、思わぬ現実を叩き付けられる。
巨象の単眼にヴァーリの拳が触れた瞬間、ヴァーリの拳に返って来たのは全くの無であった。硬いという感触も柔らかいという感触も、それどころか殴ったという感触すらない。拳で空を切る方がまだ感触があると思える程の無の手応え。
これは、と不可思議な感触に驚きを覚えるよりも先に、金属音と共にヴァーリの頭が仰け反る。
「くっ！」
痛みよりも先に、何故という疑問が浮かぶ。巨象が何かをしたという動きは無かった、だというのにヴァーリが感じたのは、間違いなく拳による打撃である。
何が起こったのか分からない様子のヴァーリに対し巨象は再び鼻を絡ませると、そのまま拘束するのではなく、頭を横に向け、戻す勢いでそのまま投げ飛ばした。
弾丸の様な速度で投げられたヴァーリは何枚目かになる壁を突き破り、その先の教室の中に背中から落ちるもすぐに体勢を戻す。

「何だったんだ今のは……」
　見えざる打撃を受け、ヴァーリは軽く首を回す。
『大丈夫か？』
「問題ない。少々驚いたが痛みは然程無い」
『心配ついでにもう一つ言っておくことがある。奴はまだ我が能力の影響下には入ってはいない』
「まあ、そんな気はしたさ」
　アルビオンの言った通り『白龍皇の光翼』の能力の一つである触れた相手の力を半減させる能力が発現していなかった。直接触れた筈ではあるが触れてはいないという事態、ヴァーリはそこに先程の不可視の一撃の答えがあると考える。
『奴の体自体が防御用の結界を纏っているのかもしれない。ヴァーリ、用心して注意深く探った方が良い』
「いや。悪いがアルビオン、それは俺の性には合わない」
『何？』
「アザゼルに一杯喰わされた鬱憤、調べるついでに晴らさせて貰おう！」
『待て！』
　アルビオンの警告も指示も無視し、ヴァーリは巨象に正面から突進する。

向かって来るヴァーリの姿を見て、巨象は両前足を振り上げる。曲芸の様に後足二本で巨体を支え、ヴァーリが前足の間合いまで近付くと鎧ごと粉砕する勢いで振り下ろす。

両前足が床へと叩き付けられるとその衝撃で床が大きく陥没する。そしてそのまま置かれていた机や椅子などに伝わり、教室内の物が一瞬浮き上がる。

しかし、陥没した床にはヴァーリの姿は無い。巨象の手応えの無さからそれが分かっていた。

巨象の鼻が突如鞭の様にしなる。鼻が狙うのは脇腹付近、空気が裂ける音と共に振るわれた鼻だったが、それを白の籠手が掴み取る。

「遅いな」

いつの間にか巨象の側面へと移動していたヴァーリは、高速で振るわれた鼻を軽々と掴みながら、余裕を感じさせるように巨象の動きを揶揄する。

直後、巨象が急に空気を吸い込み、ヴァーリの掴んでいた鼻先が膨らんでいく。それを見て良からぬものを感じたのか、掴んでいた手を離し後方へ退くと、膨らんだ鼻先から見るだけで毒だと分かる黒緑色の気体が噴出された。

毒々しい気体の範囲外へと逃れたヴァーリであったが、吐き出された気体はすぐに教室へと充満していき、ヴァーリから安全圏を奪っていく。

四方から迫る気体。吸えばどんな異常が体に起こるか分からない。そんな危機的状況の中でも、ヴァーリは鎧の下で猛々しい笑みを浮かべる。

ヴァーリはその場で腰を落とし、上半身を捻りながら拳を後方へと引く。指先まで覆う鎧が軋む音を出すほどに拳を固めた。

そして捻った上半身に溜めた力を解放し、腰を半回転すると共に引かれていた拳を突き出す。

何も無い宙へと突き出された拳。しかし、そこから生まれた拳圧は離れた場所に並ぶ窓ガラスを一斉に砕き、放たれた拳の拳圧により、流れに乗って場に満ちていた筈の気体が窓の外へと飛んでいく。

まさに空を斬るを体現したヴァーリの一撃。これにより巨象までの道が拓かれた。

すかさずヴァーリは間合いを詰めると巨象の胴体に合計三発の拳を叩き込む。殴ったヴァーリの拳に返ってきたのは、やはり先程と同じ不可思議な感触。

そして今度は三打の衝撃がヴァーリの胴体に走った。

（これは……）

鎧を纏っていてもその下にある肉体に伝わる衝撃。痛みを覚えるがそれ以上にヴァーリは、朧気ではあるが巨象の能力について見えてきたことがあった。

（もう少し試してみるか）

全く動じない巨象の反撃を軽々と避けながら、自分の推測を確信へと変える為に次の行動に移る。
巨象の腹の下に潜り込み、拳を突き上げる。当てた瞬間、ヴァーリもまた腹部を突き上げられるような衝撃を味わう。
足下に入り込まれるのを嫌がり巨象は鼻を伸ばすが、それが届く前に抜け出し、今度は鼻を伸ばしている巨象の頭に四発の拳をそれぞれ違う角度で叩き付けた。
殴ったヴァーリの頭が勢いよく横に傾いたかと思えば後ろに仰け反り、再び横に傾いた後、頭を下げる様な形となる。
その状態のまま、ヴァーリは下段蹴りを巨象の右前足に浴びせる。するとヴァーリの右腕に痺れるような感触が走った。
「やっぱりか」
軽く首を擦るヴァーリの口から出たのは、確信に満ちた言葉。
『奴の能力が分かったのか？』
「ああ」
振るわれた鼻を後方へ飛ぶことで回避しつつアルビオンの質問に答える。そしてそのまま巨象との距離をとった。
「アルビオンの言った通りこいつは全身に何らかの力で特殊な能力の結界を纏っている

みたいだ。そしてその能力は――」
ヴァーリは何処か愉しげな口調で、自ら導き出した答えを出す。
「――『物理攻撃の反射』。そうだろう？」
正解か否か、その問いに相手は何も答えない。
「だとしたらショックだ」
相手の反応を無視し、独り語り続ける。
「さっきの攻撃をそのままの威力で反射しているのだとしたら――俺の拳は俺が思っている以上に軽いな。少しプライドが傷付く」
通常の攻撃が効かないということよりも、実際に受けた自分自身の攻撃の威力の方に注目する。ヴァーリに焦燥など欠片も無かった。
「まあ、それは改めて鍛え直すとして、さっきの質問の答えだが――」
巨象はその答えに対し、肯定、否定の意を示さず、咆哮を上げながらヴァーリに向かって突進した。
重さトン単位の巨体による突進。まともに喰らえば無傷では済まない。これを見て誰もが回避を選択するであろうが、ヴァーリは違った。
「能力が『物理反射』と仮定したとして――」
ヴァーリは逃げる様子は一切見せず、両手を広げ迫る巨象の真正面に立つ。

巨象の頭がヴァーリへと叩き付けられ、その頭をヴァーリの両腕が受け止める。その瞬間、ヴァーリが踏み締めていた床が巨象の圧力に押され抉れていった。

突進の速度そのままにヴァーリを再び押し込んでいく巨象。既視感を覚える光景であった。

教室の壁をまた粉砕し、更に奥へと進んで行く。だがここで先程とは違うことが起きる。

壁を突き抜けて別の教室に入ったとき、巨象の突進の速度が緩まった。そして、教室の半ばまで進んだとき、その突進は完全に停まる。

巨象はその場で何度も足を動かすがそれ以上先には動けなかった。巨象の動きを止めるのは、自分の何十倍もの重量を持つ相手を押さえつけるヴァーリの二本の足。抉れた床を地に根を降ろすかのように踏みつけ、微動だにしなかった。

「――確かめたい事が有る」

踏みつけた床に無数の亀裂が生じたかと思えば、ヴァーリは巨象の象牙を掴む。

「ふっ！」

息を吐くと同時に力を込め、上体を後ろへと逸らした。

巨象から鳴き声が上がる。それは威嚇するようなものではなく、現状に戸惑うような鳴き声であった。

あろうことか、巨象の足が床から浮いていたのだ。
巨象の身体を浮かすのは勿論ヴァーリの膂力。自分を上回る体躯の相手を、持っている力のみで持ち上げていた。
浮き上がった巨象の体は徐々に地面と垂直となっていき、やがて逆立ちするような格好となる。
「直接攻撃を当てなければどうなるんだ？」
ヴァーリはそのまま体勢から両足を地面から離し、真っ直ぐ前に伸ばす。逆立ちの格好をしていた巨象はヴァーリの動きに合わせて勢いよく落下する。
床に頭から着地。自分の体重を全て乗せた状態で味わう脳天砕き。重さと衝撃で巨象の頭の床に深々とめり込んだ。
「ふう」
柱のように埋まる巨象から手を離し、ヴァーリは軽く息を吸う。
「成程」
直接打撃を叩き込んだときとは違い、自分の身体に何の衝撃も無かったことを確かめ、ヴァーリは巨象の物理反射は物を介せれば無効となることを知る。尤も、この手が通用しなければ、今度は魔力を用いた戦い方をするつもりであった。
脳天から床に突き刺さった巨象の身体はゆっくりと傾き、派手な音を立てて仰向けに

倒れる。
倒れた巨象はぴくりとも動かない。ヴァーリもまさか先程の攻撃で倒したなどとは思ってはおらず巨象の動きに注目していたが、どれだけ眺めていても動く気配を見せなかった。
「――拍子抜けだな」
かなりの力を持っていたと思っていたが、能力の謎を解き、たった一撃を加えただけで戦闘不能になった巨象に対し、失望の言葉が漏れる。
ならばお預けとなったアザゼルやマタドール、シンとの戦いに赴こうとヴァーリが巨象に背を向けたとき、あることが起きる。
かりっという爪で引っ掻くような音。その音を聞いたヴァーリは足を止めて、振り返った。
振り向いた先にあるのはやはり大の字になって倒れた巨象の姿。さっき見たものと何一つ変わっていない。
「――ん？」
と思っていたヴァーリであったが、倒れた巨象の姿にある違和感を覚えた。左右に広げられた両前足、ヴァーリの記憶が確かならば柱の様に太くまっすぐであり、僅かに伸びた爪が生えた形をしていた筈であったが、どういう訳か広げられた両前足は足という

よりも、親指から小指までの五指が揃った人の手と同じ形をしている。
視線を下げて後ろ両足の方も見てみるとこちらもまた、人と同じ形をした足になっていた。
「何だ？」
近付き調べようとしたその瞬間。
パオオオオオオオオオオオオオオオオ。
沈黙していた巨象がいきなり両手で床に突いたかと思えば、その巨体からは想像出来ない程俊敏な動きで床を突き飛ばし、近付くヴァーリの腹部に両足を叩き付ける。
その奇襲にヴァーリも動きが遅れ、防御が間に合わず蹴り飛ばされた。地面を二度跳ねた後、壁に叩き付けられるヴァーリの体。
「くっ！」
壁に叩き付けられたヴァーリは軽く頭を振る。
一瞬何が起こったのか分からなかった。
少し混乱するヴァーリの前で巨象はその身体を起こす。それも動物などがする起き方では無い。まるで人の様に手を突き、膝を突きながら身体を起こしていた。
巨象はヴァーリの目の前で、あろうことか人の様に『二足』で立ち上がる。
そして立ち上がった巨象は自分の足元に伸びる影目掛け、素早く手を伸ばす。伸ばし

た手は水面に触れるかの様に影の中へと沈み込む。手を影に沈めると水しぶきが上がる様に影が飛び散り、巨象の身体へと掛かる。

巨象の身体に掛かった影はそのまま形を変えていった。手足に掛かった影は幾重に重なった黄金の輪へ変化、胸元に掛かった影は胸元を隠す薄い布へと変わり、それに繋がって黄金の肩当てが巨象の両肩に装着される。股部分にも影が纏わり、そこから黄金色の紋様が描かれた布が垂れる。

上半身と下半身に装飾が施されていく中、最後に現れたものは影の中に沈めこんだ巨象の手の中に納められていた。

完全に沈んでいた手が引き上げられていくと、何も持っていなかった手には何かが握り締められている。

最初に現れたのは柄。次に現れたのは鍔。そして最後に現れるのは銀色に輝く刀身。柄と鍔はすぐに現れたが、刀身の方は全体を見せるのに少しだけ時間が掛かった。何故なら完全に引き抜かれたソレの長さは、巨象とほぼ変わらない。

数メートルもの長さを持つ大太刀であった。

獣面人身の異形と化した巨象は大太刀を片手に持ち、空いた手を共に相手を迎えるように左右に広げて構える巨象。さっきまでの四足とは違い二足で立ち上がったことで、倍近い身長となってヴァーリを見下ろす。灯りの無い暗闇の教室の中、黒味を帯びた肌

のせいで巨象の爛々と輝く単眼が浮いているかのようであり、そこに威圧と不気味さがあった。

「ははははっ！」

だがそれでもヴァーリは笑う。心の底から楽しんでいる笑いであった。

物理反射の能力も巨象の変身も恐怖は覚えない。覚えるのは寧ろその逆、燃え上る高揚感。それによって血が熱を帯び体内を高速で駆け巡る。血が蒸気となって体から立ち昇っていくのではないかという興奮をヴァーリは覚えていた。

「これだ！　こういうのだよ！」

ヴァーリが嬉々として叫ぶ。

強い奴と戦いたい。自分の強さでどこまで高みに昇れるかが知りたい。勝って当たり前の様な易い戦いや勝利など要らない。望むのは肉が裂け、骨が砕ける様な戦い。血反吐を吐きながら、己の全てを出し切った後に得られる勝利。

マタドールとの戦いは血が沸いた。セタンタとの戦いは心が躍った。そして、この巨象との戦いは体が熱くなる。

体の内で流れる血、吐く息すら灼熱を帯びていくかのような感覚。だというのに頭の中は清々しいまでに冷静であった。相手の動き全てが視覚以外でも感じ取れるまでに意識が集中していく。

ヴァーリはその状態で一歩踏み込む。数十センチ前に出た場所、そこは巨象の振るうであろう大太刀の間合いの中である。

間合いの外から中へ自ら飛び込む。ヴァーリから巨象に対しての無言の挑発だった。

その挑発を受け取った巨象は軽く鼻を鳴らす。それだけで教室内の窓ガラスが細かく震える。

巨象の足元で床が軋み、小さく鳴る。それが戦いの開始を報せるものであった。

床板が捲れ上がる程の勢いで巨象が踏み込むと同時に、手に持つ大太刀がヴァーリの胴体を斬り裂こうと振るわれた。長大な太刀であったが重さなど無いかのように軽々と振るわれ、剣速によって刀身が霞む。

大太刀が向かって来る場所を瞬時に理解したヴァーリは上半身を捩じりながら、そのとき生じた力を乗せながら迫る大太刀の刃へと向け、拳を放つ。

光の少ない教室内が一瞬明るくなる程の火花が両者の間で開いた。火花が消えると同時に弾かれる大太刀、そして揺らぐヴァーリの体。

身体を傾けながらヴァーリは自分が初手をミスしたことを悟る。拳と大太刀が触れた瞬間、ヴァーリは側頭部を打ち抜かれる様な衝撃に襲われていた。不意を突かれそれにより体勢が崩れてしまう。

（まさか武器にまで耐性が付加されているとは）

ゆったりと変わっていく視界の光景を見ながら、ヴァーリは焦ることも無く独りそんなことを思っていた。

視界の端では、既に体勢を戻していた巨象が大太刀を振り翳す姿が見える。

（次は気をつけるか）

振り下ろされた大太刀の刀身腹に今度は叩き付けるのではなく、添える様に腕を押し付け軌道を逸らしつつ、その微かな支えで傾いた体勢を修正する。

それによりやや前のめりとなった巨象。すかさずヴァーリはその懐へと潜り込む。

ヴァーリの右腕全体が白色の魔力によって包み込まれる。普通に殴打すれば同じ威力で返ってくる。ならば直接殴らなければどうなるのか。

即席で考えた打開策を、なんの躊躇いも無くヴァーリは実行した。

大きく膨れ上がった巨象の腹。ともすると肥満に見えるそこを目掛け、ヴァーリは貫くイメージで魔力を纏わせた拳を打ちこむ。

拳が巨象の腹に沈み込んでいく。だがヴァーリの身には何も起こっていない。

目論見通り、直接的な打撃でなければ物理反射は発生しないらしい。思い通りの結果になったヴァーリであったが、仮面の下のヴァーリの表情に笑みは無い。

沈み込む拳。魔力越しでも分かる相手の肉体の感触。衝撃を和らげる脂肪の奥底には鋼鉄を思わせるような硬い筋肉の感触があった。

殴りつけたヴァーリだからこそ分かる。相手が全く損傷を受けていないという事実に。

筋肉と脂肪。それを二重に備えた肉体の鎧。そこに物理反射の能力を加えれば三重の守りを持っていることになる。

（成程…能力が無くても元が頑丈なのか）

敵ながら自分の一撃に微動だにしないことに素直に感心するヴァーリであったが、巨象からすればそんな感心を抱くことなどただの隙でしかなかった。

巨象が腹に力を込めると、ぶよぶよとしていた腹回りが一瞬にして巌の様な硬さと成る。

それに拳を挟まれていたヴァーリは腕全体に掛かる圧力を感じ、咄嗟に引き抜こうとするが動かない。

巨象はそんなヴァーリの両脇を掴むと軽く膝を曲げる。その動作を見て巨象が何をしようとしているのか悟るが、腕を拘束されている為に逃れられない。

締めていた腹が緩められた次の瞬間、ヴァーリの身体が天井目掛けて投げ飛ばされた。

室内であること、投げ放たれた速度、その二つのせいで飛ぶことも出来ず背中から天井に衝突し、そのまま天井に体を埋める。

「くっ！」
痛みなどは鎧のおかげでそれほどでもなかった。すぐにこの場から離れようとする。
パオオオオオオオオオオオオオオ
巨象の咆哮。ヴァーリが見たものは天井目掛け頭から突っ込んで来る巨象の巨体であった。

◇

背後から絶えず放たれてくる魔弾を回避しながら、一誠たちは旧校舎二階の廊下を駆け抜けていた。
外部から特殊な術を施されたらしい魔術師たちは皆が正気を失った表情をしているものの、魔術に関する知識までは失ってはおらず、己の限界を無視して連続で唱え続けている。
「はっ！」
一誠やギャスパーに直撃しそうになった魔力の弾をリアスの消滅の魔力が盾となって防ぐ。そのリアスに向かって放たれる魔力の弾を、今度は一誠が『赤龍帝の籠手』で防いだ。

「ひゃあ！」
「大丈夫か？」
「ボクらのことは気にしなくていいよ～」
　ギャスパーの悲鳴を聞いて一誠は詫びの言葉を言うが、ジャックランタンは気遣いは不要だと告げる。現在、ギャスパーは一誠の脇に抱えられた状態であり、そのギャスパーはジャックランタンを抱きしめていた。
　リアスの方もジャックフロストを抱えており、ピクシーはそんなジャックフロストに抱えられていた。
　無数に襲い掛かってくる魔力の弾の狙いを最小限にする為、自らを守る手立ての少ないギャスパーたちを守る為にこの様な状態となっている。
　いつまでもギャスパーたちを庇っている訳にもいかない。どこかで反撃の機会を窺う一行であったが、そのときある不運がリアスたちを襲う。
　ドンっと建物全体が揺さぶられたかと思える程の衝撃。いきなり足元が揺れ動いたせいで、走っているリアスたちはバランスを崩してしまう。
「おおっ！」
　ギャスパーとジャックランタンを抱えている一誠は辛うじて転倒を免れる。そして、リアスの方も倒れはしなかったものの前のめりになる身体を支える為に片脚を大きく

踏み出し、前傾の姿勢となる。
この瞬間、リアスの意識が僅かな間、背後にいる魔術師たちから逸れてしまった。
風を斬る音を出しながらリアスの脚に魔力の弾が直撃する。
「あうっ！」
「部長！」
アキレス腱部分に命中したことで堪らずリアスは床へと倒れていく。その際、抱えているジャックフロストたちを庇って、咄嗟に身体を捻り体の側面から倒れた。
魔力の弾を受けた場所は赤く焼け、リアスの白い肌との対比のせいもあってより酷く見える。
すぐに立ち上がろうとするリアスであったが、そこに追撃に魔力弾が無数に放たれ、避けることの出来ないリアスに容赦なく降り注ごうとする。
「ギャスパー！　悪い！」
「イッセー先輩！」
一誠はそう言って抱えていた手を離すと、すぐにその場を蹴ってリアスの前に飛び出す。
そして自らをリアスを守るための盾とする。
魔力弾の一発や二発は左腕の『赤龍帝の籠手』で何とか弾くことが出来たが、それで

も向かって来る魔力弾の数は圧倒的であった。
　防ぐことの出来なかった残りの魔力弾が、一誠の胸元、脚、肩などに着弾し、制服が破け血が飛ぶ。
「イッセー！」
　自分の身代わりとなっている一誠を見て、リアスは悲痛な叫びを上げた。
「だ、大丈夫です！」
　痛みを押し殺した声。明らかにやせ我慢であることが分かる。その間にも魔力弾は放たれ続け、その内の一発が一誠の頬を掠め裂傷を刻む。
「あ……ああ……あああ……」
　ギャスパーは震える声を出しながら、嬲られながらも必死になってリアスを守り続ける一誠を涙を溜めた眼で見ていた。
　自分も何かをしなければならない。皆を守る為に何かを。だというのに体が竦んで動こうとしない。こんなにも一生懸命になっているヒトがいるというのに、足が床に吸い付いたかのように動かなかった。
（部長……！　イッセー先輩……！　僕は……！　僕は……！）
　自分の力を使えば何とか出来るかもしれないと思いながらも、ギャスパーの脳裏に少し前の出来事が過ぎる。

シンによって部室から連れ出され、守られているという立場だったにも関わらず、自分の神器を暴走させてシンの脚を引っ張る所か、危機的状況にまで追い詰めてしまった光景であった。

その大きな失敗がギャスパーの動きを止めてしまう。

「ギャスパ〜」

抱きかかえているジャックランタンが、己の不甲斐なさに震えているギャスパーに声を掛けた。

涙で視界がぼやけさせながらギャスパーはジャックランタンを見下ろす。

「ランタンくん……僕は……僕はっ！」

「いいよ〜。別に怖くたって。泣いたって。でも逃げたくはないんだよね〜？」

ジャックランタンはいつもよりも少しだけ優しい口調で、ギャスパーに語りかける。

「自分のせいで見捨てられるのが怖いのはよく分かるよ〜。でもいつまでも引き摺ってはいられない。言ったよね〜？　動けなくなったら背を押してあげる。転びそうになったら支えてあげるって」

がらんどうな南瓜の顔。しかし、その双眸の暖かな灯りはギャスパーを照らしていた。

「大丈夫。大丈夫だから、ギャスパ〜。僕も一緒だよ〜」

ジャックランタンの言葉を聞いたギャスパーはその場で大きく息を吸い込んでから吐く。

心の中の恐れは完全に消えた訳では無い。でもこの一瞬だけはそのことを心の奥底へと押し込む。

自分は何をすべきか。浮かぶ答え。

決心はついた。

その場から駆け出すギャスパー。倒れていくリアスの側を通り、その前に立つイッセーの横を抜けていく。そしてその際、ギャスパーは一誠の頬に指先を伸ばし、頬から垂れ落ちている血を拭う。

「失礼します！」

「ギャスパー!?」

いきなり頬を触っていったギャスパー。驚く一誠であったが、すぐに顔色を変えた。自分の前に立つということは、魔術師たちの魔術の餌食になるということである。

「ギャス――」

「いきます！」

ギャスパーは指先に付いた一誠の血を舐めた。以前、アザゼルと遭遇した際、神器の操作を格段に上昇させる為の手段として、ドラゴンを宿した一誠の血を摂取することが

一番の近道であることを教えられていた。
しかし、ギャスパーはその方法はとらなかった。血を舐めるという行為に嫌悪感や抵抗を覚えていると前に一誠に話したことがあった。自分の中で眠る吸血鬼としての本能。それに対しギャスパーは、自分の神器と同じぐらいの恐れを抱いていた。
（でも、今それが必要ならば僕は――！）
目を閉じ口に含んだ血を嚥下する。その途端、体の芯に熱が灯る。今まで感じたことが無い熱。ギャスパーはそれが、自分の中にある神器と吸血鬼の力が真の意味で目覚めた為による熱だと確信した。
覚醒していくギャスパーを他所に魔術師たちは容赦なく魔弾を放つ。正気を失っている彼女たちには、良くも悪くも躊躇うことがない。目の間で明らかにおかしなことが起きているとしても、彼女らにはそれを認識するほどの危機感が既に無かった。
一誠の代わりにギャスパーへと襲い掛かる無数の魔弾。
先程の一誠のときとは弾幕の数が増えている。まともに浴びれば命の保証など無い。
しかし、その弾幕を前にしてもギャスパーは逃げなかった。
閉ざされていたギャスパーの眼が開かれる。全ての魔弾を映す目は瞳の形を変え、極彩の光を放っていた。
途端、全ての魔弾が空中で停止する。魔弾のみを対象としたギャスパーの『停止世界

の邪眼』。今まで対象を限定とした停止など出来なかったギャスパーが、このときそれを克服してみせた。

自分たちの魔術を停められた魔術師たちであったが、もしもこのとき正気であったならば次の攻撃に移るのを躊躇ったであろう。しかし、現在の彼女らにはそのような思考は無い。

停められたと分かるとすぐに次の魔術を放つ。だが、放たれた魔術はギャスパーが停止させた弾幕の壁によって全て遮られ、無駄射ちとなってしまった。

相手の魔術を防いだこの瞬間、突如ギャスパーはその場で蹲る。すると次の瞬間、ギャスパーの体は無数の蝙蝠へと分裂し、停められている弾幕の間を擦り抜けながら魔術師たちに向かって飛ぶ。

「そんなことも出来たのか！」

「あれがヴァンパイアとしての本来の力よ」

初めて吸血鬼らしい能力を見せられイッセーは驚く。そしてその驚きは更に重ねられていく。

赤い瞳の蝙蝠は何十の群となって魔術師たちに群がる。魔術師たちも魔術でそれに抵抗しようとし、その手に魔力の光を灯す。だが、その腕に張り付いた蝙蝠が噛み付くと溜められていた魔力は光を失っていき、最後には消えてしまう。

血では無く魔力を吸い出す力。魔術師たちにとっては天敵とも呼べる力である。
次々と魔力を吸い出されていく中、それでも何とか魔術を唱え続けている魔術師もおり、飛び交う蝙蝠たちに向け魔弾を放とうとする。
それを察した蝙蝠の一部は床に目掛けて落下。着地と同時にその身体は黒い影となり魔術師の足元へ伸びていく。
影の中から無数の手が伸び、魔術師たちの身体へと纏わる。脚に張り付いた影の手が魔術師たちの身体を引き摺り倒し、倒れた魔術師たちの腕や手などを押さえつけ、完全に拘束した。
そして飛ぶ蝙蝠たちの眼が赤い閃光を放つ。その光を浴びた魔術師たちはもがくのを止める。神器の効果で時間を停止させられたのだ。
『お〜!』
ギャスパーが全ての魔術師たちを無力化したのを見て、感心した様にピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンが拍手を送る。
すると影と化していた蝙蝠や宙を飛ぶ蝙蝠が一か所へと集まり、一つとなると元のギャスパーへと戻った。拍手されているのが恥ずかしいのか赤面している。
「あ、あの……」
言い淀むギャスパーに一誠が近付くと、ギャスパーの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

「凄いじゃねぇか、ギャスパー！　俺の血を飲んだからってあそこまで神器を使いこなすなんて！」
　我が事の様に嬉しそうに笑う一誠を見て、ギャスパーもつられて笑う。
「は、はい！　ありがとうございます！　イ、イッセー先輩の方は大丈夫ですか？」
　所々破けた制服を見て、ギャスパーが心配そうに尋ねてくる。
「ん？　ああ、堕天使に腹に大穴開けられたり不死鳥に全身焼かれたりしたことに比べれば軽いもんだ」
「え、ええ！」
　さらりと言った内容にギャスパーは驚く。
　そんなギャスパーに今度はリアスが近寄ると無言でギャスパーを抱きしめた。
「ありがとう……ギャスパー。貴方のおかげで助かったわ」
「ぶ、部長……」
「嬉しいのよ。貴方が勇気を出して私たちを救ってくれたのが」
「そ、そんな大袈裟です！　殆どイ、イッセー先輩の血のおかげですし」
「それでも貴方が助けてくれたことには変わりないわ」
　自分の下僕の成長を心の底から喜ぶリアスにギャスパーは顔を赤めつつ、嬉しさからか涙目になっていく。

が、その直後全ての余韻を吹き飛ばすかのように突如一誠たちが立つ廊下が揺れ始め、瞬く間に亀裂が奔る。
突然の事態に驚く一行であったが、その驚きは更に加速する。
亀裂が大きな裂け目へと変わったかと思えば、床を突き破りそこから現れる白い影。
「ヴァ、ヴァーリ?」
それがヴァーリであると分かり、一誠が名を呼ぶがヴァーリが答えるよりも先に、同じく床下から伸びてきた鼻らしきものがヴァーリへと巻き付き、そのまま窓ガラスの向こうへと放り投げる。
「なあ!」
ヴァーリが投げ捨てられたことにも驚いたが、床下から這い出てきた一つ目の巨象の姿を見てまたもや一誠たちは驚く。
二足歩行する象。そんな奇怪な生物を見て驚かない方が無理であった。
床下から出て来た巨象はすぐにヴァーリの後を追おうとするが、視界の端に一誠たちの姿を捉え、足を止める。そして主に一誠を凝視し始めた。
「な、なんだよ?」
いきなり見つめられることに一誠は構えながら警戒する。
パオオオオン。

嘶く巨象。その鳴き声を聞いた瞬間、一誠たちの頭に一つの声が響く。
『あとは任せる』
「へっ？」
声の内容を理解するよりも先に一誠の胴体に巨象の鼻が巻かれ、ヴァーリと同じように窓ガラスから投げ飛ばされた。
「イ、イッセーせんぱーい！」
「イッセー！　何の――」
巨象に文句を言おうとするがそれを聞くよりも先に巨象の体が崩れ、平たい影へと変わると近くの影に混ざり、あっという間に姿を消してしまうのであった。
「いててて」
窓ガラスから投げ飛ばされた一誠は背中から地面に着地、その痛みに悶える。そのとき一誠の耳に長い溜息が聞こえてきた。
「はあああ……結局こういった形に納まるのか……」
心底うんざりした声。声の方を見るとそこには鎧を解除したヴァーリが立っていた。
「運命、因縁、宿敵、言葉にすれば大層に聞こえるが実際に自分の身に起こるとこんなにも期待外れなものだなんてな……」
「急に何を言っているんだ？」

独白するヴァーリに一誠は困惑する。
『相棒、構えろ』
「ドライグ？」
『奴はお前を殺す気だ』
「なっ！」
『禍の団』のテロ行為を防ぐ為にヴァーリが戦っていたと思っている一誠には、ドライグの言葉は不意打ちであった。
「そんなものに縛られている限り、俺の愉しみが奪われていくのならば……ここで死んでくれるか？　赤龍帝」
ドライグの言葉を肯定するかの様にヴァーリは一誠に向け、殺意を叩き付けるのであった。

激突、解放

兵藤一誠は混乱していた。今、目の前に立つ銀髪の美丈夫、ヴァーリから殺気と共に殺意の言葉を叩き付けられたせいで。

『死ね』という言葉は生まれてから今までの間に耳慣れているという程、異性から――主に覗きなどがばれて――散々言われ続けていた言葉であった。堕天使との戦いのときも、ライザーとの戦いのときも聞いた。だがヴァーリの一言はそれら全ての謗りを合わせてもなお重かった。

感情に任せて言い放つといったものの比では無く、明確に殺す意志を込めての言葉であった。

「――一体、どういうつもりなんだ？」

殺気に呑まれる中で何とかその一言だけが一誠の口から出た。

一誠の認識ではヴァーリはアザゼルに言われ、新校舎の方に出現した魔人の相手や魔術師たちを掃討していた筈である。

だというのにいつの間にか旧校舎内に移動し、尚且つ一つ目の巨象と戦っていたという訳の分からない状況であった。

「何でお前はここに居る？　魔人はどうした？　アザゼルに言われたのか？　てかどうして今、ここで俺とお前が戦わなきゃならない」
新校舎で魔人や魔術師たちに襲撃され、間もなくして旧校舎へと転送された一誠は、新校舎内で何が起こったのか全く知らない。故に憶測でヴァーリがここにいる理由を尋ね、またいきなり殺気立っている理由も尋ねた。
その問いにヴァーリは溜息を吐き、呆れた視線を一誠に向ける。
「君は鈍いな」
「えっ？」
そう言うとヴァーリは突然一誠の胸倉を掴み、片手で一誠の身体を持ち上げる。
「くっ！　何だよ！」
その行動に驚き、咄嗟にその手を引き剥がそうとするが、倍加が掛かった一誠の両手でも、制服を掴むヴァーリの指一本すら剥がすことが出来ない。
ヴァーリは自分たちが落とされた場所に一度だけ視線を向けた。
「これ以上、邪魔が入るのは御免だ。場所を変えよう」
するとヴァーリの背部に展開されている『白龍皇の光翼』から光が噴き出し、一誠を掴んだまま飛翔する。
「うおお！」

一誠自身も悪魔である為、背中の羽で何度か飛んだことがあるが、それとは比較にならない程の速度で上昇する。
顔面に強風が当たり、まともに目を開くことが出来ない状態であったが、突如として上昇感が消える。
そこで目を開けた一誠が見たのは、旧校舎よりも数十メートル高い位置で見ることが出来る光景であった。
僅かな時間であったが、旧校舎を見下ろす位置からは様々なものを一誠は見ることが出来た。
一誠たちよりも更に高い場所で、真紅の光が眩くも寒気を感じさせる光に包まれている光景。
（もしかして……サーゼクス様！）
そして旧校舎の正面付近では、見覚えのある人物が堕天使の光と共に、蛍光色の魔力を放っている。
（間薙！）
無事とは言えない状況であるものの、死なずに未だ戦い続ける仲間の姿を見て、場違いであると分かっているが胸中に一抹の安堵を覚える。
だがその安堵も、次なるヴァーリの行動によって全て払拭された。

十分な高さまで上昇したと判断したヴァーリは一誠を掴んだ腕を振り翻す。その行動が何を意味するか瞬時に理解した一誠は更なる力で抵抗を試みるものの、相変わらずヴァーリの手はびくともしない。

そして、ヴァーリは振り翻した腕を地上目掛け、一気に振り下ろした。

一誠は目に映るものが全て混色したように見えた次のときには、上昇したときよりも上回る速度で地上目掛け落下していた。

（だあああああ！）

口から絶叫を出す余裕すら無い。地上まで数秒も待たずに激突する。

仮に悪魔の羽を広げても減速させるには力も時間が全く足りない。

だとすればこの状況から生還する方法は一つしかない。

『相棒！』

（分かっているさ！）

プロモーションにより『兵士』から『女王』へと昇格し、基礎能力を底上げする。本来ならば『王』であるリアスの承認が必要であるが、旧校舎に転送される前に既に承認を得ているので、いつでも自分のタイミングで発動出来る様になっていた。更に腕に装備していたアザゼルから貰った腕輪が光を放つ。その光が一誠の『赤龍帝の籠手』に填め込まれた宝玉へと取り込まれたとき、『赤龍帝の籠手』から赤色の強大な魔力が噴き出

し、一誠の身体を包み込む。
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｏｖｅｒ　Ｂｏｏｓｔｅｒ』
籠手から響く声と共に一誠を包み込んでいた魔力は実体へと変わり、全身を覆う鎧と化す。
『赤龍帝の籠手』の禁手化、『赤龍帝の鎧』を纏った一誠は宙で素早く身を翻し、地面に向けて背を向ける。そして、背中に備えられた噴射口から一気に魔力を噴出させ、落下速度の相殺を試みた。
残された限り在る時間の中で、生き延びる為に全力を尽くす一誠。その甲斐あって、落下速度は最初のときよりも落ちる。
だがやはり時間は足りず、完全に勢いを殺すことは出来ずある程度減速した後、背中から地面へと着地する。そしてそのまま地面を削りながら数メートル程滑っていく。
「ぐっ！」
背中から胸に突き抜けていく衝撃に堪らず声を上げた。しかし、鎧を纏っていたおかげで呻く程度で済んだとも言える。生身であったならば、声など出す余裕も無いかもしれなかった。
『大丈夫か？』
「ああ、何とか……」

ドライグの気遣う声に答えながら、一誠は身体を起こす。
アザゼルから貰った腕輪のおかげで代償無く禁手化を行うことが出来たからこそ軽傷で済んだ。仮に腕輪が無かったのであれば、否応無しに代償を支払っているか、もしくは今頃地面の染みと化していたかもしれない。
もしもの未来に軽く身震いをしながら、一誠は左手の籠手にある宝玉を見る。そこには禁手化が解けるまでの時間が表示されており、残り時間は十五分であった。
「流石に生き延びたか。――まあ、それぐらいはしてくれなきゃ逆にこっちが困る所だ。何一つ力を発揮せずに終わるなんて、敵とはいえ可哀そうだ」
ヴァーリもまた地に降り立つ。『赤龍帝の鎧』を纏う一誠を見て、ほんの少しではあるが口の端を吊り上げる。尤もそれは愉し気な笑みというよりも、落下死などというつまらない結末で無かったことに対する、安堵の様な笑みであった。
「……内通者がいるかもしれないとアザゼルが言っていたが、それはお前なのか？」
『禍の団』が現れたとき、何気なく呟いたアザゼルの言葉を思い出した一誠。それに今のヴァーリの行動と合わせて、自分なりの推測を口にする。
「そうだよ」
ヴァーリはあっさりとそれを認めた。
「何で……！」

「会談のときに言った筈だ。俺は戦えればそれでいいと。三勢力の和平で争いが無くなるならば、戦える場所を求める。必然だろう？」

悪びれない態度のヴァーリに、一誠は頭に血が昇ってくるのを自覚した。ヴァーリのせいで、今も仲間が危険な戦いに巻き込まれていると知ってしまった故に。

「……ふざけんなよ、この野郎！」

自分でも驚く程、低く唸る様な声が出る。今まで一誠が生きてきた中で、ここまで怒りを相手に抱いたのはレイナーレぐらいであった。

「――ははは！　どうしたんだい？　さっきよりも力が上がっている。俺のしたことに腹が立ったかい？　『怒り』、単純な理由ではあるが神器を動かすにはこれ以上ない想いだ」

『想いが純粋であればある程、神器の力は増大する。ドラゴンにとって純粋な心は良き糧だ』

「たしかに」

目の前で力を増大させていく一誠を見てもヴァーリの余裕は消えず、アルビオンと言葉を交わす余裕すらある。

『もっとも――』

「てめえはぶん殴る！」

怒りに任せ、一誠は左腕を大きく振り上げ、薄ら笑いを浮かべるヴァーリに向かって、背部の噴射口から魔力を噴出し加速して接近する。
速度を上乗せした一誠の拳が、ヴァーリの顔面目掛け放たれる。
直後、響き渡る金属同士が擦れ合う音。
『――お前の方が遥かに上だがな』
「なっ！」
『馬鹿な……』
一誠とドライグがほぼ同時に驚愕の声を上げた。
ヴァーリはその場から一歩たりとも動かずに一誠の拳を掴み、押さえ込んでいたが、二人が驚いたのはそこではない。一誠の拳を掴むヴァーリの右手は、指先から肘に掛けて白の鎧で覆われていた。
「何を驚いているんだい？　ドラゴンの力を扱うんだ。せめてこれぐらいの芸当はできないとな」
『部位限定で禁手化だと！』
全身ではなく体の一か所のみを限定として禁手化を発動させる。少なくともドライグが見てきた歴代の白龍皇の中で、そのようなことが出来た者は居なかった。
ヴァーリは掴んでいた手を引く、その力で一誠は前のめりになりそうになるがすぐに

踏み止まる。だが、そのときに起こる体の硬直を見逃さず、ヴァーリの方から踏み込むと、無防備に曝け出された一誠の腹部に拳を突き立てた。

「ぐぅ！」

鎧を貫く衝撃。ドラゴンの皮膚と変わらない装甲を纏っていても感じる痛み。ヴァーリの左手もまた右手同様に手甲で覆われていた。

ヴァーリは更に数発拳を叩き込む。一発の拳速は早く、一誠の視点から見ればほぼ同時に叩き付けられた感覚であった。

白の手甲が赤の胸甲を打ちつける度に甲高い音が鳴るが、八発目の拳が装甲に叩き付けられると甲高い音に異音が混じった。

一誠の鎧に罅が生じていたのである。

「だあ！」

痛みを堪え、一誠は狙いなど碌に定めずに右腕を大きく振るう。掴まえられた左手を離させることが目的とした、技術も何も無い攻撃。

ヴァーリはそれを受け止めることはせず、意外にも一誠の思惑通りに掴んでいた手を離して回避した。

空を切る一誠の拳。このとき空振った勢いで一誠の身体は拳の軌道に沿って動いてしまう。そのとき、ほんの僅かの間、一誠の視線はヴァーリから外れてしまった。

一秒未満の見逃し、だがヴァーリにとっては十分過ぎる程の隙であった。
逸らしてしまった視線を戻したとき、先程まで居たはずのヴァーリの姿が無い。
（どこだ――ッ！）
首に突如として掛かる圧力。背後から伸びたヴァーリの手が一誠の首を絞め、そのまま後ろへ引き倒そうとする。
それに抗い、腹筋に力を入れて上体を前に倒そうとする一誠。このとき丁度、胸部を仰け反らせる格好となる。
「貧弱だな、赤龍帝」
その仰け反らせた胸部目掛け、ヴァーリの肘が振り下ろされた。拳のときよりも遥かに大きな音を立て、ヴァーリの肘が一誠の胸甲へとめり込み、刻まれた罅を更に大きくする。
「ぐはっ！」
堪らず一誠は苦鳴を上げる。首を絞めていた手は外れており、一誠の身体は背中から地面に強く叩き付けられた。
「困ったな……想像以上に手応えが無い。弱いなぁ、本当に弱い。君の実力はそんなものなのかい？　俺は強い奴と戦うのは好きだが、弱い者いじめは嫌いなんだよ」
ヴァーリは一誠を見下ろし、失望混じりの言葉を掛ける。

「く……そ……！」

悔しさを滲ませながら立ち上がろうとする一誠であったが、そこに容赦の無くヴァーリが足底で踏みつける。その足は膝まで装甲に覆われ、腕と同様に限定的に禁手化をしていた。

両腕を交差し、それを防ぐ。しかし僅かに拮抗した程度であり、交差した両腕は胸部へと押し込まれ、更に地面に背を付けている状態では衝撃を逃すことが出来ず、踏み付けの威力で一誠の身体は地面へと文字通り沈み、その圧力で地面に亀裂が生じる。

「これが君の限界かい？」

尋ねながらも踏みつける威力は劣らず、寧ろ徐々に圧力を増していく。押し込まれている両腕は胸部へとめり込み始め、ミシミシと破壊されていく音が鎧の裡に響く。

相手の方が実力は上であることは分かっていたが、ここまで圧倒的なものであるとは一誠も思わなかった。こちらは禁手化して力を上げているというのに、部分的に禁手化しただけのヴァーリに手も足も出ていない。

あまりに高く分厚い壁であった。

（このまま殺られるのか……！）

焦燥、恐怖が胸中に湧く。レイナーレ、ライザー、コカビエルとの戦いでも感じたことがあるが、ここまで明白に感じたことはなかった。

「俺はどうすればいいのか……君の実力を改めて知って君を嘲笑えばいいのか、それとも己の運命を嘆けばいいのか……対と成る龍の神器を持つ所有者、だというのに生まれた時点で差が出るとは本当に運命は残酷だ」

そう言うとヴァーリの背中から何かが飛び出す。

「なっ！」

一誠にも見覚えのあるソレは紛れも無く悪魔の羽。それも一対ではなく何対も生やしている。

「赤龍帝、俺の本名はヴァーリ・『ルシファー』というんだ」

「ヴァーリ……『ルシファー』だと……！」

サーゼクスと同じ魔王の名。それが含まれているということはある事実を示していた。

「大戦時に死んだ先代ルシファーの血を受け継ぐ者、旧魔王ルシファーの孫である悪魔の父と人間の母との間に生まれた混血児、それが俺だ」

頭を殴られた様な衝撃であった。悪魔として最高位にある血を持ち、そして半分が人で在るが為に神器として最上級である神滅具を手に入れる。それは一体、どれだけ確率が重なればこのようなことが起こるのであろうか。

『……馬鹿げた奇跡だ』

『否定はしない。だが実際に起きた、それが全てだ』
信じ難いといった様子のドライグに、アルビオンは至って冷静に告げる。
「それに対して君は至って平凡だな。父親は普通のサラリーマン、母親は専業主婦、血縁を何代遡ろうが異能者や術者は無し。見事なまでに一般人だ。自分や周りを含めてごく普通の君が『赤龍帝の籠手』を手にするとは……俺とは違った意味で奇跡のようだ」
いつの間にか調べ上げられた一誠の情報。それを語りながらヴァーリの声はどんどんと暗いものへと変わっていく。
「ここまで普通だと興味を持つ方が難しいだろう？　気持ちを昂らせること自体が空しい。どうすればこれ以上失望せずに済むのか――と考えていたがさっきの君の態度を見て思いついたことがある」
ヴァーリは一誠の目を真っ直ぐ見ながら淀みの無い口調で言った。
「君の両親を殺そう」
「……何？」
あまりに爽やかに言うので一誠は一瞬、ヴァーリが何を言ったのかが理解出来なかった。
「不幸によって両親を失う。これで君の人生にも多少なりとも厚みが出て来るだろう？
復讐という名の厚みが。どうせ君は転生悪魔だ。余程のことが無い限り君よりも先

に親は逝く。生きて老いて死ぬぐらいならばドラゴンに葬られたという最期の方が箔が付くんじゃないかな?」

身勝手なことを言うヴァーリに一誠よりも先にドライグが声を出す。

『……血筋は一流でも挑発は三流だな』

『生憎、挑発でも冗談でも無い。ヴァーリが言うのであれば本気だ』

『ならば一流なのはその身に宿る血だけだな』

ドライグは明確な敵意をヴァーリたちに向けた。自分の相棒を追い込む様な台詞を聞いて不快感と怒りから口を出さずにはいられなかった。

「それでも足りないというのであれば、君の友人たちにも死んでもらおう。――今の状況ならばすぐにそれが出来るが?」

更に重ねられていく言葉。それを聞いたとき、一誠は頭の中で複数の糸が千切れる様な感覚を覚えた。

「……殺すぞ、この野郎」

生まれて初めて本気で他人へと向けるその言葉。口に出さずにはいられなかった。身勝手な理由で自分たちの為に身を粉にして働く父、そんな父や自分を支えてくれる母の命が奪われる。それだけでも血の煮え立つ様な気持ちになる。それだけでは留まらず日々を過ごす上で最早欠かすことが出来ない仲間たちにすら手を出そうとしている。

怒りは昇華し『殺意』へと転じる。最早、体の内に宿る衝動を抑えることなど出来はしなかった。
「てめえの都合で俺の親や仲間を殺すだと……そんなの許すことなんてできるわきゃねぇだろうがぁぁぁ！」
踏み付けるヴァーリの足を掴むと同時に、背中の噴射孔からありったけの魔力を噴出させる。真上に飛び上がると何処へ飛ぶのか本人すら分からない無軌道を描き、空中を不規則に飛ぶ。
「はははは！　その調子だ！　また力が上がった！　もっとだ！　もっと力を上げて俺の退屈を消してくれ！」
飛びながらも哄笑を上げるヴァーリは掴む足を無理矢理捻り、一誠の側頭部を蹴りつける。
頭を突き抜けていく衝撃。視界が揺れ、吐き気が込み上げて来るが一誠は掴む力を緩めず、そのまま地面目掛け吶喊する。
「おおおおおおおおおおお！」
なりふりなど一切構わない単純な動作。しかし、驚異的な加速を得たことでそれは必殺に近い威力を秘めている。
しかし――

「残念だが」
掴まれている方の足の膝を曲げ、自分から一誠の方に近付くと、ヴァーリは足を掴む一誠の指を狙い、肘を振り下ろした。
ミシリという嫌な音が一誠の体内で木霊する。折れてはいないが、罅は間違いなく入っていた。それにより掴んでいた力が僅かに弱まる。
ヴァーリはそのタイミングを狙い、掴まれていない方の足底を一誠の腹部に叩き、その反動で足の拘束を解く。そしてすかさず一誠から離れると、何事も無かったかのような動作で軽やかに地面へと着地。一誠の方が勢いよく地面にその身を叩き付け、砂煙を上げた。
「こ、の……！」
仮面の下で歯を食い縛りながら一誠は立ち上がる。全身が痛むが、そのようなことなど気にしていられない。目の前のヴァーリを殴る。その思いが一誠の身体を動かしていた。
「ほんの少しだけだが興味を向ける程度の力にはなったかな？　さっさと構えたらどうだい、赤龍帝。ここからは俺も強さを一段上げるぞ？」
立ち上った一誠が見たのは顔以外に鎧を纏ったヴァーリであった。完全に禁手化していない状態でも一誠を圧倒していたが、ここから先の戦いは禁手化を存分に使い戦う

ことを意味していた。
「まずは十秒ぐらいは耐えてくれよ?」
ヴァーリの顔が装甲で覆われた次の瞬間、ヴァーリは既に一誠の懐へ飛び込んでいた。その状態から拳を突き上げると、重々しい音と共に一誠の足が地面から離れる。
殴打の衝撃で浮き上がった一誠にヴァーリは続けざまに拳を打ち込む。その拳は正確に一点だけを叩き、その度に『赤龍帝の鎧』に亀裂が生じた。
一撃一撃の殴打の重さに一誠は鎧の下で苦悶の表情を浮かべる。ヴァーリが言った様に先程よりも一撃が強く、受ける度に肺の中の空気を全て吐き出しそうになり、目の前の光景が白黒に反転する。
反撃を試みようとするものの、ヴァーリの拳撃はその暇など与えず、一誠は豪雨の様に直撃してくるそれに耐えるしかない。
そのとき前触れも無くヴァーリの連撃が止まる。何事かと思うよりも早く、ヴァーリの掌が一誠の仮面を鷲掴みにした。痛みは無いが、凄まじい音を上げて仮面が軋む。握力のみでドラゴンの鎧を破壊していく。
一誠も黙ってそれを見ている訳にはいかず、掴んでいるヴァーリの腕に手を伸ばすが、指先が触れる前にヴァーリの前蹴りが一誠の鳩尾に突き刺さり、そのまま蹴り飛ばされた。

勢い良く飛ぶ一誠の身体は進路上に生えていた大木に背中から衝突。それにより樹齢何十年といった樹がへし折られる。

「く、そ……！」

「意識があるか偉いぞ。そして丁度十秒だ」

『Ｄｖｉｄｅ』

ヴァーリの鎧から音声が響くと一誠は脱力感に襲われる。白龍皇の能力によって力を半減された証であった。半減された力はヴァーリに吸収され、更なる力がヴァーリへと加わる。背部に備わった光翼からは一層激しく光が噴き出していく。

白龍皇の能力について事前に知っていたが、自分で味わうとどれほど厄介なものかが分かる。只でさえ圧倒されている状況だというのに更に手枷や足枷を嵌られた様に体が重い。

『相棒、半分にされた力は俺の能力で元に戻すことは出来る。だがその度に鎧を維持する力を消耗していくことになる。腕輪の力で補助されているとはいえ仮初めの禁手化だ。注意しなければすぐに限界を迎える』

相手の禁手化は無制限に対しこちらは有限。時間が経てば経つほどに今でも開いている両者の差が更に開くこととなる。

圧倒的不利な状況。しかし、それでも一誠は屈することは無かった。

「なおのこと！　立ち止まれないだろうが！」
『そうだな。全力で助力する、いけ！　相棒！』
『Ｂｏｏｓｔ』
　失われた力を倍加によって埋めた一誠は背後の樹を蹴りつけ、勢いを得ると構えずに立つヴァーリに突撃する。
「単調だな」
　その突撃を軽く笑いながらヴァーリは真正面から迫る一誠の拳を見ると、地を滑る様にして動いて迫っていた拳の側面に移動すると、その拳を両腕で掴み、地を蹴ったことで跳ね上がった膝で一誠の顎を突き上げる。そしてそのまま掴んでいた腕を振るい、一誠を地面に叩き付けた。
　地面に転がる石礫が宙に浮く程の勢いで背中から叩きつけられるが、一誠は痛みを全部無視して脚を上げ、腕を掴んでいるヴァーリの顔面に爪先で狙う。
　しかし、ヴァーリは顔を後ろに逸らして難なくそれを回避。だが一誠は僅かに意識が別の方へと向けられた瞬間を狙って、掴まれている腕を全力で振るいヴァーリの手から引き剥がした。
　すぐに立ちあがる一誠であったが、次にヴァーリを見たときに目に映り込んだのは無数に浮かぶ魔力の弾。

「避けるか、耐えてみろ」
その言葉を合図に宙に浮かんでいた白色の魔力弾が一斉に放たれる。
「上等だぁぁぁ！」
一誠は吼えると背中の噴射孔から魔力を噴き出させ、魔力の弾幕に向かって突き進む。
魔力弾の中に入った途端、四方から迫る弾が次々と鎧に着弾していく。当たる度に鎧に亀裂が生じ、欠ける部位もあり、ただの魔力であっても一発一発がヴァーリの拳と同等の威力が秘められていた。
そんな中を進む一誠の身体は見る見るうちにボロボロになっていき、弾幕を突き抜けたときには鎧は傷だらけになっており、顔を覆う仮面部分には大きな縦の亀裂があった。
勢い良く背部から噴き出ていた魔力も弱まり、立っているのがやっとのような有様である。
そんな状態でヴァーリの前に立った一誠はよろよろとした弱々しい動きで左拳を突き出す。
突き出された拳を難なく受け止めるヴァーリ。
「耐えたことは褒められたものだが、それだけではね……兵藤一誠、君はドライグを使い

こなすには些か知恵が足りないみたいだな」
　ヴァーリが見下すような台詞を言うのに対し、一誠は荒い息を吐くだけ。既に限界が近い様子であった。
「罪だよ、その力の使い方の下手さは。こういうのは君の国の諺でなんて言ったかな――ああ、『宝の持ち腐れ』か」
「……だったら」
「ん？」
　ぼそりと呟く一誠の言葉にヴァーリは耳を傾ける。
「こういうのはどうだ？」
『Ｂｌａｄｅ』
　その音声が響くと同時に『赤龍帝の籠手』に納められていたアスカロンが展開。左手を押さえる形であったヴァーリの手を貫通。腕内部を通過し、肘辺りからその切っ先を現した。
「くっ！」
『ヴァーリ！　その剣をすぐに抜け！　竜殺しの力を帯びている！』
　初めて痛みを耐えるような声をヴァーリが洩らし、アルビオンも初めて焦りを帯びた声で指示を出す。

「しゃあ！」
思わずしてやったり、という意味を込めた歓喜の声を上げる一誠。剣術の心得など全く無い一誠が確実に一太刀入れる為に考えた即席の策。それが見事にはまった。
ようやく入れた一撃。変わるかもしれない流れに喰らい付く為に、すぐさま次の行動に移る。
ヴァーリの肩部を掴むと面で覆われたヴァーリの額に向け、己の頭を叩き付ける。
「ツッ！」
アスカロン程ではないが痛みを覚えた様なヴァーリの声が面越しに聞こえてきた。それと同時に叩き付けた衝撃で一誠の面の一部が割れ、破片が落ちていく。面が割れたせいで顔の一部が露出するが、今はそんなことなど気にしていることなど出来ない。
二度目の頭突き。一誠の面が更に割れるが、ヴァーリの面にも亀裂が生じる。
三度目。ヴァーリの面の亀裂がより大きなものとなる。
そして、四度目の頭突きを放とうとしたとき一誠の肩にヴァーリの手が伸びる。このまま押し止める気かと思った一誠はより勢いをつけて叩き付けようとしたが、止められるのではなく逆にヴァーリは一誠を引き寄せた。
「ぐあっ！」
四度目の衝突。しかし、苦鳴を上げたのはヴァーリではなく一誠の方であった。

ヴァーリの方から頭を叩き付けてきたからである。
赤と白。互いの鎧の仮面が接した状態から両者の仮面が割れる。
仮面越しでは無く、素顔で互いに睨み合う両者。二人とも額が割れており、そこから流血をしていた。
「中々、粘るじゃないか。兵藤一誠！」
「お前の思い通りになると思うなよ！　ヴァーリ！」
ヴァーリは凄絶な笑みを浮かべ、一誠は鬼気迫る表情をする。
「アスカロン。正直、これを君が持っているのは誤算だったよ。――だがおかげで気力が湧いてきた！　ようやく君と面を向かって戦えそうだ！」
アスカロンが貫く傷口からは夥しい血が流れている。『白龍皇の鎧』の強度でも竜殺しの特性の前には紙同然であり、刺し込まれた刃はヴァーリの左腕の肉と骨を裂き、尚且つ剣身から竜殺しという毒をヴァーリの体内へと流し込んでいた。
しかし、ヴァーリに焦りは無い。寧ろこのような展開となることを喜んでいる自分がいた。痛みを与えられたことに喜んでいるのではない、余裕の無い状況へと変化していく自分の立場に心を燃やしていた。
何の特徴も無く、ただ神滅器に選ばれただけという凡百の好敵手。運命が戦えと言っているように、目の前の良質な戦いから引き離された挙句に持ってこられた、眼中にも

無かった相手。
運命、因縁という見えない柵のせいでこの様な相手を充てがられることに嘆き、いっそのこと始末してしまい、未来に希望を託すことを考えていた。
だが、結果はどうだ。左腕を使い物にされなくなっている。
気力が湧かなかったことも気分が高揚していなかったことも油断していたことも認める。それでもここまでされるほど近い実力では無かった。
だからこそヴァーリは笑う。自らが考える以上に喰らい付いてくる一誠のことを嬉しく思い。
「愉しくなってきたな、兵藤一誠」
底が見える様で見えない一誠の実力をもっと見たいと考え始めるヴァーリ。
「うるせぇ！　この野郎！」
気を抜けば呑み込まれてしまいそうになる覇気を前に一誠は啖呵を切る。だが忘れてはいけない。
ヴァーリが一誠の実力を見抜くことが出来なかったのと同様に、一誠もまたヴァーリの実力について何一つ見抜いてはいない。
歴代最高の白龍皇と称されるヴァーリの実力。その実力の底はあまりに深い。

◇

「イッセー！」

ヴァーリに首を掴まれ、そのまま空に連れられていく一誠の姿を見て思わず窓から身を乗り出してリアスは叫ぶ。だがその叫びに応じる声は無く空しく夜空へと木霊した。

赤と白の光はすぐにリアスの視界の中の外へと消えてしまい、二人が今どうなっているのか全く分からなくなってしまう。

「一体どういうつもり！」

リアスは足元に伸びる影に向かって怒鳴りつけた。突如としてヴァーリと一緒に廊下を突き破って現れたかと思えば、そのままヴァーリを窓の外へと投げ飛ばし、更に序でと言わんばかりに一誠も窓の外へと投げ飛ばした、今起きたことの元凶とも呼べる一つ目の象の獣人がこの影の中に潜んでいる為である。

「どうしてヴァーリと戦っていたの！　何故、ヴァーリはイッセーを連れて行ったの！

さっさと出てきて答えてくれるかしら！」

詰問するリアスであったが影には一切の変化は無く、鳴き声一つ上がらない。完全にリアスのことを無視していた。

側ではギャスパーがリアスの剣幕に完全に怯えており、ピクシーたちを抱えながら廊下の端でどうすればいいのか、といった様子でリアスと影を交互に何度も見ている。

「――そっちがそういった態度をとるなら、こっちもそれ相応の手段に出るわよ？」
低い声を出しながらリアスの手の中に滅びの力を備えた赤色の魔力が炎の様に揺らぎながら現れる。だがそれでも影に変化は無い。
「このっ！」
魔力を持った手を掲げ、そのまま廊下の影に向かって振り下ろす――ことはせず、リアスは溜息を吐いた後、溜めた魔力を霧散させた。
「こんなことをやっている場合ではないわね」
徹底してこちらのことを無視する巨象に怒りを向けることを馬鹿馬鹿しく感じてしまい、感情が冷えていく。一旦怒りが冷めていくことで、自分が状況のせいで焦り、昂り易くなっていることを自覚、より心が静まっていく。
そうすることで一度に起こったことを頭の中で冷静に分析し始め、すぐにヴァーリが一誠を連れ去っていったのか、大よその推測が浮かぶ。
「――私はこのままイッセーとヴァーリを探すわ。ギャスパー、貴方は」
「ぶ、部長！　僕、どうしても行かなきゃいけない所があるんです！」
リアスが指示を出す前にギャスパーが自らの意志を主張する。リアスはそれに一瞬驚いた顔をしたが、すぐにその表情を消し、真剣な眼差しをギャスパーに向けた。
「それは何所かしら？」

「間薙先輩の所に」
　リアスの目を真っ直ぐ見つめながらギャスパーは言う。
「間薙先輩は僕の力のせいで僕たちを守る為に独りで戦うことになりました。でも、今だったらほんの少しだけでも先輩の力になれるんじゃないかって……」
「罪滅ぼしをしたいの？」
「――かもしれません。自己満足だと分かっています。でも……」
「分かったわ。行ってきなさいギャスパー」
　最後まで聞かずにリアスはギャスパーの意志を尊重する。
「いいんですか！」
「イッセーのことは私に任せなさい。貴方にはシンのことを任せたわ」
「は、はい！」
「貴方達はどうするの？　ギャスパーについていく？」
　リアスはピクシーたちの意見を聞いた。
「うーん。もしもシンが居たら『俺のことはいいから部長たちを守れ』って言いそうだからアタシ、リアスについていく」
「オイラもそんな気がするからリアスについてくホー！」
「じゃあ～ボクは～」

ピクシー、ジャックフロストがリアスについていくという選択をする。最後の一人となったジャックランタンはちらりとギャスパーの方を見た。ジャックランタンの視線に気付いたギャスパーは小さく首を横に振る。
それを見たジャックランタンの中で選択は決まった。
「リアスについていくよ～。ギャスパ～、それでいいんだよね？」
ジャックランタンの問いにギャスパーは頷く。
「貴方達はそれでいいのね？　もしかしたら後悔するかもしれないわよ？」
「大丈夫だって。きっとシンにはまた会えるから」
悪魔、魔人、魔術師たちが跋扈する戦場の中で、無事再会できるというピクシーの言葉には何の根拠など無かった。
ピクシーは事態を楽観視してこのようなことを言っているのではなく、信用、信頼といったもの以上の言葉に出来ないナニかによって、シンとの再会を信じていた。
「分かったわ。なら行きましょう。飛んでいった位置から大体の場所は推測出来ているから。貴方の無事を祈っているわ、ギャスパー」
「じゃあ、行こう。ギャスパーは、シンのこと頼んだよ」
「ギャスパーは、また後でホー！」
「ボクが居なくても～ベソかかないでね～ギャスパ～」

それぞれがギャスパーに言葉を送りながら、リアスを先頭にして走り去って行く。
一人残されるギャスパー。その状況が怖くないと言えば嘘になるが、今のギャスパーはそれに屈する程弱くはなく、一誠の血を呑んだ影響で身体に残る熱がギャスパーの身体を突き動かす。
「大丈夫、大丈夫……行こう」
ギャスパーはリアスたちが走って行った方向に背を向け走り出す。
自らが為すべきことを為す為に。

◇

黒い粘液を固めた様な異形が人の頭よりも大きな拳を握る。しかし、ゼノヴィアはその拳が振るわれるよりも前に異形の懐へと飛び込んでいた。
『騎士』の駒で得た力は、ゼノヴィアに韋駄天の如き速さを与えていた。振りが大きな大剣を武器とするゼノヴィアにとって、速度を強化されることは自らの弱点を埋めることに繋がり、その実力をより高めさせていた。
懐に入ると同時にゼノヴィアは、肩に担ぐ様にして構える聖剣デュランダルを異形の胴体へと振るう。刃先が体に埋まり、抵抗も無く進みやがて腹から背に抜けると、デュランダルが斬り付けた周辺はまとめて背後へと散り、異形の身体を両断どころか、切断

面が一致しようが無い程に吹き飛ばされる。
上半身はそのまま錐揉みしながら上空へと飛び上がり、下半身はその場で膝を折る。だがゼノヴィアが息吐く暇も無く、下半身の断面が波打つと宙にある上半身の断面目掛け、無数の触手を伸ばす。触手は上半身の断面に触れるとそのまま同化。一気に引き寄せて元の位置に上半身を納め、何事も無かったかのように近くに立つゼノヴィアへ手を伸ばす。
すぐにそれをデュランダルで払うと、ゼノヴィアは一旦異形から距離を取った。
「限が無いな」
既に何度か繰り返した光景を見ながら、ゼノヴィアはやや疲れた様な声を洩らす。
この短時間でゼノヴィアは十数を超える聖剣の斬撃を異形に対し浴びせているが、その体を聖剣で吹き飛ばされる都度、すぐに修復をしていた。悪魔ならば数十回滅んでも釣りが来る程聖剣の力を流し込んでいるが、異形に効果は見えなかった。
せめて表情の一つさえあれば変化を見て取れたかもしれないが、生憎、異形には表情どころか顔すらない。
斬り付ける度に体の一部が飛沫と化して飛び、その分異形の身体が縮んでいることから全くの無意味という訳ではないが、十数度斬りつけてせいぜい数十センチ程の縮小ではあまりに先が長い。

迫り来る拳を腕ごと吹き飛ばしたゼノヴィアは視線を動かし、周りの状況を確認する。

異形に対し朱乃、小猫、匙は危なげなく立ち回っている。そして、セタンタ、木場の二人は異形の相手をしつつ復活した魔術師たちの相手もしており、異形の攻撃を掻い潜りながら魔術師たちを斬り伏せたかと思えば、魔術の隙間を縫って異形を穿つという行為を繰り返していた。二人の奮闘のおかげで他のメンバーも異形の方に集中することが出来ていた。

残るイリナの方はというと――

「それ！」

イリナが『擬態の聖剣』を異形に振るうと、その途端剣身が解れ、無数の糸の様な形に変わるとそれらが一斉に巻き付く。四肢や胴体に深く喰い込むとイリナは聖剣を手元へと引いた。

すると巻き付いた聖剣の刃は異形の体に吸い込まれる様に入っていくと、粘着質な音を上げてまず両手が斬り落とされる。その次には両脚が幾つものパーツに分割され、最後に胴体が細切れの形となった。

だが細かく切り刻もうが異形に痛覚など無く、すぐに切断された部位同士が結合し始め、元の形へと戻ろうとする。

それを見たイリナはすぐに追撃をしようとするが、そのとき斬り落とされた腕が一人でに動き、指先をイリナへと向ける。
すると五指の指先が同時に伸び、聖剣を振るおうとしているイリナに襲い掛かろうとする。
それに気付いたゼノヴィアは慌ててイリナの名を叫ぶ。
「イリナ！」
だが不幸にもこの叫びによってイリナの顔がゼノヴィアへと向けられ、迫る指たちから完全に意識を逸らされた格好となってしまった。
異形の五指がイリナの身体を貫く。心臓、肺、脇腹、肩、そして最後の一指が頭を貫く。誰がどう見ても即死は免れない傷であった。
「イリナァァァァァ！」
「何？」
「アァァ――ああ？」
絶叫するゼノヴィアであったが、何故かすぐ側からイリナの声がする。声の方に目を向けると無傷のイリナがキョトンとした顔でゼノヴィアの方を見ていた。
「どうしたの？」
「どうしたって……何故、生きている？」

「何故って？　あれあれ」
ゼノヴィアの最もな疑問に対し、イリナは答える代わりに突き刺されているもう一人のイリナを指差した。
貫かれているイリナは今側に居るイリナと全く同じである。だがそこでゼノヴィアはある違和感に気付いた。刺された部位から血が流れてはいない。
そのことに気付いたとき刺されていたイリナの身体が『解れ始める』。人型の輪郭はすぐに崩れ、色味もすぐに失われる。解れたイリナの身体は大量の糸の塊へと変貌していた。
「『擬態の聖剣』か！」
ゼノヴィアは理解する。糸の塊に見えたそれは、細く変形した『擬態の聖剣』の一部であると。
先程までイリナであった『擬態の聖剣』は、そのまま異形の指に絡み付きながら本体の方に伸びていく。そして、本体にも絡み付くと細い糸の様な剣身で全身を包み込んで行き、最後は繭の様な形となり異形を完全に密閉してしまった。
「ふふーん。どう？　あれから結構修行したんだから」
「――見事だな」
本心からの言葉であった。

『擬態の聖剣』の一部を切り離した状態で操るのもかなりの技術が必要であるが、更にそれを使い手の姿に変身させるなど凄まじいとしか言い様がない。身を守るための『擬態』と獲物を襲う為の『擬態』、その二つを完璧に熟しているのを見てゼノヴィアは、イリナが完全に『擬態の聖剣』を使いこなしているのが分かった。

「私も負けていられないな」

元同僚の成長を見せ付けられ、ゼノヴィアは目付きを鋭くするもその口には微笑を浮かべていた。

デュランダルの担い手であるが、未だゼノヴィアはデュランダルを完璧に使いこなしてはいないと自覚していた。先代の使い手があまりに偉大な存在である為にそれと比較して見ている部分もあるが、それでも担い手として不十分と言える。

ゼノヴィアはデュランダルを構えながら先程腕を吹き飛ばした異形に近付く。

肩まで腕を消し飛ばされた異形は失った部位を修復させていたが、ゼノヴィアが接近するのに気付き、残った腕で攻撃しようと構える。が、構えたときにはゼノヴィアの姿が異形の前から消えた。

消えたゼノヴィアを探し、目の無い異形は体を左右に振るう。しかし、右にも左にも居ない。

次に異形の身体が空を仰いだとき、そこには大剣を振り翳して飛び上がるゼノヴィア

がいた。
「はあ！」
　気合の声と共にデュランダルが振るわれる。剣身に帯びた聖なる力は、巨大な波動となって異形の頭上に振ってくる。波動に触れた瞬間、異形の身体は波動の圧によって地面に向かって勢いよく押し潰されていく。地面とほぼ平行に見える程に潰される異形の体、だがデュランダルの波動は更なる圧を加えていき、異形の身体は地面ごと沈んでいく。
　液体に近い柔らかさを持つ異形の身体が校庭の土ごと地面に押し固められていく様は、豪快と言っても差し支えなかったが、更にそれに対し飛び上がっていたゼノヴィアがデュランダルを突き立てる。
　纏っていた力を飛ばすだけでも絶大な威力を見せ付けたが、直接叩き付ける威力はそれの上を行く。
　ゼノヴィアの身体ごと地面が一気に陥没する。底が抜けたのではないかと錯覚する様な光景であったが、現実は校庭に底など無く、ただ凄まじい力で土が圧縮されているだけであった。
「ゼノヴィア？」
「何だ？」

イリナがデュランダルによって出来た穴を覗き込むと、下から普段通りのゼノヴィアの声が聞こえてくる。穴の深さは少なくともイリナの身長は軽く超えており、悪魔ほど夜目が効かないイリナには、月の光が届かない穴の底に居るゼノヴィアの姿が見えなかった。

「倒したの？」

「この通りだ」

カンカンという本来ならば聞こえない様な音が聞こえてくる。剣先で地面を突いているのであろうが、一向に土が堀返される様な音はしてこなかった。

「土に押し込めて固めてやった」

「うわー、物凄いごり押しな方法」

清々しいまでに力任せなやり方に、イリナは驚きと呆れを混ぜ合わせた感想を述べるのであった。

一方他のメンバーの戦況は――

「この！」

匙は『黒い龍脈』から伸びるラインを詠唱している魔術師に伸ばす。ヤモリ、あるいはカメレオンの様な愛嬌を感じさせる神器、その口から伸びる舌の様なラインは魔術師の腕に絡み付く。

それを見た匙は神器に意識を集中させ、ラインによって魔術師の身体から魔力を吸収していく。これにより、先程まで魔術師の手の中にあった魔力の弾は見る見る内に萎んで行き、やがて消失。そこから更に吸収することで、魔術師の体内にある魔術を空にしてしまう。

「ふう……」

もう吸える魔力が無いことを確認してから匙はラインを解き、戦いの場ではあったが思わず疲れた様な息を吐く。

体力や魔力が無くなってきたからではない。『黒い龍脈』によって魔術師たちから大量の魔力を吸い取っている。ならば何故疲労の様子を見せるのか。

原因は、今の匙が大量の魔力を蓄積し過ぎていたからである。

今までの間に何人もの魔術師たちから魔力を吸収してきた匙。いくら匙が悪魔だったとしても、吸い切れる魔力には限度がある。しかし、その魔力の限度を匙は神器によって補っていた。今まで吸ってきた魔力は全て匙の神器の中に納められている。が、神器とて溜め込む魔力に限りがあるのか、あるいは完全に神器を使いこなせていない匙の未熟さが原因なのか。

徐々にではあるが、神器の中に溜め込まれていた魔力が匙に逆流し始めていた。

（気持ちわりぃ）

魔力が自分の中に流れ込んでいくという感覚は、匙が想像しているよりも遥かに気分が悪くなる感覚であった。自分本来の魔力を高めたのであればこのような感覚に襲われなかったであろうが、他者の魔力で在る為に波長の様なものが違うのか、血流や筋肉が熱を帯びていき、頭の中で血管が脈打つ音が木霊する。

戦えば戦う程に不調になっていく体調に苛立ちを感じながら、匙は少し離れた場所で戦う木場たちの姿を視る。

一見鈍重に見える動きで手を翳す異形。その先には構える小猫がいる。異形の指先が複数の触手に分裂し、四方から囲むように小猫を狙う。

小猫は無表情のまま、左右から迫る触手を大きく後方へ退きながら避ける。そしてそのまま背後に設置してある休憩用のベンチの側まで移動すると、ベンチの背もたれを手で掴んだ。

しかし、一度持ち上げようとするものの持ち上がらない。小猫が視線を降ろしその原因を見る。ベンチの脚がボルトと金具によって地面に固定されていた。

原因が何か分かった小猫は背もたれを掴んでいた手を離す。持ち上げるのを諦めたのかと思いきや、今度は腰掛けの縁を両手で掴み、持ち上げる。すると金具が弾け飛び、地面に固定されていたベンチが持ち上がる。

どうやら持つ位置が悪かったらしい。

既に拳などの打撃が効かないと分かっていた小猫はベンチを担いで持ち、迫る触手に向けて力任せに振るう。風切り音を出しながら振るわれたベンチは何十本もの触手を纏めて薙ぎ払う。砕け散った触手は地面に転がりその上で黒い粘液となって蠢く。

片手を失った異形。だがすぐにもう片方の腕を小猫に向ける。

そのとき轟音が鳴り、異形の身体を雷が貫く。一撃で全身が黒焦げと化す異形であったが、まだその体はぎこちなくも動いていた。そこに更なる雷が降り注ぐ。今度は一撃では留まらず、何発もの雷が立て続けに落ち、焼け焦げた異形の身体を砕いていく。

最後の雷が異形に落ちたとき、異形の身体は完全に粉砕され、燃え盛る破片となって周囲に散らばった。

「ふう……」

上空で一息吐きながら、朱乃は雷撃で砕いた異形を見下ろした。最初に与えたときの数倍の魔力を込めて、再生が追い付かない程に雷を与え続けた朱乃であったが、結果としてそれなりの効果があった。だが消耗した魔力の量と比べて、割に合うとは言えない結果でもあった。

見下ろした先には、まだ多くの異形達が控えている。

そんな異形達の間をすり抜ける様にして駆け抜けていく、二つの影。異形の側を影が通り過ぎていく度に異形の身体は分断、あるいはその身が千切れる程に穿たれていく。

走る影は木場とセタンタ。持ち前の速度を生かし、縦横無尽に動き続ける。
木場は常に魔剣を創造し続け、異形を斬る度に魔剣に付与した効果を確認し、どれが最もダメージを与えられるか確認していた。
木場が異形の側へと接近し、離れ際に異形の膝を斬り飛ばす。異形を斬り付けた剣身は何かの液体によって濡れており、振り抜いた剣先から粘度の強い毒々しい液体が滴り地面に落ちる。すると液体が落ちた土が変色し、白煙を出しながら溶けていく。
木場が手に持っている魔剣は斬った対象を『腐食』させるという効果を備えていた。木場の性格とその効果の為に、実戦で使ったことなど全く無いものであったが、相手が通常の生物では無いと考え今回使用してみた。
斬った部分が僅かに溶け、変色しているものの、相手の修復をほんの少し阻害する程度の効果しかない。この魔剣の効果も期待できないと判断すると、すぐさま近くにいた異形の胴体目掛け投げ放ち、それが突き刺さると同時に新たな魔剣を創造する。
今のが駄目であれば、次はこれを試す。それも駄目であるならばその次を試す。試すべき魔剣は未だ無数にある。
木場が魔剣を振るう裏でセタンタはその槍を振り回す。
異形の真正面に立つとセタンタは構え、次の時にはその身が霞む。何をしているのか他者からは確認出来ない程の速度。僅かな時の中で尋常でない動きを繰り返す。

時間にすれば瞬き程度。セタンタの動きが再び人が見える程度の速度に落ち着いたとき、セタンタの前に立つ異形の身体は穴だらけになっており、無傷の部分を探すのが困難な程であった。

それでも風通しが良くなった体を動かし、異形はセタンタに向け手を伸ばそうとする。それを凍てつく様な眼差しで見ながら、マフラーの下で小さく息を吐き、同量を吸い込むと再び時間の流れを逸脱するような動きを見せた。

神速の槍捌き。既に無数に穿たれている異形にそれを耐える道理など無く、辛うじて無事だった部分も槍の突きによって細かく破壊され、異形はセタンタの前から完全に姿を消されてしまった。

「すげえ……」

遠巻きから眺めていた匙は思わずそう呟く。圧倒的身体能力と技術、それらが合わさって生み出す破壊に驚くしかない。

だがそれと同時に胸の中で湧き立つ感情もある。

羨望、あるいは嫉妬とも呼べるものであった。

セタンタと自分を比べることなど烏滸がましいという自覚はある。しかし、そのセタンタに合わせる様に、木場たちも慣れた動きで異形たちや魔術師たちを無力化していた。悪魔としての年数は負けているが、自分と変わらないぐらいの年齢の木場たちの動

きを見ていると、嫌でも自分の未熟さというものを見せ付けられる様な気がした。
異形たち相手に互角に戦う木場たちに比べ、自分はせいぜい魔術師たちの妨害というサポート程度、どうしても劣等感を覚えてしまう。
（くそっ！　もっと強く、もっと上手く神器を使えたら……）
今、そう思っても意味の無いことだと分かっているが、どうしてもその様なことを考えてしまう。
雑念を振り払う様に目の前のことに集中しようとした矢先、匙は視界の端で光るものを捉える。眼球のみ動かし、光の方を見るとそこには既に詠唱し終えた魔術師がいた。
「しまっ――」
今更、ラインを伸ばしても遅い。戦いの中で一瞬でも違うことを考えてしまった自分の迂闊さを呪いながら、匙はありったけの力を込めて地を蹴る。
直後、先程まで匙が立っていた場所に火柱が昇った。
背中に炎の熱を感じながら転がる様にして回避した匙はすぐに立ちあがろうとして、その動きを止める。
立ち上がろうとしてふと見た足元。そこにあるべき匙の影が無い。正確に言えば影があることはあるが、地面に映る影は匙の身体よりも遥かに大きなものであった。
下げていた目線を上げる。見上げた匙が見たのは、自分に向かって異形が今にも拳を

振り下ろそうとしている光景であった。
「あっ」
自分で聞いて間抜けと言える声が無意識に漏れる。
例え『黒い龍脈』を使ったとしてもあの拳を止めることなど出来ない。匙の神器にそれほどの力など無い。
何かをしなければ、何か行動に移らなければ、情けない結末に至ると思っていても体が付いていかない。
終わり。その三文字が頭の中に過ぎる。
（こんな所で？　何も成し遂げていないのに？）
匙の思いなど異形には何一つ分かる筈も無く、無慈悲な拳が振り下ろされ、それが匙を圧殺するかと思われた、そのとき――
「まだまだですね、サジ君」
冷めた声と共に、匙と異形の拳との間に巨大な鏡が現れる。縁に煌びやかな装飾をされたその鏡の鏡面に異形の拳が触れた瞬間、音も無く鏡が砕ける。と同時に異形の腕もまた木端微塵に砕け、その破壊は腕から胴体まで伝わり、異形の上半身が半分消失してしまった。
「副会長！」

鏡を顕現させた人物、副会長こと椿姫の名を呼びながら匙は慌てて立ち上がる。
「助力に来て正解でした」
「か、会長ぉぉぉ！」
椿姫だけではなく、会議室に居る筈のソーナも隣に居ることに気付き、半ば絶叫染みた声を上げる。
「油断しましたね、サジ」
「うっ！」
大口を叩いて戦場に赴いた癖に結局大した活躍も出来ず、挙句の果てにはやられそうになる場面を見られ助けられている。
醜態もいいとこである。
「この戦いが終わった後、特訓のメニューを再考する必要があるわね」
その一言で匙の全身から血の気が引く。今のメニューですら悪魔である匙が地獄だと感じているのに、これよりも更に厳しくなると一体どのようなものが待っているというのか、匙の頭では想像すら出来ない。
「ですがこの様な不測の事態の中で今までよく無事でした。――大きな怪我が無くて良かったわ」
ソーナの冷徹な表情がほんの僅か解け、その下から安堵と慈愛が混じった微笑が浮か

ぶ。
「え！　あの！　その！……はい」
　厳しい言葉の後に優しく気遣う言葉と微笑み。不意打ちでそれを貰ってしまった匙は顔を俯かせながら返事をする。こうでもしなければ、涙腺が緩んでしまった顔をソーナに見られてしまうからである。
「怪我があったら言って下さい、私が治します」
「アーシアさんも来たのか！」
　ソーナと椿姫の後ろから姿を現すアーシアを見て、匙は驚く。
「私だけ何もしないでいることなんて出来ません」
「いや、うーん……でもなぁ……」
　この様な戦いの場に非戦闘員であるアーシアが出て来ることに、匙は素直に喜ぶことが出来なかった。確かにアーシアの神器は便利ではあるが、そのせいで敵から狙われる可能性がある。ここには居ない一誠がもし今の光景を見たらどう思うか、大よそを想像するのは簡単であった。
　そんな中、椿姫の神器で半身を吹き飛ばされた異形が飛ばされた部分の断面を波打たせ、修復しようとしていた。粉微塵となった部位を戻すことが出来ないのか断面部分が風船の様に膨らませていき、それの形を変え足りなくなった部分を補っていく。

「っと！　また来ますよ！　今度こそ！」
意気込んで神器を構える匙であったが、その肩にソーナが手を置いて制する。
「大丈夫よ。この戦いはもう終わったわ」
「はい？」
そのとき一陣の風が校庭を吹き抜けていく。この季節の風にしては冷たく、体に触れていった瞬間、匙は身震いをした。
風が向かった方向へ匙が目を向けたとき、目の前に広がる光景に絶句する。
校庭内にいた全ての異形たちが動きを止めていた。その体表には白い霜が張り付いており、体から冷気が立ち昇っている。
「凍ってる？」
そして、魔術師たちも同様に蒼褪めた顔で地面に倒れ伏しており、誰もが体を細かく震わせていた。だというのに、その魔術師たちや異形の側で戦っていた木場たちには何の影響も無く、唐突に凍らされた敵を見て困惑している。
ほんの僅かな間で校庭内にいる敵のみを全て無力化する。こんなことが出来る人物など一人しか心当たりが無い。
「遅れてゴメンね☆　魔法少女レヴィアたん、ただいま参上☆」
能天気な名乗り口上を上げながら魔王セラフォルー・レヴィアタンが空から舞い降

り、ポーズを決める。絵面だけ切り取れば可憐な姿に見えるが、全ての敵が凍結している現状ではシュールそのものであった。

「みんなを虐める悪い子はー、えい☆」

パチンとセラフォルーが指を鳴らした瞬間、凍り付いていた異形のみが砕け散り、その身を粒子へと変えていく。再生出来ない程に細かくされた異形たちの身体は、風に吹かれて何処かへと散っていった。

ものの数秒で、異形が溢れていた校庭が綺麗に清掃される。

「ソーナちゃん☆　どうどう？　お姉ちゃんカッコよかった？」

「……ええ、流石お姉さまです」

感謝はしているがソーナの顔はやや引き攣っていた。尊敬も敬愛もしているが、やはり姉のこういったキャラを割り切れないらしい。

「結界の方は大丈夫なんですか？　ミカエル様のサポートをしてた筈じゃ」

「そのミカエル君がこっちに助太刀するように頼んできたの。流石に神滅器相手じゃ分が悪いからって☆　だから今、ミカエル君とグレイフィアちゃんが必死になって結界を支えているんだよね。私もすぐに戻らなきゃ！」

事態がこれ以上悪化しない為に、自らに多大な負荷が掛かると理解した上でセラフォルーを送り出したミカエルの判断は、思い描いた通りの結果となった。

「会長たちは？」
「私たちも何らかの手伝いが出来れば、と考えここに来ましたがどうやら不用みたいでしたね」
「そんなことはないです！　副会長のおかげで助かりました！　会長の判断は間違ってないです！」
「――それなら良かったわ」
そこに戦っていたセタンタたちも戻ってくる。
「やはりセラフォルー様の御力でしたか。魔王の力、感服させられました」
合流するなりセタンタはセラフォルーに頭を下げ、感謝の言葉を述べる。
「セタンタ君に褒められちゃった☆　でもー」
そこで一旦言葉を区切り、セラフォルーはセタンタの顔を眺める。
「セタンタ君が『本気』を出したら私が居なくても大丈夫だったんじゃないかなー？」
「――買い被り過ぎです。私の実力など魔王の方々に比べれば足元にも及びません」
含ませた言い方をするセラフォルーに対しセタンタはその言葉を否定。あくまで魔王の方が上であると主張した。
セラフォルーはそれ以上追及することはなく「そう☆」と言ってこの話を終わりとし、すぐに結界を張る手伝いをする為に校舎の方へ踵を返す。

が、その途中で足を止め、セラフォルーは上空を見上げた。異形たちは全て倒したが、未だに新校舎の周囲には神滅器の霧によって覆われている。従ってセラフォルーが見上げた先も白い霧で何も見えない筈であるが、セラフォルーの目はその霧の先が見えているようであった。
「あっちの方ももうそろそろ終わりそうね☆」
「ですね」
セラフォルーの言葉にセタンタが同じく上空を見上げながら同意する。
木場たちも同じように空を見上げるが、やはり霧が漂っているだけであり何一つ見えない。
「――サーゼクスちゃん、勝つよね？」
ソーナは驚いた眼差しをセラフォルーに向ける。姉妹だからこそ分かるほんの少し違いではあるが、どんな時でも明るく、能天気とも呼べる姉が言葉に僅かな不安を滲ませていたのだ。
魔人という存在が、例え魔王であっても敗北の可能性を考えざるを得ない相手であることを認識させられる。
「勝ちます」
だが、セタンタは毅然とした態度で断言する。

「魔王サーゼクス・ルシファーは相手が誰であろうと絶対に負けません、絶対に」

◇

煩悩即菩提。

その言葉がだいそうじょうの口から放たれた途端、サーゼクスの裡にある衝動が湧き立つ。

「ぐっ……！」

奥歯を噛み締めて耐える。精神の手綱を強く握らなければ、あっという間にその衝動に呑まれ、正気を失いそうになってしまう。

全てを壊してしまいたい。全てを消し去ってしまいたい。自分の全力を以って、目に映る何もかもを、否、それ以上先も。

今まで考えたことすらなかった、どす黒い破壊衝動。目を背け、嫌悪を覚えてしまう筈の感情がサーゼクスの心を蝕んでいく。

「ほう、流石は魔王、良き心の強さじゃのう。普通ならば我が言葉を耳に入れた瞬間、正気を失うというのに、まだ耐えるか」

賞賛の声をだいそうじょうが掛けるが、それに応じる余裕は今のサーゼクスには無

い。
「己を殺すことは苦痛かのう。煩悩即菩提、己の煩悩を捨て去る者に悟りの道は無し。己の煩悩すら受け入れることから悟りの道は開かれる」
サーゼクスを取り囲むように破魔の陣が描かれる。先程までのサーゼクスならば陣が描かれる前に消し去ってしまっただろうが、今のサーゼクスにはそれほどまでの精密な魔力の操作は出来ない。
瞬く間に完成される破魔の術。四方を囲まれたサーゼクスに退路など無かった。
「終わりだ、魔王よ。汝に死の救済を」
陣から破魔の光が放たれ、サーゼクスの身体を包み込む。夜の中に太陽が突如として現れたような激しい閃光。例え魔王であっても、直撃を受ければその魂を消滅されかねない程の力を込めた破魔の光であった。
辺りを白く染め上げる光の中で、だいそうじょうはある違和感を覚えた。
破魔の光が注ぎ込まれているというのに、未だサーゼクスの魔力が消えない。上級の悪魔であろうと十度滅びる程の力が注がれているにも関わらず。
「……私の相手が貴方で良かった」
「むっ」
破魔の光の中で響くサーゼクスの声。それを聞き、だいそうじょうは言葉に僅かな驚

きを混ぜる。
破魔の光の中で何かが動く。それは赤く輝き、人の形をしていた。
「貴方の言った通り抑えきれないならば、解き放つまで。だが貴方ならば私と拮抗し抑えられるだろう」
光の中で赤の人型が動く。破魔の光に呑み込まれて動ける悪魔など存在する筈が無い。
「この場でいるのが貴方だけで――」
赤い人型はだいそうじょうに掌を向ける。
「――本当に良かった」
その瞬間、赤い魔力がだいそうじょうの胴体を突き抜け、その体に大きな風穴を開けるのであった。

才能、凌駕

胴体に人一人が通り抜けられそうな程の大穴を空けられただいそうじょう。その空けた穴の向こう側を赤い魔力に包み込まれた、否、赤い魔力そのものと化したサーゼクスが瞳の無い眼で見ていた。

先程まで囲んでいた破魔の光は既に無い。サーゼクスの全身から意図せずに漏れ出す滅びの魔力によって、全て消し去られてしまったからだ。

第三者がこの状況を見れば誰もがサーゼクスの勝利を疑うことは無いであろう。しかし、当事者であるサーゼクスの胸中に勝利を喜ぶ気持ちなど湧かない。寧ろ反対に、この程度で魔人が負ける筈が無いという確信があった。

少なくとも、かつてこの姿を見せ、生死の狭間まで死闘を繰り広げたあの魔人ならば、胴体に穴を開けられた程度では怯みなど見せない。

「……齢を取ると」

不意にだいそうじょうが声を出す。

「夜風がこの老骨に響くのう。特に腹の辺りに沁みてくる」

カタカタと顎を震わせ、冗談を口にしながらだいそうじょうは、何事も無い様にサー

ゼクスと向き合った。
『流石は魔人。その生命力には感服します、だいそうじょう殿』
「カカカカカ。だが久方振りに『痛み』を感じたのう。この感覚はいつ以来のことだったか」
『私としてはその程度の感覚で済んだことに驚かされます』
「恐ろしい、実に恐ろしいのう、サーゼクスよ。藪をつついて蛇を出したか、あるいは虎の尾を踏んだ様な気持ちじゃ」
だいそうじょうは静かに笑いながら、空いた腹部をさする様な仕草を見せる。
「にしてもそれが汝の真の姿か。成程、その力、我らと似たものを感じる」
だいそうじょうは見定める様な眼差しを向ける。その間にもサーゼクスの体から溢れ出していく滅びの魔力が場を満たしていき、見えざる滅びがゆっくりとだいそうじょうの黄衣を崩していくが、だいそうじょう自身他人事の様にされるがままとなっていた。
「汝は何者ぞ?」
『それは私自身も答えられない問いです』
「汝もまだ答えを探しているという訳か。結構、結構」
言葉を交わす二人であったが、その一方でサーゼクスは予断の許されない状況であっ

た。
　出そうとは思わなかった本気をだいそうじょうの術によって無理矢理引き出されたサーゼクスは、本来ならば制御し切れず周囲に影響を与えていく自らの魔力を、神経をすり減らしながら押さえ込んでいた。
　量にすれば微量であったが、その微量であっても滅びの魔力に触れれば全てが消滅する。幸いにも建造物やだいそうじょう以外のヒトが居ない為に被害は最小に抑えられているものの、このまま広がり続ければいずれ学園全体を覆っている結界まで届いてしまう。
　それを防ぐにもサーゼクス自身がどうにかするしかないが、だいそうじょうの術の影響はサーゼクスの中で深く影響しており、だいそうじょうの胴体を穿った際、力の解放感と破壊衝動で意識が飛ぶ寸前までいった。
　今の状態でどれほどまで自分の力を正確に操作できるか、サーゼクス自身にも分からない。
　表情の読めない顔の下でサーゼクスは頭を高速で回していく。この状態でどれほどの時間で決着が付けられるのか、その際自分がどれほどの深手を負うのか、周りの被害はどのくらいまで抑えることが出来るのか。だが聡明であるが故に認めたくない事実が頭の中で過ぎる。この戦いで必ず、この街の無辜なる市民たちの犠牲が生じるという

ことであった。
悪魔という立場であるが、だからといって人間の命に無関心ではない。寧ろ逆に悪魔に似つかわしく無い程、サーゼクスは一般市民たちの身の安全のことを案じていた。
自分たちの都合でそれらを奪う真似など決してしたくはない。しかし、非情な現実は不調な我が身と強敵であるだいそうじょうが衝突し合えば、少なくは無い被害が生じることを突き付けてくる。
「――互いに力を見せ合ったことじゃ。そろそろ終いとするかのう」
だいそうじょうが独鈷鈴を掲げる。それを見たサーゼクスの全身に緊張が走った。このときサーゼクスの頭の中にあったのはだいそうじょうと戦い、どこまで戦えるか、という考えでは無く、どこまで被害を最小に済ますことが出来るかというものであった。
「魔王サーゼクスよ」
『何でしょうか？』
「汝は善き男よのう」
『はい？』
突如出て来た褒め言葉に思わずサーゼクスが聞き返した瞬間――
「喝ッ！」

独鈷鈴の清浄なる鈴の音と、それを掻き消してしまいそうになるぐらいの声量がだいそうじょうの口から放たれる。
最初に現れたときに発せられたのよりも遥かに力が込められているのか、その言葉は大気を揺らし、真正面にいるサーゼクスは見えざる圧を感じた。
不意打ち。その言葉が頭の中に過ぎるが、間も無くしてそうではないことに気付く。自分の身に何も起きなかったことも理由ではあるが、もう一つ別の理由があった。それはサーゼクスにとって思いがけないことでもある。
『何のつもりでしょうか？』
「はて？　何のことかのう」
『……私は確かに貴方ならば私の力を抑えることが出来ると言った。……しかし、それは『そのままの意味』で言ったつもりは無い』
サーゼクスが戸惑う理由。それはだいそうじょうが声を発した瞬間、無意識に広がっていく筈の滅びの魔力がその場で停滞したからである。
だいそうじょうの力ならばサーゼクスの力と拮抗し合える。この言葉には、万が一自身が暴走したとしても、だいそうじょうの実力ならばそれを抑え込むことが出来るという戦いに関することであり、現状の様なことを指してはいない。
だいそうじょうが自分を手助けするということにサーゼクスは、内心驚愕に近い感情

を覚えていた。
「カカカカカ。面白いものを見せて貰った駄賃の代わりじゃ」
『――私がこの姿になることすら想定済みという訳ですか』
「いやいや。拙僧とて汝がその様な力を持っていたことなど存ぜぬ。何かあるやもしれぬという勘はあったがのう」
　極一部の者しか知らないサーゼクスの本当の力。それを己の直観のみで感じ取り、あまつさえ表へ引き摺り出したことに、サーゼクスは畏怖や驚嘆を通り越して敬意すら抱きそうにある。
「それにしてもそれ程の力を持ちながら第一に考えることは拙僧を如何に下すことよりも、周りのことについてか、悪魔にしておくのか勿体無い程の人格だのう」
『――何のことでしょうか?』
「おまけに嘘を吐くのも下手と見える。全く、好ましいのう」
　サーゼクスの内心を正確に見破るだいそうじょうに対し誤魔化そうとするサーゼクスであったが、その嘘すらも容易く見破られる。だいそうじょうが骸骨の顔故に何を考えているか分からない様に、サーゼクスもまた膨大な消滅の魔力が辛うじて人の形を保っているという人外な見た目をしているが、それでも正確に内心を見抜かれたことに対し、何とも言えない羞恥の様な感情を覚える。

「いっそのこと拙僧の弟子にでもなるか？　汝ならば徳の高い僧になれる筈じゃ」
本気なのか冗談なのか分からないまさかの勧誘を受け、サーゼクスの表情の無い表情で驚く。魔王を引き継いでから今までの間に、これ程驚いたことも無い。
だがサーゼクスは平静を装い、静かに首を横に振るう。
『貴方ほどの存在に認められるのは光栄です。ですが、その誘い断らせて頂きます』
「まあ、そういうとは思っていた。汝ほどの責任感の強い男が容易く己の立場は捨てられんなあ。だが残念じゃ」
断られたことに納得しつつも本気で残念がるだいそうじょうを見て、サーゼクスは如何に相手が本気であったかを理解する。
この様な感想を抱くのは魔王という立場として間違っているかもしれない。多くの仲間を屠り、消滅させ、先程まで命のやり取りをしていた相手ではある。親しみが湧くことは無いがサーゼクスはどうにもだいそうじょうのことを憎めず、嫌いにはなれなかった。
「さてさて二の次、三の次となってしまったが拙僧本来の目的を果たそうとするかのう。でなければ間に合わなくなる」
そう言うと今の今まで纏っていた殺気とも覇気とも呼べるものがだいそうじょうの身体から消え去り、残るは静かに座を組むだいそうじょうの姿のみ。その落差は目の前

にいても見失ってしまうかのしれないと錯覚を覚える程に気配が薄く、皆無と言っても過言では無かった。
「じきにこの戦いの幕は閉じる。汝も感じているであろう？　その前に一目見なければ、この場に来た意味が無くなる。流石にそれは滑稽極まる」
　このままだいそうじょうを黙って見送るのが得策かどうかサーゼクスは黙考する。だいそうじょうからはこれ以上戦う意思を感じられない。だが彼が旧校舎へと向かうことは魔人同士が顔を合わせるということとなる。魔人〈だいそうじょう〉と魔人〈マタドール〉との邂逅、同類ではあるが互いに強烈な同族嫌悪を持っているが故に出会ったら最期、どの様な惨劇が起こるか分からない。
　更にそこへ未熟とはいえ魔人の力を持つシンまで居る。それがどの様に作用するか見当も付かない。
「カカカカカ。安心せい。今宵、これ以上の戦いはせん。目的を果たせばすぐに帰る」
『その言葉を信じろと』
「信じるも信じないも汝の自由。汝の心次第じゃ」
　それだけ言うと、だいそうじょうは『ではな』という言葉を残し、サーゼクスの答えを聞かずにあっさりと姿を消してしまった。と同時にサーゼクスは、自分の精神の中で滾っていた破壊衝動といった暴力的な感情が、熱の様に霧散していくのを感じた。

だいそうじょうが、姿を消すと同時に術も解除していったらしい。

『食えない御人だ』

この戦い、どちらも自分の力を御しつつ戦っていた。しかし、最後の最後でサーゼクスは、だいそうじょうによって本気を出さざるを得ない状況になってしまっていた。あのまま戦えば負けることはないが、サーゼクスにとって望まない展開になることは明白である。

この戦い、相手に一歩上を行かれた。

恥ずべきこととは考えず、それを事実としてサーゼクスは認める。この経験ですら己の糧へとする為に。

サーゼクスは全身を包み込む滅びの魔力を体内へと戻していく。人型の魔力の塊はすぐに元のサーゼクスの姿へと戻った。

通常の状態へと戻ったサーゼクス。しかし、その周囲には未だにサーゼクスが放った滅びの魔力が漂っている。

サーゼクスは軽く腕を振るう。その瞬間、不規則に漂っていた筈のサーゼクスの魔力は統一され、サーゼクスの意志に同調して彼の望む通りに動く。

全力時とは扱える魔力の量は遥かに落ちるが、今の状態ならば精密な魔力の操作が可能であり、周囲に散らばる魔力を操るなど造作も無いことであった。

操作された魔力はサーゼクスの足元、学園全体を覆う霧へと向かって一斉に飛び込み、消滅の力を以って次々と霧を払って行く。
本体から離れてはいるが仮にも『神滅具』に属する霧を消し去っていくのは、ひとえにサーゼクスの実力故。
晴れていく霧を見ながら、サーゼクスの視線は旧校舎の方へ向けられる。新校舎での戦いは終わったが、まだ旧校舎内では戦いが続いているのを感じ取った為である。
（出来ればこれ以上死人は出したくないな）
密かな決意を胸にサーゼクスは旧校舎へと向かった。

◇

シンたちを守る光の壁を突き破ってマタドールが飛び込んで来る。それを迎撃しようと放たれる光の槍と蛍光の魔弾。距離にすれば数メートル、放たれた二つの力が持つ速度からすれば回避する余裕など与えさせない距離である。
真っ先に襲い掛かったのはアザゼルが放つ光の槍。マタドールの胴体を消滅させようと迫るが、マタドールはそれに対し剣を振るう。
ただ、振るわれた剣は光の槍を斬り裂くのではなく、光の槍の側面へと当てられ、そ

こに力を加えることで僅かに軌道をずらす。それでも直撃を免れないコースであったが、そこでマタドールは身を翻し、その場で旋回しながら避けてみせる。

そこに少し遅れてシンが放った魔弾が襲ってくるが、マタドールはそれを見もせず、自らの動きに合わせてカポーテを振るう。

カポーテと魔弾が触れ合った瞬間、拮抗など何一つ起こらないまま、魔弾の動きはカポーテの動きに沿って真上目掛けて飛んでいってしまった。

二つの攻撃をあっさりといなしたマタドールは、そのまま地を蹴り付け更なる加速を以って二人に迫る。

来る、とシンの眼がマタドールの動きを辛うじて捉えた瞬間、シンの前にアザゼルが出る。

その瞬間、マタドールの剣とアザゼルの槍が激突し合う。その衝撃は大気を揺らし、地を震え上がらせた。

加速して得たマタドールの剣撃は鍔競り合うアザゼルの力を上回り、地を踏み締めているアザゼルの足は踏ん張りきれず後ろへと下がっていく。

一対一の状況であればいずれアザゼルが押し負けるであろうが、この戦いは決闘でも一対一の戦いでも無い。アザゼルが生み出す僅かな拮抗状態を狙い、シンは負傷した右足を庇いつつも左脚を全力で踏み込み、マタドールの開いた胴に向け、弧を描きながら

左拳を振るった。
剣を持つ手はアザゼルによって塞がれ、あらゆる攻撃をいなすカポーテは絡み合う剣と槍が妨げになっている。
狙う機会としてこれ以上ないものであったが、マタドールは迫るシンの拳を視界の端に捉えると焦る様子も見せず、小さく笑うと交差している剣の刃を滑らせる。
手元へと引く様な形で剣が槍の上を走ると、剣の柄の位置がシンの拳の軌道と重なり合い、間も無くして――
「つッ！」
拳が最高速へと到達する寸前、それを阻む様にして出て来たマタドールの剣の柄がシンの指へと直撃する。まるで固定されているかのように拳と衝突した柄は微動だにせず、反対に叩き付けた方のシンの薬指は生木が折れる様な音と共にへし曲がり、指の第二関節から先が真上に向かって折れ曲がった。
その痛みにシンの身体は一瞬であるが硬直してしまう。
直後、二人の攻撃を難なく捌いたマタドールは目の前に立つアザゼルの鳩尾を闘牛士靴の爪先で蹴りつけ、アザゼルが離れると同時に蹴りつけた足を地に付けず、そのままシンの顔に向け、蹴りを放った。
咄嗟に腕を上げ、それを防ぐ構えをとるシン。だがマタドールの足の甲が腕に触れた

瞬間、シンは『不味い』と反射的に悟り、同時に両足の力を抜く。
筋肉など何一つ付いてはおらず、細身という言葉ですら足らないマタドールの体格であるが、直に触れたことだからこそ分かる、骨の中に秘められた圧倒的な力。
掲げた腕が蹴りの威力に負け、体へ一気に密着する。それと同じくしてシンの両足が地面から浮き上がった。
地面を踏み締めて耐えれば腕が折れると判断したシンは、マタドールの脚の方向に合させて蹴り飛ばされる。
腕や体に突き抜ける様な痛みがあるものの、すぐにシンは自分の状況を冷静に判断しようとするが、視界が高速で回転しているせいで自分が今どのような位置に居るのかがすぐに分からない。
そのとき背中に熱の様な痛みが走り、体が跳ね上がる。背中が地面に接触したのだと理解したシンは、それによって自分の位置を大よそ把握する。
そして、次に地面と接近するタイミングを見計らって腕を伸ばし、土に爪を突き立て、それによって無理矢理飛ばされるのを止める。
ガリガリと土を抉りながらも飛ばされる速度は一気に緩み、手を捻ると同時に体勢を戻すと、今度は膝から地面に着地する。その状態から、体中に付いた土のことなど気にせずシンは顔を上げ、マタドールの方を向いた。

マタドールの方は、蹴りつけた脚をいっそ優美とも呼べる様な動作で元の位置に戻している。余裕の表れか、あるいはそれがマタドールの流儀か、どちらにしても見ている側にとっては、良くも悪くも神経を昂らせられる。

そして、シン以外にも余裕に満ちたマタドールの動きに対し、感情を昂らせている者がいた。

この戦いが始まってから消極的な動きを見せているカテレアである。本来の目的が在る為に積極的な攻撃を避けていた彼女であったが、今、彼女の顔すぐ側に突き立てられている光の槍が、その考えを曇らせていく。

先程アザゼルが放ち、マタドールが捌いた光の槍である。

（あの魔人……！）

あと数センチ今の場所から動いていたら確実に直撃していたであろうそれに、カテレアは肝が冷えると同時に胸の奥に灼熱の様な怒りを覚えていた。

戦いの中で流れ弾に当たり、不運にも死ぬことはあるかもしれない。しかし、この光の槍を逸らさせたのはあの『魔人』である。意図的に狙ったとしても可笑しくは無い。

気を抜いていた訳では無い。油断もしていたわけでも無い。だというのに、この光の槍が自分の側に突き立った瞬間まで、カテレアは動くことが出来なかった。

マタドールのせいで投擲の速度が上がった訳では無い。あれこそがアザゼルの実力。

鎧の力で底上げしているであろうが、その鎧ですらアザゼルの知力と技術によって生み出されたものである。

それは暗にアザゼルの実力が、オーフィスの力を取り込んでいる筈のカテレアを上回っていることを指していた。

その事実を突き付けたのはマタドールである。光の槍が刺さり、カテレアは反射的に飛んできた方向を見た、そのとき見えたのは剣を構えているマタドールの横顔。骨のみで表情を作るものなど何も無い筈なのに、カテレアはマタドールが自分の方を横目で見て、嘲笑を浮かべている姿が幻視された。

『掛かって来い』

言葉にせずにカテレアを挑発してくる。

怒りを覚えずにはいられない。正当な魔王を継ぐ者として、かつての偉大な魔王たちの血を受け継ぐ者として、堕ちた堕天使如きに、いつどのようにして生まれたかも謎である得体の知れない魔人などという存在に、自分を見下されることなど在ってはならない。

カテレアの感情に呼応し、周囲に青黒い魔力が漂い始める。

成せばならない使命がある。今の時代を破壊し、新たなる新世界を創り出すこと。奪われた『レヴィアタン』の座を再び自分の名とすること。

高尚なる二つの野望〈ゆめ〉を叶えようとする自分を嘲う者は、誰であろうと許す訳にはいかない。
周囲を漂う魔力が形を変え、球体状となるとそこから無数の魔力が光線となってマタドールに放たれる。
カテレアに対し完全に背を向けていたマタドールであったが、背後から迫る光線を見もせず、身を低くして躱すとその状態から片足を軸に素早く反転、カテレアの姿を正面に捉える。
「そうこなくては」
自分に牙と殺意を向けるカテレアにマタドールは嬉々とした声を出しつつ、手に持っていた剣を高々と放り上げる。
その奇行に一瞬だけカテレアの視線が釣られると、その間に空いたマタドールの左手に赤の魔力で出来た銛が握られる。
それを構え、マタドールはカテレア目掛け疾走を開始した。
カテレアが目を離していたのは刹那の間だけであったが、その僅かな時間で数十メートルは離れていた筈の二人の距離は十メートルも満たないものとなっていた。
距離を詰められているものの手数ではまだ自分の方が有利であると判断したカテレアは接近してくるマタドールに再び、青黒い閃光を放つ。

カポーテを翻し、閃光へと向けて振るうマタドール。カポーテに触れる度に青黒い閃光は軌道を逸らされ、地に向かい、あるいは宙に向かって飛んでいく。

残された距離も瞬く間に零となり、カテレアの眼前にマタドールが立つ。

だがそれもカテレアにとっては想定内のこと。このとき事前に仕込んでいた術式が発動する。

カテレアが纏う青黒い魔力が触手の様な形となってマタドールの身体に巻き付く。頭から足の先まで一瞬にして覆うと間髪入れずに締め上げ、元の形の三分の一にも満たない程まで絞り上げた。

『勝った』そんな言葉がカテレアの脳裏に過ぎった瞬間――

「今のは中々面白かった」

――耳元で囁かれる言葉。

驚き、振り向くと同時に視界が真っ赤に染まり右肩に走る痛み。そして間も無くして左肩、左脚、右脚に同じような激痛が走る。両脚から意図せずに力が抜け、その場で両膝を着いてしまう。

何が起こったのか瞬時には分からなかったが、視界を覆う赤が消え、地に着いた状態からマタドールの顔を見上げた瞬間、我が身に起こったことを悟る。

風に靡くカポーテ、それが視界を奪い、両肩、両脚に突き刺されるマタドールの銛が

カテレアから立つ力を奪っていた。
と同時に、マタドールを締め殺していた筈の魔力の触手が消える。案の定、触手の中には誰も居なかった。あのとき捕らえたと思ったのは、マタドールの残像に過ぎなかったことを思い知らされる。
カテレアを見下ろしたままマタドールは高々と手を掲げると、その手の中に最初から分かっていたように放り投げた剣が落下し、そのまま握る。
あのとき、剣を放り投げてから再びその手の中に納まるまでの間、全てはマタドールにとって想定の範囲に過ぎず、カテレアの行動は読み切られていた。あるいは想定外のことがいくつかあったかも知れないが、そのどれもがマタドールにとって修正が効くものであったのであろう。
「言い残すことはあるかな？　レディ」
「この地に降り立ったときから既に覚悟は決めています。言い残すことなど何もありません。殺るならばどうぞ」
「素晴らしい。その覚悟に敬意を払わせて貰う」
遺言を聞こうとするマタドールに毅然とした態度を返すカテレア。自らの敗北を認めるも取り乱すことないその姿にマタドールは嬉しそうな反応を見せながら、掲げていた手を振り下ろした。

剣はカテレアの胸へと突き刺さり、その奥の心臓を貫く。カテレアの身体は刺し貫かれた瞬間一度だけ小さく震えたが、最期まで声を出すことはなかった。

強い意志を秘めていた眼からは命の光が消え、体は力が抜けたせいで前のめりに倒れていく。

その途中でマタドールはカテレアの身体を抱き止めると、さっきまでの戦いを讃えるかのように抱擁。しばしその姿のままで動かなかったが、やがて貫いていた剣を引き抜きつつカテレアの頭に手を回すと、丁重に扱いながら仰向けに寝かすのであった。

「次は俺か、あるいはお前か」

カテレアとマタドールの決着を見届けたアザゼルが、少しおどけた様な口調で呟く。この期に及んでもまだ冗談を口にすることが出来るアザゼルに呆れ半分敬意半分を抱きながら、シンは左手に右手を伸ばす。

歪に曲がる左手の薬指。それを周りの指ごと掴み、これからくる未来を想像しつつ覚悟を決める様に一回だけ深呼吸すると、一気に掌に向けて曲げた。

折れた指を無理矢理曲げて拳を形作る。指先で生まれたものが神経を伝わって一気に脳の深部まで届き、そこで痛みと言う激しい警鐘を掻き鳴らす。シンは声を洩らさなかったものの、決して無視することの出来ない痛みに額や背中から冷たい汗を流す。

疾走した痛みはやがて最高値から治まるものの、それでも継続的な痛みが一定の波で

頭に突き抜けていく。
青黒く変色し倍以上に腫れ上がってはいるものの、何とか拳を作ることが出来た。掴む等の行為は無理かもしれないが、そもそもマタドール相手にそんなことをしている余裕など無いので、出来てせいぜい殴り掛かることぐらいである。
「無茶するな、お前。長生きできねぇぞ」
一連の流れを見ていたアザゼルは呆れた声を出しながらも、忠告の様な言葉を飛ばす。シンも自分の身体を労わっていない行為だと自覚している。だが、少なくとも今はそのようなことを気にかけている余裕は無かった。
骨折に刺し貫かれた膝。時間が経過する度にどんどんと不利な状況へと陥っていく。シンはちらりとアザゼルの方を見る。鎧を全身に纏っている為に表情は見えないが、肩に負った傷や前に出る戦いをしている姿から、間違いなく疲労しているのが分かる。
あとどれぐらい自分たちが戦えるのかは分からない。そんなに長い時間は戦えないことは目に見えている。だが、その限られた時間の中でマタドールを倒すか、あるいは退かせるかのどちらかをしなければならない。
カテレアを丁寧に葬ったマタドールがゆったりとした動作で振り返る。旧魔王派の大物を倒しても、マタドールの全身から昇り立つ殺気や魔力が萎えることはない。寧ろ、ますます増大している様に思えた。

「今が良いと思えると勝手ながらついつい次にも期待してしまう。――貴公らも私を愉しませてくれるかな?」

そう言った瞬間、マタドールの姿が視界から消えた。何処に、シンが考えたとき突如眼前に広がる白一色。それがマタドールの掌であることに気付くと同時に顔を鷲掴みにされ、頭から地面へと叩き付けられる。

場所が土であった為に叩き付けられた衝撃が多少なりとも和らいだが、それでも頭の中身が器の中で激しく揺さぶられ、痛みや吐き気が込み上げて来る。

鷲掴みをするマタドールの指の隙間から微かに見える光景。月光を背にしたことでその体に影を纏っているかの様なマタドールの姿と月光を受け、白銀に輝く剣がこちらに向けられている。

そこから先の行動はシンが考えた上での行動では無く、殆ど本能に引っ張られて動かされたものであった。

振り上げられた刃が胸に突き立てられる前にシンは両手に魔力剣を形成する。

「ほう?」

生み出したそれがどの様な効果を発揮するか既に知っているマタドールであったが、使うにしても明らかに間合いの中、次にシンが何をするか僅かに関心を示す。そのことによって出来た隙とは言えない程の間。マタドールを狙うには圧倒的に少ないが、この

場を切り抜けるには十分な間であった。
刹那、形成されていた魔力剣が弾ける。剣の中に内包されていた魔力が周囲にばら撒かれ、魔力の暴風が二人の身体を一瞬にして飲み込んだ。
自分の技をまともに受けたシン。四肢がそれぞれ関節の可動を無視して別々の方向に曲げられそうになり、空気が一気に薄れ酸欠を起こしかける。
今まで何度も敵に向かって放ってきたが、いざ自分で受けてみるとその威力がどれほどのものか、文字通り痛感されられる。
だがその甲斐あって掴んでいたマタドールの指が引き剥がされ、同時に両者の間に距離が出来る。
ダメージを受けるシンとは逆に、マタドールの方は荒れ狂う魔力風の中で特にダメージを受けた様子は無く、せいぜい風に押されて数歩後退した程度であった。
「まだまだだな」
シンの技をそう評価し、再びシンに向かって歩を進めようとしたとき――
「ならこういうのはどうだ？」
――それを遮る様なアザゼルの声。すると魔力の風の中に混じり始める光。
「これは――」
アザゼルの手の中から零れ落ちる光が、シンの熱波剣の魔力波へとどんどん吸い込ま

れていき、その中で無軌道に動き始める。
小さいが数え切れない程大量に撒かれる、槍状の形をした光。それらが不規則に動く魔力の中で脅威となる。
顔目掛け飛んで来た光を避けたかと思えば、背後から来た光がマタドールの肩を掠っていく。胴体に向かってきたものを半歩横に移動して回避したかと思えば、避けた先で脚に光が掠めていった。
四方を取り囲む光の中で細かく動き、迫る光を次々に避けていくマタドールであったが、それでも完全に回避し切れないのか、ほんの少しだけであるが、マタドールの絢爛とした衣服を削いでいく。
「成程、実に鬱陶しい攻撃だ」
「そうかい。なら存分に味わってくれ」
言葉とは裏腹に、マタドールの口調には喜色があった。攻められている状況でも危機的状況でも彼にとっては苦ではなく、自らの愉しみでしか過ぎないらしい。アザゼルの方もマタドールに応じるかのように、更なる光を放つ。
「だが一方的にされるのは少々癪だ」
マタドールがカポーテを頭上に向かって振るう。暴風の中で激しく靡く赤のカポーテが振るわれた瞬間、不規則かつ縦横無尽に荒れ狂っていた魔力が全て軌道を揃えられ

て空へ向かっていく。
一振りで全てを変えたマタドール。途方も無い力を見せるが、間近で見たアザゼルには動揺は無い。これほどのことが容易く出来る相手であることを理解しているからである。
だからこそ、アザゼルは魔力の嵐が消え去ると同時に次の行動に移ることが出来た。
アザゼルは黒翼を羽ばたかせると地上を滑る様に飛び、カポーテを振り上げているマタドールに向かう。
地表の石や砂が一斉に巻き上がる程の加速で接近しながらアザゼルは、片手で握っていた槍にもう片方の手を添える。すると黄金の槍が光に包まれていき、アザゼルの手の中で黄金と光が混ざり合い、黄金とも堕天使の光とも異なる色合いを放つ新たな槍が生まれる。今までは柄の部分は実体を持っていたが、新たな槍は穂の部分から柄に至るまで燃え盛る様に激しい光が形作られていた。
まさに『堕天龍の閃光槍〈ダウン・フォール・ドラゴン・スピア〉』と呼ぶに相応しいそれをアザゼルはマタドールに振るう。
間合いの長い槍ではあるが、アザゼルが振るった位置は明らかに槍の間合いの外の位置である。普通ならば決して届くことは無い。――普通だったのであれば。
アザゼルが槍を振るうと同時に閃光槍はその形を変形させ、柄の部分が倍以上の長さ

へと伸びた。
マタドールの位置が一瞬にして槍の間合いとなる。
眩い光が尾の様な残像を描きながら自分に迫るのを見たマタドールは、恐れず剣を構えて槍を迎え撃つ態勢を取る。
自分と槍との狭間に構えられた剣。閃光槍の軌跡に合わせ、マタドールは剣を横薙ぎに振るう。
直後、人外の速度で交差する刃と光。
このとき体勢を立て直したシンは己の左眼で、二つが衝突し合った瞬間を見ていた。
閃光槍に剣の刃が触れた瞬間、拮抗も音も無く閃光槍の中へと剣が滑り込んでいった。間も無くして滑り込んでいった剣が槍の反対側へと突き抜けていく。貫通した剣は空振りで終わるが、伸びた槍は間合いの中にマタドールを捉えている為、そのままマタドールに襲い掛かる。
「はっ！」
マタドールは笑う。迫る死と脅威。それを心の底から楽しみ、そして自らの裡に宿る死を解き放つ。死と死、それを比べ合う様に。
閃光槍がマタドールの首を刈ろうとした瞬間、マタドールの姿が消えた。正確に言えば、当たる直前に体を沈めることによって槍の下に潜り込んだのである。だが完全に避

けきれることが出来なかったのか、マタドールの闘牛帽の一部が閃光槍によって焼かれ、焦げ付いている。

その状態から地べたを這うように身を低くし、地を駆ける。

マタドールの姿を目に捉えたアザゼルは槍から片手を離し、その掌を接近するマタドールに向けて、光の槍を放つ。

至近距離で放たれる槍にマタドールは正面から向かって行く。その穂先がマタドールに触れるかに思えた直前、マタドールの姿が幾重にぶれて見えたかと思えば、当たる筈の槍はマタドールを擦り抜けていき、そして仕掛けていた筈のアザゼルが仰け反る。

仰け反ったアザゼルはその場から数歩後退するものの倒れず、体勢を戻す。その肩には銛が突き刺さっている。

マタドールは光の槍が直撃する寸前、最少の動きで光の槍を回避。更にそれだけでは終わらず、攻撃の構えが解けていないアザゼルに向け銛を放っていた。通常ならば鎧で弾かれているであろうが、マタドールが狙ったのは剣で貫いた箇所であった。

低くした体勢から伸び上がる様にして元の体勢へと戻りつつ、アザゼルを剣の間合いへと入れると、そこからマタドールは怒涛の連撃を繰り出す。

初撃は肩から腰に掛けての袈裟切り。アザゼルもそれに応じ、片手で器用に槍を旋回させ、柄で防ぐ。防がれると同時にマタドールは胸元まで剣を引くと、二撃目の突きを

アザゼルの心臓目掛け繰り出した。
鉄面の下で奥歯を噛み締めながらアザゼルは、マタドールの突きに合わせて左手を翳す。刃先が黄金の手甲を破り、掌から甲まで突き抜けるが、そこで左手を閉じ剣の動きが止まる。
左手という代償を払ってまでもマタドールの剣の動きを止めたアザゼルは、閃光槍を短く持ち直して振り上げると、やり返す様にマタドールの胸目掛けて振り下ろす。
だが、振り下ろされた槍の前に現れるマタドールのカポーテ。柔らかなそれに槍先が包まれたかと思えば、足元に向かって勢いよく突き立てる。不自然までに力の方向を捻じ曲げられる閃光槍。アザゼル本人もまるで抵抗感も違和感も覚えなかった。肉体そのものが自分の意志で動かしていると勘違いしてしまう程、自然なまでの力の流れの操作である。
狙いを外させるとすぐさまマタドールはアザゼルの胸部を蹴りつけ、その反動で宙返りをし、数メートルもの距離を取ると着地と同時に前方に駆け出し、稼いだ距離を零とする。
攻撃を受ける前にアザゼルの方から閃光槍が突き出されるが、マタドールは駆けながらカポーテを翳すと閃光槍の動きに合わせながら、今度は先端ではなくその側面へとカポーテを当て、移動しながら片足を軸にして回転。カポーテを纏いながら背を向ける格

好となった。
このときマタドールの体に隠れ、アザゼルの位置から剣の姿が見えなくなる。
背を向けていたマタドールが正面を向こうとする。その勢いに生じてくるであろう斬撃を予期して、いつでも対処する心構えをするアザゼル。
「違う！」
鋭い声が飛ぶ。声の主はシンであった。
（違う？　何が違うんだ？）
刹那、アザゼルの思考がシンの言葉の意味を探るべく神速の回転を見せる。
シンからは見えて今のアザゼルの位置からは見えないもの。マタドールが背を向けて今隠しているのはマタドールの正面。カポーテをマントの様に身に巻き付けているマタドールの姿。
（違う――違う――成程！）
閃く様に一つの答えがアザゼルの頭を過ぎったとき、アザゼルは自分が動くタイミングをほんの少しだけ早まらせる。
その瞬間、ひらりと舞うカポーテの下からマタドールが正面を向くよりも先に飛び出て来る白銀の刃。
現れたそれを見たアザゼルはその一撃を防ぐと同時に、黒翼を羽ばたかせて大きく後

退をする。
「やれやれ、外したか」
躱されたことに僅かな悔しさと感心を滲ませる。
正面へと向き直ったマタドール。その左手には逆手に持った剣が握られ、右手は逆にカポーテを掴んでいた。
あの背を向けたときに武器の持ち手を替えており、あのときシンが叫んだ理由がこれであった。もしもシンがこのことを気付かさなければ、アザゼルはこの奇襲をまともに受けていたかもしれない。
「やはり堕天使の長ともなると大したものだ」
「褒めるなら気付いたあっちの小僧を褒めてやりな」
「あの一言は所詮切っ掛け。そこから察し、即座に動けた貴公の方こそ称賛に値する」
「お前に褒められても嬉しくねぇよ」
「私は嬉しいがね。相手が強ければ強い程、勝利という美酒は美味となる」
「散々浴びる程飲んで来ただろうが。まだ足りないってのか？」
「ああ、足りない。全く足りないな。知っているか？　勝利というものは重なれば重ねる程に感動が薄まっていく。量などでは補えない、必要なのは質だ。強敵との死闘、これのみが勝利を味わい深いものとする……そういった点ではあの女性も貴公も期待に

は応えている」
「はっ、戦闘狂が。つくづく迷惑な存在だな」
マタドールの言葉をアザゼルは鼻で笑いながら、吐き捨てる様に言った。
「――あいつにちょっかいかけているのもそれが理由か」
「彼には素質、そして生まれ持った戦いへの渇望がある。私が今まで見てきた中であれほど戦う為の才能を持った存在は知らない。まさに奇跡の賜物だな」
「そんな奴を葬る所か戦い方を教えてどうするつもりだ？　いずれあいつはお前を超えていくぞ」
「望むところ。いや、寧ろ私はそれを願っている」
「ああ？」
アザゼルは怪訝な声を出す。
「自分を超える存在。それに死力を以って打ち勝つことこそ至上の勝利。己の限界を超えるという最も困難な壁を超えることで私は更なる高みへと昇れる。――しかし哀しいかな、この世で私を超える強さを持った存在は一握り。そして、力を極めているせいか戦うことへの意欲も低い。ならば自分の手で生み出すしかない」
「それがヴァーリだと？」
「然り」

「気色悪い期待を背負わせやがって……最終的にはどっちかが死んで終わりじゃねぇか」
「過程でヴァーリが死のうと結果として私が死んだとしても、それがどうした？　所詮はそこまでの器だったということ、惜しくは無い」
「――分かったよ。お前は正真正銘の狂人だ」
吐き捨てると同時にアザゼルは、マタドールに向かって光の槍を投擲する。マタドールは上体を捻るだけで軽々と躱しながら前へ踏み出す。その間に剣とカポーテを持ち替える余裕すら見せる。
アザゼルはマタドールが動いた瞬間、右に向かって大きく動く。それを追う様に向きを変えようとするが、突如その場で大きく跳躍した。
すると、今までいた場所へ吹き抜けていく魔力の波。アザゼルが光の槍を投擲した直後、マタドールの背後でシンもまた熱波剣の準備をしていたのだ。
空中でマタドールは素早く二人の位置を確認すると、カポーテを振るう。振り払われたときに発せられた風はマタドールの魔力によって、微風程度の勢いが小型の竜巻まで引き上げられ、螺旋を描きながら二人を襲う。
シンとアザゼルは、自分たちに向かって来る空間の歪みの様なものを見て咄嗟に動く。アザゼルはまだ軽傷である為すぐに回避することが出来たが、シンの方は片足を負

傷しているせいですぐには動けない。
片膝で立っている状況。左右に素早く動くことが出来ないと分かっていたシンは、拳を地面に叩き付けると同時に無事な方の足で力の限り地面を蹴った。手足の力で後方へと跳ぶと、間も無くして地面が空から降ってきた風によって押し潰されたかと思えば、そこから上空へと昇る竜巻が発生。このとき巻き上げられた土砂によって、初めて迫ってきたものの姿が明らかとなる。
巻き込まれたのであれば即座に身を引き千切られそうな空気の渦を見つつも、マタドールから意識を逸らさない。
宙にいるマタドールが見えない何かを足場にして一気に落下する。先程の魔法を利用しての移動であった。
地に降り立つと同時に、一切の淀みが無い動きで疾走。今度は狙いをアザゼルからシンへと切り替えていた。
向かって来るマタドールにシンは左目に意識を集中させる。最初のときと比べればマタドールの動きを目に捉えることが出来る様になったが、それでも僅かに気を緩めれば目で追い切れなくなってしまう。
複雑な軌道でこちらを撹乱する様な移動はせず、一直線で走り抜けてくるマタドールを見て、シンは最善のタイミングを計りながら拳に力を込める。剣と拳ではリーチの長

さが違う。これを当てるとなると、どうしても相手よりも先に仕掛けなければならない。早ければ相手に見切られ、遅ければ斬られる。その刹那の間を見抜かなければならない。

マタドールが数メートルまで接近してくる。剣はまだ動かない。狙う間はほんの一瞬であるだけなのにそこに至るまでの時間は長く、そして重い。

残り三メートルも無い距離へと近寄られた瞬間、構えている剣先が僅かに揺れ、マタドールの全身から殺気が噴き出す。

その姿が左目に映った途端、取り入れられた情報が体中へと駆け巡り、シンの身体を突き動かす。

空気を裂く様にして繰り出される拳。先手として出されたそれはマタドールの身体へと吸い込まれる――ことなく空を切った。

いつの間にか側面へ移動していたマタドールの姿を見て、動揺するよりも先に体を動かそうとするが、そうはさせまいとマタドールの足がシンの胸部に叩き付けられ、そのまま地面へと押し倒される。

「反応は良し。だが、思考が追い付いていないな。だからあんな簡単な動きにも騙される」

それを聞いてシンは、自分がマタドールに動かされたことを理解した。目の前の動き

にだけ集中していたせいで反応のみが先行し、牽制であることを見切ることが出来ず、その結果が今の最悪な状況である。
「次は気を付けるのだな。まあ、来世の話だがね」
剣先が心臓へと向けられる。動いて逃げようとしても、地面に押し付けてくるマタドールの脚力によって身動きがとれない。アザゼルもシンを助けようとするが、槍を飛ばそうと間に合わない距離にいる。
ここまでなのか。そう考えるシンの前でマタドールの剣が振り下ろされる。
が、何故か振り下ろされた剣はシンの胸の前で突如、急停止する。
意味が分からずマタドールを見上げるシンであったが、マタドールはぴくりとも動かない。
「今のうちです！」
焦った声が聞こえると同時にシンは両手で地面を押し、その勢いで滑りながらマタドールの足元から逃れる。
声の方へと目をやるとそこには両眼を輝かせているギャスパーが立っていた。
神器を発動させていて視界内にシンも捉えていた筈であるが、時間を停められたのはマタドールだけ。いつの間にか神器を上手く操れるようになっていた。
が、そんなことを考えている間に時間を停められていた筈のマタドールに変化が起こ

る。全身が油の切れた機械の様にガタガタと震え始める。時間を停止させられれば少なくとも数分間は動けなくなる筈であるが、マタドールはたった数秒ほどで神器の効果から解かれようとしていた。

早く離れなければと思うも、膝の負傷で素早く動くことも出来ない。するとマタドールを飛び越して現れたアザゼルがシンの腕を掴み、そのまま飛翔。そして序でと言わんばかりにマタドールに向け何本もの光の槍を投げつけた。

直後、神器の効果が切れたマタドール。初めに剣の先に居た筈の人物が居ないことに軽く驚き、その後自分へと迫る光の槍を感知する。

一秒にも満たない時間で直撃するであろう距離にまで迫っていた光の槍に対しマタドールは、自分の身に起こったことを考えるよりも先に動いていた。

光の槍の先端に向けてカポーテを振るうと、赤い布の上を槍が何の抵抗も無く滑り、そのまま地面に突き刺さる。

「奇怪な」

槍を難なく躱したマタドールであったが、槍を回避出来たことよりもシンがいつの間にか抜け出していたこと、そしてあれほどまでの距離まで光の槍が接近していたことに気付かなかったことを考えていた。

マタドールは周囲に視線を向ける。かなり離れた距離にシンとアザゼルが立ってい

たのを見つけた。これもまた不自然なことである。先程までアザゼルはマタドールの背後に立っていた。

「むっ？」

そしてもう一つ気付いたことがある。シンとアザゼル以外に新たな人物が現れていた。

格好からして少女と思わしき人物。その人物から煌びやかな光を放つ両眼を向けられた瞬間――

「くっ！」

マタドールの身体は魔力の嵐に包まれていた。

◇

一誠とヴァーリ。赤と白の龍を宿す両者が零に近い距離で互いに睨み合う。

数度目となる頭突きの衝突で互いの額から流れる鮮血で顔が朱に染まっていく。一誠の方は度重なる殴打をその身に受けてなお折れず食い下がっており、ヴァーリの方は左手から肘まで竜殺しの剣であるアスカロンに貫かれている状態であるというのにその口元には凄絶とも呼べる笑みを浮かべていた。

頭突きの衝撃で仰け反った一誠が食い下がる様に大振りの拳を放つ。戦いの経験が

ろくに無い素人、ましてや苦し紛れに放った攻撃などヴァーリに届く筈も無い。寧ろ、それは大きな反撃の隙を生む。

迫る拳を体勢を低くして回避すると、そこから立ち上がる勢いを利用し、一誠の顎を下から掌打で突き上げる。

一誠は首が根本から抜けそうになる衝撃を受け、両脚が地面から僅かに浮く。そこに間髪入れずにヴァーリの前蹴りが鳩尾に向けて放たれた。

龍の鱗に等しい堅牢な鎧で纏っている筈であるが、ヴァーリの爪先はその強固な守りを貫き、衝撃を通す。

その威力に押され一誠の身体は後方へと吹き飛ぶ。このときヴァーリに突き刺さっていたアスカロンが抜け、血が弧を描く。

数メートル宙を飛び、更に十数メートル地面を滑った後に止まると一誠はすぐに立ち上がろうとするが、そこで嘔吐する。蹴りを受けた時点で胃袋が裏返しになった気分であった。会議前に殆ど食事を摂っていないので口から出るのは胃液のみ。一誠は自ら吐いた吐瀉物に何も無いのを見て、これ以上不様を晒さなかったことに場違いな安堵を覚えた。

『Ｄｉｖｉｄｅ』

そこに追い討ちを掛ける白龍皇の能力。全身から一気に力が抜けていく。

『Ｂｏｏｓｔ』

すかさず赤龍帝の能力が発動し、半減された力を取り戻すが、結果だけ見ればマイナスである。

一誠が吐いている一方で、ヴァーリの方は追撃をせず、刺されていた左手の調子を見ていた。骨や肉が裂け、激痛が走っている筈なのに平然な顔をして左手を握ったり開いたりしている。

「拳は――作れるな」

『竜殺しの力は私が抑えておく。だがなるべく早く竜殺しの力を抜いた方が良い』

「善処はするさ」

震える指先を無理矢理動かして拳を作るヴァーリ。貫かれた痛みなど無視出来る。

背部の翼から魔力の光を噴出させ、ヴァーリが一気に距離を詰める。ダメージが抜け切っていない一誠だがヴァーリの動きを見て、痛む体を無理矢理動かす。

「おらあっ！」

先に仕掛けたのは一誠。向かって来るヴァーリに右拳を放つ。しかし、ヴァーリは鼻で一笑すると一誠の伸ばされた腕を下から突き上げた。

肘辺りを殴られ腕が高々と上がり、胴体ががら空きになると、すかさずそこにヴァーリが裏拳を数発叩き付ける。それもわざわざ傷を負っている左手を使って。

普通ならば躊躇う筈だが、裏拳を受けた一誠は、ヴァーリが一切の手加減などしていないことを身を以って知る。それ程までに一撃一撃が重く、体の芯に響き、受けた箇所は拳の形で陥没していた。

ヴァーリは一誠の首筋に手を回し、引き寄せると同時に膝で腹部を突き上げる。

「かはっ！」

一般的な体型を持つ一誠の身体が、膝蹴り一つで十数メートルの高さまで蹴り上げられた。鎧の守りのおかげで激痛だけで済んだが、生身であったら例え悪魔の肉体だったとしても、上半身と下半身が別れてもおかしくは無い威力である。

内臓が掻き混ぜられたかのような痛みを堪えながら一誠は宙でヴァーリの姿を探す。幸いヴァーリは蹴り上げた地点から動かず、一誠が落下するのを待ちながら拳を構えていた。

（だったら！）

一誠は背部の噴射孔を使い更に上昇し、先程の場所から倍以上離れた所で体勢を変え、ヴァーリに向け両手を突き出した構えを見せる。

「うん？」

初めて見せる構えにヴァーリは興味を持ったのか、一誠が次に何をするか眺めている。

ヴァーリが眺めている中で『赤龍帝の鎧』の各部に填め込まれた宝玉が光を放ち、その光が鎧を伝わって一誠の両腕へ集束していく。
合わせられた右手と左手の中で集束された魔力は一つの塊となり、それを限界まで抑えられたとき、遂に放たれる。
「くらえぇぇぇぇぇ！」
全魔力を注ぎ込んだ渾身のドラゴンショット。両の手から放たれた一握りの魔力は一誠から離れると瞬時に巨大化、ヴァーリの姿など軽く呑み込んでしまう程である。
正直、一誠は学園内に於いてこの技を使用するつもりはなかった。地形すら変えてしまう威力を持つこの技を学園〈ここ〉で放てば、どれほどの被害が出るか分からない為である。だが出さなければ負けてしまう。
しかし、それでも一誠の中から不安は消えない。ヴァーリならばどうにかしてしまうのではないか、という考えが、放つ前も放った後も脳裏から消えなかった。
「やり方は単純そのもの。だがこういった豪快なのは嫌いじゃない」
一誠のドラゴンショットをそう評するとヴァーリは右手を掲げた。
上空から迫る巨大な魔力の塊を片腕一本で止めるつもりであるらしい。
一見すれば相手を舐めている様であり、もしくは正気を疑う様な姿であるが、ヴァーリ本人は至って正気であり、放たれ、迫るそれを片手で止めることが出来ると本気で

思っていた。
　赤い魔力がヴァーリの手に触れる。その圧力でヴァーリの両足は地面に沈むが、膝が屈することは無く真っ直ぐと伸び、上から掛かる圧力に耐えていた。
「まあ、俺を倒すには威力はまだ不十分だが、手の内を見せて貰った礼にこちらも見せよう」
『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』
　今までとは異なる音声が場に響いたとき、ヴァーリを呑み込もうとしていたドラゴンショットが瞬時に収縮し、半分の大きさとなる。
「なっ！」
　起きている光景に一誠が驚きの声を出すが、その間にも音声が連なって響き、その度に魔力の塊は小さくなり、やがてヴァーリの手の中に納まるまでその縮むと、一誠に見せつける様に片手でそれを握り潰した。
「なんだありぁ！」
『あれも白龍皇の能力の一つだ。対象となったあらゆるものを半分、縮小させる』
「そんなものまであるのかよ……ならあれを喰らったら俺も半分の大きさになっちまうのか」
『奴の力ならば俺が抑えることが出来る。だが抑えられるにも限界があるがな。――可

能な限りあれを貰わないようにしろ、相棒』

只でさえ身体能力や技術で負けているという状況で先程の能力を貰わずに戦う。それは殆ど不可能に近い。

「さて、赤龍帝。今からは更に戦いの段階が上がるぞ。覚悟はいいかな？」

好戦的に笑いながらヴァーリは宙にいる一誠に向かって飛び上がる。一誠も応戦出来る様に構えようとしたとき――

『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』

「えっ」

――いつの間にか目の前にヴァーリが現れ、構える暇も無く一誠は頬を殴られ、錐揉みしながら宙を飛ぶ。

首が勢い良く傾き、目の中で火花が散り、口内で鉄の味が広がっていく。しかし、一誠はそのことを気にする余裕が無い。

（いつの間に！）

一瞬たりとも目を離さなかった。だというのに、一誠はいつヴァーリが接近したのかが分からなかった。気付けばすぐ近くにいたのだ。

噴射孔を操作し慌てて体勢を立て直した一誠は、ヴァーリの方をすぐさま見る。互いの距離は十数メートル程開いていた。

光翼を広げ、ヴァーリが飛行する体勢となる。
『Ｈａｌｆ　　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』
再度聞こえる音声。そして目の前に立ち拳を振り上げているヴァーリの姿。
格好など気にしている暇など無く、一誠は両腕を眼前で閉じ、両膝を上げ、体を縮込ませる。
直後、両腕に走る衝撃。骨まで響く打撃に歯を食い縛りながらも、今度は先程とは違ってダメージを抑えることが出来た。
『相棒！　危険だがこのまま奴とは距離を詰めて戦え！　離れればさっきの様になる！』
（それは分かっちゃいるさ！　だけどヴァーリが何をしたのかさっぱり分かんねぇ！）
『恐らくは縮小する能力を応用して相棒と自分との『距離』を文字通り縮めたんだ』
（そんなことも出来んのかよ！）
空間にまで作用する白龍皇の力に内心で叫んでしまう。
ヴァーリが一誠の両肩を掴み、後方に倒れながら両脚を曲げ、つられて前へと倒れ掛かる一誠の胸元に両足を揃えて当てる。地面と水平になるまで傾くと同時に曲げていた脚を一気に伸ばし、一誠を上空向けて押し飛ばした。
「こほっ！」

胸部に掛かる圧力に肺の中の絞り出させられながら飛ぶ一誠。
『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』
そしてすかさずそこに白龍皇の能力でヴァーリが追い付き、そこから追い越して一誠の背後へと回ると高々と片足を上げ、一誠の背中に踵を叩き込む。
「がはっ！」
追撃を受けて今度は地上目掛けて落下する。
そのまま地面に叩き付けられるかと思われたが寸前の所で強引に体勢を戻し、噴射孔から魔力を噴き出させることで落下の速度を相殺。地面が陥没するものの両足から着地することが出来た。だが、胸と背中に受けたダメージですぐに膝が曲がってしまう。
着地した一誠を見て、ヴァーリもすぐに追おうとするが、そこで何を思ったのか動きを止めた。何かを考えているかのような素振りを見せる。
動きを止め、数秒後のヴァーリの動きを見て、一誠は愕然とする。
両手首を合わせて突き出す構え、それは一誠のドラゴンショットと同じものであった。
「確か、こうやって撃っていたよな？」
ヴァーリの全身が白い光を放ち、それが両腕に向かって注ぎ込まれていく。
『相棒！　早くここから離れろ！』

焦るドライグが一誠の鼓膜を揺さぶり、伝播する焦りに従い一誠は、動きが鈍くなった四肢の代わりに背部の噴射孔を操作し、今居る場所から急いで離れる。
その瞬間、ヴァーリの両手から放たれる白い魔力の塊。一誠のドラゴンショットとは違い、手から離れても数センチ程の球体を維持しているが、ドラゴンショットよりも速い。
白い魔力が先程まで一誠が立っていた場所に着弾した瞬間、白い魔力を中心に地面が引き寄せられ、白い魔力の中へと吸い込まれていく。ドラゴンショットとは違い派手な破壊は無く静かなものであった。
白い光が収まるとそれを中心にして数十メートルの広さと深さを持つ大穴が場に残る。
『……半減の力そのものを飛ばしてきたか』
何が起きたのか察するドライグ。
地面は破壊されたことで消えたのではない。アルビオンの能力によって見えなくなるまでに縮小されたのである。
「初めてにしては、まあまあといった所かな」
自分が放った技の威力を見て、そう評したヴァーリ。
「こっちはまだまだ戦い足りないんだ。もっと頑張ってくれるかな、赤龍帝。でなきゃ

――」

ヴァーリは冷たくも、隠し切れない闘争の熱を込めて言った。

「――原子レベルにまで落とされることになるよ」

覚醒、爆発

身を魔力の嵐に晒しながら、マタドールは自分の身に起きた不可思議なことについて思考していた。荒れ狂う魔力の渦で煌びやかな装飾が施された衣服の所々が裂けながらも、頭の中は至極冷静に働いている。

いつの間にか自分の足下から消え、別の場所へと移動していたシン。放つ瞬間も、自分に接近してくる過程も分からなかったアザゼルの光の槍。そして今自分が、恐らくシンが放ったであろう魔力波の真っただ中にいること。

戦いの中で無意識になるなどという愚行を自分が犯す訳が無く、考えられる可能性があるとすれば、新たに現れた少女しか考えられない、とマタドールは直感で断定する。

自分の身に何が起きたのかは一先ず後に置くとして、問題は少女が『何をした』ことで自分がこの様な状態にすることが出来るのか、それが重要である。

そして既にマタドールは『何をした』かの大体の予想は出来ていた。最初の異変のときは気付かなかったが、二度目の異変のときに気が付いた。

尤も一目見たからそれに気付いた訳では無い。

そういった考えに即座に辿り着いた理由は、マタドールが過去から今に至るまで積み

重ねてきた戦いの経験によるものであった。
自分を見ていたあの眼。過去に似たような能力、あるいは神器を所有していた者たち特有のものが感じ取れた。
戦いとは自分にとっての財である。マタドールは心の中で、自分の勝利の為に屍になっていった数々の戦士たちに感謝の念を送る。
ならば今からするべきことは、数多の戦いの中でそれらの能力者を屠ってきた戦い方。マタドールは魔力波の中でカポーテを振るった。

◇

ギャスパーの神器で停止させた隙に熱波剣を放ち、避ける暇も無く魔力の波で呑み込んだが、致命的なダメージを与えているとは言い難い状況であった。それでもこの戦いが始まってから初めてまともに技を直撃させたのは間違いない。
「――まさか、一人でここに来るとはな」
「は、はい！　ま、間薙先輩の助けになるかもって、そ、それで……」
最初は勢い良く返事をしたものの後半になるにつれ、勝手な真似をして怒られるかもしれないのでは、と思ったのか、どんどんと声が小さくなっていき、最後の辺りなど虫

の羽音の様な声であった。
「赤龍帝〈アイツ〉の血を飲んだみたいだな。神器の精密さと力が格段に上がっている。いいタイミングだ。飲んでなきゃ出力不足で停められなかったかもしれないな」
「そ、そうなんですか？」
初めて見る鎧の男がアザゼルであったことに驚きつつ、その言葉で一誠の血を飲むと決断したことがその時だけではなく、後にまで影響する好判断であったことをギャスパーは知った。
「このままずっと奴の動きを――」
そこまで言い掛けたとき、マタドールを包む魔力波に変化が生じる。
砂利や土を巻き込みながら、中のマタドールにダメージを与えていた筈であったが、巻き込む土などの量が最初に見たときよりも明らかに多くなっており、そのせいで中にいるマタドールの姿が隠れてしまっている。
本来ならば時間が経つことで威力が弱まる筈であるが、唸る魔力波は弱まる所か、明らかに威力が増していた。
技を放った本人であるシンも自分の技を熟知している為、異変が起きていることにすぐ気付く。
「――止められる訳無いか」

悟った様な台詞をアザゼルが吐くと共に、マタドールを囲んでいた魔力波が内側から弾け、中から高速で回転する竜巻が新たに現れた。
シンたちの前でマタドールが何度か使用していた、風の魔法を応用したものだと考えられる。
竜巻がこちらに向かって一歩近付く。
それに反応し、ギャスパーはすかさず神器を発動。迫ってくる竜巻ごとマタドールの動きを停止させようとした、そのとき。
「うあっ！」
――ギャスパーが悲鳴を上げ突如仰け反ると、反射的に両目を手で押さえた。その指の隙間からは血が流れている。
「大丈夫か？」
すぐにシンがギャスパーの側に寄り、手で押さえていた場所を見る。
ギャスパーの両瞼に裂傷が生じ、赤く腫れ上がってまともに開けない状態になっている。
「少し我慢しろ」
そう言ってから閉ざされた瞼を開き、眼の確認をする。幸い眼球自体に傷は無かったが、この腫れではまともに開くことも見ることも出来ない。

「まあ、そうくるよな」
　アザゼルはギャスパーの下で転がる二つの石を見る。大きさは一センチ程の小さなものであり、恐らくは竜巻に混ざっていた石礫を飛ばして来たと考えられる。荒れ狂う竜巻で姿を隠し、動きを悟らせないようにしてからの奇襲。そのマタドールの慣れたやり方にアザゼルは口の端を歪める。
「中々、セコイ真似をしてくれるじゃないか」
「派手に魅せる大技も必要だが、それに至るまではこういった『小技』も必要なのだよ、アザゼル」
　竜巻を解き放ちマタドールが姿を現す。
「尤も想定していて防げなかった貴公のミスとも言えるがな」
「この野郎……」
　それ以上強く言わなかったのは、マタドールの言葉に自覚があったのかもしれない。
「あ、あの人は！　あの人はど、何処ですか？　僕はまだ見えます！」
　瞼を腫らした状態でも懸命にマタドールの位置を尋ね、目を開こうとするギャスパー。そんなギャスパーにマタドールは挑発する様な声を掛けた。
「私はここだぞ。その眼を見開いて良く見たまえ」
　声を出し、自分から位置を報せるマタドール。ギャスパーはマタドールの声を頼りに

して、内出血をして重くなっていく瞼を必死になって開こうとし、その両眼にマタドールの姿を納めようとする。
その直前、マタドールは地面を力強く踏み付ける。するとそれによって地が割れ、細かく砕かれた土や砂が舞い上がり、マタドールの姿を隠す。
何とか目を開くことが出来たギャスパーであったが、ギャスパーが思っていた以上に瞼は持ち上がらず半目の状態であり、視界の方も焦点が合わずぼやけて見える。
それでもギャスパーの神器が発動するが、瞳に納められた姿はマタドールではなく、宙にあった土や砂であった。
「あっ」
ギャスパーが声を出すも既に手遅れであり、対象を捉えていなかったことで神器はマタドールではなく土砂の時間を停止させ、停められた土砂や砂埃は、マタドールの目の前で壁の様にそびえ立つ。
「ほう」
時間を停止させられ、宙に固定された土砂に対し、興味深そうな声を漏らしながら、剣先でその壁を軽く突く。
「成程……最初は視線を媒介にした催眠の類の邪眼、もしくは神器かと思っていたが、どうやらそれよりも更に厄介なものらしい。――『停止世界の邪眼』、名と能力は知ってい

るが実物を見るのは初めてだ。貴公も希少な神器を宿しているな」
　このとき、シンとアザゼルは同時に同じ言葉を頭に浮かべる。
『完全にばれた』
　ギャスパーの神器の詳細がまだ判明していない段階であれば、マタドールも必要以上に警戒し、深く踏み込んで来ないと考えていたが、神器の能力が分かってしまえば、マタドールの行動は早くなる。
　恐らくこの先、二度とマタドールがギャスパーの視線に納まることはない。
　正解を当てられても二人は動揺を表に出さず冷静な態度を維持していた。マタドールが僅かでも自分の答えに疑問を抱かせる様にする為のささやかな抵抗であったが、当の本人はそれを気にすることなどなく、自分の出した答えが当たっていたという前提で話を進めていく。
「それにしても私ともあろうものが戦いの場で、神器の効果だったとはいえ数秒も意識を失うとは――」
　シンたちには見えなかったが、マタドールは壁の向こうで俯き肩を震わせている。第三者が見れば自らの失態から来る怒りで震えている様に見えたであろうが、次のマタドールの態度を知れば、その考えもすぐに消え去ってしまうだろう。
「――くくくく、はははははは！　まさに屈辱だな！」

哄笑しながら屈辱であると叫ぶ。怒りを通り越して笑いへと転じたとも考えられるが、笑うマタドールの声に怒りなど無く、あるのは喜色のみ。遠くまで突き抜けていく様な快活な笑い声であった。

いきなり笑い出すマタドールにシンやアザゼルは瞠目し、ギャスパーはその声量にびくりと肩を震わせる。

「屈辱って言っている割には随分と嬉しそうだな」

「くくくく。この屈辱は元を正せば私の隙が生み出したもの。隙があるということは私にはまだ至らない点があるということを突き付けられたという訳だ。これを喜ばないでどうする？　私にはまだ強さの先があるのだ」

自分の隙ですら糧にしようとするマタドール。その貪欲なまでの強さへの執着はシンたちの理解の範疇を超えていた。

「強くなるためだったら屈辱や失態すら飲み干すってか？」

「必要ならば一時の敗北にすらこの身を沈めよう。恥や屈辱も啜り、この誇りが擦り切れる寸前になろうとも耐えて見せよう。戦う敵が那由多の数だろうが、全知全能の神が相手だろうが構わない」

マタドールの全身から膨大な魔力と覇気が溢れ出す。この戦いで全開だと思っていたが、未だ実力の底へと辿り着いていないらしい。

「最後に勝利するのはこの私だ」
一体どれほど研鑽を詰み、数多の戦いを潜り抜けてきたら、これ程までに確信に満ちた自信と言葉を得られるのであろうか。ただ肥大した誇りから来る中身の無い言葉ではなく、聞く者誰しもが無理だと分かっていても『もしかしたら』と思わせる様な台詞であった。事実、シンたちも一瞬ではあるが、その様な言葉が脳裏を過ぎってしまった。
「くっだらねぇ――と言い切ったら楽なんだがな。性質が悪いなお前は」
善悪問わず、この様に本気で言っている相手に否定の言葉一つでも吐けば、途端に小物染みた印象を自他ともに受けてしまう。故にアザゼルはマタドールのことを、性質が悪いと評した。
「自分の可能性を信じてこそ得られるものがある。今日に至るまで私は私自身を信じ抜き、そしてこの力がある。己を信じぬものに先など無い」
数多の生命を殺めてきた魔人の口から出て来る、青臭いと言える台詞。ただ言った本人が本人である為に、恐ろしさを感じさせる程の説得力があった。更にはその考え自体にはある程度の共感を覚える為、強く否定できない。だからこそシンとアザゼルは表情には出さないものの顔を顰めたくなる。
『本当に性質が悪い』
二人はそんな悪態を胸の中で吐きつつ、それぞれ次にどう動くかを思案する。

「さて能力の正体が分かったのはいいが、戦いの中で一々それに注意を払うのも些か鬱陶しい」
マタドールの視線がギャスパーへと向けられる。腫れた目でまともに状況を把握出来ていない筈のギャスパーだが、マタドールに見られた途端、何かを敏感に悟ったのか反射的に身を縮ませた。
「その両目――抉り出すとしようかな？」
放たれた言葉に感情の起伏が無い。だからこそ実感してしまう。その言葉が冗談などではなく間違いなく本気であることに。
魔人から直々にそう宣言されたギャスパーの顔から、血の気が引いていくのが見て分かった。シンはそれを見て臆病、弱気などと責めるつもりはなかった。恐らくギャスパーと同じ立場になって平然としていられる人物など、この世に数える程しかいないであろう。
ギャスパーは魔人への恐れに背を押され、再び神器の力を使用しようとするが、その直前、両瞼を手で抑えられる。
「今は我慢しろ」
「間薙先輩……？」
ボソボソとギャスパーにしか聞こえない声量でシンは話す。

「奴の注意はお前に向けられている。何度やろうともさっきの二の舞だ」
「でも！　でも！」
　助けられたシンの手助けをしたくてこの場所へと来た。だというのに足手まといになってしまっている自分の現状に焦燥を覚え、余裕の無い声を出すギャスパー。
「よく聞け。『今は』と俺は言ったんだ」
「『今は』……？」
「必ずチャンスは来る。その力を使うチャンスが。だから今は耐えろ。俺たちの切り札はお前だ、ギャスパー」
　興奮するギャスパーを宥める為に言った言葉ではない。あの魔人に対し最も有効な手段は間違いなくギャスパーの『停止世界の邪眼』である。その証拠にマタドールはギャスパーから潰しにかかろうとしている。
「……はい」
　シンの言葉に応じ、ギャスパーの体から無駄な力が抜けていく。
「言うのは結構だが、俺が黙って見ているなんて思っていないだろ？　そう易々とお前の思った通りにことを運ばせられるか」
　アザゼルがシンとギャスパーから離れ、数歩前に出る。シンもアザゼルに続く為に体を動かそうとするが、それを制する様にアザゼルから視線が飛ぶ。

無言で向けられた視線はシンからギャスパーの方へと移動する。それは言外に、ギャスパーから離れるなと指示しているようであった。

シンはそう解釈し、動くのを止める。それを見てアザゼルは何も言わずに視線をマタドールの方へと戻した。シンの判断を無言で正解であると告げる。

「まだまだいけるだろう？　アザゼル。私はもっと貴公と戦いを愉しみたい」

「お前の趣味に付き合うのは不本意だが、何もせずにやられるのはもっと不本意だ。――いいさ、とことんやってやる」

「素晴らしい返答だ」

言うと同時にマタドールは一歩踏み込む。その途端マタドールの姿は消え、直後アザゼルの前の前に現れたときには、右手に持つ剣から突きが繰り出されていた。

アザゼルもマタドールの動きを読んでいたのか、胸部に向かってくる突きに対し槍を水平にして構えていた。

実体の無い光の槍から既に元の黄金の槍へと戻っていた槍の柄で、マタドールの突きを受け止める。

両者の間では眩い火花が盛大に散って、大気が震える程の衝撃が走り、見ていたシンやギャスパーの髪が揺れる。

突いたマタドール。受け止めたアザゼル。衝突し合った位置から二人とも動くこと

なく拮抗したかと思えば、マタドールは左手に持つカポーテを前方へと翳す。
アザゼルの視界全体に映る赤一色。それによってアザゼルは極短時間、マタドールから目を離すこととなってしまう。
そして突如来る力の消失。せめぎ合っていた筈のマタドールの力が消え、その拍子にアザゼルは僅かに前のめりになる。
カポーテに突っ込む様な形になるが、アザゼルが触れるか触れないかという絶妙なタイミングでカポーテは翻り、赤一色であったアザゼルの視界が開ける。
だがカポーテの向こう側には、立っていた筈のマタドールの姿は無い。
何処へ行ったのか、そう考えるよりも先に背筋を駆け上がる悪寒。アザゼルの身体は直感が感じ取った危険信号に反応し、背後に向けて狙いなど定めずに槍を突き出す。
突き出した槍に手応えは無く、空しく空を切っただけに思えたが、槍の柄に上から何かが落ちた様な軽い感触が伝わってきた。
突き出した槍から少し遅れ、アザゼルの首が背後に向けられる。
そこでアザゼルが見たものは槍の柄の上に器用に立っているマタドールであった。
「狙いは良かったぞ」
そう褒めるとマタドールは狭く短い槍の上を滑る様に前進。アザゼルは咄嗟に槍を振り上げようとするが少し遅く、接近したマタドールの蹴りを頬へと叩き付けられる。

生身であったのであれば首に損傷を受けていたであろうが、纏う鎧のおかげでその一撃を僅かに体勢が傾く程度に抑え、その状態から槍を力の限り振り上げた。
下から押し上げる槍に逆らうことなくマタドールは宙へと跳ね上げられる。間髪入れずアザゼルはマタドールに向けて手を翳した。
マタドールの周囲３６０度に発生する無数の光の槍。逃げる隙間、躱す間など与えない様に密集している。
「はっ！」
自分を狙う全方位に見える槍の穂先に対し、マタドールは笑う。嘲り、見下しといった笑いでは無く、今自分に迫る攻撃への敬意と感謝を込めた笑いであった。
襲い掛かる攻撃は試練であり、苛烈な攻めによる苦境はその先にある勝利をより円熟させる。無論、そこには如何なることも乗り越えることが出来るという確固たる自信がある為。
アザゼルに心からの感謝を送ると共により殺意を高める。
いつの時であろうと強者の猛攻を掻い潜り、その心臓へと剣を突き立てる瞬間は甘美なものである。
翳した手を握った瞬間、全方位から一斉に光の槍が射出される。
優に百を超えるであろう光の槍が、常人では視認出来ない速度でコンマ一秒のずれも

なく、マタドールへと群がる様に襲い掛かる。
三界の者たちであったのならば抵抗する前に絶望するであろう光景の中、マタドールは迫り来る死に対し、己の力を存分に発揮する。
まずは前方からくる光の槍にカポーテを振るう。カポーテに触れた光の槍は貫くことなく布地の上を滑っていくかと思えば、マタドールはそこでカポーテを僅かに動かす。すると滑っていた筈の光の槍たちはそれぞれ軌道を変えて、四方へ飛び散る。
上下に飛んだ光の槍は同じく上下から来る光の槍と正面から衝突し、互いの力で相殺され、別方向へと飛んでいった槍は向かってくる槍の側面に当たり軌道を逸らすと、その別の槍もまた更に別の槍へと接触し向きを変える。
瞬時に多数の槍を無力化させたマタドールは、今度は剣を構えると残った槍へと向け、銀の軌跡を描く。
前方から来る槍を斬り落としたかと思えば、背後に眼でも付いているかのように後方の槍を振り向き様に薙ぎ払う。左右から来た槍には最小限の動きで躱しつつ、避けきれないと判断した槍は剣で払う。
このときのマタドールは宙から落下し始めた状況であり、重力に従い地面に向かっているにも関わらず、それを感じさせない程自由自在に動き続ける。
判断から実行まで殆ど間も無く動き、全方位から来る光の槍を次々に消滅していくマ

タドール。あと数秒も掛からずに全ての光の槍は消え去ってしまう。
だがそれもアザゼルにとっては想定の範囲内のことであった。
槍の持ち方を替え、穂先をマタドールへ固定しながら槍を持つ腕を可能な限り引き、投擲の構えをとる。
光の槍はあくまで目くらまし。本命は今から放つ槍の一撃である。
鎧に宿る『黄金龍君』ファーブニルの力とアザゼルの力を相乗させ、限界まで威力を高めた『堕天龍の閃光槍』最速にして最大の一撃。現在のアザゼルにとって、これが最強の火力である。
放てば文字通り閃光となって相手を貫き、魔王クラスであっても恐らく無事では済まない。
だがそれを今から放つ相手は魔人の中でも武に長け、その技を以て如何なる攻撃をもいなし、逸らすことが出来るマタドールである。
故にアザゼルは限られた時間の中で相手に悟られぬ様に慎重且つ、だが迅速に力を収束させていく。いずれ来るであろう最大の好機を狙って。
そんなアザゼルの人知れず行っている攻撃の準備を知ってか知らずか、マタドールはアザゼルに視線を向けないまま、四方八方から来る光の槍の対処をしていた。
光の槍を避けるかあるいは斬り落とすか、逸らすか。その単純とも言える動作を繰り

返す度に、光の粒子となって消えていく槍。
数え切れない程大量にあった光の槍も、瞬く間に数え切れてしまいそうなぐらいに数を減らしていく。
そのとき、マタドールは側面から迫る気配を察知。それを剣で払うこともカポーテで逸らすこともせず、僅かに体を反らして避けるという選択をした。
マタドールの眼前を通り過ぎていく光の槍。彼にしてみれば何気無い行動だったかもしれない。だが光の槍がマタドールの視界を刹那の間遮った瞬間、これを待ちに待った好機と見て、アザゼルは水面下で進めていた準備を一気に加速させる。
全身を駆け巡る全ての力が一本の槍の中へと一気に注がれる。膨大な力が無理矢理収束させていくせいで、少しでも気を抜けば暴発しそうになる綱渡りであるが、アザゼルはそれを長年の経験と知識、そして地力によって驚異的な速度で完了させた。
マタドールの目の前から光の槍が通り過ぎ去ったとき、マタドールの目に入ってきたのは黄金色の閃光を発する槍を構えたアザゼルの姿。この戦いで見てきた中で最も強い輝きを放っており、その閃光はマタドールの無明の洞同然の目が、輝きで奥底を照らし出させられるかの様であった。
「これは」
マタドールの胸に湧くのは軽い驚き。そしてそれを上回る期待と緊張感であった。

一目見ただけで理解する。今まさにアザゼルが放つのは、彼が持てる力の全てを注ぎ込んだ最強の一投であると。

構え、投げ放とうとするアザゼル。それを迎え撃とうとするマタドール。

しかし――

「何？」

この戦いの中で初めて聞くマタドールの声色。それは困惑が含まれたものであった。

投げ放つ直前になって紐が解ける様に黄金の槍が分解されていき、それと同じくしてアザゼルが纏っている黄金の鎧も解除されていき、最後にはアザゼルの手の中に神器の核となっている宝玉が残るのみ。

「……このタイミングでかよ」

当事者であるアザゼルは、この現象に心当たりがあるのか、激しい動揺は見せないものの、鎧の下から現れた顔には悔しさを滲ませていた。

アザゼルが発動させた禁手化は正確に言えば禁手化ではない。神器に対し許容範囲以上の出力を出させることで、神器内に眠るファーブニルの魂に無理矢理働きかけ、そこから更なる力を得るという、一種の暴走である。その為、一度使えば解除と同時に神器は崩壊する。

人工神器という修復が効く神器だからこそ可能な荒業であり、完全な制御も難しいも

のではあるが、精力的に神器の研究を行っているアザゼルはその制御も熟していた――筈であった。
（こっちが想定している活動限界時間よりも早い……あいつから受けた損傷がこっちの考えている以上に負荷を与えていたって訳かよ）
目の前の敵が強敵である為に細かい配慮が出来なかったなど、ただの言い訳に過ぎない。敵と自分、その二つを考慮してこその戦いである。
（はっ！　――俺も鈍ったな）
重要な局面で失敗を犯し、自嘲するアザゼル。その前に全ての光の槍を捌き切ったマタドールが降り立つ。
「やれやれ。折角心を昂らせていたというのに、その終わり方は些か拍子抜けだぞ？　アザゼル」
「ふっ。生きていく上では付きものだろう？　失敗も失望も」
「反論はしない」
危機的状況でもアザゼルは口元には太々しい笑みを浮かべ冗談を口にする。そんなアザゼルを見てマタドールは安堵に近い感情を覚える。
今まで数え切れない人数を絶望の淵に追い込んできた。そのとき見せる表情には大体二通りある。一つは心を折られ、目の前の絶望を受け入れようとする者。この表情を

見せた瞬間にはマタドールはその者の首を刎ねるか心臓を貫いていた。
そしてもう一つの表情は絶望に対し折れず、歯を食いしばり、抗って何が何でも生き抜こうとする表情。この顔を見たときマタドールの選択は決まっていた。
マタドールは徐に歩き始める。
アザゼルもまたマタドールに向かって歩き始めた。鎧が解除されたことでマタドールから受けた右肩への負傷の影響が出たのか、アザゼルの右腕は力無く垂れ下がった状態であり、一歩進む度に左右に揺れる。
二人の距離が近づく毎に両者の挟間では見えざる力が衝突し合い、空間が歪んでいるように見える。
遠くからそれを見ているだけのシンもその余波を受けてか、口の中が急速に乾いていくのを感じていた。
両眼が塞がっているギャスパーは見えないせいかより一層、場に満ちていく重苦しい空気を感じ取っているらしく、側にいるシンの制服の袖を掴む。
掴んだ場所から伝わってくる震え。シンにはギャスパーの心境がよく分かる。声を出すことすら出来なくなるほど場の空気は張り詰めている、だというのに目の前の光景から目を離すことが出来ない。
目を背ければ死ぬ。危険に対し警戒する本能が、そうシンに促しているのかもしれな

い。

二人の距離が残り五メートルを切る。マタドールは血糊を払うかの様に剣を振り、剣身が放つ冷たい銀光をアザゼルに見せつける。対するアザゼルは左手に持っていたファーブニルの魂を封じ込めた宝玉を懐へと仕舞い、今度はその手に光で形作った剣を握り込む。

やがて二人の距離が互いに握る剣の間合いへと入った瞬間、マタドールとアザゼルは同時に踏み込む。

心臓目掛け突き出してくるマタドールの剣にあらん限りの力で光の剣を叩き付ける。剣身の側面に当てられたことでマタドールの剣は僅かに軌道をずらされ、心臓への狙いは逸れたものの依然として胴体に向かって剣が奔る。

直後に響く肉が貫かれる鈍い音。だがその発生源はアザゼルの胴体からではない。剣と胴体の間に割って入ったアザゼルの右腕から鳴った音であった。負傷し使えないと思われていたが、どうやらマタドールを騙す為の演技であったらしい。

右腕が貫かれると同時にその腕を素早く持ち上げる。マタドールの剣を持つ手もそれに連動して上がり、胴体が無防備となる。

アザゼルは更にそこから一歩踏み込む。マタドールもそれに反応し、カポーテを振るおうとするが、アザゼルはそうはさせまいとマタドールの腕に左腕を下から叩き付け動

きを制止させる。
両腕共に持ち上がった状態になったマタドールの胴体に、今度はアザゼルの方が光の槍を突き立てようしたとき――
「流石だ」
――マタドールは称賛の言葉を発し柄を握っていた手を放すと、今度はその手に魔力の槍を握り締め、光の槍を放つ寸前であったアザゼルの左肩へと突き刺す。
「くっ！」
血飛沫が舞い、アザゼルの顔に一瞬苦悶の表情が浮かぶ。そして刺された衝撃と痛みによってその体がほんの僅かの間、硬直してしまった。
隙とも呼べない様な極々短い時間。だがマタドールにとってそれは付け入る絶好の間であった。
突き刺した赤の魔槍から手を放すと再び剣へと手を伸ばし、アザゼルの腕から引き抜く。と同時にアザゼルの右肩に向け、剣を振り下ろした。
右肩から脳天に向かって走り抜ける激痛。そして体内に響く骨の砕ける音。確認するまでも無く間違いなく右肩の骨は折れている。
（あ？）
そこでアザゼルの中に疑問が生じた。斬られた筈なのに何故折れているのか、と。

叩き付けられた肩の方へと視線を向ける。
アザゼルの肩には確かにマタドールの剣が食い込んでいた。だが、食い込んでいるのは刃ではなく、背面の部分。
斬れる筈がない。
どう考えても手心を加えられた。
そう思った瞬間、アザゼルは全身の血が沸騰するかの様な怒りが体の奥底から湧き出てくる。今まで長い年月を生きてきたが、これ程までに相手に舐められたことが無い。
「――何のつもりだ」
激昂することは無かったが、体中に渦巻く怒りを辛うじて抑え込んでいるせいで、アザゼルの口から出てきた声は絞る様な掠れたものだった。
アザゼルの静かな怒りに対し、マタドールは一笑すると肩に食い込ませていた剣を素早く引き、アザゼルの膝に打ち付ける。今度もまた刃では無い。
短く呻きながらアザゼルは膝を折るが、そのまま俯かず見下ろしているマタドールを睨み付ける。
「何の…つもりだ」
先ほどよりも語気を強くして問い質す。
「貴公から可能性を感じた」

「ああ？」
　返ってきた答えの意味が分からず、アザゼルは眉間に皺を寄せる。
「言葉通りの意味だ。最初に称えたであろう？　貴公が創り出した神器と禁手化に。アレは良いものだ。強い力と可能性を感じた。だが惜しむらくは未完ということだ。だからこそ先程の様なことが起きる」
　『堕天龍の鎧』が強制解除されたことへの指摘にアザゼルは屈辱を感じたが、指摘自体間違いではないので反論出来ず、もっと時間を掛けて研究するべきだったと思うも今は臍を噛むしかない。
「……それがどうした？」
「私はとても不満なのだよ。不完全な決着に。あれは私が望むような勝利ではない」
「勝ちは勝ちだろうが」
「分かっていないな。私にとっての勝利で重要なのは私が納得するか否か、だ。納得できない時点で勝利などではない」
「この骸骨野郎……」
　要は、結果が気に入らないからやり直しを相手に求めているということである。しかも求められる側に拒否など一切考えていない。どこまでも自分勝手な相手にアザゼルは怒りを覚えるものの、悔しいかな、それを行動に移す力は既に残っていない。

「眠れ。次に目覚めるときには全てが終わっている」
マタドールは剣を持ち上げると、柄頭をアザゼルに向かって振り下ろす。
「くそ」
アザゼルは短く毒吐く。この瞬間、彼の頭の中にあったのはマタドールへの怒りではなく、背後にいるシンたちのことを守り切れなかった己への不甲斐無さであった。
（こんなことを考えるのは柄じゃないが、せめて――）
――せめて死ぬ順番があるとすれば年長の自分からであるのが望ましかった。
そう思った直後、額に衝撃が叩き付けられ意識が黒く染まっていった。
アザゼルが額から血を流し崩れ落ちるのをシンは見ていた。そこだけ切り取られたかのようにゆっくりと見える。
アザゼルが倒れた今、次に狙われるのは自分であるとシンは理解していた。初めて会ったときから、何とも言えない執着の様な気配をシンは敏感に感じ取っていたからだ。
同じ魔人だからというには何処か仄暗さを感じさせる感情。そんなものを何故抱いているのかは全く分からないが。
（どうしたものかな）
シン自身片足と片手を負傷し満足に戦える状態ではない。例え、完全な状態であって

も今のシンとマタドールとでの実力の差は歴然である。アザゼルがいたからこそ辛うじて死を免れていたが、そのアザゼルも今は戦闘不能である。

そして、次の問題としては隣にいるギャスパーである。目を負傷しているためここから逃げるにも視界がまともに利かないせいで何処へ行っていいのか分からない筈。仮にシンが戦って時間を稼いだとしてもマタドールの俊足にすぐ追いつかれてしまう。

考えれば考える程、手詰まりだということを実感する。更に言えば考える時間の猶予も殆どない。アザゼルを倒したマタドールがこちらへと向かって歩いてきているからだ。

（八方塞がりか。ここまで先が見えないなんてな……いや、違うな。決まった未来〈さき〉しか見えない、だな）

どんなに考えたとしても結局の所、シンが選ぶ選択は戦うしかない。それも自分が死ぬことが分かっての絶望的な戦いである。希望的な観測など抱けない。援軍が来るなどという都合の良い未来など見えないくせに、必死になって戦ったとしても敗北し、せめて一人でもと思って逃がしたギャスパーがマタドールの手によって命を落とすという未来は容易に想像出来る。

一秒がもっと長ければ、とあり得ないことを思ってしまう。迫る現実から目を背けさせようと心の片隅にある臆病が囁いているかもしれない。

マタドールとの距離は二十メートルも無い。あと数秒もすれば剣の間合いの中である。

妙案など何も無い。だが行かなければならない。

立ち向かっても死。逃げても死。同じ結末を辿るのであればせいぜい自己満足出来る選択を選ぶ。

碌に動かない片足を引き摺り、マタドールの方へと向かおうとしたとき、シンは制服の袖が引っ張られる。

目線だけ向けると泣きじゃくるギャスパーが震える指先でシンの袖を掴んでいた。

「もっと、僕が！　しっかり、していたら！」

恐怖から震え泣いているのではない。役に立てず足手まといとなっている自分の状況に悔恨を抱き、無力さで慟哭しているのである。

「お前が来ていなかったら、俺はここに立っていることも立ち向かうことも無かった。――ありがとう」

そう言い残し、シンはギャスパーの手を剥がして先へと行く。

「ありがとう、なんて、言われる資格！　僕には、無いです！」

助けられたお礼がしたかった。だが残酷なことに現実はそれを許さず、ギャスパーが最も苦しむであろう状況へと追い込む。

「別れの言葉は済んだかね？」
「アザゼルは生かすが、俺は殺すか？」
「貴公の実力次第、というところかな」
「敵に媚びる趣味はないが、せいぜい足掻かせてもらう」
「ふふふ。では見させてもらおうか」
シンとマタドール、手を伸ばせば届く様な距離で言葉を交わす二人。シンは間近に立つマタドールに恐れを見せず、マタドールの方は余裕といった態度を見せる。
マタドールが言葉の後。両者間に沈黙が流れる。無言で睨み合う中、最初に動いたのはシンからであった。
力強く一歩踏み込むと同時に左拳を突き出す。マタドールはそれをカポーテで捌かず、片足を軸にしてその場で半回転をする。それだけで拳は狙いから逸れ、胸元を通過する。
だがシンにとって避けられることは予想外ではない。左拳はあくまで牽制。狙いは右手が握っている。
右手の中で形成された魔力剣が地を擦り流れ、一拍遅れ下から上に向かって振り上げられる。
加減無しで注ぎ込んで作られた魔力剣。触れれば内に閉じ込められた魔力が一気に

襲い掛かる。
半身の体勢になっているマタドールにそれを叩き付けた――かと思われたが、右手からは何の手応えも伝わっては来ない。
そのときシンの目の前を何かが横切る。よく見ればそれは振るった筈の魔力剣の先。目線を握っている魔力剣の方に向けるといつの間にか握り手から先が切断されていた。
知覚できない速度で振るわれていたマタドールの剣。油断など微塵もしたつもりは無い。だがこれこそが、今のシンとマタドールとの実力差であった。
「貴公に返そう」
宙を飛ぶ魔力剣をカポーテに当て、勢いを殺さぬままシンに向かって放つ。自分に向かって飛んでくる魔力剣の一部。咄嗟に判断したシンは右手に残っている僅かな魔力剣の残骸を飛んできたそれに押し当て、そのまま上空目掛けて突き上げた。
高々と飛び上がる魔力剣。一秒も待たず収められていた魔力が解放され、頭上から魔力の波が降り注ぎ地表の砂を巻き上げ、砂埃を起こす。
視界が瞬時に悪化すると、それに乗じてマタドールの姿も消える。何処へ消えたのか気配も感じられない。
周囲に漂う砂煙。あと数秒も立たずに落ち着くであろうが、相手はそれを待たずに襲い掛かってくるであろう。

神経を尖らせてもマタドールが何処にいるのかは分からない。こうなる状況を想定して動いていたのであれば、流石だとシンは密かに思う。

（一々、考えても無駄か）

相手が悠長にこちらを待つ筈がない。ならばとシンはある決断をした。

砂煙に身を隠し、気配を殺しながらマタドールはシンの背後に立っていた。

（同じ魔人だが――まあこの程度か）

目覚めたのが最近であり、自らを魔人と認識したのはつい先程である。そう考えれば今の実力でも中々かもしれないが、アザゼルと比べれば曇って見える。堕天使の総督以上に光るものを見せるのは高望みというもの。だが、それでも失望を感じずにはいられなかった。

初めて見たとき、マタドールは不可思議な感情を抱いていた。強者と出会ったときとは違う、今まで感じたことの無い言葉に出来ない感情。それが何なのか未だに分からなかったが、それに対し答えを見出すことはもう無いであろう。

このときマタドールはシンを殺すことを決定していた。

音を消し、殺気すらも消し、マタドールは静かにその剣先をシンの心臓に向ける。

そしてそこから踏み出そうとしたときマタドールは気付く。シンが背中越しに自分の姿を見ていることに。

蛍色の光を放つ左眼。その瞳の中に自分の姿が写り込んでいるのが分かったとき、マタドールの中で警鐘を激しく鳴らされた。

積み重ねた経験に体が勝手に動き、両膝を曲げてその場に沈む様に身を屈する。

何故、自分はこの様な動きをしているのか、そう思うよりも先にマタドールの闘牛帽の頭頂部に何かが掠り、その衝撃で闘牛帽が落ちる。

（何？）

目の前でゆっくりと落下していく闘牛帽。戦いの中で傷付けられることはあったが、落とされる様な事など無かった。ましてやカポーテを使う暇も無く、これ程まで避けるだけに意識を傾けたことなどない。

頭頂部が解れた闘牛帽を見ながら、避けるのがあと少し遅かったのであればこの帽子を落とした攻撃は何処に命中していたのであろう。そんなことを考えてしまう。

（――避けられた）

激しい左眼の痛みもシンにとっては重要では無い。視線を攻撃へと転じさせる今のシンが放てる最速の一撃。それが寸での所で回避されてしまった。

何処から攻め入るのか己の直感だけを信じ、背後へと目を向け、そこでマタドールを捉えたまでは良かったが、まさかあれを紙一重で避けられるとは思わなかった。

二発目はもう撃てない。閉じた左眼から生暖かいものが頬を伝っていく。恐らくは

血であることは間違いない。
マタドールの動きに辛うじて食らい付けたのもこの左眼のおかげであるが、使えなくなった今、マタドールの動きを追うことは出来なくなっているであろう。
悪化する現状。だがそれでも引くことは出来ない。
シンはマタドールの方へと振り返る。
(見誤っていたかな?)
シンの新たな面を見せられ、マタドールは評価を改める。自分に技を使う暇すら与えなかった先程の技、左眼から流血していることから精々一、二回程しか使用出来ないものだろうが、それでも十分興味が惹かれるものであった。
(ならばもっとその力を――)
そう思いマタドールがシンの顔を覗き込む。圧倒的な相手を前にしてもシンの顔に恐怖の色は無い。内心では抱えているかもしれないが、それを見事に隠す、場に似つかわしくない無表情であった。
その顔を見たときマタドールの胸中で疼く感情がより一層濃さを増し、気付かない内に剣を握り締め、そして――
「ッ」
短い息がシンの口から洩れる。

「――何だと?」

マタドールの口から出る戸惑いの声。

もっと実力を試す筈であった。ここで終わらすのは勿体ないと考え、もっと成熟させるつもりであった。だというのに今、自分は剣を相手の心臓へと突き刺している。

刃を伝わり血の滴が土へと落ちていくのを見ながら、マタドールは自分でやったことに呆気に取られていた。

無意識の内での殺人。戦いと勝利を崇拝し、殺した相手の顔を全て覚えているマタドールにとっては、自分のしたことが信じられない思いであった。

「こんなことが……」

彼にしては露骨に動揺を見せるが、既に起こってしまったことは取り消すことは出来ない。

マタドールの目の前でシンは口から血を吐くと力の無い動きで手を伸ばし、剣を突き刺しているマタドールの右手に触れる。

最早、風前の灯となっている最後の足掻きとも呼べる行為をマタドールは静かに見ており、触れた手も振り払おうとはしない。

やがてシンの体から力が抜けていくのを見て、マタドールは貫いていた剣を引き抜き、その場から一歩下がる。

シンの体は崩れ落ち、うつ伏せとなって倒れ、間もなくして体の下から鮮血が溢れ出し血溜まりを作る。

マタドールはそれを無言で見つめた後、落ちた闘牛帽を拾い上げるとそのまま被るのではなく、顔に覆い被せ天を仰いだ。自分のしたことを悔やむ様にあるいは黙祷でも捧げる様に。

「間薙……先輩……？」

沈黙の中、ギャスパーは涙声でシンを呼ぶ。だが返ってくる声は無い。

「間薙……先輩……！」

もう一度、シンを呼ぶ。それでも応じる声は無い。

視界を封じられているギャスパーではあるが、耳から入ってくる音だけで何が起こっているのか大凡想像出来てしまっていた。

短く、小さいけれど確かに聞こえたシンの苦悶の声。そしてその後に聞こえた何かが倒れる音。後に残る静寂。この三つが音を繋げることで嫌でも分かってしまう。

流れ落ちる涙を止めることが出来ない。結局、最後まで守られてばかりであった。

（だけど、最期の最期ぐらい！）

怯えが消えた訳ではない。今でも足が震えている。しかし、それでもここから逃げ出せない。せめて相手に一矢報いる為に。

決意を込めあらん限りの力を神器へ注ぎ込もうとした瞬間――

「誰だ貴様は」

警戒するマタドールの声。その声はギャスパーへと向けられたものでは無かった。

◇

一体何発目の拳を受けたのか。数え切れない程の拳を貰った訳ではなく数えられない程の速い拳打を身に浴びて、そんなことを考えつつ回転していく景色を見ながら吹き飛ばされていく一誠。

『――棒！　相棒！』

ぼんやりとしていた一誠の頭の中に響くドライグの声。その声にハッと意識を覚醒させ慌てて体勢を立て直そうとするが、一歩遅れて背中から地面へと着地した。

「痛ぇ」

仰向けの体勢で口元を拭う。赤い籠手に、口の中が切れて出てきた血が付着した。幸いまだ歯の方は折れてはいないが、口内の方はあまり想像したくない状態となっている。

ヴァーリが半減する力を飛ばしてきたのを見てからは、距離を詰め放つ暇を与えない

ように無謀は承知で接近戦を挑んでみるが、やはり向こうの方が何枚も上手であり、いい様に殴られ続け、今の状況となっている。
『立てるか？』
「まだまだぁ！」
自らを奮い立たせながら一誠は立ち上がるも、その場でふらつき一歩後退してしまう。気持ちはまだ折れてはいないが、体の方は徐々に限界を迎え始めていた。
「動きは直線的。攻め方は単調、おまけに力の使い方は下手。その粘り強さは認めるが、それを差し引いても弱いな、赤龍帝」
一誠の実力をそう評価しながら、少し離れた場所にヴァーリが着地する。評価する声には若干飽きが混じっていた。
「あー、そうかい」
言われるまでもなく自分の実力を把握している一誠は怒ることなく、どうでもよいといった口調で適当な相槌を打つ。
「そろそろ終わりにしよう。俺もまだ戦いたい相手がいるんだ。時間が勿体無い」
「終わらせられるもんなら、終わらせてみやがれ！」
一誠は啖呵を切ると同時に背中から魔力を噴射させ、ヴァーリに向かって突進する。
「それがバカの一つ覚えだというんだ」

代り映えの無い攻め方に失望した表情を浮かべながら、ヴァーリは魔力によって出来た光の盾を目の前に展開する。

構うことなく一誠は右腕を振り上げ、加速した勢いのまま右拳を光の壁に叩き付けた。光の壁に蜘蛛の巣状の亀裂が走る。だが砕くまでには至らない。

「非力だな」

壁に阻まれたことで速度が落ちた一誠の顔面に、光の壁を突き破って出てきたヴァーリの拳が放たれる。

「くぅ！」

咄嗟に首を倒し直撃は避けるが、拳は頬を掠めていき、触れた皮膚の部分が捲れ上がる。

一誠が再度光の壁に右拳を叩き付ける。二度目の衝撃には耐え切れず光の壁は完全に砕ける。

前進し、大振りの拳をヴァーリの側頭部に向けて放つ。ヴァーリは避けることはせず、拳の軌道上に手の平大の光の壁を展開させ、一誠の攻撃を防ぐと同時に、自分は一誠の腹部に鋭い拳を打ち込む。

胃から喉にせり上がってくる不快感に耐えながらも一誠は何度も攻撃を繰り出すが、その度に光の壁によって防がれてしまう。

先程指摘した通りの単調な攻撃に、ヴァーリは内心で呆れていた。
一誠の方は繰り出せど繰り出せど攻撃が防がれることに焦る――ことはなかった。ヴァーリに自分の未熟さを指摘されたときから、一誠はある一つの狙いだけに絞っていた。次々に防がれていく攻撃、これもその狙いの布石でしかない。
（どうせ闇雲に殴っても当たらない。だったら！）
二十を超える打ち合いが両者の間で繰り広げられた後、一誠が待っていた瞬間が訪れる。
最初のときの様に一誠は左拳でヴァーリに殴り掛かる。
それを見もせずに光の壁を展開させ、防ぐと同時に攻撃を加えようと構えるヴァーリであったが、その考えが愚考であったことをすぐに思い知る。
「ドライグゥウウウ！」
『承知！』
事前に頭の中で思い描いていた策をドライグへと伝えていたので、一誠の呼び掛けに直ぐに反応し行動を起こす。
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ』
籠手から鳴る音声。それは赤龍帝の力を他のものに譲渡していることを示していた。
それを聞いたヴァーリとアルビオンは渡した力が何処へ流れていくのか、と思考し、

即座に反応する。

『ヴァーリ！　回避しろ！』

相手の狙いに気付いてアルビオンが叫ぶが、一歩遅い。

一誠の左拳が光の壁に触れると同時に、一度目は完全に防いでいた壁が粉々に砕け散る。阻む間もなく容易く打ち砕かれた光の壁の向こうの先にあるのは、ヴァーリの顔面。そこに目掛けて全力で打ち込む一誠。

だが当たるかと思われた直前、驚異的な反射でヴァーリが右腕を割り込ませた。『赤龍帝の籠手』が『白龍皇の鎧』に直撃すると、防いでいた右腕の指先から肘に至るまでが一斉に砕け散り、その下の生身の部分へと拳が打ち込まれる。

『くっ！』

二人の口から似たような声が漏れるが、そこに込められたものは異なっていた。一誠の方は直撃を避けられたことへの動揺と悔しさ。ヴァーリの方は負った傷の痛みと、いつの間にか腑抜けていた自分への怒り。

一誠は右手でヴァーリの右腕を掴み、逃れられないようにすると二撃目をヴァーリの腹部へと放つ。それを避けずに真面に受けるヴァーリ。鎧は先程の右腕と同じく紙のように脆く崩れ、その下に突き刺さる。

目を見開き、額に血管を浮き出させるものの、声一つ上げずにそれを受け切ったかと

思えば、体を折り曲げて一誠の左手を挟み、抜けさせない様にしてから負傷している左掌で一誠のこめかみを打つ。
突き抜ける衝撃に一誠の体が傾くと両脚で飛び上がり、そのまま相手の胸に押し付けてから勢い良く蹴ると、両者ともに吹き飛んでいった。
「かはっ！」
「つっ！」
二人揃って地面に大の字に倒れる。一誠は連打を放ったことと受けたことでの消耗。ヴァーリの方は生身で神滅具を受けたダメージのせいですぐには立てなかった。
「アスカロンか……中々、効いた」
ヴァーリが言った様にあの時、一誠が力を譲渡したのは左籠手に収めているアスカロンであった。龍殺しの力を最大限まで高めたことで龍の力を帯びているヴァーリに絶大な効果を発揮し、防御を無視した攻撃が出来た。
あと数発は食らわせたかったが、予想以上にヴァーリの反応と反撃は早く、結局打ち込めたのは二発だけ。
アスカロンを加えた力がどの様なものか知られてしまった為、もう二度と同じ失敗は繰り返さないだろうと思いながら一誠は立ち上がろうとする。そのとき一誠は右手に何か掴んでいることに気が付いた。掌の中に納まっている青色の宝玉。それは『白龍皇

の鎧』に填め込まれているものであった。ヴァーリの右腕を掴んだ際に外れたらしく、無我夢中であったため今まで気付かなかった。

無用なものだとは分かっているがどうにも捨てる気にならず、それを持ったまま一誠は身を起こす。

だがここで、思いも寄らないことが起きた。

起き上がり、両手を突いてから足に力を入れようとした瞬間、脚ががくがくと震え、そのまま両膝が地面に着く。何度も同じことをするがやはり脚に力が入らない。

ついにダメージが脚にまできたらしい。

「やれば出来るじゃないか。俺の鎧をここまで破壊するなんて。素直に凄いなと思えるよ！」

立ち上がることに苦労している一誠とは対照的に、ヴァーリはすぐに起き上がった。

一誠に殴られた右腕と腹部は青黒く変色し、内臓を痛めたのか口の端からは血が垂れている。決して軽い傷ではないが、それを感じさせない。

「だけどそれもここまでだな」

未だに立ち上がれない一誠を見下ろしながらヴァーリは深く息を吸い込み、吐く。すると破損していた箇所が白色の光に覆われ、それが消えると傷一つ無い装甲が現れる。

身を削って与えたものが一瞬で無と帰せられる光景に、一誠も唖然とする。

『多少の傷など所有者が力尽きない限りいくらでも修復出来る。だが相棒、お前の禁手化は自力で行っている訳じゃない。壊れたら壊れたままだ』
「でかいなぁ……差が」
『怖気づいたか？　逃げるならば止めはしないが……まだやれるか？』
「当たり前だ！　部長たちを置いて逃げられるかよ！」
　ドライグの発破に応える様に、一誠は震える脚を懸命に動かし立ち上がる。ふらふらと下半身が揺れて不安定ではあるが、確かに一誠は立っていた。
「気迫は十分だ。だが言った筈だ。ここまでだ、と」
　ヴァーリが構える。それはドラゴンショットの構え。一誠たちに見せたあの半減させる力を再び飛ばしてこようとしている。
『動け、相棒！』
「分かって、いる！」
　歯を食い縛って動こうとするが、気持ちとは裏腹に脚が動かない。それでも無理に動かそうとするがそのせいで膝が折れ、その場で倒れてしまう。
「くそっ！」
　毒吐く一誠。既にヴァーリの方は力を収束し切っている。最早避けることは不可能。
（どうする！　どうする！　どう――）

その時、一誠は自分の手の中にある宝玉のことを思い出した。もしこれにまだ白龍皇の力が残っているならば――

「ドライグ、今から無茶苦茶だと思えることをするが付き合ってくれるか？」

頭に思い描いたイメージをそのままドライグに伝える。ドライグが一瞬息を呑むかの様に黙ったが、すぐにそれを掻き消す哄笑を上げる。

『確かに無茶苦茶だ。正気の沙汰じゃない。だが面白い！　この場を切り抜けるとしたらそれしかないな。覚悟はいいか？　死ぬとしても楽には死ねんぞ？』

「死ぬつもりはねぇよ。まだ部長の処女どころかおっぱいすら揉んでもいないんだぞ。これを乗り越えなきゃ、何一つ出来ねぇ！　そして何よりも……」

一誠はヴァーリを真っ直ぐ見る。

「俺はアイツに勝ちたい！」

『覚悟は出来ているか！　フハハハハハハ！　ならば赤き龍の王と称される俺も覚悟を見せるとしよう！　相棒――否！　兵藤一誠！　お互い死を越えて生きるぞ！』

何かしようと構える一誠。ヴァーリは少しだけ興味を込めた視線を向ける。

「女の処女や胸が戦う動機なのか？　――まあいいか、それで何かを見せてくれるならな」

ヴァーリの両手から半減の力が放たれる。それを見ても回避しようとはしない一誠。

次の瞬間には一誠の体は白色の光の中にいた。
「ぐぬぅおおおおお！」
体が内側に向かって引っ張られていく様な感覚。痛みは無いが言い様のない不快感があった。
『急げ！　俺の力で抵抗出来るのもそう長くはない！』
「了、解！」
一誠は右手の甲に填め込まれていた宝玉を叩き割り、そこにヴァーリから奪った宝玉を填め込む。
「うあああああああああああああああああ！」
一誠から絶叫が上がった。神経が直に炙られているかのような、血管内に劇薬を流し込まれたような、体内の至る所を串刺しにされたかのような、今までの経験で味わったことのない最上の痛みが一誠の脳を焼く。
「成程、面白い！」
『無謀な……相反する我らの力が合わさる筈がない。そのまま消え失せるぞ』
一誠たちの行為に異なる評価を下すヴァーリたち。
『ぐおおおおお！　フ、ハハハハハ！　誰も、試したことが無いからといって、出来ないという道理は、無い！　頭が固くなったな、アルビオンよ！　不可能、だと言ってこと

を避けようとするとは！　それでも、龍の皇か！』
苦悶の声を上げながらもアルビオンを挑発するドライグ。
激痛に激痛が重なっていく中、一誠は自らの中で脈打つものを感じた。その脈動の中心にあるのは宝玉を填め直した右腕。
「神器が、人の想いに応えるなら！　俺の想いに応えてみせろ！　いや！　応えろぉぉぉぉぉ！」
一際強い声で叫んだとき、一誠の右腕に填め込まれた宝玉が白銀の光を放つ。光は右腕全体を覆ったかと思えば右腕の中へと吸い込まれていき、光が消えたときには、光と同じ色を持つ籠手が一誠の右腕に出現していた。
「おおおおおおお！」
変化した右腕を掲げる。宝玉が煌くと一誠たちを囲っていた半減の力が宝玉の中へと吸収されていく。
『馬鹿な！　我が力を得たというのか！　こんなことが！』
「――あながち無理だったという訳じゃないさ。最近、聖と魔を完全に融合させ聖魔剣というものを創り出した存在がいるとアザゼルは言っていた。アザゼルの言葉を借りるなら神の不在によるシステムエラー、プログラムバグによって実現出来たもの。その可能性に賭けたということか……面白いじゃないか！」

『不安定な現状だからこそ出来たものか。だからといって実行するのは愚かに等しい』

ヴァーリの力を無効化した一誠は白く変色した右手の籠手を見る。

「……へへへ、やってみれば案外出来るもんだな……『白龍皇の籠手〈ディバイディング・ギア〉』ってとこか？――ぐっ！」

一誠は苦し気な声を漏らす。すると鼻から血が流れる。出血の量は尋常ではなく、すぐに足元が真っ赤に染まっていった。

『無理矢理適合させた不具合が出ているな。恐らく寿命もかなり削られているだろう』

「別に寿命が長かろうと短かろうと関係ないさ。俺の生き方だって寿命を削っているようなものだしな」

白龍皇の力を取り込んだ反動で苦しんでいる一誠に接近するヴァーリ。

そのとき――

「ん？」

――視界の端から飛んでくるものに気付き、確認するよりも早く右腕を振るう。電撃、氷柱、炎、それらが鎧に触れると瞬時に霧散する。

「これは――」

それらから少し遅れ別の魔力がヴァーリに向かってくる。これも同じ様に右腕一本で払おうかと考えたが、その魔力が持つ真紅の色と波動に気付き、防ぐのではなく、そ

の場から後退するという回避を選択した。
「一対一の勝負に横槍を入れるのは無粋じゃないのか？　リアス・グレモリー」
ヴァーリは真紅の魔力すなわち滅びの力を放った人物――リアスに顔を向ける。
余程急いでこの場に来たのかリアスの呼吸は少し荒い。そのリアスを囲む様にピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンも居る。
「これ以上、イッセーを傷付けさせないわ！」
殺気立った視線をヴァーリへと向けるが、ヴァーリの方はそれを涼風を受けるかの様に動ぜず、魔力の火花を散らすリアスよりも、小さな乱入者たちの方に目線を落としていた。あからさまに嫌そうな表情を浮かべて。
「妨害してもいいが、その小さなお供は何処か他所に置いてきてくれないか？　俺でも流石に戦う気が失せる」
見下しているというよりは、幼子に気を遣っているといった口調。戦いが好きであると公言しているヴァーリでも、ピクシーたちと争う気は湧かないらしい。
「ヒホ！　オイラ達は遊びに来たんじゃないホー！」
「でもま～たくボクらの攻撃効かなかったよね～。そう言われてもしょうがないね～。ヒ～ホ～」
「うーん。そんなことを言われるとねー。どうしようか？」

それぞれバラバラな反応をする。戦場だというのに場違いな程マイペースであった。
「うん！　じゃあお言葉に甘えて少し離れているね。リアス、後よろしくねー」
「ええっ！」
いきなりピクシーが背を向けてここから去ろうとしたので、リアスどころか一誠も驚く。
「――なーんちゃって」
かと思いきやピクシーは背後に手を向け、そこから電撃をヴァーリの顔面目掛けて放った。
稲妻の如き速度でヴァーリへと迫るピクシーの電撃。相手の虚を突くタイミングで放たれたそれに、リアスも一誠も直撃したと、このとき思った。
だが電撃がヴァーリの端正な顔に触れる直前、左腕が割って入り、鎧に当たった電撃が四散していく。
「今の不意打ちはいいセンスだったぞ」
ヴァーリは微笑を浮かべて褒めながら、盾にした左腕で空を撃つ。
「きゃっ！」
すると触れてもいないのにピクシーが吹き飛ぶ。
続け様にヴァーリは二度空を打つ。

「ヒホ！」
「アウ」
　今度はジャックフロスト、ジャックランタンが後方へと吹き飛んでいってしまった。
「貴方たち！」
　慌ててピクシーたちの方を見る。目立った外傷は無いものの、三人とも地面に倒れて気を失っていた。
「加減がいまいちだったか」
　拳圧のみでピクシーたちを無力化したヴァーリ。白龍皇と比べれば確かにピクシーたちの力は格下である。だからといって決して弱くはない。こうもあっさりと倒してしまったことに少なからずともリアスの中に動揺が生まれる。
「部長！　そいつらを連れて、逃げてください！」
　血を吐く様な絞り出した声を上げ、一誠はリアスに自分のことよりもピクシーたちのことを優先するように言う。
「私は自分の下僕を大事にする。貴方を決して見捨てることはしないわ！」
　リアスの手から滅びの力が撃たれる。手から放れるとすぐにヴァーリが隠れる程の巨大化するが、ヴァーリはそれに臆さず真正面から行きながら手を向ける。
『Ｈａｒｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』

滅びの力に半減の力が作用し、その大きさが一気に半分となる。更にそこからまた半分の大きさとなり、それが何回か繰り返されると滅びの力は肉眼では捉えきれない程微小なものとなり、そのまま誰も気付かない内に空気の中へ溶ける様に消えていった。

「滅びの力と言っても魔王クラスじゃなければこんなものか」

自分の力を脅威とすら感じず、淡々と処理してしまったヴァーリ。誇りを傷付けられた気持ちだが、改めて突きつけられる重圧感はそれを上回り、背筋が冷たくなる。

「まだやるのか？」

無駄だと言わんばかりの冷めた態度。

実力は向こうの方が圧倒的に上。だが逃げ出すことも見捨てるということもリアスは選ばない。

もう一度最大まで高めた魔力をぶつける。そう思い構えようとしたとき――

「そう何度も撃たせると思ったかい？」

既にヴァーリはリアスの目の前に立っていた。

やられる。そうリアスが思ったとき、ヴァーリはリアスの予想を遥かに上回ることをした。

「――赤龍帝は随分と執着していたみたいだが、そんなに大層なことか？　これは？」

いきなりリアスの胸を鷲掴みにしたのだ。

『なっ！』
リアスと一誠から同じような驚きの声が上がる。
「いや！　やめっ！」
「よく分からん」
そのまま二、三回程揉んだ後、ヴァーリは手を離す。
前触れも無く受けた辱めにリアスは羞恥と怒りで顔を真っ赤に染め、目尻に涙を浮かべながらヴァーリの顔に平手打ちを繰り出す。しかし、それはあっさりと受け止められてしまった。
「何のつもり！」
「いや、赤龍帝が――」
そう言ってヴァーリが一誠の方に目を向ける。そのとき彼の眼前にあったのは赤い拳。
「ツッ！」
頬に拳が突き刺さり、そのまま殴り飛ばされるヴァーリ。すぐに立ち上がると、先程ヴァーリが立っていた場所には半死半生であった筈の一誠が、とてつもない魔力を立ち昇らせ、憤怒の形相で立っていた。
「何やってんだ、何やってんだ、何やってんだぁぁぁぁぁぁ！　て

めぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

木々や校舎の窓が震えるほどの怒声が響き渡る。

「まさか胸を揉んだくらいでそれ程の力が爆発するとは……」

「揉んだだけ？　揉んだだけだとぉぉぉぉ！　てめぇ！　誰のおっぱい揉んだと思ってんだぁぁぁぁぁ！」

「別に誰のを揉もうと大したことはないだろう。胸ぐらい」

何気なく言ったヴァーリの台詞。それが一誠の怒りを飽和させる。

「嫌味かぁ！　この野郎ぉぉぉぉ！」

◇

体の中心から熱が抜けていく様な感覚。それに合わせて四肢が冷たくなってく。

目の前が暗くなっていき、周りの音が遠くに聞こえる。

これが『死』ということなのだろうか。

鈍くなっていく頭でぼんやりと他人事の様に思ってしまう。

このまま音も光も無くなり、最期は命が無くなっていくのかと考えたとき――

死の安らぎは　等しく訪れよう

人に非ずとも　悪魔に非ずとも
大いなる意思の導きにて
――聞こえなくなっていた筈の耳に詩が聞こえた。
このまま死の安らぎに身を委ねるか？
聞き覚えのある声。
それともまだ足掻き、生きて、苦しむか？
生きるか死ぬへの問い。ほっといても死ぬであろう自分に、その様な選択など出来はしない。
聞いているのはお前の意思だ。生きるのか、死ぬのか、どちらを選ぶ？
――このまま死ねない。やりたいことが山ほどある訳じゃない。何か成し遂げたいことがある訳じゃない。ただ――負けては死ねない。
それでいい。足掻いて、足掻いて、足掻き続けることで得られるものがある。最期のときあの魔人から力を吸って正解だった。おかげでほんの少しの間だが、『戻れる』
『戻れる』ということがどんな意味かは分からない。ただこのときこの聞き覚えのある声が誰のものかに気付いた。
行け『――羅』
この声は、自分の声によく似ていた。

◇

予期せぬことが起き、高鳴っていた闘争心は今まで無いくらいに沈み切っていた。
視界の端では『停止世界の邪眼』を持つ少女が何やら覚悟を決めていたようだが、今の自分の冷めきった心に熱を入れるには足りない。
それでも相手をしなければ失礼、と思いマタドールは徐に振り返り、少女のもとへと行こうとする。
だが不意に左腕が誰かに掴まれた。
驚愕するしかない。自分ともあろう者が間合いの中に誰かが入っていることに全く気付くことが出来なかったことに。
一体誰だ。突然現れた存在を早く見たく、焦った様に背後を見る。
そこに立ち、腕を掴むのはつい先程、刺殺した筈のシン。
姿形は同じ。だというのに異質な存在感を放つそれは、まるで中身がそのまま入れ替わってしまったかのようであった。
「誰だ貴様は」
敬称すら忘れて、そんな言葉が出てしまう。

シンは応えず、血で真っ赤に染まった学生服に手をやると一気に引き千切る。
露わになった上半身。胸の中央には確かに刺された跡が残っているが、それも瞬く間に閉じてしまう。
傷が塞がると同時にシンの右腕に刻まれていた紋様が生物の様に伸び、体の至る所に新たな紋様を刻んでいく。そして放たれていた蛍光の色も徐々に変わっていく。
「そうか、そういうことか！」
歓喜に満ちたマタドールの声。変わっていくシンの姿にマタドールは納得した。
まだ不完全だったのだ。『魔人』としての力が。故に今、変わっていく姿こそ――
「それが貴公の本当の姿か！」
右腕だけでなく全身から放たれる赤色の魔力光。赤く輝く双眼。首筋から隆起した角の様な突起。
この世界において、十番目の魔人が真の姿を顕す。

終戦、授名

全身から噴き上がる赤い魔力。怒りの形相を浮かべ、親の仇でも見るかの様に一誠はヴァーリを睨み付ける。
「アハハハ！　まさか目の前で胸を揉まれたぐらいでそこまでドラゴンの力が跳ね上がるとは！　君は本当に面白いな！」
「何笑ってんだこの野郎！　こっちは笑えねぇんだよ！」
「別にそこまで大したことをしてないと思ったんだけどね」
「部長の胸が大したものじゃねぇっていうのか！　ぶっ殺すぞ！」
「いや、別にそう言った意味じゃ……」
「ならどういう意味だ！　言ってみろてめぇ！　ぶっ飛ばすぞ！　と思ったけどやっぱ言うな！　言ったらぶっ壊すぞ！　てめえ！」
怒りで思考が若干空回りしているせいか、言動が支離滅裂になっていく。
「こういうのを怒り狂うというのかな？　アルビオン」
『もうこれ以上会話するのは止せ。話が噛み合わん』
これでもかと怒る一誠の姿にヴァーリは興味深そうに見るが、アルビオンの方はそん

なヴァーリを窘め、さっさと戦うことを促す。
「一誠……」
怒る一誠であったがリアスの声だけは簡単に耳へと届いた。一誠がリアスの方を見る。胸を抑える格好をしていたリアスは一誠と目が合うと、すぐにその目線を下ろしてしまった。
好きでも何でもない異性に辱められるという場面を見られてしまったという羞恥。真面に一誠の顔を見ることが出来ない。
ほんの僅かだけ混じり合った二人の視線。そのとき一誠は見た。リアスの目の淵に輝く涙を。
自分でもこれ以上怒りを覚えることは無いと思っていた。だがどうやらそれは間違いであったらしい。
想い人を泣かせた相手への怒り。想い人を泣かせてしまった不甲斐無い自分への怒り。自分でも制御し切れない感情が炎の様に理性を焼く。
「ドライグ、もしものときは止めてくれ」
『任せろ。だからお前は存分に暴れろ』
その言葉を最後に一誠はあれこれ考えるのを止めた。ただ自分の胸の内で暴れ狂う感情に身を委ね、動く。

一誠が地を蹴る。それを見たヴァーリも動こうとするが――

「がはっ！」

――ヴァーリが動くよりも先に、一誠が肩からヴァーリの腹部に体当たりを決めていた。

亀裂が生じる『白龍皇の鎧』。自分を上回る速度で動いた一誠に驚きつつ、すぐに距離を取ろうと後ろへ飛び退る。

だが離れたかと思えた瞬間、ガクンとヴァーリの体が宙で止まったかと思えば、一誠の方に向かって引き寄せられていた。

後退する直前、ヴァーリの片足を一誠が掴んでいたのだ。

ヴァーリを引き寄せながら一誠は拳を握ると、目の前に来たタイミングに合わせて亀裂がある箇所目掛け、拳を叩き込む。

鎧は砕け、その下へ拳が捩じり込まれる。そしてすかさず掴んでいた方の手を離し、そのまま両拳に拳の乱打がヴァーリの全身を叩く。

素人が放つ拳ならばヴァーリはすぐに捌けた。しかし、ドラゴンの魔力が極限にまで高まっている今の一誠は速度と手数により、技を力で捻じ伏せていた。

また一撃一撃が先程とは段違いの重みを持っており、拳が鎧を打つ度にその箇所に拳の跡が残っていく。

「くっ！」
打撃を受け続けるヴァーリも黙ってはおらず、拳打の嵐の中、ほんの僅かに生まれる間を縫って拳による反撃の繰り出すもそれが一誠に触れる前に一誠の拳によって叩き落される。
「ここまで速いとはな！」
打撃を浴びながらも楽し気な表情を崩さないヴァーリ。
「何笑ってんだ！　リアス・グレモリーのおっぱいを揉んだ罪！　そしてリアス・グレモリーを泣かせた罪！　こんなもんで済むと思うなよ！」
「ここまで引き上がるならあんなことでもやった甲斐があったもんだ！」
「部長の素敵なおっぱいを『あんなこと』だぁ！　二度と転生出来ないぐらいに魂ごと破壊してやらぁぁぁぁぁぁ！」
更に力を爆発させた一誠は渾身の右正拳をヴァーリの胸部に打つ。拳から鎧以外のものが折れるのが伝わってきたが、今の一誠がそれに構うことはない。
『Ｄｉｖｉｄｅ』
白龍皇の力が埋め込まれた『白龍皇の籠手』から鳴る音声。その途端、ヴァーリが纏っていた魔力が半分の大きさにまで下がる。
そこに一誠の右の回し蹴りがヴァーリの脇腹に炸裂。魔力が低下していることで鎧

の強度は一段下がり、今度は一撃で鎧が砕けた。
「ぐはっ！」
ヴァーリの口から血混じりの吐瀉物が吐かれ、その場から二、三歩程よろめいて後退する。
それによって出来た両者の間。一誠はその短い距離で背中から魔力を噴射させ、瞬間的に加速するとヴァーリの一歩前になって地を舐める様に身を低くし、一歩踏み込むと同時にそこから通過するだけで地面が抉られていく威力を秘めた拳を突き上げながら体を起こす。
突き上げた拳はヴァーリの腹部に深々とめり込み、体が浮き上がる。更に追い打ちでそこから両脚で地を踏み切り、揃えた両足をヴァーリの腹部を蹴り、真上に飛ばした。
蹴り飛ばされた体が宙を飛んでいくヴァーリ。すぐに光翼で体勢を取り戻そうとするが、既にそこには一誠が居た。
「ドライグゥゥゥ！」
『細かい制御はこちらが受け持つ。お前は力の限り放て！』
名を呼ばれ力強く、頼もしく、最も望んでいる答えを返す。共に在る故に想うだけ相手が何をしたいのかを既に察していた。
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ』

『赤龍帝からの贈り物』の効果によって高まっている一誠の魔力が左手に収まっているアスカロンへと注ぎ込まれる。それによって龍殺しの効果が最大限にまで高められた。

龍殺しの力が宿った左拳を握り締める。そして今度は右手に魔力を収束させる。

「おおおおおおお！」

咆哮を上げてヴァーリへと突進しながら、龍殺しと魔力を秘めた両拳を重ね合わせる。

一見すればドラゴンショットの構え。しかしドラゴンショットとは大きな違いがあった。

重ね合わさった両拳がヴァーリの胸部に押し当てると同時に一誠は両拳の魔力を開放する。

龍殺しの力にドラゴンの魔力を単純に注ぎ込めば互いの力を食い合うこととなるが、今回の場合『赤龍帝からの贈り物』という繋ぎと呼べる力を事前に送り込んでいる為、互いの力を殺し合わず融和し合う。

解き放たれた二つの力はさながら剣の様にヴァーリの胸に突き立てられ、そこからヴァーリの体内に龍殺しの力を帯びた魔力が流し込まれていく。

今までドラゴンショットが魔力を『放つ』ものだとしたら、今一誠が使ったドラゴン

ショットは魔力を『撃ち込む』もの。
「がはっ！」
ヴァーリは吐血しながら魔力の勢いで吹き飛ばされ旧校舎の壁を突き破り、中へと消えていく。
飛ばされたヴァーリを見て、構えを解く一誠。その途端呼吸が乱れ、顔中から汗が流れ落ちていく。力が爆発的に上昇した状態でも疲労を感じる程に大量の魔力を消費してしまっていた。
『あの技も白龍皇の力も初めて使った割には上出来だ。だが、半減するだけであいつの様に半減した分の力は取り込めん。そしてあの技もそう燃費の良い能力ではない。膨大な魔力で無理矢理制御したからな。あまり連発は出来んぞ』
「ははは……それでも結構な威力だっただろ？　名付けるなら『ドラゴンショット・Ａ〈アスカロン〉』ってのはどうだ？」
移植した白龍皇の力や新技について助言を送るドライグ。それに対し、少しだけ興奮が収まり頭が冷えた一誠が変型ドラゴンショットに名称を付けるという軽口を交えながら頷く。
まだ力に余力はある。アザゼルから貰った禁手化を維持するリングも制限時間を超えていない。

「――今日は色々と経験が多い日だ。指一本触ることなく一方的に攻撃をされたかと思えば、物理攻撃が全く効かないどころかそのままこちらに返してくる奴、龍殺しときて最後は今まで散々使ってきたが白龍皇の力だ。力を半減されるという感覚か、自分で言うのもなんだが中々、鬱陶しいな」

突き破られた旧校舎の壁の中から聞こえるヴァーリの声。いまだに健在であることを示しており、心なしか饒舌になっている気さえする。

やがて瓦礫を歩いてヴァーリが姿を現す。殴られての流血以外にも片目から涙の様に血が流れており、龍殺しの力が体内に流れた為かその血は赤い鮮血ではなく時間が経った様に赤黒く変色していた。

ドラゴンショット・Aを受けた胸部は血痕で白い鎧が斑に染まっている。だが直撃した割には思っていたよりも傷が浅く、血の量も少ない。

口元の血を拭っているもののあれ程の連撃を浴びせられても何事も無かったかの様なしっかりとした足取りであった。

「マジかよ……」

手応えは感じていた。手を抜いたつもりは全く無い。間違いなく一撃一撃に全力を注ぎ込んだ。だというのに相手が想像以上に壮健であることに少なからず動揺する。

『あれほど受けても、その程度とは……』

ドライグもまた一誠と同じような心境であった。最高潮にまで達した一誠の力はドライグでさえ、瞠目するものであった。同じドラゴンの力を持つとはいえ、いくら何でも頑丈過ぎる。

「いや、それでも結構効いた。特にアスカロンはな」

そう言うとヴァーリは咳き込む。すると血の飛沫し、足元を汚す。

「そのまま受けていたら正直、命の危険もあっただろう。だが、俺たちの力を忘れてはいないか？」

どういうことだ、と一誠はすぐに理解出来なかったが、ドライグの方はその言葉ですぐに察する。

『まさか、自分自身に半減の力を使用したのか……』

「ご名答。流石に影響が出なくなるほど半減化することは出来なかったが、それでもこの程度で済んだ。ついでに傷の方も縮めてみたが、初めてやった割には結構上手くいくものだな」

自分の力が更に一歩先に進んだことに喜びを感じているらしく、上機嫌そうに話す。それを聞いて一誠は『何て奴だ』と驚く。ドライグもまた一誠の様に驚いていたが、その驚きは一誠の比ではない。驚愕、驚嘆、唖然、という言葉を並べてもなお足りない程である。

長い時間を生き、何度も白龍皇と戦ってきた彼だからこそ分かる、ヴァーリの精緻の極致と呼べる技術。

ヴァーリは軽く言っているが、そもそも体内に流れ込んだ力のみに限定して半減の力を行使するなど、今まで聞いたことも見たことも無い使い方である。ドラゴンの力は強力だが、その分繊細な扱い方には向かない。もしヴァーリの言った力の使い方をすれば、龍殺しの力どころか体の内側が半減する恐れがある。

傷の方もそうだ。下手をすれば体そのものが縮小するかもしれない。ヴァーリの言葉を信じるならばどちらも今日初めて試みたということになる。恐れ知らずというなどという段階ではない。

白龍皇の力を取り込んだ一誠を馬鹿を貫いた大馬鹿と思っていたが、このヴァーリもまた馬鹿を通り越した大馬鹿者である。

「――で、だ。こうして悠長に説明している間に別の目的も果たさせてもらった」

『ヴァーリ、奴の半減の力に対する分析は済んだ。赤龍帝の力を介して発動しているが元は私の力だ。こちらの制御方法と照らし合わせれば対処可能だ。もう奴らから力の影響を受けることはない』

アルビオンから『白龍皇の籠手』の対策がもう済まされたことが報告される。あの説明自体がこれの為の時間稼ぎであることを知らされる。そんな可能性など微塵も考え

ず普通に話を聞いてしまったこと、命を削り、痛い思いをして手に入れた力がもう通用しなくなってしまったことに、一誠は歯ぎしりをしたい衝動に駆られた。
「しかし、我ながら随分とボロボロにされたな……ここまで傷を負ったのはマタドールと初めて会ったとき以来だ……」
所々、装甲が剥がれ落ち、自分の流す血で汚れた鎧を見て懐かしむ様な口調で話すヴァーリ。
「――だとしたら『あの力』を使うのも必然だな？」
『あの力』それが何のことを指しているのか一誠には分からなかった。だが代わりにドライグが焦った声を上げる。
『まさか、もう既にその段階に至っているというのか！』
『待て、ヴァーリ。この場でその選択は良策ではない。無闇に使えばそれが呼び水となってドライグの力を呼び起こすかもしれない』
アルビオンもまたヴァーリに異を唱える。感情的ではないもののドライグと同じく焦っているのか口調が速い。
「アルビオン、兵藤一誠は赤龍帝として新たな可能性を見せてくれた。ならばこちらも返礼として見せるだけだ。『白龍皇』の『覇龍〈ジャガー・ノートドライヴ〉』を！」
『待て！　ヴァーリ！　自重しろ！　我が力に翻弄されるのがお前の本懐か！』

「安心しろ、アルビオン。見せるのは全部じゃない、ほんの一部だ」
『な、に？』
「言っただろう新たな可能性に対する礼がこれだと」
怒っていたアルビオンもヴァーリの言葉を聞いて戸惑う。一心同体であるアルビオンすら知らないことをこれから見せるという。
「本当だったら最初にマタドールに見せる予定だったが予定変更だ。これは俺なりの君への敬意だと思ってくれ」
胸部の宝玉が七色の閃光を放つ。
「我、目覚めるは――」
〈消せ！　消し飛ばせっ！〉〈消すの！　消しちゃうの！〉
ヴァーリの詠唱に合わせ、鎧から放たれる金切り声、怨嗟の籠った声、感情的な声、冷たい声といった様々な声が重なっていく。
「覇の理に全てを奪われし、二天龍なり――」
〈夢に終わりを！〉〈幻に始まりを！〉
「無限を妬み、夢幻を想う――」
〈全部だっ！〉〈全てを捧げろ！〉
「我、白き龍の覇道を極め――」

〈全てを、全ての力を！〉〈捧げ、消し、誘え！〉
「――されど、求めるは一筋の極光」
〈何だ！　どういうことだ！〉〈知らない！　こんなの知らない！〉
続いて紡がれた詠唱が違うものだったのか、無数の声は激しく動揺し出すが、ヴァーリはそれに構うことなく最後の一唱を詠み上げる。
「極限への片鱗！　現在〈いま〉ここに顕在せよっ！」
『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ』
眩い銀色の光。そして圧倒的な魔力が場を埋め尽くす。
閃光に思わず目を瞑ってしまった一誠。魔力の探知に関しては鈍い彼でも一瞬にして分かってしまう程の魔力の量。それは明らかに今の自分を凌駕していた。
瞼越しに感じていた光が収まるのが分かり、一誠は目を開いていく。目を開いた先にどんな光景があるのか、そんなことを考えるだけで心臓の鼓動が早まっていく。
『……ヴァーリ、今日ほどお前の才を頼もしく、そして恐ろしく思った日は無い』
瞼を開き切った一誠の耳に、アルビオンの感嘆とも戦慄とも言える声が入ってくる。
「これが……」
それ以上の言葉を続けることが出来なかった。
一誠によって破壊されていた鎧は修復されており、手足などを覆う装甲に目立った変

化は無い。最も目立った変化を起こしていたのは胴体の方である。丸みを帯びていた鎧が全体的に鋭利な形状に変化、その背からはより巨大な光翼が生えており、光翼の輝きが夜の闇を全て消し去っている。

胸の中心に填め込まれていた宝玉は一回り以上巨大化しており、まるで眼の様であった。

「これが覇龍だっていうのか？」

『――違う、違うぞ相棒』

「え？」

『確かに覇龍の力を使用している。だがあいつの今使っているのはその『覇龍』の一部、部分的に『覇龍』の力を開放している』

「そんなこと出来るのかよ？」

『出来る筈が無いっ！』

一誠の問いにドライグは激しい口調で否定した。目の前の出来事に対し、信じられないという気持ちが込められているのを感じる。

『覇龍は一度使えば理性を失い、周りも自分を含めて破壊する云わば暴走だ！　一部の力だけを取り出せるなどといった融通が効くものじゃない！』

「だけど現にあいつは……」

『ああ、だからこそ恐ろしい！　禁手化だけでなく覇龍すらも完全に制御しようとしている奴が！　これほどの使い手は俺も初めてだ！』

前代未聞。その言葉がこれほどまでに嵌る事態は無かった。

「完全な状態で覇龍を使用すれば俺でも意識を保つのは持って数分。だがこれならばそれの何倍もの時間を維持することが出来る」

ヴァーリの言葉通り、正気を失っていれば出来ない流暢な喋り。面で覆われている為、表情が分からないが恐らくはさっきの様な笑みを浮かべながら喋っているのであろう。

「鎧の一部が変わったってぐらいでなんだってんだ！　そんなことでビビッてたまるか！」

啖呵を切る一誠にヴァーリは哄笑する。

「無知からくる恐れ知らずか？　それとも天然か？　まあ、嫌いじゃないがな。だが――」

ヴァーリは両手を巨大な宝玉がある胸元に持っていく。

「これを見ても折れずにいられるかな？」

『なっ！』

ドライグとアルビオンが声を上げ、そのまま絶句する。

宝玉の収まっている鎧の縁を掴むとそれを左右に開き、胸部を展開させ宝玉を剥き出しにしたかと思った次のとき、途轍もない脱力感が一誠を襲う。
「うあっ！　こ、これは！」
纏う鎧が信じられない程重く圧し掛かる。それを支えている脚にも力が入らなくなり、その場で四つん這いになってしまうが、更に腕にも力が入らなくなっていき最終的にはうつ伏せとなってしまう。
「なん、だ、これ！」
自分の身に起こった事態に戸惑う一誠。その間にも力が抜けていき、動かす舌すらも重い。
「うう、力が……抜けて……」
離れた場所に居るリアスもまた表情を蒼褪めさせ、地面に伏せる。
『待て！　待つのだ、ヴァーリ！　もう十分だ！　お前の強さは十分に理解した！　だからそれを地上で放つのは止めろ！　ここ一帯を消滅させる気か！』
「済まないな、アルビオン。――どうにも抑えることが出来ない。どうやら赤龍帝からもそうだが彼奴の熱にもあてられたようだ」
『何を――むっ』
「楽しそうだな、向こうも。これが終わったら是非とも混ぜてもらおう」

声を荒げて止めようとするアルビオンだが、ヴァーリは止めようとはしない。寧ろ何かに張り合うかの様に力を更に高めていく。咎めていたアルビオンもヴァーリを通じ、何かを察知したのか、驚きを交えて声を漏らす。

（一体、何をしようとしているんだ？）

『覇龍最大の一撃を放とうとしている』

碌に動かなくなってきた口の代わりに頭の中でドライグに問う。

（今、動けなくなっているのもその一撃による効果なのか？）

『違う。ただ奴は体内で力を溜めているだけだ。だがその溜めるという行為そのものの強さに、周りの力が引き寄せられているに過ぎない』

（嘘だろ……）

この脱力もただ力の余波を受けているだけだと教えられ、唖然とする。

その間にも周囲のあらゆる力がヴァーリへと引き寄せられていく。青々としていた木の葉や雑草などの植物は色が緑から一気に茶へと短時間で変色し枯れていく様を見せる。

与える影響はそれだけに止まらない。

ガラスに罅が入った様な音が断続的に聞こえてきた。その音の元は何かと一誠が首を動かし音の方へと目を向けたとき、絶句する。

空に刻まれる無数の亀裂。学園全体を覆っている筈の結界に綻びが生じ始めていた。結界を維持する為の力もまた、ヴァーリに取り込まれていく。
「受けてみろ、この一撃を！」
『待てっ！』
やがて力が十分に溜まったのかヴァーリは宣言の後、胸に収まった宝玉が視認出来ない程の輝きを放つ。最後までアルビオンが制止するもののヴァーリは止まらない。
『Ｌｏｎｇｉｎｕｓ――』

◇

魔人として本当の意味で目覚めたシンは、無言のままマタドールの手を握り締める。締め上げる力はマタドールの白骨に軋みの音を上げさせるが、マタドールはその痛みすらも愉しんでいるかの様に下顎を震わせて笑っている。
「くくくく！　私としたことが早計であったな！　まさかこれ程の力がまだ眠っていたとは！」
マタドールはシンへと向き直り、その顔を覗き込む。
「魔人として本当に目覚めた気分はどうかな？」

答えの代わりに出されたのはシンの拳であった。

「はっ！」

それを笑いながら頭を傾けて避けるマタドール。だが完全に避けたと思っていたマタドールの耳にピシリ、という音が聞こえた。外から聞こえた音ではない、体の内側から聞こえてくる音。

触れずとも分かった。避けたと思えた先程の一撃、それが頬を掠め、骨の一部を削り取っていったのだと。

完全に避けたとマタドールは思っていた。だが掠めていた。左腕を掴まえられてカポーテが使用できず、自由に動くことも出来ないとはいえ、避けられると思った攻撃を避けきれなかったのだ。

マタドールの心が衝撃で震える。喜びによる衝撃で。

「随分と動きにキレが増したなぁ！」

シンの首筋を狙い、マタドールの横薙ぎの斬撃が銀色の閃光となって奔る。しかし、その銀光は躊躇なく割って入った左腕が防ぐ。

左腕の半ばまで食い込む刃。だがそれ以上先には進まない。マタドールにしてみれば称賛に値する硬さである。少なくとも今までマタドールが斬ってきたものの中で生身の状態で斬れなかったものは無い。魔人化によって肉や骨が変質しているのかもし

れない。
更に力を込め切断しようと考えたマタドールであったが、何故か刃がそれ以上先に進まない。
するとマタドールの見ている前で、はっきりと分かる程の速度で斬られた部分が再生し始めていった。切断された筋肉組織が糸を垂らす様に繋がり、互いに引き寄せ、刃が食い込んでいる骨も切断部分が急速に埋められていき、マタドールの刃を押し返していく。
掲げる左腕から流れる血はもう既に止まっている。胸の傷に注目しているあまり気付かなかったが、貫いた膝、折れた指、流血していた左眼も完治していた。
「再生――いや、回復魔術か！」
僅かに発せられたシンの魔力の波動にそう結論付ける。だがその回復速度は尋常ではない。高度な回復魔術でも治癒の神器でもここまでの速度で傷は治らない。更に目立った動きも詠唱も無い。難度が高いほど手順の複雑性は増していく、これは『魔術』というよりも『魔法』という言葉の方が相応しく思えてくる。
腕が半分切断されかかっていたシンは顔色も表情一つも変えず、些末なことの様に傷が治るよりも先に攻撃を仕掛ける。爪先で地面を蹴り付け、勢いをつけながら上げ、そのままマタドールの胴体に向けて左脚による回し蹴り。

至近距離。直撃するのに一秒も掛からない。だがそんな極短時間であってもマタドールにとっては十分過ぎる時間であった。

左腕に食い込む剣を素早く抜き、そのまま手首を返して剣先を地面に向け、刃は迫る左脚へと向けられた形で防御の構えを取る。

剣の刃が足に刺さったら、そのまま反撃に転じようと考えた故の構え。

間もなくしてマタドールの思い描いた通り、マタドールの剣にシンの左足首が食い込む。

そして、このまま剣で斬り払おうとしたときマタドールは異変に気付く。

（――動かない！）

剣が振り払えない。斬り裂こうとしていた左脚の脚力によって剣を持つ右手が微動だにしない。

マタドールの剣は左足首の三分の一ぐらいまで裂いているが、シンは引く処か更に力を加える。

均衡は刹那の間。

「おおっ！」

蹴り抜かれた左脚は突き刺さった剣もろともマタドールの胴体へと叩き付けられる。

この戦いの中でマタドールは初めて痛みに耐えるかの様な声を上げる。

強い痛みがあった訳ではない。力負けしたことがショックだった訳ではない。ただ今、受けた一撃が響いたのだ。肉体の根幹を為す『芯』とも呼べる部分に深く染み込む様に。

経験したことが無い感覚。その戸惑いから来る動揺の声であった。

一撃、受けただけで解る。危険であると。何がどうなってこうであるから危険などという理屈など無い。己の裡から『危険』という言葉が意識しなくても湧き出てくるのである。

だが、それこそマタドールの望むもの。己自身の声すら無視し、戦いの続行を望む。

血が舞い、肉が弾け、骨は削られ、痛みが交う。まさに戦いの醍醐味――の筈であるが、マタドールは未だに拭い切れない感情のせいで没頭することが出来なかった。

シンの顔を見る度、拳と剣を交える度、戦えば戦うほどに増していく、苦く、黒く、鬱陶しくへばり付く『それ』。知っている気がするが何故か言葉にすることが出来ない。

一度は『それ』のせいで、気の乗らない殺しに手を掛けてしまった。何故突き動かされたのか、見当もつかない。

（――本当にそうか？）

否定した自分に自分が問う。

（――認めたくないからではないか？）

知っているのに知らないと思い込んでいる。それは何故か？　頑なにまで認めようとしない理由は？
（認めてしまえば自分自身の存在を揺るがすことになるかもしれない）
久しく無かった魔人同士の戦い。それは閉ざされていたもの、封じられていたものを互いに抉じ開ける戦いであった。

◇

体が熱い。内側に籠った熱が肉や血、骨を炙っていく様な感覚。
その熱は脳にまで至り、思考は半ば止まっていた。
「それが貴公の本当の姿か！」
目の前で闘牛士の恰好をした骸骨が嬉しそうに叫んでいる。見覚えはある様な気がしたが、殆ど働いていない頭のせいで名前が出てこない。
骸骨が言う『貴公』とは当然、骸骨の前に立つ存在のことを指している。
ぼんやりとした回らない頭で考える。『貴公』と呼ばれた自分は何であったのか、と。
自分自身の名前すら思い浮かばない。何故こうしてここにいるのか、骸骨と向き合っているのか、そして骸骨の腕を掴んでいるのか、ほんの数秒前の出来事であった筈なの

に何一つ思い出せない。
本当の姿とは何か『貴公』――つまり自分のこと――は目線を落として体を見た。
見せる範囲で指先から肩、腹から胸に掛けて浮かび上がる赤い光で縁取りされている黒い線によって描かれた紋様。
何がおかしいのか、やはり本当の姿の意味が分からない。
何一つ変な所は無い。見慣れた『いつもの姿』だ。
その後も骸骨がなにやら喋っているが耳には入ってこない。
目の前に殺気を放ちながら立っている。それだけで何をするか決めるには十分であった。
骸骨に拳を振るう。当てるつもりであったが、躱され僅かに掠るだけであった。思っていた以上に速い。
骸骨の方も剣で斬りかかってくる。避ける必要性を感じなかったので腕で受け止めた。軽い衝撃と共に腕の半ばまで剣が食い込むが痛みは無い。
斬られた部分はすぐに治す。負った傷は自分か、あるいは××たちが治すのが当たり前であった。
――××たちとは何であったか。
自然に思い浮かんできたが、考え直すとその部分だけ記憶が欠落している。

思い出せないものを深く考えてもしょうがないと思い、それ以上考えるのは止め、剣を抑えている内に骸骨の方を倒すことの方を優先した。

腕が使えないので代わりに足で蹴る。だが今度は剣で防がれてしまった。構わずそのまま蹴り飛ばすも、剣が間に入っているせいで十分な威力が出せない。

力もそこそこ。素早さはかなり。守りも硬い。単純に強い。普通に戦えば手古摺る相手。

やはり前に何処かで会った様な気がする。だからこそなのか、このような相手とどうやって戦えばいいのか、頭に方法が浮かんでくる。

強ければ弱くすればいい。

◇

答えの出ない思考を頭の片隅でしつつも、意識は常に相手から離さなかったマタドールはまたシンから瞬間的な魔力を感じると、体に撃ち込まれた剣ごとシンの脚を振り払う。

何が来るかと剣先を向け身構えたマタドール。その変化はすぐに身を以って体験することとなる。

（ん？）
明らかな違和感。それは剣やカポーテを持つ手から感じた。
（――重い）
最早、体の一部と言っても過言ではないマタドールにとっての象徴。だというのに両手からは伝わってくる重み。信じられないことに気を抜けば指先が離れてしまいそうになる。
「何を――」
その言葉の先を発するよりも早く、シンから再び魔力の波を感じた。途端、腕に掛かる重量が倍以上のものとなる。
武器の重さが増した訳ではない。武器を持つ手や腕の力が急速に弱まっているのだ。繊細な指先の感覚が失われていき、渾身の力を込めなければ握っている実感すら湧かなくなってくる。
大きく削がれていくマタドールの力。だが削がれていくのはそれだけに収まらない。両脚もまた数百キロの重りを架せられたかの様に重くなっていき、膝を折らないだけでもかなりの力を有する様になる。
（私の力が封じられていく！）
四肢の力を奪われたマタドールは表情の無い顔の下で驚く。

マタドールから自由を奪ったシンはすかさず拳を振り翳す。
それを見て先程の様に躱そうとするマタドールであったが、動くよりも先にマタドールの頬にシンの拳は打ち込まれていた。
「ぐっー」
殴られた個所から脳天にまで貫いていく衝撃。その威力を物語る様に、頬から顎にかけて白骨に亀裂が生じていた。
全く反応が出来なかった。脚の自由だけではなく、反応速度まで鈍らされていることに気付く。
だが、マタドールも黙って攻撃を受ける訳も無く、伸び切っているシンの腕を下から斬り上げる。
しかし、先程とは違い刃はほんの数ミリだけ腕に食い込んだだけであり、それ以上先には進まない。
長年己の技術を研磨し続けてきたマタドールにとっては衝撃的な光景であった。
頬に打ち付けた拳を引くと、もう一度同じ個所に拳が叩き付けられる。亀裂は更に延び、眼窩、こめかみにまで届き、白い骨に黒く太い線を刻まれる。
(何たる無様)
顔を殴った後、今度はマタドールの鳩尾をシンの拳が抉る。

（何たる醜態）

二回、三回、四回と同じ箇所に同じ威力の拳が同じ間隔で叩き付けられていく。

（この様な姿を他人に見せるときがくるとはな……）

手も足も出ずにいい様にされる情けない姿。このような姿にしたシンに怒る気持ちは無い。あるのは自分に向けての強烈な羞恥心であった。

（何たる鈍重！　何たる非力！　これが私か！　最強にして最高の戦士に至らんとするマタドールなのか！）

一方的に蹂躙されつつある自らを叱咤する。そんなマタドールの心情など全く介することなく五回目の拳が繰り出されると、文字通り鳩尾に突き刺さり、そのまま背から握った拳が飛び出す。貫いた拳には血は付いていなかったが、代わりに砕けたマタドールの骨の破片がいくつか刺さり、それによって流れるシンの血があたかもマタドールの流した血の様に錯覚させる。

（これほどまでに傷を負ったのはいつ以来か……）

腹部を貫く拳を見ながらマタドールはそんなことを考えていた。

初めてサーゼクスと邂逅しその異質なる力を身を以って知ったときか。あるいは遥か昔、三勢力との戦いに介入し、他の魔人たちと死を以って死を滅する戦いを繰り広げたときか。

（そういえばあの時も……）

戦った魔人の中でラッパを吹く魔人の姿を思い出す。神の下僕であり走狗、その在り方はマタドールから見れば唾棄すべきものであったが、忌々しいことにその実力は本物であった。

その魔人が使った術の中で今の様に大きく力を削ぐ技があった。それを身に受けたマタドールは全身の力だけなく魔力すらも大幅に削がれた記憶がある。

もしシンが今使っているものがその魔人と同じものであったのであれば――マタドールの中にはそれを解く術が既にある。

（あの日以来か、これを使うのは）

剣による近接戦闘を好むマタドールが長年の間使わなかった術。正確に言えば使う様な場面が今日の日まで一切無かった。

何故ならば今から使用する術は攻撃目的のものではなく、補助を目的とした術であるからだ。

マタドールは頭の中で術の式を思い描く。長い間使用せずとうに錆び付いていると思っていたが、それに反しその術の式は驚くほどすんなりと浮かび上がってくる。

思考の中で描かれた術式にマタドールの魔力が反応し、それに従い魔力が性質を変えていく。

質を変えた魔力はマタドールを包み込む橙色の球体へと形も変えると、中にいるマタドールに干渉、すぐに弾ける様な音と共に橙の球体が割れ、それを形成していた魔力は霞の様に消え失せた。

マタドールの行ったことに関心など示さず、突き刺していた腕を引き抜き、マタドールの顔を狙う。

波打つ様な金属音。放たれた拳はマタドールが眼前に翳す剣の腹によって受け止められていた。

剣が拳によって僅かに撓んでいる。

「全く何様だ……」

押し込もうとする拳。だが防いでいる剣はその力に拮抗している。

シンによって施された弱体化は既に解けていた。マタドールにはそういった魔法や術を解除する対抗術を備えていたのだ。

しかし、それを戦いの場で使用したのは今までで一度しかない。そんなことをされるよりも先に相手を倒しているか、弱体化されても尚相手の実力を上回っていたということばかりだったのである。

「絶えず勝利と修練を積み重ねてきたと驕り……」

拳を抑え込みながらマタドールは独白する。

「その驕りと勝利に溺れて自分でも知らないうちに慢心、そして怠慢を抱く。――醜態にも限度がある」

自分でも認識していないうちに腕が鈍っていたことを自覚する。その証拠が先程の弱体化である。かつての自分であったのならばもっと早くに気付き、対策をとっていた。

「痛みが足りなかった。苦しみが足りなかった。執念が足りなかった。だからこそこのような無様を晒す」

風穴が開いた胴体のことを指しながらマタドールはかたかたと顎を震わす。

「だがそれでも恥知らずだと罵られようと敢えて言わせてもらおう――何と愉しい！」

未だに胸の裡では染みの様な違和感は消えない。しかし、それでも思いもよらぬ強敵と戦い、追い込まれている状況だがこの逆境に打ち勝ち、その先にある勝利を手にすることを想像すると高揚が抑えきれず、全身を突き動かす衝動と化す。

マタドールの剣がシンの拳を突き上げて押し返し、胴体を大きく開けるとそこを袈裟切る。

傷口から血が噴き出す。しかし、散った血が地面に付く間に斬られた傷は閉じてしまう。

返す様にシンの拳がマタドールの左胸に打ち込まれた。拳は衣装越しにマタドール

の骨を砕く。砕かれた肋骨が衣装を突き破って飛び出てくる。
「ははははははははははははは！」
痛みは在る。だがそれを上回る高揚が今のマタドールにはあった。
高笑いを上げながらマタドールの突きがシンの脇腹を貫き、そのまま横へ滑らせ腹を裂いた。
噴き出た血がシンのズボンを汚す。
流れ出る血を這わせたまま、シンの脚がマタドールの大腿を蹴りつけた。
空中に赤い弧を描く血。割れる骨の音。更に上がる哄笑。
拳が骨を砕き、剣が肉を削ぐ。両者の間には奏でられるのは血の滴る音と骨の破砕音。
加速する拳と剣の交わりは、宙に舞う血を赤い霞へと変えてしまう。
「もっと！　もっとだ！　この時、この場所こそ！　私と貴公による血のコロッセオだ！」

◇

殴る。貫く。蹴る。折る。掴む。砕く。

それを何度も繰り返す。
強かったので弱くしたにもかかわらず、すぐに元に戻ってしまったので仕方なく手足を動かし、相手を攻める。
何か所も折り、何か所も貫いたというのに相手は弱っていく気配はない。寧ろ勢いが良くなっている気さえする。
こちらも斬られ、抉られ、貫かれたりしているがその度に元に戻している。
靄がかかった頭は未だに晴れず、何の為にこれを繰り返しているのか分からない。
このまま続ければ死ぬだろう。それがどちらかは分からないが。
繰り返す。繰り返す。淡々と殺意を込めて。繰り返す。繰り返す。
そのうち終わるであろうと考え、繰り返す。
繰り返す。繰り返す。繰り返す。繰り返す。
――い。
繰り返す。繰り返す。繰り返す。繰り返す。繰り返す。
――輩。
何かが聞こえた気がした――繰り返す。繰り返す。
――先輩。
やはり誰かの声が聞こえた気がした。

――薙先輩。
覚えのある声。覚えのある名前。
――間薙先輩！
――名前。呼ばれた名前。その名前は知っている。思い出した。それが自分の名前だ。
そして、呼ぶ者の名は――

◇

低下した視界でも分かる舞う血の量。寒気立つ様な気配が突如増えたかと思えば、半吸血鬼であるギャスパーも噎せ返りそうになる程の血のニオイが場を満たす。
初めは誰が戦っているのか分からなかった。ただ二つの衝突し合う大きな力に呑まれ、震えて動くことも声を出すことも出来なかった。
そのとき口元に何かが付着する。鼻腔をくすぐるニオイ、それは間違いなく血であった。
半吸血鬼であるが、吸血という行為に対し嫌悪感を持つギャスパーであったが、このとき何故かその血を手で拭うことはせず、無意識に舌で舐めとってしまった。

口内に広がる血の味によって自分のした行為に戸惑い、そしてその血の持ち主が誰なのかを知る。

「間薙、先輩?」

血の味で誰の血か当てるなど本来のギャスパーには出来ないことであった。しかし、どういう訳かその血がシンのものであるのが確信の様に分かってしまった。

マタドールによって倒された筈のシンが何かしたことによって立ち上がり、今はマタドールと死闘を繰り広げている。

その身からマタドールと全く同じ気配を放ちながら。

それによって思い至った考えにギャスパーは唾を呑み込む。それによって口内にあったシンの血を意図せず嚥下してしまった。

血が喉を通り抜けていく、すると胸の奥が熱くなる。

「うぐっ!」

臓腑が一気に熱を帯びた様な感覚。苦しくは無いが、いきなりのことで戸惑い呻く様な声を出してしまう。

体の内側で起こった熱の様な力が体中へと広がっていく。

広がった熱が最も集中したのは怪我を負った両目であった。眼球、瞼に籠っていく。

その感覚に慣れず紛らわす為に両目を強く瞑る。その状態が少しだけ続いたが、その

内、両目から熱が消えていくのが分かった。
「あっ……」
違和感が消え、閉じていた目を反射的に開こうとする。すると、マタドールによって腫れ上がり重くなっていた瞼がすんなりと持ち上がる。
続いて霞んでいた視界も徐々に焦点が合い始め、完全に見える様になった。
一瞬にして完治した両目。それに驚いているものの、次に見た光景にその驚きも消え去ってしまう。
「ひっ！」
出てしまった悲鳴。ギャスパーの両目はしっかりと捉えていた。
マタドールと姿が変わっていたシンとの壮絶な殺し合いを。
互いに一歩も引かない状況で剣と拳が傷付けあう。マタドールはシンの拳によって至る所を砕かれ、折られていき、シンの方もマタドールの剣によって斬られ、貫かれていく。
傷つけられていくマタドールは笑い、血に塗れていくシンは表情一つ変えない。
その凄絶さに目を逸らしてしまう。
あれは本当に自分の知っている先輩なのだろうか、ギャスパーは分からなくなる。
出会ってから今日までそれほど長い期間行動していた訳ではない。同じ日に知り

合った一誠とは違い、感情を表に出すことは殆どなく、無表情であることも多かった。それでもまだ完全に感情が見えなかった訳ではない。

しかし、今のシンの表情はギャスパーの記憶にあるシンの表情とは違い、完全に感情が欠落しているといってもよかった。

何を考えているのか全く分からない。暗い底を見ているかのように何も見えない。

素直に恐ろしいと思ってしまった。だがその恐ろしさは傷を負ってもすぐに治してしまうことでも、淡々と殺し合う姿でも無かった。

自分の体のことなど一切考えず、削る様に酷使し、命を絞り、燃やし尽くす様な破滅的な戦い方が、ただ恐ろしかった。

このまま消え去ってしまう様なシンの戦い方に焦燥感をギャスパーは覚えた。

シンの身に何が起きてしまったというのか、ギャスパーはただ何も出来ずただ茫然とするしかなかった。

そのとき――

「え？」

――声が響いた。

淡々とした声。何処を狙い、どうやって攻め、どうやって守るのか、という考えが最低限の言葉のみで重なっていく。

声には何一つ感情らしいものは無く、機械的とも言ってよいものであった。聞いているだけで体の温度が下がっていく様な気さえする。
少なくとも通常の人間が発する様な声ではない。
「これは……」
耳から聞こえてくる音ではない。声は頭の中から聞こえてきた。
それはギャスパーの知っている者の声であった。
自然と視線は向けられていた。
頭の中の声に沿うようにシンが動く。攻めると考えたときには攻め、守ると考えたときには守る。
何がどうしてこうなったか理由は分からないが、シンとギャスパーとの間に繋がりが出来ていた。
ふとギャスパーは思う。向こうの考えが頭の中に流れてきているのであれば、こちらの考えも向こうに流せるのではないか。
目を固く瞑り、神器を扱うときの様に精一杯意識を集中させ、頭の中でシンへと呼び掛ける。
（間薙先輩！）
呼び掛けるが返事は無い。シンは手を止めず黙々と戦い続けている。

（間薙先輩！）
もう一度呼び掛ける。やはり返ってくる声は無い。
強く強く、その名を呼ぶ。
（間薙先輩！）
返事は来ない――そう思った。
「手を貸してくれ。ギャスパー」
自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

◇

どれほどの間、意識がはっきりしないまま好き勝手動いていたのか分からないが、ようやく頭が冷えた。
自分に起こった変化に驚くのは一先ず置き、今は目の前の状況を打破しなければならない。
高揚した笑い声を上げながらマタドールの突きが胸部に向け繰り出される。反射的に掌を翳す。
切っ先が掌を貫くが、胸に届く前に掌を閉じ、力尽くで動きを止める。

貫かれる痛みと切れる痛みが熱の様に感じるが、耐え切れない程ではない。それよりもマタドールの剣を止められるほど力が増していることに今更ながら驚いてしまう。

剣の動きが止まった間にマタドールの腹部を膝で蹴り上げる。だが直撃する前にマタドールの方も膝を持ち上げ、脚でそれを防いだ。

ぶつかり合う脚。体内でミシリという音が響く。骨に罅でも入ったのかもしれない。

「動きが鈍ったな」

新たに負った怪我でほんの一瞬であるが意識が逸れたのを指摘し、マタドールは掴まれていた剣を斬り上げる。掌が半分に裂けるが、それも瞬く間に閉じていく。

人離れしていく体。状況が状況であれば思う所もあったかもしれないが、今はそんな些細なことに構っている暇は無い。

斬り上げられた剣が今度は振り下ろされる。狙いは左の肩。

避けようと思えば避けられるだろう。しかし、避けた所で追撃が来るのは分かり切っていた。

ならばどうするのか。その回答は既に在った。

頭の中であることを考え、それを強く念じる。

振り下ろされた剣の刃が左肩に食い込む。

「ぬぅ!」

マタドールが呻く様な声を出す。振り下ろされる瞬間にこちらが放った拳がマタドールの腹部に深く刺さり、逆に左肩に食い込んだ刃はそこから一ミリたりとも先へと進まない。

押しても引いても刃はその位置から動かず『固定』されていたのだ。

すぐにマタドールの視線がシンから外れ、別の方に向けられる。その先にはギャスパーが居た。

「いつの間に……」

塞いでいた両眼が完治し見開かれているのを見て、僅かに驚きを混ぜた声を漏らす。

あのとき強く思ったのはギャスパーへ時間停止のタイミングを教えるものであった。ギャスパーの身体能力ではマタドールの剣速を追うことは出来ない。しかし、自分の目ならばマタドールの剣の動きを追うことが出来る。謂わば自分の目とギャスパーの目を連動させたのだ。

離れた相手に意思を伝えるのは仲魔にも使うことが出来るが、それ以外の相手に使ったのはこれが初めてであった。いつの間にか出来た繋がりであるが、おかげでマタドールの虚を突くことが出来た。

打ち付けた拳を開き、そのままマタドールの体を鷲掴む。掌を密着させた状態から体に籠った魔力は掌に向けて流し込む。

掴んでいる指の隙間から零れる蛍色の光。零距離から光弾を撃ち込むつもりであった。

充填まで一秒も掛からない、確実に当てる。そう思っていたが、マタドールの執念は予想の上を行く。

「はあああ！」

気合いの籠った叫びと共に時間停止していた筈の剣が震え始める。神器の効力を力と魔力で無理矢理解除しようとしていた。

まだ十分ではない状態だが、すぐにでも放たねばと思い、掌に込められた魔力を開放しようとした瞬間、マタドールの剣の拘束が解かれる。

そこから先のマタドールの動きは、神速と呼ぶに相応しいものであった。

剣の自由を取り戻したマタドールはそのままシンを斬り裂くのではなく、切っ先の向きを変えて突き出す。

放った先にあるのはカポーテを持つマタドールの腕を掴むシンの右手。そこを自分の腕もろとも容赦なく串刺しにした。

突き刺すことで生まれるほんの僅かな隙間。それによって力が緩む紙一重の間を使い、突き刺された自らの腕を刃で裂きながら強引に引き抜いた。

それと同時に後ろへ大きく上体を逸らし、掴んでいる腕を膝で突き上げる。掴んでい

る部分が引き千切られようとも構わずに。
これにより光弾は狙いから逸らされ、マタドールが居た位置から斜め上に向かって放たれる。
直撃を避けたマタドールは突き刺していた剣を引き抜きながら反った体勢から大きく後方へと宙返りし、着地を待たずに空中でギャスパーの方に向けて剣を振るった。
剣から放たれた空気の歪みはギャスパーに当たらなかったものの、その足元に着弾し、土砂を巻き上げて視界を閉ざす。着地の瞬間を狙っての時間停止を妨害する為のものであった。
ギャスパーの神器を塞いでいる内にマタドールは無事着地。腕が手の甲から肘まで二つに裂かれているにも関わらず、それでもカポーテを離さなかった。
有利とも言えた状況が瞬く間に五分の状況へと戻った。
一見すれば、だが。
（――体が重くなってきた）
制限時間の終わりが体の負荷となって現れる。表情には出さないものの四肢が徐々に怠くなり、血や肉が錘に置き換わっていくかのような感覚となっていく。
更には体中を巡る紋様からは最初のときと比べ、光が翳った様に思えた。
この姿でいられる時間も残り少し。恐らく全力で戦えるのは次で最後であると直感

的に悟った。
「そろそろ限界かな？」
　こちらの考えを読んでいるかの様なマタドールの台詞。完全に隠せてはいないとは思っていた為、動揺は無い。
「安心してくれ。私は待たない。――お互い悔いが残らないようにしよう」
　敵に掛ける言葉にしては随分と優しいものであった。マタドールが言った様にこのまま戦いを引き延ばせば確実にマタドールの方が勝つ。だが相手は敢えてそのような選択はしない。きっと裏も無く言葉の通りの理由なのであろう。
　間もなく終着となるであろうこの戦い。そして場の空気もまた終わりに近づいていることを示していた。
「ほう？」
　関心を含んだ声を漏らしながらマタドールの目線が別の方向に向けられる。自分の視線も同じタイミングでそちらの方を向いていた。
　戦いの最中で目線を逸らすのが愚行だというのは分かっている。しかし、反射的に向けてしまうほど、肌が粟立つ様な巨大な魔力を感じてしまったのだ。
「――ヴァーリと赤龍帝か、これは面白い！」
　マタドールは魔力の持ち主に気付き、骨の表情でも分かる程喜びを露わにする。

「部長、イッセー先輩、ランタン君、ジャック君、ピクシーちゃん……」

ギャスパーもまた突如現れた巨大な魔力を感じ、不安そうに次々と名前をつぶやく。恐らくはあの場所に皆がいるのであろう。手助けしたいという気持ちはあるが、状況が状況である為にそれも出来ない。

今はただ皆の無事を願うしかなかった。

「恵まれているな、私は。これほどの好敵手たちと出会えた。――尤も今宵一人消えるかもしれないがね」

マタドールが構える。最初に出会ったときと比べ、今のマタドールの姿は酷いものであった。絢爛とした衣装は所々裂け、破れており、大きな穴が開いている箇所もある。衣装の穴から見える白骨には折れていたり、亀裂が走っているものもある。

カポーテを握る手は二つに真っ二つに裂けて、中指、人差し指、親指の三本で辛うじて握っている状態であった。

誰が見てもボロボロと呼べる姿だというのに、最初に感じた凛とした印象が何故か薄れることは無かった。

だからこそ実感する。衣装などがこの魔人を飾っている訳ではない。こちらが想像できない程の年月を戦いに費やしてきたことで生まれた隠しきりようの無い金剛石の如き自信こそが、この魔人を彩っているのであると。

人格面ややってきたことははっきり言ってしまえば好感も無く不快感しか覚えないが、自らの生の中で一つのことを極めようとする姿勢だけは、不本意ながらも凄さを感じた。

構えるマタドールを見て、こちらもいつでも動けるように構える。

離れた場所にいるギャスパーもマタドールを警戒し神器を発動する状態となるが、その前に待つよう指示を飛ばす。

何度か意識の隙間を上手く突いて動きを止めることが出来たが、今の状態のマタドールにはとてもじゃないが神器を当てることは出来ない気がした。

少なくともギャスパーが発動させた途端躱し、優先目標を自分からギャスパーに変えるのが予想出来る。そうなると身体能力が低いギャスパーがマタドールの凶刃から逃れることは出来ない。

ならばどう有効的に使うか。そう思ったときギャスパーの方からある提案が送られてくる。その案を聞き、成程と思った。出された案は過去のギャスパーを知る自分ですら全く知らなかったものであったからだ。そして、一度限りではあるがこの作戦はマタドールにも刺さると思った。

マタドールはギャスパーの特異な生い立ちを知らない。

今の状況で他にいい策も浮かばない。ギャスパーが出した案。それに全てを賭ける

ことを決意する。
それにしても、人と目を合わせることを恐れ、いつも震え、引っ込み思案であったギャスパーが自分から積極的に考えを伝えてきた。
場違いだと分かっていても妙な感慨深さを感じてしまう。
だからこそ、この策は必ず成し遂げなければならない。

◇

シンとマタドール。数メートル離れた位置で互いに対照的な視線を飛ばす。
マタドールは内側に滾る殺意、覇気、闘気などのそれらをくべた様な烈火の如く激しい意志を込めての眼差し。シンの方は逆に強い意志を感じさせず冷めているといってもいい、感情の揺らぎを一切感じさせない冷徹な眼差しを向けていた。
無言で互いを見る両者。その間にも秒単位で場の空気が張り詰めていく。
傍からそれを見ていたギャスパーはその重圧に押し潰されそうになるのを懸命に堪え、片時も二人から視線を外さない様に努める。
痛みすら錯覚しそうになる凍てつく空気の中で終わりに向け遂に動き始める。
先に動いたのはマタドールの方からであった。

シンに向かって一足飛び、その速さは今まで見てきた中でも最速であった。
それを見たシンは即座に判断する。避けることは不可能であることを。故にシンはその場から動かずマタドールを待ち受ける。
刹那に剣の間合いまで動いたマタドールは渾身の力を以って突きを繰り出す。狙う先にあるのはシンの顔の中心。心臓を貫いても殺しきれなかったことから、次は頭を貫いて仕留めるつもりらしい。
音すら裂いて進むマタドールの剣。
それに対するシンは僅かに首を回す。剣を躱すにしてもあまりに動きが小さい。
やがて剣の先端がシンに刺さるかと思われた次の瞬間――シンは僅かに口を開いた。
そして迫る刃に向け、自分の方から剣に喰らいつく。
口内に入った刃は奥歯の上を滑り、金属の摩擦音が鳴る。そこから開いた口を力の限り閉じ、刃と歯で鳴る甲高い衝突音。
シンはマタドールの剣を口で受け止めていた。
無論その様なことをしてシンも無事ではない。現に剣はシンの頬を貫通している。
しかし、口腔内でしっかりと刃を噛み絞め、それ以上動かない様に固定させる。
それと同時に逃がさない様にマタドールの袖を掴む。
「――貴公には驚かされる」

零す様に呟くマタドール。今まで経験したことのないことであったらしく、口調からも高揚が薄れていることから心底驚いているらしい。

シンは剣を押さえたまま拳を握る。マタドールもまた放たれる拳に対しカポーテを振るう――かと思いきやそれをシンではなくギャスパーに向けて振るった。

マタドールはシンと対峙しながらもギャスパーから意識を逸らすことは無かった。故にギャスパーが神器を発動させようとしている気配を感じ取っていた。

今度は先程の様な空気の歪みが弾丸の様に放たれるのではなく、ギャスパーの足元に小さな旋風を発生させる。

足元から吹き上がる風に思わず下を向いてしまったとき、小さな旋風はギャスパー一人を呑み込む竜巻と化し、その体を風によって裂く。

悲鳴も苦鳴も吹き荒ぶ竜巻の中に消えていく。

時間停止の神器発動を妨害されたシン。しかし、動揺は無い。まるでそれが予定調和だったかの様に。

シンが拳を突き出す。マタドールはそれをいなし次の攻撃に繋げる為にカポーテで受け止めようとした。

シンの拳がカポーテに触れる。だが翳したカポーテから伝わってくる力は想像していたよりも遥かに弱い。まるで赤子が撫でたかのような感覚。

拳がカポーテに触れた状態からシンはゆっくりと拳を押した。その力があまりに小さ過ぎる為、カポーテでいなすことも出来ない。

微弱な力で押されたカポーテはそのままマタドールの体に押し当てられる。カポーテ越しに伝わってくるシンの拳。だがそこに力も殺気も感じられなかった。

殺し合いという場、ましてや先程の寒気すら感じさせる者には似つかわしくない程、弱弱しい一撃。

受けるマタドールも内心戸惑いを感じさせるものであった。

一体何を考えているのか。そう思いながらマタドールがシンの目を見る。その瞬間、マタドールは理解する。自分が逃れられない状況に追い込まれていると。

その双眸に曇りは一切なく、外部に悟らせないぐらい恐ろしい程静かに闘志を滾らせていた。

瞬間、マタドールの体を衝撃が貫く。体の中を通り抜けていく何か。少し遅れて痛みが走り、更に遅れて体がくの字に折れ曲がっていく。

拳を密着させた零距離の状態から打たれるシンの拳。それはマタドールがカポーテで捌き切れない程の一瞬の力の爆発であった。目立った動作も無く、力みなどの予兆も無い形で零から百まで過程を飛ばして打ち込む。

人の形から放たれる人外の一撃であった。

衝撃に耐え切れずマタドールの両脚が地面から離れる。その勢いで掴んでいた袖は千切れ、同時にシンも捕らえていた剣を離す。口から離した剣は頬から口角までを裂きながら口内から出ていく。

斜め上に吹っ飛んでいくマタドール。

既にシンはこの力を維持できるのもこれが限界であることを悟っていた。次に放つのは正真正銘最後にして最期になるかもしれない。

シンは両手を胸の前で交差しながら前傾となり自らの体を抱える様な格好となる。末端に流れる魔力ですら吸い上げる様に心臓を中心として体内で収束されていく。心臓に集まった魔力が行き場を求めて一気に膨れ上がり、そこを中心とし魔力が黄昏色に輝き、さながら太陽の様であった。

それを無理矢理束ね、抑え、制御し、膨れ上がった魔力を限界まで縮小させる。そして限界値に達した魔力を押し出す様に心臓が一際強く膨らみ、そして中に溜め込まれているものを押し出すかの様に一気に収縮する。鼓動が零となった瞬間、交差した腕を開くと同時に体を仰け反らせる。

引き絞った弓が矢を放つように極限まで溜め込まれた魔力はそれを開放の合図とし、シンの体から幾本に分かれて放たれる。

放たれた矢――否、矢と呼ぶには相応しくない。一本一本軌跡を描きながら太く鋭い

魔力の弾が、逃げ場を埋め尽くす程雨の如く無数となってマタドールへと迫る。
飛び上がっているマタドールも自分を追い、迫ってくる魔弾の雨の動きを捉えていた。
数も多く威力も強い。だが死力を尽くせば捌き切れない数ではない。
コンマ1秒ほどの猶予があれば切り抜けることが出来る。
マタドールがカポーテを構えようとした――が。
「ッ！」
マタドールは息を呑む。僅かではあったがまだ距離があった筈の魔弾の群が突然眼前に迫っていたからだ。
瞬きも意識を逸らしてはいない。そんなことをしている暇すらも無かった。
そんな筈は無いと思っていても、この感覚には心当たりがあった。
神器による時間停止を受けたときの感覚である。しかし、マタドールはこの神器に対し細心の注意を払っており、事前に発動出来ない様に潰していた。
現にギャスパーはマタドールの風の術を受け、体の至る所から血を滲ませた姿で横たわっている。
ならばいつ時間停止を受けたのか。そのときマタドールは視界の端に何かを捉えた。
目線だけ動かす。

そこに居たのは一匹の蝙蝠であった。だが只の蝙蝠ではない。蝙蝠にはあるまじき赤い瞳をしており、その瞳は不可思議な光を放っていた。

その光には見覚えがある。それは時間停止の神器を発動させたときのギャスパーの瞳の光と酷似していた。

それを見てマタドールは瞬時に理解した。何故、停められたのかを。そして自分が重大な見落としをしていたことを。

「――不覚!」

直後、マタドールの体を無数の魔弾が貫いていった。

◇

体中を貫かれたマタドールが地面に落下しそのまま動かないのを見て、シンは大きく息を吐いた。

全身全霊の力を込めた最後の攻撃。それを何とか当てることが出来た。

安堵と同時に全身から力が抜けていき膝が折れるが何とか堪え、ふらふらとしながらも体を真っ直ぐにする。

全身を覆っていた紋様から輝きは失せ、生き物が這う様にシンの右腕へと移動してい

く。首から生えた突起物はそのまま砂の様に崩れ、風に舞って何処かへ消えていってしまった。
やがて全身の紋様が右腕に移動し終わる。しかし、元通りという訳ではなく肘までであった紋様は肩の辺りまで伸びており、シンには見えないが背中の右肩甲骨付近まで浸食していた。
シンはギャスパーの方を見る。横たわったまま動かない。頭の中で呼び掛けて見るが返事は無い。というよりも先程の戦いの中で感じていた繋がりを今は感じられなかった。
「ギャスパー」
今度は声に出す。するともぞもぞと動きながらギャスパーが顔を上げる。その顔の至る所に小さな切り傷が出来ていた。
「……終わったんですか?」
「ああ、多分な」
ギャスパーは痛みで顔を顰めながら立ち上がる。体の方も顔と似た様な状態で制服はずたずたに裂けており、近寄って分かったがそこから覗く肌には血が滲んでいるものの深いものではない。
「大丈夫か?」

「僕の方は――って！　間薙先輩の方こそ大丈夫なんですか！」
無事を聞いてきたシンの顔を見てギャスパーは驚き、顔を蒼褪めさせる。言われてシンの方も自分の頬に大きな裂傷が出来ていたことを思い出す。戦いの最中はすぐに傷が治っていたが、その力はもう無いらしい。
意識した途端、熱の様な痛みを感じ始めた。アーシアの神器によって治療してもらえばすぐに治るだろうが、その前に傷を見て驚かれるのが容易に想像出来る。
（きっと今のギャスパーみたいな顔をされるんだろうな）
そんなことを考えていると、ギャスパーの方が何か言いたげな顔でシンを見上げる。
「その、あの、先輩は本当に大丈夫なんですか？」
「これ以外の傷は無い筈だが？」
「そうじゃなくて……『あの姿』になって、体に変なことは起きていないんですか？」
戦いに集中していたときは何とも思わなかったが、冷静になって考えると魔人としての姿をギャスパーに見られていたことに今になって気付く。後ろめたいことでは無いが、自分自身の問題に他人を巻き込むのを良しとしないシンは悩む。このまま素直に事実を云うべきか否かを。
そのとき背筋を駆け抜ける悪寒と共に膨大な量の魔力を感じた。方角はヴァーリと一誠たちが戦っていると思わしき場所からであり、その魔力の大きさは先程感じたもの

よりも遥かに大きい。
「ひぃ！」
ギャスパーもそれを感じ、その桁外れの量に身を竦ませている。
それと同じくして学園の空に無数の亀裂が生じ始めた。学園中を覆っている見えないそれを恐らく外と中を隔絶する為の結界の様なものと判断したが、特に何かした訳でもないというのに綻びが出来始めたことに事態の異常さが分かる。
「ヴァーリか」
聞こえてきた声。シンはそれに瞬時に反応し、身を竦ませているギャスパーをやや強引に下がらせる。
警戒するのも無理は無い。声を発したのは紛れも無くマタドールであったからだ。
マタドールは仰向けの体勢からどういった原理か音も無く立ち上がる。
「先程の技は効いた。体の波長も狂わせるのか少し動けなかった」
立ち上がったマタドールの姿は、一言で言えば無惨であった。
体には拳大の穴がいくつも開いており、そこから向こう側の景色が見える。左腕は殆ど千切れかけており、力無く揺れているもののその状態でもカポーテを指先に引っ掛ける様にして持っていることに執念染みたものを感じる。両脚も抉られた部分が目立ち、立っていられるのが不思議に思えてくる。顔の左頬骨辺りも魔弾によって削られてお

り眼窩と繋がって顔に大きな穴が開いている様に見えた。
満身創痍の姿。唯一無事な部位は剣を持つ右腕ぐらいである。
「――くく、くはははは……ははははははははははは！」
いきなりの哄笑。激しく笑うマタドールに後ろにいるギャスパーが飛び上がる様にして驚く。
「そうか……そういうことか……成程……」
一人ぶつぶつと呟き何やら納得している。前の姿も十分不気味であったが、その不気味さは今一層上がっている。
「今になって漸く理解した。この胸の奥に渦巻く感情――羨望と堪えがたい程の嫉妬、貴公とは今日が初対面の筈だが間違いない」
射貫く様な眼差しがシンに向けられる。
「この『敗北感』！　分かる、分かるぞ！　私は貴公に『負けた』ことがある！　自分でも可笑しいことを口走っていると思っている！　だが紛れも無いことだ！　私は負けた！　それもただの敗北ではない！　この魂が覚えている！　死という唯一無二の『完敗』を！」
今までに無い程感情を剥き出しにして叫ぶマタドール。
「あ、あの人は何を言っているんですか？」

「――さあな」
狂人の戯言と切って捨てればそれまでであったが、シンはそれを否定しなかった。何故ならばシンもまたマタドールに対し、会ったことがあるという既視感を覚えていたからだ。
「まさか、まさかこのようなことが起こるとは……」
マタドールがボロボロの体で構える。だがその構えは今までに見たものでは無い。剣を持つ右手と突き出す様に構え、カポーテを持つ左手ごと左半身を一歩下げるという最初の構えを逆にしたものであった。
「分かる、分かるぞ！　あのとき何故私が貴公を刺したのかが！　今なら理解できる！　私は貴公に勝ちたかったのだ！　心の底から！　敗北を濯ぐには勝利しかない。だが死という完敗に二度目の機会は無い――そう思っていた。だが！　まさか！　そのあり得ることの無い二度目が訪れようとは！　これに滾らずして何が戦士か！　失われた誇りを取り戻すことに燃えずして何が『闘牛士〈マタドール〉』か！」
その言葉の通り周囲一帯を燃やし尽くすのではないかと思える程の魔力が、マタドールを中心にして吹き荒れる。満身創痍とは思えない程の魔力と覇気。密度と量が最初に会ったときの比ではない。
「この一撃にて貴公を葬ろう！　死と血と勝利によって研鑽された私の技を以って！

受け取り給え！　これが貴公へ送る最大の敬意だ！」

吹き荒れるマタドールの真紅の魔力が剣に集っていく。気合いを込めた叫びと共に膨大な量の魔力が一点に収束していく様は悪寒しかしない。シンも似た様な技を持っているが、これはそれの比較にならない程、桁が違う。

全力で戦った。それ相応に善戦した。だがそれでもマタドールを倒すには至らなかった。

『死』、それを明確に意識したのはこれが初めてかもしれない。

「血の――！」

目の前に顕現する暴力。圧倒的な力。確実なる死。間も無くして自分たちの命が失われる。――そう思っていた筈なのにこのときシンはマタドールから視線を外し、何故か空を見上げた。

見上げた後に、自分でも何故この様な真似をしているのか分からない。空を見上げてもあるのは星々。その中でも一際大きく黄金に輝く星が見える。

生きるか死ぬかの瀬戸際であるまじき行為。だが相対するマタドールはそれを咎めなかった。

何故ならばマタドールもまたシンと同じように空を見上げている。

彼だけではない。この場に居ないが離れた場所にいるヴァーリや一誠、サーゼクスな

どの上位者たちもまた空を見上げている。
「この期に及んで私の邪魔をするか！　走狗ども！」
剣を構えたまま、マタドールは怒りの言葉を空目掛けて吐き捨てた。

◇

極限まで高まった魔力が見る見るうちに萎んでいく。相手から唐突に戦意が失われていくことに対し一誠は疑問を持たなかった。正確に言えば疑問を持つ余裕が無かった。
上空に光る黄金の光。それから目を離すことが出来なかったのだ。
『長く見るな、相棒。あの光は悪魔にとって猛毒以上だ』
ドライグからの警告。
「あれが何なのか知っているのか？」
『ああ、あれは『神矢』の光だ』
「『神矢』？」
初めて聞く単語に戸惑う声を漏らしつつふらつきながらも立ち上がる。するとそこにヴァーリとアルビオンの会話が聞こえてきた。

『目立ち過ぎたな、ヴァーリ。これ以上暴れると『騎士』どもが介入してくるぞ』
「それはそれで面白いな」
「面白くないっての」
突如として現れた新たな声。その声の主は一誠が気付かぬ内にヴァーリの隣に立ち、その肩に手を置いていた。
歳はヴァーリと差ほど変わらない。短く切り揃えた髪に整った顔は他者に爽やかな印象を与え、同時にその身に纏う中華風の鎧一式が相反する様に威圧感を放っていた。
「美候か。何をしに来た？」
「酷い言い草だぜぃ。迎えに来たって以外に何があるっての？　ていうかヴァーリ、お前の役目はカテレアの暗殺の監察兼手助けだろう？　それなのに派手に暴れて……」
「そんなつもりは無かったんだがな」
「こんだけ結界をバリバリにしておいてよく言うぜぃ。まあ、そのお陰で入り易かったんだがねぃ。で、カテレアがしくった以上もう役目も終わりだ、一緒に帰ろうや。本部で別の仕事が待ってるぜぃ」
「もうそんな時間なのか……」
「でなきゃこいつもうるさいしな」
自分を親指で差す美候と呼ばれた青年。すると美候の肩側から顔を覗かせる存在が

いた。今まで美候の背中にしがみ付いていたらしい。
「ヒーホー！・　こんなつまらないことに何時までも時間を割いているんじゃないホ！・そんな暇があるならオレ様と戦えホ！」
「おーおー、耳元で叫ぶんじゃないぜぃ」
　顔を覗かせたのは紫色の二股に分かれた帽子を被り、同色の前掛けをした黒い肌に赤い目をした一誠にとって記憶にある存在と酷似した姿をしている。
「ジャック、フロスト？」
「あ〝あ〝ーんだホ！」
　そう呼ばれたことが気に食わないのか、愛らしい顔から想像出来ない程ドスを効かせた声が発せられる。
　円らな瞳をこれでもかと吊り上げながら一誠を睨み付ける黒いジャックフロスト。しかし、そこへ間が悪いというべきか、ある存在が偶然一誠の言葉を耳にしてしまっていた。
「ジャックフロストだってホ！」
　今までヴァーリの影響で倒れていたジャックフロストが勢い良く起き上がり、美候の方を見る。そこに居た自分と同じ姿の存在を見つけると目に涙を浮かびながら走り出した。

「ヒーホー！　オイラ以外のジャックフロストだホ！」
「あ！　だ、駄目よ！」
　敵に不要に走り寄っていくジャックフロストを見てリアスが慌てて止めようとするが、その制止を聞かずに全速力で駆けていく。
「お！　あれってお前の同族じゃあねぃか？」
　駆け寄るジャックフロストを見て、美候は珍しいものを見た様な表情をしながら背後にいる黒いジャックフロストに話し掛ける。
　黒いジャックフロストは無言で美候の背から降りると駆け寄ってくるジャックフロストの前に立ち――
「ヒーホー！　ヒーボッ！」
「近寄るんじゃないホ！」
　――右のストレートで迎え打った。
「ヒホホホホホ！」
　顔の中心を殴られたジャックフロストは、悲鳴を上げながら駆け寄ったときと同じ速度で後ろへと転がっていき、元居た場所まで殴り飛ばされ、そのまま気絶してしまった。
「ひでぇことするねぃ。お前のお仲間だろぅ？」

「ふんだホ！　弱っちいジャックフロストなんかと仲間じゃないんだホ！　オレ様はサイキョーでサイコーなジャアクフロストだホ！」
　ジャアクフロストと名乗った黒いジャックフロストはそのままビシリと一誠の方を指さした。
「おい！　赤龍帝！」
「な、何だよ」
「少しばかりヴァーリに傷を付けたくらいでライバル面するんじゃないホ！　ヴァーリの永遠のライバルはこのオレ様だホ！　たまたま『赤龍帝の籠手』を宿した奴なんてお呼びじゃないホー！」
「なっ！　こ、この野郎！　いきなり出てきて何だ！　それとそっちのお前も誰なんだ！」
　面と向かって邪魔者扱いされたことに絶句しかけるが、何とか言葉を紡ぎつつ突然現れた美候と呼ばれた青年のことを問い質す。
「俺っちのことかい？　美候ってんだ。よろしくな、赤龍帝」
「お、おう」
　思いの外爽やかに挨拶され戸惑いながら返答する一誠。一方でリアスの方は美候の自己紹介を聞き、険しい顔つきとなる。

「びこう？　美猴？……それにその姿――もしかして」
「博識だねぃ。だけど生憎だが、想像しているのとはちょっと違うぜぃ。ま、闘戦勝仏の血は引いているけどねぃ」
「やっぱり……！」
戦慄するリアスであったが、話についていけない一誠は見て分かる様な程疑問符を浮かべている。それを見兼ねたのか、美候の方から分かり易い説明をされた。
「ま、簡単に言えば西遊記の孫悟空の末裔ってことだぜぃ」
「そ、そん、孫悟空だって！」
知らぬ者は殆どいないであろう存在の名を出され思わず叫びながら驚く。そして、そんな人材までもが集まっている『禍の団』に更なる脅威を覚えた。
「まあ、挨拶はここまでってことでそろそろお暇するぜぃ、ヴァーリ」
「――少しもの足りないんだが」
美候は棍を手元に出現させるとそれをくるりと回して、ヴァーリの頭を軽く小突く。
「我儘言うんじゃないぜぃ」
「そうだホ！　こんなヤツほっとくんだホ！　そしてオレ様と勝負するんだホ！」
「お前はうるさいぜぃ」
返す刀でジャアクフロストの頭も軽く叩く。そして、そのまま手の中で器用に回すと

地面に棍を突き立てた。
　棍を中心にして地面が黒い闇に覆われていき、その闇の中にいるヴァーリたちの体が闇に沈んでいく。
「待て！　逃げるのか！」
　思わず叫ぶ一誠。
「逃げる？　勘違いするなよ、赤龍帝。君たちが見逃されるんだ」
　ヴァーリの拳が一瞬霞む。軌跡の残像すら見ることが出来なかった程の瞬速。刹那、割れる様な音と共に一誠の手甲が剥がれ落ち、その下に収まっていたリングも砕ける。
　砕けたリングが地に落ち、崩れ去る。禁手化を補助する為のリングが壊れたことで一誠の体は閃光を放つと、鎧が消え、禁手化が解除された生身の姿が現れる。
「やろうと思えばいつでも出来た」
「なっ！」
「だがしなかった。つまらないだろう？　それじゃあ」
　突き付けられた事実に、一誠は今まで味わったことが無い程の敗北感を覚え言葉が出なくなってしまう。
「いずれは再び戦うことになるだろうが、次に戦うときはそんな玩具など使わずに同じ段階で戦えることを期待している。強くなれ、赤龍帝。俺を昂らせるぐらいに」

それだけ言うとヴァーリたちは完全に闇の中へと消える。ヴァーリたちの姿が無くなると同時に地面に広がっていた闇も消え去った。

「……チクショウ」

絞り出す様に出てきたのは悔しさに満ちた言葉。

立ち尽くす一誠にリアスは掛ける言葉が見つからず、ただ悔しさに震える背を見ていることしか出来なかった。

◇

天に向かって怒声を浴びせるマタドールであったが、間も無くして構えを解き、その全身から放たれる魔力と殺気が薄れる。戦闘態勢を解いた様に見える。

「……至極残念だが今宵はここまでだ。このままでは私の敵があの走狗どもの餌になってしまう」

心底不満気であるといった様子のマタドールであったが、シンたちからすれば思ってもいないことであった。

マタドールの言葉に偽りが無ければ生き延びたことになる。

「ならば早々に去って頂けるかな？」

空から聞こえてくる声。羽ばたきの音とともにシンたちとマタドールの間に降り立ったのはサーゼクスであった。
「――久しいな、サーゼクス。我が好敵手〈とも〉よ」
「久しぶりだ。――随分と派手にやられたみたいだ」
「戦士の箔が付いただろう？」
顔見知りらしい両者の会話。言葉だけ聞いていれば友人同士の会話の様であったが、二人の間で渦巻く濃い密度の殺気と魔力がそれを否定する。
「君は変わらないな」
「貴公は少し変わったな。貫禄が付き、雰囲気が前よりも丸みを感じる。まあ、嫌いではないが好みの感じではないな」
「そうかな？　自覚はないな」
会話しつつもサーゼクスの周囲にはいくつもの真紅の光球が浮かび、それらが衛星の様に動いている。いつでも戦いに入れる構えであった。と同時にサーゼクスは視線を至る所に向ける。それはマタドール以外の何かを探している様であったが、すぐに視線をマタドールに戻してしまった。
「それでどうするんだい？　あれの介入覚悟でこのまま戦うか？」
「今宵はもう終わりだ。これ以上戦うつもりはないさ」

そう言うとマタドールの姿が消える。と同時にシンとサーゼクスの視線は旧校舎の方に向けられた。

旧校舎の屋上、月を背景にマタドールが立っている。

「今日は中々有意義な戦いであった、決着を付けられなかったことが少々心残りではあるが、それは次の楽しみにとっておこう」

するとマタドールの視線がギャスパーの方に向けられ、見られたギャスパーは反射的にシンの背後に隠れる。

「貴女の神器には苦しめられた。出来れば名前をお聞かせ願えるかな？　ハーフヴァンパイアのセニョリータ〈お嬢さん〉」

「あ、あの僕、男なんですが……」

「――それは失礼。訂正させてもらう。では、改めてお聞かせ願えるかな？　ハーフヴァンパイアのセニョール」

声に動揺を一切出さなかったことは流石であるが、困惑を完全に隠し切れなかったらしく話すまでに一瞬間があった。

「ギャ、ギャスパー・ヴラディです……」

律儀に名乗るギャスパー。ただし消え入りそうな声であった。

「ギャスパー、その名前しかと刻ませて貰った。では――」

マタドールがこちらに背を向けた――かと思えば首を回し、視線だけをこちらに向ける。

「ああ、忘れていた。私にここまで傷を負わせた褒美、という訳ではないが私から貴公に魔人としての名を送ろう」

そこで一旦言葉が切れる。

『人修羅』

その名を聞いたときシンの心臓が今まで聞いたことが無い程、大きな鼓動音を鳴らす。初めて聞く言葉。だというのに何処かで聞いたことのある名。懐かしさすら感じる。

「きっと貴公に相応しい名だ。人修羅、そしてギャスパー、覚えておいてくれたまえ、貴公らの命は私が必ず頂く。次に会う日を楽しみにしている」

そう言い残し、マタドールの姿は完全に消え失せてしまった。

人修羅。その言葉を頭の中で反芻するシンであったが、そこであることに気付いてしまった。

マタドールが、よりにもよってサーゼクスの前で堂々と、シンのことを魔人と呼んだことである。

サーゼクス個人が魔人のことをどう思っているかは知らないが、魔人という存在自

体、三勢力にとっては厄介極まりないもの。悪魔全体のことを考える魔王という立場であるならば、早々に葬りたい存在には違いない。
もし仮にサーゼクスに殺す気があるのであれば、今の状態では瞬きする暇も無く殺されるであろうという確信がシンにはあった。尤も万全の状態であっても結果は然程変わらないであろうが。
「あの――」
「おーい……喋っているのは構わないが……こっちの心配もしてくれー」
シンが何かを言う前に割って入る声。アザゼルの声である。
仰向けの体勢のまま腕を上げ、こちらに向けてひらひらと振っている。
「おや？　アザゼルともあろう者がここまでやられているとは」
「うるせー、生きているだけ大したもんだと思えー……あー、頭いてぇー」
サーゼクスがシンの肩に手を置く。
「もう敵は居ない。だから今は休みなさい。色々と言いたいことがあるだろうと思うがね。――それにしても無茶をするな、君は」
裂けている頬を見ながらサーゼクスは苦笑する。
そう言うとサーゼクスはアザゼルの方へ歩いていく。
離れていくサーゼクスの背を見て、こちらの心情を見透かして気を遣われたのが分

かった。
「本当に、本当に終わったんですよね……？」
戦いが終わったことに実感が無いのか、不安そうな声でギャスパーが聞いてくる。
「ああ、終わった。生き延びたんだ、俺たちは」
その言葉に緊張の糸が完全に切れたのか、崩れ落ちる様に地面に座り込む。初めての実戦がこれだと考えると無理も無いことであった。
「良かった……本当に良かったよぉぉぉ！」
座り込んだまま泣き出す。今までの怯えからくる涙ではなく、歓喜からくる涙であろうとシンはこのとき思っていた。
「僕、ずっと役立たずだったから、と、と、取り返しのつかないことをして間薙先輩の足を引っ張ってばかりだったから！　よ、良かった！　先輩が生きていてくれて、本当に良かったぁぁぁぁぁ！」
シンは気付く。この涙が、ギャスパー自身が助かったことではなく、シン自身が生きていた為のものであったことに。
恐らく旧校舎内でシンに誤って神器を使ってしまったときからこの気持ちを抱えていたのであろう。だからこそ、あのときマタドールとの戦いに参戦したのであろう。
シンは座り込むギャスパーに手を差し伸べる。

「お前がいてくれたから俺は生き延びられたんだ」
「僕が、居たから？」
「ああ、お前の能力〈チカラ〉があったからこそ助かった。言った通り切り札はお前だったな」
一度言った言葉を今度は真っ直ぐ目を合わせながらもう一度ギャスパーへ送る。
「ありがとう」
一度言われた言葉。だがあのときは自分の不甲斐無さから受け取ることが出来なかった。だが二度目に言われた言葉は自分の心の中にすっと入ってくる。
ずっと嫌ってきた能力〈チカラ〉だった。そのせいで恐れられてきた、忌み嫌われてきた。こんなもの無くなってしまえばいいと何度も考えてきた。
だから初めてなのかもしれない、自分の能力〈チカラ〉があって本当に良かったと心の底から思ったことは。
「あ、ありがとうございます！　うぅ、うぅ……僕の能力〈チカラ〉にありがとうと言ってくれて、ありがとうございます……！」
涙でグチャグチャになった顔で差し伸べられた手を掴む。掴んだ手の先にあるシンの顔は涙で滲んでいるが、ギャスパーには微かに笑みを浮かべているように見えた。

◇

生命が存在しない遥か高度。光源も無く、唯一頭上から降り注ぐ月と星の輝きだけが夜の闇を照らしている。本来ならば。

闇一色で染まっている筈の世界を黄金色で塗り替える例外が今まさに起こっていた。

足場も何も無い場所で立たずむ影。あり得ないことにそれは人と馬の形をしていた。

夜の闇をそのまま仕立てた様な艶の無い黒のローブで足先から頭部まで完全に覆っている。そしてその頭上には纏う黒とは対極とも言える金の王冠を被っている。

唯一ローブから覗かせているのは顔面のみ。しかし、その顔に目も鼻も口も無い。肉を全て削ぎ落した骸骨の顔であった。

跨る馬もまた異形としか呼べないものであり、体形は普通で白い体色。だが、鬣によって目が隠されているが、その代わりと言わんばかりに全身には無数の目。どれもが別々に動き時折瞬きをする。

そんな異形の馬に跨った骸骨はその上で弓を構えていた。

手甲で覆った手に網目の装飾がされたグリップを持ち、それに矢を番え、その矢先を足元に向けている。

弓に特徴らしい特徴は無い。問題は番えている矢の方であった。

太陽の輝きを矢という形に押し込めたかと錯覚するほどの眩い光。あまりの輝きに矢の形がはっきりと分からない。黒に染まる世界を黄金の光で一変させるそれは、さながら『神』の威光であった。

足元に狙いを定めた骸骨。番えた矢を引き、張った弦によって弓が微かに軋む。

限界まで引いたそれを解き放つ――

――そこまでだ。弓矢を仕舞え、ホワイトライダー。

――直前、何もない空間に響く声。抑揚のない何処までも平坦な声であった。

制止された骸骨――ホワイトライダーは舌打ちをして苛立ちを表す。

「あの馬鹿共をのさばらせて何になるっ！　俺たちが黙っていれば調子に乗るだけだっ！　ここで一掃した方が奴らも思い知ることになるっ！」

その見た目からは想像が出来ない程、血気盛んかつ乱暴な口調であった。

見えざる相手に噛み付く様に話すホワイトライダー。するとまた声が響く。その声は先程の声とは異なる人物のものであった。

ヒッヒッヒッヒッ。血の気が多いのぉー、白いの。その白骨の体のどこに余分な血が蓄えられているのやら。

しわがれた老人の声でホワイトライダーをからかう。

「黙れっ！　赤騎士っ！　己の使命に忠実であることの何がおかしいっ！」

そなたの……熱心さは……誰もが知るところ……激情という渇きは……衝動でしか潤せない……引きたければ引くがよい……だが……それを引いた時点で……我らの使命に……汚点がつく。

老人とも老婆とも判別つかない渇いた声。水を死ぬ直前まで飲まなかった者、あるいは飢餓で死を迎えようとする者の最期に発する声はこのようなものかもしれない。

「回りくどいぞっ！　はっきりと言えっ！　黒騎士！」

お前が矢を向けた時点で全ての勢力は戦う意思を失っている。既に人間が害を受ける危険は無くなった。私たちの役目はそこで終わりだ。これ以上は過干渉だ。

「今は良くてもまた事を起こすぞっ！　奴らはっ！」

お前と言い争うつもりは無い。もう一度言う。弓矢を仕舞え。

一切感情に揺れない声からの命令。暫しホワイトライダーは沈黙を続けていたが、やがて番えていた矢から輝きが失せ、何の変哲も無い矢に戻る。そしてそれを背負っていた矢筒の中に入れた。

「――今度似た様なことが起きれば俺は躊躇なく射るぞっ！　蒼騎士っ！」

そのときが来れば、な。

ホワイトライダーは足元にいる者たちに向け舌打ちを一つすると馬の手綱を引く。

馬は嘶いてその場で立ち上がると夜の闇に向かって蹄音を響き渡らせながら駆け出

していった。
「せいぜいこの『揺り籠』の中で心身を休ませておけっ！　いつの日か俺たちと相見えるそのときまでなっ！　人修羅っ！」
彼らは互いにいがみ合い敵対する魔人の中で、唯一集団で行動する。
それぞれが地上の人間の四分の一を殺害する絶対的権威を持つ代償として、来るべき日まで人々を守護する使命を授かった者たち。
白騎士、赤騎士、黒騎士、蒼騎士。総じて『黙示録の四騎士』とそう彼らは呼ばれている。

◇

「……にしても……だったな」
「無理も無い……魔王相手……上出来だ」
「このデータを……そして……」
「だいそうじょう殿……かな？　彼に会わなく……」
「一目……十分……挨拶はまたの……だ」
何やら遠くから声が聞こえてくる。もう開かないと思っていた瞼が自然に開いてき

た。
最初に目に入ったのは空に浮かぶ月と星であった。
空を見上げたまま身を起こし、周囲を見渡す。
そこは明らかに駒王学園ではなく、何処かのビルの屋上であった。
更にそこには見覚えがある人物たちも居る。
「ああ、目が覚めたか」
雑談をしていた一人が気配を察して話し掛けてくる。
「貴方は……私は……何故生きて？」
マタドールによって刺殺された筈のカテレアが、自分の置かれた状況を理解出来ていない様子で呟く。
思わず胸に触れる。そこにある筈の刺し傷は痕も無く消えており、四肢の傷も同様であった。
「彼が態々連れて治癒してくれたんだ」
漢服を羽織った青年は隣に浮かんでいるだいそうじょうを指さす。
「また助けられるとは……」
「気にするな」
カテレアに対し目線を向けずそっけない態度をとるだいそうじょう。

「――そして、貴方たちも私を助けてくれるなんて……私たちには非協力的だと思っていましたが……」

その言葉に漢服の青年は微笑を浮かべる。

「折角の力だ。勿体ないだろう？」

「――借りが出来ましたね」

「ましてや『オーフィス』の力をみすみす消滅させるなんて」

「――え？」

噛み合わない会話。そのとき背後に誰かの気配を感じた。急いで振り向こうとするカテレアであったが、振り向くよりも先に背中に何かが突き進んでくる。

「こ、これは！」

喀血しながらカテレアが振り返った先にいたのは黒のスーツと同色の山高帽、そして同じく黒の翼を生やした堕天使が悪魔にとって猛毒である光によって形成された槍を刺している姿。

「まさかこの様な日が来るとな」

口の端を歪め、見下す様な笑みを浮かべる堕天使――ドーナシーク。一介の堕天使に過ぎない者が、元とはいえ魔王を名乗っていた者に苦痛を与えているという状況が、加虐的な喜びを彼に与えていた。

「だ、堕天使如きが！」
　青黒い魔力が火花の如くカテレアの全身から迸る。
「ふん」
　しかし、ドーナシークはそんなカテレアを冷笑し刺している光の槍を更に深く刺し込んだ。
「ああっ！」
　カテレアは喉を震わしながら苦し気な声を上げる。魔力を練り上げる集中力も光が生み出す激痛によって妨げられ、四方へと散っていく。
「堕天使如きか――魔王崩れがほざいてくれる」
　ドーナシークが光の槍を押し込むと背から入った槍が胸元を突き破り、その先端をカテレアの眼前に現した。
　カテレアを貫き血が滴る光の槍の先端に血だけではなく巻き付く黒い蛇。カテレアが呑み込んだオーフィスの力の一部である。
　それを見つけたドーナシークは素早く槍を抜き取る。カテレアが呻くがそんな些細なことなど気になど留めない。
　突き刺した光の槍を手前に持っていく。巻き付いている黒い蛇を指先で摘まむと、血の滴るそれを躊躇うことなく呑み込んだ。

直後、ドーナシークの全身から先程とは比べものにならない程の力が放たれ、その余波で彼を中心にして亀裂が屋上に生じる。
「――素晴らしい！　何だこの溢れる程の力は！　これがオーフィスの加護なのか！　上位の堕天使たち、いや、アザゼル様たちに迫る程の力だ！」
自分の身に起きた異常に、信じられないといった表情と歓喜の表情を入り交えた顔をする。
力を爆発的に上昇させたドーナシークとは反対に、オーフィスの力を奪われたカテレアからは一気に力が消失していった。
「この、為に、私を生き返らせっ！　あのときの、覚悟に、泥を――」
「それも理由だが、もう一つ別の理由もある」
漢服の青年は瀕死のカテレアに歩み寄り、屈んで目線を合わせる。
「今回の件の失敗でどれほどの被害が生じたか理解しているかな？　カテレア殿」
微笑を消し、漢服の青年は今にも輝きが消えそうなカテレアの瞳を覗き込む。
「人材というのは金や資源では埋められないんだ。それ相応の年月がいる。ましてや魔術を扱う人間を育てたりスカウトしたりする手間と時間を考えれば眩暈がしそうだ。そんな貴重なものが無駄に散った」
漢服の青年は立ち上がるとカテレアを見下ろす。

「貴女には責任をとる義務がある。だから死を以って償ってもらう――だが尊厳ある死や誇りを貫いた死など認めない、それだと罰にならない」
　青年はカテレアに背を向けた。
「落ちぶれた魔王が堕ちた天使に滅せられるのは中々皮肉が効いていると思わないかな？」
「曹、操……！」
　漢服の青年の名を怨嗟を込めた声で呼ぶカテレアの背後で、ドーナシークは掌では収まりつかない程の光球を生み出していた。
「さようなら。名を取り戻せなかった魔王よ。安心してくれ、せめて貴女の同胞だけにはカテレア殿は名誉の戦死を遂げた、と伝えておく」
　曹操の別れの言葉と共にドーナシークはカテレアに向け、その手を振り下ろした。
　周囲を白く染め上げる閃光。それが消えるとカテレアの存在は消え去っていた。唯一屋上に残った人型の黒い焦げ跡だけが彼女がここにいたという名残りであった。
「どさくさに紛れたとはいえ、そろそろカテレア殿が居ないことに気付くだろう。さっさと退散するとしよう」
「少し遅かったな」
「おや？」

曹操も何かに気付いたらしく視線を上げる。
そんな曹操を守る様に側にジークとゲオルクが立つ。他の者たちも既にそれぞれ構えて戦いをいつでも始められる状態となっていた。
「まさかこの私が気付かないなどと楽観的な考えをしていた訳ではあるまいな？」
「笑止。汝如きに気付かれたところでどうにでもなると思っていたまでのこと」
音も無く現れたマタドールにだいそうじょうが敵意を以って応じる。
二体の魔人が相見えた瞬間、初夏の熱を帯び始めた夜の空気はさながら極寒の冷たさに変り、場の空気が一気に重苦しいものとなった。
常人ならば漂う気だけで卒倒しかねない状況。しかし、曹操と並ぶ者たちは敵意を込めて睨み付ける者、興味深そうに眺める者、好戦的な笑みを浮かべる者と、怯む者も脅える者も居ない。
「元より見下げ果てた奴であると思っていたがまさか戦士の魂すら凌辱するとは、どうやら恥という言葉を知らぬらしい」
「それは汝のことではないかえ？　自分の煩悩に従い無意味な殺生を繰り返す。正気の沙汰では無いのう。尤も狂人に最初から正気を望むことの方が阿呆というものじゃが」
隠そうとはしない相手への嫌悪。同じ見た目を持つ者同士であるが、根本から合わない。

侮辱の言葉を投げ掛ける度に殺意が膨れ上がっていき、ビルの屋上がそれだけで異界と化していく。
傍から見ればただの謗り合いであるが、言い合う者たちが死を振り撒く存在であるだけに、誰も口を挟むことが出来ず静観するしか無かった――ただ一人を除いて。
曹操が一歩前に出る。そして、マタドールに向かって左掌に右拳を当てながら頭を下げる。
「お初にお目にかかります。俺がこの者たちを率いている者、本名は明かせませんが曹操と名乗らせて貰っています。マタドール殿の高名はかねがね伺っております」
「誰かとは違い礼儀を知っている者がいたか。高名か、フフフ、悪名の間違いではないかね？　――しかし、曹操とは随分大層な名を名乗っている」
「ええ、それに恥じないよう精進する毎日です」
「結構なことだ」
魔人に対し気後れするどころか対等に喋り合う曹操。この時点で並外れた胆力の持ち主であることが伺える。
「貴方とはこうして一度話をしてみたいと思っていました」
「そうか――だがいいのかな？　見た所、貴公らは『禍の団』。私はそれに属する者たちを殺めたぞ？　それも今回が初めてという訳ではない」

「重々承知していますよ。確かに貴重な戦力を削いだ貴方は俺たちの敵と言っていい。だが同時にその力に魅力も感じます」
その言葉に含まれるものを敏感に感じ取ったゲオルクが次に曹操が何を言うのかを察し、その背中に向け『本気か？』という意思を込めた視線を送る。
曹操もそれを感じ取っていたが、躊躇うことなくその台詞を言った。
「もし良ければ我々と手を組んでは頂けませんか？」
「ほう？」
魔人に対し仲間にならないかと誘う曹操。彼と比較的付き合いの長い者たちは『またか』という表情をしていたが、逆に浅いフリードやドーナシークはその言葉に目を見開いていた。
「如何かな？」
「ふふふ、はははははは！　随分と大胆なことを言う！　貴公の度胸には敬服する！――が、断る。貴公と並び立つのも面白いがそれよりも相対することの方が魅力を感じる」
曹操を気に入るが提案はすぐに断り、改めて敵対する意思を見せるマタドール。それに対し曹操は後ろに立つ仲間に肩を竦めて見せた。
「断われてしまった」

「当たり前だ」
　ゲオルクが呆れた表情をしながら言う。
「ならもうここには用は無いな。マタドール殿、我々は帰らせてもらう」
「戦わないのか？　今の私は満身創痍だぞ？」
「その誘いには乗りませんよ。確かに今の貴方にならば勝てるかもしれない……だがきっと戦えば何人か犠牲が出るでしょうね――流石にそれは避けたい」
　すると曹操たちを包む様に霧が発生する。ゲオルクが持つ神滅具の霧である。
「それにしても十番目の魔人『人修羅』ですか、彼にも興味がある。一度話をしてみたいものだ」
「手出しは無用。あれは私の獲物だ」
「ふふふ、怖い怖い。では、いずれまた」
「ああ、その日を楽しみにしている」
　やがて曹操たちが完全に霧に包まれる。数秒も待たずして霧が消えると、そこに曹操たちの姿は無かった。
　何もせずに見送ったマタドールは、誰も居なくなった屋上で一人高らかに笑う。
「ああ、また一つ楽しみが出来た」

◇

シンはいつもの様に駒王学園の校門を潜る。
あれほどの激闘が在ったにも関わらず、戦闘の処理は完璧に行われており、校舎には戦いによって出来た傷が一切無い。
あの時の戦いが幻であったかの様な徹底ぶりである。
「きれいになってるねー」
ピクシーも似た様なことを思ったらしく感想を口にする。
「ヒホ……そうだホ……」
いつも通りのピクシーとは違いジャックフロストの方には全く元気が無い。
「前よりもきれいに見えるねー」
「ヒホ……そうだホ……」
「ちゃんと聞いてる？」
「ヒホ……そうだホ……」
完全に上の空といった様子。こうなった原因はシンもリアスから聞かされている。
何でも折角の同胞を見つけたのはいいが、その同胞に酷い拒絶をされたらしく、今も深く傷付いているらしい。

何度かシンもピクシーも慰めの言葉を掛けているが、効果は殆ど無く落ち込んだままであった。

どうしたものかと考えていたとき、視界の端にあるものが目に入る。

決して変なものという訳ではないが一つ置かれているといやに目立つ段ボール箱。それが校舎の入口から少し離れた場所にポツンと置いてあった。

最近見慣れつつあるそれを見て、中に何が入っているのか大凡想像が付きながらもシンはその段ボール箱の近くに行く。

すると段ボール箱がカサカサと動き出し、校舎裏に移動していく。人目に付くのが嫌なのだと思い、その後を大人しく追った。

校舎裏に行くと日影となった場所に先程の段ボール箱が在った。近付くと今度は動く様子を見せない。

シンは段ボール箱の縁を掴んで持ち上げた。

「何か用か？　ギャスパー？」

「お、おおおはようございます！　先輩！」

「おはよ～う」

中には想像していた通りギャスパーと何故かジャックランタンも入っていた。

「一体どうした？」

日の光が嫌いでひきこもりのギャスパーが朝の、それも人が大勢いる学園に姿を見せたのだ。疑問を抱かずにはいられない。
「そ、そそれはランタン君が間薙先輩に話したいことがあるっていうから……」
「ヒ～ホ～ついでにギャスパ～の脱ひきこもりを兼ねてね～」
「ジャックランタンが？」
ギャスパーから離れてフヨフヨと浮かびシンの前に立つ。
「色々とギャスパ～がお世話になったからね～お礼も兼ねてボクも君の仲魔になろうと思って～」
その提案にジャックランタンではなくギャスパーの方を見る。既に聞かされていたのかギャスパーの方は驚いた様子は無かった。
「ランタン君が先輩の仲魔になっても僕とランタン君は友達のままですから」
「そういうこと～まあ、手を貸してくれる相手が増えたってぐらいに考えればいいよ～。ヒ～ホ～」
双方納得しているのであれば、特に断る理由も見当たらない。
「じゃあ、よろしく頼む」
シンがジャックランタンに手を差し出す。
「ヒ～ホ～。今後ともよろしく～」

その手をジャックランタンの小さな手が握る。
握った手からは微かではあるが、確かにある小さな熱が伝わってくるのであった。

◇

その日の放課後。オカルト研究部に向かう途中、シンはベンチに座る二人の人物を発見した。
一人は一誠。もう一人はジャックフロスト。珍しい組み合わせである。
声を掛けるよりも先にシンもまたそのベンチに腰掛ける。
「ああ、お前か」
「ヒホ……」
座った人物を横目で見てシンだと分かった一誠。その声にはいつもの明るさは無く弱々しく感じる。一方のジャックフロストは朝と変わらず落ち込んでいる状態であった。
「珍しいな。そこまで落ち込んでいるなんて」
「俺だって落ち込むことぐらいあるさ……」
そこで一誠はシンの顔を見て、一瞬悩む様な表情となるが意を決した様に口を開い

た。
「実はな――」
あの会談での戦いでヴァーリとどんな戦いがあったのかを語り出した。
初めは圧倒されたものの何とか傷を負わすことが出来たが、本気を出してきたヴァーリには手も足も出ず、結局のところヴァーリの掌で踊らされていたことに過ぎなかったことを。
全て言い終えると一誠は大きな溜息を吐いた。
「情けねぇ……」
その言葉が今の一誠の中にある自分への評価なのであろう。手も足も出なかった自分に対しての不甲斐無さ。それが心に重く圧し掛かっている。
「なら次は勝てばいい」
「次は勝てばって……次に期待をするのってなんかこう甘い考えの様な……」
「現に次があるんだからいいさ。俺もお前も生き延びて次がある。負けたと思った分は勝ってきっちり返せばいい」
「そういうもんか？」
「落ち込んでばかりいないで先を考えて動くことだ」
いまいち腑に落ちないといった顔をする一誠であったが、シンの方はいつまでも立ち

止まっているなと暗に告げる。
「何か青春してんなー、お前ら」
　背後から一誠とシンの肩に手を回してくる。見上げるとそれはアザゼルであった。総督としての格好はしておらず、ネクタイを締めずシャツのボタンを何個か外して着崩すしたスーツ姿である。
「ど、どうしてここに！」
「当分こっちに滞在してお前と『僧侶』の神器の面倒見てやるよって言っただろう」
　アザゼルが言った通り、会談の帰り際にその様なことを言っていた。
「てなわけで今日から俺はオカルト研究部の顧問になったからよろしく。気軽にアザゼル先生とでも呼んでくれ」
　いきなりの発言に対しシンも一誠も固まるが、そんな中でジャックフロストがいきなりアザゼルに飛び掛かった。
　アザゼルはジャックフロストを反射的に掴む。
「ヒホーー！　アザゼル！　オイラと会ったときオイラの仲間なんて知らないって言ったホ！　でもヴァーリとオイラの仲間が一緒だったホ！　ヴァーリが知っててアザゼルが知らないだなんておかしいホ！」
「悪かったな。確かにお前とそっくりなあいつのことは知っていたよ。だけどあいつは

自分がジャックフロストだってのを絶対に認めなかった。正直、変に期待をさせるのを不味いと思ったんだよ」
「ヒホ……一体何者なんだホ？」
「さあな。詳しくは知らないがある日、ヴァーリが連れてきたんだよ。魔術師やハンターに襲われていた所を助けたらしい。何かそのせいでヴァーリの強さに憧れみたいなのを抱いているらしくてな。一方的にライバル宣言して、いっつもちょっかいを掛けていたな」
　ジャアクフロストの詳細を少し知ることができ、冷静になったのかアザゼルの手の中で暴れるのを止める。
「今度会ったらちゃんと話せるかホ？」
「さてね。それはあいつの気分とお前の粘り次第といったところかな？」
「ヒホ、分かったホ」
　ジャックフロストをベンチに戻すアザゼル。ジャックフロストによって出鼻が挫かれたが、一誠たちもアザゼルに質問し始めた。
「顧問ってどういうことですか？」
「セラフォルーの妹に頼んだらこの役職だ！　まあ、俺には相応しいかもな」
「よく会長が了承しましたね」

「そりゃあサーゼクス経由のお願いだからな」
「それだけですか？」
「ちゃんと滞在する条件もある。一つは俺の知識を生かしてグレモリー眷属の未成熟な神器を正しく成長させる」
「もう一つは？」
「そいつの監察だ」
　アザゼルはシンを指差す。
「え！　何で間薙を……」
「実は分かっているんじゃないのか？　赤龍帝――いやイッセーでいいか？　もしくはドライグが」
　その言葉に一誠の表情が固まるのを、シンもアザゼルも見逃さなかった。
「こいつが魔人だってこと」
　一誠が目に見えて動揺し、シンに対しこのままアザゼルを止めなくていいのかと尋ねる様な眼差しを向ける。
　一方正体について勝手にばらされたシンであったが、シンの方も一誠たちが知っているのではと考えていた為、アザゼルを止めず好きに喋らせる。
「少なくともドライグならこいつを一目見て気付いていた筈だ。何度も会ったことがあ

るだろうしな」
『……相棒に知らぬふりをさせていたのは俺だ。その男の詳細が分からない内は相棒の身に何が起こるか分からなかったからな』
「ドライグ！」
　アザゼルの言葉を認める発言。思わず一誠はシンの顔を見たが、シンの方はいつもの無表情のままで、特にショックを受けているという訳では無い。
「――気を遣わせていたかな？」
　寧ろこちら気遣う様な言葉すら掛けてくる。
「なんか悪い……」
「気にするな。別に責められるようなことじゃない」
　隠し事をしていた後ろめたさから謝罪の言葉を口にするが、あっさりとシンはそれ許す。
「それで監察というと俺は今後何か調査されたりするんですか？」
「いや別に。今まで通りにしてくれればいい。――というか俺の監察ってのは正直アピールの様なものだからな」
「アピール？」
「サーゼクスの方は魔人に対してあれこれ干渉するつもりは無いし、お前の正体を広め

るつもりも無い。だがもしお前の正体がばれたときの保険の様なもんだ。お前の立場が結構都合が良くてな。四大魔王を輩出したグレモリー家とシトリー家の協力者ってのを利用して魔王たちと俺が密かにお前の監視をしている――という設定にして他所が手を出せない様にしているという訳だ」

「それって部長も会長も知っているんですか？」

「いや、全く」

「俺は知らない方が良いと思う」

「何でだよ？　せめて部長くらいには……」

シンの言葉に不満そうな表情を見せる一誠。仲間に隠し事というのが本質的に受け入れ辛いのであろう。

「知ったら知ったで必要以上に俺のことを護ろうとするかもしれない。責任感が強いからな」

「あー、それは……」

反論しないのは大いに納得出来るからである。

「まあ、言いたいことが山程あるかもしれないが一先ず部室に案内してくれ。他のメンバーにも話すことがあるからな」

「ああ、分かった――じゃなく分かりました。行きましょう」

一応顧問という立場を思い出し、慌てて敬語に直す一誠。
「ヒホ？　まじんって何ホー？」
「後で教えてやるからあんまり外で言うなよ、その言葉」
「分かったホ」
ベンチから立ち上がりオカルト研究部がある旧校舎を目指す一行。前を歩くシンたちの背中を見ながら、アザゼルはサーゼクスに言われた本当の条件を思い出していた。
『魔人ではあるが彼の立場は非常に危うい。前に現れた九体の魔人と比べて彼の力はまだ弱い。恐怖や怒りを抱く者たちは彼を抹殺する為に動くだろう。欲望や野心を抱く者たちは彼の力を利用しようと動くだろう。――アザゼル、彼の力になってあげてくれ』
（自分らの都合でガキの人生を終わらすなんて正直見てらんねぇしな。まあ、いいさ。詰まらんことは何もかも全部こっちが背負ってやるよ。だからガキども、お前らは伸び伸びと生きな）

おまけ
「ところであの一つ目象ってあのマダって人の仲魔なんですか？」

「ああ、ギリメカラのことか？　あれはあいつが昔知り合いから借りパクしたペットって話だ」
「あれを飼う奴がいるんですか？」
「かなり有名な奴だぞ『マーラ』っていう――おい。どうした、イッセー？　顔色が真っ青だぞ？」
「マ、マーラ……ご、ご立派……生暖かい……いいいいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「お、おい！　どうした！　『マーラ』と何かあったのか？」
「すいません。その言葉はこいつの前では禁句にして下さい」
「いいいいいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
『相棒！　気をしっかり持て、相棒！』

異界合宿のヘルキャット編

友人、先生

タン、タン、タン。

一定の間隔で刻まれる乾いた音。それが広い一室に響いていた。

壁に掛けられた絵、カーテン、ベッド、椅子、机、ソファー、目に映る家具等全て一級品で揃えられた豪華絢爛とした部屋。

本来ならばそれらはそれに見合った輝きを放ち、見る者を魅了する筈であったが、カーテンを閉め切った薄暗い部屋ではその魅力も半減してしまう。

更に魅力を損なう原因がこの部屋の使用者にあった。

皺だらけのシャツと同じく皺だらけのズボンを身に着け、金色の頭髪は碌に手入れをしていないのかぼさぼさに乱れ、口周りには無精髭を生やしている。きちんとしていれば二十代程に見えるであろうが、手入れをしていない格好のせいで老けて見える。

光の無い濁った眼をしたこの部屋の住人は天蓋付きのベッドに腰掛けたまま、側に置いているテーブルの上に置かれたチェス盤で、黙々と一人でチェスをしていた。絶えず鳴っていた音の正体がこれである。

ポーンを進め、ビショップを取り、ナイトで躱し、クイーンで深く切り込む。
やがてポーンがキングの前に立つ。逃げ場の無いチェックメイトの状態であった。
男がポーンの駒を持ち上げる。何故か摘まむ指先が震え出す。
震える指先に反応し、カチカチと男の歯の根も合わない。
すると男は摘まんでいたポーンの駒を地面に投げつけた。ポーンの駒は床を跳ね、壁にぶつかり、そのまま床の上を転がる。
男の濁った眼に初めて感情の色が付く。怯え、動揺、苛立ちという負の色であった。
転がるポーンの駒から目を逸らし、男はベッドに横たわるとベッドカバーを頭から被る。まるで嫌なものから逃げるかの様に。
そのとき、扉をノックする音が聞こえる。
「誰だ？」
ベッドカバーの中から顔も出さず、不機嫌そうな声で応じる。
「私です」
扉の向こうから聞こえてきたのは艶のある女性の声であった。
「何の用だ？」
「用というほどではありませんが、少し外を歩きませんか？　毎日部屋の中にいますと気分も優れませんでしょうし……」

「今はとても気分が悪いんだ。誰とも会いたくないし、ここから出たくも無い。ほっといてくれ……俺はここがいいんだ」
生気の無い、さながら亡者の様な声。
「ですが――」
「ほっといてくれ！　頼むから今の俺に構わないでくれ！」
なおも食い下がろうとする女性に強い拒絶の言葉を吐くと、男はベッドの上で体を丸め、身を縮め込む。
「……分かりました。失礼します」
男の醜態にも礼儀を尽くし、寧ろ不憫にすら思っている女性は、去り際にこう言った。
「私共はいつまでも待っています。――ライザー様」

◇

三勢力によって行われた会議の場が襲撃されてからそれなりの日数が経った。
あのゴタゴタで行われなかったが後に場所を変えて、総督アザゼル、四大魔王サーゼクス、天使長ミカエルという各勢力代表によって和平協定が調印された。
これによって三勢力が争うことが禁じられ、有事の際には互いに手を貸し合うという

協調体制となった。
協定が結ばれる切っ掛けとなった学園から名を取って『駒王協定』と称されるこの協定によって、目下の敵である『禍の団』も迂闊に事を起こすことが出来なくなり、今日に至るまで平穏な日々を送ることが出来た。
駒王学園も夏休みに入り、シンもまたゆっくりとした日常を送っている――ことは無かった。
夏休みに入り、人気が殆ど無くなった駒王学園の校庭。そこで二人の男が向かい合っている。
一人はシン。いつもの学生服ではなく、夏用の普段着である半袖のシャツに薄生地の長ズボンという格好であったが、それでも降り注ぐ日差しによって、額からは大粒の汗が浮き出ている。
そしてもう一人は匙であり、こちらもシンと似た様な半袖のシャツにハーフズボンという、動きやすい格好をしていた。
そんな相対する二人から少し離れてピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、そして数名の女子が見学をしていた。
見ている女子の中にはソーナ、椿姫の姿があり、残りの女子たちも生徒会役員である。
「どっちが勝つと思う？」

ソーナの肩に乗っているピクシーが皆に尋ねる。
「順当に考えれば間薙君が勝つでしょうね。まだサジは間薙君の動きについていけていませんから」
「私も会長と同じ考えです」
身内贔屓しない冷静な分析でソーナはシンが勝利すると言った。その考えに椿姫も賛成する。
「じゃあオイラはサジが勝つ方を選ぶホー！」
椿姫がソーナに差した日傘の日陰にちゃっかり入っているジャックフロストは匙の勝利を選ぶ。
「悩むが、元士郎には悪いが私は間薙が勝つと思うな。私も何度か間薙と手合わせをしているが、はっきり言って強い。今の所勝つ方法が見当たらないぐらいに」
匙を下の名前で呼ぶのは女性にしては長身であり、一見すると美少年にすら見える容姿を持った女性。駒王学園二年にしてソーナの『戦車』である由良翼紗（ゆらつばさ）である。
「うーん……私もシン君かな？　前に相手してもらったとき、私の木刀を片手で白刃取りされちゃったのを思い出すとねぇ。今の元ちゃんだと無理かなーと？」
由良に続くのは、くせ毛の髪を二つに縛った同じく二年の巡巴柄（めぐりともえ）であり、彼女はソーナの『騎士』である。

「うう、心情的にはどっちも負けてほしくはないけど、どっちかを選ぶとなると間薙先輩かな、勝率的に。でも匙先輩に一矢報いて欲しい気持ちもあるけど……」
　眉間に皺を寄せ、苦悩しながらもシンが勝つ方を選んだのは、長い髪を二つに縛った唯一の一年である『兵士』の仁村留流子（にむらるるこ）である。同じ『兵士』という立場からか歯切れが悪い。
「ヒ～ホ～。シンが勝つ方ばっかだね～。じゃあ、ボクは匙が勝つ方に一票～。選んだ理由？　そうなったら面白そうだからだよ～。ヒ～ホ～」
　フラフラと空中を揺れ動くジャックランタンはそれだけの理由で匙が勝利する方を選択した。ちなみに彼はギャスパーの住処から何も言わずにシンの家に遊びに来るので、その度にシンは電話越しからギャスパーの――
「すみませんぅぅぅ！　そっちにうちのランタン君が来ていませんかぁぁぁ！」
　――という涙声混じりの絶叫を聞く羽目になっていた。
　今日も当然、何も言わず無断でこちらに来ている。
「難しいですね……元ちゃんも神器の扱いを目に見える程の早さで上達させてきました。――ですが間薙君も異常と言える早さで成長しています。同じ早さで力を増していたと想定して、勝つのはやはり間薙君でしょう」
「だね。実戦訓練に間薙君が参加してから今日まで、元ちゃんは間薙君にボコられっぱ

なしだったからね。中々差が縮まらないなー」
ウェーブのかかった長い髪と持つ女子は二年で『僧侶』の花戒桃（はなかいもも）。その花戒に同意をするのが同じく二年であり『僧侶』である草下憐耶（くさかれや）である。
全員の意見を聞いたピクシー。そのピクシーにソーナが逆に聞く。
「貴女はどちらが勝つと思いますか？」
「うーん、シンが勝つ！　って言うと何か普通過ぎて面白くないからー、ここはもしもに賭けてサジが勝つ！」
「――だとさ？」
「ええい！　こんちくしょう！　ピクシーにジャックブラザーズ！　見てろよ！　お前らに大穴見せてやる！」
外野の勝敗予想を聞いた匙は自分の低すぎる勝率に悔しそうな表情を浮かべつつ、自分を選んだ三人に対し意気込みを見せつける様に『黒い龍脈』を発現させた。
匙の腕に装着された蜥蜴の口から伸びる数本の黒いライン。それぞれが別々の意思を持っているかの様に蠢いている。
それを見たシンもまた右腕に紋様を浮かび上がらせた。手の甲に浮かんだそれは蛇を彷彿とさせる動きでシンの腕を這い、肩まで一気に紋様が描かれる。それに伴い、シンの左眼の光彩が変わり、紋様と同じ蛍光が瞳に宿る。

二人の間合いは約五メートル。伸縮自在のラインを持つ『黒い龍脈』を操る匙にとって有利な間合いであった。

シンが僅かに前のめりになる。それを見た匙はいつでも迎撃出来る様にシンから目を離さない。

その場から一歩踏み込む。次の瞬間、足の裏が爆発したかと錯覚する様な勢いで地面を蹴り付け、シンが一気に間合いを詰める。

「いっ！」

その踏み込みの早さに瞠目する匙であったが、すぐに後ろへ飛び、それと同時にラインをシンに向けて振るった。

勢いの付いたシンへと迫るライン。顔を目掛けてきた一本目は頭を傾けて避け、続け様に胴体を狙ってきた二本目は上体を捻りながら躱した。だが、避けたと思った二本目のラインが途中で枝分かれし、そこから三本目のラインが現れ、避けたシンの右手首に巻き付く。

どうやら二本目のラインに三本目のラインを予め絡めており、シンが回避するのも計算の内に入れて動かしていたらしい。

「よし！」

まんまと匙の思惑に嵌ったシン。匙の方も特訓の中で初めてシンにラインを巻き付

けたことで嬉しそうに笑っている。

巻き付いたラインから力が吸われていくのを感じる。だがここで怯む様なシンでは無い。

地に足裏が付いた瞬間、さっきよりも更に強く地面を蹴り付けた。

その動きに匙の笑みも凍る。

一瞬にして匙の目の前に立つと、表情を凍りつかせている匙の顔を左手で鷲掴みにし、そこに意識を集中させる。

すると、掌に掴んでいる匙の体温以外の、熱を持ったものが流れ込んでくる。左手に流れてきているのは匙の魔力であった。

以前、実戦の場で使用し、思わぬ体調不良を招いたこの魔力吸収――シンは吸魔と呼んでいる――あのときの失敗を繰り返さない様に何度も相手を変えて練習を重ねた結果、ある程度症状を抑えることが出来るようになった。

匙の神器がシンから力を吸い取り、シンもまた匙から魔力を吸い取る。この状態が続けば決着が付くことがないだろうが、当然シンも次の行動に移っていた。

「いでででででで!」

匙の口から出る苦鳴。

シンが掴んでいる左手に力を込め、頭を締め上げているからである。

五指の圧力が匙の頭蓋骨に悲鳴を上げさせる。その痛みで集中は乱れ、神器も上手く操作できなくなり、そのせいで拮抗状態は崩れ、どんどん魔力が吸い出されていく。

抵抗しようにも魔力が奪われ、脱力状態になっていく匙の今の力では指一本も剥がせない。そうでなくても力ではシンの方が上である。

「割れる！　割れる！　ギブ！　ギブ！　参った！」

負けを認め、神器を解除したのを見て掴んでいた手を離す。締められた痛みの余韻でその場で膝を突き、頭を押さえながら悶えていた。

「いって！……お前、指先に万力でも仕込んでんのかよ……」

顔を顰め、恨めしそうにシンを見上げる匙。そんな匙にシンは手を差し出す。

溜息一つ吐きながら差し出された手を掴み、そのまま持ち上げられた。

「……また負けか」

何度も訓練で戦っているがその度に匙はシンに敗北していた。あのまま意固地になって勝負を長引かせることも出来たが、恐らくは途中でソーナが止めに入るのは分かり切っていた。実際、それをやったことがあったが、そのせいでソーナや椿姫から地獄の様な説教をされて以降やらなくなったが。

「少しは手応えを感じる様になったか？」

いつもシンが無表情なせいか余裕を持って勝っている様に見えてしまっている匙は、

少し卑屈な質問をしてしまう。

「……」

その質問にシンの眉間に僅かに皺が寄った。どう答えるべきか悩んでしまったからだ。

良く言っても悪く言っても、所詮は勝った側の上から目線の言葉に過ぎない。どう転んでも匙のプライドに傷を付ける結果になると思ったからだ。

だが聞かれたからには何か言わなければならない。

言葉を選んでいるシン。そこに第三者の声が介入する。

「間薙君の動きも流石でしたが、サジ、貴方も『黒い龍脈』の扱いも上達してきましたね。ラインが一本のときとは違い、三本のラインを動かすのはそれに見合った複雑な思考を有します。だからこそ先程の間薙君の動きを読んで、ラインを巻き付けたのは素直に見事だと思いました」

ソーナが匙の神器の扱いを褒める。それを聞いた匙は一瞬呆然とした表情となったが、すぐに頬を紅潮させる。

「あ、ありがとうございます！」

余程嬉しかったのか、頬を痙攣させながら、にやつきそうになる顔を抑えていた。

「あー、サジ負けちゃったかー、もう！　折角応援してたのにー！　負けた罰でケーキ

奢って！」
「ならオイラはかき氷だホ！」
「二人とも贅沢だよ～。あ、ボクはお菓子だったら何でもいいよ～」
「何で俺が！」
本気かそれともからかっているのか。集ってくる三人に匙は抗議し、そのままじゃれ合いの様な言い争いを始めた。
狙ってやっているのかは分からないが、匙の意識は先程の勝負から完全に離れていた。
シンがソーナの方を見る。シンの視線に気付き、いつものクールな表情のままこちらにウインクをする。
見兼ねて助け船を出したことが分かる。
「そろそろ時間ではないですか？　リアスからも呼ばれているのでしょう？」
そう聞かれ、シンは携帯電話を取り出し時刻を確認する。ソーナが言った通り、今出発すれば集合場所である一誠の家に、待ち合わせ時間内に着く。
「そうですね。それでは俺はこれで」
「休みの最中まで付き合ってもらって悪いですね」
「気にしないで下さい。呼ばれること自体、嫌という訳ではないので。ピクシー、ジャッ

クフロスト、ジャックランタン、もう行くぞ」
声を掛けると三人は匙との言い争いを止め、シンの方を見る。
「はーい。じゃあね、サジ。次は勝つんだよー」
「ヒホ！　かき氷はまた今度で言いホー」
「じゃあね～。ボクもお菓子は今度でいいよ～。ヒ～ホ～」
「あー、あー！　分かった！　分かったよ！　今度奢ってやるよ！　またな！　チビ共！　それと間薙もな！」
ヤケクソ気味に言いながらシンたちに別れの言葉を言う匙。
シンは生徒会メンバーに一礼した後、校門に向かって歩いていく。そのときふと思い出す去り際に見た匙の顔。真一文字に強く結ばれた口。苦悩する様に集まった眉間の皺。負を感じさせる表情がやけに印象に残った。
そんなことを考えながら歩いている途中、シャーシャーと水を撒く音がした。誰かが学園の花壇に水を撒いているらしい。
こんな暑い中、大変だな。と他人事の様に思いつつ校門を目指すシンであったが、その足が突如止まる。
（……誰が撒いている？）
今日はこの学園に生徒会メンバーと、シンたちを除き誰も居ない筈である。だからこ

そ、校庭で堂々と訓練をすることも出来た。
ソーナが、うっかり人が来るのを忘れていた？　在り得ない。そんな簡単なミスを、あのソーナが犯す筈が無い。
シンは音のする方へ足早に駆ける。十数秒ぐらいで目的の場所に着いた。
そこには麦わら帽子を被り、青い作業着を着た用務員らしき男性が、しゃがみながら花壇に水を撒いている。
（何だ？　これは……）
何故かシンはその人物を見た途端、既視感を覚えた。何処かで会ったことがある感覚。しかし、その後ろ姿に見覚えは無い。
「――どちら様ですか？」
意を決し、声を掛ける。
「どちら様と聞かれても、私は只の用務員ですよ。貴方はここの学生さんですか？　夏休みに入っても学校で勉強でもしていらしたんでしょうか？　そうなら感心ですね。それに比べて私はこうやって花に水を与えるだけですよ」
振り返らないまま中年男性らしき声だけが返ってきた。だが返ってきた答えにシンの不審は増す。
「花に水やりですか……でもそれ以上水をやると花の根が腐りますよ。――そこは一度

水を撒きましたから」
そう言うと水を撒く音が消える。
「何せ花壇の水やりは『生徒会』の仕事ですから」
そして、男が小刻みに震え始めた。どうやら笑っているらしい。
「へへへへ。そうかい。そうかい。やっぱり慣れないことはするもんじゃねぇなぁ」
聞こえてきた声は先程とは別人のものであった。低く、枯れており、酒やけしている様な声であった。
初めて聞く声であったが、その笑い方には聞き覚えがある。
シンの前で男は徐に立ち上がった。
男の一挙一動を見逃さない様に視線で追うシン。だがその視線は徐々に上を向いていき、最後には見上げる形となる。
（――でかい）
立ち上がった男は明らかに二メートルを超えており、目測で見ても三メートルはあろうという巨体であった。
しゃがんでいた時は普通の体型であった。信じ難いことではあるが、明らかに立ち上がっている最中に大きくなっていた。
「人……じゃないな」

「おうよ。見ての通りの化け物さ」
そこで男がシンの方に振り返る。このときシンは男の顔を見る――が、その顔は男の言った通り人のものではなかった。
それを見たピクシーたちは一斉に声を上げ、素早い動きでシンの背後に隠れた。
「わっ！」
「ヒホッ！」
「わ～お」
仮面を彷彿とさせる群青色の無機質な顔を持ち、そこに目や鼻などの部位は無く、代わりに橙色の縦線が扇状に並んで描かれていた。
口は付いているものの歯が剥き出しとなっており、どの歯も鮫の様に鋭利な形で人の歯とは全く異なる。
「俺がやったギリメカラは元気か？」
口を歪める異形。表情が殆ど無い為、分かり辛いが笑っているらしい。
顔を見てピクシーたちが驚いていたが、シンもピクシーたち程ではないが驚きで少し思考が止まっていたものの、異形の台詞を聞いて止まっていた思考がすぐさま動き、その正体を確信する。
「貴方がマダか」

「おうよ。これがオレの本当の姿ってやつよ。あのときは変装していたからなぁ。へへっ、男前だろう？」

聖剣事件の際アダムという名を騙って暗躍、何度か接触、行動したこともあった。あのときは聖職者という人の姿であったが、その下にこの様な正体を隠していたと思うと、何とも言い難い不思議な気分になる。

「ここには何の用で？」

動揺は見せず、努めて冷静な態度で接する。そんなシンにマダは身を屈めながら近付き、顔を覗き込む。

「お前をぶっ殺しに来た」

笑みが消え、場の空気が凍て付いたのかと思える程の殺気で満たされる。

いきなりの発言と重圧に、背後に隠れていたピクシーたちが体をビクリと震わせたのが伝わってくる。

シンもまた頬から一筋の汗を流す。

そんなシンたちの顔をまじまじと見つめていたマダであったが、急に吹き出し、そのまま爆笑し始める。と同時に、先程まであった殺気も霧散する。

相手のころころと変わる態度に付いていけず、シンも困惑してしまう。

「冗談だよ！　冗談！　そんなマジな顔をするなよぉ。はははははは！」

冗談と言いつつ洒落にならない様な空気を発していたマダは、悪びれる様子も無く豪快に笑う。その様子に、さっきまで危機感を抱いていた自分を馬鹿らしく感じてしまうシンであった。
「……それで、本当は何をしに来たんですか？」
目を細め、冷めた視線を向けて問う。
「はははは！　――んん？　待ち合わせ」
「待ち合わせ？　誰と？」
「俺だよ」
「――アザゼル先生」
背後から掛けられた声に振り向くと、そこにはアザゼルが立っている。日差しは強く、湿度の高い日だというのに、学園内でいつも着ている黒のスーツ姿。だが、汗一つ流していない。
三勢力の会談以降、オカルト研究部の顧問という立場になったアザゼルに対し、シンは先生と敬称を付けて呼んでいる。
「よおアザゼル。来てやったぞ。つーか、何だその格好は？　見ているだけで暑苦しいなぁ」
「お前に言われたかねぇよ。というかお前の格好こそ何だ？　俺が用意してやった変装

道具はどうした？　何処の世界に麦わら帽子に作業着を着た化け物が居るんだよ。世界どころか、三界探しても居ないぞ」
「お前さんの目の前に居るぞ。良かったな、これでお前も歴史の目撃者だ」
　気心の知れた仲なのか、対等といった様子で軽口を言い合う二人。アザゼルがマダと繋がっていることはシンも知っていたが、二人の関係が上司と部下という関係ではないことをこのとき初めて知る。
「何かお前に言ってたみたいだが、こいつの話は話半分で聞いておけよ。基本的にこいつの言ってることは酔っ払いの戯言だ」
「おいおい。何も知らないからって純真無垢な青少年たちに嘘を吹き込むんじゃねぇ。俺ぁ、いつだって大真面目よ」
「それが戯言だっていうんだよ。だいたいあのとき――」
「それを言うんだったらお前だってな――」
　あれこれと昔話を始め出した二人。これ以上喋らせると話が先に進まなくなる。それにシンたちはリアスたちに呼ばれていて、あまり長居も出来ないので、強引に話に割って入る。
「それで申し訳ないんですが、どうしてアザゼル先生はこの人を呼んだんですか？」
　言い争うのを止め、アザゼルがシンの方に顔を向ける。

「ん？　あー。それは、イッセーの家に着いてから話す。全員に話した方が効率が良いしな」
「そうですか。分かりました」
　それ以上聞くことはなく、素直にアザゼルの言葉に従う。焦らされている様にも思えるが、シン自身そこまで深く興味があった訳ではないので、質問の答えは後に回すことにした。
「じゃあ、行きますか？」
「おうよ」
「――って、おい待て」
　シンに付いていこうとするマダの作業着をアザゼルが後ろから引っ張る。
「その面で街中歩くつもりか？」
「別にいいじゃねぇか。ちょっとした仮装みたいなもんだよ」
「百歩譲ってその面で人前に出るのは認めてやる。だが、その図体をどうにかしろ。世の中、三メートルを超える人間は居ないんだよ」
「小さくなるのは息苦しいんだがなー」
「つべこべ言うな。とっとと普通の大きさになれ。あとこれを顔に張り付けておけ」
　アザゼルが懐から肌色をした球体を取り出す。シンには見覚えの無いものであった

が、マダの方はあるのか、嫌そうな声を上げる。
「うぇぇ。またそれかよ。それ、付けるとき気持ち悪いんだよなぁ」
「お前が人の姿に化けられたならこんな手間を掛けん」
「へいへい」
マダは不満そうではあるがアザゼルの言葉に従い、肌色の球体を受け取る。そして、それを躊躇うこと無く顔に押し付けた。
パキリという音が鳴って球体が割れると、中から粘液状の物体が出てマダの顔全体を覆う。肌色ののっぺらぼうの状態から、瞬く間に目、鼻、口、耳などの部位が形成され、あっという間に人の顔になる。
出来上がったのは年の頃は二十代から三十代。これといって特徴も無い顔立ちであり、すれちがったら数秒で忘れてしまう程、没個性という言葉がこれ以上無いくらいに似合う顔であった。
「これを使って人に変装していたんですね」
「わざわざこいつの為に作ってやったんだよ。こいつ、変装とか人間の目を誤魔化す方法はからっきしだからな」
「……こう言うのは何ですが、あの事件のとき、よくこの人を選びましたね」
「……丁度いい人材が居なくてな……俺も送って後悔した。全然こっちの言うこと聞か

ずに好き勝手やってくれたからな……ただ質の悪いことに実力だけは本物なんだよ」
　顔を顰めながらもマダの力は認めているアザゼル。シンも相対したとき、向こうがどれほど本気を出していたかは分からないが、力の一端を感じ取っていた。
「これで準備も出来たし、そろそろ赤龍帝の家に遊びに行くとしようか？」
　肌の感触を確かめつつ、いつの間にか平均的身長にまで縮んでいるマダがさっさと歩いていく。
「勝手な奴だぜ、全く」
　溜息を吐きながらアザゼルも後を追い、シンもまたそれに付いていく。
　その道中での会話。
　シンは声量を絞り、アザゼルだけに小声で話し掛ける。
「ちょっとお聞きしたいんですが、あの人って俺の正体について知っているんですか？」
「ああ、それは――」
「知ってるぞー」
　アザゼルが答えるよりも先にマダの方から質問の答えを返す。かなり小さな声で喋っていたが、それを聞き取るとは思ってもいなかった。
（随分、地獄耳だな）
「まあ、こいつには以前、堕天使と魔人〈それ〉に関わる問題で外部から手を貸してもらっ

た連中の一人だからな」
　アザゼルの言葉でコカビエルの話を思い出す。コカビエルは魔人と戦ったことがあると言っていたが、マダが協力したのはそのときの戦いなのかもしれない。
「ところで俺がやったギリメカラはきちんと仕事しているのか？」
「『禍の団』が攻めてきたときに助けてもらいましたが、それっきり姿を見せないです」
「あー、俺の『やばくなったら守れ』っていう命令だけ聞いているのか。つーか、敬語は止めろ。そういうのはむず痒い」
「分かりまし――分かった。それで、何でギリメカラの方から殆ど接触して来ないんだ？」
「そりゃあ、お前のことを舐めているからだよ。自分よりも弱いって思っている奴の言うことなんて聞かないぞ、そいつは。只でさえ怠け者だっていうのに」
　マダはそう言ってシンの影を蹴る。すると影の中心に眼が一つ現れると、嘶きを上げる。
「おうおう、起こしてやったっていうのに随分な態度だな」
「……何て言ったんですか？」
　シンには象の鳴き声にしか聞こえなかったので、小声でアザゼルに尋ねる。
「まだ二十七時間しか眠っていないのに起こすな、だとさ」

　果たしてこのギリメカラという象は、一日が二十四時間であることを知っているのであろうか。
「こいつを従えたければ、それ相応の実力を見せるしかないなぁ。手っ取り早い方法としてこいつをぶちのめすってのがあるが」
　言うことを聞かせるには殴り合わなければならないらしい。このままずっと影の中で眠らせている訳にはいかない。せっかく貰った強力な力である。これから先どんな敵が襲ってくるか分からない。力は多いに越したことは無い。
「もし、こいつをぶちのめす時が来たら呼んでくれよぉ。観戦したいからなぁ」
「シン。こいつの言うことを聞くんじゃないぞ。どうせ、酒の肴にして囃し立てるだけだからな」
「冷てぇ奴だなぁ。それでも俺の飲み友達か？　それに俺はギリメカラを送った者としての責任を……」
「責任だぁ？　よくそんな言葉を出せるな。お前に最も縁の無い言葉だろうが」
　再び言い争いを始める二人。どういう関係で繋がっているかを聞いていなかったが、マダの言葉を信じるならば酒の縁で繋がっている仲らしい。
　二人の言い争いは一誠の家に着く直前まで続き、シンはそれを少しうんざりした顔で、ひたすら聞き流し続けていた。

◇

一行は一誠の家の前に着いた――筈であった。

何度か一誠の自宅を訪れたことがあったが、どういう訳か一誠の家が見当たらない。それどころか一誠の家の周りにあった家すらも無い。

代わりに広々とした敷地と、六階建てのビルの様な家が建っている。

思わず周囲を見渡してしまうシンであったが、肩に乗っていたピクシーが飛び出していき、六階建ての家の玄関まで飛んで行く。

「ねえー、これってイッセーと同じ字じゃなかったけー？」

表札を指差すピクシー。見ると確かにそこには『兵藤』の文字が彫られた大理石の表札。

「……前に来たときから一ヶ月も経っていないぞ」

表札が兵藤家のものであることを示しているが、シンは頭の片隅で理解しつつも常識の範囲として否定してしまう。

これほどの家が一ヶ月かそこらで建つ筈も無い。それどころか周りの家をどうやって立ち退かせたのか。

「おーおー、随分とでっかい家にリフォームしたなー」
「そうかぁ？　俺には小っちゃく見えるぞ？」
「お前の図体ならどんな豪邸だろうとウサギ小屋だろうが」
　あれこれ考えているシンの他所でアザゼルとマダは、特に驚いた素振りを見せずに呑気な会話をしている。
「……悪魔の力を使ったらこんな家、一ヶ月以内で建てられるんですか？」
「馬鹿言うな」
　アザゼルは一旦否定するが――
「一晩で建てられる」
（成程。ファンタジーだ）
　――想像の上を行く回答をする。
「まあ、流石に家の土地を広げるのには正攻法を使ったんだろうがな。きっと元の土地の価格に零を一つか、二つ付けて買ったんだろうさ」
「……ああ、そうですか。凄いですね」
　色々と豪快過ぎて真面目に考えるのも億劫になってきたので、気になることは全部胸の奥に仕舞い込んでさっさと家の中に入ることにした。
　呼び鈴を鳴らす。暫くすると、パタパタと廊下をスリッパで歩く音が扉越しに聞こえ

てきた。
「はい。どちら様でしょうか？　あら、間薙君？」
「こんにちは」
　玄関の扉が開けられ、そこから一誠の母親が出てきた。
「間薙君も呼ばれていたのね。もう他の子たちはイッセーの部屋に来ているわよ」
　一誠の母親は人の良さそうな笑みを浮かべながらシンを招き入れる。シンやピクシーたちが玄関を潜ると扉が締められたので、まだ二人残っていると声を掛けようとしたとき、アザゼルとマダの姿が無いことに気付く。
（いつの間に……）
　姿を消した二人。思い返せば一誠の母親は、扉を開けたときからシンにしか話し掛けていなかった。アザゼル、マダがあのとき居ればその二人にも声を掛けている筈である。
　一体何の為に、と考える。
「あの子の部屋は二階にあるから階段でもいいし、そこにエレベーターもあるから間薙君も自由に使って頂戴」
　――が、そんな考えも前の面影が全くない一誠宅の内部を見て、やや呆気にとられてしまい中断される。

「おおー！　広―い！」
「大きいホー！　かけっこ出来そうだホ！」
「かくれんぼしたら隠れる場所に困らないね～」
豪華になった一誠宅に目を煌かせているピクシーたちを引っ張る様な形で、シンは二階に上がっていく。
二階にも部屋がたくさんあるが、幸い部屋の扉にネームプレートが掛けられていたので、迷うことなく一誠の部屋の前に立つ。
扉を二回ノックする。
「どうぞ」
中からリアスの声が聞こえたのでシンは扉を開いた。
扉の向こう側は以前の一誠の部屋と比べ、倍以上の広さとなっており、置かれている家具も一新されている。私服姿のオカルト研究部メンバーが豪華なソファーに座り、紅茶や菓子が置かれたテーブルを囲って話していた。
「遅かったわね。貴方が最後よ？」
「少しごたごたがあって……」
「生徒会の仕事も兼任していますからね。間薙君も大変なんですよ」
「無理の無い範疇で頑張って欲しいわ。体は一つなんだから」

シンが遅刻してきたことが珍しかったのか、少しからかう様な口調のリアス。朱乃が擁護するが、事情は分かっているらしく気遣う言葉を付け加える。
「やあ」
「……こんにちは」
私服姿の木場と小猫が挨拶をしてきたのでシンも軽く挨拶を返す。
「ヒ～ホ～」
「ラ、ランタン君！　僕に黙ってまた勝手にどっかに行っちゃって！」
「ギャスパ～。僕が居なくたってメソメソしない～。あの時の度胸は何処にいっちゃったんだい～？」
「だ、だって、だってええええ」
ふわふわと飛びながら自分の下に来たジャックランタンを抱きしめるギャスパー。当然というべきか私服は女物の服であり、皆がソファーに座っているなか、彼だけ持参したと思わしき段ボール箱の中に居た。
「よお」
「見ない間に随分な豪邸になったな」
手を上げながら声を掛けてくる一誠にシンは、少しからかう様な言葉を掛ける。
「ははは……俺も朝起きたらびっくりしたよ」

一誠が乾いた笑いを浮かべながら言う。
アザゼルが言っていた一晩で出来るという言葉通り、本当にこの家は一晩で建ってい
たらしい。
「皆は既に聞いているから知っているけど、実は私、皆を連れて冥界に帰ろうと思ってい
るの。夏休みだしね」
冥界。つまり悪魔の故郷へ帰ることを告げるリアス。勿論、眷属である一誠たちも連
れて行くと言う。
「い、生きている間に冥府へ行くのなんてき、緊張してしまいますね！　こういう場合、
決死の覚悟とか、死ぬ気で行くのが正しいのでしょうか！」
ずれた意気込みを見せるアーシア。未知なる世界に対しての不安と、それを上回る興
奮が見て取れる。
「冥界、つまり地獄に行くということだな。天国を目指して研鑽してきた私だが、まさか
地獄を見る日が来ようとは皮肉だな。まあ、元信者だが地獄では悪魔に恥じない様な振
る舞いを心掛けるとしよう」
自虐なのか冗談なのか良く分からないことを言うゼノヴィア。ただその口元に微笑
を浮かべていることからまだ精神的余裕を感じる。ほんの少し前であったならば自分
で言った自虐や皮肉に落ち込んでいたであろう。

やはり、三勢力の会談後、喧嘩別れしていたイリナときちんと別れの挨拶をしたことで、少し吹っ切れた様子であった。因みにイリナと別れの言葉を交わした際、手土産としてあの自作の面を渡していた。渡されたイリナの絶妙に引き攣った笑みが、何とも印象的であった。

「尤も、地獄に居ようとも神への敬虔を怠るつもりは無いがな。なあ、アーシア？」

「はい！　そうですね、ゼノヴィアさん！」

二人が微笑む。そして、特に合図を出し合った訳では無いのに同時に十字を切り、『アーメン』と神に祈った。

本来ならばここで悪魔の性質として痛みが発生するのだが、会談後のミカエルに一誠が、その発生を無くしてもらうよう嘆願したことで、何時でも祈れる様になっていた。

シンは、祈る二人の様子を横目で見つつ、リアスの言葉にも耳を傾ける。

「無理にとは言わないけど、帰るならばオカルト研究部メンバー全員で帰りたいと思っているのだけど……」

出来れば来て欲しい。という言葉を口に出さなかったが、言外に匂わせている。

リアスたちには申し訳ないと思うが、シン自身は冥界に行くことに乗り気では無かった。魔人という自分の正体も理由であるが、人間である自分が悪魔たちの世界に入っていくことで、向こう側が拒否感を覚えないか、という考え。そして、自分が不在の間に

『禍の団』やマタドールといった、他の魔人が身内に手を掛けないかという不安が、シンから行く気を削いでいた。
「俺は――」
　自分の意思を伝えようとした、そのとき――
「そいつは冥界に行くぜ。あと俺とこいつもな」
　口を挟んできたのは、いつの間にかソファーに座っていたアザゼル。突如現れたアザゼルに対し、訪問を知っていたシンやピクシーたち以外のメンバーは面食らっていた。
「ア、・アザゼル――先生？　それと――」
　皆の視線がアザゼルの隣に向けられる。そこで同じくソファーに座っていたマダが、我関せずといった様子で菓子を食べている。
『誰？』
　言葉を発しなくとも、メンバーの困惑した空気が嫌でも伝わってくる。リアスたちにしてみれば、今のマダは見ず知らずの男でしかない。
　不審に満ちた視線がマダに集中する。流石のマダも視線に気付いたのか、テーブルに置かれた菓子を食べ終えてから一言。
「お代わりある？」
　図々しく且つマイペースな態度を続け、皆の視線など全く意に介していない。

そこで一誠は気付く。
「あ！　それ、俺の分！」
目の前に置かれていた菓子が消えていた。消えた菓子は当然、マダの胃の中に既に納まっている。
「こ、この！」
「気を付けて、イッセー君。アザゼル先生もそうだけど、この人がここに入るまで全く気配を感じられなかった」
流石に魔剣は取り出さなかったものの、見知らぬ不審者に対し何時でも剣を抜けられる様に構えている。少し離れた位置にいるゼノヴィアも同様であった。
「アザゼル先生！　誰ですか！　この人！」
警戒しているせいか強い口調で尋ねる一誠。
「うん？　お前の先生の一人だよ」
「……へ？」
返ってきた答えの意味が分からず、一誠は間の抜けた声を出す。
すると今まで黙っていたドライグが声を出した。
『久し振りだな、マダ。前と比べて力が少し衰えたか？』
「久しぶりだなぁ、ドライグ。そう言うお前さんは随分と大人しくなったもんだ」

◇

冥界。魔王の部屋にてサーゼクスが、何時もの様に魔王としての職務を熟していた。その傍らには彼の『女王』であるグレイフィアが立っている。

紙の上をペンが走る音だけが支配する中、突如凄まじい勢いで扉が開き、セタンタが早歩きで入ってくる。

「やあ、セタンタ。どうしたんだい？　そんなに怖い顔を――」

サーゼクスに近付いた途端、最後まで喋らせることなく問答無用でその頭を掴み、ぎちぎちと締め上げる。

「聞いたぞ、この野郎ぉ。赤龍帝の家に朱乃、小猫、あのゼノヴィアという娘を同居させたらしいじゃねぇか」

ドスを効かせた声で魔王の頭を締め上げるセタンタ。無礼、不敬を軽く超えた行為であるが、側に立つグレイフィアは黙って見ている。何故ならば何度も見てきた光景であるからだ。

「ははははは。スキンシップの向上の為にね」

ミシミシと頭蓋が音を立てて軋んでいるというのに、サーゼクスは朗らかな笑みを浮

かべている。
「てめぇ……自分の妹の恋路を応援したいのか、邪魔したいのか、どっちなんだ」
穿てそうなほど鋭い視線を向けるが、サーゼクスには全く効果が無い。
「これはこれで良い方向に向かうと私は思うのだがね」
「お前の質が悪い所は、そんな思いつきの様な提案でも本当に良い方向に向かう所なんだよ」
これ以上効果は無いと察し、セタンタは手を離す。
「この駄目魔王め」
「セタンタ。そこはもう少しきつい表現をしなければこの人には通じませんよ？」
「ははははは。グレイフィア、そこは彼じゃなく私をフォローする場面じゃないかね？」
いつも通りのサーゼクスに湧いた怒りも萎え、セタンタはさっさと背を向けて部屋から出ようとする。
「ああ、そうだ。丁度、君に頼みたいことがあったんだ」
「……何だ？」
渋々といった様子で立ち止まり、視線をサーゼクスに向ける。
「君に鍛えて欲しい子――いや」
そこでサーゼクスの笑みの質が変わる。超越者としての底知れない笑みに。

「『魔人』がいるんだ」

適当、出発

マダ。その名がドライグから発せられたとき、場は騒然とする。
「マダって……あのときの偽神父の正体じゃあ……」
「その口を開けば神どころか宇宙すらも呑みほすと言われているインド神話の阿修羅……まさか、そんな大物がここに現れるなんて……アザゼル先生、貴方は何てヒトを連れて来たんですか！」
咎める様に言うリアスであったが、アザゼルは軽く肩を竦めただけであった。
「別に俺が頼んで連れて来た訳じゃない。ただ、こいつと飲んでいたときにポロッとお前らのことを零したら面白そうだと言ってついてきたんだよ」
「そういうこと」
アザゼルが連れて来た経緯を軽く説明し、マダはそれに首肯する。
「そんな簡単に……」
「あの、いいですか？」
「何？　イッセー」
「その、阿修羅とか言われていますけど、見た感じは普通の人っていうか……」

未だに菓子と紅茶を飲み食いしているマダの姿とリアスの説明の差に戸惑い、本当に言うほどの存在なのか半信半疑らしい。
「そんなに見たいのか？　俺の本当の姿が？」
「え？」
返事を貰うよりも早くマダの体が炎に包まれる。いきなり発火したことにオカルト研究部メンバーは驚くが、隣に座っているアザゼルは平然としている。
不思議なことに、部屋の中で巨大な火柱が立っているというのに、マダが座っているソファーは引火せず、それどころか室内の温度も全く変化しない。これほどの炎ならば本来、熱の余波を感じてもおかしくないというのに。
炎の中でマダが纏っている衣服が灰も残さずに蒸発。そして、マダを包んでいた変装用の特殊な皮膚も炎の中で溶けていく。
その様は非常にグロテスクなものであり、そういったものへの耐性が弱いアーシアは顔を蒼褪めさせており、それを見兼ねてゼノヴィアが抱き寄せ、見ないようにさせていた。
数秒後、マダを人の形に押し込めていたものは全て消え去り、火柱の中から異形の巨人が姿を現す。
顔は知っているシンであったが、このとき初めてその全身を見ることとなった。

青みがかった青緑色をした岩壁の如く荒々しい肌を持ち、腕は人の倍の四本、背に円形上の輪を背負い、頭頂部からは鬣の様に炎を噴き上げている。
神すらも恐れを為す形相は生ある者に本能的な恐れを抱かせ、オカルト研究部一同止めど無い冷や汗を流し、中には己の意思に反して震える者も居た。
威嚇している訳でも威圧している訳でも無い。ただそこに存在するだけでいかなる存在も畏怖させ、凄まじい重圧を受ける。
誰もがその圧倒的存在感に口を開くことが出来なかった。
『その姿、変わらんな』
「いい男っていうのは、いつまで経ってもいい男なんだよ」
そんな沈黙を破ったのはドライグであった。臆せず、何処か懐かしむ様な声。それに対し、見た目からは想像出来ない様な冗談を返すマダ。
その二人のやりとりでほんの少しだけではあるが皆の緊張は緩んだ。
一誠は少しだけ心に余裕が出来たので、改めてマダの全身を眺める。リアスは、宇宙や神ですら呑み込めると言っていたが、目の前にいるマダは確かに大きいが、言うほどの大きさには感じられない。
(何と言うか……)
『聞いているよりも小さいなー』とか思っているじゃねぇか？　赤龍帝？」

「え！　い、いや、そんなことは！」
　心の裡をあっさりと見破られ、それどころか思っていたことをそのまま口に出され激しく動揺する。その動揺こそ答えている様なものであった。
　するとマダが徐にソファーから立ち上がる。
「何ならお望み通りにしてやろうか？　床に穴が開いて、天井が抜けるだろうが……」
「い、いえ！　結構です！」
「へへへへ。冗談だよ、冗談」
　新築の家をいきなり壊されたら堪らないと思い、必死でマダを止めようとする一誠であったが、マダはそんな一誠の様子がおかしかったのか、一笑してすぐにソファーに座ってしまった。
　どうやらからかわれていたらしい。
『相変わらず掴み所の無い奴だ』
　ドライグはそんなマダに少し呆れた声を漏らす。
　正体を露わにしたマダ。そのとき朱乃が、アザゼルとマダが共に現れたときからずっと思っていた疑問を口にする。
「すみませんが。見た所、御二人は親しい間柄に見えますが、もしかしてアザゼル先生は、あの件のときに裏でこの方を使って、私たちを動かしていたんですか？」

朱乃の言葉に若干の不審があった。だが、そう思うのも無理も無いことである。結果的に全員生還という形で終えられたものの、一歩間違えればこの場に何人か居なかったかもしれなかった。

返答次第では深い溝が出来てもおかしくはない。

朱乃の問に対するアザゼルの答えは――

「それはな――」

「それについちゃあ、全部俺の責任だ」

――横から口を挟んできたマダによって奪われてしまった。

「貴方の？」

「ああ、全部俺が悪い。何もかもな。本当ならアザゼルが用意した無難な策があったが、俺の勝手な判断でお前たちを巻き込み全てを託すことになった」

先程までの飄々とした態度を潜め、真摯な声と態度であった。

そうなのか？　と問う全員の眼差しがアザゼルに向けられる。

すると皆に見えない位置でマダの足が軽くアザゼルの足を蹴る。話を合わせろというサインであった。

「まあ、な」

アザゼルは取り敢えず肯定した。尤もマダが言っていることは決して嘘では無い。

「言い訳はしない。許せないんだったらいくらでも俺のことを殴るなり罵倒するなりすればいい。だが、お前たちには本当に……本当に申し訳ないことをした」
テーブルに四本の手を着けて頭を下げるマダの姿に一同驚愕する。
これほどの大物に頭を下げられ、皆恐縮してしまう。
「あ、頭を上げて下さい」
「いや！　こんな程度じゃあ謝罪にもならねぇ！　いっそ土下座の方が……」
「大丈夫ですから！　結局皆は無事だったので！　大丈夫よね？」
リアスの目線が恐らくあの事件の際に一番振り回されていたシンと木場に向けられる。
木場は既に割り切っているのか無言で頷き、シンの方も同じ様に頷く。
ただ、シンは頭を下げているマダから何とも言えない胡散臭さを感じていた。態度自体は反省し切って、心の底から謝罪している様に見える。だが、その背からは何か喜色とも呼べる様な気配が見える様に気がした。
この場の空気がこれ以上悪くならない様に黙っていたが。
（こいつは……）
頭を下げるマダにアザゼルは内心呆れていた。長い付き合いだからこそ分かる。今頃、下げて隠れた顔に満面の笑みを浮かべていることに。

この怪物は如何なる状況も愉しむ。傍から見れば、格下の存在相手に謝罪しているという状況、それに対する相手の反応、それだけで愉快な気持ちになっている。
この性格が厄介でもあり、長く付き合う理由でもあるのだが。
「そうか、悪いな……」
下げていた頭を上げる。如何にも殊勝な態度だが、心の裡では自分や相手のことで大爆笑しているのであった。
「ところでイッセーの先生だと言っていましたが、まさかこのヒトを……」
「言葉通りの意味だ。俺がオカルト研究部の顧問になったとき指摘しただろう？　こいつの力は、爆発力はあるが、不安定だって。ヴァーリを一時的とはいえ追い込められたのもそれのおかげだ。まあ、二度目は通じないだろうがな」
アザゼルは顧問になったときはっきりと指摘していた。ヴァーリを退けられたのはミカエルに貰った『アスカロン』と『赤龍帝の籠手』。そして、相手が一誠の力に対し情報不足であったこと。
そして、次に戦えば間違いなく負けるとも言っていた。
「問題点を上げればキリがないが、今のお前に必要なのは間違いなく禁手化だ。それもただ成るだけじゃない、長時間維持することが出来る程、完璧に扱うことだ。次点としてはヴァーリから奪った白龍皇の力を扱える様にすることだな。あれを使いこなせれ

ば戦い方に幅が広がる」
　愉し気に語るアザゼル。神器に対して深い知識があるだけに、十全の力を発揮した『赤龍帝の籠手』を想像し期待を高まらせているのかもしれない。
「それに必要なのがそのヒトなんですか？」
「実を言うと既に他の奴に頼んでいたんだが、ヴァーリの奴が限定的とはいえ『覇龍』の力を使いこなしているのを聞いたからな、これは生半可な『修行〈じごく〉』じゃなくて、もっととびっきりの『修行〈じごく〉』を用意しなければと思っていたところにこいつが丁度、な」
「……え？」
　さらりと出てきた単語に思わず聞き返す一誠。
「今、地獄って言葉が聞こえた様な……？」
「この際、言っておく。比喩抜きでそれぐらいの修行をしなければ、お前はヴァーリに一生勝てない。『赤い龍』の力は『白い龍』に対する抑止力として考えられている。イッセー、お前は対ヴァーリとして期待されているという訳だ。だが、あいつは魔人相手に何度も地獄を潜り抜けて、今の強さを手に入れている。そして、今後もあいつは魔人と命のやりとりをして自分を高めていくだろうな。今、この瞬間にも」
　改めて突き付けられるヴァーリとの差。一誠自身、魔人と戦ったことは無い。ただ、

その戦う姿を遠目で見ただけであった。だが、それでも分かる、魔人の圧倒的強さ。それを相手に殺し合いという名の修行をしているヴァーリに対し、畏怖を感じられずにはいられなかった。
「嫌だったら逃げ出してもいいんだぜぇ?」
口を歪めて笑いを含んだ言葉を放つマダ。その言葉を一誠に逃げ道を用意する為の甘い言葉にも、神経を逆撫でする様な挑発の言葉にも聞こえた。
そして、それを後者として受け取った一誠は、眉間に微かに皺を寄せ、少しだけ怒った様な表情をしながら言い切る。
「俺は逃げません。……強くなれるんだったら」
宣言する一誠に対し、マダはゆっくりと立ち上がって一誠に近付くと、その肩に四本ある腕の内の一本を置く。
「安心しろよ。地獄を見せるたって、何も殺す訳じゃねぇ」
一誠の耳元に顔を近付け、ぼそりと呟く。
『殺してくれ』って泣いて懇願する様な目に合わせるだけだからよぉ」
全身の汗腺が一気に開き、そこから汗が噴き出す。折角奮い立たせた意思を一気に折りに掛かる、奈落の底に引きずり込む様な声であった。
「まあ、楽しみにしてろよ」

そう言ってマダは笑いながらソファーに戻っていく。
「イッセー、大丈夫なの？　顔が真っ青よ！」
「ハイ。ダイジョウブデス、ブチョウ……オキニナサラズ」
何故か片言になっている一誠を疑問に思いつつもリアスは、アザゼルの説明で疑問に思ったことを問う。
「そう言えば、イッセーの先生はもう一人いらっしゃるみたいですが、一体どんな方なんですか？」
「冥界に着いたらそのときに説明する。そのもう一人は冥界に居るからな」
「もう一つ質問なんですが、このヒト――マダさんは」
「呼び捨てでいいぜ」
「……なら、そうさせて貰います。マダは冥界に行っても良いのでしょうか？　彼は三勢力と組していない他勢力の方の筈ですが……」
「そのことについては、既にサーゼクスに話は通してある。ちゃんと許可は貰ってあるさ」
「なら彼が所属している方々には……」
「それなら問題ねぇ」
マダが口を挟む。

「他の奴がどうかは知らんが、俺は少々特別でねぇ、ある程度の自由が許されてるんだよ。悪魔側が許可してくれれば、それだけで大丈夫だ」

リアスは少し不安気な眼差しをアザゼルに向ける。

「嘘は言ってない。マジで大丈夫だ。でなければ俺と一緒に行動なんかしていないさ」

多少の不安を覚えつつもそこまで言い切られてしまうと、これ以上このことについて深く聞くことも出来なかった。

アザゼルは懐から手帳とペンを取り出し、パラパラとめくる。

「んで？　冥界に着いたらどんな流れになるんだ？」

「あ、はい」

アザゼルに聞かれ、リアスは到着後のスケジュールを軽く説明する。

里帰りした後は、現当主に眷属悪魔たちの紹介。その後に新鋭の若手悪魔たちと、会合の予定があった。

その間にもアザゼルは手帳にペンを走らせ、予定を書いていく。ずぼらに見えるが意外とマメな一面があるな、とシンはそんな感想を密かに抱く。

「じゃあ、その後ぐらいにお前たちの具体的な修行の説明だな……と思ったらサーゼクスたちとの会合が俺の予定に入っていたな。時間の擦り合わせで間が開くかもしれん。あー、めんどくせぇ」

「堕天使総督様が忙しい間に、俺は冥界を堪能させてもらうかぁ。あー、いい酒と女があればいいなぁ」
「嫌がらせか、てめぇは」
役職も肩書もない自由さをアピールするマダに対し、アザゼルは顔を顰める。
「なら先生とマダは私たちに同行するという形でいいんですね？　予定もこちらで立てても？」
「ああ、よろしく頼む。悪魔側のルートで冥界入りしたことはないからなぁ。いっつも堕天使専用のルートだ。今から楽しみだぜ」
「俺も楽しみだ。何せ冥界に行ったことはあるが、外を出歩いたことなんて無かったからなぁ。出ようとするとこいつが本気で怒るし」
「冥界〈こっち〉に招いて貰っただけでも有り難く思え。和平協定結ぶ前にお前に好き勝手出歩かられていたら、宣戦布告だと思われるかもしれなかったんだぞ？」
「そりゃあ、愉快なことになっていたかもな」
「愉快なのはお前だけだよ、この馬鹿」
アザゼルがマダの頭を軽く叩く。
ここまで来る途中に何度も見て来た為、シンは慣れていたが、リアスたちは二人の漫才の様なやりとりをどぎまぎとした表情で見ていた。堕天使総督と神話級阿修羅の馴

れ合いは初見だと心臓に悪いらしい。
「まったく……ああ、すまんが冥界での予定をもう少し詳しく教えてくれるか？　なるべく早く修行に入りたいからな」
「え、ええ。分かりました」
そこから先はリアスや朱乃が冥界での行動を詳細に説明し、それをアザゼルがメモを取りながら時折質問するという流れであった。たまにマダが口を挟んで雑談などが発生していたが。
ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンは早々に飽き、アーシアの使い魔である蒼雷竜のラッセーとじゃれ合いをし始め、待っている他のメンバーも特にすることが無かったので、時間を潰す為に色々と雑談をしていた。
そうやって時間を消費していると気付けば日も傾いており、外は夕闇に包まれ始めている。
話の区切りも付き、そろそろ自宅に帰ろうかと思ったとき、下の階から一誠の母親の声がする。
「良かったら家で夕飯でもどうかしら？」
その言葉を聞き、立とうとしていたシンの動きが止まり、反射的に一誠の方に目を向ける。

シンの窺う様な視線に気付いた一誠はニッと笑った。
「遠慮すんなよ」
特に急いで帰宅する理由も無く、向こうから折角誘われたのを断るのも失礼だと思い、シンは夕飯を御馳走になることにした。
「俺もいいか？」
「あ、はい」
「下降りる前にきちんと変装しておけよ。その姿で現れたらイッセーの両親が卒倒するぞ」
「それはそれで見てみたいな」
「お願いですから止めて下さい！」

◇

一誠宅、リビング。そこでオカルト研究部メンバー全員が揃って食事をしていた。かなりの人数だが、改築した一誠宅のリビングはそれでも窮屈に感じられない程広い。
大人数である為、料理は一誠の母だけでなくリアス、朱乃、アーシアも手伝い、人数分の食事を手際良く出している。

「いやー、いつもうちのイッセーがお世話になっています！先生方。ささ、どうぞどうぞ！」
「これはどうも」
「では頂かせてもらいます」
テーブルの隣に座っているアザゼルと人間に変装しているマダのグラスに一誠の父が酒を注いでいく。
二人がそれを呷ると一誠の父が尋ねてきた。
「それで最近のイッセーはどうでしょうか？　先生方に迷惑をかけておりませんか？」
「いえいえ。最近の兵藤君はとても評判が良いですよ。成績も伸びてきていますし。兵藤君が居るとクラスも賑やかになります。彼はムードメーカーですからね。ハハッ」
それに答えるのはマダ。彼は自己紹介の際、オカルト研究部副顧問という嘘を吐いている。
一誠のことをにこやかに笑いながら高く評価するマダであるが、一誠と会ったのは今日が初めてであり、当然一誠の学園での態度のことなど何も知らない。それっぽく言っているが全部出鱈目である。
よくここまで嘘をつらつらと重ねることが出来ると二人の会話を聞きながら、周囲は感心半分呆れ半分であった。因みに一誠は、嘘とはいえ並べられていく褒め言葉への気

恥ずかしさから、妙な居心地の悪さを覚えていた。
「これもどうぞ」
　新しく出来た料理を置く一誠の母。マダは礼を言い、それを一口食べる。
「これは美味しい！　いやー、料理上手な上に美人ときた。世の男性が羨む様な女性を掴まえてイッセー君のお父さんには正直嫉妬を覚えてしまいますよ」
「まあ、お上手ですね」
「いやいや、そんなことは……」
　照れる母親、謙遜する父。
「いえいえ、本当ですよ。あーあー、結婚していなければ是非お近づきになりたかったなー」
「もう、からかわないで下さい」
　マダの言葉を冗談として受け取った一誠の母は、他の料理の様子を見る為に台所へと戻っていく。その後ろ姿を上から下に掛けて眺めるマダ。
「マダ先生、ちょっといいですか……」
　思わず声を掛けてしまう。自分の母親に対し何やら不穏な視線を送っていることを察し、堪らずマダをリビングの外へ連れて行く。
「何だよー、気持ち良く飲んで、食べて、口説こうとしてたのにー」

「あのー……済みませんが人の母親に口説こうとするのは止めてもらえないでしょうか？　というか、それ冗談ですよね？」
「いいじゃねぇか。抱けるよ、俺」
「本当に止めてもらえませんかぁ！　そういう生々しいことを言うの！　親をそんな風に見られるの子供としてキツイんですよぉ！」
「俺ぁ純粋にお前の母親を女に戻し――」
「だから本当に止めてくださいって！　うちの家庭を崩壊させないで下さい！」
人より煩悩が強い一誠でもやはり思春期の少年。親のそれを想像することなど本能が拒絶してしまう。
「ええー」
「そんな残念そうな声出しても駄目です！」
分かったよ、と不貞腐れた表情をし、席に戻ろうとするが、一誠はこの女性好きな阿修羅のことを不安視し、更に釘を刺す様な言葉を掛ける。
「言っておきますが、だからと言って部長たちにも――」
「手なんて出さねぇよ。俺は処女には興味無いんだ」
その返答に思わず絶句しかけた。
「え？　え？　な、何でそんなことがわ、分かるんですか？」

「見れば分かる」
　言い切るマダ。自分の言葉に微塵も疑いを持っていない。
「そして、お前は童貞」
「なっ！」
「見れば分かる」
『一体どんな特徴が！』という言葉が喉まで出掛かる。しかし、振り返って席に戻っていくマダの姿に、出掛かった言葉は胸の奥に引っ込んでいく。
　一誠はどっとくる疲れに思わず壁にもたれてしまった。
「何だ……あのヒト……」
『真面目に接すると痛い目に遭うぞ。あいつは昔からいい加減な様で真面目な様でやはりいい加減な奴だ』
「……要は疲れるヒトってことなのか？」
『それで合っている』
　溜息を一つ吐き、一誠もまた自分の席に戻る。
（上手くやっていけるかなー……）
　師事する予定のマダの掴み所の無さに、一抹の不安を抱きながら。

◇

一誠宅での夕食も終わり、シンたちは一誠たちに別れの挨拶をした後、帰路に着いた。道を並んで歩くのはシンと仲魔たち、マダ、アザゼル、木場、小猫、ギャスパー。朱乃、ゼノヴィアは一誠宅に同居している為、帰宅する必要も無い。

余談ではあるが、シンは、その二人が既に同居していることと小猫もまた同居する予定であることをこのとき初めて知り、思わずリアスの顔を見てしまった。こちらの視線に気付き、若干苦味を含んだリアスの顔が何とも印象的であった。

「へへへへ。なあなあ、あんだけ女に囲まれた生活していて何であいつは手を出さねぇんだ？　あれか？　不能なのか？」

「んな訳ねぇだろ。あいつは、そりゃあもう思春期剥き出しよ。原因があるとすれば女に囲まれ過ぎて、逆に均衡状態みたいになってんだよ。下手に手を出したら誰かを悲しませるっていうのが頭の中にあるんじゃねぇか？」

そこそこな声量で話すマダ。人が寝静まる様な時間ではないが、人によっては近所迷惑に捉えるであろう。

「あ、あんな大きな声で喋っていて、通報とかされないでしょうか？」

心配そうに言うギャスパーであるが、そんなギャスパーもまた頭から段ボール箱を

被っているという不審者そのものという姿である。
「……そうだな、通報されないことを祈ろう」
「あははは……」
　真っ先に目を付けられそうなギャスパーに呆れた声でシンは同意し、木場は困った様に笑う。
「はははははは！　ハーレム王になりたいって言っている割には紳士だことで！一人に手を出して泣かせるんだったら、全員同時に手を出して啼かせてやりゃいいのに！」
「……下品です」
　品の無い台詞を言い続けるマダに小猫は軽蔑した目で見ながら、ぼそりと呟く。するとマダは、アザゼルとの会話を中断しそのまま小猫の顔を覗き込んだ。
「……何ですか？」
　自分の言葉が癇に障ったのかと思った小猫であったが、それでも動じずに睨み付ける様な眼差しでマダを見る。だが、マダは小猫の予想に反し、口の両端を吊り上げて笑みを浮かべる。
「俺ぁ自分の思ったことを正直に口にしているだけだ。そういうおチビちゃんはどうなんだ？」
「……私ですか？」

そこでマダは声を潜める。
「猫を被っているんじゃあないのか？　まあ、猫が猫を被るなんて変な話だがな」
その言葉に常に無表情だった小猫に明らかな動揺が走る。目が見開き、瞳が激しく揺れる。
「親切心で言っておくと、今のままじゃあ頭打ちだぜ？　駒の力だけじゃなぁ」
「……余計なお世話です」
あからさまに不機嫌な声を出すと小猫は集団から早足で抜けていく。
「……先に帰らせてもらいます」
シンたちに一言残すと、返事も聞かずにさっさと先に帰っていく。
「ごめん、間薙君。いくら小猫ちゃんでも夜道を一人で先に帰らすのも危険だから、僕もついていくよ」
「ああ、分かった」
「あ、あの僕も行きます！」
「じゃあ～、ボクもついていくよ～。じゃあね～。ヒ～ホ～」
紳士的な態度を見せる木場。そんな木場と家が近いギャスパー、ジャックランタンも続き、別れの挨拶を言った後、先に行く小猫の後を追う。
先程まで大人数であったが、あっという間に半分の数になる。

「怒らせたかー」
「何言ったんだよ、お前」
　特に悪びれた様子も無いマダをアザゼルは、横目で睨み付ける。
「猫被ってんなー、とか、頭打ちになるぞー、とか」
「よりにもよって一番キツイこと言いやがって……お前は、言葉をオブラートに包むことを知らないのか？」
「知っている。そして、分かってやってる」
「余計質が悪いんだよ！」
　怒りの表情を見せ、アザゼルがマダの足を全力で蹴り付ける。が、受けたマダは痛がる所か微動だにせず、逆に蹴った方のアザゼルが自分の足を摩っていた。
「どうせ修行のときになったらお前も言うつもりだったんだろ？　だったら早い方がいいだろ？　わざわざ俺が憎まれ役をやってやったんだ。あー、礼ならいいぞ。俺とお前の仲じゃないか」
「この野郎、よくもまあ抜け抜けと……」
　嫌らしい笑みを浮かべるマダにアザゼルは苦虫を噛み潰した様な表情となる。しかし、マダの言葉を否定しなかった時点で、言っていることは大凡合っていた様だった。
（何か隠していることでもあるのか？）

言葉の断片から小猫が何かを秘密にしているらしく。マダはそれを知っており、アザゼルも態度から見て、知っている様子であった。

あの時、普段見せない程感情を露わにしたことから、余程触れてほしくない話題であることが良く分かる。

「気になるか？」

思案していたシンにアザゼルが声を掛ける。

「小猫のことが気になるんだろ？」

「……別にそんなことはありませんよ」

嘘では無いが、本音とも言えない言葉であった。

気にはなる。だが、ここで素直に『はい』と言えば、アザゼルが、小猫が隠していることを話し出す様な気がして、敢えて否定的なことを言った。

木場の件でもそうだが、シンは基本的に他人の口からそういう類の話は聞かないことにしている。聞くならば本人から。他人が聞けば面倒な拘りだと思われるかもしれないが、それがシンにとってのルールの様なものであった。

「ふーん。分かった」

「へへへへへ」

あっさりとアザゼルは引き、マダの方はシンを見て、笑っている。二人ともまるでシ

ンの考えを見透かしているかの様であった。
その後、暫しの間沈黙が降りる。
沈黙の間、シンはずっと冥界行きのことを考えていた。
アザゼルによってなし崩しで冥界行きが決まってしまったが、未だにシンは冥界行きに関して乗り気では無かった。
どうしても地上に残される不安が拭い切れない。
しかし、頭でこのまま考え続けていても意味が無い。言葉にしなければ相手には伝わらない。
やがて意を決し、シンは口を開いた。
「アザゼル先生、冥界行きに関してのことなんですが……」
「何だ？　あー、そっちのチビ共を連れて行くってならもう向こうに話を通して了承を貰っているぞ。あと、不在時に『禍の団』が襲撃してくる可能性を考慮して、悪いがお前の親には、身辺保護と護身用の魔術を付けさせてもらう。すぐに逃げられるようにな。勿論、イッセーの両親にも付けておくが」
アザゼルが、先回りしてシンの不安に対する解決策を出す。
言うとしていたことを先に言われた所か、その答えまで出され開いた口が、再び閉じてしまう。

「これで気兼ねなく冥界に行けると思うが？」
「それは……そうなんですが……」
シンは、歯切れの悪い反応を示す。
確かに、そこまで対策してもらえると幾分不安を和らげることが出来る。だが、シンの頭の中には、とある最悪を想定していた。
「……もし、魔人が来たとすれば、言っちゃ悪いがお前が居てもどうにもならんぞ」
こっちの頭の中を読まれているのではないかと思わせる程、的確にこちらの内心を見抜いてくる。組織の長、そして、長年生きてきた者が持つ洞察力には舌を巻く。
「まあ、魔人が攻めて来るという可能性は極めて低いだろうな。だいそうじょうの爺を動かすにしても今、『禍の団』は、天界、冥界だけでなく北欧の神族も敵に回している。動かすにしてもそちらの方にだろうな。そしてマタドールの奴は、性格からして直接お前を狙ってくる。実を言うと、マタドールから護る為という意味でもお前には冥界に来て欲しい。あそこなら、迎撃に十分な戦力もあるしな」
あれこれ考えた上でシンにとって冥界行きが、メリットになるという答えを出したのであろう。
「と言ってもお前にもきちんと向こうで修行してもらうがな。ちゃんと教える先生も準備してある」

そこでアザゼルは言葉を止め、少し躊躇いがちに言葉を続ける。
「……お前にとっちゃいい迷惑かもしれないが、一日でも早く強くなる必要がある。マタドールに命を狙われているのも理由の一つだが、目覚めたての魔人、未熟な魔人なんて存在は魔人に恨みを持っている輩にとっちゃ格好の獲物だ。八つ当たり、という意味でな。情報を広げない様にしているが……なるべく正体をばらさない様にしておけよ」
魔人という立場への忠告。
今の所、身近でシンが魔人だと知っているのは、オカルト研究部では一誠とギャスパー。仲魔であるピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン。それ以外だとアザゼル、サーゼクス、マダである。
このメンバーから情報が洩れる可能性は低いと考えられるが、一番懸念しているのは同じ魔人であるマタドール、そして、シンは直接会ってはいないが、三勢力会談のときに現れたもう一人の魔人だいそうじょう。
シンに執着を見せたマタドールが、そのことを洩らすことは無いと思われるが、問題は『禍の団』に属しているだいそうじょうの方である。
どんなに楽観視しようともシンが魔人であるという情報は、『禍の団』に広まっていると思われる。
何らかの形で接触してくるかもしれない。今の所何も無いが、今後どうなるかは全く

分からなかった。
「肝に銘じておきます。――ところで俺にも先生を就けると言っていましたが、誰なんですか？」
これ以上考えると気が滅入りそうなので、話題を変える。
「冥界に着いたらイッセーの先生と一緒に紹介する。まあ、それまで楽しみにしておけ」
勿体ぶるアザゼルであったが、シンは特に追及せずに『分かりました』と言って素直に引く。
「安心しとけよ。別に変な奴じゃあないさ。きっとお前にピッタリな奴だ」
マダがフォローする様な言葉を掛けてくる。しかし、そんなマダをアザゼルは半眼で睨む。
「……お前、俺が誰を就けたのか知らないだろうが」
「ああ、だから適当」
しれっと言うマダの臀部をアザゼルは無言で蹴り付け、そのまま前に見た様な言い争いを始める。
ピクシー、ジャックフロストはそんな二人の争いをケラケラ笑いながら囃し立てている。
（本当にいい加減だな、このヒトは……）

好き勝手な言動を繰り返すマダにシンは内心呆れつつ、二人の喧騒を見ながら帰路を歩くのであった。

◇

冥界へ行く日。シンは正装だという理由で駒王学園の制服を着て、指定された駅に仲魔二人を連れて行く。

駅に着くと、ほぼ同じタイミングで一誠たち、そして、アザゼルとマダも到着。一行はそのままリアスと朱乃に先導され、駅内に設置されたエレベーターの前に行く。

「じゃあ、まずイッセーとアーシアとゼノヴィア来てちょうだい。先に降りるわ」

「お、降りる？」

リアスの言葉に一誠が戸惑いの声を上げた。そうなるのも仕方ない。ここが一階であり、本来ならばこのエレベーターは上にしか行かない。地下など無い筈である。

困惑する一誠たちの背中を押して、リアスと朱乃がエレベーターの中に入る。

「祐人、小猫、貴方たちは慣れているからシンたちと一緒に来てちょうだい」

「はい、部長」

「……分かりました」

エレベーターの扉が閉まる。階層表示を見ても一階を表示したまま動かないままで

あった。
　その間にマダが小猫に話し掛ける。
「このエレベーターって体重制限は大丈夫なのか？　俺ってこう見えても結構重いんだがな」
「……そんなこと知りません」
　下手すれば初対面のときの一誠以上に邪険な態度で接する小猫。だが、マダは気を害した様子も無く逆に笑い始める。
「へへへへ。嫌われちまった」
「自業自得だろうが」
　意図して声を掛けたのが分かる。その神経の太さにある意味で感心するシンであったが、決して見習いたくはないとも思った。
　やがて閉じていたエレベーターの扉が開く。中には誰も乗っていない。
「じゃあ、行くよ？」
　木場に促されて皆がエレベーターに乗った。あまり広いとは言えない中に大荷物を持った者たちが何人もいるのでかなりの圧迫感を感じる。
　木場がポケットからカードを取り出すと階層ボタンの前に翳す。すると電子音が鳴ると、エレベーターが動き出す。

全身に掛かる浮遊感。間違いなく下に向かって降りていた。
「ここの地下に悪魔専用のルートがあるんだ。と言ってもこれはその内の一つだけどね」
木場が軽く説明する。
「ほおー。なら何処にあるのか探すのも暇潰しになるなぁ」
「止めとけよ。下手に探して、向こうに不審者扱いされても知らんぞ」
企む様な笑みを浮かべるマダとそれを窘めるアザゼル。この二人は本当に仲が良いらしい。尤もそんなことを言えば本人たちは強く否定しそうではあるが。
一分程降下してエレベーターは停止した。
扉が開いた先には広々とした空間。そして、駅らしきものがあった。
地面を丸ごとくり抜き、そこに駅のホームを填め込んだかと錯覚してしまう。
線路の数は一本では無く無数にあり、その数だけプラットホームがあった。
「おー、すごいすごーい！」
「広いホー！　大きいホー！　ヤッホー！」
「ヤッホ～」
「やッほぉぉぉぉ！」
「ガキかお前は」

大きな駅に目を輝かせ、興奮する三人とそれに加わるマダ。その声が空間内で木霊していく。

「こっちよ」

降りて来たシンたちにリアスが声を掛け、呼び寄せる。

「これで全員揃ったところで、三番ホームまで歩くわよ」

指定されたホームまで歩く一行。その間に一誠やピクシーたちは興味深そうに周りを眺めていた。

シンも一誠たち程では無いものの、周りの光景を観察する。

駅に光源など無く壁そのものが、恐らく魔力によって輝き、その光によって駅内が照らされている。電灯の灯りとはまた違う妖しいと言える光、人工的な光に慣れているシンからしてみれば、少々落ち着かない光であった。

隈なく見渡したが、どうやらシンたち以外でここを利用している者たちの姿は無い。

冥界行きを決めたシンは、その日のうちにソーナに、当分生徒会の仕事を手伝えない旨の連絡をした。

返ってきた返事は、ソーナもまた眷属たちを連れて冥界に里帰りをするというものであった。

向こうで会いましょう、と言われていたがもしかしたらこの駅に居るかもしれないと

思い探していた。見つからないということは別のルートを通って冥界に行ったと考えられる。

ソーナたちを探すのを止め、視線を前に向ける。すると前方を歩いていた朱乃がさりげない動きで一誠の隣に並び、その手を握るのを見た。一誠は驚いた顔をした後その手を握り返す。それに対し朱乃は顔を真っ赤に染めて嬉しそうであった。

最初の頃は一誠の反応を楽しむ様にからかっていた朱乃であったが、三勢力会談以降は本格的に一誠に好意を抱いていると思わせる場面をポツポツと見る様になった。

当然、アーシアもリアスも面白く無く。アーシアは涙目で、リアスは刀剣の様な眼差しで一誠を見ている。

「あー……からかいてぇ……」

ウズウズしながら呟くマダを見て、アザゼルは溜息を吐いていた。

やがて目的のホームに着く。そこには特徴的な形をした列車が停車していた。

その列車には見慣れた紋様が描かれている。

「グレモリー家所有の列車よ」

自慢する訳でも誇る訳でも無く、あっさりとした口調で言うリアス。それが却ってリアスの家の大きさを改めて認識させられる。

圧縮された空気が抜ける音と共に列車の扉が開く。

「さあ、乗りましょう」
リアスに促され一同列車に足を踏み入れるのであった。
◇
ガタガタと小気味良い振動が体に伝わってくる。
グレモリー家所有の列車が発車してから十分程経過した。
冥界まで約一時間の道のりで、シンは窓に頬杖をしながら、代り映えのしない景色をぼんやりと眺めていた。
「ヒホッ！　ヒホッ！　ヒホッ！」
「わー！　景色がヒュンヒュン流れてくー」
「ヒ～ホ～。目じゃ追えないね～」
列車に初めて乗る仲魔たちは、座席の感触を楽しんだり通り過ぎていく景色を楽しんでいる。
「ふふふーん」
列車に乗ると同時に変装を解いたマダは、一人で二席独占していた。そこで鼻歌を歌いながら加工を施された瓢箪を持っており、そこから杯に液体を注いで呷っている。ここには手ぶらで来ていた様に見えたが。

その向かいでは我関せずといった様子でアザゼルが眠っていた。
それを見ていたシンにも眠気が襲ってきた。原因は、一定の間隔で来る心地よい振動か、あるいは変化の無い景色に眠気を誘われたのか、そんなことを考えているうちにシンの意識はブツリと途切れた。

◇

「はい。完了しました」
一誠の前に機器を翳していた男が人の良い笑みを浮かべている。
機器を持つ男は、この列車の車掌であり名をレイナルドという。一誠に翳していた機器は事前に登録している『悪魔の駒』のデータと確認、照合させる為のものである。
既に朱乃たちは完了しており、一誠が最後の確認であった。
「ありがとう。レイナルド。後はシンやアザゼルたちかしら」
リアスがアザゼルの方を見るとアザゼルは熟睡している。
「……よくもまあ、ついこの間まで敵対していた種族の移動列車で眠れるものね」
リアスが呆れと感心を混ぜた表情で微笑を浮かべる。
「ホッホッホッ。流石堕天使の総督様は大物ですな」
レイナルドは愉快そうに笑いアザゼルの下に行く。

「おや？」
途中で足を止めるレイナルド。するとそこで再び笑う。
「ホッホッホッ。どうやら姫の客人は皆大物みたいですな」
レイナルドの視線の先には、これから未知の世界に行くというのに動じず穏やかに眠るシン、ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、マダの姿があった。

冥界、防衛

『もうすぐ次元の壁を突破します。繰り返します。もうすぐ次元の壁を突破します』

列車内に響き渡るアナウンスで、シンは閉じていた目を開く。

同じ姿勢のままであった体を伸ばしながら目線を落とすと、あれほどはしゃいでいたピクシーたちが席で横になって眠っていた。アナウンスにも反応せず、寝息を立てている。

「あら、起きた？」

シンが眠りから覚めたのに気付いてリアスが声を掛けてくる。上級悪魔で主という立場から、本来この列車の先頭車両が指定席であった筈だが、一誠たちの席に座っているのを見ると、どうやら独りでいるのが嫌であったらしい。

「うふふ。貴方たちの寝顔って可愛いのね」

シンたちをからかうリアス。自分がどんな寝顔であったのかなど自分には分からない。可愛いと言われて別に不機嫌になることも無いが、逆に気分が良くなることも無い。

「そうですか？」

照れ隠しという訳ではないが、言われたシンの反応は素っ気ないものであった。
「貴方も外を見てごらんなさい」
リアスが窓の外を指差す。
差された方に目を向けたシンの目に最初に飛び込んできたのは、夕と夜の境界がそのまま空を覆い尽した様な紫色の空であった。
神秘的というべきか非現実的というべきか分からない、まず見ることの無いであろう空。青い空に見慣れた者にとっては激しい違和感を覚えるかもしれないが、それを見上げるシンはそれを淡々と見た後、視線を上から下に向ける。
山があり、そこから無数の木々が生えている。大きな湖があり、そこから伸びる川があり、その川を下った先には民家と思わしき建物が密集している。
「ここから見える全ての土地がグレモリーの領地よ」
誇らしげに言うリアス。
「え！　そうなんですか！」
一誠が大袈裟なぐらい大きな反応を示すと、リアスは嬉しそうに笑う。こういった直球かつ期待通りの反応を見せるのもリアスが一誠を好んでいる理由なのかもしれない、とシンは密かに思った。
現に自分がさっきのリアスの言葉を聞いても目立った反応を見せず、

（それは凄い）

そう心の中で思ったぐらいである。

リアスの家のスケールの大きさを改めて思い知らされた一誠は、そのままリアスにグレモリーの領地はどれぐらいの広さなのかという質問をする。

返ってきた答えは、日本の本州と同じ大きさというものであった。

リアスが説明するには、冥界は地球とほぼ同じ大きさであるものの、そこに住む者たちの数が遥かに少なく、更に海も無い為土地が有り余っているらしい。

説明を終えると、リアスが急に何か思いついた表情となる。

「すっかり忘れてた。イッセー、アーシア、ゼノヴィア。貴方たちにも領土を与えるから」

領土と言われ一誠はギョッとした表情をするが、アーシアとゼノヴィアは元より無欲な性格な為かあまりピンとこない顔をしていた。

「りょ、領土ですか？」

「ええ。次期当主の眷属悪魔である貴方たちにはグレモリー眷属として領土に住むことが許されているわ。朱乃、祐斗、小猫、ギャスパーも自分の敷地を持っているのよ」

するとリアスは何も無い場所から地図を出現させ、皆の前に広げる。地図にはいくつか赤く染められている部分があった。

「赤い所は既に手が入っているところだからダメだけど、それ以外の場所は大丈夫だから好きに指差してね。貴方たちに上げるから」

気前の良い台詞で微笑む。

一誠は広げられた地図を前にし、どうしたものかと頭を悩ませていた。十数年程しか生きていない者が、いきなり土地を貰えると言われれば無理も無い。大人ですらこうなるであろう。

アーシアとゼノヴィアは、どうすればいいのかイマイチ理解していないようであり、一誠の動きを様子見ている。

すると悩める一誠の脇から伸びる手。

「じゃあ、アタシここー」

「ヒホッ！　ならオイラはここホー！」

「じゃあボクはここにするよ～。ヒ～ホ～」

いつの間にか起きたピクシーたちが、リアスの地図を指差す。

「おい」

はしゃぐ仲魔三人をシンは咎める。先程も言っていたが、リアスはあくまで眷属である一誠たちに土地を与えると言っていた。眷属どころか悪魔ですらない者たちが、貰える権利など当然――

「じゃあ、印を付けておくわね」
　――無いものかと思われたが、あっさりとリアスは承諾してしまった。
「……部長？」
「どうかしたのかしら？」
　思わず声を掛けてしまう。
「さっきの話を聞く限り、別に俺達には領土を貰える権利なんて」
「大丈夫よ。貴方にも謝礼という意味も込めて領土を与えるつもりだったわ。色々と力を貸して貰ったから。ちゃんと話は通してあるわ、安心して」
　そんなことを言われてどう反応していいのか分からない。
「ああ、この子たちが指定した土地は一応貴方の名で登録しておくわね」
　見知らぬ土地に来て早数分。あっという間にシンは地主に成ってしまった。

◇

　列車が完全に停止し、アナウンスが目的地に着いたことを報せる。
　皆が荷物を持って出ようとする中、アザゼルとマダは席に座ったままであった。
「あれ？　二人は降りないんですか？」

「ああ、俺はこのままグレモリー領を抜けて魔王領に行く。サーゼクスたちにお呼ばれしているからな。終わったらグレモリーの本邸に向かう。後こいつは……」
マダの方を顎で指す。するとマダから寝息が聞こえてきた。爆睡している様であった。
「これだからこのままこいつも連れてく。こいつだけグレモリー領に置いておくと、どんな悪さをするか分かったもんじゃないからな」
マダについて詳細を知らない一同であるが、このとき何故かはっきりとそのイメージが頭に浮かび上がってくる。
グレモリー領の酒屋を飲み潰すマダ。領内の女性に手当たり次第手を出すマダ。そして、悪びれた様子も無く豪快に笑うマダ。
「じゃあ、マダのことはよろしくね、アザゼル。くれぐれもお兄様たちに迷惑を掛けないようにね」
「わーってるよ」
アザゼルにすんなりと従い、マダはこのまま残していくことにする。リアスの頼みを聞いて、起きない内に早く行けと言う代わりに手を振る。
アザゼル、マダを抜いた一行がホームに降り立った瞬間、リアスの帰還を祝福する声が駅全体から上がった。その大きさは、同時に打ち上げられた花火の音が掻き消されて

しまう程である。
歓迎の声の大きさと人の量に圧倒されたギャスパーは、情けない声を出しながらフワフワ浮かぶジャックランタンを抱いて、その背に顔を隠す。
「ヒ、ヒィィィ……人がいっぱい……」
「人じゃなくて悪魔だけどね～」
駅内を埋め尽くす程の人もとい悪魔たち。それどころか上空にも人間界では見たことが無い動物に跨って飛んでいる悪魔もいる。
兵士、メイド、執事といった明らかに一般的ではない格好の者たち。よく見るとその中にシンも知っている顔の人物がいる。
その人物は一歩前に出ると優美な動作で一礼する。それに合わせて他の者たちも頭を下げた。
「お嬢様、おかえりなさいませ。道中無事で何よりでございました」
「ええ。ただいま、グレイフィア。他の皆も元気そうで何よりだわ」
リアスの里帰りを安堵するかの様に微笑を浮かべるグレイフィア。そして、その視線はシンたちに向けられる。
「皆様方もご無事で何よりです」
そこで一瞬グレイフィアの視線が左右に動く。確認する様な動き、恐らくは聞かされ

ていた人数よりも少ないことに気付いた様子であった。
「もう一人は、アザゼルと一緒にお兄様の所へ向かったわ。後で合流する予定よ」
「左様ですか。では皆様方、馬車を用意していますのでどうぞこちらへ。本邸までこれで移動します」
すぐにグレイフィアの考えを察し、その答えを出すリアス。長い付き合いを感じさせるやりとりであった。
グレイフィアに促されて馬車に乗る一同。
数台ある馬車の内、先頭の馬車に一誠、リアス、グレイフィア、朱乃、アーシア、ゼノヴィアが乗り、二台目にシン、ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、木場、小猫、ギャスパーが乗る。
テレビかあるいは雑誌でしか見たことの無い馬車に実際に乗ってみたシンは、何とも落ち着かない気分であった。乗り心地が悪い訳ではない。ただ自動車、電車などに乗り慣れた現代人からくる認識の差の様なものである。
そんなシンとは反対にピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンは列車のときみたく無垢な好奇心を発揮させ楽しんでいた。
細かな揺れと蹄鉄の音。人の世では中々味わう機会の無い感覚を身で感じながら、緩やかに変わっていく窓の景色を見る。

綺麗に舗装された道にはゴミ一つ落ちておらず、周りに植えられた木は見事に剪定され、整えられている。
その徹底された綺麗さは、シンの目には非現実的にも見えた。
人間の世界でこれ程までに清潔感を保つにはどれぐらいの労力が必要なのであろうか、とそんなことをぼんやり考えてしまう。
「ほら、あれが部長の家だよ。家は数あるけどあれが本邸なんだ」
木場が窓を開け、そこから手を伸ばしてある点を指差す。指差す方に目を向けるとそこには家は無かった。正確に言えば家という表現は相応しくない。そこにあるのは城であったから。
「わー！　おっきー！」
「ヒーホー！　でっかいホー！　オイラが王様になったらあれぐらいのが欲しいホー！」
「ヒ～ホ～。君には大き過ぎない～？」
初めて見る城に喜ぶピクシーたち。それとは反対にギャスパーはあまり嬉しそうではない。
「うう……あんな大きくて広い所にこれから行くのか……きっとヒトがいっぱい待っているんだろうな……ヒィィィィ……段ボール、段ボール箱が欲しい……」

「……ギャー君もいい加減段ボール離れをするべき」
「いやだぁぁぁ！　段ボールは僕の第二の故郷なんだぁぁぁ！」
世にも情けない台詞を言いながら涙目になるギャスパーを見て、小猫とジャックランタンは口を揃えて言う。
『へたれ』
「う、うわぁぁぁぁぁぁぁん！　小猫ちゃんとランタン君がいじめるぅぅぅ！」
泣き叫びながら何故かシンの腕に抱きつくギャスパー。
「あははは。懐かれているね、間薙君」
「……まあな」
邪険にする訳にもいかずされるがままのシン。それを木場が微笑ましく見ながら言った。
城周辺にまで来ると、非現実的な光景がより非現実さを増す。
見たことも無い種類の花が煌びやかに咲き誇り、職人が手間と時間を掛けて造ったと一目で分かる芸術品の様な噴水、その噴水の縁には色彩豊かな鳥たちが羽を休めている。
凡人ならばそれだけで気圧される程に絢爛とした物が、当然の様に至る所に設置してある。

馬車を降りると城までの道に赤いカーペットが敷かれ、その脇に執事とメイドが整列している。
ここまで徹底して来るとシンは一種の滑稽さを感じ、逐一反応するのも馬鹿らしいと考え、目に映るもの全てを流す様にした。
「お嬢様、そして皆さま。どうぞお進み下さい」
会釈しながらグレイフィアが先に行くよう促す。
「さあ、行くわよ。皆、付いてきて」
リアスが赤いカーペットの上に一歩踏み出そうとしたとき、列の間をすり抜けて赤い髪の少年が飛び出し、リアスへ抱き着く。
「リアス姉さま！　おかえりなさい！」
「ミリキャス！　ただいま。大きくなったわね」
ミリキャスと呼ばれた赤い髪の少年を抱き締め、自分と同じ赤い髪を撫でながらリアスは嬉しさと慈愛を混ぜた笑みを浮かべる。
「ミリキャス様。急に走っては転んでしまいますよ」
シンたちにとって聞き覚えのある声。執事とメイドたちが左右に退くと、そこからセタンタが姿を現した。
「だって久しぶりにリアス姉さまに会えるんだもん」

「お気持ちは分かりますが、転んで怪我をされたらリアス様も私もここに居る者たち全員悲しみます」
「セタンタは心配性」
「それが私の仕事ですので」
セタンタはリアスたちの前に立ち、頭を下げる。
「リアス様。お待ちしておりました」
「ええ、ただいま。セタンタ」
突然現れた少年とセタンタ。少年のことが気になり一誠が恐る恐る尋ねる。
「あ、あの、この子は？」
一誠の問いにセタンタが答える。
「この方はミリキャス・グレモリー様でございます、兵藤様。サーゼクス・ルシファー様の嫡男であり、リアス様の甥にあたる方です」
「サーゼクス様の！」
セタンタの説明を聞いて、シンは思わずミリキャスの顔をまじまじと観察してしまう。赤い髪は確かにサーゼクスを彷彿とさせるが、顔立ちはサーゼクスと比べるとあまり似ておらず、幼い故か中性的であり、愛らしさに寄った容姿をしている。
「ほら、ミリキャス。挨拶をして。この子たちが私の新しい眷属よ。そして、そちらの彼

が、私が招いた新しい友人よ」
「はい。ミリキャス・グレモリーです。初めまして」
礼儀正しく挨拶をするミリキャスに一誠やアーシアは緊張しながら自己紹介し、シンとゼノヴィアはいつもと変わらない態度で自己紹介をした。
改めて正面から見るミリキャスの顔。その顔立ちには既視感を覚えた。記憶の中のとある人物とよく似た顔をしている。ふと、シンは背後に目線を向ける。
振り返った視線の先ではグレイフィアがこちらを見ている。が、良く見るとその視線はシンたちに向けられているのではない。リアスに抱き着いているミリキャスに向けられている。
すると、シンの視線に気付いたのか、一瞬グレイフィアがハッとした顔でシンの顔を見るもすぐに顔を伏せてしまった。
それを訝し気に見るシンであったが、次のリアスとミリキャスの会話を聞いて思わずそちらに意識が傾いてしまう。
「ミリキャス。私が居ない間寂しくなかった？」
「いえ。セタンタが遊んでくれるから寂しくはありません」
微笑むミリキャス。すると何か思い出したかの様な表情となる。
「ああ、そういえば少し前にリアス姉さまの御友人がいらっしゃいましたよ？　少し話

をさせてもらいましたが、とても楽しい方ですね」
「……友人？」
ミリキャスの言葉に全員疑問符を浮かべる。そんなことを言われても心当たりがないのだ。
「リアス姉さまたちが来ましたよー！」
ミリキャスが振り返って、その『友人』を呼ぶ。
「おー、やっと来たか。待ちくたびれたぜ」
現れたのは、アザゼルと一緒に魔王領へと向かった筈のマダであった。
「あ、貴方、どうしてここに！」
「元々ここに来る予定だったのに、どうしてはないだろう」
「アザゼル先生とサーゼクス様の所に行ったんじゃないんですか？」
「アザゼルに付き合うのが嫌だったから、途中で列車から飛び降りた」
「ええ……」
一誠が困惑した声を出す。豪快というべきか考え無しというべきか、評するに困る行動力である。
「リアス様。ここで立ち話も結構ですが、そろそろ……」
「そうね。先に屋敷の中に入りましょう」

セタンタの言葉にリアスも同意し、取り敢えず屋敷の中に入ることとなった。
ミリキャスはリアスと手を繋ぎ、嬉しそうに歩いていく。
眷属一同もそれに続き、その後からシンたちやマダも付いていく。
赤いカーペットの上を歩きながらマダが脇に並ぶメイドたちをジロジロと眺めながら歩いていく。尤も彼に目はないのでそういった仕草だけであるが。
するとマダの隣に無言でセタンタが並んだ。
すぐ前を歩いているシンにすら聞こえない程の小声で何やら会話をしている二人。
穏やかさなど皆無であり、背中越しにひりつく様な空気が伝わってくる。
両者の極限られた空間の中で途方も無い殺気が行き交う。
ピクシーやジャックフロストはそれを敏感に察し、恐れる様にシンにしがみ付く。
ジャックランタンも表面上は恐れを出さなかったが、ギャスパーに張り付く様にくっついている様子から、内心では怯えを抱いているようであった。
（一体何を話しているのやら……）
気にはなるが足音ですら掻き消される二人の会話を聞き取れることが出来ず、グレモリー邸に入るまでシンはひたすら耐えるだけであった。

◇

グレモリー邸に入るまでの両者の会話。

「くくくくく。あのミリキャスという坊や、可愛い面して中々肝が据わっているじゃあねぇか。周りがビビっている中で堂々と俺に話し掛けてくるとはなぁ」

「あの方は将来グレモリーの当主となる御方です。器の出来が違いますよ」

「そりゃあ将来が楽しみだ。ただ、真面目過ぎる雰囲気はいただけねぇ。もう少し遊び心が欲しいところだ。ここは一つ俺がそれを――」

「結構です。余計な知識や経験を覚えるのはもっと先で十分なので」

「おいおい。こういうのは学べる内に学んでおくもんだぜ。無駄だと思った経験が将来無駄じゃ無くなるってこともあるもんだ」

「その意見を否定はしません。だが、決めるのは貴方じゃない」

「つまんねぇな。ガチガチな教育をしたって頭の固い奴になるだけだぜ？　上を立つ者には柔軟性も必要だ」

「先程も言いましたが、それを決めるのは貴方じゃない。こういった言い方は気分を害されるかもしれませんが、他所の方があの御方の将来にあれこれ口出すのは止めて頂きたい。仮にあの御方の将来を導く者が居るとすれば、それはあの御方の父君、サーゼクス・ルシファー様か、あの御方の母君だけです」

「そう言われるとますますちょっかいを掛けたくなるなー」
「――あまり調子に乗るなよ」
「ほう？」
「サーゼクス様が招いた客人ならばそれに合った対応はする。しかし、その範疇を超えるようであれば、今度はそれに相応しい対応をこちらでさせてもらう」
「言うねぇ。その殺気だった喋り方、鳥肌が立ちそうになる丁寧口調よりも好ましいぜぇ。お前さんのことがようやく好きになれそうだ」
「周りがどう思っていようがこの際はっきりと言わせてもらう。俺はお前を信用していない。三勢力外の連中が何を考えているのか未だに分からない内は、な」
「いいんじゃねぇの？　お前の言った通り誰が何を考えているのかわかったもんじゃないからなぁ。まあ、俺はそういった争いには興味なんてさらさらないがな。めんどくせぇ」
「……警告はした。もし、不穏な動きを見せたときは覚悟してもらうことになるぞ」
「へへへへへ。そりゃあ楽しみなことで。――ところでよ」
「何だ？」
「お前さん、どっかで会ったことなかったか？　何かそんな気がするんだが……」
「……さあな」

◇

グレモリー邸に案内されてから数十分。シンは持ってきた荷物を部屋に置いた後、グレモリー邸の庭に出ていた。

部屋の中でじっとしているのを退屈に思ったのもあるが、何よりも人一人が過ごすには広過ぎて、豪華過ぎる部屋の中に居ることが逆に息苦しく感じてしまい、気分転換の為に外の空気を吸っていた。

庭には至る所に花が咲き、彫刻や噴水が置かれている。花はどれも手入れが行き届いており、萎れた花や枯れた花が一本も無い。飾られている彫刻も外に置いてあるのに汚れ一つ無く、まるで新品の様であった。

「キャハハハ！」

「ヒーホー！」

一緒に連れてきたピクシーとジャックフロストは早速広い庭をあちこち遊び回っている。何処へ行ってもいつもの態度を崩さない二人にある種の安心感を覚えてしまう。

シンは空を見上げる。相変わらず紫色の空が広がっていた。

冥界には冥界の時間の流れがあるらしいが、転生悪魔や人間界に住んだり喚ばれたり

した悪魔の為に特殊な術を使用して調整しているという。
シンは携帯電話を開き時間を見る。外出しているリアスの父と夕食時に顔を合わせる予定になっているが、まだ数時間ほど先のことであった。
「冥界の空気は肌に合いますか？」
呼び掛けられて振り向く。そこには亜麻色の髪を持った、リアスと酷似した妙齢の女性が立っていた。
「ええ、まあ。ただ、人の世界の空気と比べると少し重みの様なものを感じます」
言葉を選びながらも思った感想を口にする。
女性はそのままシンの顔をジロジロと眺める。気分を害した様子では無かった。その証拠に眺めた後、小さく笑う。
「不思議なものね。人間から転生した悪魔は何度も招いたことがありましたが、人間を私たちの家に招いたのは初めてかもしれないわ」
私たちの家。その言葉が示す通り、この女性はグレモリー家に関係する女性である。名は、ヴェネラナ・グレモリー。リアスと殆ど変わらない外見をしているが、れっきとしたリアスの母親である。
グレモリー邸に入って最初に挨拶されたときは素直に姉かと思っていた。悪魔はある一定の年になれば魔力で自由に見た目を変えることができ、それ故に若い姿でいられ

る。
　一瞬リアスの父と母が並ぶ姿を想像し、何処となく犯罪のニオイがすると思ってしまったのはシンだけの秘密である。
「人間の貴方から見て、冥界はどう見えます？」
　厳密に言えば、シンは純粋な人間とは言い辛い。魔人という得体の知れない存在である。だが、おいそれとは他人に言えないことである為シンはヴェネラナの問いに対しシン個人が純粋に思ったことを言う。
「不思議、という言葉に尽きます。人間の世界ではまず見ることが出来ないものが多々あるので」
「好きになれそうですか？」
「……どうでしょうね。まだ悪魔も冥界もほんの少ししか見ていないので」
　世辞でも言うべき場面であったかもしれないが、シンは率直な感想をつい言ってしまった。しかし、決して間違ったことは言っていないとも思っていた。出会った悪魔もリアスやサーゼクス、ソーナといったお人よしとも言える者、冥界に関してもグレモリー領という上級の悪魔の領土である。それだけで簡単に決めることなど出来はしない。
「そうですか。貴方は真面目な方なのですね」

気分を害した様子も無く逆に笑う。
「そうですか？」
「ええ。貴方の様な人間がリアスの友人で良かった」
面と向かって言われると気恥ずかしさを覚えてしまう。自分ではさして特別なことなどしている訳でも言っている訳でもないと思っていた。
「おばあさま！」
そこにミリキャスが小走りで近寄ってくる。おばあさまと呼ぶことにどうしても違和感を覚えてしまうが、実際にそうなのだから仕方ない。慣れるまで少し時間が掛かりそうだが。
「あら？　ミリキャス。どうしたのかしら？　セタンタは一緒じゃないの？」
「はい。セタンタは少し用があると言っていたので。僕の方は――」
言い辛そうに口籠るミリキャス。その視線はチラチラと遊んでいるピクシーたちに向けられていた。
ミリキャスの視線に気付いたヴェネラナが、シンに目配せをする。シンもまたミリキャスがピクシーたちを見ていたことに気付いていたので、ピクシーたちを手招きする。
すると、二人は遊ぶのを止めてシンの方に近寄って来た。

「なーにー？」
「ヒホ。どうかしたのかホ？」
首を傾げる二人に対し、シンは二人にミリキャスの方を見させた。
「まだきちんと挨拶をしていなかっただろう？　いい機会だから挨拶をしてみたらどうだ？」
「そう言えばそうだね。アタシ、ピクシー。よろしくねー」
「ヒホ！　オイラはジャックフロストだホ！」
二人の自己紹介にミリキャスは頬を紅潮させる。
「こちらこそ初めまして！　凄いです！　妖精と雪精に会えるなんて！」
嬉しそうに挨拶を返す。するとミリキャスは上目遣いでヴェネラナに対し何か言いたげな眼差しを向ける。
何が言いたいのか言葉にしなくても分かったのか、ヴェネラナはミリキャスの真紅の髪を撫でながら言った。
「まだ勉強の時間まで余裕があります。あの子たちと遊びたいのであれば構いませんよ」
「はい！」
無邪気に笑うとピクシーとジャックフロストに駆け寄る。元より人懐っこい二人は

すぐにミリキャスと打ち解け、手を引いて庭の奥へと走っていく。
「貴方の断りも無く勝手なことをしてしまいましたが、今更ですが迷惑では無かったかしら？」
「仲魔のあいつらが良いと言うなら俺が口を挟むことはありませんよ」
　するとヴェネラナはキョトンとした表情となる。
「『仲魔』ですか？　使い魔ではなく？」
「……あー」
　久し振りの反応を見て、シンは自分の失言に気付いた。当たり前の様に言ってきたことではあるが、やはり初めて聞く相手には疑問が浮かぶ言葉なのであろう。
「まあ、何と言いますか……使い魔だと上下関係の様に聞こえるので、対等という意味を込めて『仲魔』と呼んでいます」
「――そうですか」
「変に聞こえるかもしれませんが……」
「いいえ。変ではありませんわ。そう、『仲魔』ですか。良い響きの言葉ですね。やはり、貴方がリアスの友人で良かったと思います」

◇

一誠に与えられた個室。一人で過ごすにはあまりに大きく、充実し過ぎている部屋。しかし、今その部屋は一人では在り得ない賑わいがあった。
天蓋付きのベッドに腰を下ろして、一誠、アーシア、ゼノヴィアの三人が談笑していた。
教会で質素かつ慎ましい生活をしてきたアーシアとゼノヴィアは与えられた個室の広さと豪華さに強い拒否反応を示し、グレイフィアに頼んで荷物を運び入れ、一部屋を三人で使用することになった。
夕食までの時間、こうやって三人で話をしながら時間を潰していくのであろうと共通して思っていた時、部屋をノックする音が聞こえる。
「はい」
返事をして一誠はドアの前まで行き、相手が誰か確認するよりも先にドアを開く。
「どうも」
「セ、セタンタさん？」
ドアの前にはセタンタが立っていた。
「な、何か御用ですか？」
思わず動揺した声を出してしまう。

セタンタという人物は好人物であることは十分知っているが、時折見せる穿つ様な視線を何度も浴びせられたせいで、一誠は若干苦手意識を持ち始めていた。そして何より一誠自身が、セタンタに対しある負い目を持っていたので、それも相まって非常に気まずい思いがあった。

「少しお話を――」

と言いかけ言葉が止まる。セタンタの視線が一誠では無くその奥に居るアーシアとゼノヴィアの方に向けられていた。

「――旦那様が帰って来られる夕食の時間までまだ大分ありますからね。部屋に御友人を招くのも仕方の無いことですね」

状況を説明しているというよりも自分を納得させるかの様に呟く。

「え、ええ、まあ……」

とそこに――

「しかし、本当に広いベッドだ。一人で眠るには大き過ぎるが三人で眠るには丁度良いな」

――ゼノヴィアの不意を突く発言。

「ほう、三人で？」

瞬間、セタンタの声が絶対零度の冷たさを持ち、空気が軋む様な錯覚を覚える。その

声に一誠は心臓が縮み上がる様な気がした。
「ちなみにその三人とは誰と誰ですか？　兵藤様」
「そ、それは」
　セタンタの問いに上手く言葉が出て来ない。まともに顔を見るのも恐ろしく、視線をさげたまましどろもどろとなる一誠。
「ゼノヴィア様、ちなみにそのベッドでは誰と誰と誰が眠るのでしょうか？」
　問う相手が一誠からゼノヴィアに代わる。
「愚問だな。私とアーシア、そして一誠に決まっている。――丁度いいし今晩ここでもう一度私と子作りに挑戦してみないか？」
　ゼノヴィアが場の空気が凍り付く様な発言をさらりと口にする。
「ストップ！　ストップ！　ゼノヴィア！」
　これ以上発言されたら何故か不味いと思い、止めようと振り返る一誠であったが、振り返った瞬間肩を掴まれた。
「――中々、面白いことになっていますね。兵藤様」
　優しく掴まれているというのに、何故か指先一つ動かず、声も出ない。
「そうそう。実は私、貴方とは一対一で話をしたいと思っていたんですよ。貴方の人となりを是非知りたくて。後は、リアス様が人間界や貴方の御宅で普段はどういった様子

なのかも」
　有無を言わせない言葉の圧力。背中越しに尋常では無い気配を放っているが、それを上手く操作し、ゼノヴィアやアーシアには悟らせず一誠にだけ集中して向けている。
「つきましては、アーシア様とゼノヴィア様には大変申し訳ないのですが、少しの間この部屋から席を外してもらいたいのです」
　口調も穏やか、声に険が在る訳ではない。だというのに背中からはひっきりなしに冷や汗が流れ続ける。
「お願い、出来ますか？」
『……相棒、ここは大人しく従っておけ』
　下手に逆らうとどうなるか分からない。そう思ったドライグはセタンタの指示に従う様に促す。尤もセタンタ自身断られた場合、特に危害を加えるつもりは全く無かった。しかし、そういう選択がされない様にわざと威圧を込めて喋っているのではあるが。
　油の切れた機械の様なぎこちない動作で、一誠はアーシアとゼノヴィアに一旦部屋の外に出る様にお願いする。
　二人は不審に思っていたが取り敢えず一誠の願いを聞き入れ、部屋を退出していった。

ドアが閉まるとセタンタは、部屋に備えてある椅子に座りその正面にある椅子に一誠も座る様に促す。
「――さて、何から聞きましょうか……」
一誠にとって長い様で短い時間が始まる。
部屋から出て数十分が経過しようとしていた。部屋のドアの前では退出していたアーシアとゼノヴィアが中の様子を心配しながら時間を潰している。
「どうかなされましたか?」
部屋の前で待っているアーシアたちに気付き、グレイフィアが話し掛けてきた。
「いや、中でイッセーとセタンタが二人きりで話したいことがあると言って席を外し、こうやって待っているのだが……」
「セタンタがですか?」
一瞬目を丸くして驚いた表情になる。すると閉じていたドアが開いた。
「お待たせしました」
中から出てきたセタンタ。この部屋に入って来た時と変わらず穏やかな表情と口調である。
「何か一誠様に御用があったのですか?」
声を掛けられて、初めてグレイフィアの存在に気付いたセタンタは、少々ばつが悪そ

うに視線をグレイフィアからずらす。
「一応、聞きたいことは聞けました」
セタンタは中にいる一誠に一礼した後、今度はアーシアとゼノヴィアの方に頭を下げる。その際――
「頑張って下さいね」
――という励ましの言葉を残してセタンタは去って行った。
「頑張れと言われたが……何を頑張れと？」
「さあ……？」
言葉の意味が分からずに困惑する二人。
「もう問題が無いようなので失礼させていただきます」
グレイフィアも優雅な一礼を見せた後にセタンタの後を追って行った。
「中で何かありましたか？」
付き合いが長いグレイフィアは僅かな表情の変化から、セタンタが不機嫌半分疲れ半分といった状態であることを見抜いていた。
「進展が無さ過ぎて頭が痛い……。俺が、あの娘の恋敵になるかもしれない相手を励ましてどうする……」
一つ屋根の下に複数の女性と暮らし、さぞ周りからチヤホヤされてリアスをやきもき

させていると思い、釘を刺そうかと考えていたセタンタであったが、本人から聞いてみると自分の想像と乖離していたことを知る。

朱乃やゼノヴィア、アーシアから色々されリアスがそれに嫉妬しているのは間違いない。が、肝心の本人がその好意に対し恋愛的なものであると全く気が付いていない。まさかとは思っていたが、一誠宅で会話したときから全く現状が変化していないことにセタンタも驚愕せざるをえなかった。

一誠自身周りが何かしてくることはスキンシップの延長と考えたり、リアスが急に不機嫌になったり怒ったりする理由を察していなかったりと筋金入りの鈍さを露呈している。そのくせ妙な自制心で自らを抑制している。

正直、話を聞いていて目の前の男を殴ってやろうかとセタンタは考えたが、そんな時にサーゼクスとの会話を思い出す。

『彼は女性に対して人一倍の関心を持っている。だがモテたことが無い、それ故に多くの女性を囲むという夢を持った、恐らくモテなかった反動で。しかし運命が巡り巡って彼にもその夢を叶える機会がやってきたが、当の本人は全くそのことに気付いてはいない。何故なら他者から恋愛感情を向けられたことがないから、すなわちモテたことが無いから！』

一応納得は出来る。だがそれでも思ってしまう。

「ハーレム築きたいなんて言うぐらいならせめて女心ぐらい勉強しておけ……！」
「真面目な貴方がそんなことを言うぐらいですから、余程なのですね」
愚痴るセタンタ。グレイフィアしかこの場に居ないせいか、いつも以上に思ったことを口に出してしまう。
「失望しましたか？」
「……いいや」
一誠に対しあまり良い心象を抱いていない印象を与えるセタンタであったが、グレイフィアの問いに対し少し間を置いたが否定する。
「確かに鈍感で乙女心なんぞ全く理解していない男だ。だが――」
セタンタは一誠との会話の中で最も印象に残ったことを思い出す。
『セタンタさん……すみませんでした！　俺……セタンタさんに頼まれたのに部長のことを泣かせてしまいました！』
頭を深々と下げて心底申し訳なさそうにする一誠。聞けば、ヴァーリとのいざこざでリアスを泣かせてしまったと言う。
初耳であった為に驚いたが、一誠を責める気は起きなかった。
少しの間だけであるが戦ったセタンタだからこそ分かる現白龍皇の実力。一誠の実力と比べれば天と地程の差がある。

一誠自身も身を以ってそれを知っているであろうが、それでも自分の不甲斐無さを嘆いていた。
「……女にだらしのない輩は好きじゃない。だが、ああいった愚直さは嫌いじゃない」
「そうですか」
「それでもあの娘を振り回す所は嫌いだがな！」
「……サーゼクス様もリアス様に対して甘いですが、貴方も大概ですね」
「あいつには言うなよ。変な仲間に引き込まれる」
「片足は突っ込んでいると思われますが？」
「俺はあいつほど馬鹿にはなれないさ」
褒めているのか貶しているのか微妙なラインの言葉でサーゼクスを評する。
「まあ、赤龍帝のことは当分放っておく。それよりもすることが出来たからな……」
「先にすること？」
「白龍皇を殺す……あの時、是が非でも殺っておけば良かった」
目を細め、殺意を静かに滾らせる。
「彼は一体何をしたというのですか？」
グレイフィアは、それを若干呆れた表情で見るのであった。

◇

冥界に着いて翌日。

列車や魔法陣を乗り継いで、魔王領にある都市ルシファードに来ており、シンはそこでリアスたちと一緒に若手悪魔、旧家、上級悪魔たちが集う会合に参加――せずに、それが行われている建物の前で待っていた。

理由は簡単。悪魔ではないから、である。

その横には同じ理由でピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、マダが退屈そうな表情で座っている。

彼らが入れないと言われたときリアスが抗議してくれたものの、揉めるのも不味いと思い、シンたちの方から辞退した。

何もせずに待つこと自体非常に退屈なことではあるが、シンにとっては心地好い時間と言えた。

正直、冥界に来てからあまり気の休まる時間は無かった。

昨夜の夕食時は、周りにメイドや執事たちが並ぶ中でリアスの両親らと食事。この時リアスの両親が、一誠を本気で婿に迎え入れる気でいることを知る。当の一誠本人は気付いてはおらず、それを見ていたシンは不用意な発言をしないか内心ひやひやしてい

た。
　都市に着くまでも魔王の妹であるリアスへ常に老若男女問わず黄色い歓声と熱い視線が送られており、間接的とは言え衆目に晒されていたシンは、そういったことに慣れていない為か何とも言えない気疲れを感じていた。
「暇だねー」
「暇だホー」
「暇だよね～」
「ああ、暇。今から街行って遊んで来ようぜ」
　この時間を満喫しているシンとは対照的にピクシーたちは、早くも痺れを切らしていた。
「ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、もう少し待て。マダ、貴方は特に何もせずにじっとしていてくれ」
「何だよぉ。俺だけ差別か？」
「昨日のアレを忘れたとは言わないでしょうね？」
　昨日のアレと言うのは夕食に招かれる少し前に起こったことである。
　メイドに間もなく夕食であることを告げられ部屋から出ると、ついでに部屋が近かったマダも呼ぼうと思い、部屋まで行くとドアをノックし中にいるか尋ねた。

部屋の向こうから返事は無く不在かと思われたが、何やら部屋の中から音や声が聞こえてきた。
はしたない行為だとは分かっているがドアに耳を傾けた。すると中から聞こえてきたのは女性の声。しかも一人や二人ではない。
シンの脳裏にいつぞやの林での出来事が過る。
ドアノブに掴み、回す。鍵は掛けていなかった。
「……何をやっているんですか？」
ドアを開けるとそこにはこの家のメイドと思わしき全裸の女性たちがベッドの上で汗だくで横たわっている。皆、息も絶え絶えといった様子であった。
「勘違いするなよ」
そのベッドの上で寝そべっていたマダは入ってきたシンに動じずに――
「ちゃんと合意の上だ」
――とほざいたのであった。
その時のことを思い出し、シンは苦虫でも噛み潰した様な表情となる。幸い目撃者はシン一人であり、当事者のメイドたちも事が事なだけに喋らず、大事になることは無かった。
（本当にどういう神経をしているんだ。他人の家で）

　他人の家で情事を及ぶ神経も信じ難いが、たった数時間でそこまで親密な関係になれることも信じ難い。どんな奇跡や魔法を使ったのか見当もつかなかった。
「そんな顔するなよ。俺も幸せ、あのメイドたちも幸せ、誰もが幸せ、不幸になった奴なんて誰もいないじゃねぇか」
「理解出来ないです」
「堅物だなぁ。お前さんは」
　口の端を吊り上げて笑みを形作りながらマダは立ち上がるとそのまま歩き始める。
「この辺りをぐるりと散歩してくるわ。ここは地下だし、出入り口はそことそこだけだ。お前の言った通りに外には出ねぇよ」
　乗って来た地下鉄のホームとリアスたちが乗っていったエレベーターを指差し、シンが何かを言う前にさっさと消えていった。
「――自由なヒトだ」
「結構面白いと思うけどなー、マダって」
「オイラもそう思うホー！」
「ヒ～ホ～。ギャスパーもあの大胆さが百分の一ぐらいあればね～」
　シンと違って仲魔たちのマダへの評価は意外に高かった。こればかりは性格の差としか言い様がない。

すると突然大きな破砕音が建物から鳴り響く。一瞬何かの襲撃かと思い身構えるシンであったが、それから暫く時間が経過しても、エレベーターから慌てて誰かが降りて来ることも、警報の類が鳴ることも、警備の悪魔たちが騒然となることも無く、拍子抜けする程簡単に先程の平穏が戻ってくる。
（こういうのも冥界では日常茶飯事なのか？）
初めての冥界である為、いまいちその辺りの線引きが分からない。
再び時間を潰そうかと考えていたとき、エレベーターの扉が開いて中から複数の男女が降りて来る。
「クソッ！　サイラオーグの奴め！　痛ッ！　離せ！　一人で歩ける！」
肩を借りていた男が、怒りを吐きながら乱暴に周りの者たちを払いのけながら前に出る。
逆立った緑色の髪。顔には術式を彷彿させる刺青が入れてある。素肌に上着を直接羽織り、ズボンには煌びやかな装飾品をこれでもかとぶら下げている。若干装飾過多なせいで品が無く見えてしまう。
通常時ならば整った顔つきなのであろうが、今の彼の顔半分は青痣が作られ、腫れ上がっておりそれを台無しにしていた。
先程の音と何か関係あるのかと思い、さりげなく見ていたシンであったが、運悪くそ

の男と視線が合ってしまった。
「ああ！　何だ、お前は！　俺の顔が何か可笑しいのかっ！」
あからさまに八つ当たりの対象として目を付けられてしまう。
「別に何も」
「明らかに見ていただろうがっ！　そんなに俺の顔が可笑しいか！　無様か！」
シンに近寄り恫喝してくる男。しかし、シンにはそんな恫喝に対し微塵も恐怖が湧かなかった。コカビエル、マタドールという敵と交戦してきたシンにしてみれば、彼らの重圧が獅子や虎の威嚇ならば、この男の恫喝など虫の威嚇以下にしか感じない。
自分に対して全く動じないシンに更なる苛立ちを覚える男であったが、そこでふと気付く。
「……お前、人間か？」
シンが人であることを悟る。
「何で只の人間が冥界にいるんだよ！」
「まあ、招待をされたので……」
リアスの名前を出しても良かったが、迷惑が掛かるかもしれないと思い敢えて伏せる。しかし、この判断は正解とは程遠い結果を生む。
「人間如きがなぁ！　俺の前でふざけた態度でいるのも！　冥界〈ココ〉に居るのも気に

食わないんだよ！」
　その瞬間、爆ぜる様に男の全身から魔力が迸った。

◇

　激しい音が広間に響く。
「はぁ……今度は外で八つ当たりか」
　溜息を吐くのは、一目見ただけで鍛え抜かれていることが分かる程逞しく、大柄な肉体を持った黒髪短髪の男性。
　まだ顔付きは若いが年齢以上の貫禄を持っており、紫の瞳は見る者を惹きつける強い輝きを放っていた。
「もう一度灸を据えてくる」
「待って、サイラオーグ」
　男を止めたのはリアスである。
「私たちも行くわ」
「いや、大丈夫だ。ここで眷属たちと茶でも飲んで待っていてくれ。お前たちは、リアスをもてなしていろ」

サイラオーグと呼ばれた男は、自分の眷属たちにそう指示してエレベーターに乗って下に降りて行く。
「行ってしまいましたね」
「もう、サイラオーグったら」
不満そうにするリアスに、ソーナが窘める様に肩に手を置く。
『大王』の名を継ぐ者として、同じ若手悪魔の不始末が許せないのでしょう」
去って行った男の正式な名は、サイラオーグ・バアル。魔王に次ぐ権威を持つ大王バアル家の次期当主であり、リアスとは母方の従兄弟にあたる人物である。
「あのサイラオーグってヒト、強いのか？」
匙が隣にいる一誠に小声で尋ねる。
「会長やお前はまだ来てなかったから知らないけど、ここで揉めていたゼファードルっていう若手悪魔を一撃で伸した」
「ゼファードルってグラシャラボラス家の？　はぁー、上級悪魔っていってもかなりの差があるもんだな」
「ああ、あの人物凄く強くて、それで凄くかっけぇよ！」
「お前がそこまで言うのか……なーんか、――しいな」
「ん？　何か言ったか？」

「いや、別に……」

◇

血の気の多いゼファードルに再び喝を入れようと考えていたサイラオーグ。
表の入口には多くの悪魔たちが居る為、負傷した姿を周りに晒さない為にも地下鉄を使用してひっそりと帰ると予想し、地下まで下りる。
そんな彼の目にエレベーターの扉が開いた瞬間、あるモノが入り込んでくる。
水面を跳ねる水切り石の様に地面を何度も跳ねながら迫ってくる物体。それは丁度エレベーターの目の前で止まり、そこでサイラオーグはそれの正体を見た。
「ゼファードルか？」
白目を向いて口と鼻から流血しているのは、少し前にサイラオーグが殴り飛ばしたゼファードルであった。サイラオーグが殴った場所に新たな拳の跡が刻まれて更に腫れ上がっている。
ゼファードルが飛んできた場所に目を向ける。するとそこに佇む少年一人。
サイラオーグの視線に気付くと少し目を丸くし、しまったと言わんばかりに目を逸らす。

「信じてもらえるか分かりませんが……一応正当防衛です」

修行、地獄

エレベーターから降りて来た男性を見て、シンはどうしたものかと考える。髪は見慣れた黒色、腕や脚、首、体といった目につく全ての箇所は鍛え抜かれ、分厚い。

視線をずらせば、その足元にはヒクヒクと痙攣しながら気絶している男。

二人の素性は分からないが、この建物で上級悪魔たちが会合を行うというのを聞いている為、ほぼ間違いなくリアスと同じか、それ以上の立場にある者だというのが分かる。

気絶させてしまった男に関しては、出来れば穏便に済ませたいと思っていたが、あまりに殺気立って襲い掛かり、周りに被害が出るかもしれないと思い、咄嗟に手が出てしまった。無意識に近い状態での反撃にも関わらず傷を負っている所をきっちり狙っているのは、我ながら容赦が無いと思ってしまう。

「この男は、お前がやったのか？」

降りて来た男がシンに問う。それは責める様なものではなく、純粋に尋ねている口調であった。

「――はい」

少し躊躇いがちに肯定する。すると男は、感心した表情となった。

「この男は、ゼファードル・グラシャラボラスといってな。グラシャラボラス家の次期当主だ。兇児と言われる程日頃の素行が悪い男ではあるが、若手悪魔としてはそれなりの実力を持っている筈なのだが……大したものだな」

男は気絶している男――ゼファードル――の襟首に指先を引っ掛けると、指一本でその体を持ち上げた。ゼファードルもまた成人男性としては大柄と言える体型であったが、それをものともしていない。

「ゼファードルの眷属たちは何処だ？」

「ここにいるぞー」

笑いを含んだ声。男とシンが声の方に目を向けると、口を歪ませて笑っているマダが四本の腕を使って、ゼファードルの眷属たちの肩に腕を回していた。

散歩からいつの間に戻って来たのかは知らないが、眷属たちが誰もゼファードルを援護せず、終わった後も近寄らなかった理由に納得する。

「見ていて気持ちいいぐらい無様に吹っ飛んでったよなぁ、あの男。お前らもそう思うだろう？」

眷属たちの主を侮辱する言葉。本来ならば、侮辱を吐いた者に牙を剥いても可笑しくない。だが、ゼファードルの眷属たちは何も言わず、何も行わなかった。

否、何も出来ないのだ。

眷属たちは皆震えていた。肩を回し、親し気に話し掛けてくるマダの、言葉に出来ない程の存在感を本能で感じ取り、その内包している力に怯えていた。
「なあ？　さっきから俺ばっかり喋っているじゃあねぇか。反応が無いと寂しいだろう？」
それでもゼファードルの眷属たちは何も出来ない。
マダは、その鋭い歯を見せつける様な笑みを眷属たちに向ける。
「なあ――」
「いい加減放したらどうですか？　はっきり言いますが趣味が悪いですよ」
マダの行いにシンが苦言を呈する。他人が怯えている様をいつまでも見せられるのも気分が良くない。
「へいへい。お前さんもアザゼルみたいに口うるさいねぇ」
反論も反抗的な様子も無くあっさりと回していた腕を離し、そのまま肩を竦める。
解放された眷属を見て、そちらに向けて男はゼファードルを投げ放った。
息苦しい緊張から解き放たれた直後に飛んで来た主の姿を見て、眷属たちは慌てふためくも地面に落ちる前に皆でその体を受け止める。
ゼファードルを雑に扱った男に眷属たちは怒りを込めて睨み付けるも、男は全く動じない。

「前にも言ったが、先に主を介抱しろ。それと今度は、そいつが馬鹿な真似をする前に止めろ。盲目的に従うだけが眷属ではない。時には主を正すのも眷属の務めだ」
怒りすら軽々と呑み込んでしまう男の迫力に、眷属たちは何も言い返すことが出来ず、怪我をしたゼファードルを連れて去ってしまった。
男は一仕事終え、息を一つ吐いた後、シンへと近寄った。
「迷惑を掛けてしまって申し訳ない。奴と同じ悪魔として謝罪する。怪我などは無いか？　あればこちらが責任を持って治療させてもらうが」
「いえ、大丈夫です」
目の前に立つ男を見て、シンは改めてその男の大きさを実感する。確かに体格や身長はシンよりも大きい。だがそれだけではない。纏う気配、存在感、迫力、そういった全てのものが濃く、強い。それが合わさり男を更に大きく見せる。
「そうか。怪我一つ無くあの男を倒すとは、やはり大した男だ。俺の名はサイラオーグ・バアル。そちらの名も聞かせて貰ってもいいか？」
「間薙シンです」
「ふむ。その名と気配からしてやはり人間か。珍しいな、ここに転生悪魔ではない人間が来るのは」
顎に手を当て、不思議そうに見て来るサイラオーグ。どう説明しようか考えるが、リ

アスの名を伏せてああなってしまったので、今度はリアスの名を出すことにした。先程のゼファードルとは違い、サイラオーグの親切な態度も話す気になった理由でもある。
「実は、ある上級悪魔の協力者という立場でして、今回はその経緯で冥界に招いてもらっています」
「契約関係ではなく協力関係か。成程、風変りだな。それでその上級悪魔の名は？」
「リアス・グレモリーです」
その名を聞き、サイラオーグは目を丸くする。が、すぐに口元に笑みを浮かべた。
「そうか、リアスか。こうやって言葉を交わすのも縁を感じる」
サイラオーグは、自分とリアスが従兄弟の関係にあることを説明する。
前はリアスの名前を伏せて失敗したが、今回は出して正解であったらしい。尤もあのときのゼファードルの精神状態を考えると、出しても出さなくても同じような結果になっていた可能性があった。
サイラオーグは握手を求めて、シンに手を差し出す。
「縁というものは大事にしていきたい。リアスの協力者というならお前とはこれからも何度か顔を合わせることになるかもしれないからな」
「そうかもしれないですね」
差し出された手を握った瞬間、サイラオーグとシンは同じ言葉が同時に浮かぶ。

『強い』

シンは、その厚みのある手から伝わってくる硬い感触に、研磨された鋼でも握っているかの様な気持ちになる。素人でも分かる程何度も何度も鍛え抜き、それによって定着した拳の強さが、そのまま本人の実力の一片として否応無しに理解させられる。

サイラオーグもまた、握ったシンの手から得体の知れない力を瞬時に感じ取っていた。ゼファードルを撃退したシンを、初めは神器使いか魔術師の類かと思っていたが、全く違うことを知る。

神器とも魔術とも異なる、冥界でも感じたことがない寒気を覚える力。鋭敏に感じたそれにサイラオーグは、親し気であった雰囲気を消し、鋭い眼差しを向ける。

「お前は――」

「おいおいおい。二人で自己紹介して盛り上がっているのはいいけどこっちを無視しないでくれるかぁ？　こう見えても寂しがり屋なんだよ」

サイラオーグが問い掛けようとした瞬間、シンの背後から見下ろしながらマダが口を挟んできた。

「――その巨体。その四本腕。そして、地獄の悪鬼すらも逃げ出す程の凶相。冥界に居れど聞いたことがあります。神すらも退ける阿修羅、マダ殿ですね？」

「ほほう？　俺のことを御存じで？」

「ええ。その高名、何度も耳にしたことがあります」
「そういうそっちも中々の有名人じゃあねぇか。なあ、サイラオーグ・バアル？　こっちも何度も聞いているぜぇ。『大王』の次期当主の話は、よぉ。噂通りいい面構えをしているじゃあねぇか」
「俺など、貴方と比べればまだまだ若輩者です」
「その歳でそこまで出来上がっている奴なんて殆どいねぇよ」
謙遜するサイラオーグをマダが褒める。だが、いつもの様なニヤケた顔はしていない。いつもそのせいで茶化していたり、皮肉を言っている様に見えるが、それが無いせいで言葉により真剣味が増す。
「ところで彼の――」
「おーい、チビ共！　もうあの小僧は居なくなったから出て来い」
何か言い掛けるサイラオーグを遮って、マダは姿を隠している者たちを呼ぶ。するとマダの声に反応して、物陰に隠れていたピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンが様子を窺うように顔を出す。
「もう出ていいの？」
「ヒホ？」
「びっくりしたね～いきなりだも～ん」

ゼファードルが襲い掛かってきた際、シンは仲魔に身を隠す様に指示を出し、それによって対象を自分だけに絞らせていた。害が他に飛ぶのを防ぐ為である。
羽ばたくピクシー、小走りのジャックフロスト、浮遊するジャックランタンがシンの下に戻ると、サイラオーグの方をじっと見た。
「このヒト誰？」
指を差して問うピクシー。初対面の相手に対し失礼な態度であったが、サイラオーグの方は気分を害した様子は無く、ピクシーたちの登場に少し戸惑っていた。
「これ程希少な存在を一度に見るとは……」
ピクシーたちの詳細を知っているのか、驚きと困惑が混じった声を洩らす。
「このヒトは、サイラオーグ・バアルさんだ。リアス部長の従兄弟だそうだ」
「へー、リアスの。アタシはピクシー、よろしくねー」
軽く挨拶をして、ピクシーは最早定位置となっているシンの肩に腰を下ろす。
「オイラは、ジャックフロストだホ！」
「ヒ～ホ～。ジャックランタンだよ～」
ピクシーに続いて手を振りながらジャックフロストは自己紹介し、ジャックランタンはフワフワと動きながら挨拶をする。
「あ、ああ。よろしく」

暫し、ピクシーたちを眺めていたサイラオーグ。するとそんな彼にマダが声を掛ける。
「そういやぁ、何か聞きたい事があったんじゃねぇか？」
マダが言った様に、サイラオーグは二度質問を言い掛けていた。
聞かれたサイラオーグは、少し黙った後険しい表情を緩め、再び微笑を浮かべる。
「いえ。きっと俺の杞憂でしょう。お気になさらずに」
一時向けられた鋭い眼差しは消え、最初のときの様に強い意志を感じられる目に戻る。
「そろそろ会合の時間なので戻ります。所で、何故こんな場所でリアスたちを待っているんだ？　間薙シン。」
「一応、悪魔ではないので」
「お前がリアスの友人ならば多少融通が効く筈だが？　中にはサーゼクス様も居る。俺も口添えすれば大丈夫だと思うが？」
「気持ちだけ貰っておきます。……こういった言い方は癪に障るかもしれませんが、俺は悪魔が全てリアス部長やサーゼクスさん、そして貴方の様な人格者だとは思っていないので」
聞く者が聞けば怒りを覚えそうな台詞だが、それを聞き寧ろ納得した様にサイラオー

グは小さく笑う。
「その考え、決して間違ってはいない。浅慮だったな。詫びよう」
思う所があるのか、シンの意見を否定ではなく肯定する。
「また会おう」
サイラオーグは、そう言い残して建物の中へと戻っていった。
「あー、やだやだ」
居なくなると同時にマダは、嫌気が差すといった表情となる。
「何が気に入らないんですか？」
「あの面構えだよ。年不相応な面。どれだけ苦労してきたのか一目で解っちまう。あんな面にならなきゃいけなかった事情や環境のことを少しでも考えると、なあ」
長い舌を出しながら不満を漏らす。
「俺はな、笑える不幸ならいいが。笑えない不幸は話をされるのも聞くのも考えるのも嫌いなんだよ。酒が不味くなる」
「あー、やだやだ」ともう一度呟きながらマダは地面に寝そべり、これ以上考えるのを止める為に居眠りを始める。
マダが、サイラオーグの顔付きからどんな過去を読み取ったのかは分からない。だが、間違いなく愉快な話ではないことだけは分かった。

悪魔たちが集う建物を見上げながら、一体どのような会合が行われているのか沈黙の中で考えるのであった。

◇

サイラオーグと言葉を交わしてから約二時間が経過した。

ピクシーたちは相変わらず三人で戯れ、マダは寝息を立てている。

あとどれくらいなのかと若干退屈を感じ始めてきたとき、建物のエレベーターが開く。すると、中からソーナたちが現れた。

「あら？　姿を見ないと思っていましたが、ここに居たんですか？　間薙君」

建物前で待っているシンの姿を見て、ソーナは意外だという表情を浮かべていた。

「お前、グレモリー部長たちをずっとここで待ってたのか？　はぁ、よくこんな何も無い所で待っていられるな」

少し呆れた様子でシンを見る匙であったが、シンの方は匙を見て違和感を覚えた。いつも以上に表情が険しく見え、声も不機嫌そうに聞こえる。

匙だけではない。ソーナの眷属たち全員、妙に刺々しい気配を纏っている。この中で平静でいるのはソーナと椿姫ぐらいであった。

（何かあったのか？）

会合で気に入らないことでもあったのかと思ってしまう。

「リアスたちならば、来るのにもう少し時間が掛かりますよ。サーゼクス様とお話をしていたので」

「そうですか」

「所で――」

ソーナの視線が、シンから寝そべっているマダの方に向けられる。ソーナたちとマダは初対面であった。

「あの方はどなたなんですか？」

「あのヒトは――」

「この姿で会うのは初めてだが、お前さんらとは一度会っているぜ？　ソーナ・シトリー」

「うおっ！」

少し目を離していただけなのにいつの間にか起き、それどころかシンの隣に移動する。その早業に匙が驚きの声を上げた。

「その声……貴方がマダですね」

「ご名答」

冷静に正体を見抜くソーナにマダは、感心した様に軽く拍手をする。
「え……このヒトが？」
マダの名を聞き、匙の目の色が変わる。
「冷静な女は嫌いじゃないぜぇ。どうだい？　このあとお茶でも」
「遠慮しておきます。私たちには早急にするべきことがあるのでその様な時間はありません」
それは残念、と言ってあっさりと引き下がる。元より本気では無かった様子であった。
「するべきことですか？」
「ええ。今から約二十日後、私たちはリアスとレーティングゲームを行います」
それを聞いてシンの頭に疑問が浮かぶ。レーティングゲームについての詳細はあまり知ってはいないが、シンの記憶ではリアスもソーナもまだレーティングゲームに公式参加をしていない筈である。どういう経緯でそうなったのか、全く分からない。
「疑問に思うのも仕方ありません。私たちは、まだデビューすらしていないので」
「何が会合の場であったんですか？」
「掻い摘んで説明しますと――」
ソーナが言うには、会合の場で各若手悪魔が将来の目標について語る機会があったと

いう。

サイラオーグはバアル家から初となる魔王になること。リアスは、近い将来グレモリーの当主となり各レーティングゲームの大会に優勝するという目標を語った。そして、ソーナが語った目標は、一部の特権のみが通えるレーティングゲームの学校を下級、転生悪魔の為に建てたいという目標を語った。

が、この夢を聞いた上級悪魔の御偉方の反応は嘲笑、冷笑であったという。笑った理由はソーナの目標が『夢物語』だからだ。

根本にあるのは下級悪魔、転生悪魔への差別視。下級、転生は所詮上級悪魔という主に仕えるのが常であり、ソーナが言う様な施設を作るというのは、伝統と誇りのある旧家の顔を潰すことになると言ったらしい。

周りから非難される中で助け舟を出したのが、ソーナの姉であり魔王であるセラフォルーと、サーゼクスであった。

セラフォルーの言葉で御偉方を黙らせた後、サーゼクスがリアスとソーナとのレーティングゲームを提案したのである。

(部長も会長も眷属全てが転生悪魔だ。会長がもし部長に勝てたら、転生悪魔への指導力をアピール出来る、という訳か？　惨敗したら言われた通り夢物語として片づけられるかもしれないが……まあ、賭けだな)

サーゼクスの意図をそう判断する。
「悪魔の中でもこの様な差別的な考えはあります。それも一部に限った話ではありません。冥界に蔓延した考えなのです……失望しましたか？」
恥じる様に、自嘲する様に問う。
少し考えた後、シンはこう答えた。
「上級だろうと頭の中身や性格まで上級ではないと分かって、寧ろ親近感が湧きましたよ」
痛烈な皮肉。普段、その様な類の言葉を言わないのでソーナたちは暫しポカンとし、マダは聞いた瞬間に噴き出していた。
「く、ふふふ、はははは！　そういうの好きだぜぇ」
シンの背中を叩きながらマダが上機嫌に笑う。
「……お前もそういうこと言うんだな」
「偶に、な」
物珍しそうに匙が言う。シンとしては、一応場の空気を少しでも緩ませようとして言った皮肉であるが、普段が普段なこともあり逆に妙な空気になってしまった。
「――コホン。場所が場所であったのならば聞き捨てならない台詞でありましたが、この場では無関係なので貴方なりの冗句として受け取らせて頂きます」

わざとらしい咳払いをしてから気を取り直すソーナ。若干ではあるが、先程よりかは表情の固さが抜けた様に見えた。
「それで貴方はどうするんですか？　今回のレーティングゲームは？」
「――ああ、それですか」
レーティングゲームへの参加の意思を聞いてくる。前回、シンがレーティングゲームに出たのはオカルト研究部の存続を願ってのことであり、また相手の人数がリアス側を大きく上回っているからである。しかし、今回は対等な数であり、それにシンが加わる余地は無い。
「大人しく観客席から観戦させてもらいます。リアス部長側には参加しません。申し訳ないですがソーナ会長側にも――」
「ええ。それだけ聞ければ満足です。私も契約を盾にして無理強いをするつもりはありません」
シンの答えに満足し、これで失礼します、と去ろうとするソーナたち。
「ちょ、ちょっと待っててもらっていいですか？」
するとそれを匙が慌てて止める。
「どうしたのですか？　サジ。すぐにでも私たちは対リアスに向けての対策や特訓をしなければならないんですよ？」

「すぐに済みますんで！」
　匙が飛び掛かる様な勢いでマダに接近する。
「おう、どうした？　ヴリトラの小僧」
「マダ――さん！　少しお話いいですか？」
「何だ何だ？　愉しい話なら歓迎だぜぇ？」
　マダの腕を引っ張り、シンたちから少し離れた場所に移動する。
　そこで周りに聞こえない声量でボソボソと小声で会話し始めた。時間にして約三分。短い時間で両者の会話は終了し、戻ってくる。
　マダの表情は変わらないが、匙の方は眉間に皺を寄せ何か考えている様子であった。
「もういいんですか？」
「……」
　ソーナが声を掛けるが、匙の返事は無い。言葉が耳に入らない程深く集中している。
「サジ？」
「え！　あ、はい！　もう大丈夫です！」
　先程よりも少し大きめな声で呼び掛けられ、匙は漸く声を掛けられていることに気付き、慌てて返事をした。
「一体何を話していたのですか？」

「ええと……それは……」
　匙が一瞬、こちらに視線を向けたのに気付く。どうやらソーナやその眷属たち以外には聞かせたくないらしい。
「まあまあ、そう急いて聞く様なことじゃあないだろう？　自分のとこに戻ってじっくり聞けばいいじゃねぇか？」
　言い淀んでいる匙にマダが助け舟を出す。
「……そうですね。先程も言った通りすぐに対策を練らなければならないのでこれで失礼します。間薙君、お元気で」
　ソーナに続いて眷属たちも一礼すると早々に去って行く。
「何を話していたんですか？」
　シンも会話の内容が少し気になり、マダへと尋ねる。
「ひーみーつ。まあ、強いて言うなら、ゲームがもっと盛り上がるかもしれない助言ってやつかな」
　ニヤニヤとしながら、マダは去って行く匙の後ろ姿を眺めているのであった。

◇

「ふふ～」
「ああー」
鼻歌と気持ち良さそうな声が開けた空間に響き渡る。
場所はグレモリー邸の庭の一角であり、そこには日本風に作られた温泉が備えられていた。
会談を終えた一同はグレモリー邸に帰ってくると、出迎えたグレイフィアが温泉を用意していると報告し、ならばと皆で入ることとなった。
湧き出る湯と立ち上る湯気に身を任せながら、体に溜まった疲労を湯船で解かす。
「ふふふふ～」
先程から呑気に鼻歌を歌っているのは、用事を済ませて戻って来たアザゼルであり、十二の黒い翼を全開にして文字通り羽を伸ばしている。
その隣では浮かべた盆の上に酒瓶を並べたマダが、湯船に浸かりながら酒を楽しんでいる。尤も杯に注ぐ様なことはせず直接口を付けて一気飲みするという、風情を一切無視した飲み方をしていた。
少し離れた所では、シンが手拭いを首に掛けて眠る様に目を瞑りながら湯を静かに楽しむ。そんなシンのすぐ前には、桶に入ったジャックフロストが、短い手足を縁に掛けながらゆらゆらと波に揺られていた。

雪精であるジャックフロストは温泉には入れないので、桶に掬った湯をジャックフロストが冷やし、冷水にしてから体を浸している。
その近くには、シンと同じように目を瞑るセタンタ。彼は最初入るつもりは無かったが、マダが半ば強引に誘い、リアスからも入らないかと誘われ渋々了承する形となった。
こちらも瞑想しているかの様に静かで微動だにせず、彼の周りでは水面が一切揺れない。が、何故か手拭いをマフラーの代わりに巻き付けており、妙な怪しさがある。

「イッセー君。背中、流そうか？」
「……何でだよ」
「裸の付き合い、ってやつかな？　――ダメかい？」
「嫌に決まってんだろうが！　上目遣いで聞いてくるな！」
木場が提案し、それを一誠が全力で拒否する。木場は、純真に親睦を深めようと考えているのかもしれないが、湯で紅潮した顔で言っているせいで、一誠には変な意味で捉えられている。
「ギャスパ～。いい加減覚悟決めて行ったら～？　このままじゃあ皆が先に出ちゃうよ～」
「うう……でも……」

「でもじゃな～い。早く行く～。ヒ～ホ～」
脱衣所内で躊躇しているギャスパー。それを何とか説得し出そうとしていたジャックランタンであったが、やがて痺れを切らしたのか鈍い音と共に『キャッ』という短い悲鳴を上げながらギャスパーが脱衣所の外に出る。
「うう……ひどいよ。ランタン君」
頭を擦りながら出て来たギャスパー。どうやら一発殴られたらしい。
出て来たギャスパーを見て、一誠は絶句する。まるで女子の様に胸辺りをバスタオルで隠していた。
一誠の視線に気付き、ギャスパーは頬を赤く染める。
「あ、あまり、こっちを見ないで下さい……」
「男の癖にそんな位置にバスタオル巻いてるんじゃねぇよ！　色々と戸惑うだろうが！」
「え、戸惑うって……ま、まさか僕のことをそ、そんな目で！」
「だあああああああ！　違うって！　いいからさっさと湯に入れ！」
頭を掻き毟りながら温泉に入ることを催促する。
ギャスパーは恐る恐る湯に近付き、足の指先を湯に浸けた途端飛び上がる。
「あ、あついよ！　こんなのに入ったら僕、溶けちゃうよぉぉぉ！」

湯の温度に対し、敏感過ぎる反応を見せる。
「別に入っても溶けたりしないよ」
「さっさと入って来い」
木場は優しく招き、一誠は若干ギャスパーの反応にイラつきながら招く。
ギャスパーは、涙目になりながらも再度湯に入ろうと挑戦する。するとその背後に現れる浮遊体。
『あっ』
「え？」
木場と一誠が声を揃える。それにギャスパーが反応した瞬間、背中に軽い衝撃を受けて湯船の中に落ちて行った。
「いやあああああああああ！　あっつい！　あっついよぉぉぉぉ！　溶けちゃう！　溶けちゃうううう！　溺れる！　溺れるぅぅぅぅ！」
「ヒ～ホ～。いちいちお湯に入るぐらいで躊躇し過ぎ～」
「ひどいよぉぉぉぉ！　ランタンくぅぅぅぅん！」
突き飛ばした本人であるジャックランタンが、悶えるギャスパーを見下ろしながら言った。
一誠は溜息を吐くと、ギャスパーのバスタオルを掴んで引き上げる。

「足がすぐ着く温泉で溺れる訳がないだろうが」
「あ、ホントだ……」
　吸血鬼は流水に弱いという伝承を聞いたことがあるシンであったが、湯の温度で悶えている程度から、ハーフヴァンパイアにはあまり関係ないらしい。
　パニックが収まったギャスパー。すると一誠が掴んでいたバスタオルが解けて、再び湯船の中に頭から突っ込んでいく。
「うあああ！　いやあああああん！　イッセー先輩に剥かれたぁぁぁぁぁ！」
「うおい！　隣に部長たちが居るのに変なこと言うな！」
　一誠が言った通り仕切り板の向こう側は女湯であり、リアスたちもまた現在入浴している。
『イッセー、ギャスパーに変なことをしちゃダメよ』
　クスクスと笑いを含んだリアスのからかい声。こちらの会話はとうに筒抜けであるらしい。
　それを聞いて恥ずかしくなったのか、一誠は顔の下半分まで湯船に沈む。
　すると、照れている一誠の側にアザゼルが近寄っていく。
「はしゃいでんなー。まあ、こんなことが出来る暇なんて今日までぐらいだからはしゃげるうちにはしゃいでおけ」

「ぼうべぇすぼえ〈そうですよね〉」
「みっちりと鍛えられるだろうけど、腹括っておけよ？」
　そこで湯に浸かっていた顔を上げる。
「何か今更ですけど、堕天使総督にアドバイスを受けたり、知らない人は居ないってぐらいのヒトに直接指導されたり、更にはもう一人教えてくれるヒトがいるって、反則的なぐらい恵まれていません？　俺」
「そいつはどうかなぁ？」
「え？」
　何時の間にかマダもまた、アザゼルと同じ様に一誠の隣にいた。
「何だか勘違いしているかもしれないが、俺が誰かにものを教えるのって今回が初めてだからな？」
「ええ！　だ、大丈夫なんですか、それ！」
　いきなりそんなことを言われて一誠は驚く。長年生きている存在だからこそ、そういうのに長けていると思い込んでいたが、ここに来て全くの素人であったことを告白されれば無理も無い。
「まあ、大丈夫、大丈夫。ヒトに教えるのに必要な三つのことをきっちり守っておけば、だいたい上手くいく」

「三つのこと、ですか？」
　マダは腕を一本上げ、指を三本立てる。
「『生かさず』」
　指を一本折る。
「『殺さず』」
　更にもう一本折る。
「『壊さず』の三つだよ」
　見せつける様に三本目の指を折った。
「大丈夫ですよね！　本当にこのヒトに教えられて大丈夫ですよね！　俺！」
「そこらへんの加減は分かっている奴だから大丈夫――な筈だ」
「断言して下さいよ！　ああ……俺、部長たちと再会出来るのかな……」
　物騒な三つの信条を聞かされ、明日に対し不安を抱く一誠。そんな一誠の不安を少しでも和らげようと思ったのか、アザゼルがニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら全く違う話題を上げる。
「ところでよ。前から聞きたいことがあったんだが……」
「何ですか？」
「お前ってリアスの胸を揉んだことがあるのか？　お前ってあいつとヤりたいって言っ

てたし、どこまで進んでいるのかちょっと気になってよ」
女湯に聞こえない声量に抑えながら尋ねる。
「は、はい！　この右手で！」
誇る様に右手を掲げ、かつての感触を思い出すかの様に開閉してみせる。
このとき、静聴していたセタンタが閉じていた目を開き、険しい目付きで二人の会話を注目し始めた。
「そうか――なら、お前は女の乳首を突いたことがあるか？」
『いきなり何を言い出しているんだ？　このヒト？』
正気を疑う様な発言に対し、沈黙しているシン、木場、セタンタ、ドライグがほぼ同じ台詞を胸中で浮かべる。ジャックフロスト、ジャックランタンは全く関心を示さず、ギャスパーは未だに温泉で四苦八苦していてそもそも話を聞いていない。
「――ッ！　い、いえ！　ありません！」
何故か強い衝撃を受ける一誠。
周りの反応を無視して、二人の会話が始まっていく。
「何だよ突いたことがないのか？　言っとくが『ポチッ』とは突くうちに入らないぞ？
『ずむっ』ってやってこそ突いたと言えるんだ」
アザゼルは語る。指が埋没していく様は圧巻だと。突いた瞬間、女は鳴る。『いやー

ん』と。
聞いているだけで脳細胞が死滅していく様な下らない内容であり、傍から聞いていたシンとセタンタは心底うんざりした表情をし、木場は困った様に笑っていた。
引いた周りの反応の中で、一誠だけは食い入る様にアザゼルの話を聞き、一言一句聞き逃さない様に集中している。さながら釈迦の説法でも聞いているが如くであった。
（もう上がろうか……）
聞いていられなくなり、シンは入ったばかりではあるが湯船から出ようかと思ってしまう。
冷めているシンとは対照的に、二人の話はどんどんと燃え上がっていく。
「そんな……そんな世界があるだなんて……！　俺はまだまだでした！」
「自分の未熟さを認めただけましだ。いいか？　女の胸はそれこそ無限だ。天使を容易く堕天させちまう程の魅力も詰まっている」
その堕天した天使本人が言っているせいで、とんでもない説得力がある様に聞こえる。下手をすれば自虐と捉えることも出来るが、言っている本人が一切の悔いを感じさせない表情をしている。
笑えばいいのか、呆れればいいのか、何とも言い難いアザゼルの言葉に、風呂内で微妙な空気が流れる。

　困った様に木場がシンにチラチラと目線を向けてくる。シンは無視しておけ、といった意思を込めた視線を返した。セタンタは気付けば遠くを見詰めており、これ以上頭の中にこの会話を入れることを拒否していた。
「やれやれ……さっきから聞いてりゃあ、随分と程度が低い会話をしてんなぁ」
　二人の会話を黙って聞いていたマダが、否定的な言葉を吐く。真っ先に乗っていてもおかしくない人物のこの言葉に、シンたちは意外と思いながらマダの方を見た。
「どういう意味だ？」
「言葉通りの意味だぜぇ、アザゼル。いくらこいつのレベルが低いからってわざわざ話を合わせる必要はねぇよ」
「……これでも十分だろうが」
「十分？　不十分だろうが。正直、聞いてて呆れたぜ」
　新たな可能性を知り志気を高めた一誠であったが、それを程度が低いと一蹴されて多少頭に血が昇ってくる。一誠個人ならばここまで頭に来ることはなかったが、師事するアザゼルも馬鹿にされたことが余計に怒りを高める。
「……一体どこが低いっていうんですか？」
「突くなんざ、女の胸への入門に対して初歩の初歩。それを高みにあるものとして語っていることが俺には許せねぇんだよ」

『――ん？』

傍から聞いていたシンたちは、微妙に話の流れがおかしいことに気付き始める。

「しょ、初歩の初歩、だって……！　アザゼル先生！　そんなことは――」

ないですよね、と問おうとした一誠。しかし、視線を向けた途端アザゼルは視線を逸らし、申し訳なさそうに唇を噛み締めていた。

「――すまん」

「そ、そんな！」

落雷を受けた様な衝撃が一誠の全身を貫く。揉む、吸う、挟むものがおっぱいであると今まで思っていた。そして、今日ここに突く、鳴らすという新たな二つが加わり、新境地を開けたと思った。だが、実際には女の胸に一歩すら踏み込んでいない状況であることを突き付けられる。

「自分がどれだけ高い山の前に立っているか、それを突き付けなければ成長しないぜ。アザゼル、お前はやっぱり優し過ぎる」

「……自分がこれからどれほどの高みに上ろうとしているのかを知って、もし絶望する様なことがあったらどうする？」

「信じろよ、自分の教え子を。そして、こいつの目を。この目は容易く折れる男の目じゃねぇ」

何やら熱く語り合っているが、それが女の胸のことだと思うと、滑稽を通り越して恐怖すら覚えてしまう。
「……なら、なら教えて下さい！　貴方はどれほどおっぱいを極めているのかを！」
今までの自分を否定された一誠が縋る様な声で、何とも阿呆な質問を繰り出す。
「お前は、女の胸をどうやって評価する？　どうせ大きさ、形、張りの三つぐらいだろう？」
「そ、それが基本じゃないんですか？　ならば貴方は一体何を基準にして評価するんですか！」
「味」
格が……格が違い過ぎる！
マダの即答に一誠は打ちひしがれた。たった一言で分かる、自分とマダとの間にある絶対的圧倒的な差。
まさに極めし者にしか言えない言葉であった。
一誠は無言で湯船から上がり、マダの正面に立つと大理石の上でいきなりその場で土下座をする。
「師匠と呼ばせて下さい！」
圧倒的な差を突き付けられ、一誠の胸中に生まれたのは敬意であった。頂も見えない

遥か高み。そこに立つマダに一誠は少しでも近づきたく弟子入りを志願する。
「……俺の教えは厳しいぞ？」
「どんなことでも耐えるつもりです！」
「そうか、いいだろう。お前に女の胸とは如何なるかを叩き込んでやる」
「はい！　お願いします！　マダ師匠！」
「へっ、敢えて苦難の道を行くか。だが決して諦めるなよ？　諦めたらそこでおっぱい終了だぞ？」
「――はい。はい！」
二人の間で結ばれる師弟関係。そしてそれを暖かく見守る者が一人。熱く滾った情熱を燃やしている一誠であったが、それを見ている方は完全に引いていた。
「ごめん……正直何て言っていいか分からないよ、イッセー君」
「考えるだけ無駄だ、木場。これはそういう次元じゃない」
「ここまで眩暈がする会話は初めてだ……」
『相棒！　戻って来い！　今ならまだ間に合う！　正気になれ！　お前の行こうとしているのは泥沼だ！』
一方で――
「イッセー先輩が何だか輝いて見えます」

「ヒホホホホホ！　ヒホホホホホ！」
「いや～。何ていうか、逆に尊敬しちゃうね～」
ギャスパー、ジャックフロスト、ジャックランタンは、妙な関心を見せていた。
常人には理解し難い青春劇が終わり、男湯に間の様な静けさが起こる。
すると、その静けさを通って隣の女湯からリアスたちの会話が流れて来た。
『あら、リアス。またバストが大きくなったんじゃない？』
『そうかしら――って、触らないでよ、朱乃。そういう貴女だって前よりも大きめのブラに変えたんじゃなかったかしら』
『本来のサイズにしただけよ。彼、大きい方が好きだから。ちょっと大胆になってみただけよ』
『そうね……ぁあん、もう！　いい加減、私の胸から手を離しなさい』
『ごめんなさい。貴女の胸ってとても触り心地がいいからつい……』
『そうなのー？　じゃあアタシもー』
『きゃっ！　だ、だめよ、ピクシー。そこは……』
『おおー、弾む弾む。柔らかーい』
楽しそうにしている朱乃とピクシー。そんな二人に翻弄されながら艶めかしい声を出すリアス。

「……何か喋らないのか？」
沈黙を続けていると女湯の会話を傾聴していると思われるのでシンが口を開くが、その途端真剣な表情をする一誠が口の前に人差し指を立て、静かにというジェスチャーを見せた。余程会話に集中しているらしく、鼻から鼻血を流している。
『いいですね、お二人とも。私はお二人ほど大きくはないので羨ましいです』
『それならば揉むと大きくなるという話を聞いたことがある。試しにしてみようか？こんな風に』
『はぁん！　ゼノヴィアさん！　ダメです！　そんないきなり！　あぁぁ！』
『ふむ。良い触り心地だ。こういった感触ならば男も喜ぶかもしれない』
『へぇー。アタシにも触らせてー』
『よし。右は君に任せた』
『おおー。すべすべー』
『ゼノヴィアさんもピクシーさんも……あっ……ダメで……うぅん……こんなことされるの初めてで……』
朱乃に続いてゼノヴィアも同じようなことをし、アーシアから色のある声が漏れ出す。
一誠も興奮状態が極限にまで達そうとしているのか、女湯を隔てる壁をしきりに見て

いる。覗き穴の一つでも無いか探している様であった。
「女湯があったら覗く。古来より伝わる伝統だな。ここは俺に任せておけ」
一誠の肩に手を置いてからマダが壁に向かっていく。
「おいおい。お前も覗きかよ。やっても結構だが、覗いて満足じゃあスケベとして一流には程遠いんじゃないか？」
「一流を知っているからこそ、たまには敢えて下流なこともしてみたくなるもんだぜ」
そう笑いながら人差し指を立て、勢い良く壁に向かって突き立てる。指が一切の抵抗なく壁に沈む様に入っていくが――
「あっ」
『あっ？』
聞こえてきた、マダのしまったと言わんばかりの小さな声に、皆が聞き返してしまう。
するとメキメキという音が壁から聞こえ始めたかと思えば、壁を支えている支柱が根元から折れ、そのまま女湯の方に向かって倒れていく。
数秒後、盛大に巻き上がる湯。全員の頭上に雨の様に、舞い上がっていた湯が降り注いだ。
仕切りが完全になくなった。女湯側では、何が起こったのか判断が落ち着かずに、呆然としている全裸のリアスたちの姿。

女湯を覗く所か眺める程まで開放されたが、男湯の面々は事が事なだけにこちらもポカンとした表情をしている。
そして、この事態を引き起こした張本人はというと。
「やり過ぎちまった。――てへっ」
可愛らしさなど欠片も感じず、寧ろ腹立たしさを感じさせる台詞を空気も読まずにのたまう。
直後、悲鳴と怒号が上がり、マダに湯、桶、魔力、雷撃、光の槍というありとあらゆる非難が浴びせられた。

◇

風呂場での喧騒も終わり、ピクシー、ジャックフロストと共に床に就いたシン。明日から本格的な修行が始まることもあり、早めの就寝であった。
夢すら見えない程の深い眠り。だが、それもある音で強制的に覚めさせられる。
コンコンというドアをノックする音。寝起きの為、緩慢な動きで上体を起こす。外を眺めるとまだ魔力で出来た疑似月が浮かんでいる。詳しい時間は分からないが、少なくとも夜が明けている時間ではないらしい。

広いベッドで未だに眠るピクシーたちを起こさず静かに降りてドアまで移動し、ドアを少しだけ開いた。
「早くに失礼します」
ドアの向こうにはセタンタが立っていた。よく見る軽鎧を纏った姿だが、その手には槍が握られている。少なくとも冥界に来て武装したセタンタを見るのはこれが初めてであった。
「何か御用ですか？」
「今まで黙っていましたが、私が貴方に『戦い方』を教えることになっております」
「貴方が俺の先生なんですか？」
「先生などと大層なことは出来ません。何せ『魔人』に教えることなど今までもこの先も無いであろうことですからね」
さらりとシンの正体に触れる。
心臓が一瞬跳ね上がったが、表面上は平静を保つ。尤も相手には見抜かれていそうではあった。
「これから貴方に色々教える為の場所に移動します。荷物は……まあ、動き易い格好だけで十分です」
「あいつら――俺の仲魔はどうしましょうか？」

「取り敢えず置いておいて下さい。事情は後でアザゼル様辺りが説明してくれるでしょう」
　取り敢えずセタンタの言うことを聞き、アザゼルから前以って持ってくる様に指示されていたジャージへ、二人を起こさない様に物音を立てないよう素早く慎重に着替える。
「では行きましょうか」
　着替え終えたのを見て、セタンタがドアから離れて行く。シンはその後を追い、ドアの外に出ると二人の顔を一瞬見た後、静かにドアを閉めるのであった。

◇

　その日の朝。グレモリー邸の一角でジャージ姿のリアスたちが同じくジャージ姿のアザゼル、そしてマダと共に椅子に座ってミーティングを行おうとしていた。メンバーはほぼ全員席に座っているが、シンだけが姿を見せない。
「じゃあ始めるか」
　アザゼルがそれに構わずにミーティングを始めようとしていたので、そこにリアスが異を唱える。

「ちょっと待って。まだシンたちが来ていないわ」
「あー、そのことなら――」
「おはよー」
「おはようだホー」
　すると目を擦りながらピクシーとジャックフロストが現れる。
「貴方たち。シンはどうしたの？」
「あれ？　もう来てるんじゃないの？」
「オイラたちが起きたときにはとっくに居なかったホー」
　二人もこのとき初めてシンの不在を知った。
「心配はいらないぞ。あいつは一足先に修行に行っているだけだからな」
「アザゼル先生がここに居るのにですか？」
「あいつの先生はセタンタだよ」
　その一言にリアスの顔色が変わる。
「セタンタがシンを教えるの!?　そんなこと私は聞いていないわ！」
「言ってなかったからな。ちゃんとサーゼクスには通してある。あいつに関しては神器とは関係の無い力だからな。はっきり言って俺の専門外だ。だからどう修行するかは全部あいつに任せてある。まあ、大丈夫だとは思うが……」

そのとき一誠は、隣に座っている木場の顔色が蒼白になっていることに気付いた。それを見て、木場もセタンタから戦い方を教えられていたという話を思い出した。
「なあ、セタンタさんて厳しいのか？」
小声で尋ねる。
「……正直、あまりセタンタ様との修行は思い出したくないかな……セタンタ様は文字通りの実戦派で、教えるというよりも自分で学習させるというやり方だったから……あのとき一体何度死を覚悟したか……」
輝きの無い瞳で遠くを見詰める木場。彼の脳裏に一体どのような修行風景が流れているのか想像し難い。
その後、アザゼルは皆に対し助言を添えながら、その人物に合った訓練方法を書いた紙を渡していく。
リアスは、元々の才能を伸ばす為に基礎を伸ばすことを重視した訓練。そしてレーティングゲームの『王』という指示を出す立場であることから、過去のレーティングゲームの記録を見て、それを記憶し機転、判断力を伸ばす訓練も入っていた。
朱乃に出された助言はシンプルで、自らに流れる堕天使の血を受け入れるということであった。本来、堕天使の力を受け継いでいる為、光の力も使用することが出来るが、朱乃本人がそれを忌み嫌っていることから、今まで使用してこなかった。

対悪魔として光の力を使えば、戦闘力も跳ね上がる。自らに嵌めた枷を外すことが訓練の主な内容であった。

木場は、高い身体能力に加え、メンバー内で唯一自分の意思で禁手化を使用することが出来るので、その禁手化を長時間維持することが与えられた訓練の内容であった。神器のより詳しい扱い方はアザゼルが、剣術の方は木場の剣の師匠から学ぶこととなる。

ゼノヴィアは、デュランダルを今以上に使い熟すこと。そして、用意されたもう一つの聖剣の扱いに慣れることであった。この場ではその聖剣が何なのかは言わず、すぐに次のギャスパーに話を移していた。

「次にギャスパー」

「は、はいいいいいいい！」

悲鳴の様な返事が上がる。

「お前はシンプルに神器の操作を上達させろ。そんで一日も早く禁手化に至れ。お前自身のスペックなら間違いなく到達出来る筈だ。本当に、一分一秒でも早く、せめて自分の命を守れるぐらいには強くなれ」

他とは違ってやたら念を押して言うのに違和感を覚え、つい一誠は口を挟んでしまう。

「でもギャスパーもこの頃神器を暴走しなくなってきましたし、それなりに使い熟して

るんじゃないですか？」
「それは分かっている。だけどな、それじゃあ足りないんだよ。……こいつマタドールの奴に顔も名前もしっかり覚えられているしな」
　ソーナとのレーティングゲームだけではなくこの先のことを考えての指示であったが、その事実が初耳であったリアスたちが、一斉にギャスパーの方を見た。
「貴方、何て相手に目を付けられたの……」
「で、ででで！　おお、覚えられただけで、ぼ、ぼぼぼ僕なんて間薙先輩にくっついていただけのちっぽけな存在でしたし！」
「そんなリップサービスする様な奴じゃない。殺ると言ったら将来必ず殺りに来るぞ？」
「ひ、ひいいいいいいいぃ！　い、今更ながら僕ってとんでもないことをしちゃいましたぁぁぁぁぁぁ？」
「そうビビるな。あのとき一人で駆け付けてみせたんだ、元よりお前には勇気が備わっている。そいつの出し方がちょいと分かっていないだけだ。俺の組んだプログラムでその出し方を覚えて、人前でも動きが鈍らないようにしてこい」
「は、はいいいいいい！」
「という訳でこいつは没収だ」

「あ～れ～」
ギャスパーの膝の上に座っていたジャックランタンの首根っこを掴まえて取り上げてしまう。
「ラ、ランタンくぅぅぅん！」
「この訓練中、こいつとの接触は禁止だ」
「そういうわけだから～頑張ってね～ギャスパ～。ヒ～ホ～」
泣きそうな表情をするギャスパーに対し、ジャックランタンはひらひらと手を振ってドライな反応を見せる。
ギャスパーは目に涙を溜めるもののそれが落ちない様に懸命に耐え、足元にあった段ボール箱を頭から被る。
「ランタン君が居なくても、当たって砕けろの精神でやり遂げてみせますぅぅぅぅ！」
震えた声を出しながら精一杯の強気な発言をしてみせた。
それに満足したアザゼルは、今度はアーシアの伸ばす方向性について話す。
身体能力が低いのでそれを補う基礎訓練。そして、『聖母の微笑』の能力を向上させる為の魔力の向上が提示された。
悪魔ですら癒す『聖母の微笑』はアーシアにとって最大の長所であり、その長所を更に引き出す為に神器の射程距離の拡大、癒しの力そのものを遠くへと送る精密な操作を

習得するのが訓練の主な目的となった。
　次に小猫の番であるが、言う前にアザゼルの表情は少しだけ固くなる。
「お前の『戦車』としての能力は決して低いものじゃない。寧ろ高いと言える。だが、リアスの眷属内で見るとはっきり言って見劣りする。木場、ゼノヴィア、そして禁手化する予定のイッセーにはどう足掻いても勝てない。――このままじゃな」
「……はい。分かっています」
　メンバーの能力について色々と言ってきたアザゼルであったが、その中でも一番低い評価を受ける小猫。顔にはっきり悔しさを浮かばせるも、アザゼルの評を否定せず、自覚があると肯定する。
「あのときは何も言わなかったが、マダがお前に言っていたことについては俺も賛成だ。封じているものを晒け出さなければ、朱乃と同じく停滞するぞ」
　何も言うことが出来ず、小猫は無言となる。するとそこに茶々を入れる様なマダの声。
「難しいこと考えずにパパッと出せばいいだけじゃあねぇか。そんなあれこれ考える様なことかぁ？」
「……何も知らないヒトが軽々しく言わないで下さい！」
　無神経な言葉に小猫は怒りを露わにする。

「じゃあこのままずっと同じ場所でぐるぐる回っているか？　まあ、きっとお優しいご主人様だからとやかく言われないだろうがな。良い飼い主に拾われて良かったなぁ？　こ・ね・こ・ちゃ・ん」

厭味を込めたマダの台詞に、小猫の顔色に憤怒の赤が差す。

小猫は、アザゼルに手渡された特訓内容が書かれた紙を握り潰す様に掴むと席を立ち、この場を離れようとする。

「小猫！」

「……私が一番成長しなければならないのは分かっているので、一足先に特訓の方に入らせてもらいます」

リアスの制止に足を止めるも、そう言い残してグレモリー邸の庭から姿を消した。

「おい」

アザゼルがマダの行為を咎める。リアスたちもマダの行いに非難の目を向けた。

「何だ？」

「言い方ってもんがあるだろうが……」

「だから？　優しく丁寧に下手に出て頭を下げながら『どうか真の力を見せて下さい』とお願いすればいいのかぁ？　違うよなぁ？　あの手の奴は、これでもかってぐらい精神を揺さぶった方がいいんだよ」

「逆に意固地になったらどうするつもりだ」
「周りのことよりも自分のことの方が大事だったってことだろう。はい、それで終わり、だ。レーティングゲームの本番で落ちる駒が確定して戦略も練りやすいだろ？」
　この言い方にリアスも頭に来たのか椅子を倒す勢いで立ち上がる。
「さっきから聞いていれば好き勝手なことを……貴方の無神経な言葉がどれほど小猫を傷付けているのか分かっているの！」
「優しくすれば万事上手くいくなんて思っていないだろうな？　お嬢ちゃん。その情愛の深さは素直に感心するが、あんまり度が過ぎると相手を腐らせることになるぞ」
　感情が高ぶり始め、その身から赤い魔力が電流の様に迸っていく。一方のマダは、殺気立つことも魔力を見せることも無く平然としていた。
　このまま、一触即発の事態に移るのかと思いきや、空気が破裂する様な乾いた音が重くなった場に響き渡る。
　全員音の方を見る。アザゼルが手を打ち鳴らした姿があった。
「おい、マダ。お前を連れて来たのは俺の責任だが自重しておけ。あんまり若い奴らをからかうな。これ以上やると俺直々に地上へ強制送還するぞ。そしてリアス、さっきも言ったがお前は『王』って立場なんだ。どんなことがあっても冷静な思考をしなきゃならない。言葉一つで心を乱されるな。例え乱されても表に出さないようにしろ」

アザゼルの言葉に、マダは肩を軽く竦めた後閉口。リアスの方もハッとした表情になった後、魔力を消して大人しく椅子に座った。
アザゼルが溜息を吐く。
「来る前に説明しておきたかったが、時間切れだな」
天を仰ぐアザゼルに、皆もつられて上を見上げる。
そこにはこちらに向かって急速に迫ってくる巨影があった。
何も聞かされていない一誠たちは、急いでこの場から離脱しようと席を立つが、時既に遅く、その巨影は庭へと降り立つ。
轟く音。それに合わせて衝撃で地面が割れ、数十メートル離れた位置にいる一誠たちの足元にも亀裂が生じる。舞い上がる土煙は周囲を一瞬にして包み込んでいくが、その土煙から現れた一対の巨翼が羽ばたき一つで掻き消されてしまう。
消え去った砂煙の中から現れたのは、身長十五メートル以上もある巨大な怪物。
全身が赤紫色の鱗で覆われており、人の身長程の幅もある脚で地面に立ち、同じく太い腕を組んで堂々と立っている。
規則的に並んだ鋭い歯。身長並みの大きさを持つ広げられた両翼。黄金の角。その姿を見た一誠は思わず叫んでいた。
「ドラゴン！」

現れたドラゴンは、アザゼルの方を見下ろして口の端を吊り上げる。人並以上の表情の変化であった。
「アザゼル、よくもまあ悪魔の領土に堂々と入れたものだ。そして――」
人の言葉を喋るドラゴンの視線は、マダの方に向けられる。
「まさか、お前とこの地で会うことになるとはな。再会は無いと思っていたぞ」
「まあ、世の中何が起こるか分からないってことだなぁ」
旧知の間柄らしく、親し気といった様子で言葉を交わす。
「先生、このドラゴンって……」
「ああ、こいつはタンニーン。前に話したことがあるだろ？」
その名には一誠も聞き覚えがあった。五大龍王がまだ六大龍王と呼ばれていたときの龍王の一匹。『魔龍聖』タンニーン。悪魔側に付いたことから除名された存在である。
「こいつがお前のもう一人の先生だ」
「……えええええええええ！　この巨大なドラゴンがですか！」
言葉の意味が分からずに一瞬沈黙していたが、それを理解したとき絶叫の様な驚きが一誠から上がる。
「久しいな、ドライグ。俺の声は聞こえているだろう？」
一誠越しにその内に宿るドライグへと話し掛ける。

『久し振りだな。懐かしさすら覚えるぞ。タンニーン』
龍王に属していたこともあり、互いに面識のある両者。関係は悪くないらしく、気安く会話している。
その間に一誠は、アザゼルとマダにタンニーンについての詳細を尋ねる。
「転生悪魔の中でも最上級悪魔。タンニーンが吐く火の息は隕石の衝撃以上と言われている。現役で活躍している数少ない伝説級のドラゴンだ。お前にドラゴンの力の使い方を教えるにはこれ以上無い程の存在だな」
「隕石級って……禁手を覚える前に俺死んじゃいません？」
「まあ、安心しろよ。ちゃーんと寸前で止めてやるから」
不安がる一誠に、更に追い打ちを掛けることを言うマダ。
「しかし、鍛えるとなると俺よりもドライグが鍛えるのが筋だと思うが？」
『それでも限界があるな。大体、ドラゴンの鍛え方って言ったら一つしかないだろう？』
「実戦方式か。とことんいじめ抜けば良い訳か。些か拍子抜けだな」
『そう言うがなタンニーン。俺の宿主は想像以上に弱い。何せ俺が目覚める前でも今でも素の魔力では転送魔法陣を跳べない程だからな』
「むっ。ならば難しいかもしれんな。……ある程度力を抑えるつもりだが殺してしまうかもしれん」

物騒なことを言うタンニーンに思わずこの場から逃げ出そうとする一誠だったが、直前にマダに首根っこを掴まれて阻止されてしまう。
「大丈夫だ。即死しなければ俺の方で何とか出来る。三分の二殺しぐらいに収める程度追い込めばいいからよぉ」
「そうか。それならば楽だな」
一誠の意思を無視してどんどんと話は進んでいく。
助けを求める様にリアスたちを見る。
「では各自修行を怠らない様にね」
リアスの方は他のメンバーと話しており、然程心配していなかった。
「イッセーも頑張ってね！」
それどころか見送る気でいた。
「リアス嬢。修行の場としてあそこの山を貸して貰いたいのだが？」
霞んで見える程遥か先の山を指差す。
「ええ、いいわ。存分に鍛えてあげてちょうだい」
「任せろ。死なぬ様に細心の注意は払う」
既にドラゴンと修行することが確定した一誠は、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「ねえねえ。みんなすることは決まったけどアタシたちもすることないの？」
「ヒーホー。オイラたちも修行して強くなりたいホー！」
リアスの眷属たちがそれぞれ修行に向かい、暇になったのかピクシーとジャックフロストがアザゼルに話し掛けてくる。
するとこれに動揺する存在が居た。
「まさか……そこに居るのは雪精――ジャックフロストか？」
ジャックフロストに対し、信じられないといった眼差しを向けるのはタンニーンであった。
名指しをされたジャックフロストはタンニーンを見上げる。
「オイラのこと知っているのかホ？」
「知っているというか……話せば長くなるな。今はこの少年の修行の方を優先させてもらう。アザゼル、済まないが頼みがある」
「何だ？」
「時間が空いたときでいい。この雪精と話す場を設けて欲しい」
「ジャックフロストとか？　別にいいぞ」
タンニーンの頼みに深くは聞かず、アザゼルは快諾する。
「頼んだ。では行くぞ。赤龍帝の小僧、マダ」

「あいよー」
「部長おおおおおおおおおおおー！」
翼を羽ばたかせて飛翔すると、飛びながら一誠は胴体を鷲掴みにされ、マダはタンニーンの足を掴んでぶさらがる。
瞬く間に姿が小さくなる一誠たち。
「何であのドラゴンは、オイラと話をしたいのかホ？」
「さあな。何か事情があるのかもな。――ん？」
「どうしたの？」
急に首を傾げるアザゼル。
「何かタンニーンに言うことがあった筈だったが……何だったかな……」

◇

山へと連れられてきた一誠は、顔色が悪いまま目の前に立つタンニーンとマダを見上げる。
「で、早速鍛えるのはいいが、俺とお前、どちらが先に仕掛ける？」
「いっそのこと二人掛かりでもいいが、そうすると死んじまう可能性があるからなぁ」

「だが、それが一番早く鍛えられる」
「確かに。まあ、その前に灰になる方が早いと思うが」
　二人して相談しているが、会話の内容が筒抜けであるため、待機している一誠の恐怖を呻っていく。まな板の鯉とはこの様な心境を指すのかもしれない、と現実逃避する様にそんなことを考えてしまう。
「取り敢えずは、今どれだけの実力があるのかを知りたい」
「最初はそれだな。おい、イッセー」
「……何でしょうか？　マダ師匠」
「限界まで倍化を使って俺を殴ってみろ」
「え！」
「遠慮することはねぇ。お前が持てる最高の一撃を見せてみろ」
　急に言われて戸惑う一誠であったが、ドライグがそんな一誠に話し掛ける。
『いいからやってみろ、相棒。間違っても『怪我させるかも』などと思っているなよ？　それは思い上がりだ』
　明らかにマダの心配などしていない様子のドライグに、一誠も覚悟を決めて『赤龍帝の籠手』を顕現。そのまま倍化を始める。
『Ｂｏｏｓｔ！』

倍化を始めて数分。今の一誠の限界値まで倍化が完了する。
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』
倍化の力をここで止め、上昇した力を全身に巡らせる。
「行きますよ！」
「いいから来いって」
構える一誠に対し、マダは一切構えず、欠伸をして余裕の態度。明らかにこちら側を舐めた態度であった。
少々カチンと来る態度であったが、一誠は努めて冷静さを保ち、今いる場所から踏み込んでマダを拳の間合いにまで入れると、全身を投げ出す様に左拳を放った。
「まあ、こんなものか」
（……何だこれ？）
渾身の力を込めた左拳は、マダの片手によって受け止められていた。それも掌で受け止めているのではない。揃えられた三本の指の腹でしっかりと止められていた。
止められた一誠は驚いていた。
殴った手から帰ってきた手応え。まるで山、大地、といった巨大な質量を殴った様な感触。マダという存在の内側にどれだけのものが秘められているのか。
「鍛えがいがありそうだ」

マダの空いた手が、一誠の眼前に突き付けられる。そして、避ける暇も無く額を指で弾かれた。
「いっ！」
痛い。という言葉よりも先に体がその場で仰け反り、頭を地面に打ち付け、勢いはそこで収まらず、更に一回転をしてまたもや頭を地面に直撃。それを数度繰り返しながら後方に転がっていき、最後には顔面から岩へとぶつかって止まった。
「おい。死んでないだろうな？」
「大丈夫、大丈夫。加減はした。おい、さっさと起きろよ。これから修行を始めるからなぁ」
遠くに聞こえるマダの声を聞きながら、一誠は自分が地獄に来てしまったことを自覚した。

◇

鬱蒼とした森を前に立つシンとセタンタ。転送魔法陣を通り抜けた先がここであった。
「ここで特訓をするんですか？」

「ええ。ここは私が管理している土地なので、特訓するには色々と相応しい場所かと」
するとセタンタは、シンの前で素早く指を動かす。その動きは凄まじく、残像で描いた文字が浮き上がっている様に見えた。
何かを描き終えると、シンは体に見えない何かが張り付いた様な感触を覚える。
「今のは？」
「敵避けの呪いです。この森はそれなりに物騒ですから」
そう言って森へと入っていくセタンタ。その後にシンも続く。
森へと入った途端、森特有の湿った土や木々のニオイを感じた。そして、その中に混じって鉄の錆びた様なニオイ。何かが腐ったニオイも漂ってくる。セタンタが言った通り、物騒なものが中に潜んでいるらしい。
だが、事前に掛けられた呪いの御蔭でそれらと会うことも無く三十分程歩き、やがて目的の場所なのか、上を覆う森が途切れて空が見える、開けた場所に着いた。
「ここで何を――」
言い掛けた瞬間、振るわれる槍。
驚きと共に体が反応し後方へと下がる。その刹那、目の前を槍の穂先が通過していく。
一体何を、と言う前に踏み込んでくるセタンタが目に入り、更に下がろうとすると、体

が急停止する。
槍の柄頭がシンの足の甲を突いており、それによって地面に縫い止められていた。
体勢を崩したシンに、セタンタは腹部を狙って足刀蹴りを放つ。
腕を突き出してそれを防ぐが、勢いを殺せずにそのまま蹴り飛ばされて、背中から木の幹に叩き付けられた。
肺を突き抜けて来る衝撃に、咳き込みそうになるが、それを堪えて奇襲してきたセタンタを睨み付けた。
「これが特訓ですよ。私と貴方が戦う。それだけの特訓です」
先にセタンタが口を開き、言うと同時に駆ける。
突然仕掛けてきたセタンタに文句の一つも言いたかったが、それを拳に載せて迫るセタンタへと放つ。が、拳が当たる直前にセタンタは地に着くかと思える程体勢を低くして拳を躱し、シンの両足を槍で払う。
衝撃と痛みが足に走ったかと思えば、両足が地面から離れ、宙に浮いた状態となる。すかさずそこに先程と同じ足刀が叩き込められ、再び背中から木の幹に叩き付けられた。
今度はそれだけでは終わらず、体勢が修正されるよりも早く槍の突きが、シンの両膝、両肩、心臓、肝臓、鳩尾、喉へ打ち込まれる。

複数個所狙われているのに、まるで同時に打ち込まれた様な衝撃。穂先ではなく柄頭であった為に致命傷とはならなかった。

「気絶しないとは大したものです」

シンのタフさを褒めつつ側頭部を槍の柄で払い、地面に叩き伏せる。

脳が揺さぶられる感覚を覚えながらも、シンは地面から立ち上がろうとした。

「貴方のことは聞いています。死の淵に追い込まれながらもその度に力を増していたらしいじゃないですか？　だったらどう鍛えればいいのかは簡単ですよね？」

シンが立ち上がろうとしている間に、セタンタは特訓の内容を喋っていく。

「この特訓でとことん貴方を追い詰めさせてもらいます。力を引き出す為に」

立ち上がる最中のシンの頬をセタンタは槍の柄で打ち払う。

地面を転がっていくシン。そのときある違和感を覚える。

「――ですが、貴方を死なせてはならない。という最低限の条件がある為、どうしても私では貴方を追い詰めるのに一歩足りなくなります。そこで考えました」

森の中から感じる視線。それも一つや二つではない。至る所から感じる。

「森に入る前に貴方に敵避けの呪いをしたのを覚えていますか？　あれは、本来かけた対象を呪いの要にして、対象よりも弱い存在を近付けなくさせるものなのですが、貴方

に掛けた呪いには少し手を加えています。『かけた対象の現状をそのまま周りに伝える』様にしています」

その言葉だけで、自分の身に何が起こっているのか理解した。つまり弱まれば弱まる程、この森の住人たちに狩りやすい獲物が存在することを教えることになる。

「ご理解頂けましたか？　これから二週間程私と実戦を繰り返し、それ以外の時間はここに住む魔獣やモンスターたち相手に生き延びて下さい」

あっさりと言うセタンタ。真面そうに見えていたが、戦いに関しては真面ではないらしい。

「マダという方は良いことを言いました。『生かさず、殺さず、壊さず』。私も最大限の努力をしますが――壊れないで下さいね？」

興味、異変

ソレは丸くなって夢の中にいた。静かに寝息を立て、睡眠という快楽に肉体と精神を委ねる。

一秒たりとも油断することが許されないこの森の中であまりに無防備な姿。他のモノが見れば餌が横たわっている様に見えるかもしれない。だが、いくら経とうとも眠っているソレに危害を加えるも獣もモンスターも不自然に思える程現れない。故にソレは熟睡し続ける。

ソレにとっては何にも替えがたい至福の時である――筈であった。

閉じていた目が唐突に開く。伏せていた頭を上げて、流れる風に鼻孔を向けた。

風に乗って漂ってくる部外者のニオイ。

性別は雄。数は二人。

ソレは、微かなニオイだけで正確な人数を計っただけではなく、侵入者の実力までも把握する。

片方の男の実力は飛び抜けたものであり、まともに戦えばソレですら命が危うい。

もう一方は、片方の男と比べると見劣りするが、それでも中々の力を感じた。尤も戦

えば負けない、という自負がソレにはあった。
しかし、気になることもある。見劣りする方のニオイ。初めて嗅ぐ筈のニオイだというのに何処かで嗅いだことが有る、懐かしさを感じさせる不思議なニオイ。
記憶には無い。だというのにまるで記憶〈それ〉以外が覚えている様であった。
暫し、このニオイが何なのか考えるソレであったが、その内考えるのが馬鹿らしくなって止めた。
天涯孤独である自分に、懐かしいと思えるニオイなど無い。
そんな自嘲が思考を止めさせる。
ソレは、ニオイを辿ってその二人が居る方角を正確に視続けていたが、少し経った後に再び頭を下げて眠りの体勢に入った。
まだ森の中心辺りで騒いでいるだけで、ソレの縄張りの場所まで来ていないという理由からであった。
尤もこの森自体、ソレにとっては縄張りそのものと言えるが、争いごとも揉めごとも好まないソレは、森の奥深くを縄張りとしてそこから出ようとはしなかった。
だが、もし縄張りにまで入って来た時には――
グルルル、という低い唸り声が、ソレの喉から聞こえてくる。
ただそれだけのことで、ソレを中心として半径数十メートル内にいる小動物、鳥など

が一斉にそこから離れ、遠くへと逃げて行く。視界に入っている訳でも無いというのに、命の危機を感じた時と同じ全力の逃走であった。

ソレは大きく欠伸をすると目を閉じ、再び眠る体勢に入った。数秒後、寝息が聞こえてくる。

弱肉強食が当たり前であり、魔獣、モンスターたちの戦闘音、威嚇の咆哮、断末魔の叫びが絶えず飛び交う筈のこの森で、そこだけ空間を切り取られたかの如く静寂に支配されるのであった。

◇

シンは大きく息を吸い込み、肺を膨らます。既に何度も胴体に打ち込まれているせいで、筋肉と骨が膨れ上がった肺に押されて激しく痛む。それでも我慢して限界まで膨らませると、痛みもまた最高潮にまで達し、頭の中で火花が散る様に痛みが迸る。

蝕む痛みを載せるかの様に、肺の中の空気を一気に吐き出す。吐息は喉を通過するときには極低温にまで下がり、口から飛び出すときには白い靄となって吐き出された。

牽制や妨害などで良く使用するシンの『氷の息〈アイスブレス〉』。それが一切の加減無しで繰り出される。

まともに浴びれば、凍傷どころか肉体がガラス細工の様に割れることも可能なそれに包まれようとしているセタンタ。

しかし――

「遅いですよ」

――風切り音がしたかと思えば、セタンタに向かっていた氷の息が、振り上げられた槍によって真っ二つに裂かれる。

シンとセタンタの間に出来た道。その中をセタンタが駆ける。

一歩踏み込んだかと思えば、両者の距離はゼロと等しくなる。だが、肝心なのはセタンタが移動した場所はセタンタの間合いであるが、シンにとっては間合いの外であった。

鳩尾狙いの直線の突き。狙いを瞬時に見極めたシンは、素早く後方へと飛び退く。

間合いの外へと逃れたかに思えた瞬間、セタンタは上体を前に倒れ込ませながら握る槍から片手を離し、もう一方の手は柄を滑らせ、柄頭ぎりぎりを掴む。

これによって槍の間合いが伸び、逃れた筈のシンを再び間合いの中へ引き摺り込んだ。

胴体に迫る冷たい輝きをした穂先。何とか逃れようと上体を素早く且つ大きく反らす。が、それでも足らず、確実に刺さろうとしていた。

そこで避けるという考えを捨てると、上体を限界まで反らす。すると体が後ろに倒れ込み始めたのでその反動を利用し、槍の柄を下から蹴り上げた。

セタンタが、槍を片手で握っていたこともあり、目論見通り掲げられる様に上げられる槍。シンもそのまま頭から地面に着地するのではなく、蹴り上げた足の勢いを使って地面まで数十センチという低い位置で宙返りをする。

視界が一回転する。だがこの極短い時間の中で、シンはセタンタから目を離してしまった。

宙返りをし終え、シンがセタンタを視界に収めたとき、セタンタは既に前のめりの体勢から戻って今の位置から半歩ほど前に移動しており、掲げていた槍に離していた手を添え、シンに向かって振り下ろしていた。

その直後、骨の芯にまで響く痛みが両腕に走る。

腕を頭の上で交差し、辛うじて受け止めることが出来たが、流れ込む様な痛みが筋肉を麻痺させ、腕から力を抜けさせる。

その結果、防いだ筈の槍を受け止めきれなくなり、両腕を無理矢理押し下げられて額を強打された。

目の前が白く染まる。ギリギリの所で意識を手放さずに持ち堪えるが、間髪入れずにセタンタの膝がシンの胸部を突き上げた。

肺の中の空気が絞り出される。
更に混濁していく意識。痛みや酸素の欠乏で思考が上手く回らず、途切れ途切れの断片の様な言葉が、脳裏にちらつく。
どうするべきか。何をするべきなのか。どう動くべきか。具体性の無い思考。だが、戦いの経験を重ねてきたせいか、思考の断片の中に具体性を持った考えを見つけ、それを実行する。
膝で突かれた直後、それに抵抗せず逆に脱力することでダメージを多少緩和し、尚且つ膝蹴りの勢いを利用して後方に下がる。
後ろへと倒れ込む様な不格好ではあったが、何とか距離を取ることに成功。そのまま背後の木にもたれ掛かる。
セタンタと戦い始めてどれほどの時間が経過したのか分からない。時間など気にする余裕など全く無く。常に神経を尖らせ、相手の一挙手一投足を見ていなければならなかった。
しかし、それでもセタンタの槍捌きは、シンの上を行く。それを示すかの様にシンの両腕は青黒い痣が無数に出来ており、口の端からは既に固まって赤黒くなっている血の痕。シン自身見ていないが、ジャージの下は恐らく腕の倍以上の痣が出来ている。
上段を狙っているかと思い、そこに守りを固めると、上段から突如軌道が変化して下

段へと変わり、横薙ぎに振るわれた槍が急停止して、そのまま突きへと変わるなど、先程の攻防から分かる通り変幻自在であった。

更にそこに体術も混ぜてくるせいで、読みの難解さが増す。

「反応は上々ですね。しかし、反応だけが先行して思考が追い付いていません。だから、私の槍の動きに惑わされるのです。虚の攻撃かそうでないかの判断が出来ていないせいで。経験不足ですね」

槍を何度も打ち込まれたシンに対しての助言。

簡単に言ってくれるな、と思わず反発心を抱いてしまう。確かに、シンの戦闘経験は少ない。しかし、仮に多かったとしてもセタンタの槍の動きを捉えることが出来たかと聞かれれば、迷わず『いいえ』と答えてしまうだろう。

どの攻撃も殺気が込められて鋭く、それが軌道を変えながら迫ってくる。凶悪なことに槍の軌道が変化する際、一切速度が緩まることはなく滑らかに動きながら、確実にシンの体を痛めつけた。

技術、速度はシンを遥かに上回る。もし勝てる要素があるとすれば、まだ試していない力ぐらいであった。

セタンタは構えながら摺足で僅かに距離を詰める。それだけで、シンはセタンタの槍の間合いの中に入ってしまった。

素手と槍。どちらが有利であるかなど素人にも分かる。一応、シンにも槍の間合いの外から攻撃する手段はあるが、『氷の息』程素早く出せるものではない。準備している間に先手を取られるのが目に見えていた。

熱波剣や光弾を使うには近く。素手で攻撃するには遠い。この絶妙な距離感もまた、シンがセタンタに圧倒される理由であった。

セタンタが軽く息を吐く。と同時に、空気の壁を裂く様な槍の突きが繰り出された。

狙いは胴体。フェイントか本命の攻撃かなど考えている暇など、迫る槍の速さの前では零であり、左眼から得た情報によって起こる反射で避けることしか出来ない。

咄嗟に足を滑らせて横に移動するシン。対象から外された槍はシンの脇腹のすぐ横を通過し、そのままもたれ掛かっていた木に突き刺さる――かに思えたが、槍は木の幹に生えた苔に触れることなく直前に止まり、そこから横薙ぎに払って、柄でシンの脇腹を強打した。

息が詰まる様な痛みと衝撃が走る。散々打たれたことで蓄積されている痛みが、新たな痛みで連鎖して大きな痛みとなり、シンの脳を焼く。

だが、この瞬間こそシンが望んでいた反撃の機会でもあった。

叩き付けられた槍を腕と脇で挟む。万力の様な力を込めて締め上げ、そこから抜けない様にした。

槍を捉えられたセタンタは目を細め、抜こうと手元に引っ張る動きを見せたが、槍の位置が先程と変わらない。

力では勝っていると思い、このまま槍を掴んで接近戦へと持ち込もうと考えたとき、シンは体が浮き上がる様な感覚を覚える。否、実際にシンの両脚は地面から離れて宙に浮いていた。

セタンタは、槍の柄頭付近を片手で掴んだ状態でシンの体を持ち上げていた。軽く見ても標準的な体重はあるシンの体を、見た目は然程変わらない体型をしたセタンタが軽々と持ち上げている。ましてや、シンは槍の先端付近を掴んだ状態である。

見た目とは吊り合わない剛力を、涼し気な顔で見せつけるセタンタ。態々片手だけで持ち上げたのも、シンに対しどれほどの力があるのかを見せつける為のものだと思われる。

槍の先端にいるシンを持ち上げたまま、セタンタが槍を木の幹に向かって振るう。

それに振り回されるシン。しかし、折角掴んだ槍を離すわけにはいかない。

肩から幹に衝突。その痛みで掴んでいた手が緩みそうになる。

歯を食い縛ってそれに耐えるシンであったが、セタンタは、今度は手元に槍を引き距離を詰め、接近と同時に打ち付けた肩に拳打を叩き込む。

痛みが引いていない場所に更なる追い打ちを受けたことで、一時的に腕の機能が麻痺

し、シンの意思とは無関係に指先から力が抜けてしまう。
その瞬間、シンの鳩尾にセタンタの蹴りが打ち込まれ、両足が浮いていたシンは耐え切ることが出来ず、背後にある木に背中から衝突した。
目の前の光景が白黒に反転する中、それでもセタンタの動きを追おうとするシンであったが、気付けば喉元に穂先を突き付けられていた。
刃が浅く皮膚を裂き、そこから一滴の血が垂れる。完全なる詰みの状態であった。
しかし、セタンタはすぐに槍を離し、構えも解く。
「今日は初日ですし、ここまでにしましょうか」
あっさりと特訓の終わりを告げた。
「……ありがとうございました」
負けたことに対し、屈辱を感じないと言えば嘘になるが、それを隠して礼を言う。尤もそんな心境など、セタンタには簡単に見通されているかもしれないが。
「礼なんていいですよ。寧ろここからが本番ですから」
その場で軽く膝を曲げたかと思えば、助走も無しに数メートル上の高さまで跳び上がった。
枝に跳び乗ると、そこからシンを見下ろす。
「言った通り、私はこの場から離れます。次に会うときは、一晩明けてからでしょうね。

きちんとこちらから出向きますので」
　そして立ち去ろうとするが、何かを思い出したかのように踏み止まる。
「ああ、そうそう。一応忠告しておきますが、なるべくこの森の食物は食べない方がいいですよ。草や木の実、モンスターや魔獣の肉は基本的に食べられたものじゃないので。まあ、水ぐらいなら大丈夫な筈です。安心して下さい。食べ物の方は、次に会うときに持ってきますので」
　そこで一旦言葉を区切ると、冷徹な眼差しをシンに向ける。あるいは、死地に怪我人を置いていこうとしているせいでそう見えるのかもしれない。
「『次』があると期待しています」
　そう言い残して、セタンタは枝から飛び、瞬く間に姿を消した。
　セタンタが居なくなったことで、場は一気に静かになる――訳でも無かった。
（いるな……）
　体中が痛み、鉛の様な疲労感がシンを襲うが、それでも周囲への注意は怠ってはいなかった。
　最初に比べると倍以上に感じる視線。どの視線も刺す様にシンへと注がれ、隠し切れない飢えを露骨に感じさせる。
　修行だから死なせない、とは言っていた。実際に戦っていて、セタンタは槍の穂先を

使わず柄や柄頭でシンに攻撃を加えていた。中には、穂先によるひやりとする攻撃もあったが、それがシンに当たることは無かった。

ただしそれは、あくまでセタンタのみに限られた話であり、四方から見てくるモノ達には、全く関係の無い話である。

もしかしたら、何処かでセタンタが監視しており、命の危機に瀕したら助けにくるかもしれない。しかし、仮にそうだとしても、一体どれぐらいの怪我を負えば助けられるのかなど分からない。そもそも、監視しているかもしれないというのは推測であり、本当にこの場から立ち去った可能性もある。

どちらにせよ、当てにして痛い目を見るのは自分自身である。不確定な希望は捨て、取り敢えずは目の前のことをどう対処するか考えることにした。

なるべく視線を向けられている方角に背を向けずに歩き始める。

一歩踏み出す毎に殴られた個所が痛む。肉に針を刺された様な痛み。骨が軋む痛み。ずきずきと疼く内臓の痛み。

このまま動かずにじっとしていれば多少は痛みも治まるが、そんな猶予を周りが与えてくるとは考え難く、少しでも撃退し易い場所を探して移動する。

周りの視線もシンの後を追う。セタンタが言ったことが本当ならば今も尚、シンの弱まった気配を広い範囲に伝え、魔物たちを引き寄せている。今襲わないのは、獲物が気

を緩ませる時間を待っている為と思われた。
（それにしても……）
シンの頭の中に過るのは、先程までの戦いであった。
持てる力を使って戦ったが、結果として掠らせることも出来なかった。無駄なく躱し、反対に的確に攻撃をしてくる。
まるでマタドールと戦った時を思い出させる。
湿気の強い森の中でも汗一つかかず、涼し気な表情で眉一つ動かさない。
（――だったら）
シンは心の中で、この修行に於ける目的を定めた。
それは、この修行が終わるまでの間に、セタンタに文句の付けようが無い完璧な一撃を叩き込むというものであった。
◇
神経を張り詰めさせながらこの場を離れて行くシン。その姿を木々の中に身を隠しているセタンタが見ていた。
推測していた通り、少し離れた場所からシンの動向を監視している。
シンの鋭い感覚にも悟られない程、完全に気配を断っており、それどころかこの森の

住人たちにもその存在を悟られていない。

（さて、どうなるか）

特訓である為、死なせないことが大前提ではあるが、それ以外で手助けをする気は、セタンタの中に全く無い。

それは知り合って日が浅いという理由ではなく、この森で生き残れるぐらいの力量はあると考えていたからである。

実戦形式で戦っていたが、あくまで訓練である為、槍の刃を極力使用しなかった。しかし、それでも戦いの最中、傷を負わせる為に何度か穂先を使用して攻撃をしている。

柄や柄頭のみで攻撃していれば、手を抜いていると思われるかもしれないと思い、適度な緊張感とどうせ手加減してくれるだろうという甘い考えを断つ為のものであった。

ところが予想に反し、先程までの実戦の中でシンが穂先で怪我を負うことは無かった。寸での所で全て躱し切られていたのだ。

セタンタはシンに経験不足であることを指摘したが、それでも数多の攻撃の中にある微妙な殺気を嗅ぎ分けて、回避していたのが分かる。

とは言っても、シン自身も自覚の無い無意識、或いは本能的なものに過ぎない。最も望ましいのは、常にその感覚を戦いの場で使えることである。数十発受けて、一発を完全に避けるだけでは、この先相見えることになるであろう『魔人』たちと互角に渡り合

うことなど出来はしない。
やや鈍い動きを見せるシン。本人は無表情だが、体力の消耗、特訓によって怪我をしているのが見て取れる。
この広い森の中で、あの様な枷を填められた状態でどれほど戦えるのか、ある意味見物であった。
本当に死にそうになれば助けるつもりではあるが――
（手足が二、三本無くなれば流石に手を貸すか）
――その基準は中々に高く、少なくともそういう状況になるまでは手助けをするつもりなど毛頭無かった。
（それとも……）
セタンタの中には、ある迷いがあった。サーゼクスから『魔人』であるシンを鍛える様に言われた時から芽生えた、ある迷いが。

◇

十数分程道無き道を歩く。全く人が踏み入っていない場所なので、足元の雑草が長く伸び、それが足に絡まって必要以上の体力と時間を消費してしまった。

生い茂る木々の枝の隙間から、空を覗く。紫色の空を見ても、今が何時か全く分からない。そもそもセタンタとどれぐらいの時間を戦っていたのかも分からず、時計も持って来ていない。完全に時間の感覚が分からなくなっていた。

常人ならば、当ても無い道を歩き、先の見えない時を過ごすだけでも精神をかなり削られるであろう。加えて、常に何かの視線を向けられている状況、下手をすれば発狂していても可笑しくは無い。

しかし、そんな中でもシンの思考は鈍らない。この森の中で生き残る。そのことだけに意識を傾けていた。

やがて目の前に、シンの背丈の数倍はある巨大な岩が現れる。長い年月を重ねたのか、一面苔に覆われ、至る所に蔦が這っている。

（ここにするか）

そう決めると岩の前まで行き、それに背を預け、ずり落ちる様にして腰を下ろす。背中越しに感じる岩の冷たい感触が、湿気の強いこの森の中で火照った体には心地良かった。

やがて、疲労が限界に達したのか、シンは俯くとそのまま目を閉じてしまう。

場に暫しの間、沈黙が訪れる。

そして、数分後。沈黙を静かに破り、狩人たちが動き始めた。

今まで草むら、木の陰、木の枝等に姿を隠して、シンが隙を見せるのを窺っていた魔物の群れ。無防備な状態と判断すると、飢えの衝動のまま姿を現す。

茶色の体毛を全身に生やしたその生物は、猿と犬を掛け合わせた様な異形の姿をした魔物であった。手足が異常に長く、そのせいか関節が人と比べると一つ多い。人の手足に近い形をしているが、指先からは指と同じ長さの太く分厚い爪を生やしていた。三角に尖った耳を忙しなく動かし、平坦な顔から突き出た口吻からは鋭い犬歯を覗かせている。

現れた数は十数匹であり、まだ背後にも潜んでいる。

狩りに慣れているのか、一歩一歩音を殺してシンへと近付いていく。

やがて、一メートル以内にまで接近すると、その内の一匹が耐え切れなくなったのか大口を開き、頭から噛み砕こうと飛び掛かろうとする。

が、しかし――

（結構な数だな）

――飛び掛かる直前に顔を上げたシンが、大口を開けた魔物の口に腕を叩き込む。

只でさえ大きく開いていた口は、シンの腕を無理矢理突っ込まれたことで更に開き、顎の関節がミシミシ悲鳴を上げ、口の端が裂け始めていた。

触れれば肉すら裂けそうな犬歯も奥にまで腕を入れられたら無意味であり、奥歯で噛

み絞めようとも顎が閉じず、甘噛み程度しか出来なかった。
シンは、魔物が腕に噛み付いたと同時に腕を背後に向かって振るう。振り回される魔物は顔の側面から岩へと激突。顔の形が歪に変形し、砕けた歯を散らしながらシンの腕から離れていく。
仲間を倒され、怒りに燃える魔物たちが唸り声を上げる。しかし、シンはそれを涼し気な表情で流すと、魔物たちに向かって指招きをする。
その挑発を理解したのか、していないのかは分からないが、それに応じる様に魔物たちは一斉に飛び掛かった。
岩を背にしている為、襲い掛かって来る魔物は前方にしかいない。襲ってくる魔物たちが、シンに到達するまでの僅かな間に、端から端まで視線を動かし、敵の位置を把握すると同時にシンも動く。
まず正面から飛び掛かってきた魔物の顎を下から蹴り上げる。間髪入れず左から襲ってきた魔物の頭を鷲掴みにすると、それを鈍器の様に振り回した。
数匹の魔物をそれで叩き返すと同時に手を離し、掴んでいた魔物は近くの木に向けて投げ捨てる。すると今度は、右方向から牙を剥きながら噛み付こうとしてくる魔物の姿を視界の端で捉えた。
牙が到達するよりも先に、その首にシンの肘が突き刺さり、背後の壁に押し当てられ

る。血反吐を吐きながら岩壁を舐める様に落ちて行く魔物。そこに追い打ちの裏拳が頬に叩き込まれた。

集団による強襲を完全に防いだシン。しかし、戦えなくなったモノたちの代わりが茂みの中から現れ、あっという間に数が補充される。

だが、魔物たちもしぶとい獲物と判断したのか一斉に飛び掛からず、様子を見る様にシンの周りを歩き続ける。

警戒しているのは、シンにとっても有り難いことであった。一気に動いたせいもあり、静まっていた痛みがぶり返してきており、回復しつつあった疲れも更に溜まり、内心で顔を顰めている状況である。

数は圧倒的に相手の方が上回っている。一気に片づけてしまいたい衝動に駆られるが、相手の残りが分からない状況で、全力を出し尽くす訳にもいかない。

どうするべきか、そう考えていたとき茂みの奥から魔物が更に一匹出てくる。他の魔物たちに比べると一回り大きく、体毛の色が濃い。

一目見て分かる。今現れたのがこの群れのボスであることを。

どういった意図で姿を現わしたのかは分からない。余裕から来るものなのか、不甲斐無い手下たちに憤りを感じて出て来たのか、自分の手を下さないといけない強者とでも判断したのか。

それにどんな意図があるかなど、この際関係無かった。ボスが出てきた瞬間、シンは行動を起こしていたのだ。

「――――――――!」

肺から空気を絞り出し、それによって声帯を激しく震わせ、喉の奥から出てきたものは、最早人の声ではなく、獣の雄叫びそのものであった。

空気を伝播し、場に浸透していく雄叫びは、音速で魔物たちの耳の奥へと侵入し、その奥の鼓膜を激しく揺さぶる。

本能を刺激し、一瞬硬直状態になる魔物たち。その瞬間、シンはボス目指して走り出していた。

魔物たちの動きが止まっていたのは、時間にして二、三秒ほど。雄叫びによる硬直が解けたときには、目の前を通り過ぎていくシンを見ているだけしか出来なかった。登場と共に出鼻を挫かれたボスは、すぐに気を取り直そうとする。が、その時には既にシンへ地を蹴って飛び上がっていた。

ボスの視界一杯に広がる何か。それがシンの膝であることを気付く間もなく、顔面の中央に叩き込まれる。

鼻が顔の奥へと引っ込み、前歯がへし折れる。

そのままボスを巻き込みながら地面へと着地。全体重を掛けた膝と地面との間にボ

スの頭を挟み込んだ。
何が起きているのか分からないといった様子で、遠巻きに眺めている魔物たち。そんな彼らに見せつける様に、シンは徐に立ち上がる。
押し付けていた膝を上げると血が赤い糸を引き、その下からは顔の中央が大きく陥没したボスの瀕死の顔が露わになる。
ピクピクと細かく痙攣するボスの姿を見て、統率された群れは一気に崩壊。奇声を上げながら散り散りとなって、森の奥へと消えていってしまった。
襲ってきた魔物たちの姿が完全に消えると、シンは疲れた様に溜息一つ吐く。
（何とかなったか……）
疲労や怪我が蓄積している状態で撃退出来たことに、僅かな安堵を覚える。
だが――
ギャアギャアギャアギャアギャアギャアギャア
――けたたましい鳴き声が、安堵する暇を掻き消す様に頭上から聞こえてくる。
見上げると、木の天辺付近から見下ろす複数の目。
剥き出しとなった骨の様な頭部。嘴は無く、人に近い形状の歯牙が持っている。その頭から下は鳥に似た体であり、鴉の様な真っ黒な羽毛で覆われているが、体格は倍近い。
休む暇すら与えずに現れた新たな鳥の魔物。数は先程の獣の魔物と同じくらいおり、

そのせいで緑の木が真っ黒に染まっていた。
先程の戦いで弱ったシンの気配を感じ取ったのか、あるいはこの場に漂っている血のニオイを嗅ぎ付けたのかは分からないが、時間が掛かれば掛かる程不利な状況に追い込まれていくのを、身を以って実感する。
鳥の魔物たちは、鳴きながら枝から飛び立ちそのままシンに襲い掛かる――のではなく、地面に横たわっている傷付いた獣の魔物たちへと襲い掛かった。
獣の魔物の体に歯を突き立て、そのまま頭を持ち上げて肉を引き千切る。当然、獣の魔物たちも弱った体で必死に抵抗するが、群がる鳥の魔物たちによる数の暴力の前には全くの無意味であり、絶叫すらも鳥の魔物たちの鳴き声によって掻き消される。
集まって黒い塊となる鳥の魔物たち。死肉を貪るハゲタカを彷彿とさせる光景であった。
その中でも特に酷いのがつい先程倒した獣の魔物のボスであり、一回り大きな体格をしているせいで群がる鳥の魔物の数が倍近い。姿が見えなくなる程群がっているが、前足だけが唯一黒い塊の外にはみ出ているが、凄まじい勢いで地面に爪を立て、何度も土を掻いていた。
惨状を見ずともそれだけで、悲惨さが容易に想像出来てしまう。
清々しいまでの弱肉強食。文明の中で生きる者ならば、まず見ることの無い光景で

あった。
　自然の環に生きるモノならば仕方の無いとも言える。しかし、自分勝手だと自覚しつつも嫌悪感を覚えずにはいられなかった。
　やがて、食事が終えたのか群がっていた鳥の魔物たちが飛び立ち、近くの木の枝に止まる。
　飛び立った後に残るのは、骨になった獣の魔物たちの亡骸。綺麗な白骨ではなく、さっきまで生きていたせいもあって骨は薄紅色をしており、所々、赤黒い肉が骨に付いているのが余計に気分を悪くさせる。
　枝に止まる鳥の魔物たちはまだ満足していないようであり、片時もシンから視線を外さない。
「喰いたいなら喰わせてやる」
　吐き捨てる様に言うと、シンは右手に魔力を収束させ、魔力剣を形成する。それと同時に鳥の魔物たちは飛び、大きく口を開いて飛び掛かる。
「まずはこいつからだ」
　魔力剣を振り下ろして発動する熱波剣。蓄積された魔力を解放され、飛翔する鳥の魔物たちは揺らぎの様な魔力の波によって包み込まれる。

◇

「はぁ……！　はぁ……！　はぁ……！」

身を隠す程の巨大な岩の物陰に隠れながら、一誠は乱れる呼吸を必死になって整えようとしていた。

訓練用に着てきたジャージはまだ特訓初日だというのにあちこち裂けていたり、穴があいていたり、焦げていたりしている。

なるべく音を出さない様に深い呼吸にしようとするが、疲労と緊張のせいで上手く呼吸を変えることが出来ない。

それでも何とかしようと努力している所に――

「どこだぁー？　何処に隠れたぁ？　イッセェェェェェェ」

地獄の底から轟く様な声で名を呼ばれ、呼吸が止まり、体は硬直、ついでに心臓も止まりそうになる。

「におうぞぉ？　ドラゴンのニオイがするぞぉぉぉ？　近くにいるなぁぁぁぁぁ？」

地を揺さぶる様な足音を立てながら、マダが隠れた一誠を探している。

隠れている一誠は、さながらホラー映画の登場人物になった様な気分で、出来ているかどうかは分からないが必死になって気配を殺していた。

足音が一誠の隠れている岩のすぐ近くにまで来る。早まる心臓の鼓動。他人にすら聞こえるのではないかと思える程強く脈動する。そのせいで大量の汗が全身から滲み出てきた。

見つかるかと思いきや、足音は次第に岩から離れていく。徐々に小さくなっていく足音。やがて遠くへ行ったのか、それも聞こえなくなってしまった。

「……はあ。行ってくれた――」

「見ぃぃぃつけたぁぁぁぁ」

「――た、か？」

緊張が緩んだ絶妙なタイミングで掛けられる声。見上げたそこには、満面の笑みを浮かべたマダが岩越しに見下ろしていた。堪らず絶叫を上げてしまう。

「ほぎゃあああああああああああああ！」

「俺から逃げられるなんて万年早いぜぇ？　イッセー」

逃げなければ、と思いすぐに駆け出そうとする。

「遅い」

マダが岩をつま先で軽く蹴り付ける。それだけでトン単位はありそうな岩が、ボールの様に蹴り飛ばされ、逃げようとしていた一誠の背中に直撃。

「ぐえっ！」

岩がぶつかった衝撃で一誠は、そのまま転倒。蹴られた岩は、遠くの山へと消えていった。
「全く。修行が始まってからずっと逃げてばっかじゃねぇか。逃げ足を鍛えるのも重要かもしれないが、お前さんの第一目標は禁手だろ？　そんな弱腰じゃあ千年修行しても至れねぇぞ？　ほら、かかって来い」
「無理ですって！　初っ端から師匠に全力を軽く受けられたんですよ！　あれが駄目なら俺に打つ手は無いです！　逃げて隠れるしかないです！」
弱気な発言に対し、マダはやれやれと首を軽く振る。
「そういうのが駄目なんだろうが――と言いたいところだが、そうなっちまったのは俺にも責任はあるしな……」
マダは考える様な素振りを見せ、何か思いついたのか、屈んで一誠に顔を近付ける。
「な、何ですか？」
「ほれ、殴ってみろ」
戸惑う一誠の前で、マダは自分の頬を指先で叩く。
「ええっ！」
「自信を付けるには、実際に殴ってみるのが一番だろ？　無駄だと思っていても実際にやると案外違うもんだぜ？　今のお前に必要なのは自信だ。だからほれ、一撃ここに入

れてみろ」
挑発ともとれるマダの提案。あるいは、失った自信を自分の手で取り戻させる様にも思えた。
「……本気で殴っても、殴り返したりはしないですよね？」
マダの頑丈さは知っている為、最初の時の様な躊躇は無い。が、そのときに受けた反撃が相当痛かったのか、一誠は額に無意識に手を当てる。
「しないしない。誓って言う。絶対に『手』は出したりしない」
このときドライグは、マダの言葉に含まれた意図を察したが、一誠には教えずあえて沈黙を続けた。ドライグも、一誠には早く成長して欲しいと願っている。下手に情けは掛けない。
「行きますよ！」
「声掛けも遠慮もいらねぜぇ？」
腰を下とし、左半身を後ろに大きく捻る。まず実戦には使えない大きな予備動作であったが、相手が避けないということを信じ、全力で放つ構えをとる。
今まで逃げ足だけに使っていた倍化の力を左拳へと溜め、それが限界に達したとき、力強く踏み込みながら捻りで得た力を体内で爆発させ、マダの頬に全力の拳を叩き込む。

直撃と同時にその余波が空気を震わし、振動する大気で近くの木々に生えていた枯葉や若葉が一斉に落ちていく。

相変わらず拳から伝わってくる感触は圧倒的であった。しかし、想像していたよりもショックは少ない。それどころか寧ろ清々しさすら感じる。

今まで逃げ続け、隠れ続けてきたことで知らず知らずに溜まっていた鬱憤が、今の一撃で吐き出すことが出来た為なのかもしれない。

マダの言った通り、思っていたときと実際に行ったときの気持ちには大きな差があった。

一誠は拳の先にいるマダを見る。頬に拳が当たっているが特に痛がっている素振りは見せず、気持ち良い――と一誠には見える――笑みを浮かべていた。

「マダ師匠、俺――」

言い掛けた時、胸に軽く押す感触があった。視線を下ろすと、何故か当てられているマダの爪先。

「え？　え？　え？」

「飛んで行け」

次の瞬間、一誠の体は空高く飛んでいた。

「嘘つきいいいいいいいいいいいいいいいい！」

蹴り飛ばされて小さくなっていく一誠の泣き声も遠くへ消えていく。
「約束通り『手』は出してねぇぜ。『足』は出すけど」
屁理屈を言いながら消えていく一誠の姿を、マダはケタケタ笑いながら眺めるのであった。
「いいいいいいいいい！」
空中を高速で飛ぶという中々に新鮮な経験をする一誠。意外なことに蹴られた場所は、思っていたよりも痛みは無かった。蹴り飛ばされたというよりも、足で掬い投げられたといた方が正しい。
尤もそんなことなど、現在進行形で恐怖を味わっている一誠には些細なことである。
「いいいいいいいてぇっ！」
涙混じりの叫びが、痛みの声に上書きされる。
飛ばされていた筈であったが、何故か壁に激突。後頭部に走る痛みで目から火花が散る。
壁伝いに擦り落ちて地面に落下した一誠は、思い切り打ち付けた後頭部を擦りながら体を起こした。
「いってー。何にぶつかったんだ」
「姿を見ないと思っていたが、自分から俺の方に来たか。感心だな」

頭上から掛けられる声。油が切れたオモチャの様な、ぎこちない動きで一誠は頭上を見上げる。

そこには腕組みをして仁王立ちするタンニーンがいた。

「でたぁぁぁぁぁぁぁ！」

「お前の方から来たんだろうが」

絶叫を上げる一誠に、タンニーンは呆れた様子で真っ当なことを言う。

「――まあいい。それでは続きといくか」

タンニーンが軽く息を吸う。それを見た一誠は一瞬で蒼褪め、這う様にしてその場から駆け出す。

ふっ、と蝋燭の火でも吹き消す様な変哲も無い動作で息を吹き出すタンニーン。しかし、そんな軽い行為とは裏腹にタンニーンの口から吐き出されたのは、巨大な火球。一誠の体を余裕で包む程の大きさがある。

「うわぁぁぁぁぁん！」

涙目になりながら前方へ飛ぶ一誠。すると先程まで一誠がいた場所に巨大火球が着弾。爆発と共に火柱が昇った。

火球が触れた場所には人が数人収まる程の穴が出来ており、熱によって赤く変色している。仮に直撃すれば、人ならば骨も灰も塵も残らずに気化してしまうであろう。

「おいおい。せめて弾くぐらいはしてみせろ」
「無茶言わないでくれ！　絶対に無理だって！」
「全力を出せばそれぐらいは出来る。ちゃんとお前の実力を見極めて調整しているつもりだ」
　タンニーンの言った通り、先程までの火球は全く本気ではない。本来の威力の数十分の一ぐらい抑えた威力である。タンニーンの本気のブレスは隕石の直撃に例えられる程であり、今の一誠ならば直撃どころかその余波だけでも即死してしまう。
「嘘だ！　そんなの嘘だ！　俺は信じない！」
「お前自身がそんなに強く否定してどうする？　一番信じなきゃダメだろうが」
　マダとタンニーンという怪物二体に追い込まれているせいで、若干精神が不安定になっている一誠。圧倒的な実力を見せつけられているせいもあり、自分のことをかなり過小評価している。
「……まあ、初日ならばこんなものか。まずは慣れろ。ほら、ほら」
　そう言いながら先程の火球を放つ。今度は一発ではなく立て続けに数発吐かれた。
「どわっ！　うおっ！　ひぃや！」
　情けない悲鳴を上げながらも紙一重でそれを躱し、何とか逃げようと全力で走る一誠であったが、突然目の前に巨大な岩が落下し、逃げ道を塞ぐ。

「なっ！」
「おいおいおいおい。折角、俺が自信付けさせる為に痛い思いをしたのにさっきと全然変わってないじゃねぇか」
現れるマダ。その手に山の様な岩がもう一つ持たれており、それを小石でも投げるかのように片手で放り投げ、一誠の逃げ道を完全に塞いでしまう。
「よっと」
並んだ岩の上に飛び乗り、腰を下ろして一誠を見下ろす。
「ああ。いたい、いたい。とてもいたいなー」
わざとらしく殴られた頬を擦りながら、棒読みで話すマダ。
「嘘だ！　絶対に嘘だ！　全然痛くないでしょ！」
「いやあ？　痛いさ。蚊に刺されたぐらいには、な」
煽ってくるマダに対し、一誠は歯噛みして悔しがるが、一誠自身もその程度だろうなと内心で思っていたので言い返すことが出来なかった。
「来たか。で、どうする？　俺が終わるまでお前は待つか？」
「おいおい。可愛い弟子を独占するのは見過ごせねぇな。ここは仲良く『一緒』にやろうぜ？」
マダの言葉に全身から汗が噴き出る。命懸けの逃走で熱を帯びていた体が一気に冷

たくなるのが分かった。寒くはない筈なのに膝がガクガクと震え始める。
一人相手にするのにあんなに必死であったというのに、もしも二人同時に相手することになるとすれば――
「ドライグ！　どうにか、どうにか出来ないのか！」
己の左腕に何か考えはないかと縋る。
『……俺から言えることは一つだけだ、相棒。――耐えろ』
返ってきた答えは無情なものであった。
「加減はしてやるが……まあ、死ぬなよ？」
前門の龍王。
「大丈夫、大丈夫。死ぬ瀬戸際になったらきちんと止めてやる」
後門の阿修羅。
「じょ、冗談ですよね？　まだ始まったばかりじゃないですか？　いきなりハードなことなんてしないですよね？　何で二人して近付いて来てるんですか？　何で口から火が漏れているんですか？　何で腕四本も振り上げているんですか？　ちょ、ちょっと待って下さい！　こ、心の準備が、ってぎゃあああああああああああああああああ！」
一誠の絶叫が木霊し、山々へと響き渡る。

一誠はこの日のことを振り返り、後にこう語る。『あの日、あの時、あの場所は、間違いなく地獄であった』と。

◇

タンニーンとマダは、無言で目の前の襤褸屑を見下ろしていた。よくよく見ると、その襤褸屑は人の形をしている。というか人であった。より詳しく言えば一誠であった。ただ、あまりに無惨でボロボロになったその姿は、一誠の様なボロ雑巾と称しても過言では無かった。

一誠の様なボロ雑巾もとい一誠は、一応生きているのか微かに動いており、虫の羽音の様な声量で「花畑が……花畑が……」という譫言を繰り返し言っていた。

「やり過ぎた……」

「結構手加減したんだがなぁ？」

後悔の言葉を呟くタンニーン。それとは対称的に悪びれた様子も無く、どこからか瓢箪を取り出すマダ。

うつ伏せになって倒れている一誠を蹴って乱暴に仰向けにさせると、「ひいじいちゃんが……ひいばあちゃんが……」という譫言を、両頬を挟んで口を開かせることで無理

矢理黙らせつつ、そこに瓢箪を突っ込む。
「おい」
「まあ、見てろって」
マダの行いを咎めるタンニーン。それを手で制しながら、マダは瓢箪の中のものを一誠の口の中に注いでいく。
変化はすぐに起きた。
全身にあった傷が瞬く間に治っていき、数秒も経たず完治する。それに伴い失われていた一誠の意識も覚醒するが、自分が何かを飲まされていることに気付くと跳ね起き、その拍子に気管に瓢箪の中身が入って咽る。
「ごほっ！　ぐほっ！　げほ！　げほ！　い、、いっだい何を……」
「やっと起きたか。まずは自分の体を見てみろ」
慌てる一誠を宥めさせる為に、自分の現状を知るよう促す。
一誠は、口元を拭いながら言われた通りに今の自分を見る。そして、目を丸くした。
「治ってる……」
かなりの傷を負っていた筈だが全く無くなっており、痛みすら無い。それどころか全身に圧し掛かっていた疲労も消え、全快となっていた。
『魔力も回復している……おい、マダ。相棒に一体何を飲ませたんだ？』

「ひ、み、つ」
　ドライグの質問に茶化した態度で応じる。きちんと答えるつもりは無いらしい。
『ちゃんと答えろ』
「疑るなよ、ドライグ。タンニーンもそう怖い顔をするな。俺ぁ別にこいつに毒なんて飲ませてねぇよ。この日の為にわざわざ持ってきた秘蔵の薬ってやつさ」
「……取り敢えずは、そういうことで信じてやろう。俺はお前がふざけている奴だとは理解しているが、それでも線引きは出来ると思っている」
　マダを信じ、これ以上追及しないことを示すタンニーン。ドライグもタンニーンと同意見なのかそれ以上何も言わなかった。
「何だこれ、体が軽い！」
　修行を始める前よりも調子が良い体に驚きつつ、軽く跳んだり、体を曲げてみる一誠であったが、不意に背後から肩に手を置かれる。
「それだけ調子が良いんだったら別にいいよなぁ？　二回戦」
　先程まで血色が良かった一誠の顔が、死人を彷彿とさせ蒼白となる。
　ギギギ、と音が出そうな程ぎこちない動きで背後に目を向けると、口角が吊り上がって三日月の如く見事な笑みを見せるマダの姿。
「い、い、い、いやあ……も、もう夜も遅いですし、そろそろ明日に備えて眠った方が……」

「さっきまで十分眠っていただろう？」
「気絶は睡眠に入りませんって！」
　嫌がる一誠を無視して襟首を掴み、そのまま引き摺っていく。一誠も手足をバタつかせたり、岩や木に掴って必死に抵抗するが、マダの力の前には無いに等しい。
「おい。マダ」
　それを見兼ねたのか、タンニーンの鋭い声が飛ぶ。
　一誠は、地獄に仏でも見た様な気持ちで縋る眼差しを向ける。
「まだ基礎体力作りも残っているんだ。ほどほどにしとけよ？」
「わーってるよ。三分の二殺しぐらいには止めておく」
　絶望に更なる絶望が加わる。
「無理ですって！　本当に死んじゃいますって！」
「だから安心しろって。加減はしてやると何度も言ってんだろうが」
「加減してもさっきまで俺死にかけていたじゃないですか！」
「あれでギリギリのラインが分かったな。次はもっとライン際を攻めていくかな？」
　反省している様子は皆無。それどころかさっきよりも追い込むつもりでいた。
「師匠！　俺をボコボコにするのを楽しんでません⁉　俺の生死で遊んでいません⁉」
「まさか！　俺が大事な弟子の命を弄ぶ訳無いだろう？　これでも心を鬼にし、胸の奥

で涙を流しながらやっているんだぜぇ？」
　わざとらしく目尻を拭う仕草を見せる。
『……で、本音は？』
「正直、棒倒しでもしている気分で面白い」
「やっぱり遊んでいるんじゃないですかぁ！」
「タンニーン、一つ賭けでもしないか？　負けた方が飯の準備をするってので」
「……勝敗のつけ方は？」
「こいつが立っていられなくなったら」
「ええっ！」
「生憎、お前と違って修行に遊びを混ぜるのは性に合わん」
　乗り気なマダに対して否定的に見えるタンニーンの態度。一筋の希望が見えたかに思えた。
「勝ち負けはお前が勝手に判断しろ。俺は前と同じことをするだけだ」
　乗り気では無いだけで結局参戦することに変わりは無い。
「じゃあ、始めるか」
　笑うマダと佇むタンニーンの姿は、一誠の目にこの世のどの悪鬼よりも恐ろしく映るのであった。

◇

頭上で爛々と輝いていた月にはっきりとした陰りが見え始めた頃、シンは頬から流れ落ちるものを手の甲で拭う。

手の甲にはべっとりと赤い血が付着していたが、シンに焦る気配は無い。何しろその血はシンのものではない。

彼の周囲で悶えてまともに動けない魔物たちから浴びせられた返り血であった。

血を拭った手を素早く払う。血が飛び、地面に落ちるとすぐに土へと吸い込まれていった。

今のシンは普段よりも呼吸が荒く、息を吸う度に肩が上下する程深い。

あれから多種多様な魔物たちが、シンの命を狙って絶えず襲い掛かってきた。

猪の様な見た目で口から炎を吐く魔物。蟷螂に蟹を足した見た目をした魔物。手足、目鼻口が無い人型をした粘液など、数えるのも億劫になる。

それらを死力を尽くして撃退したシンであるが、当然無傷では済まない。体の至る所に裂傷、火傷、刺し傷、咬み傷がある。先程拭い捨てた血の何割かはシンの血も混じっていた。

ひたすら目の前の敵を打倒していくことに集中していたが、そろそろ体力の限界が近いらしく、体力や集中力が途切れ始めていた。

それでも立て続けに襲い掛かってきた魔物たちもシンに恐れをなしたのか、急に姿を見せなくなる。

張り詰めていた緊張の糸が若干緩んだのか、今まで感じなかった疲労、そして意識に重く圧し掛かる眠気を覚える。特にこの眠気が厄介であり、意識しないと自然に瞼が下がり始め、視界を半分覆っていく。

微睡む快感に浸ろうと脳が必死になってシンの意識を断とうとするが、それを精神力で抗う。いくら敵の襲撃に間が空いたとしても、この場で無防備に寝ることは即死に繋がるのは分かり切っていた。

あとどれくらいこうしていればいいのだろうか。終わりがある筈なのに先が見えないことに若干の焦燥を覚えた時、暗闇の向こう側から新たな唸り声が聞こえてくる。

目を凝らすと闇の中に潜む複数の魔物。鎧を纏った豹。それが魔物への第一印象であった。

魔物たちは、シンの様子を窺う様に左右を行ったり来たりしたかと思えば、軽やかな動きで木に登り、そこから観察してくるものもいた。

その様子から、明らかにこちらの警戒が途切れることを狙っているのが分かる。獰猛

そうな姿に反して、冷静かつ狡猾な思考を持つ魔物であった。
そこから先は持久戦であった。シンは複数いる魔物たちの動きを逐一警戒し、神経を尖らせる。一方魔物の方はというと、時折襲い掛かる様な動きは見せるものの、それ以上深くは入ってこず、嬲る様にシンの周囲を動き回っていた。
何時まで経っても襲い掛かって来ない魔物たちに対し、いっそのこと広範囲を熱波剣で吹き飛ばしてしまおうかという考えも思い浮かぶ。しかし、前の襲撃で既に十数回使用しているせいで、シンの魔力は尽き掛けていた。これ以上使用するとシンの魔力は確実に枯渇する。
この魔物で打ち止めなどという甘い考えはしない。先のことを思うと無駄に魔力を消費することは出来なかった。
吸魔によって相手から魔力を補充する考えもあったが、魔物から魔力を吸収するのは試したことが無い。人以外から魔力を吸収するとどういう結果になるか、不確定要素がある為決断し難い。
思考するシンを他所に、魔物たちはじりじりと距離を詰めていく。嬲る様な行動とも捉えられるが、弱肉強食を当たり前とする世界では慎重とも言える行動であった。
まだ余力があると判断しているシンは、相手の動きから一瞬たりとも意識を離さず、いつでも動ける様に四肢に力を込める。

魔物たちが更に距離を詰めようとしたとき、魔物たちの足元に閃光と共に青白い電撃が着弾。怯んだ魔物たちの体に橙色の火の粉が落ちたかと思えば、それが一気に燃え広がる。

「ヒホッ」

聞き慣れた声と共に魔物たちからシンを守る様にして突如氷の壁が地面から生えたかと思えば、氷は瞬く間にシンの周囲を覆い、ドーム状の防護壁と化す。

「もー、酷いんじゃない？　あたしたちを置いていくのってさー」

耳元で言われる不機嫌そうな声と共に、慣れすら感じる重みが肩に掛かる。

目線を動かせばそこには頬を膨らませているピクシー。

「ヒホッ！　オイラたちを置いていくなんて薄情だホ！　それに一人で修行なんてずるいホ！　オイラも修行したいホ！　修行をさせるホ！」

壁を顕現させたジャックフロストが、両手を上げながら抗議してくる。

「ヒホ～。ギャスパーとは当分会えないからね～。暇になったからこっちについてきたよ～。でもいいよね～？　ボクも君の仲魔だから～。ヒ～ホ～」

何時もの様にマイペースな喋り方で登場するジャックランタン。

シン個人の修行の為、置いてきた仲魔たちが現れたことに、シンは目を丸くする。

何故ここに？　どうやって来た？　などという疑問が浮かぶが、ここに居る以上そんな詮索をするのは最早無意味。
ならばここでシンがするべきことは一つ。
「……少し休む。それまで時間を稼いでくれ」
仲魔に信頼を寄せての一時休憩。
「りょうかーい。ま、ぐっすりと寝てなよ。起きるまであたしたちがちゃんと守ってるからさ」
「頼んだ」
そう言うと今まで重かった瞼を閉じる。そして一秒も待たずにシンの意識は眠りの中に入っていくのであった。

◇

突然の仲魔の乱入を遠くから眺めているセタンタ。
「出来れば一人でいることが望ましかったのですがね……彼個人の能力を高める為にも」
誰かに語り掛ける様に呟く。

「彼女らを連れて来たのは貴方の判断ですか？　アザゼル様」
視線はシンらに向けたまま問い掛ける。その問いに応じて宵闇の中から浮き出る様にアザゼルが姿を現した。
「ここを見つけるのに苦労したぜ。お前が管理している物騒な土地を片っ端から調べる羽目になったからな。御陰でこんな夜遅くになっちまった」
悪びれる様子も無くいつもの態度で話し掛けるアザゼルに、セタンタは誰にも聞こえない程小さな溜息をマフラーの下で吐く。
「それにしても随分と危うい鍛え方をしているな。俺の担当外だから口出しするのもあれだと思うが、実際見てみて考えを改める必要があるかもしれんな」
「……もしもの時は、私がきちんと救出します」
「お前にその気があるならな」
「……」
シンを助けるつもりがない。それを指摘するアザゼルに対し、セタンタは怒ることもせず沈黙する。反論しないことが、アザゼルの言っていることが正しいと肯定しているようなものであった。
「ここに来る前にサーゼクスと話したぜ。セタンタという男は心配になるぐらい真面目な男だってな。もしかすれば、セタンタは彼を将来の脅威と捉え排除することも考えて

いるかもしれないってなことも言っていたな」
「……そうですか」
セタンタは否定しなかった。サーゼクスの指摘は間違いなく正しかったのだ。
サーゼクスから魔人であるシンを鍛える様に言われた時から密かに思っていたこと。しかし、サーゼクスもまた言い渡すと同時にセタンタの内心を読み取っていたらしい。
「サーゼクスの奴が言ってたぜ。セタンタという男はいざとなったら私心を捨ててグレモリーに尽くそうとする危うさがあるってな。……何でもグレモリーに仕える前の記憶が無いっていうじゃねぇか。理由は知らないが、シンの奴を見て既視感を覚えたんだろ？　自分の記憶を取り戻す手掛かりをみすみす屠るのか？」
「サーゼクス様は、そこまで貴方に話しておいでですか。……まあ、話す気持ちも分かるかもしれませんね。貴方の性格とサーゼクスの性格は良く合いそうですから」
「あとこうも言っていたな。尤も私が信じるセタンタならばつまらない真似をしないだろうがね、とな」
「あの方らしい釘の刺し方だ」
僅かに眼を細める。セタンタはマフラーの下で苦笑を浮かべていた。
そこで初めてセタンタはアザゼルの方を見た。
「……彼が私の記憶の手掛かり……それも私が彼を屠ろうとする理由なのかもしれませ

ん。ここで彼が居なくなれば、私は記憶を戻す手掛かりを失う。そうすれば今まで通りグレモリー家に仕えるセタンタのままでいられますので」
「忠誠の為に過去の自分を完全に殺すのか？　真面目真面目と聞いていたが、予想以上だな」
　セタンタの言葉にアザゼルは呆れた表情となる。
「とは言っても今はそんな気はあまり無いです」
「ふーん？　何か心境の変化でもあったか？」
　セタンタの目線が再びシンの方に向けられる。シンは、氷の壁に守られているとはいえ周囲を敵に囲まれている状況で、太々しく睡眠をとっていた。
「未熟な魔人。彼は恐らく他の魔人の中でも最弱でしょう、『今は』。だがこの先どれほどの成長を遂げるのか、魔人としてどれほどの力を振るうようになるのか、それは未知数です」
　実戦形式でのシンとの戦い。そして、無数の魔物相手の死闘。その中で確かに感じ取った力の片鱗。
「不謹慎だと自覚しています。三勢力の未来を思えば馬鹿な考えだとも思います。しかし、私は見てみたいと思ってしまいました。彼の未来〈さき〉を」
　既視感を覚えた彼に対する失った記憶の残滓から来る親近感なのか、あるいは僅かに

触れた力に惹かれたのか、どれが答えなのかはセタンタには分からない。
「ふーん。なるほどねぇ……」
　アザゼルは顎を擦りながら、何処となく納得した様な雰囲気を出していた。
「馬鹿な奴だと笑ってもらっても構いませんよ？」
「いや、気持ちは結構分かるぜ。ジャンルは違うが、俺も神器の研究をしていた過程で何人か神器使いと接触したことがあるが、へったくそな使い方している奴や逆に上手に扱う奴を見ているとついついアドバイスをしちまうし、もっと先が見たいって気持ちにもなるからな。それに今の俺は、元敵のリアスたちを鍛える立場にあるんだぜ？　お前を笑うとなると俺自身も笑い者だな」
　研究者として、オカルト研究部顧問であり彼らを育てる先生という立場としてセタンタに共感を示す。
「そうですか。そう仰って下さると助かります」
　セタンタは乱れ一つ無い整然とした動きでアザゼルに頭を下げる。
「そう改まった態度なんか必要無い。――ところで大丈夫そうか？　あいつ等は」
　話を変え、今も魔獣たちの襲撃を受けているシンらを気に掛ける。
「大丈夫だと思います。独りで戦ってきたときも多少危うさはありましたが生き延びていました。今は彼女らもいます。問題は無いかと」

ただ、という言葉の繋ぎを胸中で付け加える。
セタンタは、シンが魔物たちに襲われていたときからある疑問を抱いていた。
この森には様々な魔物たちによるいくつもの縄張りがあった。森の奥に行けば行くほど、縄張りを守る魔物は強く、あるいは狡猾となっていく。
この森での修行を進める毎に森の奥へと自然に進んで、より強い魔物たちと戦わせる算段であった。
だがどういう訳か、今までシンを襲っていた魔物たちは普段森の中心部辺りに住む森で中堅クラスの強さを持った魔物たちである。
たまたまこの様なことになったのか。あるいは、そうならざるを得ないことが森の中で起こっているのか。
特に不都合があるわけではないが、この森の管理者としていずれ原因を調べなければならないと密かに思うのであった。

◇

分厚い氷の壁に何度も爪や牙が突き立てられる。その度に削れ、罅が入るが、魔力によって創られた氷はその度に修復され、ますます分厚さが増す。

諦めて別の獲物を探してもいいように思えるが、魔物側にとってはある事情で満足に餌を食べていない状況であり、折角の食料をみすみす逃す訳にはいかなかった。
厚い氷に牙を突き立てながら魔物は思う。ほんの前まではこの様なひもじく、惨めな生活を送ってはいなかった。
数ヶ月から全ての状況が一変した。
本来森の奥で暮らしている筈の魔物たちが、何故か自分たちの縄張りを奪いにきた。抵抗空しく居場所を獲られ、仕方なく森の入口辺りに逃げ延び、そこで自分たちよりも弱い獲物を狩っていた。
しかし、そこには自分たちと同じく居場所を奪われた別の魔物たちも逃げてきており、そこで起こったのは熾烈な縄張り争いと獲物の奪い合いである。
それにより多くの仲間たちが消え、更に食料となる獲物も姿を消した。
弱肉強食が当然であるこの森にも暗黙のルールというものがあった。長年森に住む魔物たちが自分たちの種を滅ぼさない様に自然と出来たものである。
だがそれも崩壊し、残るのは完全な無秩序。今までルールを強制する側であった力有るモノたちがそれを破ってしまったのだから仕方ない。
子孫を残すなどという考えなど無く、一日でも生き延びる為に他を滅ぼす。自滅する為に生きているようなものであった。

飢餓で思考も本能も上手く働かない魔物たちはそんなことに気付く筈もなく、一秒でも早く空になった腹を暖かな血や肉で満たしたいという考え一つだけであった。

だからこそ、彼らは選択を見誤る。

何度目かの牙が叩き付けられると氷に亀裂が入った。

これを見た魔物は更に強く牙を叩き付けようとしたとき、氷の壁を突き破って現れた手が口を開こうとしていた魔物の額を鷲掴みにする。魔物は気付いていなかった。氷の亀裂が外側からではなく、内側から生じていることに。

掴んだ手が今度は引っ張り、突き破って出来た小さな穴に無理矢理魔物の頭を引き摺り込む。

頭部よりも明らかに小さな穴に強引に引っ張り込まれれば、当然引っ掛かる部位があったが、引き込む力がそれを氷の壁と一緒に削がしていく。

その痛みに絶叫を上げるが力は弱まらず、やがて穴の中に魔物の頭が完全に入り込む。

壁の向こうには引き摺り込んだ張本人が、冷たい目で魔物を見ながら拳を振り上げて待っていた。

完全に引き際を誤ったことを魔物は悟る。氷の壁の外にある手足に力を入れて頭を抜こうとするが、びくともしない。

直後、魔物の眉間に拳が突き刺さる。
頭が嵌っていた氷の壁諸共、魔物の身体は飛ばされ茂みの奥へと消えていく。
仲間が吹き飛ばされたのを見て、他の魔物たちは怯み、様子を窺う。
氷の壁の中の人物もまた開いた穴から魔物たちの様子を窺っていた。
警戒しているのではない。今から倒す魔物の数を静かに数えているのであった。

◇

セタンタとの修行が始まって一週間以上が経過する。最初の頃は毎回毎回死ぬのではないかという思いをしていたが、恐ろしいことにその辛さにも慣れ始めつつあった。
そして、シンは今日も修行する――
「ねえねえ、あれ買ってー」
「オイラはこれが欲しいホ」
「ボクはアレ～」
――のではなく、街で買い物をしていた。場所は魔王領都市ルシファード。以前リアスたち上級悪魔が集う行事を行った都市である。
いつもだったらセタンタと実戦形式の特訓をしている時間の筈だが、仲魔三人と呑気

に時間を過ごしていた。
尤もこの様な提案をしたのはセタンタ本人からである。
切っ掛けとなったのは二日前のことであった。
セタンタとの修行を終え、疲労困憊となった状態で森の中の魔物たちとひたすら戦う実戦を行う筈であったが、どういう訳かその晩、魔物が一匹たりとも姿を見せなかった。
シンの立場からしてみれば、疲れ切った体を休ませる時間が出来たと喜ぶべきことであったが、何とも言えない気持ち悪さを感じていた。
そして、翌日の晩。前日と同様に全く魔物が姿を見せなかった。
流石に不審に思ってシンの方から魔物たちを探すこととなる。あちこち探した結果、何度か魔物の姿を発見することが出来たが、シンたちを見た途端何処かへと走り去ってしまった。まるで争うことを拒否するかの様に、脇目も振らず脱兎の如き逃げであった。
折角考えた修行が上手く行かなくなってしまったセタンタは、原因を究明する為に森を隈なく調査することを決め、その間シンたちに休みを与えた。
シンは、居ない間でも特訓が出来ることを主張するが、自分の目から離れた場所でそれを行うことは教える責任として出来ないと却下し、転送用魔法陣を使用して安全圏である場所に送ったことで、シンの現状に至る。

特にすることもなく仲魔たちが好奇心にあれこれ目を輝かせているのを眺めていたシンであったが、そこで見覚えのある人物らを見つける。
「う〝っ！　貴方は！」
縦にロールされた金髪を二つに括っているやや高飛車そうな容姿をした人物が、嫌そうに顔を顰めさせている。シンの記憶が確かならば、ライザー・フェニックスの『僧侶』で実の妹であるレイヴェル・フェニックスである。
「まさか冥界で貴方と会うとは……」
「奇遇とはこのことだな」
側にいるのは『女王』のユーベルーナと『騎士』のカーラマインであった。二人ともシンを見て目を丸くしていた。
「……どうも」
顔を合わすのも言葉を交わすのもレーティングゲーム以来の三人に対し、シンは素っ気ないとも言える挨拶をするのであった。

◇

異変が起きている森を調査し、木々の枝を飛び移りながら奥深くへと進んでいくセタ

ンタ。
奥に進む毎に森の異変がより分かり易くなっていく。
常にあった魔物同士の殺気に満ちた空気が無くなり、絶えず聞こえていた魔物の鳴き声が一切しない。
不気味な程の静寂が森の中に満ちていた。
（むっ？）
移動していたセタンタは、視界の端に何かを捉える。すぐに方向転換し、そちらへと向かった。
「これは……」
到着した先にあったのは巨大な魔物の死骸であった。
人間界で言う熊に近い姿をしているが、大きさは十メートル近く、前脚が四本あり、額には三つめの目が備わっている。
セタンタはこの魔物に見覚えがあった。この魔物こそ、この森で最強の魔物であり森の主である。
しかし、その主は首と胴体が離れている状態となっていた。
（死後一ヶ月ぐらいか……）
腐敗し始めている主の死体を見てそう判断する。ここで修行を始める前には既に主

が交代していたらしい。
（この傷。一撃でこれを仕留めたのか？）
切断された頭部以外に傷は無く、明らかに生きている内に頭部を切り落としたのが分かる。そして、頭部と胴体の切断面には余分な傷は無く、一撃で切断したのも分かった。
（やったのは流れモノか？　だがこれに圧勝する程の実力があるとなるとかなりの力を持っているな）
未だ見ぬ新たな森の主の存在。セタンタは、その得体の知れない相手に対し強い警戒心を抱くのであった。

焦燥、再起

「……」
「……」
　街中で偶然出会ったレイヴェルとシン。しかし、話す話題も無ければ、それほど親しいという間柄でも無く、寧ろ敵対していたのでお互い牽制する様に無言となる。
　シンの方は普段と変わらない無表情であるが、レイヴェルの方はというと、会いたくない人物に会ってしまったと顔に書いてあった。
（そこまで嫌われる様なことをしたか？）
　シンが覚えている記憶で最後にレイヴェルと接したのは、敵を倒した直後に炎で焼かれた時の記憶である。シンの方がレイヴェルの表情をするのならまだしも、レイヴェルが露骨にこちらを避けようとしているのには覚えが無かった。
「まさかまた会うとは思いませんでした。それも冥界で。リアス・グレモリー様に連れられて来たのですか？」
「ふむ。お前がここにいるということは、リアス・グレモリーの『騎士』も来ているのか？　そうなると是非もう一度手合わせを願いたいのだが……」

無言の二人を見兼ねたのか、ライザーの『女王』であるユーベルーナと『騎士』のカーラマインが話し掛けてきた。
「――ええ。こっちに来てもう一週間は経ちます。それと木場の方とは今は別行動をしているので連絡を取る手段が無いんです」
「そうなのですか。ルシファードにはリアス・グレモリー様たちもおいでで？」
「連れはいますが――」
レイヴェルとは異なり、親し気に話し掛けてくる。
レーティングゲームの際、ユーベルーナを脱落させたのはシンであったが、それに対するわだかまりを抱えてはおらず、一定の敬意を抱いている感じすらあった。
「ねぇねぇ。これ、買ってってばー」
「買ってホ！　買ってホー！」
「ヒ～ホ～。早くしないと売り切れるよ～」
そこに戻って来た仲魔三人。
「あれ？　何か見たことある人たちがー？」
「オイラも見たことあるホ」
「ボクは初対面～」
レイヴェルたちの姿を見て、ピクシーとジャックフロストは思い出そうとして首を傾

げている。
　ピクシーは、レイヴェルたちとは部室で一度だけ顔を合わせているが、ジャックフロストはレーティングゲームの際観客側だったので面識は無く、ジャックランタンは言った通り初対面であった。
「貴方は……随分と可愛らしい使い魔を持っているのね」
　ピクシーたちの姿に少し気が和らいだのか、レイヴェルがようやく口を開く。しかし、どうにもやや偏った趣味を持っていると誤解されている様であった。
「自然の成り行きでこうなったんだ。別に俺が好んで集めた訳じゃない。それとこいつらは使い魔じゃない、仲魔だ」
　要らぬ誤解を解こうと早口且つやや荒い口調になる。
「仲魔？　随分と変わった表現をなさるのね。ところで貴方は……」
「間薙シンだ」
「失礼。間薙さん、今日は――」

　レイヴェルがきょろきょろと周囲を見渡す。
「――赤龍帝はご一緒じゃないのかしら？」
　頬を染めながら一誠がいるかどうか尋ねてきた。

「……会いたいのか？」
「えっ！　そ、それは……！　そ、そうですわ！　赤龍帝に負けた上にリアス様を奪われたショックでお兄様が塞ぎ込んでしまいました！　そのことに関して色々と言いたいことがありますわ！」
　明らかに取って付けた様な理由に聞こえた。文句は建前で、本音としては純粋に一誠に会いたいと思っているらしい。
「ライザー・フェニックスは今も落ち込んでいるのか？」
「ええ。まあ、悪魔として才能に恵まれていたのを鼻に掛けていた節もありましたし、いい薬になったと思いますわ。……少々長く落ち込み過ぎだとは思いますけど」
　婚約解消以来、自分の屋敷に引き篭もっているという話をリアスから聞かされたが、未だに継続していたのを知って軽く驚く。見るからにプライドの高そうな性格をしていると思っていたが、ここまで精神的に落ち込んでいるとは思わなかった。
「あの一戦以来、ライザー様はひたすら自室に籠ってレーティングゲームの仮想ゲームをしているか、一人でチェスを延々としてばかりいます」
　表情を曇らせるユーベルーナ。余程痛ましい姿なのであろう。
　プライドをへし折った当事者ではなく間接的に関わったシンは全く同情などしていなかった。しかし、話を聞いてしまったことで何とも言えないもやついた感情が芽生

え、お節介だとは分かっているが何かするべきなのか、と思ってしまう。
「ユーベルーナ。ヒトにお兄様の情けない姿をあまり話さないで」
「失礼しました」
「申し訳なかったわね。貴方に言った所で何か解決する訳でもないのに」
「気にするな。それと俺たちと話し込んでいていいのか？　目的があるならそちらを優先した方が良いと思うが？」
「今日は、魔王様主催のパーティーに着るドレスの衣装合わせに来ただけですわ。もう既に終わりましたわ。これから帰る所でしたの」
　レーティングゲーム前日にその様なパーティーが行われることはシンも事前に聞いていた。そういった煌びやかな催しを少し苦手としているシンにとっては、気が晴れる所か少々気が重くなるものであった。
「そうか。引き留めて悪かったな」
「貴方は、まだここに？」
「一応、迎えが――」
「お待たせしました」
「――来た」
　音も気配も無く現れる。一週間以上毎日同じことをされていたシンたちは慣れたが、

前触れも無く現れたセタンタにレイヴェルたちは驚き、そして、それが誰なのかを認識して二度驚く。
「え！　セ、セタンタ様！　ど、どうしてここに！」
位であれば純血であり、上級悪魔であるレイヴェルの方が高い筈であるが、敬称を付けてセタンタの名を呼びながら動揺する。
「この様な場所でお会いするとは思いませんでした。レイヴェル・フェニックス様」
恭しく頭を下げるセタンタ。
「お、御止めになって下さい！　魔王の槍とも称される貴方がその様な真似を！」
「いえ。私は所詮、グレモリー家に仕える一介の使用人に過ぎません。貴族である貴女に礼儀を尽くすのは当然」
慌てふためくレイヴェルにセタンタは態度を崩さず、丁寧に接する。
「少しいいか？」
二人が会話している中、カーラマインが静かにシンへと喋り掛ける。
「何故、お前がセタンタ殿と一緒なのだ？」
「今あの人に色々と教えて貰っているので」
「何っ！　色々ということはセタンタ殿から直々に戦い方を学んでいるというのか！」
「そういうことになります」

「くっ！　何と羨ましい！」
嫉妬と羨望が混じった視線を向けられる。
レイヴェルやカーラマインの反応を見て、セタンタが大物であることを改めて知る。が、それに反して街を行く悪魔たちの反応は薄く、時折視線を向けられることはあるものの、二人の様に過剰に反応することなくすぐに去ってしまう。
リアスが自分の領地を移動したときには、老若男女問わず多くの悪魔が見物に来ており、歓声も上げていた。
反応の差に矛盾を感じ、思わず尋ねてしまう。
「あの人は有名みたいですが、その割にはこう、周りに人だかりとかが出来ないですね」
するとカーラマインは『何を言っているんだ？』と言わんばかりの、呆れと困惑を含んだ目でシンを見る。
「セタンタ殿がどれほどの人物かも知らずに師事していたのか！」
それもシンの無知さに対する怒りへと変わり、噛み付かん勢いで顔を近付けてくる。
「そこまでにしなさい。彼は冥界出身ではないのですよ？」
ユーベルーナがカーラマインをシンから離し、冷静になる様に諭す。
「数え切れない程の戦歴を持つ御方ですが、滅多に人前に出ることはありません。そのせいで冥界に広く名前は知られていますが、どのような姿かなどは殆ど知られていませ

ん。上級悪魔や私たちの様な上級悪魔に仕える眷属ならば顔を見る機会がありますが、それでも私たちがセタンタ様の御顔を見たのはこれで二度目です」
　シンの疑問にユーベルーナが答える。
「へー。そうなの。セタンタ、カッコいいんだからもっと人前に出ればいいのに」
「ヒホ！　分かってないホ！　セタンタはカッコいいことを敢えてしないからカッコいいんだホ！」
「何それ～。分かるような～分からないような～」
　子供の様な無邪気な評価をするピクシーたちに、カーラマインも頭に昇っていた血が下がったらしく、軽く息を吐いていた。
「間薙様、ちょっとよろしいですか？」
　レイヴェルとの会話を終えたセタンタが、シンに呼び掛ける。
「何ですか？」
「今からライザー・フェニックス様のお見舞いに行こうと思います」
「は？」
　いきなりのことにそんな返事しか出てこなかった。
「……どういう成り行きでそんな話になったんですか？」
「ライザー様がひどく落ち込んでいることは私も小耳に挟んでいましたが、改めてレイ

ヴェル様に聞いたところ、こちらが思っているよりもひどいことがわかりまして。元とは言え婚約者であった方です。ここは様子を窺った方がいいかと。貴方もレーティングゲームに参加していましたし、その縁で」

「絶対にそんなことを思っていませんよね？　婚約を解消させたのはリアス部長側ですよ？　俺も殆どライザー・フェニックスとは接点がありませんし。行った所で意味が無いどころか逆効果にしかなりません」

「分かっていますよ」

自分で言ったことをあっさりと否定した後、セタンタは目を細める。その表情には見覚えがあった。初日の修行の時に疲労困憊のシンを魔物が蠢く森に一人置き去りにした時の表情と同じであった。

「私の様な者の願いを承って下さったこと、レイヴェル様の器量には尊敬の念を禁じ得ません」

「そ、そんなことを仰らないで下さい」

大袈裟と呼べるほど感謝するセタンタにレイヴェルは赤面しながら謙遜する。

（絶対に良くないことを考えている。俺にとってもライザー・フェニックスにとっても）

嫌な予感がしつつも、拒否するという選択が無いシンは大人しく従うしか無かった。

◇

ルシファードから転送用魔法陣をいくつか経由し、フェニックス家の城へと辿り着く。

グレモリー家の屋敷と大差ない大きさを持つ城を見上げる。フェニックスの家は、回復アイテムとして重宝されている『フェニックスの涙』で利益を生み出しているというのを聞いたが、この城を見ればその利益が多大であることが良く分かる。

「おおー。ここ大きいー。リアスの家とどっちが大きいかな？」

「オイラも王様になったらこんな城に住みたいホ！」

ピクシーたちはフェニックスの城を前にしてもいつも通り能天気な反応。そういった緊張とは無縁な所が少々羨ましく感じる。

門の前に立つと独りで門が開き始める。

門の向こうには庭園が広がっており煌びやかな花が咲き誇っている。

門の中に入ると衛兵たちが道の両脇に整然と並んでいたが、シンたちの姿を見た途端、若干ではあるが皆の表情に戸惑いが生まれていた。

誰なのかは分からないが、レイヴェルたちが連れてきた相手ということで疑問を心の裡に留めたまま、一斉に頭を下げる衛兵たち。

衛兵たちの中心を歩くシン。その間にも疑問の念が至る所から突き刺さってくるのが分かる。

庭園を抜けると遠くにあった城が近くに見える。

「フェニックス家の者や従者が住む居住区がここです。お兄様もここに住んでいます」

入口の門よりも装飾が凝った扉の前に立つと、自動的に扉が開き始める。すると中から何人か出て来た。

「お帰りなさいませ。レイヴェ――」

『お帰りなさ、ゲッ!』

顔半分に仮面を付けた女性『戦車』のイザベラはシンたちの姿が目に入った途端戸惑いを露わにし、口を揃えて出迎えをしていた双子の『兵士』は、特にシンの顔を見ると品の無い声を出しながら驚いていた。

知らなかったとはいえ全裸されるのを手伝った――ように見える――シンには良い印象を持ってはいないのであろう。

「……何故、セタンタ様と彼がいるのですか?」

意味が解らない、を言葉と表情で表しながらイザベラがレイヴェルに問う。

「偶然出会って、それから――」

シンたちがフェニックス家に訪れた理由を軽く説明する。

「そういうことですか。お気遣い感謝致します」
イザベラが礼をしようとし、それにならって双子も慌てて頭を下げようとするが、それをセタンタは軽く手を振って止める。
「私に頭を下げる必要はありません。レイヴェル様にも言いましたが、私は所詮グレモリー家に仕える一介の家来に過ぎません。寧ろ、ライザー様の眷属である貴女方に礼を尽くすのが本来の立場です」
「あ、貴方にそんなことを言われてしまうと……」
あくまで自分は下であると言い張るセタンタ。著名な人物にそんな態度をとられイザベラたちは戸惑い、言葉を詰まらせてしまう。
レイヴェルの時もそうであるが、セタンタは有名であるとは思えない程下手に出る。シンは、それがセタンタなりの処世術なのではないかと推測する。目立つことを好まないのは本気だろうが、自分の名声については客観的に理解しており、それと謙虚な姿勢を使い、物事を自分の好む様に進めているのではないかと考えた。
恐縮しているイザベラに案内されながら城内へと入っていく一同。
その道中――
『……』
――双子の視線をチラチラと何度も受けていた。その視線は、決まってジャックフロ

スト、ジャックランタンを見た後に向けられている。
最初は黙っていたシンであったが、いい加減気になってきたのでつい口を開く。
「何か？」
「えっ！」
「あっ！」
丁度向けられていた視線に合わせて声を掛けたので、双子は揃って驚く。
急に話し掛けられて戸惑う双子であったが、やがて決心した様に喋り出した。
「その子たち」
「ちょっと触ってもいい？」

言われてシンの視線は、ジャックフロストとジャックランタンに向けられる。
二人は構わないらしく、返事の代わりに双子の側に近寄っていった。
二人が接近すると、双子は堪らずといった動きで抱き上げる。
「うわー！　ひんやりしてふわふわー！」
「こっちはポカポカしてるー！」
抱き上げた二人の感触を満面の笑みを浮かべながら語る。
「私はイル」

「私はネル」
自己紹介する双子。ジャックフロストとジャックランタンもそれに応じて名乗る。
暫く二人と戯れていた双子であったが、不意にシンの方を見た。
『この子たちってキミの趣味？』
口を揃えて言われたのは、最早聞き慣れたと言ってもいい台詞。
言われる度に思うことだが、ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンの存在は余程自分に似合っていないらしい。ならばいっそのことギリメカラでもこの場に呼び出そうかと考えたが、よくよく考えれば怠惰という言葉に命を吹き込んだ様なギリメカラが呼び出しに応じる筈も無く――森で魔物に襲われていた際も一切手助けしなかった――否定することも億劫に感じ始めていたので――
「好きに解釈してくれ」
――適当に投げてその会話を終わらせた。
その後双子が小声で。
「無愛想な顔の割には可愛いモノ好き」
「ああいった風だから集めているのかも」
「物凄いギャップを感じる」
「逆にそれのせいで親しみが湧く」

等々言っていたが聞き流していた。その間ずっと肩に座っていたピクシーは笑っていた。

複雑な通路を歩き、多すぎる部屋を通り過ぎた後、ようやくライザーの部屋の前に到着する。扉には、中にいる者の存在を主張するかのように不死鳥を模ったレリーフが刻まれていた。

「ここがライザー様のお部屋です」

「案内ありがとうございます」

「その……もし、ライザー様とお話をなさるのでしたら……出来れば赤龍帝、というよりドラゴンそのものの話題を避けて欲しいのです」

複雑な表情を浮かべながらイザベラが懇願してきた。

「お兄様は、赤龍帝に負けたのが余程のトラウマになってしまったのか、赤龍帝どころか関係の無いドラゴンですら拒絶する様になってしまいました。前にゴシップ誌に赤龍帝の写真が載っていたのを見て、その本を燃やしてから三日もベッドの上でシーツに包まっていました」

「それは……重症だな」

「というかですね、情けないんです！　兄は！　今まで生きてきた中でも赤龍帝に負けたのが最もショックな出来事だというのは私も重々承知しています！　だからといっ

て怖がって、拒絶し続ける姿は情けないにも程があります！　それだったらまだ恨み言を吐きながら逆恨みして、仕返しの方法を考えている方がまだましです！　例えネガティブであろうが前に進む意思があるのですから！　ですが今の兄には、その意思が全くありません！　停滞しているだけ、男ならば敗北すらも飲み干して糧にする器を見せてほしいものです！」

情けない姿にかなり鬱憤が溜まっていたのか、堰を切った様に喋り続けるレイヴェル。粗方言い終えると皆の視線が集中していることに気が付き、恥じらって顔を背ける。

「ま、まあそれだけ今の兄は情けないということです！　イザベラ！　お兄様を呼んでくれるかしら！」

「かしこまりました」

強引に話を戻して、扉の前に立つイザベラにライザーへ見舞いが来たことを報せる様に言い付ける。

イザベラが扉をノックする。

「ライザー様、起きていますか？　ライザー様にお客様です」

呼び掛けるが返事は無い。

「ライザー様？」

もう一度ノックして呼び掛けるがまたも返事は無かった。
「イザベラ、変わってくれるかしら？」
レイヴェルが扉の前に立つと、握った掌で先程の何倍もの勢いで扉を叩く。
「お兄様！　お客様です！」
呼び掛ける声もまた何倍もの声量。
すると扉越しに何かが動く音がする。シンの耳には、布の擦れるような音に聞こえた。
「……レイヴェルか」
初めその声が誰のものかシンには分からなかった。部屋の中に居るのはライザー一人である為、ライザーの声には違いない。だというのに、聞こえてくる声とシンが記憶しているライザーとの声には落差があった。
扉越しだの数ヶ月振りに聞いた声だのという理由だからではない。あまりに覇気が無い声。過剰な自信が込められていたライザーの声とは似ても似つかなく、そのせいで繋がらない。
「……済まないが帰ってもらってくれ。今は誰とも会う気がしない」
「またそんなことを……そう言って前も出てきてくれませんでしたわ」
「寝て起きる度に嫌な夢を見る……それが続く限り誰とも会う気は無い」

傍から聞いていると同情を通り越して苛立ちすら覚えてしまうぐらい弱々しい。蚊の羽音の方が力強く思えてしまう。

そんな弱々しいライザーの態度に溜息を吐きながらも、レイヴェルは引かない。

「今回だけは、絶対に会ってもらいます。来ている方は、セタンタ様と間薙さんです」

「……はっ？」

一瞬間が空いた後に呆けた声が聞こえた。予想の範囲外の訪問者に動揺しているのが分かる。

「セ、セタンタ様と――間薙、あの時の小僧だと！　ど、どういうことだ！」

狼狽えるライザー。セタンタは構うことなく扉の前に立ち、話し掛けた。

「突然の訪問、申し訳ございません。ライザー様」

「……その声、間違いなくセタンタ様ですね。何をしに来たのですか？」

「偶然街でレイヴェル様に出会い、その時にライザー様の不調を知ったので心配になってつい。あくまで私個人の意思で来ているので、リアス様は居ません」

「そ、そうか」

声に安堵が混じっているのが分かる。当然と言えば当然であるが、やはりリアスには会いたくないらしい。

「お兄様。いつまでも扉越しで会話するのは失礼と思われますが？」

レイヴェルがタイミングを計らって出てくることを促す。リアスが居ないことに安心したのかは分からないが、レイヴェルの言葉に従ったのか扉がゆっくりと開いた。
「……あの時以来だな」
扉から出て来たライザーの目に真っ先に入ったのはシンの姿であった。間接的とはいえ自分が負ける要因を作ったシンに対し、つい恨みがましい視線を向ける。
一方でシンの方もライザーを見るのはレーティングゲーム以来であったが、大分風貌が変わっていた。
後ろに撫でつけていた髪は全て垂れ、整えていないせいでボサボサであった。口周りにも手入れをしていないせいで不精髭が生えている。顔色も悪く、頬もややこけている。服もズボンも皺だらけ。服に至ってはボタンを何箇所も掛け違えている。そのせいで初めて見た時の高慢さはすっかり抜け落ちている様に見えた。
尤もこれはこれで陰をもった野性味がある感じで様になっており、ライザー自身が紛れも無く美形であることを証明しているようであった。
「どうも」
シンは軽く頭を下げる。それを見てライザーは鼻を鳴らし、セタンタの方に目を向ける。
「今更何をしに来たのですか？　俺のことを笑いにでも？　あの時、貴方が俺とリアス

の婚約に反対だったのは分かっているのですよ？」
「さて、一体何のことか？　あの時はあくまでリアス様の御友人を守っていただけですので」
　白を切るセタンタに若干怒りの籠った眼差しを向けるが、すぐにその怒りは冷め、目線を落とす。
「見舞いに来てくださったことには礼を言います。しかし、何も話す気分ではありません。では」
　言い終えると同時に扉を閉めようとする。が、ガチンという音が鳴り、扉が途中で止まる。いつの間にかセタンタの槍が扉に挟まれており、閉まるのを阻んでいた。
「……何のつもりですか？」
「ライザー様に話すことは無くとも私にはありますので。聞きたくありませんか？」
「……何をですか？」
「『赤龍帝』の今を」
　イザベラから禁句と言われていた言葉をあっさり口に出したセタンタに、ライザーを含む眷属たちの顔色が変わる。特にライザーの変化は著しく、ただでさえ悪かった顔色が更に悪くなり、全身が震え始め、汗が噴き出し、目の焦点が激しく揺れる。
「せ、せ、赤龍帝だと……」

上手く舌も回らないのか、どもりながらやっとその言葉を口にする。
名を聞くだけでこれほど動揺するのなら、本人を連れてきたら発狂するかもしれないと、シンは今のライザーを見ながら思った。
「彼は、今冥界で特別な訓練を受けています。『禁手』に至る為の特訓を、それこそ命を削る様な内容をこなして」
「そ、そんなこと俺がし、知ってどうするんですか！」
「知っておいた方がいいと思いますよ。もし赤龍帝ともう一度戦う気があるとするならば」
ライザーの肩が震える。セタンタの言葉を想像し、恐怖によって震えたのか。あるいは心の奥底で本当は考えている図星を指されたせいなのか。
「ここでこのまま何もせずにただ部屋の中で無為に過ごし続ければ、貴方は赤龍帝に追い付く機会を失う。それこそ永遠に。貴方はそれでいいのですか？」
「そ、そんなことは……」
ライザーの中に葛藤が見えた。ただ腐っていくだけの現状に対する焦燥。抜け出したくとも折れた心、恐れや不安が枷となり抜け出すことが出来ず逃避の日々。
一度は一誠によって叩き潰された誇りが、ライザーをここまで落ちぶらせていると同時に、完全に折れない為の唯一の支えとなっているのが分かる。

今、セタンタはその支えを激しく揺さぶっている。支えがどちらに倒れるのかは誰にも分からない。完全に倒れるのか、それとも――

「断言します。今の貴方ではきっと彼にも勝てないでしょう」

――が、その矛先は突如としてシンへと向けられた。

皆の視線が一斉にシンへと注がれる。事前に何も聞かされていないシンもセタンタの発言は寝耳に水であり、咄嗟に声が出なかった。

「……どういう意味ですか？」

先程とは打って変わって、低い声を出しながらセタンタを睨み付ける。セタンタの言葉を挑発と受け取った様子であった。そうとってしまうのも無理は無い。いくら赤龍帝に負ける敗因の一つを作った人物とはいえ、一度たりとも戦っていないライザーの認識からしてみれば、自分の『女王』を倒したそこそこの実力者程度のもの。それがいきなり自分よりも強いと言われれば、流石に舐められていると思うかもしれない。

「言葉通りの意味です。きっと貴方は彼には勝てない。ああ、先程『今』のと言いましたが訂正しておきます。『万全』の貴方でも勝てないでしょう」

挑発に挑発を重ねていく。これにはレイヴェルたちも絶句してしまう。

蒼白かったライザーの顔色は今や憤怒によって赤く染まっており、扉から覗く指先は力が込められすぎて、血の気が引いて白くなっている。

「俺がこいつに勝てない……本当にそう思っているのですね？」
「ええ、確信しています」
ライザーがシンを睨み付ける。明らかな敵意が込められていた。
度重なるセタンタの挑発。そして、赤龍帝との一戦の時にあった手助け。それらが鬱屈した精神の中で混じり合い、殆ど何もしていないシンに対し異常なまでの敵意を持たせる。
身も蓋も無い言い方をすれば八つ当たりに過ぎないのだが、それに気付く程の余裕は今のライザーには無かった。
「すぐに訂正してもらいます」
弾ける様にして扉が開くと同時に、中にいたライザーがシンに向かって問答無用で拳を振るう。
いくら先にセタンタが挑発していたからとはいえ、客人に対しての蛮行。レイヴェルたちも慌てて止めようとするが、飛び出してきたライザーの動きの方が遥かに速い。
大振りの拳がシンの側頭部へと叩き付けられる――かに思えた次の時には、何故かライザーは後ろに向かって数歩後退し、飛び出した扉を潜るとそこでバランスを崩して尻餅を突いてしまう。
「え？」

信じ難い様子で兄とシンを交互に見るレイヴェル。襲い掛かったライザーが逆に床に座り込んでいることを理解出来ていなかった。

困惑しているレイヴェルとは逆にユーベルーナ、カーラマインとイザベラは、あの一瞬の出来事で何が起こったのかを正確に把握し、戦慄していた。

シンがしたことは至ってシンプルであった。殴り掛かるライザーの拳を片手で撥ね除けた後、その手でライザーの胸を押したのだ。

たったそれだけのことであるが、いくら不調とはいえ主であるライザーの実力を十分に知っている者たちからすれば驚くしかない。それも実力の底が見えない程軽くやってのけたことが更に驚きを増させる。

だがこの場で一番驚いているのは、他ならぬライザー自身であった。

（何で俺がこいつを見上げているんだ？）

まず自分の身に起きている状況に疑問を持たずにはいられなかった。

殴り掛かり、本来ならば自分が見下ろしている立場の筈であった。だが現実の立場は逆である。

（手加減なんてしていなかった……）

自室にずっと籠っている為、万全とは言えない体調ではあるが、だからといって実力が何割も落ちている訳ではない。シンに向かって放った拳は、レーティングゲームで赤

龍帝を一方的に嬲った時と同じくらいの威力はあった筈であった。
しかし、それを軽々と払われたかと思えば、気遣いを感じられる程軽い力で押しのけられた。まるで駄々を捏ねる子供に仕方なく付き合ったかの様に。
（こいつはこんなにも強かったのか？）
弱いとは微塵にも思っていなかったが、自分よりも強いなどとは微塵も思っていなかった。だが、ほんの僅か戦っただけで分かる相手の実力。それは間違いなく強者のものであった。
（こいつがこれだけ強いとなると今の赤龍帝は……）
そう考えた途端、臓腑が爛れる様な不快感と心臓を握り締められたかのような動悸がライザーを襲う。
（あれからもっと強くなっているのか？　あの時は十秒で負けてしまったのに今度戦えば瞬殺されてしまうのか？　このまま引き離されていいのか？　ならもう一度戦うのか？　もう一度戦って負けたらどうする？　なら鍛えるか？　鍛えて負けたらどうする？　ならこのまま何もしないでずっと部屋の中にいるのか？　そんなことをしていれば更に離されるぞ？　ならやっぱりもう一度戦うのか？　なら――なら――なら――）
今の自分を甘やかそうとする自分自身の声と今の自分を否定する自分自身の声。い

わゆる焦燥がライザーの中で激しく駆っていた。だが、どんなに考えても答えなど出て来ない。未だに迷っているライザーが答えなど出せる筈が無かった。

ライザーが考えている中、シンが歩み出る。そして、セタンタの隣を通る際に横目で視線を送った。

最初からこうするつもりでしたか？　という批難を含んだ視線であったが、セタンタの方は一切反応を見せない。

恐らくレイヴェルの話を聞いたときから、この様な展開にすることをセタンタは考えていたのであろう。森で戦う相手が居なくなったので、別の修行相手として上級悪魔であるライザーをぶつけ、量よりも質を高めた修行をさせる腹積もりなのであろう。

下手をしなくてもグレモリー家とフェニックス家との間に問題が発生してしまうだろうが、余程上手く捌く自信があるのか、あるいは何も考えていないのか。セタンタを見てもその真意は分からない。

（このヒトはかなり性格が悪いのでは？）

セタンタの言動を見ていたシンは、そんな感想を抱いてしまう。

シンがライザーの前に立つ。するとそこでようやくシンの接近に気付き、ライザーがビクリと肩を震わせた。

（どうするか……）

シンには二つの選択肢があった。セタンタの思惑通りにライザーを挑発、そこから更なる戦いに発展させる選択。セタンタの考えに反して先程のことを詫びて事を収めるという選択。

いくら修業とはいえ、好き勝手に巻き込まれることに不快感を覚えたシンは後者を選択。座り込んでいるライザーに向けて手を差し伸ばした。

が、これが失敗であったと十数秒後思い知らされることになる。

「大丈夫ですか?」

出された手を見て、ライザーは一瞬何をしているのか分からない、という表情となった。しかし、すぐに相手から気遣われていることに気付く。思い至ると同時にライザーの胸の裡に屈辱の感情が激しく沸き立った。

シンからすれば別に他意の無い行為であるが、ライザーの視点からすれば見下されている行為に等しい。互いの考えの違いが摩擦を生み、それが更なる戦いの火種となる。

「そんなに俺が弱々しく見えるか?」

ぼそりと呟いた言葉にシンは不穏な気配を察知する。

「お前に同情されるほど弱く見えるかぁぁ!」

怒声を上げながらライザーの両腕から炎が噴き上げる。左右から挟み込む様にして振るわれるそれは、炎の軌跡もあって鳥の羽ばたきの様に見えた。

殺気立った一撃にシンもまた反射的に動く。
左右からくる熱を肌で感じながら、正面に立つライザーの胸部に前蹴りを叩き込んだ。
最速を以て出されたそれは手加減出来る筈も無く、ライザーの体は部屋の端まで蹴り飛ばされる。
蹴り飛ばされていくライザーの姿を見て、咄嗟にやってしまったこととはいえ、事が取り返しのつかない段階に行ってしまったことを悟る。最早言い訳のしようなど無い。こうなってしまったのならば、後は流れに任せるしかない。
ライザーの後を追って、シンは部屋の中に踏み入れる。するとシンの後をピクシーたちが勝手についていく。
行き成りの事に言葉を失っていたレイヴェルであったが、部屋に入っていくシンたちの姿を見て気持ちを持ち直すと、ここで意外な指示を飛ばす。
「ユーベルーナ。今すぐこの部屋全体に結界を張りなさい。周りに被害が出ない様に。そしてカーラマイン、美南風(みはえ)をここに呼んできなさい。ユーベルーナの補助をさせます」
指示の内容に一瞬戸惑うライザーの眷属たち。
「――分かりました」

しかし、リーダー格のユーベルーナが了承したことで他の眷属たちもそれを了承。カーラマインが指示に従って、眷属の一人を呼ぶ為に駆け出す。

「残った者は、私と一緒に行動してもらうわ。――お兄様と彼の戦いを見届けます」

そう言い、レイヴェルもまた部屋の中に入っていこうとする。

「こういう台詞を私が言うのは何ですが、『よろしいのですね』？」

切っ掛けを生み出した張本人であるセタンタが、二人の戦いを収める所か舞台を整えようとしていることに対し問う。セタンタからしてみれば即拘束されても処分されてもおかしくないことをしている自覚はあった。

「私は兄に一日でも早く立ち直ってもらいたいと思っています。今までは、時が過ぎることによって受けた傷が埋まると思っていましたが、実際の所は傷が埋まる所かそれの影響で日々を腐った様に生きるという状態になってしまいました。そろそろ活を入れる時なのかもしれません」

シンはセタンタが計算や算段の上でこれを起こしたと思っているかもしれないが、実際の所はほぼ賭けの様なものであり、ギリギリの綱渡りである。こうなると思った根拠も街でレイヴェルと会話している中、ライザーの現状に対して憤りを覚えたという非常に薄いものであった。

だが、結果としてセタンタは綱を渡り切った。

「私はお兄様にどんな形であれ立ち上がって欲しいのです。今から一歩前に踏み出して欲しいと願っています。これが切っ掛けとなってくれればいいのですが……」
「今のライザー様は、完全に自信を喪失しています。ですが、誇りまでは完全に失ってはいません。傷口に爪を立てる様な荒療治ではありますが、この戦いを機にもう一度取り戻してもらいましょう」
シンの能力向上にライザーを利用しているのは間違いないが、引き篭もっているライザーを立ち直らせようという気持ちに偽りは無い。その為の手段に、セタンタは一切の遠慮などしない。下手をすれば折れかけているライザーの心を完全にへし折り、誇りごと木っ端微塵になって、二度と表舞台に出て来なくなる可能性も考えていた。
レイヴェルが部屋の中に入ると、壁にもたれていたライザーがゆっくりと立ち上がっている所であった。
胸を押さえながら俯いていた顔を上げる。そこには言い様の無い絶望感の様な表情が浮かんでいた。
「こんな……！　ことが……！」
ほんの少し外の世界から目を逸らしていたつもりだったのに、その間に信じられないぐらい力を上げたシンに対し、ライザーは動揺を隠せない。
その実力はまるで赤龍帝の禁手の様な――

そこで思考を中断させる様にライザーは両腕から炎を生み出す。部屋の中に一気に熱気が吹き荒れるが、ユーベルーナが既に結界を施しているお陰で周りの家具などに炎が引火することは無かった。

「そんな、筈は、無い！」

目の前の男は少々特殊ではあるが人間であることは間違いない。神滅具どころか神器すら持っていない人間である。

ライザーは、赤龍帝に敗北し意気消沈していたものの、心の何処かでは自分に対してある言い訳をしていた。

『あれはドラゴンの力を持っていたから勝ったんだ』

『神器の中でも特別な神滅器を所有していたから負けたんだ』

『十秒とはいえ神滅器の禁手が発動していたから勝つことが出来なかった』

かつて一誠が神滅器を所有していることに嘲笑を向けたライザーであったが、皮肉にもそれが誇りに付いた深い傷を抑えてくれていた。

だが、今の相手にはそんな言い訳は通用しない。

もしここで負ける様なことがあるとすれば――

「おおおおおおおおおおおおおお！」

想像したくない光景を振り払う様に燃え盛る腕を振るう。炎が散弾の様に奔り、シン

の逃げ場を奪う。
その場から一歩も動こうとはしないシン。だが、それは逃げ道を塞がれたからではない。もとより逃げるつもりなど無かった。
シンの右手に魔力が集中し、瞬く間に魔力による剣が形成される。
それを見たレイヴェルとユーベルーナが目を見開く。レーティングゲームで見せられ、実際に受けた技であったが、あの時よりも発動が早く、剣から感じられる魔力の量も上がっている。
シンが魔力剣を振り払う。蓄積されていた魔力が解放され、それが飛んで来た炎を包み込むと、そのまま押し返すのではなく無茶苦茶に暴れ狂う魔力の波によって四散してしまう。まるで見えざる咢に食い散らかされた様に見えた。
フェニックスの炎をあっさりと掻き消されたことにライザーは目を見張ったが、すぐに自分へと向かってきている魔力の波を見て、急いで駆け出す。
魔力の波が壁に衝突。結界の効果で壁を破壊することは無かったが、行き場を失った破壊は結界全体に伝わって結界そのものを激しく揺さぶり、その揺さぶりはユーベルーナへの負担と化す。
「くっ！　これほどとは！」
歯を食い縛りながら耐えるユーベルーナ。その額から汗が流れ落ちている。

結界を維持するだけでも相当の負担が掛かっていることが分かる。
一方、シンの熱波剣を辛うじて躱したライザーであったが、彼は激しく傷付いていた。肉体では無く、その精神が。
炎と風を司るフェニックス。それが放つ炎は魔術で生み出された炎とは比べものにならないものであり、その威力はライザーも自負していた。赤龍帝の鎧ですらライザーの炎を完全に耐えることが出来なかった。
それがまるで蝋燭の炎の様に吹き消された。それがどれほどのショックなのかは当人にしか分からない。
だが、シンはライザーが激しく動揺していることが分かった。何故ならば拳が届く範囲まで接近している自分の存在に未だに気付いていないのだから。
シンが拳を握り締めたとき、ようやくライザーはシンの接近に気付くがもう遅い。防御しようと交差させようとしている腕の隙間を縫って、ライザーの頬にシンの拳が突き刺さった。
当たった拳をそのまま振り抜くのではなく、更に押し込む様に捩じりながら真横ではなく斜め下に向かって振るう。押し込む度にライザーの顔は変形し、拳から伝わる感触が肉から骨のものへと変わっていった。
床目掛けて拳を振り抜くと、ライザーは側頭部から床に叩き付けられ、それでも力は

まだ残っていたのか、そこから跳ね上がり側転する様に転がっていく。
「お兄様！」
『ライザー様！』
流石のレイヴェルや眷属たちも悲痛な声を上げる。それほどまでにライザーが痛々しい殴られ方をしていたのだ。
殴り飛ばされたライザーは、壁際に置いてある高級な装飾がされた衣装棚へとぶつかって動きを止める。
最初の数十秒は全く動かなかったが、やがて呻き声を上げながらゆっくりと動き始める。
「ぐ、ううう！」
口内が切れたのか血が混じった唾液を垂らしながら立ち上がろうとしている。いくらでも追撃出来る程隙だらけな姿であったが、シンは手を出さずにライザーが立ち上がるのを待っていた。
やがて衣装棚にもたれ掛りながらライザーが立ち上がる。
「血が出ているな」
ライザーを見ながらシンが呟く。
「ああ！　お前のせいでな！」

それを馬鹿にしていると捉えたライザーが苛立ち混じりに言うが、シンが言っているのはそのことではない。
「治さないのか？」
その言葉にライザーが硬直し、反射的に口の端から流れる血を拭う。
フェニックスは瞬時に傷を治す再生能力を持っている。実際にシンは見た訳ではないが、ライザーとのレーティングゲームの事前にリアスから聞いたことがあった。しかし、今のライザーからは聞いていた様な再生能力が感じられなかった。その証拠にシンが殴りつけた痕は頬に刻まれたままであり、さっき拭った筈の血も新たに流れ始めている。
精神が疲弊すれば再生能力も鈍ると知っていたが、今のライザーは小さな傷を治せない程精神が落ち込んでいるらしい。
「お兄様、そこまで心を痛めて……」
再生出来ない不死鳥。それがどれほど痛ましいものか、同じフェニックスであるレイヴェルは衝撃を受けていた。戦いが始まる前は不甲斐無い兄と憤慨すらしていたが、本当に弱り切った姿を見せつけられ、それも憐憫に変わってしまう。
だが、この場で最もショックを受けていたのは、紛れもなくライザー当人であった。
（痛い……）

何もしなくてもズキズキとした痛みが顔全体を蝕む。口の中には不快な鉄の味が広がっていく。舌を動かして頬の内側にある傷に触れれば、ざらついた感触と鋭い痛みが伝わってくる。

通常時ならばとっくに治っている傷だというのに、それが治らない。不死身と称しても過言ではない再生能力を持つ身として、この様な継続する痛みは無縁なものであった。

頭を吹き飛ばされようが、全身を吹き飛ばされようがその度に再生していた。だが、今の自分はこんな軽傷一つ治せないでいる。

不死。フェニックスにとって代名詞とも呼べるそれが今の自分には無い。不死身では無い不死鳥に、一体どんな価値があるというのであろうか。

（なら俺は……俺の存在価値は……）

今にも崩れ落ちそうになるアイデンティティー。

そのとき――

「怖かったら逃げ出してもいいですよ？」

――シンが弱っているライザーへと言葉を掛ける。

「……何だと？」

「言葉通りの意味です。怖いんだったら今すぐ止めましょうか？」

明らかな挑発。言葉に憐みが入っているが口調自体には含まれていない。どこまでも感情を感じさせない平坦なものであった。

何を意図してそんなことを言い放ったのかは分からない。しかし、シンから言われた言葉はグチャグチャになっていたライザーの思考を一気に凍結させ、一つの考えに纏めさせようとしていた。

「貴様は……俺を、舐めているのか……！」

「何か言うぐらいなら行動で示したらどうなんですか？　そんなのだから舐められてもしょうがないと思いますが？　まあ、舐められたくないなら――」

さっきまでこの世の終わりかのように蒼白であったライザーの顔色が、怒りで赤く染まっていく。

真っ向からシンの言葉を受けているライザーはそれを嘲りと捉えたが、傍から聞いていたセタンタたちには違って聞こえていた。まるでライザーを焚き付ける様にわざと挑発しているかのようであった。

「――かかって来い。『ライザー・フェニックス』」

指招きするシンの姿を見て、ライザーは頭の奥で何かが切れるような音が聞こえた気がした。

ここに至るまでに溜まっていた鬱憤。引き篭もっていた間に少しずつ溜まっていた

鬱憤。それらが重なり、混じり、一つとなっていた所にシンのこの一言。心の中で積りに積もったものへの火種となり、ライザーの中で感情が暴発する。

ようはキレたのだ。

「舐めてんじゃねぇぞ、このクソガキがぁぁぁぁぁぁぁ！　俺を！　ライザー・フェニックスを！　不死鳥を！　見下すんじゃねぇぇぇぇぇ！」

見学していたピクシーたちが思わず仰け反る程の怒気と声量を放つライザー。

燃え盛っていた炎は両腕に止まらず、全身から噴き上がり、一瞬にして部屋の温度を上昇させる。

「ヒホ！　暑いホ！　熱いホ！　溶けちゃうホー！」

熱を嫌うジャックフロストが急激な温度変化に、堪らずパニックを起こす。

「慌てな～い、慌てな～い」

ジャックランタンがカンテラを掲げる。

「あっ。涼しくなった」

その途端、カンテラを中心にして周囲の温度が平常時のものとなる。以前、カンテラで炎を吸収してみせたジャックランタンであったが、炎だけではなく熱も吸収出来るらしい。

「ライザー様！　これ以上は……！」

ユーベルーナの額から玉の様な汗が流れ落ちる。部屋の中に急速に満ちていく熱気だけではなく、許容範囲を超えそうな程の炎を放つライザーによって結界を維持し続けられなくなってきたのも理由であった。
「レイヴェル様！　連れてきました！」
その時、レイヴェルに命令されていたイザベラが戻ってきた。その後ろには十二単を纏った女性の姿。ライザーの『僧侶』の美南風である。
「これは――」
部屋の中で何故か戦っているライザー。そして、その戦っている相手が何故か以前レーティングゲームで戦ったことがある人物。その戦いを何故か眺めているのは、公の場に姿を滅多に見せないセタンタ。
一体どういった経緯でこうなったのか全く分からず、来て早々に困惑してしまう。
「呆けていないで、貴女も結界の維持を手伝いなさい！」
ユーベルーナの声を聞き、考えるのを止めてすぐにユーベルーナの手助けをする。本当ならば事情を聞くべきなのであろうが、ライザーの全身から放たれる膨大な炎に一刻を争うと判断したようであった。
「絶対に！　ぶちのめしてやる！」
血走った眼でシンを睨み付けるライザー。

（少し焚き付け過ぎたか？）

予想以上に激怒しているのを見て、成功とも失敗とも言えない結果に何とも言えない気持ちになってしまう。

「がああああああああああああああ！」

咆哮を上げるとライザーの背から翼の様な炎が噴き出す。それと同時にライザーが床を蹴り飛ばした瞬間、背中の炎が倍以上の勢いで噴き出し、一気に加速する。

まるで背中にロケットエンジンでも背負っているかの様な急加速。先程放たれた炎弾よりも遥かに速いが、シンの目はライザーの動きを正確に捉えていた。

五指を鉤爪の様に広げてそこに炎を燃やしながら、シンの肩から腰に掛けて斜めに裂こうと右腕が振るわれる。

しかし、振るわれる直前にシンは拳を振り上げながら前に踏み込み距離を縮め、攻撃の内側に入り込むと同時に突き出した拳を絶妙なタイミングでライザーの頬へと叩き込む。

シンの拳の威力とライザーの加速で二人の動きが僅かな間均衡するが、最終的に勝ったのはシンの拳であった。

頬に入った拳をそのまま振り抜く。ライザーの体がその場で一回転したかと思えば、背中の炎の翼による加速で天井目掛けて飛び上がり、そのまま天井へと叩き付けられた

かと思えば、そこから無理矢理体を捻って方向転換して今度は窓に体を叩き付けた後、床へ降りるが、ダメージがあるのか四つん這いとなる。

無軌道という言葉が相応しい程、無茶苦茶な飛び方であった。

ライザーが立ち上がる。その頬には殴られた拳の跡が深々と刻まれていた。それを覆い隠す様に炎が立ち上るが、それだけに止まり、ライザーは顔半分に仮面の様に炎を被っていた。

恐らく傷を再生させているのであろうが、再生能力が完全に戻っていないらしく中途半端な状態となっていた。

一方、ライザーを殴ったシンは僅かに顔を顰めながら、殴った手に目線を落としている。

拳から上がる白煙。手の甲全体が赤くなっており水泡が出来ていた。ライザーに触れたあの僅かな瞬間で火傷を負わされていたのだ。

シンは焼け爛れた拳に息を吹き掛ける。白い冷気となって出された息は両手を包み込み、霜を降ろした。ライザーの熱に対する慰め程度の防御策である。

体勢を戻したライザーが、再び翼を羽ばたかせ、シンに向かって突撃してくる。

それを見たと同時に、シンは左手を突き出して構え、照準を固定させる様に右手で左手首を掴む。

左手の中に蛍光色の魔力が収束されていく。だが、ライザーはそれを分かっているのか分からないのか、避ける動きを見せることなく一直線に向かってくる。

両者の距離が約三メートルとなったとき、左手に収束されていた魔力は完全に溜まった訳ではないがこれ以上は待つことが出来ないと判断し、ライザーに向けてそれを放つ。

蛍光色の魔力の光弾がライザーを呑み込まん勢いで襲い掛かる。しかし、ライザーは横へ僅かに体を動かして、それを受けた。

光弾に呑まれ通過したとき、ライザーの体は右腕から右足に掛けて消失していた。だがそれに構うことなくライザーは前進、シンとの距離を詰めた。

右半身が消失した状態のライザーが左腕を振り上げると、肘から炎が噴き出し、それによって勢いを得た大振りの一撃を放つ。光弾を放った直後を狙われたシンに躱す余裕は無く、咄嗟に右腕を掲げた。

拳が腕に触れた瞬間、シンは体内で骨が軋む音を聞き、耳で皮膚が焼ける音を聞いた。

上半身が吹き飛ばされそうになるのを両足に力を込めて耐える。

そのとき、シンは視界の端にあるものを捉えた。

先程の攻撃で無くなったライザーの右半身。その断面から炎が噴き出し、それが右腕を形成している光景であった。

炎が腕らしき形になると同時に横振りの一撃が襲い掛かってくる。
反射的に左腕を向けるシン。辛うじて受け止めることが出来た――かに思えた。
ライザーの炎の拳を防いだと思ったら突如右腕が膨張、次の瞬間爆発音と共に右拳が停止状態から加速し、シンを左腕ごと殴り飛ばしていた。
体の側面から壁に衝突。肩や腰、側頭部を激しく打ち付ける。
だが呻き声一つ上げることなく、ダメージを感じさせない素早い動きでシンは壁から離れる。
左腕は先程の爆発で焼け爛れ、赤黒く変色している。左耳も同様に爆音を至近距離で聞いたせいで聴力が麻痺しており、キーンという音が頭の中に鳴り響いている。口内は裂け血の味が広がり、血が溜まってきたので静かにそれを嚥下する。少しでも相手に傷を負ってないと思わせる為のやせ我慢である。
シンはライザーを改めて見る。体の至る所から炎が噴き上がっており、右半身は炎によって形作られている。損傷を負う度に異形化していくライザー。果たしてこのまま戦い続けるとどうなってしまうのか。
荒い息を何度も繰り返すライザー。吐き出された息は高熱を帯びており、息が炎と化している。
暴走に近い状態のライザー、そして傷を負ったシンの姿を見て、レイヴェルは予想を

超えた惨状になってしまったことに堪らず側にいたセタンタへ声を掛ける。
「今すぐに止めないと！」
「何故ですか？」
　返ってきたセタンタの反応は淡白なものであった為、レイヴェルは更に焦りを募らせる。
「このまま放っておいたら死人が出ますわ！」
「大丈夫です。お互い本気ですが殺気は薄いので」
「だからといって万が一のことも！」
「大丈夫です。死人は決して出ません」
「どうしてそう言い切れるのですか！」
　平然としているセタンタの態度に苛立ち、詰問する。
「私が出させませんから」
　ただ自分がこの場にいるから死人が出ない。傲慢にも自信過剰にも聞こえる台詞であった。しかし、その言葉を聞いてしまった瞬間、レイヴェルは無条件に納得し掛けてしまった。
　根拠がある訳ではない。だが、セタンタという存在が放つ目に見えない何かが、言葉に説得力を持たせていた。故にレイヴェルはそれ以上に何も言うことが出来なくなる。

周りの眷属たちも同様であった。

閉口してしまったレイヴェルの前で再び両者が激突する。

舞う炎や揺らぐ熱が容赦無くシンの身体を焼いていく。致命傷は避けているものの、見る側が痛々しく思える程の火傷が次々に出来ていた。だが、シンの方も相手が不死身だからか、苛烈な攻撃を繰り返している。

至近距離で氷の息を吹き掛けたかと思えば、間髪入れずに熱波剣を叩き込み、ライザーの体の一部を四散させたかと思えば、空いた手でライザーの顔面を鷲掴みにし、手が焦げていくのを構わず、密着した状態で光弾を撃ち出した。

ライザーの頭部が下顎から上が光弾で消し飛ぶ。常人ならば即死しているだろうが、ライザーはものの数秒でそれを再生させた。だが、復活した部分は元通りになっておらず、目鼻や口の形は認識出来るものの、再生した箇所が発火した状態となっており、ますます異形化が進む。

内側から溢れる怒りを叫びながら無茶苦茶な攻撃を繰り返すライザー。対照的に無言のまま攻撃を繰り返すシン。一見すれば冷静さを保ち続けているシンの方が有利に思えるが、シンの攻撃を受ける度にライザーは不完全ながらも再生し、その都度シンは新たな傷を負っている。尤も、ライザーがこのまま不完全な再生を繰り返せばどんな影響が起きるかは分からず、両者とも未だ先が見えない状態であった。

突き出されるライザーの手刀。躱せないと判断したのか、シンはその手首を掴んで止める。当然、高熱を帯びているので掴む手は焼け、煙が上がる。
そしてそのまま反撃に移ろうとしたとき――
「……何故だ？」
――ライザーの呟きに振り上げた拳が止まった。
「何故お前はそこまで戦える？」
怒りが冷めてきたのか、最初の時とは比べものにならない程静かな声であった。
「そこまで傷を負ってまで何で戦える？　何故折れない？　俺の炎が怖くないのか？」
今も焼けていくシンの手を見ながら、理解出来ないといった感情を籠めて問う。
「深い理由なんて無い。強いて言うなら――負けたくないからだ」
「負けたくない？　誰にだ？」
「――目の前のお前以外にいるのか？」
呆れたと言わんばかりに溜息一つ吐く。
「……俺に勝って、意味や価値なんてあるのか？」
激昂していたのが嘘の様に卑屈になっていく。それに伴ってあれほど燃え盛っていた炎や熱も感情と同じく消沈していった。
「質問を質問で返して悪いが、そっちこそ俺と戦う意味があるのか？」

「お前が、俺の！　フェニックスの誇りに傷を付けたからだろうが！」
　再び熱を帯びていくが、シンは冷めたままあることを聞く。
「何故そこまで自分の家に拘るんだ？」
「……何？」
「お前はフェニックス家の三男なんだろう？　当然、家督権は長男にある。どんなに足掻いても余程の事が無い限り、お前がフェニックスを継ぐことは無い」
「それが……どうした……」
「レーティングゲームで勝ったり、接待なんかをして他所の家から点数を稼いだりしているみたいだが、フェニックス家の株は上がっても、お前自身の株が上がるかと言えば……」
「……黙れ」
「継げない家の誇りを護って何の意味がある？」
「――黙りやがれ」
　ライザーがシンの胸倉を掴む。
「お前は……俺が……フェニックスの家を継ぐ為にあれこれしていると思っているのか……舐めるな」
　今までの怒りが爆炎と例えるなら、青炎の様に静かな怒りであった。だが、その内に

込められた感情は先程の比では無い。シンは真にライザーを怒らせたことを感じた。
「俺が、俺がこの家に尽くすのは……」
思い浮かぶのは二人の兄の姿。どちらも自分よりも悪魔として遥かに優れている。嫉妬を感じないと言えば嘘になるが、それを上回る程の尊敬の念を持っている。二人の弟として誇り高くもあり重圧も感じていた。
フェニックス家は間違いなく長兄が継ぐ。万が一のことがあったとしても同じくらい優秀な次兄がおり、どう考えてもフェニックスの家は安泰である。
三男である自分がフェニックスの家を継ぐことはないとライザー自身重々承知していた。ならば自分はフェニックスの為に何が出来るのか、考えた上で起こした行動といえばレーティングゲームの際に名家との繋がりを強くする為に接待。将来のことを見据え、魔王も輩出している名家であるグレモリー家との婚約であった。ライザー自身、リアスには色々な理由で好感を持っていたが、それよりも名家としての義務、悪魔の将来についての考えの方が強かった。
「俺が、俺が家に尽くす理由は……」
尽くす理由。そんなものは最初から決まっている。
「俺がこの家のことを誇りに――」
違う。理由はもっと、ずっと単純である。

「――この家が好きだから尽くすんだよ！」

好きだから。子供の様な単純な理由。だが、それこそがライザーにとっての原点であった。故に一誠に負けた時に精神はどん底に落ち込んだ。初めて完敗したことや想像していた輝かしい未来を失ったのも理由の一つであるが、一番の理由はそんな醜態を晒して家の名に泥を塗ってしまったことであった。

言った後にライザーは後悔し目を伏せる。昂った感情のままに本音を曝け出してしまったが、傍から聞いていれば幼稚そのもの。きっと相手は呆れか、冷めた表情をしているのが目に見えていた。

「――そうか」

至って平坦な声。だがそこに蔑みの感情は無い。伏せていた目を上げれば、変わらない表情のシン。

「今のを聞いて、少しだけお前に好感が持てた」

「――はっ。野郎の好意なんているか」

どちらかという訳では無く両者は掴んでいた手を離す。直後、掴んでいた手は拳となって互いの頬へと叩き付けられ、弾かれた様に二人が吹き飛ぶ。

壁際まで移動する両者。先に体勢を立て直したのは再生能力を持つライザーの方であった。

ライザーは頭上に手を掲げ、そこに炎を生み出す。轟々と燃える炎が一つの塊になる。さながら太陽を掲げているかのようであった。

手加減抜きの本気の一撃。まともに受ければ下手をしなくても命は無い。だが、ライザーは躊躇うことなくそれを放る。しかし、先程までとは違い全力ではあるが殺意は無かった。

自分相手にあれだけ出来たんだからこれもどうせどうにかするだろう、という一種の信頼であった。尤も、それはそれで腹が立つという感情もあった。

体勢を戻した直後のシンにライザーの火球が迫る。

（どう出る？）

そう思った直後、シンは避けることなくライザーの炎に包まれてしまった。

この光景に誰もが息を呑む。放ったライザーも驚いていた。あまりに呆気無く炎に呑まれてしまったことに。

そのとき、ライザーは炎の中で揺らぐ影を見る。朧気なそれは段々と輪郭がはっきりとしていき、それが人の影と分かった瞬間炎を突き破り、中からシンが飛び出してくる。

出てきた体のあちこちから煙を上げているが、フェニックスの炎を受けたと考えるとあまりに軽傷。

飛び出したシンは、そのままライザーの場所まで跳躍しながら大きく左腕を振り上げ

る。
急接近するシンに反応が遅れ、避けることよりも防御することを選択したライザーは眼前で両腕を交差する。
数秒も満たない内に両腕に圧し掛かる力。だが、そんなことよりも驚くべき感覚がライザーを襲う。
「熱っ！」
口にして驚愕した。炎を使役するフェニックスがまず味わうことはないであろう『熱い』という感覚。
その熱の源は突き出しているシンの左腕。どういう理屈かは分からないが、シンの左腕自体が燃え盛っていた。
「何だ？　そ――」
最後まで言うよりも先にシンの左拳は受け止めているライザーの両腕ごと殴る。交差していた腕がそのまま額に叩き付けられ、衝撃が額から後頭部まで突き抜けたかと思えばそのまま殴り抜けられ、ライザーの体が大きく回転。空中で数度回転した後に後頭部から床に叩き付けられる。
不完全な再生。直前の動揺。それらが重なった結果、再生能力が上手く働かずライザーの意識は一瞬で黒く塗り潰されるのであった。

◇

床に倒れたライザーの体から炎が消える。炎で補填されていた部分も人の形に戻っていた。

それを見た後に、シンは左腕を振るう。するとさっきまで燃え盛っていた炎は消え、その下からはライザーから受けた火傷以外は無事な腕が現れる。

ライザーの放った火球を咄嗟に左手で受け止めたとき、まるでその火に触発された様に左腕の中から炎が噴き上がった。

シンには心当たりがあった。この左手はコカビエルに灯っていた魔人の炎を吸収した左手である。得体の知れないものが相変わらず体の内に残っていることに若干の不快感を覚えるが、あるものは仕方ないと割り切り、どう使うかと前向きな方向に考える。

「お疲れー」

見学していたピクシーたちがシンの方に集う。

「お疲れ様です」

その中に混じる様にしれっとした態度でセタンタが話し掛けてきた。

「お望み通りの結果になりましたか？」

「ええ。予想以上の結果です」
若干険を込めて言うが、セタンタの方は眉一つ動かさない。
シンはちらりとライザーの方を見る。慌てて近寄った眷属たちによって介抱されていた。
「今更言うのもなんですが、大丈夫なんですか?」
「責任は全て私が負いますのでお気遣い無く」
「そうですか。ならお言葉に甘えて、何を聞かれても取り敢えず貴方の名前を出しときます」
嫌味を込めた台詞だが、それを聞いてセタンタは軽く笑った。
「騒がしいと思って来てみれば、随分と愉快なことになっているな」
部屋に響く威厳に満ちた声にライザーの眷属たちは思わず介抱する手を止め、レイヴェルも眼を見開いて新たな来訪者の方を見る。
部屋に入ってきたのはライザーと良く似た顔立ちをしているが、ライザーよりもより気品と威圧感を備える美丈夫であった。皺一つ無く、細部まで刺繍が施された貴族そのものといった格好が、よりそれを際立たせる。
「……ルヴァルお兄様」
ルヴァルと呼ばれた青年。レイヴェルの口振りからして、ライザーの長兄か次兄のど

ちらかであろう。
「ふむ」
ルヴァルは部屋を一瞥する。気絶しているライザー。それを介抱しているライザーの眷属。セタンタ。そして、傷だらけのシン。
ルヴァルは無言でシンに近付く。一瞬警戒するシンであったが、相手から全く敵意を感じ無かったのですぐにその警戒を解いた。
「これを受け取り給え」
懐から小瓶を一つ取り出し、シンに手渡す。それはフェニックスの涙であった。
「実は――」
セタンタが何が起こったのか話そうとするが、ルヴァルは手を上げ、それを制止させる。
「詳細は聞きません。ですが凡そ察せます。後のことは私が何とかしておきますので、セタンタ殿らはなるべく早くここから離れた方がいいでしょう。恐らく、今の騒ぎを聞き付けて他の使用人らがここに来ます。そうなると貴方方にとっては不都合な筈です」
自分の領地内で暴れた相手に対し、手助けどころか見逃すという発言。
「――ルヴァル様の恩赦、心より感謝致します」
深々とセタンタは頭を下げた後、セタンタはシンたちに外に出るよう目で促す。

セタンタを倣ってシンも頭を下げた後、部屋を出る――直前に振り返り、レイヴェルを見る。
「起きたら伝えてくれ。『色々と悪く言って悪かった』と」
「お兄様を焚き付ける為に言ったことでしょう？　律儀なのですね」
「それと『やっぱり勝つ意味も価値もあった』とも」
「ええ、分かりました。きちんと伝えておきます」
シンの台詞にレイヴェルは苦笑を浮かべる。街で会ったときはレーティングゲームでの印象から警戒していたが、今のを聞いて警戒心は殆ど無くなっていた。
伝言を頼み終えると部屋の外に出る。ピクシーたちもシンたちの真似をしてそれぞれ軽く頭を下げてから後をついていった。
「うう……」
シンたちが居なくなったすぐ後に、呻き声を上げながらライザーが目を覚ます。
『ライザー様！』
開いた目に真っ先に映ったのは、自分の眷属たちの心配する顔であった。
鈍い痛みがする頭ごと上体を持ち上げるライザー。
「目が覚めたか」
「あ、兄上！」

何故かいる長兄の姿に、ライザーは裏返った声を上げた。
「漸く顔を見ることが出来たな。……まったく酷い顔だな、この愚弟め」
「……久しぶりにあった一声がそれですか？」
「あのゲーム以来、一度も私に会おうとしなかった様な奴を愚弟と呼んで悪いか？　ライザー？」
痛い所を突かれ、気不味そうに目を逸らす。
「正直に言えば、負けて落ち込むお前の気持ちも理解出来ていた。だから、なるべく干渉は避けていたが……まさか、あれから数ヶ月も部屋から出て来ないとは思わなかったぞ……いくらなんでも打たれ弱すぎる」
肩を竦めるルヴァルに対し、ライザーは叱られている子供の様に不貞腐れた表情を浮かべた。
「……俺は、兄上の様に優秀じゃあ無いです。それに俺のせいでフェニックスの名に傷を……」
「フェニックス家は、婚約破棄や赤龍帝に負けたぐらいでお前を責める様な狭量な家だと思っているのか？」
「まさか！　ですが……」
「外野の誹謗中傷か？　言わせたいなら言わせておけ。言っている連中は、フェニック

スのことを何一つ理解していない」
　ルヴァルは、そう言ってライザーの正面まで歩いていく。
「どんなに傷付こうが必ずその傷を治す。例え、灰になってもそこから蘇り、舞い戻るのが不死鳥〈フェニックス〉だ。お前もフェニックスなら言っていることが分かるだろう？」
　その言葉にライザーは、引き篭もって以来初めて兄の顔を真っ直ぐ見た。完敗した後、恐ろしくて見られなかった目。その目に蔑みも失望の色も無い。前と変わらない兄の目であった。
「まあ、放っておいた別の理由として、お前なら自分で汚名を雪ぐことが出来るだろうと思っていたのもあるのだが……私の見立ては間違っていないな？」
「ああ……兄上は、間違って、いない」
　声が詰まりそうになるのを堪えながら、ライザーは必死に言葉を並べていく。
「必ず、絶対、フェニックスは、復活する」
「そうか。なら大丈夫だな」
　ルヴァルは軽く微笑んだ後、ライザーに背を向けて歩き出す。
「後は任せたぞ」
「はい」

途中、レイヴェルにそう言い残して部屋から退室していった。
「ユーベルーナ。今すぐ風呂の準備だ」
「は、はい！」
「あと街から美容師も呼んでおけ。さっぱりしたい」
「かしこまりました！」
ライザーの命令を叶える為、眷属たちが一斉に動き出す。
「レイヴェル」
「何でしょうか？」
「少し調べてほしいことがある」

◇

燃え盛る左腕を勢い良く振るう。しかし飛ぶのは火の粉だけで、纏った炎は腕に絡みついたままであった。
修行地である森に戻ったのは良いが、相変わらず何も出て来ないので、折角なので空いた時間を使い、新たに得た炎の力を早速試してみたのだが、全くと言っていい程活用出来ていなかった。

炎が灯った手で何かを掴めば対象も燃えるが、はっきり言って拳で殴るのと然程変わらない。炎という強みを全く生かせない使い方である。

どう上手く使えばいいのか考え、火を操るジャックランタンにも聞いてみたが、返ってきた返事は『教え方なんて知らな〜い』というものであった。

セタンタからの助言も正直期待できないので、あれこれ自分で試行錯誤しなければならない。

今度は強めに腕を振るう。すると拳ぐらいの大きさの炎が腕から飛ぶが、一メートルも飛ばずに地面に落下。数秒程燃えた後、鎮火してしまった。

「何だ？　それは？」

聞き覚えのある声。しかし、この場にいることに違和感を覚える人物の声。

皆が一斉に振り向く。

鬱蒼とした森に不釣り合いなワインレッドのスーツを着ている。長く伸びていた筈の髪は整い、後ろに撫で付けられていた。口周りに生えていた筈の不精髭は綺麗に剃られ、剃り跡すら見当たらない。

「ライザー……フェニックス？」

「まさかこんな場所で特訓していたとはな。虫も多い、湿気も多いで最悪だな」

初めて会った時の様に、傲慢さを感じさせる笑みを浮かべながらポケットに手を入れ

て立つライザー。何故ここにいるのか分からずに戸惑ってしまう。
「……何をしに？」
「あれだよ。リベンジしに来た――」
「ここで？」
「――つもりだったが、さっきのを見て気が変わった。何だ？　その炎は？」
ライザーが不機嫌そうな表情で燃えるシンの左腕を指差す。
「俺の、いや、フェニックスの前でそんな下手くそな炎を使いやがって……」
「……炎の使い方なんて全く知らないからな」
「だったら教えてやる」
「はあ？」
思わず聞き返してしまう。
「俺がお前に、本当の炎の使い方を教えてやるって言ったんだよ」

連携、前兆

イッセー。

久しぶりに聞いた愛しい主人の声。久しぶりと言ってもせいぜい一週間程度しか経っていないが、毎日聞いていた声であった為、一週間全く聞いていないとなるとやはり久しぶりの様な気がした。

イッセー。

光の無い空間に再度響く甘い声。声の振動だけで鼓膜が柔らかく震え、その震えが脳へと伝わり、一瞬にして脳内が蕩けてしまう。

イッセー。

三度呼ばれて、暗闇の中で一誠は目を開く。するとそこには派手派手しい円形のベッドと、その中心で横たわるリアスの姿。

肌が透けて見える薄い生地の下着を纏い、蠱惑的な笑みを浮かべながら一誠を指招きする。

「イッセー……来て」

官能に濡れた声。背筋が震え、心臓が胸から飛び出しそうなほど激しく動く。

「ぶ、部長」
言われるがまま一誠はベッドへと近付き、その縁に片膝を乗せる。
「いいのよ、イッセー。遠慮しなくても」
一言一言に色気と艶があり、聞いているだけで天にも昇りそうな気持ちになってくる。
「え、え、遠慮しなくてもいいとは？」
緊張で上手く回らない舌。本当は何を意味しているのか分かっているが聞き返してしまう。相手の口からその意味を直接聞きたいという願望から。
「私を抱いてくれる？」
ある意味では予想通りの答え。だが、相手の口から直接聞いたとなるとそれだけで興奮が止まらなくなる。
「い、い、いいんですか？」
「ええ」
思わず唾を呑み込もうとしたが、このとき緊張と興奮で口の中が乾いていることに気付いた。しかし、それも無理は無い。憧れの人がすぐ目の前にいるのだから。
「じゃ、じゃあ！」
飛び上がる様にしてベッドへと乗りリアスの顔を見たとき、一誠は時が止まったかの

ように停止した。
　ベッドの上にいたのはリアスではない。ワンピースを着た黒髪の少女へと変わっていた。そして、その少女を一誠は知っている。
「どうしたの？　イッセー君？　変な顔をして」
　クスクスと笑う少女。相手を見下す嘲笑であった。
　その声。その笑いを聞くだけで、一誠は全身から血の気が引いていくのが分かる。先程までの昂りが全て消え去っていたが、未だに心臓の鼓動だけは早かった。無論、それは興奮から来るものでは無い。純粋な恐怖による動悸であった。
「レイ、ナーレッ！」
　絞り出す様に目の前の少女の名を口に出す。それを聞いてレイナーレはますます笑みを深くした。
「そんな風に言わないで。前みたいに夕麻ちゃんって呼んでくれない？　私たち恋人同士だったじゃない」
　拭いたくとも拭えない忌まわしい記憶。だがレイナーレが言ったことは、仮初であっても紛れも無い事実であった。
「何が恋人同士だ！　俺ばかりか、アーシアまで殺しかけたくせに！」
「いいじゃない。実際の所は生きているんだから。悪魔になってね。結果から見れば人

間だったときよりもいい暮らしをしているみたいだし」
　まるで自分のおかげだと言わんばかりの言動に、流石の一誠も拳を強く握る。きっとこの先の人生で後にも先にも心の底から殴ってやりたいと思う女性は、このレイナーレぐらいであろう。
「俺の夢の中にまで現れて、好き勝手言いやがって……！」
「そう、これは夢。貴方の夢。そこが分かっているなら、どうして私がここにいるのかも分かるんじゃない？」
　レイナーレがゆっくりと一誠に近付く。避けようとして動くが、何故か手足がベッドに張り付いたまま動かない。何とか動こうとしているうちにレイナーレは、吐息が掛かる程近くまで来ていた。
　そして、一誠の耳元に近付き――
「忘れられないんでしょう？　私のことが」
　――甘く、そして蔑む様に囁く。
「な、に？」
「私のことが忘れたくても忘れられないから、こうやって夢に見るんでしょう？　イッセーくん？」
「――黙れ」

「騙されたことが分かっているのに、守りたかったアーシアの命を奪い掛けた女なのに忘れられない」
「黙れっ！」
「本当に馬鹿な男。初めての女が忘れられないの？　あれだけ恋心を汚してやったのに。イッセーくん、貴方って本当に愚かでつまらなくて救い難い男だわ！」
「レイナーレェェェェェェ！」
　我慢していたものが一気に決壊し、それによって生まれた衝動のまま握り締めた拳をレイナーレへと叩きつけた。
「ふふふふふ」
　それを躊躇うことなく顔面で受け止めるレイナーレ。拳から硬い感触が伝わってくる。
　――棒
（な、何だこの硬さ！）
　異様なまでの硬度に戦慄する。だが、何故かその感触には覚えがあった。
　――相棒
（何だよ、ドライグ！　俺はこいつを！）
　――今すぐ起きろ相棒！　死ぬぞ！』

（へっ？）

ドライグの言葉の意味が分からず呆けた瞬間、周りの光景が一瞬にして崩壊する。レイナーレの姿も塵の様に消え、何もない白い空間と化すと、何かから引っ張られる様に意識がはっきりとし始める。

夢から覚める。そう思った瞬間、開けていたと思っていた筈の目がもう一度開いた。

今度こそ紛れも無い現実。川のせせらぎが聞こえ、開けたばかりでぼやけた視界には日の光、そして何故か突き上げている拳、その拳をもろに顔面に受けているマダ。

至って平常な朝の――

「……あっ」

「朝から随分と威勢の良い挨拶をしてくれるなぁ、イッセー？」

声に怒りの色は無い。いつも通りの口調である。だというのに、全身から冷や汗が止まらない。

「こ、こ、これは！」

「ああ、分かっている。分かっているさ」

突き出していた拳を慌てて引き、弁明しようとするがマダは手を振り、それを制する。

「朝一から特訓をしたいんだろう？　なんせこんなにも元気が有り余っているからなぁ」

マダの全身から視覚化出来そうな程の威圧感が放たれる。空気が一瞬にして浸食され、纏った空気を吸うだけで胃が締め上げられる様な感覚が一誠を襲う。
「お、怒ってますか？」
「全然」
そう言いつつ仰向けになっている一誠の頭を人差し指と親指で挟むと、そのまま指二本で持ち上げる。
「いだだだだだだだだ！　やっぱり怒ってますよね！　怒ってますよね！」
「怒ってないって言ってるだろうが」
言葉に反し、締め上げる力が増していく。
「特訓を始める――前に顔でも洗って来い」
そう言ってマダは川辺に向かって一誠を勢いよく投げる。
「むっ」
その頃、朝食の準備をしていたタンニーンが川辺から聞こえてくる水を切る様な音に気付き、そちらに目を向ける。
すると水面を水切り石の様に何度も跳ねていく一誠の姿。十数回以上水面を跳ねた後、川へと沈み、そのまま仰向けに浮かび上がる。
「ちょうどいい。そのままそこで魚を捕まえろ。獲った分だけ朝飯が増えるぞ」

水面を跳ねていた一誠の心配など特にせず、それどころか魚を捕らえるよう指示してくる。タンニーンにしてみれば先程の光景も日常の一コマに過ぎない。
水面に浮かびながら、遠のきかけた意識の中でタンニーンの声を聞いていた一誠。幸か不幸か朝一番の衝撃によって、目覚める直前まで見ていた悪夢のことは綺麗さっぱりに忘れていた。

◇

「ライザー・フェニックス……お前が、俺に炎の使い方を教える？」
「そうだ。有り難く思えよ？　フェニックス直伝だぜ？」
いきなりそのようなことを言われてシンは面喰らってしまう。この前戦っていた相手からその様なことを言われれば尚更であった。
「それは有り難いが……大丈夫なのか？」
「何がだよ？」
「ついこの間まで引き篭もっていたが……」
「はっ！　たかが数ヶ月閉じ籠っていたぐらいで腕が鈍るかよ」
あくまで自信満々といった様子。引き篭もり時のときの陰鬱な様子はすっかりと消

えていた。見た目も中身も最初に会ったときに戻っている。
「あっちの方も大丈夫なのか？」
「あっち？　何のことだ？」
「ドラゴン」
　ぽつりと呟いた単語。しかし、ライザーは余裕の表情を貫き続ける。
「ふん。今更そんな言葉に惑わされるか」
「あっ。イッセー」
「何っ！」
　ピクシーの指差す方向に向かって、凄まじい勢いで振り返るライザー。だが、当然振り返った先に一誠の姿は無い。
　気不味い空気が場に流れる。
「――はっ！　嘘だなんて分かってたよ！　敢えて乗ったんだよ！　未だに怖がってねぇよ！」
　子供の様な誤魔化しをするライザーであったが、その膝は生まれたての小鹿の様に震えていた。取り敢えずドラゴンという言葉に対してはやせ我慢出来るらしいが、一誠の恐れはトラウマとして根強く残っているらしい。
「……悪かったな」

「本当に怖くないからな！　我慢している訳じゃないからな！　もう克服しているからな！」
「分かった。分かったから」
　必死になるライザーを宥め、話を元へと戻す。
「お前が教えてくれるのは分かったが、良いのか？　敵を強くする様な真似をして」
「……いいんだよ。お前や赤龍帝にはきっちりと強くなってもらわなきゃ俺が困る」
「理由は？」
「お前らは、認めたくないがこの俺に勝った。不本意だがそれは俺よりも強者であることを意味している。勝った奴が負けた奴に対する義務というのを知っているか？」
　その問いにシンは首を横に振る。
「負けた奴がリベンジするまで強者であり続けることだ。俺は、お前らがどこの馬の骨とも分からん奴らに負けることを絶対に認めない。お前らに土を付けるのは俺だ！　だからそれまで赤龍帝やお前には勝ち続けてもらう」
　自分に勝った者が負ければ、自然と自分の価値も下がる。だから負けない様に強くなってもらう。本末転倒の様な気もするが、プライドの高い者からすれば到底許せないことなのであろう。完全にとは言えないがシンとしても理解出来る部分もある。
「それが理由か」

「まあな」
「何だかんだ言って本当は、部屋を出る切っ掛けを作ってくれたシンへのお礼じゃないのー」
「違う！」
「そうなのかホ？　そうならそうと言えばいいホ！　別に恥ずかしいことじゃないホ！」
「違うと言っている！」
「それっぽいこと言ってるけど～。やっぱり図星っぽいね～」
「違うって言っているだろうが！　燃やすぞ！　チビ共！」
　外野の言葉に限界がきたのか、両手に炎を纏わせ恫喝する。ピクシーたちは、わーと言いながら離れていき、近くの木の影に隠れると、そこから頭だけを出してシンたちの様子を窺う。
「何だ、あのガキ共は……！」
「気にしないでくれ。遠慮と物怖じをしない性格なんだ」
　興奮しているライザーを宥めるシン。ライザーもこれ以上ピクシーたちに付き合うのがバカバカしくなったのか、咳払いを一つした後に本題に戻る。
「俺がお前に教える理由はもういいだろ。話を先に進めるぞ。それで炎の使い方だが―

―おい、試しにさっきの様に炎を出せ」
シンはライザーの指示に従い、左手に炎を生み出す。業々と燃え盛る橙色の炎。それを見た途端、やれやれといった様子でライザーは首を振るった。
「思った通りだ。お前は魔力を燃料にしてその炎を出している」
「まあ、そうだな」
これに関してはシンも凡そ分かっている。
「が、それだけだ。お前の魔力は炎を維持するだけの使用に止まっている。それじゃあいくら振り回しても何の意味も無い。纏っている炎が揺らぐだけだ」
「――成程」
「つまり――」
ライザーの説明を聞きながら、シンはそれを頭の中で整理していく。
左手に魔力を集中させ、それを炎に変換するまではいいが、一度点いた炎を絶やさない為には次々と燃料である魔力を注がなければならない。あくまで燃える理由は、シンの魔力によるものである。可燃性のモノに触れるならまだしも、空中には火種となるモノが無い。こんな状態では、シンが想像している様な炎を飛ばす遠隔攻撃など到底無理な話である。
ならば、遠くまで炎を届かせるにはどうしたらいいのか。

答えは至って単純である。目標まで魔力を届かせればいいのだ。
解決策が分かれば後は実行するのみ。早速試してみようとするシンであったが、その前にライザーが声を掛ける。
「――ちょっとその左腕を上げてみろ。炎は消さなくていい」
「うん？　……ああ」
どういう意図でそんな指示を出したのか分からないが大人しく従って、燃える左腕を肩の高さまで上げた。
ライザーは、少しの間左腕を見ていたが、徐に燃える左腕に手を翳す。
「ちっ」
忌々しそうに舌打ちをしながらライザーは手を素早く引き、その後暫し掌を眺めていたが、やがてその手を握り締めてズボンのポケットに突っ込んでしまう。
「もういいぞ。さっさとやれ」
「……ああ」
ライザーの行動を不審がるもそれ以上追及することはなかった。
シンはライザーの助言に従って特訓を再開し、そして思い知ることとなる。理想と現実にはいつだってそれを隔てる壁があることを。

◇

左手に魔力が集い、それが熱を発する炎と化す。燃え盛る左手が向けられた先には立ち枯れした一本の木。

左手の中にある魔力を徐々に押し出すイメージを頭の中に描きながら、左手の魔力を外へと放出していく。

覆っていた炎が放たれる魔力に合わせて動いていき、やがて――といった所で突如として炎は消え去ってしまった。

「……またか」

掌から数センチほど炎が飛び出した瞬間に鎮火してしまった。何回目か数えるのも億劫になってきた失敗である。

魔力を動かせば炎も動く。至極簡単なことであるが、その炎を維持したままという条件が付く途端に難易度が跳ね上がる。

魔力を無理矢理押し止めるのは、熱波剣や光弾といった技を持つシンにとっては然程難しくは無い。だが、それは純粋な魔力の場合である。

魔力を変換した炎の操作は想像以上に精密なものであり、中々結果を出せずにいた。

「早々上手く出来るものじゃない。炎を舐めんなよ」

何度も失敗を繰り返すシンを見て、ライザーはそっけない態度でそう言う。言い方はぶっきらぼうではあるが、すぐに出来ないのは当然であり、焦る必要は無いことをライザーなりに伝えたいらしい。

「――そうだな」

それが伝わったのか、シンは深く呼吸をして気分を落ち着ける。

自分では分からなかったが、知らず知らずのうちに上手くいかない焦りで操作が雑になっていたのかもしれない。少なくともライザーからはその様に見られたのは間違いなかった。

「フェニックスも初めて炎を使うときは、誰もが苦労したのか？」

気分転換の為にライザーに話を振る。

「はっ！　そんなわけないだろうが。フェニックスは炎と風を司る悪魔だぞ？　炎を操ることなんて息を吸うよりも簡単だ。ただ――」

「ただ？」

「生まれ持った感覚だけではいずれ限界を迎える。炎が何故燃えるのか、風が何故逆巻くのか、それを知り、学ぶことで初めて限界の先を行ける。まあ、俺はそっちの方もすぐに憶えたがな」

最後に自慢を加えたことを除けば、中々為になる話である。

先天的な才能があってもそれを磨く努力をしなければ輝き発しないということであろう。

（俺も知る必要があるかもしれない）

『魔人』というものが何なのかを知る。いつまでも避けられるものではない。いずれ知らなければならないことである。その手始めとして自分の体の詳細について知らなければならない。

（アザゼル先生辺りに頼めば調べてくれるかな？）

そんなことを考えているとライザーが話し掛けてくる。

「もうそろそろ日が完全に落ちるが、お前らはどうするんだ？」

「いや、いつもこの森で野宿している」

「はあ？　野宿！　信じられん……」

貴族として生きてきたライザーからしてみれば、この様な場所で寝泊まりしていることと自体、想像の範囲外のことらしい。

「――まあいい。それで明日も朝から炎の訓練をするのか？」

「朝はセタンタさんと訓練している」

「お前、セタンタ様から直々に教えられているのか!?　……その訓練は何時までだ？」

「実戦形式だからどのタイミングで終わるかは分からない。取り敢えずまともに動けな

くなるまではやる」
「……お前、よく今まで生きていたな」
「やっていれば慣れる」
「……そうか」
シンの発言に信じ難いといった眼差しを向ける。
「なら適当に時間を見て来る」
「ああ――ん？」
頷き掛けたがそこで止まる。
「明日も来るのか？」
「来ちゃ悪いのか？」
「そういうことではないが……」
シンからしてみれば助言をしてそこで終わりと思っていたので、継続して教えに来るとは思っていなかった。
「何か別の予定とかは無いのか？」
「気にする必要はない。……色々あったせいで当分の間は、レーティングゲームに参加しないと主催者側に言ってしまったからな……とくにやることもねぇよ」
若干卑屈な表情となる。やろうと思えばすぐにでも不参加の取り消しなど出来るの

であろうが、いくら見た目は元に戻っても精神の方はまだ完全に戻ってはいないらしい。

これ以上聞くのは傷を抉るだけだと思い、シンは素直に受け入れることにした。

「分かった」

「はっ。俺が来る前にくたばっているなよ?」

憎まれ口を叩くと、ライザーは炎の翼を広げて飛び立っていく。

「また頼む。ライザー・フェニックス」

「またねー」

「またホー」

「さ〜よ〜な〜ら〜」

ライザーが帰るのを見て、少し離れていた所で見学していたピクシーたちがシンの下にまで出て、空を飛んで行くライザーに向け手を振る。

その声に気付きライザーは下を見下ろすと、返事はせずにふん、と鼻を鳴らして飛び去っていった。

時同じくしてライザーが飛び去っていくのを眺めている者がいる。木の陰に身を潜めてシンたちを見守っていたセタンタである。

ライザーがこの場所に来て、新たな力の使い方に悩むシンにその使い方を教えたのは

意外であったが、セタンタからすれば嬉しい誤算であった。
あの炎の扱い方に関してはセタンタが直々に教えるのも有りであった。武術に秀でているが魔術に関してもセタンタは相当な実力を持っている。だが、やはり扱える術に関しては偏りがある為、上手く教えられるか若干の不安があった。そこに炎に長けたライザーが来てくれたお陰でその不安も解消される。
「手札は多い方がいいですからね」
新たに手に入れた力のことを考慮しながら、セタンタは今後の実戦訓練についてのやり方を考える。

◇

シンたちの姿が完全に見えなくなると、ライザーは飛びながらポケットに入れていた手を出す。シンの炎に翳して以降、訓練中ずっとポケットの中に入っていた。
握っていた拳を開く。すると掌の中央部分が赤く変色し、所々水泡が出来ていた。明らかに火傷である。
(まさか、不死鳥が火で火傷をするとはな)
炎を支配する存在として在り得ないことであるが、その在り得ないことが目の前に傷

という証拠として残っている。
シンとの一戦で感じた異質な熱。それを改めて確認する為にシンの炎に触れたが、答えは目の前の通りである。
不調とはいえフェニックスの炎を超え、更に再生を阻害する炎。ライザーにとってもフェニックス家にとっても未知の脅威である。
だが、ライザーの胸に不思議と焦燥も恐れも無かった。代わりにあるのは燃え盛る様な強い対抗心。
（いいぜ。もっともっと強くなってみろ。こっちの予想を上回るぐらいに。だが覚えておけ。必ず俺はお前に勝つ！）
いずれ起こるだろう雪辱戦を思い、ライザーは更に己を昂らせるのであった。

◇

「はあ……はあ……はあ……」
俯き、額から目にかけて流れる汗を手の甲で拭う。全身の熱を冷ます為に全身にも汗が流れており、そのせいで衣服が体に張り付き不快感を覚えた。
与えられていた特訓は既に熟していた。というよりも与えられていた内容の二倍以

上の特訓を自主的にしており、とっくに必要量は超えていた。
それ故に体は限界が近いことを訴えている。しかし、どんなに内容を熟していても消えることのないものが胸の中にあった。
不安。焦燥。
その二つがどんなに厳しい訓練をしていても消えない。寧ろ特訓をすればするほど強く感じる。
特訓を終える度に、本当にこれだけでいいのか、という疑問が湧き、更なる特訓を行う。それが終わってもまた疑問が湧き、同じことを延々と繰り返す。
疲労が溜まり、体が上手く動かなくなっていくことで見えてしまう今の自分の限界。もっと出来る、もっと出来る筈、と自分に言い聞かせ、見たくないものから目を逸らす。
一分一秒たりとも無駄にしたくない。その焦りから俯いていた顔を上げ、更なる特訓をしようとしたとき――
「そこまでだ」
後ろから肩を引っ張られて無理矢理止められた。
振り向くとそこには眉間に皺を寄せ、険しい表情をしたアザゼルがいた。
「……アザ、ゼル先生」
「言いたいことは山程あるが、取り敢えず――」

アザゼルが顔面目掛け腕を振るうのが見えた。殴られる、そう反射的に思ったが想像していた衝撃は無く、代わりに眼前に突き付けられたのはペットボトルを握るアザゼルの手であった。
「水分を摂れ。小猫」
有無を言わさぬ態度に気圧され、小猫は突き出されたペットボトルを受け取る。触れた瞬間、痛みに近い冷たさを感じた。キャップを捻り、飲み口に唇を当てると中身を一口飲む。
舌で感じ取れるほんのりとした甘さとしょっぱさ。市販されているスポーツドリンクに近い味であった。だがそれよりも強く感じたのは冷たさであった。
熱が滞った体にするりと流れ落ちて染み渡る冷たさ。体の内側から冷えていく心地良さに飲むことが止まらなくなる。
十秒も満たずに空になってしまうペットボトル。名残惜しさを感じながらも飲み口から唇を離す。
小猫が渡された飲み物を一気に飲む姿を黙って見ていたアザゼルであったが、その表情は変わらず険しい。
「一人一人様子見に周っているが……お前、俺が与えた課題以上のトレーニングをしているな？」

その言葉に小猫の動きが止まる。態度だけで図星を指されたのが分かる。
「勘違いしているようなら言っておくぞ。俺が与えたトレーニングは今のお前に最適と思って与えたものだ。指定した量を以下でも以上しても無意味だ。逆にお前の成長を阻害するだけだ」
諭す様な言い方であったが、小猫は無表情のまま。心なしか苛立っている様にも見える。
「……私は、もっと強くならなきゃいけないんです」
アザゼルに、というよりも自分に言い聞かせる様であった。
「……皆さんはどんどん強くなっています。特にイッセー先輩や間薙先輩は私以上に強くなっています。……ギャーくんも段々と神器を使いこなせる様になっています」
「焦る気持ちは分かる。他と比べるなというのも無理な話だ。だが、それでも俺は教える立場として言わせてもらう。これ以上のトレーニングは止めろ。結果の前に壊れるぞ」
相手の気持ちを理解しながらも、それを敢えて無視し警告する。力の入っていない四肢。活力の無い目。全身から漂う濃い疲労の色。アザゼルの目には既に小猫が限界に近い疲労困憊の状態に見えていた。
「……嫌です」

だが小猫は、アザゼルの警告を拒む。
「小猫――」
「私は！」
語気を強めるアザゼルの言葉を遮る小猫の声。それは悲痛なものが含まれていた。
「……今の私は、きっと眷属の誰よりも弱いです。……きっといつかこの弱さのせいで部長にも迷惑を掛けてしまいます。……だから……だから」
そこから先の言葉は言わず、小猫はアザゼルに一礼すると逃げる様に走り去っていく。
小さくなっていく背中を見て、アザゼルは何か言いたげな顔をしていたが、やがて溜息を吐く。
「俺もまだまだだな……」
自嘲する言葉を思わず呟く。
無理をする小猫を止めるならばそれこそ簡単である。捕まえてベッドに鎖で縛り付けてしまえばいい。だが、それが根本的な解決にはならない。
焦っているのは分かっていた。それ故に無理をする可能性も見えていた。だが、面と向かってそれを咎めるのが、想像していたよりも難しい。
焦り、悲しみに濡れた目を向けられると言うべき言葉が喉で詰まってしまう。

そもそも出会って間もない相手の言葉。それが小猫の心にすんなり届くとは思えない。それこそリアスでも連れて来なければ説得も難しいであろう。

だがそれはそれでリスクもある。リアスの説得に耳を貸すのは間違いないであろうが、それによって拭い切れない罪悪感、劣等感を覚えてしまう可能性もあるし、今度は陰で見つからない様に過酷なトレーニングをする様になる危険もあった。

これぱかりは本人が考え方を変えなければ解決しない。

取り敢えずはいつ小猫が倒れるか分からないので看視の目を強めることにする。

「年頃の子供を扱うのは本当に難しいもんだな」

ヴァーリを頭に浮かべながら、アザゼルは若々しい容姿とは裏腹に年寄り染みた言葉を吐くのであった。

◇

全身が重石を架せられた様に重い。体の至る所からひりつく痛みを感じたが、それをどうこうする程の力も出ない。

セタンタとの実戦訓練が終わった時は、必ずと言っていい程この様なボロボロの状態となっていた。最初の頃は思考するのも億劫だったことを考えれば、自分の体のことに

注意が払える程度は慣れた。
仰向けになりながら荒い呼吸を徐々に規則正しいものへと変えていく。その間にピクシーが治癒魔法をかけて体の傷を治す。
ピクシーの治癒魔法は、傷だけでなく多少ではあるが体力を回復させる効果も有り、疲労に満ちた体にはその多少の効果も有り難いものであった。
「相変わらずズタボロだな。セタンタ様とやり合ってその程度で済んでいると考えれば大したものなのかもしれないが」
仰向けになっているシンを覗くのはライザー。この様な状況で似た様な台詞を聞くのはもう何度目となるか。
「……始めるか」
「どうせそんな体じゃ満足に動けはしないだろうが。ゆっくり立て。そして、とっとと回復しろ」
立ち上がろうとするシンを制止しながらも、矛盾する様な急かす言葉を言ってライザーは近くの木に背を預け、こちらを待つ構えをする。
ライザーから炎について助言を受けて数日。その日から毎日の様にライザーは、シンの訓練場に顔を出す様になった。
ライザーはセタンタとの特訓が終わったと同時に顔を出す。最初のうちは偶然と

思っていたが、どうやらセタンタとの特訓が終わるまでどこかで身を潜めて待っているらしい。

セタンタとの特訓中にそれらしき視線を何度か感じ取っていた。

一度、そのことをライザーに聞いてみると――

「俺は色々忙しいんだ！　お前の特訓なんぞ最初から最後まで見ている暇は無い！　只の偶然に決まっているだろうが！　自惚れんな！」

――と凄まじい剣幕で捲し立てられた。

セタンタの方も気付いているらしいが特に何も言わない。ライザーがこの訓練場に来ていることや特訓の手伝いにも何も言わず、シンにそれに関することを尋ねるのも無い。完全に黙認している状態であった。

ゆっくりと時間を掛けてシンは立ち上がる。体の各部に異常が無いか確かめる為に首や肩、手首、足首を緩やかに回す。所々鈍い痛みを感じるものの大事に至る様なものではない。

体に足りない酸素を補充するかの様に大きく長く息を吸い、同じ間隔で息を吐く。それを数度繰り返した後に、ライザーの方を見た。

まだ疲労は残るものの何時までも休んでいる暇は無い。与えられている特訓の期間も半分は過ぎようとしている。

「早速やるか。ほら、さっさと炎を出せ」
シンの左手に炎が灯る。魔力を糧にして燃え盛る炎が宿った左手を、適当な位置に生えている木に向けた。
炎を維持したまま、火種となる魔力を移動させる。この時、シンが頭に思い描くのは一本の軸であった。左掌から対象に向かって伸びる真っ直ぐな軸。
それを導火線として、イメージする軸に向けて魔力を注ぎ込む。炎が掌から目標の木に向かって一気に伸びる、が一メートル程伸びた所で一気に失速し、そのまま萎れる様に地面に当たり、生えている雑草を燃やした後に消えてしまう。
届かなかったのを見て、シンは息を吐きながら左手の炎を消す。強く集中していたせいで額から汗が流れ落ちる。
「最初の頃に比べたら大分良くなったんじゃないか？」
数日前まで左手を燃やす程度のことしか出来なかったが、今では僅かではあるが炎を伸ばすまで成長している。
色々と助言していたライザーは目に見える形で成長するシンに嬉しそうに笑う――ことなどせず、逆に顔を顰めていた。
（腹立たしいぐらいに上達していきやがって）
数日前までは碌に炎を操れなかった者が急速にモノにしている。その早さには複雑

な感情を抱かずにはいられなかった。
見せつけられるシンの成長に対し、ライザーは嫉妬すら覚えていた。
だが、とライザーは湧き上がる感情を腹の奥底に押し込める。この仕舞い込んだ感情すらも糧にしなければ自分自身も成長出来ない。どんなに言い訳を並べようと、ライザーは既に一誠とシンに完敗した身。体の内側から焼け爛れそうな屈辱感を覚えるが、それを納得し、受け入れなければ前と何一つ変わらない。
（いいさ。どんどん俺に見せてみろ。お前の実力を。いずれその全部を超えてやる。勿論、赤龍帝もな）
虎視眈々と雪辱を注ぐことを考えながら喉の奥で笑うライザー。シンやピクシーたちは、ころころと変わるライザーの表情を不審な眼差しで見ていた。
シンらの視線に気付いたライザーは、不気味な笑いを引っ込め誤魔化す様に睨み返してくる。
「何だ？」
「いや、別に」
「ふん、余所見してないでさっさと再開しろ。……にしても」
ライザーは頭上を見上げる。あるのは何十にも重なった木々と葉のみ。そのせいで日の光も殆ど入って来ない。

「ここは蒸し暑い上に薄暗いな。もう少し明るい場所はないのか？」
「枝の隙間が大きな場所があるが大分戻らないといけない」
「奥に同じような場所は無いのか？」
「さあ、どうだろうな」
　セタンタと特訓しながら徐々に森の奥へと入っているのは分かっていた。入口付近は油断する暇も無いほどの魔物たちが群れを成して襲撃して来たが、そこから先に進むとパタリとそれも止んだ。
　セタンタですら異常と思い森の調査をしていたが、シンが結果のほどを聞くと空振りであったと告げられた。
　直感的にこの森に何かがあるのは分かっているが、それが何かは全く分からない。
「もう少し奥に行ってみるか」
　そんなシンの考えをよそに、ライザーは躊躇することなく森の奥へと入って行ってしまう。
「おい」
「少し調べるだけだ」
　シンが咎めるが、ライザーは気にすることなくどんどん先へと進んで行く。
　相手が聞く耳を持たないことに溜息を吐くが、一人で行かす訳にもいかずライザーの

後を追う。
ライザーは、草木が生い茂る道無き道を、不機嫌そうに顔を顰めながらも掻き分けて進む。
周囲に特に異常は無い。問題があるとすればせいぜい自前の赤いスーツに蜘蛛の巣がひっついてしまいそうになるぐらいである。
ライザーは、蜘蛛の巣の下を潜る。特に気を張ることもなくこのまま先へと一歩踏み出した瞬間――
「ッ！」
――得体の知れない重圧が突如としてライザーへ圧し掛かった。何か目の前で変化が起きた訳では無い。危険な香りが漂ってきた訳でも無い。ただ本能が告げる。まるで触れてはいけないものに触れてしまったと、まるで起こしてはならないものを起こしてしまったようなと。
変化を感じ取ったのはライザーだけではない。
「――ゆっくりでいい。そこからゆっくりこっちに戻ってきてくれ」
シンもまた見えざる重圧を敏感に感じ、前にいるライザーに後退する様に言う。
「なになになに！」
「ヒホ！　体がぞわぞわするホー！」

「ヒ～ホ～。何かあれだね～。間違って悪霊の巣に入っちゃった時のことを思い出すね～。この感じ～」

ピクシーたちもまた危険を感じ取り、怯える様にシンの側に寄る。

すると今度は木々がざわめく。木の葉が擦れ合う音があちこちで聞こえてきた。見上げると枝葉の隙間から無数の翼を持った魔物たちが一斉に飛び立っていくのが見える。

あれほど静かだったのにこれほどの数の魔物たちが身を潜めていたことに驚きつつ、それが何故か息を殺す様に隠れていたことに強い不安感を覚えた。

「――おい」

声を掛けられ、シンは視線をライザーへと戻す。緊張しているのかライザーの声は少し掠れていた。

「来るぞ」

◇

森の最奥。いつもの場所でソレはいつもの様に眠っていた。

誰も侵すことの出来ないソレのみが許される安眠。

何時もの様にそれが続くと思っていた。しかし――

閉じていた目が開かれたかと思えば、ソレは勢い良く立ち上がる。

ソレは離れた場所にいても感じ取っていた。誰かが自分の縄張りに足を踏み入れたことを。

僅かに鼻を動かす。複数のニオイを感じ取った。一つは前に一度嗅いだことのある不思議なニオイ。他は最近森で騒いでいる者らのニオイ。その中で火と風のニオイがする者がどうやら縄張りに侵入したらしい。

一番警戒している強者のニオイも感じたが、どういう訳か他の者たちよりも離れた場所から感じた。尤も例えその強者が居たとしてもソレは縄張りを侵した者を見逃すつもりはなかった。

ニオイの下に向かって地を蹴る。一足で最高速へと達したソレは、木々の隙間を縫う様に、あるいは木の枝を踏み台にして木々の間を飛ぶ様に走りながらもその速度を保ち、緩めない。

どんどんニオイが濃くなっていく。侵入者たちは、その場に止まったままである。

間もなく侵入者たちを視界へと捉えることが出来る距離まで来た。目の前にそびえる大木。その向こう側に侵入者たちはいる。

ソレは前足を大きく振り上げる。ここまで来たのならば迂回する必要も無い。大木

が邪魔ならばどかすまで。
大木に向かって前足を一閃。すると大木が大きな音と共に周りの木々を巻き込みながら倒れていく。
阻むものはなくなった。切り倒された木の向こうにこちらを見ている複数の存在を確認する。
切り倒した大木の株に飛び乗り、最も近くにいた人物目掛け再び前足を振り上げた。

◇

人が数人いなければ囲えない程の大木が目の前で倒れていく。本来ならばこの光景に目を奪われていたであろうが、今のシンたちにとってそれは些細なことであった。
切り倒された木の株に何かが乗る。その何かは一瞬こちらの人数を確認する様に一瞥すると、近距離にいたライザーへと飛び掛かった。
間近に現れたソレは前足を振り上げながらライザーへ襲い掛かる。
回避。反撃という選択は最初から抜け落ちていた。咄嗟の判断か、あるいは相手の気に呑まれてしまった為かは分からないが、このときのライザーは避けることしか考えていなかった。

横へ飛び退くかあるいは後方に下がるか、何千分の一秒にも満たない時間の中で思考を動かし、相手が動きの大きい振りをしているのを見て、避けるついでに後ろにいるシンたちに合流しようと考えて、後方に下がろうとした。

（――何？）

だが何故かライザーの意思に反して体が横へと飛ぶ。思考と噛み合わない体の動きにライザーは戸惑うが、その戸惑いもすぐに消える。

空振る大振りの一撃。すると爪先から放たれた三爪の軌跡。虚空を斬り裂くだけでは飽き足らず、触れていない筈の地面を大きく斬り裂き、大地に深々と爪痕を残す。

避けたライザーは、その光景を見て心臓が大きく鼓動したのを感じた。刻まれた爪痕はシンたちがいる場所近くにまで伸びており、もし仮にライザーが横ではなく後ろへと下がっていたら、間違いなく自分の身が爪痕の数だけ分断されていたのが分かる。

思考ではなく直感が働いて選んだ選択が、ライザーによって最良の選択となった。

素早く立ち上がったライザーは襲撃者の姿を見る。シンたちもまたその姿をはっきりと捉えた。

全身から生やした真白な体毛。光が当たる角度によっては銀色にも見える。首周りを覆う豊かな鬣から一見獅子に見えるが、長く伸びた口吻は大型犬あるいは狼によく似ていた。

体格は軽く見ても二メートル以上。口を開ければ人の頭など軽々と噛み砕ける程の体格差があった。その大柄な体格を支える四本の足はどれも太く、指先からは黒々とした爪を生やしていた。あの斬撃を放てるのも納得してしまうほどに鋭く、禍々しい。

臀部というよりも背中の半ば辺りから尾を生やしており、体毛が無い代わりに鱗を縦に連ねた独特な尾であった。

「グルルル……」

魔物は、喉から低い唸り声を出してシンたちを威嚇する。全身から凄まじい殺気を放っている。下手に動けば真っ先に狙われるのが分かっているので、ピクシーたちも蒼い顔をしたまま動くに動けなかった。

シンもまた微動だにしていなかったが、ピクシーたちとは理由が違った。度々起こる既視感によって彼は動けなかったのだ。

見たことが無い筈なのに見たことがある。何度も経験してきたそれが今も起こっていた。

この魔物を見た時、ある言葉がシンの頭に過っていた。しかし、その言葉と目の前のこれとはあまりにかけ離れていると言ってよかった。だが以前、それと会ったとき何一つ間違っていないそれを見た時に違和感を覚えたのを記憶している。

何一つ合っていない筈なのにその言葉と目の前の魔物とが不思議と結び付き、すんな

りと受け入れられる。
「何だこいつは……」
「グルルル……オレハコイツデハナイ」
「喋れるのか！」
魔物から思わぬ返事が来たことにライザーは驚く。シンもこの森で様々な魔物たちと戦ってきたが、喋る魔物は初めてであった。
「喋ることは、まあいい。一応話が通じるということだな？　おい、何でいきなり襲ってきた？」
驚きもすぐに消え、ライザーは突然襲ってきた魔物にその訳を問う。
「コノ森ハオレノ縄張リ。他ノ奴ラニ恵ンダ場所マデナラ許ス。ダガココカラ先ハ、オレノモノ。入ッテキタオ前ラ、許サナイ！」
「チッ！　多少知恵はあるが、結局は考えることはそこらの魔物並みか、こいつは！」
至って単純な理由で襲われたことに、腹立たしい気持ちを吐き捨てる。
「グルルル！　コイツト呼ブナ！　オレノナハ――」
「――ケルベロス」
魔物が言うよりも先にシンが、頭に浮かんでいた言葉を囁く様に漏らす。
「は？」

シンが言っていることが一瞬理解できなかったのか、ライザーは気が抜けた声を出す。
「いきなり何を言い出しているんだ、お前は？」
至極尤もなライザーの疑問に対し、シンは自分でもよく理解していないのか、やや躊躇いがちに口を開いた。
「――何となく思ったことを言っただけだ」
自分でも唐突で突拍子も無いことを言ったのは自覚している。だが、それでも何故か口に出さずにはいられなかった。
「呆けたか？　こんな時に……」
理解出来ないといった態度を見せるライザー。しかし、シンの言葉を聞いてからピクリとも動かなくなった魔物の姿を見て、不審そうに眉を顰めた。
「……何故ワカッタ？」
「なに？」
「何故、オレガケルベロスダトワカッタ？」
驚き、そして同等の警戒心を込めながら、魔物ことケルベロスはシンに問う。
「……ただそんな気がしただけだ」
「理由ニナッテイナイ」

尋ねられたとしてもそう言うしかない。根拠など無かった。ただそう思ったから言っただけである。全くイメージと違う目の前の魔物を何故ケルベロスと言ったのか、自分でも知りたいぐらいであった。
「待て待て待て待て！」
すんなりと自分をケルベロスと認めた魔物に対し、それを認められずライザーが口を挟む。
「お前のどこがケルベロスだ！」
「オレガケルベロスト言ッタラケルベロスナンダ！」
否定するライザーにケルベロスは犬歯を剥き出しにしながら応じる。
「体毛の色が違う！」
「生マレツキダ」
「尻尾が蛇じゃない！」
「アンナヒョロヒョロシタ生キ物ナンテ邪魔ナダケダ」
「そもそも根本的な所から違う。お前、頭が一つしかないだろうが」
その言葉を発した瞬間、ケルベロスは目を細める。誰も判別出来ないぐらい微妙なものであったが、これから巻き起こるであろう嵐の為の静かな変化であった。
「三つ首はケルベロスにとって当たり前だろうが。残りの二つはどうした？　何処で首

を無くし――？」

そこまで言い掛けてライザーは黙る。黙らざるを得なかった。

ケルベロスが全身の毛を逆立てながら凄まじいまでの怒気を露わにしている。さっきまでの外敵を払う為の気とは全く違う。業火を彷彿とさせる様な激しい怒りに、ライザーは自然と口を閉じるしかなかった。

「オマエモ呼ブカ……」

前足を上げたかと思えば、それを地面に叩き付ける。地面が沈み、衝撃が伝わった周囲の木々から一斉に木の葉が落ちていく。

「オレノコトヲ『クビナシ』ト呼ブカッ！」

咆哮と共に、宙を舞っていた木の葉が全て吹き飛ぶ。

「――言ってはいけないことを言ったみたいだな。ライザー・フェニックス」

「俺は、あくまで常識を言っただけだ！」

尤もシンもケルベロスがここまで激怒するとは思わなかった。あまり話が通じない相手ではあったが、今は完全に話の通じない状態となっている。

「オマエラモオレト同ジニシテヤル！」

ケルベロスの四肢に力が込められ、爪が地面に食い込んでいくかと思えば、込められた力は瞬時に爆発し、その場から跳躍した。

狙いをライザーに定め、前脚を振り上げながら飛び掛かる。接近してくるケルベロスの速さにライザーの反応は僅かに遅れ、避けようとしていた時には既にケルベロスは前脚を振り下ろそうとしていた。

「舐めるな！」

避けきれないと判断したライザーは、ケルベロスの前脚が振り下ろされるよりも先に指先をケルベロスへと向けるとそこから炎弾を数発放ち、ケルベロスの顔面を炎で覆い尽す。

しかし、ケルベロスの動きはそれでも止まらず、横振りの爪が宣言通りライザーの首を狙って振るわれた。だが、炎で視界を奪われているせいか振りに最初のときの様なキレが無く、ライザーは仰け反る様にして回避すると、炎の翼をはためかせながら後方に飛び、追撃の炎を放って、ケルベロスを火達磨にする。

「くそっ！」

シンの近くに降り立つライザー。その顔は苛立ちから歪んでいた。

首筋を手で押さえており、そこから血の代わりに炎が洩れている。直撃は避けたものの僅かに掠っていた。

押さえていた手を離すと傷口を埋める様に炎が吹いていたが、その状態が続くだけで一向に傷が塞がる様子は無い。今のライザーの治癒能力ではここまでが限界らしい。

ライザーの状態が気になりつつも、シンはケルベロスから意識を逸らすことが出来なかった。

不死鳥の炎で全身を焼かれるという時点で、通常ならば決着が付いてもおかしくない。しかし、燃え盛る炎の中で崩れることなく立つケルベロスの姿を見ていると不安が拭えない。炎を放ったライザーもシンと同じ心境らしく、燃えるケルベロスを睨むように見ている。

そんなことを思っているとケルベロスに動きがあった。炎の中で体を左右に激しく振る。すると纏っていた炎が四方に飛び散っていく。

まるで水を振るい落とす様な動きで炎を取り除くケルベロス。銀の体毛には焦げ跡一つ無く、無傷の状態であった。

「俺の、フェニックスの業火を受けて無傷だと……」

龍の鱗すら焼くことが出来る炎を浴びて無事でいるケルベロスに対し、ライザーは信じられないといった様子で目を見開く。それと同時に、やはり目の前の魔物はケルベロスではないと確信する。只のケルベロスであったのならば、フェニックスの炎に耐えられる筈が無いのだ。

「温イ」

ライザーの額に青筋が浮き出る。その一言は、プライドを大きく傷付けるものであっ

た。
ケルベロスが大きく口を開く。それを見て、何をするのか察したシンたちは急いでその場から離れる。
直後、予想した通りケルベロスの口から炎が吐かれた。直線状に放たれた炎はシンたちが立っていた場所を通り過ぎてその先にある木に当たると、呑み尽くす様に炎で包み込む。
湿気を帯びた森の空気を一瞬にして乾燥させる程の熱量。当たれば即灰と化すのが想像出来た。
炎によってシンとライザーを分断させたケルベロスは、今度はシンに狙いを変え、一直線に駆けてきた。
振り上げられる前脚。しかし、その動きを読んでいたシンは振り下ろすよりも先にケルベロスの側面へと回り、無防備となっている胴体目掛けて拳を打ち込む。
（むっ）
「グッ！」
全力で放った拳の威力にケルベロスの口から小さな呻き声が洩れる。だが、すぐにそこから飛び退き、追撃出来ない様に距離をとる。
（この感触……）

拳に伝わってきた感触から、ケルベロスへ大したダメージを与えられていないことが分かった。まるで針金の束でも殴ったかの様な感触。硬いが弾力があり、剛柔が合わさっているケルベロスの体毛に阻まれ、芯まで届いていない。

炎への耐性は厄介であるが、打撃への耐性まであるとなると、戦いが更に困難なものとなる。

よろけるケルベロスであったが、すぐに地面を足で蹴り付けて体勢を建て直し、その流れに沿う様にして再びシンへと爪を振るう。

振るわれるケルベロスの大きな足。爪先が掠ればそこから全ての皮が剥がされてしまいそうに思えた。

だが殺気という重圧をその身に受けながらもシンは逃げずにその場に止まり、足の下から根が張る様なイメージをしながら地面を踏み付け、奥歯を噛み締めると迫る爪に拳を繰り出す。

拳はケルベロスの足の中央、肉球にあたる部分へと直撃する。

力と力の衝突。肩が外れるかと思える様な衝撃が右腕に走るが、それでも力を緩めない。

ケルベロスの爪撃を力で押えたシンであったが、すぐさまそこにもう一方の足から凶爪が迫っていた。

シンは、爪が届くよりも先に足首の部分に手の甲を叩き付け動きを止める。両方から掛かる圧力に、肉と骨がか細い悲鳴を上げる。
「オマエ、丸カジリ」
両腕で押えられて動けない状態のシンにケルベロスは口を大きく開き、頭部を言った通りに丸齧りにしようとする。
そんな場合ではないとは思いつつも、以前別のケルベロスと戦った時も喰われかけたことを思い出し、変な縁を感じてしまう。が、シンの心情を相手が考慮することなどなく、綺麗に並んだ牙はすぐそこまで迫っていた。
牙が届く直前、シンは可能な限り頭を前に倒し、ケルベロスの胸元に頭を押し付ける様な格好となる。
ケルベロスの牙が狙いを外され、ガチンと牙が打ち合う音が頭上で聞こえたのと同時に、上半身をバネ仕掛けの様に跳ね上げ、後頭部をケルベロスの下顎へ叩き付けた。
「ウッ！」
流石に顎への打撃は効いたのか、先程よりも強い声でケルベロスが呻くのが聞こえた。
シンはそのまま後頭部を顎に押し当て、口を開けない様にする。ケルベロスはそれを嫌がり、押し付けている両足に力を込めて押しのけようとしたり、全身を震わせて逃れ

ようとするが、シンは密着したまま動かない。
「そっちばかりに気を捉えられてんじゃねぇよ」
耳に届くライザーの声。意識をそちらへと向けようとしたときには既に遅かった。
炎の翼を羽ばたかせて加速したライザーが、両足を揃えてケルベロスの横顔を蹴り飛ばす。
無防備状態からの突然の一撃。ケルベロスの大きな体が真横に吹き飛び、地面に接するとそこから数度転がっていく。
「余所見しているからだ」
「助かった」
礼を言うシンであったが、ライザーの方は苦虫を噛み潰したような表情でシンを見ていた。
「白々しい。こうなることは想定済みだったんだろうが」
「――まあ、二対一みたいなものだからな」
最良とは分かっていても相手の思う様に動かされたことが、ライザーのプライドに障った様子であった。
「……もし、俺がお前の予想通りに動かなかったらどうするつもりだったんだ？」
「大丈夫だろう。お前は弱くないしな。ライザー・フェニックス」

そこでライザーは舌打ちをした。いつかは打倒すべき相手だと分かっている。その相手が自分の実力を買っている。上から目線かと反発したい気持ちがあると同時に妙な嬉しさも覚えてしまう。それを悟らせない為にわざと不機嫌な表情を浮かべる。
「――上級悪魔である俺に当たり前のことを言うんじゃない。あと一々俺の名をフルネームで呼ぶな。……ライザーだけでいい」
「そうか、分かった。力を貸してもらうぞ、ライザー」
「お前が俺に力を貸すんだよ、シン」
改めて共闘することを確認する様に互いの名を呼ぶと、二人はケルベロスとの距離を詰めていく。
「このまま一気に攻める」
「殴る蹴るなんて野蛮な戦い方は趣味じゃないんだがな」
炎が効かないのは分かっているが、素手で戦わなければならないことに不満があるらしく愚痴を溢す。
「代わりに突くか、啄んでみるか？」
「お前、フェニックスのことを馬鹿にしているだろ？」
戦いの最中であるが軽口を言い合う。
「グゥゥゥ……」

頭を左右に振りながらケルベロスは立ち上がろうとする。不意打ちであったせいでそれなりのダメージを負ったが、それよりも地べたを舐めさせられることとなった屈辱の方が強く、更なる怒りが湧き、負わされた痛みもそれによって気にならなくなる。

「アオォォォ……オン？」

立ち上がってすぐに怒りの咆哮を上げようとしていたケルベロスであったが、それも途中で困惑の声へと変わった。

自分の間合いに立つ二人の姿。二人は少し距離を置いてケルベロスの左右に立っていた。

この森を縄張りにする為、何十もの魔物を仕留めてきた。ケルベロスの力を見ると決まって魔物たちは距離を取り、接近することを避けた。命の取り合いをするということは、臆病とも呼べる慎重さが必要である。だというのに少し前脚を伸ばせば簡単に届く距離に平然と立つその命知らずな姿にケルベロスは純粋に驚いた。

「――ナゼ、オレノマエニ立ツ？」

「この位置でなければ手が届かない――怖いか？」

シンの言葉にケルベロスは体の血が沸騰しそうな程の怒りを覚えた。自分が相手に臆する理由など何一つ無い。見下されたと判断したケルベロスは、咆哮を上げて爪を振るおうとする。

この行為自体、図星を指されムキになって否定している様にしか見えないものであった。

冷静さを欠いた衝動的行動。もし『一人』であったのならば重圧のある攻撃に見えたのかもしれない。しかし、それを『二人』で見ればただの隙のある行動でしかなかった。

爪を振るおうとした直前、ケルベロスの側頭部に衝撃が走る。脳を揺らす程のものではなかったが、それでも無視できるものでもない。

目だけを向けると肘部分から炎を噴き出していたライザーが軽く手を振っていた。

「見た目以上に硬いな、こいつ」

ライザーに殴られたと理解した瞬間、今度は脇腹から内臓に向かって突き抜けていく衝撃と痛み。

ほんの僅かの間意識を逸らされた時を狙われ、今度はシンによって胴を殴打されていた。

偶然か意図してか、丁度骨と骨の隙間に拳が叩き付けられていた。

大概の物理的攻撃に耐えられる自慢の体毛であったが、シンの攻撃もライザーの攻撃も予想以上に重く、痛みを味わうのはケルベロスがこの森を縄張りにしてから久しい。

「グウッ！」

呻きながらケルベロスはシンの頭部目掛けて爪を振り下ろす。少しでも掠れば相手

の動きを鈍らせることが出来る。
だが、それを感知しケルベロスの斜め後ろへと避けつつも素早く移動すると、ケルベロスの後足を蹴り付ける。
蹴られた足から力が抜け、ケルベロスの身体がガクンと沈む。その瞬間、炎を噴出させたことで急加速したライザーの足がケルベロスの腹部を蹴り上げる。
再び呻くケルベロス。反撃する度に別方向からの攻撃が飛んできて、それに意識が割かれるとまた別方向からの攻撃が来る。
前足を振るう。すると側頭部を殴られ、左後足に蹴りを受ける。炎を吐こうとする。次の時に顎を真横から殴打され、背中に肘が下された。
最初は反撃していたケルベロスであったが、二人の連携によってその機会を奪われていき防戦状態となる。
一方攻め続けているシンたちであったが、決して余裕とは言えない状況であった。一撃一撃が鋭く、重いケルベロスの攻撃を回避するのは相当精神を削るものであること。既に百以上の攻撃を繰り出しているが、まだケルベロスが倒れる気配が無い。
僅かでも攻撃の手を緩めれば手痛い反撃が来るのが分かっているので、両者とも全力で攻めの状態を維持しなければならなかった。
精神と肉体を消耗する戦い方に、二人からは尋常ではない量の汗が流れている。そも

そもシンはセタンタとの特訓終わりで疲労が抜け切れていない。ライザーは長い間引き篭もっていたせいで体力が落ちている。どちらも限界の底が浅い状態であった。そこへ蓄積していく疲労。やがてそれはこの連携に綻びを生じさせる。

守りに入っていたケルベロスが、咆哮を上げてシンに飛び掛かろうとする。その隙を狙うライザーであったが、突如横に向かって吹き飛んだ。

吹き飛んだ原因は、ケルベロスの太く長い尾による一撃である。シンに攻撃すると見せかけておいて、実はライザーの方が本命であった。

万全の状態ならば避けることが出来たであろうが、疲れによりやや集中力が欠け始めていたライザーは気付くのが遅れ、まともに受けてしまっていた。

この時、シンは吹き飛ばされたライザーの姿をほんの僅かの間目で追ってしまっていた。これによりケルベロスの攻撃への初動が遅れてしまう。

地を蹴り、飛び込んできたケルベロス。咄嗟に腕を交差して防御するが、頭から衝突してきたケルベロスの重量によって軽々と飛ばされる。

背中から木の幹にぶつかり、その際の衝撃で呼吸が止まりそうになるが、口を開いているケルベロスの姿を見た途端、痛みのことなど忘れどう動くか考えることだけに思考が動く。

だが相手も猶予など与える訳も無く、すぐにケルベロスの口から炎が吐かれる。

一人など容易く包み込むことが出来る巨大な炎。逃げる時間など無い。ならばどうするべきか。

このときシンがとった行動は、炎に向かって左手を突き出すというものであった。

やけになった訳では無い。シンは頭の中でライザーから教えてもらったことを思い出していた。

魔力による炎は、魔力を糧にして燃える。ケルベロスの炎がここまで届くというのは即ち既にケルベロスの魔力がシンに届いているということである。

仮にもしその魔力に狂いが生じたのならば？　頭に浮かんだ疑問をこれから証明する。

炎に突き立てた左腕に炎を灯らせる。そして同時に左手からいつも思い浮かべている魔力による『軸』を伸ばす。

ケルベロスの炎を敢えて自分の魔力に引火させ、自分の炎とケルベロスの炎を同調させると、左腕を力の限り振るう。すると、左腕に燃え移っていたケルベロスの炎は左腕の動きに合わせて動き、シンから狙いを外れて腕の振るった先にあった木に直撃した。

「バカナ！」

自分の炎が操られたことにショックを覚えるケルベロス。その隙を見逃さない男がいた。

「土壇場で魅せる様なことをしやがって……腹が立つ！」
苛立つライザーの声の方に目を向けるが、ライザーの姿は無い。
「こっちだ、犬っころ」
再び声が聞こえる。聞こえた方向はケルベロスの頭上。
炎の翼で風を操りながら錐揉みしているライザー。それを見て構えようとするケルベロスであったが――
「こっちだ」
――別方向からのシンの声。無視出来ずにそちらを見るがシンの姿は無い。何故ならば既にシンは、地面すれすれまで身を低くした体勢でケルベロスの顎下まで接近していたのだ。
ケルベロスがそれに気付いた時には既に遅い。地面から伸びる様にして立ち上がりながらケルベロスの顎を拳で突き上げる。それと同時に錐揉みして勢いをつけたライザーの踵がケルベロスの脳天に直撃。
下と上。両方から来る衝撃はケルベロスの頭の中心で激しくぶつかり合い、脳を揺さぶる。
「グ、ウウ……」
ケルベロスは短く呻くと白目を剥いて崩れ落ち、気絶して横倒れとなる。

動かなくなったのを見て、二人は同時に息を吐く。
「……コイツはどうするんだ？」
「……取り敢えず動けない様にしてから、その後に考える。……正直、今はあまり何かを考えたくない」
「……それには同意してやる」
疲労によって二人が同時に座り込んだのを見て、避難していたピクシーたちは慌てて駆け寄るのであった。

◇

「うーむ……」
ソーナによる地獄の特訓を終えた匙は、一人部屋の中で唸りながら考えていた。腕には顕現させた『黒い龍脈』。それを難しい顔をしながら眺めている。
あの時マダに『どうすれば赤龍帝を倒せる様になるか』と聞いた際、返って来た答えは『今以上に神器と心を通わせ、ヴリトラを味方にしろ』というものであった。
具体的な方法などは言わず勝てる可能性を上げただけであったが、その日以降匙は自分の神器と心を通じさせる方法を悩んでいた。

最初に思い付いたことといえば神器をとことん使い続け、扱いを上達させるというもの。これはソーナの特訓の中で自然と高まってきた。だが、使いこなす技術が上達していくだけでいまいち心が通っているという感覚は無い。神器の表面だけで止まっている感じで奥まで届いてはいない。

次に考えたのは神器に話しかけること。朝、神器におはようと挨拶し、今日の予定を話し、神器を上手く扱えたなら褒め、撫でる。夜にはその日の出来事を振り返りながら話し、おやすみの挨拶をする。

次にやったのは神器を磨く。休憩時間に延々と神器を磨き続けた。

その次にやったのは写生。画用紙に自分の神器を模写する。

その次の次にやったのは秘密の共有。誰にも言えない匙だけの秘密をこっそりと自分の神器に打ち明けた。

その次の次の次にやったのは歌と踊り。自分の神器の名を歌にし、神器を表現する踊りをひたすらやってみた。

その他にも色々な方法を試してみたが効果は出ず、それどころか他の生徒会メンバーから『最近のサジは奇行が目立つ』と心配される様になっていた。

今日も何らかの方法で神器と心を通わす方法を試してみなければならない。一体何をしようかと悩んだ挙句――取り敢えず舐めてみた。

『黒い龍脈』の黒い本体を匙の舌が這う。丁寧に、そして優しく時には激しく、隅から隅まで余すことなく――

「……何をやっているんだ？　元士郎」

「はっ！」

声を掛けられ慌てて振り向くと、『戦車』の由良が得体の知れないものを見る様な眼差しで匙を見ていた。

「最近独りでぶつぶつ呟いていたり、妙な動きをしているのは知っていたが……まさかここまでとは……会長の特訓が厳し過ぎたせいなのか……？」

完全に頭がおかしくなったと思われたらしい。

「違う！　誤解だ！」

このままではレーティングゲームよりも先に病院に入れられそうだったので、匙はこれまでの奇行の理由を説明する。説明を聞き終えた由良は呆れた様子であった。

「それならそうと最初に言え。傍から見たら頭が病んだ様にしか見えなかったぞ？」

「まあ、何というか……」

理由を口籠る匙に由良は微笑を浮かべる。

「男のプライドというやつか？　分からないでもないが」

理由を話せばソーナたちは力を貸してくれるに違いない。だが匙としては己に宿る

力を己自身で極めたかった。そんな匙の考えを敏感に悟った由良は背を向け部屋を出ようとする。

「このことは私たちだけの秘密にしておこう。本番で会長たちの度肝を抜いてみせてくれ」

「由良……恩に着る」

男前と言える様な笑みを残し、由良は部屋から去ろうとする。匙も再び神器と心を通わすのを試みようとしたとき――

「くしゅん」

――背後から可愛らしいくしゃみが聞こえた。振り向くと由良が口と鼻を手で押え、少し顔を赤くしている。

「聞き苦しいものを聞かせたね」

「可愛いくしゃみだったと思うけどな」

美少年と呼んでも差し支えない容姿の由良から少女らしい声が出て来た。そのギャップで素直にそう感じてしまう。

「まあ、私も女だからね。こういう一面もあるということさ。では、おやすみ」

少し照れた表情を浮かべながら由良は足早に部屋から退出していく。

（珍しいものを見たな……）

そんなことを考えながら再び神器と向き合う作業に集中する匙。このとき意識を目の前の神器に集中させている匙には気付かなかった。

由良が歩いていった方角から数度咳き込む音がしたことに。

休憩、宴会

この世に生まれ落ちたとき、初めて見たものは拒絶の意を宿した生みの親の目であった。
最初から何もかも違っていた。
体色が違う。
体格が違う。
尾が違う。
そして何よりもあるべきものが無かった。
三つ首として生まれるべき筈の自分には一つの首しか無かった。
『クビナシ』。生まれて最初に言われた言葉がそれであった。
明らかな異形。異形を前にして連中が抱いたのは拒絶と言う名の嫌悪だった。
連中の一匹が、生まれて間もなくしての自分の命を奪おうとしたのが分かった。欠陥を持って生まれたものを育てる程の義務も義理も無い。
弱肉強食の世界に於いて、間引くと言う行為は当たり前のことであった。
だがここで連中にとって予想外のことが起きたのだ。

生まれて間もない脆弱と言える子供。その子供が、連中が束になっても敵わない程の力を持っていたのだ。

生まれて初めて戦った相手は自分が生きる筈の群れであった。戦いの経験など皆無。そもそも何故自分が襲われているのかも分からない。ただがむしゃらに、体の内側から起こる衝動に身を委ねるだけであった。

群れの連中を全員地面に平伏させ見下ろしたとき、嫌悪の視線が別のものへと変わっていた。今思えば、あれは恐怖と命乞いの目であったと思う。

それを見た時、何の知識を無い筈の自分は悟る。

ここは自分の居場所では無い、と。

だから群れから離れ、独りで生きることに決めた。自分が居るべき場所を探す為に。

去り行く自分の背に連中の謗る声が刺さる。『クビナシ！　クビナシ！』と何度も。

ケルベロスとして生まれた筈の自分。だが同種である筈のケルベロスからはそれを否定された。

しかし、それでも自分はケルベロスと信じ続ける。何者か分からない自分にとって、それだけが唯一存在を示すものだったからだ。

だから誰であろうと自分はケルベロスであると名乗る。それを嘲る者、否定する者がいれば誰であろうと八つ裂きにし、灰にする。

それをいつまで続けるかなど分からない。きっと、自分を認めない存在が居る限り延々と続くであろう。

――そう思っていた。

◇

目が覚めた時、まだ生きていることに驚いた。戦いに敗れ、意識を失った時点でこの森の中では勝者の餌になるのが常識であった。

体を起こそうとしたが起き上がらない。見ると、両前足と両後足が蔦で一つにまとめられた上で何重にも縛られていた。少し力を加えてみたが蔦はびくともしない。尤も、この場から逃げる意思など今の自分には無かった。

「あ、起きた」

頭の上から声がした。見上げるとそこには、森では見たことのない形をした虫が飛んでいた。形だけ見ると戦ったあの二人の様な姿をしている。

その近くには白く丸い形をしたモノと、橙色のデコボコしたモノがいた。

自分が目を覚ましたことに少し驚いている様子であったが、怯えている訳では無い。どちらかと言えば好奇心に満ちた瞳を向けてきていた。

今まで向けられていた視線といえば、殆どが恐れと怯えに満ちたものであった為、慣れない視線に戸惑い、目を逸らすついでに自分を倒した者たちの姿を探す。
目を動かすとすぐに見つかった。
「起きたか」
「グルル……ドレクライネテイタ……？」
質問に答えたのは火を使う者ではなく、どことなく見た覚えがある者の方であった。火の方はライザー、見覚えある方はシンと呼ばれていた気がする。
「せいぜい三十分といった所だ」
「サンジュップン……？　ツマリドレクライダ？」
「……気絶して起きるまでそんなに時間は経っていないということだ」
身動きがとれないと思っているのか、聞いたことに素直に答える。尤も今の自分には暴れる気も抵抗する気も無かったが。
「ナゼ、オレハイキテイル……？」
「殺していないからな」
「ナラコロセ。マケタモノハ死ヌ。ソレガココノキマリダ。スキニシロ。オレハナニモシナイ」
するとシンはライザーの方を見た。どうするかと尋ねているかのようであった。

「死にたいのだったら望み通りにしてやればいい」
「それはそうだが……」
「なんなら俺が止めを刺してやろうか？」
「オマエノ温イ炎デハムリダ」
　思ったことを口に出した。
「今から丸焼きにしてやるから覚悟しろ！　犬っころ！」
「落ち着け。挑発に乗るな」
　額に青筋を浮かべながら手に炎を出して怒るライザーを、呆れた表情をしながらシンが宥める。
　少しの間言い合いになっていたがやがてライザーの方が折れ、自分の方を憎らし気に見下ろすと舌打ちをして、手に出していた炎を消す。
「ドウシタ？　オマエモナニモシナイノカ？　マケタモノハカッタモノニナニヲサレテモ文句ハナイゾ？」
「うるせぇ！　負けた奴が勝った奴に従うっていうなら暫くの間黙っていろ！」
　そう言われたので大人しく黙っていることにした。沈黙した自分の前で、二人は再び言い合いを始めた。

◇

「お前があいつを生かすと決めたんだ。責任を持ってあいつをどうにかしろよ？」
険しい表情を浮かべるライザー。先程の挑発への怒りがまだ薄れていないのが分かる。
「俺はさっきあのクソ犬を殺そうとした。つまりあいつの命なんざこれっぽっちも惜しくないということだ。というかこれ以上あの犬に関わるのは御免だ」
お前が引き取れと暗に言う。
シンがケルベロスを殺さなかったのは、戦う前に覚えた既視感のせいであった。知らないのに知っているという妙な感覚のせいで命を奪うことに抵抗を覚え、今の様に身動きを封じるだけに止めていた。
「もし俺がお前を引き取ると言ったら、どうする？」
その言葉が意外だったのかケルベロスは目を見開いてこちらを見たが、すぐに興味を無くしたかの様にそっぽを向いた。
「イッタハズダ。カッタモノハマケタモノノ命ヲスキニ出来ル。オマエガソウ望ムナラ従ウダケダ」
投げやりとも言える台詞であったが、一応シンに従うらしい。

「じゃあ今日から仲魔だねー」
ケルベロスの言葉を聞いてピクシーがそう告げる。
「仲魔？　ナンダソレハ？」
「仲魔は仲魔だホー！　シンの仲魔ならオイラとも仲魔だホー！　オイラはジャックフロストっていうんだホ！」
答えになっていない答えを言いながらジャックフロストが自己紹介する。
「ボクは～ジャックランタンだよ～。よろしく～ヒ～ホ～」
ジャックフロストに続き、ジャックランタンも名乗る。
「それでアタシがピクシー。よろしくね」
最後にピクシーが挨拶をする。ケルベロスはそれをポカンとした顔で眺めていた。
「……オマエタチノコトガヨクワカラナイ。言葉モソノ態度モ……」
敵意も無く、悪意も無い言葉を掛けられたことにケルベロスは戸惑いを覚えていた。
「これから慣れていけばいい」
座っていたシンが立ち上がり、ケルベロスの側に行くと巻き付けていた蔦を解き始めた。
「グルル……イイノカ？　マタオソウカモシレナイゾ？」
「その時はその時だ。それともまだ戦う気があるのか？」

蔦を解きながらシンはケルベロスの目を見た。
「……イヤ、何故カ今ハ戦ウ気ガオコラナイ」
蔦が解けるとケルベロスは徐に立ち上がり、体に着いていた土を身を震わせて払う。
「……ソウイエバキチント名乗ッテイナカッタナ」
シンを真っ直ぐ見据える。
「グルル、オレハケルベロス。コンゴトモヨロシク」
「ああ、よろしく」
「これで完全に決着がついたということですね」
前触れも無くいきなり挟まれた声に皆が驚き、一斉に声のする方を見た。少し離れた場所にセタンタが立っている。
「……いつの間に来たんですか？」
「いつの間にと言いますか、ずっと私はここにいましたが？」
「ソイツノニオイハズット感ジテイタ」
「ずっと？　セタンタ様、もしかして俺たちがこいつと戦っているのをずっと見物していたんですか？」
「見ていましたが、それが何か？」
「え！　いや、別に問題があるという訳じゃ、まあ、勝ちましたし……」

後ろめたさも悪びれた様子も無く、平然とした態度で言葉を返され、むしろ聞いたライザーの方がしどろもどろとなる。
「見ていたなら手助けの一つでもしてくれても良かったんじゃないですか？」
手助けなど微塵も期待していなかったが、それでも命懸けの戦いを見物されていたことに少々腹が立ち、厭味を感じさせる口調で問う。
「手に負えない相手だったなら救けましたよ。何せ相手がこの森の主ですからね。ですが貴方は勝ちました。こちらの期待を上回る成果です」
本当だったら一対一で戦わせる予定でしたが、という本音を隠しながら、セタンタはシンの戦いぶりを称賛する。
誤魔化す様な称賛の言葉を素直に受け取れないシンであったが、それよりもセタンタの言葉に聞き捨てならないものがあった。
「森の主？　こいつがですか？」
「ええ。その筈です。前の主を貴方が倒しましたね？」
「アノデカイダケノヤツカ？　手応エノナイヤツダッタ」
ケルベロスはセタンタの言うことを肯定する。
確かに戦う前、ケルベロスは縄張りに入ったと言っていたが、それはこの辺り一帯のことを指していると思っていた。

「森の主っていうなら何であんな深くに行くまで襲って来なかったんだ？」
「グルル。オレガ眠レル場所サエアレバ充分。ソレ以外ハベツニイラナイ」
　広大な森を全て縄張りにしても、本人は意外と質素な生活を好んでいるらしい。
「この森の主を倒すのが貴方への最終試練でしたが、まさかここまで早く試験を突破するとは大したものですね」
「それじゃあ、もうこの森で特訓することは無いということですか？」
「はい、そうです。彼の存在で魔物たちの動きが殆ど無かったのは誤算でした。だからといってこの先もそれは期待できません。何せ貴方たちは森の主を倒してしまったので」
　その言葉にシンもライザーも怪訝そうな表情をする。
「今日から貴方たちがこの森の主という訳です」
「……主ということは、この森全体を手に入れたということですか？」
「はい」
　そんなことをあっさり言われシンとライザーは同時に思う――
『要らない』
　――と。
「いやいやちょっと待って下さい！　この土地はグレモリーの土地ですよね！　それな

のにフェニックスである俺が勝手に領地の所有者になるなんて不味いですよね！」
「まあ、何とかなるんじゃないですか？」
「軽く言わないで下さい！」
「そもそもこの土地は、貴方が所有しているんじゃないですか？」
「正確に言えば管理しているだけです。土地自体の所有者は現在いません」
　そう言われ、シンとライザーは顔を見合わせる。
「さっきも言ったが俺の立場上、勝手に他所の土地を所有するのは不味い。だからお前に譲ってやる」
　明らかに不要なものを押し付けようとしていた。
「生憎、冥界に土地なんて在っても俺には必要の無いものだ。――それに冥界〈ここ〉に来る時に部長からいくつか領地を貰っている。これ以上は必要無い」
　人間であるシンが何度も冥界に足を運ぶ機会がそう何度もある訳では無い。今回は色々な事情が重なった結果訪れているだけであり、この先も余程の理由が無い限り、冥界に来るつもりは無かった。
「いいじゃん貰っちゃえば」
「ヒホ！　主ってことはシンがこの森の王様ってことだホ！　羨ましいホー！」
「ヒ～ホ～。いいじゃないか～主になっちゃえば～。減るもんじゃないし～」

気乗りしないシンとは反対に仲魔たちは乗り気であり、シンをこの森の主にしようとしてくる。

「チビ達もお前のことを推しているんだ。素直にお前が受け取れ」

ここぞとばかりにライザーがピクシーたちに同調する。

急速に塞がれていく逃げ道。この流れは不味いと思い、シンはまだ意見を言っていないケルベロスの方を見る。

ケルベロスは我関せずといった態度で頭を後足で掻いていた。シンの視線に気付くと、どうでもいいと言わんばかりの緩慢な速度で口を開く。

「グルルル。別二主トナッタカラトイッテ特別ナ事ヲスル訳ジャナイ。時折、主ノ座ヲ狙ッテクル生意気ナ奴ヲ殺レバイイダケダ。楽ナモノダ」

今の流れに従ってシンを主にしようとしていた。味方がゼロという状況に肩を落としたくなる。

このまま首を縦に振らざるを得ないのかと考えてしまう。

「早急に決める様なことでも無いですしね、気が向いたら私に連絡して下さい。それまでの間は今まで通り私が管理しておきます」

が、セタンタからの助け舟によりこの場で決断せず、取り敢えず答えは保留という形となった。

見知らぬ土地にある魑魅魍魎蔓延り弱肉強食が渦巻く森の頂点に自分が納まるのを免れることができ、内心ほっとする。森の主の座に自分の名が予約済みであるという現実からは一旦目を逸らしておく。

「さて、するべきことも済ませましたし、一度城の方へ――」

そこでセタンタは一同を見回す。

「――戻る前に少しさっぱりしていきますか」

◇

「ひゃ……百……九十一！　ひゃ、ひゃく……百……九十二！」

絞り出す様な声を出しながら回数を数える一誠。今、彼は日課となっている体力及び筋力作りの為のトレーニングの一つ、腕立て伏せをやっていた。その回数の大変さを表す様に、一誠を中心にして地面が流した汗を吸い、黒く変色している。

「ほれほれ。頑張れ頑張れ」

マダの呑気な応援が一誠の頭上から聞こえてくる。決して腕立て伏せをして苦しんでいる一誠を見守っている訳では無い。寧ろその逆であり、腕立てをしている一誠の背に胡坐をかいて座り、彼を苦しめていた。

「肩をもっと広げろ。顎をきちんと地面に着けろ。膝を伸ばせ。神滅具の維持も忘れるなよ」

「は……い……！　百……九三……！」

知らず知らずのうちに楽な体勢になろうとしている一誠を注意し、トレーニングの質を落とさない様にする。

マダが言っていた通り、今の一誠は『赤龍帝の籠手』を発現させ、能力を倍化させた状態でトレーニングを行っている。

通常状態の一誠ならばマダを背負った状態で腕立て伏せなど出来ない。倍化を数度行った状態でようやく人並の速さで腕立て伏せが出来る。

厳しいトレーニングを熟すには『赤龍帝の籠手』の力が不可欠なのも理由の一つだが、別の理由として一誠の体に倍化の負担を慣らすという目的もあった。

倍化は文字通り能力を倍にするというものであるが、デメリットとして倍化すればする程、解除したときの負担が大きくなるというものがある。『赤龍帝の籠手』に倍化の限界は無いが、反動のせいで一誠の倍化には限界があった。

その限界を少しでも伸ばすのが今行っているトレーニングである。兎に角体に負荷を掛けさせ、それに無理矢理慣らせる。

文字通り身を削る思いをさせているのである。

「百……九十四……！　百……九十……五！」
「おーおー。最初の頃に比べればいいペースで出来る様になったじゃねぇか」
二百を区切りとしている腕立て伏せ。初めにやったときは二時間以上も掛かっていたが、今は三分の一も時間を短縮出来ていた。
「あと五回だ。だから負荷増しな」
「百……え？　ふぐおぉぉぉぉぉぉ！」
途端、背中に乗っているマダの体重が増加。その重みで一誠は屠殺される家畜の様な声を出す。
支える両手はガクガクと震え、今にも限界を迎えそうであったが、辛うじて堪えていた。
「一回崩れる度に十回追加な」
そんな無慈悲なことを宣告されれば、意地でもやり切らなければならない。
「ひゃ、ひゃく……百、きゅ、きゅ、きゅう……九十、ろ、六……！」
絞り出す様な声は血を吐く様な声へと変わり、額は千切れそうな程血管が浮き出て、顔は今にも破裂しそうに真っ赤であった。
それでも一誠は崩れずに耐え切り、数分かけて残りの回数をやり遂げた。
達成すると同時にマダは一誠の背中から降りる。その途端、一誠は地面に倒れ伏せて

動かなくなる。
「ひゅー……ひゅー……」
一誠から隙間風の様な、か細い呼吸が聞こえてくる。
「休んでいる暇はないぞー。まだ次のがあるんだからな」
そんな一誠の状態を見ても特に同情することなく、それどころか無慈悲な催促をする。だが、一向に起き上がらない一誠を見て、マダは溜息を吐きながらうつ伏せになっている一誠を仰向けにし、顎を掴んで無理矢理口を開かせると、瓢箪を取り出して中の液体をそこに注ぐ。
「……ごふぉ！」
されるがままであった一誠であったが、注がれた液体を嚥下した瞬間、体力の限界を迎えていたとは思えないほどの勢いで跳ね上がる様に地面から立ち上がる。液体が気管に入ったらしく、しばらく咽ていた。
「げほっ！　げほっ！」
「おし、起きたな。次行くぞ、次」
するとマダが再び一誠の背に飛び乗る。
「重っ！」
咽ていた時にいきなり背中へ飛び乗られ、バランスを崩して左右によろけるも、何と

か踏み止まる。
「……今度は何すか？」
背後にいるマダへ若干恨めしそうな声を掛ける。
「あそこを目指してみようか」
マダが指差す。
指の先にあるのは山。より正確に山の頂上に生えている大きな木であった。
「師匠を担いで走れってことっすね」
ここ数日で精神的にもタフになってきたのか、一誠もすんなりと受け入れる。
「ああ。ただし『全力』でな」
「はい？」
当然そのつもりであった一誠だが、わざわざ強調して言う意味が分からず聞き返してしまう。
だが、その疑問はマダからではなく、背後で大きな音と共に降り立った巨影が教えてくれた。
音に驚いて振り返る。腕を組み仁王立ちするタンニーン。
どうしたんッスか、と聞く前にタンニーンの口の端から炎が零れるのを見て、一誠の顔から血の気が引いた。

『走れ！　相棒！』

ドライグの声と同時に一誠は駆け出していた。直後、背後に轟く爆音と衝撃、炙る様な熱。

振り返って確認しなくても分かる。タンニーンの炎が地面に着弾したのだ。

「死ぬ！　死ぬ！　死ぬ！　死ぬぅぅぅぅぅぅ！」

「走れ、走れ。赤龍帝の小僧。少しでも速度が緩まったら炭になるぞ」

マダを背負った状態で必死の全力疾走。背後から迫る重圧に精神が圧され、無理矢理体を突き動かす。

以前にも似た様な特訓をしたことがあるが、あの時とは緊張感が全く違う。

「あ、そうそう。俺に少しでも当たったらその度に拳骨一発な」

何気なく言うが、マダの拳骨など貰ったら頭の原型が変わってしまう。どんどんと重なっていく恐怖に一誠は涙を流していた。

「地獄だ！　ここは地獄だぁぁぁ！　部長！　朱乃さん！　アーシア！　ゼノヴィア！　小猫ちゃん！　会いたいよぉぉぉぉ！」

マダとタンニーンの特訓は地獄であるが、何よりの地獄はここに全く女っ気が無いことである。人一倍煩悩が強い一誠にとっては耐え難い。ほんの少し前の一誠であったのなら耐え切れたかもしれないが、美女、美少女と接点を持つ今だからこそ、その落差

に苦しめられていた。
「こんな時にも女の名か。その筋金入りの女好きな点だけは褒めてやる。――しょうがねぇ。少しサービスしてやる。『イッセー』」
「な！　部長！」
　背後から聞こえてきたのは間違いなくリアスの声であった。
「『イッセーくん』」
「朱乃さん！」
「『イッセーさん』」
「アーシア！」
「『イッセー』」
「ゼノヴィア！」
「『イッセー先輩』」
「小猫ちゃん！」
　次々と変わっていく声。その見事なまでの声真似には驚くしかない。
「どうよ？」
「――びっくりするぐらいそっくりでした」
　マダの変な特技を披露され、そう言うしかなかった。そして同時にマダを背負った状

態で良かったと思う。もしマダの姿を見ながら皆の声真似をされたら、そのギャップで気持ち悪くなったかもしれない。
「少しはやる気が出たか？」
「ええ、まあ……」
「ならこういうのはどうだ？　『ああ……んんん……』」
「なっ！」
　リアスの声真似をしながら喘ぎ始める。
『んんん……あっ』
　艶のある声。まるで本当にリアスが後ろにいるかのようであった。
　反応してはいけない。あくまで後ろにいるのはマダ、と言い聞かせるが、一週間以上女性を見ることも触れることも出来なかった一誠の煩悩を強く刺激し、ダメだと理解していても頭の中で妄想が始まってしまう。
『ああん……イッセー……』
　悩ましげな声で呼ばれる自分の名。背後で火球が迫っているという危機的状況だというのに聞き入ってしまう。
『イッセー――のより凄ぉい』
「うあああああああああああああああああああー！」

天国から地獄というのは、このことを言うのかもしれない。
『イッセーの××な××より貴方の××な××が私の××――』
「いいいやぁぁだぁぁぁぁぁ！　部長はそんなこと言わない！」
刺激された妄想が最悪な光景を生み出すので、それを掻き消す様に一心不乱で走る。
「お前が頂上行くまで延々と聞かせてやる。喜べ」
「俺にそっちの趣味は無いっす！」
「脳髄に刻まれるまで聞かせてやる。次はアーシアな」
「やめろぉぉぉぉぉ！」
「いっそのこと目覚めちまえ」
「やめてくれぇぇぇぇ！」
「ならとっとと走ることだな」
肉体的にも精神的にもこれでもかと追い込まれながら一誠の特訓〈じごく〉は続くのであった。

◇

どうしてこうなった。そんな言葉をもう既に何回も呟いている。

世の中何が起こるか分からない。まさにその通りであると痛感させられる。よもやこのような事態が我が身に降り注ぐとは欠片も思ってもいなかった。
「どうしたのですか？」
黙考しているシンの顔を覗き込む様に尋ねるのは、ライザーの『女王』であるユーベルーナであった。
妖艶ともいえる顔立ちから発せられる甘い声は、それだけで凡人を虜にするであろう。そしてそこに惜しげも無く裸体を晒しているのであれば、生涯の隷属を誓っているかもしれない。
「……いや、大したことじゃない」
色香に惑わされずいつもの鉄面皮で素っ気ない対応をするシン自身も、ユーベルーナと同様に衣服を纏っていない。
「俺の自慢の『女王』が隣にいるのに、何だその辛気臭い顔は」
「この顔は生まれつきだ」
少し離れた場所で周りに『兵士』や『僧侶』を侍らせているライザーもまた服を着ていない。当然周りの眷属もである。
どこを見ても肌、肌、肌。だがこの事態を誰も咎めない。
「折角、セタンタ殿の好意でこの『湯』を使わせて貰っているんだ、それなりの顔をした

らどうだ？」
何故なら彼らは今温泉に浸かっているのだ。
切っ掛けとなったのは、セタンタのさっぱりしようという言葉だった。
森の中をしばらく移動し、着いた場所は明らかに場違いと言える露天風呂であった。
以前森を調査していたセタンタが、天然の温泉が出ている場所を偶然発見。このまま放っておくのも惜しいと考え、わざわざ日本の露天風呂を参考にしながら周りを整備して、露天風呂を一人で自作したという。
ここで体を清めてから戻ろうという話となったが、露天風呂を見ていたライザーがぽつりと言葉を洩らす。
「華が足りない」
そこから先のライザーの行動は早かった。あっという間に眷属たちをこの場に呼び寄せ、今の状況となっている。
ライザーの眷属たちは、タオルで体を隠すということはせず躊躇無く全裸となっているので、シンとしては目のやり場に困っていた。
一誠がここに居れば涙を流しながら喜ぶシチュエーションであろう。そして、この場に居られなかったことを知れば血涙を流す程に悔しがるであろう。
レーティングゲームの時に一誠の『洋服崩壊』を受けて羞恥で叫んでいた者たちもい

たが、あの時と違って観客がいないせいか、割と平然としていた。尤もこの場にいる異性らしき異性はシン、ライザー、セタンタしかいない。眷属の彼女らが主人であるライザーに肌を見せることに羞恥を覚えるのも考え難い。

　セタンタの方はというと――

「なんとしなやかな筋肉だ……剛と柔、二つの特性を持ち、互いに持ち味を殺し合っていない……！」

「これが歴戦の戦士の体か……見事としか言い様が無い」

　――『騎士』のカーラマインとシーリスに体をあちこち触られていた。

　冥界に名を轟かせる戦士であるセタンタの肉体にぜひ触れてみたいと頭を下げてまで懇願されたので、渋々了承したセタンタ。相変わらず顔の下半分にタオルを巻くという奇妙な姿をしているが、上半身の至る所を触られているというのに表情どころか眉一つ動かさないのは流石であった。

「ほーら！」

「ヒーホー」

「ほーら！」

「ヒ～ホ～」

　セタンタから少し離れた場所では湯桶に乗って浮かんでいるジャックフロストと

ジャックランタンが『兵士』の双子イル、ネルと戯れていた。
ジャックフロストはお湯が嫌いなので、水を張った桶に体を浸けており、ジャックランタンもそれを真似して湯が張った桶に体を浸している。
離れた場所にいる双子は、桶に乗った二人をお互いの間を行ったり来たりさせながら遊んでいた。
「沁みるー」
「しっかり目を閉じていろ」
温泉の外の洗い場では、ピクシーが『戦車』のイザベラに頭を洗われていた。風呂場でもイザベラは仮面を付けている。
ピクシーの小さな頭を指先で器用に洗い、栗色の頭髪は白い泡であっという間に覆い尽されていった。
「グルル……」
「にゃ。痛かった？」
「にゃにゃ。変なとこ触っちゃった？」
「気ニスルナ。マダ慣レテイナイダケダ」
同じく洗い場ではケルベロスがレーティングゲームでシンと戦った獣人の『兵士』ニィ、リィによって体中を洗われており、泡のせいでケルベロスの体は倍近く膨れ上

がっていた。
体を洗うという習慣がなかった為、体を洗われることに抵抗を示していたが、シンに洗ってもらえと言われると嫌々といった態度で従った。
最初は汚れのせいで泡立たず、泡立っても真っ黒な泡であったが、数回繰り返すうちに汚れも落ちて、白い泡が立つようになっていた。
戦っていたときは針金の様な体毛であったが、ニィ、リィのボディブラシはしっかりと梳いていた。ケルベロスとの戦いの後にシンも偶然触れて気付いたことであるが、戦闘体勢に入ると体毛が硬質化する特性を持っている様であった。戦闘時以外だと厚手のタオルの様な感触である。
「わしゃわしゃー」
「ごしごしー」
獣人二人は楽し気な様子でケルベロスを洗う。洗われることが思ったよりも良いらしくケルベロスは目を閉じて二人の好きな様にやらせていた。
余談だが、獣人という人と獣という二つの視点を持つ彼女たちから見て、ケルベロスは驚く程の美形であるという。二人が楽しげなのも、容姿が良いケルベロスの相手が出来ているのも理由であった。
「こういう入浴があるのは知識として知っていたが、実際に入って見ると案外悪くない

な。お前らの文化もそう捨てたもんじゃないな」
何処で仕入れた知識なのか、頭に手拭いを載せているライザー。そのライザーの前には盆が浮かんでおり、盆にはグラス二つと氷によって冷やされているワインのボトルが載っている。微妙に間違っている辺りが、言葉通り知識だけであることを強調していた。
ライザーが盆のグラスを取ると、隣の眷属がワインをそれに注ぐ。それを一気に飲み干すと、向かい側にいるシンに向かって盆を押した。
盆がシンの目の前で止まる。シンはそれを無言で見つめるだけであった。
グラスを手に取らないシンにライザーは怪訝そうな表情をする。
「どうした？　飲まないのか？　入浴しながら酒を飲むのはお前の国の文化だった筈だぞ？」
合っている様で間違っている知識を晒すライザー。
相手の気遣いを無下にすることも出来ないので、シンは一応グラスを手に取る。すると隣にいたユーベルーナがボトルに手を伸ばす――前に、シンの隣にいるもう一人の人物が先にボトルを取った。
「注ぎますわ」
そう言ったのはレイヴェルであった。他の眷属たちとは違い、胸までバスタオルを巻

いて隠している姿であった。
「あの時はごたごたしていたのできちんと言えませんでしたが、お兄様を立ち直らせて下さってありがとうございます」
「ライザー自身が自力で立ち直っただけだ。これといって特別なことをしたわけじゃない」
「だとしても切っ掛けを作ったのは間違いなく貴方ですわ」
　ボトルの口から赤いワインがグラスの中に注がれていく。やがて十分な量を満たすとレイヴェルはボトルを離した。
　シンは注がれたワインを無言で見つめる。赤い液体に無表情な自分の顔が映っていた。
　好意としては有り難いものであったが、今まで一度もアルコールというものを摂取したことが無いシンにとっては、目の前のワインは非常に冒険的なものに見えた。
「何だ？　俺の妹の酒が飲めないのか？」
「お兄様。そういう言い方は止して下さい」
　手にワインを持ったまま飲もうとしないシンを見て、ライザーが急かすと、レイヴェルがそれを注意する。
「ちなみに聞くが、酒は何歳から飲んでいいんだ？」

「そんなもの、飲んだ時が飲める歳だ」
「――そうか、分かった」
ライザーの答えを聞いてから、シンはグラスの中のワインを一気に飲み干す。何時までもどうこう理由をつけて飲まないことよりも、相手の好意を素直に受けることを選んだ。
ワインが舌の上を通ると甘味と渋味を感じた。そのまま喉を通り、胃に注がれると臓腑が熱を持ったかのような感覚を覚えた。
想像していたよりも飲み易い。それが第一印象であった。
シンが一瞬でグラスを空にしたのを見て、ライザーがニヤリと笑う。
「中々良い飲みっぷりじゃないか」
「酒を飲んだのなんて今日が初めてだがな」
「飲んだことがないのか？　珍しいな」
「俺のところでは酒を飲んでいいのは二十歳からだ」
「なんだ、生まれてすぐじゃないか」
長い寿命を持つ悪魔からすれば、人間の二十年など、赤ん坊が立って歩くまでぐらいの感覚なのであろう。
「まだまだいけるだろ？　どんどんいけ」

空になったグラスが今度はユーベルーナの手によって満たされていく。当分続くであろうこの宴に心の中で溜息を吐きながらも、半ば自棄になりながら注がれたそれを一気に呷るのであった。

◇

「おーい。調子はどうだー？」

一誠たちの特訓の様子を見に来たアザゼル。その手には大きな風呂敷を持っていた。

広大な山で三人の姿を発見するのは本来ならば難しいところであるが、特訓地点から大きな爆音が常に聞こえてくるのですぐに見つかった。

アザゼルの姿を見た途端、タンニーンは何故か目を逸らし、マダは何かを体で隠す様に移動する。

「様子を見に来たが、イッセーの仕上がりはどうだ？」

「んん……？　まあ、そこそこだな……」

タンニーンの歯切れの悪い言葉にアザゼルは訝し気な表情となる。

「ところでイッセーは何処だ？」

『……ここだ』

一誠の代わりにドライグが呼び掛けに応える。声のする方向からマダの後ろにいるのが分かる。
「んん？」
遮っているマダの横から覗き込むと、そこには襤褸屑があった。
「――って、イッセー！」
一誠であった。
慌てて駆け寄り、抱え上げる。一誠は白目を剥いたまま譫言を呟いている。
「へへ……ダメですよ……部長……そういうのは……もっと段階を踏んで……」
「おい！　しっかりしろ！　戻って来い！　お前、まだリアスに何もしていないだろうが！」
正気に戻させる様に揺さぶる。すると白目が元の目へと戻り、周囲を確認する様に数度瞬かせる。
「……あれ？　アザゼル先生？」
「……取り敢えず無事か」
意識を取り戻した一誠に安堵し、地面に寝かせると原因となったであろう二人の方を見る。
「とことんやらなきゃダメなのは分かっているが、やり過ぎだ」

叱責することは無かったが、それでも若干口調に棘があった。
「言い訳のしようが無いな。済まぬ」
責任を以って預かる身として過剰であったと自覚しているらしく、タンニーンは素直に謝罪する。
「すまんすまん」
一方マダの方は反省した様子が感じられない程軽いものであった。
「お前なあ……」
そんなマダの態度に、アザゼルは怒りを通り越して呆れてしまう。
「まだ時間はあるとはいえそれでももう期限の中盤なんだぞ？　どうするんだよ、こんなボロボロで。いくら悪魔の回復力でも限度があるぞ」
禁手に至るには生半可な特訓では駄目だと理解しているものの、小猫の件もあってかアザゼルは教え子たちの体調に関して、少し過保護気味になっていた。
「ふぅん……」
「――何だよ」
付き合いの長いマダは、そんなアザゼルの心情を何となく見抜いたのか、顎に手をやりながらアザゼルを見ていた。
「まあ、安心しろ。こういった時の為の準備をちゃんとしているからな」

ニヤリとマダは笑うと、最早修行恒例と化しつつある謎の液体を一誠の口に注ぐ作業を行う。
それを初めて見るアザゼルは訝しむ目で見ていたが、注がれて数秒後完全回復した一誠を見て、その目を丸くさせた。
「お前、一体何を飲ませたんだ？」
その効き具合を逆に不審に思い、アザゼルは問い質す。
「別に、そんな怪しいもんじゃねぇよ」
「十分怪しいだろうが」
はぐらかそうとするマダ。そうはさせまいとするアザゼル。
暫し同じ様な応答が続いていたが、不意に何か思い付いた様にマダがある提案を出す。
「そんなに気になるんだったらお前も飲んでみるか？」
「何？」
「害が無いか心配だからしつこく聞いてくるんだろう？　だったら身を以って知るしかないよなぁ？　安心しろ。俺も飲んでやるから」
何やら企んでいる様に見えるが、指導者として確かめない訳にはいかない。
「……分かったよ」

「よし。タンニーン、ついでにお前も飲んでみるか？」
「俺もか？」
「悪いもんじゃねぇから安心しろ。中々良い味してるんだぜ、これ」
タンニーンも誘うとマダは返事を聞く前に腰を下ろして座り、何処からか杯を取り出す。アザゼルとマダの杯は通常の大きさのものであったが、タンニーン用の杯は通常の何倍もの大きさがあった。人の手では両手でも足りないぐらいだが、タンニーンの大きさならば丁度良い大きさである。
置かれた杯に瓢箪の中身を注ぐ。杯の中が乳白色の液体で満たされていく。
「ほれ」
皆の分を注ぎ終えるとマダは飲む様に促す。それぞれ杯を手に取る。
杯を顔に近付けたとき、ニオイがアザゼルたちの鼻孔をくすぐる。マダが持ってきたものである為、酒の類だと思っていたが、酒精のニオイが全く無い。今まで経験したことの無いニオイであったが、敢えて近いニオイを上げるとすれば花の香りであった。
まだ警戒するアザゼルとタンニーンであったが、そんな二人をおいてマダは自分の杯を一気に飲み干し、すぐに替わりを注いでいた。
意を決し、二人も杯の中の液体を一口含む。その瞬間、舌から頭を駆け抜ける衝撃が二人を襲った。

美味という言葉では言い表せない程の至上の味。甘い、辛い、しょっぱいなどという普通の味とは異なる別次元の味に、全意識が舌に集中してしまう。

一口飲んで確認するだけであったが、その美味さに意識を乗っ取られたかの様に、杯の中を飲み干してしまった。

「何だこりゃ……」

「これ程とは……」

飲み干した後、二人は暫し陶然としてしまう。長年生きてきた二人ですら経験したことの無い、極上の味であった。

「中々良い味だろう?」

「中々なんてレベルじゃねえぞ……」

「お前はどこでこれを手に入れたんだ……?」

「そんなに特別なもんかね? ちょいちょい飲んでたからあんまり有難味も感じねぇがなぁ」

そう言って杯では無く直接口の中に注ぎ込む。あまりに勿体無い飲み方にアザゼルとタンニーンは揃って声を上げそうになった。

「この味が気に入ったんならもう一杯どうだ?」

瓢箪の口を二人に向ける。二人は無言で杯を瓢箪の口に向けた。杯が再び液体で満

たされる。
「しかし、とんでもないなこれは……」
「一体何なんだこれは……」
杯の液体に再び陶酔しながら呟く。すると、その答えは意外な程あっさりと返ってきた。
「ん？　これ？　ソーマ」
『ぶほぉあ！』
「うわ！　汚っ！」
アザゼルとタンニーンが揃って噴き出す。それを一誠がもろに浴びせられる。
二人が何か言いた気な表情でマダの方を睨み付けているが、咳き込んで上手く喋られないでいた。
その間に一誠はドライグに小声で尋ねる。
「なあ、ソーマって何だ？」
『インドの神々だけが飲むことを許される霊薬だ。生命力を活性化させたり、寿命を延ばすことも出来る』
「ええ……俺ってそんな貴重なものを飲んでたの？」
『貴重などいうレベルじゃない。言っただろう？　神だけが飲むことを許されると』

毎回気を失っている時に飲まされていた為、飲んだ記憶など皆無である。そんな希少なものを躊躇無く飲ませるマダは、想像出来ない程の太っ腹なのか、あるいは底無しの考え無しなのであろうか。

今もソーマをラッパ飲みしているマダを見て、一誠は畏敬の念を覚えた。

「お前なぁぁぁ！　冥界〈こっち〉になんてもん持ち込んでんだぁぁぁ！」

「馬鹿なのかお前は！　もっと常識を考えろ！」

咳き込むのを止めたアザゼルとタンニーンが凄まじい剣幕でマダを怒鳴りつける。アザゼルは手に光の槍、タンニーンは口から炎が漏れ出していた。

「そう怒るなよ。ちゃんとやることはやって持って来たからよぉ」

その言葉に少しだけ二人の怒りが治まる。きちんとした順序を踏んで持って来たのならば、多少――

「戴いた分はきっちり水でかさ増ししてきたから」

『この大馬鹿野郎がぁぁぁ！』

――大丈夫な訳も無く、アザゼルは槍を投げ放つ構えをとり、タンニーンは今にも炎を吐き出しそうであった。

あわや一触即発。が、攻撃される直前にマダは四本の腕を上げ、降参の構えとなった。

「悪い悪い。悪乗りが過ぎたな。冗談だよ、冗談。これに関してはきちんと親父殿に許

可を貰っている」
　その言葉に二人はピタリと動きを止めた。
「……本当なんだろうな？」
「俺が親父殿の名を出して嘘を吐いたことがあるかぁ？」
　少しの間、沈黙を続ける二人であったが、やがて同時に溜息を吐いて光と炎を霧散させた。
「あんまり質の悪い冗談を言うな。寿命が縮む」
「ソーマを飲んだのにか？」
「――本当に消し炭にされたいか？」
「すまんすまん」
　茶化すマダにタンニーンが、炎をちらつかせながら睨み付ける。
「許可を貰ったのはいいが、本当に良かったのか？　ソーマは神にだけ許されたものだろう？」
「昔と今とじゃ、勝手も違うぜ。親父殿の言葉を借りるなら『もうそういった時代ではない』ってやつだ。まあ、もしコイツがうちんとこの神様になりたいって言ってんなら話は別だろうがなぁ。イッセー、お前はうちら〈インド〉の神様になるつもりあるか？」
「いやいやいやいや！　俺は部長の眷属で十分です！」

首や手を激しく横に振る。
「だそうだ」
「まったく、ソーマがただの回復薬として扱われるとは贅沢な話だ。……というか毎回それを飲ませているんだったら、こいつの寿命もどうにかなっているのか？」
アザゼルが一誠を指差す。
ヴァーリとの一戦で一誠は白龍皇の力を無理矢理取り込んだ代償として、何千年と生きることが出来る悪魔の寿命を大幅に削ってしまっていた。リアスたちやアザゼルもどうにか寿命を元に戻そうと方法を探しているものの見つからずにいた。
そこにマダが持って来たソーマである。寿命を延ばすと言われている霊薬があれば、その問題を解決出来るのではと思ったのだ。
アザゼルの問いに対し、マダは答える前に手を振って、無理であることを報せた。
「出来ることは出来るが一回に飲む量じゃあたかが知れている。元の寿命に戻したきゃ、それこそそうだな……プール一杯分ぐらい飲む必要があるなあ」
「……ビニールプールですか？」
「お前んとこの学校のプールぐらいだよ」
「絶対に無理です！　腹が裂けます！」
いくら寿命が戻るといってもそんな拷問紛いなことをされなければならないと思う

と、嫌としか言えない。
「まあ、そう簡単に事が上手い方に行くとは思ってないさ。イッセー、どうせ腹を満たすんだったらこれで満たせ」
　アザゼルは持っていた風呂敷を一誠に渡す。受け取った一誠は、それが何なのか疑問符を浮かべつつ風呂敷を開けると、中には大量のおにぎりと三つの弁当箱が入っていた。
「これって……」
「リアスと朱乃とアーシアがお前の為に作った弁当だ」
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」
　歓喜の叫びを上げながら三つの弁当箱を開ける。中には唐揚げ、卵焼き、野菜炒め、アスパラのベーコン巻き、ハンバーグなどなど、弁当の定番から少し変わり種も入った、彩りも中身も豊かな弁当であった。
　そんな弁当たちを前にし、一誠は滂沱する。
「久しぶりの……まともな……料理だ……！　ああ！　文明のニオイがする！」
　特訓中の食事と言えば、川で獲った魚や山で獲れた木の実や茸を焼いただけのものばかりであった。そんなに日数が経っていない筈だが、人の手で作られた料理を見るのは久しぶりな気がしてならない。そんな風に感じる程、特訓の日々は密度が濃いもので

あった。
　素早い手付きで三つの弁当箱からそれぞれおかずを掴み、口の中へと放り込む。餓死寸前の様な食べ物への異常な反応を見せたかと思えば、口に入れたものを何十回も咀嚼し、嚥下せずにとことん舌で味わっていた。
「うみゃい！　うみゃいよおおおおおおお！」
　ようやく口の中の物を胃に流し込むと絶叫を上げる。人の手で作られた料理、それも愛情の詰まった料理なら叫ばずにはいられない。
「多少は良い面になったが、そんな顔してるんだったら台無しだな」
　頬を歓喜で弛緩させただらしない表情で弁当を頬張る一誠を見て、アザゼルは苦笑する。
「だってしょうがないじゃないですか！　こんなまともな飯を食べたら誰だってこうなります！」
　おにぎりを食べながら一誠は抗議の声を上げた。
「マダとタンニーンに大分鍛えられているみたいだな」
「あんなの特訓じゃない！　時間を掛けた死刑だ！　俺、何度も死にかけているし！　そもそもタンニーンのおっさんとマダ師匠と実力が開きすぎてて話にならねぇぇぇぇ！」

　アザゼルが来たことでタガが外れたのか、今まで溜まっていた鬱憤をぶちまける。
「二人とも全然加減をしてくれないんだもん！　何度花畑や川を見たのか！　本当に死んじゃうよ、俺！　童貞のままじゃ死ねないッす！」
　泣き声混じりで言う一誠にマダは笑い、タンニーンは半眼で見る。
「これでもギリギリまで手加減しているぞ、馬鹿者め。お前がそうとう脆いせいでな。お陰で最近力の細かいコントロールが出来る様になってきてしまった」
「お前、いじ――特訓すると物凄い必死な顔になるからつい面白――こっちも熱に充てられてやり過ぎちまう」
「そもそもお前が禁手に至れば痛い思いも辛い思いもせずに済む。さっさと至れ」
「そう簡単に言うけど、あんだけ特訓しても何というか、切っ掛けもまだ掴めない感じなんだよ……」
　実力の方はついてきた自信はある。しかし、本来の目的である禁手の方はまったく進展が無い。どうすればいいのか、何をすればいいのか分からず、先の暗さだけを感じてしまう。
「ふん。そんな情けない顔をするな。お前はリアス嬢の『兵士』、ましてや最強の『兵士』になろうとしているんだろう？　そんな調子では目指すこと自体片腹痛い。リアス嬢の下僕になりたい者がどれ程いるか知っているのか？　そんな数多の中でお前が選ば

れたんだ。もう少し自分の立場を自覚しろ。お前への評価はそのままリアス嬢の評価に繋がる」

耳の痛い言葉である。ライザーにも同じ様なことを言われた。

「そうなんだよなぁ……もう俺だけじゃ済まないんだよなぁ……」

心から慕うヒトの為に誰よりも強くなりたい。だが、現実はそう易々とその願いを叶えてはくれない。理想と現実の差に、一誠は柄にもなく少し落ち込んでいた。

そんな一誠の心境を見抜いてか、アザゼルが一誠の背中を軽く叩く。

「まだ日数もあるんだからそう思い詰めるな。基礎トレーニングだけじゃなくてこの怪物二人との実戦形式での特訓もこなして今日まで生きてきたんだろう？　確かにお前には足りないものが多い。魔力なんてヴァーリと比べられると超えるのはどんなに頑張っても無理だ。だからそれを補う為には他を伸ばすしかない。道は長い。だけどな、確実にお前は先に進んでいる」

「蛞蝓ぐらいのスピードだけどな」

「茶化すなっ！」

折角励ましているのに茶々を入れるマダをアザゼルが一喝する。

一誠はヴァーリとの差を直に感じていた為、アザゼルの言葉を素直に受け入れる。あの時、あんな力を見せつけられれば、嫌でも実力差を認めるしかない。

「そういえば言って無かったんですけど、三勢力の会談のとき――」
ヴァーリの名を聞いて、一誠はヴァーリが最後に見せた『覇龍』のことについて詳しく知りたくなり、アザゼルに尋ねた。
戦いの顛末を話しているうちにアザゼル、マダ、タンニーンの顔付きが変わっていく。
『覇龍』ならある程度使えるだろうと思っていたが、まさかあいつがそこまで使いこなしているとは……」
「おいおいおい。ヴァーリの奴、ちょっと信じられないくらい力を付けてるな」
「現白龍皇がそこまで実力があるとは……赤龍帝の小僧、今まで生死のぎりぎりまで追い詰める特訓をしてきたが、これからは死に片足を突っ込むぐらいの特訓をしなければ白龍皇に瞬殺されるな」
想像していたよりも深刻な反応が相手から返ってきた。
「嫌です！　俺はまだ死ねない！　俺には叶えなきゃならない夢があるんだっ！」
「何だ？　さっき言っていた貞操を捨てることか？　リアス嬢に見合った悪魔になることか？」
「全部！　あとハーレム王にもなりたい！」
「お、おお。そうか……」
即答する一誠の気迫と予想以上の強欲に、タンニーンも言葉を詰まらせてしまう。

「まあ、俺たちが四の五の言っても仕方ないか」
「そうだな。ヴァーリと戦って死ぬのはどうせこいつだし」
「軽く言わないで下さいよ！」
　さらっと酷いことを言うマダに一誠は涙目になってしまう。
「まあ、今まで以上に死ぬ気で頑張れってことだな」
「そんな簡単に……でもそれしか無いってことか……」
　自分の未来に関わることなので簡単に割り切れるものではないが、結局出来ることがあるとすれば特訓しかない。というか、目の前の特訓に集中しなければ、ヴァーリと戦う前に特訓で死んでしまう。
「ええい！　やってやる！　ヴァーリも覇龍もなんだってんだ！　こっちはハーレム王を目指してんだ！　男、それもイケメンなんぞに負けてたまるか！」
　若干ずれた感じの意気込みを見せる一誠。アザゼルとマダは笑っているが、タンニーンは少し呆れていた。
「で、アザゼル。お前は、この後予定はあるのか？」
「ん？　ああ、イッセー、お前は一度俺とグレモリーの別館に戻るぞ」
「え？　俺に何の用が？　部長の命令ですか？」
「リアスの母上殿からのお願いだ。――社交界関係のことでな」

「社交界？　俺が？」
　自分とは一生無縁だと思われていた言葉を聞き、ポカンとなる。
「ふむ。小耳には挟んでいたがグレモリー家は本腰のようだな」
「完全に外堀を埋めにきてるなぁ。いや、一家総出で墓穴を掘っているのか？」
　マダとタンニーンはそれを聞いて何かを察するが、一誠の方は全く分からないという表情をしている。
「それは急ぎの用事か？」
「いや、明日の朝一に連れて行って、次の日の朝には返す予定だ」
「ほほう？　アザゼル、明日の朝までは時間が空いているのか？」
「まあ、そうだな。――ああ、そういうことか。仕方ねぇな」
　付き合いが長いこともあって、アザゼルはマダの考えをすぐに理解する。
「食うものがあるし、酒もこの通りある」
　マダはどこからともなく別の瓢箪を出す。
「この二つが揃っているならやることは一つだよなぁ？」
「一体何ですか？」
　一誠が聞くとマダとアザゼルはニヤリと笑い――
『宴会だよ』

――声を揃えて答えた。

◇

「ということで飲め飲め」
「あの、俺は未成年なんですけど……」
「冥界に人間界のルールなんて関係ねぇ。何事も経験だ」
「酒も飲んだことないし……というか飲んでも大丈夫ですか？　俺、父親が酒のせいで気持ち悪くなっている姿を何度も見たことがあるんですけど……」
「安心しろ。酒をこいつで割れば二日酔い知らずだ」
「これって……」
「ソーマ」
「また罰当たりな使い方しやがって……俺にも一杯くれ」
「おうよ」
「じゃあ、頂きます――何コレ！　うまっ！」
「いいだろ？　酒のソーマ割り。俺はこれをハオマと――」
「お前、ゾロアスターの連中に殺されるぞ」

一時間後。
「いいんだよ、俺はー。結婚しようとすればいつだって出来るから」
「そう言って先越されているのはどこのどいつなんだろうなぁ？　イッセー、見とけ見とけ。婚期を逃した哀れな男の姿をよぉ」
「は、はは」
「そういうお前だって結婚してねぇじゃねぇか」
「いいんだよ、俺は。怪物だし」
「シェムハザもバラキエルも昔は一緒に馬鹿やってたのにいつの間にか身を固めやがって……」
「バラキエルって朱乃さんのお父さんでしたよね？」
「ああ、そうだ。あいつらにとっちゃ余計なお世話かもしれないが、それの関係で朱乃のことは結構気になるのさ。お前も朱乃のことを気にしてやってくれ」
「はい！　朱乃さんには色々とお世話になっていますから、当然です！」
「アザゼル、お前の考えが全く伝わってないぜ？」
「これでいいんだ。たらしなんかより安心だ」
「そういうもんか？　――ところでお前は結婚しないのか？　タンニーン」
「どういうタイミングで俺に振ってくるんだ……あと俺は既婚だ。子もいる」

「……ドラゴンにも先を越された」

二時間後。

「そして俺は完成させたって訳ですよ！　『洋服崩壊』を！」

「良い発想するじゃねぇか、イッセー。だからこそ惜しいと言わざるを得ない」

「な、何が惜しいって言うんですか、マダ師匠！　全裸ですよ、全裸！　すっぽんぽんですよ！　一体これのどこが惜しいって言うんですか！」

「お前がその技を完成させようとしたとき、どんな気持ちだったか手に取る様にわかるぜぇ。脳細胞をすり減らさんばかりに妄想し、何度も何度も気の遠くなる程シミュレーションしてきたんだろ？　だからこそ惜しい。完成させてしまったその技が、な」

「か、完成させたことが惜しい？　それはどういう意味で――」

「半裸」

「なっ！」

「全裸が悪いとは言わん。だがそれは結果だ。脱ぐ過程で生まれる半裸というエロ。お前の技はその完成度の高さ故にそれが失われている。結果も大事かもしれないが、過程あってこその結果！　お前は結果を重視するあまり、得られる筈であったものを切り捨てている！」

「た、確かに……衣装系のＤＶＤを見ていると、途中までは良かったのに何故か全部脱い

でしまうのを見て、何とももどかしい気持ちになったことがあったけど……」
『何、本気で動揺しているんだ、相棒。お前たちの会話は傍から聞いていると恐ろしいぞ』
「マダ……一理ある！」
『お前もかアザゼル』
三時間後。
「――つまりだ、お前の今の力と白龍皇の力を合わせれば……」
「さっき言っていたことが実現出来るってことですか！」
「理論上は、な。だが今のお前に出来るか？　白龍皇の力どころか自分の力ですら満足に扱えていないぞ？」
「やってみせますよ、俺は！　必ず！　絶対に！　……ところでちょっと相談したいことが……」
「何だ？」
「実は……と……したい……」
「……その発想に至るとは……お前……天才だな！」
「ありがとうございます！　自分で言い出してなんですが……出来るでしょうか？」
「自信を持て。お前のその想いと赤龍帝の力が合わされば、可能性は無限大だ」

「はい！　俺、ゲームまでに絶対にこの二つを完成させてみせます！」
「……お前が先に完成させるのは禁手だろうが」
『何故だ、何故こうも悪寒が走るんだ……』
　五時間後。
「おっぴゃーい！　おっぴゃーい！　ぴゃぴゃぴゃぴゃおっぴゃーい！」
「見事に酔っ払っているな……」
「この酒、初めての奴には少し強かったか……？」
「あんな風にした張本人らが引くんじゃない」
『……どうにかしてくれ……痛々し過ぎる……』
「おっぴゃーい！　おっぴゃーい！　あいうえおっぴゃーい！」
　数時間後。
「うん……？」
　一誠は何時の間にか自分が眠っていたことに気が付いた。仰向けになって見上げる空には大きな月。
　体を起こして軽く捻ってみる。土の上で眠っていたせいで体のあちこちから音が鳴った。
「起きたか」

頭の上から声がし、見上げるとタンニーンがこちらを見下ろしていた。
「いつの間にか寝ちゃってたか……」
「前触れも無く倒れて少し驚いた。その後に寝息を立て始めてすぐに杞憂だと分かったがな。体調の方は大丈夫なのか？」
記憶が途切れるまで酒を飲んだ割には、一誠の体調に殆ど変化は無かった。敢えて言えば少し体の火照りを感じるぐらいである。マダが言った通り、霊薬と一緒に飲んだおかげであった。
「先生たちは？」
「あそこでまだ飲んでいる」
タンニーンの目線を追うと、少し離れた場所で火を囲みながら、アザゼルとマダが雑談をしながら酒を飲んでいた。途切れる前の記憶では二人ともかなりの量を飲んでいた筈であるが、全く酔っている気配はなかった。
「明日は早くにグレモリー邸に戻るんだ、このまま眠れ」
「ああ、そうする。おっさんは二人と一緒に飲まなくていいのか？」
「もう十分飲んだ。それに酔ったお前を放っておいて万が一のことがあれば俺の不行き届きだからな」
「……おっさんって良いドラゴンだよなー」

特訓の中では厳しいがそれ以外では色々と気遣ってくれるタンニーンに、思ったことをつい口に出してしまう。
「良いドラゴン？　俺がか？　そんな風に言われたのは初めてだな」
タンニーンは口の端を歪める。一誠には照れて笑っている様に見えた。
口に出したついでに、前々から思っていた疑問も聞いてみた。
「おっさんはどうして悪魔になったんだ？」
龍王という肩書を持ち、それに相応しい実力があるタンニーンが、悪魔の眷属になった理由が全く想像出来なかった。
「理由はいくつかあるが、最たる理由は種族の存続の為だ」
タンニーンは語る。元々は人間界に住んでいたドラゴンであったが、環境が変化していったことである種の食物が育たなくなり、特定のドラゴンたちが絶滅の危機に瀕した。その特殊な食物しか摂取することが出来ないドラゴンたちを絶滅から救う為にタンニーンは奔走し、冥界でまだその食物が取れることを知って悪魔と取引をし、眷属になることを条件にその特殊な食物が生える土地を丸ごと領土にしたのだと言う。
個では無く種族という全体のことを考えての行動に、一誠は素直に感動した。
「やっぱおっさんってすげぇな。流石は竜の王様」
「――いや、俺にはもう王を名乗る資格は無い」

「へ？」
　思いもよらない言葉に一誠は呆けた声が出てしまう。
『どういうことだ？』
「……俺が眷属になった理由はまだある。それは……」
　タンニーンの頭の中に消し去ることが出来ない記憶が蘇る。
『何故だ！　何が目的でこんな真似をした！』
『退屈しのぎ』
『なっ！　貴様……！』
『だが少々期待外れだったかな？　どれにも属さないドラゴンの力を過大評価していたらしい。とはいえ貴公の様な存在が現れたと思えば、『暇』を潰していた甲斐があるというものだ』
『その為にどれだけの同胞を手に掛けた！』
『さて？　無意味なことには気を向けない性分なのでね』
『灰すら残ると思うなぁ！』
『はははははは！　いいぞ！　もっとだ！　もっとその怒りと力を私に見せてくれ！』
『本当にそれでいいのかい？』

『構わない。このことが他の者たちに知れ渡れば、必ず報復に走る者が出る。これ以上犠牲は出したくない。このことは俺とお前だけが知っていればいい。死んでいった者たちの無念と怒りを引き継ぐのも俺だけでいい』

『……僕も手を貸すよ。こんな形で契約してしまったが、僕は君の『主』だからね』

『気遣い感謝するが、不要だ。奴は俺のこの手で殺す』

『それが竜の王としての責務かい？』

『……今、ここにいるのは王の矜持も無く、復讐することだけを考えたただの一頭のドラゴンだ。そんな奴が王を名乗る資格なんて、ある筈が無い』

タンニーンが沈黙し、何か思い返し始めた瞬間、一誠は言い様の無い恐怖を覚えた。

厳しくも優しいタンニーン。その彼が言葉にも表情にも出さないが、体の内に途方も無い怒りを抱えている。

一誠はその僅かに漏れ出した怒りを感じると口の中が渇き、体中から汗が噴き出て、意思とは無関係に体が震え始める。

「お、おっさん？」

震えながら何とか出せた声でタンニーンに呼び掛けると、ハッとした表情となって、怒気も霧散した。

「……どうやら俺も少し飲み過ぎたようだな。少し夜風に当たってくる」

タンニーンは翼を広げ、空へと羽ばたいていった。
「何だったんだろう……」
『奴にも人には言えない何かがあるという訳だ』
タンニーンが去ってしまった以上、その何かが何なのか聞くことも出来ない。
後ろ髪を引かれる気分であったが、仕方なく一誠は眠ることにした。
（まあ、大丈夫だよな。タンニーンのおっさんは立派なドラゴンだし）
無理矢理でもポジティブなことを考えながら、一誠は目を閉じる。
厳しい特訓を通じてタンニーンを信頼する一誠には想像も付かないであろう。
少し先の未来にある光景を。
燃え盛る大地の上で対峙する両者の姿を。
それが片や師であるドラゴンであることを。
もう片方が友である魔人であることを。

交流、逆鱗

温泉での一件を終えたシンは、仲魔たちやセタンタと共にグレモリー邸へと戻って来た。ライザーも自分の領地に戻っていったが、帰り際にまだ炎の特訓が終わっていないことを告げられ、自分の領地に来る様に言われた。

「俺の方からさんざん足を運んでやってきたんだ。今度はお前からこっちに来い」

というのがライザーの言い分である。炎の扱いがまだ不十分だと思っていたシンは断ることも出来ず、後日フェニックス家へと行くことが決まった。

相変わらず大きなグレモリー邸を見て、シンは軽く頭を回す。温泉でライザーと眷属たちとかなりの量の酒を飲んでしまった。初めの方は普通に飲んでいたが、酒瓶が増える程にライザーの眷属たちから理性の箍が外れ出し、やたらと体を密着させにきたりと絡み始めてきた。

流石に不味いと思いライザーの方を見たが、ライザーもライザーで完全に出来上がっており、咎める所か囃し立てる始末であった。

何とかしなければと考えた末、全員を酔い潰してしまおうと考え、兎に角周りにひたすら酒を勧めたが、その過程でシンも大量に摂取することとなってしまった。

結果としてこの考えは辛うじて上手くいき、温泉でまともな理性を残していたのは酒を飲まなかったレイヴェルとピクシーたち。そして、飲んでも酔い潰れなかったシンとセタンタであった。

あれだけ飲んでも二日酔いが起きない体質に、自分のことではあるが少し驚く。尤も完全にアルコールが効いていないという訳では無く、今もシンは頭に重さの様なものを感じている。さっき頭を軽く回したのもこれが原因である。

グレモリー邸に入ると、執事たちやメイドたちが一斉に頭を下げてシンたちを迎え入れた。

使用人たちを代表し、グレイフィアがシンたちの前に出る。

「お疲れ様でした。お早い御帰還ですね。セタンタ、貴方もお疲れ様です」

「あくまで一時的なものです。また特訓の方は続きます」

「左様で御座いますか。リアスお嬢様、イッセー様、アーシア様、ゼノヴィア様、小猫様、朱乃様、祐斗様、ギャスパー様も今、本邸の方におられます」

「全員ですか？」

「ええ。……小猫様が倒れてしまい、治療のため本邸の方へ運ばれましたので……」

いきなりそんなことを聞かされ、シンは目を少し見開く。

「いつ運ばれたんですか？」

「昨日です。ご存知無かったのですか？　……セタンタには伝えた筈なのですが……」
グレイフィアは少し鋭くさせた目線をセタンタに向けたが、セタンタは全く意に介した様子は無く――
「聞いた話では過剰なトレーニングによる過労で倒れたというので、命に別条は無いと思って後回しにしました。こちらの特訓の方が優先なので」
――平然とそう言ってのける。反論したい気持ちもあるが、実際そんなことを聞かされて出来ることと言えば見舞い程度しかない。見舞いに行ったら行ったで、小猫が特訓の時間を割いて見舞いに来たことを知れば、逆に落ち込むのが容易に想像出来る。
腹立たしいが、セタンタの判断は間違っているとは言い切れない。
「賢明な判断ですね」
だが、感情的に割り切れる訳ではないので、少し棘を含んだ声で皮肉を言ってしまう。
「お褒め頂いて光栄です」
尤も、そんな皮肉一つでセタンタの鉄面皮を崩せる訳も無く、余裕の態度で流されてしまった。
「取り敢えず、塔城の様子を見に行っていいですか？」
「ええ、どうぞ」
これ以上言い合っても無駄なのでさっさと小猫の見舞いに行くことにし、グレイフィ

アから小猫が休んでいる場所を聞いて、仲魔たちを連れて行こうとする。
「――少しお待ちになっていいでしょうか？」
するとグレイフィアから声を掛けられた。
「念の為の確認ですが、そちらの方は一体どなたなのでしょうか？」
グレイフィアだけはない。この場にいる使用人たちの視線が、一斉にケルベロスの方に向けられる。
不審に思うのも無理の無い話である。出発の時には居らず、帰ってきたときに姿を現したのだから。
「特訓場所で新しく仲魔になったんです。自己紹介」
「ジコショウカイ？　ナンダソレハ？」
「……名乗ればいいだけだ」
「ウオオオン、ワカッタ。オレノナハケルベロス」
ケルベロスがケルベロスと名乗ると、グレイフィアを含む使用人一同の不審な眼差しが、驚きと怪訝な眼差しに変わるのを感じた。まさか喋るとは思わなかったようである。
グレイフィアも冷静な表情を僅かに驚きで崩していたが、すぐにそれも元へと戻る。
「ケルベロスですか？　失礼ですが――」

そこから先何を言おうとしているのか容易に想像が付いたので、言う前に手を前に出してそれを制止させ、グレイフィアに近付くと小声で話し掛けた。
「それ以上は。何をおっしゃりたいのか分かっています。ですが、あいつの前で普通のケルベロスと違うのを指摘するのは控えて欲しいです。怒りますし、傷付きますので」
傷付くというのは完全に推測からのものである。怒るということは他人に何かを傷付けられたということに等しい。
「――分かりました。浅慮な行動でした。お許しください。他の使用人たちにも伝えておきます」
「ご理解ありがとうございます。基本的には大人しい奴なので」
すぐに理解を示してくれたグレイフィアに礼を言って、シンは下がる。
「出来ればこいつのことを部長たちにも紹介したいのですが……」
本来ならばリアスかリアスの両親に許可を貰うのが筋であろうが、姿が見えないので屋敷の管理の統轄であるグレイフィアに一応の伺いを立てる。
グレイフィアは少し考える素振りを見せた。いくらリアスの客人とはいえ、それが突然連れて来た未知の存在に対して簡単に『はい』とは言えないのも無理は無い。
「私も同行しますので」
そこにセタンタが口添えする。

「――それならば恐らく問題はないですね。分かりました。その方を新たな客人とさせて頂きます。万が一リアスお嬢様たちと問題が起こったのならば、私の名前を出して下さい。事情を説明しに行きますので」

グレイフィアが恭しくお辞儀をすると、他の使用人たちも同じくお辞儀をした。ケルベロスを迎え入れるという意味を込めた。

「グルルル……ナゼコノ悪魔タチハオレタチ二頭ヲサゲテイルンダ？　丸カジリ二シテクレトイウコトカ？」

人語を理解し喋られるが、野生育ちであることで常識が欠けているせいでグレイフィアたちの行動に素っ頓狂な反応を示す。折角、基本的に無害であることを告げたのに台無しである。

「……そういう意味じゃない。お前を歓迎するってことだ」

「歓迎？　ドウイウイウ意味ダ？」

「ここで自由に過ごしてくれということだ」

「ツマリナワバリノ中ノ様二シテイイイウ訳カ？　力尽クデウバワナクテモイイノカ？」

「ああ」

「ソウカ……ジャア寝ル」

「――ん？」
何を言い出したのか一瞬分からなかったシンであったが、そんな彼を無視してケルベロスはその場で身を丸くする。
「おい、ちょっと待て」
「ココハナワバリト一緒ダト言ッタ……オレガナワバリデスルコトハ……眠ルコト……グルル……」
「場所を選べ。場所を」
寝息を立て始めるケルベロス。いきなり玄関ホールのど真ん中で眠り始めたので揺さぶって起こそうとするが、まったく起きる気配が無い。
突然寝始めたケルベロスの大胆で自由過ぎる行動に、グレイフィアを含めた使用人たちは明らかに戸惑っていた。
「起きろ。せめて部屋の中で寝ろ」
更に激しく揺さぶるが効果は無い。軽く拳を握って頭を叩くがこれも効果無し。さっきよりも拳を強く握り、額を強めに叩いてみるが起きる気配が全く無い。
周りにいる使用人たちの『どうするの？』という視線が痛い。
「こいつ……」
ならば全力で叩き起こそうとしたとき、グレイフィアから声を掛けられる。

「今日は特にお客様もお見えになりませんので、そう無理に起こさなくても大丈夫だと思われます」
「ですが……」
「ここは私が見ているので、貴方は小猫の様子を見に行って下さい」
渋るシンにセタンタがケルベロスのことは任せる様に言ってくる。
「……」
それを聞いても快諾しないシンであったが、シンよりも先にピクシーたちが行動に移っていた。
「アタシは先に行くねー」
「オイラも小猫ちゃんのことが心配だホー！」
「じゃあボクも～」
シンを置いてさっさと行ってしまう仲魔たち。あの三人を放っておくわけにもいかず、後ろ髪を引かれる思いであったが、ケルベロスのことをセタンタたちに任せることにした。
「すぐに戻ってきます」
「そう急がなくてもいいですよ。きちんと見ているので」
ピクシーたちの後を追って、シンは小猫が休んでいる客室へと向かう。

「……別に無理をしてあんな態度をとらなくても良かったのではありませんか？」
「何のことです？」
シンが居なくなったのを見て、グレイフィアは声を潜めてセタンタへ話し掛けた。
「小猫様のことです。全く心配していない様に言っていましたが、私が貴方に連絡した後、何度もこちらに小猫様の様子を確認する連絡を入れていましたよね？」
「……ああ、そのことですか。さっき言った言葉に嘘はありません。彼の特訓を妨げるものは少しでも無くしたかったのは事実です」
「貴方の悪い癖ですよ、それは。目的の為に自分を押し殺したり、泥を被ろうとしているのは。サーゼクス様も何度も苦言を呈しているというのに……」
呆れる様な、それでいてセタンタのことを心配している様なグレイフィアの言葉に、セタンタは視線を伏せながら目を細める。顔半分を隠している為、どんな表情を浮かべているのか普通のヒトには分からないが、付き合いが長いグレイフィアはセタンタが苦笑を浮かべているのがすぐに分かった。
「生まれ持ったものか、あるいは失って新たに芽生えたものかは分かりませんが、この性は中々変えることは出来ません」
「私としても変えて欲しいとは思っていますが、一筋縄ではいかないとは分かっています。――ですが、だからこそあのヒトも私もあの子も貴方を信頼しているのでしょう

ね」
「……身に余ることだ。何も無い俺にとっては」
ほんの少しだけ素の顔を見せると、セタンタは眠っているケルベロスの側に立ちその寝顔を見ながら、グレモリー家〈ここ〉に来た時から今に至るまでの記憶をぼんやりと思い返す。
（記憶〈かこ〉も無く噛み付くぐらいしか能の無かった野良犬がいつの間にか家を護る番犬か……出来過ぎなぐらいの人生だ）
自分にとっての最大の不幸が記憶を失ったことだとすれば、最大の幸運は最初に出会ったのがグレモリーであったことである。
あの出会いが無ければ今の自分はここに居ない。
（こいつとあいつの出会いが、俺とグレモリー家との出会いと同じものであることを願おう）
暢気に眠っているケルベロスの顔を見ながら、セタンタはそんなことを考えていた。

◇

シンが小猫の部屋へ行くと、扉の前で木場とギャスパーが心配そうに扉の向こうを見

詰めていた。
木場は向けられている視線に気付くとシンたちの方を見て、微笑を浮かべる。しかし、その笑みには曇りが感じられた。
「やあ、久し振り」
「あ、間薙先輩！」
木場の挨拶でギャスパーもシンたちの存在に気付く。
「ランタンくーん！　会いたかったよー！」
ギャスパーがジャックランタンに駆け寄り、力強く抱き締める。
「ギャスパ～。特訓の間はボクとこうするのは駄目なんじゃないの～？」
「ちょっとだけ！　ちょっとだけだから！」
ジャックランタンの顔を半泣きで頬擦りをするギャスパー。全く変わらない所か、前よりも酷くなっているギャスパーにジャックランタンは呆れていた。
「君も小猫ちゃんのことを聞いて戻って来たんだね？」
「――ああ、まあ、そうだな」
小猫が倒れたのをほんの十数分前に知ったのだが、グレモリー邸に戻って来た理由は違えど、小猫の様子を見に来たのは間違いなく倒れたのを知ったのが理由であるので、大まかに考えれば似た様なもの――という詭弁を心の中でしながら、少々歯切れの悪い

言葉で肯定する。
「部長たちは？」
「リアス部長と朱乃さん、アーシアさんは部屋の中で小猫ちゃんの様子を見ているよ」
「ゼノヴィアはどうした？」
「彼女は、小猫ちゃんの状態を見た後に『私がここにいても何もしてやれない』って言って特訓に戻っていったよ。万が一の為に小猫ちゃんの穴を埋められる様に力を付けておくのが、彼女なりの気遣いなのかもしれないね」
　不器用と呼べるゼノヴィアの振る舞いに木場は苦笑を浮かべた。
「あいつはどうしたんだ？　姿が見えないが……」
「イッセー君かい？　今頃はヴェネラナ様からダンスのレッスンを受けている筈だよ」
「なぜ、ダンス？」
　思わず聞き返してしまう。
「上級悪魔の眷属である以上、他の上級悪魔たちとの交流は避けられないからね。悪魔の社交界に出るには最低限の作法や振る舞い方を身に付けないといけないんだ」
「それでダンスなのか……」
「因みに僕も一通り学んでいるよ。ギャスパー君も吸血鬼の名家出身だから作法もきちんと覚えているし」

「そうなのか？」
相変わらずジャックランタンを抱き締めているギャスパーの姿からは想像出来ない。
「一つ聞きたいんだけどいいかな？」
「何だ？」
「間薙君って……踊れる？」
「俺もやらないといけないのか？」
協力者という立場であったシンはリアスの眷属ではない。ましてやダンスなど自分とは程遠い存在と思っていたので、木場の言葉に意表を突かれた気分であった。
「ほら、レーティングゲームの前に魔王主催のパーティーがあるじゃないか。あの時の為に最低限のマナーは覚えないといけないから」
「拒否権は？」
「多分、無いと思うよ……？」
命懸けの特訓が一先ず終わったかと思えば、次は気が進まないダンスの特訓である。
流石のシンもいつもの無表情が少し剥がれ、僅かに顔を顰めた。木場はシンの心情を察してか苦笑いをしている。
「……塔城の様子を見てもいいか？」
取り敢えず嫌なことは置いといて先にするべきことをする。

「ああ、多分大丈夫だと思うよ」
　木場は部屋をノックする。
「部長、間薙君が来ました」
『そう。入ってもらって』
　部屋の中から入室を許可するリアスの声。
「どうぞ」
「ああ」
　シンは、失礼しますと言って扉を開けた。
　広々とした部屋の隅の置かれたベッドの上に横たわる小猫。その周りにはリアスたちが心配そうに見守っている。
「元気そうで良かったわ、シン」
「少し見ない間に、ちょっと逞しくなりましたね」
「間薙さん、お元気そうでなによりです！」
　三人が口々に何日かぶりに顔を合わせたことを喜ぶ。シンは軽く会釈をして簡単にそれに応えると、横たわっている小猫の側に寄る。
　目を閉じ、小さな寝息を立てながら一定の間隔で上下する胸。外傷なども無く大事に至ってないことが分かる。

ただ見た目の『ある一点』を除いて。
「無事――なんですよね？」
小猫の顔を見ていたシンの目線が徐々に上へと向けられていき、小猫の頭頂部で固定される。
人間ならば備わっていなければおかしいが、そこに備わっているのはおかしいもの。
頭髪の色と同じ体毛で覆われた三角系の耳。俗にいう猫耳というものが小猫の頭頂部から生えていた。
「体力を使い過ぎていて、もうこれを隠す程の力も無いのよ」
リアスが小猫の耳を撫でる。すると小猫の耳は僅かに震えた。
「いつかこの子のことは貴方やイッセーにも聞かせるつもりだったけど、まさかこのタイミングで教えることになるなんてね」
リアスが微笑むが、その笑みには疲れが見えた。
「小猫はね、猫又と呼ばれる妖怪。その中でも最も強い力を持っていると言われた種族、猫？の数少ない生き残りなの」
リアスはシンに、小猫が妖怪から悪魔へと転生するに至った経緯を話し始める。
小猫には一人の姉がいた。その姉はとある悪魔に実力を見初められ眷属となった。姉が悪魔の眷属になったことで妹である小猫もその庇護を得ることができ、親とは死別

していた為根無し草と呼べる貧しい生活から人並の生活を送れる様になった。
転生悪魔となった小猫の姉は、急速な勢いで実力を高めていく。しかし、その速度があまりに異常であった。
猫又が操る妖術は勿論こと、猫?という希少な存在だからこそ可能である仙人以外での仙術の発動。
これにより小猫の姉は、主である悪魔を超える力を得てしまったのだ。
その結果として起こったのが、姉による主への反逆であった。
『はぐれ』と化した姉は、そのまま追っ手を逃れて姿を消してしまった。
残されたのは、事情を全く知らない小猫一人。
周囲の悪魔は小猫の処分を検討した。未熟であった小猫への冷酷な仕打ち。姉と同じ素質を持つかもしれないと危惧していたのだ。
そこに手を差し伸べたのが、サーゼクスである。他の悪魔の面々を説得し、監視という形へと収束させたのだ。
サーゼクスは小猫を年の近かったリアスへと預け、リアスは傷心していた小猫を慈しみ、彼女に今の名前である『小猫』という名を送ったのだという。
「懐かしい話ですね」
言い終えたリアスの後に、朱乃はポツリと呟く。既に朱乃もその頃からリアスの眷属

であった為、一緒になって小猫の心を癒していた。
「小猫、さんに、そんな、ことが、あった、なんて」
アーシアは小猫の過去を聞いて滂沱の涙を流している。
「アーシア、涙、涙」
顔を涙でびしょ濡れにさせているのを見兼ねて、ピクシーがアーシアにハンカチを手渡す。
「あり、がとう、ございます、ピクシーさん」
しゃくり上げながら手渡されたハンカチで涙を拭う。ちなみにこのハンカチ、ピクシーが勝手に取り出したシンのハンカチである。
「――という訳よ、シン」
「そうなんですか」
落涙するアーシアとは逆にシンは一切表情が変わらない。別に小猫に同情していない訳では無い。ただ表に出していないだけである。しかし、激しく感情を露わにしているアーシアがいるせいもあって尚更薄情に見えた。
「……貴方が冷たい人だとは全く思っていないわ。でも、アーシア程とは言わないけどもう少し反応を見せてくれると私としては安心なんだけど……」
「私の時もそんな反応でしたわねー」

反応の薄いシンにやれやれといった態度を見せるリアスと朱乃。
少し居た堪れない空気となった時、コンコンと扉をノックする音が聞こえてくる。
「イッセー君が来ました」
部屋の外にいる木場が一誠の来訪を告げる。
それを聞いてリアスは扉へと近付き、アーシアも少し遅れてリアスの後を追う。
「入ってらっしゃい」
「失礼します。あっ、部長」
一誠が部屋に入ってきた瞬間、扉の前に待機していたリアスは出会い頭に一誠を抱きしめた。
「会いたかったわ、イッセー」
一誠の温もりを全身で感じ取るリアス。
「私も会いたかったです！　イッセーさん！」
アーシアも遅れて一誠に抱き着く。前はリアスがいるので、背後から抱き締めていた。
「アーシアも元気そうで良かった」
別れる前と変わらないアーシアを見て、一誠は安堵の表情を浮かべた。
「もう……二人ともずるいですわ」

出遅れた朱乃が少し悔しそうに呟く声がシンの耳に入ってきた。内心ではリアスたちと同じ事がしたかったらしい。

少しの間、二人の女性は一誠を抱き締めていたが、小猫の部屋ということもあって名残惜しみながらも二人は一誠から離れる。

「お前たちも来てたんだな」

「ああ」

「やっほー」

「ヒーホー！」

シンたちの存在にも気付いて声を掛けてきたので返事をする。ピクシーたちは軽く手を振っていた。

一誠は横たわる小猫の様子を見に来て、小猫の変化に目を丸くする。

「イッセー君、これは――」

「大丈夫です。だいたいのことは部長のお母、じゃなくてヴェネラナ様から聞いています」

事前に小猫の事情を聞かされていたらしい。目を丸くしたのは実際に目の当たりにしたことによるものなのであろう。

一誠は寝ている小猫の様子を窺う。上から下へと滑らせる目線。怪我が無いか確認

しているようであった。
「ううーん……」
　すると小猫が小さく唸り、微かに瞼が震える。目を覚ます前兆である。
「私たちは小猫と既に話を済ませているから外に出ているわね。貴方たちも何か小猫と話すことがあるなら話し掛けてあげて」
　そう言うとリアスはアーシアと朱乃を連れて部屋の外に出る。
　その直後、小猫の目がうっすらと開く。暫くその状態であったが、やがてシンたちの姿が目に入ったのか目は完全に開いて、ベッドから上体を起こした。
「やあ、体は大丈夫？」
　最初に声を掛けたのは、一誠であった。相手を気遣う様に笑顔を見せていたが、それに対する小猫の反応は非常に悪いものであった。
「……何をしに来たんですか？　先輩たちは」
　目を半眼にして不機嫌そうに言う小猫。明らかに様子を見に来られたことを歓迎していない。
「心配だったから様子を見に来た、っていうのが俺や間薙たちが来た理由じゃダメかな」
　素っ気ない態度を取られても一誠は態度を崩さず、優しい口調を続ける。
「小猫ちゃんの話は聞かせてもらったよ。色々とね」

「……あっ」

そこで小猫ははっとした様に頭に手を伸ばし、隠していた猫耳があることに気付いた。と同時に自分がここまで弱っていたことを思い知らされたのか、不機嫌な表情が一変し悲愴を感じさせるものへ変わる。

「自分でも分かっているとは思うけど倒れる程のオーバーワークはダメだ。体や命は大事にしなきゃ……そう、本当に命は大事にしなきゃ。一個しかない命なんだから……ホントに、ホントに……命はいくつあっても足りないって言葉があるけど、一つの命を限界まですり減らしてから治して再使用するのはやっぱ何か違うというか……無理なものは無理で、本当にそれ以上は勘弁して下さいというか……」

後半の方になると小猫に向けてというよりもここには居ない誰かへの言葉となっている。余程恐ろしい目に遭っているのか喋りながら蒼褪め、冷や汗を流していた。

「……それでも……なりたい」

小さく呟かれた小猫の言葉。聞き取れない程小さなものであったが、ベッドの上に落ちた涙の跡を見れば、何が言いたいのか容易に想像出来た。

「私は強くなりたいんです。もっと、もっと。祐斗先輩やゼノヴィア先輩、朱乃さん……イッセー先輩や間薙先輩の様に心と体を強くしていきたいんです。……私には『戦車』としての力しかありません。ギャーくんの様に時間停止の力もアーシア先輩の様に回

復の力もありません……私だけが置いてかれているんです……私だけが変わらないまま弱い……このままじゃ、リアス部長のお役に立てなくなる……」
普段無口な小猫からは想像出来ない程の饒舌。内にあったものを全て吐き出している印象であった。
「小猫ちゃん……」
「でも、私に眠る力を……使いたくない……」
強くなる可能性は秘めている。だが小猫自身がその力に怯えていた。姉がその力で悪魔を殺したという事実が、小猫の心にトラウマとなって深く根付いている。
「使えば私は……姉さまの様に……もう嫌です……あんなのは嫌……もし私の力のせいでリアス部長たちを傷付けることになったら……」
泣き続ける小猫。すると今まで黙っていたシンが無言で小猫の側に近付き、手を伸ばす。
「……間薙先輩？」
伸ばされた手は涙が伝う頬に触れ、そのまま涙を拭う――
「いひゃい！　いひゃい！　いひゃいです！　せんひゃい！」
――のではなくいきなり抓り上げた。
「随分と上からものを言ってくれるな、塔城」

ギリギリと頬を抓られて別の意味で涙を流し始める小猫。反射的にシンの手を引き剥がそうとするが、びくともせず逆に抓る力が増していく。
「お、おい！　いきなり何してんだ！」
シンの蛮行に一誠は驚き、咎めるが、シンはそんな一誠を睨み付ける。『黙っていろ』と言わんばかりに。
「そもそも最初の態度から何だ。思い通りにいかなかった不満や鬱憤を八つ当たりで人に向けた態度は。『何をしに来たんですか』だと？　お前の見舞い以外の理由があるか。お前は仲間が倒れても様子一つ見に来ない薄情な連中だと思っているのか？　第一そうなった原因はお前が無理したからだろうが。もっと自分の立場を理解しろ。お前一人が動けなくなったら、他のメンバーもこういう風に動くことを」
淡々と語りながら徐々に小猫の頬を抓り引っ張っていく。
「それと自分の力のせいで周りを傷付けるかもしれないと言ったな。はっきり言って大きなお世話だ。俺も部長たちもこの馬鹿もお前の力なんかでどうにかなるかと思っているのか？　満足に使った事が無い癖に大した自信だな」
「この馬鹿っ!?」
いきなりの暴言に一誠が反応する。そんな一誠の反応は無視して、シンは反対の頬にも手を伸ばし同じ様に抓り上げる。

「いひゃい！　いひゃい！　ごめんなひゃい！　ごめんなひゃい！」
つい謝ってしまう小猫。今のシンには何故かそう言わせる迫力があった。
「まあ、お前の言った通り、そんな迷いのある状態じゃあその力も満足に使い熟せないだろうがな。ある意味で賢明な判断だと言える。ところで――」
そこでシンは小猫の目を真っ直ぐ見た。
「ライザーとのレーティングゲームの時、俺を助ける為に、お前猫又の力を使っただろう？」
熱波剣の扱いがまだ不慣れであったとき、発動までの時間を稼ぐために小猫が単身でライザーの『女王』ユーベルーナへと挑んだ。その時、小猫がした何かでユーベルーナが不自然な動きをしたのをシンは覚えていた。
「……ふぁ、ふぁれは……とっひゃのことだったのへ……」
「お前があの時に何を考えて力を使ったのかは分からないが、俺はお前があの時にその力を使ってくれたお陰でライザーの『女王』に勝てた」
シンの言葉に小猫の瞳が動揺して揺れる。
「お前の力は、お前が思っているよりも悪いものじゃない。――少なくとも俺にとっては、な」
小猫の猫又としての力を肯定する言葉。

シンが言った様に小猫はライザーの『女王』へ確かに猫又の力を使った。それはシンに助けられた恩を返すことだけを考え、夢中になって意図せずに使ってしまった力であった。試合の後は人知れず自己嫌悪に陥ったが。

小猫にとって猫又の力は使えば孤独になるものという認識であった。否定したくても消せない力。しかし、今、目の前のシンにそれを肯定された。

「……れも、わたひは……にゃっ！」

それでも頑なに力を受け入れることを拒もうとする小猫の言葉は、シンが引っ張っていた指を勢い良く離したことで中断される。

「うう……」

涙目になって赤くなった両頬を擦る小猫。シンはもう話すことはないと言わんばかりに背を向けた。

「おい！」

部屋から去ろうとしているシンの肩に手を置き、一誠が引き留める。

「お前の言いたいことは分かるけど、やっぱ言い方ってやつがあるだろうが……」

「そうだな。厳しい言葉を言った分、お前が優しい言葉を掛けてやれ」

そこで一誠は理解する。わざとシンが憎まれ役をやったことに。

きっと誰もが小猫を気遣う言葉を掛けたであろう。事実、一誠もその一人であった。

慰められれば慰められた分だけ、小猫は負い目と情けなさを溜め込み、内にある心の傷を膿ませていく。シンは敢えて踏み込み、その傷を抉ることで膿んでいく部分を切り取ろうとしていた。

シンの、普段しない様な行動に納得する。それと同時に、モヤモヤとした気持ちが生まれて来る。

「だーもう！　お前はいちいちカッコつけすぎなんだよ！」

一誠は内にある感情に任せ、自分から進んで損な役を引き受けたシンを咎める様な、それでいて称賛する様な言葉を掛けると置いていた手を離す。

シンは一誠の言葉に応えず、代わりに後ろに向かってひらひらと手を振りながら部屋の扉を開けた。

部屋から出るとリアスたちが何とも言い難い表情をしながら立っていた。少なくとも部屋でどんなやり取りがあったのかは、扉越しでも分かっている筈である。

シンと比べればリアス、朱乃、木場と小猫の付き合いは長い。心身共に弱っている小猫に追い打ちを掛けたと言っていいシンの所業に対して、怒りを抱いていてもおかしくはなかった。

暫しの間、リアスたちとシンは無言で互いを見る。

その間、アーシアとギャスパーはオロオロとした態度で両者を眺めていた。

沈黙を破ったのはシンからであった。
「特訓の方に戻ります」
言い訳も何もせず、それだけ告げるとリアスたちの横を通り抜けようとする。
「――分かっていたことだったのだけれどね」
通り抜けようとした寸前、リアスが呟いたのが聞こえシンは足を止め、リアスの方を見る。リアスの表情には後悔の色が浮かんでいた。
「あの子は焦っていた。後から来たイッセーや貴方が力を付けていったことに。周りに置いていかれると思って、どんどん自分を追い込み始めていたことに気付いていた。気付いていた筈だったのに……」
額に手を当て、強く目を閉じ、苦悶を見せる。
「もっと小猫とちゃんと向き合っていれば、こんなことにはならなかった……あの子の苦しみを和らげることが私には出来た筈なのに出来なかった……」
小猫を思いやる故にその心に深く踏み込むことが出来ず、結果自身を追い込む状況を作ってしまった。
リアスの脳裏に特訓を始める前のマダの言葉が蘇る。
『優しくすれば万事上手くいくなんて思っていないだろうな？　お嬢ちゃん。その情愛の深さは素直に感心するが、あんまり度が過ぎると相手を腐らせることになるぞ』

あの時は怒りを覚えたマダの言葉は、今のリアスには絶対零度の刃となって心に深く刺さる。マダの指摘した通りの結果となってしまった。
「本来ならば、あれは私の役目だったわ。それなのに結局貴方に投げてしまった……私は『主』として……やっぱり『甘い』のかもしれないわね……」
嫌われる様な役を人に押し付ける様な結果になってしまい自己嫌悪の言葉を零すリアス。
「誰に何を言われてそんなこと思ったのかは知りませんが、それがどうしたって言うんですか？」
「え？」
「俺が勝手にしたことに一々責任なんて感じる必要は無いです。俺にしか出来なかったことだと自惚れるつもりもないです。偶々ですよ、偶々。そういう役割が色々あって俺に巡って来ただけの話です」
いつもの様に素っ気ない口調だが、言葉の端々に気遣いが感じられた。
「貴女の言う甘さ――俺は嫌いじゃないです」
そこまで言うとシンは頭を軽く下げ、用があるのでという理由で足早に立ち去っていく。その後をピクシーやジャックフロストが追い掛けていく。
「じゃあ、皆が行くみたいだから僕も行くね～」

「あっ……うん」
ギャスパーの手から離れるジャックランタン。少し躊躇するギャスパーであったが、引き留めることはしなかった。
「またね～。ヒ～ホ～」
最後にそう言い残してシンたちの後を追う。
「私も気を遣われちゃったわね」
「間薙君もイッセー君と同じ様に優しい人ですからね。だけど危ういとも思います。小猫ちゃんのことも、嫌われるのや他の反感を覚悟して敢えて踏み込んで接した様に感じられました」
良くも悪くも、傷付けることも傷付けられることにも躊躇いが無いシンの在り方に、一抹の不安を感じてしまう。
「で、でも私たちは間薙さんのことを嫌いになっていませんよね！」
もしかしたら小猫のことでリアスや朱乃がシンのことを嫌ってしまうのではないかと思い、確認するアーシア。
一誠は強く意識している異性ならば、シンのことは頼れる異性として認識しており、木場と同様に兄の様に慕っている。
同じく姉の様に接しているリアスや朱乃とシンとの間に亀裂が生じることを恐れて

いた。
「大丈夫よ、アーシア。シンのことは理解しているつもりだから。きっと小猫もシンが自分のことを思って厳しく接したことを理解しているわ。誰もあの子を嫌っていないわ」
安心させる様にリアスはアーシアの頭を優しく撫でる。
「宿っている力の詳細が未だに分からないのに、間薙君は私や小猫ちゃんと違って躊躇わずに先へ進んで行きますね……」
堕天使の血を宿し、それを嫌悪する朱乃にとって、それは眩しく見えた。

◇

（柄にも無いことをしたな……）
ケルベロスの件で早々に部屋から去ったシンは、玄関に向かいながらそんなことを考えていた。
彼は後悔していた。小猫やリアスにあんなことを言ったのを。
何故なら――
「お前の力は、お前が思っているよりも悪いものじゃない。――少なくとも俺にとって

は、なヒホ」
「きゃはははははは！　似てる似てるー！」
――シンの直ぐ側で先程あったことを仲魔たちが物真似し始めたからだ。
「へ～。中ではそんなことがあったの～。僕も見たかったな～」
「貴女の言う甘さ――俺は嫌いじゃないですホ」
「きゃはははははははは！　もう一回！　もう一回！」
普段はあまり口数が多くないシンが良く喋っていたことや感情的になっていたことがよっぽど珍しかったのかしつこく真似をし、ピクシーはツボにはまったのか飛びながら腹を抱えて笑っている。
止めろと言いたくなるが、言ったところでますます調子に乗るのは目に見えていた。だからこそ敢えて沈黙を続ける。
シンが黙っている間、延々と物真似を繰り返す仲魔たち。
一秒でも早く玄関へと辿り着くことを考えていたシンは、前方からグレイフィアが向かって来ていることに気付く。
シンが足を止めると、グレイフィアも足を止める。
「もう小猫様のお見舞いはよろしいのですか？」
「ええ」

「そうですか。では申し訳ありませんが私についてきてもらってもよろしいでしょうか？」
　シンに用があるらしい。
「何か御用でも？」
「私ではなく奥方様が――」
「すみません。玄関の方に置いてきたケルベロスのことが気になるもので」
　そこから先は聞かずに理由をつけて去ろうとし、グレイフィアの横を通り過ぎる。
「――玄関にいるケルベロス様のことはご安心下さい。セタンタがきちんと寝所まで運んでくれたので」
　通り過ぎた筈なのに、いつの間にかグレイフィアはシンの正面に立っている。
「間薙様には一誠様と同じく色々と『作法』を覚えてもらわないと奥方様から御達しを受けているので」
　木場の言葉が脳裏に浮かぶ。シンにとっては更に柄では無いことをしなければならなくなる。
「因みに拒否権はあるんでしょうか？」
「奥方様にご確認して下さい。私の役目は奥方様の所へご案内することだけなので」
「……そうですか」

もう逃れることは出来ないと悟り、腹を括ると同時にヴェネラナの元へ向かう前にしなければならないことがある。
「行く前にこいつらを何処かに預けていいでしょうか？」
「ええー。アタシたちもついてきたいー」
「ダメだ」
同行したがるピクシーに即答で却下する。踊りを練習する姿など見られたとなれば、どんな反応をするか分かったものではない。
「ちぇー」
頬を膨らまして不満を露わにするピクシーであったが、それ以上は粘ることなかった。
「預けるとなると何処に――」
「あれ？　どうしたんですか？」
声を掛けてきたのはミリキャスであった。
「ミリキャス――様。お勉強の方はよろしいのですか？」
「はい。さっき終わったので部屋に戻ろうとしていた所です。間薙さん達はここで何を？」
シンたちが立ち話をしている姿に思わず声を掛けたらしい。確かに広い通路の真ん

中で話していれば気になるのも無理は無い。
「実は――」
「あっ。そうだ。ねえ、ミリキャスの部屋に遊びに行っていい？」
　事情を説明する前にピクシーが割って入る。
「僕の部屋にですか？」
「アタシたちさー、シンにどっか行けって言われて行く場所が無いのー」
「そうだホ。オイラたち、この広い屋敷の中で捨てられたんだホ！」
「み～な～し～ご～」
「えっ！」
「冗談ですから」
　ピクシーたちの嘘を真に受けてシンを凝視するミリキャスに手を振って嘘であることを告げた後、先程までの会話の内容を軽く説明する。
「そういうことですか。えーと……」
　このときミリキャスは横目でグレイフィアの顔を窺っていた。
「勉強以外の時間はミリキャス様の自由なので」
　視線に気付いたグレイフィアがそう言うとミリキャスは顔を輝かせて、ピクシーたちを手招きする。

「いいですよ。僕の部屋で良かったなら」
「わーい」
「お邪魔するホー！」
「よろしくね～」
「じゃあ、行きましょう！」
　年齢以上にしっかりした印象を受けるミリキャスもこのときは年相応に無邪気に声を弾ませ、ピクシーたちを連れて部屋へと案内していった。
「――では私たちも行きましょうか」
「はい」
　ミリキャスたちの後ろ姿を見送った後にシンたちもヴェネラナの元へ移動する。
　その道中で――
「今更ですけどピクシーたちと遊ばせて良かったんですか。――変な影響を与えるかもしれませんよ」
「御自分の御仲魔をその様に言ってはいけませんよ。それにミリキャス様はしっかりとしているので」
「親として信頼しているということですか」
「はい。そう――」

グレイフィアはその場で振り返りシンを見る。冷静な表情が剥げ、驚きで目が少し見開いていた。
「誰にそれを聞きました？」
「見てれば分かるものじゃないですか？　顔や雰囲気がグレイフィアさんに良く似ていたので。――それとも間違っていました？」
「……いえ、間違ってはいません」
「それとも口に出すのは拙かったですか？」
あくまで主と従者として振る舞っていたことから、公言するのは間違っていたかと思うシンだったが、グレイフィアは首を横に振った。
「いえ。ただ公の場では私はサーゼクス様の眷属であり、グレモリー家に仕える者。公私混同で振る舞う訳にはいかないので」
普通に考えれば魔王の妻という高い地位にいるにも関わらず、敢えてグレモリー家の従者として生きるグレイフィア。あまり接する機会が無かったので、少しだがどんな性格であるかを知ることが出来た。
「でないと――」
少し言い淀む。グレイフィアに透き通る白い頬が少しだけ朱に染まった。
「私はあの子を甘やかし過ぎてしまうので……」

グレイフィアの母親として顔を垣間見た気がした。
「それにしても……そうですか……あの子は私に似ていますか」
微笑むグレイフィア。慈愛に満ちたその顔は、色艶以上に人の目を惹きつける強い輝きが放たれている。シンは全く似ていないとは分かっているものの、その微笑みに母の顔が重なって見えた。
「――いけませんね。これ以上話をして奥方様を待たせる訳にはいきません。そろそろ向かいましょう」
グレイフィアは懐中時計を取り出し時間を確認すると、話を切り上げる。
「分かりました」
「では今度こそ行きましょう。間薙様」

◇

シンたちがグレモリー邸に戻った翌日。アザゼルは一誠を再び修業場へ連れて行く為にグレモリー本邸へ訪れていた。
大きな扉の前には立つとその脇にいる番兵に扉を開けるように頼むが、何故か反応が悪い。堕天使であるアザゼルの言うことを聞くのを嫌がっているというよりも開けて

いいのか悩んでいるように見えた。
開ける様に催促するアザゼルに番兵は――
「驚かないで下さいね」
――とだけ言って扉を開ける準備を始める。
事情が分からないのでその言葉に困惑するしかないアザゼル。その間に扉は開き、アザゼルは訝しんだまま本邸の玄関へと入ると。
「うおっ！　びっくりした！」
玄関のど真ん中で横たわって寝ている魔物に驚き、声を上げてしまう。
アザゼルも初めて見る姿の魔物に最初は驚いたものの次第にそれは好奇心へと変わっていった。
「何だこいつは？　おーい」
恐れることなく魔物に近付き、寝ているそれの頭を軽く叩く。だが、魔物は目を覚ます様子は無い。
「聞こえているかー？」
もう一度同じことをする。すると魔物は片目だけを開いてアザゼルを見た。
「……ナンダ」
「おっ。喋るのか、お前」

言葉を理解し、話せる魔物にアザゼルは再度驚く。
「誰なんだ、お前は？　グレモリーのペットなのか？　何度かここに出入りしているがお前の顔を見るのは初めてだな」
「グルル……オレハ……ペットデハナイ……シンノ仲魔ダ……」
「シンの仲魔？　いつの間に……」
魔物はそれ以上応答する気は無いといった態度で目を瞑り、寝息を立て始める。
丁度そのタイミングでパタパタと足音が聞こえてきた。
「アザゼル先生！　おはよ――うおっ！　びっくりした！」
十数秒前のアザゼルと全く同じ反応を示しながら一誠が現れる。
「何ですかこれは？」
「シンの仲魔らしいぞ」
「こいつも！」
今までどちらかと言えば可愛い容姿をしていたものを仲魔としていたが、目の前の獅子と狼を掛け合わせた様な魔物も仲魔と言われ、改めて驚く。
「またここにいたのですか」
「どこに行ったかと思えば……」
呆れた声を出しながら姿を見せたのはセタンタであった。その隣にはシンの姿もあ

る。
　朝早く起きたせいかシンはいつも以上の仏頂面をしている。シンの肩にはピクシーが二つ折りになって眠っており、その足元では枕を引き摺ったジャックフロストが半目になってくっついていた。
「何処でどういう理由で拾ってきたのかは知らんが、仲魔なら責任持って見とけよ」
「すみません。昨日の時点では俺の部屋で眠っていた筈なんですが……朝、気付いたらここに……」
　周りに人が集まっているのに相変わらず寝息を立てているケルベロス。その姿に一同呆れる。
「仕方のない子だ」
　セタンタはそう言ってケルベロスの腹の下に手を差し込むと、その細腕からは想像出来ない程の力で軽々とケルベロスを持ち上げ、肩に担ぐ。
「間薙様。このまま部屋に運びます」
「ありがとうございます」
「あ、ちょっと待ってくれ」
　去ろうとするシンたちをアザゼルが呼び止めた。
「ちょっとの間、そいつを貸してくれるか？」

視線を下ろしたアザゼル。その先には寝ぼけ眼のジャックフロストが今にも崩れ落ちそうな勢いで船を漕いでいた。

◇

一誠の帰宅に合わせて領土に戻っていたタンニーンは、日が昇り始めると同時に修業場である山へと戻っていた。

そこで一誠たちが戻って来るのを座って待つ。

日が大分高くなり魔力による月の輝きが失せ始めた頃、一誠たちは山へと現れる。

「戻ってきたか――むっ」

帰っていった時には居なかった人物を連れてきたのが見え、タンニーンの表情が僅かに強張る。それは招かざる客と思っているからではない彼の心情を知れば誰もが驚き、言葉を失うであろう。

「ヒホ！　また会ったホー！」

無邪気な挨拶をする小さな雪精。それを前にして、龍王という座にかつて名を連ねていたタンニーンが少し緊張しているなど、誰にも想像出来ないだろう。

「……そうか。連れてきてくれたのだな。アザゼル。感謝する」

「そんな大層なことはしてねぇよ」
　願い通りにジャックフロストを連れて来てくれたことに感謝の意を示すが、アザゼルは謙遜する様にそれを軽く流した。
「で？　早速何か話すのか？」
「――いや。先に赤龍帝の小僧の修行をする。話はそれが終わった後でも構わないか」
「ああ、大丈夫だ。こいつの主――というか仲魔からは、今日一日こいつを預かるって言ってあるからな。迎えに来るのは明日だ」
「仲魔？　変わった表現をするのだな。――まあいい。早速、修行を始めるとするか。……ところでマダはどうした？」
「あいつのことだからどっかで酒を飲んで寝ているんじゃないのか？」
「ここにいるぞー」
　いつの間にか岩の上で肘を突いて横になりながら酒を飲んでいるマダ。相変わらずの神出鬼没である。
「あの小僧んところのちっこい雪精も連れて来たのか？　どういうこった？」
「大した理由じゃねぇよ。それよりグレモリー邸に戻らずに何していたんだ、お前？」
「適当な街に行って適当に酒や女を楽しんでただけだ。聞きたいかぁ？　俺の五十人斬りの話を」

「独りで喋ってろ」
「つまんねぇの。なら、イッセー。お前が聞くか？」
「えーと……俺はそれよりも修行の方がしたいです」
一誠が好みそうな話を振ったにも関わらず、修行を優先したいと返されたことにマダは軽く驚く。
「一日そこらでどういった心境の変化だぁ？　ベソかいて死にそうな顔でいっつも逃げ回っていたのに」
「これが今の俺にしか出来ないことだって思ったからです。俺にしか出来ない戦い。見せたい人たちがいるんです。俺が壁を超えるのを。それで少しでも励ませたらなーって……」
小猫と朱乃。どちらも自分の中にある力という壁によって苦しんでいた。一誠はシンが小猫にした様に厳しく接することが出来ない。上手く言葉で励ますことも出来ない。唯一出来るとすれば行動で示すことだけ。
「……ふーん。まあいいか。日数も少ないんだ。効率が上がればそれで良し、だ」
マダはそんな一誠の心情を見抜いたのかどうかは分からないが、その決意を茶化すことは無かった。
「なら始めるとするか。一日出来なかった分、いつも以上に厳しくいくぞ？」

「おう！」
タンニーンの言葉に一誠は力強く頷いた。

◇

「今日はここまでだな」
「つ、疲れた……」
その日の修行の終わりを告げる言葉と共に、一誠は崩れる様に地面へ仰向けになって倒れた。タンニーンの宣言通りいつもよりも密度の濃い修行で、体中の細胞が疲労を訴えているのを感じる。
「イッセー、お疲れ様だホー」
「おお、サンキュー」
倒れている一誠にジャックフロストが水筒を持って来る。
それを受け取って中身を呷る。雪精の力でキンキンに冷やされていた中身が喉を通って胃へ流れ込み、そこから体全体に染み渡る冷たさは、熱で火照った体には格別であった。
「っああ！　うめぇ！」

疲れを一瞬忘れてしまう程の爽快感。苦行を為した者にしか得られない瞬間とも言えた。暫くその余韻に浸っているとマダが声を掛けてきた。
「そろそろ晩飯にするぞー」
「うっすー」
火が起こされ、その前にマダが胡坐をかいて座っている。火の周りには木の枝に刺さった魚がずらりと並べられている。いつもなら火起こしも食事の準備も一誠が自分で行っているのだが、この日は何故かマダが仕度をしてくれていた。
「珍しい。どういう気の回しだ？」
「うん？　――まあ、あいつが取っている量じゃ足りないと思ったからなぁ」
意図をぼかす様なマダの答えにタンニーンは訝しむが、火の側に座る一誠と火から少し離れた場所に座るジャックフロストを見てそれ以上は追及しなかった。
魚が焼けると空腹を満たす為に熱々のまま一誠は齧り付く。焼けた皮が小気味良い音を立てて割れ、香ばしいニオイごとその下の白身を咀嚼する。味付けは塩のみという淡白なものであるが、空腹という状態で食べればそれは最上の味であった。
片手で焼き魚を食べながら空いた手でもう一匹の焼き魚を取り、火を避けているジャックフロストに手渡す。
「ありがとうだホー」

一誠から手渡された焼き魚に冷気を吐いて一瞬で凍結させると、そのままガリガリと音を立てて焼き魚を頬張った。

最初の内は食欲に押された焼き魚を食べていた一誠であったが、腹が満たされるにつれて場の空気の変化に気付き始める。

何故か妙な重さがあるのだ。その原因というのは無言で座るタンニーンにあった。

威圧感もそうであるが、時折視線をジャックフロストに向け、何か言いたげな様子で口を僅かに開くがすぐに閉じてしまう。一誠が気付いた限り、数回は同じ事を繰り返していた。

視線を向けられているジャックフロストは魚を食べることに夢中で気付いてはおらず、マダの方は我関せずといった態度でちびちびと酒を飲み、焼き魚を齧っていた。

（タンニーンのおっさんはジャックフロストに何を話したいんだ？）

何か喋りたいことはあるのは知っているが、どうにも踏ん切りがつかないらしい。見ている分にはかなりもどかしい挙動である。

一誠もこの空気をどうにかしなければと考え始める。すると――

「何だ。もう始めていたのか」

「アザゼル先生？」

「どうした？　何か用か？」

「俺が呼んだんだよ」
　静かに飲んでいたマダが手を上げる。
「ついこの間も飲み合ったばかりだろうが……」
「いいじゃねぇか。酒ってのはいつ飲んでも良いもんだ。色々と楽にさせてくれるからなぁ」
「お前……」
　タンニーンは、短い会話で自分の為にマダが気を利かせてくれたことを理解する。タンニーンの為に、話し易い状況をつくろうとしていた。思い返せば、アザゼルが来るのが分かっていたからわざわざ自分で食事を用意したり、飲み相手がいるから酒量を控えていたのだ。
　上手く話を切り出せない状況が続くことを見越されていたのに気付いたタンニーンは、恥ずかしさを感じてしまう。
（幾つだ？　俺は……）
　子供がされる様な気遣いに、思わずそう自問してしまう。
　人知れず羞恥心で身悶えしているタンニーンを見て、ニタニタと笑いながらマダは酒を呷る。
　幸福も不幸も肴にして飲めるのがマダ。ただしそれに自他は問わない。

「やっぱ趣味が悪いな、お前は」
倒木の上に腰を下ろす。事情を聞かされていないアザゼルであったが、状況を見て何の為に呼ばれたのかを瞬時に理解し、悪趣味と窘めながらもマダから差し出された酒を流れる様に受け取る。
「……俺にも一杯くれ」
自分から酒を貰おうとするタンニーンに一誠は少し驚く。前の時もマダに勧められて受け取っていたが、あまり自分から積極的に飲むイメージが無かった。
マダはニタニタ笑い続けながらタンニーン用の杯を取り出して酒を注いで渡す。
若干顔を顰めながらもタンニーンはそれを素直に受け取り、あっという間に中身を飲み干すと空になった杯を無言で突き出す。
それに文句を言わずに注ぐマダ。そして、それを飲み干すタンニーン。それの繰り返し。時折アザゼルがその繰り返しの間に入って酒を注がれていた。
事情を把握出来ていない一誠は、ハイペースで飲んでいくタンニーンを不思議そうに眺め、ジャックフロストは特に気にせずに魚を食べていた。
そんなことが数十回と繰り返した後、タンニーンは杯を地面に置く。
「……少し話せるか？」
「ヒホ？」

タンニーンがついに動く。
「出来れば二人だけで話をしたいのだが……」
「いいホ」
「感謝する」
タンニーンはジャックフロストに掌を差し出す。ジャックフロストは躊躇わずにタンニーンの掌へと乗った。
「すまんが少し出てくる」
「へいへい。好きなだけ話してきな。俺らはここで飲んでるから」
「あんまり夜更かしさせるなよ。そいつはまだガキだからな」
「分かっている。一時間もかからない」
タンニーンは翼を羽ばたかせ、空へ飛び上がり、そのまま何処かへ飛んで行く。
「タンニーンのおっさん、ジャックフロストと何の話がしたいんだろう……というかジャックフロストの奴、おっさんと知り合いだったのか？」
『恐らくジャックフロストではなく、アレと縁のある者と知り合いなのだろう』
「まあ、何となく話したい内容は想像出来るがな……いや、聞きたいことか」
「聞きたいこと？　それって何ですか？」
「あくまで俺の憶測だ。確信も無いのにペラペラ喋るのは無責任だからな。ここで話は

お終いだ」
「ええー。滅茶苦茶気になるんすけど……」
話を一方的に打ち切られて少し不満気な表情をする一誠。アザゼルはそれを無視して杯に注がれた酒を呷っていた。もう話すつもりは無いらしい態度からこれ以上聞いても無駄だと感じ、大人しくタンニーンたちの戻ってくるのを待つことにし、手に持っていた焼き魚を齧った。
タンニーンたちのことは気になるも齧った魚の美味さもきちんと感じる自分に、我ながら単純だと思いつつも一誠は空を仰ぎながら再び魚を齧るのであった。

◇

数分の飛行の後、タンニーンは山の頂上へと降り立った。腰を下ろし、掌に乗せていたジャックフロストを降ろす。
ジャックフロストが掌から降りるとタンニーンも腰を下ろして座った。
「それでオイラに話って何ホ？」
「長い話でも難しい話でもない。ただ聞きたいのだ」
「聞きたい？　何をだホ？」

「お前は、王の最期を……見たのか？」
「ヒホ！　オイラたちの王様のこと知っているのかホ？」
「……色々とあってな……知り合いだったし交流もあった……あの竜狩りの日までな」
「ヒホ？」
「――すまない。今の言葉を忘れてくれ」
失言であった。
焦っているのかもしれない。二度と無いと思っていた機会に巡り合ったことと酒が入っているせいで、口が思いの外軽くなっていた。
「見たのなら教えて欲しい。知らなければ他に知っている者に心当たりはないか？」
ジャックフロストたちの王とタンニーンとの関係は、一言で言えば腐れ縁の様なものであった。
真面目な性格をしたタンニーンと王という割には子供の様な性格をしたジャックフロストの王。正反対な性格をしていたが、不思議と馬が合い、何度か互いの住処に顔を出しては、延々と無駄話をするというのが決まりの様になっていた。
だがその関係も時が過ぎることで出来なくなってしまう。
タンニーンは、人間界での食糧不足と魔人の襲撃によるドラゴンの減少。ジャックフロストの王は発展する文明によって雪精としての力が失われていき、その数を減らして

いったことで。
　このままでは絶滅するかもしれない二つの種族に、冥界から救いの手が差し伸べられた。人間界から冥界への移住である。タンニーンは食料問題や数が減ったドラゴンたちの保護が出来ることからこの誘いを受けた。
　雪精もまた冥界の環境ならば失った力を取り戻すことが出来る。しかし、ジャックフロストの王はタンニーンとは違いこの話を断った。
　別れの日、タンニーンはジャックフロストの王に問う。何故、滅んでいく道を選んだのか、と。
　ジャックフロストの王はいつもの様に子供の様な顔で言った。
　降って積もって雪はいずれ消える。ジャックフロストは雪の精。いつかは消えてなくなる雪の精。だから受け入れる。永久に溶けない雪は無い。永久に溶けない雪はジャックフロストではないから。
　自分たちが自分たちで在り続けることを選択したジャックフロストの王に、タンニーンは何も言うことは出来なかった。
　冥界に移り、悪魔の眷属となって他のドラゴンたちが住める領土を手にしたとき、タンニーンはジャックフロストが絶滅したという報せを耳にした。
　そのとき湧き上がった感情は喪失感を伴った悲しみであった。永久に言葉を交わす

機会が失われた。
ジャックフロストの絶滅を聞いてから、タンニーンの心の中ではある一つの迷いが生まれていた。
『本当に自分のしたことは正しかったのか?』
後悔に似た迷い。自由に生きるのがドラゴンである。だが、タンニーンの選択は意図せずに彼らに枷を填めてしまったのではないかという迷い。冥界に押し込めずに自由に生きることこそ、ドラゴンとして正しい在り方なのではないかという考えに苛められる。
後悔など生きた者の生きた心から零れ落ちる傲慢の様なものであるのは分かっている。間違ったことをしたつもりはない。だがそれでも迷いは生じる。一度生まれた迷いは容易く消すことが出来ない。
タンニーンは知りたかった。自分の選択に殉じたジャックフロストの王の最期がどうであったのか。笑っていたのか、泣いていたのか、後悔していたのか、満足していたのか、それが知りたかった。
それで迷いが晴れるとは思っていない。何かが変わるとも思っていない。ただ知りたいのだ。きちんと別れの挨拶を交わすことなく去ってしまった友の最期を。
「……ジャックフロストはオイラ以外には居ないホー。オイラは最後に生まれた最後の

ジャックフロストだから……」
「ッ！　そうだったのか……知らなかったとはいえ無神経な発言をした。すまない」
数少ない生き残りと考えていたタンニーンからすれば、最後の一人という言葉は予想外のものであり、同時に傷を抉る様な発言をしたことを謝罪する。
「気にしなくていいホ。あとオイラは王様がどんな風に消えていったか知ってるホー」
「本当か？」
タンニーンは頭を下げる。ジャックフロストの言葉を聞き逃さない為に。
「王様は最後に――」
『――――――――――――』
時間にすれば十数秒程度の言葉であった。
聞き終えたタンニーンは天を仰ぎ、口の端を僅かに吊り上げて笑う。
「あいつらしい」
迷いが晴れた訳では無い。何が変わった訳では無い。だが、少しだけ安堵した。
友の面影を持つ雪精から友の最期の言葉を聞けて。さよならすら言えなかった悔いが少しだけ消えた。
「今度はオイラから聞いていいホ？　オイラの王様や他のジャックフロストってどんなだったホ？」

「……そうだな。お前たちの王は王と言う割には子供っぽい奴でな――」

◇

明るくなったのを瞼越しに感じて一誠は目を覚ます。近くではジャックフロストが大の字になって眠っている。

視線を動かすと火を焚いていた場所にマダとアザゼルが座っており、雑談をしながら杯を傾けている。どうやら一晩中飲み明かしていたらしい。

「起きたか」

タンニーンが頭上から声を掛けてくる。昨晩は予定していた時間よりも少し遅れて帰ってきたが、帰ってきたタンニーンは少しすっきりとした表情をしていた。

「おはよう、おっさん。すぐに顔を洗ってくる」

「そんなに急がなくてよい。俺は少し出る」

「急用？」

「いや。朝になったらそいつの仲魔が迎えに来るとアザゼルが言っていたのでな、まだ顔を合わせていないのでな。挨拶がてらに迎えに行ってくる」

「あ、そうだっけ」

初めてタンニーンと顔を合わせをしたとき、その場にシンが不在であったことを思い出す。
「では出て来る」
「いってらっしゃーい」

◇

飛行するタンニーン。事前にアザゼルからジャックフロストの仲魔がどこに現れるか聞かされていた。
間もなく目的に場所へと到達しようとした時、『ソレ』を感じた。
「これは……！」
冷たい、恐ろしく、死を彷彿とさせる気配。一度知れば二度と忘れることが出来ない気配。
「ぐ、が！」
屈辱と怒りの記憶が抉る様に掘り起こされる。
積み重なる同胞の死体。同胞の血によって染まる空気と大地。冷たく光る刃。今も耳に残る高笑い。

「魔、人……！」

タンニーンは情が厚い性格であった。だからこそ理不尽に殺された同朋の無念を背負ってしまう。そして、悲しいことに彼にはそれを全て背負い切れる程の器があった。

一度戦った魔人はタンニーンの逆鱗に触れた。我を忘れるぐらいに暴れ狂ったタンニーンであったが、それでも相手を滅することは出来なかった。

彼の不幸は屠るべき相手を屠れなかったこと。晴らすことの出来なかった怒りは彼の逆鱗に楔の様に打ち込まれたままであった。

タンニーンは他のドラゴンを導く立場から見て見ぬふりをしてきた。しかし、その間にも怒りは静かに燃え盛り、暗く、熱く煮詰まっていく。

そして、二度目の魔人との邂逅。最早、彼の中の怒りは抑えることの出来ないものにまで達しており、放たれた怒りは瞬時に彼の理性を呑み込む。

「がああああああああああああ！」

天すら震わす咆哮を上げ、タンニーンは魔人の姿を確認するよりも先に全力の炎を放つ。

焦炎、焦土

「筋はいいですが、少し淡々とし過ぎですね。教えられたことをきちんと熟すのは結構ですが」

鼻先が触れそうな程の距離から、リアスの母ヴェネラナが注意する。

「……慣れていないもので」

「言い訳は結構。イッセーさんは貴方程上手くはありませんでしたが、貴方よりもダンスで感情を表現していましたよ？」

グレイフィアに連れられてヴェネラナの元へ案内されると、そこからは休む暇も無くダンスのレッスンであった。

教えられたことを人並以上に熟していたシンであったが、それでも内心では慣れよりも苦手意識の方が募っていく。

理由としてダンスという今まで碌に縁が無かったものをするのは勿論であるが、それと同じくらいに苦手意識を強めさせているのはヴェネラナの存在であった。

現在シンの片手はヴェネラナの手を握り、もう片方の手はヴェネラナの腰に回され、その状態で体を密着させている。もう少し距離をとりたいのだが、そうすると逆にヴェ

ネラナの方から体を密着させてくるのでどうしようも無い。
リアスの母親と言っても見た目の年齢はリアスと殆ど変わらない。容姿も良く似ており、違いと言えば亜麻色の髪ぐらいである。
知っている顔とこうして至近距離で顔を合わせると心臓の鼓動が早まるといったことは無いが、何とも言えない居心地の悪さがあった。
ヴェネラナが一歩踏み込む。そのタイミングに合わせて本来ならシンは一歩下がるのだが、反応が少し遅れてしまう。結果、ヴェネラナの豊かな胸がシンの胸部へと押し当てられる形となる。
（あいつだったら喜びそうだ……）
一誠ならば全神経を当たっている箇所に集中させる様なシチュエーションでも、シンは、柔らかく、温かみを持った弾力に対して特に反応することなく、全く別のことを考えていた。
「シンさん。反応が遅れていますよ？」
「すみません」
ヴェネラナが上目遣いで鋭い視線をこちらに向けてくる。更に密着しているせいか喋る毎にヴェネラナの吐息が首元にかかりこそばゆい。
ヴェネラナがシンから体を少し離す。

「もう一度最初からいきます」
「はい」
　最初の状態へと戻ると、ヴェネラナから教わった通りのステップを一から始めていく。
　滞りなく動く足運び。基本に従ったリード。教えられた内容を無難に熟していく。
「少しお聞きしてもよろしいかしら？」
「はい？」
　ダンスの最中にヴェネラナが話し掛けてくる。教えられたことをきちんと覚えていることもあって、ダンスに乱れは生じない。
「あなたの目から見て、イッセー君とリアスはどう見えますか？」
「仲は良いと思います」
「それは主従としてですか？　それとも――」
「男女の関係という意味ですか？　そうなるとどうでしょうね」
　互いに好意を持っているのは傍から見ても良く分かる。人目の無い所ではリアスもかなり大胆に一誠を可愛がっているのも、時折鼻の下を伸ばしだらしない顔をした一誠からそういった話を聞かされているので知っている。興味無いのでほぼ聞き流している状態だが。

しかし、ここで一つ問題がある。リアスの行為は一誠を異性として意識しているからこそしており、一誠の方は同じくリアスを異性として強く意識しているが、行為については主として下僕を可愛がっているという認識が強い。

変な話ではあるが、リアスは一誠をその気にさせているつもりなのに、当の本人は主には手を出してはいけないという自制心を働かせているせいで、生殺しを味わっている状態なのである。

「やはりと言うか、そういうことですか……」

「どちらかが告白すれば即くっつくとは思いますが、そうなるまではまだ大分時間は掛かりそうです」

「イッセー君は少し鈍そうですし、リアスの方も奥手な所がありますからね。はぁ……」

悩みながら艶めかしい吐息を吐く。

「……こちらからも質問しますが、何故俺にそんなことを聞いたのですか？　木場やギャスパーに聞いても良かったのでは？」

「あの子たちと違って、あなたはどこか一歩引いた雰囲気があったからでしょうか。だからこそ公平に見ていると思ったので」

「そういう風に見えましたか？」

「ええ。でもあなたがリアスたちと馴染めていないという訳ではありませんよ？　悲観

的に捉えないで下さいね」
一歩引く。そんなことは意識したつもりは無い。つまり無意識のうちにやっていたのだろう。理由があるとすれば、リアスたちに自分が魔人であることを隠している後ろめたさからくるものなのかもしれない、とシンは考える。
その時、思考の方に意識を傾け過ぎたせいでシンの足がヴェネラナの足に当たってしまった。丁度踵で足を払う様な形になってしまい、ヴェネラナが背中から倒れていく。
シンは反射的にヴェネラナを抱き寄せると、そのまま素早く体を入れ替え、シンが背中から倒れる形となった。
背中から地面に転倒。抱きしめているヴェネラナの体重がのしかかってくるが、耐え切れない衝撃では無い。
シンは呻き声一つ上げないまま、ヴェネラナの安否を尋ねた。
「すみません。大丈夫でしたか？」
「ええ。大丈夫です。身を呈してくれたこと礼を言います」
「奥方様。そろそろ時間の方が――」
絶好とも最悪とも呼べるタイミングで現れたのはセタンタであった。扉を閉めていない状態でレッスンを受けていたせいもあって、ノックなどの事前確認など無いまま部屋へと入って来る。

「……」
「……」
下から見上げるシンの目線と上から見下ろすセタンタの視線が合ったまま互いに沈黙してしまう。
それも無理は無いことである。傍から見れば年若い男女が床に寝そべって抱き合っている。そんな姿を見れば誰でも黙ってしまう。
この状況をどう説明するべきかとシンは考える。
「セタンタ。これはですね――」
「申し訳ありませんが、少しお待ちください」
ヴェネラナが説明しようとするが、セタンタはそれをやんわりと止めた後――
「状況からダンスのレッスン中に間薙様が誤って足を引っ掛けてしまい、その際に転倒。奥方様の方から倒れそうになったのを間薙様が身を呈して庇ったと推測しますが、合っているでしょうか？」
――誤解されかねない状況で至って冷静に場を分析し、ましてや見ていたのかと思う程完璧に当ててしまう。
「はい。その通りです」
「そうですか。当たっていて良かったです」

膝を突いてヴェネラナに手を伸ばす。ヴェネラナがその手を取ると丁寧な動作で立ち上がるのを手伝う。
「奥方様を守って頂きありがとうございます」
「いえ。元は俺が原因なので」
続いてシンに手を差し伸べ、倒れていた彼を引き起こした。
「見苦しい姿を見せましたね。ところでセタンタ、一体何用ですか？」
「そろそろ私との特訓の時間が迫っていましたので間薙様をお迎えに参りました」
ヴェネラナが部屋に置いてある時計を見た。
「もうこんな時間でしたか。手を煩わせましたね」
「いえ。とんでもありません」
恭しく礼をするセタンタ。彼の一挙手一投足全てからヴェネラナに対する敬意が見て取れる程であった。
「では一旦ここまでです。セタンタとの特訓が終わった後にまた再開しましょう」
「はい。ありがとうございました」
踊ること自体気の進む様なことでは無いが、少しでも早く覚えればその分早く解放されると前向きに考えることにした。
ヴェネラナに頭を下げ、歩いていくセタンタの後をついていく。

その途中――

「あなたが冷静な人で助かりました」

「先程のことですか？　買い被りです。私は奥方様と間薙様の人柄を知っているからこそあのように冷静でいられただけです。御二人があのようなこと、万が一にもありません」

「……もし万が一の場合だったらどうしました？」

セタンタは歩くの止め、後ろを振り返る。そして、目を弧状の形に細める。相変わらずマフラーで表情が分かり難いが、笑っているようであった。

「私はどんなことがあろうとも奥方様の――いえ、グレモリー家の味方であるとだけ言っておきましょう」

（……下手したら消されていたかもしれないな）

穏やかな口調とは裏腹に言外から滲み出る寒々しいものを敏感に感じ取りながら、自分の命が日頃の行いや振る舞い方で救われたのを実感するのであった。

◇

翌日。シンは日が昇ると同時に目を覚ます。

枕の側でピクシーが体を丸めて眠っているので起こさない様に静かにベッドを降り、素早く且つ音も無く運動着に着替える。
そのまま物音を立てずに部屋から出ようとする。
「グルル……」
唸り声。見るとベッドの側で寝ていた筈のケルベロスが片目を開けてこちらを見ていた。なるべく音を立てない様にしていたが、常に命が狙われる危険性がある弱肉強食の森の中で生きてきたケルベロスにとっては、起きるには十分な騒音であったらしい。
獣ゆえにいまいち感情が読み取り難い表情であるが、少なくとも起こされて不機嫌という訳では無いらしい。
シンがケルベロスに視線を向けたまま扉に一歩近付くと、ケルベロスが組んでいた前脚から顎を離す。
ついてくるつもりらしい。
それを見たシンは手を横に振り、ついて来なくていいと声を出さずに指示をする。
シンの動きを見て、それに込められた意味を理解したのか、ケルベロスは離していた顎を再び前脚の上に乗せ、目を閉じる。
あっさりと引くケルベロス。本当についてくる気があったのか、あるいは形だけのものであったのか、付き合いがまだ浅いので判断することは難しいが、こちらの望む動き

をしてくれたのは、とりあえずは有り難かった。
いつもの動作を何十倍にも引き延ばしたゆっくりとした動きでノブに手を掛け、回し、引き、開けて扉を潜るとまた同じ動作で今度は閉める。
扉の前の通路を、足音を立てない様に意識しながらやや動きの固い歩きで数十メートル進んだ後、もう音が届かないと判断しようやくいつもの歩き方へと戻った。
シンが朝早く起きた理由は、先日一誠たちに預けたジャックフロストを迎えに行く為である。しかし、迎えに行くには少々というよりもかなり早い時間であった。
玄関へと向かうシン。その途中でグレモリー家の使用人と何人かとすれ違う。朝早くというのに既に仕事に入っているらしく、隣を通る度に頭を下げられたのでシンもその度に軽く会釈をする。
何故彼は早朝から動いているのか。それにはきちんとした理由がある。昨日セタンタとの会話で、明日ジャックフロストを迎えに行くと言う話になったとき――
『場所は何処ですか？　――なら自力で迎えに行けますね。頑張って下さい。ああ、午後からは奥方様とレッスンの予定が入っていますので午前中までには戻ってきて下さい。くれぐれも遅刻をなさらないようにお願いします』
これにより、シンは自らの足で一誠たちが修業場としている山へと向かう羽目になった。それも時間制限付きで。

遅れたら一体どのようなことが起こるか想像が付かないが、少なくとも生死の境目に立たされる様なことをされるのは、これまでの付き合いで容易に予想出来た。
玄関に付き、大きな扉を潜って外に出る。晴天とは程遠い紫色の空がシンを迎えてくれる。早朝の息を吸い込む。人の世界であれば湿り気を帯びた冷たい空気で肺が満たされていくだろうが、冥界の空気には冷たさも暑さも無く、適温という言葉が相応しい空気が入ってきた。
何気無いことでも人の世界と冥界との差を感じてしまう。尤もこの空気も別に悪いものではないとは思っている。
「行くか……」
手足を軽くほぐした後、独り呟き気持ちを切り替える。手や腕、背に浮かび上がる紋様。魔人としての力を出し惜しみしなければ、指定された時間までに戻って来られる。
膝から下に力を瞬時に込め、片足の裏がしっかりと地面を踏み締める。ふっ、と軽く息を吐くと同時に込めた力を解き放ち、足で体を前に押し出す。
零が一に至るまでの間に加速は最高に達し、風の様な俊敏さでグレモリー邸の広い庭を駆け出す。
グレモリー邸が誇る煌びやかな庭園。その中でも最も目立つ色とりどりの花々。それらの輝きを維持する為に水やりや手入れを細やかにするメイドたち。

「きゃっ！」
花壇に水を与えていた使用人のメイドがいきなり側を通り抜けていく突風に短い悲鳴を上げながらスカートの裾を抑える。また、吹き抜けていく風の後を追う様にして花びらが空へと舞い上がっていく。突然の出来事にメイドたちは目を丸くしながら走っていく影の背中を見詰めていた。
外とグレモリー邸との境界として囲う高い壁。外と繋ぐ出入り口を守る軽鎧を纏った守衛の兵士たちは、朝早くというのに直立不動のままその職務を真っ当していた。
「ん？」
出口に向かって走って来る人影。目を凝らしてみれば、主であるリアスが招いた客人であった。
速度を緩めずに全速力で走ってくるのを見て、兵士たちは何事かとざわつく。
自分の行動に困惑する兵士たちシンは敢えて無視し、出口まで残り二十メートルの距離にまで来ていた。
「外に何か御用ですか？」
兵士が声を張り上げて要件を尋ねるが、シンは答えない。距離は更に縮む。
「外に御用があるなら少々お待ちください！　開門致しますので！」
丁寧に言うがシンは速度を緩めない。出口まで残す距離あと十メートル。

「お待ちください！　すぐに開けますので！」

全速力で門に向かっているシンを見て、流石におかしいと思い兵士は声を強くし、制止させようとするが、それでも止まらない。

残り五メートルを切った時、シンは地面を蹴り付ける。その衝撃は、石で舗装された地面にくっきりとした靴跡を残し、離れていた兵士たちの足元に伝わるものであった。

加速の最高点で跳び上がったシンは、そのまま十数メートル程の高さまで跳び上がり、まるで地面の様に垂直の壁に着地する。そこは壁の三分の二程の高さ付近であった。

このままでは重力に従い地面に落下するだろうが、シンは落ちる前に壁に着けた両爪先で体を上に押し上げる。

その状態から数メートル跳び上がる。頂上が見えるとそこに片手を伸ばし縁に指先を掛けると、一気に体を引き上げて壁の頂上に降り立った。

頂上に立ったシンは、跳び上がってきた方に視線を落とす。壁の下では兵士たちがポカンとした様子でシンの方を見ていた。

翼を持って飛べる悪魔ならばわざわざこんなことをしているのを見れば、奇行か変人にしか思えないであろう。シンとて普通に門から出たかった。しかし、セタンタからの事前の指示で、グレモリー家内にいる使用人や兵士などの手を借りることは禁止されて

いたのだ。
ジャックフロストを迎えに行くまでの行動全てを修行に充てたいつもりらしい。
人間に対して変な偏見を持たれないか心配しつつも、時間の猶予が余りないシンは躊躇なく壁の外に向かって飛び降りた。
壁の向こうに消え去ったシンを見届けた後、兵士たちはこの様な会話をしていた。
「あんな出方する人、セタンタ様以外にも居たんだなー」
「えっ！　セタンタ様ってあんな風に出ていくのか？」
「あの人落ち着いている様に見えて、かなりせっかちだぞ？　あの人が門を普通に出ていった所なんて、俺は殆ど見たこと無いな」

◇

グレモリー邸を出て大分日が高くなってきた。
舗装されていない荒れた道や斜面をひたすら走り続けるのはかなりの体力を必要としたが、それでも速度を落とすことは無く、その甲斐あって予定していた時間通りに指示された場所へと辿り着いた。
事前にセタンタから向こうの方から迎えに来るということが知らされている。一誠

たちが定まった場所で特訓をしていない為の配慮でもあった。
周囲を確認するが人影は無い。しばらく休憩がてらに待とうかと考え、手頃な石に座った。
そのとき――
がああああああああああああ！
天に響き渡る咆哮。空気が震い、周囲の木々の葉がざわめき様に擦れ合う。
思わず立ち上がり、警戒するシン。一体何の咆哮かと思ったとき、爆音と共に地面が揺れ、直後横から殴られたかの様な衝撃がシンを襲う。
「ぐっ」
近くの木に叩き付けられ、声が洩れる。
衝撃で吹き飛ばされたとき、シンは頬を炙られた様な感覚があった。それを証明する様に木が焼けるきな臭いが鼻を突き、周りに漂っていた空気は明らかに先程よりも熱を感じる。
大規模な爆発。それが離れた場所で起こった。何が原因かは考えなくても分かる。
爆発が起こる前に聞いた、あの咆哮の主が起こしたものに間違いないであろう。
ならば何故そんな爆発が起こったのか。
それを考えるよりも先に二度目の爆風が起きる。

凭れ掛かる木に更に押し付けられる。木の葉が一斉に散り、細い木の枝はへし折れる。

爆風が静まると同時にシンは木から離れ、走り始めていた。

どういう理由かは分からない。何故こんなことになったのか考えても分からない。

ただ一つ確信して言えることは、爆発の音や風の強さからさっきよりも近くで起こっていた。つまりこの爆発を起こしている人物は、自分を狙っている可能性があるかもしれない。

考え過ぎであることを願いながら、なるべく目につかない様に木の生い茂っている場所を走る。

三度目の爆発。茂る木々によって爆風の方は軽減されたが、耳の奥で金属を鳴らされた様な不快な耳鳴りが鳴り響く。

どれほどの規模の爆発が起きているのか把握出来ないが、相手が狙いなどを正確に定めず、手当たり次第に爆発を起こしていると感じ、爆発の状況を確認することにした。

太い根が地面に張り巡らされ、色々な高さに木の枝が伸びている道を、シンは全速力で駆け抜ける。

左眼を絶え間なく動かし、溶ける様に伸びていく映像を余すところなく目に映していく。

視界に一瞬足元に伸びる太い根を映すと、それを跳躍して避け、跳んだ位置に丁度伸びた木の枝を見つけるとそれを両手で掴み、振り子の様に体を揺らし勢いがあるまま飛ぶ。

飛んだ先にある別の木の枝を足場にし、そこから高く跳び更に別の木に飛び移った。前に移動しながらも周りを見渡される様に木の頂上を目指す。木の下を延々と走っていても木々が邪魔で遠くを見渡せない。

数本目の木に飛び移ると、細い枝や木の葉を手で払いのけながら木の頂点から顔を出した。この高さならば木々に遮られることなく周りの状況を確認出来る。

首を動かし周りを見る。

いくつもの箇所で黒煙が上がっており、その黒煙を中心にして周囲の木が根こそぎ吹き飛ばされており、森の中に巨大な穴が広がっていた。

一体どうやればこの様な穴が発生するのか。その疑問に答えるかの様に、視界の中へそれは飛び込んできた。

朱の尾を紫の空に描く紅蓮の輝き。最初隕石でも降って来たのかと思えた。だが違う。シンの左眼が視て、それが何か本能に囁く様に伝えて来る。

隕石だと思ったそれは、極限にまで圧縮された炎の塊である。それが大気を焼き、一切減衰することなく地表へと落ちていく。

地上に触れたかと思った瞬間閃光と爆発が起こり、目を灼く様な暴力的な光量に反射的に目を閉じ掛ける。

膨大な熱量によって空気は一瞬にして熱せられ、それが着弾の衝撃で乗せられて広がっていく。着弾場所から周囲の木々が燃え広がっていく光景は、ある種圧巻とも言えた。

距離にすればまだかなりあるというのに爆発によって生じた熱波を浴び、急速に皮膚が乾いていくのを感じ、手を目の前に翳す。

熱波が通り過ぎた後にシンが見たものは、空に向かって昇る巨大な炎であった。まるで天と地を繋げる柱の如く太く、長い炎の柱。

神話を再現した様な非現実的な光景を、ただ呆けた様に見詰めてしまう。

風を叩き付ける轟音。断続して聞こえてきたその音にシンの意識は引き戻される。

音の方角へと目を向けると、小さくではあるが何かが見え、こちらに向かってきているのが分かる。

まだ遠くにいるため輪郭がぼやけて詳細が分からない。目を細め、相手の正体を見極めようとする。

大きく広げられた翼。長い口吻からは炎が零れている。頭部からは捩じれた黄金の角が左右対称に生えている。赤紫色の鱗を鎧の様に纏ったその姿、見間違いでなければ

思い付く正体は一つしかない。

（ドラゴン……）

強襲してきたモノは十中八九ドラゴンで間違いない。それもドライグやアルビオンの様な魂だけの存在ではなく、アーシアの使い魔である幼生のドラゴンとも違う。実体を持ち、成長した完全なドラゴン。

それが一体どういう理由で自分を狙っているのか。

その時、突き抜ける様な感覚を覚えた。以前にも浴びたことのある殺気。だがそれだけではない、コカビエルの時やマタドールとの戦いでも味わったことの無い感覚。相手の存在を強く否定し、一片残すことなく滅ぼそうという冷たくも熱く、そして黒いイメージを与える意思。

浮かび上がるのは憎悪という言葉。だが、どうしてそんなものを向けられるのか考えている暇はない。

この感覚を覚えたということは相手に見られたということ。つまりは先程の炎が、より正確にシンを狙うということを意味している。

口から零れていた火の粉が溢れんばかりの炎と化すのが遠目からでも分かった。

足で逃げても間に合わないことを瞬時に悟ると、シンは右手に魔力剣を創り出し、足場にしていた木に向かって手加減なく放つ。

足場の無い場所で放ったことによる反動と、木に衝突して跳ね返ってきた魔力波によってシンの体は弾丸の様に宙を飛ぶ。
その直後、ドラゴンが炎のブレスを吐き出したのが見えた。狙う先にあるのはシンが先程までいた木。間一髪直撃を避けることが出来たが、まだ着弾時の余波がある。
吹き飛ばされている状況の中、新たな魔力剣を生み出した。
熱で空気が歪み、それが木々の破片や土煙を巻き込んで迫ってくるのが分かる。
シンはその歪みに向かって全力で魔力剣を振るった。

◇

タンニーンは着弾場所へと向かって全速力で飛翔する。
魔人の気配を感じ取り、炙り出す為に数発の炎を放った。目論見通り様子を確かめる為に木の頂上から姿を見せる者がいた。
視界に捉えたと同時に炎を放っていた。その人物に目を向けられた途端、かつての感覚が冷気となって背中を走り、自分の中の逆鱗が激しく怒り狂う。
怒りが度を超えれば逆に冷静になるという言葉があるが、今のタンニーンは激昂と沈静が交互に繰り返されていた。どうやって追い詰めるかと思考していたかと思えば、内

から溢れる程湧き立つ怒りに身を任せ、この一帯諸共魔人を葬りたい衝動に駆られる。
狙った相手は間違いなく魔人である。確認も詳細も必要無い。寧ろ知りたくも無く。己の中に記憶として宿っているだけでも忌々しい。魔人のことを考えている今も怒りで血が煮え立つ。
もし魔人に対し知りたいことがあるとすれば、せいぜいその死に様ぐらいである。
炎が消え、代わりに黒煙が立ち昇る着弾場所を旋回する。例え死体と化していようと目に映った瞬間に即灰とする為に。
僅かに流れる風が徐々に黒煙を払っていき、覆い隠すそれを薄れさせていく。
消え去るのも時間の問題と思った――次の瞬間、黒煙を突き破り、橙色の光線が幾筋になってタンニーンへ向かってきた。
高く、広く昇っていた黒煙によってギリギリまで形を隠されていた為、回避が遅れてしまったが、翼で空気を打つ様に羽ばたかせると空中で滑る様に移動し強襲を何とか避ける。
だがそれでも数十ある光線の内、十数を避けたに過ぎない。残りの光線が移動したタンニーンを追尾し、その軌道を大きく変化させる。
まさか避けた先にまで追ってくるとは思わず、避けきれないと判断したタンニーンは、直撃する直前に羽ばたかせていた右翼を胸前に持ってきて、盾代わりにして光線を

受けた。
翼の皮膜に突き刺さる光線。しかし、ドラゴン、それも最上位に位置する元龍王の鱗や皮膜を突き破るには力が足りず、当たった直後に霧散して消えていった。
多少の痛みを覚えたものの、傷へと至るほどのものではない相手からの攻撃に拍子抜けすると同時に、潰すならば今だと考える。
前に翳してした翼を戻そうとしたとき、異変に気付く。
手足の様に扱える筈の翼に全く力が入らない。力は込めている筈なのにまるで空気が抜けていく様に込めた感触が戻ってこなかった。
感覚を切り離された様に麻痺した右翼。片翼だけではタンニーンの体を飛ばす程の力を発することは出来ず、必然的にタンニーンの巨体は地面に向かって落下した。
「おおおおおおおお!」
着地する直前体勢を戻し、四肢から地面に着く様にする。
大地が震える落下の衝撃。それによって舞う土煙も黒煙で一気に拡散されてしまう。
両掌、両膝を地面に突き、四つん這いの格好となって着地した。
すぐに立ち上がらねばと思った時、地を踏み締める音が聞こえる。周りはタンニーンの吐いたブレスによって燃え盛る大地と化し、木々が燃える音や湿った土が急速に乾いていく音が絶えず聞こえている状況だというのに、その微かな音は鮮明に聞こえてき

た。
　顔を上げた視線の先に立つのは、燃え落ちた木の枝を踏み締めながら歩いてくる一人のヒト。
　かつて見た魔人と何一つ違う。肉の体を持ち、人間と殆ど変わらない姿をしている。だが、その身から放たれる蛍光の魔力からは、隠し切れない魔人と同じ死を連想させる冷たく、恐ろしさすら感じる気配が放たれている。
　姿形など関係無い。かつて同胞を私欲によって虐殺した魔人の同類がいる。それだけで滅ぼす理由となる。
　タンニーンは立ち上がり咆哮を上げる。これこそが、元竜王と魔人との殺し合いを告げる開戦の音であった。

◇

「ヒホ……？」
　一誠が目を覚ましてから暫く経った後、ジャックフロストも目を覚まし、その黒く円らな瞳を緩慢に擦る。
「起きたか、フロすけ」

「……その呼び方は止めて欲しいって言ったホー」
一誠が時折呼ぶあだ名にジャックフロストは寝起きながらも流さずに文句を言う。理由は単純にジャックフロスト本人がカッコ悪いと思っているからだ。
ジャックフロストはフラフラとした足取りで川の方へと向かい、両手で川の水を掬う。そしてそのまま顔を洗う――のではなく手の中で掬った水を冷やし、シャーベット状にした後それを顔に擦りつけて洗顔した。
「フー！　さっぱりだホー！」
「お前の顔の洗い方って独特だなー」
シンとは違い日常生活を共に送っていない一誠は、ジャックフロストの行動に心底珍しいといった感想を洩らしながら、タオルを手渡す。
完全に目を覚ましたジャックフロストは、顔についていた氷をタオルで拭い終えた後、キョロキョロと周囲を見回す。
「タンニーンは何処に行ったんだホ？」
「おっさんなら間薙を迎えに行ったぞ。あの二人、まだ会ったことがなかったからな」
「そうなのかホ。今日も色々と話をしたかったホ」
残念そうに肩を落とすジャックフロスト。昨日タンニーンたちの帰りが遅くなった理由も二人で話し込んでいたのが理由である。それでも今朝になって話し足りなさそ

うにしているのは、途中でジャックフロストが眠気に負け、話を打ち切る形で終わってしまった為である。

一晩の間に随分と仲が良くなっていた二人。一誠も寝る前にタンニーンとジャックフロストが喋っている姿を見たが、祖父にじゃれつく孫の姿を連想させる。タンニーンに言えば、そこまで老けてはいないと憤慨しそうであるが。

「タンニーンのおっさんと話すのがそんなに楽しかったのか？　二人でどんな話をしてたんだ？」

「オイラの王様の話とかホ！　タンニーンと王様が仲良くなったきっかけの話だったり、喧嘩したときの話だったり、二人で一緒に戦ったときの話とかホ！」

話しているうちにその時の興奮が蘇ってきたのか、瞳を輝かせ、口調が段々と強くなっていく。

「それとそれと――あっ」

ジャックフロストがこのとき『あの言葉』を思い出したのは、全くの偶然であった。どんな話をしたのかを思い返していたときに掘り返された、記憶の中に混じっていた断片。特に気にしていた訳でも無かったが、一誠という特異な立場にある人物と話していたという現状が、気になっていなかった筈の『あの言葉』をジャックフロストの口から引き出させる。

「そういえば……イッセーって『竜狩り』って知っているかホ？」
「へ？」
タンニーンが何気なく洩らした言葉。同じドラゴンであるドライグを宿す一誠ならば、この言葉の意味を知っているのではないかと思い尋ねてみた。
『竜狩り』……？　初めて聞くな、それ。ドライグは知っているか？」
『俺も初めて聞く。……だが、あまり良い響きでは無いな』
ドライグの知識の中にジャックフロストの問いの答えを指すものは無かった。だが、ドライグ個人としては言葉そのものに嫌悪を覚える。
「何か物騒な感じがするけど、何処でそんな言葉を覚えてきたんだ？」
「昨日、タンニーンが言ってたホ」
「――ちょっと待て」
二人の会話に酒盛りをしていた筈のアザゼルが割って入ってくる。手に持っていた杯を放る様にして置くと立ち上がり、一誠たちの下に寄ってきた。心なしかその言動に焦燥を感じる。
「もう一度言ってくれ。誰が何を言ったんだ？」
寄って来たアザゼルはジャックフロストに顔を近付け、先程までの会話をもう一度言う様に促す。詳細を知りたいというよりも、出来れば間違っていて欲しいという印象を

受ける。
　詰め寄られたジャックフロストは、アザゼルの威圧にたじろぎながらも言われた通りにする。
「ヒ、ヒホ。タンニーンが、『竜狩り』って――」
「それだぁ！」
「ヒホッ！」
　聞き終える前にアザゼルが大声を上げ、その声量にジャックフロストは勿論、一誠も飛び上がる様に驚く。
「そうだ！　それだったんだ！　あいつに聞きたかったことは！　何であの時思い出さなかったんだ！」
　両手で髪を掻き毟りながら、自分の犯した失態を悟る。
「情報は調べ切った筈だ！　あいつとの関わりも無かった！　じゃあ意図的に隠したのか！　いやいやいや！　そんなことをしてサーゼクスに何の得がある！　魔王にも分からない様に隠蔽していたというのか！」
　冥界で修行する際、万が一のことを考えて周辺にアレとの関わりが無いか事前に調査していた。タンニーンとアレとの繋がりは、アザゼルが調べた段階では見つからなかった。

故にアザゼルは安心しきっていたのかもしれない。本人に直接聞くということを失念してしまっていた。
「マダ！　今すぐタンニーンを追うぞ！」
「あいよ」
文句一つ言わずにマダはアザゼルに従う。それだけで今が切迫している状況だというのが分かった。
「おっさんのことを追うって……べ、別にタンニーンのおっさんと間薙が会ったからっていきなり何か起きる訳じゃ……」
「何も起きないかも知れないが、何かが起きるとしたら確実に殺し合いだ」
アザゼルのその言葉に、一誠は二人が殺し合う姿を想像し、鉛でも呑み込んだ様な不快感に襲われる。知り合い同士が殺し合う。一誠からしてみればそれはありえないし、あってはならないことであった。
「お前らは俺たちが戻るまでここで待っていろ」
「俺も行きます！　そんなこと聞かされてじっとなんかしてられないっす！」
「オイラもだホ！」
「ダメだ。来るな。万が一巻き添えを喰らったとき、俺らなら何とかなるがお前らだと——死ぬぞ？」

アザゼルはそう忠告すると、一誠たちの反論も聞かずに黒翼を広げて飛び立っていく。マダの方も気付けば姿を消していた。

残された二人は暫くの間黙っていたが、やがて一誠の方から口を開く。

「なあ、お前だったら間薙の場所が分かるんじゃないか？」

シンと仲魔という繋がりを持つジャックフロストにそう尋ねる。

「ヒホ。はっきりとした場所は分からないホ。でも、何となくなら何処にいるかは分かるホ」

「そうか。それで十分だ。なあ、悪いけど――」

「分かってるホ！　オイラもイッセーと一緒に行くホ！」

申し訳なさそうに言う一誠を遮り、自ら同行することを宣言する。

「ありがとよ。ドライグ、悪いけど俺たちも行く」

『お前の選んだことだ。好きにすればいい。だが前以って言っておく。アザゼルがお前に言った警告は脅しではなく事実だ。仮に禁手が使えたとしても恐らくタンニーンには勝てない』

「別におっさんと戦うつもりはない」

『お前にそのつもりが無くても向こうはどうだかな……雪精の小僧が言っていた『竜狩り』という言葉が言葉通りのものだとしたら、まず間違いなくタンニーンと話し合いな

どできんぞ』
「どういう意味だよ？」
一誠の中でタンニーンは冷静な大人というイメージであった。話し合うことが出来ないというのが想像出来ない。
『あれは龍王の中でも責任感の強いドラゴンだった。その同胞を手に掛けたんだ、タンニーンの怒りは計り知れない。それこそ逆鱗に触れていてもおかしくはない』
「逆鱗……」
『相棒。お前は本当に怒り狂うドラゴンの恐ろしさをまだ知らない』

◇

咆哮を上げる名も知らぬドラゴン――タンニーンを見上げながら、シンは先程の光線を放ったことで穴だらけになり、襤褸屑と化した上着を破り棄てる。
何らかの誤解が生じているのは分かっている。だが、目の前のタンニーンのこの姿を一目見ただけで話し合いの余地は無いことを悟った。話し合いに持ち込むとしたら、それこそ相手を動けなくしなければならない。
空を自由に飛べなくしたことで一方的に攻撃されることは無くなった。リアスたち

悪魔や天使、堕天使の様に飛ぶ為の羽をシンは持っていない。空から延々と攻撃を繰り返されるだけで手も足も出なくなってしまう。

大気どころか大地すらも揺さぶる咆哮が終わると同時に、タンニーンが拳を振り下ろす。

握った拳は人一人隠れてしまいそうな程大きく、それが巨体から想像出来ない程の速さで繰り出された。

動きの大きさから事前に見抜いていたシンは後方へ大きく下がる。シンが下がってから数秒後に拳が大地を叩き割る。その威力に大小様々な石礫が上に向かって飛び上がり、地面に断層が出来る程の亀裂が生じた。

タンニーンは狙いを外したと分かると突き立てていた拳を開き、地面を抉りながら上から下へ掬い上げる。その手の先にも勿論シンが立っていた。

土砂を巻き上げながら迫るタンニーンの爪。更に後ろへと下がって回避しようとしたが、背後に木々が生えていることに気付き、仕方なく横へ移動する。

空振りしたタンニーンの爪は文字通り木々を根こそぎにし、そのまま宙に向かって飛ばしてしまった。

重機を用いなければ運べないであろう大木が軽々と宙を舞う。

避けたシンを狙い、大振りの拳が追撃してくる。後ろには先程と同じく木々が生い

茂っており、下がることが出来ない。
シンは右手に魔力剣を創り出し、迫る拳に向かって魔力波を放つ。
拳の軌道を逸らすつもりで放った魔力波であるが、あろうことかタンニーンの拳はそれを真っ向から突き破りながら迫って来る。純粋な腕力だけでシンの技を捻じ伏せようとしてきた。
すかさず左手にもう一本の魔力剣を創り出し、振るう。二発目の魔力波によって拳は狙いを外し、シンの足元へと突き刺さった。
全力の熱波剣を二発打ち込んで辛うじて狙いを外すことが出来たが、改めて相手との実力差を思い知らされることになった。
もしかしたら自分が戦っているドラゴンはかなり上位の存在かもしれない。そんな考えが頭を過ぎる。
追撃の拳も外されたタンニーン。すると、突如シンに向かって背を向ける。その行動に一瞬虚を突かれたシンであったが、すぐに相手が何を狙っているかに気付き、背中に悪寒が走る。
ほぼ対人経験しかない故に反応が遅れてしまった。相手がドラゴンならばこの攻撃が来るのは必然とも言える。
繰り出されるのは高速でしなる尾による広範囲攻撃。

先端は瞬時に最高速に到達し、音を超え、空気を裂き、回避不能の域へと達する。
中部から末端は先端に比べれば遅いかもしれないが、幅と厚みが人を軽々と覆い隠す程大きく、これもまた回避困難。
そして、シンが居る位置は丁度タンニーンの尾の先端辺りが通過する位置であった。後方に下がっても尾の範囲から逃れられない悪い意味で絶妙な位置。ましてや、さっきの様に横に移動して回避出来るものでもない。
掠るだけでも四散しそうな程の威力を秘めているのが、左眼から伝わってくる。と同時に、最早移動するだけの余裕も無いことも伝わってきた。
どうするべきかと無意識に後ずさりした時、がくんとシンの体が沈む。この期に及んで足も捕られるという不運も重なってしまったというのか。
だが、この時のシンの心情は真逆であった。思いもよらない幸運に気付き、沈む体を踏ん張って支えるのではなく、抵抗することなく受け入れる。
直後、大気そのものが爆発したのではないかと錯覚するほどの音を響かせながら、ドラゴンの尾が振り抜かれる。
シンはそれを眼前で見ていた。顔の前を強風と共に巨大な尾が通り過ぎていき、空気の爆ぜる音で耳鳴りがするが彼は無事であった。
彼の体は地面に出来た穴の中に収まった状態であり、それによって地面から低い位置

にいたことでタンニーンの尾から逃れられたのだ。
最初の攻撃の時にタンニーンが木々を地面ごと抜き取ったことで出来た穴。そこに偶然逃げ込むことで間一髪回避することが出来た。
タンニーンは反転した体勢であり、シンの姿を視界に収めるまで僅かではあるが間がある。偶然によって得られたこの好機を逃さない。
穴の縁に手を掛けると同時に大きく息を吸い込む。一息で肺が限界まで膨らむ程の空気を吸うと、穴から出ると同時にそれを全て冷気に変換。今度は肺を限界まで絞りながら『氷の息』を吐き出す。
シンから吐かれた『氷の息』は瞬く間に広がっていく。見上げる程あるタンニーンの巨体を包み込むことは出来なかったが、それでも膝から下が全く見えない程の靄に覆われ、シンの姿を隠す。
元の体勢に戻ったタンニーンは足元に広がる冷気を見て、不愉快そうに口を歪めると片翼を広げ、扇ぐ。
翼の一羽ばたきで突風が起こり、漂っていた冷気は吹き飛ばされて大気の中で霧散していく。
視界を遮っていたものが無くなり、見失った相手を探す。
さっきまで居た場所には当然居ない。首や目を動かし視界を広げ、鼻を効かせ嗅覚で

辿り、鱗にまで神経を張り巡らせ僅かな気配ですら逃さず、見失った敵の位置を探ろうとした。何処に逃げ、身を隠していても、必ず見つける強い意志を持って。

相手の位置はすぐに見つかった。だが、それはある意味で予想外の場所であった。

タンニーンは動かしていた首を下に傾ける。狙うべき相手はすぐ側、自分の足元の前に居た。

身を隠す訳でも逃げる訳でもなく、あの冷気の中でシンはタンニーンに急接近していた。

シンの存在に気付き、行動を起こそうとするが、それよりも先にシンが動く。

シンが拳を限界まで握り締めながら振り上げると、タンニーンの足先にある親指に向け、一切加減無しに拳を叩き込んだ。

刀剣の様に鋭い爪が割れ、その下の肉を貫き、更に奥にある骨を砕く。指先という最も神経が集中している部位を、人間でいうならば金槌で叩き潰している様なもの。

足元から脳天まで稲妻の様に駆け抜けていった激痛。

「があっ！」

堪らずタンニーンの口から声が洩れる。が、すぐに痛みを超える怒りによってそれは呑み込まれた。

呻く声はすぐに咆哮へと変わり、たった今指先を砕かれたばかりの足でシンを蹴り付

ける。振りの無い膝から下だけの力で繰り出された蹴りであったが、シンにとっては十分必殺の域であった。

胸部を貫かんばかりに迫るタンニーンの足爪。シンはその内最も長い爪が胸元を貫く前に両手で掴んだ。

しかし、貫かれることは防げたが、タンニーンの巨体から出された蹴りまでは抑えることは出来ず、タンニーンの足先にしがみついたまま地上から十数メートルの高さまで持ち上げられた。

タンニーンの足が上げられる限界の高さまでいき停止する。その反動で体が離れそうになるが、何とか持ち応えた。

するとタンニーンは、片足を持ち上げたまま軸足を捻ると共に腰を回す。それは回し蹴りのときに行われる動作であった。

足が今度は縦ではなく横に振るわれる。全身を使用しての蹴りの勢いは先程までの比では無く、空を切った瞬間シンの顔面に大気の壁が叩き付けられ、目を開けられず、呼吸も出来なくなる。

それでも爪を立てる様にして離さなかったが、蹴りが最も威力を発揮する点に辿り着くと同時に、そのまま振り抜くのではなく急停止された。

暴力の様な慣性がシンの体全体に圧し掛かる。加えてタンニーンの鱗には爪先すら

かける箇所も無く、指先や腕だけでは限界であった。
シンの手が引き剥がされ、空中を矢の如き勢いで疾走する。
周りの光景全てが溶かされた絵の具の様に引き伸ばされていく。減速しようにも空中に掴まるものはなく、あるとすればそこらに生い茂っている木々だが、それもシンが飛ばされている位置から数メートル下にあり、手を伸ばすことが出来ない。
数十メートルの距離をほぼ真っ直ぐに飛び、地面に向かって落下し始めたのは百メートル以上飛ばされた後である。
この時になってようやく木に手が届く位置になり、シンはすれ違い様に木の先端を掴んだ。木の先端は一瞬しなった後、音を立てて折れる。止まることは出来なかったが、それでも減速させることは出来た。
勢い失ったシンの体はそこから斜め下に向かって落ちていく。落下先に木を見つけると、その木の幹に腕を叩き付け無理矢理止まり、地面に降りる。
シンは飛ばされてきた方向へすぐに振り返る。生い茂る木々によって視界が遮られている為、タンニーンの姿は見えない。
しかし、次に何をしてくるのかは想像が出来る。先程まで近距離で戦っていたせいで自分を巻き込む危険があったせいで使わなかったのかもしれないが、今は十分過ぎる程の距離が確保出来ていた。

その予想は的中していた。
タンニーンは、シンが飛ばされていくと同時に大きく息を吸い込んでいた。その勢いは周囲の木々の木の葉を激しく揺さぶるほど。
胸部が大きく膨らむ。取り込んだ大気に自身の魔力を合わせていく。
そこに消えることの無い怒りを込め。そこに無惨に散っていった同胞の無念を込め。
二度と同じ悲劇を繰り返さず、残る同胞たちをどんなことをしても守るという決意を込め。
「ガアアアアアアアアッ！」
タンニーンの口から全力のブレスが吐かれた。
一方。タンニーンのブレスを警戒し、なるべく狙い定まらない様にジグザグに走っていたシン。
（ん？）
遠く、木々の間から見える橙色の光に気付き、訝しむ。それが少なくとも右の視界の端から左の視界の端まで見える。
そして、間もなくして、それが巨大な絶望であることに気付かされた。
視界全てに映り込む橙色の光、全てが炎。
シンが見た隕石を彷彿とさせる炎の塊とは違う。

それは津波であった。それは怒涛であった。灼熱の波が全てを呑み込み、灰塵へと変えながら迫る。

上にも横にも逃げ場が無い。逃れる時間も無い。絶対に相手を殺すという決意と殺意が混じり合った強い意志が感じ取れた。

シンは深呼吸とも溜息ともとれる重く、長い息を吐き出す。そして、それを吐き終えるまでの間に決断した。

地面に片膝を突きながらしゃがみ込み、左手を前に向かって突き出す。

彼は炎から逃れるのではなく、この炎に耐えることを選択した。

しゃがみ込んだのも出来るだけ炎が当たる面積を減らす為である。

間もなく炎と接触する。どれだけ凌げるかなど分からない。フェニックスの炎を受け、ケルベロスの炎を逸らすことは出来たが、目の前の炎は明らかにそれらとは質量が違っていた。炎を使い始めて日が浅いシンには自殺行為に等しいものである。

周りの空気が一気に熱を帯びていく。炎を見詰めていた目は渇き始め、口の中も乾いていくが、それが熱のせいか緊張のせいか分からない。

額から汗が一筋流れる。だが、地面に落下するよりも先に汗は蒸発してしまっていた。

シンは大きく息を吸い、そして呼吸を止める。これ以上空気が熱くなる前に吸ってお

かなければ肺や喉がやられてしまう。
迫る炎の勢いは速い。だが圧倒的力を前にして待機しているシンには迫るまでの時間が長く感じられた。最初から耐えることを選択せずに逃げることに専念すれば逃れたのではないかと、僅かな後悔が頭の片隅で誘惑の様に囁いてくる。
そんな自分にシンは逆に安心する。肉体は徐々に人から離れていっているが、恐くて逃げ出すという人間性は持ち合わせているらしい。
炎が眼前へと迫る。生か死かの境目。耐え切らなければ死。例え耐え切れたとしてもまだタンニーンとの戦いが残っている。生死の天秤は死に傾いている。だが、結局のところこれに生き延びなければ先は無い。
灼熱の死を前にし、無表情であったシンは口の端を僅かに歪める。それは理不尽な程の恐怖による諦観からの笑みか或いはそれ以外の感情からくるものか、その答えは彼にしか分からないものであった。
その直後、大質量の炎がシンの体を呑み込む。
五感全てを包み込む炎の抱擁。業火の地獄の中でシンは歯を食い縛りながら耐えていた。
直撃する筈であった炎は、突き出された左手によって阻まれ後方へと流れていく。だが、燃え盛る左手の炎はドラゴンの炎によって蝕まれ続けており、また炎自体の圧力に

よって指は折れる寸前にまで曲がり、左手に絶えず激痛が起きていた。
表皮が焼け、剥き出しとなった神経が炙られていく。なまじ左手に炎に対する抵抗があるせいで神経が焼き尽くされず、長い時間をかけて苦痛を生じさせていく。
ごきり、という音が体内に響く。熱のせいで殆ど開けられない目を凝らすと、左小指が圧に負けて手の甲に背を付け、こちらに指の腹を見せている。折れた痛みは感じない。焼かれる痛みがそれを遥かに超えており、感覚が麻痺していた。
再び音がして今度は薬指が折れる。このまま炎の威力に負け、左手で防ぎきれなくなるのも時間の問題であった。
シンは即断し、右手を突き出す。
右手からは左手の様に炎を出すことは出来ない。だが左手と同じ様に出来ることはある。
突き出した右手が炎に触れる。その途端、灼熱の舌が右手の皮膚を舐め取っていく。
奥歯を限界まで噛み締める。
短く声が洩れる。両手から伝わる痛みで脳が白く焼けそうな気分であった。
痛みという警鐘を抑え込みながら、シンは右手に意識を集中させる。すると右手を舐っていた炎が右手の中へと吸い込まれていく。
実戦形式の練習ではまだ見せたことの無い、右手を使っての『吸魔』。魔力によって生

じた炎ならば吸い取ることも不可能ではない。
左手で炎を逸らし、押さえ切れない炎は右手によって吸い取る。
一見すれば重厚な守りに見えるかもしれない。だが、タンニーンという竜王の肩書きを持つ実力者を前にすれば、シンの守りなど藁草の盾に等しいものであった。
「ぐっ」
短い苦鳴が洩れる。その原因は炎を吸い取っていた右手の異変であった。
皮膚を突き破り、内側から火が上がる。それも一カ所にではなく手から腕にかけて何カ所も。
膨大な量の魔力を自分のものに変換出来ず、溢れた魔力が右腕から噴き出しているのだ。
事態はそれだけでは終わらない。
取り込んだ膨大な熱はシンの体中を一気に駆け巡り、体温を一気に上昇させる。
頭が割れてしまうかと思える程の頭痛。ぼやけ始めていく意識。炎を防いでいる両手が激しく震える。体温が異常であることは分かっているのに汗が全く流れない。
あとどれくらいの時を耐えればこの灼熱の地獄は終わるのか。既に痛みすら感じ無い程に意識が曖昧になっている。
（このまま死ぬのか？……熱いな……熱い……熱……）

身を守ることからも戦うことからも意識は離れ始め、シンは白昼夢を見るかの様な感覚で外の熱と内の熱に耐え続ける。

◇

ブレスを吐き終えたタンニーンは、目の前に広がる焦土を見る。

炎を吐いた時間は数十秒。それだけで青々と生い茂っていた森は灰と炭だけの大地と化していた。

タンニーンは、焼き払った大地を歩き始める。魔人の息の根が止まったかどうか確認する為に。本当なら飛んで行きたい所であったが、まだ翼の自由は戻っていなかった。

魔人がいるであろう場所は、タンニーンの位置から約百メートル先。走らなくてもタンニーンの巨体ならば一分も掛からない。

万が一逃げ延びている可能性も考慮し、周囲の僅かな変化も逃さない様に意識を張り巡らせながら、先へと進んでいく。

それから間もなくしてタンニーンはあっさりと目的の人物を見つけた。

焼け焦げた大地に座り、微動だにしていないシン。彼の背後だけは燃える前の状態が保たれており、何らかの方法で炎を防いでいたのが分かる。

生きてはいるらしいが、だらりと垂れ下げられた両手は炎によって焼け爛れていた。特に左手は肘の辺りまで黒く炭化しており、使い物になる状態ではない。

炎を防ぐことに尽力し精根尽き果てた姿。それがタンニーンの印象であったが、油断が生まれることは無い。逆に自分の炎を受けて生き延び、あまつさえ原型を留めているのを見て警戒を増す程であった。

（やはりこの手で確実に葬らなければならない！）

巨岩の様な拳を強く握り締める。死に体だろうが関係無い。必要なのは確実なる死のみ。

動かないシンに向け、拳を振り上げる。拳の影がかかろうともシンは動かない。

タンニーンは、確実な止めを刺す為に全力で拳を振り下ろした。

大地が震え、シンのいた場所を中心に亀裂が生じる。

「――何だと？」

タンニーンから戸惑う声が出る。拳から伝わってきた手応えが想像していたものと違っていた。まるで固い杭を打ち込んだ様な抵抗のある感触。

大地に打ち込まれる筈のタンニーンの拳は、地面に触れてはいなかった。

拳の下、傷付いた両腕を交差し、額ごと押し当てて受け止めているシンによってそれが阻まれていた。

タンニーンはそのまま拳に力を込めて潰そうとする。だが、それ以上先に進むことはなかった。それどころか、徐々に押し返され始めている。

半死人とは思えない程の力にタンニーンは驚愕する。

タンニーンは一つ思い違いをしていた。シンは決して瀕死の状態では無い。寧ろ今の彼の体内には、溢れんばかりの魔力によって満ちている。

シンが炎の中でやった試み。それは決して失敗では無かった。確かに膨大な量の魔力を体内で変換しきれてはいなかったが、それはあくまで時間が足りなかったからである。炎を耐え切り、タンニーンと邂逅するまでの間に、シンは炎から得た魔力を自分のものへと変えていた。

ただその莫大な量に飽和寸前となり思考が若干飛び掛かっていたので、タンニーンを前にして無防備を晒してしまっていたのだ。

だがそれは、皮肉にもタンニーンが向けた強い殺意によって解消される。

タンニーンの殺意がシンの意識を引き摺り出し、タンニーンの力が溢れる魔力の使い道を与える。

巨大な拳の下で右腕と額を押し当てた状態でシンも自身の拳をつくる。折れて黒く焦げた手で無理矢理作り出した左の拳。タンニーンのそれと比べるとあまりにも小さい。だが、見る者がいればその拳に言い知れない恐れを抱くであろう。そんなものを抱

かせる何かがその拳に込められていた。
肘を曲げ、下から上に向けて振り上げると空を切る音よりも早くタンニーンの拳に叩き付ける。
その衝撃でタンニーンの腕は跳ね上がり、その勢いでその場から数歩後退してしまう。
タンニーンの拳から脱出したシンは緩慢な動きで首を軽く回す。受け止めたせいで額から流血し、顎にかけて二筋の血の道が出来ているが拭おうとはしなかった。
「……熱い」
ぽつりと零した言葉と共に、口から火の粉も零れ落ちる。タンニーンの炎によってこの周辺の温度は上がっているが、シンの周囲では空気が揺らぎ、陽炎が出来ている。
炎を吸収した影響で今のシンの体温は異常なまでに上昇。常人ならばまず生きてはいられない体温にまで達している。
後退したタンニーンはすぐに体勢を戻し、シンを睨み付ける。シンもまたその殺意に満ちた目から逸らすことなく真っ向から受ける。
竜と魔人。戦いは更にここから過熱する。

　互いに意識を集中させる中、極々小さな音が鳴る。誰も気に留めない程の小さな音。その音の主であるシンですら気付かない非常に小さな音。音の源はシンの左手。先程の殴った衝撃で炭化している一部に亀裂が生じていた。だが亀裂の下から覗かせるのは肉でも骨でも血でも無い。淡く輝く蛍光。シンの右腕から放つのと同じ光であった。

責務、岐路

焼け付く様な暑さだというのに、その一カ所だけは極寒かと錯覚を覚える程の空気が流れる。実際に寒い訳では無い。ただ両者から放たれる殺気は、見る者全てに死という概念を烙印の様に与え、その心と魂を震わせるのは間違い無かった。

片や、激しい激情を隠すことなく放ち、相手を呑み込み圧壊させんばかりの龍の殺気。片や、さざ波の様に静かだというのに、刀の様に一切の無駄や零れも無く、一点にだけ集中して向ける殺気。

対照的な気が混ざり合い、その場を異界へと変える。

タンニーンは、雷鳴の如き咆哮を上げると、シンの真正面を狙い、拳を振り下ろす。拳が空を奔るだけで、風が巻き起こされる。

何処か気怠げで覇気が無いとも言える表情のまま、シンは足を滑らせる様に右へ一歩移動する。だが、どう見てもタンニーンの拳を避けるには足りない距離。体の中心で受け止め、全身が粉砕されることは無くなった。代わりに左半身が消失する未来が予約された。

拳圧で巻き起こった風が先にシンの前髪を揺らす。すると、一歩移動した筈のシンは

そこから、更に右斜め上に半歩移動する。
自分から当たる様に前進したかと思えば、迫る拳に向かって躊躇することなく焼け焦げた左腕を押し当てる。
女性の胴体はありそうな太さを持つタンニーンの指に触れると、そのまま拳の側面に左腕を滑らせる。
鋼の如きドラゴンの鱗と焼け焦げた人間の皮膚。それが接触すれば結果がどうなるか、無知なる者でも分かるであろう。だが、凡その予想を覆す展開がそこにはあった。
接触する両者の間に激しい火花が散る。あろうことかシンの左腕は吹き飛ばされるどころか、その衝撃に耐えているのだ。
飛び散る火花を浴びながら、シンは左腕に右手を押し当て更に密着させる。
側面から力を加えられたタンニーンの拳は進む筈であった軌道を逸らされていく。それと同時にシンは左腕を当てながら前進する。
拳は地面に向かって振られ、大地を大きく陥没させた。その勢いでタンニーンは前のめりとなる。
拳を逸らすことで出来た隙を狙い、再び足を狙うシン。体格が大きく違う為、狙う場所がそこしかないのは勿論だが、相手の機動力を奪うのも目的であった。翼が使えない今、タンニーンはどうしても足を使って移動するしかない。

接近するシン。その時、視界の端に巨影が映る。
足元を払う様にして振るわれたタンニーンのもう一本の手。シンの逃げ場を奪う様に五指が開かれた状態であった。
勢いが付いたシンに後退は出来ない。急停止すれば只の的になってしまう。
絶妙なタイミング。タンニーンは、最初からシンを誘い込む目的で初撃を大振りの攻撃にしたのではないかと思ってしまう。
思考は一瞬。行動は刹那であった。
加速がついたままシンは跳躍。間髪入れず足元にタンニーンの手が通過する。膝を折り曲げ、身を縮めていた状態でも靴底にタンニーンの指が掠ったのが分かった。
だが、辛うじて回避出来たのは事実。そのままの状態を維持し、瞬きよりも早く通り過ぎていくだろうタンニーンの手を見送ればいい。
シンは目的を定め静観――することはなく、何故か曲げていた膝を伸ばす。何事も無く通過する筈であったタンニーンの指先に両足を着けた。
着地は一瞬。次の瞬間には指先から跳び上がる。両足に力を加えるだけの足場がほんの少しの間だけ必要だった。
下手をすればタンニーンの手に弾き飛ばされ、宙に無防備な姿で投げ出されてしまう危険があった。だが、シンは敢えて危険な方に我が身を賭ける。安全、無難などの保身

をして勝てる相手では無い。それこそ全力を以って戦わねば勝てない相手である。
だからこそ命を懸ける。生き残る為に今ある保身や命を捨て、その先を手に入れる為に。
跳躍したシンが次に着地したのはタンニーンの腕の内側、肘窩という部分である。鱗に比べれば比較的軟らかい感触を足裏から感じた。
降り立つと同時に腕部を駆け上がるシン。人などとは比べものにならない程の太さを持つドラゴンの腕は、全力で走っても十分な幅があった。
シンが駆け上がっていくのを見て、タンニーンは地面に叩き付けていた手を急いで戻し、大きく手を開き、止まっている羽虫でも潰すかの様にシン目掛けて振り下ろした。
が、その直前に三度の跳躍。タンニーンの肩部に手を伸ばして掴み、潰されるよりも早く体を引き上げ、タンニーンの肩に降りる。
今まで見上げてばかりいたタンニーンと、この時初めて同じ目線となった。
瞳の中に渦巻く怒り、憎悪。折れそうな程食い縛った鋭い歯からは、歯同士が擦れ合う音が絶えず聞こえる。
シンは気付く。その瞳はシンを見ているようでいて見ていない。シンを通して別の何かを見ているようであった。
ここまで他人から恨まれる存在。果たしてそんな人物と自分がどの様にして重なり

合うのだろうかと一瞬考えたとき、不意に脳裏に高らかに笑う白骨の闘牛士の姿が浮かびあがった。

根拠があるわけではない。他に心当たりがないからとも言えるが、一番の理由としてはシン自身、その人物が心底嫌いだからである。

タンニーンがシンに向かって大口を開ける。それに合わせ喉が鱗越しに赤く輝き始めた。

ブレスを放つ動作。一方でシンもまた、タンニーンが口を開くと同時に息を吸い込み始めていた。

その時、胸の奥で何かが訴えてきた。前に『氷の息』を初めて使用したときと同じ前兆。新たな力が産み落とされる度にシンの体内で起こる異変。

肺の中に限界まで取り込まれた空気。いつもならば魔力によって取り込んだ空気を冷気へと変換するのだが、この時のシンは胸の奥の衝動に従い、いつもとは異なる魔力の込め方をする。

体内で暴れる熱をそのまま空気へと混ぜ込む様なイメージを頭に描きながら、肺の中の空気の温度を上昇させていき、やがて一定の温度を超える。

放つ準備を済ませたシン。溜めていたタンニーンよりも一手早い。

肺を絞り、喉を通過し、口から吐き出された息は紅蓮の炎と化し、タンニーンに吐き

掛けられる。それは『氷の息』とは真逆の『炎の息』であった。
今まで出来なかったことが当然の様に出来る。普通に考えれば恐怖なのかもしれない。だが戦いに徹している今のシンには、切れる手札が増えた程度の認識であった。
胸の奥の疼きは少しだけ弱まったが、まだ収まる気配はない。
得意の炎を今度は浴びせられる立場となったタンニーン。だが、それに構うことなくブレスを吐く準備を進める。迫る炎は彼にとって脅威とはなりえなかった。
種によっては異なるが灼熱の炎を操るドラゴン。ましてやその中でも上位にあたるタンニーンの鱗は、並大抵の炎では焦げ跡一つ残すことは出来ない。タンニーンの鱗を溶かす事が出来る者などそれこそ同じ龍王か、炎を司るフェニックスぐらいしかいない。故にシンの炎を歯牙にもかけないのは当然の理であった。
脆弱な炎ごと自身の炎で吹き飛ばす。それがタンニーンの考えであった。しかし、その選択は結果として間違いであった。
何故ならば、シン自身も自らが放った炎がタンニーンに傷を与えるなど微塵にも思っていなかったのだ。
シンは炎を吐きながら首を上に傾け角度を変える。それに合わせて軌道を変化させる『炎の息』。狙うはタンニーンの眉間付近であった。
突如として軌道が変わった炎。元から避けるつもりは無かったのでタンニーンの眉

間に直撃する。
タンニーンの顔に当たり、広がっていく炎。シンやタンニーンが考えていた通り『炎の息』はタンニーンの鱗を溶かす程の火力は無かった。
タンニーンからすれば温いとすら感じる炎。しかし、シンの本当の狙いはこの先にある。
鱗を伝わり這う様に広がっていく炎。顔を覆い尽していく炎が向かう先にはタンニーンの双眼。赤い炎が憎悪に燃えるタンニーンの眼を舐める。
眼球の湿りが『炎の息』によって急速に乾かされていく。普通の人間ならば失明しても可笑しくない筈だが、生物として格の違うドラゴンにしてみればその程度で済むこと。
乾いた眼も数度瞬きすれば何の問題も無い。だからこそ反射的な行為であった。乾燥し、痛みを覚える目を、敵を前にして瞬かせてしまったのは。
タンニーンが目を瞑ると同時にシンは動く。しかし、タンニーンも鱗越しにシンが動いたのに気付き、目を閉じたまま肩に立つシン目掛け、ブレスを放った。
灼熱の塊が肩の上を通過していくのが分かる。だが手応えを感じない。空気が焦げるニオイはするが、生命が焼けるニオイはしなかった。
外したのかと思い、次に来る衝撃に備えるタンニーン。その予想通り、直後痛みが

走った。神経に突きささり、毒の様に広がっていく痛みが足の脛から発せられる。痛みを覚えた箇所はタンニーンにとって予想外であった。

碌に狙いを定めないままタンニーンは片足で地面を蹴り、跳び上がると同時に地面を尻尾で薙ぎ払う。

大地を砕き、抉る尾の一撃。

着地点にある木々を小枝の様に踏み潰しながら着地したタンニーンは、まだ痛む脛を見る。脛には四本の裂創が刻まれており、鱗を削り、その下の肉へと届き、血を滲ませていた。

金属よりもなお固いドラゴンの鱗にここまで傷を負わせたことに、少なからず衝撃を受ける。

あの時シンの姿を見失ってしまった為、どの様な方法でこのような傷を負わせたのかは分からない。或いは、自分の知らない武具を隠し持っているのではないかとタンニーンは考えた。

傷のことは気になりつつもタンニーンはシンの姿を探す。あの尾の一撃で吹き飛んだとは微塵に思ってもいない。その程度の相手に傷を負わされた方が余程誇りが傷付く。

タンニーンの思った通りシンは生きていた。尾で抉った場所から少し離れた位置に

ある木へいつの間にか登っており、その枝の上に立っていた。
焦りも恐怖も無い双眼がタンニーンの姿を捉え続ける。

◇

炎を吐き出しても、胸の奥の疼きや衝動はまだ消えることは無かった。以前は新しい力を使えばすぐに消えたというのに。
取り込んだ力が余程良質なものであったらしい。体の内に滞る熱や魔力を貪り、新たな力が今も産み落とされようとしていた。
未知である筈の力なのに、使い慣れたものの様に自然と使い方が頭に浮かんでくる。
普通ならば恐怖してもおかしくはないが、シンの胸中にそんな感情は湧いてこない。それを不自然に思うことはなかった。寧ろ、戦いの最中に余計な感情に振り回されなくて済むとすら思っていた。
今ある力をどう有効に使うか、どうやって相手を翻弄するか、どうやって相手を倒すか。その思考だけを駆け巡らせる。
喉の奥で一際強い疼きを感じた。再び未知でありながら既知の力が目覚める。
シンの頭の中にどの様な力か自然に浮かび上がってきた。

それを使えると判断すると即座に行動に移る。
息を吸い込み、大気を体内へと取り込む。『氷の息』や『炎の息』を吐くときと全く同じ準備であったが、ここから少しだけ変化する。
体内に入った空気を魔力によって冷気へと変換。それと同じくして魔力で熱にも変換していく。
体内で同時に熱と冷気を操る。
互いに相殺され、相手を燃やし尽くす力も相手を凍て付かせる力も失っていくが、構わずに更に変質した体内の空気に魔力を練り込んでいく。
これは攻撃の為のものではない。シンの戦いをより有利に進めていく為のものである。
タンニーンは力で捻じ伏せられる様な相手ではない。だからこそこの様な力が生きてくる。
準備が整うと、シンは腹筋に力を入れ、肺を絞り、体内で変質したものを一気に吐き出した。

◇

胸を膨らませるのを見て、タンニーンは僅かに警戒する。ドラゴンの様に冷気、炎をブレスとして吐くのは既に分かっているし、それが自分に対して効果的ではないことも承知していた。だが、あれを吐く時は必ず目晦ましとして使用しており、姿を見失う度に手痛い一撃を受けている。怒りで鈍くはなっているが、まだ潰された親指も脛の傷も痛む。

これ以上相手に攻撃の機会を与えれば、次はこの程度では済まないかもしれないと考えた矢先、シンの口からブレスが吐き出された。

初めに見た冷気のブレスと同じ白い靄。それはタンニーンに向かって吐き出されず首を動かして周囲に広げていく。だが、その広がり方は異常であり、空間に染み渡る様にしてあっと言う間に広がり、シンの体を覆い隠してしまう。

タンニーンの体に白い靄が触れる。触れた箇所から冷たさは感じなかった。冷気では無い。触った箇所に僅かな湿り気を感じる。つまりこれは――

（――霧か？）

今更になって攻撃でも何でもない、霧による目晦まし。まだ冷気の方に脅威を覚えた。

稚拙な隠れ蓑で自分の目を二度も誤魔化せると思われたことに侮辱を覚え、怒りのままに翼を広げる。

冷気を消し去った時と同様に、翼の羽ばたきでこの霧ごとシンを彼方へと吹き飛ばしてしまおうと考え、広げた片翼で勢いよく扇ぐ。

ドラゴンの一羽ばたきで場に旋風が巻き起こる。その羽ばたきは木々の枝が悲鳴を上げる程激しく揺らし、木の葉を毟り取る様にして散らせ、木から緑を奪っていく。が、次に起こったことにタンニーンは驚く。

大気に漂っている筈の霧は突風に扇がれても吹き飛ぶ所か、微風でも受けているかのようにゆったりと漂い続けているままなのである。

まるで空間そのものに絡みつくかの様な霧。否、最早ただの霧では無い。魔霧と呼べるそれはどんどん浸食し続け、気付けばタンニーンの視界は白一色に染まっていた。

魔霧に包まれたタンニーンは、そこで改めてこの霧の異常を実感する。

まずは視覚。ドラゴンの眼を以ってしても霧の中では何も見えず、自分の体すら胸から下が見えない程であった。

次に聴覚。包まれる前までは聞こえていた音も、霧の中に入った途端遮断され、静寂と化してしまった。

同じく嗅覚も働かなくなり、場を覆う霧のニオイが鼻の動きを阻害。また、纏わりつく霧の湿った感触のせいで、鱗越しにシンの気配を感じることも出来ない。

まるで白い闇の中にいるようであった。

（何処に――）

その瞬間、右足の腱に痛みが走る。抉られる様なその感覚は、先程脛に傷付けられたときと同等のものであった。

すると再び走る痛み。場所は前に傷付けられた脛。だが今度の痛みは前の時の比では無い。抉った箇所を正確にもう一度抉ったらしく、肉は削がれ、骨にまで達し、その骨も削られた。

声を発しそうになったが耐えて呑み込む。痛みを怒りに、その怒りを力に変え、尾を地面に押し当てると、大地を削りながら周囲一帯を薙ぎ払う。シンの居場所に見当も付けず放たれたそれは地表を剥ぎ、その生えた木々を根元から砕き、巻き上がった土砂や木片を凶器と化して周囲に飛散する。

人に当たった手応えは無いものの飛び散る土砂などを避けたせいか、タンニーンはこれ以上追撃をされなかった。

熱の様な痛みを訴える脚にタンニーンは表情を歪める。足への執拗な攻撃は確実にタンニーンの動きを鈍らせていた。それだけではない。攻撃を放つ際も両足でしっかりと大地を踏み締めなければ、力を十分に乗せることも出来ない。速さだけでなく力すらも削ごうとしているのが分かる。

翼が動けばすぐにでも反撃に移ることも出来たのだろうが、未だに翼は痺れ、力が入

らない。あとどれくらいの時間が経てば動くようになるのか、タンニーンに知る術は無い。

五感を鈍らされた状態で防戦一方。片やシンは霧に乗じてタンニーンへ着実にダメージを与えている。漂う霧の中を自由に行動出来るらしい。尤も、自分で放ったそれに惑わされるなど間の抜けた話でしかないが。

タンニーンは神経を尖らせシンが接触してくるのを待つ。冷静でいなければならないが、今のタンニーンには無縁の言葉であった。怒りが腹の底で今も尚マグマの様に煮え立ち続けている。気を抜けば暴発しかねない怒りを抑えるのに精一杯で、思考を冷ますことなど出来はしない。

霧の中に静寂が満ちていく。先程とは違って次の攻撃までに間があった。意図的に造られた間。いつ、どのタイミングで仕掛けてくるのか完全にシンの考え次第。戦いの主導権を握られた状況にタンニーンは苛立つ。

無音と緊張感がタンニーンの精神を緩やかに削っていく。もし、ここにいるのが並の存在だったならば、これに耐え切れずに動き始めていたかもしれない。だが、タンニーンは動かない。その内に激しい激情を宿しているというのに、それに振り回されず、手綱を握る。

彼は怒りの使い方を心得ていた。怒りとは無闇やたらにまき散らすものではない。

怒りの矛先を正確に定め、そこに叩き付けることこそ正しい怒りなのだと考えていた。
だからこそ今、激しい怒りを溜める。次にシンの姿を捉えた時、その全てをぶつける為に。
そして、その時は訪れる。音も無く、気配も無く、タンニーンの右脚の膝が裂かれる。
「ガアアアアアアッ！」
神経を張り巡らせていたタンニーンは、傷が付けられたと同時に右膝周囲を左手で振り上げる。
空気が擦れる様な風切り音。手応えからして空振ったのが分かった。しかし、この行為は無意味なものではない。
タンニーンの手刀は文字通り空を裂き、僅かながら空間に纏わりつく魔霧に隙間を生み出す。その僅かに出来た隙間から見えるのはシンの姿。裂かれた魔霧に瞠目している。
この瞬間、タンニーンは耐えることを止めた。一切の余力を残さない全力を腹の奥底から押し上げ、それが喉を通過し牙の隙間から覗くそれは小型の太陽の様であった。
怒りのブレスを自らの足元に向かって放つ。
最初に閃光。次に爆発、そして熱。最後に音が来た。
光が霧を内側から食い尽くしていく。

タンニーンを爆心地として起こった爆炎は、漂う魔霧を一気に蒸発させる。太陽の光が闇を祓うかの様であった。

視界を妨げるものは消え去った。だが、それ相応の代償も払うこととなった。

爆発の中心地にいたタンニーンは、全身から白煙を上げている。自身の炎で鱗が溶け始めていた証拠である。尤も、元龍王であるタンニーンだからこそ代償がその程度で済んだと言っても良い。二天龍や龍王を除いたドラゴンであったならば、自慢の鱗など紙の如く容易く燃やされ、灰と化していたであろう。

炎によって霧を払う手段はやろうと思えば何時でも出来た。しかし、闇雲に炎を吐いた所でシンに対し大きな隙を見せるようなもの。やるとすれば相手の位置を確実に把握した時と決めていた。

その結果が先程の大爆発であるが、やはりタンニーンの行動には冷静さが欠けている。殺意だけが先行し、自身を顧みない。どこまでも荒々しいその戦い方は、見る者に不安しか与えないものであった。

晴れた霧の中、タンニーンの目が素早く動く。度重なる破壊のせいで荒野同然となってしまった元森林で、シンの姿を見つけるのは簡単であった。

爆発の衝撃で数十メートル以上離れた場所に目の前で腕を交差しているシンを見つける。その全身からはタンニーンと同じく白煙が上がっていたが、原型を保っている。

タンニーンの炎を吸収した際に炎への耐性も得たようであった。しかし、それも完璧な耐性では無い様子であった。重傷は見当たらないが火傷が体の何箇所かに見える。

全力の炎の余波を受けてそれならば、もし直撃を受けたならば――

シンを見つけてからのタンニーンの動きは迅速であった。

吹き荒ぶ風。それはタンニーンが息を吸い込む際のものであった。タンニーンの爆炎で未だに燃える大地。揺らぐ炎が、舞う火の粉が、立ち昇り消え行く筈の熱が全てタンニーンへ吸い込まれていく。

場に漂っていた魔力を再び体内へと取り込んでいるのだ。

取り込んだ魔力に自身の魔力を上乗せし、先程以上の炎を先程以下の時間で放てる様にする。

狙う的は見えている。決して外すことは無い。

全てを消し去る煌炎がタンニーンより解き放たれた。

◇

眩しい。タンニーンから放たれた火球を見た第一印象はそれであった。まるで太陽を間近で見ている様な気分である。

熱。速度。大きさ。どれをとっても今まで見た中で最高と呼べる炎であった。直撃すれば跡形も無くなってしまうであろう。

神罰が顕現したかの様な攻撃を前に、シンは交差していた両腕を解き、それを前に突き出す。

太陽の如き炎を前にして突き出されたシンの両腕はあまりに矮小であった。対比となる大きさは勿論のことだが、構える両手は共に焼け焦げ、炎の熱によって爛れ、傷付いている。一目で受け止めるのは無謀だと分かってしまう。

だというのに、両手を突き出して構えるシンの表情は、焦り、恐怖と無縁の涼やかなものであった。人によっては、絶体絶命の状況を前にして諦観していると捉えるかもしれない。それ程までに落ち着いたものであった。

シン自身、今からすることに対し絶対的な自信が有る訳では無い。シンとて絶対に無理なことがあれば、逃げるという選択もする。ただ今回は背を向けて逃げた所で無駄だと思い、それならば今思い付いた方法で真正面から挑んだ方が生き延びられると思ったからに過ぎない。

顔を炙る炎の熱。森でのケルベロスとの戦いを思い出す。尤も、あの時と比べれば迫る炎の桁が違うが。

しかし、シンもまたあの時とは違う。

黒く焦げた左手から感じる脈動。まだ完全に起きてはいないが、もう少し刺激を与えれば目を覚ます様な気がした。そして、熱く滾る右手。タンニーンの炎を取り込んだ時から末端から、端にかけて熱いものが行き場を求めて循環している感触があった。

もし、これを上手く操れたら――

シンが思い出すのはライザーから教わった炎を扱う時の基礎。シンが炎を伸ばす時にイメージしていたのは真っ直ぐな『軸』であった。それに炎を伝わらせ対象まで届かせようとしていた。

ケルベロスの時に使ったのはそれを逆に応用したもの。ならばもっと『軸』を伸ばし、更にそれを両手で行ったのならば――何が起こるか。

シンの両手に炎が点る。燃え上がる双炎。爆ぜる音が立つ度に、左手から焼け焦げた破片が落ちていく。

タンニーンの炎に向かって炎上する両手を突き入れる。入れた瞬間、炎越しでも分かる圧倒的熱量。耐性が無ければ、両手が灰を通り越して気化していたであろう。

炎の中を真っ直ぐ進んでいく二つの『軸』。

時間の猶予は無い。全身を呑み込まれるどころか、炎が肘から上に来た段階でお終いである。

刹那の時間が何千にも引き伸ばされて感じる。

タンニーンの炎が手首を超える。『軸』はまだ突き抜けていない。
腕の半ばまでくる。まだ『軸』は炎の中を進んでいる。
肘まで残す所が無くなってきた。まだ抜けない。
炎が肘を超えシンを呑み込む――前に伝わってくる『軸』が炎を貫く感覚。両手からそれを感じると同時に突き出していた両腕を左右に広げた。
太陽がその身を分かつ。
灼熱が裂かれる。
シンを呑み込む筈であった炎が二つに分断され、左右に走っていく。消し去られる筈のシンはその場から一歩も動くことなく、堂々と正面を見据えたままタンニーンの業火を捌いたのだ。
全力の炎が断たれる光景に、激情するタンニーンも流石に思考が一瞬止まる。
炎を捌けたシン。だが無傷という訳にはいかなかった。突き入れた両手から煙が昇り、傷の酷さが一層増している。まだ動くことが奇跡の様であった。
互いに負傷はしているものの、傷の深さと体力の消耗ではシンの方が圧倒的に不利。タンニーンの全力はシンの全力だけでは足りず、命懸けまでしてようやく回避するのが精一杯なので、無理も無いことであった。
これ以上時間をかければ、どちらに勝利が傾くかは明白である。

動揺からすぐに立ち直ったタンニーンは、もう一度息を吸い込み、ブレスを吐く準備に入る。胸部から喉にかけて赤く輝き始める。体内で創り出している炎がタンニーンの分厚い皮膚や鱗を赤熱させているのだ。

ほぼ全ての攻撃がシンからすれば必殺の域であるというのに、その中でも最強の一撃を惜しむことなく使い続けてくるタンニーン。その殺意の高さは計り知れないものである。

シンもまた躊躇することなく、持てる全てを己の両腕に注ぎ込み始める。

炎を捌いた時、ふと思い付いたことがあった。

炎の射線や軌道を逸らす為に使用していた『軸』。今までは左手から一本しか出せなかったそれが、タンニーンの炎を吸収したことで右手からもう一本出せられる様になった。

もし、この二つの『軸』を一つに重ね、そこに持てる力を注ぎ込んだら一体どんなことが起きるのか。

言うまでもなく何の確証も無しに実戦でそれを行うのは愚行である。だが、今もシンの体の中では燃え盛る様な魔力が行き場を求め、その熱を高めながら暴れ回っている。

熱によって突き動かされる衝動に抗えない。冷静な判断をするべきだと頭では分かっていても、自らを止めることが出来なかった。

焼け爛れたシンの両腕から炎が噴き上がる。赤炎は空気を焦がし、音を立てず静かに燃え盛る。左手に入った亀裂がその炎の勢いで更に大きくなり、隙間から生じる光の量も増える。溢れた光は、炎の中に薪の様にくべられ糧となる。

轟音のタンニーンに対し、静黙のシン。対照的な姿勢だというのに、共にその身に灼熱を纏っている。

タンニーンの口から炎が零れ始める。シンもまた最大まで高めた炎を掲げ始め、それを頭上で一つに合わせようとしたとき――

突然、その炎を消し、あろうことか余所見までする。

愚かとしか言い様の無いシンの行動に、タンニーンは大口を開きそれを断じる様にブレスを吐き掛けようとする。

「待て！」

制する声。それを命乞いと捉えるタンニーン。それに聞く耳を持たない。

タンニーンの口からブレスが吐かれる――その直前。

「こっちへ来るな！」

怒鳴る声。焦りはあるものの恐れが含まれていない。このことがタンニーンの思考に僅かな疑問を生じさせる。

「おっさん！　ちょっと待ってくれ！」

「ヒーホー！」

その時、滑り込む様にして二人の間に割って入ってくる二人の人物。修業場で待っている筈の一誠とジャックフロストであった。

怒りに囚われていたタンニーンの頭が、この時一気に冷える。

止めなければ、外さなければ、逸らさなければ。だが無情にも一度動き出したものは止められない。一誠たちが現れたタイミングは文字通り間が悪く、体内で高められたブレスは既に喉を通り、口内から吐き出される寸前であった。

（何をしてもいい！　避けろ！）

タンニーンの考えとは裏腹に、龍王の獄炎が放たれる。その時、頬に強い衝撃が走った。何者かがタンニーンを背後から殴りつけたのだ。無理矢理首の向きを変えられたことによって一誠たちへの直撃は避けられた。しかし、例え外れたとしても余波だけで十分殺傷の域にある。ましてや熱に弱いジャックフロストなど、瞬時に蒸発してしまうだろう。

外れた炎弾が一誠たちから大きく右に逸れた後、森に着弾。炎がドーム状に広がりながら周囲の木々を吹き飛ばし、広がる熱波が森を焼き尽くしていく。

「そこから動くなよ！」

見えない熱波が一誠たちに襲いかかろうとした時、声と共に空から降り注ぐ光の壁。

一枚だけではなく同時に何枚も重なって降り、一誠たちを守る様に囲む。
光の壁は熱波を完全に遮り、中の一誠たちは汗一つ掻くことはなかった。
「はあ……冷や冷やさせるなよ、お前ら」
「アザゼル先生！」
空からアザゼルが、安堵の息を吐きながら光の壁の縁に立つ。
「間一髪、ってところか」
これ以上何かをさせない様にタンニーンに肩を回すマダ。その体はタンニーンと同じ大きさにまで巨大化していた。
「待っていろと言っただろうが」
光の壁が消え去り、地面に降りたアザゼルが目を細めて一誠たちを睨む。
「うっ……すみません」
「正直、寿命が縮むかと思ったぜ。お前らの姿を見つけたときは……」
先に出た筈のアザゼルたちよりも一誠たちの方が先に着いたのは、偶然と呼んでいいものであった。アザゼルたちはシンとの待ち合わせ場所を大まかにしか知らず発見が遅れ、一方の一誠たちはジャックフロストの仲魔共有の探知を使ってシンの位置に最短で向かっていた。更にそこでシンとタンニーンが場所を変えながら戦闘。その方角が、偶々一誠たちがいる方角だったのだ。あの時、シンがタンニーンよりも先に一誠たちの

存在に気付いたのも、ジャックフロストの存在を感じ取った為である。
「……派手にやられたな」
「――生きてはいます」
「そういう問題じゃねぇよ」
シンの両腕を見て、一瞬アザゼルは表情を歪めた。
「イッセー、お前らはそいつ連れて一旦リアスの屋敷に戻れ」
アザゼルは、懐から一枚の紙きれを取り出し一誠に渡す。紙には魔法陣が描かれており、見覚えのあるそれは転送用の魔法陣であった。
「それを使えばすぐに屋敷に跳べる。そんで俺たちが戻るまで待っていろ」
「え、でもタンニーンのおっさんは――」
「こいつとは俺たちが話をする。いいから早く戻れ。一秒でも早くそいつの治療をしてやれ。分かったな？」
さっさと行けと言外に含ませる強い口調に、一誠はそれ以上何も言えずアザゼルの指示に従う。
「大丈夫か、その怪我。早くアーシアに見せないと……」
そう言って一誠はシンに肩を貸そうと思い、シンの腕を首に回す。
「あっちいいいい！」

首に腕が触れると同時に一誠は叫ぶ。まるで焼けたアスファルトや鉄にでも触れた様な感覚であった。
「どうなってんだ！　お前の体温！　というか何でお前上半身裸なんだ！」
「……成り行きだ」
「どんな成り行き!?　ジャックフロスト！　冷やせ！　冷やせ！」
「ヒホー！」
一誠に言われてジャックフロストがシンに息を吹き掛ける。雪の混じった『氷の息』は、シンに触れると一瞬音を立てて蒸発する。
「騒いでないでとっとと行け」
さっきよりも少し強い口調で言われ、一誠はシンの隣に立ち、ジャックフロストを側に寄らせると魔法陣に触れる。描かれた魔法陣が発光すると、一誠たちは光に包まれ目的地へと転送された。
「――さて、少し話をするか、タンニーン」
「話をするまで逃がさねぇ……つもりだったがそんな心配はねぇな」
マダはあっさりとタンニーンから手を離す。
タンニーンは項垂れ、その背に生える翼も萎れた様に畳まれていた。ついさっきまで殺気溢れる姿は見る影も無く、同一人物かと疑ってしまう程に弱々しい姿を晒してい

た。

偶然とはいえ、危うく自らの教え子と友人の忘れ形見を殺めてしまいそうになってしまったことに、少なからず衝撃を受けていた。理性を無くし暴れ狂う元龍王とは思えない醜態。皮肉にも一誠たちによって冷え切った頭に、その事実が深く刺さる。

マダとアザゼルの介入が無ければ――最悪の想像をしてしまい、吐き気すら催す。

「……無様だな」

「自己嫌悪していないで何があったか詳しく話せ。あいつを襲ったことも、あいつを襲った理由も全部だ」

「……ああ」

何を思い、何を理由にシンへ襲いかかったのか、本音を何一つ隠さずにタンニーンは語り始める。

既に拭い切れない醜態を晒した。最早これ以上の恥は無いと思い、淡々とタンニーンは語り続けた。

◇

一誠たちによってグレモリー邸へと連れ帰られたシンは、疲労からすぐに眠りについ

た。その間、夢か現実かあやふやな感覚の中で、聞き覚えのある声らが飛び交っていたような気がする。
『イッセー、どうした――シン！　その怪我はどうしたの！』
『事情は後で話しますから、兎に角医者を！』
『ヒホー！　早くシンを助けてホ！』
『グルルル……焦ゲテル……美味ソウ……少し齧ッテイイカ？』
『ダーメ！　シンを食べたらアタシ怒るよ！』
『冗談ダ』
『笑えないよ～』
『アーシアを呼んできて！　あと可能ならばフェニックスの涙も！』
『リアスお嬢様。そのことなのですが……』
『何？　ど、何処で手に入れたの、そんなに大量のフェニックスの涙を！』
『匿名で間薙様宛に今送られてきました』
『君を保護する為に冥界へ連れてきたのに、こんな目に遭わせるなんてね……』
『あの時、一人で向かわせずに私も同行すべきでした。私の浅慮が原因です』
『いや、全ては私の不測が招いたことだ。責を負うのは私だ』
『いえいえ。全部の責任は私が取るべきだよ。サーゼクス君』

『貴方は――』

目が覚める。目線の先にあるのは高い天井に吊られた豪華なシャンデリア。続いて体を起こす。体中の筋肉が引き攣り痛みが生じるが、耐えられないものではない。

上体を起こして周囲を見渡しながら、状況を確認する。今はベッドの上で、そこから見覚えある光景を見ている。記憶に混乱が無ければグレモリー邸で、シンが泊まっている部屋であった。周りに人は居らず、部屋の中にはシンだけである。

そのままベッドから降りようと掛けてあったシーツを掴む。その時、シーツを掴んでいた右手に大小様々なガーゼが貼られていることに気が付いた。もっと傷は酷かった筈だが、眠っている間に治療されたらしく、三分の一は治っている。

今度は左手の方を見る。指先から肘まで包帯で隙間無く巻かれていた。明らかに重傷である。試しに指を一本曲げてみた。剥き出しの神経を紙やすりで擦ったかと覚える程の深く、鋭い痛みが脳の奥底へと突き刺さる。曲げた指を元に戻す時も同じ痛みが電流の様に突き抜けていった。尤も、それを表情に出していないので、傍から見れば大したことの無いように見えるかもしれない。

しばらくの間、ベッドの上で動かず自分の左手を凝視するシン。すると扉をノックする音が聞こえてきたので返事をする。扉が開けられ、その向こうから姿を見せたのはサーゼクスであった。

「もう目が覚めたのかい？　良かった」
　安堵した表情を見せるサーゼクス。
「どれぐらい眠っていました？」
「一日ぐらいだよ」
　サーゼクスがベッドの側に来たのでシンはベッドから降りようとするが、サーゼクスは手でそれを制止する。
「安静にしていてくれ。君に万が一のことがあったら君は勿論だが、リアスにも申し訳が立たない」
　そう言われ、シンは大人しく元の位置に戻る。
「先に君の両腕のことなんだが、今は痛むだろうが安心してくれ。その傷は必ず完治する。傷跡一つ残さないと誓わせてもらう。ただ左腕の傷は右に比べて深い。治るまで少しだけ時間が掛かると思う」
「そうですか」
　普通は安心するものだが、他人事の様にそっけない返事。
「……君には謝らないといけない」
「あのドラゴンのことですか？」
　何が言いたいのかを察し、先に話題に出す。

「そうだ。あれは――」
「そこから先は僕から話させてもらうよ、サーゼクス君」
サーゼクスの言葉を遮り、突如としてその人物は現れる。音もニオイも、魔力も気配も無く、今この場に貼り付けられたかのように出現した。
見た目は中年にさしかかった男性。皺の無い新品同様の品の良いスーツの上から外套を纏い、赤と青の派手派手しい色味がかった頭髪は、毛一つ跳ねることなく整えられている。切れ長の鋭い目から覗く瞳は頭髪と同じ赤と青で、左右の色が違う。
現魔王を君付けで呼んだこと、そして、その身から放たれる妖しい気だけで只者では無いことが分かる。
「やあ、初めまして間薙シン君。シン君と呼んでも良いかな？　成程。君とは初対面だけど君を見ると重ねざるを得ないな――『魔人〈彼ら〉』と」
厳ついとも怖いとも言える顔付きからは想像出来ない程、親し気な喋り方をする。
「ああ、自己紹介が先だったね。僕の名はメフィスト・フェレスです。そこそこ名の通った悪魔だよ」
悪魔と言えば、まず候補に浮かぶ名。『光を愛せざるもの』という意味を持ち、戯曲や本などで記される有名な悪魔である。
「訳あって今は冥界ではなく人間界の方で暮らしているんだけど、事情が事情だから直

接会いに来させてもらったよ。流石にこの件は人間界から映像という訳にはいかないからねぇ」

メフィストはそこで笑みを消し、真面目な表情となる。

「君を襲ったタンニーンは僕の『女王』。つまり眷属さ」

タンニーンの主。つまり古参の悪魔であり、相当の実力の持ち主であるらしい。

「彼は滅びゆくドラゴンという種族を出来る限り救済したいと言って僕の眷属になったんだよ。やー、龍の鑑、まさに龍王の器だよねぇ。でも今回のことはそれが仇になってしまったようだね」

メフィストは、タンニーンが何故シンを襲ったのかを説明し始めた。

ドラゴンという種が環境の変化によって数を減らしていったこと。そこにマタドールが竜狩りという行為をしたせいで更に激減させたこと。そのときの怒りをタンニーンは根深く持っていること。

「――ということさ」

メフィストが語り終えるまで、シンは口を挟まず黙って聞いていた。

「こんな風に説明をしているけど決して同情を誘っている訳では無いよ。ただ本当にタンニーン〈かれ〉というドラゴンを君に知って欲しかったんだ。彼は決して我欲で動く様なドラゴンじゃない、今回のこともしかしたら彼の背負っているもの故の行動だっ

たかもしれないねぇ」
　可能ならばタンニーンに対して温情を与えて貰いたい。メフィストの言葉の端々にそれを感じ取っていた。シンは怒る訳でも無く、静かにメフィストを見詰める。
「色々と言わせて貰ったけど、今回の件は間違いなくタンニーンが加害者で、君は被害者だ。タンニーンもそれを認めている。彼をどう裁くか、それは君の考え次第だ」
「俺次第、ですか……」
「重罰を望むのならそれも仕方ない。速やかに然るべき罰を与えることになるだろうねぇ。――ただ」
　メフィストは床に片膝を突き、ベッドに座っているシンと同じ目線に合わせた。
「たった一度でいい。彼と言葉を交わしてくれないか？　彼という存在に触れてほしい。それが叶うなら僕の持つ知識、財、力を君の望むままに譲ろう」
　紛れも無い懇願であった。長い刻を生きる悪魔が彼からすれば生まれて間もないに等しいシンに対し、嘆願している。それも自分よりも若い悪魔であるサーゼクスの前で。
　話を聞く限り、メフィストはタンニーンに命令も指示も与えず放任している。仮にタンニーンを失ったとしても、メフィストに損失が有る訳では無い。それでもメフィストはタンニーンの助命を願っている。

真剣に乞うメフィストに対し、シンの答えは――
「いいですよ」
――非常にあっさりとしたもの。メフィストの言葉を聞いて悩む間もない即答であった。
これにはメフィストも目を数度瞬きする。
「え？　本当に良いの？　自分で言うのも何だけど結構虫の良い話をしているつもりだよ？」
「元々話をしたいと思っていました。だから望み云々は結構です」
「いやいや。悪魔として契約は大事だからね？」
「だからいいです」
「だめだめだめ。僕の方から言い出したんだからきちんと何かしらの代価は受け取って貰うよ？　じゃなきゃ格好がつかないよ」
要らないと言ってもメフィストの方は頑として譲らない。このままだと埒が明かないので、とりあえず代価は保留という形となった。
「すまない。ありがとう、シン君。じゃあ、タンニーンと会う日取りなんだけど――」
メフィストの言葉を最後まで聞かずに、シンはベッドから降りる。
「今から行きます」

「今からっ！　――君って変わっているって言われない？」
「さあ？」
メフィストの言葉を軽く流しながら動き易い服装に着替えようとしたとき、勢い良く扉が開かれた。

◇

タンニーンとシンとの戦いが終わった後も、休むことなく一誠は禁手化に向けての特訓を続けていた。
マダ監視の下いつも通り苦しいメニューをこなす一誠であったが、この日はそんなことが苦にならない程特訓に身が入らない。理由は、少し離れた場所で銅像の様に微動だにせず暗い目をしたタンニーンの存在であった。
一誠がシンたちをグレモリー邸に連れ帰ってから数時間後、言っていた通りアザゼルが迎えに来た。
アザゼルが一誠を修行地である山へと連れていくと、そこにはマダとタンニーンが待っていた。てっきりもう修行を見てくれないと思っていた一誠はタンニーンが居ることを素直に喜んだが、そんな一誠にタンニーンが向けたのは、その巨体から放ったと

は思えない程小さく弱々しい謝罪の言葉であった。
　偶然とはいえ一誠を殺めてしまいそうになったことを謝るタンニーンに対し、一誠はあの場に飛び込んだ自分に非があるから謝る必要は無いと告げる。だが、性根の真面目さ故かタンニーンはそれを素直に受け取ることが出来ず、自らを許そうとはしなかった。
　アザゼルが言うに、初めは一誠を教える資格は無いと言って自分の領土へと帰ろうとしていたらしいが、その際マダが――
「何だ？　シン〈あいつ〉が原因で暴れたと思えば、今度はあいつのせいにして全部放り投げるのかぁ？」
　――とかなり痛烈な言葉を浴びせ、無理矢理引き留めたという。
　修行が始まってもタンニーンは一誠と最低限の接触と会話しかせず、それ以外の時は沈黙を保ち続けていた。更にその身にはシンとの戦闘で受けた傷が今も残っている。治療を受ける様にアザゼルから言われたが、タンニーンはそれを拒否し、傷に一切手をつけていない。
（どうすりゃいいんだろうな……）
『こればかりは俺でも相棒でもどうにもできん。そもそも奴は生真面目に悩み過ぎだ』
　心の声にドライグが反応する。

基本的にドラゴンは自由に生きる存在である。良く言えば周りに縛られない、悪く言えば周りを顧みない。ドラゴンの未来を憂い、身を粉にして働くタンニーンは異端と言える。

（確かにドライグじゃ励ますのは無理かもなー）

ドラゴンは自由。その最たる例であるドライグ。三勢力が争っているときにアルビオンと戦いながら乱入して、戦争をぶち壊した者が慰めの言葉を掛けても、説得力が若干欠けるであろう。

『悪かったな。戦争のど真ん中で喧嘩する大馬鹿で』

考えが筒抜けらしく、少し拗ねた声が頭の中に響いた。

（いや、別に馬鹿にしている訳じゃ――）

その時、軽い衝撃を頭に受ける。後ろを見るといつの間にかマダが接近し、一誠の頭を軽く叩いていた。

「身が入ってねぇなぁ？」

「す、すみません！」

「……まあいいや。ちょっと休憩」

そう告げるとマダが離れていく。

一誠は戸惑っていた。いつものマダなら、もし修行中に気を抜いている様なものなら

地面に埋まる勢いで頭を叩いていた筈。断じてあんな撫でる様な一発ではない。更に休憩まで取らせるとは考えられない。一誠の死にかけた姿を見て爆笑する様な人物である。

マダもまた、タンニーンのあの様子に調子を狂わされているのではないかと思いつつ、一誠は休憩に入る。

近くの川に行き、汗でべとついた顔を手で掬った水で洗い落とす。それを数回やった後に片手で滴を払いながら、もう片方の手で近くに置いたタオルを手探りで探す。

左右に行ったり来たりし、中々目的の物に触れられない。

「もっと右だ」

そう指示され手を右に動かすと、指先にタオルの感触を捉えそのまま掴み、顔の水気を取る。

「ん？」

自然だった為につい大人しく従ってしまったが、この場に居ない筈の記憶にある声であることに気付き、タオルから顔を離して声の方に目を向ける。

「って間薙！　何でここに！　というかお前大丈夫なのか！」

負傷している筈の人物が普通に立っていることに驚き、声が思わず大きくなる。

シンは一誠と同じジャージ姿であったが、上着には袖を通さず羽織っている格好で

あった。包帯やガーゼで治療してある両腕や治りかけの傷が、一誠から見ても痛々しい。
「用事があって」
「用事って……一人でか？」
「オイラも居るホ！」
　シンの存在に注目して気付かなかったが、シンの足元にはジャックフロストも付いていた。
「お前もここに何の用だよ、フロ助」
「シンと一緒にタンニーンに会いに来たんだホ！」
　一誠は、何を言っているのか理解出来ないといった表情をしながらシンとジャックフロストの顔を交互に眺めた後、いきなりシンの両肩を掴んだ。
「お前、一体何考えてんだよ！　もし復讐しに来たって言うんなら俺はおっさんとお前を会わさないぞ！」
　殺し合い同然の戦いを昨日したばかりの二人が顔を会わせるなど黙って見過ごすことも出来ず、またそんな相手にすぐに会いに来たシンの正気を疑ってしまう。
「別に戦いに来た訳じゃない」
　シンは右手で肩を掴んでいる一誠の両手を軽く払う。

「――本当だな？」
「一言、二言言いに来ただけだ」
一誠が探る様な目線を向けるが、シンの微動だにしない鉄の如き無表情から何かを読み取れる訳も無く、結局付き合いの中で得た経験から信じることとした。
「分かった……俺がおっさんのとこに連れて行く」
先導してシンらを案内する一誠。万が一の時は自分が止めようと密かに決意する。
「ん？」
マダは一誠が戻ってきたことに気付き、その後ろから付いてくる人物を見て、ほんの少しだけだが驚きで動きが止まる。しかし、それ以上は何もせず声を掛けることも無く、一誠らを静観する。
タンニーンもまた、シンとジャックフロストが現れたことに気付いたが、こちらは一切驚く様なことはせず、何処か納得した態度で自分の方からシンたちの方へと歩み寄っていった。
向かってくるタンニーンに一誠は緊張する。あの時の様に全身から殺気や怒気を振り撒くことは無かったが、その不気味な程落ち着いた反応にかえって不安になってくる。
やがて両者の距離がある程度まで近付くと、タンニーンは徐に地面に片膝を突いて座

り込む。
「言い訳は一切しない。俺がお前を殺そうとしたのは間違いなく事実だ。その報いを受ける覚悟は出来ている」
タンニーンはシンに向けて頭を垂れ、手に届く位置にまで下げる。
「この首、持っていけ」
自ら犯した過ちを正す為に自らの命を捧げようとする。その行為に一誠は声を出しそうになるが、それよりも先にシンが動いた。
乾いた音。タンニーンの鼻先にシンの左手が叩き付けられていた。
拳ではなく女、子供を叱る様な平手打ち。それを受け、タンニーンの方は意味が分からず困惑する。
「大した怪我じゃない」
叩き付けていた左手を離し、見せつける様にひらひらと軽く振ってみせる。
そして、それだけ言うとあっさりとシンは身を翻した。
(それで終わりっ!)
確かに一言、二言言いに来たと言っていたが、本当に一言で終わらせてしまったシンに、一誠は内心で突っ込んでしまう。
あれだけ覚悟を見せたタンニーンは、あまりに簡単に下がっていくシンの姿に絶句し

てしまう。だが、シンと入れ替わる形で今度はジャックフロストが前に出た。
「ヒホ！」
「……お前か。お前にも詫びなければいけないな」
謝罪の言葉を口に出そうとしたとき、ジャックフロストが一際大きな声を出した。
「タ、タンニーンは王様し、失格だホ！」
「……はっ？」
急にそんなことを言われてタンニーンは呆けた声を出す。元より龍王の名はとっくに返上している。
「そ、そんな情けないす、姿を王様は見せちゃいけないホ！　実はさ、最初からオイラは気付いていたホ！　タンニーンは、お、王様としてまだまだってホ！」
聞いている方がいたたまれなくなる程の棒読み。左右に忙しなく動く目。落ち着きの無い態度に、一度たりとも止まらない胸の前での指の動き。一目でジャックフロストが心にもない嘘を吐いているのが分かる。
「ほ、ほ、本物の王様がどういうものか、いつかタンニーンにオイラが見せてやるホ！」
ビシリと指差し宣誓するジャックフロスト。暫しの間、シンを除く皆がポカンとした様子であった。
「ふ、ふ、ふはははは。言ってくれるな！　そうか俺は王としては未熟か！　く、はは

ははは。そんなことを真っ向から言われたのは初めてだ！」
沈黙を破ったのはタンニーンの笑い声であった。一頻り笑うとタンニーンは、ジャックフロストを正面から見つめる。
「お前が王になるときまで、この命、大事にしておこう」
「ヒホ！　待ってるホ！　タンニーンやオイラの王様以上の王様になってやるホ！」
二人が喋っている間に一誠がシンに近付き、小声で話し掛けてくる。
（これってお前の指示か？）
（あいつ自身の言葉だ）
（そうか……何はともあれおっさんが少しだけでも元気になってくれて良かった。お前もありがとな）
（大したことはしていないさ）
それだけ言い残すとシンはジャックフロストを手招きし、来た時同様にあっさりと去って行く。
「おーい。何時までも喋ってないでとっとと再開するぞー」
「は、はい！」
マダの声に反応し、一誠は慌ててマダの下に走り寄っていく。
「お前は――もう少し後でいいや」

タンニーンに視線を送った後、一瞬だけ何も無い場所を見る。
マダが一誠を連れていったのを見て、タンニーンは独り言葉を洩らす。
「いるのだろ？　メフィスト」
「あれ？　やっぱりばれてた？　上手く消えていた筈だったのになぁ」
虚空から浮き出る様にメフィストが現れる。
「俺やあいつの勘を侮るなよ」
「怖いなぁ、全く」
「お前にまで心配掛けるとはな」
「そんな風に責任を感じるからシン君には僕の名前を出さないでもらっていたんだけど、いやぁ、台無しにしちゃったなぁ」
苦笑を浮かべるメフィスト。
「正直、少し冷や冷やしたよ。君が首を捧げるなんて言った時は。――でも、もうそんな気はないんだろう？」
「子供らにあれだけ気遣われておいてこのまま腐り続けたのなら、ドラゴンとして、年長者としての沽券に関わる。それに約束もしてしまったからな、あいつが王になるのを見届けると」
「やっぱり君は真面目だねぇ。ところでさ、一つ提案なんだけど」

メフィストが指を二本立てる。
「君の尽力でドラゴンの数は安定してきた。多分、余程のことが無い限りこのまま数は増え続けていくだろうね。つまり君の当初の目的はほぼ達成出来たと言ってもいい」
そこでメフィストは指を一本折る。
「余裕も出来てきただろう？　そろそろ返していたものを戻す時が来たんじゃないかなぁ？」
「――メフィスト、お前は俺にもう一度龍王の座に戻れと言うのか？」
「どうせ待つなら同じ高みで待つのがいいんじゃないかな？」
タンニーンに見せる様に残った指を左右に振る。
「ふっ、成程。王として未熟と言われたばかりだ。もう一度目指すのも一興か」

◇

一誠たちと別れたシンたちはグレモリー邸に帰る為、近くに描いている転送魔法陣へと向かう。
目的のものはすぐに見つかり、帰還しようとしたとき、声が掛けられる。
「無茶をしましたね」

現れたのはセタンタであった。口振りからして、先程のタンニーンとのやりとりを見ていたらしい。
「どうしたんですか？」
「一応護衛に。杞憂でしたが。それと貴方に渡すものがありまして」
セタンタが封に入った一枚の封筒をシンに渡す。
「サーゼクス様からリアス様と貴方に至急渡す様にと」
「部長と俺にですか？」
受け取ったそれには差出人の名前は書いていない。裏面を見た時、僅かにシンの表情が険しくなる。今時殆ど見ることはない封蝋が施されていたが、その蝋に刻まれた紋章は見覚えがあるものであった。
傷付いた左手を動かしながら封を開け、中の手紙に目を通す。
「何て書いてあるんだホ？」
「……」
「シン？」
気になって声を掛けるが、反応が無い。シンの表情の険しさは先程よりも深いものになっており、何か悩む様な表情であった。

◇

夜。蝋燭の明かりの下、黒と白のチェス盤に向き合い沈黙し続ける一人の女性。
黒の駒からは戦車が一つ取り除かれ、白の駒からは騎士が一つと戦車が二つ除かれている。
その盤面を静かに見つめる女性は、時折時計の方に目を向けていた。
チェスの打ち筋に悩んでいるというよりも、別のことで悩んでいる様子である。
その時、部屋の扉をノックする音が響き渡る。
女性は椅子から立ち上がり、扉の前に立つと、ゆっくりと深呼吸した後に部屋の扉を開く。
扉の向こうには、彼女が待っていた人物が立っていた。
「まずは来てくれたことにお礼を言います」
「いえ、色々とお世話になっているので」
「ここに来てくれたということは、了承したと考えていいんですね？」
「はい」
女性は扉の向こうの人物を部屋に招き入れようとするが、その直前に立ち止まり、念を押す様にして確認する。

「本当にいいんですね？　私たち――ソーナ・シトリー側としてレーティングゲームに参加してくれることに？　間薙君？」

扉の前に立つ人物――シンは、答える代わりにソーナの部屋へ足を踏み入れた。

決意、闘志

「ほれ。撃って来い。撃って来い」

左腕を突き出して構える一誠に向かって、マダが指招きしながら挑発する。

限界まで倍化を済ませている一誠は、全魔力を左手に集中させ、そこからマダの巨体をも上回る魔力弾――ドラゴンショットを放った。

山合宿で放った時とは質も大きさも上回っている。直撃すればこの山ごとマダを消し去ってしまうかもしれない。

しかし、マダは迫るドラゴンショットを見て口の端を吊り上げて笑うと大口を開ける。そして、ガチンという歯が噛み合う音がしたかと思えば、マダに迫っていた筈のドラゴンショットは跡形も無くなってしまった。

「まあまあ。と言ったところかぁ」

鋭い歯に爪を当て、見せつける様に掃除する。口の端からはドラゴンショットの残骸らしき微小の魔力が、煙の様に立ち昇っていた。

「ならば、これはどう対処する?」

タンニーンが息を吸い込み、胸が膨らんでいく。ブレスを吐く準備をしているのを見

た瞬間、一誠はその場から走り出す。
だが、それは逃走の為に走り出したのではない。一誠は近くに流れる川にまで移動する。
足首まで水に浸かると、タンニーンの方を注目しながら左拳を足元に向け、腕を振り上げる。
「ガアアッ！」
咆哮と共にタンニーンの口から、先程のドラゴンショットと同等の大きさの炎弾が放たれる。
距離があるというのに肌や目が一気に乾いていく程の熱気。加減はしてあるが、それでも修行初日の一誠だったならばその場で腰を抜かしていても可笑しくはなかった。
しかし、マダとタンニーンから連日地獄そのものの様な修行を受けてきた一誠には、その炎に対する恐怖は無い。棺桶に片足を何度も突っ込む様な体験をしていれば、嫌でも慣れてしまう。
慌てず臆せず、一誠は左拳を川面に突き入れ、更にその下の砂利まで沈み込ませる。拳が埋まると同時に増大している力を『赤龍帝の贈り物』によって譲渡し、一誠を中心にした水の消火能力を高める。
感覚的に倍化している時間がもう間もなく終わる。時間切れになるよりも先に、一誠

は砂利ごと水を掬い上げながら、その左手から再びドラゴンショットを放った。
土砂が混じった水が巻き上がりそれが口を開いたかの如く、タンニーンの炎弾を包み込む。
爆発しながら広がっていく水蒸気。消火能力が高まった水や土砂が一気に熱を奪い、炎を鎮火させていく。が、それでもタンニーンの炎を完全に鎮めることは出来なかった。ただ、巨大な炎の塊は拳大程の大きさにまで縮小してしまい、一誠が水に濡れた『赤龍帝の籠手』で叩くと、シャボン玉の様に呆気なく消え去ってしまった。
『Ｒｅｓｅｔ』
同時に一誠の倍化も解除される。軽かった体に錘の様な疲労が圧し掛かってくるが、マダを担いで全力疾走していたときの疲労に比べれば遥かに楽なものである。
「あれぐらいは防ぐぐらいには成長したか。初日と比べれば、大分力が高まってきたな。神滅具を連続で使用してもその程度で済んでいる。体力の方も十分備わったな」
「及第点ぐらいはやってもいいかもなぁ。まあ、それぐらいになってもらわなきゃ俺たちの面子が立たないってもんだ」
いつもは弱い、遅い、立て、寝るな、死ぬなと言いながら殴る蹴る投げる焼く叩き付ける等をしてきたマダとタンニーンが一誠の成長を認め、褒める。
「うっす！」

褒められた一誠は、勢い良く頭を下げて二人に礼の意思を示した。
冥界に来る前もリアスによって鍛えられていたが、それでも同年代と比べれば少し体つきが良い程度のものであった。だが、この山でマダとタンニーンによる地獄の修行を潜り抜けてきた一誠の体は無駄なものが削ぎ落され、太く、厚く、逞しいものへと生まれ変わっていた。
水面も映る顔がふと目に入る。鏡など碌に見ない生活をし続けてきたせいで、自分の顔を久しぶりに見た一誠。我ながら少し精悍な顔付きになった、と思う。
「最初見た時は一日持つか不安だったが……良く喰らい付いてきたものだ。――だからこそ惜しいな。あと一月、いや半月ほどあればお前を禁手にまで至らせられたかもしれない」
タンニーンは申し訳なさそうに溜め息を吐く。
タンニーンの言葉から分かる通り、一誠はこの修行の最大の目標であった禁手化に到達することが出来なかった。
そして、今日は八月十六日。レーティングゲーム前に行われるパーティー。修行で疲労した体を回復させる為の休養日を入れて修行出来る期間は今日までであった。
「折角、色々してもらったのに――」
「こればかりはお前のせいじゃねぇよ。俺たちがもっと効率良くお前を鍛えていれば済

んだ話だ。こんなことならもっと彼奴に頼んでも神器のことをもっと詳しく教えてもらっとけば良かったぜ。あーあ、アザゼルにでかい口を叩いた手前、だっせぇなぁ、俺」

一誠が期待に応えられなかったことを謝ろうとするが、その言葉を遮り、マダは四本の手を頭の後ろで組みながら空を見上げる。心なしかその顔は悔しそうに見えた。

「でもまあ、本命は出来ずとも『あれ』と『あれ』をほぼ完成させたのは偉いぜぇ、イッセー」

「マダ師匠の指導のおかげっす！　あとは実戦だけです！」

二人で盛り上がっているが、タンニーンは『あれ』と『あれ』が何のことか全く知らない。一日の修行が終わると一誠がマダと共に山の奥で行っているので、詳細については分からない。疲労困憊の体を引き摺りながらも毎日欠かさずに行っていたことから余程執着しているか、凄まじいものなのであろう。

「一体どんなことが出来る様になったのだ？」

一誠やマダではなくドライグに尋ねる。

『……口が裂けようとも俺が言うことは無い』

だが、返ってきた答えは拒否であった。何故か悲壮感を感じさせる口調である。

「ふっふっふっ。今おっさんに見せられるのはこんなぐらいかな」

川から上がっていた一誠が荷物を纏めている場所からペットボトルを一本取り出す。

容器の中に三分の二程水が入っていた。
それを、神器を発現させている左手で掴むと、意識をペットボトルに集中させる。するとパンという音を立てペットボトルのキャップが飛び、飲み口から水が零れ出す。どう見ても零れる筈の無い水が溢れ出ていくのを見て、タンニーンは訝しむ表情となった。
それを見て、一誠は悪戯が成功した子供の様に笑うと、ペットボトルの水を一気に呷り、乾いていた喉を潤す。
「……ん？」
水を飲み終えた一誠から怪訝な声が洩れる。何か今、急に体の中で異変が起こった様な、何とも言えない曖昧な感覚が全身を走った気がしたのだ。
『相棒、俺を見てみろ』
ドライグが話し掛けてきたので、左腕を見る。
「何だこれ？」
光沢のあった赤い籠手が、今は埃でも被った様なくすんだ色に変化し、手の甲の中心に備わっている宝玉にはいつもの光が点っておらず、切れた電球の様な薄黒い色に変色していた。
明らかに只事では無い。様子を確かめる為、一誠はいつも使っている様に倍化を開始

させるが、反応は返ってこなかった。
「動かない……一体何が起こったんだよ！　ドライグ！」
『まさかこのタイミングとは……相棒、今相棒の神器は曖昧な状態になっている』
「曖昧？」
　ドライグが言うには、修行により力を高めたことで神器が成長し、次の段階へと進む分岐点に立ったのだという。だが、問題なのは神器が単純にその性能を高める方向に進むのか、あるいは禁手化という別次元の段階に進むのか混乱した状態になっているらしい。
「成程ねぇ。今日一日隙間無く鍛えてやるつもりだったが、逆に下手なことは出来なくなったなぁ」
『その通りだ。鍛え続ければ神器が目を覚ますかもしれないが、恐らくは禁手では無い。ただの性能の底上げだ。禁手に至るには使用者の心に劇的な変化が起きなければならない』
「そうか、そうか」
　納得した様子で首を縦に振りながら、ごく自然な動きでマダが一誠に近寄っていく。何気無い動作であったかもしれないが、タンニーンはそれを見た途端嫌な予感がした。
「イッセー、そこを一歩も動くなよぉ」

「はい？」
機能停止した『赤龍帝の籠手』に気を向けていた一誠は、急にマダから声を掛けられ意味が分からず声の方に意識を向ける。
次の瞬間、ただでさえ大きなマダが一瞬にして数十メートルもの巨体に膨れ上がったかと思えば、いきなり拳を振り上げ、振るう。
突然の展開に一誠の脳が追い付かないうちに、自分よりも大きな拳が真正面から迫る。
（え？　あれ？　あ？　死ぬ？　もしかして？　え？　え？）
巨大な暴力が風を切り、当たれば四散するかの速度。避ける暇など無かった。
頭の中にこれまでの記憶が一瞬で駆け巡る。ここまではっきりと走馬燈を見たのは生まれて初めての経験であった。
拳の影が一誠を覆う。と、同時に体が後ろ仰け反る程の風が吹き抜けていく。
唖然とする一誠の目の前、鼻先に触れるか触れないかのぎりぎりの所で拳は急停止している。吹き抜けていった風は拳圧によって巻き起こされたものであった。
思考も体も一秒停止。三秒後に理解が追い付き、鳥肌が立ち、五秒後には全身の毛穴から汗が噴き出て、十秒後には膝から力が抜け、震え始める。
「急に、な、な！　何を！　す、すすすす！」

時間差で起きている恐怖に呂律が回らなくなりながらも、マダにこの暴挙の理由を問い質す。

寸止めしていた拳を引きながら元の大きさに戻るマダ。その際に一誠の神器を一瞥した。

「何だ、変化無しか」

がっかりした様な台詞であったが、口調は軽い。最初から何かを期待していた訳では無いらしい。

「一体何するんですか！」

ようやくちゃんと舌が回る様になった一誠が、マダの真意を問う。一誠からしてみれば理不尽な暴力にいきなり襲われたので仕方の無いことであった。

「死ぬかと思いましたよ！」

「一応寸前まで殺す気でやってたからなぁ」

「ええっ！」

躊躇なく言うマダに一誠は慄く。確かに先程の拳からは修行の時とは違う威圧感、恐怖、冷たさがあった。

「刺激が必要らしいってんで、試しに与えてみたんだがぁ。こういうのは手っ取り早く『死にそうになったから覚醒』ってのがお決まりだと思ったんだが……」

当てが外れたなぁ、と笑う。一誠からすれば笑えない。今でも気を抜けば腰が抜けそうな程である。
「もう本当に止めてくださいよー。俺、心臓が止まるかと思いましたよ」
「動くなって警告しただろ？」
「あんなの心の準備しててもびびりますよ！」
「おいおい。あれ程度でびびってたら心臓がいくつあっても足んねーぞ？　この先俺よりももっと強い奴と戦うかもしれないのによぉ」
「正直、タンニーンのおっさんやマダ師匠よりも強い奴って想像出来ないです」
この修行の間に嫌という程実力を見せつけられた一誠からしてみれば、マダの台詞に全く実感が持てなかった。
「へっ。全盛期の俺だったら敵う奴なんて殆どいなかっただろうなぁ。だが、今は昔よりも確実に弱くなっている」
「えっ？　何かあったんですか？」
「イッセー、お前は俺が何の代償も無しに色々と好き勝手やっていると思っているのかぁ？」
「はい。思っています」
マダの好き勝手、傍若無人ぶりを知っているからこそ一誠は即答する。

「なわけねぇだろうが。外で自由に動いても良い代わりに、俺はインドの神々〈奴ら〉に力の四分の三を捧げてんだよ。他所の神と手を組んだりしない為の保険と誠意代わりに」
「何？　お前はそんなことをしていたのか？」
『成程、道理で昔ほどの力を感じない訳だ』
タンニーンとドライグも初耳らしく、マダの発言に驚きつつも納得した。二人ともマダの全盛期の強さを知っている為である。
「四分の三って……じゃあ、本当だったらもっと強いんですか？」
「少なくともさっきの寸止めでお前を挽肉に出来るぐらいには、な」
マダの言葉で自分が粉砕されて散らばる光景を脳裏に描いてしまい、一誠は表情を青くした。
「しかし、何故そんなことをした？　わざわざ弱体化するなど……」
「馬鹿な真似って言いたいのか？　まあ、否定はしねぇよ。でも外でどうしてもしたいことがあってなぁ。国の外に行きたかったんだよ」
「どうしてもしたいこと？」
自由に生きているマダがそこまでしてしたいことなど、一誠には思いつかない。
「――ぶッ殺したい奴がいるんだよぉ」

変わらない平坦な口調。ここに居ない誰かに向けられた言葉だというのに、殴り掛かられた時以上の震えが一誠の全身に走る。紛れも無いマダの本気且つ純粋な殺意。こんな殺意を向けられる相手は一体どんな相手なのだというのか。

『そういうことか。お前らしいと言えばお前らしい』

「あの決着、今でも納得していないという訳か……」

マダが殺意を向ける相手に心当たりがあるらしく、タンニーンとドライグは独り納得する。

誰のことか気になったが、マダが執着している相手のことを下手に詮索すれば不機嫌になると思い、それよりも先に気になったことを聞く。

「でも、いいんですか？　倒したい相手がいるっていうのに俺の修行を見てても」

「ん？　それとこれとは別だろう。彼奴のことは殺したいほど嫌いだが、そいつの為に時間を割くのも勿体無くねぇか？」

「ええ……？」

先程までの話を聞いていた印象では血眼になって相手を探しているとばかり思っていた一誠は、決着を二の次にしているマダに困惑してしまう。

「よくよく考えてみろよ？　何で大っ嫌いな奴の為に俺の貴重な時間を捧げなきゃいけないんだ？　お前は嫌いな奴の為に人生を懸けられるか？」

「いや、そう言われるとそうなんですが……」
「だろぉ？　どうせそのうち会うことになるんだから適当なタイミングで仕掛けりゃいいんだよ。もしくはどうしても時間が空いた暇な時にでもなぁ」
あっけらかんと語るマダに一誠は何も言えなくなってしまう。よくある物語の話では自分の人生を全て懸けて復讐を成し遂げたり宿敵と決着を着けたりするものだが、マダの考えは定命では無い者特有のものかもしれない。
「……お前は本当に決着を着ける為だけに外に出たのだろうな？」
『それを言い訳にして外で好き勝手やろうと思っていないか？』
マダの言葉に最初の言葉の説得力が吹き飛び、疑わしい眼差しを向ける二頭の竜。
「へっへっへっへっへっ」
マダは答えず、笑いながら酒を呷るだけであった。

◇

全ての修行を終えた一誠は、マダと共にタンニーンの背に乗せられてグレモリー邸へと戻って来た。
タンニーンとパーティーで再び会うことを約束し、タンニーンが飛び去っていくのを

手を振って送った後、一誠はその姿に憧憬を向ける。
「やっぱりドラゴンってカッコいいな」
　最初の時は、その姿、威圧感、存在感から恐れを抱いていたが、共に行動する内に慣れ、改めてその造形に見惚れる。一誠が頭の中で描くドラゴンの姿とタンニーンの姿は重なる点が多かった。
『――俺もドラゴンではあるんだぞ？』
　タンニーンを褒める一誠に少し面白くなさそうにドライグが呟く。
「はっ。そんな神器に封印されている姿じゃ威厳もねぇよ。悔しかったらイッセーの体を利用して実体化ぐらいのことをしなきゃなぁ」
『そんなことをしたら、俺が現れる前に相棒が壊れるだけだ』
「俺越しに物騒なこと言わないでくれよ……」
　とんでもないことを何でもない様に言いあう二人に、一誠は少々恐ろしくなる。
「やあ、イッセー君」
　グレモリー邸に入る前に声を掛けてきたのは木場であった。一誠と同じジャージ姿で所々破れていたり、土汚れが付いてお世辞にも小奇麗とは言えない格好だったが、何故かそれでも様になっていた。改めて男としての造形の差を見せつけられた気分になり、内心悔しくて歯ぎしりする。

そんな一誠の心情を他所に、木場は一誠の体を上から下にかけて眺める。
「……良い体になったね。服越しでも分かるよ……」
その発言に良からぬものを感じたのか、一誠は身を守る様に自分を抱きしめながら背を向ける。
「な、何だその台詞は……俺はお前の眼の保養になるつもりはないぞ！」
「い、いや。筋肉が付いて立派な体格になったねって言いたかっただけなんだけど、そ、そんなに強く拒絶しなくても……」
生じた誤解を解こうとする木場。一応、その言葉を信じて一誠は木場の方へ向き直る。
「お前は――あんまり変わってないな」
「僕は元々細身だしね。でも今回の修行で結構肉が付いたと思うよ？　……イッセー君のを触らしてくれたら僕のも触って――」
「やめろっ！」
「べ、別に深い意味はないんだけど、ただのスキンシップで」
「深かろうと浅かろうとそういうのはやめろ！」
「いいじゃねぇか、触らせるぐらい。減るもんじゃあるまいし」
「嫌です！　きっと何かが減ります！」

三人で色々と騒がしい会話をしていると、そこに掛けられ声。
「おや？　イッセーに木場――それとマダだったか？　もう来ていたか」
ゼノヴィアの声がし、振り返った一誠と木場は揃って目を丸くする。ゼノヴィアは、頭から足にかけて至る所に包帯が巻かれていた。
「ど、どうしたんだ？　それ？　もしかして大怪我をしたのか？」
「うん？　いや、確かに怪我はしているが別に大したほどじゃない。怪我する度に包帯を巻いていたらこんな風になっていた」
そう言いながら顔に巻いていた包帯をめくる。ゼノヴィアの言った通りうっすらと傷跡らしきものが見えたが、それだけであった。
「ならいいんだけど……なんていうか、少し雰囲気が変わったか？　ゼノヴィア」
修行する前に比べてゼノヴィアの雰囲気は落ち着いている様に見えた。前の荒々しい魔力が静まってみえる。それと同時に、一誠は感覚的に相手の魔力をより鋭敏に感じ取れる様になったことに気付く。これもまたタンニーンとマダとの修行の成果であると実感した。
一誠の脳裏に突如浮かび上がる修行風景。絶対に振り向いてはいけないという条件の下、背後から放たれるタンニーンの火球を避ける修行。突如前振りも無く休憩中、食事中、睡眠中と四六時中殴り飛ばしてくるマダの修行。

「あ、あ、あああああああ……」
思い出した途端、頭を抱えて震え始める。
「イ、・イッセー君！　大丈夫かい！」
短い期間の間にしっかりと刻まれたトラウマに悶える一誠とそれを心配する木場。そんな二人を無視してマダはゼノヴィアを観察する様に眺めた後、不敵な笑みを浮かべる。
「ちょっと前までじゃじゃ馬だったのに、少しはしおらしくなったじゃねぇか、お嬢ちゃん？」
「ふっ。私をお嬢さん扱いすると痛い目をみるかもしれないぞ？　自分で言うのも何だが、落ち着いているのはあくまで外見だけだ」
「いいねぇ。その強気な感じ。そういう女を色んな意味でナかせるのは大好きだぜぇ？」
「生憎、子供の様に泣くのはとっくに卒業している」
「いや、きっとそういう意味で言ったんじゃないと思うけど……」
微妙に噛み合わない会話をする二人に、つい木場は口を挟んでしまった。
「イッセーさん！　木場さん！　ゼノヴィアさん！　それとマダさんも！」
邸宅前が騒がしいことに気付いたのか、扉を開いてアーシアが現れ、皆の姿を見て花

の様な満面の笑みを浮かべる。
「おー！　アーシア！　元気みたいだな！」
「はい！　イッセーさんも元気そうで、嬉しいです！」
小猫の一件以来の再会であり、共に大怪我も無く無事であることを喜ぶ。
「あら、外出組も帰ってきたのね」
アーシアに続いてリアス、その後に朱乃が現れ、そして最後に小猫が現れ――一誠の顔を見た途端、気不味そうに視線を落とした。
「部長オオオオオ！　会いたかったッス！」
子犬の様にリアスの下へ駆け寄る一誠。期間からすればそれほど長く空いてはいなかったが、色々と女っ気の全く無い場所で禁欲生活を送ってきた一誠には一日千秋の思いであった。
リアスは駆け寄ってきた一誠の腕を徐に掴み、二、三回ほど揉み感触を確かめる。
「随分と逞しくなったわね、イッセー。そして、おかえりなさい」
一誠の頭を両手で挟み、胸元に押し付けて抱き締める。
久しぶりに感じる柔らかな感触と甘い香りに、一誠は自分がリアスの下に帰ってきたことを強く実感し、暫くの間陶酔する。その間、朱乃が少し不機嫌そうな表情をしていたことも、アーシアが頬を膨らませて嫉妬していたことも、幸い一誠からは見えなかっ

た。
　そして、それ見てマダが笑いながら――
「なあ。あいつ、いつ刺されると思う？」
　――と木場に聞いて、木場を困らせている光景も見ずに済んだ。
「じゃあ、皆。中に入りましょう。シャワーを浴びて着替えてきたら修行の報告会をしましょう」
　一誠を離し、そう告げると皆を伴ってグレモリー邸に入ろうとする。その時、ふと一誠が気付いた。
「あれ？　間薙はどうしたんですか？」
　一人だけ姿が見えないことに一誠が疑問を持つ。皆が揃っているというのに一人だけ顔を見せない様な薄情な性格をしていないのを知っているからこそ、気になってリアスに尋ねた。
「……あの子は、今ソーナの所に居るわ」
「え？　ソーナ会長の所ですか？　何か用でもあったんですか？」
　理由が分からずに聞き返してしまう一誠であったが、朱乃、木場、小猫は、ソーナの所に行く理由を察し、問う様な眼差しをリアスに向ける。
「……修行の報告会の時に言うつもりだったけど、この場で言うことにするわ」

　真剣な表情を浮かべながらも、次の言葉を言うまでリアスの口の動きは重かった。
「今度のレーティングゲーム、シンはソーナ側のメンバーとして参加するわ」
「はああああああ!?」
　思ってもみないことを言われ、一誠は思わず声量が狂った声を上げてしまう。ゼノヴィア、アーシアも予期せぬことであり、片方は目を丸くし、もう片方は口を手で押えて驚きを露わにする。
「経緯を聞いてもいいですか？」
　冷静に尋ねる木場。しかし、その表情は硬い。
「ソーナの眷属の中の一人がレーティングゲームに参加出来なくなったの」
「参加出来なくなったって――怪我でもしたんですか？」
「違うわ。病気によるドクターストップよ」
「病気！　じゃあ重病なんですか？」
「いいえ。人間界で言う所の風邪に近いものよ」
　風邪と言われて、一誠は大病で無かったことに安心するも、同時に納得できない気持ちも湧く。
「風邪って、医者から止められる程なんですか？」
「私たちの様な冥界生まれの悪魔なら問題ないけど、転生悪魔となると話は違ってくる

わ」

リアスが言うに、今回ソーナの眷属が侵された病は冥界特有のもので、通常の悪魔ならば免疫を持っている為せいぜい微熱止まり程度で済むものだが、転生悪魔はそれらの病に対する免疫を一切持たない故に悪化し、中々治り難いものらしい。

「私や祐斗君、小猫ちゃんも罹ったことがありますが、最低でも二週間は熱が引きませんでした。熱が治まっても、その後暫くはまともに動くことが出来ませんでしたわ」

「あれは大変だったねー……」

「……はい」

当時を思い出して三人の表情に苦いものが含まれる。余程辛い体験らしい。

「だから、その代わりに間薙が呼ばれたんですか？」

「ええ。公式戦だったのなら無理でしょうけどね。この件に関しては、既にソーナの方がお兄様とセラフォルー様に伺いを立てているわ。シンが参加できる条件は二つ。シン本人が参戦に同意すること。――そして、対戦相手がそれに同意すること」

「じゃあ、間薙がレーティングゲームに出ることは、部長の意思でもあるんですか！」

敢えて間薙を送り出したリアスに一誠を含め、他の眷属たちも驚いた。

「まあ、驚くでしょうね」

予想通りの反応にリアスは苦笑を浮かべる。

彼女の脳裏に、シンがグレモリー領を出る前にした会話が思い起こされた。

◇

サーゼクス、セタンタを経由して渡されたソーナの手紙を読み終えたリアスは、その内容に苦悩していた。

本音を言ってしまえば、幼い頃から知っているソーナとは対等な形で戦いたい。グレモリーとして生まれたプライドも、正々堂々とした戦いを求めている。だが、レーティングゲームに勝つことを目的とするならば、ソーナの願いを蹴るべきなのである。

戦力が一人欠けることは大きい。それによって戦略の幅が狭まり、逆にリアスの方は戦略の幅が広がる。

何よりも埋める穴として参戦するシンの存在が大きい。初めは一誠よりも少し強いという程度の力であったが、戦いを重ねるにつれてその実力をどんどん上げてきている。

堕天使ドーナシークの単独撃退に始まり、ライザーの女王の撃破、コカビエルのケルベロスを退治。そのコカビエル本人も一対多であったが倒し、更にはあの『魔人』と敵対して生還している。僅か数カ月の間にこれである。

そして、サーゼクスの友であり『魔王の槍』と称されるセタンタから直々に戦いの教えを受けている。短期間で一体どれほど実力を伸ばしたのか、リアスも想像が出来なかった。

仮にもしリアスがシンと戦うこととなったら。負けるつもりは毛頭無い。だが、勝つ光景を思い浮かべられない。

共に戦う時は実力的にも精神的にも頼れる味方である。しかし、敵となればこれ以上無い難敵であった。

正しい選択、後悔しない選択が思いつかない。リアスは苦悶する様に悩み続ける。

すると、リアスの悩みに割って入る様に数回扉を叩く音が聞こえてきた。

「部長、いますか？」

紛れも無くそれはシンの声であった。

「鍵は開いているわ」

「失礼します」

扉を潜り、シンがリアスの部屋に入って来る。

「座って。お茶でも――あっ」

「大丈夫です。右手は普通に使えますから」

怪我をしている両手を見て一瞬躊躇するものの、シンは問題無いと右手を開閉してみせた。
部屋に備わった質素ながらも細部に拘りを感じさせるテーブルに座ると、シンの前にティーカップが置かれる。中には琥珀色に輝く紅茶。
頂きますと言い、それに口をつける。リアスもまた椅子に座ると自分の分の紅茶を飲み始めた。
何故来たのか、理由を言わず問わずの二人は、そのまま黙って茶を飲み続ける。中身を飲み干した後も会話は無く、そのまま三十分も沈黙が続いた。
先に沈黙に耐え切れなくなり、リアスが口を開く。
「……貴方にもソーナから手紙が来ているわね？」
「――はい」
「貴方はどうするのかしら？」
「それは俺が先に言っても良いんですか？」
問いに答えず、逆に質問を返す。双方の同意を得られなかった時点でソーナの願いは通らなくなる。仮にシンが参戦すると言ってもリアスが参戦を認めなければ、そこで終わる。シンの問いにはシンの答えを聞いて、リアスが返答を変えないかという意味が含まれていた。

リアスも問いの込められた意味を理解するが、不機嫌になることは無かった。もし、同じ立場の者が居れば、十中八九ソーナの願いを拒むであろう。

「俺としては会長にはコカビエルの件で恩があります。ですが、部長たちにも日頃から良くしてもらっています」

どちらにも義理を立てたいが、立場としてリアス、ソーナどちらかの義理を蹴らなければならない。

「選択しなければならないなら、俺は決断しました」

リアスの表情に緊張が走る。

「俺はソーナ会長の申し出を受けます」

シンの選択を聞いた時、リアスは自分が想像していたよりもショックを受けていないことに気が付いた。寧ろ、逆に安堵している。

(……ああ、そういうことね)

きっとリアス・グレモリーとしての選択は既に決まっていたのだ。友と憂いなく戦いたい。それしか選ぶことが出来なかった。ただ、不安だった。自分の選択の先にあるものが。あれこれ選択を変えようと言い訳をしてきたが、シンの選択に背中を押される。

「――そう。シン、戦うなら全力で掛かって来なさい」

その言葉こそリアスの選択の表れ。

「安心して下さい。一切手を抜くつもりはないです」
　両者の間で衝突し合う気迫と気迫。火花散る様であったが、それもリアスが苦笑を浮かべたことですぐに霧散してしまった。
「あの子たちに呆れられるわね。あー、私って本当に甘いわね」
「色々と言われるでしょうけど、それが部長の持ち味じゃないですか？」
「……それでも怖いと思う時があるのよ。私の選択のせいであの子たちを傷付けてしまう時がくるんじゃないかって……」
「例えその時が来ても大丈夫じゃないんですか？」
　シンは、空になっていたカップに紅茶を注ぐ。
「部長の眷属は、貴女のそういった所に惹かれて眷属になった筈ですから。今、皆が部長の周りにいるのは結局の所、貴女の性格が理由だと思います。もし、そうじゃなければきっと面子は変わっていましたよ」
　言い切った後、自分で注いだ紅茶を一気に飲む。
「貴方って基本的に控えめだけど、時折ストレートにものを言うわね」
　シンの言葉に照れたのか、リアスが目線を伏せながら言う。
「――ところでシンはどういう理由でソーナの依頼を了承したの？」
「それは――」

その時扉が開き、ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、ケルベロスが中に入ってくる。ケルベロスは何故か荷物を背負っている。
「ソーナの所に行く準備出来たよー」
「ノックぐらいしろ」
「何それ？　アタシそんなの知らなーい」
突然入ってきたピクシーたちを窘めるが、本人たちは全く悪びれた様子は無い。そういった習慣とは無縁そうに見える為、仕方がないとも言えるが。
「ちょっと待って」
聞き捨てられない台詞があり、リアスはピクシーたちに聞き返す。
「ソーナの所に行く準備って言っていたわね？」
「うん。言ったよー」
「シンが行くことになるから準備しておいてくれって言ったからホ！」
「ヒ～ホ～。ちょっと手間取っちゃたね～」
「……何故オレガ運バナケレバナラナイ」
「順番、順番！　アタシが最初にシンの仲魔になったから一番えらーい！」
「オイラは二番目なのかホ!?」
「ボク、三番目～？　というかいつきまったのそれ～」

「気ニ入ラン。強サデ決メロ」
　ぎゃあぎゃあ揉めだす仲魔たちのことはとりあえず放っておき、リアスはシンにジトリとした眼差しを向ける。
「……どういうことかしら？」
「部長だったら、たぶんこういった形になるのを望んでいるだろうと思ったので」
　表情筋一つ動かすことなく平然と言う。
「……確かにそうなることは願っていたわ。でも迷っていた」
「紆余曲折あってもどうせその答えになっていたと思いますよ？　俺じゃなくても姫島先輩かイッセー辺りに相談していてもきっと同じことになると思います。……まあ、部長がそっちを選んでくれたお陰で恥をかかずに済みましたが」
　冗談を言っているのか本気で言っているのかいまいち良く分からないシンにリアスは一瞬ポカンとした表情になるも、すぐにそれを微笑に変えた。
「貴方って不思議ね」
「そうですか？」
「貴方たちも何時までも騒いでいないでこっちに来なさい。お菓子食べるでしょう？」
「食べるー！」
「食べるホ！」

「頂きま～す」
「オイ。話ハマダオワッテイナイゾ。……トコロデオ菓子トハ何ダ？」
揉めるのを止め、目の色を変えて近寄ってくるピクシーたち。ケルベロスも不承不承といった様子だがこちらにきた。
その後しばらくの間雑談する。それは、これから敵対する者たちとは思えない程和やかなものであった。

◇

シンが敵対するという事実を告げられ衝撃が走る一同。この場をどうしようかとリアスが考えていた時、ゼノヴィアが真っ先に声を上げる。
「面白いじゃないか」
ゼノヴィアは愉し気に笑う。
「シンとは今まで一度も手合わせしたことが無かったが、互いに本気で戦う機会がこうも早く巡って来るとは……」
ゼノヴィアが言う通り、シンとゼノヴィアは訓練でも戦ったことが無い。剣と素手という理由もあり、ゼノヴィアの相手は専ら木場が務めていた。

「好戦的だね、ゼノヴィアは。――でも僕も同じ心境かな」
ゼノヴィアの反応に苦笑しつつも、木場もまた静かに燃える。親友であり、同時にライバルとしても認めている存在。それと全力で戦う機会など少ない。剣士としての性が、強敵との戦いに歓喜していた。
「ぼ、僕も修行した成果を間薙先輩に見てもらいたいです！」
普段だったら怖がるか怯えているかのどちらかであるギャスパーが、珍しく男気を見せている。三勢力会談の際、シンに色々と助けられたことからギャスパーはシンに尊敬を抱いていた。だからこそ、尊敬している人の前で自分の成長を見せたいと意気込む。
「――ってあれ？　間薙先輩がソーナ会長の所に行ったなら、ランタン君も一緒について行っちゃったんですか？　――ランタンくぅぅぅぅぅん！」
シンと戦う。それを聞いた時の小猫の表情は、深く思い悩むものであった。未だに内にある迷いは拭い切れていない。正直、小猫にはこの場にシンがいないことが有り難かった。自分が倒れた時のこともあって、会ったとしてもどんな表情で会えばいいのか分からなかった。
一誠は無意識に左手を握り締めていた。今まで何度か実戦形式の訓練をしたことがあるが、接近戦でシンには負け続けていた。勿論、『赤龍帝の籠手』の倍化はある程度抑えた状態で戦ってはいたが、シンもまた実戦の時に使用していた技を意図的に使用しな

かった。
もし、お互いに全力で戦ったら？　友人と呼べる存在に対しそんなことを自然と考える自分に、内心驚いてしまう。
リアスは、最初皆がショックを受けると思っていたが、各々が戦意を高揚させていく姿を見て、見当違いだったことを知る。それと同時に自分の眷属たちが知らず知らずの内に逞しくなっているのを目の当たりにし、子の成長を喜ぶ母の気持ちとはこういうものかしら、とつい思ってしまった。
「おーおー、眩しいねぇ。とうに過ぎ去った青春が呼び起こされる気分だ」
中々グレモリー邸に入って来ない一誠たちが気になって外を覗いたアザゼルが、眩しそうに目を細めながら一誠たちを見ていた。
「爺くせぇこと言ってんなぁ、アザゼル。そんなこと言ってるとあっという間に枯れちまうぜぇ？」
その隣にいつの間にか移動していたマダが並ぶ。
「お前と違って俺は節操を持って生きてんだよ。お前もいい加減落ち着きを持ったらどうだ？」
「生憎、怪物はそんな殊勝なもんと無縁でなぁ」
「お前、いっつもそればっかだな」

マダお決まりの逃げ口上に呆れ顔となるアザゼル。二人のやりとりに、一誠たちはアザゼルの存在に気付いた。
「あっ。アザゼル先生」
「よお。積もる話はあるだろうが、それは中に入ってからにしようぜ。俺も色々と聞きたいからな」

◇

シトリー邸に招かれたシンは、匙に連れられてある部屋へと向かっていた。
その道中――
「まさか、間薙がうちのメンバーとして出るとはな……」
数十分前にソーナからシンが参戦することが生徒会役員全員に告げられていた。匙はまだその時の驚きが抜け切らないでいる。
「あまり歓迎はされていないみたいだがな」
驚きの後に匙を含め皆が複雑そうな表情を浮かべていたのが、シンの記憶に新しい。
「勘違いすんなよ。誰もお前が俺らと一緒に戦うのを嫌がってねえよ。ただな、お前が来たってことは、由良はもう出られないんだなって……」

今回、ソーナに呼ばれた理由となったのが『戦車』である由良のレーティングゲーム参加停止である。
レーティングゲームの日の為に厳しい特訓に耐え、数え切れない程のシミュレーションを重ねてきたのである。だが、初のレーティングゲームにソーナたちと一緒に参加出来ない。苦楽を共にしてきた匙や他のメンバーたちも、由良の今の心境が痛い程理解出来てしまう。
「――失望したか？　俺を呼んだ会長に」
ソーナの選択自体決して間違ったことではない。不測の事態に対して少しでも勝率を上げる為の苦肉の策とも言える。だが、同時に勝ちを重視して他のメンバーたちの思いを蔑ろにしているともとれる。
「それこそ勘違いすんなって話だ」
少しだけ語気が強まる。見損なうなと言わんばかりに。
「お前を呼んでも呼ばなくても関係無い。……由良は、ずっと自分を責めているんだ。会長は、少しでも安心させてやりたいんだよ」
あの時ああしていれば。もっと深く考えて行動していれば。病で倒れた時から、由良は日々後悔を募らせているという。匙曰く、見ていて非常に痛々しく、下手に慰めることも出来ない。

ソーナにシンの出場を知らされた時、由良は泣くでもなく、怒るでもなく、小さな声で良かったと言い、微笑を浮かべていたらしい。自分の欠場の穴を埋められたことに対しての痛ましい安堵であった。
「まあ、俺もお前が来て心強いよ。……お前は俺よりも強いし」
言葉の最後が、弱々しく聞こえた。
「……なあ。お前だったら兵藤に勝てるか？」
「――そんなこと聞いてどうする？」
シンには匙の問いが肯定を求めているのを感じ取った。しかし、ここで肯定すれば匙から何かが抜け落ちていきそうな気がした為、敢えて答えずに聞き返す。
「――もし、俺が兵藤に」
「着いたな」
聞き終える前にシンがある扉の前で急停止する。立ち止まった扉には由良の名前が刻まれたネームプレート。匙の方は勢い余って扉の前を通り過ぎていってしまい、慌ててUターンしてきた。
「話は後だな」
「……もしかしてわざとじゃないよな？」
話を打ち切ったシンに匙は訝しむ眼差しを向けるが、最初の目的が由良の見舞いであ

る為に大人しく引き下がると、扉を数度ノックする。
「どうぞ」
中から聞こえてきた由良の声は小さく、掠れていた。
「入るぞ」
扉を開けて中に入っていく匙。その後にシンも続く。
中の様式はグレモリー邸の部屋と然程変わらないぐらい豪華な造りとなっている。
大きなベッドの上で由良が横になっているのが見える。シンたちが入って来たのを見て、体を起こそうとしたが、匙がそれを制した。
「いいから。大人しく横になっててくれ」
「……済まない。こんな格好で」
寝間着姿の由良が弱々しく微笑む。
熱があるのか顔が赤い。目の下には隈があり、頬が心なしかこけている様に見えた。
「……怪我をしているのか？」
会って早々、由良はシンの両腕に巻かれている包帯に気付き、気遣ってくる。
「大した怪我じゃない。ゲームまでには治る」
「……そうか。君には迷惑をかけるな」
「気にするな」

『――と言っても無理か』という言葉は呑み込んでおいた。由良の顔を見れば、どんなに言い繕っても無駄だというのが分かったからだ。
「元士朗も来てくれてありがとう。……でも良いのか？　会長からはなるべく私の部屋には行くなと言われていた筈だが？」
「……ちょっとぐらいなら大丈夫な筈だ」
どうやらシンを由良の部屋に案内したのは匙の独断らしく、それを指摘された匙は気不味そうに視線を虚空に逸らした。
「ははは……しかし……情けない話だよ。自分の体調管理もしっかり出来ないなんてね……」
自嘲が浮かぶ。
由良がこうなってしまった経緯をシンも事前に聞かされている。
切っ掛けは、くしゃみや咳といったちょっとした症状であった。発熱をした訳でないので由良は誰にも告げず、いずれ治るだろうと放っておいたが、一向に症状は治まらず、それどころか微熱などの新たな症状まで出てきた。
流石に体に異常が起こっていると分かった由良であったが、それでも皆に隠し、一人で治そうと陰でこっそりと薬などを摂っていたという。
しかし、それでも症状は治まらず、また日頃の特訓のせいで体力を消耗していたこと

もあり、ある日を境に一気に悪化。常時四十度前後の熱に苦しめられる様になり、最後は特訓中に倒れてしまったという。

医者に診てもらったおかげである程度症状を抑えることが出来たが、それでも病によって衰弱した体は元には戻らない。

「結果がこの様だ……。私のミスのせいで生徒会の皆ばかりではなく、君にまで迷惑をかけてしまった……大事なレーティングゲームだというのに……！」

由良がシーツの端を強く掴む。自分への憤り、無念、不甲斐無さが込められた指先が震えている。

こんな彼女を見て安心させる言葉など言える筈も無い。『お前の分まで頑張る』『俺に任せておけ』『後のことは皆に任せて養生しろ』どれもこれもただプライドを傷付けることにしかならない。

弱った心には、例え耳あたりの良い言葉でも刃になりうる。

「それだけ一生懸命だったってことだろうが！　自分を責めるなって！」

だが、そんなシンの考えを一蹴する様に匙が声を出す。こういう時に躊躇いなく言える性格にはシンも羨望を覚えてしまう。

「……あまり長居するのも悪いな。もう行く」

あれこれ言葉を交わすのは、これ以上由良にとって身体的にも精神的にも負担になる

と考え、退出することを選ぶ。
　来て早々に帰るシンのドライな態度。案の定、匙が非難する様な眼差しを向けてきた。
「……そうだな。……これ以上私と居て病気を移したら、それこそ目も当てられない」
　由良の方が納得したので、匙はそれ以上何もせずにばつの悪そうにする。
「邪魔したな」
　そう言い残して去ろうとしたとき、由良の手が伸び、シンの手首を掴む。
「……間薙！　頼む……！　私の……私の代わりに、会長たちを守ってくれ！」
　ソーナの『戦車』としての役目をシンに託す。掴む手は、病人とは思えない程に強く、だが幼子の様に小さくも見えた。
　シンは掴んでいる手をゆっくりと離し、改めて離した手を握る。
「分かった」
「……有難う。元士朗も頼んだぞ」
「任せておけって」
　託されたものを確かに受け取ったことを告げると、由良は微笑み手を離す。そして、シンは匙と共に由良の部屋から出た。
「これで少しは由良も安心したか？」

「そう思うか？」
部屋から出た後に匙の問いに対し、シンは聞き返すと同時に立ち止まる。急に止まったシンに匙が話し掛けようとするが、手を上げてそれを制止させた。
沈黙の中、何かが聞こえてくる。悪魔の聴力でも微かな音。しかし、集中し始めると段々はっきりと聞こえてきた。
声を押し殺しながら泣く女の声。音が何処から聞こえてくるかなど調べなくても分かる。
思いを託した。安心した。寧ろその逆である。由良は、シンに会ったことで完全にレーティングゲームへの参加の道を断たれたことを理解したのだ。
医者から止められても、病気で碌に体が動かなくても万が一の可能性に賭けていたのだ。だが、それは潰えた。悔しくない筈が無い。哀しくない筈が無い。
普段は凛々しい仲間の泣く声を聞き、匙の表情は次第に決意に帯びたものとなっていく。
「間薙……今度のゲーム、勝つぞ」
「――その為には、色々会長たちと打ち合わせしないとな」
ゲームを前にして戦意を高める匙を横に、シンはレーティングゲームの策を考える為にソーナたちの下に向かう。

◇

魔王主催のパーティーが行われる前日。シンは左腕に巻かれている包帯を解いていた。

ここ数日治療に努めていた為、まともに動かす機会が無かった左腕から全ての包帯が解けると、その下から火傷一つ無い状態の皮膚が現れる。炭同然であった状態からここまで回復することが出来た。

元々のシン自身の回復能力もあるだろうが、やはり最も大きいのは――

「フェニックスの涙のおかげだな」

「ふん。せいぜい感謝するんだな」

シンの言葉に答えたのは、背後でいつもの通りの不機嫌な表情を浮かべているライザーである。

現在、シンはシトリー家から離れてフェニックス領に足を運んでいた。炎に関することでライザーに見て貰いたいことがあったのだ。

「怪我をした時に、大量のフェニックスの涙が送られてきたらしいがあれはお前が送っ

てくれたのか？」
「はあ？　自惚れるのも程々にしておけよ。幾ら量産が出来ると言ってもフェニックスの涙を欲しがる悪魔はごまんといる。それだけの価値があるんだ。お前なんぞにタダでくれてやるほど余裕なんて無い」
　顔を顰めながらはっきりとライザーは否定する。すると、そこにレイヴェルがユーベルーナとイザベラを伴ってやってきた。
「間薙様。フェニックス領へようこそ。お元気そうで何よりです」
　令嬢らしく丁寧にお辞儀をするレイヴェル。
「ああ。色々とあったが、ライザーが送ってくれたフェニックスの涙のお陰で助かった」
「それは良かったです」
「レイヴェル様っ！」
「――あっ」
　ごく自然にシンが言ったせいか、レイヴェルは普通に返してきた。直ぐに側近のユーベルーナが声を出すが時既に遅し。レイヴェルは、しまったと言わんばかりの態度で口元に手を当てる。恐らくは、ライザーから口止めをされていたのであろう。
　一連の動きそのものが、シンの言葉を肯定している様なものであった。
「では私は色々とパーティーの準備がありますので失礼致します」

早口で言い残すと二人を連れてさっさと戻っていった。
三人が居なくなると場に何とも言えない沈黙が落ちる。
「――はっ！　俺が態々時間を割いてお前を教えてやっているのに、お前の怪我如きでこっちの予定を狂わされるのが腹立つからだよ！」
堂々と前言撤回するその姿と面の厚さに、並々ならない胆力を感じさせる。
「ああ、そうか。分かった、分かった。ありがとう、ありがとう」
これ以上深く突っ込むと爆発する恐れがあったので、この話題は適当に流して終わらせることにした。
「……で？　俺に見せたいものって何だ？」
「自分なりに炎の応用の仕方を思い付いたから、その出来具合を」
説明しながらシンは両腕の袖を捲る。
「まあいい。見てやるよ」
敷地に用意されていたテーブルに頬杖を突きながら面倒くさそうに言うが、その両眼はシンの動きをつぶさに観察している。
ライザーが見ている前でシンの両腕に炎が灯る。それを見たライザーの表情は変わらないものの内心では驚いていた。ついこの間までは、片腕だけでしか炎を扱えなかったというのに。

シンは、両腕で燃え盛る炎を頭上で一つに束ね、前方に何も無いことを確認すると、一つとなった炎を掲げる両腕を振り下ろす。
それによって放たれた炎は――
「どうだ？」
「……」
見せ終わった後、ライザーに評価を聞くが返事は返ってこない。
黙っているライザーの視線は、シンの足元、正確に言えば足元から前方に一直線に伸びていく炎の軌跡に向けられていた。
シンが放った技の余波で生み出された炎の轍。
ライザーは無言のまま立ち上がると炎の轍に沿って歩き、ある程度の距離まで移動するとシンと向かい合う。
「さっきの技、もう一度やれ。今度は、俺目掛けてな」

その指示に、シンも流石に即答出来なかった。
「見るよりも直接受けた方が早い。それに最低でも俺に通用しなければ、俺はお前の炎を認めない。俺が直々に教えてやったんだ。俺に、俺の予想以上のものを見せてみろ！」

「……本当にいいんだな？」
「さっさとしろ」
　これ以上語ることは無粋と判断し、応じる代わりに再び両手に炎を宿らせる。ライザーもまたその背から炎の翼を生やし、シンの全力を受ける体勢となる。
「――いくぞ？」
「殺す気でやれ」
　口止めされていたことをうっかり洩らしてしまい、逃げる様に小走りで離れていたレイヴェルは、フェニックス邸の前にまで戻っていた。
「……やってしまいましたわ」
「迂闊だったな、レイヴェル」
「間薙様の話術に嵌められてしまったわ」
「大して高度なことなどしていないだろうが」
「いいえ。あの自然な入り方は中々出来ませんわ！」
　自覚はしているものの、性格から自分の失敗を素直に認められず、あくまでシンの策にやられたことにしたいレイヴェル。そのプライドの高さに、イザベラは少し呆れた態度を見せ、ユーベルーナの方は小さく笑っていた。
「そもそもお兄様がいけないのですわ！　御友人の為にしたことをいちいち隠す必要な

んてないとは思わない？」
「何と言いましょうか……ライザー様は異性との交友関係は広いのですが、同性との交友関係が極端に狭いというか、殆ど無いというか……だからなのか色々と照れているのかと……」
「照れ隠しをする様な年齢じゃないでしょう」
いい歳をした男がそんなことをしても気色悪いだけですわ、と付け加える。実の兄に対して中々に辛辣な言葉である。
言いたいことを言い終えると、屋敷内に戻ろうとする。扉を潜る直前、レイヴェルは立ち止まり、背後を振り返った。
「レイヴェル？」
その行動に二人は不審がる。
炎と風を司るフェニックスだからこそ感じ取れた微細な魔力。風によって運ばれた火の粉の様に散る炎の魔力は、間違いなくライザーのもの。そして、それに混じる別の炎。初めて感じたそれは、炎だというのに冷たい印象を受ける矛盾したもの。
一体誰のかと疑問に抱いた瞬間、爆発と共に空に向かって炎が昇る。それは、空を掴みとる為に伸ばし、五指を広げる炎の腕の様であった。
唖然とするレイヴェルたちであったが、その炎が上がっている場所が、シンたちが居

る場所だと気付き慌てて引き返す。
急いで戻ったレイヴェルたちが見たのは、一面焦土と化した大地の上に立つシンとライザー。
「お兄様！」
思わず叫んでしまう。何故なら、ライザーの右半身が完全に焼失した状態であり、断面からは先程感じた炎が燃え上がっている。
しかし、ライザーは燃える己に対し焦ることも恐れることも無く、至って冷静にシンを見詰めると、舌打ちを一つ。
「腹立たしい、本当に腹立たしいが……」
顔を背けるが、目線だけはシンの方に向け――
「大した炎だ」
フェニックスとして、シンの炎を認めるのであった。

おまけ。その頃の仲魔一行。
「わぁ！　新しい子が増えたね☆　ピクシーちゃん、ジャックちゃん」
「よろしくね～」
「……」

「可愛い！　お名前は何て言うの☆」
「ヒ～ホ～。ジャックランタンだよ～」
「じゃあ、ランタンちゃんだね☆　そっちの子は何て名前なのかな？」
「……」
「ほら、黙ってないでいいなよ」
「言うんだホー」
「……ケルベロスダ」
「かっこいい子だね☆　この中では珍しいクール系？」
「……」
「寡黙な所もカッコいい☆　私はセラフォルー・レヴィアタンっていうの☆『レヴィアたん』って呼んでね☆」
「よろしく～。レヴィアた～ん」
「……」
「ねえねえ、ケル君☆　君のことちょっとでいいから撫でていい？」
「……スキニシロ」
「わーい☆　じゃあ失礼して――わあ！　ふっかふか！」
セラフォルーの独特のキャラと内に秘めている不釣り合いな程強大な力に、ケルベロ

スは完全に圧倒されてしまい、シンが帰ってくるまでの間、セラフォルーにされるがままとなる。

「……アイツヲオレニ近付ケサセナイデクレ」

この件でケルベロスは、セラフォルーに対し苦手意識を持つようになってしまった。

会場、奇襲

パーティー当日。

一誠は、修行時のジャージではなく駒王学園の制服を着ている。その腕にはグレモリーの紋様が入った腕章がつけられており、一目で誰の眷属かを示していた。

他のメンバーの仕度があるという理由で一人客間で待つ一誠。すると、知っている顔がきょろきょろと辺りを見回しながら歩いているのを見つける。

「匙？」

「ん？　おお、兵藤！」

一誠の顔を見て安堵した表情を浮かべながら匙が早足で近付いてきた。匙もまた一誠と同じく学生服を着ており、袖にシトリーの紋様が入った腕章をつけている。

「何でここにいるんだ？」

「会長が、リアス先輩と一緒に会場入りするって言うから皆で付いて来たんだ。で、会長はリアス先輩たちと少し話があるから客間で待っててくれって言うもんだから、客間探して迷ってた。ちなみに他の生徒会のメンバーは、屋敷の外で待ってる」

あの安堵した表情は、迷っていて少し心細かった時に屋敷内を知っているだろう人物

を発見したものであったらしい。
　一誠は視線を動かし、匙の周囲を見渡す。
「……間薙は来ていないのか？」
「あいつは、何か呼ばれたらしくて、仲魔連れて寄り道してから直接会場に行くってさ」
「呼ばれた？　誰に？」
「俺も知らん。因みに会長も知らないってさ」
　ソーナとリアスを除けば、冥界に知人など居ない筈である。サーゼクスやセラフォルーに呼ばれているのであれば、少なくとも一誠や匙の耳にも情報が入ってきてもおかしくは無い。
　一体誰なのだろうかという疑問を抱くと同時に、一誠はシンがリアスの屋敷に来ていないことに少し安心していた。
　いきなり敵として戦うからという理由も無いことは無いが、それよりも大きな理由がある。
　実は、一誠はタンニーンとの修行後、グレモリー領に連れて帰ってきて貰った際、背に乗せられて空を飛んだ時に、自分の羽では味わえない様な壮大感、圧倒感、爽快感などの感動を覚えており、タンニーンと話して、パーティー会場にタンニーンとその眷属たちの背に乗って向かう約束をしていた。

本気の殺し合いをした二人。その二人を再び会わせることに気が引けていた。一応、翌日には和解と言っていいのか分からないが、一種のけじめの様なものをつけていたが、それでも不安視してしまう。
「おーい。何、黙ってんだ？」
少し離れた席に座った匙が、急に喋らなくなった一誠に声を掛ける。
「ん、ああ、いや、何でもない」
知らない内に考え込んでいたことに気付き、適当に誤魔化す。匙は、特に追及することは無かった。だが、そのせいで会話に穴が開いてしまい、互いに話す内容を考え始めたことで沈黙が場に降りる。
「……もうすぐゲームだな」
匙の方から話題を切り出してきた。尤も、それは一誠も話したいことである。
「俺、鍛えてきたぜ。強くなれることを色々試してきた」
「俺もだ。山でドラゴンに追い掛けられたり、阿修羅に殴られたり、その二人に殺されかけたり……」
「それ、一応修行だよな？」
話だけ聞くといじめられている様にしか聞こえない。
「まあ、とりあえずハードなメニューを熟してきたってことだな。でも、それなら俺だっ

て負けていないぜ。普段の会長の特訓もあるけど、最近セタンタさんにも戦い方を教えて貰っているからな」
「セタンタさんに？」
　意外な人の名が出てきて、一誠は聞き返してしまう。
「知らないのか？　うちに間薙が来てからもセタンタさんはわざわざシトリー領まで来て間薙を鍛えているんだぞ？　そのついでに俺も鍛えてもらっているんだ」
　一誠には初耳であった。だが思い返すと屋敷内でここの所セタンタを見た記憶が無い。セタンタは、サーゼクスやリアスの両親の護衛が主な仕事らしい。それ以外だとミリキャスの子守り、あとは屋敷や領地の巡回の仕事をしている。
　色々と多忙らしいが、殆どグレモリー領内にいるので全く見ないという方が珍しいことであった。
「へぇー。そうだったのか。セタンタさんの特訓はやっぱり厳しいか？」
　特に他意の無い質問であったが、それを聞かれた途端、匙は黙ってしまう。そして、何やらガタガタという音が鳴り始める。匙の両脚が凄まじい勢いで震え、踵で床を叩いている音であった。
「厳しいなんてレベルじゃねぇ……あれは特訓という名の処刑だ……鍛えられている間ずっと『ああ……俺って今から死ぬんだ……』って思ってたんだぞ……」

どんな内容か知りたくもあるが、死人の様な土気色の顔を見ると躊躇ってしまう。それに下手をすると自分の修行のトラウマまで刺激されそうな気がしたので、聞くのは止めて話をレーティングゲームへと戻す。

「にしても、匙や間薙とレーティングゲームで戦うなんて思いもしなかったな。いつかは戦うかもとは考えていたけど、こんなに早いとは思わなかった」

「――そうだな。こんな形だが、正式に近いレーティングゲームを早めに経験出来る。……なあ、前に若手悪魔が集まったときのことを覚えているか？」

「ああ、覚えているけど。それがどうかしたのか？」

「あの時、会長が言っていたことも覚えているか？」

「えーと……確かレーティングゲームの学校を作りたいだっけ？　下級や転生悪魔も学べるとか」

ソーナたちが目指す夢。だがそれは、旧家や上級悪魔の権力者たちに夢物語と失笑された。

その時の怒りと屈辱が蘇ってきたのか、匙の右手が拳を作り、込められた力で震え始める。それを押さえる様に左手が重なる。

「絶対に目に物見せてやる……」

抑え切れず洩れた怒りが言葉となって匙の外へと出ていく。

夢を馬鹿にされた。否定された。笑われた。あの時はソーナに窘められて匙は堪えたが、ずっと胸の奥で燻り続けていた。

堪えることが出来たのは、誰よりもその夢に真摯に取り組んでいるソーナが堪えていたからだ。本当は誰よりも傷付いている筈だというのに。

静かに怒る匙に、一誠は若干戸惑いつつ探る様に声を掛ける。

「何か燃えてるな……」

「ああ、俺は会長が作った学校の先生になるのが夢だからな」

「そうだったのか……」

言われて何となく納得した。前にフリードと戦った時、苦戦していたフリードが子供を人質にしたことがあった。その時、誰よりも子供の心配をしていたのは匙である。恐らくは、あの時から教師になる夢を抱いていたのだろう。

「……はっ！」

匙が突然目を見開き、口を大開きにしたかと思えば、顔を一気に紅潮させる。

「お、俺、い、言っちゃったか？」

黙っているつもりであったことを弾みで言ってしまったらしく、羞恥と照れから組んだ手に額を押し当てて顔を隠してしまう。

「そんなに恥ずかしがることじゃないだろ？　立派な夢じゃん」

「……ありがとよ」

一誠に夢を肯定された匙はゆっくりと顔を上げる。その顔からはまだ赤みは抜けていない。

「言っちゃったもんは仕方ない。そうだよ。俺の夢は、レーティングゲームの先生になることなんだ」

レーティングゲームが生まれ、悪魔の中で浸透してきたが、伝統、差別という枷のせいで十分とは言えないものであった。一部の上級悪魔だけが恩恵を受け、レーティングゲームの益を独占しているというのが現実である。下級悪魔や転生悪魔にはそれを得られる権利も回ってこない。

本来ならばゲームの中では如何なる者も平等であり、貴族以外の悪魔も結果を出せば上級悪魔へと昇格することが望ましい。

だが、それは上級悪魔が許さない。自分たちの地位を脅かす存在が生まれるのを、当たり前の様にあったものを奪われるのかもしれないのを、黙って見ている筈が無い。だからこそ、平等であるゲームを不平等なものへと変える。

長い時間を生きる者たちならではの歪さとも言えた。尤も、この構造も現魔王たちの尽力によって多少は改善している。しかし、望むものにはまだ遠い。

「可能性はあるんだ。たった一パーセントでも。会長は、ゼロだと思っている下級悪魔

や転生悪魔にそれを信じられる為に学校を作りたいんだ。兵藤、お前なら分かるだろ？

お前も俺も、ほっそい糸みたいな可能性だが自分は上級悪魔になるんだって信じているだろ？」

「ああ、その通りだ」

迷うことなく一誠は頷く。碌に魔力も無く、正直なところドライグや周りの力が無ければ、いつ死んでいてもおかしくは無かった。だが、苦難を超える度に少しずつだが、前に進んでいる気がしていた。匙の言う細い糸みたいな可能性を手繰りながら、確実に前進している。

「だからさ、その……俺が先生になって教えたいんだよ。今はまだ全然駄目だけど、これからいっぱい勉強して、ゲームもいっぱい戦って、色んなものを蓄えたい。そんで、それを生かして『兵士』としての役割とかを教える先生になりたいんだよ」

語る匙に一誠は素直に尊敬していた。自分と同じ眷属悪魔であり同年代の相手が、既に進むべき道を見据えていることが格好良いと思えた。

（将来かー）

一誠の将来は未だ漠然としている。『ハーレム王になる！』と宣誓しているが、あくまでそれは夢の一つであり、上級悪魔になるのもそれに至るまでの過程である。匙の様に辿り着くべき場所や仕事となると、どうもまだイメージは出来ない。

「すげぇな、匙は」
「――いや、そうでもないさ」
褒め言葉を受け取らず謙遜する態度を見せる。
「俺って、結構馬鹿なことばっかりやっていた時があってさ、先生からは見放されたし、周りの人間からも嫌われてた。親にも散々迷惑かけたしな……今の俺が昔の俺を見たら問答無用でぶっ飛ばしているな」
そんなどうしようもない自分に手を差し伸べてくれたのが、ソーナであった。自分の道をくれたのも、可能性をくれたのもソーナ。
ソーナが夢を描いてくれたおかげで、匙は夢を見ることが出来た。
「泣いてばっかりだったお袋が、俺の夢を聞いて笑って泣いてくれたよ。まだ、悪魔になったとか色々と重要なことは教えていないけど……それでもお袋のあの顔を見たときは安心した」
「……そうか。やっぱり立派な目標だな」
「ありがとよ。……俺の夢は、会長の夢があってこそだ。会長の夢が俺の夢なんだ。だから――」
強い意思が一誠へと向けられる。気を抜けば気圧されそうになる。
「――今度のゲームは俺たちが勝つ」

レーティングゲームに匙たちが勝ったとしても、得られるものは少ないかもしれないし、現状を変えるには小さいものかもしれない。それこそ小さな傷一つ与える程度のもの。だが、それでも十分であった。その小さな傷に指先を掛けられれば先へと進められる。先へ進めば新しい道が見えて来る。

「当然、お前にも俺は勝ちたい」

面と向かって言われる宣戦布告。言われた一誠は不思議な気持ちが湧いてくる。

どちらかと言えば今までの一誠は匙の立場であった。自分よりも強い相手に挑み、噛み付くというのが当たり前だったのだが、今は挑まれる立場になっている。

話を聞いて一誠は匙に敬意を抱いていた。そんな人物が、自分に勝ちたいと言ってきた。嬉しい様な、誇らしい様なと色々な感情が混ぜ合っていく。

「――いや、今度のゲームは俺たちが勝つ。そして、俺はお前に負けない」

互いに自然と笑みが浮かぶ。だが、その目は至って真剣なもの。勝つという意思を互いにぶつけ合う。

「イッセー、待たせたわね。あら、匙君も一緒だったの？」

火花散らす時間を終わらせたのはリアスの声。二人が振り向くと、ドレスを身に纏ったグレモリー眷属の面々が立っていた。

『おお……』

その華やかな姿に一誠は勿論のこと、匙も感嘆の声を上げた。
「どうですか？　イッセー君。この日の為に新しいドレスを作ったのですが」
「お似合いです！」
巫女服など和を中心とした朱乃の西洋ドレス姿と、髪を結い上げたことで覗く白いうなじ。いつも以上の色香に、興奮のボルテージも上がっていく。
「うーむ。やはり私には似合わないと思わないか？」
「そんなことないです！　ゼノヴィアさん！　良く似合っていて、お綺麗です！」
「そうか？　私よりもアーシアの方が綺麗だと思うが」
慣れないドレスを纏ったゼノヴィアが着心地悪そうにしているが、清楚なドレスを着たアーシアがそんなことはないとゼノヴィアの姿を褒める。
小猫もまた可愛らしいドレスを着ていたが、何も言わずに他よりも一歩下がった位置に立ったままであった。
「イッセー先輩」
名を呼ばれ一誠はそちらに顔を向ける。つられて匙も顔を向けた。
『ぶほぉっ！』
ドレスでしっかりと着飾っているギャスパーを見て、二人同時に噴き出した。
「何でお前までドレス着てんだよ！」

「だ、だって、ドレス着たかったんだもん」
「涙目の上目遣いでこっちを見ないでくれ！　なんか色々と掻き乱される！」
『ぐあああああ』と叫びながら頭を掻き毟る匙。似合い過ぎているその姿を少しでも可愛らしいと思ってしまうと、既存のアイデンティティーが崩壊してしまう。
「やあ、匙君」
少し遅れて木場も姿を見せる。木場は、一誠たちと同じく制服に腕章の姿であった。
「なんだ、てっきり着替えてくるかと思った」
「少し考えたけどね。でも、一誠君が制服なら僕もこの格好でいいなと思って。それに男性の中で僕だけだと浮いちゃうし」
「ギャスパーは制服じゃないぞ」
「うーん。あれは例外かな」
一誠の指摘に、木場は困った様な笑みを浮かべる。
「兵藤君。お久しぶりですね」
そこにソーナが声を掛けてきた。いつもはきっちりとした制服姿しか見たことが無かったが、今日だけは華やかなドレスに身を包んでいる。いつものクールな雰囲気と相まって、一誠は月下に咲く花を連想した。
「ソーナ会長、お久しぶりです」

若手悪魔の集会振りに顔を合わせる。
「見ない間に逞しくなりましたね」
「そうですか?」
何度か言われたが、精神的には逞しくなったつもりだが、見た目の変化についてはあまり実感が湧かなかった。
「ええ、少し修正をしなければなりませんね」
ソーナの眼から鋭い眼光が奔り、それが全身を貫いていく様な錯覚を覚えた。何の修正かは気になるが、ただ言えることは、ソーナの中では既にレーティングゲームが始まっているのだ。
「タンニーン様とその眷属の方々がお見えになりました」
グレモリー家の執事が迎えの到着を告げる。
「では行きましょう」
ソーナの眼光は消え、微笑を残して入口の方に向かっていく。
その後ろ姿を眺めながら、一誠は匙に小声で話し掛ける。
「……会長って怖いな」
「今更知ったか」

◇

「じゃあ、俺たちは大型悪魔専用の待機スペースへ行く」
「おっさん！　ありがとう！」
飛び去っていくタンニーンに、一誠は大きく手を振りながら礼を言う。
空の旅は、小一時間程のものだったが、空から見下ろす冥界の絶景やタンニーンと談笑であっという間に過ぎ去ってしまった。
「それでここからどうします？」
「すぐに迎えが来るわ」
一誠たちが降ろされた場所は、競技会場らしきドームの前。パーティー会場となる超高層ホテルが広大な森の中に在る為、一旦ここで降ろされたのだ。
リアスの言った通り、間もなくして黒塗りのリムジンが二台現れる。
前方のリムジンにリアスたちが乗り、後方のリムジンにはソーナとその眷属たちが乗る。
その車の中。一誠の隣に座るリアスが、一誠の少し乱れた髪型を櫛でとかし、整えている。運ばれる際に格好が乱れない様に風除けの結界が張られていたが、頭部にいた一誠は多少の風の影響を受けていた。一方、胴体部に乗っていたリアスたちには髪や衣服

の乱れは無い。
「ソーナに宣戦布告をされたわ。『私たちの夢の為にあなた達を倒します』と」
髪を梳きながら一誠にグレモリー邸であったことを話す。
「俺も匙から宣戦布告されましたよ。『先生になる』って夢も聞かせてくれました。すっげぇ眼をしてました。ちょっと怖いって感じましたし、カッコいいとも思いましたが」
「そう。『学校を造る』、レーティングゲームの学舎を冥界に建てる為、ソーナは人間界で学生をしながら学校の仕組みについて学んでいたわ。人間の学校は、彼女にとって良いお手本になるから」
「そうだったんですか……」
改めてソーナ側がこのレーティングゲームに対し、強い意気込みを持っていることを知る。
「……俺たちが勝ったら、その夢が遠ざかるってことでしょうか？」
口に出してはいけないと思いつつも言ってしまった。リアスにもまた夢や目標がある。どちらかが良い夢、叶えるべき夢などと、比べること自体間違っている。
「……それでも私たちは、本気で戦うべきだわ。手を抜いた戦いなんてソーナにとっても私たちにとっても何の意味も無いわ。どんなことであろうと本気でやることで価値が生まれるの」

決意を込めたリアスの言葉。それを受け止めた一誠は、リアスの決意が体に染み込んでいく様な気がした。

「そうですね。俺も本気であいつ等にぶつかっていきます！」

尤も、本気でぶつかっていこうにも、まだ神器の方が眠っている状態なので、今の一誠の全力はたかが知れている。あれこれ色々と試しているが、一向に解決策は見つからない。リアスたちもこのことは知っているが、そう焦らなくてもいいと慰めてくれる。とは言ったものの、リアスやソーナ、匙らの決意を知った一誠としては、こんな不十分な状態では無く完全な状態で戦いたいと思っていた。

そうこうしているうちにリムジンは目的に到着。ドアが開けられ、従業員たちが並んでリアスたちを出迎える。

パーティー会場となるのはホテルの最上階。エレベーターに乗って最上階へと向かう。

長い浮遊感を体験した後、エレベーターの扉が開かれ、そこから一歩出ると、そこには更なる扉。

一誠らが前に立つとその扉は自動的に開く。扉の向こうは豪華絢爛とした光景が広がっていた。

天井に吊るされた巨大なシャンデリアの下では、きらびやか衣装を纏った悪魔たち

が、料理や酒を片手に談笑している。あちらこちらに置かれている装飾品や部屋の雰囲気のせいで、広間全体が光っている様に見えた。
リアスたちの姿を見ると、話をしていた悪魔たちや食事に手をつけていた悪魔たちも一斉にそれを止め、その視線をリアスに注ぐ。
見惚れる者、その美貌を讃える者など、リアスの登場で会場の空気が一層盛り上がる。
「うううう……人がいっぱい……」
一方で皆の視線が集まったことでギャスパーは怯え、一誠の背中に隠れる様に張り付く。その様子に一誠は呆れるものの、逃げ出さなくなっただけ多少は精神的に強くなったと密かに思った。
「ヒ～ホ～。相変わらずだね、ギャスパ～」
怯えるギャスパーの背後から声が掛けられる。一誠、ギャスパーが振り返る。
「ばあっ」
ギャスパーの眼前に広がるかぼちゃの顔。しかし、ギャスパーは驚くことなくその存在を抱き締めた。
「ランタン君！」
「あれ～。ちょっとは驚くと思ったけど～」
予想外の反応だったらしく、少し困惑した声を出すジャックランタン。

「よお」
「ヒ～ホ～。久しぶりって程じゃないけど久しぶり～」
「会いたかったよ！　ランタン君！　……今日のランタン君はおしゃれだね」
　ギャスパーが言う通り、ジャックランタンの格好はいつもと違っていた。いつもは紺色外套を着ている筈だが、今は黒のジャケットに蝶ネクタイというこの場に似合った姿をしている。
「用意されてたから着たんだよ～」
「用意？　誰が？」
「あっちでシンと話している人～」
　ジャックランタンが指差す。が、悪魔たちが壁になってシンの姿は見えない。
「挨拶回りの前にシンと会っておきましょう」
　リアスの案に皆賛成し、ジャックランタンが指差す方へ歩いていく。前に立つ悪魔たちを避けながら進むと、すぐに目的の人物は見つかった。
「いたわね」
「――ああ、どうも」

　敵同士と戦うこととなった友人。今度会ったときどんな顔で、どんな話をするのだろ

うかと、一誠は思っていた。
　そして、会ったときの会話は――
「間薙、お前……似合わないなー」
「お前は制服で正解だな。きっと俺以上に似合わない」
　――どこにでもあるような軽口の言い合いであった。
「というか本当にどうしたんだ、その格好？」
　一誠は、シンを上から下までまじまじと見てしまう。一誠たちの様に制服ではなく、上から下まで高そうなスーツに身を包んでいるのだ。
　黒のスーツとパンツは皺一つ無く。ジャケットの下には白のシャツ。ネクタイは付けずに、襟が大きめに開かれている。
　着慣れていないせいか、若干スーツに着られているという印象を受ける。
「これか……これは――」
「私達が用意しました」
　シンの言葉を継いだ人物に皆の視線が向けられる。
「――あ、焼き鳥野郎の妹」
「レイ！　ヴェル！　フェニックスです！　赤龍帝！　というより貴方！　今、私のことを一瞬忘れていましたわね！」

レイヴェルの顔を見て反応するまで、微妙に間が空いていたことを指摘する。
「悪かったな。……でも、何で間薙と一緒にいるんだ？　服まで用意して……」
「間薙様には色々とお世話になりましたので。聞くと、間薙様は学制服でこのパーティーに出るとおっしゃっていましたので、差し出がましいとは思いましたが、間薙様たちに衣装の方を用意致しました」
「間薙……様？」
一誠の記憶では、レイヴェルは高飛車なお嬢様という印象であった。それがシンに対して敬意を持って接している。これには、他の面々も困惑してしまう。
「ヒーホー！　いっぱい持って来たホ！」
「早く食べよ、食べよ。あっ、リアス」
料理を盛った皿を頭上に掲げたジャックフロストとピクシーが上機嫌で現れ、リアスたちを見つける。
ジャックフロストはジャックランタンと同じ、黒のジャケットに蝶ネクタイという姿。ピクシーの方は、いつも着ているレオタードの様な衣装と同色のドレスを着ている。
「素敵な姿ね。貴方達」
愛らしいとも言える二人の姿に、リアスの頬は自然と緩まる。

「もう一人、じゃなくてもう一体はどうした？」
「外の森にいる。ここはニオイが混ざり過ぎていて気分が悪くなるそうだ」
　言われて納得する。見るからに嗅覚が鋭そうなケルベロスには、様々な種類の香水、料理、酒、悪魔のニオイが混ぜ合わさったこの場はきついであろう。
「リアス様。レーティングゲーム以来ですね」
「そうね。私が言うのも何だけど、ライザーの調子はどうかしら？」
「そこの赤龍帝に負けたせいですっかり塞ぎ込んでいましたわ。敗北と婚約解消のショックがよっぽど大きかったのでしょう。一時期自分の部屋に籠りっきりでしたわ」
「……そう」
　ライザーが引き篭もっていることはリアスの耳にも入っている。望まない婚約だったとはいえ、そこまで追い込んだことには多少ながらも責任を感じた。
「……ですが、それももう過去のこと。お兄様もこのパーティーに来ていますわ」
「ライザーが？」
「俺を呼んだか？　リアス」
　その声に反応し、リアスたちが振り返る。そこには中が満ちたワイングラスを片手に、赤を基調としたスーツを纏うライザーが立っていた。傍らには『女王』のユーベルーナが付いている。

初めて会ったときと似た様な格好であるが、あの時とは違って着崩しておらず、下から上まできっちりとしており、軽薄そうであった印象は薄れ、貴族としての雰囲気が強く出ている。
リアスとライザーの邂逅。周りの悪魔たちが騒めき、傍観する。元婚約者同士が顔を合わせたのである、当然の反応とも言えた。
「ライザー……」
「相変わらずの美貌だな。いや、更に磨きがかかったように見える。君との婚約が解消されたことが、今更ながら惜しく感じる」
その言葉に、彼女の眷属たちが守る様に自然と前に出ようとするが、リアスはそれよりも先にライザーへと歩み寄り、それを制する。
「思ったよりも元気そうね」
「まあな。いつまでも落ち込んではいられない。それに復活はフェニックスの専売特許だ」
周囲の予想に反し、二人の会話は友人と話す様な気軽なものであった。
「今度、シトリー家の当主とレーティングゲームをするんだって？　大丈夫か、リアス？　前のレーティングゲームは俺に完敗しただろう？」
リアスの表情に変化は無かったが、他のメンバーは、ライザーの言葉に一瞬だけ身を

固くする。嫌味ともとれたが、ライザーの声に嘲りは無い。だからこそ逆に違和感も覚える。ライザー・フェニックスという男は、もっと他者を見下していたというのが共通認識であった。
「大丈夫よ。あの頃よりも、私もあの子たちも強くなったから」
「それは良かった」
そこでライザーはリアスから視線を外し、別の人物へと向ける。ライザーの視界に立つのは一誠。ライザーは、手に持っているワイングラスの中身を一気に呷った。
「久しぶりだな。赤龍帝」
「……どうもっす」
一度は手も足も出ずに完敗し、二度目は代償を払って辛勝した相手。負けた恨みが今でも残っているのか、睨み付ける様に見てくるが、一誠は怯まず真っ向から睨み返す。
両者の間に火花散る――かに思えたが、ライザーはふっと笑いあっさりと睨むのを止めた。
「最初に会った時よりも大分強くなったな。一目で分かる。神滅具を使うに相応しい感じになってきたな」
「え、あ？　……どうも」
まさか恨み言ではなく、褒められるとは思っていなかったので、若干戸惑いつつ一応

礼を言う。
「貴様に負けて色々と失ったが、逆にすっきりしたこともある。――ただ黒星をつけたままというのはフェニックスの名を持つ者として、俺個人としても許せない」
　ライザーの眼が、一誠からリアスの眷属たち全員に向けられる。
「団体戦は俺の勝ち。個人戦ではそちらの勝ち。これで一勝一敗だ。リアス、俺は君たちともう一度レーティングゲームがしたい」
「貴方の方からそう言ってくるとわね……。公式でのレーティングゲームで決着を望むのなら、もう少しだけ待ってくれるかしら？」
「別に構わないさ。その間に力をつけ、戦術を磨かせてもらう。ソーナ・シトリーとのレーティングゲームに負けるなよ、リアス」
　すると、ライザーは一誠の肩にポンと手を置く。
「お前もだ、赤龍帝。俺に勝ったお前が、もし不様に負けようならこの俺が焼き殺してやる。……だから負けるなよ」
　冗談ではなく本気なのが伝わってくる。だが、不思議と悪い気はしなかった。鼻持ちならない焼き鳥野郎だった筈のライザーから一種の応援をされていることに、自然とやる気が湧いてくる。
「あのさ」

「何だ、赤龍帝？」
「その赤龍帝、赤龍帝と言い続けるのは止めてくれ。そっちのレイヴェルも。俺には兵藤一誠という名前があるしさ。『イッセー』って呼ばれる方が慣れてる」
一誠の方から一歩歩み寄る。
「お、お名前で呼んでもよろしいのですか!?」
レイヴェルは若干嬉しそうに。
「はあ？　俺が男を愛称で呼ぶわけないだろうが。気色悪い。赤龍帝なら赤龍帝で十分だろうが」
ライザーは露骨に顔を顰めて言う。
「何だその反応は！　前よりも丸くなっているから少しは仲良くした方がいいかなって思ったらそれか！　なら俺もお前をずっと焼き鳥野郎って呼んでやる！」
「その呼び方止めろ！　多少認めてやったからって調子に乗るな！　こっちは慣れ合うつもりはないんだよ！」
ギャアギャアと言い争いが始まり出す。
「イッセー。気持ちは分かるけど、大人しくしなさい。他の人たちの迷惑になるわ」
「お兄様。折角、イッセー様の好意を無下にするのはどうかと思いますわ。もう少し大人になって下さる？」

　リアスとレイヴェルに窘められ、燃え上がる直前であった二人の勢いはすぐに鎮火。ライザーは舌打ちをしてさっさと一誠から離れる。
「この決着、リアスとのレーティングゲームまでとっておいてやる」
　ふと何かに気付き、ライザーの視線が一誠らから外れる。首を動かし見ると、ライザーをシンが半目で見ている。
「何だ？　何か文句でもあるのか？」
「今日のパーティーは若手悪魔たちの為に用意されているから、若手悪魔たちは勿論だがその関係者もそれなりの服装をしなきゃならないと事前に聞いていた筈だが？」
　制服姿の一誠と木場を目で指す。
「そんなこと言ったか？」
「あのね、シン。それは建前で、このパーティーはどちらかというと各御家の交流会みたいなものなの。そんなきっちりとした社交会じゃなくて、お父様方が楽しむパーティーといった方が正しいわ」
　とぼけるライザーに対し、リアスはこのパーティーがどういうものか説明する。それを聞き終えたシンは、苦いものを含んだ表情をしながらライザーに鋭い目線を向ける。
「地味な嫌がらせを……」
「似合っているじゃないかその姿……くっ！」

ライザーがわざとらしく失笑をする。
そんな二人のやりとりをリアスたちは目を丸くして驚いていた。
リアスたちの記憶では、シンとライザーに交流らしい交流など無かった。だというのにお互いに気軽に会話をしている。交流する機会があるとすれば、修行の期間内である。その間に切っ掛けがあったのか、気になってくる。
「なあ？　いつの間に知り合ったんだ？　ライザーもそうだがレイヴェルも」
「間薙様は、お兄様が外に出る切っ掛けを作ってくれましたので。今では、すっかりあのような御友人として――」
『友人ではない』
レイヴェルの言葉を二人揃ってきっぱりと否定する。
「レイヴェル。旦那様のご友人がお呼びだ」
『戦車』のイザベラが現れ、レイヴェルに用件を伝えにきた。
「分かりました。間薙様。リアス様。失礼します。それと、イッセー様。今度、お茶でも飲みながらゆっくりとお話でもいかがかしら？」
そう言い残し、優雅に一礼するとレイヴェルはイザベラを伴って去って行く。一誠はいきなりの提案にきょとんとした表情をしていた。
「なら俺も行くとするか。リアス、またな。赤龍帝、妹が折角誘ってきたんだ。恥をかか

せるなよ？　シン、赤龍帝にゲームで不様を晒すなと言ったが、お前もそうだからな？」
シンは答えず、さっさと行けと言わんばかりに手を振る。ライザーは鼻を鳴らし、ユーベルーナを連れて去っていった。
ライザーの背が遠くなっていくのを横目で見ながら、シンは密かに感心していた。
ついこの間までは一誠の名を聞いただけで膝を震わす程のトラウマを抱いていたライザーだったが、実物を目の前にし怯えず、震えず、いつもの通りの態度で接していた。
（いつの間に克服したんだ？）
ライザーは、シンたちの視界内から完全に消えたのをユーベルーナに確認すると、会場の隅に足早で向かう。
団欒している集団から離れ、壁に背を預けるライザー。よく目を凝らせば、その両脚は細かく震えていた。
「うう……ユーベルーナ……酒だ……アルコールを含んでいるなら何でも良い……」
「ライザー様。御立派でした」
ライザーの密やかな奮闘にユーベルーナは涙を流す。
実際のところ、ライザーはトラウマを克服はしていない。リアスが来たという情報を耳にした瞬間しこたま酒を飲んで酔い、恐怖を鈍らせていただけである。
方法としてはかなりアレではあるが、やせ我慢出来るだけほんの少しだが前進したと

もとれる。

「うう……ドラゴン……うう……赤龍帝……」

◇

ホテルの外でセタンタは、常に神経を尖らせながら周囲の警戒をしていた。華やかなパーティーの外で不穏な輩が居ないか、外の警備をしている。

護衛の悪魔たちも何十人も居るが、セタンタは敢えて自分から進んでこの仕事をしている。というのも、あまり表舞台に立つこともなく、また立つつもりも無いセタンタは、名ばかり通っているせいでいざ姿を見せると変に注目される。あくまで陰に徹したいと思っているセタンタには非常に窮屈なものである。

それならば、まだこうやって周りに神経を張り巡らせている方が、気が楽であった。

ふとセタンタの足が止まり、森の方に目が向けられる。

「どうしました?」

護衛の悪魔の一人が、急に動きを止めたセタンタを心配して声を掛けてきた。

「少し気になることが……貴方たちは引き続き会場の護衛をお願いします」

セタンタが森の中へと入っていく。

その姿を遠くから見つめている複数の視線があった。
（おいおいおい。今のを気付くかねぃ……）
（ヴァーリから事前に聞いてて正解だったにゃー。普通に眷属使ってたらばれていた所だにゃー）
小声で話す二人の人物。セタンタの情報を前もって知っていた為、目的の人物を招き寄せる最大の障害になると思い、とある細工をしてホテルから引き離したのだが、その細工自体ヴァーリ案のものであり、それを聞かされた二人はその案に懐疑的であった。
何せプールに一滴の滴を落とす。あるいは針を地面に落とすという様な極小さな変化であり、やった者たちも自分が気付くかどうか半々といったものである。
だが、その高い能力故にセタンタは、引っかかってしまった。障害は取り除かれたのである。
（じゃあ、いってらっしゃいにゃー）
黒い着物を着た黒髪の女性の手から一匹の黒猫が放たれる。黒猫は、にゃーと鳴くとホテルに向かって歩いていく。
（あとは待つだけだにゃー。そういえば静かだけどあの子はどうしたんだにゃ？）
（暇過ぎてあそこで寝てるぜぃ）
近くの木を指差す。

（あの子、口や態度は悪いけど寝顔だけは可愛いのににゃん）
（その可愛さの十分の一ぐらい普段の態度に回せたら、もう少し可愛げがあるんだがねぃ）
（にゃははは。そんなこといってヴァーリの次くらいに気に入られているくせに）
（体の良い足代わりにされているだけだぜ）
（照れないにゃん。――と、いつまでも喋っている訳にはいかないにゃん。美候。一足先に白音を待っているにゃ）
（おうさ。俺っちは、お前の妹が出てきたのを確認してから行くぜぃ。先に行ってまってな。黒歌）
　着物の女性の姿が消える。後に残るのは、一誠とヴァーリとの戦いで伝令として現れた孫悟空の子孫であり、『禍の団』の一員である美候。
　欠伸を噛み殺しながら、このまま何事も無く時が過ぎていく――という訳にはいかなかった。
　一人になって数分。森の中で別の気配を感じ取る。しかもその気配は、明らかに美候に迫って来ていた。
（おいおい。いきなりバレたのかぃ？　まっ、退屈する時間が無くなったと思えばましかもねぃ）

思うこととは裏腹に、美候は犬歯を剥き出しにして獰猛に笑う。それは、戦いを望んでいる者の顔であった。

美候は耳へと手を伸ばし、そこから何かを指先で引っ張り出す。目視では確認出来ない程極小のそれは、美候が指の腹を擦ると瞬く間に身の丈よりも大きな棍へと変わる。

孫悟空の代名詞とも呼べ、望めばどんな長さにも大きさにも変化する武器、如意金箍棒――即ち如意棒である。

美候はそれを手の中で一回転させ、金箍が填められた先端で地面を軽く叩く。それだけで美候を中心とした半径数十メートルは内界と外界として切り離され、音や気配が内界で遮断される。

「さあ。いつでも来ていいぜぃ?」

小声で話すのは止め、逸る気持ちが言葉となる。

直後、木々の枝をへし折りながら姿を現したのは、銀色の体毛を持つ魔獣。美候の姿を視界に捉えると、問答無用で前足を振り下ろす。

それを如意棒で受け止める美候。力の最高点の一歩手前で如意棒を押し当てる様にして受け止めたが、それでもケルベロスの一撃の重さに美候の足が地面に沈む。

「グルルルルルル!」

「こいつは驚いたぜぃ!」

現れた銀色の魔獣――ケルベロスの先制に目を丸くしつつも、その口元には笑みを浮かべる余裕がある。

空いている片足から爪が飛び出し、横振りでの一撃を放とうとするが、美候はそれよりも先にケルベロスの胴体を蹴り付けた。僅かに曲がるケルベロスの体。しかし、そこで怯まず爪で薙ぎ払う。だが美候は、蹴った反動で後方に跳び下がっていた。

「おお。怖いねぃ」

十数メートルもの距離を一足で跳んだ美候は、身に付けている朱色の鎧には触れさせていないにも関わらず、四本の浅い裂傷が刻まれていた。美候は、その傷跡を撫でながら怖がって見せるが、言葉とは裏腹に楽し気な表情をしている。

「ナニモノダ？」

「喋られるのかい？　というか普通襲ってからそういうこと尋ねるのかねぃ？」

「ソンナコトハ、ドウデモイイ。オマエハ誰ダ？」

「一方通行だねぃ。――まあいいや。俺っちは美候っていうんだ。『禍の団』所属で、孫悟空の末裔さね。知ってるかい？」

あっさりと自分の正体をばらしてしまう美候。相手を揺さぶるというよりも、どんな反応をするか期待しているようであった。

「ドッチモ知ラン」

「そりゃ残念だねぃ」
　言い切ったケルベロスに、美候は特に気を害した様子は無かった。
「こっちは答えたんだから、そっちも答えてくれるかぃ？　お前は何なんだぃ？」
「グルルル。オレノナハケルベロス」
　名乗ったケルベロスに、美候は訝しんだ表情となる。
「ケルベロス……？　何か俺っちの知っているケルベロスと大分違うんだが……」
　じろじろとケルベロスの全身を眺める。
「体毛の色も違うねぃ。尾の形も違う。大きさも違うし」
　記憶の中のケルベロスと目の前のケルベロスとの違いを指摘していく。だが、その行為はケルベロスの地雷に接近していくものであった。ただでさえ、彼は他のケルベロスとの違いにコンプレックスを抱いている。違いを指摘されている間、ケルベロスの不機嫌と怒りのボルテージは徐々に上がっていた。
「一番違うと言ったら、何より――」
　そして、美候は特に悪意も無く、ケルベロスにとって最大の地雷を踏み抜く。
「三つ首じゃないねぃ。『首が無い』」
「……ホウ？」
　最大の禁句を言われたケルベロスの態度は一見すれば落ち着いたものであった。だ

が、内心は違う。今まさに溢れ出る怒りが全身へと駆け巡っていた。
美候も言った後に、ケルベロスの先程までとの雰囲気の違いを感じ取り、少しだけ気まずそうに聞いてみる。
「あー、俺っち何か不味い事言った？」
答える代わりにケルベロスの口から炎が吐かれた。煮詰まった怒りが変換されて放たれた炎は、その灼熱をもって美候を焼き尽くそうとする。
「はっ！」
美候は笑い、如意棒を持つ手を炎に向けて突き出す。そして、手を離すと宙に固定された様に浮き、側面を指先で弾くと、その場で横回転をし始める。高速で回転する如意棒は、残像によって一つの円と化した。
円と化した如意棒に炎が触れる。途端に炎は四方へと飛び散り、砕けた炎は周囲の木々へとへばりつく様に着弾した。
一帯が炎に呑まれて行く中で、ケルベロスの炎を浴びせられている美候は火傷どころか汗一つかいていない。ケルベロスの炎が全く届いていない証拠であった。
ケルベロスの息が持つまでこの攻防が続くかに思えられたが、既に片方は次の行動へと移っていた。
紅蓮一色に染まる美候の視界。だが、その炎の揺らぎの中に美候は何かを見た。初め

は小さな影。しかし、段々とそれが大きくなっていく。
「んん？」
目を凝らす美候。影の正体はすぐに姿を現した。
「アオオオオオオン！」
自ら吐いた炎を突き破りながらケルベロスが飛び掛かる。しかし、美候との間にはケルベロスの炎すら防ぐ如意棒の盾がある。
美候は、迫るケルベロスをその場から一歩も引かずに見ていた。どうやって如意棒を突破するのかという期待を込めた眼差しであった。
ケルベロスは、最高速を維持したまま大口を開ける。そして、その鼻先が如意棒の回転に巻き込まれようとする直前、木霊する金属音と刹那に煌く火花。
閉ざされたケルベロスの顎には、丁度中心部分から挟まる如意棒。
あろうことかケルベロスは、形が溶ける程の勢いで回る如意棒を、その口で咥え、強引に止めたのだ。タイミングを計る様な機会など無かった。勢いと流れのままにそれを為したのだ。
「ハハハハハ！　やるねぃ！」
あまりに直球且つ単純且つ強引な突破の仕方に、美候は笑いながら称賛する。その間にも、ケルベロスは美候に接近していた。

爪の間合いに入るのを見て、ケルベロスは前足を上げる。美候は、ケルベロスが咥えている如意棒に両手を伸ばし、如意棒の梢段、把段を掴むと力任せに捻る。

ケルベロスの首の力は美候の腕力に負けて傾き、それによって跳ね上がった如意棒の先端が振り上げられていた前足首に叩き付けられる。

痺れる様な感覚が奔る。痛みにまで至らないが、美候の抵抗で力を削がれたと判断すると、振り上げた前足を残りの足と同様に地面へ着け、着地と同時に地面を蹴る。

突進するケルベロスを両足で地面を踏み締めながら押さえようとする美候であったが、勢いを止めることが出来ず、両足で地面を削りながら押され、轍の様な跡が地面に刻まれていく。

「調子に、乗るんじゃないぜぃ！　筋斗雲ッ！」

叫ぶ美候。すると足元に金色の雲が発生する。

「グウッ！」

ケルベロスが驚く様に唸る。何故ならば、筋斗雲が発生したのは美候の足元では無い。ケルベロスの足元であったのだ。

雲と呼ぶに相応しい柔らかな感触がケルベロスの足を包み込む。沈む足。もがいてみるが、筋斗雲の柔らさのせいで力が入らない。文字通り雲を掴む様な感触は、ケルベロスから足の自由を奪う。

「立つには結構コツがいるんだぜぃ、それ」
　美候はニヤリと笑うと、戸惑うケルベロスの喉元に掌打を当てる。
「グルッ！」
　衝撃で僅かに咬む力が緩む。その隙を狙い、美候は如意棒を引っ張り出す。
　再び噛み付こうとするケルベロスであったが、美候は揃えた二本の指を上に向かって突き出す。すると、それに合わせて筋斗雲が急上昇する。
「空を飛んでみるかぃ？」
　一秒足らずで数十メートル程の高さにまで上げられたケルベロス。本当ならばもっと高い場所まで上げられるが、それ以上上げると結界の外に飛び出てしまうので控え目にしていた。
「グゥゥゥ……」
　地を駆けていたケルベロスが初めて見る高度からの景色。森が小さく見え、遠くの明かりが星の様に輝き、空が近い。とても場違いであるが、この時のケルベロスは素直に空からの光景を眺めていた。
　が、そんな鑑賞もすぐに終わる。
「伸びろ！　如意棒！」
　美候の声に従い、如意棒の先端がケルベロスのいる高さまで一気に伸びる。それと同

時にケルベロスの足元にあった筋斗雲が消え、空中へと放り出される。
空中で自由に動けないケルベロスの胴体に振り下ろされた如意棒が打ち込まれ、地面に向かって叩き落される。
数秒後、派手な音と豪快に土を巻き上げながらケルベロスの体は地面に叩き付けられた。
「戻れ。如意棒」
伸ばしていた如意棒を元の長さに戻す。
「空からの景色はどうだったぃ?」
冗談を口に出す。
「グルルルル。ワルクハナカッタ」
答えはすぐに返ってきた。
土埃が消え、そこには体についた土汚れを身を振るって落としているケルベロスが立っている。まるで何事も無かったかのように平然としていた。
「おいおい、丈夫だねぃ。手加減した覚えはないんだが……」
言葉の通り一切の加減をしていない。殺すつもりで叩き付けた。だが、ケルベロスは生きている。美候は、ケルベロスの強さを見誤っていたことを反省する。しかし、これは嬉しい誤算であった。

　待つだけであった退屈な時間が、現れたケルベロスのおかげで楽しい戦いの時間へと変わった。ヴァーリ程ではないが、美候自身闘争に楽しさや充実を見出す人種である。手応えのある敵の登場に喜べない筈が無い。
「く、くく、ひゃはははははは！」
　嬉しさに堪らず笑いが洩れる。甲高い笑い声。どこか獣染みた外聞の無い笑いであった。
「ナニガオカシイ？」
「気を悪くさせたなら謝るぜぃ。ただ純粋に嬉しいんだよぉ。お前みたいな奴と戦えて」
「意味ワカラン」
「戦いに熱くならないタイプかぃ？　そいつは残念だぜぃ。そこも気が合ったらさぞかし楽しかっただろうに」
　美候が如意棒を旋回させた後、先端をケルベロスに向ける。ケルベロスもまた後ろ足に力を込め、いつでも最速を出せられる前傾姿勢になりながら低く唸る。
「――ところで聞き忘れてたことなんだが」
「……ナンダ？」
「何で俺っちのことをいきなり襲ったんだ？」

姿を隠して多少は怪しい点が在ったのは分かるが、襲われる程のようなことはしていない。

「グルルルル。簡単ダ。オマエノ存在ガ無性ニ気ニ入イラナイ」

「はっ！　そうかい。俺っちも犬は大っ嫌いだぜぃ！」

突き出す如意棒の先が、射貫く様に伸びる。駆け出したケルベロスは眼前に迫ったそれを、僅かに首を動かして避ける。その際如意棒が掠め、ケルベロスの体毛が数本宙に舞う。

ケルベロスは、口に紅蓮の炎を溜めながら美候へとその牙、その爪を突き立てようと、大地を蹴った。

◇

パーティーが始まってそれなりの時間が過ぎた。知り合いとも会話を済ませ、食事も適当に済ませたシンは、特にやることも思いつかなかったのでフロアの隅に置かれている椅子に座っていた。

彩られた悪魔たちから離れた場所にいると少し落ち着く。パーティーという華やかな空気に慣れていないからだと自覚していた。

見える範囲では、リアス、朱乃、ソーナらが女性悪魔らと談笑している姿が見え、別の方に目を向ければ、ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンらが食べ物や飲み物を食べ続けている姿を見える。

フロアの一角では、男女の悪魔たちが曲に合わせて優雅に踊っている姿も見えた。シンもリアスの母から手ほどきを受けているが、人前で見せるほどのレベルにはなっていない。仮になっていても、見せるつもりもないが。

「お前もここに来てたか」

一誠が、アーシアとギャスパーを連れて現れた。心なしか皆疲れた表情をしている。シンと同様にパーティーに慣れていないからだと思われる。

三人は、そのままシンの側に座る。

「あー、ちかれた」

一誠は、上まできちんと止めていた制服のボタンを外し、襟を緩める。心身共に感じていた息苦しさを解放させる為である。

「私もちょっとだけ疲れちゃいました。私、こういうのは初めてでずーっと緊張しちゃってて」

「僕もこんなに人に挨拶したのは初めてですぅ……」

質素な生活をしていたアーシアと引き篭もり生活をしていたギャスパーには、この

パーティーの空気は中々重たいものであるらしい。
「アーシアもギャスパーも結構男の悪魔に声を掛けられてたもんなー」
二人揃って可愛らしい容姿をしている。声を掛けられてもおかしくはない。
アーシアは声を掛けられると戸惑いつつ無難な返事をし、ギャスパーもどもりながらも一応返事をしていた。中々離れないときは、一誠に助けてもらうなどをしていた。
「うーっす」
匙がシンらを見つけ、声を掛けながら近くの椅子に座る。その手には料理が盛られた皿を持っている。
「おっす。会長の側に居なくてもいいのか？」
「それなら副会長が付いてるよ。俺よりもお偉い悪魔さんは、副会長の方が話し易いみたいだしな」
ケッと皮肉を言いながら料理に手を伸ばす。
「やあ。皆、ここに居たんだね」
匙に続き、木場が軽く手を上げながら現れた。
「参ったよ。中々場を離れるタイミングが見つからなくって」
困った様に笑う木場。しかし、それに対し一誠と匙はじとりとした陰気な眼差しを向ける。

「それって誰に引き留められていたんだ？　男か女か？」
「え？　女性だけど」
「何人だ？　何人に引き留められていたんだ？」
「えーと、正確な数は覚えていないけど五人以上だったかな……？」
　止せばいいのに馬鹿正直に答える木場。案の定、僻みに満ちた男二人の視線を浴びせられることになる。
「ちっ！　これだからイケメンは！」
「何で世の中こんなに不公平なんだ……くれ！　お前の持っている何かをくれ！」
「え、ええ……？」
　理不尽な嫉妬され、困惑した様子の木場。
「チクショウ！　俺たちにとって奇跡の様な所業を平然と体現しやがって……俺たち『四人』には、そんな奇跡なんて巡って来ないっていうのに……」
　匙、一誠、ギャスパーときて必然的に四人目は――匙に自然と自分が組み込まれていることに、混ぜるなと反論したいシンだったが、下手なことを言うと墓穴を掘りかねないので黙っていることにした。
「ああ。俺だって幸運と幸運が重なって奇跡に昇華してようやく揉めるっていうのに……」

「全くだ。……んん？」

同意しかける匙であったが、聞き捨てならない言葉が含まれていることに気付き、一誠の方を見る。

「え？　え？　揉む？　揉むって言ったのか？　う、嘘だろ……？　は、ははは。俺をからかっているんだろ？　主さまのを揉んだっていうのか？　ど、どうせ揉むって言ったって肩とかっていうオチだろ？　そうだよな？　そうだと言ってくれ！」

本当は理解している筈なのに理性がそれを拒んでいるのか、椅子から立ち上がった匙が縋る様な目で一誠を問い質す。

「……ごめんな、匙。俺はもう階段を一つ上がったんだ……揉むというのは既に過去の目標なんだ。今の俺が目指しているもの、それは――つつく」

雷にでも打たれたとしてもこれほどまでにショックを受けないであろう形相となり、崩れ落ちる様にして椅子に座る。

「つ、つつくって……つつくってお前……一体どういう幸運があればそんなことが出来るんだ？　どうやったらそんな奇跡が起きる……？」

「まあ、普段一緒に寝たり、一緒にお風呂に入った時に……」

既に日常と化しているリアスとのスキンシップ。しかし、匙にとってはあまりに重く、残酷な言葉の一撃であった。

「ね、寝るって……ふ、風呂って……生を見たり、触ったりしたってことなのか？　お、俺は、会長とは一度もそんなことは……」
　匙の全身が見ていて恐ろしくなるほどガタガタと震え始める。
「この裏切り者っ！」
（別に足並み揃えていた訳でもないだろう）
　涙目でそう叫ぶ匙に、シンは心の中で割と冷めた言葉を思うが、口には出さない。出せば確実に飛び火する。
「ははは。やっぱり皆といるのが一番賑やかだね」
　一誠に噛み付いている匙を見ながら、木場は匙に見えない角度で笑う。
「騒がしいだけだ」
「僕は、こういう騒がしさは好きなんだけどね」
　一誠と匙とは対照的にシンと木場の会話は静かなものであった。淡々とし、取り留めの無い話をする。
　しかし、その会話も長くは続かず、やがて会話の間が出来る。とは言っても、沈黙が続いたのは一分にも満たない。
　生み出された沈黙は、木場の言葉によって斬り裂かれた。
「もし、君と戦うことになったら、僕は君に勝つ」

決意としては、随分と淡々な言葉に聞こえた。もっと熱があっても、もっと鋭さがあっても良いのではないかと思う程、木場の口調は普段通りのものであった。
だが、それなりの付き合いがあり木場の性格を知っているシンは、言葉の裏に潜む本気を感じ取っていた。
木場は今もなお研いでいた。自らの内にある戦意を。それを外に出そうとしないのは、僅かに漏れ出すそれすらも惜しいと考えていた。
対等な友人だからこそ本気で戦いたい。剣士としての性であり、エゴでもあるそれを向けるのは、木場からシンへの信頼とも言えた。
木場の決意を聞かされたシンであったが、返答はしなかった。木場の方もただ自分の決意を伝えたかっただけらしく、シンから視線を外す。
シンは周囲を見渡す。視界に入る談笑している面々。数日後には、互いに意地と誇りをかけて全力で戦うことになる。そう考えると不思議な気持ちであった。
「ここに居たのか」
物思いにふけ始める直前のタイミングで、ゼノヴィアがシンたちのもとに現れた。その手には豪華な料理が盛られた皿を器用に何枚も持っている。
「色々と料理をゲットしてきた。皆で食べてくれ」
皆に料理をそれぞれ手渡す。

「ゼノヴィア、悪いな」
「いや、何。これぐらいは安いものだ。あと飲み物もあるぞ」
だが、ゼノヴィアの手に飲み物らしきものはない。
「おーい」
後ろに声を掛けると、いくつもの飲み物を載せたトレイを運ぶジャックフロストとジャックランタン。小柄なピクシーはジャックフロストの頭に乗ってちゃっかりと楽をしている。
「ヒ～ホ～。持ってきたよ～」
「ヒホ！　どうぞだホ」
「御苦労」
ジャックランタンのトレイに乗ったジュースをアーシアとギャスパーが手に取る。
「ありがとうございます。ランタンさん。緊張して喉がカラカラでした」
「僕もですぅ……」
二人揃ってジュースを口にする。
「一枚貰っていいか？」
「ん？　ああ。構わないぞ」

ゼノヴィアから料理を盛られた皿を一枚受け取ると、シンは椅子から立ち上がった。
「何処か行くのか？」
「外に居るケルベロスに差し入れをしてくる」
そう言って会場の外に向かって歩いていく。
「ところで、サジって何でさっきからブツブツ言ってるの？」
虚ろな目で、「何故だ」「どうしてだ」「あんまりだ」と独り言を呟いている匙を気にするピクシー。
「うーん。軽く言うと――」
先程までのやりとりを掻い摘んで簡単に説明する。
「ふーん。要するに仲魔外れになって寂しいんだ。よしよし」
落ち込む匙の頭を撫で、慰める。
「ありがとよ……だけど、その優しさは間薙にでもあげてやれ……あいつも俺と同じ、女の胸にも、女と風呂にも縁が無さそうな奴だからな……」
「え？　シンも女の人と一緒にお風呂に入ったことあるよ？　それもいっぱい」
「!?」

◇

棍と爪が衝突すれば、甲高い音と共に発生する衝撃で周囲の木々が揺さぶられ、炎が奔れば如意棒の一閃が奔り、二つの焔に割かれた。
両者の攻防は短時間で百を超え、あまりに密度の濃い戦いとなっている。
近い実力故に共に無傷という訳にもいかず、美候は鎧を何カ所か爪によって傷付けられ、炎で焦がされている部分もある。
ケルベロスも整えられていた毛並みが乱され、爪が一本折られていた。
美候は汗を流し、ケルベロスも呼吸が少し荒い。二人とも確実に疲労が溜まりつつあるが、それでも戦い方に陰りが見えなかった。
何度目か覚えきれない程の攻防が終わり、次の攻防の為に共に距離をとる。
力が拮抗している為に戦況が動かない。戦いの天秤は常に定位置から動かず、ただ時間だけが過ぎていく。
黒歌との約束がある為、何らかの形でこの戦いを終わらせなければならない美候であったが、彼の胸中に焦りは無かった。
秘策がある――という訳では無い。ただ単純にケルベロスとの戦いに熱が入り、夢中になりかけているのである。頭の中では分かっているものの、それを片隅に追いやる程にケルベロスとの戦いを楽しんでいた。

出来ればもっと長く、とそんなことまで考え始めていたとき、唐突に事態は動き出す。肩に何かが置かれる感触があった。視線を向ければ、それが人の手であることを知る。

ケルベロスとの戦いに集中するあまりこんなにも簡単に背後を取られたことも驚きだが、人避けの結界の中に誰かが入ってきたことも驚きであった。

視線を更に動かし、その手の主が誰なのか確かめようとした瞬間、頭の芯まで届く様な衝撃を受けながら、美候の頭が仰け反る。

頭突きをされたと理解しながら大きく跳ぶ美候。着地し、すぐに構えようとするが、景色が一瞬ぼやける程の眩暈がし、すぐには移れなかった。

「いってぇ……親父の拳骨喰らった時を思い出すぜぃ」

叩き付けられたところを擦りながら、先程まで自分が立っていた場所に目を向けるが、そこに誰も居ない。更に視線を動かすと、その人物はケルベロスの隣に立っていた。

「お前は……初対面だけど、俺っちはお前のことを知っているぜぃ。『人修羅』だろ？」

人修羅ことシンは、魔人としての名を呼ばれたことに僅かに顔を顰める。

「……誰に聞いた？」

「ヴァーリからだぜぃ」

それを聞いて二つ推測する。恐らくヴァーリは、マタドールを経由して『人修羅』の

名前を知ったのだと。『人修羅』と命名したのはマタドールであり、シンはマタドールとヴァーリが親し気であった所を見ている。
　そして、ヴァーリの名を出した目の前の人物は『禍の団』と関わりを持っている可能性が高い。
「グルルルル。ナニヲシニ来タ？」
「差し入れ」
　ケルベロスの前に料理が盛られた皿を置く。
「それを食べている間、交代だ」
　小指から順番に折って拳を作ると、紋様が浮き上がり暗緑の光を放つ。
「全く。主従揃って行き成りは無いだろう、行き成りは」
　二人のやりとりでそう判断した美候は、愚痴りながらも如意棒を構える。
「というか結界張ってあったのにどうして気付いたんだ？」
「――何となく」
「何だそりゃあ？」
　適当な答えに呆れるが、本当に何となく気付いたのだから仕方ない。
　ケルベロスを探して森に入った所、妙に違和感を覚える気配を感じたのだ。何がおかしかったのかは感覚的なもので説明することが出来ないが、強いて言えば森の中の独特

な雰囲気の中で、ある場所だけで不自然に『浮いて』見えた。文字が二重書きされているような、絵の塗り斑があるようなそんな感覚である。
「勘で気付いたのかい？　結構へこむぜい、それ」
それすら騙せ遂せると思っていた美候には割と衝撃的であった。
「ならもっとへこむことになるな」
新たな声と共に美候の側面から炎が襲い掛かる。如意棒で地面を突き、その反動で後方に飛んだ美候は、炎で焼かれて出来た道から現れた人物を凝視する。
「今度は誰だ？」
「お前なんぞに名乗る程、安い名前じゃないんだよ」
紅蓮の双翼を羽ばたかせ夜の闇を輝かすのは、ライザーであった。
「何故ここに？」
「何か不穏なものを感じたからだよ」
シンと似た様な理由を言うライザーであった――が、事実はかなり異なる。
一誠への恐怖を紛らわせる為にかなりの量の酒を摂取していたが、そのせいで気分が悪くなってしまい、酔いを醒ます為に夜風に当たろうとホテルの外に出ていた。その時、偶然にも森に入っていくシンの姿を見つけ、何をしているのかと動きを目で追っていたところ、急にその姿が見えなくなったのでおかしいと思い、この場所に降り立った

のである。あまり格好の良い理由ではないので、真実はライザーの中で握り潰された。
「で？　誰だこいつは？」
「冥界のやつらってのは、問答無用で人を襲うのが常識なのかぃ？」
「ビコウダノ、『禍の団』ダノ名乗ッテイタ」
「こいつが……だと」
　立て続けに不意打ちをされる美候の不満を無視して、ライザーの問いにケルベロスが答える。相手が、三大勢力を相手にテロを行っている『禍の団』の一員と聞いて、ライザーは七十二柱の悪魔としての使命感からか、敵意と殺気を込めた視線を美候に向ける。
「どういうルートを使って、冥界に来たのかは知らないが、生きて帰れると思うなよ」
「退屈しないねぃ、ここは。好きになりそうだぜぃ」
　ライザーが一歩踏み込み、臨戦体勢に移るとシンもまたケルベロスの側から離れる。
「手を出すな。こいつを倒して俺が――」
「仕留めるなら確実に仕留めるぞ」
　少しの間、ライザーは顔を顰め黙考する。
「――まあいい。手を『貸させ』てやる」
「どうも」

上から目線の了承に、シンも素っ気ない態度で礼を言う。
「二対一になるが悪く思うなよ？　敵地に来たんだ、これぐらいは想定済みだよな？」
「別に構わんぜぃ。ただ――」
美候が最後まで言うよりも先に場に大きな変化が起こる。ライザーの登場によって熱を帯びていた空気がいきなり肌寒いものへと変わったかと思えば、吐く息が白く染まり始めた。適温であった冥界の空気が瞬く間に、極寒のそれへと変わっていく。
「ようやく起きたか、寝ぼすけめ」
「ふぁああーあ……オレ様が寝ている間に何が起こったんだホ？」
童の様な声がした。すると木の葉が揺れ、木から何かが落ちて来る。
その姿を眼に入れた瞬間、美候を除き誰もが驚いた。
紫の二股に分かれた帽子。黒く染まった体色と異なる点はあるものの、形は彼らの知っている者に酷似しているのである。
（ジャック、フロスト？）
その姿に思い浮かべ言葉を否定するように黒い雪だるまは出て来て早々に叫ぶ。
「よく聞くんだホ！　オレ様は！　最強にして最恐の最凶で最狂なジャアクフロスト様だホ！　オレ様の力の前に平伏すがいいホ！　ヒーホッホッホッホッホッホッ！」
高らかに名乗りながら笑う黒い雪だるまことジャアクフロスト。その姿にポカンと

する一同。
「……まあ、あれだ。こいつも入れて二対二だってことだぜい」
妙にしまらなくなった空気の中、おずおずと美候は中断していた台詞を紡ぐのであった。

選択、進路（前編）

ホテル前に造られた噴水の縁に腰を下ろしている二人の男女。どちらも落ち着かない様子であり、男性の方は絶えず足踏みをし、女性の方は時折空を見上げていた。

「小猫ちゃん、大丈夫でしょうか？」

「私も心配よ。それに今の小猫をあまり一人にしたくないわ」

二人の男女――一誠とリアスは互いに深刻な表情をし、ここに居ない小猫の心配をしていた。

ことの発端は、ケルベロスに差し入れをすると言ってシンが席を外してから数分経った後に起こった。

一誠が他のメンバーと会話していた際に、偶然視界の端に小猫の姿を映した。それだけならば気にすることなど無かったが、普段無表情の小猫が血相を変えて、何かを抱きかかえてパーティー会場から出ていったとなると話は変わってくる。

その必死な様子に不安を覚えた一誠は小猫の後を追うことにした。事を荒立てたくないという理由から、他のメンバーに適当な嘘を吐いて会場に残しておく。

会場の外に出ると下に向かって降りるエレベーターを見て、すぐに隣のエレベーター

に乗り、下へ向かおうとボタンを押す直前、誰かがエレベーターへ乗ってきた。
見るとそれはリアスであった。何故ここにと尋ねると、一誠が慌てた様子で会場の外に出るのを見つけたからしい。
一誠は小猫のことを説明すると、リアスもすぐに小猫を探すことに決めた。
エレベーターが下まで降りるとすぐに下の階にいる従業員たちに小猫を見ていないかを確認し、その中で外に出たという情報を掴む。
ホテルの外に出ると、リアスは空に向かって使い魔の蝙蝠を放ち、小猫を探す様に指示し、蝙蝠が戻って来るのを待つ今現在へと至る。
「一体どうしたんでしょうね？　あんなに余裕の無い顔をした小猫ちゃんは初めて見ました」
「あの子がそんな風になるとしたら、理由は限られてくるでしょうね」
全く分からない一誠に対して、リアスの方は思い当たる節がある様子であった。
「――そういえば、小猫ちゃん、会場を出て行くときに何かを抱きかかえていました」
「抱きかかえて？　詳しく思い出せない？」
リアスに言われ、一瞬見た光景を必死に思い出す。
「確か……黒っぽくて……ふわふわしていた様な……」
そして、同時に小猫がその黒いふわふわしたものを抱いている姿には既視感を覚えて

いた。何度か見たことがある様な――。
その時、キィ、キィという鳴き声を上げながらリアスの蝙蝠が戻って来る。
「見つけたようね」
蝙蝠は、リアスの手に降りると鳴き始める。
「――森？　ホテル周辺の森であの子を見つけたのね」
使い魔からの情報を受け取ると再び放ち、小猫の所までの道案内を指示する。飛んで行く蝙蝠の後を追おうとしたとき、一誠が小さく『あっ』という声を上げた。
「どうしたの？」
反射的に足を止め、声を上げた理由を問う。
「いや、大したことじゃないんですが……」
「いいから言いなさい」
リアスの足止めをしてしまったことに申し訳無さそうな表情をし、前置きをしてから、つい先程思い出したことを話す。
「あの、部長とその使い魔の蝙蝠を見て思い出したんですが――」
使い魔。その言葉が一誠の頭を過った時に、過去の記憶が唐突に掘り起こされる。それは、オカルト研究部の面々がそれぞれの使い魔を紹介したときの記憶。その中で、小猫は自分の使い魔と言って、白い猫を抱き上げていた。

あの時の姿が、会場を後にする小猫との姿と重なり合い、小猫が何を持って会場を出て行ったのかを思い出す。
「小猫ちゃん、会場を出て行った時に猫を抱いていたんです。使い魔の白い猫じゃなくて、黒い猫を」
告げられたリアスは、固いものでも呑み込む様に体を一瞬硬直させた。そして、納得した様な表情となる。思い当たる節であったものが、確信へと変わった瞬間であった。
「急いで小猫を探すわよ、イッセー。ますます今の小猫を独りにする訳にはいかないわ」
「一体何が分かったんですか？」
「走りながら説明するわ」
リアスが蝙蝠を追って走り始める。それに慌ててついていく一誠。人工の光で照らされた夜を抜け、二人の姿は闇夜の森の中へと消えていく。
彼らは気付いていなかったが、走り去って行くその姿を、ホテル内から見ている人物が居た。
その人物は、その辺りを歩いていた従業員を呼び止める。
「はい？　何で――ひっ！」
「怯えるなよ。ちょっと聞きたいことがあるだけだからよぉ。別に取って食ったりしないぜぇ？　へっへっへっへっへ」

「な、な、何でしょうか？」
「さっきあそこにいた二人が何していたか知っているか？」
「さ、さあ？　申し訳ありませんが私には分かりません」
「そうか」
「あ、噴水前で何をしていたかは存じませんが、それより前に何をしていたかは知っております」
「ほう？　何をしていたんだ？」
「人を探しておいででした。私も尋ねられましたので。確か探していたのは、小柄な少女だったと思います」
「小柄な少女ねぇ……ありがとよ。これやるよ」
「え？　うわっ！――ってこれうちのカジノの換金用チップじゃないですか！　こんなに受け取れません！」
「賭け事は好きだが、金は別に好きじゃねぇんだよ。全部くれてやる」
「と言われましても……お客様？　お客様ぁ！」▪

◇

光源の無い森を走ること数分。幸い完全に放置されている森では無かったので、走る分には問題は無かった。特に一誠は山の中で何日も過ごしていたこともあって、森の中を自在に駆けていく。そのせいで森に不慣れなリアスと、徐々にだが差が広がっていた。

リアスを気遣い、少し移動速度を緩めようかとリアスの方を見る。そのタイミングで横に伸びた枝が現れ、一誠の後頭部に当たろうとする。

「イッセー！　ま――」

前、というよりも先に、ごく自然な動作で一誠は頭を下げて、伸びた枝の下を潜る。完全に死角となっていたにも関わらずに、である。

「どうかしましたか？」

枝よりもリアスが声を上げた方を驚いていた。その大した事をしていないという態度に、リアスは一誠の成長を再認識させられる。

「逞しくなったわね。貴方」

「まあ、色々とありましたから」

褒められて一誠は苦笑いを浮かべる。

成長した喜びというよりも、あれだけやれば嫌でも成果を出すだろうというのが、山での特訓の感想であった。

そこから更に数分走った時、リアスが一誠の手を引く。地面を強く踏み締めて急停止すると、リアスに木の陰へと引っ張り込まれた。
リアスが指を差す。その方向から顔を出すと、そこには小猫がいた。
小猫は、両腕に黒猫を抱えたまま森の真ん中で何かを探している。
「ニャー」
黒猫が鳴き、小猫の腕から飛び出す。そして、トコトコと歩き始めた。
黒猫の動きを目で追う小猫。すると何も無かった筈だというのに、いきなり白い両手が黒猫に伸び、そのまま抱き上げられる。
「よしよし。いい子だにゃー」
続いて女の声。木の陰から見ていた一誠たちは驚く。本当に何の前触れもなくその人物が現れたからだ。滲み出た、浮き出たと表現していいほど突然であった。
「白音もいい子だにゃー。この子に大人しく連れ出されてくれるなんて」
現れた女性は、黒の着物を纏う妖艶な女性であった。纏う黒のお陰で、着物から覗く肢体の白が映える。しかし、その頭頂部から生えている猫の耳と腰から垂れた二股の尾を見れば、その女性が人外であることが分かる。
「黒歌姉さま……」
「そうにゃー。お姉ちゃんよ。久しぶりじゃない？」

笑い掛ける黒歌に対し、小猫は怒気を含んだ表情をしていた。
「……姉さま。今更何の用ですか？」
「にゃははは。そんな顔をしないで欲しいにゃー。折角、久しぶりの再会なのにそんな冷たい態度をされたらお姉ちゃんは悲しいにゃん」
くすんくすんと言いながら目尻を指で擦り、涙を拭う仕草を見せる。一目で演技だと分かるほど、わざとらしいものであった。
からかわれていると思ったのか、小猫の語気は更に強まる。
「最初はちょっとした野暮用のつもりだったのよ？　悪魔さんが、それもお偉いさん達が大きな催しをしているっていうじゃない？　だからちょっと気になっちゃったにゃん――そしたら、懐かしいニオイと気配がしたから驚いたにゃん。まさかここで可愛い妹と会えるなんて運命って素敵だにゃー……そっちの御二人さんもそう思わないかにゃん？」
明らかに一誠とリアスの存在に気付いている口振りの黒歌。二人はドキリとするものの、元より最後まで隠れているつもりでは無かったので、黒歌の言葉を切っ掛けにして木陰から出る。
「……部長、イッセー先輩」
姿を現した二人に小猫は驚き、その後に気まずそうに視線を伏せた。黙って独りで行

動したことに後ろめたさを覚えている様子であった。
　リアスはそんな小猫に近付き、無言で頭を撫でる。怒っていないことを伝える為のものであった。
「もう。折角の姉妹水入らず、涙の再会を邪魔するなんて無粋だにゃー」
「……明らかにそんな穏やかなものじゃなかっただろうが」
　黒歌の言葉に一誠はぶっきらぼうに返す。
「そんな怖い顔をしないで欲しい――にゃん♪」
　手を猫の手の様に丸め、ウィンクする黒歌。容姿と相まってかなりの破壊力。敵対している一誠も思わず『可愛い』と内心思ってしまうほどである。尤も、そんな一誠の心情はリアスにあっさりと見破られ、小猫を撫でる反対の手で一誠の頬を抓る。
「そっちの紅髪の悪魔はリアス・グレモリーだと知っているけど、そっちの子は誰にゃん？」
「小猫ちゃんと同じリアス・グレモリーの眷属で『兵士』の兵藤一誠だ！」
　一誠の名乗りに黒歌は目を丸くする。
「ヒョウドウイッセー……赤龍帝かにゃー」
　黒歌は、一誠の頭の天辺から爪先までをじっくりと眺める。
「ふーん……これがヴァーリに手傷を負わせたおっぱい好きの現赤龍帝かにゃー……

へぇー」

ヴァーリの名前を出され、一誠たちの表情が変わる。ヴァーリと繋がりがあるということは『禍の団』との繋がりがある可能性も高い。

「ヴァーリって……お前も『禍の団』の一員かよ！」

「正解だにゃん」

「……姉様、何てことを……」

「まあ、『禍の団』の目的よりもヴァーリに惹かれて入っただけだにゃんだけどね」

「冥界に居たのもテロが目的か！」

「違う違う」

一誠の詰問に黒歌は、手と尻尾を振って否定する。

「そういう指示は私たちには降りてないにゃん。されたのは冥界での待機だけ。さっきも言った様にここに来たのは本当に偶々だにゃん」

黒歌の言葉を鵜呑みにするつもりは無かったが、本当にテロを企んでいたとしたら今回の行為は迂闊とも呼べるものであった。尤も、ばれてもどうにかなるという、自信の表れとも捉えることが出来る。

「テロも目的じゃないし、冥界にいることもバレたんだからもうここには用はないだろ」

「それがあるにゃん。正確に言えば出来たとも言えるけど。ねぇ、白音？」

目を細め笑う黒歌。その瞳を向けられた瞬間小猫が纏っていた怒気は霧散し、体を小刻みに震わす。
「白音は頂いていくにゃん。あのとき連れていってあげられなかったからね」
「ふざけたことを言わないで。この子は私の眷属よ。貴女には指一本触れさせはしないわ」
「酷いにゃー。姉妹が一緒に暮らすことがそんなに間違っているかにゃん？」
「自分のしたことを覚えているの？　貴女がこの子の姉を名乗ることに寒気がするわ」
「あらあらあら？　そっちがどう思っていようと白音は私の妹。上級悪魔様にはあげないにゃん」
「それがどうしたっていうの？　覚えておきなさい。塔城小猫はリアス・グレモリーの『戦車』！　そして私の大切な家族！　貴女に渡したりなんてしない！」
女と女の激情を込めた視線が激しく衝突する。並みの胆力を持つ者ならばその光景に腰を抜かすであろう一触即発の空気。現に一誠は背中から冷や汗を流していた。
「これ以上話しても無駄だにゃん。だったら――」
黒歌が両手を広げる。
「――もう殺すしかないにゃん♪」
両掌を打ち付け合う音が響き渡ると、同時に世界が変わる。色やニオイが変わった訳

では無いが、漂う空気や雰囲気が明らかに異質なものへと置き換えられる。
「これは！」
「空間をちょっとだけ弄ったにゃん。これでこの森一帯は外と遮断されたにゃん。どんなに音を出しても漏れないし、外から悪魔が入ってくることもない。人知れず、私に殺されてグッバイだにゃん！」
　明らかに高度と思われる術を容易く操る黒歌。実力の片鱗を見せつけられるが怯むことも脅えることも出来ない。負ければ命を奪われるだけでなく、小猫をも奪われてしまう。
「もう一度聞くけど私と本気でやるのかにゃん？　今だったら小猫を渡してくれれば命だけは助けてあげるにゃー。因みにこれは最後のチャンスだにゃん」
『断る！』
　一誠とリアスが黒歌の提案を、口を揃えて一蹴する。
　黒歌は、口には笑みを浮かべているもののその目は笑っておらず、縦に割れた瞳からは、ぎらつく様な妖しい輝きを放つ。
「じゃあ、もう死ぬしかないにゃん」
「……姉様！　止めて下さい！」
　小猫が叫ぶが既に遅く、黒歌は再び手を打ち鳴らす。

「はあ？」
　それによって起こった現象に、一誠は呆けた声を上げてしまった。
　周囲を囲む青々とした木々が、黒歌が手を鳴らした瞬間、その枝に一斉に花を芽吹かせる。森の青いニオイが、あっという間に花の甘い香りで覆い尽された。
「枯れ木に花を咲かせましょー。何てにゃん」
「何だこれ……？」
「イッセー、気を付けなさい！　これが黒歌の仙術よ！」
「仙術？　これが……？」
「そうだにゃん」
　黒歌が会話に割って入ってくる。
「魔力や光力とは似て非なる、生命の源流である気を操るのが仙術だにゃん。命在るものならばその中の気を操って、こんな風に花を咲かせたりもすることが出来るにゃー。逆に――」
　黒歌が指を鳴らす。すると、数本の木から咲いていた筈の花が全て散ったかと思えば、瞬く間に枯れ始め、やがて自重によってへし折れる。
「こんな風に気を乱したり、断ったりすることも出来るにゃん。――もし、この木と同じことを悪魔がされたらどうなるか、試してみる？」

妖しく微笑みながら、散って舞う花びらの一枚を指先で摘まむ。
聞かれなくとも、折れた枯れ木を見ればどうなるか容易く想像が出来る。
『相棒。絶対にあいつに触れられるなよ』
一誠の頭の中でドライグが警告する。
『悪魔の魔力や魔術師の魔術と比べると、生気の乱れを治す術は限られている。外からのものではなく内にあるものを狂わせられるのはかなり厄介だ。数回程度なら俺の力で無理矢理流れを正すことが出来るかもしれないが、即死を免れるだけだ。代わりにまともに動くことが出来なくなるぞ』
（ドライグでも不味いのかよ）
『生憎、気は俺の専門外だ。――玉龍辺りなら容易く対処出来るかもしれないがな』
この相手に身動きが取れなくなればすぐに死に繋がる。ましてや、今の一誠は神器を使えない。体一つでどうにか足掻くしかないのだ。
「でもそんな面倒なことをしなくてもすぐに終わりそうだにゃん」
黒歌は摘まんでいた花びらを指先で弾く。消える花びら。直後、鋭い痛みが一誠の右肩に起きる。
「くあっ！　な、何だ？」
制服が流血で赤く染まり始めていた。肩を僅かに動かすと、再び起こる痛み。肩に埋

まった何かが肉と擦れあっている。
歯を食い縛って傷口に手を伸ばす。そして、傷口を撫でるとそこに異物感があった。指先で掴んで一気に引き抜く。
一誠の血で赤く染まっているが、それは間違いなく、今もなお宙を漂っている花びらの一枚であった。
「気を込めればこんな花びら一枚だって、あっという間に立派な刃になるにゃん」
黒歌は人差し指を立て、それを軽く回す。すると舞っていた花びらがその動きに合わせて動き、黒歌の頭上で花の渦を作り上げる。
幻想的な光景であったが、先程の花びらのこともあり、一誠たちにとっては寒気のするものであった。
「ばいばいにゃー」
黒歌が手を振り、別れの言葉を言うと、花の渦巻きから凶弾と化した花びらが一誠たちに向かって放たれる。
一誠がその場から跳ぶようにして移動する。狙いを外された何枚もの花びらが地面に突き刺さった。
間髪入れず軌道を変えた花びらの追撃が、移動した直後の一誠を襲う。
「おおお！」

地面に飛び込む様にして回避するものの、腹這いになっておりすぐには立ち上がれない体勢であった。だが、一誠はそこから地面を勢い良く転がり、追撃の花びらを立て続けに避けていく。

傍から見れば無様に映るかもしれないが、これは一誠がタンニーンとマダとの修行の中で学んだことである。兎に角動きを止めないこと。相手に狙いを定まらせない。天から降り注ぐタンニーンの業火や、魂すら吹き飛びそうなマダの豪拳を少しでも味わわない為に、身を以って得たことである。

一方でリアスは滅びの魔力を周囲に天幕の様に展開し、弾丸の如く撃ち込まれる花びらを消していた。いくら気を込めた花びらであってもリアスの力の前では、ただの花びらとは変わらない。

しかし、だからといってリアスにとって有利な展開とは言えなかった。リアスの滅びの魔力の使い方は、守りよりも攻めに趣がある。小猫をかばう為今の様に防御として使っているが、あまり慣れていないこともあって、いつも以上に魔力の扱いを集中せざるをえなかった。

集中する。一見何も悪い様には思えないが、裏を返せば余裕が無いのである。することどれもに必要以上の力を込めてしまっており、リアスはかなりの勢いで魔力を消耗していた。

本当ならば一誠を助けたいが、それも現状出来ない。神器を使用出来ない一誠が非常に厳しい状況に置かれていることは理解しているが、今のリアスにはこの凶弾の嵐から一誠が無事生き延びることを祈るしかなかった。

降り注ぐ凶器を掻い潜りながら一誠はひたすら動く。以前の自分であったのならばとっくに体力が切れていてもおかしくない程に激しく、そして休まず動く。

そんな一誠の動きを見て、黒歌は疑問を抱く。

「どうして神器を発現させないのかにゃん？」

尋ねても避けることに必死な一誠の耳には届かない。

『赤龍帝の籠手』の能力は当然黒歌も知っている。能力で力を倍化させれば、あのように無様に転げ回る必要も無い。最初はこちらを舐めているのかと思ったが、あの余裕の無さを見れば思い違いだというのが分かる。

なら何故使わないのか。否、もしかしたら――

一誠に襲い掛かっていた花の刃が空中で静止する。

「――神器、使えないのかにゃん？」

今度の言葉は一誠の耳に届いたらしく、弾かれた様に黒歌の方を見た。その反応を見れば答えた様なものである。

「あはははははは！　何だ！　今のあなたは赤龍帝ですらないじゃん！」

哄笑すると静止していた花が動き出し、再び襲い掛かってくる。
「ヴァーリには悪いけどここで死んでもらうにゃん。別にいいにゃん？　こんなことで死ぬなら最初からヴァーリのライバルになんて相応しくないから」
冷めた言葉を吐きながら一誠を追い詰めようとする黒歌。しかし、この言葉が一誠の感情に火を点ける。
「なめん、なよ！」
地面に拳を打ち込み、その反動で立ち上がると黒歌に向かって一直線に走り出す。
「お馬鹿さんにゃん」
無謀な行動を嘲笑し、黒歌は頭上に花びらを集めると迫る一誠を迎撃する準備をとる。
「イッセー！」
「イッセー先輩！」
数秒後の未来を幻視し、リアスと小猫が悲痛な声で一誠の名を呼ぶが既に手遅れ。黒歌の集めた花びらが放たれる。
一誠の身を穿つ為に放たれた無数の花びら。あと一秒もしないでその全てが一誠の体で血の花を咲かせる。
――そう思っていた。

「だあああああああ！」
一誠は声を上げ、一段階加速する。当たる直前の花びらの刃を、走り抜けることにより間一髪で回避した。
「にゃ！」
先程までの走りが最高速だったと思っていた黒歌は驚く。確かに黒歌は一誠の身体能力を見誤っていた。だが、だとしてもあの無数の凶器を前にして、速度を緩める所か逆に上げることなど出来るのであろうか。
拳の間合いに入った一誠が拳を振り上げ。だが、黒歌もまた残りの花びらを眼前に集め、花の壁を作り出す。ただ攻撃を防ぐだけではない。触れれば切り裂く、攻防一体の壁である。
しかし、一誠は躊躇うことなく花の壁に拳を叩き付け、その腕が所々裂かれながらも壁を突き破り、黒歌の目の前に拳を突き出す。
「い、痛くないのかにゃ？」
「こんなもんが何だって言うんだ！」
黒歌はもう一つ見誤っていた。特訓によって鍛えられた一誠の精神。理不尽な特訓を受け続けてきた一誠は、並みのことでは怯まない。
無謀な行動に半ば呆れそうになる黒歌であったが、その表情が突如怪訝なものへと変

わる。仙術によって気の流れを見ることが出来る黒歌は気付いた。一誠の気が目の前の拳に集まっていることに。

咄嗟に動こうとするが、一誠の方が一歩先に動く。突き出した拳を開き、その手の中には集められた魔力の塊が露わになると、それを黒歌に向かって放つ。

両者の間に魔力の閃光が奔る。

◇

「おりゃあああああああ！」

振り上げられていた如意棒が、シンの脳天を砕く為に風切り音を発しながら振り下ろされる。

シンは左足を軸にし、右足を下げて右に九十度回転。振り下ろされた如意棒は、シンの前髪を掠り、その風圧で数本切り取る。外れた如意棒は地面を強打。その一撃で半径数メートルの地面が割れ、隆起する。

大きな動作ではなく最小の動作によって如意棒の狙いを外させると、シンは不安定な足場の中で足元に叩き付けられている如意棒の先端を踏み付け押さえ込み、美候の鼻先目掛けて左の裏拳を放つ。

獲物に喰らい付く蛇の如くしなりながらその牙を突き立てようとするが、突如背筋を走る悪寒を覚え、シンは放ったとき以上の速度で左手を戻す。その直後、左手が通過する筈であった場所に白い塊が通り過ぎていく。

外れたそれは進路先にある木に当たるとその木を一瞬にして凍結させ、凍らされた木は急激な凍結に耐えられず折れる。もし左手を直前に引いていなければ、あの木と同じ結末を辿っていたのが容易に想像出来る。

凶悪なまでの冷気を放った主が、シンの視界端に映る。冷気の主――ジャアクフロストは、目を吊り上げ、口には笑みを浮かべるという、怒っているのか笑っているのか分からない曖昧な表情のまま二撃目の冷気を投げ放つ。

今度はピンポイントの狙いでは無くシンの体全体を狙ったもの。直撃すれば命は無い。しかし、シンは避ける素振りを見せない。それどころか美候に向け、再び拳を放とうとしている。

避けるのを諦めたのか？　――否、彼の心に諦めなど無い。この戦いが一人のもので無い為に避ける必要が無いのである。

シンの期待に応じるかの様に炎の壁が冷気とシンとの間に現れ、熱を以てその冷気を阻む。

冷気と高熱が接触すると一瞬大きな音を立てて、何も無かったかの様に相殺される。

飛翔しているライザーは、それを見て不快そうに舌打ちをした後腕を組んで、偉そうにふんぞり返っているジャアクフロスト目掛けて炎を放つ。

迫る灼熱。氷精ならば音も立てずに蒸発されるだろうが、ジャアクフロストは腕を組んだままその場から一歩も動かず、あろうことか眼前にまで来た炎に対し鼻で笑う程の余裕を見せる。

不死鳥の炎が顎の様に広がりジャアクフロストを呑み込む――かに思われたが、ジャアクフロストに触れる直前に常に揺らいでいた炎が、その形を固定させたかと思えばガラスが砕ける様に散り、炎が氷の礫となって空気中へと消え失せていく。

消え去った炎の後には、ライザーに対し心底憎たらしい笑みを見せつけるジャアクフロストのみ。

炎が凍る。現実を知るものならば如何に非常識な光景かは分かるであろうが、だが両者の扱う炎も冷気も共に魔力を使って顕現させたもの。ゆえに現実では計れず、また常識でも考えられない。

ライザーとジャアクフロストの熱凍対決の最中も、シンと美候の攻防は続いていた。

シンに力強く踏み付けられた如意棒の先端は地面に深々と埋まっている。シンごと持ち上げるのも美候の力を以ってすれば容易であるが、力を込める際に僅かな隙が生まれる。目の前の人物がその隙を見逃す筈は無いと、短い時間ながらも拳と棍を交えたこ

とで確信に近い予感はしていた。
ならばどうするか。美候が考えるがその暇を与えることなく、今度はシンの右拳が美候の側頭部を打ち抜く為に振るわれる。
片手は棍を握ったまま、もう片方の腕を上げそれを受ける。拳頭が腕に触れると骨の髄まで痺れる程の衝撃と痛みが走る。
「いっ」
――そこから先の言葉は奥歯で噛み殺す。正直声に出したい衝動に駆られるが、プライドからそれを無理矢理飲み込み、胸の奥に押し込む。単純な威力ならば禁手したヴァーリよりも劣るが、痛みという観点から見ればもしかしたら上回るかもしれない。技術ではなく別の何かを感じさせる一撃であった。正直、何度も受けたくはない。
だが、受け止めた甲斐というものもあった。腕を掲げて側頭部を守るというこの守りの形。極めて自然な動作で指先を伸ばすことができ、そして、相手に感付かれない程の滑らかな動きで頭髪を一本引き抜くことができ、棍を掴む動作に紛れさせながらそれを最小の指の動きで弾いて飛ばすことが出来る。
飛ばされた美候の髪は、夜の闇へ溶け込む様に消えていく。美候と対峙しているシンは気付いてはいなかった。飛ばされた髪が空気の流れに逆らい、自分の背後に移動していることに。

頭髪が完全な死角へと移動したとき、美候は小さく音を鳴らす。シンの耳には舌打ちにしか聞こえなかったが、これこそ術の発動させる合図であった。

宙を漂っていた頭髪が美候の姿へと変わり、無防備なシンの背後目掛け如意棒を振るう。

後ろからの奇襲に気付いたシンは、上半身を捻りながら背後に向かって右拳を放った。

狙いなど碌に定めておらず何処かに当たればいいという考えで振るったそれは、分身体の美候の如意棒を腕で受け止める形となる。

手加減抜きで叩き付けられた如意棒の一撃は、神経に電流を流したかの様な衝撃であった。しかし、それを面には出さない。

だが、完全に隠し切れた訳では無い。その証拠に背後に意識を向けたことで足元への注意が弱まる。結果、美候に攻撃の機会を与えることになる。

踏み付ける力が弱くなった瞬間、美候は如意棒に指示を飛ばす。

「縮め！　如意棒！」

その掛け声通り如意棒は長さだけでなく太さを瞬きよりも早く変化させ、縮小したことで出来た隙間から抜ける。

「戻れ！　如意棒！」

引き抜いた如意棒を振り上げながら続け様に出した指示により、縮小していた如意棒は縮む速度と同程度の速さで元の大きさへと変わる。

そして分身と挟む様にして美候本体もまたシンの脳天目掛け、気を練り込んだ如意棒を振り下ろした。

直撃すれば頭蓋どころかその中身も叩き割る一撃。これをどうするのか。勝負だというのに美候は、シンの次なる行動に期待をしていた。

シンは短く息を吐き、腹部に力を込める。そして、如意棒を引き抜かれたことによって浮いた足を地面に叩き付ける様にして踏み込む。隆起した大地がその一歩に震えた。

大地を踏み込むことによって返ってきた力を利用し、下から上に向かって魔力を込めた拳を突き上げた。

重力の鎖を引き抜くが如く速度で振るわれた力強い拳が、逆に重力をも味方につけた様な振り下ろしの一撃と衝突し合う。

金属音と打撃音。二つの音は拳と棍との挟間で生まれた気と魔が混じり合った衝撃と共に散り、周囲の木々を騒めかせるだけではなく、シンに棍を叩き付けていた美候の分身をその余波で砕く。

当然その中心にいた二人も無傷では済まず、シンは衣服の一部が破れ、頬や腕に無数の裂傷を負う。美候もまた鎧の肩当ての部分が破損し、シンと同じく体のいくつかに裂

傷が刻まれていた。
「――聞いた話じゃ」
如意棒と拳がせめぎ合いながらも、美候が世間話でもするかの様に気軽に話しかけてくる。
『それ』が在るのって右腕だけじゃなかったかい？」
美候の視線の先にあるもの。それは、左手の甲に浮かび上がる紋様。右腕と同じ蛍光の様な魔力の光を放っている。
シンは答えず、自由になった右手を美候に向けて振るう。
「つれないねぇ」
答えないシンにそう言い残しながら、美候は後方に大きく跳んでそれを回避した。
追おうとするシンであったが、ジャアクフロストがこちらに向けて腕を上げる動きを見ると、急停止する。
「ヒホッ！」
その直後に手で地面を叩くジャアクフロスト。すると地面が盛り上がり、それがシン目掛け迫ってくる。
直感で危険を察知したシンは、美候との距離を詰めるのを止め、逆に下がって距離をとる。

地面の盛り上がりが先程までシンが居た場所に到達すると、そこから勢いよく冷気が噴出。その際に巻き上げた土や地面に含まれていた水分を凍結させ、巨大な霜柱の様な突き出された氷柱を作り上げた。
「オラッ！　オレ様の前で情けない姿を見せるんじゃないホ！　それでもオレ様の子分かホ！」
「……いつ俺っちがお前の子分になったんだぜぃ？」
後方に下がった美候に対し、ジャアクフロストが叱咤する。慣れたことなのか美候は疲れた様な表情で軽く反論する程度に止めた。
ジャアクフロストとせめぎ合っていたライザーが地面に降り立つ。
戦いに少し間の様なものができたので、その間に改めてジャアクフロストをまじまじと見つめる。
見れば見る程に仲魔のジャックフロストに良く似た姿。というよりも、ただの色違いぐらいの差しかない。しかし、ジャックフロストに比べるとかなり粗暴で口や態度が悪い。そして露骨なまでにこちらを見下してくる。
シンの視線に気付いたのか、ジャアクフロストがこちらに向かって眼を飛ばしてくる。
「ああーん？　オレ様をじろじろと気安く見るんじゃないホ！」

愛想どころか可愛さの欠片も無い態度であったが、それでも聞かずにはいられないことがあった。
「お前は……ジャックフロストとは違うのか？」
「あっ」
他意も無い質問に対し、美候が『やっちまった』と言わんばかりに天を仰ぐ。
変化は劇的なものであった。
「――誰が、ジャックフロストだホ？」
その反応に既視感を覚える。シンたちの後方で未だに料理を貪っているケルベロスに、禁句を言った時の反応と良く似ていた。
「このオレ様を……あんな弱っちい連中と一緒にするんじゃないホ！」
シン、そしてジャックフロスト個人というよりも、ジャックフロストという存在そのものに対し強い拒否感や嫌悪、怒りを露わにする。
「ヒーホッ！」
ジャアクフロストがシンに向けて拳を突き出す。すると拳の先から冷気が拳速に乗って放たれた。
顔目掛けて迫るそれを、胴体を横に傾けて回避する。が、直後に痛みが耳から伝わってくる。反射的に触れると耳の一部から硬い感触が伝わってきた。かなり距離をとっ

て避けたつもりであったが、白い冷気は見た目以上の範囲を持っているらしい。
「ヒホホホホホ！」
続けて繰り出される拳の連打。そのどれもから冷気が放たれる。シンは避けるのを止め、両手に熱を込めようとすると、そこにライザーが間を割って入ってくる。
迫る冷気に向かって右手を一振り。空気が歪んだかと思えばそれが炎へと転じ、冷気を次々と呑み込んでかき消してしまう。
全ての冷気を無力化させると、ライザーはジャアクフロストの方を見て――
「ふん」
――鼻で一笑。先程の意趣返しである。
「ヒホッ！」
それにプライドが甚く傷付いたらしく、子供が癇癪を起した様に地団駄を踏み始める。
「生意気な奴ホ！　絶対にあいつ性格が悪いホ！」
「お前が言うんじゃないぜぃ」
荒れるジャアクフロストの頭を軽く叩く。
「美候も悔しくないホ!?　オレ様は舐められるのは嫌いだホ！」
「お前のプライドの高さは見習うべきもんがあるかもねぃ。まあ――」

美候は、如意棒を素早く回した後に構える。その先端はシンたちに向けられていた。
「俺っちも戦うのは楽しくて好きだが、負けるのは大っ嫌いだぜぃ」
美候が頭部に手を伸ばし、そこから数十本の髪を一気に引き抜く。そして、それを空目掛け息で吹き上げた。
宙に散る頭髪。するとそれが閃光を放つ。夜の闇もあってその眩さに直視出来ない。夜目が効く悪魔であるライザーには尚のこと効いており、目を瞑ってしまっていた。
閃光が収まり美候たちの方を見る。たった数秒間で変化したそれにシンたちは絶句する。
美候、ジャアクフロストたちが、合わせて数十人もその場に立っていたのだ。美候が分身を創り出せるのはついさっき見たので知っていたが、まさか自分以外の分身も生み出せるとは思っていなかった。
『おいおい。そんなに驚くことはないぜぃ？　孫悟空が分身を生み出すのは有名な話だろう？』
数十人の美候の声が、一切のぶれなく重なることで大声量となる。
「また面倒くさいことに……」
「嫌なら下がってもいいぞ」
「ほざけ。誰に向かって言っている」

シンの発破とも気遣いともとれる言葉に、ライザーは吐き捨てる様に答え、その背から生やす炎の翼を更に燃え上がらせる。折れればとことん弱いが、折れなければ持ち前のプライドの高さからくる気丈さで強気を見せる、ある意味で仲間に居れば頼もしく感じさせる存在である。

二対多の状況。それでもシンとライザーに怯えは無かった。

『んじゃ、いくぜぃ?』

わざわざ開戦の合図を窺ってくる。余裕からくるものか、はたまた挑発の一種か。

答える代わりに、ライザーが炎を投げ放つ。

炎は、美候たちの足元に着弾。そこから一気に燃え広がり、炎に包まれる。しかし、次の瞬間には炎を突き破って美候、ジャアクフロストの分身たちが一斉に飛び掛かってきた。

最初に接近してきた美候が如意棒を突き出す。シンはそれを脇で挟んで受け止め、カウンターで顎を掌打で突き上げる。すると美候の顔が仰け反り、後頭部が背中に付くまで折れ曲がる。明らかに致命傷であるが、シンはそれを見て眉一つ動かさない。

手から伝わってくる手応えの無さ、完全に分身の一体である。

美候の分身の全身に罅が入りそして砕ける。あまり頑丈で無い事が救いではあるが、それでも眼前に迫ってくる無数の分身たちを見ると気休め程度にしかならなかった。

上から斜め振り下ろされる如意棒を右手で受け止めるが、続いて別の分身が胴体に横薙ぎの一撃を放つ。今度はそれを左手で受けるが、更に足元にジャアクフロストが迫っていた。冷気を帯びた手で触れようとするが、触られるよりも先にシンの爪先がジャアクフロストの顔の中心に突き刺さり、そのまま蹴り飛ばす。リーチの差で辛うじて防げた。

顔面を蹴り抜かれたジャアクフロストは地面を転がりながら砕け散る。またもや分身。

次の瞬間、側頭部に衝撃が走ったかと思えば脳が揺さぶられる。視界が一気に傾いていく中で、一撃貰ったことを理解するシン。いくら周りに気を取られていたからといって、ここまで反応出来なかったのは久々のものであった。

劣化している分身とは切れが違う。分身の中に本体が紛れているのは間違いない。すぐに視線だけでも受けた方向に向けるが、そこには既に数人の美候が立っている。既に身を隠された後であった。

一方でライザーの方も苦戦を強いられていた。

ライザーの両足にしがみつくジャアクフロストたち。それを炎で引き剥がそうとするもジャアクフロストの全身から冷気が放たれ、自分たちごとライザーの足を凍結。地面に張り付けてしまう。

炎で溶かそうにもジャアクフロストの冷気の影響で炎を出すことが出来ない。身動きがとれないライザーの胸部に美候の分身たちが如意棒を突き立てる。

如意棒の群が胸を貫き、先が背中から飛び出す。普通ならば致命傷である。だが、それを受けるのがライザーならば話が変わってくる。

ライザーの全身が一瞬膨張したかと思えば、爆発を起こし身の内から生じる炎が周囲の美候たち、ジャアクフロストたちを呑み込んで焼き尽くす。

一帯が炎に包まれる。すると燃え盛る炎から幾筋の炎が線の様に伸び、絡み合う様にして形を作り始め、それが人の形になると炎が消え去り、中から無傷のライザーが現れた。

シン、ライザーによって分身たちは数を減らしていっている筈だが、全体を見て減少した様な印象を受けない。寧ろ、最初の数よりも増えている印象すらあった。

術の発動者である美候さえ無事ならば幾らでも分身を生み出すことが出来る。シンたちの行動はいたずらに体力を消耗させていることに等しい。

かといって美候やジャアクフロストの本体を探そうにも全く分からない。色々な意味で眼の良いシンでも、本体と分身との差を見極められないでいた。

複数の如意棒を捌いているシンの死角から、急所を狙って更に別の如意棒が突き出される。しかし、それが届く前に横から獣爪が、突きを繰り出している美候の分身の頬を

殴り飛ばし、消し去ってしまう。
「休憩はもういいのか？」
「グルル……次ハ腹ゴナシダ」
　食事を終えたケルベロスが戦列へと加わる。頼もしいが、口の周りに食べカスがついているのが若干緊張感を損なわせる。
「コノ数ヲドウスル？」
　何か策は無いかケルベロスが尋ねてきた。自分、ライザー、ケルベロス。この三人の戦力でこの状況をどう打破するか、戦いの中で思考を高速で回転させる。
　ふとその時思い浮かぶ、今いる三人の共通点。それに気付くと同時に、一つの考えを思い付いた。
　そして、思ったことそのままをケルベロスに念じて送る。頭の中で響くシンの声にケルベロスは驚くが、すぐに順応してシンの考えを受け取ると一言。
「正気カ？」
　策とは言えない考えにシンの正気を疑ってくるが、シンの眼を見てすぐに本気であることを悟ったらしく、少しだけ嫌そうに顔を顰めた。
「餌ヲ運ンデキタ礼ダ。乗ッテヤル」
「ついでにあいつにもこのことを伝えてくれ」

目線でライザーを指す。
「注文ノ多イ奴メ」
愚痴るが断るつもりはないらしく、ライザーの下に向かって走っていく。
途中それを妨害しようと分身たちが道を阻む。ケルベロスは速度を緩め無いまま真横に跳ぶ。跳んだ先にある木の幹を足場にしてそこから更に真横に跳び分身たちを越えていってしまう。
ライザーは分身たちと格闘し続けていた。炎で薙ぎ払うも次から次へと分身たちは迫ってくる。いい加減鬱陶しく感じ始めた時、目の前からジャアクフロストが飛び掛かって来た。
炎で撃ち落とそうと手に炎を宿すが、それを放つ前にジャアクフロストが宙でガクンと不自然に停まった。
よくよく見ると顔の両端から鋭い牙が見えている。すると両端にあった牙は閉じられ、間に挟まっていたジャアクフロストの頭が砕け、消失する。
ジャアクフロストの分身を噛み砕いたケルベロスは、口内から何かを吐き出す。唾液に塗れたそれは、分身の媒体となっていた美候の髪であった。
「……手助けならいらんぞ」
ケルベロスに対し、礼ではなく強気な言葉を向ける。

「オマエノ命ナゾ興味無イ。アイツカラノ伝言ダ」
　爪で周りの分身たちを蹴散らしながら、ケルベロスはシンの言葉をそのままライザーに伝える。
「正気か？　というか出来るのか？」
「知ラン。ヤルト言ッタカラニハヤルダロウ？」
　共に分身を消し去りながら会話する二人。シンの言葉に懐疑的な態度を見せるライザーであった。
「ナンダ？　コワイノカ？」
「はあ！　誰が怖がっているっていうんだ！」
「オマエダ。オマエ」
「どいつもこいつも俺を、フェニックスを舐めやがって……。いいだろう乗ってやる！　ただし手加減無しだ。あいつもお前も死んでも恨むなよ！」
「コッチノ台詞ダナ」
「お前もあの黒雪だるまも本当に生意気だな！」
　悪態を吐きながらライザーは炎の翼を広げ空に飛び立つ。それと同時にケルベロスもその場から駆け始めた。
　真反対に向かって移動する二人。その行動に美候は違和感を覚える。

「おい。あいつら何かするつもりだぜぃ。警戒を強めろ」
「ヒホ！　この無敵のオレ様に何をしても無駄だホ！」
「偶には人の言うことぐらい聞け」
　我が道を行くジャアクフロストに頭が痛くなる思いの美候であったが、すぐにそんなことを気にしていられない状況となる。
　目的の位置にたどり着いたのか、ライザーは翼を消して降り立ち、ケルベロスは急停止する。
　互いに向かい合う二人。その中心にはシンの姿。
　美候の感じた違和感が悪寒へと変わる。
「おい――」
　危険を感じ、ジャアクフロストに呼び掛けると同時に半数の分身をシンたちに向かわせ、残りの分身はシンたちから離れさせた。迅速に対応されるものの、シンたちは構わず動く。
　ライザーの全身が炎に包まれる。そこから放たれた熱は、離れた場所にある木々が延焼する程のものであった。それほどの熱量が籠った炎が移動し始め、ライザーの右手に集まると、それをシン目掛けて放つ。放たれた炎は巨大な火の鳥そのものであった。
　ケルベロスもまた深く息を吸い込み始める。胸部が膨れ上がる程ケルベロスは上体

を仰け反り始めた。やがてそれも限界にまで達すると、咆哮と共にケルベロスの口から火が吐かれる。初めは小さな火であったが、ケルベロスが吐き続けるごとに大きさが増していき、最終的にはライザーの放った火の鳥と変わらない程の炎の巨塊と化す。

向かっていた分身が火の鳥と炎の巨塊に呑み込まれて焼失する。阻む壁にすらなれないほど呆気ないものであった。

左右から膨大な質量の炎が迫っているにか関わらずシンはその場から移動もせず、また恐れの感情も抱いていない。

左右の炎に向かって己の両手を突き出す。触れれば灰すら残さないであろう炎に向かって。自殺行為にしか思えない行動であったが、それを見た美候の頭の中で先程よりも強い警鐘が響く。

突き出された両手に炎が直撃する。そこからシンを呑み込むかと思われたが、両手が触れると同時に炎の進行が止まった。

するとシンの掌の中で二つの炎が姿を変えいく。火の鳥は形を崩し、炎の巨塊は圧縮されていき、最後には二振りの剣の形と化す。

「ジャァ――」

名を呼ぶよりも先にジャアクフロストが美候の前へと飛び出した。

シンが二振りの炎の剣を振るった瞬間、周囲は焦熱の嵐に包まれる。無作為に動く炎

と魔力はその場に居る全員を包み、蹂躙し焼き尽くす。分身たちはある者は炎と熱によってその身を焼かれ、ある者は魔力の渦によって引き裂かれる。

彼が行ったことは至って単純なこと。熱波剣と二人の炎を合わせただけである。タンニーンとの戦いで炎への耐性を得た為、限られた時間ではあるがライザーとケルベロスの放つ膨大な熱量を受け止めることが出来た。それを、熱波剣を創るときの様に魔力で無理矢理形を留め、一気に放っただけである。

当然狙いを定めることなど出来ず、手当たり次第に射程内の者に襲い掛かる。ライザー、ケルベロスも射程内におり、放った本人も例外では無い。シンたち一同炎の烈風にその身を捲かれる。

暫くの間、局地的に灼熱の地獄が顕現されるが、時間が過ぎると嘘の様にあっさりと炎は消え去ってしまった。

縦横無尽に暴れ狂う業火が通り過ぎた後、残るのは焼け焦げた平地だけ。周囲の木々は炎と魔力波によって根こそぎ倒されていた。

そんな何もかもが無くなった大地の上で、何事もなかったかの様に立つ複数の影。

「無茶苦茶なことしやがって、全く……」

苛立った声を出しながら乱れた髪形を手櫛で整えるライザー。

「グルル……」

唸りながら体に付着した燃え滓を、身を揺すって払うケルベロス。
そして、燃え上がっている衣服の一部を素手で叩いて消しているシン。全員、焦熱の嵐をほぼ無傷で耐え切っていた。
皆が炎に対し、一定以上の耐性を持っているからこそ出来た無茶。その結果、美候やジャアクフロストの分身は全滅させることが出来た。
肝心の本体たちは――
「ヒホ」
――皆の視線が声の方向に向けられる。その先には、シンたちと同じく炎の中を無傷で切り抜けたジャアクフロストが腕を組んで堂々と立っていた。そのジャアクフロストの後ろには、真っ白な氷に包まれた人型の彫像。
「ックション！」
くしゃみと共に表面の氷が砕け、中から身震いしている美候が出てきた。鎧や衣服にはまだ氷が張り付いている。
「や、やるならい、言え！　じゅ、準備も何もせ、せずにいきなりこ、凍らせて……と、凍死す、するかとお、お、思ったぜぃ！」
あまりの寒さに呂律が回らなくなっており、顔色も蒼白い。
「文句を言う前にオレ様に礼を言うのが先だホ！　この恩知らず！」

美候の体調よりも態度が気に入らなかったらしく、ジャアクフロストが罵倒する。
ジャアクフロストの冷気によって美候は灼熱の中を無傷で済んだが、そのせいで凍死寸前まで追い込まれたとなると、感謝の気持ちも素直に抱けない。
「こ、こいつめ……！」
美候もまた売り言葉に買い言葉で言い返そうとするが、何故か途中で口を噤んでしまう。
「……黒歌か」
ポツリと呟くここには居ない者の名。名を呟いた後、美候は黙り続けていたが、その表情はコロコロと変化していた。
非常に不服そうな顔をしたかと思えば、苦渋に満ちた表情となり、最後は諦めた様な表情をして溜息を吐く。
「――急用が出来ちまったぜぃ」
そう言うと美候の足元に筋斗雲が現れ、美候を乗せる。
「おい――」
「先に行ってろホ。オレ様はこいつらの相手をするホ」
美候の言葉に被せ、この場に残ることを告げる。
ジャアクフロストの我儘に美候は怒るかと思いきや、『そうか』とあっさりと引き、美

候だけが乗った筋斗雲が浮き上がり始める。
　流石に度が過ぎて面倒が見切れなくなったのかに思えた。少なくともシンたちの視点からすれば。
「今俺っちのことを、仲間を見捨てる冷たい奴、とでも思ったかい？」
　上昇していく筋斗雲の上で美候が、こちらの内心を見透かしてきた。
「勘違いするんじゃないぜぃ。確かにこいつは我儘だし、偉そうだし、人の言うことを全く聞かないろくでなしだ」
「うるさいホッ！」
「だけどなぁ。我儘だけで、俺っちがこいつを戦いの場に連れてくるわけないぜぃ。『戦力』になるから連れて来てるんだ。例え、独りにしても何の問題もない」
　それは、美候からジャアクフロストの強さへの信頼であった。そして、同時にジャアクフロストならば、シンたち三人を相手にしても生き延びることが出来ると本気で思っている。
「足止め任せたぜぃ」
「そういう言い方止めるホ！　何かオレ様がお前の為に戦うみたいだホ！　オレ様の戦いはいつだって打倒ヴァーリの為の戦いだホ！」
　強く否定するが、美候はそれを聞いて笑いながら何処かへ飛んでいってしまった。

「……全く。まあいいホ。美候に付けられた変なイメージも、これから見せるオレ様の偉大さと強さで吹き飛ばされるホ！」
　気を取り直し、ジャアクフロストがシンたちに向き直る。
「前を向いたまま聞け」
　シンの近くにまで来ていたライザーが、シンに小声で話し掛けてきた。口の動きでばれない様に片手で顔の下半分を隠している。
「お前とケルベロスはさっきの奴を追え。放っておいたら何をするか分かったもんじゃない」
　シンは答えず、横目でライザーを見る。それは『いいのか？』という確認を込めたもの。
「ジャアクフロストとかいう奴は、俺がこの場に引き留めておいてやる。――あのむかつく黒ガキは俺の手で倒さないと気が済まない」
　ライザーの怒気に呼応して、背部が陽炎で歪む。
　一人置いていくことに気乗りはしなかったが、ライザー自身が言い出したことを却下するのは、それこそ彼の気遣いを無下にするものだと思い、シンは微かに頷いてライザーの案に乗ることに決めた。
　ケルベロスにもそのことを念話で伝える。ケルベロスは特に反対せずあっさりと了

承する。
「そこぉ！　何をこそこそしてるホ！　オレ様の鷹の如き鋭い目が、それを見逃すと思ったのかホ！」
己の円らな瞳を指差すジャアクフロスト。
「ヒーーーー」
ぐるぐると片手を振り回しながら肩を上げていく。
「ホッ！」
拳を地面に突き立てる。一秒、二秒経っても何も起こらない。しかし、シンらは不発したなどとは思っていなかった。三秒経過したとき、ジャアクフロストの足元が膨れ始める。
そして、五秒が過ぎようとしたとき膨張は最大に達し、大地が割れると共に白い冷気が噴出し、シンたちに向かって襲い掛かる。
少なくとも視界全域にまで広がった冷気は津波の様に押し寄せ、飲み込むもの全てを凍結させていく。
高さも幅も簡単には乗り越えられない冷気の壁。
「風穴は俺が開けてやる。タイミングをずらすなよ」
ライザーの両腕が燃え上がる。胸の前で両手を合わせると、左手の炎が右手に移り、

更に燃え上がる。
煌々と燃える右手の指を軽く曲げながら揃え、そこに親指を当てる。鳥の嘴を彷彿とさせる手の形であった。
「それぐらいでフェニックスの業火を防げると思うなよ！」
右手を突き出す。炎が収束され、一本の線の様に真っ直ぐ飛ぶ。炎が奔ると同時にシンとケルベロスも走り出す。もし、仮にライザーの炎が冷気に通用しなかった時、彼らは自ら絶対零度の中に身を投じることを意味する。しかし、それでも二人の走りには一切の恐れが無かった。
冷気と炎、何度目かになる衝突。熱と冷気が互いに喰い合い、それによって生まれる余波が蒸気となって周囲を包み込んでいく。
跳び上がり躊躇うことなくその蒸気の中に飛び込んでいく。視界が白一色に染められている為に分からないが、目指すのは炎の着弾点。
空中では最早身動きなど取れない。ただ冷気の壁に穴が開いていることを信じ、蒸気の中を突き進んでいく。
「ヒホ！」
ジャアクフロストもまた蒸気によって視界を遮られていたが、それを突き破って現れた何かが地面を転がっていく。

自分の冷気を突き抜けたのだからあそこに転がるのは氷漬けにされた者らだと思っていた。
だが、数度地面を転がると立ち上がって地面を駆けていく。
「ヒ、ヒホ！　何で凍ってないホ！」
凍っていると思っていたものが動いている。ドラゴンですら凍結出来ると自負しているジャアクフロストにとっては信じ難いことであった。
「それだけお前の冷気が温いってことだろ。性悪雪精」
「ヒホ！」
冷気の壁を抜けていった者たちに動揺し、気を取られていたことで別の人物の接近に気付けなかった。
「燃えろ」
振り返ったジャアクフロストに浴びせる様に、ライザーが炎を叩き付ける。
抵抗する間も無くジャアクフロストの全身が炎に包まれた。
焼かれるジャアクフロストは、炎を消し去ろうと体を揺さぶったり、手で叩き消そうとするも無駄な足掻きに終わる。
暫く暴れるジャアクフロストであったが、やがてその動きも鈍くなり最期の時を迎えようとする。

熱のせいか両手で自分を抱き抱える様にし、前屈みに体を曲げると――
「ヒホホホホホホホホ！」
――盛大に笑う。炎の中、腹を抱えて爆笑しているのだ。
ジャアクフロストを包み込んでいる炎が体表を移動し始め、ジャアクフロストの右手に集まっていく。手の中で炎は球状となり、それを片手で上げては受け止めるという、さながら野球のボールの様にして遊ぶ。
「オレ様に炎なんて効かないホ！」
ジャアクフロストが言う様に、体には焼け跡一つ無い。前は冷気によって防いでいたが、今回は間違いなく炎は直に当たっていた。にも関わらず無傷なのである。
「――雪の精じゃないのか？　お前は？」
「はっ！　言った筈だホ！　オレ様はジャアクフロスト！　弱っちいジャックフロストなんかとは格が違うホ！」
同じ姿をしているジャックフロストを蔑みながら、ジャアクフロストは遊んでいた炎の球をライザーに投げ返す。ライザーは首だけを動かしてそれを避けた。
「どうだホ？　自慢の炎が効かなかった気分は？　それも元とはいえ雪の精に効かなかった気分は？」
煽ってくるジャアクフロスト。客観的に見れば、相性ではライザーの方が有利であっ

た。だが事実は逆である。フェニックスの最も得意とするものが通じ無かったのだ。
ジャアクフロストは意図してか、それとも性格からなのかは分からないが精神的動揺を誘ってくる。
「黙ってないで答える――ヒボッ！」
答える代わりにライザーの拳がジャアクフロストの顔面の中心に叩き込まれる。ライザーはそれだけに留まらず、肘から炎を爆発させる様にして噴出し、瞬間的に加速させて一気に殴り抜けた。
「ヒホォォォォ！　ヒホッ！」
殴られたジャアクフロストの声が遠ざかっていくが、十数メートル飛ばされた後に後頭部を木に打ちつけることで、二度目の苦鳴を上げながら止まる。
「炎が通じなくてもな、戦い方はあるんだよ」
もし以前のライザーだったのなら、ジャアクフロストに炎が通じなかった時点でひどく動揺していたであろう。だが、一誠との一戦。シンとの一戦。ケルベロスとの一戦を経て、多少なりとも精神耐性が出来ていた。
無防備な顔面に完璧な一撃を貰ったジャアクフロストは、木の根元でうつ伏せに倒れていたが、やがてゆっくりと立ち上がる。今までのことから怒り狂い、喚き始めると思っていたライザーが拍子抜けするほど静かな動きであった。

身体についた葉や土を払うと無言のままジャアクフロストは、ライザーに接近し始める。何か仕掛けてくるのではと思い、構えるライザーであったが、予想に反しジャアクフロストはただ歩いてくるだけであった。

その足もやがて止まる。距離にしてライザーから三メートル程の位置。

警戒心を強めるライザー。だが、ここでジャアクフロストは、ライザーの予想だにしない行動をとった。

ライザーに向かって右の頬を突き出す。

その行為の意味が分からず、ライザーは戸惑う。

「どうしたんだホ？」

ジャアクフロストは、自分の右頬を指で突く。

「もう一度殴らせてやるから、殴って来いホ」

その言葉を聞いた瞬間、ライザーの顔が引き攣る。湧き出す怒りによって意思では制御出来ない程感情が暴れ狂う。ようは舐められているのだ。あれだけ勢い良く殴り飛ばしてやったというのにまるで効いていないと暗に告げ、それどころかチャンスまで与えてくる。これほどまでにプライドを揺さぶってくる挑発はない。

ライザーの右足が燃え上がる。脚を持ち上げると同時に集められた炎と風が噴射し、先程の拳と同様に爆発的加速を得ると、突き出しているジャアクフロストの頬に、右足

の甲を全速力で叩き付ける。
頬に足が触れると、その衝撃でジャアクフロストの全身が波打つ。続いて首が千切れ飛んで行きそうなぐらいに傾き、勢いに押されてジャアクフロストの両足が地面を削っていく。
ライザーが、このまま空の彼方まで蹴り飛ばそうとしたとき唐突に脚の動きが止まった。未だに燃え盛り、炎が噴き出している右足を見るに凍らせられた訳では無い。
ならば何が理由で止まったのか。答えはすぐに分かってしまった。
地面に根付く様に踏み締められるジャアクフロストの両足。ライザーの蹴りを踏ん張って耐えた、ただそれだけの単純且つ馬鹿げた理由である。
自分よりも遥かに小柄なジャアクフロストが、フェニックスの力によって極限まで高めた一撃をライザー以上の力で捻じ伏せているのである。
頬に足を打ち込まれているジャアクフロストは、ライザーの内心を見抜いたのかニヤリと笑う。
すると、ジャアクフロストに触れていた足が炎ごと凍り始め、膝から下が完全に凍結する。
やろうと思えば今の様に凍らせて無力化することも出来た。しかし、敢えてそれをしなかった。ライザーに己の実力を見せつける為に。

勝ち誇った様な笑みを浮かべるジャアクフロストであったが、その笑みも凍った足を顔面に突っ込まれたことで掻き消される。
「ヒボッ！」
濁った声を上げるジャアクフロスト。顔の中心がライザーの足の形に凹んでいる。このジャアクフロスト、実力は間違いなく高いが、それ故かあるいは生来のものかは知らないが、すぐに調子に乗る悪癖が見られた。その度に大きな隙を作り反撃を受けている。
一方、完全に凍結した足で蹴り飛ばしたせいでライザーの膝から下が衝撃で砕け、木っ端微塵となる。しかし、すぐに断面から炎が噴き出し、足が再生する。
「ヒイイイホオオオオオ！」
怒りの雄叫びを上げながらジャアクフロストは両手で顔を左右から押す。するとどういう理屈か凹んでいた部分が元に戻った。
「もう怒ったホ！　お前はオレ様が直々にいじめてやるホ！」
「上等だ。この腐れ雪だるまが！　二度とそのでかい口を叩けなくしてやる！」
両者拳を振り上げ激突。炎と冷気が混じり、反発し、飛び散る。凍結し炎上する周囲の木々。
共にプライドが非常に高い性格。この戦いは勝つ、負けるの戦いでは無い。相手のプ

ライドをへし折る為の戦いである。

選択、進路（中編）

眼前に迸る魔力の光。至近距離から放った全力の一撃は間違いなく直撃した。一誠はそう確信していた。

――が、次に腹部から背に突き抜ける衝撃で、その確信も霧散する。

「がはっ！」

耐え切れず両足が地面から離れ、十数メートル離れた位置に生える木の幹に背中から叩き付けられた。

咳き込む一誠。その時吐く唾には赤いものが混じっている。

「ひどいことするにゃー」

光の収まった場所では黒歌が平然とした様子で立っていた。

「乙女の柔肌に傷を付けるなんて最低だにゃ」

着物から覗く黒歌の白い腕の一部が火傷の様に赤く染まっている。確かに一誠の攻撃は届いていた。しかし、黒歌を倒すには至らなかったのだ。

「無駄な抵抗をしなければ優しく殺してあげたのに――」

黒歌は一誠から受けた傷に舌を這わせる。

「――そんなに惨たらしく死にたいのかにゃん？」

殺意で冷たく濡れる黒歌の瞳を見た時、一誠の背筋に悪寒が走る。そして、反射的に腕を掲げた。

途端、背後から何かが首に巻き付き一気に締め上げられる。腕を掲げていたおかげで指が挟まり完全に絞まることは無かったが、それでも呼吸が途絶えそうになるほどの力で圧迫される。

僅かに視界に映ったそれは変哲も無い植物の蔦だったが、黒歌の気の影響を受けて人を軽々と持ち上げ、尚且つ絞め殺す程の強度を得ていた。

頸部への圧迫が、今度は上向きになる。その途端全体重が首へと掛かり、首の骨が外れそうになる。

「ッツ！」

圧迫された声帯では苦悶の声すら上げることが出来ない。爪先が辛うじて地面に触れているだけで支えにもならない。

常人ならばとっくに意識を失っていてもおかしくはなかったが、何とか一誠は意識を繋ぎ止めていた。しかし、徐々に端から黒くなっていく視界に命の危機を覚えるものの、流れが滞っている思考では上手い脱出の方も思いつかない。

一誠の命は刻一刻と尽きようとしていた。

「イッセー！」
絞め殺されようとしている一誠の姿にリアスは叫び、あらん限りの力を以て襲い掛かっていた花の刃を消滅させる。
一気に魔力を消費したことで立ち眩みを感じたが、それを捻じ伏せて一誠の救助へと向かおうとした。
「え？」
前触れも無くリアスは膝から崩れ落ちる。すぐに立ち上がろうとするも、手や足に力が入らず立ち上がれない。
「な……に……これ……は……？」
舌も上手く動かない。全身から力が抜けていた。
「……う、く……これは」
小猫もまた、リアスと同じ様に膝を突いて苦しがっていた。
身体の自由が効かなくなった時になって初めて気付く。この場一帯に薄い霧が立ち込めていることに。
「気付いたかしら？　この霧は、悪魔や妖怪だけに効く毒霧にゃん。その気になれば夢見る様に死なせてあげることも出来るけど、貴女たちは後後。そこで赤龍帝が縊り殺されるのを見届けるにゃん」

「ふざけ……ないで……！」
リアスは、渾身の力を込めた魔力の弾を黒歌に向けて放つ。避ける暇も与えず、赤い魔力が黒歌に直撃――が、魔力を受けた黒歌の体は解ける様に霧へと変わってしまった。
「無駄にゃー無駄無駄」
消えた黒歌の隣に黒歌が立つ。当然ながらリアスから受けた傷など無い。
「幻術を使えば貴女の眼を惑わせるなんて簡単だにゃん。貴女の攻撃は私には届かない」
「だった……ら……！」
再び魔力を集め、それを放つ。しかし、今度の狙いは黒歌では無い。一誠を吊り上げている蔦目掛けてであった。せめて消え行く一誠の命だけでも救おうとしての行為。
「だから無駄無駄にゃー」
だが、それも黒歌にとって想定内の行動であった。魔力の弾を防ぐ様に霧が移動し、視界を遮る程の濃霧と化す。
濃霧に包まれたリアスの魔力弾は、霧に触れた途端球状を維持できなくなる。不安定に形を変え続けるが、やがて霧に吸い込まれる様に消えてしまった。
「そん……な……」

「触れれば消滅する魔力なんて考えるだけでも恐ろしいけど、どうやら一度に消滅させる量には限度があるみたいだにゃ。それだったら話は簡単。許容範囲以上の気を与えて、消される前に貴女の魔力を狂わせるだけだにゃん」

限界に達したのか、リアスは地面に突っ伏してしまう。しかし、それでも目だけは黒歌を睨み付けていた。

怖い、怖いと言いながらもリアスの現状を笑う。立って見下ろす黒歌。それを見上げるリアス。第三者が見れば、誰が勝者かなど一目瞭然であった。

そして、一誠の方も限界が迫っていた。血流が止まり掛けているせいで一誠の顔色が赤黒く変色し始めていた。

意識が途切れる。そう思った時――

「貴様、何をしている」

空から聞こえる頼もしい声。同時に凄まじい衝撃が走り、吊られていた一誠の体は地面に落下する。

止まっていた血が一気に流れ込み、血管が広がっていく感覚を体感しながら、蔦が巻き付いていた首を擦りながら咳き込む一誠。

「リアス嬢と兵藤一誠が森に入ったと聞いて、万が一のことを考えて来てみれば――どうやら正解だったみたいだな」

一誠が吊るされていた木を踏み潰した状態で腕を組み、威風堂々と立つのは――

「タン、ニーンの、おっさ、ん！」

掠れた声ながらも喜びを露わにしながらその名を呼ぶ。

「元龍王タンニーン……こんな大物が来るなんて予想外にゃん。結界が張ってあったと思うけど……」

「タイミングを見誤ったな。結界が張られたのは俺『たち』が範囲内に入ってからだ」

タンニーンの言葉を聞いて、初めて黒歌は飄々とした表情を崩し、顔を顰めた。

「それはミスったにゃん――俺『たち』？」

聞き捨てならない言葉があり、思わず聞き返す。

すると場に漂っていた霧が急に移動をし始めた。初めはゆっくりと動いていたが徐々に速くなっていき、最後の方になると白い線と化していた。

霧の移動する先に目を向ければ、そこには大きく口が開いていた。比喩抜きで本当に大きな口なのである。上顎と下顎との位置の差が、成人男性が収まる程開いている。ずらりと並ぶ牙、喉の奥には何も無い闇が広がっており、霧はその闇の向こうへと吸い込まれている。

霧が全て消え去ると大きな口は閉ざされ、その陰に隠されていた本体が現れる。

「マダ、師匠！」

「おうおう。無様にやられてるなぁ」
一誠の傷付いた状態を心配するどころかケタケタ笑いながら、手に持っていた瓢箪を一誠に向かって投げた。
「ほれ。飲め飲め」
言われるがまま、栓を抜いて中の物を飲む。嚥下した途端かっと腹の底が熱くなったが、それが消えると身体中にあった痛みが傷ごと消えてしまう。
「元龍王のタンニーンどころか阿修羅のマダも……流石に二人相手は無理っぽいにゃん」
顔は笑っているものの、黒歌の頬には一筋の汗が流れている。二人の実力を知っている者ならば、表面上とはいえよく笑っていられるものだと感心するだろう。
「そのどす黒いオーラ。パーティーには相応しくない来客だな」
「にゃんと！　折角おめかししてきたのにそんな言い方は悲しいにゃん……」
よよよ、と泣き真似をしてみせるが、そんな冗談などタンニーンに通じる訳が無かった。
「ほざけ」
一蹴すると同時に黒歌に向け、タンニーンが炎を吐き出す。容赦も躊躇も全く無い。
当然、黒歌も避ける暇も無く炎に呑まれる。

「……姉、さま！」
　先程まで殺意を向けられていたとはいえ、流石に実姉が焼かれることに動揺し、声を上げる。
「おうおうおうおう。いきなり呼ばれて急いで来てみれば、こっちはこっちで大当たりじゃないかぃ！」
　しかし、それも上から降ってきた声によって杞憂であることが分かる。
　皆が一斉に空を見上げる。するとそこには筋斗雲に立つ美候と、猫の様に着物の襟を掴まれている無傷の黒歌がいた。
「美候！」
「よお。赤龍帝」
　名を叫ぶ一誠に、美候は気軽な態度で手を振る。
「助けてもらったのはお礼を言うけど。少し乱暴じゃない？」
「折角、楽しんでいたときに水を差されたんだ。これぐらいは我慢しろぃ」
「楽しんでた？　――一体誰と戦っていたの？　美候」
　美候の鎧の一部が損傷していることに気付き、問うが美候は答えない。既に彼の目と意識はタンニーンに向けられていた。
「『魔聖龍』のタンニーンと戦えるなんて、腕が鳴るねぃ！」

「相変わらずやんちゃだなぁ、美候」
「ん？　……げっ」
　気安く名を呼ばれたので声の方に目を向けると、美候は拒絶が混じった声を上げる。
「何でマダのおっさんがここに……」
「猿の奴は元気か？　あとおっさん言うな、クソガキ」
　互いに顔見知りといった態度。
「知り合いか？」
「あいつんとこの爺とは飲み仲間だからなぁ。そのついでに小さい頃はよく可愛がってやったもんだ」
「……あんたには殴られているか、ぶっ飛ばされているかの記憶しかないぜぃ」
　思い出話を懐かしむマダに対し、美候は終始しかめっ面であった。
「昔馴染みということで見逃してやってもいいぜぇ？」
「寝言言ってんじゃないぜぃ、おっさん。いつまでもガキと思っていると痛い目みるぜぃ？」
「ははははははは！」
　マダは笑いながら軽く身を屈め、地面に片手を突き刺す。すると地鳴りが場に響き渡り始め、地面に伏せている一誠たちの身体が激しく揺さぶられる。

「ほれ」
マダが腕を上げると同時に大地も持ち上がり、それを美候たちに向けて軽々と放った。地割れの音と共に、数十トンの土の巨塊が飛んでいる美候たちに圧し掛かる。
「相変わらず派手だねぃ！」
美候は掴んでいた黒歌を放り投げる。その際抗議する声が上がったが、美候は無視した。
「上限三十三天」
如意棒を頭上で回し始める美候。
「下限陳莫」
回す度に如意棒は長く、そして太く変化していく。
「斤一万三千」
最早大木を振り回しているかのようであったが、美候は重さなど感じていないのか軽々とそれを旋回させる。
「神珍如意金箍棒！」
変化した如意棒を迫る土の壁に向かって一振り。振るわれた如意棒は、土の壁と変わらない程の大きさにまでなっていた。
棍と壁が衝突。土の巨塊は如意棒の一撃によって粉砕され、辺りに土や木が雨の様に

降り注ぐ。
「やるじゃねぇか」
あっさり防がれたが、マダは寧ろ楽し気であった。
「何時までも昔と同じじゃないっつーの」
「なら今度は俺が試してやろう」
いつの間にか飛び立っていたタンニーンが美候の側に現れる。
それに驚くことなく美候は指先で如意棒を軽く叩くと如意棒が元の太さに戻る。素早く振るう為の変化であった。
美候は如意棒をタンニーン目掛けて振るう。その先端に巨大な土塊を纏わせた状態で。
「温いわっ！」
触れずに纏っていた土塊が粉砕された。
数メートルはある土塊を避けるのでは無く、受け止めるのでも無く、咆哮一つで砕いてしまう。
「いいねぃ！」
咆哮に弾かれた如意棒をすぐさま軌道修正し横薙ぎに振るうが、タンニーンは巨体にあるまじき俊敏さでそれを回避する。美候も続けて突き、払い、打ち下ろしと棍を操っ

てみせるが、タンニーンは翼を巧みに動かし空中で自由自在に動いて、それらを全て躱してしまった。

タンニーンが口を広げる。喉の奥から紅蓮の光が溢れ出す。美候は攻めるのを止めて伸ばしていた如意棒を縮めた。

大質量の炎が暗闇の空に吐かれ、世界が夕暮れの如き赤の光に染められる。

炎に呑み込まれた美候であったが、すぐに炎を突き破って姿を見せた。

鎧の一部が白煙を上げていたが、それを手で叩いて消す。

「いいねぃ！　燃えてきたぜぃ！」

「美候――孫悟空の血筋か。このタンニーンの炎を受けて燃え尽きなかったことは褒めてやろう」

「手加減されているのに褒められても嬉しくないぜぃ」

気の流れを見ることが出来る美候にはさっきの炎が抑えられていたことが分かっていた。理由もすぐに分かる。本気を出せばここにいる一誠たちだけでなく、パーティー会場にいる者たちも巻き込んでしまうからだ。

だからこそ気に入らない。手を抜いても勝てると思われていることが。

「すぐに全力出させてやるぜぃ！」

「ぬかせ、猿！」

上空で両者激しくぶつかり合う。
「やれやれにゃー。美候は女の扱い方が雑だにゃん」
美候に空から放り投げられた黒歌は、不機嫌そうな顔で空を見上げていたが、すぐにその目を一誠たちに向ける。
「で？　こっちはそっちが相手してくれるのかにゃん？」
マダに対し挑発的な言葉を掛ける。
「別にそれでもいいけどな――」
マダの視線が一誠に向けられた。それが何を意味しているのかは読み取れる。お前は戦うのか、戦わないのかどちらなんだと。
戦わないことを選べばきっと代わりにマダが戦ってくれるだろう。しかし、そんなことは出来ない。主であるリアスや仲間の小猫、師であるタンニーンやマダの前で背を向けて逃げ出すことなど出来る訳が無い。
「まだ！　俺は！　戦えます！」
立ち上がる一誠にマダはニヤリと笑い、近くにある木を蹴り付け小枝の様にへし折ると、根元を即席の椅子にして座り、脚に肘を付け、その手に顎を乗せるという完全に観戦する形をとる。
「じゃあやってみな」

短い言葉で一誠の背を押す。
「……駄目、です」
しかし、小猫は逆にそれを止めようとする。
「……姉、様の力は、最上級悪魔にも、匹敵します……神器を使えない、今のイッセー先輩には、勝つどころか、捉えることも、出来ません」
毒霧の影響で苦しみながらも、必死になって一誠が戦うのを止めようとする。
「白音の言う通りだにゃん。大人しくしていれば優しく、丁寧に殺してあげるにゃん」
「ふざ、けんな！」
例え神器を使えなくとも戦おうとしたとき――
「だったら神器〈それ〉が使える様になるまで俺が時間を稼ぐ」
言葉と共に頭上から魔力の渦が黒歌を襲う。
「にゃん？」
軽やかな動きで後転し、渦の射程から逃れる黒歌。外れた渦は地面を抉り、捲り上げ、砕いた後に破壊の跡だけを残して消えた。
そして、その破壊された場所に立つ人影。
「間薙！」
現れた人物の名を思わず叫んでしまう。

シンは声の方には目を向けず、黒歌に視線を固定させたまま話す。
「名前を呼んでいる暇があったらさっさと自分のことに集中しろ。こっちは全部引き受けておく」
素っ気ない態度をとるシン。それに対し一誠の反応は歯切れの悪いものだった。
「……正直、俺はどうやったら禁手が出来るか分からない」
「そうか」
「もしかしたら成れないかもしれない」
「そうか」
「……それでも時間を稼いでくれるか？」
「最初に言った通りだ」
成功の保証も無いことに全力をかけてくれる友の背中。これほどまでに頼もしいものはない。
「おいおい。弟子の出番をとるなよぉ」
笑い混じりの野次がマダから飛ぶ。
「良い所は譲りますよ」
それを軽く流す。マダは一笑するとどこからか瓢箪を取り出し、それの中身を呑み始めた。

「グルルルルル」
　唸り声を出しながらケルベロスもまた姿を見せた。ケルベロスはシンに助力することはなく、倒れているリアスたちの側に立つ。
「貴方、は……」
「シンニオマエタチヲ守レト言ワレタ。ソコノオマエ」
「俺？」
「オマエダ。オマエ。コノ二人ハオレガ全力デマモル。ダカラ自分ノコトニ集中シロ」
　皆の期待が背に掛かる様な気がした。重い。確かな重みを感じる。何としてもこの期待に応えねばと強く決意する。
「赤龍帝の次は貴方？　ていうかどちらさんだにゃん？」
「誰でもいいだろう」
　冷めた反応を示すシンをジロジロと観察する様に見ていたが、何か思い至ったのか、小さく口を開ける。
「もしかして、ヴァーリの言っていた『人修羅』かにゃん？」
　その言葉にシンは微かに表情を歪ませる。一方、リアスと小猫はシンが何故そんな名で呼ばれたのか分からず怪訝な表情をしていたが、マダと一誠はそれが何の名か思い至る節があり、敢えて反応を表に出さなかった。

「それがどうかしたか？」
あくまで淡々とした態度を崩さない。
「ヴァーリは貴方のことも気に入っていたみたいだけど、邪魔をするなら白音共々殺しちゃうにゃん」
「――殺すなんて言葉、あまり口に出さない方がいい」
「お説教？　私の妹を私がどう可愛がるかなんて私の自由だにゃん」
黒歌の身体が空間に溶け込む様にして消えていく。仙術、妖術、魔力などの技術を組み合わせた隠遁術。音もニオイも気配すらも絶ち、この世から完全に姿を晦ます。
消えた黒歌を探す様に視線を左右させるシン。姿を隠していた黒歌はそれを嘲笑し、背後からその鋭い爪をシンの頸椎に突き立てようと、腕をゆっくりと振り上げる。
「別に説教じゃない」
まるで最初から見えていたかの様にシンは振り返り、皆から見て何も無い筈の虚空を掴むと、そのまま地面に向けて叩き付ける動きをする。すると地面に人型の窪みができ、消えていた黒歌の姿が現れる。
「出来ないことを口に出せば後で恥をかくのは自分だ」
呻き声一つ上げることが出来ない黒歌。
倒れている黒歌にシンは腕を振り上げ、そのまま振り下ろす――のではなく自分の背

後に向けて伸ばす。
首筋辺りで何かを掴むシン。すると浮き上がってくるのは鋭い爪を揃えた女の手。シンの足元で倒れている筈の黒歌が、何故かシンの背後に立っていた。
「ありゃ？　ばれてたかにゃん？」
慌てる様子を見せず、惚ける様に小首を傾げる。するとシンの足元に倒れていた黒歌が煙の様に消えていく。
「初見で幻術を見破るなんて、大したものね」
「さっき似た様なことをされたからな」
「あのお猿さんね。もう！　楽しいと手の内をどんどん見せるんだから！　感心しないにゃん！　貴方もそう思わないかにゃ？」
頬を膨らませ、今も上空で戦っている美候への不満を露わにする。
シンは無言のまま掴んでいる手に力を込める。すると黒歌の腕が枯れ枝の様に容易くへし折られた。
自分の身に何が起こっているのか分からないといった表情をする黒歌の首に、シンは振り向き様に折れた腕を無理矢理巻き付ける。肘、肩といった複数の箇所から鳴る骨折音。
腕が首に完全に巻き付くと同時にシンは黒歌の腹部を蹴り上げる。その威力に後方

へ飛ばされたる黒歌の体。しかし、シンがしっかりと腕を掴んでいる為急停止し、首に巻き付く腕は更に絞まり、黒歌の顔色を死人の色に変える。
シンが手を離すと黒歌は前のめりに倒れていく。するとシンは片足を上げ、黒歌の額が地面に着く直前、後頭部に踵を叩き付けた。
リアス、小猫、一誠は、流れる様に起きた容赦の欠片も無い一連の行動にただ唖然とする。女性の頭を躊躇無く踏み潰したシンに、どんな感情を向けたらいいのか分からなかった。
「本当にひどいにゃー」
踏み付けられている黒歌の横で、『黒歌』がそれを眺めていた。
「貴方って女性に対する気遣いは無いのかにゃん？」
「十分している」
現れた黒歌に驚くことなく、シンは踏み付けている足に力を込めた。すると踏み付けている黒歌の頭はガラスの様に砕け、その全身も同様に砕ける。
「幻術って知っていてわざとやったのかにゃん？　何でそんな無駄なことを？」
「気にするな。ただの嫌がらせだ」
その露骨な挑発に、黒歌は唇を歪めさせ牙の如き八重歯を見せると、笑っているとも怒っているともとれる曖昧な表情でゆっくりと立ち上がり、シンの眼前に立つ。

互いの瞳にお互いが映り込んでいるのが分かる程の近距離。間合いなどとうに超えた零の位置で不気味な程静かに睨み合う。

見ている方も息が詰まりそうになる緊張感。

どちらが先に動くのか。見守る者たちがそんなことを考えていたとき、突如頭上で大きな爆発が響く。

思わず空を見上げてしまう一誠たち。上空でタンニーンと美候が何かをして起こされた爆発らしい。

タンニーンたちに意識をとられていることに気付き、慌ててシンたちの方に視線を戻す。

両者の戦いは既に始まっていた。

側頭部を打ち抜く様に振られたシンの拳を、黒歌は後方に跳んでひらりと躱す。猫の様に四肢で着地するも、それと同時に爪先が黒歌の顎下から突き上げられた。

頭を後ろに引いてそれも躱す。触れればその箇所が千切れそうな勢いの蹴りが、黒歌の目の前を通り過ぎていった。

黒歌の右手に禍々しい力が宿る。妖力が込められた爪が、蹴り上げられたシンの足に突き立てられようとするが、シンは軸足を回し、それによって足が突如軌道が修正され、後ろ回し蹴りの様な格好となる。

その状態から姿勢を低くし更に足払いの形に変え、黒歌の両足を薙ぐ様に放つ。
しかし、それも黒歌は跳んであっさりと避けてしまった。宙に跳んだ黒歌は右手を突き出す。すると指の先から込められた妖力が糸の様に伸び、それが束ねられ鞭の様に変化。うねりながらシンの首を狙う。
不規則な動きをするものの左眼はしっかりとその動きを追っており、狙う箇所を把握し避けようとしたとき、シンの足が止まった。
何かが足に巻き付き地面に固定させている。確認しようにもそんな猶予など無い。
不利になるのを覚悟で地面に向かって仰向けになって倒れる。直後、通り過ぎていく妖力の鞭。頭髪に僅かに掠り、数本の毛髪が宙に舞うものの、妖力の影響がそのまま溶けて消えてしまった。
地面に倒れたシンは素早く立ち上がろうとするが、突如地面を突き破って現れたものが右腕に巻き付く。
泥に塗れた茶褐色の物体。木の根である。地面に張り巡っている木の根が生き物の様に絡まり、拘束する。足の動きを止めたのもこの木の根である。
この時点で仙術について詳細を知らないシンだが、これが黒歌の仕業であることはすぐに分かった。すぐに引き千切ろうと力を込めるも、幾重に巻き付いた木の根が数本千切れただけ。植物の根とは思えないぐらい固く、しなやかであった。

それでも力を込めればその分だけ纏わりつく木の根も千切れていく。だが、それを静観している様な相手ではない。

地面から伸びる木の根は更に本数を増やし、シンの両腕だけでなく胴体にも巻き付いて、完全にシンの動きを封じた。

木々に覆われた森という舞台。当然地中に伸びる木の根の数は途方も無いもの。恐らく至る所にそれが張り巡らされている。それは蜘蛛の巣の上で足掻く羽虫に等しい。

身動きが取れなくなったシン。その姿を見て、リアスと小猫は助ける為に立ち上がろうとするも毒霧の影響ですぐに倒れ伏せる。

ならばと自由に動ける一誠が、シンを救う為に動こうとした。

「来るな」

しかし、それをシン本人が止める。

「お前は自分のことだけに集中しろ」

あくまで禁手を発動させることを優先させる。だが、そんなことを言われ素直に応じる一誠ではない。確かに自分がやろうとしていることも重要である。しかし、それを優先し友の危機を放っておくなどという、薄情な真似など到底出来はしなかった。

「今から――」

「だーめにゃん」

一誠が動くよりも先に黒歌の魔力弾が胸部へ直撃。その威力で後方へと飛び、巨木に背中から激突する。
「がはっ！」
衝撃で肺の内にある空気を無理矢理吐き出され、地面に倒れるとそのまま身動きしなくなる。
「弱。これが本当にヴァーリのライバル？　本当にヴァーリに手傷を与えたの？　お話になんないにゃん」
動けない一誠を黒歌は嘲笑う。倒れている一誠にまだ意識が有るらしく、黒歌の嘲笑を聞いてその爪を地面に突き立てた。
「こっちもこっちで手応えないにゃん。こんなんじゃあすぐ皆殺しだにゃん」
「――ふっ」
余裕の宣言をする黒歌に水を差す鼻で笑う音。音の主はシンであった。
「――何がおかしいにゃん？」
「もう一度言う。出来ないことを口に出せば後で恥をかくのは自分だ」
黒歌の顔が、明らかに不愉快だと言わんばかりの表情と化す。
身動き出来ず、助けも無い状態だというのに焦りも恐怖も無い余裕の態度。それどころかこちらを軽んじる様な言葉すら吐いてくる始末。気分を害さない訳が無い。

「決めたにゃ。まずは貴方。その次は赤龍帝だにゃん」
黒歌の死刑宣告。しかし、シンは――
「恥の上塗りだな」
――それすらも挑発を以て返す。
黒歌の両手に仙術、妖術の異なる力が集まっていく。この混じり合った力が注がれれば肉体は原型も無く崩壊する。当然治癒する方法など無い。確実に相手を殺す為の技である。
近付いてくる死を前に、シンは冷や汗一つかかない。その面の厚さを不愉快に思うと同時に黒歌は不審に思う。
黒歌を見る双眸。無機質とも呼べる程感情の揺れが無い。しかし、何処か黒歌を測っている様にも見えた。
直感に従い、接近しながら黒歌は『目』を切り替える。相手の体内の力の流れを見る為のものである。
一目シンを見た瞬間、黒歌の足が止まる。体の中に流れる力が胸部の中心に向かって集中しているのが見えた。
何が起こるかは分からない。だが、これ以上近付くのは危険と判断する。
シンも黒歌が気付いたことに気付く。もう数歩接近していれば確実に当てることが

出来たであろうが、察知されたのならばこれ以上近付くことは無い。
シンは体の内に溜めていた力を解放する。
背部から放たれる無数の魔弾。地面に接している為、地表を破壊し巻き付く木の根を大地ごと吹き飛ばす。
地面が吹き飛んだことで出来た隙間から、残りの魔弾が黒歌に向け一斉に襲い掛かった。
四方から迫る魔弾を仙術、妖術を合わせた力で次々に撃墜していく。
距離が遠かったこと。放った体勢が悪く弾数が減ってしまっていたせいもあり、シンの攻撃は黒歌に届かない。
だが、全く無意味な行為では無い。何故なら、黒歌の意識は否が応にも魔弾の方に向けざるを得なかった。
全てを捌き終えた黒歌は、急いでシンの姿を探そうとする。
「ッ！」
既にシンは黒歌の目の前に立ち、右手の五指を鉤爪の様に広げた状態で振り上げている。
避ける暇が無いと即座に判断すると両手を突き出す。すると黒歌の姿が歪む。
正確にはシンの目から見て黒歌が歪んで見えた。一誠たちを逃がさない為に空間を

操作し外界と遮断する為の結界。小規模にしたそれを、盾としてシンの前に創り出す。
空間そのものを操作している為あらゆる攻撃を遮断し、歪めて作っているので直に触れればその歪みに巻き込まれることもある。
黒歌が自信を持って生み出した結界。事情を知らないシンは、躊躇することなくその結界に向かって右手を振り下ろす。
その姿に内心ほくそ笑む黒歌であったが、次の光景に目を剥いた。
結界にシンの右手が触れた瞬間、その指先が結界を突き破って現れる。指の第一関節までが埋まり、干渉出来ない筈のものに干渉していた。
在り得ないと驚愕する黒歌の前で突き入れられた指先が徐々に下ろされていき、結界を裂いていく。
シンとの戦いが始まる前、黒歌の中にはある小さな疑問があった。それは、シンが何故結界内にいるのかというもの。それをタンニーンやマダと同じく、結界が張られる前に中に居たのだと一人解釈していた。
しかし、本当の答えは目の前で起きている。
振るう右腕に力が加わり、弓の弦の様にしなっていく。初めはゆっくりと裂かれていた結界も、裂かれる速度が増していく。
これ以上守り続けるのは拙いと判断するのと同時に結界が半ばまで裂かれ、結界がシ

ンの力に耐え切れなくなり、空間の歪みが若干弱まる。抵抗が少なくなると抑え込まれていた力が一気に解放され、その力を以て結界を完全に引き裂く。

黒歌は結界が引き裂かれる直前にその場で宙返りをし、高く跳び上がった。結界を引き裂いたシンの指は空を切ることとなるが、空振った先の黒歌が立っていた地面には深い裂創が刻まれた。

宙にいる黒歌は、何も無い場所を片足で蹴り付ける。見えない足場があるかの様に反動が起こり、シンと距離をとるように後ろへと跳んでいった。

着地した黒歌の表情は、余裕から一変し苦々しいものとなる。

気を使い肉体の内外を強化することが出来る。だが、先程の結界のことを考えると接近戦は危うい。どんなに強化してもそれらを無視し、貫いてくるのでは無意味。通常では干渉出来ないものに干渉をしてみせるということは、そういった可能性が高いということである。

こうなってくると、最早近付いて戦う気も失せる。

距離を空けられたシンであったが、追撃はしなかった。未だに相手の力の詳細が分からず、更に手札も多いため、下手に攻めて思わぬ反撃を受けるのを考慮してのことであった。

木の根による拘束を解いたせいでボロボロになったスーツを破り脱ぐ。借り物だが

美候との戦いの時に既に焼け焦げていたので、今更きちんと返品出来るものではない。それに纏わりついているだけの襤褸切れを着ているぐらいなら、一層脱ぎ捨てた方がまだましである。

上半身を露わにしたシンを見て、リアスも小猫も驚く。決してその行動に驚いている訳では無い。初めて見るシンの右手から背部にかけて伸びる紋様、そして左手にも同じ輝く紋様が。

リアスたちが最初に見た時、シンの紋様は右手の甲までしかなかった。だが、今は無かった筈の左手にまで浮かび上がっている。胸中に覚えるのは漠然とした不安であった。はたしてこれを成長と呼んでいいのであろうか。

不安がるリアスや小猫とは異なり、マダはその背を興味深そうに眺めていた。

黒歌の周辺から薄い霧が生じ始める。シンがそれを視認すると霧は一気に広がり始め、シンの足元付近まで伸びてきた。

「それ、を、吸っちゃだめ！　毒、よ！」

リアスが苦しそうにしながらもシンに警告を飛ばす。

毒霧の中心に立つ黒歌。すると霧が広がる度に別の黒歌が現れ始める。霧と幻術を併用してきた。

目を凝らし、本体を探ろうとするが漂う霧がそれを妨害する。霧越しに見ると霧自体

に力が込められているせいか、どれもこれもがぼやけた感じに見えてしまい判別がつかなくなる。
　そうこうしている内に毒霧はシンの足元付近にまで伸びて来ていた。あと数分もかからずに呑み込まれてしまう。
『特別にその子たちの時よりも濃い霧にしてあげたにゃん。一息吸えば、五臓六腑が腐れ落ちちゃうかも』
　全ての黒歌が口を揃えて喋る。判別する材料を少しでも与えない為か、一切の乱れが無かった。
　吸えば即死に繋がる毒の霧。それを聞いたシンが思ったことは一つ。
（だったら問題は無い）
　触れれば溶ける様なものであるのなら少し厄介だったかもしれない。そうでなければ恐れる必要など何一つ無い。
　要は吸わなければいいだけのことである。
　足元付近にまで伸びていた霧は更にその先端を伸ばし、這う様に身体へ触れようとしたとき、音も無く霧が消え失せる。
「――にゃ？」
　少し間を空けた後、意味が分からないという表情と声を出す黒歌。

術の解除などしていない。だというのに霧が消えてしまった。理由が分からず、目を何度も瞬かせる。

消えるのは触れようとした霧だけに留まらず、最初にシンの足元の霧が消え、更に半径二メートル内の霧も消えていく。広がっていた霧が逆に見えざる力に呑まれていく。

一体何が原因なのかと考える黒歌の頬に、撫でる様に風が触れていく。

暖かい――など通り越し、熱いと言える段階の風。

霧が消えた理由を察すると同時に、黒歌の前でシンの両手に火が起こる。

揺らぎながらも煌々と燃え盛る二つの火。シンは両腕を上げ、二つの火を頭上に掲げ、それは炎と化す。

吹き抜けていく風は熱いというのに、黒歌の背中に流れるのは冷たい汗。

結界を張り、身を守ることも考えたが、結界を素手で破壊する様な者が放つ技に、同じことが出来ないと楽観的に考えられない。

炎を掲げる両手が黒歌に向かって突き出される。

放たれたソレは最早炎では無かった。熱によって造り固められた柱。あるいは世界を溶かすことで描かれる灼熱の一筆。圧縮された炎の迫撃は、不思議なことに見る者に熱気ではなく寒気を与える。

群れ為す幻影の中で一人動き出す者がいた。本体である黒歌である。

一直線に伸びた炎が幻影たちの中心を貫いていく。触れていない筈なのに、炎が通過していく度に黒歌の幻影が姿を消していく。

いち早く動いたことで炎から逃れたかに思えた黒歌。しかし、シンはそれに対し何もしない筈が無い。

突き出している両腕を黒歌の方に向けて振るう。炎もまたその動きに合わせ、横薙ぎに走る。

軌道にあるものは木であろうと岩であろうと問答無用で焼き切っていく。その様子は刃を振るうが如く。

地を滑る様にして全速力で駆ける黒歌。そのすぐ背後には炎が迫っている。二股に分かれた尾の先端にチリチリとした熱を感じる。

このままでは不味いかもしれないと思い始めたとき、唐突に熱の気配が消えた。急停止はせずに走りながらシンの方を見ると、その手から炎が消えている。

炎が消えた両腕を冷ます為に軽く振りながら、シンは短く息を吐く。この炎、威力はかなりのものであるが、持続力に関してまだまだ改良する点が多い。単純に炎の扱いに慣れていないせいもあるが、燃費が非常に悪い。数秒間維持するだけで、熱波剣を数発放った様な疲労感を覚えていた。

「危ないにゃー。自慢の尻尾が焦げたらどう責任をとってくれるんだにゃん?」

「元から黒いから目立たないだろ」
　表面上でも余裕を見せる為に冗談を言うが、シンはそれを切り捨てる様に返す。
「でも惜しかったわね。私を倒すにはちょっと足りなかったにゃん」
「元から倒すつもりなんて無い。最初に言った通りあくまで時間稼ぎだ」
「……ふーん。あんな弱い赤龍帝が私を倒せるとも？」
「その時が来るまで分からない」
　すると一誠とリアスの会話が聞こえてきた。黒歌に吹き飛ばされていたが立ち上がったらしい。
「――部長。俺、自分の何が足りなくて禁手に至れないのか、少し分かった気がします。俺が禁手に至るには恐らく部長の力が必要です！」
　決意に満ちた一誠の言葉に、リアスはまだ毒の状態が薄れていない中でも引き受ける。
「分かったわ！　――それで私は何をすればいいの？」
「――おっぱいをつつかせて下さい」
　良く通る声で、阿呆みたいな内容の言葉が戦場を駆け抜けていく。結果、誰もが戦う手を止めてしまい、場が沈黙する。
「――あんなこと言っているけどいいにゃん？」

「……」

黒歌が聞いてきたが、シンは黙る。シン本人も何故この様な状況であんなことを言い出したのか全く分からなかった。

きっと、恐らく、多分、何らかの理由がある筈である。理由があっての行動の筈。が、それを差し引いてもシンの戦意は若干下がるのであった。

選択、進路（後編）

「く、うぅぅ……」

呻きながら一誠は体を起こす。視界の先では黒歌とシンが激闘を繰り広げていた。一誠も初めて見る技で黒歌に攻め勝っているシンの姿を見て、悔しさが込み上げてくる。

禁手に至る為の時間を、体を張って稼いでくれているシン。それなのに黒歌に一蹴され、今みたいに無様に地を這い蹲っていることが、涙が出るほど悔しかった。

部長を守ることも小猫を守ることも出来ていない。自分の無力さが恨めしい。何故欲しい時に欲しい力が無いのか。

思えば初めて神滅具の力を発揮したとき、アーシアが人としての生を終えた時だった。初めて禁手に至ったのは、リアスが望まない婚姻をさせられたからであった。ヴァーリと辛うじて互角に戦えたのは、リアスの涙を見たからであった。

今以上の力が解放された時、誰かが泣くか、誰かが苦しんでいる時であった。

物語の主人公ならば珍しいシチュエーションではない。王道、基本、テンプレートの様なもの。

だが――

（それで……それでいいのか？）

合わない。しっくりとこない。当然と受け入れることが出来ない。

「……イッセー先輩」

身体を起こした一誠に気付き、小猫が声を掛けてくる。守りたかった少女に逆に心配をされ、余計情けなさを感じる。

「小猫ちゃん……ごめんな。俺には伝説のドラゴンの力が宿っている筈なのに何にも出来ないんだ。……俺がもっとドラゴンの力を上手く使えていたら、こんな風に蹲っていることも、間薙やタンニーンのおっさんに戦ってもらうことも無かったんだ……ドライグ、ごめん。――俺は才能の無いダメ悪魔だ」

『相棒……』

戦いたい時に上手く戦えない自分の才能の無さに絶望すら抱いてしまう。

「歴代の赤龍帝はさ、皆、短期間で禁手に至ったんだってさ……禁手に何カ月もかかっているのは俺ぐらいだって」

赤龍帝のことについてドライグやアザゼル、時には自力で調べた。その結果知ったことは、一誠の劣等感を一層煽るものであった。だが、タンニーンに鍛えられたら、マダに鍛えられたらという一縷の望みを懸け、見て見ぬ振りをしてきた。

それも限界だった。心の奥底で蓋を締めていた劣等感が一気に溢れ出す。
「わかってたんだ。もうずっとわかっていたんだよ。赤龍帝の力が宿っていても俺自身がクズなんだ……俺がダメだから、部長や小猫ちゃんに何も出来ない……俺は、間薙〈あいつ〉の様に戦えない……」
殆ど同じ時に人ならざる力を得た。だからこそ感じてしまう差。シンが目に見えて強くなっていく一方で、ずっと同じ場所で足踏みをしている気がした。
こんな時に言うことなど間違っているとは自覚している。しかし、一度弱音を出してしまうと止まらなくなってしまう。
小猫に失望されるかと思われたが、小猫は一誠の話を聞き微笑を浮かべながら首を横に振った。
「イッセー先輩はクズじゃないです……知っていますか？　歴代の赤龍帝は皆、力に溺れた者が多かったって。……絶大な力に呑み込まれたんだと思います……。でも、それはきっと大きな力を一人で操ろうとしたから。……私、知っています……イッセー先輩とドライグが、仲良く話していることを……。実はちょっとだけ聞こえているんです。心の中で話しているのが」
猫？としての力の影響からか、小猫の耳には声を出さない心の中の会話が僅かに聞こえていた。内容までは分からなかったが、お互いに笑ったり、時には一方を怒っていた

りと、伝説のドラゴン相手とは思えない程仲の良さを感じていた。
「どんなに力があっても……優しさが無ければ、独りよがりの力なら……必ず暴走してしまう。……でも、イッセー先輩は優しい赤龍帝です、だからドライグとも仲が良いんです。……ちょっと力が足りなくても……二人なら、それもすぐに埋められる。それは素敵なこと……。きっと先輩は歴代の赤龍帝の中で初めての優しい赤龍帝です。……間薙先輩の生き方は……間薙先輩にしか出来ません。だから、イッセー先輩はイッセー先輩のまま――」
小猫の言葉に胸の奥が熱くなってくる。その熱が体中を駆け巡り、四肢に力を与えてくれる。
「優しい『赤い龍の帝王』になって下さい」
こう言われて。ここまで言われて、立てない筈が無い。
一誠は奥歯を噛み締め、痛む体を無理矢理立たせる。
小猫に言われ、ようやく自分の中にある何かが分かった気がした。
だからこそ、それに従い行動に移る。
「――部長。俺、自分の何が足りなくて禁手に至れないのか、少し分かった気がします。俺が禁手に至るには恐らく部長の力が必要です！」
「分かったわ！　――それで私は何をすればいいの？」

「――おっぱいをつつかせて下さい」

その一言に皆の視線が集中するのを感じた。全員呆気にとられているのも感じる。

当然の反応と言えたが、言った一誠は微塵も後悔していない。

アザゼル、マダとの会話以降、ずっと頭の中にそのことが残っていた。特訓で死ぬような目にあってもふと思い浮かぶのはリアスの胸を突くという妄想。一誠にとってそれほどまでに衝撃的なものであった。

リアスはポカンとした表情をした後、赤面していく。

正直、己の中の願望を言っただけで九割満足していた。遥か遠く彼方にある夢を語れただけである種の満足感があった。この後、リアスに拒否の平手打ちを貰うのも、軽蔑の視線を向けられるのも覚悟の上である。

「……わかったわ。それであなたの想いが成就出来るなら」

拒否ではなく応諾。それを聞いた時一誠は、自分は起きながら夢を見ているのではないかと最初に思った。

自分で言い出したというのに、一誠は大きく動揺する。

「ほ、本当ですか！　冗談じゃないんですよ！　つつくんですよ！　俺が！　部長の！　乳首を！　指で！　本気ですよ！」

リアスもまた本気であることを示す為にドレスに手を掛け、一気に下ろす。

戦いの真っ只中でその乳房を曝け出してみせた。
「わっ！　何やってるんだにゃん！　リアス・グレモリーは何を考えているにゃん！
――どういうことなの？」
「……俺に聞くな」
リアスの行動に驚愕し、その真意をシンに聞いてくる。シンは無表情のまま一蹴するが、その身から放つ気迫が明らかに失せていた。
「一体どんなことをしようってんだい！　何かの秘策か？　タンニーン！　あんたもこの件に一枚噛んでいるってのかい？　俺っちと戦っているのはあれをする為の時間稼ぎ――」
「そんな訳あるか馬鹿が！　俺が知りたいぐらいだ！」
変な濡れ衣を着せられそうになるのを怒鳴って否定し、これ以上変な勘繰りをされたり、何が起きているのか深く考えるのも止める為に戦いを再開させる。
一方マダとケルベロスはというと。
「ハハハハハハハハハハハハハハ！」
マダは腹を抱えて爆笑。
「グルル……」
ケルベロスは興味無さそうにそっぽを向いていた。

色々な意味で戦いの中心になっている一誠とリアス。リアスは毒で血の気の引いていた肌を羞恥で真っ赤にしていた。一誠は、目の前に晒された二つのものを凄まじい眼力で凝視し、興奮で顔を真っ赤にしていた。

「……は、早くなさい」

リアスの急かす声。その恥じらいに満ちた声に鼓膜が蕩けそうになる。悪いとは思うが、正直何回も聞きたいくらいであった。

「で、では……」

右手の人差し指を立てると、緊張に満ち満ちた表情でゆっくりとそれを近付けていく。――が、何故か突然その動きが止まる。

「た、大変だ……」

焦燥に震える一誠の声。緊張した面持ちから一転、苦悩に満ちたものへと変わる。

「おっさん！」

いきなり呼び掛けられたタンニーンは、驚きつつも美候に炎を吐き出し、自分から離れさせるとその声に応じる。

「どうした！　何かあったのか！」

声、態度から非常事態でも起きたのかと思った。

「右のおっぱいと左のおっぱい、どっちをつついたらいい！」

予想の斜め下を行く一誠の発言に、タンニーンも雷鳴の様な怒鳴り声を落とす。
「この馬鹿野郎オオオオオオ！　何だその質問は！」
「俺が禁手に至れるかどうかの選択なんだ！　真剣なんだ！」
「どういう因果でつついたら禁手に至れるというんだ！　ああ、もういい！　どっちも同じだ！　右も左も！　さっさと突いて至れ！」
「しょうがないだろぉ！　初めてなんだから！　ファーストブザーなんだから！　だったら参考までに教えてくれ！　タンニーンのおっさんは、最初の時嫁さんのをどっちからつついたんだ！」
「何てこと聞くんだこの大馬鹿野郎！　言えるかぁぁぁ！　ああ、チクショウ！　何か涙が出そうだ……。おい！　美候！　さっさとかかって来い！」
一誠の問いに答えるよりも美候との戦いを優先する。タンニーンから模範解答を得られなかった一誠が次に声を掛けたのは――
「間薙！」
「後で殴るから今のうちに覚悟しておけ」
――聞く前に突き放される。
頼れる友人も答えは与えてくれなかった。ならば最後に頼れる者は一人しかいない。
「マダ師匠！　俺は右と左、どちらをつついたらいいでしょう！」

「というより、本当につつくのはその指でいいのか？　その手でいいのか？」
「はっ！」
当たり前の様に右人差し指でつつこうとしていた一誠は、気付きもしなかったという表情で己の両手を見る。
『この期に及んで選択肢を増やすな！』
流石に黙っていられなかったらしく、ドライグが怒声を上げる。
「もう！　どっちでもいいでしょう！　両手で同時につついたら！」
いつまでも胸を晒していることにいい加減限界が来たのか、リアスは一つの解答を出す。
雷にでも打たれた様な顔をした後、両目から滝の如き涙を流しながら一誠は両手の人差し指を立てる。
「――そう、させてもらいます」
リアスの答えを自分の答えとした一誠は、涙に溢れる目で正確に押すべき箇所を狙い定めると、目的に向け一気に両手を突き出す。
ずむっ、と指先が先端に埋まる。
質感、感触、弾力が指先から脳に光速に伝わってくる。
脳に送り込まれる未知の感覚。否、正確には未知『であった』感覚。もう既に脳には

これが何の感覚か、深く深く刻まれる。
（これが……）れが！　これがぁぁぁぁぁぁ！）
脳が気化しそうになるほど興奮する一誠。しかし、内なる興奮とは裏腹に表の一誠の表情は『無』そのもの。全ての力を指先に集中させている為である。
「……いやん」
そのときであった。リアスの口から零れる様に甘い声が漏れたのは。
蕩ける。耳が、脳が、体が蕩けてしまうほどに官能的。男として、そんな声を女性に出させてしまったことに若干の罪の意識と、それを上回る程の活力が蕩けていく全身を駆け巡る。
――が、それがダメであった。
苦行そのものといってよい修行と禁欲の生活。そこにただでさえ味わったことの無い興奮の最中に更なる興奮が圧し掛かってきたせいで、一誠の脳の容量を完全に上回ってしまう。
結果、一誠は鼻から勢いよく鼻血を噴出したかと思えば、そのまま白目を剥いてしまう。
『――相棒？　おい！　相棒！』
いち早く異変に気付いたドライグが声を掛けるが返事は無い。

兵藤一誠。戦いのど真ん中で胸を突いたせいで意識を失う。

◇

「あああああああ！　……ああ？」

興奮して叫んでいた一誠であったが、目の前の光景ががらりと変わったことに気付き、叫びも治まる。

四方が壁に囲まれた部屋。その中央に置いてある派手派手しい円形ベッドの上に何故か腰を下ろして座っている。しかも、一誠にはこの場所に見覚えがあった。

「ここは……」

「胸を突いて意識を失うなんて貴方らしいと言えば貴方らしいわね。イッセーくん」

聞き覚えのある言葉。聞くだけで背中に氷を入れられたかのような寒気が立つ。

「レイナーレ……！」

「はあい。何日ぶりかしら？　でも、この姿の時は夕麻って呼んでね」

一誠の前で足を組んだ姿で椅子に座っているレイナーレこと夕麻。その姿は、初めてデートした時と同じワンピース姿であった。

「……また、俺の夢に出てきたのかよ」

彼女の姿を見ると同時に過去にも同じ夢を見たことを思い出す。目覚めたときに全部忘れてしまっていたが。
「私に文句を言わないでよ。これって貴方の夢よ？」
「だったらもっと良い夢を見たかったね。夕麻ちゃん」
絶頂にあった興奮もすっかり冷めてしまった。刺々しい口調でその名を呼ぶが、当の夕麻は一誠のささやかな抵抗にクスクスと笑っていた。
「名前を呼んでくれてありがとう」
「どうだっていい。そんなことより早く起きたいんだ、俺は！　間薙もタンニーンのおっさんもまだ戦っている！　早く禁手に至って――！」
「はいはい。焦らない。別に夢の中の時間イコール現実の時間って訳じゃないのよ？」
ベッドから急いで立ち上がろうと腰を浮かす一誠を宥める。そう言われ納得した訳では無いが、目を覚まそうとしても全く変わらない現状に気付き、仕方なく再び座った。
（何でまたこんな夢を見ちまっているんだ、俺……）
二度と会いたくないと思っていた女性と顔を合わすことになり、思い出したくない記憶が蘇ってくる。
「見るのは私のせいじゃないわよ。全部、貴方のせいだから」
心の中で思ったことを見透かされ驚く一誠に、夕麻は呆れた表情となる。

「あのね。ここは貴方の夢、つまりは心の中なの。思っていることなんて筒抜けなの」
「……ああ、そうかよ」
「そうなのよ」
そこで会話が途切れ、沈黙が下りる。
一誠は夕麻との会話に違和感を覚えていた。前に見た時は、こちらの心の傷に爪を立てる様に責め立て、罵倒してきたというのに今回の彼女は妙に大人しい。
「きっと、リアス・グレモリーの胸をつついたことで精神的に少し余裕が出来たからじゃないかしら？　私って貴方の記憶から作られたものだし」
一誠の疑問を聞いてもいないのに答える。
「にしても傑作よね。胸をつついたら禁手になるって……ぷふっ！　イッセーくんらしいと言えばらしいとも言えるけど」
一瞬噴き出すが、その後は笑いを噛み殺した表情をする。
「もっとカッコいい成り方もあったんじゃない？　例えば大切な人を傷付けられたーとか、大事な人が泣いたーとか。もっとこう主人公的な――」
「いいんだよ。俺はこれで」
別の方法を勧めてくる夕麻の言葉を遮る。
リアスや仲間たちが傷付く所なんか見たくもない。泣く所も見たくもない。そう

やってしか手に入らない力なら求めない。求めるのはそれを未然に防ぐ為の力である。そして、考え思い付いた別の方法があれであった。

不真面目？　度し難い？　ふざけすぎ？　馬鹿？　阿呆？　大いに結構。謗られ、軽蔑され、馬鹿にされようとも、選んだ道を真っ直ぐ行く覚悟は完了している。

「だから、俺はこれで良いさ」

握る左手を見る。決意の言葉であり、ある意味では今までの赤龍帝たちとの決別の言葉でもあった。

小猫が願った優しい『赤い龍の帝王』になる為に。

「やらしいの間違いじゃない？」

「うるせぇ。自覚はしてる」

一誠の言葉にしていない決意に夕麻がつっこんできた。

「……まあ、至れるかどうか分かる前にここに来ちゃったが……」

「――大丈夫よ。今のイッセーくんなら出来るわ。禁手が」

「え？」

夕麻の言葉に虚を突かれ、顔を上げると夕麻は微笑を浮かべていた。

「貴方の神器は岐路に立っていた。そして、貴方は一つの答えを出した。それは神器を扱う上で大事なこと。イッセーくんは進むべき道を選択したの」

かつての怨敵の口から背中を押される様な事を言われ、心中複雑な気持ちになる。
「そりゃあ、イッセーくんの頭の中の私だもの。――今の私ってイッセーくんにとって都合の良い女ね」
「嫌な言い方……ん！」
すると突然、夕麻の姿が薄らぐ。それだけではない周囲のものが徐々に色味を失い始め、白くなっていく。
「そろそろ起きる時間みたいね。イッセーくんの相棒が呼んでいるわ」
「ドライグ……よし！」
一誠がベッドから立ち上がると、部屋が白くなる速度が増していく。
「またね。イッセーくん。と言っても起きたらきっと私のことも、ここのことも忘れているとは思うけど」
「……出来れば二度と会いたくねぇよ」
「そう思っている限り、きっとまた会えるわね」
最後に笑いを含んだ表情を見せると夕麻の姿が消える。それと同時に部屋の中に白い閃光に満たされ――

◇

『相棒！』

「――ああ、聞こえてる」

流れた鼻血を左手で拭い払う。払った左手に出せなかった筈の『赤龍帝の籠手』が装着されており、輝きを失っていた緑の宝玉には元の輝きを放っていた。

『――至ったッ。分かるぞ、この感じ！　本当に至ったか！』

ドライグ本人もまさかあの方法で禁手に至れるとは思っていなかったらしく。大きく笑う――が、一誠には若干ヤケクソの様にも感じられた。

「いくぞ！　ドライグ！」

『ああ！』

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』

全身から放たれる赤い龍の魔力。夜の空が赤によって染め上げられる程の膨大な量であった。

赤い魔力は一誠の全身を覆い尽すと、形無き魔力が装甲と化し、それらが連なって鎧と成る。吹き荒れていた魔力が全て一誠に取り込まれると、そこには龍の鎧を纏う一誠の姿があった。

「禁手、『赤龍帝の鎧』ッ！」

この鎧を纏うのは四度目。一度目はドライグに左腕を代償として纏えた。二度目は謎の助力によって纏わせられた。三度目はアザゼルの補助によって成れた。全て誰かの手を貸してもらっていたが、四度目となる今回は自力によるもの。

「主のおっぱいつついてここに降臨っ！」

ある意味では助力はあったかもしれないが。

鎧を纏った一誠を見て、各々の反応は様々であった。

「……最低です。いやらしい赤龍帝だなんて……」

過程が過程なだけに驚き半分呆れ半分となる小猫。

『ついにやったな、相棒。何かもう色々と酷くて笑うしかないな！　ハハハハハ』

「ソンナニ面白カッタカ？　今ノガ？」

『やかましい！　笑わなきゃ泣いてしまいそうなんだよ！』

「ごめんな。エロい赤龍帝で……」

少し荒れるドライグに素直に謝罪する。

「色々言いたいことがあるが……まあいい。ついに至ったな」

修行の目的であった禁手に至った一誠の姿を見て、タンニーンは静かに笑みを浮かべた。

一誠は視線を感じ、そちらに目を向ける。シンが無言で見ていた。言葉にしなくとも

『早く来い』というのが伝わり、禁手の喜びはひとまず胸の奥にしまい、シンの方に一歩踏み出す。途端、地表が爆発したかの様に抉れ、弾丸の如き速度で一誠は前進した。

いつものような感覚で動いたつもりであったが、鎧によって強化された身体能力から繰り出される力は、一誠自身も鍛えられたこともあり一誠の想像以上のものであった。

上手く制御出来ず、このままシンの側を通り抜けていってしまうかと思われたとき、肩に軽い衝撃を受け、一誠は急停止する。

側を通るタイミングに合わせて伸ばされたシンの手が、一誠の肩を掴んで力で止めていた。

「落ち着きが無いな」

「悪い」

「場は持たせておいた。さっさと終わらせて戻るぞ」

「おう！　ありがとうな！　後は任せろ！」

禁手の時間を稼ぐという役目を終えたシンは、一誠が応えた後その肩を軽く叩いて後を託す。

この行動に対し、黒歌は不機嫌な表情になる。戦いの決着がつかなかったことは勿論のことだが、シン自身がこの戦いに全く執着をしていないことも苛立つ要因であった。言外に黒歌の存在など眼中に無いと示しているかのようであった。

「ハッ！　おもしろいじゃないの！　あれだけいいようにやられていた赤龍帝が、どれだけ強くなったか試してあげようかしら！」

積もる苛立ちの矛先を一誠に向け、その手に二つの異なる力を顕現させる。シンとの戦いのときにも見せた妖術と仙術の合わせ技である。

胸の前で手を合わせる。二つの力は反発することなく混じり合い、一つの力となる。

「妖術と仙術のミックス、味わってみる？」

その答えを聞くよりも先に、黒歌は両手からその力を撃ち出した。

迫る力を前にして、一誠の心中に焦りは一つも無かった。少し前の自分だったなら、くらえば細胞一つ残さずに消えていくであろう力に対し、不思議な程に平静でいられた。

直撃する。黒歌の目にそう映った時、混合された力が爆ぜ、四散した。

飛び散る力に混じる赤い魔力。それが広がり囲っている結界を激しく揺さぶる。

仙術、妖術の力が消え去った後に残るのは、拳を突き出した一誠のみ。それに黒歌は、信じられないといった表情になる。

「効かない！　嘘でしょ！」

かなりの力を練り込んだというのに全くの無傷。驚くべきことだが、更に黒歌は拳を突き出すまでの動きも一切目で追えていなかった。

拳に僅かな衝撃を感じ、煙も立ち昇っているがそれだけであった。恐ろしく頼りになる程の堅牢さは、まさにドラゴンの鱗そのものであった。

「――こんなものか？」

一誠の言葉に黒歌の頬が引き攣る。一誠は挑発する為に言った訳ではない。つい先程まで一方的に嬲ってきた相手の全力を容易く防いでしまったことに若干戸惑いを覚えて、今の台詞を零してしまった。尤も、そんな心情など知ることが出来ない黒歌にしてみれば、猫？としての誇りに傷をつけるには十分過ぎる。

「調子に乗らないでよッ！」

牙を剥きながら怒声を上げる。すると周囲の木々が騒めき立つ。

「これならどう！」

指揮する様に腕を振るうと、木々から木の葉が一斉に落ち、それらが全て一誠に向かう。更には地面が盛り上がり、そこから無数の木の根が現れ、一誠の動きを拘束しようとする。追い討ちをかけるように黒歌の両手が二つの力を纏い、いつでも撃ち出す構えをとる。

全ての力の矛先が一誠に向けられる。

黒歌がその手から力を撃ち出そうとしたとき、一誠の姿が消えた。

「え」

すぐに視界を動かし姿を探す。一誠の姿は見つけることが出来たが、立っている場所は、先程居た場所から百メートル以上も離れている。

動きが見えなかったことに焦るも、それを押し殺して標的を失った力を修正する。が、またしても一誠の姿が消える。

今度は先程の位置から右斜め前十数メートルほどの位置に姿を現したかと思えば、姿を消し、そこから左斜め前の位置に姿を現す。

目視出来ない速度でジグザグに移動する一誠に、黒歌はただ首を左右に往復させることしか出来ない。狙いを定めようにも、定める前に動いてしまう。

しかも、一誠が確実に黒歌との距離を詰めていく。

消えた一誠が姿を現す。また消える。姿を現す。そして消える。

翻弄される黒歌。ならばと、凡その位置を予想しそこへ逃れられない程の広範囲の術を放とうとする。

姿を見せる一誠。ならば次の位置は――。直後、一誠は背部から魔力を噴出させ、一直線に黒歌を目指した。

虚を突かれた黒歌は反応が遅れる。

回避を脳内で選択した時には、既に一誠の繰り出した拳が眼前にあった。

直撃する。同時に覚悟を決める黒歌であったが、次にきた衝撃は顔面を撃ち抜く様な

ものではなく、吹き抜けていく突風であった。
寸止めをされたと理解するが、怒りよりも先に全身から冷や汗が噴き出す。目の前にある固められた拳。そこから放たれる威圧感に畏怖を覚えた。
「俺の大事な先輩と可愛い後輩を苦しめるんじゃねぇよっ」
拳が解かれ、そこから人差し指が跳ね上がり黒歌の額を小突く。
その軽い衝撃に黒歌は正気に戻ったらしく、すぐに後方に飛び退いて距離を取った。
「舐めてるの？　今のを止めなければ致命傷を与えていたのかもしれないのよ？　私をあまり見くびるなっ！」
手心を加えられたと思い激昂する黒歌に、一誠は右腕を見せる。肘から下が赤ではなく白に染まっており、その色は黒歌にも見覚えがあった。
白龍皇の白である。
「舐めてなんかいないさ。あんたは俺の敵だ。だけど小猫ちゃんのお姉さんだ。だからこの技を使わせてもらう」
一誠が徐に両腕を上げ、肩幅まで開く。リアスたちが初めて見る構えであったが、マダだけはそれが何を意味するのか理解しているらしく、木の株から腰を浮かし注目する。
広げたられた両手が、一誠の胸の前で打ち鳴らされ、金属音が場に響き渡る。

変化はすぐに起きた。
「うっ」
黒歌が苦しそうな声を上げ、体を丸くする。
「うう……」
なおも苦し気な声を出し続ける小猫。
「おい、黒歌」
仲間故か黒歌の異変をすぐに気付き、美候がタンニーンとの戦いを中断して急いで筋斗雲を向かわせる。
「大丈夫か？――ッ！」
すぐに無事を確認しようとする美候。側に寄り黒歌の姿に驚き、そして――
「アハハハハハハハ！　何だその格好！」
「うる、さい！　笑うなクソ猿！」
――爆笑。笑われた黒歌は顔を赤くして怒鳴った。
身に纏う黒の着物が、体のラインがハッキリと分かる程に密着しており、裾も丈も異様なまでに短くなり、腕は二の腕部分まで露出し、足は大腿部全て曝け出された状態であった。こうなる過程で破れたのか黒の着物にはいくつか裂け目が出来ており、そこから白い肌を覗かせていた。

黒歌の衣服が全体的に『縮んで』いるのだ。
「ハハハハハ。はぁあ……早く立てよ。肌見せて恥ずかしがる程清純じゃないだろぉ？」
「それが、出来たら、あんたなんかすぐに殴っているわよ！」
見た目は冗談の様だが、黒歌本人は冗談では済まない状況である。密着した服のせいで腕は上がらず、脚を伸ばすことも開くことも出来ない。明らかに縮む前よりも衣服の強度が上がっており、全く伸び縮みしないのだ。
黒歌は完全に身動き出来ない状態となっていた。
「見たか！　俺の持てる全ての力と技を組み込み、マダ師匠との修行の末に編み出した新技！『洋服拘束〈ドレス・クロス〉』だ！」
切っ掛けはマダの一言であった。何気ない会話の中に出てきた『半裸』という言葉。全裸になれば全てエロイと考えていた一誠にとって青天の霹靂とも呼べるものであった。
半裸。半裸。修行中、その言葉はいつまでも頭の中から離れなかった。忘れようとも忘れられない言葉。やがて一つの決心をする。
修行の合間に出来た時間を使いマダに問う。
『半裸って本当に良いものなんですか？』

マダはその言葉で一誠の心中を全て理解し、優しく告げる。
『聞くんじゃなくて、実際に確かめてみろ』
そこからは、修行の中で僅かに出来た時間を利用してのマダとの特訓の日々であった。
思考。想像。工夫を凝らし、どうすれば理想に近付けるか試行錯誤を繰り返す。
長く苦しい時間であった。だが、目指すべきゴールがあればそれも耐えることが出来る。
そして完成し、今実戦で初めて使用したのが、この『洋服拘束』である。
白龍皇の力を利用し、衣服を縮小。その衣服に赤龍帝の力を送ることで繊維を強化。ここで問題なのが強化をするタイミングである。遅ければ衣服は縮小に耐え切れず完全に破れ落ち、早ければ何も起きないまま普通に縮む。一誠がこの技を編み出す上で最も苦労した部分でもあった。
だが、そのタイミングさえ合えば、今の黒歌の様に肌が見え隠れするあられもない姿となる。
今ある全ての能力を注ぎ込んだ技の完成に一誠は鎧の下で静かに涙を流す。
ふと、師であるマダの方を見ると、マダは無言で拍手を送っていた。
だがこれも完成では無い。『洋服崩壊』がいずれ見ただけで服が破ける様になるのが

目標なら、『洋服拘束』は破ける箇所を細かく指定出来る様になるのが目標。先は長い、だがようやくスタートラインに立てたのだ。

独り感極まる一誠と何故か拍手を送っているマダを他所に周りの反応はというと――

「修行して覚えたのがこれか……」

『俺を見るな！　俺に拒否する権利があると思うな！』

「ううん、まあ、イッセーらしいというか……」

「……最低です。やっぱりいやらしい赤龍帝です」

「ナニカ意味ガアルノカ？　コレハ？」

――呆れ、困惑、疑問といったものであった。

一方で黒歌たちは笑えない状況であることを理解しつつあった。

「なんだこれ。硬すぎるぜぃ」

拘束されている黒歌を解放しようとするが、肌に密着している着物に隙間一つ無く、爪先すら引っ掛けることが出来ない。

「黒歌！　恥を覚悟で仙術や妖術で服を吹き飛ばすんだぜぃ！」

「もう、やっているわよ！　でも出来ないの！」

美候の考えは、既に黒歌も考えており実行もしていた。だが、言った通り出来ないの

である。
体内で力を練り、それを体外に出そうとするも力が別の力によって抑え付けられ、術どころか力も発揮できない。
動きだけではなく力すらも阻害し完全に無力化させる。ふざけた技かと思っていたら、実体は恐るべき技であった。
戦慄している黒歌であったが、実際の所、一誠は『洋服拘束』にそんな力があることなど全く知らない。意図せず生み出された副作用なものである。
「はあ……まあ、こうなったら仕方ねぇや。そこで大人しく見とくんだぜぃ、黒歌。俺がドラゴンの親玉二匹の首を取るところをな」
救出することを諦め、黒歌を適当な場所に転がしてから美候は如意棒を構える。雑な扱いにギャーギャーと文句を言ってくるが、交戦体勢に入った美候の耳には届かない。
緩んでいた空気が美候によって再び張り詰められたものに変わる。
「さあ、行くぜ――」
「そこまでです」
しかし、その緊張に満ちた場に似つかわしくない冷静な声が、文字通り空を裂いて掛けられる。

◇

ジャアクフロストの頬に拳が叩き込まれ、そのまま地面に叩き付けられる。小柄なジャアクフロストの身体は叩き付けられると大きく跳ね、錐揉みしながら再び地面に顔から落ちる。

何度目か数えるのも嫌気が差す程の回数、ライザーはジャアクフロストを殴っていた。

しかし、ジャアクフロストはすぐに地面から立ち上がる。

頑丈だとは分かっていたが、ここまで頑丈だとは想定していなかった。手応えは十分だというのにジャアクフロストが受けているダメージは少ない。攻める側と受ける側の噛み合わない結果に、ライザーは苛立つ。

「どうしたホ？　もう終わりかホ？」

土塗れの顔で挑発してくるジャアクフロスト。それがやせ我慢であったのなら、ライザーの気も楽になっただろうが、しっかりと立つ姿を見ればやせ我慢でないことがすぐに分かってしまう。

しかし、同時に不審に思う点もあった。戦いが始まった最初のうちは冷気や氷を使って攻撃してきたが、戦いが進むにつれ何故か使用を控えるようになった。また短い手足

を振り回して殴りかかってきていたというのに、今は一方的に殴られ続けている。
何か相手の流れに乗らされている嫌な気持ちであったが、攻撃の手を緩める訳にもいかない。与えられる内にダメージを少しでも与える。それがライザーの考えであった。
挑発に応える様に、足の甲がジャアクフロストの顔面に埋まり、そこから蹴り飛ばす。縦に回転するジャアクフロストは頭を数度地面に接触させながら数十メートルも飛んだ。
仰向けに倒れたジャアクフロストを見て、追撃しようと一歩踏み出したとき、背筋に感じたことが無い冷たいものが走る。
それが何を意味しているのか戸惑っている間に、倒れていたジャアクフロストが上体を起こした。
「ヒー……ホー……」
ジャアクフロストの赤い目が爛々とした輝きを放ち始め、黒い体からは同じ色の魔力が立ち昇る。
それを見た時、ライザーは心臓を掴まれた様な気分であった。ジャアクフロストが放つ光に見覚えがある。
フェニックスは不死身である。しかし、不滅という訳では無い。完全なる生命が無い様に、フェニックスにも弱点はあった。

一つは祝福を受けた武器、あるいはもの。一誠との戦いでやられた様にこれを受けると再生能力が著しく低下する。

そして、もう一つはある特別な力である。矛盾した言い方になるかもしれないが、基本的には恐れる必要は無い。どんなに鍛えてもフェニックス程の上級悪魔を葬るには至れないと歴史が証明している。だが、何事にも例外が付き物である。故にフェニックスの歴代の当主たちは『もしも』を考えて、一族にその力について危機感を覚えさせていた。

ライザーも父から資料を見せられていたからこそ知っていた。ジャアクフロストの発する光は、魔を滅する『破魔』と対となる光。

(『呪殺』の力かッ!)

直感に従い、ライザーは炎の翼を広げ、空に向かって飛び上がる。その瞬間、ジャアクフロストが纏う呪殺の光が解き放たれた。

「ヒホオオオオオオオオ!」

黒い光がジャアクフロストを中心にして森に広がっていく。あらゆる生命を呪い殺す光が通過するだけで木から色が失われ立ったまま枯れ落ち、地面に生える雑草は一瞬にして朽ち果て、森に棲む生物たちは呪殺の影響により骨も残さず消えていく。

草木が、生物が、大地が、生命そのものが死に絶える。

空の上から広まっていく死を見て、ライザーは息を呑んだ。
フェニックスが死に瀕した状況からも生還することが出来るのは、体の中にある核――言うなれば魂の存在にある。肉体が消し飛んだとしても、この魂が無事ならば再生することが可能なのだ。だが、『破魔』『呪殺』となると話は違ってくる。
その二つの力は肉体だけでなく魂にまで影響を及ぼす。魂が滅ぼされればいくら肉体が不死身であっても意味を持たない。
悪魔にとって最大の効果を発揮するのが『破魔』だが、『呪殺』の力も『破魔』程では無いが魂に影響を及ぼす。
ジャアクフロストが放つ『呪殺』は範囲もそうだが、威力の方もライザーが過去に見た資料とは比べものにならない。
もし、あれを受けていたら。そう考えた瞬間、一度だけ体が震えた。
息絶えた大地の上で力を放ち終わったジャアクフロストがキョロキョロと周囲を見渡している。姿が見えなくなったライザーを探している様子であった。
隙だらけの姿。攻めるならば今――だと分かっている筈なのに、思いとは裏腹に体がその場から動かない。
ライザーが場に止まっている間に、ジャアクフロストは顔を上げ、空に居るライザーを発見する。

好戦的な笑みを浮かべ、走り出そうとした時――

「はしゃぐのはそこまでです」

ジャアクフロストの背後から腕が回され、持ち上げられた。持ち上げられたジャアクフロストの短い足がジタバタと空を蹴る。

その光景にライザーは瞠目する。ジャアクフロストの背後から伸ばされた腕は、何も無い場所から生えているのだ。よくよく見ると腕が生えている場所に小さな裂け目があり、そこから声が聞こえてくる。

「邪魔するんじゃないホ！」

ジャアクフロストは特に驚いた様子は無く、腕の主が知っている相手なのか、怒鳴りながら更に足をジタバタさせて文字通り足掻く。

「予定の時間が過ぎていたので嫌な予感はしていましたが……」

「お説教なんか聞きたくないホ！　オレ様はあいつに勝つんだホ！」

「そういう訳にもいきません。悪魔たちに気付かれそうなんです。早く帰りますよ」

「いーやーだーホ！」

我儘を言うジャアクフロストに大人の態度を努める声。しかし、次に言われた言葉でジャアクフロストの動きがピタリと止まった。

「ヴァーリに迷惑がかかりますよ？」

「うっ……」
苦い顔、悩む顔、悶える顔と表情を二転三転した後暴れるのを止め、手足をだらりと垂らす。
「……分かったホ」
「良い子です」
腕がジャアクフロストを裂け目の中に引き込んでいく。裂け目に入る直前、ジャアクフロストは空のライザーに指を突き付け叫ぶ。
「お前の顔は覚えたホ！　次に会う時こそオレ様の恐ろしさを思い知らせてやるホ！」
そう言い残し、ジャアクフロストは裂け目の中に消えていった。
一人になったライザーは、暫く呆然とした様子で飛んでいたが、やがて地面に降り立ち、何を思ったのか仰向けに倒れ込む。
「だあああああああああああああああ！」
ライザーは叫ぶ。腹の奥底から喉が裂けそうになるほどの声量で叫ぶ。
結果を見れば決着のつかない終わりであった。負けてはいない。だが、そんなことなど些細なこと。
「らあああああああああああああああああ！」
ジャアクフロストが最後に見せた『呪殺』。あれを見た瞬間、ライザーは紛れもなく恐

れ、逃げるという選択をした。
「おああああああああああああああああああああ！」
正しい判断だったのは間違いない。しかし、間違っていなかったとしても、必ずしもそれが許せれることとは限らない。
相手に臆した。その事実が、ライザーの中で言葉に出来ない怒りとなり、業火と化して臓腑を焼く。
「おおおああああああああああああああああああああ！」
こうやって叫んで少しでも怒りを外に出さないと頭が怒りで煮え尽くされそうになる。
ライザーの叫びは、当分の間止まることは無かったが、やがて喉が枯れ果て声が出なくなってくると、最後の最後に一つの言葉を残す。
「……クソッ」
怒りの叫びとは比べものにならないほど小さな声であったが、そこには詰め込むだけ詰め込まれた悔しさによる重みがあった。
空を見上げたまま吐いた言葉は虚空へと消えていった。

◇

皆の目線が声の方へと向けられた。そこには一の字の裂け目。
「黒歌に美候、遊ぶにも限度がありますよ？」
一の字に更に縦の裂け目が生まれ、大きく広がった裂け目から男性が一人現れる。
品の良い背広を着て、眼鏡をかけた若い男性。落ち着きと知的さを醸し出していたが、腰のベルトにある大剣と手に持っている朝日の様に輝く剣が、男性の異物感を強めていた。嫌でも目を引いてしまう輝く剣の威圧感もさることながら、鞘に納められている大剣もまた同等の威圧感を放っている。
男性の登場に、美候と黒歌は気まずそうな表情になる。
「お前、ヴァーリに付き添っていた筈じゃなかったかい？」
「今、何時か知っていますか？　予定していた時間を覚えていますか？　とっくに過ぎているので迎えに来たんです。予定場所を探しても彼しかいないから少し焦りましたよ。全く、三人とも何をしていたのやら」
ため息を吐きながら、手に握っている剣を一回転させ、柄頭で眼鏡を押し上げる。
「そいつに近付くな！　手に持つ剣もあまり見るな！」
タンニーンが警戒を飛ばしながら地面に降り立った。
「聖王剣コールブランド……カリバーンと呼んだ方が分かり易いか？　まさか最強の聖

剣が白龍皇の下にあるとはな……しかも、その二本目、同じく聖剣だな？」
抜いている剣が聖剣ならば、同じ気を放っている帯剣もまた、聖剣であることが分かる。
男性は頷き、鞘に収めていた剣を僅かに抜き、剣身を見せる。月明かりに反射し輝く剣。その光はシンたちの目の奥に小さな痛みを起こす。
「ご指摘の通り、こちらは最近発見された最後のエクスカリバーにして七本中最強のエクスカリバー、『支配の聖剣〈エクスカリバー・ルーラー〉』です」
コカビエルとの騒動の中で唯一現れなかった最後のエクスカリバー。それを目の前に立つ男性が所持している。悪魔側にしてみれば最悪のニュースと言えた。天敵である聖剣。それも最強クラスが『禍の団』の手に落ちているのである。
「ああ、そういえば自己紹介が遅れていましたね。私の名はアーサーといいます。以後お見知りおきを」
丁寧にお辞儀まですするアーサーであったが、そこに黒歌が口を挟む。
「ちょっと、名乗るのも聖剣についてぺらぺら喋るのもいいの？」
仲間から見ても情報を出し過ぎているらしい。
「別に構わないでしょう？　彼らに色々と見せて貰った様子でしたし、こちらのことも色々と知って貰わないでフェアじゃないです。――というよりもどうしたんですか？

さっきから蹲って」
「……動けなくされたにゃん」
「――どうやら迎えに来て本当に正解だった様ですね。返り討ちに合うとは情けない」
やれやれと首を振って呆れを態度で示す。黒歌は悔しそうな表情をするも、事実なだけに反論出来なかった。
アーサーは動けない黒歌に近付き、その首根っこを掴むと猫の様に持ち上げ、そのまま空間の裂け目に放り投げる。
「にゃっ！」
「ヒホ！」
裂け目の中に飛び込んでいった黒歌。既に裂け目の中にジャアクフロストも居るらしく、いきなり現れた黒歌に驚いた声を出す。
「重いホ！　さっさと退くホ！　オレ様を圧殺するつもりかホ！」
「ホントにうちの男共はデリカシーが無いにゃん！」
裂け目内で言い争う声が聞こえてくるが、アーサーは無視して話を続ける。
「では赤龍帝殿。私たちは退散させてもらいます。ああ、そうそう。聖魔剣の使い手さんと聖剣デュランダルの使い手さんによろしく言っておいて下さい。いつか一剣士として相まみえたい、と」

一瞬、穏やかな目に鋭い光が宿ったが、すぐに消えた。
「帰りますよ」
「あいよ」
アーサーの指示に従い、美候は筋斗雲に乗ったまま裂け目の中に入る。
「さようなら、皆さん」
微笑と言葉を残し、アーサーは裂け目を潜る。裂け目の内に入ると切断された部分が閉じ始め、あっという間に傷一つ無い空間に戻る。
ヴァーリの仲間たちが完全に去ったことが分かると、一誠は長く息を吐きながら鎧を解除する。
「終わったか……」
「お疲れ」
シンが側に立ち、労いの言葉を掛けた。
「おーい。二人ともこれを飲め。スッキリするぞ」
マダが黒歌の毒霧に侵されているリアスと小猫に瓢箪を渡す。突き付けられた瓢箪に二人は少しだけ躊躇するが、リアスが先にその瓢箪を手に取り中身を飲む。
効果はすぐにあった。青白く生気の無かった肌に一気に赤みが戻る。
リアスは自らの変化に驚くがすぐにそれを小猫に飲ます。小猫もリアス同様に健康

的な色艶の肌に戻った。
　その変化を見ていたシンが言葉を洩らす。
「あの瓢箪――」
「ああ、あれか？　マダ師匠が持ってる薬みたいなもんだよ。すっげぇ効くんだぜ」
「そうか。だったら問題無いな」
「ん？　ふごっほぉ！」
　一誠の両足裏が地面から離れ、体がくの字に折れ曲がり、顔から地に突っ伏す。
「すみません。こっちにもそれを下さい」

「ヴァーリ。戻りました」
「お帰り。どうだった？」
「ええ、実は――」
　アーサー、先程までのことを報告。
「そうか！　自力で禁手に至ったか！　ようやくスタートラインに立ったな！」
『落ち着け、ヴァーリ。……所で黒歌。どうしたのだその姿は？』

「これはにゃんというか――」
黒歌、洋服拘束について説明。
『……今すぐ赤龍帝を殺しにいくぞ、ヴァーリ』
「落ち着け、アルビオン」

信頼、戦闘

黒歌、美候たちの襲撃を辛くも退けた一誠たち。何が起きたのか上に報告していたのもあって、気付けばレーティングゲーム前夜となっていた。

現在は最後のミーティングの為にリアスの部屋に集まり、明日のことについてアザゼルも交えて話をしている。因みにマダの姿は無い。アザゼル曰く、目的であった一誠を鍛えるという役目が終わったので、何処かで女遊びでもしているらしい。

「で、イッセー。禁手の状態はどうなんだ？」

「はい。自力でなれるようになりましたが、いくつか条件があります」

禁手に至った後、一誠はドライグから『赤龍帝の鎧』について聞かされていた。

まず変身するまでに約二分かかる。黒歌の時は、既に力が溜め込まれていた状態だった為に覚醒してから即変身することが出来たが、あの後でもう一度禁手を試した際、変身するまでにそれほどの時間がかかってしまった。しかも、その間『赤龍帝の籠手』は使用できない。倍化も譲渡も出来ず、完全に無防備な状態になってしまう。

さらに禁手になれるのは一日一回が限度である。一度なってしまうと、制限時間を残して禁手を解除しても変身出来ない。神器もほぼ使用不能になる。

「鍛えるか、慣れるかすれば短縮出来るだろうが、死活問題だな。前以って変身準備を完了させなきゃ実戦じゃ使い物にならねぇ。それに『赤龍帝の籠手』を使えなくなるのが痛過ぎるな。……もしもの話だが、お前、二分間間薙に殴られて立っていられるか？」
「それは……ちょっと厳しいかもしれないです」
　幾ら修行でタフになったとはいえ、アザゼルの言う『もしも』の状況を耐え切れるほど楽観的にはなれず、素直な意見を述べた。
「まあ、そういうこったな。二分あればお前を倒せる奴なんて山ほどいる。自分の弱点はよく把握しておけよ」
「はい！」
「それで、禁手はどれくらいの時間維持できる？」
「はい。フルで三十分です。力などを使って消耗していた場合、もっと減ります」
「初めてにしては上等――と言いたい所だが、レーティングゲームとして考えると短いな。『赤龍帝の籠手』状態での倍化と譲渡は使い方の幅があるから大事だ。それが出来なくなると戦術の幅が狭まる。使い所が難しくなるな。何せ無傷且つ消耗無しって都合の良い状況で禁手が出来るとは限らない」
　アザゼルの言う通り、戦況次第では禁手をしないで戦っている方が得策の場合もある。激しく消耗している状態で禁手をし、即燃料切れを起こして敵も倒せなかったなど

という情けない状況など一誠も望まない。
「変身時、稼働時間、使用制限を聞かせてもらったが、過去にあった赤龍帝たちとだいたい同じデータという訳だな。ソーナ・シトリー側も赤龍帝のデータに目を通している筈だ。弱点は筒抜けになっていることを肝に命じておけよ？」
「はい」
「まあ、あれこれとネガティブなことを言ったが、やはり禁手が出来るってのは相手に相当なプレッシャーを与えられるからな。それに聞いた話じゃ修行で新しい技を覚えたらしいじゃねぇか」
「はい！　『洋服拘束』のことですね？」
新技の名を誇らしげに上げる一誠。既に見ているリアスと小猫は何とも微妙な表情をし、詳細を知らない他のメンバーは、少しだけ興味を示していた。
「中々の技みたいらしいな。ＳＳ級のはぐれ悪魔の黒歌を無力化させるなんてやるじゃねぇか」
「色々と苦労した甲斐がありました！」
「で、あれか？　やっぱ『洋服崩壊』と同じで女限定の技なのか？」
「勿論です！」
即答する一誠。『あ、やっぱりそういう系統の技なんだ……』という木場の声が聞こえ

てきたが、無視する。
「禁手の状態で使ったみたいだが、『赤龍帝の籠手』の状態でも使えるのか？」
「うーん……難しいですね。あれって『赤龍帝の籠手』と『白龍皇の籠手』の合わせ技ですから、両方顕現していないと上手く制御が出来なくて……禁手無しの状態だと木の実の殻を握ったまま割ったり、ペットボトルの蓋を触らずに開けたりする程度ぐらいしか出来ません」
「そうか……一応聞いておくが『洋服拘束』の成功率ってのは分かるか？」
　その問いに一誠は申し訳なさそうな表情をする。
「すみません。自分の技なんですがよく分からないっス。使用制限があるせいで実際に試す機会が殆ど無くて……」
「そんな顔すんな。恐らくそうだろうとは思っていた。念のために聞いただけだ」
　軽く手を振り、身振りで気にするなと伝える。
「だが、見せかけだとしてもかなり使えるな。そうだろ？　リアス」
　話題をリアスに振るう。急に話を振られてもリアスは落ち着いた態度でアザゼルがどんな解答を求めているかを瞬時に考え、それを口に出す。
「そうね。あの場にはシンも居たからきっとソーナの耳にも入っている筈だわ。そうなると女性を向かわせるのは避ける筈――尤も、そうじゃなくてもイッセーの相手を女性

にさせる可能性は低いわ」
「何でですか？」
「……洋服崩壊。女性の敵ですし、公開セクハラですから。大勢の観客の前で晒されるかもしれないと考えたら絶対に戦いたくないと思いますし、会長も絶対に戦わせたくないと思います」
「ああ、うん……おっしゃる通りです」
　小猫の尤もな意見に反論の余地は無く、素直に認める。
「まあ、理由はともかくとして相手の戦い方の幅を狭める可能性が高いし、こちらも対策が取り易いって訳だ。ただ、だからといってこっちに分があるとはいかないがな。リアス、ソーナ・シトリー側はグレモリー眷属のことはある程度知っているんだろう？」
「ええ」
　アザゼルの確認をリアスは肯定する。
「というよりも殆ど知られていると言ってもいいわ。ライザー・フェニックスとのレーティングゲームでイッセー、朱乃、祐斗、アーシア、小猫の戦い方は確認されている筈だし、ゼノヴィアの奥の手もコカビエルの件で割られている。……お兄様に報告する為の書類をソーナと一緒に作成したから。ギャスパーの神器も匙を通じて知っているだろうし、今回の小猫のこともシンから聞いていると思うわ」

「筒抜けと考えていい訳か……全く、有名人も辛いなぁ？」
　アザゼルが冗談っぽく言うが、メンバー誰一人くすりともしない。『こういうときこそ笑ってみせるもんだぜ？』と愚痴の様な言葉を洩らすが、事態を深刻に捉えているメンバーはやはり笑わなかった。
「ちぇ、まあいいや。で、お前の方はどれくらいあちらを把握している？」
「ソーナの扱う魔術、副会長である『女王』の使用する神器、あと他何名かの能力は知っているわ。けど、一部判明していない能力の者もいるし、神器を持っているかどうかも分からないわ。ただ、念の為に言っておくけど、これは一月以上前の情報よ。レーティングゲームが決まってから一体どれほど実力を伸ばしたのかしら……」
　不確定要素を語るリアス。一誠は、このパーティー当日の匙との会話を思い出していた。凄まじい気迫を内に秘めており、尚且つサーゼクスからの信頼も厚いセタンタから短い期間ながらも手ほどきを受けている。間違いなく格段に力をつけているに違いない。
「そんなとこか。じゃあ、シンの奴の能力はどれぐらい認識している？」
　敵として戦う仲間の実力の詳細を尋ねる。
「近距離戦は相当なものよ。純粋に体術が優れているのもあるけど、何よりも掴んだ相手から魔力を吸収することも出来るし、だからといって中距離戦で戦うのも難しいわ。

魔力を広範囲に放ったり、冷気を吐き出したり出来るから。狙うとしたら遠距離かもしれないけど、あの子やソーナたちが何の対策もしないとは考えられないわ」
「味方だと頼もしいが、敵だと厄介という訳だ」
　マタドールとの戦いで共闘した経験のあるアザゼルはしみじみと語る。
「……姉――『禍の団』に襲われたとき、手から炎を出していました。それもかなり強力な炎を。……もしかしたら私たちの知らない技を増やしているかもしれません」
「成程。こういう言い方はあれだが、本番前にあいつの戦いを見られたのは有り難い」
　一通り情報が出ると、アザゼルは次に各メンバーの能力をデータ化したプリントを渡し、それぞれどんなことに気を付けるべきか助言を送る。
「――と俺が言えるのはここまでだな。ああ、最後に付け加えておくが、絶対に最後まで油断をするなよ？　前評判ではお前たちが勝つと言われてるが正直な話、そんなもの当てにするな。勝率八十パーセントだかなんだか知らないが、お前たちとソーナ・シトリーの戦いは一回きりだ。この先、何度か戦うかもしれないが、今のリアスたちと今のソーナ・シトリーが戦うのは明日の勝負だけ。分かるよな？」
　同じ勝負など二度と無い。次があるなどという考えを持てば、それは即敗北に繋がる。負けてもいいなどという勝負など無い。他人が予想する勝率など関係無い。十回戦って八回勝てるなど無意味。

必要なのは、絶対に勝つという強固な意思なのである。
「言いたいことも済んだし俺は行かせてもらう。少し仕事もあるんでな。明日のことで話し合うのはいいが、あんまり夜更かしすんなよ？」
『はい』
リアスらが頷くのを見て、アザゼルは退室する。
「――じゃあ、もう少し明日の戦術について話し合いましょうか？」
リアスや朱乃が具体的な案を出し、そこに一誠や木場たちが思い付いた意見を言う。
夜遅くまでリアスの部屋から会話が途切れることは無かった。

◇

夜も更けた頃、シンはそろそろ床に着こうとしていた。既にベッドでピクシーとジャックフロスト、ジャックランタンが眠っており、ベッドの横でケルベロスが体を丸くして寝ている。
するとドアを軽くノックされる。誰が尋ねて来たのか、と思いつつドアを開ける。
その向こうに立っていたのはソーナであった。彼女も就寝前なのか寝間着姿である。
「少しいいですか？」

「明日のことについてですか？」
「はい」
　生徒会メンバーを集め、明日のレーティングゲームの戦術について話し終えた筈だが、まだ話すことがあるらしい。
「分かりました。少し準備をしてから――」
「いえ、お構いなく。――間薙君には先に言うべきかと思ってきました」
　ソーナの表情はいつものような冷徹なものだったが、シンの目には痛みに耐えている様に見えた。
「……明日、貴方には兵藤君の相手をしてもらいます」
「理由を聞いてもいいですか？」
「総合的に見て、兵藤君が禁手を使用しても貴方ならば対処できると判断しました」
　ソーナは、匙が一誠をライバル視し、今回のレーティングゲームで戦いがっていることも知っている。しかし、その匙を一誠にぶつけずにシンを向けることを選択した。
　或いは当初は匙を当てるつもりだったかもしれない。だが、先日の戦いにおいてシンが高い実力を持つ黒歌と互角以上の戦いをしてしまったことで、判断を変えざるを得なくなったのかもしれない。
　ソーナは冷徹だが、情が分からない悪魔では無い。しかし、それでも割り切った判断

をしなければならないときがある。
しかし、シンはソーナの選択にある疑問があった。聞きたい気持ちもあったが、自分が気付くということは当然ソーナもまた気付いている筈だと思い、この場で問うのは止める。
「――そうですか」
その判断を聞かされたシンは、肯定も否定もしなかった。あくまでソーナの判断を優先する意思だけを見せる。
「……さっきまでどうするか考えていました。貴方にするかサジにするか。……あの子の気持ちは十分知っています。ですが、私は結局少しでも勝率の高い選択を選びました。……もしリアスだったら、きっとサジの気持ちを優先していたでしょうね」
自嘲するソーナ。少しでも勝率を上げる。それは上に立つ者として間違ってはいない。だが、その為に感情をないがしろにすることに罪悪感を覚えている様子であった。
「……ごめんなさい。夜中にこんな話をしてしまって」
「別に構いませんよ」
シンが眷属という立場ではないからこそ、つい弱音や悩みを洩らしてしまう。また、話したことを口外しないという信頼もあった。
「匙にはもう言ったんですか？」

「いいえ」
「代わりに言ってきましょうか？」
　シンの提案に首を横に振る。
「私の口から直接伝えます。それが主としての責務です」
「分かりました。――ああ、多分匙は部屋に居ないと思います。まだ庭で特訓している筈です。二人で」
「二人……セタンタさんも来ているのですか？」
　シンがシトリー家に来てから匙もセタンタから特訓を受けているのは知っている。セタンタの立場からして、ソーナたちに肩入れするのは不味いのではないかと思い、ここに来ることをやんわりと断ったが、わざわざサーゼクスとリアスの父から直筆の許可証を貰って戻って来たときには流石に度肝を抜かれたと同時に、なんて頑固な人なのかと少し呆れた。
「夜遅くにこんな話をしてごめんなさい。そして、ありがとう。話を聞いてくれて」
　いいえ、と短く謙遜するのを見てからソーナはシンに背を向け、匙の下に向かおうとする。そのとき、シンから声を掛けられた。
「会長」
「何でしょうか？」

足を止めて振り返る。
「さっきの話、取り敢えず暫定ということに出来ますか？」
「……というと？」
「戦況がどうなるか分かりません。場合によっては、俺があいつと戦うことを優先したことで不利な状況になる可能性もあります」
「そういうことですか。……私も自分の考えで自分を縛るつもりはありません。状況が状況ならそれに合わせた対応をするつもりです」
「ならいいです。ありがとうございます」
「……気を遣わせてしまいましたね」
「――何のことですか？」
「そういうことにしておきます」
シンが何故そんなことを言い出したのか、真意は分かっていた。しかし、当の本人はとぼけてみせる。その態度が少し可笑しく、ソーナは小さく笑いながらシンの部屋を後にした。
ソーナは一人廊下を歩きながら、匙にどの様に話すか考えていた。一つ案が浮かぶとすぐにそれに伴う結果が頭を過り、その案を却下してしまう。どうすれば良いか悩み続けるが、目的の場所に辿り着いたことでそれも時間切れとなった。

（もう少し廊下が長ければ良かったのですが……）

通常の感覚ならば長過ぎる廊下も、時間が少しでも欲しかったソーナからすれば短い。

シトリー家の庭園。駒王学園のグラウンドよりも広いが、隅々まで手入れが行き届いている。

夜深く使用人も誰一人居ない庭。その一角で夜の静けさを吹き飛ばす程の音と戦いが繰り広げられていた。

「おらぁ！」

『黒い龍脈』から伸びるラインが鞭の様にしなりながら縦に振るわれる。激しい特訓を繰り返し行ってきたことで匙の神器にも変化が起こっていた。可愛らしい蜥蜴の様な形をした籠手は、面影が全く無い禍々しい龍の頭部を模した形状となり、そこから伸びるラインも一本一本が黒い蛇の形に変わり、それぞれが独立して動いている。一度に出せるラインの本数も十を超えていた。

今も腕の軌道とは別に数本のラインが縦だけではなく、左右、下、斜めという多方向から、且つタイミングを僅かにずらしながら、相手の逃げ道を塞ぐ様にして襲う。

だが、匙の相手をするセタンタは蛇たちを一瞥すると全ての軌道を見極め、前に一歩踏み込んだかと思えば、二歩目を踏み出す時には全ての蛇を躱しきっていた。

匙の視点から見ればすり抜ける様な動き。一体どうやって躱したのか、肉眼で追えない。
セタンタが三歩目を踏み出したとき、彼は匙の目の前に立っていた。
「おわっ！」
思わず仰け反る匙。すると何かが背中に当たる。振り向けば、セタンタが匙の背に手を押し当てていた。
反射的に飛び退こうとしたがその途端、視界が百八十度回転する。足を払われたと気付いたときには脳天から地面に着地していた。
「おぐおっ！」
目玉から火花が飛び散り、匙は頭を押さえながらその場で悶絶してしまう。
「今日はここまでにしましょう」
匙の様子を見て、セタンタが特訓を終了させようとしたが、地面を転がっていた匙はその言葉で急いで立ち上がり、涙目になりながらもセタンタを見る。
「……もう少しだけいいですか？」
それを聞き、セタンタは溜息を吐く。
「『もう少しだけいいですか』は、先程も聞きましたよ？『あと一回だけ』というのも聞きましたが？」

「本当に！　本当に次で最後にしますんで！　あと一回！　あと一回だけお願いします！」
　額を地面に着けそうになる程の勢いで頭を下げながら懇願する。セタンタは、眉間に皺を寄せ悩んでいる様子であったが、頭を下げ続ける匙の姿にもう一度だけ溜息を吐く。
「……分かりました。あと一回だけですよ？」
「ありがとうございます！」
「本当に次で最後です。もし駄々をこねるようならば、貴方を強制的に眠らせた後部屋のベッドに縛り付けます」
「わ、分かりました！」
「分かって下されば結構です。――次を始める前に少し休憩しましょう。その間にこれで怪我の治療をして下さい」
　セタンタから小瓶が手渡される。
「これって……」
　匙は小瓶の栓を抜き、一滴手の平に垂らすと、それを特訓で出来た擦り傷に塗る。瞬く間に消える傷を見て確信した。
「フェニックスの涙！　いいんですか！」

「お気になさらず。私物ですから」
「でも……」
手に届かない程の値段という訳は無いが、それでも高価であり数にも限りがある。貰ったからといって即全部使うなどということは出来ず、躊躇ってしまう。
そもそも、セタンタは本来シンを特訓する為にシトリー領まで来ているのである。あくまで匙はそれに便乗して鍛えてもらっているに過ぎない。そんな自分がここまでしてもらっていいのだろうかと後ろめたさを覚えてしまう。
「……彼を鍛えるのも貴方を鍛えるのも、全部私の意思でやっていることです。そこに差などありません。特訓の長い短いも、内容の濃い薄いも関係ありません。私が貴方にそうするべきだと思ったから、貴方にそれを渡しただけです」
匙の内心を見抜いた言葉。これ以上遠慮すれば逆に失礼と思った匙は、短く息を吐いた後に瓶の中身を頭から浴びた。
「……有り難く頂戴します」
運動で熱が籠った体には、フェニックスの涙の冷たさが心地好く感じられる。
休憩ということもあって、暫し間沈黙が続いていた。
「明日のレーティングゲーム、貴方はどうなると思いますか？」
セタンタは夜空を見上げながら匙に話し掛ける。具体性の無い曖昧な問い掛けで

あったが、匙は少し黙った後に思っていることを話し出した。
「兵藤と戦って勝ちます――と言いたいですけど、その役目は俺じゃないかもしれません」
　その言葉を意外に思ったのか、セタンタは見上げるのを止め、匙の方を見る。
「きっと会長なら兵藤の相手に間薙をぶつけると思います」
「彼を、ですか？　ソーナ様なら貴方の心情を良く把握している筈だと思われますが？」
「俺だって会長のことはそこそこ分かっているつもりっすよ。会長にはきっちり人情もあります。でも、冷静でもある。だから何となく分かるんですよね、戦力を見て誰を誰に当てるかってのが」
　願いが叶わないかもしれないという予想している匙だが、その顔に悲愴感は無い。
「しょうがないと言うか何と言うか……間薙が俺より強いってのは間違いないことだし、他の生徒会のみんなも知ってます。まあ、普通に考えたら一番厄介そうな奴に一番強いのをぶつけるのが当たり前ですよ」
　匙が苦笑を浮かべる。
「貴方はそれでいいのですか？」
「……悔しくないって言えば嘘ですが、だからといって間薙を恨むのは違うでしょ？　間薙は強いです。あいつが生徒会の補佐として会長の協力者なときから今日まで特訓

で勝ったことないし、生徒会の仕事も出来るし……あと何人もの美人と混浴したし……」

「最後の、関係ありますか？」

話が若干ずれる。

「まあ、結局は俺があいつより弱かったのが原因です。俺が誰の文句も言えないぐらい強ければなぁ……」

そこで匙の顔に悔しさが混じる。シンに対し劣等感を覚えているのは事実だが、同時に敬意があるのも事実である。故に複雑な心境になってしまう。

「だからこそ、その気持ちをソーナ様に明かすべきではないですか？　冷静と言っても情があると貴方も言っていた。頼めば貴方の希望通りに――」

「それはダメです」

セタンタの提案をきっぱりと断る。

「会長は俺よりも頭が良いですから、きっと俺の何十倍も考えて考えて答えを出していると思います。その答えを俺は否定出来ないです。俺、会長を尊敬しているんで」

歯を見せニッと笑う匙。それを見てセタンタは目を細める。セタンタもまた微笑を浮かべていた。

「まあ、それでも兵藤と戦って勝ちたいってのが本音ですけどね」

しかし、それはすぐに消える。
「今から言うことは、貴方には少し酷なことかもしれません」
「え？」
セタンタは匙から目を離し、再び空を見上げる。
「私の経験からはっきり言えば、一部の例外を除けば強い想いで勝負の明暗が分けられることなどありません。叶えたい願いがあっても、崇高な目的があっても、実力の差を埋めるのはあまりに薄い」
匙はじわりと背中が汗ばんでいることに気付く。セタンタの言葉に不安感を覚えていた。
「貴方と赤龍帝の実力差は、あまりに大きい」
突き付けられる現実に、匙は無意識にセタンタに詰め寄っていた。
「そんなこと今更――」
「貴方は認めている様で認めていません。だからこそ、こうやって私と戦い、足掻いている。伝わってきますよ、貴方がどんなことを考えて戦っているのか」
焦りと儚い希望。それが、匙と戦ってセタンタが感じ取ったものであった。姿、形の無い希望に縋ろうとしている。セタンタと戦うことで何かが変わるかもしれないという、根拠の無い希望を抱いている。

「そんなことは！」
「無いと言い切れませんよね？　甘く見ないで下さい。これでも私は貴方の何倍も生きているので。何を考えているのかなど容易く見抜けます」
「……確かに無いと言えば嘘になります。でも、間薙の方が勝つ可能性が高いんです！
　赤龍帝を倒せば、ゲームの展開も」
「シトリー眷属では無く外部の、それも人間が倒したとして、果たしてソーナ様の評価に繋がるでしょうか？　仮に倒してもソーナ様の実力というよりも間薙様の実力が評価されるか、逆に今の赤龍帝は人間に負ける程弱いと評価され、ソーナ様にとってマイナスになるかもしれません」
　セタンタの考えこそ、ソーナとの会話でシンが抱いた疑問であった。評価に繋がらない戦い。むしろ、戦いそのものにケチがつけられる。
　勿論ソーナもそのリスクを承知である。それが分かっている上でシンに頼んだ。リスクがあっても勝てば一定の評価を得られる。だが、負ければそれも無い。ソーナにとっても苦渋の選択であった。
　その答えにどれほどソーナが苦しんだか知っているからこそ、匙はセタンタの否定的な意見を黙って聞いていられなかった。
「だったら！」

　匙はセタンタの胸倉を掴んでいた。だが、掴む手の力は弱々しい。
「……俺たちはどうすればいいっていうんですか。俺だって会長の夢なら命を懸ける覚悟はあります。……会長の、俺たちの夢を笑った連中にシトリー眷属の本気を見せつけてやるって気持ちもあります。……でも、それだけ懸けてもきっと足りない。兵藤は……あいつは俺よりも強い。……あいつが赤龍帝だから……」
　そこで我に返り、自分が今何をしているのかを理解して、セタンタから手を離す。
「……すみません」
「いえ。こちらも無神経に言い過ぎました」
　匙は気まずそうに目線を地面に逸らす。教えてもらっている立場だというのに、激情に任せて礼儀に反する行為をしてしまったことに自己嫌悪する。
「……先程、私が言ったことを覚えていますか？」
「え？」
　セタンタの急な質問に咄嗟に答えることが出来ず、呆けた声を出してしまう。
「……えーと、間薙を戦わせることが会長の為にならないって所ですか？」
「違います。その前です。一部の例外を除けば強い想いで勝負の明暗が分けられることなど無いという所です」
　話の意図が分からず困惑する匙。

「私の言う一部の例外、それは貴方がた神器使いのことです」
「え！　俺がですか！」
　匙が思わず聞き返すが、セタンタは首を縦に振り、肯定の意を示す。
「想いの力は、そのまま神器の力に繋がります。正も邪も無く強い想いを抱き続けることで、神器は力を増していく。これは恐ろしくもあり、同時に素晴らしいことでもあります」
　匙はただ黙ってセタンタの話に耳を傾ける。
「貴方には強い想いがある。誰かの願いを、そして自分の願いを。進むべき道が見えている。だからこそ全力で前に向かって走ることが出来る。その若さで中々見つけられることではありません。貴方の想いには芯がある。曲がらない、ぶれない想いは神器にとって最高の糧です」
　セタンタの一言一言を心の中に刻み込む。
「その想いは決して赤龍帝に負けていない。忘れないで下さい。想いを絶やさない限り、その神器は貴方の味方です。どんなことがあっても、折れない限り。……想いを強さに変えることは簡単なことではありません。きっと神器使いにだけ許された特権なのでしょう。……だからこそ、私は貴方たちが羨ましい」
　最後の言葉に感じられたのは羨望と僅かな嫉妬。あのセタンタが羨む。改めて神器

が宿ることの大きさを突き付けられた気分であった。
「急にこんな話をしてすみません」
「い、いえ！　何か、逆にやる気が出てきましたから！」
頭を下げるセタンタに、匙は慌てて言葉を並べる。
「休憩は……少し延ばしましょう。何か飲み物でも持ってきます」
「それなら俺が――」
「いえいえ。私の話に付き合ってもらった匙様のお手を煩わせる訳にはいきません。ここでお待ちください」
そこまで言われてしまうとこれ以上は相手の面目を潰すことになると思い、匙は引くことにした。
匙に一礼し、セタンタはシトリー邸へと戻る。
その途中――
「匙様にお話があるのであれば今のうちに」
独り呟く。
その声に反応し、柱の影に隠れていたソーナが顔を出す。セタンタと匙の話の邪魔をしない為に気配を隠していたが、やはりセタンタには見抜かれていたらしい。
飲み物を取りに行くというのも、二人に話をさせる為の方便なのだろう。

その心遣いにソーナは小さく礼の言葉を送る。
「ありがとうございます」
セタンタは一瞬だけソーナの方を向き、頭を小さく下げるとそのまま足を止めずに屋敷の中へと入っていた。
ソーナは柱の影から出ると深呼吸をする。匙の覚悟は既に聞かされている。ならば自分もまた覚悟を決めなければならない。
匙が敬愛するソーナ・シトリーとして。

◇

レーティングゲーム当日。若手悪魔たちの戦いを用意されたＶＩＰルームで見学している者たちが居た。
主催者であるサーゼクスの『女王』であるグレイフィアと護衛を務めるセタンタ。更には実子であるミリキャスに、リアスの父と母の姿もあった。
他にも三勢力の幹部。他勢力の上位者たちの姿もある。
三勢力代表として呼ばれたアザゼルは、椅子に背をもたれさせながら両チームの登場を待っていた。

「へっへっへっ。ついに始めるなぁ？」
アザゼルの隣に座るマダが酒瓶を片手に話し掛ける。
「こんなときでも酒かよ」
「若い奴らの青い戦いは良い肴になるんだよぉ」
「良い趣味してんな」
呆れるアザゼルであったが、ふと視線を動かしたときにあるものが目に止まる。
全員揃っている筈の要人席に一つだけ空席があるのだ。
「……あそこは誰が座るんだ？」
「あん？　俺は知らねぇ」
指差すアザゼル。マダが興味無さそうに答える。
「オーディン殿から急遽一つ席を用意して欲しいと言われたのでね」
アザゼルの質問に答えるのは背後から現れたサーゼクスであった。
「オーディンのジジイがか？　はっ、しきたりや礼儀を重んじる神族様が随分と我儘なことを言ってくるじゃねぇか」
北欧神話の最高神オーディン。それに苦手意識を持っているせいもあり、アザゼルの口調も少し刺々しい。
「いや、オーディン殿にとっても想定外のことだったらしい。突然現れたせいで揉めて

いたという話だ」
「はっ。想定外ってか？　未来を見通す眼が泣くぜ」
「だが、人物が人物なだけに納得も出来るがね」
サーゼクスにそこまで言わせる者とは誰かとアザゼルが思考し始めようとしたとき、扉が開き、その答えが向こうからやって来た。
白銀の長髪をなびかせ、剣呑な目つき周囲を一瞥する美青年。青年の登場に室内の視線が注がれるが、動じることなく鼻で一笑すると用意されてある空席に座る。
「……マジかよ。ロキ、だと？」
オーディンと同じく北欧の神ロキ。悪神、あるいはトリックスターという言葉の代名詞的存在とも呼べる狡猾な神。
アザゼルが驚いたのは、ロキは自らの神話体系を至上とし、他勢力と交わることをよしとしないことを公言している。そんな存在が冥界に、しかも若手悪魔のレーティングゲームを観戦しに来るなど、本来あり得ないことであった。
「……何か企んでいやがるのか？」
「無い、とは断言出来ないね。一応は監視の目は光らせているが、今のところは不審な動きは無いよ。尤も、あのロキ相手にどこまで通用するかは分からないが」
「まあ、何か企んでいるにしても堂々とし過ぎだよなぁ？」

　複数の眼がロキの動向を密かに探る中、当のロキはモニターに映し出されているレーティングゲームの舞台を心底興味無いという白けた目で見ていた。
「誰よりも遅く来てその態度か？　おぬしのその席を用意させる為にどれだけわしやサーゼクスに迷惑をかけたか自覚がないのかのぉ？」
　床に着きそうな程長い白髭を撫でながら、オーディンは片方しかない目でロキを睨む。
　するとロキはモニターから目を離し、オーディンに向け微笑む。
「なに、私と主神殿の仲です。礼を言うのは逆に無礼かと思って」
「心にもないことを」
「いやいや。急な願いを聞き届けてもらい心の底から感謝している」
「ならばその礼をサーゼクスにでもしたらどうかのぉ？」
「そうしたいのはやまやまだが、きっとサーゼクス殿を前にしたら礼の言葉も喉の奥で詰まってしまいそうだ。何せ、私は人見知りなのでね」
「全く、お前という男は……」
　ロキの態度に呆れ、オーディンは杖を突いて立ち上がる。それに合わせて隣で待機していた鎧を纏った女性、戦乙女のヴァルキリーがお供する。
「お前の代わりにもう一度サーゼクスに礼を言ってくる」

「流石は主神殿。御歳の割には色々と『軽い』。見習いたいぐらいだ」
「減らず口を」
一瞬だけオーディンとロキの間に冷たい空気が流れる。それを敏感に感じ取ったヴァルキリーが緊張から身を固くする。
しかし、それ以上発展することはなく、オーディンは無言で会話を打ち切りサーゼクスの下へ向かう。その後ろを緊張から解放されたヴァルキリーが慌てて追った。
オーディンたちが行くのを見てから、ロキは再びモニターへ目を向ける。
「……お前とは長い付き合いだが、これは意外だったな。まさか子供のお遊戯を鑑賞する趣味があったとは」
誰にも聞こえない程の小さな声で、独り呟くロキ。悪魔に対する侮蔑を隠そうともしない。
「――ふははは。同感だな。しかし、これは私への嫌がらせだな。若い悪魔の児戯など時間の無駄。苦痛そのものだ――心にもない慰めなど結構」
独り言の筈が、まるで誰かと会話している様であった。オーディンのときとは違い、口調に何処か気安さがある。親しい友人と話している様な軽さがあった。
「――さて。お前が気にしている奴の戦いぶりを見せてもらおうか。――ああ、そうだな。十番目の魔人、その実力を見定めさせてもらうとしよう」

◇

レーティングゲーム決戦日。戦いの舞台へ既に到着していた一誠たちは、審判役であるグレイフィアのアナウンスで今回の戦いのルールを聞かされていた。

今回の戦いの場となるのは駒王学園近くにあるデパート内。一階、二階は吹き抜けでショッピングモールが広がる横長の全三階建ての建物である。魔力や実物を使用し、内部は忠実に再現されている。

一誠たちが現在居る二階の東側が本陣であり、ソーナたちは一階西側を本陣と設定されている。一誠がプロモーションをするにはこの場所まで移動する必要があった。ちなみに一誠たちは飲食フロアで説明を聞いている。

『今回は特別ルールとして各陣営に『フェニックスの涙』が一つずつ支給されます。バトルフィールドの詳細、今回のレーティングゲームの追加ルールについてはこのアナウンスが終了後に資料が送られますのでご確認下さい。ゲーム開始は今から三十分後となります。その間の移動等は問題ありませんが、相手選手と接触は禁じられております。接触次第即退場となるのでお気をつけ下さい。では今回のレーティングゲームのルールについての説明を終了します』

アナウンスが終わると同時に、リアスの手元に資料の紙束とフェニックスの涙が出現する。

資料にざっと目を通す。

「今回の追加ルール、『バトルフィールドであるデパートを破壊し尽くさない』こと――つまり、大規模な技や魔術はあまり使用しない方がいいわね」

提示されたルールは一誠たちにとって不利とも言える内容であった。

一切の破壊を禁じられている訳ではないが、どれほどまで破壊していいかという制限も書かれていない。こうなると、山まで吹き飛ばした一誠のドラゴンショットや、体育館を一撃で破壊した朱乃の雷の魔術の使用も出来ない。

「屋内戦だから元々あまり使用させる気は無かったし、ある意味では良かったのかしら。イッセーや朱乃の力で倒壊して巻き添えという可能性もゼロではないわ」

強すぎる力を狭い場所で使えば、それに伴った被害も起きる。そして、それの被害を受けるのは相手だけでは済まない。味方の攻撃で味方に害が及べばそれだけで戦意の低下に繋がる。

「私も極力デュランダルの力は抑えておくよ。振り上げて力が天井を貫いたり、振り下ろして床を貫いたりしてイッセーたちを傷つけたら笑い話にもならない――やりようはいくらでもあるがね」

聖剣は悪魔にとって必殺に等しい武器だが、諸刃の剣でもある。その気になれば離れた場所にいる相手も斬れる為、万が一それに巻き込まれることもある。そういう意味では事前にこのルールを知ったことで、皆に誤爆の恐れを強く意識付けることが出来た。
「それとギャスパー」
「は、はいいいい！」
名を呼ばれ裏返った声で返事をする。
「貴方の神器のことについてだけど……」
「あ、あの何か不味いことが、あ、あったんですか？」
言い淀むリアスに、ギャスパーが狼狽える。
「不味いというか逆よ。『ギャスパー・ヴラディの神器で停止し、十分以上解除されなかった場合リタイヤと見なす』らしいわ」
その内容に一同驚く。特にギャスパーなど目を見開いて全身を震わせていた。あまりにこちらに有利なルールなのである。
「それってギャスパーが見たらほぼ勝ちってことですか？」
「でも敵味方とは書いてないから、仮に僕らが停められてもリタイヤってことになるんじゃないかな？」
「あ、そうか。というかギャスパー、お前って十分以上の時間停止って出来るのか？」

「ち、力を込めて神器を使えば可能だと思います。れ、練習のときにはそれぐらいと、停められました」
「そっか。――でもいいんでしょうか？　こっちに有利過ぎません？」
　ソーナ側にとって不利なルールに一誠が疑問を持つ。するとリアスが資料を皆に見せる。ギャスパーの神器についてのルールの文章の終わりにシトリー家の紋様が書かれていた。
「同意のサインよ。ソーナはこのルールに文句は無いみたい」
「そうですか……」
「そうなるとギャスパーが真っ先に狙われる可能性も出てくるな。ここは遮蔽物も多い。それを壁にして闇討ちを仕掛けてくるかもしれない」
「そうね。視界を塞ぐ術はいくらでもあるわ。それを気にしていたら戦いなんて出来ないけど、常に注意を払うのは当然ね」
「逆に利用されたら厄介ですからね」
「そういうこと。力が強ければ必ず勝てるという訳では無いわ。力の工夫、使い方、ルールへの適応の仕方。それによって戦局は変わるわ。『兵士でも王を取れる』、レーティングゲームの格言よ。差を様々な理由で埋め、それによって下克上を成す。これこそが冥界や他の勢力でレーティングゲームが広まった理由ね」

リアスの言葉を忘れないように一誠は記憶に刻む。
「まあ、仮に神器が使えなくなっても、ギャスパーにはヴァンパイアの力がありますしね」
一誠の言葉にリアスが同意する。
「そうね。ギャスパーの蝙蝠たちを使ってデパートの各所を飛んでもらえば、多くの情報を手に入れることも出来るわ。特別ルールは出来たら程度で考えておいてくれる？ギャスパー」
「りょ、了解です！」
声を張り上げるギャスパーの顔は紅潮していた。あまり日の下に出ないせいで色白であるため、より目立って見える。ギャスパーにとって今回は初のレーティングゲームである。そこに相手の監視や特別ルールのこともあって、使命感から普段の内気さからは想像出来ない程の気迫が感じられた。
その様子に、一誠たちはギャスパーの成長を感じた。だが、もしこの場に観察に優れた者が居たのであれば、頼もしさと同時に微かな危うさも感じ取っていたであろう。どんなに戦いへの意欲を見せたとしても彼にとっては紛れも無く初のゲームであり、そして実戦経験も皆無に等しいのである。
その後細かな戦術を決め、ゲーム開始まで残り十五分となった。開始五分前に今の場

所に集合することをリアスが告げ、一時解散する。
「あ、ちょっといいかい？」
折角の飲食フロアなので軽食でもしようかと考えていた一誠に、木場が話し掛ける。
「何だ？」
「実はゼノヴィアの提案でね――の使用権を――されたんだ」
「え！　そんなこと出来るのか？」
「今の僕ならね。それで相談なんだけどイッセー君の――を僕とゼノヴィアにも――させることが出来ないかな？」
「あー、多分大丈夫だと思うけど……ドライグ？」
『問題無い。すぐに終わる』
ドライグの言う通り、木場に頼まれたことは内容としては一分も掛からずに終了するものであった。ただ、それをやる際に互いの手を結ぶ必要があり、本気で一誠が嫌がったので無駄に時間が掛かってしまったが。
木場からの頼み事も終わり、時間を確認するがまだ余裕がある。すると飲食フロアの近くに本屋があることを発見した。
一誠の頭に邪な考えが浮かぶ。
（もしかして、あれか？　中の物も忠実に再現されているのか？　……エッチな本も？）

思春期男子高校生の溢れ出る欲求に従い、疾風の如き動きで本屋の中に突入すると、一切無駄の無い動きで成年雑誌コーナーに向かう。
「う、嘘だろ……！」
成年雑誌コーナーの前で一誠は震える声を出した。
紐が無い。ビニールも無い。無防備な姿で置かれている成人向け本。買いたくても買えず、読みたくても立ち読みすら出来ず、入手経路が限られている一誠にとっては衝撃的過ぎた。
涙が零れ落ちそうな夢の光景。しかし、今はそれを流す時間も惜しい。
取り敢えず一番手前にある巨乳の女性が表紙となっている本を手に取り、心を高鳴らせながら表紙めくった。
そして目に飛び込む白紙。
「んだよチクショウッ！」
上がりに上がった期待を裏切られた瞬間、一誠は怒りと共に雑誌を床に叩き付ける。
「どうしてここだけ手を抜くんだよ！　いや、まあ、バトルフィールドでエロ本を忠実に再現するのも意味が分からないけど！　だけど！　だけど！　この裏切り物！」
『相棒、落ち着け。言っていることが意味不明だぞ』
「ドライグ……裏切られるってやっぱり哀しいな……」

『何と同列にして悟っているのかは知らんが、見られているぞ？』
「え？」
首だけ後ろに向けると背後で微笑む朱乃の姿。顔から冷や汗が噴き出す。その状態で体が硬直してしまう。
「……どこから見てました？」
「うふふ。イッセー君が本を叩きつけた所からです」
一連の醜態を見られていたらしい。恥ずかしさで今度は全身から火が噴き出そうになる。
「あ、あの、な、何と言うのでしょうか、こ、これは戦いの為のテンションを上げる為のものというか、モチベーションを高める為の儀式というか」
自分でも苦しいと思う言い訳を並べ始めるが、朱乃は軽蔑も怒りも見せなかった。
「大丈夫、分かっていますわ。いつも通りのイッセー君らしくて逆にこっちが安心します」
朱乃は、一誠が地面に叩き付けた本を拾い上げる。
「こういうのが好みなんですか？」
「え、ええ、まあ……」
今度は言い訳をせずに素直に認める。

「こういう衣装、今度着てあげましょうか？」
　脳みそを殴られた様な衝撃的発言。朱乃が指している本の女性の格好は、最低限の面積しかない紐同然の姿をしている。
「マ、マジですか！」
「ええ、本当ですわ。ただその代わりに――」
　首に両腕が巻かれ、柔らかな感触が二つ背中に押し当てられた。絹の様に滑らかな朱乃の頬の感触が一誠の頬に触れる。背後から朱乃に抱きしめられていた。
「あ、朱乃さん？」
「ちょっとだけ勇気を下さい。戦う勇気はありますわ。……でも、私の欲しい勇気はもう一つの力を使う勇気。堕天使の力を扱う勇気が欲しいんです」
「……やっぱり、怖いですか？」
「ええ。……私にとって堕天使は――父は許せない存在。その力を使うなんて本当は嫌。……でも、私の我儘でリアスたちに迷惑をかけるのはもっと嫌。だから……」
　一誠は朱乃の両手を握る。
「俺の勇気でよかったら持っていって下さい！」
「……私が光の力を使うのを見守ってくれる？」
「それで朱乃さんの不安が和らぐなら喜んで見守らせてもらいます！」

「――ありがとう」
一誠を抱き締める力がより強くなる。
相手の鼓動すら伝わってくる程の密着に、一誠の鼓動も早まる。
「……そろそろ集合時間ですが？」
突如掛けられた小猫の言葉に鼓動が加速するどころか一気に跳ね上がり、胸から飛び出すかと思いであった。
「こ、ここ、こここ！」
「……鶏の真似ですか？」
不意打ちの登場に舌が回らない一誠。そんな一誠に小猫は普段通りに接する。
「あらあら、小猫ちゃんに見られてしまいましたわね。ありがとうございます。イッセーくん。おかげで元気を貰えましたわ」
一誠からあっさりと離れ、何事もなかったかの様に去って行く朱乃。こんな状況に一人置いてかれた一誠は、朱乃のS気質を改めて感じた。
小猫と一誠の間に沈黙が流れる。
それを嫌い何か話そうとするが、生憎一誠には都合の良い話題が思い浮かばなかった。
「……イッセー先輩」

気付けば小猫が一誠の前に立っている。思えば、こうやって向かいあって話すのは小猫が倒れたとき以来であった。

小猫は一誠に無言で両手を出す。それの意味が分からず、一誠は突き出された両手を見詰める。

「……私の手も握って下さい」

無表情だが、少しだけ頬を赤くする。

「え？」

「……お願いします」

「……分かった」

小猫の小さな手を両手で覆う様に握る。指先が冷たく強張っている。小猫の緊張が伝わってくる様な感触であった。

「……イッセー先輩は私が、猫又が怖くないですか？」

「ん？　いや全然」

「……猫又である姉様に殺されかけたのにですか？」

「あれはあれ、だよ。そもそも猫又なんて小猫ちゃんとお姉さんしか知らないし」

「……その気になれば、私もイッセー先輩を殺すことが出来ると言ってもですか？」

「小猫ちゃんはそんなことしないでしょ？」

並び立てる言葉を平然と流していく一誠に小猫は驚いた表情をし、そして俯く。
「……イッセー先輩はやっぱり優しい赤龍帝ですね」
「そうかな？」
優しいと言われて、少し恥ずかしくなり視線を斜め上に向ける。小猫の顔を真正面から見ると余計恥ずかしさが増すからだ。
「……私が倒れたときのことを覚えていますか？」
「ああ、あれね」
「……あのとき間薙先輩に凄く怒られました」
「色々と容赦無いからな、あいつ」
「……間薙先輩の言う通りでした。……私は、きっと周りを信じ切れ無かったから猫又の力を使うのが怖かったんです。……傷付けて嫌われるのが、避けられるのが怖かった」
シンは小猫に言った。仲間を見縊るな、と。猫又の力は自分が思っているよりも悪いものではない、と。
「……このゲーム、私は猫又の力を使います」
小猫の決意に息を呑む。
「……私は猫又の全力を使って、間薙先輩と戦います」

自らの決意を見せる為。シンの言った言葉を信じ、自分の全てをぶつけることを一誠に告げる。

「……そうか分かった。そんな顔しなくたって大丈夫だって！　間薙なんか殺しても死ななそうというか、死んでも蘇りそうな奴だし！　……もし、猫又の力が暴走しそうになったら俺が全力で止める。俺が居なくても部長や朱乃さんや木場が絶対に止めてくれる。だから小猫ちゃんは怖がらずに、間薙を全力でぶっとばしてやれ！」

「……はい。ぶっとばしてみせます」

◇

ゲーム開始五分前。シトリー本陣では『仕込み』を終え既に皆が集合していたが、誰も口を開こうとはしない。誰の顔にも緊張の色があった。あのソーナですら緊張のせいかやや顔色が悪い。

そんな中でシンは小指から順に折り曲げて拳を作り、作ったら今度は親指から開いていくという動作を黙々としていた。

「……なあ？」

緊迫した空気に耐え切れなくなったのか、匙がシンに話し掛けてくる。

「何だ？」
「緊張してるか？」
「さあな。――お前の顔色は真っ青だな」
　匙の顔から血の気が引いており、病人の様な見た目になっている。
「……平然としてるお前が羨ましいよ」
「見た目だけだ。今でも吐きそうだ」
「嘘吐け」
「ああ、嘘だ」
　初めは虚を突かれた表情になったが、シンがしょうもない冗談を言っていることに思考が追い付き、思わず吹き出す。似合っていない者から似合っていないものが飛び出すギャップに耐え切れなかった。そして、それが自分の気を紛らわす為に言ったのだと気付いた時、笑いが止まる。
　蒼白だった顔が笑ったことで赤味が戻る。
「……なあ、作戦は上手くいくと思うか？」
「断言は出来ない。こればかりはな」
「失敗したら、自分で自分の首を絞めた馬鹿集団だな」
「不安か？」

「会長が決めたんだ。不安なんてあるか。俺は全力を尽くすだけだ」
　言い切る匙であったが、視線が下がる。何か別の不安を抱いている様子であった。
「会長は決めた。でも俺は……」
「何かするつもりなのか？」
「……俺はもしかしたら、このレーティングゲームで大きな賭けに出るかもしれない」
「賭け？」
　どんな賭けなのかは分からないが、匙の余裕の無い表情を見ればあまり分の良い賭けでは無いらしい。
「当たればでかいが、外れれば俺のせいで会長に迷惑を掛ける所か、ゲーム自体台無しにするかもしれない」
　その切羽詰まった雰囲気から大袈裟に言っている様には見えなかった。
「この勝負に勝つには命懸けじゃ足りねえ。自分の存在意義を全て注ぎ込む気でやらなきゃ、聞く耳すら持ってもらえない」
　匙の口振りから誰かに覚悟を見せるのは分かったが、それがソーナや上位陣では無いとシンには思えた。ならば誰かと考えても、どうにも対象が思い浮かばない。
「どんな決意をしたのかは知らないが……」
『頑張れ』『お前なら出来る』『信じている』『大丈夫だ』。かける言葉ならいくらでも思い

付く。しかし、言わない。代わりに出てきた言葉は――

「背中を押そうか？」

――少々意地の悪い問いを投げ掛ける。

匙は、それを鼻で笑った。

「はっ。なめんなよ。そこまで面倒見て貰う気はねぇよ。いざという時の一歩ぐらい自分で踏めなきゃ意味が無い。……色々とモヤモヤしてたんだ。ただ聞いてくれるだけで十分だ。悪かったな、ゲーム前に弱音みたいなもの聞かせて」

シンは軽く手を振り、気にするなと動き告げる。

『開始の時間となりました』

頭上から降るグレイフィアの声が開幕を告げる。

◇

一誠と小猫はデパート内を小走りで駆ける。今回のレーティングゲームは三時間の猶予しかない。一分一秒が惜しい。しかし、足音を出して自分たちの位置を報せるのは避けたいため、なるべく足音を立てず且つそこそこの速さで移動する為に小走りなのである。

目指すは相手の本陣。一誠が『女王』のプロモーションを行うのが目的であるが、その他にも目的があった。敵を引きつける囮である。

一誠はリアス側にとって最強の一角。更に『女王』に昇格するとなると、相手も無視することは出来ないとリアスは考えていた。

一階を駆ける一誠と小猫が囮ならば本命の戦力は誰か？　それは現在立体駐車場を経由して本陣に向かっている木場とゼノヴィアの騎士二人である。

作戦としては一誠たちが相手の注意を引き、木場たちが本陣に攻め込む。その隙に一誠は『女王』に昇格。その後退き、待機しているリアスたちと合流した後に『王』を攻めるというもの。個人よりもメンバーの動きを合わせる作戦である。

『聞こえますか？　今のところ相手の姿は見えません』

通信用のイヤホンからギャスパーの声が聞こえてきた。ギャスパーは偵察として無数の蝙蝠に分裂し、先行して索敵を行っている。

「分かった」

『引き続き――あっ！』

ギャスパーの驚く声にビクンと体が震える。

「どうした！」

『人影が見えました！　すぐに角を曲がったせいで姿ははっきりと見えませんでしたが

！　誰か居ます！』

興奮気味に話すギャスパー。声量の加減が出来ないのか、耳の奥に響いて来る。

「落ち着け。場所は何処だ？」

出来ることなら作戦が最終段階に入るまで無駄な戦闘は避けたい。その道は避けなければならない。

『雑貨品売り場の近くです！　食料品売り場に向かった様です！　このまま追跡します！』

「あ、おい！」

通信が切れる。

ギャスパーの積極的な行動。普段ならば喜ぶべきことだが、今のギャスパーの行動には不安が感じられた。どこか前のめりになっている印象を受ける。

「大丈夫かあいつ……」

「……少し急ぎましょう」

小猫もギャスパーの行動に不安を覚えたらしく、歩を進める速度を少し速める。

「そうだね」

一誠も足を速めようとしたとき、視界の端で何かが動いたことに気付く。慌てて首を動かすと、何かが道の角に消えていくのが見えた。

「小猫ちゃん！」
　小猫の手を引っ張り近くの自動販売機の影に隠れる。
「あの角の向こうに誰かが居る」
「……あそこですか？」
　すると小猫の頭部から猫の耳が生え、さらに尻尾まで生える。目を瞑ると猫耳がピクピクと動く。
「……おかしいです。気配が感じられません」
「おお……え、分かるのかい？」
　小猫の愛らしさに暫し心を奪われていた一誠だが、その情報で正気に戻る。
「……はい。現在、仙術の一部を解放していますから、気の流れでそこそこ把握出来ます。……先輩の指した場所からは人の気を感じられません。……人の気配というより」
　小猫が自販機の影から出て、怪しい影を視た曲がり角に向かう。
「ちょっと待って！　小猫ちゃん！」
　いきなりの行動に一誠は反応が遅れ、小猫に少し遅れて自販機の影から出た。
　曲がり角に着くと、小猫は地面付近を見回し始め、何かを見つけたのかしゃがみ込む。
「何かあったのかい？」
「……これを」

小猫が一誠に見せたのは小さなガラス玉であった。何の変哲も無く、覗き込む一誠の顔が歪んで映るだけである。
「……微かにですが魔力の気配を感じます。恐らくは何かの術を施してあったのかも」
「そんなの持っていても大丈夫かい？」
「……一回きりの使い捨ての術だと思われます。術を発動出来る程の魔力は感じられません」
「どうしてここにそんな物が……」
相手の意図が分からず、悩む一誠。すると小猫が、推測ですがと前置きをしてから自らの考えを話し始める。
「……恐らくこのガラス玉に施された術は、相手に幻影を見せるものだと思います。一瞬でもガラス玉が視界に入ればそれに反応し、曲がり角に消えていく人影を見せる」
一誠は、レーティングゲーム前に見たシトリー眷属の資料の中で、副会長の椿姫が鏡に関する能力を持っていることを思い出していた。
「……もしそうだとしたら、何の為にこんな仕掛けを？」
「……私たちみたいに警戒をさせ時間稼ぎをするか、或いは……」
「或いは？」
「……相手を誘い込む為に」

　それを聞いた瞬間、一誠は、通信機に向かって叫んでいた。
「ギャスパー！」
『な、何ですか！』
　突然大声で名前を呼ばれたギャスパーが通信機の向こう側で驚いている。返事があったことに安堵する。
「今、お前は何処にいるんだ？」
『今ですか？　食料品売り場にまで来ています』
「そうか。あのな――」
『わっ！』
「おい！　どうした！」
　ギャスパーが悲鳴を上げたのに反応し、大声で上げてしまう。
『も、靄が！　いやこれはき――あう！』
「ギャスパー！　おい！　ギャスパー！」
　返事は無い。通信機からは雑音しか聞こえなくなった。壊されたか通信妨害を受けている。
　最後に聞こえたのは苦鳴。こんなものを聞かされて黙っていられる筈が無い。

「小猫ちゃん！」
「……ギャー君を助けに行きましょう」
小猫はすぐに同意を示す。
本来の作戦から外れる真似をすることを内心でリアスに詫びつつ、ギャスパーが現在居る食料品売り場を目指す。

◇

無数の蝙蝠に分裂したギャスパーは、曲がり角に消えた影を追っていた。他の分身も同じように角に逃げ込む影を発見しており、途中で合流。現在は全体の三分の二の数を引き連れて飛び回っている。
固まって飛ぶことで四方に目を向けることができ、死角が無くなる。これならば相手を発見次第、即『停止世界の邪眼』で動きを停めることが出来る。
普段は弱気のギャスパーは、自分の存在が思わぬ形で重要になったことで気合いが満ち満ちていた。
ギャスパーは、リアスにとって初となるレーティングゲームに自分の都合で参戦出来なかった。それは彼にとっての負い目にもなっている。神器の操作にも慣れ始めると、

もし自分が参戦していたらという空想を頭に描くことも度々あった。
リアスからは、無理に邪眼を使う必要は無いと言われていたが、ギャスパーはどうしても自分の力で一人でもいいから相手を倒し、世話になっている先輩たちや同級生に貢献したい、役に立ちたいという一種の欲が芽生え始めていた。
人影が向かったと思われる方向を飛ぶ蝙蝠の群れ。間も無く食料品売り場に到着する。
本物かどうかは分からないが野菜やパックに包まれた肉、魚などが置かれ、棚にはインスタント食品、レトルト食品、菓子などが置かれている。
遮蔽物の多いこの場所に誰かが、あるいは複数人身を潜めている可能性がある。
蝙蝠たちをいくつかのグループに分け、食料品売り場を徹底的に探る。
『ギャスパー！』
そのとき、頭の中で一誠の大声が響き渡った。
「な、何ですか？」
『今、お前は何処にいるんだ？』
通信機の向こうの一誠の声に余裕が無い。
「今ですか？　食料品売り場にまで来ています」
戸惑いつつ現在の場所を教える。

『そうか。あのな――』
一誠が何かを言おうしたとき、蝙蝠のグループの一つがいきなり現れた白い靄の中に突っ込んでしまう
「わっ！」
視界の中で白が一気に広がっていく。
『おい！　どうした！』
ギャスパーの驚く声に反応し、一誠が焦った声を出す。
（も、靄が！　いやこれはき――）
霧という言葉を伝えることは出来なかった。その白い霧に紛れ、誰かが飛翔する蝙蝠の一匹を背後から掴んだのだ。伝わってくる手の感触、しかし、それもすぐに消える。掴む手が躊躇うことなく蝙蝠を握り潰す。
（あう！）
分裂してようと、一匹一匹がギャスパーの肉体である。視界の一つが消えると共に本体のギャスパーにダメージが伝導され、その痛みに声を上げてしまう。
百を超える分身の内の一体が潰されただけ。味わう痛みも百分の一程度。
だが、白い霧に乗じて襲い掛かってきた襲撃者が、たかが一匹程度潰した程度で終わる筈が無かった。

（うあああああああ！）

断続的に走る痛み。襲撃者の手で次々と分身の蝙蝠たちが潰されていくのが、文字通り痛いほど分かる。一匹の痛みは耐えられる。しかし、十の痛みが重なれば激痛へと変わる。

神経が焼かれる程の痛みに苦しみながら、何とか蝙蝠たちを動かして襲撃者を邪眼の中に収めようとする。

しかし――

（あ……）

白。白。白。白。視界全てを覆い尽す絶望の一色。見えているのに見えないという窮地。右を見ようとも左を見ようとも、あるのは白い霧のみ。まるで箱の中に閉じ込められた様な閉塞感を覚える。

問題はそれだけではない。白一色のこの状況。仮に『停止世界の邪眼』を発動させた場合、何処まで停止するのか。見た部分の時間だけが停まるのか、それとも周囲を霧全てが停まるのか、仮に霧全てが停まってしまえば、発動した蝙蝠たちは時間停止した霧に閉じ込められて出られなくなってしまう。

（ど、どうしよう！　時間停止で動けなくなった物の中に閉じ込められたら僕も失格になっちゃうの？　で、でも閉じ込められるのは僕の一部だから――あ、だ、だけどルー

ルには一部だったらセーフなんてか、書いてなかったし！　ど、ど、どうしたら！）

記載されているルールには無い特殊な状況に置かれてしまったことで、正否が分からないギャスパーはパニックを起こしてしまう。

考えれば考える程思考が絡まり、そして空回りし、視野が狭まっていく。蝙蝠たちの動きもおざなりになってしまう。

そんな絶好の機会を襲撃者が見逃す筈が無い。

（あぷっ！）

別の順路から探索していた蝙蝠たちが先程と同じ様に白い霧に包まれる。視界が限定された瞬間、同じ様に次々と蝙蝠たちが潰され、破壊されていく。

（あうううううう！）

あっという間に過半数の蝙蝠たちが使いものにならなくなってしまう。それに加え、蓄積していくダメージもかなりのものになっていた。

このままではいずれ蝙蝠たちは全滅してしまう。全滅するならばいっそのことと、ギャスパーは一つの決断をした。

群れ為す蝙蝠たちが集い、一つとなってギャスパーの形に戻る。

元の姿に戻ったギャスパーの足元に床を這う様にして無数の影が集まり始め、ギャスパー本体の影の中に吸い込まれていった。潰された蝙蝠たちの残骸であり、こうなると

当分の間蝙蝠に変化させることも出来なくなる。
蝙蝠単体だとあっけなくやられてしまうが、人の姿ならばまだ蝙蝠よりも持つ。その分ダメージを分散することも出来ないが、既に消耗しているギャスパーには些細な問題である。
ギャスパーの赤い眼は絶えず動き続け、周囲を見回す。瞬きすら恐ろしくて出来ない。
「はあ……はあ……はあ……」
極度の緊張から自然と呼吸が乱れ、顔からは汗が滴り、膝が震える。ついさっきまで嵐の様な襲撃があったというのに、今は凪の様に静かであった。
だが、この静けさはギャスパーにとって安らぎにはならない。逆に静寂がギャスパーの神経をゆっくりと削いでいく。
いっそのこと泣き喚きたくなる衝動に駆られるが、リアスたちの役に立ちたい、シンやジャックランタンたちに成長した自分を見せたいという思いを支えにして耐えていた。
――カーン
静寂を破る音。心臓が胸を突き破りそうになるほど驚くが、それでも特訓で身に染み込ませた動きで音に向かって邪眼を向ける。

が、この時ギャスパーは自分の失敗を悟ってしまう。咄嗟に動いたのではない、動かされたのだ。
しかし、既に手遅れ。ギャスパーの両眼から光が放たれ、音源となった物の時間が停められる。時を停められたのは床から跳ね上がっている缶詰であった。だが、ギャスパーがそれを確認することは無かった。
「う、あ……」
ギャスパーの背後から回された腕が喉を絞め、小柄なギャスパーの体を吊り上げる。顎を強引に上向きにされた上に、気道が狭められているギャスパーだが、辛うじて爪先が地面に接しているおかげで窒息だけは免れた。尤も、それは背後から絞めている人物が意図的にやったことだが。
首が完全に固定されており、動かすことが出来ず『停止世界の邪眼』での反撃も出来ない。腕に爪を立てるなどの抵抗を試みてみるものの、びくともせず。
「手短に聞く。グレモリー眷属の現在位置を教えろ」
「間薙、先輩……？」
「余計なことは喋るな」
巻き付けてある腕に力が込められ、ギャスパーの息を止めさせる。
「うぐ……はあ！　はあ！　はあ！」

数秒間だけではあるが呼吸が出来なくなる。腕の力が緩んだ瞬間、ギャスパーは大きく口を開けて息を吸う。
「もう一度聞く。全員の配置を教えろ」
はたして背後に立つ人物は、自分の知っている人なのであろうか。あまり感情を見せず常に無表情で一見近付き難いが、実際は何度も助けてくれた優しく頼もしい先輩。だというのに、今のシンから発せられる言葉は感情を一切排した零下の冷たさを持っており、一つ一つ耳に入って来る度に体が震える。
「うう……うううう……」
慕っていただけに、その落差で心が折れそうになる。
「答えればすぐに楽になる。――言え」
苦しさと怖さで視界が滲んでくる。シンの言葉に従いそうになる。
「い、言いま、せん……!」
しかし、それでも抵抗する。皆の役に立つ為にこのレーティングゲームに参加したのだ。何も残せずに終わらせたくない。
「――意地を張るな。きっとここで負けても部長は許してくれる」
冷たい声が一転して相手を気遣うものに変わった。
「部長だけじゃない。他の皆も誰も責めない。もう少し甘えてみたらどうだ?」

甘言とはこのことを言うのであろう。その言葉に飛びつきたくなる。しかし、それは出来ない。シンの言う通り、ここで負けてもリアスたちは許してくれるだろう。だからこそ許されない。ギャスパー自身がそれを選択することを許さない。

もうリアスたちに甘える時間は終わったのだ。

「僕は、絶対に、言い、ません……！」

断固とした意思をシンに見せる。

「――そうか」

短く言った後、ギャスパーの首が一気に絞められる。今度は呻き声を上げることすら出来ない。絞めるどころかギャスパーの細い首を折ろうとしている様にすら見えた。

このまま数秒も持たずギャスパーの意識は途切れるだろう――かと思われた。

シンの腕の中でギャスパーの体が崩れた。崩れた体の破片は蝙蝠たちへと変身していく。

ギャスパーはこの瞬間を待っていた。蝙蝠の群れから人型へと戻ったのは耐久力を上げる為だけでは無い。相手を誘い込む為に我が身を囮にした、捨て身の策の意味もあった。

このまま反転し、蝙蝠全ての目で邪眼を発動すれば、シンの時間を停めることが出来る。

蝙蝠たちが、その赤い目でシンの姿を捉えた。

（……あっ）

鉤状に曲げられた左腕。それがさっきまでギャスパーを絞めていた。そして、振り上げられた右腕。その手には魔力で形成された剣が握られている。

攻撃に移るまでの動きがあまりに速い。速過ぎると言ってもいい。ギャスパーが拘束から抜けた時点からでは遅い。絞めているときには既にその手に魔力剣を握っていたのであろう。

（全部読まれてた？）

ギャスパーの反撃もシンにとっては想定内のことであったのだ。そう考えると悔しく思ってしまう。

間もなく振り下ろされる魔力剣。その魔力の波を受ければ脆い蝙蝠たちは一瞬で全滅するであろう。ここにいる蝙蝠たちが全滅すれば、恐らく自分の意識を保つことは出来ない。ギャスパーは、窮地のせいか逆に自分の状況を冷静に判断していた。

魔力剣から魔力が解放される寸前――

「少し、男らしい顔付きになったな」

（え？）

――思いもよらなかった言葉を送られ、ギャスパーは刹那の間呆けた。その直後に魔

力の渦が蝙蝠たちを呑み込み、壁、天井、床へと叩き付けていく。
意識が霞んでいく中でギャスパーは思う。やはりシンは最初から全部見抜いていたのだと。どれだけ強く脅しても、優しい言葉で諦めさせようとしても、最後に刃向かってくると。
（ああ……ダメだなぁ……）
負けて悔しいとは思う。だが、いけないとは分かっているのに、自分が泣いて逃げる奴では無いと思われたことを嬉しく思ってしまった。
（部長、すみません……小猫ちゃん、イッセー先輩、頼み――）
『リアス・グレモリー様の「僧侶」一名、リタイヤ』
アナウンスがギャスパー脱落を告げる。
魔力の波で荒れた食料品売り場でシンは軽く息を吐く。当初の予定通りギャスパーを倒すことが出来た。これで役目の一つを果たしたことになる。
そして、役目はもう一つ。
「――早かったな」
この言葉には二つの意味があった。ここまで来る時間。そして、ゲーム序盤でこの展開となったことに。
「……間薙先輩」

「お前が、ギャスパーを！」
食料品売り場に現れる一誠と小猫。一人立つシンに両者鋭い視線を向ける。
一誠が一歩出ようとするが、それを小猫が手で制止し、代わりに小猫が前に出る。
「迷いは晴れたのか？」
小猫の猫の耳と尻尾を見てシンは問う。
「……正直に言うとまだ不安です。先輩は言いましたね？『お前の力なんかでどうにかなるかと思っているのか？』と。……私は、あの言葉を信じて全力で行きます」
構える小猫。シンはそれに何か言うことはせず、己の拳を固く、強く握る。
既に小猫の覚悟は出来ている。掛ける言葉は不要。必要なのは、その覚悟を受け取るという意思。
シンはゆっくり左腕を上げ、上向きにして小猫に向け真っ直ぐに伸ばし、手首から先を小刻みに動かし手招きをした。
魔人対猫？・赤龍帝、戦闘開始。
◇
（大丈夫か？　間薙の奴……）
デパート二階を慎重に移動する匙は、周りを警戒しながらも一人一階に残っているシ

ンを心配していた。強さは十分知っているが、一対複数となればそれを発揮出来るとは限らない。

「――先輩？　匙先輩？」

「うん？　ああ、どうした？」

一緒に行動している同じ『兵士』であり後輩の仁村留流子が声を掛けてきたが、考え事をしていたせいで少し反応が遅れた。

「あそこ辺りはどうでしょう？」

仁村が天井を指差す。そこには何枚か広告用の大きい垂れ幕が下がっていた。

「ああ、いいかもな」

二人は匙の神器を使い、天井から周囲の様子を観察し、場合によってはそこから奇襲しようと考え、その為に上手く身を隠せる場所を探していた。

丁度いい場所も見つかったので、匙は仁村を背負い天井に向けラインを伸ばそうとする。

ティーン。

一瞬それが何の音か分からず、二人揃って音の方に目を向ける。視線の先にあるのはエレベーターの扉。すると扉が開き中から現れたのは――

「……何でエレベーターから出てくるんだ？　ゼノヴィアさん」

「ああ――迷ったからだ」
清々しい程に言い切るゼノヴィアの姿に脱力しそうになる。
「――だが、ある意味で正解だったらしい」
しかし、すぐにそれも緊張によって消し飛ぶ。伝説の聖剣デュランダルを構えられたことによって。
「……ああ、チクショウ。予定外だ予定外。聖剣使いと戦うなんて……でもな」
匙は『黒い龍脈』を顕現させる。
「それを超えなきゃ彼奴と戦えないってんなら戦って勝つだけだ！」
黒龍対聖剣（ヴリトラ　デュランダル）、戦闘開始。

攻防、不退

本陣にて皆の吉報を待つリアス、アーシア、朱乃。開始して数分も経っていないが、アーシアは手を組んで一誠たちの勝利を祈っていた。

そんなアーシアの肩にリアスがそっと手を置く。

「大丈夫よ。あの子たちは強くなった。きっと作戦を成功させて戻ってくるわ」

「私……怖いです。イッセーさんたちが傷付いて戻って来るのを思うと……」

「ええ……私も怖いわ。でもその時は貴女の神器で癒してあげて」

「……そうですね。私にしかそれが出来ないですよね。私、頑張ります！」

「それはどうでしょうか？」

突然声と共にソーナがリアスたちの前に現れた。

いきなりのことに驚くアーシアであったが、守る様に朱乃が前に立つ。

「アーシアちゃん。大丈夫ですよ。あれは実体ではありませんわ。恐らく魔術で姿を投影したもの。でも、何が起こるか分からないので私の後ろに居て下さい」

「は、はい！」

一瞬でこの場に居るソーナの正体を見抜いた朱乃は、安心させる様にアーシアに微笑

んでいる横顔を見せた。その朱乃の背に身を寄せると、さっきまでの驚きが嘘の様に静まっていく。

　リアスは鋭い眼差しのまま映像のソーナに詰め寄る。

「随分と大胆ね。戦う前の挨拶は済ませておいた筈だけど？」

「そうね。でもいくつか貴女に言っておきたいことがあって」

「言っておきたいこと？」

　リアスは怪訝そうな表情を浮かべる。

「今回のレーティングゲームにあった特別ルール。あれを不自然だとは思いませんでした？」

「特別ルール……ギャスパーの神器に関することかしら」

「ええ、そうです。実は、あのルールは本来『ギャスパー・ヴラディの神器使用を禁ずる』というものでした。――私たちがルールの変更を頼んだのです」

「なっ！」

　それ以上の言葉を継げることが出来ず絶句してしまう。ソーナの言葉を信じるなら、リアスたちが有利になる様にわざわざ嘆願したことになる。

「説得には中々骨が折れました。審判側や関係者は目による暴走でゲームが台無しになることを危惧していました。ギャスパー君が今どれ程の実力が有り、暴発の危険性はど

れだけ低下したのかを説明しなければならなかったので」
　主催者側はさぞかし困惑したであろう、何せ有利を蹴って、自分たちを不利な状況に追い込んでいるのだから。
　ソーナの話を聞き、ある疑問が浮かぶ。
「ちょっと待って。私たちが特別ルールを知ったのはついさっきのことよ。どうして貴女たちの方が先に知ることが出来たの？」
　いくら説得したとしても急遽ルール変更など出来るとは思えない。少なくともゲーム前には知っていたことになる。
「……まあ、これに関して何と言いますか……実はある方が、アザゼル先生がギャスパー君専用の神器封じの眼鏡を作っている所を偶然目撃したらしく、そのことを私の家の前でとても大きな独り言で教えてくれました。私たちはそれで今回の特別ルールを知ることができ、直談判することが出来たのです」
「まさか……そのある方って……」
「貴女の想像通りの方だと思います」
　リアスの頭の中で大酒を呷りながら品の無い笑い声を上げる阿修羅の姿が浮かび上がる。その人物に色々と言いたいことがあるが、それよりも新たに浮かんだ疑問の方を優先した。

「何故――」
「――そんなことを、ですか？　理由は二つ有ります。一つはギャスパー君に全力を出してもらう為です。ヴァンパイアとしての能力も確かに厄介ですが、脅威かと言えば『いいえ』と答えます。ヴァンパイア対策なんていくらでもありますから。彼の実力は『停止世界の邪眼』もあってこそ。実力の半分も出せない相手よりも、全力を出せる相手に勝つ方が勝利の価値が高まります」
　一歩間違えれば自分たちの首を絞めるだけの結果になる、危険な賭けを行うソーナに戦慄を覚える。
「別に貴女が思う程危険な賭けという訳ではありませんよ？」
　リアスの内心を正確に見抜き、先回りをして答えた。リアスからすれば『王』という立場である自分の動揺を悟られたことに悔しさを感じる。
「どういう意味かしら？」
「能力が封じられているギャスパー君よりも能力が封じられていないギャスパー君の方が、精神的な隙が生み出されると予想したまでです」
「精神的な隙、ですって？」
「ええ。何せギャスパー君にとってこのレーティングゲームは初めてのゲームであり、数少ない実戦です。恐らくゲームを始めるまで彼には相当の重圧がかかっていたこと

でしょう。彼にはその重圧を跳ね除ける程の経験がありませんので。そこに突如として充てられる重要な役目。彼の過去のことを考えれば、内心舞い上がっていたかもしれませんね。何せ、経験不足の負い目を一気に払拭する程の強力な権利を手に入れたのですから」

すらすらと言い淀むことなく語るソーナに対し、リアスの表情は言葉が進む度に険しいものへとなっていく。

「きっと貴女は無理をするなと忠告はしたでしょう。ですが、ギャスパー君が誰よりも勝利を献上したいと思っているのはリアス、貴女自身です。貴女の忠告も、彼の奉仕の心に深くは届かなかったでしょう」

ソーナは冷淡な眼差しをリアスに向ける。

「貴女に予告しておきましょう。グレモリー眷属で最初にリタイヤするのはギャスパー君だと」

「そんなこと！」

無い、と否定しようとしたリアスであったが、そのとき頭上からアナウンスが流れ始める。

『リアス・グレモリー様の「僧侶」一名、リタイヤ』

まさにソーナが予告した通りのことが起こり、リアスをはじめとして朱乃、アーシア

も愕然とする。ここまでの流れ全てがソーナの掌の上でのことであったと思い知らされた気持ちであった。

「どうやら間薙君は上手くやってくれたみたいですね」

ソーナの表情が僅かに緩む。表には出さなかったが内心では安堵していた。どんなに場を整え、相手の調子を下げようとも、肝心のシンが勝たねば意味が無い。シンの実力からして負ける可能性は低いと思っていたが、それでもソーナの性格から万が一を切り捨てられなかった。

「あとはギャスパー君を誘い出すだけです。蝙蝠になれる能力が使えるギャスパー君は高確率で偵察を任される。そこで不審な動きを発見すれば、多少怪しんでも気持ちが先走り、単独行動をとった所を狙うだけ。間薙君がギャスパー君を倒した様に」

さも事もなげに言っているが、この策はシンがいなければ最初から成り立たないものであった。仮にシンが今回のゲームに参加しなかった場合、特別ルールに従ってギャスパーの神器を封じていたであろう。シンがギャスパーの神器を防ぐのに必要な能力を持っていることを知り、更にそれでどうギャスパーを封じるのか本人自身がよく分かっていたことで成り立った策である。余談だが、ギャスパーの神器を防ぐ方法をシンがソーナたちに喋っていた際、シンには珍しく若干苦い表情をしていた。それには思い出したくも無い記憶も伴っていたらしい。

「どうやら私の方は予定通りに進んでいる様です。リアス」
その言葉に奥歯を強く噛み締める。自分もギャスパーもソーナに都合の良く動かされていたことが、彼女のプライドを傷つける。
「……まだゲームは始まったばかりよ」
「ええ。そうですね。安心下さい。私は貴女相手に微塵も油断をするつもりはないので」
そう言い残し、ソーナの姿が消える。後に残された三人。朱乃とアーシアは俯くリアスに何と声を掛けていいのか分からなかった。二人もまたソーナに呑まれかけていたのだ。
するといきなりリアスが顔を上げ、自分の両頬に両掌を叩き付ける。乾いた音が響き渡った。
リアスの行動と音に思わず驚く二人。リアスはゆっくりと振り返る。両頬が赤くなっていることを除けばリアスの表情は穏やかなものであった。
「心配しなくても大丈夫よ。ソーナに一歩上を行かれて悔しいとは思ったけど、これから巻き返していくわよ」
覇気の如き赤い魔力がリアスの全身から昇り立つ。その堂々とした姿は朱乃、アーシアに伝わり、彼女らの中で勇気と化す。

「はい！　これからですね！」
「うふふ。そうですわね。こんな序盤で気圧される訳にはいきませんね。ところでリアス、さっきの気合いを入れる姿、イッセー君みたいでしたよ」
「あら、そう？」
　それを聞き、少しだけ嬉しそうに微笑む。
「でも、ソーナ会長はどうしてわざわざギャスパーさんのことを言いに来たのでしょうか？」
　アーシアが思ったことを素直に口に出す。
「きっとこちらを揺さぶって精神的に優位に立つ為ね。私を焦らせて今の策から別の策に変えさせる為の誘導とも考えられるわ」
「なら、このまま最初に言った通りの作戦で？」
　リアスはそこで少しだけ考える。ソーナに全て予測されているのならば変えるべきだが、変えさせることが目的ならば更に深みに嵌ることになる。これは重要な決断であった。
「――このままで行くわ。でも、いざという時には朱乃、貴女に動いて貰うことになるわ」
「ええ。分かりました」

リアスの決断が下され、朱乃は頷く。成功すれば眷属たちの手柄。失敗すれば主である自分の失敗。後のことは全て自分が責任を背負う覚悟は出来ている。

するとアーシアがおずおずと手を上げながらリアスに問う。

「あの、私は……？」

「事態が動くまで私とここで待機よ」

「ですよね」

肩を落とすアーシア。回復役という重要な役目を与えられているが、きっと本音を言えば一誠と肩を並べて戦いたいのであろう。その気持ちはリアスも良く分かる。『王』という立場でなければ自分もきっと動いていた。

リアスは慰める様にアーシアの頭を撫でる。

「待つしか出来ないというのも辛いわね、アーシア。でも、大丈夫よ。貴女は少しずつ強くなっているわ。いつかきっとイッセーの隣に立って戦えるわ」

「部長さん……ありがとうございます！」

励まされたアーシアの表情から陰が消える。

アーシアは、今は『聖母の微笑み』で傷を癒すことしか出来ない。だが、いずれはそれ以上のことを為さなければならない。

歯がゆいが今はただ待つしかない。だが、せめてこの想いが届くようにアーシアは皆

に祈りを捧げた。

◇

シンと向き合う小猫と一誠。互いに手の内を知っているが、いざ相対するとどう戦えばいいのか一誠は迷ってしまう。いつもの様に全力でぶつかればいいのかもしれないが、それで倒せるほど容易な相手では無いことは身を以って知っている。

実戦形式での特訓でシンと戦う時、互いに力を制限した場合、技術の差でいつもシンに負けている。接近戦での動きと反応の早さは一誠から見て異常であった。

一方で、シンが小猫との特訓で何度か組み伏せられている場面を見たことがあるが、それは対ライザーのときの合宿までで、それ以降二人が戦っているのを少なくとも一誠は見たことが無い。

（どうするか……）

禁手の使用が頭に浮かぶが、発動するまで二分もかかり、その間は倍化も譲渡も出来なくなる。更に、禁手を発動して三十分を過ぎれば、このゲーム内では二度と神器の使用が出来ない。

全力で戦わなければならないとは分かっているが、後々のことを考えるとここで禁手

は厳しい。
迷う一誠。だが、状況は刻々と動き続けていた。
シンが動き出す。走る訳でもなく一定の歩幅で歩み寄って来る。すると小猫もまたそれに受けて立つ様にシンに向かって歩き始める。
もう迷っている時間は無い。一誠は決断し、『赤龍帝の籠手』の力を発動させる。
シンと小猫の距離はたった十数秒で詰められ、あっという間に両者の間合いが重なる。
「……いきます」
「いちいち声を掛ける必要は無いぞ」
小猫の律儀な態度に、シンは少しだけ表情を緩める。
ほんの僅かだが、小猫の体が沈む。両足に力を十分伝達させるために膝を曲げた為である。いつでも地を蹴る体勢を整え、溜めた力を解放しようとした瞬間、その出鼻を挫く様にシンの前蹴りが小猫の胸部目掛けて放たれていた。
誤差程度にしか見えない体勢の変化。しかし、シンの目はその些細な変化も捉えていた。故に攻撃を仕掛けてくるタイミングを読み、小猫が攻めるより一瞬先にシンから仕掛けた。
攻めの姿勢から守りの姿勢に移るには、どうしても間というのが発生する。特に小猫

の様に意識が攻撃する瞬間を狙われるとよりそれが顕著になる。

――筈であった。

小猫はまるでそれを知っていたかのように素早く腕を交差し、シンの蹴りを受ける。小柄な体はそのまま蹴り飛ばされず、その場で踏み止まった。すると小猫の足元に無数の亀裂が生じる。小猫はその亀裂の中心でまるで地と足が一体化したかの様な不動を貫いていた。

小猫は先手を取られたのではない。先手を取らせたのである。猫?としての力を解放した小猫には相手の気が読める。これにより相手の動きを予測することが可能になる。両足付近に気が溜まっていくことから初撃が蹴りであることが分かり、動く振りをして逆に相手を動かした。

だが、このとき小猫が使用した気を扱った技術はこれだけではなかった。

蹴り足から伝わってくる重い感触。『戦車』の特性もあるだろうが、それだけではない。何か小猫の見た目よりも遥かに重いものを蹴った様な気分であった。

シンの感覚は決して間違ったものではない。事実、シンが蹴ったのはこのデパートそのものと言ってもいい。正しく言えば、小猫が受けた衝撃を自身の体内にある気の流れに乗せて足元から床に流したのだ。蹴りに対し微動だにしなかったのも、足元が不自然に罅割れたのも全てこのせいである。

小猫は交差している腕を離し、片腕でシンの足を受け止めつつ、空いた手でシンの足首を向け掌打を放つ。その手は淡く輝く白い光が纏っていた。

シンは小猫の腕を押し、その反動で掌打が届く前に後方に退く。あまり自分の痛みや傷に対し無頓着とも言える面があるシンであったが、その素早い動きから小猫の掌打を必要以上に警戒しているのが見て分かる。

気や仙術についての知識を、シンはソーナから最低限教わっている。外部ではなく内部を破壊することに特化した拳打を放てるという。腕で受ければ腕の機能を断ち、胸で受ければ心臓の鼓動を断ち、頭で受ければ意識を断つ、問答無用の防御を貫く一撃。仮に先程の小猫の掌打を足に受けていたら、中の骨は砕け散り、肉と神経とごちゃ混ぜになって、足首より下が只の血袋と化していたかもしれない。

仙術を極めれば離れた場所にいる者すら触れずに命を奪うことが出来るというらしいが、流石に年数のこともあり、小猫がそこまでのことを出来るとは考え難い。

下手に受けることも出来ないことで戦いの難易度は上昇する。

そして、そこに更なる難易度上昇の報せが声で伝えられる。

『Ｂｏｏｓｔ！』

『赤龍帝の籠手』が倍化したことを告げる。シンが小猫に警戒しつつも声の方に目を向ければ、一誠が拳を振り上げて殴り掛かって来る最中であった。

振り下ろされた『赤龍帝の籠手』。シンはそれを片手で受け止める。五指が籠手に食い込む様にして突き立てられ、砕く勢いで握り始める。ミシミシと音を立て装甲の一部が歪み、僅かではあるが亀裂が生じる。

『ふざけた力だ』

素手で神器を破壊しようとしているシンに、ドライグが僅かな焦燥を混ぜた声を一誠の頭の中で零す。

神器を握り潰すだけに留まらず、一誠の拳を手の甲側に向けて折り曲げ始める。抵抗するも一回目の倍化では力負けしてしまう。

「ぐぅ！」

思わず苦しそうな声が洩れる。このままでは手首がへし折られてしまう。しかし、この戦いは二対一の戦い。それを小猫が黙って見ている筈が無く、一誠を助ける為にすかさずシンに飛び掛かる。

警戒をしていたシンは、すぐにそれに反応し片手で一誠の身体を引き摺り、小猫の前に壁として立たせた。

「……イッセー先輩、ごめんなさい」

一言詫びを入れた後、小猫は跳躍。一誠の後頭部を踏み付ける。

「ぐへっ！」

小柄とはいえ、人一人分の体重が首に掛かり、カエルの潰れた様な声を出す一誠。そんな一誠を踏み台にして小猫は更に跳躍し、シンの真上に跳んだ。

迎撃しようと構えようとするシンであったが、空いている方の手を掴まれてしまう。

「そうはさせない！」

『Ｂｏｏｓｔ！』

視線が小猫に向いた一瞬の隙に、迎撃させまいとシンの手首を掴み、動きを封じようとする一誠。更に倍化が掛かったことで簡単には外れない。

――と一誠は思っていた。

次の瞬間には、頭が仰け反る程の衝撃が額に奔り、後頭部が背中に密着しそうになる。

（え？　痛っ！　何だ！　何を！　クラクラする！）

痛みと衝撃でぶつ切りになる思考。何をされたのか必死に思考と紡ぎ合わせ、シンが頭を垂れる様な姿勢をしていることから頭突きをされたことに気付いたときには、胸部に足裏を叩き込まれて蹴り飛ばされていた。

デパートの床を数度跳ね、精肉店のガラスケースにぶつかってようやく止まる。

妨害していた一誠を引き剥がしたシンであったが、間髪入れずに小猫の掌打が頭部に向かって放たれていた。シンの視線は未だに一誠の方に向けられている。まさに回避困難の絶体絶命のタイミングであった

小猫の白い気がシンに打ち込まれる――と誰もが思った。しかし、小猫の掌打はシンに触れず寸前で止まる。シンに手首を掴まれたことで。

このときになってシンの視線が小猫へと向けられた。宙に小猫が跳んだ時点で、シンは小猫があと何秒後に来るのかを凡そ把握していた。後はその秒数以内に行動に移ればいいだけである。直感と勘に任せたかなりの力技である。

シンの前で吊り上げられる小猫。すぐにもう一方の手で掌打を打ち込んでくるが、構えの崩れた体勢から放つ掌打に速度は無く、これもシンに容易く掴まれてしまう。

両腕を引き、手前に引き寄せると同時に小猫の鳩尾に向け、貫けと言わんばかりの膝を打ち込む。それも一発では済まず、相手の反応など一切無視して立て続けに数発、それも同じ箇所を正確に狙って打ち込んだ。

容赦などしない。出来る筈が無い。『戦車』の頑丈さは知っていればこそ手加減等出来ない。少しでも手を抜いた瞬間、手痛い反撃を貰うのが目に見えている。だからこそ、全力の一撃を正確且つ連続で叩き込む。反撃させない為に。

シンのこの用心は正解であった。初撃をまともに受けた小猫であったが、『戦車』の特性によって耐えることが出来た。しかし、同じ箇所を抉る様にして打ち込まれれば如何に頑強な肉体であっても痛みを覚えるし、苦しみも感じる。シンの膝が打ち込まれる度に肺が圧迫され無理矢理息を吐かせられ、吸う暇も与えられない。肉体のダメージより

も酸欠で意識を失いそうになる。
作業の様に単調だが無慈悲に行われる繰り返し。それは唐突に終わる。
数度目の膝を打ち込んだとき、小猫の身体はシンの手から離れ、商品棚に向かって吹っ飛ぶ。そのまま棚を数台ドミノ倒しにし、落下してきた商品に埋もれてしまう。
あのまま続けていれば小猫の意識を断てた筈であったが、何故か手放してしまったシン。何か考えがあるのかと思いきや、眉根を寄せながら自分の両手を見ていた。このことはシンにとっても予想外のことであったらしい。
『Ｂｏｏｓｔ！』
だが、考える時間は側面から聞こえて来る音によって中断しなければならなかった。
情報が耳から入り、脳に伝わった瞬間、一切の無駄も戸惑いも無く顔を僅かに後ろへ下げた。
その眼前を通り過ぎていく赤い籠手。その腕が完全に伸び切った所で、シンは右足を軸にして右に半回転。それと同時に左手を突き出す。一誠の腕と交差しながら反撃の掌打を一誠の額に叩き付ける。
掌打の一撃で仰け反る一誠の頭。シンの左手はそのまま一誠の頭に指を突き立て、渾身の力で締め上げる。
「あぐぁ！」

頭蓋骨を押し潰されそうな程の激痛。骨の中にある脳の形すら変えられてしまうかと思える程であった。引き離そうと両腕でシンの腕を掴むが、一体化したのかと錯覚してしまうぐらい微動だにせず、それどころか更なる力で締め上げてくる。

その体勢でシンはそのまま腕力にものを言わせ、一誠の身体を床に向けて押し倒そうとする。

無理に力を込めれば首の骨が折れると、激痛の中で冷静に判断した一誠は、敢えて脱力し、シンにされるがまま床に叩き付けられようとするが、直前にありったけの力で床に左腕を叩き付け、可能な限り勢いを殺す。

後頭部が地面に接した瞬間、衝撃が両眼を突き抜けていく様な感覚を覚えると共に、視界の中に火花の様な点がちりばめられる。

頭蓋が割れる、砕けるというのを通り越して、自分の身に何が起きているのか、というよりもここは何処なのか、そもそも何をしにきたのかという記憶の混乱が一誠の中で起こっていた。

意識を断つつもりで地面に叩き付けたシン。受け身で勢いを削がれたが、それでも異常の域に入っている一誠の頑丈さに感心しつつ、今度こそ完全に断とうと拳を握り締める。

――カラン。

積み上がった商品の山が崩れ、落ちた缶が音を鳴らして転がる。視界のみを動かすと小猫の上に重なった商品が盛り上がっていくのが見えた。

間もなくして小猫が立ち上がると察したシンは、追撃の手を止めるとその場で一誠の頭を掴んだまま地面に円を描く様に引き摺る。

「いでででででで！」

摩擦によって一誠の髪が音を立てながら千切れていくが、手を緩めない。

積まれた商品を突き破って小猫が立ち上がる。そのときを狙い、勢いに乗せたまま一誠の身体を小猫目掛けて投げ放つ。

状況を確認しようと視線を動かした小猫が見たものは、自分に向かって一直線に飛んできた一誠。その光景に驚き、瞠目する。

そして、逃げる暇が無いと悟った小猫は、飛んできた一誠をその小柄な体で受け止める。『戦車』の力と頑丈さがあれば苦でも無いことだが、咄嗟のことなので不自然な体勢で受けたせいで完全に受け切ることが出来ず、立ち上がったその場に一誠を抱えた状態で尻餅を突いてしまった。

二人が重なったこの瞬間、シンは左手に魔力剣を創り出す。二対一という不利な状況、更に時間が経てば一誠の『赤龍帝の籠手』の能力、そこから派生する『赤龍帝からの贈り物』により一層追い込まれることになる。追い込まれる前にどちらか、あるいは

両方をリタイヤさせる為に全力の一撃を叩き込もうとする。
多量の魔力を収束させ、剣の形に押し留めようとしたそのとき――
（……）
――小さな違和感を左腕に覚える。まるで歯車の中に砂利でも挟まったかの様なつっかえる感覚であった。だが、所詮は一粒の砂粒。僅かに力を込めれば容易く砕け、歯車は元の通り動き始める――筈であった。
シンの左手の中で魔力によって創られた剣がグニャリとその形状を変えた。
砂一粒の抵抗。しかし、それを退かす為にシンは無意識のうちに必要以上に力を込めてしまっていた。熱波剣は、大雑把な理屈を精緻の操作で可能にするもの。それ故に小さなミスだが、それが一気に連鎖し、一つの大きなミスへと変わる。
（急ぎ過ぎたか）
二対一という状況を打破する為に、知らず知らずのうちに急いでいたことを自覚する。その結果が目の前で起こっているこれである。
魔力剣の歪みが伝播し、剣を中心にしてその周囲もまた歪んで見え始める。その歪みが剣を持つ左手にまで達した時、シンは危険を承知で魔力剣を手放した。
これにより、辛うじて抑えてあった魔力が完全に解放される。長剣の形が瞬時に螺旋状に捩じれたかと思えば、内包されていた魔力が爆発し、辺りに不規則に暴れ狂う魔力

の波を撒き散らす。
　手放し急いで離れたことで何とか爆心地から逃れられることが出来たが、それでも完全に回避することが出来なかった。シンの眼が爆発直後に見たものは、揺らぎ、歪んでいく光景の中に呑まれた自分の左手。その直後に魔力の波に弾かれ、商品棚を何台も巻き込みながら飛ばされていった。
（ここまでの大失敗は初めてかもしれないな）
　飛ばされて行く中、そんな他人事な感想を抱いていた。
　派手な衝撃と爆発の後に残るのは静寂。音すらも爆発で飛ばされていったかのように錯覚してしまう。
　突然の衝撃から身を守っていた一誠たちが構えを解くと、そこには破壊されて広く見渡すことが出来る食品コーナー。ここまでくると逆に清々しさすら覚える。
「ど、どうなってんだ？」
　いきなりのことで思考が追い付かない。一誠にはシンが自爆した様にしか見えなかった。
「……恐らく私の気の影響です。打ち込んではいませんが、多分私の手を掴んだ時に、微弱ですが気が流れ込んだのかもしれません」
　一誠の疑問に小猫が応える。ならば小猫の力で危機を切り抜けたことになるが、小猫

の顔色は優れない。その表情には喜びよりも不安の色が強かった。

「……こんなことになるなんて」

明らかに小猫は動揺している。小猫にとってこれは予想外の展開であった。本来ならば気を打ち込み内部にダメージを与え意識を奪う程度で納めるつもりだったが、偶然流れ込んだ気が、偶然シンの使う技に影響を与え、至近距離で魔力を暴発させるという結果になってしまった。己の力を忌避していた小猫にとってこの結果は、自分が一番恐れていた展開でもある。

「だ、大丈夫だって！　まだリタイヤのアナウンスも流れていないし！　きっとすぐに姿を見せるって！」

震え出す小猫を慰め出す一誠。敵がまだ生きていることを安心の為の材料にするという何とも矛盾した慰め方であった。

『ソーナ・シトリー様の『騎士』一名、リタイヤ』

直後、アナウンスが鳴り響きビクリと体を震わす二人であったが、呼ばれたのが『騎士』であって安堵する。シンは『戦車』の代理で出ているからだ。

本来なら仲間の善戦を喜ぶべきところだが、素直に喜べずにいた。

すると一誠が小猫に掛けた慰めを後押しするかの様に商品が潰れていく音が、シンの飛ばされた方向から聞こえてきた。

「やっぱり無事……」
安堵の声も、シンの姿を見た時絶句に変わる。
「二人揃って何だその顔は?」
平然とした態度のシンであったが、体の至る所に擦り傷、切り傷を負っている。特に左腕は酷く、全身が血で真っ赤に染まっていた。肩から腕にかけて無数の裂傷が刻まれ、大量の流血をしている。手の指は殆どが真面では無い方向に捩じれ折れており、人差し指と中指の間が深く裂け、そこから絶えず血を地面に滴らせていた。
重傷を負うシンの左腕を見て、小猫は震える声で思わず言ってしまった。
「ご、ごめんなさい……!」
謝罪する小猫にシンは呆れた様に溜息一つ吐くと、破れてボロボロになった袖を引き千切る。破かれた袖の端を唯一まともに動く左親指で掌に押さえ付けて挟む。すると、シンは右手で折れた左手の指を無理矢理元の向きに直し、更に右手でそれを覆って拳の形にすると、挟んでいた袖を巻き始める。
治療というにはあまりに荒々しい行為。直す度に血が飛び、折れた骨の生々しい音が聞こえて、見ていた一誠や小猫は思わずその痛みを想像し、寒気で鳥肌を立たせる。
傷を負った者が平然とし、負わせた者が蒼褪めるという真逆の構図であった。
「いちいちこれぐらいで謝るな。敵同士だぞ」

シンの突き放しつつも気にするなという態度に、小猫は迷う様な表情となる。それは、これ以上仙術や気を使ってもいいのだろうかという迷いが表に出たものであった。

すると、シンは無言で左手を動かし、近くにある転倒を免れた商品棚に叩き付けた。商品棚が大きく歪み、商品が飛び出させながら倒れる。

行動を以て、左腕はまだ使えることを示す。

「まだお前の全力を見たつもりは無いぞ、塔城。俺に対していちいち詰まらないことを考えるな。――安心しろ、俺は死なない」

状態を見ればやせ我慢の様に聞こえる。だが、その傷を負った身から発せられる気に、一切の揺らぎも弱々しさも小猫には見えなかった。常に一定の波を保ち続けている。

血を吸って朱色になる巻いた袖。そこから滴る血。命そのものが流れ出ているというのに、シンの生命に陰りが見えない。

小猫は戦う前に全力で戦うと誓った。それにより、小猫は初めて自分の本来の力で他者を傷付けた。こんな状況でなければ、もう一度この力を放棄していたかもしれない。しかし、シンはそれを赦すどころか、もっと見せろと言ってくる。

小猫は震えそうになる体を必死で抑えようとする。シンが体を張っているのに、それに応えなければ本当に失望させてしまう。頑張らねば、頑張らねばと思うも、それが呪

縛の様に小猫の心を縛りつけていく。
「……わ、私は……！」
そのとき、側に立つ一誠が小猫の肩に手を置いた。
「そんなに自分を追い詰めなくてもいいよ」
不安そうな眼差しで見上げてくる小猫に、一誠はそれを吹き飛ばす様な笑みを見せる。
「言っただろ？　小猫ちゃんが暴走しそうになったら俺が止めるって。それに間薙の奴はそう簡単に死なないって。だから俺や間薙を信じて、このまま全力で行くんだ、小猫ちゃん」
この瞬間こそ、小猫が踏み止まる時であった。逃げず、恐れず、泣かず、嘆かず、己の力を信じ、相手の力を信じ、真に自分の力を我が物としなければならない。
「でもって、力を克服して、将来的に猫又や猫？の力を乗り越えていけばいい」
「……乗り越えて……乗り越えたら私は何になるんでしょう？」
「え？　それは……」
考える一誠の足元に何かが当たる。視線を下げると、そこにはヒーローの写真がプリントされた子供向けソーセージの箱。そのヒーローに一誠は見覚えがあった。敵キャラの女幹部が子供向けとは思えないやたら扇情的なコスチュームを着ていたので。

（たしか名前はヘル――）
　その時、閃光の様にある名をひらめく。
「そう、小猫ちゃんは猫又や猫?を乗り越え、いつかヘルキャットになるんだ」
「……ヘルキャット?」
「冥界猫と書いてヘルキャットと読む！　そう！　これだ！」
　一誠なりに考え、小猫に目標を与える。小猫は最初目を瞬かせていたが、やがてクスクスと小さく笑う。
「……ヘルキャットですか。ならイッセー先輩は何になるんですか?」
「小猫ちゃんがヘルキャットなら俺は……そうだな……ヘルドラゴン、いやもっとカッコよく邪悪な赤龍帝（ダークネス・ウエルシュ・ドラゴン）にでもなろうかな?　ふふふふふ」
「……センスないな、お前」
「うるさい！」
　一誠のネーミングセンスを評価するシンに一誠は噛み付く様に吼える。
「話は十分だな。それで?　来るのか?　来ないのか?」
　手に袖を巻き終え、拳の形を固定すると、シンはそう問い掛ける。
　小猫は構えることで応じ、一誠もまた神器を構えた。
　闘志を戻した小猫の姿にシンは、一瞬表情を緩めるもすぐに元の無表情に戻す。そし

て、大きく息を吸い込み始めた。
シンの胸部が膨れ上がるのを見て、二人は氷の息を吐くのかと警戒し、小猫が前に出る。仙術を使えば冷気を無効化出来るという考えからであった。
息を吸い込むのを止めるのを見て、来るかと神経を尖らせる二人。
いざ溜めた力を解放しようとした直前、屋内に響き渡るある声を耳にし、シンの動きが止まった。
隙だらけな行動であったが、一誠も小猫もまたその声に反応し、動揺を現すかの様に周囲を見渡し始める。
ただの声ならばここまで動揺しない。ならばこの声はそれほどまでにおかしなものであるのか。
デパート内を揺さぶるこの声。否、咆哮は――

◇

木場は一人、立体駐車場を目指して走っていた。本当ならばゼノヴィアと一緒に目指す筈であったが、彼女は現在別のルートから立体駐車場に向かっている。
何故別ルートを行くことになったのか、それは道中でゼノヴィアが不審な人影を発見

したからであった。
木場はその人影を見ていないが、ゼノヴィアが見たというならばそれを無視することは出来ない。もしかしたらソーナ側の眷属が隠れていて、後々挟み撃ちにされる可能性も捨てきれない。
木場は少し考えた後、リアスに連絡。起こったことを手短に話し、指示されたルートとゼノヴィアが人影を見た道を経由して立体駐車場に向かうルートと二手に分かれることを提案する。
通信機の向こうのリアスはその提案を聞かされ暫し黙っていた。戦力を分散させるのはリスクがある。しかし、不審なものを発見したにもかかわらずそれを放っておくことにもリスクがあった。
リアスは考えた末に木場の案を採用する。ただし、敵と接触したら直ちに連絡を取る様にと念を押す。
そして、二人は分かれそれぞれ別ルートから目的の場所を目指すこととなった。
やがて木場は目的の立体駐車場前に着く。慎重に中を確認し、駐車してある車に身を隠しながら先へと進んで行く。
神経をこれでもかと尖らせ、自分は物音一つ立てず、逆に小さな音には即座に反応しながら徐々に二階の駐車場内を進んで行く。

ゼノヴィアと分かれて数分程経過するが、未だにゼノヴィアからの連絡は無いし、後から追い付いてくる気配も無い。

もしかしたら先に一階の方に向かっているのではないかと思いつつ、特に敵と接触することなく二階立体駐車場を踏破した。

そのまま、車用通路を下り、一階の立体駐車場へと下りる。

ここでもまた周囲を警戒しつつ先へ進もうかとしたとき、木場はすぐさま車の陰に身を隠した。

立体駐車場のど真ん中に陣取る様にして立つ二人の人物。『女王』の真羅椿姫と『騎士』の巡巴柄である。椿姫は長刀を、巡は日本刀で武装していた。

「やっぱり読まれていたか」

二人の様子を観察しながら、独りごちる。事前に二人の情報を見ている為、勝てない相手では無いと思っているが、それ相応の苦戦を強いられると木場は予想する。

二対二ならば確実性が増すが、未だにゼノヴィアの姿は見えない。内心、二手に分かれたことを失策だったと思い始めるが、今は後悔するよりも先にあの二人をどう倒すかに思考を傾けることを優先する。

幸い二人は木場の存在には気付いておらず、無防備な背を木場に向けている――

「隠れていないで出てきたらどうですか？　木場祐斗君」

――かと思いきや椿姫は木場に背を向けたまま、木場に声を掛けた。
鼓動が早まる。ブラフではなく明らかに確信を持っている。声の響きにそれが感じ取れた。
このまま隠れていても仕方が無いと思い、木場は車の陰から姿を現す。それに合わせて椿姫たちもゆっくりと振り返った。
「ごきげんよう、木場君」
「こんにちは。真羅先輩――いつから気付いていました？」
「貴方がここに来る前から知っていました。ゼノヴィアさんと二手に分かれたときから」
どうやら椿姫たちは、何らかの方法を使って木場たちの動きを監視しているらしい。出来ればもっと情報を知りたい所だが、相手が馬鹿正直にそれを話すとは思えない。
相手を警戒しつつ事前に話し合っていた通り、通信機でゼノヴィアに呼び掛ける。しかし、返ってきたのは耳障りな雑音だけであった。その音に僅かだが木場は顔を顰めてしまう。
「ゼノヴィアさんを呼ぼうとしたのなら無駄ですよ。ここでは外との通信は断たせてもらっています」
木場の表情の微妙な変化から正確に行動を読み取る椿姫。この辺一帯、立体駐車場に

は通信妨害用の結界が張られている様子であった。ゼノヴィアからの通信が来ないのではない。通信が出来ないのが正しかったらしい。

こちらの行動を一歩先に潰してくる椿姫たち。それに指示を出しているだろうソーナに苦々しさと敬意を半々に覚える。

木場は手元に聖魔剣を創造し、構える。椿姫もまたそれに応じて自らの得物を構えた。一方巡は日本刀の刀身に指を滑らした後に構えた。巡は悪霊退治を生業としている一族の出なのでなんらかの儀式ではないかと木場は推測する。

『リアス・グレモリー様の『僧侶』一名、リタイヤ』

アナウンスが響き、仲間の脱落を報せる。

ゲームが開始してからまだそんなに時間は経っていないことや、アーシアの居る場所を考えても脱落したのはギャスパーであるのが濃厚であった。

「どうやら私たちが一歩リードしたみたいですね」

「のようですね。でも、それもすぐに追いつきます」

「冷静ですね」

「戦いはまだ始まったばかりです。こういうのを聞かされる度に怒っていたら身が持ちません」

苦笑してみせる木場。表面上冷静に、しかし、その内心では言葉とは裏腹に臓腑が煮

え滾る様な悔しさが湧き上がってくる。
「……きっと落とされた『僧侶』はギャスパー君でしょうね」
木場と同じ答えを椿姫も出す。
「倒したのは十中八九間薙君ですね」
続けて出された言葉に、木場の目が見開かれる。
「……彼はこの先に居るのかい？」
「さあ？　どうでしょうね」
答えをはぐらかされたが、椿姫の態度からしてシンが一階の何処かにいるらしい。それを知った瞬間、先程とは違う熱が木場の中に生まれる。
闘志という熱が。
戦いたい。それも全身全霊を込めて。親友であり共に死線を潜り抜けた戦友であり、尊敬すべき好敵手として。
目の色が変わった木場に椿姫と巡の警戒心は強まる。普段はクールな木場が、熱すら感じさせる程の戦意を見せていることに軽く驚く。
互いに得物の切っ先を向けたまま静かに間合いを詰めていく。
最初に仕掛けたのは長さのある長刀を持つ椿姫であった。床の上を滑らす様に一歩踏み込むと、木場の胸部目掛け刀身を突き出す。

木場はそれを聖魔剣で斬り落とそうと横薙ぎに振るが、聖魔剣の剣身と長刀の刀身が触れ合った瞬間、火花の様に魔力が散る。

対聖魔剣用に魔力による加工を施されているらしく、長刀は聖魔剣の斬撃に耐える。

ならばと聖魔剣を長刀の刀身に押し当てたまま椿姫との間合いを詰めようとする木場であったが、椿姫を守る為に前に出た巡の日本刀による振り下ろしがそれを阻む。

もう片方の手に聖魔剣を創造し、これを防ぐ木場。巡の日本刀もまた椿姫の長刀と同じく、魔力の保護によって聖魔剣に耐えられる様になっていた。

女性とはいえ悪魔と化している二人の斬撃を腕一本ずつで抑える木場。再び距離を取ろうと足に力を入れようとしたとき――視線の端に人影を捉える。

（伏兵っ！）

木場の視線が人影の方に向けられる。しかし、そこにあるのは黒塗りの自動車だけ。人の姿は無かった。

意識を無理矢理逸らされてしまった木場。その隙を狙い、巡は木場に袈裟切りを振るう。

それにすぐさま反応し、聖魔剣で防ごうとするが僅かに遅れ、刃が木場の肩を浅く斬った。

制服に血が滲む。だが、この程度ならば戦いに支障をきたすことはない。

椿姫の長刀が今度は振り下ろされ、それを受け止めると横薙ぎ、回避すれば突きが繰り出され、巡の日本刀もまた上段斬り、下段斬りと隙を突くように振るわれる。

しかし、二人の猛攻は木場の二本の聖魔剣によって悉く防がれる。

突き出される長刀。その刀身に左の聖魔剣の刃を押し当てて逸らすが、この際に巡に対して背を向ける格好となる。当然の如くその無防備な背に刃を振り下ろされる。木場はそれを背に回した右の聖魔剣で受け止める。剣舞やアクション映画でしか見たことが無い曲芸染みた技を実戦で難なくやってみせる。

これだけでなく、右と左が独立して動いているのではないかと思う程左右の刃を自在に操り、時には受け止め、時には流し、時には斬り落とす。二対一という不利な状況でも互角に戦っていた。木場自身の高い技量が見て取れる。

（攻めに転じられない！）

状況を見れば互角ではなるが、木場は内心で焦っていた。椿姫と巡との剣戟だけではなく、時折視界の端に映る人影のことが気になる。逃げに徹しているのか一向に攻めては来ず、ただ姿を見せては消えていく。攻めようとする絶妙なタイミングで現れるせいで意識を取られ、その度に攻める機会を潰されていた。

聖魔剣という剣の特性上、一太刀でも浴びせればそれだけで回復手段が限られている彼女たちはリタイヤしなければならない傷を受けることになる。だが、守り一辺倒では

それも出来ない。
また、何処かに隠れているのか分からない見えざる敵の重圧も、木場の精神に圧し掛かってくる。
そこでふと思い出す。ゼノヴィアもまた謎の人影を見たことを。仮にこの人影が同一のものだとしたら。
（……正体を突き止めないといけないかもしれない）
そろそろ謎の人影に振り回されることに嫌気が差してきた木場は決断する。
二人の斬撃を捌く中、再び視界の端に人影を捉えた。その瞬間、木場は手に持っていた聖魔剣を影目掛けて投擲する。
何に突き刺さったか木場の目に映らなかったが、金属音だけが木場の耳に届いた。
戦いの中で得物を手放した木場に椿姫が長刀を振るう。これはもう一本の聖魔剣に防がれたが、がら空きになった胴体に巡の刺突が放たれる。
その直後に響く肉を貫く音――ではなく、つんざく様な金属音。
「嘘っ！」
驚く巡。そして片足を上げた木場。曲げられた膝裏には聖魔剣が挟まれており、聖魔剣の腹で巡の突きを受け止めていた。
まさか脚で剣を創造するとは思っていなかったのか、椿姫もまた木場の器用さに驚

き、意識がそちらに向いてしまう。
その隙に木場は地に付いている足で力の限り後方へ宙返りをし、二人との距離を取った。その時に膝裏に挟んでいた聖魔剣を手に持ち替える。そして、先程投擲した聖魔剣の側に降り立つ。

（成程……）
聖魔剣が突き刺さっていたのは車の車体であった。よく磨かれていたボディは現在凹んでおり、そこには歪んだ木場の姿が映り込んでいる。注目すべきは聖魔剣が刺さった部分。その中心には、真っ二つに割れた小さな文字が書かれていた。
魔術などで用いられるものではない。だが、朧気だが木場にはこの文字に見覚えがあった。東洋の、それも日本で主に術などを施す際に使われる文字である。
これらの情報。そして、事前に頭に入れてあるシトリー眷属の情報を合わせると、一つの仮説が浮かび上がる。
相対する真羅椿姫。彼女はこの日本で最大規模の異能集団『五大宗家』に名を連ねている『真羅』の出である。椿姫は神器だけでなく鏡に関する能力を持つという情報があるが、もしも、その能力は鏡だけでなく、鏡面など姿が映し出されるものも範囲に入っているのだとすれば。

事前にこちらの姿を把握していたこと。そして、人影の正体も分かった気がした。
結論を出すにはまだ早いかもしれないが、木場は自らの考えを行動で証明することにした。
木場は双剣を構え、姿勢を低くすると十数メートルの距離を『騎士』の速さによって一足で詰める。
今までの中でも最速の動きに椿姫はワンテンポ遅れ、巡は更にワンテンポ遅れて反応する。
急いで長刀を振るうが、既に間合いの奥に入っている木場には刀身ではなく柄の部分が当たってしまう。
狙いが巡だと判断した椿姫は、瞬時に術を発動させる。この辺りにある反射物全てに椿姫の術が施されており、その内のどれかでも視界の中に映れば、反射物から幻影を生み出し、相手を攪乱させる。
木場の動きについていけていない巡を少しでも間に合わせる為に木場の意識を逸らそうとする。
椿姫の思惑通りに木場は視界の端に幻影を捉えたのか、視線を幻影の方に向けてしまう。
その隙に巡が斬りかかろうとした。

事は椿姫の望み通りに進んでいる。しかし、木場が幻影に意識を取られた瞬間、強烈な違和感を椿姫は覚えた。

木場の視線。その先にある筈の幻影。そこで気付く。木場の目線が幻影に向けられていないことに。

「巴柄っ！」

椿姫は反射的に叫んでいた。

横から入り込んできた椿姫の声に巡の動きが急停止する。

木場は振り向かないまま巡に向けて腕をしならせ、その速度が最高点に達すると同時に今度は手首をしならせた。腕の速度を乗せた高速の手首の返しから繰り出される斬撃。巡の目には胸元に光が通り抜けた様にしか見えなかった。

何が起こったのか考える前に椿姫に腕を掴まれ、木場の間合いから離される。

巡を守る様に前に立つ椿姫。その背中を少しの間呆然と見ていたが、やがて先程走った光を確かめる様に胸元に触れる。

指先で感じ取る違和感。制服に段差があった。目線を落とせば、光が通過した胸元に一筋の切れ目が出来ている。

これが何を意味するか、頭に伝わったとき巡は全身から汗が噴き出てきたのが分かった。もし、あの時椿姫の声で動きを止めなかったら、今頃どうなっていたのか。あまり

に容易く想像が出来てしまい、今度は呼吸が乱れる。
「落ち着きなさい」
背中越しに巡の荒い呼吸を聞いて、椿姫が安心させる様に声を掛ける。
「どうやら私の仕込みの方もばれてしまったみたいですね。それどころか逆に利用してくるとは、その冷静さ、流石ですね」
「ありがとうございます」
椿姫の称賛を素直に受け取る。
傍から見れば巡への追撃の機会なのに何を呑気に会話しているのか、と思われるかもしれない。それには理由があった。椿姫が巡を守っていることである。
椿姫の神器の能力を木場は知っている。実際に自分の目で能力を使っている場面を見たことがあるからだ。神器名『追憶の鏡』。その名の通り、巨大な鏡であり、鏡が受けた攻撃を倍にして返すというカウンター能力を持つ。同士討ちの危険性がある近接戦闘とは違い、守りの体勢の今ならばその神器を使用してくる可能性がある為、下手に手を出せない。
「やはり手強いですね、木場君は。……ですが、それでもこちらが一歩リードしている事実は消えませんが」
術を見破られたというのに椿姫に焦りはない。逆に余裕すら感じさせる。今の言葉

も油断させる為のブラフではなく確信して言っている気がした。
（まだ何か隠している策があるのか？）
木場は椿姫たちだけでなく周囲の警戒も強める。
「ふぅぅぅはぁぁぁ……」
椿姫の背後で巡が乱れていた呼吸を整える。深く吸い、長く吐くことで、早まり痛いほど聞こえていた鼓動を強引に正す。
短時間で状況を立て直し、再び構える巡。
「行けますか？」
「はい！」
返事一つすると、先程の動揺が嘘の様な勢いで木場に向かって走り出した。
踏み込み一つで最高速に達し、三歩目で木場の前に現れ、そのまま刀を振るう。
その動きを目で追っていた木場は、初撃を頭を下げて回避。勢いで木場の後ろに駐車されていた車の天井が斬り飛ばされる。
刀を掻い潜り、巡の胴体に横薙ぎの一閃を放つ木場。それは下に向けて突き出された刀が受け止める。続け様に二本目の聖魔剣を振るおうとするが、巡は聖魔剣の柄ごと木場の手を掴んで振るうのを妨害する。
「うくっ！」

聖魔剣の柄に触れた巡の手から白煙が上がる。聖の属性が巡を浄化しているのだ。彼女は今、手の中に溶鉄を流し込まれた様な熱さと痛みに襲われている。だが、それでもこの手を離す訳にはいかない。

自分の手を犠牲に、木場の腕を今から奪う。

「反転(リバース)!」

その瞬間、木場が肩に負っている傷口が白色に輝く。

「あぐあっ!」

生きたまま焼かれた様な痛み。同時に四肢から力が抜けていく脱力感。そのせいで手から滑る様に聖魔剣が落ちる。

(まさか、これは!)

自分を苦しめる正体に気付くと同時に、巡の蹴りが木場の腹部に捻じ込まれる。数十メートルの距離をほぼ一直線に蹴り飛ばされた挙句、停めてあった車のフロントガラスを完全に砕き、前半分を半壊させたことでようやく止まる。

内臓がかき混ぜられた痛みも中々のものだが、それでも肩の傷の痛みに比べれば針と掘削機程の差がある。

剣士としての性か、この様なことが起きてもまだ握り続けていた聖魔剣を杖の様にして突き立て、歯を食い縛りながら体を起こす。

体の隅々まで行き渡る灼熱感、全身を駆け巡る痛みに神経を嬲られながら、木場の思考は何が起こったのかを冷静に分析しようとしていた。
（この肩の傷から感じられるのは、間違いなく聖の気だ……いつ付けられた？　巡さんは直前に何を言っていた？　――『反転』、反転だ。文字通り反転させて聖の気を生み出したのか？）
最新の資料には載っていなかった情報である。最近収得した巡の神器なのかもしれないと推測する。
（ということは……）
木場は戦う前に、巡が日本刀に指を這わせていたことを思い出す。聖と反転させたのならば対となるのは魔力である。対聖魔剣用に強化を施していたのかと思っていたが、最初から傷口に魔力を付着させ、それを反転させることで戦闘を困難にさせる程のダメージを与えることが目的だったのだ。
傷一つ付ければ勝ち。そう考えていた自分だが、傷一つ負わされて追い詰められているこの状況が皮肉に思える。
「あまり動くことはお勧めしません。このままおとなしくリタイヤする方が貴方の為だと思いますが？」
冷徹な言葉で優しい提案をしてくる椿姫。彼女の言う通り大人しくリタイヤを受け

入れれば楽であろう。
しかし――
『ソーナ・シトリー様の『兵士』一名、リタイヤ』
――ここで屈したら今もなお戦っている皆に申し訳が立たない。
椿姫の提案に応える代わりにコンクリートの地面に聖魔剣を突き立て、手を空ける。
その行動に椿姫たちは抗おうとする意思を感じ取った。
「……もう一度言います。これ以上の抵抗はしないで下さい。命に関わりますよ?」
「真羅先輩。貴女が同じ立場だとしたら簡単に諦めますか?」
その言葉に椿姫は後の言葉を詰まらせる。蒼褪めた表情で木場は微笑を見せると、その手に光が灯り、形を変えていく。
光が消えると木場の手の中には一本の短剣が握られていた。
椿姫たちは訝しむ。神器を使用した筈なのに、その短剣からは力が感じ取れないのだ。
「その短剣でどうするつもりですか?」
「こうするのさ」
木場はおもむろに短剣を振り上げて、一回だけ深呼吸をした後腕の傷口にその短剣を突き刺した。

『なっ！』
突然の自傷行動に二人揃って目を剥き驚く。
端正な顔を苦痛に歪めているものの木場は歯を食い縛り、声を上げることは無かった。
刺し口からは血が垂れ、制服の片袖を赤く染め上げていく。だが、不思議なことに流れる血に反して木場の顔色には赤みが戻り、生気を取り戻し始めていた。
刺して逆に回復するという矛盾した現象。これを見た椿姫の頭に一つの説が思い浮かぶ。
「……まさか、その短剣は聖剣？」
「正解です」
椿姫の出した答えをあっさりと認める。
もう一つの神器『聖剣創造』によって生み出した聖の気を吸い取る聖剣。既に体内に入ってしまった聖の気を今の様に直接体に突き刺して吸収させたのだ。
それなりの代償を払ったが、辛うじてリタイヤすることは免れた。
「何て無茶を……」
「ハハハハハ。無茶ですか。でも、僕の尊敬する人たちはもっと無茶をしますよ？」
聖剣を突き刺した腕をダラリと垂れ下げたまま、聖魔剣を引き抜く。

何故だろうか。さっきよりも深手を負っている筈なのに、椿姫たちは木場から威圧感が増したと感じていた。
「不屈と根性。彼らの持つそれを、僕も手に入れたいんです」
如何なる困難であろうと屈しない力。途方も無い茨の道だろうと一歩一歩進む力。壁を前にしても己を貫く力。自分に足りないと思っている、その精神が欲しい。
「貴方からそんな言葉が出るとは思いませんでした」
「アハハハ、似合わないですよね？」
「おっしゃる通り似合いませんが……私は素敵だと思います」
「はい？」
最後の辺りが小声だったせいで思わず聞き返してしまうが、椿姫は何も答えずそのまま黙ってしまった。
「はいはい。お喋りはそこで終わり。私たちもそうだけど木場君もあまり時間をかけていられないでしょ？」
椿姫に変わって巡が話す。彼女の言う通り、いくら聖剣で聖の気を吸った所で完全に除去される訳では無い。聖の気の影響は体に残っている。
「――そうですね」
戦いは始まったばかりであり、戦うべき相手はまだいるのだ。

木場が構えるのと椿姫たちが臨戦態勢をとったのはほぼ同時であった。
両者の距離は十数メートル。だが、『騎士』の足ならば短い距離である。
巡の身体が僅かに沈むのが分かった。踏み込んでくる。そう判断すると同時に木場は地面を蹴った。
巡は木場が一歩踏み出したことで、想像以上に聖の気の影響が体に出ていることが分かった。
あの目にも止まらない速度が、巡の目で追えるほどまでに低下している。
巡もまた木場から僅かに遅れて駆け出すが、先に距離を詰めたのは巡の方であった。
間合いに入ると共に上段から日本刀を振り下ろす。木場も片手の聖魔剣でそれを受け止めようとするが、受け切れずに一歩後退。続けて右から左に一直線の横薙ぎの斬撃を放つ。これに合わせて聖魔剣が振るわれる。刃と刃が噛み合い、火花が散る。力負けしたのは木場の方であり、日本刀の勢いに押されて体が傾く。
片手持ちと両手持ち。どちらがより力が加わるかなど答えるまでも無い。ましてや木場の身体能力は衰えている。
巡は手首を返し、下から上に向けて斬り上げた。すぐに態勢を立て直した木場が聖魔剣で防御しようとする。
甲高い音の後に空を裂く音。木場の手から聖魔剣が離れ、宙で舞っていた。

丸腰になってしまった木場に止めの一撃として、斬り上げた日本刀をそのまま振り下ろす。
手応えあり――かと先走る思考を冷やすかの様な空を斬る感触。
居るべき筈の場所に木場の姿が無い。何処に、と視線を動かそうとしたとき、軽い衝撃が脇腹に走る。
「え？」
視線を横に動かせば、消えた木場の姿。そのまま落とせば脇腹に突き刺さる短剣。
その短剣は木場が聖の気を吸い取る為に自らに突き刺した物。吸い取ることが出来るなら逆に――
そこから先を考える前に巡の全身に貫く様な衝撃が駆け抜け、その意識を断つ。
『ソーナ・シトリー様の『騎士』一名、リタイヤ』
巡が光を放つと立体駐車場から姿を消す。戦闘継続不可能と判断され、転送されたのを見送ると同時に、木場の顔から汗が幾筋流れ落ちる。
巡が一瞬見失う程の急加速からの神速の一撃。通常時でも疲れを覚えるであろうそれを絶不調の状態で繰り出せば、当然凄まじい反動となって返ってくる。
四肢の筋肉が熱と痛みを発し、不快感を伴う汗が体を濡らす。喉の奥は渇き、呼吸をする度に鈍い痛みを感じた。

自然と垂れてしまう視線。映るのは冷たいコンクリート。その温度を感じさせない無機質さに今すぐにでも横たわり、全身でその冷たさを感じ取りたくなる衝動に駆られる。

だが、それは許されない。今のは長くも短い戦いのたった一戦が終わった程度のこと。次なる戦いは更なる苛烈さを伴うのは容易に想像出来る。

下げた視線を上げれば、目に映るのは険しい表情をする椿姫。ソーナと同じく常に冷静であまり表情を変えない彼女が、ここまで露骨に感情を見せている。仲間をリタイヤさせられたことへの悲憤が彼女の中に渦巻いていることが一目で分かった。木場もまた、同じ感情を以て戦っているからだ。

「どうやら私は、貴方の実力を把握していたつもりになっていたのかもしれません」

表情から険しさが消えるが、その双眸は未だに感情の炎が燃え盛っている。

「その結果、仲間が一人討たれてしまった。ここから先は、もう二度と見誤りません。私の全身全霊を以て貴方をここで倒します！」

宣言した椿姫の隣に大きな鏡が現れる。彼女の神器『追憶の鏡』である。

木場はその行動に疑問を抱く。相手の攻撃を倍にして返すカウンター系の神器であるそれを、戦いの最中に出すのではなく今出したことが不自然に思えた。

その不自然さに警戒を強める木場の前で椿姫は長刀を振り上げ――『追憶の鏡』に叩

き付けた。
「なっ！」
意図が分からない椿姫の行動に驚く木場。
長刀を叩き付けられた『追憶の鏡』の鏡面に罅が生じ、その割れ目が鏡面全体に行き渡ったとき、鏡面が割れ、鏡の破片が木場に向けて一斉に飛んで来る。
すぐさま聖魔剣を創造する。無数の鏡の破片を片手で全て打ち落とすことは出来ないと判断した木場は、聖魔剣を顔の前に翳す構えを取って、最低限の部位だけは守ろうとした。
だが、とっくに直撃していてもおかしくない時間は過ぎているのに、衝撃も痛みも来ない。
構えを解いた木場が見たものは、辺り一面に浮かび上がる中小大きさの不揃いの無数の鏡の破片。
その全てに椿姫の姿が映り込んでいる。
『貴方は』
姿が。
『神器の結界に囚われました』
声が。

『この合わせ鏡の中で散って貰います』

気配が全て反射する。

閉ざされた鏡の結界の中で木場は更なる苦戦を予感した。

◇

ゼノヴィアは、木場と分かれて謎の人影を追うこととなったが、どういう訳か探しても探しても見つからない。それどころか逃げた痕跡すら見つからない。

気付けば一階まで来てしまっていた。

ここで流石に誘われたのでは、という疑問を抱き始めたゼノヴィアは仕方なく立体駐車場に向かおうとする。が、ここで更なることに気付く。自分の現在場所が分からないことに。

一応は戦闘前にこのデパートの地図に目を通していたが、細かい所までは覚えていなかったせいで完全に迷ってしまった。

どうしたものかと頭を悩ませるゼノヴィア。やみくもに歩けば敵に見つかる可能性や罠に掛かる可能性も考えられる。すると視界の端にあるものを捉えた。デパート内部が詳細に書かれた案内板である。

すぐにこれを見て地図を頭に叩き込むと、木場と合流しようと立体駐車場へ向かう――かと思いきやその場で急停止した。
案内板の挟むようにして並ぶ二つの扉。扉の横には上向きの矢印が描かれたボタンが付いている。よくあるエレベーターの扉であった。
（そういえば……）
ゼノヴィアはゲーム開始前にリアスが言っていたことを思い出す。
『エレベーターがもし機能していてもなるべく使わないこと。乗っている最中に襲撃されたら逃げ場所が無いから』
そんな注意を受けていた。
（使わないなら、いっそのこと停めておいた方がいいかもしれないな）
階層の移動手段が限られている方が戦い易いと判断したゼノヴィアは、エレベーターのボタンを押し、扉を開ける。
そして中に入り、そこで首を傾げる。
（……どうやったら停められるんだ？）
行動したのはいいが、手段が全く分からないゼノヴィア。とりあえず階数が描かれたボタンを全て押してみる。特に変化は無し。
次に二つの三角の底辺が向かい合っているボタンを押してみるが、やはり変化は無

かった。
今度は三角の頂点が向き合っているボタンを押してみる。すると開いていた扉がしまってしまう。
「しまった……」
二つの意味を込めた言葉を洩らしてしまうゼノヴィア。使うなと言われて乗ってしまった事態をどうするべきか考える。
しかし、そんなゼノヴィアを焦らさせる様にエレベーターが上に向かって動き始めた。
「――よし。壊そう」
一秒の思考の末エレベーターを壊して停めることにするとデュランダルを出現させる。
デュランダルをいざ振り上げようとしたとき、ティーンという音の後に扉が開いた。
開いた扉の向こうでは匙と仁村がこちらを見ており、最初は目を瞬かせていたが、少し時間が経つと何が起こったのか分からないという困惑した表情へと変わる。
「……何でエレベーターから出てくるんだ？　ゼノヴィアさん」
「ああ――迷ったからだ」
包み隠さず本当のことを言うと、二人揃って今度は唖然とした表情となった。

「――だが、ある意味で正解だったらしい」

追う人影は見つからなかったが、代わりにシトリー眷属の『兵士』を二人も見つけることが出来た。匙の方に至っては、シトリー眷属でも二名しかいない神器所有者である。ここで倒しておくべき必要がある。

「……ああ、チクショウ。予定外だ予定外。聖剣使いと戦うなんて……でもな、それを超えなきゃ彼奴と戦えないってんなら戦って勝つだけだ！」

事故の様な不幸に嘆きながらも『黒い龍脈』を現し、戦闘体勢へと移る。隣に並ぶ仁村もまた構えた。仁村は徒手空拳が戦闘のスタイルの様である。

デュランダルの剣先を匙たちに向けたまま、ゼノヴィアはエレベーターから出る。

その一挙手一投足に敏感に反応し、エレベーターから二、三歩前に進んだだけで、匙たちはその倍間合いを広げた。臆病ともとれるかもしれないが、聖剣を一太刀受けただけでもこのゲームに於いて致命傷となることを考えれば、当然の反応と言えた。

強く警戒している状況は、ゼノヴィアにとっても都合が良いもので、この隙に通信機で木場と連絡を取ろうとする。

「聞こえるか？」

悟られない様小声で呼び掛ける。しかし、通信機からは雑音しか聞こえず返信が無い。

（妨害でもされているのか？）

そう判断し、ひとまず木場への連絡は後回しにする。

一方で匙と仁村も、ここから先どうするかゼノヴィアから視線を外さないまま、小声で相談していた。

「まさか、こんな展開になるとは……」

「奇襲かけるつもりが、こっちが奇襲されましたね。――迷子とか言っていましたけど、実は嘘で狙ってやったという可能性は？」

「無い無い。絶対無い」

即答で否定する。ゼノヴィアの残念な部分を知っている匙からすれば、馬鹿にしている訳ではないが、そんな賢い真似をするなど万が一も無いと言い切れた。

「兎に角俺が最初に仕掛ける。何とか神器で動きを封じる」

ラインの射程と聖剣の間合いを考えれば、匙の方に分がある。なるべく距離をとりつつ上手くラインを繋いで力を吸い取り、ゼノヴィアを弱らせた後に仁村で攻めるというのが咄嗟に考えた匙の案であった。

特に反対も無いだろうと思っていた匙であったが、仁村は匙の考えていたものとは違っていた。

「――匙先輩、すみません。私が先に攻めてもいいですか？」

　匙の案とは逆の案を出す仁村に、匙は思わず横目で仁村の顔を見てしまう。
「どうしてだよ？」
「上手く言えませんが――ここは私が最初にゼノヴィアさんの出方を見た方が良い気がするんです。……勘ですけど」
　最後に付け加えた言葉に匙は顔を顰める。勘という曖昧な根拠で自分の案を否定されたことに不快感を示している訳では無い。仁村は生徒会メンバーの中でもかなり勘が鋭いのである。相手の雰囲気、僅かな表情の変化、放っている気配から相手の内心を見抜くことが多々あった。
　それを知っているからこそ仁村は今のゼノヴィアから何かを感じ取り、匙の案では駄目だと判断したのであろう。しかし、分かってはいるが先輩という立場だからこそ後輩が危険を買って出ることに躊躇ってしまう。
　だが、仁村は匙の答えを聞くよりも先に匙の前へと出てしまった。声を掛けて戻そうとするが、仁村が動いたことに反応し、ゼノヴィアも動き始めてしまう。
　右足を引き、体を斜めに構えながらデュランダルの切っ先を後方に向け、逆に柄を相手に向ける。その剣身を体で隠す構えは脇構えに近い体勢であった。
　相手が戦う構えをとってしまったことで匙は仁村に何も言えなくなってしまう。下手に声を掛ければ、ゼノヴィアに隙を見せることになる。

こうなってしまっては仁村の言った通り、仁村が攻め、匙がそれをサポートする戦法を取らざるを得なかった。
「気を付けろよ」
出来ることがあるとすれば、後輩の背に向けて言葉を掛けるぐらいしかない。
『リアス・グレモリー様の『僧侶』一名、リタイヤ』
そのときアナウンスがリアス陣営の脱落を告げる。
『僧侶』がリタイヤした、即ちギャスパーが落とされたことを察した匙たちは、ソーナの作戦が上手くいったことに内心喜ぶ。
しかし、その喜びも次の瞬間には吹き飛んでいた。
「まったく、彼奴は体の鍛えが足りないな」
嘆息するゼノヴィア。彼女もまた落とされたのがギャスパーだと察している様子であった。表面上は後輩の不甲斐無さに呆れている。だが、言葉と態度に反し、その身からは匙たちも身震いしそうになる程の重圧が放っていた。
「たが、可愛い後輩をやられて黙っている訳にもいかないな。八つ当たりの様に思われるかもしれないが仇はとらせてもらうよ」
ゼノヴィアの全身に力が込められていくのが分かる。両者の距離は十メートル程。デュランダルの間合いを考えれば、それ未満となる。

速度では『兵士』より『騎士』の方が圧倒的だが、匙と仁村も仲間の『騎士』との訓練で、ある程度ならその速度に対応出来る様にはなっている。

必ず喰らい付くとゼノヴィアの重圧を跳ね除けるぐらいの気合いを込める二人であったが、それを見てゼノヴィアがポツリと呟く。

「残念だが――」

ゼノヴィアは左足で一歩踏み込む。そこから駆け出し距離を詰めて来ると考えていた二人。だが次の時には全く違う光景が流れていた。

踏み出した左足でしっかり床を踏み締め、構えていたデュランダルを下から上に向け振り上げようとする。

明らかに剣の間合いの外。何をするかと匙が思った瞬間、仁村が急に仰け反る。そこから後ろ向きに倒れていく仁村。その胸部はいつの間にか斬り裂かれていた。

「既にそこは私の間合いだ」

何が起こったのか分からなかった。倒れていく仁村もまた何が起こったのか分からないという表情をしている。

倒れていく仁村を慌てて支える匙。それと同じくして匙は頭上から悪寒を感じ、天井を見上げる。

天に向かって伸びる光の帯らしきもの。注視すればその光の帯とデュランダルが繋

がっていることに気付くが、頭上から振り下ろされる光の帯が匙に逃げる暇も考える暇も与えない。

仁村を支えていることで咄嗟に動くことが出来ない匙。すると胸部に衝撃が走り、匙の体が後方へと飛んで行く。

全てが緩慢に見える中、匙が見たものは自分を突き飛ばした後に消えていく後輩の姿。さっきまで立っていた場所に突き立てられる光の帯。

背中から床に倒れる匙。しかし、痛みも衝撃も感じない。

『ソーナ・シトリー様の『兵士』一名、リタイヤ』

（情けねぇ……！）

後輩に救われた不甲斐無い自分への怒りで、そんな些細なことを感じることなど出来なかった。

「く、そぉぉぉぉ！」

後悔に浸る暇など無く。床に突き立てられた光の帯は、ゼノヴィアが振るうデュランダルの動きに合わせ、倒れている匙を追撃する。

匙は近くの柱にラインを伸ばし巻き付けると、急速にラインを巻き取り光の帯の追撃を避ける。

柱まで到達するとすぐさま立ち上がり柱の陰に身を隠す匙。

「はあ！　はあ！　はあ――」

乱れる呼吸を何とか整えようとしたとき、頬の薄皮が炙られる様な感覚を感じ取る。

その感覚に従い、目を向けると柱の横を通り過ぎていく光の帯――かと思いきやいきなり方向転換して、柱にもたれていた匙の首元目掛けて襲い掛かってきた。

「嘘だろぉぉぉ！」

悲鳴の様な声を上げながら殆ど崩れ落ちる様に身を屈める。間一髪、光の帯は匙の頭上を通過し、匙の毛髪を数本と柱に浅い切り傷を付けて消えてしまった。

感傷に浸る暇無く必殺の追撃を避けきった匙。だが、戦いも試練も途切れることは無かった。

黒い影が柱の側を通り過ぎていく。それが何なのか考えるよりも先に匙の体は動いていた。

『黒い龍脈』から伸びたラインを束ねながら掴み、それを顔の横に持っていき力の限りラインを張る。数千、数万回は繰り返してきたであろう守りの構え。

身に染みついたその動きをほぼ無意識に行った匙は、構え終えた後に何故自分がこの構えをしているのかと疑問に思い、その直後の両腕を伝わってくる衝撃で答えを知る。

「受け止めるか。やるな、匙」

「ゼノ、ヴィア、さん！」

接近戦に切り替えてきたゼノヴィアに、匙は食い縛った歯から漏れ出す様な声を出す。

匙が張ったラインに受け止められるデュランダル。だが、余裕など全く無い。あと数センチ進めば頬に触れる程の近距離に聖剣の刃があるのだ。

匙がデュランダルを受け止められたのは、一割の実力と九割の幸運によるもの。デュランダルの刃先が、匙が背にしている柱に入り込み、それによって勢いを殺されたことで辛うじて防ぐことが出来たに過ぎない。

細い糸の様な幸運であったが、所詮は実力外の偶然。長くは続かない。それを証明するかの様にデュランダルの刃が柱を斬り進め、匙にその刃を埋めようとする。

負ける。負ける。負ける負ける負ける負ける負ける負ける負ける負ける負ける。戦いたい相手の顔を見ることなく。すべきことを全うすることなく。敬愛する人の役に立つことなく。

何一つ為すことなく負け――

「てたまるかかぁぁぁぁぁぁ！」

吼えると同時に匙の両足が床から離れる。ゼノヴィアと匙にある僅かな間に膝を折り曲げて両脚を入れると、一気に膝を伸ばしゼノヴィアを蹴り飛ばそうとする。

匙の反撃に対し、ゼノヴィアは押し当てていた聖剣を引き、柄で両足を受け止めた。

「くっ」

短い声を洩らしながらゼノヴィアの身体が後方へと飛ばされていく。数メートル程飛ばされた後に両足で床を踏み付けて減速させ、無理矢理止まった。

距離を空けられたが、『騎士』の俊足を以ってすれば無いも同然。すぐに攻めようとデュランダルを構えようとする。

匙もまたゼノヴィアに全くダメージが通っていないことは分かっていた。だからこそ、ゼノヴィアを蹴り飛ばしたことで出来た僅かな時間の間に、ある物目掛けてラインを伸ばす。

目的の物を掴むと、構えようとするゼノヴィアに向けてそれを投げ放つ。

正面から高速で迫る赤い筒状の物体に、ゼノヴィアは条件反射でそれを両断する。その瞬間、薄紅色の粉が一気に広がり、ゼノヴィアの視界と身体を覆い隠してしまった。

匙が投げたのは消火器であった。中の消火剤を煙幕代わりにして時間を稼ぐ為である。

相手のペースで追い詰められ、戦況は最悪の状態。ほんの少し時間を稼いだ所で、打開策が見つかる保証は無い。だが、それでも勝たなければならない。その為に思考を回転させ続けながら、体も動かそうとする。

次の瞬間、全身に刺さる様な悪寒を覚えた。

煙幕を斬り裂き、何かが匙に向かって飛来する。
一目見てそれが何なのかは分かった。しかし、何故それがそんなことになっているのか意味が分からず、この時本気で思考が停まってしまう。
悪魔にとっても。天使にとっても。そして、敬虔な信者にとっても悪魔の様な光景である。
聖剣デュランダルが旋回しながら飛んで来る。
投擲武器の如く投げ飛ばされているデュランダルにコンマ数秒唖然とする匙だったが、すぐに正気に戻り、身を屈めて避ける。
対象を失ったデュランダルは、そのまま柱に突き刺さった。
頭上すぐにある聖剣に体が冷たくなるが、すぐにある疑問が浮かぶ。
（ゼノヴィアさんは、何で武器を手放したんだ？）
大雑把で大胆な性格なのは知っているが、だからといって戦いの最中に武器を手放す様な考え無しとは思えない。ならば武器を手放しても、それを埋める手段があるのでは。
そこまで考えたとき、舞う消火剤が一際激しく揺れるのが見えた。
その揺らぎに向けて複数のラインを伸ばす。
揺らぎを裂いて数度瞬く銀色の煌きが奔ると、ラインが切断され溶ける様に消えてし

まう。
目の前で起こったことに匙は驚くしかない。ラインを斬るには聖剣でもそれなりの力が必要だというのに、容易く斬られてしまったことに動揺を隠せない。
消火剤の煙幕を突き破り、ゼノヴィアが姿を現す。その手には推測通りもう一本の剣が握られていた。
それを見た瞬間、匙は恐怖を覚える。ある意味で聖剣以上に厄介な代物だったからだ。
「なんでアスカロンを持ってるんだよぉぉ！」
一誠が所持しているのは知っていたが、それがゼノヴィアに譲渡されているとは思わなかった。というよりも、その様な最悪な状況を考えたくなかったのかもしれない。
『黒い龍脈』に対し、龍殺し（アスカロン）の聖剣は最悪の相性だからだ。
どんなにラインを放とうと全て斬り飛ばされていく。
匙が剣の間合い入った瞬間、ゼノヴィアは横薙ぎの一閃。
咄嗟に右腕を剣の軌道に置いてしまったが、直後にそれが失策だったと悟る。
腕を貫く衝撃。『黒い龍脈』に傷が刻まれる。アスカロンの一撃に耐え切れずに飛ばされる匙。だが、そんなことは些細なことであった。もっと焦るべきことが今の匙の身に起きているのだから。

（動かねぇ！）

神器と繋がっているという感覚が、アスカロンに傷を負わされたと同時に断たれてしまった。龍殺しの力によりヴリトラの神器の能力を封じられた。今、右手に装着されているそれは只の重石に過ぎない。

神器を使用不能にされた状態で聖剣を相手に戦わなければならない。

（それでも……それでも！）

絶望的な状況に、先の無い未来に折れそうになるが、それでも立ち上がろうとする匙。

しかし、現実は信念も覚悟を全て圧壊させる程の光景を匙に突き付けた。

柱に突き刺さっているデュランダルから光の帯が伸び、アスカロンの剣身がそれを纏う。デュランダルの力がアスカロンに注がれる。

「……マジかよ」

龍殺しと聖なる力。今の匙にどちらも防ぐ手立てはない。

その言葉を呟いた直後、二つの力が重なり合ったアスカロンの一撃が匙の身体を斬り裂く。

力が抜け前のめりに倒れていく最中、匙は決意する。

最後の賭けに出ることに。

◇

匙を切り伏せたゼノヴィアは、軽く息を吐く。
デュランダルの力をアスカロンに流すというのは初めての試みであったが、上手く扱うことが出来た。
特訓の中でゼノヴィアがひたすら行ったのはデュランダルの力の操作であった。じゃじゃ馬で扱い辛い力をどれ程まで精密に制御出来るかをひたすら研鑽した。
今までとは違うデュランダルとの向き合い方に当初はかなりフラストレーションが溜まったが、そんな折にアザゼルが来てゼノヴィアに言い聞かせた。
『はっきり言ってな、お前の聖剣の扱い方は雑なんだよ。この脳筋にデュランダルを渡したのは誰だ！　って思ったもんだぜ。ただその雑な扱い方も一概に間違った扱いとは言い切れないんだよなぁ……。単純さってのは割と聖剣と相性が良いし。でもな、もっと戦い方の幅を広げたければ、そのデュランダルを使いこなせ。その暴れ馬を乗りこなせたとき、お前はきっと色んな聖剣を上手く扱える様になる』
その言葉を信じ、ゼノヴィアは特訓に特訓を重ね、聖なる力を光の帯の様に伸ばして自在に扱うことが出来る様になった。通常の斬撃よりは威力が落ちるものの、射程と変幻自在な動きはイリナの『擬態の聖剣』に迫るものがある。

そして、アザゼルが当初予定していた通り、新たな聖剣として一誠からアスカロンを借り、今の様に振るうことが出来た。アスカロンはデュランダルに比べるとかなり大人しく、初めて振るうというのに、こちらの望むままに力を発揮してくれた。

手から離れた状態でもデュランダルの力を操り、その力をアスカロンに纏わせる。自分の強化だけでなく、応用すれば木場の聖剣も強化出来る、ゼノヴィアの新しい技術である。

木場との共闘でも是非試してみたい。

「――と思っているのだけどね。……匙、君は――」

振り返り、地に伏している匙を見る。匙は未だに倒れたままであった。だが、その右腕からはラインは無数に伸び、生き物の様に蠢いている。右手の神器から伸びているのではない。右腕から直接生えているのだ。

「――何をしたんだ？」

蠢くラインが解き放たれる。急いで回避するゼノヴィア。

伸びたラインは、床、天井、柱、製品など無差別に突き刺さる。そして、ラインが突き刺さった物体、あるいはその周辺が霧散しラインへと吸収されていく。

魔力によって生み出された物体が、魔力に再変換されていく。

今までとは比較出来ない何十ものラインから、膨大な魔力が匙へと注ぎ込まれる。

ゼノヴィアの前で、匙はゆっくりと身を起こし始めた。
両眼が赤く輝き、首から頬にかけてラインが血管の様に伸びている。
「何をした、じゃないな。君は――何になった？」
答える代わりに匙の口からデパートを揺るがす程の声、否もはや咆哮と呼べるものが放たれた。
それは人のものではなく、その咆哮に最も適したものがあるとすれば――
「ドラ、ゴン……！」

継戦、勝敗（前編）

四肢から力が抜け落ちていく。体の熱が消えていく。意識が黒く塗り潰されていく。聖なる気の一撃を受けた匙は今にも意識を手放してしまいそうであった。

だが、ここで眠る訳にはいかない。ここで眼を閉じてしまったら、この戦いに二度と戻れなくなってしまう。

匙は舌を歯で挟み、思い切り噛む。貫く様な痛みが脳内に響き、鉄の味が口内に広がる。二つの刺激で僅かではあるが暗かった意識に光が差す。

ほんの少しだけ伸びた猶予。それを一秒たりとも無駄にしない為に、匙は行動に移る。

アスカロンの斬撃を受けて機能しなくなった右手の『黒い龍脈』。龍の頭部を模した籠手の上顎を掴むと一気に広げた。

上顎が真上に向かって開くと中には黒い宝玉が埋め込まれている。これが『黒い龍脈』の核であり、ヴリトラの魂の一部が封じ込まれている。

匙はそれを籠手から外す。手の中で黒く輝く宝玉。一瞬、中が揺らいでいる様に見えた。

『黒い龍脈』は、ヴリトラの力を基にして動いている。神器という道具を介しているからこそ、匙にも龍の力を使用することが出来る。同時に神器を介している為に、ヴリトラの力を一定に抑えられている。

前にマダから『今以上に神器と心を通わせ、ヴリトラを味方にしろ』という助言を受けた。それに従いあれこれと心を通わせる方法を試してみたが、いまいち成果を感じられなかった。

匙はある一つの方法を思い付く。

仮に、神器を介せずにヴリトラの力を使用したのならば？

誰もその結果は分からない。ただ龍の魂に乗っ取られて暴走する。それだけならばまだいい。龍の魂を取り込んだせいで、龍でも無く悪魔でも無い怪物に成り下がる可能性があった。

しかし、セタンタから受けた、『想いを絶やさない限り神器は自分の味方である』という言葉が匙の背を押す。

魂と語らうなら、自分の魂も曝け出さなければならない。

意を決し、匙は宝玉を己の口に運び、それを飲み下して自分の中へと入れる。

匙は、この時知らなかったが、この行為の成否を分ける上で二つの重要なことが起こっていた。

一つは、彼が日々自分の神器に行っていた様々なコミュニケーションである。全く反応が返って来ずに匙は失敗したと思っていたが、ほんの僅か、それこそ絹糸一本程度の繋がりが生まれていた。会話や意思の疎通が出来る程のものでは無かったが、確かに二人を結ぶ繋がりが出来ていたのだ。

そして、もう一つはアスカロンによって『黒い龍脈』が斬られたことである。赤龍帝の力に影響を受け、龍殺しの力を更に増していたアスカロンの一撃は、強烈な刺激となってヴリトラの魂に影響を与え、所謂、気つけとなっていた。

腹の奥に宝玉が落ちると同時に、匙の意識は何かに引き摺りこまれていった。

日々の努力と偶然。どちらかが欠けていたら、この現象が起こることは無かったであろう。

◇

「う、あ?」

目を開けると真っ暗な空間の中にいた。足場も天井も無い黒一色の空間。その中で自分が浮いていることに気付く。

自分の身体を見てみると斬られた傷は無く、当然斬られた痛みも無い。今ある自分が

意識だけの存在であることを認識する。そして、同時にここがヴリトラの魂の中であるとも認識した。

「おぉぉぉぉぉい！」

暗闇の中呼び掛けてみる。声だけが反響し、闇の中に吸い込まれていった。

「いるんだろ！　ヴリトラァァァァァ！」

喉が裂けそうになる程の大声を出すが、やはり声は闇の中へ消えていくだけであった。

「ヴリトラァ！　ヴリトラァァァァ！　ヴ！　リ！　ト！　ラァァァァァァァァァ！」

半ば自棄くそ気味にひたすら名を呼ぶ。ここまで来たのはいいが、ここから先何をすればいいのか正直思い付かなったのである。唯一思い付いたことが、ただひたすら名を叫ぶことであった。

何十、何百と名を呼ぶ。手応えを感じなくても繰り返す。

「ヴリトラ……ヴリトラァァァ……うらぁぁぁぁぁぁ！」

――が、流石に変化が無さ過ぎたせいで遂に匙はキレ始める。心身共に余裕の無い状況もあったため、普段よりも気が短くなっていたせいもある。

「とっとと出てこい、この野郎ぉぉぉぉ！　姿見せろ！　返事しろ！　何でもいいからアクション起こせぇぇぇ！」

……相変わらず、騒々しい、奴だ……

変化が起こった。途切れ途切れな上、掠れて聞き取りづらい声が聞こえたかと思えば、真っ暗な闇の中に二本の赤い線が奔り、それが開き眼と化す。

目の前に広がる黒い闇、それこそがヴリトラだったのだ。

「お、お前がヴリトラなのか?」

事前にヴリトラの姿について口頭で聞いていた匙は、てっきり東洋の龍の様な長く伸びた胴体を持つ姿を想像していた。だが、姿は無くともその威圧感は本物である。

声が耳朶を震わす度に全身から汗が噴き出し、今すぐにでもこの場から逃げろと本能が警鐘を鳴らし続ける。生物としての格の違いをこれでもかと思い知らされている様な気分であった。

期待に、沿えなくて、残念だが、この形の無い、姿こそ、今の、我の姿だ……

匙が心の裡で思っていたことに応えられて驚くが、考えてみれば互いに魂で向き合っている状態である。思っている事が筒抜けなのも仕方の無いことであった。

「形や姿なんてこの際どうだっていい！　あんたの力を俺に貸してくれ！」

我の、力を借りて、何をする?　我が器よ

「勝つんだよ！　ゼノヴィアさんに！　そして兵藤にも！」

一瞬の沈黙の後、空間内に笑い声が響く。

く、くく、くく。聖剣使いと、赤龍帝に勝つと、ほざくか。無謀という言葉を知らぬ、愚か者だな

「笑うんじゃねぇよ！　俺は本気だ！」

ああ、分かっている。本気、なのは。だからこそ、笑ってしまう。龍の魂の欠片、程度手にしたことで、勝てると思っている、その浅慮さに

冷水でも浴びせる様なヴリトラの現実的な言葉。一縷の望みを懸けた存在から希望を断つ言葉が掛けられる。

「あんただって龍王と呼ばれたドラゴンだろ？　そんな自虐的な……」

自虐では、ない。事実を言っている、までだ。既に、聖剣使いならば、まあ、勝てるだろう。だが、ドライグたちは、禁手に、至っている。今のお前と、我の力を合わせても、禁手の力には――

「だからどうしたっていうんだよ！」

赤龍帝の力がどんなものか計れない程、匙は鈍感ではない。このレーティングゲームまでの間に七十二の悪魔であるフェニックス、『神の子を見張る者』の幹部コカビエル、そして、二天龍の片割れである白龍皇ヴァーリを退けているのだ。匙が挑んだ所で一秒と持たず瞬殺されるだろう実力者たちである。無謀なのも無茶なのも分かっていた。分かっている上で今の選択をした。

己の実力も、分からずに、天に向かって吼えるか。我も、運が無い。こんな、愚か者が、器だと、な

「吼えなきゃ見上げることすら出来ねぇだろうが。分部相応に地べたを見下ろしているのが賢い選択だって言うのかよ？　ふざけんなっ！」

負ける可能性が高かろうと、挑まなければ勝つことなど絶対に無い。

「五大龍王なんて呼ばれている癖にさっきから随分と御利口なことばっか言いやがって！　それでも龍王なのか！　ドラゴンなのか！　玉付いてんのかこの野郎！」

闇が捩じれ、無数の束を作ったかと思えばそれらが黒い蛇の群れと化し、叫ぶ匙の身体に巻き付き、締め上げる。

「あぐ、ごあっ！」

お前は、悪魔の癖に、随分要領と頭が、悪いようだ。ここは、我が魂の中、であろうことを、忘れたのか？　お前如き、脆弱な魂など、喰らって、しまっても構わぬのだぞ？

巻き付く黒い蛇が匙の眼前で鎌首をもたげ、黒い舌を挑発する様に震わす。

今なら、許しを乞えば、見逃して、やっても良い。何千年もある、悪魔の生、たった一度の、意地でそれを落とすのは、浅はかというもの。せいぜい、次の機会にまで、力を蓄えておくのが、賢明だな。

ヴリトラは匙に、長い目で物事を見ろと暗に言う。何も間違ってはいない正しい考え方である。匙もヴリトラの言っていることが分からない訳では無い。

しかし――

「……ここで諦めるなんてしたら、俺はきっと一生後悔する！　何百年も！　何千年も！　会長の夢、俺の夢に後悔なんて残したくない！　そして、赤龍帝に！　間薙にも負けたくないんだよ！」

ほぼ同時期に『兵士』となり、その身に神滅具を宿した男、兵藤一誠。何処か自分と似た雰囲気を持つ一誠に、どうしても自分との差を意識してしまい、劣等感を覚えてしまう。更に、赤龍帝と同時期に悪魔の世界へと足を踏み入れた男、間薙シン。

匙と性格が対極にある人物であり、その実力は匙を上回るし、生徒会に入って間もないというのにソーナからの信頼も厚い。本気の戦いはまだしたことが無いが、模擬戦だけで敵わないと悟ってしまう。

自分と同年代にある者たちとの差。勿論その実力に敬意も持っているが、同時に消し去ることの出来ない嫉妬も覚えていた。

だからこそ、このゲームに於いて匙は自らに別の目的を課した。それが赤龍帝に勝つこと。それこそが最もソーナに貢献することだと信じて。背中を見ていた者たちとようやく肩を並べられると信じて。

俗な、理由だな。我が、器。愚か者を、通り越して、馬鹿者だ
「言ってろ。誰が何と言おうと、俺は俺のしたいことをするだけだ」
今、この場で、喰われ、ようとしてもか？
眼前の蛇が大口を開ける。
「喰われるくらいなら――」
匙もまた大きく口を開き、蛇が噛み付く前に蛇の頭部に噛み付く。そのままあらん限りの力を顎に込め、蛇の頭部を噛み砕くと、そのまま咀嚼して呑み込んでしまった。
「俺がお前を喰ってやる！」
ただ喰われるだけだと思うなと、知らしめる様に吼える匙。匙の行動に、闇に沈黙が訪れる。
……くっ
闇が一瞬震える。
ふは、ははは。それぐらい、馬鹿者ならば、まあ良いか
先程よりも幾分か声が柔らかくなったかと思えば、匙を拘束していた蛇たちが消え、体が自由となる。
「えーと……これは？」
急展開に追い付けない匙は戸惑ってしまう。

少し、試させて、もらった。仮にも、我が力を以て、二天龍に挑もうと、するのだ。途中で、折れる様な者に、力など、貸したくは、ないからな

今までの言動はヴリトラからの試練の様なものだったらしい。それを知った途端、急速に恥ずかしさが湧いてくる。勢いとはいえ少々、では済まない暴言を言ってしまった。

「えー、ヴリトラ、さん。何か色々と失礼なことを――」

今さら、下手に出て、どうする。それに、今より、我とお前は、対等だ

「……ちなみに、もし俺を試してダメだったらどうなっていた？」

宣言通り、お前の、魂を、喰っていた

「……」

さっきまでの、威勢は、どうした？　お前の言う、タマはついているのか？

言い返され何も言えなくなってしまうと共に、龍でも軽口を言うのだと感心を抱いてしまう。

無駄口は、ここまでだ。そろそろ、行くぞ。覚悟は、いいな？

問う声に匙は躊躇無く頷く。

では、行くぞ。――意識を、保たせろ

周囲の闇が匙の身体に纏わってきたかと思えば、匙の体の中へ吸い込まれていく。

「ぐ、あああああああああああ！」
体の中に今まで感じた事の無い力で満たされていく。
身体の細胞が無理矢理覚醒されていく様な。
閉じていた感覚がこじ開けられていく様な。
奥底に仕舞われていたものが力尽くで引き摺り出されていく様な。
確かに言えることがあるとすれば、確実に身に余る力であった。
感情を、昂らせろ。我が魂と、同調しろ。呑まれるな、我が器……いや
全ての闇が匙の体へと納まったとき、真っ白な空間の中で声が響く。
我が分身よ

◇

咆哮を上げる匙に、ゼノヴィアは瞠目する。明らかに普通の状態では無い。更にその身からは切り伏せる前よりも膨大な魔力が放たれていた。
匙は唸り声を出しながら、床や天井、製品などに突き刺していたラインを引き抜き、今度はゼノヴィアによってつけられた傷にラインを潜り込ませる。
かすかに呻く匙。数本のラインが血管の様に数度脈打つと傷口から引き抜かれ、匙が

右腕を振るうと突き刺されていたラインの先から大量の血が吐き出され床を真っ赤に染めた、かと思いきや、その血痕も瞬く間に消え去ってしまった。
ゼノヴィアが見ている前で聖剣によって出来た傷口に肉が盛り上がり、傷口を塞いでしまうとそこに皮膚が張り、傷跡一つ無い状態になる。十秒にも満たない早回しの様な再生であった。
それを見たゼノヴィアは、匙が何をしたのかを理解する。傷口に挿したラインで血液ごと流し込まれた聖なる気を取り除いたのだ。理屈は簡単だが、実際にするには至難の業であり、それを目の前で行った匙にますます警戒を強める。
ドラゴンを彷彿とさせる咆哮。膨大な魔力。超絶的な技術に異常なまでの再生。
何が起こったのかと考えたい所だったが、相手がそんな猶予を与える筈も無かった。
匙が右腕を振るう。籠手ではなく右腕から直接生えだしている無数のラインが、それぞれ独立した動きをしながらゼノヴィアを襲う。
「くっ！」
初撃を移動することで回避したが、避け切れたのはほんの数本。ゼノヴィアの移動に合わせ、残りのラインが一斉に方向転換し追いかけてくる。
接触寸前まで迫るラインに、ゼノヴィアはアスカロンを振るう。一振りによって複数のラインの先端が斬り飛ばされた。龍殺しの力によってどれも手応え無く斬れる。

それでもラインの数は一向に減らない。このまま戦っても不利だと思い、場所を変えようと片足に力を込め、それを一気に解放し距離を取ろうとした。

（――何だと？）

床を蹴り付けた瞬間、足裏がすぐに床に着いた感触があった。『騎士』の俊足ならば一回蹴るだけで十数メートルの距離を移動することが可能である。だというのに、今のゼノヴィアは一メートルも移動していない。

何が起こったのかと視線を下ろす。そこで彼女は見た。自分の足に巻き付く黒いライン。斬り飛ばした筈のラインの先端が生物の様に独立して動き、ゼノヴィアの足から力を吸い取っていたのだ。

不覚と心の中で自分の失態と油断を自責するが、前情報も無くこれに対処しろというのは酷なものである。しかし、勝負に於いて一瞬の油断も敗北に繋がる。この場合、彼女は運が悪かったのである。

彼女は、今の匙がどこまで出来るのか知らない。

動きを阻害されたゼノヴィアに匙のラインが襲い掛かる。腕や脚に巻き付き締め上げる。

「なんの！」

完全に拘束される前に巻き付いたラインを切断しようとし、アスカロンを振り上げよ

うとし――

「あ、ぐぅ……！」

その腕が止まる。

突如として起こる脱力感。手足から力が抜けていく。体を支える筈の足は体の重みで震え出し、持ち上げる筈の腕は、ただそれだけの動きだというのに、重力が蜘蛛糸の様に絡みついてぎこちない動きとなる。特にアスカロンを握るのは苦行に等しいものとなり、今にも指が剥がれ落ちそうになる。

（こんなにも、剣を、重いと感じるとは……！）

初めて剣を握った時よりも更に重く感じる。自分が何も出来ない幼子になったかと思える程の非力さが体を支配していく。

それでも意地でアスカロンを手放さないゼノヴィア。

匙が右腕を後方に向けて振るう。ゼノヴィアの体は抵抗する間も無く引っ張られた。

「ガアアアアアアアアアッ！」

人外の叫びを発しながら、匙は左手で拳を作る。その途端、骨の折れる音が数回鳴り、握り締めた指が歪な形に変形する。あろうことか、強く拳を握り締めたせいで自らの指を砕いてしまったのだ。明らかに自分の力を制御出来ていない。

尤も、ゼノヴィアにはそれを見る余裕も聞く余裕も無い。ただ、引き寄せられた先に

ある自分に向けられて放たれようとしている拳にしか意識を向けられなかった。
アスカロンを横に構え盾代わりにする。
ラインに引っ張られたゼノヴィアが最接近した瞬間、匙は床が陥没する程踏み込み、その勢いに乗じて左拳を放っていた。
拳がアスカロンの腹に命中。斬らずとも龍殺しの力を帯びたそれに触れると、匙の拳は裂け、龍殺しの力により血が蒸気の様に霧状に噴き出す。しかし、匙は構わず殴り抜ける。
ラインによって力を吸い取られているゼノヴィアの腕力では、匙の全力を受け切ることは出来ず、アスカロンごと胸部を強打された。
体の中に響き渡る骨の音。数本砕けたのを感じながらゼノヴィアは殴り飛ばされた。
そのまま十数メートルの距離飛んで行く――かと思いきや、再び絡みつくラインに引っ張られ、ゼノヴィアは空中で急停止する。
「がはっ！」
無理矢理停止させられたことによる負荷がゼノヴィアの体に苦痛として襲い掛かる。特に胸骨が折れた状態でのそれは表現のしようの無い激痛であった。
再度引き寄せられるゼノヴィア。この時、彼女は二撃目を耐えることが出来ないと悟っていた。防ごうにも体が自由に動かず、今出来ることはせいぜいアスカロンを落と

さずにしているだけである。
自分の体を壊す様に拳を握る匙。その姿を見てゼノヴィアは覚悟を決めた。
再度床を力強く踏む込む匙。
そのとき、何かが外れる音と共に匙が倒れ込んでしまった。
匙が転倒してしまったことでゼノヴィアはそのまま匙の頭上を通過。そのままラインが外され床に投げ捨てられる。
床の上を転がった後、ゼノヴィアは四肢を着いて体を起こす。急には立てずその場で何度が咳き込んだ。咳き込む度に胸部に痛みが生じる。
痛みに耐えながら、何が起こったのか確認する為に匙の方を見る。匙は唸り声を上げながら既に立ち上がっていたが、体の重心が片方に傾いている。見れば、先程踏み込んだ足の膝から下が横に出っ張っている。膝を脱臼していたのだ。そこで初めてゼノヴィアは変型した匙の左手に気付き、戦慄する。
「自分の力をコントロール出来ていないのかっ！」
それに応じる様に咆哮を上げる匙。完全に理性を失っている様にしか見えなかった。
匙は左足を引き摺った状態でゼノヴィアへと駆け出す。体が片側に大きく傾ける走り方で俊足と呼べる程の速度を出す。
剣を突き立て無理矢理体を起こすゼノヴィア。体の内側では高熱の様な痛みが発し

続けられているが、それに悶える時間は無い。
駆けながら匙は右腕を振るう。不規則な軌道を描きながらラインもまた宙を駆ける。
迫るラインの動きを一本一本把握しながら、ゼノヴィアは最小且つ最速の動きを以て、最も接近したラインを斬る。そしてすかさず手首を返して剣の軌道を変え、続けて迫るラインに斬り下ろしの一撃。骨と筋肉から生み出した力を、柄を握る手、柄頭に当てた掌に伝導させ、上から来るラインをまとめて数本切断する。
軌道の変化の際、一切の淀みも無い滑らかな斬撃の連続。瞬きの間に描かれた銀の軌跡は十を超える。ラインの接触を許さず全て薙ぎ払われていく。
一見順調に見えているが、振るう度にゼノヴィアの神経を痛みが焼き続ける。それにより無意識に起こる体の硬直が剣の鋭さを徐々に鈍らせ、蓄積したそれがやがて致命的な隙を作り出してしまう。
ラインを切断し次を斬ろうとしたとき、斬撃よりも早くラインがアスカロンの柄に巻き付く。ラインの動きが早まったのではない。ゼノヴィアの剣の振りが遅くなったのだ。
匙がラインを引っ張る。抵抗しようとしたゼノヴィアの指は呆気なく剥がれ、アスカロンは遠くへと投げ捨てられる。
無手となってしまったゼノヴィアに、匙は咆哮を上げながら飛び掛かる。

だが、それを迎えるゼノヴィアの表情に絶望は無い。何故ならばこの展開こそゼノヴィアが望んでいたものだからだ。

「来い！　デュランダル！」

ゼノヴィアの声に応じ、柱に突き刺さっていたデュランダルは空間の歪みの中に消え、同じくしてゼノヴィアの手の中に新たな空間の歪みが生じる。そこに手を入れ引き抜くと同時にデュランダルを引き摺り出し、飛び掛かってくる匙を迎え撃つ。

匙もデュランダルのことなど眼中に無いのか、あるいは認識出来ない程本能的に動いているのか、デュランダルの聖なる輝きに臆さず右腕を振り上げる。

聖剣の一撃と黒龍の一撃。どちらに勝敗が上がるのか。それとも引き分けとなるのか。その結果は誰にも予想出来ない。

やがて二人の間合いが交わり、その疑問に答えが出ようとしたとき――

「ほぐあっ！」

振り上げた右拳を何故か自分の頬に叩き込み、そのまま近くのショップに頭から突入していった。

「……なぜ？」

意味の分からない行動にゼノヴィアは呆然としてしまう。

一方、ショップの中に突っ込んでいった匙はというと――

「……ん？」

体に載った品物を落としながら顔を上げる。獣染みた咆哮しか出さなかった口からようやく理性を感じさせる声が発せられ、それに伴い、赤く輝いていた両眼が、今は片目しかその輝きを放っていない。

何故自分がこんな所で横たわっているのか分からず暫しの間呆けていたが、頬と体を駆け抜けていく激痛で一気に覚醒する。

「い、いでぇぇぇ！」

思わずその場で悶え転がるが、それが更なる痛みを呼び悶絶する。片頬がジンジンと痛み、左手と足がいつの間にか変型する程負傷していた。

「い、一体何が！」

それは自分でやったことだ。我が分身

頭の中でヴリトラの声が響く。途切れ途切れではなく、はっきりとした喋り方をしている。

「お、俺が？」

呑まれるなと忠告した筈なのにあっさりと魔力に溺れてしまうとは……意気込みだけは一人前だが、実力は半人前以下だな

辛辣な評価と共に溜息を吐かれた様な気がした。

「暴走してたのか……？　俺？」
見事なまでに畜生と化していたな。成るならばせめてドラゴンらしい振る舞いをしてほしかった所だ
揶揄われているのは分かった。しかし、猛烈な羞恥に襲われている匙は何も言えず、痛みとは違う悶えに苦しむ。
ただでさえソーナの望まない様なことをしているのに、そこに更なる心配を重ねる様な真似をしてしまった。ソーナだけでなく観客も見ていると思うと、恥ずかしさで消えてしまいたくなる。
扱い切れ無かった魔力でお前の体を修復している。怪我をしていて良かったな
皮肉なのか本気で言っているのか分からないが、ヴリトラの言う通り激痛がだんだんと薄れていく。
「まだ戦えるよな、俺？」
ここから先は我も助力しよう。扱い切れ無い分の魔力はこちらで制御する。お前は、全力であの聖剣使いの小娘を倒せ
「本当か？」
久々の現世の空気だ。もう少し味わっておきたいのでな
ラインが伸び、ショップ内にある魔力で構成された物へと突き刺さると魔力に分解し

吸収する。
体の中に大量の魔力が入り熱くなってくるが、頭の中にまでその熱は届かず、逆に冴えてくる気すらした。
畜生の時間は終わりだ。ここから先は、黒龍の戦いをあの小娘に見せてやれ
言い終えると同時に、体中にあった痛みが完全に消える。折れた指も、脱臼していた膝も元の形へと戻っていた。
品物を押し退けてショップの外に出る。するとショップの前にはゼノヴィアが立っており、慌てて身構える。ゼノヴィアもまたデュランダルを構えるものの、その目は戦う相手を見る目では無く、心配する様な不安気な眼差しであった。
「……どうかしたのか？　ゼノヴィアさん」
「どうやら打ち所が良かったようだな。正気に戻って安心した」
敵対しているというのに、本気の安堵の息を吐かれた。
ヴリトラの宝玉を呑み込んだ直後からショップに突っ込んでいる状態になるまでの間の記憶が飛んでいる匙には何故こんなに心配されているのか知る術が無い為、その間自分がどんなことをしでかしたのかと不安を覚えてしまう。
「いきなり吼えたり唸ったりした挙句、自分で自分を殴り飛ばした時には流石に驚いた」
「そんなことしてたの!?　俺!?」

ヴリトラの言う通り、本当に畜生の様になっていたらしい。
「さて仕切り直しと――いこうかっ！」
馴れ合うのはそこそこにして、ゼノヴィアはデュランダルを振り抜く。剣先から聖なる気を具現化した光の帯が、相手を惑わす様に不規則な軌道を描きながら舞う。
触れれば即敗北に繋がるそれの動きを、瞬き一つすることなく目で追う。
頭上まで移動してきた光の帯は突き立てる様に急降下してくる。
横に跳び回避する匙。光の帯はそのまま床に突き立つ――ことはなく、跳ね返って横に逃げた匙の後を追って来た。
「うおっ！」
慌てて身を屈めて避ける。背部に感じる聖なる気。その途端、全身に鳥肌が立ち理由も考えるよりも先に身を屈めたまま床を蹴り、転がっていく。先程まで匙が居た場所に光の帯の先端が下りてきた。
転がりながらそれを見ていた匙。光の帯は匙に暇を与えることなく追い掛けてくる。
「このっ！」
床を転がっている不安定な体勢から右腕のラインを伸ばす。複数のラインが光の帯に絡みつき締め上げる。
ラインと光の帯を繋げ、このままデュランダルの力を吸収しようと考え、巻き付いて

いたラインから力を吸う。すると光の帯が溶ける様に薄まっていくが、同時にラインも崩れて消えていく。

「いいっ！」

愚か者。今の我とお前の力では直接聖剣の、それもデュランダルの力を取り込められん。自滅するだけだ

頭の中で叱咤するヴリトラの声が響く。ラインが消えたのはヴリトラの判断からであった。途中で消したことにより、デュランダルの力を取り込まずに済んだ。

理性が飛んでいたときは本能的に避けていたが、取り戻した途端こうも下手を打つとはな

「分かった！　分かったよ！　悪かったな！」

未熟さを指摘されながらも光の帯を一応だが避け切ってみせた匙。だが、そのせいで一時的とはいえ右腕の無数のラインが消えてしまっていた。その隙をゼノヴィアは容赦なく突いてくる。

ラインを警戒し中距離から仕掛けていたゼノヴィアは、すぐさま近距離へと切り替え、デュランダルを振り上げながら匙との距離を一気に縮める。

匙が反応したときには、既にゼノヴィアはデュランダルを振り払う体勢となっていた。

左手を借りるぞ
「えっ？　――おい！」
匙が了承する前に左手が勝手に動き出し、今まさに振るわれようとしているデュランダルの前に突き出される。
斬られる、と匙が恐れで身を震わせるが、左手だけは別の物の様に微塵も動くことはなかった。
振るわれた聖剣の軌道と、匙の左手が交差した直後――
「馬鹿な……」
動揺した声がゼノヴィアから上げられる。
「マジかよ……」
匙もまた似た様な声を出していた。
デュランダルの刃が匙の左手によって止められていた。正確に書くならば、匙の左手の中で燃える黒い炎によって阻まれている。
我が黒炎の結界は、たとえ聖剣であっても易々とは斬れん
盾として使われている黒炎が、今度は矛として聖剣へと燃え広がろうとする。これ以上触れ続けることは不味いと判断し、ゼノヴィアは後方へ下がる。
「こんなことも出来るのか……！」

ラインによる吸収だけでなく、新たに黒炎を生み出す力を使えたことに少し感動する。

力を吸い取るなど我が力の一端に過ぎない。そして、この黒炎も然り

本来ならば黒炎を操るのも、それを盾の様にして扱うのも、ヴリトラ由来の別の神器の能力である。封じられているヴリトラの魂から能力を引き出す目的に適した媒体、即ちそれがヴリトラの神器であった。しかし、今の匙は分割されたものとはいえヴリトラの魂、すなわち力を得ている状態にあった。神器ではなく自分の体を媒体にしたことにより直接ヴリトラの力を引き出せ、『黒い龍脈』以外の能力を扱うことが出来る様になった。

だが、当然それにはデメリットも生じる。

消えていた右腕のラインが突然伸び出し、近くにある床や商品に繋がり、それを魔力に変換し吸収し始める。

「どうしたんだよ？　突然――」

こうやって魔力を吸収しなければ我が力どころか、我が意識すら保てん

ヴリトラを覚醒させたことによるデメリット。それがこの魔力の燃費の悪さである。

覚醒当初、周囲の物を吸収したのもこのせいであった。

匙本人の魔力だけでは足りず、他で補うことで無理矢理力を行使しているのが現状で

ある。そういった意味では今回のフィールドが選ばれたのは運が良い。もし周りに魔力を吸収出来るものが無ければ、三分も持たずに匙の魔力は枯渇し、指一本動かせない状態となっていただろう。

重要且つ生命線に関わることをいきなり聞かされた匙は当然驚き、慌てる。

「ええっ！　そうなのかよ！　もっとこう、ドラゴン特有の魔力がたっぷりと蓄えられているとか――」

ほんの数分前まで封じられていた我にそんな都合の良いものがあるわけなかろう

「さっきから何を独りブツブツと言っているんだ？」

ヴリトラの声が聞こえないゼノヴィアには、匙が独り慌てふためきながら独り言を喋っている様にしか見えず、打ち所が良すぎたせいで頭のネジが外れてしまったのではないかと思い始めていた。

そんな場違いなことを考えつつ、戦いの為の思考は次にどう攻めるかを必死に検討していた。

変幻自在に動き、こちらの力を吸い、更に数もあるライン。デュランダルの一撃すらも防いでみせた得体の知れない黒い炎。奇行後から戦い難い厄介な相手へとなっていた。

匙から意識を逸らさず視線だけを僅かに動かす。匙によって床に投げ捨てられたア

スカロンを視界の端で捉える。
距離にして五メートルも無い。『騎士』の速さを以てすれば瞬く間に取ることが出来る。
アスカロンの龍殺しの力ならばあの黒い炎――恐らくヴリトラの力――も攻略出来るのではないかと考える。また、まだ試してはいないがアスカロンとデュランダル、二本の聖剣を同時に扱えばその相乗効果で、今まで以上の力を発することが可能であろう。
匙に勝つ為にはアスカロンを手にする必要がある。
――などということを考えているのであろうな
ヴリトラはこの後のゼノヴィアの動きを推測し、それを匙に伝える。
聖剣二本と相手取るのも一興か
頭の中にヴリトラの好戦的な感情が伝わり冷や汗が出てくる。ヴリトラには楽しいかもしれないが、匙からすれば自殺行為である。
（待て待て待て！　流石にそれは不味いだろ！）
ゼノヴィアに動揺を悟られない為に匙は心の裡で叫ぶ。
……と完全に復活した我ならば真っ向から受けて立つ所なのだが、この不完全な状態ではそれは蛮勇か

あっさりと自分の言ったことを撤回してしまう。相手への理解が浅い為か、いまいちヴリトラの考えが分からず、精神的な疲労を覚える。

尤も完全でも少々手を焼くかもしれないがな

（だったら尚更止めないといけないだろうが！）

落ち着け、我が分身。ここまで予想しておいて、我が何もしないとでも思っているのか？

「え？」

意外な言葉に匙は思わず声を出してしまう。この瞬間、匙の意識は完全に内に居るヴリトラへと向けられた。

自分への注意が外れたのを察したゼノヴィアが駆け出す。最速の動きでアスカロンに接近し、最小の動きでそれを取ろうとする。

咄嗟にラインを伸ばしてそれを止めようとするが何故か伸びない。ヴリトラが止めているのを感じ非難する意思を飛ばすが、返ってきた答えは――

もう既に決着はついた

――勝利の宣言。

ゼノヴィアがアスカロンを掴み取った瞬間、ゼノヴィアの手が黒い炎に包まれ、そのまま腕、体と燃え広がっていく。

『なっ！』

匙とゼノヴィアが揃って驚きの声を出す。

その位置は我が炎の範囲内だ。火種を仕込ませてもらった

黒い炎を何とかして消そうと払うが炎は消えずますます燃え移っていき、やがてゼノヴィアの全身を呑み込んでしまった。

「お、おい！　やばいだろ！　これ！」

知人が容赦無く丸焼きにされていく光景に、流石に声を荒げてしまう。戦闘不能状態になればフィールド外へと転送されるが、炎の勢いを見てこのまま焼け死ぬのではないかと思ってしまった。

慌てるな。我が黒炎は敵を焼き尽くす炎ではない。敵を奪い尽す炎だ。あの黒い炎は敵の力を糧にして燃え盛る

ヴリトラの炎に焼かれた者は灰になることはない。しかし、一度その炎に焼かれれば、五体に流れる力は炎を燃え上がらせる薪として強制的にくべられ続け、一滴も一絞りも残さずに奪われる。

黒い炎に焼かれたゼノヴィアの体が徐々に沈み始め、とうとう地面に伏せてしまう。

じきに指一本動かすことも出来なくなる。あの小娘の戦いもここまでだ

黒い炎に包まれたゼノヴィアが、今どんな表情をしているのか匙には見えない。だ

が、きっとあの炎の中で抗う為に、歯を食い縛り必死の形相を浮かべているのを幻視した。少し前の自分にも同じ様な表情が張り付いていたのだ。

カツン、という硬い物を突いた音。倒れ伏せているゼノヴィアの両手の聖剣が床に突き立てられた音であった。

二本の聖剣を支えにし、ゼノヴィアが体を起こそうとしていた。

ほう……？

とっくに体力が底を突いていてもおかしくないというのに、それでも尚立ち上がろうとするゼノヴィアに、ヴリトラは少し感心した声を出した。

まだ立とうとするか。大したものだ。だが――

燃え上がる黒炎から無数の炎が伸び、それが床に突き刺さると今度は縮み、立ち上がろうとするゼノヴィアを地面に引き倒す。更にそこから炎が複数伸び床へと刺さる。まるで鎖の様にゼノヴィアを床に縛り付けてしまった。

「凄え……」

黒炎を浴びせられても抗おうとするゼノヴィアの執念と、それを上回る力を見せつけたヴリトラに対し、思っていたことが自然と口に出てしまった。

しばらくの間黒炎の中でもがくゼノヴィアであったが、その動きも止まる。

「すまない……皆」

そんな声が聞こえた直後、ゼノヴィアの姿が消える。
『リアス・グレモリー様の『騎士』一名、リタイヤ』
アナウンスが聞こえ、ようやく一つの戦いが終わったことを実感したが、勝ったという高揚感を覚えることは無かった。所詮はヴリトラの力を借りての勝利である。そこに自分の実力がどれ程含まれているのか。更に言えばヴリトラが居なければ、ゼノヴィアの最初の一撃でリタイヤしていた筈である。
その力を呼び出したのは紛れも無くお前自身だがな
「……何だよ。慰めてくれるのか？」
ネガティブなことを考える匙にヴリトラが声を掛けた。
こんな所で立ち止まっていては困るからな。――赤龍帝に勝つのが目的なのだろう？
赤龍帝――兵藤一誠に勝つ。その言葉に体の中に熱が駆け巡る。
「そうだな。こんな所で突っ立って暇なんて無いよな」
その通りだ。――ドライグの力を感じる。奴らは向こうに居るぞ
ヴリトラの示した方向へ匙は全速力で駆け出した。

Ｅｘｔｒａ　Ｓｔｏｒｙ　黒龍と予言者

匙元士郎にとって一つ忘れられない記憶がある。
それは、彼がまだ小学生の頃の出来事であった。
父と母、小学生の妹と母に抱かれる生まれたばかりの弟を連れ、近くのスーパーに買い物をして帰路に着いたときにそれは起こった。
その時の匙は、妹と追いかけっこをしながら遊んでいた。父や母が転ぶから危ないと注意をしていたが、構うことなく笑いながら走り続ける。
「あははは、あう！」
前方に何かがあったらしく後ろを振り返っていた匙はそれに気付かず当たって尻餅をついてしまう。
前を向くとそこには十代後半ぐらいの少年が匙を見下ろしていた。その目を見た瞬間、匙は震えた。その眼光は幼い匙から見ても普通のものではなく、野犬の様な獰猛さを秘めた目をしていた。
それに気付かない両親は、すみませんと言いながら匙に近寄り起こす。そして、匙にも謝る様に促す。
しかし、匙は口を閉じたままであった。目の前の少年が怖く口が動かないのだ。

「別にいい」
初めて少年が口を開く。言葉に何故か喜色が混じっている様に聞こえた。
少年は何気ない動作でズボンのポケットに手を伸ばす。そして、そこから掌の中に収まる楕円形状の物を取り出した。全員が見ている前でそれに指先を伸ばし、折り畳んでいたものを取り出す。
現れる銀色に輝く刃。折り畳み式のナイフを気軽な動作で匙たちに突き付けた。
「代わりに俺にあんた達の財布くれない？」
いきなりのことに匙たちは唖然とする。平和であった日常に起こる突然の凶行に言葉を失ってしまう。
「早くしてくれるか？」
急かす様に少年はナイフを軽く振る。
今起こっている現実に思考が追い付いたのか、匙の母が思わず悲鳴を上がようとした。
「うるさい」
だが、まるで最初から分かっていた様に少年の手が匙の母の口に伸び、それを押さえてしまう。
妻へのこの行為に固まっていた父は怒鳴りながら少年を押さえようとするが、それを

あっさりと躱し、それどころか足を引っ掛けて転倒させる。
「邪魔だな……死ぬか？」
匙に突き付けていたナイフを今度は父の方に向け、匙の母を押さえたまま近付いていく。
両親が危ない。そう思ったとき、匙は叫んでいた。
「や、やめろぉぉぉ！　父さんに近付くな！　母さんを離せ！」
「元兄！」
手を滅茶苦茶に振り回しながら少年へ突撃していくが、少年は迫って匙を躊躇なく蹴り飛ばした。
「うわっ！」
地面に倒れ伏せる匙。だが、これにより少年の対象が両親から匙へと移る。
少年は匙に近付くと、髪を掴んで顔を無理矢理上げさせた。
「父さんと、母さんに、近付くな！」
「へえ……」
匙の顔を興味深そうに眺める少年。
すると少年は顔を歪めて笑う。匙は人生で初めて狂気というものに触れた気がした。
「人間、一皮剥ければ血と肉の塊に成り下がる――かと思ったら、意外と中に面白いもん

が入っているらしいな。くくくく」
少年は匙の髪から手を放すと、もう興味は無いといった態度でさっさと立ち去ろうとする。
だが、途中で足を止め、匙の両親に視線を向けた。
「あんたら、車には気をつけた方がいいな。可愛い家族を苦しめたくなかったら、な」
意味の分からない言葉を残し、少年は笑いながら去っていった。
この日から数か月後、匙の両親は交通事故に遭う。父は死に、母も日常生活は送れるものの働くのは無理な体になってしまった。
匙は悪魔に転生してから時折あの日の出来事を思い返す。
あの少年は未来を予知していたのではないか、と。

継戦、勝敗（後編）

小さな頃から鏡に映るのが嫌いだった。
鏡に映ると怖いものが向こうから覗いてくるからだ。
ずっとずっと鏡が怖くて泣いていた。両親を困らせるのが悲しかった。
だけどある日、怖い日は終わりを告げた。
私の恐怖を終わらせてくれたのは一人の悪魔。
ソーナ・シトリー。
貴女の為ならば、私は何度でもこの身を鏡に映そう。

◇

視界全てに映り込む鏡の破片。椿姫の鏡の神器による結界。それに囲まれ中心に立つ木場は、体の至る箇所から流血していた。深い傷では無いが、それでも数が多い。
流れ落ちる血によって、木場の足元は赤く染まりつつあった。
「はあ……はあ……」

大量の出血のせいで木場の顔色は悪く、疲労の色も濃い。しかし、その両手に一本ずつある聖魔剣は強く、そして固く握られており、木場の意思まで弱っていないことを表していた。

『こういった嬲る様な真似はしたくなかったですが……』

同じく鏡の結界の中にいる椿姫。重なり合う声が示す通り、椿姫の姿は一人では無く、複数あった。

鏡に映った像を利用した魔術であり、それにより声や姿だけでなく、まるでそこにいるかの様な存在感すらも感じられた。

かつて似た様な技を使ってきた者がいたが、その人物と比べれば幸い椿姫の身体能力は劣る。木場一人でも目の前の数を捌くことは可能である。

しかしながら、目の前の分身たちには一つ厄介な仕掛けがあった。

本物を含めた椿姫の幻影たちが一斉に長刀を構える。その動きに一切の違和感は無く、見るだけでは見抜くことは出来ない。

椿姫たちが同時に木場へと攻撃を仕掛ける。ある者は右から。ある者は左から。別の物は正面から。頭上から。足元から。とことん逃げ場を潰してくる。

左右から首を刈る様に刃が挟み込んでくる。振るわれた刃の質感や、肌で感じた圧迫感も本物のそれであった。

だが木場は聖魔剣でそれを防ぐことはしなかった。限りなく本物に近い。しかし、何処か違和感を覚える。言葉では正確に言い表すことが出来ない感覚。ただ漠然と何かが違うとしか言えなかった。

長刀の刃が木場の首元へと迫り、そして交差し通り過ぎる。刃が通過した木場の首から血は流れず、傷一つ無い。感覚に従った通り、幻影であった。

息する暇も無く正面から長刀が突き出される。これもまた己の感覚に従い、無防備で受ける。刃が木場の胸に突き刺さるが、背中から突き出た刃に血は付いていない。これもまた幻影であった。

幻影の刃をその身で受ける木場であったが、決して楽なことではない。これ以上体力を消耗させない為の策である。いくらまやかしといっても、精神的にはかなり負担を強いられていた。誰であろうと何であろうと、斬られて良い気などしない。

最初は回避や斬るなどして幻影を散らそうとしていた木場であったが、前述の事情によりそれも封じられていた。

担いだ構えから振り下ろされる斬撃。この時、木場の直感が警鐘を鳴らす。この一撃は本物であると。

すかさず木場も聖魔剣を斬り上げた。駒としての格は椿姫の方が上であるが、身体能力ならば木場の方が上回っていた。一瞬遅れたとしても、先に刃が届くのは木場の方で

ある。

「っ！」

しかし、木場が目を見開く光景が次の瞬間に起こっていた。

木場と本物の椿姫との間に割って入る幻影の椿姫。振り抜く斬撃を途中で止めることが出来ず、木場の刃が幻影を斬り裂く。

幻影と共に砕け散る音。椿姫の姿が消えた後に細かく砕けた鏡の破片が現れ、そこから波動が生まれ、木場に襲い掛かる。

「くうっ！」

斬った直後に放たれたそれを、身を捩って回避しようとする木場であったが、間に合わず脇腹を掠めていく。掠めた制服の箇所は斬られ、皮膚まで達しており、流血で赤い染みを作っていく。

不安定な体勢から聖魔剣を床に叩き付け、その反動で追撃を避けられる位置にまで移動する。

今受けた攻撃こそ、この合わせ鏡の結界の厄介な仕掛けである。

椿姫の幻の中に『追憶の鏡』の破片を紛れ込ませることで、木場からの攻撃を反射しているのだ。最初のとき何も知らずに幻を斬った途端、胸に切り傷を刻まれ、その痛みと何が起こったのか分からず戸惑ってしまった。

幸いと言うべきか、本来の能力なら相手から受けた衝撃を倍にして返すのだが、破片ということで等倍、あるいはそれ以下の衝撃としてしか返ってこない。それでもダメージと痛みは無視することが出来ないものであり、仮に手を抜いて幻の相手をしようならば、即座に本物が攻めてくる。

相手する側としては嫌らしいと言うしかない。

逃れようにも木場の周囲には常に鏡の破片が漂い続けており、攻撃すれば当然カウンターとして返ってくる。

やれることがあるとすれば、偽物と本物を見極めて戦うことぐらいである。

距離をとった木場に対し、椿姫たちが再び攻めてくる。

本物の攻撃と偽物の攻撃。神経を削る様な見極めをしながら、木場は反撃の機会を窺う。

だが、やはり今の木場には精神的余裕が無いと言える。何故ならば、幻影に対し対処しつつある現状を前にして、相手が今まで通りの戦い方をし続けると無意識に思っているからだ。

肌にヒリつく殺気の雨を浴び続けながら待つ。刃が腕をすり抜け、胴をすり抜け、頭部をすり抜けていく中、無数の中にある唯一の本物を探る。

嘘の刃に紛れ込み、本物の刃が木場の胴体目掛けて薙ぎ払われた。

長刀の刃が木場の胴体に食い込む――直前に木場は床の上を滑らす様な歩法によって後退。刃先が制服の生地を僅かに掠るという紙一重の回避をしてみせた。
大振りを空振ったせいで椿姫の体勢が横に流れる。木場にとって十分過ぎる程の隙であった。
それを狙い、聖魔剣を振り下ろす。
パキン
最早聞き慣れた破砕音。触れてもいないのに鳴ったそれを警戒し、木場は反射的に視線をそちらに向けてしまう。
音の先にあるのは、空振りした椿姫の長刀が鏡の破片を砕いている光景。
ミスをした。という甘い考えなど木場はしなかった。これは椿姫の編み出した結界である。そんな中でこの様な単純な失敗をするなどと思えなかった。
砕かれた破片から波動が椿姫に向かって飛ばされる。しかし、椿姫はそれに目線を向けることをせず、上体を後ろに反らすという最小の動きで避けてしまう。割ればどのタイミングで衝撃を跳ね返してくるのかを熟知しての動きであった。
狙いを外された衝撃が何処かへ飛んで行く。かと思いきや破砕音と共に衝撃が方向を変え、今度は木場に向かってきた。
それを回避する木場だったが、背後でまたもや聞こえる破砕音。木場が振り向くのと

脹脛に裂傷が生じるのはほぼ同じタイミングであった。
痛みにより思わず声を上げそうになる。しかし、この機会を逃さずに長刀を振り下ろしてきた椿姫の行動に対処するため、苦痛ごと呑み込み耐える。
椿姫の長刀を受け止めたとき、脚に力が入り負傷した脹脛から血が溢れ出る。痛みと血を失っていく喪失感に力が抜けそうになるが、それを悟らせない様に必死にやせ我慢をする。弱みを見せれば一気にそこを攻めて来る。
刃を数度交えたが、負傷していても接近戦の技量は木場が上回っており、また聖魔剣も警戒した椿姫も深追いはせず、不利になる前に退いてしまう。
木場は呼吸を整えながら、何が起こったのか冷静に振り返る。
衝撃を反射させて死角からの攻撃。新たに見せた戦い方である。これからは自分だけはなく、椿姫の攻撃による反射にも注意しなければならない。
これだけ優位な立場になっても慎重さを失わない椿姫。付け入る隙を見せないその姿勢は、敵としてこれ以上無い程に戦い難い。時間が経過すればする程に、自分が追い込まれていくのが分かる。
『リアス・グレモリー様の『騎士』一名、リタイヤ』
追い詰められている木場を更なる窮地に追い込むアナウンス。合流することを約束していた筈のゼノヴィアの退場を告げられた。

「ゼノヴィア……くっ！」

共に戦う筈であった仲間の退場に木場は唇を噛み締める。そして同時に思う。誰がゼノヴィアを倒したのか、と。

聖剣という悪魔特攻の武器を持つ彼女が敗北したのは信じ難いことであった。椿姫の『追憶の鏡』の様な力を跳ね返すカウンター系の能力を扱う者とは相性が悪いが、椿姫は木場と戦っており、他にカウンター系の神器を使う者は居なかった筈である。巡の様な、資料には無かった反転させる神器を持つ者がまだいるとなれば話は別だが。

一方、ゼノヴィア退場という情報に椿姫もまた少し驚いていた。当初の予定では椿姫を含むカウンター系の神器を有した者たちが相手をする予定であった。しかし、巡はリタイヤし、『反転』を持つ『僧侶』もまだ動いてはいない。ならば彼女を倒したのは誰なのか。

木場との戦いに集中していた為、把握出来なくなってしまった戦況を通信機で密かに尋ねる。

（会長、聞こえますか？　戦況は今どうなっていますか？）

（……）

（会長？）

（……サジがゼノヴィアさんを倒してくれました。予定通りこのまま進めていきます）

返ってきた答えに椿姫は身震いする。匙がゼノヴィアを倒したということに驚いたからではない。それが気にならなくなるぐらいにソーナが激怒しているからだ。

声に抑揚が全く無い。今にも外に出てしまいそうな感情を無理矢理押し殺しているらしく、機械の様な平坦な喋り方になっていた。ソーナの片腕として付き合いの長い椿姫には、今まで感じたことが無い程ソーナが怒っていることが分かった。

（そ、そうですか。分かりました）

（……貴女も頑張って下さい）

これ以上会話をすることが恐ろしくなり、早々に通信を切上げる。あまり情報を得ることが出来なかったが、改めて考えると匙がゼノヴィアを倒したという事実に遅れて驚きがやってくる。相性から見て決して優位とは言えないが、何らかの方法で勝ったのだろう。そして、その方法がソーナの逆鱗に触れたのが容易に想像出来た。

兎に角、こちらは二名、あちらも二名リタイヤしたことになる。数としては互角だが、流れを見ればこちらが優位と言えた。

ここでエースに匹敵する木場を倒し、優位を確固たるものにしたい。

長刀を構える椿姫。木場もまた両手に握っている聖魔剣を構え、そのまま床へと突き刺した後に手離す。

「何の……つもりですか？」

自ら武器を手放す愚行と呼べる行為に思わず聞いてしまった。仲間が倒されて自棄になったとは少なくとも思えない。何故なら木場の目には強い決意の光があった。
「両手が塞がっていたら、新しい剣も握れないので」
わざわざ聖魔剣を手放すぐらい強力な剣があるのかと考え、椿姫は警戒する。
木場が右手を伸ばす。すると空間に歪みが発生し、その歪みに右手を沈める。歪みから手を引き抜くと、そこには一本の剣が握られていた。
「アスカロン……！」
一誠が所持している筈の龍殺しの聖剣が、今木場の手の中にある。しかし、聖魔剣とアスカロンを比べると聖魔剣の方が性能的に上である。
だが、木場から発せられた力ある言葉に椿姫は耳を疑う。
「ペトロ、バシレイオス、ディオニュシウス、聖母マリア。我が声に耳を傾けてくれ！」
左手を突き出す。左手の先で空間の歪み、そこから裂け目ができ、裂け目の中に手を差し込む。
「嘘でしょう！　そんなことが！」
木場が何をしようか理解した椿姫から冷静な表情が剥がれ落ち、驚愕を浮かべる。
「聖なる刃に宿りしセイントの御名において僕は解放する。――デュランダル！」
空間の中から取り出したのは、ゼノヴィアが所持している筈のデュランダルであっ

た。
「どうして貴方がデュランダルを！」
「ゼノヴィアからの提案です。もし自分がリタイヤした場合、この剣をそのままにしておくのは勿体無いから、限定条件ですが僕に使用の権利を譲る、と」
巨大な力を放置しておくのは確かに勿体無いと思えるが、それでも椿姫には納得出来ないことがあった。
「しかし、貴方には聖剣の適正が――」
椿姫の見ている前で木場はデュランダルを掲げる。すると、その剣身からは眩い聖なる気が発せられる。それは、聖剣を扱えている証拠であった。
「たしかに昔はありませんでした。――でも、禁手のおかげ……いや、かつての同志たちのおかげでこうしてデュランダルを扱えるようです」
聖なる気を静かに放つデュランダルであったが、それを持つ木場の手は何かを抑え付けているかの様に震えている。
「本当に、じゃじゃ馬だな。よくゼノヴィアは平然と振るっていられるね」
デュランダルに込められた力が解放されることを望んで暴れる。それを何とか抑えているが、気を抜けば暴走しそうであった。そういう意味ではもう片方の聖剣がアスカロンで良かった。この聖剣は癖が無く、非常に手に馴染む優等生である。

極端な性格の聖剣二本。だからこそ扱うことが出来るとも言えた。
「聖剣二本とは……計算外だわッ！」
すぐにソーナにこの情報を伝える。一刻も早く伝えなくてはならない。
木場がアスカロンを下斜めに構え、デュランダルを掲げる様に構える。椿姫はそれを見た瞬間、周囲に漂わせていた鏡の破片を可能な限り自分の前方へと移動させて壁にする。
アスカロンに向け、木場はデュランダルを振り下ろす。打ち鳴らされる両剣。相乗し合う聖なる気。交差させたことで生まれる閃光が立体駐車場内を奔る。
周囲に浮かぶ鏡の破片が瞬時に砕け散り、同時に幻影も消える。椿姫が壁にしていた破片も全て粉砕された。だが、『追憶の鏡』の特性上聖なる光は椿姫には届くことは無く、それら全てが破壊の力として木場へ反射される。
自ら発した大き過ぎる力が、全方向から木場へと襲い掛かる。
逃げ場の無い木場は観念したのか、避ける素振りも見せない。
勝った、と椿姫が確信した瞬間――
「――デュランダル・バース」
突き刺された聖魔剣を中心として立体駐車場の地面を突き破り、大小様々な聖魔の刃が飛び出し、反射された力を次々に防いでいく。

先程までの木場ならこれ程までの聖魔剣を創り出すことは出来なかった。だが、デュランダルの力を借りることで、一帯に花の様に聖魔の刃を咲き乱れさせることが出来た。

聖魔剣とはいえ、魔が混じる刃。相反する力に対し反発することなく力を貸してもらったことこそ、木場もまた聖剣自身に扱われることを認められている証とも言えた。

「そんなっ！」

完全に防がれたことに椿姫は愕然とする。多少の計算違いはあれど、ここまでは椿姫のペースで戦いが進んでいた。しかし、二本の聖剣の一撃によりその戦いの流れは一気に木場へと流れ込む。それも最早取り返しのつかない程に。

合わせ鏡の結界全てを破壊され、無防備となった椿姫に木場は最後の攻勢をかける為に、持てる力全てを込めて駆ける。

一歩踏み込むことで姿が消え、二歩踏み込むことで音が消える。

その速さは、『女王』である椿姫ですら反応できず、動き始めることが出来たのは手に持っていた長刀が破壊されたときであった。

眼前に迫る木場。神器を使おうにも短い時間で連続しては使えない。この時になってあの結界を張ったことでのデメリットのせいで為す術が無くなる。

吹き抜けていく風を感じた瞬間眼前にいた木場の姿は消え、跡には十字の傷が刻まれ

た椿姫。
聖剣による傷。最早リタイヤを免れないと悟った椿姫の行動は速かった。
仕舞っておいた、いざという時の為に取っていたフェニックスの涙を、転送魔術によってソーナの下へ送る。
これで折角の回復手段を失わずに済む。
「次に……戦う機会があれば……必ず勝ってみせますよ、木場君」
「はい。ですが、僕も負けるつもりはないです」
消え行く椿姫。最後まで仲間の為に尽くす彼女を、木場は敬意を以て見送る。
『ソーナ・シトリー様の『女王』、リタイヤ』
椿姫の姿が消えた後、木場の勝利を告げるアナウンスが聞こえてきた。
苦戦を強いられた木場の体が休みを求め、痛みという形で悲鳴を上げる。気を抜けばどこかの壁にもたれ掛り、そのまま目を閉じたくなる。
だが、そんな猶予など無い。ソーナの『女王』を倒しても、まだ倒すべき強敵は残っている。
リタイヤした人数は、ソーナはこれで三名。しかし、楽観視出来るものではない。攻撃の要であったゼノヴィアがリタイヤしたとなると、当初の作戦を変更しなければならなくなる。それを埋める為に本陣の朱乃が出るか、もしくはリアスたち全員が出るか。

一誠たちの戦況も気になる。
それと今後のことを確認する為、木場は通信機の向こうにいるリアスに喋りかけるのであった。

◇

至近距離での拳の応酬。それがシンと一誠、小猫の間で行われていた。
一誠が大振りの拳を放てばシンはそれを拳で打ち落とし、小猫が気を込めた拳打を出せば、触れずにそれを避ける。更にその動いた先を読んで一誠が攻めようとすると、シンはそれを先読みし、攻撃が繰り出される前にその部位を殴り付け動きを潰す。
（強え……！）
攻防することで実感するシンの強さ。既に何回も倍化して能力も高まっており、小猫にも『赤龍帝からの贈り物』によって力を譲渡している。最初の頃に比べれば少しずつだが一誠の攻撃は届き始めていた。その証拠に、シンの頬や手に一誠の拳が掠めたことによる擦傷が出来ている。
だが、どうしても直撃しない。二対一という有利な状況で果敢に攻めているのに、シンはそれを尽く捌いてしまう。

先の先により一誠の動きを封じたシン。しかし、それにより小猫に対し背を見せる格好となってしまう。触れるだけで魔力の流れを断ち、体の内部にダメージを与える気の拳にとって大き過ぎた程の的であった。

その背に向け掌打が放とうとする。だが、小猫は見落としていた。シンは背を見せながらもそれ越しに小猫の動きを感じていた。

シンは森で魔獣たちの集団に襲われたときを思い出す。他の魔獣に構っているとき、別の魔獣がシンの喉笛に牙を突き立てようと大口を開けながら殺気を放っていた。今の小猫に殺気は無いが、嘘偽りの無い攻め気が感じられた。どこぞの性根の悪そうな槍使いと比べれば心地良いぐらいである。

フェイント無しに放ってくると確信する。その直後、白い気を纏った掌打が放たれた。

シンは、一誠に打ち付けた拳を引きながら一誠の腕を掴んだ。腕を引っ張り、自分に引き寄せる。

「ッ！」

前のめりになり攻撃の軌道上に入ってしまう一誠。寸での所で掌打を止める小猫であったが、無理矢理止めたせいで動きが硬直してしまう。

その瞬間シンは掴んでいた手を離し、前傾姿勢となっている一誠の背に掌を叩き付

け、それを支えにしてシンは体を持ち上げる。
跳び箱の様に一誠を跳び越えながら、小猫に向けて横蹴りをする。
足の爪先が小猫の側頭部に突き刺さるかと思われたが、硬直から抜け出した小猫の交差した腕がそれを受け止める。
直撃は避けたものの蹴り飛ばされる小猫。
着地したシンに体を起こした一誠が拳を振り上げて殴り掛かってくるが、振り下ろされる前に懐に入ると一誠の頭を腕で挟み、殴り掛かってきた勢いのまま床に向けて投げ飛ばす。
一誠は水切り石の様に床を何度も跳ねながら小猫の側で止まる。背中に手を当て痛がりながらもすぐに立ち上がり、シンの方を見た。
「痛う……！　どうすりゃいいんだか……」
現状に思わず本音が漏れる。
焦りが生じる。先程のアナウンスでゼノヴィアか木場がリタイヤしたのを知った。どちらにしろかなりの痛手である。
一誠たちの戦況も良くは無い。
こちらは攻め切れ無いことや体の痛みで表情を歪めているというのに、シンは相変わらずの無表情を続けており、顔色一つ変えない。左手からは未だに血が滴っており、巻

き付けた布がそれを吸って赤黒く変色しているというのに。
状態だけみれば一番の怪我を負っているが、当の本人はそれに構わず普通に左手も使っている。
何一つ変化を見せないというのはこれ程までに畏怖と重圧が掛かるということを一誠は初めて知った。
そして、一番効くのがシンが放つ一発一発の拳である。兎に角、痛いという以外説明しようが無い打撃。体に打ち込まれる度に痛みが杭の様に刺し込まれ、それが残る。修行で散々痛みに耐えてきた一誠も出来れば避けたいと思う程であった。
「こうなったら……！」
最終手段である禁手を使用することを考える。ただし、発動すれば禁手に至る二分間は、倍化も譲渡も出来ない状態でシンの攻撃をやり過ごすしかなくなる。
賭けに近いが、現状を打破するにはもうこれしか無かった。
「スター――」
「……ちょっといいですか？」
開始しようとした直前小猫が制服を引っ張り、待ったをかける。
「……一つ試してみたいことがあります」
「試してみたいこと？」

シンに悟られない様に小声での会話。
「……上手くいけば間薙先輩に私の気を打ち込むことが出来るかもしれません」
「一体どういう方法で？」
小猫は手短に自らの案を説明する。聞かされた内容に一誠は少し驚いた表情をするも、すぐに真剣な表情となる。
「それで行こう」
即決する一誠に小猫は目を見開く。
「……いいんですか？　イッセー先輩も危険なんですよ？」
「まあ、そんときはそんときさ。それに俺を信じろって言ったのに、俺が小猫ちゃんを信じないなんて不公平だろ？　ドライグもいいだろ？」
『好きにしろ。これはお前の戦いだ』
「だってさ」
一誠が歯を見せて笑う。小猫は目を伏せ、少し赤くなりながらも礼の言葉を言った。
「……ありがとうございます」
「じゃあ、やろうか！」
「……はい！」
構える二人を見て、シンは少し目を細める。何か仕掛けてくるつもりらしいが、それ

が何かは全く分からない。
二人はシンが余裕そうに見えているらしいが、シン本人は決して余裕がある訳では無い。二人同時に相手をすれば嫌でも体力は消耗していく。『戦車』の特性を持つ小猫が頑丈なのは分かるが、一誠もまた硬く頑丈になっており、何発打ち込んでも倒れる気配が無い。一体どんな修行をしてきたのか、シンは少し気になった。
魔力による大技を使用すれば二人揃って倒せたかもしれないが、今のシンはそれを使用することを避けていた。原因は左手の傷である。小猫の気によって体内の流れを乱されていたことを気にしていた。流石に右手も左手の様にはしたくない。
また一誠の禁手に関しては強く警戒しており、素振りを見せたらどんな状況でも即潰しに掛かるつもりだが、中々その動きを見せない。
一誠の禁手を倒せるかどうかは分からないが、発動したらそのときは使用時間を可能な限り消費させるつもりでいた。
小声で話し合っていた一誠と小猫が横並びになって構える。何かを仕掛けてくるつもりらしい。
油断せずに二人を見詰めるシン。
先に動いたのは一誠側であった。
並走しながら距離を詰めて来る一誠たち。

すると一誠がシンに向け左掌を突き出す。『赤龍帝の籠手』に覆われた掌の中央で赤い魔力が収束し始める。ドラゴンショットを放つ構えであった。

周囲を破壊する覚悟で放つのかと思い、どう対処するべきか思考を動かす。

すると一誠は、掌の中で圧縮された魔力をシンに向けて放つのではなく、掌で握り潰してしまう。

途端、『赤龍帝の籠手』の端部から魔力が噴出し、それによって一誠の動きが加速。間合いを一気に詰めた。

相手の思わぬ動きに回避が間に合わなかったシンは、迫る拳に対し両手を重ねて受け止める。

受けた瞬間腕内部を抜けていく衝撃で肩が脱臼しそうになる。踏み締めていた筈の両足は一誠の勢いに負け、床を滑っていく。重ねていた左手に力が籠り過ぎて血が噴き出してくるが、それでも力を緩めず一誠の拳を受け切った。

シンが数十メートル後退した後、『赤龍帝の籠手』の噴出は収まる。

思いもよらない技に内心舌を巻く思いのシン。一方で一誠もまた似た様な心境であった。

マダとタンニーンとの修行があまりに酷過ぎて少しでも逃れたい、何処か遠くへ行きたいという切実な想いから生まれたこの技。『赤龍帝の鎧』状態で使用した噴射を限定

的に発現させたものだが、初見で受け切られるとは思わなかった。因みマダとタンニーンの前で初めて使用したときは、いつもよりも十秒程長く逃げることが出来たが、その後に捕まりいつもの二倍しごかれる羽目となった。

しかし、受け止められた一誠に焦りの気持ちは無い。この形こそ一誠たちが望んでた状態であったからだ。

シンは一誠を押さえ付けながら小猫の姿を探る。が、右にも左にも小猫の姿が無い。彼の探している人物はすぐ側にいた。目の前に立つ一誠のその背後。一誠の背に手を当てて構えていた。

白い気が小猫の手に灯る。この時になりシンは小猫が一誠の背後にいることに気付く。だが、最早手遅れであった。

小猫は短く切れる息を吐きながら、押し当てていた手を突き出す。一誠は背に軽い衝撃を感じると共に、体の中を何かが通り抜けていく感覚を覚えた。

痛みは無い。暖かみすら感じる。

打ち込まれた力は一誠の体を通り、その先にあるシンの体に流れ込んだ。その瞬間、シンの右肩が一度だけ震える。外の変化はそれだけであったが、内部ではあらゆる気脈を乱され、体内を蹂躙されていた。

俯くシンに、一誠は小猫の策が成功したと悟る。

一誠の体を通して、シンに気の一撃を与える。それこそが小猫の策であった。気は体内を巡る気脈に乗せることで別の気脈まで届かせるという、荒業にして精密業。これにより、一方は無傷のままで片方を再起不能にすることが出来る。だが、一歩間違えば一誠をリタイヤさせていたかもしれない。実戦でこれを成功させた小猫。それを了承した一誠。どちらも並外れた精神を持っていたからこそ、それを可能とさせた。

気の一撃による内部破壊。どれだけ頑強な肉体だろうと耐え切れるものではない。

一誠も小猫も、このときは少なくとも勝ちを意識してしまっていた。

「……先輩っ！」

最初に気付いたのは小猫。断ち切ったと思われたシンから微かに気が発せられている。それは、まだ意識を失っていないことを示している。

一誠が反応したときには側頭部に手の甲が叩き込まれていた。

脳を揺さぶる衝撃。頸部に掛かる圧力。

『耐えるな！　折れるぞ！』

いち早く察したドライグの指示が脳内に飛ぶ。その言葉に従い一誠は両足から力を抜いた。突如、世界が逆さまに映る。

一誠にはこのとき分からなかったが、後ろに立っていた小猫は、殴られた勢いで体勢が百八十度回転する一誠の姿を見ていた。

何が起こったのかと一誠が理解する前に、腹部に一撃を受ける。
一誠の体を抱き止めた小猫だったが、一誠の背後にいたせいで反応が遅れ、きちんと止めることが出来ず、追撃で二人揃って飛ばされた。
「ご、ごめん！　大丈夫かい！」
「……大丈夫です」
下敷きになっている小猫から慌てて退く一誠。しかし、殴られたせいでその場で二三歩よろけてしまう。
視界がぶれる中、一誠はふらつきながらもシンの方を見た。幸い拳を突き出したままの体勢でその場から動いていない。だが、その静けさが不気味とも言えた。
俯いていた顔を上げる。その顔に苦痛の色は無く、不変とも言える無表情を貫いている。
効いている筈。きっと効いている筈なのに、一誠も打ち込んだ本人である小猫も、もしかしたらという疑念を抱いてしまう。
「……ドライグ、行くぞ」
目の前の敵を確実に倒すには最早これしかない。
「スタート！」
『Ｃｏｕｎｔ　Ｄａｗｎ！』

遂に発動させた禁手。宝玉に至るまでの時間が表示される。これから二分間、倍化も譲渡も出来ない。地獄の特訓でいじめられた、もとい鍛えられた肉体を信じ、耐えきってみせる。

目の前の敵に集中する一誠。故に最初にそれを感じ取ったのは小猫であった。

「……っ！　イッセー先輩、誰かが――」

「え？」

四方から現れた黒いラインが一誠の両手両足胴体に巻き付く。途端に地面に引き摺り倒され、そのまま凄まじい勢いで何処かへ引っ張られていく。

「先輩！」

咄嗟に手を伸ばすが間に合わず、一誠の姿はすぐに食料品売り場の外へ消えてしまった。

「間薙イイイィ！」

食料品売り場に響き渡るは匙の声。

「こいつは俺が相手をする！　そっちは任せた！」

返事は待たず一方的に言い残していく。

特に反対することは無く黙って見送るシン。しかし、懸念することもあった。匙の魔力が普段以上に大きくなっており、尚且つ何かが混じった様な感覚がした。あのときデ

パートを揺さぶった咆哮から大凡理由は察せる。全く不安が無いと言えば嘘になるが、あれだけはっきりと自分の意思を告げたのだから、恐らくはまだ正気なのだろう。

一対一となり不利となった小猫。だが、その顔に焦燥は無く確固とした意思が感じられた。寧ろこの状況を望んでいたのかと思える程、その目は闘志によって激しく燃え盛っていた。

「……間薙先輩は凄い人ですね」

小猫は構えながらシンとの距離を詰め始める。

「……手加減無く気を打ちました。きっと貴方の体の中はボロボロの筈です」

シンは答えず、突き出した拳を引いて迎え撃つ構えをとる。

「……それなのに顔色一つ変えないなんて」

じりじりと詰められる距離。やがてその距離は互いの間合いと重なる。

「……凄いですけど、怖い人です」

苦しみや痛みを全く外へ出さないシンへの敬意と畏怖を混ぜた、小猫の率直な感想であった。

互いの拳が届く位置。そこで打ち合わず微動だにしない二人。次の一打を思考する静寂。それだけで空気が張り詰め、見る者に緊張感を与える。

沈黙を続ける両者。それを破り二人を動かしたのは、遠く離れた場所から聞こえてき

た破壊の音であった。
それを合図にして二人は拳を放つ。
先に動けたのは小猫。その後にシンが動く。突き出される小猫の拳とシンの縦拳。その軌道は重なっており、間も無く打ち合うこととなる。
気を纏う拳に触れた瞬間、シンの敗北は決まる。相打ちを覚悟して放った小猫は、シンの行動に僅かな疑問を抱いた。
やがて両者の拳が衝突し合う――かと思われたとき、突然シンの拳が軌道を変え上向きに逸れていった。
小猫の拳が腕の下に潜る形となったとき、シンは腕を曲げ突き出された肘を小猫の腕目掛けて振り下ろす。
腕に鉄杭でも捻じり込まれた様な痛みと共に拳が叩き落される。丁度、気を纏った箇所とそうでない箇所との境目を上手く狙っての一撃であった。
『戦車』の特性を軽々と貫いていく激痛に、小猫の体が刹那の間硬直する。
その有るか無いかの隙を見逃さず、シンは更に踏み込み、小猫の胸部に右腕を叩き付けた。
背部に突き抜ける衝撃。しかし、気を失う程では無い――これでシンの攻撃が終わりだったのなら。

押し付けた右手で小猫の制服の右肩口を掴むと、小猫を掴んだ状態で走り出す。
小猫の体は浮き上がり地面と足が離れる。この状態ではシンの走りを止めることが出来ない。ここにきて二人の身長差が大きく影響してきた。
シンは小猫を持ち上げたまま走る。目指す先にあるのはデパートの壁。
小猫も逃れようと抵抗するが、シンの腕が小猫の肩と腕を押さえ付けている為動かせられない。
壁へと接触しようとした瞬間、右腕に交差させる様に左腕が押し当てられる。
前から炸裂する貫く『突撃』。その力は小猫の体を通り抜け背後の壁に伝わると、小猫を中心として大きな亀裂が発生。罅割れは床、天井まで伸びる。足元の舗装は割れて歪になり、上からは大小の破片がパラパラと落ちて来る。
破壊。その一言に尽きる一撃を受けた小猫は声すら発することが出来なかった。不思議と痛みは無い。ただ間も無く自分の意識が途切れることだけが分かった。
シンは小猫を掴んでいた手を離す。浮いていた小猫の足は地面に着き、そのまま前のめりに倒れる。
だが、小猫の体が地面に横たわることは無かった。前に立つシンの胸に額を押し当てる形で止まる。
「……ありがとうございました」

意識を失う前にこれだけは伝えたかった。ある意味で感謝の言葉だった。シンの強さを信じて全力を出し、そして負ける。きっと自分はもうこの力に怯えることは無いだろう。何故なら間違った道を行こうとしても止めてくれる人、正してくれる人が居ると証明されたのだから。

「……やっぱり強いですね。先輩は」

その言葉を残し、小猫の体は光に包まれ場外に転送された。

『リアス・グレモリー様の『戦車』一名、リタイヤ』

アナウンスが小猫の退場を告げる。

シンが咳き込む。咄嗟に手で口を押える。その手を離すと、掌にはべっとりと血が付着していた。

決して楽な戦いでは無かった、それがシンの抱いた感想。

シン自身も気付いていなかったが、この戦いの中で一つの幸運があった。一誠越しに打ち込まれた気。本来の状態ならばあの一撃で戦闘不能まで追い込まれていてもおかしくはなかった。だが、あの時のシンは万全では無かったのだ。

負傷した左手。あれこそシンが生き延びた理由である。

気とは即ち生命の流れ。気の一撃が流し込まれる際、シンの左手からは大量に流血していた。それによりシンの左手から腕は殆ど死んだ状態であった。生命の流れが無い

物に気は流し込めない。これによって、小猫の気の効果は半減以下となっていた。
それでも気を流し込まれたのは事実。小猫が言った様にシンの体内は傷だらけの状態となっている。気を打ち込まれてから一言も発しなかったのは、今の様にダメージを負っていることを悟られない為であった。
「強い、か」
一人残ったシンが呟く。
「――楽なことじゃないな」
手に付いた血を振り払いながら、シンは次の戦場を目指す。

リアス・グレモリー残り５名。
ソーナ・シトリー残り５名。

尽力、全力

「一進一退……中々面白い展開になってきたじゃねぇか」

モニターに映る戦いを見ていたアザゼルが勝てば負け、負ければ勝つという目まぐるしい戦い模様への感想を洩らす。

実力からしてリアスの方が大差を付けるかと思われたが、蓋を開けて見れば、『停止世界の邪眼』を持つギャスパー。デュランダル使いのゼノヴィア。猫？であり仙術を扱う小猫が落とされている。

「いいねいいね、こういうのは。酒が美味くなる」

その隣りで同じく観戦していたマダは上機嫌に笑いながら、テーブルに置かれた酒瓶を手に取ると、そのまま一気に飲み干す。並みの悪魔なら酔い潰れる度数の酒を、水でも飲むかの様に取り込む。彼の前のテーブルには、レーティングゲームから今に至るまでの間に彼が飲み干した数十本の空瓶が置かれていた。

「つーか、ソーナ側が見せた『反転』って、お前たちが研究してた人工神器じゃなかったか？」

その指摘に、アザゼルは苦虫を噛み潰したような表情となる。

「どこの誰かは知らんが勝手に提供しやがって……大方試作品のデータを取りたいが理由だろうな」
「試作品か。使っても問題無いのか」
「無い、とは断言出来ん。自分に無い能力を後天的に付与するのは下手をすれば寿命を縮めるし、そのせいで本来使用出来た能力が使えなくなるリスクもある。俺としてはお勧め出来んが。――ともあれ、あれをソーナ・シトリーたちは覚悟して使っているだろう」
「若い奴ってのは無茶をする」
「それで若い芽が潰れたら元も子もない。今後のゲームでは使用を禁止するか、それか俺に話を通してもらわないとな」
　人工神器に関して知識は、ほぼ堕天使側が独占している。天使や悪魔側にも技術提供はしていくが、それでも危険防止や安全対策を万全にするには研究者であり責任者でもある自分が判断すべきだ、という考えであった。
「あのがむしゃらさが面白いけどなぁ」
　あくまで楽しむ様子を見せるマダ。
「そのがむしゃらさも度が過ぎれば命を危険に晒す。自分は勿論だが相手もな」
　他人の生き死にを楽しんでいるともとれるマダに、アザゼルは苦言を呈する。

「……聞きたいと思っていたが、ギャスパーの件、何で横槍を入れた？」
　レーティングゲームそのものが台無しになるかもしれないという理由から、アザゼルはギャスパーの神器を封じる為の道具を作成していた。しかし、土壇場になって魔眼封じの使用がキャンセルされ、折角作った物が無駄になってしまった。理由は知らされていなかったが、先程のリアスとソーナの会話で原因がマダであることを知った。
「横槍って言うんだったら、お前のやってることも同じ様なもんだろうが」
「あん？」
「戦いってのは、自分と相手だけのもんだ。外野があれこれ口出しするのは気に入らねぇ。口出しし続けた結果、戦いがショーか見世物にまで落ちるのなんて見てられねぇからな」
　戦いというものはあくまで当事者たちのものと主張するマダ。
「言っておくがな。レーティングゲームってのは殺し合いじゃないんだよ。自分たちの持つあらゆる力を見せ、それぶつけ合う為のもんだ。ルールを決めるのも、第三者が審判するのも、熱が入り過ぎるのを止める為だ。相手の命を奪って上か下かなんて決める時代じゃないんだよ、今は」
　これはマダの言う戦いではなく試合であり、決まり事があるのは命を奪い合うことを避ける為と主張するアザゼル。

静かな言い合いであったが、互いに互いの主張を譲らないという確固たる意思が感じられた。このまま更なる議論に発展するかと思われたが、二人揃って大きく息を吐き出す。

「――まあいいか。レーティングゲームのあれこれを決めるのは悪魔側だ」

「――戦いの定義なんてそれぞれだ。あれだこれだと決めつけてもしょうがない」

これ以上言い争っても話が平行線のままなのが分かっていた。付き合いが長い二人からこそ出来る、会話の打ち切りである。

あくまで自分たちはこのレーティングゲームを見学する側。それがあーだこーだと言うことこそ真剣に戦う彼らに失礼である。

さっきまでの主張の衝突がまるで無かったかの様に話を戻す。

「しかし、シトリー側なんて眷属全員まさに命懸けってやつじゃねぇか。特に匙の奴なんてそれを通り越して前代未聞のことをしでかしたしな」

マダが指しているのは、匙のヴリトラ覚醒のことである。その時のＶＩＰルームは騒然としていた。匙が何をしようとしているのか真っ先に気付いたアザゼルなど、ＶＩＰルームを飛び出して、匙を直接止めに行こうとする事態にまでなっていた。

思い出して笑うマダをアザゼルは横目で睨む。

「たまたま上手くいったからいいものを……失敗したら悪魔でもドラゴンでもない化け

物に成り果てていたかもしれんのだぞ？」
「確かに。でけえ賭けだったな。まあ、本人がどこまでリスクを把握していたのかは知らんが」
アザゼルが想定していた最悪の事態をマダも肯定する。
決してあの時のアザゼルの判断は大袈裟なものではない。言葉通り匙がヴリトラの覚醒に失敗していたら、肉体を乗っ取られた挙句理性を完全に失った状態となり、周りの魔力を手当たり次第に取り込み、仮初の体を形成しドラゴンもどきと成って、取り込む魔力が無くなるまで暴れ続けるという未来になっていた。この場合、レーティングゲームは中断され、ゲーム主催者側によって抑えられるか、もしくは排除されていたであろう。
当の本人が想像していたよりも遥か上の最悪の事態。それへの動きがレーティングゲームの外で起こる寸前であった。
「……お前、あいつに変なことを吹き込んでないよな？」
疑いの眼差しを向ける。
「おいおい。いくら俺でもヴリトラの魂を呑め、なんて助言する訳ねぇだろうが。ゲーム開始前にせいぜいヴリトラとは仲良くしておけよとしか言ってねぇよ」
マダの考えは、そうしておけば神器の中で眠っているヴリトラが戦いの熱や想いに反

応し、多少は力を貸してくれるというものであった。結果としてはその斜め上の行動をされたが。
「しかし、不完全とはいえあれほど魂をバラバラにされたヴリトラを呼び起こすとはな……。リアス嬢を応援させてもらっている手前、あまり声を大にしては言えないが……大した小僧だ」
　二人の話に入ってくる新たな存在。同じ五大龍王であるタンニーンであった。現在の彼は会場に入る為に体を縮めており、掌に乗れるほどの大きさになっている。現にタンニーンが話している場所はマダの肩であり、止まり木の様に腰を下ろしている。
「俺とお前が直々に鍛え込んだ赤龍帝が、ヴリトラ相手にどれ程足掻くか見物だな」
　笑うタンニーン。その言葉に違和感を覚えたアザゼルが口を挟む。
「逆じゃないのか？　未熟とはいえ禁手が出来る赤龍帝に不完全な覚醒のヴリトラがどれだけ喰らい付くのかと思うもんだが？」
「ただの力押しだけではヴリトラには勝てん。何せ奴の戦い方は嫌らしいからな。今の赤龍帝とヴリトラでは相性が悪過ぎる。地獄を見るのは赤龍帝の方だな」
　タンニーンの断言は、アザゼルにとって不意打ちの様なものであった。確かに覚醒直後とはいえ、ゼノヴィアを手玉にとってみせた。ゼノヴィアもこれから匙が相手をする一誠も直線的な戦い方をする。そう考えるとタンニーンの言葉に説得力が増す。

「そこまで言うか」
「力を借りているだけならここまで言わん。恐らくだが、ヴリトラの意識も表に出てきているぞ？」
「マジか？」
　タンニーンは匙の戦い方を見てヴリトラの意を感じ取った。黒い炎の慣れた使い方に見覚えがある。
「……お前はヴリトラと戦ったことがあるのか？」
「――まあ、一度か二度な。小競り合いの様なものだ。あの頃は若かったしな」
　長く生きたアザゼルも初耳であった。本人は軽く言っているが、ドラゴン同士の戦いなどそれこそ天変地異に近い騒ぎと被害が起こっただろう。
「で、結果は？」
「引き分けだ」
「参考までに聞かせてもらえるか？　ただの力押しで勝てない奴にお前はどう戦ったんだ？」
「ただの力押しが駄目なら――」
　そこで一旦言葉を区切る。
「――もっと力押しで戦ったまでだ」

凄まじいまでに単純な方法、聞いたアザゼルも逆に清々しさすら感じる。側で聞いていたマダなどその解決方法に爆笑していた。
「ははははははははは！　下手な小細工するぐらいなら力で捻じ伏せた方が早いもんなぁ！　いいねぇ！　大好きだぜ俺も。力に物を言わせるのは！」
同調し始めるマダにアザゼルは頭が痛くなってくる。
「――と笑っちゃいたが。タンニーンの言う通りあんまし良くない状況かもな。タンニーンぐらいの力がなきゃまともに戦えねぇってことだ。未熟な彼奴だったらどんなことになるのやら」
一転して真面目なことを言い出す。が、今もその顔はにやけていた。
「心配している割には楽しそうだな」
「可愛い弟子がこれから苦戦を強いられるんだ。喜ばしいことじゃねぇか。試練と苦難は成長の糧だぜ？」
「確かにな。ドラゴンたるもの死線を何度か越えてこそ一人前だ。ましてや赤龍帝。後々のことを考えればまだ足りないな」
マダの考えにタンニーンが同意する。師として愛情みたいなものだろうが、加虐さを感じさせられる。
とは言ってもアザゼルもタンニーンたちの考えには否定的ではない。

歴代最弱ではないかと囁かれている一誠が強くなるには、こういった戦いを何度も経験するしかない。
戦いの先には歴代最強と謳われる白龍皇ヴァーリが待ち構えているのだ。いつかあるだろう決戦の日まで力を付けなければならない。
一方別の観覧席では。
「ほっほっほっ。これまた分からなくなってきた。面白い一戦になりそうじゃな」
モニターの中で黒いラインに引き摺られている一誠を見ながら、オーディンは白い髭を撫でながら愉快そうにしていた。
「サーゼクス」
「何でしょうか？」
側にいるサーゼクスに呼び掛ける。
「あのドラゴンの神器を持つ小僧じゃが」
「赤龍帝の兵藤一誠君ですか？　それとも黒龍の匙元士郎君のことですか？」
「シトリー家の『兵士』の方じゃな」
誰もが注目する赤龍帝ではなく、知名度が無い匙の方にオーディンの興味が向けられていた。
「弱者が大きく化けるのは強者との戦いじゃ。あの小僧、聖剣との戦いで壁を超えよっ

た。レーティングゲームには時折こういうことが起こるから観戦が止められん。さてさて次はどうなる？　聖剣に続いて赤龍帝すら打ち倒してみせるか？」
「うーん。匙君には頑張ってもらいたいけど。あんまり無理したらソーナちゃんが悲しむかもしれないし……。うーん、うーん。お姉ちゃんとしては複雑なしんきょーう」
匙のこれからの戦いに期待と関心を寄せる大神。一方で妹の眷属が無茶をして勝ったことに喜んでいいのか心配をすればいいのか、判断を困らせているセラフォルー。
観客席で大物たちが様々な理由でレーティングゲームに注目する。
そんな中で唯一例外の存在がいた。
「ふぅ……」
モニターに映る戦いを見ながら退屈さからくる欠伸を噛み殺すのは、ロキであった。
誰もが一定以上の熱を以て観戦する中で彼だけは冷めた眼差しで見続けている。
レーティングゲームが開始してから数度目となる欠伸を噛み殺したとき、ロキは徐に席を立ち上がった。
「どうした？」
その動きに素早くオーディンが反応する。ロキは、貼り付けた様なわざとらしい笑顔を浮かべながらオーディンの方を見る。
「流れ出る血に、少々中てられてしまいました。少し外の空気を吸ってきます」

白々しい嘘に皮肉の一つでも言いたくなるオーディンであったが、ここで言い争って熱を帯びた場の空気を冷やすのを避け無言で頷く。

一礼し席を離れるロキ。オーディンは御付きのヴァルキリーに目配せをする。ヴァルキリーはその目に込められた意味を察し、彼女もまたオーディンから離れロキの後ろに付く。

「お供します」

自分が監視役であることを露骨に示すが、ロキは表情を変えることなく黙って歩を進める。拒絶の言葉を吐かなかったことを許可の証と勝手に受け取り、観客室から出たロキの後を追って彼女もまた部屋の外に出た。

部屋を出るとロキが数歩先を歩いている。オーディンの命に従い、ここから先不審な動きを何一つ見逃さずに監視を続けることを、ヴァルキリーは強く決意した。

そんな彼女の後姿を嘲る様な眼差しでロキは眺めていた。

(出来が良くてもたかがヴァルキリーの小娘如きに私の監視が務まるとでも?)

誤った選択をロキは嗤う。彼女が追っているのはロキが生み出した幻影である。ヴァルキリーの目を欺くのなど、それこそ瞬き一つの猶予さえあれば十分であった。他にも悪魔側の監視する目もあったが、ついでにまとめて欺く。

「もう十分だろう。流石に退屈だ。死にそうになる。——赤龍帝? ふん。例え禁手を

使ったとしても、あの魔人共々敵じゃない」
確固たる自信を以て独り言い放つ。彼にとって赤龍帝も人修羅も脅威では無かった。
「――私が自惚れているとでも？　ふはははは！　私の自惚れはお前の自惚れでもあるぞ？　私がお前が何を考えているのか分からないとでも？」
不気味なのは先程から呟かれている独り言である。明らかにロキ一人しかいないというのに、その話し方は近くに誰かが存在している様な生々しさがあった。
煩わしい監視の目も無くなり、ここからどの様にして時間を潰そうかと考えながらあてもなく歩き始める。
しかし、その歩みは十も進まずに止まり、ロキの視線もまた、ある一定の方向に向けられたまま止まる。
「ほう？　この気配……。ここはお前に出番を譲るとしよう」
とあるＶＩＰルーム。華美な装飾が施された室内で、その雰囲気にそぐわない場違いな面々がモニターに映し出された映像を見つめていた。
シンの仲魔であるピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、ケルベロスたちである。
この部屋は、色々な意味で希少な彼女らが邪な目から避ける為にサーゼクスが用意したものである。部屋の外には数名の悪魔たちによる警護体制も敷いていた。

「頑張ってるねー」
机に盛られた菓子に手を伸ばしながら呑気な感想を洩らすのはピクシー。
「ヒホ！　オイラが王様になったら家来を引き連れてゲームに参加するのもいいホー」
いつかを夢見るジャックフロスト。
「ヒ～ホ～。ギャスパーがすぐに負けてボクはつまんないよ～。あ～あ、残念ざ～んねん」
友の敗退に不満を洩らすジャックランタン。
「グルル。コウイッタ戦イモアルノカ」
野生の世界で生き抜いてきた為、ルールが有るレーティングゲームを初めて目の当たりに関心を寄せるケルベロス。
それぞれが異なった感想を抱きながら試合の行く末を見守る。
――筈であった。
「アオォォンッ！」
真っ先に異変に気が付いたのは、この中で最も力が長けたケルベロスであった。その場から大きく跳び部屋の端まで移動すると、全身の毛を逆立てながら先程まで自分が居た場所に向かって威嚇し始める。
ケルベロスの突然の行動に、ピクシーたちは目を丸くする。だが、そこでピクシーた

ちも気付いた。
自分たちしか居ない筈のこの部屋に、見知らぬ人物が居ることに。
「……誰？」
「誰だと思う？」
ピクシーの問いに、前触れもなく現れた人物――ロキは笑いながら揶揄う様に問い返す。
もし、彼を知る者が居れば驚くだろう。彼の浮かべる笑みは見たこともない粗野なものであった。

◇

「おわあああああ！」
いきなり引っ張られ、そのまま床を引き摺られていく一誠。何とか巻き付いている黒いラインを剥がそうとするが、しっかり食い込んだそれを容易く外すことは出来なかった。『赤龍帝の籠手』の能力が使える状態ならばまだ分からなかったが、禁手に向けて準備を行っている今は能力を発動することは出来ない。
気づけばショッピングモールの中央広場まで一誠は引き摺られていた。どこまで連

れられて行くのかと思い始めたとき、巻き付いていたラインが突然解除され床をそのまま滑っていく。

摩擦によって勢いは殺され、一誠は仰向けの体勢で止まる。見上げて先には時計の柱が立っていた。

「よー、兵藤」

声が掛けられる。それを聞くと同時に、一誠は上半身をバネの様に跳ね起こす。その直後、先程まで一誠の頭があった場所に何かが落下した。

それを確認するよりも先に前方に向かって大きく飛び込み、着地と同時に体勢を反転させ自分がさっきまでいた場所に目を向ける。

そこには匙が立っていた。彼の右足は床を踏み砕いており、それは何が落下したのかを表していた。

「匙……って匙、なんだよな?」

思わず聞いてしまった。

姿形は彼の知っている匙である。だが、赤く輝く片目。右腕に蠢く何十ものライン。首筋から頬にかけて伸びる黒い血管の様な紋様。何より全身から放たれる気配が彼の知る匙とは大きく異なるものであった。

彼の気配に別の何かが混じっている。そんな不可思議な感覚である。

『この気配……まさかヴリトラを呼び起こしたのか？』
察しが良いなドライグ。――まあ、同じドラゴンならば容易いことか
何の気配かを言い当てるドライグ。そこに一誠が初めて聞く声が答えた。その声を聞いたドライグの驚きが一誠にも伝わって来る。
『お前……意識まであるのか！』
くくくく。お前のその反応を聞いただけでも目を覚ました甲斐があったな。贅沢を言えばお前の驚く顔も見たかったが
『……ちっ』
意地悪く笑うヴリトラ。一杯食わされたドライグが不機嫌そうに舌打ちをする。
『逆にこっちはお前のにやけた面を見なくて済んで良かったがな』
言い返してみせるが、ヴリトラは特に気を害した様子も無く笑い続ける。
「え？　ヴリトラって五大龍王の？　神器に封印されていたんじゃないのか？」
『だから俺も驚いている。分割された魂の状態でここまではっきりと意識を覚醒させるとは……小僧。どうやら俺達、いや俺はお前を見縊っていたらしい』
匙の全身から放たれる力は紛れも無く神器の力。ヴリトラの魂の器となることで、匙自身が一つの神器と化していた。それはドライグからしても驚嘆に値する。
評価を改めるドライグに対し、匙は照れる様に後頭部を掻き――

「そんなことを言われたら照れる、なっ！」
――流れる様な動作で一誠に向かって右腕を振るった。
無数の『黒い龍脈』が束になり、一つとなって一誠に襲い掛かる。
「うおっ！」
その不意打ちに対し身を屈めて咄嗟に反応してみせる一誠。頭上を『黒い龍脈』の束が通過していく。だが、しゃがんだ一誠にいつの間にか距離を詰めた匙が顔面目掛けて爪先を蹴り出す。
腕を交差しそれも反応してみせる一誠であったが、腕に爪先がめり込むとその脚力に押され、腕の防御ごと顔を蹴り抜かれ、体が宙を舞う。
鼻の奥まで痛みが貫いていくと同時に、想像を上回る匙の一撃の重さに驚く。
何とか体勢を整え足から床に着地をしてみせる一誠に、匙は手を緩めることなく、更なる攻撃を仕掛ける為に接近する。
近付いてくる匙の姿を捉えた一誠は、仕掛けられるよりも先に仕掛けた。
匙が近付く前に自分から匙に向かって踏み出し、飛び掛かりながら拳を振り上げる。
匙の顔へ打ち下ろされる一誠の左拳。当たる。そう思った時、匙の左手が割り込み拳を受け止めると、そのまま指を突き立てて掴む。
そこで気付く。『赤龍帝の籠手』の宝玉に映る数字。匙の見ている前で六十から五十

九へと数を減らす。
仕留めるならさっさとした方が良い。それは禁手に至るまでの時間だ。今なら奴は能力が使えない
ヴリトラの言葉を受け、匙の中に焦りが生まれる。禁手がどれほどのものかは知らないが、ヴリトラを覚醒させた自分がこれ程の力を得たのである、神滅具級の禁手など、それこそ桁が違う力であろう。
一誠は、掴まれた左手を解放させる為に今度は右拳を匙に向けて振るう。拳の突き出た部位が匙の頬に突き刺さろうとしたとき。
「がっ！」
足に激痛が走り、体が急停止してしまう。目線を落とせば、匙の爪先が一誠の脛を蹴り付けていた。
痛みによる硬直の隙に、匙の肘が一誠の蟀谷に打ち込まれる。痛みと首が折れ曲がりそうになる重さに耐えようとしたが、痛みの箇所に気を向けている間に、匙の蹴りが一誠の腹部に深くめりこんだ。
「ぐはっ！」
そのまま仰向けに倒れそうになる一誠。しかし、その動きは途中で止まる。
一誠の左手に巻き付いたラインが彼の体を支えていた。尤も、それは相手を気遣う様

な親切心からくる行動などでは無い。
　匙が腕を引くと、倒れようとしていた一誠の体が引き上げられる。勢い良く戻ってきた一誠の頬に匙の渾身の正拳が叩き込まれた。
　殴り飛ばされる一誠。このまま地面に落下するかと思われたが、飛んで行く最中再び急停止する。
　一誠を止めたのは、未だに左手に巻き付いているライン。一直線に張ったそれを匙は両手で掴み、全力で振るう。
「うらあ！」
「うあっ！」
　真っ直ぐ飛んで行く筈の一誠が今度は横向きに飛ぶ。しかも飛ばされた先にあるのは床などではなく、待ち構えるのはデパートに置かれた自動販売機。
　慌てて身を守る一誠。その直後に激突し、数台の自動販売機を巻き込む。
　破砕音と共に砕け散るプラスチックの外装。そこから飛び散る商品見本。ひしゃげた取り出し口から大量の缶が溢れ出て、傷一つ無かった自動販売機は二度と使用不可能な程に破壊される。
　残骸の下敷きとなる一誠。
　そんな状態でも匙は手も気も緩めない。

右手のラインを数本伸ばし、無事な自動販売機に接続する。何百キロもある自動販売機は軽々と持ち上げられ、地上から数メートルの高さまで移動するとそこから振り下ろされた。
即席の槌が動いていない一誠に襲い掛かる。
が、直撃する寸前瓦礫を跳ね除けながら一誠が飛び出る。振り下ろされた自動販売機は、残骸の山を粉砕し、それもまた残骸の一部と化す。
何とか逃げ延びた一誠。あと一、二秒程飛び出すのに遅れていたのなら、自動販売機が墓標の様に突き立てられていたであろう。
「あぶねぇ、あぶねぇ」
「よく逃げられたな。やり過ぎ覚悟でやったってのに」
「舐めんなよ。あの自販機よりも大きな岩に潰されたことがあるんだぜ、それも何度も！　あれぐらい軽い！」
「……どんな特訓してきたんだ、お前？」
誇る様に胸を張る一誠。匙の方は、壮絶な特訓の一端を知り、引き気味の反応であった。
一誠も無傷という訳では無い。額に切り傷が出来ておりそこから血が流れ、額、頬と伝わり、顎から血の滴を垂らす。拭う余裕など無い。それすら命取りになる気がした。

その時、頭上からアナウンスが聞こえる。
『ソーナ・シトリー様の『女王』、リタイヤ』
椿姫の脱落を告げられ、匙の顔色が変わった。
いつでも冷静であり、ソーナの右腕として支える頼れる先輩。同じソーナを慕う者として戦い切れ無かった無念を思い、奥歯が軋む程噛み締める。
間も無くして――
『リアス・グレモリー様の『戦車』、リタイヤ』
小猫の脱落が知らされ、今度は一誠の顔色が変わった。
自らの力と向き合い克服しようとした小猫。彼女を倒したのは間違いなくシンである。きっと互いに納得しての勝敗なのは分かっている。だが、後輩の仇をとるのは先輩としての務めである。
気付けば互いに走り出していた。
己の裡に湧いた感情の行き場を求め。そして、それをぶつけ合う為に。
『おおおおおおおおお!』
叫び合いながら互いの拳が繰り出された。
守ることも避けることも一切考えていない捨て身の一撃。
拳は皮膚の表皮一枚めくりながら交差し、お互いの頬へと突き刺さる。

全力の相打ち。その結果は――

「う、ぐ……」

匙がよろける様に数歩後退し止まる。膝が折れそうになるが気合いで持ち応えるが、ダメージで足が震える。

口の中で広がる鉄の味。思わず殴られた頬の内側を舌で触れる。ざらつく裂け目の感触に不快感を覚えた。

打ち負けた。その事実が鉛の様に心に架かる。一誠は殴り合った場から一歩も引かず匙を真っ直ぐ見ている。

神器の能力が封じられた相手に競り負けたことが、匙の中の劣等感を煽るには十分であった。

――時間だな

「え？」

更にそこへ追い打ちを掛ける事態が起こる。

一誠の『赤龍帝の籠手』。その宝玉の数字がゼロとなる。

「ここで立ち止まる訳にはいかないんだよ、匙！　まだ俺はこのゲームでやり残したことがあるんだ！　全開でいくぜ！　ブーステッド・ギアァァァァ！」

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』

目の前で絶対的な力が具現化する。
（なんだこれは……）
場を瞬時に満たす重く、濃く、赤いドラゴンの魔力。想像を軽々と上回るその力を前に呆けるしかない。
ドラゴンを模した鎧姿の一誠。それを視界に収めただけで、まるで巨大なドラゴンの目の前に立たされたかの様な威圧を受ける。
度を越した緊張で舌も喉も動かず、口内が血で満たされていく。
未だ震え続ける膝。それは先程の拳によるものから、別の理由からくるものへと置き換わっていた。
（俺は……勝てるのだろうか……）
命懸けでがむしゃらに戦い続ける最中に禁手化されたのなら、その勢いでこの様なことを考えずに戦えていたかもしれない。しかし、一誠との打ち合いに負け、僅かな動揺と間が生まれた時に至られたせいで、疑念が生まれてしまった。
そんなこと思いたくも無い。でも考えてしまう。一度生まれたものを心の隅に追いやろうとしても、逆に意識してしまう。
負の連鎖へと陥ろうとしている匙の思考。
――不味いな

そんな匙の不安を加速させる様に、ヴリトラが弱音とも言えることを言い出す。

（ま、不味いって、どういうことだ……？）

勝てる見込みが少なくなったということだ。禁手、それも赤龍帝の、だ。これで勝負は――

そこから先の言葉は聞きたく無かった。これ以上追い込まれてソーナの夢が潰えてしまうことを考えたくなった。

故に――

――五分五分といった所か

――後に続く言葉に我が耳を疑った。

「五分五分？」

ああ。五分五分だ

禁手の力を目の当たりにしてもそう言い切るヴリトラ。これが戦意を低下させている自分の為に言っている嘘か、本気で言っているのか匙には分からない。しかし、そんなことはどうでも良かった。

「あははははははははは！」

耐え切れず匙は腹を抱えて爆笑した。いきなり笑い出したことに一誠が戸惑っているのが分かったが、それに構わず匙は笑い続ける。

臆して腰が引けていた自分を笑い。自分の裡にいる頼もしい存在に笑い。それと共に戦える自分の幸運に笑う。
「ははははは！　はあーあ……」
一頻り笑った匙は、笑い過ぎて出てきた涙を拭う。気付けば怯えも劣等感も笑いと共に何処かに吹き飛んでいた。後に残るのは、目の前の男に勝ちたいという強い戦意のみ。
「五分五分なら勝たないとなぁ、ヴリトラ」
最初からそのつもりだ
構える匙を見て、一誠も慌てて構える。
禁手によって自分のペースに持ち込めたかと思えば、匙の思わぬ行動で再び流れを持っていかれている様に思えた。
『奴のラインには気を付けろ。禁手の状態ならばお前の力を吸い取れば体が耐え切れずに自爆しているだろうが、ヴリトラが目覚めているのならばその辺りの魔力の操作を上手くやる筈だ』
先程まで巻き付いていたラインは、禁手化したときの余波で吹き飛ばされていた。同じ方法が何度も使用出来る訳でも無い。魔力や神器の力を吸収する匙のラインには特に注意を払う様に、ドライグが警告する。

ふっ。戦う前から臆したか？　ドライグ？　昔のお前なら何も考えずに突っ込んできただろうに。随分と丸く、大人しくなったな。いっそのこと二天龍の看板も下ろしたらどうだ？　お優しくなったドライグには少し荷が重い看板だ

『――相変わらず口だけは達者だな。その弁舌の才を少しでも実力の方に回せたら、五大龍王の中で最も非力などと陰口を囁かれなかっただろうに』

……

『……』

見えざる火花が散るのが一誠と匙には見えた。正直、当事者でなければ一刻も早くここから離れたくなる。

我が分身よ。あの器ごとドライグを潰すぞ

『相棒。あの小僧ごとヴリトラを完膚なきまでに打ちのめしてやれ』

下手をすれば戦う一誠と匙よりもやる気に満ちている両者。同じドラゴンとして、やはり意識せざるを得ないのかもしれない。

そんなパートナーに苦笑しつつ、言われるまでもなく既に二人の心は戦う準備が出来ていた。

「いくぜぇぇ！　匙！」

「来いよ！　兵藤ぉぉ！」

互いの名を叫ぶ。その姿は、さながら咆哮するドラゴンのようであった。
一誠の背部の噴射口から魔力が漂い始めたかと思えば、それはすぐに火柱の如く噴出しその状態から一歩前に踏み込んだ瞬間、匙の視界から一誠の姿が消えた。
（速っ！）
次に視界に映ったときには既に目の前に立ち、拳を握り、いつでも放てる構えをとっていた。
匙は咄嗟に右手のラインを左手に巻き付け力の限り引っ張る。前部に盾として展開されるラインの束。
一誠はそれに向かって全力の右を打ち込む。
拳がラインの束に接触すると匙に向けて大きく凹む。匙も突き抜けさせまいと全力でラインを張り続ける。
トン、軽い感触が匙の胸を打つ。ラインの盾越しに一誠の拳が触れていた。
強固かつ弾力性に富んだラインの盾に一誠の拳の威力は殺されておりダメージなど無い。
だが、そんなことは一誠にとってどうでも良かった。触れさえすればいいのだから。
『ＪＥＴ』
その音声の後に一誠の拳が再び加速する。

噴射口から膨れ上がる様に一気に魔力が噴射され、突き出した拳を更に押す。
拳が接触した零距離から、穿つ様な一撃が匙の胸部に炸裂した。
「がはっ！」
目が限界まで見開かれ、肺から押し出された空気が無理矢理吐き出される。
重い。ただ重い一撃。盾で防いだ状態でこれなのだから、まともに受けていれば今頃胸骨は粉砕され、即退場となっていたであろう。
痛みで白黒と反転する視界。しかし、匙もただでは転ばない。
もう一撃を加えようとする一誠。その途端体に脱力感を覚えた。まさかと思い自分の体に視線を巡らせると、いつの間にか左手にラインが巻き付き、そこから力を吸い取っていた。
急いでそれを外そうとする一誠。だがそれによって出来た隙を狙い、匙は盾の構えを解き、拳をその身に受けたまま一誠の顔面に横殴りの一撃を見舞う。
自らの腕力に吸い取った魔力を加えての一撃。それを完璧なタイミングで入れた。
だが――
「あぐあっ！」
苦鳴を上げたのは匙の方であった。一誠は匙の拳を受けると同時に、左拳を匙の脇腹にめりこませていた。しかもそれだけでは無い。打ち込んだ匙の拳は、一誠の鎧の強固

さに負け皮が破れ、肉が削げている。攻めた方が逆に負傷していた。
一方の一誠はというと、多少鎧が揺さぶられたが痛みは無く、全くの無傷。
圧倒的力の差。それを切り抜けても、龍の鎧という強固な守りが徹底的に匙を阻む。
脇腹に食い込んだ拳をそのまま振り抜く一誠。匙の体がボールの様に飛ばされ、何度も地面を跳ねた後に雑貨品売り場の店舗に突っ込む、棚や机をまとめて倒してようやく止まる。
「ぐうう……！」
雑貨品を掻き分け、歯を食い縛りながら立ち上がる匙。小さな動きでも脇腹から激痛が走り、傷を負った手は痛みで力が入らない。両方とも骨に亀裂が生じている可能性があった。
「ヴリトラ……！　この傷を治せるぐらいの、魔力は、まだあるよなぁ！」
当然だ。
右腕のラインが負傷した箇所に伸び、傷に接続する。そこから流し込まれる魔力で、負傷した箇所が急速に回復していく。
「これなら――っ！」
痛みが治まり動こうとしたとき、微かな痛みが脇腹に走る。
一瞬ではこの程度が限界か。もう少し時間と魔力をかければ完全に治すことが出来

るが？
「相手が悠長に待ってくれるかよ」
同感だな
匙の見ている前で、一誠が左手に巻き付いていたラインを魔力によって力尽くで断ち切ってしまう。
これでさっきと同じ様な戦い方は出来なくなったな。まあ、魔力を奪ったとしてもあの鎧には力が足りず通じないだろうが。さて、どうする？
それは匙を試す様な問いであった。と同時にこれからどう戦っていくかの方針を尋ねている様にも聞こえた。
「足りなきゃ足りない分足すだけだ！　同じことが通じないなら工夫して通す！」
どう戦っていくかを頭の中で思い浮かべる。その考えを知ったヴリトラが失笑する。
くっ。無茶な上に危うい戦い方だな。が、我が分身――お前の決めたことだ。存分にやれ。多少の危険はこちらが引き受ける
頼もしい相棒の言葉で闘志を燃やし、雑貨品売り場から駆け出す匙。その殆どダメージを感じさせない動きに一誠は鎧の下で驚きつつ、迎え撃つ構えをとる。
距離が離れている段階で匙は一誠に右腕を振るう。無数のラインが複雑な動きをして狙いを定まらせない様にし、あらゆる方向から迫る。

だが、その動きも一誠が右腕を振るった瞬間、そこから放たれる魔力を帯びた風圧により触れることが出来ずに打ち返されてしまう。禁手の力の前ではラインはあまりに軽かった。

尤も、それは匙にとって想定の範囲内のことではあったが。

一誠がラインの接続を嫌がりそれを防ぐ動きを見せたと同時に、匙は両足に魔力を集中させる。そして、ラインが打ち返されるのとほぼ同じタイミングで強化された両足で地面を蹴った。

一瞬でも一誠の意識が匙から逸れるのを見計らっての行動。がら空きとなった懐に匙は潜り込む。

急加速して距離を詰めた匙に一誠はどう対応するべきか僅かに迷い、それが動きにも出てしまう。

一誠の胸部に匙の拳が打ち込まれる。聞く者、見る者が居れば鳥肌が立たせるか顔を顰めるであろう生々しい殴打音と、保身を捨て拳が裂けてしまう程の全力。

「痛う!」

小さくだが呻いたのは一誠の方であった。『赤龍帝の鎧』によって守られている身に僅かな、だが確かな痛みを覚える。

殴り方などが明確に変わった訳では無い。だというのにこの一撃、何故か響く。

続け様に前蹴りが同じ箇所に命中。これもまた身体に響き、数歩ではあるが一誠の方が後退した。
距離が空いたときに一誠は気付く。右腕のラインの内の一本が匙の心臓に伸びていることに。そのラインが何かを吸い取り、右腕に流し込んでいる。
「匙！　お前、まさか自分の命を……魔力に変換しているのか！」
一誠の問いに、匙は顔色を悪くさせながらも凄絶な笑みを浮かべた。
「ただでさえ俺の魔力は低いんだ。お前の魔力を奪っても足りないんだってなら、他のもん削って補うしかないからなぁ！」
どうしてあそこまで響いたのか納得する。文字通り魂が籠っているのだ。今の匙の状態ならば尚更その効果は強く発揮される。
「お前、そこまで……」
「するさ！　命懸けってやつをな！　負けたくないんだよ！　俺の、会長の夢を笑った奴らに！　そして――」
片目から放つ赤い光が一際輝く。
「――お前に」
「何で……俺なんだ？」
匙がずっと対抗意識を持っていることは知っている。だからこそ思ってしまう。何

故自分なのかと。一誠自身の自己評価ははっきり言って低い。悪魔としての素質はほぼゼロであり、歴代の赤龍帝の中で最弱であることも自覚している。今、匙を上回っているのも神滅具あってこその力である。

ただ運が良かっただけ。恵まれていただけなのでは？

度々そんなことも考えてしまう。

聞きたかった。そんな自分に勝ちたいと思う理由を。

「そんなの――お前が強いからだよ」

「――え？」

至ってシンプルな匙の答えに、最初何を言っているのか分からなかった。一誠にとってあまりに聞き慣れない言葉だからだ。

「俺が……強い？」

「こうやって戦ってみて改めて思った。お前は強いよ。だから挑みたい！　勝ちたい！　超えたい！　そう思うのはおかしいか？」

前に宣戦布告された時と同じ気持ちの高揚が、自分の中で起こっているのを自覚する。

「歴代最弱候補の赤龍帝だぜ？　俺は」

「だからどうした？　俺はお前を強いと思った！　どこかの誰かが何と言おうと関係

ねぇ！」
「偶然伝説のドラゴンを宿した運だけのダメ悪魔でもか？」
「偶然だろうが運だろうが全部まとめてお前だろうが兵藤！　胸を張れ！　俺にとってお前は越えたい目標なんだよ！」
　この時、一誠は鎧を纏っていることを心底良かったと思った。目標とまで言ってくれた倒すべき強敵に泣きそうな顔を見られずに済む。
「匙……。お前ってほんと良い奴だなぁ！」
　一誠の全身から今まで以上の魔力が迸る。誰かの目標となるという誇らしさと嬉しさの想いに、神器が反応する。
　ここまで言われたのなら、情けない姿など見せられる筈が無い。
　魔力が更に高まったか。余計なことを言ったな。我が分身
「そうか？　俺も燃えてきたけどなぁ！」
　一誠に呼応して匙もまた魔力を放つ。
「勝たせてもらうぜ！　兵藤ぉぉぉ！」
「それはこっちの台詞だぜ！　匙っ！」
　一誠が駆け出す。一歩で最高速に達し、構える匙の前に瞬間移動でもしたかの様に現れる。

その速さに追いついていない匙。認識したときには一誠の拳は放たれていた。
避けられない。そう判断した匙は後退するのではなく、逆に全力で前進する。
頬にめり込む拳。その痛みだけで悶絶しそうになる。だが、威力が最も発揮する前に接触したことで威力を無理矢理抑え込み、更に殴ってきた腕を掴む猶予さえも出来た。
「ふ、ふはまへたへ」
殴られている状態の為に間抜けな喋り方になってしまうが、匙たちはこの瞬間を待っていた。
味わってみろ。我が黒炎を！
掴んでいる手から黒い炎が灯り、一誠の腕に燃え移る。燃え盛る腕に慌てて腕を振って匙を引き離す。
鎧で守られている為か熱は感じられない。しかし、このまま燃え続けるのは不味いと思い、ラインを消した様に強い魔力で吹き飛ばそうとした。
『待て！　相棒！』
ドライグが制止させようとするが一歩遅く、一誠は腕に向け魔力を注ぎ込んでしまっていた。
瞬間黒い炎は膨れ上がる様に巨大化し、より一層激しく燃え盛る。
「な、何が！　――あっ」

一瞬眩暈が起き、足元がふらつく。
『その炎は魔力や神器の力を糧にして燃える！　力を送るのは逆効果だ！』
ドライグの言葉で自分が先走ってしまったことを悔いる。
『腕への魔力を切るぞ！』
ドライグによって腕への魔力を遮断されたことにより、燃え盛っていた黒い炎はあっという間に小さくなる。だが、完全には消えていない。禁手という力の塊の様なものから鎮火させるには、それこそ神器を解除するしか方法が無かった。
匙が頬に打ち込まれている一誠の拳を引き離す。力が遮断されているせいで倍化も途切れており、片腕だけならば匙の力を下回る。
「しんどいのはこれからだぜ！」
複数のラインが一誠の腕に巻き付き接続された。そこから一気に力が吸い取られ、前よりも強い脱力感が一誠を襲う。
「く、この……！」
接続されたラインを吹き飛ばそうとし、気付く。未だに腕で燻っている黒炎。これがあるせいで、魔力によって吹き飛ばそうとすれば全て黒炎の燃料となるだけ。
「うっ……！」
三度起こる脱力。放っておけば匙のラインが容赦なく一誠の力を吸い取ってしまう。

この状況を打破するには一刻も早く匙を倒すしかない。
しかし――
「おらぁぁ！」
匙の拳が一誠の腹に刺さる。一誠は鈍痛を感じた。
一誠から吸い取った魔力と命を削って上乗せした匙の魔力が合わさり、鎧を纏っていても威力を完全に消すことが出来なくなっている。
一誠もまた反撃の肘を匙の背に下ろす。匙が空気の塊を吐く様な声を出すが、そのまま地面に倒れず逆に体を伸ばして一誠に殴り掛かった。
迫る拳を拳で払い、流れる様な動きで匙の顔目掛けて正拳を放つ。
防御は間に合わない。このまま直撃の流れかと思った時、匙の眼前に黒い炎の壁が現れた。
予備動作も無く出されたそれ。無事な方の腕も黒炎に侵される訳にはいかず、一誠は慌てて拳を止める。結果、触れることなく寸止めの状態となった。
触れずに済んだことを安堵する一誠。直後、黒い炎の壁を突き破って現れた匙の拳が一誠の顔面を殴り飛ばした。
眉間に当たり、目の前で閃光を放たれた様に視界がぼやけ、匙の姿を見失う。
『動け！　相棒！』

ドライグからの指示を受け、今居る位置から大きく後退しようとする。だが、そのときに何かが体に巻き付いた。

ラインだと察したときには一気に力が吸収され、思わず膝が折れてしまった。

『厄介な状況になってきたな……』

一誠の頭の中に浮かぶ数字の列。それは禁手を維持できる時間を表示したものだが、それが凄まじい勢いで減ってきていた。全力を出しても三十分は戦える筈だが、禁手になって五分も経過していないというのに残り時間が十五分を切っている。『黒い龍脈』の神器の力を吸い取る能力や黒い炎により、何倍もの速度で消耗している。

「だったら倒される前に倒すしかないな！」

一誠は残り時間のことなど気にしていなかった。目の前の匙を倒せないならば、そんな時間など無意味である。

自分に巻き付いたラインをまとめて鷲掴みにし引っ張る。しかし、引っ張った時に何の抵抗も感じず、また重みも無い。

ぼやけていた視界がこの時になってようやく正常となる。一誠は見た。匙の右腕から生えていたラインが全て無くなっている。

何処へという疑問は手に持っているラインが代わりに答える。切り離されたラインは一本一本が黒い蛇と化し、掴んでいる一誠の手や腕を這いずり巻き付く。引き剥がそ

うにも接続し半ば同化した状態になっていた。更には床からも黒い蛇たちが這いより足に巻き付いていく。
「貰ったもんは全部返すぜ」
巻き付いた蛇たちの胴体が一斉に膨張する。何が起こるのか察したが逃げる術は無い。
黒い蛇たちは吸収し蓄えていた一誠の魔力を爆発させ、それに一誠を巻き込んだ。
連続して起こる赤い魔力の爆発。その破壊の中心で一誠は嬲られる。
しかし――
「うおらぁっ！」
「ぐはっ！」
――爆発を貫いて現れた一誠が、そのまま匙の腹を殴る。折れ曲がる匙の体。その顔に容赦なく肘を叩き込んだ。
体がくの字の曲がった次は首がくの字に曲がる。だが、匙はすぐに体勢を立て直して一誠の顔面を殴りつけた。
「少しはダメージ喰らっとけよ！」
あれほどの爆発を受けても無傷な鎧に理不尽を感じつつ、その感情を拳に乗せて殴る。

「そっちもあぶねぇことしてんじゃねぇよ！　生身だったら死んでたぞ！」
同じく容赦無い攻撃を仕掛けてきた匙に、一誠も昂る感情を乗せて殴り返す。
「お前ぐらいの不死身っぷりならあれぐらいで十分だろ！　寧ろ足りないぐらいだ！」
「見た目は無傷でも中に響くんだよ！　お前の攻撃は！」
一誠の蹴りが匙の足に叩き込まれれば、反撃の掌打が一誠の側頭部に打ち込まれる。
「まだまだやれんだろ！　匙！」
「全部見せたつもりはないぜ！　兵藤！」
足を止め全力で殴り合う両者。一撃一撃の重さは一誠が上回る。しかし、匙は血塗れになろうとも引かず怯まず喰らい付く。
「そんなもんか！」
歯を食い縛りながら匙は殴り返す。殴る度に体の内側が軋む音がする。命を削っているせいで体が重くなり、反して中が空になっていく感覚を覚える。既に一誠の攻撃によるダメージは匙の回復を上回っている。故にもう回復に魔力を回すのを止め、それを全て攻撃に回す。
全力で振り抜いた拳が一誠の頬に直撃する。仰け反る一誠。ピキリ、という音を立ててドラゴンの頭部を模した兜の仮面に、僅かだが亀裂が生じた。この戦いに於いて初めて、見て分かる損傷を一誠に負わせたのだ。

だが、それに払う代償も大きかった。
自分自身の力と鎧の強度に耐え切れず、匙の拳は歪に変形していた。間違いなく指が二、三本骨折している。
指が折れたことよりも、変形した拳では十分な一撃を放てないことの方が匙にとって痛手であった。
（――まだもう一本ある！）
もう一方の拳を限界まで握り締め、一つの塊とする。
「骨ごと持ってけ！」
一誠が仰け反っている間にもう一撃を同じ箇所に向け放つ。
瞬間的に絞り出せる命を全て魔力に変えた先程以上の威力を秘めた拳が、亀裂の入った部位を打つ。
再び鳴る亀裂音。しかし、頬の亀裂が目の辺りにまで浸食した程度であり、仮面を砕くには至らなかった。
そして、匙の拳は宣言した通りに砕ける。指だけでなく手の甲まで骨が砕け、とても拳を握れる状態では無い。
両手を潰してまで行った攻撃は、一誠の兜を砕くことすら届かない。匙は、今一誠がどんな顔をしているのかさえ分からない。

「まだだ！」
痛みも迷いも吹き飛ばすかの様に匙が叫ぶと、その体が黒炎によって包まれる。余すところ無く黒く染まる匙はその姿で走り出す。
黒炎による鎧。下手に触れればたちまち黒炎によって力を奪い尽される。攻撃にも防御にも転じられるものであった。
略奪の抱擁を迫る黒炎に対し、一誠は黒炎が残る拳を突き出した。
どうせ既に燃え移っているのだから構わないという考えでの迎撃。
一誠の拳が匙の顔の中央に当たり――そのまま突き抜ける。
「あ？」
顔面を貫いたというのに手応えが全く無い。すると炎の中から身を屈めた体勢の匙が飛び出し、一誠の足元に駆け寄る。
「うらぁ！」
そこから全身の筋肉を稼働させて伸び上がり、一誠の顎を頭で射貫く。
目の前の黒炎に気を取られていた一誠は、意識の外からくる衝撃をまともに受け、その場で動きを停止する。
そこに追い打ちの黒炎が一誠へと覆い被さり、全身から力を奪い尽す為に燃え盛った。

「ど、どうだ？」

焦点が定まらない目を何度も瞬かせながらおぼつかない足取りで一誠から距離を取る。頭突きのせいで頭部から出血し、幾筋の血が流れて顔を赤く染めていく。

黒炎に焼かれ、最初はもがいていた一誠であったが、やがてその動きは鈍くなり、とうとう動かなくなり、その場で蹲る。

体中からあらゆる力が抜けていく最中、一誠の意識は徐々に薄れていく。

『相棒。おい、相棒。聞こえるか？』

（――ああ。聞こえている）

『どうする？　やるか？　やらないのか？』

意識がはっきりしなくなっていく中でドライグの声だけははっきり聞こえた。短くシンプルに問いてくる。このまま戦うのか、戦うのを止めるのかを。

（……やる）

『それを選べば、お前はもう戦えなくなるぞ？』

（それでも……やる！）

心のどこかでまだ出し惜しみをしていたのかもしれない。匙が先を考えず今この瞬間に全てを注ぎ込む中で、無意識のうちに次の戦いの為に余力を残していたのかもしれない。

だが、それも捨てる。ここから先は何も残さない。持てる全てを絞り、削り、懸ける。

『馬鹿者め。――が、俺もヴリトラに負けるのは癪だ。行くぞ。俺も馬鹿になってやる！』

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

炎の中で一誠は叫ぶ。己の全身全霊を込めて。

匙が見ている前で一誠を包み込む黒炎が激しく燃焼し始める。それは、黒炎が力を奪っている証拠であった。

これ程の炎の勢いなら力を多量に消費している。だというのに炎は一向に弱まらない。一体どこからこれ程の力を生み出しているのか。

「まさか……」

自分と同じ様に命を魔力に？

炎の中で蹲っていた一誠が立ち上がろうとしているのが見える。膝を突き立て、匙の方へ前のめりに体を向ける体勢。そこから炎ごと、匙に向かって突貫する。

今にも倒れそうな程疲労している筈なのに最初のときと遜色ない速さ。しかし、それでも匙には一誠が右拳を引きながら迫って来るのが見えた。

拳を下から上に突き上げる構え。動きは迅速。だが、避けられないものではない。

瞬くよりも速く距離を詰めた一誠。その構え通りに、匙に向け下から掬い上げる様に

拳を突き上げる。
想像よりも速い。だが避ける。避けてみせる。拳の先が制服に触れる。その僅かな接触で制服が裂けるのが分かる。もっと体を引かなければ抉れる。もっと早くもっと早く。皮膚一枚越しに拳の感触が伝わってきた。今の感覚ならば直撃を避けられる。炎を纏いながらでも分かる、眼前を通過していく白い拳。
（……白い？）
赤ではなく白い手甲に覆われた右手に、匙は刹那の間疑問に囚われるが、その答えはすぐに一誠自身から教えられることとなる。
『Ｄｉｖｉｄｅ』
その途端、匙は体中に鉛でも埋め込まれたかの様な重みを感じた。今まで感じたことの無いぐらいの身体の変化である。
匙の中のヴリトラはこの事態に、信じられないという動揺を露わにした。
馬鹿な！　白龍皇の力だと！
宿敵の能力を使った赤龍帝。彼らの因縁を知っているヴリトラからすれば、考えもつかなかった一撃である。
ヴリトラの言葉で自分の力が半減されたことに気付く匙。そんな彼の目の前で一誠は突き上げた拳を引き、それに連動させて上から下に向け左拳を振り下ろす。

見えている。分かっている。だというのに体が反応しない。ようやく体の一部が動く。しかし、遅い。自分の時間の流れだけが緩やかになったのではないかと錯覚するほど遅い。何かしなければ一誠の拳が届く。無防備な自分には、恐らくあれに耐えられそうにない。

（動け！　動け動け動け動け！　あと一歩なんだよ！　何でも良い！　出ろ！　出ろ！　出ろぉぉぉぉぉ！）

額に血管が浮き、奥歯がすり減ってしまいそうな程に力を籠める。鼻孔から血が流れ落ちる程の念。半減の呪縛の中で蠢くそれはやがて呪縛の殻を突き破り、匙と一誠との間を遮る黒炎の結界として形を成す。

聖剣による斬撃すら受け止めてみせたヴリトラの結界。それを見た一誠は直感的に自分の拳が阻まれることを察する。

引くなどという選択は一誠には無い。引けば負ける。勝つには攻めるのみ。

そのとき、一誠はこの状況に既視感があることに気付いた。

（確か、間薙が小猫ちゃんのお姉さんと戦っていたとき――）

思い至ったとき、一誠は天啓を得る。

握っていた拳を開き、指の先端を鉤爪の様にして曲げる。左腕全体に在る魔力を指先のみに集中させる。

気を抜けば暴発しそうになるほど魔力を強引に押し込め、留まらせながら目の前の結界に向けてその指を突き立てた。
鼓膜を突き抜ける様な撓む音が両者の間で響く。
突き立てた指先は結界を貫き、その先端を匙に向ける。
今、匙に向けられているのは人の指ではなくドラゴンの爪。そこから繰り出されるは万物を引き裂く赤龍帝の爪撃。
「おおおおおー」
気迫と共に全身を投げ出す様に左手を振り下ろす。結界は爪撃によって裂かれ、爪先から放たれる収束した五本の魔力の線がその先に立つ匙の体に触れ、消える。
一瞬の間の後制服のシャツが裂け、肌が外気に触れる。線が触れた箇所に赤い玉がポツポツと浮かび上がると、次のときにはそれらが全て繋ぎ合わさり、五本の裂傷を匙の体に刻み付けた。
「ッ!……」
体から噴き出す鮮血、痛みに苦しむ声も呻く声すら出せない。匙の体は地面に向けて倒れていく。
近付いてくる床。匙の目には極限状態の為か、時間が引き伸ばされてゆっくりに見えた。

まだ我が声が聞こえるか？
途切れそうになる意識の中で鮮明に聞こえるヴリトラの声。
ここで終わるか？
傷付き、血に塗れ、骨も折れ、力は底を尽きようとしている。ここまで追い込まれたのならば、後は負けを受け入れるしかない。
本当にそう思っているのか？
最早勝ち目なんて無い。敗北は確実。分かっている。分かっている筈なのに――
お前がまだ戦えるというのなら
――想いが、心が、魂が、まだ戦いたいと叫んでいる。まだ出し尽くしていないと叫び続けている。
持っていけ。我が力を
一誠の爪撃を受けた瞬間、誰もが匙の敗北を確信した。故にダン、という音が何なのかドライグにも、モニターで見ている観客にも最初は分からなかった。
それが倒れ行く匙が、床を踏み締め倒れ行く体を支えた音だと皆が理解する前にヒュン、という音が鳴る。
誰もが砕けた手にラインを何重にも巻き付け形作った拳が風を切る音であるとは分からなかった。

誰もが見た。戦う力などもう残っていない筈の匙が拳を振るうのを。ラインを纏った拳は、獲物を狙う黒い蛇を彷彿とさせる。その黒い蛇が喉笛に喰らい付く為に襲い掛かってくる。

敗北を確信されてからの土壇場の反撃。それは誰にとっても完全なる不意の一撃であった。

ただ一人を除いて。

黒い蛇が一誠の喉を貫く――かと思われたとき、一誠の上半身が傾く。

最小の動きにより匙の拳は兜の頬を掠めて空振り、それに絡む様に放たれる一誠の拳。

赤い拳が匙の顔面を捉え、打ち抜く。

渾身の一撃に合わせられた匙が、糸が切れた様にその場に座り込む。

そして、虚ろな眼差しで一誠を見上げた。

「何、で……」

反撃が出来た、という言葉を口に出す程の余力は、匙には既に無い。

「――お前が強いからだよ」

匙が言った言葉が、そのまま一誠から返ってくる。

匙という男が最後の最後まで諦める筈が無い。戦いを通してそれを知ったからこそ、

一誠は最後まで気を緩めることなく戦えることが出来た。
すると一誠の仮面から破片が落ちる。床に落ち、小さな金属音が立て続けに鳴った。
最後の拳打によって亀裂が限界に達し、一誠の顔半分が露わになる。
その表情を見て、匙は腫れた顔を歪め苦笑する。
「勝った、んだ……」
少しは嬉しそうな顔をしろ。
その言葉を残し、匙の体が床に倒れた。
匙の体は光に包まれ、場外へ転送される。
匙が消えると、一誠を燃やしていた黒炎も消える。
『ソーナ・シトリー様の『兵士』一名、リタイヤ』
一誠の勝利を告げるアナウンス。しかし、一誠の胸中に喜びなど微塵も湧かない。
自分を認めてくれた友人を倒す。分かっていたが、清々しさも満足感も何も無い。残るのは悔恨。後は今にも意識を失いたくなる疲労のみ。
鎧によって辛うじて体を支えている状態であり、鎧が解除された瞬間に自分はリタイヤするだろうという確信があった。そして、散々匙に力を吸収されたせいで、残り時間は少ししか残っていない。
匙を殴った拳を見る。小さく震える理由は極度の疲労だけではない。

『相棒』
そんな一誠にドライグが声を掛ける。
『悔やむな。誇れ。それに値する相手だった』
一誠への励ましであり、匙への賛辞にも聞こえる。
震える手を強く握り締める。この拳から伝わってきたものを心に刻み込む為に。
「……そうだな。そうだよな」
匙が最後まで足掻いた様に自分も最後まで足掻こう。そう思ったとき――
床が擦れる音。
一誠が振り返る。
擦れる音の正体が片足を引き摺る音であった。
「……間薙」
――彼は現れた。
「あー……」
一誠は自分でも気の抜けた声だというのは自覚している。しかし、無意識に出てしまっていた。
柄にも無く悟ってしまった。ここで自分はリタイヤしてしまうと。
「だったら最後に一つ試してみるか！」

逆に開き直り、修行の中で思いついたもう一つの技を使用することを決める。理屈では出来るが、実際に使うのも実戦で使用するのもこれが初めてである。ダメで元々の覚悟で放つ。
「はあああ！」
一誠が気迫を込めた声を上げる。
シンも一誠が何かをしているのは分かっていた。力が頭へと集中していく。
初めて見る行動に警戒し、観るに徹する。未知に対して少しでも情報が欲しかった。
魔力の光が一誠の頭部で輝く。
「広がれっ！」
最大まで高まった光が、言葉通り一誠を中心にしてデパート内に染み渡る様に広がっていく。
広がっていく光の上に立つシン。特に変化は起きなかった。攻撃を目的とした技ではないのか、あるいは発動までに時間差があるものなのか。
「成程……そういうことか」
独り呟く一誠。すると小声で独り喋り始める。誰かに何かを伝えている様であった。
伝えたいことを伝え終わったのか、スッキリとした表情で一誠はシンを見据える。
「これで正真正銘、本当に最後だ」

ほんの少しだけ残った力を左手に注ぐ。その途端、体に重圧が圧し掛かる。
息をすることがこんなにも苦痛なことだったことを知る。
立つだけで足元から見えない鎖で引き寄せられているかの様だ。
動く時に纏わる空気が粘りを持つかの様に重い。
持てる力を全て左手に注ぎ込んだせいで、構えるだけでこれ程の苦行。
一誠はシンに向かって駆け出す。全力で走っている筈なのに沼の上で走っているかの様に鈍く、左右に蛇行した不安定な走りであった。
たった数メートルの距離だというのに遠い。その間にも禁手を維持する時間は容赦なく零に迫っていく。
赤龍帝の禁手とは思えない程のキレも力強さも無く、傍から見れば無様に思えるかもしれない。何もせずに大人しくしていればこんな姿を晒さずに済んだ。しかし、それは許されない。一誠自身が許さない。全力で戦った匙。彼に勝った自分もまた最後まで全力を尽くす義務がある。
残り時間が五秒を切る。
（あと少し……！　あと少しなんだ……！）
気力だけで体を動かす。
ようやく拳の届く間合いにまでたどり着いたとき、残り時間は二秒。

シン目掛け拳を振るう。残り一秒。
「おおおおお！」
カウントが零に達した後に鈍い音が響く。
一誠の突き出した拳をシンは構えず、避けず、黙って額で受け止めていた。
僅かに間に合わず、拳が届く前に禁手は解除されてしまっていた。
力を全て出し尽くした一誠。その顔色は死人の様に蒼白い。
「言って、おくが、お前に、負けた、訳じゃ、ねえぞ」
重い舌を動かし、これだけは伝えておきたかった。
「そうだな。お前は匙に負けたんだ」
その言葉に何処か満足した様な表情を浮かべながら、一誠は仰向けに倒れていく。
「後は、頼んだ」
光が一誠を包み込んでいく。そのとき、シンは見た。倒れ、消えいく一誠の向こう数メートル先に、二本の剣を持ち佇む青年の姿を。
「木場」
後を友に託し、一誠は消える。
『リアス・グレモリー様の『兵士』一名、リタイヤ』
アナウンスが一誠の退場を告げると木場は二本の聖剣を構える。

「任されたよ、イッセー君。――さあ、やろうか？　間薙君」

シンは勝っても負けてもこれがレーティングゲーム内での最後の戦いだと予感した。

試合、終了

ゲームが始まり時間が経過していく度に新たなアナウンスが聞こえる。それが聞こえる度にアーシアは体を硬くし、朱乃は見えない角度で衣服を強く握り、リアスは表面上平静だが内心穏やかでは無かった。

相手の下僕ならば一先ず安心し安堵の息を吐くが、自分の下僕がリタイヤを聞くと暗い気持ちになると同時に、リタイヤした者の分まで戦わねばという気持ちも湧く。

『ソーナ・シトリー様の『女王』一名、リタイヤ』

ソーナ側の最強格の駒を落としたという報告が頭上から告げられると、朱乃とアーシアは喜びを露わにする。リアスも心の裡では歓喜するが表情には出さなかった。自分まで素直に喜んでしまうと無意識に油断をしてしまうかもしれないと思ったからだ。

『王』という立場は皆が寄り掛かれる精神的支柱であると同時に、常に平常心を心掛けることで、どんなときでも下僕たちに冷静さを取り戻させる為の楔でもあるべきだとリアスは思う。

すると、通信機に木場からの連絡が入る。

『聞こえますか？　部長』

「ええ。聞こえているわ」
『真羅先輩を落としました。これからどう動きましょうか？』
「よくやったわ。貴方の方は大丈夫なの？」
『はい。多少は傷を負いましたが、まだ戦えます』
　このとき、リアスは木場の言葉に若干の違和感を覚える。付き合いが長いこともあって、木場の言葉に嘘の気配を感じとっていた。
　恐らく、多少では済まない程の傷を負っている可能性がある。
「――本当に大丈夫なの？」
　念を押す様な質問に、木場が通信機の向こう側で言葉を少し詰まらせるのが分かった。
　少し間を置いて、木場は椿姫たちとの戦いで何があったのかを簡単に説明した。ソーナの眷属の一人が『反転』という神器らしきものを使用したこと。その『反転』により聖の気を流し込まれたこと。
「アーシアの回復を受けた方が良いわね」
『――そうかもしれません』
　天使や堕天使の光の毒ではなく、魔を反転させて出来た聖の気。前者はアーシアの『聖母の微笑み』で回復出来るが、後者はどうなるか分からない。通常の効果を発揮する

かもしれないし、効果を阻害される可能性もある。
『一旦こっちに戻れる？』
　木場は少し黙考する。
『途中で合流しませんか？』
「いいの？　貴方、怪我をしているのよ？」
『寧ろ、それで相手を釣れるかもしれません』
　木場の自分を危険に晒すやり方を素直に認める気にはなれなかったが、逆に却下するのも木場の士気に関わる。
　リアスは苦渋の選択の末、木場の意思を尊重することにした。
「――分かったわ。私たちも相手の本拠地を目指して前に出るわ。今が攻める時かもしれないわね」
　ゼノヴィアが倒され、木場が負傷していることから、オフェンスの力は大分弱まっている。まだ一誠と小猫が居るが、前線にシンがいることを考えると、戦力を出し惜しみしている場合では無い。
「祐斗、今はどこにいるの？」
『一階の立体駐車場です』
「じゃあ、私たちも一階に向かうわ。合流場所は――」

朱乃がリアスの前で見取り図を開く。それを見て選んだ場所は――

「一階の中央広場で落ち合いましょう」

『分かりました。じゃあ、中央広場で』

東と西に置いてある本陣の丁度中央にある地点がこの中央広場であった。

場所を指定し通信を終えると、朱乃とアーシアを見る。

「聞いていたわね。これから私たちは――」

『リアス・グレモリー様の『戦車』一名、リタイヤ』

相手の『女王』を倒したことで上がった士気。それに乗って進軍しようとした矢先に冷水を浴びせる様なアナウンスが聞こえてくる。

「そんな、小猫さんが……」

口を押えながら動揺を露わにするアーシア。小猫が心配なのは勿論だが、彼女に同行している一誠もまた、危機的状況になっていてもおかしくない。そう考えた一秒後には一誠脱落の報せが聞こえるのではないかと、後ろ向きな想像をしてしまう。

「小猫……」

憂いを帯びた表情を見せるのは一瞬。すぐにリアスは表情を引き締める。前線に送ったオフェンスの駒はこれで二つ落ち、戦力の半減を意味する。

「すぐに動くわ。いいわね？　二人とも！」

一秒でも早くここを発つ理由が出来た。
「ええ」
「はい！」
間髪入れずに返事が来る。アーシア、朱乃も同じ気持ちらしく、居ても立っても居られない様子であった。
一同は中央広場を目指す。だが、焦る気持ちとは裏腹に三人は急ぎ足では無い。たとえ気持ちが逸っていても注意を怠り不用心な真似はせず、常に周囲に気を配り罠や待ち伏せなどに警戒する必要がある。
仲間を助ける為に動いた筈が、返って仲間の足を引っ張ることになったら目も当てられない。
そんなに離れた距離ではないというのに、警戒して動くだけでこうも遠くへ感じる。心を削る様な進軍であった。
すると頭上から微かに音が聞こえる。アナウンスが報せる前兆であり、それが聞こえたとき、リアスたちの動きが固まる。
『ソーナ・シトリー様の『兵士』、一名リタイヤ』
アナウンスが告げたのはソーナ側の脱落であり、それを聞いて皆ホッと息を吐く。
ソーナの『兵士』は二名。その内一名は既にリタイヤしており、今の放送で『兵士』は

全滅である。本陣に入れば様々な駒の特性をプロモーション出来る『兵士』がいなくなったのは大きい。更にソーナの下僕の中でも一、二番目に厄介だと思っていた匙が脱落したと分かったことも、リアス側にとっては追い風であった。

その時リアスは体、それも胸の辺りに何かが通過していく様な感覚を覚え、反射的に胸を手で押さえてしまう。悪意のある感覚はしなかったが、良いものとも言えない。見ると朱乃とアーシアもリアスと同じ構えをしている。

「貴女たちも感じたの？」

「はい。何だったんでしょうか……」

「嫌な感じはしなかったんですけどね……」

良く分からない事態に三人は少し戸惑う。

それから少し後のことであった。通信機に連絡が入る。

『――部長』

「イッセー！」

連絡を入れたのは一誠であった。彼が無事と知り、リアスたちは何度目かになる安堵の息を吐く。

「今、何処にいるの？　怪我はしていない？」

『今すぐ、屋上に向かって、下さい。そこに、ソーナ会長が、います』

途切れ途切れの喋り方。何かを言うという単純な動作すら、苦痛を伴っているようであった。
「どういうこと？　何故貴方がそれを？　それより貴方、大丈夫なの？　もうすぐそこに祐斗が――」
『お願いです。俺を、信じて、屋上へ。これが、俺が出来る、最後の精一杯、です』
間も無くリタイヤするであろうと自ら告げる一誠に、リアスたちは言葉を失う。
『アーシア、部長たちの、回復は、任せた』
「は、はい！　朱乃さんも部長さんも全部治します！」
『頼んだぞ――朱乃さん』
「――はい。聞こえていますよ」
『約束を、守れなくて、本当に、本当にすみませんでした！』
レーティングゲーム前に交わした、朱乃が堕天使の力を使う所を見守るという約束を果たせないことに心の底から謝罪する。その声は、自分への不甲斐無さで震えていた。
『約束を、守れなかった俺が、こんなことを言う資格なんて、無いかもしれませんが、どうか、アーシアと部長を、守って下さい……！　お願いします！』
自分がもう誰かを守る力が無いことは分かっている。アーシアに身を守る術は無く、リアスは『王』として最後まで守り抜く必要がある。故に二人を守ることを朱乃に託す。

約束を破った自分がこんなことを願うなど、烏滸がましいと自覚している。だが、それでも託すことしか出来ない。朱乃の返事が例え拒否でも、恨む気持ちは無い。
「分かったわ。イッセー君。二人のことは私に任せて下さい」
『ありがとう、ございます！』
「だから、悔いが残らない様に安心して全力で戦って下さいね？」
『――はい！』
通信が切れる間際の一誠の返事は安堵に満ち、はっきりしたものであった。
「朱乃？」
「はい？　何ですか？」
リアスが朱乃に声を掛ける。彼女はいつも通りであった。
「貴女、大丈夫なの？」
朱乃は眉を下げ、僅かに哀しみを混ぜた笑みを浮かべる。
「本当を言うと、少しだけ寂しい気持ちがあります。でも、私、イッセー君ともう一度約束しちゃいましたから」
「その、もう一つの約束のことなのだけど……」
「大したことじゃありませんわ。お気になさらず」
「そうなの？」

堕天使の力を使うという約束をリアスの前で敢えてぼかす。彼女にこのことを言えばきっと気を使う。その優しさに甘える訳にはいかない。
「このままイッセー君が言った通り、屋上を目指すということでいいですか？」
「そうね。詳細は語らなかったけどわざわざ知らせてくるということは、イッセーなりの根拠が有る筈よ。ここはあの子を信じて屋上を目指しましょう」
一誠の言葉を信じ、屋上を目指すことにする。木場にもそのことを連絡するがどういう訳か返事が無い。
「祐斗？　聞こえる？　祐斗？」
もう一度呼び掛けるが返事は無く、それどころか通信機そのものが切られた音がした。
「もしかしたら敵と接触したのかもしれませんね」
「……取り敢えず私たちだけで屋上に向かいましょう」
『リアス・グレモリー様の『兵士』、一名リタイヤ』
行こうとした矢先、一誠脱落が知らされる。事前に声を聞いていた為、こうなることは分かっていた。受け入れる準備も出来ていた。だが、どんなに身構えようとも歯を食い縛ろうとも、受ける痛みや衝撃が消える訳では無い。
「――行きましょう」

この中で最初に口を開いたのはリアスであった。他人が見ればその内にどんな感情が渦巻いているのか悟らせないほど、表情から感情を排し冷静な態度を見せる。
「……はい！」
表情から分からなくとも同じ心境であると理解しているアーシアは、気丈に振る舞うリアスを見習い、いまだ声を動揺で震わせているも立ち止まらない意思を見せる。
そして、朱乃もまたリアスに応えようとし口を開く――
「朱乃っ!?」
――かと思いきや、いきなり羽を広げて飛び出した。
突然の行動に驚きを隠せないリアスであったが、朱乃の飛ぶ方向を見てその疑問は解消される。
吹き抜けの通路の向かい側にソーナの『僧侶』である花戒桃がいた。他に眷属の姿は無く単独で動いていること、『僧侶』という特性を考え魔術か結界でも仕込みに来たのかもしれない。
そして何より花戒はまだリアスたちの存在に気付いていない。
朱乃の動きはまさに迅速であった。木場や一誠といった存在、また朱乃が魔力による攻撃を主としていることで隠れがちであるが、彼女は悪魔の駒の中で最強の特性を持つ『女王』を宿す者。個々の力は一誠たちに引けを取らない。

飛翔する朱乃は、魔力によって風の流れを変え更に加速する。花戒が朱乃の存在に気付いたとき、既に彼女は通路の縁に優雅に腰を下ろし、華やかな、それでいて寒気立つ微笑みを浮かべていた。

「会長は屋上ですか？」

「何――」

そこまで言い掛けて花戒は自分の失言に気付き、口を無理矢理閉じる。しかし、そこまで聞ければ朱乃には十分であった。今の言葉でソーナが屋上に居るという確証を得た。尤も朱乃は、一誠の言葉を信じていないから花戒にわざわざ聞いたわけで無い。

狙いは一つ。花戒の動揺を誘うこと。

体術だろうが魔術だろうが、ある程度の心の余裕が無ければそれこそ体に染み付く程の鍛錬でも行わない限り咄嗟に出ることは無い。

朱乃は質問と同時に、花戒の胸に人差し指を突き付けていた。自分の失言に気付き、そして朱乃の指先が当てられていることに気付いたときには、もう遅い。

「ありがとうございます」

魔力による防御を行うよりも速く朱乃の指先から雷が放たれ、花戒の体を貫く。体内で暴れる雷により、花戒はその場で仰け反った後に光に包まれて消失した。

『ソーナ・シトリー様の『僧侶』一名、リタイヤ』

雷を操ることから『雷の巫女』と呼ばれている朱乃。だが、今回はそのイメージを覆す様な雷が如き行動の速さを衆目に見せつけた。

迅速な対応を見せた朱乃は、微笑みを消して哀しみの表情となる。出来ればこれを一誠に見せたかったという思いからであった。

一誠が約束を守れなかったことを裏切られたとは思っていない。あの必死な声から、一誠がどれだけ一生懸命戦っていたのかが伝わってきた。全力を尽くした彼に裏切りを感じるなど薄情が過ぎる。

（……あ、そうだわ。私が約束を守り通したら、イッセー君に何かお願いしちゃおうかしら）

一誠との最後の約束のことを思い、何をお願いしようかと少し明るさを取り戻して前向きなことを考える。

一誠を赤面させたりドギマギさせるお願いを色々と考え、一人クスクス笑う朱乃。そんな朱乃を遅れてきたアーシアとリアスが少し離れて場所で見ていた。

「――何か朱乃さん、楽しそうですね」

「ほら。朱乃ってドSだから」

変な勘違いをする二人に気付かないまま朱乃は少しの間、楽しい未来へ思いを馳せて

いた。

◇

『ソーナ・シトリー様の『兵士』一名、リタイヤ』

屋上で匙の敗北を告げられたとき、ソーナの表情は変わらなかった。しかし、側にいる『僧侶』の草下憐耶は、匙の負けを知った瞬間、ソーナが強く拳を握り締めていたことに気付いていた。

匙が一誠と戦っているのは魔術によって知っていた。その為にどんな無茶をしたのかも。

ほぼ同じ時期に転生悪魔になり、同じ『兵士』、ドラゴンを宿した神器を持つ二人だが、そこで明確な差が出た。

只の嫉妬ならばここまでの執念を見せない。嫉妬と同じくらい、一誠のこれまでの戦歴や性格に匙は敬意を抱いていた。だからこそ命以上のものを懸けて戦いに挑み、そして敗れた。

敗れた匙が今、どんな感情を抱いているのかソーナには分からない。

だが一つ確かなことは、匙の顔を見た瞬間、自分のしでかしたことの責任の重さを

きっちりと教え込む。
ソーナは握り締めていた拳を開き、音を鳴らしながら指を小指から順に曲げ、曲げ終わると親指から立てていく。
近くで見ていた草下はその無言の圧力に気圧されていた。
（きっちり教え込んだ後に――）
『リアス・グレモリー様の『兵士』、一名リタイヤ』
（――少し褒めてあげましょう）
指を鳴らすのを止め、ソーナは硬かった表情を少しだけ柔らげた。
「元ちゃんやりましたね！　大金星ですよ！」
一誠とほぼ相打ちという匙の戦果に草下ははしゃぐ。赤龍帝、それも禁手を発動させた相手に勝つことは、草下の言う通り大きな戦果であった。
ソーナは内心で匙の結果を喜びつつも、思考はリアスたちの今後の動きについて予想していた。
前線に送った『兵士』『戦車』『騎士』の三つが落とされたことで、リアスたちが前に出て来ることは間違いなく。既に本陣に向かっている可能性もある。
それを見越して、前に送った花戒には後方に待機している草下と協力し、特殊な結界を張る様に指示を出してある。

結界内に本物とほぼ変わらない立体映像を映し出す結界。これを用いて少しでもリアスたちを消耗させる。更にシンとも無事合流できればシンの攻撃力と結界の攪乱が合わさり、かなりの相乗効果が得られると考えていた。

指定した場所に花戒が到着すれば連絡が入って来る筈だが――

『ソーナ・シトリー様の『僧侶』、一名リタイヤ』

アナウンスにソーナは息を一つ吐く。

「そう簡単には思惑通りに行きませんか」

ソーナはあくまで冷静を貫く。『王』である自分が少しでも動揺する素振りを見せればたちまちそれが味方に伝播してしまう。

現に草下はソーナの表情を窺う様に何度も視線を送って来る。ソーナはいつも通りの態度で草下に指示を出した。

「結界の方は、私と貴女で張ります。桃がリタイヤしたとなると、貴女に前に出て貰うことになるわ。憐耶」

「はい」

前線に送られることに草下は躊躇うことなく頷く。

「貴女は少しでも早く間薙君と――」

そこまで言い掛けた時、ソーナたちは屋上にあるドアに目を向けていた。屋上周辺に

は探知用の結界が張られている。そこにソーナとその眷属以外が触れたとき、結界内のソーナたちだけに聞こえる警鐘が鳴る仕組みになっていた。
今、ソーナたちの頭の中でうるさい程の警鐘が鳴り響いている。
階段を昇ってリアス側の誰かが迫って来ていた。
「会長……！」
「予定変更よ。ここで迎え撃つ」
何も無い筈の空間に水が集まり始め、瞬く間に二メートルを超える水塊となった。魔力による水の操作により、デパート内にあるありとあらゆる水が、ソーナの意思一つでコントロールされる。
階段から足音が聞こえる。段々と近付き、ある一定の所で止まった。そして、ソーナが見ている前でドアノブがゆっくりと回され、ドアが開こうとする。
その瞬間、ソーナは集めた水塊をドア目掛けて放つ。
トン単位の水を圧縮したことでその破壊力は、直撃すれば受けたものの原型が留まることはまず無い。
圧壊の水がドアの向こうの人物をドアごと吹き飛ばそうとしたとき、ドアに備わっているガラス窓越しに紅い光が見えた。
紅い閃光が放たれたかと思えば水の塊が、音も無く、飛沫も無く、痕跡も無く消失す

る。
　跡に残るのは、円形状に綺麗にくり抜かれた屋上の出入り口と、そこで片手を突き出した構えで立つリアス・グレモリー。
「出会い頭にこんな挨拶をしてくるなんて、少し過激になったんじゃないかしら。ソーナ？」
「私としては少し後悔しています。――もっと強めにしておけば、と」
　双方不敵な言葉を交わす。
　滅びの魔力で消し去られた出入り口から一歩前に出るリアス。その後ろから朱乃とアーシアがついてくる。
「もう！　いきなり前に出るなんて危ないですわ！　部長！」
「ごめんなさい。ソーナの魔力を感じたからもしやと思って」
「私には部長とアーシアちゃんを守る責任があるんですからね！」
　リアスの行動に本気では無いものの怒った態度を見せる朱乃。取られたら負けという『王』という立場から、もう少し自重して欲しいという願いからであった。
　ソーナはリアスたちを一瞥する。
「ようやく生身の貴女と顔を合わせることが出来たわ」
「全員来るかと思っていました」

「祐斗が気になる？　ならきっとシンと戦っているんでしょうね」
「そうですか」
　ソーナからすればそちらの方が望ましい。アーシアは治療担当から攻撃に参加する可能性は極めて低い。となると戦うのはリアスと朱乃の二名。ここに木場が加わっていたら、三対二という数として不利な状況になっていた。
「まさか真っ直ぐ屋上に向かって来るとは思いませんでした」
「イッセーが教えてくれたのよ。貴女が屋上に居る、と」
「イッセー君が？」
　意外な名前が出てきて、ソーナは表情を僅かに変化させる。一誠はそういった索敵能力は極めて低いと分析していた。仮に位置がばれるとしても、気を扱う小猫辺りだと考えていたので予想外のことである。
「ソーナ、どうして屋上に？」
「簡単なことです。『王』は最後まで生きること。それが役割であり責任です。『王』が取られたらそこでゲームは終わってしまうでしょう？」
　それを肯定するかの様に草下がソーナの前に出る。それに応じて朱乃もまたリアスの前に出た。
　本当のチェスの様に互いの駒を一手差し、向き合う『王』たちは語り続ける。

「今私がこうしてここに立っているのも、リアス、貴女と話しているのも『王』の私を生かす為に皆が尽力してくれたからこそ。良くやってくれました。本当によくやってくれました。ままならない中で私の為に動いてくれました」
「ままならない？　それはこっちの台詞よ。おかげできっと私たちの評価はボロボロでしょうね。悔しいわ、貴女に一歩先行かれたみたいで――でもね」
悔し気な表情を一転させ、曇りの無い笑みを浮かべる。
「お陰で何も気にすることが無くなったわ。誰かの顔色を窺う様な必要も無い。純粋に貴女に勝ちたい、という気持ちだけで戦える」
幼い頃からの親友であり、互いに切磋琢磨し、魔力や知識を深め合ってきた。どこまでも肩を並べ、先へと進みたいとも思っている。だからこそ勝ちたいのだ。どこまでも努力し続けるソーナに、自分以外が土をつけることが許せないし、見たくもない。
エゴに満ちた思いだと自覚している。こういう考えもグレモリーの血かもしれないと、内心苦笑する。
リアスの体から焔の様に紅色の魔力が立ち昇る。それに呼応してソーナの周囲に大小の水の塊が浮き上がる。浮き上がった水の塊の形は一定せず常に形を変化させていた。
『王』同士が戦闘体勢に入ったことで、朱乃もまた魔力を解放する。朱乃から放たれる

金色の魔力。それは爆ぜる音を響かせていた。
朱乃の手が草下に向けられた瞬間、落雷の如き轟音と共に雷が撃たれる。直撃すればリタイヤを免れない大出力の一撃。
しかし、草下は自分が狙われることを見越して、朱乃が雷を放つ前に両手を突き出す構えをとっていた。閃光が煌くと同時に草下は叫ぶ。
「反転(リバース)!」
雷は呆気無く消え、後には空気が焦げ付く様なニオイだけ。
自分の雷を容易く消されたことに朱乃は少しだけ驚くが、それ以上動揺することは無かった。
事前に木場から聞かされていた『反転』の能力。どうやら固有のものではなく、複数存在するものらしい。ソーナもまた、この『反転』の能力が使えると考えても良い。
草下が今やったことは魔力によって発生した雷を反転させ、元の魔力に戻したのではないかと朱乃は推測する。
ならば破る方法は既に自分の中に有る。
(本当は、彼の前で見せたかったわ……)
魔力以外の力が体の中を這い上がってくる。どうしてもそれに嫌悪感を覚えてしまう。自分もまた、あの忌むべき父の血と力が流れているのだと自覚させられる。

ポタリ、と何かが衣服に落ちるのを感じた。最初はソーナの操る水かと思ったがそうではない。頬に伝わる濡れた感触。無意識のうちに朱乃の片目からは涙が流れ落ちていた。

強過ぎる嫌悪感から来る涙か。自分の決意を見守ってもらおうとしていた一誠の不在か。あるいはもっと別の――。

そこから先を考えるのを朱乃は止めた。今はそんなことをしている場合ではない。

朱乃が魔力を高めるのを見て、草下は再び『反転』の構えをとる。

朱乃の周辺に光の球体が無数に発生する。先程雷を放ったときとは全く別の現象であった。

その光を見た時、草下の背筋に冷たい汗が流れる。本能がその光に対し強い拒否感を覚えていた。

このままだと不味いかもしれないと草下が思ったときには既に手遅れ。浮かび上がる光球から雷が放たれる。

出力は先程と同じ。しかし、迫る数は数倍。鼓膜を通り越して脳が直接震わせられていると錯覚するほどの轟音の束。

逃れられないと分かり覚悟した草下は、『反転』に全ての魔力を懸けてそれを防ごうとする。

「反転！」
迫る雷を全て反転させようとするが、雷は消えることなく草下の体に突き刺さり、轟音と共に突き抜ける。
直撃と同時に草下の体は光に包まれ、場外へ転送された。
『ソーナ・シトリー様の『僧侶』一名、リタイヤ』
これで残すは『王』のソーナとシンだけである。
「――反転するものを違えれば力を覆せません」
朱乃の言葉でソーナは何故反転出来なかったのか悟る。
「……そうですか。光の力と合わせましたね？」
「ええ。今のが雷光。雷と光。力一つ反転させても無意味です」
朱乃の素性を知っているソーナからすれば、堕天使の力を使用したことに内心驚く。そして、この土壇場で更なる力を見せられたことに苦い気分となった。
だが、同時にこうも思う。「最初にあれが向けられたのは自分でなくて良かった」と。
草下がその身を犠牲にしてくれたことで、受ける前に、相手の手の内を一つ知ることが出来た。そのことに感謝し、リタイヤした下僕の無念を力に変える。
一方で雷光を使った朱乃は、平静を装いつつ想像以上の消耗を隠していた。肉体の消耗では無く、精神の消耗である。

見守られない代わりに約束を以って一歩踏み込んだ。克服には程遠いが、それでも自ら望んで堕天使の力を使用した。小さくも確かな前進である。
朱乃の頑張りを見て、リアスの士気も高まる。親友が心を削りながらも戦ったのだ。それに応えなければ、主として面目が立たない。
先程の朱乃の様に、リアスの周囲にソフトボール大の魔力の球体が無数に浮かび上がる。
数は小さけれど、一発一発が触れれば消滅する滅びの力を宿している。
それらの照準を全てソーナに定め、一斉に発射した。
逃げ場を埋め尽くす紅い魔弾。
ソーナは逃げることなくずれた眼鏡を直す仕草をすると、宙を漂う水がソーナの前方に集まり壁を創り出す。
水の壁に衝突する魔弾。水が紅い魔力に触れればその箇所は消失するが、当たった箇所から水が埋まっていきすぐに塞いでしまう。
滅びの力でも貫けない水の壁。水の中に大量に含まれるソーナの魔力を、リアスの魔力が完全に消し去ることが出来ない為のことであった。魔弾のどれもが、分厚く張る水の壁の半ばまでくると、滅びの力がソーナの魔力で飽和し消えてしまう。
「さて。貴女の芸を見せて貰った次は、私の水芸をとくと披露しましょう」

「望む所よ、ソーナ！」

応じた瞬間、水の壁の中から半透明の鮫が大口を開けてリアスに向かって飛び掛かる。水の魔力による変幻自在の召喚である。

リアスは水の鮫に向け指を一閃させる。指先から放たれる線状の魔力が鮫を真っ二つに裂く。

上顎と下顎の境から綺麗に二つされた鮫。するとその体が蠢き、体の表面を波立たせる。すると鮫の体の一部が球体となって飛び出す。拳大程の水の塊が空中で見る見る姿を変え、一匹の蝶と化した。それを切っ掛けに鮫の体から何百もの水の蝶が飛び立ち始める。

蝶の大群が目の前で大量に展開し、視界を阻む。すぐに魔力を撃ち出し、蝶を落とし始めるが、数が多い。

一気に消し去ろうと魔力を溜め込もうとしたとき、リアスは視界の隅で何かが動いたと感じ、その場から咄嗟に跳ぶ。

離れて気付く。自分が立っていた位置に水の蛇たちが忍び寄っていたことに。

蝶のせいで足元への注意が疎かになっていた。

標的を失った蛇たちは、透明な目をリアスに向け威嚇する様に出した舌を震わす。蛇たちは絡み合い始め一つとなる。水の塊と化したかと思えば、それを突き破る様にして

今度は水の狼が群れとなって現れる。
宙を飛ぶ蝶たちもまた次々と合わさり形を変え、蝶の群れから数匹の鷹へと変化した。
魚類が昆虫に、その昆虫が鳥に。爬虫類が哺乳類に。次々に起こる幻想的とも悪夢的とも言える脈絡も規則性も無い変化。それを目の当たりにしているリアスたちは白昼夢を見せられている様な錯覚を覚えてしまう。
狼の群れが真紅の魔弾で蹴散らされる。砕け散りバラバラとなっていく狼たち。その千切れ飛んだ手足がグニャリと形を変えると、触手の様に一部を伸ばして繋がり合い、引き寄せ、集い、勇ましい獅子という新たな姿となった。
獅子は声無き咆哮を上げ駆け出す。駆けだした先に立つのはリアス――ではなく朱乃であった。
このことにリアスも朱乃も驚く。狙われたことに驚いた訳では無い。リアスとソーナの一対一の戦い。それが暗黙の了解だと思っていた。数が勝っているリアス側がやれば卑怯に映るかもしれないが、数で劣る筈のソーナの方から仕掛けたことに二人で驚いていた。攻撃してくるならば朱乃も迎え撃たねばならない。それは同時に、朱乃がソーナとの戦いに加わることを意味している。
均衡していた状況をわざわざ自分に不利な方に傾ける、ソーナの意図が分からない。

迫る獅子に朱乃は仕方なく雷光を放つ。雷と光の力は水の獅子を真正面から撃ち貫き、ただの水へと還す。

そして、そのまま返す刃の如くソーナに向け雷光を撃つ。眩い輝きと轟音がソーナに襲い掛かる。

だが、直撃する前にソーナの足元の水が隆起し、大蛇の形となるとソーナを守る為に雷光の前に立ち塞がる。

雷光を大蛇が呑み込む。雷光は大蛇の体を貫くことなく、半透明の体内で閉じ込められ、そのまま帯電した状態となった。

魔力を強く練り込んだことで可能とした荒業。事前に朱乃の技を見ていたからこそできた対策である。

雷光の力を宿した大蛇は文字通り蛇行しながら朱乃に襲い掛かる。

口を百八十度開き、牙を見せつけながら朱乃を頭から呑み込もうとする大蛇。しかし、その牙が届く前に紅の魔弾が頭部を吹き飛ばす。

頭を失った大蛇の断面から取り込んでいた雷光が飛び出し、その体を爆散させてしまう。

広範囲にまき散らされる水。すると、散らされながらも水は変化し、大蛇の体から魚の群れが生み出された。

宙を泳ぐ魚群がリアス、朱乃に牙を剥いて攻める。
滅びの力と雷光がそれらを次々に打ち落とし、今度は水滴一つ残さずに消し去っていく。
後方で待機しているアーシアは、その嵐の様な攻防に見ているだけで体に力が入ってしまう。それだけ苛烈なものであった。
二対一という不利な状況でもソーナは大量の水を自在に操り、リアスと朱乃に攻めさせず守りに徹しさせる。
零から水を生み出すにはそれなりの魔力が必要だが、既にある水を魔力で操るのは消費が少ない。一方でリアスと朱乃は自前の魔力を消耗し力を放っている。豊富な水があるという戦場がソーナの力を後押しする。
とは言っても水は有限。必ず尽きる。それまでにリアスたちを倒せる保証は無い。
しかし、既にソーナは手を打っていた。この目まぐるしい攻防こそ、その布石である。
ソーナの創り出した水のドラゴンがリアスの魔力を受け、その身を大きな水溜りへと変える。
この瞬間、ソーナは仕掛けた。
水溜りから一斉に飛び立つ水の鳥たち。羽ばたき狂った様に周囲を飛び回る。
視界全てに映り込む鳥、鳥、鳥。群れずに単独で動いている為、狙いを付け難かった。

「きゃあ！」
目の前に飛び込んできた鳥に、アーシアは頭を押さえながらしゃがみ込む。
「くっ！」
リアスは魔力が籠った手で飛び掛かってくる鳥をはたきおとす。しかし、次から次へと飛んで来るのでキリが無い。
目の前の鳥たちに意識が集中し、リアスは気付くことが出来なかった。頭上に向かって飛翔する一匹の鳥。その鳥が持つ小瓶のことを。
鳥が目的の位置まで小瓶を運んだとき、それを落とす。
鳥たちを迎撃していたリアス。そのとき、上から落下してくるモノが視界に入った。
見覚えある小瓶。リアスも知っている。フェニックスの涙が入っている小瓶である。
何故こんなものが、と思ったとき、リアスの思考は閃光の様に一つの答えを導き出した。
ソーナの眷属たちが使用した『反転』の能力。それをソーナもまた使用することが出来たら？　あらゆる傷を癒す万能の薬もその性質を反転されれば身体を侵す毒へと転じる。
逃げなければ。そう思うリアスの前で小瓶に亀裂が入る。ソーナならば液体を操って内から小瓶を割るなど造作も無いこと。場を乱し、荒らすことで本当の狙いを隠す。

これが、ソーナがリアスに仕掛ける策であった。
『王』が取られたらゲームは終わる。だが、咄嗟のことに魔力で防ぐことも出来ない。やれることがあるとすれば次に起こることから目を閉じるだけ。
ガラスの砕け散る音と共に毒と化したフェニックスの涙がリアスに浴びせられる。
リアスは自分の迂闊さを呪う。

――大丈夫。

しかし、どういう訳は何も感じない。苦痛どころか浴びた感触すらない。何が起こったのかリアスが閉じていた目を開く。
「朱乃っ！」
大きく広げられた堕天使と悪魔の羽。朱乃がリアスの前に立っている。その背や羽からは白煙が立ち昇り、毒からリアスを守る為にその身を盾にしていた。
「この、羽も役に立つことが、あるみたいですね？」
血の気を失った顔に無理矢理微笑を浮かべながら、朱乃はリアスに倒れ込む。それを受け止めるリアス。傷の具合を見ると朱乃の翼は重度の火傷を負った様に爛れており、傷が見えない衣服も同じ様な状態になっているのが想像出来る。

「アーシア！　私の側に！」
「は、はい！」
　すぐに指示を飛ばしアーシアを側に寄せると、リアスは魔力を頭上に向け放つ。球体であった魔力が広がり、ドーム状となってリアスたちを守る壁になった。
「すぐに朱乃の回復を！」
「朱乃さん！　待っていて下さいね！」
『聖母の微笑み』の光が朱乃を包み込む。だが、回復の速度が遅い。未だに反転したフェニックスの涙が朱乃の体を蝕んでいる為に、治癒の阻害が起きていた。
「どうしてこんな……！」
　自分を守る為にその身を犠牲にしたのは勿論のこと、その為に混血の象徴であり、忌み嫌っている筈の堕天使と悪魔の双翼を衆目の目に晒したことをリアスは問わずにはいられなかった。心身共に傷付くことなどして欲しくなどなかった。
「気付いたときには、動いちゃいました。羽を、広げないと、貴女を完全には、守れなかった」
「それなら――」
「悪魔の、羽だけって、結構意識しないと、出来ないんですよ？　咄嗟には無理です」
　リアスの言いたいことを先回りして朱乃が答える。

「約束を、破りたくなかった……でもねリアス、本音を言うとね」
朱乃は、リアスを慈しむ目で見る。
「私の、親友が危なかったから、つい動いちゃった」
約束があったから身を呈した訳では無い。朱乃がリアスの危険に気付いたとき、そのことは頭から抜け落ち、ただ守らなければという思いだけがあった。
リアスは朱乃の言葉を聞いた瞬間、朱乃の手を取りその手に額を当てる。まるで祈る様な姿であった。
深く目を閉じる。その想いを心に受け取る為に。
数秒の後リアスは朱乃の手を放し、閉ざしていた目を開く。その紅玉の様な双眸には猛々しい光が籠められていた。
「朱乃。まだ少し頑張れる？」
「……はい」
「なら見ていなさい。――私が勝つ所を」
朱乃から離れ、二人から数歩離れる。
「アーシア、朱乃のことは頼んだわ」
「はいっ！」
覇気に満ちたリアスに影響され、アーシアもまた強い声で返す。

リアスは、自分が張った防御のギリギリの位置に立つ。薄膜上の魔力向こう側には、狼、大蛇、鷹、ドラゴンなどの多種多様な水の魔物たちがリアスを待ち構えている。

リアスが体表に魔力を張ると薄膜をすり抜け、外に出る。その途端、待機していた魔物たちが一斉にリアスへと襲い掛かる。

しかし、リアスは自然な動作で両手に魔力を溜める。瞬く間に数度繰り返される圧縮。掌には直径数センチ程の球体が作り出される。

それを胸の前で打ち鳴らしたとき、音と共に滅びの力が拡散され、襲い掛かっていた水の魔物たちがその身を崩されていく。

滅びの力の波はソーナが居る場所にまで影響を及ぼし、張っていた水の壁の三分の一がこれによって消失する。

「また一つ負けられない理由が出来たわ。このゲーム、絶対に私が勝つ！」

「そうですか。ですが、想いでも力でも私が貴女に負けていると思っていませんよ、リアス！」

互いの内にある想いを魔力に乗せ、紅の魔力は阻むもの全てを滅し、魔の水は変幻自在を以って立ち塞がる。

◇

『ソーナ・シトリー様の『僧侶』一名、リタイヤ』

また一人、誰かが消える。

ソーナ側に残るのは自分を含め残り三名。対するリアス側は四名。本当ならば今すぐにでもソーナと合流すべきなのかもしれない。しかし、目の前に立つリアス側の四人の内の一人、木場を掻い潜ってそれを実行するなどまず無理であり、そして無謀と言えた。

「ようやく君と一対一で戦えるときが来たね」

「お互い万全とは言えないがな」

シンは左手を大きく負傷し、更には体の内側はボロボロな状態である。さっきから耳鳴りや動悸、体温の低下を感じており右足の動きもぎこちない。一方木場の方も体の至る所に切傷が出来ており、制服の所々に血が滲んでいる。特に肩に大きな負傷があるらしく、そこから流れ出る血が腕を伝わって、木場の足元に血溜まりを短時間で作っていた。

両者とも長い時間戦える体では無い。

尤もそんな負傷など木場にとっては些細なことらしく、全身からは普段の落ち着いた態度からは想像出来ない程ギラついた気を放っている。限りなく殺気に近い闘気とも

呼べる。

その気に影響を受けているのか、手に持つ聖剣アスカロンとデュランダルからもより鋭い聖の気が放たれている。前までが針に刺されている様な感覚だとすれば、今は剃刀を滑らされている様な気分である。

一体いつの間に聖剣を二振りも操れる様になったのか。状況が違えばその成果を称賛するだろうが、それを向けられている今のシンには、そんな余裕など隙間一つ生まれなかった。

木場が床を滑る様に一歩出る。戦いを開始する合図など無い。しいて言えば一方が相手の姿を捉えた瞬間から戦いは始まっている。

シンは後退しない代わりに横に一歩動いた。可能な限り木場の姿を左眼内に収めておきたいからである。グレモリー眷属内最速の男の前では、瞬き一つしただけでも出遅れる。

木場は更に一歩前に出る。今度は、シンは動かなかった。五体を十分に動かせないシンは木場の動きにはついていけない。残されたのは相手の動きを待ち、迎え撃つことだけである。

木場が更に一歩前に足を踏み出そうとしたとき、異音がシンの耳に入ってくる。亀裂が生じるときの音。

このときシンは気付け無かった。木場の踏み込もうとしている右足ではなく、残っている左足元の床が割れ砕けていることに。
踏み込もうとしているこの時、既に木場は力の充填を終えていた。
右足が床を踏み付ける直前、木場は左足で床を割り砕く勢いで突いて前に出る。
木場の足運びに意識を傾けていたせいで、半歩早い木場の動きにシンの反応は遅れた。
その遅れた反応の間に木場はシンを己の間合いに捉える。
アスカロンの横薙ぎ。間合いに入れて即放たれたそれは、シンの目から見ても届くか届かないかの絶妙な位置であった。
龍殺しの剣がデュランダルの影響で聖なる気を纏っている。剣先が僅かでも肉体に埋もれば、そこから悪魔にとって猛毒である聖なる気が流れ込む。勿論魔人のシンであっても毒である。
額目掛けて奔る銀閃。その軌跡を把握しシンは動く。
僅かに上体を反らすシン。その直後にアスカロンが目の前を通過する。
ミリ単位の傷ですら致命傷に等しい中、散ったのはシンの前髪一本。それが宙で溶けて消える。
文字通り髪の毛一本程の見切りを木場の目の前で成してみせたシン。木場の目から

すれば、刃がシンをすり抜けていった様に見えていた。
シンの動きに通常の相手ならば動揺していたであろう。しかし、相手は互いを知る相手。木場からすればシンが目の前でやったことなど『彼なら出来るだろう』と即納得し、前に出てくるシンにデュランダルを斬り下げるという行動に移っていた。
アスカロンを避けた直後に見計らったかの様に上から迫るデュランダル。シンはそれに向けて左の掌打を放つ。
生身で聖剣に触れることなど自殺行為。当然狙いはデュランダルそのものでは無い。狙うのはデュランダルを握る木場の手。そこ目掛け掌底を打つ。
打たれた木場の腕は一瞬だけ止まったが、すぐにシンの力を押し返し始める。
シンの左手は大きな怪我を負っておりまともに力も入らない。完全な状態なら掌打で木場の指をへし折っていたであろう。
力でシンを斬ろうとしたとき、シンは左肘を自分の膝で突き上げた。
腕と足の二つの力には木場も勝てず、腕が跳ね上がる。
隙だらけになった胴体目掛け、シンは拳を握り踏み込もうとする。
そのとき、背筋が粟立つのを感じた。この短い期間で散々殺気などを浴びせられたせいか、危険に対し勘が働く様になっている。
踏み込もうとしていた力を、そのまま真後ろに向けて放つ。絶好の機会を敢えて放棄

するシン。その直後に、木場の足元から無数の刃が飛び出してきた。
後退するシンの胸元に剣の刃が掠める。衣服一枚裂いただけで皮膚にまで到達することは無かったが、飛び出してきた剣の群れはそこからシンを追う様に次々と床を突き破って現れる。
床に足が接すると同時に更に床を蹴ろうとする。無理な体勢から行ったこと、小猫の気によって内側に損傷を負っていることから足に鋭い痛みが走るが、構わず全力で蹴る。剣に串刺しにされるよりかはましだと思った。
背中に衝撃がくる。いつの間にか壁際にまで移動していた。
追っていた剣の群もシンから二、三メートル先の場所で止まっていた。剣の群の向こうでは、木場が肩で息をしている。
これ以上追撃出来ないと判断し止めたのか、それともこれ以上剣を創造出来ず止まったのか。どちらが正解にせよ最早シンにとってはどうでもよい。もう足が碌に動かない。壁に背を預けてやっと体を支えることが出来る程度。
遠距離から魔剣や聖剣を創造し、ひたすら撃ち続ければ木場の勝利は確実である。
しかし、木場は構える。彼はあくまで決着は接近戦で終わらせるつもりであった。
シンの推測通り、木場に大量の剣を創造する余力は残っていない。尤も、仮に残っていたとしても今の様に直接剣を打ち込むつもりであった。

木場はシンに勝ちたい。だが、勝ち方にも形というものがある。自分が納得出来ない勝利など上辺のものに過ぎない。

全身の疲労及び負傷。魔剣想像、聖剣創造、そしてアスカロン、デュランダルによる消耗から、全力を出せる時間は残り少ない。

『ソーナ・シトリー様の『僧侶』、一名リタイヤ』

そして、ゲーム自体残された時間も少ない。ソーナ陣営は残り二名。ソーナがリタイヤした時点でゲームは終わる。

待ち望んだ戦いを不完全に終わらせたくない。

構える木場の前でシンは大きく息を吸い、同じ量息を吐く。木場と違って構えをとらない。だが、それを無気力には見えなかった。無駄な消費を一切省き、次の動きに全てを懸けている様に木場には見えた。

「勝たせてもらうよ」

「来い」

交わす言葉は短い。次に声を上げるとき、それは勝利への歓喜の声か、あるいは敗北の嘆きの声か。そして、それを上げるのはどちらか。

その答えは間もなく明かされる。

木場はイメージする。己の足に巻き付く鎖を引き千切るイメージを。疲れと怪我と

いう鎖からの解放。それは同時に体をこれ以上酷使すれば壊れてしまう警告でもあったが、纏わりつくそれを全て取り払う。

全力を出せるのであれば壊れてしまえばいい。その後のことなど考えない。

崩壊への一歩。同時にそれは最速への一歩。破壊の二歩。それは神速に至る二歩。

絞り出された速さは、誰の目にも映らず、誰の意識すらも追いつけない。

シンの目に木場の姿が映り込んだとき、二本の聖剣は振り下ろされていた。

最速の動きに対しシンもまた最速の反応を以って応じる。

胴体へとその刃を走らせる左のアスカロンをシンは木場の左手首を掴まえることで止め、鎖骨付近を狙い右から袈裟切りを放つ右のデュランダルに対し、左の手刀を鍔に叩き込むことで止める。

左右から迫る聖剣を見事に受け止めてみせたシン。しかし、ここで止まらない。木場の手首を掴んでいる右手にありったけの力を注ぎ込んだ次の瞬間――鈍い音が外にも、そして木場の体の内にも響き渡る。

歪に変形する木場の手首。シンが握力のみで手首の骨をへし折った。

木場の顔に汗が浮かび始める。痛みで叫んでもおかしくはないというのに、木場はそれを奥歯ごと噛んで押し留めていた。

だが、いくら気丈に耐えても肉体は言うことを聞かず、木場の手からアスカロンが滑

り落ち、地面に向け落下していく。
残す聖剣は一本。そう考えるシン。この時、反射的にシンの意識がデュランダルへと向けられる。
この愚は、大きな代償として我が身に襲い掛かってくるとも知らずに。
落下していくアスカロン。その柄頭を木場が足の甲で蹴り上げる。蹴り放たれたアスカロンは、シンの右腕を貫き、背後の壁に刺さってシンの右腕を磔にする。
腕に熱の様な痛みが駆け巡るが、シンもまた呻き声一つ洩らさなかった。それどころか、木場の手から離れているアスカロンには聖の気が宿らないことが分かり、運が良かったとすら思っている。実際、聖の気が宿っていたらこの時点でシンの敗北は決まっていた。
右腕の自由を奪われ、残るのは負傷している左腕のみ。それも木場のデュランダルに押されつつある。
木場は折れた右手もデュランダルの柄に押し当て更に圧を強める。
迫る聖剣の刃。
すると、シンは磔にされている右手の五指を曲げ、その右手を木場に向かって振り下ろそうとする。その攻撃は突き刺さったアスカロンが阻み、壁から数センチほど腕が離れただけであった。

失敗に終えるとシンは腕を壁に接しさせ――再び振り下ろす。今度は十数センチ前に出た。
失敗すれば壁に接しさせもう一度振り下ろす。傷が大きくなる度に、アスカロンの剣身が赤く染まっていく度に、シンの攻撃が木場へと迫っていく。
自らを省みない痛みなど一切無視した自傷行為に等しい、繰り返される攻撃の失敗。
間近でそれを見せつけられる木場。その頬に散った血が浴びせられる。
突き付けられる行為に、木場もまた行動を以って答える。
デュランダルに押し当てられた右手を更に強く当てる。歪さが増す木場の右手。
両者の頭の中で痛みという命に対する警鐘が喧しく騒ぐが、二人は自分のしていることに一切手を抜かない。
これは我の見せつけ合いであり、覚悟の見せ合いでもある。
怯んだ方が、臆した方が、躊躇った方が負ける。
徐々に壁から抜けていくアスカロン。シンの衣服に触れる寸前のデュランダル。
あと数センチ、あと数ミリで勝負は決する。
勝つのは己だと信じ、互いに身を削り合う。
やがてアスカロンが壁から完全に抜け、開かれた鉄の爪が木場の頭部に繰り出され、木場は最後の一押しの為に右手を振り上げた後柄に向けて振り下ろす。

勝負の行方は――

『ソーナ・シトリー様のリタイヤを確認。リアス・グレモリー様の勝利です』

――アナウンスによって告げられた。

シンの右手は木場の側頭部に触れる直前で止まり、木場の振り上げた右手も柄に打ち付けられる前に止まっている。

視線が合う二人。すると木場は苦笑を浮かべた。

「残念」

「こういうこともある」

最後の決着を告げる前と同じ様に短い言葉を交わし、シンと木場は退場用の白い光に包まれるのであった。

リアス・グレモリー	ソーナ・シトリー
B	R×
N×	P
N×	N
N	P×

3320　試合、終了

K Q Q P R N
× × × ×
1 K
#
| K
+ B B P Q
0 K × R
×

一歩、暗澹（前編）

レーティングゲーム終了後、シンは医療施設の一室にあるベッドの上で横になっていた。怪我の治療の為でもあるが、もっと優先すべき理由がある。

袖を捲ったシンの腕に刺された針。そこから伸びるチューブの中を通る赤い液体。血液である。チューブの先には殆ど空になった血液パックがあり、そこにはシンの血液型が記されていた。

魔力の暴発による負傷。追い打ちを掛ける様にアスカロンで腕を串刺しにされ、更にはその状態で無理矢理腕を動かしたことで大量の血を外に流していたらしい。

レーティングゲームという常時緊張状態が続く環境だった為かあまり自覚は無かったが、シンを治療した医者はシンの怪我の状態を見て目を丸くし、『何で意識があるんだ……』と呟く声が聞こえた。

シンは指先から手首まで巻かれた包帯を見る。それなりに重傷の怪我の筈だが、特に痛みは感じない。こんな風に包帯を巻かれていること自体大袈裟だと思っていた。実際、ゲームの終了時には傷口からの出血が既に止まっており、それどころか傷口に薄い皮膚の膜が張っていた。

（我ながら人間離れしてきたな……）

常人ならば、異形と化していく自分に恐れを抱くか悲嘆にくれるかもしれないところだが、ここまで露骨に治りが早いと、まるでコミックやアニメのキャラクターになった様なコミカルさを覚えてしまう。

少なくとも今のシンにはそういった感傷は無縁と言えた。

血液パックの中の血が全てシンの中に流れ込む。

横たわっていた体を起こす。少しの気だるさと戦いの感覚が残っているのか、普段以上の体熱を感じる。

肩、腕を軽く回した後、周囲を確認する。他の怪我人を見ているのか、近くに医療スタッフの姿は無い。このままじっとしていてもいいが、ソーナたちやリアスたち、そして仲魔たちのことが気になったので、輸血針を抜いてベッドから降りる。

シンが怪我と輸血をされてからまだ一時間も経過していないが、冥界の医療故、殆どの者たちの治療は終えていると思い、最初にソーナたちかリアスたちの様子を見に行くことにした。

部屋から外に出る。廊下に人の姿は無い。窓も無く汚れ一つ無い白い壁に覆われた長い廊下にはポツンと自動販売機が置かれており、人間界の病院の様な俗っぽさを見る者に与える。

暫くあてもなく廊下を歩くシン。すると、背後から足音が聞こえて来る。聞こえる足音の数からして二名。そのうちの一つが急に音の間隔が短くなる。早足で接近してきているようであった。

医療関係者かと思い振り返った途端、いきなり両手を掴まれる。

反射的に振り払おうとしたが、目の前に立つ人物が誰なのか分かり途中で止めた。

レイヴェル・フェニックスがその頬を紅潮させ、瞳をこれでもかと爛々と輝かせながらシンの両手を握り締めていた。

「私……感動しましたっ！」

開口一番の言葉がそれであり、ついていけずシンの方は閉口してしまう。

「今回のレーティングゲーム、本当に！　本当に見所ばかりでしたわ！　決まれば即リタイヤの危険があるかもしれない神器の相手を一方的に振り回し、尚且つ撃破する間薙様の強さ！　その後の塔城さんとイッセー様との緊迫した戦いには息をするのも忘れ、そして、塔城さんと決着がついたあの瞬間！　倒れる塔城さんが間薙様に体を預けるあの構図！　偶然から生まれた奇跡そのもの！　名作の絵画を見ている様な感動を覚えました！」

レイヴェルの話は止まらない。口を挟むことすら阻まれる程の怒涛の勢い。

気付けばレイヴェルの後ろにライザーが立っていたが、妹の熱の入り具合に若干呆れ

た表情をしていた。
「イッセー様と匙さんの死闘も私、血が熱くなる程でした！　お互いの全力と全力をぶつけ合うその様は、古の益荒男の戦いを彷彿とさせるものでしたわ！　まさに男の決闘！　拳と拳でしか生まれない領域！　女の身ですが、あれを見た時少しばかり殿方になりたいとさえ思ってしまいました！」
　リアスとソーナのレーティングゲームを観戦しての感想を息つく暇もなく語り続ける。余程興奮したのか、体の内に生じた熱をそのまま感想と感情に乗せて外に放っているようであった。
「リアス様とソーナ様の王同士の戦いは、まさに背負う者としての戦い！　駒たちを動かし時には冷徹な戦術を出すも決して冷血ではなく、寧ろ下僕が落ちていく度にその無念を背負い自分たちの力へと変えていくその姿はまさに王道！」
　放たれる熱は一向に収まることを知らず、それどころかどんどんと上昇している様に思えた。
「間薙様と木場さんの最後の戦いは、画面越しでも痛さと怖さが伝わってきました！　戦いの現実と残酷さを皆に見せつける様であり、同時に戦う者たちの意地と執念を見せつけられる思いでした！」
　興奮のままに握り締めているシンの両手を勢いよく上下に振る。一応包帯を巻いて

いる怪我人ではあるのだが、興奮状態のレイヴェルの目には入っていなかった。
このままだとレーティングゲームの最初から最後まで感想を延々と聞かされそうな気がしたので、背後に立つライザーに視線を向ける。『どうにかしてくれ』、という意味を含ませて。
ライザーは溜息を吐いた後に、レイヴェルの肩を指先で二回叩く。
「何ですか！　今リアス様とソーナ様のあの素晴らしい戦いの結末を――」
話の邪魔をされたことで実兄に対し噛み付かんばかりの勢いで迫るが、ライザーは動じずにシンの両手を顎で指す。
示した方向を目で追い、包帯が巻かれた両手に辿り着いたとき、紅潮していたレイヴェルの顔から一気に血の気が引き、慌てて握っていた手を離す。
「ご、ごめんなさい！　私ったら我を忘れていました！」
少し距離を空け深々と頭を下げるレイヴェル。レーティングゲームで戦ったときの尊大さが嘘の様なしおらしい態度であった。
「気にするな。大した怪我じゃない」
「いや。大した怪我だろう」
左手は骨折と左右に分かれそうなほどの深い裂傷。右腕はアスカロンで串刺しにされているのを画面越しで見ている。大した怪我では無いと簡単に流してしまうシンに、

思わずライザーは口を出してしまった。
「本当に大した怪我じゃないんだがな」
そう言ってシンはライザーたちの目の前で両手を開閉してみせた。
「人間なのに気持ち悪い体をしているな」
「お兄様っ！」
歯に衣着せぬ率直な感想。レイヴェルが咎めるものの、シンの方は特に気を害した様子も無く『まあな』とさえ言って認める始末。
そんな二人にレイヴェルは何を言えば良いのか分からなくなり、閉口してしまう。
「それで？　感想を言う為にここまで来たのか？」
「ごめんなさい。どうしても伝えたくなって……。あともう一つお願いが……」
「お願い？」
レイヴェルはもじもじと恥ずかしがっている様子でそのお願いについて中々言い出せずにおり、ライザーに視線を向け助け舟を求める。
するとライザーは露骨に『嫌だ』という表情をする。
それでも潤んだ目を向け続けるレイヴェル。妹の懇願する視線に耐え切れなくなったのか、重い息を吐きながらライザーがレイヴェルの前に出た。
「まあ、その、何だ……。結構というか、それなりにというか、多少というか、まあまあ

ゲームで活躍していたな」
「……お前も感想を言いに来たのか？」
中々話を切り出さないライザーを少し揶揄う。瞬間、ライザーに火が点いた。
「はっ！　だったら言わせてもらおうか！　無様に負けたな、貴様！　赤龍帝や猫又に振り回されている姿は滑稽だったな！　ソーナ・シトリーの『戦車』代理のくせに『王』を守れないとは『戦車』失格だな！　馬鹿め！　あと聖魔剣使いにも紙一重で負けそうになった挙句アナウンスで助けられるとはな！　精々リアスに感謝しておけ！　お前が倒される前に『王』を取ったことをな！　個人の黒星がつかなかったことだけはまあ、一応褒めておいてやる！」
早口且つ上から目線でシンをこき下ろしてくる。
だが、添え物程度に褒め言葉が付け加えられていた。
「ああ言っていますが、ゲーム中は、それはもう食い入るように見ていたのですよ。特に間薙様とイッセー様の戦いなんて前のめりになるくらいに」
「レイヴェェェェルッ！」
シンに耳打ちしてきたレイヴェルの言葉をしっかりと拾い、照れ隠しなのか大きな声でレイヴェルを注意する。
「さっさと用件を済まして行くぞ！　ここは俺達がウロチョロしていい場所じゃないん

だ！　無理を言って融通を利かせて貰ったに過ぎない！　残り時間も少ないぞ！」
ライザーの言う通り、本来この場所に居られるのはレーティングゲーム参加者か、その関係者だけである。部外者であるライザーたちが足を踏み入れることにいい顔などされはしない。日々ライザーがコネクションを築いてきたこと、七十二柱という上級悪魔という立場で無理を言って、何とか十数分の猶予を貰えたに過ぎない。
「もうそんな時間なのですか？　分かりました。間薙様っ！」
「何だ？」
ライザーが下がりレイヴェルが前に出る。レイヴェルが真っ直ぐシンを見ながら両手が後ろ手になる。少し躊躇する様に口をもごもごと動かしていたが、後ろでライザーが小声で『早くしろ』と急かしたことで意を決したのか、背に回していた両手を勢いよくシンに向かって突き出す。
右手に色紙。左手に万年筆を握り締めて。
「これにサインを書いてくださいますかっ!?」
目の前に突き出されたそれを見て、暫しの間シンは沈黙した。沈黙せざるを得なかった。今まで生きてきた中で、そしてこれから生きていく先で一生頼まれることもすることも無いであろう台詞を言われたからだ。
「……サイン？」

「はい！　そうですわ！」
聞き返せばレイヴェルが瞳を輝かせて頷く。冗談ではなく本気だというのが伝わってくる。
「……サインなんて書いたことが無いんだが」
「まあ！　だったら私が初めてということですか！　光栄です！」
喜々としてますます目を煌かせるレイヴェル。
サインと万年筆から視線をずらし後ろに立つライザーの方を見ると、視線だけで物理的に焼き殺せそうな程の目付きでこちらを睨んでいる。
『まさか可愛い妹の頼みを断るんじゃないよなぁ？　もし断ってみろ。燃やし尽くすぞ？』
圧が籠った眼がそう語っていた。
ここで断ってライザーに暴れられるのも不味い。何よりここまで期待を込めたレイヴェルの顔を曇らせるのも悪いと思い、レイヴェルから色紙と万年筆を受け取った。
白い色紙に万年筆の黒いインクが走る。よく見る様な洒落たサインなど書けないので、色紙の真ん中に堂々と『間薙シン』という名を崩さずに書き、それをレイヴェルに手渡した。
「ありがとうございます！」

喜んでそれを受け取るレイヴェル。すると、またもじもじとした態度をとる。
「実は、もう一つお願いが……」
「……何だ？」

◇

ライザーたちと別れてシンは再び医療施設内を歩いていた。その手に万年筆と新たな色紙を持って。
これで一誠のサインも貰ってきて欲しいというのがレイヴェルのもう一つの願いであった。あれ以上施設内を歩き回ることは時間切れの為に出来ないからである。
頼みを引き受けてくれた礼として『フェニックスの涙』を渡された。
（最近、身近に感じる様になったな）
そう思いながら小瓶の中に『フェニックスの涙』を揺らす。それだけ必要になる場面が多くなったとも考えられる。
フェニックスの涙を何となく見つめながら歩いていると、それ越しに人の姿を見つける。歪んで見えるが、それでも鮮やかな紅の色までは歪むことも曇ることも無い。
「部長」

シンが名を呼ぶと、扉を開こうとしていたリアスの動きが止まり、シンの方を見る。
リアスは少しだけ驚いた表情をした。
「シン……貴方は大丈夫なの？」
「大したことないですよ」
レイヴェルに見せた様に軽く手を振って見せる。
「大したがことないからって無茶をしたらダメよ」
その行動にリアスは苦笑しながらやんわりと注意をした。
「ここがイッセーの病室なのだけど、貴方も来るでしょう？」
「……いいんですか？」
シンも一誠に用があったが、つい先程まで敵味方に分かれて戦っていた関係である。こうやってリアスと会話していることですら、いいのだろうかという疑問を抱いていた。
「あのね。貴方がソーナ側で戦うことは私も認めたことなの。それにゲームが終われば敵も味方も無いわ。勝っても負けても。それとも私や私の眷属たちが、そういったことでわだかまりを持つと思っているのかしら？」
半眼で責める様に見詰めてくる。そんな器の小さな者だと思っているのかと。
「それもそうですね。分かりました」

これ以上躊躇うのは逆に失礼だと思い、リアスの言葉に従うことにした。大体シン自身も戦った相手に対し恨みも怒りも抱いてはいない。双方それならば、それでこの疑問は終わりである。

リアスの後に続いて病室の中へと入る。

病室のベッドの上で一誠が仰向けで寝ているが起きており、ベッドの隣でいつの間にか来ていたマダと喋っていた。

マダを見た瞬間、リアスが小さな声で『うっ』と呻いた。あまり顔を合せたい相手ではないらしい。

「あ、部長！」

リアスを見ると仰向けになっていた一誠が勢い良く上体を起こすが、すぐに頭をフラフラと揺れさせる。

「あんま無理すんな」

見兼ねてマダが一誠の額を指先で押す。抵抗も無く一誠は再びベッドの上で仰向けになった。

「大丈夫なの？　イッセー」

「だ、大丈夫です。ちょっとクラクラしますけど……」

『意識を失うまで生命力を魔力に変換したんだ。もう少し大人しくしていろ、相棒』

強がってみせる一誠にドライグの声が飛ぶ。シンは一誠と匙がどんな戦いをしたかは知らないが、シンの前でリタイヤする姿や今の一誠の状態を見ると、紙一重の戦いだったのが容易に想像出来た。
「あ、間薙も来てたのか」
リアスから少し遅れてシンに気付いた。
「まあな。思ったよりも元気そうじゃ無いみたいだな。――匙は強かったか？」
「――強かった。何とか勝ったけどな。……いや、引き分けみたいなもんか」
匙との激戦を思い返す一誠。その表情は僅かな悔しさとやり遂げた満足感が混ざり合っている。
「確かにあの子の働きは大きかったわね。今回のゲームの評価は匙と貴方のおかげで厳しいものになったから」
横目でリアスがシンを見る。恨みがましいというよりはしてやられたというものであり、視線にまとわりつく様なものは感じられない。
「開始早々にギャスパーを落とされたこと、それに赤龍帝がリタイヤしたことが上の人たちには気に入らなかったみたいね。ギャスパーにとって有利なルールだったこと。赤龍帝が禁手まで使用したのも大きく影響していたわ」
「そりゃあ、あの神滅具が禁手に至ったていうのに結果を見れば一人を相打ち同然で倒

しただけのしょっぱいもんだったからなぁ。あー、情けねぇー」
　情け容赦無く追い打ちを掛けるマダ。事実なだけに一誠はぐうの音も出なかった。
「うう……すみません」
「別に貴方を責めている訳じゃないわ。責められるとしたら皆を上手く動かせなかった私の責任よ。貴方たちは十分戦ってくれたわ。辛勝だったけど勝ちは勝ち。初めての一勝よ」
　一誠を元気付ける様に笑い掛けるリアス。励まされた一誠は地獄で仏に会った様な救われた表情となった。実際は真逆であるが。
「それに決して貴方の評価だって厳しいものばかりじゃないのよ。ほら、貴方がリタイヤする直前に私たちの動きに気付いてソーナの居場所を教えてくれたじゃない。ソーナの策を一気に封じるだけじゃなくて同時に追い込んだ一手は中々のファインプレーと言われていたわよ」
　リアスの言葉を聞いて、シンも一誠がリタイヤ直前に謎の力を放っていたことを思い出した。リアスやソーナの位置が分かったということから、攻撃では無く索敵用の技だったらしい。
「あれって一体どうやったの？　私たちも知らない技を使ったのよね？」
　どんな方法かと尋ねると一誠は笑い出す。その笑みを見たとき、シンは嫌な予感がし

た。
「ふふふふふふ。あれはですね。うふふふふふ」
「へっへっへっへっ。土壇場で成功させたみたいだな？　イッセー。へっへっへっへっ」
何故かマダも笑い始める。それについて何か知っている様子であった。
「……勿体ぶらずに早く言え」
「ふふふふふ。なあに、ただ聞いただけさ、声を」
「声？」
読心術でも身に付けたのであろうかとシンは一瞬考えた。
「そう！　おっぱいのなっ！」
その直後に自分が如何に浅はかな考えをしていたのか思い知らされた。目の前の男がそんな単純で普通な技を覚える訳が無い。
「……え？　え？　急に何を言い出しているの？」
言ったことについていけないのか、リアスは聞き返してしまう。
「女性限定でおっぱいの声が聞こえる！　それが俺の新技、『乳語翻訳（パイリンガル）』なんですっ！」
発想も酷ければ名前も酷い。頭の中でその単語を思い浮かべるだけで脳細胞が死滅していく様な気がする。もし、人生でその単語を言うべきときが来たら、躊躇うことな

く己の声帯を抉り出すだろうと、シンは迷い一つ無く思う。
　あまりにあれな新技にリアスは絶句する。一方、マダは誇らしいと言わんばかりに頷いていた。
「まさに胸の内を聞く、というやつです」
（何だろうか……殴りたい）
　少し上手いことを言う一誠を何故か引っ叩きたくなる衝動に駆られる。
「本当なら会話する為の技なんですが、近くにおっぱいが無かったから声を聞くのが精一杯でした。まあ、何とかソーナ会長の『僧侶』のお姉さんの声と部長たちの声が聞こえましたが」
「そういえばあのとき何か胸に違和感があったわね……」
　一誠の説明にリアスは心当たりがあり、納得してしまう。
「ふふ……いいもんでしたよ。マダ師匠。おっぱいの声を聞くっていうのは……。本人と違った個性があって俺のおっぱいへの理解がより深まりました」
「へっ。ついこの間までひよっこだった癖に。師匠の俺ですら出来ないことを成し遂げちまうとはな……」
　師が弟子を認めるという暖かな光景。ただし、それを見ているリアスとシンの周囲には冷えた空気が流れており、それらが混じり合ってぬるい風が場に吹いていた。

『本当になあっ！　何で出来ちゃったんだろうなっ！　それだけ俺が高性能という訳か！　ふはははははははははははははは！』

ドライグが笑うが、その笑い声から自棄になっているのが伝わってくる。聞いている方が痛々しく思える程の悲痛な笑いであった。

『ふはははははははは……はははは……はは……おおう……おおお……』

その空元気も底を突いたのか、哄笑が慟哭へと変わっていく。

「ごめんな！　本当にエロくってごめんな！　どうしても、どうしてもこの渇望が捨てきれない……！」

「取り敢えず落ち着け。お前は一生懸命そいつの相棒をやっているだけだ。お前自身何も間違ったことはしていない」

「大丈夫よ、大丈夫。貴方が誇り高い二天龍だって言う事は誰もが分かっているから」

あまりに哀れに思ったのか、一誠、シン、リアスがドライグを慰め始める。傷付いた自尊心を埋める様に称賛の言葉を浴びせ続けた。

その甲斐あってドライグの嘆きも次第に治まっていく。

『うう……そうだよな。頑張っているよな、俺』

「そうだぜ。誇れ。胸の声が聞こえるなんて特技を持つドラゴンなんてこの世でお前一匹だけだ」

折角治りつつあったドライグの心の傷を深く抉るマダ。
『お前とは当分口利かないからな！』
子供の様な捨て台詞を吐いて、ドライグはそれ以降沈黙してしまう。
「おい、ドライグ？　おーい！　ドライグ！」
一誠の呼び掛けも無視。完全に心を閉ざしてしまった。
シンとリアスが視線で責めるが、マダは気にする様子も無く口笛を吹く。
「まあ、いいわ。色々と言いたいことがあるけど一先ず置いておきましょう。取り敢えずイッセー、その技はゲームでは今後禁止よ」
『えー』
師弟揃って不満そうな声を上げる。
「だってそんな技があったら今度から女性悪魔たちとは戦えなくなるわ。弱みを握られたり、プライベートを知られたりするって普通は考えるもの。相手がこちらとのゲームを拒否するでしょうね」
戦うだけで自分たちの心を読まれるなどたまったものではないだろう。尤もこのことを知っているのは今この場にいる者たちだけである。誰にも言わなければ今後も密かに使用出来るだろうが、リアスの性格上黙っている筈は無いが。逆に読心を黙って使っている者たちも居るかもしれない。心を読む神器など実際に在りそうである。

「うううぅ……部長がそう言うのなら従います……」
リアスの命に従うと決めた一誠であったが、余程無念なのか少し涙目になっていた。
「すみません。どうやら一度限りの命だったみたいです……」
マダに詫びると、マダはそれを一笑する。
「気にするな。ゲームが駄目なら実戦でばんばん使ってやれ。お前の洋服崩壊と合わせて身も心も丸裸にしてやれ」
最低な励ましと助言を送るマダに、リアスもシンも呆れる。
「馬鹿馬鹿しい……」
酷過ぎる内容に思っていたことがついシンの口から漏れ出す。リアスも一誠も聞き取れない小さな声量だったが、マダの耳は零れ出た声をしっかりと捉えていた。
「イッセー。いつかはあの堅物野郎にもお前の世界を教えてやれ」
「え？　間薙にですか？　……頑張ります！」
マダの碌でも無い台詞に、一誠も断らず素直に応じる。聞いているシンとしてはいつか実現されるのではないかと、背中に嫌な悪寒が走った。
これ以上ここに居るとマダが更に良からぬことを言いそうなので、目的を果たすことにする。
「ほら」

「何これ？」
シンから色紙と万年筆を手渡された一誠は、意味が分からずキョトンとした顔でシンを見上げる。
「お前のファンがサインを欲しいとさ」
「マジでっ！」
ファンなど自分の人生に於いてこれからもこの先も縁が無いと思っていた。それが現実に現れ、ましてや自分のサインを欲しがっている。このことに一誠は興奮を隠せない。
「誰!?　誰!?　男!?　女!?　名前はっ!?」
ファンという言葉に喰い付き、上体が目にも止まらぬ速さで起き上がる。血走った目で鼻息を荒くして詳細を聞いてきた。
が、しかし――
「だから寝てろっってんだろうが」
マダの人差し指が一誠の額を弾く。その瞬間、起き上がったとき以上の速度で頭を枕に叩き付けられ、反動で両脚が九十度真上に伸びる。首倒立の体勢を数秒キープした後、両脚はベッドに降りる。
「イ、▪イッセー！」

リアスが慌てて一誠の顔を覗き込む。一誠はベッドの上で白目を剥いて気絶していた。
「大丈夫なの!? イッセー!」
「大丈夫。大丈夫。この程度でくたばる様だったら、特訓の時に既にくたばってるぜぇ。おら! この程度で寝てんじゃねぇ!」
気付け代わりの平手打ち。それの連発が一誠を襲う。
「止めなさい! 本当に死んじゃうわ!」
マダにしがみつき一誠から引き離そうとするが、巌を彷彿とさせるマダの巨体にはリアスの細腕など無力であった。
「じゃあ、サインは後で取りに来ますので」
これ以上居座ると巻き込まれそうになると察し、俄かに騒がしくなっていく病室を後にしようとする。背後から打楽器の様な音が聞こえてくるが、流石に本気では無いことは何となく分かっていた。喧騒はシンの去り際の言葉や気配を完全に打ち消してしまい、リアスたちが気付くことなくシンは病室から出る。
「ん?」
病室を出ると、すぐそこに白鬚を蓄えた老人が立っていた。皺以上に彫りの深い顔立ちは一目で異国の出身だと分かる。

「こんなところで会うとはのぉ」
　こちらのことを知っている口振りで老人はシンをじっと見つめる。その片目は閉ざされており隻眼であった。
「どちら様で？」
　面識の無いシンが尋ねると老人は破顔する。好々爺という印象を受けるほどその笑みは気さくなであった。
「なあに。ただの北田舎のジジイじゃよ。お前の戦いを見せてもらったが若いのに随分と勇ましいというか、痛々しい戦い方をするのぉ。特に最後の聖剣に串刺しにされるのは、昔を思い出したわい」
　笑いながら自分の体をさする。
　レーティングゲームを観戦しているので自称北田舎のジジイで収まる様な人物ではないのは簡単に分かる。
「とは言っても若いうちは苦しいことも楽しいことも存分にやるべきじゃわい。その方が育つからのぉ。特にお前の場合はそれを何倍も経験しなければならないしのぉ」
「――それはどういう意味ですか？」
『魔人』には敵が多いからなあ？」
　柔和な表情が一瞬だけ変わる。槍の如き威圧と神気が量る様にシンを貫いた。並み

の精神ならば意識を持っていかれる形無き槍撃。しかし、シンはそれを微動だにせず真っ向から受け止め、表情も微塵も変化させない。

すると、老人から放たれた圧はあっさりと霧散する。

「すまんなぁ。少し試させてもらった。どうやらアレの中では真面な方らしいのぉ」

「そうなんですか？」

「少なくともわしが知っておる魔人ならば少しでも殺気を向ければ喜々として襲ってきよったわ。――トール辺りは楽しそうに迎撃しておったがのぉ」

シンの脳裏に高笑いする某闘牛士の姿が浮かび上がる。悪い意味で顔の広い魔人であることを思い知らされる。

「悪魔の中でお前を見た時は、悪魔もとち狂ったかと思ったが案外大丈夫そうじゃのぉ。それだけ分かれば十分」

老人はシンの横を通り抜け病室の前に移動する。

「ではな。赤龍帝の小僧にも一言言いたいので」

「それでは。北田舎の御爺さん」

既に容姿や先程の気配から正体は察していたが、敢えてそれを伏せて最初の名乗りで返す。

老人とシンはほぼ同時に背を向け歩き出した。その去り際――

「ロキには気を付けろ」
シンは足を止めどういう意味かと問う為に振り返るが、それよりも先に老人は病室の向こうに消えていた。
少し気になったがこれ以上問うのは無駄だと思い、ここから離れることにする。もし、本当に警告をするならあの場できちんと説明をしていた筈。老人も確実性の無い勘から来る警告であった為、気にする程度に留めておいたのではないかと。
（まさか神に会うとは……）
悪魔や天使と関わっているのならいずれ会うとは思っていたが、出会いというのは常々時や場所を選ばないものだと知る。
（あれが北欧神話の主神か……）
その力の一端を見ることが出来たが、せいぜい挨拶程度のもの。本当の実力を知るには浅い。
（ロキか……）
北欧神話のトリックスター。悪戯の神。それが何かしらの意識をこちらに向けている。全く身に覚えの無いことなので推測も予測も出来ない。
（……そういえばあいつ等はどうしているんだ？）
仲魔たちのことが頭を過る。それは自分でも不思議に思うほど唐突なものであった。

◇

「まあ、こんなもんか」
レーティングゲームが終わると共にロキは立ち上がる。ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンは未知の観客に対し、これといった警戒心を見せなかったが、ケルベロスは終始警戒しており、ロキが何かする度に唸り声を上げていた。今も立ち上がったロキに対し唸っている。
「そんなに警戒するなよぉ。何もしないって気配で解るだろう？」
「グルルルル……」
しかし、ケルベロスは唸るのを止めない。
「やれやれ。悲しくなるぜぇ」
わざとらしい仕草を見せるロキ。しかし、その顔には笑みが張り付いていた。
ロキはそのまま部屋の外に出ようとする。
「もう帰るの？」
ピクシーが話し掛ける。
「ああ。もう用事は済んだからな」

「結局何しに来たんだホ？」
「用事って言っても僕たちと一緒にシンたちの試合を見ただけだよ～」
「それが用事って訳さ。久しぶりに会えてよかったぜ」
久しぶりと言われて、ピクシーたちは戸惑う。ピクシーたちにとってはロキとは初対面であった。
「お前たちはきちんと忘れられているんだな」
ピクシーたちの反応を見て、独り納得しながらロキは部屋の外に出る。
「あ、ちょっと待って！」
腑に落ちないピクシーたちは、慌ててロキの後を追う。ロキはまだ扉の前に居た。
「忘れているって何がホ？」
「知る必要は無い」
突き放した言い方にピクシーたちは少し怒った様子で顔を顰める。その顔を見てロキは喉の奥で笑った。
「別に意地悪して教えない訳じゃねぇよ。まあ、好きだがな。忘れていた方がお前たちにとって為になる筈だ」
「どういうこと～？」
「それも言えないな。実のところ、こうやって俺がお前たちとベラベラ喋っているのも

もしかしたらお気に召さないかもしれない」
「……ダレガオキニメサナイ？」
「さあな」
　気になる情報は漏らす癖に肝心なことは喋らないロキに、苛立ちを覚え始める一同。全く心当たりが無いことなのに、自分だけが知っていることを勝手に言うロキと話が噛み合わない気持ち悪さもまた苛立ちを増加させる。
　もっと追及しようとしたとき、金属が擦れ合う音が廊下から聞こえてくる。自然と音の方に目を向けると、鎧を纏った女性が駆け足でこちらに向かっていた。
　女性はロキの前で急停止すると、目を吊り上げてロキを見上げる。
「どこにおられたのですかっ……！」
　本当ならば怒鳴りたい所を、注意を惹きたくないので無理矢理声を押し殺す。その余剰となった怒りが赤面として表に出ていた。
「何だ、自力で気付いたか」
　幻術の自分と自然に合流し誤魔化すつもりであったが、そうなる前に悪魔たちよりも早く幻術だと気付いたことにロキは少し驚き、多少感心する。魔術体系が同じだとはいえ神の力を一介の戦乙女が破ったのだ。オーディンが付き人として連れてきただけのことはあった。

「何を考えているのですか！　冥界で単独で動くなど！　下手をしたら悪魔と北欧の神々との間に亀裂が生じるかもしれないのですよ！」
「それはそれで面白そうだな」
「何を言うのですか！　誰かに聞かれていたらどうするのですか！　神としてもう少し御自分の立場と発言に――」
「ガミガミうるせぇぞ。行き遅れのヴァルキリーが。まず自分の行末を心配しろ。そんなんだから余るんだよ」
「なっ！」
　普段のロキからは想像出来ない暴言にヴァルキリーの女性を絶句させる。そして、よろよろと後退した後、いきなり蹲って泣き始めた。
「そ、そんなはっきりと言わなくてもぉ……うぅ……私だって色々と頑張っているのに……」
　余程効いたのか本気でショックを受けている様子であった。
「大丈夫。大丈夫。あの人、性格悪そうだから気にしたらダメだよー」
「ヒホ！　本気にしたらダメだホ！」
「ヒ～ホ～。真面目に捉えちゃいけないよ～」
「グルルルル。トリアエズココデナクナ」

見兼ねて初対面のピクシーたちがヴァルキリーを慰め始める。
「うう……ありがとうございます……ところで貴方たちはどなたですか？」
ヴァルキリーとピクシーたちが自己紹介をし始めたのを見て、ロキが何やら口を挟もうとする。しかし、開かれた口は自らの手によって塞がれた。
瞬きが少しだけ多くなる。自分でしたことだというのに他人にされた様な驚きを感じさせる。
（これ以上喋るな、か。はいはい。分かった、分かったよぉ）
塞いでいた手が離される。
「いつまで無駄話を続けている気かな？」
その声が聞こえたとき、ピクシーたちはそれが誰の声か一瞬分からなかった。それがロキから発せられたと気付くと強烈な違和感を覚える。今まで粗野な印象だった筈なのに、今のロキからは真逆の印象を受ける。急に威厳が増したのだ。
「は、はい！」
ロキに声を掛けられたヴァルキリーは、釣り上げられた様に立ち上がる。
「私を連れ戻しに来たのだろう？　ならばさっさと行くぞ。もう冥界には用は無い」
「で、ですが、まだオーディン様の用が済んでいません」
「ならば一足先に帰らせてもらう。ここの空気は肌に合わない」

我関せずの態度で去っていく。

押し掛ける様に付いてきて、ふらふらと何処かに姿を消し、挙句勝手に帰ろうとする始末。ヴァルキリーもあれこれと文句も言いたくなるが、立場上思い切ったことは言えない。というよりも、先程の件で次に何を言われるのかと思い躊躇していた。

「ま、待って下さい！」

慌ててロキへと駆け寄る。ロキを止めるつもりは無かったが、本当に帰るのか半信半疑であった為、今度こそきちんと見逃さずに最後まで看視するつもりであった。

「……何だったんだろうね？」

「オイラには分からないホ」

終始勝手をしていたロキに対してのピクシーたちの感想がそれであった。ピクシーたちも基本自由に生きているが、それでもロキの意図が理解出来ずにいた。

すると、去って行くロキが首を動かし顔半分をピクシーたちに向ける。声を出さず、唇だけを動かし何かを告げると、すぐに顔は正面を向き見えなくなる。

『またな』

確かに彼はそう言っていた。

◇

「うう……」

呻き声を上げながら匙は瞼を開ける。見上げた先には白い天井があった。

自分が何故ここに居るのだろうと数秒ほどぼんやりと考え、やがて一誠に負けたことを思い出した。

体を起こす。治療が済んでいるらしく、あれだけ殴られたというのに体に痛みが走ることは無かった。

自分たちはゲームに勝ったのか負けたのか。途中でリタイヤしてしまった匙にはそれを知らない。

そして、もう一つ気になることがあった。

「ヴリトラ?」

自分の中にいる存在に声を掛ける。しかし、返事は返ってこない。今度は心の中でその名を呼ぶ。やはり返事は無かった。

分かってはいた。最後の一撃を一誠に放つとき、ヴリトラは匙に意識を保つ為に最低限必要な魔力を全て譲渡した。そのせいで、深い眠りから目覚めた筈のヴリトラは再び深い眠りへと入っていた。

「礼もさよならも言えてないのにな……」

呟く言葉に寂しさが混じる。
言葉を交わし、一緒に戦った時間は決して長くは無い。だが、その短い時間の中でも自分たちは間違いなく相棒であった。一誠相手にあれほど食い下がれたのもヴリトラの助力があってこそ。
そのときドアが数回ノックされる。
「はい？」
「起きていましたか」
「か、会長！」
ドアが開き、ソーナが現れたのを見て匙は思わずベッドから跳ね、何故かベッドの上で正座になる。
ソーナはそのまま匙のベッドの側まで移動する。
無言。沈黙。静寂。匙の側まで来たというのにソーナは一言も発しない。匙の方はソーナの静かな圧力のせいでさっきから冷や汗を流し続けていた。
まるで空気が鉛と化した様な重苦しさ。緊張感のせいで体から全ての水分が抜け出ていっている様な渇きを覚える。まだ頭に銃か剣でも突き付けられた方がましに思えた。
持てる勇気を全て振り絞り、匙は沈黙を破る。

「ゲームは……どうなりました？」
　無言で立っているソーナの目と見上げた匙の目が合う。それだけで匙の心臓は破裂寸前かと思えるほど鼓動を速める。
「私たちの負けです」
「そう、ですか……」
　その報せを聞かされたときだけは、目の前のことが塗り潰されるほどの悔しさが沸き上がった。臓腑が熱を帯びながら収縮していく様な感覚と力が抜けていく様な喪失感。苦く、いつまでも残る敗北の感覚であった。
「リアスと一対一にまで持ち込みましたがダメでした。『反転』の力も駆使して戦いましたが、慣れない力を使ったツケでしょうね。魔力切れを起こして、リアスに負けてしまいました。尤も仮に使わなくとも結果は同じだったかもしれませんが」
　淡々と語るソーナ。負けたことへの悔しさを微塵も外に出さないその姿に、匙は感服する。もし、自分が同じ立場ならば感情を隠し切れ無い。
「それで？」
「……はい？」
「まだ私に言うことがありませんか？　サジ」
　見下ろす眼が絶対零度の冷たさを帯びる。その眼差しに匙は体中から熱が抜けてい

き、体が震え始めた。
「そ、そ、それは……」
　恐ろしさから上手く舌が動かない。これほどの恐怖は生まれて初めてのことであった。
「神器の核を取り込むという独断」
「うっ！」
「成功したからいいものの、下手をすれば貴方が貴方で無くなってしまうかもしれなかったのですよ」
「ううっ！」
「流石に見ている方々も貴方の行動に肝を冷やしたそうですよ。アザゼル先生など、このゲームを強制的に止めようとまでしていた」
「うぐっ！」
「貴方の行動は貴方だけでなくこのレーティングゲーム関係者全てに迷惑を掛けました」
　言い訳など出来る筈が無い。全てが事実である。分かっていたことだが、現実を突き付けられ、心の何処かで自分の都合の良い考え方をしていたことを実感した。
「貴方には色々と言いたいことがあります。ありますが、正直多すぎて何から言ってい

いのか分からないぐらいです。だから、逆にシンプルにいきます」

「――はい？」

頬から脳に掛けて稲妻の様な衝撃が駆け抜ける。視界がいつの間にか傾き、斜めになった光景。そこには右手を振り抜いているソーナの姿が在った。

衝撃が熱に変わり、やがて痛みに変わったとき、そこで初めて自分がソーナに平手打ちを貰ったことを理解する。

今まで厳しい説教や特訓はあっても、折檻は無かった為にこの平手打ちは肉体よりも精神に重く響く。

本当にソーナを怒らせてしまった。

だが、次に起こったことは、平手打ちよりも衝撃的であった。

ソーナの両手が匙の頭に回され、そのまま胸元に抱き寄せる。柔らかく、そして暖かい感触。

ソーナに抱き締められる匙。この瞬間、殴られた痛みなど全て吹き飛んでいた。

「本当に……心配をさせないで」

本当に。本当に自分は、ソーナを心配させてしまったことを思い知らされる。あのいつも冷静なソーナが声を震わせている。この声を一生忘れることは出来ないだろうと匙は確信する。

「会長……ずみまぜんでじだ……！」
　匙は色々な感情が溢れ出し、情けない涙声で己のしたことを謝罪する。それに応じる様に匙を抱き締める腕に力が込められる。
　コンコンと扉をノックする音。するとソーナは抱き締めていた匙を勢い良く突き飛ばし、急いで離れる。
「――はい。どうぞ」
　普段通りの冷静な声でノックに応じる。
「いいかな？」
　扉を開けて入ってきたのはサーゼクスであった。
「サーゼクス様！　どうしてここに？」
「彼に用があって来たんだが……彼は大丈夫なのかい？」
　心配そうにベッドの方を見るサーゼクス。その視線を追ってソーナもベッドを見ると、匙がベッドの上で後頭部を押さえながら悶絶している。
　ソーナが突き飛ばした際、勢い余って壁に後頭部を激突させていたのだ。
「だ、大丈夫です……」
　涙目になりながら後頭部の痛みを堪えて、尋ねてきたサーゼクスと向き合う。
「あの、俺というか、僕というか、私に一体の何の用が？」

「そう硬くならなくてもいい。普段通りで構わないよ」
慣れない言葉遣いをする匙に緊張を解くよう促しながら、サーゼクスは金線の装飾が施された小箱を取り出す。匙にとっては初めて見る物。だが、ソーナは知っているのか目を丸くしその小箱を凝視していた。
「これを受け取りなさい」
言われた通りにサーゼクスから小箱を受け取る。
「開けてみるといい」
言われるがまま小箱を開ける。中を見たとき、匙は驚きのあまり小箱を落としそうになる。
中に入っていたものは、リボンの先に金のメダルが付けられた勲章であった。
「あ、あの、これは……？」
緊張で声がか細くなる。渡された勲章は、明らかに讃える為のもの。
「これはレーティングゲームで優れた戦い、印象的な戦いを演じた者に贈られるものだ」
即ち匙の戦いが皆に評価されたことを意味する。しかし、匙はそれを素直に喜ぶことも受け取ることも出来なかった。
「お、俺は……兵藤に負けました。それに、皆に心配を掛ける様なことをしでかしました。……これを受け取っていい立場じゃありません」

　匙は小箱を閉じ、勲章をサーゼクスに返す。
「成程。確かに君の言う通り、ヴリトラの魂を、たとえその一部だとしても体に取り込むという行為は危険だった」
　サーゼクスは匙から小箱を受け取る。
「しかし――」
　サーゼクスは小箱を開ける。
「そのことに対して君は十分反省しているらしい。それに彼女からもきちんと叱って貰っている」
　サーゼクスの目が匙の頬を見る。そこには赤い手の痕が見事なまでにくっきりと残っていた。リアスの親友であり幼い頃から知っているソーナの、彼女らしからぬ激情の名残を見て微笑む。サーゼクスが何に注目しているのかに気付き、ソーナは静かに赤面した。
「それに君はイッセー君に負けたと言うが結果的に見ればイッセー君を、あの赤龍帝を倒したのは間違いなく君だ。君とイッセー君との戦い。あれは正直胸が熱くなった。一秒たりとも目を離せられない激闘だった。あの北欧のオーディンも君の戦いには賛辞を送っていたよ」
　小箱の中から勲章を取り出す。

「でも、あれは俺の力じゃなくてヴリトラの――」
「こういう解釈も出来る」
取り出した勲章を手に乗せ、サーゼクスは身を屈めた。
「あのとき見せた力は君がいつか至る力で、今回はそれを少し前借りしたんだ」
「えっ」
前向きとも都合がよいとも言えるサーゼクスの解釈に匙は戸惑った声を出してしまう。
「いつか至るのならばあれは紛れもなく君の実力だ。私は、そのいつかを信じて君にこれを贈るんだ」
匙の胸に勲章をつける。
「自分を卑下にしてはいけない。君は上を目指せる悪魔なんだ。何せ、魔王が信じたいと思わせるほどだ。君の様な若手の悪魔を見られて私は嬉しい」
匙の肩にサーゼクスの手が置かれる。
「自分を信じなさい。この先、苦難や挫折があるかもしれない。だけど、君には夢を目指す力も、それを叶える力もある」
その言葉に耐え切れ無くなり、匙は唇を噛み締め、声を押し殺して泣く。本当なら号泣したいが、サーゼクスやソーナの前でそれを必死に我慢した。

匙の中で目指すべきものが増える。
今まで目指しているのはレーティングゲームの先生になること。そこにソーナに二度と心配させない為、そして、サーゼクスの信じるという言葉に応える為、強くなることが加えられる。
そして、もう一つ――
（いつになるかは分からないけど、絶対また会おうぜ。――ヴリトラ）
――自分の中で眠る戦友と再会すること。

一歩、暗澹（後編）

「……あ」

リアス、もしくはソーナの眷属たちを探し廊下を歩いていたシンは、通路の反対側から小猫が向かって来ているのを発見する。小猫もシンの姿に気付き、小さく声を上げていた。

少しだけ歩調を早める二人。廊下の丁度真ん中で両者向かい合う。

「……もう大丈夫なんですか？」

小猫の視線が落とされ、包帯を巻いてある手に向けられる。

小猫の表情が曇る。戦いとは言え、事故の様な不本意な形で怪我を負わせたことに小猫は未だに罪悪感を覚えていた。戦いの最中はそれを押し込むことが出来ていたが、終わった途端噴き出してしまう。

「問題無い」

小猫の眼前に左手を突き出し、見せつける様に開閉してみせる。何も背負う必要は無いと言葉の代わりに見せた行動。

「……ありがとうございます」

それを察して小猫は感謝を言葉に出す。その言葉を聞くと、シンはさっさと手を下げた。この件はこれで完全に終わりだと言わんばかりに。
「……あの、ちょっと失礼します」
一言断ってから小猫は両手を伸ばし、シンの胸辺りを触り始めた。
「……いきなりどうした？」
思わず尋ねる。払い除けはしなかったが、小猫の行為の真意が分からず少し困惑していた。
「……イッセー先輩越しとはいえ間薙先輩に気を打ち込んだので、先輩の気の乱れを直そうと思ったんですが……」
病室の外に居たのも気を通らせたシンや一誠の体調を調べる為である。
シンの体を触る小猫の眉根が徐々に寄っていく。戸惑っている様子であった。
「……全然気が乱れていない。……何か治療をされましたか？」
「何も」
「……どういうことなんでしょう」
本当に何も治療はされていない。あえて言えば自然治癒である。しかし、小猫は納得出来ないのか更に念入りに触れていく。
第三者が視れば完全に誤解される光景であった。

この状況を続けるのは互いの為に良くないと思い、シンは小猫の頭に両手を置く。
そして、わしゃわしゃと小猫の髪を掻き乱した。
「にゃっ！」
飛び跳ねる様にしてシンから離れた小猫。乱れた髪からは隠していた猫耳が飛び出ており、どれほど驚いたかを表していた。
「年頃が、あんまり男の体をベタベタ触るもんじゃない」
少し怒った様な目でシンを見ながら、小猫は乱れた髪を手櫛で直しつつ出ていた猫耳を隠す。
「……そう言うのなら女性の髪をこんな風にするものじゃないです」
「ならそれで相子だな」
小猫は暫し拗ねた様に唇を尖らせていたが、やがていつもの表情に戻る。とは言ってもシンの目には普段よりも柔らかい表情に映った。
「……色々とありがとうございました」
小猫はシンに頭を下げた。
「……私が焦っていたときに叱ってくれたこと。私の失敗を許してくれたこと。私が前に進む為の支えになってくれたこと。本当に感謝しています」
これまでのことを振り返り、改めて礼を言う小猫。

「あんなものはただの切っ掛けだ。それも小さな、な。偉いのは全てお前だ」
言われたシンは、照れる訳でも、謙遜する訳でも無く全て小猫の実力だと言い切る。ある意味では突き放している様にも聞こえるが、実際その意味も含ませていた。
目の前でしっかりと立ち、自分の道を歩んで行こうとする小猫に支えは最早不要と思えた。
「……先輩ってお父さんみたいですね」
思ってみなかった小猫の台詞。不意打ちを受けたシンは黙ってしまった。生きてきた中で初めて言われ、返す言葉が見つからない。
その沈黙を気分を害したと受け取ったのか、慌てて小猫は自分が言ったことを補足し始める。
「……変な意味で言った訳じゃないです。本当にそんな風に思えたのでつい言っちゃいました」
「……初めて言われたな、そんなこと」
辛うじて出てきた言葉がそれであった。
「……私は父様――父の記憶がありません。どんな顔や性格だったのかも知りません。だから、父親がどんな存在かなんて正しく理解していないと思います。……でも」
小猫は少し恥ずかしそうに頬を染める。

「……もし、父が居たのならやっぱり先輩みたいな人が良いです」
ここまではっきり言われたのなら仕方が無いとシンは思いながら、シンは小猫に背を向けた。怒らせてしまったのかと思い、オロオロと動揺し始める小猫。
背を向けたまま小猫を手招きする。
若干の不安が混じった訝しむ顔でシンへと近付く小猫。そして、シンの側まで来る。
「小猫」
名で呼ばれ驚く。それと共に暖かな手の感触が頭に乗る。今度は先程の様に掻き乱されることはなくただ優しく置かれているだけであった。
「色々と頑張ったな」
成長を喜び、慈しむ言葉。
父の様だという言葉に乗っかったのか、あるいは悪戯心からの仕返しか、それとも単なる気紛れか。正解は小猫には分からない。
だから、小猫は今のこの状況を素直に感じ入ることとした。
「……今なら撫でても良いですよ?」
くっ、という小さな失笑が聞こえた。こちらに背中を向けていても小猫には分かった。このときシンはいつもの無表情を僅かに崩し、微笑を見せているのが。
二人だけがいる静かな廊下で、髪の擦れ合う音だけが微かに響いた。

◇

冥界でするべきことは全て終え、明日には人間界へと帰る。人の世界とは違う輝きを放つ月を、シンはシトリー邸からぼんやりと眺めていた。シトリー眷属の立場での戦いを終えたのでグレモリー邸へと戻っても問題無かったが、残りの滞在日数からわざわざ戻るのも面倒だと思い、ソーナに頼んで最終日までシトリー邸で過ごすこととなった。

仲魔たちからも不満な声は無く――ケルベロスだけは獣面でも分かるほど露骨に嫌な顔をしていたが――ソーナの所で世話になっていた。

その間特に問題は無く、せいぜい妙に気合いの入った匙と一緒に特訓や手合わせをするぐらいしかやることは無かった。

しかし、それももう終わる。冥界での生活に未練など無かったが、それでもこの日までのことに、思いを馳せる日が来るだろうという予感はあった。

「こんばんは」

独りが生み出す静寂を破る来所者の声。警戒はしない。知っている人物の声であったからだ。だが、疑問は生じる。何故ここに現れたのか、と。そして、やはり只者では無いことを思い知らされる。声を掛けられるまでその存在に気付くことが出来なかっ

た。
「セタンタさん？」
「お一人の所、失礼します」
そう言って頭を下げる。
「何をしに？」
純粋な疑問がつい口から出てしまう。既にセタンタとの特訓は終わっており、レーティングゲーム終了から今日まで姿を見せることは無かった。それが急に現れたのだ、不思議に思わずにはいられない。
「最後にやり残したことがあったので。ああ、私が来ることは事前にソーナ様には伝えております」
「やり残したことですか？」
「ええ。――私が貴方に課せた特訓の終了試験です」
その一言で周囲の空気は一変する。肺腑に取り込まれる空気が冬の風の様に冷たく感じ、且つ鉛の如く重い。セタンタの発する圧により、無意識に体が萎縮している。
試験などと言っているがシンにはそう思えなかった。発せられる重圧は紛れもなく殺意が込められている。
目の前の人物は間違いなく自分を殺したがっている。そう感じずにはいられない。

「――いいですよ」
相手の真意など分からない。しかし、シンは引かずにそれを受ける。
「では、少し広い場所に移動しましょう」
セタンタが背を向け歩き出す。その後ろに付いていくシン。
無防備に背をシンに向けているが、その実一切隙が無い。どんなにシンがイメージしようとも、拳が当たるどころか触れるイメージすら浮かばなかった。
歩いて数分。シトリー邸の庭園に着く。周りの彩る花々も両者の間に流れる空気により鮮やかさを失いくすんで見える。
「ここなら十分ですね」
槍を握り締めたままセタンタは、シンから数歩離れる。距離にすれば三メートル程度。シンが少し移動すればすぐに槍の間合いとなる距離である。
「始めましょうか」
肩に寄りかからせていた槍を下に垂らす。構えというよりも適当、脱力という言葉が相応しいものであった。
シンもまた両腕をだらりと下げ、構えの無い構えをとる。ただ、その両手に輝く紋様がシンの心を映す様に眩く光る。
構えをとった直後、濁流を思わせる槍の突き、払い、突き上げがシンを襲う。

どれも本物では無い。セタンタが見せる幻である。微かな動きがシンの直感に幻の軌跡を見せる。

本能を揺さぶるセタンタの牽制。少し前の自分ならば反射的に幻のどれかに反応していたかもしれない。だが、今のシンならば分かる。

ライザー、ケルベロス、タンニーンと死闘を行ってきたシンにはどんなに巧みに見せようとも、どの攻撃も本命では無いことを見抜く。

セタンタも今程度の揺さぶりではシンを惑わすことは出来ないと察し、無数に繰り出していた槍のまやかしをあっさりと消し去った。

幻の牽制よりも今の静かなセタンタの方が、シンには遥かに恐ろしく感じる。どこが、どのように、どのタイミングで動き出すのか全く見えない。

（そういえば）

戦いの最中、シンはあることを思い出す。それは、セタンタとの過酷な特訓が始まって間もないとき。理不尽なサバイバルと実戦により心身ともに追い詰められたときに一つ決めたことがあった。

この修行が終わるまでの間に、セタンタに文句を付けようが無い完璧な一撃を叩き込む。

色々あって今の今まですっかりと忘れていたが、物事というのはなるようにしてなる

ものらしい。明日には失う筈だった機会が、セタンタ本人から齎されたのだから。
シンはセタンタの重圧に屈せず前に一歩出る。
たった一歩であるが、槍を持つ相手には十分過ぎる一歩。眼前に突き付けられていた刃が、喉元に突き付けられる感覚へと変わる。
そこから更に一歩。第三者が見れば自殺行為に等しい。だが、近づかなければ振るう拳も届かない。
セタンタが一歩でも移動すればすぐに槍の間合いとなる。対するシンの拳を届かせるにはまだ遠い。
近付く。近付く。地面を擦る様にゆっくりと。どこまで近づけるかは、セタンタの気分次第。
生温い冥界の空気は、両者が生み出す張り詰めた空気のせいで極寒の凍気と化していた。
一センチ、一ミリでもいい。可能な限り間合いを詰める。
シンの爪先が小さな小石を蹴る。その瞬間シンは理解した。ここが境界であると。小石がセタンタに向かって転がったとき、殺気が一段と濃くなったのを感じた。間合いに入った小石に無意識に反応した為である。
シンはその場で軽く深呼吸をする。躊躇は一瞬。動くときは石火。踏み込むという

動作に連動し、拳が振り上げられる。
定めていた間合いにシンが踏み込むと同時に、セタンタは動作間の動きを全て省略させたかの様な不可視の動きで槍を振るう。
虚ではなく実の動き。体全体で感じ取ったセタンタの動きは、情報として体内に光速で巡っていく。
拳と槍。間合いも威力も全く違うが、己が最強と信じる武器が交差する。
夜の中、二つの衝突は激しいものではなく不気味ぐらい静かなものであった。
刹那の交差の後、二人は背を向き合わせていた。
シンは背後に立つセタンタに顔を向ける。その右頬には裂傷が出来ており血の滴が垂れている。
一方で、セタンタの外見には傷一つ無かった。
無傷のセタンタを見て、シンは溜息を吐く。
「試験は不合格ですか?」
「いいえ」
セタンタが振り向こうとすると、顔に巻いてあったマフラーが解け、首から地面へと滑り落ちていく。
「合格です」

男にしては艶のある唇で笑みを作る。
「貴方の成長には本当に驚かされます。何時振りでしょうね。戦いの中でこれを落とすなんて」
柄頭でマフラーを拾い上げ、軽く叩いた後顔に巻く。
「傷の方は大丈夫ですか？　傷薬なら持っていますが」
「合格の証として貰っておきます」
裂傷を指先で拭う。既に傷口からの血は止まっていた。
「今の貴方なら、魔人相手でも簡単に命を奪われる心配は無さそうです」
「そうだといいですが」
太鼓判を押されるが、シンは楽観的にはなれなかった。
「それだけ謙虚ならまだまだ貴方は伸びていきます」
セタンタは槍を担ぐ。
「これで私の特訓は完全に終わりです。お疲れ様でした」
「こちらこそありがとうございました」
「あまり引き留めておくのもご迷惑なので、私はこれで」
一礼すると余韻も無くあっさりと夜の中へと消えていってしまうセタンタ。最初から居なかったかの様な静寂だけが後に残る。

唐突に現れ、さっさと消えていくセタンタは終始淡白であったが、シンの方も特訓が終わったことに対し特に感動を見せず、セタンタが消えていった方角に軽く頭を下げて、自分の部屋へ戻っていった。

◇

シンと別れたセタンタは、早足でシトリー領から離れていく。心なしかその歩みに苛立ちが感じられた。

先程から頭痛が起きており、それがセタンタの心をざわめかせている。早々にシンの下から立ち去ったのもこれが原因である。

頭蓋を内側からこじ開けられる様な感覚。錆び付いた扉を無理矢理開くかの様なそれは、神経を削るに十分であった。

その痛みを紛らわせる為、他のことを考え始める。

（これで少なくとも容易く殺られる心配は無くなったか）

シンには魔人だけが敵の様に言ったが、実際は違う。魔人関連で怨恨を持つ者など三勢力どころか他勢力にまで及び、正確な数など把握出来ない。

そういった連中の手が伸びない様に、シンは四大魔王及び番外の悪魔であるメフィス

トフェレスなどから厳重に監視されているという情報をさり気なく流し、簡単に手出しできない状況を作っているが、それでも確実では無い。

そんなことを無視してでも襲撃してくる者たちが居る可能性も捨てきれない。

また外だけでなく悪魔、特に上級悪魔たちの動向も気になる。特に大王派は魔人を蛇蝎の如く嫌い、敵視している。

上級悪魔こそ真の悪魔と考えている彼らにとって、大戦時多くの上級悪魔たちを屠った魔人たちは忌むべき存在であった。

このことについてセタンタもサーゼクスに尋ねたが、どうやら大王派でも魔人であるシンを今すぐ葬るべきという考えと、上手く利用するべきという考えで二分しているのが現状だと説明された。

『老人方は長く生きている分、時間にも寛容だ』

というのはサーゼクスの言。大王派は慎重であること。そして、即決即断が出来る者達では無いという皮肉が含まされていた。このことに関してはセタンタも同意である。守る、囲むということに関しては年季があり強固だが、未知や変化に対してはとことん二の足を踏むのが彼らである。

改めてシンのこれからが前途多難であると分かる。目に見えているだけでこれならば、見えない部分にはどれほどあるか分かったものではない。

だが、セタンタは心配することは無かった。シンの実力もそうだが、彼は一人ではない。周りにはリアスたち、そして彼の仲魔たち――仲魔――仲魔。

そのとき、一際大きな痛みがセタンタの脳内に起こり、思わず立ち止まってしまう。

目の前が真っ白になったかと思えば、次々と見えてくる見覚えの無い光景。

崩れた近代的建物。広がる砂地。崩壊した世界で弱肉強食を繰り広げる異形たち。

次に見えた光景は真逆のもの。緑豊かな自然と石造りの建物。民族衣装を纏う者たち。

連続した映像では無く、異なる場面を一枚一枚つなぎ合わせた歪な映像。何一つ記憶に無い。だというのに自分の中からそれらが掘り起こされていく。

そして、最後の光景は――

誰かが叫んでいる。言葉は分からないが、紛れもなく自分の声であった。だが、今の自分よりも低く感じる。

声の先には、黄金の髪を持つ青年が立っている。

無感情の様であり憐憫ともとれる眼差しをこちらに向けていた。

『今なら――合う。忘れ――今まで通りに――』

雑音が混じった様に黄金の青年の声が途切れ途切れに聞こえる。

それに対し再び叫ぶ自分。その声には強い拒絶があった。

今度こそ青年は表情を変える。そこには哀しみがあった。そして、最後の言葉だけははっきりと聞こえた。

『残念だ。この世界から君という英雄が消えることが』

黄金の光が闇へと変わる。

「はっ！」

気付くと、セタンタは膝を地面に着けていた。額から頬にかけ冷たい汗が流れ落ちている。

セタンタや槍を突いて体を起こす。

今まで全く思い出すことの無かったというのに、断片だが過去の記憶が呼び起こされた事態に、セタンタは喜びよりも不安を覚える。

「……サーゼクス。お前の考えは正しかったな。確かにあの魔人との接触は、俺に影響を与えるものだった。だが――」

――もしかしたら俺は、俺たちはこの世界に居るべき存在ではないのかもしれない。

◇

手荷物を持ち仲魔を連れたシンは、シトリー邸を出てグレモリー本邸前にある駅を目

指す。シトリー邸近くにも駅があるが、アザゼルに用事がある為そちらに向かうことにしていた。ソーナは総出で送り出そうとしていたがやんわりと断っておいた。そこまで大仰にしたくは無かった。

ソーナたちとは屋敷内で挨拶を済ませ、その後外に出る。

シトリー邸から出ると『戦車』の由良がおり、シンを見つけて近づいてくる。

「やあ、間薙」

「体は良いのか？」

「ああ」

由良が病床に伏せたときに会ってから今日まで顔を合せていなかった。病が移る可能性があるのでなるべく会わない様にとソーナにきつく言われていたのもそうだが、頼まれておいて役目を果たせなかったことに負い目を感じていたこと、由良の体調が完全ではないこともあって会うことを避けていた。

「……『戦車』の役目は果たせなかった」

「私の代わりに戦ってくれただけでも十分だよ」

笑顔を見せる由良。その長身もあって同性から好意を持たれるのが良く分かる凛々しさであった。

「君には大きな借りが出来た」

「気にする様なことじゃない」
「謙虚だね。正直、私は泥臭くて何度でも這い上がる様な不屈という言葉が似合う男が好みだが――」
手が伸びシンの頬に添えられると、すぐに反対の頬に柔らかな感触が伝わってくる。
由良からシンに贈られる口付け。
『おおー』
仲魔全員が揃えて声を出して驚く。
「君みたいなタイプも嫌いじゃないみたいだ」
由良がシンから離れる。
「お礼という訳じゃないが、何かをしておかないと女が廃ると思ったのでね。新学期からもよろしく頼むよ」
清々しさを感じさせるほど爽やかな笑みを残しながら由良はシトリー邸へと戻っていった。
シンは、無意識に唇が触れた箇所を触っていた。女性からこの様なことをされたのは初めてのことである。
「お、おお……」
まだ仲魔が騒いでいるのかと思い、声の方を見る。

匙がこの世の終わりの様な表情でこちらを凝視していた。律儀にも最後まで見送るつもりだったらしい、そのせいで見たくも無いものを見る羽目になったが。
シンは何も見なかったかの様に目線を戻し、無視してシトリー邸から出ようとする。
「マジかよ！　お前っ！」
向こうの方からこちらにやってきた。
「何でノーリアクションなんだよ！　俺に対してもさっきのことに対しても！」
「これでも照れている」
「嘘吐け！」
シンの言葉を嘘と切り捨てる。実際、驚いたが照れてまでいないので間違ってはいない。
「何かあるだろうよ！　あんなことされたんだからそれなりの反応が！」
「逆に聞くが、どんな反応が正解なんだ？」
「そ、そりゃあ……固まって身動き一つとらなくなるとか？　その場で小躍りして喜ぶとか？」
「何故こっちに聞く」
「しょうがないだろうが！　未経験者にそんなこと聞くな！　俺が正解なんて言える訳がないだろうが！」

「なら経験者（イッセー）にでも聞いておくか」
「……え？　え？　な、なんでそこであいつの名前が出てくるんだ？　まさか！　嘘だろ！」
「答えは本人に聞くんだな」
矛先を全て一誠に投げ渡し、頭を抱えて激しく動揺する匙に軽く手を振りながら離れていく。
ソーナ曰く、シトリー邸の外に駅に向かう為の足を用意しているらしい。
門を出てすぐ側にそれは居た。
「待っていたぞ」
腕を組み、威風堂々と立つのは以前殺し合いをした仲であるタンニーンであった。負傷した手で横っ面を引っ叩いて以来の再会である。
「――どうも」
「――ああ」
再会の挨拶は素っ気ないものであった。出会いが出会いなだけに両者にわだかまりを感じさせる。
「乗れ」
用件だけを言い、身を屈めるタンニーン。

「アタシがいちばーん！」
「ヒホ！　オイラが先だホ！」
「慌てな～い。慌てない」
「グルルルル。マサカ、ドラゴンニ乗ル日ガ来ルトハ」
シンよりも先に仲魔たちが一斉にタンニーンの背に乗っていく。最後に残されたシンも溜息一つ吐いた後にタンニーンの背に乗る。
靴底から伝わってくるドラゴンの硬い鱗の感触。鋼の地面を踏み締めている様な気分であった。今更ながらよくこんな相手も一対一で戦ったものである。
「飛ぶぞ」
全員が乗るとタンニーンは翼を羽ばたかせる。二回の羽ばたきで巨体が地面から離れ、三回目の羽ばたきで、それが垂直に上がり、四回目の羽ばたきで飛行する。
周りの景色が流れて見える速度で飛んでいるというのに、乗っているシンたちには風の影響が一切無い。揺れも振動も無く、ドラゴンの背とは思えないほど良い乗り心地であった。
「――お前には大きな迷惑をかけた」
飛行の中、タンニーンがシンに話しかけてきた。
「詫びて済む様なことではない。命を奪おうとしたのだ、こちらも命をかけなければ詫

びにもならない」
「だからと言って、首なんて要らないぞ?」
　言い訳などせず自分の首を差し出そうとしたときのことを思い出す。
「それは前にも拒否されたからな。なら他に差し出すといったら俺のこの力しかあるまい」
「力?」
「龍王として誓う。この先、力が必要なことがあれば俺を呼べ。何時如何なる時も俺はお前の下に駆け付ける。そして、尽きるまでお前の為に我が力を揮おう」
　損得を抜きにしてドラゴン、それも龍王に名を連ねていたタンニーンが個人であるシンに力を貸すことを宣誓する。他に聞く者が居れば、前代未聞と仰天したであろう。
　しかし、この場に於いては能天気とも空気が読めないとも言える者たちしかいなかった。
「それってシンの仲魔になるってこと?」
「いや、そういう訳では……」
「オイラいつの間にか龍の王様よりも偉くなってホ!」
「いや、あくまで力を……」
「ヒ～ホ～。今後よろしく～」

「知ッテイルカ？　仲魔ノ上下ハ入ッタ順番デキマル。オマエハオレノ下ダ」
「……」
「という訳でもっと速く速くー！」
訂正するのも疲れたのか、それも大人しく従うことにしたのか、ピクシーに言われたとおりに無言で速度を上げるタンニーン。
（真面目だな……）
生真面目なタンニーンの姿に、人知れず好感度を上げるシンであった。

◇

駅近くで降ろされるシンたち。互いに別れの挨拶を言うと、タンニーンは自分の領地へと戻っていった。
駅に着くと、一誠とリアスが家族一同と大勢の使用人と最後の挨拶をしていた。
それを離れて場所で眺めていたら、視界の端の目的の人物の姿を捉えた。向こうもまたシンの姿に気付く。
「おお、来たか」
「どうも」

アザゼルがいつもの様に気軽に声を掛け、シンもそれにいつもの様に返す。
「で？　本当にお前らを連れていっていいんだな？」
「ええ。お願いします。そろそろきちんと調べておきたいと思ったので」
「――そうかい。ならとことん調べさせてもらうとするか」
事前にアザゼルと連絡を済ませているのでシンとアザゼルは必要最低限の言葉を交わすだけであったが、事情を知らないピクシーたちは二人の会話に怪訝そうにしていた。
「そう言えばマダは何処に？」
「あそこだ」
アザゼルが指差す方に目を向けると、マダを中心に人だかりが出来ている。その全員が女性であった。
兎に角女性に色々されており、プレゼントを手渡されたり、顔にキスをされたり、強烈な平手打ちを受けたり、顔面の中心に膝を叩き込まれていたりしている。女性からの好意と敵意を五対五で受けていた。
シンたちの視線に気付いたのか何か二、三言言うと人だかりを割ってこちらに向かって来た。その背後からは『死ね！』『くたばれ！』『女の敵！』『でも好き！』という言葉を浴びせられながら。

「いやー、モテる怪物は辛いねぇ」
余裕綽々といった態度で笑うマダ。実際傷一つ無く、キスマークだけを残した顔で言っているので自慢にしか聞こえない。
「全く羨ましく無いがな。というかどんだけの数の女に手を出したんだよ」
「聞きたいか？」
「……いや、やっぱいい。ドン引きしそうだ」
良く分かっているといって豪快に笑うマダ。つくづく自由な存在である。
「で？　そいつらは何でこっちに居るんだ？　シトリー領にも人間界へのルートはあっただろう？」
「こいつらは俺に用があって来たんだよ。――こいつらをグリゴリの研究施設に連れていく」
「へぇ……」
マダはそれだけ言ってそれ以上追及はしなかった。理由を大凡察した為である。
「ということで俺はリアスたちとここで別れる。万が一は無いと思うが、お前はあいつらと一緒に人間界へ帰ってくれ」
「へいへい。分かったよ」
アザゼルの頼みを素直に聞き、汽車の方へと向かって行くマダ。

マダが離れると今度は、両親との挨拶を済ませたリアスたちが寄って来た。
「あら？　シン？　どうしたの？」
マダと同じ疑問を抱くリアス。
「ああ。こいつ、ちょっと俺に用があってな。俺と一緒にグリゴリの施設へ行くことになった」
「えっ。そうなのか？　一体どうして」
一誠の疑問は真っ当なものである。一瞬正直に答えるべきかと思ったが、止めて予め用意していた答えを出す。
「こいつも連れて行こうと思って。この姿じゃ色々と不便だからな」
ケルベロスの頭に手を乗せる。そう言われてリアスと一誠は納得する。人の世界で三メートルもある犬など注目や好奇心を集めるだけである。同時にグリゴリならばそれをどうにかするアイテムが存在するだろうと理解した。
「じゃあ、ここでお別れね」
「また新学期で会おうぜ」
「ああ、また新学期で」
一誠たちに別れを告げる。リアスたちも汽車へ向かって行った。
「あ、そうだ」

唐突にピクシーが何かを思い付く。
「ミリキャスと最後に喋ってきていい？　色々と遊んだし」
「ヒホ！　オイラも行くホ！」
シンはアザゼルに視線を送る。時間の余裕が有るかの確認であった。
「行ってこい行ってこい」
シンの代わりにアザゼルが許可を出す。するとピクシーたちはケルベロスに跨った。
「じゃあ、行こっか」
「ナゼオレガ……」
不満そうな態度であったが大人しくピクシーたちを乗せてリアスたちを見送る準備をしているサーゼクスの下に行く。
「あ、皆さん！」
ミリキャスはいち早くピクシーたちの存在に気付き、駆け寄っていく。
「来ていたんですか？」
「うん。イッセーたちがお別れしているからアタシたちもミリキャスにお別れしようと思って」
ミリキャスの表情が少しだけ寂しさで曇る。表に出してはいけないと分かっていてもどうしても滲み出てしまう。

父は魔王。母もまた高名な悪魔。その両親から生まれ、さらには将来グレモリーの当主を約束されているミリキャスにとって、立場などを気にすることなく遊べる存在は稀有であった。

「皆さんと過ごせて本当に楽しかったです」

「アタシたちも楽しかった。また会おうね」

ピクシーが小さな手を伸ばす。ミリキャスも手を伸ばすと、ピクシーはその指先を掴み、サイズの違う握手を交わした。

「じゃあねー」

「ヒーホー」

「またね～」

「グルルルル……ジャアナ」

湿っぽさの無いピクシーたちの別れは、また会えるという再会を予感させる、ミリキャスの僅かな寂しさを吹き飛ばす様な爽やかなものであった。

◇

アザゼルが用意した魔法陣でグリゴリの研究施設にやってきたシンは、最初にレント

ゲンの様な機械で全身をくまなく撮影された。
暫くして撮れた写真を持ってアザゼルが現れる。その顔は神妙な表情をしていた。
「どうでしたか？」
無言でシンに写真を見せる。
その写真を見て、シンは一言――
「――随分愉快なことになっていますね」
「これ見てそう言えるなら大したタマだ」
撮影に使用したのは神器を写し出す特殊な装置であり、本来なら骨も筋肉も透かされ神器のみが写し出されているが、写真には神器以外のものが写し出されている。
頭頂部から脊髄の基底部にかけて大きさが異なる七つの影。その影は根の様なものを伸ばし、それが手足などの末端にまで伸び、伸びた先で影と同じ形の小さな瘤の様なものを形成していた。
その数合わせて二十五。
ぼんやりと写る影だが良く見ると、細い昆虫の様な生物が胎児の様に身を丸め、まるでマガタマを彷彿とさせる形になっている。
「――写真じゃ分からないが、これ、動いていたぞ」
アザゼルは、写真を写し出す前に、このマガタマが体を震わしている姿を見ていた。

「これがお前の神器……じゃねぇな」
「きっとこれが俺の力の源なんでしょうね」
今もきっと体内で蠢いているだろうマガタマたちを想像し、目を細める。
「……このことは俺とお前だけの秘密だ。調べたが特におかしなことは無かった。他の奴らにはそう言っておけ」
「――そうですね」
シンの手の中で写真が黒染み始め、やがて発火し火に包まれる。数秒で写真は灰と化して焼失した。
このことが他者に知られるのは出来るだけ避けるべきという考えが両者で合致した。なまじ形があるだけ魔人の力を奪われる可能性が出てくる。この様な力が広まる危険を可能な限り潰しておきたい。
「データは完全に消しておく」
装置のある部屋に戻ろうとするアザゼルに、シンは声を掛けた。
「先生」
「何だ？」
「俺の中のアレが全部育ち切ったとき、俺は何になるんでしょうね」
「……それは俺にも分からんな」

「そうですね。――俺にも分からないことですから」
突き進んだ結果、一つの事実を知った。それは決して明るいものではない。寧ろこれから行く先に暗澹たるものを見せる。
シンは手に付いた灰を払い、歩き出す。
だが、進むしかない。答えも結末も突き進んだ先にしか用意されていないのだから。

一方その頃の仲魔たち。
「ほほーう！　これは！　これは！」
仲魔たちの姿を見て、くたびれた白衣に度の強い眼鏡をかけた小柄の男が眼鏡越しに輝かんばかりの目で観察する様に見ている。
「しっしっしっ。これは凄い！　凄いのだ！」
白衣の男ことグリゴリの幹部の一人であるサハリエルは、ピクシーたちを見て興奮していた。
「何と何と！　これほど希少な存在がここにやってくるとは幸運なのだ」
ジロジロと眺めるサハリエルに居心地悪そうにするピクシーたち。

「ああ、色々と研究したいのだ。――だが、アザゼルからは君たちに指一本触れるなと言われているのだ。残念なのだ」
本気で悔しがるが、次の瞬間にはその目に再び光が宿る。
「でも、私からはダメだけど君たちが望むならば！　どうなのだ？　私の改造手術を受けてみないかな？」
会って間もないというのにとんでもない提案をするサハリエル。
「えー。アタシ嫌ー」
ピクシーは拒否する。
「ヒ～ホ～。ボクは今のままでいいや～」
ジャックランタンも同じく拒否する。
「……ちなみに改造手術を受けると強くなれるホ？」
ジャックフロストは少しだけ内容に興味を惹かれた。
「おお！　やる気なのだな？　私の手術を受ければ君は絶大な力を得られるのだ。そうだね、まず初めに冷蔵庫との合体を――」
「やっぱり止めるホ」
「何故!?」
初っ端の言葉に不安を感じ、あっさりと引いたジャックフロストにサハリエルは

ショックを受ける。
騒しい堕天使とピクシーたち。そんな中で無関係といった態度で横になっているケルベロス。
「どうなのだ？　君はどうなのだ？」
サハリエルが聞いてきたが、ケルベロスは露骨に無視する。少しでも会話が発生すれば面倒になると思っての行動である。
「いいのだ。凄いのだ。君なら一流の素材になるのだ」
嬉しくも無い褒め言葉を掛けながら黙っているケルベロスに構うことなくしつこく誘う。
「ちょっと、ほんのちょっとでいいのだ。あれを付けたり、これを貼ったりするだけなのだ。切ったり、潰したりなんて絶対にしないのだ」
それでも無視し続けるケルベロス。
「ああ、そうなのだ。今ならサービスでミサイルも搭載するのだ。どう？　改造手術したくなったのだ？」
訳の分からない提案。彼の中でケルベロスがどんな姿になっているのか常人には想像も出来ない。
やがてケルベロスは横になるのを止め、立ち上がる。そして、サハリエルへと近寄っ

ていく。
「あ、もしかして改造手術を受ける気になった――」
「ウルサイッ！」
「のだっ！」
ケルベロスの肉球の一撃がサハリエルの頬に炸裂。そのまま建物の端から端へと吹っ飛んでいく。
グリゴリの施設内でケルベロス、キレる。

幕間　もしも、可能性

朝、目を覚まし学校へ向かう途中、見慣れた通学路だというのに違和感があった。新しい建物が出来て、景観が変わった訳では無い。変に感じたのは通学路で顔を合せる人たちにあった。

毎回、決まった順路を決まった時間で歩けば、そこを通る人々も大体同じであり顔も何と覚えてしまう。その筈なのだが、今日通学路で見た人々の顔は一切記憶が無く、初めて見る顔ばかりであった。

腑に落ちない気持ちで学園の校門を潜り、自分のクラスへ入る。そこで、自分はまだ夢の中でまどろんでいるのではないか疑った。

男女比率が女性に傾いている駒王学園。だが、クラスを見渡すと男女比率が逆転している。

よくよく見れば、女子が座る椅子に男子が。男子が座る椅子に女子が。

自分の知っている世界とは違い、この世界では不思議なことに男女の性別が逆転している。

そんな摩訶不思議な世界で何故か性別が変わらず、いつものように女子学生服を纏う

少年ギャスパー・ヴラディは、目の前の光景にひたすら困惑するのであった。

◇

周囲の性別が逆転していても当たり前の様に授業は行われ、当たり前の様に時間は過ぎ、放課後となる。その間、ギャスパー以外はこの世界に戸惑いを覚える者は居らず、いつもの日常を送っていた

ギャスパーは、終始戸惑いながらも授業を乗り切る。正直、授業中は何故こんなことが起こったのか考えており勉学に身が入らなかった。結局、その考えは『心当たりが無い』という結論で終わってしまった。

勉強用具をしまい、教室の外に出る。放課後にすることは決まっている。ギャスパーの足はオカルト研究部へ向かっていた。

オカルト研究部教室前。よく知る場所だというのに緊張してしまう。

ゆっくり扉を開け中を覗く。やはりと言うべきか、中は男子ばかりであった。

「ん？　どうしたんだ？　そんな所から覗いて」

ギャスパーの存在に真っ先に気付いたのは中央に備えてあるソファーに陣取って紅髪の青年。

すらりとした無駄な肉の無いモデルの様な体型。異性も同性も虜にしてしまいそうな人間離れした整った容姿。その碧眼を向けられただけでギャスパーは男性ながら心臓が高鳴るのを感じた。

その姿は紛れもなく男体化したリアス・グレモリーである。

「今更遠慮する様な所でも無いだろ。早く入って来い」

「は、はい！」

鼓膜を震わす魅惑的な声に、逆らうことなど出来ず迅速な動きで部室内へと入る。

「やあ、ギャスパー。お茶はいかがかな？」

ティーポットを持って涼し気な笑みを見せる黒髪の美丈夫。男性と化した朱乃が、ティーカップに紅茶を注ぐ。その優美な立ち振る舞いは容姿もあって絵になっていた。

紅茶が注がれたカップがソファーの前にあるテーブルに置かれる。

「あ、ありがとうございます！」

ギャスパーはそそくさとソファーに座り、カップを両手で持つとすぐに飲む。だが、落ち着かないのかその目は常に泳いでいた。

「さっきから何だ、落ち着きがねぇ。男だったらもう少しどっしりと構えろ」

ぶっきらぼうな声にびくりと体を震わせ、声がした隣に恐る恐る視線を向ける。

制服でも鍛えられていると分かる逞しい肉体を持ち、緑のメッシュが髪に入れられて

いる野生的な青年が隣のソファーにもたれ掛りながらこっちを睨む様な目で見下ろしている。
「え、えーと、そ、その、あの――」
「んだよ。言いたいことがあるならはっきりと言え。――斬るぞ、この野郎」
「ヒ、ヒィィィィィ！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」
「もう！　ギャスパー君を脅さないでよ。可哀想だろ」
　野生的な青年を窘めるのは、彼とは正反対の物腰柔らかそうな金髪の青年。野生的な青年に比べ細身であるが、陽だまりの様な暖かい気を纏っていた。
「あんまり後輩を甘やかすんじゃねぇぞ、アーシア。そんなんだからこいつはいつまで経ってもナヨナヨしているんだよ」
「ギャスパー君だってちゃんと頑張っているよ。初めて彼と君が会ったときなんて、ギャスパー君、口から泡を吹いて気絶したじゃないか。その頃に比べれば強くなっているよ、ゼノヴィア君」
（やっぱりそうなんだ――！）
　男性と化したゼノヴィアとアーシアのやりとりを見て納得した。名前も女性のときと変わらないことをここで知る。
「もっと後輩には優しくするものだよ？」

「へいへい」
ゼノヴィアは生返事をしながらより深くソファーにもたれる。
「もう！」
反省した様子が無いゼノヴィアに、アーシアは不満そうな表情となる。
男性の姿になっても面影はあるが、性格の方に若干の違いを感じた。男性となったゼノヴィアは常に気怠い雰囲気を纏っており、口調も少し刺々しい。アーシアの方は優しい雰囲気は変わらないものの、女性のときと比べて控え目な態度では無くなっている。両者の関係も女性のときよりも一定の距離感を感じ、険悪では無いが仲睦まじいというほどでも無かった。
最初はどうなのかと心配したが、いざ変化を見てみると新鮮味を感じ逆に楽しくなってくる。
（じゃあ、小猫ちゃんはどうなっているんだろう？）
自分と変わらない体型の男の子の姿を予想しながら部室内に視線を巡らせる。だが、部室内に小猫の姿は無い。途中、見慣れない熊の置物があったが。
「……ん？」
視線を滑らせていたギャスパーは固まった様に急停止し、ゆっくりと視線を戻していく。

熊の置物が動いた気がした。
よく見ればそれは置物では無かった。座っているのに見上げる程の巨体。その巨体に相応しい太すぎる腕には、赤ん坊の腕ぐらいある指が連なっている。日本人離れの彫りの深い顔には陰影が差し、白い頭髪もあってコントラストとなっている。何より注目すべきは頭頂部から生える猫の耳と腰部から伸びる猫の尻尾。
以上を総合し、出される答えは一つ。
（ま、まままま、まさか、小猫ちゃんなの!?　な、何であんな巨漢に!?　猫というよりももう熊だよ！　熊！　熊猫！　パンダ！　――いやいやいや！　そんな可愛いものじゃないけど！）
衝撃が強過ぎて自分でも良く分からない思考になる。リアスたちがほぼそのままイメージであっただけにギャップの差が暴力の様にギャスパーの精神に叩き込まれる。
大切な友人が、何時ぞや自称魔法少女と引けを取らない姿になっているとは夢にも思わなかった。おかげでつい先程まで予想していた男性姿の小猫の像は粉微塵に吹き飛んでしまっている。
「そう言えば、昨日頼んでいた『アレ』は終わったのか？　大猫殿？」
（だ、大猫!?　そんな！　名前まで変わって！）
「ノープロブレム」

（何で英語!?）

何故か敬称を付けるリアスに、何故か流暢な英語で応じる小猫。見た目、名前、力関係、更には人種まで変わっているのかもしれない。

「――キルゼムオール」

（ヒィィィィ！）

「なら良かった」

物騒な言葉に対し怯えるギャスパー。リアスは頷き、何事もなかったかの様に朱乃との会話を再開する。

「ちわース」

ギャスパーの耳に今日初めて聞き慣れた声が入ってくる。

部室の中に入って来たのは一誠であった。しかし、その姿はギャスパーと同じく男性のまま。変わらない姿に安堵を覚えつつ、何故、という新たな疑問も湧く。

「こんにちは」

一誠の後に続いて入室してきたのは、輝かしいまでの美少女であった。

体の動きに合わせ僅かに揺れる長い髪は、宙に溶けるのでは無いかと思えるほど細く滑らかであり、光沢の様な艶があった。スカートから伸びる白い足は長く、それでいて引き締まって形をしており、腕もまた無駄な贅肉が無い。女性の象徴たる胸部も十分豊

かであり、凡その男性が理想とする女性の姿を体現しているといっても過言ではない。
ギャスパーもその女性が入ってくるなり目を奪われる。さっきのこともあってかその美が二倍にも三倍にも増して見えた。
ギャスパーの視線に気付き、美少女が笑い掛けてくる。
「こんにちは。ギャスパー君」
「こ、こ、こんにちは――先輩」
急に喋り掛けられたこと、笑い掛けられたことで動揺し詰まった様な返事をしてしまう。自分の格好悪さとその美少女の可憐さにギャスパーは赤面した。
「遅いぞ。イッセー、祐美」
「すみません、部長」
「寝ているイッセー君を起こそうとしたら時間が掛かっちゃいました」
（こ、これが女性になった祐斗先輩なのかー！）
元々美形であった木場の容姿がそのまま映し出された祐美に納得する。綺麗な人は性別が変わっても綺麗ということを理解した。一部例外もあるが。
「全く。イッセーは祐美に甘え過ぎだ」
「す、すみません」
「いいんですよ、部長。私が好きでやっていることですし」

「本当に祐美はイッセーのことが大好きだね」
「ピュアラブ」
部員全員から揶揄われ、祐美は真っ赤になって俯いてしまう。
（これってやっぱりそうなんでしょうか……？）
周りの反応から二人の関係を察するギャスパー。前の姿を知っているだけに複雑な気持ちになってくる。
オカルト研究部の部員がほぼ揃った。残るはシンとその仲魔たちだけ。ここまでくるとシンたちの姿に自然と期待してしまう。木場の様な美少女となっているのか、あるいは一誠の様にそのままなのか、それとも小猫の様に姿形が大きく異なっているのか。
あれこれ予想しつつシンたちの登場を待つ。
しかし――
「じゃあ、会議でもしようか」
――シンたちの登場を待たずにリアスは会議を始めようとする。
「あ、あの！」
思わずそれを呼び止める。
「ま、まだ全員来てないと思いますが……？」
「来ていない？　部員ならもう全員居るぞ？」

「――え？」
リアスが冗談を言っているのかと思ったが、困惑した表情から本気でそう思っているのが分かる。
「間、間薙先輩のことですよ！」
「間薙？　それって」
――誰だ？
ギャスパーは言葉を失った。周りを見てもリアスと同様に間薙という名に全く心当たりが無いといった様子。
「だ、誰って……間薙シン先輩のことですよ！」
「い、いや。初めて聞く名前なんだが……？」
大人しいギャスパーが食って掛かる様に聞いていたことに、リアスは驚きつつも知らないと告げる。
（ど、どうして？　この世界だと間薙先輩は居ないの？）
性別以外ほぼ同じだと思われた世界において大きく異なる点、それが間薙シンの不在である。
「じゃ、じゃあ！　間薙先輩の仲魔のことは!?　ピクシーちゃんやフロスト君のことは!?」

「ピクシーって妖精のピクシーのことか？　ピクシーを使い魔にしている奴はうちの部員に居ない筈だが？」
「フロスト？　いや、そんな名前は知らないな」
「アイドンノー」
シンと同じくピクシーとジャックフロストの存在もまたこの世界には消失していた。
「そ、それじゃあ……僕と一緒に引き篭もってくれていた、ランタン君のことは……？」
声が自然と震える。否定したくてももう既に答えが分かっているというのに、誰かに否定してもらいたくて、縋る様な思いで聞いてしまう。
「初めて会ったとき、ギャスパー、お前一人だったじゃないか」
一誠の口からジャックランタンが存在しなかったことを教えられた。目の前が真っ白になってくる。理由が分からない。シンと仲魔たちだけが消えてしまったその訳が。
「どうしたんだよギャスパー？　何か変だぞ？　急に知らない奴のことなんか言い出して」
「何か気分でも悪いの？　その、間薙という人が関係しているの？」
優しく気遣ってくれるが、今のギャスパーにはその優しさは逆効果であった。外見は変わっても中身は変わっていないことを思い知らされ、余計にシンたちだけが居ないことを異質に感じてしまう。

「ぼ、僕！　きゅ、急用を思い出したので！　こ、これで帰ります！」
「お、おい！　ギャスパー！」
「ごめんなさいいいいい！」
呼び止められる声を振り切り、部室から飛び出す。
一刻も早く調べなければならない。シンたちのことについて。
最初に取り掛かったのは学年名簿を調べることであった。一誠たちは知らなくても、もしかしたら別のクラスにシンの名前が書かれているかもしれないという淡い期待を込めて名を探す。
結果はすぐに分かった。二年の中に間薙シンという名は無かった。一年、三年も調べてもシンの名は無い。
次は、シンの自宅がある住所に向かった。住所の番地はギャスパーの記憶にある。それに従い目的地を目指す。
家はすぐに見つかった。だが、その家に掲げられている表札は間薙ではなく別の苗字だった。
シンという存在の手掛かりはここで完全に失ってしまう。
この時点でギャスパーは今すぐにでも泣きたい気分であった。自分は覚えているのに誰も彼の存在を知らない。そのことがただ悲しくて仕方がなかった。

しかし、ギャスパーにはまだやるべき事が残っていた。その為に一度自宅であるマンションへ帰る。

着くや否や、ギャスパーは倉庫の中に入れておいた段ボール箱を引っ張り出した。これは、いつもの身を隠す為の段ボールではなく、思い出の品を入れる為の保管用の段ボール箱であり、中には一誠たちとの写真、当然シンたちと写った写真も入れられている。

段ボール箱を開き、その中のアルバムを一冊開く。

「……無い！　無い！」

オカルト研究部全員で写っている集合写真。だが、そこにシンたちは写っていない。

アルバムの中身を手当たり次第確認するが、どの写真にも彼らの姿は残されていない。

自分の能力を恐れ、自ら他者との交流を断ったギャスパー。徐々に交流を増やそうと努力する彼を思い、リアスたちが少しでも思い出を増やし、それを記憶する為に撮った写真。

その思い出の中に彼らは居ない。

遂には残すページが一枚になってしまった。震える手でページを捲り、最後の写真が貼られているページを見る。

そのページを見たとき、ギャスパーは抑えていた涙を止めることが出来なかった。
最後の一枚。それは、ギャスパーが部屋に閉じ籠ることを止め、外でオカルト研究部の皆と生きていくことを決意した日に、記念として親友のジャックランタンと一緒に写った思い出の一枚。
だが、最後のページには何も無かった。彼の存在が最初から居なかったことを表す何一つ張られていない真っ白なページ。
「う、うわあああああああああああ！」
慕う先輩。大切な友達。唯一無二の親友がこの世に存在しないことを確信し、ギャスパーは声を抑えることなく泣き喚いた。

◇

気付くと、ギャスパーは近くの公園のベンチに座っていた。日は沈みかけ、夕方と夜との丁度境目の時間。空を夕日の赤と夜の黒が並んで染めていた。
沈んでいく太陽を、同じくらい真っ赤に泣き腫らした目と光の無い夜の様な瞳で意味も無く見つめている。
どうしてこうなったのか。何故こんなことになったのか。答えなど導かれる筈など

無いのに、延々と頭の中で繰り返される。
これが夢ならば早く覚めて欲しいとギャスパーは願う。不可思議な夢かと思えば、それを表面に張り付けた悪夢である。
「……どうしてこうなっちゃったんだろう？」
正解など分からず、答える相手も居ない。
――そう思っていた。
「珍しい」
「え？」
すぐ側で聞こえた声に驚き、すぐに隣を見る。ギャスパーの座るベンチに青年が一人腰かけていた。その出現は音も無く気配も無く突然としか表現しようが無い。
青年は、上下に皺の無い真新しい灰色のスーツを纏い、履いている革靴もまた外履きの筈なのに土汚れ一つ無く下ろし立ての様だった。その側には山羊のレリーフが付けられたカバンが置かれている。
頭部には同色のハンチング帽を被っていたが、ギャスパーが最も目を惹かれたのは帽子から覗く髪であった。溶けた黄金を櫛で梳いた様な金色の髪。自然では有り得ないほど輝かしい髪は夜の中でも輝いている。
「あれ？　あれ？」

そこで気付く。先程までまだ明るさが残る夕闇であった。だが、今は頭上の星々がはっきりと見える。ベンチの側に設置されている街灯の照明が点いている。
既に周囲は夜であった。まるで青年が夜を、闇を連れてきたかの様に思えた。
「気になって来てみたけど――面白い。今の君はあちら側と繋がっているんだね？」
困惑するギャスパーに構わず、金髪の青年は話を進めていく。
「原因は神器かな？　だが、それだけだと足りないな。ただの神器使いならこの世界に疑問なんて抱かない筈だが……？」
金髪の青年の色素の薄い碧眼がギャスパーを観察する。少し間を空け、青年は独り納得した。その奥の見えない瞳にギャスパーは萎縮し、声を出せなかった。
「――そうか。彼の一部を取り込んだのか。君は――ああ、吸血鬼かそれも混血の。彼の血でも飲んだのかい？　成程。それでズレを認識出来たんだね」
「あ、あな、貴方は、だ、誰なん、で、ですか？」
もつれる舌を辛うじて動かし、たどたどしく更には震えた声を発する。
「誰、か。あまり名乗っても意味が無いかも知れないね。だけど、聞かれたからには答えよう。ベル――いや、こちら側には僕しか居ないから今はルイと名乗らせてもらおうかな」
「ル、ルイ？」

「今度は君の名前を聞かせてくれるかな？」
「ギャ、ギャスパー……ヴラディ、で、です」
青年に名を聞かれ、ギャスパーは素直に名乗る。得体の知れない人物だというのに、その声に抗うことも逆らうことも出来ず、言われたままに答えてしまった。
「ギャスパー・ヴラディ。ここで君と会った『偶然』、僕はそれを大事にしたいと思っている。聞かせてくれるかな？　君はここで何をしていたんだい？」
「ぼ、僕は――」
警戒心も恐怖心も抱いているのに、その意思に反してギャスパーの口は今まで起こったことを吐露していた。初対面の相手にこんなことをするのは、人見知りの激しいギャスパーにとって異常なことであった。だが、止まらない。思いが勝手に口から飛び出て行く。
人に聞かせているという気持ちにはならなかった。果ての見えない穴に向かって話している様な感覚。
ギャスパーの声を、青年は最後まで黙って聞いていた。
「――そうか。だから君は彼らを探していたんだね。残念だけど、君は彼らを見つけることは出来ない」
全てを聞き終えた青年が微笑を浮かべる。最初に会ったときから気になっていたが、

青年の口調は明らかにシンたちを知っている。
「し、知っているんですか！　間薙先輩やランタン君たちがどうなっているのか！」
「ここは分岐した可能性の世界。『もしも』という思いが形になった世界なんだ。そして、この可能性の世界に彼らは存在しない」
「そ、存在しないって……」
「正確に言えば存在出来ないんだ――彼らの存在そのものこそ『もしも』なのだから」
「は、はい……？」
ギャスパーには青年が言っていることが理解出来なかった。それでも青年は話を続ける。
「彼らの選択に他の可能性は無い。枝分かれする世界も無い。彼らはこの世界に根付いた可能性じゃない。接ぎ足された可能性だ。だからこそ常に一つの答えだけなんだ。――僕も含めてね」
青年は自らシンたちの同類だと告げる。
ギャスパーには分からない。だが、自分が途轍もないことを聞かされているということだけは直感で感じ取れた。
全身が震える。体から体温が抜けていく。今すぐにでも気絶でもして意識を手放したくなる。

それでも、ギャスパーは聞かざるを得なかった。
「な、なら、あ、貴方は、間薙先輩たちはど、何処から来たってい、言うんですか？」
青年の視線が一旦ギャスパーから外れた。襟元を直す仕草をしながら一瞬だけ虚空を見つめる。
「……大きな光と深い闇が相克し相打ったとき、総ての創世は消え去った。何も無い中で闇は同朋たちの残骸を掻き集め、再び光が目覚めるその刻まで同じく眠りにつこうと思っていた。あの時までは――」
声が聞こえたんだ。遠く、遠く、果てしない向こうから。
小さく、細く、微かな声だった。
それは確かな想いであり、何一つ存在しない無の中でその想いが響き渡った。
その想いに込められたものが、怒り、悲しみ、喜び、嘆き、憎しみ、救い、何であったのかと分からない。だけど、その想いに引き寄せられた。
触れれば途切れてしまう様な蜘蛛の糸の様な想いに導かれ、ただひたすらに彷徨い続けた。
時間も終わりも何もかもが無い中でそれだけが唯一の灯。
そして、とうとう闇は見つけた。新たな可能性を。
「――鳥籠の外の世界を。十三番目の想いを道標にして」

青年の語りは殆ど抽象的なもので、ギャスパーには把握仕切れなかった。ただ分かることがあるとすれば、目の前の青年は自分たちと根本的に違う存在だということ。
「何が、一体何が、も、目的なんですか？」
「そんなに怖がる必要は無いよ。ギャスパー・ヴラディ。僕は君たちに害を与えるつもりはない。逆に、君たちが望めば助力も惜しまないつもりでいる。――さて、目的か」
安堵させる様に笑い掛けるが、ギャスパーにはその笑みから不安と恐怖しか感じ取れなかった。人という形に無理矢理留められた圧倒的な存在感を前に、友好的な態度など何の安心にもならない。
「僕はただ見たいだけさ。本来交わることのない二つが交わったとき、どんな可能性が生まれ落ちるのかを。或いは、その可能性が『大いなる意思』すら下すかもしれない」
青年は声無く笑う。未だに見えない筈の可能性のことを思い。心の底から、童の様に楽し気に笑う。
「……そういう意味では、君の可能性にも期待をしているんだ」
青年は笑うのを止め、ギャスパーの顔を見る。
「見せてくれるかな？　君の可能性を」
ギャスパーに向かって青年の手が伸びる。
その瞬間、ギャスパーの『停止世界の邪眼』が発動した。特訓によってある程度制御

出来る様になった筈だったが、青年を前にしたとき箍はあっさりと外れてしまった。
恐怖による手加減無しの神器。これにより青年の時間は停止させら――
「あ……あっ……」
「これがバロールの眼か」
――青年の指がギャスパーの下瞼を下げ、時間停止の光を放つ邪眼を観察していた。
生まれて初めての経験であった。神器発動中の眼を覗き込まれるなど。あの魔人ですら停めた邪眼が一切効かない相手が眼前に現れるなど。
「まだまだ未熟だ。でも、強い可能性が感じられる。その眼、大事にするんだね」
青年の指が離れ、ギャスパーの額に当たられる。軽く押されたとき、ギャスパーはギャスパーを見た。
「え?」
自分の背中をいきなり見ることとなったギャスパーは戸惑いながら今の自分を見る。向こう側の景色が透けて見える半透明の体となっていた。
「そろそろ君は君の世界に帰るんだ。出来れば二度とこんなことが無いことを願う。君は君の可能性の世界で在るべきだ」
体がどこかへ引っ張られていく。周りの景色が徐々に遠ざかっていく。
「最後に一つだけ言っておこうかな。彼らを心の底から慕うなら死なせないことだ。彼

らの死は、ただ死ぬことよりも残酷だ」
「ど、どういう――」
「魂の片隅にでも刻み込んでおいてくれ。またいつか会おう。ギャスパー・ヴラディ」

◇

「はっ！」
跳ね起きたギャスパーは、冷や汗を流しながら周囲を見渡す。そこはオカルト研究部の中であり、ギャスパーはソファーに座っていた。
ギャスパーは思い出す。今日は珍しく一番にオカルト研究部に来たことを。他のメンバーを待っている間に眠っていたらしい。
「あれ？」
頬の濡れた感触。自分が泣いていたことに気付いた。どうやら夢を見て泣いていたらしい。
（衝撃的だったような、怖かったような、悲しかったような……）
思い出そうにも欠片も内容を思い出せなかった。
悩むギャスパーの耳に、ドアが擦れる音が飛び込んでくる。

「あ、ギャスパー」
「ヒホ。オイラたちが一番だと思ったのにー」
「珍しいね～。明日は雪かな～」
ドアから現れた騒がしい三人。そして――
「……どうした？」
自分たちを凝視するギャスパーにいつもの無表情で聞いてくるシン。
彼らを見たとき、ギャスパーは心の底から安堵した。いつも会っている筈なのに、どうしてこんなに安心したのか分からない。
「あ、あのっ！」
「何だ？」
「せ、先輩たちは、居なくなったりしないですよね？」
どうして急にそんなことを聞いたのか、ギャスパー自身も意味が分からない。だが、聞かずにはいられなかった。
ギャスパーの唐突な質問に、仲魔たちはキョトンとした顔になり、シンは少しだけ考える素振りを見せた後、こう答えた。
「確かなのは――今はここに居るな」

体育館裏のホーリー編
天界、吹奏

「呼ばれて来ました！　ジャジャジャジャァァァン！　フリード・セルゼン登・場でぇすっ！」
　開口一番、相手を舐めているとしか思えない台詞と共に室内へと足を踏み入れたのは、元ヴァチカン直属のエクソシストであったフリード。
「そうか」
　ふざけた態度のフリードに、椅子に座り背を向けたまま素っ気無い反応を見せるのは、フリードと同じく教会に所属していたが、そこで行った『聖剣計画』という実験により多くの命を奪い、異端として追放された大司教バルパー・ガリレイ。
　今は共に『禍の団』に身を寄せている立場にある。
「んでんでじいさん、呼び出して何ですかー？　俺に用事って？」
「お前に一つ頼みたいことがあったな」
「じいさんが俺に？　へぇー、めっずらすぃー！」
　バルパーの口添えにより『禍の団』に入ったフリードだが、『禍の団』の中での二人の

交流は殆ど無い。フリードは現場、バルパーは実験という分野違いのせいもあったが、それでも両者の関係は希薄なものであった。

「フリード。強くなってみないか？」

「強く？　俺様既にスペシャァァルな『アレ』とゴージャァァスなコレをじいさんから貰ってるんだけど？」

バルパーに自身の右腕を見せる。その右腕はかつて木場によって切断された筈だが、何事も無かった様に動いている。

「確かなのは今以上に強くなれる」

「へぇ……」

フリードから人を小馬鹿にした様な笑みが消え、口角を限界まで吊り上げ、歯を剥き出した獣の笑みへと変える。その常に狂気を帯びた双眸に飢えた輝きが混じる。

「それは、確かなことなんだろうなぁ？　じいさん。僕ちゃん、法螺って嫌いなんだよねぇ」

かつてコカビエルと手を結び、共に戦争を企てた仲ではあるが、あくまで利害が一致したからに過ぎない。仲間意識など無く、自分に益が無いと分かれば即座にバルパーを殺害することに躊躇いなど無かった。

尤も、バルパーが死んでもその記憶は保管されているバルパーの予備の肉体に転送さ

れ、何の問題も無く復活するのは分かっていた。
無駄だと分かっていて何故するのか。
自分の気分を害した。それだけでフリードが、相手を殺す理由として十分である。
「嘘など言わん。確実に今のお前を何倍も強くすることが出来る」
バルパーは背を向けるのを止め、フリードの方に体を向ける。その手に紙の束が握られている。
「最近、面白い資料を手に入れたのでな。私の研究と合わせれば今までに無かった力を手に入れることが出来るぞ」
「今までに無い、ねぇ？」
眉唾物と言わんばかりに不審の眼でバルパーを見るフリード。
「その資料ってのが、それを可能にするってことですのん？」
フリードが資料の束を指差したので、バルパーはそれをフリード目掛けて投げ渡す。
雑に扱われる資料だが、既に内容は脳内に記憶されているので、バルパーにとってその程度の扱いのものとなっていた。
投げ渡された資料に目を通す。『四凶計画』『ウツセミ』『人工神器』『真似形計画』などはフリードでも読めたが、その後には複雑な数式と理論が続いていたので速攻で読むのを止め、放り棄てる。

「ぜーんぜんわっかりませーん！　とーにーかーくっ！　僕チンをあれこれ改造しちゃうってことでいいんですかい？」
「至極簡素に纏めればそういうことだな」
「改造しゅじゅちゅのリスクは？」
「ゼロでは無いと言っておこう。何せ私自身も初めてのことだからな」
「本当は、俺を使って実験がしたいだけじゃないのー？　じいさん」
「否定はしない」
　バルパーは、フリードの指摘に対し笑いながら肯定する。
　フリードは考える。この世で何が大事かと言えば自分の命である。が、だからといって悪魔殺しを捨てることも出来ない。それは彼にとってのライフワークである。命を大事にしている割には自分の命を奪われるリスクがある悪魔殺しをするなど矛盾しているが、そんなことを気にするフリードではなく、また他人に指摘されても気にしない。指摘されればそいつを殺せば事は済む。
　そんなフリードにとっても強くなれるという言葉は魅力的であった。強くなれれば今まで手が届かなかった相手すら殺すことが出来る。
（どうしよっかなぁ？　やろっかなぁ？　やらないでおこっかなぁ？　でも殺りたいしなぁ？）

頭を振り子の様に左右に揺らし、珍しく悩む姿を見せる。
そんなフリードに対し、バルパーは止めとなる言葉を放った。
「赤龍帝と魔人、あの聖魔剣使いを殺せるぞ？」
「するぅー！」
改造されるリスクも、一誠、シン、木場を殺害出来るという言葉で全て吹き飛んだ。
「さあさあやろう！　今すぐやろう！　そして、あいつら殺ってやろう！　今でもさあ！　痛むんだよねぇ！　殴られた跡がさぁ！　この右腕がさぁ！　どういう訳か疼くし痛いんだよねぇ！　あんのクソ悪魔どもがよぉ！」
自分の右腕を指先が食い込むまで強く握るフリード。その顔には狂気に満ちており、遠くにいる怨敵に向け、恨み言と殺気を飛ばしていた。
それを至近距離で浴びせられていたバルパーだが、全く動じる様子は無い。内心では、扱い難いようで扱い易いフリードに対し、嘲り混じりの感謝をしていた。
（礼を言うぞ、フリード。お前のその捻くれた単純さには。ああ、約束通り間違いなくお前を強くしてやろう。――その代わり、色々と仕込ませもらうがな）
互いに笑い合う両者。歳が離れ、顔立ちも違うものの、狂気を宿した者同士。顔に張り付けられた笑みは良く似ていた。

◇

夏休みも終わり、本日から駒王学園の二学期が始まる。

シンはいつもと変わらず登校する。その肩にピクシーを乗せ、その背にジャックフロストがしがみついていた状態で。二人の姿は常人には見えないが、見える者が居たら不似合い過ぎて思わず噴き出すだろうが、これこそ彼が仲魔たちと一緒に登校する為の姿である。

だが、今日の登校から少しだけ変化があった。シンの側に大型の犬が一緒に歩いている。

犬種はシベリアンハスキー。頭部から背にかけての上毛が黒。顔部から腹部に灰色の毛を生やし、その瞳は青を帯びた灰色をしていた。

シンはその犬にリードを付けることなく歩いており、犬の方も人が近くを通っても無駄吠えするどころか、見向きもせず黙々とシンに付いていく。

やがて学園が近くなると、シンは一旦手前で曲がり、人通りから離れた道へと入る。そして、犬に対しある方向を指差した。

犬は分かった様に頷く。すると、犬は地面を蹴り目の前にあった数メートルもある壁を簡単に跳び越えてしまう。

壁の向こうに犬が消えたのを見て、シンたちは通学路へと戻っていった。
校門を潜り、途中ピクシーたちを旧校舎に向かわせた後に自分のクラスへ着く。
「うーすっ」
「よっ」
シンがクラスに入って来たのを見て、松田と元浜が声をかけてきた。
「おはよう」
一誠経由とはいえ、大分打ち解けてきたと思いながら挨拶を返す。
「あ、間薙君じゃん。おはよー」
今度は同じクラスの女子、桐生が話し掛けてくる。
「ああ、おはよう」
挨拶し終えると同時に、桐生はシンの顔をまじまじと凝視する。
「間薙君も、夏に何かあった？」
突然の質問に内心少し驚く。女の勘というべきものなのかシンから何かを感じ取った様子であった。確かに桐生の言う通り夏休みには色々とあった。それこそ数え切れないぐらいのことが。
「どうした？　急に？」
「うーん。何か雰囲気が変わったっていうか……あれだね、綺麗になったね、間薙君」

「――褒め言葉として受け取っておく」
「んふふふ。男にこんなこと言うのは変かもしれないけどね。そう思ったから仕方無い。やっぱり理由ってあれ？　卒業した？　童貞」
流れる様に下の話を混ぜてくる桐生。シンが答える前に、松田と元浜が過剰に反応する。
「違うよな？　違うよなぁ!?　お前も俺達と今でも仲間だよな！」
「違うなら違うと言ってくれ！　俺達を置いて行かないでくれっ！」
あまりに必死な態度にどう反応すべきか迷ってしまう。発端の桐生はというと松田と元浜の醜態を見てケラケラ笑っていた。
「変わったと言えば、兵藤やアーシアも変わってたよね」
縋る二人を『想像に任せる』とだけ言って突き放した後、桐生の気になる言葉にシンは最初に一誠の方を見る。
「見た目が日に焼けて精悍になったってのもあるけど、何か落ち着きが無いというかイライラしているというか……」
桐生が指摘した通り、机に座っている一誠は頻りに指先で机を叩いたり、爪先で何度も床を踏み付けたりなど、じっとしていられないのか絶えず体を動かしていた。松田と元浜がシンに話し掛けてきたのも、一誠が珍しく近寄りがたい雰囲気を纏っていたから

である。
「アーシアもあんな感じだし」
今度はアーシアの方に目を向ける。こちらは心ここにあらずといった様子で遠い目をしている。クラスメイトがアーシアに声を掛けるも反応は無く、もう一度声を掛けられてやっと反応し慌てて頭を下げていた。
「私が挨拶した時もあんな反応だった。二人揃って何かあった？　間薙君は知ってる？」
「――いや」
桐生の質問に、シンは首を横に振った。
一誠たちとは、冥界で別れて今日まで会っていない。その間に何かあったのは間違いない。二人が喧嘩したとも考えたが、一誠たちの対極的な態度にその考えはすぐに捨てた。
ついでにゼノヴィアの様子も見る。いつも通り凛とした姿で席に座っていたが、時折その視線がアーシアに向けられるのを見た。
断片的な情報からアーシア絡みで何か起きたのかもしれないと推測する。
（部活動の時にでも聞いてみるか）
チャイム音が鳴り響き、少し経ってから担任教諭がクラスの中へと入ってくる。一月

振りに見る光景に、二学期の始まりを実感する。

◇

「……」

「……」

「……」

帰りのホームルームも終わり、オカルト研究部へと向かう一誠、アーシア、ゼノヴィアは無言であった。彼らの周りに重たい空気が流れている。三人ともこの空気をどうにかしたいと思い、何か紛らわせる様な話題を出そうとするも、口を開いた段階で何を言うべきか迷い、結局閉じてしまう。

こんなことになったのは、全て冥界から帰ってきた直後に起こったことが原因である。そのときの衝撃が強過ぎたせいでも今もギクシャクとした空気が抜けない。

会話らしい会話も無いまま、三人はオカルト研究部の部室の扉を開ける。

「……ちわース」

「……こんにちは」

いつもよりも張りの無い声で挨拶をしながら部室へと入っていく一誠とアーシア。

だが、部室に入って数歩の後、足が止まった。
その理由は――
「ん？　犬？」
立ち止まった一誠とアーシアの横から覗き込んだゼノヴィアが見たのは、ソファー付近で座っている大型犬。
一誠たち以外は既に部室内に居り、犬を気にした様子も無くお茶を飲んだり、菓子を食べたり、談笑したりしていた。
「何で犬が？」
一誠は疑問に思いつつ座っている犬へと近寄る。
「誰が連れて来たんだ？」
「自分デ来タ」
「うおっ！」
部員に問い掛けたつもりが、犬の方から答えが返ってきた。不意打ちの様な返答に一誠は声を出して驚く。アーシアとゼノヴィアも目を丸くしていた。
「ウルサイゾ」
口を動かさず声だけが犬から発せられている。よく聞けば、その声は聞き覚えのあるものだった。

「お前……もしかしてケルベロスか？」
「ソウダ」
「縮んだなー……」
　そんな感想が出てしまう。三メートルはあった筈の体躯が、大型犬とはいえ常識的なサイズに変化しているのを見れば当然とも言えた。
「どうやったんだ、それ？　お前って普通の犬に変身出来たのか？」
「ソンナ器用ナコトハ出来ン。――オイ」
　隣のソファーに座っているシンを呼ぶ。
「部室なら問題無い」
　何かの許可を出す。するとケルベロスが身を震わす。すると全身に魔法陣を彷彿とさせる文字や記号が浮き出る。その一つ一つが光り、その輝きからは魔力を感じ取れた。
　光がケルベロスの体を包み、その光の中でケルベロスの体が変化していく。体が膨れ上がり、尾が伸び、鬣が生える。時間にして数秒程で大型犬程度の大きさが、大型の肉食獣を上回る巨躯へと変わる。
　包み込む光が消えると、一誠もよく知るケルベロスの姿へとなっていた。
「おお。どういう仕組みになってんだ？」

「それの御陰だ」
　シンが指差す方向、ケルベロスの右前脚に金具が付いた革製の輪が巻かれている。大型犬姿のケルベロスが身につけていた首輪であった。
「カモフラージュの魔術が仕込まれた首輪だ。姿だけだが、一般人どころか悪魔や天使にも効く代物らしい。」
「アザゼル先生に頼んで用意してもらったやつだな。グリゴリの施設に行くって言ってたし」
「――まあな」
　それも目的の一つだが、本来のものではない。当然、シンがここでそのことを言うつもりは無い。
「首輪なのに脚に巻いてるのか？」
「巻こうにも、あの鬣が邪魔だ。それにペットという訳じゃないからな」
　飼い犬ではなく仲魔であるという姿勢を崩さないシンの考えであり、またケルベロスのプライドを尊重してのことである。
「そういうもんか」
　仲魔という使い魔とは違うシン独特の考え方について、一誠も大体理解しているのでそれで納得する。

「ただの犬のときは、なるべくケルベロスとは呼ばないでくれるか？」
「何で？」
「流石に自分の犬をケルベロスと呼ぶのはな……」
「ああー……」
　言われて納得する。そういった時期ならばおかしくは無いが、時期を通り越していると自分も他人も痛々しさしか感じられない。
「じゃあ、何て呼べばいいのかな？」
「パスカル」
　木場の質問に即答する。名前は前以って決めていた。
「何でパスカルなんだ？」
「昔、飼っていた犬の名だ」
　――全く似ていないけどな。胸中で後に続く言葉を呟く。
　すると、今度はシンの方から一誠に尋ねた。
「それでそっちは何かあったのか？　随分と落ち着きが無かったが」
「それは……」
　一誠だけでなくアーシアの気持ちもまた沈んでいくのが見て分かった。それだけに止まらず部室内の空気が重くなる。シンを除くメンバーは理由を知っている様子で

あった。
「……プロポーズされたんだよ」
　苦々しい口調の一誠。
「誰が？」
「……私です」
　おずおず名乗り出たアーシア。
「誰に？」
「ディオドラ・アスタロト。七十二柱に名を連ねたアスタロト家の次期当主よ」
　疑問に応えたのはリアス。声に感情を感じない。あまり快く思っていないのが伝わってくる。
「理由は？」
「……アーシアが悪魔を神器で治癒したことで教会から追放されたのは知っているな？
　その悪魔がディオドラだ」
　説明するゼノヴィアの表情は硬い。今ではアーシアと仲が深まっているが、かつては魔女として唾棄すべきと思っていたゼノヴィアが、今の価値観を以って自分の視野の狭さと古傷に向き合っている。
「成程」

事情を大体把握する。ただ、それ以上の行動を見せなかったので恐る恐る一誠が聞く。
「――どう思った？」
「話だけ聞けば悪い話ではないな」
シンの率直な感想に、一誠が涙目で肩を掴んでくる。
「なんでだよおぉぉ！　うちの可愛いアーシアちゃんが、お、お嫁に行くかもしれないんだぞ！　俺は嫌だぞ！　あいつにお義兄さんなんて呼ばれるのは！　まだ呼ばれるのだったらお前にお義兄さんって呼ばれた方がましだ！」
「落ち着け、お義兄さん」
「あぐっ！」
喚く一誠の脳天に鉄槌を打ち込み、喋るのを中断させる。
「実際に会ってみなければ良いも悪いも分からない。信用していない訳じゃないが、聞いただけじゃ測れないこともある」
一誠の反応から私情がこれでもかと感じられた。それが悪いとはシンも思わないが、あくまでディオドラ本人と会わなければ、賛成も反対も出来ない。
頭を押さえながら一誠はシンを見上げる。少し不満そうな表情をしていたが、反論はしてこなかった。

「なら丁度良かったかも」
　リアスが呟く。するとテーブルの上に魔法陣が現れ、その魔法陣の中から梱包されたプレゼントらしき物が、手紙を添えられて出現する。
「これは？」
「ディオドラからのプレゼントとラブレターよ。アーシアがプロポーズをされたときから、毎日送られてくるのよ」
　ウンザリした表情でリアスが説明する。余程頻？に送られて来ているのが、その表情から察せた。
「これを読んだら少しは彼の人となりが分かるんじゃないかしら？」
　添えられたラブレターをシンに手渡す。
「流石に勝手に読むのは不味いので」
　手渡されたラブレターをアーシアにそのまま渡す。
「読んでいる所を勝手に覗きます」
「……貴方も良い性格しているわね」
　シンの詭弁に、リアスは呆れを半分混ぜた笑みを浮かべる。
「ええと、じゃあ読みますね」
　律儀に応じ、ラブレターの中身を読み始めたアーシア。シンはその横から宣言通り

堂々と内容を見る。
豊富な語彙から紡がれる歯が浮く様な、もとい情熱的な内容。いつ、どの場所で、どれぐらいアーシアのことを思っているのか赤裸々に書かれており、それはラブレターというよりも詩であった。
上級悪魔の名に恥じない教養の高さが窺える内容に感じられた。
読み終えたアーシアの表情は何とも言い難いものであった。一方的な好意を向けられていることへの困惑が分かる。少なくともラブレターで好感を得ることも、心を動かすことは無かったと言える。
「これで、あの、終わりです」
隣に立つアーシアがシンに告げる。アーシアが手紙を読んだというよりも、ただシンに見せる為だけの時間であった。
「どうだったかしら」
「情熱的でしたね」
シンの感想はその一言だけだった。淡々とした態度もあって皮肉を言っている様にも聞こえる。
「お前が気に入らないという理由も分かる。相性が悪そうだ」
泥臭さと血の気と熱が強い一誠と、如何にも上品といった印象を与えるディオドラ。

対極的な二人が意気投合するとは思えなかった。
「それで、このプレゼントは――あら？」
朱乃がプレゼントの方を見ると、テーブルから消えている。皆が何処に消えたのか目で探す。
「……あそこに」
小猫が指差す方向。
『あっ』
そこにはいつの間にかプレゼントの梱包を開けているピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、ケルベロスの姿。
「貴方たちねぇ……」
本当ならば開けずにそのまま返品するつもりであったリアスは、ピクシーたちの勝手な行動に額に手を当てながら溜息を吐く。
「ごめん。甘いニオイがしたから」
口では詫びているものの、その腕はしっかりプレゼントの中身である高級感溢れる洋菓子を確保している。
「食べて良い？」
「俺じゃなくてアーシアに聞け」

「食べて良い？」
「え、あの、どうぞ」
ピクシーから上目遣いにお願いされ、それにあっさり負けて許可を出してしまう。
「わーい！」
ピクシーが洋菓子に噛り付くと、それを合図にして他の仲魔たちもプレゼントをあさり始める。
見た目が可愛らしいピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンがプレゼントを漁る姿は微笑ましいが、ただ一匹混じるケルベロスがそれをやると、獲物を貪る肉食獣といった殺伐とした光景となっていた。
「そうだわ。シン、貴方に少し話したいことがあるの」
リアスの声に、陰と陽が混じり合った食事風景をひとまず置いて意識をそちらの方に向ける。
「話したいことですか？」
「私とソーナがレーティングゲームをしたじゃない？　その一戦がとても評判が良かったから、他の若手悪魔とレーティングゲームをしないかという話があったの」
「他の若手悪魔ですか？」
「貴方は不在だったけど、冥界で会合があったのを覚えているかしら。そのときに参加

した六家の次期当主たちが相手よ」
リアスが言う六家とは、リアスのグレモリー家とソーナのシトリー家。シークヴァイラのアガレス家。そして、ゼファードルのグラシャラボラス家。先程リアスが説明したディオドラのアスタロト家にサイラオーグのバアル家。
シンはこのうち、ゼファードルとサイラオーグを知っていた。前者は、いきなり因縁をつけてきた人物。後者はその直後に会い、挨拶を交わしシンが『強い』と思った人物である。
「実は、貴方が良ければまた私たちと一緒にレーティングゲームに参加してもらいたいのだけど。勿論、上の許可は貰っているわ。後は貴方の返答だけよ」
言われてシンは少し悩む。ライザーのときは、リアスたちへの義理のため。対リアスたちのときは、ソーナたちへの義理から参加した。今回の場合もリアスたちへの義理として参戦するのは簡単だが、別の思考がそれに待ったをかける。
色々な戦いを経験して魔人としての力が強まっている自覚がある。このままレーティングゲームに参戦し続けるのなら、いずれ魔人であることが知れ渡る危険がある。
サーゼクスたちは、シンのことを考え黙認しているが、それ以外から洩れることは十分考えられた。
魔人とは殆ど忌み名である。シンが魔人である事実を知っているか、いないか関係無

く責められ、リアスの立場が追い込まれる可能性がある。
「あっ」
「どうしたの？」
「――いえ、何も」
そこまで考えていたが、もっと単純な問題を忘れていた。正当防衛――恐らく範疇――とはいえ、六家のゼファードルを殴り飛ばしている。この事実はリアスも知らない。そんなシンがリアスのチームで戦うとなれば、ゼファードル側からどんな因縁をつけられるか分からない。ゼファードルについて殆ど知らないが、第一印象のこともあってシンは彼の人格面を信用していなかった。
この二つの考えからシンは結論を出す。
「誘ってくれた気持ちは嬉しいですが、辞退させてもらいます」
「――分かったわ」
リアスは食い下がることも無く、また、『残念』や『惜しい』などの言葉も付け加えることなく一言で済ます。決断したシンに対し、後ろめたさを感じさせない為の配慮であった。
が、シンの不参加という決定に、オカルト研究部内の空気はどうしても沈んでしまう。周りも何かを言うなどのことはしなかったが、無意識のうちに『残念』という気持ちが

外に漏れ出していた。
「ま、出ないんなら出ないでしょうがねえな。その分しっかり見とけよ、俺たちのレーティングゲームを。ソーナ会長のときは、ここぞというとき活躍出来なかったけど、今度のゲームで汚名返上してやるからな」
沈む空気を吹き飛ばすかの様に、一誠がシンに宣言する。自分がリアス・グレモリーのエースであることを証明する意気込みであった。
「頼もしいな」
「そりゃあ、最強の『兵士』になるのも目標だからな」
「期待している。『邪悪な赤龍帝』」
「お前、ちょっと馬鹿にしているだろ？」
「褒め言葉だ」
「嘘吐け」
軽口をたたき始める二人。それを眺めるオカルト研究部一同。もう既にさっきまでの空気は無い。
「イッセー君が頑張るなら当然僕も頑張らないとね」
「うふふふ。そうですね。私も『女王』として負けていられませんね」
「……私も頑張ります」

「ぼ、僕もぜ、絶対活躍してみせます！」
笑みを見せながらも自らも負けていられないと意気込みを露にする面々。
戦意を高める眷属たちにリアスは微笑を浮かべる。一誠もシンも、他の者に良い刺激を与えてくれる。その高まる気持ちを無駄にしない為に、『王』としての責務を果たさなければならない。
リアスに重圧としてかかるが、それが齎す緊張を、リアスは自分が成長する為の糧と捉える。
（いつかは、この重圧すら愉しむ様にならないとね）
そこに至るには、まだ自分は若く経験も浅い。だが、決して叶わないことだとは思っていなかった。
それを可能だと信じさせてくれる者たちは、今自分の目の前に居るのだから。

◇

「では、頼みましたよ。イリナ」
「はい！　ミカエル様の『御使い（ブレイブ・セイント）』に恥じない働きをしてきます！」
純白。その一言で尽きるぐらいに穢れ一つ無く、ありとあらゆるものが完璧なまでに

整えられている空間。
その中心で四大天使として名高い熾天使ミカエルが、教会の聖剣使いである紫藤イリナと向き合っていた。
ミカエルに対し、溢れ出る崇拝から潤む眼差し向けるイリナ。その頭上には光輝く輪。そして、背からは白い翼が生えていた。
「――天使化して間もない貴女に苦労をかけます」
「そんなことはありません！　ミカエル様直々に任務を与えてもらい、体が喜びで打ち震える思いですっ！」
紫藤イリナはミカエルからの祝福を受け、天使へと転生していた。
他者を悪魔化させる『悪魔の駒』の技術。堕天使が神器を研究して生み出した『人工神器』の技術を参考、応用して創られた新たなシステムである。
ミカエルを含む十名の熾天使が、それぞれ十二名の『御使い』と称した配下を生み出すものであり、その十二名に対しトランプの札に倣いエースからクイーンまでの配置を当てはめる。イリナの与えられた配置はエースであり、それを示すようにイリナの左手の甲には『A』の文字が描かれていた。
三勢力が互いに情報の共有をした結果新たに創造された技術である。
「サーゼクスの妹君には、事前に話を通しています。貴女を迎え入れる準備は整えてあ

る筈です」
「分かりました！　紫藤イリナ！　全身全霊を以ってミカエル様の期待に応えます！」
自分の仕える主に対し、迸るほどのやる気を見せるイリナ。そんなイリナをミカエルは微笑ましく見ていたが、急にその笑みが消え、じっとイリナを見詰め始める。
「あ、あの、どうかなさいましたか？」
ミカエルが突然黙り込んだことに、何か自分が失礼なことをしたのではないかと思い、やる気に満ちた表情を一転させ、不安気な表情で恐る恐る伺う。
「……貴女に見せたいものがあります」
「見せたいものですか？」
「付いてきて下さい」
言われるがまま、イリナはミカエルの後について移動する。
空間の外に出ると、そこは神々しい光が降り注ぎ、石造りの建物が並んでいる。イリナたちはそれを見下ろす位置にいる。今まで居た場所は空に浮かぶ雲の上に作られた建造物であった。
この白く輝く天上の世界こそ、天使たちが住む天界である。
ミカエルとイリナは翼を羽ばたかせ、天界の中で聳え立つ巨大な門の前に向かう。そこには警護をする天使たちが立っていたが、ミカエルの姿を見た途端警備の構えを解

き、祈りを捧げる体勢となる。
　巨大な門が開くと、その向こうは何も無い白い空間であった。イリナたちが中に入ると足元に金色の紋様が浮かび、それが輝くと二人の体は上へと運ばれていく。この建物は、上に向かう為のエレベーターの様なものである。
　上に向かう最中、イリナはミカエルに尋ねる。
「何処に向かわれるのですか？」
「――第七天に」
「な、ななな、七天ですか!?」
　天界は第一から第七までの層となっている。ミカエルや熾天使たちが集う本部拠点が第六層こと第六天。直接仕えるイリナですら第一天が主な勤務場所である。そこを跳び越えた先に向かう。イリナが驚くのも無理は無かった。
「そ、そんな、お、恐れ、お、お、多いです！　主の住む場所に向かうなど！」
　最上層である第七天。そこは、イリナの言う通りかつて神が居た場所。第六天の段階でごく限られた者しか入れない。第七天に入ることを許されるのは熾天使のみ。
「イリナ。貴女は第七天に今、何が在るか知っていますか？」
「そ、それは、主が残した奇跡、です」
　神が死に、今は神の奇跡を司るシステムのみがそこに存在している。それがイリナの

知っていることだった。
「半分正解です」
「半分、ですか?」
「残りの半分を貴女にお見せします」
何度も分厚い門を潜り抜け、上層を目指す。その間、イリナは緊張し続けていた。敬虔な信者である彼女が、今から向かう場所のことを考えればその程度で済んでいることに称賛すべきと言える。
時間にすれば、そう長い時間では無かった。本来ならば一層上がることに警護の天使たちから厳重なチェックが行われるが、ミカエルという存在のおかげで全て一目だけで通されていく。
熾天使たちの拠点である第六天に着き、いよいよ第七天へと向かう。すると、ミカエルは足元の紋様に向け、数度指を奔らせる。金色の紋様はミカエルの指に合わせ形を変えると、二人を上に運び始めた。
「何をしたのですか?」
「熾天使のみが知っている鍵を使用しました。イリナ、今から向かうのは第七天であり、第七天では無い場所です」
「ど、どういうことですか?」

「『彼』の為だけに創られた空間。それがもう一つの第七天です」
「彼？　誰のことですか？」
「――魔人」
その名を聞かされた瞬間、イリナの体に震えが起きる。
『魔人』。死を撒く悪しき存在。三勢力だけにとどまらずありとあらゆる生在る者たちに害為す存在。
三勢力の会談際に、イリナもその一人である『だいそうじょう』の姿を見たが、その魂すら凍て付く様な死と恐ろしい存在感は今でも忘れられないでいる。
「ま、魔人ですか！　た、確かに、天使が魔人の一体を封じたという話は知っていますが、何故、魔人の為にその様な場所を!?」
「貴女は大戦争の際、魔人たちがどの様な行動をとったのか知っていますか？」
「え、えーと。敵味方関係無く無差別に暴れ回ったという話だったと思います」
「その情報は正確ではありません。確かに殆どの魔人は無差別に暴れました。しかし、例外もありました」
「例外？」
二人にかかっていた浮遊感が消える。それは、目的の場所に着いたことを告げていた。

「着きましたね」
白い空間の外に出ると、巨大な門が建っていた。
「魔人の中で例外的な行動をとった魔人が二体居ました。片方は悪魔や堕天使に目を向けず、ひたすら天使だけを狙い、もう片方は天使だけは攻撃しなかった。寧ろ逆に私たちを守る動きすら見せていました」
「ま、魔人がミカエル様たちを守ったのですか？　一体何故？」
「それは分かりません。彼と言葉を交わす機会はありませんでしたから」
ミカエルの手が門に触れる。すると門が大きな音を立ててゆっくりと開かれていく。
「イリナ。気をしっかりと持っていて下さい」
門の向こうから流れ出る空気は異様なまでに冷たかった。
完全に開かれた門。その向こうにソレは在った。
白く広々とした空間にただ一つある大きな十字架。その十字架に鎖で幾重も厳重に縛られている者こそ魔人。
魔人と聞かされたとき、イリナはもっとおどろおどろしいものを想像していた。だが実際は――
金の十字が刺繍された帽子。胸、両肩、背に垂れる白と黒の帯。その身に純白の法衣を纏い、その手に金のラッパが握られている。

だが、最も目を惹かれたのは、その背から生えるもの。
天使と同じ純白の翼であった。
『吹奏者』魔人トランペッター。それが彼の名です」
「トラン、ペッター……」
その名を聞かされたとき、イリナは黙示録のラッパ吹きを連想した。それに相応しい死が目の前の存在から放たれている。
「戦争が終わった時、彼は天界に現れ、そのまま深い眠りにつきました。そして、その日から一度も彼が眠りから覚めたことはありません」
「その、退治しようと思ったことは？」
「熾天使の中でも意見は割れました。どう扱うべきか。私も天使に危害を加えなかったからといって味方だ――という楽観視は出来ませんでした。結果として誰の手にも届かない場所で封じることとなりましたが、今となってはそれが正解だったと思います」
数十年前、魔人の一人である『獄天使』が堕天使の本拠地を突如襲撃した際、堕天使の総戦力に加え、アザゼルと個人的な付き合いがあった阿修羅のマダ、そのマダの繋がりで闘戦勝仏初代孫悟空、五大龍王の一匹である西海龍童（ミスチバス・ドラゴン）、玉龍（ウーロン）も戦いに加わり何とか封印することが出来た。
仮にトランペッターに害を与え反撃されようものなら、そのときの堕天使たちと同等

以上の戦力を準備していなければならなかったが、戦争で疲弊しきっていた当時の天界には準備する余裕など無かった。
「そんなことが……」
沈黙するトランペッター。死体の如き静かな内に、一体どれだけの死が内包されているというのか。
俯くトランペッターからは何も伝わって来ない。
（一体、どんな顔を――）
しているのだろうか。そう思った瞬間、俯いていた筈のトランペッターの顔が跳ね上がり、白骨の顔にくり抜かれる様にある虚無を彷彿させる眼無き双眼がイリナを見た。
あまりのことに声を上げることすら出来ない。
トランペッターは自分を縛める鎖を容易く引き千切り、その双翼を羽ばたかせイリナの眼前に立つ。
剥き出しとなった歯に押し当てられる吹き口。その反対はイリナに向けられる。
奏でられるはこの世ならざる音。――
音が体の中へと染み込み、皮は全て溶け――ッ
血は蒸発し、肉は剥がれ、骨は砕ける――ナッ
残る魂もまた跡形も無く――リナッ

「イリナッ！」
「はっ！」
ミカエルの声。我に返りイリナは思わず自分の体を見る。傷一つ無い。
トランペッターを見る。最初と同じ様に俯いたままの状態であった。
トランペッターは何もしていないし、何も見せてはいない。魔人の死に触れたことで、イリナが自身に見せた刹那の幻覚である。
「大丈夫ですか？」
「お、お見苦しいところを――」
イリナの全身は冷や汗で濡れ、寒さに耐える様に震え続けている。
「行きましょう。長居をしたみたいです」
他の魔人と比べれば、眠りについているため比較的死の気配が薄いトランペッターだが、それでも天使にとってはやはり悪影響を及ぼす。
ミカエルはイリナに手を貸し、門の外に出る。二人が出ると門は自動的に閉まった。
「も、申し訳ございません」
「いえ。謝るのはこちらの方です。少し、急いてしまいました」
「そ、そんなことはありません！　私が天使として未熟だからです！」
「魔人の死の気配に影響を受けない天使はまず居ません。貴女は十分耐えていました

よ」

　穢れや邪なものに弱い天使にとって、魔人特有の死の気配は非常に厄介なものであった。だが、魔人の中にはそれですらまだましと言えるほど、天使と最凶最悪の相性を持つ天敵そのものの魔人が存在する。

「……それでどうして私を魔人と会わせたのですか？」

　イリナは、青い顔のままミカエルの真意を聞く。

「貴女にもう一つ任務を頼むつもりでした。それには魔人が関わることです。少しでも知っておくべきと思ってのことでした。ですが――」

「やります！　やります！　絶対成し遂げてみせます！」

　任務を取り下げようとするミカエルに、イリナは今見せられる精一杯のやる気を振り絞る。

「どんな危険なことでもやり遂げます！」

「危険――という訳ではありませんが、先の見えない任務ですよ？」

「それでもやります！」

「……分かりました。なら、イリナ、貴女にもう一つの任務を与えます」

「はい！」

　ミカエルはそこで一呼吸置き――

「間薙シン。彼から目を離さないで下さい」

歓迎、幻痛

「紫藤イリナです。皆さん、どうぞよろしくお願いします！」

『おおおお

して容姿のレベルが高いイリナに、男としての性が抑えきれていないのが傍から見てもよく分かった。
「――少しいいか？」
新たにイリナに対し話し掛けてくる人物――シンである。イリナに接触しに来たシンを見て、男女問わず驚いた表情を浮かべていた。大体のクラスメイトは、シンが今の様な行動をする印象を持っていないからである。
「何か用？」
人当たりの良い笑みを浮かべているが、シンにはイリナが緊張している印象を受けた。微妙な変化であるが、身体を縮込ませている。
「生徒会から言われて、時間があれば学園の案内をしてあげて欲しいと言われたんだ。――今、いいか？」
イリナが他のクラスメイトを見る。女子は、『私たちのことは気にしなくてもいいから』と言って引き、男子も女子が引いたのを見て同じく引いた。ただ、一部の男子は中断させたシンを少し恨めしそうに見ていたが。
「大丈夫よ」
「なら、行こうか」
イリナを連れて、シンは教室の外に出る。

「あっ」
教室の外の廊下には、一誠、ゼノヴィア、アーシアの三人がイリナを待っていた。学園案内は建前であり、本命はこちらである。
「ちょっと来てくれ」
五人は人気の無い場所を探した結果、屋上へと到着する。
この五人以外誰も居ないことを確認すると、イリナはゼノヴィアに抱き着いた。
「久し振り！　ゼノヴィア！」
聖剣事件で喧嘩別れし、三勢力の会談で和解した二人。それ以降会う機会に恵まれなかったが、ようやくその時が巡り、再会を喜ぶ。
「ああ。久し振りだね、イリナ。変わらず元気そうでなによりだ」
同じく再会を喜ぶゼノヴィアだが、イリナの首をから下げられた十字架を押し当てられ、少し苦しそうにしていた。
「しかし、何故ここに？」
誰もが疑問に思っていたことをゼノヴィアが代表してイリナに聞く。
「ミカエル様の命で、使いとして転校してきたの。――ああ。ちゃんとリアスさんには、話は通してあるから」
「そうなのか？　そのミカエル様に与えられた命というのは？」

「うーん。話すと少し長くなりそうだし、どうせならアザゼル様や他の人たちにも聞いてほしいから詳しくは放課後でいい？」
「じゃあ、放課後にオカルト研究部で聞くか。木場たちにも連絡しておく。で、オカルト研究部の部室は――」
「噂の旧校舎でしょ？　分かってるって」
一誠は携帯電話を操作し、今聞いた内容を他のオカルト研究部に伝える。
（ピクシーたちにも、放課後はウロウロするなと伝えておくか）
おそらく部室に居るであろうピクシーたちに待機という指示を飛ばそうとしたとき、シンは視線を感じ取った。
その視線の主は、またもやイリナであった。シンは敢えて気付かない振りをし、その視線の意図を探る。
多くのことが分かる訳では無いが、少なくとも敵意は感じられない。
少し動きを大きくして、イリナの方を見ようとすると、イリナが慌てて視線を外すのが分かった。そのままイリナを見ると、視線どころか顔まで泳がし、露骨且つ意味も無く辺りを見回していた。
（……分かり易い）
性格からか、それとも慣れていないのか隠密行為は不得手らしい。

この場で言及すればすぐに済むことだが、再会後の空気を壊すことに気が引けたので、機会を見ることにした。
その日の放課後。オカルト研究部部室に、メンバー全員に加えアザゼルとソーナもまたイリナの話を聞きに来た。
「初めての方は初めまして！　顔見知りの方はお久しぶりです！　紫藤イリナと申します！　天界の使者として駒王学園に馳せ参じました！」
皆が見ている中で、イリナは改めて自己紹介をする。とは言っても殆どイリナも知っている人物ばかりである。新顔はジャックランタンとケルベロスぐらいであろう。そのケルベロスも犬形態のまま、イリナの自己紹介を聞いた後に、興味無しと言わんばかりに伏せてしまい、ジャックランタンはギャスパーの周囲をフヨフヨと漂っている。
「紫藤イリナさん。貴女の来校を歓迎します」
「色々と会ったけど、過去のことは水に流して改めてよろしくお願いするわ」
ソーナとリアスが、歓迎の意を示す。
「んで？　お前はミカエルの使いってことでいいんだな？」
「はい！　ミカエル様の『御使い』として参りました！」
「『御使い』？」
イリナから出た聞き慣れない言葉に、アザゼルを含め全員が疑問符を浮かべる。

すると、イリナが祈りを捧げる構えをとる。彼女の全身が光に包まれ、その背から白い翼が現れた。
イリナの変化に全員驚く中、アザゼルだけは研究者としての血が騒ぐのかイリナの翼を興味深げに観察していた。
「ほう。天使化か。実現させたのか」
人を天使に転生させる理論は、既にあったがそれを可能にする技術は確立していなかった。
「とは言え、今の技術を応用すれば可能っちゃ可能か」
天使化に悪魔と堕天使の技術が使用されていることを、アザゼルはすぐに理解し一人納得する。
イリナから『御使い』について簡単な説明を受けた後、一誠が休み時間に聞けなかったことを聞く。
「それで、イリナはどうしてここに？」
「それはね、イッセー君。天界と冥界の力が働いているこの学園に天使側の使いが一人も居ないことが問題視されたの。現地に人員が居なければ、いざという時に迅速な対応が出来ないって」
「ああ。そんなことミカエルの奴が言ってたなー。別に俺たちやリアスたちが居れば十

分対応出来るっていうのに。それとは別に天使側が一人も戦力を出さないことに負い目でも感じたのかもな。律儀というか、真面目というか、そういう所は昔と変わんねぇな」

旧友の相変わらずの性格に、アザゼルは苦笑する。

「まあ、こんだけごった煮になれば面白いっちゃ面白いけどな。なあ？」

揶揄う様にリアスとソーナに問う。

一つの学園に、悪魔、堕天使、天使という相反する存在。更には、ドラゴン、妖精、魔獣。そして、ごく一部のものしか知らない魔人。カオス極まる内容である。

リアスとソーナも現状の混沌さを理解しており、アザゼルと同じく苦笑していた。

「何事も経験よ」

「遣り甲斐はあります」

二人ともこの辺り一帯を任せられているだけあって、何とも頼もしい言葉であった。

「さて、紫藤イリナさんからの説明はここまでにしておいて、ここから先はイリナの歓迎会としましょう」

ソーナが指を鳴らすと、テーブルが輝き、料理や飲み物が次々と現れる。

「それじゃあ、始めましょうか」

リアスの言葉と共にイリナの歓迎会が始まった。

歓迎会が始まって暫くは、イリナはオカルト研究部のメンバーと次々に会話をし、これからもよろしくと挨拶を交わしていた。特にアーシアとゼノヴィアとは同じ信仰を持っていることもあって大いに盛り上がり、三人で一緒に祈りを捧げている。
シンは、ソファーに座り静かに飲み物を飲んでいたが、時折視線が刺さるのを感じていた。休み時間と同じ様に、視線の主はイリナである。
(ここに来た理由は、本当に説明したことだけか?)
不審なイリナの行動に、シンの疑惑は濃くなっていく。
やがて順番が、シンに巡ってくる。
「えーと……」
いきなり言葉を詰まらせるイリナ。聖剣のときも、三勢力の会談のときも会話らしい会話などしたことがない二人。改めて会話しようにも互いのことを知らな過ぎた。
(そう言えば、悪魔崇拝者かと言われたり宗教に誘われたしたな)
初対面の印象は決して良くなかったと言っていい。
シンの方から何か話し掛ければいいものを、このときイリナに対し少し警戒心を持っていたため、口を噤み続けていた。
その無言の圧にイリナの表情がどんどん悪くなっていく。このまま会話もせずに去っていけばいいのだが、自分から話し掛けた手前それも出来ずにいた。

どんなことを話せばいいのか。その考えが、イリナの頭の中で空回りし続ける。
と、そのとき思わぬ助け舟が現れる。
「おーい。何時まで寝てないで、君も参加したら？」
「そうだホ。起きないと全部食べちゃうホ」
イリナが来てから今に至るまで伏せていたケルベロスことパスカルを揺すり、歓迎会に参加させようとする。
「あ、そうだ！　――聞いたよ。あの子たちって貴方の使い魔というか、仲魔って言うんでしょ？」
一誠辺りから聞いたのか、ピクシーたちのことについて聞いてきた。これを話の切っ掛けするつもりらしい。話題を振られれば黙っている必要も無く、シンも応じる。
「ああ」
非常に短い返答であったが、無いよりはマシだと思いイリナは話を続ける。
「可愛いらしい子たちだね。あそこで浮いているカボチャの子も貴方の仲魔なんだよね？　名前は何ていうの？」
「――ジャックランタンだ」
「じゃあ、あそこに寝そべっている子は？　仲魔じゃなくて貴方のペット？」
「あれは――」

パスカルについて答えようとしたとき――
「早くこっちに来なよ。このクッキー、美味しいよ」
「サクサクだホー」
「ヒ～ホ～。全部食べちゃうよ～？」
起こすことを諦め、食べ物でパスカルを釣ろうとする。すると、パスカルは唸りながら頭だけを持ち上げた。
「グルルルル。ソコカラナゲロ」
いきなり犬が喋ったことに、イリナが目を丸くする。
ピクシーたちは、パスカルの言葉に顔を見合わせていたが、やがて好奇心が勝ったのか、パスカル目掛けて笑顔でクッキーを投げつけた。
それぞれ上中下の高さに分かれ、更には右中央左と軌道も別々のクッキーがパスカルに迫る。
パスカルの頭部が一瞬ぶれる。まるで一筆を走らせる様に頭を動かし、投げ放たれた三枚のクッキーを口に収めると、それを噛み砕きながら何事もなかったかのように頭を伏せた。
誰がどう見ても普通では無いパスカルの動きに、イリナは絶句していた。
すると、いきなりシンの方を見る。その眼は何故か尊敬の念をシンに向けている。

「貴方って、もしかして――凄腕のペットトレーナー？」

先程まであった緊張が若干解けたが、代わりに変な誤解が生じるのであった。

◇

イリナが転校してきてから数日が経過した。歓迎会の件もあってシンとも多少ぎこちないも会話をする様になったが、それでも時折監視する様な視線を向けてくることがあった。直接的な行動はしてこないので、シンの方もとりあえず様子を見ることにしていた。

そして現在、シンは体操服に着替えてグラウンドを眺めている。本日から今度行われる体育祭の全体練習が解禁されていた。

グラウンドでは、イリナとゼノヴィアが土煙を上げながら競争している姿が見られる。悪魔と天使という高い身体能力のおかげで二人とも驚異的な速度で走っており、それを見ている他のクラスメイトたちが唖然としていた。

「ここに居ましたか」

背後からの声。後ろを見るとソーナが椿姫を連れて立っていた。

「どうかしましたか？」

「少し手を貸してもらってもいいですか？　生徒会の人手が足りなくて」
「いいですよ」
「ありがとう、間薙君」
　ソーナの頼みに迷うことなく応じる。シンの決断の早さに、ソーナは微笑を浮かべながら礼を言う。
「あとはサジですね。全く、どこで油を売っているのか。ただでさえ人手不足だというのに」
「探して来ますよ。見つけたら合流します」
「重ね重ねありがとう。なら場所は――」
　合流場所を聞き、ソーナたちと分かれ匙を探す。
　数分後、一誠と話している匙を発見した。その近くには地面に座り、体操服姿の女子たちを眺めている元浜と松田も居た。
「ん？　おう、間薙」
「どうかしたか？」
　匙がシンに気付き、右手を上げて挨拶してきた。その右手には腕まで包帯が巻かれている。シンの記憶では二、三日前に会ったときはしていなかった筈である。
「匙に用があるんだが――その右腕はどうした？」

「ああ、お前も気になるか」
ソーナの用件よりも先に匙の包帯について問う。
シンの見ている前で匙が包帯をずらすと、露わになった肌には蛇を彷彿とさせる黒い痣が巻き付く様にあった。
「どうしたんだそれは？」
「レーティングゲームでかなり無茶したのと、そのときに赤龍帝の力を吸ったのが原因で神器の形が変化したらしい――ということをアザゼル先生に聞いたときに言われた」
神器の変化。禁手以外でその様なことが起こるとは思っていなかった。
「アザゼル先生もかなりレアなケースだって言ってたよ。丸々形が変わっちまうなんてな。でも、能力は健在だ」
そう言うと、匙は軽く拳を握る。すると肌に幾重に巻き付いていた黒い痣の一本が蠢き、匙の腕から飛び出した。黒い痣は地面に降り立つと黒い蛇に変わり、体をくねらせながら音一つ無く元浜の背後に這い寄ると、体操服の裾を咥えた。
匙が軽く腕を引くとそれに連動して蛇が裾を引っ張る。急に後ろから引っ張られた元浜は驚き、後ろ手に地面を突いて体を支える。
黒い蛇は靄の様になって消失する。
直ぐに背後に誰か居ないか見回していたが、周りに誰も居ない。唯一シンたちが居た

が、元浜から見て離れ過ぎて無理だと判断し、一人不思議そうに首を傾げていた。
「おおー」
「見たか？　ワイヤレスだぜ」
　思わず声を上げる一誠に、匙は自慢げに笑う。
　匙が説明するに、変化した黒い龍脈はラインを接続する必要が無く、放った蛇が噛み付いたものから力を吸収出来る様になり、また今見せた様にまるで繋がっているかの様に操ることも出来る
「影響は無いのか？」
「全く。と言いたいところなんだが、まだ完全に使いこなせないんだよな。一度、神器を出すと暫く出しっ放しになっちまう」
　おかげで隠すのが面倒だと少し愚痴る。
『ヴリトラの置き土産か』
　匙の新しい力を見たドライグが匙に話し掛けた。
「まあ、そんなところだろうな。色々と未熟だと思ったんだろうぜ。最初から最後まで世話になりっぱなしだ」
『そんなものを残すとは、随分とお前のことを気に入ったらしい』
「――そうだと嬉しいけどな」

少しだけ誇らしげに笑う。
「それに見合うには、まだまだ鍛錬不足だけどな。――ところでお前たちは体育祭の練習をしなくて良いのか？」
匙が鍛錬繋がりで体育祭の話題に変えてきた。
「俺はアーシア待ちだよ。向こうでストレッチやっているんだ。俺はアーシアと二人三脚だ」
「はぁー。相変わらず周りに女っ気が絶えないですこと！　嫉ましい！　俺の相手はパンだっつーのに！」
匙はパン食い競争に出場する様子。
「で？　間薙。お前は何の競技に出るんだ？」
「借り物競争」
「それなら良し」
自分だけ置いてかれて居ない状況にひとまず安堵する。
「安心したところで悪いが、さっきの用の話だ。会長たちが探していたぞ」
会話に区切りをつける為に本題を持ち出す。そのことを聞き、匙の顔は一気に蒼ざめた。
「やべぇ……話に夢中になってた。とりあえず俺はもう行く！　間薙！　会長たちは何

処に!?」
　ソーナから聞かされていた合流場所を匙に告げる。
「分かった！　じゃあな、兵藤！　あとでな、間薙！」
　そう言い残し匙は駆け出していった。
「慌ただしいー」
「色々とやることがあるからな」
　匙も行った事なので、間薙もまたこの場を離れようとする。
　そのとき、丁度ストレッチを終えたアーシアがこちらに向かって来ているのが見えた。
「俺も手伝いに行く。また後で」
「おう。あんまり無理すんなよー」
　一誠と別れ、合流場所に向かう。既に生徒会メンバーの仕事は始まっており、先に着いていた匙がメジャーを持って、運営用テントなどを設置する場所の計測やチェックを行っている。
「遅くなりました」
　近くに居たソーナに声を掛ける。
「来ましたね。では早速ですが手伝ってもらえますか？」

ソーナの指示に従い作業を始める。重労働ではなく今回は準備に向けての下調べが主な作業内容であった。

作業が簡単なこと。ソーナや椿姫の指示が非常にテキパキし、正確なこともあって詰まることもなく予定通りの時間内に作業は終了した。

「間薙。少しいいかな？」

シンが計測に使用した道具を片付けていたときのこと、由良が話し掛けてくる。

「どうした？」

「今度一緒に夕食でもどうかな？」

由良の方から食事の誘いが来た。

「夕食か……」

「皆の目もあって中々言い出せなかったが、冥界では本当に君には世話になった。当然、食事一回で済むとは思っていないよ。でも、こんなことでもいいから少しずつでも君に借りを返していきたいんだ」

間薙自身は別に気にする必要は無いと思っていた。だが、そんなことを言っても由良が納得しないのは、この真摯な目を見れば分かる。

「分かった」

「ああ、良かった。時間は何時でも構わない。君の都合に合わせるよ」

了承されたことに安心し、シンから離れるその間際――
「楽しみにしているよ」
――同性すらも魅了させる凛々しい笑みとウインクをシンに送ってから去って行った。
そして、シンは何事もなかったかの様に道具を片付け始める。
「……おい」
重々しい声。視線を向けると、匙が宇宙人でも見る様な目をシンに向けていた。
「……今の何？」
「何が？」
「何が？　じゃねえだろ！　何ちゃっかりと女子と食事の約束してるんだよ！」
「誘われたからな」
「そうだけどさー！　そうなんだけどさー！」
この世の全ての理不尽を嘆く様に、匙は頭を抱える。
「この前のときといい、今回のことといい、色々とショックが大き過ぎる……」
冥界で由良がシンにしたことを、生徒会メンバーの中で唯一目撃している匙。二学期が始まって暫くの間は、二人が近付く度にソワソワと心落ち着かずにいたが、二人の関係性は夏休み前と全く変化が無かった。気にし過ぎていると思い始めた直後にこれで

ある。
守りを緩めていた匙の精神に重い一撃が綺麗に決まってしまった。
「兵藤とお前は、どうしてこうもあっさりと俺の先を行くんだー！」
匙の慟哭。シンは若干面倒くさくなってきていた。
「嘆くぐらいなら、お前も会長を食事にでも誘ってみたらどうなんだ？」
その言葉を聞いた瞬間、匙の体は硬直した。映像で一時停止されたかの様に見事なまでの急停止である。
だが、その硬直も小刻み震えに変わる。
「お、お前は、な、なんて恐れ多いことを……」
「人に噛み付いている暇があるなら行動してみたらどうだ？」
「そ、そんなことは……」
「待っていたらもしかしたら向こうから来るかもしれない。だが、万に一つの可能性だな。それに、会長はそういう風な人には見えない」
「た、確かに……」
「待っている間に横から攫われていくかもな」
匙の脳裏に、純白のウェディングドレスを着たソーナが、見知らぬ男に抱き抱えられる光景が造り出される。

幸せそうに微笑むソーナ。よく見れば、そのお腹は膨らんでおり、つまりは妊――
「会長ぉぉぉぉ！　誰の子なんですかぁぁぁ!?」
「……急にどうした？」
いきなり意味不明且つ気色悪い台詞で絶叫する匙に、シンも思わず一歩後退る。
「す、すまん……見たくも無いものを幻視たせいで取り乱した」
「……お前もあいっ（イッ）と（セー）変わらんぐらい妄想が激しいな」
態度を二転三転するのを見て、シンはやや呆れを混ぜた目で匙を見る。
「それでどうするんだ？　誘うのか？　誘わないのか？」
話を戻し、匙がソーナを食事に誘うか否かを問う。
「そ、それは……というか何故俺が会長と一緒に食事に行く話に――」
「どうなんだ？」
話を元に戻されるのが嫌だったので、強引にこの話を続ける。
「そりゃあ、行けるなら行きたいけど……」
「大したことじゃない。由良の様に言えば良いだけだ」
「それが難しいんだよ」
「試しに言ってみろ」
「……会長、こ、今度一緒にひょ、ひょくじにでも――」

まさに蚊の無く様な声。更には肝心な所で噛んで間抜けな台詞にもなっている。
「声が小さい。もっとはっきりと」
再度言うことを促す。
「か、会長。こ、今度一緒に食事にでも行きませんか！」
半ばやけくそ気味だが、聞き取れる声ときちんとした台詞であった。
「――だそうですよ？」
「……え？」
シンの目が、匙ではなくその後ろに焦点を当てている。油の切れた機械の様にぎこちない動きでその目線を辿ると、背後でソーナが無言で立っていた。
「……ッ……ッ」
言葉を失い、顔面が死人の顔色と化す匙。
「じゃあ、俺はこれを片付けてくる」
そんな匙を放ってシンはメジャーなどの道具を片付ける為に、さっさとこの場を離れていく。
「待ってくれ！　俺を、俺を一人にしないでくれぇぇ！」
匙の悲痛な叫びが聞こえたが無視。この程度の逆境を乗り越えなければ、ソーナを落とすことなど夢のまた夢である。

「……サジ」
「ひぃっ！」
「――少し話をしましょう」
後に匙からシンの携帯電話にメールが送られたきた。内容は、今度生徒会メンバーで食事会を行うというものである。結局、匙はソーナと二人っきりで食事を誘うことに失敗したようであった。因みにメールの最後には『お前を一生呪ってやる』というありったけの怨念が込められたメッセージが書かれていた。

◇

某日早朝。目覚まし時計ではなく携帯電話の振動音でシンは目を覚ます。冥界の森で生きるか死ぬかのサバイバルを行った成果か、小さな物音でも目が覚める様になっていた。
時計を見る。まだ日が昇って間もない時間である。
携帯電話を見ると、画面にはアザゼルの名が表示されていた。
「――はい」
『よお。おはようさん。出るの早いなー』

感心した様子のアザゼルの声が耳に飛び込んでくる。外部からの刺激でシンの脳は一気に覚醒していく。
「何か用ですか？」
『ああ。これからお前、学園に行けるか？』
「学園に？」
『少し前からイッセーがアーシアとゼノヴィアと一緒に体育祭に向けての朝練をしてるんだよ』
「それが何か？」
『昨日、ゼノヴィアがイリナも誘っていてな』
「はあ」
『上手く行けばイリナと二人で話すことが出来るかもしれないぞ？　……いい加減何が目的でお前を監視する様な真似をしていたのかはっきりさせとくべきだ』
やはりと言うべきか、アザゼルもまたイリナがシンを見ていたことに気付いていた。
「やっぱり気付いてましたか」
『当たり前だっつーの。というかオカルト研究部員の何人かも気付いていたと思うぞ？』
シンもそれを否定しなかった。イリナの行動を不審に思ったかもしれないが、悪意や

敵意というものが感じられなかったので様子見の姿勢だったのかもしれない。実際、シンもそうであった。

『突けば簡単に喋るかもしれないぞ。何せ天使ってのは総じて真面目で腹芸が下手だからなぁ』

「アザゼル先生も、昔はそうだったんですか？」

『ふっ。俺は昔から捻くれ者だ』

シンの茶化す様な問いに、アザゼルは小さく笑う。

『――ほれ。何時までも俺と話してないで支度しろ。向こう天使の生真面目さを舐めんなよ。約束の時間一時間前に着くやつも居るぐらいだ』

「分かりました。いい機会なので聞いてみます」

電話を切ると、五分も掛からずに仕度を済ませる。ピクシーたちはまだ眠っているが寝かせておくことにした。何処に居ても連絡は取れる。

自宅から出ると早朝の空気が肌を撫でる。冷えた空気の感触は心地良く、夏の終わりと秋の始まりを感じさせる。

人気の無い道を一人黙々と進んで行くシン。当たり前だが駒王学園に辿り着くまで殆ど人と会うことは無かった。

駒王学園の校門が見えてくる。そのとき、シンは自分以外の足音を捉える。

「……あ」
足音の主がシンの姿を見て、小さな声を漏らすと共に立ち止まった。声の主――イリナがシンに驚いた表情を向けている。
「おはよう。紫藤」
「お、おはよう！　……間薙君」
挨拶を交わすが、その後は沈黙が続く。
「あ、あのどうしてこんな時間に……？」
「早朝特訓をすると聞いたから」
「……貴方も誘われたの？」
「いや」
「じゃあ、何で？」
「歩きながら話そう」
シンは止めていた足を進める。イリナも慌ててそれを追い掛ける。
「何の用があってイッセー君たちの朝練に来たの？」
隣に並んだイリナが尤もな疑問を発する。
「用があるのはそっちじゃないのか？」
イリナが息を呑むのが分かった。

「自己紹介をしたときに聞かされた任務は、あれで本当に全部なのか？」
　自分の中の疑惑をイリナにぶつける。すると、イリナは長々と溜息を吐いた。焦りの反応は無く、何処か嘆いている様に見える。
「ばれちゃったか……」
「一体何が目的で俺を見ていたんだ？」
「ごめんなさい！　本当にごめんなさい！　誤解させたなら謝るわ！　ミカエル様も私も貴方に危害を与えるつもりは全く無いの！　本当よ！」
　関係がこじれてしまうのを恐れ、イリナは必死な様子で謝罪をする。
　シンは、イリナに対して疑惑はあったが、怒りを覚えてはいないのであっさりとそれを受け入れる。
「別に怒っていない」
「本当？」
「ああ」
　揉めてもおかしくはなかったことが、簡単に終わってしまったことに若干拍子抜けしているイリナ。
　シンは再び問う。
「それで？　何が目的で俺を見ていたんだ？」

「……ミカエル様が私に言ったの。貴方から目を離さない様にって」
「理由は？」
　察していたが、敢えて聞く。
「貴方って……『魔人』なんでしょ？」
「……」
　首を縦にも横にも振ることは無かったが、その無言がイリナには肯定に見えた。
「――目を離さない様にというのは、天界は危険視しているということか？」
「危険視というより、心配しているの」
「心配？」
　脅威として排除の対象とするなら分かるが、心配し身を案じることには違和感しか覚えない。
「ミカエル様は仰っていたわ。十番目の魔人が生まれたということは、いつか必ず魔人たちによる大きな戦いが起きるって。そのとき、戦いの中心にいるのは恐らく十番目の魔人である彼だ、と」
　魔人と魔人は敵対関係にある。実際、シンもマタドールと死闘を繰り広げた。決着は付かなかったが、いずれは再戦するときがくるだろう。そのときは、イリナの言った様に一対一ではなく、残りの魔人たちが参戦してくる可能性が大いにある。そうなった場

合、どれほどの大きな戦いとなるのだろうか。
「貴方は魔人でも、他の魔人たちと違って人として生きているわ。でも、これ以上魔人たちと関わっていたら、いつかは取り返しのつかないことになるかも……」
「成程」
　自分のことだが、返答するシンの声は他人事の様に素っ気ない。覚悟からくるものなのか、それとも途方も無いことに実感が湧かないのか。
「――聞いておいて今更だが、そのことを話して良かったのか？」
「ミカエル様は、貴方かアザゼル様が聞いてきたら全て話して構わない、と」
　ばれる事までミカエルには想定済みだったらしい。アザゼルにも事情を説明して構わないと言ったのは、アザゼルならば全て把握していると考えてのことであろう。
「間薙君は……」
　イリナは視線を伏せる。今から聞くことは、とても相手の顔を見て聞けない。
「もし、他の魔人と会ったらどうするつもりなの？」
「――どうするも無い」
　場に漂う空気が、早朝の涼しさ以上の冷たさを帯びる。全身に駆け巡る寒気。イリナには覚えがあった。
「そのときは……殺し合うだけだ」

伏せた目を上げ、隣に並ぶシンの顔を見ることが出来ない。だいぞうじょうに会ったときの様に、トランペッターを見たときの様に、魂を凍て付かせる死の気配が場を侵食する。

殺し合う。そう言ったとき、シンがどんな表情をしているのか、イリナには分からない。

人の顔か。あるいは――

◇

「バルパー。フリードは何処だ」

「……部屋に入って来るときはノックの一つぐらいしろ」

許可なく入室してきた相手に、バルパーは不快の念を飛ばすが、相手は全く意としない。内に量り切れ無い狂気を持っていても所詮は老人の殺気。その相手には無に等しい。

相手の態度に舌打ちの一つでも聞かせてやりたいところだが、同じく全く意を介さないのは分かっていたので、苛立ちを溜息にした後、来室の理由を問う。

「何をしに来た?」

「仕事だ。フリードも連れていく」
「ふん。旧魔王派の連中か。この間のことで凝りてもいないらしい」
「旧かろうと新しかろうと、所詮悪魔は悪魔だ。奴らの頭の中には、何も詰まってもいない。だから学ばない」
悪魔を心底見下しながら嘲笑する。
「その馬鹿共の駒の一つとして扱われるお前も滑稽だな」
バルパーが嫌味を返した瞬間、その喉元に光で出来た槍が突き付けられた。
「言葉を選べ。でないと無意味に死ぬことになるぞ？」
「やれるものならやれ。そして、私に悪魔並みの浅慮さを見せてみろ」
無言で睨み合っていたが、やがて舌打ちの後に光の槍は消える。
「――旧魔王派の奴らは、今度は何処で仕掛けるつもりだ？」
「冥界。内通者が居るらしい。旧四大魔王も二人出て、今度こそ今の魔王たちを屠るつもりだ」
「ふっ」
その一笑には色々な意味が込められていた。多過ぎて把握し切れ無いが、少なくとも肯定の意は無い。
「フリードを連れていくなら待て。今は術後の経過を見ている。安定するまで少し掛か

る」
「術後？　何かを仕込んだか。――お前にとってはフリードも実験動物（モルモット）か」
「良いを頭に付けろ。生命力の強い実験動物は希少だ」
「確かに。奴の人としての矮小さと生き汚さは虫（ゴキブリ）けら並みだ」
それだけ言うとバルパーに背を向ける。
「お前の言う通り待つが、時間を過ぎる様ならどんな手段を使っても――」
そこまで言い掛け、急に顔を押さえて呻き始める。その突然の行動にバルパーは驚くことなく、椅子から嘲る様に見下ろす。
「まだ痛むか？　顔の幻覚痛が？」
「だま、れっ！」
かつて負わされた傷。完治した筈なのに、時折発作の様に痛みを発する。薬も術も効かずただ耐えるしかない。
そして、最悪なことにどういう訳か最近その痛みの頻度が増えてきている。
「そんな様子で大丈夫か？　なあ？　ドーナシークよ」
かつてシンと戦い、惨敗を喫した堕天使ドーナシーク。その身に刻まれた傷は、癒されるときをひたすら待ち続けていた。

上面、食事

『……』

埃のニオイが漂う体育倉庫内で、五人の男女が沈黙したまま向き合っていた。

一人はシン。目の前で並ぶ三人に呆れを混ぜた冷たい視線を送っている。

一人は一誠。目の前から突き刺されるシンの視線に耐え切れず、冷や汗を流しながら俯いている。

その隣にいるアーシアは耳まで真っ赤に染め、体を縮込ませていた。

アーシアと一誠の間に挟まれているゼノヴィアは、威風堂々としており、臆することなくシンの視線を受け止めている。

そして、最後の一人であるイリナはオロオロとした様子でシンと一誠たちを交互に見ている。

「……別に」

沈黙をシンが破る。

「行為そのものを咎めるつもりは無い。だがな、俺も立場というものがある。立場上こんなことを言うのは間違っているかもしれないが、場所を選べ」

あくまで諭す様な口調。
それを聞き、ゼノヴィアは『ふむ』と言いながら顎に手を当て、考える仕草を見せた後、ある答えに至る。
「――つまり、『乳繰り合う』ならここよりも場所が整っている保健室の方が」
「黙れ。馬鹿」
真顔で出された結論を、シンは短い言葉で一蹴する。
何故この様な状況になっているのか。事の発端はゼノヴィアにある。
シンとイリナが一誠たちの早朝特訓に合流し、暫く特訓風景を眺めていた。やがて、一誠たちの特訓は終わり、一誠たちは練習に使用していた道具を体育倉庫に片づけに行った。
そこまでは良かったのだが、中々戻ってこない三人に対しシンは不審に思い始め、そのとき唐突に夏のプールの一件を思い出した。
まさか、と思い体育倉庫の中に入ると案の定と言うべきか、上半分を剥いたアーシアとゼノヴィア、そして露わになった二人の胸に触れる一誠の姿があり、そこから冒頭に至る。
シンはオカルト研究部員ではあるが、同時に生徒会のメンバーでもある。役職には就いてないが、ソーナからは生徒会としてある程度の権限を保証されていた。そして、生

徒会には学園の風紀を取り締まるという仕事もある。顔見知りということで見逃しても良かったが、今後シン以外に見つかる可能性も考慮し、釘を刺しておくことにした。
「――アーシア」
「は、はい！」
　名を呼ばれてびくりとしながら返事をし、そのままシンを見るが、途端に赤面して顔を伏せてしまう。体育倉庫に入ったとき、アーシアはシンに下着も何も着けていない上半身裸を見られていた。一誠相手ならある程度の羞恥も我慢出来るが、他の男性なら話は別である。今のアーシアはまともにシンの顔を見られなかった。
「するなとは言わない。だが、さっきも言った様に場所は選んでくれ。――でないと見せたい相手以外に見せることになるぞ？」
「はい……」
　消え入りそうな声で返事がくる。
「アーシアを責めないでくれ。一緒にと誘ったのは私だ」
「――いい加減、突発的に暴走するのは止めろ。ゼノヴィア」
　アーシアを庇うゼノヴィアに、シンから苦言が呈せられる。
「至って真面目に考えて行ったつもりなのだが？」
「真面目に考えた挙句に正反対なことをしてどうする」

本人が至って真剣な為、シンとしても諭しようが無い。時間を掛けてあーだこーだ言っていくしか解決方法が無いのではと思えてくる。
「あんまり露骨過ぎるとそのうち見つかって最悪停学を受けるぞ？　――それとも続きは停学中に家でするのか？」
「そうか。――その手があったか！」
「あってたまるか」
ゼノヴィアに斜め上の解答を間髪入れずに否定する。基本的には真面目なのだが、ふとした拍子にとんでない思考に至るのがゼノヴィアの悪癖と呼べた。その度に指摘すれば良いが、指摘せずに済む日が来るのは何時になるのだろうか。
「――イッセー」
名を呼ばれ、気まずそうに俯いていた顔を上げる。
「流され野郎」
何時か言った台詞を、若干棘を含ませた形でもう一度言う。
あれこれと諭されるのではなく、直球過ぎるその言葉が一誠の心に突き刺さった。実際、その通りなので反論一つ出来ない。
「……仰る通りで」
今の一誠に出来ることがあれば、甘んじてその呼び名を受け入れることである。

「偶にはお前も言ってやったらどうなんだ？　――ドライグ？」
一誠の中に宿る龍にも忠告する様に言う。
『……相棒がすることに俺はとやかく口を挟むつもりはない』
一誠の左手の甲が光り、そこからドライグの声が発せられる。ドライグ自身は、一誠に過干渉するつもりは無いと明言する。
「そういう風だから好き勝手使われるんだろうが。……性欲願望具」
ドライグの尊厳を一撃で粉砕する言葉。それを聞かされた瞬間、一誠の左手が跳ね上がった。
「お、おい！　落ち着け！　落ち着けドライグ！」
『うおおおおおお！　相棒ぉぉ！　一発でいい！　一発でいいからそいつを殴らせてくれぇぇぇ！』
暴れ狂う左手を必死に押さえ込む一誠。左手からは慟哭の様なドライグの叫び。
狭い体育倉庫内が騒然としたものとなる。
鼻先で一誠がパントマイムの様に左手と右手を戦わせている状況下で、相変わらず涼しげな表情のシン。
そんなシンの横顔を見ているイリナは分からなくなってしまう。友人たちのやりとりを呆れながらも見捨てずに付き合う彼。身内の様に諭す彼。そして、冷たく、恐ろし

い死の気配を放つ彼。

一体どれが本当の彼なのだろうか。

監視の件も、聞くだけ聞いただけで怒ることも追及することもしなかった。堪らず、イリナの方から何か言うことは無いのかと聞いてしまったが、返ってきた答えは『無い』。それどころか、これからも使命に沿って動けばいいと監察対象直々の承諾までされてしまった。

何を考えているのか。感情の色が薄いシンの表情を見ても、イリナには何一つ読み取れるものは無かった。

◇

その日の放課後、いつものメンバーがオカルト研究部に集まる。シンもその中に居り、隣にはピクシーたちも居る。

朝、置いてかれたことに対しピクシーたちはそれを非常に不満に思い、ずっと不機嫌であったが、シンが何かを奢ると言うと途端手の平を返してすぐに上機嫌となった。言った後に察したが、不機嫌な態度は、全てシンのその一言を引き出す為の演技であった。少しでも隙を見せると味方でも容赦無くそれを突いてくる仲魔たちの強かさに、頼

もしさすら感じる。
「……そういえば」
小猫がシンに話し掛ける。彼女の側にはパスカルが横になっている状態で小猫に撫でられ、それをされるがままでいた。戦いとなると苛烈に戦うが、普段の彼は非常にマイペース且つ大人しい。
「……この子は普段は何を食べているんですか？」
「基本雑食だ」
言葉通り、食べられる物なら何でも食べる。姿から肉食をイメージさせるが、野菜も食べる。昨晩、キャベツを一玉与えた所、一口で噛み砕いて飲み下してしまった。
だからといって肉食を好まないという訳でも無い。塀の上を歩く野良猫を見て、表情が少ない彼が、明らかに獲物を見る目をしながら口角を吊り上げているのをシンは見ていた。その気になれば、周囲一帯から野良猫どころかペットまで消えるだろう。
（食事代をどうするべきか……）
小猫の言葉で、最近頭を悩ましている問題が思い浮かんできた。ピクシーやジャックフロストは小柄の為特に問題は無く、ジャックランタンにとっては食事など娯楽程度にしか思っていないので殆ど必要ない。ただ、ケルベロスは見た目以上に食べる。
一応はシンを気付かってか食事量を抑えているみたいだが、それでも結構な量であ

る。シンとしても人間界に連れてきた責任としてケルベロスを飢えさせるのも忍びない。しかし、満足させる量を与えるとなると、シンの家の財政は破綻する。
いくら強くなっても金の壁を破ることが出来ないという事実に、世知辛いものを感じた。
（はぐれ悪魔たちを倒せば金が出るシステムだったらな……）
などと都合の良いことを考えてしまう。そんなことなど在る筈も無いのに。
「……い？　先輩？　間薙先輩？」
「ん？」
「……アザゼル先生とリアス部長の準備が終わりましたよ」
パスカルを撫でていた小猫は既にソファーに座っており、アザゼルとリアスがいつの間にか巨大なスクリーンと映像媒体らしき機械を設置していた。
そのことに全く気付かなかった。考えにどれだけ没頭していたのかが分かる。
「これには、若手悪魔の試合が記録されているわ。勿論、私やソーナたちの試合もよ」
機械に触れながら、どんなものか説明をするリアス。
「お前たちの試合の後にも他の若手悪魔たちがレーティングゲームを行った。ライバルたちの試合をよく見ておけよ。そこから何か得られるものがあるかもしれないからな」
リアスの言葉を継いでアザゼルが補足説明する。

これからオカルト研究部一同で、若手悪魔たちの試合内容を視聴する。
何故この様なことをするのか。それは先日、リアスたちの次のレーティングゲームの対戦相手が決まったからである。
ディオドラ・アスタロト。今、リアス眷属内で渦中となっている人物が相手であった。
「まあ、入っている内容はアガレス家とアスタロト家のゲームだけだがな。そう長い内容じゃない」
アザゼルの説明に、一誠が疑問の声を上げる。
「バアル家とグラシャラボラス家のゲームはどうなってんですか？」
「中止になった。何でもゼファードルが寝込んじまったらしくてな。ゲームに参加出来る様な精神状態じゃないらしい」
シンは、脳裏にゼファードルのいざこざを思い出す。そうとう尾を引いているらしい。
「凶児なんて呼ばれて忌み嫌われていたゼファードルが、心折られるなんてよっぽどショックなことがあったのかもな。なあ？」
皆に聞いている様であったが、シンには自分に問いている様な気がした。アザゼルのことなので、もしかしたら全て把握している可能性がある。
「――俺としては少し残念だ。若手悪魔の序列一位のサイラオーグ・バアルの実力を見

たかったからな。リアス、お前も少しでも情報が欲しかっただろ？」
「ええ、そうね。サイラオーグは怪物とまで呼ばれる実力を秘めているわ。レーティングゲームに本格参戦すれば、上位を狙える実力者だと周りも言っている」
真剣な表情で語るリアス。それだけでどれほどの実力者か伝わってくる。
「……もしかして、ライザーよりも強いんですか？」
リアスは少し考えた後――
「……そうね。贔屓目に見て私はサイラオーグの方が強い――」
「――それはどうでしょう」
――サイラオーグの方に分があると言おうとしたが、途中で異を唱えられる。
口を挟んだのはシンであった。
「今ならいい勝負をするかもしれません」
一同最初は何を言っているのか分からずにポカンとしてしまう。
やがて言っていることを理解し、もう一度驚く。まさか、シンの口からライザーの肩を持つ発言が出ることなど、誰も微塵も思っていなかった。
「――あくまで、もしかしたらですが」
照れ隠しの様に言葉を濁す。
「……パーティーのときも思っていたけど、貴方っていつの間にライザーと仲良くなっ

たの？」
「別に仲が良い訳じゃないです」
　そこだけは即答で否定する。
「――まあ、いいわ。確かに貴方の言う通り、ライザーの不死性とサイラオーグの力が競り合ったときの答えはやっぱり実際に見てみないとね」
　自分の答えを一旦保留し、シンの考えを汲んでか答えを曖昧なものとした。
「サイラオーグさんってどんな戦い方をするんですか？　やっぱりリアス部長の従兄弟ですし、滅びの力を？」
　一誠の質問に、リアスは僅かに表情を曇らせる。
「……確かに滅びの力はバアル家の特色よ。お母様が授かった力は、私やお兄様にも受け継がれたわ。でも……」
「同じ血だからといって才能、素質、特色ってのが必ずしも受け継がれる訳じゃない。サイラオーグはな、純血悪魔の中でもそういったものを何一つ得られなかったのさ」
　若手最強の悪魔が全くの無能ということに、一誠を含む他のオカルト研究部のメンバーは衝撃を受ける。
「じゃ、じゃあどうやって若手最強に？」
「体一つしかないんだ。そりゃあ、立ちはだかる奴を殴って蹴って倒してきたのさ。ま

あ、純血悪魔はあまりしないが、そこに至るまでに鍛えて鍛えて鍛え抜くしかねぇよ。負けたら鍛えて、勝っても鍛えて、どれだけ血を流しても、どれだけ汗を流しても、どれだけ泥に塗れても、ただそれだけを愚直に続けただけだ」

徒手空拳だけで最強の座を掴んだことに、一誠たちは戦慄する。

シンもまたサイラオーグと会ったとき、握手を交わしたことを思い出していた。血が滲むなどという言葉が霞む程の修練の果てに得た拳。触れただけで『強い』と感じる訳である。あの拳には言葉以上の説得力があった。

「一度彼が修行している所を見た事があるけど――色々な意味で震えるわよ?」

ここまでの力を持っているのかという恐れ。ここまで至ることが出来るのかという羨望。あの姿は見た者の心を揺さぶる、とリアスは最後に付け加える。

「――と、ここまでお前たちをびびらせたところで悪いが、ディオドラとの戦いが終わったらサイラオーグと戦うことになるぞ。ゼファードルがいつ復帰するか未定だからな」

爆弾発言が静まり返っている部室にいきなり投下される。リアスも初耳らしく目を見開いていたが、すぐに気を取り直して一人黙考し始めた。対サイラオーグの為にどれだけの準備が必要か瞬時に計算する。

「こんなタイミングで言ったのは悪かったが、あんまり先のことばかり考えていると足元を掬われるぞ?」

沈黙するリアスにアザゼルが話し掛けると、ハッとした様に顔を上げ、気持ちを切り替える様に深呼吸をする。

「――そうね。まずは目先の試合に集中しましょう。アスタロトの試合内容を研究、分析するのが今回一番の目的よ。気を引き締めて見ましょう。何せ、アスタロトはアガレスを破ったのだから」

周囲の評価では、アガレスの方がアスタロトよりも実力が上であると思われていた。しかし、結果は予想に反してアスタロトの勝利。若手悪魔のレーティングゲームで唯一下馬評を覆している。

「まさか、アガレスが負けるなんてね……」

今でも信じられないといった態度で映像を再生する。

レーティングゲームの内容は、説明すると至ってシンプルなものであった。

長髪の眼鏡を掛けた女性、シーグヴァイラ・アガレスが眷属たちを引き連れて進軍し、柔和な笑みを常に浮かべ続ける優男、ディオドラ・アスタロトの眷属たちを次々に撃破していく。

しかし、最後はディオドラ単騎でシーグヴァイラを含む眷属たちを返り討ちにして勝利を掴んだ。

結果を見ればディオドラの一人舞台であった。シーグヴァイラたちもディオドラの

眷属たちも、彼の活躍を彩らせる為の添え物に成り下がっていた。
（随分、圧倒的だな）
いくら評価に誤差があるとはいえ、殆どディオドラ一人でシーグヴァイラたちを撃破している。実力を隠していたと言われればそれまでだが、シンはディオドラの力に直感的に違和感を覚えていた。他のメンバーも同じ様に、ディオドラの実力に驚きよりも先に怪訝を感じている。
そのとき、床に伏せていたパスカルが顔を上げ、唸り始める。鋭い視線が部室のある点について向けられていた。
「どうしたの？」
「ダレカクル」
パスカルのその言葉に、部室内のメンバーは一瞬にして警戒態勢となる。
その直後に、転送魔法陣が床に浮かび上がる。描かれた紋様には誰もが見覚えがあった。つい先程までスクリーンに映し出されていた紋様である。
「――アスタロト」
朱乃の洩らした言葉に応じる様に、魔法陣から一人の人物が現れる。
見ていた映像と寸分変わらない笑みを浮かべる優男――ディオドラ・アスタロト。
「皆さん、出迎えありがとうございます。久し振りにアーシアに会いに来ました」

警戒態勢の皆を見てもその笑みを崩すことは無い。一誠などディオドラが現れたときからギリギリと歯を軋り、今にも飛び掛かりそうな程危険な敵意を向けているが、余裕に満ちた態度を崩さない。一誠など眼中に無い様子であった。
「何の用かしら？」
ディオドラに向けられるリアスの排他的な冷たい声。
「レーティングゲーム前に少しお話をしたいことが。――ああ、でも一番の目的は愛しのアーシアの顔を見に来たことですが」
そう言ってアーシアに微笑み掛けるが、アーシアの方は一瞬身震いした後に、一誠の背後に隠れてしまう。
客観的に見ても脈など一切無い反応であったが、ディオドラの方は傷付いた様子も無く、人見知りの幼子の反応でも見るかの様に微笑ましくそれを眺めていた。
「まあ、立ち話もなんだ。座れよ。ディオドラ・アスタロト」
アザゼルがソファーに座るよう促す。
「では、お言葉に甘えて」
ディオドラがソファーに座ろうとすると、木場と朱乃、小猫がソファーから立つ。それに反応し、少し遅れて一誠とアーシア、ゼノヴィア、ギャスパーもソファーから慌てて立った。

普段は家族同然の付き合いをしているリアスの眷属たちであるが、こういった上級悪魔同士の対話では分を弁えた行動を自然にとる。でなければ、リアスに恥をかかせることになるからだ。

そのまま部室の隅に移動し、置物の様に沈黙する。

「朱乃。お茶の用意を」

「はい」

リアスの指示に従い、お茶の準備をする朱乃。普段の動きと違い、温度を感じさせない機械的な動きであった。

数分後、朱乃が淹れたお茶がディオドラの前に置かれる。この数分間、部室内には一切会話は発生しなかった。

ディオドラは置かれたお茶を一口飲む。

「美味しい。流石、リアスさんの『女王』。結構な御点前で」

「ありがとうございます」

朱乃は笑顔で応じるが、目は笑っていない。親しい者ならそれが上辺だけのものだと分かる。

「レーティングゲーム見させてもらったぜ。アガレスに勝つなんて大したもんじゃねえか」

「紙一重の差でしたよ。やはりアガレスは強かったです」
謙遜するディオドラだが、何処か言葉に嘘を感じさせる。アザゼルもそれを感じとったのか目付きが変わる。
「本当に大したもんだったぜ？　特に終盤は、な。あんだけの力を持っているなんて予想外だった。能ある鷹は爪を隠すってやつか？」
褒めるというよりも探っているという印象を受けるアザゼルの言葉。
「日々の研鑽のお陰ですよ」
笑顔で言い切ってみせる。
「――そうかい」
これ以上探っても何も出てこないと察し、この話がこれ以上続くことは無かった。
「それでお話のことなのですが――その前に」
ディオドラの視線が手元のお茶から別の対象に向けられる。
「彼は？」
ディオドラの視線の先で、シンは朱乃が置いたお茶を静かに飲んでいた。
一方、仲魔たちはというと、ディオドラのことを警戒しているのかソファーから離れ、我関せずを貫いているパスカルの体の陰に隠れて、コッソリとこちらを眺めている。
「……確か彼は、リアスさんとソーナさんとのレーティングゲームにも居ましたね。

てっきりソーナさんの眷属だと思っていましたが？」
「彼は、ソーナの眷属でも無いし、私の眷属でも無いわ」
「眷属では無い？　なら転生悪魔でも無いのですか？　人間ならこの場に相応しくないと思いますが？」
顔は笑顔のままだが、声に明らかに侮蔑が込められていた。シンというよりも人間という存在を見下している。
（隠すつもりは無い、という訳か）
差別感情を露骨に見せるディオドラ。悪魔とて十人十色。自分たちの種以外を蔑む者たちも必ず居る。いちいち分かりきっていることに腹を立てるのも馬鹿馬鹿しいので、ディオドラの言葉に全く反応することなく、シンはお茶を飲み続けていた。
自分の言葉に一切意を介さない姿を不快に思ったのか、更に何を言おうとディオドラが口を開く。
「君は――」
しかし、それを制する様にリアスが口を挟んだ。
「彼は、私とソーナ共通の大切な友人よ。――私の友人に対して言葉は慎重に選んでね？」
言葉次第ではグレモリー家とシトリー家を、敵に回すかもしれないという脅しを暗に

言う。
　ディオドラは、その細めた目から一瞬眼光を飛ばす。が、すぐにそれも笑顔で覆い隠されてしまった。
「つまらないことに時間を取られるのはここまでにしておきますよ。今、リアスさんの気分を害するのは損ですし」
　ふざける様に両手を軽く上げ、降参といったポーズをとる。その言動自体が、リアスの気分を著しく害するが、ディオドラは分かっているのか分かっていないのか構わず本題に入る。
「単刀直入に言います。リアスさん。貴女の『僧侶』、アーシアさんと僕の眷族をトレードしませんか？」
　途端、部屋の片隅で怒気が膨れ上がるのをシンは感じた。怒気を放つのは、当然一誠である。目を動かし少し見てみると、噛み付きそうな形相から今にも噛み殺しそうな形相へ変わっていた。尤も度合いは違うが、木場は無表情だがその眼は鋭く輝き、ゼノヴィアもまた眉根を寄せており、他のメンバーたちもディオドラの発言に嫌悪感を覚えているのが分かる。
「そんなことだろうと思ったわ」
　ディオドラは一冊の本を虚空から出現させ、中身をパラパラとめくり始める。

「それでこちらが用意出来るのは――」
「話を進めているところ悪いけど、私はトレードに応じるとは一言も言っていないわ」
　ページをめくる手が止まった。
「貴方の眷属と釣り合いがとれないというつもりは無いわ。最初からトレードをする気が無いだけ。彼女は私の大事な眷属よ」
「大事な、ですか？　それは彼女の能力が？　それとも彼女自身が？」
「全て合わせてアーシアの魅力よ。それに、自分の眷属だもの。最後の最後まで面倒を見るのは当たり前じゃなくて？」
「立派な考えだとは思いますよ。でも、今のままでは彼女は下級悪魔のままだ。僕のプロポーズさえ受け取ってくれれば、すぐに上級悪魔の仲間に入れる」
「そういう地位も大事だけど、妹同然のアーシアにはきちんと納得した形で幸せになってほしいわ。――正直に言うと貴方の所には安心して送り出せない」
　手に持っていた本を放り棄てる様にテーブルの上に置く。
「僕では彼女を幸せに出来ないと？」
「少なくとも、トレードで手に入れようとしている貴方には不信感を覚えるわ。求婚とはそういうものじゃないでしょう？」
「大事な女性を自分の側に居させたいというのは当然の考えでは？　僕にとっては僕の

手に届く範囲が彼女にとって最も安全な場所だと思っているので」
　ディオドラの言葉に、リアスから静かな怒りが零れ出す。
「私が彼女を守れないと？　貴方よりも弱いと思っているのかしら？」
「弱いなどとは思っていませんよ。――でも、リアスさんに負けるとも思っていません」
「余計な心配よ」
「かもしれませんね。――いざとなれば、リアスさんはサーゼクス様のお力を借りればいいですし」
　さも、リアスがサーゼクス頼りだと言わんばかりの台詞。実の兄を敬愛している為に、兄に負担を掛ける様なことを嫌うリアスにとっては、最上級の挑発である。
「……言葉は慎重に選ぶべきだとさっき忠告した筈よ？」
「ええ。周知のことを言ったつもりです」
　場の空気が重苦しいものと化す。リアスは能面の様な表情で、ディオドラは相変わらずの笑顔のまま、部室内を瞬時に満たす程の魔力を放っている。
　一触即発の状態。二人のうち、どちらかがあと一言でも発したら、すぐさまそれを火種として爆発するだろう。
　が、その極限まで張り詰めた空気もあることで一変する。
「こんにちは――！　ちょっと用が……あって？」

勢い良くドアを開け、快活な挨拶をしながら入って来たイリナであったが、オカルト研究部内の異常な空気に触れ、最後の言葉は小声となっていた。
前触れも無く現れたイリナに、部室内の誰もが目を丸くした状態でイリナの方を見ている。
「――お取り込み中だったかしら？」
見知らぬ人物が居ることと、一誠たちが揃って壁際に並んでいるのを見て、イリナなりに状況を把握する。
「ごめんなさい！　どうぞ、どうぞ、続けて」
そう促すイリナであったが、先程までの空気は見事なまでにぶち壊されている。改めてさっきまでのやりとりをしても滑稽なだけと判断したリアスとディオドラは、この話題を終わらすことに決めた。
「――兎に角、貴方のトレードには応じないわ」
「――分かりました。今日はこれで帰ります」
ディオドラは、ソファーから立ち上がるとアーシアへ微笑む。
「僕たちを妨げる障害は多いけど、決して僕は諦めない。乗り越えてみせるさ。アーシア、愛している」
アーシアに向けて愛の言葉。それを聞いた女性陣は、一斉に身震いをした。情熱的な

台詞とは裏腹にその言葉に強烈な嫌悪感を覚えている様子。事情を全く知らない筈のイリナも鳥肌を立たせ、何故か男のギャスパーも体を震えさせていた。

顔を蒼褪めさせるアーシアに尚も笑みを送り続けるディオドラ。それを阻む様に、一誠がディオドラの前に出る。

「どいてくれないかな？　僕とアーシアの前から」

「い・や・だ・ね！」

「あまり調子に乗らない方が良いと思うよ？　所詮、君はドラゴンありきの下級悪魔君なんだから？　――まあ、中に入っているドラゴンも血に飢えた粗暴で薄汚いドラゴンだけどね」

笑顔のまま一誠たちを罵倒する。

「このっ！」

更に一歩前に出ようとする一誠。だが、その動きは急に停まった。誰かが腕を引っ張っている。一誠が首だけ後ろに向けると、アーシアが一誠の腕を引っ張っていた。

「アーシア？」

何故と聞く前に、今度はアーシアが一誠の前に出て、ディオドラと真っ向から向き合う。

「イッセーさんもドライグさんも、貴方よりも綺麗でずっと強いです！」

普段は控え目な態度のアーシアが、この時ばかりは強い意思を以ってディオドラの言葉を強く否定する。
「へえ？　僕よりも？」
「そうです！」
「それは聞き捨てならないね」
笑顔はそのまま。しかし、その眼だけは妖しい輝きを放つ。
「じゃあ、こうしよう。次のレーティングゲームで直々に兵藤一誠を倒す。そうしたら、僕のプロポーズを受けてくれるね？」
「分かりました」
「アーシア！　貴女――」
躊躇うことなく了承するアーシアに、思わずリアスは声を出してしまう。だが、続く言葉は、リアスに向け手を突き出す一誠によって制された。
「俺が、お前に負けるわけねぇだろ」
一誠もまた言い切る。
首尾よく望んだ通りの展開となったディオドラ。その顔には満面の笑み――は無く、迷い無く自分を倒すといった揺るぎない一誠の姿が癪に障ったのか、僅かな不快感を浮かべている。

「驕らないことだね、赤龍帝。次のゲームで完膚なきまでに倒してあげるよ」
「お前が見下した俺たちの力を存分に見せてやるさっ！」
一誠の言葉を鼻で笑いながら、ディオドラは足元に魔法陣を出現させ、光に包まれて帰っていった。
ディオドラが帰った後、リアスが溜息を吐く。
「貴方たちねぇ……」
「す、すみません！　部長さん！　つ、つい我慢出来なくて……。イッセーさんもごめんなさい！」
「いやいやいや！　謝る必要なんて無いって！　アーシアが言わなかったら俺が言ってたかもしれないんだから！　部長！　叱るなら俺を！」
「二人とも落ち着きなさい」
独断でアーシアの行く末を賭けたことに怒っているかと思われていたが、リアスの声は柔らかく、怒気を含んではいなかった。
「言ってしまったものはしょうがないわ……決まったからには絶対に勝つわよ！」
『はい！』
リアスの宣誓に眷属たちは声を揃えて上げる。
そんな中で、話についていけず置いていかれている者が一人。

「えーと……もしかして私、変なタイミングで来ちゃった？」
「ある意味では最高のタイミングだったぞ」
アザゼルがフォローを入れる。一触即発の空気を一瞬で萎えさせたのは、アザゼルにしてみれば大したものと言えた。
「そ、そうですか？」
褒められたことがいまいちしっくりとこないのか、複雑そうな表情をする。
周囲が騒がしくなっていく中、一人ソファーに座り続けているシン。傍から見れば溶け込めずに孤立している様にしかみえない。とはいえ普段流されたり、巻き込まれることが多いシンにとっては、この孤立こそある種の自由と言えた。
そんな自由の中で、シンはまだ残っているお茶に手を伸ばそうとし、その手を途中で止める。シンの視線は、ティーカップから別の物に向けられていた。
テーブルに置かれた一冊の本。ディオドラがトレードの為に出した本である。イリナや一誠たちのこともあって回収し忘れていったらしい。
何気ない好奇心からその本に手に取り、開く。中にはディオドラの眷属である女性たちの写真や特技などといったデータ、あまり声に出せない様な情報まで詳細に書かれていた。
リアスが中身を見ずにディオドラの要求を突っ撥ねたのは正解だった。もしも見て

いたら、この本でディオドラの頬を張り倒していたかもしれない。個人情報やプライバシーという言葉が馬鹿らしく思える程の内容である。

「何それ？」

いきなり背後から現れたイリナが、シンの顔の側で話し掛けてくる。顔を動かせば頬が触れ合いそうな近距離だったので、シンは目線だけイリナに向け、本について軽く説明する。

案の定というべきか、ディオドラのしたことにイリナは憤慨した。

「何なのそれ！　アーシアさんの気持ちを何も考えていないの！」

「……本当に考えていないのかもな」

「え？」

考えれば考えるほど、ディオドラのやり方は露骨過ぎた。下手に出るつもりは一切無く、外堀を埋めるつもりもない。寧ろ軽んじている態度すら見せる。いくら何でもプライドが高いからという理由の許容を超えている。悪魔ですら治癒するアーシアの性格を考えれば悪手でしかない。

そう思うと、ディオドラがアーシアに向けた行動全てが薄ら寒く思えてきた。

前に、一誠にディオドラと直接会って見なければ良いも悪いも分からないと言ったが、今日会ったことで、一つの解答が出る。

「――きな臭い奴だ」
それが、シンがディオドラに抱いた印象であった。
「ところで何をしにここに来たんだ？　用はどうした？」
いつまでも隣にいるイリナに用事のことを聞く。
「大丈夫！　用があるのは貴方だから！」
「――何？」
嫌な予感がする。
「私、考えたの。正直、貴方って何を考えているのか全く分からない変な人だって」
人によっては傷付きそうな台詞である。
「でも、それは貴方のことを殆ど知らないからなのよ！　そう！　私たちには会話が足りないの！」
一方通行で話されているこの時点で会話など成立していない。
「このことを解決する方法はすぐに見つかったわ！」
「……それは何だ？」
「私の立ち上げるクラブ『紫藤イリナの愛の救済クラブ』に入って一緒に困っている人たちを助けましょう！　互いのことを理解出来て、人助けも出来て、まさに一石二鳥よ！」
色々と主張の激しい名前のクラブに勧誘され、眩暈がしそうになる。

「今入ってくれるなら貴方の名前もクラブに刻むわ！　そう『紫藤イリナと間薙シンの愛の救済クラブ』よ！」
「……何かの罰かそれは？」
　永久ものの恥である。
「ねえ？　ねえ？　どう？　どう？」
　爛々と目を輝かせて誘ってくる。
「――とりあえず考えておく」
　シンの選択は保留であった。が、後日あの時きちんと断っておけば良かったと後悔する時が来るのを、この時のシンはまだ知らない。
「うーん。いい案だと思うんだけどなー」
　快諾されなかったことに若干の不満を抱いているイリナだったが、断られなかったのでそれで良し、と妥協する。
「――ところで」
　イリナの目が再び本に向けられる。
「その本、少しだけ私に貸してくれない？」
「何か気になるのか？」
「うーん。何なんだろう」

イリナは眉間に皺を寄せ、何かを思い出そうとする仕草を見せる。
「この写真の人、どっかで見たことがあるのよね……」

◇

「すまない、間薙。もっと洒落た店を私が知っていたら」
「気にするな。肩肘を張ることが無くていい」
シンと由良は、隣り合って席に座っていた。
今日は、生徒会の手伝いをする日だが予想以上に仕事の量が多く、夜が更けるまで時間が掛ってしまった。帰宅しようとする際に、由良から声を掛けられ以前一緒に食事をすると約束したので、その約束通り今二人でとあるラーメン屋に来ている。雑誌でも度々紹介されている有名なラーメン屋らしい。
既に仲魔たちは家に帰しており、店内も時間が遅いので客が居らず、今は由良とシンの二人だけである。
注文は済ませており、店主が座っているカウンター席の奥で手際よく料理をする音だけが聞こえてくる。
「――静かだね」

「そうだな」
「君はよく外食をするのか？」
「偶に、だ。基本的には自炊だ」
「料理が出来るのか。それは凄いね」
「美味くも不味くも無い平凡な腕だ」
「出来ること自体大したものさ。私はあまり料理なんてしないからね」
あまり盛り上がっていない会話。原因があるとすれば淡々としているシンにある。しかし、由良は特に不満そうな表情をしていなかった。シンが不誠実な人間ではないということを知っているからである。
「ソーナ会長は料理をすると聞いたな。偶に菓子を差し入れするとか？」
その話題に触れた瞬間、由良の顔から血の気が引く。
「会長のお菓子は、その、うーん、何というか、あー、そのー、あのー」
その反応で腕前の方は察せた。これ以上この話題を広げても由良の為にはならないので、別の話に変えようとしたとき――
――シンは弾かれた様に店の入り口の方を見る。
「どうかしたのかい？」
由良が聞いてくるが、シンは答えずに入り口の扉を睨み続けている。

数秒後、入り口の扉が開く。
「いらっしゃい」
「二名だ」
「空いている席にどうぞ」
入り口から入って来たのは二人の男性。このときになって由良の顔付きが変わった。
男たちは、カウンター席に座るシンたちの姿に一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐにそれを笑みで消し、シンたちの隣の席に座る。
「奇遇だな」
「女っ気の無さそうな奴だと思っていたがちゃっかりデートかぃ。やるじゃなーい」
親し気に話し掛ける男たち。片方は白龍皇ヴァーリ。もう片方は、シンと交戦経験のある美候。
リアス、ソーナの縄張りとしているこの町に敵対関係にある者たちが平然とした様子で現れた。
「何をしに来た?」
低い声で威圧する。
「ちょっとした用事を済ませたついでに食事に。この店のラーメンをぜひ食べてみたいと思っていた」

ふざけているのかと思ったが、その眼の本気さから嘘では無いらしい。
「用事？」
「明日にでも兵藤一誠に聞いてくれ」
口振りからして既に一誠とは接触済みらしい。
「お前たちは――」
「まあ、待ちな」
由良が言いかけるが、それを美候が中断させる。
「話は食事中でも出来るって」
手に持ったメニュー表を指先で叩きながら、美候は朗らかな笑みを見せる。
「それはダメだ」
しかし、ヴァーリがそれを却下した。
「ラーメンを食べるときは雑念を捨て、舌に全ての意識を集中したい。いや、食べるんじゃない。これは会話だ。ラーメンと真剣に向き合う会話だ」
独自の熱弁を振るうヴァーリ。
『急に何を言い出すんだこの男は』という意を込めて視線を、シン、由良揃って美候に向ける。
「悪いねぃ。ヴァーリはラーメンにうるさくて。――ま、言いたいことも聞きたいこと

も食い終わってからにしようや」

かくしてとあるラーメン屋の一角にて、非常に重苦しい空気の食事が始まる。

食事、不穏

料理を注文し、それが出来上がるまでの間、シンたちの狭間で流れるのは沈黙であった。シンはもとより気安く喋るつもりは無く、由良はヴァーリたちを警戒している。ヴァーリの方は、さっきからメニュー表に視線を注いでいる。

故に、この沈黙を破ったのは美候であった。

「おいおい。何かの因果で折角会ったんだ、お喋りの一つでもしようぜぃ？　だんまりするのは好きじゃねぃ」

美候は、シンたちと戦ったときの様な中華風の鎧ではなく、若者が好みそうなラフな格好をしており、初対面の人間なら『軽そう』という第一印象を受ける。

「お前と話すことは無い」

一言で切り捨てるシン。美候に向け、刺す様な圧を飛ばす。場所が場所でなければ一戦交えていただろう。

しかし、美候の方は飛ばされる圧に冷や汗一つ流さず、柳の様に全て受け流す。孫悟空と同じ血統であること、白龍皇ヴァーリと共に行動していることは伊達では無い様子。

美候は懲りずに再度会話を試みる。
「何でもいいから話そうぜぃ、『人修羅』。お前と、お前の仲間とは派手に喧嘩した仲だ。次は平和的に会話と洒落込もうぜぃ。何か話の種の一つぐらいあるだろう？」
「……人修羅？」
シンが聞いたことの無い異名で呼ばれたことに由良が思わず呟く。どういう意味だとシン本人に尋ねようかと考えたが、シンから放たれる圧が増したことに気付き、気圧されて聞くことが出来なかった。
「――その名で呼ぶな」
名自体が不快な訳では無い。ただ、その名の意味を知ることによって巻き込まれなくてもいい危険に由良が巻き込まれることを危惧し、それ以上は言わないよう美候に警告を飛ばす。
「んん？　まあいいや。……そういやぁ、何て名前だったけ？」
「彼の名は、間薙シンだ」
シンが答えるより早くヴァーリが答える。相変わらずメニュー表に目を向けたままだが。
「ふーん。じゃあ、シン。何か俺っちたちに聞くことはあるかぃ？」
いきなり名前で呼ばれることに抵抗を覚えるが、訂正させるのも話の輪が広がりそう

だったので止めた。
　シンの目が料理を作っている店主を見る。たった一人とはいえ、一般人が居る所でこちら側のことを話す気にはなれない。目の前の調理に集中しているようだが、いつ何時耳に入るか分からない。
　すると、美候は声を押し殺し笑う。
「安心しろ。部外者に聞き耳を立てられ無いように、ちゃーんと結界を張っているぜぃ」
　シンの内心などとっくに察していた様子。シンは、カウンターの向こう側へ手を伸ばす。すると、手に蜘蛛の糸が絡みついた様な微かな感触を覚えた。美候の言ったことが正しければ、これが結界の感触なのだろう。しかし、結界を張ったというのに全くそんな素振りを感じなかった。あまりに速く行ったのか、それとも動きの中に自然と混ぜたのか。知識の無いシンには深く詮索することは無理である。
　本当ならばこのまま黙っているつもりだったが、一つ気になったことがあったので渋々尋ねる。
「……どうやってこの町に入って来た？」
　町には、リアスとソーナが仕掛けた術が張り巡らされており、外敵が入ってきたら察知出来る仕組みになっている。特に、堕天使の件やコカビエルの件もあって術の強化も施されている。悪魔、天使、堕天使、何かしらの異能を持つ人間が外部から侵入すれば、

即リアスとソーナが飛んでくる筈である。
「ああ。あの術のことか？　二重、三重と仕掛けられて中々嫌らしい組み方をしてたねぃ。並みの奴らだったなら解こうとした時点でアウトだ。――だけど、生憎俺っちは並じゃないんでねぇ」
　悪戯を成し遂げた様に歯を見せて笑う美候。
「ちょちょいと仙術を使えばあら不思議。誰にも気付かせることなく出入りが出来るんだぜぃ。何ならちょっとコツでも教えようかい？」
　悪意は無く、無邪気とも呼べる態度であったが、その態度に由良の神経は逆撫でされる。
「……それで我が物顔でこの町を歩いていたという訳か？　随分と舐めた真似をしてくれるな」
　口元が歪み、目付きに険？なものが混じる。整った顔立ちによるそれは、標的を見据える雌獅子を彷彿とさせる。
「おー……おたくの彼女、随分と怒っているみたいだけど？」
「彼女じゃない。怒るのは当たり前だ。会長――ソーナ・シトリーの『戦車』だ」
　由良にしてみれば、目の前で自分の主が虚仮にされているのも同然。それに怒りを見せるのも、眷属として至極当然のことである。

「あーあ。やっちまったかぃ」
美候にしてみれば軽口の延長であったが、知らずのうちに地雷を踏み抜いてしまっていた。
由良から怒気と戦意が立ち昇る。一方で、美候は由良の気を受けても昂ることはしなかったが、掛ってくればそれに応じた対応をする構えをしている。
一メートルも離れていない距離で、戦いの予兆が渦巻く。
シンはいつでも止める準備をしていたが、ヴァーリは一体何が彼の心を引き寄せるのかメニュー表に釘付けのままであった。
「はい。チャーシュー麺です」
シンと由良の前にチャーシュー麺が置かれた。スープで薄まった醤油の中に、黄色の真っ直ぐな麺。器の半分に厚めに切られたチャーシューが五枚並べられ、残りの空いたスペースにシナチクとネギが添えられている。
張り詰めていた空気が、全く気付いていない店主によって弛緩する。
「でもよ――」
美候が何かを言い掛けようとする。
「――美候」
このとき、ヴァーリの目がやっとメニュー表から離れ、美候に向けられる。

俺の目の前で、ラーメンを伸びさせるなどという愚行を犯さないよな？

静かな口調であったが、ヴァーリの両眼からは他者を屈服させ、捻じ伏せ、精神を焼き尽す様な眼光が放たれている。実際、向けられていない筈の由良は、その眼力によって浮き出させていた怒りを無理矢理押し込めさせられてしまっていた。

「へいへい。お前、本当ラーメンのこととなるとすぐにマジになるな」

肩を竦めただけでそれをあっさりと受け流す美候。流石の胆力と言える。

美候が口を閉ざしたのを見て、ヴァーリはまたメニュー表を見始めた。

シンは、固まっている由良の肩を軽く叩く。由良は体を一瞬震わせた後、シンを見る。その眼には屈辱の色が宿っていた。

「私は……」

眼力だけ、それも直接向けられていないというのに、ヴァーリとの力量差に怯んでしまったことが余程効いたのだろう。無理もないことである。

「冷めるぞ」

「あ、ああ……」

取り敢えずは目の前のラーメンを食べることを勧める。少しでも気を紛らわせてたいと考えて。

割り箸を手に取り、両手を揃える。

「いただきます」
「い、いただきます」
　それから二人は数十秒間、ひたすら無言で麺を啜っていた。ラーメンの味は良かったがそれを楽しむ余裕は無い。殆ど作業の様なもの。由良の方は、ヴァーリたちのことやさっきの失態を気にして、味など全く分からなかった。
　シンたちが食している最中に、ヴァーリたちが注文した品もカウンターに置かれる。
「はい。醤油ラーメン二つです。それと炒飯です」
「ありがとう。あと追加で塩ラーメンを頼む」
「ありがとさん。あ、俺っちも追加で餃子と唐揚げ。あと中華飯を頼むぜぃ」
「はい。分かりました」
　追加注文された品を作りに再びコンロの前に立つ主人。
「――いただきます」
　指先は真っ直ぐ天に伸び、後光すら放ちそうなほど厳かな雰囲気で挨拶をする。その所為の一つ一つがいちいち絵になる。
「いっただきまーす！」
　美候の方は対照的に軽い感じで済ますと、食欲に導かれるまま凄まじい勢いで食べ始めた。

麺を一気に半分ほど口の中に入れると、顎を極短い感覚で動かす。五秒も満たない時間で数十回は噛んでいた。

十数秒で麺と具を全て食べ尽くし、スープを飲み干す。完食するまで一分も掛かっていない。そして、そのまま炒飯をレンゲで掬うと麺と同じ様に大口で頬張り、噛み尽くし、飲み下す。美候が食べ終わるのとシンたちが食べ終わるのはほぼ同じタイミングであった。

一方でヴァーリの方はひたすら静かであった。麺を啜る音など全く立てず、一定の間隔でラーメンを食している。

ヴァーリがラーメンを食べ終えたのは、美候と同じくらいであったが、それなりの速さで食べていたというのに、ヴァーリが着ている白いワイシャツには染み一つ付いていなかった。

変な場面で底知れなさを見せつけられる。

ラーメンを食べ終えたヴァーリは懐からメモ帳を取り出し、そこに何かを書き始めた。

米粒一つ付いていない皿の上にレンゲを置き、中断された話を再開しようとする。シンたちも食べ終わっていたので、今度はヴァーリも注意しない。というより、書くことに集中している。

一体何を書いているのかとシンと由良が疑問に思うと、それを察して美候が答える。
「ああ、これ？　気にすんな。食ったラーメンの味を記録しているだけだぜぃ。何でも自作ラーメンレシピの参考にするとか。引くぐらい細かく書いてあんだぜぃ？」
内緒話でもする様に口に手を添える。
「――んで、どこまで話をしたっけ？　ああ、そうそう。結界を破るコツを教えようか、って話だったな」
「余計なお世話だ」
由良は吐き捨てるように言う。
「仮に教えてもらったとして、それを応用し術を強化したとしよう。だが、お前たちの侵入を防げなければ意味が無い。他人に教えられるようなコツだ。幾つもある手段のうちの一つに過ぎないのだろ？　それなら無意味だ。いや、敵に教えを乞う時点でこちらの恥だ」
一度は萎えかけた怒りを再燃させてまくし立てる。
「すっかり嫌われちゃったなぁ」
敵対心を露にする由良に、美候は困った様に頭を掻く。これ以上この話を続けても険悪な雰囲気が増すだけと思ったのか、美候は話し相手と話題を変える。
「そういや、風の噂で聞いたんだが、お前、冥界でタンニーンとやり合ったって本当？」

どこで仕入れたのか。突然振られた話題に、シンは返答を窮する。その反応が不味かった。常人には僅かな変化でも人を超えた彼らには答えているに等しい。
「マジかー。それってやっぱり本気のタンニーン？　それだったらすげぇ」
噂が真実という前提で話を進め出す。
一体どこから洩れたのかと思ったが、今思い出せばあれ程派手な戦いである。何処かで目撃者が居てもおかしくは無い。仮に情報が断片的なものだとしても、タンニーンが暴れている姿、それと同時に大火傷を負ったシンなどを繋ぎ合わせて、一つの仮説を生み出したとも考えられる。
「噂は噂だ」
「元龍王相手に生き残れるとはねぃ。まあ、当然ちゃあ当然か」
今更否定してみたが、美候はそれを信じる気が全く無く、シンの話を聞いていない。
「本当なのか？　今の話は？　もし、本当だとしたら、私は君が大変なときに」
「言っただろう。噂は噂にしか過ぎない」
あくまでタンニーンとの戦いを否定する。ここで肯定しても、シンと由良とタンニーン、誰にとっても得をすることなど無い。
「タンニーンと戦ったときに気付いたんだが、足に傷跡があった。最近出来たものに見えたなぁ。鱗が削れてその下の肉がはっきりと見えていたのをはっきり覚えている

ぜぃ。引っ掻いた様な五本の裂傷だった。――そういやお前、黒歌の結界を素手で裂いてたよなぁ？　こうやって」

美候が手を縦に振るジェスチャーを見せた。美候もまたタンニーンと戦っている最中であったが、あのときのシンたちの動きを見落としていなかった。

鋼に等しいドラゴンの鱗に傷を付けられる者など限られている。ましてや龍王に名を連ねていたドラゴンである。その頑強さは最上級。そこに空間を歪めて形成された結界を素手で引き裂いた人物が現れたのだ。結びつけるのは当然と言えた。

美候にとっては噂ではなく、最初から確信があっての話だったらしい。

シンは横目で美候を穿つ様に睨むが、美候はそれを楽しげに受け止めていた。

「気になるんだよぉ。俺っちはタンニーンと決着をつけられなかったからさぁ。そっちの勝敗はどうなっているのかがさぁ」

ヴァーリほどではないが、美候も戦いに熱と楽しみを見出す。タンニーンは美候の血を滾らせる強敵であった。そのタンニーンと戦った相手が目の前に居る。しかも、魔人という希少な存在。龍王と魔人の戦いの勝敗、気にならない訳が無い。

「同じ事を言わせるな。――噂は噂だ」

お前に話すことはなど何も無いと間接的に告げる。

それを聞き、美候は笑みのまま、その質を変える。人の警戒を解く様な笑みから、唇

から犬歯を覗かせる獣の様な獰猛さを含ませた笑みへ。
「そりゃあ、力尽くで聞き出せって解釈でもいいか？」
「好きな様にしろ。どうせ無理な話だ」
　途端、由良は息苦しいまでの重圧を感じる。呼吸することすら困難になり、この場から衝動的に逃げ去りたくなる。それを耐えることが出来たのは、ソーナの眷属としてのプライドと責任感、ただそれのみであった。
「はい。塩ラーメンと中華飯です。唐揚げと餃子はもう少しお待ちください」
　店主が注文の品を置いた途端、その重圧は嘘の様に消えてしまい、美候も獣の様な笑みを引っ込めて、喜々とした表情でレンゲを握る。
「いただきまーす！」
　人参、白菜、きくらげ、椎茸、タケノコといった野菜がふんだんに入った餡をご飯ごと口に運ぶ。熱々のそれを数秒間咀嚼した後、飲み込むとシンたちに話し掛ける。
「そっちも何か頼んだらどうだぃ？　俺っちたちだけ食べても何か味気ないんだよなぁー。折角、偶然この店で会ったんだ、奢るぜ？」
　敵対関係にある相手にわざわざ奢られる筋合は無い。
「すみません。麻婆豆腐と野菜炒めと青菜炒め、それとご飯の大を下さい」
　――などと言うつもりは全く無く、遠慮も容赦も無く追加注文する。

「え、じゃ、じゃあ私はエビチリと麻婆飯とかに玉に杏仁豆腐を」
シンが躊躇無く注文するのを見て、由良が少し遅れて追加する。
「……ちょっと頼み過ぎじゃない？」
「なら俺も追加で味噌ラーメンを頼む。大盛りで」
「おい！」
ヴァーリも追加で頼む。
「安心しろ。俺はちゃんと自腹で払う」
「……便乗して俺に全部奢らせるつもりだったら、俺っちたちの関係に罅が入っていたところだぜぃ」
美候はこっそりと財布の中身を確かめながら、少々の後悔を混ぜた言葉を洩らす。
いきなり大量注文をされた店主は、慌てて厨房へと向かっていった。
「――まあ、話を戻すけど。俺っちとしてはタンニーンとの戦いは結構印象が強いんだよ。龍王と初めて戦ったのもあるけど、今思い返せば赤龍帝が、赤龍帝が――ブフッ！」
当時のことを思い返していきなり美候は噴き出す。タンニーンとの戦いの中だったので戦闘に意識を向けていたが、戦いが終わり冷静になって振り返ってみれば、あのときの一誠の行動がシュール過ぎて、未だに美候の笑いのツボを刺激してくる。
「何を血迷ったかリアス・グレモリーの乳を突っついたんだよな？　その直後に禁手に

至ったんだから世の中分からないもんだぜぃ」
　言った後に我慢出来なくなったのか美候は声を上げて笑う。その豪快な笑いは店の窓を震わせる声量だったが、美候の術で店主は一切気付いていない。シンはその笑い声に微かに眉をひそめ、ヴァーリは淡々とラーメンを食し、由良は何故か唖然とした表情でシンの方を見ていた。
「……今の話は本当なのか？」
　美候の笑い声よりも一誠がリアスの胸を突いたことの方が衝撃的だったらしい。
　シンは無言で首を縦に振る。
「何をやっているんだ……」
　心底呆れたという声を洩らす。本人の知らぬ間に、由良から一誠への評価が少し下がった。
「いや、その後も面白くってな。赤龍帝の力と白龍皇の力を合わせて、俺っちの仲間の服を縮めて半裸状態に――」
『その話は止めろ』
　美候の喋りを遮ったのは、今まで沈黙を続けていたアルビオンの声。由良はいきなり知らぬ声が上がったことに驚く。
「いや、でもなぁ」

『本当に止めろ』

アルビオンにとって本気で避けたい話題だというのが分かる。女性を半裸状態で拘束する技に自分の力が使われているという事実が余程嫌なのであろう。ドライグも『洋服崩壊』や『乳語翻訳』に自分の力を使われたことで精神に多大な影響を受けていた。

（アルビオンもドライグと似たような状況になれば、同じ様になるのか？）

普段はそういうことに無関心なシンだが、このとき妙な好奇心が彼に囁いてくる。

「そういえばもう一つ小耳に挟んだ噂があるんだが。何でも赤龍帝が人の心を読む力を身につけたとか？」

微妙に歪められた噂だが、ほぼ真実と言ってもいい。真実の方が歪んでいる様な気さえする。が、それよりもシンが気になったのは、そのことが美候たちの耳に届いていることである。

一誠の『乳語翻訳』『洋服崩壊』『洋服拘束』は、リアスからレーティングゲームに使用することを禁じられている。そのことは運営にも伝えており、もしゲーム中に使用するならば一誠のリタイヤだけでは済まず、リアスもリタイヤすることが決まっており、つまりは敗北を意味している。それだけ一誠を強く戒めている。

しかし、そのことをリアスが宣言したのは最近のことである。この情報を知っているということは、冥界の何者か、もしくは何者たちかが禍の団に情報を流している可能性

が高い。
考えれば当然のことと言えた。禍の団に旧魔王派は下ったが、今もなお新しい体制の中に旧魔王派の悪魔たちが内部から崩壊させようと息を潜めている姿が容易に想像できる。
四大魔王たちにとっては獅子身中の虫。かといって炙り出す為に他の悪魔たちを締め付ける様な真似をすれば相手の思う壺。頭痛の種であろう。
政治には全く興味も関心も無いが、ただの憶測ですら面倒に思えてくる。関わらざるを得ない者たちに同情する。
「で、どうなんだ？」
「――心というか、女性の胸と会話する能力だがな」
何故こんなことを言ってしまったのか。他のことを考えているうちに口を滑らせたのか。知らず知らずのうちにストレスが溜まっていたのか。ヴァーリたちに一泡吹かせたいと無意識に思ったのか。先程の好奇心からくる行動だったのか。
後にこのときのことを振り返るシンだったが、答えは全く分からなかった。
一瞬にして静けさが満ちる。その静けさでシンは自分が何を言ってしまったのか気付くが、最早後戻りは出来ない。
「か、会話？　女の乳と？　……あはははははははははは！」

美候が言われたことを理解すると同時に爆発する様に笑い始める。
「そんなことが……待て。もしかして、それを生徒会の皆に使ったのか？」
シンが頷くと、由良は頭痛を堪える様に眉間に皺を寄せた。
「兵藤……」
彼の知らないところで株がまた少し下がる。
『ドライグが、私の宿敵が穢されていく……』
新たな事実に打ちひしがれ、絶望に満ちたアルビオンの声。
「兵藤一誠には言ったことがあるが、正直女性の胸にそこまで情熱を燃やせる気持ちは理解出来ないな。ただ、そこから新たな力を開拓したことは素直に尊敬するよ」
いつの間にか塩ラーメンを食べ終えたヴァーリは、メモ帳にペンを走らせながら会話に入ってくる。
「歴代の赤龍帝でもそんな力を持った人物は居ない」
『……居てたまるか』
強いショックを受けているせいかアルビオンの声は若干弱々しい。初めて声を聞いたときは、ドラゴンに相応しい威厳と重圧のある声だった筈なのだが。
「面白いじゃないか。何かの切っ掛けがあれば、俺もそういう力を得ることが出来るかもしれない」

「お前も女性の胸と会話でもするのか？」
「さっきも言ったが、生憎それには興味が無いね。兵藤一誠ほどの情熱は出せない」
「ならラーメンとでも会話するか？」
大した意味があって言った訳ではない。ただ、ラーメンに対して異様な情熱を見せるヴァーリの姿を見たので思わず言ってしまった。
反応は劇的なものであった。
メモ帳にペンを走らせるのを止め、見開いた目でシンを見た後に、空になった器を見る。
「……アルビオン」
『先に言っておく。無理だからな？　無理だからなっ！』
「無理やあり得ないことを超越してこそ、誰も到達出来ない高みに至れるんじゃないかな？」
『待て待て待て！　思い直せ！　考え直せ！　あいつらが特殊なだけだ！』
「アルビオン。お前だって二天龍の片割れだ。ドライグに出来て、お前に出来ないことは――」
『止めろっ！　そこでその呼び名を出すな！　変な期待をするな！』
シンの想像以上にアルビオンが慌てふためき出す。だが、アルビオンの気持ちも空し

く、ヴァーリの心は完全に決まっていた。
「間薙シン。いい助言をありがとう」
（もしかしてこいつは、イッセーとは方向性が違うだけで同類なのでは？）
爽やか笑みで礼を言うヴァーリを見て、そんな感想を抱いてしまう。
一方的だが、ヴァーリとの距離が縮まる傍らで――
『……お前の存在を、私は一生許さない』
――アルビオンとの間に深い怨恨が生まれた。

◇

「あーあー。すっかり財布が軽くなっちまったぜぃ」
会計を済ませた美候が財布の中を覗き込みながら呟く。
「ま、ポケットに入れやすくなったけどな」
愚痴かと思えばすぐにそんな冗談を言うので、大して気にもしていないのだろう。
食事を終えた四人は、ラーメン屋の前で向かい合う。店の中だからこそ戦わなかったが、外に出た今その理由も通じない。
「さて……どうしようか？」

誘っている様にも聞こえるヴァーリの言葉。周辺に民家は少ないが、それでもここで戦うとなる一般人に被害の出る危険がある。ましてやシン、ヴァーリ、美候が本気を出せば周辺など簡単に更地と化してしまう。

「腹ごなしの軽ーい運動でもするかぃ？」

重ねられる挑発。シンの隣に立つ由良は静かに汗を流していた。最悪の展開を予想し。

しかし、二人の誘いをシンは鼻で笑う。

「そっちと違って無駄な戦いはしない主義だ」

「そうか。ならしょうがない」

ヴァーリは軽く肩を竦め、シンたちに背を向ける。美候もそれに続いて背を向けた。

二人に戦う意思が無いことが分かり、内心安堵する由良。

シンもまたヴァーリたちの様に振り返ろうとしたのを見て、同じ様に背を向けようとする。

シンが振り返って最初の一歩を踏み込んだ瞬間、由良の髪が突然の突風で乱される。

風が吹き抜けていったのではない。シンが踏み出した足を軸にして百八十度反転したときに生じた風に巻き上げられたのだ。

直後に乾いた音が響く。

由良がシンの動きに反応して背後を見る。そこには、シンとヴァーリが互いに突き出した右腕を交差させていた。固められた右拳が、二人が何をしたのか物語っている。
「良い反応だ」
「あれだけ露骨だったら分かる」
ヴァーリは言葉ではなく気配のみで仕掛けることを伝え、シンはそれを難なく察する。
ようやく事態が呑み込めた由良が、慌てて止めようと声を上げるが、由良の口から『待て』という一言が飛び出る合間に、シンたちは十動く。
交差させていた腕を弾き、シンの左拳が突き上げられる。ヴァーリはそれを目で追うこともなく、上体を少し反らし最小限の動きで回避すると、空いた胴体に蹴りを放った。
迫る蹴りに対し、シンは水平に肘を突き出す。守る構えではなくヴァーリの脛を砕く為の攻めの構えであった。
しかし、ヴァーリの蹴りは途中で軌道を変え、胴を穿つ中段蹴りから首を刈る上段蹴りへと変わる。
狙う箇所を変更されたことに気付くと、シンは水平にしていた肘を九十度変更し、腕を上向きに突き出す。攻めから再び守りの構えをとった。
シンの腕にヴァーリの足の甲が叩き込まれるが、地面を掴む様にして立っていたシン

は僅かに横へずれただけで済ますと、手首を返し、指先でヴァーリの足首を掴んで逃さない様にし、アキレス腱を断つ勢いで拳を突き出そうとした。
その直後、視界の下端に何かが迫ってくることに気付く。
直感で状態を維持することは不利だと感じた瞬間、躊躇う事無くシンは手を離し、攻撃を中断した。
刹那、眼前を通り過ぎていく靴底。爪先が前髪に微かに触れるのを感じた。
低空且つ高速宙返りで放たれたヴァーリの蹴り。あと少し反応が遅ければ、ヴァーリの足を一本奪っていたかもしれないが、その代償として顎を砕かれていたか、千切られていた。
少し仰け反った姿勢から着地直後のヴァーリに前蹴りを放つも、腕を押し当てられ軌道を逸らされる。
ヴァーリから反撃の拳が飛んでくるが、軌道を逸らされた脚を強引に押し当てることで体勢を崩させ、拳を拳で打ち落とす。
今度はヴァーリがシンの足を掴もうとするが、掴まる前に引き抜く。
奇しくも戦う前の体勢へと戻る二人。狙うべき箇所を片や冷徹に、片や闘志を以って狙い定めると、同時に動く。
両者の顔を打ち砕く為に放たれる拳。必殺を込めた拳は、やがて両者の眼前――

「待て！」
　ようやく発せられた由良の制止の声。その後に、空気が爆ぜる音が響き、木霊する筈であった由良の声を掻き消す。
　シンもヴァーリも目の前に迫っていた拳をもう一方の掌で受け止めていた。
「凄いね。少し見ないうちにここまで強くなっていたなんて嬉しいよ」
「……」
「でも、今の俺で良かったな。神滅具をこの状態から発動すれば、十秒後にはすぐにこの均衡は崩れる」
「……十秒後、お前が生きていたらな」
「……くっ」
　ヴァーリは顔を俯かせたが、すぐに大きな笑い声を上げながら顔を上げた。
「あっはっはっはっはっはっはっはっは！」
　笑いながら、ヴァーリは拳を引き、掴んでいたシンの拳を離した後に構えを解く。これ以上戦う意思は無いと態度で示す。
　シンの方もそれが本気だと察し、同じ様に構えを解くと、その身から放たれていた強い圧が弱まる。
　未だに上機嫌そうに笑うヴァーリ。対照的にシンの方は仏頂面であった。

「あーあ」
一頻り笑ったヴァーリは、先程の笑いを微笑にまで抑えてシンに話し掛けてくる。
「兵藤一誠に会ってから、本当に予想もつかないことがよく起こる。少し前まで突き付けられた現実に絶望していたのが嘘の様だ。今は未来が楽しみでしょうがない」
大人びた雰囲気は剥がれ落ち、今だけは年相応の抜けきれない幼さが見える。
「これから先君には色々な苦難が降りかかってくるだろうけど、頑張ってくれ。まあ、どうしようもないと思ったときは声でも掛けてくれ。場合によっては手伝えるかもしれない」
「随分と太っ腹だな」
「君が俺のことをどう思っているかは知らないが、俺は君のことは嫌いじゃないみたいだ」
ヴァーリは、明かりの無い夜の闇に向かって歩いていく。
「目的は全て済んだし帰らせてもらう。――試したいこともあるからな」
『本気でやるつもりか……』
絶望に満ちたアルビオンの声を残しながら、ヴァーリは闇の中に消えていく。
「んじゃま、俺っちも行くわ。じゃあな～、お二人さん。縁が在ったらまた飯でも食おうや」

ひらひらと手を軽く振って、美候はヴァーリの後を追って闇に消えていった。
二人が闇の中に消えていって数秒後、シンは溜息を吐く。その溜息に驚き、由良は肩を一瞬震わせた後、溜息一つでビクビクするほど余裕の無い姿を晒したことへの羞恥で顔を朱くする。
「帰るか」
「あ、ああ」
時間にすればそう長い時間では無かったが、由良にしてみれば密度が濃く心休まない時間のせいで何倍も長く感じられた。
静寂に満ちた夜の中、沈黙のまま歩く二人。その沈黙に耐え切れなくなったのか、由良が話し始める。
「すまなかったな」
「何がだ？」
「折角、礼の為に食事をご馳走するつもりだったのにこんなことになってしまって……」
「事故の様なものだ。お前が何一つ謝る理由は無い」
「白龍皇との戦いも全く手を出すことが出来なかった」
「それで正解だ。何も間違ってはいない」
それは優しさであると同時に、暗に足手纏いとも言われている気がした。

あのとき、由良だけがシンとヴァーリの戦いについていけていなかった。美候は二人の戦いを目で追い、いざとなれば参戦出来る準備までしていたというのに。

「それに戦いなんて大層なものじゃない。ただじゃれつかれただけだ」

一方的に遊び相手にされたことに、シンは少し不機嫌そうであったが、あれが遊び程度のものだと聞かされた由良には衝撃的であった。

例え戯れであったも、ドラゴンの戯れである。見合う相手でなければ戯れは一転して虐殺へと変わる。

隣に並ぶシンに大きな隔たりを感じてしまう。現白龍皇にとってシンは、遊んでも壊れない相手という信用があるのだ。

（……情けないな）

そう思ってしまったことに由良は自己嫌悪する。自分の無力さを突き付けられ、後ろ向きな考えになってしまっているのが分かるが、止めることが出来ない。

本来ならば謝罪の言葉ではなく、礼の言葉を言うべきなのに。

ここまで陰鬱な気持ちになるなど、食事前までの自分からは想像もつかなかった。少し高揚していたその時の自分が羨ましく思える。

せめて礼の言葉だけでも。そう決心し、口を開こうとした矢先――

「俺はこっちの道だから」

分かれ道の前でシンは自分の帰路を指す。
「あ、ああ」
「じゃあな」
「……ああ」
去って行くシンの背中を見て、結局言うことを言えなかった由良。暗い夜道よりも暗い気持ちを抱えながら、由良は一人帰路につく。

◇

「そんなことがあったんだ！」
共に作業をするイリナに昨晩あったことを軽く説明した。
「一体、どういうつもりなのかしら？」
「さあな」
やはり一誠の方もヴァーリたちと会っており、その時にディオドラについて警告をされたという。ヴァーリの言葉を全て鵜？みにするシンではないが、それでもディオドラから漂うきな臭さはより一層強まったと言えた。
なおリアスとソーナは、自分たちの縄張りに簡単に侵入されたことがご立腹だったら

しく、レーティングゲームも近い中で、急遽術式の改善を行っていた。
オカルト研究部員、生徒会メンバーほぼ総出の作業なので、本日の部活動は中止である。
その為、シンは中止に出来ない生徒会の仕事を行っているが、今日は少し事情が違う。
イリナが、生徒会の仕事をクラブの活動として手伝っていた。
何故こんなややこしいこととなったのか。それは熱心なまでのイリナの勧誘に、シンの方から妥協したことが始まりである。
保留にすると返事をしたのに、朝から放課後の間、とにかく時間さえあれば自分の？楽部への勧誘をしてくる。
非常にしつこいので生返事で返していたが、終いには――
『貴方が、貴方が欲しいの！』
『お願い！　お願いだから見捨てないで！』
『貴方が居ないと私、私……！』
――と捨てられる直前の女性の様なことを言い出す始末。そのせいで勧誘に周囲の視線とざわめきが加わって非常に居心地の悪いものとなったとき、シンは一つの考えを閃く。
『たしかクラブの目的は人助けだったな？』

『ええ、そうよ。困っている人たちを無償の愛で助けるの！』
『実際に救いを求めに来た人数は？』
『……まだ同好会レベルで正式な活動が出来ないからゼロ人』
『なら俺が最初か』
『え？』
そうやってシンはイリナに生徒会の仕事を手伝わせることに成功した。これによりしつこ過ぎる勧誘や仕事の負担が減らせる。勿論、イリナにとってもきちんとメリットがある。
生徒会に恩を与えることができ、同時にクラブとしての実績も積める。
イリナの活動について、他の生徒会メンバーに口コミで広げる様頼むと約束したので、名を売ることが出来る。
結局シンと一緒に行動するのでイリナの任務と違わない。
これらのことを説明するとイリナも納得し、現在シンと共に生徒会の仕事をこなしている。
「そういえばこの間のことで、何か分かったことはあるのか？」
「この間の？　ああ、見覚えのあるって言ったことね。それがまだ分からないの」
雑談しながらも二人の作業ペースは緩まない。シンは慣れているという理由がある

が、イリナはこれが初めてである。抜けている所もあるが、やはりミカエルの使徒として選ばれるだけのことはあって地の能力は高いことが窺える。
「教会の情報を調べてみたけど写真の人たちは見つからなかったの」
「記憶違いという可能性は？」
「うーん。無いとは言い切れないけど、どうしても引っ掛かるのよねー。教会で見つからないなら、今度は天界の情報を片っ端から調べるつもりよ」
　諦めるつもりはなく更なる意欲を見せる。
「まあ、手助けが必要になったら言えば良い。余裕があるなら手伝う」
「ありがとう！　でもいいの？　レーティングゲームで忙しくない？」
「俺は出ない」
「そうなんだ。ちょっと勿体無いかも」
　リアスもソーナも日常生活を送りながら、今度行われるレーティングゲームの準備を進めている。ディオドラがオカルト研究部部室に現れたときに、対戦日時は五日後という通達が丁度来た。
　時間はあまり残されてはいない。
　その時、生徒会のドアが開く。
「おーす。やってっかー？」

生徒会のドアを潜って軽い挨拶をしながらアザゼルが入って来た。
「どうかしたんですか？」
ソーナたちが出払っている生徒会室にアザゼルがやってきたことに少し不思議に思う。
「実はな、冥界で若手悪魔たちを特集したテレビ取材の依頼が入ったんだよ」
「はあ。そうですか」
シンが思っているよりも大きな規模で、リアスたちのレーティングゲームが注目されていることを知る。まさか、テレビに出演するほどとは思ってもいなかった。
そうなると少し心配になってくる。約一名、緊張で死にかけそうな元引きこもり眷属の存在が頭を過った。
「部長や会長もまた忙しくなりそうですね」
「他人事だなー。お前も来るんだよ」
「……何故？」
不意打ちで告げられたそれに、シンはそう返すことしか出来なかった。

◇

「ここに居たのか」
背後から声を掛けられ、曹操が振り返るとゲオルクが立っている。知性を感じさせる容貌に、今は不機嫌さを露わにしていた。
「どうした？　何か問題でも起こったか？」
「問題と言えば問題だ。連中、俺たちにもっと力を貸せと要求してきた」
ゲオルクが不機嫌な理由を知り、曹操は小さく笑う。
「笑い事じゃないぞ。新参のくせに随分と図々しい……。謙虚という言葉を教えてやりたいぐらいだ」
「謙虚な魔王というのも不思議な響きだな」
「それで？　どうする？」
「手を貸してやればいいさ。でも、生憎ジャンヌもヘラクレスもジークもレオナルドもやることがある。ああ、あと俺も、な」
「……つまり俺しか残っていないという訳か」
ゲオルクは、気が乗らないという言葉の代わりに溜息を吐く。
「ということで任せたぞ、ゲオルク。――匙加減はお前に任せる」
「――分かった」
了承するが、再びゲオルクは溜息を吐いた。それを見て、曹操は苦笑しながら自分が

歩いてきた方向を指差す。
「そんなにストレスを感じるなら、『彼女』と少し話していったらどうだ？」
　すると、ゲオルクの眉間に皺が寄る。
「曹操。彼女と二人だけで会うなと言った筈だぞ。油断すれば骨の髄どころか魂まで蕩けさせられる」
「彼女との会話は色々と気分転換になるんだけどね。――そういうならレオナルドは良いのか？」
「彼はもう手遅れだ。生みの親よりも彼女を慕っている」
「両親以上に慕える存在に会えるなんて幸運だと思うよ。特に俺たちみたいな存在にとっては、さ」
　自嘲を感じさせる曹操の言葉。ゲオルクは、それを否定することは無かった。
「『否定された者の母』『愛されざる者を愛する者』、彼女が与える愛は俺達には猛毒――いや、ある意味では薬かもしれないな。ただし、劇薬や麻薬の類だが」
「そこまで分かっているのなら――」
「だけど彼女は何もしないさ。求める者に与えるだろうが、見返りは求めない。だからこそ彼女の為に命を捨てられる連中がごまんといる」
　語る曹操の姿を見て、忠告しても無意味だと悟り、眉間に皺を消す。代わりに少しだ

け嫌がらせの言葉を送る。
「だいそうじょうに報告しておく」
「やめてくれ。ここが消える。同じ陣営に居ることでさえ奇跡だっていうのに」
本気で嫌がる曹操の顔を見て、ゲオルクの溜飲も下がった。
「伝えることは全て伝えた。俺は準備に入る」
ゲオルクはローブを翻す。すると、今度は曹操が後ろから声を掛ける。
「そうだ。一応、このことだけ伝えておく」
「重要なことか？」
「彼女が珍しく禍の団の動向について聞いてきた。――近いうちに彼女は動くかもしれない」

頂点、前夜

「あー、あの、お、俺は！　じゃなくて！　僕はグ、グレモリー眷属の！」

ガチガチに緊張した強張った表情で自己紹介をする一誠。慣れない言葉を使っているせいでどもりながらも、インタビュアの質問に答えていた。

その光景を、シンはスタジオの隅から眺めている。傍から見れば思わず笑ってしまいそうになるぐらいのぎこちなさである。実際、シンの側に居るピクシーとジャックフロストは笑い転げていた。

ケルベロスの方は相変わらず表情の読めない顔で沈黙している。因みにケルベロスは擬態を解きいつもの姿になっていた。

だが、緊張するのも無理は無いと言えた。

シンはただインタビューされる程度のものと考えていたが、実際は観覧客も入れた本格的な会場で行われる、若手悪魔たちや眷属への公開インタビューであった。老若男女の観覧者たちが好奇の目で一誠たちを眺めているのである。

（出なくて正解だったな）

アザゼルが冥界にシンも連れてきたのは、他の勢力がシンに手を出せない様にする為

でもあるが、実はシンにもこのインタビューの話が来ていたのだ。
それを知らされたのは冥界に来た直後のこと。出るかどうか尋ねられたが、シンは頑としてその話を断った。アザゼルはどちらでも良かったらしく、シンが断るとあっさり引いた。
一誠の顔色はあまり良くないが、それと同じくらいアーシアも緊張しており、インタビューの番が自分に回ってくるのを視線を泳がせながら待っている。
リアス、朱乃、木場は普段通りの落ち着いた態度。ゼノヴィアも持ち前の図太さで緊張を微塵も感じさせない。
一番酷いのはギャスパーである。色白な顔から更に血の気が引いており、今にも気絶しそうであった。辛うじて膝に抱えているジャックランタンの存在のおかげで意識を保っている有り様である。当初は愛用の段ボール箱に隠れようとしていたが、テレビ側からNGが入ってしまったせいでそれも出来ず、このまま出たら死んでしまうと泣くので、仕方なくジャックランタンが体を張ってくれた。
インタビュアの質問に一誠がぎこちない言葉遣いで答えていく。すると――
「ちちりゅうてー！」
「おっぱいドラゴーン！」
観覧席の子供たちから一誠にかけられる歓声。リアスが話せば男女問わず歓声が、朱

乃が話せば男性からの声援が、木場が話せば女性からの黄色い声援が、そして一誠が話せば今の様に『乳龍帝』、『おっぱいドラゴン』と呼ばれる。

今、子供たちの間でその名が爆発的に広まっていた。

切っ掛けとなったのは、やはりシトリーとのレーティングである。その中でがむしゃらに戦う一誠と匙の姿は冥界の全お茶の間に流れていた。

一誠が禁手化した姿のカッコ良さに子供たちの心を鷲掴みにしたのも理由だが、もう一つ子供たちの心を掴んだ理由がある。

そもそも『乳龍帝』『おっぱいドラゴン』という名が何故生まれたのか。あのレーティングでは、一誠はその類のことは言っていない。ならば何が理由でその呼び名が生まれたのか。

理由というべきか原因となったのは、リアスとシトリーのレーティングゲーム後に流されたとある人物のインタビューである。

自らを赤龍帝の師と名乗った某M氏。何故かプライバシーを守りたい為、シルエットのみでインタビューを受けていたが、三メートル近い巨体。四本の腕。頭頂部から噴き出す炎。それだけ見れば誰なのかは一目瞭然であった。

インタビュアが、赤龍帝の強さの秘密は何なのでしょうかと質問に対し、某M氏は一言。

『女性の胸だっ！』

そこから一誠が白龍皇と引き分けた際にも女性の胸が関わっていること、使う技の殆どに女性の胸が関連していること、禁手に至る為に女性の胸を突いたことなどを赤裸々に語る。

全冥界に向けてのインタビューでこれである。並の神経の持ち主ならば自殺ものの暴露だが、そもそもまともな神経を一誠が持っていたらこんなことなど一切起こらないという点に帰結してしまう。

子供たちの歓声に一誠は照れている様な反応をしているが、中のドライグは恐らく一誠の様にこの事実を受け止めていないだろう。

シンにはドライグが声無き慟哭を上げている気がした。

「まだレーティングゲームを始めて日が浅いというのに、民衆の心をこれだけ掴むことが出来るとは流石だ。これからが楽しみだね」

知らぬ声にシンは驚き、隣を見る。そこには荘厳な外套を纏った二十代ほどの白髪の青年が佇んでいる。

急に声を出されたことに驚いたのではない。この男性が声を出すまで全くその存在に気付けなかったことに驚いたのだ。気配も音もニオイも無く、最初からそこに存在していたかの様に。ここまで無防備に接近を許したのはこれが初めてかもしれない。

更に驚くべきことは、この男の存在に気付いているのは声を掛けられたシンのみであること。
ピクシーたちから数歩後ろにシンは待機していたが、いくらピクシーたちの視界に入っていないからといって全く感知していないのはおかしい。ましてや、ニオイや気配に敏感なケルベロスにすら己の存在を隠し続けている。
たった数秒で男の異様さを知らしめさせられた。
相手に敵意など全く感じ取れないが、それでもシンの中の警戒心は最大まで高まっている。開いていた手が自然と拳を形作る。
「君は出演をしないのかい？　リアス・グレモリー側、ソーナ・シトリー側でも選手として出ていたと記憶しているが？」
「……今回は出場しないので」
「そうなのかい？　それは惜しい。君の冷静ながらも熱を秘めた戦い方に心惹かれている者たちも居るというのに」
心底惜しむ様な口調。
「貴方はここへ何をしに？」
今度はシンの方から話を振ってみる。全く情報の無い人物なので、少しでもそれを得たいが為である。

「ここに来たのは偶然だよ。私の方も収録が予定されていたが、少しトラブルが起きてしまってね。空いた時間が出来たので様子を見に。ああ、私はサイラオーグ卿のアドバイザーをしているんだ」

若手悪魔最強と評されているサイラオーグ。そのサイラオーグに助言を送れる立場。リアスたちに置き換えれば、アザゼルと同等以上の知識と力を持っていると考えられる。

魔王以外でそこまでの力を持つ者は決して多くは無い。何よりその身から放たれる威厳。着飾っていないというのに荘厳に見える。上に立つ者が持つ他者を引き寄せる引力、所謂カリスマと言われるものを感じた。

「彼は優秀な『王』。勿論、一選手としても素晴らしい。あまり若い悪魔に荷を背負わせるのはいけないとは思うが、ついつい期待をしてしまうよ」

サイラオーグを褒めつつもその未来に憂う。だとすると少し疑問が湧く。何故リアス・グレモリーのインタビュー会場に来ているのか。サイラオーグのアドバイザーならサイラオーグの方に向かう筈。ここでインタビューを受けるのはリアスとその眷属のみの筈である。

「少々恥ずかしい話だが、本当はサイラオーグ卿たちのスタジオに行く予定だったんだ……スタジオを間違えてしまった」

湧いた疑問に察し、苦笑しながら先に答えてくれた。
「とは言ってもリアス・グレモリー嬢たちも前々から気にはなっていた。彼女の眷属たちもね」
男はリアスたちに視線を走らせる。その眼差しは眩いものを見るかの様に細められていた。
「最近は優秀な若い悪魔たちが多い。私としてもそれは喜ばしいことだ。まあ、転生悪魔がレーティングゲームで名を上げることに渋い顔をする方々も居るが、転生も純血も関係無く競い合い、己を高めていくことこそレーティングゲームの理念だと私は思っている」
熱く語るその顔を思わず凝視してしまう。レーティングゲームに深い造詣を持つことが良く伝わってきたが、ならばこそこの人物は誰なのかという疑問が強まる。
「――ああ、そういえばまだ名乗っていなかったね」
少し唐突な自己紹介。シンは、誰だという考えが僅かだが表情、あるいは目に滲み出ており、それを悟られたと思った。
「私の名はディハウザーだ。君の名前はちゃんと知っているよ。間薙シン君」
「――ディハウザーさん、ですか……」
ディハウザーの方はシンを知っていたが、シンの方はディハウザーの名を聞いてもピ

ンとはこなかった。有名なのは間違いない筈なのだが、冥界の事情に疎いせいで記憶を辿ってもディハウザーの名が出て来ない。

折角名乗った相手に対し無反応に等しいシンの対応。しかし、ディハウザーは気分を害した様子は無く、爽やかな笑みを浮かべ続けている。

『誰だろう』と今思っていたね？」

「……すみません」

思わず謝るが、ディハウザーは手を振り、気にしないでくれと笑う。

「いやいや、知らなくても構わないよ。寧ろ、君にとって私の名が『無価値』であった方が、変に畏まる必要が無くなるから良い」

この場では対等に接することを望むディハウザー。シンもそれに付き合うことにする。

「収録が終わるまでまだ時間は在る。もう少し話せるかな？」

「何を話しますか？」

「そうだね……君のレーティングゲームの話を聞かせてくれないか？　観覧している側ではなく、実際に行っている者から見たレーティングゲームの内容は、中々興味深いものだ」

「なら――」

シンが最初に語るはライザー・フェニックスとのレーティングゲームの内容。シンの視点から見たそれを詳細に語っていく。ゲーム開始前から開始するまでの話、ゲームが始まり、最初に相手をリタイヤさせたときの話、追い詰められながらも逆転したときの話、そして最後に自分がリタイヤするまでの話。時折、ディハウザーからの質問に答えながら淡々と語っていく。

ディハウザーはそれを終始真面目な表情で聞き続けていた。

「――以上です。まあ、説明不足な点もあるかもしれませんが」

「面白い。とても興味深かったよ。君や、君から見たメンバーの反応に初々しさを感じるね。私が初めてレーティングゲームを行ったときのことを思い出す。気持ちでは誰にも負けないつもりだったが、中々それを戦いと噛み合わせるのは難しい」

満足そうに頷くディハウザー。その閉じた瞼の裏には、かつての光景を映し出しているのかもしれない。

「もう少し話を――と言いたいところだが、そろそろ収録も終わるみたいだ」

ディハウザーの言う通り、インタビュアは既に全員から話を聞き終えて、締めの挨拶をし始めている。

「一足先に楽屋に向かわないかい？　君はリアス・グレモリー嬢に用があるだろうし、私もサイラオーグ卿と少し話したいことがある」

シンはディハウザーの提案に従うことにし、会場から離れることにした。ピクシー、ジャックフロスト、ケルベロスに声を掛ける。
「はーい。って、あれ？」
「ヒホ？」
ディハウザーの存在に今気づいたピクシーとジャックフロストの反応は呑気なものであったが、ケルベロスの方は静かに牙を剥いている。見知らぬ相手にこれ程まで気付かれることなく接近を許したことで、即座に警戒態勢となっていた。
三人の異なった反応を興味深そうに見るディハウザー。シンはピクシーたちにディハウザーを軽く紹介しつつ、ケルベロスに警戒を解くよう宥める。
一応シンの言うことを聞き、ケルベロスは牙を剥くのを止めて構えを解く。ただし。あくまで表向きに、である。内心では未だに警戒し続けており、漏れ出すひりつく気をシンは肌で感じていた。
「その反応、そこの二人は中々の大物だね」
「呑気なだけです」
「そして、未だに気を緩めていない君も賢い忠犬だ」
「トウゼンダ」
「おや、喋れるのかい？」

ケルベロスをただの魔獣と思っていたディハウザーは、言葉を発したことに軽い驚きを見せた。
「君の使い魔たちは個性的だね。興味をそそられる」
「変わり種の仲魔なだけですよ」
「仲魔、かい？」
使い魔という言葉を訂正するつもりで言った訳では無い。無意識につい飛び出てしまう。最早癖の様になってしまっていた。
「君にとって彼らは僕ではなく対等な関係という意味かい？　成程。悪魔という立場からすれば異端な考え方だが、個人的には好ましい考え方でもある」
言葉とシンとピクシーたちの間に流れる独特の空気から、瞬時にシンが言う仲魔がどんなことを指すか大凡理解してしまった。
ディハウザーの聡明さが際立つ。
「と、いけないいけない。つい話し込みそうになってしまった。私から言っておいて足止めさせて申し訳ない。今度こそ楽屋の方に向かおうか」
振り返り会場から去るディハウザーの後を追い、シンたちも会場を後にした。

◇

インタビューの会場は上層階なのでエレベーターを使用し下層に降りる。その間、ケルベロスは相変わらずディハウザーを警戒していたが、ピクシーとジャックフロストは色々とディハウザーに話し掛けていた。

幼児の扱いに長けているのか、ディハウザーは嫌な顔一つせず、二人との会話を弾ませ愉しんでいる様にも見えた。

やがてエレベーターは目的の階に止まる。

扉が開くと直線の通路。その途中で左に曲がる通路がありT字の形となっている。リアスたちの楽屋はこの通路を真っ直ぐ行った先にある。

誘導する様にディハウザーが先を歩いていく。

直進し、左に曲がる通路の前を通り過ぎようとしたとき、一瞬だけ視界に見覚えのある人影を捉えた。見間違いかと思いつつ足が反射的に止まってしまったので、確認の為に左の通路を見た。

「……何で居るんだ？」

「それはこっちの台詞だ」

「まあ！　間薙様。偶然ですわね」

シンの顔を見るなり顔を顰める男――ライザー。表情を輝かせる少女――レイヴェ

ル。フェニックスの兄妹が対照的な表情をしていた。
「ここにいらっしゃるということは、間薙様も取材に？　今度のレーティングゲームはリアス様の眷属としてご出場なさるのですか？」
大きめのバスケットを持ったレイヴェルが興奮した面持ちで詰め寄ってくる。
前回のレーティングゲームでシンたちの戦いに感動したそうなので、次のレーティングゲームにも強い期待をしているのが見て取れる。故に、シンは彼女にとって失望させることを今から言わなければならない。
「――いや出ない。多分、今後も……」
「そう、なのですか……」
『何故？』『どうして？』などの言及はせず、シンの言葉をレイヴェルは素直に受け取っていた。しかし、ショックは隠し切れず先程までの輝いた表情は見る影も無く曇ったものとなった。
そのせいでライザーが刺殺しそうな程の目付きでシンを睨み付けている。
「足を止めさせて申し訳ありませんでした。何処かへ向かう途中だったのでしょう？」
沈んだ気持ちのまま、ぎこちない笑みをレイヴェルは無理矢理浮かべた。見ていて痛々しい気持ちになる。
自分でこの様な顔にさせた挙句、このまま去るのは流石に薄情が過ぎる。かといって

どう返すべきか、良い言葉など咄嗟には思いつかない。
「それは――」
「何かあったのかい？」
立ち止まっているシンに気付いて戻って来たディハウザーが、シンに声を掛ける。ライザーたちから見て、曲がり角から突然顔を出す格好となる。
「エ――」
ディハウザーの顔を見た瞬間、レイヴェルの顔が悲しみから一転し驚きへ。ライザーの怒りの表情も瞬時にレイヴェルと同様のものとなる。
『皇帝（エンペラー）ベリアルッ!?』
声を揃え、叫ぶ様にディハウザーをその名で呼んだ。
「皇帝？」
「ベリアル？」
「呼ばれ慣れた名のつもりだったが、そんな風に言われると少々照れ臭いものがあるね」
同じく様子を見に来たピクシーとジャックフロストが小首を傾げながら、ライザーたちが叫んだ名を呟くと、ディハウザーは少し恥ずかし気に笑う。
ベリアル。グレモリーとシトリー、フェニックスと同じく七十二柱に名を連ねる悪魔の名。詳細を知らない一般人でも一度は聞いたことのある有名な名である。

ディハウザーが高名な悪魔の名を継ぐ存在だったことに驚く。しかし、新たな疑問も生まれた。
『皇帝』とは一体何を意味を指すのか。
「お会い出来て光栄です。皇帝ベリアル殿」
「お初にお目にかかります」
取り乱したのは刹那のこと。高貴な出であったライザーとレイヴェルはすぐに背筋を伸ばし、落ち着き払った動作で優雅に挨拶をする。だが、その顔には隠し切れ無い緊張の色があった。
「ライザー・フェニックス卿にレイヴェル・フェニックス嬢だね。君たちとこの様に言葉を交わす機会は思い返せば無かった」
ディハウザーもまた威厳に満ちた態度でそれに応じる。同じ上級悪魔だというのに、明確な格というものが感じられる。
「君たちは何故ここに――ああ、そういえばこのテレビ局にはフェニックス家の」
「はい。我が次兄の番組があります」
「ならば差し入れかな？」
ディハウザーの視線がレイヴェルのバスケットに向けられる。
「え、ええと。そ、その。そうとも言いますか……」

問われてレイヴェルがしどろもどろになる。それを見てシンは察する。バスケットの中身は一誠に差し入れする為のものであると。
「ところで話は変わりますが、ベリアル殿は何故その男と一緒に行動を?」
見兼ねてライザーが助け舟を出す。尤もライザー自身、そのことが気になって仕方なかったという理由もあった。
「彼とは会場で偶々出会ったんだ。前のレーティングゲームで注目をしていたので、何かの縁と思って少し会話もね。今は一緒に楽屋に向かっている所だ。私はサイラオーグ卿に、彼はリアス嬢に用があるので」
「そうなのですか……」
「イッセー様ッ！　じゃなくて！　リアス様たちの楽屋に向かっているのですか!?」
ディハウザーの説明を聞き、その部分に喰い付くレイヴェル。
「ん？　――ああ、成程。良ければ君たちも一緒にどうだい？」
レイヴェルの反応で大体のことが分かってしまったのか、ディハウザーが気を利かせてライザーたちを誘う。
「よ、よろしいのですか！」
「君たちと、彼が良ければ」
ディハウザーがちらりとシンの方を見る。

「構いませんよ」
　シンはあっさりと首肯する。
「なら行こうか」
　更に同行者を二人増やして楽屋に向かう。
「ところで」
「何だ？」
　その道すがら、シンは気になっていたことをライザーに聞こうとする。
「『皇帝』ってどういう意味だ？」
「はあっ！」
　意味を聞いた瞬間、質問の意味が理解出来ないといった声を上げ、信じられないものを見るかの様な顔付きとなる。
　当然その声に驚いてディハウザーたちが足を止めるが、それに気付かずライザーは捲し立てる様に怒涛の言葉をシンに向けて吐き出す。
「知らずに一緒に居たのか！　この間抜け野郎が！　皇帝ってのはな！　ディハウザー・ベリアル殿だけが呼ばれることの許される称号なんだよ！　馬鹿野郎！　レーティングゲームランキング第一位にして他を寄せ付けない圧倒的にして最強の王者！　レーティングゲームの世界に携わる者ならルールと同じぐらい知っていて当然の存

在なんだよ！　覚えておけ！　無知野郎！」
　罵声を交えながらも一応説明をしてくれた。しかし、これ程ライザーが過剰に反応することはシンにとって意外であった。無知に対する怒りというより、ディハウザーを尊敬していることの方が伝わってくる。
「レーティングゲームにはあまり興味無いんだが……」
「それでも知っておけ！　常識と同じだ！　非常識野郎！」
　理不尽な罵倒であったが甘んじて受け入れることとした。下手に言い訳をしたら話が長引きそうなので。
　ディハウザーが何者かを知って色々と納得した。リアスの目指しているレーティングゲーム上位。その頂きに座すのがディハウザーである。他の悪魔と一線を画す存在感は、それを証明しているかのようであった。
「説明ありがとう」
「あ、申し訳ありません。勝手な真似を」
「こういうことは自分で説明するのは気恥ずかしいからね。誰かが言ってくれて助かったよ」
　声を掛けられ、ようやくディハウザーたちが自分たちを見ていることに気付き、我に返り先程までの激しい態度を一転させ大人しく謝罪しようとするが、ディハウザーは

笑ってそれを止めた。
「だが、彼を責めないでほしい。彼との会話の中で知ったが、彼が冥界に足を運ぶ様になったのはここ最近のことだ。知っていなくてもおかしくはない」
「それは……そうかもしれませんが……」
「私を慕ってくれる気持ちはとても嬉しいがね。しかし、友人も大切にしなければいけないよ?」
「友人?　まあ、その……あの……えーと……はい」
　否定したいところだが、ディハウザーの言葉を否定する訳にもいかず、迷った挙句苦渋の決断の様にそのことを認めた。
「ここに居られましたか」
　聞く者の足を止めさせる覇気のある声。この声の主をシンは知っている。
「サイラオーグ卿。どうしてここに?」
「ベリアル殿がスタジオの方に来ていたという話を聞いたので」
「私を探しに?　手を煩わせてしまったようだね」
「とんでもない。これは俺の単なる自己満足です」
　ディハウザーを迎えに、サイラオーグが現れる。
「それにしても――」

サイラオーグの目線がシンたちに向けられる。
「まさかここで会うとは……」
意外な場所で意外な人物たちに会ったと目が語っている。
「こうやって話すのは初めてかな？　サイラオーグ・バアル卿？」
「いずれはレーティングゲームでと思っていたが、一足先の挨拶だな。ライザー・フェニックス殿」
いつぞやのライザーとサイラオーグ、どちらが強いのかという話を思い出す。
片やレーティングゲームで名を上げ始めていた者。もう片方はこれからが期待されている若手悪魔。
いつかは戦い合う両者。意識しない筈が無い。
「最近はレーティングゲームに参加しないので体調不良の噂が出回っていたが……その姿を見るにデマの様だ」
「少し前まで不調だったのは事実だ。レーティングゲームに復帰するのもそう遠くは無い」
「それは楽しみだ」
好戦的な笑みを浮かべる二人。心なしか周囲の温度が上がり、見えざる圧力に息苦しさを感じさせる。

「二人の対戦も実に楽しみだが、二人とも少し落ち着こう」
戦意を昂らせる二人に、ディハウザーの言葉が飛ぶ。その言葉だけでこの空気は払拭された。
「申し訳ありません。つい」
「そうなる気持ちは分からなくも無いがね」
素直に頭を下げるサイラオーグの肩を、ディハウザーは二度軽く叩きながら共感を示す。
サイラオーグは頭を上げると、今度はシンを見る。
「会うのは二度目だな」
「どうも」
「リアスから聞いている。どうやらもうレーティングゲームには参加しないみたいだな？」
「まあ、そのつもりです」
「惜しいな。一度手合わせをしたいと思っていたが」
サイラオーグの精悍な顔が曇る。知らずのうちにかなり評価をされていた様子であった。
「だが、もしかしたら気が変わるかもしれない。その時が来ることを期待しておこう」

しかし、直ぐにそれを晴らし前向きな考え方を見せる。
「ところで、サイラオーグ卿――」
何かディハウザーが言おうとするが途中で止まる。そして、申し訳無さそうな表情をシンたちに向けた。
「すまない。どうやら私の方のトラブルがもうすぐ解決するようだ。間も無くテレビの撮影が開始される。私はそちらに向かわなければならない」
念話で状況を送られていたらしい。
「私の方から誘っておいて、すまない」
「お気になさらず」
謝るディハウザーに、シンは気を害していないことを告げる。ライザーとレイヴェルも、シンと似た様なことを言っていた。
「では皆、ここでお別れだ。サイラオーグ卿、後でまた連絡を入れる」
「分かりました」
ディハウザーは一礼し、来た道を戻っていく。最初から最後まで一分の隙も無い動作。王者という言葉がこれほど似合う存在はそうは居ないだろう。
「バイバーイ！」
「またホー！」

去っていくディハウザーにピクシーとジャックフロストは手を振る。ディハウザーは一度だけシンたちの方を見ると、微笑み、小さく手を振りながら去っていった。
「はあ……」
ディハウザーの姿が消えるとレイヴェルが小さく息を吐く。緊張からの弛緩から思わず漏らしたものであった。
「まさに皇帝、だな」
いつかは戦うべき相手に、ライザーは自然と闘志を燃やす。
「サイラオーグさん。この後は？」
「俺はこのまま帰るつもりだ。まだ他に予定がある」
「そうですか。じゃあ、ここで」
「ああ。また会おう」
シンは別れの言葉を言うとサイラオーグに背を向ける。レイヴェルは優雅に一礼し、ライザーはふてぶてしい態度で『またな』とだけ言い残す。
去っていくシンたちの背中を見つめるサイラオーグ。正確にはシンの背を見ていた。
無防備な背中。サイラオーグは脳裏に、その背に向け拳を構える己を想像する。
構え、引き絞り、それが限界に達し、撃ち貫く様な拳を放つ自分を幻視した時――
「ッ！」

自分の肩越しに、サイラオーグを見るシンと目が合った。サイラオーグは何一つ構えなどとっていない。しかし、僅かに漂う殺気の様なものを敏感に嗅ぎ取られていた。

感情が見えない瞳を向けられ、サイラオーグは口の端を歪めて笑う。

シンは何か言うことはなく、視線を正面に戻した。

離れていく背を見て、サイラオーグは思わず呟く。

「やはり勿体無いな……」

◇

冥界の取材があった翌日。シンはいつも通り学校に向かっていた。

無事冥界から戻って来た――という訳では無く、レイヴェルがリアスたちの楽屋に入ったら運悪く一誠が扉から出てきて、咄嗟のことで対応出来なかったライザーが立ったまま気絶したり、それを誤魔化す為に暴れたり、その騒ぎに乗じてピクシーたちが姿を消したりなど、戻って来るまでにひと悶着あった。

ピクシーたちのことについては、念話を飛ばしても返事はせず、暫く探した後召喚して呼び寄せようとしたときに何食わぬ顔で帰って来た。シンが何処に行ったのか言及するもピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンはニヤニヤと笑うだけ。対照的

にケルベロスの方は終始不機嫌そうに沈黙していた。
その日の授業も何事も無く終わり、一誠らと共にオカルト研究部部室に向かう。
イリナもそれに同行していた。同好会がクラブに昇格し本格的な活動が行えるようになるまでの間、生徒会だけでなくオカルト研究部の手伝いもすることとなった。イリナ曰く、地道な実績積みらしい。
「ちーすっ……あ」
先頭でオカルト研究部部室に入った一誠が挨拶をした後、入口前で立ち止まる。
不審に思い、シンたちが隙間から覗き込む。
「よお」
リアスたちの居ない部室で、マダがソファーに腰掛けてくつろいでいた。偽装用の人の姿では無く、阿修羅としての姿なので、その重みでソファーが大きく変形している。
「マダ師匠！　久し振り――」
『貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』
一誠が言い終える前にドライグの怒号が部室内に響き渡る。
「何だよ。静かにしろぉ。ご近所迷惑だろうが」
『よくも俺の前にのこのこと姿を見せたなぁ！　貴様のせいで！　貴様のせいで俺はなっ！』

「俺はしょおおじきに答えただけだぜぇ？　そこからどうなるかなんて俺でも分からないっつーの」

怒りのままに吼える様に叫んでいたドライグであったが、いきなりトーンダウンする。

『き、貴様のせいで……ほ、誇り高き二天龍の名が……赤龍帝の名が……』

「おっぱいドラゴンと乳龍帝だもんなぁ？」

『う、うお、うおおおおおおおおんっ……』

新たに付けられた二つの異名を出され、ドライグは耐え切れなくなり宝玉の中で泣き始める。

「ド、ドライグ！　大丈夫！　大丈夫だから！　一時的な流行りみたいなものだって！」

「そ、そうですよ！　私たちはドライグさんがカッコイイことは知っていますから！」

「まだ赤龍帝の名の方が有名だ。だから安心してくれ」

一誠、アーシア、ゼノヴィアが泣き止まそうとドライグを励ます。

「おっぱいドラゴン？　乳龍帝？　何それ？」

「……取り敢えず今はそれについて掘り下げないでやってくれ」

事情を知らないイリナがシンに聞いてきたが、丁寧に説明するだけでドライグの心の傷を深く抉ることになるので、後にするように言う。

「子供ってのは本当に的確で残酷なあだ名を付けるよなぁ？　最初に言い出した奴に、個人的に何か賞をあげてぇなぁ」
『うぐお……他人事の様に……何か俺に怨みでもあるのか？』
「ああん？　昔殺し合ったことを未だに根に持っているって言いてぇのか？　見損なうなよ。戦いの遺恨なんざ生まれてこの方持ったことすらねぇよ」
　さらりとマダが言ったが、聞き逃せない言葉が含まれている。
「え！　師匠とドライグの間にそんなことがあったんですか！」
　何かしらのいざこざはあったかもしれないと思っていた一誠であったが、そこまで殺伐としたものとは思っていなかった。それを聞くと、今の様に普通に話し合っている関係が不思議に思えてくる。
「因みに結果は？」
「今もこうして喋っているのが答えだと思え」
　勝敗については引き分けと言いたいらしい。詳細を知りたかったが、マダとドライグの会話がヒートアップしていくせいで入る余裕が無い。
『だとしてもだ！　結果的に見ればお前のせいで俺にとんでもない忌み名が生まれたんだぞ！』
「いいじゃねぇか。俺はもっとこの名が広がれば良いと思っているぜぇ」

『き、貴様……！』
「皆から親しまれる立派な名だろうが。俺はな、二天龍や赤龍帝の名を否定する気はねぇが。その異名は、少し怖がられ過ぎていると前々から思っていたんだよ」
『な、何を急に……』
　いきなり口調を変えるマダに、ドライグは戸惑う。
「強い名前ってのは悪くねぇ。だがな、強さにも種類ってのがあるんだよ。憧れる強さ、畏怖する強さってな。ハッキリ言うとな、ドライグ。お前の強さってのは後者だ。他人を寄せ付けず、触れさせず、独り高みに昇っていく強さだ。考えてみろよ？　三勢力巻き込んで自分の戦いを優先する様な奴だぞ？　どんな危険なドラゴンか分かったもんじゃねぇ」
『むぅ……』
　言っていることが事実な為、ドライグも下手に反論出来ない。
「お前一人がその強さを貫くってのなら止めはしねぇ。だがな、お前の強さは今、そいつの強さでもあるんだよ」
　マダが一誠を指差す。
「そいつは独りになる強さを目指している訳じゃないってのは知ってんだろ？　相棒なんだしな。そいつががむしゃら突っ走って生まれた名なんだ。お前の強さが変化して

きた証だろう？　畏怖されるんじゃなく親しまれる強さに近づいた証拠だ。相棒だったら少しは認めてやれよ」

『それは……』

マダの考えにも一理あると思ってしまい、ドライグは即座に否定は出来なかった。

「マダ師匠。ドライグのことをそんなにも思っていたなんて……」

かつては敵対関係にあった相手の将来を親身に思い、熱く語るマダに一誠は感動する。自分以上にスケベな上に、女ったらしで大酒飲みでいい加減で暴力的で容赦も慈悲も無い性格だと思っていたが、戦友もとい好敵手思いの一面があるとは知らなかった。

『そこまで言うのなら、まあ……少しは認めてもいいが……』

不満はあるが相棒の為に妥協の姿勢を見せる。

「――おしっ！」

するとマダがいきなり拳を握り締め、ガッツポーズをとる。急にそんなことをするマダに皆の視線は一斉に怪訝なものへと変わった。

「これでおっぱいドラゴンも乳龍帝もドライグ公認となったわけだなぁ？」

そう言ってマダは腕の一本を一誠たちの方に向けた。大きな手に隠れて気付かなかったが、その手に何か握られている。

マダがその手を軽く握ると――

『そこまで言うのなら、まあ……少しは認めてもいいが……』
先程のドライグの台詞が聞こえてきた。テープレコーダーの類を隠し持っていたらしい。
部室内に沈黙が流れる。
『そこまで言うのなら、まあ……少しは認めてもいいが……』
『そこまで言うのなら、まあ……少しは認めてもいいが……』
『そこまで言うのなら、まあ……少しは認めてもいいが……』
『そこまで言うのなら、まあ……少しは認めてもいいが……』
繰り返し流されるドライグの台詞。
「あ、あの？」
「何だ？」
一誠が恐る恐る質問する。
「か、勘違いかもしれませんが、もしかして、さっき言っていたこと全部ドライグからその言葉を引き出させる為の……？」
「うん」
躊躇なく頷くマダに全員絶句してしまう。
そのとき、この場に居る皆が何かが千切れる様な音を聞いた気がした。

「あら？　もう皆来て――」
『ガアアア

『――――――――ッ！』

これが本気のドラゴンの叫びと言わんばかりの大声量。窓ガラスや壁が震え、天井から埃が落ちてくる。

一体どうすればドライグの怒りを収めさせることが出来るのか、皆が頭を悩ませているとき、救世主が現れる。

「騒がしいぞ。部室の外にまで聞こえさせて、何してんだ？」

アザゼルが部室内に入って来る。左腕に振り回されている一誠。笑うマダ。困った表情をしている他のメンバーを見て、アザゼルは呆れた表情を浮かべた。

「また何かやったのか」

騒ぎの原因がマダであると的確に見抜いたアザゼルは、面倒くさそうに後頭部を掻きながらマダへと近付く。

「おいおい。いきなり親友を疑うなよ。傷付くぜぇ……」

「白々しい台詞だなぁ」

ショックを受けて肩を落とすマダだが、アザゼルはそんな三文芝居に付き合うつもりはなく、ある距離まで接近するとアザゼルの右腕が一瞬消え、次に現れたときにはその手にマダが持っていた筈のテープレコーダーが握られていた。

「あっ」

「珍しいモン持っているじゃねぇか。ホラ」
　テープレコーダーを一誠に向けて放り投げる。
『グオオオオオ！』
　宙に放られたそれを一誠の左手が掴み取り、そのまま握り潰してしまう。
「あーあ。折角俺が計画した『乳龍帝百年計画』の第一歩だったのに」
「どんな計画かは知らんが、ろくでもない計画なのは分かった」
　残念そうに肩を落とすマダであったが、テープレコーダーを奪われた際にそれを必死になって取り返そうとしなかった所を見ると、本気では無かった模様。アザゼルは、いつもの悪ふざけだと思っていた。
「全く。お前は騒ぎの原因にしかならんな」
　アザゼルが一誠たちの様子を横目で見る。
「ほら、ドライグ！　もうお前を怒らせるものは無いぞ！」
『グルルルルルル！』
　人語を忘れて唸り続けるドライグ。その唸り声が向かう先には在るのは、当然マダの存在。
「何か用があって来たのかは知らんが、もう帰れ、お前。騒ぎが増える前に」
　手を振り、追い払う仕草をする。

「えー」
「えー、じゃねえよ。どう見ても長居出来る状況じゃねえだろうが。不満なら、今度は余計なトラブルを起こさない様に謙虚に振る舞うんだな」
不満を洩らすマダに対し、アザゼルは突き放す言葉を掛ける。
「へえへえ。分かったよ」
それ以上粘ることはせず、マダはアザゼルに応じて扉へと向かって行き、引く意思を見せた。
人用の出入口を、体を縮めて窮屈そうに通って部室の外に出る。
「じゃあなー」
マダの巨体が壁の向こう側に消え、皆が安堵の息を吐いた瞬間、突如マダの手だけが現れ、出入口の縁を掴む。あまりに絶妙なタイミングのせいで見計らったかのではないかと疑ってしまう。
「……何だよ」
「一つ聞き忘れたことがあったな」
掴んでいた手の指が一本だけ上がる。
「次のレーティングゲームは何時なのか聞いてなかった」
「来る気なのか？」

「そりゃあ、色んな意味で可愛がっている弟子の戦いを見ない師匠なんて居ないだろう？」
上げられた指が左右に振られる。姿を見せない代わりに、手だけがやたら感情豊かに動いている。
「一回見れば満足するかと思ってたぜ。お前、飽き性だしな」
「面倒見は良いって評判なんだぜぇ」
「初耳だぞ、それ」
ピースサインをするマダの手。いつもの冗談だと思い、アザゼルは本気にしなかった。
「まあいいや。五日後だ。今度のレーティングゲームは、な」
その言葉に、オカルト研究部員全員の目がアザゼルへと向けられる。
「そうか、分かった。五日後だなー」
外に居るマダは、それに気付くことなく指を五本立て、そのまま手を振って呑気に別れの挨拶をする。
「遅れるなよ」
「へいへい」
今度こそ本当にマダは去っていく。

足音が遠ざかっていく中、誰もが抱いた疑問を一誠が真っ先に聞こうと口を開く――が、それを察したアザゼルが、先手を打つように口の前で人差し指を立て、黙っているよう指示する。

それから数分間、オカルト研究部内に沈黙が流れ続けた。

やがて、完全にマダの気配が消えたことが分かったのか、アザゼルが場の沈黙を破る。

「もういいぞ」

「先生、一体どうしてマダ師匠にあんな嘘を？」

一誠の口から滑り出る様に疑問が飛ぶ。

アザゼルがマダに伝えた日数はでたらめなものであった。五日後では若手悪魔たちのレーティングゲームは終わっている。

「訳あって今回のレーティングゲームにはあいつは呼べない。冥界の方もそれが分かっているから、選手や関係者以外にはレーティングゲームの日程は教えていない。だから、絶対にお前らも洩らすなよ？」

いつもよりも念が込められた眼光に、一誠たちは頷くしかなかった。

◇

明日の夜にはレーティングゲームが始まる。リアスなどは緊張を表情に出さないものの、ピリピリとした空気を放っているのが分かる。
逆にギャスパーは緊張を隠すことが出来ず常時体を震わせていたが、周りはいつものことだと特に気にしていない様子であった。
そして、もう一人。レーティングゲームが迫り、重い溜息を吐く者が居た。
「はあ……」
「憂鬱そうだな」
目の前で溜息を吐く一誠に、シンは買ってきた缶コーヒーを手渡す。
今は昼休憩の時間であり、食事を簡単に済ませると一誠の方が話したいことがあると呼ばれ、屋上付近の階段に連れてこられた。
(そういえば前にもここに来たな)
まだ魔人の力に目覚めていないときであり、シンと一誠が顔見知り程度の間柄のときのことである。
「ちょっとな……レーティングゲームが近付いているせいか、夢見が悪いんだよ」
「嫌な夢でも見たのか？」
「……ああ、とびっきり最悪なのをな」
「内容は？」

「……アーシアがあいつに取られていく夢だよ」
口に出すのも嫌なのか、表情を顰めると気分転換でもする様に手渡された缶コーヒーを一気に飲み干し、その表情を今度は苦々しいものへと変えた。
「……また無糖かよ」
「最近甘ったるい思いをしているお前には丁度良い」
冥界でソーナとのレーティングゲームが終わった後、一誠に小猫が懐く姿を度々見る様になった。膝の上に座るなどのスキンシップをしている。尤もシンが来ると恥ずかしがって飛び退いてしまうが。
小猫は一誠を異性として意識しているが、シンには父性を意識しているようであった。シンの前では流石にベタベタと触れる真似が出来る程図太くは無いらしい。
小猫が積極的になったことで、相乗効果としてリアス、朱乃、アーシア、ゼノヴィアも積極的に行動する様になった。何時ぞやの体育倉庫の件などがいい例である。
通常の男ならば泣いて喜ぶ様な展開。だが、当の本人はというと――
「甘ったるいって……何が？」
自分の境遇に無自覚。リアスたちの好意も、可愛がられている、頼られている、懐かれているという認識に変換されている様であった。
鈍いと言えば鈍いが。ここまで来るとある種の卑屈さを感じてしまう。自分なんか

がモテる筈が無いという後ろ向きな考えを常に持っているのではないかと思ってしまう。

　いっその事、『皆、お前のことを異性として好きなんだ』と言ってしまえば色々な意味で全てが終わるだろうが、そこまでいくと不粋という言葉では片付けられないことになってしまう。

「――まあ、いい。気にするな。話を戻そう。その悪夢がどうした？」

「う、ううん？　……分かった」

　これ以上この話題を続けても何も進展しないと思い、さっさと切り上げる。一誠は微妙に納得出来ていなかったが、本題を優先することにした。

「……俺はさ、アーシアを絶対にあいつなんかには渡さないつもりだ。どんな強くても絶対にだ。でも、それでも、嫌でも万が一のことを考えちまう」

　誓った言葉にも想いにも？偽りは微塵も無い。しかし、不安というものは完全に拭い切れるものでは無い。

『禁手に至ってもまだ不安か？』

　弱音を洩らす一誠に、ドライグが問う。だが、声色に責めているものは感じられない。

「そうだな……それでもまだまだダメだって感じる」

『ふっ』

素直に答える一誠。返ってきたドライグの反応は笑い声であった。
「何だよ。折角、禁手になってもこんな風に思っているのがおかしいか？」
『そうじゃないさ』
「逆だ。禁手が出来ても、そのまま胡坐をかくことなく強くなりたいと思っていることに安心したんだろ？」
「そうなのか？」
『……どうだかな』
それだけ言ってドライグは引っ込んでしまった。一誠には、正確に内心をシンに見抜かれて照れた様に感じられた。
「あれこれ不安に思うのは別におかしいことじゃない。当然のことだ。何も感じないより遥かにましだ」
「そうか？　そうなのかー？」
「そういうことにしておけ」
「強引だなぁ。ははっ」
不安が完全に払拭された訳ではないが、誰かに聞いてもらったこと、不安を抱えている自分を肯定されたことで、一誠はこのことを話す前よりも気持ちが軽くなった気がした。

「というか、俺じゃなくても素直にリアス部長たちに話しておけば良かったんじゃないか？　弱音吐いてもきっと受け入れてくれる」
「いや、間薙が物凄く口が堅そうに見えるってのがあるけど、……やっぱ女子の前で男としてあんまり弱さを見せたくないというか、カッコよくありたいというか……」
「俺は、お前のことをカッコイイとは一度も思ったことが無いがな」
「酷いな！　おい！」
　さらりと言われた台詞に、軽くショックを受ける。
「色々と予想は出来ないが、何だかんだで頼りになるとは思っている」
「え！　いや、まあ、その、なあ、うん……」
　続いて言われた思いがけない台詞に思いっきり照れてしまい、上手く返事が出来ない。一誠も、シンに対して対抗心と共に敬意も持っているので、そんな相手から褒められると照れと喜びの感情が湧き、それが中々消化出来ない。
「やっぱりカッコよくは無いな。寧ろ気色悪い――」
「しみじみと言うな！　しみじみとっ！」
　赤面している一誠を見てのシンの感想に、湧いていた感情も一気に吹き飛ぶ。
「全く……でも、少しスッキリした。悪いな、愚痴って」
「気にするな」

会った時から変わらないクールなシンの反応に苦笑しつつ、こういう常に冷静な態度だからこそ信頼出来るのだと一誠は実感する。

これでこの話も終わりかと一誠は思った。

「……お前の不安とは違うが、俺も今回のことで少し懸念していることがある」

「お前も？」

「相手が大人しく引き下がるか、ということだ」

「それって、レーティングゲーム以外で仕掛けてくるかもしれないってことか？」

「そういうことだな」

シンはディオドラに対しきな臭いものを感じていると同時に、アーシアへの暗い執着心も感じていた。そんな相手が、レーティングゲームに負けて大人しく従うのか疑問が出てくる。

「自分から提案したことなのにか？」

「約束を持ちかけた側が、それを反故にするなんてよくある話だ」

無条件に他人を信じない。それが悪魔だろうと天使だろうと人だろうと。だが逆に言えば、何か条件に合うものを感じ取れれば必要以上に信じてしまう。それは、シンの無自覚な良さであると同時に悪癖とも呼べた。

「それは……そうだな」

一誠もディオドラに不信感を持っているので、シンの言葉を否定しない。しかし、そうなると新たな問題が出てくる。
「勝って全部が済まないとなると、アーシアを四六時中守らないといけないな」
一誠はそう言うが簡単なことでは無い。どんなにアーシアへ張り付いたとしても隙が生まれない保障は無い。
「アーシアから絶対に離れず、絶対に守る方法か……そんな都合の良い方法なんて――」
「一つ心当たりがある」
「――あるのかっ！」
「ただし」
「ただし？」
「多分、簡単には出来ないかもしれない。いや、ある意味では簡単かもしれないが……」
「何だそれ？」
歯切れ悪い台詞に、一誠も訝しむ。
「一つ確認したい。アーシアの為に頑張れるか？」
「当たり前だろうが！　アーシアの為なら何だってしてやる！」
「何だって、か」
「何だって、だ！」

「それは良かった」
シンが薄く笑う。その笑みを見た瞬間、一誠の背中に悪寒が走った。何か良くないことが今から起きると本能が警鐘を鳴らす。
「俺とお前、それとピクシーたち。あと何人か必要だな。探してみるか」
「え、本当に何するんだ？」
「場所は……アザゼル先生に頼んでみるか」
「おい」
「取り敢えず部長たちには、今日の部活には出られないことを伝えとかないとな」
「おい！」
「家にも連絡を入れておけ。遅くなるかもしれないからな」
一誠の不安を無視してシンはどんどんと話を進めていく。
「マジで何をするつもりなんだよ……？」
「放課後の楽しみにしておけ」

◇

夜更けて兵藤宅のチャイムが鳴らされる。それを聞き、慌てて玄関に向かってくる足

音。間も無くして勢い良くドアが開かれた。
「イッセーさん！　あれ？　間薙さん？　え！　イッセーさん！」
ドアから現れたのはパジャマ姿のアーシア。部活動を休み、家にも遅くまで帰って来ない一誠を心配し、一誠が帰ってきたのかと慌てて出たが、玄関先に立っていたのはシン。そして、その背に負われているのは、白目を剥いて気絶している一誠であった。
「ど、どうしたんですか!?」
一誠は顔も傷だらけで、制服もボロボロ。何か激しい戦いを終えた後の姿をしていた。
「アーシアか。丁度いい」
背負っていた一誠をアーシアの前に下ろす。良く見ればシンの制服もボロボロであり、顔には乾いた血が張り付いている。
「イッセーさんも間薙さんも、どうしてそんな！」
「明日に向けてのちょっとした特訓みたいなもんだ。後は任せた」
「え！　間薙さん！」
詳細は話さずシンはさっさと立ち去っていく。若干重い足取り。シンも相当疲労している様子であった。
何が起こったのか聞きたいアーシアであったが、目の前で転がる一誠を放っておくこ

とが出来ず、リアスたちが来るまでの暫くの間、呆然としているしかなかった。

◇

「おや？　何処かに出かけるのかい？」
「見学」
「見学……ああ、そうか。『彼』がこちら側に出てくるのか」
「そう。我、会ってくる」
「そういうことなら」
「ルイもベルも、来る？」
「ああ。僕らも久々に旧友たちの顔を見ておこうと思ってね」

包囲、参戦

「これかな？　うーん。これじゃない……」

イリナは天界の資料室にてひたすら本を漁っていた。

ディオドラが持ってきた眷属のカタログを偶然目にしたときから、強い引っ掛かりを覚えて以降、毎日資料を調べているが、一向に手掛かりは見つからない。

何故ここまでするのか、それはイリナ自身にも良く分からなった。ただ、何処かで見たことがあるというあやふやな記憶だというのに、どうしても胸の中の引っ掛かりを無視することが出来なかった。

調べ終えた本を本棚に戻そうとする。しかし、自分の身長よりもやや高い位置から取った物なので、イリナは爪先を立て、腕を限界まで伸ばして本を元の位置に挿し込もうとする。

「ううー」

本の角が棚の上に辛うじて引っ掛かるが、そこから先に押し込むには高さが足りない。何とか押し込もうと悪戦苦闘するイリナ。

すると、イリナの頭上を誰かの腕が通過し、本の背表紙を指先で触れるとそのまま押

し込む。
　イリナは振り返る。背後に立つのは、金髪に緑の瞳を持つ美青年。歳はイリナの三つか四つ上。その身に纏う神父の服が、その青年の容姿をより清廉としたものへと変える。
「ジョ、ジョーカー！」
「はいはーい。ジョーカーことデュリオ・ジェズアルドですよー」
　整った容姿からは想像出来ない軽く陽気な喋り方であった。
『ジョーカー』。イリナと同じ転生天使であるが、各熾天使の配下である十二名の『御使い』には含まれない。名が表すとおり彼だけの称号であり、天界の切り札と呼ばれる存在でもある。
　そして、最も注目すべきことは、一誠やヴァーリと同じく彼も神滅具の所有者である。尤も、イリナは彼が神滅具を使用している姿を見た事は無いが。
「ジョーカー。何故ここに？」
「何か、イリナちゃんが毎日の様に調べ物をしているのを小耳に挟んだので。ここは一つ何かお手伝いでもと思ったわけッス。ああ、あとジョーカーじゃなくてデュリオって呼んでくれる？　同じ天界で働く者同士、称号で呼び合うのって堅苦しいっしょ？」
「えーと……」

　デュリオとはあまり会話をしたことがないイリナ。ましてや相手は同じ『御使い』でも遥か格上である。自然と緊張してしまう。
　すると、緊張し戸惑っているイリナを見てデュリオはある誤解をしてしまう。
「あ！　もしかしてナンパされているって思った？　違うよー。違う違う。あんまり交流が無いから仲良くなろうってのは本気だけど、俺ってさ、自分よりも年下を見ると何かお節介を焼いちゃうんだよねー。癖みたいなもんだよ」
　人を和ます様な柔らかい笑みと気さくな喋り方に、イリナの緊張も自然と解けていく。
「じゃあお言葉に甘えて、お手伝いを頼んでもいいかしら？」
「どんと任せない。天使が天使に頼っても罰なんて当たらねぇっス。それで何を調べてたの？」
　イリナの頼みを快諾し、早速イリナが何を調べていたのか尋ねてくる。
「これなんだけど……」
　イリナは、デュリオに調べることになった経緯を軽く説明した後眷属のカタログを見せ、既視感を覚えた人物のページを見せる。
「うーん？　綺麗なお姉さんだとは思うけど」
「何処かで見た事があるのよね……」

「でも、これって悪魔の眷属なんだよね？　どういう接点で？」
「それは……そうなんだけどね」
　イリナは幼い頃から教会に所属しており、イリナの親も教会の関係者である。箱入りもとい教会入り娘のイリナが、悪魔の眷属に見覚えがあること自体不自然と言えた。少なくとも過去のイリナならば、分かった瞬間には相手を滅ぼしている。
「絶対何処かで会った筈なんだけどなー……」
　もう一度記憶を思い返すイリナ。だが、やはりハッキリとは思い出せない。すると記憶を掘り起こすことに意識が割かれ、ページを押さえていた指がページの縁へと無意識に移動し、その縁で指の腹を滑らせてしまった。
「いたっ！」
　没頭していたイリナは、突然の鋭い痛みで反射的にカタログから手を離してしまう。その拍子に、ページが一枚捲れ上がる。
「いたた」
　指の腹を見ると、紙で切れて浅い切り傷が出来ており、血が少し滲んでいた。
「おいおい。大丈夫かい？　イリナちゃ――」
　デュリオの言葉がそこで途切れる。不自然に会話を止めたことを不審に思い、デュリオを見ると、彼の目はカタログを凝視していた。

「嘘だろ……マジか……」
陽気な表情は消え、愕然としたものとなる。
彼の目に映るのは、そのページに載っているある眷属の写真。
「この人がどうかしたの？」
「……イリナちゃん。俺、この人知ってるよ……」
「えっ！　本当に！」
驚くイリナ。
デュリオはまだ動揺しているが、その人物が誰か説明し始める。何かをしなければ揺れる自分の心を鎮めることが出来ないと分かっていた為である。
「俺がまだ教会の施設に居た頃にこの人と会ったんだ。差し入れで見たこともないお菓子を一杯持ってきてくれてさ。高い菓子だったんだろうなぁ……凄く美味しくってさ、俺もそうだけど弟たちも妹たちも皆喜んでたよ」
「教会の……施設に!?」
「間違いない。……この人はあの時のシスターだ」
シスター。その言葉に驚愕すると同時に、イリナの脳内で繋がらなかった記憶と記憶を結びつけるパーツとなってそれらを繋ぎ合わせ、スパークさせる。
そしてイリナは思い出す。過去の記憶を。

父に連れられてやって来た教会。父と挨拶をする女性。母親よりも歳が近い大人の女性に少し照れて父の後ろに隠れてしまうイリナ。そんなイリナを慈しむ様な笑みを向ける女性。

その女性の顔は、イリナが引っ掛かりを覚えた眷属の女性と同じ顔であり、そして、その女性もまたシスターであった。

「あああー！　思い出した！　思い出した！　そうだ！　あの時の！　あの人もシスターだったんだ！」

胸の引っ掛かりが全て消える。ようやく答えを見つけることが出来た。しかし、そこに爽快感などは無い。

引っ掛かりの後にイリナの胸中で次に生まれたのは、疑惑と不安であった。

「じゃあ、もしかして他の人たちも……？」

カタログに載っている他の女性たち。イリナの記憶には無いが、残りの女性たちも教会関係者である可能性が強まる。

「アーシアさんのことも……？」

彼女たちの主であるディオドラは、今アーシアを狙っている。彼女もまたシスター。三度も続けばそれを偶然と流すことなど出来ない。

それにもっと気になることがある。ディオドラがアーシアにプロポーズをした切っ

掛けは、アーシアが彼を神器で治療したからである。傍から見れば美談だが、彼の眷属にシスターの女性たちが居ることで一気に疑わしいものへと変わる。
　出会いそのものが仕組まれたことかもしれない。
「アーシア？　それってリアス・グレモリーの眷属になったアーシアちゃん？　元シスターの？」
「……ええ。アーシアさんは、今このカタログの主にプロポーズを迫られているの」
「へえ……。それはそれは。胡散臭いねぇ……」
　デュリオもまたイリナと同じくディオドラへの強い疑惑を抱く。
「ちょっとこれは言っておいた方が良いんじゃない？」
「そうね。もうすぐリアスさんの――」
　そこで言葉を区切り――
「あああああああああああああ！　忘れてたぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
　――絶叫する。
　いきなり叫び声を聞かされ、デュリオは目を白黒させているが、イリナはそんなデュリオの両肩を掴んで激しく前後に揺さぶる。
「今何時!?　今何時!?　今日レーティングゲームがあるってすっかり忘れてたの！」
「イリナちゃん。取り敢えず落ち着こう。そんなに揺さぶられちゃ、時計も見られない

からね」
慌てるイリナを宥める様に落ち着いた声を聞かせるデュリオ。
「そ、そうね。お、落ち着いて落ち着いて。スーハー」
深呼吸し、何とか気を静めようとする。
「それで今何時？」
「今は――」
デュリオから聞かされた時間。それはレーティングゲームの開始時間を過ぎた時刻であった。
「あーもう始まってるー！　急がなきゃ！」
イリナは走り出そうとするが、急停止してデュリオと向き合うと勢い良く頭を下げた。
「ありがとう！　おかげで知りたかったことが分かったわ！」
時間が無いことは分かっている。だが、どうしてもデュリオには礼を言わなければならなかった。彼の言葉があったからこそ思い出したかったことを思い出せた。
「じゃあ、私行くね！」
全速力でイリナは駆け出し、部屋から飛び出る。
目指すは天界に設置されている冥界への転送用魔法陣。

はしたないとは分かっていても一歩を大きくして前に走る。
タン。タン。タン。タン。
タッタッタッタッ。
タン。タン。タン。タン。
タッタッタッタッ。
「え？」
自分の大きな足音の間隔を抜ける様にして聞こえる短い足音。それもすぐ背後から聞こえた。
思わず振り返ると、そこにはデュリオが付いてきており、イリナが気付いたのを見て笑顔で手を振る。
「え？　えー！　何で付いて来たの！」
「このまま何もしないなんて後味も悪いじゃん？　俺も行くよー」
「えー！」
イリナは本日何度目か分からない叫び声を上げた。

◇

シンたちが魔法陣で転送された先は何処かの廊下であった。豪華な絨毯が敷かれた長い通路。壁には一定の間隔で扉が設けられている。

リアスたちのレーティングゲームを観戦する為に、オカルト研究部の魔法陣で一緒に転送されたシンたち。

リアスたちの姿は無い。恐らくレーティングゲームのバトルフィールドに居るのだろう。シンの側に居るのはいつもの仲魔たちである。

「――ここから何処に行けばいいか分かるか？」

「知らなーい」

「オイラたちは前に案内されたホ」

「今回はいないみたいだね～」

てっきりそのまま観戦席へと送られるとばかり思っていたので、何処かも知らぬ場所に送られ少し困ってしまう。

闇雲に扉に入る訳にもいかず、どうしようかと思っていたとき、通路の向こう側から誰かが来た。

「間薙シン様ですね？」

「そうですが……」

見知らぬ女性。品のある清楚な顔立ちをしているが、着ている服はやけに肌の露出し

たものであり、扇情的にも下品にも見え、あまりこの女性には似合っていないというのがシンの感想であった。

「我が主が貴方方に特別席をご用意しました。どうぞこちらへ。案内致します」

女性が誘導しようとするが、シンの足は動かない。

「どうかしましたか？」

「一つ質問が」

「何でしょうか？」

「我が主というのは？」

「ディオドラ・アスタロト様のことです」

「そうですか」

質問の答えを聞いて、シンの止まっていた足が動き出す。

シンも女性も黙ったまま特別席に向かう。本来ならば重苦しい空気が漂っていてもおかしくはないが、そんな空気を吹き飛ぶかの様に仲魔たちが喋り続けていた。

仲魔たちのお喋りを耳に通しながら、シンは少し考える。

特別席を用意したと言われて、正直な感想として不自然さしか感じられない。ディオドラとは一度会っただけ。碌に会話もしていないし、ディオドラの嫌悪を隠さない露骨な態度を見て、相手を気遣う奇特な人物にも思えなかった。

（何か仕掛けてあるのか、それとも万が一の考えだが……純粋な善意かもしれない）
後者だったら間違いなく驚くだろうが。
（まあ、ここであれこれ考えても仕方ない）
何かあると予想しつつ、敢えてその中に飛び込む。答えとは結局行動しなければ明かされない。
「こちらです」
女性がある扉の前に立ち、開く。中を覗くと観戦用のモニターと席が置かれていた。
シンたちが部屋の中へと入ると、女性は出入口でシンたちに頭を下げる。
「では、どうぞごゆっくりお過ごしください」
そのまま扉が閉まり、女性の姿は扉の向こうに消える。
部屋の内部を改めて見回す。巨大なモニターに、シンたちよりも遥かに多い席。ちょっとしたシアターであった。
「アタシここー！」
「オイラはここホ！」
「ボクはいいや～。浮けるし～」
「ナンダコレハ？　邪魔ダ」
ピクシーとジャックフロストは一番前の席を隣り合って座り、ジャックランタンは席

に座らずにピクシーたちの頭上に浮き、ケルベロスはそもそも席に座るという考えが無いらしく床に横たわった。
シンはどの場所でも良かったので、最後方の席に座る。
モニターにはまだリアスたちのレーティングゲームは映されず、灰色の画像のままであった。
いつ始まるのかとシンが思っていたとき誰かが右隣の席に座る。扉の開いた音も閉まった音もしなかった。
右隣を見る暇も無く今度は左隣の席にも誰かが座る。
挟み込む様にして座る二人の人物。
眼だけを右隣へと向けると、視界に入り込むのは銀色に輝く拳銃の銃口。そして、その奥に見える歪みと狂気を孕んだ笑み。
「お・ひ・さ・しぶりー。間薙くぅーん」
「……フリード」
聖剣にまつわる騒動のとき以来の再会であった。尤も、二度と会いたくないと思っていた人物である。顔を見た瞬間からシンの気分は最悪のものとなっていた。
「相変わらずのクールなお面ですこと。はぁームカつく。その顔、？ぎ取りたくなってきちゃう」

シンのことを相変わらずというが、シンからしてみても、フリードは相変わらず自らの狂気や殺気を隠さず、人を不愉快にさせる言葉を吐き続けている。
「もっと驚いちゃってもいいのよん？　例えばこれを見てさー」
これ見よがしに右手を振ってみせる。
木場の聖魔剣によって切断された筈のフリードの右腕は何事も無かった様に動いている。通常、切断から再接合し、そこから元通りに動くまで長い年月を必要とするが、摩訶不思議が罷り通る裏の世界に於いては、それは驚嘆に値しない。だが、木場の力を小馬鹿にしているようで、シンは驚きよりも不快さを感じていた。
「これから死ぬ相手に一々反応を期待するな、愚か者め」
左隣の席に座る人物が無駄口を叩くフリードに吐き捨てる。
フリードの登場よりも、シンにとってはその人物の登場、もとい生存の方が驚きに値した。
「――ドーナシークか」
「私の名をきちんと覚えていたか。結構。忘れていたら即座に殺していたところだ」
シンに光が灯る指先を向けながら、ドーナシークは冷笑を見せた。
記憶の中で、限りなく殺し合いに近い戦いをした堕天使。レイナーレとの戦いのときにリアスによって協力者の堕天使たちと一緒に葬られていたと思っていたが、何の因果

か偶然か、今日この日まで生き延びていた。あの時よりも更なる力を身に付けて。
「生きていたとはな」
「ふん。私は――」
「ええ。ええ。私たち共々今日まで恥ずかしながら生きてまいりました！　日頃の行いがいいのか、あと少しでマジ逝きそうっ！　てな瀬戸際で拾われたわけですよ、『禍の団』に！　うーん！　何という主役補正！　これは間違いなく主役の器！　皆さーん！　フリード・セルゼンを主人公にした俺ＴＵＥＥＥＥ作品を作るなら今ですよー！」
「……」
ドーナシークでは無くフリードが答える支離滅裂な内容であったが、二人が『禍の団』に拾われたことは分かった。ここに来た理由が、私怨なのか任務なのかまでは分からないが。
「何をしに来たんだ？」
思わず聞いてしまった。状況を見れば一目瞭然だが、敢えて聞く。挑発を兼ねた言葉であったが、シンに恨みを抱く二人には良く効いた。浮かべていた笑みがあっという間に憤怒の表情に変わる。
「え？　何？　嘗めてんの？　この状態が答えでしょ？　それとも間薙きゅんはこの危機的状況が御理解になれないの？　馬鹿なの？　それとも脅威とも思ってないの？」

「この状況で詰まらない冗談は控えた方が良い。今の私はあまり気が長い方では無い」
早口で捲し立てるフリード。一言一言に絶対零度の殺意を込めるドーナシーク。追い詰められている側はシンだというのに、追い詰めている筈のフリードたちの方が精神的余裕を感じられない。今すぐにでも爆発しそうな感情を辛うじて引き留めているという様子であった。
するとフリードは怒りの表情を一変させ、粘質さを感じさせる昏い笑みを見せた。
「もしかして自分の命には無頓着系？　だーったーらー」
フリードの構えていた銃の先が仲魔たちの方に向けられる。
「お仲間ちゃんたち殺ってやろうか？　あ〟あ〟っ！」
実力は在るのにその口から出る言葉はそこら辺の不良よりも品が無い。そして、その忍耐力の無さはそれ以下という質の悪さ。
仲魔たちに狙いを定めた凶弾。だが、この状況であってもシンに焦りの色は無かった。
「その銃を突き付けていた状態なら五分五分だったかもしれないが、今なら確実にこちらの方が速いな」
冷静な言葉で冷めた現実を突き付ける。どこまでも薄い反応にフリードの苛立ちは最高点に達しようとしていた。

「その前に間薙くんのお友達に風穴が空くよぉ？　とびっきり綺麗な穴がさぁ」
「自分の命よりも他人の命が優先か――」
ハッと息を短く吐いてシンは薄く笑う。それは彼には珍しい嘲笑であった。
「偉いな。聖職者として少し成長したか？」
シンの皮肉と事前に見せられた嘲笑で、フリードの怒りが最後の一線を越える。
それにドーナシークが気付くが、止める暇も無くフリードの銃口が再びシンに向られた。
「死ね」
血走る目にシンを映し、ありったけの殺意を込めた台詞と共にフリードは引き金を――
鞘から剣を抜き放つ様に、シンの手が空を裂き、向けられた銃口に指先を掠めさせる。
――引いた。
シンの指先が掠めたことで本来の照準から数ミリずれる。常人にとっては誤差程度のずれだが、シンにとってこの数ミリは大きなものであった。
手を抜き放つと同時に、シンは体を背後の背もたれに沈めさせる。上質な素材で出来ている故に体が良く沈む。
眼前を通過していく弾丸。回転しながら発光するそれは、浮き上がったシンの前髪の

下を潜り抜けていく。
フリードの狙いは外れた。しかし、シンの狙いは当たる。
「――ちっ！」
外れた弾丸の先にはドーナシーク。直前までシンの頭部が弾丸を隠していたせいで、反応が遅れ、回避には間に合わない。
それが分かっているドーナシークは、舌打ちと共にシンに向けていた指先を弾丸の方に向けざるを得なくなってしまう。
ドーナシークの指先から一直線の光が伸び、迫る弾丸を貫き消滅させる。
勝手な真似をしたフリードに殺意しか湧かないドーナシークであったが、今はそれを後回しにし、席に体を沈めたままのシンにもう一度狙う。
フリードもまた拳銃の引き金を引こうとする。
シンは動かない。
動く必要が無い。
既に動いている者たちがいるから。
ピクシーの掌が、フリードに向けられ、そこから閃光と共に波打つ雷が放たれる。
ジャックフロストの指先がドーナシークを指すと、宙に無数の氷柱が発生し、それらが一斉に放たれた。

ピクシーの電撃が拳銃に命中し、フリードは咄嗟に拳銃を手放す。
ドーナシークはシンを狙うのを止め、飛んで来る氷柱へ掌を翳し、光の壁を作ってそれを防いだ。
「このっ！」
フリードが怒声を浴びせようと矢先、視界に飛び掛かってくるケルベロスの姿。
「アオォォーン！」
ケルベロスは咆哮と共にその爪を振り下ろす。
フリードは躊躇せずに己の右腕を突き出した。ケルベロスの爪がフリードの右腕に喰い込む。すると、爪と腕の間に火花が飛び散り、異質な音が鳴る。
ケルベロスの一撃で壁端まで飛ばされたフリードであったが、右腕は切断されず、袖が裂かれた程度であった。
全ての氷柱を防ぎきったドーナシークは、光の槍を作り出し、それをシンに投擲しようとする。
その直前、何者かに肩を叩かれる。
思わず振り返るドーナシーク。そこには視界一杯に広がる笑うカボチャ。
「ばあっ」
悪戯を成功させた無邪気な声と共にジャックランタンの口から炎が吐き出される。

「ぐっ！」

一瞬にして全身を火達磨にされるドーナシーク。纏わる炎を振り払う様に体を捩る。

「邪魔するんじゃねぇよ！　この犬畜生がっ！」

殺気をまき散らしながら、フリードは壁際からケルベロスの所まで一足で跳躍する。意趣返しの様に右腕を振り上げた姿で。

だが、その右手がケルベロスに届くことは無かった。横から伸びたシンの手がフリードの右手を掴み取る。

このままへし折ってしまおうとシンが力を加えようとしたとき、背筋に悪寒が走る。フリードの口の端が吊り上がると同時にシンは掴んでいた手を放していた。

手を放した直後、フリードの右腕から袖を突き破って刃が突き出る。

指先に刃が触れる感触が僅かにあった。素早く引いて、手の指先を見る。小さな切り傷、しかし、そこから白煙が上がっている。

この現象にシンは見覚えがあった。

「その右腕……聖剣か」

「大、正、解。あー、惜しい惜しい。今頃こうなってたのに」

突き出た刃から、更に無数の刃が生える。あと少し掴んでいる時間が長かったら片手が使い物にならなくなったかもしれない。

「いい性能でしょう？　じいさん特製のこの義手。『擬態の聖剣』の能力をコピーして作ってあんだよねー」
新しい玩具を誇る様に、フリードは右腕を見せびらかす。
一方でシンはフリードの右腕よりも言葉を気にしていた。
じいさん。聖剣、それもエクスカリバーの複製。自ずとある人物を連想させるが、その人物は間違いなく死亡している。死亡したときも、その遺体が回収されたのもシンは見ていた。
「お前の口の軽さは、その頭の中身の軽さと直結しているのか？　フリード」
燃え盛っている炎の中からドーナシークがフリードに嫌味を飛ばすと、体を一瞬震わせて、纏わりついていた炎を全て弾き飛ばす。飛び散った炎が部屋中に撒かれる。
衣服の一部から煙が上がっているが、ドーナシーク自身は全くの無傷であった。
燃え跡を軽く叩きながらドーナシークはシンを睨み付ける。
「無いものに重いも軽いもあるのか？」
ドーナシークの嫌味にシンは挑発の言葉を重ねる。するとドーナシークは一旦シンから視線を外し、フリードを見た後、鼻で笑った。
「確かに」
「ああん？　うっせーんですよ！　てめぇらは！　さっさとちゃっちゃとやんぞおらぁ

！　他の連中はとっくに動いてんだ！　何の為にクソ悪魔に頼みたくも無いのに下手に出て頼んでこいつを隔離したと思ってんだっ！　うらぁっ！」

激怒し感情のままペラペラと喋るフリード。明らかに簡単に喋っていけないことも含まれており、ドーナシークは苦虫を噛み潰した表情をしていた。

「こいつもそうだが、お前も殺したくなる」

フリードとドーナシークは、仲間などという馴れ合いの関係では無い。偶々、殺すべき相手が一致しているだけに過ぎない。

ドーナシークは、フリードの隠そうとしない狂気と考えの無さを嫌い。フリードは自分のすることに一々文句を言ってくるドーナシークを心底疎ましく思っている。

状況によってはシンと纏めて殺してしまおうかと、ドーナシークとフリードも密かに企んでいた。

「うざってえ！　うざってえ！　無駄口叩く暇あんならさっさと連れて行くぞ！　死にぞこない堕天使が！」

「ほざけ、三流以下のエクソシストが」

吐き捨てながらドーナシークは指を鳴らす。すると、部屋の内部に無数の文字が浮かび上がり、魔力の光で輝き始める。

変化はすぐに起こる。シンの肉体が、部屋に描かれた文字と同じ光を放ち始めた。フ

リード、ドーナシークも同じ現象が起きている。
（この感覚は……）
転送用魔法陣で飛ばされるときと似た感覚。この部屋自体それが目的で作られていたらしい。
（確かに特別席だったな）
この部屋に入った時点で、自分の失敗であったと認め、自嘲する。
仲魔たちを見る。仲魔たちは光に包まれていない。飛ばされるのはシン、フリード、ドーナシークだけであった。
間もなくここから消える。そして、恐らく『禍の団』が攻めてくる。
だが、一言だけ仲魔たちに伝えることが出来た。
「生き延びろ」
戦っても、逃げても、隠れても、何をしてもいい。また生きて再会する為に生きろと告げる。
光が最大まで高まる。その輝きに、ピクシーたちは目を瞑ってしまった。
時間にして数秒。ピクシーたちの視界が元に戻ったとき、シンたちの姿は室内から消えていた。
「何処に行ったの―！」

ピクシーが叫ぶ。返事は無い。心の中で呼ぶ。同じく返事は無かった。
「グルルル……！」
シンの消失に不安を抱くピクシーたちに追い討ちを掛ける様に状況は深刻なものへ変わっていく。この場に於いて真っ先にそれに気付いたのは、やはりケルベロスであり、周囲に警戒させる為に唸り声を上げる。
「うわっ。ぞわぞわしてきたー……」
「ヒホー！　ヒホー！」
「ヒ～ホ～。これはちょっと不味いかも～……」
遅れてピクシーたちも感じ取る。背筋に寒気が走るほどの速さで増えていく魔力の気配。それも一つ、二つという生易しい数では無く、桁が三つ、四つ違うほどの数が感じられた。
「グルルル……コチラニムカッテキテイルナ」
ケルベロスが相手の動きを敏感に察知する。
「ドウスル？」
ケルベロスは敢えてピクシーたちに問う。今、この中で最も強いのはケルベロスである。自分が戦えばピクシーたちを守れるという自負もあったが、ケルベロスは知りたかったのである。

命のやりとりが行われるだろうこの状況下で彼女らがどんな選択をするのか。答えによっては、彼女らの今後の立ち位置が決まる。

「決まってるじゃん」

答えはすぐに返って来た。

◇

『禍の団』に属する旧魔王派に傾倒する悪魔たちは、内通者の手引きにより魔法陣によって次々に送られてくる。

下級から上級までの悪魔たちが数を多く揃え、呑気に観戦しているであろう現魔王は勿論のこと、その血縁者、観戦に招かれた神々全てを根絶やしにする為に息巻く。

誰であろうと見つけ次第抹殺する。悪魔が悪魔らしく生きることを是とする彼らは、魔力の気配がする扉に気付いた。

中に誰が居るかまでは分からないが、全滅を目的とする彼らにとってはどうでも良いこと。

一人が扉の前に立ち、それを開けようとするドアノブに手を掛ける。

その瞬間を見計らったかの様に扉が爆ぜる様に飛び、部屋から飛び出した何かが扉の

前に立っていた悪魔は扉ごと壁に叩き付けていた。
相手側の強襲に驚く旧魔王派の悪魔たちは、部屋から飛び出してきた獣に警戒する。
獣ことケルベロスは、片前足で扉ごと悪魔を押し付けながら、射貫く様な眼光を他の悪魔たちに向け、その喉から唸り声を鳴らす。
「何だ貴様は！　誰かの使い魔か!?」
「グルルル。コタエルヒツヨウハ――」
一旦片前足を扉から放し――
「ナイ」
――最後の言葉と同時に再び前足を扉に叩き付ける。その威力で扉は真っ二つに砕け、押し付けられていた悪魔は、今度はケルベロスの前足と壁によって頭を挟まれる。
挟まれた悪魔の顔が、他の悪魔たちには半分しか見えない。壁にめり込んでいるのか、それとも潰れてしまったのか。答えはどれであれ、ケルベロスの前足の隙間から滴る血は他の悪魔たちの血を沸騰させる理由には十分である。
「貴様ァァァ！」
同志の流れ出る血に激昂した悪魔たちが、ケルベロスに魔力を放とうとする。
「あがっ！」
だが、直前に光が走り、その内の一人は背骨が折れそうなほど仰け反りながら痙攣。

「ぐあっ！」
また別の一人は拳よりも大きな氷の塊を鼻頭にぶつけられ鼻血を流して悶絶。
「うあああああ！」
更に別の悪魔は、衣服が燃え上がり広がっていくそれを慌てて消そうとする。
ケルベロスに意識を割いていた悪魔たちは、部屋から少しだけ覗いている者達――ピクシーたちの存在に気付くことに遅れ、下級ではあるが三人の悪魔が傷を負わされる羽目になった。
「まだいたのか！」
ピクシーたちの存在に気付いた悪魔が、ケルベロスから狙いを変え、ピクシーたちに魔力弾を放つ。
鉄の板すら軽々と貫くそれを、脆弱なピクシーたちの肉体では受け止め切れない。
故に――
「フン」
盾となる為にケルベロスがその身で魔力弾を防ぎ、身を呈してピクシーたちを守る。
「大丈夫？」
「クスグッタイ」
軽く体を振りながら無事であることを告げる。

悪魔の方は、全くの無傷であるケルベロスに瞠目すると同時に、深く誇りを傷付けられる。一切手加減無しで放った魔力をくすぐったい、の一言で片付けられたのである。旧い悪魔の在り方に固執している悪魔にしてみれば、許し難い侮辱であった。

「貴様ッ！」

再び魔力の弾を放とうとする。ケルベロスは、疎ましそうな眼差しをその悪魔に向けた後、大きく口を開く。

悪魔から魔力弾が放たれると、ケルベロスの口から炎が吐き出され、放たれた魔力弾を呑み込み、ついでの様に放った悪魔も炎で包み込む。

「うあああああああ！」

焼かれる全身。何とか消そうと床の上で転げ回る。他の悪魔たちも消火の為に水や氷の魔術を掛けるが、燃え盛る悪魔の炎は弱まらない。まるで『地獄の業火』の如く、相手を焼き尽くすまで激しく燃え続ける。

やがて炎の中で悪魔の動きは弱まり、最後には動かなくなる。消え去る炎。その後には身内ですら見分けることの出来ない人の形をした黒い物体が残るだけであった。

時間にすればほんの数秒。だが、焼かれた悪魔にとってはその何十倍にも引き延ばされた地獄だろう。

無惨な死体と化した仲間の姿に、悪魔たちは哀しみよりも怒りを覚える。

「おのれっ！」
「よくもっ！」
怒りのまま叫ぶ悪魔たち。
アオオオーン。
それすら掻き消してしまう程の咆哮がケルベロスから発せられ、悪魔たちだけでなくピクシーたちですら固まってしまう。
「グルルル。ココハオレガオサエテオク。オマエタチハイケ」
「ヒホ！　一緒に戦うんじゃないホ!?」
「オレトオマエタチデハ、戦イ方ガチガウ」
この中にはお前たちの力が通用しない相手も居る、という言葉をケルベロスは伝えなかった。倒した悪魔はどれも下級だが、それよりも格上が他の悪魔に紛れて何人か混じっていることをケルベロスは感じ取っていた。負けるつもりは無いが、それでも少々骨の折れる相手と察する。ピクシーたちの身を案じて戦える相手では無い。
「でも……」
渋るピクシーたち。仲魔を置いて行くことに抵抗を覚える。
「イキノビルナラバソレガ最善ダ。オレヲシンジロ」
迷いは一瞬。そして、決断も一瞬であった。

「――わかった」
ピクシーが頷いたことで、ジャックフロストもジャックランタンもケルベロスの言葉を信じることに決めた。
「生きてね」
「また会うホ！」
「またね～」
ケルベロスが悪魔たちに睨みを利かせている間に、ピクシーたちは素早くこの場を去っていく。
それでいい、とケルベロスは内心思う。足を止めて戦うよりも逃げながら戦う方が、ピクシーたちには合っている。ここにシンが居れば、逃げずにケルベロスと共にこの場に居る悪魔たちを相手に出来ただろうが、ないものねだりをしても意味が無い。
逃げた先で強い悪魔と出会うかもしれないが、そこはピクシーたちの機転と運を信じるのみ。孤独に生きてきたケルベロスなりに、考えうる他人の心配をしてみた。ここから先は、かつて森を縄張りにしていたときの一匹の獣となる。
獣毛は自身の魔力に反応して逆立ち、肺腑を通って漏れ出す息は外気に触れたときから炎と化す。立てられる爪は、硬石で出来た床を紙の様に容易く裂き、爪痕を残す。
ケルベロスはその全身を以って殺意を示し、目の前で殺気立つ悪魔たちを威嚇する。

人の世界で鈍った体と勘を研鑽するには、獲物の数も十分。
敵に地獄を見せる為、仲魔たちの背を守る為、ケルベロスは悪魔たちへ立ち塞がる番犬と化す。

◇

「……起こってしまったか」
サーゼクスは耐える様に目を深く閉じた後に、そう呟いた。
「予想はついていたことだ。今日みたいな日は、連中にとってはお誂え向きの日だしな」
その隣に座るアザゼルが冷静に答える。
レーティングゲーム開始直前に起きた、『禍の団』それも旧魔王派によるテロ行為。次々と外から敵戦力が送られてくるが、サーゼクスもアザゼルも慌てる様子は無かった。寧ろこのことを彼らは予見していた。
そして、今回のレーティングゲームを利用した包囲陣がアザゼル立案の下敷かれた。
故に各勢力には、襲撃の件について事前に伝えている。誰も彼もが、旧魔王派の掃討に応じ、助力を惜しまないことを誓っている。
兆候はあった。現魔王派に関わる者たちが連続して不審死していた。隠そうとはし

ないそれは、現魔王派に対する旧魔王派の挑発行為であった。当然、警戒を強める現魔王派であったが、その目を掻い潜り犯行を繰り返す。

相手の手口から冥界に内通者が居ることはほぼ分かっていたが、今回のことでそれも確信となった。

しかし、冥界を脅かす旧魔王派を一網打尽にする機会が訪れてもサーゼクスの気が晴れることは無い。寧ろ、暗澹とした気分ですらあった。

道を違えたとはいえ同じ悪魔である。その命が散っていくことを喜ぶことなど出来はしない。

「――サーゼクス」

「……分かっているさ」

サーゼクスは閉じていく目を開ける。これから起こること全てを目に焼き付ける為に。

「サーゼクス様が出ずとも、私ならばいつでも出られます」

自ら出陣することを申し出るのは、サーゼクスの隣に静かに立つセタンタであった。サーゼクスが手を汚さないでいい様に。

「セタンタ……」

同じくサーゼクスの側に立つグレイフィアが、セタンタを案じる眼差しを向ける。彼

の忠義は誰もが認めるものだが、進んで汚れ役をやろうとする。主の望みに反してもそれを全うしようとする危うさがあることを、付き合いが長いグレイフィアとサーゼクスも当然理解している。

「私はそこまで臆病では無いさ」

セタンタの言葉を微笑みと共に流し、サーゼクスは立ち上がる。

「行こうか」

「そうだな。今回の件を言い出した手前、がむしゃらに働かないとな」

アザゼルとてリアスたちを危険に晒す可能性が高いこの作戦を、簡単に決めた訳ではない。しかし、旧魔王派との衝突は決して避けられない道である。今か先かを天秤に掛けた結果今を選び、サーゼクスたちを説得して今回の作戦を実行するに至った。

卑怯者と後ろ指を刺される覚悟も出来ている。

だが、万が一犠牲が出た場合、その責任は――

「万が一なんて起こりませんよ」

気付かない内に接近していたセタンタが、アザゼルの心をまるで見えているかの様な正確さとタイミングで呟く。

「私が起こしませんから」

「……へっ」

言い切るセタンタに、アザゼルは思わず笑ってしまう。流石はサーゼクスの右腕とも呼ばれることはあった。文字通りの心強くなる味方である。
「これが終わったら、サーゼクスも連れて酒でも飲みに行こうぜ」
「それはいいね。ただ、グレイフィアが、ね……」
「大丈夫ですよ。私もサーゼクス様もグレイフィアの目を盗んで動くのは得意ですから」
「……私の目の前で堂々と言わないでもらえますか？」
大きな戦いの前とは思えない程の緩い空気。しかし、内にある想いや強さは本物である。
混沌と化そうとする戦いの場に、魔王（サーゼクス）が出陣する。

◇

「ＨＡＨＡＨＡッ！　騒々しくなってきたじゃねえか」
禍の団によって会場が攻められる中、とある一室で現状を豪快に笑う一人の男。
短く刈った髪に、丸レンズのサングラス、首には数珠をかけており、派手な柄のアロハシャツを素肌に直に着ており、前のボタンも留めていない。会場に招かれた各勢力は

正装でこの場に臨んでいる。その中で最もラフな格好をしていた。
　他者の目や評価など気にしない。裏を返せば他人など眼中に無い。男性からは絶対的な自信と傲慢さがあった。
　旧魔王派の悪魔たちが仕掛けてきたことで、宣誓通りそれらを撃退に向かおうと男の背後で何名か立ち上がる。
「ああ、いい。いい。そこで大人しく座ってな」
　男の言葉で室内に動揺が走る。その動揺を男は笑う。
「ああん？　もしかして真面目に手を貸す気だったのか？　ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　笑わせてくれるＺＥ！　そんだけ生真面目だと将来禿るぞ？　まあ、今も似た様なもんか」
　再び豪快に笑う。
　何名かが抗議する様な目で訴えてきたが、声には出さない。出すことが出来なかった。この場に於いて最高の権力と力を持つのは、この男である。逆らうこと自体天に唾を吐く様なものである。
「よく考えてみろよ。悪魔同士が黴の生えた思想と甘っちょろい思想をぶつけてマジで殺し合っているんだＺＥ？　馬鹿同士の馬鹿な戦いなんて嗤って見てれば十分なんだよ」
　考え方の違いで殺し合う悪魔たちを見下す言葉。

「こんな馬鹿な戦いに首を突っ込むなんて逆に格を下げるだけだっつーの。まあ、そこんとこ分かっていない爺共が居るがな。有象無象を蹴散らす弱い者虐めなんて、俺様の趣味じゃねーよ」

魔王も含む悪魔たちを全て格下と見ている上での発言。だが、それを咎める者など居ない。言い方は乱暴だが、男の言葉は全く間違っていない。

全勢力の中で最強に近い実力を持ち、四大魔王すら凌駕する。神々の王、天帝とその名も最高位の知名度を持ち、聞けば誰もが理解する。

「本当に……本当にそれでよろしいのですか？　……『帝釈天』様」

耐え切れなくなり一人が男の名――仏教における神仏『帝釈天』の名を消え入りそうな声で呟く。

男は、その呟きに反応し、声に出した者の方を向き、ただ笑う。その笑みだけで魂が消し飛びそうになる。

「万が一が起きたら出てやるさ。万が一、がな」

心の底から在り得ないと思いながら、天帝（帝釈天）は静観を続ける。

◇

「おいおいおーい。レーティングゲームはいつから場外乱闘有りになったんだぁ？」

揶揄う様な口調で誰かに問うのは、本来ならばここに居る筈の無いマダであった。

アザゼルの敷いた箝口令は完璧であった。何かを嗅ぎ付けたとかアザゼルの考えを見抜いていたからという訳でも無い。この会場に来るまで本当にマダは何も知らなかった。

ならば何故来られたのか。

それは今日マダが――

『何となくだが、冥界に行ってみよー』

――と唐突に思い付き、神懸かり的な勘で冥界を訪れたせいである。

アザゼルが理由を知れば『ふざけんなっ！』と激怒したことであろう。それほどまで彼の耳にこのことが届かない様に神経を使っていた。

「我ながら良い勘してるぜぇ。こんな楽しそうなことを見逃さないんだから。日頃の行いが良いせいかぁ？　そう思わねぇか？」

再び問うマダ。しかし、彼の近くにその問いに答える者は居ない。

問われた者たち全て、マダの足元で横たわっている。数は数十を超えており、皆顔を素人目で見ても異常と分かるぐらいに紅潮させ、不規則な呼吸、意識を朦朧とさせ、焦点の合わない瞳をしていた。

横たわっている者ならまだマシな方である。中には自ら吐いた吐瀉物に顔を埋めて身動きが出来ない悲惨な状態の者までいる。

全てマダの力によって起こされたことである。

「さてさて。どうしようかねぇ……」

事情を知らずに来たマダだが、下に横たわっている者たちの言動の断片を繋ぎ合わせ、現状を凡そ把握していた。恐らく『禍の団』の奇襲を受けており、足元に転がっているのは、『禍の団』の旧魔王派の悪魔たちである、とほぼ合っている答えを出していた。

既に周囲一帯の悪魔たちは無力化した。このまま次の獲物を探そうかと思っていたが、ふとマダは思う。

何故、アザゼルはこのレーティングゲームのことを黙っていたのか。

自分でも行儀の良い方では無いと自覚はあるが、それでもレーティングゲームを台無しにするほど無作法では無い。ましてや、教え子として――マダなりに――可愛がっている一誠の戦いの邪魔などしない。それは前回のレーティングゲームでも見せていた。

「となると、俺と会わせたくない奴でも居るのかぁ？　なあどう思う？」

倒れている悪魔たちに問うが、返ってくるのは死にそうな呻き声のみ。

「その会わせたくない奴を探すのもありかもなぁ。万が一、それがあいつだったら……」

悪鬼の如き笑みを浮かべながら、阿修羅（マダ）は敵を求めて彷徨い始める。

◇

「――始まったか」
伝わってくる小さな振動。無数の魔力を感じ取り、オーディンは席から立ち上がる。
すると、オーディンが立ち上がったのを見て、その隣に座る者もまた立ち上がろうとした。
「お主はここで座って待っておれ」
立ち上がる前に、オーディンは手を縦に振り、待つように命じる。
動きは途中で止まり、逆回しの様に再び席に腰掛ける。大人しく従い、文句を言わなかったが、その目で不満を訴える。
「わし一人で十分だから大人しく待っておれ。危険だからな」
気遣う様な言葉に、不満に満ちた目は伏せられる。
「まずはアザゼルにでも会ってくる。何かしらの準備があるかもしれないからのう」
そう言い残し、オーディンは音も無く室内から消える。
一人残されたその人物は、オーディンの姿が消えた後も椅子の上で沈黙し続けるのであった。

◇

「……着いたわね」

ゲームフィールドに転送されたリアスたちは、周りを見渡す。

広々とした平野に、石を削って作られた柱が一定の間隔で並んでおり、その先に石造りの神殿が建てられている。

デパート内という場所の限られたレーティングゲームと比べれば、それぞれの力を存分に発揮できる空間と言えた。

審判役からのアナウンスはまだ聞こえない。リアスはこの少ない時間も使い、この場所での戦い方を皆と話そうと思い、眷属たちを見る。そして、気付いた。

「――アーシアはどうしたの？」

リアスの言葉に驚いて、皆が一斉に周りを見る。近くにも遠くにもアーシアの姿は見えなかった。

「アーシアッ！　居るなら返事をしてくれ！」

「アーシア！　何処だ！」

一誠とゼノヴィアは大声でアーシアの名を呼ぶが、声が響き渡るだけであった。

「転送魔法陣の誤作動でしょうか？」
「それならアナウンスがすぐに入ってもおかしくないわ」
「そもそも一緒に転送された筈なのにアーシアさんだけが他の場所に移されるのは可笑しいですわ」
「ア、▪アーシア先輩、だ、大丈夫でしょうか……？　も、もしものことがあったら」
「……ギャー君。あまり悪いことは考えちゃダメ」
　リアスたちの中で嫌な予感が湧いてくる。何か非常事態が起きているかの様な。
「やあ、リアス・グレモリー。そして赤龍帝」
　頭上から聞こえてくる爽やかそうな声。だというのに、リアスたちにはその声に気色の悪い響きを感じた。
　見上げた先にはディオドラ・アスタロトと、その腕の中で意識を失っているアーシアの姿。
「アーシア！」
「ディオドラ！　貴方どういうつもりなの！」
　ゲーム開始前に自分の眷属を拉致したディオドラに、リアスは激昂する。
「どういうつもり？　見ての通りだよ。アーシア・アルジェントはいただいたよ」
「……最初からそうやってアーシアを無理矢理奪うつもりだったのね。ご丁寧に転送用

魔法陣に仕掛けまで施して」
「ご名答。まあ、こうなった後では遅いけどね」
事が思い通りに進んでいることが余程嬉しいのか、声が裏返るほど高らかに笑う。一誠たちには、この上なく耳障りな笑い声であった。
「アーシアを返しなさい！」
「嫌だね。それにこれから死に行く君たちが、彼女を取り返しても意味なんて無いさ」
出現する魔法陣。一つ二つといった少数ではなく、数え切れないほど無数に現れる。浮かび上がる紋様はアスタロトを示すものではない。誰の記憶にも無い紋様。
その魔法陣から数えるのが馬鹿らしく思う数の悪魔たちが出てくる。
ここまでくれば、彼らが何者なのか。ディオドラの背後に何が居るのか見当がつく。
『禍の団』に通じていたのね、貴方！　魂も誇りも旧魔王派に売ったようね！　私は、貴方を、絶対に許すことが出来なくなったわ！」
リアスの怒りに呼応し、全身から紅色の魔力が溢れ出す。
「怖い怖い。それに野蛮だ。そんな野蛮な人達の相手をしたくは無いな。そんなことよりもアーシアと一刻も早く契る方が大切だ」
リアスの怒りを、ディオドラは嘲る。
「見たければ神殿の奥まで来ることだね。まあ、来られたらの話だけど。もし、来たら特

等席を用意するよ」
ディオドラの背後の空間が歪み、アーシアを抱えてその中へ消えようとする。
「アーシア！」
ゼノヴィアはアーシアの名を叫ぶ、それが届く前にディオドラの姿は歪みの中に消えていった。
後に残されるのは、何百、何千という敵に囲まれているという現実。四方から浴びせられる敵意と殺意。
ゼノヴィアが神殿に向かって走り出そうとするが、それを一誠が制する。
「待てゼノヴィア」
「待てだと！　友達が攫われたんだぞ！　イッセー！　お前は――」
そこでゼノヴィアは息を呑んだ。止めている一誠の顔を見てしまったからだ。
目が血走り、頬が引き攣って痙攣を起こしており、怒りの形相を通り越して笑みに近い表情となっている。
飽和過ぎた怒りが、一誠に逆に冷静さを与えていた。その冷静さが一誠にこう考えさせる。ここで怒りを旧魔王派の悪魔たちにぶつけるのは勿体無いと、溢れ出そうな怒りは全てディオドラにぶつけると。その為なら臓腑が焼け爛れそうな激情すら抑え込む。
ゼノヴィアは、一誠の内に秘めた怒りを見て、怒りが鎮まっていくのを感じた。

「まずはここを生き延びなきゃ、アーシアには会えない。アーシアは――大丈夫だ」
諭す様な言葉。そこに違和感を覚える。アーシアの身の安全に対し、一誠には確信がある様子であった。
「――本当に大丈夫なのか？」
「きっと大丈夫な筈だ――『あいつ』がついているから」
あいつという言葉に、全員疑問符を浮かべた。
「頼むぞ……」

◇

「う、うう……」
頬に伝わる冷たい感触でアーシアは目覚める。いつの間にか横たわっていたことに戸惑いながら立ち上がって周りを確認する。
石造りの建物の中、というのがアーシアの感想。先程の冷たい感触は石造りの床のせいであった。
「ここは……」
「やあ、アーシア」

その声に、アーシアは身を震わせる。ゲームで戦う筈のディオドラが何故かすぐ側に居り、更に周りに一誠たちが居ないことに気付き、一瞬の震えが継続する悪寒へと変わる。
「な、何で貴方が……イッセーさんたちは何処に！」
「気にすることは無いよ。もう会えないのだから」
「ど、どういう意味ですか！」
ディオドラが一歩近付く。アーシアは逃げようとするが、体が動かない。ディオドラの魔力によって動きが封じされていた。
動けないアーシアの前まで来ると、アーシアの顎を指先で押し上げる。
「待っていたよ。この日が来ることを。君を一目見た時から今日まで我ながらよく我慢したと思うよ。溜まった鬱憤を侍女や下僕たちを代わりにして晴らすのも今日で終わりだ」
ディオドラの卑しい眼差しに、アーシアは寒気立つ。
「君がリアスや赤龍帝に助けられたときは少し焦ったよ。折角の計画が失敗するかもと思ったからね。――でも、安心したよ。まだ君は綺麗なままだ。ニオイで分かるよ。ふふふ。赤龍帝の純情さ、奥手さには感謝しないとね」
感謝と言いながらも馬鹿にした様な口調。

吐き気がするディオドラの言葉に一つ、聞き捨てならないことがあった。
「計、画？」
「そうさ。君が僕を助けて教会を追い出されるまで、そして今日に至るまで。全て僕の掌の上だったんだよ、アーシア」
「じゃ、じゃあ、あれは全部、貴方の演技……」
「君はとても優しく良い子だよ、アーシア。だってこんなにも素敵な表情を僕に見せてくれるんだからさあっ！」
真実を思い知らされ、絶望によって涙を流すアーシアの顔を見て、ディオドラは冷静さをかなぐり捨て上気し、興奮する。
「良い顔だぁ！　何て素敵なんだ！　是非とも記録に――」
そのとき、何かがディオドラの頭を押さえる。
「だ――」
誰だ、と言って振り返ろうとしたディオドラだったが、押さえる力が増し、首は回らず。それどころか体も動かない。
茫然としながらアーシアの視線はディオドラの背後に向けられた。橙色の大きな目が一つ半眼となってアーシアの方を見ている。
象の頭に人の体を持つ巨人が口をもごもごとさせながら片手でディオドラを押さえ

込んでいた。
アーシアにとってその象の巨人の第一印象は『寝起き』であった。
「何者だっ！」
振り返ることが出来ないせいで、背後に立つ存在が見えないディオドラ。
象の巨人ことギリメカラは、返事の代わりにディオドラの頭よりも大きな拳を、その顔面に叩き込む。

◇

「どうしよ！　どうしよ！」
「ヒホッ！　まずいホ！」
「これはダメかもしれないね～」
旧魔王派の悪魔たちに何とか遭遇しない様に動いていたピクシーたちだったが、それも厳しくなってきた。
倒さずに隠れているだけなので、時間が経過する度に悪魔の数も増えていく。
ピクシーたち三人なら下級悪魔は速やかに倒せるが、中級以上となると時間も掛かる上に下手をしたら返り討ちにあう危険もあった。

何とかしてアザゼル、もしくはサーゼクスと合流したいと思っていたが、何処にいるかも知らない。更には大っぴらに探すことも出来ない。置いてきたケルベロスのことも心配だが、自分の身も守らなければならない。

やることは多いのに、出来ることの選択肢は徐々に狭まっていく。

「ああ、ほんとにどうしよう……」

いつもは陽気なピクシーもこの状況では笑み一つ出せない。今までシンやリアス、一誠といった自分よりも強い存在に守られていたピクシーだが、久しぶりに一人で活動していたときのことを思い出す。

あの時は自分の希少さを知らなかった故、自分を狙う者たちの目を常に気にし、捕まる、追われる恐怖に神経を擦り減らしていた。

「あー、やだやだ」

過去の忘れたい記憶を紛らわせる為に、近くにいたジャックフロストの頭にしがみつく。ひんやりとした感触が、少しだけ気を紛らわせてくれる。

「ヒホ。怖いホ？」

「本当ならシンが良かったんだけどねー。キミで我慢してあげる」

「失礼だホ！」

「ヒ～ホ～ホ～」

少しだけ調子を取り戻したピクシー。怒るジャックフロスト。それを見て笑うジャックランタン。
張り詰めた場が僅かに緩む。
「じゃあ、行こうか」
周囲を確認し、敵が居ないことが分かると通路を進む。
やがて曲がり角へ差し掛かったとき――
『あっ』
「何だ？」
角の向こう側で悪魔の集団を見つけてしまう。運の悪いことにその内の何人かがピクシーたちを見つけてしまった。
「やばっ！」
来た道をすぐに戻る。
『あっ』
来た道の奥から悪魔の集団がこちらに向かって来るのを見てしまった。そして、またもや悪魔の何人かがピクシーたちを発見する。
「やばいホ！　どうしようホー！」
「これは～本当にダメかもね～」

逃げ道は完全に塞がれてしまった。
迫る悪魔たち。数も実力も完全に向こうが上。絶体絶命であった。
「……あれ？」
ピクシーの視線が一点に止まる。壁に設けられたそれは間違いなく扉。
何処に繋がっているのか。そもそも行き止まりではないか、という疑問はこの際考えないことにした。
動かなければ終わる。
「あそこ！」
ピクシーの指差しで、ジャックフロストとジャックランタンも扉の存在に気付く。
ピクシーとジャックランタンは二人掛かりでドアノブを回して引っ張り、ジャックフロストも扉に僅かな隙間が出来ると指を差し込んで開けるのを手伝う。
扉が開くと素早く中に滑り込んで、扉を閉める。
状況が変わった訳ではないが、ほんの少しだけ時間を稼げた気がした。
しかし、稼げても微々たるもの。この微々たる時間で何か次のことを考えなければならない。
三人が急いで知恵を絞ろうとしたとき、気付いた。
「……誰？」

◇

使い魔らしきものが扉の中に入っていったのを見て、旧魔王派の悪魔は大勢で扉の前を囲う。

扉の向こうに使い魔の主が居る可能性がある。現魔王派に与するものは全て滅ぼすことを決めている彼らは、僅かな可能性でも見逃さない。

集団を代表し、上級悪魔が扉の中へと入っていく。

間も無くして――扉の隙間から漏れ出る閃光、直後に轟音が響き渡った。

反射的に身を丸めてしまうほどの大音響。だが、本来ならばその音はこの場では在り得ない音であった。

室内に於いて、雷鳴が轟くなど。

少しの間を置いてから扉がゆっくりと開く。扉の向こうから現れた存在を見て、誰もが絶句し、あるいは絶望した。

「……オーディン殿は、待てと言われたが」

一体どれだけの研鑽と鍛錬を積めばそれだけの肉体に至るのか、憧れと同時に畏怖を覚える磨き抜かれた巨躯。鱗を重ねた様な黄金の鎧を纏い、背には白のマント。両足、

両手には同色のブーツと手袋を装備しており、右手には柄の短い鉄槌が握られている。
頭部には牡牛の様な角の装飾がされた黄金の兜を被っており、兜から覗かせる双眼は翡翠色をしていた。
「降りかかってくる火の粉を払うぐらいは許してくださるだろう。ましてや、それが幼子たちを守る為ならば」
オーディンは、彼に危険だから出るなと命じた。しかし、それは彼の身を案じて言った訳では無い。オーディンが案じたのは冥界そのもの。彼が暴れれば冥界が危険なのである。
オーディンが万が一の事態を想定し、連れて来たその者の名は――
「ト、ト、ト、トールだぁぁぁぁぁぁ！」
名を叫ばれ、それに応える様に鉄槌に紫電が帯びた。
目の前の敵を全て滅ぼす為に雷神（トール）は参戦する。

歴戦、一線

「く、ああ……」
「うう……」
「はあ……はあ……」
　呻く声。一つ一つは小さく、消え入りそうな声である。しかし、それが何十にも重なれば広場を埋め尽くすほどの音量と化す。
　旧魔王派の悪魔たちは、体に深々と、そしてはっきりと残る拳の跡を刻まれて倒れ伏している。それぞれに一発あるいは二発の拳の跡、確実に言えるのは三発以上拳を打ち込まれた悪魔は居なかった。
　素手のみで百に迫る下級から上級悪魔を制圧したのは、レーティングゲームランキング一位にして『皇帝』の異名を持つ男、ディハウザー・ベリアルである。
　圧倒的実力を見せつけたベリアル。だが、その表情は憂いに満ちていた。
（出来れば外れて欲しかった）
　今回の『禍の団』の襲撃は、サーゼクスやアザゼルから事前に聞かされていた。尤も、あくまで可能性の話であったが、それでも高い確率で来ると予測されていた。

何事も無ければ、今頃は解説席からリアスたちのレーティングゲームを見ていただろう。結果として予想は的中してしまったが。

ディハウザーとしては、若い悪魔たちのレーティングゲームが囮紛いにされたことに些か抵抗感を覚えていた。

レーティングゲームが出来たことで今まで日の当たらなかった者たちにも、皆から称賛の声、尊敬の念を向けられる機会を得ることが出来た。が、それは同時に新たな影も作る。

実力がある者が、権力のある者に取り入る為の接待など政治的な取り引き、八百長が度々起こっていた。

ディハウザーとしては、名誉の為に戦うレーティングゲームで、そういった不純物を持ち込まれることを好ましく思っていない。が、結果としてそれが見る者たちを喜ばせられるならばそれも良し、と黙認していた。

王者として他を圧倒してしまうディハウザーもまたレーティングゲームを盛り上げる為に負けはしないが、勝つための過程で一進一退という演出をしてしまうことがある。最強とは観衆からの憧憬を生むが、同時にレーティングゲームに停滞、退屈も生む。

より良きレーティングゲームの為にと考えながらも自分の行為に欺瞞も抱いてしまう。

その為、未来の若きレーティングゲームプレイヤーたちには大いに期待をしている。期待しているが、今回の件で一つの事実が分かってしまった。

若手悪魔の一人、ディオドラ・アスタロトは『禍の団』と通じている。襲撃の件と同時に告げられたことであった。

ディハウザー個人としては否定したかったが、納得してしまった自分もいた。ディオドラとシーグヴァイラ・アガレスとのレーティングゲームを観戦したディハウザーは、ディオドラの力を変に感じていた。

力や技は鍛錬を経て得るものだが、ディオドラがアガレスとの戦いで自分の力に振り回されている印象を受けた。把握しているべき自分の力を上手く制御出来ていない。まるで初めて使うかの様に力を振るっていた。

『禍の団』に協力している者は、首魁であるオーフィスから力の一部を授けられるという。ディオドラは、その力をあのレーティングゲームで使用した可能性が高い。

アザゼルはこの件に関してディオドラの失敗と言っていた。そのせいで冥界での不審死と彼の存在が結びつけられてしまったからだ。

アガレスに負けたくないという意地か、或いは圧倒的力を振るってみたいという欲望か、どちらにせよ与えられた力では、精神がそれに追い付かないとディハウザーは考える。

（しかし……）
ディハウザーはディオドラの戦い方に違和感とは別に、既視感も覚えていた。
力に追い付かない技。己の力に把握し切れていない動き。
以前に戦ったレーティングゲームのランキング上位者の中でディオドラと似た動きをする者がいた。
当初は少し変に思った程度で、記憶の片隅に仕舞っておいたが、ディオドラを見てその時の記憶が引っ張りだされてきた。
（まさか……）
そこから先を考えようとしてディハウザーは頭を振る。誇りあるレーティングゲームでそんなことは在る筈も無く、考えてもいけない。
「くう、何故だ……！　何故我らの、邪魔をする……！」
呻く声を怨嗟の声に変えて、戦闘不能状態の悪魔から吐かれる。ディハウザーは、思考を中断させられて有り難いとさえ思ってしまった。
「今、こそ、かつての、栄光を取り戻すとき！　悪魔が、悪魔として蘇るとき！　七十二柱に名を連ねた貴方ならば、分かる筈だ！」
「正確には元七十二柱だがね」
爵位を持つ七十二の純血悪魔の一族は、大戦によって軍勢を失い、多くの一族もまた

断絶された。序列も殆ど関係無くなり、七十二柱も形骸化している。
「私とて先人に敬意を払わない訳では無い。しかし、その先人たちの道を辿って行き着く先が破滅ならば、ベリアルは既にその道とは決別した。私もその道を行くことに価値を見出せない。今の一族としてあるべき道は、領民の幸福、それだけだ」
　大戦で多くのものを失い、一族として断絶寸前まで追い込まれたベリアルが、その中で見つけたのが一族と、そして領民たちとの強い繋がりであった。
「このまま大人しく降伏してくれ。悪い様にはしない。道を違えても同じ悪魔。悪魔同士が殺し合うなど空しいだけだ」
「悪魔としての、誇りを捨てた者の、言葉など……！」
「……悪魔というものは、いつから死にたがりになったのやら」
　その言葉で空気が変わる。重く、苦しく、精神を折りに掛かる存在感がこの場を一瞬で支配した。
　先程までの噛み付く声も、呻く声も全てが消え去る。誰も怒りも痛みも、ディハウザーという存在を前にして無となった。
「悪魔としての誇り？　大いに結構だ。私もそれを持ち合わせているつもりだ。だが、それは貴公らとは形が違うというだけ。何一つ捨ててなどいないさ。ところで――」
　ディハウザーは倒れ伏す者たちを一瞥する。反論しようとする者、睨み付けていた

者、痛みに喘いで顔を上げていた者全てが、ディハウザーと目を合わせることを恐れて顔を伏せた。

「そんなにも見たいかね？　私の悪魔らしさを……？」

物音一つ上がらなくなった。誰もがディハウザーに身を竦ませ、震える。

誰もが倒れ伏した中でディハウザー一人佇む。皇帝の威光を前に民が平伏する光景そのものであった。

かつての栄華を取り戻そうとした旧魔王派の悪魔たちの心は、ディハウザーという圧倒的強者の前に屈服する。力を以て全てを変えようとした彼らが、更に上回る力によって変えられるのは皮肉な結末と言えた。

折れた悪魔たちを見て、ディハウザーは嘆息する。結局、好ましくないやり方で終わらせてしまったことへの悲しみと虚しさもそこには含まれていた。

しかし、感傷にあまり長く浸ってはいられない。まだ、戦いは始まったばかりなのだから。

◇

光が収まると、シンは見知らぬ場所に立っていた。

草も木も生えていない荒野が視界一杯に広がっている。少しだけ視線を動かすと、遠くに神殿らしき建物が建っているのが見えた。
もう少しだけ視線を動かす。隙間無く埋め尽くす様に投擲された光の槍が見えた。
左肩を後ろに下げ、右半身を前に出す構えとなると、眼前にまで迫った光の槍を手の甲で打ち払う。
軌道を変えた光の槍は、他の光の槍を巻き込んで明後日の方向へと飛んでいくが、それもたかが数本程度。迫る数がまだ圧倒している。
光の槍の束を前にして、シンは冷静に動く。動きを最小限にし、直撃するものだけを右手で打ち落とし、当たらないもの、掠める程度のものは無視する。
光の槍の奔流が、シンを呑み込む。その中でシンは次々と光の槍を払い、あるいは見切る。
耳を掠め、そこから白煙が立ち、衣服の一部を裂き、皮膚まで届いた光の毒が肌を焼く。紋様が輝く右手は、打ち落とす度に火傷跡の様に光の毒による影響が出るが、その程度の痛みでシンの動きから精細さが欠けることは無かった。
怒涛の攻撃を、静謐の守りによって凌ぎ続けていたが、そんな中でシンの目があるものを捉えた。
光の槍の隙間を縫って巧みに動く銀色の蛇。変幻自在に形を変えることが出来る『擬

態の聖剣』の刃が、シンの喉笛に狙いを定めて迫る。
それを見た瞬間、シンはただ守ることから攻めて守ることに切り替えた。
左手に集中されていく魔力。それが剣を形作るまで僅か一秒足らず。かつては溜めの時間を必要としたこれも、今では短時間且つ全力で放てるまでに至った。
魔人という異形に近付く度に、人間として遠のく度、その間に出来た隙間を力が埋めていく。
前に出していた右半身を引くと同時に、左手を下から上に向かって振り上げる。右と左の体勢が入れ替わったとき、魔力剣に押し留められていた力が放たれ、陽炎の如き歪みとなって光の槍と擬態の聖剣を呑み込み、それらを砕きながら振り上げられた軌跡に沿って、上空目掛けて飛ばされていく。
雲の無い晴天の空に向かって光の槍が吸い込まれる様にして消えていく――訳では無く所詮は映し出された偽りの空。無数の光の槍は見えない天蓋に突き刺さった。その際に、空の映像が乱れて本来の天井が見えるが、白い霧が膜の様に張られているのが一瞬だったが、シンは見た。
しかし、天に向かって飛ばされていく光の槍に混じって『擬態の聖剣』が地上に引っ張られるのが目に入り、そちらの方に意識が向けられる。
伸びたそれが縮んだ先には、本体である剣を掲げるフリードとドーナシークが立って

いた。
「かーっ！　先・制・チャンス！　だったのに事も無げに捌いちゃいましたよ、あの子！　あー凄い凄い凄いねー。凄くてムカつくわー！　なにその涼しい顔ー！　あ、僕初めて知りました！　俺ってそういうクールキャラって大っきらいだったんだね！　また知らない自分の一面を知ることが出来ましたー！　お・れ・いに、その澄ました顔を切り刻んで二度とクール面出来ない様にキャラ変してやるよぉぉぉぉ！」
　どうすればそこまで独りで盛り上がることが出来るのか、新しい腕や聖剣によく似た武器よりもそちらの方が気になってしまう。一方で、ドーナシークは完全にフリードのことを無視することに決めたらしく、こちらも勝手に喋り始める。
「この時を待っていたぞ……！　間薙シン！　あの日、貴様に敗れたときからな……！」
　ドーナシークが片手で自ら顔を鷲掴む。
　シンを見ていて痛みの発作が起こり始める。肉体では無く精神に打ち込まれた敗北の屈辱が、刻まれた痛みを呼び起こす。顔が内側にめり込んでいく様な痛み。目の前にその痛みの元凶が居るせいもあっていつもよりも痛みが増した様に感じた。
　掴む手に力が込められる。爪が皮膚に突き立てられ、表皮を破り、血を滲ませる。自らを傷つけ行為が、唯一この幻痛を紛らわせる手段であった。
　仲間も居場所も奪われた屈辱は、シンの命を奪うことでしか埋められない。

力に屈服させられ命乞いまでしてしまった恥辱はシンに命乞いをさせるしか消し去れない。
精神に深く植え付けられた痛みは、シンの血で雪ぐしか癒されない。
「貴様を――」
その先を掻き消す発砲音。ドーナシークが隣に目をやると、フリードが拳銃を構えている。
自分はあれほど長々と喋っていたくせに、他人の喋る時間は待てないらしい。尚、シンはフリードが引き金を引く前に頭を傾け、額目掛けて撃たれた銃弾を避けていた。
ドーナシークの冷え切った眼差しに、フリードは舌を出し、殺意しか湧かない憎たらしい笑みのまま一言。
「てへぺろでーす！」
ドーナシークは無言で腕を振る。振った直後の手には光の剣が握られており、フリードの頬に裂傷が生じ、頬から顎にかけて鮮血が垂れる。
「お前は、そこで、何もせずに、見ていろ……！」
辛うじて踏み止まったドーナシークの声は、怒りのあまり声が少し震えていた。
「はいはーい！　もうお邪魔はしませんよー！　ここで黙って置物の様に見ていますよー！　あれ？　急に鼻がムズムズしてきたぞ？　くしゃみが出そうっす！　ファ、

ファ、ファ、ファッキュー！」

捨て台詞を吐いた後、フリードは武器を全てしまい、両手を頭の後ろで組み、完全に傍観の姿勢となる。

わざわざ数の有利を捨てる二人に、シンは内心呆れる。同時にここまで険悪な仲だというのによく今まで殺し合いにならなかったと思う。共通の敵である自分が余程憎いらしい。二人を繋ぎ止めるのが自分だという事実に、気持ちが悪いという感想しか抱けなかった。

水を差されて少し白けた空気を、ドーナシークが再び自分の憎悪で染め直す。

「貴様を、殺す……！」

改めて殺意の宣誓。

今日、この日、ドーナシークは忌むべき過去を超えることを誓う。

「――ああ、そう」

極限まで煮詰められた感情から発せられた言葉に対し、シンの返した言葉はただ乾いていた。

魔人関係無く、自分に対してここまでの殺意を抱かれるのは初めての経験であったが、ドーナシークの殺気を浴びせられてもシンは至って平静であった。

ドーナシークはシン目掛けて腕を振ろうとする。指の間には、二十センチ前後の短剣

の形をした光の力が挟まれている。
振り抜く腕から放たれた光の短剣は、投擲の直後に強く輝く。
短剣の光に、シンは目を限界まで細める。輝きそのものに光の毒が含まれており、目に刺すような痛みを覚えた。反射的に閉じそうになったのを堪える。
狭まった視界でも全ての動きを見落さない。短剣は輝きの後に光の槍と化し、四本がそれぞれ別々の軌道を描きながら迫ってくる。
ドーナシークも黒い翼を羽ばたかせ、光の槍に混ざる様に急接近しようとする。投げ放った光の槍に追い付く速度、身体能力が明らかに上昇している。
見た時から分かっていたが、ドーナシークは最初に会ったとき以上の力を得ている。シンの脳裏に旧魔王派の魔王レヴィアタンが黒い蛇を呑み、力を増した光景が蘇る。
恐らくは、ドーナシークもまたオーフィスの力を得ている。
四本の光の槍がシンの眼前に来たのと、ドーナシークが光の剣を振り下ろすタイミングはほぼ同じであった。
左右から挟む様に光の槍。正面にはドーナシークの光の剣。
逃げ場は完全に失われた――とドーナシークは思っているだろう。
わざわざ攻撃を待つほどシンは悠長ではなく、また大人しくも無い。
全ての攻撃が重ね合わさる寸前、シンは地面を蹴った。

ドーナシークと拳一つ分しか離れていない位置にまで接近する。
ほんの少し前まで構えず、何の動きも見せなかったシンが、予想を遥かに上回る速度で近付き、眼前に現れたことでドーナシークは思わず仰け反りそうになる。
そして気付く。接近だけでなく、シンの拳が自分の鳩尾に押し当てられていることに。
全身から冷汗が噴き出し、体が咄嗟に動く。前へ、と羽ばたかせていた黒翼を逆に後ろへ、と全力で動かす。
弾かれる様に後方へ飛び退くドーナシーク。距離を取り、すぐにシンの動きを確認する。
シンは拳を押し当てる格好のまま、その場から動いていたい。
ドーナシーク自身、何故ここまで必死になって動いたのか分からなかったが、一先ず近付くのは止め、遠距離から攻める方針に変えることを決める。
光の槍を形成しようとし――
「――げほっ！　げほっ！」
――急に咳き込む。手で口を覆うドーナシーク。覆っていた手を離しその手を見て目を見開いた。
掌に付着する鮮血。

「馬鹿な……。がっ！」

血を認識したタイミングで、体が折れ曲がる程の激痛がドーナシークを襲った。

膝も折れ四つん這いの体勢となってしまう。

信じられない、という言葉がドーナシークの頭の中で激しく繰り返される。

圧倒的な力を得た。あの『無限の龍神』であるオーフィスの力の一部を取り込んでいるのだ。負傷していたが魔王クラスであるカトレアすら一撃で葬ることが出来た。

だというのに、今起こっていることをドーナシークは受け入れられなかった。たった一撃でこれほどまで苦しみ、そして動けなくなっている。

この現実が、ドーナシークには幻の様に思えた。

しかし、継続してドーナシークを苦しめる痛みが、紛れもない現実だとドーナシークに突き付ける。

フリードは動けないドーナシークから顔を背け、素知らぬ顔で口笛を吹いていた。しかし、横目ではしっかりとドーナシークが苦しむ姿を見ており、喜悦で眼が細まっている。

激痛を何とか堪えようとするドーナシークの耳に入ってくる足音。シンが近づいてくるのが分かった。分かったというのに、ドーナシークの意思に逆らって体は動かない。動けという命令は、痛みという情報によって上書きされてしまう。

こんなことが在り得るのだろうかと自問自答を繰り返す。
たった一度、接近戦を挑もうとしただけである。強化された自分の力を見せつける為に、そのたった一度の選択で、ドーナシークは窮地に追いやられた。
足音が止まる。自分の影に別の影が伸び、一つの影となる。痛みで滴り落ちる汗が地面に吸い込まれ、その部分だけ影をより濃くする。
「――もう三発も必要無い」
頭上から掛けられる冷徹な声。ドーナシークは顔を上げることが出来なかった。下から掬い上げる拳から目を離すことなど出来はしない。
三発も必要無いとシンが宣言する様に、ドーナシークも命乞いする言葉も必要無かった。
拳がドーナシークの顔面中央を穿つと同時に頭の中で何かが断ち切られる音が聞こえ、ドーナシークの意識はここで途切れる。
シンはドーナシークの顔面を突き上げたまま拳を捻じり、下向きであった手甲を上向きにする。その状態から今度は上から下に向けて拳を振り下ろし、ドーナシークの頭ごと地面を叩き割る。
割れ、陥没し、穴が開く地面。フリードの位置からは、ドーナシークの頭がどんな形となっているかは見えなかった。しかし、穴の縁に首が掛かり、そこから上が見えない

こと、ドーナシークが全く動かないこと、離れていく拳とドーナシークとの間に血の糸が引かれたのを見れば結果など馬鹿でも分かる。

「……ぷっ！」

フリードはドーナシークの最期に、吹き出したかと思えば、腹を押さえ、体が折れ曲がる勢いで笑い始める。

「あひゃはははははは！　何すか？　何なんすか、その負けっぷり？　人に手を出すなって言ってたくせに、それって……もうダメ！　うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！」

屈めていた体が今度は仰け反る。

「モブＡみたいな死に様っ！　腹が痛いよー！　お腹痛い痛い痛い！　あはははは！　腹が捩れて死んじゃう！　堕天使って死に様で相手を笑い死にさせる道連れ技なんてもってたのかー！　初めて知ったわー！」

ドーナシークの死をとことん笑い、嘲り、侮辱する。死んだドーナシークも、フリードからここまで辱められるとは思っていなかっただろう。シンの方はというと、フリードの甲高い声での哄笑に、少し顔を顰めていた。

一頻りフリードは笑うと、？がれ落ちる様に笑みは消え、蔑む表情となる。

「ほんと、マジ役に立たねぇ。腕の一本ぐらい落としてこいよ。無傷とか使えねー。死

ねや。ああ、もう死んでるねぇー、チミは」
最後まで罵り続け、フリードはドーナシークの死体からシンに視線を移す。
「まあ、俺様に獲物をきちーんと残したことだけは褒めてやんよ」
白い歯を剥き出しにし、剣を肩に担ぐ様に構え、銃は前に突き出した構えをとる。
「殺ってやんぜ！　シンくんよぉぉぉぉ！」
フリードが地面を蹴って駆け出した途端、その速度は不自然なほど急加速する。
十分離れていた距離も、瞬きよりも早く詰められた。
シンは、その速さに見覚えがあるが、答えを出すよりも先にフリードの銃口から弾丸が飛び出す。
放たれた五発の弾。避けづらい胴体を狙って飛んでくる。
シンは右手全体に魔力を込めると、飛翔するそれらを横から叩き、纏めて弾いてしまう。
シンが銃弾の対処をしている間に、フリードは剣の間合いにまで詰め寄っていた。
足だけでなく振る速さまで加速した状態で、上段から剣を振り下ろす。
高速の斬撃。しかし、シンの目はその速さに追い付いている。頭を断つ為に振るわれた刃を両手で挟み、見事受け止める。
――が、受け止めて気付く。剣の一部が枝分かれしており、シンの頭上を超えて弧を

描く様に伸びている。
そこから先の動きは反射ではなく、勘による動きであった。
シンの後頭部を刺し狙う刃の一部。頭を体ごと傾け、背後からの奇襲を回避してみせる。
後ろからの攻撃を難無く躱してみせたシンに、フリードは舌打ちをしながら剣を持つ手に力を込める。
掴んでいる剣に不穏なものを感じ、シンが何かをされる前に挟んでいた両手を放し、後ろへ下がる。
下がるシンに対し、フリードは距離を詰める。そのタイミングで、手に握っている拳銃を投げた。
目に向かってくるそれを手で払うシン。拳銃と自らの手によって視界が一時的に塞がれた時を狙い、フリードが斬りかかる。
初撃の袈裟切りを一歩後ろに下がることで空振りにさせ、切り返してきた二撃目を剣の腹に拳を打ち付けて落とす、すると二本目の剣――聖剣の形となったフリードの右腕が横薙ぎの三撃目を振るう。
それもまた拳で打ち落とそうとし、シンの動きは急停止した。
振るわれた聖剣は途中で紐状に解け、不規則な軌道を描きながらシンを斬ろうとす

る。打ち落とした一本目の聖剣も剣身に樹木の芽の様な突起が現れ、それが分裂しながら突き出してくる。

どちらも逃げ場を奪う範囲攻撃。

すると、シンは急停止させた拳の中で魔力剣を生み出し、一切の躊躇いもなくそれを眼前で解放した。

乱れる魔力の波に聖剣の分かれた刃は吹き飛ばされ、同時にシン、フリードの体もまた風の中の木の葉の様に飛ばされた。

魔力の波の中で振り回される体。しかし、シンもフリードも天地が入れ替わる光景に惑わされることなく、素早く体勢を変えて足から地面に降り立ってみせた。

両者の間に距離が空く。その間に、シンはさり気なく自分の手を見る。掌は赤く変色し、血管が脈打つ度に痛みが起きる。光の毒に触れたときと同じ現象であった。だが、本来の光の毒に比べれば症状は弱いと言える。まだ、ドーナシークに付けられた傷の方が痛かった。

「その剣――」

「分かっちゃいますよねー。爺さん特製のスペシャァァァル山盛り聖剣デラックスでぜぇーまーすっ！」

最後まで言うよりも先にフリードが答える。余程自慢したくてしょうがないらしい。

「前に俺様が聖剣使ってたことがあったよねぇ？　何とこの剣、それのコピーどぅえす！　一本で四本の聖剣の力！　そして主人を裏切らない！　お買い得だと思いませんか奥さん！」

聞いてもいないのによく回る舌でベラベラとこちらに情報を渡してくれる。フリードという人間の性格を考慮して全てを鵜呑みにはしないが。

「いやーまじ爺さん凄くね？　この剣といい、この右手といい。聖剣に関することなら右に出る奴いないんじゃねぇ？　もう愛だね、愛。聖剣ＬＯＶＥ！」

聖剣状態から人の手に戻し、ピースサインを見せる。まだドーナシークが生きていたら、フリードの口の中に光の槍を突っ込んでいたかもしれない。それほどまでによく喋る。

「あーあ。あと『支配の聖剣』があればなー。もっとすんごいことになってたのになー。あいつってほんとケチだよ、ケチ。眼鏡の癖にケチなんだよー？　眼鏡なのにねぇ？　眼鏡の癖にねぇぇぇ！」

対悪魔への効果は劣化しているものの、複数の聖剣の能力を扱える模造の聖剣の作成。悪魔側にとっては脅威でしかない。

聖剣への深い知識。シンの中でバルパーが何らかの形で生き延びているかもしれないという思いが、ほぼ固まる。

途端、少し憂鬱な気分となった。過去と決別した木場に対し、このことを告げなければならない。

フリードとの戦いの最中で、先のことを考え出すシン。この時点で、フリードへの関心が薄れていた。

そんなシンの心境など知らず、一人自慢気に話し続けるフリード。が、途中で気付く。シンはフリードを見ていた。だが、その目はフリードを見ている様で見ていない目。模造された聖剣の話を聞いても一切揺らがず動じず恐れもしない。

シンのその目を見て、フリードは嘗められていると判断した。自ら悪意をばら撒くフリードにとって、同じ様に悪意を向けられても全く平気である。しかし、嘗められる、下に見られることだけは許さない。高過ぎるプライドのせいでほぼエゴの塊と化しているフリードの精神には、それらに対しての妥協は一切無い。

シンの目を見た瞬間から、感情は一気に激情まで振り切り、突然に、唐突に、脈絡も無く聖剣の力を全開にし、シンへと斬りかかる。

離れた距離を、地面を一回蹴っただけで埋めた。高速の移動から、最速にして、全力で振られる模造聖剣。目の前に立つシンを真っ二つに両断する為に。

パキン。

直後に響いたのは、刃が肉や骨を断つ水気を帯びた音でも、切断された断面から中身

が零れ落ちる音でも無く、心地良さすら感じさせる金属の高い音。

「――はれ？」

フリードは我が目を疑う。聖剣が消失していた。何処にも無い。鍔から先が折られて消えている。そして、鍔元にはシンの拳が添えられている。

素手で模造とはいえ聖剣を殴って折ったという事実に、流石のフリードも理解が追い付かずに混乱する。

その混乱が解けたのは、折られた聖剣の刃が頭上から落ちてきて、上を向くことなくシンがそれを手で取り、躊躇なくフリードの右肩に突き刺したときであった。

刺さった所は、まだ義手の箇所だったので痛みは無い。だが、生身とのギリギリの境目だったので、フリードは自らの強運に感謝する。

しかし、フリードは勘違いをしていた。シンは最初から傷付けることなど考えては居ない。フリードに聖剣の刃を突き刺したのは楔の為である。

シンの左手が、素早くフリードの右手を掴む。即座に反応しようとするフリードであったが、彼の視界に高々と上げられるシンの足が入り込む。

何を、とフリードが考える前にシンは左手を引き、同時に靴底を刃の破片へと打ち込んだ。

浅く刺さった刃の破片は貫通し、それによって出来た亀裂が引っ張られることで大き

くなり、やがてそれらが繋がると引き千切れる音と化す。
「がああああああああああ！」
フリードは絶叫を上げた。繋げたものを無理矢理引き千切られる激痛は、フリードの神経を焼き尽くす。
シンは、フリードから千切った腕を見る。断面からは水銀の様な液体が血の様に滴る。見た目は人の腕と変わらない右腕は、肌色を失い、銀色の光沢のあるものへ変化した。通常の義手とは違い、金属を腕の形に固めた様な外見をしている。指先から腕の末端まで『擬態の聖剣』と同じ構造なのだろう。
フリードは叫びながら右腕の断面を押さえる。指の隙間から赤が混じった銀色の液体が零れ落ちる。義手だけでなく生身の部分も少し裂けた様子であった。
「何で……！　コピってても聖剣なんだぜ……！」
「……コピーだろうが、本物だろうが関係無い。前に言ったな？」
「ああ？」
「お前が持っている時点で、それは鈍だ」
シンは手に持っている義手を、フリードの足元へ放り棄てる。足元に転がったそれを見て、フリードはシンを睨み付ける。
血走った眼はいつ血が噴き出してもおかしくは無いほど赤く充血しており、人間とい

うものは、ここまで怒りを表現することが出来るのかと、シンに変な関心を与える。
「こ、こここここっ！　ここここ！」
恐らく『殺す』と言いたいのだろうが、怒りが知性を呑み込んでしまったのか、それが空回りして鳴き声の様な言葉がフリードの口から発せられる。
「ここここ、殺して、やるよっ！　てめえは！　今！　ここで！　俺様が！」
ようやく思考と怒りが噛み合って人の言葉を言うと、フリードの肉体が膨張し始める。
手足は数倍の太さに膨れ、体もまた同じ様に膨れていく。膨れていく肉体は神父服を容易く破る。
変化はそれだけで終わらず、背中からは鳥類の翼。昆虫類の翅。爬虫類の飛膜、見たこともない生物の羽が無数に、それも適当という言葉が相応しいほど雑に生える。
腕、肩、背、頭部からは捩じれた角、真っ直ぐな角、枝分かれした角が生え、切断された右腕の断面からは新たに三本の腕が生え出す。その三本とも別々の形をしており、人、動物、虫の手に別れていた。
顔は口が突き出て口吻状になり、そこから牙が無作為に生え出す。大きく口を開くと口蓋、口腔底に意味も無く牙が密集していた。
人だったときの面影は最早目の色しかない異形の姿と化したフリード。

『爺さんがくれたもう一つの力だぜぇぇぇぇ！　色々な力をぶち込んだ合成獣（キメラ）だとさぁぁぁぁ！　この姿を見てどうよ！　間薙くぅぅぅぅぅぅん！』

フリードの声が何重に聞こえる。見ると脇腹、首元にも新しい口が形成されており、そこから声が発せられていた。声の重なり具合からして背中にもいくつか口が出来ている。

「――センスが無いな。造った奴は」

『それには同感だぜぇぇぇぇ！』

同意の言葉を叫びながら、フリードは左手を握り締める。筋肉が表皮を破りそうになるほど膨張し、隆起する筋肉。

『ぶっ飛んできなぁぁぁぁぁぁぁ！』

咆哮と共にシンを粉砕せんが為に繰り出される拳。シンは守ることも避けることもせず、迫る拳に己の拳を迷いも無く打ち込んだ。

大気が震える音。

右拳を突き出したままのシン。体重差のせいか、シンの足元には轍が作られている。

いまだ衝突し合っている拳と拳の間から滴る血。だが、それはシンの血では無い。

フリードの左腕から白い突起が内から外皮を突き破って出ていた。

折れた骨である。シンの拳に押し負け、折れ、開放骨折を起こしていた。よく見れば、

左腕の皮膚が弛み蛇腹となっている。左腕が縮んだ証拠であった。

『な、な、な……』

人の姿を捨てて異形にまでなったというのに、たった一撃で何も差が埋まっていないことを思い知らされる。

だが、フリードは認めない。この事実を、現実を。自分が滅ぼすべき悪魔に負けることなど天地がひっくり返っても絶対に認めない。

『何でだよぉぉぉぉぉぉ!』

悲痛さすら感じさせるフリードの絶叫。三本に分裂した右腕を、鞭や打撃武器の様にしならせながら振るう。

体を脱力させる様に身を低くし、それの下に潜りこんで避けると、通過する前に三本腕の根本を左手で指先が食い込むほど掴み、更に右手で自分の左手首を掴む。

シンの手を振り解こうと再度動かす前に、左手から放たれた光弾が、三本腕の根本を砕き、断ち、滅する。

人を凌駕する力を解放した筈なのに、一分も満たないうちに両腕が使い物にならなくなってしまう。

悪夢そのものの現実に、フリードの思考は一瞬停まってしまった。

シンは流れる様な動きで呆然とするフリードの懐に入る。その両腕に炎を纏わせて。

フリードの胸部に燃え盛る両掌が添える様に当てられる。二つの炎が一つに重なり合わさったとき、それは全てを消し去る超高熱となり、フリードの胸の中心を貫通し、綺麗な穴を作り上げていた。

『……すーすーする』

間の抜けた台詞を言いながら、開いた穴に触れるフリード。傷口から灰が零れることは無い。炎が触れた部分は全て気化していた。

シンが手を離す。フリードの体は支えを失った様に崩れ落ちた。

戦いを終え、シンは軽く息を吐く。すると、東の間の安息も無く遠くから戦闘音らしき音が聞こえてきた。

他に宛ても無いので音の方を目指すことにした。敵でも味方でもいいので今の情報が欲しい。

音の方へ十歩だけ歩いた時、シンは立ち止まる。背後で地面を引っ掻く様な音が聞こえた。

『何で……何で……何で……』

フリードの呻く声。思わず溜息を吐きそうになる。体の中心にあれほど大きな風穴を開けたのにまだ動けている。見た目通り人外っぷりであった。

『何でだよぉぉ……ここまでしたのによぉぉぉ……』

立ち上がり、こちらに近付いて来ているのが声の間隔で分かる。しかし、シンは振り返らない。

『何でっ！　何でっ！　何で勝てないっ！』

瀕死の筈なのに声が徐々に激しいものとなっていく。

「答えが知りたいか？」

フリードはあらゆる獣の鳴き声を混合させた咆哮を上げ、シンの背に向かって襲い掛かろうとする。

堕天使（コカビエル）、魔人（マタドール）、竜王（タンニーン）と比べれば最初から脅威など微塵も感じなかった。

シンは、左肩越しにフリードを見る。

「お前たちよりずっと強い相手と戦ってきたからだ」

左眼を僅かに横へ滑らす。たったそれだけのことで決着は付いた。

「――っ？」

フリードの頭部が胴体から落ちる。あまりに呆気無く、フリードは突然百八十度変わる視点に何故という疑問を抱きながら、死んだことすら気付かずに絶命した。

シンは左眼を拭う。少量の血が指に付いたが、視界がぼやけることは無かった。

今度こそ完全に終わったと思い、シンは再び歩き出す。

（……ああ、そういえば）

ふと、あることに気付き、後ろを振り返ってドーナシーク、フリードの死体を見る。
「初めて人を殺したな……」

「逝ったか、フリード。そして、ドーナシークもな」
黙って密かに施しておいた通信用の術によってフリードの視界から状況を確認していたバルパーは、それが途切れたことで二人の死を知った。だが、その声に一切惜しむ感情は無い。寧ろ、これからすることへの喜々とした響きがあった。
「では、実験開始といこう」

王母、淫母

「……あーらら。随分と騒々しくなっているみたいで」
「まさか、襲撃を受けているの？　冥界で！」
レーティングゲーム会場に到着したイリナとデュリオは、来て早々に襲撃が起こっていることを、到着と同時に襲われたことで知る。
十数名ほどに襲われたが、イリナの聖剣とデュリオの力であっさりと返り討ちにした。尤も大半はデュリオによって氷漬けにされている。イリナも詳細は知らないが、デュリオに宿る神滅具の能力の一つらしい。
「お、お、おおお、おの、れ……」
唯一顔だけ凍っていない襲撃者の一人が、凍えてまともに動かない舌を何とか動かし、怨み言を吐く。
その襲撃者に、デュリオは顔を近付け尋ねる。
「はーい。ちょっと質問ねー。君たちは何？　何でここを襲ってんの？」
へらへらと緩い笑みを浮かべているが、その目は笑っていない。相手の何もかもを見過ごさない静謐な目をしていた。

「だ、だだだ、だれが……」
　襲撃者はデュリオの質問に、当然大人しくは答えない。
「大人しく喋った方が良いよー？　怒らせたら怖いぞー？　滅茶苦茶酷いことをしちゃうぞー？　――イリナちゃんが」
「えっ、私？　しないしない！　異端審問とか拷問は習ってないから！　専門外だから！」
　顔と手を横に振りながら、微妙にずれた否定をするイリナ。その手には『擬態の聖剣』が握られており、手を振ることで聖剣が光を反射、その光を見た瞬間、襲撃者は顔に深々と皺が浮かぶほど強く目を瞑った。
　その反応だけで襲撃者の正体が分かる。
「もしかしてとは思ってたけど、おたく悪魔ッスか。冥界で悪魔が襲撃……となると旧魔王派の悪魔さん？　もし、旧魔王派となると禍の団も噛んでいるという訳だね。旧魔王派は、禍の団に下った訳だし」
「わ、わ、我々は、く、下った、のでは、ない！　あくまで、一時的な、同盟を結んだに、過ぎない！　と、取り、消せ！」
　デュリオの言い方が気に喰わなかったのか、旧魔王派の悪魔であることを否定せず、それどころか発言の修正を求めてくる始末。

デュリオは溜息を吐きながら困った様に頭を掻く。
「はあー。厄介なタイミングで来ちゃったねー、イリナちゃん。ゴタゴタの真っ最中だよ」
「大変！　早くイッセーくんたちを見つけないと！　あ、それにミカエル様たちも今回のレーティングゲームを観戦なさっている筈よ！　お守りしないと！」
「まあー。ミカエル様たちなら大丈夫だとは思うけどねー」
気が逸ってその場で足踏みし出すイリナに対し、デュリオは落ち着いた態度であり、焦るイリナを宥めようとする。
「それでも守護しないと！　私はミカエルさまの『御使い』なの！」
与えられた使命を全うする為に、イリナは居ても立っても居られなくなったのか、宛ても無く駆け出そうとする。その直前デュリオの手が伸び、イリナの襟を掴んで止める。
うっ、と息を詰まらせながら強制停止させられるイリナ。咳き込みながら涙目で後ろのデュリオを見る。
「ごめんごめん。そんなに睨まないでよ。確かにちょっと乱暴な停め方だったけど。でもね、イリナちゃん。周りにはもう少し気を配った方が良いんじゃない？」
デュリオから笑みが消えていることに気付き、イリナは『擬態の聖剣』を構えた。

感覚を鋭敏にさせて気付く。何者かがこちらに近付いていた。
まるで存在を隠そうとはしない堂々としたもの。だが、その気配に触れて分かってしまう。津波や嵐、竜巻が見るだけで強大なものと分かる様に、イリナはこめかみから一筋の汗を流す。こちらに向かって来ている者の気配に本能が反応してしまう。
それだけでどれほど危険なものか表している。
気配は、通路奥から感じられる。突き当たりで左右どちらにも行ける道がある。
右と左、どちらの曲がり角から姿を現すのか、イリナは固唾を飲み込みながらその時を待った。
曲がり角から勢いよく飛び出してきたのは、一人の男性であった。
男は、イリナたちの姿を見て、その目を見開く。
鬼気迫る男の表情を見て、イリナは『擬態の聖剣』をいつでも全力で振るう様にする。
男が、こちらを見て何かを言おうとしたその時――曲がり角から伸びた手が男の後頭部を鷲掴みにする。
白い手袋に覆われた手は巨大で、掌は男の頭を余裕で包み、指先が男の顔面まで届いていた。
男は絶叫を上げながら来た道に引き戻される。直後、轟音と閃光が発生。轟く大音にイリナは耳を塞ぎ、視界を白く焼く程の光量に目を瞑る。

数秒ほどそれが続いた後、イリナは目と耳を解放する。耳には耳鳴りが残り、目にはまだ光の残像が残っていた。
「すんごい雷」
隣に立つデュリオが、少し顔を顰めながら呟く。室内なのに先程の光と音を雷と称する。だが、イリナも雷と言われて納得してしまった。あれは、そうとしか表現出来ない。
雷が収まってから間もなくして、曲がり角の向こう側から巨大な手の持ち主が姿を現す。
全身が張り詰めた筋肉によって構成された巨体。黄金の仮面を被り、背には白のマント、手には槌を持つ。
その巨人は、手を払う。すると白い手袋から炭が零れ落ちていく。その炭こそ先程の男の成れの果てと、デュリオは直感した。
一方でイリナは――
「いやあああっ！　筋肉の悪魔っ！」
――逞し過ぎる肉体を受け付けられなかったのか、見た瞬間悲鳴を上げていた。
「いや、まあ、確かに常識外れの体付きはしているけども……」
緊張感がやや欠ける反応を見せたイリナに、デュリオは笑っているのか、困っているのか何とも言えない曖昧な表情になってしまう。

「出会い頭にいきなりなんだ、貴様ら……」
イリナの発言に、怒っているというよりも呆れている態度を見せる。
「すみませーん。この子、ちょっと年頃なもんで。貴方の存在が刺激的過ぎたんですよ――トール様」
巨人――トールであることに真っ先に気付くデュリオ。イリナの方はというと、トールの名前が出た瞬間に顔面蒼白となった。信仰してはいないとはいえ北欧を代表する神である。そんな神を悪魔呼ばわりしてしまった。
「ト、トール……？　えええっ！　どうしよう！　神様を悪魔なんて呼んじゃった！　あ、あの！　た、大変失礼なことを……」
「……構わん。生憎、名は知られているかもしれんが、顔はあまり知られていないことは自覚している」
慌てて謝罪するイリナを、トールはあっさり許す。
迂闊とはいえイリナのトールに対する反応はあながち間違ってはいない。実際に神と呼ばれる存在の顔を知る者の数は多くは無い。神と面識を持てるのはそれに相応しい地位や力がある者に限る。少し前まで人であったイリナが今のトールをトールと認識することは難しい。一般的に人間社会で広められているトール像とは異なっているからだ。これは伝聞によってその像が描かれているからである。

たとえ信者であっても、誰もトールが仮面を被っていることなど知らないだろう。
デュリオが知っているのは、セラフを通じて偶々彼の人相を知っていたからに過ぎない。
「自己紹介が遅れましたが、デュリオ・ジェズアルドと申しまっす。お見知りおきをー。それでこっちは――」
「し、紫藤イリナですっ！」
「二人とも天使の『御使い』でっす」
神を前にしても変わらず緩い感じで自分たちについて、デュリオは簡単に説明する。
「噂の御使いたちか。そして、デュリオと言ったか？　貴様が、天使たちが囲っている神滅具所有者か……」
冷静に考えれば凄まじい状況ではないか、とトールの言葉を聞いてイリナは思った。何せ神の前に、神を滅ぼす力を持っている者が立っているのだ。そう思っただけで緊張感も冷や汗も倍に感じる。
「そうなんですよー」
ははは、と照れる様に笑うデュリオ。神を前にして豪胆としか言えない態度であった。
「あれ？」

　イリナにとって聞き覚えのある声が聞こえた。声の方に目を向けると、曲がり角からピクシーたちが顔だけ出してイリナたちを見ている。
「貴方たち！　来ていたの？　大丈夫？　怪我は無い？」
　シンがレーティングゲームを観戦することを聞いていなかったので、ピクシーたちの存在に驚き、すぐに無事かどうか確認する。
「うん。大丈夫」
「オイラたち守ってもらってたホ」
「怖いぐらい強いよね～。この人」
　イリナの姿に警戒を解いて曲がり角から出てくる。ピクシーたちの言った通り、体に傷など無かった。
「何だ。その幼児たちは知り合いか？」
「はい。私の友人の使い魔――じゃなくて仲魔です」
「仲魔……？」
　仮面から覗くトールの翡翠色の目が細まった。思ってもいない反応に、イリナは恐る恐る尋ねる。
「あのー……どうかしました？」
「……いや、何でもない」

引っ掛かる反応であったが、イリナはそれ以上追及することは出来なかった。
「どもども、おチビちゃんたち。俺はデュリオ・ジェズアルドって名前だよ」
「アタシ、ピクシー」
「ジャックフロストだホ」
「ボクはジャックランタンだよ。ヒ～ホ～」
「随分と珍しい面子だねー」
簡単な自己紹介を済ませ、話を進める。
「イリナちゃんの友達の仲魔ってらしいけど、その友達は何処に？」
「というか、もう一人居たわよね？　あのワンちゃんはどうしたの？」
すると、ピクシーらの表情が曇る。
「ケルベロスは、アタシたちを逃がす為に一人で残ってくれたの……」
「シンは、あのフリードとオイラの知らない堕天使にどっかに連れられて行ったホ……」
「確かドーナシークって呼んでたね～」
「フリードって……フリード・セルゼン！　ここに来ているの！」
行方不明のフリードが、『禍の団』と一緒に来ていると知りイリナは驚く。だが、ある意味では当然の流れとも言えた。今の状勢に反感を覚える者たちが流れ着く先が『禍の団』である。はみ出し者であり、反逆の徒であるフリードがそこに付くのは納得出来る。

「そんなことになっているの！　早く皆を見つけないと！」
「慌てるな、娘。紫藤イリナと言ったか？　この奇襲自体、我らにとって想定内のことだ」
「それってどういうことですか？」
　トールは、各勢力が結託して『禍の団』を一網打尽にする計画を建てていたことを簡潔に説明される。つまりは、ミカエルたちも最初からこの襲撃に備えていたということである。
「そうだったんですか……」
「それで？　貴様たちは何をしに来た？　声を掛けられていないのだろう？」
　今度は、トールから質問が返ってくる。
「えーと……」
　内容が内容だけに一部情報を隠して話そうかと考えるイリナであったが、彼女が少し言い淀んだだけでトールの目が細まる。
「まさかとは思うが――私を前にして何か隠し事する、などという愚かな発想は、当然無いな？」
　眼光だけで心臓が止まりそうになり、刺された釘の重さだけで膝が折れそうになる。
「ひゃ、ひゃい！　しません！　しません！」

「ならば良し。話せ」
　イリナからすれば苛烈な脅しに感じたのかもしれないが、トール視点からすれば少し念を押した程度のことである。この差こそが二人の実力の差を表していた。
「実は――」
　ディオドラ・アスタロトのこと。そして、その眷属たちが元聖女の可能性が高いこと。自分たちはそれを調べると同時に、一誠たちに報告しに来たことを説明する。
　ディオドラの名が出ると、トールは興味深そうな声を出す。
「ほう。ディオドラ・アスタロトが」
「そうなんです」
「ならば丁度いいな」
「え？」
「今回の計画には、内通者を炙り出すことも目的にしている。その内通者として最も怪しまれていたのが、ディオドラ・アスタロトだ」
　トールからもたらされた新たな情報に、ディオドラへの疑惑がほぼ黒に染まる。
「にしても、悪魔も天使も色々と甘い。内には入られ外にも出られているとはな。――まあ、こちらもあまり大きく言えはしないがな」
　悪魔、天使の不甲斐なさを笑うが、その後に続いた言葉は巨体に見合わないほど小さ

く、イリナたちの耳に届くことは無かった。
「ああ、でもどうしよう……ディオドラが内通者ならイッセー君たちの身に危険が……それにアーシアさんも……ゼノヴィアのことも……でも、間薙君のことも気になるし、ミカエル様たちも御守りしないと……」
イリナは、信仰と友情の間で揺れていた。以前のイリナならば真っ先に信仰をとっていたが、今のイリナにとって一誠たちは簡単に切り捨てることの出来ない存在となっていた。
重く悩むイリナ。その苦悩する姿を見てトールは溜息を吐く。
「友の所へ行け」
「え？」
イリナの代わりにトールが決断を下す。
「友の所へ行けと言った」
「で、でも！」
「そんな悩みを抱えた者が一体誰を守れるという？　かえって足を引っ張るだけだ。邪魔になるだけだ」
トールからの厳しい言葉に、返す言葉が見つからず、イリナは呻くしか出来なかった。
「ミカエル様たちがっ！」

「代わりに私が様子を見に行ってやろう。場合よっては助力もする」
「……え？」
　トールの提案に、イリナは呼吸数回分反応が遅れた。文化が違えど神と一介の使い。天地以上の差がある。その神が自分たちの為に動いてくれることが信じられなかった。
「い、いいんですか？」
「目の前で悩む者を救えないとあれば、私の名が廃る」
　きっぱりと言い切るトールに、イリナは感動で瞳を潤ませる。
「全く信仰していないのに、ありがとうございます！」
「一言余計だ」
　悪気の無いイリナの礼に、トールは少し呆れる。
「んじゃま、俺たちはグレモリーの方々を探そうかね。間薙君ってのも見つけないと」
「恐らくだが、こ奴らの主もグレモリーの悪魔たちと同じ場所に送られた筈だ。襲撃と共にレーティングゲームのバトルフィールドに特殊な結界が張られた。かなり厄介で強固なものだ。邪魔されずに戦うならばあの場が相応しいだろう」
「神様から見ても厄介かー」
「まあ、貴様が居れば問題無いだろう」
　デュリオの方を横目で見る。

「トール様からお墨付きも貰ったし、イリナちゃん、そろそろ――」
デュリオの言葉がそこで区切られる。会話を止め、微笑も消え、鋭い目で周囲を見渡し始めた。まるで、何かを探っているかの様に。
それはトールもまた同様であり、翡翠色の目が鋭くなり、体の表皮に青白い電光が奔る。
イリナとピクシーたちは何も感じなかったが、二人は見えない何かに対し、警戒をしていた。
神と神滅具を宿す者にしか探知出来ない何かに。
「……本当に行っていいんですか？　トール様？」
「構わん。行け。結界内に入ればオーディン殿や魔王も居る」
ここよりもそこの方が安全かの様な口振り。イリナたちも不穏に感じる。
「――そうですか。分かりました。行こっか。イリナちゃん」
「いいの？　何か危ないことが起きてるんじゃ……」
「いいから、いいから。ここに居ても俺たちが出来ることなんてないよ」
後ろ髪を引かれる思いだが、当初の目的を無かったことには出来ない。
「分かった……行く。貴方たち、絶対に間薙君も見つけてくるからね！」
イリナはそう言い残し、バトルフィールドを目指す。走り去るイリナたちを、ピク

シーたちは手を振って見送った。
「……お前たち、絶対に私から離れるな」
「う、うん」
トールの言葉に、ピクシーたちはびくりと震える。
旧魔王派の悪魔たちを倒してもどこか退屈そうに見えた。何故だろうか。今のトールの声には、さっきまで無かったハリがあり、全身に覇気が満ち、ピクシーたちから見ても高揚しているのが分かる。
（何か嬉しそうじゃない？）
（ヒホ。急にギラギラし出したホ）
（ヒ～ホ～。怖いね～）
トールの変化に、ピクシーたちは声を潜めて相談し合う。
「どうした？　来ないのか？」
「ッ。今行く！」
先を急ごうとしているトールの後ろを慌てて付いていくピクシーたち。結局のところ、彼女らはトールに頼るという選択肢しかなかった。

◇

石造りの神殿の中、小さく響く少女の泣き声。
入り組んだ神殿内部の片隅で、アーシアは膝を抱えて泣いていた。その隣では、単眼の象の頭を持つ悪魔――ギリメカラが退屈そうに立っている。
拉致されたアーシアを、ギリメカラがディオドラに一撃入れた後に救い、そのまま宛ても無く神殿内を逃げ、一息入れる時間が出来た後、アーシアはディオドラから告げられた残酷な真実に泣いた。
自分の心を踏み躙られたことに、怒りよりも何故そんなことをするのかという悲しさしか湧いてこない。
ギリメカラが『パオ』と一声鳴く。
「ず、ずみまぜん……」
アーシアは涙声で謝る。気を遣った言葉を言われたのではない。寧ろ逆に『いい加減泣くな。鬱陶しい』と冷たく突き放す言葉であった。
それでも悲しみを抑えきれないアーシア。そんなアーシアに、ギリメカラは鼻先から溜息を洩らす。
「パオオ」
「え？」

泣いていたアーシアが顔を上げる。ギリメカラが、アーシアの護衛をしたのは頼まれたからだと言ったからである。
「パオ」
「イッセーさんと、間薙さんが……」
自分にアーシアを守る様に頼んだのは、一誠とシンであることを教えられる。
そのことを深く噛み締めながら、アーシアは泣いて腫れた目でギリメカラを見る。この時、助けられて初めてアーシアはギリメカラと向き合った。冷たい言葉の割には、愛嬌ある顔、意外と可愛らしいとアーシアは思った。
「あの……お礼を言うのが遅れましたが、助けてくれてありがとうございます」
真面目に礼を言うアーシアに、ギリメカラは『ただ頼まれただけ』と割り切った答えを返した。
「それでもありがとうございます。それで、あの……」
言いにくそうにしているアーシアに苛ついたのか、一声鳴いてさっさと言えと催促する。
「は、はい！　あ、あの！　私の我儘ですけど！　イッセーさんにも間薙さんにも私はちゃんとお礼を言いたいんです！　リアスお姉様たちにもう一度会いたいんです！　だから、私をここから逃がしてください！」

頭を下げてお願いするアーシア。それを見下ろすギリメカラ。すると、ギリメカラは鼻先でアーシアの頭をペシペシと叩き、『パオオ』と鳴いた。
「ありがとうございます！」
最後まで守るのが自分の役目だ、というギリメカラの言葉に頼もしさを覚えるアーシア。
「あの！　そう言えば、お名前の方を――あれ？」

◇

「ぐっ……くっ！　よくも！　僕の顔を……！」
屈辱とまだ残る痛み、そして怒りでディオドラの顔が歪む。
ギリメカラから顔面が窪むほどの一撃を受けた後、アーシアをまんまと連れ去られてしまった。最高潮にあった高揚が、今は最底辺どころか底を突き抜けるほど最低な気分であった。
「傷はもういいのか？」
怒るディオドラに声を掛ける人物。ローブを纏い、長い髪の一房で片目を隠す美丈夫。

心配しているというよりも、ディオドラの失態を嘲る含みがあった。
「シャルバ……！」
シャルバ・ベルゼブブ。名前が表す通り、旧四大魔王であるベルゼブブの末裔であり、今回の襲撃の首謀者。つまりは、ディオドラの共犯者である。
「こんな傷、どうでも無い！」
ディオドラの足元に空のガラス瓶が転がっていた。顔が凹む程の傷もフェニックスの涙を使用すれば一瞬で治る。
「折角、あの娘に神器について教えてやったというのに、まさか始まる前に躓くとは……流石に私も予想外だ」
「僕のせいじゃない！　全部あの訳の分からない象もどきのせいだ！　それよりアーシアは何処に行った！　赤龍帝たちに見つかる前ならまだ間に合う！」
「ふん。そうか」
ディオドラとは対照的に、シャルバの反応は冷めたものであった。現ベルゼブブを輩出する名門のアスタロト。血統からすれば両者はほぼ同格。しかし、シャルバからは明らかにディオドラを格下に見ている節がある。
自らが正統であると自負している故に、偽りと認識している現四大魔王に関与していること自体、彼にとって気に入らない。

「落ち着いている場合か！　折角建てた計画が、水泡に帰するかもしれないんだぞ！」
「貴公こそ落ち着け。既に手は打ってある」
　喚くディオドラを宥めながらも、シャルバは愉快と呼べる気分であった。自分たちこそが真の魔王であり正統且つ選ばれた悪魔。『旧』などと蔑称されているが、その『現』魔王の血筋である目の前の悪魔はどうだ？　童の様に騒ぎ、下衆そのものの性癖を晒し、今は自分に縋っている。間接的に現魔王の醜態を見ている様で、正直笑いを堪えるのに必死であった。同時に、やはり冥界は自分たちが統べなければならないという思いが湧く。
「――何をするんだい？」
「ここにあれの存在に気付かず、招き入れたのは奴にとっても失態だ。そこを突いてやったら案の定、動いてくれた」
　強力な力を掌で転がすことに優越感を覚える。血も力も自分の意思のままに動かす万能感。かつての自分が居た高みを思い出させる。
　全てはシャルバ・ベルゼブブの言葉で動く。計画は万全に進んでいないが、その不快感もこれによって薄まる。
　だが、何事にも望まない展開が付いて回るということを、このときのシャルバは思ってもいなかった。

◇

「……煙？　じゃなくて――」

アーシアは、足元に伸びてくる白い靄に気付く。しかし、煙の様な燻したニオイはしない。ならば、この白い靄は――

「――霧？」

その瞬間、ギリメカラはアーシアを抱き寄せ、自らの大きな腹に押し当てる。硬くもあり、柔らかくもあり、冷たくも温かくもあるギリメカラの不可思議な感触と突然の行動に目を白黒させるアーシア。

ギリメカラは、アーシアを抱えたまま、巨体に似つかわしくない俊敏さで壁を蹴り、その反動で十数メートルの距離を跳躍。霧から瞬時に距離をとる。

すると、霧はまるで生き物の様にギリメカラたちの後を追い、着地場所へ這う様に伸びてくる。

この時点でアーシアもこの霧が普通のものではないことに気付く。

着地地点に集う霧。このまま得体の知れない霧に飛び込むかと思いきや、アーシアは上下の激しい揺れを感じた。

着地の衝撃ではない。アーシアが目線を下に向ける。ギリメカラの足は地面に着かず、宙に浮いた状態であった。

どうやって宙に浮いているのか。今度は視線を上に向ける。

ギリメカラの長く伸ばした鼻が壁に突き刺さり、空中で体を静止させていた。壁を容易く貫く強度も驚くが、ギリメカラの巨体とアーシアを同時に支える鼻の頑丈さも異常であった。

ギリメカラは鼻をロープの様に揺らし、勢いを付けてから再び飛ぶ。鼻だけの力でも先程の跳躍以上の距離を飛ぶ。

「きゃっ！」

「パオ」

『うるさい。騒ぐな』と言いながら、ギリメカラは音も無く着地。たった数秒間の出来事だが、ギリメカラの力の一端を垣間見せる。

「――強いな。気乗りのしない命令だったが、どうやら本気で行かないといけないみたいだ」

ギリメカラから離れたアーシアは、第三者の声に肩を震わせ、恐る恐る声の方を見る。

きっちりと整えられた衣服にローブを纏い、眼鏡を掛けた青年。アーシアは、自分と然程歳が離れていないと思った。

先程まで一箇所集まっていた霧が、青年の下に向かって移動していく。よく見れば、青年を中心にして霧が発生しており、彼こそがこの霧の発生源だとすぐに分かった。
「だ、誰なんですか！　貴方は！　貴方も旧魔王派の人なんですか！」
アーシアは、口を滑らせたディオドラから現在禍の団の勢力である旧魔王派が襲撃していることを知らされていた。それ故に、目の前の青年も旧魔王派の悪魔だと予想する。
「いや、違う。俺は人間だよ」
アーシアの予想は、青年から否定される。
「まあ、この状況だ。君がそう考えるのも無理は無い。アーシア・アルジェント」
名を呼ばれ、アーシアは身を固くする。
「ゲオルク――それが俺の名だ。覚えるか、覚えないかは好きにしてくれ。尤も、俺から教えられることはこれだけだが」
最低限名乗りだけする青年ことゲオルク。その眼は、アーシアでなく常にギリメカラに向けられていた。
「その容姿、伝承と照合すれば邪神の乗騎、魔象ギリメカラとお見受けするが？」
ゲオルクがギリメカラの名をすんなりと見破る。
「パオー」

「……こんな時につまらない冗談は止めてくれ」
『チガウヨーオレノナハガネーシャダヨー』という棒読みで認めないギリメカラ。尤も、ゲオルクはそれに付き合うことはしなかった。
「え？　ガネーシャさん、なんですか？　それとも先に言っていたギリメカラさんなんですか？」
アーシアの方は、ギリメカラの悪ふざけを真に受けて、どっちが本当の名なのか混乱していた。
禍の団の中でも、研究者気質であり真面目な性格に分類されるゲオルクは、表面上は無表情を貫くも、内心ではギリメカラの不真面目な態度に少し苛立つ。
ゲオルクの仲間も我が道を行く我の強さはあるが、少なくともこういった状況でふざけた態度はとらない。
（そちらがそういう態度なら――構う必要など無い）
ゲオルクの霧が動く。ゲオルクが操作出来る限界まで霧は希釈され、肉眼では見分けられないほどの薄さとなる。
その薄くなった霧を密かに、そして音も無くギリメカラたちへと忍び寄らせる。
ギリメカラとアーシアは、まだ霧の存在に気付いていない。
あと残り僅か。まだ気付かれてはいない。

希釈された霧が一定量貯まる。ギリメカラの眼が動く。ゲオルクが何をしているのを探知した様子。

ギリメカラは足先で自らの影を踏み付ける。すると、中から大剣が飛び出し、ギリメカラの手に収まる。

（もう遅い！）

ギリメカラが大剣を掲げたタイミングで、一気に霧を集束させる。霧へと突き立てられるギリメカラの大剣。だが、刺さった切っ先が霧から出て来ない。

霧がどんどんギリメカラの大剣を包み込んでいく。剣身、鍔の順に霧へと消えていき、最終的には柄を握る手ごと霧の中に入ってしまった。

霧の中に消えたものは何処へ行ったのか。その答えは、ゲオルクのすぐ側にあった。

ゲオルクの周囲に立ち昇る霧の中から、突き出る大剣を握るギリメカラの手がそこにあった。

ゲオルクの神滅具『絶霧（ディメンション・ロスト）』は、結界系神器の中で最強と謳われている。無限に発生する霧は、あらゆる攻撃を防ぐ盾にすることも出来れば、今の様に離れた場所と場所を繋げる出入口となる。

ただし、その反面神滅具としての攻撃力は、『白龍皇の光翼』、『赤龍帝の籠手』と比べれば皆無に等しい。

だが、何事も応用である。足りなければそれを補う工夫をすればよいだけのこと。
例えば、今の様に離れた場所にあるギリメカラの手と腕。もし、この状態で『絶霧』の出入口を閉じたらどうなるのか。
その答えを知る方法は、至極簡単である。ゲオルクの意思一つですぐに――
「――ん？」
「――え？」
目が合った。
誰と誰の目が？
アーシアとゲオルクである。
互いに向かい合っているのならば可笑しくは無い。
いや、可笑しい。ゲオルクは、アーシアの瞳の虹彩がはっきりと分かる距離で目が合っている。
それが分かる程の近距離。だが、アーシアはまだギリメカラの側に――体だけある。
体が、ギリメカラの鼻に持ち上げられている。
ゲオルクはアーシアと目が合った。
霧の中からギリメカラの大剣と一緒に頭部だけ出しているアーシアと。
「おおおおおっ！」

「きゃあああああ！」

思考が現実に追い付き、同時に声が上がる。ゲオルクは、慌てて『絶霧』の解除を止める。

その間に、霧の中からギリメカラの大剣と一緒にアーシアが引き抜かれる。

「付いてますか！　私の首、ちゃんと付いてますか！」

首の無い自分の体を見るという一生に一度有るか無いかの経験をしたアーシアは、涙目で自分の首を触って確認している。

「何を考えているんだお前はっ！　護衛するならもっと丁寧に扱え！」

ゲオルクは思わず立場を忘れて本気でギリメカラに怒鳴っていた。あと少し遅ければアーシアの首は落ちていた。アーシアの命などゲオルクからすればあまり興味の無いことであり、必要なのは彼女の神器の能力だが、ギリメカラの無茶な行動には流石に一言言わなければ気が済まなかった。

（牽制のつもりか……！）

だとしたらかなり効果を発揮している。ゲオルクは、同じ手を使うことに躊躇している自分を自覚している。

「パオ」

『次は気を付ける』と半笑いの言葉の後、ギリメカラは鼻を持ち上げ、アーシアを宙に放

る。
高く上げられたアーシアは、一瞬のことで反応出来ず、次に何かの上に落ちたことでワンテンポ遅れて自分の状況に反応した。
「きゃっ！　あれ？　あれ？　ギリメカラさんなんですか？」
自分が乗っているものに気付き、アーシアは下に向かって問う。アーシアが乗っているのは、青黒い肌を持つ象であった。
放り投げている間に、人型から四足の獣型へと姿を変えるギリメカラ。
そうだ、と一声鳴いた後に、壁に向かって突進。分厚い壁は粉砕され、壁の向こうにギリメカラは消える。アーシアの悲鳴を残しながら。
「まともに戦うつもりは無いか……！」
逃走を選択したギリメカラに、ゲオルクは特に驚かない。アーシアをリアスたちの下に連れていき、渡すだけでギリメカラの勝ちである。
正直な話、今回の襲撃は成功しようが失敗しようがゲオルクが所属している英雄派にはあまり影響は無い。成功すれば確かに旧魔王派の株が上がるかもしれないが、三勢力の会談で決して少なくない被害を『禍の団』に被らせた旧魔王派の信用がプラスマイナスゼロになるだけである。寧ろ、失敗してくれた方がゲオルクたちにとって有り難いと言えた。

が、ゲオルクとて偉大なる先祖の血と技を受け継ぎ、そして神滅具を所有しているという誇りがある。虚仮にされたままで終われる筈など無い。

シャルバの望んだ通りに動くなど癪だが、英雄派を代表して出てきた以上自分も英雄派にも泥を塗れない。

あの魔象から必ずアーシアを奪い取る。

知的な風貌からかけ離れた熱気が、ゲオルクから噴き出す。その心に応じて霧がより深く濃いものへと変わっていく。

満たされていく霧の中にゲオルクは身を沈める。ギリメカラたちの後を追って空間を飛ぶ。

皮肉にもギリメカラ自身の存在が、アーシア護衛の難易度を跳ね上げていく。

◇

四方を数え切れない程の悪魔たちに囲まれるリアスたち。逃げ場は無く、抜け出すには何処かに穴を開けなければならない。

一刻も早くアーシアを助け出したいが、目の前の悪魔たちをどうにかしなければ自分たちの命も危うい。

囲う悪魔たちの手が魔力の輝きを放ち始める。
リアス、朱乃はそれに迎え撃つ為に真紅の魔力を纏い、雷光を放つ。
木場は無数の聖魔剣を創り出し、守りと攻めを同時に出来る様にし、ゼノヴィアは構えるデュランダルに聖なる光を宿す。
ギャスパーは周囲の悪意ある眼に震え、涙目になりながらもその瞳を閉じることはなく、何時でも邪眼を発動できる様にしていた。
（ドライグ）
『何だ？』
（すぐに禁手は出来るか？）
『可能だ。お前が望めば刹那で装着させてやる』
（よし）
本来ならば時間が掛かる禁手だが、昂りに昂っている今の一誠の精神状態ならば即座に発動することが出来る。
たとえ、悪魔たちが一斉に放ってきても鎧の強度があれば最低でも皆の盾にはなれる。
何時でも開戦出来る張り詰めた空気。
『きゃあッ！』

しかし、その緊張感に満ちた空気を裂く様な女性たちの悲鳴。リアスと朱乃の声であった。他のメンバーが何事かとリアスたちを見ると、彼女らはスカートの後方を押さえている。

そして、彼女たちの後ろには小柄な老人。隻眼、長く白い顎髭。その老人に、一誠は見覚えがあった。

「いやいや。跳んで来たら目の前に良い尻があったのでな、ついつい手を伸ばしてしまったわい」

悲鳴の理由を知り、一誠は反射的に怒りそうになったが、同時に老人の名を思い出して、その怒りは奥に押し込められる。

「あんたは――」

「オーディン！」

囲っている悪魔の一人が、老人の名を叫ぶ。

「そう叫ばんでも聞こえるわい。耳は遠くはなっていないからのぅ」

「相手は北欧の主神だ！　討ち取れば名が上がるぞ！」

オーディンは笑いながら、その手に三又の槍を出現させる。決して真新しい槍ではない。年季を感じさせ、かつては黄金の輝きを放っていたであろう穂先はくすんでいる。

だが、その槍が現れた瞬間、この場に居る者たち全員が、心臓、あるいは眼前に穂先

を向けられた様な圧迫感、緊張感、恐怖感を覚える。
「――グングニル」
オーディンは短く槍の名を呟き、投げ放つ。
「ぐあっ！」
悪魔の一人が苦鳴を上げる。体の中心に空いた大きな穴。悪魔は、穴が開いた後に苦鳴を上げていた。
「あがっ！」
「があっ！」
「うぐっ！」
「ああっ！」
重なる苦鳴。致命傷に至る大穴を穿たれる悪魔たち。声を上げられる者は運が悪い。痛みという現実を知ってこの世を去るからだ。
声を上げられなかった者は運が良い。自らの敗北という現実を知る前に頭を吹き飛ばされたのだから。
苦鳴と悲鳴が追いつかない速さで起こり続ける。
一誠たちは、オーディンがグングニルに投げた直後、光の様な物が次から次へと悪魔たちを貫いている光景を唖然として見るしかなかった。

さながら光速で動く槍。あまりに速過ぎるせいで、槍が通った後には光の残像が残り、それが糸の様に貫かれた悪魔たちを繋ぐ。
その光の糸が繋ぎ合わされたとき、この場に戦える悪魔の姿は居なくなっていた。
辛うじて致命傷を免れた悪魔も全体の一割ほどいる。しかし、最早まともには戦えない。傷は勿論だが、瞬く間に自分たちを壊滅寸前にまで追い込んだオーディンに圧倒され、精神が既に敗北を認めてしまっていた。
「はて」
オーディンは手に戻ってきたグングニルに肩に担ぎ、負傷した悪魔たちに呼びかける。
「少し遊んでやる前に何か言っておったな。耳は遠くなったつもりはないが、物忘れしやすくなってしまったかのう？」
オーディンが一歩近付く。
「何と言ったか、出来ればもう一度言ってくれるか？」
「ひ、退け！　一旦退いて態勢を立て直せ！」
言うが早く、悪魔たちは負傷した仲間を担いで一目散にこの場を飛び去っていく。
オーディンは追撃することはせず、それを黙って見送った。
「さて終わったのう」

未だに唖然しているリアスたちに、オーディンが話し掛けてくる。神たる力を見せつけられたリアスたちは、話し掛けられた瞬間に正気に戻り、慌ててオーディンに礼を言う。
「オーディンさま。あり――」
「あー、よいよい。ちょっとした運動をしただけだわぃ」
手を軽く振ってそれを遮る。謙遜というよりは、本当に言葉のままという態度であった。
「滅茶苦茶強かったんだなー、爺さん」
「『このセクハラクソ爺、怖過ぎだろ！』と内心思っておる癖に」
的確に内心を読まれ、動揺する一誠。神は心をも見通せるのかと驚く。
「心など読めはせんよ。お主は分かり易い」
またもや正確に当てる。
（本当は読んでいるんじゃないのか？）
「だから読めないと言っているだろぅ」
「ッ！」
読めないという割には、一々一誠の内心を正確に読んでくるオーディンに、一誠はたじたじになってしまう。

「あの、オーディン様はどうしてここに？」
「うむ。まあ、簡潔に説明するとだな――」
旧魔王派の悪魔たちが現在襲撃していること。今回のレーティングゲームのこと。裏でディオドラ・アスタロトが手を貸していること説明する。
ディオドラが禍の団と通じていることは先程知ったが、このレーティングゲーム自体がそれをいぶり出す為のものと知って、心中複雑そうな表情を浮かべる。
「文句があるなら、あの小僧に直接言ってやれ」
オーディンから耳に装着させる人数分の通信機器を手渡される。
「お仲間が一人連れ去られておるのだろぅ？　あれこれ話すなら走っている最中にせぃ。後始末はこの爺が特別にやっておいてやる」
急かすオーディン。リアスたちもアーシアをすぐにでも助け出したいので、オーディンの言葉に甘える。
「ありがとうございます！　行くわよ！　皆！」
神殿を目指し駆け出す一同。が、突如として一誠だけ急停止する。
首筋を駆け抜けていく悪寒。その寒々しい感覚に言い様の無い不安を覚え、足が自然に止まってしまった。
「なあ、ドライグ。今のは――」

「何をしておる。さっさと行かんか」
「いった！」
オーディンにグングニルの柄で背を叩かれる。
「でも――」
「いいから行くがよい。――あとのことはこのわしに任せておけ」
全てを見通す様なオーディンの言葉。
『ここはオーディンに任せておけ、相棒。アーシアを助け出した後にでもまだ間に合う』
後押しするドライグの言葉。
腑に落ちないが、アーシアのことを放っておける筈は無く、一誠は深く頭を下げた後に走り出した。
遠く離れていく背中に、オーディンは小さく笑う。
「小悪魔共の援護のつもりだったが、貧乏くじを引いたかもしれんなぁ」
顎髭を撫でながら、オーディンは閉ざしていた左眼を開く。そこに眼は無く有るのは水晶で作られた義眼。義眼の中では、魔術文字が現れては別の形になっていく。どの文字も現代では失われたものであり、魔術に関わる者ならば垂涎ものであった。
「どれ、この老骨を酷使するかのぅ」
口調は軽い。しかし、浮かぶ表情に好々爺の顔は無く、知識と戦いの神としてあるべ

き顔付きとなっていた。

◇

グレイフィアは一人、部屋から通路に出る。

サーゼクス、アザゼルは供を連れてオーディンと共にバトルフィールド内の旧魔王派の悪魔の一掃に向かった。セタンタは、会場内の旧魔王派を倒す為に赴いている。

残るグレイフィアは、彼らからの連絡の中継点となる為に待機していたが、言い様の無い胸騒ぎを覚え、いけないと分かっていても動いてしまっていた。

通路に出ても特に変化は無く。静かなもの。胸騒ぎを覚えるものなど――そこまで考え可笑しいことに気付く。

（静か過ぎる……）

今も戦いが続いている筈だというのに、この場だけが戦場から隔離された様に物音一つ無い静寂であった。

原因を突き止める為にグレイフィアは動き――

最初に感じたのは柔らかな感触だった。背後から回された腕が、グレイフィアの細い体を抱き締める。

指先から肘付近まで覆う紫のドレスグローブ。それから覗く肌は、赤子の様に染みも皺も無く、絹よりも滑らかで、死人よりもなお白い。

もう一方の伸ばされた手は、グレイフィアの頬に触れ、慈しむ様に頬から顎に掛けて指を這わす。その指先が進む度に甘く、痺れる様な心地良さが起こり、脳を悦びで浸す。常人ならばそれだけで絶頂を迎えるほどの快感。

しかし、グレイフィアは表情一つ変えない。

「久方振りねえ」

背後から紅いベールに包まれた顔を出す。グレイフィアの頬に触れそうなほど近い。

「……貴女ですか」

「つれない言葉。妾は汝との再会をこれほどまでに喜んでいるというのに」

紅いベールの女の言葉一つ一つが理性を揺さぶる毒そのもの。耳に入り、鼓膜を震わせるだけで味わったことのない甘い響きとなって脳を奮わす。

グレイフィアの体にその体をより密着させる。

その身から放たれる香りもまた正気を蝕む。花や香水などこの香りに比べれば無臭そのもの。どこまでもその香りに包まれていたい、浸っていたい。それこそ死ぬまで。そう思わせる堕落の香り。

だがどんなに体を重ねようとも、その身からは熱も暖かさも感じられない。あるのは

死を凝縮させたような冷たい感触だけ。
「……貴女一人だけ、ですか？」
「ホォーホッホッホッホ。あの子らが気になるかえ？　先に述べた様に冥界へ来たのは久方振り。あの子らには少し遊んでくるよう命じておいた」
グレイフィアは正面を見続けるのを止め、目線だけを横に向ける。グレイフィアの視線が自分に向けられたことに合わせて紅いベールの女もグレイフィアに顔を向ける。
ベールから現れたのは、肉を全てそぎ落とされた白骨の顔。
白骨の顔。纏う死の気配。それらを兼ね備えた存在は唯一つ。
グレイフィアの耳元に、唇の無い口を添える。
「さあ、可愛がろうぞ。グレイフィア。最高の快楽（死）を以って」
『忌まわしい者たちの母』『大淫婦』、数々の名を持つ魔人マザーハーロットは、慈母の如く慈愛に満ちた声で死を囁く。

愛壊、穢獣

彼女とマザーハーロットとの因縁には、もう一人別の魔人が深く関わっている。

魔人マタドール。各地にて殺戮を繰り返す最悪の存在として、あらゆる勢力から蛇蠍の如く忌み嫌われた存在である。

マタドールは、過去に何度か冥界に侵入し、その度に多くの悪魔が彼の手によって葬られてきた。

悪魔よりも悪魔染みた存在であるマタドールを、冥界に来る度に撃退していたのが魔王サーゼクスである。

最初の戦いではサーゼクスが未熟であり、マタドールへの知識も殆ど無かったことから敗北を喫したが、その時にサーゼクスの中にある秘めたる力に気付いたのか、マタドールはサーゼクスの命を奪うことなく冥界を去った。

二度目の戦いのときには、サーゼクスも力を覚醒させており、マタドールを実力にて冥界から追い出した。

そして、三度目の戦い。その記録は、魔王が魔王たる所以、魔人が魔人たる所以をこれでもかと見せつけたあまりに凄絶なものであり、見る者が怖気づくほどであった。

恐怖や力による統治を望まないサーゼクス本人によって、その記録は歴史から完全に抹消され、関係者以外知る由も無い戦いと化した。

このときに、サーゼクスは一生消えない傷痕をマタドールによってその身に刻まれ、マタドールもまた度重なる冥界侵入によって得られたデータを四大魔王にして稀代の天才アジュカ・ベルゼブブが利用し創り出した対マタドール用結界のせいで、二度と冥界に入ることが出来なくなった。

そして、この三度目の事件の陰にもう一人魔人が存在した。それが、マザーハーロットである。

彼女は冥界に密かに侵入し行ったことは、サーゼクスの眷属たちの妨害である。彼女の存在によって、サーゼクスはマタドールと一対一で戦わざるを得ない状況へと追い込まれた。

マザーハーロットという存在は、グレイフィアや他のサーゼクスの眷属たちにとって忌み名であり、そしてセタンタにとっても忘れたくとも忘れられない存在である。

生涯を賭して守ろうとした。だが、その願いを踏みにじり、血塗れとなって半死半生となったサーゼクスを見たグレイフィア。その筆舌に尽くし難い悔恨に苦しむ姿を見たときのマザーハーロットの哄笑は、どんなに時が過ぎようとも耳の奥に鮮やかに残っていた。

◇

自分でもここまで冷静に居られることに、グレイフィアは密かに驚く。あるいは、感情が飽和し無感情に等しいものとなったのかもしれないとも考えた。

背後に立つのは、堕落にして穢れの化身でもあるマザーハーロット。グレイフィアを抱き締める手、頬に這わせる指はグレイフィアよりも細く、病的にまで白いが見た目など意味は無い。少なくとも彼女の手は、数え切れぬほどの存在を様々な意味で堕としてきている。

マザーハーロットの手が、グレイフィアの胸に当てられる。その胸の奥から伝わってくる命の脈動。死の象徴というべき魔人に触れられているのに乱れることはない。

伝わる鼓動。そして、その深奥にある純粋なまでの想いに触れ、マザーハーロットは恍惚とし、その音すら艶美な吐息を洩らす。

マザーハーロットは、以前感じたグレイフィアの純粋な想いが全く変わっていないことに喜ぶ。

純粋な想い。或いは『愛』とも表現出来るが、言葉で表すには『愛』などと言う一言など陳腐であり不粋である。だが、マザーハーロットは敢えてグレイフィアのその想い

を愛と表現する。
誰かを心の底から思う気持ち、もしくは魂。それに触れる度にマザーハーロットは、それを慈しみ、愛し、抱き締めたくなる。
そして、同時にこうも思う。
この愛を踏み躙り、穢し、壊したくなる。
マザーハーロットがそういった純粋な想いを愛と表現するのも、形無きものを定まった形に押し留めるという一種の侮辱に近しい。
だが、愛を否定したいから蹂躙するのではない。マザーハーロットは、肯定する為に愛を徹底的に凌辱する。
踏み躙ることで痛みが分かる。穢すことで形が分かる。壊れたことで存在が証明出来る。
あの想いは間違いなく愛『だった』と。
グレイフィアは、ただ静かに時を待つ。実力者であるグレイフィアの背後を難なく取った敵である。今の状況で動けば間違いなくやられる。
相手がどんなに不快な存在だろうと、自分の体を味わう様な屈辱的な真似をされようと、グレイフィアは黙って、表情を全く変えずに待つ。それこそが、マザーハーロットへの無言の反抗であった。

グレイフィアの、その静かな決意すらもマザーハーロットには心地好い感触であった。冷徹さの中にある確かな感情の熱。相反する二つの魂の感触は、つい壊してしまいたくなるほどに面白い。

が、それも長くは愉しむことは出来ない。もう一つ、苛烈で、激しく、そして純粋な愛を感じ取った。

「おい」

物音一つ無い通路に響き渡る重々しい声。その声には激しい怒りが込められていた。

通路の端に現れるのは、槍を担ぐ美青年。

「セタンタ……」

グレイフィアがその名を呼び、マザーハーロットが彼の存在を視界に入れた瞬間、姿が消え、マザーハーロットの真正面に槍を構えた状態で現れる。数十メートル離れた距離を、刹那を超える速さで駆けたのだ。

「汚らわしい手で彼女に触るんじゃない。淫売が」

吐き捨てる言葉と共に、マザーハーロットの目の無い眼窩に向けて槍を突き出す。

だが、マザーハーロットは突き出された槍の穂先を、一輪の花を摘まむ様に指先で掴み、止める。

「乱暴だこと」

セタンタが槍を押し込もうとしても、全く動かない。花よりも重いものなど持ったことが無い様な、細く白い手からは想像もつかない力。
目を吊り上げ、睨むその様は、普段の物静かなセタンタを知っている者からすれば驚愕ものである。
押そうが引こうがセタンタの槍は動かない。その様子をマザーハーロットは愉快気に見ている。肉のそぎ落とされた骨の顔では表情など何一つ分からないが、嗤っているという気配だけは自然と伝わってくる。
一見すれば全く力が通じず焦っている様に見えるセタンタ。しかし、セタンタの内心に焦りは無い。
全ては一秒。否、百分の一秒でも注意を自分に惹きつけておくこと。
不意に、マザーハーロットはグレイフィアに回していた腕を僅かに緩める。
直後、マザーハーロットの頭部を拳が背後から貫く。
拳を繰り出したのは、ディハウザー。気配全てを殺し、マザーハーロットに接近して拳を打ち込んだのだ。
事前にセタンタと会っていたからこそ、ディハウザーの為にセタンタは自分に注目する様に仕向けた。尤も、怒り自体は演技でなく本物だが。
しかし――

「ホォーホッホッホ。危ないこと」
――ディハウザーの拳はマザーハーロットを貫いておらず、頭部に纏うベールを捲り上げただけ。
完璧と思われたタイミングで打ち込んだ拳を、まるで幻を見せる様に避けてしまう。
マザーハーロットは、グレイフィアに回していた腕を蛇の様に這わせて移動させ、顔のすぐ側に突き出されているディハウザーの拳をその指先で触れる。
ディハウザーの背筋に、味わったことの無い衝撃が駆け抜ける。ただ指先で撫でられただけというのに、全身に鳥肌が立ち異性に初めて触れられたかの様な初心な反応を示し、母親の腕に抱かれた様な安堵感を覚え、同時に体を巡る血が加速し、体温が上昇していく。
見て、触れることで初めて実感する魔人の恐ろしさ。死という負をまき散らす存在から、今の様な感覚を覚えること、その矛盾はただ恐ろしく思う。
「汝からは深い情の絆を感じとれる。――同時にその中にある喪失も」
「……」
ディハウザーの心を見透かす様なマザーハーロットの言葉。正確に読み取られたことにディハウザーは危機感を覚え、会話をする気など無い意思を示す。
「その喪失、妾の愛で埋めてやろうかえ?」

「……黙れ」
抑えていても感情の波が乱れていく。マザーハーロットの言葉の響きだけでも心を乱す。そして、触れられたくないものに触れてくるせいで余計に感情の制御が難しくなる。
マザーハーロットの挑発に一言だけで済ますディハウザーの精神は、寧ろ強靭なものと言えた。
「オーホッホッホッホ」
何が面白いのか、マザーハーロットは声高く笑う。すると場に満ちる甘い香りが一層強まったのを感じた。セタンタ、グレイフィア、ディハウザーはその香りが鼻腔に触れた瞬間、心臓が高鳴り、不味いと感じる。
脳が思考を放棄し始める。張り詰めた感覚に虫食いの様に空白が生まれていく。
他者を堕とし、惑わし、誘惑する力の濃度が増した。いくら超人的な精神力を持つ三人でもこの状況が続けば、いずれは意識が蝕まれる。
アオオオオオオン！
通路を揺さぶる雄叫び。それは聞いた者の本能を揺さぶる様な大声量であった。しかし、グレイフィアたちにとっては逆に気付けとなる。
雄叫びの主は、通路を駆け、壁を駆け、天井を駆けてマザーハーロットの頭上まで行

くと、落下と共にその爪を振り下ろす。
「次から次へと」
新たな乱入者の存在に、愉しむ様な言葉を残しながらマザーハーロットは爪が当たる直前に霞の様に消える。
マザーハーロットから解放されるグレイフィアたち。天井から落下するそれは、標的が消えたのを見ると振り下ろすのを中断し、そのまま通路に降り立つ。
「貴方は……」
「グルルル。無事カ？」
乱入者ケルベロスは、三人の無事を確認してくる。
「……まさか貴方が来るとは思っていませんでした。助かりました」
「コッチモ同ジキモチダ。オマエラガ居ルトハナ」
セタンタがケルベロスに礼を言う。
襲撃してきた悪魔たちを全て倒したケルベロスは、初めて嗅ぐ不気味なニオイと背筋が寒気立つ気配を感じ取り、この場に現れた。
そして、来て正解だったと思う。ケルベロスが睨み付ける先には、マザーハーロットが何事も無い様に立っている。
その黄金比の肉体は、立っているだけでも一つの芸術となりえたが、ケルベロスから

は、マザーハーロットはあまりに不気味な存在に見え、存在すること自体に強い拒否感を覚える。
「二人とも彼とは知り合いでしたか。――ここに来たのは間薙君の指示かい？　ケルベロス君」
「……アイツハ変ナ二人ニ何処ヘ連レテイカレタ。他ノ仲魔トモハグレタ」
その返答に、ディハウザーだけでなくセタンタ、グレイフィアの表情が曇る。シンの強さは知っているが、それでも無事で居られるという確証は無く、またピクシーたちもこの場所は危険過ぎる。
その非が自分たちにあると分かっている故に、ケルベロスに対して罪悪感を覚えてしまう。
グレイフィアが何か言おうと口を開いたとき――
「マア、強ケレバ生キ残レルダロウ。弱ケレバ死ヌダケダ。オレモ、コイツノコトニ集中シナケレバ死ヌ」
達観とも冷淡とも呼べるケルベロスの態度。しかし、間違ったことは言っていない。グレイフィアたちもこの先、生き残れる保障は無い。
グレイフィアは、喉から滑り出そうになっていた謝罪の言葉を呑み込み、『そうですね』と同意の言葉に変える。

「気をつけてください」
セタンタは声を潜めてディハウザーに注意すべきことを告げる。
「あの魔人は二人組です」
「二人組、ですか」
あの魔人に近い力を持った存在がもう一人居ることに驚くべきなのかもしれないが、その余裕すら、目の前に居るマザーハーロットを警戒するディハウザーには無い。
「もう一人というか、正確にはもう一頭ですが、どこかに潜んでいるかもしれません」
「それは――無いかと思います」
セタンタの警告に、グレイフィアが口を挟む。
「私も気になっていましたが、彼女自らが言っていました。遊ばせに行かせた、と」
その言葉に、セタンタの眉間に深々と皺が刻まれる。
この場所の何処かで、マザーハーロットと同じ脅威が暴れようとしている。それに巻き込まれるのは一体誰か？　リアスたちか？　サーゼクスたちか？　シンか？
誰にせよ、グレイフィアたちは一刻も早く目の前魔人を退けなければならない。
グレイフィアたちの心の中の焦りを愉しむ様に、マザーハーロットは顎を震わせ、人を食う様に嗤う。

◇

シンはひたすら神殿に向かって走っていた。時折、遠く離れた場所から聞き慣れない音と破壊音が聞こえてくる。

バトルフィールド内でも誰かが戦っている証である。その音の方に向かえば、オカルト研究部のメンバーの一人ぐらいに会えるかもしれないと考えたが、すれ違う可能性も考慮し、結局最も目立つ神殿のみを目指すことにする。

行けば味方か、敵の一人ぐらいは居るだろうと考えながら。

ある程度神殿にまで近づいたとき、シンの足が止まる。

前方に、ローブを深く被った八名の人物の姿。ローブの者たちは、何かを探す様に視線を彷徨わせていたが、その内の一人がシンに気付くと皆の視線が一斉に向けられる。

そのローブにはシンは見覚えがあった。ディオドラの眷属たちが纏っていたのと同じ装飾である。

「お前は……」

向こうもまたシンの顔に見覚えがあるらしい。

「……アーシア・アルジェントは今何処に居るか知っているか？」

ローブを纏った集団の一人の問いに、シンは表面上無表情に徹しつつ、内心では眉を

ひそめる。
（どういう状況だ？　アーシアが行方不明になったのか？）
きな臭いと感じていたディオドラの眷属が、アーシアの行方を探す。いくつか考えられる可能性が浮かぶ。リアスの眷属のうちの誰かが、アーシアを連れて逃げ回っていること。乱入してきた禍の団がアーシアを連れていってしまったこと。
あるいはどちらにも関与してない別の存在にアーシアが連れていかれたこと。この考えをしたとき、脳裏に単眼の巨象の姿が浮かび上がる。
シンはこのとき解答を知らなかったが、最後の考えは当たっていた。ディオドラの眷属たちは、当初の計画では神殿内でリアスたちを待ち構えるという予定であったが、主のディオドラからアーシアが逃走したことを告げられ、彼女たち八人の『兵士』は神殿の外を探し、残りの眷属たちは神殿内でアーシアを探している。
「黙っていないで、何か言ったらどうだ？」
沈黙し続けるシンの態度を無視と判断したのか、声に少し感情が乗る。
それでもなお、シンは彼女らの存在など見えないかの様に何も喋らない。
「……沈黙は決して利口な答えでは無いぞ？」
ディオドラの眷属たちが構え始め、その手に魔力、あるいは魔法陣を浮かび上がらせる。全員既にプロモーションによって『女王』に昇格している。シンは八人の『女王』と

一人で戦うことを意味している。
しかし、他者から見れば窮地という中でもシンは特に構えることはせず、右手、左手の紋様を淡く輝かせながら八人の眷属たちを見ている様で、その焦点はその向こうの神殿に向けられていた。
この状況に於いてもシンは、彼女らを眼中に入れない。
隙があるようでいて、何故か攻めることを躊躇させるシンの無防備に等しい構え。対峙し、構え、相手の出方を窺うことで、彼女らは得体の知れない不気味さをシンから感じとっていた。
だが、いつまでも膠着してはいられない。彼女らには主からの命がある。絶対に逆らうことの出来ない主からの命が。
眷属の一人が一歩にじり寄る。削られる土の音。巻き込まれる砂利たちが擦れ合う音で、ようやくシンの目線がその音の方へと向けられた――が、すぐにその視線は別の方向を向く。
舐められているのかと思い、眷属たちから殺気が迸る。
「おっとっと。ちょっと待ってくれるかな」
殺気も薄れる様な軽い声と共に、白い翼を羽ばたかせて一人の青年がシンと眷属たちの間に降り立つ。

「どうも」
　青年はシンとディオドラの眷属たちに気安い感じで挨拶をする。
　シンにとっては初めて見る顔。ディオドラの眷属たちは『天使……』という声を洩らしながら、驚きと何故か怯えを混ぜた反応を見せる。
「……誰だ？」
「初めましてー。イリナちゃんと同じ『御使い』のデュリオ・ジェズアルドだよい。お見知りおきおー」
　緊張感が無いというか、自然体とも呼べる態度で自己紹介する。
「えーと。君って間薙シン君で合ってる？」
「……そうですが」
「ああ、やっぱり。イリナちゃんから聞いた通り、凄い無表情。想像の倍はいってるね」
「……そうですか」
「気を悪くさせたらごめんねー。何か見事なまでに無表情というか鉄仮面みたいな顔だったからついつい。ああ、あと敬語とか使わなくていいよ。普段通りに喋ってくれていいから」
　デュリオのマイペースさに、ディオドラの眷属たちは言葉を失っていた。一方でシンは、そのマイペースさにイリナと似た感じを覚える。転生天使というのは、基本的にこ

の様な性格なのだろうかと思い始めてもいた。
「……天使の御使いがこの場に一体何の用だ？」
ディオドラの眷属が、場の流れを制しているデュリオに逆らう様に会話に割り込む。その声は絞り出す様な声であり、デュリオを恐れている様にシンには聞こえた。
「まあ、用はあるね。――貴女たちにさあ」
軽薄にも見えた笑みが消える。憂いを秘めた眼差しで、デュリオはディオドラの眷属たちを見つめる。
「正直、こういうことをハッキリ聞くのは好きじゃないけど――どうして悪魔の眷属に？」
その問いに対し、ある者は息を呑み、ある者は視線を逸らし、ある者は身を守る様に己を抱き締める。動作はバラバラであったが、全員共通しているのは、デュリオの言葉に動揺していた。
「そっかぁ……全員かー……」
「どういう意味だ？」
「教えるけど、一つだけ俺のお願いを聞いてくれる？」
「……何だ？」
「ここは全部、俺に任せて欲しい」

「――分かった」
「あんがとね」
　シンの質問への答えは至ってシンプルなものであった。この場にいるディオドラの眷属たちは全員教会の元信者たちである、と。
　デュリオは、ディオドラの眷属たちの中に元教会関係者が、どれほどの数居るのか正確には把握していなかった。しかし、彼女たちの反応で全員が元信者であると確信した。
　デュリオの中にやるせない気持ちが湧いてくる。
「で、だ。お姉さん方にお願いがあるんだけど。――出来れば、このまま黙ってこの戦いから手を引くっていうのは――」
「それは……無理な話だ」
「――そうですか」
　穏便に済ませたいというデュリオの考えは、即座に拒絶される。デュリオ本人も甘い考えだと自覚しているが、それでも穏便に済ますことに一縷の望みを懸けていた。結果が駄目であったが。
「……なら、仕方ないのかなー」
　その言葉で、デュリオが戦闘態勢に入ったと思ったのか、ディオドラの眷属たちが一

斉に構える。

「――何がそんなに怖いの？」

構えるディオドラの眷属たちを見て、デュリオは目を細めて問う。微かに震える指先。ローブで顔を隠しているが、一筋に汗が流れている者も居る。

デュリオの未知の力を恐れているというよりも、別の何かに恐れている様子であった。

「私達には……もうここしかないのだ」

強迫観念に満ちた言葉であった。自分たちを縛る唯一のものに縋り、依存する様は、デュリオには痛々しく見える。

「俺が天使だからしんどいのかい？　それとも教会に関係しているから？　或いは両方？　止めたいなら止めてもいいと思うぜい？　誰も怒りゃあしない。当然俺も怒りはしないよ。まだ間に合う」

「教会を……！　神を裏切った我らに、最早行く場所などありはしないのだ！」

涙に濡れた声で一人が叫び、デュリオに向けて魔力の塊を飛ばす。それに伴い他の眷属たちも次々に魔力を放った。

過去との決別、というよりも自傷行為を彷彿とさせる行動。堕ちた身故に救いも求めず、救いの手も払い、更に堕ちることを自ら罰とした行為。

秘めた叫びを乗せた様な攻撃に、デュリオは悲し気に息を吐く。
途端、デュリオの周囲を囲う様に氷壁が現れ、魔力を防ぐ。シンもまたその氷壁によって守られながら、冷静に氷壁について観察もしていた。
厚みはそれ程無く、向こう側が透けて見えるほどの透明度と薄さだというのに、魔力をいくら浴びせられても、氷壁は砕けず、溶けず、シンたちを守る。
出会って、たかが数分程度。デュリオがどんな能力を持っているかなど全く分からないが、この氷壁は力の一部でしかないのは分かる。デュリオからは、まだ底が分からないほどの余力が感じられた。
全ての攻撃を防ぎ切ると、氷壁が呆気無く溶けて消える。
氷壁が消えた後、デュリオは人差し指と親指で輪を作り、そこに息を吹き込む。輪の中から虹色のシャボン玉が息を吹き込む度に作られ、それがフワフワと漂いながら眷属たちに向けて飛んで行く。
得体の知れないシャボン玉を恐れ、皆がそれに魔力を放つ。
魔力が直撃し、割れたと思った彼女らの目の前に割った筈のシャボン玉が漂ってくる。
シャボン玉は強風に扇がれた様に魔力が触れる直前に避け、そのまま速度を増して彼女らの側まで移動していた。

シャボン玉が彼女らに接触し、音も無く割れる。その途端、彼女たちは目を見開き、次の時に滂沱の涙をその目から流す。
蹲り声を押し殺して泣く者。空を見上げて呆然としながらただ涙を流す者。感情のままに泣き叫ぶ者。反応は異なるが、全員から戦意が削げていた。
「今更……今更こんなことを思い出して、どうなるというんだ……お前は、残酷だ……！」
嗚咽の混じった声で非難する眷属の一人。
「憎んでも、恨んでくれてもいいよ。それで立ち止まってくれるなら。……俺には、堕ちるとこまで堕ちようとするお姉さん方を黙って見ていられなかったんで」
デュリオはもう一度指で輪を作り、そこからシャボン玉を噴き出す。
今度は抵抗も無く、抵抗する気力も失ったのか簡単にシャボン玉は彼女たちに触れる。
シャボン玉は割れずに、彼女たちを包み込んでしまう。
ふっ、とデュリオが息を送ると眷属たちを包み込んだシャボン玉は、空に向かって飛んでいってしまった。
「――何をしたんだ？」
「あのシャボン玉はさあ、触れた相手に昔の大事な記憶を蘇らせるって力があるんだよ」

「成程」
　シンはデュリオの説明に納得する。大切な記憶と今の現実との非情な差を突き付けられ、あの眷属たちは泣き崩れたのだろう。下手をすれば精神崩壊、もしくは自殺にすら追い込めそうな能力である。
「言っとくけど、あんまりえげつない追い込み方なんてしないよ」
　シンの考えていることを見抜いて、デュリオは誤解しない様に言う。
「それにしても――」
　デュリオは地面に腰を下ろし、疲れた様に溜息を吐く。
「しんどいなぁ。誰もが幸せってのが一番だけど、中々最良の方法なんて見つかんないねえ」
「――これが最良かは知らないが、血は流れなかったな」
「慰めてくれんの？　あんがとね。あ、シンたんって呼んでいい？」
　変な愛称を付けられたが、可否は答えずに話を進める。
「俺一人だったら血は流れていた」
「え？　スルー？　勝手にシンたんって呼ぶよ？　――じゃあ、俺がこっちに来て正解だったのかなー……」
「ところでイリナは？」

「こっちに入ってきた所で分かれた。広いし、手分けして探す為にね。ディオドラの眷属の中に俺が昔世話になった人も居るんだけど、もしかしたらイリナちゃんが向かった方に居るかも」
「そうか」
詳細な事情は分からないが、ディオドラの眷属たちは真っ当では無い理由で眷属になったことと、デュリオとイリナはそれを伝えに、或いは真相を突き止めに来たのだと推測する。
デュリオはゆっくりと立ち上がる。
「お話はここまでかな？」
「だろうな」
ディオドラの眷属たちとの戦いは終わった。だが、シンはまだ紋様を輝かせ、警戒を解いていない。そもそも、デュリオもわざわざ彼女らをこの場から遠ざけるという謎の行動をとっている。
背中に走る悪寒はまだ消えない。寧ろ強まってきている。
シンがディオドラの眷属たちから目を離したのは、デュリオの存在を感じとったからではない。そもそもシンの視線とは違う方向からデュリオは現れた。
デュリオは、会場で感じた気配とは似て非なる気配を、このバトルフィールド内に

入った直後から感じたことに内心驚いていた。
ただの気配ではない。心の中を侵す様などす黒く、呪いの様な穢れた気配。それを感じるだけで、純白の翼が穢されていく気分であった。
「本当に俺がこっちに来て正解だ。イリナちゃんには悪いが荷が重い。――というか俺でもキツイ」
「外れかもしれないぞ?」
「まあ、そんときはそんときってことで」
冷たい死を伴った穢れが近付いて来る。方角は――頭上。
二人の行動は迅速であった。頭上から迫るそれに向け、デュリオは竜巻を起こす。
大地を抉りながら回る小規模ながらも破壊を秘めた高速の旋風。土煙に濁ったそれに、シンは炎を吐き出した。
灰色の竜巻は一瞬にして紅に染め上げられ、竜巻が周囲の空気を取り込むことで炎は更に激しく燃え盛る。
即席の連携によって生み出された火炎旋風が中に居る者を焼き尽くそうとする。だが、その赤い竜巻も内側から放たれる一撃によってただの火の粉となって霧散する。
中から現れたものを一目見た瞬間、デュリオの表情から血の気が失せ、脂汗を流し、苦痛に耐える様な顔となる。

全長数メートル程で決して大きな体躯ではない。暗い赤の体、それは乾く前の血と似た赤色。その体に一定間隔にある黒の紋様。紋様は生物の様に蠢き、形を秒単位で変化させていく。

長い尾と両翼はまるでドラゴンを彷彿とさせるが、その体から生える頭はドラゴンとは異なる。

鼻が削ぎ落された様に低く。瞳の無い白い目。上顎を突き破りそうに下顎から伸びた長く、反った牙。獣と人を混ぜ合わせた様な顔は見る者に嫌悪感を与える。

王の様に黄金の冠を被り、頭頂部から伸びる角。

赤い獣の目がシンとデュリオを右から見て、左から見て上から見下し、下から見上げ、真正面から見て来る。

目線の数に矛盾は無い。何故ならその赤き獣から伸びる頭は一つでは無い。その体躯が窮屈に感じさせる七つの頭。どれも同じ顔をしているが、唯一の個性として生える角の数が違う。

一本あるもの、二本あるもの、角がないもの。その角の数は合わせて十。

知識ある者が赤き獣の姿を見れば、恐れ戦き、あるいは発狂するかもしれない。

その赤き獣は、過去に、未来に、そして終末に現れる存在。

しかし、この場に立つ二人にはその赤き獣についてあれこれと考える余裕は無い。そ

の暇など与えてくれることすらさせて貰えない。
赤き獣は咆哮を上げる。その咆哮が二人の耳に入った瞬間、脳を穢す様に聞くに耐えない罵声、暴言、怒声、冒涜、侮辱の言葉へと変換される。
頭の中で鐘を鳴り響かせられたかの様に大音量でそれが反響する。無意味と分かってしても鼓膜を抉り取りたくなる衝動に駆られる。
シンは言葉から逃れる為に身を丸めそうになるのを、奥歯を擦り減るかと思うほど強く噛み締めて耐える。
デュリオは、膝の力が抜け片膝を地面に付けてしまう。赤き獣に対して、デュリオの体は先程から過敏に反応しており、その存在だけでも悪影響を及ぼされている。
彼らは知るまい。その常に蠢く赤き獣の紋様は、神を冒涜する言葉の集合体であり、常に新たな言葉が出ては、別の誹る言葉に覆い被されていく。
視覚化された呪詛であり穢れ。吐き出される鳴き声すら相手を呪い尽くす。その場にいるだけで空気を、大地を汚染し、全てを己の領域へと変えていく。
赤き獣は唸り声を上げ、両翼を羽ばたかせて飛び掛かってくる。最初に狙うのは、赤き獣の影響を最も受けているデュリオ。
七つの頭が人の頭など容易く噛み砕けるほど大口を開ける。
分かり易く狙う獣の前にシンが立ち塞がる。シンがデュリオを守る様に横入りして

きても獣は、眼中にも無い様に速度を緩めない。
シンは迎撃するのではなく獣に向かって走る。距離は瞬く間に詰められたが、獣はあくまでデュリオに狙いを定めており、どの頭もシンを襲おうとはしない。
獣の胸元にまで接近すると同時に、シンは拳を打ち込む。
拳に伝わってくる感触をどう表現すればいいのか。ただ分かるのは、自分が全く無意味な行動をしているということであった。
シンの拳では獣の動きを鈍らせることも出来なかった。
獣の走破は止まらず、シンはもう一方の手を獣に叩き付ける様に当て、つま先を地面に刺す様に立てる。
まるで赤子と大人の力比べであった。獣の速度は緩まず、シンのつま先は後方に向けて地面に溝を刻むだけ。
触れられることを鬱陶しく思ったのか、頭の一つが開いた口をシンに向ける。頭蓋を噛み砕き、その中身を啜り取る為に。
牙がシンの脳天に突き立てられる前に、頭上から迫る獣の顎を掌で打ち、開かれた口を無理矢理閉じさせる。
しかし、獣にとっては何ら影響も無いこと。噛み砕く牙と啜り取る口はまだ六つある。

残り全ての頭がシンの体を引き裂く為に牙を剥く。
「危なっかしいことをするのう」
絶体絶命の状況の中で穏やかとも言える年季の入った声。直後、シンの顔のすぐ側に突き出される三ツ又の槍。
空気を震わす音と共に、槍の先端から一条の光が放たれ、獣の体に当たる。か細いとも言える光が、前進する獣にその場でたたらを踏ませ、更には後退させていく。
シンを八つ裂きにするはずだった七つの頭は、空振りに終わる。
シンと獣との距離が十分に開いたとき、獣を押し込んでいた細い光は、獣の姿が光で見えなくなるほど巨大なものとなる。力を更に注いだのか、あるいはあの細い光自体が元々これ程力を束ねていたのか分からないが、地面を抉りながら獣を彼方へ飛ばしていく。
数百メートルほどの距離を光が奔った後、消える。
「やれやれ」
突き出していた槍をクルリと回し、肩に担ぎながらシンの隣に並ぶのは隻眼の老人――オーディン。
「また会ったのう」
「貴方は……」

シンは、前のレーティングゲーム後に病室前でオーディンと会ったことを思い出していた。
「もしかして、オーディン様、ですか？」
痛みに耐える様な途切れ途切れの言葉で、デュリオがその名を呼ぶ。
「あんまり喋るな。天使のお主があれと戦うなんぞ自殺行為だわい。よく形が保てているものよ。ただの天使なら堕天を通り越してとっくに消滅しておる」
「は、はは、一応ジョーカーなんて、呼ばれて、いるんで」
血の気の無い顔で無理矢理笑ってみせる。痛々しく感じるその笑みに、オーディンは呆れた様に溜息を吐くと指を宙に走らせ、何か文字を書き、それをデュリオに向けて飛ばす。
デュリオの胸に、見たことの無い文字が浮かび上がり、一瞬だけ輝いた後に消える。すると、デュリオの顔に僅かに血の気が戻ってくる。
「気休め程度にはなるだろう。しかし――」
オーディンは目を細め、愛槍によって吹き飛ばした獣を見る。
「頑丈な奴め」
シンもまた目を凝らして獣を見る。オーディンの言う通り、あれ程の攻撃を受けても獣に目立った傷は見えない。思い返せば、炎の竜巻のときも無傷であった。

咆哮を上げる獣。その声にオーディンも顔を顰めた。
「耳障りな声だわい」
獣がシンたちに向かって走り出そうとした、そのとき。
真上から巨大な影が獣を踏み潰す。その勢いで地面は割れ、割れた大地は隆起し、土煙が舞い上がる。
急なことに驚く暇も無く、落下による轟音の余韻を掻き消す雷鳴の如き声が響き渡る。
「可能な限りここから離れろ！」
土煙で姿は見えないが、その声をシンは知っていた。
「……タンニーン？」
答えが当たっているのか判明する前に、オーディンが呟き、半透明の円がシンたちを包み込もうとする。
円が全てを覆う前にシンは見た。土煙の中で輝く橙の光を。
次の瞬間には、シンたちは別の場所へ跳んでいた。元居た場所からどれほど離れているか分からない。
大地を揺るがす様な衝撃と音が聞こえる。
音の方に目を向けたシンの目に映ったのは、煌々と輝く炎。それは地平線に沈む太陽

の様であった。

◇

血の痕と苦痛に呻く声を引き連れながら、旧魔王派の悪魔たちはひたすら逃げていた。

行く当てなど無い。ただ少しでもあのオーディンから離れたかった。

あれ程居た悪魔の数は、今では数え切れる数にまで減少している。更に殆ど負傷しておりまともに戦える者だけを数えたらもっと少ない。

先頭で誘導する上級悪魔は、屈辱と恐怖で頭の中が埋め尽くされていた。

神であるオーディンに復讐したいという気持ちはある。しかし、見せ付けられた力のことを思い出すと体が自然と震える。既に心が折られている状態であったが、その事実から必死に目を背けていた。

何処へ行けばいい。何処に逃げればいい。敵を前に逃亡してしまった自分たちには戻る場所は無い。『禍の団』に戻った所で、事情を知られたら残っている旧魔王派たちによって処分されるのは目に見えている。それどころか、戻る前に今回の作戦を指揮している二人の魔王によって処刑される可能性の方が高かった。

最悪しか待っていない未来に、何処で間違ったのかと自問自答してしまう。
答えの出ない自問に、一人葛藤する。
「……？」
ふと、葛藤の合間に疑問が生じた。
静か過ぎる。
深く没頭し過ぎて、それに気付くのが遅れた。苦しむ声も呻く声も聞こえなくなり、妨げになるものが消えていたせいでもあったが。
立ち止まって振り返る。
そこには付いてきている筈の他の悪魔たちの姿は無かった。
「どういう、ことだ……？」
考えが追い付かなくなりそうになる。少ないとはいえ、転送用魔法陣など無しで悪魔たちが一斉に消えるなど在り得ない。
混乱による沈黙の中、地面を這うザリザリという音が聞こえてくる。
音が聞こえた先には大小様々な岩が並んでおり、音の主はその岩の陰に隠れている。
現魔王派の悪魔でも潜んでいるのかと警戒し、ゆっくりと距離を取ろうとしたとき――
「うあっ！」

岩から何かが伸びてきた。それが瞬時に足に巻き付く。咄嗟に外そうとするが、巻き付いた箇所から白煙が上がり、悪魔の肉体を滅していく。

「あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、あ゛、！」

生まれてきてここに至るまでの間で、間違いなく最上級の痛み。逃げようとする意識を上塗りし、ただ激痛のみで染め上げ、何も出来なくさせる。

巻き付いた何かは、悪魔を凄まじい速度で引き寄せ、岩陰の中へと連れ込む。

そして、悪魔は見た。陰に隠れたものの姿を。

その姿は――

「――はっ？」

悪魔は気付けば光の無い空間に立っていた。不思議なことに、光源が無い筈なのに自分の姿がくっきりと見える。

いくら悪魔が夜目が効くといっても微小の光が全く無い漆黒では見ることなど出来ない。闇の中で自分だけ浮き出ている様に見えた。

「どこだ……？」

見回すが何も無い。出入口も無い。そもそもどうやってここに来たのかすら分からない。

悪魔にはここに来る前の記憶が完全に抜け落ちていた。

「一体……ッ！」
もう一度見回したとき、悪魔は見つける。誰かの後ろ姿を。
「おい！」
その後ろ姿に向かって全力で走る。かなり遠くに見えた筈なのに、不自然なまでにあっという間に接近していた。だが、悪魔はこの不自然さを何故か気にもしない。
「んんー？」
声に反応し振り返るその人物。男であり白髪に神父服を纏っていた。悪魔にはその人物に見覚えがある。作戦前に協力者なので手を出すなと言われた者であった。
「お前は……」
「お前もかぁ……？」
「いったい――」
「お前も俺を殺しに来たんだろぉー？」
悪魔は気付く。白髪の人物の足元に転がる同胞の姿を。悪魔の見ている前でその体は粒子状に分解され、白髪の男の体に吸い込まれていく。
「何をしたっ！」
「やっぱ殺しに来たのかー。そうだよなー、そうじゃないかと思ってたんだよ」
「質問に――」

「やだなぁ。やだやだやだやだ。殺されるなんてノーサンキュー。絶対無理」
噛み合わない会話に業を煮やし、悪魔は白髪の男に魔力を放とうとして気付く。魔力が出てこない。息をする様に、生まれたときから共にあった魔力が一切反応しない。
「これは！　があっ！」
動揺する悪魔を、白髪はいきなり殴り飛ばす。
地面に倒れる悪魔に、白髪は跨った。
「殺されるのが嫌なら――先に殺るしかないよぁー？」
悪魔の顔を何度も殴打する。悪魔は身を守ろうとするが、白髪の拳はその甘い防御を抜けて的確に悪魔を痛めつける。
「誰だって死にたくないよ！　俺もそうだ！　てめえもそうだろ！　だけど俺の代わりに死んでくれ！　っていうか死ねぇぇぇぇ！」
両手で悪魔の首を締め上げる。見る見るうちに変わっていく悪魔の顔色。
「フ、リー、ド」
白髪の男――フリードの名を最後に呼び、悪魔の体は先程の様に粒子状となってフリードに吸収されていく。
「フリード……？　誰？　何だろ……すっごく大事な様な気が……」
自らの名前すら思い出せないフリードは、視線を斜め上に向け考える表情でフラフラ

と立ち上がる。
「……あ」
　フリードを取り囲む幾つもの姿。人では無い。鷹の上半身と獅子の下半身を持つ獣。岩の肌を持つ蜥蜴。九つの頭を持つ蛇。蒼い鱗の龍。半透明の軟体生物。様々な種類に富んだ怪物たち。
　統一感の無い群れであったが、唯一、フリードに向ける並々ならぬ殺意だけは共通していた。
「またかよ……」
　フリードは何も見えない天を仰ぐ――が、すぐにその顔に歪んだ笑みを浮かべた。
「そういや殺したら何か分かったんだよねぇ！　ということは殺れば殺るほど俺がだーれなのか分かるってことだよねぇ？　ドゥーユーアンダスタン？　諸君？」
　殺意の中で、フリードは道化の様にはしゃぐ。
「だからさぁー、どいつもこいつも死んでくれやぁぁぁ！　俺の為によぉぉ！　皆死んでくれ！　俺の為に犠牲になれ！　俺の為に殺されてくれ！　俺の為にくたばってくれ！　はははははははははは！」
　暗闇の中で狂人と怪物たちが殺し合う。否、これは戦いでは無い。
　これはあるものの中で起こっている共喰いである。

応用、勇猛

人工神器。それは、元々堕天使たちが研究していたものであった。しかし、その研究内容は、とある事情によって外部に漏らされた。

人工神器の情報を得た一部の人間たちは、その研究を下地にして独立具現型の人工神器を創ろうとした。

その最初の計画は『真似形計画』と呼ばれるもので、人間の精神と人工神器を混ぜ合わせ、『マネカタ』と呼ばれる存在を生み出そうとしたものであったが、成功率の低さと数少ない成功例たちの暴走により、計画は中断されることとなった。

だが、この計画は決して無駄なものではなく。そこから得た情報により、新たな能力を生み出すことに成功した。それが、『虚蝉機関』によって生み出された『ウツセミ』である。

不安定な部分は多々あるものの、マネカタよりも成功率が高く、様々な個体を生み出せるので、研究面でも大いに役に立った。

尤も、これすらも『四凶計画』と呼ばれる本命の為の足掛かりに過ぎないが。

紆余曲折あって潰えたこれらの計画は、巡り巡ってバルパーの手に届くこととなっ

た。

過去の研究と、今あるバルパーの研究。これらを合わせ、一つの実験を思い付く。

その実験材料に選ばれたのがフリードであった。

バルパーは、フリードの体内に様々なモンスターの因子を埋め込み、疑似的な合成獣へと作り変える。

何故モンスターそのものではなく因子なのか。答えは単純にそちらの方が多く混ぜることが出来るからである。そしてもう一つ、因子にしたのには理由がある。

今の段階で人工神器について最も詳しいのはアザゼルである。彼は、人工神器を完成させただけでなく不完全ながらも禁手にまで至らせている。その人工神器を作成する際に、五大龍王であるファフニールの魂を封印した宝玉を使用していた。

バルパーはそれに注目した。

バルパーは、フリードの肉体をその宝玉に見立てたのである。因子を埋め込んだのはその為。何故なら因子の中にはその者の魂が宿ることを、あの聖剣にまつわる騒動のときに見ている。

龍王級の魂など用意することは難しい。その為の質を補う数である。

バルパーが今回の実験で行おうとしているのは、独立具現型の人工神器の発現では無い。そもそも本体が人工神器の為の器になっている。

狙っているのは、本体と人工神器の完全融合。人が神器に取り込まれるか、神器を取り込むか、その二つが目的である。

なおこの実験については、フリードには一切知らせていない。彼はただ合成獣にされたとしか思っていない。

レーティングゲーム開始前に下準備はきちんと済ませた。

あとはあることを切っ掛けにして人工神器を発動させることである。

その切っ掛けが自身の『死』である。

神器には強い想いが不可欠である。その想いを引き出すのに丁度いいのが『死にたくない』という想い。

凡人でも愚者、人だけでなく生物も死に際なら瞬間的でも神器に干渉出来る程の想いを発せられる。

あとはフリードが適当な相手と戦い、死ぬのを待つだけである。

そして、バルパーの狙い通り、フリードは戦いの中で命を落とした。

「――って全部お前の筋書き通りに進んだっていうのに、随分と不機嫌そうじゃないのぉ？　バルパーくん？」

フリードに埋め込んである装置からリアルタイムで送られてくる情報に目を走らせているバルパーに話し掛けるのは、バルパーと然程歳の離れていない男性。銀に近い白

髪を歳不相応に長く伸ばしており、その顔立ちは一目見るだけで誰もが美形だと判断する程整ったものであった。

バルパーは、男の声に反応を見せず情報を凝視し続けている。

「無視するなよぉー。悲しくなるだろ？　おじさんは、寂しくなると死んじゃうだぞ？

――なんてな！　うひゃひゃひゃひゃひゃひゃっ！」

一人で喋って、一人で笑い出す。その顔からは不似合いな品の無い笑い声であり、笑う顔が見た目よりも幼く見えることもあって、子供っぽい印象を他者に与える。

バルパーはその笑い声をこれ以上聞きたくなかったのか、溜息を吐いた後に、その男と目を合わせる。

はっきり言って、バルパーは目の前の男が嫌いであった。どこまでが本気でどこまでが冗談なのか分からないふざけた態度と喋り方、特に今聞かされた笑い声など、聞くだけで血管が千切れそうになるほど苛立つ。

しかし、それを顔には出さない。バルパーにとってこの男との繋がりは、個人的な感情を無視する程には重要であった。

尤も、自分よりも長い年月を生きているこの男には、自分の内心など既にお見通しだろうとは思っている。分かっている上で今の態度をとっているのが男の鬱陶しさであり、性格の悪さと言えた。

「んでんで？　結局実験は順調なの？」
「順調だ……と言いたい所だが、ダメだな。失敗だ。既にこの実験は破綻している」
涼しい顔で実験の失敗を告げるバルパー。男は笑みを消し、目を丸くする。
「ええー！　すっごいことになってんじゃん！　どう見ても実験大・成・功！　にしか見えないけど？」
「大成功と言えば大成功とも言える。――いや、成功し過ぎだ」
「んん？　どういうことなの？　バルパーくん？」
眉根を寄せて腕を組み、首を傾げる男。この一々子供の様に大袈裟な反応を見せるのも、バルパーが男を嫌う理由の一つである。バルパーは子供が好きではない。
「私の予想していた結果は、本体との融合後に自壊するというものであった。今回の実験は本当に試すだけのものだったからな」
「うひゃひゃひゃひゃ！　ひでー！　フリードくん、完全に捨て石じゃん！」
「再利用と言ってくれ。あ奴が死ななければ今回の実験は無かった。寧ろ代償無しに強くなれるなど甘い考えだ。死んだ後にその代償を払うなら安いものだと思うが？」
「おじさん的には、死んだ後に体を滅茶苦茶にされるのは嫌だなー。まあ、死んだ後に滅茶苦茶にするってのならやるね！　だって死んでも責任取らなくていーしー！」
無責任さが極まった言葉を吐く男。どこまでも自己中心的な性格だとバルパーは思

う。バルパーも自らのエゴが強いことは自覚している。ただ、自分と同等以上のエゴの持ち主を見たのは、この男が初めてであった。

「んで、その再利用された哀れで可哀想な元フリードくんの何が予想外だったの？」

「自壊せずにそのまま活動し続けていることだ。……まさか、自壊前にドーナシークの死体と聖剣のレプリカを取り込むとはな」

　その段階で、既にバルパーの予想図から逸脱していた。ドーナシーク単体ならば別に問題は無かったかもしれない。しかし、ドーナシークの体内にはオーフィスの蛇が在る。放っておけば数分で消えていたかもしれなかった神器もどきが蛇の力で自壊を防ぎ、力の糧となるものを手当たり次第に取り込んでいる。

「ここから先はどうなるか全く想像がつかん。忌々しいことにな」

　バルパーからすれば実験の為の実験。それも本腰を入れていない半ば適当――フリードに埋め込んだ因子など無作為に選び、選別もしていない――とも呼べるもの。バルパーの理論が正しかったのではなく、運が良かった結果である。そんな偶然を喜べるほどバルパーは単純では無い。

「いいじゃん。いいじゃん。カオスってるねぇ！　フリードくんも、あっちの戦況も！　おじさん年甲斐も無くワクワクしちゃうよ！」

「ふん。だったらお前も行けばどうだ？　アスモデウスとベルゼブブにお前も加われ

ば、魔王の首を一人ぐらい取ってこられるだろうに」
「ん？　まあ別にいいや。今は」
「あの二人でも魔王を相手するのは少々厳しいぞ？　下手をすれば――」
「どうでもいいや。死んだら死んだでそこまでだったってことでしょ？　それに、悪魔が死んだところで、世の中が平和に一歩近付くだけだぜ？　わーい！　やったね！」
半笑いのまま、男は小さく手を叩く。同胞に対し、あまりに冷淡過ぎる態度と言葉であった。
男のそういう態度を見る度に、バルパーは不気味に思い、やはり悪魔など理解出来ない存在だと再認識させられる。元より理解するつもりは皆無だが。
「……やはりお前のことは全く理解出来んよ。リゼヴィム」
「うひゃひゃひゃ。悪魔なんか理解したら、魂盗られるか地獄に落ちるぜ？　バルパーくん」
今の旧魔王派を束ね、かつては『明けの明星（ルシファー）』の名を受け継いでいた男、リゼヴィムは悪意を形にした様な悪魔らしい歪んだ笑みを見せた。

◇

オーディンに後を任せ、アーシアを取り戻す為にディオドラが居るであろう神殿を目指す。
その道中でオーディンから渡された通信機器にアザゼルからの連絡が入ってきた。
『おい。無事か？　こちらアザゼルだ』
「聞こえているわ」
皆を代表してリアスが応じる。
『オーディンの爺さんとは無事会えたみたいだな』
「ええ。……それと今回のことについても少し聞かされたわ」
心なしかリアスの声が固い。
『……そうか。悪かったな。本当ならこうなる前に阻止するべきだったが、結果としてお前たちを危険な目に遭わせた。言い訳はしない。責任は俺にある』
あらゆる罰を全て受け入れる態度のアザゼル。
だからこそ一誠は尋ねたくなってしまう。
「もし、万が一俺たちが死んじゃったらどうしたんですか？」
『それに相応しい罰を受けるだけだ。まあ、万や億ぐらい殺されても文句は言えんな』
さらりと軽く言うが、それが嘘では無いという重みが言外に感じ取れた。
『兎に角、お前たちは今から俺が指示する座標に向かえ。そこには緊急の地下避難所が

ある。そこに隠れていれば――』

「先生！　アーシアがディオドラに連れ去られたんです！」

通信機器の向こう側で、一瞬アザゼルが言葉を飲み込んだのが分かった。恐らく相当苦い表情をしているに違い無い。

『――先手を取られていたのか。どちらにしても旧魔王派がうろついている。ここは危険だ、すぐに身を隠せ。アーシアのことは俺たちが――』

「嫌よ」

「嫌ですね」

「嫌です」

「嫌だ」

「……嫌です」

「い、嫌です」

「嫌ですっ！」

一同口を揃えてアザゼルの指示を拒否する。

『……』

姿は見えなくても、向こう側のアザゼルが目を丸くしているのが全員想像出来た。

「アーシアは、俺たちが救います！」

『……それは、今がどういう状況か分かって言っているんだろうな？』

体の至る所に刃物を突き付けられたかの様な錯覚を覚える。言葉自体に感情の起伏はなく平坦なものであったが、遠く離れている場所から言葉の圧だけで一誠を萎縮させる。それは他のメンバーも同じらしく、皆表情が強張っていた。

「そ、それでもアーシアを助けに行きます！　俺たちが助けに行かないとダメなんです！　アーシアは仲間で、家族なんです！　隠れてアーシアを見捨てることなんて出来ません！　それに、何か嫌な感じがしましたし尚更――」

『それでお前たちの誰かが死んだら、アーシアは一生自分を責め続けるぞ？』

「そ、それは……」

冷水の様なアザゼルの言葉に、一誠は僅かに怯む。が、自分にも皆にも言い聞かせる様に宣言する。

「絶対に誰も死なせませんし、俺も死にません！　死ぬ気で頑張ります！」

『無茶苦茶言ってんなー』

言葉は置いておくとして、一誠の固い意志は伝わったのか、アザゼルは呆れつつも少し笑っている様子であった。

「アザゼル先生、心配してくれるのは有り難いけど、私たちはイッセーの言う通りアーシアを救う為に神殿に向かうわ。ゲームのことや今のテロのことを抜きにしても、私は主

として、眷属を奪っていったディオドラに自分が如何に愚かなことをしたのか、嫌というほど教え込まなければならないの」

眷属の拉致を行ったディオドラに、頭に来ているのかリアスの周囲に紅い魔力が蠢く。

「という訳です。皆も部長と同じ気持ちですわ。それに現悪魔勢力に対する反政府的行動を、現悪魔勢力に属する者として見過ごすことは出来ません」

『ガキがそんなことする義務は無いんだがな』

「既に巻き込まれているので義務もありませんわ。自然な成り行きです」

当然の様に言う朱乃。アザゼルは暫く黙っていたが、やがて嘆息する。

『分かった。分かったよ。頑固なガキ共め……。そこまで言うならとことんやってこい！　責任は全部取ってやる！　お前たちの力を、ディオドラの小僧に全力で叩き込んでこい！』

アザゼルは一誠たちが動くのを認め、その背を強く押す様な言葉を送る。

『その前にいくつか約束してくれ』

「約束？」

『一つは無理を承知で言うが、死ぬな。命の危機に陥りそうなら絶対に逃げろ』

次の約束を言う前に、アザゼルは一誠に一つ質問する。

『そういえば、イッセー、お前何か嫌な感じがするって言ってたよな？』
「え、ええ。言いましたけど……」
『他にそれを感じた奴は居るか？』
　一誠が他のメンバーを見ると、全員首を横に振る。
「他は居ません」
『だったらイッセー、お前がその嫌な感じというものを近くに感じたら、全員すぐにそこから離れろ。これだけは約束しろ』
「一体どうして――」
『俺もお前の言う嫌なものを感じた。姿形は見えないが、俺の感覚からして魔人の気配だ』
　一誠たちは言葉を失う。危険な状況の中で、更に危険な存在が現れたのだ。
『いいか、約束しろよ。絶対に逃げろ。絶対だ。そっちは俺たちが対処する』
「せ、先生は大丈夫なんですか？」
『こっちの心配よりもまずは自分たちのこと、そしてアーシアのことを心配しろ。いいか？　アーシアを救ったらさっさと退避するんだぞ』
　念には念を押して言ってくるアザゼル。それが、一誠たちがどれほど危険な場所に向かうのかを表している。

だが、一誠たちの肚は決まっていた。
「行ってきます！」
『……気を付けろよ』
最後まで一誠たちを心配しながら通信が切れる。
「覚悟は良い？」
リアスの問いが最終確認であった。予想を上回る危険地帯にこれから入っていく。
しかし、全員躊躇うことなく首を縦に振った。
「それでこそ私の眷属たちよ。小猫、アーシアの位置は分かる？」
小猫は頭部に猫の耳を出し、それをピクピクと動かす。その後に、小猫は神殿の方を指差し、何故かその指が絵図を描く様に動く。
「……ディオドラ・アスタロトの気配は向こうにありますが、アーシア先輩の気配は動いています。……二つの大きな気配。……追われている？」
「それってアーシアは今、ディオドラから離れているってこと？」
「……そうなります。二つの大きな気配のうちの一つと一緒に」
「よし！　やってくれた！」
小猫の報告を聞き、一誠はガッツポーズをとる。
「貴方、何か知ってるの？」

「詳しいことは移動しながら話します！　今はアーシアを迎えに行かないと！」
事態は一刻を争う為、一誠の言う通りリアスたちは神殿に向かいながら事情を聞くのであった。

◇

「――それで、アーシアの影の中に仕込んだという訳ね。あの時の象を」
神殿内部に入るタイミングで、一誠が何をしたのかの説明が終わる。
「間薙君も一枚噛んでいたんですね」
「あのね、そういうことは私たちにも言ってくれないと」
「その……勝手なことをしたので、怒るんじゃないかと思って……」
「黙ってそんなことをする方がもっと怒るわよ？」
「まあまあ。そのお陰でアーシアさんが無事かもしれないと考えればイッセー君と間薙君のお手柄ですよ」
「ナイスだ。イッセー」
ジト目で見てくるリアスに、木場が一誠のフォローをし、ゼノヴィアは手放しで褒める。

「でも、気になるわ。アーシアを追っているもう一つ気配のことが」
「あまり時間を掛ける訳にはいかないですね」
アーシアの無事を願いながら神殿奥に向かって行くリアスたち。石造りの神殿を抜けると、更に神殿が見える。
そして、神殿の前で何やら話しているディオドラの眷属たちも見つけた。数は七人。
向こうもリアスたちの姿に気付き、眷属内に動揺が広がる。
「――もう来たのですね」
全員ローブを目深に被っているせいで容姿は分からないが、眷属代表らしき女性が少し疲れを含んだ声を洩らす。
『兵士』を除いた眷属たちが揃っているみたいですね」
木場が小声で皆に伝える。全員容姿を隠しているというのに。
「何で分かるんだ？」
「え？　背丈や肩幅や魔力の感じで。全員女性――ああ、一人だけ男性が混じっているね」
「……良く分かるな」
木場の観察眼と記憶力に、一誠はただ感心するしかない。どれだけ見ても、一誠には見分けなど全くつかない。

「ようこそおいでくださいました。リアス・グレモリー様」
先程声を洩らした女性がローブを捲る。金髪碧眼の妙齢の美女が顔を露わにする。
「あの人が『女王』だよ」
木場がさり気なく教えてくる。
その美貌に一誠が小声で『おお……』と言った瞬間、側に居た小猫の拳が脇腹に刺さる。
「……先輩。ＴＰＯ」
「欲望に、素直で、ごめんなさい……」
殴られた脇腹を押さえながら、リアスたちの会話に耳を傾ける。
「ディオドラはこの先に居るのよね？」
「答えられません」
「貴女たちも旧魔王派に下ったの？」
「答えられません」
「旧魔王派以外に他の戦力は来ているの？」
「答えられません」
リアスの問いに、機械の様に定型の言葉しか返さない。
「……そう。まあ、素直に答えて貰えるとは思っていないわ。――ところで」

そこでリアスは一拍置き。
「アーシアは見つかったかしら？」
その問いに、ディオドラの『女王』は表情一つ動かさない。しかし、リアスは彼女を見ているだけではない。眷属全体を見ていた。リアスが知らない筈のアーシアの逃亡について聞いた瞬間、動揺を隠し切れずに体を僅かに震わせた者が二人ほど眷属の中に居た。
「ありがとう、分かったわ。アーシアは今も逃げているのね。そして、貴女たちはそれを探している最中に運悪く私たちに会った、と」
「……」
ディオドラの『女王』は答えなかった。しかし、その沈黙は肯定に繋がる。
「私たちにとって最優先すべきはアーシアを救うこと。そしてその次にディオドラに今回のことへの償いをさせること。だから、貴女たちと戦うつもりは無いわ。黙って私たちを通してくれるかしら？」
無駄な戦いを避けようとするリアス。その頼みに対して彼女たちの答えは――
「お断りします」
『女王』から放たれるうねる大蛇を彷彿させる炎の魔力。それには拒否という答えと開戦の意が込められていた。

「……そう。残念ね」

リアスが右手を薙ぐと紅い魔力が幕の様に広がり、それに触れた炎の魔力は、リアスの滅びの力によって消滅させられる。

この攻防の終わりと共に、乱戦が始まる。

ディオドラ側の先陣を切ったのは、最速の『騎士』であった。ローブの下から大剣を取り出しながら、リアスに斬りかかる。

しかし、大剣の間合いにリアスが入るよりも先に、いつの間にか動いていた木場が二人の前に立ち塞がる。現れた木場に驚き『騎士』二人が大剣を振るうが、木場は二本の魔剣でそれを受け止める。

そこに距離を詰めてくるのは、ディオドラの『戦車』二人。『騎士』と遜色無い速度で動いており、『騎士』二人を抑えている木場の隙を左右から狙う。

硬く握った拳で木場の右側から攻めようとする『戦車』。そのとき、視界の端に銀光が煌めくのが見えた。

急いで停止すると、『戦車』の足元に一本の剣が突き刺さる。

投げ放ったのは一誠であり、投げた剣は『赤龍帝の籠手』に収めていたアスカロン。

折角の名の有る剣を飛び道具に使った。傍から見れば愚行に見えるかもしれない。

しかし、それは間違いである――

地面に突き刺さったアスカロンが引き抜かれる。
――一誠はただ彼女に渡したに過ぎない。
『戦車』の前に、デュランダル、アスカロン、二振りの聖剣をゼノヴィアが構える。
ここまで移動してきたときの速度を緩めることなく斬りかかった。
大剣の、それも片手とは思えない速度で振るわれたデュランダルは、『戦車』の胴体を真っ二つに裂こうとする。
『戦車』は、デュランダルの輝きを一目見ただけで『戦車』の耐久力を以てしても紙を切る様に一切の抵抗も無く斬られることを察すると、己の速度に全てを掛け、跳躍する。
全ての動きが緩慢に見える。引き伸ばされた光景の中で迫るデュランダルは、恐怖そのものであった。
速く、早くと体が動くことを願う。
靴底に微かに触れる金属の感触。死を予感させる感触であったが、同時に『騎士』の一撃を完全に避け切ったことも感じた。
後は――そこまで考えたとき、視界に極彩色の輝きを見た。そこでその『戦車』の思考は停止する。ギャスパーが停めた時間の中で、『戦車』の思考もまた停まり続ける。
ゼノヴィアが『戦車』と対峙したほぼ同じタイミングで、もう一人の『戦車』に立ち塞がるのは小猫。

妨害する小猫に、もう一人の『戦車』は舌打ちをし、やむを得ず狙い木場から小猫に変える。

速度を以て小猫を攪乱しようと考え、最初に右に動き、すかさずそこで切り返して左から攻めると決め、右に一歩踏み出す。

「っ？」

指先で押された程度の軽い衝撃が胸に走る。もう一人の『戦車』が右に動いた直後、小猫は右に掌打を置いた。もう一人の『戦車』は、自分から当たりに行っているか、小猫の手に吸い込まれる様に置かれた掌打に胸を打たれる。

猫？として生きることを決意した小猫には、目の前の『戦車』の動き、というよりも力の流れが見えていた。

右に行こうとする力の流れを見れば、対の先で仕掛けることが出来る。

掌打に纏わせた気を体内に打ち込まれた『戦車』は、体を一回震わせた後に膝から崩れ落ちる。

後輩たちと同級生の頼もしさに、木場は小さく笑う。

（負けてはいられないね！）

木場が表面上は冷静を装いながらも、心の裡では己を昂らせる。

その昂ぶりに身を任せる様に、鍔迫り合いをしている魔剣に力を籠める。

細身の男、それも二人も相手しているというのに力負けをし、根を張る様に踏みしめていた筈のディオドラの『騎士』たちの足は、地面を削りながら後退する。
押せば当然反発もある。二人の『騎士』は、木場の力に負けまいと、押し返そうと足元に力を更に込めて対抗しようとする。
その瞬間に、あれほどあった抵抗感が消失する。
『騎士』たちは見た。木場の手から二本の剣が離れるのを。戦いの最中で武器を手放すのは愚行にしか過ぎない。しかし、木場の場合は例外である。彼は自分の心の力が在る限り、何千、何万もの剣を自由に創り出すことが出来る。
相手の体勢を崩す為に、剣を放すことに全く躊躇は無かった。
『騎士』たちは不味いと思っていても体が前のめりになるのを止めることが出来なかった。絶妙なタイミングで木場が引いたせいもあるが。
木場は、無手となった両手を『騎士』たちに向かって振るう。『騎士』たちもすぐさま体勢を立て直してそれを防ごうとするが、『騎士』同士の戦いの中では一秒に満たない隙も、永遠に埋めることの出来ない致命的なものとなる。
指揮者が指揮棒を振るわす様に、淀みも、無駄も無く振るわれる木場の両腕。振り切った後には、その手にいつの間にか剣が握られている。
手から大剣が滑り落ちる。それに少し遅れて『騎士』たちは膝から崩れ落ちる。

「あ、ああ……」
「う、くう……」
腕を伝って指先から垂れる血。『騎士』たちの両腕は脱力し、垂れ下がっていた。
ローブに入った僅かな裂け目。木場は『騎士』たちの腕を斬って力を、更に脚を斬り要とも言える速さを奪った。
他のディオドラの『眷属』たちが援護する暇も与えず、四人も無力化されたことに残った眷属たちは動揺する。
個々の力は完全にリアスたちが上回っており、数でも力でも圧倒されている。ディオドラの『眷属』たちが勝てる可能性は殆どゼロに近い。
「……もう一度言うわ。このまま大人しくしていてくれるかしら？」
ディオドラの『眷属』たちの動揺を見て、リアスは再び退く様に勧告する。
「それは……出来ません」
あくまで戦うことを固持する『女王』。ディオドラへの忠義心と素直に思えれば、敵ながら称賛する所。
「……進みたければ、私たちを殺して先へ行くことです」
リアスにはどうにも彼女たちの態度に噛み合わないものを感じる。それは他のメンバーも思ったことであった。彼女たちの目は明らかに死んでいた。明らかに、リアスた

ちを倒すという使命に燃える目では無い。何処か諦観を感じられた。
　そのせいで先程の言葉。命を懸けてでも与えられた命令を守る、という言葉が空虚に聞こえる。
　アーシアを助けなければならないのは分かっている。分かっているが、リアスたちは、彼女たちに悲哀の様なものを感じてしまう。
「貴女たちは――」
「ストップ！　ストップ！　ストォォォップ！」
　リアスの声を遮って焦った声がこだまする。
「はあー！　着いたー！」
　白い翼を羽ばたかせながら、イリナがリアスの前に立ち塞がる様に降り立った。
「イリナ！　どうしてここに？」
　イリナの登場に、ゼノヴィアが真っ先に問う。
「色々と話したいことはあるけど！　取り敢えず待って！」
　イリナは振り返り、ディオドラの『女王』を見る。
「私のことを、覚えていますか？」
「……何のことですか？」
「私の名は、紫藤イリナです」

「シドウ……紫藤っ！　まさか……！」
『女王』の中である記憶が掘り起こされ、その途端視線をイリナから外す。
「やっぱり、あの時の！」
「……何も言うことはありません」

かつて教会であったシスターであることを確信するイリナであったが、『女王』はこれ以上イリナと話すことを拒絶する。
「一体どういうことなの？」
「あの人たちは、教会の元関係者なの！」
「……何ですって？」
イリナから告げられた事実に、リアスたちに動揺が広がる。
「きっと何か訳があって――」
「黙りなさいっ！」
イリナの言葉を遮る様に、『女王』が叫ぶ。
「私たちは何も知りません！　全ては貴女の戯言！」
「そんな！　ちゃんと話せば……」
「ここは戦いの場！　話し合う場では無い！　貴女たちに話すことなど何もありません

！」

一方的に話を打ち切ると、『女王』はその手に炎の渦を生み出す。螺旋を描きながら離れた場所に居るイリナが頬の乾きを感じるほどの熱を発していた。

「私は！　貴女たちと！　話したいの！」

「話すことは無いと言いました！」

「そんなの知ーらーなーい！　何でもいいから言って欲しいの！」

「だから黙れと言っているでしょう！」

「そういうのは無しで！」

「だから！　ああ、もう！」

イリナに振り回されていることに、どうしようもない苛立ちを覚える『女王』。背後に並ぶ『僧侶』二人は困惑していた。それと同様にリアスたちもどうすればいいのか判断に迷っている。

「貴女と無駄話をするつもりはありません！　いいから構えなさい！」

すると、イリナは腕に巻き付けていた一本の紐を解く。その紐は手の中で形を変え、瞬時に片刃の剣に変化した。

イリナの愛剣『擬態の聖剣』である。

聖剣の輝きに、ディオドラの眷属たちは眩しそうに目を細める。

イリナはそれを構える――のではなく地面に突き立て、柄から手を放す。
「何の、つもりですか?」
「私は貴女たちと話がしたいの。なら、これは要らない」
あくまで対話することを望む意思を見せるイリナ。
「貴女という人は……」
ほんの一瞬だけ『女王』の顔から険が消える。だが、すぐに俯いてその顔を隠してしまった。次に顔を上げたとき、『女王』は唇の端から血を流し、怒りではなく何か決意に満ちた表情となる。
「……これが、私の、私たちの答えです!」
イリナに向けて炎が放たれる。渦巻く業火が、呑み込み、焼き尽くす為に大口の如く渦の中心をイリナに見せる。
炎を前にしても『擬態の聖剣』に手を伸ばさないイリナ。勝算が有った訳では無い。ただ、彼女たちの心に賭けた結果である。こうなることを覚悟しての行動であった。
「――全く」
覚悟するイリナに呆れた声。
「真っ直ぐと言うか、考え無しと言うか」
イリナの前に立つゼノヴィアが、二振りの聖剣を構える。

「相変わらずだな、君は」
構えた聖剣を打ち鳴らしたとき、夜明けの太陽を思わせる閃光が放たれ、その光が炎を押し留め――振り抜かれた光が交差すると炎は斬り裂かれ、消し去られる。
「アーシアをすぐにでも助けたいが、目の前の親友も放っては置けない。親友を二人とも助けたい――我ながら欲深くなったものだね」
自分の変化を楽しんでいるとも自嘲しているともとれる台詞だが、それを言うゼノヴィアは微笑を浮かべていた。
「あまり無茶なことをするなよ？　イリナ」
「無茶の回数ならゼノヴィアには負けるわよ。でも、ありがとう」
礼を言うイリナ。その彼女を見るゼノヴィアの目は優しいものであった。
一方でディオドラの眷属たちは追い詰められていた。『女王』渾身の魔力が蝋燭の火と同じぐらい簡単に吹き消されたのだ。一本の聖剣でも厄介だというのに、それが二本在る。更には聖剣同士が干渉し合い、聖なる力を増大させるという相乗効果も見せている。
認めたくないことだが、二刀流のゼノヴィア一人居れば自分たちを塵も残さずに全滅させることが出来る。客観的にそれを理解してしまった。
（やはり使うしかありませんか？）

『僧侶』の二人のうち、女性の方が『女王』にしか聞こえない声で聞いてくる。彼女は手の中に五センチ四方の立方体を隠す様に持っている。透明の面で囲まれた中に更に透明の立方体。その立方体の中にも立方体があり、見えなくなるまで続いている。

（出来れば使うべきではないかと。――得体が知れない）

異を唱えたのはもう一人の『僧侶』の男性であった。彼の言う通り、透明の立方体は彼女らの力ではなく、禍の団から与えられたものである。いざという時に身を守る為に、と。

（……もう少しだけ待って下さい。ですが、私が敗れたらその時はすぐに）

『女王』の考えに『僧侶』たちは同意をする。

ディオドラの眷属たちの考えが纏った頃、リアスたちは密かに悩んでいた。

アーシアを助ける為に彼女らを倒すのは簡単だが、イリナから齎された情報と『女王』たちの反応に、ただ倒すだけが正解なのかと迷いが生じる。

「あーあ。せめてあの人たちの本音が聞けたら……」

ぽつりと洩らしたイリナの言葉。

『あっ』

「え？」

「な、何だ？　……あっ」

リアスたちの目線が同時に一誠に向けられる。イリナは意味が分からず、一誠は急に皆に見られて驚くも、少し遅れてその視線の意味を理解する。
「部長！」
「……今はレーティングゲームじゃないから特別よ」
「分かりました！　いくぜぇ！」
「え？　え？　何？　何？」
許可するリアス。気合を入れる一誠。事態についていけずに戸惑うイリナ。
『乳語翻訳ッ！』
何と言っていいのか分からない言葉を叫ぶ一誠に、イリナは唖然とする。ディオドラの眷属たちも似た様な表情をしていたが、何かを察し、行動を起こそうとする。しかし、既に遅い。一誠には見えていた。己の煩悩によって生み出された空間が既に彼女たちを取り込んでいることに。
「何でディオドラの眷属になったんだ？」
知りたがっていたことを彼女らの胸に問う。胸に直接聞いている為、どんなに持ち主が言いたくなかろうと筒抜けとなる。
返答はすぐにあった。途端、一誠の顔が歪む。怒りや悲しみなどの感情が混ぜ合わされた様な表情だった。

「……部長」
「な、何かしら？」
　意気揚々としていた一誠から放たれた初めて聞く低い声に驚き、リアスは声が一瞬詰まる。
「一分、いや、三十秒だけ時間を稼いで下さい。――俺が全部終わらせます」
「貴方……まさか、禁手を使う気？　でも本来なら二分は掛かるんじゃ……」
「今の俺ならそれぐらいの時間で成れます」
　一誠から強い怒りを感じる。オカルト研究部たちも、一誠の態度の変わり様に驚いていた。
「イッセー君。何が分かったの？」
「……ごめん、イリナ。俺からは簡単に言えそうに無い」
　イリナの為に聞いたが、返ってきた答えを言うのを一誠は躊躇していた。
「――でも、代わりにあの人たちは俺が何とかする。絶対に傷付けない」
　イリナはそんな一誠をじっと見つめ後、頷く。
「うん。分かった。お願い」
「ああ、任せろ！　いくぞ！　ドライグ！」
『Ｃｏｕｎｔ　Ｄａｗｎ！』

カウントダウンが始まる。これ以降一誠は神滅具の力を使用出来ない。禁手に至るまでの時間が赤龍帝の籠手に填められた宝玉に映し出される。それは一誠が宣言した通り、三十秒であった。

「……聞いたのですね、赤龍帝。私たちの心の声を！」

ディオドラの『女王』が言う通り、一誠は彼女たちの心の声を聞いた。いや、声というよりも何一つ取り繕っていない本音の叫び。ディオドラの策略によって本来行くべきであった道を断たれ、行き場を失い、ディオドラの庇護の下肉体も魂も凌辱され続けながら、己の弱さを悔いる叫び。

余すことなく伝えられる本音というものは、聞く者に重いものを残す。『乳語翻訳』のデメリットを一誠は知った気分であった。

触れられたくないものに触れられたことに激昂し、『女王』は他のメンバーを無視して一誠だけに狙いを定めて炎を放つ。

灼熱の渦が一誠を灰塵に帰そうとするが、光の力を帯びた雷が炎を貫いて半壊させ、紅色の破壊の力が、残ったそれを全て消し去る。

「イッセー君の邪魔はさせません」

「どうしてもと言うなら、私たちを倒すことね」

リアスと朱乃が一誠の前に立ち、彼を守る。『王』と『女王』の二枚の強固な壁は、然

程離れていない筈の一誠を、手が届かない何処までも遠くの存在の様に錯覚させた。
湧き上がった怒りも、圧倒的力の前に気圧される。
三十秒という時間は、まるで刹那の時の様に呆気無く過ぎ去った。
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』
籠手が全身を覆う鎧と化す。『赤龍帝の鎧』を纏った瞬間から、倍化は最大まで行われ、全身に力が漲る。
『ＪＥＴ』
鎧の背から噴出される魔力。一誠とディオドラの『女王』との距離は瞬きよりも早く零となる。
避ける暇というよりも、目の前に一誠が現れたということすら認識が追い付かず、一誠は無防備な『女王』に拳や蹴りを繰り出すのではなく、纏っているローブを赤の指先といつの間にか白に変色した指先で僅かに触れる。
触れたときからローブは急速に収縮し始め、『女王』を拘束する。
「こ、れは！」
魔力を使おうにも使用出来ず、そのまま簀巻きの様な状態となる。
『洋服拘束』。相手の衣服を二つの龍の力で拘束衣に早変わりさせ、動きと魔力を封じる技である。特にディオドラ眷属たちが着ている様な露出の少ないローブなら、より強

固な拘束を生む。
瞬時に『女王』が無力化され、残された『僧侶』二人は瞠目する。
一誠の目線が兜越しに二人に向けられたとき、『僧侶』たちは決断した。
『僧侶』の女性が、立方体を掲げる。立方体を見たとき、一誠は既視感の様なものを覚えた。
『あれは『絶霧』の禁手だっ！』
ドライグの内に響く声に合わせたかのように、立方体の面が？がれ落ちながら展開され、『僧侶』たちと一誠たちを隔絶する様に結界が張られる。
「これはっ！」
目の前に張られた結界に驚くも、すぐさま一誠は結界に全力の拳を打ち込む。『赤龍帝の鎧』から繰り出される破壊の一撃を受けても結界に亀裂は入ることなく、一切揺るがない。もう一度同じ力で同じ箇所を狙ってみたが、結果は同じであった。
「これ程とは……」
展開した本人も、張り巡らされた結界の強固さに驚く。
「ドライグ！　何だよこれ！」
『『絶霧』という神滅具によって生み出された結界だ。結界を操る神器の中でも最強を誇る』

「じゃあ、あの女の人は神滅具所有者ってのか！」
『違うな。『絶霧』の禁手は、所有者が望む結界を自由に創り出すことが出来る。何より創り出された結界は、所有者以外でも発動することが可能だ。恐らくこれはそれだろう』
「マジかよ……。ドライグ！　どうにかこの結界を壊せないのか？　同じ神滅具だろ？」
張り巡らされた結界は、『僧侶』たちを守るだけでなく次の神殿への道も塞いでいる。このままではアーシアを助けに行けない。
『神滅具でも位がある。『絶霧』は、『赤龍帝の籠手』よりも上だ。……認めたく無いがな』
プライドの高いドライグがそう言うのであれば、間違いない事実なのだろう。
一誠たちが目の前の結界の頑丈さに驚いているのと同様にして、結界の内にいる『僧侶』二人も赤龍帝の一撃を受けてもびくともしない結界の強度と術の完成度に内心驚いていた。しかし、同時に不安も覚えていた。
これ程の高度な術で作られた結界に何かしらのデメリットがあるのではないか、と。
彼女たちは知らないことだが、張られた結界は単純に壊れにくさを追求して創り出された結界であり、神滅具の攻撃を受けても破壊されないほどの代物であり、一度発動すれば内蔵された魔力が尽きるまで張られ続ける。一応のデメリットとして発動者でも

結界の壁を出入り出来ないというものがあるが、守ることと時間稼ぎを目的とした彼女らにはデメリットにはならない。

もし、この場にこの結界を創り出したゲオルクが居たら、この程度の御粗末な結界で代償など在る訳無い、と彼女らの不安に対し失笑していただろう。一流の魔術師が生涯を掛けて完成させるだろう術も、神滅具所有者にとってはほんの数秒のこと。それ相応の代償を払うことも代償無しで可能とする。それ程までに埋め難い差がある。

リアスの放った紅の魔力が結界に着弾する。しかし、結界は変わらず。滅びの力を有した魔力であっても結界に罅を入れることすら叶わない。

「くっ……！」

リアスは強く唇を噛む。これには自分の力が通じないという屈辱も込められているが、アーシア救助を妨げる、文字通りの壁に対しての苛立ちが殆どであった。

一誠、リアスという最高火力がダメならば、残りのメンバーでも突破は難しい。

何とかしたいというのに、妙案が思いつかない。それが焦りを生み、その焦りが思考を空回りさせる悪循環を生む。

（何とか、何とかなんないのかよ！　アーシアが待っているんだ！　壊せないんじゃ先に進めない！　壊せない……壊せない？）

悩む様に俯いていた一誠が、急に顔を上げて『僧侶』の女を見る。いきなり凝視され

た女は結界に守られているというのに、驚きで体を震わす。
「――この結界、『僧侶』のお姉さんが張ったんだよな？」
「そ、それがどうしたというの？」
一誠が放つ妙な圧力で、『僧侶』の声が少し震える。
「だったら試す価値はあるよなぁ！」
皆が注目する中で一誠は両手を握り締める。最大限まで高まっている魔力が体から噴き出し、守られている筈の『僧侶』二人を慄かせる。
一誠の魔力に応える様に、赤の拳はより眩く、白の拳はより煌めく。
大事なのは強いイメージである。この結界は『僧侶』の女性が展開した。そこからイメージを発展させる。
彼女の結界内部に居る。つまりは結界を纏っている様なもの。纏うということはつまり衣服の延長。というか纏っている時点でこの結界は彼女の衣服である。
『……いや、そうはならんだろう』
飛躍し過ぎな考えにドライグは引くが、イメージを常人には出来ない程発展させている今の一誠にはその声は届かない。
「――いくぜぇぇ！」
一誠は両手を組み合わせて拳を作る。

「うおりゃああああああ！」
全魔力を注ぎ込みながら結界に両拳を打ち込んだ。金属板を無理矢理押し曲げた様な耳障りな音に、全員顔を顰める。
音が遠のいていく中、皆の視線は一誠の拳の先に集まる。
結界に亀裂は無く、一誠最大の一撃も届かなかった。リアスたちに悔しさを、『僧侶』たちは安堵を覚える。
「……この結界を張ったのが、そっちで良かったよ」
「……は？」
言っている意味が分からず、『僧侶』の女性は訝しむ。
「おかげで成功した」
一誠が拳を打ち鳴らした瞬間、張ってあった結界が内側に向かって縮小し始める。
「なっ！」
結界内部に居る『僧侶』二人は、縮小する結界にすぐに逃げ場を奪われ、何一つ抵抗することが出来ないまま二人は背中合わせの動きを固定され、身動きとれなくなり横たわる。
『洋服拘束』の応用によって、結界は破壊されるのではなくその形を変えられた。
「……すごい。相手の結界をそのまま利用して逆に閉じ込めたんですね」

「さ、流石です！　イッセー先輩！」
小猫とギャスパーは、一誠を素直に称賛する。
「ああ。女性の方が結界を張ってくれて助かったぜ。おかげで結界も服の延長というイメージ力が高まった！」
真顔でどう聞いても理解不能なことを言う一誠。
「んん、まあ……流石、イッセー君としか言えないね」
「やっていることは凄いのですけどね」
「手放しで褒められないわ……」
何とも言い難い表情となるリアスたち。
一方で――
「大した技だ」
「凄いわ！　イッセー君！」
――素直に感心するゼノヴィアとイリナ。本来は相手を半裸状態で拘束する技だということを知らないイリナは、無邪気に喜んでいた。本当のことを知れば、すぐにでも手の平を返して一誠に説教をするだろう。
取り敢えずは敵を無力化させることが出来た。後はアーシアの救出に向かうだけである。

「ねえ」
　すると、イリナが皆に話し掛ける。
「私……ここに残っていてもいい？」
　そう言うイリナは、申し訳無さそうな表情をしていた。
「アーシアさんのことは勿論心配よ。でも……この人たちのことも放って置けないの」
　今のディオドラの眷属たちには、自分の身を守ることは出来ない。あちこちで戦いが起こっている中で彼女らを放置していたら戦いに巻き込まれるか、或いは口封じで殺される可能性も考えられる。
「――そうね。彼女たちも『禍の団』についての情報を持っているかもしれないわね」
　それは、イリナの考えを尊重する為の建前であった。リアスも彼女らが重要な情報など持ってはいないことは予想出来ている。
「祐斗。念の為に貴方もここに残ってくれる？」
「分かりました」
　万が一のことを考え、木場も彼女たち護衛兼監視に置く。木場は快諾する。自分と同じ元教会の人間であることに思うところがあるのかもしれない。
「イッセー君、ゼノヴィア。アーシアさんのことは任せたよ」
「ああ。分かった」

「すぐに戻って来る」
「……ます」
小さく、呻く様な声。その声はディオドラの『女王』から発せられていた。
「……私は貴方のことを恨みますよ、赤龍帝」
俯いた体勢のまま、『女王』が恨みを募らせた声を吐く。
「ディオドラ様は私たちの失態を許すことはあり得ません。これで、きっと、私は、私たちは最後の居場所を失います。失った私たちはどうすればいいのですか？　これから私たちは何処へ行けばいいのですか……？　何に縋ればいいのですか……？」
絶望に満ちた『女王』の言葉。事情を知らない一誠とイリナを除いた他の面々も不穏なものを感じ取っていた。
「俺が……」
恨みをぶつけられた一誠が呟く。
「俺が今出来るのは、ディオドラの奴をぶん殴る！　……それだけだ」
「……そうですか」
『女王』はそれ以上何も言うことは無かった。
「……行きましょう」
リアスの声に従い、皆が神殿奥に向かう。

「イッセー、大丈夫？」
陰りを感じさせる一誠の表情を見て、リアスは心配になり声を掛けた。
「ははは、大丈夫ですよ！　気にしてませんって！　女性に嫌われるのは慣れているんで！」
笑いながら自虐的なことを言うが、皆には空元気にしか見えない。
すると、笑う一誠の首に、誰かが背後から腕を回す。背中に伝える体温。柔らかでありながら弾力のある双丘。鎧越しでも分かる。
「あ、朱乃さん？」
「イッセー君。私は貴方を嫌ってはいませんよ？」
敵意を向ける女性も居れば、好意を寄せる女性もここに居ることを告げ、一誠を慰めようとする。
「あ、ありがとうございます……」
「――という訳で。アーシアさんを助けて全部解決したら、私とデートをしましょう。いいですわね？　イッセー君？」
「は、はい！　……えっ！」
「はい。了解を得ました」
不意打ち同然にデートの約束をした後、満面の笑みを浮かべながら朱乃は一誠から離

れる。流れで、はいと言ってしまった一誠は狐につままれた顔をしていた。
「……流石、朱乃先輩。抜け目無いです」
「あ、朱乃ったら私の目の前でイッセーと……！　くうう！」
「成程。参考になるな」
リアスが特に朱乃に対して物申したい様子であったが、それよりも優先すべきことがあるので一旦その感情は置く。尤も、事が終われば朱乃に文句を言うつもりだが。
「……ん？」
小猫が立ち止まり、頭の猫耳をピクピクと動かす。
「どうしたの？」
「……今、少し揺れませんでした？」

◇

自らが作り上げた焦熱の空間。地を融解させ、天すらその熱で焼き破れそうになる。
生者を許さない生誕直後の星が一時的に再現されたその中で、二つの生が争う。
一つは龍王であるタンニーン。その鱗は自身が放った炎に焼かれることも焦げることも溶けることも無く、彼の身を守る。

もう一つは赤き獣。タンニーンに踏み潰され、溶ける大地の中にその身が埋められているというのに、その生は未だ終わりを見せない。

寧ろその生の底すら見せていない。

（ぬうっ……！）

高熱の中でタンニーンが心の中で呻く。赤き獣は、タンニーンの炎に耐えるだけでなく、その圧に耐えているどころか、押し返し始めていた。

タンニーンの足裏をその七つの首が持ち上げる。体格的に大きな差があるというのに、タンニーンは獣を再び押し潰すことが出来ない。どんなに力を込めようとも獣はその力に屈せず、立ち上がろうとする。

ならばもう一度炎を撃ち込もうとしたとき、燃え盛る業火の中で響き渡る鳴き声。

高く、低く、耳障りで、どこまでも遠くに通り、不安定で、心を騒めかせる不快という言葉で表現し尽くせない赤き獣の鳴き声。

途端、業火が鎮火する。

これにはタンニーンも瞠目する。吐いた炎は、彼の力によって生み出されたもの。彼の意思無しで消えるものではない。だが、炎は消えた。獣の鳴き声に、炎が屈服させられたかの様に跡形も無く。

怪現象に僅かな動揺が生まれたとき、一条の稲光がタンニーンの足を貫く。

貫いた光は、そのまま直線上にある顎から脳天まで風穴を開けようとするが、タンニーンが咄嗟に後ろに飛んだことで躱される。

しかし、それは赤い獣を解放したことも意味した。

溶けたこととタンニーンの重量で沈んだ地面から赤い獣が這い出る。その体に火傷一つ無く、体毛一本すら焦げていない。

タンニーンは翼を一回羽ばたかせた後に、足の傷に構うことなく両足で地面に降り立った。

タンニーンは獣に注意しつつも傷口を観察する。

（焼け焦げているな。そして、あの光……雷の魔術でも使えるのか？）

痛みはあるが、努めて冷静に情報を分析する。

魔人という存在は、タンニーンにとって今でも唾棄すべき存在だが、冷静さを欠かさないと決めていた。同じ失態を繰り返す様な存在ならば、タンニーンは龍王という異名を得ていない。

魔人との交戦経験はあるが、マタドールとシンの二名。片方は手の内を全て見ていないし、もう片方は二度と戦うつもりは無い。

三度目の魔人との戦い――この獣が魔人かどうかは不確かだが――得られるものを見落とさず、全て拾い上げる気概でいく。

獣の七つの頭が一斉にタンニーンに視線を向ける。十四の感情を見せない目が、その白い眼球にタンニーンを閉じ込める様に映し込む。

同時に開かれる七つの口。その口内に先程と同じ光が漏れ出す。

ドラゴンの鱗を容易く撃ち抜く雷撃。それが七条。しかし、タンニーンは怯むことなく真っ向から迎え撃つ為に、同じ様に口に炎を蓄える。

炎と雷。似て非なる破壊を生み出す力。それらが今まさに衝突――する前に光が次々に獣の顎を打っていく。

貫くまでには至らなかったが、下顎の牙が上顎を貫く程の勢いで強制的に閉ざされる。

自らの牙で口を縫い合わせられる獣。だが、最後の頭だけはその光の動きを読み、首を仰け反らせることで回避してしまう――が。

トン、と軽い足音。上向きとなった獣の頭を踏み付けて虚空からシンが現れる。その手に蛍光の光弾を宿して。

放つ寸前の雷を、シンに向けようとする獣。それよりも先に口内目掛け光弾を呑み込ませる。

放つ筈の雷は、光弾により喉の奥へと押し込まれる。

獣を踏み台にしていたシンの姿が消える。直後、行き場を求めて暴発した雷が、喉や

目を突き破り、内側から焼く。
「――もう戻って来たのか」
蓄えていた炎を霧散させ、タンニーンが視線を下ろすと、足元にシンとオーディンが並んで立っている。
「爺でも意外と素早く動けるもんじゃぞ？　それに一人残して戦わせるほど老いてはおらん。手を貸すぞ」
オーディンは頼もしく感じる程ふてぶてしく。
「――手を貸す」
シンは心強く感じる程静かに助力を言って出る。
「――恩に着る」
タンニーンは、その硬い鱗を歪めて勇ましく笑った。

巡合、右足

平地にて一人でポツンといる人物――デュリオは、死人を彷彿とさせる顔色に尋常では無い汗を流しながらも、目を閉じ、腕を組み、胡坐をかきながら静止状態を続けていた。事情を知らない者が見れば、死んでいると錯覚するほどに微動だにしない。

（……情けないなー）

赤き獣の穢れによる肉体、精神を蝕まれる苦痛の中で、デュリオは己の不甲斐なさを自己嫌悪していた。通常の天使ならば視界に入れただけで即消滅するほどの穢れをその身に受けてもまだ考える余力があるのは、神滅具所有者だからというよりもデュリオ個人の精神力の強さ故であった。

その苦痛に耐えながら、デュリオはその身に宿す神滅具『煌天雷獄』の力と、天使の光の力を合わせて、体内の穢れを取り除いている。

（大丈夫かな。オーディン様やシンたんは……）

彼をここに連れて来たオーディンと、僅かな間だが共闘したシンのことをそんな状況では無いと分かっていても心配してしまう。

後は離れる隙を作ってくれたあの巨大な存在――オーディンとシンが言うに元龍王

であるタンニーンらしい。龍王の名の大きさと強さはデュリオも承知のことだが、それでも相手はあの魔人とほぼ同格の存在。一人で戦うには危険である。だからこそ、オーディンもシンもすぐに戻ったのだが。

（あのお姉さんたちも……上手く戦場から離れられたかな……）

シャボン玉に閉じ込めて飛ばしたディオドラの『兵士』たちのこともデュリオは心配していた。

神滅具の力を回復に回したせいで、シャボン玉に向けていた力は途切れた。シャボン玉はすぐに割れることは無いが、いずれは割れる。問題は割れた後、彼女たちが何処に居るかである。

なるべく戦いから離れた場所に運ぶ予定であったが、シャボン玉が割れた場所がそこだという保証は無い。ましてや彼女たちは完全に戦意喪失している状態である。そうしたのはデュリオであり、彼は彼女たちを無事助けるという責任を自ら背負っていた。

（……このままじゃ終わらない）

デュリオは静止した中で、内に想いを滾らせる。神滅具の力の根本は想いである。その想いをくべる度に神滅具は活性化していく。

天界の切り札は、自らを切る時の為に力を取り戻し続ける。

◇

帝釈天がいきなり立ち上がる。それだけの動作で周りにいる付き人たちは、落雷でもあったかの様に大袈裟に体を震わせる。尤も、帝釈天という存在を知っている者ならばそれが大仰だとは思わないだろう。彼の一動作一動作は雷鳴の様に心臓に悪い。

ことの成り行きをただ観客の様に静観すると宣言していた筈の帝釈天が動いたことに、周りにいる付き人の一人が恐る恐る尋ねる。

「ど、どうなされましたか？」

「ああん？」

「ひぃっ！」

丸グラス越しに帝釈天に睨まれた付き人は、一瞬にして蒼白となり、生まれたての家畜よりもその身を震わせる。

「そんな質問をしている時点でナンセンスだＺＥ。お前ら、全員天界に戻ったら一から修行し直せ」

帝釈天は、僅かに漂う魔人の気配を鋭敏に感じ取っていた。甘い、というよりもいざなわれる様な官能的な気配。それに気付かない力量不足の周囲を嘆くが、同時にもし感じ取っていたなら、抵抗する間も無くこの魔人の気によって骨抜きにされ、廃人となっ

ていることが予想出来ていた。
「ちょっと出てくるＺＥ」
帝釈天が部屋から出ようとして、周りは慌てて後を追おうとする。
「一体どちらへ！」
「暇つぶし」
悪魔同士のつまらない小競り合いを見物しているよりも、神出鬼没の魔人と戯れる方が遥かに面白そうである。
周りには具体的なことは言わない。付いてくるなら、帝釈天は直前まで魔人について喋るつもりはなかった。知らない内に魔人と邂逅したらどんな反応を示すのか、質の悪いサプライズを考えながら帝釈天は部屋の外に出る。
「ん？」
「あん？」
部屋を出た直後、天井に頭が着きそうな巨体が目の前を通り過ぎようとしていた。
四本の腕。鉱物から削り出された様な荒々しい肉体。頭頂部には噴き出す様に燃える炎。
それは、帝釈天の良く知る化物であった。
「――おやおやおやー？」

「――ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」
帝釈天を見た途端、その異形は牙が並ぶ口を歪めて笑みらしきものを見せる。帝釈天もまた化物を見ると声高らかに笑い始める。
互いに一拍置いたのは、この邂逅が完全な不意打ちだったことにある。帝釈天もそうだが、この化物もまた微かに漂う魔人の気配を追っていた。意識がそちらの方に傾いてしまった為に、お互いの存在を察するのが疎かになってしまっていた。
花の蜜を探す蝶の様に。尤も、両者の存在は蝶の様に華やかで脆弱なものではない。理不尽にして不可侵な存在。
「こんな所で呑気にゲームの観戦かぁ？　良い身分だなぁ？　ああ、そう言えば良い身分だったな。訂正するぜぇ。何様だぁ？　ああ、そう言えば神様だったなぁ。名前は御大層だけど中身がからっきしなせいですぐに忘れちまう」
「化物もボケるのか？　初めて知ったＺＥ。というかここに中身が入っているのか？　化物っていうのは？　お前の場合、酒が代わりに入っているんじゃないのか？　まあ、それだったら空っぽの方がマシだな」
出会って早々、悪意を剥き出しにして互いを皮肉る。
「へっへっへっへっへ！」
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

気の合う親友の様に笑い合うが、相手への嫌悪を微塵も隠そうとはせず、敵意を超えた殺意をぶつけ合う。

衝突し合う殺気は物理的な影響も及ぼし、帝釈天たちが笑う度に壁や床に亀裂が生じ、空間全体が細かく震える。その現象は、まるで世界が彼らに恐怖していると錯覚させる。

両者とも人知を超えた存在故に、向け合う殺気など涼風の様に流してしまうが、仮にこの場に並みの人、悪魔、天使が居れば、二人の殺気で死を迎えていたであろう。

そして、大勢の死が生まれたとしても彼らは止まることは無く、また止めることも出来ない。そもそも彼らの争いを止められる者など、この世に数える程度しか存在しない。

帝釈天の付き人など、二人が認識し合った瞬間に九割が気絶し、残りの一割はまだ自分の意識が有ることを呪い、ひたすら気を失うことを願うという現実逃避をしていた。

「お前のその耳障りな笑い声、二度とさせなくしてやるよぉ！　インドラァァァァ！」

「気安くなぁ、そっちの名で呼ぶんじゃねえよ！　マダァァァァ！」

業火と雷が怒号と共に発せられ、衝突し、打ち消し合う。この時に最後の付き人も意識を失う。これにより完全に二人のみの領域と化す。

会場内では未だに旧魔王派の悪魔たちが活動しているが、最早二人にとってはどうで

もいいこと。そもそも既にこの場は逸脱した者しか入ることが出来ない神域となっている。仮に資格が無い者が踏み入れれば、肉体だけでなくその魂すら消滅させられるだろう。

旧魔王派の襲撃。魔人の襲来。そこに更なる厄災が重なる。

神とそれに近い力を持つ阿修羅の戦い。誰かが止めなければ確実に冥界は滅びる。

◇

ギリメカラとアーシアの逃走劇が開始された直後に、ゲオルクは一切手を緩めることなく追走する。

鈍重な見た目とは裏腹に凄まじい速度で走るギリメカラ。背に乗るアーシアは、向かい風に目を閉じながら、落ちまいと必死な様子でしがみつく。

一方ゲオルクの方は、『絶霧』の能力を応用し、前方とそこから離れた位置に霧を発生させ、その霧を通って短距離の転送を繰り返すことで、身体能力が劣っていてもギリメカラたちとの距離を一定に保てられていた。

この方法を使えばギリメカラを追い抜くことが可能だが、ゲオルクは何故か先回りしない。当然ゲオルクも最初はしようとしたが、それをやろうとした結果ギリメカラは転

送先に毒を含んだ息を吹きかけられ、転送した瞬間に毒殺出来る状況に仕上げてしまった。

ならば見えない位置に転送すればいいという考えもあるが、その場合ギリメカラは即座に方向転換する可能性が高い。わざわざ相手が待ち構えているかもしれない道を走る必要など無い。

しかし、いつまでも追い続けても埒が明かないことはゲオルクも重々承知している。何らかの方法でギリメカラを足止めするか、アーシアを奪うしかない。それも限られた猶予の中で。

（……仕掛けてみるか）

ゲオルクから霧が発生する。白い霧は、ゲオルクの姿及び通路を覆い隠す程の密度と量であった。

「霧よ！」

発生した霧がギリメカラたちに向けて撃ち出される。触手の様に幾本に分かれて伸びる霧。その速度はギリメカラよりも速い。

「ギ、ギリメカラさん！」

それに気付いたアーシアが急いでギリメカラにそのことを報せる。だが、ギリメカラは速度を上げることも進路を変えることもせず、直進し続ける。

「きゃっ！」

間近に迫った霧に、アーシアはギリメカラに密着する様に身を低くするが、アーシアの想像とは異なり、霧の触手はギリメカラたちを素通りする。

霧の触手の群れは、ギリメカラたちの現在位置から十数メートル程度離れた先で絡み合い始めたかと思えば、一気に形が崩れて通路の両端、天井まで広がり、通路を塞ぐ壁と化す。

（さて、どうする？）

通路に霧が張られてるだけに思われるかもしれないが、強度だけなら例えギリメカラが全力で突進しても防ぎ切れるし、それどころか神滅具の一撃すら耐え切ってみせられると豪語出来る。

『絶霧』の壁を前にしてギリメカラはどう対応するのか。そのとき、前方ばかり向いている筈のギリメカラが一瞬だけゲオルクの方を見た。

単眼を細め、その長い鼻を一回鳴らす。ギリメカラは、ゲオルクの絶霧を鼻で笑ったのだ。

ゲオルクはそれを見た時、血流が増すのが分かった。ゲオルク自身が自慢することは無いが、少なくともゲオルクは人として生まれも才能も上位に位置する。それに溺れるつもりもないし、鼻に掛けるつもりも無い。だが、それでもそれなりのプライドという

ものが成される。
　ゲオルクの人生の中で一瞬だけのこととはいえ、ここまで小馬鹿にされ、下に見られるのは初めてのことであった。
「突破出来るものならしてみせろ！」
　誰の怒声かゲオルクは最初気付けなかった。一コンマ置いてそれが自分の声だと気付く。冷静さでは御しきれない激情が自分の中にあるとは。場違いな所で自分でも知らない一面を見た気がする。
「パオッ」
「は、はい！」
　それに答える様にギリメカラは鳴くが、ゲオルクにではなくアーシアに向けられたものであり、内容は『今すぐ目と口を閉じろ』というもの。
　アーシアはギリメカラの突然の指示にも疑問を持つことはなく素直に従い、その目と口を閉ざした。
　間も無く霧の壁にギリメカラが接触する。
　どうするのか。それを張ったゲオルクも自然と注目してしまう。
　ギリメカラは鼻で息を吸い込み、霧に向けてどす黒いガスを噴射する。それは、ゲオルクも見た毒を含んだ息であった。

毒ガスは霧の壁に阻まれたかと思えば、霧の壁と混ざり合い始め、白一色であった霧の壁が白と黒のマーブル色に変わる。

「しまっ――」

ギリメカラが何をしたのかに気付いたが、ゲオルクにそれを止める術は無い。ギリメカラは白と黒の壁に躊躇なく突進すると、壁は『絶霧』で出来たものとは考えられない程呆気無くギリメカラの侵入を許し、簡単に突破された。

その光景を見せられたゲオルクの心は、屈辱感で蝕まれる。

ギリメカラが行ったことは至極単純なこと。『絶霧』の中に自分の魔力を含ませた毒ガスを混ぜることで、ゲオルクの魔力を阻害し、『絶霧』本来の力を発揮出来なくさせたのだ。

絶対的防御力を誇る『絶霧』が破れたことへのショックはゲオルクには無い。何よりも屈辱なのは、ギリメカラが破った方法がゲオルクの力不足を指摘するものであったからだ。

霧の結び付きが甘いせいで、ギリメカラの魔力が入り込むのを許してしまった。もっと密度を濃く、結合を強めれば、先程の毒ガスなど跳ね返すことが出来たのだ。

持ち前の頭脳故に、ゲオルクは自分の未熟さをすぐに理解してしまう。

体の末端から頭の頂点まで血が煮える様な感覚であった。ゲオルクとて失敗した事

がないわけでは無い。実験で多くの失敗を経験している。しかし、それは失敗も視野に入れてのこと。ミスを許されない時のミスはこれが初めてとも言える。

「パオ」

「あ、はい！」

ギリメカラが『もういい』と言うと、アーシアは目を開け、口を開き、ついでに止めていた呼吸を再開する。

アーシアが振り返ると、佇んでいるゲオルクの姿が見えた。

つくづく色々な思いを味合わせてくれる相手だと、小さくなっていくギリメカラたちを見ながらゲオルクは思う。

爪が食い込むほど握った拳を開く。

（まだだ。まだ終わっていない。俺にはまだ出来ることがある。これで終わりじゃない）

ゲオルクは自分にそう言い聞かせる。神器を扱う上で最もやってはいけないことは『勝てない』『もうダメだ』と思い込むことである。その時点で神器はその相手に対して力を発揮出来なくなる。想いを糧にするということは、こういったネガティブな考えも反映してしまう。

ゲオルクがギリメカラに対し、絶対に勝てないと思うことは二度と勝てないことを意

味する。強引にでもその考えから抜け出さなければならない。
敗北感を例え冷静さを欠くことになっても怒りに変える。自分への怒り、そしてギリメカラへの怒り。理由はどうあれ心が沸き立つことが神器の強さに繋がる。
「――ん？」
ゲオルクの感覚があるものを捉えた。自分と同じ神滅具の力である。しかも禁手に至っている。
（赤龍帝か……）
力の波動はそう遠く無い。アーシアを探しにここに来ているのだとしたら、赤龍帝が禁手化したのが一番考えられる可能性である。
残された時間がもう少ないことが分かる。『赤龍帝の籠手』に後れを取るつもりは全く無いが、四大魔王の実妹であるリアス、魔聖剣の木場、聖剣使いのゼノヴィアという無視できない存在も居り、そこにギリメカラも加わるとなると分が悪い。
（早く終わらせなければ……攻め方を変えるか）
神滅具へ道を塞ぐやり方から別の手段に変更することを決めると、ゲオルクは再びギリメカラを追い掛ける。
霧そのもので足止めすることを止め、もっと単純な方法に切り替える。
ゲオルクは、ギリメカラたちの頭上に向けて霧を伸ばす。その動きにギリメカラも気

付くが、事を起こすまで何もしない構えをとる。
石造りの天井に吸い込まれていく霧。すると、突然天井に幅数ミリの切り口が生まれた。
ゲオルクは天井に吸い込ませた霧を内部で細長い形に変え、その形に合わせて天井の一部を別の場所に送る。
それにより天井は内部から切断され、繋ぎ止めるものが無くなった結果、天井の一部が大量に落下する。
原始的だが質量による足止め。正直アーシアも巻き込まれる可能性大の方法だが、ゲオルクとて必死である。成か否ギリギリの手段でなければ、ギリメカラからアーシアを奪うことは出来ない。
上から降ってくる大量の石片。ギリメカラの今のままの速度で行けば巻き込まれず、道を塞がれるだけで済む。しかし、ギリメカラは逆に速度を上げた。
「ギ、ギリメカラさーん！」
アーシアの悲鳴が聞こえるが、ギリメカラは無視。落石の中に突っ込んでいく。
その光景を見てもゲオルクはもう驚かない。無茶苦茶に見えてもギリメカラの行動は一貫してアーシアを守るというものである――守る対象としてはかなり扱いが悪いが。

一瞬にしてアーシアを圧殺出来る石片の塊が、アーシアの頭上に落ちてくる。アーシア本人はギリメカラにしがみつくことに夢中になっており気付かない。

すると、アーシアに翳す様にギリメカラの鼻が後ろに伸びる。その鼻に石片が触れたか触れないか分からない内に、石片は弾かれて端に飛んでいってしまった。

（あれは……！）

また一つ、ゲオルクはギリメカラの能力を見た。よく観察すれば、他の大小の石片もギリメカラの体に触れた途端弾かれていく。大きさも重量も関係無く。

（弾く……反射しているのか？　もう少し確認する必要がある）

ゲオルクは移動しながら足元に転がってきた石片を撫でる。撫でられた石片は宙に浮かび上がり、ゲオルクが指を鳴らすと一斉にギリメカラ目掛けて放たれる。

すると、石片がギリメカラの臀部へ次々に直撃していくが、逆に粉砕されていく。

このことが、ゲオルクに一つの仮説を与える。

（どうやら魔力を帯びたものは反射出来ないようだ。反射出来るのは物理的なもの限定か？　だが――）

相手の反射能力について大凡理解出来たが、問題はその先にある。石片を当てて分かったことだが、ギリメカラ自身も非常に硬い。ゲオルクが簡単に放ち、ギリメカラが何事も無い様にしているせいでそうは思えないだろうが、先程の石の投擲、人体ならば

穴が開いていた。
ギリメカラに傷を付けるには、反射能力とギリメカラの硬さという二重の壁を超える必要がある。
『絶霧』自体に攻撃力は無いので、ゲオルクの魔術を使うことになるが、その魔術でも突破出来るか確証は無い。
そんなことを考えている内に、ギリメカラは落石地帯を無事抜けてしまった。
残されたのは、ギリメカラの足止めに失敗した無数の天井の残骸。
（――いや）
残骸を見てゲオルクは一つ考えが浮かび、すぐさまそれを実行に移す。
『絶霧』を伸ばし、大量の天井の残骸を包み込む。小規模で創り出した『絶霧』の結界。
残骸を内包した『絶霧』の形を変化させる。四角形、それも可能な限り厚みを薄くする。すると中の残骸が圧縮されていく、大きな音を立てて砕けていき、『絶霧』の形に合わせられていく。
圧縮され平たい形になった『絶霧』を更に分割し、三角形状へと変えた。
結界を応用して即席で作り上げた『絶霧』の刃である。重量の無い霧だが、中に圧縮したトンを超える量の石を詰め込むことで重さを付け、更に魔力を帯びているのでギリメカラの反射能力の対象にはならない。

（これなら！）

ゲオルクの周囲に浮かぶ複数の『絶霧』の刃。その先端をギリメカラに定め、そして放った。

風切り音を超えて進むそれは、ギリメカラの足を掠り、またはギリメカラの臀部にその先端を刺す。

（どうだ……？）

ゲオルクが注意深く見ると、掠めた箇所から、突き刺さった箇所の間から青黒い体を伝わって赤い血が僅かに流れていく。

ギリメカラの体格から見ればほんのかすり傷。音速を上回る速さで発射したにもかかわらずその程度で済んでいることから驚異的な頑丈さである。しかし、活路は見えてくる。

（血を流させることが出来たなら――）

途端、ギリメカラの体が緑色の光に包まれ、足の傷は無くなり、刺さっていた刃も勝手に抜け、刺傷跡に肉が盛り上がって傷を塞ぐ。

「大丈夫ですかっ！」

ギリメカラが傷ついたと分かって、アーシアが神器を発動させた。

その光景を見てゲオルクは理解する。ギリメカラを止めるには、反射能力を超え、ギ

リメカラ自身の防御力を超え、尚且つアーシアの治癒能力が追い付かない程の致命傷を与えるという三重の壁を超えなければならない。
　見えた活路が一秒も満たずに潰えたことを知り、ゲオルクは――
「アーシア・アルジェントッ！　お前ぇぇぇ！」
「ひゃ、ひゃい！　ご、ごめんなさい！」
　――思わずキレた。
　名指しで怒鳴られたアーシアは反射的に謝ってしまう。性格からしてあまり敵を作らないアーシアだが、ここまで相手を怒らせたのは初めての経験であった。
　尚、ギリメカラの方は怒るゲオルクと、最高のタイミングで嫌がらせの様に神器を発動させたアーシアを面白がり、『よくやった』と鼻でアーシアの頭を撫でる。
　何もかも思い通りに行かず、怒りと苛立ちで煮える様に頭を抱えるゲオルクから遠ざかっていくギリメカラたち。
（まだだ！　まだ手段ならいくらでもある！）
　活火山のマグマ溜まりとこの場所を繋げて一体を溶岩地帯にも出来るし、深海と周囲の空間を入れ替えて陸地でこの世で最も深い海水の味を教えてやることも出来る。
　いっその事、大気圏外と空間を繋ぎ合わせて隕石の雨を――。
「……はあ」

そこまで考えて、ゲオルクは止めた。
「今回はそちらの勝ちだ」
ついでに負けも潔く認め、これ以上ギリメカラたちを追うのも止める。
深追いしてもゲオルクにとって益は無い。こちらの手札を相手に見せるだけのこと。仮にアーシアを奪還出来たとしても、喜ぶのはシャルバとディオドラだけ。虚しさも感じられない程意味が無い。
（やれるだけのことは最初にやった。これ以上連中の言う事を聞くのは調子に乗らせるだけだ）
レーティングゲームのバトルフィールドの隔離。そして、無意味となったがアーシアの神器を利用した結界装置を渡しただけでゲオルクの役目は終わっていた。今までゲオルクがギリメカラたちを追っていたのはゲオルクの生真面目な性格故。シャルバが、自分を上手く転がしているつもりになっているのを当然見抜いていた。
不本意とはいえ為すべきことが為せなかったことにプライドが傷付くが、引き際を見極めなければ醜態を晒すことになる。
「笑われるか？　――いや、笑われないか」
仲間たちのことを思い浮かべ、自分の失態が嘲笑の対象になるか考えたが、すぐにその可能性を払拭する。寧ろ、このことで旧魔王派が責めることがあれば真っ先に自分を

庇うだろうし、怒りも見せるだろうと理解していた。それでもこのことを曹操たちに報告するのは気が重い。

ゲオルクはシャルバたちに何も言わずに去ることにする。顔を合わせて嫌味か皮肉でも言われたら、折角冷静さで押し殺した屈辱感と怒りが溢れて殺してしまうかもしれない。

ゲオルクの足元から霧が立ち込め、体へ徐々に覆い被さっていく。

冥界から消える前にゲオルクの視線はある方角に向けられる。

(曹操が言っていた通りになったか……)

寒気立つ感覚。間違いなく魔人の気配であった。曹操が予見通り、マザーハーロットがこの地にやって来たのであろう。

目的は何なのか分からないが、ゲオルクはそれについて深く考えるつもりは無く、当然彼女を手助けするつもりも無い。下手に手助けなどしたら巻き込まれて死ぬ可能性がある。

マザーハーロットの力はゲオルクも知っている。彼女の力は敵味方の区別が付けられる程融通が効くものでは無い。

精々、彼女が遠慮無しに力が振る舞える様に一刻も早く退散するのが一番の助けである。

霧がゲオルクの首元まで這い上がる。転送の間際、ゲオルクは一言零す。
「次は、こうはいかない」
この日の記憶と感情を心に深く刻み込み、ゲオルクは冥界から消えた。

◇

疾走するギリメカラであったが、突然走るのを止める。
急停止に振り落とされそうになるのを、四肢のありったけの力でしがみついて耐えるアーシア。
伸ばされた鼻がアーシアの胴体に巻き付き、地面に降ろす。
驚きながらギリメカラを見上げるアーシア。ギリメカラはいつの間にか獣から人型の姿になっていた。
「パオォー」
眠気混じりの鳴き声。追手がもう来ないこと、一誠たちが近くまで来ていることを告げる。
「本当ですか！」
ディオドラに攫われてから今までを時間にすれば短い時間の出来事であったが、その

間の不安、焦燥、恐怖がそれを何倍も引き伸ばし、長く会って居なかった様に感じさせる。

アーシアの双眸から安堵の涙が溢れ出ようとしていた。

「パオ」

するべきことが済んだからもう寝る、とギリメカラは大きく口を開けて欠伸をする。

「あ、あの！」

「パオ……？」

休眠に入ろうとするギリメカラをアーシアが呼び止める。ギリメカラは半眼でアーシアを見詰めた。

「助けて頂いてありがとうございます！」

アーシアがギリメカラに感謝の言葉と共に頭を下げる。ギリメカラは少しの間、下げられたアーシアの頭を眺めていたが、やがて鼻先を伸ばし、最初の時の様にアーシアの頭をペシペシと叩くと、お休みと一声鳴いた後、その鼻でアーシアの影に触れ、その中に吸い込まれて様に消えていった。

「ギリメカラさん……？」

自分の影の中に消えたギリメカラを呼んでみたが返事は無い。あっという間に深い眠りへと入ってしまった様子であった。

「ありがとうございました」
もう一度だけ礼を言い、アーシアは走り出す。
彼女の耳には届いていた。こちらに向かってくる複数の足音。そして、その音に紛れて聞こえてくる慕う者たちの声が。

◇

焼く。貫く。潰す。叩く。蹴る。使える手段を全て用いて目の前の敵を打倒しようとする。
しかし、焼かれようが、貫かれようが、踏み潰されようが、殴り飛ばされようが、赤い獣は何事も無いかの様に立ち上がり、叫びの様な鳴き声と共に七つの頭を凶器の様に振るう。
強いことは最初から分かっていた。だが、北欧の主神、元龍王、半端ながらも魔人の三人が揃って戦っていても、最初の認識がまだ甘かったことを思い知らされる。
シンに向かって前足を振り上げながら獣が飛び掛かる。シンにとって見切られない動きでは無い。しかし、七つの頭から同時に放たれる咆哮が彼の動きを鈍らせる。
咆哮が耳に入った瞬間、筆舌し難い穢れた声が理解し切れ無い情報へと変換されて脳

に入り込み、悪寒を走らせ、本人の意思とは関係無しに体を一瞬だけ硬直させてしまう。

神であるオーディン、人外のタンニーン、並外れた精神力を持つシンだからこそ一瞬の硬直程度で済んだ。並の精神ならば、咆哮を聞くと同時に意識を手放している。

獣の真横から黄金の光が奔り、獣の首を三本貫く。これにより飛び掛かりの勢いが僅かに殺され、それによって出来た時間がシンに反撃の機会を与える。

シンの両手に魔力剣が握られると、すぐさま魔力の波が放たれ獣を捉える。

不規則な軌道を描く魔力の波が、閉じ込めた獣の体を引き裂こうとするが、捩じり裂く力の渦中でも獣はまだもがく。

渦の中から何かがシンに向かって飛んできた。反射的に手を翳してそれを受け止める。掌が赤黒い血で染め上がった。

獣の首を貫いた黄金の光――オーディンの投げたグングニルの傷は、襲い掛かる力に耐えることが出来ず、穿たれた穴は広がっていき血しぶきを散らす。魔力波が通り過ぎた後には三本の首が文字通り首の皮一枚でぶら下がった状態となっていた。

七つの頭の内三つを再起不能した――と一見すれば思うかもしれない。シンたちがそれに対し全く手ごたえを感じている様子は見せていない。

千切れた首の根本が横に激しく振るう。ぶら下がっていた首が吸い込まれる様に断面に乗せられると、他の頭が舌を伸ばし、傷口及びそこから流れる血に舌を這わせる。

すると、手品の様に傷口は消えて元の七つの頭へ戻った。
見ていてうんざりする程の再生速度である。ただでさえ頑丈な上に打撃もまるで手応えを感じない。唯一魔力による攻撃が一番効果的だが、それも今のような再生で無かったことにしてしまう。
シンたちも最初、誘爆させて破壊した頭部が瞬きをしている内に無傷な状態に戻っていたときには、目の錯覚を疑う程であった。
「呆れるのう……」
「……馬鹿げた再生能力だ」
ここまで底無しの生命力を見せられると、一種のコメディー映画かマンガでも鑑賞させられている様な気分になってくる。
度を超えているせいで滑稽さを感じさせるが、状況はかなり悪い。山を素手で掘削するように果てしなく、終わりが見えない。
しかし、この場に於いてその程度で絶望する様な精神を持つ者は居ない。
「――向こうが死ぬまでやるだけだ」
「まあ、そうだのう」
「それしかないな」
折れることなく、躊躇することなく、果ての無い戦いに飛び込む者しかこの場には居

ない。
獣の口部に青白い光が零れ出る。ドラゴンの鱗をも貫通する雷の光。
それを視認した直後に七つの口部から雷が迸る。
七条の光がシンたちに向けて迫るが、光を見た時には既にシンたち動いており、雷の狙いは外れる。が、獣は七つの頭を動かし、シンたちを追跡する。
大地を裂く様にして吐かれる稲妻がシンとオーディンに迫るが、その矛先が自分に向くよりも先にシンは次の場所、次の場所と目まぐるしく動き、オーディンは魔術を使い連続して短距離の空間跳躍で避ける。
宙を飛翔するタンニーンに、獣は首を振り回して稲妻を横薙ぎ、振り下ろしなどをするが、タンニーンの巨体からは想像も出来ない巧みな飛行により、狭間をすり抜ける様にして回避される。
縦横無尽に吐かれる雷撃を、同じように縦横無尽に避け切るシンたち。
獣が雷を出し切ると同時に即座に反撃に移り、シンが先手として魔力剣を掌に生み出そうとする。
手の中で集められた魔力が、そのまま剣の形に押し留められ――呆気無く霧散する。
今までに無かったことがこの状況で起き、短い間ながらシンは動揺する。すぐに魔力剣を作り出そうとするが、今度は掌に集中させた魔力が剣になろうとすらしない。

魔力が流れているのは分かる。だが、その魔力が体の内に封じ込められたかの様に外へ出て行こうとしない。

僅かな動揺。魔力剣の再形成。短い時間だが、シンの意識が散漫となる。この隙を、獣の十四の目は見落とさない。

地面に爪を立てると、それに力を掛けると瞬時に最高速に達し間合いを詰める。

シンの意識が獣に向けられたときには、七つの口が限界まで開かれ、シンを貪ろうとしていた。

しかし、その牙が届く前にシンの姿が消える。

獣との戦いの前にオーディンはシンに魔術を施していた。オーディンが念じれば彼が認識出来る範囲だが好きな場所に転送出来るというもの。

これにより、オーディンはシンを自分の側に運ぼうとしていた。

消えたシンが現れる。現れた位置は元の場所から一メートルも離れていない。

もう一度魔術を発動させる。今度は消えることすら無かった。

オーディンは隻眼を見開き、タンニーンは驚愕する。オーディンにとって魔術とは代名詞そのもの。それが失敗するなど自惚れでなくあり得ることではない。理由があるとすればそれは外因しかない。

タンニーンは、止むを得ず獣に向けて炎を吐こうとする。位置からしてシンを巻き込

むことになるが、自分の炎を耐え切ったシンの頑丈さはタンニーンも知っており、今はそれを信じるしかない。

タンニーンは喉の奥にある熱を感じ、それを吐こうとしたとき熱が急速に消え、元の魔力へ還元されたのを感じた。

シンもオーディンもタンニーンも実感する。魔力が封じ込められていることに。

彼らは知らなかった。獣の持つ穢れを。

天使に対し魂ごと滅するだけが穢れでは無い。獣の行動全てがあらゆるものを穢し、呪い、侵す。その場に存在するだけで、周囲が、空間がまともなものでは無くなる。

当然ながらシンたちもその影響を知らず知らずのうちに受けていた。それが、唯一獣に効果のある魔力を使用出来なくなるという最悪の形で。

獣が姿を現したシンに頭を伸ばす。有らん限りの力で後ろへと跳んで避けようとするシン。

火花が散りそうな程噛み合う獣の牙の音を聞きながら、シンは背中から地面に着地し、すぐに立ち上がろうとし、違和感を覚える。

（軽い……）

体の軽さ。数キロの重りを外された様に。

その軽さを感じたまま立とうとし、再び背を地面に付ける。

「あー……」
気付いてしまった。体の軽さの理由を。
見てしまった。獣の口の一つが何かを咀嚼しているのを。
触れてしまった。粘りとまだ暖かさが残る赤い液体を。
シンの右膝から下は無くなっていた。

平行、吸血

バトルフィールド内に居る旧魔王派の悪魔たちを大半仕留めたアザゼルは、残りを引き連れていた部下たちに任せ、一人その場から離れる。

彼が離れた理由は、彼が持つ宝玉にあった。

五大龍王のファーブニルの魂を宿したこの宝玉が、このフィールドに訪れて以降ずっと輝き続けている。

現在フィールド内には視認していないが、感覚的に魔人が存在している。各勢力の中でただ一人九体の魔人と会い、その全てから生還出来たという経験を持つアザゼル。そんな彼の感覚に狂いは無い。

魔人の気配の方には一緒にバトルフィールド内に来たタンニーンが向かったが、この宝玉が指す方向は、その魔人の気配とは逆方向である。

万が一、もう一体の魔人が存在するかもしれない。部下を置いてきたのも犠牲を最小限に抑える為。

アザゼルは飛翔しながら宝玉の光の強弱で方角を確認し、光が強まる方へ飛ぶ。

徐々に宝玉の輝きが増す。だが、未だに魔人特有の寒気立つ気配は感じ取れない。宝

玉が指しているのは魔人では無いのかもしれないとアザゼルは思い始めていた。
やがてフィールドの一番隅に小さな影を見つける。
それを視認したとき、アザゼルは心の中で舌打ちをした。
（成程……はっ！　こいつは大外れだな！）
自らの引きの悪さを自嘲する。アザゼルはその人影を知っていた。正確には姿ではなく纏う気配を。
その存在は、魔人をも凌駕する。
アザゼルはその存在の側に静かに降り立つ。
ゴシック調の黒いワンピースを纏い、長い黒髪を背に垂らした人形の様に精巧な作りの顔立ちをした少女がそこに居た。
「まさか、お前自身が出っ張ってくるとはな」
アザゼルの声に反応し、少女はゆっくりとアザゼルに顔を向ける。その動作は緩慢であり隙だらけと言っても良かった。だというのに、アザゼルはその少女の行動全てに神経を張り詰めさせている。
「アザゼル。久しい」
「以前は老人の姿だったか？　今度は美少女姿とは恐れいる。正直、お前の趣味が分からん。何を考え、何をしに来た？　――オーフィス」

『無限の龍神』というこの世で最強級の力を持つドラゴンであり、『禍の団』のトップにして象徴。それがこの少女――オーフィスである。
アザゼルの言った様にドラゴンではなく少女の姿をしているが、会う度に姿が違い定まっていない。尤も、オーフィスが成る人の姿など飾りに等しい。その身から放たれる圧倒的力の片鱗こそがオーフィスがオーフィスであると何よりも証明していた。
「見学。ただそれだけ」
「高みの見物か……余裕だな。仮に俺がのこのこ出て来たボスを倒せば、それで世界は平和、ハッピーエンドってことにはなるか？」
アザゼルは、まるでプレゼントを渡す様な気軽な動作でオーフィスの喉元に光の槍を突きつけた。あと数センチ前に出せば、オーフィスの白く細い喉を貫くであろう。
状況から見ればアザゼルが有利。しかし、オーフィスは光の槍を突きつけられてもそれに目線を落とすことはせず、その視線はフィールド中央に並ぶ神殿へと固定されている。無関心を貫いている。
一方でアザゼルの方は、有利な筈だというのにその表情に余裕は無く、額に僅かに汗を滲ませている。
「無理」
固定されていた視線が外れ、アザゼルに向けられる。その一言、その視線、オーフィ

スがその気になればそれだけで相手を滅ぼすことが可能である。
「はっきりと言ってくれるな。――だが、そう言われて引くと思うか？」
「それでも無理。アザゼルでは我らは倒せない」
「我……ら？」
アザゼルは気付く。オーフィスの隣に誰かが居ることに。
オーフィスよりも更に小さな金髪碧眼の少年がオーフィスと手を繋いで立っている。
（おいおいおいおい！）
心臓がうるさく思える程鼓動する。全身に血が巡っていく筈が、体温が急速に下がっていく様な気がした。
（いつだ！　いつからそこにいた！）
上空から確認したとき、間違いなくオーフィス一人だけであった。話し掛けたときもオーフィスしか見えなかった。
アザゼルとあろう者が、こんなにも近くに居るのにオーフィスが言うまでその少年の存在に気付けなかった。まるで突如として世界に浮き出てきたとしか言い様が無い。
それは異常事態であり、同時に少年の存在もまた異常そのものである。
動揺を押し殺しながらアザゼルは少年を観察する。
喪服の様な黒のスーツを着ており、片手をジャケットのポケットの中に入れている。

アザゼルの視線を気にする様子は無く、先程のオーフィスの様に並ぶ神殿を感情を読み取れない目で見詰めている。
「そいつは……誰なんだ?」
どもらず、噛まず言葉を発せたことが奇跡に思えた。
オーフィスが少年に目配せをする。少年はポケットから手をゆっくりと引き抜く。ただそれだけの動作だが、警戒心が最大まで高まっているアザゼルは、自分でも格好悪いと思えるほど過剰な速度で首ごと視線を動かしてその動きを追ってしまう。
少年は抜いた手を口に添え、何かをオーフィスに耳打ちする。虫の羽音よりも小さな声であり、アザゼルでも聞き取れない。
「ルイ」
少年の代わりにオーフィスがアザゼルに名を教える。
「ルイ……?」
アザゼルの記憶の中にその名は無い。これ程得体が知れないというのに。
「そっちがベル」
オーフィスの視線がアザゼル越しに誰かに向けられた。
(……ここまでくると笑えるな)
振り返ったアザゼルは背後に立つ青年――ベルを見て、その様な感想しか抱けなかっ

た。

「初めまして。君がアザゼルだね？」

ルイとは違い、ベルは直接話し掛けてくる。高くも低くも無く、これといって特徴の無い声。しかし、何故かその声は耳に残り、自然と傾けたくなってくる。

「……お前たちも禍の団の一員か？」

自分でも馬鹿な質問をしていると思えた。あのオーフィスが側に置く程の存在が、一員などで収まる筈が無い。それこそ首領クラスでもおかしくない。しかし、何か言葉を発し、それで時間を稼がなければ冷静さを欠く思考を正すことが出来ない。

「いや、違うよ。僕らとオーフィスはただの友人さ」

「……ああ、そうかい。オーフィスの友達なんて初めて見たよ」

オーフィスが否定しないことから事実らしい。この世で最強に限りなく近い存在と対等な関係を結ぶルイとベル。オーフィスもそうだが、この二人に対しても情報を得なければならない。

アザゼルは突き付けていた光の槍を消し、握りしめていたファーブニルの宝玉を懐にしまう。例え『堕天龍の閃光槍』の禁手を使用したとしても、この三人に勝てる光景が微塵も見えない。ならば最初から戦うことを捨て、命懸けで対話しそこから何かを探ることに徹すると決めた。

「安心して欲しい。最初から君と争うつもりは無いよ。僕たちは彼女の付き添いさ」
アザゼルの内心を見抜いているかの様なベルの言葉。揺らぎの無いその瞳は全てを見通していると錯覚させられる。
「……ならオーフィス。お前から聞きたいことがある」
ぼんやりとした瞳が、アザゼルの姿を映し込む。
「今頃になって何故『禍の団』の首領になった？　お前がテロリストの親玉になって力を貸し与えてから被害が各地に出ている。――目的は何だ？　一周回ってシンプルに世界征服にでも乗り出したか？」
自分で言っておいて世界征服なぞ馬鹿馬鹿しいとアザゼルは思った。何故ならオーフィスには簡単過ぎる。オーフィスを止められる存在などこの世に存在しない。
わざわざテロリストたちに力を与えるなどという回りくどい方法をとる理由が知りたかった。
「――静寂な世界」
「……は？　何だって？」
思わず聞き返す。
「――静寂な世界」
オーフィスは全く同じ声でもう一度言う。

「それはつまり――」
「故郷である次元の挟間に戻ること。挟間の中の静寂を得たい。ただそれだけ」
言われて納得せざるを得なかった。確かにそれが目的ならば他の力を借りる必要がある。何せ世界を征服するよりも困難なことであるからだ。
「うちに帰りたいってか？　お前さんでもホームシックに罹るんだな。にしても次元の挟間か……」
次元の挟間。それは人間界と冥界、天界と人間界の間にある世界と世界を分け隔てる壁、あるいは境界と呼ばれる内にある世界である。
壁や境界を超えることは可能だが、その中にわざわざ入ろうとする者は居ない。そもそも各勢力は、そこに入る必要性を見出していない。中は何も存在しない『無の世界』が広がっており、そしてそこには決して触れてはいけない存在が唯一の主として居座っている。
その名は――
「グレートレッド。我は、挟間をグレートレッドから取り戻す」
「成程ね。それを条件に禍の団や旧魔王派たちに力を貸しているって訳か」
「そう」
動機を聞かされた正直な感想としては、アザゼルはオーフィスが利用されている、と

いうものであった。どれだけオーフィスが力を与えたとしても、禍の団や旧魔王派たちがいくら束になってもグレートレッドを挟間から追い出す光景が想像出来ない。
ただ、オーフィス本人が小細工など通用しないほど強い為、相手が何か企んでいるとしても無頓着であり、時間に限りの無い存在である為悠長に千年でも万年でも待てることを考えれば本人が利用されていると思うことは無いだろう。
思考するアザゼルは、今得た情報から連鎖的にある人物の思惑に見当がつく。
「……ヴァーリは元気か？」
「アルビオン？　普通。偶に我と喋る」
「そうかい」
どうにも真っ直ぐバトルマニアへと育ってしまったヴァーリに誰に似たのか、と内心苦笑する。
（白龍皇になっちまったからこそ、なのかねえ？）
ヴァーリが禍の団にいった本当の目的。近くで彼を見ていたアザゼルだからこそすぐに分かってしまった。
「……んで、そっちの奴らは何が目的なんだ？」
「僕たちのかい？」
「オーフィスと一緒に行動している理由は何だ？　お友達だから、なんてピュアな理由

じゃないだろう？」
「終始彼女と共に行動しているわけではないよ。今回は偶々さ。目的、目的か……」
ベルはネクタイの結び目を正す様に触れる。
「君も知りたいかい？」
ベルの言葉の直後、転送用魔法陣が宙に描かれる。
魔法陣を潜り抜け、真紅の髪を揺らす美丈夫が姿を現す。
「――サーゼクス。お前もこっちに来たか」
「後は部下たちに任せていいと判断したのでね。……それに無視できない気配も感じた」
四大魔王サーゼクスは、オーフィスに視線を向ける。
「この場でウロボロスであるオーフィスと出会えるとはね……それと」
オーフィスはサーゼクスに目を向けることは無かったが、代わりにルイがサーゼクスを見ていた。
「サーゼクス・ルシファー」
ベルの口から出るその名。敵意も悪意も無い。しかし、何かを含ませたその声は見えない圧を生み、アザゼルは無意識に拳を握り締め、サーゼクスは意図せずに体から滅びの魔力を漂わせる。

「それが、君の名前でいいんだね？」
「貴殿とは何処かで会ったことが……？　それと失礼」
　一言詫びた後に、体から漏れ出る滅びの魔力を消す。サーゼクスは、表面上は平静を装っているが、その内では自分にこの様な反応をさせたベルという青年に警戒心を抱く。
「いや、今日が初対面だよ。ただルシファーという名を持つ魔王に興味があっただけさ」
　サーゼクスに対してもアザゼルの様に至って平常に話す。一切の起伏を感じさせない平坦さが返って不気味さを出していた。
「さて、話を戻そうか。君たちは僕らの目的を知りたい、と言っていたね」
「大人しく話してくれるのかい？」
「正直に話されても、素直に信じられないと思うがな」
「言葉にしなくても君たちからは強い意志が感じ取れる。内容によっては力尽くでも阻止する、という意思が」
「悪魔の未来を守るのが魔王の使命だ」
「ガキ共の邪魔はさせられないんでね」
　ベルはそれを聞き、再びネクタイの結び目に触れる。それが彼の癖なのかもしれないとアザゼルは思う。

「君たちの強い意思は好ましいと思えるが、阻止となると無理だろうね。目的の為の行動は既に終えているんだ」
ルイがオーフィスに耳打ちをする。
「ルイたちが、今しているのは、経過の観察、らしい」
オーフィスによるルイの言葉の代言。
「観察、だと？」
目的の為の行動は既に終わっている。経過観察。その言葉に気持ち悪さを覚える。不安から来るものではない。全くもって心当たりが思いつかない。得体の知れなさ、オーフィスと肩を並べられる存在ならば何らかの痕跡があってもおかしくない筈だというのに。
しかし、アザゼルもサーゼクスも今日の今日まで、ルイとベルという人物についての情報を持っていなかった。それが不安を煽る。
（あるいは、それが不自然と感じさせないほど馴染んでしまったものなら……？）
一つ考えが頭を過る。だが、それ以上考えることは出来なかった。新たな魔法陣が現れ、何者かが転移してくる。
描かれた魔法陣を見て、サーゼクスが悲し気に呟く。
「アスモデウス……」

魔法陣から出てきたのは、黒地の貴族めいた衣服を纏う、長い黒髪を一つの纏めた美青年。
「ここで会うとはな、サーゼクス。偽りの魔王め……！」
サーゼクスの顔を見た途端、青年は顔を憤怒の赤に染め上げる。
「アスモデウスの御登場か」
アザゼルの声に反応し、憤怒の表情を押し込める様に隠し、不敵な態度で一礼する。
「お初にお目にかかる。俺は真のアスモデウスの血を引く者。クルゼレイ・アスモデウス。『禍の団』に属する真なる魔王の一人だ」
「真？　旧の間違いじゃないのか？」
アザゼルの挑発の一言は、クルゼレイの不敵さを一気に剥ぎ取った。
空気を震わす程の魔力がクルゼレイの全身から発せられる。その色は黒、そして魔力の中に微かにオーフィスの魔力の気配も感じ取れる。間違いなくオーフィスの力の一部である蛇を呑み込んでいた。
「魔王ならもう少しクールに行こうぜ。俺の軽口ぐらい流せるぐらいに」
「ほざけ、堕天使が。翼同様に汚らわしい言葉を吐くな」
「旧い魔王ってのは、どいつもこいつも血の気が多い」
すぐに罵倒の言葉を吐くクルゼレイに、アザゼルは肩を竦める。突き刺す様な殺気と

共に浴びせられても余裕の態度であった。
「そのどいつもの中にはカテレアも入っているのか……？」
カテレアの名を口に出した途端、より殺気の濃さが増す。その態度の変化でクルゼレイとカテレアが親しい仲、恐らく男女の関係であることをアザゼルは察した。
「先に言っておくが、カテレアとは戦ったが殺したのは俺じゃないぞ。文句があるならあのバトルジャンキーな上にナルシストな闘牛士もどきに言うんだな」
「そんなことは分かっている。しかし、彼女の魂を慰めるには貴様の首が必要だ。当然奴の首もな。それを彼女の墓前に捧げて初めて彼女は救われる」
「あーそうかい」
鬱陶しいまでに殺意を振り撒くクルゼレイに、うんざりしてきたのかおざなりな返事をすると、クルゼレイに向け挑発の指招きをする。
「だったら掛かって来な。相手をしてやる」
「――待ってくれるかな、アザゼル」
二人の間にサーゼクスが割って入る。
「どうした？」
「……少しクルゼレイと話がしたい」
その表情、声音でアザゼルはサーゼクスがクルゼレイを説得したいのだと分かった。

「お前って奴は……」
　呆れというよりも、そうまでして種としての数を減らす悪魔に歯止めをかけたいのかと憐みを覚える。同時にわざわざ自分から傷付く様な真似をするサーゼクスに不安も覚えた。
「お人好しめ。――向こう答えなんて決まっているぞ」
「それでも現魔王として直接聞かなければならない」
　サーゼクスがクルゼレイに向き直った途端、クルゼレイから放たれる黒い魔力が蛇の様に地面を這い、宙に蠢く。クルゼレイの敵意に満ち溢れた怒りの形相に合わせて、のびていく魔力がサーゼクスに害を与えようとするが、サーゼクスに触れるまでもなくその過程で見えない何かによって先端が悉く消失していった。
「サーゼクス……！　忌々しき偽りの存在！　私の前に現れるとはなっ！　貴様が！　貴様らさえいなければ、我々は……！」
　吐く言葉一つ一つに纏わりつく怒りと恨み。正統なる血統である自分たちが居るべき場所を追いやられ、今その座にいるサーゼクスと、残りの魔王たちに消えぬ恩讐を見せる。
「本物、偽物。その違いはいったい何なんだろうね。偽物が本物の模倣として、本物が本物たる理由は？　唯一無二であることかい？　長い時間かい？　それに相応しい実力

かい？　なら本物が偽物に破れ去ったとき、破れた本物は一体何を理由に自分たちが真であると主張するんだろうね？」

クルゼレイの怒りなど然程興味が無いのか、ベルはアザゼルに問い掛ける。

「――哲学なんざ興味ないな。まあ、言えるとしたら偽物はどうあっても偽物だが、なんかの拍子で偽物が本物を超えちまったら、それはもう偽物とは呼べんな。まあ、本物と言うのも何か違うかもしれんが」

「成程ね」

アザゼルの答えに対し、ベルは一言だけ言い肯定も否定もしなかった。

どう見ても埋めようの無い深い溝を見せられても、サーゼクスの気は落ち着いたままであった。

「クルゼレイ。ここは引いてくれないか？　既に君たちの配下には大きな被害が出ている。勿論、私たちも無視出来ない被害も受けている。袂を分けたとしても同じ悪魔であることは変わらない。徒に限りある同種の命を削るものではない」

「笑わせないでもらおうかっ！　同種？　同じ悪魔だと？　全く違うな！　貴様らは所詮悪魔としての在り方を捨てた者たちだ！　日和った落伍者共の集まりだ！　我々こそが悪魔の本懐を全うする真の悪魔っ！」

自分たちこそが悪魔として本物である声高らかに主張するクルゼレイ。

「――かつての悪魔ならばその生き方でも問題なかったのだろう。しかし、時間は流れる。既にその生き方では限界が見えているのだ。滅びに向かって行くだけが本当に悪魔として正しい道なのか？　今こそ別の道を探すときでは無いのか？　……かつての魔王の血筋を表舞台から遠ざけ、冥界の辺境へと追いやったときからその考えが頭を離れたことは無い。力による追放ではなく、和解の道があったのではないかと。三勢力が和平を結べた様に」

悔恨を滲ませるサーゼクス。アザゼルは甘い考えだと聞いて思ったが、その考えを嫌いにはなれない。アザゼル自身も長い戦いの日々を経験し、戦いへの嫌気があったからであろう。

しかし、その言葉はクルゼレイには一切届かず、寧ろ激情する。

「それこそがふざけた話だ！　堕天使どころか天使にとも通じた今の貴様らに悪魔を語る資格など無い！　貴様らが我々から魔王の座を奪ったときから既に殺し合うことが定められている！　話し合いなど無駄だ！」

「よく言うぜ」

クルゼレイの話を聞き、アザゼルは呆れた様子で口を挟む。

「堕天使、天使と通じているのが嫌な潔癖症な癖に、『禍の団』に属しているじゃねえか。あそこは三勢力の危険分子の集まりだぞ」

言っていることとやっていることの噛み合わなさを指摘するが、クルゼレイは小馬鹿にする様にアザゼルを笑う。
「属す？　笑わせるな、馬鹿め！　所詮は利用しているに過ぎない。天使も堕天使もな！和解に和平だと？　そんなものは不要だ！　いずれが悪魔以外は全て滅ぼし、我々悪魔が全ての世界の王となる！　やがては世界を滅ぼし再構築する！　新たな悪魔の世界の創造だ！」
自分の言っている内容に酔ってきたのか、声が段々と大きくなっていく。
熱量を増していく一方で、それを聞いていたアザゼルの表情はどんどんと冷めていく。クルゼレイの中身の絵空事、ろくでもない理想を聞かされ心底呆れ果てていた。
「世界の王ねえ……？　全てを滅ぼすとか大層なことを言っているが、オーフィスから力を貰っている時点で既に屈してんじゃねえか」
「黙れ、穢れた堕天使が！　オーフィスの力も悪魔の世界の為に利用しているに過ぎん！」
「よくまあ本人の前で言えるな。ただまあ――」
アザゼルはオーフィスを見る。オーフィスはクルゼレイの言葉に何の関心も示さず、神殿の方を眺めていた。隣に立つルイも同じく神殿を見ている。
「お前さんのご高説には全く興味が無いらしいな。はっ、眼中にも無いか。ところでよ」

アザゼルはクルゼレイに挑発的な笑みを向ける。
「オーフィスにはどうやって媚びたんだ？　冥界の僻地に長いこと居たんだ、額の擦り付け方と足の舐め方ぐらいは覚えたんだろう？」
「き、さま、は……！」
蔑む言葉にクルゼレイは歯が砕けそうな程に噛み締め、血が噴き出すのかと思える程目を血走らせる。
「オーフィスにしてみれば、願いさえ叶えば利己的でも遜った態度でも構わないさ。誓えば渡す、それだけのこと」
「超常的な奴ってのは、そういう所が無責任だな。厄介なものをばら撒く」
「否定はしないよ」
「さっきといい独りで何をブツブツ言っている！」
アザゼルの態度を自分に対する挑発と受け取ったクルゼレイは、アザゼルに向けて掌を突き出す。
手の中で蝋燭の炎の如く小さな魔力が生れたかと思えば、一瞬にして膨張しアザゼルを楽々と呑み込める大きさになる。
沸き立つ殺意に背を押され、その魔力の塊をアザゼルに放つ。
構えようとするアザゼルであったが、それよりも先にサーゼクスがその魔力の前に立

ち手を翳す。
　そこから発せられる渦の様に旋回する滅びの魔力。巨大な魔力を瞬時に削り取って消滅させていき、サーゼクスに届く頃には元の蝋燭の炎程度の大きさにまで削げられていた。
　サーゼクスは手を閉じ、クルゼレイの魔力を握り潰して消滅させる。
「――私との話はまだ終わっていない」
「終わっているさ！　最初からな！」
　あくまで戦いを避けようとするサーゼクスにクルゼレイは更に苛立ちを募らせる。
「気に喰わん！　気に喰わんぞ！　サーゼクス！　お前の持つ滅びの力こそまさに悪魔としての力！　その滅びの力を以てその堕天使を滅ぼすことこそ正しき力の使い方だ！　だというのにお前はその力で守った！　魔王としてあるまじきことだ！　そんな魔王など認められるか！」
「クルゼレイ、貴殿が思い描く魔王と私が思う魔王は違う。私は悪魔という種を守り、繁栄させ、未来へと繋ぎたいだけだ。今の冥界にも、未来の冥界にも戦争は必要ないのだ」
「違う！　魂を奪い、地獄へ誘い、全てを滅ぼすことこそ今と未来の冥界に必要だ！」
　サーゼクスと真逆の結論を出すクルゼレイ。
「サーゼクス」

アザゼルがサーゼクスに声を掛ける。サーゼクスは僅かに首を動かし、アザゼルを見る。
「もう無駄だ」
「――残念だ」
その一言には心の底から無念だという気持ちが込められていた。
最初から話し合いが成り立つとはサーゼクスも考えてはいない。しかし、それでも何もせずただ戦うということは出来なかった。万が一でも戦わずに済むという可能性に賭けて。だが、それも決裂で終わった。
同種で殺し合うなど空しいことでしかない。
サーゼクスは目を閉じる。その姿から慙愧の念が感じ取れる。閉じた目を開いたとき、サーゼクスの覚悟は決まっていた。
「――クルゼレイ。現魔王として、冥界の敵である貴殿をここで排除する」
「私はお前が魔王であることを認めんと言った筈だ！」
クルゼレイから魔力が迸り、一帯を覆い尽す。
「アザゼル。少し離れていてくれ。危険だ」
「あいよ」
どっちがだ？　とは聞かずにアザゼルは大人しくサーゼクスに従い、黒翼を羽ばたか

せて二人から距離をとる。
「勝負はすぐに着くだろうね」
　移動した先にいつの間にかベルが居た。
「お友達を置いてきて良かったのかよ？」
　アザゼルはもう驚かずに、オーフィスたちのことを聞く。アザゼルが言う様に、二人はすぐ側で起きていることに無関心であった。
「大丈夫さ。君もそう思っているんだろう？」
「さあな」
　アザゼルは惚ける様に返すが、すぐにその表情を引き締める。
（クルゼレイの奴、『独りで何をブツブツ言っている』なんて言ってたが、こいつらの存在が認識出来なかったのか？　なら何故俺たちには見える……？）
「それは君たちと話がしたかったからさ」
　アザゼルの心を容易く読み、声に出すよりも先に答える。
「……人の心を読むのはあまり良い趣味じゃないな」
「アザゼル。君の存在に前から興味があった」
　アザゼルの嫌味を無視してベルは話を進めていく。
「生憎、俺にはそっちの気は無いぞ」

「人は雷に、火に、嵐の脅威を前にして、それに恐れ、そしてそれの中に神を見出した。だが、時代が進むにつれてそれらの脅威は人々に解析され、踏み込めない神域からただの現象に成り下がり、そこに神を見出す人々はいなくなった」
茶化すアザゼルに、ベルは傲慢さすら感じるほど一方的に会話を進めていく。
「だが、それでも唯一踏み込めない領域がこの世界にはある。――それが神器さ。だがそれもいずれは過去のことになるだろうね」
ベルは手提げている山羊のレリーフが付いた黒革のバッグを開け、中から何かを取り出し、それをアザゼルに見せる。
黄金の輝きを放つ宝玉。見間違う筈が無い。それはアザゼルが持っている筈のファーブニルの魂が封じ込められた宝玉であった。
アザゼルは懐に手を伸ばす。そこにあるはずの宝玉が無い。
「――手癖が悪いな。ついでにバッグの趣味も悪い」
虚勢の様に軽口を飛ばすアザゼル。
「君には尊敬の念すら覚えるよ。神のみが許された領域に踏み込んだのだから」
ベルは初めて無表情を崩し、微笑を浮かべながらアザゼルに宝玉を投げ渡す。
「そりゃどうも」
アザゼルは口の端を歪めただけの笑みらしき表情を見せながら渡された宝玉を受け

取る。
「これはサーゼクスにも後で言おうと思っていることだけど――」
ベルがアザゼルに近寄る。アザゼルの方が上背があるため、ベルは下から見上げる形となったが、その両眼からアザゼルは目を逸らすことが出来なかった。
「僕たちに協力してくれないかい？　協力してくれるのなら、君に教えてもいい。君の知らない全てのことを」

◇

体の一部が無くなるということ。それも片足が無くなると体から数キロの重りが外された様な気になる。しかし、同時にその重りは体のバランスを保つ為のものであることを、上手く立てない体でシンは実感する。
今まで無意識に行っていた立つという動作。生まれて初めてそれを難しいと思う。
「大人しくしていろ」
老人の声が聞こえる。一瞬その声が誰の声か思い出せなかった。少し間を置いた後に、オーディンの声だと思い出す。
痛みや喪失のショックで記憶が飛んだのではない。今も見えない手で絞られている

かの様に傷口から流れ出る血のせいで、思考が鈍くなってきた。
「あー……大丈夫です」
「そんなわけあるか」
意識があることをオーディンに告げるが、オーディンは呆れた表情をしながら少し強い語気で言う。
オーディンの目から見れば、今のシンの顔色は、大量出血のせいで死人に等しいものであった。
今すぐに治療を施さなければならないが、その為の魔術が使用出来ない。魔力を使おうとすると外部から見えない圧力の様なものが働き、魔力を体の内に押し込められてしまう。
原因は明らかにあの獣にある。赤い獣の何かがシンたちに干渉し、魔力を使用不能にしている。
戦いの手段の一つであり、赤い獣に唯一効果的なダメージを与えられる方法が封じられ、窮地に追いやられる。
この状況で獣は当然手を緩めることは無く、標的を、それも片足を失い碌に動けないシンを狙い、地を駆け出す。
龍の如き四足の巨体が、豹の様にしなやか且つ俊足を以ってシンたちに迫る。

オーディンはシンを見捨てることはせず、守る盾或いは迎え撃つ矛となる為にグングニルを構えてシンの前に移動する。

出会い、共闘するまでの時間を合わせても、たかが十数分程度の間柄。しかし、オーディンはその身を呈してシンを守ろうとしている。

傍から見ればそんなことをする必要など感じられない。ましてや、オーディンはシンがいずれは敵対するかもしれない魔人であることも見抜いている。ならば何故守ろうとするのか。

答えは、単にオーディンの誇り故である。

シンが怪我を負う原因となったのは、オーディンの魔術の不発である。魔術を扱う者として神の中でも並ぶ者は居ないという自負がオーディンにはあった。だが、外的要因があったとしても魔術に失敗した。それは誇りを傷付け、強い怒りを伴わせる。

だからこそ、失敗したけじめとして身を以ってオーディンはシンを守る。そして、目の前の獣に、何一つ思惑通りになどさせない。

神としての誇りを持ち、獣と相対する。

そして、もう一人、己の誇りの為に戦う者が居る。

駆ける獣を横殴りの様に側面から突撃した巨影――タンニーン。

タンニーンは、獣を地面に押さえつけたまま巨翼を羽ばたかせ、低空飛行を維持しな

がら獣で地面を削り取っていく。
「炎一つ奪った程度でドラゴンを無力にさせたつもりか！　まだ俺の爪も牙も折れてはいないぞっ！」
力で獣をねじ伏せようとするタンニーン。七つの頭が地面に押し付けられながら、顔面で大地を強制的に掘削させられていく。
しかし、その内の頭の一つが、無理矢理首を曲げて顔をタンニーンの方へ向けると、口から雷光を放ち、タンニーンの脇腹を貫く。
鱗は溶け、肉が焼ける。それだけにとどまらず雷がタンニーンの体内を通過する一瞬の間に、高電圧、高電流の電気が猛毒の様にタンニーンの内部を駆け巡る。
獣の雷をその身に受けるのはこれで二度目。通常ならば意識が飛ぶか、苦悶のまま沈んでもおかしくはない。しかし、タンニーンはそれに声一つ洩らさず力も緩めない。
タンニーンはシンに対し、負い目に等しい借りがある。
怒りのまま襲い掛かり、一方的な理由で殺し合った。それはタンニーンの私怨によるただの八つ当たりであり、シンに非は無い。罰せられるべきは自分だが、相手はそれを望まず、殺されかけたというのに平手打ち一発で全てを終わらせた。
タンニーンは全てを流せる程単純では無いし、器用でも無い。シンがよくても、まだタンニーン自身は自分のしたことを許していない。だからこそ、タンニーンはここでシ

ンの命を終わらせる訳にはいかなかった。
「タンニーン！」
オーディンの声。老体とは思えないほど良く通る。
「少しの間、時間を稼げ！　この魔力封じ、わしが何とかする！」
「――任せた！」
どういう方法で破るのかなどタンニーンは聞かず、全てをオーディンに任せ、自分は目の前の獣の足止めに専念する。失敗するなどとは考えない。あのオーディンが何とかすると言ったのだ、これ以上説得力のあることなど無い。
「そういう訳だ！　暫く俺に付き合って貰うぞ！」
タンニーンの巨大な拳が、獣に打ち付けられる。
オーディンはタンニーンに何とかすると言ったが、現状でオーディンがこの魔力封じを破る術は無い。無いならどうするか、答えは一つしかない。
「さて、創るとするか」
この場で、この異常を分析し、それに対応させた新たな魔術を創り上げる。オーディンにしか出来ない文字通りの神業である。
オーディン、タンニーンがそれぞれの役目を果たそうとする中で、シンは冷たく、重たくなっていく体を支え、途切れそうになる意識を辛うじて繋いでいた。

体を起こそうとするが、すぐに力が抜け、前のめりになる体を両手で支え、倒れるのを防ぐ。

傷口を破いた袖で縛り、簡単な止血をしたが、獣の与える傷に何らかの効果があるのか血が止まらない。

足元から広がっていく血溜まり。シンの顔を映す程の量であった。

血溜まりに映る自分の鏡像。不意に、その鏡像が唇を歪めて笑う。シンが笑っているからではない、鏡像だけが笑っている。

前にも似た様なことがあったのを思い出す。

血溜まりの中のシンは声を出さず、口だけを動かし何かを話し掛けてきた。何故かシンは何を言っているのかすんなりと理解出来る。

『足りないなら、注げばいい』

何を、どこにと思うシン。すると血溜まりのシンが指差す。指した方向にあるのは、地に付けられたシンの手。

シンはその手を上げる。掌には、あの獣の赤黒い血がべったりと付いたままであった。砂利塗れの獣の血。

この血を舐め取ればいいのかと考えたとき、シンの見ている前でその血が掌の中へと吸い込まれていく。あたかも砂に注がれた水の様に。

血溜まりのシンが指招きをする。流れた血に触れさす為に誘っている。
どんどんと人外化していく己の肉体。しかし、それを苦悩する暇など無い。躊躇すれば命を失う。シンに選択の余地など無かった。
血溜まりに映る己の顔に触れる。血は幾筋に赤い霧の様になってシンの体へと吸収されていく。
流れた血を取り込みながらシンはふと思う。
次に自分が血を流したとき、また同じ赤い血なのだろうか。

◇

木場は少し離れた場所で拘束されたディオドラの眷属たちを見ていた。不審な動きを何一つ見逃さない確固たる意志の光を宿した目で。
一方でイリナはというと、ずっとディオドラの眷属たちに話し掛け続けている。その反応は悪く、全員イリナを居ない者の様に無視し続けている。しかし、イリナはめげる事なくずっと喋り掛けていた。
正直、無反応な相手に一秒たりとも沈黙を続けずに話をし続けるイリナの忍耐力は大したものであった。

眷属たちも徐々に根負けし始め出し、視線が忙しなく動いたり、何か言いたげに口を開けたり閉じたりしている。
会話が始まるのは時間の問題に思えた。
「――っ！」
それに最初に気付いたのは木場であった。次にイリナ、その次にディオドラの眷属たちも気付く。
何かがこちらに向かってやってくる。しかし、その何かが分からない。悪魔の様な気配だが、何かが違う。神器の気配の様でやはり何かが違う。
純粋に気持ちが悪い。そういう気配であった。
「――紫藤さん」
「分かってる。――何この感じ……」
木場は聖魔剣を創造し、イリナも擬態の聖剣を構える。
近付いて来る気配。それに加えて、這いずる様な音も聞こえてきた。
――やがてそれは現れる。
「ひっ！」
ディオドラの眷属の一人が悲鳴を上げた。声を上げたくなる気持ちは木場もイリナも嫌と言う程理解出来る。

一言で言えば、それは肉塊であった。体の内側を外側に向いた様な色をした肉塊。
それだけでも嫌悪するが、そこから飛び出る何本もの手足と黒い羽。それが悪魔のものであるとすぐに分かる。極めつけは、肉塊と半ば融合している悪魔の顔。虚ろな目でどこかを見ており、生きているのか死んでいるのかは分からない。
「何なの、これ……？」
「……何かはあまり想像したくないね」
木場たちの目の前で、肉塊が体を震わす。すると何本もの突起が表面に出来る。中には先端に手や足を付けたものもあり、悪趣味極まりない光景となっている。
「一つ分かるとしたら――」
突起は触手となり、木場たち目掛けて一斉に伸ばされる。
「捕まったら、ああなる！」
迫る触手の群に、木場は聖魔剣を強く握り直した。

傀儡、冷怒

まるで踊っているようだ。マザーハーロットとグレイフィアの戦いを見る者が居れば、その様な感想を零すだろう。

互いの顔を近付け、誰かが背を押せば唇が触れ合うだろう至近距離。かと思えば離れて距離をとったかと思えば、瞬きほどの間の間に互いの位置が入れ替わっている、と目まぐるしく動く。

重力も体重も疲労も感じさせない軽やかな動きで二人は殺し合っていた。

正しく言えば『し合って』いる訳では無い。グレイフィアが一方的に攻撃し、マザーハーロットが舞を思わせる動きで全て避けているのだ。

マザーハーロットが下がれば、それを追ってグレイフィアも前に出る。魔力が宿されたグレイフィアの手が、マザーハーロットの顔を消し去る為に振るう。マザーハーロットは体を弓なりにし、上級悪魔さえ直撃すれば消滅しかねない魔力の籠ったその手を鑑賞する様に眼前を通過させる。

芸術品の様に完成されたマザーハーロットの肉体は動き一つとっても艶めかしく、戦いの最中であっても相手の理性を引き剥がそうという猛毒に等しい誘惑を放つ。

弓なりの体勢になったことで強調される彼女の美の極致の様な体の線に、見惚れない存在はどれだけいるのだろうか。

攻撃を躱されたグレイフィアはすぐさま二撃目を放つ。今度は直接当てるのではなく、威力は落ちるが何十もの魔力の弾へと変えた。

移動が限られた通路で、逃げ場を埋め尽くす魔力の弾が一斉にマザーハーロットへ襲い掛かる。

マザーハーロットは佇む。その立ち姿はこの世のどの絵画よりも目を惹く程ものであった。

飛んで来る魔力の弾に向かって、ふっ、と短く息を吹きかけた。途端、先頭の魔力の弾が突然軌道を変え、真横に曲がる。すると、別の魔力の弾に当たり、最初と二つ目の魔力の弾が軌道を変える。軌道を変えた先でまたも衝突が起こる。

ビリヤードの様に連鎖する魔力弾同士の接触。軌道を変えられた魔力弾は、床、天井、壁を貫通しどこかに消えていくもの、残りは狙いを外されマザーハーロットの脇や横を通過していく。

マザーハーロットに傷一つ無い。たった一息でグレイフィアの魔力をどうにかしてみせた。

グレイフィアの攻撃を無効化してみせたマザーハーロットは、白骨の顔でグレイフィ

アに――恐らく――微笑みかける。

どこまでも余裕を含み、どこまでも底を見せないその態度で相手の心を折ろうとする。

しかし、この場に於いてマザーハーロットの思惑通り折れる者は誰一人として存在しない。

『女王』と『大淫婦』のダンスに二頭の『番犬』が加わる。

『番犬』の一頭――セタンタは、グレイフィアの弾幕が全て逸らされたときにはマザーハーロットの眼前に躍り出ていた。グレイフィアの魔力弾を隠蓑にし、僅かの間だけでもマザーハーロットの注意を逸らす。セタンタとグレイフィアの言葉を交わす事無く行った即席の連携である。

セタンタは、マザーハーロットの喉元に突きを繰り出す。しかし、槍の穂先はマザーハーロットの喉に触れる寸前に止まる。セタンタが寸止めしたからでは無い、マザーハーロットが一瞬にして槍の間合い外まで移動したのだ。それも挑発するかの様に届くか届かないかのギリギリの位置に。

目の前で舐めた真似をされるセタンタだが、至って冷静であった。何故ならばまだ彼の――彼らの攻撃は終わっていない。

セタンタの攻撃が躱されたと同時に、通路の壁を走っていた二頭目の『番犬』ケルベ

ロスは、四肢で壁が割れる程蹴り付けマザーハーロットに飛び掛かる。その際に両前脚が振り上げられ、先端の太く、鋭い爪に魔力が収束される。

空中で振り下ろされるケルベロスの前脚。爪から放たれる魔力の斬撃は、一瞬にして床や壁に賽の目上の傷跡を深く残す。

だが、やはりマザーハーロットは無傷であった。傷跡の縁に優雅に立ち、跡の深さを確かめる様にその白い足先で縁を撫でる。

動きの一々が、相手を淫らに誘う挑発と怒りを誘う挑発だと感じさせられる。

セタンタは、コメカミに青筋を密かに浮き上がらせながらもマザーハーロットの動きを観察していた。ハッキリと言えば、マザーハーロットの動きは戦う者の動きでは無い。動きのどれもが大仰なものに思え、無駄を感じさせる。

だが、当たらない。こちらが本気で攻めているのにどの攻撃も当たらない。この事実は、マザーハーロットの動き以上にセタンタを苛立たせる。

次はどう攻めるべきかと、セタンタが戦いの動き方を高速で思考させたとき、不意にマザーハーロットが後退する。

誰も何もしていない――とセタンタたちが不審に思った次の時には、拳を突き上げた格好のディハウザーがマザーハーロットの前に立っていた。

セタンタたちは気付く。今の今まで彼らはディハウザーの存在を完全に忘れ去って

いた。影が薄いから、存在感が無いからなどと言う簡単なものでは無い。人手、それも強力な者を欲している状況で、『皇帝』であるディハウザーの存在を無視することなど在り得ない。

マザーハーロットに避けられたディハウザーは、深追いはせずに素早く下がり、セタンタたちと合流する。

「申し訳ありません。折角の好機を逃してしまいました」

謝罪するディハウザー。セタンタは気にする必要は無いことを動きで伝える。

ディハウザーは何かしらの能力を使ったと思われるが、セタンタが知るベリアルが持つ特性とは異なる。もしかしたら今の現象事態が特性の応用なのかもしれない。それについて詳しく聞きたい所だが、その余裕は今は無く後回しにして先程あったことを一先ず忘れる。

「……にしても厄介ですね」

グレイフィアの愚痴めいた言葉に、他の者たちも無言で同意する。何度も仕掛けているが、未だにマザーハーロットは無傷。それどころか触れることすら出来ずにいた。

加えて――

「グルル……気持チガワルイ」

ケルベロスは喉を鳴らしながら苛立ちを含んだ言葉を洩らした。ケルベロスは場に

漂う甘い香りに顔を顰める。嗅ぐだけで脳が蕩け、恍惚とし、嫌な気持ちが全て消えてしまいそうになる極上の香り。それがマザーハーロットから絶えず放たれている。

時間を追うごとにその香りは濃さを強めていく。そして、その影響でセタンタたちにはある異変が起きていた。

戦意の低下である。戦いの最中であるというのに、戦う気力が徐々に落ちてくる。マザーハーロットに対し、本来ならば怒りや敵意を向けることが当たり前だというのに、その感情が薄まっていくのを感じていた。

セタンタやグレイフィアにしてみれば屈辱もいいところである。怨敵に対し、無限に湧く筈の怒りをわざわざ心を奮い立たせなければ枯れてしまいそうになる。

ディハウザー、ケルベロスも意思を強く維持しなければ途端に思考に霞がかかる。ケルベロスが気持ち悪いと言ったのは、外から自分の意思に影響を与えることへの不快感からであった。

マザーハーロットを前にしてまだ正気を保つことが出来ること自体、彼らの精神力が並外れていること。そして、その心にマザーハーロットの誘惑を撥ねる確固たる思いがあることを意味している。

ならば、もしそれが無い者がここに訪れたなら。その答えは複数の足音と共にやってきた。

「ムッ……」
　通路の曲がり角から現れる数人の悪魔の姿を見て、ケルベロスは唸る様な声を出す。通常時ならニオイですぐにその存在に気付いたが、漂う濃厚なマザーハーロットの香りのせいで鼻が上手く動かず気付くのが遅れた。
「お前たちは……！」
　セタンタ、グレイフィア、ディハウザーを見て目を丸くし、途端に殺気立つ。その反応で旧魔王派の悪魔だとすぐに分かった。
「ここに来るんじゃない！」
　ディハウザーは思わず声を出していた。敵対する関係だが、同じ悪魔としてつい情けからか助ける為に動いてしまう。
　しかし、そんな思いのディハウザーの声は、固執した考えを持つ彼らの耳には届かない。ディハウザーの警告も命乞いか何かと勘違いをする始末である。
　旧魔王派たちの悪魔がセタンタたちに襲い掛かろうとしたとき、その間に割って入るマザーハーロット。
「誰だ！　貴様は！」
　道を阻むマザーハーロットの背に、悪魔の一人が怒声を浴びせる。魔人を前にして強気でいる悪魔たち。彼らが恐怖に対して鈍い訳では無い。マザーハーロットという巨

大過ぎる存在は、彼らの感覚の許容量を遥かにしのぐものであり結果として魔人の恐怖を認識出来なかったのだ。

マザーハーロットはゆっくり悪魔たちの方へ振り返る。マザーハーロットの顔を視界に収めた途端、目の前で赤や桃色の閃光が放たれたと感じた。

それはマザーハーロットの魅了する力を幻視したに過ぎない。しかし、それを深く考えることはもう彼らには出来ない。光を見たときから彼らの人格は完全に破壊された、自分たちが仕える魔王たちを元の玉座に戻し、真の悪魔として誤った道を進もうとしている悪魔たちを正すという使命感は全て塗り潰され、跡形も無く彼らの心から消える。

今あるのはマザーハーロットに対し我が身が滅びるまで奉仕しようとする隷属の精神のみ。彼女の為に死に、その死を以て彼女を喜ばせることが今の彼らの使命。

もう、それしか彼らには無い。もう、そのようにしか生きられない。彼らの悪魔としての長い月日は僅か数秒で終わりを迎え、傀儡としての一生が始まる。

理性を失った濁った眼で悪魔たちはマザーハーロットを見ると、一斉に膝を着いて忠誠の構えをとる。

「ホォーホッホッ！　良き眺めぞよ」

物言わぬ傀儡たちが頭を垂れる姿に、マザーハーロットは嘲りとも高揚ともとれる声を掛ける。

「悪趣味な……」
　グレイフィアが吐き捨てる。他の者たちも同意見であった。傍から見ていて嫌悪感を覚える光景である。
「楽しいか？　そんな真似が……？」
　セタンタが刺し貫く程の殺気を込めてマザーハーロットを睨むが、マザーハーロットはその殺気すらも玩具の様に扱い、嗤う。
「楽しいか？　楽しいぞよ。妾の為に堕ちて生きる姿は。そして、それが死に行く姿はもっと甘美な筈」
　その言葉を合図に、膝を着いていた悪魔たちが全員立ち上がる。正気を失った眼に、濁った殺意を宿している。
　敵であり、内に宿すかつての悪魔の生き方を戻すという信念も肯定することは出来ない。しかしながら、たった十数秒の間でその信念を捨てさせられ、踏み躙られ、傀儡として人格を塗り潰された彼らに憐みの感情を覚える。
「……どうすることも出来ないのですか？」
　ディハウザーが小さく洩らす。誰もそれに言葉を返すことは出来なかった。あそこまで正気を失わされた者を救う術は無い。ディハウザーは皆の沈黙が答えだと知り、それ以上喋ることは無かった。

マザーハーロットが、指揮者の様に指を振るう。その動きに従い、悪魔たちは皆奇声を発しながら、セタンタたちに襲い掛かる為全速力で走る。

心を失った彼らを解放する手段は最早一つしか残されていない。

悪魔の一人が、セタンタに向け、奇声と共に拳を――

「ひゅっ」

息を吹き掛ける様な声を、セタンタに仕掛けた悪魔が出す。その音は彼の口から発せられたものでは無い。うなじの皮一枚残して斬り裂かれた彼の喉から出てきた音であった。

真横に振るわれたセタンタの槍。あまりに速く振り抜かれた為、穂先には血一つ付いていない。一瞬にして悪魔を一人倒したセタンタだが、その表情はマフラーで顔半分隠していても分かるぐらいに苦々しいものであった。

戦う前から分かっていたが、この悪魔たちは下級、中級程度の実力しかない。セタンタたちには到底敵わない実力だが、それが魔力も使用せずに原始的な拳だけで挑んできているなら尚更勝てる要素は薄くなる。はっきり言えば駒としては、実力不足もいいところ。だが、ある意味では負けることよりも苦い気持ちにさせられる。

首を斬られて絶命する悪魔。その顔は満面と呼べる笑みを浮かべていた。マザーハーロットの為に死ねることが至上の幸福であると体現する。

ディハウザーは戦いの中である試みを行おうとし、接近してきた悪魔の何の技術も無い打ち下ろしの拳を半身になって避けると、その頭を鷲掴みにする。

ベリアル家の血には、『無価値』という魔力が宿る。相手の特性を一時的に消し去るという能力であり、セタンタたちやマザーハーロットに気付かれずに攻撃を仕掛けられたのは、この特性をディハウザーがある応用をしたからである。

この『無価値』の力を使えば、マザーハーロットの魅了から彼らを解放出来るかもしれないと思い、この場で試す。

力を掴んで悪魔の精神に流し込む。その結果――

「……」

その悪魔は全ての生気を失い、自らを支え力も無くなり、空っぽの目のまま弛緩した口から涎が垂らす。

悪魔は廃人同然と化した。彼の精神は、マザーハーロットの魅了と完全に融けあった状態にあり、マザーハーロットの魅了を消すということは彼の精神を消し去ることに等しくなっていた。

ディハウザーは既に取り返しのつかない状態になっていることを嫌でも思い知らされる。『無価値』の力を消せば、マザーハーロットの魅了の力が再び発揮されて彼の精神は戻って来るだろうが、その時はディハウザーに襲い掛かってくるだろう。

一縷の望みは消えた。ならばせめて傀儡ではない今のままの状態で屠ることが情けだと考え、ディハウザーは指先を揃え手刀の形にすると、その心臓を貫く為に放とうとする。

が、先に走る銀の光が悪魔の心臓を穿つ。銀の光は、セタンタの槍であった。

「セタンタ殿……」

「――こういうことは、私の役目なので」

白い鎧と、トレードマークと言っていいマフラーに点々と血の染みが付いている。

他の悪魔たちは、物言わずに横たわっている。傷から見てどれもセタンタの槍によって既に絶命していた。

自分から進んで汚れ役をするセタンタに、ディハウザーは複雑な表情を浮かべる。同胞を殺したことに礼を言うこともセタンタを傷付ける様な気がした。

グレイフィアもまたセタンタの行為に複雑な表情を浮かべていたが、若干の怒りも見える。そんなことをセタンタに望んでいないと暗に伝えている様であった。

唯一、ケルベロスだけがセタンタの行動に対し関心を示さないでいる。それよりも、どれもこれもが笑みを浮かべて死んでいる悪魔の死体を興味半分、気持ち悪さ半分という感情で見ている。

セタンタは、幽鬼の様な力の無い動きでマザーハーロットを見る。しかし、その眼光

は今までに無い程に強く、昏い光が込められており、闇夜であったならば浮かび上がりそうであった。

「……これで満足か？」

マフラーの内から聞こえるセタンタの声。ディハウザーが初めその声を聞いたとき、獣の唸り声かと勘違いしそうになる。低く、感情を極限まで抑え込まれたそれは辛うじて人語として聞き取れる具合であった。

マザーハーロットは口を手で覆っており、セタンタの問いに合わせてその手を僅かにずらし、剥き出しの歯を見せる。肉も皮膚も無い白骨の顔だというのに、セタンタたちにはマザーハーロットが口の端を吊り上げて笑っている姿を幻視した。

「――お前は存在するべきじゃない」

セタンタは、マフラーに指を掛けてずらす。露わになる口元。犬歯を剥き出しにし、唇を僅かに震わせていた。

奇しくも同じく口の端を吊り上げた表情を互いに見せるが、片方は悦び。もう片方は怒りと内包する感情が真逆である。

指を掛けていたマフラーを掴み、引き剥がそうとする。その行為が何を意味するのかディハウザーとケルベロスは分からない。しかし、グレイフィアはその後に何が起こるのか分かっているのか、セタンタを明らかに止めようとする。

グレイフィアの伸ばした手が、セタンタの腕を掴もうとするが、間に合わず一気に引き剥がされ――る前に突然セタンタの手が止まった。

不自然な停止に皆が訝しむ中で、セタンタは視線をある一点へと向けていた。

噬うマザーハーロットの手につままれている杯。何時、何処から、どうやって取り出しのか、マザーハーロットを凝視していたセタンタにすら見抜けなかった。

白色の本体（ボウル）。本体の側面には青色の宝石が複数埋め込まれている。本体を支える脚（ステム）、台（プレート）は黄金によって作られていた。

美麗なマザーハーロットが持つに相応しい燦爛たる黄金の杯。

その黄金の輝きが目に映ったとき、カツンという小さな音がセタンタの足元で聞こえた。

何かと思い足元を見て愕然とする。セタンタの足は、一歩後退をしていた。自分でも気付かない無意識の後退。退る足が小石を蹴らなければ認識出来なかったかもしれない。

もう一人自覚出来たことがあった。先程まで烈火の如く渦巻いていた怒りが嘘の様に消え去り、熱が消えた思考でここから退避する方法を考え始めていた。

セタンタの培ってきた経験が、感情を排してでも戦いを避けようとさせている。

（何だ、あれは……？）

黄金の杯を見るだけで体の芯を震わす怖気が走る。見ることも、意識することも、その杯の前で息をすることすら体が拒絶する。

黄金の杯の影響はセタンタだけでなく他の者たちにも影響を与えていた。

「うっ……」

常に冷静沈着なグレイフィアが口を手で覆っていた。込み上げてくる吐き気を耐えている。

「グルルル……！」

ケルベロスは威嚇する様に唸る。しかし、本能には逆らえないのか背中や肩甲骨周辺の毛が逆立ち、尾が丸まっており、恐怖を覚えている。

ディハウザーは声を出すことは無かったが、その顔色は土気色に変わっている。精神が疲労しているのが見て分かってしまう。

マザーハーロットは、セタンタたちの反応を愉しみながら、黄金の杯をゆっくりを傾ける。

杯の中からナニカが零れ出た瞬間、地獄が広がった。

◇

「アーシアァァァァァ！」
最奥の神殿内に足を踏み入れると一誠は叫んでいた。
「アーシア！　大丈夫かっ！」
同じくゼノヴィアもアーシアの名を大声で呼ぶ。
「ちょっと落ち着きなさい。二人とも」
いきなり近くで大声を出され、目を白黒させながらリアスは二人を窘める。リアスも一誠たちの気持ちは良く分かるが、相手の陣地内で無謀なことは出来ないので冷静を努める。一誠とゼノヴィアが代わりに叫んでくれたことで、少し落ち着けたという理由もあるが。
「す、すみません。アーシアのことが心配で……」
「……すまない。自分でも驚くぐらい冷静でいられないみたいだ」
リアスに言われていくらなんでも勇み足過ぎたと思い、二人は少し冷静になる。しかし、胸の内では焦燥は消えることは無い。寧ろ神殿内に入ってから更に強くなったと言える。
「小猫、アーシアの場所は分かる？」
「……確認します」
小猫は猫の耳をピクピクと動かす。

「……あ」
　すると虚を衝かれた様な声を出す。
「どうしたの？」
「……すぐ近くにいます。しかも一人です」
『えっ！』
　今度は全員が虚を衝かれる思いであった。何かしらの苦難があるかと思っていたが、想像を下回る程簡単にアーシアを救い出せる状況。喜びよりも先に困惑の方が来る。
「アーシアァァァァ！」
「いるなら返事をしてくれ！　アーシア！」
　すぐに切り替えたのは一誠とゼノヴィアであった。神殿に入ったときの様にアーシアを呼ぶ。
「アーシア！　助けに来たわ！」
「アーシアさん、何処にいるんですか？」
　リアス、朱乃も事情が変わったので、アーシアを呼ぶ。
「ア、▪アーシア先輩ィィィ！」
「……アーシア先輩。私たちはここです」
　ギャスパーは精一杯声を出し、小猫も普段よりも声を張る。

神殿内を進みながらアーシアの名を連呼するリアスたち。神殿内に反響する声。すると、その反響を返す様に別の反響音が聞こえる。それは、足音であった。
「――さん！」
足音だけでは無い。正確に聞き取れなかったが、声も聞こえた。その声は間違いなくアーシアのもの。
「アーシアっ！」
一誠が名を呼ぶ。
「イッセーさん！」
応える様に名を呼ぶアーシア。
やがて、神殿奥からアーシアの姿が見えた。
無事な姿のアーシアを見て、全員駆け出す。アーシアもまた走る。
両者の距離は、大して離れていなかったが、今はそんな距離すらもどかしく感じるぐらい、すぐにでも触れ合いたかった。
あと少し。もう少し。そして――
「イッセーさん！」
アーシアが走ることすらもどかしくなったのか、一誠へ向かって飛びこんでくる。それを優しく受け止める一誠。この時ばかりは纏っている鎧を解除したくなる。アーシ

アの温もりと感触を直に感じ取りたかった。
「良かった！　無事で！　本当に良かった！」
「はい！　私は大丈夫です！」
アーシアは安堵から涙を流す。一誠も兜の下で涙目になっていた。
「アーシア！」
ゼノヴィアが、一誠とアーシアを纏めて抱き締める。
「怪我は無いか？　ディオドラに変なことはされなかったか？」
「ゼノヴィアさん！　安心して下さい。私は私のままです」
喜びで更に二人を強く抱き締めるゼノヴィア。
傍から見ていたリアスは少しだけ拗ねた表情となる。
「もう。あれじゃあ、私が入れないじゃない」
リアスもまたアーシアを抱き締めて無事を喜びたかったが、一誠とゼノヴィアが先にしてしまったせいで入る余地が無くなってしまっていた。
「でも、アーシアちゃんが無事で本当に良かったわね、リアス」
「ええ、本当に」
朱乃は、リアスの肩の強張りが緩まったのが分かった。アーシアが攫われてからずっと強い緊張状態であったことを知っていた。全てが解決した訳では無いが、少しだけリ

アスの重荷が軽くなった。
「う、うあああああん！　よ、良かったぁぁ！　アーシア、先輩が戻って来てー！」
「……ギャー君、泣かない」
　アーシア以上に号泣するギャスパーを、小猫が撫でて宥める。
「――そうか。ギリメカラがちゃんとアーシアを守ったんだな」
　アーシアが逃げ出した経緯を聞き、一誠は自分のしたことが間違っていなかったと安心した。それと同時に約束を守ってくれたギリメカラに感謝する。
「それでギリメカラは？」
「私の影の中に入っちゃいました」
　一誠は、アーシアの影に近付き叫ぶ。
「ギリメカラ！」
「あ、あの！」
　アーシアが何か言おうとするが、一誠の大声に掻き消されてしまう。
「ありがとな！　アーシアを助けてくれて、本当にありがとなっ！」
　すると、アーシアの影の中からギリメカラの鼻が伸びる。
　一誠はハイタッチをするつもりで手を掲げ――思いっ切り頬を鼻で殴打された。
「へぶあっ！」

五メートルほど地面と平行に飛んだ後、頭から柱に突っ込む。鎧が無ければかなりのダメージだったかもしれない。
「な、何故……！」
ギリメカラは『喧しい』と一声鳴いて鼻を影の中に戻す。
「ギリメカラさん、私の影の中で寝ていたみたいで……」
「そ、それを早く言って欲しかったな……」
ヨロヨロと立ち上がる一誠。
「全く、どいつもこいつもまるで役に立たないなぁ」
再会を喜ぶ空気を全て吹き飛ばす苛立ち混じりの声。
「ディオドラ……！」
「気安く呼ばないでくれるかな？」
神殿奥からディオドラが姿を現す。彼の姿を見た途端、アーシアは一誠の背後に隠れ、その肩を震わせた。
「ディオドラ……よくも私の可愛いアーシアを攫ってくれたわね！　そして、レーティングゲームを穢す様な真似を！　その代償は払って貰うわ！」
「あははは。そう睨まないでくれよ、リアスさん」
怒気を込めた目で見るリアスを、ディオドラは不遜な態度で笑う。

「少しばかり悪魔としての自分に正直になっただけじゃないか。アーシアが欲しい、という自分の気持ちに素直になっただけさ」
「貴方が同じ悪魔であることを、私は恥じるわ」
「はっ！　サーゼクス様たちが掲げる今の悪魔というのは、僕には息苦しいだけさ。まるで躾られた飼い犬だ。飼うのは趣味だが、飼われるのは趣味じゃない」
　敬称を付けてサーゼクスの名を出すが、その声には明らかな侮蔑が込められている。
「奪い、破壊し、蹂躙するのが悪魔の本質の筈さ」
「……その下らねえ本質であの人たちを苦しめたのか？　お前は？」
　一誠の声。余程、感情を押し殺しているのか声量は小さい。だが、神殿内に反響し、皆の耳に届く。その声は前震を彷彿とさせ、次に来る感情の爆発を予見させる。
　一誠の後ろで震えていたアーシアは、自分の震えが大きくなったことに気付く。それは、触れていた一誠の震えが伝わってきたせいであった。顔の見えない鎧越しでも分かる。一誠が怒りで震えていることに。
「あの人たち……？　ああ、もしかして気付いたのかい？」
　一人理解するディオドラ。
「君には女性限定で心を読む能力があるらしいね。成程、それで分かったのか」
　ディオドラの顔が悪意で歪む。

「なら鈍そうな君でももう分かっているんじゃないかな？　アーシアが教会を追放された事の顛末を」
「……お前、アーシアにそれを言ったのか？」
「当然！」
真実の暴露。それは逃げ出したアーシアに対するディオドラからの一方的な罰。傷つけた心の傷をもう一度抉り、心の傷から溢れ出る血を啜る様な外道の行為。
「君に！　君たちに！　見せて上げたかったなぁ！　あのときのアーシアの顔を！　映像に残せられなかったことが非常に悔やまれるよ！」
事情を知らないリアスたちは、一人高揚するディオドラに嫌悪感を覚える。動き、言葉から溢れ出る悪意。
「アーシアは――」
「黙れ、クソ野郎」
興奮するディオドラに冷水の様な冷めきった一誠の声が間近で浴びせられる。
ほんの僅か一誠から目を離しただけだと言うのに、一誠は既にディオドラの側に移動しており、尚且つ拳を放つ為の溜めの動作に入っていた。
「くっ！」
ディオドラからオーフィスの『蛇』によって得た力が、どす黒いオーラと化して出る。

その力をすぐさま防御に転じ、一誠と自分との間に何十に重なった障壁を生み出す。
『薄い壁だな』
目の前の壁をドライグは詰まらなそうに評する。
「全くだ」
溜めた力を解放し、一誠は一直線に拳を撃ち出す。拳が障壁に触れたかと思えば、紙を突き破るかの様に一発で数十の重なった壁を突き破る。
「なっ！」
あまりに呆気無く障壁を貫いていく様子に驚くディオドラであったが、一誠の拳が障壁を突き破る前に後ろに飛ぼうとする。
一誠の拳が貫通するのと、ディオドラが飛び退くのはほぼ紙一重の差であった。
不必要なぐらい一誠との距離をとるディオドラ。加虐に満ちた笑みは既に無く、整えられた髪は冷や汗によって乱れていた。
「は、ははははー　少し驚いたが、僕には届かなかったね！」
哄笑するディオドラであったが、それが虚勢であることは誰が見ても分かった。
「ははははー　はは――は？」
ぬるりとした生暖かい感触を唇に感じ、ディオドラは笑うの止めて唇を手の甲で拭う。手の甲には鮮血がべったりと付いていた。

「当たってんじゃねーか」
　ディオドラは、鼻から血を流していた。一誠の拳は、ディオドラに直接触れることは無かったが、振り抜いた際に発せられた拳圧はしっかりとディオドラに届いていたのだ。
「部長、皆、一つだけお願いがあります」
「何かしら？」
「こいつだけは俺の手で倒させて下さい」
「ダメよ。全員で倒すわ――と言いたいところだけど、そんなことを言っても貴方止まりそうにないわね」
　一誠の全身から放たれるドラゴンのオーラ。神器は想い、感情を反映させる。一誠がどんな想いを抱いているのかが視覚化されていた。
「全く、先走って……。怒っているのは貴方だけじゃないのよ？」
「すみません……」
「だから、私たちの分を貴方に譲ってあげるわ。手加減無しでぶちのめしてやりなさい」
「はい！」
「イッセー」
　ゼノヴィアが声を掛け、何かを投げ渡す。受け止めるとそれは、ゼノヴィアに貸して

いたアスカロンであった。
一誠がゼノヴィアを見ると、ゼノヴィアは何も言わずに頷く。自分の分まで戦ってくれという意思がそれだけで伝わってきた。
受け取ったアスカロンの柄頭を、左手の拳頭に押し当てる。閃光を発した後、アスカロンは籠手の中に収納された。
一誠の戦いの準備は完了した。一誠はディオドラを兜越しに睨む。一誠の殺気立った視線にディオドラは怯むことは無かったが、その顔は先程一撃で屈辱に歪んでおり、右目を見開き、左目は細め、左右異なる歪な顔で一誠を睨み返す。
「さっきクソ野郎って言ったけどよ、改めて考える、お前がクソ野郎で良かったよ」
「何を急に……」
鼻血を拭い取りながら、ディオドラは言っていることが理解出来ないという表情をする。
「――おかげで躊躇わずに全力で殴れる」
一誠は、拳を握り締めるのを見せつける。
「ふざけたことを……！」
ディオドラの全身から先程と同じ黒い魔力が迸る。それだけでディオドラから放たれる圧が数段増す。

「さっきは少し油断したが、今度はそうはいかない！　見たかい！　これがオーフィスから貰った『蛇』の力だ！　僕の力を何倍にも高めてくれる！上級悪魔である僕ならもっと力を引き出すことが可能だ！　たかが下級悪魔の分際で！　現魔王のベルゼブブの血筋である僕を前に粋がるな！」

『オーフィスの『蛇』か、オーフィスと何か契約をして力の一部を貰ったか』

「粋がるなっていう癖に、自分は貰いもんで粋がってるじゃねぇか」

一誠がそう吐き捨てると、ディオドラの額に青筋が浮かび上がる。痛い所を突かれたか、或いは一誠の態度そのものが気に入らないのか。

ディオドラは両腕を広げる。体から昇る黒い魔力がディオドラの頭上で球体と化していく。その数は、一目で数えるのが無駄だと悟らせる程の無数。

「僕の気高い血を流させた罪は、君の命で償って貰う！」

ディオドラが腕を振り下ろす。待機していた魔力の球が、雨の如く一誠に降り注ぐ。

一誠もまた背部の噴射口から魔力を噴射し、動き出していた。

魔力の集中豪雨に自ら飛び込んでいく一誠。その行為を愚かだと言わんばかりディオドラは罵る。

「君の様に下級で！」

黒い魔力が石造りの床を穿つ。

「下品で！　下劣で！　模造以下の転生悪魔如きが！」
黒い雨は、ドラゴンの赤い光すら塗り潰す。
「この僕に――」
塗り潰された黒い雨の中で一瞬煌く赤い閃光。
「――触れることす……ら？」
ディオドラは、突如として現れた一誠に、自分が胸倉を掴まれているという現状を呑み込めなかった。
一誠がやったことは至って単純なことである。ディオドラまでの最短の距離、つまりは直線を最速で駆け抜けただけであった。
その際にディオドラの魔力を幾つも浴びており、その箇所から白煙を上げているが、それだけであり、鎧は全くの無傷。
避けようと思えば避けることは出来たし、弾くことも出来た。だが、一誠はそれをしなかった。それによって生まれる時間すら惜しんだ。それほどまでにディオドラを早く殴りたかったからだ。
ディオドラの魔力の雨に突っ込むことに何の恐怖も無かった。修行の時にタンニーンとマダに追い掛け回されたことの方が比較にならない程恐ろしい。
ディオドラは迎撃の為に魔力を放とうとするが、それよりも先に一誠の拳がディオド

ラの頬に打ち込まれる。
叩き付け、振り抜くまでの間に拳を捻じり込む様に押し込む。頬の内側が裂け、歯が折れ、顎に罅が入っていく音がディオドラの体内に響き渡る。
一誠が拳を振り抜くと、ディオドラの体は軽々と飛んで行き、数十メートルの距離を移動した後落下し、地面に横たわる。
「ぐあ、はぐ……！」
だが、ディオドラはすぐに体を起こす。『蛇』のおかげで魔力だけでなく生命力も強化されていた為であった。
顔を床から離すディオドラ。その口からボタボタと血が垂れ、その血が床に広がる。広がった血溜まりの中には白い物も混じっている。ディオドラの折られた歯であり、一本だけでなく数本転がっていた。
「こんな、こんなことが……！」
肉体よりもプライドが大きく傷付けられる。確実に強くなった筈なのに、あっさりと一撃を受けてしまったことが、上級であり高位の血を受け継ぐディオドラのアイデンティティを揺さぶる。
「僕は、アスタロト家の、ディオドラだぞ！　こんなことは……！」
立ち上がるディオドラ。しかし、その足はダメージのせいで震え、辛うじて体を支え

ているだけであった。
「それがどうした」
一誠はディオドラが立ち上がっている間に既に距離を詰めていた。数歩移動すれば拳が届く距離である。
「下級風情が、僕に、よくもこんな！」
喚くディオドラを無視して一誠は構える。ディオドラは左手を突き出し、そこに魔力を溜める。
一誠が左腕を振り上げながら最速で走る。するとディオドラの左手の魔力が障壁を創り出し、それを阻んだ。構わずその障壁に殴る一誠。しかし、今度は最初の障壁よりも頑強に出来ており、一撃では罅も入らない。
「アハハハハハハ！　これだ！　これが正しいんだ！　僕の方が君よりも上だ！　上であるべきなんだ！」
一誠の魔力とディオドラの魔力が衝突し合い、金属を研削盤に触れ合わせた様に反発する魔力が二人に降りかかる。その光景は、お互いの意思すら反発し合う両者を表している様に見える。
「――本当に上か、確かめてみるか？」
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏ

ｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

倍化を告げる音声が立て続けに響く。一瞬にして一誠の力が跳ね上がる。

『Ｂｌａｄｅ』

突き出していた左手からアスカロンの刃が飛び出し、ディオドラの障壁を貫く。刃は障壁を超え、ディオドラの前にその切っ先を見せる。

一誠は左手を斜め下に向けて振り下ろす。分厚い筈の障壁はその一太刀で紙よりも容易く切断された。

だが、アスカロンが斬ったものはそれだけでは無かった。

「つあっ！」

アスカロンの切っ先が、突き出していたディオドラの掌を斬り付ける。刻まれる裂傷。深くは無いが、体の傷以上にディオドラの精神を深く傷付ける。またもや自分の自信を揺さぶられた。

「痛い。痛い。痛いよ！　どうして！　こんな痛み、僕に起こって良い筈が無いんだ！」

鮮血を垂らす掌の傷を痛がりながら、涙目で現実逃避染みた言葉を叫ぶディオドラ。

「泣くんじゃねえよ。アーシアはもっと悲しい思いをさせられたんだぜ。お前の眷属にされた人たちは、もっと苦しい思いしたんだぜ」

言葉にするだけで一誠の中で怒りが湧いてくる。今起こっていることが自分が行っ

てきたことへの因果とも分からず、醜態を晒して喚くディオドラを見ていると、怒りが溢れ出そうになってくる。

「ふざけんな、ふざけるなよ。僕はアガレスに勝った！　能力の無いバアルにも勝つ！　情愛だけが取り柄のグレモリーにも勝つんだ！　僕が一番なんだ！　アスタロトであるこの僕が！」

現実を認めず否定する様に叫ぶディオドラ。反省の見えない態度どころか、サイラオーグやリアスのことを侮辱するディオドラに、一誠は兜の下で血管が千切れそうなほど形相を歪める。

「――もう黙れ」

怒りが一周回って言葉に絶対零度の冷たさが宿る。今まで生きてきた中で、感じたことも無い程の嫌悪をする。

「この僕がぁぁぁぁぁぁぁ！」

ディオドラが右手を頭上に向ける。幾つも魔力の塊が生み出され、それが捩じれて形を変え、先端尖った螺旋状の細長い形となる。

三百六十度。一誠の逃げ場を全て塞ぎ、耐えるという一択しか与えない状況をつくる。

螺旋の魔力が一斉に回転し始める。空気を震わす耳障りな音が神殿内に響く。

ディオドラが掲げた腕を振り下ろす。それに合わせ、切っ先が全て一誠に狙いを定め、次々と射たれる。同時にではなく避けられない様に一本一本に時間差を付けていた。

あらゆる角度からの攻撃。一誠に躱す場所も手段も無い。

全弾が一誠の体に刺さり、その身に穴を開ける為に回転を増す。

「イッセーさん！」

全身を刺された一誠を見たアーシアの悲痛な叫び。

「あははは！　中々似合っているじゃないか！」

全身を刺された一誠を見たディオドラの哄笑と皮肉。

「あはははは！　――は？」

ある異変にディオドラが気付く。全身を突き刺され、更には抉られている筈だというのに、一誠の体から血が一滴も流れていない。

「――嘘だ！　そんな筈が無い！」

ディオドラの魔力は、一誠の鎧を貫けていなかった。装甲が厚い箇所を外し、関節部などの装甲が薄くなっている箇所を集中して狙った。だというのに、ディオドラの魔力はその薄い箇所すら貫けていない。

『自分のしてきたことを全く理解してないな。――相棒を怒らせ過ぎた』

ドライグがディオドラに向けた言葉は全くの無感情であった。虫にでも話し掛けている様な冷めた声。その声の冷たさに、ディオドラは身を震わせる。

ドライグの言葉の通り、一誠の内には怒りが溜め込まれていた。神器は想いによって力を増す。通常時の『赤龍帝の鎧』だったのなら先程の攻撃は効いていたかもしれない。だが、激しい怒り、ディオドラを許せないという心が『赤龍帝の鎧』の力を引き上げ、強度が増すという変化を起こしていた。

ショックを受けているディオドラに、一誠は魔力のブーストで瞬時に距離を詰める。

「あ」

ディオドラが我に返ったとき、一誠の拳は放たれていた。

頬に打ち込んだ拳を振り抜く。ディオドラの体は回転し、その勢いの速さで全身が溶けて色が混じった様に見えた。

空中にいる間に何回転したかは分からないが、少なくとも百に迫る数はあったと思われる。

回転したままディオドラは顔面から無様に着地する。

ディオドラが落ちた場所は、一誠から数歩ほど離れた場所であった。ほぼ真上に跳んだせいである。尤も、そういう風になる様に一誠が殴ったのだが。

一誠はディオドラの胸倉を掴み無理矢理立たせる。

ディオドラの顔は片頬が倍ほど腫れ上がり、足がダメージで震えている。
ある女性が居た。敬虔な信者であり、日々を清く正しく生きてきた。
その生き方は誰もが尊敬し、ゆくゆくは人々を導く立場になる。誰もがそう思っていた。
とある悪魔の目に止まるまでは。
彼女が気付いた時には、既に取り返しのつかない状況となっていた。
彼女は責めた。陥れた悪魔でなく神を裏切った無知なる自分を。
故に彼女は自分を罰した。誰にも助けを求めず、怨敵に奉仕し、穢れていくことを知りながら悪魔の道を進むことこそ自分に与える罰。
彼女は願った。いつか正しい道を歩む者が、穢れた自分に罰を与えるその時を。
一誠はディオドラを殴る。折れて歯とその破片が口から飛び散り、殴られ旋ることで口内の血が宙を描き、汚らしい花を浮かび上がらせた。
地面に落ちるディオドラ。だがすぐに引き摺り上げられる。
顔の半分が青黒く染まり、腫れ上がっているせいで顔の形が歪になる。
目を殆ど白目を剥いており、意識も殆ど飛び掛かっていた。
「や、やへ、やへて、ふれ……」
ディオドラの殆ど歯が抜け落ちた口から、掠れた声が洩れる。許しを乞う声。それは

一誠の耳にも届いている――

ある女性が居た。その女性は慈悲深く、親を失った孤児たちの為にお菓子などを差し入れする優しい女性であった。その慈悲は人だけに止まらず、動物にも植物にも与えられた。

その優しさに惹かれる男性が居た。女性もまたその男性の好意に気付いており、同じく男性に惹かれていた。

このまま惹かれた者同士、同じ運命を並んで歩いていく――筈だった。

ある悪魔に慈悲を与えるその日まで。

彼女の慈悲は最悪な形で裏切られ、彼女は悪魔に堕ちた。

自分の身に起こった不幸。しかし、彼女はそれを悪魔の甘言に惑わされた自分への罰として受け入れようとした。

本当の罰はその後に起こるとも知らずに。

男性は女性を愛していた。愛しているからこそ、その愛を貫くことを決意した。

男は自ら悪魔へと堕ちた。愛する彼女の側に居る為に。

女性は泣いた。自らの過ちに男性を巻き込んでしまったことに。

悪魔は嗤った。その愛すら自分の欲望を昂らせる道具にする為に。

――だが、一誠は殴った。その声に耳を貸さず。

ディオドラはクルクルと宙を舞う。もがく意識すら既に無く、四肢が風圧ではためき、操られているマリオネットの様に無茶苦茶な動きを見せる。見ようによっては滑稽な踊りを宙で踊っている様に見えるかもしれない。

マリオネットことディオドラは、頭から落ち、床にへばりついた様に動かない。

一誠は無言でディオドラを引き摺り上げる。微かに口が動いており生きていることは分かった。しかし、ディオドラの意識は完全に飛んでいる。

一誠は、拳を硬く、硬く握り締める。握り締めた籠手が砕けそうになる程に。

「おおおおおおおおおおお!」

自然と喉の奥から声が出た。義憤と理不尽への怒りが合わさったその声は、ドラゴンの咆哮に近い。

握り締めた拳を引き、上半身を捻り、威力を生む出す為の距離を作る。骨も肉も神経も纏う鎧も、全ては絶命の一撃を放つ為の歯車。

悪意を以て他者の人生を弄ぶ輩を破壊する為の引き金は、一誠の理性が握る。

心が叫ぶ。殺れ、と。そいつが生きている限り、誰かを不幸にする。

心が叫ぶ、待て、と。そいつを殺しても、犯した罪は残り続け、結局何も変わらない。

拳が放たれるまでの刹那の間、心は叫び続ける。

殺れ待て殺れ待て殺れ待て殺れ待て殺れ待て殺れ待て殺れ待て殺れ待て殺れ待て。

一誠が出した答えは――

理性が引き金を引く。全ての歯車が噛み合わさり、一つとなって力となる。その力は拳に乗せられ、死神の鎌の様にディオドラの側頭部を打ち抜く為に空気の壁を突き破る。

その鎌は狙いを定め――大きな風切り音を鳴らした。

一誠の拳の下で、ディオドラは崩れ落ちている。拳が当たる直前、一誠はディオドラの胸倉を掴んでいた手を放していた。つまり、ディオドラを生かしたのだ。それが一誠の出した答えであった。

硬く握られた拳がゆっくりと開く。指先から、殴った時に付いたディオドラの血がポツポツと垂れ、床に小さな点を作る。

「イッセー」

側にゼノヴィアが立っていることに気が付いた。その手には、デュランダルを持っている。

「代わりに私がやろうか?」

異端、異形を狩ってきたゼノヴィアが、ディオドラへの止めを代わりに刺すことを提案してくる。ゼノヴィアがディオドラを見る目に一切の感情は無く、声に感情も無い。止めを刺すことが簡単な作業だと錯覚してしまいそうになる。

「いや、いいよ」
「――また、アーシアを狙ってくるかもしれないぞ？　今後の為に首を刎ねた方がいいんじゃないか？」
「かもな」
ゼノヴィアが言いたいことは良く分かる。一誠は、ディオドラが自らの過ちを反省するなど微塵も思っていない。きっと自分の身に降りかかった因果応報も全て降って湧いた理不尽と感じ、自分は何も悪く無いと自己肯定するだろう。
そう考えてしまうと殴っても殴ってもスッキリはしない。気分が晴れたのは、最初の一撃くらいであった。
「だったら――」
「こいつにはテロのことで色々と聞かなきゃならないことがあるし、殺したらそれを理由に部長や部長のお兄さんに迷惑を掛ける」
それが理由の半分であった。もう半分は彼女らが関わっているせいで、簡単にゼノヴィアに言うことが出来ない。
一誠は、彼女たちにしたことをディオドラの命で償わせることを軽いと思ってしまった。これから先、彼女らは悪魔として生きていく。それをディオドラの命一つで無かったことにならないし、釣り合わない。

ならどう償わせるのか。相応しい案が浮かばない。ディオドラの行く末を保留にしたのと同じ。一誠はそんな自分を情けなく思う。

（これで良かったのかな……）

『俺は肯定も否定もしない。相棒、それはお前のすることだ』

頭の内のドライグが、優しくも厳しい言葉を掛ける。

（――だよな）

選んだからには今後の責任を背負わなければならない。それがどのように圧し掛かってくるかは分からないが、今は取り敢えずオカルト研究部の仲間たちが一緒にいることの幸福を噛み締めたい。

（そういや、間薙の奴、どう――）

「イッセー！」

ゼノヴィアの鋭い声が飛ぶ。同時に、腹部に軽い衝撃があった。初めは何も感じ無かったが、やがて熱に、熱の次は痛みに、痛みの次は激痛と化し、一誠は片膝を突く。

「ぐ、あ……」

腹部を見る。脇腹の辺りに五百円玉程の円形が鎧を貫いて出来ており、その穴から白煙が出ている。一度この身に味わったことがある。出来た傷は間違いなく光の力によるもの。

「未熟なドラゴンに一つ助言を送ろう」
　神殿奥から誰かがこちらに向かって歩いて来る。
「戦いの場では気を抜くな。勝った直後は、緊張の糸が途切れて狙い易い。感情と能力が直結している神器使いは特にな。今の貴公の鎧、脆いぞ」
　黒い軽鎧を装備した冷ややかな気配を纏う美丈夫、シャルバ・ベルゼブブはリアスたちを見渡して、冷笑を浮かべる。
「尤も、これから死に行く貴公らには無駄な言葉だったかな？」

復活、吸血

肉塊から伸びる人の腕の太さ程の触手。その速度はかなりのものであったが、『騎士』である木場の目から見れば遅い。

触手の先端が触れる前に、木場は既に側面へと移動し、伸ばされた触手に聖魔剣を振り下ろす。

（硬いッ！）

刃が触手の肉に触れた瞬間、その感触が即座に木場の脳へと伝わる。石や鉄などの硬度的な硬さでは無く、密度が高いゴムを彷彿とさせる強い弾力性を含んだ硬さであった。

刃を弾かず、ある程度埋めてから止まる、というこちらの動きを鈍らせようとする地味ながらも厄介なものである。

木場の判断は迅速であった。聖魔剣の刃が触手に食い込むと同時に手を放し、即座に新たな聖魔剣を創造すると、それで食い込ませている聖魔剣を上から叩く。

火花が生じ、耳奥が痛くなる高音が響くが、木場の一撃で伸ばされた触手は切断された。

斬れないことは無い。そう確信する木場だが、触手の断面と断面が蠢くのを見てすぐにその場から離れる。

触手の断面から更に細い触手が何本も生え、木場を絡め取ろうとするが、木場が既に離れているせいで触手の群は空振りする。暫くの間は木場を探していたが、近くにいないと判断すると、断面同士の触手が結び付き、結び目が同化し、繋ぎ合わさって元の姿に戻る。

雌雄同体の交尾の様な光景であり、その見た目のせいもあって傍から見ていた木場の気分を著しく害す。

一方で、イリナの方も触手に苦戦を強いられていた。

天使に転生したことで実力は底上げされており、速度も木場に劣らないが、力の方が今一つ劣る。故に、木場がやった方法でイリナは触手を切断することは出来ない。

が、そんなことはイリナ自身、触手に『擬態の聖剣』を斬った時に気付いていた。

ならばどうするのか？

答えはイリナの中に既にあった。木場が自由自在に魔剣、聖剣を創り出せる様に、イリナの『擬態の聖剣』は変幻自在である。

肉塊の触手が、イリナを叩き伏せようと持ち上げられる。イリナは触手が作り出す影の中で動かない。

動かないイリナに、躊躇なく振り下ろされる触手。しかし、その触手はイリナを叩き潰す直前に動きが止まった。その触手の何箇所が絞られた様に細まっており、腸詰めの様な形になっている。

イリナが『擬態の聖剣』で触手を斬ったときに、聖剣の一部を切り離し、細いワイヤー状にして触手に巻き付けていた。巻き付けた聖剣のワイヤーは、近くの瓦礫などにも伸びて巻き付いており、触手は自らの力と瓦礫の重みできつく縛られていく。

痛覚が無いらしく縛られている状態で更に力を加えていく触手。それでもイリナに触れることが出来ず、最終的には自分の力で自らを何等分にも分けてしまった。

輪切りとなった触手。地面の上で陸に上がった魚の様にのたうち回る。

「うえー……」

生理的嫌悪を覚えるイリナ。遠巻きに見ていたディオドラの眷属たちも声に出さないが、イリナと似た様な顔付きになっている。

すると、輪切りにされた触手も木場が斬った触手と同じく細い触手を伸ばし、繋ぎ合い、引き寄せて元に戻る。瞬きの合間にほぼ行われ、数度目の瞬きの後には繋ぎ目すら消えていた。

「何なのこれ！」

イリナが思っていることを叫ぶ。見た目は生物なのだが、どうにもそれだけでは無

い。木場もイリナもあまり認めたくない事実だが、現れた肉塊からは神器、悪魔を連想させる気を感じていた。
醜悪な存在から自分が良く知る気配を感じ取ったことに不快感を覚えるが、重要なことである。
そして、もう一つ見過ごせない気配がある。木場、イリナの感覚がそれを訴えているが、感情が思わず拒もうとする。
木場たちの前で元に戻った触手。するとその表面が波打ち始める。嫌な予感がし、イリナと木場はすぐさまその場から離れる。
波打った部分が盛り上がり、そこから新たな触手が枝分かれして伸びる。鞭の様に振るわれるのでは無く、先端が鋭利になり相手を貫く為のものに変化していた。
既に間合いから離れていた木場たちは無事であったが、触手の柔剛を自在に分ける特性に一筋縄ではいかない相手だと再認識させられる。
「――木場君、あれには触れない方がいいかも」
「――やっぱりイリナさんも、そう思う?」
見過ごせない気配。それは、あの肉塊から聖剣の気配が放たれているのだ。どうやら体の内に取り込んでいるらしいが、誰が、どうやって聖剣を手に入れ、何故この肉塊にあたえたのかまるで分からない。

しかし、確かなのは木場にとって肉塊の一撃は強烈な毒が含まれているということ。それは、少し離れた場所にいるディオドラの眷属たちにとっても、であるが。

肉塊の本体が、伸ばしていた触手を戻す。目や鼻などの器官は見えないが、何かで木場たちの位置を察知している様子であった。肉塊の表面に張り付いている半分溶けた状態の悪魔の顔たちを代わりに使っているという想像はしなかった。出来ればしたくはない、既に亡くなっている方が彼らにとっては救いであり、もし生きているとしたら

（止めよう、こんなことを考えるのは。今はそれよりも優先することがあるじゃないか）

悪い方向に向かおうとしている思考を木場は修正する。嫌なものを見ると、自分の中で嫌なものが生まれてくる。

「木場君。あの人たちのことだけど……」

「ああ、それは僕も考えていたよ」

チラッとだがディオドラの眷属たちの様子を窺う。突然現れた肉塊に驚き、嫌悪しているが怯えは見えない。が、焦ってはいる様だった。

彼女たちは、朱乃とリアスの魔術によって拘束され動けない状態にある。そんな状態で悪魔を捕食する肉塊が来たとなれば、彼女らは肉食獣の前に置かれた餌、俎板の鯉同然。焦るなというのが無理である。誰だって食われて死ぬという結末を迎えたくない。

木場は一本の魔剣を創造する。飾りなど一切無く、真っ直ぐな刃と鍔と柄だけの、剣という言葉をそのままイメージして創られた様な素朴なショートソード。
「対魔術用の魔剣だよ。これで斬れば部長たちの魔術を解除出来る」
「……いいの？」
ディオドラの眷属を生かしたい、話したいというのはイリナの個人的な意見であり、我儘である。それを叶えてくれたことは、リアスたちへ感謝し切れ無い。自分の我儘に巻き込まれて、更にここまでしてくれる木場に対しイリナは申し訳なさを感じ、思わず念を押す様に確認してしまう。
「彼女たちをこのまま死なせる訳にはいかないんだよね？」
木場は悪戯っぽくウィンクをしてみせた。軽い態度で、イリナに責任を感じさせない様にする。余談だが、木場の整った顔でされたそれは普段からは想像出来ない子供っぽさがあり、彼に好意を寄せている女性ならば一撃で落とせるものであり、特に密かに木場を慕っている某副会長なら物理的にも落とせる。尤も純真で一誠に好意を寄せているイリナには効果は薄いが。
「僕の方に注意を惹き付けるから、その内にイリナさんは彼女たちを」
「ありがとう！　木場君！」
木場から魔剣を受け取り、イリナはディオドラの眷属たちに向かおうとする。

その動きを察知し、肉塊の表面が盛り上がり始める。触手を伸ばす為の前動作である。狙う先にはイリナとディオドラの眷属たち。

「させないよ」

その声をきっかけに、木場の周囲に魔剣が創り出される。刀身が燃え盛る魔剣。刀身から冷気を放つ魔剣。刀身に紫電を帯びている魔剣。各属性を宿した魔剣が十ずつ創り出される。

聖魔剣で斬っても効果は薄かった。ならばどれが一番効果的か試すだけのこと。焼いて、凍らして、感電させ、それでダメなら溶かすか、砕くか、微塵切りにするか。

木場の想像が尽きない限り魔剣の創造は終わらない。

紫電の魔剣と炎の魔剣を手に取ると、先制の一撃を肉塊に向けて放つ。

凍気の魔剣が群となって肉塊へと突き刺さり、刺さった箇所を中心とした肉塊を凍らせ始める。

肉塊の一部から生々しさが消えていくが、肉塊の動きは鈍らない。凍った箇所が罅割れても体を動かしていく。

とことん痛覚が鈍い肉塊に不快感を覚えながら、木場は注意を自分に向けさせる為に動き続ける。

宙に浮かぶ紫電と炎の魔剣を発射し、肉塊に突き立てていく。魔剣が帯びた熱によっ

て焦げたニオイが場に漂い始めていく。
電気、高熱を体内に流し込まれていく肉塊。だが、何かしらの変化は見えない。少なくとも動きは変わらないままであった。
注意を向けさせるつもりだったが、肉塊の狙いを変えることが出来なかった為、すぐに移動し、イリナの背を守る様に立つ。と同時に肉塊から触手が伸ばされる。
先程と同じく直線的動き――かと思いきや、伸ばした触手の表面が震え、そこから新たな触手が伸び、枝分かれしながら木場たちに迫る。
それは肉塊なりに学習しての攻撃行動だったかもしれない。あらゆる方向から来る触手。しかし、木場から見ればそれは脅威では無い。
「甘いよ」
木場が足先で地面を軽く叩くと、地面を突き破って様々な魔剣が飛び出し、下から肉塊の触手を迎撃する。下から現れた魔剣が触手に突き刺さり、上へ押し上げたかと思えば外れた魔剣が上から降り、地面に縫い付ける。
木場自身も魔剣、触手の中は高速で移動する。油断すれば魔剣による大怪我か、聖剣の気配を纏う触手に巻き付かれる危険地帯を、その足を止めることなくすり抜けながら尚且つ両手に持つ魔剣で次々と斬り裂いていく。その間にも肉塊に創造した魔剣が次々と突き刺さる。

電熱と炎熱によって触手が断たれ、地面に落ちていく。その断面が炭化し、すぐにくっつけられない様になっていた。

初撃の様な腕の太さ以上ある触手なら、例え両手の魔剣でもここまで容易く切断出来ない。枝分かれをして一本ごとが細くなっているからこそ可能なのである。

枝分かれの触手が、木場の顔面を貫こうとする。首を傾け、頬の皮一枚どころか髪一本すら掠らせない紙一重以上の回避をすると同時にその触手を切り落とす。すぐさま次の触手が鞭の様に振るわれるが、それよりも速く木場の魔剣が触手を斬る。

（ん？）

しかし、他の触手よりも一回りほど太い為か、このままでは完全に斬り落とせないと即座に判断すると魔剣から手を放し、影すら追い付けないと思わせる速度で柄を蹴り付ける。

蹴りで勢い付いた魔剣は、食い込んでいた触手を切断する。その勢いのまま回転し、大きな円となった。

回転する魔剣に手を伸ばし、柄を掴むとそこから振るう木場。下手をすれば手首が斬り落とされていたかもしれない寒気立つ真似を、涼し気な顔でさも当然の様に容易くやってのせる。

肉塊がイリナに触手を伸ばそうとしても、その矢先に木場が斬り落していく。遂には

触手を伸ばす速度よりも、木場が斬り落とす速度が上回った。結果、本体である肉塊が無防備を晒すこととなる。

木場は見上げる程の大きさがある肉塊の前に、その脚力を以て接近すると手に握る魔剣で肉塊に横薙ぎの一撃を与える。

ジュッ、という焼ける音を立てながら、柄付近まで高熱の剣身を突き刺し、横に滑らす。

肉塊に一文字の大きな裂け目が出来た。裂け目上下の断面は熱で焦げ、奥に行くほどその焦げは薄くなる。血というよりも体液そのものが無いことを、斬った手応えから感じる。

そもそも肉の様な薄気味悪い色をしているが、どうにも違和感を木場は覚えた。見た目と手応えに何とも嚙み合わない感触がある。

（――まるで大きな口が出来たみたいだ）

自分で斬った痕を見て、その様な感想を抱く。次の瞬間――

「き……ば……」

――裂け目が本当に口の様に声らしきものを発した。それも聞き取り辛かったが、自分の名前を言ったのだ。

あまりに唐突過ぎたせいで、戦いの中だというのに木場は唖然としてしまった。

自分のことを知っている。もし知っているとしたら、目の前のこの肉塊のことを木場も知っている可能性が高い。
なら、この肉塊になる前は何だったのか？
動揺のせいで、戦いの思考から肉塊の正体を探るという思考にずれてしまう。
そのずれによって視野が狭まり木場には隙を、肉塊には機会を与える。
肉塊の一部が触手を伸ばす。瞬時に最高速に達したそれは、発射と言ってもよい。
狙いは木場では無く、ディオドラの眷属たちを逃そうとしているイリナ。イリナは肉塊に対して背を向ける格好であった。
「イリナさん！」
木場が声を飛ばす。斬るよりもイリナに声を掛ける方が速い。自分で生み出したミスだが、伸ばされた触手をどうするかはイリナの実力に頼るしかない。
ディオドラの眷属たちもまた自分たちの方に触手が伸びてきているのが見えていた。しかし、イリナはそれに背を向けた状態。このままでは貫かれるか、捕らわれる。
「逃げなさい！」
ディオドラの『女王』が叫んだのは、悲鳴では無くイリナへの切羽詰まった警告の言葉。ふだが、既に触手はイリナの背後にまで迫っていた。
手遅れ。その言葉が『女王』の頭を過ったとき、触手が花の様に開かれた。

五つに分裂したのかと思ったが、違う。鋭利な刃で裂かれた断面となっており、イリナと反発する様に触れることが出来ずにいた。

何が起こったのかと驚く『女王』。そのとき、光に反射し一瞬だけだが細長い糸らしきものが見え、疑問が一気に氷解する。

先程イリナが見せた様に、彼女はディオドラの眷属たちを解放する傍らで、周囲に『擬態の聖剣』で作ったワイヤーを張り巡らせ、結界を作っていたのだ。

幾重にも張ったワイヤーに触手が自ら突っ込んでいったことで裂かれ、そこから更に襲い掛かろうにも張ったワイヤーが絡まって身動き出来ない状態になっている。

まったくそんな素振りを見せなかったイリナに『女王』は戦慄する。仮にイリナと戦えば、気付かぬ内に周囲一帯に罠を仕掛けられ、罠と気付いたときには首を落としているだろう。

密かに慄いている『女王』をイリナはジッと見つめ――

「どうもありがとう！」

「――はい？」

――礼の言葉を送る。送られた方は、いきなりのことで困惑した声で返すことしか出来なかった。

「逃げて、って言ってくれたから」

「……言い間違えただけです」
本意では無いと言うが、イリナは嬉しそうな表情のまま、素早く彼女たちの拘束を解く。
「さあ、行って！」
「捕らえた相手をわざわざ逃がすのですか？」
「いいから！　早く！　あまり時間は無いわ！」
聖剣のワイヤーから逃れ様とする触手。肉塊の追撃は、木場が次々に落としている。しかし、いつまで持つかは分からない。
「貴女たちは安全なところに逃げて！　生き延びて！　じゃなきゃ、私たちの負け！」
イリナはディオドラの眷属たちを誰一人死なせないと誓った。彼女たちの人生が不幸に塗れたまま終わっていい筈が無い。悲劇と苦難を味わった彼女たちを救うことこそが今のイリナの使命である。
「ですが――」
「早く！」
何か言いたげであった『女王』だったが、イリナは言葉を被せて急かす。ワイヤーで拘束された触手が枝分かれし始めた。再び攻撃をしてくる。
「分かり、ました」

『女王』が他の眷属たちに目配せをすると、全員が頷き、悪魔の翼を広げる。ディオドラの眷属たちが、この場から飛び立った直後に触手の攻撃が再開される。
イリナは『擬態の聖剣』でそれを打ち落とし、別方向から迫ったものは軌道を逸らす。
剣戟と羽ばたく音でイリナの耳には届かなかったが、去り際に『女王』はこう言い残す。
「貴女も、死なないで下さいね」
四方から襲い掛かる触手を捌いていくイリナだが、数が多く拮抗するので精一杯であった。躱し、払い、斬る、の動作を速い動きと短い間隔で何度も繰り返す。その繰り返しはイリナの体力を激しく消耗させる。
「こ、の！」
イリナの斬撃が触手に食い込む。
（あっ）
同時にイリナは自分のミスに気付いた。触手に深く聖剣を食い込ませて過ぎたせいで、それを抜くのに体の動きが一動作遅れる。体に無駄な力が入ってしまいそれが剣に伝わった結果である。
「やばっ」
逃げ場を埋め尽くす触手の群。捕まえられたら、肉塊に張り付いている悪魔たちの様

になる。
　そのとき、赤熱と紫電の線がイリナの視界を覆い尽す程に描かれ、その線が触手を切り落としていく。
「ごめん！　大丈夫だった？　イリナさん！」
　線を描いたのは木場であった。イリナが見たのは、速過ぎる剣速が空間に残したいくつもの残像であった。
「ありがとう！　木場君！」
「彼女たちは、無事逃げられたみたいだね」
「ええ！　あとは目の前のあれを――あれ？」
　木場の魔剣創造を全力で使用された肉塊は、余すところ無く魔剣が刺さっており、地獄の針山を彷彿とさせる姿となっていた。
　肉塊に目を向け、イリナは戸惑った声を出す。イリナが何に戸惑ったのか、木場にもすぐに分かった。
「――小さくなってるよね？」
「――そうだね」
　無数の魔剣のせいで分かりづらいが肉塊が一回り程の小さくなっており、見上げる程であった大きさも木場たちと同じ目線の高さにまでなっている。それに伴ってか肉塊

の表面に張り付いていた悪魔たちの残骸も消えていた。
理由を考えるならば、魔剣の斬撃によって体力や肉体を消耗したせいという理由が思い付く。このまま行けば肉塊は収縮していく筈――という楽観的な考えを木場は出来なかった。
あの時確かに聞いた自分の名を呼ぶ声。それが木場に胸騒ぎを与える。
だが、そんなことを考える暇を肉塊は木場たちに与えない。肉塊の左右から触手が伸びる。今までとは変わりない行動だというのに、木場には肉塊から腕が生えたという印象を受けた。
生えた触手は、伸びながら木場たちに向けて振るわれる。
技術も変哲も無い一撃。木場は魔剣を交差しそれを受け止めようとし、イリナは聖剣で上手く軌道を逸らそうとする。
触手が木場とイリナの剣に触れる。
『ッ！』
その瞬間、木場は防御を、イリナは逸らすのを止め、即座に回避に切り替えた。
触手の一撃が、先程よりも明らかに重くなっており、普通に受ければ防御を突き破り、逸らそうとすれば力で押し負けるというイメージが、二人の頭の中で閃光の様に浮かんだのだ。

イリナは背中の翼を広げ、後方に向かって飛ぶことで回避。木場は、魔剣を一本にして触手が防御を突き抜けてくるまでの時間を僅かに稼ぎ、魔剣がへし折れるまでのその僅かの間で『騎士』の速度を生かして触手の間合いから離れた。

木場とイリナの目が合う。互いに同じ行動をとったことで、自分が感じたものが正解であったことを確信する。

「何か……強くなってない？」

「――間違いないね」

木場たちを逃した触手は、しばらくの間木場たちを探す様に左右に動いていたが、いないと分かると肉塊の方へと戻っていく。しかし、取り込まれる事無く垂れ下がる形で留まる。その垂れ下がる姿は、やはり両腕に見えた。

肉塊は、木場たちが警戒している前で攻めてこないと分かっているのか、全身に刺された魔剣を、腕もどきで一本一本引き抜いていく。

カチャン、カチャンと地面に放り棄てられる魔剣。肉塊の変化は、その間にも起きていた。

まず、肉塊の下半分が急に縮まり始め、上の半分以下の太さになると二つに分かれる。それはどう見ても両脚であり、その二本で体を支える。

そして、楕円状の上半部も細まっていき明らかに人の体へと近付いていた。

無駄なものが削ぎ落されていくのではなく、完全なものへ成っていく肉塊。その姿に木場は既視感を覚えた。
見るだけで嫌悪感が湧く既視。
「君は……誰なんだ？」

◇

「あー、あ、あ、あー、」
何も無い空間で、白髪の青年が調子の外れた鼻歌を歌う。
突然現れた羽の生えた連中は、既に全員白髪の青年によって殺され、喰われた。残るのは白髪の青年だけ。
「何だろー？　何だろうなぁー？　何なんでございましょう？　あのグサグサ感アーンドアチアチビリビリ体験はー？　痛いし、熱いし、痺れるし、最悪なんですけど？　誰？　誰？　どこの誰がやったの？　見えないインビジブルなＳＭ嬢さん？　すみませーん！　どっちかっていうと僕、Ｓなんですよー！　攻守交代しましょー！」
誰もいない空間で一人喋り続ける。自分で言っていて、自分が何を言っているのかさっぱり分からない。何故かすらすらと口から出てくる。だが、止める気は無い。

これがしっくりとくる。この支離滅裂さが空洞となっている青年の中を刺激する。
「他に誰も居ないですよーん？　俺様お一人様ですよー？　先に何か性癖とかカミングアウトしてた方がやりやすいっすか？　言っても良いけど引かないでね？　割とハァアドなのが好きだから！」
考えなくても口から言葉が滑り出てくる。他者が聞けば意味不明な言葉だが、白髪の青年にとっては言葉の一つ一つが彼にとって意味の有るものであり、言葉が飛び出てくる度に内にあるものが多いに刺激される。
「それとも予約が必要？　あ、予約名なら、なら、なら……ならららららら？」
だが、肝心の自分の名前だけは思い出すことが出来なかった。頭の中身を絞り出して思い出そうするが、最初の一文字どころか関連するものすら出て来ない。
そのもどかしさは苛立ちになり、即座に怒りとなって爆発する。
「鬱陶しい！　鬱陶しい！　鬱陶しいんだよ！　くそったれがぁぁぁ！　何で出てこないんだよ！　何で忘れてんだよ！　俺を苦しめるんじゃねえよ！　おい！　名前！　名前如きが何様だぁぁぁぁ！」
地団駄を踏み始めたかと思えば、思い出せない名前に怒りをぶつけて喚く。常人には理解し難い行動を、全力で、何の疑問も無く行っていた。
「あがあああああああああああああ！」

「黙れ」
「あああー……ああ？」
　叫ぶ青年に鋭い声が飛ぶ。声の主は、山高帽を被り黒のスーツを着た男性であった。
「どちらさんでしたっけ……？」
「馬鹿が極まったか。遂に私の名すら忘れたようだな、フ■■■」
「あ、それ」
　スーツの男が発した言葉。途中で雑音が混じった様に聞こえなかったが、間違いなくそれこそが自分の求めていたものだと分かった。
「それが俺の名でしょ？　もう一度言ってちょうだーい」
「どうやら真の馬鹿になった様子だな。まさか自分の名すら忘れたとは……」
「うるせえ！　早く言え！　それは俺のもんだろうがよぉぉ！」
「断る、と言ったら？」
「決まってんでしょ……？」
　フリードは口の両端を限界まで吊り上げ、凶笑を見せる。
「喰らって取り込むだーけ。そしたらそれは俺のもん」
「一度に取り込み過ぎて記憶が混乱しているのか？　まあ、いい。私とお前、取り込んだ数に大差は無い。これが最後だ。お前を取り込んだとき、私は主導権を握り奴に復讐が

果たせる！」
「奴？　奴ってなんだっけ？　でも、何だかとってもイヤーな響き」
腕を組みながら、何とか思い出そうとする。
「ま、いいか。あんたを殺れば思い出しそうだし」
が、たった数秒でそれも止めてしまった。

「覚えておけ。奴を殺すのはこの私だ！」
「知ーりませーん！　そんなこと！　先に殺ったもん勝ちでぇぇぇす！」
残った二人は、ただ一人となる為に最後の戦いを始める。

◇

肉塊の体は、既に人の形まで変化していた。人間が肉の皮を全身に被ったら今の様な姿になるだろう。
「人……だよね？」
「恐らくは……」
肉塊の不気味な変化を警戒して木場もイリナも斬りかかれない。どんな反撃をされ

るか警戒し、攻めることよりも守る方に意識が傾けられていた。
すると、肉塊が顔らしき部分を両手で掴み、左右に引っ張り始める。
「な、何？」
頭を左右や前後に振り乱しながら顔を引っ張り続け、暴れる。離れた位置で見るそれは不気味としか表現出来ない光景であった。
顔面を左右に回してもがく肉塊。やがて、布地が裂ける様な音が沈黙の中で響く。
肉塊の頭頂部らしき箇所に裂け目で出来ており、そこから覗かせるのは間違いなく人の毛髪であった。
あの肉塊の中に人がいたという事実に、木場とイリナは驚きを隠せない。
裂け目が出来ればあとは簡単に引き千切られていく。左右に引っ張られる肉塊の表皮。中から現れたそれは――二度目の衝撃が木場たちを襲った。
「う、嘘！」
「ど、どういうことだ？　何故、君が……！」
肉塊の皮の中から出て来たのは、二人もよく知る人物。目を惹く白髪、整った顔立ち、その顔立ちを台無しにする狂気染みた目付きと笑み。
『フリード・セルゼン！』
木場とイリナが口を揃えてその人物の名を叫ぶ。

フリードは、皮を引っ張るのを止め、木場たちの方を向くといっそ無垢とすら感じさせる満面の笑みを見せる。
「そうそう。それそれ！　そんな名前だったわ！」

◇

オーディンは、獣の穢れによって汚染された空間を正しくする為の魔術を頭の中で構築していた。片目を代償として、人間が一生を懸けても得られない魔術の知恵がオーディンの中にある。
時間をかければもっとしっかりとした魔術を創造することが出来るが、今は一分一秒でも惜しいので、急場しのぎとなるが簡易且つ即席の魔術を創り出す。
魔術の構築は済んだ。だが、魔術を使うには魔力が必要となる。その魔力は、獣の穢れのせいで内から外へと出すことが出来ない。
ならば答えは簡単である。内から無理矢理魔力を引き出せば良いだけのこと。
オーディンはグングニルを握り、その穂先を徐に掌へと向けた。
力を込め、黄金の穂先を掌に突き刺し、その状態でグングニルを動かす。
グングニルを伝わって滴る血。掌に刻まれていく傷。しかし、グングニルの動きは止

まらない。
掌に刻んで描かれた魔術文字。血の滴りで赤く染まった土に、その掌を当てる。
「さて、行くとするか」
流れる血と共に体内の魔力を放出する。途端、それに反発し全身に痛みという負荷が掛かってくるが、オーディンは魔力を流すことを止めない。
流血に込められた魔力と大地に染み込んだ魔力が繋ぎ合わさり、そこに発動した魔術が加わる。
歪み、穢れた空間を正し、清浄化する魔術が大地に伝わり、その大地が空に影響を与える。
一般人には何が起きているか分からないだろうが、オーディンの目には空間が点滅、歪曲を連続して繰り返している光景が見えた。無理矢理正そうとしている影響である。
暫く間、目に悪影響を及ぼす光景が続いたがやがて間を置き始め、規模も小さくなり、最後には収まる。同時に体に掛かっていた負荷も消えた。
「――まあまあと言ったところかのぅ」
即席の魔術へのオーディンの評価は、五十点といった所であり満足のいくものではなかった。
あくまでその場しのぎもの。獣がタンニーンによって離されたことで穢れの濃度が

薄まった影響も成功の理由であった。効果と速さを優先したせいで魔術自体の強度は脆い。

（さて、タンニーンの方まで届いているかのぅ）

獣と真っ向から戦っているタンニーンにもこの魔術の効果が伝わって筈だが、こことタンニーンとの位置では穢れの濃度が違う。全く効果が無いまではいかないが、大分魔力を出し難くなっているだろう。尤も何もしなければいずれは獣の穢れのせいで魔術が破壊されるが。

それを維持する為に動けなくなってしまうオーディン。それを歯がゆく感じる。せめて、シンの治療を、と考えたとき背筋に悪寒を感じた。

魔人の気配。オーディンは、その気配の先へ反射的にグングニルを向ける。

「お主……」

グングニルの先にはシンが立っていた。オーディンは、シンが魔人であることは知っている。知っているが、グングニルを向ける程の脅威を感じてはいなかった。魔人の中でもシンの気配は弱い。しかし、だというのに今のオーディンはシンにグングニルを向けている。

「足の怪我は――」

オーディンの目線が下に向くと言葉が途切れる。シンの右膝から下は無い。だが、傷

口から垂れた血が、雑に筆を走らせて描いた様な輪郭だけの右脚を作り、それがシンの体を支えている。
　地面に着いた血の右脚を中心に、ゆっくりと血溜まりが広がっていく。
「どうなっとるんだ、それは」
　シンの右脚の様子を確認する為に一歩前に出るオーディン。すると、オーディンの掌から垂れる血が霧状に変わり、シンの体に向かって伸びていく。
　その現象にオーディンは思わず前に出た体を下げる。すると、伸びていた血は空中で霧散した。
「あまり、近寄らない方がいいですよ。どうも、力を上手く制御出来ないので……」
　シンはオーディンと目を合わせないまま、そう呟いた。彼の目は、タンニーンと獣がいるであろう場所に固定されている。
「一体何が起こった？」
　魔人の気配を濃くさせたシンにオーディンが問う。その言葉には、シンに対する心配と警戒が含まれている。
「取られたものを、取り返してきます」
　シンの返答は、オーディンの問いに沿ったものでは無く、止める間も無くシンは目線の方角に走っていく。

土を駆ける足音と、水が跳ねる様な足音が交互になり、走った後には血の足跡を残していく。
シンの姿は、瞬く間に小さくなる。走り去るシンを、オーディンは止めなかった。声を掛けて制することもしない。
重傷を負った魔人が再び立ち上がり、同種の存在に立ち向かう。この一連の流れ、まるで予め定めてあったかの様に出来過ぎている。
魔人同士の運命かもしれない。しかし、その出来過ぎた運命の裏で誰かがほくそ笑んでいるのをオーディンは感じた。
きっとシンとあの獣が戦えば、潜むものにとって望ましい展開になるかもしれない。この戦いに於いて、最良の結果となるかもしれない。
しかし――
「あー、空気が美味い」
思考するオーディンの側で、若干間の抜けた台詞が聞こえた。
「――大人しくせんでよいのか？」
「お陰様で、大分良くなりましたよ。それにしても、本当にここは空気が美味いっスね」
獣の穢れによって一時的に戦闘不能寸前にまでされたデュリオが、普段通りの覇気の抜けた態度で戻って来ていた。

「それで、シンたんたちは、どこに行きました？」
「じっとしていろ。――次は堕天どころか魂ごと潰されるぞ？」
獣ともう一度戦おうとするデュリオに、オーディンは視線を鋭くし釘を刺す。神滅具で穢れへの抵抗力があるが、それにも限界である。ただでさえ、天使という穢れに対して弱い存在ならばその抵抗力も更に落ちる。
「いやあ、やられっぱなしは嫌ですし、何より自分よりも年下が無茶をしているかもしれないと思うと、つい助けたくなっちゃうんッスよね」
三枚目を気取る様にヘラヘラと軽薄な笑みを見せ、余裕がある風に振る舞うデュリオ。しかし、オーディンの目はそんな上っ面では誤魔化されない。血の通いが悪い蒼白い肌、時折乱れる呼吸、輝きが色褪せている天使の力、万全とは程遠い体調であった。
大分良くなったと言っているが、実情は雀の涙程の回復なのが分かる。いつ倒れてもおかしくない状態を気力によって支えているのが、今のデュリオであった。
天使たちにとって希少な神滅具所有の転生天使である。もし、ここでデュリオが死ぬような事態になれば、それを見過ごしたオーディンの責任になるし、天使と北欧勢力との間に溝が出来ることになる。
警告し、絶対に獣の下へ行かせないように止めるのが正しい選択なのだろう。
「――そうか。無茶はするんではないぞ」

正しい、正しいが、その正しさがこの状況を好転させてくれる訳では無い。魔人相手に無難な選択、分かり易い選択をして勝てる筈が無い。常識に則って勝てる相手ならばとっくの昔に魔人など全滅している。

だからこそオーディンが選ぶのは大多数が選ばない選択。それを選んでこそようやく相手と同じ土俵に立てる。

九十九パーセント失敗すると分かっていながら敢えて残りの一パーセントを選ぶ。そして、自分ならその一パーセントでも成功する、という傲慢なぐらいの自信がないと神などやれはしない。

「ま、死ぬつもりはサラサラ無いですよー。まだまだしたいこともやらなきゃいけないことも山ほどあるんで」

死地に向かおうとする者とは思えないほどその言動は軽い。楽観視している様には見えない。死ぬかもしれないと分かりつつ自分らしく振る舞っているのだろう。

「行くなら足跡を辿ればよい。その先に二人はいる筈じゃ」

オーディンに言われて、デュリオはここで血の足跡に気付き怪訝な顔をする。シンの足跡なのは分かったが、足跡は明らかに失われた右足の形をしており、それも血に塗れている。

「……脚、治ったんスか？」

「何とも言えんのぅ」
曖昧な答え。だが、デュリオはこれ以上考えるのは止め、シンとタンニーンに合流することを優先し、足跡を追おうとする。
「ちょっと待て」
直前にオーディンが呼び止める。
「お主にこれを渡しておく」
「――えっ！」
デュリオはこの時ばかりは普段の飄々とした態度が消え、心底驚いていた。
短い間に色々と驚かされたオーディンだが、それに振り回されるのも少々癪になってきた。今度はこちらから、この戦いに一石を投じる。

◇

もつれあうドラゴンと獣。七つの頭がタンニーンの体に喰らい付く。二つの頭部は、タンニーンの両手が鷲掴みするが、残りの頭部は防げない。
獣の牙がタンニーンの鱗に突き立てられる。ドラゴンの頑強な鱗を砕き、その下にある肉を獣の鋭い牙が穿つ。

神経を一本ずつ火で炙られる様な噛む以上の痛みをタンニーンは感じた。獣は存在そのものが穢れに等しい。牙を濡らす唾液も猛毒以上なのだろう。心身共にどんな悪影響を及ぼすか分かったものではない。

タンニーンは両手に掴んでいる獣の頭を叩き付け合う。二つの頭が一つに融合する。

自由になった手で両脚に噛み付いていた二つの頭を鱗ごと剥がし、一方の開いている口の中にもう一方の頭の角を刺し、口蓋を貫いて頭頂部まで貫通させる。

脇腹に喰らい付いていた頭の一つが、牙を離してタンニーンの腕に噛み付こうとするが、タンニーンはその頭を掴み、掴んでいる隙を狙って襲ってきた別の頭の口の中に捻じ込む。顎関節が限界以上まで開かれ閉じることが出来なくなった頭部を踏み付け、その重さで閉じるのを手伝う。獣の牙によってその頭部は切断され、首の断面からはどす黒い血が噴き出た。

残り一つとなった頭は、首を見た目以上に伸ばしてタンニーンの喉元を食い千切ろうとするも、タンニーンはその首を片手で掴んで締め、伸びた頭はもう片方の手で掴み取ると同時に百八十度捻じ曲げる。

七つの頭部をどれも無残な状態へと変えた後にタンニーンは獣から離れた。

「ふぅ……」

一息入れる。ようやく少し休憩に入れる。

バキバキと凄まじい音が鳴る。見ると、口に頭部を突っ込まれた頭が、その頭部を噛み砕いていた。砕き、咀嚼し、呑み込む。すると、切断されて首の断面から黒い血が風船の様に膨らみ、弾けるとその中から無傷の頭部が現れる。

次に剥がれる音と粘着音が合わさった不快音。二つに融合された頭部が剥がれ、顔を半分潰された状態のままタンニーンの方を見る。

口内を角で突き刺された頭部は口の中からその頭部を吐き出し、無理矢理入れられた影響のせいで顎が外れており下顎が左右に揺れる。

首を百八十度捻じ曲げられ真後ろを見ている頭部は、そこか更に首を百八十度回転させて正面を向く。首の表皮は螺旋状に重なり、骨の一部が内から突いているのか首を歪な形にする。

「……ふぅ」

タンニーンはもう一息入れて戦闘態勢に入る。さっきからこれの繰り返しである。

潰そうが貫こうが獣はその桁外れの生命力で死なない。一時的に動きを止めることは出来るが、少し時間が経てばすぐに動き始める。その間にタンニーンが出来ることがあるとすれば、小休憩程度であった。

戦っていて分かったことだが、この獣は物理的な攻撃が一切効かない。効かないどころか物理攻撃の力をそのまま再生能力に反転させている節がある。一度半分に抉れた

獣顔面を殴打したとき、他の部位とは比べ物にならない速度で再生してみせた。
タンニーンの推測の域は出ないが、それ以降直接的な攻撃を控え、獣自身を利用した戦い方に切り替えている。しかし、文字通り火力を封じられているタンニーンは徐々に追い込まれている。
生命力という点に関しては、間違いなくタンニーンよりも獣の方が上である。戦う度にタンニーンの傷は増えていく一方。近いうちに先に動けなくなるのはタンニーンの方である。
どうにかこの状況を打破する方法は無いかと考える。そのとき、体に纏わりついていたものが消えた様な感覚を覚えた。

（オーディンか？）
試しに喉の奥で炎を灯す。普段よりも力を消費するが、何時でもブレスを吐けることを確認出来た。タンニーンの体を張った時間稼ぎが実を結ぶ。
（まだいけるな……！）
内に火が灯ることで、それがタンニーンの闘志にも燃え移る。戦いの手段が増えれば、それだけ勝つ手段が増える。
獣の体が半壊している内にダメージを与えられるだけ与える為に、喉の奥の炎を更に

燃焼させ、それを吐き出す。
「――んっ！」
つもりであったが、視界にあるものが入り中断せざるを得なかった。
獣は重傷の筈の身体を痛みなど感じない様に動かし、タンニーンに飛び掛かろうとするが、あることに気付く。
体中の傷から血が煙の様に立ち昇り、どこかに向かっていく。幾筋の血が向かうのは獣の背後。
獣は目の前のタンニーンよりも自分の体に起こった異変を調べることを優先し、振り返る。
獣から出る血は、いつの間にか背後に立っていたシンの体に吸い込まれていた。
「俺の脚は美味かったか？」
向かい合う獣に、シンは問う。獣は答える代わりに、シンの頭蓋を噛み砕く為に襲い掛かった。
獣が襲い掛かるのと、シンが前に踏み込むのはほぼ同時であり、シンは獣の懐に入り込む形となる。
「お前の血は不味いな」
吐き捨てると共に、シンは真下から獣の腹を蹴り上げた。それも無い筈の右脚で。

オーディンが見た時は、血の線で描かれた輪郭だけの脚であった。しかし、獣の力を取り込んだことで、輪郭の中が血で満たされて血の右脚と化し、その右脚で獣を蹴る。

シンの登場に驚くも、タンニーンは獣に物理攻撃は効かないと声を飛ばすつもりであった。だが、その声は飛ぶ前に呑み込まれた。

獣の口から血塊が吐き出される。タンニーンとの戦いでそんなのは見せたことが無い。どういう理由か、シンの攻撃が獣に効いていた。

七つの頭が一斉に血を吐き、体が宙に浮きあがる。獣が落下し始めるとシンは同じ箇所をもう一度蹴り上げた。

再び宙に浮き上がる獣。今度は両翼を羽ばたかせてシンから離れた場所に着地するが、四肢が地面についた途端、獣はもう一度血を吐いた。

降り立った獣の方にシンは向き直る。右脚は鮮血の様な赤がいつの間にか乾いた血を思わせる赤黒い色に変色していた。

蹴りの反動からか赤黒い脚に亀裂が生じる。すると赤黒い血が剥がれ落ち、中から無傷の右脚が現れた。だが、元の右脚とは異なっていた。

回路図の様に膝から足先にまで伸びる紋様。両手と同じ、紋様に沿って蛍の様な淡い光を放っている。

新しい右脚の感触を確かめる様に爪先で地面を数度叩く。前と変わらないことが分

かると、シンは獣に向かって右足から一歩踏み込んだ。
その一歩で間合いに入れたのか、獣の吐いた血がシンに向かって吸い込まれていく。だが、先程とは違いその吸い込む力は弱かった。
無数に分かれて向かって来ていたのが数えられる程度になり、向かってくる血の量も薄い。明らかに力が落ちている。
まだこの力を制御出来ていないシンは、これを不思議に思うがすぐに理由を察した。
あの時は、無い右脚を直す為に大量の血を必要としていたのだ。しかし、直ったせいで必要が無くなった。要は空きが無くなり力が弱まった、シンはそう考えた。
この力は、獣と戦う為に必要なものである。どうやってさっきまでの威力を維持すればいいのか。
答えはすぐに出た。空きが無いなら作ればいい。
シンは、己の首筋に右手の指先を当てる。そして、一瞬の躊躇も無く首筋を引き裂いた。
「なっ！」
タンニーンはシンの蛮行に絶句する。
引き裂かれた傷から大量の血が流れ出て、シンの衣服を赤く染め上げる。
大量出血の途端、吸い込まれていく血の量が増す。

「これで、空きが出来るな」

赤い獣の前に、自らの血で己を赤く染める魔人(ケモノ)が立つ。

神罰、力尽

首から勢い良く流れ出る血は、首筋を伝うまではまだ温かさを感じられたが、衣服を伝う頃には熱が抜け、冷たさしか感じない。血は命であり、血が命を内包する証明がこの温かさだとすれば、今体を伝っているものはただの液体にしか過ぎない。

冷たい液体ならば気を向ける必要など無く、それを惜しむことも無い。

自ら手で首を裂き、流血させたシンはその無茶苦茶な理屈で自分を誤魔化す様に納得させ、体内から血を噴き出させながら動き始める。

手負いとなった獣に近づくだけで、獣の傷から血が気体となって強制的に吸い出され、シンの体に取り込まれていく。

意識を失ってもおかしくは無い量の血液を獣から搾取し、それで輸血しつつ塞がらない傷から体外へ流す。

暴走状態にあるこの力を利用し、シンは獣の命を削り続ける。

命を貪り、それを吐き捨て、また貪る。攻撃というよりも命に対する冒涜そのもの行為。他者に嫌悪感を与えても仕方の無い攻撃方法。しかし、それを迷うことなく実行するシンの精神は、本人も気付かぬ内に常識の箍が外れていく。

だが、獣の方も黙って自分の命を餌とはさせない。大量の血を奪われ続けているのに、それを感じさせることなく獣は穢れた咆哮を上げる。
獣の生命もまた通常の認識では測れない領域にあった。
タンニーンによって半壊した七つの頭が、一斉にシンを見る。シンはその目線を受けて立ち止まった。獣の目線に怯んだからでは無い。ここで迎え撃つという意思の表示である。
獣はそれに応じる様に、一対の翼を羽ばたかせ、その場で跳躍。数十メートルの高度まで跳び上がると、そこからシン目掛けて滑空した。
獣は、滑空しながら七つの内三つの頭が咆哮する。三つの咆哮は重なり合って増幅され、神経を削るだけでなく直接的な破壊も秘めた見えざる破壊へと変わる。
シンは右手に魔力剣を形成する。その最中に血が流れ込み、魔力と血が混じり合って魔力剣の中で霞の様になり、魔力の輝きに照らされて赤色の魔力剣と化す。
破壊の咆哮に向けて、同じく破壊の波をシンは放つ。
咆哮に衝突する赤く色付いた陽炎。ぶつかり合う箇所だけ光景が歪み、その歪みと歪みが互いを破壊する為に更に空間をおかしくさせていく。
力と力の押し付け合い。勝ったのは――無し。互いの力を消し去ることが出来ず、相殺してしまい、残ったのはシンの前髪と獣の体毛を僅かに撫でるそよ風程度のみ。

攻撃が掻き消されたと理解する獣。だが、何も問題は無かった。三つの頭が動くと同時に残り四つの頭も攻撃に入っていた。

獣たちの口内に輝きを蓄える。その光は、喉から青白い光が透かし見える程の光量。

互いの一手目が互角と分かった瞬間には、四つの口から青白い光――雷光が飛び出していた。

その速度は雷と同じ。光がシンの目に映ったときにはもう遅い。四条の雷がシンの体に刺さる。シンの耳に雷鳴が届いたのは、丁度そのときであった。

シンが雷撃を受ける姿に、タンニーンは言葉を失う。本来ならば自分が盾となるべきであった。しかし、シンの自らの命を顧みない行為に唖然とさせられていたこと、負傷した体が咄嗟に動かなかったことがタンニーンの反応を遅らせてしまう。

電撃の直撃を見て動けなかった自分への怒りと後悔が同時に襲ってくる。

胸部に二。腹部に一。右肩に一。そのうちの一つは心臓を直撃していた。

身を以ってその威力を知っているからこそ、次に見える最悪の光景が頭を過ってしまう。

しかし、その最悪の光景はシン自身によって覆される。

「何だと……！」

体を電撃によって貫かれたと思われたが、貫かれたのは衣服だけ。その下のシンの体

に僅かな焦げ跡を残す程度。体内に流れ、全身の細胞を焼き尽す筈だった電撃は、シンの体表で留まっているのか体から白い火花となって音を立てている。

シンが獣から血を取り込んで得たのは失った右脚だけではない。電撃を放つ獣からその力も奪っていた。しかし、これはあくまで偶然のこと。シンも電気に強い耐性を持ったことを今知った。耐性があると分かっていて獣の電撃を受けたという訳では無い。

何せ、最初から相打ち狙いだったからだ。

ヒュー、ヒュー。と火花の音と混じりながら風が抜ける音が聞こえる。続いて溺れているとも泡立たせる音ともとれるゴボゴボという音。

その音は、獣の方から聞こえた。

獣の首に、いつの間にか反対側が見える穴が貫通している。風の抜ける音はこの穴から獣の呼気が抜ける音。溺れる音、泡立つ音はそこから零れ出る獣の血であった。

獣が電撃を吐くと同時に、シンは左眼で獣を凝視していた。視線は螺旋の様に絡み合う蛇へと転じ、蛇が獣の首を貫いた。

獣の喉から出た血が、シンに吸い込まれる。取り込んだ血が、シンの体に付いた僅かな焦げ跡を再生させる。

シンは、頭の中でイメージを描く。体中を蛇の様に駆け巡る電流を自由に操るイメー

ジを。

その図に従う様に、帯電していたシンの体から電気が『放電』され、元の主であった負獣へ反逆を起こす。

獣の傷口を狙って飛び込む電撃。場には獣の肉が焦げるニオイが――しない。電撃に焼かれる筈の傷は、それで穴を埋める様にして再生していき、『放電』が終わる頃にはタンニーンとシンが付けた傷が半分ほど無くなっていた。シンが与えた喉の傷も完治している。

（……調子に乗ったつもりは無かったんだが、間違えたな）

素直に悪手であったと認める。打撃が効き難いだけでなく、電気に対して耐性どころか吸収し、自分の力に変える能力もあることを知る。

シンが獣から奪ったと思った力は、それの劣化した一部らしい。

（いや、やっぱり調子に乗っていたかもしれないな）

気付かない内に高揚していたとシンは客観的に見る。右脚を奪った相手への報復の一撃。失った物を取り戻したこと。知らない内に手に入れた力。それを新しい玩具の如く即座に使ったこと。

積み重ねたことが自分の判断を誤らせた。だが、そう分かっていても自分を止められる気がしない。

流れ出て滴る血は、こんなにも冷たいのに。体内を駆け巡る血はこんなにも熱い。血流の速さが摩擦を起こして熱を生じさせているのかと有り得ないこと思ってしまう。

或いは、今もなお吸い続けている獣の血に酔っているのかもしれない。獣の血を取り込む自分もまた獣に近づいているのでは、とシンは考える。

だが、それで良いと思った。敵であろうと他者の血を啜る様な真似など獣同然。ならば獣同士争い、殺し合い、共喰いし、最期にはどちらも死に絶えればいい。その方が世が少し平和になる。

破滅願望の様な死を想うシンに相対しながら、獣の七つの頭が天に向かって叫びを上げる。悲鳴、苦鳴、憤怒、嘲笑、悲哀、殺意、狂気全てが混じり合い、聞く者の心を穢し汚染させる、聞くに堪えない叫び声であった。

その聞くに堪えない声を上げながら、獣はシンへ突進する。接近すれば接近するだけ傷から吸い取られる血の量は増す。だが、命を削られようとも獣は全く躊躇しない。

死に対する恐怖が無いのか。底無しの生命力を持っているという自負か。

七つの頭が同時に牙を剥き、左右上下とあらゆる逃げ場を封じた時差の無い七連攻撃。捌き切れなければ肉片一つ残らず、守っても同じく一欠片も残らない。

シンが選んだ手段は――

ガチン、という牙がぶつかり合う音が七つ重なる。それは獣の攻撃は空振った証明。

貪る筈であったシンの姿が無い。
何処に消えたのか。
七つの内六つの頭が一斉に残る一つの頭を見る。その頭の頸部にシンがしがみついている。
七つ攻撃に対してシンが選んだのは前進。前に進むことで自分から距離を詰めて、首同士の間が広い内にすり抜けたのだ。
頸部にいるシンを振り払おうと獣は首を左右に激しく振る。しかし、その程度のうごきではシンを引き剥がすことなど出来ない。
揺さぶられながらも、シンの目は頸部にある傷を見ていた。タンニーンとの戦闘で付けられた深く抉られた縦長の傷。
何を思ったのか、シンはその傷に喰らい付く。両腕だけでなく口まで使って文字通りに噛り付いてでも離れないという意思の表れか。
当然、そんな受け身の為の行動では無い。攻める為の行動である。
獣の傷に噛み付いたまま、シンは肺を絞り、その傷に息を吹き込む。吐き出される息は、吐息ではなく魔力によって過熱され橙色に燃え上がる炎の息。
傷から流し込まれた炎の息は、獣の肉を内から焼き崩し、内部に達すると獣の口から吹き込んだ炎が噴き上がる。

そのまま内部から焼き尽そうとするが、残りの頭部が大人しくされるがまま見学している筈も無かった。

顔半分が潰れている頭部が、シンの脚に噛み付き引き離そうとする。幸い、獣の首ごとシンの脚を噛んだせいで噛み切るまでには至らなかったが、それでも鋭い牙が脹脛に数本刺さり、その内の何本かは肉を貫通していた。

一気に噛み切られるまでの間が生まれたが、それも僅かなもの。獣がもう一度顎に力を込めれば、自分の肉ごとシンの足を食い千切るだろう。

そうなる前にシンは動く。貫かれる痛みも、猛毒に侵された様な傷口の熱も全て些末なこと。動かなければ痛みは死に昇華する。

シンは炎を吹き込んでいた口と片手を離し、脚に噛み付いている獣の潰れている側頭部にその手を突き入れる。内部の肉が手の侵入を拒む様に硬直するが、指先に魔力を集中させたことで、それを穿ちながら奥に進んで行く。

手が頭部中心まで辿り着く。ここまでしても獣の顎はしっかりとシンの脚を咥えており、力が緩まない。

それならば、シンの攻撃も次へと移るだけのこと。

指先に集中していた魔力を、掌全体に行き渡らせる。本来両手を使う技だが、今回は片手のみ。狙いも発動も安定しなくなるが、獣の頭の中ならば何の問題は無い。

掌の送られる魔力が一定量を超える。すると、内部の魔力の光が漏れ出したのか、獣の両眼が蛍光色の光を放つ。

直後、掌から撃たれる光弾。密着をゼロ距離だとすれば内部から放つマイナス距離の一撃が獣の頭部上半分を粉砕する。

頭を二つ潰すが、獣の動きが弱まることは無く、残りの頭部がシンに迫る。

頸部から降りて、獣の背に降り立ったシン。途端獣は叫び、激しく体を揺さぶる。そこに居ることを拒絶するかの様に。

感情を一切感じさせない獣に、初めて見えた感情的とも呼べる行動。獣の背に乗るということは何か獣にとって特別な意味を持っているのかもしれない。

しかし、シンにとってそんな事情などどうでもいいこと。五指を広げ、足元目掛けて右手を振り下ろす。

五指から放たれる収束された魔力が、獣の背に五本の裂傷を刻み込んだ。開いた傷からは赤黒い血が噴き出し、それがシンの体へと取り込まれる。血を取り込むことで、首の傷も、先程噛み付かれた脚の傷も塞がる。

もう一度、シンは右手を振り下ろそうとする。だが、横から伸びてきた獣の口が、右手を咥える。

牙が手に食い込むと同時に、右手にありったけの力を込めた。容易く噛み千切られ無

い為に。
左手で右手を咥え込む頭部に仕掛けようとするも、その前に左肩に獣が噛み付き動きを制する。
両腕を動かせなくすると、脇腹、左脚に獣の頭が喰らい付く。
「くっ」
シンの口から呻く声が洩れた。痛みによって洩れた声では無く、無理矢理体を動かす為に洩れた声である。
傷などはどうでもいい。血を吸えば塞がる。寧ろ手間が省けたとすら思っていた。しかし、それでは追い付かない程のダメージを受けたら――
残る一つの頭が、大口を開けてシンの頭を噛み砕こうとしている。流石に頭部を失って生きていると思える程、シンは自分の生命力を過信していない。
獣の歪に連なった牙が、シンの頭ごと命を砕こうとする。
牙が届くまでの僅かの間、シンは右足で足元を強く踏み付けた。
反動で体が後ろに反らされ、噛み付いている獣の牙が傷を更に抉っていくが構わない。
仰け反った体勢から右足を蹴り上げる。獣の顎を下から蹴り、下顎を変形させ強制的に閉ざす。だが、この一撃では足りない。

砕かれた顎が、右足を除けて開こうとする。もう一撃、ダメ押しとなるものを放たなければならない。
ふと、脳裏に浮かび上がるイメージ。右足が帯電したかの様に輝き、その輝きを後ろ回し蹴りと共に放つ。
今までの一度も試したことが無いのにやたら具体的な映像であったが、今はそれについてあれこれと考える暇は無い。
イチかバチか。やったことは無いが、右脚にまで紋様が浮かび上がった今だからこそ可能なのかもしれない。
砕いた獣の顎に、収束された魔力が撃ち込まれる。右足から放たれたそれは、獣の顎を下から撃ち抜いたそれは、獣の顔も貫き消失させる。
魔力が通過した後には、白煙を上げ断面と化した獣の顔。
頭をまた一つ潰したシンは、体に噛み付いている残りの頭を狙い、その全身から魔力を放とうとする。
しかし、シンの動きに気付いた獣は、一つを除いて噛み付くのを止め、素早く頭を引く。残る右手に噛み付いていた頭は、頭ごとシンを振り回し、投げ飛ばした。
空中に身を投げ出されるシン。目線の下に地面が見える。上下逆さまになっている体勢を宙にいるうちに直し、勢いが弱まり落下すると両足から地面へと着地した。

着地してもまだ勢いは止まらず地表を滑っていく。爪先を立て速度を殺すが、それでも着地した場所から十メートル以上も離れていた。
（左足もこれだったらもっと早く止まれたかもな）
素足の右と靴を履いた左足を見る。地面に刻まれたブレーキの痕は、左よりも右の方が深かった。
（……左も右と同じになったらもっと戦い易くなるのか？）
何の疑問も抱かずにそんなことを考える。戦うことだけに没頭し始め、常識から思考が外れてもシンは何もおかしいと思っていない。
（いっそのこと……）
独りである故に誰も彼を止めることは出来ない。考えは過激になり、狂気を帯び、死に侵されていく。
自分の命を軽んじ始める。それはいずれ他者の命すら軽んじることへの一歩。その道を突き進むならば、シンという存在は本当の意味で魔人と成る。もし、ここに彼の仲魔がいればここまでならなかったのかもしれない。彼女らは、共に戦い庇護し合う存在であると同時に、シンにとってブレーキでもあった。
彼女たちが居ない今、シンは獣の暴力と死に引っ張られる形で自らもそれに染まっていく。ある意味で、獣の穢れに毒されていると言ってもいい。

シンの右手に力が込められていく。痛みも恐怖も無い。刀剣よりも鋭く、綺麗に斬り落とし――
「そこまでにしておけ」
背後から伸ばされた大きな爪が、シンの肩に置かれる。
タンニーンは、シンが何を考えていたのかを見抜いたのか、自分への凶行の前にそれを止める。
「……今の俺に近付かない方がいい。この力をまだ制御出来ていない」
タンニーンの傷口から血が奪われ、シンへと注がれていく。
「構わん。欲しければくれてやる。だが、代わりに俺の話を聞け」
シンは、右手から力が抜けていくのが分かった。
「お前の戦いは危なっかしいな。見ていてひやひやさせられる」
獣に対し、自ら接近戦を挑んでいったせいでタンニーンはシンを援護することが出来なかった。タンニーンの巨体から放たれる攻撃は、それに見合って規模も大きい。獣を攻撃してシンを巻き込む可能性が高かった。
「あまり綱渡りな戦いをするな。対応が難しくなる」
「俺は――」
「少し待て」

何か言おうとするシンを遮った後、タンニーンは口を開け、獣に向けてブレスを吐いた。

太陽を連想させる巨大な火の玉が、傷を再生しようとしている獣に着弾すると、大地や天を焦がす火柱となり、その中で獣を焼く。

無傷ならば獣は例え燃やされていようと行動出来たが、頭を幾つも失い、体の至る箇所を負傷している今の状態では流石にタンニーンの炎は応えるらしく、炎の中で身を丸める。それでも生きている辺り、やはり獣の生命力は次元が違う。

「これで時間を稼げるな」

さらりと言うタンニーンだが、獣に受けた傷からかなりの量の血が出ている。オーディンの魔術によって魔力封じの効果は弱まったが、それでも負荷はまだありタンニーンの場合は傷口が開くという形で現れている。

その流れ出る血が、シンへと吸収されるのだから、シンにとって最悪の気分である。

「いちいち気にするな。行動も結果も俺の責任で、俺の意思だ」

「だが――」

「少し黙って俺の話を聞け」

不満はあるが、シンは大人しく口を閉じる。

「いいか良く聞け。獣を倒す為にお前自身も獣になる必要は無い。力に溺れるな。血に

酔うな。痛みに鈍感になるな。己を見失って獣へ堕ちることの醜さは、あの時の俺の醜態で学んだ筈だ」

自嘲と自虐を込め復讐心に憑りつかれてシンに襲い掛かったことを思い出させる。

「己を保て。もし保てなくなったら頼れ。少なくとも今はここにお前に手を貸せるドラゴンが一頭いる――少々傷モノだがな」

冗談を混ぜながらももっと他人を頼りにするよう忠言する。或いは警告なのかもしれない。

シンの人生に分岐点が在り、仮に今とは違う選択を選んだとき、シンは孤高の道を歩むこととなっていただろう。誰にも頼らず自分だけの力で切り拓く道。そのシンは、今のシンよりも数歩先を行く強さを得て、唯一無二の強さに至っていただろう。

しかし、代償として己を見失いシンはシンとしていられず全てを敵に回す。隣に並ぶ者は無い、先に立ち塞がる者は無い、後を追う者は無い孤独の強さ。

「――頭に血が昇り過ぎていたみたいだ」

だが、所詮はもしもの話に過ぎない。シンがその道に進むには、他者との縁を結び過ぎていた。

タンニーンから吸い出される血の量が減り始め、最後には無差別の吸血が止まる。立ち止まったことで、ようやく力の扱い方のコツが分かった。

「ちょっと手伝ってくれるか？」
改めて協力してくれるようにタンニーンに頼む。
「前に言った筈だ。必要があれば呼べ、尽きるまでお前の為に我が力を揮おう、と」
当然と言わんばかりにタンニーンはそれを受ける。
肩を並べ立つ魔人とドラゴン。とは言え、二人ともかなりの深手を負っており有利とは言えない状況。獣も方が重傷だが、あちらの方は生命力の底から分からない。本当に死ぬのかさえ疑問に思えてくる。
その疑問を深めさせるように獣が超高熱の炎を突き破る。その姿は悲惨の一言であり、表皮は焼け爛れ、傷を負った部分は完全に炭化している。赤黒かった見た目が、今はほぼ黒一色と化していた。
しかし、当の獣は傷などお構いなく接近してくる。その最中に炭化している前脚が踏み出した衝撃で崩れるが、次の一歩を踏み出すときには前脚の断面から骨が突き出し、二歩目で肉が絡まっていき、三歩目には脚の形となる。焼け爛れた部位や傷口が目で分かる速度で肉が盛り上がり、部品を交換する速さで元に戻っていく。
破壊された頭部も骨から再生していき、元の形にしようと蠢いている。
悲惨という感想が一瞬にして吹き飛ぶ程の再生能力の高さ。絶命させるには、少なくとも原型が無くなるまでダメージを与えないといけないらしい。

「――いけそうか？」
「――まあ、何とか」
いっそ羨ましさすら覚える程の再生を見せつけられ、体中の痛みを感じながらタンニーンとシンは軽く言葉を交わす。
冷静になると同時に、シンは魔人としての力も落ちた、もとい落ち着いたのを感じる。先程の様に傷を短期間で治す、ましてや脚を生やすことなど出来る気がしない。シンの精神が魔人に寄れば寄る程に肉体はそれに呼応する様子。早く魔人になれと肉体が催促しているように思えた。
使えないなら使えないで仕方が無いと割り切ることに決めた。ないものねだりはしない。今は今ある力で戦うのみ。
まともに動けるまで再生したのか、獣の速度が歩きから徐々に速まり走りに変わる。それでも剥き出しの四肢を含んだ足で奔る姿は痛々しさと悍ましさを感じさせた。
真っ向から迎え打とうとするシンとタンニーン。すると、二人の間をすり抜けてフワフワと飛んで行く小さなシャボン玉。
シャボン玉はそのまま走り寄って来る獣に向かって行き、獣に触れると儚く弾ける――ことはなく、瞬く間に獣を包み込む巨大なシャボン玉と化した。
「間に合ったかな？」

背後から聞こえる声。振り向きたいところだが、目の前に獣がいるせいで気軽には出来ない。獣は自分を閉じ込めるシャボン玉に爪を立てるが、シャボン玉の膜はその爪を通さず、突き立てた分だけ伸びる。喰らい付くが牙も通じず、吼えるが音すら通さず、雷撃を放っても膜の外に出ること無く内側で止められる。

薄い膜一枚によって獣は完全に閉じ込められていた。

『煌天雷獄（ゼニス・テンペスト）』の禁手『聖天虹使の必罰（フラン・エツロ・ディ・コロリ・デル・アルコバレーノ）、終末の綺羅星（スペランツァ・ディ・ブリスコラ）』のシャボン玉は、ちょっとやそっとじゃ割れないよ。ましてやお前専用に特別力を込めてあるからね」

非常に長い禁手名を言いながら、声が近付いて来る。その声の主は、シンとタンニーンの間に入ってきた。

「大丈夫なのか？」

「心配ありがとさん。ま、何とかね」

シンは隣に並ぶデュリオを横目で見ながら尋ねる。デュリオは軽い態度であったが、その両眼には、衣服の一部を破いて出来た布が巻かれており、それで視界を閉ざしていた。

「ああ、これ？」

目を閉ざされた状態でも布越しで視線に気付いたのか、デュリオが両眼の布に触れる。

「オーディン様の魔術を刻んだ即席の穢れ防止アイテムだよ。こうでもしないと影響を受けるからね。おかげでここまで来るのに時間が掛かったよ、ごめんね」
視界が使えない分、肌で獣の気配を感じ取り、デュリオはここまで来ていた。獣の気配を感じるだけでもかなり消耗したが、何とか尽きる前に辿り着けた。
「本当ならあのシャボン玉の中であらゆる天罰を受けてもらいたいところだけど、情けないことに、そこまで力は残って無いんだよね」
何千ものシャボン玉を出し、それに閉じ込め、中の対象に業火、突風、冷気、雷などありとあらゆる自然現象を次々に発生させるのが、デュリオの禁手『聖天虹使の必罰、終末の綺羅星』なのだが、獣の穢れによって体力を消耗しているデュリオにはシャボン玉を一個で獣を閉じ込めるのが精一杯であった。
「――でも、代わりにとびっきりの天罰を用意しといたから」
デュリオが指を上に向けると、シャボン玉が上に昇っていく。
「ま、天罰というよりは神罰かな？」
シャボン玉の中で空間の一部が歪み、そこから黄金の光が放たれる。目を覆いそうになるほどの輝き。その光はシンもタンニーンも見覚えがある。
「まさか――！」
タンニーンは驚愕する、シャボン玉の中に現れた三又の槍。勝利へ導く神の槍。

「グングニルか！」
「大正解」
密閉された空間の中で黄金の光が奔り、獣を貫く。
光は止まることを知らず、黄金の軌跡でシャボン玉の中を埋め尽くす勢いで疾走し続けた。
シャボン玉によって自由に身動きがとれず、避けることも出来ない獣はグングニルの必刺の一撃をその身に受け続ける。
「オーディンがグングニルを貸し与えるとは……それも他勢力に」
「俺も渡されたときは驚いちゃいましたけどね」
神のみが扱うことを許された武具である。その価値は神滅具に勝るとも劣らない。それを貸すなど以ての外。ましてや天使に与えるなど前代未聞である。だが、見方を変えるとそれが必要な程の相手だと意味している。
体中に穴を開けられながらも獣は抵抗し、飛翔するグングニルを止めようとする。しかし、獣が一動く間にグングニルは十穿つ。
「行けるか？　このまま」
「無理。あれは本来俺には扱えない物だから、オーディン様が籠めた魔力の分しか動かないよ。そして、それもそろそろ切れる」

「分かった。なら、シャボン玉を限界まで上げてくれ。切れたと同時に俺とタンニーンが全力で仕掛ける」
「なら」
デュリオが上を指差すと、シャボン玉の高度が上がっていく。その間にもグングニルの猛攻は止まらない。
「あー、あと十秒ぐらいで終わりそう」
デュリオがグングニルの残り稼働時間を教える。
『十分だ』
シンとタンニーンは、揃って声を出し最大の一撃を放つ準備に入る。
シンがイメージするのは、獣との戦いで使ったあの一撃。襲われる間際の為不完全な溜めから放ったが、二度目は十分な猶予がある。
右足に体中の魔力を集束させていく。やっていることは今までとは然程変わらない。魔力剣、光弾、全身から放つ魔弾それらで培った技術を使う。
違う点があるとすれば、文字通り全身の魔力を籠めるということだけ。
右足に流し込まれた魔力が、行き場を求めて発光し、青白い火花を散らす。気を抜けば足の魔力が暴発して肉体すらも破壊しかねない危険な状態、それを冷や汗一つかくことなくやる。

「あと五秒」

タンニーンもまた出し惜しみすることなく全ての力をブレスに籠める。『魔龍聖』の名で通っていた頃のタンニーンの火の息は、隕石の衝撃に等しいとまで言われた。獣によって力に制限が掛かる状態で、その力を発揮するのは難しい。

難しいからこそ、敢えて超える。己の限界を超えてこそドラゴンであり、ましてや伝説と謳われた龍王に名を連ねていた。この逆行こそがかつての自分を超えるとき。

一度降りた龍王の名を、もう一度取り戻すにはそれぐらい超えてこそである。

四、三、二、一とデュリオがカウントダウンをしていく。

「――ゼロ」

デュリオが告げると同時にシャボン玉内を神速で飛び回っていたグングニルが元の位置へと戻っていく。同じタイミングで獣を包んでいたシャボン玉が割れた。

宙に放りだされた獣。シャボン玉で貫かれて溜まった赤黒い血が、雨の様に地面へ降り注がれる。

獣の動きを止め、攻撃の妨げとなっていたシャボン玉が消えると二人は動く。

先に動いたのはシン。

右足を軸にして体を大きく回す。獣に背を向ける形となると、軸足を右から左に切り変えて更に回転を強めながら右足を持ち上げる。

狙うは上空にいる獣。持ち上げられた右足が斜め上へ軌道を変える。
右足が真っ直ぐに獣へと伸ばされ、狙いが定まったとき右足に籠めた魔力が蹴りの加速によって撃ち出された。
獣の頭も吹き飛ばした魔力。その形は魔力の槍、あるいは尾を引きながら飛んでいく流星。収束された魔力は途中で無数の魔槍に分かれ、それぞれが直線、弧と異なる軌道を描きながらグングニルによって負わされた傷の中へと飛び込んでいった。
既に出来た入口から入り、獣の体を内側から蹂躙し、出てくるのは既存の出口ではなく新しく作られた出口。肩の傷から入った魔槍は腹から飛び出し、腹から入った魔槍は背から、首から入ったものは、眼から出るなどして獣の傷穴を倍にする。
己の血で赤黒く染まる獣であったが、全身を橙色に照らされる。獣の目に反射して映るのは押し固められた業火であり、圧縮された超高熱の塊。
触れる前から流れ出る血が乾くのを通り越して蒸発していき、獣の表皮が燃え上がっていき、塊を見ていた獣の目からは瞬時に水気が抜け切る。
「随分と風通しがいい見た目になったな」
タンニーンは口から残った炎を零しながら、獣を揶揄する。
「次は俺が火通りを確認してやる」
その言葉の後に、タンニーンの炎が獣を呑み込む。炎は傷から獣の体内に入り込み、

内から焼き、更に外からも焼く。逃れられない内外からの劫火は、獣のありとあらゆるものを焼き尽す。

そのままバトルフィールドを覆う天井の結界まで打ち上げ、『絶霧』によって作られた壁へ衝突すると爆発を起こす。

天井が夕日色に染め上げられ、バトルフィールド内全体の温度が十度以上上がる。地表で放ったら確実に死者が出る規模の威力であった。

後に判明することだが、このタンニーンの炎は『絶霧』の結界の一部を焼失させていた。

数秒後、空から焼き尽くされた獣の成れの果てが地面へと落ちる。

獣は、動くことは無かった。

◇

協力するか否か。協力すれば知らないことを全て教える。ベルから持ち掛けられた取引。

（まるで悪魔との契約だな）

どちらを選ぶという悩みよりも先に、アザゼルはそんなことを考えていた。

全く心惹かれない、と言えば嘘になる。アザゼルとて一定の知的欲求はある。
「さーて、どうしたもんかね……」
わざとらしく言葉に出し、相手を焦らす態度をとるアザゼル。少しでも相手の反応を引き出し、ベルという存在を見極める為の一種の芝居であり挑発でもある。
向こうはそれなりアザゼルのことを知っているが、アザゼルはベルのことを何も知らない。故に今の態度である。
僅かな変化でも見逃さない、貴重な情報になる。アザゼルは、ベルがどの様な反応を示すか淡い期待を抱く。
すると、ベルはアザゼルを見上げるのを止め、視線を別の方向に向ける。気分を害した、という反応では無い。
「どうやらもうすぐに終わりそうだ。答えを聞くのは、彼が来てからでも遅くない」
「分かり切っていたこと。クルゼレイ、少し、我の力に酔い過ぎ」
いつの間にかオーフィスとルイもこちらに移動していた。ベルもオーフィスもだが、当たり前のようにアザゼルに感知されずに移動する。アザゼルとしては、実力を暗に見せつけられている気分であり、その差に軽く頭痛がする。
それを面に出さず、アザゼルもオーフィスたちが見ている方向に視線を移す。
下級悪魔ならばすぐに消し飛んでしまうだろうクルゼレイが発する魔力の奔流。そ

の中でサーゼクスは無表情のまま立っていた。
クルゼレイは天に向けて手を掲げる。魔力の奔流は、その手の中に集い、渦巻く巨大な球体となる。
「消え失せろ！　偽りの魔王よ！」
クルゼレイが吼え、掲げた手をサーゼクスに向けて振り下ろす。破壊の為の力を圧縮したその塊が、サーゼクスへと放たれ――
「なっ！」
――霧散した。
魔力が急に消えたことは勿論だが、クルゼレイはもう一つの異変を感じ取っていた。あれ程体内で満ちていた魔力が無くなっている。
「こ、これは……！　一体何が起きたというのだ！」
自分の身に起きた異変にクルゼレイは焦る。
「貴殿の体内にあったオーフィスの『蛇』は、私の魔力で消滅させた」
「ば、馬鹿な！　いつの間にそんな真似をっ！」
「……その言葉を口に出した時点で、貴殿が私に勝つことは絶対に出来ない」
絶対零度の言葉の刃を突き立てられ、クルゼレイは目を見開き、わなわなと体を震わす。

サーゼクスがやったことは至って単純なこと。微小の滅びの魔力をクルゼレイの体内に忍び込ませ、それによってピンポイントで『蛇』を消滅させたのだ。それも、それを一切相手に悟らせずに行うという。

クルゼレイも計り知れない差を知ってしまい憤怒の言葉すら、その差によって出てこない。

「……終わりだクルゼレイ」

その言葉に、糸が切れたかの様にクルゼレイが倒れる。体内にある滅びの魔力を操り、クルゼレイの内部を全て消滅させた。

何の爪痕も残せずあっけなくクルゼレイは絶命する。しかし、見方によっては当然の結末と呼べる。滅びはあらゆるものを消し去る。それが、恨み言や死に際の言葉であろうと。

クルゼレイの外身だけ残ったのは、サーゼクスの最後の慈悲と言えた。この世から跡形も無く消えるのは哀れに思い。

「……さて」

自分に向けられている視線は既に気付いている。サーゼクスは翼を広げ、その視線の主の下へと向かう。

「私に何の用かな?」

ベルの近くに降り立つサーゼクス。
「流石はルシファーの名を継いだだけのことはあるね」
クルゼレイを圧倒したサーゼクスに、ベルはほんの少しだけ声に嬉を滲ませていた。
「お世辞は結構。率直に言って魔王という立場からすれば、貴殿らの存在を見過ごすことは出来ない」
得体の知れないルイとベルの存在に強い警戒を抱き、滅びの魔力をその身から発するサーゼクス。
「アザゼルには言ったが、君にも聞こうか。僕たちに協力してくれないかい？　協力してくれるのなら、君に教えてもいい。君の知らない全てのことを」
滅びの魔力を全く恐れずに、アザゼルと同じ言葉でサーゼクスに協力を持ちかける。
「知らないこと、か……」
サーゼクスは横目でアザゼルを見た。
「俺はまだ答えてないぜ」
「君が来てから聞こうと思ってね」
「成程。では私が先に答えさせてもらおう『断る』」
悩む素振りを一切見せず、サーゼクスは即答する。
「理由を聞いても？」

「私は魔王として、他の悪魔たちを幸ある未来に導いていく義務がある。――気分を害するかもしれないが、貴殿らからはそういったものとは対極の様なものを感じ取れる……」

協力したとして、悪魔の未来が視えないというのがサーゼクスの理由であった。はっきりと言えば勘に等しい。

「残念だ。なら、君の答えは？」

「決まってんだろ、『断る』、だ」

サーゼクスに続き、アザゼルもまたベルの協力を蹴る。

「君もか。まあ、それなら仕方ない」

二人から協力を拒まれたベルであったが、特に不満を見せる様子は無く。至って平常。この結果が分かっていた様にすら見える。

「随分とあっさり引くな」

「こうなることは想像が付いていたからさ。ものは試しで言ってみただけだよ。そもそも、あまり公平とは言えない提案だったからね」

「公平じゃないだと？」

「いずれ答えに辿り着くと分かっているからさ。僕が持ち掛けたのは、それを少し前倒しにするだけのこと。それに、アザゼル」

ベルの目がアザゼルを捉える。
「君は、僕が教えようとしていたことを察しているんじゃないか？　僕の見立てでは、君は気付き始めている。いや、とっくに気付いているのかもしれない」
「……それは魔人絡みの話か？」
アザゼルが零した言葉に、サーゼクスは思わずアザゼルの方に顔を向けてしまった。
「僕たちと魔人、一体どんな関係があるというのかな？」
「簡単なことだろ？　お前があいつらの親玉って話だよ」
ベルは、アザゼルの言葉に首を縦に振ることも横に振ることもなく、『はい』とも『いいえ』とも言わなかった。ただ、代わりに深い笑みを見せる。
そのとき、空を真っ赤に染め上げる程の炎が天井の結界に広がり、そこから反射した熱で周囲の温度が一気に上がる。
「あの炎！　タンニーンか！」
「閉じた空間内であんだけの炎……まさか！」
タンニーンが全力で戦っているという事実に、ある予感が二人に浮かぶ。
「彼らは、魔人と戦っているよ」
二人の考えを先読みして、煽る様に事実を出す。
ベルの差し金かと聞きたい所であったが、それよりも先に引っ掛かる点があった。

「彼ら、だと……？」
「タンニーン以外に誰が……」
タンニーン、オーディンなら魔人でも遅れはとらないとは分かる。しかし、それ以外の人物だったのなら？　今すぐにでもその場に向かいたくなる。なるのだが――
「行くのは構わないが、僕らを放ってもいいのかな？」
ベルとルイという存在が二人に立ち塞がる。オーフィスとルイは、無関心という態度を貫き、ベルも殺気や魔力を一切出していない。だが、無視するには、この三人の存在は大き過ぎた。
「もう少しゆっくりしていくといい」

◇

帝釈天とマダ。一触即発の場面。神とそれに等しい力を持つ怪物が戦いあえば冥界も無事では済まない。しかし、この場においてそれを止めるだけの力を持つ者は居らず、この衝突は避けられない。
「お前との因縁、ここで断ってやるぜぇ！」
「笑わせんじゃねえぜ！　その因縁、こっちがお前の命ごと断ってやるよ！」

業火と雷が今まさに衝突し合おうとしたとき――
「そこまでにしろ。見苦しくて見ておれん」
二人の間を割る様に、槌が床に突き刺さる。
「……何でお前がここにいんだよ」
「……おいおい。水を差すなよ」
昂っていた所に横槍を入れられ、不機嫌な様子で槌の主を見る。
「何やら良からぬ気を感じて来てみれば、貴様らだったとはな」
槌(ミョルニル)の主――トールが手を伸ばすと、投げたミョルニルが手の中に戻っていく。
「この非常時に何をやっているんだ、貴様ら……」
テロ関係無く個人的な戦いに走っていた二人にトールは呆れる。
「うるせえよ、部外者。とっととあっちへ行くんだな」
「早くどっかに――ってあれ?」
マダが、トールの後ろに隠れるピクシーたちの姿に気付く。
「何でここにいんだよぉ……」
「事のついでだ」
「さっさと向こうに連れてけ……死ぬぞ?」
マダと帝釈天の力がぶつかり合えば、か弱いピクシーたちの存在は一瞬で消し飛ぶ。

今も形があるのは、トールが殺気の防波堤になっているからだ。
「こ、これ、不味くない……？」
「ヒ、ヒホ……オイラ、溶けちゃいそうホー……」
「ヒ～ホ～……これは笑っていられないね～」
　ピクシーたちも自分たちがどれだけ場違いな場所にいるのか分かっており、圧倒的力に震え上がっている。
「北欧の神トールは、いつから保護も司る様になったんだ？　はっきり言って似合わんぜ」
「黙れ。いいから馬鹿なことはせず『禍の団』どもを倒せ」
「誰にもの言ってんだぁ？　お前の言うこと聞くつもりはねえ」
「こればかりは、俺も同感だＺＥ」
　トールの指図を一切聞かず、帝釈天とマダは向き直る。
「お前たちは……」
　トールはそう言った後――
「言っても分からんなら力尽くで従わせるまでだ」
「え！　そっち！」
　力技過ぎるトールの解決方法に思わずピクシーは声を出してしまった。

争いを止める筈なのにその争いに加わってしまったら本末転倒。だが、元よりトールの中に話し合いで物事を解決するという選択は無い。だいたい力でどうになってきたので。

「何だお前！　お前もやるのかぁ！」

「上等だぁ！　誰が雷神最強か決めてやるよ！」

「ぬかせ！　貴様ら二人とも我が力に屈服させてやる！」

冥界の滅亡の危機から、三界滅亡の危機にまで上昇する。

無力なピクシーたちは、それが為される様を間近で見ているしかない。

いざ、三人が戦いを始めようとしたとき、急停止をする様に動きが止まる。

「うえ、くっせぇ……」

「何だ、この穢れたニオイは……？」

「この臓腑が爛れる様な悪臭は……」

幸か不幸か、大淫婦が解き放った悪意により、三界滅亡の危機は少しだけ引き伸ばされる。

汚染、素裸

黄金の杯から零れ出たナニカを一番近いもので例えるなら泥水であろう。透明な液体の中で、表現しようのない色が攪拌されながら床に触れると、拳大に広がる。

杯から垂らされたナニカは、その内に宿す害悪で瞬時に触れたものを侵す。

目に見えた変化がある訳では無い。ただ、触れたもの、浸されたものが別のものへと強制的に変質させられる。

それは床だけに留まらず、形の無い空気、あるいは空間すらもナニカに染め上げていく。

世界そのものへの浸食、あるいは凌辱とも呼べるもの。

そして、それは認識したものの五感を通し――

「グレイフィアッ！」

浸食される世界の中で、拒絶する様にセタンタがグレイフィアの名を叫ぶ。

マザーハーロットの解き放ったそれから目を離すことが出来なかったグレイフィアは、セタンタの言葉が耳に入ると同時に、行動に移っていた。何をすべきかすぐに分かったのは二人の付き合いの長さ故である。

グレイフィアは、側にいたセタンタの首にしがみつく。すると、セタンタは持っていた槍を手放し、代わりに動けていないディハウザーとケルベロスを脇に抱え、全力で床を蹴る。

一歩踏み込むことで床が大きく割れ、セタンタたちは斜め上後方の天井に向かって跳び上がり、セタンタは空中で反転させると天井を踏み抜く勢いで蹴る。

セタンタは、得物を捨ててまで全速力でこの場から逃走することを選んだのだ。

狭い空間内で、セタンタは自分の動体視力でも遅れ、急停止も方向転換も出来ない速さのみを特化させた動きでマザーハーロットから離れる。自分が今どこにいるか視覚では分からないが、建物内の構造は覚えているので、その記憶を頼りに天井、床、壁など全て足場に使って踏み壊しながら一秒でも早く遠ざかる。

まとめて姿を消したセタンタたちをマザーハーロットは追うことはしなかった。黄金の杯を傾け、その中身を口の中に注ぎ込み嚥下する。セタンタたちとって必死になって逃げるほど危険なこれも、マザーハーロットにしてみれば程好く酔える酒のようなもの。

生にしがみつくセタンタたちの姿を肴にして、黄金の杯を呷る。

「――おや？」

マザーハーロットは、彼女にしか分からないものを察知し、口から黄金の杯を離す。

少しの沈黙の後、マザーハーロットは楽し気な哄笑を響かせた。
時間にすれば凡そ十秒程度の間に、セタンタはマザーハーロットから数百メートル以上離れることが出来た。
ある程度の距離を稼ぐとセタンタは止まる。まだここにはあの液体の影響は無い。
両脇に抱えていたディハウザーとケルベロスを離し、グレイフィアもセタンタから離れる。
「――大丈夫ですか？」
「……ええ、何とか。……感謝します、セタンタ殿」
「グル……ルルル……」
真っ青な顔をしながらディハウザーは返事をする。ケルベロスも顔色は分からないが、唸って一応無事であることも告げる。二人からしてみれば、いきなり掴み上げられた挙句、三半規管を直接殴りつける様な高速移動を強制的に体験させられたようなもの。体調が悪そうに見えただけで済んだのは彼らが並外れて頑丈である証拠であった。
「グレイフィア――」
「私よりも、自分のことを心配して下さい」
グレイフィアも血の気が引いた顔色をしているが、セタンタもそれと変わらないほど蒼白となっていた。ただでさえ色白の顔から血の気を失うと、死人に近い顔色となる。

理由は、移動のせいでは無い。

「何でしょうね、あれは……」

何とか呼吸を整えながら、ディハウザーが誰もが思っていたことを口に出す。

「あれは――」

セタンタが流れ出るアレについて推測しようと脳内に映像を出した途端、猛烈な吐き気が込み上げてきた。吐く一歩手前で抑えることが出来たのは、ひとえにセタンタの精神力が故。

聞いてきたディハウザー、それによって思い出したグレイフィア、ケルベロスも似たような状態となったのか体を強張らせるが、幸いにもこの場に於いて無様を晒す、やわな精神の持ち主はいなかった。

黄金の杯から出てきたものに、セタンタとグレイフィアには予想が付いている。あれは恐らく穢れである。それも視覚化される程に凝縮された。

この様に思い至ったのは、この場にいないあの赤い獣の存在がある。あの獣もまた存在そのものが穢れであり、そこに居るだけで大地や大気、果ては空間まで穢す。セタンタたちの不調は、その時のものとよく似ていたが、あの時よりも症状は数段重い。変な表現になるが、穢れの純度が違うと言っていい。

セタンタたちの身を以って知った経験からの推測は正しいと言えた。

マザーハーロットが黄金の杯から出したのは、この世のありとあらゆる穢れが混じり合って出来たもの。世界から絞り出された毒。人々から集められた悪意、業の滓。逃れられない汚れを煮詰めたもの。

正しいという行いがあれば、当然間違いという行いもある。正しくないもの、間違ったものは穢れ、汚れ、呪いとなってマザーハーロットの黄金の杯へ溜まっていく。

目を背けた数だけそれは溜まり、人を妬み、恨み、憎んだ数だけそれは熟成されていく。

人の存在、繁栄した年月を懸けて出来上がった穢れは、果てなく未来永劫力が高まっていく呪いであり、一滴でも放てば即座に世界を汚染し、五感どれかを問わず通じて呪い、触れればいかなる存在も魂ごと穢し尽くして滅ぼす。

セタンタたちの体調が悪化したのもこの穢れを思い出し、そのせいで穢れの影響を受けた為である。強力過ぎるせいで直接的では無く間接的にも効果を及ぼす。

彼らが穢れを見た時間が最小であった為に影響も最小で済んだ。もう少し長ければ、逃げるという思考すら出来ない程に脳内を汚染させられていた。

「……一先ずあれのことは考えないようにしましょう」

セタンタの言葉に皆が同意する。深く考えなければならないのに、考えれば考える程悪影響を及ぼす。最悪と言っていいものである。

「すぐにでもここから退避しましょう。まずは天界の方々から優先して逃げて貰わないと」

穢れに弱い天使にとって、あの穢れは死と同意である。熾天使級でもしのげる保証は無い。一刻も早く影響の無い場所まで避難してもらう。勿論、他の勢力も同じだが。

問題はその先にある。皆が退避した後、この会場をどうするかだ。

最悪の穢れによって汚されている。すぐにでも対処しないと被害は広がっていくだろう。しかし、あのレベルの穢れを完全に消滅させるとなると、魔王クラスの力が必要となる。候補としてセタンタとグレイフィアはこの時、サーゼクスとアジュカ・ベルゼブブの顔を思い浮かべていた。

アジュカの力か、サーゼクスの滅びの魔力によって周囲一帯を消滅させる方法ならどうにかなる。だが、サーゼクスは現在結界の張られたバトルフィールド内にいるので連絡が取れない。ならば、残るはアジュカであるが、ここでもう一つの問題が出てくる。

「――駄目みたいですね。繋がりません」

通信用魔法を使おうとするが上手く機能しない。マザーハーロットの放った穢れの影響がここにまで及んでいる。半ば分かっていたことであった。かつて、セタンタとグレイフィアを含む眷属たちがマザーハーロットと戦った際に、魔力関係の能力が上手く使用出来なくなる事態となった。そのときと同じ事が今も起こっている。

魔王に助けを乞えない。となると、後は神クラスの者の力を借りなければならないが、果たしてそう都合よく事が進むのか。
「直接事態を伝えに行く必要があるわけですか」
何よりもどこで誰が『禍の団』と戦っているのか把握していない。探知することも出来ない。地道に探すしかないのだ。
もっと穢れの影響が少ない場所があったのなら、探知か通信魔法も行える筈だがその望みも薄い。
何故なら――
「グルッ――」
ケルベロスが息を詰まらせる。嗅覚が敏感な彼だからこそ真っ先に気付けた。続いて、セタンタ、グレイフィア、ディハウザーも話し合いを止めざるを得なくなる。
鼻を刺激する言葉で表現し切れ無い悪臭。鼻腔に入るだけで体内に悪影響を及ぼしてやるという悪意を感じ取らせる。このニオイの前ではナイフで鼻をそぎ落とす行為ですら正常に思えるだろう。
「これ、は……！」
「想像以上に速い……！」
「ここも、すぐに離れないと……！」

マザーハーロットの悪意が迫ってきている。すぐにこの場から移動する。

歯痒さしか感じらない。自惚れでは無く自分が並以上の力を持っているという自負がある。しかし、今の状況ではそれが全く役に立たないのだ。力があってもそれ以上の力か特異な力の前では簡単に無力になってしまう。

遠くに声を飛ばすことも出来ず、見ることも出来ず、出来ることがあるとすればひたすら走って地道に一人一人見つけ事情を説明すること。それも、常に背後に迫る悪意と限られた時間を気にしながら。

セタンタの内心は煮え滾っている。マザーハーロットの前で武器を手放し逃走した時から決まりきっていたことだが、自分はマザーハーロットに負けたのだ。生死の問題では無い。生きていれば負けではないなどと自分を甘やかす様な勝負観など持ち込まない。

今のセタンタたちの無様に逃げる姿、これが敗者の姿でなければ何だと言うのだろうか。

マザーハーロットの高笑いが聞こえてくる気がした。あの悪女は今頃、自分が蒔いた穢れの中心で優雅に佇んでいることだろう。追いもせずに。もし、本気でこちらを倒す気ならとっくに姿を見せ、そこら中に杯の中身を零している筈。

舐められている以前の問題である。こちらが本気でも、向こうにすれば精々時間潰し

の戯れなのだろう。
怒りで熱が生まれるなら、セタンタの臓腑はとっくに焼き尽くされている。内心を面には出さず、当たり散らさないのがせめてもの抵抗であった。
尤もそれに気付いている者は居た。
グレイフィアは移動する最中にセタンタの顔を一瞬だけ見た。それだけでセタンタが激怒しているのが分かる。付き合いが長いこともあって、セタンタがどんなにポーカーフェイスを貫こうとも内心が読める。サーゼクスも同様である。というよりもセタンタの表情の見極め方は、サーゼクスから教えて貰った。セタンタは知らないだろうが。
悪化していく現状と、それをどうにも出来ない自分に怒りを覚えているのがグレイフィアには分かった。グレイフィア自身も同じ心境である。
サーゼクスにこの場を任されておきながら、そのサーゼクスに頼らざるを得ない現実に無力感を覚える。
どうにかしなければならない。しかし、そんな都合の良い方法は無い。
もし、これを覆すにはそれこそ神の力が――その時、セタンタたちは走るのを止め、急停止する。否、しなければならなかった。
「何、必死になって走ってんだよ」

全速力で走っていたセタンタたちをさも面白がる偉丈夫。
「ふむ。どうやらこの悪臭の原因は向こうからか」
通路に壁の如く仁王立つ巨躯。
「へっへっへっ。何があったかちょっと教えてくれよ」
同じくセタンタたちの行く手を遮る様に立つ巨体。
「あ、貴方方は……！」
その組み合わせにセタンタたちは、迫る悪意のことを一瞬だが忘れてしまう。
四大魔王を遥かに上回る力を持つ神――帝釈天。
北欧神の中で最強と謳われる雷神――トール。
帝釈天ですら真っ向から戦うことを避けたと言われた化物――マダ。
神の中でも指折りの実力者とそれに等しい力を持つ存在が三人並んでいる。それは神秘的光景と言うべきか、悪夢と言うべきか。
「……何で居るんですか？」
「居ちゃ悪いのかよ？　冷てぇーなぁー」
セタンタは思わずマダに聞いてしまった。帝釈天との仲の悪さは有名である為、絶対に接触させないよう箝口令を敷き、レーティングゲームの情報が洩れないようにしていた筈である。

だというのにここに居る。ということは――
「ちょっと遊びに来ただけじゃねぇか。……ついでにインドラの奴もぶっ殺してやろうと思っただけだぜぇ」
「やっぱり化物ってのは常識がねえぜ。つまらない冗談をすぐに口にだすからよ。俺がお前をぶっ殺すってのが当たり前の常識だよなぁ？」
「非常識なこと言ってんじゃねぇぞ、インドラ？」
「俺が常識なんだぜ、マダ？」
チンピラの様な口喧嘩をしているのに、放つ圧は非常識そのもの。というよりもマザーハーロットの陰で帝釈天とマダが衝突しようとしていたという事実に、セタンタたちは蒼褪める。気付かない所で冥界は危機に陥っていたのだ。
「口を慎め貴様ら。彼らの話を聞くのが先だ」
それを止めるのがトール。セタンタたちは彼が居たことでこの二人が戦うことを防げたのだと分かった。
「お前が黙れ脳筋。あっちに行ってろ」
「とっとと北欧に帰ってロキに遊ばれてこい」
「良し分かった。今から力尽くで黙らせよう」
と思ったが違った。止めるどころか戦いに加わろうとしている。

魔王でも止められるか分からない三人が、殺気立った様子で睨み合う。
「――グルルル。オマエタチ、イタノカ」
「あっ！　無事だった！」
「ヒホ！　良かったホー！」
「ヒ～ホ～。無事でなにより～」
三人の存在のせいで陰に隠れていたが、ケルベロスがピクシーたちの存在にようやく気付く。ピクシーたちは、自分たちを逃がす為に一人残ったケルベロスが無事であったことに気付き、一触即発の三人のことも忘れてケルベロスにしがみつく。
「良かったー」
ケルベロスを撫で回すピクシーたち。平和的な光景に見えるが、その隣りで巨体三人が至近距離で睨み合っているので対比でシュールな光景となっている。
流石にこの状況で争うのは格好がつかないと思ったのか、三人とも息でも揃えたかの様に同じタイミングで視線を逸らす。
「……それで、一体何が起こった？」
さっきまでの一触即発の空気を無視してトールがグレイフィアに事情を尋ねる。
緊急事態でのマイペースさに文句の一つも言いたい気分であったが、事態が事態の為に不満は呑み込んで迅速に対応する。

「実は――」
　マザーハーロットが現れたこと。彼女と戦っていたこと。マザーハーロットがこの会場に最悪の穢れを撒いたことを簡潔に伝える。
「はあー。魔人が来たのは分かっていたが、『大淫婦』が来たのかよ。見た事は無いが聞いた話じゃ、いい女と聞いたぜ？」
「どうりでくせえわけだ。流石に魔人の穢れじゃ胃がもたれそうだぜ」
「ちっ、出遅れたか」
　マザーハーロットに興味を示す者、顔を顰める者、不満を露わにする者と反応は三者三様であったが、共通してこの状況を慌てているものはいない。
「んじゃま、全部綺麗さっぱりと消し飛ばすとするか」
「はい？」
「いいだろう。不浄なものなど我が雷で滅してくれる」
「ＨＡＨＡＨＡ！　お前の静電気でどうにかなるのかよ？」
「抜かせ。真の雷を知らぬ未熟者が」
「あ、あの……」
「へっへっへっ。ごたごた言ってないでとっととやれ。何なら代わりにやってやろうか？」

まるで何のことは無い様に、穢れを消し去るという方向で話が進んで行く。セタンタたちにとっては望ましいが、展開が早過ぎて置いてけぼりとなっていた。
「いや、なら他の方々にこのことを……」
「俺がやっといてやるよ。で？　お前らどうする？　安全な場所にでも避難するか？　世界一の所を知ってるぜぇ？」
「世界一安全な所？」
「おうよ」
すると、マダの四本の手が伸び、セタンタの肩、グレイフィアの腰、ディハウザーの腕、ケルベロスの首根っこを掴む。
掴まられた方は驚くしかない。突然であったとはいえ、こうも易々と触られたのだから。
「おい待て！　こっちは避難すると言っていない！」
了承も無く触れてきたマダにセタンタが怒鳴るが、手が離されることはなくしっかりと掴んだまま。
「まあまあ。ついでに面白いもん見せてやるよぉ」
マダはゆっくりと口を開ける。普通ならば顎の可動域には限界があるが、マダのそれには限界が無い。顎が地面に着くまで下がり、それに合わせて左右も広がっていき、人

が数人入り込める大きさとなる。
「まさか……！」
ディハウザーの額に汗が伝わる。こんな光景を見れば何をされるか一目瞭然であった。
マダの蛮行を止めようとセタンタたちが動こうとするが、それより一歩もとい一手早くマダは己の口の中に手を突っ込む。
口から手を引き抜いたときには、セタンタたちは手の中からいなくなっていた。
「うっそ！」
「た、食べちゃったホー！」
「え？　え？　ホントにホント～？」
マダの行動にピクシーたちは驚き、慌てるしかない。
「後は――」
マダの目線が、ピクシーたちへ向けられた。それが何を意味しているのかなど、数秒前の光景で嫌でも分かる。
振り返り、一目散に逃げようとするピクシーたち。途端、凄まじい勢いで後ろに引っ張られる。
マダは手を使わず、口で吸い込むだけでピクシーたちを引き寄せていた。

「いやぁぁ！」
飛んでいるピクシーがジャックフロストの帽子を掴む。
「ヒホッ！」
後ろに仰け反ったジャックフロストが、ジャックランタンのローブの裾を掴む。
「あ～れ～」
宙に浮いているジャックランタンに二人を止まらせる力は無く、マダの吸引力に負けて口の中へと入り、呑み込まれてしまった。
大きく広げられていたマダの口が元の大きさに戻る。
「ちゃんと出してやるから大人しく待ってなぁ」
マダは腹部をポンポンと叩く。そして、ついでに気絶している帝釈天の関係者も口の中へ放り込んでいき、最後にはマダたち三人しか残らない。
「相変わらず品がねぇな」
「お前だったら特別によく噛んで呑み込んでやるよ」
「阿修羅の腹の中なんざ、死んでもごめんだぜ」
わざと牙を見せつけるマダに、帝釈天は鼻を鳴らす。
「やり方はあれだが、一先ずは安心か」
トールが口を開く。マダの体内についてはトールも知っている。外に居るよりもそ

こにいた方が安全と判断し、セタンタたちやピクシーたちが放り込まれていくのを黙って眺めていた。
「それで他の者たちには、これからのことをどう伝えるのだ？」
イリナたちに天使たちのことは任せろと約束した手前、彼らを無事にここから逃がす義務がトールにはあった。マザーハーロットの穢れで上手く連絡が取れない以上、どのような手段をとるのか。
「あん？　そんなの簡単だろ」
マダは簡単そうに言い切ると、少し息を吸い込み――
「今からぁぁぁぁぁぁ！」
爆心地の衝撃波の様なマダの大声。声の波で通路が揺さぶられ、細かい亀裂が生じる。
「五分以内にいいいいい！」
凶器同然のマダの声。通路の細かい亀裂は大きな亀裂へと変わり、壁の一部が崩れ始める。
「ここを消滅させるぅぅぅぅ！」
魔力、魔術などの小細工に一切頼らず声で伝えるという原始的過ぎて、一周回って逆に斬新とも思えるマダの連絡手段。

「死にたくなけりゃあとっとと逃げろぉぉぉぉぉ！」
通路だけでなく建物全体がマダの声で揺さぶられ、天井の一部も落下し始める。
セタンタたちとピクシーたちをマダが呑み込んで正解であった。この大声を間近で聞いていたらピクシーたちは間違いなく死に、セタンタたちも重傷を負っていた。
「よし」
「よし、じゃねえんだよ。喧しい」
「事前に言え。耳鳴りがする」
伝えきって満足気なマダに、帝釈天とトールが文句を言う。死人が出てもおかしくない殺人的な大声を至近距離で聞かされても耳鳴り程度で済む当たり、やはり別次元の存在である。
「一仕事終えたし、ここでのんびりと見物させてもらうぜ」
マダは壁に背を預け、四本の腕を頭の後ろで手を組み、胸の前で腕を組む。完全に傍観する構えであった。
「お前にも雷浴びせてやってもいいんだぜ？」
「そりゃあいい、肩凝りに効きそうだ」
丸サングラスをずらして睨む帝釈天と牙を覗かせるマダ。
「殺し合うならせめてこの後にしろ」

先程とは違って、マザーハーロットの穢れをどうにかするという最優先の目標が出来た為にトールは口だけ挟む。尤も、いがみ合う態度とは裏腹にマダと帝釈天も形だけで争う気は疾うに失せていた。

マダと帝釈天が望む戦いは、一切の介入が無い正々堂々としたもの。言い訳など入る隙間も無い完全なる決着であった。トールが戦いに横槍を入れようとしている時点でそれは成立せず、戦う気も萎えていた。

なら何故未だに殺気立っているのか。自分から引いて舐められるのが嫌だという子供染みたしょうも無い理由である。質の悪いことに殺気自体は本物であり、互いに退くに引けない状況、場合によっては不本意な形ながら戦っていた可能性もあった。故にグレイフィアたちが現れたのは、マダと帝釈天にとってこの戦いを有耶無耶するのに丁度良かったのだ。

「ま、こんな化物とグダグダと喋っていても時間が勿体無いから、とっとと終わらせるか」

帝釈天はアロハシャツの内側に手を入れると、そこからある物を取り出す。中央が膨らんだ棒状の物体で、両端に特殊な装飾が施されている。長さは短く、棒の部分が掌で覆い隠せた。

それは、仏教に用いられる金剛杵に酷似していたが既存の種類に当てはまらない形を

している。

これこそが帝釈天の武器であり、全ての金剛杵の原型ヴァジュラである。

帝釈天がヴァジュラを握ると輝きを放ち始めた。ヴァジュラには雷を操る力があり、今頃は、会場の空は雷雲に覆われているだろう。

帝釈天が準備を始めたのを見て、トールはミョルニルの柄をより強く握る。すると槌の部分が蒼白い光に包まれ、そこから稲光が飛び出し、床や天井の一部を焦がす。

内と外。二つの側から攻めて完全にこの会場を消し飛ばす。欠片も穢れも一片も残さずに。

「気合い入ってんじゃねえか。そそるぜ」

「貴様もな」

間近で見せ合う力に、戦神としての面が疼く。昔とは違い、軽々と神が戦い合うことが出来ないのを口惜しく感じる。それさえなければ、己の全力を懸け戦っていただろう。

「イチャついてんじゃねえぞー」

その輪に入れないマダが外からヤジを飛ばすが、二柱の神が気にすることは無かった。マダは拗ねる様に天井を見上げる。

あと三分も経たずに始まり、終わる。その間マダには珍しく、可愛がっている弟子の

安否を想うのであった。

◇

穿たれ出来た脇腹の傷。鎧の下で一誠は苦悶の汗を流す。

（ドライグ……！）

『ああ、分かっている！』

鎧の穴の開いた箇所が修復され、それによって傷口を押さえ込み塞ぐことで出血し難くする。痛みが消える訳では無いが、血を失うよりもましと思っての咄嗟の判断であった。

「イッセー！」

駆け寄ろうとしてくるリアスに、一誠は手を突き出してこちらに来ないように伝える。

「大丈夫、です！」

やせ我慢をしてわざと明るい声で無事だと伝える。リアスたちに心配させない為に。尤も、一誠の性格を知っているリアスたちはすぐに内心を見抜いたが、一誠の意思を尊重して誰もその場から動かない。

「お初にお目にかかる、忌々しき偽りの魔王の妹よ」
「……誰？」
一誠を傷付けられたせいで、リアスの声は刺々しい。
「私の名は、シャルバ・ベルゼブブ。偉大なる真の魔王ベルゼブブの血を引く正当な後継者だ」
「旧ベルゼブブの御出ましとわね」
「……その呼び方は止してもらおうか。殺意が湧いてくる。新も旧も無い。ベルゼブブは常に一つだけだ」
表情は変わらないが眼光から発する圧に殺気が混じり、この場に居る者達の背筋を冷やす。
「それにしても――」
シャルバは顔面を血塗れにして気絶しているディオドラを見下ろす。
「調子に乗ってこのザマとは。アガレスの時に無断で蛇の力を使って、周りに疑念を抱かせただけに済まず、あの娘に執着した挙句にそれだけの醜態を晒すとはな。愚行も度が過ぎると感心する。間違いなく貴公は私が見てきた中で一番の愚者だ」
手を貸しているディオドラをこれでもかとこき下ろす。仲間であっても明らかに蔑んでいる。

「――まあ、こんな愚図の処分などいつでも出来る。それよりも優先すべきは」
シャルバの目がリアスに止まる。
「貴公だ、サーゼクスの妹君。ここで死んでもらう」
その言葉が出た瞬間、リアスの眷属たちは一斉に戦闘態勢へ移っていた。そんなことを許せる筈が無い。
「理由は二つ。一つは現魔王の血筋を全て滅ぼすため。もう一つはクルゼレイの死を、貴公の命で慰めるため」
クルゼレイがサーゼクスに敗北したことは、シャルバにも伝わっていた。盟友という間柄では無いが、真の魔王の血統を継ぐ同士、偽りの魔王の手によって死んだことへの無念は理解出来る。
「今回の作戦はこれで終了だ。『絶霧』を使った仕掛けもあったが、ディオドラの失態で無駄に終わったな。潔く失敗であると認めよう。だが、得るものは在った。後はそれを次に生かすだけだ。色々と失ったが問題は無い。まだ我々が残っている。我々がいる限り真の魔王は滅びない」
「どんなに潔く見せようとも、貴方の言っていることは負け犬の遠吠え！　やっていることは悪足掻きよ！　私が死ねばお兄様が絶望すると思ったの？　そう思っているなら外道と言わせてもらうわ！」

「偽りの血統が、真の血統を前によく吼える。……そんなに早く死にたいのかね？」
シャルバから憎悪を具現化させたようなどす黒いオーラが放たれ、空間を殺意で染め上げる。対するリアスは怯むことなく対照的な赤いオーラを迸りさせ、シャルバに指を突き付ける。
「貴方の血も考え方も、旧いを通り越して腐っているわ！」
毅然とした態度で言い放つリアスに、シャルバは表情を変えなかったものを内に滾る激情を言葉に変えて吐き出す。
「あまりほざかないでもらいたい。――楽に死ねんぞ？」
シャルバは魔力の弾を撃ち出す。それも動作を最小限とし、最速で行うことでリアスたちの反応が一瞬遅れてしまう。
目で得た情報が脳に伝わり、危険と判断したときにはリアスは避けるのに間に合わないところまで来ていた。
リアスが滅びの魔力を放つ。朱乃もまたリアスと同じタイミングで雷光を撃ち出していた。
これによりシャルバが放った魔力の弾の三分の二は消え去るも、残りが間に合わない。
当たる、かと思われたとき、魔力の弾がリアスの眼前で停まった。

「ま、間に合った……」
ギリギリで反応出来たギャスパーが、両眼に宿る神器『停止世界の邪眼』によって時間停止させたのだ。
「良くやったギャスパー！」
一誠は、ギャスパーを褒めながらシャルバに突撃する。リアスを殺すと言ったこと、そして、実際に殺そうとしたことで一誠の怒りは頂点に達している。開いた傷口など気にならない程に。
「おおおお！」
その怒りを拳に載せてシャルバに殴り掛かる。一誠の拳が、シャルバの顔に突き刺さる。
「ドラゴンの割には非力だな」
一誠の拳を受けても余裕の言葉を出すシャルバ。よく見ると一誠の拳はシャルバに届いていない。数センチ手前でシャルバの魔力で作られた防御障壁によって防がれていた。
一誠が動くと共に、ゼノヴィアも動く。デュランダルとアスカロンの二刀流で、同じ箇所を狙い、突きを繰り出す。
二本の聖剣の切っ先が一点に集中され、頑強な防御障壁にも亀裂が生じる。

しかし――

「愚かだな」

自ら防御障壁をすり抜け、シャルバが前進すると共に一誠とゼノヴィアの腹部に掌を当てる。

「隙だらけだ」

攻撃を重視する余り疎かになった守りの隙を衝いたシャルバは、押し当てた掌から魔力を放つ。

一誠、ゼノヴィアは一直線に飛び、端から端までをほぼ減速することなく飛ばされ壁に叩き付けられる。

「ぐあっ！」

「うあっ！」

一誠は鎧を纏っているのでダメージを抑えられたが、衝撃で傷口から血が押し出される。ゼノヴィアは、身を守るものが無かったせいで一誠よりもダメージが大きい。壁からずり落ちる様にして倒れ、その手から聖剣が転がっていく。

「ゼノヴィアさん！」

急いでアーシアが駆け寄り、神器による治療を始めようとする。

「アー、シア……すま、ない……」

すぐに立ち上がることが出来ない状態だが、ゼノヴィアの意識はまだある。
「すぐに治しますから！　イッセーさんも！」
「俺はまだ大丈夫だ！　ゼノヴィアの方を優先してくれ！」
このときばかりは全身鎧で良かったと一誠は思う。でなければ、今頃足元に血溜まりが出来てアーシアを泣かせてしまっていた。
「治癒の神器は少々厄介だ。無駄に時間をとらせられる」
アーシアに向けてシャルバは手を突き出す。その腕には見慣れぬ機器が装着されている。
「消えろ」
機器から放たれる光が、槍の様にアーシアを貫こうとする。
「アーシア先輩！」
そうはさせまいとギャスパーが神器を発動させる。放たれた光の時間を停止させ、宙に光の軌跡を固定させた。
だが、それには代償も伴う。
「ううう……！」
ギャスパーが両眼を押さえて蹲る。
「ギャー君！」

小猫がすぐにギャスパーに駆け寄る。急いでギャスパーの目を見ると、ギャスパーの両眼は固く閉ざされ、大量の涙を流している。
「目が……！」
眼球への激痛で目を開けることが出来ない。
シャルバが使った機器は、一誠の腹部に穴を開けたものであり、人工的に天使、堕天使の光の力を生み出すものである。光は悪魔にとって猛毒。ギャスパーは神器の都合上、毒の光を直視しなければならず、両眼にダメージを受けてしまう。
不幸中の幸いはまだ力の弱い光の力であったこと。もっと強ければ失明していた可能性もあった。
「ほお。これは都合がいい。『停止世界の邪眼』も厄介だと思っていたところだ。さて、サーゼクスの妹君」
シャルバは、リアスを嘲笑する。
「足手纏いが増えて、どこまで抵抗出来るか見物だな」
シャルバの挑発に、リアスは奥歯を強く噛んだ。
ヒュウ、という風切り音。それは前触れも無く突然であった。入口から何かが勢い良く飛び込み、石造りの床の上で派手な摩擦音を立てながら止まる。
突然の乱入に驚くが、その人物が誰なのか気付き、また驚く。

「祐斗！」
「ああ、部長。すみません。驚かせてしまって」
木場はリアスに突然現れたことを詫びるが、リアスの方に目を向けず飛んできた方向に固定したままであった。
体の至る所に裂傷があり、口の端から血を流している。両手には聖魔剣。明らかに戦闘の形跡がある。
木場は視線を動かさずに手の甲で口元の血を拭い取る。木場に手傷を負わせた相手は、一瞬でも目を離すことが出来ない実力者なのがそれだけで察せる。
「おやぁぁ？　おやおや？　何だか身に覚えのある気配がするぞー？　誰かな？　誰のだろうなぁ？」
耳障りで聞く者に不快感を覚えさせる声。そして、危うさを感じさせる言葉。一度聞けば忘れられない存在。
「あ、やっぱり居た。おーひーさーしーぶーりー！　イッセーくぅぅぅん！」
フリード・セルゼンの登場に誰もが言葉を失った。リアス、朱乃、アーシアは、フリードが現れた途端、即座に視線を逸らす。戦闘中に相手から目を逸らすなど自殺行為だが、それが分かっている上でも今のフリードを直視することなど出来ない。
「ナイトくーん！　俺様をエスコートしてくれたのぉ？　サンキュサンキュ！　おかげ

でぶっ殺したいランキング一位のイッセー君に会えたよー！　お礼にその綺麗な顔をトロフィーにして部屋に飾ってやんよ！　ヒャハハハハハハハ！」

ゼノヴィアと小猫は高笑いをするフリードに嫌悪と軽蔑に満ちた眼差しを向ける。今のフリードは彼女らの生涯において、最悪と言っても過言では無い。

「フリード……」

「はいはーい。何すかー？」

シャルバの呼び掛けに、フリードは笑うのを止める。

「何て姿だ……」

シャルバがこの場に居る一同が思っていたことを代弁した。

フリードは何一つ身に纏っていない全裸であった。更には木場と戦っていた為か体の至る箇所に聖魔剣が刺さっている。右太もも、右腕、左肩に一本ずつ。腹部と右胸に二本。背中に三本聖魔剣を刺したままにしており、不思議なことに刺された箇所からは血が流れていない。

某パーティーゲームを人で再現したような悪趣味なフリードの姿は、何故そんなことになっているのかという疑問を皆に抱かせる。

「やだ！　何！　皆の視線が集まってる！　俺様恥ずかすぃぃぃ！」

と言いながら顔を隠すフリード。明らかにふざけている態度であった。

「……お前のその醜悪な姿にはこれ以上何も言わん。いいから手伝え。ここでグレモリーの血を絶つ」
「ふーん」
顔を隠す手に隙間を空け、そこからシャルバを覗く。
タン、という地を蹴る音。フリードが高々と跳躍し、数十メートル離れた位置にいるシャルバのすぐ側に着地する。
助走無しの脚力のみで跳んでみせたフリードの身体能力に木場を除く他のメンバーは驚かされる。確かに人並み外れた身体能力を持っていたが、ここまでは無かった。それにまだ余裕すら感じられる。
「挟撃すればいいものを。わざわざ私の側に来てどうする。馬鹿なのか、お前は？」
「えーと。僕からー貴方にーちょっと言いたいことがありまぁぁす」
いつの間にかフリードの人差し指がシャルバの脇腹に押し当てられていた。シャルバは触れられたことに、まだ気付いていない。
「どーん」
シャルバの脇腹の一部が軽鎧ごと抉られて消失する。
「――がっ」
フリードの凶行に、一瞬遅れて反応したシャルバは、抉られた箇所を押さえる。そこ

から血が溢れ出し、白煙が指の隙間から昇っていた。

「だーれーにー命令してんだよぉぉ。クソ腐れ悪魔風情がよぉぉぉ！　はいムカついた。はい決めた。はいお前から殺す」

フリードの制御不能の狂気が、暴走を始める。

二重、愉快

時間は少し前に遡る。

謎の肉塊と戦いを繰り広げていた木場とイリナであったが、戦いの中で肉塊は変化し続け、最後には中からフリードが出てくるという、謎とも衝撃とも言える展開となった。

体にへばりつく肉塊の残骸は皮として残り、それを引き剥がしながら、フリードは首を回しつつ体の調子を確認する。

「あっあっー。何でしょこの気分は。俺様、心機一転生まれ変わったような新しく生まれたような爽快な気分でございますよ！　言葉に出来ないこの爽やかな気持ち！　でも、敢えて言葉にしちゃう！　明けましておめでとうございまーす！」

皮を脱ぎ捨てると共に何故か新年の挨拶をするフリード。異常な状態から現われたというのに中身は一切変わらず平常運転であることに、安堵するべきなのかもしれない。尤も、比較して平常と錯覚するだけで常識人から見ればただの狂人と変わらない。

おかしなモノから頭のおかしい者が出て来たのだ。

「フリード、君の身に一体何が起こったっていうんだ……」

木場個人からすれば、フリードの存在など唾棄すべき者だが、状況が状況なだけに思

わず話し掛けてしまう。
話し掛けられたフリードは、少しの間木場を凝視する。何か考えている様子であった。
「あー。チミのこと見覚えがあるある！　グレモリーさんとこの腐れナイト君じゃないの！　俺の右腕を切り落としてくれた！」
木場のことを思い出していたらしい。フリードは気色が悪いぐらいに満面の笑みを見せてくる。
「あ、貴方！」
「んー。何か君のことも見覚えがあるような、無いような……」
「そんなことはいいから、何か着なさい！」
イリナは顔を真っ赤にしながらフリードへ怒鳴る。イリナが言った通り、肉塊の顔を脱ぎ捨てたフリードは全裸であった。無駄な脂肪が無いが浮き出た筋肉も無い、鍛えているのかいないのか判断が困る体付きをしている。
「あー。どうりで風当たりがいいわけだ」
己の格好に今気付く。
イリナは『擬態の聖剣』を構えながらフリードへの視線を外さない。本当ならば顔をすぐにでも背けてしまいたいが、危険人物であるフリードを前にして些細な隙を見せる

訳にもいかず、鋼の精神を持って視線を固定する。でも、なるべく視線は下腹部まで下がらないようにする。

天使も欲に負ければ堕天する。年頃の少女であるイリナが、中身を抜きにすれば美青年であるフリードの裸体を見ても堕天の傾向が一切見られないということは、情欲よりもフリードへの嫌悪が圧倒的に上回っているということ。そもそも異性、もしくは人間として見ていないかもしれない。

「何すか？　赤くなって何すか？　見慣れてないっすか？　処女？　処女なの？　ねえねえ処女？　処女？　処女？　処女？」

恥部を隠そうとはせず、イリナに対しセクハラまでしてくる始末。

「う――！　う――！　う――！」

怒りたいし、目を背けたいし、今すぐにでもフリードをどうにかしたいイリナであったが、やりたいことが多すぎて空回りしてしまい、唸ることしか出来ない。

敬虔な信者であるイリナには、狂気且つ自由過ぎるフリードとの相性が悪かった。

「イリナさん。相手のペースには乗らない様に。彼の言葉は無視すればいい」

「かっ――！　酷いなぁ！　騎士君！　俺は――」

フリードの体が僅かに沈む。重心が前に掛かっていることを意味し、動き出す前兆である。

「もっと話したいのになぁぁ！」
フリードが地を蹴った瞬間、姿が消えた。その速度はイリナも、そして速さに優れた木場ですら見失う。
「どこっ！」
「速い！」
予想以上の動き。肉塊の触手の動きや、『天閃の聖剣』を用いていた時よりも速かった。
木場たちは、フリードが何処に消えたのか急いで探す。見失っている間に奇襲される可能性がある。
「お、おお……」
戸惑った声が後方から聞こえた。声の方に素早く振り返ると、神殿の壁に張り付いているフリードが居た。
張り付いているとは言っても両手両足を使ってヤモリの様に張り付いているのではなく、正確には壁に対して垂直に立っている。足の指先で壁を掴み、その力だけで直立しているのだ。
「何じゃこりゃあ……俺様パワーアップし過ぎじゃない？　我ながらチートっぷりにビックリですたい！　『フリード・セルゼンが生まれ変わったらチートでした！』ってや

つ？　つまり俺は主人公だった？」
　相変わらず意味不明なことを言っているが、フリード自身も自分の身体能力に驚いているのだけは分かる。
　フリードが壁を蹴り、再び姿を消す。すると、さっきまで居た地面に顔から突っ込んで着地。地面は深々と陥没し、埋まった顔は勢いのまま十数メートル地面を掘削しながら滑っていく。
「うわ……」
　イリナが引いた声を出す。顔面を地面で擦り下ろしている光景に鳥肌を立てていた。木場も声には出さないものの、痛みが想像でき、尚且つこの後のフリードの顔面の惨状を想像すると多少の寒気を覚える。
「うん……うん……なるほど、なるほどー」
　フリードが地面から顔を上げて、木場たちを見る。荒い地面で顔を擦り下ろした筈なのに、フリードの顔に傷一つ無い。
「分かってきたぜぇ。この体の使い方がなぁ」
　綺麗に並んだ歯を見せつつ、嫌らしく歪んだ笑みを浮かべるフリード。動作の一々が、他人が羨む整った容姿を台無しにする。
「いくぜぇ？　色男」

またも体を僅かに沈めるフリード。しかし、木場の直感はフリードがその動きを見せた途端、彼の体を突き動かしていた。

両腕が跳ね上がる様に動き、聖魔剣を目の前で交差する。直後、瞬間移動でもしたかの様にフリードが木場の前に移動していた。

フリードは跳躍しながら木場に対し背を向け、片足を上げている。飛び後ろ回し蹴りの体勢へと入っている。

速いが、先程の動きに比べればまだ木場の目で追える。

風を斬り裂く様にして放たれる蹴り。木場の目をしても膝から下が速過ぎて捉えられない。

衝撃。風切り音。両腕に伝わる痛み。

（重、い……！）

両肩が脱臼するかと思った。交差していた聖魔剣が見た事が無い程しなり、そのしなりも限界に達し、亀裂が生じ始めている。

平均成人男性の体型からは想像も付かない一撃の重み。着地した地面が陥没したことなどを考えると、今のフリードの体重は百や二百では済まない。考えてみれば、あの巨大な肉塊が圧縮し続けた結果出てきたのがフリードである。それぐらいあってもおかしくはない。

耐えたら肩も聖魔剣も壊される。木場は即座に判断し、耐えるのを止め、フリードの蹴りの威力に敢えて乗る。
木場の両足が地面から離れ、神殿内部まで蹴り飛ばされていく。
「えっ！」
イリナからすれば、フリードの姿が消え、木場が突然吹っ飛ばされたという結果だけしか見えなかった。
急いで木場の方を見るが、木場は百メートル近く飛ばされ、更に数メートル先には消えたフリードが立っている。
フリードを挟み込む陣形となっているが、異常なまでに跳ね上がったフリードの力を警戒して迂闊には攻められない。
「ああ、この感覚サイッコーじゃないの！　イヤッフー！」
通常自分の身体能力が数十倍になったとしたら、それに慣れるまでには相当な時間と訓練が必要だろう。しかし、フリードは三度動かしただけでほぼ完璧に近い形で動かしている。非常に難のある性格や三下染みた台詞のせいで誤解されるが、フリードは天才と呼ばれる部類の人間である。人が十を掛けて覚えることを一で理解出来てしまう、本物の天才なのである。
その類稀な戦闘の才覚と転生悪魔や転生天使を遥かに超える肉体が組み合わせられ

た結果、フリードは最悪の存在として生まれ変わった。
人外の力を得たフリードを挟む木場とイリナ。剣の柄を持つ手が汗ばんでくるのが分かる。フリードの身体能力の高さは三度の動きで十分理解出来た、自分たちを上回っていると。
だからといって降参するつもりは無い。尤も、フリードがそんなことで止まる相手では無いことも承知している。
イリナは『擬態の聖剣』を糸状に変え、フリードの動きを止めようとした。先に仕掛けるなら距離の近い自分だと思っているからである。
すると――
「相変わらず君の声は耳障りだね」
「――あん？」
木場がフリードを挑発し始める。高揚していたフリードも、その言葉で冷水を浴びせられたかのように静かになる。
「君は黙った方がいいんじゃないかな？　いや、もう居ない方がいい」
木場は冷めた言葉で、フリードという存在を否定する。先程まで笑って体を揺さぶっていたフリードは、今度怒りで体を震わせ始めた。
「おや？　おやおや？　ご自分の立場を理解していらっしゃらないの？　もしかして？

ワタクシがちょっとマジになったなら、今のおたくなんてグッチャグチャになるっていうのに？」
「生憎と君からは恐怖なんて感じないな。以前の君と中身が全く同じだからだろうね。下衆相手に恐れる道理なんて全く無い」
必要以上にフリードを謗る木場に、イリナは驚く。明らかに自分にフリードの矛先を向けようとしているのだ。
思わず木場を止めようとするイリナであったが、その時に木場と目が合った気がした。気のせいでなければ、その目が一瞬だけ横に振られる。木場が視線を送った先、それはイリナが逃したディオドラの眷属たちが逃げた方向である。
『ここは自分に任せて、彼女たちを守ってくれ』
木場が暗に伝えているのをイリナは理解する。理解するが、危険な存在と化したフリードに一人残していけないと思い、イリナはフリードに悟られない様に小さく首を横に振る。
しかし、木場はここでフリードに更なる挑発を重ねた。
「少し訂正するよ。一度勝った相手を怖がるなんて馬鹿馬鹿しい」
「調子くれてんじゃねぇぞおおお！　この腐れナイトがぁぁぁぁ！　てめえに地獄を――！」

「その台詞の続きは、地獄の死神相手に吼えるといい」
激昂するフリードに、冷めた声で返す木場。この瞬間に、フリードの頭の中からイリナの存在は完全に消え失せる。
「あああああああああああ！」
咆哮を上げながらフリードは百離れた距離を瞬時に跳び越える。だが、木場とて天賦の才を持ち、更にそれを伸ばす為に血の滲む鍛錬を積み重ねてきた。三度不覚はとっても四度目の不覚は許さない。
獣の様に跳び込んできたフリードの右胸を、ひび割れた聖魔剣で突く。
剣から伝わってくる硬い感触。やはり、フリードの肉体は通常とは異なる造りとなっているらしい。相手の勢いを利用し、尚且つ全力で突いたというのに、先端が数センチ埋まった程度でそれ以上先に進まない。
「痛っ――くなーい！」
聖魔剣で刺されても動きに支障は無く、木場の顔目掛けて拳で突く。
それをもう一本の聖魔剣の腹で受けるが、その聖魔剣にも罅が入っていたのでフリードの拳の圧に耐え切れずに砕かれる。しかし、破壊されることを想定済みであった木場は、フリードが聖魔剣を砕くと共に身を低くしながら手首を返して、剣身が砕けた聖魔剣の柄頭でフリードに刺さっている聖魔剣の柄頭を思いっ切り叩く。

更に切っ先が埋め込まれる聖魔剣。
「だから、痛くないっってんだろうが！」
だが、これもフリードの動き止める程には行かず、体勢が低くなっている木場を蹴り上げる。
放たれる蹴りの速度は、木場が魔剣を創造させる時間を与えず、木場は己の脚力を信じて全力で後方に跳ぶ。
木場が移動した距離は僅か数メートル程。ただし、そこまでを自身の最速を以って動いた。
「ちっ」
フリードは舌打ちをした。絶好のチャンスと思ったが、掠めた程度で終わったことに。
「くっ」
木場は呻いた。肩を僅かに掠ったが制服の一部と一緒に肉も削げ、白い夏服に血が吸われ、赤く染まっていく。
掠めた程度でこれである。一撃をまともに受ければまず助からない。仮に助かったとしても、全力で動ける体では無くなるのでどちらにせよ死に繋がる。これから木場は、このフリード相手に直撃を受けずに戦い抜かなければならないのだ。

「おらあああ！」

フリードの動きに技術など見られない。溢れる程の力を以てその体を動かし、視認が遅れる速度で動く。木場が同じ速度で動くには、体の関節、骨、筋肉の動きを全て把握し、精緻の技術によって無駄なく連動させる必要がある。それでも、今のフリードの速さには一歩遅れるだろう。

巧みな技術を小細工と一蹴してしまう程の身体能力。羨望を覚えないと言えば嘘になるが――

「雑だね」

――日々の鍛錬で積み重ねてきたものが、師より授かった技が、フリードの力より劣っているなど微塵も思わない。

頭を刈る為に大振りに拳を振るうフリードに対し、木場は前蹴りを繰り出す。すると、木場の足から聖魔剣が飛び出し、フリードの腹部に刺さった。

やはり、フリードの動きが鈍ることは無かったが、木場は聖魔剣を放った足先を腹に刺さっている聖魔剣の柄頭に引っ掛け、それを踏み台にしてフリードの頭上に跳び上がる。

「ありゃあ？」

大振りの攻撃が外れ前のめりになるフリード。その背目掛けて木場は両手に創造し

た聖魔剣を投げ放つ。二本の聖魔剣が背中に突き刺さるが、フリードは顔を上げて痛がる素振りも見せず、逆にニタリと笑う。

「何かしたぁ？」

木場の攻撃など痛痒すら感じず、無力であると強調する台詞と共に繰り出されたのは、落下する木場を迎撃する上段蹴り。

無手に再び聖魔剣を握り、フリードの蹴りに対してすぐさま二刀同時に振るう。

今度は耐える猶予すら無かった。具足も何も無い素足が、何の技術も感じられない力任せの蹴りが聖魔剣をへし折る所か粉々にする様は、悪夢そのものと言える。だが、蹴り返された聖魔剣の破片を受け、体を浅く切られる痛みは間違いなく現実であると訴えていた。

（全く笑えないね）

何の奇跡があって、目の前のフリードはこの様な力を得たのであろうか。神の奇跡、祝福を受けるには程遠い人格であるというのに。ある意味ではこの様な存在にも恩恵を与えることが、神がまさに不在であると表しているのかもしれない。

理不尽を体現したフリードに笑えない冗談を感じつつ、木場は体を捻って足から地面に着地する。聖魔剣を砕かれた勢いだけでまた十数メートルも移動してしまっている。だが、木場には好都合であった。

（イリナさんは……追って来ていないね）

上手く意図が伝わったと木場は安堵する。

イリナが感じ取った通り、木場はイリナにディオドラの眷属たちを追わせるつもりであった。このバトルフィールドから上手く逃げさせる為に。

彼女らの事情は、詳細では無いが木場もイリナから聞かされている。似て非なる立場の木場としても思うところがあり、出来れば彼女らには無事であってほしいと思っている。

その為に出来るだけフリードを引き付けておくつもりだったが、それは要らぬ考えであったらしい。そんなことをしなくても、木場がフリードに押されてどんどんと追い詰められていっているからだ。

しかし、苦は感じない。木場の人生の前半は、理不尽と不条理が殆どである。故にそれに屈しない為、大事なものを奪われない為に『騎士』となり剣を振るい続けてきた。そんな自分が、目の前の理不尽な存在から他の者たちを守る為に戦っているのである。

それは苦しいどころか――

「燃えてくるね」

――親友の様に熱い気持ちが湧き立つ。

薄っすらと笑みすら浮かべる木場。フリードはその表情が気に入らない。

追い詰められているのだからそれに相応しい引き攣った表情、怯えた表情、蒼褪めた表情をするのが正しいのだ。彼が今まで葬ってきた異端や悪魔たちの様に。

なのにまだ笑ってみせる余裕がある。木場の笑みでフリードの歪んだ笑顔が消える。

是が非でもその顔を屈辱と恐怖で染め上げてやるという確固たる黒い決意がフリードの中で成される。

「燃えるぅ？　燃えるどころか灰にしてやんぜよ！　腐れ悪魔さんよぉぉぉ！」

フリードが吼える。その咆哮は、地面に転がる砂利が細かく震える大声量であった。

その声が遠くにこだまし、消える前にフリードの姿が消える。途端、木場が聖魔剣を振るい、見えない何かを斬る。

剣戟音と共に木場は滑る様に後退する。否、後退させられる。

四方に剣を振るう度に音が響き、木場は体勢を崩しながらもすぐに剣を振る。

秒間に数度それを繰り返しながら木場はどんどん神殿内部へ入っていく。

神殿入口でイリナはそれを見ることしか出来なかった。

イリナは強いジレンマを感じていた。木場を助けに行きたいが、ディオドラの眷属たちの安否も心配である。

木場は彼女たちを追う様に示したが、だからといって木場一人であのフリードと戦わせる訳にはいかない。

迷えば迷う程時間は過ぎていく。どれだけ時間が過ぎても事態が好転することはない。決断をしなければならない。木場かディオドラの眷属たちか。

選べない人間ならば、いっそのことこのまま時間が過ぎていくのを待ち、自分の目が届かない所で全てが終わり、自分は何も関係無かったと逃避するだろう。

だが、イリナは選ぶことが出来るし、関係無いと見過ごすことも出来ない。

イリナは天使の羽を広げて飛んだ。羽ばたいていく方角は、ディオドラの眷属たちが逃げた方角。

血の気を失う程に『擬態の聖剣』を握る。爪が食い込む程手を握る。イリナは彼女らの為に来た。ならばそれを最後まで全うする義務がある。

（絶対に、絶対に戻って来るから！）

イリナは誓う。義務を果たしたとき、必ずここへ戻ってくることを。

◇

「何の……つもりだ……フリードォオ！」

抉られた脇腹の痛みよりも、怒りの方が上回ったのかシャルバが怒鳴る。押さえた箇所から血が噴き出るが、構うことは無かった。

「耳ついてんですかー？　ムカつくから殺るって言ってんじゃん？　大丈夫ですかぁ？

頭の中身入ってますかぁ？」
シャルバを小馬鹿にする様に、自分のこめかみを人差し指で叩くフリード。その腹立たしい言動は、どんな聖人君子ですらも青筋を浮かべるだろう。
「き、さま……！」
「ちょっと試運転に付き合ってくれよ。『騎士』君相手に大分この体の使い方が分かってきたけどさぁ、別の刺激が無いと分かんないことってあるよなぁ？」
自分をかませ犬にしようとしているフリードに、シャルバは奥歯が砕けそうな程歯を軋り鳴らし、青筋と顔が引き攣ったせいで形相が変わる。
そんなシャルバを囃し立てる様に、フリードは小さく手を叩く。
「ほらほら。おいでおいで。こっちに。かませわんちゃん。てめえの体でたっぷりと試してあげるからよー」
シャルバの頭の中で何かが千切れる音が聞こえたと思えば、いつの間にかフリードへ魔力を放っていた。
フリードの視界を埋め尽くす無数の魔力の弾。
「はっはっはっ！」
余裕を持って笑うと、フリードはその中へと突っ込んでいく。何をするのかと皆が思った。だが、フリードは何もしない。防御も回避もせずに魔力弾の雨に入る。

当然ながらその体に魔力の弾が浴びせられるが、フリードの体はびくともしない。貫かれず、傷付かない。その内目にも着弾するも、フリードは瞬きもせずに眼球で魔力を受け止め、それどころか打ち勝ってしまった。

「こそばゆいぜぇぇぇ！　くすぐりプレイはＮＧだ！」

激情に身を任せていたシャルバも、フリードの異常な頑丈さに冷静さを取り戻さざるを得なくなり、それも通り越して焦りを覚える。

「どうなっている！」

腕に取り付けた装置からフリードへ人工の光を撃ち出した。

「何だそりゃあ？」

魔力の弾に紛れて迫る光を小馬鹿にし、急停止と共にその光を片手で難なく掴み取ってみせる。光はフリードの手の中で槍の形に押し留められる。まるで堕天使たちがよく使う光の槍に似ていた。

「キャッチアンドリリース！　お家にお帰りハウス！」

撃ち出された光を投げ返す。

「ぬあっ！」

フリードの投げ返した光の槍は、シャルバの腕の装置に命中し、装置に火花が走ると爆発した。シャルバの腕は酷い火傷を負う。装置の爆発の中に光の力も混じっていた

のかもしれない。
「イエーイ！　大当たり！　フリード選手！　今のお気持ちを！　ええ！　気持ち良すぎて色々出しちゃいそうですねぇ！」
猿の様にはしゃぎながら一人芝居を見せる。ふざけているとしか思えないフリードの態度は、押されているシャルバに強い屈辱感を与えた。
「おの、れ……！」
「テンプレなセリフあざーっす！　ていうか分かっただろう？　あんたじゃ俺様には勝てないってーのが。分かる？　理解した？　ユーアー負け犬ってことが？　ドユーユーアンダスタン？」
一の台詞に対し、フリードは十の嘲りで返す。シャルバに浮き出た青筋は、今にも血を噴き出しそうであった。
「貴様の様な汚物に、我が宿願を邪魔されてなるものかぁぁぁ！」
圧倒されている現実を押し返す様にシャルバは叫び、その身から迸る魔力の全てを放つ。
魔力の壁――というよりも、立ち塞がるものを容赦なく呑み込み粉砕する魔力の津波であった。高さも幅も神殿一杯まで広がり、何処にも逃れる隙間は無い。
リアスはその膨大な魔力に驚き、すぐに眷属たちに自分の後方に移動するよう指示を

出す。自分の滅びの魔力を壁にすれば何とか切り抜けられるだろうという算段であった。

「あー凄いね。凄い凄い」

魔力の津波が目の前にまで来ていてもフリードの余裕は崩れない。

「凄すぎちゃってさ――」

フリードが踏み込み、次の動作に入るときには姿が消える。直後、魔力の津波は真っ二つに裂けた。まるでモーセが海を割るかの様に。

「――欠伸がでるわー」

「かっ……」

リアスたちが次にフリードを見た時は、彼は神殿の壁際に立っていた。伸ばした片足で、シャルバを壁にめり込ませながら。

全力で放ったシャルバの魔力も、加速を付けたフリードの蹴りによってあっさりと貫かれ、シャルバ本人もその蹴りで壁のオブジェの一部と化している。

フリードが足を引き抜くと、シャルバは崩れ落ちていく。しかし、完全に伏せることだけはプライドが許さなかったのか、両手両膝を床に着いて辛うじて体を支える。

「オーフィスと……契約し……蛇を、飲んだというのに……何故、人間如きに……！」

シャルバにとって信じられない現実であった。見下すどころか眼中にすら無かった

フリード相手に、今こうして膝を屈していることに。偉大な魔王の血を継ぐ正統な後継者である自分が、野良犬よりも品性の無いフリードに。

「蛇？　蛇ってこれのこと？」

フリードはシャルバのマントを掴んで強制的に体を起こさせると、舌を垂らして見せる。その舌の上には黒い小さな蛇が身をくねらせていた。

「何故、お前が……それを……！」

オーフィスの蛇を誰に与えたという情報はきちんと伝達されている。それ程までに強力なものだからだ。フリードがオーフィスから蛇を得たなどという情報は一切無い。

「はっはー！　どうでもいいでございやせんか、そんなこと。……今からくたばるてめえが知ってどうすんだよ」

狂笑が潜まり、代わりに出てくるのはどこまでも冷徹な殺意。戦う度にころころと性格や言動が変わるせいで、どれが本当のフリードの顔か分からない。全てが偽りかもしれないし、全てが本当かもしれない。その不安定な人格こそが、フリードの危うさと強さに繋がっているのは間違いない。

「貴様――」

魔力で反撃を試みようとするが、フリードの方が遥かに速かった。シャルバから魔力の気配を感じ取った瞬間に、前蹴りが腹部に打ち込まれる。

砲撃の様な一撃であった。受けたシャルバの姿が消え、壁に叩き付けられ、その壁も叩き付けられたシャルバによって破壊されて打ち砕かれる。

シャルバは壁の向こうに消え、それ以降何の動きも無い。死んでいるのか生きているのか誰にも分からない。確かめようにもフリードのせいで下手に動くことは出来なかった。

「いやー、サンドバッグご苦労さんでしたー！　おかげでいい感じに準備運動も出来たし、テンション上げ上げだぜぃー！」

フリードは笑いながら、蹴った際に引き裂かれたシャルバのマントをひらひらと揺らす。

一体どうしてこんなことになったのか、リアスたちは事態の変化に思考が若干追い付かなかった。

ディオドラと戦い、一誠が勝ったと思ったらシャルバが現れ、彼と戦うと思いきや、木場と共にフリードが乱入してきて、そのフリードがシャルバを圧倒してしまった。

目まぐるしいまでの状況の変化である。が、それも今収束する。

「――んでま、こっからが本番なんですがねー」

シャルバのマントを、フリードは腰に巻く。さんざんシャルバに向けていた狂笑が、今度はリアスたちへと向けられた。

「マジ最高のシチュエーションじゃないの。笑っちゃうほどにさぁ？　ぶっ殺したいランキング一位、二位のイッセー君と木場君が居るし、デュランダル使いのクソ聖剣女も居るし、元助手のアーシアたん、いつぞやの教会で見たことのあるロリッ子に、頭のよわーい元上司と同僚を殺ってくれたグレモリーのお姉さんズも居るし――ってあれ？　そっちの目を押さえているおにゃの子って誰だっけ？　まま、いいや。ついでに殺っ・ちゃい・ます！　あ、女の方々は殺る前にやってお楽しタイムするのもありかも」

「ふざけんな！」

フリードの発言に真っ向から言い返したのは一誠であった。

「そんなことさせると思うのかよ！」

脇腹に穴が開いていようとも叫ばずにはいられない。自分の前でリアスたちを辱めるなど例え冗談であったとしても聞き逃すことなど出来なかった。

「てめえの意見なんざ聞いてねえんだよ！　このクソったれ悪魔が！　あ、いいこと思い付いた。やる前にお前の手足斬り落として瞼切り取って、死ぬまで目の前でやってやんよ！　泣いて喜びな！　ヒャハハハハハハハ！」

下衆が極まった発言に、女性陣は嫌悪で顔を歪め、男性陣は憤怒で顔色を変える。

今すぐにでも殴って黙らせてやると一誠が飛び掛かかろうとしたとき、小猫が呼び止めた。

「……イッセー先輩。気を付けて下さい」
「小猫ちゃん？」
「……あの人、最低ですけど実力は本物です。それに……」
「それに？」
「……もう人じゃないかもしれません」
小猫の目には人の体内を巡る気の流れ、気脈というものが見える。木の根の様な光る線が頭から足の指先まで伸びており、人間も悪魔も大した差は無い。
しかし、フリードの体内は小猫が初めて見る気脈の形をしている。形と言っていいのだろうか、気脈が見当たらず体内全体が気の輝きを放っているのだ。人型の容器に水を満杯にしたように気で満ち満ちている。
凄いではなく気持ち悪いという印象を小猫は抱く。だが、同時に自分の仙術が効かないのを悟ってしまう。体内全体に気が満ちているせいで、自身の拳に気を乗せて内側から破壊することが出来ず、気脈を折って気を断つことも出来ない。
「人じゃないっ――じゃあ何に？」
「……分かりません」
「まあ、あれだけ刺しても痛がらないから人じゃないかもね。用心してくれ、彼は痛みに対して相当鈍感になっているよ。攻撃を当てても油断しない様に」

フリードと直接戦って得た数少ない情報を木場は皆に伝える。木場の言う通り、体中に聖魔剣を刺しても全力で動いていた辺り、無痛に等しいのだろう。
「アーシア、ギャスパーと一緒に出来るだけ下がっていて。可能ならその子の目を治してあげて」
「はい！」
「す、すみません……」
「朱乃、アーシアたちの護衛を頼むわ」
「分かりました」
「残りの皆は私と一緒にフリードを倒すわよ！」
『はい！』
素早く役割分担を指示したリアス。
フリードは欠伸をしながら、ごく自然な動作で刺さっている聖魔剣の内の一本を引き抜き、欠伸が終わると同時にリアスへ投擲した。
白と黒の光が線を引く様にリアス目掛けて一直線に伸びていく。
刹那の時間さえあれば、投げ放たれた聖魔剣はリアスを刺し貫くだろう。だが、その時間を超えても刃がリアスに届くことは無かった。
木場が柄を掴み、一誠が刃を握り、ゼノヴィアがデュランダルを盾にして切っ先を防

いだことで。
「あ、っぶね……」
聖魔剣を止めた一誠の体中から一気に汗が噴き出す。一歩間違えばリアスが串刺しになっていたこと、咄嗟とは言え聖魔剣の刃に触れてしまったこと、危うい状況であったことをワンテンポ遅れて理解してしまったせいである。
「あひゃひゃひゃひゃ！　待ちくたびれてつい手を出しちった！　よく止めたこと！　麗しい友情ってやつですかぁ？　ぶっ壊したときはさぞ見物だろうよ！」
戦いはフリードの狂笑によって始まる。全ての主導権が自分にあるかの様に。
助走も無く、一歩踏み出すだけの動きでフリードは前方に跳び出す。最小限の動きで『騎士』以上の速度を生み出してみせた。
弾丸の様に飛んでくるフリードへ最初に仕掛けたのは木場であった。剣の間合いに入る同時に聖魔剣を一閃。
聖魔剣が真上に弾き上げられる。フリードの拳が聖魔剣を突き上げた。だが、木場も力でフリードに勝てないと既に承知している。
もう一本の聖魔剣をフリードの顔面へ突き出す。木場の突きの速度とフリードの速度が合わされば貫けると考えていた。
「おおっと！」

両足を地面に突き刺し急ブレーキを掛けると、フリードは地面と平行になるほど仰け反り、木場の突きを躱す。

「あめぇんだよぉ！」

フリードはその場で後転。体が溶けた様に見える程の高速であり、跳ね上げた足で突き出された聖魔剣を弾くのではなく蹴り折る。

聖魔剣越しに伝わってくる衝撃で木場は手が痺れるのを感じた。そして、もう一つ感じたことがある。

フリードが分かり易いぐらいに力を増してきている。使い慣れて力を上手く使える様になってきたからか、それとも別の要因か。木場としては前者の方がまだ有り難い。底が在ると感じられるからだ。もしも、後者だったのなら、フリードの力に限界があるのだろうか。

両足から地面に着地したフリード。すると、木場の背後から現れたゼノヴィアが、フリードの右側面に移動しつつデュランダルを振るう。

デュランダルの刃が、フリードの脇腹へと食い込み、そのまま両断――することは無く、刃が数センチ埋まっただけで止まってしまった。

大剣としての重量。聖剣デュランダルの切れ味。ゼノヴィアの腕力。『騎士』の速度。それらが合わさっても今のフリードを断つことが出来ない。

斬ったゼノヴィアも、フリードの異質な手応えに目を瞠る。
ゼノヴィアが斬るタイミングに合わせて、一誠も逆側から攻めていた。構えていない無防備なフリードの顔面に最大まで倍化させた力による一撃を見舞う。
拳から伝わってくる感触で、小猫が言っていたことを嫌でも理解する。肉でも骨でも無いギッシリとした密度を感じる手応え。
『何だこいつは……』
ドライグですら知らないものであった。
「ふひっ」
一誠の拳で歪められた顔を更に歪めて笑うと、フリードもまた拳を放つ。最初に狙ったのは一誠だった。
「うぐっ！」
衝撃の後に息が詰まり、痛みを感じる。一誠の胸部中央はフリードの拳の形で凹んでいた。
跳ね返った拳で、そのままゼノヴィアを襲うフリード。そのとき、視界の端から何かが飛んで来るのが見える。殴りかかろうとした手で打ち落とす。床に跳ねたそれは、折れた聖魔剣であった。木場が投げたものである。今のフリードにとってかすり傷程度も与えられないが、反射的に動いてしまっていた。

フリードが別の物に気を取られている隙に、ゼノヴィアは一誠に返したアスカロンを再び呼び戻し、デュランダルと交差させる。
双方の聖剣が触発され、相乗効果で聖なる気を何倍にも高めていく。
「あ、やべ」
フリードがデュランダルから離れようとしたときにはもう遅かった。高まった気は波動となってフリードを呑み込む。
フリードを呑み込んだ極大の光は、そのまま柱を数本薙ぎ倒し、壁に当たる。その壁すらも聖なる波動によって削られていく。
「いけ！　ゼノヴィア！」
「ああ！」
一誠の声に応じて、光は激しさを増す。が、突如として光が二つに裂かれた。
「あんましちょーし乗ってんじゃねぇぞ！　聖剣アマァ！」
聖剣の光を裂き、中からフリードが飛び出す。体の所々から白い煙が上がっているが、デュランダルとアスカロンの二刀流を受けたとは思えない程の軽傷であった。
「デュランダルとアスカロンの光を受けて、その程度だと……？　馬鹿な！」
自分が最も信頼する聖剣と、親愛する者から借りた聖剣を受けて、ほぼ無事であったことが信じられないゼノヴィア。

「――どうやって切り抜けたんだい？」
「ああ？　言う訳ねえだろ――と言いたいけどやっぱり教えて上げる。俺様って、もう聖人クラスで優しいから」
フリードは、右手の中指と人差し指に親指を押し当てる形を作る。
「俺があの光の中で大丈夫だったのは――」
意味深なフリードの動きに、誰もが視線をそこに集めてしまう。
「パチン、とな」
指を鳴らした瞬間、凄まじい光量が指先から発せられる。閃光手榴弾でも放たれたかの様に神殿内が白光一色に染まる。すぐに全員目を閉じるか背けるかしたが、見た光がただの光で無いことを、身を以って知る。
「これ、は……！」
リアスたちは、激しい目の痛みに涙が止まらず、目を開けることが出来ない。似た様な感覚を皆が知っている。聖剣を見たときと同じ感覚であった。ただ見るだけでは目が乾く様な痛みを覚えるだけだが、元より目を潰すのが目的で放ったらしく、苦痛は数倍である。
「く、う、これは、聖剣の……！」
白く染まった視界の中で木場が呻く。

前線に立っていた木場、ゼノヴィア、小猫、リアスはまともに光を見てしまったせいで、ほぼ視界はゼロ。次に朱乃は後方に居た為に前線の者たちよりも軽傷だったが、涙が止まらず視界がぼやけている状態。朱乃が壁になってくれたおかげで背後にいたアーシアは無傷で済んだが、彼女ではフリードに太刀打ちできない。他のメンバーを治癒するという選択もあるが、フリードがそれを見過ごす筈も無く、また視力を奪われ著しく能力が低下している彼らでは守れる保証が無い。

「このハマった感！　良い――」

最後まで言い切る前に、赤い拳がフリードの顔面を殴りつけ、再び壁に叩き付けた。

「あ、れ、れー？　何で無事？　ホワッツ？」

壁に大の字に張り付けられながら、フリードが首を傾げる。その目線の前には一誠が立ちはだかっていた。

「言う訳ねえだろ」

フリードの台詞をそのまま返す。

一誠の目が無事だったのは、ドライグのおかげであった。閃光を放つ直前に、気配を察し兜の目を閉じさせたのだ。『赤龍帝の鎧』を纏っているからこそ出来た緊急回避である。

「おいおい、何かのご都合主義ですかぁ？　空気読んでよ、イッセー君。今の主人公は

おーれ。転生チート強化オリジナル悪魔アンチヘイトイケメンオリジナル主人公なの。ご都合主義は、俺の特権なーの」

「相変わらず訳の分かんないことを……！」

これ以上話していると、自分まで頭がおかしくなってくると感じ、フリードを更に壁に埋め込んでやろうと拳を握り締めたとき――

『相棒！』

――ドライグの声。気付くと体を後ろに仰け反らせていた。眼前を通り過ぎていく光の軌跡。

「熱ッ！」

胸の辺りに火で炙られた様な熱を感じ、見ると鎧に肩から胸に掛けて斜めの傷が走っている。

「ありゃあ？　避けられちった」

顔を兜で隠していても一誠が驚いているのが分かるらしく、喜悦に満ちた声を出すフリード。

何かを振り下ろした体勢であり、一誠の目線は自然と下に下がり、一点で止まる。

フリードは何も持っていない。代わりに真っ直ぐに伸ばされ、揃えられた五指。手刀の形となった手。

嫌な答えが一誠の頭を過る。
「いいだろ？　俺の聖剣は！」
その答えを肯定する様にフリードは叫んだ。
フリードが死に、肉塊となった復活するまでの過程で取り込んだのは悪魔だけでは無い。義手に使い、シンにへし折られたエクスカリバーの模造品。それもまた取り込んでいた。
エクスカリバーの模造品は、『擬態の聖剣』の特性もあったことで肉塊にも上手く形を変えて混ざり合い、その結果フリードと完全に同化してしまった。
フリードが意識すれば、彼の体は模造品だがどこでもエクスカリバーと化す。
「あひゃひゃひゃひゃ！　驚いた？　驚いた？　あひゃひゃひゃ――」
突然フリードの哄笑が止まる。一時停止でも押されたかの様に唐突に。その目は一点を凝視していた。
「――ああ、驚いた。……何で生きているんだ？　フリード」
背中に聞こえる声。それは、バトルフィールド外で見学している筈の――
「間薙！」
彼が神殿内に現れたことに、一誠だけで無くリアスたちも驚く。
だが、一番驚いている、というよりも過敏な反応を示しているのはフリードであった。

眼球が上下左右異様なまでに速く動き、口が半開きとなっている。その端から涎が垂れており、完全に弛緩している。
戦いの場に於いても、普通の場でもおかしいとしか言えない反応。フリードの中で何か別のことが起こっているようであった。
「間薙……シンッ！」
動き始めたフリードの第一声。それは一誠を心底驚かせ、シンもまた僅かに目を大きくする。
渋味を感じさせる男の声。明らかにフリードとは別人の声であったが、シンも一誠もその声を知っている。
同時に忘れられない声でもあった。シンは二度戦い、一誠は一度殺されかけた。
その者の名が、揃って口に出る。
「ドーナシーク……」
「ドーナシークッ！」
それが正解だと言わんばかりに、天井目掛けて何かを放る。
天井付近で停まったそれは、バスケットボール大の光球であった。
「死ねッ！　間薙シン！」
光球の表面が波打つと同時に、数え切れない程の光の槍が撃ち出され。豪雨の様にシ

ンへと降り注ぐ。

勿体無い。非常に勿体無い。

彼という波紋が、新たに生み出した波紋。

それが衝突しようとしている。

彼が打ち勝つか、それとも打ち負けるか。

一度しかない人生の中で、困難、強敵にぶつかっていく。生と死の狭間で揺れる人生。

ここで彼が死ねば全てのことは無駄に終わるだろう。自分が懸けてきた膨大な時間が無に帰す。

何と哀れか。最初から苦難しかない人生。

だが、超えても超えても尚降りかかる困難こそが彼を唯一無二の存在へ押し上げる。

今回の試練は、見立てではかなりの確率で彼は死ぬだろう。

でも、乗り越えて欲しいと願う。

まだ超えていく壁はたくさん在るのだから。

そして、その壁を乗り越えた分だけ新たな波紋を生まれ、彼に試練として襲い掛かるだろう。

彼の人生に神の慈悲は無いだろう。

　だからこそ、だからこそ――
「おい。何愉しそうに笑ってんだよ、お前」
「そんな顔をしてたかい？」
「してたぜ。そっちのガキもな」
「そう見えるなら、そうなんだろうね、アザゼル」

怨念、虚飾

気持ち悪いぐらいに事が上手く、或いは悪く運んでいる気がした。もしかしたら運ばれているのかもしれないとシンは思う。

赤い獣の戦いの後、リアスたちのことが気になり、タンニーンとデュリオに後のことを任せて彼女らを探しに出た。二人には止められたが、シンは胸騒ぎの様なものを覚えていたので半ば強引に頼み、返事を最後まで聞かずに移動してしまった。

探そうにも当てなど無く、たまたま一番大きな神殿が目に入り、取り敢えずそこを目指すことにしたが、結論から言えば大当たりであった。

神殿入口では戦いの痕跡。内部まで入ると奥から戦闘音も聞こえてくる。

勘は比較的に良い方であると自覚しているが、ここまでとは思っておらず、若干の気色悪さを覚えた。

急いで神殿奥を目指すが、戦闘音がはっきりしてきたと同時に、聞き覚えのある声も耳に入ってきた。

高音、低音が混じりの不協和音且つ情緒不安定な話し方。もう二度と聞くことは無いと思っていた声。

神殿の開けた空間まで来ると、そこには目を押さえているリアスたち。禁手化し戦っている一誠。そして、シンがその手で葬った筈のフリード。

整った顔立ちを台無しにするほど歪んだ笑み。一度聴いたら忘れられない耳障りな哄笑。何故かほぼ全裸という点を除けば間違いなくフリードであったが、万が一の事を考えて試しに名を呼んでみた。

どういう訳かフリードの口から同じく葬ったドーナシークの声が発せられ、怒号と共に光の槍を降らしてきた。

幻影でも亡霊でも無い。向けられた憎悪、殺気は間違いなく本物。

死んだ者が蘇り、完全に断った因縁が、怨念と共に再びシンと結びつこうとしている。

逃げ場を全て埋め尽くす光の槍の豪雨。今居る位置から下がり通路の奥に行けば避けることは出来る。しかし、その選択は視界に入った事情からすぐに消え失せた。

少し離れた位置にいる朱乃、アーシア、ギャスパーを見つけてしまった。朱乃はリアスたちと同じく目からボロボロと涙を流し開けられなくなっており、ギャスパーも目を閉じた状態であった。周囲の状況を確認出来ない二人に対してアーシアの目は無事であった。その証拠に降り注ごうとしている光の槍に、驚愕の表情をしている。

シンは走り出す。走りながらシンは両手に魔力を集中させ、二本の魔力剣を創り出す。

絶望的な数の光の槍を見たアーシア。彼女にそれを防ぐ手段は無い。ならばせめて、と朱乃とギャスパーに覆い被さる。自らを呈して彼女らを守ろうとした。

一誠はアーシアの名を叫び、思わず飛び出そうとするが、タイミングや距離からして間に合わない。

光の槍がアーシアたちに襲い掛かる。一誠は、数秒後の悲惨な光景を幻視した。

だが、その未来の光景も間一髪でアーシアたちの下に辿り着いたシンによって覆される。

天井目掛けて二本の魔力剣を振るう。解き放たれた魔力の波が、光の槍を呑み込んでいく。

天井へと向かっていく魔力波。渦巻くそれに合わせて光の槍もまた乱回転し、次々に天井へ突き刺さり、または貫いていく。

取り敢えずの窮地は脱したと思ったシン。その矢先に、爪先に振動を感じる。

爪先から僅か数センチ離れた場所に突き刺さった光の槍。魔力波を受けてもなお直進し、その魔力波すらも穿ってみせた。

咄嗟であったが、シンは手加減などしていない。手加減無しの魔力波を貫く光の槍。

また光の槍が床に刺さる。今度は少し離れた場所であった。

光の槍自体に見た目の差は無い。しかし、魔力波に負けるもの、打ち勝つものなど、込

められている力にかなりのムラがあり、そのランダム性が却って予見し辛くした。
頭上の光球からはまだ光の槍が放たれ続けている。いずれは――
またも魔力波を貫いてくる光の槍。今度は狙いも合っており、シンに直撃するコースへ乗っている。
短く舌打ちした後、その光の槍を拳で打ち払う。手の甲を当たると光の槍は四散し、光の粒と化す。一瞬手の甲が焼ける痛みを感じたが、構うことは無かった。
撃ち出す数に限界があるのか雨の様に光の槍を降らす光球が萎んでいく。ようやくドーナシークの攻撃が弱まる。
「おおおおおおお！」
――筈が無かった。フリードもといドーナシークが獰猛な叫び声を上げながら飛び掛かってくる。
シンは光の槍に注意しながらもドーナシークから殆ど意識を逸らさなかった。意識を離してしまったのは、唯一先程の光の槍を払ったときだけ。
時間にすれば一秒も無い。だが、その一秒に満たない時間でシンに接近している。かなり距離があったというのに。
ドーナシークの動きを速いと思いながらも、ただがむしゃらに突っ込んでくるだけのドーナシークの顔面に迎撃の右拳を打ち込む。

（重い）

伝わる感触が明らかに違う。密度も重さも人外のもの。ドーナシークの左頬にめり込ませた拳が、ドーナシークの勢いを弱めることが出来ず、手首が曲がり始め逆に押し負けそうになる。

「はあああああ！」

ドーナシークは痛がる素振りも見せず、頬に拳が突き刺さったままの状態で、右腕を振るう。拳をちゃんと作らずに適当に五指を曲げた形で、シンの頭部を叩き潰す大振りの一撃。

豪快さだけが目立ち技術も何も感じられない、精彩が欠けた原始的なものであったが、光の毒で浸された毒手と見た目以上の重量を知れば、嫌でも避けなくてはならない。

半歩だけ前に出る。風切り音は耳のすぐ側まで来ていた。ドーナシークの手が、シンの頭部を生卵の様に砕く前に上体を下げる。

ドーナシークに対し深々とお辞儀でもしているような体勢で、迫っていた風切り音が、髪を靡かせると共に遠ざかっていくのを感じる。直後に、下げた上体を追うようにして振り上げられた右拳が、ドーナシークの顎を打つ。

相手がどんな顔をしているのか。効いているのか。体勢を崩せたのか。など考えるよりも先に、下げていた上体を起こしながらドーナシークの腹部を左拳で突き上げた。

この二撃でドーナシークの体が僅かに前のめりになる。すると、シンはドーナシークの髪を鷲掴みにして頭を無理矢理下に持っていき、低い位置に来た顎を歓迎する様に右膝ではね上げる。

たとえ悪魔や天使であっても頭部から首が外れる程の連撃だが、顎をはね上げられてもドーナシークの目はシンから外れない。

「間薙シィィィン！」

はね上がった頭部を力任せで元の位置に戻す。

雄叫びとシンの名前しかドーナシークの口から出て来ない。理性が失われているのか、それとも理性を忘れる程に怒り狂っているのか。

厄介なのは、ドーナシークの目にはシンしか映っておらず、周りのことなど目に入っていない。そして、シンの方は後ろにいるアーシアたちのことを無視することなど出来ない。

下がることも避けることも出来ない状態で、とにかくドーナシークをこの場から引き離そうとする。

しかし、まだシンはドーナシークの怒りを甘く見ていた。ドーナシークが眼中に無いのはアーシアたちだけで無い。

「おおおおおお！」

ドーナシークが光球を作り出し、放る。真上に。
「死ねっ！」
「お前――」
光球から発射される光の槍。槍の雨下に入っているのはシンやアーシアたちだけでなく、ドーナシークも入っている。
自らの命もまた彼の眼中には無かった。
急ぎ魔力剣を作ろうとする。が、光の槍が降ろうとしている中でドーナシークがシンに拳を繰り出す。
咄嗟に手で掴んで防ぐ。光の力のせいで掌が焼けるが、そんなことよりもこの攻防のせいで魔力剣を作る時間が失われてしまった。手はもう片方空いているが、一本では防ぎ切れ無い。
一誠はすぐにドラゴンショットで光球を消し飛ばそうとするが、既に光球から槍が放たれており、一歩間に合っていない。
どうすればいいと誰もが思ったとき、朱乃、ギャスパー、アーシアの体が地面を滑って移動していく。
よく見れば、三人の影から黒い手が伸びており、その手が次々に引っ張って三人を運んでいた。

「こっちでいいですか！」
叫んだのはギャスパーであった。ヴァンパイアの能力を使い、自分ごとアーシアたちを運んでいる。
邪眼が使えないギャスパーが精一杯考えた自分のすべき事。一誠やシンの迷惑にならないように、ここから移動する。目がまだ見えないので方向が分からず、声を上げて誰かに尋ねた。
「それで良い」
シンは短い言葉で、偶然だが槍の範囲から離れようとしている動きであることを教え、ついでにギャスパーの行動を褒める。ここでの機転は大きい。
ギャスパーはシンの言葉を受け、黒い手で運ぶ速度を上げる。
掴んでいるドーナシークの手を離そうとはせず、逆にもう一方の手も掴む。密着している部分が焼け、嫌なニオイが立ってくるが、その状態で右足裏から魔力を爆発させる様に放つ。
シンは仰け反る体勢となり、そこにドーナシークは覆い被さる様な形となる。背を地面に着けない巴投げで宙に浮く二人。丁度、シンの体がドーナシークの体の影に隠れた。
そこへ落ちてくる光の槍。自ら放った光の槍が、どんどんとドーナシークに突き刺

さっていく。
　まんまとドーナシークを盾もしくは傘にしたシンだが、その表情は険しいまま。何故ならば、体を串刺しされているドーナシークは未だに憎悪の形相をシンに向けている。
　赤い閃光が天井で爆発する。一誠の放ったドラゴンショットが、ドーナシークの光球を破壊するのと同時に、ドーナシークは脳天から床に打ち込む様に叩き付けられた。
　シンはドーナシークを蹴り付け、その反動で側から離れる。ある程度距離をとると己の両手を見る。赤く変色し、ドーナシークの手を掴んでいた箇所の皮膚が剥がれている。だが、シンは皮膚が捲れた手ですぐに拳を作る。左眼を失ったり、右脚を失ったりした経験のせいか、シンの中では傷として勘定もされない。
　勢いとドーナシーク自身の重量で床が割れ、その罅の中に埋まるドーナシークの顔上半分。
　ゆっくりと前後に揺れた後、仰向けになる様にして倒れた。
「アーシア！　朱乃さん！　ギャスパー！　無事か！」
　一誠は神殿隅まで移動していたアーシアたちに声を掛け、怪我が無いか急いで聞く。光の毒はかすり傷であったとしても無視出来ない。
「だ、大丈夫です！　ギャスパー君のおかげで無事です！」
「ありがとうございます。ギャスパー君」

「は、はいぃ！　どういたしまして！」
　朱乃の視線はまだぼやけているが、輪郭でギャスパーを見つけ、その頭を撫でる。
「朱乃！　貴女たちはなるべくここから離れなさい！　また巻き込まれるわ！」
「ですが、部長！」
「私たちのことはいいから！」
　朱乃たちの身の安全を優先するリアスの指示。先程のドーナシークの攻撃は偶々リアスたちが射程外に居た為に当たることは無かったが、その偶々が何度続くか分からない。
　何せドーナシークは狙いをシンに定めているものの、その攻撃方法は無差別だからだ。
　一誠は、シンの方を見る。いきなり現れ、ドーナシークとの戦闘が始まったので気付かなかったが、シンの姿はどうも見ても一戦、もしくはそれ以上戦った形跡が見える。
　一誠たちと同じ学生服は、至る箇所がボロボロに破れており、血の染みらしきものも見えた。そして、ズボンが右脚の膝から下が裂けて無くなっており、靴も履いていない素足であった。
「――大丈夫なのか？」
「ああ」

衣服の損傷具合に対してシンの体には目立った傷は無い。一誠の念の為の確認もシンは短い言葉で返す。

そんなことを言っている内に、仰向けになっていたドーナシークが動き始める。

体中に刺さっている光の槍は既に消えている。しかし、ドーナシークが倒れている場所には血溜まりが出来ておらず、それどころか傷口から出血もしていない。光の槍が貫いていた箇所は拳程の穴が開いているにも関わらず。

見た目は人だが、中身は明らかに人では無い。ならドーナシークたちは一体何になったというのか。

「間、薙……！」

相変わらずその口からはシンの名しか出て来ない。

「間薙……！」

怨恨を込めて名を呼ぶ度に、ドーナシークの風穴が埋まっていく。まるで、裡に満たされている憎悪を力に変えているようであった。

「……滅茶苦茶執着されてるな」

「まあ、理由は分かる。自分の仇が目の前に居るんだからな」

「そりゃ恨む……え！　そうなのか！　じゃあ、何で生き返って――というかフリードの姿に……」

さらりと告げられた事実に一誠は驚く。状況が状況ならもっと深く聞いていたかもしれないが、それが事実だとすると、何故死んだドーナシークがフリードの姿になって蘇ったのかという、新たな疑問が出てくる。

フリードも手に掛けていることも話しても良かったが、更に混乱するだけだと思い、シンは後回しにすることとした。

割れ目から頭を引き摺り出し、仰向けからうつ伏せの体勢となる。そして、体を起こそうとすると、ドーナシークは何故か自分の髪の毛を鷲掴みにする。

その奇怪なポーズに訝しむ目が向けられる。次の瞬間、ドーナシークは自分で自分の額を地面に叩き付けた。

何度も。何度も。床が割れ、破片が舞う程の勢いで自傷行為を繰り返すドーナシーク。その光景に一誠は絶句し、シンは微かに顔を顰め、アーシアは理解の範疇を超えている行為を目の当たりにして震えていた。目が使えなくなっている他のメンバーは、途切れず聞こえる破砕音を警戒している。

「勝手な！　ことを！　してんじゃ！　ねえええ！」

叫ぶ声はドーナシークの声ではなくフリードのものであった。

「死にぞこない！　死にぞこないが！　間薙、間薙って何度も馬鹿みてえに叫び、やがって！　俺様を、あの半端悪魔の！　ストーカーにしてんじゃねえぞ！」

「お前が、消えろ！　フリード！」
「てめえが消えんだよぉぉぉ！」
フリードとドーナシークの声が入れ替わりながら互いを罵倒し合う。それをしながら額で地面を砕いている光景は、シュールを通り越して意味不明な恐怖感を与える。
「これは！　この体は！　俺のなんだよ！　しゃしゃり出てきてんじゃねえぞ！　この亡霊堕天使が！　とっとと養分になっちまえよぉぉ！」
額を打ち続けるに加え、自分の頬を殴り始める。
断片的に得た情報だけを整理すると、今のフリードは二重人格に等しく、元々はフリードの主導権が強かったのだろうが、シンに対し強い憎悪を持つドーナシークの精神が強まり一時的に主導権を奪った。だが、負傷などの影響でフリードの精神も表面化し、現在体の主導権を奪い合っている様子。
情報を整理してみたものの、やはりフリードとドーナシークの精神が混ざっているという事実が一番意味が分からない。
（あの後、何が起きたんだ？）
まさかシンによって命を落としたことが引き金となって、バルパーの計画通りに人工神器の実験体となり、そこから計画者の想像を上回る成功体となっているなど、いくら想像力が豊かでも思いつくことは無いだろう。

未だに自分を痛めつけているフリード。その正体はどれだけ考えても分からないとシンはさっさと割り切り、倒すことに専念する。

「はあ……！　はあ……！　はあ……！　へ、へへ、いひひひ。ひゃはははは！　ようやく！　ようやく大人しくなったよ！　いへへへへへ！」

天を仰ぐ様に顔を上げたフリードの顔は、傍から見ても正気を感じさせるものではない。眼球の動きが定まらず、瞼が痙攣し、頬が何度も引き攣りを起こしている。

「これでようやく――痛ぇ！」

フリードが顔を押えて悶絶し出す。先程までの自傷行為の痛みかと思ったが、フリードの顔には傷一つ無い。

「痛てぇ！　痛てぇ！　何で！　何でだよ！」

身体を刺されても、斬られても、殴られても大丈夫だったのに、血も出ず、傷も無かったというのに、顔の中央に熱の様な痛みが生じていた。

困惑するフリード。それを見ている周りも困惑する。

シンたちの正直な感想を言えば、さっきから正気の沙汰では無い行為を何度も繰り返しているせいで、完全に攻めあぐねていた。何せ身体能力ならば脅威の一言、下手に刺激すればどんな風に暴れ回るか分からない。それ故に見に徹し機会を窺う。フリードの奇行を見るのは苦痛というのが共通の感想だが。

「顔が……！　顔が……！」

フリードはドーナシークを取り込んでしまったことで、彼がシンによって刻まれたトラウマであり、敗北の傷である顔の幻覚痛まで引き継いでしまっていた。

薬でも魔法でも消すことが出来ない痛み。死への恐怖によって精神に深く埋め込まれた傷。そして、その傷は別の傷を呼び起こす。

「冷たい……冷たい寒い寒い！　何だよ！　あるんだよ！　ここにあるんだよ！　落ちてねえぞ！　ある！　ある！　ここも埋まってんだよ！」

情緒不安定な様子で首と胸を掻き毟り始めるフリード。聞いていたリアスたちには、意味不明な言葉であったが、シンだけはそれが何を意味しているのか分かった。

フリードを倒したとき、炎で胸に風穴を開け、視線から放つ魔力によってその首を落とした。今のフリードは、その死に際の記憶がフラッシュバックされているのだ。

胸の中心に無い筈の穴が開き、そこを通り抜けていく冷たい風の感触。首筋に感じる血が失われていくような喪失感。

本来ならば二度と得ることは無い死の体験が、フリードの中で何度もリピートされていく。

その体験に狂乱状態となるフリードだったが、子供の様に身を丸めた体勢で急に喚くのを止めた。

「そうか、そうか。そういうことか」

顔を地面に着けた状態で譫言の様に同じ言葉を繰り返す。

「俺がこんなにも可哀想で痛い思いをしているのはそういうことですか。マジかよ散々主人公属性を積んできたのに、更にここで不幸属性や可哀想属性も盛っちゃう？　全方向に刺さっちゃうパーフェクトなキャラになっちゃうよ、俺様。坊ちゃん嬢ちゃん父母方爺婆も夢中になるキャラで歴史に名が刻めますぜー！　でもね、でもね」

一旦普段の調子に戻るが、すぐに声色が変わる。平常と異常が入れ替わっていく様は、狂人という印象を強めさせる。

「痛いのはダメだよ。NGだ。マゾじゃないもんで。どっちかつーとドSなんで」

「これもそれもあれもどれもかれもなんもかも痛いのは――」

フリードは首を捻じり、下からシンを見上げる。その目は異常な輝きを放ち、狂気と殺気に満たされている。

「――てめえのせいだな？」

フリードが唸りの様な声を吐くのと、シンが側頭部を地面に打ち付けたのは、ほぼ同じタイミングであった。

視界が突然真横になり、鈍い衝撃が頭を突き抜けていく。何が起こったのか一瞬理解できなかった。だが、頬の熱。口の中に広がる血の味。目の前に見えるフリードの足が

見え、殴られたことに間を置いて理解した。
（速い……）
目が反応しない程の速度は初めてであった。油断などしていない。虚を衝かれたのではなく、純粋にフリードの動きが速いのだ。
直後に目の前の足が、横になっているシンを蹴飛ばそうとする。腕を交差して防御するが、シンの体は軽々と浮き上がり、宙を飛ばされていく。
背中から壁にぶつかる。衝撃が臓腑を突き抜けていくが、耐えられない程では無い。そんなことよりも、防御した腕が折れていないかどうかの方が重要であった。使えないと一気に戦力が落ちる。場合によっては無理矢理使うが。
腕を動かす。痛みはあるが拳は握れる。ただし、蹴られた箇所にはフリードの足型の火傷が出来ている。
シンは、石造りの壁に指を突き立て、体を横に引っ張る。そのすぐ後にフリードが頭から突っ込んできた。
脳天を壁に叩き付けると、そこを中心にして蜘蛛の巣状に罅が伸びていき、壁は勿論のこと床、天井にまで亀裂が走る。
「逃がさねぇ……」
ホラー映画、またはスプラッター映画のモンスターの様に恐怖を煽る為の緩慢な動き

で頭を引き抜くフリード。
「フリードオオオオ！」
シンにもう一度攻撃を仕掛けようとするフリードであったが、聞こえてきた声でそちらを向いてしまう。眼前に見える拳を避けることが出来ず、自分が作った亀裂にまた頭を埋め込まれる。
「大丈夫か！」
一誠がフリードの顔面に拳を打ち込んだままシンの容態を確認する。だが、シンが答えるよりも速く、仰け反った状態で放たれたフリードの前蹴りが一誠の胸部に刺さった。
体が折れ曲がる。フリードの爪先が、ドラゴンの鱗に等しい鎧に貫いている。幸いにも生身の部分にまでは紙一重で届いていないが、放たれる聖剣の力は届いており、皮膚を炎で炙られていく様な熱さと痛みを感じる。
すぐにその足を引き抜き、フリードに拳を振るう。が、その拳はフリードの手が難なく止めてしまった。
「そういえばさぁ……」
海老反りの体勢だというのに、引いても押してもフリードはびくともしない。最大まで倍化をしている今の一誠の身体能力を、フリードは上回っている。

「考えてみれば、チミと最初に会ったときから何か俺の人生上手く行かなくなったよなぁー？　そうそう。俺が神父としてちゃーんと仕事をしてたときに、のこのこと姿見せたのが最初の出会いだったねぇー。うーん、メモリアル」
「何が、ちゃんとした仕事だ……！　俺の依頼人に、あんな酷いことをしたくせに……！」
悪魔を呼ぶ常習犯という理由で、切り刻まれ、手足や胴体に釘を打ち込まれて逆さに磔にした。フリードの性格からして嬲り殺しであったのは間違いないだろう。悪魔となって日が浅く、また凄惨な現場を見たことが無かった一誠は、その光景が今でも脳裏に焼き付いている。
「そんなの知んねぇ！　悪魔に関わるってだけで有罪だよ有罪！　ギルティーー！」
埋もれていた頭を、瓦礫をまき散らしながら引き抜き、そのまま額を一誠の兜に叩き付ける。至近距離から見せつけられるフリードの眼光は、目を逸らしたくなるような不気味な輝きを宿していた。見ていて気分が悪くなる目から逸らさなかったのは、フリード相手に弱気な所など一切見せたくない一誠の意地である。
「そしててめえもギルティーだ。悪魔ってだけで死刑だが、俺様の素敵な人生を狂わせたのは大罪。よってメガ死刑！」
フリードの跳ね上がった膝が一誠の脇腹を突き上げる。偶然にもシャルバに付けら

れた傷に直撃し、痛みで一誠の体が一瞬硬直する。
「お？」
その動きを目聡く見逃さなかったフリード。一誠は、奥歯を食い縛って硬直していた体を動かし、フリードの顔面目掛けて横振りの拳を放った。
頭を後ろに引いて軽々と避けてみせるフリード。しかし、その体が身震いする様に震える。拳に続いて出していた蹴りが、フリードの横腹に深々と入っていた。
空振りした拳が軌道を逆に辿り、今度は裏拳としてフリードのこめかみに打ち込まれる。
ほぼ真横に曲がるフリードの首。裏拳の一撃で掴まれていた一誠の拳も離された。
「おおおおおお！」
そこから一誠のラッシュが始まる。腹に左右の連打を入れること十。フリードの顎が下がると、アッパーを叩き込む。
脹脛に下段蹴りを打ち、フリードの肩を掴み、引き寄せると鳩尾に膝を突き入れ、右拳でフリードの頬を殴り、すぐに左拳で逆の頬を殴る。フリードの頭を右へ左へと何往復もさせる。
「舐めんなおらぁぁぁ！」
フリードも一方的に殴られ続けていなかった。顔面を殴られると同時に一誠の顔面

も殴り返す。お互いの頭が傾く。
「しゃらぁぁ！」
奇声を発しながらフリードが貫手で突いたのは、一誠の脇腹であった。先程の攻撃で一誠が不自然な動きをしたので、もう一度打つ。
「うっ」
息を詰まらせる一誠。この反応でフリードの疑惑は確信に変わる。
「あれぇ？　ここってイッセー君の性感帯？」
嘲りながら突き立てていた指を折り曲げ、今度は拳で突く。指の長さ分だけしか拳を加速出来ないが、人外の身体能力と重量が合わさって脅威的な破壊力となる。
拳の圧に押され、地面の上を数メートル滑った後に爪先を立てて何とか停める。塞がっていない傷口から血が溢れていくのを感じる。ただでさえ光の力によって治りにくい状態なのに、聖剣や光の力を纏わせた拳で叩かれ悪化する。
シャルバのときとは違い、気を緩めず常に戦意を保っているおかげで鎧の硬さはある程度維持出来ているものの、フリードの力はそれを上回ろうとしている。
一誠は脇腹に目をやる。脇腹の装甲には指先の跡と拳の跡がしっかりと残っている。更には打ち込まれた箇所には聖なる力が残り、鎧越しにその力を熱の様に感じた。
胸に刻まれた手刀の傷もそうだが、手足が聖剣と同じ効果を持っているのが厄介で

あった。今はまだ鎧のおかげで大丈夫だが、それを貫くのも時間の問題である。
「いやあ、感じちゃった？　俺様ってテクニシャンだからさぁ。おにゃのことチョメチョメするときは、いっつも哭かせちゃうぐらいだし」
詳細を聞かずとも碌でも無いことなのが分かる。嫌悪感が沸き立つ。一誠も女性に対しては、多少紳士的では無い面もあることは認めるものの、フリードやディオドラの様な人種は心底理解出来なかった。
女性を手籠めにして何が愉しいというのか。何故興奮出来るのだろうか。
リアスたちも侮蔑の表情をしている。女性として、フリードの話など唾棄すべきものである。
「あ、そうだ、そうだ。俺っちの人生が上手くいかなくなったのって、もう一人関わってたよなぁ？　可愛い顔して、こっちのムカつくことばっかする余計なことしいがさぁ……」
「何だよ、いきなり……」
話の矛先が別の者へと向けられる。戦いもそうだが、会話の方も主導権を握られつつあった。とは言っても、フリードの会話は支離滅裂、自分本位であるためそもそも成り立っていない。
「なあ、アーシアちゃぁぁん？」

首を捻り、邪悪な顔でアーシアに微笑みかける。
「――逃げろっ！　アーシア！」
相手の嫌がることに関しては、徹底的にやる男だと再認識する。一誠を傷付けることよりも、その心に深い傷を付けようとする。
体は正面に向けたまま、後方にいるアーシアへ後ろ向きに跳ぶ。飛蝗を思わせる跳躍で襲い掛かる。
アーシアは、周囲に朱乃やギャスパーがいるので逃げることが出来ない。
空中で体勢を反転させ、聖剣の力を宿した手刀で、アーシアの華奢な体を斬り――
「ほぐああっ！」
――つける前に横から飛び出してきたシンの右足が、フリードの頬を踏み付ける。下顎がずれる様に歪みつつ、踏み付けられて勢いで飛ばされる。
「視野が狭いな」
自分の快楽を優先するあまり、視野狭窄となってシンの存在に気付かなかったフリードに冷めた言葉を吐く。
直線で跳んでいたのを真横に蹴飛ばされ、床に顔から突っ込んでいくという無様な着地を決めたフリード。
「この――あびゃびゃびゃびゃびゃびゃ！」

体を起こしたフリードの脳天に落とされる雷。電撃の衝撃で奇声を発する。
「あびゃびゃびゃ――てめっ！　ほぎゃらっ！」
耐え抜いた所にもう一撃。またもや奇声が上がる。
「覚悟して下さいね。私、かなり頭に来ているので」
雷を連続して放つ朱乃が、温度を感じさせない言葉と共にフリードの脳天へ雷を叩き込む。フリードが動く度に雷が落とされる。立とうとしても、顔を上げても、首を動かしても、手足の指を動かしても容赦なく。
朱乃がサディストで楽しんでいるからという理由では無い。光の目潰しで比較的症状が軽く済んだ朱乃だが、まだ視界がぼやけており相手を輪郭で判断するしかなかった。その為、フリードの動きに過敏になっており、輪郭が少しでも動いたと思ったのなら雷撃を打ち込んでいる。好意を持っている一誠を嬲ったこと、可愛いがっているアーシアを殺そうとしたことなどの理由で、そこに躊躇いも無くなっているが。
「ふ、あぎゃ！　ざ、あが！　けん、あふっ！　なっ！」
雷撃による蹂躙。最低でも秒間に十は雷を浴びせられているフリードだが、感電しながら少し慣れてきたのか徐々にだが立ち上がり始めていた。体から煙が上がっているが、火傷や焦げ跡などは見つからない。
炭になってもおかしくはない程の雷を受けながらも立ち上がってみせたフリード。

それに合わせたかの様に雷が止まる。
「ふ、へへへ！　無駄無駄――むっ？」
視線が下がる。フリードの前にいつの間にか小猫が立っていた。
朱乃の雷が止まったのは、彼女を巻き込まない為である。
小猫の目は光の影響で閉じていたが、代わりに頭部の耳が周囲を探る様にして動いている。
「……貴方」
「あん？　何だよ？　猫耳っ娘」
「……声も気配も五月蠅過ぎです」
閉じた目でも簡単にフリードの位置が感じ取れるぐらいに馬鹿みたいに大きな声と、隠そうとしない、もしくは隠すことが出来ない気配をこれでもかと発している。
小猫の言葉で、フリードから怒気が放たれる。小猫の脳内に鮮明に映し出されるフリードの輪郭。
相変わらず光によって全体が染まっているが、怒りを煽ったことで体内に流れが生み出される。
体内の力が腕に向かって収束されていく。器用、というよりも極端過ぎる動きに呆れてしまいそうであった。普通は防御の為に幾らか残すというのに。

だが、小猫にとっては好都合。満たされ過ぎていた読み難かった体内に流れが出来た。

「ちっちぇえ体をもっとちっちゃくしてやるぜぇぇ！」

力が流れ込んだ拳を、小猫の真上に振り下ろす。

パン、という軽い音が鳴る。フリードの拳が伸び切る前に、小猫の掌が先に当てられていた。

二人の体重差は何倍もあるが、『戦車』の能力なら苦では無い。しかし、フリードにとっては意味が分からないことが起きている。

ありったけの力を込めたというのに、不発で終わってしまった。いくら途中だからといってこんなにも簡単に止められるのだろうか。

力は何処に消えたのか。それへの疑問は、フリードの体が教えてくれた。

掌で押さえられていたフリードの腕が波打ち始める。皮膚の下に蛇が這っているかの様に。それが腕を昇っていき、体内へと入り込んだとき、フリードは爆音を体の内側から聞いた。

小猫の仙術によって外に出る筈の力を操作し、逆流させて体の内に戻した。フリードが小猫を叩き潰す筈であった力が、フリードの体内で炸裂する。

体の内側を直接殴られたに等しい衝撃は、フリードの体を前屈みにさせ、そこから錐

揉み回転をしながら飛び跳ねた。
派手なパントマイムをやっているかの様であったが、行っているフリード自身は堪ったものでは無い。
痛みは無いが、何が起こっているのか分からず、気付いたら天井を見上げている。そして、見上げ天井には――
「わーお」
無数に並ぶ数々の魔剣、聖剣。全ての切っ先がフリードに向けられ、冷たい輝きを放つ。
「ちょっとタイ――」
言い終える前に剣が一斉に降り注ぎ、フリードを地面に張り付けにする。昆虫の標本よりも徹底的に、雑に、隙間なく刺し止める。
両眼まで貫かれたせいで最後まで見届けることが出来なかったが、表皮で感じ取れた。察知するだけで皮膚の産毛が消失していく様なヒリヒリとした聖なる気と魔力の感覚。
間違いなくゼノヴィアのデュランダルとリアス・グレモリーの消滅の魔力の気配。
「――そこまでする？　ぼくわるいエクソシストじゃないよー」
その減らず口の後に、天を貫く様な聖なる気で作られた光の柱と巨大な赤い魔力がフ

リードに叩きつけられた。
「お、おお……」
一連の流れを見ていた一誠の口から、感嘆とも怯えともとれる声が洩れる。床に出来た円形のクレーターから目が離せられなかった。
シンの妨害を皮切りに、朱乃が足止めし、小猫が転倒させ、木場が固定し、最後にリアスが止めの一撃。おそらくは、通信機を用いてある程度動きを決めていたのだろうが、視覚が機能していない状態とは思えない連携であった。
情け容赦の無い連続攻撃だったが、同時にここまでしなければ倒し切れ無い相手と言える。単純な性能ならば、この場にいる誰よりも高い。しかし、情緒の不安定さと移ろ気易いせいで隙も多かった。
だが――
「ひ、ひひゃはははは!」
クレーター内からフリードの笑い声が聞こえてくる。あれだけやったのにまだ生きている。その生命力には戦慄するしかない。
「すげぇなぁ、俺。あんだけされたのに、まだ生きてんよぉ」
自分でも生きていることに驚いている様子。カリカリと爪を立てながらクレーターから這い出ようとしている。

クレーター縁にフリードの指が掛かると、一気に飛び出てきた。
「は、はははは！　あいつなんかよりも俺様の方が相応しいじゃねぇか！　俺は不死身のジークフリードだぁ！」
自らの生命力を高名な英雄に喩えるフリード。それを分不相応と咎める者は居なかった。その生命力はまさに不死身の英雄そのもの。異論など無い――などという理由からではない。
目が見える一誠、シン、アーシアの目線は、フリードのある一点へと向けられ、言葉を失っていた。
フリードも三人の視線に気付く。彼らの目がフリードの顔を凝視し続けていることに。
「何？　何？　その熱視線は？　俺様のハンサムフェイスに何か付いてる？」
フリードが自分の顔に触れようとして、空振る。
「……あれ？」
何度手を動かしても、そこにあるべき筈の顔に触れない。
「あれ？　あれ？　どういうこと？」
「お前……自分が今どうなっているのか、分かんないのかよ？」
困惑した一誠の声に、フリードが苛立つ。

「ああ？　何言ってんだ？　俺様がどうしたってんだよ！」
「――足元を見てみろ」
シンの言葉に、フリードは視線を下ろす。フリードを拘束していた魔剣の一本が転がっている。磨き上げられた剣身。それこそ鏡の様に姿が映るほど。
「……ん？」
剣身を見たフリードは気付いた。鏡像に映る筈の自分と目が合わない。剣身に映るのは、薄い桃色の何かの断面。そこで初めて理解した。
自分が、首から上を失っていることに。
目が見えないのに見える。口が無いのに喋られる。鼻が無いのにニオイが分かる。耳が無いのに音が聞こえる。脳が無いのに考えられる。
シンたちからすれば、頭部が無いのに普通に振る舞えるフリードが不気味で仕方ない。首の断面も骨や肉など血など無い樹脂を固めた様な無機質なもの。
一誠は、小猫がフリードを人間じゃないかもしれない、と言った意味をようやく理解出来た。そして、どんなだけ殴っても痛がらず、血が出なかったのも分かった。
フリードという人間の形を模しているだけ。何かにフリードの皮だけを被せ、フリードの精神とドーナシークの精神を入れたのがあれなのだ。
目も鼻も口も人形と同じ飾り。最初から機能などしていない。

見ている方も、見られている方も、この事実にただ唖然とするしかなかった。

◇

デュリオとタンニーンは腰を下ろして、炭の塊と化した獣を眺めていた。正確には、監視しているのはタンニーンだけである。デュリオは獣から目を逸らしていた。オーディンの術で両眼を保護し、視覚から穢れが入らない様にしているが念の為である。

獣が焼き尽されたと同時に一帯の穢れは消え、獣自体からも放たれることは無くなった。タンニーンは、応援が来るまで一人で監視を行い、デュリオにはオーディンの下で休む様に言ったが、デュリオはこれを拒否する。

万が一、獣が動き出したとき自分ならば、穢れをいち早く察知出来るという、鉱山のカナリヤの役目を買って出た。

「ここまで来て後は全部お任せ、っていうのは無いっスわ」

というのがデュリオの弁である。軽そうな見た目に反し、責任感はかなり強く、タンニーンもそう簡単には意思を曲げられないと分かり、させたいようにさせた。

監視している間、何度かアザゼル、サーゼクスと連絡を試みているタンニーンだったが、繋がる気配が無い。

それでも時間を置きながら、それを繰り返していた。
デュリオも視線は向けていないものの、獣から意識を外さない。だが、どんなに神経を張り巡らせても獣からは何も感じ取れない。
完全に死んだ、と思うのは楽観的とデュリオは考える。得体の知れない魔人と同質の存在なのである、考え過ぎと思えるぐらいに警戒していた方が丁度良い。
「――あっ」
穢れを防ぐ為に目に巻いていた布が、解けて地面に落ちていく。戦いの中で結び目が緩んだのかと思い、落ちていくそれを手で掴もうとした。
布が黒ずみ、一瞬で原型が無くなる。獣の穢れですら耐えられる様に、オーディンが魔術を施したそれが、一切の間も無く。
デュリオにとって二つの幸運があった。一つ目は、今落ちた布。これがあったおかげで何かが起こる前兆となってくれた。
二つ目はタンニーンの存在。デュリオの声に反応し、布の異変を見たタンニーンの行動は迅速であった。
すぐにデュリオを掴み、傷付いた翼を広げて、即座にその場から離脱したのである。
この対応が、生死を分ける結果となった。
「ホォーホッホッホ。せっかちだこと」

大地に赤黒い渦が起こり、その中心からマザーハーロットが押し上げられる様に出て来る。
光すら照らせない黒い虚空の眼窩が、殆ど見えなくなったタンニーンたちの背を見ていた。
マザーハーロットは、炭化した獣の側に寄る。
「遊びは愉しかったかえ?」
黄金の杯を一口飲み、獣の死体に息を吹き掛ける。
すると、獣の死体が震え出し、炭化した体に罅が入った。
罅が全身に回ったとき、黒い部分は全て剥がれ落ち、中から無傷の獣が蘇る。
獣はマザーハーロットを見ると、恭しく七つの頭を垂れる。マザーハーロットは、下げられた頭を踏み付け、階段の様に首を渡り、その背に足を組んで座る。
それは玉座に腰を下ろす女帝そのもの。マザーハーロットと赤い獣。二体が揃い、真の魔人と化す。
「さて、妾もそなたも十分愉しんだ。最後に顔を拝みに行くとしようかえ。――下賤なる我が同胞の顔を」

哄笑、罵声

首の無い者を見たら、まずそれは死体にしか見えないだろう。
だが、立っていて、動いていて、喋っていたりしたら、それは死体ではなく化物にしか見えないだろう。
頭があった場所で何度も手を往復させ、呆然としている――様に見えるフリードは、人から化物へと成っていた。
シンが死ぬ前に見た時も、まさに化物という姿であったが、あの時は首を落として死んでいる。今は無くとも生きている。とは言え、これを生きていると表現するのは正しいかは分からない。
「あー……」
頭部が無いのに、フリードの声が体から聞こえる。悍ましいというよりもシュールな光景であった。
「何なんだよそれ……」
「あー、はいはい。ちょい待って」
動揺する一誠とは逆に当事者であるフリードは落ち着いていた。

「ん？　こうか？　あれ？　んー？　こうなんでしょうか？」
　呟きながら首を捻ったり、手足を動かし何かをしようとしているフリード。アーシアは、口を両手で押さえてその光景を恐ろし気に見ている。
「どうしたの？　何があったの？」
　一誠やアーシアの動揺が伝わってきたらしくフリードを視認出来ないリアスが現状を聞いてくる。あれだけの攻撃を受けても、フリードの平然とした声だけは聞こえてくるので相手の損傷具合を確認しておかなければならない。
「……何か、おかしなことになっています。……首から上が無いのに生きています」
　小猫が代わりに答えた。心なしか声に混乱が含まれている。彼女の目からすれば、首から上の気脈が無くなっているのに、気が途絶えていないどころか普通に循環している様子が見えているのである。フリードの存在は、悪い意味で小猫の常識を覆すものであった。
「ヒ、ヒィィィ！　ひ、人じゃないんですか！」
　ハーフヴァンパイアのギャスパーが、小猫の言葉に怯える。
「あ、こうね」
　周りの反応を他所に、フリードは手応えがあった反応を示す。すると、ピンク色の断面がチューインガムの様に膨らみ始める。

一定まで膨らんだそれは、一部が窪み、盛り上がり、凹んでいく。時間にすればものの数秒程度。窪んだ部分は目や口となり、盛り上がった部分は鼻や頭髪、凹んだ箇所は耳となる。

内面を知れば完全に詐欺としか言い様のない整った顔。その顔を一瞬で台無しにする悪意と歪みと醜悪に満ちた笑み。首の上で、永遠に失われた筈のフリードの頭部が完全に再現された。

「新しい顔よ！　フリード！　おかえり！　俺様のハンサムフェイス！」

新しく出来た顔の感触を、両手で頬を軽く叩いて確かめる。

「お、お前、平気なのかよ……？」

頭を生やしたこともそうだが、そんなことが簡単に出来る存在となったことに平静を保っていられるのか一誠は聞いてしまう。自分がもし同じ立場なら、果たして正気を保っていられるかどうか。悪魔に転生したときも殆ど人と変わらない見た目であり、不便なことはあったが、自分の存在に恐怖を覚えることは無かった。

「本当は恐ろしいさ……こんな、こんな怪物になっちまうなんて……」

両手で顔を覆い、声と体を震わせる。

「でーもー」

間を置かずに手の隙間から陽気な声が零れ出てきた。

「そういうことは、君らぶっ殺した後で悩めばいいやー！　大事なのは先よりも今！　今がなきゃ未来なんてありませーん！　その為に有効活用させてもらいましょー！」

異形となる苦悩などフリードには全く無縁であることを思い知らされる。彼からすれば悪魔を殺す手段が増えた程度の認識だった。

「でもよぉ！　じいさんも俺をこんなにするなら先に言ってくれよなぁ！　合成獣だけじゃ飽き足らずに、訳の分かんないものに変えちまってよ！　本当にマッドだよな！　バルパーのじいさんは！」

フリードの口から出てきたバルパーという言葉に、木場とゼノヴィアが固まる。

「なん、だって……？」

「バルパー、だと……？」

バルパーがコカビエルの手によって死んだのは、この場にいる全員が見ている。だが、フリードの口振りは、明らかにバルパーの生存を匂わせるものであった。

皆が驚く中で、事前に聞いていたシンだけは無表情だったが、フリードの悪意を感じさせる暴露に僅かに眉根を寄せる。

「バルパー・ガリレイは死んだ筈じゃっ……！」

皆の反応を見て、フリードはあっ、と声を上げ、慌てて両手で口を塞ぐ。そのあまりにもわざとらしく下手な芝居のせいで、フリードが意図してバルパーの名を出したのが

分かる。
「ああ、言っちゃった！　でも、じいさんもこのこと秘密にしてたし、逆に俺様は喋っちゃおー！　そうでーす！　バルパーのじいさんは生きてまーす！　今明かされる衝撃のしんじーつ！」
全員がショックを受けたことに満足し、甲高い声で笑うフリード。もし、バルパーがこのことを知れば、激情に駆られてフリードを縊り殺そうとしていただろう。
「いい反応するっすね！　特にそこのナイト君と使い手さん！　期待通りのナイスリアクション！　画になるねぇー！」
ゼノヴィアがデュランダルを振り抜く。木場が無数の聖魔剣を一斉発射する。目が見えなくとも、フリードの不愉快な声で位置など凡そ把握出来る。
「あらよっと！」
デュランダルの刃から、帯の様に伸びる聖なる気の横薙ぎの斬撃を、跳躍して軽々と避ける。
続けて頭上から聖魔剣が束となって降ってくる。空中に居るせいでもう避けることは出来ない。
「はっはーん！」
最も近付いた聖魔剣を素足で蹴り返す。すると、蹴り返された聖魔剣は次々に他の聖

魔剣に接触し、軌道を変えさせ、全てがフリードを避けて通る――などという都合が良いことは起きず、弾けたのは最初の数本だけ、後はその十倍の量の剣がフリードを呑み込みながら床に突き立てられる。
「ツボ押しには、ちょっと針が大き過ぎじゃなーい？」
だが、すぐに床に刺さる聖魔剣を蹴り飛ばしながらフリードが姿を見せる。その体に刺さる十数もの聖魔剣を引き抜きながら。
剣を引き抜かれた箇所はすぐに閉じる。首や背中、心臓、肺などの急所にも刺さっているのに、フリードは顔色一つ変えない。
頭が吹き飛ばしても直り、人体の急所も効果無し。不死身のジークフリードと豪語するだけのことはある生命力である。
「どうしたぁ！　狙いが雑だぜぇぇぇ！」
フリードが言う様に、ゼノヴィアと木場の攻撃は、大体の位置を把握して攻撃しているに過ぎない。故に、ゼノヴィアの初撃は難なくと避けられた。木場の方は不正確さを数で補おうとしたが、一本一本まで精密に扱うことが出来ず束の様な攻撃となってしまっていた。
「そんなんじゃ甘ぇんだよ！　舐めんな腐れ悪魔どもがぁぁぁ！」
地を蹴るフリード。瞬時に最高速へと達する。狙うは片腕を切り落とした木場。

フリードが接近してくるのを感じ、聖魔剣を一斉発射するが、フリードの動きは木場の想像よりも一歩も二歩も早く、フリードが通過した場所に聖魔剣が刺さり、どれも外れてしまう。

「祐斗君！」

木場を逃がす時間を稼ぐ為に、朱乃がフリードに雷を撃つ。

「あひゃはははははは！」

着弾――かと思った瞬間に、フリードが急停止。雷はフリードの前方に落ちた。雷が外れると同時にフリードは再加速する。

ぼやけた視界の中で朱乃は必死にフリードを狙うが、フリードは急停止と急加速を巧みに使い分け、どれも回避してしまう。

朱乃の狙いが甘い訳では無い。フリードの動きが異常なのだ。通常の人体ならば、体が壊れてしまう動きを短時間で何度も繰り返している。

雷を全て避け切り、手刀を突き出す様に構える。その手に、デュランダルと似た輝きが宿った。

受けた傷が軽傷であっても、重傷もしくは死に繋がる聖なる気をこれでもかと込めるフリード。手刀が向ける先は、フリードが見るだけで反吐が出る木場の美貌。

距離、速度。五感を通じて伝わってくる情報は、木場に回避不可という非情な現実を

突き付ける。
攻撃も回避も間に合わない。
瞼越しに感じる毒々しい聖なる気。肌が総毛立つのが分かった。
「ぐっちゃぐちゃのどろどろに整形してあげるよぉぉ！　ナイトくぅぅぅん！」
動かない木場を見て、観念したと思ったのか悪意を撒き散らすフリード。一方で、暗闇の中の木場は感じていた。
急速で向かって来ている気配。閉じた目でも伝わってくるその気配の色は赤。
「フリードォォォ！」
噴射孔から限界まで魔力を噴出させた一誠が、フリードに横から体当たりをし、そのまま掴んで飛んでいく。
「邪魔すんじゃねぇぇぇ！」
楽しみを妨害されたフリードは、一誠の背中に肘を叩き付ける。頑丈な鎧でも衝撃が貫いてきて息が詰まる。しかし、フリードを掴む手の力を緩めない。
「悪魔如きが、俺様に触るんじゃぁねぇぇぇ！」
噴出孔にフリードの掌が打ち込まれる。その手に宿る聖なる気が噴出孔を破壊し、片方が使用不能になったことでバランスは大きく崩れ、空中を錐揉みしながら無茶苦茶に動き回る。

「おおおおおおお！」

視界が三百六十度回転する。視界がマーブル模様となって何が何か分からなくなる。その間にもフリードは肘、膝、拳を手当たり次第に打ち込んでくる。

「離せ！　離せぇぇぇぇぇ！」

「誰が離すかぁぁぁぁ！」

一誠は魔力を噴出孔の片方に集中させる。速度を緩めるどころか逆に加速し、回転も速度も激しくなる。

「うおおおおお！」

ノーブレーキで壁面に衝突する一誠とフリード。互いに側頭部を強く打つ。壁は粉砕され、大小の破片となって壁から崩れ落ちていく。

目から火花が散り、脳みその奥が痺れる様な痛みを感じるが、一誠がフリードを掴んで離さない。

何も無い空中から、ようやく触れるものに接触出来た。

噴射孔の向きを変え、一誠はフリードの喉元に爪を立てる。指先が深く刺さり、容易に抜けなくなった状態から更に握り締めた。

「てんめぇぇぇぇ！」

フリードがもがくが、一誠の手を外すことが出来ない。

フリードの顔面を壁面に押し付け、魔力を噴射する。その状態から、空いている手でフリードの顔を殴打し続ける。
「おおおおおお！」
壁面に沿いながら一誠は飛び、フリードを削りながら殴る。一撃一撃に全力を込め、顔半分を壁面に埋め込ませ、フリードの頭をヘラの様にして壁を抉っていく。
「こ、の、や、ろぉぉぉぉぉぉ！」
フリードもされるがままではなく、動かせる手足を滅茶苦茶に動かし、どこでもいいから一誠の体に当てる。
その動きはだだを捏ねる子供そのものだが、見た目に反して一撃がとても重い。常人なら触れた箇所が吹き飛ぶ威力が込められている。
それを間近で何度も浴びせられる一誠。鎧に罅が入り、その罅も繋がり大きな亀裂となっていく。
「負けるかよぉぉ！」
フリードに打ち込んでいた拳を開く。掌に集まる赤い魔力。拳では無くドラゴンショットを直接叩き込もうと考える。
直に打ち込まれることは、流石のフリードも不味いと思ったのか足掻きが強まる。フリードが今の体になってまだ少ししか経っていない。フリードは自分がどこまで耐え

られるか把握し切れていない。頭を吹き飛ばされても戻ったが、それ以上の破壊は耐え切れるのか？　再生の回数に限度は無いのか？　分からないことだらけ。

だからこそ、一誠のドラゴンショットは、その許容を超えるかもしれないという疑念から忌避する。要は、肌で感じる魔力にそれだけの説得力があるのだ。

「おらぁっ！」

フリードの全身が発光する。指を弾いて聖なる気を拡散させた技の応用。全身から放つ為に光自体の殺傷能力は低い。しかし――

「うっ！」

一誠が硬直する。放つ光が聖剣と同じ効果を持っていると知っている為に、反射的に体が萎縮してしまった。

掴んでいる手の力が僅かに緩み、魔力噴射の勢いも低下した。

この瞬間、フリードは両足で壁を踏み抜き急停止を掛ける。

「うお！」

勢いでフリードよりも前に出る一誠。投げ出されそうになる一誠の腹に、フリードの拳が刺さる。

掴んでいた手は、フリードの首の肉ごと離れ、壁面から中央目掛けて殴り飛ばされる一誠。

下に叩き付けられ、床を破砕する。衝撃と痛みからかすぐには立てない状態であった。
「はっはー！」
フリードは両手で壁を叩き、両足を引き抜きつつ、叩いた反動で一誠に向かって飛ぶ。
まだ立っている途中の一誠に、追撃を行おうとし――眼前一杯に広がる拳にてそれが阻まれる。
「うごあっ！」
フリードの頭部の半ばまでめり込んだ拳は、飛び込んできた以上の速度でフリードを殴り返す。
背中で何度もバウンドしながらフリードはまた壁面に戻っていく。
フリードを殴り返した拳の主、シンは守る様に一誠の前に立つ。
「大丈夫か？」
「大丈夫、だ！」
一誠の言葉が一瞬詰まったのは、脇腹の傷口からまた血が噴き出たから。激しい動きや攻撃でどんどん傷口が悪化していくのが分かる。流れ出た血の量もかなり増えた。
だが、それがどうした、と一誠は痛みも苦しみも誤魔化す様に心の裡で叫ぶ。
守るべき人たちが自分の後ろにいる。情けない所を見せたく無い戦友が隣にいる。

こんな状況で心を折らすなど、みっともないことなど出来やしない。

「――そうか」

シンは、一誠の心境を察したのかそれ以上気遣う言葉を言わなかった。

「て、めえ、くそー　何でいってぇんだよ……！」

フリードが顔を押さえながら悪鬼そのものの形相でシンたちを睨む。

壁で削られようが、一誠の全力の拳をもらおうが、剣で串刺しになろうが、頭を消し飛ばされようが、殆ど痛みは感じなかった。しかし、シンの拳だけは苦痛を感じる。

シンの拳が少々特別なのも理由であるが、一番の理由はフリード、その中にいるドーナシークも無意識のうちにシンにトラウマを抱いているからである。

彼らにとってシンは自らの死をイメージさせる存在と化していた。故に彼の一撃は、彼らの死の記憶を強制的に掘り返す。怒りで忘れていた筈のドーナシークの幻覚痛がまた起こり始めている。首や胸に痛い程の冷たさも生じていた。死の記憶が別の死の記憶を引きずり出してくる。

人間というものをほぼ捨てたフリードを、嫌でも人間に引き戻す存在こそがシンであった。

「ってぇんだよ！」

痛みを忘れ去る為に暴力に走る。技術など無い。衝動のままに体を動かす。

爪先が床に亀裂を入れる程の力で蹴り、肩から先が千切れ飛ぶイメージで背負ったものを放り投げるような全身を使った拳の振り下ろし。

凡百の者たちならば、フリードが地を蹴る瞬間すら分からず、そして自分が死ぬ時ですら認識出来ないままに挽肉と化していただろう。

しかし、フリードと相対するのは普通という言葉では収まらない者たち。

一誠は、赤龍帝としては過去最低の素質だが裡に秘めた熱量は歴代に勝るとも劣らず、その奇天烈さに並ぶ者は居ない。ましてや守る者、負けたくない者が揃ったこの状況で、彼の心は限度無く高まる。

（速いし、怖ええ。でも――）

片側だけの噴射孔が魔力を噴き出す。

『行け、相棒』

「負けてたまるかよ！」

魔力の勢いで加速する一誠。『赤龍帝の鎧』ですら耐えられるか分からないフリードの全力の一撃に自ら向かっていく。

鈍い打撃音。呻く声。よろめいたのは――

「かっ……！」

――フリードであった。その腹部には一誠の拳が鋭く打ち込まれている。

恐れなかった故に、直線という最短距離を、最速を以って駆け抜け、フリードよりも先に一撃を喰らわせることが出来た。
前のめりになるフリードの顎を、一誠の拳が突き上げる。火花が飛び散りそうな勢いで閉ざされるフリードの口。しかし、歯が折れることも罅割れることも無い。この歯もまた頭部と同じで見せかけだけのもの、飾りと一緒なのが分かる。
顔を仰け反らせるフリード。首の力で無理矢理頭の位置を元に戻す。そのせいか、首の形が歪に変形する。
「こ、の……！」
両眼が火を吹きそうな程の殺意が暗く輝く。その危うい輝きを見て構える一誠であったが、突如後ろから押されて上半身が前に倒れる。
「うお！」
驚く一誠の背で、シンが片手を軸にして体を回す。
フリードは、一誠の背に乗ったシンと目が合う。どこまでも冷静というべきか冷めた目をしていた。戦っているときも自分を殺したときと変わらぬ感情が読めない目。もしかしたら、シン自身が死ぬ時も今の様な目をしているのではないかとすら思えてしまう。
そんなことを考えるフリードの前で、シンはまるで体操選手の様な軽々とした動き

で、フリードの下顎を蹴り飛ばすという重い一撃を見舞う。
　下顎を皮一枚で吊るした状態になりながら、フリードは独楽の様に回転しながら吹っ飛んで行く。
「やるなら言えよ」
「言ったらバレる」
「ビックリするだろうが」
「こっちも何度か驚かされたことがあるからお互い様だ」
　内容だけなら緊張感が無い軽口。二人の顔が真剣なまま飛んでいったフリードを凝視し続けているのを見れば、まだ油断ならない状況だと分かるだろう。
　回転していたフリードがピタリと止まる。下から見上げる様に睨みつけてくるフリード。下顎がプラプラと揺れている。
「ホラー映画みてぇ……」
「Z級以下の内容だろうな」
　一誠の率直な感想に対し、シンは辛辣な評価を下す。
「へめぇは、へっはひに、ふっほおふ！」
「何言っているか分かんねえよ。っていうか、頭なくても喋ってただろうが」
「あ、そうだった」

フリードが下顎を戻しながら、今気付いた様に言う。本気なのかふざけているのかイマイチ判断し難い。

直った顎で何度も閉じて歯を鳴らし、噛み合わせを確かめる。

「人以上の体が手に入ったっていうのに、人の感覚ってのは抜けないもんだねぇ。つーわけでやり直し！　てめぇら、絶対にぶっ殺す！」

シン、一誠、フリードの戦いにリアスたちは介入することが出来なかった。彼らがほぼ接近戦をしているので攻撃すれば巻き込んでしまうというのが理由の一つであるが、もう一つは、ここで援護すればフリードの矛先が必ずこちらに向くのが分かっているからである。

我が身可愛さに攻撃を躊躇っているのでは決して無い。短い時間でもフリードの悪辣な性格が身に染みて分かっているつもりであった。視力が不完全なリアスたちは、動きが落ちている――木場や朱乃の動きを見ての通り――フリードはリアスたちを攻撃し、それをわざとシンや一誠たちに庇わせる、つまりは一誠たちが盾になることを見越しての攻撃を行うと予想出来た。

だから、リアスは密かに攻撃をしない様に指示を出す。少なくともフリードがシンと一誠に注目している間は。

これが最善だと思う。思うが、リアスは強く唇を噛み締める。もっと他に最善の行動

は無かったのかと自問自答してしまう。だが、時間は限られ、また時は過ぎていく。思考する間にも事態は変化し続ける。

最善であったとしても、更なる最善を求めてしまう。見守ることしか出来ない罪悪感からくる思考のループであった。

リアスはそれを、悔しさを抱きながら見ることしか出来ない。

「いいからさっさと来い」

同じ台詞を言うフリードに、シンは冷めた態度で手招きをする。道化の様な態度でマイペースのフリードに、シンも自分のペースを貫く。

素っ気ない言葉に、フリードは青筋を浮かべる。構えなど無いノーモーションでシンに接近するが、攻撃をする前にシンの五指がフリードの胸部に埋まる。

挑発すれば必ずと言っていい程乗って来るフリードの単純さに呆れつつ、埋め込んだ指先を振り上げ、フリードの体に深い裂創を与える。

「う、ぐ！」

血は出ないが体を引き裂かれる痛みがフリードの中に起こる。やはり、シンの一撃はフリードの痛みを呼び起こす。

今すぐここで必ずシンを殺さなければならない。シンの存在はフリードにとって危険過ぎる。

裂かれた体を修復しつつ、聖なる気で輝く拳をシンに打ち込もうとするフリード。すると、シンは横に滑る様に移動する。

直後にさっきまでシンが立っていた場所を通過する赤い残像。一誠の回し蹴りが、フリードの拳とぶつかり合う。

聖なる気と赤い魔力が衝撃波の様に散る中で、フリードは一誠を睨み付ける。彼もまたフリードにとって殺すべき対象だが、優先度が違う。真っ先に殺す必要があるのはシンなのだ。

「邪魔すんな！」

「嫌だね！」

一誠のそのたった一言で、フリードはシンが自分にとって如何に危険か、など考えていたのを忘れ、一誠を殺しにかかる。常人ならばまずしない様な悪い意味での切り替えの早さ。フリードの刹那の感情で標的がころころと変わる。

鎧越しに伝わる聖なる気で、皮膚が火に炙られる感覚を覚えるが、一誠は倍化の力でフリードの拳を蹴り弾く。

半身が後ろに引っ張られるフリード。すぐに体勢を戻そうとするが、その間にシンと一誠が動く。

フリードの腹、胸、頬にシンの拳が刺さり、よろめいた内に一誠の拳が間を埋める様

に、顔面を殴打、続けて腹部に重い一撃を打ち込む。
後退するフリードに、シンは二本の魔力剣を振るおうとする。すかさずそこに一誠のサポートが入る。
『赤龍帝からの贈り物』
一誠の魔力が、シンに贈与される。極限まで倍化したことで送られる魔力は、普段とは段違いのものであり、白光に輝く魔力剣が赤の光へ変化する。
荒れ狂う魔力を無理矢理剣の形に押し止め、開放して暴風の様に相手を呑み込むのがシンの技である。魔力が高まれば暴発する危険も高まるというのに、それを実戦で難なく制御してみせる。
二本の魔力剣を、一本に融合させ、より魔力の密度を高めた後に、フリードにそれを直接叩き込む。
零距離で解放された魔力が、瞬時にフリードを喰らう。
「く、おおおおお！」
高まった魔力によって通常の何倍もの威力となる魔力波。味わった者にしか分からないが、波の中には魔力の渦の様なものが無数に存在し、それらが右左別方向に渦巻き、更に縦横斜めの回転をしている渦もあり、それがフリードを四方から引き千切ろうとする。

体の内からブチブチという切れていく音が鳴り響く。一箇所だけでなく体中からだ。シンが放った攻撃のせいか、全てに痛みを感じる。四肢が千切れようとする痛みは、フリードの有るのか分からない脳すらも苦しめる。

（いてぇ！　いてぇ！　いてぇいてぇいてぇいてぇ！）

回転する視界の中でフリードはひたすら痛みに苦しむ。渦の中で声を上げることすら出来ず、心の中で叫び続ける。

痛みを感じる度に心の中に黒いものが溜まっていく。痛みは、怒りと恨みとなり、相手を憎む呪詛となってフリードの中に蓄積される。

背中が何かにぶつかる。恐らくは壁である。壁の中に体が押し込まれていく。全身が圧される。

されるがままの今に屈辱を強く覚えた。

フリードは人と神器、その中間に位置する様な曖昧な存在である。それ故に、半端に人としての特性を持ち、そして、半端に神器としての特性を持つ。つまりは、フリードは自覚していないが神器の能力を有している。

能力は至って単純。感情の昂ぶりよって力が増すというもの。この能力、フリードにとって相性が良いとも悪いとも言えるものであった。

元々情緒不安定な面があるフリードだが、ドーナシークなどを取り込んだせいで不安

定さが増している。故に感情の振り幅が極端になっており、能力自体も安定しない。

感情と神器の能力が噛み合わなければ一定の力しか発揮出来ない。だが、逆に言えば噛み合ってしまえば何処までも自身の力を高めることが出来る。

そう。今の様に、強い屈辱と殺意を覚えたときなどは。

壁が粉砕され、魔力波を突き破って何かが突っ込んでくる。それが向かう先にはシン。腕を交差した直後に、突き抜ける様な衝撃と鈍い音が聞こえ、シンは吹っ飛ぶ。

「間薙!」

飛ばされたシンに声を掛ける一誠であったが、その耳に破砕音が届く。

音の後に気付いた。脇腹に深々と刺さる拳。『赤龍帝の鎧』を素手で砕き、中の一誠の肋骨すら折っている。

「フリー、ド……!」

拳を突き刺すのはやはりフリード。だが、その姿は無傷ではなく片手、片足が千切れかけた酷い姿であった。しかし、そんな姿でもドラゴンの鱗と同等の鎧をも砕いてみせたのだ。

一誠は拳を握り、反撃を試みようとする。だが、フリードはそれが分かっており、刺さっている拳を捻じり、痛みで一誠の動きを硬直させた後、千切れかけた脚で一誠の側頭部を蹴り飛ばす。

首が折れるかと思った衝撃と、脳を揺さぶられる気持ち悪さを味わいながら、一誠は地面を跳ねていく。

シンとは反対の位置に移動させられてしまう一誠。並び立って戦っていた二人が、フリードの攻撃で離される。一対二で優位に戦えていたが、これによってその優位も失う。

追撃は無かった。蹴りを放ったフリードは、そのまま床の上で大の字になっていたからである。フリードもまた無理な動きのせいでバランスを崩して倒れていた。

速度と力が瞬間的に跳ね上がったフリードに驚くしかない。

シンは、反応が遅れてフリードから直撃を受けた時のことを思い出す。あれ以降、速いが反応出来る速度であったのに、またそれに等しい動きをされた。

殴り飛ばされたシンは体を起こす。途端に激痛が走る。痛みは両腕から発せられていた。

一目で分かる。右腕が歪に変形しており、骨が完全に折れていた。右腕を上にして交差していたので直接殴られた為にダメージが大きい。一方で下にしていた左腕にもダメージを負っており、指を動かすだけで鋭い痛みが生じる。骨は折れてはいないが、罅が入っていると思われた。

右手は拳を握れず、左手は拳を作れるが握りが甘い。両腕が使い物にならなくなって

しまった。
一誠もまた立ち上がる。本人は素早く立ち上がったつもりだが、傍から見ると緩慢な動作であった。
立ち上がった一誠からポタポタと滴が落ちる。脇腹辺りの鎧をフリードによって砕かれたせいで止血する物が無くなり、傷口から押さえていた血が溢れ出る。
足元がすぐに赤く染まっていく。長い時間持たないのは身を以って分かった。
「イッセーさん！」
堪らずアーシアが悲痛な声を上げてしまう。そんな彼女を心配させまいと大丈夫であることをアピールするかの様に一誠は笑ってみせるが、それは、失血での蒼白、痛みによる引き攣りのせいで痛々しい笑みであった。
「ひ、ひひひ、ひひひひ」
三下の悪党そのものの笑い声を出しながらフリードは仰向けの状態から片足だけで立ち上がってみせる。千切れかけた手足もくっついており、見た目では無傷であった。
「大逆転ってやつ？　おいおい！　マジで俺様主役じゃないの？　パワーにテクニックにスピードにルックス！　おまけに主役補正もついたら完璧じゃないの！　フリード君！」
減らない減らず口で捲し立てるフリード。自分の力が突然増したことに何の疑問も

抱かずに素直に受け止めている。
この時点でフリードは、少し前の力に戻ったことに気付いていない。このまま戦えば、先程の繰り返しとなった、再びシンたちに押されるだろう。だが、押された結果、また今の様な展開へ戻る。
厄介なことにフリードの力は波がある。それも一定では無い波が。これのせいで、シンたちはフリードの戦いに慣れない。追い詰めると突然力を爆発させて一気に反撃に出てくるので、その切り替えに対処出来ず一瞬にして立場が逆転してしまう。
フリードの情緒不安定さが、そのまま戦いに表れていた。
「さあ！　さあ！　どうするんだい！　その怪我で俺様とやれんのかい！」
シンと一誠の負傷を見て、調子に乗って叫ぶ。どんな傷もすぐに治してしまうフリードと時間が掛かるシンたちとでは、戦いが長引くにつれて差が出てしまう。
アーシアの神器を使えばその差は埋まるだろうが、それはアーシアを危険に晒すに等しい。回復能力を持つ存在など、普通なら見過ごさない。
勝ち誇った様に叫ぶフリード。それに対し否定する声を上げられる者は居なかった。
「――そうだな。このまま行けば負けるな」
シンの口から負けを認める様な台詞が出て、一誠は耳を疑う。他の者たちも一誠と同じ気持ちであった。

冷静沈着ではあるが負けず嫌いな面があり、やられたらやり返すシンがその様なことを言うなど、例え本人が言おうとも認めたく無かった。
「おい！　そんな――」
「だから次で終わらせる」
「――え？」
「あん？」
またもや耳を疑う。今度はフリードも同じ様な反応をする。
「だから次で終わらせるって言ったんだ。俺とそいつの全力を同時にお前に叩き込む。耐えたらお前の勝ちだ」
あまりにも単純な方法に、誰もが絶句する。
「何だそりゃ？　イカレちまったの？」
フリードのハイテンションはすっかり消え去り、聞き返してくる。もしかしたら、困惑しているのかもしれない。
「イカレてもいないし、冗談でも無い。本気だ。勝つか負けるか、生きるか死ぬか。力や速さや技を比べ合うよりも単純だろ？」
いつもの通りの平坦な口調で、突拍子も無いことを言う。
「それで、お前はどうする？　お前の力が無きゃ勝てない。多分全員が死ぬ」

フリードの背後にいる一誠に協力するか否かを問う。
「――協力を頼む台詞じゃねぇぞ。それじゃあ脅迫だ」
兜の下で一誠は苦笑いをする。シンの言う通り、このまま戦い続けたら不利になるのはこちらであった。全力を出せられる時間もそう残されてはいない。ならばいっそのこと後のことなど考えず次の一撃に掛けるのも有りかもしれないと思った。
「いっちょやるか！　出し惜しみ無しで！」
「うるせぇ！　俺様越しに会話するんじゃねぇ！」
フリードの勝ちに流れていく空気が一転し、シンたちの空気に染められていく。
「で、どうすんだ？　兎に角ドラゴンショットを直に撃てばいいのか？」
「それしかないな」
「おい！　何、俺の前で作戦会議してんだ！」
「ドライグ。鎧を維持する力も魔力に変えられるか？」
『可能だ。心配なのは、そいつが俺たちの魔力に耐えられるかだが』
「遠慮するな。俺を心配する必要は無い」
「おい！　無視するんじゃねえよ！」
今まで振り回してきたフリードが、シンと一誠の会話に入れず、逆に振り回されている。それが、絶望的であった空気を払拭していく様に思える。

「イッセー、シン……」
　生死を懸ける二人に、リアスはその名を呟くことしか出来なかった。まるで世間話の様な軽い口調だというのに伝わってくる、どれだけ二人が本気なのかが。
「にしても一発限りのギャンブルかよ！　正直ビビるな！」
「そうだな。俺も似た様な気持ちだ」
「嘘吐け！　全然見えねえぞ！」
「見た目だけだ」
「絶対嘘だ！　はははは！」
　徐々にだが、二人のテンションがおかしくなってきている。生きるか死ぬかの重圧を緩和させる為に脳が高揚させているのか、一誠から場違いな笑い声が上がった。シンの方も声に出していないが口角を片側だけ上げ、肩を上下に揺らして笑っている。
「悪いな、ドライグ！　こんな一か八かの戦いに巻き込んで！」
『気にするな。あまり大声では言えないが、こういうギリギリの戦いも嫌いじゃない』
「そうか！　あはははは！」
『ふはははは！』
　ドライグも一誠に合わせて笑う。シンも声を出さずに笑う。最早狂気に片足を突っ込んでいる様であった。

先程まで心配していたリアスたちも、一誠とシンの場違いなハイテンションに戸惑っている。
フリードもまた狂気をばら撒く側であったのに、二人の狂人染みた振る舞いに、気圧され始めていた。
シン、一誠も精神がある種の極致に入り始めており、その中でしか得られない精神状態となっていた。死や痛みから遠ざかってしまったフリードには二人のそれが理解出来ない。
「でも、やるとしてどうやって当てるんだ？　タイミングよりも外したらお終いだぞ？」
「――問題無い。フリードの動きは俺が止める」
シンは、一つだけフリードの動きを止める方法を思いついていた。かなり悪辣な方法であり、確実性は無く、その時点からギャンブルであった。
「――そうか」
先程までのハイテンションは潜まり、一誠の両手が赤く輝く。会話をしながらも既に準備を進めていたのだ。
両腕を負傷したシンは拳を握らず、代わりに感触を確かめる様に右足の爪先で、何度か地面を叩く。不完全な腕よりも今はこちらの方が信用出来る。
「何だよ……！　笑ってたと思ったら急によぉ……！」

フリードはせわしなく前後を見る。身体能力も、戦いも自分が有利で、更に相手は一か八かのやけくその様な賭けを行おうとしている。どう考えても自分の方が勝っている筈なのに胸騒ぎが止まらない。

それに気になる点もう一つ。シンが動きを止めると言ったが、一体どんな方法で止めるというのか。

魔力波によるものか、眼からの不可視の光線か、或いはマタドールとの戦いで見せた全身から放つ魔力の槍か。

しかし、フリードの考えとは裏腹に、シンが何かをしようとする動きも無ければ、魔力の高まりも無い。

「――それにしても」

状況とは裏腹に、世間話でもするかの様な口調でシンは急にフリードへ話し掛ける。

「思い返せば失敗続きだな。アーシアの件といい、俺との戦いといい」

急な挑発に、フリードは怒りよりも困惑する。足止めする方法があると言っていたが、安い挑発に乗せて怒りで我を失わせようとしているのだろうか。

「そして、今回の件もそうだ。失敗した挙句、死んだ」

淡々と事実を並べていくシン。何か違和感がある。シンの視線はフリードに向けられているが、言葉は別のものに向けられている。そんな気がした。

「行き着く先が、そいつの養分か……」
そこで一旦言葉を止める。何故かフリードは体の内側が熱くなってきていた。無い筈の心臓が早鐘を打つ。フリード自身はまだ冷静である。しかし、体が異様な反応を示している。何かの前兆の様に。
「お前はつくづく負け犬だな――ドーナシーク」
途端、フリードは内側から何かが弾けるのを感じる。フリードの意思に反して口が勝手に動き始めた。
「間薙、間薙シン！　俺が！　俺が！　負け、負け犬だと！」
フリードから発せられるドーナシークの声。取り込んだと思われたドーナシークが再び暴走し、フリードの肉体の主導権を奪おうとする。
「や、めろ！　やめろぉぉぉぉ！　これは俺の体なんだぁぁぁぁ！」
「黙れ黙れ黙れ！　奴を殺させろぉぉぉぉ！」
フリードは頭を抱え、半狂乱となって叫ぶ。
フリードという器の中で二つの魂が、争いを始める。それこそ外部が見えなくなる程の。
ドーナシークの自分への屈辱、憎悪、執念が容易く消えないと考え、感情を焚き付ける。悪辣、卑怯、尊厳を穢す様な行為だとは自覚している。だが、シンは実行した。

理由など簡単。自分で勝ち筋を断つ様な真似をしない、それだけのこと。
正直、軽蔑されてもおかしくはない方法であった。シンは動く前に一誠を見る。一誠は何時でも動ける準備をしており、シンを見ていた。
自分もまた共犯であると言わんばかりに。
シンが走る。一誠もまた走る。この刹那の時に全てを掛けて。
精神がぐちゃぐちゃに入り混じるフリード、或いはドーナシークは見た。
夜空の星の如く、白光の輝きを纏わせたシンの蹴りを。
万物の頂点に限りなく近い、全てを滅する一誠の赤の魔力。
それが前後から同時に打ち込まれる己自身を。

◇

「あー、さっぱりしたなー」
何一つ消え失せた光景の中で、マダは呑気に言う。そんなマダを、トールと帝釈天が呆れた様に見ていた。
「何、一仕事やったみたいに言ってんだよ」
「やったのは我らだ」

「細かいこと言うなよぉ。中々派手で面白かったぜぇ?」
会場があった場所は、巨大なクレーターとなっており、その中心に立つ三人は全くの無傷である。
帝釈天とトールにより、マザーハーロットが撒いた穢れは完全に焼失した。別の理由でこの辺一帯は使用出来ないが、汚染されるよりはマシと言える。
「あ、そうだ」
何かを思い出し、マダは口を開け、中に腕を突っ込んでいく。見た目は最悪の光景であったので、トールも帝釈天も目を逸らす。
「お、うお、うおぇ……」
すると、わざとえずき始め、耳を責めてくるという嫌がらせをしてくるマダに、視線を逸らしたままトールはミョルニルを投げつけ、帝釈天は雷を落とす。
が、いち早くマダは移動しており、二人の制裁は空振りに終わる。
移動したマダの側には、いつの間にか体内から出されたピクシーたちがおり、夢から覚めた様な顔をしている。
「あれ? あれ? 明るい!」
「ヒホ? オイラたち星空を眺めていた筈だホ?」
「ヒ〜ホ〜。月みたいなの、浮かんでなかった〜?」

「グルルルル。モウ少シデアノ毛ムクジャラノ象ガタベラレタノニ」
仲魔四人は、何やらおかしなことを言っている。
一方でセタンタ、グレイフィア、ディハウザーはというと――
「セタンタ、私はあの中で誰かと喋った様な記憶があるのですが……」
「奇遇ですね。私も握手をした感触がまだ手に残っているんですが……」
「――私は酒を奢って貰いましたよ。まだグラスも持っていますし」
そう言ってディハウザーは琥珀色の液体が入ったガラスのグラスを見せる。
「……貴様の腹の中はどうなっているのだ？」
「前からヤバいモン食ってるとは思ってたが……」
「ひーみーつー」
色々と謎は残ったが、一応全員が生還した。遠くを眺める、無事に脱出した天使たちなどがこちらに向かって来ているのが見える。
後は、バトルフィールド内の者たちが無事に戻ってくるだけである。
その時、全員の視線が一斉にバトルフィールドの方角に向けられた。強い魔力が生じている。
「シン……」
己の羽根を震わす魔力の気配に、ピクシーはシンの存在を感じ取り、無事を祈る様に

その名を囁いた。

悪意、邪笑

赤色と白色の魔力が衝突し、反発し合う。赤白混じった多量の魔力が天井目掛けて昇っていき、分厚い石造りの天井を突き破ってしまう。膨大な魔力のせいで砕くのではなく殆ど消滅してしまい、瓦礫の落下による被害は無かった。

問題は、上に向かわずに四方へと散っていく魔力である。

シンが右足から放つ魔力と一誠のドラゴンショットの魔力が合わさったそれは、無数に分裂しながら床、壁面などを穿ち、様々な場所を破壊していく。

リアスたちは、なるべく体を低くして当たる面積を小さくし、飛び散る魔力から身を守る。

シン、一誠にとっては不本意な状況だが、手を抜くことは出来ない。天井を消失する程の魔力を受けても、まだフリードの形は残っている。

「――――――！」

フリード越しに打ち付け合う魔力は上に伸びる柱となり、フリードをその中に閉じ込めていた。魔力の柱の中でフリードが何かを叫んでいる。痛みによる叫びか、または怨嗟の声か。だが、魔力の奔流に呑まれているせいで全く聞こえない。

「ドラ、イグ！　まだ持つか……！」
『ああ。だが猶予は少ないぞ』
本来ならば単発のドラゴンショットを放出し続けており、更にその魔力に鎧の維持する魔力も籠めているので、時間が経過する度に鎧の一部が消失していく。既に肩の装甲と具足が無くなっている。
一方でシンの方も無表情を崩さないが、奥歯を噛み締めて耐えていた。一誠の魔力は倍化していることもあってシンを上回っている。それに押されない様に必死に喰らいつく。
まだフリードを倒し切れていないのに、一誠の魔力に負ければフリードを倒し損ねるどころか、シン自身がドラゴンショットに巻き込まれる危険もある。
シンは左腕を伸ばす。消耗していく魔力を少しでも回復させる為に、散っていく魔力を左手で吸収する。
赤白の光の中でフリードが最後の抵抗と言わんばかりに、シンに向けて手を伸ばそうとしてくる。
激しい光のせいで影しか見えないが、伸ばされていく手が段々と崩れていくのが見える。人外の耐久力を持つフリードでも、二人の全力の魔力に再生が追い付いてない。
しかし、崩壊していく手は、激流とも言える魔力の中から外に出ることができ、見せ

かけの皮膚も無い肉塊の手が確実にシンへ接近している。魔力を打ち込むことに全力を注いでいるシンはそれから逃げることは出来ない。少しでも力を緩めれば、フリードに絶好の機会を与える。

逃れられない。ならば一刻も早く倒す為に攻める。

残された魔力。それを惜しみなく出し切る。それでもまだ足りないならば命すら魔力の中にくべる。

白色の光が強まる。一誠は自分が押されていると感じ、均衡を維持する為に鎧を消失させながら魔力を絞り出す。

互いにとって数秒が何倍に引き伸ばされている様に感じる。シンと一誠は、魔力を出し尽くす寸前まで来ているというのに、まだフリードの原型は残っている。フリードもあと十数センチ腕を伸ばせば、防御を捨てているシンに痛烈な一撃を浴びせることが出来る。

勝敗がどちらに傾くか分からないギリギリの状態。数秒先の勝者、敗者は容易く入れ替わる。

「――――――！」

フリードは声無き叫びを上げ、腕を伸ばす速度を上げる。蝸牛の速さが倍になったところで傍から見れば脅威では無い。しかし、眼前に迫っているシンにとってはまるで弾

丸が迫っているかの様な心境であった。

崩れた指の爪まではっきりと見える距離まで近付く。指先に聖剣の光が宿る。触れれば聖なる気が毒となってシンを蝕むだろう。

魔力の煽りによって揺れる前髪にフリードの指先が触れる。数本の髪が瞬時に溶けて消える。数秒後のシンの未来を暗示していた。

均衡が崩れるまであと数センチ。勝利がフリードに微笑みかけようとしていた、その時――

フリードの手が跳ね上がる。

何が起こったのか、と気にする余裕はシンも一誠にも無かった。視界の外で宙をクルクルと回るフリードの腕。

衝突して昇っていく二つの魔力の圧にフリードの腕が先に限界を迎え、千切れ飛んだのだ。

上昇していく腕は、赤白の魔力によって消滅する。

フリード最後の抵抗もシンと一誠の力によってあえなく終わり、魔力の光の中で身悶えするのみ。

やがて、最期の時がくる。フリードの体は耐え切れなくなり崩壊し始めた。

体のあらゆる部分が、水の中へ溶けていく様に一部分、一部分が崩れ、魔力の中に消

えていく。
それが受け入れられないのか、フリードは魔力の中で駄々をこねる様に腕を振り回すが、残ったもう一本の腕も崩れ消え、それを切っ掛けにして崩壊は速まっていき、光の影が消え去る。
同時にシン、一誠の魔力も限界に達し、魔力の放出が止まり、光の柱も無くなる。
光が消えた後にフリードの姿は無い。フリードが立っていた床が足跡の形で残っていたが、それだけであった。
難敵への勝利。しかし、それへの勝鬨の声は上がらない。勝ったが、その勝利を喜ぶことを味わう余裕すら無い程に二人は疲れ切っていた。
一誠は鎧が完全に解除され、赤龍帝の籠手も装備出来なくなっている。震える両膝に手を乗せ、呼吸することも困難な程に疲労していた。
シンもまた今すぐにでも倒れてしまいたい衝動を耐え、俯きながら乱れる呼吸を何とか整えようとする。足元には額から流れる汗が何滴も落ち、黒い染みを作っていく。
激闘の結末としては何とも静かなものであった。だが、その静けさこそが勝利の余韻と言える。
リアスたちは、霞む視界でもシンたちが勝ったのが分かった。しかし、勝利の歓声を上げることは無く口を閉ざす。疲労困憊のシンと一誠にこそ真っ先に勝利を喜ぶ権利

があり、辛いこと、苦しいことを彼らに任せてしまった自分たちが喜ぶのは、その後である。

リアスがそのことを伝えなくとも木場や小猫、朱乃、ゼノヴィアは理解していた。

そんな静かな中で声を押し殺して泣くアーシアとギャスパー。二人が無事に生き残ったことで元々緩い涙腺が一気に決壊していた。泣き喚くなどのことをしなかったのは、アーシアたちなりの精一杯の我慢である。

シンと一誠は揃って顔を上げる。汗を流し、顔色も悪い。互いに余力の無い顔を見て静かに笑う。

疲れ過ぎて舌を動かすのも億劫だったが、この戦いを締める言葉を言おうとしたとき、ゴンという鈍い音が聞こえ、音の方を揃って見る。

転がるそれを初めは場違いなボールかと思ったが、すぐに違うと分かった。疲れ過ぎて思考も目も鈍くなっているのが分かる。それはボールなどではなく人の頭部、それもフリードの頭であった。

「フリ、ード……！」

あまりにしつこ過ぎるフリードに、一誠は悪夢でも見たかの様にその名を口に出す。

当然ながら一誠の声に反応し、リアスたちもまさか、という表情となる。

脅威的な生命力。だが、脅威なのはそこまでであった。首だけとなったフリードは顔

の下半分が溶け肉色のスライム状となっており、眼球がせわしなく動かしている。シンの目にはそれが焦りに映った。

シンは疲労で重くなった体を無理に動かして、フリードの側まで移動する。一誠やアーシアが止めるが、シンの足は止まらない。

一誠たちは、フリードを危険と思っているがシンの勘は既にフリードを敵と見なしていない。その証拠にシンがすぐ近くまで来てもフリードは体を再生させず、また攻撃も仕掛けてこない。

シンや一誠が限界寸前の様に、フリードもまた既に限界を迎えていた。

「――逃げそびれたか？」

フリードにそう尋ねる。フリードは血走った眼でシンを睨み付け、それ以上のことはしない。

シンが指摘した通り、フリードは逃亡に失敗していた。

フリードが最後に魔力の中で見せた動き。あの時、フリードは自らの首を切断した。そして、上昇する魔力に乗じて天井から外に逃れるつもりであったが、フリードの体が消滅すると共にシンたちは魔力を止めたので、昇り切ることが出来ず神殿内に戻されてしまった。

失敗とそれを看破されたことで、フリードはこの世のものとは思えない形相となる。

しかし、所詮は顔付きを変えただけのこと。シンがそれを微塵も恐れることは無かった。

シンは拳を握り締め、フリードの真上に立つと、その拳を振り上げる。

体力はほぼ使い切った。だが、動かない頭一つ砕くことは難でもない。例え一発で砕けなくても何発、何十でも打ち込めばいいだけのこと。

「――さよならだ」

別れの言葉など、フリード相手には不要と言える。それは、もう二度と会わないことを願っての言葉であり、無意識にシンの口から出ていた。それほどまでにフリードという存在を嫌っている証明であった。

シンの拳がフリードの頭部を砕く――かと思われた瞬間。

待て

頭上からの制止の声に、シンは停まる。意思を無視して強制的に体が待ってしまったことに驚愕する。同時に吐き気を覚える様な甘い香りが場を満たす。

背中を駆け抜ける悪寒。恐怖というものを直接神経に流し込まれた様な感覚を覚えさせる存在など、一つしか思い浮かべられない。

『まさか……この状況でだと……!』

ドライグがシンとほぼ同じタイミングで気付く。最悪の状況下で最悪な存在が現れ

る事に信じ難い気持ちであることが伝わってくる。
逃げろ、という言葉を発することは出来なかった。それよりも先にそれは上から落ちてくる。
シンの眼前に落下した赤い影。衝撃で床は砕け、砕けた床に乗っていたシンは吹き飛ばされる。
背中から落ち、すぐに立ち上がるシン。先程まで立っていた場所に現れたものを見て、シンは二度目の衝撃を受ける。
タンニーン、デュリオと共に倒した筈の赤い獣が無傷の状態で、またシンの前に現れた。そして、その背には淫靡な肉体を持つ赤いヴェールを被る髑髏顔の女の魔人。
シンはマタドールに続いて、二体目の魔人と邂逅する。
「ホォーホッホッホッ」
開口一番女の魔人は高らかに笑う。その声は、どんな女の声よりも艶があり、耳心地が良く、そして淫らに聞こえる。
『マザーハーロット……！　ここに貴様が現れるとは……！』
「ホッホッホ。ドライグかえ？　あの赤龍帝が随分とみすぼらしい器に入れられたこと」
旧知の間柄である二人。ドライグは忌々しくその名を呼び、マザーハーロットは相手

を心底見下した言葉を吐く。
『何をしに来た!』
「さてさて。何をしようか。もう既に目的は達しておる。つまりは、そなたらをどうするかは、わらわの気分次第、ということじゃ」
シンに対し僅かの間、視線を留まらせた後嬲る様に周囲を見渡す。眼球の無い目で見られただけでリアスたちは、背筋を凍り付かされ、反抗する気すら奪われた。視界が封じられ、肌で気配を感じているだけでこれ程である。
直視しているアーシアなど魔人の死の気配で意識を失いそうになっているが、同時にその死の気配が気付けにもなっており、気絶すら出来ず凍り付いた表情のままマザーハーロットから目を離せずにいた。
「おやおや。また随分と面白い姿になっておるのう、フリード」
半壊したフリードを見て、マザーハーロットは笑いながら赤い獣の背を撫でる。すると、七つある頭の内の一つが、フリードの頭部を咥えた。
「どうする気だ……?」
シンがマザーハーロットに初めて声を掛ける。マザーハーロットが放つ香りのせいか、思考が段々と鈍くなっていくのが分かる。赤い獣が垂れ流す穢れとは違うが、これもまた人を堕とすもの。何か行動しなければ、このまま何もせずにマザーハーロットに

屈服しそうになる。
「何をするのもわらわの自由。そなたらには関係の無いこと。そこで大人しく頭を垂らしながら跪いているのが利口じゃ」
嘲り、煽り、見下す。悪意しか感じさせない。だが、マザーハーロットが言うことはある意味では正しい。この場に於いて絶対的強者は間違いなくマザーハーロットである。
彼女の機嫌を損ねず、嵐が過ぎ去るのを待つ様に縮こまれば気紛れで命は助かるだろう。
「――何様だ、お前は」
しかし、そんな諂う利口さなどシンは即座に捨てる。生殺与奪を相手に委ねた時点で命なんて無いも同然である。ましてや、魔人がそんな媚びた態度で許す筈が無い。
相手の手の中に自分の命が握られているのなら、足掻いてでも取り返すしか道しかない。
魔力はほぼ空。体力も空。片腕は骨が折れて使えない。
舌を回す。思考を回す。精神を感情で焚き付け、とにかく体でも心でもいいから何かを動かす。でなければ、何も出来ない木偶人形と化してしまう。
シンは罅が入った腕でゆっくりと拳を作る。

例え虚勢にしか見られなくとも、戦う意思は捨てることは出来ない。
「何一人でカッコつけてんだか……」
呆れた様な声を出しながら、一誠は体を引き摺る様にしてシンの隣に移動する。
「俺にもカッコつけさせろ……！」
一誠もまた拳を作り、構える。既に神滅具を出す力すら残っていないというのに。
シンと一誠、二人がマザーハーロットたちの思考を奪う猛毒の魅了に抗う姿は、リアスたちにも伝播し、折れ掛けた心に活を入れる。
構えるシン。吼える一誠。活力を取り戻していくリアスたちを見て、マザーハーロットは愉快そうに笑う。
「ホォーホッホッホッ。まさに虚勢ぞよ。幼さ故の無知からくる蛮勇じゃ。だが、それも良し。ここはわらわも童心返り遊ぶとしよう。もがく虫の手足を一本一本千切るのは子供の戯れゆえ」
シンたちの反抗する意思すら幼稚と嗤う。あまつさえ、今のシンたちを虫と評し、これからすることは戦いではなく遊びと断じる。
どこまでも見下して上から物を言う。誰が反論しようと、誰が抗おうと、それは純然たる事実であり、マザーハーロットという魔人の存在に屈していないだけで、未来はほぼ決まったも同然であった。

それを受け入れないからこそ、マザーハーロットはシンたちを幼稚と認識するのだろう。
「さて、誰から可愛がって欲しい？　最高の快楽を以ってもてなそうぞ。死という名の快楽で」
吐き気を覚える程に香りが濃さを増す。一呼吸するだけで脳が麻痺するかの様に思考力が奪われていく。
「悪いが、彼らは先約済みだ」
姿は見えない。しかし、声だけは聞こえる。しかもそれはシンたちもよく知る声。
何も無い宙に一筆走らせた様なものがシンと一誠の前方に現れる。それは裂け目となって中から人が現れた。
後ろ姿を見て、一誠は思わずその名を呼ぶ。
「ヴァーリ！」
白龍皇ヴァーリが突如としてこの場に参上する。
「やあ、兵藤一誠に間薙シン。まだ正気かい？」
横顔だけを見せ、爽やかさすら感じる口調で応える。
「な、何でここに……」
「俺たちも居るぜぃ」

裂け目からヴァーリに続いて二人の男性が出てくる。古代中国の鎧を纏う美候、背広姿で二本の聖剣を帯剣するアーサー。
「丁度、この辺りの空間を探索していたのと、『禍の団』から野暮用を頼まれたからついでに。どうやら良いタイミングだったみたいだ」
ヴァーリは臆することなくマザーハーロットを見る。
「ホッホッホッ。わらわをついで、と言うか」
「いくら『禍の団』内で貴女を咎める者が居ないとしても、少々勝手が過ぎたみたいですね」
「おかげで俺っちたちが駆り出される羽目になっちまったぜぃ」
アーサーは紳士的に、美候が愚痴りながら言う。マザーハーロットたちを正面から向き合ってもその声が淀まず、彼らの胆力の強さを表していた。
「相変わらず小物の集いぞえ、『禍の団』の上は。だから新参者に立場を奪われる。その愚かしさも度が過ぎて愛らしくも見えるが」
自分が所属している『禍の団』を小馬鹿にするマザーハーロット。尤も、彼女が『禍の団』に身を置くのは英雄派の者たちと交流があった為の気紛れ故。その結果、新参、古参問わず多くの『禍の団』の団員がマザーハーロットの信徒として堕とされた。
旧い者たちにとってマザーハーロットは、面白くもないし、触れたくも無い存在であ

る。
「という訳で、大人しく付いてきてくれないか？　手荒な真似はしたくない」
「ホォーホッホッ。どこぞの戦闘狂と同じで戦うことしか頭に無いそなたが、女の扱い方を少しでも心得ているのかえ？」
「生憎、エスコートは苦手だな」
　マザーハーロットの挑発に苦笑を返すヴァーリ。
「しかし、上の彼奴らもわらわを見くびったものよ。たったこれだけでわらわを連れ帰ると思っているとは……それとも、そなたらが出来ると自惚れているのかえ？」
「魔人の、それも大淫婦を相手に自惚れなんて出来る訳が無い――実を言うと全員で行けと言われたが、出来ると確信しているからこそたったこれだけで来ているんだ」
　途端、赤い獣たちが一斉に唸る。たった三人でマザーハーロットたちを連れ帰ることが出来ると豪語するヴァーリたちに牙を剥く。
　獣の怒気、殺気、穢れに一歩も後退らないヴァーリたち。逆にヴァーリの方から獣の方に一歩近付く。
　十四の眼光と、ヴァーリの眼光が衝突し、見えざる圧力で空間が歪んでいく錯覚が見え始める。
　アーサーは静かに聖剣の柄に手を置き、美候は好戦的な笑みを浮かべながら如意棒を

肩に担ぐ。
　しかし、マザーハーロット本人は殺気立つ空気を他所に戦いに一切興味無しという態度で黄金の杯を呷る。また、唸る赤い獣の背を足で叩き、黙る様に促す。赤い獣もマザーハーロットには従順で、すぐに唸るのを止めて殺気も引っ込める。
「つまらぬ挑発に乗るではない」
「挑発のつもりで言ったつもりは無いんだが？」
「ならば戯言よ」
「まあ、どちらにしてもここから立ち去るのは間違いない。――聡明な貴女なら、もう気付いてもいいんじゃないか？」
　ヴァーリの何かを含ませた言葉に、マザーハーロットは傾けていた杯を途中で止める。
　シンたちもあることに気付く。場に漂っていた筈の思考を狂わせる甘い香りがいつの間にか消えていた。突風で吹き飛ばされたかのように綺麗さっぱりに。残り香すら無い。
　何か大きなことが起こる前兆。シンたちはそう感じとった。
　白い空に音を立てて大きな穴が開いていく。そこから現れたものを見て誰の目も釘付けになる。

「よく見ておけ、兵藤一誠。あれが俺の本当の目的。この世の頂点に立つものだ」
憧憬、戦意を混ぜ合わせた笑みを浮かべるヴァーリの目に映るのは、百メートルを軽く超える真紅の巨大なドラゴン。
人が思い浮かべるドラゴンというものを形にした様なその姿は、何もかもが途方も無く感じられた。
何せ、シンたちが耐えることしか出来なかったマザーハーロットの穢れ、魅了を登場の前兆だけで掻き消してしまう程である。
饒舌であったマザーハーロットが、今は黙って真紅のドラゴンの動向を見ていることも、ドラゴンの強さを現わしている。
「『Ｄ×　Ｄ（ドラゴン・オブ・ドラゴン）』、『真なる赤龍神帝（アポカリュプス・ドラゴン）』、『真龍』、グレートレッド。俺が目指す果てだ」

◇

「――ってな感じで今頃ヴァーリの奴は眼の色を変えているだろうな」
アザゼルは、空を自由に飛ぶグレートレッドを見上げながら、ヴァーリの動向を予想していた。
「グレートレッドが次元の挟間に住んでいることは知っていたが、まさか姿を見せると

は……今回のバトルフィールドのせいなのかな？」
　今回のレーティングゲームのバトルフィールドは、次元の挟間に近い所に結界を張ってその内部で展開をしていた。もしかしたら、その結界が次元の挟間に干渉し、グレートレッドを呼び寄せたのかもしれない。
「――しかし、現白龍皇の目的が打倒グレートレッドとは……冗談でも私は口に出すことは出来ないな」
「あいつは唯一無二の白になりたいんだよ。『真なる白龍神皇』にな。白だけ赤の一歩手前で止まっているのが気に入らないって前に言っていたな。まあ、それに至る素質は十分にあるのが幸福とも不幸とも言えるがな」
　他人が聞けば荒唐無稽の夢か笑い話に捉えられるかもしれない。しかし、ヴァーリ本人の口からそれを聞けば、誰もが笑おうとしていた口を閉ざすだろう。ヴァーリの強さには、それを成せる可能性が見える。
「グレートレッド、久しい」
　オーフィスは、グレートレッドに指先を向け、撃ち抜くジェスチャーをしてみせる。
「我は、いつか必ず静寂を手にする」
　グレートレッドに破れて次元の挟間から追い出されたオーフィスからの宣戦布告。それを聞かされるアザゼルとサーゼクスは心情的にたまったものではない。この二頭

が全力で戦えば、地球など軽く消し飛ぶ。
幸いオーフィスは、今は戦うつもりは無い。グレートレッドの方もただ空を飛んでいるだけ。そもそも神すらも超える存在が他者に関心を持つことなど無い。
そう思っていた。
地面が震える。空間が揺れる。天地の振動で体が細かく揺さぶられていく。最初何が起こったのか分からなかった。時間が経つにつれて理解する。この揺れがグレートレッドの咆哮によって引き起こされているのだと。
咆哮一つで森羅万象を震わす。その事実に、改めてグレートレッドは規格外であることを思い知らされる。
だが、同時に疑問を抱く。あらゆるものに関心が無い筈のグレートレッドが何故に吼えたのか。
「――ああ、そうだね」
涼やかな声が咆哮に応える。
「僕も君と久しぶりに会えて嬉しいよ、グレートレッド」
微笑を浮かべるベル。ルイもまたグレートレッドに向けて小さく手を振っていた。
ベルが再会を喜ぶ言葉を言い終えると、グレートレッドの咆哮も止まる。
信じ難いことだが、あのグレートレッドがベル、ルイという存在を認識し、挨拶の声

まで送っているのが事実だとすれば、彼らはグレートレッドと対等の関係であることを意味する。
「さて、行こうかオーフィス。もうここに用は無い」
「うん。我、帰る」
オーフィスは無表情だが、心なしか満足している様にも見える。宿敵が健在なのが嬉しいのかもしれない。
このまま大人しく帰ってくれたのなら、アザゼルたちにとっては万々歳。しかし、どうしてもアザゼルは口に出さずにはいられない。
「今回の件、一から十まで全部お前たちにはお見通しだったのか？」
すると、背を向けていたベルがアザゼルを見る。下手をすれば消されるかもしれない危険があったが、少しでも情報を聞き出す為に危険を承知で踏み込む。
「まあ、ほぼ予想通りという所かな。――でも、一箇所だけ大外れをしたよ」
大外れという割には、アザゼルにはベルの機嫌が良さそうに見える。
「死ぬかもしれないと思っていたが、どうやら今の環境は彼にとって良いみたいだ。こちらの予想を上回る速さで戻っている。喜ばしいことだよ」
「……何の話だ？」
誰かの成長を指しているのかもしれないが、不自然な表現も混じっている。『戻る』と

はどういう意味を持っているのか。
「彼を見守っていてくれ、アザゼル。人修羅の未来を」
「――おい！　そりゃあどういう意味だ！　何でお前があいつのことを！」
「また会う機会があれば、もう少しだけ教えよう。さようなら、アザゼル、サーゼクス」
「アザゼル――これから先はもっと楽しくなるぞ」
　瞬きよりも早くオーフィスたちは消え去ってしまう。止める暇すら無かった。
　三人が完全に居なくなると、アザゼルは溜息を吐く。
「最後の最後で気になること言いやがって、あの野郎……」
「人修羅。やはり、彼も関わっているのか……」
「得体の知れない連中が、裏で密かに何かを企んでいるか。全く、『禍の団』だけでも厄介だっていうのによ」
「――それも気になるが、今は一刻も早く魔人を探そう。死人が出る前に」
「得体の知れない奴らの次は、何を考えているか分からない奴らの相手か。骨が折れるな」
　口で愚痴を言っているが、既にファーブニルの宝玉を出し、何時でも交戦出来る状態となっている。
「――強い奴は自由でいいな」

アザゼルは飛び立つ前に、悠々と空を漂う様に飛翔しているグレートレッドを見上げながら、少しの嫌味と羨望を混ぜた言葉を小声で零した。

◇

今にも崩壊しそうな神殿内。上空のグレートレッドの咆哮一つでそれが起きようとしている。

「ははははは！　凄いな！　声だけでこれか！　震えて来るな！」

空間を震わす程の咆哮を受けたヴァーリは、武者震いでその身を震わしながら上機嫌そうに笑う。

『まさか、グレートレッドが鳴くとは……』

『珍しいこともあるものだな、白いの』

『……』

『白いの？』

『――喋り掛けるな』

『な、何故！』

終生の好敵手であると思っていたアルビオンに冷たくあしらわれ、ドライグはショッ

クを受ける。
　そんな二天龍のやりとりなど耳にも入らない様子で、ヴァーリはグレートレッドを見つめていた。
「流石は『黙示録』に記された赤いドラゴン。――とはいえ『黙示録』の赤は一つだけじゃないな、マザーハーロット？」
　マザーハーロットにしか伝わらない様な言葉を投げ掛けるが、マザーハーロットは答えず、その代わりにヴァーリへ優雅にその白い手を伸ばす。
「その手は？」
「わらわを連れて帰るのであろう？　無骨なそなたに女のエスコートの一つでも教えてやろうぞ」
　上からの言い方だが、要は『禍の団』へ帰る気になったらしい。グレートレッドを敵が居る中で戦うのを避けたのか、もしくは別の理由か。彼女の心情は彼女にしか分からない。
「得意ではないが精一杯はしよう」
　差し伸べられたマザーハーロットの手を取るヴァーリ。一流の職人が長い年月を掛けて作り上げる絹織物よりも滑らかな肌に触れてもヴァーリの表情は変わりもしない。
　ヴァーリは、マザーハーロットの手を引いて赤い獣の背から降ろし、出て来た裂け目

の中に入っていこうとする。
「勝手に出てきて勝手に帰るのか？」
それを呼び止めたのはシンであった。僅かだが口調に苛立ちがあった。いきなり襲撃されたかと思えば、蚊帳の外に追いやられ、今度は見送らせる。相手に振り回され過ぎたのと、過労によって余裕が無いせいで普段よりも声に感情が現れていた。あるいは、マザーハーロットという存在がシンの心を騒めかせているのかもしれない。
「ここは押さえてくれ、間薙シン」
「ホラーか恋愛映画のワンシーンを強制的に見せられたこっちの身にもなれ」
躊躇なく品の無い嫌味が口から滑り出て来たことで、相当気が立っていることをシンは自覚する。
マタドールや赤い獣と戦ったときもそうだが、魔人を相手にするとどうしても自制心が緩んでくる。魔人という存在がシンを戦いに駆り立てようとしているようであった。
ピンと来ないのかヴァーリはキョトンとした顔をし、美候には受けたのか吹き出し、アーサーは表情を崩さない。さっきの場面を辛辣に評されたマザーハーロット本人は声無く笑っていた。シンの台詞に笑っているというよりも、余裕があまり無いシンの態度を嘲っている様に見える。
「それが何なのか良く分からないが、もう一度言う。俺たちが退散するまで大人しくし

ていてくれ。俺はまだ君に死んで欲しくは無い。当然、兵藤一誠にも」
　ヴァーリの目線が一誠の方を向く。
「俺は、現赤龍帝の兵藤一誠もそうだが、君とも戦いたいし倒したいとも思っている。宿敵がいるのに目移りした話だが。――兵藤一誠、君も同じ気持ちだと思うが？」
「……俺もお前を倒したいさ。超えたいと思っている。けど、超えたいのはお前だけじゃない。同じ眷属の木場だって超えたいし、ダチの匙も超えたい。それにここにいる間薙だって当然超えていきたい。挙げ出したらキリがないな」
「――だそうだが？」
　ヴァーリが投げ掛けてくる。シンは短く溜息を吐く。内のモヤモヤとした感情を吐き出すかのように。
　いつもは落ち着かせる側だが、今回ばかりは逆の立場となった。それを自分の未熟さとして甘んじて受け入れる。
「――一応聞いておくが、それはどうするつもりだ？」
　冷静さを取り戻した声で、シンは赤い獣の頭の一つを指差す。その口に収まるフリードの頭部。よく見れば牙が何本も突き刺さっている。丁寧に扱うつもりは無いと見てとれる。
「うおっ。何だこれぃ？」

シンの指摘でフリードの頭部に気付き、まだ生きていることが分かった美候は気色悪そうに言う。
「ああ、これか」
マザーハーロットが片手を上げる。すると、赤い獣は口を閉じ、フリードの頭部を丸？みにする。人の頭部が通るには十分な太さが無い首の為、嚥下されていく様が喉の膨らむ形で良く見えた。
「これで満足かえ？」
「……腹を壊すぞ」
「ホォーホッホ。悪食ゆえ馳走となろう」
どちらにしろこれでフリードに手を出せなくなる。必死になってフリードを追い込んだのに全てを台無しにされた気分であった。
だが、ここで下手に喚くと台無し以上のことが起きるかもしれない。表面上は静かに、しかし、怒りや屈辱は深く心に刻み込む。
ヴァーリたちが、空間の裂け目の中に入って行く。
その間際――
「では、再会を愉しみにしているぞえ。『人修羅』」
マザーハーロットが、皆が聞いている中でわざわざ強調する様にその名でシンを呼

ぶ。
　初めて聞く者はその名の意味が分からず困惑し、名だけ知っている者は魔人がそれを知っていることに驚き、名の意味を知っている者は一瞬だけ肩を震わす。
　最後の最後までこちらの神経を逆撫でする真似をしてくれたマザーハーロットに、殺意を覚えながら、その殺意が薄まる前に胸の奥にしまい込む。いつの日か、叩き付けてやる為に。
　ヴァーリたちは次元の裂け目に消え、空を遊覧していたグレートレッドもそれに合わせたかの様に、登場時と同じ派手な音を出しながら次元の挟間に戻っていった。
「――スッキリしない終わり方だな」
　残されたリアスたち。シンが戦い終えた感想を愚痴にして出す。
「アーシアも無事だし、全員生きてるしそう考えたら俺たちの勝ちだろ？」
　戦いの発端は、アーシアがディオドラに攫われたことからであった。そこに『禍の団』の旧魔王派からの襲撃が有り、更にはフリード、魔人の登場。しかし、結果として負傷者は出たもののリアスたちの中に死人は出ていない。他人が聞けば奇跡の様な生還と称するだろう。
「――かもな」
　短い間に連戦してきたシン。タンニーン、オーディン、デュリオの助けが無ければ死

んでいた。結果に納得し切れなくとも生きていることは素直に喜ぶべきである。
死んでいたら次など無い。生きているからこそ次が考えられる。次に会う時には、マザーハーロットの好き勝手にはさせないと強く決心することが出来る。
「うう……」
不意に聞こえた呻き声。戦いの後で過敏になっているシンたちは、すぐに声の方を見る。
「う、うう……」
気絶しているディオドラ。その胸から下は瓦礫に埋もれていた。シンと一誠の魔力で崩れた建物の一部が、ディオドラに落下していた。
このまま放っておけば、瓦礫によって圧死するだろう。よく見ると瓦礫の隙間から血が流れ出ている。
「――どうする?」
シンが尋ねたのはアーシアであった。ディオドラの非道な行いは既に知っている。そして、アーシアもまた彼の毒牙にかかる寸前であった。
「おい!　よりにもよってアーシアに!」
「今、この場でどうにか出来るのはアーシアだけだろ?」
「それは、そうだけど!」

出来ることならアーシアには二度とディオドラと関わって欲しくはない。しかし、重傷のディオドラを助けられるのはアーシアの神器だけ。

だが、ディオドラはアーシアの人生を狂わせた張本人。そんな相手を治癒するなど酷と言える。

「わ、私は……」

すぐには答えられなかった。アーシアとて思うことはある。

「好きに決めればいい。誰も、何も言わない。本当に決めたことなら」

アーシアの意思を何よりも優先する。ただそれだけを告げる。

「――私は」

真っ直ぐにシンを見つめ、アーシアは自分の決断を下す。

◇

目が覚める。眼球だけ動かし周囲を探る。薄暗くすぐ近くに壁が見える狭い部屋であった。その狭さに圧迫感を覚えるほど。

自分がベッドで寝かされているのが分かり、体を起こそうとする。だが、足は動かず手も動かない。指も全く動かず、動くのは目だけ。

「起きましたか？」
　その声に心臓が飛び跳ねる。全く気配が感じられなかった。
「だ、誰だ？」
　眼球だけでなく舌も動かせることに今気付く。
「私ですよ」
　顔を覗き込む様に見下ろすのはセタンタ。
「ぼ、僕を――」
「無駄ですよ。魔力によって現在拘束状態になっています。指一本動かせません。目と口だけは動かせますが。貴方には聞きたいことが山ほどありますからね、ディオドラ様」
　敬称を付けて呼ぶが、言い方に吐き捨てる様なものがあった。
「一応はディオドラ様と呼ばせていただきます。今回の件でアスタロト家は失墜し、魔王の輩出の権利を長期間失うことになりますが、まだ正式に発表されていないので。無理矢理脅属にしていた件や、現ベルゼブブ様の顔にまで泥を塗ったのは、私個人としては許せることでは無いですが」
　セタンタの目に獣の如き光が宿る。その眼光にディオドラは萎縮する。
「な、何故――」

「私がここに居るという質問なら私は見張りですよ。貴方が万が一自害でもする可能性があるかもしれないので。まあ、杞憂でしょうが」
そんな度胸も忠誠も無いと馬鹿にする。侮辱に反論しようとするが、セタンタの圧に負け言葉を?み込んでしまう。セタンタの指摘をわざわざ体現してみせた。
「それとも、死に掛けていた自分が生きていることへの疑問ですか?」
セタンタに言われると同時に、記憶がフラッシュバックする。
顔が潰れる程の衝撃。脳や頭が歪んだのではないかという痛み。一誠の拳の感触が生々しく蘇る。
「はぁ……!　はぁ……!」
せり上がって来る嘔吐感。一誠によって気絶させられた後、ディオドラは一度目を覚ましていた。体に落ちてきた瓦礫の衝撃によって。
瓦礫の上に更に瓦礫が落ち、一瞬では無くじわじわと骨と内臓が潰されていく感触。押し潰されたものが行き場を求めて喉に這い上がってきて、血と吐瀉物が混じりあったニオイが体の内から漂ってきた。
声を上げられず、助けも求められず、誰も気付かない。そうしている内にディオドラの意識は途切れ、気が付いたらここに居た。
「彼女が貴方を治しました」

「彼女？」
「アーシアですよ。彼女が神器で治癒しなければ間に合わなかったでしょう」
「はあ……？」
　心の底から意味が分からないという声を発する。人生を狂わせ、凌辱までしようとした自分を助ける理由が全く分からない。
「どういうつもりなんだ……？」
「目の前に死ぬ寸前の悪魔がいたからでしょうね」
「は、ははは……あはははははは！」
　ディオドラは哄笑する。助けられたことへの感謝など微塵も無い。アーシアが、自分が想像するよりも遥かに愚かな女性であったことを。教会から追放される理由を作った相手をもう一度助けるなど、ディオドラの考えからすれば愚者でしかない。
　その愚かさが腹の底から愉快であり、笑いとなって出てくる。
「耳障りだ。黙れ」
　セタンタの手がディオドラの口を鷲掴みにした。ミシミシと骨が軋む音が鳴る。
「本当だったらこのまま顎を砕いてやってもいいが、そんなことをしたらお前を治癒した彼女の覚悟に無駄にすることになる。感謝しろ、彼女に」
　セタンタは上辺だけの丁寧さを捨て、完全に粗野な口調となる。

「笑うならもう少し考えて笑え。お前は、彼女のおかげで今も笑うことが出来るんだからな。――そして、それが最後だと思え。もう、そうやって笑うことは二度と無い」
　ディオドラの精神を押し潰していくセタンタの殺気。ディオドラという男を心底軽蔑しているからこそ容赦が無い。
「確かにお前は彼女の人生を狂わせた。だが、それでも彼女はもう一度お前を助けた。どうしてか分かるか？　千年考えてもお前が辿り着くことが無いから今ここで教えてやる」
　押さえていた手を離し、ディオドラの目に己の目を近付けるセタンタ。ディオドラの眼球に殺意でも焼き付ける様に。
「お前如きが、彼女の生き方を曲げられると思うな」
　狂わされた人生であっても、アーシアがアーシアで在り続けたことで今の居場所を手に入れられた。ディオドラの下衆な欲望では、彼女の心を折り曲げることなど出来はしない。
「きっと、こんなことを言っても何一つお前には届かないだろうな。全て理不尽に思い、自分は悪くないと思い続ける。だが、それでいい。そうやって全てを呪っていろ。駄犬の様に同じ場所を回り続けていろ。他の皆は先に進んで行く。いずれお前のことなど忘れて」

ディオドラはこの先、己の過ちを認めることも反省することも無いだろう。何故自分が、何故こんな目に、と自分の置かれた環境を不幸と嘆くだけ。ならばこそ罪に対する罰になる。

言い返すことがあれば言い返してみろ。そう言わんばかりに、言い終えたセタンタはディオドラの目を覗き続ける。

舌は動く筈なのに、セタンタに見られるだけで鉛にでも置き換えられた様に重く、動かすことが出来ない。

目を逸らすことも呻くことも出来ず、冷や汗を流しながら脅威が去るのを待つだけ。

やがて、セタンタは興味を無くした様にディオドラから目を離す。

「――情けない奴め」

そう吐き捨て、壁に背を預けて見張りを続ける。ディオドラは他の者達に輸送されるまで、声も発さずにひたすら怯えることしか出来なかった。

◇

「あーららー。やられちゃったねー。シャルバ君とクルゼレイ君」

「一応、シャルバはまだ生きている。どさくさに紛れて逃げ延びたらしい」

「だからってこっちに戻って来れるかねぇ？　あんだけ息巻いておいて全滅でしたーなんて、恥ずかし過ぎじゃない？」
　今回の件の結果を報告され、リゼヴィムは敗れ去ったシャルバたちを嘲る。バルパーの方は興味無しという態度であった。
「旧魔王派はほぼ壊滅したというのに呑気だな」
「壊滅ぅ？　うひゃひゃひゃひゃー！　全然問題ナッシーング！　俺さえ残っていたらそれだけで十分だよーん！　カテレアちゃんもシャルバ君もクルゼレイ君も正直扱い辛い駒だったから、一掃されて逆にスッキリしたねぇ！　ま、成果無しの犬死ってのはちょっとマイナスだけど」
　強がりではなく本気で言っているのが分かる。同じ悪魔ですら情け容赦無く悪意を以て嘲笑う。
「英雄派の者たちが動くぞ？」
「動きゃいいじゃーん。暫くは高みの見物と洒落込ませてもらうぜい！　色々とやらなきゃいけないこともあるしさぁ！」
「ほう？　それが何なのかわらわも少し気になるぞ」
　二人しか居ない場所に姿を見せたのは、赤い獣に座るマザーハーロット。
「やあ、マザーハーロットちゃぁん！　相変わらずセクシーだねぇ！　おじいちゃんク

ラクラしちゃう！」

「――お前か」

「ホォーホッホ。相変わらず無礼な奴じゃ」

『禍の団』内において、マザーハーロットをちゃん付けして呼ぶ者などリゼヴィムしかいない。他の者たちは、そんな命知らずな真似など出来ない。

一方でバルパーの反応は非常に冷めたもの。興味無しという態度を貫いている。

「何しに来たの？　マザーハーロットちゃん。あ、もしかしておじいちゃんに会いに来た？　それだったら感激だなぁ！」

如何にもリゼヴィムはマザーハーロットに魅了されているかの様であるが、それは上辺だけのもの。実際は心ひとつに動かされていない。リゼヴィムの中にあるのは強烈な自己愛のみ。自分よりも好きになるものなど存在しないからこそマザーハーロットの魅了が通じない。

そして、バルパーもまたマザーハーロットの魅了が一切効かない。彼にあるのは聖剣への憎愛だけで、その他一切に関心など無い為である。

マザーハーロットとしては、自分の魅了が通じない相手だというのに好意的であった。敵も味方も愛せるし殺せる彼女にとっては、それも許容出来ることにしか過ぎないからだ。

「拾い物を届けに」
「拾い物？」
マザーハーロットが赤い獣の背を撫でる。七頭の一つが喉を膨らませ、口から何かを吐き出した。
「わーお。やあ、初めまして？」
地面に転がるのは、半分溶け掛けたフリードの頭部であった。まだ意識があるらしく、瞼と眼だけが動いている。
「フリードか。よく戻って来たな」
バルパーは立ち上がり、フリードの側に移動する。
「おかげで色々と実験と研究が出来る」
バルパーの目は、フリードを完全に実験動物としか見ていない。
それに危機感でも覚えたのか、溶解していた部分を動かし逃げようとするフリード。
「はい。ダメー」
リゼヴィムが指先をフリードに向けると、途端動きが止まる。
「残念だなぁー、フリード君。君とは馬が合いそうな気がしたけどね。ああ、抵抗しても無駄だよん。俺と君とじゃ能力の相性悪すぎなんだよねん」
動けなくなったフリードをケラケラと嗤うリゼヴィム。

「わらわはもう行く」
「えー、もっとゆっくりしていきなよぉ。おじいちゃん寂しいよぉー。寂しいからベッドの上で良い子、良い子して欲しいなぁー」
甘えた声を出すリゼヴィムに、バルパーは本気で気持ち悪そうな視線を向ける。いい歳をした男の甘える態度など醜悪という言葉では収まらない。
「ホォーホッホ。気が向いたら時にでもしてやろうぞ」
本気なのかリゼヴィムの冗談に合わせたのか分からない言葉を残して、マザーハーロットたちは姿を消す。
「やっぱいいわぁ……」
「まだ言っているのか」
「違う違う。魔人ってのが良いなぁって思うわけ。あ、マザーハーロットちゃんが良い体してるってのは本気だけど」
「それで？」
バルパーはフリードを何処からか持ち出した透明な箱の中に入れながら、リゼヴィムの真意を尋ねる。
「おじいちゃん専用の魔人、欲しいなぁって」
「成程」

　それだけ言ってバルパーは何処かへ行く。数分後、戻って来たバルパーは透明の液体が入った筒を持っていた。
「何これ？」
「役に立つかもしれん」
「へえ……」
　液体の中には人の眼球が一つ浮かんでおり、覗き込んでいるリゼヴィムの目と合う。
「じゃあ、創っちゃおうか、魔人！」
　リゼヴィムは童の様に笑った。

「ホォーホッホ。不満かえ？　あの場で言わなかったことが」
　唸った赤い獣を宥める様に、マザーハーロットはその背に指を這わす。
「あの小僧を魔人と明かしたところで浅い溝が出来るだけ。すぐに飛び越えられ、埋められるだけぞ」
　人修羅と言ったが、魔人であると暴露することは無かった。最初はそのつもりであったが、並び立つ二人の姿を見て気が変わった。
「どうせなら、もっと深く、もっと激しく、もっと死を孕んだ傷にしなければ面白くない」

思い描く未来の光景。それだけで背中に快感が走る。
「人修羅と赤龍帝。あの二人を殺し合わせる方がもっと愉しそうではないかえ？」
赤い獣はそれを聞き、邪笑を浮かべて同意する様に唸った。

出演、競争

『禍の団』によるレーティングゲーム襲撃から数日が経過していた。シンは仲魔と無事に合流を果たし、受けた傷も既に癒え、いつも通りの日常を送っている。

あの件で、有望株と思われていた若手悪魔のディオドラ・アスタロトは反逆者として拘束され、旧四大魔王であるクルゼレイは死亡。もう一人のシャルバは、魔人などの襲来の混乱に生じて逃走を許してしまった。

あの場にシンもいたが、正直フリードとマザーハーロットに完全に気を取られていて存在の認識すらしていなかった。

また、イリナとディオドラの眷属たちも無事に見つかり、ディオドラの眷属たちは事情もあるので、サーゼクスたちが一旦身柄を保護する形となり、今後どうするかを検討するという。

近くに体育祭を控えたある日の休日。シンの家のチャイムが鳴る。

「はい」

玄関のドアを開けると、その向こうには異様なメンバーが居た。

サーゼクスにグレイフィア、セラフォルー。もう一人は、シンが見た事の無い中性的

な容姿をした金髪の美形。
「やあ」
「こんにちはー☆　シン君☆」
「どうも」
　朗らかに笑うサーゼクスと明るく挨拶をしてくるセラフォルー。シンは軽く頭を下げて挨拶をする。
「急な訪問で申し訳ありません」
　グレイフィアが恭しく頭を下げた。
「お構いなく。暇でしたので。それで――」
　シンの目が金髪の美形に向けられる。視線に気付き、その美形は品の良い笑顔を見せる。
「初めまして。私はミカエル。天使の長をしております。デュリオがお世話になりました」
「ああ、成程」
　シンは事件後にデュリオと碌に話さずに別れたことを思い出す。上に無断で来たので見つかったら不味い、と言い残して逃げる様に去っていったが、どうやら筒抜けであったらしい。

「イリナも貴方のお世話になっているとか。色々と感謝していましたよ、貴方に」
「ちょっと手を貸した程度ですよ」
　素っ気なく謙遜するシン。
「こっちもそちらに色々と心配を掛けている様なので」
「――その件について気に障ったのなら、ここで謝罪します」
「――すみません。意地の悪い言い方をしました。別に気にしていませんよ」
　ミカエルがイリナにシンの監視もとい見守る指示を出していたことについて、皮肉混じりの冗談を言うと、ミカエルは即座に謝罪する姿勢を見せる。そこまでさせる気など微塵も無かったので、すぐにシンも前言撤回する。天使は基本的に生真面目な者が多い、というアザゼルの言葉を思い出す。
「傷の方は、もう大丈夫みたいだね」
「ええ。アーシアの神器ですぐに良くなりましたので」
　ドアを開いていたシンの腕をサーゼクスは見ていた。
　フリードによって両腕で折られたが、先に言った様にアーシアの神器ですぐに骨もくっついた。重傷を負わされた一誠も、フリードによって目を負傷させられたリアスたちも、後遺症も無く傷は完治している。
「少し君と話がしたいんだが……いいかな？」

「どうぞ。狭い家ですが」
すぐに応じ、家の中に案内する。両親はいつも通り不在であるので特に問題は無い。
居間に着くとピクシーたちがソファーに座っている。
「あ、サーゼクスだ」
「ヒホ！　レヴィアたんもいるホ！」
「ウガッ」
セラフォルーの顔を見た途端、嫌そうな声を出すケルベロス。すぐに離れようとするが、その前に電光石火で接近してきたセラフォルーに抱き締められる。
「三人とも久しぶりー☆　相変わらずフカフカモフモフだねー、ケルベロス君☆　柔らかーい☆」
頬擦りをしてくるセラフォルーにケルベロスは不動の構え。もう彼女専用のぬいぐるみにでもなる決心が付いたらしく、心を完全に無にしてされるがままとなっていた。
「ジャックランタン君は？」
「あいつならギャスパーの所に居ます。家とギャスパーの家を気分次第で行ったり来たりしているので」
「へー。ギャスパー君とも仲が良いんだ☆」
「一時期ジャックランタンと一緒に引き籠っていましたし、一番仲が良いんじゃないで

すか？」
「そうなんだ。初耳」
　とは言うものの、ジャックランタンはいたずら好きであり、ギャスパーを良く振り回しているが。
「とりあえず、そこにどうぞ」
「すまないね」
　多人数が座れる場所は、食卓とそれ用の椅子しかないのでそこに座る様に促す。
　言った後に気付いたが、四人に対して食卓の椅子が予備も入れた四つしかない。シンも入れれば五人。
（まあ、立って聞けばいいか）
　そうシンは思っていたが、四つ目の椅子に誰かが座ることは無かった。
「グレイフィアさん？」
「私のことはお構いなく」
　グレイフィアは椅子に座らず、サーゼクスの背後に立っていた。こここそが自らの定位置と言わんばかりに。
　ならばもてなす為にお茶かコーヒーの一つでも淹れなければ失礼かと思い、キッチンの方を向く。すると、さっきまでサーゼクスの背後に居た筈のグレイフィアがそこに

立っていた。
「このキッチンのものを拝借してもよろしいでしょうか？」
「一応、こっちがもてなす側ですが……」
「押し掛けてきた上に、間薙様にもてなしてもらうのは少々図々しいかと思ったので」
「ここはグレイフィアに任せて貰えないかな？」
「間薙様は、お掛けになってお待ちください」
大して美味くも無いお茶やコーヒーを淹れるぐらいなら、任せた方が賢明かもしれないとシンは思う。他人の接待など碌に経験したことが無い者がしても、失敗するのが目に見えている。
「じゃあ、お願いしてもいいですか？」
「はい。すぐに準備します」
初めて使うキッチンなのに、グレイフィアは長年使用していたかの様に手際よく準備をしていく。何処に何があるのか分かっているのか、動きに無駄が無い。
シンが空いた椅子に腰を下ろす。すると、ぬいぐるみの様にセラフォルーに抱き抱えられたケルベロスと目が合った。小柄なセラフォルーが三メートル程あるケルベロスを軽々と抱えている姿は中々シュールである。
ケルベロスの目がどうにかしてくれと訴えてきている風に見えたが、見て見ぬふりを

した。あそこにいるのはケルベロスではない。セラフォルー専用のぬいぐるみと思うことにする。

「それで、今日は何の御用ですか？」

「あの後のことを幾つか君に報せようと思ってね」

サーゼクスが言っているのは、恐らくディオドラの件についてであろう。ディオドラに関わった者として、その後について報告しに来たらしい。

「わざわざサーゼクスさんたちが来なくても良かったのでは？」

悪魔の最高責任者や天使の長が足を運ぶ仕事とは思えなかった。

「いや、今回の件について君には本当に申し訳ないことをしたと思っているんだ。本来ならば巻き込まれる必要が無かった筈なのに巻き込んでしまった」

一瞬だが、サーゼクスの目がシンの右脚に向けられた気がした。

（まあ、当然だが筒抜けか）

あの戦いの後にシンも何があったのかを教えたが、最低限のことしか言っていない。フリード、ドーナシーク、マザーハーロットの赤い獣、蘇ったフリードとの戦いの詳細を省いて言っただけ。その過程で赤い獣に右脚を喰われて再生したことは言っていない。誰かが言ったのか、もしくはバトルフィールド内のことが映像記録として残っていたのかもしれない。

考えれば戦いに巻き込まれる発端となったのはディオドラの罠――恐らくはフリードとドーナシークの私怨によるもの――だったことを思い出す。連戦による命の綱渡り状態をよく駆け抜けたものだと、シンは他人事の様な感想を抱いた。

「それに、君にはディオドラ・アスタロトを通じて悪魔の負の面を見せたからね」

悪魔の負の面。その言葉だけ聞くと皮肉に思えてしまう。

シンもディオドラの所業については知っている。アーシアを策略によって教会から追われる立場にしたこと、教会に関係する女性を自らの欲望の為に眷属へと変えたこと。

『悪魔の駒』の悪用とも言うべき行為だろう。

「ディオドラだけでは無い。過去にも同じ様に好みで同意も無く眷属にしたり、神器所有者を無理矢理眷属にしたりする悪魔も居た」

敢えて隠さずに話すことで誠意を表しているサーゼクス。

「そういう悪魔には、それ相応の処分を与えて数は減少したと思っていたのだがね……」

「締め付けを厳しくした結果、隠し方も上手くなったということですか？」

「残念なことにね」

何々をしてはいけない、と禁止すれば大概の者は罰を恐れてそれに従うだろう。だが、あくどい者、ずる賢い者は必ず抜け道を見つけ出して、禁止されたものに手を出す。

悪魔だけに限らず人間でもよく聞く話である。
「――失望したかい？」
「特には。嫌な悪魔一人見ただけで全部嫌っていたら、それよりも先に人を見限っていますよ」
一を見て十もそうだと決めつけるのは簡単だし楽である。しかし、シンはそんな風に単純にはなれなかった。
「それに部長たちのことは嫌いじゃないので」
「――その言葉だけで大分気が楽になったよ」
サーゼクスは微笑を見せた。
「ディオドラ・アスタロトに関しては現在『禍の団』についての情報を聞き出している最中だ。彼は、冥界へのテロ行為だけでなく現魔王に関与する者たちの不審死、グラシャラボラス家次期当主の事故死への協力が疑われている」
グラシャラボラスの名を聞いて、シンは以前殴り飛ばした男の顔を思い浮かべた。そろそろ心身の傷は癒えただろうか。
「尤も、有力な情報が得られる可能性は低いと見ている。どうも、彼には最低限の情報しか与えられていなかったみたいだ。――シャルバが彼の口封じよりも逃走を選んだことが何よりも証拠だ」

その名を聞いて、苦いものがこみ上げてくる。シャルバ・ベルゼブブはあの戦いの混乱に乗じて姿をくらませてしまった。それに気付いたのはマザーハーロットたちが去った後のことである。

悪運の強い奴に限って、次に会う時には厄介な力を引っ提げている様な気がする。今回のフリードの様に。

「アスタロト家の土地は九割没収。魔王輩出の権利も長期間?奪された。――ディオドラ・アスタロト自身も、生きている間に冥界の空を見ることはないと断言しておく」

空も見えない所へ幽閉。それが、ディオドラに与えられた結末であった。悪魔の寿命は長い。何百年、何千年という命が尽き果てるまでディオドラは独りきりで過ごす。死刑の方が温情かもしれないとすら思えてくる。尤も、死して罪を雪ぐか、生きて罰せられ続けるか、どちらが相応しいのかは個人差があるだろうが。

(まあ、もう終わったことだ)

シンはそれだけ思い、ディオドラの存在を記憶の端にとっとと追いやる。ある意味では最も冷酷な対処かもしれない。

「そうですか」

シンのその一言で、ディオドラについての話は終わった。

「それで、そちらの方は何の御用でこちらに?」

次にシンは、ミカエルに話を振る。デュリオとイリナについての礼を言っていたが、それだけでは無いだろう。
「私がここに来た理由は二つあります。デュリオとイリナがお世話になった件についてが一つ。これはデュリオからです。色々と助けて貰った礼だそうです」
ミカエルの手が光り、その光の中から四角い紙箱が現れる。
「彼の趣味は美味しいもの巡りなので、その中でも特に気に入ったものを貴方に、と」
ミカエルから手渡される箱。すかさず横から伸びてくる小さな手。
「甘いニオイ！」
箱の中身を鋭敏に察知したピクシーが箱に抱き付く。
「ヒホ！　お菓子かホ！」
ジャックフロストもいつの間にかシンの側に来ていた。
素早い動作でピクシーが箱を開ける。中身は見た事の無い円形の焼菓子。切れば何人分になるかは分からないが結構な大きさであった。
「ねえねえ。食べていい？　食べていい？」
「食ーべーたーいホ！」
「分かった。分かった」
我儘を言ってくるピクシーたちがこれ以上騒がしくなる前にジャックフロストに箱

を渡す。
「ヒーホー！」
ジャックフロストはそれを宝物の様に頭上に掲げ、グレイフィアの方へ走っていく。
その後をピクシーが飛んで追う。
「これを切り分けて欲しいホー！」
「お願ーい」
「承りました」
二人の願いを快く引き受け、手際よく準備していく。
「デュリオのことは本当にありがとうございました。魔人も、それも我々にとっては猛毒そのものであるマザーハーロットと交戦して生き延びられたのは貴方のおかげです」
「俺だけの手柄では無いですし、こちらも助けられましたから」
決して謙遜ではない。あの戦いに於いては、シン、オーディン、タンニーン、デュリオの誰かが欠けていたら犠牲者が出ていた。それぐらい紙一重の戦いであった。
「デュリオの方は？」
「赤い獣の穢れにかなり毒されましたが、堕天にまでは至っていません。現在は静養中です。勝手な行動をした罰を含めて部屋に見張りを付けて外出出来ない様にしていますが」

「無事ならそれでいいです」
　尾を引く様な結果にならず、ひとまず安心する。
「もう一つ私の方もディオドラ・アスタロト関連についてのことです。彼の眷属の処遇の話になります」
「ああ、そう言えば……」
　ディオドラの眷属たちは保護されたという話は聞いたが、その後にどうなったかまでは知らされていない。
「元教会関係者ということで、彼女たちの管轄は我々となりました。デュリオとイリナの強い意思もありましたしね」
　ミカエルの表情はあまり明るいものでは無い。だが、暗いと言う程のものでもない。
「彼女らの経緯を知った上で、今後について彼女らに提案をしました。――ですが、彼女たちは、シスターや教会に関わる道はもう歩めない、と」
　恐らくは、復帰の道を提示したのだろうが、ディオドラの元眷属たちは拒否したらしい。
　有名なシスターや名の知れた聖女だった故に、一度道を外した自分たちを許すことが出来ないのだろう。
「なるべく人目を避けた場所で彼女らはひっそりと暮らすと彼女たちは言っていまし

た。誰に関わる事も無く。あれは隔離されることを望んでいる様に見えました」
天界、冥界、人界との繋がりを断ち、転生悪魔として孤独な生を全うすることを自罰としているのかもしれない。
「――そうですか」
それだけしか言えなかった。これ以上ディオドラによる悲劇は起こらないが、起こってしまったことを無かったことには出来ない。そして、シンはそれを救う術を持たない。
あの時、戦いの直前でデュリオにそれを譲った。結果として血を流さずに終わった。しかし、それが正しかったかどうかは分からない。少なくとも、すぐに正解が出る様なことではない。正しいか間違っているか、それが分かるのはどれほどの時間が必要なのだろうか。
「不甲斐ない結果です。貴方たちが頑張ってくれたおかげで彼女らを保護することが出来たというのに」
視線を伏せて申し訳なさそうするミカエル。熾天使であっても傷付いた心は容易く癒すことは出来ない。
「今後は、天界が責任を持って彼女らの行く末を見守っていくつもりです。彼女たちは、時間を掛けて自分たちの過去を振り返るでしょうが、いずれその目が未来に向けられる

ことを願って」
　第三の人生、あるいは最初に歩んでいた人生に戻った彼女たちは今後どうなっていくのか。結末など誰にも予想も出来ないし、するものではない。
「今後と言えば、テロリストの介入もあって若手レーティングゲームも大きく見直されることになった」
　ミカエルの話が終わったのを見計らってサーゼクスが話し始める。
「当分の間、中止にでもするんですか？」
「仕切り直しになると思うが、冥界の住人たちや他勢力からの強い希望があって、後一戦だけ組むこととなった。リアスたちには既に報せてある」
「どんな組み合わせで？」
「リアスとサイラオーグだよ」
「――へえ」
　興味が湧かないと言えば嘘になる。若手悪魔の中で最強を決定付ける対戦カードであった。
「そしてもう一つ、シトリー対大公カードも熱望されているね。現時点においては試合の是非も決まってなくて、若手は全員待機という指示が出ているけどね」
　決定はしていないが、ほぼ内定している様にシンには思えた。テロの直後とあって自

重しているが、暗いニュースが続く冥界を活気付けるにはレーティングゲームが必要なのだろう。現実に多くの冥界の住人たちが対戦を望んでいる。
「――それでなんだが、ここから先の話はまだリアスたちにも言っていないんだが」
サーゼクスがそう前置きする。
「サイラオーグが私に直訴してきたんだ。ゲームが決まったら、ぜひ君を練習相手として招きたいと」
「……俺をですか？」
「ああ」
まさか、サイラオーグからその様な申し出をされるとは露程も思っていなかったので、不意打ちを受けた気分となる。
「随分と気に入られたね。彼とは親しいのかい？」
「――親しい程では無いですが、それなりに縁は在ったと思います」
冥界には何度か訪れ、何回かサイラオーグと会って会話もしている。同じ相手を殴ったり、妙に鋭い気配を向けられたことがあったが、思っている以上に注目されていた。
「嫌なら今のうちに断っておいた方がいい」
「――考えておきます」
「そうかい。伝えておくよ」

はっきりした返事では無かった。シンもサイラオーグには悪い印象を持っていないので、断るのも気が引けた為こういう返事となった。

（――とは言え、戦うかもな……）

曖昧に返したが、シンの脳裏に自分とサイラオーグが対峙する光景が過る。その光景が現実のものになるとシンの勘が囁いていた。

「私の方の話はこれで以上だ」

「じゃあ、私の番だね☆」

ミカエル、サーゼクスの話が終わり、残るはセラフォルーのみ。しかし、疑問に思う。何故セラフォルーがシンの家に来たのか。今回の件でセラフォルーは関わっていないし、妹のシトリーも関係していない。

「そう言えばセラフォルーは彼に何の用が？　詳しくは聞いていなかったが」

「シン君にも用事はあるけど、メインは違うのよねー☆　おーい！　二人ともー☆」

セラフォルーが呼び掛けたのは、グレイフィアの足元で切り分けられた菓子に行儀悪く噛り付いているピクシーとジャックフロスト。

「『アレ』、出来上がったよー☆」

「ホント？」

「すぐ行くホーー！」

菓子を食べるのを中断し、セラフォルーの下へ駆け寄っていく。
「アレ？」
サーゼクスとミカエルが知っているのか、という視線をシンに向けるが、シンも心当たりが無いので首を横に振った。
目を輝かせるピクシーとジャックフロスト。一方でケルベロスは何故か嫌そうに喉を鳴らしている。
「はい☆」
「わーい」
「ヒホ！」
「ランタン君にも後で届けてあげてね☆」
『はーい』
セラフォルーから手渡されたのは冊子。その表紙には『マジカル☆レヴィアたん』の文字。猛烈な悪寒が背中を走っていく。
「――何ですか？　それは？」
「え？　聞いてないの？　ピクシーちゃんたちが今度出演する『マジカル☆レヴィアたん』の脚本だよ☆」
全く以て初耳であった。そんなこと一単語すら聞いていない。思わず責める様な眼

差しをピクシーたちに向ける。
「うん。言ってないから」
「ヒホ。別にいいかと思ったホ」
「……」
しれっと言うその態度。何といい性格をした仲魔たちなのだろうか。その図太い神経に頼もしさすら覚えてしまう。
「ピクシーちゃんたちを見た時にビビッと来たの☆　私の番組で人気者になれるって☆　監督さんにピクシーちゃんを紹介したら即採用ってことになって、いきなり準レギュラーでデビューよ☆　ピクシーちゃんたちも出演オッケーで契約してくれたし」
何から何まで初めて聞くことばかりであった。いつの間にそんなことに、と思ったがある事を思い出す。リアスたちが、レーティングゲーム前にテレビ局でインタビューを受けていた時のことを。
暫くの間、ピクシーたちがテレビ局内で自由行動をしていた時があった。紹介や契約はその時にしたのだろう。
「はい☆　シン君にはこれ」
セラフォルーから書類が渡される。
「出演料とか細かい契約内容について書いているから、キチンと読んでサインしてね☆

気になる点があったら何でも聞いて☆」
「出演料？」
「ピクシーちゃんたちをノーギャラで出そうなんてしないよ☆　ちゃんとしたお仕事には、ちゃんとした報酬を払います☆　でも、ピクシーちゃんたちは振込先口座とか持ってないから、代わりにシン君の口座を貸してね☆」
書類に軽く目を通す。書かれている出演料はかなりの額であった。
「いいんですか？」
提示された金額について思わず確認をとってしまう。
「いいの☆　あ、でも☆　そのお金でピクシーちゃんたちをお腹いっぱいにしてあげてね☆」
ピクシーたちがこの仕事を受けた理由が大凡分かった。きっと、ケルベロスを飢えさせない為に受けたのだろう。今でこそ普通の暮らしをしているピクシーたちだが、以前は逃げたり、隠れたりなどして飢えが付き纏う生活をしていた。
シンの家に住む様になってそれとは無縁となったが、森で君臨していたケルベロスは逆に人の世界に出たせいで自由に狩りなどが出来ずに飢えとまではいかないが、食欲が満たされない生活を送っている。ケルベロスはそれを表立って見せないが。
このことは、ピクシーたちなりの新入りであるケルベロスへの気遣いなのかもしれな

い。
「くっ。流石セラフォルー。目の付け所が良い。今度グレモリー家がプロデュースする特撮ヒーロー『乳龍帝おっぱいドラゴン』で彼らにマスコットポジションをやってもらうと思っていたが、先を越されてしまったか。冥界で子供たちに大人気のおっぱいドラゴンに引けを取らない人気者になれると思っていたのに……」
「……え？　冗談ですよね？」
悔しそうにしているサーゼクスに、シンはつい聞いてしまった、出来れば冗談であって欲しい。
「既に主題歌は完成、撮影は開始、グッズ展開の計画まで進んでいるよ」
真顔のサーゼクス。まごうなき本気。まさか、自分の仲魔と友人が特撮デビューするなど予想外にも限度がある。
「ああ、そうだ。君にも聞いて貰おうか。おっぱいドラゴンのテーマ曲を」
まるで名案でも思い付いたかの様に言うサーゼクス。
「いや、それは……」
全く聞く気になれない。
「それってこないだのテレビ局で撮った奴？　私がダンスの振り付けを考えたの」
「何やってんですか？」

「違うよ。出来ればイッセー君が子供たちと踊っている正式バージョンを持って来たかったが、残念ながらまだ編集中でね。持って来ることが出来なかった」
（何やっているんだ、アイツ……）
　しれっと知る新事実。
「だが、代わりに仮歌バージョンを持ってきた。かなりレアだと思うよ。ちなみに作曲は私で、作詞はアザゼルだ」
「何やってんですか？」
　さっきからこんなことしか言っていない様な気がするが、それしか言えない。
「へえ☆　楽しみ☆」
「冥界の子供たちに大人気のキャラクターの歌ですか。興味がありますね」
　セラフォルー、ミカエルは興味津々。
「ヒホー　オイラも聞くホ！」
「アタシもアタシもー」
　ピクシーとジャックフロストも興味津々。
「……」
　ケルベロスは相変わらずぬいぐるみに徹していた。
　グレイフィアを見る。グレイフィアは諦観の目でシンを見つめ返してくる。大人し

く受け入れろということらしい。
この場合に於いて、今のシンの心境を共有する者は居ない。四面楚歌であった。
サーゼクスが携帯音響機器を取り出し、手早くボタンを押して操作する。
軽快な音楽の後、歌が始まった。
『とある国の――』
衝撃的なのは、仮歌を歌っているのがアザゼルであること。
『――。――ゴン。おっぱいドラゴン』
渋い声で言葉に出来ない感想を抱かせる歌詞を歌い上げていく。
『ずむずむ。いやーん』
脳みそが湯立ち過ぎて気化しそうな内容の歌詞。聞いていたシンは、脳細胞が死滅していく様な気分を味わっていた。
「ああ、これはアザゼルだが、本番の曲はイッセー君に歌ってもらったよ」
「……そうですか」
横目でミカエルとセラフォルーの様子を見る。セラフォルーは楽し気に聞き入っている様子。ミカエルは俯き、時折体をビクビクと痙攣させていた。全身全霊で笑いを堪えている。
アザゼルの元同僚であるミカエルには、アザゼル本人が歌っていることもあって、腹

筋が捩じ切れそうな程の凄まじい破壊力を発揮させていた。
一番が歌い終えるとすかさず二番目の歌詞。時間にすれば数分間の出来事だというのに、何故こうも永く感じられるのだろうかと、シンは心を半ば無にしつつ思う。
全て流し終えると、機器を切り、サーゼクスが問う。
「どうだったかな？」
その問いに対し――
「――独創的でした」
――シンは逃げに等しい回答をした。

◇

『ただいまの競技――』
駒王学園のグラウンドにてアナウンスの声が響き渡る。
本日は駒王学園の体育祭の日であり、生徒だけでなく保護者も見学していることもあって、いつも以上の熱気がグラウンドから放たれていた。
シンは自分が参加する競技が始まるまでの間、運営の手伝いをしながら競技の様子を眺めている。

『それでは、二年生全クラス対抗の二人三脚、スタートです』
アナウンスが読み上げたのは、一誠とアーシアが参加する予定の競技であった。視線を動かして二人の姿を探す。
動かしていた視線が止まった。二人が並ぶ列を見つける。丁度、足をひもで結び付けている所であった。
空砲が鳴る度に列が進んで行く。やがて、一誠たちの順番に回って来る。
「お、始まるな」
同じく運営を手伝っている匙もスタート前の一誠たちを見つけた。
一誠とアーシアはスタートラインの前に立ち、構える。審判係がスターターピストルを掲げ、よーいと掛け声を出すと選手全員が前のめりになる。
空砲が鳴ると同時に全員がスタートラインから駆け出す。
一誠とアーシアが先頭を走る。早朝の訓練の成果もあって足並みは見事に揃っており、どんどん速度が上がっていく。
「速いなー」
後続を引き離していく一誠たちのスピードを、匙は称賛する。
一誠たちが走る姿を、リアスが、朱乃が、小猫、ギャスパー、木場、ゼノヴィア、イリナが応援する。

オカルト研究部のメンバーだけでなく、アザゼルや一誠の両親もまた声援を送っていた。

誰もが一誠たちに頑張れと声援を送っている。ここで黙っている程、シンは薄情では無い。

「行けっ！」

走る一誠たちの背を押す様な弾丸の如き声援。近くで聞いていた者たちは、その声量に驚いて誰の声か探している。大声を出すイメージが無いせいで、それらの視線がシンに向けられることは無かった。

唯一、シンの隣でそれを聞いていた匙は目を丸くしている。

「お前もそういう声、出せるんだな……」

「こういう時ぐらいな」

一誠たちは、皆の応援を受けて更に加速し、圧倒的な速さでゴールテープを切った。

ゴール直後に一誠はガッツポーズをし、アーシアは一番の旗を渡されると応援してくれたことへの礼代わりに旗を見せる様に振った。

「おおー」

一位でゴールした一誠たちに、匙が小さく手を叩いて讃える。

シンは一誠たちにゴールを見届けると、その場から移動し始めた。

「どこ行くんだ？」
「準備だ。そろそろ競技の番が回ってくる」
「何に出るんだっけか？」
「借り物競争だ」
「そうか。頑張れよー」
「ああ」
　匙の軽い声援を背に受け、シンは後ろに向けて手を振りながら準備に向かった。
　アナウンスが、次は借り物競争であると放送で流す。
　競技は滞りなく進んでいき、あっという間にシンへ順番が巡ってきた。
　スタートラインに立つ。リアスたちの声援が耳に入り、視線だけそちらに向ける。
　横並びでオカルト研究部のメンバーがシンを応援していた。先程競技を終えた一誠とアーシアも並んでいる。並んでいるが何故だろうか、一誠は心ここに在らずという感じの夢心地の様な気の抜けた顔。アーシアは耳まで真っ赤に染めて俯いている。
　露骨な両者の態度に、短い時間の中で何かが起きたのが一目で分かるし、大体察せた。
　目線を戻すと、審判係がスターターピストルを構えている。もう間もなくスタートの空砲が鳴る。
「よーい……」

ドン、という空砲が鳴った直後にシンは飛び出す。人外の力を使わずに、純粋に人としての力だけで走るシン。
日頃から特訓をしているので、すぐに独走状態となった。
やがて、目の前に箱が幾つか並べられた机が見える。箱の中に借りてくる物が書かれた紙が入っている。
一番で箱の中から紙を取り出し、中身を確認するシンであったが、そこで動きが止まった。
後続が追い付き、次々と箱から紙を取り出し、借りてくる物を探しに行っているというのにシンは不動のまま。
何か悩んでいる様にも見える。
暫しの間、シンは動かなかったが急に行動を開始する。コースを逆走し始め、向かった先には一誠とアーシア。
「え？　どうしたんですか？」
「二人とも付いて来てくれ」
同行を頼むシン。
「は、はい！」
アーシアは快諾する。一方で一誠はというと――

「……んふふ」
シンの姿が眼中に無いらしく、だらしのない顔で思い出し笑いをしていた。
無言で一誠の額を指で弾く、後頭部が背中に付く様な勢いで一誠は仰け反った。
「いってぇぇぇ！　何すんだぁ！」
「――来い」
二人の手を引っ張ってゴールを目指す。足の速さもあって一番でゴールすることが出来たが、問題はこの先にある。
指定されたものをちゃんと持ってきていないとゴール扱いされない。
順位の旗を持つ審判係の男に、シンは紙を見せる。
見せられた紙に書いてある内容と、シンが連れて来た二人を交互に見る。
「……本当にこの二人が？」
シンは無言で頷く。一誠とアーシアは質問の意味が分からずにキョトンとしていた。
「ケッ！」
審判係は、何故か一誠の方を見て吐き捨てながらシンに一位の旗を手渡すと、ゴールした他の競技者の下にさっさと行ってしまった。
「何だあれ……」
審判係の態度に戸惑う一誠。

「その、何が書かれていたんですか……？」
シンは二人に審判係と同じ様に紙の内容を見せた。途端、アーシアは真っ赤になる。
「お、お、お前……！」
一誠の方は動揺して言葉が詰まっている。
「人気の無い所で、あの程度で済ませたことについては自重したな、と言っておこう」
「な、何でお前が俺とアーシアがキキキ……したのを知っているんだよ！」
思わず口走りそうになるのを何とか濁す一誠であったが、殆ど内容を言っている様なものである。
「俺じゃない。あいつ等だ」
シンが目線を動かす。一誠が向けられた先を見ると、校舎の陰から顔を出してニヤニヤと笑っているピクシーたちが居た。
一誠とアーシアが少しの間だけ校舎裏へ移動し、そこで何があったのかを見て、伝えてきたのは彼女らの仕業である。
「お前！　というかお前ら！」
照れ隠しの様にシンの胸倉を掴んで前後に揺さぶる一誠。されるがままのシン。途中で気付いて止めに入るアーシア。
ガクガクと揺さぶられていたシンの手から紙が落ち、風に吹かれて宙を舞う。その紙

に書かれていた文字は――
『カップル』

「はあ……！　はあ……！　はあ……！」
シャルバ・ベルゼブブは必死の思いでここまで来た。
『禍の団』の拠点。拠点は幾つも存在するが、シャルバが居る拠点は限られた者しか入ることが許されない。
幸いにもまだ誰にも見つかっていない。もし、見つかることがあれば死は免れない。
大多数の戦力を失った挙句に作戦に失敗したのだ、その責任を取らされることは目に見えていた。
「まだ死ねん……！　私はまだ……！」
赤龍帝に敗れる所か、いきなり乱入してきたフリードという狂人に一方に倒された。精神がひび割れる程の屈辱が彼の中に残ったが、逆にその屈辱が彼をあの場から逃げさせるという選択肢を与えた。

シャルバが呟く様に、この屈辱を抱いたまま死ぬことなど出来はしない。
目的の場所に辿り着く。殺風景な扉。だが、この扉の向こうに『禍の団』の象徴である『無限の龍神』オーフィスが隔離されている。
周囲に護衛など配置されていない。そもそもそんなものはオーフィスに必要無い。限りなく頂点に等しい力を持つオーフィスを倒せるものなど存在しない。
「もう一度……！　もう一度だ……！」
オーフィスの望みを叶えるという誓いを立てたことで、シャルバはオーフィスの力である『蛇』を授かった。もう一度オーフィスに誓いを立て、更なる力を手に入れる。
最早、賭けでしかない。オーフィスの気紛れでシャルバの命運は決まる。仮に力を与えられたとして、その力に耐え切れる保障も無い。しかし、全てを失っているシャルバにはこれしか手段が無かった。
扉を潜り、中に入る。室内には家具や生活用品などの置かれている物は殆ど無い。だが、何故かテーブルと椅子だけが置かれており、それが何も無いこの部屋では浮いて見えた。
「オーフィス！」
オーフィスの名を叫ぶが、反応は無い。
「オーフィス！　居ないのか！」

決死の覚悟で潜入したというのにオーフィスの不在という空振り。だというのにシャルバは叫ぶ。

「私はまだ死ねない！　何も成していない！　偽りの魔王たちへの復讐も！　私たちを拒絶した冥界への鉄槌も！　真の血統であるベルゼブブの名を取り戻すという目的も！　オーフィス！　私にもう一度力を！　二度と屈することの無い力を！」

血走った眼で血を吐く様に叫ぶシャルバ。

カチン、という陶器と陶器が触れ合う音が何も無い筈のこの空間に聞こえた。

誰も座って居なかった筈の椅子に金髪の青年が座り、紅茶を飲んでいる。

「だ、誰だ……？」

辛うじてその言葉だけ言えた。本能が警鐘を鳴らし、体が危険を察知して震えそうになる。だが、何故か同時に強烈なまでに魅かれるものも感じた。もっと深く知りたいという欲求が恐怖を超える。

シャルバの言葉に、金髪の青年は少しだけ驚いた表情となる。

「へえ。僕が見えるのかい？」

「な、何を言っている……！　何時からそこに居た……！」

虚勢。今のシャルバの態度は上っ面のものでしかない。

「最初からだよ。君が入って来た時からここに居たよ」

「馬鹿な……！」
確かにシャルバはテーブルを見た。そこには誰も存在しなかった。一切感知出来ないなど在り得ない。
「貴様は何者だ！　ここで何をしている！　オーフィスは何処に行った！」
見せつける様に魔力を発するが、金髪の青年の碧眼は揺らがない。
「君は、力が欲しいのかい？」
シャルバの質問に答えず、青年の方が逆に問う。
「何を――」
「欲しいのかい？」
「ほ、欲しいに決まっている……！」
どういう訳か青年の言葉に逆らうことが出来ず、素直に答えてしまう。
「――これも何かの繋がりかな」
青年は一人で納得し、椅子から立ち上がった。
青年がシャルバに近付く。シャルバは金縛りでも受けたかの様に動けない。
「まさか見える様になるとはね……おめでとう。君の執念は一つの壁を超えた。そんな君に僕から贈り物を与えよう」
青年がシャルバの眼前に立つ。

そして――
「なっ！」
シャルバの下がっていた視線が段々と上に上がっていく。そして、シャルバを黒く染めていく影。
「まさか……！　まさか……貴方は……！　ベル――」

「ベル。誰か来ていた？」
ルイと一緒に戻って来たオーフィスが部屋に入るなり金髪の青年――ベルに聞く。
「ああ。シャルバという名前だったかな？　彼が来ていたよ」
「シャルバ、どうした？」
「僕の『翅』を一枚あげて閉じ込めた。使いこなせるようになったら出て来られるんじゃないかな？」
「シャルバ、死ぬ」
「かもね。でも……もし出て来られたのなら面白いことになりそうだ」
ベルはオーフィスを見つめ、爽やかな微笑を浮かべた。

幕間　会食、裏話

「よお」
　ある日の放課後、アザゼルがシンに声を掛けた。
「どうかしましたか？」
「今日、暇か？」
「特に用らしい用は無いですが」
　生徒会の仕事で呼ばれることも無く、オカルト研究部の部室に待たせているピクシーたちを迎えに行ってそのまま帰宅するつもりであった。
「そうか。あのな……」
　続きの言葉を少しだけ口ごもらせる。アザゼルらしくなく見えた。
「この間のレーティングゲーム、お前に迷惑掛けたろ？」
「――ああ。あれのことですか」
　ディオドラとリアスとのレーティングゲーム。それ自体が『禍の団』を釣る為の作戦であったが、その際に敵の先手によってシンは戦いに巻き込まれてしまい、結局最後まで戦うこととなった。

シン自身や、ピクシーたちも特に気にしていないが、作戦の立案者の一人であるアザゼルは負い目を感じているらしい。サーゼクスたちも直接シンに謝罪しに来た。彼らにとっては失態だと重く考えている様子。

「別に気にしなくてもいいですよ」

「いや、よくねえって。っていうかなぁ。状況が状況だったとはいえ、勝手に危険に晒されたことについてもっと俺を責めるべきだろうが」

簡単に許そうとするシンに対し、アザゼルが待ったをかけた。追及するべき権利を行使しろと逆に叱ってくる。

もう少し自分の命に頓着しろと言う。傍から聞いたら、シン自身が自分の命に対して希薄という印象を受ける。

その後に言葉を続けさせようとするが、開けた口をそのまま閉じ、再び開いた時には溜息を吐く。

「いや、悪い。こんな説教紛いなことを言うつもりは無かったんだけどな。話がずれちまった」

目的から外れ始めたのに気付き、そこで中断する。

「まあ、とにかくだ。お前はどうとも思っていないかもしれないが、俺は迷惑掛けたと思った。詫びの代わりって訳じゃ無いが、今日メシでも奢ってやる。あのチビたちも一

緒にな」
前置きが長かったが、要はそういうことらしい。アザゼルなりのシンへの気遣いであった。
そうなると断るのも無粋。素直にその言葉に甘えることにする。
「分かりました」
「何か希望の店とかあるか？」
アザゼルに言われて少しだけ考える素振りを見せるシン。時間にすれば十秒程の黙考の後に話す。
「あります。あと、もう一つ頼んでいいですか？」

◇

夕日も沈みかけ、夕闇となる外の光景。徐々に静まっていく一日の終わりの最中、とある店はそれに反して活気に満ちていた。
小奇麗な店内に座る十を超える制服姿の男女。シンを含むオカルト研究部のメンバーと生徒会のメンバーであった。それぞれが長机の上にメニュー表を開き、どれを注文しようか迷っている。

アザゼルも当然居り、少し離れたカウンター席で先に注文していた生ビールを呷っていた。

どうせ食事するならば全員誘ってみようと考え、シンがオカルト研究部のメンバーと生徒会のメンバーに声を掛けたところ、全員が参加ＯＫしたので大人数での食事会と化した。

食事会の場所となったのは、洒落た店では無く以前に食べに来たこともあるラーメン屋。店内にはシンたち以外一般の客は居ない。アザゼルがもしもの時を想定して貸し切りにしたのだ。一日で稼ぐ分以上の額を提示されたら、店主の方も断ることも出来ない。

とは言え、料理するのは店主一人。従業員は店主の妻らしき女性が一人。これだけの人数の注文を受けるとなると、他に客が居たらパンクしていたことだろう。

「さて、どれにしようかしら……」

「この特製ラーメンというのは気になりますわね、部長」

「あっさりとした塩……それとも逆にコッテリとした豚骨にしようかな？」

「うーん。醤油チャーシュー麺にするか、それとも味噌チャーシューにするべきか。間薙、前に来た時は何を頼んだんだ？」

「醤油のチャーシュー麺だ」

「あ、あの、イッセーさん……別々の味を頼んで交換したりするというのは……」
「……ギャー君。餃子を食べよう？」
「ヒィィィ！　せめてニンニク抜きにしよう！　小猫ちゃん！」
「な！　見ろ、イリナ！　この店では各品の大盛りが無料だぞ！」
「嘘！　この店、大丈夫なの！」
「ええー。甘いものが無ーい」
「ヒホ！　冷たいラーメンが無いホ！」
「ヒ～ホ～。そりゃあ、ラーメン屋だからね～」
「グルルルル。トニカク腹ガ減ッタ」
　オカルト研究部のメンバーは、相談しながらどの料理を選ぶべきか悩み、シンの仲魔たちは望んだものが無く不満を漏らしている。因みに、見た目が犬のケルベロスは通常では入店出来ないので術によって姿を隠してある。
「――トッピング全部載せも有りかもしれませんね」
「会長。飲み物はどうしますか？」
「チャーシュー麺は当たり前として、お供を中華飯にするべきか、チャーハンにするべきか、麻婆飯にするべきか、それが問題だ……」
「元ちゃん悩み過ぎですよ」

「由良先輩はもう決めたんですか？」
「ああ。前に間薙と来たからな。同じもの頼もうと思っている」
「え！　初耳なんだけど！　翼紗！　そこの所を詳しく教えて！」
多少の脱線をしながらも、生徒会のメンバーも何を注文するべきか決まり始める。
「遠慮すんなよー。頼みたいものがあればどんどん頼め。若い内は食える時にはジャンジャン食え。――生ビールもう一つ貰えるか？　あと、このチャーシューの盛り合わせと餃子も頼む」
大ジョッキのビールをすぐに飲み干したアザゼルは、すぐに次のビールとつまみを注文する。
オカルト研究部、生徒会はあれこれと雑談しながら数分後に頼む品を決めると、そこからは怒涛の注文の嵐となる。
「特製ラーメンを二つ。チャーシュー麺の大盛りを三つ。塩チャーシュー麺を二つ。その内一つは大盛りで。あと普通の醤油ラーメンを二つに味噌ラーメンを一つ」
「炒飯と中華飯、ご飯の大を一つ。それと餃子十人前お願いします」
リアスと朱乃が代表して品を頼む。
「こちらはチャーシュー麺を三つ。味噌チャーシュー麺を二つ。塩チャーシュー麺を二つ。チャーシュー麺の一つは、トッピング全部で。炒飯を二つに麻婆飯を一つ、餃子を

五人前で」
生徒会の方は、ソーナが大量の注文をスラスラと頼む。
かなりの数の注文を伝票に書き込む女性従業員。やがて、書き終えるとすぐに厨房へと向かい伝票を店主に渡す。
伝票に目を通すと、大量の注文に表情一つ変えずに店主はすぐさま調理を開始する。無駄の無い動きで手際よく作業を行う。女性従業員の方も、店主の代わりに具材を出すなどの細かい手伝いをしていく。
注文した品が届くまでまだ時間がある。そうなると、雑談の話題は自然に今日の食事会についてになる。
「それにしても、間薙君から夕食に誘われるとは意外でした」
「まあ、偶にはこういうことも悪くないかと思って。とは言っても、本当の理由は二人への礼も兼ねてですが」
「二人……？」
心当たりの無いソーナ。リアスも同じ様な顔になっている。シンの視線が言っていた二人――匙と由良に向けられた。
「そんな大したことはしていないさ」
「――俺は、もうお前の『ちょっと手伝ってくれ』という言葉を信用しないからな」

由良はクールな態度で謙遜してみせるが、匙の方は露骨に顔を顰めて恨み言を吐く。
「あれは本当に大変だったな……」
一誠は知っているらしく、こちらも顔を顰めながら何故か片頬を擦っていた。
「イッセーも知っているの？　一体何をしたっていうの？」
「結構、重要なことですよ。アーシアにも関係ありますし」
「私ですか？」
自分にも関係があると言われ、アーシアは目を丸くする。
「今思うとかなり無茶したよなぁ。でも、向こうもお前たちを試す為の試験のつもりだったのかもな」
「――試験って言っても、俺、所々記憶が抜け落ちているんですけど……」
アザゼルも知っている様な口振りであった。
「あの時、本当に大変だったんだからねー」
「オイラも物凄く疲れたホ」
「ヒ～ホ～。二度目はごめんだね～」
「グルルルル。アレハ中々オモシロカッタ」
愚痴るピクシーたちとは反対に、ケルベロスの方は楽しかったという感想。性格の違いが分かる。

「勿体ぶっていないで、何があったのか教えてくれないかしら?」
中々話さないことに疎外感でも覚えたのか、リアスが急かしてくる。
「あれは、ディオドラとのレーティングゲーム前日のことです」
シンがその時のことを思い出しながら語り始めた。

◇

万が一の場合を想定し、アーシアを絶対に守る為の方法。シンからそう聞かされた一誠はその言葉を信じてシンと一緒にある場所に着く。
駒王学園の職員室。扉を開けて一言挨拶をしてから入室する。職員室内を堂々と歩いていくシン。その後ろを一誠が気不味そうに歩いている。
一年生の頃は、度々問題を起こしていたせいで、何度も職員室でお叱りの言葉を受けているからだ。二年生になって問題を起こすことは無くなったが、今でも苦手意識は在る。教員の何名かが『久しぶりに何かやったのか?』という視線を一誠に向けていた。
「先生」
シンの足がある机の前で止まった。
「おお、来たか」

　そこはアザゼルの机であり、アザゼルがシンたちの姿を見て飲みかけのコーヒーを置く。
「準備は出来ているんですか？」
「出来てるぞー。お前たちはタイミングが良いな。そろそろお前たちにも専用の訓練場所が必要だってサーゼクスと相談していてな、大体の工事は済ませてある。少し早いがそこを使う。安心しろ、全力を出しても大丈夫だ」
　シンは既にアザゼルに何をするのか話しており、話がトントンと進んでいく。一方で、一誠の方は完全に置いてけぼりになっていた。
「え？　俺達専用の訓練場所？　全力を出す？　ってことはそれだけ派手に暴れる様なことをするのか？」
「――お前、何をするのか言ってないのか？」
「多分、大丈夫だとは思うんですけど、もしかしたら逃げる可能性もあるので逃げられない状況にしてから話そうかと……」
「悪い奴だなぁ、お前は……。下手したら相手の気分次第で死ぬかもしれないのに」
　小声でぼそぼそと会話をするシンとアザゼル。
「おい、今『死ぬ』って言葉が出てこなかったか？」
「――さあ？」

惚けるシン。
「で？　メンバーは？　お前とイッセーだけか？」
「あとはピクシーたちも連れて行こうと思っています」
「うーん。不安だな……戦力が足りなくねぇか？　俺の見立てではもう少し欲しい。でなきゃ、死ぬ確率が上がるぞ？」
「やっぱり『死ぬ』って言葉が出てただろ！」
「アーシアの為なら何だってしてやるって言っていたよな？」
「うっ！」
　その言葉を出されると、一誠はそれ以上何も言えなくなってしまった。
「冗談が過ぎたな。安心しろ。そこまで考え無しの相手じゃねえよ。――多分」
「そこは言い切って下さいよー！　……というかさっきからの話からして俺たち、何かと戦うんですか？」
「頼んで言うこと聞いてくれる相手だったら楽だったんだがな」
　逆にある意味ではシンプルな相手とも言える。言うこと聞かせられる程の実力を見せればいいのだから。
「失礼しまーす」
　聞き覚えのある声と共に誰かが職員室に入って来る。声を見ると書類の束を持った

匙が居た。生徒会の仕事で来たのだろう。匙の後ろには由良も居る。
匙たちはすぐにシンたちの存在に気付き、書類を教員に渡した後にシンたちの方へ来た。
「珍しいところで会うな」
「まあな」
「やあ。間薙、兵藤」
「どうもっす」
返事をする一誠の声はやや硬い。一誠と由良がちゃんと言葉を交わすのは、これが初めてであった。
「……匙、由良。この後、時間はあるか？」
『え？』
「ちょっと手伝って欲しい」
唐突にシンからそんなことを言われ、匙たちは面食らった表情となる。すると、すぐに一誠がシンの制服の袖を引っ張る。
「おい。二人を巻き込むつもりかよ」
一誠の声には少し怒りが混じっている。アーシアの為に人手が欲しいが、だからといってオカルト研究部員ではなく無関係な生徒会のメンバーに声を掛けるのは気に食

わない様子。
「この二人が加わればギリギリ及第点って言った所だな」
「アザゼル先生も……」
「そう睨むなよ。あくまで事実を言っただけだ。お前がダメだって言うんならそれまでだ」
「包み隠さずちゃんと事情は説明する。それで少しでも気が乗ら無さそうに見えたら諦める」
「……俺には詳しい事情も話さなかった癖に」
「お前はそういう風に扱っても大丈夫そうだったからな」
若干恨みがましく言う一誠に、シンはしれっとした態度で言い返す。
「で？　何を手伝ってほしいというんだい？」
由良が内容を尋ねてくる。
「ここじゃなくて外で話す」
職員室内では説明し難いので、全員職員室外へと移動する。
そこから人目に付かない場所へ行くこととなり、その道中でこれからすることについての説明を二人にする。
「――成程。聞けば聞くほど胡散臭いな。ディオドラ・アスタロトは」

「レーティングゲームでアーシアさんをかっさらっていくつもりかよ。気に入らねぇな」
　ディオドラについて聞かされた二人は顔を顰める。彼らにとって元七十二柱の名を持つ悪魔の基準はソーナである。厳しいが同時にその内の優しさも知っている二人からすれば、ディオドラの行為に不快感を覚える。
「それが純血の悪魔にとっての普通なら、少し悲しいね」
　転生悪魔故に生まれつきの悪魔とは価値観が異なる。それがディオドラの様な者が当たり前だとしたら、悪魔になったことをほんの少しだけ後悔しそうになる。
「まあ、そう深刻に考えんな。それが嫌だと思ったならお前たちで変えてやれ。古い価値観を変えるのは大概がお前らみたいな若い奴だからな。偉くなれ、偉く」
　少し暗くなった由良を慰める様にアザゼルが笑いながら言う。アザゼルこそ旧い存在だが、後進の背を押す。若い者たちが成長することへの焦りが無く、逆にそれを望んでいる様子であった。
「すみません。ちょっとネガティブに考え過ぎました」
「気にすんな。そういうのも若い奴らしい」
「――それで、もしもの為のボディーガードみたいなものを用意するのに俺達が協力すればいいのか？」

「説得する、という雰囲気では無さそうだね」
「言うことを聞かせるには力を見せる。ですね、アザゼル先生？」
「そうだな。怠け者だが、実力は確かだ。だからこそ自分よりも弱い奴の言うことなんて聞きゃしない。そいつの御眼鏡に適う必要がある」
怪我や血を流すことになる可能性を告げる。嫌だと少しでも思ったのならそれで良い。あくまで頼む立場であるシンが彼らに強制することなど出来ない。
すると、匙は長い溜息を吐いた後に頭をガシガシと掻く。
「何かもうすげえ嫌な予感しかしねぇー。しねぇけどやるよ、やるやる。手を貸してやるよ。あー、言っちまったー」
匙が協力してくれることを約束してくれた。
「いいのか？」
「正直嫌だよ！　でもなぁ断ったら絶対後悔しそうだから手伝ってやるよ！　同じ生徒会の好みとアーシアさんの為に」
「え、俺は……？」
「兵藤は……まあ何かついでに」
「何だそりゃあ！」
「冗談だよ」

実際のところ、匙が参戦する理由の中で一番強いのは一誠が参加していることである。同じ『兵士』として一誠を超えたい目標としてライバル視している匙は、一誠と同じ試練を受けることでその背に追い付こうとしていた。

そう思っているなど恥ずかしいので口が裂けても言えない為、誤魔化しているが。

「私も手伝うよ」

「そうか。ありがとう」

「君には大きな借りがあるからね。こうやって少しでも返していかないと」

「気にする必要なんて無いが？」

「私の矜持みたいなものだよ」

言った後に笑う由良。美形故に女子ならば即座に恋に落ちそうな程である。

「幸い生徒会の仕事もあれで終わりだ。悪魔の仕事まで自由時間だ」

「なら遠慮なく力を貸してもらう」

二人の協力を得たシンたち。そのまま誰も居ない空き教室に着く。周りに人の目が無いのを確認して中に入る。

「ピクシーたちはどうするんだ？」

そのまま空き教室に直行してしまった為にピクシーたちには声を掛けていない。

「喚ぶ」

「え？」
　すると、青白い光の柱が複数現れ、そこに雷の様な光が落ちると離れた場所に居たピクシーたちが召喚されていた。
　その光景に、一誠は感心した声を上げる。
「おお！　お前、そんなことも出来る様になったのか」
「仲魔限定だがな」
　喚ばれたピクシーたちは、キョロキョロと周囲を確認している。事情は既に話しているので混乱している様子は無い。どちらかと言えば不満そうな表情をしていた。
「もおー。お菓子食べてる最中だったのにー」
「置いてきちゃったホー！」
「あ～あ。急に喚ばれたからギャスパー泣くな～」
「グルルル。時間カ」
　戦いの前だと言うのに相変わらずのマイペースっぷり。
「頼もしいだろ？」
　若干の皮肉を込めて周りに聞く。全員苦笑いをしていた。
「んじゃ行くとするか」
　アザゼルがスーツの内側から一枚の紙を取り出す。何も描いてない白紙の紙であっ

た。
その紙に向けて指を振るう。すると、紙に光で文字や図形が描かれていく。
指の動きの速さは尋常ではなく残像が見える程であり、また複雑な文字や図形を描いているのに一秒たりとも動きが止まらない。
「何をしているんですか？」
一誠は思わず聞いてしまう。
「これから行く場所への転送魔法陣を描いてんだよ」
「今描いてんですか！」
「俺個人が使う時は、基本的にその場で描く。誰かの手に落ちる、なんて万が一の危険を考えてな」
「……よく描けますね」
見たことも無い文字の配列や、図形の配置を見て思わず言葉が零れる。
「は？　簡単だろ、こんなの覚えるなんて」
事も無げに言い切るアザゼル。一誠は描かれている魔法陣を見て、完璧な暗記するのにどれぐらい膨大な時間が掛かるか想像して眩暈を感じる。
喋っている間にアザゼルは描き終え、紙を指で弾く。ひらひらと舞う紙。描かれた魔法陣が輝いた時にはシンたちは全く別の場所に居た。

これといったものが無い殺風景な場所であったが、端が見えない程に広く、天井は何処までも高い。
全力を出しても問題なさそうな空間であった。
『おおおおお……！』
一誠と匙が声を揃えて感嘆とした声を出している。由良は声を出さなかったが、目を輝かせていた。
「広い広ーい！」
ピクシーたちは飛び回り、走り回っている。
「見た目はこんなんだが、作りは特別製だ。派手に暴れても問題無い」
「こんな所が在ったんですね……」
「在ったというか作ったんだがな、ここは冥界のグレモリー領の地下だ」
「そうだったんですか！」
「力が増すにつれて専用の場所も必要になってくるからな。それ用のバトルフィールドがここって訳だ。もう少し経ってからリアスたちに使わせる予定だったが、一足先にな」
「てことは、ここはリアス先輩たち専用か……羨ましい」
匙から本音が零れ出る。専用の訓練施設など夢の様な代物であろう。

「別にシトリー領内でも作ればいいだろ？　セラフォルーが口添えすれば一発だ。作るなら俺も手伝ってやるぜ？」
「うーん……会長が悩みそうだ」
　ソーナの言うことならセラフォルーも首を縦に振るだろうが、それを対価にして別のことを要求しそうな気がした。セラフォルーはソーナに弱いが、ソーナもセラフォルーには弱い。
「早速やるか――と言いたいところだが、その前に幾つかある」
　アザゼルはそう言うと由良の前に立つ。
「お前にはこれを渡しておく」
　アザゼルの手の中に光球が現れ、それが由良に手渡されると光球は盾と化す。
「これは？」
「人工神器『精霊と栄光の盾（トウインクル・イージス）』だ。『戦車』のお前とは相性が良いだろう」
「人工神器って……ええ！」
　手渡された物の重要さに由良の声は裏返る。現状で確認されている人工神器はアザゼルの『堕天龍の閃光槍』しか無い。どれほど貴重な物なのか瞬時に理解してしまう。
「幾つか作った人工神器の一つだ。防御力は勿論だが、精霊と契約することでその力を付与することも出来る。今回は前以って俺が火の精霊と契約しておいた」

「いいんですか？　そんな大事なものを渡して？」
「丁度、実戦データが欲しいと思ってた所でなぁ」
「――大丈夫ですか？」
　安全性を確認する様にシンが問う。
「あのなぁ。基本的な実験を何千回も繰り返した後の実戦での実験だ。まず暴走はしない――多分」
「多分って……」
　言い切らないアザゼルに一誠は不安そうな声を出す。
「一万回やっても一万一回目で何か起こる場合もあるんだ。絶対大丈夫なんて言えるか。その代わり九十九パーセントは保障してやる」
「有り難く使わせてもらいます」
　一誠はまだ何かを言いたげであったが、貰った由良がそう言ってしまうと何も言えなくなってしまう。
「んで、次にイッセー。お前、禁手使用禁止な」
「はい――ええっ！」
　軽く言われたせいで返事をしてしまったが、内容を理解して時間差で驚く。
「今のお前の禁手のインターバルは大体一日だったよな。今日使っても明日のレーティ

ングゲームにはまだ間に合うかもしれないが、一日と言っても多少の誤差はあるよな？」

『無い、とは言い切れんな。相棒の体調や気分次第でお前の言う通り誤差が生じる』

一誠ではなくドライグが答えた。

「禁手は明日のレーティングゲームの切り札だ。ここで使わせたらリアスたちの戦術を大幅に変えることになるからな。というか、いざ本番で禁手使えなくてディオドラを有利にさせる様なことになったら本末転倒だしな」

「そりゃそうですが……」

「分かりました。じゃあ、そろそろ始めます」

「もうかよ！　色々と心の準備が――」

「禁手が使えなくたって、今のお前ならそこそこ戦える。胸張って行け」

不安そうな一誠の背を押す様に、アザゼルが激励を送る。その言葉に目を丸くした後、両手で頬を張って不安な表情を消し去り、気迫の籠った顔付きとなる。

「じゃあ、頑張れよー」

手をひらひらと振りながら、アザゼルはシンたちから距離をとる。

アザゼルが十分離れると、シンは己の影を爪先で叩く。――しかし、何も起こらない。

もう少し強く叩いてみる。やはり反応は無い。

床が砕けそうな程強く踏みつけてみる。以下同文。
「あいつ、何やってんの……？」
「さあ……？」
「恐らく意味のあることだとは思うのだが……」
傍から見れば奇行としか表現出来ないシンの行動に、一誠たちがヒソヒソと小声で会話する。
恥ずかしく無い――と言えば嘘になるが、それでもシンは似た様な行動を繰り返す。
「居るんだろ？」
遂には影に話し掛けてしまった。返事は無い。
どうしたものかと、影の中のアレについて自分よりも詳しい者に助言を求めようとアザゼルの方を向いた時――
「あっ」
それが誰の声であったのか、シンには認識出来なかった。横から来る何かに身を固めて防御する方に意識が向いていたからだ。
横殴りの一撃がシンに直撃する。ギリギリで紋様が発現し、身体能力を高めた状態で受けることが出来た。しかし、踏ん張って耐えることをすぐに止める。耐えたら逆に体が壊れてしまうことを電光石火で伝わる痛みと共に察した。

受けた一撃に身を任せると自分でも面白いとすら思える程に飛んだ。視界が三百六十度激しく回転し、全ての光景が回転のせいで混ざり合って一つに見える。

（油断した）

飛ばされながら自分の失態を振り返る。これから戦う相手に対していつの間にか甘えた考えを持っていた。試合以外でよーいドンで始まる戦いなんて在りはしない。それを忘れていたからこそ先手を受けた。

目まぐるしく回転する光景に目を凝らす。回転は緩まり、どこが上で、どこが下なのか認識する。

着地が近付いてきているのが分かると自分から回転の速度を速め、足から着地する。足裏で地面をしっかり踏み締めるが、勢いは中々殺せず、着地場所から数メートルも移動してしまう。

自分が落ちた地点からさっきまで居た場所を見る。数十メートルは軽く飛ばされていた。

そして、その場所では戦いが始まろうとしている。

◇

（不思議な光景だ）

シンがいきなり吹っ飛ばされたことに驚きつつ、由良が抱いた感想がそれであった。

本来ならば、シンと共に動く筈の影が切り離されて残っている。そして、その影からは太く長い縄の様なものが伸びている。この縄らしきものがシンを殴り飛ばした。

続いて影から手が出てくる。人の手に近いが大人の頭を覆い隠せそうな程大きい。その手が影の縁を掴み、中から本体を引っ張り出す。

青黒い体色の巨体は人の体。その体の乗っかるのは単眼の象の頭。獣人を思わせる怪物がシンの影から姿を現す。

「お前か！」

『赤龍帝の籠手』を顕現させながら、一誠は姿を見せた象の獣人――ギリメカラをシンがこの存在をアーシアの護衛に選んだことを納得する。

あのヴァーリと一戦交えて無事だった程である。その後にヴァーリとの戦いを文字通り丸投げされたことが若干の不安要素ではあるが。

いつの間にかピクシーたちもギリメカラの周りに移動し様子を窺っている。匙や由良も神器を構えて相手の出方を見ていた。

だが、当のギリメカラは周りを警戒する態度を一切見せず、長い鼻を高々と掲げて豪快な欠伸をしている。

周りを舐め切っているのか、それともギリメカラの性格がこうなのか判断し辛い。

『Ｂｏｏｓｔ！』

一回目の倍化が終わり、一誠の能力が二倍に上昇する。

倍になると同時に一誠は走り出していた。主力の一人であるシンが不意打ちで飛ばされた以上、同じく主力である一誠が先陣を切る必要がある。

接近してくる一誠に、ギリメカラはその単眼すら向けない。余裕の現れなのだろうか。

ここまで見せつけられて良い気などしない。目にもの見せてくれるという意気を込めて、ギリメカラの肥えた腹に拳を打ち込む。

拳が触れた瞬間、一誠は突っ込んでいった速度とほぼ同じ速さで弾き飛ばされる。

『なっ！』

一同声を揃えて驚く。ギリメカラは全く動いていないのに、殴った筈の一誠が逆に吹っ飛んでいた。

見事なまでの縦回転をしながら、空中で回転する一誠。地面に後頭部から着地すると再び跳ね上がり、またも脳天から地面に着地。そのまま仰向けになって倒れる。

「兵藤！」

匙の声に反応は無い。一誠は鼻の片穴から鼻血を流して白目を剥いており、意識が飛

んでいた。
開始十秒で主戦力であった一誠が気絶してしまう。
「マジかよ……」
愕然としながらも構えを維持する匙。だが、それだけであり攻められない。由良も同様であった。先程の一誠がされたことを見れば、不用意に攻められなくなる。
「早速かー」
一誠が殴り返された光景を傍観していたアザゼルは小声で呟く。
ギリメカラの持つ能力『物理反射』によってカウンターを喰らった一誠。清々しいまでの飛び具合であった。あれを見て、禁手を制限させていたことは正解であったとアザゼルは思う。禁手状態で物理反射を受けたら、いくら鎧を纏っていても無事では済まない。
当然のことながらアザゼルはギリメカラの物理反射については知っている。知っているが黙っていた。
何事も経験――などという理由では無く、アザゼルなりの手助けのつもりである。
知っている情報を伝えずに何が手助けだと思われるかもしれないが、あの場に於いてギリメカラの情報を伝えるのは訳あって止めていた。
普段はシンの影の中に潜み、惰眠を貪るギリメカラだが、彼は眠っていても周りの状

況を正確に把握出来る。それ故にシンの時の様な不意打ちを仕掛けられた。
そして、ギリメカラと戦う前にこちらがどんな制限を付けて戦うか事前に報せることも出来る。一誠の禁手制限とギリメカラの情報無し。こちらがこの様な制限を設けるので、そちらもそれに合った対応をしてくれ、とアザゼルは密かに伝えていたのだ。
ギリメカラに言うことを聞かせるとなると、彼が決めたハードルをクリアしなければならない。ギリメカラは怠惰であるが話の分からない奴では無い。こちらの戦力を見て、それに対応した力で戦ってくれる。
アザゼルの予想通り、ギリメカラの方はまだ本気では無い。愛用の剣を出さずに素手である。多対一でもこれで十分であると思っている態度であった。
今のギリメカラが納得する様な戦いぶりを見せればギリメカラはシンたちに協力するだろう。
「負けるなよ」
小さな声援を送りながら、アザゼルは傍観を続ける前で動きがあった。
様子を見るメンバーの中で飛び出すものが現れた。
「アオーン！」
ケルベロスである。ギリメカラの背後に居た彼は、後ろからギリメカラの肩に噛み付く。

ギリメカラの皮膚にケルベロスの牙が突き立てられる――突き立てられるが、突き破ることは出来なかった。どんなに力を込めても牙がギリメカラの皮膚で止まってしまう。

噛まれているギリメカラは振り払う動きも見せない。

変化はそれだけでは無い。ケルベロスの胴体にも二つの穴が生じる。ケルベロスの体毛を破り、穴からは血が流れ出始めていた。

一誠の時と同様に、ケルベロスもまた見えない攻撃で反撃を受けている。

自身の傷にも構わずに更に牙に力を込めようとするケルベロス。

「ストップ！　ストップ！」

それに待ったを掛けたのはピクシーたち。ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンは、ギリメカラの眼に目掛けて電撃、冷気、炎を飛ばす。

飛んできたそれらを鼻の一払いで掻き消してしまうギリメカラ。気付くと肩にいたケルベロスが離れていた。

離れた位置でピクシーの魔力によって傷を治癒されている。

のっそりとした動きでそちらへと向かおうとするギリメカラ。だが、足に何かが絡みつくのを感じ、視線を下げる。

何十もの黒い蛇がギリメカラの足に巻き付き、噛みついている。また、一回り太い黒

のラインが右脚に繋がっていた。
黒いラインを辿るとその先には匙。神器『黒い龍脈』を接続させ、ギリメカラの力を吸い取っている。
「行かせねぇぞ！」
匙は啖呵を切って見せるが、内心では冷汗ものであった。ヴリトラが一時的に覚醒したことで変化した黒い龍脈の力をフルに活用し、相手から力を吸収しているのに、底というものが全く感じられない。
大木を縄一本で引っこ抜く。そんな無謀な試みをしている錯覚が見えた。
一誠やケルベロスに見せた謎の反撃に、底知れない体力。それだけで十分過ぎる程の脅威である。
ギリメカラは右脚を振り、匙を自分の方へ引っ張ろうとする。しかし、ラインが伸びるだけで匙にその場から動かない。
すると、ギリメカラは両手を地面に着ける。人の手の形をしていた両手は瞬時に形を変え、象の蹄となる。
変化を終えると共にギリメカラは走り出す。
普通の象が走る速度は、世界最高峰の陸上選手と変わらない。ならば異形の象が生み出す速度は如何ほどのものか。

ギリメカラの両手もとい前足をも使った四足から生み出す速度は、匙との距離を瞬時に詰め寄り、そのまま速度と質量を掛け合わせたシンプルながらも殺傷力の高い体当たりを繰り出す。
当たれば自動車事故などの比では無い衝撃が匙を襲う。
だが、そこに臆することなく割って入る由良。彼女は、ギリメカラに向けて『精霊と栄光の盾』を構える。
直後に空気が揺さぶられ、聞く者が仰け反りそうになる程の音が打ち鳴らされる。
由良が構えた『精霊と栄光の盾』は、実体から光の盾に成っており、その光の盾がギリメカラの体当たりを防いでいた。
『戦車』としての由良の力と盾の性能が、ギリメカラと拮抗する。
「大した、盾だね……！」
ギリメカラの力に対抗しながら渡された盾の性能を褒める由良。事前にアザゼルから渡されたことで、ギリメカラにも通じる性能があると分かっていたが、実際にそれを目撃して『精霊と栄光の盾』の性能の高さを実感する。
しかし、反撃する手立ては無く由良はじわじわと後退させられていく。
「何か、手はないかな？　元士郎……？」
「有るんだったらすぐにやってるさ」

「それは、残念だ……！」
どちらも直接的な攻撃力が無い神器である。このままではいずれ押し負ける。
そう考えていたとき、蛍光色の光弾がギリメカラの側面に直撃。まともに受けたせいで、ギリメカラの巨体が何度も横転しながら跳ねる。
「間薙！」
右手を突き出して構えるシン。不意打ちの借りをギリメカラへと返す。
シンはすぐに周囲を確認する。失神している一誠とピクシーに治癒されているケルベロス。
「何があった？」
手短に状況を確認する。
「兵藤は殴って、ケルベロスは噛みついてああなった」
「何か訳分かんねぇ、見えない力でああなったんだよ」
シンは光弾を命中させたが、何も起きていない。匙の言う見えない力には何か条件がある様子。
「二人は何も受けてないのか？」
「私はこの盾で防いだが特に無かった」
「俺も無い。今もまだ繋がっている」

ギリメカラと繋がってラインを見せる匙。ただ触れることも見えない力が発動する条件では無いらしい。

もう一度一誠とケルベロスの様子を見る。ケルベロスの方は殆ど治りかけている。一誠の方も気絶しているが、この戦いの間には意識を回復させるだろうとシンは予測する。ずっと気絶している程軟弱では無いことを知っている。

横たわっていたギリメカラが体を獣型から人型にしながら体を起こす。光弾が命中した箇所を指先で掻く。つまりはその程度のダメージであるらしい。

ギリメカラの足には相変わらず匙の放った蛇たちが噛みつき、少しずつだがギリメカラから体力を奪っていく。

匙の右手の本体とは繋がっていないが、蛇たちが吸収した力はワイヤレスで匙へと流れていく。巻き付くラインと同様に実体が無い為、聖なる力で切り裂くか禁手並みの出力で吹き飛ばすしか解除する術は無い。

すると、ギリメカラが鼻から勢いよく空気を吸い込む。そして、息を止めたかと思えば体からどす黒い煙が立ち昇り始めた。

ギリメカラの体に生じた異変。体から昇る煙の正体について気付いたのは、匙とケルベロスであった。

「うっ！」

「サガレ！」
　匙は軽く呻き、何故か神器を解除する。ケルベロスはピクシーたちにギリメカラから離れる様に声を飛ばす。
「ドクダ！」
　ケルベロスの嗅覚が、ギリメカラから生じる煙が毒であることを察知する。
「元士郎！」
　膝を突いた匙に由良が声を掛けるが、匙は手を上げ意識があることを示す。
「だ、大丈夫……少し吸っただけだ」
　匙もまたラインを通じて少量だが無理矢理毒を吸わされてしまっていた。風邪を引いたときの様な熱感、倦怠感、筋肉の痛みが匙を蝕む。
　異変に気付いて反射的に神器を解除したおかげで軽く済んだが、ギリメカラに付いていた蛇たちは全て消えた。
　シンは、ギリメカラに二度ほど助けられたことがあるが、戦う姿を見たことは殆ど無い。せいぜいヴァーリに強襲を仕掛けた時ぐらいである。
　対峙することでよく分かったが、ギリメカラという存在はシンの想像を上回る程の実力者であった。
（考えが甘かったか？）

自分の選択に後悔は無いが、認識不足であったことは認める。その結果負傷者が出た。

誘ったのは紛れも無くシンである。誰が何と言おうとその責任はシンのもの。

だからこそ、シンは前に出る。

誰かが血を流したら、自らはその倍の量の血を流せ。誰かが傷を負ったら、自らその倍の深い傷を負え。

戦いの中で果たせる責任などその程度ぐらいである。

シンは走る。拳を握って。

ギリメカラの眼にシンが映り、ギリメカラもまた見せつける様にシンの頭よりも大きな拳を握った。

あと数歩進めばシンの拳の間合いに入る。巨体のギリメカラの方がシンの間合いよりも広いので先に仕掛けてくるのは間違い。

一歩踏み込み息を吸う。二歩目を踏み出したとき、シンの口から冷気が吐き出された。

氷の息はギリメカラの眼を狙い、瞬時に凍結させる。

視界を奪われたギリメカラ。その懐に入り、シンは腹部のど真ん中に拳を打ち込む。

拳から伝わる手応えの無さ。そして、間髪入れずに見えない衝撃がシンの腹部に打ち

込まれる。

（なる、ほど）

背中まで突き抜けていく衝撃。防御の為に力を半分回し、残りの半分程度の力で殴ったが、防御を意識していてもかなり苦しい。

氷の息は吐いても大丈夫。神器も接触するだけなら大丈夫。ただ、直接殴ると見えない反撃が来る。打ち込んだ力が反射してくるのか、一定の力で返ってくるのかは判断出来ない。

シンが息を詰まらせている内に、ギリメカラの眼から氷が？がれ落ち、シンをしっかりと捉えて振り上げていた拳を下ろそうとする。

しかし、その拳は下ろされず。背後に向けて振るわれた。バチッという音と共に青白い火花が爆ぜる。ピクシーの電撃による援護をギリメカラは素手で散らす。

電撃を放ったピクシーに何も異変は無い。先程と今ので確信した。ギリメカラは魔力による攻撃は跳ね返すことは出来ない。

得た情報は、すぐにピクシーたちに念話で伝える。伝わったことの証として、ピクシーたちは一斉に魔力による攻撃を始めた。

ケルベロスとジャックランタンは火を吐き、ギリメカラを火達磨にする。ギリメカラが燃えている内にシンは離れる。すると、ギリメカラは鼻で自身に纏わりつく火を吸い

込み、口から煙として吐き出す。一服でもしているかの様であった。
火が消えた直後にピクシー、ジャックフロストは電撃と冷気を飛ばす。電撃は肩に、冷気は耳に直撃する。
魔力が当たった直後のギリメカラは体を軽く振る。が、それだけ。痛がる様子は無い。反射能力に加えて体も頑丈であるらしい。
（どうするか）
打撃が封じられた以上、魔力を主体とした攻撃をするしかない。どちらかというと直接殴るのが主な戦い方のシンとしては、少々戦い辛くなる。
一誠も同じく直接打撃がメインだが、限界まで能力を高めて魔力を放てば必殺の一撃となる。だが、その肝心の一誠はまだ白目を剥いている。時折呻いているので目覚めは近いかもしれないが、悠長にそれを待っている暇は無い。
ギリメカラの姿勢がやや前傾となる。走り出す前兆であった。
効くかどうか判断するよりも早くシンの体は動く。右手に魔力剣を作り出し、ギリメカラへと振るった。
解き放たれた魔力の乱気流がギリメカラを引き裂く為に呑み込む。だが、ギリメカラはその中で真っ直ぐに立っていた。根を張り巡らせた大樹の様に微動だにせず、シンが得意とする魔力波もギリメカラという大木の前では微風に等しい模様。

ギリメカラは鳴き声を上げる。豪風の中でも掻き消されない大音量。わざわざ自分の方から攻撃すると教えてくれた。

鳴き声の後、ギリメカラが攻勢に出る。することは至って単純。その巨体を生かしての突進であった。

佇む姿は大樹。走る姿は重戦車そのもの。巨体が生み出す力と重さは魔力波など関係なく突き進み、その頑丈な体は鎧そのもの。

だが、力と重量と速度にその頑丈な肉体が組み合わされればそれだけで脅威であり、暴力であり、蹂躙となる。

小細工やその場しのぎなどでは止めることが出来ない巨躯が、シンを砕かん為に迫る。

目の前に向かっているそれを見ただけで、今持つ手札では止めることが出来ないとシンは悟る。

襲来するギリメカラ。ただでさえ大きな体が、全身から放つ重圧と殺気によって更に大きく見える。並の精神ならばとうに呑み込まれて避ける思考すら出来ず、ギリメカラによって四散させられることだろう。

シンは動かずギリギリまでギリメカラを引き付ける。少しでも早く動けばすぐにギリメカラは軌道を変え、体勢が崩れたシンを追撃するだろう。それをさせない為にも可

能な限り距離を詰めさせる。
接近する分だけギリメカラのプレッシャーが強まる。距離は三メートルを切る。残り二、残り一。ギリメカラの象牙がシンに触れそうになる刹那、シンはプレッシャー跳ね除けて横に飛び退く。
見ていた者たちが、一瞬シンが串刺しにされた幻影が見える程の紙一重の回避であった。
地面の上で前転し、すぐに立ち上がるシン。彼の想像では通過していくギリメカラの後ろ姿か、急停止して方向転換する姿が描かれていた。
だが、立ち上がったシンは言葉を失う。そこに居る筈のギリメカラの姿が無い。
何処に行ったのか瞬時に視線を動かすシン。時間にすれば一秒にも満たない。
見渡される周囲の光景。その中で気になるものを捉えた。
匙、由良、ピクシーたち。全員の視線が斜め上を向き、呆けた表情となっている。
シンもまた頭上に目線を向ける。ギリメカラが大の字に体を広げて落下してくる。
あの状況からすぐさま真上に跳躍したギリメカラ。鈍重そうな見た目に反して身軽な動きである。
シンは急いで前方に跳び込む。ギリメカラの巨体が地面に叩き付けられた。間一髪の所で回避してみせたが、そこから思わぬことが起きる。

ギリメカラのボディプレスによって地面が割れ、細かい破片が巻き上がる。
細かく砕けた床が噴煙となってギリメカラの姿を隠す。途端、噴煙を突き破って大小異なる石片が飛んできた。
高速で飛来するそれを咄嗟に避けることが出来ない。ならばと石片に対して半身となる。当たる面積を最小限にし、致命傷になりかねない石片は目を使い避ける。
砕けた石片は、シンの制服を掠り、または頬にも掠っていく。触れた部分は裂けるが小さな傷など構う必要は無い。大きな石片だけ避ければいい。
やがて全ての石片が通り過ぎていく。かに思われたとき、極小さな石片の一部が運悪くシンの眼の中へと入った。
目に鋭い痛みと異物感を覚え、反射的に片目を閉じてしまう。
それがいけなかった。ギリメカラは大の字に体を広げたまま鼻を伸ばし、振る。
太いそれから風切り音を出しながら鞭の様にシンを襲う。体の一部が裂けるなどでは済まない。骨が粉砕される程の威力を秘めている。しかも、それをシンが閉じている目の死角から狙うという徹底した容赦の無さを見せた。
シンの耳にもその音が入ってくるが、視界が欠けているせいで反応が鈍る。
不味い、と思ったとき肩に何かが触れる感触があった。ギリメカラの鼻では無い。柔らかく温かな感触。

鼓膜の中を突き抜けていく音。シンは首ごと動かして欠けた視界を補う。隣には肩を揃えてならぶ由良が『精霊と栄光の盾』でギリメカラの攻撃を防いでいた。
「ギリギリ、だったな……！」
歯を食い縛りながらもギリメカラの力に耐える由良。ギリメカラはそのまま鼻を振り抜こうとする。
『パオッ』
盾が火を噴き上げ、接していたギリメカラの鼻を焼く。精霊の力を宿すことが出来ることは聞いていた。この火こそが宿っている精霊の力なのだろう。アザゼルの準備に感謝する。
鼻を焼かれたギリメカラは、火を嫌がって鼻を離し、鼻先を器用に曲げて火傷した部分に鼻息を吹きかける。
火傷に気を取られているギリメカラに白い塊が当たる。命中した部分は凍っていた。
ギリメカラの周囲を駆けるケルベロス。その背にはジャックフロストが乗っている。
「ヒホ！　ヒホ！　ヒホ！」
「アオーン！」
ジャックフロストが指先を向けると、その先端から冷気の塊が発射され、ギリメカラへ飛んでいく。

ケルベロスの機動力を生かして周囲から狙い、ギリメカラを攪乱する。
ギリメカラの注意がジャックフロストたちに逸れている内に、シンたちはギリメカラから離れた。
「助かった」
「礼ならアザゼル先生に言ってくれ。これが無ければとっくにリタイヤしていた」
『精霊と栄光の盾』を掲げる由良。
「お前に助けられたことには変わりない」
「真面目だな、君は」
短く言葉を交わしながらギリメカラの様子から目を離さないシンたち。
四方から冷気を浴びせられながらも、それを鬱陶しい程度にしか感じておらず、面倒くさそうに冷気を鼻で打ち消していた。
「こっちこっち！」
ピクシーがギリメカラへ見せつける様に指先を向ける。再び電撃でも放つのだろうと特に構えることはしなかった。
ギリメカラの考えていた通りピクシーの指先から電撃が放たれる。ただし、一条の青白い光が走るのでなく何条もの、それも朱乃が放つ最大出力の雷光に近い雷撃がギリメカラを貫いた。

『パオ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛オ゛ッ！』

高出力の雷を浴びせられ、ギリメカラは閃光の中で激しく痙攣する。

ピクシーがこれ程までの力を放てることなど知らない。というよりも一人で放てられる筈が無い。

ならば考えられることは一つ。シンは視線を別方向へ向けた。そこには上体を起こして顔を擦っている一誠。いつの間にか意識を取り戻しており、ギリメカラに気付かれない内にピクシーに『赤龍帝の贈り物』によって力を譲渡し、電撃を何十倍にまで引き上げていたのだ。

余裕ぶっていたギリメカラに、先にやられた一誠が痺れる一撃を返す。

一誠が活躍すれば、それを黙っていない者が居る。匙である。

彼もまた一誠が何をしたのか理解し、毒ガスに不調になった体を気合いで動かす。

『黒い龍脈』を構え、そこから何十もの黒蛇を解き放った。

「うーん。爽快」

ギリメカラに極大の雷撃を撃ち終えたピクシーが満足そうな声を上げる。

電撃を長時間浴びせられていたギリメカラの体からは煙が上がっていたが、すぐに活動し始める。

『パオ……』

やってくれたな、と鳴き声に怒りを滲ませるギリメカラ。

「油断したのはそっちじゃーん」

べーと舌を出して挑発する。ときたま蛮勇、無謀としか言えない行為を考え無しに出来るピクシーに危うさと頼もしさの両方を覚える。

しかし、ギリメカラの方はピクシーの安い挑発に怒り狂う訳でも無く、真の原因である一誠を半眼で睨む。

「やられっぱなしな訳ないだろうが」

好戦的な笑みを見せる一誠。

『パオ。パオオオオオオオ』

そんな一誠を侮っていたと素直に認めるギリメカラ。ただし――

『お前のことを×で××な×の××な奴だと思っていたが――やるな』

聞くに堪えないとても卑猥で下品な言葉を並べた後の称賛であった。ほぼ侮辱と言っていい。

「そこまで言うことはねぇだろう！」

今まで色々と言われてきた一誠ですら激怒する程であり、由良は赤面して言葉を失っている。

「この野郎ぉぉぉ！　ぶっ飛ばしてやる！」

『落ち着け。普通に殴ったらさっきの二の舞、いや、倍化が進んでいる分もっと酷いことになるぞ』

興奮する一誠をドライグが宥める。気絶中にあったことはドライグから一誠へと伝えられている。物理攻撃が通じないギリメカラに猪の様に突撃することは無い。

「ふー！　ふー！」

尤も、本人は猪並みに猛っているが。

ギリメカラはシンたちを威圧する様に両手を上げる。昆虫、動物などが体を大きく見せる為の威嚇の様であった。単純な方法でだが効果はある。実際に、シンたちはギリメカラのその動きだけで体が自然に緊張する。

（やる気になってきたか）

ギリメカラの様子を見ていたアザゼル。一誠の魔力を譲渡されたピクシーの電撃はかなり効いたらしい。

ここから先は更に厳しくなるかもしれないが、一誠たちの動きを見る限りは勝算を感じていた。

（どう攻める？）

一誠たちに期待するアザゼル。

ギリメカラは、何を思ったのか単眼を閉じた。自分から視界を閉ざす行為に、シンた

ちは強く警戒する。
ギリメカラの眼が開かれたとき、シンらはその眼に光を見た。少なくともそう錯覚する程であった。
眼光鋭くなどという言葉があるが、これはその比では無い。
威嚇の極致と言うべきか、眼から発せられる圧力が本能を貫いていき、見た者の体を無理矢理硬直させる。
蛇に睨まれた蛙。捕食者と被捕食者。人では真似することも到達することも出来ないまさに獣の眼光。
体の硬直は、シンたちの動きを一手遅らせる。その一手の遅れはこの戦いの中で致命的と言えた。
『パオッ』
シンたちが動き出す前にギリメカラが動く。拳を構え、跳躍。巨体に似合わない身軽さを以てシンの方へ。
振り下ろす拳に自身の体重を乗せ、大地すら容易く割れる程の威力を秘めたそれがシンを狙う。
避けられるタイミングでは無い。だからといって受け止め切れる威力では無い。
完全な袋小路。絶体絶命。

「盾よっ！」

――シン一人だったらの場合だが。隣に並ぶ由良の存在が、それを覆す。

二人を守護する様に展開される光の盾。光にギリメカラの拳が打ち込まれる。物理的な攻撃によって盾の光が波打つ。

『精霊と栄光の盾』が稼いでくれた僅かの間、その間があれば硬直は解け、全力の一撃を放つことが出来る。

シンは全身を投げ出す様に内側から光の盾越しにギリメカラの拳に自分の拳を打ち込んだ。

盾に触れていたギリメカラの腕が、シンの拳で跳ね上がった。反射は無い。『精霊と栄光の盾』越しに殴った影響からか。

それを見た由良は、即座に行動に移っていた。ギリメカラの防御の甘くなった胴体に『精霊と栄光の盾』によるシールドバッシュ。

自動車程度なら素手で殴り飛ばせる『戦車』による一撃。ギリメカラもまた吹っ飛ばされる――ことなくその場で受け止め切った。盾が火の精霊の力で燃え上がるが、ギリメカラはそれすら耐え、脱力することは無い。

しかし、由良に焦りは無かった。例えこの一撃を受け止められても次があることが分かっているからだ。

由良の期待に応える様に、シンは燃え盛る盾の内側に両掌を押し当てた。
精霊の火すら呑み込んでしまいそうな炎がシンの両掌から発し、それが合わせられて熱線の様に放たれる。
押し当てられた盾越しに放たれたそれは、ギリメカラの腹部を焼くと同時に灼熱の奔流によってギリメカラを押し流す。
踏ん張る筈の足元から両足が離れ、炎で飛ばされていくギリメカラだったが、離れれば離れる程に炎の勢いは弱まり、ギリメカラも止まる。
『パオ……』
燃えている腹を手で叩いて鎮火させるギリメカラ。高熱を浴びせられても焼き尽くされることの無い頑丈過ぎる皮膚。だが、焦げ目だけはしっかりと付いていた。
ギリメカラが見せる僅かな隙。それを見逃す筈が無い。
地を這う大量の黒蛇が、ギリメカラを襲う。ある蛇は足に巻き付き、ある蛇は這い上がって腕に噛み付く。
だが、どんなに大量に纏わりつこうと『黒い龍脈』の蛇ではギリメカラの力を短時間で吸収し切ることなど出来ないし、すぐにでも振り解ける。
「――なんてこと考えているよな？」
ギリメカラが考えていることを把握し、挑発の言葉を添える匙。その隣にはいつの間

にかジャックランタンがフヨフヨと浮いている。
ふと、ギリメカラは気付く。黒蛇たちの姿に違和感があった。ギリメカラの記憶では蛇らしく細長い胴体をしている筈だが、今は胴体だけが記憶よりも倍近い太さになっている。まるで何かを呑み込んだ様に。
それ認識した途端、黒蛇たちの胴体が一斉に膨れ上がる。倍どころか三倍、四倍と膨らみ続け、やがて限界に達し始めたのか膨らむ胴体が裂け始め、そこから橙色の光が洩れ出るのが見えた時――
「ぼ～ん」
――ジャックランタンの言葉を合図に黒蛇の一匹が爆発。それに連鎖して他の黒蛇たちも爆発する。
匙と黒蛇たちは見えない線で繋がっている。黒蛇たちが吸収すれば匙に流れ込むが、逆に匙の方から魔力を流し込むことも可能なのである。
事前にジャックランタンの炎を吸収させていた黒蛇たちに匙は取り込んでいた魔力を一気に注ぎ込む。魔力はジャックランタンの炎を激しく燃やす燃料となり、ギリメカラを爆炎で包み込む。
全身を燃やす炎。だが、ギリメカラはその炎の中でも膝を突くことはせず、手足や鼻を使って纏わりつく炎を消そうとしていた。

『パオッ』

それでは追いつかないと思ったのか、内側から発する魔力より全身の炎を吹き飛ばすギリメカラ。

そこへ飛び込む赤い影――一誠である。炎に気を取られていたせいで接近を許してしまった。

一誠は、ありったけの魔力を左手に込める。『赤龍帝の籠手』が魔力で赤く輝いていた。

その輝く左拳を、焼け焦げたギリメカラの腹に叩き込む。

反射は無かった。拳は直接触れず、纏っている魔力の方が接触しているので。

左拳からそのままドラゴンショットが放たれる。赤色の魔力球体が、ギリメカラを吹き飛ばす――直前。

鈍い音と共にギリメカラの大きな拳が一誠の顔面に打ち込まれていた。ただではやられないギリメカラの執念。

ドラゴンショットでギリメカラが吹き飛ぶのと、一誠が殴り飛ばされるタイミングはほぼ同じであった。

ドラゴンショットの腹部に受けながらギリメカラがトレーニングルームの端まで飛ばされ、一誠は宙で何十回転しながら地面に着地する。

「大丈夫か？」
地面に横たわる一誠にシンが声を掛けたが返事が無い。また白目を剥いて気絶していた。
そして、ギリメカラの方を見る。ギリメカラはトレーニングの隅の方で大の字に寝ていた。
「おーい。まだやるかー」
アザゼルが遠くにいるギリメカラに確認する。ギリメカラは鼻だけ伸ばして左右に振った後、一声出した。
『パオ……』
『疲れたから、もういい』、という実質ギブアップをする。
「お前らの勝ちみたいだ。おめでとう」
アザゼルのその言葉によって、この戦いの幕が下りる。

◇

「――ということがあったんです」
言い終えると同時に空の皿の上にレンゲが置かれ、カチンという涼やかな音が鳴る。

「どうりであれだけ傷だらけだったのね」
「皆さん、私の為に……！」
　アーシアは感動した様に瞳を潤ませる。
「……私は聞いていませんが。サジ？」
「そ、そ、そ、それは、べ、別に会長のお耳に入れる様な話じゃなかったというか、言いそびれてしまったというか、その……」
　ソーナに横目で睨まれ、顔を青くさせながらダラダラと冷や汗を流す匙。
「水臭いな。私も誘えば良かったものを」
　声を掛けられ無かったゼノヴィアは、不満気に言う。
「そうだ。まだ、間薙さんからギリメカラさんを預かったままでした。ちゃんと――」
「当分の間は、アーシアに預けておく」
「ええ！　いいんですか？」
　シンの言葉に、アーシアは申し訳なさそうな顔をする。ギリメカラの強さはアーシアも見たので知っている。それだけ強い力を預けられることに畏れ多いと思ってしまう。
「今の仲魔でも充分だ。ギリメカラは俺にはまだ手に余る。アーシアの方が上手く付き合えると思う。聞いた話だと相性も良さそうだ」
　物理反射に脅威的な耐久。そこにアーシアの治癒の神器が合わされば並大抵では突

破されない。

「で、でも、ギリメカラさん本人はいいんですか？」

アーシアは自分の影の中にいるギリメカラに尋ねる。返事は何も無かった。

「何も無いってことはいいってことじゃないのか？」

「そう、なんでしょうか……？」

勝手に話を進めている様で、アーシアは気が引けているがシンもギリメカラも特に気にする態度は見せなかった。

「――分かりました。ギリメカラさん、今後ともよろしくお願いいたします！」

自分の影に向かって律義に頭を下げるアーシア。すると、アーシアの影の中で単眼が現れ、二度ほど瞬きをする。そして、また影の中に消えてしまった。

ギリメカラなりの挨拶の返しだったのかもしれない。

「さて、食べ終えたことだし――」

リアスの言う通り、テーブルの上には空の皿が大量に並んでいた。ソーナたちのテーブルの上も同様である。

その様子を見ていた店長はやっと終わったと一息吐く。大量に注文をしてくれるのはいいが、大量過ぎるのも考えものである。おかげで一秒たりとも休めずに料理を作ることになった。

「――次は何を頼む？」

メニュー表を広げて再びあれこれと話し出すリアスたちを見て、店長の顔色が変わる。

そんな店長を尻目に、アザゼルは心の中で『ご愁傷』と思いながら注がれたビールに口を付けるのであった。

放課後のラグナロク編

鑑賞、襲撃

降り注ぐ白い雪。冷たく、淡く風によって漂うそれが地面に溶けることなく残っていく。大地に積もる雪の上で横たわる黒髪の女性。

その身から流れ出る血が白い雪を赤く染め、翼の様に広がっていた。

女にはまだ息があった。だが、虚ろな眼差し、雪が降り注ぐ中でも白く染まらない呼気が、女の命が長くないことを示している。

息絶えようとしている女の側に、何かが近寄って来る。不思議なことに、積もる雪の上を歩いている筈なのに足音が聞こえない。

霞んでいく目で女は見た。そこには人の形をした死が女を見下ろしている。

「貴方は……死神……？」

女の目にはそれが死に行く自分を迎えに来た死神に映った。

「くっ、死神か――かもしれないな」

女の問いに死神と呼ばれた存在は小さく笑い、自らの正体をはっきりとさせない曖昧な返しをする。死に掛けた女を前にしても、その声に憐憫の感情は無かった。

「あの子は……朱乃は……無事です、か……？」
終わる自分の命よりも、かけがえのない娘の安否に残された時間を費やす。
「朱乃？　貴女の娘か？　安心するといい。生きている。気絶はしているがな」
女から少し離れた場所に、木に背中を預けて意識を失っている少女が居た。衣服や顔に血が付着しているが、少女のものではない。母の返り血を浴びたことでショックを受けて気絶していた。
娘が無事だと分かり、強張っていた女の顔が安堵で僅かに緩む。
「これも何かの縁だ。最期に言い残すことはあるかね？」
女の死が確定であるとし、遺言を尋ねる死神。それを慈悲と取るか無慈悲と取るか人によるだろう。
「あの人に……伝えて、くれますか……？」
「聞くだけならば」
あくまでも遺言を受け取るだけ。そこから先は死神の気紛れという確実性の無いもの。それでも女は言葉を残す。最愛の人に向けて。
「――――――」
言葉は短いもの。だが、それを残す女の言葉にしきれない思いが一字ごとに込められていた。

死に行く女が最愛を込め、残された命を削りながら語る言葉を死神は聞き入る。その胸中に万感の思いが駆け抜けていく。

女は最期の言葉を紡ぎ出した後、事切れた。

「しかと聞かせてもらったセニョーラ。戦士の最期の断末魔よりも、敗者の遠吠えよりも至高の響きであった」

薄っすらと開いた目を閉じ、死体となった女を焼き付ける様に見る。尤も、その伽藍洞な目に何かが映るということは無かったが。

◇

ここの所、シンの周りは比較的平和だと言って良かった。

兵藤家の広い地下室。オカルト研究部全員で、最近冥界で大人気の特撮番組を見るぐらいには平和であった。

『ははははは！　乳龍帝！　この場所が貴様の墓場だ！』

『この乳龍帝が貴様ら闇の軍団に負ける日など来ない！　いくぞ！　禁手化！』

特撮の知識があれば既視感を覚える怪人に啖呵を切って一誠と瓜二つのヒーローが、『赤龍帝の鎧』瓜二つの姿に変身する。

変身したヒーローは戦闘員たちを蹴散らした後、怪人と一対一の戦いが始まる。始めは押していたが、怪人側が新兵器を持ち出すと攻守が入れ替わり、ヒーローが防戦一方となる。

『おっぱいドラゴン！　来たわよ！』

そこに助けに現れるヒロイン。こちらはリアスにそっくりであった。『スイッチ姫』とヒーローが名前を叫ぶ。

何故にスイッチ、という疑問が浮かぶがその答えはすぐに画面が示してくれた。

ヒーローがヒロインの胸を触ると途端に全身を赤く輝かせて怪人に逆転勝利。色々と斬新過ぎる逆転劇に皆が言葉を失う。

「説明しよう！　おっぱいドラゴンはピンチに陥ったとき、スイッチ姫の乳を触ることで無敵のおっぱいドラゴンになるのだ！」

まるで特撮番組のナレーションの様にハキハキとした声で解説するアザゼル。

無敵のおっぱいドラゴンになるところに既視感を覚えたが、アザゼルの説明で一誠が初めて自力で禁手に至ったときのことを思い出す。

元となっているのは完全にあの時のことであった。

ノリノリで解説をしたアザゼルの頭を、羞恥で顔を真っ赤に染めたリアスが叩く。

「グレイフィアから聞いたわよ……！　スイッチ姫の案と監修は貴方なのよね……？

お、おかげで私がこ、こんな……！」
「ガキ共の間じゃ、イッセーもお前も人気が鰻登りらしいじゃねえか。元々人気はあったがこの番組のおかげで幅広く支持を得られているみたいだぞ？　リアス”スイッチ”グレモリー」
「勝手にミドルネームにしないでちょうだい！」
　どんな顔をして冥界を歩けばいいの、と天を仰ぎながら溜息を吐くリアス。衆目を集めることには慣れていても、今回の様な特殊な集め方は不慣れである様子。
「何か凄いことになったな、ドライグ」
『ああ、本当にな……ククククク、お前といると飽きる日が来ないな、本当に。詰め込み過ぎて少し眩暈がする』
　ドライグの暗い笑い声が一誠の脳内に響く。
「ヒホー　面白かったホー」
　エンディング曲が流れている場面を見ながらジャックフロストが拍手を送る。
「これって何回ぐらいやるの？」
　ピクシーも気に入ったらしく放送回数を尋ねる。
「視聴率五十パーセント越えらしいからな。まず間違いなく一年間はやるな」
『フフフ、ククク……最低一年間俺たちは乳龍帝というわけか。少し前までは涙が止ま

らなかったが、今はそんなことないな……慣れてきたのか？　受け入れてきたのか？
まあ、どうでもいいか……』
　ドライグはかなり投げやりになっていた。しかし、どうでもいいと言う割に、一誠にはドライグのネガティブな感情がこれでもかと伝わってくる。
「へえ。一年！　楽しみ」
「人気作だからな。きっと放送は延長されるだろうぜ。悪魔は寿命が長いからな十年、二十年は続くかもな。下手すりゃ百年愛される作品になったりな」
　アザゼルの容赦の無い言葉が、既に傷だらけのドライグの心に突き刺さる。だが、ドライグは無心を貫き通す。
『意識したら傷付く、心を無にしていれば傷付かない。無心、無心。無心無心無心無心』
　相方の精一杯の心の防衛に涙が出そうになる一誠。
　黙って見ていたシンが何気無く呟く。
「百年後に『赤龍帝』の名前が残っていたらいいな」
　その時、一誠はドライグと意識が繋がり、脳内にドライグが慄く最悪の未来予想図が映し出された。
『あ、乳龍帝だ！』
『乳龍帝！　あの戦いは見事でした！』

『流石乳龍帝！　おっぱいドラゴンの名は伊達じゃありませんね！』
『乳龍帝！　乳龍帝！』
『え？　赤、龍帝？』
『何それ？　聞いたことある？』
『全然？　乳龍帝のパクリ？』
『おい！　乳龍帝のことを赤龍帝って言うなよ！　失礼だろうが！』
『赤龍帝？　そんなものは存在しない』
　赤龍帝の名が払拭され、乳龍帝の名に置き換わった生々しくも起こり得るかもしれないいつかの光景。
『ああああああああああああああああああ！』
　無心に徹する筈であったドライグが堪らず絶叫を上げる。
　脳内で伝説のドラゴンが大音量で絶叫するので、一誠の方も頭を抱えてしまう。
「落ち着け！　落ち着いてくれ！　ドライグ！」
『ああああああああ！　ああああ！　ああああああああああああ！』
「頭がー！　頭が破裂するー！」
「どうしたのイッセー！　急に！」
「だ、大丈夫ですか！　イッセーさん！」

ちょっとした騒ぎになり上映会は少しだけ中断。一誠と中のドライグが落ち着きを取り戻した後に、再び上映会が始まる。

今度はおっぱいドラゴンでは無い。セラフォルーの番組である『マジカル☆レヴィアたん』。それに準レギュラーとして出たピクシーたちを視聴する。

前に聞いた話ではセラフォルーが悪魔の味方として、敵対する天使、堕天使、ドラゴン、教会関係者とバトルを繰り広げる特撮番組だという。

番組に参加したピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン、ケルベロスは、彼女が召喚で呼び出すお友達兼助っ人というポジションであった。

内容は至ってシンプル。悪さをする敵をセラフォルーが懲らしめるもの。小さい子には分かり易く、そして、大人が見ると作品内に散りばめられた毒に気付く。

セラフォルーが画面の向こうで、ステッキの先端から人など容易く消滅出来そうな極大のビームを放っている。

撮影に参加したピクシーたち曰くＣＧ無しで本当にステッキからビームを出しているらしい。ビームを撃った後に射線状の物が一切消滅していたのは流石にＣＧであって欲しいが。

余談だが、シンはピクシーたちの撮影などには一切関与していない。関与しない理由としては何か嫌な予感がするという曖昧なものであった。自分もなし崩し的に参加さ

せられる様な気がするのである。
撮影場所に行く為にセラフォルーから転送用の簡易魔法陣を渡されており、ピクシーたちはそれを使用している。
話が進むと高笑いする天使と対峙するセラフォルーの場面となる。如何にも悪役だと言わんばかりの笑い方と顔付き。
「天使はあんな笑い方はしないわ！」
転生天使であるイリナが、悪役天使に憤慨していた。周りはフィクションだからと宥める。
そんな悪役天使が部下を召喚する。戦闘員風にアレンジされた神父服を着た教会関係者たちが、やたら目を見開いたり、舌を垂らしたりなどして悪人アピールをしている。
「教会に属する者であんな顔をした奴は居ない！」
今度は元教会関係者であるゼノヴィアが憤慨する。正直、戦闘員風の教会関係者を見た時に全員がフリードを連想したが、敢えて言わずにゼノヴィアを宥める。
『出て来て！　私のお友達！』
普段よりも凛々しい口調のセラフォルーによって魔法陣が地面に描かれ、中からピクシーが召喚される。
「あ、出た出た！」

自分の姿が画面に映り、喜ぶピクシー。衣装など無くいつもと同じ格好をしていた。
魔法陣から出たピクシーは、セラフォルーの周囲を飛び回った後にステッキの上に座る。
『助けに来たよー』
いつも通りに喋るピクシー。初めての演技にしては自然体であった。或いは、演技ではなく素の状態で喋っているのかもしれない。
『やるわよ！　ピクシーちゃん！』
『はーい』
ピクシーが教会関係者たちの頭上を指差し、同じくセラフォルーもステッキを向ける。
『えい！』
ピクシーの指先から放たれた電撃。それを狙う様にしてセラフォルーのステッキから魔力が放出される。
結果、ピクシーの電撃にセラフォルーの魔力が合わさり、雷の雨と表現していい無数の落雷が発生し、教会関係者たちへ降り注ぐ。
阿鼻叫喚となる画面向こうの教会関係者たち。上がっている悲鳴が演技であって欲しいと願う。

『やったね！　ピクシーちゃん！』
合体技で敵を一掃したセラフォルーが眩い笑みを見せる一方で、その背後で死屍累々という様子で横たわる黒焦げの教会関係者たち。酷い絵面の差であった。これもまたCGであって欲しい。
戦闘員が居なくなり、天使との対決になるが、セラフォルーがまたも魔法陣から仲間を喚ぶ。
『来て！　私のお友達！』
『ヒーホー！』
喚び出されたのはジャックフロストであった。
『来たわね！　ジャックちゃん！』
『来たホ！』
セラフォルーに手を振るジャックフロスト。
そこから天使とセラフォルーたちの戦いが始める。ビームに光の槍、氷柱に吹雪に雷、電撃と騒々しく、派手な戦闘が繰り広げられる
やがて、セラフォルーたちが押し始め、天使の顔面をステッキでフルスイングしたことで天使は吹き飛び、大きな隙が生まれる。
『いくよ！　ジャックちゃん！』

『ヒホ！』
　またもやセラフォルーとの合体技。ジャックフロストの頭上に置かれたステッキを、ジャックフロストが両手で挟む。
　ステッキの先端から青白い光が発せられると、天使の上に巨大な氷塊が出現し、天使を押し潰す。
『こうして悪い天使は、マジカル☆レヴィアたんとそのお友達によって倒されました。今後もマジカル☆レヴィアたんの新しいお友達を楽しみしていてね』
　勝利を喜ぶセラフォルーたちを背景にしてナレーションが流れた後、エンディングへと入っていく。
「あれ！　ランタン君が出てない！　ど、どういうこと?」
「ヒ～ホ～。ボクの出番はあと二話後だよ～」
「ボク、絶対予約するよ！」
「ボクとレヴィアたんが協力して湖を干上がらせるシ～ンは圧巻だよ～」
　ジャックランタンとケルベロスの出番は無かったが、数話後に参加すると言う。既に撮影は終えていた。
「元々ガキ共に人気だったが、二人の登場で人気も鰻登りらしい。グッズ化の話まで出ているらしいぜ」

「でも、いいの？　ピクシーもジャックフロストも稀少な存在なのよ？」
「あんだけ堂々と出ているせいでこの二人、ＣＧ疑惑が出ているんだよなぁ。制作側も二人に配慮して、そこの所はハッキリとさせていないみたいだ」
　一応は、変なトラブルが起きない様に対処されていた。撮影を依頼した側としての責任からくるものと思えた。
「まあ、なにはともあれどっちも作品として成功しているのは良いことじゃねえか」
　鑑賞作品が全て見終わり、このままお開きになるかと思われたとき――
「そう言えば、そろそろ私との約束を果てしてもいいと思いませんか？」
「約束？」
「デートの約束ですわ」
　――朱乃の出した一言で和やかであった地下大広間が極寒と化す。
　アーシアは分かり易く不機嫌そうになり、リアスは一見すると無表情だが目元をひくつかせ、小猫は無言のまま一誠の方へ鋭い視線を向け、ゼノヴィアは仏頂面となり、イリナは背中の羽を白黒と点滅させ、独占欲や嫉妬による堕天への葛藤を表していた。
「ディオドラ・アスタロトとの戦いでイッセー君とちゃんと約束しましたわ」
「――確かにしましたね。ああ、でも……」
「もしかして……あの時の約束は嘘だったの……？」

笑みを一瞬にして悲しみに満ちた表情へ変える朱乃。その潤んだ瞳に一誠は容易く屈する。
「う、嘘じゃないです！　しましょう！　デートを！」
『あーあ、言っちまったよ』とアザゼルが小声で呟くのをシンの耳が捉えていた。
「嬉しい！　じゃあ、今度の休日にデートね！」
心の底から喜ぶ朱乃。それ以外の女性陣の雰囲気は絶対零度のものとなっている。
「ひ、ひぃぃぃぃぃ！」
ギャスパーはその雰囲気に怯えてジャックランタンにしがみつく。
「何かトラブル起きそうだな。なあ？　最後まで無事にデート出来ると思うか？」
「俺なら出来ない方に賭けます」
「そっか。なら俺は出来るの方で。負けた方が勝った方に飯を奢るでどうだ？」
「いいですよ」
「二人ともそんな呑気な……」
一誠と朱乃のデートを賭けの対象にし、緊張感に満ちた空気を愉しむ様なシンとアザゼルに、木場は気苦労から溜息を吐くのであった。

◇

駒王学園の昼休み。

一誠、松田、元浜のいつものトリオにシンを加え、アーシア、ゼノヴィア、イリナ、桐生の女子四人と一緒に雑談を交えながら昼食の弁当を食べていた。

このグループを見る度にクラスメイトたちは首を傾げる。交流が広い桐生はともかくアーシア、ゼノヴィア、イリナなどの美少女が一誠たちと一緒にいること。

一誠たちの評判は、一年生の頃から積み重ねてきた所業で非常に悪い。最近、一誠がましになってきたと囁かれているが、学園の女子たちからすれば三人で一セットなので微々たる影響でしかない。

そんな学園の嫌われ者トップスリーを独占する一誠たちとアーシアたちがよく一緒にいること、そして、三人とは全くタイプが異なるシンもまたよく一緒にいることが疑問視されている。

話題は修学旅行の話となっていた。修学旅行先の旅館が四人部屋なので、男女共に三、四人のグループを作ることが決められている。

一誠、松田、元浜の三名はほぼ固定。というよりも他に組んでくれる男子が居ない。女子たちに嫌われているせいで、同類と思われたくない男子生徒たちからも一誠たちは避けられている。

修学旅行という一生に一度しかないイベント。松田と元浜は青春の為に是非とも女子グループと一緒に回りたいと思っているが、前述の様に嫌われている彼らと一緒に回る女子たちは存在しなかった。

だが、そこに助け舟を出す女子が現れる。

「修学旅行のとき、うちらと一緒に回らない？　美少女四人とウッハウハよ？」

桐生、アーシア、ゼノヴィア、イリナもグループを組んでおり、一誠たちに申し出る。

「ああ？　どこに四人目がいるんだよ？　美少女三人しか見えねえぞ？」

「あーあ、これだからエロ猿は。エロ本やＤＶＤ見過ぎて目玉が腐ってるわ」

松田の憎まれ口に、桐生は同じく憎まれ口で返す。

「ま、猿は放っておいて、間薙君はどうなの？　誰と組むか決まってる？」

「いや、まだだ」

弁当箱のおにぎりを掴む手を止め、桐生に答えた。

シンもまたクラスでは浮いている方であった。一誠たちとは喋るが、その他のクラスメイトたちとは最近殆ど会話が無い。

一誠は顔や体が引き締まって少しましになってきたという評価を得る一方で、シンの方は何も変わっていないのに何故か近寄りがたくなってきた、という評価を受けていた。

「じゃあ、兵藤たちと組んじゃいなよ。それなら四、四でキリがいいしさ」
「お前、勝手になぁー」
「俺は構わないが」
「……まあ、そういうことなら別に問題ないけどよ」
松田は入ることに反対せず、元浜は何も言わないので不満は無い様子。修学旅行は一誠たちと一緒に行動することとなった。
「で、さっきの返事。うちらと組む？　兵藤、アーシアがさ。ね？」
桐生がアーシアにアイコンタクトを送るとアーシアはニッコリと笑う。
「イッセーさん、ご一緒してくれますか？」
「勿論、ＯＫに決まっているだろ！」
「はい！」
一誠が即答すると、アーシアは嬉しそうに一誠の腕に抱き付く。ディオドラの件と体育祭の件で二人の距離感が一層縮まっており、桐生はそれを興味深そうに眺め、松田と元浜は嫉妬に塗れた視線を送っていた。シンは特に気にすることなく弁当を食す。
「おいおい、アーシア。抜け駆けはしないでくれ。私もイッセーと一緒がいい」
「イッセー君と一緒だと面白いしね」
ゼノヴィア、イリナもアーシアの後に続く。

　それを聞いて、松田と元浜は心穏やかでいられなくなる。
「クソォォォォ。何だこのシチュエーションは！　なぜ、こうもイッセーばかりモテるんだよぉぉぉぉぉ！　俺もされたい！　美少女に抱き付かれたい！　美少女に取り合いにされたい！」
「あー、イッセーの周辺に変なものが見えるなぁ？　何だあれは？　もしかしてイッセー専用のフラグかな？　壊したい……全力でぶっ壊したい……」
　刺さりそうな目付きで一誠を睨む二人。すると、同士を求めてシンにも絡み始める。
「なぁなぁ、間薙よぉ。目の前でこんなに理不尽が起きていることを許せるかぁ？　何なんだこの現実はぁ！」
「おかしいよなぁ？　こんなことはおかしいよなぁ？　俺たちは女子から嫌われているのにおかしいよなぁ？」
　道連れを求める怨霊か亡者の様な暗い気を放つ二人。その様子に呆れつつ思ったことを口に出す。
「嫌われなくなる方法はあるかもしれない」
『な、何だと！　そ、それは何だ！　早く教えてくれ！』
　声を揃えてシンの言葉に飛びついてくる。
「その剥き出しの欲を捨てろ。少なくとも学校で見せるな。あと、他人を妬むのを止め

るだけだ。二人とも見た目は悪くない。良い方だと言っていい。余裕のある態度を普段から見せていればあるいは……」

学園で皆が見ている前で平然とエロ話やエロ本、エロＤＶＤの交換をするなどの思春期にしては強過ぎる欲求を隠し、モテる人間を一方的に敵視するという矮小さを見せなければ、もしかして機会が巡ってくるかもしれない、とシンは考える。

あまり言われ慣れていないことを言われたせいか、松田と元浜の脳は処理が追い付かずに停止してしまう。

ようやく脳の処理が追いつく。女子たちから罵倒されることが多い松田と元浜は、シンから容姿のことを褒められたことを理解し照れ始める。

「間薙、お前って良い奴なんだな……」

「今からでもお前となれるか？　親友ってやつに……」

「あはははははははは！」

一方でシンの対処法を聞いて桐生は爆笑し、目尻に涙を浮かべている。

「無理だって！　エロ坊主とエロメガネには無理！　いや、もしかしたら奇跡的なワンチャンあるかもしれないけどさ！　そんなことしたらこいつらのキャラが死ぬね！　はははははははははは！」

「うるせぇ！　久々に褒められたんだ！　余韻に浸らせろ！　あと俺のリビドーはキャラ付けの為のもんじゃない！」
「生まれもってのものだ！」
「うんうん。それが顔に出てるわ」
「うっせぇ！　人の顔をどうこう言える面か！　さっきの美少女四人って台詞もちゃんちゃらおかしいぜぇ！　なあ！　間薙！」
「俺はそうは思わん」
　シン、即否定。
「いやー、流石間薙君は分かってるねぇー」
　間薙の一言で桐生は上機嫌になる。
「ひ、否定してぇ……！　否定してぇけど、それを否定すると俺たちへの否定に繋がってしまう……！」
　桐生が美少女であると肯定したシンの眼を節穴だと言えば、シンが評価した二人の容姿も節穴となってしまう。
「これが、これがジレンマだって言うのか……！」
　シンは悶える松田と元浜を見て、多分二人が自分の言った通りになるのは無理だろうと、密かに思うのであった。

◇

友人たちとの交流、会話。比較的平和な日常を過ごす皆。しかし、あくまで比較的。これまでのことに比べたら平和と評していい程度のこと。

日が落ち始める頃には、平和を脅かす者たちが暗躍する。

場所はとある廃工場。そこには三人の衣装の異なる男たちと、それを囲う様にして並ぶ百を超える異形たち。

ディオドラ・アスタロトの件以降、旧魔王派が壊滅的な被害を負ったことで『禍の団』の中の別派閥であり、人間の英雄、勇者の末裔、神器所有者で構成された『英雄派』という者たちが、リアスやソーナの縄張りである町や各勢力の拠点に度々襲撃を仕掛けてきていた。

今日もまたその小規模な襲撃の一つである。そして、襲撃者たちも当然神器所有者であった。

黒いコートの男は、両手から出る白い炎を操る『白炎の双手』

サングラスの男は影を操り、影が呑み込んだものを別の影に転移させる『闇夜の大盾』

中華風の民族衣装を着た男は放った後に軌道を変えられる光の矢『青光矢』

アザゼルが過去から今に至るまでの神器のデータを入力した機械を開発していたので、少し戦うだけで相手の戦力を解析出来る様になっていた。

とは言っても、神器使いが三人揃おうと百の異形を従えていようと今の一誠たちを相手にするには戦力不足。

一誠が禁手化し、『赤龍帝の鎧』を纏って加速し突っ込めばそれだけで二十近い異形たちが粉砕される。

ゼノヴィアがデュランダルを一閃すれば、同じく二十の異形たちが両断される。

ギャスパーがその眼で異形たちを見れば、瞬く間にそれらは時間停止され、リアスの魔力と朱乃の雷光によって跡形も無く消し飛ばされる。

単純な戦闘力ならば中級の悪魔に匹敵する異形たちを軽々と薙ぎ倒していく。

しかし、神器使いも異形たちを目晦まし程度にしか考えておらず、隙を狙って神器を使ってくるが、最前線で戦う一誠とゼノヴィアは自身らが最上級の武具を扱っている為、禁手に至っていない神器を恐れる道理など無い。

仮に負傷したとしてもアーシアの治癒神器『聖母の微笑』によって治すことが出来る。しかも、神器使いとして成長した彼女は直接触れなくても離れた場所にいる相手すら傷を癒すことが可能。

そのアーシアを守るはイリナと小猫。変幻自在の聖剣『擬態の聖剣』と、一撃で相手

を戦闘不能状態にまで追い込める猫?の仙術が彼女を守護する壁となる。
何重もの矛と盾が勝ち目を奪う。無論、英雄派の神器使いたちも過去に戦った者たちの情報を基にして戦い方を変えたり工夫などしているが、実力差を埋めるに至らず。
結果からすれば危な気なく一誠たちは英雄派たちに勝った。しかし、快勝という訳でなく幾つか問題も残った。
黒いコートの男と民族衣装の男を捕縛することが出来たが、サングラスの男には逃げられてしまっていた。
そのサングラスの男、魔法陣で逃走する直前に不穏な動きを見えていた。影から別の影へ転送させるサポート用の神器だったが、自らに影を纏い始め、廃工場を浸食する様に影を広げていた。
その変化に全員が悪寒を覚えた。神器が別の領域へと入っていく感覚。即ち禁手への予兆である。
英雄派の動きを見て、リアスたちは彼らが敢えて自分たちに神器使いをぶつけているのではないかと推測する。
この町には強力な力が集中していた。神滅具、禁手、聖剣、上級神器、仙術など。
強力な力と神器を接触させることで禁手を促すという強引な覚醒。思惑通りに行くには、それこそ多数の犠牲を払うことになるだろうが、その犠牲すらも禁手化への要素

として考えれば納得がいく。
十把一絡げの神器の犠牲よりも禁手化した神器の方が遥かに価値がある、そういう意図が見えてきた。
その発想には誰もが渋面となったが。
英雄派の思惑は一先ず置いておき、捕縛した神器使いたちの意識を奪い、冥界へ送ろうとしたとき、黒いコートの男が声を押し殺して笑う。
「くくくく、こんな風に暢気な会話をしていていいのかな？」
「どういう意味かしら？」
「毎度、毎度一手で攻めると思っているのか？」
黒いコートの男の言葉から察するに、今回の襲撃には複数の部隊で来ていたらしい。
「魔王の妹に赤龍帝をも引き付けることが出来た！　この町もお終いだな！」
勝ち誇る黒いコートの男。しかし、それを聞かされたリアスたちは平然としていた。
その態度に、黒いコートの男は逆に動揺させられる。
「貴方――」
リアスは真っ直ぐ黒いコートの男の目を覗き込む。
「怯えているから視野が狭いのかしら？　それとも元々？」
黒いコートの男はリアスに言われ、改めて彼女と彼女の眷属たちを見る。そして、今

になって気付いた。数が足りないことに。
「居ない……居ないだと！　『聖魔剣』の木場祐斗は何処だ！　『人修羅』の間薙シンは何処に行った！」
勝ち誇った態度を一変、焦りから叫ぶ黒いコートの男。その叫びを聞いて一誠とギャスパー、イリナの心臓が早鐘を打つが、悟られない様に努力する。
『人修羅』。英雄派の人間たちはシンをそう呼ぶ。オカルト研究部のメンバーの内の何人かは以前に聞いたことがあるが、数回の襲撃の内に全員が知ることとなった。
幸い、『人修羅』という呼び名は英雄派の者たちがシンに付けた異名だとリアスたちは受け取っている。英雄派の者たちもそのつもりで使っている節があった。
『人修羅』の名が示す真の意味を理解しているのは、オカルト研究部メンバー内で一誠、ギャスパー、イリナだけである。
リアスは黒いコートの男が見ている前で携帯電話を取り出し、ある番号に掛ける。電話の向こうの主はすぐに出た。
「シン、そっちはどう？　手助けはいる？」

◇

「大丈夫です。もう終わりましたから」
リアスに応えながらシンは積み重ねてある鉄骨に腰を下ろしていた。
目の前には墓標の様にあちこちに突き刺さる無数の聖剣、魔剣。剣の切っ先の下では異形たちが絶命していた。
場所は建築途中のビル。英雄派の者達はここに集合して町を破壊しようとしていた。
「部長からかい？」
「ああ」
しかし、それもシンと木場、そして仲魔たちによって全滅させられていた。数はそれなりに多かったが、苦戦する様な相手では無い。
「ば、馬鹿な……」
ケルベロスに背中を踏み付けられ動けなくなっている神器使いが、現実を受け止められない様に呻く。その隣ではとっくに気絶しているもう一人の神器使い。
神器使いは二名であったが、戦闘員は別部隊の倍は用意していた。だが、結果は圧倒され、為す術無く戦闘不能状態になっていた。
「この悪魔共め……」
「ピクシー」
「はーい」

わざわざ怨み言を聞く義理も無いのでピクシーに声を掛ける。ピクシーは神器使いの頭に座ると、脳天に電撃を放つ。体を数回痙攣させた後、白眼を剥き、泡を吹きながら気絶した。

自動追跡する光球の神器と半透明の帯の様な神器を使う二人であったが、特に苦戦することは無かった。過去に戦ってきた相手と比べたら負ける道理など無い。

「――いや、何でも無いです。もう終わりましたから。――はい。少し暴れたので後処理の方を頼みたいのですが。――お願いします」

携帯電話を切ると、シンは軽く首を回す。ここの所は楽な戦いばかりで体が逆に鈍りそうな気がしてくる。尤も、シンは戦いが好きでも嫌いでも無いが。

「じゃあ、すぐに二人を冥界に送ろうか。送った後のことは、リアス部長は何か言っていたかい？」

「特に何も。自由解散だ」

「なら、一緒に夕食でも行かないかい？」

「そうだな――」

すると、携帯電話が鳴る。発信者はリアスのもの。言い忘れたことでもあるのかと思いながら電話に出る

「何ですか？」

「ちょっといいかしら？　明日は暇？」
何故かリアスは小声であった。
「暇ですが……」
「じゃあ――駅のコンビニ前に来てくれる？　祐斗にも伝えておいて」
「何かあるんですか？」
「……明日、そこでイッセーと朱乃が待ち合わせするの」
知人たちのデートの監視など英雄派たちとの戦いよりも気が乗らない。
明日も襲撃があればいいのに、と不謹慎なことを願ってしまうシンであった。

覗見、盗聞

「何だその格好は……」

出歯亀の集合場所へと着いたシンの開口一番の言葉がそれであった。

リアスは帽子にサングラス。アーシアは眼鏡。この二人は別に問題無い。紅髪や金髪が目立つが、一応は変装を呈している。

ゼノヴィアは前髪をヘアピンで留め、レンズの分厚い眼鏡。イリナはツインテールをポニーテールに変えていた。こちらも別にいい。一瞬気付かないかもしれない。

問題は残りのメンバーであった。

小猫はどこで調達したのか分からない覆面を被り、頭部から猫耳を出すというマニアック過ぎる変装をし、ギャスパーは二つ穴を開けた紙袋を被り、スカートを履いた不審者へ成り下がっていた。

シンに付いて来たピクシーとジャックフロストはその姿に爆笑する。因みにケルベロスは家で待機中。今回のことを話したら『クダラナイ』の一言で同行を断っていた。

「……すみません。顔を隠すのがこれしか無くて。……大丈夫です。気を操って気配を隠せるので」

「ひ、人の多い所に行くとなると、こ、これが無いと落ち着かなくて！」
仙術の応用で発見し難くなるからか小猫の変装は雑。引き篭もりで、対人恐怖症のギャスパーにとって紙袋はせめてもの御守りなのかもしれない。段ボール箱を被って歩き回るよりかはマシと考えるべきなのだろう。
「またこんなの被って～」
ジャックランタンがギャスパーの被っていた紙袋を引っ張り抜く。
「や、やめてよ、ランタン君！　そ、それがないと僕は――！」
「少しは勇気を持ちな～」
「やだぁぁぁ！　だったらランタン君を被る！」
そう言ってジャックランタンのローブの下に頭を突っ込む。
「いや～ん」
ジャックランタンは、ふざけているのか本気なのか判断し難い反応を見せながら、中のギャスパーごと左右にフラフラと揺れる。
ギャスパーとジャックランタンのじゃれ合いはとりあえず放っておき、最後に残った木場を見る。
一切変装をしていない普段着。その姿を見ただけで、今回のことについて乗り気では無いことが伝わる。

「いつも通りだな」
「間薙君の方こそ」
　木場は苦笑を浮かべる。木場に指摘された通り、シンは濃い緑のパーカーに黒のズボンという組み合わせ。私服であり、帽子やサングラスや髪型を変えるなどの変装は一切していない。シンもまた他人のデートを盗み見することに全くやる気が無かった。
「待ち合わせは十時。それまで待機よ」
　時計を見ると九時を少し回っていた。残り約一時間。一誠と朱乃の姿はまだ無い。デートの待ち合わせを待つという空しい時間である。
「今のうちに幾つか決め事を決めませんか？」
「決め事？」
「あくまで見ているだけ。何が起ころうとも妨害や邪魔は一切無しで」
　シンが言った途端、リアスたちの顔が蒼褪める。
「も、もしイッセーさんと朱乃さんが手を繋いだら……？」
「見ているだけだ、アーシア」
「イッセーに朱乃がアーンをしたら？」
「それも見ているだけだ、ゼノヴィア」
「……イッセー先輩と朱乃先輩が腕を組んだら？」

「黙って見守るだけだ、塔城」
「イッセー君と朱乃さんがキ、キキ、キスをしちゃおうとしたら？」
「見ているしかないな、紫藤」
「万が一、それ以上のことが起きたら……？」
「諦めて下さい」
「……因みに決め事を破ったらどうなるのかしら？」
「俺と木場とギャスパーが全力で部長たちを遠ざけます」
いきなり巻き込まれた木場とギャスパーが揃って『えっ！』という顔をしたのが横目で見えたが、シンは無視する。
リアスたちはどうするべきか黙考し始める。その間に、急に巻き添えにされた二人が小声で話し掛けてきた。
「間薙君。部長がもし暴走したら、僕止められる自信が無いんだけど……」
「情けないことを言うな。それでもリアス・グレモリーの『騎士』か？」
「いや、部長を守る『騎士』であって、部長から守る『騎士』じゃないんだけど……」
「ぼ、僕もぶ、部長を止められる自信が無いですぅぅぅ！」
「灰になっても蘇る程の精神力を見せてくれ」
「灰になること前提なんですかっ！」

適当にあしらいながらシンはリアスたちを観察する。
女性陣全員苦悩する顔となるが、シンはこの条件を呑むだろうと思っていた。ヤキモチや嫉妬はするだろう、一誠は彼女らにとっての思い人である。しかし、朱乃の方も彼女らにとって共通の友人である。自分の恋路も大事だが、相手の恋路を踏み躙る真似はしないとシンは信じていた。
「……分かったわ。それで行きましょう」
重い沈黙を破ってリアスが提示された条件を呑んだ。他に反対する声は出ない。皆の総意と見て間違いない。
「それじゃあ、ルールを守って清く正しく盗み見と行きましょうか？」
現状への皮肉とも冗談とも取れる台詞を言う。当然ながら誰一人笑うことは無かった。
午前十時となり、待ち合わせ場所で一誠と朱乃が合流する。
朱乃は普段見ないフリル付きのワンピースを着て、束ねていた髪を下ろしていた。それだけで朱乃の年不相応にあった艶の代わりに可憐さが前面に出てくる。
一誠と並ぶと同い年どころか年下の彼女に見えてくるほどであった。
一誠も普段とのギャップで完全にやられたらしく、出会って早々に顔を真っ赤に染め上げる。

そして、デレデレしている一誠を見てリアスも真っ赤に染まる。怒りと悔しさのせいで。

リアスたちはバレないように遮蔽物の影から覗いているが、隠し切れない圧力のせいでリアスたちの近くを通る一般人は急に早歩きになる。出処不明の怒気に生存本能が刺激されての無意識の行動と思われる。

恐らく一誠たちも見られていることに気付いただろう。何故なら離れた場所にいるシンにもリアスの嫉妬の圧力が伝播してきたので。

そんなシンはリアスたちとは別の場所から一誠たちを見ていた。携帯電話を操作する振りをしながら横目で一誠たちとリアスたちの様子を窺う。側にはイリナとゼノヴィア、ピクシーとジャックフロストも居り、一般人には見えないピクシーたちはシンにしがみついて遊び感覚で一誠たちを監視し、イリナとゼノヴィアも一誠たちを盗み見しているが、リアスたち同様に気になるらしく前のめり気味になっている。

全員で固まっているとすぐに見つかるし不自然だという理由で、二つのグループに分かれたが正解であった。目立つリアスたちのお陰でシンたちはまだ気付かれていない。

そして、いざデートが始まると開始早々に朱乃が一誠と手を繋ぐ。リアスたちに見せつける様に。リアスの嫉妬心はより増し、殺意めいたものとなり、その近くではアーシアが涙目になっていた。覆面を被っている小猫の表情は分からないが、隣にいるギャス

パーがオロオロしている様子から察せられる。
デート開始から荒れる周囲を放っておいて、一誠と朱乃のデートは進んでいく。
最初は服のブランドショップ。朱乃は一誠にどの服が似合うのか尋ね、気になる服があれば試着して一誠に見せる。リアスたちの存在を気にしていた一誠も、朱乃のファッションショーにすぐに夢中になってしまう。
朱乃の服選びの次は、一誠の服選びとなる。一誠に似合う服を朱乃が選び、時折一誠に当てて着た時の姿をイメージする。女子に服を選んでもらうという今までに無い体験に一誠は感涙していた。
「ふーむ。デートというのは、ああいうものなのだな」
「興味深いわー」
ブランドショップの外から中の二人を見ていたゼノヴィアとイリナが感心した様に呟く。教会に奉仕し、俗世との関わりが薄かった二人にはデートというものが新鮮に映っていた。
最初は一誠と朱乃が二人で会うことを不安視していたが、ゼノヴィアたちの方が逆に惹き込まれていた。いずれ来るその時の為の参考にしているのかもしれない。
その次は露店でクレープを買う。実に嬉しそうに財布から金を出す一誠。乳龍帝の番組が始まってから版権料という形で、とんでもない額が一誠の預金通帳に入ってい

る。男相手だと渋るが、女性相手だと財布の紐がとことん緩くなる。
買ったクレープを一緒に食す。お互いに笑顔を向け合い味の感想を言い合っていた。
そのまま歩いていく二人。後を追おうとするシン。が、数歩進んで気付く。ゼノヴィアたちが付いて来ない。
振り返ると彼女らの視線はクレープ屋に釘付けになっていた。
「美味しそうだったな、イリナ」
「ええ。とっても美味しそうだったわ、ゼノヴィア」
「いーなー。アタシも甘いもの欲しいなー」
「ヒホ。オイラも欲しいホ」
合図していないのに、同時に四つ眼差しが揃ってシンへ向けられる。嫌なコンビネーションを見せつけられた。
「――選んでいる時間は無いからすぐに買うぞ」
却下すれば余計拗れると考え即決すると、ゼノヴィアとイリナはシンの腕を引っ張って電光石火でクレープ屋の前に行き、迷いなく注文する。手渡される五つのクレープ。そして、何故か代金はシン持ちであった。
そこから一誠たちはゲームセンターへ行き、ＵＦＯキャッチャーでぬいぐるみを取ってはしゃいだり、二人協力プレイのゲームなどをして仲を深め合っていた。

その姿をリアスたちが見るたびに、嫉妬を燃料にして怒気の炎を噴き上げる。もう隠れる気が無いのでは、と思う程に目立つ。とはいえ、リアスたちが目立てば目立つ程シンたちの存在が隠される。

ゲームセンターの次は水族館。そこで一緒に多種多様な魚を眺める。その間、ずっと手を握り合う二人。傍から見れば恋人同士にしか見えない。

終始緩んだ幸せそうな笑みを浮かべる一誠。今日の日のことを一生ものの思い出にすることが伝わってくる。

水族館を一通り回ると出入口へと向かう一誠たち。だが、外に出た途端、朱乃が一誠の手を引いて走り出してしまった。

やはり、監視の目に気付いていた朱乃。ここでリアスたちを撒く気でいた。

咄嗟のことで反応が遅れるリアスたち。周囲に人々が居ることもあって、悪魔の力も使えない。

「どうしよう！　見失っちゃう！」

「追うぞ！」

走り出そうとするゼノヴィアとイリナの肩を、シンが掴んで止めた。

「何故止める！」

「もう追わせている」

誰を、と言い掛けたがゼノヴィアたちはすぐに気付いた。シンの肩に乗っているピクシーの姿が見えない。
「次は空から覗き見だ」

◇

「ふんふーん」
上空からピクシーは一誠たちの後を追い掛けていた。右へ左へと何度も曲がり、リアスたちを追い掛けて来られない様にしているが、空から見下ろしているピクシーには無意味であった。また、リアスたちのことを気にして自分たちの周囲には注意を払っているが、真上への警戒は薄くピクシーの存在に全く気付いていない。
リアスたちを撒いたと分かると一誠たちは走るのを止める。当然ながらピクシーは上からそれを見ていた。
やたら煌びやかな建物の並ぶ場所まで来ており、その建物の前で一誠と朱乃は何かを話している。
流石に離れ過ぎていて声を拾うことは出来なかった。会話の中で朱乃は赤面し、一誠も同じくらい赤面し、それも限界を超えて鼻血を流す。

「何やってるんだろ？」

ピクシーは一誠の奇行に首を傾げる。

今居る場所がラブホテル街で、朱乃から『入ってもいい』と言われたことなど、俗世に疎いピクシーには想像も付かない。

「――あれ？」

彼女は気付く。一誠たちの横に立つ人々。一誠たちから目を離したつもりは無かったのに、いつの間にかそこに居た。

帽子に若々しいラフな姿をした老人。整えられた顎髭に大柄の厚みのある肉体をしたスーツ姿の男性。ロングストレートの銀髪にパンツスーツを着た女性。特に女性の方にピクシーは既視感を覚える。

老人の方が一誠たちに話し掛け、一誠と朱乃は動揺する。顔見知りなのかそこから会話が発生していた。

その間に大柄の男性が朱乃に詰め寄っており、真剣な声で何かを言っている。それに対し、朱乃の方も強く反発していた。

それを止める一誠。一誠と男性との間に火花が散ろうとしていたが、間に老人が入って二人を宥める。

すると、老人は一言、二言発した後、真上を指差す。

「あっ」
　不味いとピクシーは思ったが、空に身を隠す場所は無く、老人の指差した方向に全員の目線が向けられる。
「あーあ」
　観念し、空から降りていくピクシー。シンに見つかったことと変な三人が現れたことだけ伝えておく。
「お前!」
　ピクシーの登場に、一誠と朱乃は驚く。彼女が居るということはシンもまた今回のデートを尾行していたことを意味しており、全く気付かなかった。
「ほっほっほっ。お前さん、確かあやつの仲魔じゃのう?」
「誰だったけ?」
「オーディンという名のしがない老人じゃよ」
　老人こと北欧の主神オーディンは、ピクシーに向け快活な笑みを見せる。
「貴女は――」
「何じゃ?　お前たち、顔見知りか?」
「はい。リアス・グレモリー様とソーナ・シトリー様の――」
「うーん。会ったことがある様な無い様な……」

「――ええ！」
ピクシーから無慈悲な反応をされ、女性は驚く。
「泣いている私を慰めてくれたじゃないですか！」
「そんなことしたかなー？」
首を傾げるピクシー。記憶に残っていないという仕草に女性はショックを受けた。
「そ、そんな……私って印象の薄いヴァルキリーだったんですか……」
忘れ去られたショックで半泣きになる女性。
「いい歳して泣くんじゃないわい」
「いい歳って言わないで下さい！　オーディン様！　うう……」
「あーごめん、ごめん。よしよし。あ、何か思い出しそう」
女性の頭を撫でて慰めるピクシー。それにより前にも同じ事をしていたのを思い出す。
泣くヴァルキリーと慰めるピクシー。それを見て笑っているオーディン。そんな状況のせいで、男はそれ以上朱乃に詰め寄ることはせず、諦めた様に溜息を吐いた。

◇

「第一印象は最悪だな」
「言わないでくれ。俺だって分かっている」
顔を両手で覆う一誠。その隣に座るシン。兵藤家の一階にあるキッチンで飲み物を呑みながら、朱乃とのデートについて話しつつ、少し前にあったオーディンたちのことも話していた。
オーディンが日本に来たことで一誠たちのデートは中断となり、兵藤家で全員合流することとなった。
一誠が落ち込んでいる理由は、オーディンのお供で護衛でもある男性の正体を知ってしまったからである。
グリゴリの幹部バラキエル。それが男性の肩書きと名。そして、もう一つ。
「あの人が朱乃さんのお父さんか……」
朱乃の実父である。
つまり、一誠は初対面の父親の前で、娘とラブホテルに入ろうとしている現場を目撃されたということである。
オーディンに付いて来たもう一人の女性の名はロスヴァイセ。戦士の魂をヴァルハラへと導く戦乙女である。
見た目はクールビューティーという言葉が似合う女性であったが、紹介の場でオー

ディンから彼氏居ない歴が年齢と同じ生娘であることをいきなり暴露され、泣き崩れたことでその印象も一気に剥がれ落ちてしまった。

オーディンの目的は、サーゼクスとミカエルの仲介で日本の神々と会談をすることである。本来ならばもう少し先の予定だったらしいが、北欧の神々の中ではオーディンのやり方に対し不服な者も存在しており、それらが事を起こす前に早めに行動したのが理由だと言う。

「一応トールの奴を置いてきて他に睨みを効かせておるが、どうなることやら」

というのがオーディンの談。ある程度の効果はあるが、効かない相手も存在する様子。

次の話題として最近の『禍の団』の襲撃についての話となった。

リアスの報告を受け、アザゼルは『禍の団』が禁手化目的で神器使いたちを襲撃させているのは概ね合っていると言う。

襲撃者たちを色々と調査したところ、殆どの人間が戦闘経験の無い一般人と変わらない者たちであることが分かった。『禍の団』によって拉致され、洗脳を施し、即席の兵隊として送り込み、見所が有れば魔法陣によって帰還させ、禁手の芽が出ないと分かれば『禍の団』に関わる記憶を全て抹消されるという細工までしていると言う。

殆ど素人集団の為被害が少ないが、英雄派と呼ばれる者たちが本格的に参戦したらど

うなるかは分からない。とはいえ、相手の行動は目下のところ調査中。兵藤家内でどうこう言ってもどうにもならないのが現状であった。

「まあ、つまらん話はここまでにするかのう。折角、日本に来たんじゃあちこち周りたいのう」

「気分転換にパアっと行くか。爺さん、どこか行きたい所はあるか？」

「わしは前から日本酒というのが飲んでみたくてのう。あとは綺麗な娘がおれば良し！」

「はっはー！　分かってるなこのエロ爺！　芸者ガールも大和撫子も堪能させてやるぜ！」

「お触り有りか？」

「当然！」

「さっすが、アザゼル坊！　老骨が滾ってくるのう！」

真面目な話があっという間に女遊びの話と変わる。話題の百八十度転換に付いて行けず、誰もが唖然としていた。バラキエルなど頭痛を堪える様に頭を押さえている。

「酒と女ならマダの奴は呼ばんのか？」

「いやー、あいつ、この間冥界で悪さする寸前だったのがあいつの親父にバレてな。謹慎くらってる」

「何と！」
　マダがこの世で唯一頭が上がらない存在からの直々の仕置きである為、逃走することも出来ない。内緒にしているが、チクったのはアザゼルである。流石に冥界でインドラこと帝釈天と一戦交えようとしたのは見過ごせない。因みにそこに混じろうとしたトールもまたオーディンから罰を受けている。トールを見張り役として置いてきたというのは表向きの理由、実際は罰である強制留守番であった。
「オーディン様！　わ、私も付いていきます！」
　ロスヴァイセが同行を求める。
「お前は残っとれ。アザゼルがいれば問題あるまい。この家で待機しておれ」
　さり気なくもう一人の護衛のバラキエルも残る様に言っている。
「ダメです！　行きます！」
「刺激が強いぞぉ？　ディープな世界だぞぉ？」
「生娘には耐えられんかもなぁ生娘には」
「何度も言わないで下さい！　絶対に付いて行きますからね！」
「じゃあ、行くか爺さん」
「ほっほっほっ！　楽しみじゃのう！」
　オーディンはそれ以上何も言わず、アザゼルと共に退室していく。ロスヴァイセはそ

の後を慌てて追っていった。
　こうしてシリアスで始まった集いは、コミカルな空気で解散となったのだ。
　それ以降は各自の自由となっており、ピクシーたちは広くなった兵藤家内を探検がてらに遊んでおり、シンもそれが終わるまで今の様に一誠と雑談をしている。
「それにしても、あんな形で姫島先輩とのデートが終わるとはな」
「ホントだぜ……。朱乃さん、中断されて残念がってたしお父さんと会ってからずっと不機嫌だし……」
　一誠が言う様に、兵藤家に戻ってから朱乃はずっと険しい表情をしていた。バラキエルとは目を合せようとはせず、バラキエルとの間に拒絶の壁を張っていた。
「――因みにだが、お前から見てデートの内容とはどうだったんだ？　満足したのか？　それでも不完全燃焼か？」
　珍しく踏み込んで内容を聞きにきたので、一誠は少し戸惑いながらも今の心境を話す。
「そりゃまあ、不満が有ると言えば有るけど、でもあれは、その、まあ……」
　ごにょごにょと言葉を濁す。恐らくは朱乃と一線を越える直前でおあずけを受けたことだと思われる。
「取り敢えずの感想は、そのー、うん、良かった」

一誠にとってデートの記憶と言えば、夕麻ことレイナーレとした記憶である。そのデートの日に人として殺され、悪魔に転生した。後にレイナーレ本人からそのデート内容を酷評されたが、言われた内容を記憶力が優れている訳でもないのに一語一句覚えている。覚えているというよりも刻み込まれているという方が的確なのかもしれない。

それが朱乃とのデートで完全に上書きされた――とまでは言わないが、少なくともデートとは楽しいものであると再認識出来た。

「微妙なラインだな……」

「何が微妙なんだ？」

「デートの成功の可否、がだ。アザゼル先生とお前のデートが上手く行くかどうか賭けていたからな」

「お前ッ！　そんなことしてたのかよ！」

隠さず堂々と賭けのことを教えられ、一誠は賭けの対象にされたことを怒ればいいのか、嘆けばいいのか分からなくなる。

「――何を賭けたんだ？」

「食事の奢り」

「安いなぁ！」

「因みに俺は上手くいかない方に賭けた」

「そこは上手く行く方に賭けろよ！　友達として！」
　気の置けない会話をする二人。そんな緩やかな空気が流れる中を――
「気安く名前を呼ばないで」
　――冷たく拒絶する声が隙間風の様に通り抜けていく。
「――聞こえたか？」
「ああ、朱乃さんの声だ」
　離れているせいで微かな声であったが、同じ階からではなく上の階から聞こえてきたものであることは分かった。
　二人は同時に席を立ち、上へ向かって階段を昇っていく。微かな声が段々とハッキリ聞こえてくる。
　そして、音の源である五階へ辿り着く。そこから覗くと廊下で朱乃とバラキエルが揉めていた。
　その会話の内容に聞き耳を立てる。
「いい加減にして。貴方には関係の無いことだわ」
　実の父親に対し、他人の様な態度で喋る朱乃。
「いや、そうはいかない。説明をしてくれ。やはり赤龍帝と逢引きをしていたのか？」
　話の内容は、一誠と朱乃の関係を問い質すものであった。父親として娘の恋愛に無関

心を貫けないのだろう。
「俺のことかー……」
「初対面の印象が悪かったからな」
　あの状況で好感を持つ方がおかしい。
「貴方には関係の無いことよ。勝手でしょ？　貴方にはとやかく言う筋合いも権利も無いわ」
「彼に関しては噂をよく耳にする。女のち、乳房を糧にする破廉恥なドラゴンだと。乳龍帝という二つ名まで持つそうじゃないか」
　変な誤解どころか、とんでもない誤解をしている。バラキエルの話では一誠だけでなくドライグにまで女の胸を好む癖があることになっている。
「――良かったな。初対面どころか会う前から印象最悪だ」
「うるせぇ！」
『な、何故だ……何故こんなことになったんだ……？』
　一誠の内の中でドライグが震えた声を出す。知らず知らずのうちに不名誉が増えていく現状を恐れて。
「聞いてくれ、朱乃。私は心配なのだ。赤龍帝は娘の乳を狙い、その内なるドラゴンは娘の乳を食らい、糧にすると囁かれている。お前までもがその餌食になったら、私は……」

とんでもない誤解ではなく凄い誤解をしている。一体、どういう話を聞けば『赤い龍の帝王』と呼ばれたドライグが、女の乳が食糧の奇癖を持つ珍龍へと成り下がるのだろうか。

娘を心配するあまり、思考が突飛なものへと変わってしまっているのだろうか。

『おおおおおっ……うおおおおおおおっ……誰か、誰か俺をこの無間地獄から救ってくれ……！』

一誠の脳内でドライグが慟哭する。

「彼をそんな風に言わないで。女性に弱いところはあるけどそれ以上に優しく頼りがいがある人だわ。――貴方と違って」

「朱乃、私はただ父として」

「今更父親ぶらないで！　自分が父親だって言うなら、あの時何で来てくれなかったの！　あの時、貴方が居てくれたら母様は……全部、全部貴方が招いたことじゃない！」

「それでも、私は……」

感情的な言葉を発する朱乃。何かを言い掛けるが口を閉ざしてしまうバラキエル。過去に母親関係で何があったのかは分からないが、責める方も責められる方も古傷を抉っている様にしか見えなかった。

「感情的だな」

「あんな朱乃さん、初めて見る」
良くも悪くも身内にしか見せられない面と言えた。
「あまり良くない展開だ」
「ポロっと言っちゃいけないことを言いそうだな」
感情が昂ぶり過ぎて口走ることを懸念する二人。
「矛先をずらすか」
「え？」
どういう意味だ、と聞くよりも早く、シンは一誠の背を押して壁の陰から廊下へ出した。
「イッセー君！」
「ぬう！　乳龍帝！　私たちの会話を盗み聞きしていたか！　破廉恥な！　そこを動くな！」
全身から音を立てて発せられる火花と放電。『雷光』の異名を身を以って示しながら、バラキエルは大股で一誠へと近付いていく。
「どうも」
そんな二人の間に滑り込む様にして入るシン。バラキエルの感情の矛先を一つから二つにする。

「お前なぁ……」
「ちゃんと俺も出て来ただろ？」
　いきなり修羅場へ突き出された一誠が恨む様な声を出すが、シンはそれをさらっと受け流す。
「間薙、シンか……」
「ちゃんとした挨拶はしていなかったですよね？　初めまして」
　いつの間にかバラキエルの雷光は消えていた。バラキエルはその両眼で、確かめる様にシンの眼を見る。シンも逸らすことなく、真っ向から受け止める。
　不意に、バラキエルは自分の腹部を衣服越しに撫でた。それにより何かを思い返している。
「――その気配、やはり同類か」
　ボソリと小声で洩らした言葉。その一言だけでシンはバラキエルにも魔人と交戦した過去があることを察する。
　敵意、殺意は感じられなかったが上手く隠しているのかもしれない。流石にバラキエルの心中まで見通すことは不可能である。
「止めて！」
　朱乃の声がバラキエルをハッとさせ、朱乃がすぐにシンと一誠を庇う様に二人の前に

立つ。
「何をする気？　彼らは私にとって大切な人たちなのよ。彼らを傷付けるなら私が貴方の相手になるわ！」
「朱乃……」
「それが嫌なら消えて！　まだ自分が父親だと思っているのなら……！」
バラキエルから気迫というものが完全に抜け落ちていく。それは、存在が色落ちしていくかの様であった。
「……すまん」
誰に対する謝罪か分からないまま、バラキエルは背を向けて去っていく。その背からは寂寥感を覚えさせられる。
「朱乃さん……」
朱乃は無言で一誠を抱き締めた。シンが側に居る状態で抱き締め返すのはどうなのだろう、と思いシンの方を見るが、音も立てずにシンは既にこの場から消えていた。
（いつの間に……）
友人の察しの良さと気遣いと行動の速さに舌を巻く。
一誠は朱乃に抱き締められたまま動かない。涙で濡れた顔が乾くまで、ずっとそのままであった。

◇

とあるビルの屋上。バラキエルは夜風に当たりながら夜景を見ていた。ただ、その眼球に目の前に広がる光景が映し出されるだけで、彼の心には何も染み入って来ない。
（こうなることは分かっていたというのに……）
娘から拒絶されることは分かり切っていた。しかし、オーディンの護衛として日本へ同行するという仕事が回ってきた時、それを拒むことは出来なかった。
成長した娘をこの目で見たいという欲求に負けてしまった為に。
拒絶されたことはショックでは無い。自分の存在が娘の心を傷付けたという事実の方が遥かにショックが大きい。
（朱璃。私は……）
「随分と黄昏ているではないか、バラキエル」
背後からの声が脳に達した瞬間、バラキエルは旋風が巻き起こされる速度で振り返り、雷光が宿った右手を突き出す。それに合わせるかの様に、喉元に銀の刃が突き付けられ、雷光と刃の切っ先が互いを貫く前に寸止めされる。
「以前の貴公なら、声を掛ける前に私に気が付いていたぞ？　老いたか？　衰えたか？

腑抜けたか？　バラキエル」
「マタ、ドール……！」
目の前に立つ魔人マタドールの名を、怒気を込めた声で吐き捨てるバラキエル。かつて、マタドールによって付けられた腹の古傷が激しく疼く。
「何をしにここへ来た……！」
「何やら闘争のニオイと気配を感じたのでね。どうやって、などと言う質問はしないでくれるか？　あんな結界を突破した話など自慢にもならないからな」
町周辺に張り巡らされた結界を気付かれずに抜けることなど不可能――だが、常識の枠外にいる魔人に対しては、その不可能という言葉は無意味なものと化す。
「そういう貴公こそ、この町へ何をしに来た？」
「答える義理など無い……！」
「オーディンの護衛、だけではないのだろう？　ああ、そうだ。思い出した」
マタドールの口調は芝居染みたものであり、わざとらしい。
「この町には貴公の娘が居るらしいな。幼少の頃一度見ただけだが、きっとさぞ美人になっているだろう。母親が美人であったからなぁ」
マタドールの口から妻と娘に関する言葉が出てくるだけで、腸が煮えくり返りそうになる。

「そういえば、貴公と妻の馴れ初めは、あの時の怪我が切っ掛けだったそうだな？」
「……それがどうした？」
「ふふふ。私が付けた傷が二人の男女を結び付けたと思うと感慨深いものがある。さしずめ私は貴公らのキューピットかな？」
瞬間、バラキエルは血が蒸発する様な怒りに呑まれた。長い人生に於いて、これほどの侮辱を味わったことがない。バラキエルを、朱璃を、朱乃を穢す言葉であった。
怒りのままにバラキエルは雷光を放つ。ほぼ零距離から撃たれる雷光に、マタドールも雷光に等しい速度で動く。
バラキエルに突き付けていたサーベルで、迫る雷光を真っ二つに斬り裂いた。神技とも言える反射速度。だが、雷光を斬ったマタドールも無事では済まなかった。
サーベルは帯電し、青白い火花を放ち、そのサーベルを持つ左手は、袖から腕に掛けて焦げ跡が付いている。
マタドールを以てしても回避ではなくダメージを覚悟で防がなければならない速度の雷光。それをその身に受け、マタドールは嬉しそうに声を上げる。
「ふはははは！　この衝撃！　技は衰えていないようだ！」
「――貴様は殺す。存在そのものを許してはおけない！」
殺意に塗れたバラキエルの宣言に、マタドールは顎を震わせて笑う。

「人間の女性だけでなく、私の口説き方も分かっているな、バラキエル」

失笑、失望

激昂するバラキエルが真っ先に行ったのは、マタドールへの攻撃ではなく周囲に結界を張り巡らすことであった。これにより周辺への被害が及ばず、また人々から気付かれることが無くなる。

一見すれば冷静な対応。しかし、やはりバラキエルの行動は冷静さを欠いていた。

彼が最初にすべきことは、マタドールと戦う準備を整えることでは無い。アザゼルにマタドールが出現したことを連絡し、援軍に来てもらうことである。今ならアザゼルと一緒に北欧の主神オーディンにも助力を得ることも出来る。

だが、バラキエルはそれをしなかった。

また、周囲から隠れる為に結界を張るという行動も、逆に言えばマタドールの存在をアザゼルたちに感知させにくくすることを意味している。

バラキエルの行動は全て自分とマタドールが戦うことしか考えていない。死んだ妻と自分のかけがえのない日々を愚弄したマタドールを自ら手で葬るという激情に任せたものであった。

場の準備が整った瞬間、バラキエルは右手を振り下ろす。雲一つ無い空間から無数の

落雷が降り注いだ。
「ははははは！　いきなり派手だな！　私好みだ！」
雨の様に降る雷。文字通り雷雨の中を、マタドールはサーベルと赤のカポーテを構えて哄笑しながら走る。
その動きはまさに人外であった。
前方に雷が迫ると分かれば急加速。通過点に落雷が起きると分かれば速度を緩め、更にそこから一歩踏み出せば即座に急加速と同じ速度となる。
緩急を交互に、それも滑らかで停止が一切無い。その動きも脅威であるが、雷の発生すらも見切るマタドールの動体視力――眼窩は空だが――が雷雨の中にある僅かな隙間を見通し、一筆書きの如く潜り抜けて行く。
人体ならばとっくに壊れていてもおかしくない動きで、上位に近い存在でも黒焦げた死体と化しているバラキエルの雷光の猛攻を躱していく。
「ふはははははは！　この程度かね？」
遊ぶように楽しみながら挑発するマタドール。
「こちらの台詞だ」
バラキエルが振り下ろした右手を逆に振り上げた時、地面を突き破り、マタドールに向けて光の槍が放たれた。

雷と光を操るがこそ『雷光』の異名。外れた雷光を即座に光の槍へと変換し、第二射としてマタドールを狙う。

大小様々な光の槍が、雑草の様にマタドールの周辺に現れており、それらが一斉発射される。更には頭上から雷も降って来る、三百六十度全ての角度からバラキエルの怒りがマタドールを襲う。

「くっ」

だが、マタドールは笑う。危機、絶体絶命な状況でさえも。死をもたらす存在である魔人は、自らに迫り来る死など恐れない。迫る死に対する魔人の反応は個々様々。

マタドールは四方八方から来る死を試練と受け取り、その先にある勝利へ向け情熱を燃やす。

赤のカポーテが、雷と光の槍に振るわれる。たかが布切れ一枚――などと楽観視する者などこの場には居ない。

はためくカポーテが雷に触れた瞬間、雷が軌道を変えた。光の槍に触れる。槍もまた軌道を変えた。実体の無い雷と光の槍が、雨粒の様に次々と弾かれる様に軌道を変えていき、外れるもしくは力同士が衝突し相殺される。

闘牛士のカポーテは、本来なら闘牛を誘導させる為の物。決してこの様な使い方や力がある訳では無い。しかし、魔人マタドールが一度それを振るえば、あらゆるものの力

の流れを変え、捌き、逸らす魔具或いは魔技と化す。
逃げ場も無い密集されたバラキエルの攻撃を、無傷で切り抜けてしまうマタドール。集中的な攻撃の為、それを抜けてしまえばバラキエルとマタドールの間に妨げるものは何も無い。
マタドールが踏み込む。瞬間移動の様にバラキエルの眼前に移動すると、既に構えていたサーベルから突きを放つ。
銀光の残像が一直線にバラキエルの心臓目掛け伸びていく。バラキエルも動くが、出来たことはサーベルと心臓との間に腕を掲げること。
マタドールの剣がバラキエルの腕に刺さり、その奥にある心臓を――

◇

「ッ！」
「どうしたの？　朱乃？」
いきなりソファーから立ち上がり呆然とする朱乃に、リアスは心配した表情で聞く。朱乃の顔色は蒼白であり、冷汗を流している。
リアスに声を掛けられ、我に返り周囲を見回す。オカルト研究部のメンバーほぼ全員

が様子のおかしい朱乃を心配する様な眼差しを向けていた。
「――大したことないですわ」
　これ以上心配させまいと微笑む朱乃であったが、その微笑みはぎこちなく、余計に周りを心配させる。
「朱乃、？せ我慢せずに話しなさい」
「――ごめんなさい。リアス」
　朱乃の内心を見抜いていたリアスの言葉に、申し訳なさそうな顔で謝りながら朱乃は立ち上がったソファーに座る。
「何か、今、嫌な胸騒ぎがしたんです」
「胸騒ぎ？」
「私にも理由は分かりません。言葉に出来ない感覚が背中を駆け抜けていって、気付いたら……」
　ソファーから立ち上がったと言う。実父のバラキエルと再会してから様子がおかしく、いつも通りに振る舞えない朱乃を心配するが、同時にそれも仕方のないことであると朱乃の事情を知っている者は納得する。
　朱乃はまた心ここにあらずという状態になっていた。
「朱乃、やっぱり父親のことで落ち着けないのかしら？」

側に座っている一誠に、リアスは小声で話し掛ける。しかし、返事が無い。
「イッセー？」
「は、はい！　どうしました？」
今気づいたといった様子で驚きながら反応する一誠。
「貴方もどうかしたの？　様子が変だったわ？」
「え？　いや、そうですか？　ちょっと考え事をしてたので……あははは」
笑って誤魔化す一誠をリアスは訝しげに見ていたが、ふとあることに気付いた。
「そう言えば、シンはどうしたの？」
「間薙ですか？　あいつなら野暮用を思い出したって言って少し前に出掛けましたよ？」
「この子たちを置いて？」
「ヒホ？」
リアスは膝の上に座るジャックフロストを上から見下ろす。リアスの視線に気付いて、ジャックフロストは首を傾げながら見上げた。
ジャックフロストだけでない。ピクシーは、小猫とアーシアと戯れ、ジャックランタンはいつものようにギャスパーに抱き締められている。
「まあ、いざとなったら喚び出すことも出来ますし、また戻って来ると言ってましたん

で」
「それなら、いいけど……」
朱乃の突然の行動、一誠の少しおかしな反応を連続して見たせいで、シンもまた何かしらの不調が有るのではと疑いと心配を同時に抱いてしまう。
リアスは思い過ごしであることを心の中で願う。
（すみません……部長）
一誠は心の中でリアスに謝罪する。一誠もまた妙な体調不良に悩まされていた。
頭の奥がチクチクと痛み、言い様の無い不快感が込み上げてくる。
（どうなってんだ？　これ……？）
――せ。――せ。――せ。
耳の奥で囁かれる男か女かも分からない掠れ声。いきなり聞こえたせいで丸まっていた背中が棒でも突き刺された様に真っ直ぐに伸びる。明らかに不審な行動であった為、一誠は慌てて周囲を確認するが、リアスは朱乃の方に意識を向けており気付いていない。他のメンバーも様子がおかしい朱乃の方を気にしていた。
（良かったー……）
ただでさえ朱乃のことを皆が心配しているというのに、これ以上心配の種を増やしたくない。

（さっきの声、一体何だったんだ？）
『声？　そんなものが聞こえたのか？』
（ドライグは聞こえなかったのか？）
『ああ。どうやら、お前にだけ聞こえる様にしているようだな』
（何で俺だけに？　というか誰の声なんだ？）
『誰の声かは分からないが、声の正体なら推測出来る』
（本当か！）
　答えがすぐに用意されたことに少し安心する。
『歴代の『赤龍帝の籠手』所持者の思念だ。それがお前の心に直接何かを訴えている』
（歴代の？　でも、今までこんなこと無かったぜ？）
『それだけ神器との繋がりが深くなったということだ。禁手化することは、神器と深く結び付くことを意味する。だから神器内に残った所持者の負の感情が、お前に干渉し始めた』
　あっさりと言われたが、ドライグの説明には一誠にとって無視出来ない言葉が含まれている。
（負の感情って……）
『別に不思議なことではない。相棒も分かっているだろ？　大きな力を持つことはそれ

だけ色々な存在から目を付けられる。幸福になることよりも不幸になることの方が多い。実際に歴代の赤龍帝たちは自らが災厄に見舞われたり、仲間が自分の力のせいで悲惨な目に遭った。その時の感情が『赤龍帝の籠手』に刻み込まれるのさ。呪いの様にな』

（呪い……）

『赤龍帝の籠手』のおかげで助かったことが多々ある一誠からすれば『赤龍帝の籠手』が呪われているなど寝耳に水である。

『呪いは所持者を破滅に導き、破滅した所持者もまた新たな呪いと化す。負の連鎖がそうやって巡り続けていくんだ』

一誠は左腕を見ながら唾を呑み込む。今も聞こえる囁き声が一誠を破滅の方へ誘っていくものだと思うと鳥肌が立ってくる。

『あまり耳を傾けるなよ、相棒。歴代の思念は煮詰まり過ぎて暗黒そのものだ。俺ですら手を焼く』

今出来ることを助言として一誠に送るドライグ。

（とりあえずそうする）

他に方法も浮かばなかったので、ドライグの助言に従い、囁きを紛らわす為にリアスたちと積極的に話し始めた。

会話に集中するにつれて声も気にならなくなる。

『赤龍帝の籠手』の奥底から怨嗟に満ちた声が囁き続ける。
――せ。――ろせ。――殺せ。魔人を殺せ。魔人を殺せ。
――魔人（マタドール）を殺せ。

◇

夜道を早歩きで独り進んで行くシン。
自分でも何処に向かっているのか分からない。体の衝動に従い、動き続けていた。
言い様のない不快感と背筋が粟立つ感覚。既視感を覚えるものであったが、はっきりと感じた訳でなく、まるでぼやけている様な曖昧な感覚でもあった。
そんな曖昧なものによって動く自分を馬鹿だと思いつつも足を止めない。止めることが出来なかった。
「おい」
誰かに声を掛けられ、ようやくシンは立ち止まる。
声の方へ目を向ける。
「一人でどこに行くのかのう」
アザゼル、オーディンの二人がそこに居た。

「嫌な感じがしたので」
　率直且つ簡単に説明する。正直、そうとしか言えなかった。
「成程。お前に俺たちがこうして顔を合わせたとなると、その嫌な感じは本物だな」
「わしらも一瞬だが不穏な気配を感じてな。だが、すぐに消えてしもうた。何かが感じにくくしとるらしい」
　数時間前に見せていたエロ爺の顔は消え、主神たる威厳に満ちた姿を見せるオーディン。アザゼルと共に真剣な表情をしており非常に頼りになる――これで顔にハッキリと付いた幾つもの口紅の痕が無ければ完璧であった。
　口紅の痕はひとまず見なかったことにし、真面目な話を続ける。
「お前の感じた気配、直感でいい。今まで会ってきた存在の中で近い奴はいたか？」
　アザゼルの言葉にシンは少し考える。あの嫌な気配、それに一番近しい存在は。
　頭の中で浮かび上がる候補が一気に黒く塗り潰されていく。そして、最後に残ったのは一つ。
「――魔人」
　ぼそりと呟いた時、アザゼルもオーディンも驚いた顔はせず納得した様子であった。
「やっぱりかー」
「本当に神出鬼没だのぉ」

「となると一番可能性が高いのはマタドールの奴か……」
「だろうなぁ。あ奴の戦いに対する嗅覚と勘は尋常ではないからのぅ。わしらの存在を嗅ぎ付けたのかもしれん」
うんざりした顔つきで魔人に対して不満を洩らす二人。それだけで魔人相手に手を焼いていることが伝わってくる。そして、現れた魔人の候補としてマタドールを挙げる。それにシンも賛成であった。何せ、嫌な気配を感じる度にマタドールの顔が脳裏にちらつく。
「悪いニュースが続くが……さっきからバラキエルに呼び掛けても返事が無い」
バラキエルとマタドールがこの町のどこかで交戦状態に入っている可能性が高いことを意味している。
「バラキエルの奴も、マタドールには因縁があるからな」
「本当に恨みしか買わない奴ですね」
「全くだ」
「恨みを買うことと喧嘩を売ることに関しては天才じゃぞ、奴は」
タンニーンが我を忘れる程の憎しみを抱かれたり、バラキエルとの間に因縁があったりと、改めて悪辣な存在だと認識する。
「とりあえずバラキエルが最後に居た場所は見当がついてある。そこへ行くぞ」

「はい」
三人が移動しようとすると――
「待ってくださーい！」
大きな足音を出しながら、ロスヴァイセが駆け付けてきた。
「勝手に、行かないで、下さい……！」
着くやいなや前のめりになって肩で息をする。全力疾走したせいで整えられた銀髪は乱れ、ぼさぼさになっている。
「お前はあの店で待ってろと言ったじゃろう」
「嫌です！　私はオーディン様の護衛なんですよ！　どこへでも付いていきます！」
顔を上げ、決意に満ちた眼差しでオーディンを見るロスヴァイセ。事情を知っているのか知らないのか、シンには分からないがロスヴァイセの真摯な気持ちは伝わってくる――これで頬に口紅の痕を付けていなければ言うこと無しであった。
シンの視線に気付き、自分の顔に口紅が付いていることを思い出したのか慌てた様子で喋り始める。
「違います違います！　誤解しないで下さい！　私もお店には入りましたけど、お二人が見られ続けると気になるって言って仕方なく席に着いただけなんです！　そしたら私にも女性の方が付いてしまって！　それで話している内にお二人が盛り上がってキ

スされて！　その流れで私もされただけなんです！　異性の方とのご縁はありませんが、まだそっちの道に入るつもりは無いんです！」

聞いてもいないのに早口で言い訳し続けるロスヴァイセ。

「そうなんですか」

「本当ですからね！　本当のことですからね！　信じて下さい！」

シンの素っ気無い態度をそういう風に見ていると誤解したロスヴァイセがしつこく食い下がってくる。シンとしては、とっととこの話を打ち切って魔人関連の話をしたかっただけである。

「お前はちょいと黙っておれ。すまんのぅ。こやつは少しポンコツな面がある」

「ポ、ポンコ――」

ポンコツ呼ばわれされ、言葉を失ってしまうロスヴァイセ。かなりショックだった様子。

「んなことより、さっさと行くぞ。バラキエルが心配だ」

「え？　バラキエル様がどうかしたのですか？」

ロスヴァイセには、まだ魔人関連のことは伏せてあったらしい。とは言ってもほぼ確信したのは、シンと接触した後であったので仕方ない。

「ロスヴァイセ。もう一度言っておくぞ。今からでも遅くは無い。あの店で待ってお

れ」
　今までは孫に接する祖父という柔らかな感じで接していたオーディンであったが、上の立場として威圧を込めてロスヴァイセへ命じる。
　ロスヴァイセもオーディンの圧に一瞬怯みかけるが、すぐに表情を引き締めて言い切る。
「私は、主神であるオーディン様の護衛としてここへ来ました。たとえ主がそう命じたとしても、私は最後まで護衛の任務を全うします」
　すると、オーディンはシンとアザゼルの方を向く。
『なあ？　こいつ堅物じゃろう？』
　声を出さずにロスヴァイセの生真面目さを半分呆れ、半分褒める。
「そこまで言うなら仕方ないのぅ。ちょいと魔人の顔を拝みに行くとするか」
　顎から伸びる長い髭を撫でながら、オーディンはロスヴァイセの同行を許可する。
「……え？」
　ここでようやく向かう先に魔人が居ることを知り、ロスヴァイセの目が点になる。
「魔人というと……あの魔人ですか？」
「魔人と言えばあの魔人しかなかろう」
「単独でこちらを攻めに来る……あの魔人ですか？」

「おうよ。しかも、多分待ち構えているのは、お前さんらと度々やり合っているマタドールだ」
「トール様と真っ向から戦える……マタドールですか？」
「だからそう言ってるじゃろうが」
魔人と戦うかもしれないということでかなり動揺しているらしく、ロスヴァイセの言っている内容がワンテンポ遅く感じる。
魔人。マタドール。ロスヴァイセはその情報を静かに噛み締めた後、さめざめと涙を流した。
「長い様で短い一生でしたね……」
逃げずに覚悟を決めている辺りは流石と言える。
「ほれほれ、行くぞ。安心せい。生娘を卒業するまではわしが守ってやるわい」
「バラキエルも早々にやられる様なタマじゃない。――タマじゃないが、流石に一人で相手するにはキツイ。とっとと見つけるぞ」
アザゼルが先導し、バラキエルが居た場所へ四人は急いで向かう。

◇

想像と現実が乖離した時、誰でも心に僅かな揺らぎが生まれる。
マタドールにしてもそうであった。数多に振るってきた自慢のサーベルから放たれる突き。柔い腕の肉など容易く貫き、その奥にある心臓もまた造作も無く突き刺す。
それがマタドールが刹那に見た幻想。現実は、マタドールの刃はバラキエルの腕半ばで止まっている。
柔いと思っていた腕の肉は、合金の如き硬さと粘りを持っていた。
予想外の手応え。予想外故にマタドールの心は弾む。安泰な勝利など退屈。苦難苦戦があってこそ得難き勝利となり、その勝利は己の成長へと繋がる。
鋼の腕も貫いてみせようとマタドールが意気込み、刃を押し込もうとした直前、マタドールは体を仰け反らせ、突き込む筈であったサーベルがバラキエルの腕から押し出される。
そのまま後方へ飛ばされていくマタドールだったが、数メートル移動した後に音も無く着地する。
「――効くな」
マタドールが顎を開く、中から白煙が立ち昇る。その全身からも同様に白煙が上がっている。それは、バラキエルの雷を受けた証であった。
バラキエルは、本来ならば外へ放出させる力を体内に満たすことによって自己強化を

密かに行っていた。力や肉体の強度を上げる為のものであり、全力で行えば神滅具の禁手相手でも真正面から戦える。

これにはもう一つ利点があり、体内の力をそのまま雷光へと変換することも可能なのである。これによりバラキエルはサーベルを通してマタドールに雷光を流し込んだのだ。

「肉を切らせて骨を断つ、という訳か」

ダメージを受けたというのに嬉しそうにカタカタと顎を震わせるマタドール。

上級悪魔でもただでは済まないバラキエルの雷光を流し込まれたマタドール。今ならば追撃を仕掛ける絶好の機会――と傍から見れば思われるかもしれない。しかし、今のバラキエルはマタドールに対して警戒を最大まで強めていた。

「ならば――」

バラキエルは肩に灼熱感と温い感触を覚える。肩から腕に掛けて伝わっていく温さはどんどんと温度を失っていき、最後には冷たくなって指先から滴として落ち、地面に赤い点を作っていく。

「私の場合はどうなるのかな?」

バラキエルの肩に出来た斬傷を見てマタドールは挑発する様に問う。

マタドールがバラキエルから離れる一瞬、マタドールはバラキエルに対してサーベル

を一振りしていた。反撃に対する反撃に、バラキエルも反応出来ずにマタドールの一太刀を受けてしまう。

　その反射速度と執念に背筋が寒くなる。容易く研鑽されたものではないことが嫌でも伝わってくる。改めて自分が魔人と対峙していることを実感させられた。

「肉の無い骨すら焦げる様な痛みと衝撃。懐かしさを覚える。今さらながら貴公と戦っていると実感させられるな」

　バラキエルの雷光を受けて逆に闘志を高めていくマタドール。それに応じて全身から放つ死の気配と魔力も高まっていく。戦えば戦う程、強敵であればある程にマタドールもまた己の力を高めていく。

　相手をする立場からすれば心底嫌な存在である。

「あの時を思い出すじゃないかバラキエル！　貴公との初めての戦いを！」

「――私にとってはどうでもよい過去だ」

「つれないなぁ、バラキエル。私はこれでも貴公には敬意を払っている。手負いの状態で私から逃れた時のことは鮮明に覚えている」

　懐かしむ様にして語るが、バラキエルからすればマタドールとは昔話に花を咲かせる様な間柄では無い。嫌悪している存在故にまるで友人の様な態度で接してくるマタドールに鬱陶しさしか感じない。バラキエルのこの反応は、マタドールを知っている者

たちにとって共通のもの。出会った相手の九割以上が彼を嫌い、拒絶する。
二人が対決したことに因縁などは無い。任務中に偶然出会い、マタドールの方から襲い掛かった。更にそこへ魔人と戦っていることなど知らなかった第三勢力の襲撃も加わり血みどろの大乱闘と化す。悪名轟く魔人であり凶悪な通り魔でもあるマタドールとバラキエルの戦いに巻き込まれて第三勢力は全滅。その最中にバラキエルも腹部に重傷を負わされたが、そこから何とか逃げ延び、その先で妻である朱璃に治療され、恋に落ち、夫婦となり子供を授かった。
マタドールのキューピット発言はあながち間違いではないと捉える者もいるだろうが、バラキエルからすれば全ては朱璃の優しさによって生まれた切っ掛けであり、マタドールが関わっているなどとは死んでも認めるつもりは無い。
「――一つ聞きたい」
「うん？」
過去を振り返っていたマタドールは、バラキエルのその言葉に意識を今に戻す。
「何かな？」
「あの日……朱璃を手に掛けたのはお前か……？」
静かな言葉と共に返答次第では即抹殺出来る様、雷光を迸らせる。
今にも目に焼き付く光景。血溜まりの中で事切れた朱璃。殴殺された術者と思わし

き複数の死体。そして、血に染まりながらも無傷であった朱乃。
何が起こったのかバラキエルが知る術は無い。ただ、血と死臭と共に残された魔人の気配が、マタドールがその場に居たことを示していた。
だから問う。一体何が起こったのかを。
「……」
マタドールは無言であった。先程まで高揚し饒舌に語っていたのが嘘の様な静かさ。
次の瞬間、マタドールが自ら沈黙を破る。哄笑によって。
「ふはははははははははは！　ふふふふふ！　はははははははは！」
心底可笑しい。それが伝わってくる程の笑い声。
「何が可笑しい！」
朱璃の死を嘲笑っているかの様な笑いに、バラキエルは雷光を今にも放ちそうになる。
「ははははは！　勘違いをするなよ、バラキエル。これは失笑だ。言動が矛盾している貴公と、そんな貴公に多大な期待を寄せていた自分の愚かしさへの失笑だ」
スイッチを切り替えた様にマタドールの笑いは消え、絶対零度の冷たさを帯びた言葉が吐かれる。
「矛盾、だと……？」

「私の目を欺けると思ったのか？　それとも無自覚なのか？　ならば言わせてもらおう。さっきの質問をした際、何故貴公は殺気と敵意を弱めた？　逆の筈だ。最愛の者を奪った相手ならば」
「そんなことは……」
　口では否定するが、マタドールの指摘に心臓を掴まれた様な気持ちになる。鼓動が乱れていく。
「無いとは言わせない。――貴公は本当は分かっているのではないか？　私にした問いの答えを？」
「何を馬鹿なことを……！」
「そうか。なら勝手に喋らせてもらおう。なに所詮は憶測。聞き流し、的外れで馬鹿な話と私を嘲ればいい」
　マタドールは剣先を突き付け、バラキエルの周囲を緩やかな速度で歩き出す。
「貴公は心の中で望んでいるのだよ。私が彼女を殺した、ということを」
「戯言を！」
　途端、雷光がマタドールに飛ぶが、既にその場所から二メートル程離れた位置にマタドールは移動していた。
「どうした？　攻撃が荒いぞ？　おかげで欠伸が出そうな程遅い。戯言如きに心を乱し

てどうする？」
　雷光の精度が欠けていることを指摘するマタドール。バラキエルは再び雷光を放とうとするが、それよりも先にマタドールの言葉が耳に入ってきた。
「本当は、彼女が死んだ原因は自分にあると自覚しているのだろう？」
　バラキエルの全身に満ちていた雷光の輝きが一気に失せる。バラキエルの心境を現すかの様に。
「堕天使と人間。大昔ならいざ知らず、今の世では何かと問題が生じる。ましてや貴公のつがいは『姫島』の出。日本の五大宗家が外の血、それも異形の血が混ざることを許すとは、とても思えない」
　何故そのことを知っている、という質問が喉から滑り出そうになるがすぐに愚問だと悟る。戦いと勝利に固執するこの存在が、そういう情報を怠る筈が無い。
「朱に交われば赤くなる、この場合は黒か。得体の知れない混ざりものは排除すると考えるのが常道。さてさて。先程の質問を質問で返すことになるが、この場合一体誰が原因となるのかな？」
　バラキエルを嬲る様なマタドールの質問返し。
「……」
　その問いに、バラキエルは答えることは出来なかった。答えが分からないから答えら

れないのではない。答えが分かっているからこそ答えられない。
「答えは至って単純。バラキエル、貴公のせいだ。貴公の存在が愛する妻を死に追いやり、愛する娘を危険に晒した」
「やめ、ろ……」
「その事実から目を背けて、まさか敵である私に全ての責任を背負わせようとはなぁ！　いや、違うな。私の言葉に縋ろうとしていたのか。自分の心を少しでも救う為に！」
「違う……！」
「情けないにも程があるぞ、バラキエル！　そんな情けない男だからこそ、妻を救えなかったのだな！」
「違う……違う！　私は……！」
未だに癒えないバラキエルの心の傷に言葉の剣を突き刺し、容赦無く抉る。
「私は愛や恋を否定はしない。それによって強くなる場合もある。だが――」
マタドールはバラキエルを冷笑する。
「貴公の様な腑抜けを生み出す場合もあるのは考えものだな」
バラキエルは反論しようにも出来なかった。その沈黙こそがマタドールの言葉を暗に認めてしまっていることを意味する。
「どうした？　何故そんな顔をする？　所詮は私の戯言。見当違いと言って笑い飛ばし

たらどうだ？　さあ、遠慮することは無いぞ？　盛大に嗤え！」
　両手を広げ舞台役者の様な大仰な動きをするマタドール。しかし、バラキエルはマタドールの言葉通りには動かなかった。
「……そういえば、貴公の娘は元気かね？」
　マタドールが朱乃のことを話題にしようとした瞬間、バラキエルのズタズタに裂かれた心に闘志の火が再点火する。
　最愛の妻を失ったバラキエルは、残された朱乃だけはどんなことがあろうとも守り抜かなければならない。父である自分を娘から拒絶されようとも、娘の幸福だけは命を賭して守る義務がバラキエルにはある。
　萎えかけていた闘志がバラキエルの瞳に宿るのを見て、マタドールは少しだけ愉快そうに笑う。
「娘だけは絶対に守る、と言いたげな目だ。だが、出来るのかな？」
　マタドールは口撃を緩めない。
「妻は死なせた男が、都合よく娘だけは守り通せるのか？　一度は両方とも失い掛けた貴公に？」
　事実を並べ、バラキエルを追い詰めていく。
「娘との仲は良好かね？　まあ、ここに一人で居ることはある意味答えか。守ると思っ

ていても娘から拒絶されるとは滑稽だ。そんな男が父親面するのは更に滑稽だが」
まるで見てきたかの様に、バラキエルと朱乃の今の関係を憶測で語るマタドール。
「諦めろ、バラキエル。無駄な決意と覚悟だ。妻を救えなかった貴公に、娘は守れない」
楔の様な呪いの言葉をバラキエルの心に打ち込んでいくマタドール。バラキエルは、それを受け止めるしか無かった。一度は認めてしまったこと。最早喚いて否定など出来ない。
マタドールの言葉を受けて、バラキエルの中で蘇る記憶。息絶えた妻を抱き上げたとき、両手に伝わってくる死者の重みと冷たさ。
命は助かったが、その心を救えなかった娘のバラキエルに対する失望と怒りの声。
『どうして！　どうして母様のところに居てくれなかったの！』
『父様と私に黒い翼が無ければ母様は死ななかったのに！』
『嫌い！　嫌い！　あなたも！　この黒い翼も大嫌い！　皆大嫌い！』
バラキエルの性格故に全てを受け入れるしかない。呪詛の様なマタドールの言葉を。だが、たとえどんなに朱乃から嫌われ様とも朱乃を守るということだけは折れない。それがバラキエルの最後の一線であり、最期に何も出来なかった朱璃への償いであった。
これまで饒舌にバラキエルの心を切り裂いてきたマタドールであったが、バラキエルの反応を見て、これ以上どうこう言うのは無意味と悟る。

バラキエルには覚悟が見えるが同時にまだ迷いも見える。だからこそ、マタドールの闘志は上がらない。一度萎えてしまったものが簡単に昂らせることは難しい。特に一度は失望してしまった相手である。もう一度同じ事が起きるかもしれないことを危惧していた。

期待を裏切られてバラキエルに辛辣に接するマタドールだが、その期待はまだ完全に失せていない。

「はぁ……」

マタドールが溜息を吐く。傲岸不遜なマタドールを知る者からすれば、珍しい行為であった。

「今日はここまでだ」

「――何だと？」

戦闘狂のマタドールが戦いを中断することにバラキエルは驚く。同時に何かを企んでいるのか疑ってしまう。

「今の貴公を倒しても何の価値も無い。倒した獅子や虎の皮を飾るのは誉れかもしれないが、翼の折れたカラスを飾るなどただの恥だ」

強者に対してそれなりに敬意を払うマタドールがバラキエルに堕天使の蔑称を使う辺り、かなり怒りを抱いているのが分かる。

「哀しいな、バラキエル。私は哀しい。認めていた男がこうも情けなくなってしまうとは。この傷心を癒すのにはしばらく時間が掛かりそうだ」

マタドールがサーベルを振るう。空間を薙ぐ様に数度煌くと、バラキエルが張った結界に斬撃の痕が刻まれた。

「しばらくの間は大人しくするとしよう。追手を放っても構わないが、出来るならアザゼルぐらいの実力者で頼む。今の私では弱者など即殺してしまいそうだ。そうなれば可哀想だろう？　八つ当たりでいじめ殺される者達が。次に会う時は、少しはマシになっていることを願おう」

赤いカポーテを振るうと旋風が生じ、亀裂が入った結界を内側から破壊する。

巻き起こされた風から顔を守るバラキエル。一瞬だけ目を逸らした後、マタドールはバラキエルの前から去っていた。

（逃げられた……いや、見逃されたと言うべきか……）

『遅れたが貴公の質問に答えておこう！』

その時、マタドールの声がこだまする。

『――私は彼女の最期を知る男だ！』

「何だと！」

不意に聞かされた新たな事実。

「どういうことだ！　答えろ！」
問い返すバラキエル。だが、もう答えが返ってくることは無かった。

◇

「動いたか、オーディン」
『それで、どうする？』
「言わなくても分かっている筈だ。主神殿は少々好き勝手が過ぎた。そろそろご隠居を願おう」
『いいのかぁ？　密かに手駒は創ってきたが、孤軍奮闘になるぜぇ？』
「構わん。他の者たちが口では不満を漏らしているが、オーディンとトールに何も出来ない腰抜けたちだ。当てになどならん」
『ヒャハハハ。その二柱を前にして強気でいられる奴なんていないさ。俺たち以外は、な』
「その通りだ。最早、オーディンとトールの時代では無い。北欧神話の未来を創造するのは、我々だ！」

返礼、高慢

その日の夜の兵藤家は騒がしいものであった。

飲みに行った筈のオーディン、アザゼル、ロスヴァイセが予想外に早く戻って来た。何故か野暮用で出掛けていたシンと、血に染まったバラキエルを連れて。

地下の大広間で談笑していたリアスたちも、負傷しているバラキエルを見て言葉を失う。特に朱乃など顔面蒼白となっていた。

すぐにアーシアの神器によってバラキエルに治療が施される。腕や肩に斬傷を負っていたが、出血の割に傷は深く無くすぐに塞がった。

その間にアザゼルは、バラキエルから直接聞いたことをリアスたちに説明する。

「……どうやら駒王町にマタドールが潜伏しているらしい」

『なっ！』

アザゼルから知らされた凶報に誰もが驚き、二の句が継げなくなってしまう。

魔人、それも好戦的で悪名高いマタドールが駒王町の何処かに潜んでいる。通り魔などの比では無い惨劇を予感させ、縄張りの主であるリアスの顔色が変わった。

「ソーナに連絡してすぐにでも警戒態勢を――」

「ちょっと待て」
「何故止めるの！」
「下手な真似をすれば奴を刺激するだけだ。最低でも俺かオーディンの爺さんぐらいが当たらないと余計な犠牲が出る」
　リアスはアザゼルの言葉に反論出来ず、悔しそうに唇を噛む。彼女の兄であるサーゼクスもマタドールと戦った過去があるが、その際に重傷を負っている。魔王クラスでも命の危険がある相手。そこに至っていない自分たちでは、アザゼルの言う通りマタドールの贄になるだけである。
「別に何もするなとはまで言わない。だが、事が事だ。慎重に進めないとな。バラキエルにもう少し詳しい事情を聞く。お前らはそれまで待機していろ」
「……分かったわ」
　本当ならば駒王町という縄張りの主として、方針を決めるべきはリアスである。しかし、今回ばかりはプライド云々は置いて、アザゼルの言う通り慎重に考えるべき事案であった。
　犠牲になるのは駒王町の人々だけではない。彼女の大切な眷属や友人たちもマタドールの毒牙に掛かるかもしれないのだ。
　リアスは、他のメンバーに詳細を知るまで待機する様に指示を出す。念の為に木場、

ギャスパー、シンに外出を控えさせ、兵藤家に泊まる様に指示を出す。そして、ソーナに今回のことを連絡し、互いの今後の動き方について相談をすることとなった。

リアスが冷静な判断が出来ていると分かると、アザゼルは治療を終えたバラキエルの下へ向かう。

アザゼルはバラキエルと二言三言喋ると、別の部屋に移動することを皆に告げ、上の階へ上がっていった。バラキエルがアザゼルと一対一で話したいことがあるらしい。

話が終わるまで待機という形になったが、全員が非常事態に備えているせいで張り詰めた空気となる。

ピクシーたちもその空気に中てられていつもの明るさと騒がしさは鳴りを潜め、リアスたちの動向を眺めていた。

待っている間、ただ時間が過ぎていくのを黙っている訳も無く、リアスは今後の方針について大まかに決め、眷属たちと話し、検討して内容を詰めていく。

オーディンたちはリアスたちの会話に口を挟まず、成り行きを黙って見ている。余所者である自分たちは下手に参加するべきではないという意思表示であった。

リアスにとっては頭の痛い話である。ただでさえ『禍の団』の英雄派が時折襲撃を仕掛けてきているのに、追い打ちの如くもっと質の悪いマタドールまでもが来襲してきたのだから。

一瞬、英雄派とマタドールを衝突させるという策も考えた。両方とも同盟関係では無いので、出会えば何かしらの諍いが起こるだろう、がすぐに却下した。

争うことはほぼ間違いないが、そうなると周りの被害など関係無く暴れる可能性が高い。リアスたちは駒王町に被害が出ないよう細心の注意を払っているが、英雄派やマタドールにそんな気遣いなど期待出来ない。

また、『禍の団』に属している魔人、マザーハーロットとだいそうじょうが出てくる危険性もある。駒王町を魔人たちの戦場にさせる訳にはいかない。

悔しいことに、考えれば考える程自分たちが大したことが出来ないことに気付かされる。グレモリーの名と駒王町を治める者としていることに誇りを持つリアスにすれば屈辱であった。

理不尽に屈しない力が欲しいと切に思う。ただ、願い念じれば向こうの方から勝手に転がり込んでくるものだとは思っていない。せめて今起こっている理不尽を自らの糧に出来る程の成長はしたい。

眷属たちと話し合いながら、リアスは頭の隅でそんなことを考えていた。

「――という具合にしたいのだけど、朱乃、貴女はどう思う？」

右腕である朱乃に意見を求める。しかし、返事は無い。朱乃の方を見ると、眉間に皺を寄せ何かを真剣に考えている様子であった。

「朱乃？」

「――は、はい！　何でしょうか？」

もう一度リアスに名前を呼ばれてようやく気付く。その様子からマタドールのことでは無く、別のことを考えていたらしい。

（父親のことでしょうね……）

ギクシャクとした親子関係であったも、血を流す父親を見て平静を保てない様子。リアスはそれを咎めるよりも、そのことに今になって気付いた自分の視界の狭さを自責する。

（私も朱乃と変わらないわね）

気負い過ぎていることを自覚すると、リアスは徐に立ち上がった。

「少し行き詰ってきたわね。気分転換にお茶でもしましょう」

「それなら私が――」

「朱乃はそこに居て。偶には私が淹れるわ」

「なら私が手伝います」

「……私もお手伝いします」

アーシアと小猫が手伝いを買って出る。

「ワシも飲みたいのぉー」

そう言って横目でチラチラとロスヴァイセを見る。
「分かりましたよ、もう。私も手伝います」
「ありがとう。なら行きましょう」
リアスは三人を連れて上の階へ行く。
残された者たちは、各々がそれぞれのやり方で時間を潰す。
ゼノヴィア、イリナ、木場は魔人と遭遇した際にどの様にして戦うのか。魔剣、聖剣などは魔人に対して有効なのかを話し合う。
ギャスパーは震えながらも、自分の魔眼でどれだけ戦えるのかジャックランタンたちに相談していた。以前の三勢力会議でマタドールと会った際に、魔眼の力とシンとの連携で彼に手痛い一撃を入れている――その結果、マタドールに顔と名前を覚えられたが――同じ手は二度とは通じないが、皆の助力にはなるかもしれないと彼らなりの作戦を出していく。
オーディンは置物の様にその光景を目を細めて眺めていた。
皆がそれぞれするべきことをする中で、シンはひっそりと立ち上がってこの場を離れる。
「どうした？」
途中で一誠が気付く。シンは彼に携帯電話を見せる。

「家に連絡だけでも入れておく。もしかしたら親が帰っているかもしれないからな。あとはケルベロスもこっちに喚ぶ必要もあるしな」

自宅で留守番しているケルベロスをいつまでも放っておけないので、こちらに召喚するつもりであった。

「そっか」

それで一誠は納得し、シンは今度は引き留められることなく部屋の外に出る。

部屋から出たシンは迅速な行動で、家の電話にメッセージだけ吹き込み、ケルベロスを兵藤家に喚び出す。

「グルルル。何カアッタノカ？」

急に喚ばれたケルベロスは特に動じる様子は無く、そんなケルベロスにシンは今まであったことを軽く説明する。デートのくだりやオーディンたちが現れたことについては興味が無さそうに聞き流していたが、魔人が現れたと聞いた途端、ケルベロスの銀色の体毛が逆立つ。

「ホウ……？」

ディオドラとのレーティングゲームの際にケルベロスは魔人の一人であるマザーハーロットと接触し、戦っている。傷を負うことは無かったが、ケルベロスもマザーハーロットにかすり傷一つも与えることが出来ず、更には手を抜かれて戦われているこ

とにも気付いており、それがケルベロスのプライドを甚く傷付け、魔人相手に密かにリベンジすることを狙っていた。

魔人と遭遇してこう考える方が稀であるらしい。会った大抵の者は死に、残りは殆ど怯えるか二度と会いたくないと思うか。魔人相手に心を折らないのは、アザゼル、サーゼクスなどの上位者ぐらいであった。

下手をすればこのまま単独で魔人を探しに行きそうな程であったが、シンはしゃがんでケルベロスと目を合わせる。

「言っておくが、まだ待機だ」

圧を込めて言うのは好ましいことでは無いが、釘を刺すことでケルベロスが暴走するのを止められるなら、憎まれ役ぐらいは簡単に出来る。

「――ワカッタ」

ケルベロスは目線を逸らすとシンに素直に応じる。若干の不満を感じさせる態度であったが、逆らう程では無いらしい。

シンに言われて一誠たちが居る地下へと向かっていった。

やることは全て終え、そのままケルベロスの後を追って地下に戻る――のではなく、足が自然とアザゼルたちが居る方に向かう。

表面上は冷静であっても、シンもまたマタドールの存在に落ち着くことは出来ず気に

なっていたのだ。同じ魔人として、力或いは本能が刺激されるのか、心がざわつくのが収まらない。
アザゼル、バラキエルが何処で話し合っているのか分からない筈だが、見えない力の残滓の様なものを直感で感じ取り、特に立ち止まることなく移動する。
そして、その足はとある一室の前で止まった。
内容までは聞き取ることは出来ないが、二人の会話する声が聞こえてくる。
「アザゼル先生たちはここに居るのかー」
背後から声が聞こえ、後ろを見ると何故か一誠が居る。
「ちょっとトイレに行ってて、その途中で気になって」
一誠もまたシンと同じく落ち着かない気分の様子。正直、ここで待っていて一体何になるという不合理を自覚する。落ち着かない心境が彼らに無駄な行動力を与えていた。
するとドアが開き、中からアザゼルが顔を出す。
「何だお前ら。こんな所に居て」
ドアの側で並んで立っている二人にアザゼルは目を丸くする。
「――まあいいや。丁度良かったしな。おい、シン。ちょいと付き合え」
「何かするんですか？」
「ん？　釣り」

「は？」
　非常事態な筈なのに、アザゼルの釣り宣言を聞いて一誠は呆けた声を出してしまう。
「バラキエルはそこまで重傷じゃないがここで休ませておく――気になるんだったら中を覗いてもいいぜぇー」
　アザゼルが誰かに呼び掛けると、階段を勢い良く降りて行く音が聞こえてきた。
「朱乃さん……？」
「だろうな」
　朱乃が複雑な心中を抱えていることが分かる。
「朱乃さんとバラキエルさんの間に何があったんですか？」
　詳細を知っているだろうアザゼルに聞く。すると、アザゼルは少しだけ顔を顰める。
「知っているけどなぁ、俺も所詮は堕天使だ。どうしても身内に肩入れした様な説明になっちまう。とは言え朱乃から聞けば恨み言を含んだ様な話になるだろうしなぁ……。悪いが詳しい事情はサーゼクスかグレイフィアに訊いてくれ。この二人なら中立の立場で説明出来るからな」
「そうですか……。うーん、二人に直接連絡する方法ってあるのか……？」
　魔王とその右腕であり伴侶である女王である。いくら身内の眷属だと言っても、こちらから連絡を取ることは難しい様に思えた。

「今はこっちも色々と騒がしくなってきているしな。その内、向こうから来るさ。――それよりも、朱乃のことはよく見ておけよ、イッセー。前に気にしてやってくれと言ったが、あいつは今は色んなことが一気に起きて精神的に不安定だ。下手な真似しない様にお前が支えてやれ」

「――はい！　分かりました！」

事情は知らないが、それでも精一杯の支えになろうと意気込んで返事をする一誠。それを聞いて満足そうに頷くとシンを見る。

「という訳で出るぞ。ああ、あと爺さんも連れて行くからな」

「オーディンの爺さんも？　釣りに行くんですよね？」

「ああ。だから餌も豪勢にしないとな」

アザゼルの言っていることが理解出来ず一誠は首を傾げるが、シンの方は釣りが何を意味するのかを察する。

「――そういうことですか。確かに餌は獲物の好みに合わせた方がいいですね」

「そういうことだ」

「盛り上がっているのぅ」

「うおっ！」

オーディンが音も気配も無くいつの間にかそこに立っており、一誠は急な登場に驚い

て声を上げる。
「よお、爺さん。ちょっと大物釣りに行こうぜ」
「しょうがない。ちと付き合ってやるか」
オーディンは白い髭を撫でながら了承する。何処まで話を聞いていたか知らないが、アザゼルの言葉にすぐに応じた。
「出掛けてくる。ピクシーたちのことを頼んだ」
「ああ、分かった」
仲魔のことを一誠に任せ、三人は玄関へ向かおうとすると、勢い良く階段を駆け上がる音が聞こえてきた。
「オーディン様！」
慌てた様子のロスヴァイセが駆け込んでくる。その手に頼まれたお茶が乗った盆を持って。
「頼みますから私に黙って動かないで下さいよー！　私は護衛なんですよー！　護衛なのに護衛の仕事が出来なかったらどんな目で見られるか！　それともオーディン様は私をリストラしたいのですか！」
半泣き顔で問い詰めるロスヴァイセ。
「そう大声を出すな、ロスヴァイセ。そこまで耳は遠くなっておらんわ。あとこの茶は

お前が淹れたのか？　まあまあだのう。密かに嫁入りの為の修行もしておるわけか」
　オーディンは盆に乗っていた筈のカップを戻す。いつの間にか飲み干されていた。
「あ、いつの間に！　というかそういう分析は止めて下さい！　セクハラですよ！」
　顔を真っ赤にするロスヴァイセ。図星であったらしい。
「まあ、ちょっとばかし出掛けるから今度こそお前はここで待っておれ」
「絶対に嫌です。何度も言いますが私は護衛です。オーディン様から絶対に離れません」
「なんじゃお前。ワシに惚れておるのか？」
「百パーセント仕事です」
「カーッ、そこで『はい』ぐらい言える愛嬌があったらのう」
　オーディンは冗談を真面目に返されて嘆く。
「はいはい。雑談はそこまでにしときな。絶対に離れないって言うんなら連れて行くしかないだろ。イッセー、リアスにこのこと伝えておいてくれよー」
「は、はい。分かりました」
　頼まれて了承したが、すぐに後悔した。ピリピリとしているリアスに、アザゼルたちが独自に動いたと伝えたら、どれだけ不機嫌になるか。とばっちりは来ないだろうが、それを間近で見るのは心臓に悪い。

アザゼルが先頭を行き、続いてオーディン、ロスヴァイセ。最後尾をシンが歩く。
その時、シンは肩を強く掴まれた。
「――どうした？」
「え？」
肩を掴むのは、一誠の左手であった。何か用があるのかと思い、聞くが一誠の方は惚けた様な声を出す。
その間にも左手の指先が食い込んでいく肉や骨を潰さんばかりに握られていく。明らかに引き留めることが目的で掴んでいない。
「――うおっ！」
一誠は驚いた声を出して左手を離す。今気付いたと言わんばかりに。
「悪い……。何でもない。本当に何でもないんだ……」
左手を押さえる様に右手で覆う一誠。一誠自身に何か変化が起きているのは一目瞭然であったが、シンは追求することはしなかった。
「そうか」
短く一言だけ。先程のことを何事も無かった様に流してしまうと、先に行ったアザゼルたちの後を追っていく。
その背を見送った後、一誠は己が左手を見つめる。自分の意思に反して左手が動い

た。この手の中に嘗ての赤龍帝の怨念が渦巻いているとしたら。
そう考えると自分のものである筈の左手が得体の知れないものに見えてしまった。

◇

アザゼルがシンたちを連れてきたのは、とあるビルの屋上であった。華やかな装飾で彩られたテーブルと椅子が中央に置かれ、テーブルの上には豪勢な料理と酒瓶が並んでいる。
屋上だというのに風は無く寒さも無い。室内にいるかの様であった。シンの目には屋上を囲う結界が映っており、これにより外と中を隔絶している。
「まあ、座れ」
アザゼルに言われて全員が椅子に座る。
釣りと聞いていたロスヴァイセは、釣りとは全く無縁な場所に連れてこられて先程から首を傾げている。
「このビルはうちが買い取ったもんだ。当然中に居る奴らも全員堕天使だ」
アザゼルは説明しながら豊富な種類の酒瓶の中からワインを手に取り、コルクを抜く。

「ほれ、爺さん」
「おお、すまんのう」
　オーディンが差し出したワイングラスの中に並々に赤い液体が注がれていく。
「お前も飲むか？」
　注ぎ終えたアザゼルがシンにも聞いてくる。
「俺は未成年ですよ？」
「かてぇな。無礼講で行こうぜ？」
「アザゼル先生は『先生』ですよね？」
　わざと先生の部分を強調する。冥界でライザーに勧められて飲んだことはあるが、あくまで冥界のルールに従っただけ。人の世界に居るのならそちらの方に従う。
「分かったよ。ちゃんと酒以外にもジュースも用意してあるよ。無添加果汁百パーセントに炭酸飲料、ミネラルウォーターもあるぞ」
　アザゼルの言う通り酒の種類が豊富なら、ジュースの種類も豊富であった。
「で？　仕掛けの方はどうなっておる？」
「こっち側に入ったら即座に外との繋がりをシャットダウンだ。いくら奴でもそう簡単には外で出られない。ビル内の堕天使には俺らが来たら全員ビルから出る様に伝えてある。最悪の状況になっても被害は最小限で済む筈だ」

「うむ。なら良し」
「あのー……」
　ロスヴァイセがおずおずと二人に声を掛ける。
「何だ？　ああ、お前さんもこれが飲みたいか？」
「あ、ありがとうございます。――じゃなくて！　あの、釣りに行くと私は聞いたんですが……？」
　すると、アザゼルとオーディンは揃って眉間に皺を寄せる。
「だから今から奴を……ってお前、まさか釣りという言葉をそのままの意味で捉えておるのか？」
「――違うんですか？」
「……マタドールを釣り上げられるかどうかを試すって話だぜ」
「え？　……えええええええ！」
　今知った。そんな絶叫を上げる。
「お前なぁ……ワシらが魔人が出たというのに呑気に魚釣りに出かける様な無責任な奴らに見えるのか？」
「……すみません」
「おい、爺さん。このヴァルキリー、俺たちのことそういう輩だと思っていたみたいだ

ぞ」
「かー、歳を重ねるのは嫌だのう。若いモンに威厳が届かなくなるわい」
「日頃の行いの賜物ですね」
『やかましいわ！』
　シンが皮肉を言うと、二人は声を揃えて反応した。
「――まあ、あれこれ言うのは後にして、ロスヴァイセ。知らずに参加したお前に一応説明しておく」
「……はい」
　自分の置かれている状況を把握してロスヴァイセは少し意気消沈しているが、返事はする。
「バラキエルに聞いた話じゃ、あいつは去り際に暫くの間は大人しくするって言ってたそうだ」
「その言葉を信じるのですか？」
　血と死と闘争に飢えた魔人であるマタドールが何もせずにじっとしているなど、ロスヴァイセには考え難いことである。
「あいつはナルシストでエゴイストでバトルジャンキーな心底どうしようもない奴だが、そのどうしよもなさに負けないくらいプライドも高い。自分でした約束を反故する

様な真似は恐らくはしない。とはいえこっちも完全に信じた訳じゃねぇ。だからこうやって試してんだよ」

「ワシらを餌にしてな」

堕天使のトップ。北欧神話の主神。同属の人修羅。新進気鋭の戦乙女。それが目立つ場所に集って飲み食いをしているのである。マタドール相手にこれ以上の挑発は無い。

マタドールがプライドに準じれば暫くの間、駒王町は平和である。しかし、戦いへの欲に駆られれば、即座にこの地で闘牛士対神、堕天使、人修羅、戦乙女の戦いが始まる。

（とはいえどうしたもんかねぇ……アイツの気配も無いし帰すならまだ間に合う。それとなく伝えるか爺さん？）

（強制もせんし忠誠心を試すつもりは無いからのう。ロスヴァイセが正直に行動すればよい。だがのう、ここで何か言えばそれだけで後ろめたさが生まれるかもしれんなぁ）

ロスヴァイセに聞こえない様にボソボソと小声で話し合う。アザゼルもオーディンもロスヴァイセを引き留める様なことはせず、本人の意思に任せるつもりであった。しかし、何かを言えばそれだけでロスヴァイセの判断を鈍らせるかもしれないと思い、下手なことを言えない状態となる。

ロスヴァイセ本人は自分が想像以上に危うい場所に居ることを痛感するが、すぐに覚

悟を決めた顔付きとなり、グラスを突き出す。
「分かりました。私も精一杯釣り餌を成し遂げてみせます」
「よし。良く言った」
　早々に決断したロスヴァイセを褒め、オーディンはグラスに酒を注ぐ。グラスに満たされた酒を、ロスヴァイセは一気に飲み干す。アザゼル、オーディン以上のハイペースで酒を消費する。
「そういやシン、お前と賭けをしてたなぁ。勝ちか負けかいまいちよく分からん結果になっちまったが、図らずもお前にメシを奢ることになったし、俺の負けでいいか」
「引き分けでいいですよ。白黒つけるのは次の賭けに持ち越しましょう」
「生意気言うねぇ。だが、そりゃいいな。機会が巡ってきたら一勝負と行こう」
　魔人と殺し合うかもしれないというのに、そんなことも微塵も感じさせない朗らかな笑みを浮かべながら、アザゼルは既に空になっているシンのグラスにジュースを注いだ。
「でも、戦い前にこれだけ飲食をとっても大丈夫でしょうか……？」
「どんだけ食おうが飲もうが大したハンデじゃない」
「大体、ワシらがこの程度平らげて音を上げる訳なかろう」
　グラス一杯の酒を飲んでそれなりに体を熱くさせているロスヴァイセに対し、アザゼ

ルたちは冷めた反応をする。
「そうですか……その、間薙君の方は？」
「まあ、自制はします」
シンは一気に大量に飲み食いなどはしないが、一定の速度を保ったまま料理と飲み物を消費していく。
「じゃあ、私も……」
改めて並んだ酒や料理を眺める。どれもが見たことも無い高級感溢れるもの。
「うう……」
強い誘惑に襲われながらも、ロスヴァイセは己を縛めて食事を開始した。

◇

食事が始まって二時間後。
マタドールの襲撃は未だ無く、シンたちは雑談を交えながら食事を続けていた。最初にあった料理も三分の一にまで減っている。
一見すれば何事も無い楽しい食事会。実際は――
「なんじゃロスヴァイセ。さっきから手が止まっておるぞ？　グラスも空だわい。ほ

れ、注いでやる」
「あ、あ、ありがとうございます……」
傾けられる酒瓶にグラスを出すロスヴァイセ。その手は小刻みに震えていた。オーディンがグラスに酒を入れると、嵐の海原の様にグラスの中の酒が波打つ。
「あ、ああ、あの……」
「何じゃ？」
「見られていますよね……？」
ロスヴァイセは全身で感じていた。何処からか向けられてくる冷たくも鋭い視線を。止めようとしても体が震え、視線の重圧によって胃に穴が開きそうな気分になる。酒も食べ物も取ることが出来ない。今胃に入れたら確実に戻してしまう。
「そうだのう」
マタドールに凝視されていることを簡素な言葉で済まし、オーディンはロスヴァイセに注ぐ筈だった酒を自分のグラスに注ぎ、平然とした態度で飲む。
ロスヴァイセからすれば理解出来ない行動である。敬愛している主神ではあるが『もしかしたら耄碌が始まっていて色々と鈍くなっているのでは？』と失礼極まりない疑念すら抱いてしまう。
だが、そんな疑念も残りの二人を見ると霧散してしまった。

「――という話さ。朱乃は今でも堕天使が嫌いだろうな。正直な話、朱乃が腹の中で俺のことをどう思っているのか分からねぇ。そういう態度を見せたことは無いが……」
「そういう事情ですか」
「ああ。とは言え話半分で聞いておけよ。俺も堕天使だ。知らない内にバラキエルの肩持つ様な話に歪めているかもしれないからな」
「そうしておきます」
　シンはアザゼルから朱乃とバラキエルの過去を聞いていた。話を振ったのはシンであり、最初はアザゼルも渋ったが、結局話すこととなった。シンの性格からして、どちらかを同情したり非難したりしないドライあるいは中立でいられると思ったからだ。
　三者三様でこの状況に適応しているのを見ると、ロスヴァイセは自分が神経質なのではないかと疑ってしまう。
「あ、あの！　平気なんですか、皆様は！　確実にいるんですよ！　魔人が！　マタドールが！　その、生意気を言いますがもう少し緊張感というものを……」
「いいんだよ。俺たちの目的はアイツをこれでもかってぐらい虚仮にしてやることなんだからな。見ているだけならそれで良し。襲い掛かって来てもそれで良し、だ」
「挑発をし過ぎて一般市民に害を為す可能性は……？」
「百パーセント無い、と断言は出来ないが、まあ九十九パーセントは無いだろうな。アイ

ツは間違いなく最悪の通り魔だが非戦闘員に手を出したことは無い。なにせ戦い大好き魔人だからなぁ。戦えない奴を殺しても詰まらない思いをするのは自分だってのをよく知っている」

『そういう面があるのもヴァーリが好意的な理由かもしれんが……』という言葉は胸の中で留めておく。

「それでも生きた心地がしないのですが……」

「見られているとしても穴が開くわけじゃなかろう。のう？」

「……そうですね」

オーディンもまさか話を振った相手が、視線で物理的に穴を開けることが出来る人物などとは夢にも思わなかっただろう。

「因みに、これっていつまで続けるんですか……？」

「日が昇るまで」

日の出まであと数時間はある。その間、ずっとマタドールから視線を送られ続けると思うとげんなりした気分となってくる。

「ロスヴァイセ。ちょっと聞きたいんだが、ナルシストと自己中で暴力沙汰をよく起こす男ってどう思う？」

アザゼルからの唐突な質問。しかし、根が真面目なせいかロスヴァイセは答えてしま

う。
「そういう方は遠慮したいですが……その質問にどんな――」
「だとさぁ！　聞いてるか！　お前みたいな男は御免被るとさ！　いっつもカッコつけている癖にモテないなぁ！　マタドール！」
「ええ！」
　見せつけるだけの挑発が直接的なものへと変わり、マタドールを詰る声を飛ばす。
「ちょ、ちょちょちょ！　ちょっと待ってください！　あんまり刺激を！」
「言わせておけ。アザゼルも戦友に血を流させられて腹が立っているのだろう。あわよくば敵討ちをするつもりかもしれん」
　アザゼルからの挑発に、視線の圧は増したがそれ以上の変化は起きない。自分の言ったことを忠実に守るつもりの様子。或いは、マタドールはこれすらも勝負事と考えているかもしれない。極上の相手を前にして自分の欲求を押し殺すことを。
　朝陽が昇るまで四人の会食は続き、結局マタドールが姿を見せることは無かった。

◇

　オーディンが来訪し、マタドールが潜伏していると聞かされた翌日。一誠たちは冥界

でグレモリー主催のイベントに参加していた。冥界で大人気特撮番組である『おっぱいドラゴン』として。

マタドールのこともあって参加に対して前向きではないリアスたちだったが、人間界に居るよりも冥界に居る方が遥かに安全だとアザゼルに言われて送り出された。

アザゼルが言うには、マタドールは当分の間は問題を起こすことは無いと、身を以って証明してきたと言う。

流石に勝手にシンを巻き込んだことにはリアスも怒っていたが、当の本人がリアスを宥めたのでそれ以上怒るに怒れなかった。

イベント会場で行われたのはサインと握手会である。

おっぱいドラゴンに扮した一誠が子供たちにサイン渡し、握手をする。リアスもスイッチ姫の格好をしてサインや握手をしていた。

冥界で放送されている『おっぱいドラゴン』では、一誠とリアス以外にキャラクターとして登場しているメンバーがいる。

それが木場と小猫である。木場は敵組織の幹部『ダークネスナイト・ファング』。小猫は『ヘルキャット』として味方役で出ていた。

役に合わせて一誠は『赤龍帝の鎧』のレプリカを着装し、リアスもドレスを纏い、木場は黒く鋭利な鎧を装備、小猫は獣を擬人化させた様な衣装を着ている。

おっぱいドラゴンは子供たちに人気で割合としては男の子の比率が高い。スイッチ姫はその逆。ダークネスナイト・ファングは子供たちの母親などの成人女性からの人気が高く、ヘルキャットは俗に言う大きなお友達に囲まれていた。

イベントは大盛況の内に終わり、一誠たちは待機用のテントへ帰っていく。

「イッセー様。お疲れ様ですわ」

そう言ってタオルを手渡すのは、今回のイベントのスタッフであるレイヴェル・フェニックスであった。グレモリー主催のイベントを聞き、自らスタッフに立候補したという。

「おー、わりぃな」

一誠は着ていた鎧を外し、汗だくになった体をタオルで拭く。

「お、お気になさらず！　今回のことは冥界の子供たちに夢を与えるとても立派な仕事ですし、将来の冥界を担おう者の一人としてお手伝いすることは当然の義務ですわ！」

レイヴェルは少し赤面して早口で言う。

「――何か昔に比べると大分柔らかくなったよなー」

「え、ええ？　そうでしょうか？」

「何かこっちのことを見下して、上から目線であれこれと言ってきたしな」

「お、思い出させないで下さい。あの時の私は、まだまだ人を見る目が無かったので！」

　レイヴェルは恥ずかしがりながら目線を逸らす。
「そ、そんなことよりもイッセー様はお体をご自愛下さい。子供たちとの交流も大事ですが、まだ人間界でのお仕事が残っているのですし」
「そんなに疲れてはいないけどなー。子供たちに夢を与えるって仕事は楽しいし。爺さんの護衛よりかは気が楽だ」
「相手が北欧神話の主神ですからね。気苦労はするでしょうね」
「そうそう。……ん？」
　何気無い会話であった為、思わず聞き流しそうになった。
「なんで爺さんって言ってオーディンだって分かったんだ？」
　オーディンの護衛をしている話は、まだレイヴェルにしていない。
「お兄様から聞きました」
「お兄様ってライザー？　なんでライザーが知ってるんだ？」
「間薙様からお兄様が聞いたんです。度々連絡を取り合っているので。ああ、偶に私やお兄様の眷属ともしています」
　一誠には初耳であった。
「ええ……あいつらどんだけ仲良くなったんだ……？」
　初めて冥界に来て以降、段々と親交を深めている様な気がする。

「とは言ってもお兄様が一方的に罵声の様な言葉を浴びせて、間薙様が全てスルーしながらそこに日常会話を混ぜるという感じですね」
「どんな会話だ……」
　少し聞いてみたいと思う一誠。
「オーディンの爺さんのこと以外で何か言っていたか？」
「いえ、特には？　人間界で何かトラブルでもあったのですか？」
「――いや、別に何にも。間薙ってあんまりお喋りなイメージが無いけど、実は裏で俺たちのことをあれこれ言っているんじゃないかって」
「ふふふふ。安心して下さい。間薙様の口からイッセー様たちの悪口なんて聞いたことがありません」
「そっか。なら良かった」
　レイヴェルの反応から見て、シンも流石にマタドールのことは話していなかった。余計な混乱を招くと分かっている。
「イッセー。そろそろ人間界に帰還する時間よ」
　テント外でリアスが声を掛ける。
「はい。わかりました。――もうそんな時間か」
「話し込んでしまって申し訳ございません。この後は、やはりオーディン様の護衛です

か？」
「そう。早く戻らないと爺さんに愚痴られちまう。レイヴェル、お疲れ様。今日はありがとうな」
「い、いえ。私も色々と勉強になりました。またイベントの時には声を掛けて下さい。私でよろしければ手を貸しますので」
頬を赤くするレイヴェルに別れの挨拶をした後、一誠はリアスたちと共に人間界へ戻り、オーディンの護衛をする。
オーディンの護衛中、一誠たちはマタドールがいつ来ても対処出来る様に常に神経を張り巡らせていたが、オーディンはそこらの外国人観光客の様に特に気を張り詰めた様子も無く、日本観光を満喫していた。
リアスとソーナは使い魔などを使い、マタドールの居場所を密かに探るものの一切手掛かりが見つからず、マタドールも最初の日以降不気味な程沈黙し続けていた。
そのまま何事も無く数日経過する。事態が動き出したのはそんなある日の夜、マタドールでは無く別の存在によるものであった。

◇

夜。上空では常人が見ればあり得ない光景があった。八本足の軍馬が馬車を引きながら道なき空を駆け抜けていき、その周囲を黒い翼を広げた悪魔たちが飛ぶ。
軍馬の名はスレイプニル。オーディンたちが用意したものである。スレイプニルが引く馬車の中にはオーディン、アザゼル、ロスヴァイセ、リアス、一誠、アーシア、朱乃、ギャスパー、そしてシンと仲魔たちが居る。残りの者たちとバラキエルは、馬車の外で護衛をしていた。
ここ数日、オーディンの観光で日本のあちこちに連れ回されたのとテロリスト、マタドールからの護衛のストレスで、リアスを含め眷属たちはやや疲れ気味の様子。
「オーディン様。もうそろそろ旅行気分から切り替えて下さいね。もうすぐ日本の神々との会談がありますので。『禍の団』や魔人の動きが大人しい今が当初の目的を速やかに行う絶好の機会です」
「わーとっるわい、言われなくとものう。お前さん、何でもかんでもキッチリしているよりも多少隙あった方が男に受けるぞ？」
「今は！　そんな話！　関係！　ありません！」
からかい混じりのオーディンの助言に、ロスヴァイセは顔を真っ赤にして怒鳴る。
「――簡単に事が運べばいいがのう……？」
「それは、どういう意味ですか？」

笑みを消し、意味深なことを呟くオーディンにロスヴァイセが訝しむ。
その時、二人の会話を黙って聞いていたシンが弾かれた様に立ち上がり、馬車の進路方向を見る。明らかに臨戦態勢に入っていた。
「――停めるぞ」
「はい？」
オーディンの言葉にロスヴァイセが聞き返そうとするが、オーディンもシンが見ている方向を隻眼で睨んでいる。
スレイプニルが嘶き馬車が急停止する。中は揺れ、一誠たちは何かに掴まり倒れない様に体を支える。
揺れが収まると同時に馬車の窓を開き、外を見る。外では木場、イリナ、ゼノヴィアが剣を構え、バラキエルが雷光を発し、戦闘態勢へと入っている。
彼らが見る方向を一誠たちも見た。そこには黒いローブを纏った長髪の男性が浮遊し、スレイプニルが行く先を阻んでいる。
「察しが良くて助かる！　我が子を手に掛けるのは少々忍びないのでな！」
男の声は良く通り、鼓膜の奥がビリビリと震える。
男の姿を見たロスヴァイセは言葉を失い、アザゼルは短く舌打ちをする。
「あっ」

ピクシーたちは、男を見て驚きの声を小さく出す。彼女らと以前会ったことがある人物であった。
「まあ、何かあるとしたら事を起こすのはお前さんだと思っていたぞ、ロキ」
いつの間にか馬車の屋根に移動していたオーディンが、隻眼を鋭くさせ男をロキと呼ぶ。
「ロキ……北欧の悪神」
「あの男、神様なんですか！」
リアスの呟きに、一誠は男がオーディンと同等の存在と知り驚く。
「折角、トールを置いてきたのにのう」
「良くも悪くも付き合いが長いのだ。お互いの考えることはよく理解しているつもりだ。あの目を掻い潜るのはかなり苦労はしたがな」
「ワシが他の神々と接触するのが気に入らんか？」
「全く気に入らないな！　我々が積み重ねてきたものに今更異なるものを交えようとする考え方は！」
「ワシよりも古臭い考え方をしおって。まあ、そんなことを面と向かって言って来るのはお前ぐらいかの」
「心の内では文句があろうと言葉にもしなければ行動にも移さない日和見共など一緒に

しないでもらいたい！　私は選んだ！　私は行動した！　それが決定的な違いだ！」
比べられること自体不愉快だと顔を顰める。
「この阿呆め。灸を据える必要があるのう」
総毛立つ様な威圧感と一目で別格と分かるオーラがオーディンから放たれる。スレイプニルがそれを浴びて巨体を震わす。
「ふっ。何なら堕天使のカラス共とグレモリーの小悪魔たちも纏めて来ても構わないぞ？　それで対等、ということにしておいてやろう」
全員に向け、ロキは高慢な態度で言い放った。

悪神、魔狼

「大きく出たな、ロキ。いつからそんなつまらない冗談を言う様になった？」
「冗談と本当のことが区別出来なくなるほど耄碌したか？　オーディン」
神と神とが互いに放つ圧が衝突し合う。力がぶつかり合うことで、陽炎の様に空間が歪み、不可視のものが可視化される現象を引き起こす。
「ロキ様！　その侮辱、聞き捨てなりません！　ましてや主神に牙を剥くなど重大な越権行為です！　しかるべき公正の場に於いて異を唱えるべきです！」
ロスヴァイセもまた馬車の上に立っていた。スーツは戦鎧へと着替えられているが、武器までは構えない。神同士が戦い合えばどれだけの規模の被害が発生するか分からない。何とか衝突を避けようと物申す。
「先に言ったが、オーディンとトールに真っ向から歯向かえる程の者など今の北欧には居ない。情けないことだがな。その二人の顔色伺いの場で何を唱えようとも無意味だ！　そもそも一介の戦乙女風情が口を挟まないでくれ」
「ですが！」
「黙れ」

ロキが眼光を鋭くさせると、ロスヴァイセは言葉を失う。それどころか呼吸も出来ないのか、何度も口を開閉する。ただ、強い意思を込めて睨んだだけで、不意を衝かれたロスヴァイセは生命の危機に陥る。

「下らん真似をするな」

ロスヴァイセを守る様に二人の間にオーディンが入ると、途端ロスヴァイセの呼吸が動き出し、吸えなかった分を取り戻す様に激しい呼吸を繰り返す。

「はぁ！　はぁ！　はぁ！　申し訳、ございません、オーディン、様」

「落ち着いて、ゆっくりと息を吸え」

ロスヴァイセを気遣うオーディンを、ロキは鼻で笑う。

「さてさて。お喋りも飽きてきた。そちらの方も準備が出来たようだ。そろそろ始めようじゃないか」

ロキが言う通り、馬車の中に居たリアス、朱乃、ギャスパー、アーシア、アザゼルは既に外に出て飛翔している。飛べないシンもまた仲魔たちと一緒に馬車の上に移動していた。一誠も同じく馬車の上に居り、禁手の為のカウントダウンをスタートさせている。

そんな中でオーディンが前に出ようとするが、ロスヴァイセがオーディンのローブの裾を密かに掴む。

「オーディン様、駄目です。ロキ様の目的はオーディン様です。どんな罠が仕掛けられているか分かりません。前に出るのは危険です」
「だがのう……」
「頼りない護衛ですが、オーディン様を戦いに赴かせる訳にはいきません。身命を賭してでも守るのが私の役目です」
ローブを掴む手を振り払うのは簡単である。だが、どうしてもその気が起きない。
（神を倒せるのは神だけ、というのも古い考え方なのかもしれないのう）
気は進まないが、ロスヴァイセの言葉を信じてここは若き者達に任せるとする。
「光栄に思って貰おう。神々の黄昏に悪魔や堕天使が混ざること、そしてその中で滅んでいくことを」
「最後に聞いておくぜ？　お前の宣戦布告、取り消すつもりは無いな？」
「愚問。この時を以て黄昏が始まる」
その宣言と共に、ロキの首へ伸びていく光の帯。帯が繋がる先にあるのはゼノヴィアが握るデュランダル。
聖剣の大質量のオーラを圧縮、帯状にした聖剣による先手必勝の一閃。早過ぎるそれはロキの宣言前から準備していた。
光の帯がロキの首に巻き付き、その首を斬り落とす――ことはなく、ロキに触れた途

端、砕ける様にして消えた。ロキは一切動いていないというのに。
「――先手必勝だと思ったのだが、届かないか。流石は北欧の神」
指一本動かすことなく聖剣のオーラを消し飛ばしたロキに、ゼノヴィアは冷静に評価する。
「デュランダル、いい聖剣だが使い手はまだまだ未熟。行動の早さは評価に値するがな」
ゼノヴィアに続き、木場は聖魔剣を創り、イリナは『擬態の聖剣』を構える。先に攻撃を繰り出したのは、イリナ。擬態の聖剣の刃を枝状に伸ばしてロキの周囲を囲むと、聖剣に光の力を流し込み、枝分かれした聖剣の先端から、天使の光と聖剣のオーラが混じった鏃を無数に放つ。
天使と聖剣の合わせ技。逃げ場の無いロキに光の鏃が衝突すると、光が弾ける。目を覆いたくなる閃光。その光の中目掛け、木場は宙に創造した十の聖魔剣を射出した。
光が収まる。そこには笑みを浮かべるロキが無傷のまま、木場の聖魔剣十本を器用に操ってジャグリングをしていた。
「ふはははー　無駄だ無駄！　神、というものをいまいち理解していないようだな？　たかが悪魔や天使の攻撃などでは我が身に血を流させることなど不可能！」
遊び道具にしていた聖魔剣を、木場とイリナへ投げ返す。それも木場が放った倍以上の速度で。

木場は同じ聖魔剣で投げ返された五本の聖魔剣を打ち落とす。イリナも擬態の聖剣と光の力を固めて作り出した剣による二刀流で聖魔剣を落としていくが――

（速っ！　重い！）

――辛うじて反応は出来るが、聖魔剣一本に込められた威力はイリナの全力で何とか打ち落とせられるもの。一本、二本を落として腕は痺れ、三本、四本目で自身の腕が重く感じ、態勢が崩れてしまう。

最後の五本目を落とそうとするが、剣を振るう過程で気付いてしまう。

（間に合わない……！）

反射的に目を瞑ってしまう。愚行だと分かっているが本能が止められなかった。しかし、一秒も満たずに来るだろう衝撃と痛みは一秒過ぎても来ない。

イリナが目を開けると眼前で停止する聖魔剣の先端。

「大丈夫か？」

その聖魔剣の柄を掴むのはバラキエル。間一髪の所でイリナが串刺しになるところを救った。

「あ、ありがとうございます！」

バラキエルはイリナの無事を確認すると、掴んでいた聖魔剣を木場に投げ渡す。

「この程度では護衛にならないな、オーディン」

全員の実力を見透かした様にロキは嘲笑する。
「前から言おうと思っていたんだがのう」
「何かな？」
「お前は、その遊ぶ癖をどうにかするべきだわい。だから――」
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』
「こうなる」
禁手化を終えた一誠が、『赤龍帝の鎧』の状態で噴射孔から魔力を放出する。
『ＪＥＴ』
ゼロから百へ急加速しながら一誠は拳を握り、薄ら笑いを浮かべているロキの顔面目掛けて一直線に進む。
「――ああ、居たな。そういえば」
今、赤龍帝の存在を認識したと言わんばかりの態度。その高慢な鼻っ柱をへし折る為に、一誠は拳で突く。
ロキの顔を貫く――かと思ったときには、そこにロキは居ない。
「パワーはある」
いつの間にか一誠の側面へ移動していたロキ。突き出した拳と背中の噴射孔の向きを変えることで、鞭の様に拳先の見えない裏拳を繰り出す。

「スピードもある」
しかし、それも空を切り、消えたロキは一誠の背後に移動していた。
「だがテクニックが無いな」
ロキは、『赤龍帝の鎧』の噴射孔の一つを指の背でコン、と叩く。途端、同出力で噴射されていた魔力が片側だけ倍以上噴射し、一誠の体が空中で大きく回り始める。
「おおおおおおおおおおお！　どうなってんだこれぇぇぇぇ！」
早く回り過ぎて円盤の様になっている一誠。その声は回っているせいで遠くなったり近くなったりしていた。
制御しようとしても言うことを聞かず、逆に回転の激しさが増し、横回転に縦回転も加わり、鎧の赤い色の中に宝玉の緑が混じって輝く。
「と、止まらねぇぇぇぇぇ！」
『くそ！　術を打ち込まれた！　ロキの術のせいで一時的に鎧の機能が狂わされている！　少し待て！　術の解除をしてみる！』
「た、頼んだぁぁぁぁ！」
「ははははは！　鮮やかだな！」
回る一誠を笑うロキだが、実際のところは洒落にならない。悪魔という頑丈な生物だから耐え切れるのであって、人間ならとっくに意識を失うか下手をすれば死亡してい

る。
「うちの教え子で遊んでんじゃねぇぞ！　ロキ！」
アザゼルがロキに向け、光の槍を投擲する。
上級悪魔を消滅する程の力を込めたその槍に対し、ロキが軽く手を振ると光の槍の進路方向に読み切れない程細かい術式が描かれた魔法陣が展開し、光の槍を阻む。
光の槍は魔法陣の盾を貫こうとするが、段々と細まっていき、最後には消失する。
「北欧の術かッ！」
「有難く思ってくれ。これは対堕天使用だ」
「わざわざありがとよ！　自分たちの方が魔法、魔術が秀でているのを見せつけたいっていう魂胆が透けて見えるんだよ！」
「その顔を見ただけでも用意した甲斐があったものだ」
憎々し気に吐き捨てるアザゼルに、ロキは口の端を吊り上げ、歪んだ顔で笑う。
そこにバラキエルの雷光も放たれた。つんざく音と共に投げ放たれるは槍というよりも雷そのもの。
ロキはこれにも術式の盾を展開する。雷光は術式に触れ、アザゼルの光の槍と同様に萎んでいく。
だが、雷光が消える間際、細い一筋の光が術式を突き破って、向こう側にいるロキへ

と伸びていく。
顔を傾け、その光を回避するロキ。その際に浮き上がった頭髪の何本かが光に触れて焼失した。
「――雷光か。複合は厄介だな。こんなことが起きる」
ロキの笑みが一転して不機嫌な表情となる。
「雷光――雷は嫌いだ。奴を思い出す」
気を害し、その矛先をアザゼル、バラキエルへ向けようとしていた。
その時、ロスヴァイセの周囲に無数の魔法陣が描かれる。その魔法陣から赤、青、緑など多色の力が放出され、ロキに向かっていく。
「同じ術式ならどうですか！」
異なる力を阻むロキの術式にロスヴァイセは同じ成り立ちを持つ術式をぶつける。
ロキは目だけ光に向け、指を振る。幾つもの魔法陣が現れ、それが光を防ぐ盾となる。
「なら！」
指揮者の様にロスヴァイセは指を動かす。周囲に展開していた魔法陣が独立して動き出し、様々な角度からロキへ光を撃ち込もうとする。
「まあまあだな」
そう評して指を鳴らすとロキの魔法陣も動き出し、ロスヴァイセの攻撃を防ぐ。ロス

ヴァイセの魔法陣が動くとそれに連動して動き、正確に攻撃を受け止めていく。
「だったらこうです！」
宙に浮く魔法陣を重ね合わせ複合した魔法陣へと変えると、その魔法陣から多色の光を放出させた。相乗効果でもあるのか二倍、三倍では済まない出力となって、ロキを奔流の中に取り込もうとする。
「一戦乙女としては才がある。だが、神相手では練度が足りないな」
ロキが新たに魔法陣を一つ作り出すと光の中へ放った。すると、ロスヴァイセの魔法陣が爆ぜる様にして消え、光も魔法陣の消滅と共に消える。
アザゼルたちやロスヴァイセの攻撃を苦も無く防いで見せたロキ。この時、ロキの意識が彼女らに割かれている隙に動こうとしている者がいた。
（い、今なら……！）
馬車の上で戦いを見守っているギャスパーは、ロキの周囲に誰も居らず、また自分から意識を逸らしているこのタイミングを狙い、『停止世界の邪眼』を発動させようとしていた。
上手く行けばロキの時間を停止させ、決定的な隙を生み出すことが出来る。神相手に邪眼がどれほどの効果を発揮するか分からないが、やってみる価値はあった。
ギャスパーの眼がロキを捉え、神器による極彩の輝きを発しようとする。

「コソコソしても無駄だ」
その動きを把握していたロキは、ギャスパーの方を見もせず、彼に向け指先で何かを弾くジェスチャーをする。
他のメンバーからすればただそれだけの行為だが、ギャスパーの眼だけにはロキが指先を弾いた瞬間に一瞬だが目を瞑ってしまう程の閃光が見えた。
閉じていた目を開けるギャスパー。すると、離れた場所に居た筈のロキがすぐ近くにまで来ている。
「うあっ！」
慌てて邪眼を発動させようとするギャスパー。だが、背後から伸びてきた手がギャスパーの瞼ごと目を閉ざしてしまう。
再びパニックになるギャスパー。
「落ち着け」
しかし、自分の目を閉ざす手がシンのものであることを知り、跳ね上がった鼓動は一気に沈静化する。
「せ、先輩？　ど、どうして？」
動揺を残すものの、状況を確認するまでの落ち着きを取り戻す。
「お前が停めようとしていたのは部長だ」

「えっ！　ぼ、ボク、ロキが近くに居たから……」
「さっきの動きで術を仕掛けられたみたいね」
　ギャスパーは、ロキが居る場所からリアスの声が聞こえてきて、シンが言っていたことを理解した。
「恐らく幻覚の術ですね。今のギャスパー君の目には私たちがロキ様に見えていると思われます。同士討ちを狙ったのでしょう」
　ロキと同じく北欧の術式を扱えるロスヴァイセは、ギャスパーに仕掛けられた術式を解析する。
「解けますか？」
　シンが解除出来るか訊くと、ロスヴァイセは難しい表情となる。
「すぐには無理だと思います。ロキ様の術ですから……オーディン様ならば間違いなく出来ると思われますが、その僅かな時間ですらロキ様が見過ごすかどうか……」
　申し訳なさそうに言うが、ロスヴァイセの考えは間違ってはいない。ロキの狙いはオーディンである。オーディンが隙を見せれば、即そこを衝いてくる可能性が高い。
　現状、ロキ一人に振り回されている。そんな中で術解除をするオーディンを守り抜ける、などと楽観的なことは誰も言えずにいた。
　もしかしたら、ロキはギャスパーの邪眼を封じるだけでなく、こうなる状況を見越し

て術を掛けたのかもしれない。
「部長！」
沈黙を掻き消す一誠の声。ロキによる術がいつの間にか解除されており、安定した状態で飛行している。
「プロモーションします！」
「ッ！　分かったわ！」
リアスの承認を得て、『兵士』の駒が『女王』へと昇格する。速度、耐久、魔力など全ての能力が向上し、最大の力を発揮出来る状態と化す。
「『悪魔の駒』か……小細工なりには中々の力を出せるじゃないか。――なら、もう少し本気を出してもいいな」
ロキは一誠に向けて手を突き出す。その手が静かに輝き始めた。音も無く、何の派手さも無い。蛍火や月光を思わせる静の光。
だが、その光を見た者たちは違う。リアスたちはその光に込められた力を直感的に理解して身震いし、攻めようにも体が動くことを拒否する。
シンは最悪の事態を想定し、魔力を溜め込んでいく。矛先がこちらに向けられたら即座に反応出来る様に。
「ロキ」

「静かにしてもらおうか、オーディン。手元が狂う。――いくらオーディンでもその数を同時に守るのは骨が折れると思うが？」

一誠を狙うロキにオーディンが殺気を飛ばすが、ロキは難なくそれを受け流してしまう。

圧縮され続け、量るのも寒気立つ力を突き付けられる一誠。既にロキの力の恐ろしさなど知っているのですぐさま全力の一撃を放つ。

『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

重なる様に響く倍化の音声。一誠の能力が極限に達し、ロキが力を解放する前に最大威力まで高めたドラゴンショットを撃つ。

構えた両掌から撃たれる赤い魔力。山など軽々と消し飛ばせる程の威力を秘めた破壊の塊が、未だに手を突き出しているロキに迫る。

ロキは、ドラゴンショットが眼前にまで来ているのに構えたまま。充填に時間が掛かっている訳では無い。ロキの顔は赤い光に照らされてなお余裕に満ちていた。

ロキが魔力に触れ、凝縮された魔力が解き放たれて周囲に被害が及ぶ様な魔力の爆風が――起こらなかった。

気付けばロキは開いていた手を握り締めているだけ。拍子抜けするぐらい簡単にド

ラゴンショットは消失する。
一誠の魔力をリアス、サーゼクスの滅びの力の様に完全に消滅させたのだ。
その現象には誰もが呆然とした。ロキが何をしたのか全く分からない。目を押さえられているギャスパーは辺りが静まったことを不安がり、視覚以外の五感で周囲を確認しようとしている。つまりは、見えないギャスパーは気付けない程、音も光も破壊が無かったのだ。
ロキは握った手を開く。その手の中から一誠の魔力の残滓が蒸気の様に上がった。幻覚などでは無く現実であると示す。
「完全に、とはいかなかったか。我がものとするにはもう少し掛かるか」
何かをしたのは間違いないが、リアスたちには原理が分からない。オーディンの隻眼がロキのしたことを探ろうとする。間違いないのは何かの術を使ったこと。そして、その術式の一部はオーディンにとっても未知のもの。
未知の光景を見せられ一同がざわめく中、何故かピクシーだけはそれを目に焼き付ける様に凝視していた。
「――ロキ、いつの間にその様な術を手に入れた？」
「おっと。オーディンの眼にはお見通しか？　しかし、これの解析までは……」
そこでロキは言葉を区切り、顔を顰める。騒音でも聞いているかの様であったが、す

ぐにその表情を消す。
「オーディンや魔王の妹に少しだけ見せてやりたかっただけだ。まだ、最後に試したいことが残っている」
　ロキが小声でボソボソ呟く。誰かと会話している様子。内容は聞き取れない。ロキだけでなく他にも協力者がいる可能が出てきた。
「出て来い！　我が愛しき息子よ！」
　ロキが叫ぶと何も無い空間が歪む。その歪みの中央から顔を出すのは灰色の体毛の狼。ただの狼ではなく、頭部の大きさだけで人の大きさを超えている。
　歪みの中から出て来たのは、十メートルはありそうな体格の狼であった。
　その狼がリアスたちを睨むだけで、リアスたちは全身が金縛りにあったかの様に強張り、寒気を覚え、心臓の鼓動が早まる。巨大狼に対して本能が警鐘を鳴らしていた。
　シンも寒気立つものを感じる。コカビエルが用意したケルベロス並の大きさだが、存在感は比では無い。当然と言えば当然だが。
　ロキに狼とくれば、自然と正体が分かってくる。
「グルルルル！」
　ケルベロスが巨大狼を見た瞬間、唸り始めた。虚勢からくるものではない。明確な敵と認識しての唸りである。

「ウウウウ！」
　すると、巨大狼もまた唸り出した。ケルベロスから何かしら感じるものがあったのかもしれない。
「おい、シン。そいつを静かにさせろ。今は下手に刺激するな」
　アザゼルが唸るケルベロスを静めさせる様に言って来る。巨大狼に対し強い警戒を感じられた。
　ロキは唸っている巨大狼の顎下を撫でながら、窘める。
「あまり格下と付き合うな。お前の品までも下がるぞ、フェンリル」
　神喰狼（フェンリル）。有名なその名にリアスたちはまたも戦慄した。
「イッセー！　最悪最大の魔物の一匹だ！　神を殺し、喰らう牙を持っている！　お前の鎧でもそいつの牙では保たない」
『アザゼルの言う通りだ。奴は危険だ。なるべく回避に専念しろ』
　アザゼルの警告にドライグも同意する。一誠としてもただ存在するだけで恐怖を覚えるフェンリルからは距離を置きたかった。
「説明感謝する。我が生み出した魔物の中でも特にこいつは優秀でな。神だけでなく神話や伝説で謳われる存在にも有効だ。試したことは無いが他の神話の神仏やドラゴンでもこの牙は効くだろう」

自慢するかの様に息子と称したフェンリルを愛でる。
「本当ならばオーディンの心臓にこの牙を突き立てる予定であったが、まあ、兼ねてから興味があった悪魔やドラゴンの血の味を覚えさせるのも悪くない」
オーディンが前に出なくて正解だったと今更ながら実感した。わざわざ目立つ様にフェンリルを披露したのは、オーディンが出てこないことに痺れを切らしたかもしれない。もし、オーディンが前線で戦っていたら宙から突然フェンリルが飛び出して、オーディンに喰らい付いていただろう。
オオオオ

――馬車から飛び出したケルベロスに喉元を咬み付かれる。
牙に対して牙でのカウンター。空を飛ぶことが出来ないのに宙へ飛び出した勇猛とも蛮勇とも言えるケルベロスの行為。一歩間違えれば遥か彼方の地面に落ちていくこととなる。
だが、少なくともフェンリルの敵意は完全にケルベロスへ向けられる。
オオオオオオオオオン！
フェンリルは喉に牙を立てるケルベロスを振り落とそうと首を左右に振る。牙の力を緩めることなく喰らい続けるケルベロス。一般的に見ても十分大きなケルベロスもフェンリルと比べれば子犬にしか見えない。
また、フェンリルの体毛も非常に頑丈であり、ケルベロスが牙を立てていても灰色の体毛が赤く染まらない。ケルベロスの牙はフェンリルへ通っていない証拠である。
「ほう？　中々の気概。我が息子に臆しないどころか自ら喰らい付いてくるとは」
フェンリルを攻めているケルベロスにロキはそれなりの評価を下すが、それは強者故の余裕からくる上からのもの。自分のフェンリルには絶対に敵わないという確固たる自信が伝わって来る。
「しかし、我がフェンリルに比べれば所詮は子犬だ。フェンリル、ここは大人として子犬のじゃれ合いに付き合ってやれ」

フェンリルの前足が消えたかと思えば、喉元にぶら下がっているケルベロスの胴体に横振りの一撃が叩き込まれた。
ケルベロスの体が軽々と浮かび上がる。速さに重さが加わった一撃から発せられる生々しい音に、皆は鳥肌が立ちそうになる。アーシアなど無慈悲な一撃に思わず目を逸らしていた。
「グルルー」
だが、打ち込まれたケルベロスの咬筋は緩むことなく未だに咬み続けている。フェンリルが頑丈な体毛を持つなら、ケルベロスの体毛も負けず劣らず頑丈である。前足の一撃の威力は半減させ、尚且つその爪を肉まで届かせない。
ケルベロスがフェンリルの一撃に耐えたことは予想外であったのか、ロキは少しだけ目を見開いた。
「やるな」
「自慢の仲魔なもので」
誰も彼もがシンに視線が釘付けとなった。馬車の上で戦いを見守っていたかと思えば、あろうことかフェンリル目掛けて馬車から跳び出したのだ。
ロキからすれば単身でフェンリルに挑む蛮勇。リアスたちから見ると蛮勇は蛮勇でも意味が変わる。

「お前、飛べないだろうがぁ！」

一誠は思わず叫んでいた。一誠が言う様にシンは悪魔の力を持つが、悪魔の羽は持たない。落ちたらそのまま遠い地面に向かって落下するだけ。

一誠の声を背中に受けつつ、跳んでいる最中に拳を握ると着地点であるフェンリルの眉間目掛けて拳を叩き込む。

ガクン、とフェンリルの頭が沈むと同時に一鳴き。

ギャッ

最初は何の声かと思ったが、少し間を置いてフェンリルが出したものだと気付き、そんな声が出せるのかと思いながら何故そんな声を出したのかという考えに移り、殴られた痛みで発したものと察した時、ロキは我が耳を疑う。

フェンリルに一撃を与えたシン。だが、フェンリルはすぐさま長い口吻でシンを横から叩く。防御はしたがシンはボールの様に飛ばされ、その先には着地する足場は当然無く落下する。シンが殴りつけた反動でケルベロスの牙の力が緩み、そこへフェンリルが頭を振るったせいでケルベロスの咬み付きが外れ、ケルベロスもまたシンと同じ場所目掛けて振り捨てられ揃って落ちていく。

その下には大地に並び立つ建物の遠い光がまるで海底を連想させ、深い闇の中へシンたちを引き摺り込もうとする。

「掴まれっ！」
背中から魔力を噴射し、落ちようとするシンとケルベロスへ必死になって手を伸ばす一誠。そんなに離れた距離ではないのにやけに遠く感じ、ブースターによる加速も遅く感じてもどかしさを覚える。
シンとケルベロスが一誠の目の前で下へと落下し――立ち上がった。
「え？　はあっ！」
意味が分からずそのまま突っ込んでしまう一誠。それを軽く躱すシン。すぐに急停止するが勢い余って数メートル程進んでしまう。
「どうした？」
そんな一誠の背に、何事もなかったかの様にシンは声を掛ける。
「いや！　どうしたって！」
振り返る。視線の先にはシンが紛れもなく空中で立っていた。側にはケルベロスも居たが、こちらは地面が宙に立っていることを驚いている。
「何で宙に立ってんの！　って……」
シンの足元をよく観察すると足を中心にして魔法陣が展開されている。ケルベロスの足元にも同じものがあった。それが足場となってシンたちを空中で立たせている。
「オーディンの爺さんかロスヴァイセさんに頼んだのか！」

飛べないハンデを無くすために抜け目の無いシンに感心するが――

「いや、別に何も」

――本人はあっさりと否定したせいで一誠は絶句する。つまりは完全に人任せで先程の行動をしたらしい。無謀を通り越して少し恐怖を覚える。

絶句する一誠と同じ気持ちを味わっているのはリアスたちも同様であった。短い時間で何度心臓が跳ね上がったか分からない。

「よく対応出来ましたね、オーディン様。流石です」

ロスヴァイセは冷や汗をかきながらオーディンのシンへの迅速な対応を讃える。

「まあ、成り行きとはいえ一度は肩を並べて戦ったからのう。それに魔人相手に無茶をするやつじゃし、これぐらいは想定内だわい」

事も無げに言うオーディン。ロスヴァイセはそれに信頼感を感じ取れた。時間の積み重ねや性格の一致などではなく、死線を共に潜ったことでしか得られないものなのだろう。

シンに殴られたフェンリルは軽く頭を振る。まだ少し痛みが残っている様子。

ロキは折角披露したフェンリルが痛がる素振りを見せたことが少し面白くなかったが、同時にそれを与えたシンに少し興味が湧く。

「お前の言う通りなら、流石と褒めるべきか？　あの男と獣を」

また小声で何かを呟く。すると、ロキは鼻を鳴らす。
「不要だ。黙って見ていろ」
ロキは横目でフェンリルを見る。
「やられたままか？」
発破をかけると、フェンリルは唸ることで闘争心の片鱗を伝える。
「ならば行け。この場にいる全員がお前のディナーだ」
駆け出すフェンリルは、さながら彗星であった。速過ぎる動きが残像を灰色の尾をとして残していく。
喰らい尽そうと駆けるフェンリルを迎え撃ったのは赤い流星。魔力の噴射でフェンリルの眼前に移動した一誠が鼻先を殴り飛ばしていた。
「お、おお……！」
何故か殴った本人である一誠が自分の行動に驚いていた。
フェンリルを前にして確かに体は竦んでいた。寒気がして金縛りにあったかの様に体が上手く動かず、逃げ出してしまいたいと頭の片隅で思ってしまう程であった。だが、シンやケルベロスが隣に並んでいること、自分の後ろにはリアスたちが居ること、そう思うと体が自然に動いてフェンリルを全力で殴っていた。
「殴っちゃった……」

『全く……回避に専念しろと言ったというのに自分から挑むとはな……まあいいさ。そういう所は嫌いじゃない』

無我夢中な行動を咎めず、少し呆れながらもドライグは褒めた。

一誠に殴られたフェンリルはすぐに構え直す。不意を衝かれたがダメージは皆無。もう一度仕掛ければ、そこまで考えて体温を奪う様な凍える視線が自分を刺していることに気付く。

ロキがフェンリルに対し、失望を込めた視線を向けていた。赤龍帝の一撃を受けても無傷など褒める様なことでは無い、当然のことである。責めるべきは一撃を受けて退いたことであった。

最高傑作の一つだと思っていたフェンリルの醜態。ロキからすれば全く面白くない。

「成程。父の手を煩わせたいのだな?」

フェンリルはロキのその言葉に巨体を一瞬だけ震わせ、不似合いなか細い声で鳴く。

「言い訳は無用。もう一度行け」

冷たく言い放つとロキはフェンリルから視線を外す。

凍える様な冷たい緊張を解かれるフェンリルは、二度と退かないことを強く決意する。

「狙いは……そうだな。魔王の血筋。希少な悪魔の血の味を覚えさせるとしよう」

その言葉で、ターゲットをリアスに定めたことを察してしまう。
フェンリルは宙で爪を立て、力を溜める。充填も解放も一瞬のこと。瞬くよりも早く筆を引いた様な残像を残し、フェンリルは灰色の巨影と化す。
次にフェンリルの姿がハッキリとする時は、リアスに神殺しの牙を突き立てた時。
「部長に、触るんじゃねぇぇぇぇ！」
大切な女性が傷付けられるかもしれない。その事実が一誠の力を増大させ、神器の能力をも高める。
神速の狼の前に先回りをし、その顔に拳を振るった――
「予想通りだな」
――手応えが無い。空振りをした。絶好のタイミングであり避けることなど不可能と思っていた。
空振りした一誠は勢い余ってフェンリルに背を向ける様な格好となってしまう。すぐさま正面を向く一誠。
「は？」
正面に居るフェンリルを見て、間の抜けた声が出てしまう。フェンリルの巨体はそこにあった。だが、頭部が無い。首の断面に魔法陣が展開しており、頭部が行方不明になっていた。

「ど、どこに――」
「赤龍帝」
思ってもいなかった事態に動揺する一誠に、ロキの声が届く。
「何をしている。右だ」
つい右を見てしまう一誠。そこには何も無い。
「愚か者め。敵の言葉を信じてどうする」
ロキが嘲ると、左から魔法陣を通じて出現したフェンリルの頭部が、一誠の胴体に牙を突き立てる。
「ごふっ」
鎧など無意味と嘲笑う様に貫くフェンリルの牙が、一誠の脇腹を貫通し、その穴から血を流させ喉を潤す。
「イッセー！」
「イッセーさん！」
「イッセー君！」
リアスたちが悲鳴の様に一誠の名を叫ぶ。
全てはロキの思惑通り。一誠はロキの狙い通りに動かされていた。最初からロキは一誠を狙っていたのだ。わざわざリアスを名指しにしたのもその為。

「下手な真似はしない方がいい。でないと命令してしまうかもしれない、『噛み砕け』と」
一誠を人質とするロキ。リアスたちやオーディン、アザゼルが一誠のことを思い、手を出せなくなる。
「賢明だな。フェンリル――噛み砕け」
無慈悲に告げる言葉。人質にして有効活用するつもりなど全く無い。そんなことをせずとも勝てると自負しているからだ。
リアスたちがしたことは一誠を処刑する場を整えたに過ぎない。
フェンリルが一誠を食い千切ろうと大口を開け――そこへ光が一閃し、フェンリルが鳴き声を上げる。
フェンリルの牙で串刺しにされていた一誠が、光が奔った直後に牙ごと消えていた。
「兵藤一誠、無事か？」
「ヴァ、ヴァーリ……？」
フェンリルから十数メートル程離れた場所、一誠に肩を貸しているのは『白龍皇の鎧』を纏うヴァーリ・ルシファー。
朦朧としているが一誠も意識があった。その脇腹にはフェンリルの牙が突き刺さったまま。あの一瞬でフェンリルの牙をへし折って一誠を救出したと思われる。
「おいおい、おっぱいドラゴン。大丈夫かぁ？　何だかしょっちゅうボロボロの姿を見

ている気がするぜぃ」
金色の雲――筋斗雲に乗った美候も現れる。
「少し預かっておいてくれ」
「あいよ」
一誠を美候に渡すと、ヴァーリはロキの方へ飛んでいく。
「初めまして。悪神ロキ殿。俺は白龍皇ヴァーリ」
「ほお？　まさか一夜で二天龍に会えるとはな。それで何をしに？」
「貴殿を屠りに」
「はははははははははは！」
宣戦布告にロキは哄笑し――
「抜かせ」
――ヴァーリの背後に魔法陣を出現させ、復讐に燃えるフェンリルをけしかける。

申出、切断

ヴァーリとロキ、フェンリルが睨み合う。ヒリつく空気の中で、美候は空気など関係無い様にヴァーリへ話し掛けた。
「真剣に睨み合っているところ悪いんだが、赤龍帝をどうにかしないとやばいぜぃ。秒単位で気が弱まっている」
フェンリルの牙で咬まれた影響からか、美候の目には一誠の生命力が弱まっていくのが見えた。事実、一誠の眼がどんどん虚ろになっていく。
「そうだな。成り行きとはいえ助けに来たのに死んでしまったら、笑い話にもならない」
ヴァーリは抱えられている一誠の側に移動すると、フェンリルの牙が突き刺さった脇腹を拳で叩く。
「ふぐおっ！」
ヴァーリの蛮行にリアスたちは悲鳴を上げそうになったが、次に起こったことに別の意味で驚く。
『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』
鎧に出来た大穴はそのままに、生身の傷がフェンリルの牙ごと縮小していく。二分の

一ごとに小さくなっていき、最終的に傷口は五ミリ程度になり、そこに刺さっていたフェンリルの牙も鉛筆ぐらいの大きさになっていた。
「応急処置はこれで良いかな？　ついでに気付けもしておいた」
「ふざ、けん、なー……」
傷口を直接殴られた一誠が蚊の鳴く様な声で抗議する。目から火花どころか稲妻が飛び出す程の衝撃であった。
あらゆる物体を半減させてしまう『白龍皇の鎧』の能力を一誠へ使用し、傷口だけをピンポイントで縮小させた。これがどれくらい精密な能力の使い方か。歴代の白龍皇を知っている者たちは全員言葉を失ったことが答えである。
「ワシがこういうことを言うのは冗談に聞こえるかもしれんが、まさに神業だのぅ……」
オーディンはヴァーリを素直に称賛。
「……どうやら、今代の白龍皇は相当優秀のようだ」
ロキも皮肉や嫌味無しでヴァーリを褒める。不本意ながらもそう言うことしか出来なかった。今起こったことを批判するなど、己の無知や無理解の証明でしかない。
「おお、流石」
事も無げにやったヴァーリに、美候は軽い口調で褒めるが内心は戦慄を抱いていた。一誠と戦った際に自分の体に半減を使い、傷を最小に抑えたことを話では聞いていた

が、今度は他人の体でそれをやってのけた。自分の体と他人の体では大分勝手が違うというのに。

どこまでも成長していく自分たちのリーダーに頼もしさを覚えながら、一誠をリアスたちの下へ運んでいく。

「イッセー！」

馬車の上に置かれた一誠をリアスたちが囲む。傷はほぼ塞がっているが、大量出血で顔色は青白いまま。

「ああ、頭がクラクラしますが大丈夫です……」

無事であることを口で伝えるが、顔色が悪いせいで空元気にしか見えなかった。

「アーシア！　傷の手当てを！」

「はい！」

「待て。フェンリルの牙に直接触れるのは不味いかもしれん。ワシが抜く。傷の治癒はその後だ」

アーシアを一旦止め、オーディンがフェンリルの牙を指差すと空中に文字を描いていく。安全に抜く為の準備を始めていた。

オーディンの警戒がロキから離れ、絶好の機会が訪れる――という訳でもない。ロキはオーディンの様子を窺いつつ、ヴァーリにも注意を払っていた。

フェンリルの魔法陣が解け、頭部が元の位置に戻るとロキは散歩でもする様な軽い足取りで空中を渡り、フェンリルの側に行く。
「開けろ」
ロキのその一言でフェンリルは口を開く。洞窟の様な喉奥に鑢よりも削れそうな舌。血よりも赤い口腔が見え、鋭く伸びた牙が並んでいるが、その内の一本は根本近くで折れている。ヴァーリが折った一本だけが、規則正しく並ぶ牙の中で目立つ。
ロキはその折れた牙に指先を這わす。
「神仏さえも殺す牙が、こんな無惨な形になって――」
悼む様に指で撫でていたが、突如として手で掴み、折れた牙を引き抜く。
ギャン！
「フェンリル――お前はいつから仔犬の真似が上手くなったのだ？」
抜歯の痛みに悶えるフェンリルであったが、ロキの言葉で即座に黙り込む。
「半端だから余計に苦しむ。こういうものは完全に取り除く必要がある」
すると、抜歯され空洞になった歯茎が脈打つ様に動き始め、傷口から血が溢れ出したかと思えば、中から真新しい牙が生えてきた。ロキに抜かれて数秒間の出来事である。
牙が生え揃ったフェンリルに、ロキは命令を下す。
「その屈辱、白龍皇を噛み殺して晴らしてこい」

ロキの命に従い、フェンリルは咆哮を上げ、ヴァーリに向かって駆け出す。
構えるヴァーリ。だが、両者の間に割って入る者が居た。シンである。
シンが拳を握り、フェンリルを待ち構える。それに反応し、フェンリルは途中で急ブレーキを掛けてしまい、速度が一気に落ちる。それを見逃すヴァーリでは無い。
『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』
フェンリルを囲む空間の歪み。全てを半減させる力がフェンリルを捕らえる。二分の一に縮小させられるだけでは済まない。繰り返し半減され、巨狼も虫以下まで縮小される。
――筈であった。
フェンリルは大きく口を開け、閉じ、何かを食い千切る様な動きを見せる。すると、歪みの一部が裂け、フェンリルはそこから脱出してしまった。
「凄いな。空間ごと食い千切るなんて。神喰狼の名は伊達じゃないらしい。そう思わないか？」
「気安く話し掛けるな」
ヴァーリに対し、シンは愛想無く応じる。ヴァーリが横に並び立つのを許したのは、視線が届く範囲に置きたいという理由のみ。後ろを見せる様な相手では無いからだ。戦う相手が共通だとしてもそう簡単に気を許すつもりは無い。

「手厳しいな」
拒絶されてもヴァーリは小さく笑う。予想通りの反応と思ったのか、或いは好意よりも敵意の方が心地良いのか。
笑いながらヴァーリは何故か周囲を確認し出す。右、左と首を動かした後、何も無かったかの様にロキたちへ視線を戻した。
ヴァーリのことを気に留めつつ、シンはロキとフェンリルからも意識を外さない。
フェンリルは牙を剥いて唸りながらこちらを睨む。相当な怒りを買った様子。一方でロキの方は、怒っても笑っても無く無表情であった。
「フェンリル、もういい。下がれ」
その言葉に、フェンリルは体を一瞬だけ震わす。ヴァーリを倒せなかったことへの失望の言葉と思ったのか、尻尾まで丸まっていた。
恐る恐るロキの顔を確認するフェンリル。だが、ロキの顔を見てすぐにそういった意味で言ったのでは無いと分かったらしく、言われた通りロキの後ろへ下がった。
「もう少しだけ白龍皇の力が見たくなった。こればかりは、自分で確かめなければな」
ロキが指を鳴らす。数百の魔法陣が瞬時に展開され、夜の闇が魔法陣の輝きによって照らされる。展開から放出までが同時であった。
全ての魔法陣から放たれる魔法。太陽を間近で見た様な眩さの魔法が津波の如く押

し寄せる。
触れれば絶命必至の多重魔法。それを迎え撃つのは――
『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ』
――神や反則を通り越した力であった。
押し寄せる魔法に向けて張り巡らされる不可視の縮小の壁。それを通り抜けていく度に魔法の威力が半減されていく。
見えないが張られた壁は一枚や二枚では済まない。ロキとヴァーリの間に数え切れない程張られており、秒単位以下で魔法の威力が弱まっていき、威力も速度も何もかもが半減されていく。
太陽を思わせる輝きも線香花火以下。津波の様な怒涛も羽虫の様に漂う様な速度まで落とされ、ヴァーリが腕を振ると風圧だけで全て掻き消された。
ヴァーリは、振るった腕にも半減の力を乗せており、それがロキ目掛けて飛ばされる。
それに気付いたロキは、攻撃の為に展開していた魔法陣を全て防御用へ変え、半減の力を防ぐ盾とする。
しかし、ヴァーリの力に魔法陣が触れた瞬間、耐える事無く消滅していき、これにはロキも移動して避けるしかなかった。
「不粋な力だ」

ロキはヴァーリの半減をそう評した。

アザゼルの光、バラキエルの雷光、ロスヴァイセの同じ北欧魔術でも崩すことが出来なかったロキの魔法陣が、ガラス細工の様にあっさりと砕け散っていったのは、術式とヴァーリの能力の相性の悪さが理由であった。

術にはそれに組み込まれる式が重要である。通常の術式では十の力を注ぎ込み、十の魔法を生み出すが、優れた式ならば一の力で十の魔法を生み出すことが可能である。

ロキと戦ったロスヴァイセもこの様な術式を使っており、少ない力で強力な魔法を発動させていた。この点に於いてはロキも認めている。ただし、それでも自分の足元に及ばないという結論も伴うが。

ロキがやったことも一つの魔法陣に緻密且つ精密な式を描き込み、一つ一つの式の効果によって相乗効果が生まれ、最小で最大の効果を発揮出来る様にしていた。これ程の術式が出来るのは自分かオーディンしかいないと自負できる程の代物である。だが、ヴァーリが行ったのは、その芸術作品の様な魔法陣の式を穢すもの。

式全体ではなく一部を半減することで効果が発揮出来ない程縮小化させ、結果として魔法陣全体のバランスを崩し崩壊させる。精密なものほど少しでも噛み合わなければ性能を出し切れない。

魔法陣を強制的に崩壊させてくるヴァーリの能力は、ロキにとって天敵に等しい。そ

して、もう一つ天敵と言える力がある。
ヴァーリの半減の射程の外に移動したロキ。その顔を照らす真紅の光。
ロキは無意識に防御魔法陣を展開する。赤い光は魔法陣によって止められた――と思いきや、魔法陣に穴を開けて侵入してきた。だが、ロキは難なくそれを躱す。触れれば厄介だが、当てるとなるとロキの目からしてそれは遅過ぎる。
「こっちは品が無い」
ロキの視線の先には、掌を突き出すリアス。『滅びの力』を宿した魔力によって魔法陣に風穴が開けられた。
これもロキにとっては面白くない。『滅びの力』の前では強固な魔法陣も問答無用で消滅させられてしまう。ロキとリアス、比べればリアスの方が遥かに格下。しかし、滅びの力があれば万が一の可能性として手痛い一撃を受けるかもしれないのだ。
誰も彼もが神に対して不遜。その思い上がりを正す為に神罰でも与えようかと極寒の眼差しで見回す。
「――何だ？」
ロキは小声で会話し始める。
「至って冷静だ。そういうお前は随分と口数が多くなったな」
誰にも届かない声量で言葉を交わすロキと何か。

「……」

ロキは沈黙した後、その顔に笑みを貼りつける。

「もう少し楽しみたいところだが、今夜はここまでにしよう。見たいことも試したいことも済んだ。年長者として我々の方が引き下がるとしよう」

ロキが指を鳴らすと空間に歪みが生じる。その歪みの中へ入って行くフェンリル。ロキも続くが、体を半分だけ入れた後にオーディンを見た。

「続きは会談の日だ。その時にまた相まみえよう。オーディンたちよ！　その時こそ貴殿らの命は我が砕き、我が子フェンリルが噛み千切るであろう！」

不穏な言葉を残し、ロキは去っていった。

◇

「あー……」

脱力した声を出しながら一誠は目を覚ます。目に入る天井と壁。馬車の屋根から中へ運ばれていた。

フェンリルの牙を受け、オーディンにそれを抜かれている内に気を失ってしまっていた。

目線を動かすと、アーシアが神器で怪我の治癒をしている。
「アーシア……」
名を呼ばれ、一誠の意識が戻ったことでアーシアは治癒の手を止め、涙で潤んだ瞳で一誠を見る。
「イッセーさん……！」
「ありがとう。もう痛くも何ともない」
「良かった！」
感極まってアーシアは一誠に抱き付き、一誠もアーシアを宥める様にその背を優しく撫でる。
「……先輩、ご無事で良かったです」
小猫の声。一誠はそこで自分の手を握る小猫に気付く。アーシアの神器だけでなく小猫の仙術によって治癒力を高められていたことを察した。
「小猫ちゃんもありがとう」
「……にゅあ、本当に無事で良かったです」
一誠は馬車内を見る。中に居るのは一誠、アーシア、小猫しかいない。
「部長たちは？」
「外でお話をしています。……白龍皇さんとも」

ロキとの戦いでヴァーリと美候が参戦したことを思い出す。何が目的で手を貸したのか不明な今、一誠もヴァーリたちの目的を知らなければならない。

体を起こす一誠。血がかなり抜けたせいで軽い眩暈がするが、耐えられないものではない。そのままアーシアたちを連れて馬車の扉を開ける。

馬車は既に地上に降りており、周りの光景も一誠には見覚えがあった。記憶が確かならば、この場所は駒王学園の近くにある公園。

馬車から降りて周りを見る。少し離れた所にリアスたちが居た。

リアスたちと相対する様に向き合うヴァーリたち。美候だけではない、聖王剣の使い手であるアーサーと小猫の姉である黒歌、そして、真っ黒なジャックフロスト――ジャアクフロストも居た。

「あ、あの時の！」

ジャアクフロストの姿に一誠は驚きながら面と向かって罵倒された記憶が蘇る。アーシアと小猫も初めて見るジャアクフロストの容姿に驚いていた。

腕を組んで偉そうに立つジャアクフロスト。ジャックフロストはそんな彼をチラチラと遠慮がちに見ている。

「――つまり、今回の件でロキと『禍の団』は繋がっていないということ？」

「こちらの言い分を信じてくれるなら」

風に乗ってリアスたちの会話が一誠たちに届いて来た。
「爺さん。あんたの目から見て、ロキは連中と組むと思うか？」
「奴は大馬鹿者じゃが、テロリストに与する程大馬鹿者では無い。そもそもあの跳ねっ返りがオーフィスに下るなど死んでもせんだろなぁ。儂とトールの言うことですら簡単には聞かん奴だしの」
北欧の神であることに高過ぎるプライドを持つロキが、雑多な集団である『禍の団』と手を結ぶことは限りなく低いとオーディンが保障する。
「なら何故来た、ヴァーリ。『禍の団』はロキと敵対しているのか？」
「いや。『禍の団』――いや、最早主導しているのは英雄派か。英雄派はロキと敵対するつもりは無い」
「お前、まさか……」
アザゼルが顔を顰める。
「ロキとフェンリルと戦ってみたいだけだ、俺が。勿論、美候たちも了承済みだ」
オーディンとロスヴァイセが『本気で言っているのか？』という眼差しをアザゼルに向ける。アザゼルが無言で首を縦に振る。
「どこにでも居るな、こういう奴は」
「トール様みたいな人って、他にも居たんですね……」

オーディンは半ば感心する様に呟き、ロスヴァイセは脱力しながら言う。
「さて、話を戻そう。オーディンの会談を成功させるには、ロキたちを撃退することが絶対条件だ。だが、正直なところ君たちだけでは、ロキとフェンリルを相手にするのは厳しいだろう？」
全員顔を顰める。言っていることは間違っていないので反論まではしなかった。
「各勢力も英雄派の動きに対応するのが精一杯で戦力も送れない。つまり、このメンバーだけでロキたちと戦わなければならない。――更に不安要素としてマタドールも居る」
魔人マタドールの名が出て、無表情であったシンの顔が若干険しくなる。
「君でもマタドールを相手にするのは難しいだろ？　赤龍帝」
ヴァーリに呼ばれ、他のメンバーも一誠が意識を取り戻していたことに気付く。
「イッセー！　大丈夫なの？」
「はい、部長。大丈夫です。ご心配をおかけしました」
一誠はアーシアたちを連れてヴァーリの近くまで歩いていく。
「……正直、マタドールとは戦ってないから分からねぇ。でも、負けるつもりは無い」
「なら一度戦ってみた方がいい。色々学べる」
その言葉に左腕が疼くのを感じた。ヴァーリに左手が伸びそうになる。右手で強く

握り締め、無理矢理動かなくさせる。掴んだ左手からはマグマの様な熱を感じた。
それに気付かないのか、或いは敢えて無視したのかヴァーリは話を続ける。
「とは言え、今この状況もかなり不自然と言える。ロキとフェンリルが現れた時もそうだ。マタドールならこの瞬間に現れてもおかしくない」
マタドールを知るヴァーリならみすみすロキたちを見逃したり、神や堕天使の長、二天龍が揃っている状況を黙って見ている筈が無かった。
「あいつが何を考えているのかさっぱりだが、一応は自粛しているんじゃないか？」
「どういう意味だ？　アザゼル」
アザゼルは、バラキエルとマタドールの邂逅。その時にマタドールが約束したこと、実際に試してみたことを話す。
「成程……」
ヴァーリはそこで少しだけ考える。プライドの高いマタドールが自分で言ったことを反故にするのは考え難い。とはいえ、やはり二天龍や神、神喰狼が揃ったあの状況こそ最も戦力が集まった時に思えた。
（あるいは……）
もっと大きな戦いが控えているのでは、という推測が浮かぶ。本命は、オーディンと日本の神々の会談の時。ロキやフェンリルだけの戦力では済まない可能性が出てくる。

しかし、ヴァーリがそれを口に出すことは無かった。何故ならヴァーリもそれを期待してしまったから。闘争を好む本分がヴァーリに黙っているよう訴える。
「お前は、ロキやフェンリル、それにマタドールは倒せるのかよ？」
話題を変えたい所に丁度一誠が話を振ってくれたので、ヴァーリはその話に乗る。
「全力で挑めば９：１で俺の負けかな」
「何だよ、意外と謙虚だな」
「流石に三人相手となると分が悪い」
簡単に言うヴァーリに誰もが正気を疑う眼差しを向けた。一誠は個々で戦ったらという意味で聞いた。三人同時に相手にするなど考えてもいない。そして、神や魔人と戦っても勝てる可能性があると自ら言うヴァーリに感心する。何せ虚勢にも聞こえない上に、一誠たちも自惚れとは思えなかった。
「まあ、この勝率を上げる方法もある」
「方法？　そんなものがあるのか？」
ヴァーリは一誠の眼を真っ直ぐ見た。
「二天龍が手を組むことだ」
場に居るほぼ全員が驚く。驚いていないのは事前に知っていたヴァーリの仲間と、僅かに眉間に皺を寄せたシンぐらいであった。

「今回の一戦で、俺は兵藤一誠と共に戦ってもいい」
共闘の申し出に、場に沈黙が訪れる。
「――残念だけど、信じられないわ」
その沈黙を破ったのは、リアスであった。リアスの目にはヴァーリに対する敵意がある。
「私は、貴方が三勢力の会談でしたことを決して忘れていないわ。そんな貴方を戦力として迎え入れることも、あまつさえ大事なイッセーと肩を並べて戦わせることなんて出来るものですか！」
リアスは、ヴァーリの申し出にキッパリと拒否の意思を示す。
三勢力の会談時に裏切り行為をしたヴァーリの言葉を簡単に信じられない。たとえ、ロキたちとの戦いで一誠の命が救われた今でもその気持ちは変わらない。それが眷属を率いる王としての責任である。
リアスは、ヴァーリが背中を預けるに足る存在と思えなかった。
本来なら裏切られた当人であるアザゼルが反論すべき立場であるが、ずっと黙ったまま。リアスが言いたいことを言っているから黙っているのでは無く、ヴァーリの性格を知っているからこそ、今回の共闘の話に裏切りは無いと分かっていた。
分かっていたからこそリアスとヴァーリを衝突させる。後半になって内輪揉めする

よりも、今の内の不満や疑心を吐き出させておこうと思ったのだ。
「すんなり事が運ぶとは思っていなかったが、さて、どうすれば俺たちの言葉を信じてもらえるのやら」
「言葉よりも行動だ」
ヴァーリとリアスの会話にシンが入り込む。
「シン……」
「部長の言うことに俺も賛成だ。そう簡単には信じられない」
「信じて貰う為の行動か……敵対しない保証みたいなものがあればいいのか？」
「ああ」
「なら、君たちは俺に何を望む？」
シンはヴァーリに視線を固定したまま一誠に手を伸ばす。
「アスカロンを貸してくれるか？」
「え？　あ、ああ。分かった……」
何に使うのか疑問に思いつつ、一誠は言われた通りアスカロンを出してシンに渡す。
シンは借りたアスカロンを手捌きで一回転させ、柄頭をヴァーリに向ける。
「受け取れ」
龍殺しの聖剣をヴァーリに与える行為に、意図が分からず皆が疑問符を浮かべてしま

う。
　ヴァーリも周囲と似た様な表情をしながら、言われた通りアスカロンを受け取った。
「それで？　これをどうするんだ？」
「そのアスカロンで腕を斬り落とせ。そうしたら俺はお前の言葉を信じる」
　はぁ？　と最初に声を出したのは誰であったのだろうか。シンが言っていることを一瞬理解出来ず、ワンテンポ遅れて脳が言葉を理解すると、リアスたちだけでなく、すまし顔をしていた美候たちも愕然とした。
「こういう場合は――」
　一同が絶句する中で当人のヴァーリが喋り出すと、自然と皆の耳が傾く。
「利き腕を落とした方が、印象が良いのか？」
「好きにすればいい」
「因みに、俺は両利きなんだが？」
「だったら二本とも斬り落としてみせるか？」
「流石にそれは困る」
　腕を斬り落とす方とさせる方との会話とは思えない程緊張感が欠片も無い。会話で間を置いたことでようやく外野も動き出す。
「おいおいおいい！　本気でやるつもりは無いんだよなぁ？　冗談なんだろう？　そう

ならそうと言って欲しいぜぃ！　笑えないぜぃ！」
「だが、俺の腕一本で話が進む」
「そんな簡単に言わないでにゃー！　そりゃあ私の仙術なら斬った直後ならくっつけることも出来るにゃ！　でも、よりにもよってアスカロンで斬るなんて……！」
「確かにアスカロンは斬られる以上の痛みがあるな。身を以ってそれを知った時は、流石は龍殺しの聖剣と思った」
「他人事の様に言わないで下さい。貴方の腕にどれだけの価値があると思っているのですか？　少なくとも私はこの聖剣を使っても貴方の腕を貰う自信は無い」
「そう言われると光栄だ。ずっと鍛え続けてきたが、聖剣以上と称されると悪い気はしない」
「ヒホー！　そんなの俺様は認めないホ！　完全パーフェクトなヴァーリに勝ってこそ意味があるホ！　片腕のライバルに勝っても俺様はなーんにも嬉しく無いホ！　そんなの勝ち逃げだホ！」
「ジャアクフロスト――完全もパーフェクトも同じ意味だ」
　ヴァーリの仲間たちは必死になってヴァーリを止めようとするが、ヴァーリの気持ちは変わることなく、アスカロンの刃を右肘のやや下に当てる。
「手伝いはいるか？」

「いや、不要だ」

ヴァーリの仲間たちはギリギリまでヴァーリの説得を試みる。しかし、アスカロンの刃が離れることは無い。

騒がしいヴァーリ側とは対照的にリアスたちは冷え切った空気が流れていた。何をどうすればいいのか全く分からないのだ。

確かにヴァーリは敵であった。彼らのしたことはそう簡単に許すべきことでは無い。しかし、冥界でマザーハーロットに襲われそうになった時に間へ入ってくれたし、ロキたちの襲撃を受けた時も助けてくれた。恩人とまではいかないが、ヴァーリの腕がこれから斬り落とされることに言い様の無い罪悪感が湧いてくる。

そして、ヴァーリから好敵手扱いされている一誠もまた、正直な気持ちを言えばこれには反対であった。

（マジでやるのか……？　何か、そんなの見たくねー……）

強かったヴァーリから片腕が無くなる。それを見たくないと素直に思ってしまう。

ロスヴァイセとバラキエルはそれぞれの上司の様子を窺うが、どちらも顔色も表情も変えず、事の成り行きを静観することにしていた。

ヴァーリがアスカロンを振り上げる。その後の光景を想像し、直視出来ないと思ったアーシアとギャスパーは目を瞑りながら顔を逸らす。

時間にすれば二、三秒間の出来事。アスカロンの刃が皮膚へ食い込み、肉を斬り、その奥にある骨へと触れ――

「待っ――」

――誰かが制止の声を上げた。だが、勢いがついたアスカロンはヴァーリ本人には止められないし、止めるつもりも無い。

刃が骨へ達し――そこで止まった。

「――斬り落とすんじゃなかったのか？」

アスカロンを止めたのはヴァーリの意思でも力でも無い。刃先を掴むシンの手によって止まっていた。

「部長が待てと言ったからな」

制止の声を上げたのはリアスであり、彼女はヴァーリの腕の途中で止まったアスカロンを見て冷汗を流しながら、少しだけホッとした眼で見ている。

「いいのか？　俺の保証が無くても？」

「貴方の腕を斬り落とされる所を黙って見ている程悪趣味では無いわ。――取り敢えずは、こちらと手を結びたいという本気は伝わったわ。完全に信用してはいないけど、もう少しだけ貴方と話し合う必要があると思っただけよ」

一考の余地がある。リアスはそう告げる。

「そっちはいいのか？　斬り落とせば信用するって話だった筈だが？」
「部長が見たくないものをわざわざ見せる必要も無い。それに――」
アスカロンを握っていた手を放す。掌はざっくりと裂け、笑みの様な斬り傷が出来ていた。
「俺が止めなかったら斬り落としていたみたいだし、今回はそれで納得する」
一先ずは二人ともヴァーリの提案を受ける形となった。最高潮まで高まっていた緊張感も、これにより一気に弛緩し、全員が安堵の溜息を吐く。
「ふっ。少しは体を張った甲斐があったかな？」
ヴァーリは微笑しながらアスカロンをシンに渡す。その直後にヴァーリの後頭部を美候が軽快に叩いた。
「――どうした？」
「この馬鹿野郎っ！　寿命が縮む様なことを勝手にするんじゃないぜぃ！　ちょいちょい馬鹿な所があると思ってたが、今日で確信したぜぃ！　お前さんは馬鹿だ！」
黒歌はアスカロンで出来た傷を仙術で塞ぎながら、ヴァーリの手の甲を思いっきり抓る。
「ヴァーリは、馬鹿って言葉じゃ片付けられない程お馬鹿さんだにゃー！」
アーサーは微笑を浮かべているが、目は笑っていない。

「貴方には何度も驚かされますが、限度というものを知った方がいいですよ？」
ジャアクフロストはひらすらヴァーリの脛を蹴り続ける。
「ヒホ！　この野郎！　ヒホ！　この野郎！　ヒホ！　この野郎！」
仲間に揉みくちゃにされるヴァーリを、何とも複雑そうな眼で見るリアスたち。
「お前、傷大丈夫なのかよ？」
一誠が小声で話し掛けてくる。
「聖剣でも龍殺しだから、あまり俺には効かないみたいだ」
シンの掌の傷は既に血が止まっていた。
「でも、良かったよ」
シンが安堵した様な声を洩らす。
「腕を斬り落とすことにならなくて」
「やっぱ、気が引けたか？」
「ああ、可哀想だろ？」
シンが指差す。一誠はその方向を見ると看板があった。
『みんなの公園はきれいに使いましょう』
「血の匂いが付いた公園なんて子供たちが可哀想だろ？」
「そっちかよ！」

やはりヴァーリのことを一切気にしていないシンを慄けばいいのか、呆れればいいのか何とも言えない気持ちになる一誠であった。

◇

鉄塔の上で佇むロキ。駒王町からそう遠くない場所でかなり目立つが、ロキは見つかるなど微塵も思っていない。隠蔽の魔術ならばオーディンをも凌ぐと自負している。

周囲の目を遠ざけたロキの表情は酷く不機嫌であった。彼にとって想定外のことが起きたせいである。

『しまらねぇなぁ。折角、あの悪魔たちを泣きっ面にしてやろうとしたら、まさか白龍皇の横槍が入るなんてよぉ』

「……想定外だとしても修正可能な範囲だ。問題は無い」

『あのマタドールに釘刺しに行ったらこれだ。つくづく運がねぇ』

「うるさいぞ」

ロキは更に表情を歪めた。

駒王町へ訪れたのはこれで二度目である。最初に訪れた時、ロキはマタドールと接触していた。

魔人という不安要素。それを制するなど不可能と考え、代わりに動きを想定し易くする為に計画の一部をマタドールへ洩らしたのだ。

オーディンと日本の神々との会談の時、全戦力を集中させてオーディンの首を獲る、と。

自ら架した枷に戦いへの欲求が高まり続けていたマタドールはこれを即座に了承した。彼にとって会談までの日数耐えることなど苦では無くなっていた。神、二天龍、堕天使、悪魔、そして魔人が一堂に会するのだ。それへの楽しみに比べたら、耐えることなど戦いへのカタルシスを高めるだけのこと。

ロキの去り際、マタドールはロキにこう言った。

『悪戯は程々にな』

思い返すだけで腸が煮えくり返り、漏れ出た力で隠蔽魔術を破壊しそうになる。

『落ち着けよ。本当に嫌いなんだな、ああいう手合いが』

「消えて無くなって欲しいな！　マタドールも！　ヴァーリも！　トールも！」

『そこまで嫌うか。まあ、俺もお前の嫌いな奴は嫌いだよ』

ロキは目的の為の手段として戦う。だからこそ、戦うことが目的となっている戦闘狂な者たちを心底理解出来ないし、関わりたいとも思っていない。

「次の戦いで必ずオーディンの首を獲るぞ……！　オーディンだけでない！　二天龍の

首も魔人の首も獲る！」

『くくくく、でかいこと言うじゃねぇか……。やってやろうぜぇ。勝っても負けても結果は変わらねぇが、どうせなら勝って起こしてやろうじゃねぇか、ラグナロク以上の混乱をよぉ！』

無理、難題

兵藤家地下一階の大広間。そこでイリナを含むグレモリー眷属、アザゼルとバラキエル、シトリー眷属にシンと仲魔たちがヴァーリたちと顔を合わせていた。

オーディンとロスヴァイセは、ロキのことで本国と連絡を取り合う為に別室に居る。

ハッキリと言って場の空気は非常に悪い。グレモリー眷属、シトリー眷属はヴァーリたちを強く警戒しており、リアスもソーナも一分の隙を見せまいと険しい表情をしている。

シンもリアスたち程では無いが、目付きを鋭くしてヴァーリたちを見ていた。

ヴァーリたちが今回の件で共闘を申し出てきたのは、サーゼクスやセラフォルーの耳にも入っている。リアスとソーナ曰く、長い沈黙の後にヴァーリたちの協力を認めたと、若干不満そうな顔で言っていた。

サーゼクスが言うには、『禍の団』の英雄派がテロ行為を行い、戦力を割けられない現状では、戦力として欲しいのは確かである。だからと言って信用するにはヴァーリたちと英雄派が繋がっていないという明確な証拠が無い。

そして、当のヴァーリたちがもし今回の協力を得られなかった場合、独自の判断で戦

闘に介入すると脅迫同然の宣言をしている為、目の届かない場所で好き勝手されるよりも目や手が届く場所に置いておいて監視することが無難であると判断された。ただでさえマタドールが潜伏していて危うい状況だというのに、これ以上危険な存在を放置することが出来ない。

ただ条件として、ヴァーリたちは決められた人物以外との連絡は一切取れない様にオーディンの北欧魔術による処置を受けることとなった。『禍の団』と連絡を取る、もしくは魔術に細工を施した場合、その情報はサーゼクスとセラフォルーの下へ届けられ、その場で協力関係は破棄され魔王直々に制裁を下す。協力を認めたサーゼクスたちなりの責任の取り方である。

「取り敢えず、もう一度確認するか」

進行役であるアザゼルが、ホワイトボードを召喚し、ペンを走らせる。書かれた文字は『ヴァーリたちが協力する理由』。リアスたちは既に確認済みだが、事情を詳しく知らないソーナたちの為におさらいをするつもりらしい。

「ヴァーリ、お前が今回協力する理由は？」

「ロキとフェンリルと戦ってみたいだけだ。ああ、でも今回はマタドールも来ているから、彼とも戦いたいな」

その言葉でシトリー眷属たちの顔付きが変わった。明らかにヴァーリの正気を疑う

様な眼差しとなる。実際、匙が小声で一誠に『あいつ、頭おかしいの？』と訊いていた。
「本当にそれだけなんだな？」
「ああ」
　あらゆる年代の女性を一瞬で恋心を抱かせる程の爽やかな笑みを皆に見せるヴァーリ。ただ、言っていることが正気の沙汰では無いせいで、この場の女性たちは逆に引いていた。
「とまあ、こんな感じで戦いにしか興味が無い。元保護者として本気だってことは保証しておく。だからといって油断するなよ。不審に思ったり、怪しい行動をしたら遠慮無く刺してやれ」
　冗談なのか本気なのか、それとも元保護者という立場から刺された程度でくたばることは無いという信頼から来るものなのか、リアクションに困る発言をするアザゼル。
「ははははは。手厳しいな」
　刺していいと言われた本人が一番受けているというのが何ともシュールである。
「さて、ヴァーリたちのことは一旦置いて、話はロキとフェンリルへの対策に移行する。こいつらの対策については、とある者に訊く予定だ」
「対策を知っている人が居るの？」
　そんな都合の良い者が存在することに、リアスは目を丸くする。他の皆も言葉に出さ

なかったが同じ気持ちである。
「五大龍王の一匹、『終末の大龍（スリーピング・ドラゴン）』ミドガルズオルムだ。こいつなら誰よりもあいつらに詳しい」
　五大龍王の名が出て来て、龍を宿す者たちが反応する。
「まあ、順当だが、ミドガルズオルムが俺たちの声に応じるだろうか？」
「二天龍、ファーブニル、ヴリトラ、タンニーンの力で門を開く。そこからミドガルズオルムの意識だけを呼び寄せるんだ。本体は北欧の深海で眠っているからな」
「ええ！　俺もですか……！」
　匙は、自分がその役割に入っていると思わなかったのか、指名されて驚く。
「そんなビビることはねえよ。要素の一つとして来てもらうだけだからな。大方のことは俺や二天龍に任せろ」
　匙が一誠を見る。
「……大丈夫なのか？」
「え？　ああ、うん……たぶん……」
　何とも頼りない返事をされたので、今度はヴァーリの方を見る。
「何でも、不完全な状態だがヴリトラを覚醒させたみたいじゃないか……君にも少し興味がある」

有り難くも無い興味を持たれていたことを知りつつも、闘争への意思を隠さないギラついた目と合ってしまい、速攻で視線を外すと仔犬の様な目でアザゼルを見る。
「大丈夫だから落ち着け。ドライグとアルビオンに任せておけば何とかなる」
そう言って宥める。
「とは言え、呼び寄せた後も問題だな。ミドガルズオルムが素直にロキたちの事を話してくれるかどうか……」
「そんときゃ話してくれるまで粘るしかないな。ドライな関係を期待しておこう」
「そのミドガルズオルムとロキってどういう関係なんですか？」
「ミドガルズオルムはロキが生み出したドラゴンだ。つまり、ロキは父親でフェンリルとは兄弟って訳だ」
一誠の疑問にアザゼルが答える。それを聞いて簡単なことに思えたミドガルズオルムへの質問が、いきなり難易度が高く感じる様になる。親兄弟を売れと言っている様なものだからだ。
「それって答えてくれるんでしょうか……？」
「だから、ドライな関係を期待しているんだよ。とは言っても、人間みたいな関係では無いからな、そう難しい事じゃない……筈」
断言しないことに若干の不安は感じるが、アザゼルの方も勝算無くこのことを提案し

ていないと思うので信じるしかない。
「取り敢えず、タンニーンと連絡が取れるまでは待機だ。俺は今後のことについてグリゴリの連中と対策の相談をしてくる。バラキエル、ついて来てくれ」
「了解した」
アザゼルはバラキエルを連れて部屋から出ようとする。その間際――
「まあ、することが無かったら適当に交流でもしておけ」
――そう言い残して行ってしまった。
アザゼルたちが居なくなると、部屋の中に沈黙が訪れる。アザゼルは気軽に交流しておけと言ったが、元々敵対関係にあった者たちである、そう簡単には会話も出来ない。特にリアス側の何名かはヴァーリたちと本気で戦ったこともあった。
とは言え、ヴァーリたちは特に気にする様子もなく仲間内で小声で何かを話している。シンに至っては最初から話すつもりは無く目を瞑っていた。
どう接すればいいのか分からず沈黙が続く中、それを最初に破る者が現れる。
「ヒ、ヒホ……」
ジャックフロストが、ジャアクフロストに恐る恐る近寄る。ジャアクフロストは真っ赤な目を吊り上げてジャックフロストを睨んでいた。
「やっぱり、オイラと同じジャックフロスト――ヒボッ！」

言い終える前にジャックフロストの顔面にジャアクフロストの右ストレートがめり込む。
「俺様を弱っちいジャックフロストと一緒にするなと言った筈ホ！」
ジャアクフロストが殴り抜くと、ジャックフロストは壁際まで転がっていく。
ジャアクフロストの蛮行に対し、リアスたちが立ち上がる。
「どういうつもり！」
怒りを露にするリアス。彼女もまたジャックフロストを可愛がっている一人として、理不尽な暴力が許せなかった。
「うるさいホー！　俺様のやることにとやかく言うんじゃ無いホ！　スイッチ姫は大人しくおっぱいドラゴンにスイッチでも押されているのがお似合いだホー！」
「なっ！」
舌を出して馬鹿にするジャアクフロスト。ジャックフロストと同じ容姿から飛び出してきた暴言にリアスはショックを受ける。それに合わさって『禍の団』でもスイッチ姫の名が浸透していることを知り、二重にショックであった。
立ち尽くすリアスを見て勝ち誇った笑みを浮かべ、彼女たちに背を向けるジャアクフロスト。
「ジャアクフロスト」

そんな彼にヴァーリが声を掛ける。
「何だホ？　俺様はお行儀良くするつもりなんて無いホ！　俺様はヴァーリの我儘に付き合ってやっているだけだホ！　とやかく指図される謂われは無いホ！」
「あまり油断をするな」
「はっ？　何を言って――ヒホッ！」
目玉が飛び出る様な衝撃が後頭部に受けた。ジャアクフロストの後頭部にジャックフロストの頭突きが炸裂したのだ。
倒れた位置から助走をつけての頭突き。それも無防備な後頭部に受け、ジャアクフロストは前転して壁に背中を打ち付ける。
「オイラは弱くないホー！」
ジャックフロストが吼える。二回会って二回とも殴られた。いくら同族であったかもしれないが、黙って殴られ続ける程ジャックフロストは大人しくない。
「ヒ、ヒホ！　こ、この野郎……！」
思わぬ反撃を貰ってしまったジャアクフロスト。後頭部を擦りながらジャックフロストを睨み付ける。感情が高ぶっているせいかジャアクフロストの足元が凍結し始め、ジャックフロストにも似た様な現象が起こっていた。
「ちょっと待て」

ヴァーリとシンが徐に立ち上がる。止めるのかと思いきや――
「すみませんけど、どいてくれませんか？」
――リアスたちにソファーから立ち上がる様にお願いし、全員がソファーから立つとそれを部屋の隅に移動させる。ヴァーリも無言でホワイトボードを隅に移動させていた。
家具を移動させたことで地下広間が広まる。
「氷は無しだ。室内だし、ここは他人の家だからな。後、殺しは無しで気絶した方の負けだ」
「分かった。聞いたな？　ジャアクフロスト」
「こんな奴、拳だけで十分だホ！」
「ヒ、ヒホ！　やっつけてやるホ！」
「なら続けてくれ」
短く言葉を交わして最低限のルールを決めると、開始の合図を掛けた。
『ヒホオオオオオ！』
ジャアクフロストの拳がジャックフロストの頬を殴る。ジャックフロストは殴られたままお返しのパンチをジャアクフロストの頬に放った。
兵藤家の地下広間で、可愛らしい見た目の二人が壮絶な殴り合いを始める。

拳の重さはジャアクフロストの方が上らしく、殴られたジャックフロストの体がよろける。そこにすかさずジャアクフロストのアッパー。ジャックフロストの頭が仰け反り短い首が限界まで伸びる。

「負けるなー！　怪我はちゃんと治してあげるからとことんやれー！」

ピクシーからの声援が飛ぶ。

すると、ジャックフロストは仰け反った頭をそのまま振り下ろしてジャアクフロストの額に打ち付ける。

「ヒホッ！」

今度はジャアクフロストが仰け反り、そのまま一歩、二歩後退する。

「この野郎ホ！」

だが、三歩目は踏み止まり、短い距離を駆けて助走をつけると、ジャックフロストに両足によるドロップキックをお見舞いする。

「ヒホォォォォ！」

壁際まで蹴り飛ばされるジャックフロスト。壁面に後頭部を派手に打ち付けられる。

「ヒ～ホ～。痛がっている暇は無いよ～」

痛みで点滅する視界の中でジャックランタンの声が聞こえ、壁の上を転がる様にして移動する。直後に飛び込んできたジャアクフロストの足がジャックフロストの顔が

あった位置を通過して壁に叩き付けられた。
「ヒホ！」
「ヒホ！」
ジャックフロストがジャアクフロストに飛び掛かり、そのまま床の上で揉みくちゃになる。
凄絶な喧嘩にシトリー側はどうすればいいのか呆然としてしまう。ただ、匙はジャックフロストへ密かに応援していた。
マウントを取ろうとゴロゴロと転がっていくジャックフロストとジャアクフロスト。事情を知らない者が見ればじゃれ合いに映るかもしれない。
ジャックフロストがジャアクフロストの上になる。
「見下すんじゃ無いホ！」
次の瞬間にジャックフロストは頭を掴まれ、蹴り上げと腕力による巴投げ擬きでジャアクフロストの上から投げ飛ばされた。
「ヘボッ！」
受け身も出来ず、大の字で床に落下したジャックフロスト。顔や腹を思いっ切り打ち付ける。
「グルル。クルゾ」

痛がっているジャックフロストに届くケルベロスの声。すぐに床の上を転がる。
「ヒッホッ！」
飛び上がったジャアクフロストのボディプレスが床上に炸裂する。ケルベロスの声で間一髪避けることが出来た。
「ちょこまかと……！」
すぐに決着すると思っていたジャアクフロストは、思った以上に粘るジャックフロストに苛立ち始める。
ジャックフロストは立ち上がり、ジャアクフロストに向けて拙いファイティングポーズをとる。心が折れていないことを見せつける為に。
「可愛い顔して根性あるねぇい。いいぞ、そのまま頑張れー」
「美候！　なに応援をしてんだホ！」
ジャックフロストに接近すると、その口に指を突っ込んで左右に思いっ切り引っ張りながらジャアクフロストが敵を応援する美候を怒鳴る。
「お前は可愛げないからねぇー」
「うるさいホ！　この猿！　お前ら知ってるかホ！　美候の尻は、猿と同じで真っ赤なんだホ！」
腹いせに皆の前でとんでもないことを暴露するジャアクフロスト。そのせいで全員

の視線が美候に集まる。
「いやいやいや！　でたらめだぜぃ！　根も葉もない嘘！」
「そうやって必死になって否定するのが怪しいホ！」
「大？吐かれたら誰だって否定するぜぃ！」
ジャックフロストをいじめる片手間に美候にもちょっかいを掛けるジャアクフロスト。
「ヒホッ！」
しかし、ジャックフロストを侮り過ぎたのか、気を取られている隙にジャックフロストの頭突きを顔面に入れられてしまう。
「ヒボ！」
濁った声を上げながら仰向けに倒れる。その際に突っ込んでいた指も離れた。
「油断し過ぎだニャー」
攻撃を不様に受けたジャアクフロストに呆れる黒歌。
「というよりも大分戦い方が雑ですね。感情が昂ぶり過ぎて空回りしている様にも見えますし、同族故に無意識に手加減している様にも見えます」
アーサーはジャアクフロストの戦い方を冷静に分析する。
ジャアクフロストは即座に立ち上がり、ジャックフロストの懐へ飛び込むと同時に頬

に拳をめり込ませ、そのまま殴り抜ける。
しかし、いつの間にジャックフロストがジャアクフロストの帽子を掴んでおり、殴り飛ばされたジャックフロストに引っ張られ、ジャアクフロストは顔を床へ強かに叩き付ける結果となった。
ジャアクフロストはうつ伏せ、ジャックフロストは仰向けに倒れる。だが、数秒経った後に二人は立ち上がった。
二人は同時にファイティングポーズをとる。ジャアクフロストは気に入らないジャックフロストを叩きのめす為に、ジャックフロストは自分以外の同族に話を聞いてもらう為に戦う。
拳が相手にぶつかり、意地と意地が衝突し合う。体も心も何でも触れ合えば摩擦が起こる。幾度も擦れ合えば熱が生まれる。例え、冷たい雪精であったとしても。
二人の衝突によって生じる熱は、やがて周囲にも伝播していく。
「が、頑張って下さい！」
「ま、負けるなー！」
ジャックフロストが殴られる姿から目を逸らしていたアーシアとギャスパーもその熱に中てられ応援し始める。
ジャックフロストが傷付く姿に心を痛めていたリアスや朱乃もやがて覚悟を決めて、

声援を送っていた。
過熱していく地下広間。その中で黙って戦いを見守るシンとヴァーリ。共に自分の仲魔が勝つという信頼によりただ戦いの行く末を見る。
『ヒホォォォォォォ!』
雄々しい声を上げながら何度目のぶつかり合いが始まった。

◇

「んで？　結局結果はどうなったんだ？」
アザゼルは、ジャックフロストとジャアクフロストの戦いの結末を一誠に尋ねていた。その近くにはヴァーリと匙も居る。
彼らが居るのは白い広々とした空間。例の龍王を呼び出す為の特別に用意した場所である。一誠たちは転送用魔法陣でここに移動していた。
「最終的にジャアクフロストがジャックフロストのタフさにブチ切れて、禁止していた氷を使おうとしていました」
「へえ、ならジャアクフロストの反則負けか」
「その直後にジャックフロストが気絶したんで、結果的には引き分けですね」

「引き分けか。はは、根性あるじゃねぇか、ジャックフロストは」
　ジャアクフロストの実力を知っているアザゼルは、相手に反則させるまで粘ったジャックフロストの精神力を讃えた。
「いやー、殴られまくったジャックフロストの顔、すんげぇことになってましたよ」
「顔に雪玉くっつけたみたいにボコボコだったな」
　笑っちゃいけないと分かっているが、雪精が殴られたらそんな風になるんだ、と妙な感心と可笑しさを覚えた。そして、その時のジャックフロストの顔を思い出し、一誠と匙は笑いを堪えて顔を引き攣らせる。
　一誠たちから少し離れた場所で空間が歪む。その歪みの中から巨大なドラゴン――タンニーンが現れる。
「先日以来だな、お前たち」
「タンニーンのおっさん！」
「そちらはヴリトラの……何時ぞやのレーティングゲームは見事だったぞ」
　匙に気付き、声を掛けるタンニーン。
「い、いや、その、へへへ、ど、どうもあ、ありがとうございます……」
　しどろもどろな匙。
「緊張するなよ、匙。おっさんは厳しいところはあるけど良いドラゴンなんだぞ？」

「ば、馬鹿！　おっさんはねぇだろ！　おっさんは！　元龍王で最上級悪魔のタンニーン様なんだぞ！　畏れ多いっての！」
気軽に言う一誠に対し、匙は信じられないと言った態度。
「最上級悪魔……？」
「最上級悪魔ってのは冥界でもごく限られた悪魔、もっと言えばレーティングゲームで現トップ１０が全員最上級悪魔だ！　冥界への貢献度、ゲームでの成績、能力を評価されて初めて得られる称号なんだよ！　っというか悪魔になったんだからそれぐらい勉強しておけ！」
無知な一誠の頭を八つ当たり気味で匙が叩く。
「白龍皇か……妙な真似をすれば、その時点で躊躇いもなくお前を噛み砕くぞ」
「そう言われると、やってみたくなるな」
睨むタンニーンに対し、ヴァーリがわざとらしく挑発する。その挑発を鼻で笑うタンニーン。相手が本気では無いとすぐに分かった。
「それにしても、赤龍帝と白龍皇。二天龍が大人しく肩を並べているとはな……」
かつては三界の戦争すら無視して争ったドラゴンが、大人しくしている様を感慨深げに眺めるタンニーン。
『月日が経てば、俺ですら少しは丸くなるということかもしれんな。なあ？　白いの』

『……』

『……え？　無視……？』

ドライグを完璧にシカトするアルビオン。その後も何回も呼び掛けるが悉く無視。

その間にアザゼルは地面に魔法陣を描いていき、ミドガルズオルムを呼び出す為の専用術式を展開していく。

「しかし、あやつは本当に来るだろうか？　俺ですら二、三回程度しか会ったことが無い」

「二天龍がいれば、否が応でも反応するさ」

ミドガルズオルムについて全く知らない一誠は、どんなドラゴンなのかタンニーンに尋ねた。

「あやつは基本的に動かん。世界の終末に動き出すものの一匹だからな。使命が来る時まで眠り続けている。昔は偶に地上に上がってきていたが、その時も寝ていた。最終的には世界の終わりまで深海で過ごすと宣言した。数百年前にな」

一誠や匙からすれば、数百年間深海に眠るという感覚が想像出来ない。転生悪魔故に百年、二百年など遥か彼方という印象である。

そんなことを考えている内に、アザゼルは魔法陣を描き終え、指定した場所に立つ様指示を出す。

全員が指定した位置に立つと、アザゼルは小さな魔法陣を空中に描く。地面に描かれた魔法陣が反応し、それぞれが立つ位置が輝き出す。
一誠は赤、ヴァーリは白、アザゼルは金、匙は黒、タンニーンは紫。各ドラゴンを象徴した色で輝く。
それから数分間、一誠たちはずっと立っていた。一誠と匙は、本当にミドガルズオルムが来るのか不安になり、横目でアザゼルたちを見る。アザゼルは魔法陣に細かい調整を加え、ヴァーリとタンニーンは腕を組んで瞑想でもしているかの様に静かに佇んでいた。
すると、魔法陣から別種の光が放たれ、その光が一誠たちの頭上に投影を始める。
やっと来たかと思う一誠と匙。どんどん姿が映し出されていくが中々終わらない。
最初は何気なく見ていた一誠と匙も、巨大化していく映像に口が無意識に開き始める。
最終的には長い胴体の巨大という言葉でも足りないドラゴンが浮かび上がる。
圧倒される大きさに言葉を失う。蜷局を巻いて体を小さく纏めているのに、それでも空間一杯に広がっている。
「ミドガルズオルムはドラゴンの中でも最大の大きさを誇る。大凡だが、グレートレッドの五、六倍はあるだろうな」

どれぐらいの大きさなのだろうという疑問を抱く前にタンニーンが一誠たちに教える。グレートレッドの大きさは約百メートル。ミドガルズオルムの大きさは五、六百メートルとなる。

高層ビルよりも遥かに大きなドラゴンを見上げる一誠。丁度顔が見える位置にある。体は蛇に似ているが、顔付きは角と突き出た口部というイメージ通りのドラゴンのもの。

暫くの間、ミドガルズオルムを見上げていたが、特に何の反応も無い。

すると、地鳴りの様な音が聞こえてきた。段々と大きくなり、最高潮に達すると飛行機が通過していく様な爆音までいくが、そこから段々と小さくなっていく。

一定のリズムで繰り返されるそれは間違いなくいびきであった。

「案の定、寝ているな。おい」

タンニーンが呼び掛けるが、ミドガルズオルムのいびきによってその声は掻き消されてしまう。

耳を閉じていろ、と周りに言った後、タンニーンは息を吸い込む。胸を少し膨らませると――

「起きろっ！　ミドガルズオルムっ！」

いびきが吹っ飛ばす程の大声量を発した。耳を閉じていた一誠たちも飛び上がりそ

うになる。人を殺せそうな程の声であった。
『ふあああああああ……何だか懐かしい龍の波動だなぁ……』
あれだけの声量を浴びせられても目覚まし時計で起こされたぐらいの軽い反応をしながらミドガルズオルムが目を覚ます。
『ふあああああああっ……』
もう一度欠伸をするミドガルズオルム。空間の上下に上顎、下顎が付きそうになる程の大きな口である。
『タンニーンだぁ。久しぶりだねぇ』
大きな図体に良く似合った、ゆったりとした口調。喋り方は、一誠には少し幼く感じた。
ミドガルズオルムは人よりも大きな眼球を動かし、周囲を確認する。
『ドライグにアルビオン、ファーブニルにヴリトラまでいる……どうしたの？　世界でも滅ぼしにいくのぉ？』
「そんなことはせん。お前に訊きたいことがあって意識だけ呼び出したのだ――おいっ！」
『ふあい？』
「寝るなっ！」

短い説明の間に再び寝そうになったミドガルズオルムに、タンニーンの怒声が飛ぶ。
「お前と玉龍は、どうしてそうも怠け癖があるのだ！」
『タンニーンが真面目過ぎるだけだよぉ』
ミドガルズオルムは欠伸を噛み殺しながらタンニーンに聞き返す。
『それで？　僕に訊きたいことってなぁに？』
「お前の父と兄弟について訊きたい」
『ダディとワンワンのこと？』
ロキとフェンリルの実物を知っていると違和感を覚える呼び方である。
「詳しいことは俺から話す」
タンニーンの言葉を継いでアザゼルが説明しようとする。
『長いのは勘弁してねー。眠くなるから』
「三分で終わる」
『長ーい』
「それぐらい我慢しろ！」
『はいはい』
タンニーンに叱られ、ミドガルズオルムは渋々と言った態度で聞く態勢になる。
アザゼルは、これまで起こったことを簡潔に説明する。オーディンが日本の神々と会

談する為に来日したこと。ロキがフェンリルを連れて襲撃してきたこと。赤龍帝と白龍皇が共闘すること。

説明し終えると、ミドガルズオルムは神妙な態度に変わっていた。

『ふーん。ダディがワンワンと一緒におじいちゃんとねー。それで、ドライグとアルビオンが一緒に戦うってわけ？』

「そういうことだ」

タンニーンの言葉を聞いた後、ミドガルズオルムは一誠とヴァーリをジロジロと見る。

『面白いね。二人が戦いもせずに並んでいる光景なんて想像もしたこと無かったよ。なーんか起きているのに夢でも見ている様な不思議な感じ』

「その点については俺も同意しよう」

ミドガルズオルムの率直な感想に、タンニーンも頷く。

『で、ダディとワンワンのことだね。ワンワンの牙は厄介だよぉ。咬まれたら、場合によっては死ぬかもしれないし。弱点は、グレイプニルだね。ドワーフが作った魔法の鎖。それで縛り付けられる』

「残念だが、それは確認済みだ。フェンリルの住処で破壊されたグレイプニルが発見された。フェンリルを拘束していたものだ」

　フェンリルは前からグレイプニルによって行動を制限されていた。神喰狼などという存在を自由にさせられないこと、ロキに対し不穏なものを薄々感じ取っていた為のオーディンの指示である。
『うーん……いつの間にかダディがワンワンを強化したのかなぁ？　ダディは言う事を良く聞くワンワンを可愛がっていたしね。それなら北欧のとある地方に住むダークエルフに相談してみなよぉ。あそこの長老がドワーフの技術を強化する術を知っている筈だからぁ』
　ミドガルズオルムからダークエルフたちが住む位置を教えられる。一誠には数字と聞いたことのない単語の羅列にしか聞こえなかったが、アザゼルはその情報を持っていた携帯電話に素早く打ち込む。すると、携帯電話から世界地図の立体映像が映し出され、不要な部分はカットされ、必要な部分だけが拡大される。
　ミドガルズオルムに示された場所を確認すると、仲間の堕天使に素早く情報を送り現地に向かわせた。
「よく知っていたな。ドワーフもエルフも人間界の変化で異界に移住したと聞いたが？」
『一部のドワーフやエルフは人間界に残ったんだよぉ。普通じゃ入れない秘境だけどねぇー。昔は、色々とお世話になったなー』

「で、次はロキ対策なんだが……」
アザゼルがロキへの有効な手段を聞いた途端、ミドガルズオルムは黙る。眠ってしまった訳では無い。両眼はしっかりと開いている。ロキについて何か考えている様に見えた。
『ダディは……うーん……どうなんだろう……』
歯切れが悪く、言い淀んでいる。
「何か問題があるのか？」
『ダディってさ、悪知恵が働くし、もの凄い負けず嫌いなんだよねぇ。だから、絶対に勝てると確信しないと戦わないの』
「じゃあ、今回のことは勝算があってのことって訳か？」
『ちょっと違うかなぁ。ダディが一度だけ言ってたけど、どんなに策を練っても絶対に勝てると確信を抱けないのがオーディンとトールなんだってさ』
ロキにとって最大の壁と言えるのはその二柱。
「つまり――」
『その二人を敵に回すってことは、ダディも結構賭けていると思うんだよね、今回』
余裕そうに見えて、ロキもまた必死になっていると語るミドガルズオルム。
『まあ、そんなダディを倒す可能性があるとしたら、ミョルニルぐらいかなぁ』

「トールのミョルニルか……オーディンの爺さんが口利きしてくれたら貸してくれるか？」
「トールの代名詞とも呼べる武器だ。そう簡単に貸すとは思えない。例え、主神の頼みだろうと」
　アザゼルの考えに、ヴァーリが異を唱える。アザゼルはそれに反論はしない。アザゼルも同じ事を考えていたのであろう。
『それならさっき言ったドワーフとダークエルフに頼んでごらんよぉ。ミョルニルのレプリカをオーディンから預かっていた筈だから』
「色々と物知りで助かるよ」
　ロキに有効な武器を手に入れる手段まで教えられ、アザゼルはミドガルズオルムに礼を言う。一方で、ヴァーリは眉間に皺を寄せていた。
「事が簡単に進めばいいが……」
　誰にも届かない声量で不穏な言葉を洩らす。
『んん、まあ、いつものダディだったらそれでやれると思うけど……事が事だし、ダディも本気になるかもねぇ……』
「ロキの本気？　どんなもんなんだ？」
『知らない。見た事無いし』

「はあ？　知らないのに、随分と怖がっているみたいだが？」
『怖がってる……うん、そうだねぇ……ダディは怖いよ。何か秘密を隠しているみたいだし』
「秘密？」
　ミドガルズオルムから告げられるロキの秘密。これから戦う相手である、嫌でも興味を惹かれる。
『先に言っておくけど、僕は何にも知らないからねぇ。何かを隠しているのは分かっているけど、聞けなかったよ、怖くて。きっと知ろうとしたら僕はダディに殺されてた』
　五大龍王にここまで言わせることに皆が驚く。ロキは、一体どんな秘密を抱えているのか。
『さっきも言ったけど、ダディは今回の戦いに賭けているみたいだし、秘密もバラしちゃうかも。その秘密があればオーディンとトールも倒せるかもしれないしね』
「貴重な情報、どうもありがとよ」
『あんまり役に立つとは思わないけど、深海から君たちの無事を祈ってるよぉ。またこうやってお喋りしたいしね』
　ミドガルズオルムは大きく欠伸をする。
『ふあああああ。僕はそろそろ眠るよ』

「そうか。色々とすまんな」
タンニーンが礼を言うと、ミドガルズオルムは目を細める。
『いいさ。同じドラゴンのよしみで。また何かあったら起こしてよ』
ミドガルズオルムの映像が切れ掛け始める。
『あ、そうだ』
「何だ？」
最後に何かを言い残そうとする。
『四騎士のおじちゃんたちに会ったらよろしく伝えておいて。最近、色々と動き始めているみたいだし』
四騎士。その名を聞いて全員はバラバラな反応を示す。アザゼルはギョっとし、タンニーンは敵意の炎を瞳に宿し、ヴァーリは好戦的で獰猛な笑みを浮かべ、名前だけ知っている一誠と匙は周りの態度にドギマギしていた。
最後に不吉な言葉を残して、ミドガルズオルムの映像は消えた。

◇

ミドガルズオルムと会話した翌日の朝。地下の大広間では会合した時のメンバーが

再び集まっていた。
　ロキとの決戦が近い為、全員が本日は学校を休んでいる。会長としての責任を負っているソーナにとっては断腸の思いらしく、その表情は険しい。
　そんな中で、オーディンとロスヴァイセは非常に気不味そうな表情をしている。特にロスヴァイセの動揺は酷く、常に目が泳いでいる。
「おい。どうしたんだよ、爺さん？」
　見兼ねてアザゼルが事情を尋ねる。
「あー、とても言い難いことなんだが……」
「勿体ぶらずにズバっと言ってくれ」
「分かった。頼まれていたミョルニルのレプリカ、手に入らんかった」
　オーディンの爆弾発言に、一瞬何を言っているのか分からず静まり返る大広間。
「――は？　どういうことだ？　まさか、ロキの奴が――」
「いや、違う。持っていったのは別の奴じゃ……」
「誰なんだよ、そいつは？」
「……ル」
「何だって？」
「トール」

「はあっ！」
　トール本人がミョルニルのレプリカを回収した。その事実にアザゼルは我が耳を疑うが、オーディンとロスヴァイセの態度からして本当のことらしい。
「何でトールがレプリカ持っていくんだよ！」
「儂だって知りたいわっ！　儂直々に取りに行ったら『トール様が既に持っていきました。あれ？　オーディン様の命なのでは？』と言われたんじゃぞ！」
　アザゼルの怒声に、オーディンも怒声で返す。オーディンにしても寝耳に水な出来事である。何処でこの情報を仕入れたのかは知らないが、トールに先を越されてしまった。
「どうすんだよ……てか、肝心のトールはどうした？」
「分かりません。連絡も取れない状況で……」
　ロスヴァイセも心底申し訳なさそうな表情をしている。対ロキ戦の為の対策が、まさか身内である北欧の神に妨害されるとは予想外のこと。皆に迷惑を掛けて居た堪れなくなっていた。
「いきなり出鼻を挫かれた気分だ……何考えてんだよ、トールの奴は！」
「知りたいなら教えてやる」
　返って来ない筈の罵倒に返事があった。空間が歪み、その中から体の各部が全て逞し

く太ましい巨人が現れる。
その巨人が現れただけで広い筈の大広間が狭く感じられ、同時に息をすることすら苦しくなる程の圧迫感が生まれる。
「トール……！」
リアスがその存在の名を口に出す。北欧の神の中でも最強と謳われる雷神が兵藤家の地下に出現した。
「トール！　お主は――！」
「お叱りの言葉は後にして頂けるか？　オーディン殿」
オーディンの言葉を遮り、トールはある物を出す。豪華な装飾と紋様が刻まれた金槌。今、トールが出した物こそミョルニルのレプリカである。
「望みの品はこれだな？」
「その通りだ。さっさと渡してくれると有難いんだが？」
「誰が使う予定であった？」
「そりゃ、イッセー――当代の赤龍帝だ」
トールの目が周囲を見渡す。トールの眼光を受けるだけで他のメンバーは萎縮してしまう。そんな中でトールの目が一誠へと定まった。
仮面越しの視線を浴びせられ、一誠はその圧でトールの体が倍以上に大きく見える。

「赤龍帝」
「は、はい！」
　名を呼ばれ、声を裏返しながらも返事をする。
「贋作とはいえミョルニル。資格の無い者が扱うことは私が許さん」
「し、資格？」
「私が出す条件を見事に合格してみせれば、資格有りと認めよう」
　トールは一誠に対し、何かしらの試練を与える様子。
「一体、どんな条件を出すのでしょうか？」
「あ奴とて状況は分かっている筈。まあ、無理難題を出すことは――」
「私と戦え」
「ど、どどどど、どどど！　どうしましょう！　オーディン様！」
　ロスヴァイセは激しくうろたえながらオーディンを揺さぶる。オーディンは、全てを見通す様な静かな表情で一言。
「……死んだな、赤龍帝」

異名、傷心

広々とした空間で相対する一誠とトール。トールは武という言葉を体現したかの様に静かに、だが威圧を放ちながら佇み、一誠の方が冷や汗をこれでもかと流し、血の気を失った蒼白顔で立っていた。

『私と戦え』

ミョルニルのレプリカの使用を懸けて一誠はトールと勝負しなくてはならなくなった。

相手は北欧神話最強クラスの神。一方で一誠は歴代の赤龍帝の中でも最底辺とまで言われているレベル。まさに比べ物にならない。

そんな対極の二人が戦うのである。

トールがこの話を出した時、当然ながら批判する声が上がった。アザゼルやリアスたち、主神であるオーディンもトールと一誠が戦うことを反対した。

だが、トールはそんな反対意見に一切耳を貸さず、しなければ絶対にミョルニルのレプリカを渡さないという始末。更には、それでも欲しければ力尽くで奪えばいいとまで言ってきた。

ロキたちとの戦いが控えているのにトールと総力戦など出来る筈が無い。ロキたちとの決戦を前に全滅する可能性すらある。

「俺……やります！」

一誠はトールとの戦いを受けることを決断した。どうしようもない状況、唯一打破出来る方法は、一誠が勝負の申し出を受け入れることのみ。

そうと決まると一誠とトールが戦う場所を決めることとなる。戦いの場所に選ばれたのは、以前ギリメカラとの戦いで使用したグレモリー領地下のバトルフィールド。

そして、トールの方から戦いに於いて幾つかの条件が出された。

一誠は禁手を使用すること。トールはミョルニルと雷の使用を禁じ、素手のみ。決着は一誠がトールに一撃入れたら勝ちとする。

完全に一誠にとって有利な条件であった。禁手使用の上で一撃だけトールに与えればいいのである。

その条件を聞いた時一誠は、やれるかもしれない、と密かに思った。

しかし、今、トールと向き合ってその考えが甘かったことを知る。

（何だこりゃ……どう戦えばいいんだ……）

向き合うだけでトールが二倍にも三倍にも膨れ上がったと錯覚する。だというのに戦い方のイメージが一切湧かない。

こう攻めよう。この手順で隙を生ませよう。この角度から行こう。戦いの時はおぼろげながら頭の中にそういったイメージが浮かび上がる。しかし、トールを見ているとそれが一切出て来ない。

『気をしっかり持て、相棒。トールの気配に完全に呑まれているぞ』

（そうは言っても……どうすりゃいいんだ……）

考えれば考える程、頭の中が真っ白になっていく。

弱気になる心に喝を入れ、出来るだけトールを観察する。丸太の様な腕と脚。黄金の仮面から覗かせる翡翠の目。手足には白い手袋と靴。そして、白のマントを着ている。

胴体のみを覆うスケイルメイルに似た鎧――とそこまで見て気付く。

（よくよく見るともの凄い格好してるな……何で気にならなかったんだろう……神様の威厳ってやつなのか？　って、どうでもいいこと考えてるし……）

際どい姿が気にならない程自然に見せるトールの立ち姿。冷静に現実と向き合った結果、どうでもいいことに気付く一誠。

トールは一誠の禁手化を待っているが、一誠は未だに禁手を発動していない。

そんな一誠の様子に、見守っているリアスたちも不安げな眼差しになっていく。

大きく深呼吸した後に一誠は『赤龍帝の籠手』を装着し、禁手へのカウントダウンを開始する。

約束通りトールはカウントダウンが始まっても全く動かない。その余裕に満ちた態度が一誠によりプレッシャーを与える。
カウントダウンの音がやけに大きく聞こえ、一秒ずつ数えている筈なのに早く感じてしまう。それは、戦いへの恐れであることを一誠は自覚していた。
禁手への準備に入った一誠をシンは黙って眺めていた。すると、その隣にヴァーリがやって来る。
「どっちが勝つと思う？」
明日の天気でも確認するかの様な気軽な声、仮にも自分のライバルとなる男が戦おうとしているのに呑気と言える。
「考えるまでも無い」
「そうだな」
シンの一言にヴァーリは同意する。二人とも既に結果が見えていた。
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』
『赤龍帝の鎧』を纏った一誠は、即座に倍化を行う。
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』
立て続けに鳴る倍化の音声。瞬時に能力を最大まで高める。

『ＪＥＴ！』

背部の噴出孔から噴き出される魔力。直線限定なら騎士の木場の速度と同等以上が出せる。

一気に最大加速まで速度を上げ、赤い閃光と化しながらトールへと突っ込む。

加速の中で拳を構える一誠。相打ちを覚悟でトールの腹部を狙う。

向かってくる一誠にトールは構えようともしない。

一誠は拳を突き出し、そのままトールへ――

「……あれ？」

視界一杯に広がる見慣れた天井。勘違いでなければ自室の天井である。

最初は夢を見ているのかと思った。だが、背や手足に伝わってくるベッドの柔らかい感触が現実であると告げている。

だが、どう考えても辻褄が合わない。ついさっきまでトールと戦おうとしていた筈なのに。いつの間にか禁手も解除されている。

一誠は上体を起こす。

「うん……」

眠気を帯びた声。横を見るとアーシアがベッドの縁にもたれ掛っていた。一誠が見ている前でアーシアは目を擦り、半眼を開けたかと思えば一気に見開く。

「イッセーさん！　起きたんですね！」
喜び、一誠に抱き付くアーシア。普段なら抱き付くアーシアの暖かさに心を蕩かす所であるが、今の状況を全く呑み込めていないせいで、それに浸る余裕が無い。
「な、なあ、アーシア。何で俺ここで寝てるんだ？」
アーシアを優しく離し、どうしてこうなったのかを訊いた途端、気不味そうに視線を伏せてしまった。
「俺、トールと戦ってたよな？」
「それは……」
トールの名前を出した途端、片頬の辺りがじんわりと熱くなり、疼く。
言い難そうにするアーシア。その顔から察せない程一誠は鈍くない。
アーシアが答えられないなら、もっと身近な存在に訊けばいい。
「ドライグ……俺……負けたのか？」
『――ああ、そうだ』
敗北をドライグに教えられ、一誠はフラフラとした足取りで自分の部屋から出て行こうとする。
「あ、あの……」
「ごめん。少しだけ、一人にしてくれ……」

いつもは明るい一誠から出て来た深く沈んだ声を聞き、アーシアはそれ以上に何も言えず、何も出来ず、出て行く一誠の背を見ていることしか出来なかった。
一誠は力無い足運びで玄関に向かって行く。その途中で――
「起きたのか」
――仲魔と一緒にいるシンと会った。
「――よお」
応じる一誠の声に張りが無い。
「何処かへ行くのか？」
「……ちょっとな」
「そうか」
それだけで済ませ、シンは一誠を止める気が無い。
「部長たちはどうしているんだ？」
「アザゼル先生たちや会長たちと、ヴァーリの仲間と今後のことを話している。俺は、こいつがまたジャアクフロストと衝突し始めたから引き離してここに」
ジャックフロストの両脇を掴んで持ち上げる。ジャックフロストの瞼や額には、たん瘤代わりに雪玉がくっついていた。
「またやったのかよ」

「ヒホ！　絶対決着を付けるって言うんだホ！　オイラだって黙って負けないホ！」
ジャックフロストと引き分けになったのが余程悔しかったのか、ジャアクフロストが一方的に喧嘩を売ってきて、それをジャックフロストを買ったのだが、流石に重要の話をしている場だったので最後までやらせることはせず、ほとぼりが冷めるまでお互い離しておくことになった。
「あのジャアクフロストは、ヴァーリの言う事しか聞かないそうだ」
「ヴァーリは居ないのかよ」
「まだ、グレモリー領のバトルフィールドに居る。トールと一緒に」
トールの名前を聞いて、またも片頬が熱くなるのを感じた。
「一緒にって……」
「またとない機会だとか言って、トールと実戦方式の特訓をしているらしい」
ヴァーリの度を超えたバトルジャンキーっぷりに、逆に敬意を覚えそうになる。
そして、一誠はトールとの戦いで気になっていることをシンに訊く。
「なあ、俺ってどうやられて負けたんだ？」
自分の傷口を抉る質問であると分かっていた。しかし、聞かずにはいられない。知らなければ敗北であっても納得が出来ない。
「お前が殴ろうとして逆に一発殴られた。それで終わりだ」

あの時の光景は、かなり衝撃的なものであった。

最高速度で突っ込む一誠。次の瞬間には逆方向に最高速度以上の速さで吹っ飛んでいた。人体はこれ程までの高さで跳ねるのかと思う程、地面を何度もバウンドした挙句に、バトルフィールドの端の壁に体を埋め込む形でやっと止まった。

トールが拳を握っていたことから反撃を受けたのが分かったが、雷神に相応しい雷光の速度で放たれたそれは、殴った部分だけを切り取ったかの様な錯覚を覚えた。

その後、壁に埋まった一誠を引っ張り出し、兵藤家宅へと運んでアーシアに治療して何とかなった。殴られた直後の一誠の顔は、明らかに原型が変わっていた。

「はは、一撃かよ」

一誠は乾いた笑い声を出しながら片頬を撫でる。頬にある熱と疼きは、トールの拳が残した爪痕だったのだ。

自分ではそれなりに強くなったと思った。しかし、日々積み上げてきた自信は、皆が見ている前でトールによって一撃で粉砕された。

プライドを粉々にされた一誠であるが、もしこの心境をアザゼルやマダなどに吐露したら、『自惚れるな』と一喝されただろう。雷神トールに勝てる存在など、あらゆる勢力の中でも極限られている。そんな相手に禁手を覚えた程度の新米転生悪魔が勝とうなど、笑い話にもならない。

そうなっていたら今の一誠の気持ちも多少軽くなり、前向きになっていただろう。だが、この場にアザゼルたちは居ない。トールがどういう存在か一誠は詳しく知らない。話している相手は友人であり、ライバル視し、出来ることなら情けない姿を見せたくないシンである。

悪い要素が重なった結果、一誠は普段よりもネガティブな気持ちになってしまった。

「……ちょっと外の空気を吸って来る」

「分かった」

「いってらっしゃーい」

居た堪れない気持ちになった一誠は、リアスたちと顔を合わせることを避けるように兵藤家を出ようとする。シンはそれを止めることはせず、ピクシーは呑気な言葉を送る。

それと入れ違う様にして朱乃がこの場にやって来た。

「今、誰か出て行きましたか？」

「イッセーが――」

一誠の名を出すと、朱乃の顔付きが険しくなる。

「イッセー君が？　何故止めなかったの？　怪我をしたばかりだというのに……！」

温厚、穏やかという印象が強い朱乃だが、最近実父のバラキエルのこともあって余裕

を感じられなかった。それらが積もり、更には想い人の一誠のことも重なり、遂に感情を御し切れなくなり、シンに対してはっきりとした怒気を向けていた。
今にも雷光が発生しそうな朱乃の怒りに、ピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンはシンの後ろに隠れる。なおケルベロスは興味なさそうにそっぽを向いていた。
シンへの怒りを押し殺して、朱乃は一誠を連れ戻そうとするが、シンが玄関前に立ち塞がる。
「――どきなさい」
「断わります」
シンと朱乃。今まで衝突したことの無い二人が初めて真っ向からぶつかる。
「もう一度言うわ。どきなさい」
同じ言葉を繰り返すのは、朱乃もシンと争うことを忌避している表れであった。
「誰にも追い掛けて欲しくないと思いますよ、今のあいつは」
二度の警告を受けてもシンは退かない。
「一人になりたいって顔をしてたので」
「そんなの貴方の主観でしかないわ！」
「なら追い掛けますか？　今の情けない顔を先輩に見られたらあいつが傷付くかもしれませんが」

「そういう言い方は……卑怯よ」
　言い終える頃には朱乃の声は萎んでいた。一誠を慰めたいと思っている朱乃。逆に傷付けると示唆されると、その可能性を否定し切れなかった。
「イッセー君は、一人になってどうするつもりなの……？」
「単純に少し時間が欲しいだけじゃないですか？　気持ちの整理をする為の。何せ何も出来ずに一撃で負けたので」
　バッサリと斬る様な言い方に、朱乃は顔を顰める。もう少し歯に衣着せろと言いたげであった。
「トールに完敗したこと、あいつはちゃんと向き合うか目を逸らすか……姫島先輩はどちらだと思いますか？」
「何故、それを……私に訊くの……？」
　朱乃は両手を強く握り締める。シンの質問は、自分の現状への当て付けの様に朱乃には聞こえた。父親と向き合うことをせず、一方的に拒絶する朱乃を皮肉った問い。
「――深い意味は無いですよ。気分を害したのならすみません」
　シンは言うだけ言ってあっさりと引いた挙句、謝罪の言葉と共に軽く頭を下げる。しかし、深い意味は無いという言葉を朱乃は信じられなかった。一誠を通して朱乃に問い掛けた様にしか聞こえない。

「目障りならここから離れます。じゃあ」
結局朱乃の答えは聞かず、シンは仲魔たちを連れて行ってしまった。一人残された朱乃。その頭の中にはシンの問いが何度も反響している。
「そんなこと……私が答えられる訳ないじゃない……」
誰にも届かない程小さく、悔恨に満ちた言葉が朱乃の口から滑る様に零れ出た。

◇

「にゃにゃにゃ。ああいう場合は、優しくしてあげるのが男の子って奴にゃん」
朱乃から離れた所でシンに声を掛けたのは黒歌であった。壁に背を預けながら腕を組み、わざとらしく胸を持ち上げ、その豊満さを強調している。
「あの子、赤龍帝にお熱にゃん。でも、ちょっと不安定な感じ。気の乱れで分かるにゃん。そんな不安定な所を突っついてあげれば――いやん、背徳的だにゃん」
一人で盛り上がる黒歌を無視して、シンは先を行く。
「嫌だにゃー。その塩対応ー」
頬を膨らませた黒歌が、シンの前に立ち塞がる。目の前を通り過ぎたというのに側を通っていく気配は無かった。

「折角、協力関係になったというのに親交を深めようという気持ちは少しはないのかにゃん？」
「無いな」
一言で切り捨て、先を行こうとする。
「周りはちゃんと歩み寄っているのに、そういう態度はつれないにゃん」
ジャアクフロストとジャックフロストとの喧嘩以降、ヴァーリの仲間たちとリアスの眷属たちとの間にあったギクシャクとした雰囲気は多少緩和された。
美候はリアスをスイッチ姫と揶揄い、リアスはそれに怒って容赦無く美候を叩き、リアスの反応を面白がって悪びれる様子も無くまた揶揄うということを繰り返す。
イリナはアーサーの持つ最後のエクスカリバーに興味津々であり、それを見せて貰って喜んでいた。側に木場とゼノヴィアも居て警戒はしていたが、その二人の目もエクスカリバーへと向けられていた。
アーシアは怪我をしたジャックフロストを治した後、ジャアクフロストも治癒しようとしたが、ジャアクフロストから拒絶され、尚も食い下がるとジャアクフロストに怒鳴られていた。だが、決してジャアクフロストがアーシアに対し暴力を振るうことは無かった。ジャアクフロストの理不尽な暴力の矛先は、ジャックフロスト限定の様子。
「本当に素っ気ないにゃん。前と変わらず。それとも殺し合ったこと根に持っているの

かにゃん？」
「別に」
　本気で殺し合ったことは今でも覚えているが、そのことに対して怒りや不満を持ってはいない。単純に信じていないだけである。
「君に会ったら聞きたいことがあったにゃん」
「聞きたいこと？」
「子供に興味ないかにゃん？」
「誰のだ？」
「私と君との」
　一瞬何を言っているのか分からず間が出来てしまう。他の仲魔たちも同様であった。言っていることを頭が理解した時、真っ先に行動したのは仲魔たちであった。
「きゃはは。モテてるじゃーん。シーン」
「ヒホ！　良く分からないけどモテてるホー！」
「ヒ～ホ～。お熱いお誘いだね～」
「盛ルナラ他所デヤレ」
　四者四様の反応しながらもシンに揶揄う様な言葉を言う。
「どっかの誰かさんと違って話の分かるお仲間さんだにゃん」

「何のつもりだ？」
　黒歌の皮肉を無視して話を先に進める。
「興味があるんだにゃん。強い子供への。ドラゴンの子も欲しいけど、人修羅の子も負けないくらい特別な子になりそう」
　目を細め妖艶な笑みを向けてくる黒歌。
「ヴァーリかイッセーにでも頼め」
「ヴァーリには頼んだけど断られちゃった。赤龍帝にも頼んだけど――」
「本人は鼻の下を伸ばしていたが、塔城辺りに釘を刺されて無かったことにされたか？」
「あれ？　見てた？」
　シンの予想は大正解であったらしい。

「色々と忙しくなるんだ。そんなことに時間を割いている暇は無い」
「にゃにゃにゃ。私の周りの男ってどうしてこうストイックというか、女の扱いが雑なのかにゃん。赤龍帝ぐらい素直な反応してくれたらいいのに」
　愚痴りながら溜息を吐く黒歌。そんな態度を気にする事無くシンはさっさと行ってしまう。今度は黒歌も止めず、去っていくシンの背中に向けて再び溜息を吐いた。

◇

日も落ち始め、辺りが夜の闇に覆われていく。
兵藤家地下広間では、一誠を除いたメンバーでロキへの作戦を話していた。
トールと手合わせしていた筈のヴァーリも参加しており、トールと激しく戦った証として頬に大きなガーゼ、腕や体に包帯を巻いてある。何とかトールに雷を使わせた、とヴァーリは誇らしげに語っていた。
内容としては、会場にてロキたちを待ち伏せし、シトリー眷属たちの力でロキとフェンリルを分断。ロキの転移先には一誠とヴァーリ。フェンリルの転移先には残ったメンバーを配置し、迎え撃つ。
フェンリルの神殺しの牙を絶対にオーディンへ届かせない為の作戦である。
対フェンリル用の強化グレイプニルの準備は順調に進んでいるが、ミョルニルのレプリカについては今のところ入手する手立てが無い。
トールは何時でも挑戦を受けると言って既に北欧へ帰ってしまった。
会議の中で、トールにロキの討伐を頼めばいいのでは？　という意見が出たが、アザゼルとオーディンによって即却下される。
理由は――

「町一つ消し飛ばせる爆弾を、町一つ吹き飛ばせるミサイルで破壊する様なもんだ」
「もしトールが動けば、確実にこの町は消滅する」
　――というもの。北欧神話の勢力と、日本の神々、冥界の間に溝を生む結果になる。
　その為、トールにはロキ討伐を頼めない。仮にトールにロキ討伐を頼めば二つ返事で了承するとのこと。トールはトールでロキにまんまと出し抜かれたことに対し腸を煮えくり返している。
「ミョルニルのレプリカのことは……まあ、一先ず後回しにしておこう。イッセーの奴は大丈夫そうか？」
　アザゼルは、シンに一誠の最後の様子を尋ねた。シンの口から既に一誠が一人で何処かに行ってしまったことは聞かされている。ミョルニルのレプリカにしても、一誠にしても作戦の重要な存在であり欠かすことは出来ない。
「どうでしょう？」
　返って来たシンの解答は素っ気無い。折れても折れていなくともどっちでもいい、と言わんばかりであり、投げ遣りに聞こえた。
「お前な……」
「大丈夫に見えようが見えまいが、結局は兵藤一誠次第だ」
　そこにヴァーリが口を挟んでくる。

「俺たちがあれこれ心配しても意味が無い。それよりも万が一の場合を想定した策を考えた方がいいんじゃないか？　アザゼル？」
一誠を好敵手と認めている筈のヴァーリがシンに同調する。それどころか一誠が不在の場合の策を考えることを進言する。
「自分のライバルに冷てぇ反応だな、ヴァーリ」
「ベタベタ構うのは俺らしくない。それにだ、これでも俺は兵藤一誠が戻って来ると信じているんだ」
「ほう。その根拠は？」
「俺が戦いたいと思った奴がこれぐらいでへし折れる筈が無い。それだけだ」
自分の見る目を信じると言い切ってみせるヴァーリ。そう言われてしまうと、周囲も言葉が見つからない。
「はっ。大した入れ込み具合だよ」
ヴァーリの解答にアザゼルは笑う。小馬鹿にした笑いでは無く、無邪気に信じるヴァーリの様を微笑ましく見ている。
その時、騒がしい足音を鳴らしながら誰かが階段を勢い良く降りてくる。
「遅れ、ましたぁぁぁ！」
騒がしい勢いのまま一誠が広間へ飛び込む様にして入り、同時に皆に向けて頭を下げ

て謝罪する。
「イッセー！」
慌ただしく会議へと参加した一誠。落ち込んでいると聞かされ心配していたリアスたちだったが、いつも通りの一誠に戻っていることに安心する。
その反面、シン、アザゼル、オーディンは一誠が部屋に入って来た途端、眉間に皺を寄せた。一方でヴァーリは目を丸くした後顔を伏せ、口の端を歪めて微笑を浮かべる。
「お前……大丈夫なのか？」
アザゼルが一誠に様子を尋ねる。何かを探る様でもあった。
「――はい。大丈夫です」
「……それならいい」
それ以上追求することはせず、遅れてきた一誠にも作戦の内容を簡単に説明する。
「……ミョルニルのレプリカのこと、もう少し待ってくれますか？」
「どれぐらい時間が必要だ？」
「……会談前日までには」
本当にギリギリの期限である。失敗すればミョルニルのレプリカを諦めることとなり、別の作戦を用意しなければならなくなる。
「それまでにトールへ一発入れるぐらいになれるのか？」

「してみせます……！」
何かしらの手段を見つけたのか言い切ってみせる一誠。アザゼルはオーディンを見る。オーディンは無言で頷いた。一誠の言葉を信じることを選んだのだ。
「――分かった。この作戦前提で行くぞ。それでだ、作戦の成功率を少しでも上げる為に……匙」
「はい？　何ですか？」
急に名前を出され、取り敢えず返事をする匙。その顔は戸惑っていたが。
「お前も作戦で重要だ。特にそのヴリトラの神器がな」
「え、っ」
そんな事を言われても匙は嬉しい筈も無く、全力で自分を下げ始める。
「ちょ、ちょっと待ってください！　俺には赤龍帝や白龍皇みたいなバカげた力なんて無いですよ！　せいぜい嫌がらせする程度ぐらいです！　それにロキやフェンリルが相手なんて！　俺、てっきり会長たちと同じで転移だけかと――」
「そう謙遜することは無い。匙元士朗。君は、ヴリトラの力を不完全ながらも引き出して赤龍帝の禁手と互角以上に渡り合ったそうじゃないか。胸を張ってもいいことだ」
「え？　何でこの状況でそんな援護を？　止めてくれ！」
ヴァーリから高く評価される匙。こんな状況では嬉しくも何とも無い。

「最前線で戦えとは言わない。お前の目的はサポートだ。ヴリトラの力を使ってな」
「サ、サポートですか？」
「それにはちょっとした訓練が必要だが、それについては後で話す。問題はここからだ」
　アザゼルの表情が険しくなる。
「この作戦は、あくまでも順調に事が運んだ場合のものだ。今回の作戦には厄介なイレギュラーが潜んでいる。そいつは、必ず姿を見せる」
「魔人マタドール。よね？」
「ああ」
　どのタイミングで介入してくるのかは分からないが、確実に現れることだけは分かる。その日の為だけに身を潜め、戦意や殺意を煮詰め続けているのだから。
「俺が相手をします」
　全員の視線がシンへと集まる。
「マタドールが現れたら、俺が相手をして時間を稼ぎます」
　自殺志願に等しい宣言と言えた。シンの申し出に対し、ほぼ全員が否定的な顔となっている。例外としてヴァーリやその仲間たちはその決断に対し、楽しむ様な笑みを密かに浮かべ、一誠は親友が死に等しい志願をしたことに対し、誰にも表情を見せない為に俯いていた。

「――待て」
　それに待ったを掛ける者がいた。
「マタドールは私が相手をする。それは私の役目だ」
　バラキエルがマタドールの相手を買って出る。バラキエルの言葉に、朱乃は人知れず息を呑む。
「待て待て待て。この死に急ぎ野郎共」
「別に死ぬつもりは無いです」
「マタドールと戦うことが私の使命だと思ったまでだ」
「まだ話の途中だっただろうが。こっちが何も考えてないと思ったか？　あと、お前らが名乗り出てくるのは予想通りだったよ。――全く、そういう想定内は勘弁しろ」
　教え子、戦友がこう言って来ることはアザゼルには簡単に想像出来た。だからこそ苦言を呈する。もう少し自分の命を大事にしろ、という意味を込めて。
「今回の目的はあくまでもロキたちだ。マタドール討伐まで入れたら作戦そのものが破綻する。まともに相手をせずに時間稼ぎだけすればいい」
　アザゼルは、マタドール用の対策を皆に教える為、携帯電話を弄り始める。だが、中々繋がらない。段々とアザゼルの表情に苛立ちが出始める。
　コールの回数が二十を超えた後、ようやく相手に繋がる。

『もういいかい？　マーダだよ』
「……開口一番で下らねぇこと言ってんじゃねー」
　電話の向こうの人物マダは、しょうもない駄洒落を言いながら電話に出てきた。
「すぐに出ろ。事前に連絡しただろうが」
『へっへっへっ。わりぃ、わりぃ。こっちも立て込んでてなぁー』
「立て込むって、お前謹慎中だろうが……まさか……」
　電話の向こう側でマダ以外の声が聞こえてくる。女性の声であり、それも複数。
『マダ様ー？　嫌ですよ、中途半端なんてー』
『もう！　皆待っているんですからね！』
『早く続きをしましょう？』
　全員楽し気且つ色っぽい声でマダへ話し掛けていた。スピーカーにしているせいで、その声はアザゼルだけでなく広間全員に聞こえている。
『謹慎だからな。逆に招いた』
「言っておくが、これ、他の奴にも聞こえているぞ？」
『何だよ聞きたいのか？　ならリアルタイムでこいつらの鳴く声、聞かせてやろうか？』
「やめろ」
　マダの品の無い発言に、アザゼルは顔を顰める。一対一なら簡単に流すが、リアスた

ちやソーナたちなどまだ純情な年頃の少年少女が居る場である。早い段階で釘を刺しておかないと、どんどんエスカレートしていく。ただでさえ、今のマダと女たちのやりとりで赤面している者たちが居るのに。

へいへい、とマダは仕方ないといった様子でアザゼルに従う。そして、話の矛先を急に一誠へと向ける。

『おうおう。聞いたぜ、イッセー。トールにぶっ飛ばされたんだってなぁ？』

「す、すみません！　マダ師匠！」

相手が電話の向こうに居るというのに、一誠は頭を下げた。夏休み、冥界でタンニーンとマダによって鍛えられた。だが、トールにあっさりと完敗してしまったせいで鍛えてくれたタンニーンとマダの顔に泥を塗ることになってしまった。ある意味で自分が負けるよりもキツイものがある。

『ふーん……』

意外なことに、マダの反応は簡素。寧ろ、一誠の態度に関心している。

『もっと凹んでいるかと思ったら、案外大丈夫そうじゃねぇか。それなら俺がどうこう言う必要はねぇな』

「もしかして……心配してくれました？」

『さあてな』

　意外、とは思わなかった。揶揄ったり、煽ったりしてくるマダだが、こちらのことを考えて鍛えてくれていたことは一誠なりに感じていた。言動が無茶苦茶ではあるが、師匠と呼ばれていることにそれなりの責任感を覚えているのかもしれない。
『ところで』
　マダが話題を変えようとする。何故だろうか。一誠は嫌な予感がした。
『そこにアルビオンは居るのか？』
　電話から話し掛けられるアルビオン。
『何か用か？　――私はお前と話すことは無いが？』
『おー。本当に二天龍が揃っているのか』
　ドライグとアルビオンが同じ空間に存在し、争っていないことにマダは少し驚いた声を出した。
『お前ら本当に丸くなったなー。仲良く共闘までする様になるなんてな。昔じゃあ、考えられねぇ』
『別に仲良くなど……なあ？　白いの』
『……』
『ほらな！　全然仲良くなどないだろ！　二天龍は今まで通りの関係だ！　ふはははは
はは！』

ドライグをやはり無視するアルビオン。ドライグはややヤケクソ気味に笑う。その空元気な笑いに、一誠やリアスたちは痛まし気に聞いていた。
『おいおーい。宿敵が悲しんでるぜぇ？』
『……私の宿敵に乳龍帝など存在しない』
アルビオンの冷ややかな訂正。
『ま、待て！　誤解だ！　乳龍帝と呼ばれているのは宿主の兵藤一誠であって――』
『そうだぞ。勘違いをするな』
マダがドライグの言葉を継いで――
『呼ぶならおっぱいドラゴンって呼んでやれ。その方が俗っぽくって親しみが湧く』
『マダァァァァァ！』
――容赦の無い追い打ちにドライグが絶叫する。
『乳を突いて、禁手の覚醒をしたかと思えば、『おっぱいドラゴン』などというヒーロー番組のモデルになった今のお前を見ている私の気持ちが分かるか？　心が涙で溺れそうだ……』
その後に聞こえるすすり泣く声。信じ難いことに、二天龍の片割れが涙を流している。
『な、涙を流したのがお前だけだと思うな！　俺は今も泣いているんだ！　うおぉぉぉ

！』

二天龍が揃って泣き声を上げている。この場に居る全員は世紀の瞬間の立会人と化す。尤も、居た堪れない空気で満ちているが。

「最近のアルビオンは、少し情緒不安定なんだ。兵藤一誠をモデルにした番組を見てから特に顕著で……」

（残酷なことをする……）

誰もがドライグとアルビオンに同情する中、そんな空気をぶち壊す様にマダは爆笑していた。

『いいじゃねぇか、いいじゃねぇか。最高に愛されているじゃねぇか。おっぱいドラゴンも乳龍帝も』

『ねぇ、マダ様ー？　おっぱいドラゴンとか乳龍帝とかなんのことですかー？』

『ああ、本名はドライグっていうドラゴンなんだ。女が祀り、敬うと豊乳にし、逆に貶したり、馬鹿にしたりすると、その女の胸を食って貧乳にしちまう』

『やだ、怖ーい』

『やめろぉぉぉぉ！　俺に変な設定を付けるなぁぁぁ！』

『喜べよ、ドライグ！　おめぇは百年後には豊乳と貧乳を司るドラゴンだ！』

『今すぐこっちへ来い！　俺が殺してやる！』

マダは笑い、ドライグは怒り、アルビオンは泣く。
自分たちは何をしていたんだろう、と自問してしまう程の混沌が地下広間で行われていた。

◇

「何か疲れました……」
「ええ……私もよ……」
一誠とリアスは自室で大きな溜息を吐く。
無茶苦茶になった作戦会議をアザゼルが強引に纏め、何とか終わることが出来た。
アザゼルは、その後匙を連れてグリゴリの研究施設へと行ってしまった。今回の作戦のサポートになる匙をそこでトレーニングさせる為である。
きっと今頃は過酷な修行をしていると思われる。アザゼルに連れて行かれるのを最後まで抵抗していた匙の泣き叫ぶ顔を思い出す。
その回想から現実へ引き戻す着信音。画面を見ると知らない番号が映し出されている。取り敢えず出てみる一誠。
「もしもし？」

『マーダだよ』
『切れぇ！　今すぐ切れぇ！　相棒！』
何故か一誠の電話番号を知っているマダからの連絡。マダが出た瞬間、ドライグが喚き始める。
「いや、でも、マダ師匠が――」
『頼むから切ってくれ！　これ以上そいつの声を聞くと俺の中の何かが崩壊する！』
懇願するドライグ。師と半身と言える相棒。一誠の中の天秤が傾いたのは――
「すみません！　マダ師匠！」
『あっ』
一誠は電話を切る。ドライグの気持ちを汲んだ結果となった。
『着信拒否しろ！　永遠に出るな！　相棒！』
過剰なまでにマダの存在を忌避している。マダによって豊乳と貧乳を統べるドラゴンにされそうになっているのが効いているのが伝わって来る。
そんな空気の中で魔法陣が出現し、中からグレイフィアが現れる。
「お嬢様。頼まれていたグレイプニルの資料を――何かありましたか？　御二人ともあまり顔色が優れていませんが？」
「気にしないで。ちょっとだけ疲れただけだから」

リアスは苦笑いをしながらグレイフィアから資料を受け取る。
グレイフィアが言うに、グレイプニルは当日、戦場に直接送り届けられるとのこと。
リアスはグレイプニルに関する資料に目を通し、使い方などを頭に入れていく。
ふと、一誠はこの状況が好機と思う。部屋にはリアスとグレイフィア、他には居ない。
朱乃とバラキエルの関係を聞くにはまたとない機会であった。
「あ、あの部長とグレイフィアさんに訊きたいことがあるんですが……」
リアスは資料を読む手を止め、グレイフィアと一緒に一誠を見る。
「何でしょうか？」
「朱乃さんとバラキエルさんについてです……バラキエルさんは、そんなに悪い人には見えないですし……どうして仲が悪いのかなって……」
一誠はバラキエルから変な誤解で敵視されているが、それが娘を思ってのことだとちゃんと分かっていた。短い時間ではあるが、一誠はバラキエルに悪い印象を抱いていない。だからこそ、朱乃がバラキエルを拒絶する理由が知りたかった。
リアスとグレイフィアは少しの間沈黙するが、やがてリアスは語り始めた。
朱乃の母――朱璃は、ある日重傷を負ったバラキエルと出会い、彼の怪我の治療と看護をした。そんな日々を送る内に二人は親しい関係となり、やがて朱璃のお腹に朱乃が宿った。

朱乃が生まれると三人は慎ましい生活を送り、日々を幸福に送っていた。
しかし、悲劇が起こる。
バラキエルと朱璃が結ばれたことを快く思わない者達が居た。朱璃は高名な術者の家系の出であり、その親類は、朱璃がバラキエルと結ばれたことを洗脳によるものだと思い込み、何人もの術者をバラキエルたちにけしかけたのだ。
グリゴリの幹部であるバラキエルに高名とはいえ人間の術者では敵わず、返り討ちにしてしまう。襲撃の理由もバラキエルは理解していたので、術者たちに手心を加えてしまい、命までは取らず退けるだけで済ませた。
そのことが一部の術者の誇りを大きく傷付けることとなり、屈辱を晴らす為に堕天使に恨みを持つ者全てにバラキエルの情報をばら撒いた。
結果、バラキエルの家は襲撃されることとなる。運が悪いことにその日は偶然バラキエルが不在で在り、襲われたのは朱璃と朱乃であった。
「朱乃は、朱乃のお母様が命懸けで逃がしたから無事だったわ。でも、朱乃のお母様は……」
「その襲撃した奴らは、バラキエルさんが……？」
「――いいえ、違います。バラキエル殿が駆け付けたとき、全ては終わっていました。バラキエル殿が見たものは冷たくなった妻と骸になった襲撃者たちでした」

「えっ」
逃がされた朱乃は何も見ておらず誰がやったのかは不明であった。術者たちの手によって朱璃が殺されたのか、それとも術者たちを殺した者が朱璃も殺したのかさえも。
この結末は、朱乃にとってもバラキエルにとっても不幸であった。
敵討ちをする相手が不明、もしくは既にこの世に居ない。ただ憤るしかない。
バラキエルは行き場の無い感情を裡に留めたが、幼い朱乃は受け止めることが出来ず、心が壊れそうになった。
故にバラキエルは、朱乃の心を守る為にその感情を全て自分が受けることにした。
堕天使の幹部がどれほど他の勢力に恨みを抱かれているか語り、母親の死には自分にも原因があると告げた。
それを聞かされた朱乃は感情のままにバラキエルを詰り、そして自分に流れる血の半分を呪った。その日以降、朱乃は堕天使を拒絶し、バラキエルにも心を閉ざしてしまった。
朱乃は親を失い、住む家を失い、点々と各地を放浪しながらいつ来るか分からない刺客に怯え、数年の時を過ごした後リアスと出会った。
「私の下で悪魔として第二の生を送り始めてからは、少しだけ明るくなったわ。イッセー、貴方と出会ってからはもっと明るくなったし、アザゼルのおかげで少しずつだけ

で堕天使とも歩み寄ろうとしている。――でも、まだバラキエルは許せないみたい。どうする事も出来なかったことだと心の底では理解している筈よ。けれど、それを素直に受け入れられる程朱乃の心は……」

　想うが故にすれ違ってしまう親子の関係に一誠は言葉が出なかった。

「――ただ、この件に関しては一つ噂があります」

「噂？」

「――グレイフィア」

　リアスの鋭い声が飛ぶ。聞かせるべき話では無いという含みを持っていた。

「このことは一誠様の耳にも入れておいた方が良いかと」

　リアスは眉間に皺を寄せ逡巡する。沈黙の後溜息を吐いて、私から話すわ、と自ら話すことにした。

「出来れば朱乃には黙っていてね」

「朱乃さんに聞かせられないことなんですか？」

「聞かせたら、朱乃の命に関わるかもしれない」

「命……わ、分かりました！」

　そこまで言われたら絶対に黙っているしかない。

「その襲撃にはね、魔人が関与しているという噂なのよ」

「ま、魔人ですか……？」
一誠は何故か鼓動が早まるのを感じた。猛烈に嫌な予感がする。
「朱乃のお母様の件については、堕天使たちが外部に情報を洩らさない様にしていたらしいわ。でも、極一部で得られた情報によると、あのマタドールがその場に居たらしいの」
「そ、そうなんですか……」
一誠の反応に、リアスとグレイフィアは違和感を覚える。普段の一誠ならマタドールへ怒りの感情を向けるぐらいはしていただろう。しかし、今の一誠からはそういったものは感じられない。戸惑っている、というのが今の一誠の態度を表すのに一番適していた。
「――何かあったの？」
リアスは思わず聞いてしまう。一誠は息を詰まらせた様な顔になる。
「特には……」
やはり声が普段よりも弱々しく感じられた。リアスはグレイフィアを見る。彼女も怪訝な顔付きで一誠を見つめていた。
「……もしかして、トールのことをまだ引き摺っているの？」
リアスは一誠の様子の違いをトール絡みのことと考えた。落ち込んでいると聞いた

と思ったら普段通りの一誠で戻って来たが、それは空元気によるもの。そして、ミョルニルのレプリカを懸けてのトールとの再戦へのプレッシャー。それらが重なって若干ナーバスになっているのでは、と。

「そう、かもしれません……」

一誠が気不味そうに肯定すると、リアスの両手が一誠の顔に伸び、顔を優しく包むと一誠を抱き寄せる。

「貴方には、色々と背負わせてしまっているわね……」

「――いえ、俺は大丈夫です」

気遣うリアスに、一誠は気丈に振る舞う。体が触れ合う二人。甘い空気が場に漂い始める。

「コホン」

二人っきりと錯覚しつつあったリアスと一誠を一気に目覚めさせる、グレイフィアのわざとらしい咳払い。忘れかけていたグレイフィアのことを思い出し、慌てて二人は離れる。

リアスは空気を壊したグレイフィアを少し恨めしそうに見るが、グレイフィアの方はいつものクールな表情のまま一誠の方を見ていた。

グレイフィアはどうにも一誠の態度が引っ掛かっていた。

何かを隠している。グレイフィアの直感がそう囁く。

◇

一誠はリアスとグレイフィアから朱乃の話を聞いた後、最上階に居るＶＩＰルームに居た。

そこで一人で作業をしているのは、匙をグリゴリの研究施設に送り込んできたアザゼル。

一誠はリアスからバラキエルと朱乃、そして朱乃の母について教えて貰ったことを報せた。

「……俺が全部悪いのさ」

アザゼルの口からも当時のことが話される。

バラキエルが不在だったのは、アザゼルが任せたい仕事があるから招集した為であった。そのせいでバラキエルは妻と娘を失うことになった、と悔やむ様に語る。

「無理を言って呼び寄せたんだ。俺のことを煮るなり焼くなりする権利がバラキエルにはある。――でも、アイツは俺を責めなかったよ。……何でもかんでも背負わずに俺を責めればよかったんだよ」

「だから先生は、バラキエルさんの代わりに朱乃さんを見ようと？」
「父親の代わりなんておこがましい。自分の出来る範囲でしかやってない」
自分を下げるアザゼル。一誠は、アザゼルが言っていることと裏腹に色々と甲斐甲斐しく世話を焼いていた様な気がした。
そこで二人の会話が途切れ、ＶＩＰルーム内には作業をする音だけが響く。
「アザゼル、今戻った」
沈黙を打ち消したのは、部屋に入って来たヴァーリ。
「ああ、お前か。どうだった？」
アザゼルの問いに対し、答える代わりに手を翳し、そこに魔法陣を発生させる。魔法陣の紋様は北欧の神々が使うものと似ている。
「ロスヴァイセという戦乙女は大したものだ。教え方が上手い。おかげで予想よりも早く覚えることが出来た」
ヴァーリが人差し指を曲げると紋様が変わる。今度は中指を曲げるとまた別の紋様に変わった。ヴァーリは短期間で北欧の術式を複数修得していた。
北欧の魔術を覚えたのは、ロキの魔術に対抗する為である。前の戦いでは軽く見せる程度であったが、攻撃、防御、幻覚の魔術などを使用していた。それらを対処するには勝手が同じ魔術が有効である。

「そうか。それならロキにいくらか対抗出来るな」
「ああ。あと、あれにも利用出来る筈」
「あれ？　何のことだ？」
　気になり聞こうとするが、そのタイミングで何故かシンが部屋へとやって来た。
「ん？　どうかしたか？」
　一誠が来た理由を尋ねると、シンは無言で携帯電話を取り出す。皆の視線が携帯電話へ集中すると――
『やあ、マダだよ』
『ごっはぁ！』
　電話向こうのマダの声に、ドライグが血を吐く様な声を上げる。
『何でお前がそいつと！　切れ！　今すぐ切れ！　そして永久に着信拒否しろ！』
「出ないと嫌がらせみたいに着信やメールを入れてくる。どこで番号を仕入れたのかは知らないがな。こうした方が手っ取り早い」
『貴様っ！　俺を売るのか！　裏切るのか！　自分の保身の為に！』
「友達同士、仲良く会話でもしてくれ」
　ドライグの訴えにも耳を貸さず、シンは通話し続ける。
「……俺は作業も一段落したし、少し休む。後は若い者同士でな」

　アザゼルは場が混沌とする前にさっさと部屋を出て行ってしまった。残された一誠たちの間で微妙な空気が流れる。
「取り敢えずいつまでも立っていないで座ったらどうだ？」
　ヴァーリはソファーへ座る。一誠は少し離れた場所にある椅子に座り、シンも同じく椅子に座った。三人の間は微妙に離れており、互いの距離感を表している。
「それにしても――」
　この微妙な空気を変えたかったのか、真っ先に一誠が話し始める。
「悪神とはいえ、神と戦うことになるとはな」
「良い神も悪い神も、人が呼吸する様に神は自分の力を使っているに過ぎない。良い悪いの判断は、そこに人への恩恵が有るか無いかぐらいだ。所詮は人の視点で見た結果だ」
「だからって戦争するのか？　俺は悪魔だけど部長たちと普通に暮らして毎日楽しく過ごせればそれだけで十分だけど……平和ってのがそんなに嫌いなのか？」
　今の幸せを十分理解している一誠からすれば、戦争を起こそうとする連中の気持ちなど全く分からない。
「嫌いというよりも変化の無い退屈が嫌なのさ」
「お前もそういう考えか？」

シンが話に入ってくる。
「ああ。そうだ。だからこそこの共同戦線には胸を躍らせている」
「早死にしそうな生き方だ」
「かもしれない。だが、きっと後悔は無いだろう」
「そうか」
「そういう君はどうなんだ？　平和が好きなのか？　それとも戦いが好きなのか？」
「どうでもいい話だ。平和ならそれに合った生き方をし、戦うことが必要なら戦うだけだ」
「適応する、という訳か。だが、流された生き方とも言える」
「好きに解釈してくれ」
　互いの生き方に思う所はあるが、否定まではしない。しても無駄なことだと分かっているからである。自分の生き方をそう簡単に曲げる様な者たちでは無い。
「戦いが好きか……俺には良く分からないな、強い奴がわんさかいるってだけでも嫌になる。それこそトールみたいな神様がまだ居るんだろ？」
「だからこそ面白いんだ。強くなるには強い相手と戦わなければならない。俺は誰よりも強くなるつもりだ」
　堂々としたヴァーリの宣言に羨望に近いものを感じる。ここまでの目標を一誠は

持っていない。
「北欧魔術をあれにも利用出来るって言ってたが、やっぱりそれも最強目指す為かー」
「いや、違う」
「え？　違うのか？」
「あれは完全に個人的な趣味の問題だ。最強とは別の極めたい事がある」
「最強とは別って……何だそれ？」
「まだ人に見せられる段階では無い。そのうち披露する時が来る。焦がれる存在との対話の時が」
「勿体ぶるなぁー」
一誠はさも壮大なことを想像していたが、シンは違う。ヴァーリが何を目指しているのか大凡想像がついていた。
あのラーメン屋で何となく言ったことを、ヴァーリが本気で追求していることが嫌でも伝わって来る。
いつの日か、本当にヴァーリがラーメンと対話する日が来るかもしれない。
片や女の胸と話す赤龍帝。片やラーメンと話す白龍皇。それが未来の二天龍。
「何だそのドラゴン……」
小声であったが、思わず声が零れてしまった。誰にも聞こえなかったのが幸いであ

る。

「そういう君はどうなんだ？　今は目標はあるのか？」

ヴァーリが一誠の今後を訊く。

「俺は……最強は最強でも『兵士』の最強になりたい。んでもって上級悪魔になって俺だけのハーレムを！　って感じかな」

自分だけのハーレムはリアスの眷属になる時に決めた夢。最強の『兵士』になると誓ったのは、初めてのレーティングゲームで負けた時。これから先、もっと夢は広がっていくかもしれないが、今の一誠の目標はその二つ――

「あ、あと一つあった。俺、ヴァーリも間薙も超えたい」

――ではなく三つ。限りなく負けに近い引き分けとなったヴァーリ。禁手を得た今でもどうしても勝つビジョンが見えないシン。一誠がライバルと思っている二人に肉体的にも精神的にも負けたくない、それが三つ目の目標である。

「そう言われるとただ嬉しくなる。最初はこんな程度かと失望したが、会う度に力が増していく君を素直に面白いと思っている。それはきっと歴代の赤龍帝とは異なる成長だ」

ヴァーリは密かに、自分とマタドールの関係を重ねる。きっと自分が赤龍帝に感じる喜びと同じ様なものを、マタドールはヴァーリに感じているのが分かった。

『はっきり言ってお前は歴代赤龍帝の中で一番才能が無い。身体能力などもからっきしだ』
「ああ、だからこそ自分がどうするべきなのかドライグと一緒に考え、対話し、共に成長しようとしているんだ。歴代の中で最も学ぼうとしている」
『へっへっへ。出来の良い奴よりも悪い奴を育てた方が、手応えがあって面白いってもんだぜ』
　改めて才能無しという事実を突き付けられても、自覚しているので特にショックでは無い。寧ろ認められていることに嬉しさと照れ、そしてプレッシャーを感じる。
　ドライグ、ヴァーリ、マダにこれ以上あれこれ話題されるのを恥ずかしく思い、一誠はシンに話を振る。
「お前はどうなんだよ？　何か目標はあるのか？」
「目標か……」
　そこから暫しの間沈黙する。最初の目標は自分の力を知ることであった。自分の力が魔人の力と知り、次の目標はそれを使いこなすことになっていた。様々な相手と戦う内に新たな力に目覚め、そして今は――
「最強や上級悪魔にならなくてもいい。だが……」
　――どうしても倒さなければならない奴らがいる。何故そう思うのか分からない。

その存在に触れたことで自分でも信じ難い程の敵意と殺意が宿る。
シンは魔人との決着を望んでいた。得るものなど何も無い筈なのに、魔人という存在を倒すことを求めていることを自覚する。まるでそれが使命であるかの様に。
「だが？」
「おやぁ？　お邪魔だったかのう？」
そのタイミングでオーディンが部屋へと入って来る。後ろにはロスヴァイセも付いていた。
「爺さん」
「オーディンか」
「何か用ですか？　オーディンさん」
『あ、人望ゼロのジジイだ』
「誰じゃ！　どさくさに紛れて儂の悪口を言うのは！」
最後のマダの言葉にオーディンが反応すると、シンは携帯電話をオーディンに見せる。
『事実じゃねぇか。ロキの野郎をきちんと躾ておけよぉ。反逆されてんじゃねぇよ』
「お主、マダか！　一々口の悪い奴じゃのう！」
「オーディン様、落ち着いて下さい」

『なあ？　実際のところ碌でもねえよな？　この爺。そう思うだろう、御付きの嬢ちゃん』
「いえ、私は、オーディン様にお仕え出来たことは、光栄だと、思っています……」
『電話越しでも目泳がせて言ってんのがわかんぞ、嬢ちゃん』
いい加減マダを黙らせないと場が騒がしくなると思い、シンは通話ボタンを切ろうとする。『切るんじゃねぇぞ』、とまるで見ているかの様にマダの制止の声が掛かった。というよりも自分が切られる様な会話をしている自覚がある様子。実に質が悪い。
「はあ……まあいいわい。所でアザゼルはどうした？」
「休憩しに行きましたよ」
「何じゃ入れ違いか」
オーディンはそう言ってソファーへ座る。アザゼルに用があるらしいが、急ぎの内容では無い様子。ロスヴァイセは座らずにオーディンの側に立つ。
オーディンは一誠、ヴァーリ、シンの顔を順番に眺め、感心して頷く。
「見れば見るほど不思議な光景じゃのう。赤白に加え魔人もこうやって顔を合わせて語り合っているのじゃから」
オーディンが言うに歴代赤龍帝や白龍皇はかなりの暴れん坊だった。各地で戦い、山を平地にし、島を消滅させ、平野を荒地にし、終いには『覇龍』を発動し死ぬまで戦い

あった。
魔人たちは今も昔も好き勝手に振る舞い、神や悪魔の手を焼かせ血の雨を降らせてどっかに消えていくという害悪の様な存在。
そんな傍迷惑な連中がこうやって暴力も無く語り合っている光景は、オーディンからすれば長生きを実感させるものであった。
「三人の情報が渡って来た時は、死闘も秒読みかと思われていました。片や欲望に忠実な卑猥なドラゴン。もう片方はテロ組織に与するテロリストのドラゴン。最後の一人は、何を考えているかいまいち分からない無愛想な魔人でしたから……あ、違いますからね！　これは私の評価ではなく神々の間での評価ですからね！」
最後に言い訳を付けるロスヴァイセ。嫌な名の通り方をしていることを今更知るが、否定が出来ない事実であった。
「ところで話は変わるが白龍皇。お主らは……どこが好きじゃ？」
好々爺だった表情が悪ガキのそれに変わるオーディン。
「どことは？」
「女の体の好きな部分じゃよ。赤龍帝は乳じゃ。お主らもそういうのがあるじゃろう？」
『俺も知りてぇなー』

　オーディンの質問にマダが乗っかってくる。
「あまりそういうのは感心が無いな」
「好きになるとしたら、相手全体じゃないのか？」
　ヴァーリは特に興味を示さず、シンの方は特定の部位の好みなど無いと言う。
「何じゃい。その年で枯れとるのか？」
『つまんねぇぞー』
　オーディンとマダが文句を言ってくる。
「強いて言うなら――」
　言わなくてもいいのにヴァーリが真面目に答える。
「――ヒップ、腰からヒップまでのラインが女性の象徴的なところだと思うが」
「成程のぉ。ケツ龍皇というわけじゃな」
　オーディンに新たな称号を与えられ、アルビオンはヴァーリの中で絶句。
『乳と尻。女の上下。天と地。ふぅむ……乳の天龍ドライグと尻の地龍アルビオン……』
『ぐおっは！』
『がっはっ！』
　マダに無駄に荘厳な異名を付けられ、ドライグとアルビオンは重なっていく精神的な

ダメージによって喀血した様な声を出す。その後に咽び泣く声が部屋の中で聞こえ始めた。
「マダ師匠、爺さん。今、二天龍はとても繊細な時期なんです！」
「泣くなアルビオン。どんな名を付けられようとお前の偉大さは変わらない」
『うーん……ダメだ。もう少し親しみやすいイメージにしたい……具体的にはおっぱいドラゴンレベルのイメージが……』
「何を真剣に悩んでいるんだ……」
マダの本気具合にシンは呆れてしまう。
『なあなあ、ヴァーリ。別に女じゃなくていい。他に好きなもんとか無いのか？』
「好きな物か……ラーメンだな」
ヴァーリの口から庶民的な食べ物の名が出て、一誠たちは軽く驚く。
『ラーメンか……麺龍皇？　違うな……ヌードルドラゴン？　語呂が悪い……』
真剣に悩むマダに対し、とっとと話を終わらせたいシンは投げ遣りな言葉を掛ける。
「なら省略したらどうだ？」
『省略……？　ヌードラゴン……これだ！』
天啓を得たりと言わんばかりにマダが叫ぶ。
『ぬおおおお！　やめろぉぉぉぉ！』

変な愛称を付けられたアルビオンが悲痛な声で止めようとする。
『マダ様ー？　何かあったんですかぁー？』
『ヌードラゴンって何ですか？』
またもや女の声が電話の向こうから聞こえる。
『本名はアルビオンっていってな。裸の女を器にして麺を啜るのが大好きドラゴンだ』
『やだ、ひわーい』
即興でとんでもない設定を捏造されてしまうアルビオン。
『マダ！　きさ――』
『喜べよ、アルビオン！　おめぇは百年後裸体とラーメンを司るドラゴンだ！』
アルビオンにとって呪いに等しい言葉を残し、マダは電話を切ってしまった。
ＶＩＰルーム内が静まる。ヴァーリと一誠は掛ける言葉が見つからず、己の半身に憐憫の感情を向けていた。
オーディンとロスヴァイセは顔を引き攣らせ、全身を小さく震わせている。この空気の中で笑ってはいけないと自制し、必死に耐えようとしていた。
『ヴァーリ……』
「どうした？　アルビオン」
『今すぐそいつを殺せ……』

殺意の矛先はシンに向けられていた。
「それは……」
『そいつは、私たちに不幸を運んで来る災厄の使者だ！　今すぐ亡き者にしてくれ！　それが嫌なら今すぐマダを殺しに行くぞ！　奴は存在してはいけない！　それも嫌ならいっそのこと私を殺せぇぇぇ！　うあああああああああ！』
アルビオンの慟哭。
『う、う、う、うおおおおおん！　ううううあああああああ！』
それに触発されてドライグが泣き出す。
限界が来たのかオーディンが噴き出してしまう。ロスヴァイセはそれを咎めるが声が震えていた。
必死にドライグとアルビオンを宥める一誠とヴァーリ。
「続き、続きと――って何があった！」
戻って来たアザゼルがＶＩＰルーム内の混沌とした様子に驚く。
「……何があったんでしょうね？」
説明するのも疲れると思ったシンは、他人事の様に返すのであった。

◇

決戦の日が嫌でも近付いてくる。一誠はまだトールからミョルニルのレプリカを貰い受けていない。

焦る気持ちは当然ある。しかし、自分がまだそれを得る段階に至っていないことも当然理解していた。

だからこそ一誠はトールの試練に打ち勝つ為に、もう一つの試練を超えなければならない。

人目を気にし、誰にも見られていないことを確認すると、一誠はとあるビルへ入っていく。

中には何も無く、埃の積もり具合で年単位で人が無人になっていることが分かる廃ビルであった。

灯りの無い廃ビルの中をどんどんと進んで行く。人気の無いせいでヒンヤリとした廃ビルの空気だが、奥へ行くほど別の冷たさへ変わっていく。

そして、一誠の足が止まる。目的地へと着いた。

「来たぞ」

真っ暗闇の中に一誠の声が響く。

「ふふふふふ」

闇から笑い声が返って来た。
「来たか。どうやら貴公は地面を舐めるのが好きらしい。当代の赤龍帝は、かなりの被虐趣味の持ち主のようだ」
一誠を嘲りながら姿を現すのはマタドール。顎をカタカタと鳴らし、一誠を嗤っていた。
「……お前に訊きたいことがある」
「ほう？　我が技を得るだけでなく更なる要求をしてくるとは……随分と欲深い」
マタドールから刀剣の様な殺気が放たれ、一誠を貫く。奥歯を噛み締め、絶対にマタドールから目を逸らさない一誠。すると、殺気は急に消えた。
「だが、それで良し。貪欲でなければ強くなどなれない。勝利を得ることなど出来ない。いいだろう、私に指一本でも触れられればその時は貴公の望みを叶えよう。――さあ、赤龍帝」
マタドールがサーベルとカポーテを構える。
「鍛錬の時間だ」

師事、私怨

どれくらいの時間が過ぎたのだろう。携帯電話でも見ればすぐに時刻が分かるが、今の一誠にはそんなこと簡単な動作すら億劫であった。

リアスたちに合わせる顔が無く、逃げる様に家を飛び出し、いつの間にか公園に居た。そこはよりにもよってレイナーレに一誠が人間の時に殺された公園である。それに気付いた時、もっとマシな場所は無かったのかと己の行動を罵ったが、同時に彼がリアスによって悪魔としての生を受けた場所であることも思い出し、複雑な気分となる。

初デートに浮かれていた兵藤一誠はここで死に、リアスに見初められた兵藤一誠がここで生まれた。

一誠にとっての生死が交差する場所。初心に返るには相応しい場所なのかもしれない。

だが、初心に返っても何もすることが思い付かない。トールに手も足も出なかった自分への不甲斐なさ、今まで積み上げきた自信の崩壊、その自信の為に協力してくれた人たちのことに申し訳なく思いながらも無気力に手すりにもたれ掛かるだけ。

そうして無駄な時間を過ごす。

先程、どれ程の時間が過ぎたのかと思っていたが、かなりの時間が過ぎていることに気が付いた。手すりからボーっと眺めていた視界に落ちる夕日が入って来ている。数時間は経過していた。

『少し寒くなってきたな』

ずっと黙っていたドライグがやっと一誠に喋り掛ける。

「ああ。そうだな」

夏の残暑がまだあるかと思えば、陽が落ちてくると秋を近く感じる気温となる。

他愛も無いドライグの言葉は、一誠にはそろそろ戻るべきではないかと暗に告げている様に聞こえた。

一誠もその通りだと思う。結局、ここに居ても情けなく腐っているだけ。トールに対抗する答えはまだ見つからないが、せめて心配を掛けているリアスたちに謝ろうと帰宅を決意し――

「今がどんな状況か知らずにこんな場所で黄昏ているとは」

――背後から不意に掛けられた声。

今の今まで気配など微塵も感じなかった。しかし、声を掛けられた瞬間に突如として世界に浮き上がる冷たく、悍ましい気配。細胞が、脳が、魂が警鐘を鳴らす。死が間近に迫っていると。

群れを成して巣へと帰る鳥たちの声が消え、草むらの中で鳴く虫の声は消え、世界から切り離されたかの様な静寂が場を支配する。ここはこんなにも静かな場所であったか。

静か過ぎるせいで自分の心臓の鼓動だけが大きく聞こえる。他人に聞かせるには見っともない程に鼓動が早い。

一誠は徐に振り返る。本当ならもっと早く振り返りたい。しかし、死に近付くことを体が拒否する為、精神力で何とか無理矢理首を動かしているので動きが遅くなってしまう。

「当代の赤龍帝は、余程の大物か。それともどうしようもない愚鈍か」

黄金糸で修飾された翡翠色の衣服と帽子。髑髏の顔。そして、心臓が鼓動を止めてしまう様な死の気配。

その姿は一誠にも伝えられていた。だが、あまりに予想外で唐突な出会い。

現れた者の名は――

『マタドールッ！』

刹那、感情の奔流が脳髄に流れ込み、一誠の思考を一気に染め上げられる。今まで抱いたことの無い殺意、怨念。それが何か考えることすら許さず、一誠の意識を鈍らせて体の自由を奪う。

左腕に『赤龍帝の籠手』が勝手に発現する。今までこんなことは無かった。左腕が一誠の意識から切り離され、意志とは無関係に拳を握る。左腕だけが別の生き物と化していた。

そして、背後に立っているであろうマタドールに向け、振り向き様に拳が放たれる。

突然、一誠の視界が急降下する。それに合わせて体も沈む。体を支えることも間に合わず、顎を地面に打ち付けてしまう。

顎関節がずれたのでは無いかと思える痛み。脳天にまで一気に達する衝撃に、目の奥で火花が散る。

「いきなりな挨拶だな。私好みだが」

マタドールが一誠を見下ろしながら笑う。左腕がマタドールによって踏み付けられ、舗装された地面が割れる程の力でめり込む。あの一瞬で、マタドールは放った本人すら不意であった不意打ちを足一本で止めてしまった。そのせいで、一誠は強かに顎を打つこととなってしまったが。

「お前が、マタドールなのかよ……」

「如何にも。貴公が今の赤龍帝か……」

マタドールの空の目が値踏みをする様に一誠を見る。

視られているだけで体温が抜け出ていく様な気がした。それだけではない。先程か

ら頭痛になる程の怨嗟の声が一誠の頭の中で響いている。
殺せ、殺せ、マタドールを殺せ、殺させろ。
これこそが神器に宿る歴代赤龍帝の思念、否怨念である。魔人、それもマタドールに対して尋常では無い憎しみを燃やし、思念だけで一誠を操っている。
『Ｃｏｕｎｔ　Ｄｏｗｎ』
「嘘だろっ！」
宝玉に浮かぶ数字。それがどんどん減っていく。禁手化までの時間を現すそれが、一誠の意思とは無関係に発動してしまった。
「はっ」
勝手な禁手化に焦る一誠を見てマタドールが――無い筈の――鼻を鳴らし、踏み付けていた足を離し、一誠の左腕を自由にする。
途端、左腕が跳ねあがり、マタドールへ殴り掛かる。しかし、ただ左腕のみが振るわれるだけの構えも無く、踏み込みもしない攻撃と呼ぶのも烏滸がましい動作ではマタドールに当てることなど到底叶わず、マタドールが半歩後ろに下がるだけで空振りに終わる。
体勢など考えずに振るったせいでバランスを崩し、一誠はまた顔を地面に打つことになった。

「どうやら当代の赤龍帝は大外れみたいだな、ドライグ？」
　マタドールは一誠の素質を見抜き、失望し、白けた口調であった。
「まさか過去の亡霊共の怨念如きに振り回されてしまう程度の才とは。ここまで来ると笑えんな」
『その怨念を生み出したのは、お前だがな』
「私からすれば、あの戦いはつまらなかった、その一言で済む。あれは私が強かったから死んだのでは無い。あの時の赤龍帝が弱かったから死んだだけのこと」
　悪びれた様子は一切無く、寧ろ相手を責める口調。マタドールの言葉で頭痛は強まり、カウントダウンの数字の減りが早まる。
　このままでは一誠の意思を無視されて『赤龍帝の鎧』が発動してしまう。
　爪で地面を掻き毟り、前進しようとしている左腕を右手で押さえつける。
「止まれっ！」
　神器の解除を試みるが、出来ない。
「時間を持て余し、つい懐かしい気配があって立ち寄ってみれば、こんなことになるとはな」
　己の左腕と格闘する一誠を、マタドールはただ見ていた。
「ヴァーリは貴公に興味を惹かれているらしいが、私は逆だな。全く微塵も興味が湧か

ない」
　尽く一誠を否定する。
「ドライグ、同情するぞ。才の無い器に宿った貴公に。この子供では、貴公の受け皿にもならない。二天龍の力が無駄に零れ落ちるだけだ」
『黙れ。何も知らないお前が相棒を見下すことも、否定することも許さん』
「今、否応なく醜態を見せられているのだがな」
　マタドールの嘲りに、一誠は反論することが出来ない。無理矢理発動する禁手化のせいで余裕が無いからではない。それが事実であると認めているからだ。
　兵藤一誠は悪魔としての素質はゼロに近い。それは悪魔に成り立ての時に嫌という程知った。
「分かるか、赤龍帝？　今、貴公は過去の残滓如きに舐められ、肉体の自由を奪われようとしている」
　いくら歴代赤龍帝であろうとも肉体を失い、魂とその記憶が神器に焼き付いている存在にしか過ぎない。それに主導権を奪われるということは、一誠の意思が死人よりも劣っているという証である。
「無様。本当に無様だ。どうせなら抵抗などせずに、亡霊の衝動に身を任せたらどうだ？　少なくとも今の貴公よりはマシな姿を見せてくれるかもしれないぞ？」

マタドールはとことん一誠を貶す。
「うる、せえ……！」
歯を食いしばりながら持っていかれそうになる意識を繋ぎ止める。苦しいものではなく、眠る寸前の様な意識が遠のいていく感覚。何かが意識の底へ引き摺り込んでいく様に思えた。
「吠えるなら犬でも出来るぞ？　吠えるだけではない所を見せてみろ」
カウントダウンが十を切る。残された時間は少ない。
「う、くっ！」
ぼやけていく視界。負の感情が一誠を本格的に乗っ取ろうとしている。
「おおおお！」
自らの左腕に額を叩き付ける。脳の奥まで響いてくる衝撃。赤龍帝の籠手はこんなにも硬かったのかと身を以って知る。だが、これでぼやけていた意識がはっきりとした。
マタドールによって死んだ過去の赤龍帝の怨念が今の一誠を使って怨みを晴らそうとしている。怨みを晴らしたい、という想いは否定しない。しかし、だからといって体を好き勝手に使われて良い筈が無い。
「おおおおおおおおお！」

纏わりつく怨念を引き千切る一誠の雄叫び。神器の主導権を取り戻す為に精神をこれでもかと昂らせる。
「今は！　俺が！　赤龍帝なんだ！」
力を込め過ぎて一誠の顔は真っ赤になり、鼻血が垂れ落ちてくる。だが、一誠の叫びは止まらない。
「そして！　おっぱいドラゴンだぁぁぁぁぁぁ！」
冥界の子供たちが目を輝かせている乳龍帝おっぱいドラゴン。子供たちを失望させる様な姿をこれ以上晒すことなど出来ない。
カウントダウンがゼロになる。しかし、禁手は発動しなかった。一誠が土壇場で神器の主導権を奪い返したのだ。
「……急に何を叫び出すのだ、貴公は……？」
神器の暴走を阻止したことを褒めるよりも先に、一誠のおっぱいドラゴン宣言に戸惑ってしまうマタドール。冥界の事情を知らない彼からすれば意味不明などというレベルでは済まない。
あれこれと言うつもりであったが、おっぱいドラゴンという言葉のせいで全部吹き飛んでしまう。
「……まあ、挨拶は済んだ。私は去るとしよう」

色々と振り回した筈のマタドールだが、最後の最後に変な反撃を受けてしまい、特に返す言葉も見つからず、マタドールらしくない普通な去り方をしようとする。
「待ってくれ」
それを引き留める一誠。
『おい、相棒。こんな奴とあまり関わるな』
「私とて品の無い名のドラゴンと関わりたくない」
『ぐっ！　こ、この……！』
「ヴァーリが言っていた。あんたと戦えば、色々と学べるって」
「ほう？　私との戦いを望むのか？」
消えていたマタドールの闘気が再び溢れ出す。一誠は肌が焼け付く様なプレッシャーを感じる。
「貴公は運が良い。今の私は時間を持て余し、そして殺めることを自戒している。鱗も碌に生え揃っていない小竜如きと戯れるには充分な条件が整っているな」
一誠はマタドールと戦って何かを得ようと考えているが、マタドールの勝負は基本的に生死を懸けたものである。それを何度も生き抜いてきた者たちが異常であり、殆どの者たちは命を散らす。今回は一誠にとって都合のいい条件が揃っていた。
「――とはいえわざわざ私に戦いを挑む？　無謀であることが分からない程愚かではな

い筈だ」
「……どうしても俺のことを認めさせなきゃならない相手がいる。でも、普通のやり方じゃ絶対に届かない」
「その相手の名は？」
「……トール」
　その名を聞いた瞬間、マタドールは感情を爆発させた様に笑い始めた。間近でそれを受けた一誠は思わず両耳を覆う。骨の体からこれ程までの声量が出せるとは思わなかった。
「それはいい！　トールは間違いなく強い！　それに挑むか！　ははははは！　愚か者ではなく馬鹿だったか、貴公は！　だが、良し！　高みへ挑むには無謀と無茶が付きものだからな！」
　マタドールの何かに触れたのか、一気に上機嫌となる。魔人、というよりもマタドールとの根本的な部分が違うことを一誠は感じた。
「いいだろう。だが、ここでは目立つ。ついて来い。そこで相手になろう」
　マタドールは一誠に背を向けるが、数歩歩いた後に振り返る。
「貴公がどうなるか、良くも悪くも楽しみだ」
　善というものを欠片も感じさせないマタドールの言葉で全身に鳥肌を立たせながら

も一誠は歩き出したマタドールの後に付いて行く。

◇

そして、現在。一誠の体は高々と宙を舞い、目に止まらない速さで縦回転をし、腹からコンクリートの床に着地する。

「――ッ」

衝撃が強過ぎて声も出ない。必死に呼吸しようとするが中々吸えない。

地面に積もっていた埃が舞い上がり、一誠の体を白く染めていく。

立ち上がろうとする一誠であったが、その頭をマタドールの足が踏み付ける。

「倒れたのならすぐに立て。でないとこの様に相手に主導権を与えるだけだ」

指導する様な口振りだが、その足は思いっ切り一誠の頭を踏み躙っている。

「それとも望んで受けているのかね？　貴公は被虐趣味が有る様に見えるが」

頭蓋骨が圧迫され、痛みで言葉を発することが出来ない一誠に、マタドールは好き勝手言う。

「それが趣味なら、正直期待には応えられない。よく誤解をされるが私にはそういう趣味は無い」

『嘘吐け』
喋ることが出来ない一誠に代わってドライグが吐き捨てる。
「嘘なものか。そもそも、そんな遊びをしている間に――」
マタドールはそこで言葉を区切り、踏み付けていた足を浮かす。足の下を一誠の手が通過していった。
一誠の抵抗を笑い、マタドールは剣の背で一誠を弾く。
日本人の平均的な体格を持つ一誠が、それだけでゴム球の様に飛んでいった。
回復し切れていない一誠は受け身もとれず、地面を数度跳ねていく。
「どうした？　まだまだ時間はあるぞ？　それともうお終いか？　私はそれでも構わないが」
伏せている一誠に言葉を飛ばすマタドール。嘲るよりも激に近いものである。
「まだ、まだ……！」
顔面を埃塗れにしながらも立ち上がろうとする。
「私は教える、育てるということを殆どしたことが無いが、確信を持って言える。貴公は出来が悪い。まあ、その分ヴァーリがどれだけ優れているか実感が出来るがね」
一誠を貶しつつ、ヴァーリを褒める。一誠に反骨心を植え付けるのが狙いかもしれない。

「ヴァーリは本当に優秀だ。私が教えることなどせずとも自分で学び、成長していく。手に掛からない。あまりこの言葉は使いたくないが、天才というのはヴァーリの様な存在を言うのだろうな」

人を挑発するか罵倒することにしか声帯を使わないと思っていたマタドールから、褒める、讃える言葉が次々と出てくる。それだけヴァーリに期待を寄せているということである。

「さて、才能の無い貴公の為にわざわざ私から時間を与えてやったのだ、さっさと立ったらどうだ？　蛞蝓よりも鈍重だ。貴公には時間が無いのだろう？　限られた時間を一分一秒も無駄には出来ない筈だ」

言葉で急かすマタドール。彼の言う通り一誠には時間の猶予はあまりない。

「その様では私に触れることなど未来永劫訪れはしないな！」

マタドールと一誠の鍛錬は至って単純。一誠がマタドールに触れたら鍛錬完了である。ただし、触れる場所は頭部か胴体のみ。マタドールの手足や武器に触れても鍛錬完了にはならない。勿論、マタドールの方から触れても無効である。

そして、もう一つ。マタドールに一誠が触れた時、教えて貰うことがあった。

「く、のっ！」

疲労とダメージで震える両脚を拳で叩き、無理矢理震えを止まらせる。

『Ｂｏｏｓｔ！』

赤龍帝の籠手による倍化で身体能力も向上。先程よりも倍近い速度で駆け出し、最も狙い易い胴体目掛けて突きを放つ。

一誠の拳がマタドールを貫いた――と感じるとマタドールは一誠の伸び切った拳の手前に立っている

「単純だな」

一誠の攻撃を分かり易いと評する。貫いた様に見えたのはマタドールの残像。本物はわざと余裕を以って一誠の間合いのギリギリ外に移動していた。

一誠とマタドールの鍛錬は二つのことの繰り返しである。その一つがこれ。何度も何度も一誠の攻撃を寸前で回避し、一誠を嘲ってその心をへし折りに来る。

足先をほんの少し踏み込めば届く様なミリ単位の回避。しかし、一誠にはその数ミリが途方も無く遠くに感じてしまう。

どんなに速く動いてもマタドールはその上を行き、一誠に現実の差をまざまざと見せつける。

常人ならとっくに無理と諦め、心が折れていてもおかしくない。だが、一誠はどうしても届かない数ミリへ、必死に手を届かせようと足掻く。

「ふっ」

その足掻く様を鼻で笑うと、伸ばした拳を阻む様にカポーテが掲げられる。
しまった、と一誠は思うが既に突き出される拳を止める術は無い。拳がカポーテに触れた瞬間、奇妙な感覚が一誠の体内を駆け抜けていく。
体から拳に注がれていた力が突然急反転し、流れが変わる。足が勝手に地面を離れ、視界が高速で流れていく。分かったのは自分が凄まじい勢いで宙返りをさせられているということである。
もう一つがこれ。カポーテにより力の向きを変えられ、一誠の体はマタドールによって良い様に遊ばれる。
込めた力の分だけ一誠の体は高く、早く宙を回る。
視界が溶ける。目に映る色がぐちゃぐちゃに混ざり合い、激しい回転で上下が分からなくなり脳内もぐちゃぐちゃ。全てがぐちゃぐちゃ。
「新記録だな」
マタドールのその言葉が聞こえると同時に、一誠の頭が加速した勢いのままコンクリートの地面に叩き付けられ、一誠の記憶はここで途切れた。

◇

「あ、あれ……？」
　気付くと見覚えのある円形ベッドに座っていた。
「ここは……ってことは」
「流石に慣れたかしら？」
　横を向くとレイナーレこと夕麻が隣に座っている。
「またお前かよ……」
　心底うんざりした声を上げる一誠。
「だから言っているでしょ？　私は貴方の記憶だって。ここに私が居るのは貴方のせいなの。理解した？」
「ああ！　ああ！　そうだな！　俺が悪いな！　……チクショウ」
　自分はここまで未練がましく、過去を引き摺っている男なのかと突き付けられ軽く凹む。尤も意識が戻れば全て忘れてしまうが。
「それにしても、イッセー君ってもしかしてＭ？　自分から魔人に訓練を頼むなんて正気の沙汰とは思えないわ」
「……普通にやっても勝てない相手に認めさせるんだ、普通じゃない方法を選ぶしかない。あと俺はＭじゃない！」
「同じ事でもグレモリー一族の娘か、バラキエル様の娘にされたら悦ぶ癖に……」

今度は一誠の口から否定の言葉が出て来なかった。
「どうでもいいだろ！　それは！　そんなことを言う為に俺を呼んだのかよ！」
「私は呼んでいないわ」
「……え？」
「呼んだのはその人」
夕麻が指差す方に顔を向けた瞬間、一誠の顔が何者かに鷲掴みにされ、ベッドに後頭部を押し付けられる。
「うあっ！」
驚きながらも抵抗する一誠。鷲掴みにする手を引き？がそうとするも両手でも剥がれない。その手の異様な冷たさに、体温を全て奪われていく感覚に襲われる。
掴まれている指の隙間から襲ってきた人物の顔が見える。男か女か分からない中性的な顔。虚ろな表情をし、眼の焦点が合っておらず、一誠を見ていない。
だが、ぼそぼそと何かを呟いているのが聞こえる。
「……せ……を……ころ……ドール……をこ……」
呟く度に一誠を掴む手が力を増していく。
「マタドールを……殺せ……！」
「その声！」

度々起きていた神器の暴走。その原因である負の思念が目の前の人物であることに気付く。

「イッセー君も災難ねー」

夕麻は両掌に顎を乗せ、乗っ取られ様としている一誠を他人事として見ている。所詮は一誠の記憶を基に作られた虚像にしか過ぎず、心配しないのも助けないのも一誠が夕麻なら絶対にそんなことはしないと思っているからである。

「殺せ……！　殺せ……！」

冷たい手を通じて一誠の頭の中に何かが流れ込んでくる。すると、ベッドしか置かれていない部屋の壁がスクリーンの様に映像を映し出す。

「あら？　何か始まった」

苦しむ一誠を放ってそちらの方に興味を示す夕麻。一誠は無意識に自分が作った夕麻が、ここまで薄情な姿を見て、改めて夕麻のことが嫌いもしくは悪印象を持っていることを自覚する。

映像に映し出されたのは一人称視点から見たマタドール。場所は分からないが時間帯は夜である。

夜の闇に煌く銀の線。数十を超えるそれを、赤い残像が全て弾く。銀の線はマタドールの剣、赤い残像は赤龍帝の鎧を纏った両拳。

数度の攻防。高らかに笑うマタドール。やがて視線の主、負の思念であり歴代赤龍帝であった人物はある決心をする。

『我、目覚めるは――』

始まる詠唱。

『覇の理を神より奪いし二天龍なり――』

初めて聞く――否、似たような詠唱を聞いたことがある。

『無限を嗤い、夢幻を憂う――』

一誠は何故か危機感を覚える。知ってはいけない様な気がして。

『我、赤き龍の覇王と成りて――』

映像の中の詠唱と、目の前の負の思念との声が重なり合う。

『汝を紅蓮の煉獄に沈めよう――』

映像から溢れ出る光が部屋を赤く染め上げる。

『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ！』

以前ヴァーリが一誠の前で見せた禁断の切り札である『覇龍』。ヴァーリは独自のアレンジをして完全な制御下に置いたが、映像に映るそれは己の命を削り続ける諸刃の剣であり、完全な『覇龍』である。

鎧が変質し、背中から翼が生え、手甲脚甲から爪を生やし、兜には角が形成される。

赤鋼のドラゴン。それが一誠の『覇龍』に対する第一印象であった。
「うわぁ……禍々しい。こんなの相手にしたくないわ……」
夕麻も眉根を寄せながら感想を洩らす。
それとは対照的に、映像の中のマタドールは更に笑う。
『それが『覇龍』か！　待ちかねたぞ！』
覇龍相手に怯まず、臆さず、喜々として剣を構える。
「うわぁ……こっちも相手したくないわ……」
マタドールの筋金入りの戦闘狂な姿に、夕麻は引いてしまう。

◇

深層意識の中で負の思念に押さえつけられている一誠。それは現実世界でも影響が及んでいる。
「またか……」
マタドールは呆れた声を洩らす。
気絶している筈の一誠が立ち上がり、『赤龍帝の籠手』の五指を開き、その手をドラゴンの頭部に見立ててマタドールを威嚇する。

鍛錬中に暴走することは無くなったが、一誠の意識が途切れるとこうやって表立って出てくる。
「いい加減死人の思念に引っ張られるのを止めろ。みっともない」
聞こえていないと分かっていてもマタドールは一誠に苦言を呈する。
牙を突き立てる様に、左手がマタドールに振り下ろされるが、視線を動かさずに難無く回避すると、その場から消える様に移動。
「昔を思い出す」
マタドールは十数メートル先の積まれた資材の上に腰を下ろしていた。
「貴公は初めて私に『覇龍』を見せてくれた。その点については感謝しよう」
気絶した一誠の体が跳ね、落下と共にマタドールへ拳が振るわれるが、その時にはマタドールは居なくなっており、空振りした拳が資材の山を破砕する。
「今思えば、あのタイミングが一番だったのかもしれない。『覇龍』がどんなものか知るのに」
マタドールは操られている一誠の背後に立っている。
「分かるかね？　『覇龍』と初めて戦った時の私の気持ちが？　失望、その一言に尽きる。あれほどの期待外れは無かった」
左手が強張る。赤龍帝の籠手が生き物の様に怒りを露わにしている。

「力、速さは確かに最上級だった。だが、それだけ。兎に角単調。工夫も技も無い獣以下の攻撃の繰り返し。涙が出るかと思ったな。退屈過ぎて欠伸が出そうになって」
『覇龍』によって圧倒的な力を得た。その代償として知性を失い、結果マタドールの前に『覇龍』という名の獣が現れた。
　山を砕く力があろうが、音を超える速さがあろうがマタドールの目にはどれもこれも大雑把な動きにしか映らず、目を瞑っても避けられる粗末なもの。期待が高まっている分、失望も大きく、数分も経たずに飽きが来た。
「懐かしいな。実に懐かしい。貴公とはこうやって戯れていたな」
　ぎこちない動きによる攻撃を、子供と遊ぶ様に大袈裟に避けたり、或はギリギリまで引き付けて避けたりする。
「そう、貴公が死ぬまで」
『覇龍』は命を削る。限界まで使用すれば当然使用者は死ぬ。『覇龍』との戦いに飽いたマタドールは、一切攻撃することはせず、相手の命が尽きるまで避け続けた。
「獣以下の相手に抜く剣など無い。誇りが傷付いたか？　どうせ死んだ後に出来た傷だ。あの時の貴公にはそんなものは一切感じなかった。畜生風情に戦士の誇りを以て戦うなど上等過ぎる」
　死者の念すら罵る男。他の者たちからすればマタドールの倫理観こそ唾棄すべきも

のだが、当の本人が外野の言葉で揺らぐ様な精神を持っていない、もしくは最初から無いせいで果てしなく傲慢で不遜、だが不動の信念と化していた。
マタドールの喉元を狙った大振りを、最小限の動きの上体反らしで避けると剣を高々と上げる。
「思い出話も休憩も、もう終わりだ」
振り上げた剣を下ろし、柄頭で一誠の頭を強打。
「そろそろ起きろ」
酔った様に左右に揺れ、真っ直ぐ歩けなくなると仰向けに倒れる。
十数秒の沈黙の後、一誠は目を覚ます。彼が最初に見たものは、眼前一杯に映るマタドールの顔であった。
「目覚めたか？　貴公は寝相が悪いな」
「……迷惑掛けたな」
「さて、休憩も済んだことだ。さっさと続きを始めるとしよう」
嫌とは言わせないマタドールの顔。その顔に額を叩き付けるつもりで上体を起こす。あっさりと躱されたが。
「――ああ、当然」
反抗的と呼べる一誠の態度に、マタドールは小さく笑う。まだまだ暇を潰せると分

かって。

◇

最近、一誠の様子がおかしい。それがリアスたち共通の認識であった。

学校が終わると家に直接帰らずにどこかへ寄り道をし、夜遅くにボロボロになって戻って来る。

何をしているのかと問い質せば、対トールの為の秘密特訓をしているとだけしか返って来ない。

その秘密特訓は本当に秘密にしており、よく一緒に訓練をしている木場やギャスパーも内容を知らず、しかも用意してある冥界グレモリー領の修行場も使っていない。

「貴方はどう思うかしら？　シン」

一誠を心配してリアスがシンに相談してくる。

「心配する気持ちは分かりますが……」

今のシンにリアスの不安を払拭させる気の利いた台詞は無い。

兵藤家の一室に沈黙が下りる。因みにだが、シンとリアスの眷属たちは全員が兵藤家の空いた部屋で過ごしている。ロキとの対決が近い為、離れて生活するのが危険と判断

したからである。
「本人が秘密と言っているからにはあまり探らない方が良いと思います。何かしらの根拠があって特訓をしていると思います。トールに負けた直後は本当に落ち込んでいたのに、特訓を始めてからは元通りになりましたし」
「そうだけど……」
納得し切れないリアス。自分の目の届かない場所で危険な真似をしているのではないかと気が気でない様子。
「きっと部長には教えないでしょうね。あいつが一番みっともない姿を見せたくないのは、部長ですから」
そういう意味として捉えたリアスの顔が赤くなる。
「そう、かしら？」
照れながら笑うリアス。大人へ至る途中の色気と幼さが合わさって、並の男なら一撃で心を撃ち抜かれて一目惚れをするだろうが、この場に居るのは生憎その様な感情とは無縁の男シン。
そうですよ、という言葉と共にあっさりと流す。
「ごめんなさいね、話を聞いてくれて。――そうだ。今からイッセーの為に夜食でも作ってくるわ」

軽やかな足取りで部屋から出て行った。
暫くしてシンは口を開く。
「何か用か？」
ドアを開けてヴァーリが入ってきた。
「リアス・グレモリーも心配性だな」
「盗み聞きは趣味が悪いぞ」
「俺が聞いていたことに、気付いていただろ？　その時点で会話を止めればよかった」
「確かにな。だが、お前を理由に部長の相談を中断させるのは気分が悪い」
そちらが引けば良かった、という意思を互いに衝突させる。とはいえ刺々しいのは口調だけであり、部屋の中の空気は殺気立ったものではない。
不本意ながらもシンの方もヴァーリと話をしたいことがあった。
「お前は大丈夫だと思うか？」
「兵藤一誠のことか」
「気付いているんだろ？」
「ああ。アザゼルもオーディンも気付いている筈だ」
「……魔人なんて厄介なものに関わるとはな」
一誠の体から漂う魔人の気配の残滓。一誠がマタドールとの特訓を始めた時からシ

ンたちはそれを感じ取っていた。幸いリアスたちはまだ気が付いていない。あの気配を察知出来るのは魔人と深い関わりがある者か、魔人本人ぐらいである。

問い質すことも出来たが、一誠本人がマタドールのことを隠し、尚且つ何度も接触しているのに怪我程度で済んでいることから様子見の状態であった。

「それは自虐か？」

「――存在するべきか、しないべきかで考えたら魔人なんて存在しない方がいい」

「それは困るな。少なくとも俺は悲しい」

言葉とは裏腹にヴァーリは好戦的な笑みを浮かべている。魔人も彼にとっては戦いたい目標の一つである。

「相手はまずマタドールで間違いない。――俺の言ったことがこうも早く実現するとは」

くっくっくっ、と上機嫌に笑う。

「マタドールに鍛えられているということか？　危険過ぎる」

挑発目的でマタドールの監視の中、堂々と食事会をしていた男とはとても思えない台詞。自分はよくても他人となると途端に心配する。あの時の面子とは違い、一誠本人の実力はまだ発展途上である為、無理もないかもしれないが。

「そうかな？　あれでもマタドールは付き合いが良い。それに、会議当日まで殺しを封

じているという話じゃないか。兵藤一誠が彼から何かを学ぶには絶好の機会だ」
「やり過ぎて殺すという可能性もある」
「無い、とは言い切れないな」
シンは黙考する。このままでいいのかと。得るものもあるかもしれないが、失敗した時に失うものが大きい。
真剣に考える様子を見て、ヴァーリは苦笑しながら言った。
「信じたらどうだい？　兵藤一誠の生命力と可能性を」
一番言われたくない台詞をヴァーリに言われてしまう。
「言われるまでも無い」
言ってしまった後にシンは後悔する。売り言葉に買い言葉。反射的に出てしまった。
「それならいいさ」
聞きたいことが聞け、満足気なヴァーリ。
「――時間は空いているか？」
「何かあるのかい？」
「こっちも特訓だ。付き合ってもらう」
その顔が気に入らず、八つ当たりをすることにした。
「その誘い、喜んで受けよう」

口の端を吊り上げ、獰猛に笑う。全く似ていないのにマタドールを思い出す。
「行くぞ、ヌードラゴン」
『――ヴァーリ、特訓と言わずこいつを殺ってしまえ』

◇

「はあ……」
座禅を組んでいた一誠は、溜息と共にそれを崩す。
魔人との接触で度々暴走が起こっている。その原因である残留思念との対話を試みてみたが、会話が成り立つどころかマタドールへの怨嗟の言葉を吐きながら、こっちを乗っ取ろうとしてくる始末。
今のところ未熟なせいか他の残留思念は見当たらず、それとしか対話が出来なかった。
「頭も体もいてぇー……」
こめかみを人差し指でほぐす。頭痛は怨念、体はマタドールの扱きによるもの。内外ともにボロボロである。
「……イッセー君」

いつの間にか部屋の中に白装束を着た朱乃が立っている。いつものポニーテールではなく髪を解いていた。

「どうしたんですか？　ドラゴンの力はちょっと前にやってもらいましたし……」

朱乃は一誠に近寄りながら、徐に白装束を脱ぎ、肌を晒す。

一糸纏わぬ朱乃の姿が眼前に迫り、脳が許容量を超えて停止。続いて抱き付かれ、ありとあらゆる柔らかな部位が体に押し当てられたことで意識が覚醒。

ただ。刺激が強過ぎて全身を硬直させたまま動けなくなる。

頬を触れさせながら朱乃は一誠の耳元に唇を寄せる。漂う甘い香りも、皮膚から伝わる絹の様な朱乃の肌の感触も一誠にとっては甘美な猛毒。

脳の許容をまた超えようとしていた。

「――抱いて」

艶のある声に鼓膜が震え、全身も震えそうになる。

「だ！　だだだだ！」

言葉にならない。今この瞬間だけはマタドールにボコボコにされて多くの血を流したことを感謝する。でなければ鼻血が噴き出して台無しになっていたかもしれない。

「あ、あの――」

朱乃の顔を真っ正面から見る。

（あれ……？）

一誠は気付く。もし、勘違いでなければこれから男に初めて抱かれようとしている女性というのは、こんなに暗く、虚ろで、自棄になった瞳をしているのだろうか。

真っ直ぐ一誠を見ている筈なのに、朱乃の瞳には自分が映っていない。一誠にはそう感じられた。

高まっていた興奮が徐々に冷静さに変わっていく。

その間にも朱乃はゆっくりと一誠の顔に唇を近付けてくるのだが、一誠は両肩に手を置き、それ以上近付けなくした。

「どうして？」

朱乃の震える声。それだけで罪悪感が重く圧し掛かってくる。ただでさえ母親の敵かもしれないマタドールから教えを乞いている身なので、余計に強く圧し掛かってくる。

（違うんです。違うんですよ、朱乃さん！）

と声を大にして言いたかったが、あまり口が上手い方では無いと分かっているので必死になって言葉を選ぶ。

「私に魅力が無い？」

「そんなこと無いです！」

　これればかりは即答する。朱乃に魅力が無いと言うなら、この世の女性のほぼ全てが路傍の石ころ程度の存在になってしまう。
「そ、そりゃあ、朱乃さんとそういうことになったら一生もの、というか何度生まれ変わっても最高の経験だって断言出来ますけど……」
「なら、最高の思い出にしましょう？　貴方が望めばすぐに叶うのよ……？」
　しっとり濡れた瞳で一誠を凝視する朱乃。その瞳を見て、一誠は確信する。やはり、そこに自分の姿が映っていないことに。別の誰かが映っている気がした。
　心当たりは一人しかいない。
「朱乃さん……今、お父さんのこと考えていますよね？」
　朱乃が息を？むのが分かった。一誠の予想が当たっていたのだ。
「……あの男のことを出さないで。忌々しいだけだわ……」
「だったら、何でそんな悲しい顔をするんですか？」
　朱乃は殴られた様に呆然とする。自分がどんな表情をしていたのか、一誠に言われるまで分からなかったのだ。
「朱乃さんは、お父さんのことや嫌なことを忘れたい為に、俺に……」
「――そうよ。貴方に抱かれたら全て忘れられる気がしたの。決戦前にきっとこの気持ちが晴れると思ったの」

する前から後悔すると一誠には分かった。一時は忘れられるかもしれない。でも、時が過ぎればそれは傷になるだろう。朱乃は疼く痛みを消し去る為にもっと深い傷を自分に与え、その痛みでそれを気付かない振りをするつもりなのだ。

一誠は無言で脱いだ白装束を拾い、それを朱乃に羽織らせる。

「……イッセー君？」

「朱乃さん！」

一誠は朱乃の両肩を掴む。言葉は荒々しかったが、置く手は赤子に触れる様に優しいものであった。

「俺は朱乃さんのことを魅力的だと思っています！　同じ転生悪魔としても尊敬しています！」

不器用ながらも真っ直ぐ思ったことを伝える。

「そんな朱乃さんが揶揄い目的でもエッチなことをしてくれると嬉しいです！　可愛がってくれることを大変ありがたく思っています！　だから、そんな朱乃さんに見合う男になりたいと思っています！」

言っていてどんどん言葉に熱が入って来る。

「だからこそ俺を情けない男にさせないで下さい！　朱乃さんの心の隙につけ込むことなんてしたくないです！　そんなことで貴方を抱きたくない！　だから――」

朱乃を引き寄せ、一誠は抱き締める。それが今の一誠の精一杯であった。
「悲しくなったら、辛くなったら、こうやって抱き締めます。元気になるまで。俺は何時もの朱乃さんが好きですから！」
言い切った後、静寂が続く。やがて、朱乃のすすり泣く声が聞こえ始めた。
「馬鹿ね……本当に馬鹿。私も……貴方も」
「そうかもしれませんね。でも、馬鹿なりにやれることがあると思います。朱乃さんのことを守る、とか」
「イッセー……ありがとう」
朱乃は一誠を抱き締め返す。
二人の鼓動と体温を共有する様に、しばらくの間二人は互いを抱き締め続けた。

◇

落ち着きを取り戻した朱乃を自室まで送り、一誠も部屋に戻って神器との対話を続けようとする。すると、廊下にシンが壁に背を持たれて立っていた。
「手を出さずにいるなんて、お前も辛抱強くなったな」
「な、何のことだ？」

「自分の声の大きさをもう少し認識した方がいいぞ」
「えっ……」
目の前のことに集中し過ぎて一誠は自分がどれだけの声量を出しているのか気付かず、そのせいで一誠と朱乃の会話の内容が外に洩れてしまっていた。
断片的だが繋げれば部屋の中で何があったのか凡そ想像がつく。
「しまった……」
一誠は額に手を当て後悔する。シンだけでなく他のメンバーにも聞かれている可能性が高い。
「まあ、何事も無くて安心した」
「……何でお前が安心するんだよ?」
「――ちょっとな」
朱乃の暴走について、シンは少なからず責任を感じていた。朱乃との問答、あれもまた今回の件の背を押す要素の一つであったと思っている。
「ところで――」
一誠の目線が下がる。
「どうしたんだ?　それ……?」
シンの左腕は包帯を巻かれ、ストラップで首から吊るされていた。

「ヴァーリと模擬戦闘をしたらこうなった」
「こうなったって……大丈夫なのか？」
「折れただけだ」
　一瞬呆気にとられた後、叫ぶ。
「折れっ！　戦いが近いのに何してんだっ！」
「少し熱が入って……」
「熱って……ヴァーリの奴、何考えてんだ！」
「――そう責めないでくれ」
　何故か折られた本人であるシンがヴァーリを擁護する。
「何で庇うんだよ！」
　少しの沈黙の後、シンは顔を背けて言った。
「――俺もあいつの肋骨を折ったから」
「戦いが近いのに何してんだっ！」
　一誠は叫ばずにはいられなかった。

劣化、模倣

夜。一誠は自室のベッドで眠れずにいた。悪魔として活発化する時間だが、それよりも日を跨ぐ瞬間がどうしても不安を感じてしまう。残された日数が減る度に精神も擦り減っていく様な気がした。

リアスたちやアザゼルたちはロキとの決戦に向けて準備を進めていっているが、一誠は自分が先に進んでいる自覚がなかった。

トールとの勝負に勝つ自信は無く、その自信を得る為にマタドールに鍛えて貰っているが、こちらも終わりが見えない。神器も絶不調で、気を抜くとこちらの体を乗っ取ろうとしてくる。

超えるべき山は見えるが攻略法の見えない断崖絶壁。登る為の道具は故障中。ダメ押しに山を越えた先にはもう一つ断崖絶壁の山が待っている。

しかし、その山を越えなければアザゼルたちが進めている作戦が台無しになってしまう。絶対にやらなければ、と考えると使命感から気力が湧くが、それを上回る程の重圧も掛かってくる。

ベッドから上体を起こす。隣では小さな寝息を立てているアーシアとリアス。無防

備で無邪気で愛らしい寝顔を見るだけで心が暖まり、擦り減った部分が癒されていく。そして同時に、必ず彼女たちを守らなければならないと強く思う。

その為には、とまたトールやマタドールのことを考えてしまい、折角埋められた箇所を自分でそぎ落としてしまう。

「俺は本当にMなのだろうか……」

自分で自分を苦しめていることに自嘲を込めて呟く。

マタドールに言われたことを思い出す。それ以外に誰かにも言われた様な気がした。誰であったのか全く思い出せないが。

「えっ」

「えっ？」

自分以外の声が聞こえたので慌てて視線を動かすと、目を覚ましたリアスが目を丸くしていた。

「イッセー……私は朱乃ほどドSじゃないけど、貴方が望むなら……」

「違います！　違います！　そういう趣味的な話じゃないです！　誤解です！」

寝起きのリアスに先程のM発言を聞かれてしまい、変に誤解され始めたので急いで誤解を解く。

「さっきのMっていうのは、その、今の状況をグルグルと考えて、勝手に安心した癖に、

自分から不安なことを考えて落ち込んだり、何というか、例えというか、比喩みたいな……あああああ！　Ｍで思い出しましたけど！　俺なんかよりも間薙はどうするんですか！　あいつ、腕を骨折していますよ！　決戦が近いっていうのに！」

上手く言葉に表すことが出来ないと悟ると、話を強引に逸らす為に友人を生贄にする。

「シンのこと？　あの子には本当に困ったわ……」

都合良くリアスもシンの話題に喰い付いてくれた。リアスの眉間の皺の寄り具合から見て、かなり怒っている様子。

「私に会いに来たら、一言目が『折れました』よ！　真横に折れた腕を見せられた時には心臓が止まるかと思ったわ！」

アーシアが近くで寝ているのでギリギリまで声量を絞って喋る。リアスの全身から放たれる怒気に、一誠は自分に向けられた怒りでは無いのに冷や汗を流す。

その時にはリアスだけでなくソーナも居り、急いでアーシアを呼び出して彼女にシンの腕を治療させたと言う。

「あれ？　でも、あいつ腕を吊っていましたけど？」

アーシアの神器なら骨折も完治出来る筈である。

「治療は最低限に留めてもらったわ。今日一日は動かせない様にね。治って同じ様なこ

とをされたらたまらないわ！」
　完全には治さず、戒めの為にある程度傷を残した後、シンはリアスとソーナから長時間に渡る説教を受けたとのこと。
　一誠は自分が同じ立場だったなら、と想像し数秒後には恐怖で震えていた。説教の最中に現実逃避で口から魂が飛び出していたかもしれない。
　ヴァーリも同じく仲間の美候、アーサーからお叱りを受けたという。骨折した箇所もシンと同じ様に黒歌の仙術で最低限の治療を施され、暫くの間仲間の目の届く場所以外には行けないとのこと。
「何て言うか……はははは」
　二人とも叱られ、仕置きを受ける。子供の喧嘩の後の様な顛末に思わず笑ってしまう。冷静沈着なシンと戦闘狂で超人的なヴァーリを知っているせいで、余計に笑いがこみ上げてくる。
「少しは気分転換になった？」
「え？」
「思い詰めていたけど、少しだけ明るい表情になったから」
「あー……はい。ありがとうございます」
　リアスの言われた通り、両肩に圧し掛かっていたものが少しだけ軽くなった気がし

た。思い返せば声を出して笑ったのも久しぶりな気がする。
「明るくなったと言えば、朱乃も少し晴れた表情をしていたわね。――何をしたの？」
ギョっと目を剥き、視線を右往左往させ、リアスから顔をゆっくり背ける。
「……エッチはしていません」
リアスの手が伸び、一誠の頬を抓まんで自分の方を向かせる。
「そういうことを言う時には、ちゃんと目を見て言いなさい」
「す、すみません……」
「じゃあ、もう一度」
「エッチはしていません……兵藤一誠は未だに童貞でございます……」
絶世の美女を相手に童貞宣言。情けない台詞と拷問の様なシチュエーションのせいで涙が出そうになる。
「よろしい。信じるわ」
一誠の言葉を信じてリアスは抓まんでいた指を離す。
「それで？　朱乃に何をしたの？」
「うえっ！　それは……」
「怒らないから言いなさい」
「朱乃さんを……抱き締めました……」

「そう」
　リアスの声に怒気は無かった。だが、言い終えた一誠の全身から冷や汗が噴き出す。まるで罪を告白した様な気分である。
「イッセー」
　名を呼んで、リアスが両腕を広げる。
「……どうしました？」
「私にもしなさい」
「えっ！」
「朱乃だけなんて、不公平よ……」
　拗ねた口調。少し頬を赤らめるリアスの顔が愛らしく見える。
「じゃあ、失礼して……」
　国宝にでも触れる様に恐る恐る手を伸ばし、リアスの背に両手を持っていく。一誠が抱き締める前に、リアスの方から一誠の胸に飛び込む。
　この世で最も貴い胸だと一誠が思っているリアスの胸が、一誠の胸板に押し当てられ、至高の弾力を伝えてくる。
「ぶ、部長？」
「どう？」

「さ、最高です……！」
　目から熱いものが込み上げてくる。同時に鼻の奥からも熱いものが込み上げてくる。気を抜けば、落涙しながら鼻血を垂れ流すという恐ろしく不細工な顔をリアスに晒すことになってしまう。
「貴方の鼓動を感じるわ。凄くドキドキしている」
「部長のせいですよ……」
「でも、それだけじゃないわよね？　最前線で戦う恐怖。自分に課せられた役目への緊張も貴方の鼓動を早めているのが伝わってくるわ」
「……はい。こういう役目は光栄ですけど、やっぱり怖いです。俺が失敗したら皆がどうなってしまうのかを考えたら……」
　落ち着いた言葉で一誠は弱音をリアスに聞かせる。本当なら最後まで隠し通したかったが、リアスの前でだと自然に出てしまった。
　リアスの優しさと、彼女の持つ胸の感触が一誠を極度のリラックス状態にさせ、不安を取り払い、心を開かせる。
「俺はやっぱり、おっぱいドラゴンなんでしょうね。部長のおっぱいに触れたら色んなものが吹っ飛んで、凄くやる気が出てきました」
「それでもいいわ。イッセーが私の誇りであることは変わらないもの。貴方が強くなっ

て最強の『兵士』になる、その夢を私はずっと信じているわ」
「部長……」
　リアスは少しだけ体を離し、一誠の頬に掌を当てる。
「そう考えると、スイッチ姫というのも悪くないかもしれないわね。貴方だけのスイッチ姫。貴方の強さの源になれるなら、こんなに嬉しいことはないわ」
　リアスは目を閉じ、ゆっくりと顔を近付ける。一誠も目を閉じ、顔を近付け、やがて二人の唇は――

◇

　部屋へ戻ろうとしていたシンは、その途中で思いも寄らない人物と会う。
「ん？」
「ヒホ？」
　ヴァーリたちの仲魔であるジャアクフロストは、シンの存在に気付くと同時に威嚇し始める。
「何だホ？　気安く俺様を見るんじゃないホ！」
　ジャックフロストと色以外の違いが殆ど無いというのに、その態度は愛らしさが欠片も無く、小憎らしい。

「あ、ヒホホホ！　聞いたホ！　お前、ヴァーリに腕の骨を折られたんだホ！　弁えもせずにヴァーリに挑むからホ！」
　吊っている腕を指差し、小馬鹿にするジャアクフロスト。
「ヴァーリも肋骨折れているけどな」
「うるさいホ！　あんなのお前に比べたらかすり傷みたいなもんだホ！」
　シンは無言でサスペンダーから抜き、ジャアクフロストの前で手を開閉してみせた。
「ヒホッ！」
　既に治っている腕に、ジャアクフロストは驚き、吊り上がっている目を丸くする。そういう表情は本当にジャックフロストにそっくりである。
「もう治っている」
　罰を込めて神器で最低限の治療しか施されなかったが、シンには十分であった。神器で折れた骨同士が薄く繋がれば、後は自前の再生能力であっという間に骨折部分は元通りになり、問題無く動かせる。
　恐らくはヴァーリも同じ様に既に完治していると思われた。彼が怪我をしたフリを続けるのは、罰を与えたリアスたちの顔を立てる為。そして、リアスやソーナの説教の中でも指摘されたが、少々はしゃぎ過ぎた自分を戒める為である。
　ヴァーリはそんなことなど気になどしないだろうが、シンがヴァーリと戦う気が無い

のを察して合わせていると思われる。戦う相手が居なければ怪我が治っても無意味なので。

「――ちっ」

自由自在に動く左手を見て、ジャアクフロストは舌打ちをする。非常にガラの悪い態度である。大方、怪我をして動けないシンの腕ともう治っているヴァーリの肋骨のことを比べてシンを嘲笑おうとしていたのだろう。それが出来ず不満げな態度を露骨に出す。

つくづく可愛げの無い存在だと認識させられる。

これ以上ジャアクフロストと話しても、その認識が深まるだけだと思い、さっさと離れようとするが、どうしてもジャアクフロストに聞きたかったことを思い出す。

「何でそんなにジャックフロストを嫌うんだ?」

「ヒホ……?」

ジャックフロストの名を出された瞬間、ジャアクフロストの目の輝きが増した気がした。良い意味では無く悪い意味で、殺気染みた眼光を放った様に見えた。

その滾った眼は雪だるまには不似合いに思える。

言葉によってはこの場でジャアクフロストとの戦いが始まるかもしれないが、シンは構わずに続ける。

「異様なまでに敵視していると思って。敵視しているのは、ジャックフロスト個人というよりも種族全体か？」
「そんなこと、聞いてどうするんだホ……？」
　口調は落ち着いているが、内では激情が渦巻いているのが分かる。その証拠にジャアクフロストの足元が凍結し出している。感情が高ぶった時のジャックフロストと同じ癖である。
「ジャックフロストという種族がお前とあいつを除いて絶滅しているのも関係あるのか？」
「だから、そんなこと聞いてどうするんだホ！」
　今度こそ怒り出し、全身から冷気を発生させる。間近でそれを浴び、衣服の表面に氷が張り付く。
「怒るのはそっちの自由だ。だが――」
　冷気を浴びながらもシンはジャアクフロストに近付いていく。
「こっちも理不尽に仲魔を殴られて、何も思ってないと思うなよ……？」
　ジャアクフロストの顔を覗き込み、赤い目を射貫く様に見る。眼球が凍結しようと決して離さないし閉じない。
　何を理由にジャアクフロストがジャックフロストに暴力を振るうのかは知らない。

ジャックフロストがジャアクフロストを絶滅を免れた同胞であると思っている以上、手出しも口出しもなるべくするつもりは無かった。

しかし、それでも限度というものがある。少なくともジャアクフロストがジャックフロストの存在を拒む理由は教えるべきだと思った。それでも嫌といい、今まで通りに振舞うのならシンにも考えがある。

「……キングフロストは間違ってたんだホ」

「――何だって？」

ジャアクフロストがポツリと洩らす。

「さっさと冥界に行けば良かったんだホ。自然の流れだとか摂理とかカッコつけて絶滅して何の意味があるんだホ」

静かな口調。だが、段々と言葉に力が込められていく。

「誰も居なくなったらそれで終わりだホ。それを受け入れることが強さなのかホ？　だったら俺様はそんな強さなんて要らないホ！　俺様だけの強さを手に入れるホ！　ジャックフロストなんてどいつもこいつもバカだホ！」

言いたいことを言って、ジャアクフロストは脇目も振らずに走り去ってしまった。

「悪いねぇ。うちの奴が騒がしくて」

その言葉で美候がすぐ側にいることに気付く。気配を消していて、声を掛けられるま

でこの距離でも気付けずにいた。
「……お前といい、黒歌といい、ヴァーリといい盗み聞きが趣味なのか？」
「トラブルが起きなきゃ来てねぇぜぃ。お仲間と揉めたり、ヴァーリと骨折り合ったり、ジャアクフロストとひと悶着起こしそうになったりしてるが、冷静沈着ってな感じの雰囲気な癖に結構なトラブルメーカーだな、お前」
　事実なせいで反論することも出来ない。美候の言う通り、短期間で一誠以上に問題を起こしている。
「……あー、ジャアクフロストのことなんだが悪かったな。でも、あんまり怒らないでやってくれぃ」
　ジャアクフロストの代わりに何故か美候が謝る。
「何でお前が謝る？」
「あいつは素直じゃないからなぁ。絶対に謝らねぇぜぃ。あいつが刺々しいのは怖いんだよ。自分以外の全てが」
　ジャアクフロストのあの態度は、自己防衛の一種だと美候は言う。
「絶滅危惧種のレア雪精だ。欲や悪意で色んな連中に狙われて、そのせいでヴァーリと出会うまでそうとう酷い目に遭ってきたみたいだぜぃ。それこそ白い体が黒く染まるまでな」

純真であったジャックフロストにとって、この世界には恐怖が多過ぎた。
「でも、あいつ黒い体のことは気に入っているみたいだぜぃ。あいつにとっちゃ今まで生き抜いてきた強さの証みたいなもんらしい」
厳しい環境で生きるにはジャックフロストではいられない。そして、黒を得て白を捨て、ジャックフロストの名も捨てた。
「あいつがジャックフロストを拒むのは多分怖いんだと思うぜぃ。ジャックフロストと関わることで自分の中の黒が薄れて、また白に戻るのが」
ジャアクフロストにとって最も恐れることは、嘗ての自分に戻ること。弱くて、情けなくて、小さなジャアクフロストに。
「でも、あいつ、ヴァーリの強さに憧れているんだよなぁ。口ではライバルだって言っているが、あいつの理想はヴァーリなんだぜぃ」
こっからは俺っちの想像だが、と前置きを入れる。
「……あいつはもしかしたら、ヴァーリの白に強く惹かれているのかもしれないぜぃ。もう二度と手に入らない白によぉ」

◇

「――いつにも無くやる気に満ちているな、赤龍帝」
「そうか？」
「普段からそれぐらいの気迫を見せてくれたら少しは期待できるのだが」
　廃墟内にてマタドールは一誠を観察する様に見る。マタドールの伽藍洞な眼窩は、一誠から立ち昇る魔力が見えていた。
「敵に期待するのかよ」
「敵……？　はて？　そんなものが何処にいるのやら？」
　マタドールはわざとらしい動きで周囲に視線を彷徨わせる。敵として一誠は眼中に無いと言いたいらしい。特訓の中で罵倒され続けているので嫌味の一つでも言ってみたら、悪意を上乗せされて返されてきた。
「今日こそ、その顔に一発入れてやる！」
「吼えるだけなら犬でも出来るぞ？」
　言葉でなく行動で示せ、という意味を込めた皮肉を言って、マタドールは一誠を指招きする。
『Ｂｏｏｓｔ！』
　開幕赤龍帝の籠手を装備し、倍化すると一誠は次を待たずに走り出す。二倍程度の身体能力ではマタドールに届かないことは重々承知しているが、今回の戦いでは珍しく策

を以って挑んでおり、これも布石である。
「ふん！」
　真っ直ぐな正拳突き。小猫に学び、我流も混ぜた打ち方であったが、倍化した能力では一撃でコンクリートも砕く。
　マタドールはそれを難なく躱し、避け様に剣の背で一誠の背中を叩く。
「うっ！」
　加減していると分かっていても肉の鎧を突き抜けて骨まで衝撃が達する。マタドールは斬って致命傷を与えない代わりにわざわざ内部にまで浸透する打ち方をする。ある意味では斬る以上の苦痛を与えるものであった。
　初日は息が詰まり、動けなくなる程であったが、数え切れないぐらい打ち続けられたことで痛みに対する耐性を身に付け、今ではすぐに動ける様にまでなっていた。
『Ｂｏｏｓｔ！』
　二回目の倍化。能力が更に倍になる。さっきよりも移動速度は跳ね上がり、突き出す拳のキレも増す。
　だが、マタドールにとっては誤差程度。一誠が拳を一発放つ間に一誠の身を五回打ち、薄皮から血が滲む程度に五回斬った。
　斬られた箇所は左上瞼一箇所、右下瞼一箇所、右耳に一箇所。これは痛みではなく一

誠に精神に恐怖を与えることが目的である。
重要な器官を攻撃することで、あと一歩踏み込んでいたら、逆に動いていなかったら、マタドールの手元が狂っていたら失明していたかもしれない、という最悪の未来を連想させる為。耳を斬るのは、斬られる音を間近で良く聞かせ、恐怖を煽る為である。尤も、マタドールからすれば顔に落書きでも書いている様な感覚だが。
当初、それをやられた一誠は躊躇してしまい、その間に体中を殴打され続けた。今ではマタドールならば失敗をしないという嫌な信用をしてしまった為、即座に行動出来る。
肉体を打ちのめしながら精神を打ちのめす。それがマタドールなりの鍛え方であった。
マタドールの虐待の様な鍛錬を受けつつ、一誠も倍化を重ねていく。やがて、倍化が限界で達する。
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ!』
倍化をそこで維持すると、それに合わせてマタドールの構えも変わった。さっきまではカポーテを後ろに回し、剣一本で一誠の相手をしていたが、ここからはカポーテを前方に出す。
マタドールにすれば今までは準備運動の様なもの。一誠の体は大分痛めつけられて

いるが。

一誠が走る。駆け抜けた周囲の積もった埃が風圧で一気に舞い上がる。最高まで達した肉体が最高速を生み出し、一誠は最初と比べものにならない速度でマタドールに接近する。

マタドールの頬を狙う一誠の横振りの拳。しかし、それを最初の時と同様に紙一重で避けられる。例え、能力を何十倍に引き上げても何も変わらないと言わんばかりに。

戦っていてつくづくマタドールは性格が悪いと実感させられる。この特訓が終わったら、一生関わらないよう願わずにはいられない。

左右の連打を繰り返し、突きを交えて攻撃のパターンに変化を加える。マタドールはそれを避け、脇腹を峰打ち。そこが隙だらけだと痛みで教える。

歯を食い縛り、今だけは痛みを脳の奥底に押し込めておく。痛みで少しでも動きが鈍ればマタドールに追い付けなくなる。

大振りの一撃。これもマタドールに軽々と回避されるが、それも想定内。狙いは拳の狙う先にあるコンクリート造りの柱。

柱に拳を叩き付ける。めり込む拳。その瞬間に一誠は魔力を流し込む。内側から圧迫された柱が弾け、コンクリート片が散弾となってマタドールに飛ぶ。

「ふっ」

マタドールは笑う。だが、決して嘲ったものではない。確かに一誠がやったことは小細工の類。しかし、マタドールはそういった小細工を見下したりはしない。小さな積み重ねが勝利へと繋がる。

他者にとって悪足掻きに見えても、それ自体が勝利への布石になり得る。

だからこそマタドールは油断せず、寧ろ気を引き締める思いで飛び散った破片にカポーテを振るう。

カポーテに破片が触れると、常識を知る者ならば我が目を疑う程不自然に軌道を変え、全てマタドールから逸れていく。

これは目晦まし、或いは注意を逸らす為のもの。当然、次が来る。

「おおおおおお！」

わざわざ声を上げながら拳を突き出した一誠。自分からタイミングと位置を報せるものだが、破片に続いて真正面から攻めているので悪手とも言えなかった。

馬鹿正直に真っ直ぐ攻めてくる一誠に、一抹の期待を抱きながらカポーテを翳す。

一誠の左拳が、予定調和の様にカポーテに触れた。

カポーテ越しに行われる力の逆転、反流、支配。一誠の体が面白い様に宙へ飛ぶ――ことは無かった。

（な、に……？）

カポーテから伝わって来る力が、マタドールの想像しているものと異なり、遥かに弱い。寸止めが出来るタイミングでは無かった。ならば、何故こうも違うのか。

僅かに動きを止めたマタドールに、一誠の右拳が迫る。

（――そういうことか）

迫る拳よりも自分が見誤った原因を探り、答えを知った。

カポーテに触れる左手、赤龍帝の籠手が解除されていた。解除することで倍化を強制解除し、マタドールのカポーテによる力の操作を狂わせたのだ。数日間、数え切れない程一誠の拳を捌いてきたせいで、一誠の左拳は赤龍帝の籠手とマタドール自身に刷り込まれたことで生まれた初めての隙。

（中々の捨て身――だが）

マタドールは一誠の右拳を難なく避け、剣を手元で回し、柄頭を一誠の鳩尾に突き刺す。

「――ッ！」

「遅いな」

カウンターを貰った一誠は、声を上げることも出来ずに崩れ落ちる。

面白い捨て身の一撃であったが、次に続く攻撃がマタドールには遅過ぎた。ドラゴンの飛翔も、亀の歩みにまで落ちれば簡単に避けられる。

倍化していない一誠の身体能力は、悪魔として最低ランクである。絶好の機会を生み出そうが、最低でも最大強化の身体能力が無ければマタドールには届かない。

数日間掛けて作り上げてきたものが、マタドールの一撃によって呆気無く打ち砕かれた。

そんな一誠が、今どんな顔をしているのかマタドールは覗き込む。

表情は苦痛で歪んでいる。しかし、その両眼はまだ死んでいない。足掻こうという意思が宿っていた。

不屈の闘志。それを見せられたらマタドールもここで手を抜くことは出来ない。容赦なく攻めることが戦士としての礼儀。

一誠が触れている左拳。カポーテを巧みに操ることで、一誠は見えない何かに突かれた様に吹っ飛ばされる。

「うおっ！」

受け身も取れず、何度も地面を跳ねながら転がっていく。数メートル程離れたところですぐに立ち上がった。

「くそ……」

一度きりしか使えない捨て身の神器解除をあっさりと対処され、ショックが無い訳では無かったが、既に一誠は気持ちを切り換えていた。ショックを受けるのが烏滸がまし

い程力量差があることなど最初から承知している。それに、トールによって一撃で自信を砕かれた一誠には、これぐらいのことを耐えられる程度の精神耐性が出来ていた。

（でも、どうしようか……何か、こう、マタドールに効果抜群！　みたいな技ってないか？）

『そんなものがあれば、最初から教えている』

（だよなー……）

歴代の赤龍帝は、マタドールと戦う際に神器の能力と本人の技量でどうにか相手に出来ていた。酷な話だが、それが出来ないぐらい今の赤龍帝である一誠のレベルは低い。

（このままじゃ終われない……！）

皆から掛かる期待に一誠はまだ何一つ応えていない。肩に圧し掛かるものを重圧と呼ぶかもしれないが、好きな人、尊敬する人、助けたい人から寄せられる期待を枷などと思いたくない。寧ろ、その期待を誇らしく思う。

唇からあの日の夜の熱が戻って来る。リアスから贈られた熱い思い。それを無駄にしない為、一誠は――

（ん……？）

リアスからキス。マタドールの赤いカポーテ。赤龍帝の籠手の能力。不思議とその三つが頭の中に浮かび上がる。直感がこれを何かのヒントであると告げていた。

モヤモヤとした形にならない想像。繋がらない様で繋がるそれが結ばれる箇所を探してごちゃごちゃと頭の中で混ざり合う。

一人悶々と考え込む一誠。それを黙って見ている程、マタドールはお人好しでは無い。

「戦いの最中に考え事か？」

剣を構えたマタドールが目の前に立っている。

「ちょ、ちょっとタイム！」

思わず出てしまった情けない言葉に、マタドールはため息を吐く。

「貴公は、しょうがない男だ」

意外なことにマタドールが剣を収める。まさか、素直に応じてくれるとは思わず、目を丸くする一誠。

次の瞬間、マタドールの蹴りが一誠の顔面を蹴り飛ばしていた。

「勉強になっただろう？　これが不意打ちというものだ」

蹴られた一誠は、鼻を押さえながら立ち上がる。最近殴られ続けたせいか、骨も折れていないし、血も出ていない。赤くなった程度である。

「……すげぇ勉強になったよ」

マタドールの意地の悪さにも慣れた一誠は、言い返す余裕もある。

「教えて貰ったついでに、俺の勉強の成果も見てくれないか？」
「ほう？」
マタドールが興味を抱いた声を出す。
蹴られた衝撃で、めちゃくちゃに混じっていたものが一本に結ばれ、モヤモヤとした想像が全て繋がった。
この数日間で得たものをぶっつけ本番で一つの形にする。
「ではその成果、見せてもらおうか？」

◇

兵藤家に戻った一誠は、そのままオーディンの居る部屋へ一直線に向かい、勢いのままドアを開ける。
「何じゃ、急に？」
「どうかしたか？」
部屋の中ではオーディンとアザゼルが打ち合わせをしており、側にはロスヴァイセも居り、突然現れた一誠に驚いている。
「爺さん。トール――様を呼んでくれ」

開口一番で一誠はそう告げる。
「トールの試練に合格する目途が立ったのかのう？」
「合格してみせるさ」
「――分かった。少し待っておれ」
オーディンはトールと連絡を取り、間も無くして以前の様にグレモリー領の訓練用バトルフィールドで戦うことになったのだが――
「……何でいるの？」
シンとヴァーリを見て、一誠は言わずにはいられなかった。前回と違い、リアスたちも忙しいと思い、トールと戦うことは秘密にしていた。だというのに、一誠がバトルフィールドに来た時には、先にシンが居り、少し遅れてヴァーリも現れた。
あまりのタイミングの良さに報せたのではないかとアザゼルとオーディンを少し疑ったが、一誠が二人の顔を見ると揃って首を振っていた。
「どうやって俺がもう一度トール様と戦うことを知ったんだ？」
「――そうなのか？」
「それは興味深いな！」
初めて知ったという様子のシンとヴァーリ。どう見ても演技では無い。
「じゃあ、何で来たんだよ……」

「強いて言うなら――」
「敢えて言葉にするなら――」
　言葉を選ぶ為に少し考え、出た言葉は――
『勘』
「マジかお前ら……」
　預言の様な二人の勘の良さに一誠は引いてしまう。
「ギャラリーが来ちまうぐらいなら、いっそのことリアスたちも呼んじまうか？」
　苦笑しながらアザゼルが提案する。一誠の士気を上げる意図も含まれていた。
「まあ、部長や朱乃さんたちの前でカッコつけたい訳じゃないんで……」
　彼女たちに相応しいカッコイイ男で在りたいとは思っているが、だからといって形だけのカッコ良さを見せるのは違うと一誠は思う。
「そうかい。要らん気遣いだったな」
「いやー、それに急にミョルニルのレプリカを見せた方が驚くかな、と思って」
「ほう？　既に勝っている算段か。頼もしいな」
　姿は無く声だけだというのに、緩んでいた空気が一瞬で張り詰める。空間の歪みが出現し、そこからトールが姿を見せる。
　張り詰めた空気が、今度はひりつくものへと変わった。見ている者の総毛が逆立つ威

圧感と神々しさ。
人々が脅威を神という形に現し、信仰していた気持ちが分かった気がする。触れてはいけない存在への信仰は、恐怖の裏返しなのかもしれない。
トールを前にし、瞬殺された時の苦い感情が心の中から溢れ出てくる。マタドールに何度も殴られ、貶され続け、その辺りの感情が麻痺してるかと思っていたが、全くそんなことは無かった。
寧ろ、マタドールとの特訓は心の蓋を閉じる為のものであった。死に物狂いでする特訓が完敗の味を一時的に忘れさせた。
「また、挑ませて貰います……！」
臓腑が爛れる様な熱く、粘り付く様な感情を押し込め、一誠は再びトールへ挑戦する。
「そうか」
トールは一言だけ残し、一誠から距離を置く。
数メートル程離れてトールは足を止めた。
「ルールは前と同じだ。全力で来い」
トールに一撃与えれば一誠の勝ち。前回は一撃を与える前に、逆に一撃で倒された。
（二度と同じ負け方はしない！）
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』

本来ならば時間が必要な筈の赤龍帝の鎧を、一誠は一瞬にして纏う。表面上は静かだが、体の内に燃え盛る激情が、神器に力を与えて時間を短縮させた。

『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

鎧が倍化を重ね始め、数秒で能力が最大強化をされた。

倍化を終えた一誠は、その場から動かない。前は飛翔して自分から距離を詰めたというのに。

「――来ないのか？」

攻めて来ない一誠を、臆したのかとトールは思った。

「……いつでもどうぞ」

手招きをし、あろうことかそちら来いと挑発してみせた一誠。正気を疑う様な行動であったが、一誠も余裕を以ってやっているのではなく声が震えている。図太さよりも若干の悲痛さを感じさせる痛ましい挑発であった。

「――くっ」

トールは、一誠の精一杯の挑発を小さく笑った後――それに乗る。

トールの巨体は即座に雷光と化し、万物を砕く剛力を拳に込めた状態で一誠の真正面まで移動していた。

この時、仮面の奥のトールの目が僅かに見開く。以前は全く反応出来ていなかった筈なのに、今の一誠はトールの拳を凝視していた。間違いなくトールの動きを目で追っている。

（たった数日で反応出来たか）

本気では無いとはいえ全く手を抜いている動きでは無い。一誠の短期間の成長にトールは感心しながら拳をより強く握り締める。

雷神から高い評価を受ける一方で、一誠の内心は余裕など一欠けら無かった。

（うわ！　うわ！　でかい！　早い！　こわっ！　こわっ！　逃げてぇぇぇぇ！）

マタドールのスピードに慣れたことでトールのスピードにも反応出来たが、筋肉の塊の様なトールが握り締めても尚でかく見える拳を構える様は恐怖しか感じられない。反応出来てしまったせいで、前とは違って拳よりも先に強烈な重圧が飛んでくる。

（こぇぇ！　くそっ！　堪えろ！　行け！　行け！　行け！）

マタドールの方が性格が最悪な分もっと碌でも無かった、と自らを鼓舞し、一誠は触れれば砕け散りそうな拳に向けて掌を突き出す。

雷神の豪腕から、電磁加速砲かと錯覚する様な拳が発射される。

直線で迫る剛拳に対し、一誠が行ったのは掌でそれに触れること。

何千分の一の間の接触。その瞬間に一誠は全てを懸ける。

『Ｔｒａｎｓｆｅｒ!』

その音声に誰もが耳を疑った。

（ここで譲渡だと!）

アザゼルを初めとし、皆が同じ疑問を抱く。一体、何に譲渡し、何の能力を向上させようというのか。

次に一誠が行ったことに、思わずヴァーリは前のめりになる。

一誠はトールに触れた掌を下方向へ向けて振るう。その際に、籠手から発せられるドラゴンの赤いオーラの軌跡が赤布の様に残るが、それにヴァーリだけでなくシンも強い既視感を覚えた。

更に驚愕すべきなのは、ただそれだけの行為でトールの拳の軌道が逸らされ、一誠の手の動きに合わせて真下に向かう。

「むっ!」

トールは自分の意思とは無関係に動く拳に気持ち悪さを覚えながら、拳が足元を砕く前に急停止させ、すぐさま軌道修正をしようとするが、その頬に硬い感触がコツンと当たる。トールの仮面に一誠の右拳が押し当てられた音であった。

「――どうですか?」

「見事。合格だ」

その瞬間、全ての緊張から解き放たれ、一誠は膝から崩れ落ちた。
「はあぁぁー……あぶねぇ……」
一誠は左手を見る。トールの拳を逸らしたその籠手は罅だらけになっており、今にも？がれ落ちそうであった。触れただけでこれである。鎧無しだったら運が良くて腕の骨が、悪ければ腕自体が粉砕していただろう。
『こればかりは、流石としか俺も言えないな、相棒』
「い、今、ほ、褒めないでくれぇ……色々と来ているせいで、泣きそう……」
トールとの戦いからの解放の反動で涙腺が締まりの無い状態となっており、全身も震えていた。
「赤龍帝」
「は、はいっ！　何でしょうか！」
トールに呼ばれると、一誠は跳ねた様に起き上がり直立不動となる。
「これを」
トールの手の中にはいつの間にか一振りのハンマーが握られていた。幾つか装飾や彫り物がされているが、一誠の第一印象は工作で使う金槌である。
「これが……」
「ミョルニルの贋作だ。お前にはこれを受け取る資格がある」

一誠は差し出されたミョルニルのレプリカに両手を伸ばす。トール直々に手渡され、緊張してしまう。

ミョルニルのレプリカを受け取った瞬間、ずしりとした重量が両手に掛かる。すると、一誠の両手の中でレプリカがどんどん大きくなっていき、それに合わせて重量も増していく。

「ふぬぅおぉぉ！　何ですかこれっ！」

「気を昂らせ過ぎだ。お前の魔力に影響を受けているんだ。抑えろ抑えろ」

重みで前傾姿勢になっている一誠に、アザゼルがアドバイスを送る。戦闘後の高揚と解放感で一誠が無意識に放っていた力が、レプリカに影響を与えていた。

アドバイス通り魔力を抑える一誠。レプリカの巨大化は止まり、今度は小さくなり始め、元の大きさまで戻る。

小さくなったそれをアスカロンの様に籠手の中に仕舞う。剣にハンマーを収納した籠手。似合わない例えだが、十徳ナイフを連想させた。

「赤龍帝」

「は、はい！　今度は何でしょうか！」

トールに名前を呼ばれる度に心臓が跳ね上がる。威厳と威圧があり過ぎて、自然と体が硬直してしまう。

「手を」
そう言われ、意図が分からないまま一誠はおずおずと左手を出す。すると、トールの巨大な手が一誠の手を包み込んだ。
「私の力をお前に託そう」
激励を込めたトールの握手。最強と呼ばれる雷神にそこまでされ、一誠は戦意が高まっていくのを感じた。
「――はい！」
トールは一誠から手を放し、オーディンに顔を向ける。
「私はこれで。だが、いざとなれば――」
「安心せい。お主の力を借りんでもロキに灸を据えるぐらいできるわい」
「灸などと優しいことは言わず、この拳を直に叩き込んでやりたかったが……」
「お主ら本当に仲が悪いのう」
「相性が悪いだけかと」
「ただでさえロキの暴走で他の神々に恥を晒しとるというのに、そこにお主らの喧嘩など見せたら恥の上塗りだわい。お主は北欧に戻って他の者たちがこの隙に良からぬことをせぬか目を光らせておけい」
「――承知した。では」

来た時と同じ様に歪みの中へ消えていくトール。
時間は掛かったが、ミョルニルのレプリカを手に入れることができ、これで下準備はほぼ完了した。
「はあああ……」
溜息を吐きながら一誠は禁手を解除する。まだ本番はこれからだが、一つの重圧が肩から下りた。
リアスたちに早速ミョルニルのレプリカを手に入れたことを報告しようと振り返る。
そこには目を輝かせ、好奇心に満ちた笑みを浮かべたヴァーリが立っている。
「……何？」
「さっきの技、出来ればもう一度見せて欲しい。というか俺に使ってほしい」
頼んでくるヴァーリの雰囲気は、まるで手品を期待する子供そのもの。
「お前、骨折しているんだろう……？」
「あんなもの怪我の内に入らない」
「ええ……」
骨折はかなり重い怪我の筈だが、何でも無い様に言い切るヴァーリ。
「おい、間薙！　――って居ねぇ！」
見学していた筈のシンの姿が何処にも無い。

「あいつ、お前が合格したのを見たらさっさと帰っていったぞ」
アザゼルに教えられ、一誠は頭を抱える。
「何でこういう時だけタイミングが悪いんだ！　あいつは！」

◇

人気の無い建物内でマタドールは独り佇む。
（ああいう成長をするとは、少々予想外だった）
一誠がマタドールに最後に見せたのは、マタドール自身の技の模倣であった。それを見せられた瞬間、マタドールは極めて短い時間ではあるが柄にも無く動揺してしまった。
その結果、一誠の拳を避けるのに僅かに反応が遅れ、衣服の一部に掠らせてしまった。頭の天辺から爪先まで全てに神経を張り巡らせているマタドールには、その微かな接触にも気付いてしまった。
一誠本人は空振りしたと思っていたが、マタドール本人が掠めたことを自己申告したので特訓は合格となったのだ。
別に一誠の頑張りを評して情けを懸けた訳では無い。マタドール自身のプライドの

問題である。格下相手に触れられることよりも、それを隠すことの方が遥かにマタドールの自尊心を傷付ける。

（それにしても酷い技であった……）

百点満点中限りなく零に近い一点。それが、マタドールの一誠の技の評価である。

相手の力を利用し、そのまま自在に操るマタドールの技とは違い、相手の力を利用出来ない一誠は、その代わりに相手に自分の力を流し込む。他人の力は利用出来なくても、自分自身の力ならばまだ上手く操作出来る。

それによってマタドールの赤のカポーテと似た様な捌き方をしたのだ。

はっきり言って欠点だらけの技である。自分自身の力を利用するので大きく消耗すること。完全に初見向けの技であり、一度分かれば同程度の実力差でも覆せること。

マタドールの技と比べれば劣化模倣もいい所である。

（だが、面白い）

今はまだ劣化したもの。いずれは自分なりに技を理解し、より完成度の高いものへ昇華出来るとマタドールは予想していた。

才能など全く無いと思っていたが、敵対する魔人の技を取り込もうとするその貪欲さは評価に値する。

（見せたと同時に合格して良かった。赤龍帝）

マタドールは手首を回し、剣を一回転させる。その途端、天井、床に斬撃による線が刻まれた。
（もう少し粘っていたら、期待をし過ぎて自重出来なくなっていたかもしれない）
マタドールは上機嫌そうに鼻歌を歌いながら剣を回す。その度に建物内に斬られた跡が出来ていく。マタドールからすればペン回しの様な感覚で建物を切り刻む。
（――ああ、そう言えば最後の約束はどうしたものか……）
斬撃によって建物の耐久も限界に達し、崩れ始める中でマタドールは呑気に別のことを考えていた。
一誠はマタドールとの特訓内で一つの約束を交わしていた。そして、特訓の合格と共にその約束も果たされている。
（姫島朱璃の死の真相を全て話す、か……聞かされた時の赤龍帝の顔。一体何を期待していたのやら？）
落胆と安堵。それが半々に入り混じった表情を一誠はしていた。
（私が姫島朱璃の仇で無いこと、その仇を私の手で既に殺害していたことなど知ってどうなる訳でもあるまい）
と考えるものの実のところ、一誠にも話していないことが一つある。それは最期を看取った朱璃の遺言である。

冷酷無比で自己中心的な考えを持つマタドールでも、これは容易く他人に聞かせるものでは無いと思っている。

（しかしなぁ……）

マタドールの当初の予定では、これを餌にしてバラキエルと戦おうと考えていた。だが、マタドールの予想に反してバラキエルが弱々しい姿を見せたので保留となってしまった。とはいえ、全て話すという約束を反故にするのもマタドールの沽券に関わる。

（――決めた）

雨の様に降る大小の瓦礫を避けながら、マタドールは歩き出す。

（この戦いでバラキエルがもし生き残ったら、その時に教えるとしよう）

自分の中で決め、それに納得すると崩壊していく建物を後にする。

後日、マタドールが破壊した建物は、『謎の崩壊』という見出しで新聞の片隅に載ることとなる。

開始、先制

会談当日。この日、シンたちは予定通りに学園に通っていた。いつも通り登校し、いつも通り授業を受け、いつも通り放課後にオカルト研究部部室へと集まる。

そして、そこで対ロキに向けての作戦会議を――

「はい！　おっぱいメイド喫茶を希望します！」

「却下」

――するのではなく今度の学園祭で行う部での催し物を話し合っていた。

決戦近くに何を呑気に、と思うかもしれないが、この日の為にリアスたちはやるべき事は一通りやってある。当日になって慌てて色々と決める様な無様を晒すことは無かった。

なので、オーディンと日本の神々との会談までの間に先にやっておくべきことはやっておく。

「な、何故に!?　お二人のおっぱい！　アーシア、小猫ちゃんの可愛さ！　ゼノヴィア、イリナの美貌があれば学園祭の売り上げ一位なんて楽勝なのに……！」

「でも、そうなると他の男子に皆の胸とか見られることになるんだけど……？」

そこで一誠はハッ、とした表情となる、盲点だったと言わんばかりの顔であった。
「生徒会メンバーの立場として見たら……？」
「一筆書いておけ」
「……何を？」
「退学届。そもそもうちの学園が認める訳がないだろうが。いかがわしい店擬きみたいな催し物を」
シンにもダメ押しされ、一誠は溜息を吐く。
「無念だ……これじゃあ、代替案のおっぱいお化け屋敷も無理か……」
深夜の大人向けのテレビ企画の様な案を自ら没にする一誠。オカルト研究部のメンバーの何人かはそれに呆れていた。
そこからはあれこれと意見の飛び交う会議となった。オカルト研究部部員のレベルはハッキリ言って高い。
リアス、朱乃は男女関係無く人気が高く、木場は学園女子にとってアイドル的存在、アーシア、イリナ、ゼノヴィアも同学年で美少女として多くの注目を集めており、ギャスパーなど一部の界隈に於いて上記の者たちよりも熱狂的な人気を誇っている。
「人気者ばかり。そして、残されたのは俺たち二人というわけか。悲しいよなぁ」
同意を求めて肩に伸ばしてくる学園で悪名高きエロ男子の一角の手を、シンは簡単に

躱す。
「仲間と思われるから止めてくれ――本当に」
「念を押すな！　念を！」
　すると、シンの肩を誰かが指で叩く。振り返ると目を輝かせているイリナが居た。
「間薙君！　この機会を逃す手は無いわ！」
　テンションが高い。イリナのアレなスイッチが入っている証拠である。それを察して一誠は素早く距離を置く。
「――どうした？」
「私と貴方のクラブ『紫藤イリナと間薙シンの愛の救済クラブ』の存在をアピールするには学園は絶好の機会よ！」
「そう言えば、あったなそれ……」
　イリナが立ち上げた、困っている人たちを助ける為のクラブである。部員数が規定に達していないため同好会レベルであるが。
　設立してからそれなりに経過しており、活動の方も割と評判は良い。だがしかし、部員数は設立した時のまま。イリナと名前だけ貸しているシンの二名のみ。
　原因は二つ。一つはそれほど名が広まっていない事。もう一つはイリナ本人にある。活動自体はボランティアの延長戦の様なクラブであり、そういったことに興味がある生

徒は何人か居た。居たが、入って早々イリナによるプロテスタントの有り難いお言葉や教えの洗礼を受けるともう来なくなってしまう。

日本人にとってはあまり馴染みの無い宗教とそれに熱狂的な信者という組み合わせは、部員希望者に二の足を踏ませることとなり、部員は増えずという結果となった。

「間薙君も頑張りましょう！　そして罪深い異教徒たちに主の教えと愛を振り撒きましょう！」

「……」

言葉だけ切り取ると殆どカルトを彷彿とさせる台詞である。これが、本物のクリスチャンで天使であるイリナが言っているのだから、世の中は皮肉に満ちている。

「――取り敢えずは、知名度を上げないと意味が無い。単独でやるよりもオカルト研究部の催し物に便乗する形にしてクラブの名前を広めたらどうだ？」

乗り気はしないが、一応自分の考えを出す。

「それだわ！」

イリナもそれに賛同し、オカルト研究部メンバーに混じって意見を出し始める。

オカルト研究部の方はというと、オカルト研究部の女子の中で誰が一番人気か、と一誠が何気無く呟いた一言でリアスと朱乃が自分が一番だと豪語し、火花を散らし始めた。

最近色々と思い詰めていた朱乃。それを心配して悩んでいたリアス。その二人が衝突し、口喧嘩している様子を見て、二人とも調子を戻していることが伝わってくる。

騒がしかった会議が別の形で騒がしくなる。こうなると最早催し物を決めることなど出来ない。

「まあ、部長も朱乃さんも落ち着いて下さい。取り敢えずここまでにして、催し物については明日に持ち越しましょう？」

その瞬間、全員の視線が一誠へと集まる。

「え？　え？　ど、どうしました？」

「――そうね。次に決めましょうか」

「そうですね。ふふふ」

笑い合うリアスと朱乃。一誠本人は意味が分からず困っていた。

本人は自覚していないが、悪神ロキと神喰狼フェンリルと戦うというのに、明日のことを考える一誠。

そもそもこの会議が事情を知る者からすれば現実逃避に見えるかもしれない。明日が来るか分からないのにオカルト研究部の皆は今後のこと、つまりは未来について話し合っている。それは、ロキとの戦いに負けないこと、全員生還することを強く信じ、それを成そうとする意志に表れでもあった。

それを自然と口に出した一誠に、皆の気が楽になるのを感じた。言葉に出さなかったが、全員が同じ気持ちである。

「青春してんなー」

部屋の隅で茶を飲みながら会議を静観していたアザゼルが、そう言って笑う。茶化している雰囲気は無く、一誠たちを眩しそうにそれでいて楽しそうに見ていた。

だが、窓の外の夕暮れを見てその笑みを消す。

「……黄昏か」

日本の神々との会談を破談させ、オーディンすら討取り神々の黄昏を起こそうとするロキ。黄昏とは最盛を過ぎたことを意味する。ロキにとって既にオーディンは黄昏というべき存在と見なしているのだろう。故にオーディンを亡き者にすることで北欧神話を最盛させるつもりなのかもしれない。

とはいえ、それが目的で起こさなくてもいい戦いを起こす必要など無い。少なくとも、堕天使の長であるアザゼルはそう考えていた。

「神々の黄昏にはまだ早い」

黄昏にはまだ余力が残っているという意味もある。オーディンはその余力を以って北欧に新たな流れを汲もうと考えている。今回の会談はその為の一歩。だからこそ絶対に失敗出来ない。

「気張っていけよ、お前ら」
『はい』
　アザゼルの言葉に全員意気込みが籠った返事をする。
「ところで――」
「うん？　何か質問か？」
　一誠がおずおずとアザゼルに話し掛ける。
「匙ってどうなりました？」
　一誠は、アザゼルが匙をグリゴリの研究施設に連れて行って以降姿を見ていない。シンも生徒会の仕事の手伝いで生徒会室に何度か顔を出したが、匙を見かけなかった。
「ああ、匙か。匙は……何と言うか……」
「え？　もしかしてヤバいことになってるんですか？」
　アザゼルのハッキリとしない態度に、一誠は匙の身に何か起こったのではないか不安になってしまう。何せアザゼルの特訓である。過去に冥界で一誠にタンニーンとマダによる地獄の特訓をさせた人である為、最悪の想像をしてしまう。
「まさか、殺――」
「す訳ねぇだろう。細心の注意を払っているっつーの」
　アザゼルが顔を顰めて否定する。

「じゃあ、何か問題が起きて特訓が上手くいかなかったとか？」
「逆だ、逆。好調過ぎて怖いぐらいだ。匙の奴、この短期間でかなり強くなったぞ」
アザゼルの言葉に驚くと共に一誠は嬉しくも感じていた。
自分でも不思議な感覚だと思う。だが、この時だけはヴァーリが自分に向ける感情を少しだけ理解出来た気がした。
「そのせいでアルマロスとサハリエルの熱が入り過ぎてな、ギリギリまで調整をするつもりらしい。まあ、安心しろ。ロキとの戦いには間に合う」
アルマロスとサハリエルはグリゴリの幹部の名である。
「念の為に聞くけど、大丈夫なのよね？」
リアスが聞くと、アザゼルは爽やかに笑い――
「あいつらは、基本的に頭はおかしいが大丈夫だ」
――何とも不安になる返答をしてくる。
「不安になることを……」
「堕天使なんてのはなぁ、基本的に自分勝手で頭がアレなんだよ、どいつもこいつも。何せ、全員が神の定めたルールを自分の意思で破る様な連中ばっかだからな」
堕天使の長直々にとんでもないことを言う。だが、説得力もある。一誠の脳裏には彼にとって堕天使の代名詞と言えるレイナーレの姿が過り、急いで頭を振って忘れる。思

い出しても碌なものではない。
「さーて、もう聞きたいことは無いよなぁ？　ほれほれ、もう解散だ。全員家に帰って準備を始めろ。今夜は長くなるからな」
　手を叩いてオカルト研究部の活動をお開きにするアザゼル。彼の言う通り何時まで部室で喋っている訳にはいかない。
「じゃあ、行きましょうか」
　部室を後にするオカルト研究部のメンバー。一旦ここで解散し、後で合流する。一誠やリアスたちは一緒に家に帰るが、木場やギャスパー――この時、ジャックランタンは大人しくギャスパーに付いて行く――は一度家に戻る。シンもまた仲魔たちと一緒に一度自宅へ戻る考えであった。
　旧校舎を出て、新校舎の校門へ歩いていくシンたち。
「あれ？　間薙君じゃん」
　名前を呼ばれ、足を止める。
「桐生か」
　シンに声を掛けた桐生は、いつもの様に悪ガキの様な笑みを浮かべている。
「珍しいな」
「あ、私がこの時間まで学校に居ること？　実はちょっと学校内で裸の付き合いをねー」

「そうか」
「もー、反応が鈍いなー、間薙君は。友達のお手伝いしてただけだって。――それとも本当に裸の付き合いをしてたと思った？」
　不満そうな表情を一転させ、いやらしい笑みを浮かべる桐生。一誠やアーシアを揶揄う時によく見せる顔である。
「かもな」
「あははは。してない、してないって。どう？　こういう如何にも慣れてそうな感じで実は奥手っていうのギャップ萌えしない？」
「自分で言わなければそうかもな」
「間薙君は相変わらずクールだねー」
　ノリが悪いと言えるシンの反応に、桐生は気分を害した様子も無くケラケラ笑っていた。
　だが、急に笑うのを止め、シンに顔を近付けてジッと見つめる。
「どうかしたか？」
「間薙君、何かあった？」
　表情に変化は無かった、と思う。
「いきなり何だ？」

「何かいつもよりもピリピリしてる感じがしたから」
普段通りに振る舞っていると思っていても、自分で気付かない内に戦いへの気持ちが零れ出てしまったのかもしれない。よく人を見ている、とシンは素直に感心する。
「――そうか？」
「変な話だけどさー、戦争に行く人っていう感じ？　実際に見た事無いからイメージで言っているけど」
戦争と言えば戦争なのかもしれない。北欧神話の神たちによる今後を決める戦争。
目の前の桐生はそれが今夜起こることを知らない。桐生だけではない。今頃どこかでスケベな話で盛り上がっている松田、元浜も。駒王町に住む殆どの住人たちは戦争が起こることを知らない。
彼らの未来や命は自分たちに懸かっている。ロキに勝って救えば英雄だ。誰にでも感謝される、いやされるべきなのである。讃えられ、褒められ、崇められる。それこそが正しい在り方――
「――って考えられたら楽だろうな」
「へ？　何？」
「いや、大したことじゃない」
――思わず言葉を洩らしてしまったが、シンはそこまで自惚れことは出来ない。所詮

は神同士の内輪揉め。自分たちはそれのお手伝い。感謝されるどころか問題を運んできているに過ぎない。

だからこそ誰も知らない内に終わるべきこと。誰も知らないことこそが正解なのである。

英雄に成る気などさらさら無い。英雄は絵物語か夢物語の中にいれば十分。

「ホントにー？」

真剣な表情の桐生が更に顔を近付けてくる。甘い香りが淡く漂ってきた。

「ああ」

シンは顔を背けることも引くこともしない。

桐生は更に半歩接近する。角度によっては唇を交わしていると誤解されかねない程の距離であった。

探る様に見てくる桐生の目。その目からシンは決して逃げない。互いに沈黙したまま十数秒経過する。

「ま、そういうことにしておきますか」

引いたのは桐生の方であった。

「あれ以上くっついてたら、誰かに誤解されて噂になるかもしれないしね」

「光栄だな」

「あっはっはっは。間薙君はクールだけど口が上手いねー」
さっきまで真剣な表情は跡形も無くなり、いつもの様ないやらしい笑みを見せながら桐生は、気分良さそうにしていた。
「桐生、悪いが――」
「あっ、急いでた？　引き留めてごめんね」
今後のことを考えてこの辺りで会話を打ち切る。桐生も特に会話を引き伸ばす様なことをしなかった。
「じゃあね」
桐生はひらひらと手を振る。それを見ていたシンは、ふとある言葉を口に出す。
「また明日」
一誠と同じく自分たちに明日があることを信じる台詞。部室では言えなかったことを桐生に言う。
「うん。また明日ねー」
特別な感情があるから言っている訳では無い。現に桐生も普通に返している。これは、ロキとの戦いに生き抜くことへの決意の証であった。
また明日を迎える為に、シンは桐生に背を向け、黄昏の時の中を歩いていく。

◇

日が落ち、決戦の時刻であり悪魔の時間が訪れる。

シンたちは、オーディンが日本の神々と会談をするとある高層高級ホテルの屋上に居た。

周囲を一望出来るが絶景――なのだが、高い場所にあるせいで風が強く、一気に体温を奪っていく。ピクシーなど風を嫌がってシンの懐に退避していた。

シトリー眷属たちは、周囲のビルの屋上に各自配置されており、魔法陣の準備をしている。

ホテル屋上にはシンとその仲魔。リアスと眷属。ヴァーリたち。バラキエルとロスヴァイセ、そして上空には術によって一般人に認識出来なくなったタンニーンが待機していた。アザゼルは、仲介役と護衛を兼ねてオーディンの側に居る。

後はアザゼルが助っ人として呼んだマダだが、この場には居ない。数が多過ぎるとロキを警戒させ、姿を見せなくなるかもしれないと考え、遠く離れた場所で待機させている。転送用魔法陣を使えばすぐにでも移動出来るので、問題も無い。

会談が始まるまでまだ少し時間がある。一誠は横目で朱乃を見た後にバラキエルの方を見た。

「――何だ？」

一誠の視線に気付き、バラキエルが不機嫌そうな声で視線の意図を訊いてくる。最初に会った時よりも若干だが棘が無い――様な気がした。

「えっ、ああ……特に何も……」

一誠は誤魔化し、愛想笑いを浮かべる。朱乃がバラキエルを睨む様に見ていたが、それ以上は何もしなかった。

（言える訳無いよな……）

マタドールから聞かされた朱乃の母――朱璃の死の真実は、一誠にとって望ましいものでは無かった。

バラキエルに恨みを持つ者たちが朱璃の命を奪い、バラキエルと戦うつもりであったマタドールが偶然その現場に居合わせ、その連中を皆殺しにした。あわよくば本当の仇はマタドールで、バラキエルの朱璃の死に対する責任が僅かでも少なくなれば二人が少しだけ歩み寄れるのではないかと思っていたが、そうはならなかった。

もしかしたら、マタドールが？を吐いている可能性も無くはないが、わざわざそんな？を吐く存在には見えない。つまり、バラキエルは永遠に妻の仇を討つことが出来ず、代わりにそれを果たしたのが怨敵であるマタドールであるという事実。

（最悪だ……本当に）

その事実を知ってしまった時、がっかりすると共に恥ずべきことだが安堵もしてしまった。朱乃の母親の仇から教えを乞うなどしていたら、どんな理由があるにせよ大なり小なり朱乃から失望されていただろう。
朱乃とバラキエルを交互に見る。最初の時の様な衝突は起きることは無かった。何故なら二人は互いに避けていたからだ。両者の溝が埋まることなくこの日を迎えてしまった。
「――時間ね」
リアスが告げる。オーディンと日本の神々との会談が始まったのだ。
その時、一陣の風が吹き抜ける。全身に鳥肌が立つのが分かった。風の冷たさによるものでは無い。これは大きな力が現れる予兆。
「小細工無し、か。恐れ入る。だが、好みのやり方だ」
ヴァーリは口の端を吊り上げて笑いながら、虚空を見つめる。
「前門が開いているのに、コソコソと裏口から入る必要があるのか？」
何も無い場所から声が響くと、空間に大きな歪みが生じ、それが穴となって中からロキとフェンリルが現れる。
「目標確認。作戦開始」
全員が付けている小型通信機からバラキエルの指示が聞こえると、ホテルを包み込む

様にして魔法陣が展開。ホテルの外の建物にいるソーナたちが魔法陣を発動させたのだ。

ロキはそれに慌てる様子も抵抗する様子も無くされるがまま。

光が全てを塗り潰すと、魔法陣内にいた全員が別の場所に転送されていた。

岩や砂利ばかりの大きく開けた場所。暴れてもいい様に用意された採石場跡地である。

戦闘要員が全て揃っているのが分かると、一誠は神器のカウントダウンを発動させ、禁手の準備に入る。

ロキは揃えられたメンバーを一人一人眺めている。

「余裕そうね」

リアスが挑発的に言う。

「どれほどの者たちを揃えるかと期待していたが……随分と舐められたものだ」

わざとらしく失望を込めた溜息を吐くロキ。

「魔王の身内が居るので四大魔王の一人でも来るかと思っていたが、全員冥界かな？魔王も平和な時を過ごし過ぎて目が曇ったか。まあ、タンニーンを連れて来たのは評価しよう。ただ、元龍王なのは減点だ」

リアスたちとタンニーンをあからさまに馬鹿にするロキ。

「元とは言え、龍王の炎が如何ほどのものか、その身で味わってみるか？」
　タンニーンが口を軽く開き、火の粉を零す。
「ふふふふ。その覇気は心地良いな。我が子ミドガルズオルムにお前の半分、いや、三分の一程度の気力があったのなら、オーディンやトールに大きな顔をさせていなかっただろうな」
　ロキは笑いながら準備運動の様に指を鳴らす。
「さて、お喋りはここまでにしてお前たちを始末させてもらおう。目的はオーディンの首なのでな」
「今、オーディン殿に何かがあれば北欧に混乱を齎すことになる。危険だ」
「混乱？　ふっ」
　バラキエルの言葉にロキは失笑した。
「混乱なら既に起こっているさ。遥か昔から。気付いていないだけだ。誰も彼もが。あまりに当たり前にそこに居るからこそ」
「どういう、意味だ……？」
　意図が分からず思わず訊いてしまうバラキエル。他の者たちも同じ心境であった。
「どういう意味か、か……」
　ロキの視線が一瞬だけシンを、その仲魔たちを射抜く様に見た。

「お前たちの隣人は、果たして本当の隣人か、ということだ」
謎めいたロキの言い回しに、言い様の無い不快感を覚える。何か重大なことを聞かされている様な気がしてならなかった。
「何を言って――」
「お喋りの時間は終わりだと言った筈だが？　そろそろ掛かってきたらどうだ？　禁手に至る時間には十分だろう？」
一方的に話を打ち切るロキ。あまつさえ禁手に至るまでわざわざ待っていたと言う。癪だがロキの言う通り、一誠の禁手のカウントダウンが終了したのは丁度その言葉の後であった。
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』
促すロキに見せつける様に一誠は禁手を発動。同時に『女王』へプロモーションをすることで能力を跳ね上げる。
『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』
一誠の禁手に合わせてヴァーリも禁手を発動。
赤色の魔力と白色の魔力が全身から溢れ出し、暗い夜を赤と白で染め返す。
「壮観だな」
前に出てきた二天龍に、ロキは素直な感想を言う。

「このロキを倒す為にいがみ合う筈の二天龍が肩を並べて共闘するか！　名誉なことだな！　あの魔人ですら為せなかったことだ！」

本来ならば窮地である状況に、ロキは高らかに笑う。前人未到ということに酔いしれている様にも見える。

「マタドールが居なくて良かった」

ヴァーリが一誠にしか聞こえない声量で零す。

「きっと嫉妬で猛っていた筈だ」

自分でも味わうことの出来なかったシチュエーションを誰かに取られたと知ったら、マタドールが何をするのか。付き合いの短い一誠ですら容易に想像出来てしまう。

（そう云えば、まだ姿を見せてないよな……？　こっちの居場所に気付いていないのか？　それともう潜んでいるのか？）

マタドールの姿が見えないことに不安を覚える。ロキごと転送したことで戦いの場が変わったが、マタドールなら必ず嗅ぎ付けてくるという嫌な信頼感があった。

「兵藤一誠。マタドールが何時来るのか楽しみなのは分かるが、今はロキに集中しろ」

そう言い残すと、ヴァーリは魔力を噴射し上空へ飛び立つ。

「いや、全然楽しみじゃねぇよ！」

『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏ

ｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

一誠は倍加によって更に能力を上げ、地面を駆け出す。

予定通り二天龍が最初にロキへ仕掛ける。

唸るフェンリルが前に出ようとするが、ロキはそれを手で制する。

指揮者の様にロキの指が振るわれると、上空、地上に向けて多数の魔法陣が展開。一誠、ヴァーリに向けて魔法陣の術式が同時に発動する。

上空のヴァーリには魔法陣から幾つもの光弾が狙い撃つ。放たれた光弾の種類は様々で、機関銃の如く秒間百発を超える勢いで放たれるものもあれば、大砲の様に二メートルを超える巨大な光弾が放たれる。

ヴァーリは白い光の軌道を空に残しながら、光弾の対空砲を次々に避けていく。より正確に表現するのなら避けてすらいない。魔法陣が狙いを修正してもヴァーリの速度に追いつけず、通り過ぎ去った後を弾幕が追うという状況であった。

一方で地上の方は、ロキが展開した魔法陣が地面を這っていく。一誠が無策で魔法陣の上を通過すると、魔法陣から光が噴き出し一誠を焼こうする。地雷そのものと言えるが、本物の地雷とは違い確実に相手を葬ろうとする意志が火力となって表れている。

だが、噴き出す光の中から一誠が飛び出す。飛び出した先に魔法陣が在り、またもや光が噴き出し一誠を包み込むが、それも力尽くで突破する。

技量一切無しの鎧の性能に任せた突撃。無謀としか言い様がないが、一誠の鎧は白煙を上げているが目立った損傷は無く、ロキへの最短ルートを一直線に進んでいた。

ロキの術式を力と技という対照的な方法で切り抜けていく両者。それを見たロキは、余裕のある笑みを浮かべながら、指を鳴らす。

展開していた術式に文字が自動的に書き加わる。すると、ヴァーリを斉射していた光弾は、外れると同時に魔法陣へと変化。数百の魔法陣が空中に描かれる。地上でも同じ様に噴き上げられた光の残滓が集まって魔法陣を形成する。

魔法陣から出現するのは帯状の光。蛇の様にうねり複雑な軌道で迫りながら、その速度は光弾と同等。

あらゆる角度から来る光の帯に対し、ヴァーリは躊躇することなく光の帯に手を伸ばす。

光の帯を掴み取るヴァーリの手。他の光の帯もヴァーリに絡み、全身に巻き付いていきヴァーリの姿が見えなくなる。

その光景を眺めているリアスたち。アーシアやイリナは息を呑むが、美候らは特に動揺している様子は無い。

その態度の意味はすぐに分かった。

『Ｄｉｖｉｄｅ！』

発せられる声の後、光の帯の輝きが一斉に鈍る。

『Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！』

『赤龍帝の鎧』と同じく連続して発動する『白龍皇の鎧』の能力。触れた対象の能力を半減させ、自分のものとする。これにより光の帯はヴァーリによって力を吸収され、余剰となった力は鎧の背部にある噴射孔から出ていく。

巻き付いていた光の帯らは吸収され過ぎて形を留めることが出来ず繋がっている魔法陣ごと自壊。光の帯を裂くようにして中から現われる巨大な光の翼とヴァーリ。羽化を彷彿とさせる光景であった。

避けるのではなくわざと受けることで相手の力を我が物としたヴァーリ。今の彼は取り込んだ力を白光の輝きとして放っている。

一誠は逃げ場を埋め尽くす程迫る光の帯に対し、籠手内に収納していたミョルニルのレプリカを取り出す。金槌程度の大きさが一誠の魔力に反応し、大槌ぐらいまで大きくなる。重量が増したそれを倍加の力で支え、思い切り振るった。

光の帯に触れておらず、素振り同然であったが、ミョルニルのレプリカが振り抜かれた時、全員の目の錯覚でなければ空間が波打った。

波紋の様に広がっていく空間の波。光の帯がその波に触れると木端微塵に破砕され、

魔法陣まで波が到達すると一斉に魔法陣が破壊されるという爽快感溢れる光景が広がる。

「何だこりゃあ!」

振った本人も驚愕する程の破壊力。使い手が本人ではなく尚且つレプリカだというのに過剰と言える威力。ただし、破壊力は凄いがミョルニルだというのに雷が全く出ない。きちんと魔力を込めたが、静電気程の火花すら出なかった。

ヴァーリの能力を楽し気に見ていたロキも、一誠がミョルニルのレプリカを振るった瞬間雰囲気を一変させ目元を一瞬震わせた。

「ミョルニル……レプリカか。雷を生み出す程使いこなせていないが……嫌な物を貸し与えるなオーディン。それともお前が許可を出したのかトール?」

どちらにせよ腹立たしい感情がロキの中で渦巻く。複製とはいえ文字通りの神器であるミョルニルを一悪魔に譲渡されたという事実。そして、振り回されるミョルニルを見て忘れ去った筈の痛みを鮮明に思い出してしまうこと。

ロキとトールの諍いは一度や二度ではない。大抵はオーディンが間に入って止めるが、時折争いへと発展する。その争いの中でトールの豪腕から繰り出されるミョルニルの一撃を何度か受けたことがあり、比喩無しで体の原型が変わったことがあった。

『ありゃあ、忘れられないぐらい痛かったなー』

ロキにだけ聞こえる声も、苦笑混じりで当時のことを思い返していた。少なくともロキは笑って話せる程風化させていない。

だからこそロキの目は嫌でもミョルニルのレプリカへ集中してしまう。故に、注意が疎かになる。ヴァーリが攻撃態勢へと入っているというのに。

「受け取ったものを返そう」

ヴァーリの手元に浮かび上がる魔法陣。それはロキの展開していたものとよく似ていた。ロスヴァイセから教えられ、短期間で習得した北欧の魔術。

半減によって吸収した力全てをその魔法陣に籠めることで、最早閃光としか認識出来ない程の力が放出される。

夜を塗り返す白光が収まったとき、ロキがいた場所に底が見えない巨大な穴が出来ていた。

「――ちっ」

だが、ヴァーリ本人は不満気に舌打ちをしている。

出来上がった穴の上にロキが浮かんでいる。それも無傷の状態で。どんなに大規模な破壊を行っても目標を倒せなければ意味が無い。

ロキはヴァーリが作った破壊の痕跡を見て複雑な表情を浮かべている。

「これはどういう感情を持つのが正しいのか分からないな。底が見えない白龍皇の才能

に歓喜すれば良いのか、それとも北欧魔術をここまであっさりと使われることを嘆くべきか……お前はどう思う？」

目線を横に向ければ、ミョルニルのレプリカを振り上げて飛び掛かっている一誠。

大振りのそれがロキの頭蓋を砕こうと振り下ろされるが――突如として間に入ってきた灰色の壁がそれを阻み、ミョルニルのレプリカを受け止める。

長い体毛で覆われたそれは壁ではなく、伸ばされたフェンリルの前脚であった。

「なっ！」

「フェンリル。控えていろと言った筈だぞ？」

後方で待機していたフェンリルがロキの背後に立っている。一誠がミョルニルのレプリカを打ち込むまで悟らせないぐらい巨体に似合わない速度で接近し、ロキを守ったのだ。

フェンリルは吠えながらミョルニルのレプリカを一誠ごと弾き飛ばしてしまう。

勝手に動いたフェンリルをロキは咎めず、下顎を撫でる。

「やられるかと思ったか？　いや、そうではないな。二天龍の闘気に中てられて本能が昂ったか？」

ロキは一誠を見る。

「分かっていたことだが、ミョルニルの複製品を全く使いこなせていないな、赤龍帝よ。

きちんと扱えていたらフェンリルの脚など小枝の様にへし折れた筈だ」
尤もフェンリルもそれを理解していた上でミョルニルのレプリカを受けていた。
「我が子も猛っている。フェンリル！　二天龍の肉をその舌で味わい、その血で喉を潤してこい！」
様子見を止め、神殺しの牙を持つフェンリルが前に出る。
この瞬間をリアスたちは待っていた。リアスが指示を出す。
「にゃん♪」
黒歌が待っていたと言わんばかりに笑うとフェンリルの周囲に魔法陣が展開。空中、地面にまで浮かび上がっている。
そこから飛び出す巨大な鎖――グレイプニル。意志を持った様な動きでフェンリルに絡みつき捕縛してしまう。
「無駄だ！　今更、グレイプニル如きで我がフェンリルを――」
そこでロキの言葉が止まり、グレイプニルを注視する。分析している様な目付きをしている。
フェンリルが絡みつくグレイプニルを力尽くで引き千切ろうとするが、グレイプニルは軋むだけであった。
「フェンリル捕獲完了だ」

バラキエルが代表して成功を告げる。
「――成程。強化してあるのか。ダークエルフ辺りの仕業か」
容易にはグレイプニルを解除出来ないと理解すると、ロキは別の手段に移る。
「可愛い孫まで使うことになるとはな……」
ロキの周囲が歪み、歪みの中からフェンリルに姿も大きさも酷似した巨大な狼が現れる。
「スコルにハティ！」
ロスヴァイセがその姿を見て驚いた様子で叫んでしまう。
「何ですかそれ！」
フェンリルを封じたというのに、全く同じ様な狼が現れたことに理不尽を感じながら一誠は聞き返していた。
「ヤルンヴィドに住まう巨人族を狼に変えて、フェンリルと交わらせて生ませた。親とよく似ているだろう？　神殺しの牙も健在だ」
生まれた経緯が現代の倫理観とかけ離れているせいで思わず訊き返してしまいそうになるが、目の前で唸る二匹の巨狼のせいでそんな余裕すら無くなる。
「そんな！　その二匹は厳重に監視していたのに……！」
スコル、ハティの存在は当然オーディンたちも認知していた。故に決してロキの下へ

向かわない様に目を光らせていたのだが――
「愚か者め！　お前たちはこの我が魔術によって姿だけ似た木偶の棒の巨狼を見張っていたに過ぎない！　本物は最初から我が手元に居た！」
ロスヴァイセたちの詰めの甘さを嘲ると、ロキは巨狼たちに指示を出す。
「さあ、行け！　お前たちの父を捕らえたのは奴らだ！　その牙で八つ裂きにし、父への捧げものにしろ！」
巨狼たちが前傾姿勢となると、グレモリー勢の中からシンが、ヴァーリの仲間の中から美候が自然と前に出る。
直後、巨狼たちの霞の様に消え、グレモリー眷属、ヴァーリのチームの前に現れるが、その動きを予測していたシンと美候は、現れた直後に拳と如意棒によって巨狼たちの下顎を突き上げた。
ギャオン、と声を揃えて巨狼たちの顔面が跳ね上がる。
「ほう？」
出鼻を挫かれた巨狼たちの姿に呆れ、見事な先制を入れたシンと美候を興味深いという眼差しを向けるロキであったが、その体が伸びてきた巨大な手によって掴まれる。
「――やれやれ。構って欲しいのか？　タンニーン」
「油断し過ぎたな。このまま握り潰されたくなければ大人しくしていろ」

タンニーンの台詞にロキは失笑する。
「龍王とは思えない甘い台詞だ」
「同じ事は二度言わん」
タンニーンは手に力を込め、ロキを締め上げていく。だが、ロキは顔色一つ変えない。
「――ああ、そうだな。丁度良い」
「何？」
「実戦は久しぶりだったな？　どれぐらい振りだ……？　ああ、あの時以来か。懐かしさすら覚えるな」
急にロキが独り言を喋り始めた。
「何だ？　何をいきなり喋り始めている？」
ロキが俯く。すると立てていた髪が一房前に垂れた。
「大したことじゃねぇよ。お前が準備運動に丁度いい相手だって話し合ってただけだ」
粗野な口調。顔を上げたロキから今までの様な冷徹な雰囲気が消え、荒々しい顔付きとなっている。
「お前は一体――」

◇

一誠とヴァーリは一先ずスコルとハティから対処しようとする。その時、上から巨大な物体が落下し、大地を震わす。

落ちてきたものを見て、一誠は叫んでしまった。

「タンニーンのおっさん！」

タンニーンは全身の至る箇所が凍り付いており、更に片腕と背中の翼も一枚失っている。切断箇所が凍結しており出血は無かった。

重傷を負ったタンニーン。幸いまだ呼吸をしている。

「一体何が……！」

「少し目を離しただけなんだがな……」

ヴァーリが見つめる先を、一誠も見た。霜が付いたタンニーンの千切れた片翼を見せつける様に左右に揺らすロキ。

二人の視線が向けられると、その片翼をゴミの様に放り棄てる。

「てめぇ……！」

「――待て」

怒る一誠を傍に降り立ったヴァーリが止める。

「止めるなよ！　おっさんが！」

「――誰だ貴様は？」
「はあ？」
　ヴァーリの言葉に血が昇っていた頭が一誠の頭が混乱によって冷めていく。
「誰って……ロキだろ！」
「違う……見た目はそうだが、放つ気配が別人だ」
「別人って……」
「鋭いじゃねぇか、白龍皇」
「え……？」
　一瞬誰が喋ったのか分からなかった。数秒の間を置いた後、それがロキの声に気付く。声も喋り方も全く異なっている。
「もう一度聞く。誰だ？」
　ロキは鼻で笑い、指を鳴らすとスコルとハティが突然退いた。
「これに耐えたら教えてやるよ」
　ヴァーリと一誠の足元が輝く。彼らだけでは無い。リアスたちや美候たちにもその光が伸びていた。
　足元から光を放っているのでは無い。光は全員の頭上から降り注いでいる。見上げた先にあるのは半透明の球体。その中で太陽を思わせる光球たちが衝突し合い、一つと

なっていく。
肌で嫌でも理解してしまう。球体の中で高まってく力の危険さを。
一誠、ヴァーリは急いでリアスたちの下へ飛ぶ。その背に向けてロキは力を解放する言葉を無慈悲に告げた。
メ　ギ　ド　ラ

二人、秘密

頭上に出現した球体の中で輝く光を見た瞬間、リアスはその光が自分の魔力と同質のものであると直感した。

何故ロキがその力を扱えるか分からない。『滅びの力』と呼ばれるそれは、リアスの母方であるバアル家の血を持つ者のみが扱うことが出来る本来『消滅』と呼ばれる特殊な魔力。

しかし、リアスにはあれこれと考える時間は無かった。『滅びの力』の前では如何なる結界も防御壁も無と帰す。それにこれほどの広範囲、間違いなく光が解き放たれ時、間違いなく全滅する。

（そんなことはさせない！）

『滅びの力』に対抗する手段は一つだけ。

「出来るだけ私の傍に寄りなさい！」

大声を出して皆に指示を飛ばしながら、リアスは紅色の魔力を集束させる。迅速に、だけど決して雑な魔力の構築はしない。

球体内の光が臨界点にまで達する。球体が解け、中から光が溢れ出す直前にリアスは

魔力を放つ。
降り注ぐ光を遮る様な大きな円状の魔力。解き放たれた真っ白な光が紅色の魔力と接触。
「ううっ……！」
リアスは歯を食い縛りながら魔力を維持。光は紅色の魔力のせいで眷属たちには届かない。
リアスの魔力の外では降り注いだ光が地面に触れると音も無く消失していく。破砕音や破壊音など一切無く、空気の中に溶け込んでいく様にあらゆるものが消滅する。
膜の様に展開したリアスの魔力を白色の消滅が蝕もうとする。広範囲に対し自分もまた広範囲に魔力を放出する。そのおかけで離れた位置にいた一誠とヴァーリも光から守れ、重傷を負って動けないタンニーンも守れた。その分尋常じゃない速度で魔力を消耗していくが。
いつ終わるか分からないが、一瞬たりとも気を抜くことを許されない。今のリアスの背中にはこの場にいる全員の命が圧し掛かっているのだ。
一秒が何十倍にも感じられる根比べ――だが、その時は来た。照射される光が消え、展開していた魔力に掛かる圧力も消える。
ロキがメギドラと呼んだ光が終わったのだ。

光が完全に消えると、リアスも魔力の展開を止める。
「はあ……はあ……」
「大丈夫ですか、部長！」
一気に消耗して崩れ落ちそうになったリアスを朱乃が支える。
「大丈夫よ……」
見れば全員が心配そうな眼差しで自分を見ていたので、安心させる様に微笑む。
「部長っ！」
一誠が急いで向かって来ているのに気付く。彼も安心させようとその声に応じようとした時――再び頭上に光が輝いた。
唖然とした様子で見上げる先には、先程とは違い複雑な術式で囲まれた半透明の球体。球体の中では光が衝突し始めている。
全く同じことが起きようとしていた。そして、描かれた魔法陣には既視感がある。見間違いでなければ、ロキと初邂逅した時に一誠のドラゴンショットを消し去った魔法陣と文字が似ている。
「俺のを防いだが――我が魔術は防げるかな？」
一瞬で口調と声が変えるロキ。
「代わりに言わせて貰おう――メ　ギ　ド　ラ　！」

容赦無く放つ無慈悲な二発目。一気に消耗してしまったリアスには、これに対応する余裕が無い。

しかし、リアスがロキの初撃を防いだことは無駄ではない。何故ならば、彼らに対応する時間を与えたからだ。

『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ！』

ロキの術が空間ごと歪められ、縮小していく。ヴァーリによって術そのものが半分にされていく――かと思いきや、ロキの術がその歪みに抗う様にして浸食してくる。『滅びの力』によって白龍皇の能力すら消滅させようとしていた。

「この力は……！　面白いなっ！」

抗うどころか逆に食い破ろうとしてくるロキの術。その未知なる力にヴァーリは焦りよりも喜びを覚える。能力発動による大きな消耗も気にならないぐらいに。

だが、このままではヴァーリの能力でも封じ切れない。しかし、ここにはそれを可能にする人物が居る。

『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』

一誠が発動させた『赤龍帝の贈り物』によって自らの力をヴァーリへ譲渡。これにより半分化する力が一気に向上する。

これには余裕のある笑いを浮かべて見ていたロキも思わず眉をひそめる。

術の浸食を白龍皇の能力が上回り、光がどんどんと縮小していく。
最後には線香花火の様な小さな光を散らして消えてしまった。
「部長！　大丈夫ですかっ！」
「ええ、少し疲れただけ……ありがとう、イッセー、それにヴァーリも。助かったわ」
リアスの顔色が悪いが喋るだけの余力はある様子。
ロキの術を二度も防いだが、三度目があるかもしれないと思い、全員が気を緩めずに警戒する。そんな彼らの耳に届く小さな拍手。送り主はロキであった。
「大したものだ。こんなにも素早く対応出来るとは思わなかった。リアス・グレモリー、その若さであれ程の魔力は称賛に値する。そして、赤龍帝と白龍皇。二天龍が揃えばあのようなことが出来るのだな。見物だった」
未知なる術を防がれてもロキの態度は変わらなかった。その余裕がロキの絶対的な自信を表し、不気味さを覚える。
「悪神ロキ……貴殿は一体何なのだ……？」
皆の意見をバラキエルが代表して言う。
「くくく、知りたいのかぁ？　そりゃあ知りたいよなぁ？」
ロキの顔付きは変わっていないというのに雰囲気が一変し、別人に見えてしまう。表情を顔ごと剥ぎ取って付け変えている様な印象であった。

「光栄に思って貰おうか。長年隠しとおしてきた我が最大の秘密を知ったことを！　――ひゃはは、運が良いぜ、アンタらは」

傲慢且つ尊大な口調と粗野でチンピラ染みた口調で交互に話すロキ。目の前に一人しか居ない筈なのに二人居るかの様な錯覚を覚える。

「ロキ様の秘密……それに、その変わりよう……まさか二重人格……？」

「見識が浅いなぁヴァルキリー！　もっと深く見ろ！　それだから嫁の貰い手が居ないんだよぉ！」

「なあっ！」

ロスヴァイセの知るロキならばまず言わない様な台詞を吐かれたこと――そもそもロキは一介の戦乙女如きに関心など持たない――そして、その内容にロスヴァイセは絶句させられてしまう。同時に以前のレーティングゲームで似た様な事を言われたのを思い出した。あの時、一瞬だけだがもう一人のロキが表に出ていたらしい。

その様子にロキは品の無い笑い声を上げる。

「ひゃはは！　お前みたいのは本当にからかい易いったらねぇぜ！」

ロキの笑い声だけが沈黙した場に響き続けるが、急にそれが止む。

「――これなら分かり易いか？」

ロキの体から放出されるオーラ。その膨大な量に気圧されるが、同時に驚かされる。

一つの体から全く異なる気配のオーラが放たれている。ロキが口調を入れ替えて喋っていた時の奇妙な感覚と重なり合う。

「これは……まさか……！　ロキという存在は、最初から二人っ！」

感じたままのことをバラキエルが言葉で表す。

「ご名答」

想像も付かなかった展開や事実に混乱する一同。その姿を見たかったと言わんばかりにロキは笑う。

「改めて自己紹介をさせて貰おうか。我(俺ら)がロキだ！」

高らかに宣言する声。あらゆる抑圧から解放された様な爽やかさがあった。しかし、それは無理も無いとも言える。途方も無い年月の間隠し通してきた秘密を白日の下に晒してきたのだ。

オーディンにもトールにも他の北欧の神々にも教えず、それどころか我が子と呼ぶフェンリルやミドガルズオルムにも隠してきたもの。

一誠とヴァーリはミドガルズオルムが言っていたロキの秘密を理解した。薄々は何かを隠していると察していたが、流石にロキという存在が二人居るとまでは気付いていない。フェンリルなど今知った様子らしくグレイプニルに縛られたまま、目を丸くして突然二人になった自分の父を凝視していた。

「ミドガルズオルムが言っていた秘密とはこのことか……」
ヴァーリの呟きを、ロキは耳聡く聞きつける。
「ほう、あいつは勘付いていたか――怠け者の癖に鈍い訳じゃねえから質が悪いなぁ」
感心する様な表情がすぐに品の無い笑みで消える。即座に変わる表情は、芸でも見ている様な気になるが、一切笑う気にはなれなかった。
「長年隠し通していた秘密を何故今になって明かす？」
バラキエルが尤もな質問をロキにする。
「良い機会だと思ったからだ。我らがオーディンの首を獲ればどちらにも世界は変わる。なればこそ示さなければならない。新たな世界を主導する者たちの真の姿を――はっ、というのは建前で、いい加減俺の存在が北欧の連中だけじゃなく世界中の神々に認知させたくなったんだがな、こいつが。俺は別にいいって言ってるのによ。大した自分思いじゃねぇか――お前は黙っていろ！」
一人で言い合い、一人で怒るという何ともシュールな姿を見せるロキだが、その様子を見ても誰も油断していない。濃密な神のオーラが気を緩めさせることを許さない。
「うう……」
「アーシア！　大丈夫か！」
ロキのオーラに中てられてアーシアが崩れ落ちそうになるのを、ゼノヴィアがすぐさ

ま支える。
ゼノヴィアに抱えられたアーシアは、血の気が引いた顔色で弱々しく礼を言う。
「あ、ありがとうございます……」
「無理はするな……私でも中々キツイ」
ゼノヴィアの額からは冷や汗が流れ落ちている。他の者たちも似た様な状態であった。
存在と放つ力が仲間たちに悪影響を及ぼす。シンの仲魔たちもロキが力を見せつけた時から影響を受けており、ピクシーは飛ぶのを止めてシンの肩に寄りかかり、ジャックフロストは足元で座り込み、ジャックランタンはフラフラと空中でよろめいている。唯一、ケルベロスだけが変わらぬ様子でフェンリルたちを威嚇していた。
「――考えれば考える程に不思議に思える。貴殿の様な存在が実在することに」
バラキエルはロキに探りを入れていた。少しでも情報を引き出す為に。
「別に不思議なことじゃねぇさ、蒔かれた種が芽吹いた結果だ――おい！　――いいじゃねぇか、少しだけでも教えてやろうぜぇ？　どうせ知った所でどうしようもないぐらいこの世界はおかしいんだからよぉ」
「種……？　この世界がおかしい……？」
バラキエルだけでなく他の者たちも背筋に冷たいものが流れていくのを感じる。何

か知ってはならない根幹に関わることに触れようとしているのではないか、そんな気がしてならない。
「俺は遥か昔にどっかの誰かさんがばら撒いた種の一つに過ぎないってことだ。俺だけじゃねぇ、種はもっとある。だけどこの世界で芽吹いた者たちにとっては、ここは揺り籠であると同時に実験場でもあるのさ」
「実験場、だと……？」
「生まれても与えられた場所には限りがある。最初に始めるのは椅子取りゲームだ。そいつの役目を奪うか、奪われるかの。奪った方が本物となる」
『まあ、俺たちの様な稀なケースがあるがな』と言いながらロキは笑う。
「本物になった後はお互いに間引き合うんだよ――そこで間引かれ消えるか、或いは」
ロキの目が一瞬シンを見る。
「抗い自らを高める。または互いに研鑽し合い、より高みに昇るか……」
視線が移動し、ヴァーリの方を見た。
「――俺たちの様に共存するか、っていう具合にな」
全員話についていけなくなってくる。もし、ロキの言っていることが本当ならこの世界が始まる前に何かが異物を混ぜ合わせ、本来居るべき存在を滅茶苦茶に入れ替えたりしているということになる。

そんな創世の神の様な真似事をどんな存在が為したというのか。
「もし、仮に貴殿の話が本当だったとして……貴殿の様な存在を作り上げた者の正体を知っているのか？」
「当然」
さも当たり前の様にロキは頷く。
「知りたいかぁ？　知りたいよぁ？　そいつの名は――」
誰もが傾聴し、次に明かされるであろう名の聴覚を集中させる。
「くっ……はははは！」
だが、聞こえて来たのはロキの哄笑だった。
「言う訳ねぇだろうが。馬鹿か、お前らは？」
敵意を通り越して殺意すら抱かせる様な小馬鹿にした表情で笑うロキ。
「今も聞かれているかもしれないっていうのによぉ」
だが、一瞬で真顔となる。態度の差と不穏な言葉に寒気すら感じる。
「まあ、ここまで話すのはセーフって訳だ。これ以上喋って俺たちの目的を台無しにされるのも御免だ」
肝心な部分を秘密にするロキに、一誠はたまらず叫ぶ。
「一体誰なんだよ！　そこまで言っておいて隠すのかよ！」

「ヒヒヒ、簡単に言う訳ねぇだろうが――お喋りはここまでだと言った筈だ、赤龍帝。今までの内容は全て我らの気まぐれに過ぎない。これ以上お前たちが求めるのは烏滸がましいぞ！　――ってことだ、知りたきゃ俺たちに勝ってみな。そうしたら教えるかどうか考えてやるよ」

言い放つロキ。その顔には自分が微塵も負けるとも思っていない。

「さて、戦闘再開といこう。ああ、そうだ。その前にお前たちには礼を言おう」

突然そんなことを言い出し、全員戸惑う。

「我らの気まぐれによる話に付き合ってくれたことだ。お陰で時間稼ぎが出来た――ありがとよ、間抜け共」

金属が擦れ合いながら落ちる音が聞こえる。音の方に目を向ければグレイプニルから解放されたフェンリル。

魔法陣から伸びたグレイプニルによって拘束されている筈なのに解けている。

「神を噛み殺せる牙が、たかが魔法陣如き噛み砕けないと思ったのか？」

神経を逆撫でする様に笑うロキ。今までロキが真面目に話していたことがそのせいで全て即興で作り上げた虚構の様に思えてしまう。だが、今はそれの真偽を確かめる時では無い。

グレイプニルの魔法陣を子のスコルとハティが破壊したことでグレイプニルの拘束

が緩み、フェンリルの脱出を許してしまった。
が、その肝心のスコルとハティの姿が見えない。あれ程の巨体が動いていれば幾らロキの話に耳を傾けていても気付く筈だ。
「スコルとハティはフェンリルと比べると若さもあってスペックが落ちる。故に少し強化しておいた――ひひひひ、よーく目を凝らしな」
最初に気付いたのはシンであった。彼の左眼が闇夜の中で黒く塗り潰された狼の輪郭を見つけると、足元に転がっている拳ほどの大きさの石をその輪郭目掛けて蹴り飛ばす。
黒い輪郭に石が触れた瞬間石が粉々に砕け散り、砂粒となって地面に降っていく。一誠たちも蹴り飛ばした石によって、そこに何かが居ることに気付いた。
「当たりだ」
闇を?ぎ取る様にスコルとハティの姿が現れる。
「でかい癖に姿も消せるのかよ……」
ほぼ完璧に近い隠密に一誠は冷や汗を流す。
「スコルは太陽を追い掛け、呑み込むことで日食を起こし、ハティは月を追い掛け、呑み込むことで月食を起こす」
二匹の巨狼の身体が欠け始め、瞬く間に消えてしまう。今度は移動しているらしくシ

ンの眼でも何処にいるか即座に見抜けない。おまけに足音も無く、気配も感じない。
「ふはははは。中々の傑作だろう、あの二匹は！　太陽と月を呑み込む様にその身で光を喰らい姿を消す！　油断をするなよ？　神殺しの牙はすぐ傍まで迫っているかもしれんぞ！　――まあ、せいぜい足掻きな」
ロキは腕を組み、空中に腰を掛ける。それは傍観の姿勢であった。
「余裕のつもりかい？」
兜の奥でヴァーリが眼光を鋭くさせる。
「戦況を見定めているだけだ。我が手足は既に縦横無尽に動いているからな」
飛翔していたヴァーリが突然降下する。直後、何もない空間に衝突し合う音が響く。ヴァーリの背後から奇襲を仕掛けたスコルの噛み付きが外れた音であるが、その姿を見える者はいないのでそう推測するしかない。
降下したヴァーリが急旋回。背部の光の翼がヴァーリを包み込む様に捻じれる。すると、ヴァーリが居た場所を何かが風切り音と共に通過する。恐らくはハティの爪によるものと思われる。
不可視の攻撃を連続して回避してみせたヴァーリ。彼の順応力の高さが伺える。
「追えるか？」
シンは傍にいるケルベロスにニオイで位置を把握出来るか問う。

「――ニオイガ薄イ。ソレニ動キ回ッテイルセイデ分カリヅライ。グルルル……」
追跡出来ないと悔しそうに言う。感知されない為の対策を施している模様。
「小猫！」
「黒歌！」
リアスと美候の声。仙術、或いは気の流れを探知出来ればスコルとハティの動きを見抜けると考える。小猫と黒歌は猫耳を動かしながら二匹の気を把握しようとする――だが、それを易々とさせるロキではない。
「フェンリル！　吼えろ！」
ロキの指示にフェンリルが吼える。獣の咆哮とは思えない程の透き通った美声。しかし、綺麗な鳴き声とは裏腹に、その咆哮を聞いた小猫と黒歌は苦痛に満ちた表情で己の猫耳を押さえた。
「あ、うう……！」
「これは……きつい、にゃん……！」
普通の状態で聞いたシンたちですらフェンリルの咆哮の大きさに一瞬体が硬直してしまう。探知する為に感覚を研ぎ澄ませていた小猫と黒歌は、頭の中で爆弾でも爆発させられた様な衝撃を受けており、平衡感覚が狂い、五感の一部が麻痺してしまう。
「行け」

ロキが命令を下すと、フェンリルの姿が消え、リアスたちのすぐ傍にまで移動していた。スコルとハティの様に姿を消したのではなく、純粋な身体能力でそれを為す。

フェンリルが爪を振るう。巨体が掻き消える速度を生み出す前脚から繰り出されるそれは、移動よりもなお速い。

神速を以ってリアスたちを切り裂こうとする。が、それを阻む為にフェンリルの爪の前に現れたシンが、巨大な足目掛けて拳を放っていた。

音速を超えるフェンリルの前足とシンの拳が衝突し合うと衝撃波が駆け抜ける。

フェンリルの前足が跳ね上がるが、シンの方も数十メートルも吹っ飛ばされ背中を岩壁に叩き付けられた。

岩壁に大きな亀裂が生じ、シンがどれ程の勢いで叩き付けられたのかを物語る。だが、シンは倒れることも、苦痛で顔を歪める事無く、岩壁から離れフェンリルの下へ向かおうとしていた。

しかし、表面上はどんなに痛みを押し殺していても体は受けたものを素直に反映させる。走れば数秒で辿り着ける、たった数十メートルの距離なの今のシンには異様に遠くへ感じられた。

走っているつもりで足が上手く動かない。前に進む意志に反して、脚が上がらず摺り足の様に前へ動かされていた。

数秒という時間が何倍にも引き延ばされる。その間に、リアスたちはフェンリルたちの猛攻に晒されていた。

攻撃を妨害されたフェンリルは、再度攻撃を仕掛けようとする。だが、シンが稼いだ時間でバラキエルは準備を完了させていた。

雷光が奔り、フェンリルの胴体へ刺さる。灰色の体毛を貫通することは出来なかったが、一部が焦げ、それ以上追撃を嫌がってフェンリルは離れる。

木場、ゼノヴィア、アーサーが剣を振るうと、何もない所に血が噴き出た。スコルとハティの体の一部を裂いたのだ。だが、致命傷には程遠い掠り傷だと斬った本人らは理解していた。

もっと集中すればスコルとハティの位置を感じ取れたかもしれないが、フェンリルの存在感が大き過ぎてそれを妨害してくる。

ギャスパーの邪眼で動きを停められたのならいいが、姿を消しているスコルとハティの位置が分からない。下手をすれば味方を停めてしまう。それを理解しているギャスパーは、悔しそうな表情を滲ませた泣き顔をしている。

スコルとハティは姿を隠し、フェンリルは自らの存在感で子たちの気配を消し、それに乗じて親のサポートをする。親子巨狼たちの連携が完成していた。

「イッセー！　ヴァーリ！　貴方たちはロキを！」

リアスは大声で指示を出し、あまり残っていない魔力を振り絞ってフェンリルに魔力の弾を撃ち出す。
フェンリル、スコル、ハティは脅威だが、真の脅威はロキそのもの。力が在る内にロキを倒すべきと考え、フェンリルたちを引き受ける。
急いでリアスの傍に行こうとしていた一誠は急ブレーキをし、ロキとリアスに交互に視線を送り迷う様な動きを見せる。一方でヴァーリは一瞬も躊躇わず、リアスに言われた通りにロキの方へ飛んでいた。
ヴァーリは周りに北欧の術式を展開し、そこから魔術を放ちながら接近していく。
ロキもまた魔法陣を出し、ヴァーリの魔術を迎撃或いは発動する前に破壊してしまう。
魔術の弾幕の中を怯むことなく突き進むヴァーリ。ロキが近くまで捉え、拳を握り締めるが――
「少し冷たいぞ?」
――一定の距離までヴァーリが近付いた瞬間、ヴァーリの拳が瞬時に凍結し始める。凍結は拳から腕に這い上がって来る。
「くっ!」
咄嗟に拳を引きながら急停止し、魔力の噴射方向を変えてロキから離れる。

氷はヴァーリの半身を覆っていた。
「流石に反応が良い」
完全に凍結させることは出来なかったが、ヴァーリの迅速な動きを見て悪戯でも成功した様にロキは笑う。
ヴァーリは拳に力を入れてみる。拳は開かず、張り付いた氷も剥がれない。これ以上力を込めると開く前に拳が砕ける気がした。普通の凍結ではなく魔術による凍結であり、現象としての凍結とは異なる、自然に解凍されるとは思えない。
「氷……それでタンニーンのおっさんを……」
一誠の呟きに、ロキは口の端を吊り上げる。
「わりぃな。完璧に氷漬けにさせるつもりだったが、加減を間違えて色々と砕いちまった」
反省の色など全く無い言葉だけの謝罪は、タンニーンを師の一人と思っている一誠の怒りを誘う。
「てめぇぇ！」
怒声を上げ、一誠はロキに挑もうとするが――
「ぐあっ！」
――見えない何かが一誠の背中を撫で、鎧ごと一誠の肉を裂く。スコルもしくはハ

ティの仕業である。
「ロキの言葉に耳を貸すな、兵藤一誠！　奴の言動全てが俺たちの油断を誘うものだ！」
感情を乱せば視界が狭まる。視界が狭まれば攻め込む隙が生まれる。仮に狙った相手が冷静に対応したとしても、他の者たちに何かしら影響を与える。ロキの目はそれを見逃さない。
「ヴァーリ――後ろだ！」
リアスたちを狙っていたと筈のフェンリルが、大口を開けてヴァーリを噛み砕こうとする。
しかし、ヴァーリはそれを予測していたかの様に身を翻して牙を避け、フェンリルの横顔を殴りつけた。
「――勉強になったよ」
ロキを真似し、隙を見せることで逆に相手の隙を誘う。来ると分かっている攻撃なら、ヴァーリでも回避出来る。
「一度ならず二度もフェンリルの顔を殴るか……言っておくが、我が子は中々優秀だぞ？」
瞬間、フェンリルは口から何かを吹き出し、それがヴァーリの脇腹に当たる。『白龍皇の鎧』ならば大抵の攻撃は弾いてしまう。しかし、当たった反射音は無く、代わりに生

肉に包丁を突き立てる様な音が聞こえた。
「っつ！」
声を押し殺そうとして、殺し切れなかったヴァーリの声が洩れる。『白龍皇の鎧』の脇腹に円形の穴が開き、そこから血が流れ出ている。背中側からは乳白色の突起がつきでており貫通には至らなかったが、逆に体内に残っていることの方が厄介であった。
思わず声を出しそうになる一誡。しかし、それよりも先にやったヴァーリの行動に、出しかかっていた声が勢い良く引っ込む。
ヴァーリが開いた傷穴に指先を突っ込んだのだ。
「ヴァーリ！」
一度は引っ込んだ言葉がやっと出る。ヴァーリの行動に何度も喉の中で引っ掛かっていた。見ているだけで痛々しいヴァーリの自傷行為。拳程の大きさの傷口を、手甲を填めた指で抉る行為など想像しただけで鳥肌が立つ。
粘着質な音が数秒間響いた後、自分の血で真っ赤に染まった指先が傷口から先が尖った三角形状の物体を取り出す。
「油断を、したよ……！」
発せられるヴァーリの声には喜色と怒気が混じっている。意表を突く攻撃を受けたことでより成長する自分を喜び、それに対しまんまと受けてしまった不甲斐ない自分へ

の怒り。どちらも相手では無く自分に向けた感情であった。
「効くだろう？　フェンリルの牙はよぉ――とは言え判断が速い。流石だ！」
フェンリルの牙と言われ、一誠は思わずフェンリルの方を見る。フェンリルは見せつける様に口を？く。牙の一部が欠けていた。先程のヴァーリの拳によって欠けさせられ、それをフェンリルは攻撃に利用したのだ。
欠けても神殺しの牙。ヴァーリに大きなダメージを与える。
刺さっていた牙を放り棄てるとヴァーリは傷に手を当て、半減を応用した治療を施そうとするが、効果が無い。
「成程、神殺しの力の影響か。半減の力が上手く発動出来ないな」
流血の量の多さの割に、ヴァーリは冷静に判断していた。
「はぁ……」
ヴァーリは短く溜息を吐く。諦めを含んだ様な溜息であった。
「少し欲張り過ぎたか……」
自嘲する様に兜の下で小さく笑うヴァーリ。
敗北を認めた、という風には一誠もロキも感じられなかった。全身から放つヴァーリの闘気は一切弱まっていない。
ヴァーリが右手をある場所に向ける。すると、吸い込まれる様に地面に落ちていたグ

レイプニルがヴァーリの手の中に収まった。半減の力を応用で距離を縮め、引き寄せたのだ。
腕すら通りそうなグレイプニルの鎖の輪を掴むと、鞭の様に振るう。並みの力ではまず無理と思われたそれが、蛇の如くうねりフェンリルへ伸びていくと、フェンリルの前脚に巻き付く。
巨大なグレイプニルを道具として扱ってみせたヴァーリであったが、かなりの力を必要とする行為であり、代償として傷口から血が噴き出し、腹から下を真っ赤に染め上げる。
「兵藤一誠」
大量の出血をしている筈なのだが、ヴァーリの声に弱々しさは全く無い。
「ロキとその他は君と美候たちに任せる。代わりに――」
ヴァーリはグレイプニルに引く。フェンリルもまたグレイプニルを引き、伸び切った鎖が軋む音を出す。
「フェンリルは、俺が確実に倒す」
ヴァーリの宣言にロキは口元を歪めて笑うが、その目は笑っていない。
手塩に掛けて育て、強くした自慢の我が子フェンリル。いずれはその牙をオーディン、トールに突き立てる。例え相手が二天龍の片割れであっても一対一で負けるとは

思っていない。ましてや手負いのヴァーリに後れを取るなど考えられなかった。
「吠えたな、白龍皇！　驕りによる無駄吠えは自身の名を貶めることに繋がるぞ！　――生きの良い奴は嫌いじゃないぜぇ？　だが、好きでもねぇ」
「ロキ。お前が特別な存在であり、その実力はそれに見合ったものだと認めよう。驕っているのはどちらかな？」
肌が焼かれる様なヴァーリの闘気が一転して寒気を覚えるものと変わる。
「天龍を、このヴァーリ・ルシファーを舐めるな！」
前までは戦いを楽しむことによる熱を持っていたが、今はそれを殺気が上回っている。シンはヴァーリの殺気混じりの闘気を肌に感じ、魔人の気配を連想した。
「黒歌っ！」
ヴァーリの鋭い声に、耳を押さえて苦しがっていた黒歌がバネ仕掛けの様に立ち上がる。
「俺とフェンリルを例のポイントに転送しろっ！　ここじゃ巻き添えが起こるっ！」
黒歌が素早く指を動かす。その速さは宙に残像が見え、図形や文字を描いているのが分かる。
指の動きが止まると、ヴァーリとフェンリルを連なった魔力の輪が囲んでいく。
フェンリルはロキを見た。それはロキの傍で戦うことを優先するべきか、ヴァーリと

戦うことを優先するべきか確認の意味が込められている。
「遠慮をするな。そいつを喰い殺して我が下に戻って来い！」
ロキの許しを得ると、フェンリルは前脚に巻き付いているグレイプニルを咥える。それは、ヴァーリと自分との間に繋がっているグレイプニルに自ら絡むことでヴァーリの挑戦を受けるというフェンリルなりの印である。
輪の中でヴァーリとフェンリルが風景に溶け込んでいく。
「死ぬなよ」
ヴァーリが最後に残した言葉は誰に送られたものなのか。ライバルである兵藤一誠か、もしくは仲間たちに向けてのものか、或いは全員へのものか。
「ヴァーリ！」
その答えはヴァーリしか知らず。一誠の声が届くか、届かないか曖昧なタイミングでヴァーリはフェンリルを伴って消えた。
「フェンリルが抜けた穴を埋めないとな」
事も無げにそう言うと足元を指差す。夜の闇に染まった大地が泡立つ様に変化すると、その中から巨大な蛇と見紛う姿をした長い胴を持つドラゴンが複数現れる。数えるだけで五匹も居る。
蛇に似たドラゴン。ロキが新たに呼び出したそれに一誠は見覚えがある。五大龍王

のミドガルズオルムに姿だけはよく似ていた。ただし、大きさはかなり縮小している。それでもタンニーンと同じぐらいの大きさがある。

『ミドガルズオルム……それの量産品か』

一誠の頭の中でドライグが忌々し気に吐き捨てた。ドラゴンのプライドとして物の様に複製されることが気に入らないのを露骨に出している。

「アレと比べると大分質が下がるが、優っている点もある。こいつらは怠け者ではない」

五匹の量産ミドガルズオルムが口を開く。口内に橙色の色が灯る。炎を吐く様子。それを察した者たちがそれを防ごうとすると――突如、量産ミドガルズオルムの一匹が大爆発を起こし、余波で残りの四匹も吹き飛ばされて攻撃を中断させられる。

爆発の後には大きなクレーターが出来ており、爆発した量産ミドガルズオルムは跡形も無くなっていた。

「確かに、大分性能が下がっているな、ロキ……！」

「タンニーン……！」

「おっさん！」

ロキによって凍結させられていたタンニーンが体を起こしていた。だが、まだ体の一部が凍り付いている状態であり、手や羽が欠損した姿が痛々しい。

「動けるだと……手加減をした訳ではないな？　――そんな訳があるか。寧ろ、加減を

間違えたと思ったぐらいだ」
　タンニーンが復帰してきたことは、ロキにとっては予想外であった。まともに動けなくなるぐらい芯まで凍らせたつもりであった。
「骨の髄まで凍っておいて元気なことだ」
「ミドガルズオルムの……産みの親の割には……ドラゴンの生命力を、舐め過ぎだ……！」
「言ってくれるな。だが、完全に凍結が解除されたのでは無い……動けるぐらいに回復させた……？　ああ、そういうことか。ちっ、見落としていた。フェニックスの涙か」
　一人で内なる自分と話し合った結果、ロキは一つの回答を導き出す。それがフェニックスの涙である。内に仕込んでいたものを使用し、ある程度動けるぐらいまでは治癒したのだと推測した。
　ロキの推測は当たりである。フェニックスの涙は事前に全員に配られており、タンニーンはそれを奥歯に仕込んでいた。体が凍結してまともに動かなくなった中で辛うじて口を動かし、フェニックスの涙が入った容器を噛み砕いて少しだけ動ける様になった。
　これはタンニーンが言う通り、ドラゴン並の生命力があってこそのことであり、通常ならばそのまま凍死していてもおかしくはない。ましてや、僅かな回復程度ですぐに動

けるタンニーンの生命力、精神力が桁外れの証明である。
タンニーンが炎を吐き、量産型ミドガルズオルムを狙うがその間にロキが割って入り、タンニーンの炎に掌を翳す。
タンニーンの業火が瞬時に凍結。ロキの掌に触れると粉々に砕け散り、細かな氷片と化す。
「炎が凍った！」
有り得ない現象に一誠が驚くが、その反応にロキは呆れる。
「我が凍気が自然のそれと同等と思っているのか？　――足りねぇな、赤龍帝。想像力と考えが足りねぇ。俺たちの氷は術によるものだ。人間界の常識なぞ無意味。人が計った様な絶対零度などとは全く違う。俺たちの氷には限界がねぇし、何でも凍らせる。例え、炎であったとしてもなぁ」
神たるロキからすれば、わざわざ自分たちの限界を定める一誠たちの考えこそが異端。常識という考え方に縛られ、視野を狭くする人間の考え方は理解に苦しむ。尤も、ロキ自身が神という在り方に縛られているので完全に自分のことを棚に上げているが。
「神の慈悲だ。お前たちに選択肢を与えよう。喰い殺されて八つ裂きにされるか、焼き尽くされて丸？みにされるか、氷の彫像と化すか、どれがいい？」
「ふざけんな！　選ぶ訳ないだろ！」

死に方の選択肢を上げるロキに、一誠は怒鳴るが、ロキは意地悪く笑う。
周囲の気温が一気に下がり始め、量産型のミドガルズオルムたちは炎を噴き出し、不可視の巨狼たちが忙しなく辺りを動き回る。
「そうか！　全部か！　贅沢だな！」
ロキの持つ全ての暴力が、一斉に牙を?く。

◇

ヴァーリがフェンリルを連れて転送された場所は、周囲を木々で覆われた採掘場と同じく全く人気の無い場所であった。
採掘場からかなり離れた場所にあり、こちらも万が一の場合に備えて周りの環境に影響を及ぼさない様予め結界を多重に張ってある。
着いて早々にヴァーリは掴んでいたグレイプニルを放り投げる。フェンリルの弱体化させるグレイプニルを自ら放棄する行動は、フェンリルに獣の顔でも分かるぐらい困惑の色を浮かべさせる。
「不要だ。――これも」
ヴァーリは液体の入った瓶を取り出すと、蓋を開けて中身を地面に零し出す。

『ヴァ、ヴァーリ！　フェニックスの涙を……！』

さしものアルビオンもヴァーリの行動に驚かざるを得ない。フェンリルによって負った傷を治癒出来るかもしれない手段を自ら捨てたのだ。

「兵藤一誠を見ていて思ったんだ……俺はもう少し追い詰められるべきだ」

トールの試練で完敗した一誠。作戦の要とも言える重圧を背負わされた彼は、それに押し潰される事無く見事にトールの試練に合格した。ヴァーリはそれに肉体よりも精神の成長を感じた。神器を扱う上で精神の力は非常に重要なもの。

自身も成長するには自らを追い詰めなければならない。勝つだけでは面白くない。勝って成長し、強くなることこそ面白い。

フェンリルからすればヴァーリの行動が愚行そのもの。正気を感じられない。舐めているのかすら思う。手負いの状態で挑もうとするヴァーリに臓腑の奥底から怒りを覚える。

その傲岸不遜ごと噛み砕いてしまおうとした時、結界の一部に魔法陣が浮かび上がる。形からして転送用の魔法陣であった。

魔法陣から何かが落下し、地面にそのまま激突して地響きを起こす。

「あー、着いたかぁ……」

折れた木々を蹴り飛ばしながら立ち上がる異形――マダは、首を鳴らしながら周囲を

見渡してヴァーリとフェンリルに気付く。
「あん？　何で居んだ？」
「――それはこっちの台詞だと思うんだが？」
「いやぁ、慌てて来たんで適当に気配の強い所に跳んだんだが……まあ、間違ってねぇよな」
　遅刻した挙句、場所も間違えているマダであったが、悪びれる様子も無く品の無い笑い声を出す。
「済まないがこれは俺の戦いだ。黙って見ているだけなら助かる」
「悪いなぁ。俺の頼まれた仕事は、お前みたいなのが必要以上に暴れない様、押さえつけることなんだよ」
「怪我をしたくないなら引っ込んでいた方がいい」
「生意気言うなぁ。そういう奴を泣かすのは、俺ぁ大好きだぜぇ？」
　殺気立つ両者。仲間ではないのか、とフェンリルは困惑させられる。
　次の瞬間、弾かれた様に全員が揃ってある一点を凝視した。
「素晴らしき闘争の気配を感じたら――」
　混沌とする場を鎮める様な冷たく恐ろしい死の気配。
　地面に現れる渦。肉の断面の様な赤と白が渦となって混ざり合い、不気味な色を生み

出す。
「――当たりであったようだ」
声はその渦の中から聞こえて来た。
「来たか！」
その声を知るヴァーリは、兜の下で笑みを深める。
舞台役者の如く、渦の中心から迫り出てくるは、死と戦いを信奉する戦士マタドール。
「遅かったじゃないか」
「何、主役というものは常に遅れて来るのが定石」
マダ同様に悪びれた態度は無く、全ては自分を中心にして回っているかの様に言い放つ。
マタドールはヴァーリを見る。
「ヴァーリ、いつの間に私好みの着飾りを覚えたのだ？　白に赤は実に良く映える」
血に濡れた『白龍皇の鎧』姿を讃えた後、マダを見る。
「聞きしに勝る雄々しさ！　阿修羅マダ！　貴公へ勝利した時、私は更なる高みに至れるだろう！」
神をも超える怪物マダの力を感じ取り、戦う前から戦意を高揚させる。そして、視線はフェンリルへ移り――そのまま露骨に無視した。

あらゆる存在から畏怖の眼差しを向けられてきたフェンリルにとって、マタドールの一切興味を持たない視線はある意味で衝撃的であった。
「さて、誰と手合わせをするか……目移りをしてしまうな。まだ、赤龍帝もロキも人修羅も居るというのに……」
当の本人は完全にフェンリルを無視して話を進めようとしている。ここまで屈辱的な行為をされるのは、フェンリルにとって初めての経験であった。
故にフェンリルは、マタドールの傲慢さを正す為、神速の爪を振り下ろす。
マタドールはフェンリルを見向きもせず、爪に向けて赤のカポーテを翳す。
そこから先の体験もまたフェンリルにとって初めてのこと。
爪が赤のカポーテに触れた瞬間、力も、重さも、重力も何もかもを無視し、フェンリルの四肢が地面から離れ、巨体が空中で半回転する。
視界が逆さまになったことに驚く暇も無く、フェンリルは背中から地面に落下した。
仰向けに倒れたフェンリルを、マタドールは冷たく見下ろす。
「私と遊びたいのか？　なら、飼い主にじゃれついていろ、犬」

相思、相殺

何をどうしたら攻撃していたフェンリルの方がひっくり返るのか、マダもヴァーリも皆目見当がつかない。物理法則も何もあったものではない、マタドールのカポーテによる捌き。

戦いに於いて比類なき才能を持つヴァーリも、長い年月を生き、神々とも戦ったことのあるマダも全く原理が把握出来ない。

マタドールの赤のカポーテを見た二人の反応は異なる。ヴァーリは色褪せることの無い芸術とも言えるマタドールの技に素直に感心し、マダは改めて見せつけられる唯一無二の魔技に表面上は無反応であったが、僅かながら目を奪われてしまったことに内心で舌打ちをしていた。

マタドールは、たった二人の観客へ好戦的に笑い掛ける。

「何なら拍手をしても構わない。その方が私の気分も高まる」

「はっ」

賞賛を求めるマタドールの言葉を受け取り、マダは鼻で笑うと四本の手を動かし、細かく手を打ち鳴らさず一回一回が発破音の様に大きい、下品な拍手を嫌味の様に送っ

た。
　マダの品性が欠ける大きな拍手音を聞いて、地面で仰向けになって呆然としていたフェンリルが正気に返り、地面を砕く勢いで立ち上がり、風切り音を出しながら移動してマタドールたちから距離を取る。
　負傷しているヴァーリはまだ脅威とは感じられないが、突然乱入してきたマダとフェンリルの巨体を難なく地面へ転がしたマタドールの実力は未知数。警戒を強める必要がある。
　ヴァーリは兜の下で悟られない様にフェンリルの動きを目で追っていた。マダもまたそれを目で追っていたが、そもそも何処に目があるのか分からない顔なので悟られる心配も無い。
　マタドールに関しては、最初の時と同じくフェンリルを完全に無視し、警戒すらしていない。あれ程の巨体を持つ狼を路傍の石ころ同然の扱いをする。
　マタドールの侮辱しか感じられない舐め切った態度に、フェンリルは怒りで体中が熱くなり血液が沸騰し、血煙になりそうになる。このまま衝動に任せて飛び掛かりそうになるが、辛うじて踏み止まり理性を僅かながら保てていた。これは、皮肉なことに初撃をマタドールによってあしらわれたことによるものである。
「一つ聞いていいか？」

「何かな？」
　ヴァーリの質問に対し、マタドールは快く応じる。フェンリルとは比べ物にならない程の親しみが籠った態度であった。
「兵藤一誠を鍛えていたか？」
「ああ、あれか。言っておくが私が誘った訳では無い。確かに私の方から彼に接触したが、挨拶で済ませるつもりだった。特訓を申し出て来たのは彼の方からだ。――まあ、暇潰しも兼ねて快諾したがね」
「うへぇ……命知らずめ」
　自分の知らない所で一誠がとんでもなく危ない橋を渡っていたことに、マダは呆れ混じりの言葉を小声で漏らす。
「俺と比べてどうだった？　兵藤一誠は、お前との戦いで中々面白い技を覚えたが……もしかして、あれはお前が教えたのか？」
「貴公の素質と赤龍帝の素質を比べるなど烏滸がましい。天秤に載せて量る必要も無い程圧倒的な差だ。それとアレを見たのかもしれないが、それも私のと比べないでくれ。侮辱だ」
　一誠に対して辛辣なまでの評価を下すマタドール。一方で褒め称えられるヴァーリは気を良くする――とはならず、兜越しでも少し面白くないという態度が感じ取れた。

「そう言う割には楽しそうだな」
「そうかね？　私は純粋な評価を口に出したまでだ」
「兵藤一誠から惹かれるものを感じたのか？　――まあ、それには同意するが……」
「やれやれ。もしかしたら、妬いているのか？　年不相応な面しか見た事が無かったが、存外可愛げのある所があるではないか。誤解しないでくれ、私が最も期待している才能を持つのはヴァーリ、貴公だ。貴公が私にとって一番なのだよ」
「気持ち悪い喋り方するな、お前」
　マダが茶々を入れる。真剣な話だが、マタドールのやたら熱っぽく扇情的な口調のせいで痴情の縺れの様に聞こえてきた。女好きのマダが、男同士のそんな話を聞いても面白くも無い。
「素敵な女性を口説き落とすことと手強い強者を仕留めることは案外似ているもの。どちらも自分を磨くことと攻め方が重要だ」
「そういうものなのか……？」
「んな訳あるかぁ。おめぇだけの価値観だよ」
　恋愛経験皆無のヴァーリは、女性の例えを出されてもピンと来なかったのか首を傾げ、マダの方は即座に否定する。分かっていたが、マタドールの考え方はマダには合わない。

「はん！　まあ、おめぇが男泣かせの女泣かせなのは知っているぜ。色んな意味でな。男泣かせ時はそっちの剣使って、女泣かせる時はもう一本の剣でも使うのかぁ？」
「――やれやれ。品の無い冗談だ」
マダの下品な返しに、マタドールは呆れた様に首を振る。
「何？　マタドール、お前は二刀流だったのか……？」
『ヴァーリ、そういう意味ではない……』
「じゃあ、どういう意味なんだ？」
『……』
経験皆無のせいでマダの揶揄を言葉通りに受け取ってしまうヴァーリ。アルビオンが一応否定するが、意味まで問われると流石に口を閉じてしまう。
傍から見れば、三人が戦場で不似合いな心底下らないお喋りをしている様にしか見えない。表面上は。
少しでも戦いに身を置いていた者ならば気付く。下らないお喋りの中で三人が見えない牽制をし合っていることを。
フェンリルが彼らのお喋りを黙って見ているのは、フェンリル視点でそれが見えていたからだ。
ヴァーリが僅かに腕を持ち上げると、そこから拳を繰り出す幻影が見えた。すると、

マタドールの体から突き出された拳を剣で斬り落とす幻影が見える。二人の攻防の隙を狙い、マダが炎を吐きだす幻影を感じ取ったが、途端にヴァーリとマタドールの攻撃の幻影が消えて、マダに向けて拳と剣が放たれる幻影へ変わる。すると、三人の争う幻影が消えてしまった。

つまり、ヴァーリとマタドールの攻防はマダの攻撃を誘う為のフェイクであり、それにマダが気付いたせいで攻撃するのを止め、ヴァーリとマタドールも誘うことに失敗したと察して止めてしまったのだ。

こういったイメージだけの攻防を先程から何百回も繰り返している。見ているフェンリルの方が精神を削られる思いであった。

グルルルル。

試しにフェンリルも攻撃の意志を込めて唸ってみる。その瞬間、三人の殺気がフェンリルへ突き刺さった。ヴァーリとマダは『掛かってくるなら来い』という意味を含ませた殺気だが、マタドールの方は『引っ込んでいろ、犬畜生』という侮蔑と警告を含ませた冷たいもの。

向けられただけで精神が粉砕され、心臓すらも止まるだろう殺気を受けながらも、フェンリルは牙を?く。

フェンリルとて悪神ロキという偉大なる存在に我が子として生み出された誇りがあ

る。実力はあるがまだ若い白龍皇、ふざけた態度の阿修羅、頭の中身が狂っている魔人如きに舐められる謂われなど無い。全員を神殺しの牙の餌食にしてくれると意気込む。

フェンリルが臨戦態勢に入ったことを察してヴァーリは戦意を高める一方で、マタドールは興味を引かない相手が横槍を入れて来ることに戦意を弱め、代わりに殺意を高める。

空気がそれぞれの放つ気が一気に張り詰めたものとなり、今すぐにでも爆発しようとしているタイミングで――

「まあ、させねぇけどな」

――マダが一言呟いた瞬間、ヴァーリ、マタドール、フェンリルが自ら意志に反して膝を折る。

「こ、れ、は……！」

ヴァーリの呂律が回らない。

「くっ！　いっ、の間、に、……！」

同じくマタドールの口調もおかしくなっている。フェンリルが立ち上がろうとするが、脚に力が入らずに巨体が何度も崩れ落ちる。

共通して呂律が回らない。視界に異常をきたし周りが溶け合って一つになったかのようになる。思考に所々空白の箇所ができ、頭の回転が極端に鈍くなる。

そして、一口も飲んでいないというのに酒精のニオイが体から漂ってくる。
「本気の戦いに水を差すのは趣味じゃねぇが、お前さんらがぶつかるのは危な過ぎるんでな」
イメージだけとは言え何度も繰り返し戦うことで分かってしまった。ヴァーリ、マタドールが本気で戦えば大きな被害が出ることに。
いくら人気の無い場所とはいえ、大規模な破壊は人に危機感を与える。それを防ぐのがマダの役目である。
「クラクラするだろ？　そのまま気持ち良くなって眠ってなぁ」
「この身に、なって、ここまで、酔うのは、久しぶり、だ……！」
「中毒になるまで注いでやるよ」
マタドールは自分の身に起こっている異常を把握していた。兜の下のヴァーリの顔は真っ赤に染まっている。マタドールの指摘通り酔っ払った症状である。
マダという名は『酩酊』を意味し、その名の通り彼は相手を酔わすことが出来る。酔わせ方も自由自在。酒を楽しむほろ酔い気分から、意識を失う質の悪い酔わせ方まで。
老若男女だけでなく異形、妖怪、幽霊、それどころか神相手ですら区別なく差別なく強制的に酔わすことが出来る、まさに『大いなる酩酊』。
アザゼルがマダを選んだのも相手を無力化させるこの能力があってのこと。あくま

でも相手を酩酊させるだけで、直接的な死には繋がらない。死んだ方がマシと思えるぐらい酔うが。

「戦いが終わるまで大人しくしてろい」

マダがそう言うと酒精のニオイが一段と濃くなり、急激に回る酔いに耐え切れなくなったのか、フェンリルは崩れ落ち地響きを鳴らす。

マタドールも片膝を突いた状態で俯いて動かなくなり、ヴァーリもうつ伏せの状態となって微動だにしなくなった。

「これで仕事も終わりだ」

マダはその場で胡坐をかき、仕舞っておいた瓢箪を出して仕事の完了を祝う様に中身を呷る。

人気の無い森では木の葉が擦れ合う音、虫の鳴き声、そしてマダが酒を嚥下する音しか聞こえない――筈だった。

「我……目覚めるは……」

雑音に紛れ何かが聞こえてくる。

「覇の理に、全てを……奪われし……二天龍、なり……」

「あん？」

聞こえる筈の無い声を聞き、マダは酒を飲むのを止めて、暫しの間周囲に耳を傾ける。

「無限、を妬み……夢幻を、想う」
「おいおいおいおい」
信じられないと言わんばかりにマダは立ち上がる。ヴァーリの体内に強い酒精を発生させ、意識を完全に断とうとする。
しかし、何故か止まらない。
「我、白き、龍の覇道を、極め……」
ヴァーリの口から紡がれる詠唱は、間違いなく『覇龍』へ至らせるもの。以前、ヴァーリが一誠に見せた部分的な解放ではなく、『覇龍』の力を完全解放させる為の詠唱である。
マダは舌打ちをすると、物理的にヴァーリの意識を断つ為に両手を組み、鉄槌としてヴァーリの後頭部に振り下ろした。
その瞬間、白い閃光がマダの視界に映ったかと思えば、大木の幹に背中から叩き付けられていた。
「うおっ」
マダの巨体を受けた大木が衝撃に耐え切れず根本からへし折れる。マダが胸を手で触れる。青銅器の様なマダの胸から胴体に掛けて拳による凹みが七つも出来ていた。
それをやったのは間違いなく十数メートル先で拳を突き出した構えで固まっている

ヴァーリの仕業である。
拳を放った瞬間が見えなかった。それどころかうつ伏せから立ち上がるまでの動きも見えなかった。
「――とんでもねぇなー」
この時点でマダはヴァーリの『覇龍』を止めることを諦めた。無駄に体力を消耗するよりも後の為に残しておくのが賢明と判断。
マダが見ている前でヴァーリは最後の一節を唱える。
「汝を、無垢の、極限へ、誘おうっ！」
ヴァーリの鎧に填め込まれた各宝玉が七色に輝いたかと思えば、ヴァーリは凡庸な悪魔、天使、堕天使ならば圧殺出来てしまう程のオーラを白い輝きと共に発する。
『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ！』
マダとフェンリルは思わず目を閉じてしまう。彼らでも直視し続ければ失明の可能性すらある圧倒的な光量。無差別に放つオーラも光も暴力にまで昇華している。
閉ざされた目の代わりに耳で周囲の状況を確認するマダとフェンリル。音を立てて変化するヴァーリの鎧と共に、この世の者ではない叫びも聞こえて来た。
〈やめてっ！　やめてっ！　やめてっ！〉
〈怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い！〉

〈誰か！　誰か！　底が無い！　限界が無い！　こんなの有り得ない〉
〈嫌だ！　嫌だぁ！　恐ろしい！　恐ろしい！〉
白龍皇の内に存在する歴代白龍皇の思念の声。二天龍内に内包された歴史の思念は無念からか大なり小なり怨念の様なものを持っている。過去にマダも覇龍に至る瞬間を見た事があるが、その際には使用者を道連れにする様な怨念の籠った声であった。しかし、ヴァーリから聞こえてくるのは救いを求める絶叫。
以前の限定覇龍の時といい、歴代白龍皇の思念らはヴァーリの限度を知らない才能に完全に振り回されている。
光が収まったとき、その場に立つのは人とドラゴンの中間の様な姿となったヴァーリであった。
全身の鎧が鋭く、触れれば切断されそうな切れ味のあるものと変わり、兜に牙が生え、よりドラゴンに似た作りになる。背部に展開される光の翼は左右に三対六枚に増え、体の各部に埋め込まれている宝玉は巨大化し、白い光を内部に閉じ込めている。
「あー、あー、どうすっかなぁー、これ」
声は軽いが内心は声ほど穏やかなものではない。ヴァーリの『覇龍』は軽く見ても神にも引けを取らない存在感と力。最盛期のマダならば止められるだろうが、大きく力を削がれた今では厳しい相手である。

フェンリルもまたヴァーリに戦慄していた。酔いで鈍った思考が一気に目覚める程の力。意志とは無関係に尻尾が丸まってしまい、体が恐怖の合図を出す。屈辱的だがそれも仕方のないこと。フェンリルがこの世で最も尊敬し、畏怖し、最強であると信じて疑わない存在（ロキ）にもしかしたら勝てる可能性が在る者が現れたのだ。

「ふ、ふふふ、ふはははは、はははははっ！」

響き渡る哄笑。自暴自棄や発狂によるものではなく心の底から歓喜に震える笑い声。声の方に目を向けたマダは、これ以上は勘弁して欲しいという気持ちが勝手に口から出てしまう。

「げっ」

泥酔して動けなくなっていた筈のマタドールが笑いながら立ち上がっている最中であった。

「大人しく寝ておけよ……」

「これ程のものを見せられて黙って寝られる訳が無い……！」

「どいつもこいつも……プライド傷付くぜ……」

自身の能力に対し、それなりに自信を持っていたマダだが、立て続けに耐えられてしまい、少しだけ愚痴を零す。

「ふ、ふふふ、勝利の美酒に酔うことは多々あれど、ここまでキツイ酔いを味わったのは、

初めてだ……！　良い、経験となる……！　だが、一つだけ、見落としていたな……！

真の戦士は、酒などでは、酔い潰れない……！　戦士が酔うのは、闘争だけだ……！」

ただの矜持のみでマダの能力に耐えてみせるマタドール。理論も理屈もない精神論。もっと単純に言えば根性とプライドだけでマダの酔気に抗っているのだ。

「ご高説どうも。でも、そんな危なっかしい足で大丈夫か？」

マダの指摘通り、マタドールの両脚はマダの酔気で震え、ヨタヨタと左右に足踏みをしている。神速の足捌きを持つマタドールとは思えないぐらいにおぼつかない。

すると、マタドールは徐に魔力で銛を作り出し、何を思ったのか自分の両足の甲をそれで突き刺す。

「――これで問題無い」

無様な醜態を晒すぐらいならば両足を地面に縫い付けて固定した方がマシ――というのがマタドールの答えらしい。その行動にマダは心底呆れてしまう。

「お前のカッコつけたがりは、病気の域だよ」

「褒め言葉として、受け取っておこう。――さて、ヴァーリ」

マダの言葉を余裕を持って流すと、『覇龍』を発動させたヴァーリに話し掛ける。

「最初に言っておく。……私は『覇龍』というものが気に入らない。どれだけ力と速さが増そうとそれを扱える頭が無ければ獣同然。私は獣を狩る狩人では無く、戦いを求める

闘士だ。故に一度だけ尋ねよう」

その答え一つで今まで培われてきたヴァーリとマタドールの関係は一変する。

「――私の声が届いているか？」

誰にも悟られるつもりは無いが、その一言を発したマタドールは僅かに恐れを抱いていた。ここでヴァーリが理性無き獣と成っていた時、彼はヴァーリの命を絶たなければならない。二つと無い才能が畜生まで落ちる姿など見るに堪えないからだ。

ヴァーリにはまだ先がある。マタドールですら見通すことの出来ない先が。ここでその先が断たれるのをマタドールは恐れた。

完成されたヴァーリ。その途方も無い才によって得た力がマタドールの前に立ち塞がった時、マタドールは自らの強さを一つ上に押し上げることが出来ると確信していた。

ここでヴァーリの未来が閉ざされることは、マタドールの未来も閉ざされることに繋がる。だからこそ、マタドールは恐れた。そのエゴの為に。

一瞬の沈黙の後――

「聞こえているさ……」

――ヴァーリは確かな理性を以ってマタドールの声に応じた。命すら削り、理性すら溶かす強力無比な力を膨大な魔力と精神力によって制御してみせた。

「流石、流石だ！　信じていたぞ！　貴公を！　貴公ならば『覇龍』を使いこなせると！　そうだとも！　ああ、そうだとも！　ヴァーリ・ルシファーという唯一無二の存在が己の力に押し潰される筈が無い！　聞こえるか、アルビオン！　誰が何と言おうとヴァーリ・ルシファーは間違いなく最強の白龍皇となろう！　先にも後にも彼を超える白龍皇は居ないだろう！　私が保証する！　否と言う者が居るのなら私の前に連れて来い！　私がそいつを殺してやろう！」

『お前に言われるまでも無い。知っていたことだ』

「そうか！　それは失礼した！」

マダの酔気の影響が少ないのかアルビオンの喋り方はしっかりとしている。

いくらヴァーリが期待に応えたからといって、マタドールのテンションの高さは異常と言えた。見ているマダもフェンリルも温度差で引いてしまう。

「まだ少しクラクラするな……」

『覇龍』化の影響で体内にある酒精は大分消えたが、それでも影響が残っている。ただ、悪影響ではなく心地良さと体温の上昇が感じられた。

『覇龍』の放つオーラと高揚するマタドールが発する気。神聖さを秘めたヴァーリのものとは違い、マタドールが辺りに死と恐怖の気配を無差別にばら撒き続けている。

何とも精細さに欠けるマタドールの行動。そして、異様なまでの興奮状態にマダはあ

る疑問が生じていた。
（もしかしてコイツ……悪酔いしているのか……？）
骨の体のせいでどれだけ酔っているのかは分からないが、言動に関して異常な部分が目に付く。元々、頭がおかしいと言われているマタドールだが、今の彼は表向きの冷静な仮面を剥がしている様に思えた。
「しかし、しかしだ！　私も悪い癖だと思っている！　そのせいで何度過ちを冒してきたか分からない！　だが、それでも、治すべきだと思っていても！　つい、やってしまう！」
マタドールは剣の切先をヴァーリへ向ける。
「貴公のもっと先を見てみたい！」
マダはマタドールが完全に酒乱になっていると悟る。『覇龍』を理性のある状態で制御出来ること自体、歴代の白龍皇の中で数える程しか存在しない。自分の欲求を押し付け、剣を突き付けて脅迫するその様は、理不尽でしか無かった。
「『覇龍』の先か……ふふふ」
しかし、ヴァーリはそれに呆れる様子も無く、肩を震わせて笑ってすらいる。
「今の俺が何処まで出来るのか、ギリギリまで試すのも面白いかもしれない」
そう言うと同時にヴァーリの肩の装甲が弾け飛ぶ。

？がれる『覇龍』の鎧にマタドール、マダは、フェンリルは虚を衝かれた表情となった。
続けてもう片方の肩の装甲が飛び、腕や手甲、胸部、頭部などの各部分の装甲が飛んでいき、埋め込まれた宝玉もまた外れていく。
外れた各装甲は、ヴァーリの周囲に浮かんでいる。
瞬く間に上半身が露わとなるヴァーリ。『覇龍』化の際の膨大なオーラのせいで上半身の衣服は千切れ飛んでおり、陰影が見える程に鍛え抜かれ、彫刻細工の様に均整の取れたヴァーリの上裸が晒される。フェンリルの牙によって出来た傷からはまだ流血しており、そのせいでヴァーリの体はやや蒼褪め、白さが目立つ。尤も、その儚げな白さはヴァーリの容姿と兼ね合って耽美と化す。
「――いや、ギリギリじゃダメだな。限界を超えていくとしようか！」
剥がれた『覇龍』の装甲が変形し始める。宝玉と装甲が組み合わさり、別の形となっていく。
「これは……！」
「『覇龍』の再構築だと……！」
目の前で起こっている現実をマタドールたちは驚愕と戦慄の眼差しで見ていた。
そして、出来上がったのはドラゴンの頭部に似た八つの浮遊体。開けた口に宝玉が填

め込まれている。
「――素晴らしい」
「こりゃ……やべぇ……」
それが何なのか瞬時に見抜いたマタドールは感動し、マダは冗談を言う余裕すら無く、すぐ様ある場所に連絡を入れる。最早、マダ一人ではどうにも出来ない状態になっていた。
ドラゴン型の浮遊物体に填め込まれた宝玉が輝きを帯び始める。その途端、この場にいる全員が体から力が抜けていくのを感じた。
木々が、大地が、空間そのものが充填されていく宝玉によって吸い尽くされていく。それだけでは無い。周囲を囲っている結界にも影響が既に出始めており、秒単位で崩壊し始めている。
恐るべきは、これが浮遊体の能力では無いということ。力を溜め込むのが強過ぎて周囲に悪影響が出ているのに過ぎない。もし、一誠とリアスがこの場に居たのなら、それが何の前兆かに気付き、そして恐怖しただろう。
浮遊体の本質はもっと直接的且つ暴力的なもの。八つの浮遊体は、あるものを撃つ為の砲口に過ぎない。
天を穿ち、神をも貫く聖槍の一撃を。

その力の片鱗を感じ取ったマタドールは世界を揺さぶる様な哄笑を上げ、マダはヴァーリが見た目とは裏腹にとんでもない戦闘馬鹿であると理解する。
攻守共に最強クラスである『覇龍』のバランスを自ら崩し、最低限の防御力だけ残し、後は攻撃に振り分けているヴァーリの行動は狂気の域。
「八発同時発射か……流石に死ぬかもなぁ」
耳を疑う様な台詞を、マダは他人事の様に零すのであった。

◇

『聞こえるかー、魔王様よー。とんでもない状況になってんだがー』
「ああ、聞こえているよ、マダ殿。これは私にとっても予想外の事態だ」
頭の中に響き渡るマダの声に、サーゼクスが応じる。
マダはアザゼルから万が一手に負えない状況になったらサーゼクスの手を借りる様に言われていた。マダ自身はそんな事態になる訳が無いと笑っていたが、結果として自分ではどうしようもない状況になってしまった。
尤も、仮にマダで無かったとしても彼が陥っている状況を打破出来る存在などほぼ皆無だろう。

サーゼクスの方は四大魔王としての業務の傍らで日本の神々とオーディンの会談、リアスたちの戦況を映像等で確認していたが、ロキに何か変化が起こった後に突如としてリアスたちの様子が確認出来なくなってしまった。

その事態に嫌なものを感じたサーゼクスは、魔王の仕事と会談を後回しにしてリアスたちの安否確認をすることを最優先とし、妨害の原因を探る様にグレイフィアへ頼む。

グレイフィアが調べたところ、強い力の干渉を受けているせいで外部からの干渉を一切遮断されていると言う。悪魔として類稀なる力を持つグレイフィアですら介入出来ず、簡単に撥ねられてしまっていた。

そんな状況下の中で飛んできたマダからの緊急連絡。外部を一切通さないのに、マダからの連絡が入るのは、マダの高い能力故としか言いようがない。

そこで知るヴァーリとマタドールの接触。それが予想外の事態を招いていた。

マタドールの足止めをしたことは大きいが、マタドールの存在がヴァーリを強く刺激し、そのマタドールもまたヴァーリを強い刺激を受けていた。

このまま何もせずに両者を戦わせれば途轍もない被害が起こる。ヴァーリたちとの共闘に賛成したサーゼクスは、その責任の為にあれこれと対策を考える。

「サーゼクス」

その最中にある人物がやって来た。その人物は、今のサーゼクスが最も必要としてい

る存在と言え、最高のタイミングと言えた。
「アジュカ。来てくれたのか」
髪を後ろに撫でつけた男性ながらも妖麗な美しさを持つアジュカ・ベルゼブブ。サーゼクスと同じ四大魔王の一人であり、『悪魔の駒』やレーティングゲームのシステムの根幹を創るなど冥界に於ける技術面を担当している。彼の存在によって冥界の技術は飛躍的な進歩を遂げた。
政治的な考えややり方で対立することがある二人だが、決して仲が悪い訳では無い。寧ろ、互いに友と呼び合う程の間柄である。
「今回の件は俺も気になっていた。しかし、白龍皇と魔人との接触がこうも劇的とは……」
アジュカが指を動かし四角を描くと、そこに映像が投影される。映像はノイズの様なものが混じり不安定であったが、ヴァーリとマタドールが対峙し、少し離れた場所でマダとフェンリルが映されている。
「これが分かるか？　サーゼクス」
アジュカが指差したのは、ヴァーリの周囲に浮かぶ浮遊体。
画像越しでもヴァーリが何をしようとしているのかサーゼクスは察する。
「彼はロンギヌススマッシャーを撃つもりか……」

「ああ、それも一発じゃない。この浮遊体の数だけ撃つ気だ。――八発同時だな」
「八ッ……！」
　いつも冷静なグレイフィアもアジュカの言葉に驚き、思わず言葉が飛び出てしまったが、それ以上は驚き過ぎて続かなかった。冗談しにか聞こえなかったがアジュカはふざけている様子は無く、全て事実であると告げている。そうなるとヴァーリが尚更規格外のことをしようとしているのが現実であり、グレイフィアは身震いした。
「どうにか彼らを隔離したい。マダ殿の方は自分ごと構わないと言っている」
「問題無い。既に準備は済んでいる。後は発動させるだけだ。そのことを言いに来た」
「流石だ。仕事が早い」
「既存の技術を応用しただけのこと。褒められる程ではない」
　謙遜ではなくアジュカにとっては本当に大したことでは無い様子。
「彼らの周囲に結界を多重に張り、完璧に内部へ閉じ込める。計算上では結界外に被害は及ばない――筈だ」
「筈、か……」
「現白龍皇の潜在能力は未知数だ。マタドールは過去の戦闘データはあるが、また強くなっている。――厄介なことにマタドールは相手が強ければ強い程に力が高まっていく傾向にある」

「――ああ。それは身を以って知っているさ」
「この二人が全力で戦った時、どれほどの破壊を生むのかは正確には計算出来ない。だからこそ、結界には大量のエネルギーが必要になる」
「必要なら私の魔力を使えばいい」
「馬鹿を言うな。そんなことをしたら干乾びるぞ、サーゼクス」
半ば本気で言ったサーゼクスを無茶だと窘めるアジュカ。
「俺がここに来たのは報告と許可だ」
「許可？」
「結界と冥界を直接繋げ、発動と維持に必要なエネルギーをそれで賄う」
グレイフィアは目を見開く。聞いた事も無い方法であること、それを短時間で構築したアジュカの技術、前例が無いせいでどの様な弊害が起こるか分からないなど様々な考えが頭の中を過っていく。
「分かった。責任も後始末も私がキチンと付けよう」
「そうか」
サーゼクスはそれを即決する。アジュカも短く答えるとすぐに結界を発動した。
その影響か、アジュカが浮かべていた画像が消え、完全に見えなくなる。同時にサーゼクスはマダとの繋がりが消えたのも感じた。

ここから先は完全に向こう側の状況を把握出来なくなる。
「こうなるなら、私がマタドールの相手をした方が――」
「駄目です」
何気なく漏らしたサーゼクスの言葉をグレイフィアは最後まで言わせなかった。
「絶対に、駄目です」
念を押す様にもう一度強く言う。グレイフィアは無表情であったが、サーゼクスには泣き顔が重なって見えた。
マタドールと三度目の戦いで引き分けた後、グレイフィアを随分と泣かせてしまったことを思い出す。
「俺からも言っておくが止めておけ。奴を喜ばせるだけだ」
「あまり本気にしないでくれ。あの時程の無茶はもうしないつもりだ」
友人からも真面目な口調で忠告され、サーゼクスは苦笑する。
「――さて、きっと忙しくなる。今のうちにやれることはやっておこう」
異変が起き、混乱するだろう冥界の住人たちに心の中で詫びながら少しでも早く事態を収拾出来る様にサーゼクスたちは準備を始めた。

◇

一体何処まで力を溜めていくのか。延々と魔力を高めていくヴァーリの姿。ここまで来ると流石にマダも呆れてしまう。

そして、それに呼応してマタドールからも途方も無い力が放出されていく。鮮血に似た魔力の様な力が空間を塗り替える様に満たされ、自分色に染め上げていく。

「ははははは！　いいぞ！　もっとだ！　もっと見せてくれ！　その強さが私に更なる力を与えてくれる！」

「言われなくとも見せてやるさ！」

マタドールの力が高まれば、ヴァーリの白色の魔力がマタドール色に染まった空間を塗り返していく。

幸いマダの連絡が通じて周囲を結界で囲み隔離状態となっている。もしも、結界が無かったらどれだけの影響が及ぶか考えたくも無かった。

相乗効果で力を増していく二人を見て、マダは改めて自分がやらかしたことを自認する。マダが彼らを酔わせたことで、彼らの中にある自分でも気付かない内に填めていた箍が外れてしまった。

そのせいで今の二人は後先など全く考えていない。ここで終わってもそれで良し、という思いで全力を尽くそうとしている。

完全に二人だけの世界へ没入しているのを見て、マダは逃げようとはせず、その場で腰を下ろした。隔離された今、マダがやれることはこの戦いを最後まで観戦することだけ。

「――この技を貴公に見せるのは初めてだったな」

暴風の様に吹き荒れていたマタドールの力が、構えた剣へと注ぎ込まれていく。荒れ狂っていた力がただの剣一本の中へ集っていく光景は異常そのもの。雪崩を一本の筒に入れる様な、雷を針に正確に落とす様な精密過ぎる技術。

圧倒的な暴力を見せつけてくるヴァーリとは対照的な姿と言える。

マタドールが見せた初めての構えに、ヴァーリの心境を表すかの様に魔力が噴出する反面、力の収束によって空間が軋みを上げていく。

「どんな技か、期待で胸が張り裂けそうな気分だ！」

「同感だ！　無くした心臓の鼓動が聞こえてくる！」

際限無く高まっていく両者の力であったが、やがて終わりが来る。マタドールはあれ程狂った様に放っていた力を一本の剣にのみ宿し、ヴァーリの周囲に浮かぶ浮遊体は直視出来ない魔力の輝きを宝玉に充填させていた。

互いに互いを運命の宿敵として認めていた。相手が強くなれば自分も強くなれるそんな相手。しかし、どんなに高みを上っても頂点へ辿り着けるのは一人のみ。いずれは

決着を付けなければならない。
今日がその日だったとしても二人に後悔は無かった。
ヴァーリは赤龍帝のことも、唯一無二の白になることも全て忘れ、一撃を繰り出す。
マタドールは後に控えるロキも赤龍帝も人修羅のことも忘れ、我が身を燃え尽す勢いで技を出すことを誓う。
あれだけ騒々しかった場が静まり帰る。
すっかり蚊帳の外へ追われていたフェンリルは、異常な力がぶつかり合う前兆に気付き、千鳥足ながらもこの場から少しでも離れようとする。
その途端、上から何かに押さえつけられた。
「おいおい。何処行こうってんだよ」
フェンリルを上から押さえつけるのはマダ。振り解こうとするフェンリルの顎を地面に叩き付け、動けなくする。
「結界で周囲を塞いでんだ、何処にも逃げられやしねぇよ。それよりもお前さんもどうせなら楽しんだらどうだ？」
フェンリルはマダの言っていることが理解出来ない。一体何を楽しめば良いというのか。
「こんなもん一生に一度見れるかどうかも分かんねぇ。どんだけ派手なことが起きるか

見物じゃねぇか」
豪快に笑うマダ。フェンリルはようやく気付く。この場に於いてまともな思考を持つ者など存在しないことに。
『Ｌｏｎｇｉｎｕｓ――』
「血の――」
ドラゴンの口から撃ち出される八つの極光。それと相対するのは、数多の屍を築き上げた末に得た技の極致。
『Ｓｍａｓｈｅｒ！』
「アンダルシアァァァァ！」
両者の技の発動直後、隔離用に展開されていた万単位の結界の内の九割が消滅。
同時刻、冥界全土にて震度三相当の揺れを確認。幾つかの施設がその影響で機能停止となる。
地震直後、人間界と合わせていた冥界の時間に大きな狂いが生じたことが確認された。
大量の力を消耗したことにより、冥界から疑似的に再現された夜と月が消失し、住人たちは天変地異の前触れとして恐怖した。
この日、たった二人の人物によって冥界全土が震え上がった。

凍結、引継

神をも殺すフェンリルはヴァーリと共に何処かへ転送された。これで戦いが楽になる――などということは微塵も無かった。

現にロキが生み出した量産型のミドガルズオルムが一斉に炎を吐き出すことで壁の様になり、不可視となったスコルとハティが親と同じ神殺しの牙で狙い、それらを合わせても尚強いロキが場を極寒に染めていく。

「ヒーホー！　オレ様にそんな冷気が通用するかホ！」

霜が張り、大地が凍結していく最中にジャアクフロストが一人降り立つ。無謀な単独行動に思えたが、不思議なことにジャアクフロストを境にして冷気がこちら側に伝わってこない。

ロキが放つ白い冷気がジャアクフロストへ吸い込まれていき、それに応じてジャアクフロストが発するオーラが増していく。

「ほう？　そういう体質か――あー、面倒くせぇ奴が混じっているなぁ」

ロキは冷気を出すのを一旦止める。わざわざ相手に力を与えることはしない。

そこに一誠が近付き、ミョルニルレプリカを担ぐ様に振り上げ、背部のブースターに

よって得た加速で一気に振り抜く。
当たった、と思った瞬間ロキの体が煙の様に揺らいで消え、盛大に空振りしたミョルニルレプリカの起こす風圧が遥か先にある木々をしならせる。
攻撃したのが幻影であったことを悔しがる一誠であったが、同時に瞬きもしていないのに即座に入れ替わったロキの早業に戦慄を覚えた。
「相変わらず力だけはあるなぁ」
すぐ背後からロキの声。後ろ目掛けてミョルニルレプリカを振るうが、ロキはいない。
「――だが、雷一つ起こせないミョルニルレプリカなど恐れるに足りん！」
今度は正面。急いで向き直る一誠。目の前にロキが悪神と呼ぶに足りる凶悪な笑みを浮かべて立っている。
攻撃を選ぶよりもその笑みと気迫に気圧されて反射的に後ろに下がってしまう。その時、ロキの指先が腹部を掠めた。
何かしようとしていたが何とか避けられた、そう思っていた一誠だが――
『相棒！　不味いぞ！』
「えっ？」
慌てた様子のドライグの声。ただならぬものを感じてロキが先程触れた腹部に目線

を下げる。いつの間にかそこには術式が浮かび上がっていた。
「なっ！」
あの僅かな間でロキは『赤龍帝の鎧』に術式を打ち込んでいたのだ。
刹那、一誠の脳が極限まで回転する。もしかしたら『赤龍帝の鎧』の防御力で耐え切れるかもしれない。が、そう考えても安心など出来きず拭い切れない悪寒が残り続ける。そもそも、ロキがそんな半端な術式を使うとは思えない。
一誠は決断する。
「ドライグ！」
一誠は意志で自分がこれから何をするのか伝えた。ドライグもすぐにそれを了承する。
「おおおっ！」
気合の声と共にミョルニルレプリカの槌を術式が刻まれた自らの腹部に叩き込む。ドライグに頼み、『赤龍帝の鎧』の一部の強度を緩めて貰ったお陰で術式周りの装甲が砕け散る。
ある程度加減はしたとは言え、ミョルニルレプリカの一撃による腹への鈍痛に耐えながら背中のブースターを使って装甲の破片から離れる。
間もなくして装甲に施された術式が発動。魔術による光の杭が装甲の内側から生え

た。あのまま放置していたら、あの杭で刺し貫かれていただろう。
そして、その光の杭が爆発を起こす。その煽りを受けて一誠は吹っ飛ばされてしまう。飛ばされながらも一誠は自分の判断が本当に正しかったことを実感した。刺し貫かれて内側から爆破など生きていられる訳が無い。
同時に自分の成長も実感する。色々な戦いを経て戦いへの直感が磨かれつつあった。
と、思った所でブースターによる急ブレーキを掛けるのを忘れていることに気付き、一誠は樹木に勢い良く後頭部を打ち付けてしまう。
「ぐおっ！」
衝撃で目玉が飛び出してしまうかと思える程の痛み。樹木を背にしたまま一誠は暫くの間動けなかった。成長の兆しを見せた途端、油断で大きなミスをする辺り、まだ色々と改善の余地がある模様。
ロキの方は一誠の素早く、的確な判断に感心しながら、木を背にして動かない一誠の様子を見ている。ロキは一誠が痛みで動けなくなっていることに気が付いていない。
正面から一誠を見つつ、横目で自分の子ら、孫らの戦いぶりも確認していた。
量産型ミドガルズオルムたちの炎に対し、木場が魔剣創造によって魔剣を無数に創り出し、吐かれた炎の壁にそれを一斉に発射する。
飾り気の無い両刃の直剣が炎に触れると剣身に炎が吸収され真っ赤になる。

「――新作だよ」
以前、炎を消し去る氷の剣――炎凍剣を創り出したが、今回の魔剣はそれとは目的が異なる。
炎の壁を突き破り、量産型ミドガルズオルムの一匹の目にその内の一本が突き刺さる。その途端、魔剣が爆発して量産型ミドガルズオルムの顔半分を吹き飛ばした。
炎を閉じ込めて圧縮し、逆に攻撃として利用する。それがこの魔剣の能力である。
木場のカウンターによって怯んだ量産型ミドガルズオルムたちに今度はゼノヴィアとイリナの聖剣が振るわれようとする。
「イッセー!」
「おう!」
ゼノヴィアが一誠に声を掛けると、すぐに意図を察した一誠が理由も問わずに応じる。すると、ゼノヴィアの空いていた手に一誠の籠手に収められていたアスカロンが現れた。
ゼノヴィアはデュランダルの聖気に竜殺しの聖気を合わせ、相乗効果で威力を高めると二振りの聖剣を平行に並べながら上体を捻り、振り抜く予備動作に入った。
量産型ミドガルズオルムの一匹がそれを見て炎を吐き出そうとする。が、その直前に量産型ミドガルズオルムの口が突然閉まる。

イリナの『擬態の聖剣』が紐状になって、量産型ミドガルズオルムが気付かない内に忍び寄り、攻撃のタイミングを見計らって口に巻き付いたのだ。

吐き出される筈の炎は行き場を失い、結果として喉を逆流。そのせいで喉が内側から赤くなったかと思えば暴発を起こし、喉に数か所穴が開いてそこから炎が噴き出てきた。

自らの炎に悶え苦しむ。その間にゼノヴィアが動く。

踏み込みから始まり、そこから全身の関節、筋肉が一纏めとなって稼働する様なイメージで二本の聖剣を振り抜く。

音すら置き去りにしそうな勢いで振るわれた聖剣から閃光が奔る。それが自爆した量産型ミドガルズオルムを通過すると、胴体と首が切り離される。勢い余って後方に居た顔を半分吹き飛ばされた量産型ミドガルズオルムの頭も飛び上がる。ゼノヴィアは、一振りで二匹の敵を仕留めてみせた。

喜びも束の間、ゼノヴィアとイリナは突然その場から飛び退く。間を置かずに地面に爪痕が出来上がる。勝利直後という最も気が緩むタイミングを狙ってスコルかハティのどちらかが襲い掛かって来た。

ゼノヴィア、イリナはフェンリルの子が発する殺気を感じ取り、兎に角その場から動くことを優先したことで間一髪逃れられた。フェンリルの子がもう少し殺気を隠すこ

とが上手だったら、今頃引き裂かれていたことだろう。
しかし、攻撃が空振りしたからといってそれで終わりではない。場合によっては次の攻撃に繋がることとなる。
「むっ」
ゼノヴィアが着地をした瞬間、足と地面の間に何かが転がっていたことに気付く。拳程の大きさの石を偶然踏み付けてしまい、それによってゼノヴィアはバランスを崩して転倒してしまう。
「しまった！」
すぐさま体を起こそうとするゼノヴィア。だが、彼女の嗅覚が風の中から漂ってくる獣のニオイを感じ取る。位置は目の前。
この時のゼノヴィアの体勢は中途半端であった。立ち上がろうとしている時に身に染みついた反射行動で聖剣を構え戦闘態勢に移ろうとする。ちゃんと立ち上がることも剣を構えることも出来ず、無防備に近い状態を敵前で晒してしまった。
やられる、と思った瞬間、誰かが横から滑り込む様にして間に入ってきた。
「させませんよ」
月光を受け、冷たい輝く眼鏡。聖王剣コールブランドを握るアーサーが、聖王剣を一閃。空間に裂け目が生まれる。

聖王剣の能力で出来た空間の裂け目が一気に閉じる。凄まじい悲鳴と共に何も無い場所から赤い血が飛び散り、続いて子フェンリルの爪らしきものが地面に落ちた。
空間の裂け目を利用し、子フェンリルの攻撃からゼノヴィアを守りながら爪を切り落としてしまう。
深爪という言葉では済まない傷を受けて流石の子フェンリルもたまらず声を上げてしまう。
「そこにゃん」
咆哮から無理矢理立ち直った黒歌が、声で子フェンリルの位置を特定すると痛みで硬直している間に仙術を発動。乾いていた大地が瞬時に泥沼と化し、不可視の子フェンリルの体が沈み込む。
「おまけにゃん」
泥が噴き上がる。その泥を被ってしまったせいで子フェンリルの体が空間から浮き出てきた。
「バッチリ見えてるぜぇ!」
美候が如意棒を伸ばし、その先端を子フェンリルの脳天に叩き付ける。泥の地面に顔面から突っ伏す子フェンリル。美候は子フェンリルの脳天に如意棒を当てたままそれを支えにして棒高跳びの要領でフェンリルの真上に跳び上がるという器用な動きを見

せる。
美候は跳び上がると如意棒を元の長さに戻し、子フェンリル目掛けて投擲。
「デカくなれ！　如意棒！」
投げ放たれた如意棒は、美候の声で巨大化し、子フェンリルを押し潰す。

◇

ゼノヴィアらが子フェンリルと戦っているのと平行して、シンたちももう一匹の子フェンリルと戦っていた。
隙を伺っているのか息を殺し、気配も殺している子フェンリル。シンの目やケルベロスの鼻でも探知し辛い。
「グルルルル……コレシカナイカ」
ケルベロスは一人で納得するとシンたちから離れて前に出始める。
「危ないよ！」
「ヒホ！　ダメだホ！」
ピクシーとジャックフロストが止めようとするがケルベロスは足を止めない。
「グルルルル。一番頑丈ナオレノ役目ダ」

孤立状態となったケルベロスはそう言ってシンの方を見る。何をするのか察したシンは一度口を開け、何かを言おうとしたが何も言わずに閉じてしまう。

ケルベロスがやろうとしているのは褒められるやり方ではない。しかし、必要ならばシンもまた同じ方法をとっていただろう。そして、自ら進み出たケルベロスの心意気を無下には出来なかった。

「間薙君……」

朱乃もケルベロスが何をしようとしているのか分かり、シンに本当にいいのか尋ねる様に声を掛ける。

シンは朱乃を見た。シンと目が合った時、既に彼が覚悟を決めていることを理解し、これ以上何を言っても無駄だと分かってしまった。

「来イ。臆病者」

姿を隠している子フェンリルを罵るケルベロス。偶然か、それとも罵声が聞こえたのか、その直後にケルベロスの体が木の葉の様に宙を舞った。

硬質な体毛の奥にある肉が裂かれ、血飛沫が飛び散っていく。子フェンリルの恐らくは爪撃をまともに受けてしまった。

「アオォォォン！」

胴体半ばまで裂かれる傷を負いながらケルベロスは身を捩り、前足に渾身の力を込め

て振る。
何も無い空間にケルベロスの爪によって流血が起こる。自分の身を犠牲にしてケルベロスが子フェンリルの位置に目印を付けた。
その瞬間、シンは地面を蹴り砕く勢いで走り出していた。数歩で最高速に達すると空中で滴る血に向かって跳躍。
一切の躊躇も無く流血箇所に五指を捻り込む。
響き渡る絶叫。悲痛な叫び如きでシンの手が止まる筈も無く、そのまま周囲を掴むと全力で引き剥がした。
繊維の千切れる音が無数になり、流血が赤黒い肉の露出となる。子フェンリルを透明化させている毛皮の一部を無理矢理剥がす。
すると、千切れる音と共にシンが掴んでいる毛皮が子フェンリルから?がれ落ちる。体を動かし自ら千切ることでシンから逃れたのだ。
シンは子フェンリルの毛皮を投げ捨て、ケルベロスの方へ向かう。そして、鬣部分を掴むと少し乱暴だが引き摺って運んでいく。
ケルベロスの受けた傷は深く、臓物が今にも零れ落ちそうである。シンは渡されていたフェニックスの涙をケルベロスの傷口へ掛ける。染みて呻くが裂けた傷が塞がり始め、薄い膜が出来上がる。しかし、それでも完治には至らない。

「ピクシー」
「うん」
ピクシーはケルベロスの胴体に触れ、治癒の魔法を施す。フェニックスの涙で治し切れなかった部分も塞がっていき、取り敢えず流血は止まった。
「――まだ行けるか？」
重傷を負った者に対し、酷と言える問い。
「アタリ前ダ」
だが、ケルベロスは当然の様に答える。ここで大人しくしていろと言われる方が、ケルベロスのプライドが深く傷付く。
ケルベロスの答えを聞いて、シンは治療を施されている彼から目を離し、子フェンリルを探す。ケルベロスの捨て身によって付けられた目印、否、それは既に狙うべき的と化している。
「雷光よ！」
宙にある赤黒い肉へ向け、バラキエルが雷光を槍の様に投擲する。朱乃よりも数段上の威力を持つそれは轟音と共に子フェンリルへ命中。
体の中へ直接雷を流し込まれた子フェンリルは堪らず透明化を解除。体を激しく痙攣させる。陸の上に上がった魚の様に跳ねる子フェンリル。それが止まると泡が付着

した口腔から煙を上らせる。だが、まだ息がある。それどころか立とうとしていた。尋常じゃない生命力である。

バラキエルがもう一撃浴びせようと構えるが、すぐに後ろへ下がる。バラキエルの目の前を炎が通過。残り二匹の量産型ミドガルズオルムが子フェンリルを守る為に妨害に入ったのだ。

バラキエルは横目でもう一匹が炎を吐こうとしているのが見える。攻撃を子フェンリルから量産型ミドガルズオルムへ変えようとした時、タンニーンが量産型ミドガルズオルムへ飛び掛かり、喉元に喰らい付く。

片腕、片翼を失っている重傷とは思えない程の俊敏さ。そして、顎の力だけで自分と同じ体格の量産型ミドガルズオルムを持ち上げた。

喰らい付いたままタンニーンは火炎球を吐く。隕石に匹敵すると言われるタンニーンの炎を直にもらった量産型ミドガルズオルムは、その炎の破壊力に耐え切れず頭部と胴体と焼き切られる。

分断された頭と体は少しの間動いていたが、断面は完全に炭化し、一部は蒸発までしているので助かる筈も無く動かなくなってしまう。

「はあ……はあ……」

残りの量産型ミドガルズオルムは一匹。タンニーンがこちらもやろうとするが、脚か

ら力が抜けて倒れそうになる。踏ん張って堪えるタンニーン。ロキの凍結によるダメージがまだ深く影響を及ぼしている。

最後の量産型ミドガルズオルムがそんなタンニーンに襲い掛かろうとするが、突然目の前に魔法陣による障壁が現れて、それに衝突して阻まれる。

量産型ミドガルズオルムが障壁にへばりついている間に周囲に幾つもの魔法陣が出現し、そこから放たれる魔法の光が量産型ミドガルズオルムに放たれる。

魔法陣を発動させたのはロスヴァイセ。攻撃と防御の魔法を同時に発動させる高等な技術を見せる。

「今すぐ回復を！」

アーシアの神器による治癒の光がタンニーンに降り注ぐ。治癒の神器による効果は、タンニーンの凍結によって深いダメージを受けた体を回復させていくが、それでも治りが遅い。それ程ダメージが深刻であることを意味する。

「助かる……！」

タンニーンは震える脚に力を込めて背筋を伸ばして立ち上がった。

その間にロスヴァイセの魔法によって量産型ミドガルズオルムは身を捩って苦しむ。魔法陣から放たれる光は頑丈な量産型ミドガルズオルムの鱗を溶かし始めていた。逃げようにも量産型ミドガルズオルムを妨害した障壁が四方にも展開して閉じ込めてい

るので逃げられない。
　遂に防御の為の鱗が完全に溶け、魔法陣の光が量産型ミドガルズオルムの肉を貫く。防御する術を失った量産型ミドガルズオルムに為す術はもう無く、最期はロスヴァイセの魔法によって穴だらけとなって絶命した。
「やれやれ、情けない」
　重傷を負うスコルと如意棒によって身動きが取れないハティ。そして、全滅をした量産型ミドガルズオルムを見てロキは失望した様子を見せた。だが、そこに怒りも焦りも哀しみも無い。手駒を封じられ、失ってもロキの余裕は微塵も揺るがなかった。
「甘やかしすぎたか？　――最初のガキ共の出来が良すぎたなぁ、無駄に期待をしたぜ。――そうだな」
　もう一人の己と雑談と反省をする姿は不気味であると同時に底知れぬ強者の雰囲気を出す。実際に多対一の状況下で並び立つシンたちなど眼中に無い振る舞いは、強者のそれであった。
「しかし、お前たちには悪い事をしたのかもしれないな」
　ロキが笑う。それに合わせ、ただでさえ低かった気温が急速に下がっていく。寒いを通り越して痛みを覚える程の冷たさになっていた。
　スコルとハティ、量産型ミドガルズオルムたちを倒した時の高揚すらも一気に凍り付

きそうな程の冷気。
「勝てるかもしれないという幻想を抱かせてしまったっ！」
ロキから発せられる殺人的な冷気の波。視界に入るもの全てが瞬時に凍結していく。
「部長っ！　皆っ！」
偶然、ロキの魔法で吹っ飛ばされて射程外にいた一誠はその光景の一部始終を目撃する。
極寒の地獄へと変えられていく中、シンの前にジャックフロストが駆け込み、盾になる様に四肢を限界まで広げる。
「ヒホォォォォ！」
ジャアクフロストが見せた様にジャックフロストの小柄な体に磁石の様に引き寄せられていく冷気。しかし、ジャックフロストの吸収する許容量を遥かに超えているロキの冷気は、ジャックフロストが守ろうとしていたシンを確実に凍結させていく。ジャックフロストが威力を押さえてこれである。彼が居なければ即凍死していたかもしれない。
ケルベロスの治療をしていたピクシーも冷気が迫っていることに気付く。逃げようにもピクシーの羽では冷気から逃れられない。
「グルルルル！」

急に影が差したかと思えば、ピクシーは地面に体を押え込まれた。ケルベロスが圧し掛かり、自分の身でピクシーを冷気から守ろうとする。
「ダメだって！」
押さえつけられたピクシーは、ケルベロスを離れさせようとポカポカと叩くが、ケルベロスを押し返すことは到底出来なかった。
「グル、ルルル！」
凍り付く速度を少しでも緩めさせるため、ピクシーまで凍り付かない様にするため、ケルベロスは体内で炎を生み出し、そのまま閉じ込めておく。それによって僅かながら凍結を防げる。
「ヒホォォォォ！」
ジャアクフロストは持てる全ての力で迫り来る冷気をその身に取り込んでいく。最初に受けた時とは比べ物にならないレベルの冷気がジャアクフロストの体内に入っていき、ジャアクフロストは胸焼けの様なものを感じた。
「おい！　ジャアクフロスト！　無理すんな！」
美候が声を掛けるが、ジャアクフロストは止めない。
「アーサー！　早く空間を斬るんだぜぃ！」
「分かっています！　ですが……！」

コールブランドを一閃させ、空間に裂け目を生み、そこに一時的に避難するつもりであった。だが、アーサーがコールブランドで空間の裂け目を作った片っ端から裂け目の間に蜘蛛の巣の様に裂け目同士が繋がり始め、すぐに修復されてしまう。

「やられました……！　ロキがこの周囲一帯に魔法を施しているみたいです……！コールブランドの能力を封じる為に！」

スコルとハティをけしかけたのは、自分たちを倒す為だけでなく一枚でも手札を引き出させることも目的としていたのだ。そして、それに抜け目なく対処する。ロキの掌で踊らされていたことに気付き、アーサーは端正な顔を悔しさで歪める。

戦い専門の美候は、ロキの圧倒的な冷気を防ぐ手立てを持たない。せいぜい自分一人なら逃げることが出来るが、仲間を置いていくなど論外。

黒歌を見る美候。視線の意図を察した。黒歌はいつも立てている猫の耳を力無く垂らす。

「ごめんね」

「謝ることはねぇぜぃ」

仙術でも神の力の前には及ばない。無力であることを謝罪する黒歌に、美候は快活に笑ってみせる。黒歌の力でも駄目ならば仕様がない。

「――つーわけだ。わりぃが頑張ってくれい、ジャアクフロスト」

「ヒホホホ！　ヴァーリの代わりに俺様がお前らの面倒を見てやるホ！」
　仲間の命を背負ってもジャアクフロストの態度は変わらない。寧ろ、ここにヴァーリが居たら為していたであろうことを自分が代わりに為すことに喜んでさえいる。
「助かったらお前ら全員、俺様に感謝の土下座をするんだホ！」
「へいへい。分かった分かった。土下座でも何でもしてやるぜぃ！」
「本当、可愛い見た目の癖に可愛くないにゃん」
「まあ、それを合わせて彼の魅力ですから」
　ジャアクフロストのどこまでも上からの態度に呆れつつも、一時だがロキの冷気の冷たさを忘れることが出来た。後はジャアクフロストを信じて耐えるだけである。
　タンニーンは今からやることがこの戦いに於いて最後の役目であると自ら定めた。
　碌に動かないこの役立たずの巨体を最後の最後で役立たせることが出来る。
　リアスたちに迫る冷気の波動。その前にタンニーンが壁となる。
「く、ぐう！　おおおお！」
「タンニーン！」
　超低温によって急速に冷やされるタンニーンの体。鎧そのものと言っていいドラゴンの鱗が、急激な凍結によってひび割れていく。
「リアス嬢……！　その眷属たちよ……！　暫くの、辛抱だ……！」

タンニーンの巨体はリアスと一誠を除いた眷属、そしてバラキエルも冷気から守る。
「貴方の体が！」
「どうせ、まともに、動かない身！　少しでも役立てられるなら、本望っ！」
リアスは止めさせようとするが、タンニーンの意志は強固であった。
だが、冷気の直撃は避けられても余波だけで体が凍り付きそうになる。
「タンニーン殿、私もお手伝いしよう！」
バラキエルは手を輝かせて、その手を振るう。雷光が礫の様に散るとそれらが稲妻によって繋がり出し、タンニーンを含めた自分たちを守る雷光の網を張る。
雷光から発せられる電熱がロキの冷気を軽減させる。
「ヒ～ホ～。なら僕も～」
「ランタン君？」
リアスたちの前にフヨフヨと浮遊してきたジャックランタンが、カンテラを掲げる。カンテラの炎が激しく燃えると、下がっていた温度が徐々に上がってくる。
バラキエルの雷光と、ジャックランタンのカンテラによる二重の耐冷防御がロキの冷気から皆を守ろうとしていた。
各々が身を犠牲にし、あるいは尽力することでロキの冷気を耐えようとする。その光景はロキにある種の感動を覚えさせる。

何せ凡庸でありきたりな愛と友情の完結よりも、足掻いても無駄だった悲劇的な結末の方が感情を揺さぶられる。

シンたちは全力を以って抗っているが、ロキはまだ全力を出してすらいないのだ。

「我が齎す死は優しいぞ？　眠る様な死だ。――夢心地を保証してやるよ」

「やめろぉぉぉ！」

ロキの力の高まりを感じ取り、一誠は魔力噴射を全開にして突っ込んでいく。ミョルニルレプリカに魔力を込め、更に『赤龍帝の贈り物』により破壊力を可能な限り引き上げる。

「おおおおおっ！」

必死な様子でミョルニルレプリカを振り下ろす一誠に対し――

「はっ」

――ロキは一笑。その笑みに一誠は悪寒を覚えるがもう止めることは出来なかった。

その刹那、世界は白く染められる。

数秒後、落下音がし、ロキの足元に転がる物体。全身を氷漬けにされた一誠であった。それだけでは無い。ロキを中心にしてあらゆるものが凍て付く。ロキのみが動くことを許された静止世界がそこには広がっていた。

「他愛ないな――下っ端相手に大人気ねぇな。まあ、こういうのも面白いからしょうが

ねぇが――相変わらず悪趣味なことを言う。下っ端でも容赦なく潰すのが礼儀というものではないか？　――ひゃはは、そういうことにしておいてやるよ」

リアスたちはロキの予想に反して粘ってみせたが、結果を見ればこの通りである。幾ら束になろうと神である自分には敵わない。

魔人である人修羅を警戒し、もう一人の自分も使う本気を見せたが、魔人であっても自分には遠く及ばない。警戒し過ぎたとも言える。

「用心をするなら、マタドールの方だったか？　――あんな奴と関わるだけ損だぜ。何の得にもなりゃしねぇ――分かっている。しかし、結局姿を見せなかったな……」

戦闘狂であるマタドールが、戦いが終わるまで一切姿を見せなかったことに安堵よりも先に違和感を覚える。事前に接触して釘を刺しておいたが、律儀にそれを守って今日まで戦闘行為を全くしてこなかった。戦いと勝利のカタルシスを手に入れる為に乱入してくる確率が高いと踏んでいたが、予想が外れた。

「それならそれでいいが」

ロキは凍り付いて動けないリアスたちの頭上に無数の魔法陣を展開させる。そこから魔法を放てば、氷像と化した彼らは簡単に砕け散る。

「さよならだ、リアス・グレモリー御一行」

別れの言葉と共に魔法陣から魔法が放たれる――かと思いきや、突然ロキはそれを中

断し、ある方角を凝視する。体ごと身構えるその姿は強い警戒があった。
「何だこれは……！」
信じられない程巨大な力を感じ取った。しかも一つだけでなく二つも。どちらもロキの力を上回っているかもしれない。そんな力を感じ取って無視が出来る程、ロキは鈍感でも剛胆でも無かった。
「この感じ、白龍皇か……！　それに魔人の気配も……マタドールもいるのか！」
一個体からこれ程の力を出せるのかと思うと寒気立つ思いである。この力を相手にするかもしれないと考えると、ロキは無意識に息を呑み喉を鳴らした。白龍皇と魔人。二つの大きな力が共に感じられたということは交戦状態にあると思われた。勝った方をロキは相手にしなければならない。
しかし、ロキの不安とは裏腹に強大な力は突然感じられなくなる。
「消えた……隔離されたか？　――或いは両方くたばったのかもしれねぇな。そっちの方がこっちとしてはありがてぇ。――あまり楽観的には考えたくはないがな」
事態を重く見た悪魔側が二人を隔離したのではとロキは予想する。同時にあの戦いに巻き込まれただろう我が子フェンリルの不運に同情する。
恐らくは生きていないだろう、とロキは思った。仮に生きていたとしても戦える状態ではないと思われる。

フェンリルが使えなくなったことは痛いが、あれだけの力を秘めた白龍皇と魔人を遠ざけることが出来たのは大きい。ロキもフェンリルを悼み賞賛の言葉を送る。心の中で。

暫し黙禱染みたことをしていたロキ。だからこそ、ほんの少しだけそれへの反応が遅れる。

体に張り付いた氷を砕きながらぎこちない動きで巨体を起こすタンニーンに。

「お、おおお、おおおおっ！」

赤紫色の姿を真っ白に染め上げられたタンニーンが大口を開ける。その口から昇る白い煙は冷気のものではない。

防御用の魔法陣を展開し、タンニーンの攻撃に備えるロキだったが、タンニーンの吐いた炎はロキへ飛ぶことはなく、見当違いの方向へ飛んでいく。

顔面まで氷に覆われ、視界も閉ざされた状態では無理も無い。タンニーンの最後の足掻きにロキは軽い拍手を送る。

「恐るべき生命力だ。だが、ここまでだな」

ロキの言う通り、タンニーンの体から力が抜け倒れる――直前に僅かに踏み止まる。

「ここ、まで、だ。後は――」

そこまで言い掛け力尽きるタンニーン。ロキはその言葉に不穏な予感を覚えた。そ

れを後押しするかの様にいつまでも聞こえないタンニーンの炎の着弾音。もう隕石の衝突並みの爆発音が鳴っていい筈。

外れたタンニーンの炎。ロキの記憶が正しければその方向には――ロキの視線がそちらへ向けられた。

「何……？」

巨大な炎の塊が空中で留まり、その大きさを縮小させていく。小さくなっていくことで炎の先に誰かが立っていることに気付く。

やがて、全ての炎が吸収され、全身から熱気を放ち極寒世界を溶かし始めるシンの姿が見える。

「タンニーンの炎を取り込んだのか……――はっ！　どいつもこいつも吸収、吸収！　戦い辛いんだよっ！　鬱陶しい！」

もう一人のロキが苛立ちのまま吐き捨てると、手を振り下ろす。放たれた冷気がシンに向かって怒涛の如く押し寄せてくるが、シンは大きく息を吸い込む。本来ならマイナスの空気を吸い込めば肺に多大なダメージを与えるが、シン自身が熱源となって周囲を急速に暖めているので思いっ切り吸い込める。

限界まで空気を吸い込むと、今度は一気に吐き出す。だが、吐き出されるのは空気ではなく橙色に輝く業火であった。

タンニーンを彷彿とさせる『炎の息』が、ロキの冷気と衝突し、一瞬で相殺されてしまう。それを見たロキは目元を微かに震わせた。
「ジャックフロスト」
「ヒ、ヒホ……」
後ろにいるジャックフロストに声を掛けると苦しそうな声で返事が戻って来た。シンが強烈な冷気を耐えられたのは、殆どをジャックフロストが吸収してくれたお陰である。しかし、その代償としてジャックフロストは見るも無残な姿になっていた。
「オ、オイラも戦うホー……！」
「――止めておけ。そんな姿で」
シンは後ろで転がっている大きな雪玉に対して、そう言った。よく見れば小さな手足が付いておりバタバタと動いている。
「ヒ、ヒホォー」
この大きな雪玉こそジャックフロストの成れの果てである。体に隠れて見えにくいがちゃんと頭も付いている。ロキの強力な冷気を取り込むだけ取り込んだせいで肥満体の様な体になってしまい、碌に動けなくなってしまっていた。
冷気を相殺されたロキは、観察する様な目でシンを見る。
（炎を吸収しただけであれ程の威力……？　自身の魔力とタンニーンの力を掛け合わせ

た結果か……？　我々の様に）

そう考えた途端、不快感を覚え面白くなくなる。自分たちの領域に土足で踏み込まれた気分である。

危険というよりも目障りな存在と認識し、ロキは魔法陣を展開しようとするが、視界の端に閃光を映したことで、魔法陣をそちらへ展開。すると、堕天使の光と雷を合わせた雷光が魔法陣に衝突。

雷光は魔法陣によって阻まれたが、それが消えた直後に真紅の魔力が魔法陣に触れ、透過でもしたかの様に魔法陣に穴を開け、ロキ本体を狙う。

「くっ！」

体を捻り、真紅の魔力を躱すロキだが、衣服の一部が触れ、跡形も無く消滅する。

「リアス・グレモリー……！」

ロキの目に映り込む霜が付着し斑となった紅色の髪。白い肌を更に青白くしながらも強い意志を込めてリアスはロキを睨んでいた。

無事なのはリアスだけではない。朱乃、アーシア、小猫、ギャスパー、木場、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセが顔面蒼白状態だが動き、戦う意志を見せている。

助かったのはタンニーンが我が身を犠牲にして盾になってくれたこと。そして――

「……無事か？」

「……ええ」

「……そうか、それなら、いい」

朱乃が複雑そうな視線を向けるのは、地面に膝を突いたバラキエル。黒翼は殆ど凍り付き、冷え切った気温の中で大量の汗を流している。彼が周囲に巡らせた雷光による結界もまたリアスたちを救う助けとなった。

そして、もう一人――

「ラ、ランタン君……！」

地面に転がる氷像と化したジャックランタン。彼が必死になって周りを暖め、温度を下げない様にしたお陰でリアスたちはまだ動ける。しかし、代償として冷気に弱いジャックランタンは完全に凍り付けになってしまった。

ギャスパーは友の死を目の当たりにし、冷気ではない震えに全身を襲われる。が、そこで気付いた。ジャックランタンが握り締めるカンテラにまだ小さな火が灯っていることに。息を吹きかければ容易く消えそうな小さな火だが、それはジャックランタンがまだ生きていることの証明であった。

「待っててね……！」

友が救われることを願い、ギャスパーは冷たくなっているジャックランタンの頭を撫でた。

「生きてるかー……」
「にゃん……」
「はい……」
　美候たちもロキの冷気に耐え切っていた。しかし、体は異様に重く、ダメだと分かっているが凄まじい眠気で今にも倒れてしまいたい衝動に駆られていた。
「爺の修行よりもきっついぜぃ……」
「にゃあー……耳の中まで凍っているにゃん」
「手が柄とくっついてしまいましたよ……でも、これで剣を落とす心配は、無くなりましたね……」
「……真面目な奴が偶に言う冗談って何でこんなに笑えないんだぜぃ？」
「本当にゃん」
「……私なりに和ませるつもりだったのですがね……」
　冗句が思いの外不評だったことに、アーサーは少しだけ傷付いた表情となった。
「おい、ジャアクフロスト……大丈夫か？」
　前で猫背になっているジャアクフロストを呼び掛けるが、返事は無い。
「おい、本当に大丈夫か？」
「無事かにゃん？」

もう一度呼び掛けると、ジャアクフロストはゆっくりと後ろを振り返る。何故か口元を手で覆っていた。
「ヒ、ヒホ……今は……話し掛けるんじゃ……ないホ……うぷっ」
今にも吐きそうな様子のジャアクフロスト。ロキの冷気を大量に吸収したが、ジャアクフロストの体型はジャックフロストの様に丸々と大きくなっていない。それは彼が上手くロキの力を取り込んだからであるが、それでもやはり許容量を超えていたらしく、今にも取り込み切れなかった力が口から逆流しそうになっていた。
「だ、大丈夫ですか？　背中を擦りましょうか？」
「い、今のオレ様に、さ、触るんじゃないホ、さ、触ったら、爆発するホ！　うっ！」
頬を膨らませるジャアクフロスト。それを見て、美候たちは一歩下がる。だが、ジャアクフロストは美候たちの前で意地でも醜態を晒したくないのか、そこで留まる。
「オ。オレ様は暫く休憩だ、ホ……後は、お前らに、任せてやる、ホ……」
体調を最悪でも上から目線で言うジャアクフロストに苦笑しながら、美候たちは弱った体に鞭打ってジャアクフロストの前に出ていった。

◇

（眠い……）
一誠を襲うどうしようもない程の眠気。今までこんなにも眠いと思ったことは無い。
眠っている場合ではないと分かっているのに、瞼を開けることが出来なかった。
『相棒！』
極度の体温低下で意識を失おうとしている一誠にドライグが必死に呼び掛ける。
（ドライグ……）
それに応じようとするも、体は一誠の意志に応えてはくれなかった。
すぐ近くなのに遠くに聞こえる仲間たちの声。皆が戦っているのが伝わってくる。
（俺も……）
自分も戦わなければならない。その気持ちとは裏腹に一誠の意識は闇の中に沈んでいった。
「あっ」
目が覚めるとそこは一誠が意識を失った時に見る謎のベッドルーム。だが、いつもいる筈の夕麻の姿は無かった。
代わりに部屋の隅で無言で立つ歴代赤龍帝の思念。マタドールに怨みを抱き、度々一誠の神器を暴走させていた思念である。
しかし、この時の思念は前とは違い、いきなり一誠に襲い掛かることはしなかった。

「あの……ん？」
一誠にしか聞こえない声。それは一誠のある覚悟を確認するもの。
「……ですよね。あのロキを倒すには、それしかないです」
一誠は自嘲気味に笑う。また声無き声が聞こえた。
「そりゃあ、怖いですよ……怖いけど、命懸けにならなきゃただ死ぬだけなんです……何も出来ずに！　それだけは……それだけは出来ません！」
それを聞き、思念から声が飛ぶ。
「え？　一緒に？」
聞き返そうとした時――
『相棒っ！』
――ドライグの声で一誠の意識は暗闇から戻って来た。
『寝るな！　寝たら――』
「我、目覚める、は……」
『それは……！』
辛うじて意識を保っている一誠の口から紡がれるか細い詠唱。
「覇の理、を神より、奪いし、二天龍、なり……」
『――それしか道は無し、か』

「無限を嗤い、夢幻を、憂う……」
『だが、それがお前の選んだ選択なら――』
「我、……赤き覇王と、成りて……」
『――俺は最期まで付き合おう！』
「汝を……紅蓮の煉獄に、沈めよう……！」
一瞬の静寂。それは嵐の前の静けさ。次に来るのは天地を揺るがす膨大な魔力の波動。
『Ｊｕｇｇｅｒｎａｕｔ　Ｄｒｉｖｅ！』

覇龍、仕込

それが顕現した時、真っ先に放たれたのは咆哮であった。否、咆哮というにはあまりに痛々しい叫びであり、肺を限界まで絞り、喉を極限まで震わせる身を裂かれる時に発する絶叫に近い。

響き渡る絶叫は、空気も大地も震わし、凍結した地面は罅割れ、木々は砕ける。

ドラゴンに似た鎧はより鋭い形に変質。背中には巨大な翼が生え、両手両足からは刀剣すら容易く断てそうな爪が揃い、兜からは角が幾つも伸びていた。

『赤龍帝の鎧』よりもよりドラゴンらしい見た目に変貌する一誠。虚仮脅しなどではなく尋常ではない暴力的な量の魔力を無差別に放つその姿こそ、赤龍帝の最期の切り札である『覇龍』。

「イ、・イッセー……」

怪物同然と化した一誠の姿を見て、リアスは震えた声でその名を呼ぶ。あれ程一緒に居た一誠を恐れるなどリアスにとってあってはならないことであったが、『覇龍』が放つ膨大な魔力が悪魔としての本能に恐怖を与え、リアスの意志に反して彼女の体を寒さ以外で震えさせる。他の眷属たちも同じ様な状態であり、何とか震えを止めようとある者

は奥歯を強く噛み締め、ある者は爪が食い込む程自らの腕を掴み、ある者は手の感覚が無くなる程、持っている武器を握り締める。

「ギャアアアアアアア！　グギャアアアアアアアアアア！」

立っていた一誠はその場で四つん這いになり、絶叫を上げながら目を動かし、周囲を確認する。物理的に緑の光を発している目を動かす度に残像が残り、頭部を左右に動かし、首を伸ばしたり、縮めたりしている姿は獣そのものである。

「あれが赤龍帝の『覇龍』か……――はっ、魔力のデカさは認めてやるがケダモノになっただけじゃねぇか。頭の中身を一瞬で空っぽにするなんて大した手品だ――確かに強大な力だが、随分と醜いな」

周囲を確認していた一誠は突然動きを止める。翼を大きく広げ、四足が大地を割る程に力を込める。

『覇龍』と化した一誠は、その本能でこの場で最も危険な存在が誰であるかを判別し、見つけた。それを排除する為に一誠の中の『覇龍』が殺意と本能を?き出しにする。

動く。誰もがそう感じ、ロキは次に来るであろう衝撃に備え密かに魔法陣を空間に仕込む。

一誠の姿が消える。その動きは音を置き去りにする速度。

そして、一誠はロキへ襲い掛かる――のではなく何故かシンに向かって飛び掛かって

いた。
「なっ」
自分に来るものだと思っていたロキは言葉を失う。他もロキと似た様な状態であった。絶句してしまうロキらの前で一誠は、口部状に変形した兜でシンに喰らい付こうとする。
「――随分と利口な判断をするな」
頭に齧り付こうとしていた兜を片手で鷲掴みにして押さえ付けながら、シンは皮肉、聞く者によっては自嘲とも取れる台詞を一誠に送った。
「イッセー！　止めなさい！　イッセー！」
「イッセーさん！　違います！　間薙さんは仲間です！」
リアスとアーシアが血相を変えて叫ぶ。冷気で体力を削られているが、それに構わずに大声で呼び掛ける。
強大な力に振り回され、理性を失っているとは言え、一誠が友人であるシンを傷付けようとする姿など見たくはない。
「グ、ガガ、アアア……！」
その必死な叫びは一誠に届いているのか、全身に力が込められ、それが暴走する力を抑えているのかガクガクと体を震わせている。獣性によって押し込まれた理性が抗っ

ている様にも見える。
その証拠にシンに噛み付こうとするだけで両手両足の爪でシンを切り裂こうとする動きがない。そうでなくとも背中の翼、もしくは魔力を背部から噴射すれば掴んで押さえているシンを地面に叩き伏せ、そのまま擦り下ろしてしまうことも可能である。
細い糸の様な理性が、辛うじて『覇龍』の手綱となっていたが、それも何時まで持つか分からない。
「イッセー君！　止めて！」
「イッセー！　正気に戻れ！　お前の敵は彼ではない！」
仲間の呼び掛けが『覇龍』の暴走を食い止めるが、それだけでは足りない。何か決定的と言える強いショックを与える必要がある。
何が一番動揺させるかとシンは考え、一つの答えを出す。そして、答えと同時にそれを実行する。
兜を掴んでいた両手を離し、牙と化している部分に右腕を差し出す様に押し込む。この時点で兜から生えた牙が腕を掠り、何箇所に裂傷を生む。
そこから何を思ったのか、左拳で一誠の顎を突き上げた。
「グアッ！」
衝撃によるものか、シンの行動に驚いたものか分からない声を発する一誠。突き上げ

られた拳のせいで兜の口が閉じ、差し込まれていたシンの右腕に牙が突き刺さる。
右腕の傷から流れ落ちる血は、自然と兜の中へと注ぎ込まれていく。タンニーンの炎を吸収した影響で異常なまでの熱を含んだシンの血が鎧の中に伝わり、血の匂いで鎧内部を満たす。
「ガ、アアア、ガ……！」
苦しむ様な呻き声を出し始める一誠。誰の血に触れているのかか細い理性が気付き、それを激しく揺さぶる。
そこにもう一度左拳を叩き込むシン。牙は更に深く食い込み、流血の量も増える。
「これが望みだったんだろう？」
自傷行為に対し、何も感じていないかの様に平然と言うシン。
「何なら腕一本くれてやる」
その言葉は挑発ではなく紛れない本気に聞こえた。少なくとも傍から見ていたリアスたちは、シンがやると言ったら本気でやると思っている。
「くれてやる代わりに――相手を見誤るな」
地面に亀裂が出来そうな程の体の震えがピタリと止まる。そして、閉じていた口を自ら開ける。未だ、兜から覗かせる緑の眼光には獣性が宿っているが、これ以上シンに害を与える様子は無いらしい。

一先ず一誠から危険性が失われ、リアスを含む眷属たちは安堵の息を吐く。その直後、一誠はシンの体を突き飛ばした。

まだ完全に暴走が解けていないのかと思われたが、シンが突き飛ばされると同時に一誠の周囲に魔法陣が展開される。足元、頭上、前後左右を埋め尽くす程の魔法陣の密集。

その魔法陣から極光の輝きを持つ魔法が全方向同時に放たれた。攻撃の魔法陣は同時に防御の精神も持っており、一誠を魔法陣の中から逃がさず、また発動させた魔法も洩らさない。魔法による完全密閉の全方位攻撃が一誠を極光で呑み込む。

「随分と舐めた真似をしてくれるな、赤龍帝……」

空中で魔法を発動させているロキ。その顔には今までにない怒りが浮かんでいた。

『覇龍』と化した一誠が最初に狙ったのは、ロキではなくシンであった。その光景を見てロキは、暴走して敵味方区別を無くした愚者――とは見なかった。『覇龍』と化したことで獣同然となっていた一誠。溢れんばかりの力で自分を無視して、格下と認識しているシンを襲ったことにロキの神としてのプライドが大きく傷付けられた。

弱かろうと魔人だから、という理由で襲ったのではない。この場で最も危険と判断してシンを襲ったのがロキには分かった、分かってしまった。

あろうことか北欧の悪神など眼中に無いかの様に。

ロキがわざと道化の様に振る舞い、相手に侮らせる、格下と見做させたのならまだ意

図してやったことなのだから納得出来る。だが、自分に来るものと思い、構え、無視してこちらを道化にすることは許されない、許しては置けない、決して。

ロキの中の神という誇りはそれ程までに大きい。

「お前は欠片も残さずに屠ると約束しよう、天龍。――ひゃははは、久しぶりに本気でキレているじゃねぇか、いいぞぉ！　悪神を舐めた罰を味わわせてやれ！」

静かに怒るロキに対し、もう一人のロキはそれを煽るかの様に高揚した声を上げる。

「イッセー！」

リアスは魔力を集中させて球状にし、密閉されている一誠目掛けて投げ放つ。脱出させる為の風穴一つでも開けられればいいとの思いで放ったが、その小さな足掻きすら今のロキは許さない。

リアスの滅びの力を込めた魔力の前に魔法陣による結界が張られる。結界に魔力が触れるとそれを簡単に貫通するが、その穴を埋める様に別の結界が展開される。ロキは魔法陣によって結界を無数に重ねていたのだ。

リアスの魔力は結界を次々に貫いていくが、結界を貫く度に威力を削がれていき、一誠に届く前に消えてしまう。ロキは滅びの力がどれほどのものか一度見て正確に把握している。同じことが通じる程甘くはない。

「恐ろしい力だが、魔王に比べればまだまだ非力だな。リアス・グレモリー」

自身の力を防がれ、リアスは悔しさで表情を歪め、口を強く噛み締める。
リアスに続いて、朱乃が雷光を、木場が聖魔剣で、ゼノヴィアが聖剣の二刀流で一誠を閉じ込めている魔法陣をどうにかしようとする。
ロキはリアスたちに向けて無造作に腕を振る。猛烈な冷気がリアスたちへ襲い掛かった。
「下がって！」
ロスヴァイセが叫び、リアスたちを後方に下げながら自らは前に出る。迫る絶対零度に近しい冷気に対し、宙にそれぞれ描かれている文字が違う魔法陣を複数展開し、ロキの冷気からリアスたちを守る。
複合させた魔法陣の相乗効果によってロキの冷気を防ぐことが出来たが、辛うじてである。ロスヴァイセは凍てつく様な寒さの中で滂沱の汗を流しながら一瞬たりとも気を緩めることなく魔法陣の維持を続ける。
既に自分を含め、リアスたちの体温はギリギリの所にあった。タンニーンたちが身を以って守ってくれたおかげで危機を免れたが、これ以上体温が下がれば動けなくなり、そのまま死に繋がる。
ロスヴァイセは自分とリアスたちの命を背負うという重圧に屈せずにロキの攻撃に耐える。

魔法陣を侵食する様に凍り付き始めるのに気付けば、魔法陣の効果が失われる前にすぐに新たな魔法陣を展開して複合魔法陣の効果を下げない様にする。下げたら即座に破られてしまうからだ。

ロキの攻撃はたった数秒のことだが、その間に何十回も魔法陣の再展開と維持をし続け、その度にロスヴァイセは消耗する。

冷気が止む。だが、ロスヴァイセはそれでも魔法陣の展開を止めなかった。限界寸前までそれを張り続ける。

「――オーディンの見る目だけは本当に褒めてもいいな」

自分の攻撃を耐え切ったロスヴァイセを、ロキは遠回しに褒めた。ロキの手の中に魔法陣が浮かぶ。

「これはどうだ？」

冷気は魔法陣で防げたが、今から放つメギドラは魔法陣を容易に破る。

ロスヴァイセはロキが何をしようとするのかを察し、青白い顔から更に血の気を引かせ死人と区別付かない様な顔色となる。

息をする様に複雑な魔法陣を組み上げたロキは、その力を解放――しようとして止まった。

視線が一誠を閉じ込めている魔法陣に向けられる。それにつられて他も同じく一誠

の方を見た。

「……何か聞こえます」

小猫が気付いて小さく呟くと、リアスたちも耳を傾ける。

『――ｉｄｅ』

確かに何かが聞こえる。ロキも同じものが聞こえている様子で眉間に皺を寄せていた。

嫌なものを感じ取ったのか、ロキは一誠を囲う魔法陣を更に重ねる。その直後にロキは訝しむ表情となった。展開している魔法陣の力がロキの想定よりも下回っているのだ。

まるで何かに力を削げられているかの様に。

「これは……」

『Ｄｉｖｉｄｅ!』

今度はハッキリと聞こえる。それは白龍皇が半減の力を発する際に響く音声。この場に白龍皇は居ない。ならば半減の力を使っているのは――

『Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！』

魔法陣内から連続して鳴り響く声。各魔法陣から放たれる極光はその声が響く度に輝きと威力を失っていく。

やがて維持することすら出来なくなったのか、全ての魔法陣が一斉に砕け散り、極光も収まる。

閉ざされた魔法陣から出て来た一誠。その背にある翼は白色に輝き、白龍皇を彷彿させる。

「白龍皇の力だと……？　いつの間に……！」

一誠が白龍皇の力を使ったことにロキは驚く。一誠自身、現在の成功率が低い為に実戦で使用することは滅多に無いので知らなくてもおかしくはない――が、ロキは一誠が白龍皇の力を取り込んでいることを知る機会があった。それは気まぐれで観戦したリアスとソーナのレーティングゲームの時である。そこで知っていたのならきちんと対策を考えていただろう。途中で飽きて観戦を放棄してしまったことのツケが今になって巡ってきた。

「グルアアアアアアア！」

宙に居るロキに向かって一誠は威嚇の咆哮を上げた。今度はロキを敵として認識している様子。しかし半暴走状態である為に油断は出来ない、と皆が思っていた所にシンが一誠の隣に歩いていく。

そして、一誠と並ぶなり、その側頭部を指で軽く二、三回叩いたのだ。
シンの蛮行に誰もが絶句してしまう。猛獣を刺激するも同然である。
一誠は横目でシンを睨む。だが、それだけで視線をすぐにロキへ戻してしまった。
「今度はちゃんと分かっているみたいだな」
真っ先に襲われたというのに、一誠を挑発する様な行動をとるシンに見ている方の寿命が縮む思いである。
「連携なんて最初から期待していない。こっちは好きにやる」
シンは右手に魔力剣を形成。いつもはマグネシウムを燃やした様な白色だが、タンニーンの炎の影響で内側に橙色の光を内包している。
「お前も好きにやれ」
ロキに向けて魔力剣を振るうと圧縮された魔力が解放され、魔力の乱れた渦がロキを襲う。更に魔力は炎へと変換され、四方八方から引き千切る様に呑み込む渦が炎の渦と化す。シンとタンニーンの力が合わさることで文字通りの熱波剣と化す。
荒れ狂う炎の渦に、ロキは舌打ちをする。冷気で防ぐには炎の熱が邪魔であった。仕方なく魔法陣で防御しようと思った時、炎の渦を突き破って一誠が突っ込んで来る。
「なっ！」
炎の渦を目晦ましにした奇襲にロキの反応も遅れる。咄嗟に魔法陣を張るが張った

ロキ自身、それでは強度が足りないと分かっていた。
一誠の拳が魔法陣に触れようとした直前に魔法陣が砕ける。一誠の発する魔力の圧によって触れずに壊れてしまった。
一切の妨げの無い拳がロキの頬にめり込む。
「ガアアアアアアアア！」
咆哮と共に拳を捻り込みながら一誠が真下に向けて拳を振り抜いた。ロキの首は限界まで捻じれながら隕石の様に地面へと叩き付けられる。
この戦いが始まって、初めてロキに攻撃がクリーンヒットした瞬間であった。
地面に落下した瞬間、シンは右足を振り抜く。収束されていた魔力が振り抜く勢いと共に幾本もの魔槍と化して空高く飛んで行くと、弧を描きながら落下。ロキ目掛けて降り注ぐ。
大地に魔槍が突き立つと、そのまま炎の柱となって炎上。複数の炎の柱が束になると巨木の如き大火となって十数メートル内を焼き尽くす。
だが、そこで攻撃は止まらない。一誠は大炎上する炎の大木に五指を向けた。指先に灯る赤い光。輝きを押し込め、魔力の球体にするとそれを指先から飛ばす。
五指から発射される五発の魔力弾。炎の大木の中にそれが入っていくと、炎の大木を内側から突き破る赤色の大輪が咲く。

一誠が発射したのは極限まで魔力を圧縮したドラゴンショット。一発の威力は、『赤龍帝の鎧』を纏った一誠が全力で放つそれを上回っている。

大地は深く抉られ、数え切れない程の亀裂が生じ、そこから断層が生まれる。地図に記された地形をいとも簡単に変えてしまった。

『覇龍』の凄まじさに誰もが息を?む。戦う為だけに存在する様な圧倒的な力と速さ。技など無いに等しいが、それを補う程の身体能力を持っている。

不安はあるが、ロキへの勝機が見える。だが、同時に嫌な予感もした。一誠が初めて『禁手』を発動した時、左腕を代価に支払っている。あれ程の戦闘力を出す為に今度はどんな代価を支払ったのか。

「――つくづく獣だな」

リアスたちの不安を一蹴する苛立った声。巨大なクレーターの上にロキが浮かんでいる。流石に無傷では済まず、殴られた頬は皮膚が破れて血を流し、纏っているローブには何箇所か黒焦げた穴が開き、煤が付いた箇所は体中の至る所にあった。しかし、あれだけの攻撃を受けてもその程度で収めてしまうロキ。心技体全てが優れているからこその結果である。

「もう少し――」

「グガアアアアアアア!」

「――最後まで聞け」

一誠は大口を開け、そこから咆哮を放つ。しかし、それは威嚇ではなく声に魔力を乗せて放ったもの。咆哮が通り過ぎた後は大地が粉砕されていく。

殺傷能力を持った咆哮に対し、ロキは防御魔法陣を展開。殺気と破壊を帯びた咆哮は魔法陣によって防御される。

『覇龍』の攻撃を完全に防ぐロキ。だが、今の一誠にとってはそんなことは些細なこと。咆哮を終えると同時に一誠は翼から赤色の魔力を噴射させて突撃。

高速で移動することで自分そのものを武器とし魔法陣に体当たり。速さと堅さ、そして重さが掛け合わせることで世界で二つと無い砲弾と化すと、魔法陣をその破壊力によって強引に突破。

破られた魔法陣の向こうではうんざりした表情のロキ。

「野蛮にも限度がある」

知性など一切無い力のみで魔法を下した一誠に苦言を呈すが、野獣そのものの一誠の耳に届く筈も無い。

一誠はロキを捉える為に、前脚――ではなく両手で掴みかかる。

鋭い爪を有した手が、ロキを掴む。しかし、掴んだのはロキの体では無くロキの手。それもロキの方から伸ばした手を組み合う、手四つの状態であった。

「まさか、トールの真似事をする日が来るとは――誰にも見せられねぇな。この無様な姿は。取り敢えず見ている奴は皆殺しだ」

己の行為を唾棄しながらも、細身の体型からは想像も付かない力で一誠の握力に拮抗する。一誠は他に攻撃手段もあったが、真っ向から力で勝負されているせいで野生が刺激されたのか、一誠の方も力で勝負しようとして結果均衡した状態となってしまう。

「――ん？」

別の方向から魔力を感じ取ったロキは、視線だけそちらに抜ける。視線の先にいたのは、全身に魔力を充填させているシン。

ロキの視線に気付くと同時に背部から曲射の様な軌道を描く魔弾を無数に放つ。

「正気か！」

弾数の多さからして一誠だけを外して狙っている様子では無い。味方撃ちを覚悟の上で攻撃をしている。

ロキはすぐに魔弾の射程外に移動しようとするが、組んだ一誠の手がそれを許さない。

「離せ！」

ロキは一誠の眼前に魔法陣を作り出し、そこから放つ魔法で怯ませようと考えたが、一誠はそれよりも先に頭突きでその魔法陣を砕き、続いてロキの額に頭突きを炸裂させ

る。

一瞬で意識が飛びかける程の衝撃が脳内を貫いていくが、ロキはそれに耐えた。

そんな攻防をしている内に一誠とロキに魔弾が降ってくる。一発、一発にかなりの魔力が込められており、ロキですら痛みを覚えるそれが数え切れない程降り続ける。

そんな魔弾の雨の中、一誠は魔弾を全身に浴びながらロキの額に頭突きを打ち込み、何度も何度も繰り返す。

「はな、せ！　こ、の！　けだ、もの、がぁぁぁ！」

頭蓋を粉砕される様な衝撃と全身に貫く様な痛みに耐えながらロキは藻掻く。しかし、ロキが言っている様に獣同然の一誠の耳にそれは届かず、喚くロキを黙らせる為に更なる頭突きを見舞う。

シンは今の一誠との連携は不可能であると最初から思っていたので、先に言った様にお互いに好き勝手に戦うことに決めた。だからこそ、一誠は熱波剣の中にわざわざ突っ込んで攻撃し、シンはロキと一誠が動けない所を攻撃した。

一誠を気遣えば攻撃は出来ず、やり過ぎれば矛先が自分に向けられるかもしれないが、それを躊躇無くやるシンの顔は、相変わらず無表情であった。

「――代われ！」

ロキからもう一人のロキへ切り替わると、二人の頭上に球体が生まれ、その中で光球

が衝突し合う。
リアスたちを戦慄させたメギドラを自分も巻き添えにして放とうとしているのだ。
一誠の野生の本能が完成しようとしているメギドラを危険と判断。背部の翼を白く輝かせる。
『Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！』
瞬時に繰り返される半減の力。メギドラの球体が一気に縮小していく。だが、ロキはこれを待っていた。
「離れろっ！」
ロキの手が解放され、そこから柄にも無く繰り出される拳の連打。一誠の鎧に数発打ち込まれるが凹みもしない。しかし、打ち込んだ箇所には代わりに魔法陣が刻まれる。
魔法陣が光を放ち、爆発。その衝撃によって一誠は地面に埋め込む勢いで叩き付けられた。
展開されていたメギドラは、効果が発揮出来ない程半減されて消滅する。
「このロキがこんな野蛮な戦い方をするとは……！　――助かったんだから文句言うな。――分かっているが屈辱だ！　これだからこういう輩は嫌いなのだ！」
殴った拳を擦りながらロキは不満を爆発させていた。知や魔ではなく、それと対極に

ある力を使う戦い方をさせられたこと、一誠の暴力に引っ張られて自分もまた同じ様な戦いをさせられたのが余程不本意であった様子。

ロキは生暖かい感触を顔に感じ、指で触れる。指先には血が付いており、ロキの割れた額から流れ出ていた。ギリギリと奥歯を噛み締め、ロキは乱暴な手付きで額の血を拭い捨てる。

「グアアアア……！」

土砂をまき散らして地面の凹みから一誠は体を起こす。相変わらず鎧には傷一つ無い。否、小さな傷が多少あったが瞬く間にそれが修復されてしまう。鎧が膨大な魔力によって修復されたのか、それともほぼ生物と変わらない姿をしているので再生能力を得たのかは分からないが、どちらにしても今の一誠には生半可な攻撃は通用しないということである。

一誠が手を伸ばす。すると、『覇龍』化の際に落としていたミョルニルレプリカが飛んできて、一誠の手に収まる。今度は反対側の手を伸ばす。

「むっ」

ゼノヴィアの手からアスカロンが消えた。

『Ｂｌａｄｅ！』

左手甲から伸びるアスカロン。譲渡していた物を強制的に回収し、装備する。

右に槌、左に剣という変形的な二刀流。その姿を見たロキは、思わず笑ってしまった。
「はっ。ミョルニルのレプリカに、アスカロンだと？」
上等過ぎる武器を構えるのが獣に等しい一誠。という光景に否が応でも失笑してしまう。使う本人が牙か爪の延長線程度にしか思っておらず、『宝の持ち腐れ』という言葉がこれ程相応しい状況は無い。
「ガアアアア！」
飛び立った一誠は、ミョルニルレプリカを振る。『覇龍』の魔力を吸って巨大化し、それに相応しい重さが備わったミョルニルレプリカによる一撃。しかし、大振りであった為にロキは後ろに下がり難なく躱した――筈だった。
「かはっ！」
胴体を抉る様な衝撃が右から左に抜けていく。それは一誠のミョルニルレプリカを振った軌跡に沿っていた。
直撃すればロキですら危ういと思うミョルニルレプリカの一振り。例え、空振りしたとしても振るった衝撃が大気を伝わり、凶器と化す。要はただの風圧でロキは息が詰まる程のダメージを受けたのだ。
そこにすかさずアスカロンで突こうとする。しかし、ロキはアスカロンの先端の前に数重に重ねた防御魔法陣を発生させて防ぐ。

アスカロンは数個の魔法陣を貫くがそこで勢いが止まる。数少ない聖剣の一本であるが、ドラゴン以外ではどうしても切れ味と破壊力が落ちてしまう様子。

だが、そんなことは今の一誠には関係の無いこと。多量の魔力がアスカロンへと注がれたかと思えば、アスカロンの剣身を媒介にして魔力を射出。

杭打機の様に剣身型の魔力が打ち込まれ、魔法陣が纏めて射抜かれる。

「ちいっ！」

貫通してくる赤い剣身を見て下へ移動するロキ。その直後に防御魔法陣を全て貫いてきた剣身型魔力がロキの肩を掠めて、彼方へ飛んでいった。

「くっ！」

熱の様に感じる痛み。ロキが掠めた部分に手を当てると生暖かい血の感触が伝わる。微かに触れた程度なのに、指が埋まる程抉られていた。

砕け散った防御魔法陣の向こう側では一誠がもう一度アスカロンから魔力を撃ち出そうとする。

アスカロンに赤い魔力が充填されていき――小さな亀裂音が聞こえた。

すると、一誠はアスカロンに魔力を充填するのを中断してしまう。よく見るとアスカロンの刃の一部に小さな欠けがある。もっと目を凝らすと無数の罅割れが剣身に出来ていた。

たった一度、『覇龍』の魔力を注ぎ込まれたことでアスカロンは大きなダメージを受けていた。あと一回同じことをすればアスカロンは確実に折れてしまう。

譲られた物を折ることを忍びないと思ったのか、それとも本能的に使えないと思ったのかは分からないが、一誠はアスカロンを手甲の中に納め、ミョルニルレプリカを両手で握り締める。

ミョルニルレプリカは更に魔力を吸い、槌部分が巨大化する。戦いでは到底使えないまで変化したミョルニルレプリカを担いで飛んでいる一誠の姿は、味方が見て頼もしいと感じると同時に恐ろしさを覚える。

一方でロキが抱く感想は真逆であった。どれだけ破壊力を増したとしても、ミョルニルレプリカからは静電気一つ発しない。『覇龍』を使用した一誠はもしかすればトールに届くまでの強さを手に入れたのかと一瞬考えたロキであったが、担い手も武器も本物とは程遠いことを改めて認識した。

勝利を齎すグングニルを携え、あらゆる魔術を自由自在に操るオーディンに比べれば知性が足りない。

万物を砕き、万雷を轟かせる剛力無双のトールに比べれば迫力が足りない。

冷静になれば良く見える。目の前の敵は、極端な力を振りまくだけのたかがドラゴンに過ぎない。

ロキ自身、オーディンによる他国の神々との融和は気に入らず、トールに至ってはこの世から消えて欲しいと本気で思っているが、同時に北欧の神々こそが最強であると確信しており、必然的にその両者の実力も認めている。

「ふっ。所詮は力だけか……色々と翻弄はされたがここまでだ。――オーディンやトールの旦那には及ばねぇな――神に血を流させた報いを受けさせてやろう！」

それに応じる様に一誠は吼えると、巨大になったミョルニルレプリカをロキの脳天に振り下ろす。

ロキは防御の為の魔法陣を今度は展開せず、影を下ろす程巨大なミョルニルレプリカに片掌だけを向ける。

ミョルニルレプリカに対し、あまりに小さな掌が槌部分へと触れる。しかし、それでミョルニルレプリカは止まらず、一誠はロキごとミョルニルレプリカを振り抜こうとする。

ピキリ、という亀裂音が誰の耳にもはっきりと届いた。

ミョルニルレプリカに触れているロキの手の骨が砕けた音では無い。寧ろ逆である。

音が鳴っているのはミョルニルレプリカの方であった。

亀裂音は瞬く間に断続的な音へと変わり、それに反応するかの様にミョルニルレプリカに罅が見え始める。

次の瞬間、ミョルニルレプリカの槌部分が完全に砕け散る。そして、それだけに止まらず、柄を伝って一誠の左半身は完全に凍り付く。翼まで凍ったことで浮力を失った一誠は下に落ちていった。

「イッセー！」

リアスは悲鳴染みた声を上げる。あれ程優位に進めていた戦いが一回の反撃で逆転されてしまった。

落下地点で動けなくなっている一誠を見下ろしているロキの顔には勝利を確信した笑みが浮かんでいた。

ロキがミョルニルレプリカに対して行ったのは、もう一人の彼が得意とする凍結魔法。ただし、広範囲を対象にしたものではなく対象を極端に絞ることで絶対零度を超えた科学では証明出来ない領域の極低温を発生させたのだ。この極低温に耐えられるものはなく、破壊されるか二度と使い物にならなくなるのかのどちらかである。

メギドラに次ぐロキの切り札の一つであるが、現状対象一人にしか使うことが出来ないので使用する機会は限られている。まだ名の無い魔法であるが、いずれは彼の娘が統治する氷の国の名を冠しようと考えている。

左半身を完全に凍結した一誠は最早満足に動くことも出来ない。手こずりはしたが、最後に勝利を得るのは自分であるとロキは高揚する。

残すは魔人一人と半分凍結しているリアスたちのみ。未熟な魔人と弱った悪魔たちなどを倒すなど容易い。

「これで――」

その時、何故かロキは顔色を変えて辺りを警戒し始めた。その顔には明らかに動揺の色が浮かんでいる。

「この気配……！　――おいおい！　まさか来ているのかよ！　何処だ！」

リアスたちからすればロキの行動は不審なものである。姿無き何かに対し、異様な警戒をしているのだ。

周囲を大袈裟な程に見回すロキであったが、やがてその視線は一点に集中する。それは、地面の上で動けない一誠。

「おのれ！　何か仕込んでいたかっ！　小賢しいことを！」

ロキは声を荒げて一誠に止めを刺そうとする。ここまで余裕の無いロキをリアスたちは初めて見るが、一誠の命が掛ったこの瞬間に理由まで考える暇など無かった。

「これで――なっ」

突然、ロキの眼前に雷光が迫る。反射的に魔法陣でそれを防ぐ。朱乃が放った雷光であるが、放った瞬間をロキは見ていない。

そう思った次の時には無数の聖魔剣とデュランダルから飛ばされた聖なる気がロキ

に届こうとしていた。
一誠への止めを一旦中断し、空を飛んでそれらを回避する。
「そういうことか……！」
警戒を怠っていないにも関わらず発生する攻撃の見落としの原因を理解したロキは、周囲に手を振るう。
掌の冷気が伝播し、一瞬にして凍てつく突風となって周囲を吹き抜けていくと、闇夜の中から落下していく大量の何か。
霜が下りて白くなっているが元は黒い体に赤い目をした蝙蝠。ギャスパーの分身体である。
密かにロキの周りに滞空させ、邪眼によってロキの時間を停止させていたのだ。しかし、種が割れれば最早意味が無い。
分身である蝙蝠を凍らされたことで本体であるギャスパーにもフィードバックする。
「ご、ごめんなさい……僕は……」
これ以上戦えないことを仲間に詫び、ギャスパーは意識を失う。
「……ギャー君！」
小猫が呼び掛けるが返事は無い。触れるとどんどん気が弱まっていくのが分かる。分身の蝙蝠を大量にやられたせいで命に危険が及ぶ程消耗している。

「小猫、お願い！」
「……はい！」
ギャスパーに触れると小猫は仙術をかける。生命の源泉というべき場所を仙術で活性化させることで弱まっていく生命力を補おうとする。
「……これで何とか」
その時、小猫の猫耳がピクリと動く。少し離れた場所にいる黒歌の猫耳も同じ様に動き、何かの動きを捕捉した。
狼の唸り声。凍り付いていた筈のスコルとハティが体表の氷を剥がしながら動き始めている。
「親譲りなのは牙だけではない！　その生命力もだ！　我が氷結でやられる様ならこの場には連れて来ない！　汚名返上の機会を与える！　食い散らかせ！　スコル！　ハティ！」
ロキの言葉を合図にしてスコルとハティが再び動き出す。咆哮を上げ、体に氷を付着させた状態で二匹の狼たちがリアスたちに走って来る。
木場たちはロキへの攻撃を断念し、スコルとハティの足止めをしようとする。木場は魔剣を放ち、ゼノヴィア、イリナは聖剣を振るう。しかし、冷え切った体は木場たちが思っている以上に動きを鈍くさせ、スコルとハティの動きに僅かについていけず、二匹

が通過した箇所に攻撃が命中してしまう。
無傷で突破したスコルとハティの前に美候とアーサーが立ち塞がる。美候は如意棒を長くし、二匹纏めて薙ぎ倒そうと振るうが、スコルが体を張って如意棒を受け止めてしまい、その間にハティが前に進んで行く。
アーサーがその前に立ち、コールブランドでハティの足を斬ろうとするが巨体を跳躍させて躱してしまう。
そして、ハティはギャスパーの治療の為に動けないリアスたちにその牙を突き立てようとするが――その牙が彼女たちに届くことは無かった。代わりにバラキエルがその身に受けた為に。
「どう、して……」
朱乃は我が身を犠牲にしたバラキエルに瞠目し、声を震わす。
二本の牙が肩から背を貫いている状態でバラキエルは全身から雷光を放ち、ハティの口内を焼く。
頑丈でタフなハティもこれに耐え切れず、バラキエルから牙を抜き、弾かれる様に後ろへ跳ぶ。
しかし、一気に牙を抜かれたせいでバラキエルの傷口から大量の血が噴出し、バラキエルは崩れ落ちる様に倒れる。冷気によってかなり消耗している状態でこれ程の傷は

命に関わる。
「すぐに治しますから！」
　アーシアは神器による淡い緑色の光を発し、それを傷口に流し込む様に飛ばす。治癒の神器により傷口に肉が盛り上がり、薄い膜が張られる。少なくとも失血による死は免れた。
「何故、私たちを……！」
「お前まで、失う訳には、いかない……」
　バラキエルは蒼褪めた顔のまま、はっきりと言う。
「朱璃を、私の不甲斐なさで、失い……娘のお前まで失ってしまうなど……耐え切れん」
「そんなこと……そんなこと今更言わないでよ……貴方をずっと拒絶していた私が、馬鹿みたいじゃない……」
　涙に濡れた声。朱乃は俯いてバラキエルに今の顔を見せない。
「すまない……いつだって私は、大事なことに遅れてしまう……」
　朱璃を助けられなかったこと。娘への思いをきちんとした言葉にすること。バラキエルはそれらを自嘲する。
　父と娘が初めて向き合おうとした時、その流れなど無視して復帰したハティが唸り声を上げる。

大事な瞬間を台無しにされた朱乃は俯いていた顔を上げ、怒気に染め上がった瞳でハティを睨み付けた。
「今っ！」
感情が昂り過ぎたせいか朱乃の背から悪魔と堕天使の羽が飛び出し、帯電し始める。
「私と父がっ！」
両手に眩い光を放つ雷光。空気の爆ぜる音が連なる。
「話している最中でしょっ！」
激情に身を任せ、己の身すら焼け落ちるかもしれない程の限界を超えた雷光。視界が一瞬白い光一色塗り潰された後、ハティの巨体が何度も跳ねながら彼方へ行ってしまう。
力の殆どを瞬間的に出し尽くした朱乃は、脱力してその場にぺたんと座り込む。すると、偶然バラキエルの顔を覗き込む形となった。
「いつも私は……お前を泣かせてばかりだな……」
「――違うわ。只の汗よ、これは……」
汗一滴すら噴き出さない極寒の中で、朱乃は強がる様に言った。

◇

スコルとハティが上手く敵をかき回してくれている隙にロキは一誠に急いで接近していた。まだ動いていないが、気配がどんどんと強くなっているのが分かる。
危なくなる前にロキは一誠を完全に凍結させ、粉々に粉砕するつもりであった。
あと数歩移動し、手を伸ばせば一誠に届く――筈であった。横から伸びて来た手がロキの手を掴まなければ。
「貴、様……！」
「神も焦るものなんだな？」
シンはロキを掴んだまま揶揄する。ロキは一秒でも早く一誠を抹殺しなければならない。しかし、神としてのプライドが神を嘲る存在を許すことが出来なかった。
「魂ごと凍て付け！」
ロキはシンの頭を鷲掴みにし、絶対零度を超える凍結によって彼を凍らせる。タンニーンの炎を取り込んだシンですらも抗うことの出来ない氷結の速度。だが、シンはロキの手首を掴み返す。
シンの全身が氷で覆われるまで数秒も掛からない。だが、その間に何かが砕ける音が聞こえた。
氷像と化したシンが発したものではない。

「く、この……！」

呻くロキ。その手首は歪に変形している。シンによる最後の反撃により、ロキの手首は砕かれてしまった。

勝った筈なのに泥を付けられたロキは、怒りのままシンを砕こうとする。

その横目に映る赤い閃光。次の瞬間、ロキの姿は消え、少し遅れて地表で雷鳴による轟音が響き渡る。

その後に数百メートル先で土が弾けた様に吹き飛び、数十メートル間隔でそれが繰り返される。誰もそれが吹っ飛ばされたロキが何度も地面を跳ねているとは思ってもいない。

シンを守る様に立つ一誠だが、その左腕は大きく変化していた。左腕全体が何倍も巨大化しており、立っているだけで拳の先が地面に着くアンバランスな見た目。装甲の厚みが増し武骨になった手の甲から肘に掛けて宝玉が等間隔で並んでおり、それらの中には青白い輝きが閉じ込められ、左腕全体から赤い稲妻が発生し、空気が爆ぜる。

「俺の友達に何しようとしてんだよっ！　この野郎っ！」

獣の咆哮ではなく、それは紛れも無く理性ある人の叫び。友の身を案じ、義憤に燃える声。

キロ単位まで殴り飛ばされたロキにもその声は届いており、仰向けに倒れたまま忌々

しそうにその名を口に出す。

「トールッ……！」

神を滅ぼすと言われた神滅具に神の力を分け与えるという暴挙。それによって生み出された新たな『覇龍』

『覇　龍・　雷　神』
ジャガーノートドライブ・タイプトール

雷光、囁声

「う、ううん……？」

目が覚めるとまたあのベッドルーム。最早、見慣れつつある光景になり始めていた。

それよりも『覇龍』を発動させた後、一誠の記憶が飛んでしまっており、目を閉じてまた開けると同じ部屋に居ることに一誠は焦りを覚える。

「もしかして、『覇龍』でも負けたのか……？」

気絶するとこの部屋に来るのは一誠も理解している。『覇龍』を使ってもロキに勝てないとなると、打つ手が無くなってしまう。

「いや、こっちから呼んだのだ」

「へえ？」

聞き覚えのある声に一誠は隣を向く。一誠の隣には筋骨隆々の凄まじい圧のあるトールが一誠と同じベッドに腰を下ろしていた。

「ほぎゃあああああああ！」

一誠は心の底から絶叫を上げた。何故これ程の存在感があって今まで気が付かなかったのか。

雷神トールという恐るべき存在。そんな存在と一緒にベッドに座っているというシチュエーションが更なる恐怖を生み、一誠は急いでベッドから離れようとする。
「黙れ。座れ」
トールが肩に手を置いただけで一誠は立てなくなってしまう。どんなに膝に力を入れても真っ直ぐ伸びない。
一誠は観念し、恐る恐るトールに訊く。
「あのー……何故ここにいるんでしょうか……？」
「勘違いが無い様に言っておくが、私はトール自身ではない」
「え？　じゃあ、誰なんですか？」
「私は、お前に分け与えたトールの力の一部だ」
「俺ってトール様に力を貰っていたんですか？　いつの間に……」
「お前が私の試練に合格した時だ」
その時のことを思い返す一誠。最後にトールから握手されたことを思い出す。タイミングがあるとすればあの時しかない。
「あの時に俺の心の中に……？」
「少し勘違いしている様だが、私自身はトールの力そのもの。この人格も力に込められた思念とお前のイメージが混じり合って出来たものに過ぎない」

試練を受けた時よりも若干フレンドリーに感じることへの説明がされる。目の前のトールもまたこの部屋である夕麻と似た様な存在であるらしい。
「私は立場上ロキと戦うことが出来ない。それに悪魔の縄張りとはいえ壊滅させる訳にもいかないからな。仕方がないので、ロキを殴る権利をお前に譲ってやった」
「……そうは言いますが、もしかして俺って体よくトール様に使われていませんか？」
『覇龍』まで使用して負けかけているお前に勝つ目が出て来たのだ。文句を言うな」
そう言われると一誠は返す言葉が無い。
「――それなら、もう少し早く力をくれたら……禁手の時にでも」
思わず不満を零す。情けないとは分かっているが、つい不貞腐れた反応を示してしまった。
「私がお前に力を貸し与えることに関し、二つの条件を付けた」
「条件？」
「一つ目の条件はミョルニルのレプリカを破壊されること。私の知るロキの実力ならばミョルニルのレプリカと赤龍帝の禁手があれば打倒出来ただろう。だが、奴は真の実力を隠していた。まさか、一つの体に二つの神の魂があろうとはな……くくくく、私とオーディン殿の目を長い間よく掻い潜ったものだ。狡さに関しては彼奴に並ぶ神は居ないな」

褒めているのか貶しているのかよく分からない。トールがロキに快く思っていないのは伝わってくるが、それが全てではないのだろう。嫌っていても認めている部分は認めている様子。
「もしかして、ミョルニルのレプリカを先に持っていったのはその細工をする為ですか？」
「そうだ。だが、弱い者が贋作とはいえミョルニルを振るうのを許せなかったのも紛れも無く本音だ」
翠色の眼光を間近で浴びせられ、心臓が締め付けられる。よくこんな相手が課してきた試練に合格したな、と改めて思う。
「それに関しては同感だ。――まさか、魔人に鍛えられてから挑んでくるとはな。愚行を通り越して狂行だ」
心の中なので一誠の考えていることは当然筒抜け。トールは呆れているが、一誠も正気の沙汰ではないと思っているので腹も立たない。
「二つ目の条件、それはお前が『覇龍』を発動させること」
「『覇龍』を？　どうしてですか？」
「『覇龍』でなければ我が力を受け止めきれん。禁手程度など即座に灰になる」
禁手程度と言い放つトールに、程度の力を苦労して手に入れた一誠は複雑な気持ちに

なるが、同時に『覇龍』と同等以上の力を得られることに戦意の高揚と多少の恐ろしさを覚える。
「ならその力を！　早く部長や皆を――」
「分かっている。が、肝心なことを忘れていないだろうな？」
「肝心なこと？」
「お前は今以上の力を得るだけだ。それにより恐らくは『覇龍』の手綱も握られるだろう。だが、お前は根本的に魔力が足りない。お前の『覇龍』は、お前の命を消耗することで為している。我が力を得たとしてもお前の命の消耗は変わらない」
　トールの力を得ても『覇龍』の消耗が軽減される訳では無い。戦闘機にミサイルや機銃などの後付けの武装を付けるのに過ぎない。下手をすれば限りある命をより激しく消耗することになる。
「先に言った様にここにいる私は力の一部。受信機の様なもの。お前が願えば本体である私から力を送られるが、送る側の私はお前の心情など一切知らん。例え破滅しようともな。――どうする？」
「今更そんな脅すようなこと言わないで下さいよ……」
「古今東西、力には代償が付き纏うものだ」
　脅すとも試すとも一誠の身を案じている様にも聞こえる。尤も、これは半ば一誠のイ

メージが入ったトールなので一誠の無意識のうちの自問自答と言えた。
「答えは……決まっています！」
『覇龍』を発動させた時から覚悟は決まっていた。リアスたちを守る為に、今も戦っている仲間を助ける為に一誠は自分から過酷な道を行く。
「――そうか。なら」
トールが立ち上がると、一誠に左手を差し伸べる。一誠は一度深く深呼吸し、掌を叩き付ける様にトールの手を掴む。
「――ぐっ、あああああああああああ！」
トールの体に紫電が走ると、一誠の全身に力が駆け巡っていく。血が沸騰し、肉が激しく収縮を繰り返し、臓腑が熱せられる。高圧電流を体内に流し込んだらこんな経験が出来るかもしれない。
覚悟はしていたが、絶叫せずにはいられなかった。トールが言う様に禁手ではこの雷に耐え切れない。
「ほらほら。イッセー君、頑張って頑張って」
何処かに姿を消していた夕麻が現れ、他人事そのものといった軽い口調の応援をする。文句を言いたいところだが、力を授けられている一誠にそんな余裕は無い。
もう一人、部屋の片隅で一誠を見つめている者が居た。魔人への復讐に燃えていた歴

代赤龍帝の残留思念である。夕麻とは違い、こちらは無言であったが心成しか絶叫している一誠を心配している様に見えた。

絶えず絶叫を上げ続けていた一誠だが、いよいよ声も枯れ果て叫ぶことすら出来なくなってくる。藻掻いていた手足も力なく垂れさがるだけ。しかし、その状態でもトールは力を注ぐのを止めない。

「気をしっかりと持て。耐えねばお前は死ぬが、それ以外の者も死ぬ。それを忘れるな」

トールの叱咤が飛び、生気を失い掛けていた一誠の目に再び光が灯る。

「もっと……強くても……構いませんよ……！」

無理矢理強がった笑みを浮かべる一誠。本人は笑みを浮かべたつもりだが、電流で痙攣する顔では顔の震え程度にしか見えない。

「よく言った……」

トールはその？せ我慢を褒めると、情け容赦無く倍近い力を流し込む。それと同時に精神世界は青白い光で覆われ、部屋の内部が崩壊。

そして――

◇

一誠が意識を取り戻した時、驚く程視界が広がっていくのを感じた。真っ直ぐ見ていても三百六十度目に映る不思議な感覚。その感覚のまま見てしまった。氷像と化したシンの姿を。

気付けば拳で誰かを殴っていた。一拍置いてそれがロキだと気付くと一誠は思ったまま叫ぶ。

「俺の友達に何しようとしてんだよっ！　この野郎っ！」

遠くのロキにも届く様な怒声を飛ばすと、巨大化と変化を起こした左手をロキが殴り飛ばされた方向に向ける。体程の大きさがあるというのに重さは全く感じない。通常時の左腕の感覚で扱えた。

左腕に収まった宝玉が青白い発光を放つと、左腕が帯電し始め赤い電気が迸る。腰部から生える尾を真っ直ぐ伸ばし後、地面へと突き立てた。

広げられた五指の先からそれぞれ電流の様な魔力が放射され、掌の中央で光球と化す。

最早砲身と化した左腕からそれは発射された。雷の如き光と一緒に放たれるドラゴンショット。まるでレールガンを撃ち出したかの様な光景。

音も無く発射される魔力の塊は、発射と共に誰も視認出来ない速度で直進を開始。

撃つ直前に一誠は翼から魔力を噴射。発射と同時に生じた反動を尾と翼の噴射で相

殺。それでも、一誠の立ち位置は数十センチ程ずれる。
そして、遅れて聞こえる轟音。落雷を間近で聞かされた様な音は、スコルとハティを悶絶させ、更に仲間たちも思わず耳を塞いで身を屈めてしまう程である。
それとほぼ同時にロキがいると思われる場所に半円状の赤い爆発が起こる。音速など遥かに超えた速度で撃ち出されたドラゴンショット。ロキの視点からすれば構えて発射した瞬間に眼前に到達している感覚であろう。
速度だけでなく威力もトールの力によって倍増しており、着弾の衝撃で凍り付いていた大地が全て捲れ上がり、衝撃波が全員を襲う。
撃った一誠も規模の大きさと衝撃波の強さに冷や汗をかき、すぐにリアスたちを見たが一応無事であった。
そのすぐ後にシンのことを思い出す。氷像にされていた彼がこの衝撃波の直撃を受け、倒れていたら体の何処かが割れているか、最悪全身粉々になっているかもしれない。
粉々にされそうであった仲間を助ける為に仲間を粉々にしてしまったら本末転倒どころのやらかしでは済まない。
急いでシンの方を振り向く。彼は衝撃波の煽りを受けて倒れていた――が、それを黒歌が抱き止めている。
「痺れそうな程の強さだけど、もうちょっと手加減した方がいいにゃん」

「わ、わりぃ。それとありがとな。間薙を助けてくれて」
「別にいいにゃん」
黒歌はそう言って凍ったシンの体に手を当てる。
「間薙は……生きているよな」
「不思議なことに、ね。こんな状態でまだ生命の源泉が活動していることが不思議だにゃん。――本当、魔人って化け物ね」
仙術にシンの体の異常さを理解しながらも治癒の仙術による施術を始める。
シンの無事も確認出来た一誠は、ドラゴンショットを放った先を見る。何も見えないが、一誠の感覚はロキが無事であることを告げていた。神の力が混じったことで神に対する感知能力が著しく上昇している。
『まさか、こんな事態になるとはな……神が神殺しに手を貸すとは』
頭の中でドライグが苦笑しているイメージが流れる。ドライグにとっても一誠にとってもトールから直接力を与えられるのは予想外のこと。だが、今はその予想外が有り難い。
このままロキを倒す――と意気込んでいた一誠の足が止まった。
鎧が肌の様に敵意を感じ取る。轟音で苦しんでいたスコルとハティがロキから与えられた命令を遂行する為にリアスたちを襲おうとしているのが分かった。

今の一誠ならスコルとハティは数秒で倒すことが出来るだろう。だが、命を削る『覇龍』にとってその数秒も文字通り命取りである。ロキを倒す前に命が尽きる可能性が高くなるのだ。しかし、逆を選択すれば誰かが命を落とすかもしれない。ロキの凍結によって全員消耗されており、更に戦闘不能者、怪我人もいる。

鋭敏な感知が一誠に迷いを与える。迷っている時間など無い。戦闘とスケベなこと以外普段はあまり活発ではない一誠の脳が、時を万分の一にする程の速度で稼働する。

ロキを倒すことを優先するか。仲間の安全を優先するか。傾けなければならない天秤が左右に揺れる。可能なことが多くなったせいで逆に選択肢も増え、それが迷いに繋がる。

現実の時間で一秒に到達しようとした時、一誠は気付く。それは中のドライグも同様であった。

地面に現れる魔法陣。それを通じて放たれる覚えのあるオーラ。

オーラは黒い炎と化し、スコルとハティを遠ざける壁として、リアスたちを守る障壁として展開。

このオーラも黒い炎も一誠は知っている。

「兵藤！」

魔法陣から聞こえてくるのは、戦友の声。

「ここは俺に任せろ！」

この場を引き受けようとする匙の声。転送途中のせいで匙の姿はまだ見えない。普段の一誠ならばそう言われても決断出来なかったかもしれない。だが、今の一誠は違う。鋭敏な感覚は一誠に迷いを与えたが、同時に迷いを晴らす切っ掛けも与えてくれた。

匙と共に感じ取るヴリトラのオーラ。その力強さが一誠の背中を押してくれる。

「任せた！」

振り向かず、一誠は飛ぶ。それと入れ替わる形で魔法陣から匙がこの場に現れた。

「おいおいおい……マジかよ」

匙の予想以上に酷い光景が広がっており、信じ難いといった声を零す。リアスたちは蒼白で体の至る所に氷が張り付いており、ギャスパー、バラキエルは負傷により治療中、ケルベロス、ジャックランタンは凍結状態、ジャックフロストは何故か丸々と太った体型になっており、ジャアクフロストは口を押えて気持ち悪そうにしている。

特に衝撃的だったのは、最上級悪魔であるタンニーンとシンが完全に戦闘不能状態にさせられたことである。

その姿に匙は奥歯を強く噛み締めると同時に『黒い龍脈』を発動。そこから生える黒い蛇たちをシンとタンニーンに向かわせる。

凍結したシンとタンニーンの上を這う黒い蛇。すると、匙は焦った顔を一変させて安堵したものと変わった。
「生きてるかー」
黒い蛇越しに二人の生命反応を確認した匙。安堵した表情を引き締めて黒炎の結界外にいるスコルとハティを見る。スコルとハティは黒い炎を警戒して中々近寄ろうとはしない。
「あの、フェンリルに似た大きな狼が二匹もいるんですが」
匙の問いへの答えは、リアスたちが緊急連絡用に付けているイヤホンマイクから聞こえてくる。
『恐らくそれはフェンリルの息子のスコルとハティです、匙君。あと他の皆さんも聞こえていますか？　私はグリゴリの副総督のシェムハザです。事態が事態なのでこの回線を使わせて貰っています』
イヤホンマイクの向こう側で挨拶をしてくるグリゴリのナンバー2。
『遅れて申し訳ありません。何とか間に合うことが出来ましたが、皆さん大丈夫ですか？』
「え、ええ。何とか。でも、いきなり彼を連れてきて大丈夫なの？」
グリゴリの下で特訓をしてきた匙。アザゼルはかなり強くなったと言っていたが、そ

れでもいきなり戦闘に投入することに不安を覚える。
「シェムハザさん。何かあの二匹すっげーこっちを睨んでますけど……」
態度そのものは普段の匙とは変わらない。
『問題無いですよ、匙君。今の君ならフェンリルの息子たちにも負けません。アルマロスとサハリエルのお墨付きですよ』
「……その二人の名前を出さないで下さいよー。悪夢を見るんです」
匙は仕方ないといった様子を見せながら躊躇うことなく自らが張った黒炎の結界外へ出ていく。
「匙君！　待ちなさい！」
一人でスコルとハティと戦おうとする匙をリアスは止めようとする。
『大丈夫です』
それにシェムハザが待ったをかける。
『匙君はこちらの予想以上の力を得ました。アザゼルも驚く程の。彼なら禁手相手でも勝てると思われます』
「一体、彼に何をしたの？」
『彼にヴリトラの神器を全部くっつけました』
ヴリトラの神器は匙の『黒い龍脈』以外にあと三つ存在する。『邪龍の黒炎』『漆黒の

領域』『龍の牢獄』。グリゴリが回収し保管していた残りの神器を匙に埋め込むことで、神器内に封印されたヴリトラの魂を統合して半覚醒していたヴリトラを完全に目覚めさせようとアザゼルは考えていたという。

『結果は成功。いえ、それ以上のものでした。匙君は元々神器一つでヴリトラの意識を目覚めさせた程です。匙君はヴリトラの力を完全に操り、ヴリトラも匙君に惜しむことなく力を貸し与えてくれます。禁手していなくともそれに近い力が彼らには備わっている』

匙は結界外に出ると深呼吸をし、スコルとハティを見る。

「――いくぞ、ヴリトラ」

その言葉と共に匙の何かが切り替わり、リアスたちは肌がひりつく威圧感を覚える。タンニーンや禁手化した一誠の時と重なる感覚である。

スコルは結界外に出て来た匙に牙を?きながら突進してくる。匙は『黒い龍脈』から伸ばしたラインをスコルの口に巻き付け、無理矢理閉じさせる。

スコルはそれを解こうと口を開けようとするが、ラインを引き千切ることが出来ない。ならばと繋がった先にいる匙をどうにかしようと首を左右に大きく振るうが匙はその場から一歩も動かない。

よく見れば両足からもラインが幾本も伸び、それが地面と繋がって匙の体を固定して

いた。

すると、ハティの方が無防備を晒している匙の背後から迫る。リアスたちは匙に逃げる様に声を飛ばすが、匙は動かず振り向く素振りも見せない。

ハティもリアスたちも気付いていなかった。匙がハティを無視しているのは、既に攻撃が完了しているからである。

走るハティは前脚に何か黒いものが纏わりついていることに気が付いた。大したものではないと判断し、走る速度を緩めない。

視界を一瞬外し、ふと気付く。灰色の体毛で覆われている筈の前脚が黒く染まっている。

ようやく異変に気付いたハティは立ち止まり、己の前脚を見る。黒く染まっているのは、脚に何匹もの黒い蛇が噛み付いているせいであった。

前脚を振るい、黒い蛇たちを振り落とそうとする。だが、黒い蛇たちは蛭の様に喰らい付いて離れない。

すると、黒い蛇の一匹が丸々と膨らみ始める。次の時には真っ二つに裂けて二匹の蛇になっていた。

一匹が二匹になれば二匹は四匹となり、倍倍に増殖していく。その異常性に気付いたハティは急いで黒い蛇たちを落とし踏み付けていく。だが、落とされる黒い蛇たちより

も増える速度の方が速い。また、踏み潰せなかった黒い蛇はハティの体に這い上がっていく。

体を震わして黒い蛇たちに悪戦苦闘するハティであったが、徐々にその動きが鈍くなっていく。

黒い蛇たちが増殖するには少々の力を必要とする。黒い蛇たちがハティに噛み付くのはその為の力をハティから吸収する為である。一匹一匹の吸収量は微々たるものだが、それが百匹、二百匹となれば膨大なものとなる。

黒い蛇が増殖すればする程にハティは消耗していく。今では黒い蛇たちが纏わりつく巨体を支えきれなくなっている。

やがて、ハティの脚から力が抜け、伏せの様な体勢となる。すると、増殖していた黒い蛇たちがその体から黒炎を出して炎上し出す。

燃え盛る黒炎は一つの大火となり、それが長い胴を持つドラゴンの形に変わった。

「久しぶりの娑婆の空気はどんなもんだ？　ヴリトラ」

『思いの外悪くないぞ、我が分身よ』

匙の問いに黒炎のドラゴン――ヴリトラが答えた。

その反応にリアスたちは驚く。体内に存在する筈のヴリトラを媒体を用いているとはいえ体外に顕現させたのだ。ただし、顕現しているのは全長の半分程度。後はハティ

の身体から直接胴を伸ばしており、ハティから生えている様な見た目をしていた。
ヴリトラはハティの顔を見下ろす。ヴリトラの視線に対し反撃の意志を示す様にハティは小さく唸る。
『硝子のような目をしている。野生を失った狼に我が恐れなど抱く筈も無い』
ヴリトラは喉を膨らませる。
『貴様はただの飼い犬だ』
ヴリトラが吐いた漆黒の炎がハティの全身を覆う。漆黒の炎は相手を焼く為のものではない。相手の魔力やオーラを燃焼させる特殊な炎。
力を吸い取られて弱っていたハティはこの漆黒の炎により、根こそぎ体力を奪われてしまい、毛を逆立たせる力すら無くなってしまった。
「よっしゃ！　流石、ヴリトラ！　うおっと！」
片割れがやられたことにスコルは心を乱されたのか激しく抵抗し出し、匙の『黒い龍脈』から逃れようとする。巻き付いて無理矢理閉ざされていた口を力尽くで開き、僅かに牙を覗かせると、首を強引に動かして『黒い龍脈』に牙を掠らせる。
神殺しの牙の効果が発揮され、物理的には斬れない筈のラインが切断されてしまう。
「やべっ」
焦った様な声を出す匙だが、行動は冷静であった。スコルが仕掛けてくるのを予想し

て地面に縫い付けていた足のラインを消し、すぐにその場から移動する。
　匙が向かう先に待つのはヴリトラ。既にハティから離れており、蛇の様な全身を晒している。
「よっと！」
　匙は跳び上がり、空中で体勢を変えて背中からヴリトラへ突っ込んでいく。待ち構えるヴリトラの黒炎の体へと入り込むと、黒炎はより勢い良く燃え、薄暗いオーラを放ち始める。
『ふむ。やはりこれが一番落ち着くな。飼われた狼の体は我には合わん』
『そりゃ、どうも』
　ヴリトラから匙の声も発せられる。魂だけであった五大龍王のヴリトラを完全に復活させ、尚且つ暴走も無く、共存している匙に全員驚く。匙が短期間でここまで成長するなど誰にとっても予想外のことであった。
『正直、奇跡としか言いようがないです。ヴリトラをここまで完璧に操る――ではなく協力出来るなど。アルマロスとサハリエルが夢中になる訳です』
　シェムハザが前例の無い匙の能力の開花を感心する。
　手負いとはいえフェンリルの息子を圧倒したのだ。スコル相手でも負けるビジョンが見えない。

最初は手伝うべきだと思っていたリアスも、今は観戦に徹している。下手に手を出せば匙たちの邪魔になるだけである。

手を出さない代わりに、リアスは声を飛ばす。

「匙。この戦いが終わったら、私からソーナに伝わるわ。貴方のとても優秀な『兵士』が私たちを助けてくれた、って」

親友のリアスから直接匙に対する感謝の言葉を送られれば、ソーナの匙に対する評価は大きく上がる。いずれはソーナと深い関係になりたい匙からすれば、この上なくテンションが上がる。

『うおおおおおお！　リアス先輩っ！　よろしくお願いいたします！』

『現金な奴だ。だが、力が高まることは良い』

匙の想いが強まるのを感じながら、その単純な理由にヴリトラは少し呆れた声を出す。もしくは苦笑しているのかもしれない。

そんな緊張感の無い二人のやりとりなど無視してスコルは神殺しの牙を？いて、ヴリトラを噛み殺す為に突っ込んでくる。

ヴリトラはその場から一歩も動かない。それなりに距離が開いているがスコルの神足はすぐにそれを詰める。

ヴリトラはタンニーンやドライグの様な強力な炎や力を持たない代わりに特異な能

力や多彩な技を持つ。
真っ向から襲い掛かってくるスコルに対し、回避の素振りすら見せないのは己の能力と技に自信がある証。
スコルが飛び掛かり、ヴリトラの首を噛み千切る――という事態にはならず、ヴリトラの体を通り抜けてしまった。
スコルが通り抜けた箇所が無数の黒い蛇に戻っており、自ら形を崩すことでスコルの牙から避けてみせた。
攻撃を盛大にミスしたスコルは、跳躍の勢いで数十メートル程地面を滑っていく。爪を立てることでやっと止まることができ、振り返り見たものは黒い壁。
ドラゴンから何千、何万もの黒い蛇になったヴリトラが群れとなってスコルを呑み込もうとする。
壁というよりも最早津波であり、生きた黒い津波がスコルの巨体に覆い被さる。
黒い津波が通過した後、ピクリとも動かないスコルが巨体を地面に横たえていた。通過する際にスコルの力を吸い尽した結果、体力が空になって倒れたのだ。
誰もが死んだかと思ったが、よく見ると微かながら体が微動している。敵とは言え手心を加えたらしい。
スコルが倒れると、黒い蛇たちの体は崩れ始め泡沫の様に消えていく。全ての黒い蛇

が消えると無傷の匙一人が残された。
「ふうー。よしっ！」
ガッツポーズをし、戦いの手応えを感じて喜ぶ匙。
「強い……」
スコルとハティを一人で圧倒した匙の実力をリアスはその一言で表す。力を奪い、我が物に、変幻自在に姿を変えて翻弄する。もし、レーティングゲームで戦うことがあれば今の一誠でも苦戦を強いられるだろう。
「ソーナも幸せ者ね」
匙の強くなる理由は、敬愛するソーナの為。その想いが強さに繋がったこと、それ程までに慕われていることを親友として嬉しく思う。
「リアス先輩！　是非とも俺の活躍っぷりを――うっ！」
匙が急に言葉を詰まらせ、前のめりになる。
「ど、どうしたの？」
ヴリトラの力を使った反動か、それとも多くの神器を埋め込んだ影響か。心配するリアスたち。
匙は口を押えて慌ててリアスたちから離れると、近くの木の根本で俯き――
「おろろろろろろ」

――吐き始める。しかも、吐き出されたのは吐瀉物ではなく大量の小さな黒蛇たちであった。体内から生物が出て来る光景はB級ホラー映画並みにグロテスクであり、リアスたちも匙から一歩退いてしまう。

『あー、どうやら大量に力を吸収し過ぎたみたいですねー。体に悪影響を及ぼすと考えてヴリトラが気を利かせて、小さな蛇にして体外に排出させているみたいです』

シェムハザが匙の身に起こっていることを説明する。

あまり気持ちの良い光景ではないが、助けられた手前、文句も言えない。が、この匙の行動が別の者にも影響を及ぼす。

「ヒ、ヒホ！　オ、オレ様の前でそんなことするんじゃ――ヒボボボボボボボ」

「うわっ。貰ってんじゃねぃ」

「――大丈夫ですか？」

ロキの魔法を大量に吸収して気分を悪くしているジャアクフロストは、それに触発されて口からシャーベット状の雪を吐き出し始める。掛けられそうだった美候はすぐに離れ、アーサーはジャアクフロストの背中を擦る。

「ヒ、ヒーホ……オ、オイラも……」

『えっ』

丸々とした体になっているジャックフロストも、前の二人のせいで気分が悪くなった

のか恐ろしいことを言い始め、丁度近くにいた木場、イリナ、ゼノヴィア、ロスヴァイセが反射的にジャックフロストを見てしまうが、それがいけなかった。彼女らは聞いた瞬間にそこから離れるべきであった。

ジャックフロストの情けない声の後に数名の悲鳴が上がる。

戦い終えた余韻を台無しにする光景に、範囲外に居たリアスたちは何とも締まらない気持ちになるが、すぐにリアスたちの視線は一誠が向かった方角に向けられる。

遠くで雷光が魔法の輝きと衝突している様子が見える。

今もそこで戦っている一誠に想いを馳せる女性たち。彼女たちは気付かなかった。一誠だけでなく、もう一人密かにこの場から離れていることに。

◇

空中でロキは防御用の魔法陣を発動させようとする。だが、雷を思わせる速度で飛翔する一誠は、それが展開するよりも速い。ロキの魔法陣が出現した頃には、一誠はロキの懐に居た。

(忌々しい程に速い！)

雷光そのものと言っていい一誠の動きにロキは奥歯が割れそうな程噛み締める。そ

の速さは怨敵を彷彿とさせる。
近距離まで来た一誠は、ロキの腹に巨腕と化した左拳を押し当てる。速さを生む溜めの無い、疾風迅雷の動きとは裏腹の優しさすら感じる様なソフトタッチ。
振り被りも溜めも要らない。今の一誠の左拳はゼロから百まで刹那で加速する。
「ごはっ！」
雷鳴と共に巨腕から打ち込まれる電光石火の拳。密着状態で放ったそれにより、ロキの体は空気の壁を突き破りながら飛ばされる。
（この一撃！　忌々しい……！）
全身から煙を上げながら内心で毒吐くロキ。魔法陣と並行して身体強化と電撃耐性の魔法を肉体に施していなければ、今頃上半身と下半身が別れた上に黒焦げを通り越して灰の体になっていたかもしれない。
速さ、力がトールを彷彿とさせ、目の前にいる一誠に重なり合う。ロキからすれば格下である筈の一誠に押されて腹立たしく、何から何まで合わないトールの影が忌々しく、二重で怒りを覚える。
赤い閃光がロキの目に映ると、音速を超えて飛ばされるロキに追いつく一誠。既に左腕が拳を放つ準備に入っている。
認識した瞬間に突き出される拳。ロキは片腕に身体強化、衝撃緩和、防御などの魔法

を極限まで施し、一誠の拳の軌道を逸らすことに全力を注ぐ。
結果、片腕は大きく抉れ、その代償として直撃だけは避けられたが脇腹を僅かに掠り、触れた箇所以上の肉が千切れ飛ぶ。
兎に角、重く鋭い一誠の拳。どれだけ防御に徹してもダメージを免れない。シンに砕かれたもう片方の手が自由に使えればもう少し何とかなったかもしれない。だが、治しようにも一誠の猛撃のせいでその暇すら無い。
一方で一誠の方も必死であった。振るっている本人だからこそ理解する。『覇龍』とトールの力が自分の身の丈を遥か超えた力であることに。
それを示すかの様に殴りつけた直後に鎧の一部が弾け飛んだ。トールの力によるものであり、一誠が受けるべき反動を鎧が代わりに引き受けてくれたのだ。
鎧を修復する余裕は一誠には無い。攻撃すればする程に鎧は剥がれ、その分反動が増していく。それは、一誠が全力で攻撃する回数が決められていることを意味していた。
「お、のれ……！　――調子に乗るんじゃねぇ！」
ロキの周囲が一気に絶対零度に近い温度と化す。生物ならば生存出来ない環境と化すが、一誠はそんな変化すら些細なことと言わんばかり拳を振るい続ける。
吐く息が固体になり、吸う息で肺が凍り付いて割れる様な状況下の中でも一誠の勢いは止まらない。全身から迸る雷光が生み出す熱が極低温化の中でも一誠を戦わせ続け

た。
止まらない。止まれない。今の一誠は止まればもう戦う余力が残らない程の極限状態。息が続くまで、体力を絞り出すまで、命の炎が消える一瞬まで立ち止まることは許されない。
雷の速度でロキの背後に回り込み、その背に拳を打ち込もうとする。多重防御魔法陣によって威力が削がれたが、上級悪魔でも数度滅ぼされても釣が来る一撃がロキに打ち込まれた。
体内で爆弾でも起爆された様な衝撃を受け、ロキは口から吐血する。しかし、死には至らない。肉片になってもおかしくない一撃を受けても吐血程度で済む神という存在の馬鹿馬鹿しいまでの耐久力を見せつける様であった。
攻撃する度に鱗の様に?がれ落ちて行く一誠の装甲。段々と鎧の下が露出し始めていく。
「トール擬きがっ！」
追撃してくる一誠に、ロキは絶対零度を超える掌打を繰り出す。触れれば一秒も満たずに氷像と化すそれに対し、一誠は一切の躊躇無く腕で受け止める。
本来ならば超低温によって一誠の体は凍結する筈であった。しかし、トールから得た雷の力はそれすら跳ね除け、圧倒的熱量によってロキの魔法を防いでしまう。それどこ

ろか触れているロキの掌を熱で逆に火傷を負わせる。
「おりゃあああああ！」
拳をハンマーに見立て、ロキの脇腹へと叩き込む。反動で兜が弾け飛び、一誠の頭部が剥き出しになる。視界が広がったが、砕けた兜の破片で額が切れて血が流れ出す。
一誠の拳を横っ腹に受けたロキの体が折れ曲がるが、拳が振り抜かれる前に魔法によって身体を強化し、耐える。
「舐め、るな……！」
ロキと一誠の間に小さな球体が生まれる。球体の中では小さな力の塊が衝突し合っていた。
それは、ロキが見せたメギドラの前兆。至近距離による自爆覚悟のメギドラ。特殊なこの魔法はリアスの消滅の魔力でしか相殺出来ない。
危機を察知し、消滅の光が炸裂する直前に一誠はすぐさまロキから離れる。
光が発せられ、その前に立っていたロキを巻き込む。
自滅という言葉が頭を過った瞬間、一誠は背後に悪寒を感じ、振り返る。
そこには先程と同じメギドラの光球が、破裂寸前の状態で展開されていた。
「なっ！」
一誠はロキの方を見る。ロキは消滅の光を浴びても無傷の状態。それを見て一誠は

ロキに嵌められたことを理解する。
　自滅覚悟で作り出したメギドラ。あれは形だけを真似た偽物。恐らくは強い光を発する程度の魔法。一誠がそれを見て離れることを予想し、移動した先に予め本命のメギドラを仕込んでいたのだ。
　移動した直後という逃れられないタイミングを見計らい、ロキの魔法が一誠を消滅させようとする。
　その時、発動直前のメギドラに下から飛んできた光球が命中した。それを見たロキの目が限界まで見開かれる。
　見間違い様も無い。メギドラに接触したのは同系統の魔法。メギドラよりも威力は劣るが、そんなことは問題ではない。
　発動する筈であったメギドラの中に入って来た別の魔法が先に発動。メギドラを消滅の力によって内部から食い荒らし、相殺して発動不可の状態にしてしまう。
「誰がっ！　はっ！」
　最大の好機を台無しにしてくれた相手を血走った眼で探すロキ。そして、見つけた。地上で羽ばたく小さな妖精――ピクシーを。
（あんな、妖精如きが何故我々の技を使える……！　――もしかしたら、最初から知ってたのか？　――な、に？　――俺たちが見せちまったせいで、使い方を思い出したのか

？）

ピクシーなどロキたちにとって取るに足らない羽虫であった。もう一人のロキも懐かしさは覚えるが、か弱い存在という認識は変わらない。

ピクシーもその侮りに気付いていた。だからこそ、この一瞬に賭けたのだ。

普段は飄々としている彼女も仲魔を何人も傷付けられ、何も感じない程薄情ではない。ロキに対する怒りもキチンとある。

だが、同時に自分ではロキを倒すことが出来ないことも自覚していた。しかし、彼女は待った。ロキに仕返しが来る時を。

そして、来た。最大の好機を潰す最高の瞬間を。

見様見真似の技のせいで最早飛ぶことすら出来ない程力を消耗してしまった。しかし、それでも怒りに染め上がったロキが自分を見下ろしているのが見える。

ピクシーは見下ろしてくるロキに花の様な最高の笑みを向けながら、最高の悪意を込め――

「べー」

――ざまあみろ、と舌を出す。

この戦いでは思い通りに行かないこと、理不尽なことが多々あった。数え切れない程の怒りを覚えた。だが、この時、この瞬間のロキの怒りは最大級のものであり、つまる

ところキレた。すぐ近くに一誠が居るというのを忘れる程に。
それは一誠の前に大きな隙を晒すことを意味する。そして、今の一誠はその隙を逃さない。
「うらあぁぁぁぁぁぁ！」
最速を以ってロキに接近。ロキの意識が再び一誠に向けられるよりも早く、一誠の左拳がロキの脇腹に穿つ。
「――っ！」
ほぼ無防備な所に突き刺さる覇龍と雷神の一撃によってロキは音を超える速度で殴り飛ばされるが、それよりも速い一誠が先回りして飛んできたロキを蹴り上げる。
蹴り飛ばされたロキを待ち受けるのは、やはり一誠。左の豪腕がロキを突き上げた。
繰り返される神速の折り返し。空には一誠が飛んだ跡が赤い光となって残り、空に向かって遡っていく赤い稲妻が描かれていく。
全てを使い切るつもりで行われる神速の連撃。攻撃の度に装甲が剥がれ、溶け落ちていく。
（まだだ！　まだまだまだ！）
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

一誠の限界を絞り出すかの様に繰り返される倍化。最早、雷がロキを貫き続けている様な光景が空中で繰り広げられる。

しかし、一誠の攻撃にも限界を迎える。装甲は八割ほど失い、左腕も罅だらけになっていた。

残された攻撃はあと一回。

（これで……！）

高々と打ち上げられたロキに最後の一撃を放とうとした時、目の前が急速に暗くなっていく。

（嘘、だろ……？　ここで、限界……？）

震える拳。体がどんどんと重くなっていく。ロキを追い詰めたが、ダメ押しの一撃を与える前に一誠の体は限界を迎えようとしていた。

（あと一発……！　あと一発だけでいいんだ……！　誰でもいい！　何でもいい！　もっと）

焦りのあまり最後の言葉は口から零れる落ちる。

「力を……！」

一誠は視界の端に光が向かっていることに気付く。一誠に向かって飛ぶそれは、一筋の雷光。

一誠の左手が、その雷光を物の様に掴み取る。握り締めることで伝わって来た。それに込められた想いが。

「朱乃さん……バラキエルさん……ありがとうございます！」

一誠は左手を振り上げ、ロキの腹目掛けて雷光を槍の様に突き立てる。

『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』

『赤龍帝の贈り物』によって雷光の威力は跳ね上がる。

「いくぜっ！　ドライグっ！」

『応っ！』

「こんな、神をも超える我々が――」

その後の言葉は轟音によって掻き消され、赤い稲妻を斬り裂いて極大の雷が地面に落ちた。

落雷によって出来たクレーター中心にはボロボロになった一誠と、黒焦げになりながらもまだ生きているロキ。

「聖書の神は……何故、神殺しの術を人間に持たせた……？　己が死んでも何故それを残した……？　トールよ……これがお前の望んだ結末なのか……？　人間が神をも殺す力を持つことが願いなのか……？　――だとしたら最悪だぜ……」

そう言い残し、ロキは意識を失う。あれだけの攻撃を受けても気絶で済む辺り、神と

いうのはとことん頑丈な存在である。
「へ、へへへ……勝った」
ロキが気絶するのを見届けた後、一誠もまた意識を失い、倒れるのであった。

◇

「……これで良かったのか？」
「――ええ。ありがとう」
バラキエルに肩を貸しながら朱乃は少し照れ臭そうに礼を言う。
急に朱乃が力を貸して欲しいとバラキエルに頼み、朱乃が示した方角に協力して雷光を放った。
負傷は治ったが、神殺しの牙の影響を受けているバラキエルは雷光を放った直後に倒れそうになったが、それを朱乃が支えたのだ。
「きっとイッセー君の助けになる筈よ」
「しかし、何故赤龍帝が力が必要と分かったのだ？」
「囁かれたのよ。赤龍帝が助けを求めているって」
「囁かれた？　一体何にだ？」

すると、朱乃は言葉を詰まらせ、困った様な表情をする。
「……よ」
「何だと？」
「……私の胸がそう囁いたのよ」
バラキエルは数拍間を置いた後――
「……んん？」
――という言葉しか返せなかった。

戦友、王権

グリゴリの幹部であるバラキエルが人との間に子をもうけた。

そんな話をどこかで耳にしたのは何時であったのか、マタドールは今となってはハッキリと覚えていない。

その話を聞いて、マタドールは日本で偶然出会ったバラキエルとの戦いを思い出す。重傷を負わせたが、バラキエルの反撃によって止めを刺すことが出来なかった不完全燃焼の思い出である。

仕留め切れなかった敵というのはマタドールにとって価値ある存在。その話を聞いて、鎮火していたバラキエルへの闘争心が燃え上がり、すぐさま日本を目指す。

来日したマタドールは、日本を守護する五大宗家から盛大な歓迎を受け、その歓迎に応えてマタドールも暴れた。

特に四神の名を持つ者たちは強敵であり、その手応えはマタドールを大いに楽しませてくれたが、当初の目的を思い出し渋々退いたのはマタドールにとって苦い思い出である。マタドールはバラキエルと戦うつもりで日本に来たのであり、目移り程度の浮ついた気持ちで戦うには五大宗家の者たちは上物過ぎたのだ。

しかし、五大宗家との戦いはマタドールにとって思わぬ幸運を齎す。
バラキエルの居場所を知らなかったマタドールだったが、五大宗家の中ではバラキエルのことはそれなりに有名であったらしく、五大宗家の下っ端を何人か捕まえて、マタドールのやり方で少々可愛がれば全員喜んで喋ってくれた。
バラキエルの住処を知ると、マタドールは早速そこへ向かった。バラキエルが居ようと居まいと関係無い。顔を出せば、バラキエルが家族を守る為に否応無く戦いを挑んでくると予想していた。
マタドール自身はバラキエルの家族に害を為すつもりは無い。力を持たない女子供を手に掛けてもマタドールにとっては不名誉なだけ。戦士らしく挑んでくるのなら話は別であるが。
舞い散る雪をその肩に積もらせながら目的の場所に辿り着いた時、マタドールにとって予想外の光景が広がっていた。バラキエルの伴侶と思わしき女性は術者たちによって半死半生となり、娘と思わしき子供も血に染まって意識を失っている。
娘は命に別条は無いことは見て分かった。何千、何万の死を見てきたマタドールには一目で分かる。娘からは死の気配が無い。だが、その母親からは死の気配が立っていた。
二人に止めを刺そうとする術者たちの足元に、マタドールが投げ放った剣が突き刺さ

り、足が止まる。

「何――」

術者の一人はそれが最期の言葉となる。マタドールの白骨の拳が顎を突き上げ、その衝撃で脛骨が折れ、後頭部が背中に密着した状態で空中で何度も回転した後落下、絶命してしまったからだ。

「我が剣の錆にする程の価値も無いな、貴公らは」

二番目に近くに居た術者の顔を掴むとそのまま縦に押し込む。亀の頭部の様に首が胴体へとめり込み、そのまま体が何度も折り返しをしながら押し畳まれる。

肉体と魂を蹂躙するかの様な暴力。だが、マタドールの気は何一つ晴れない。

考えれば今に至るまで幸運が続いていた。偶然バラキエルの現状を知り、訪れた日本では思いもよらない強敵と戦えた。心身ともに充実した状態で目的を達しようとした結果がこれである。

その落差にマタドールの機嫌は最低最悪なまでに悪くなる。普段は使わない素手での暴力に至る程に。

マタドールの姿に慄き、咄嗟に術を放つ前に顎を引き千切り、のたうち回る前に拳で殴り殺す。

振り返って逃げようとする術者は、逃走の一歩を踏み出す前にマタドールの足裏を後

頭部に押し当てられ、大地と一体と化すまで踏み続けられた。
手応えの無さすぎる相手にマタドールの機嫌はますます悪くなり、バラキエルが居ないことに気付いて更に悪くなる。
バラキエルは偶然グリゴリの仕事で不在であり、それを知った術者たちが混血である朱乃を始末しに来たが、自分たちが始末される羽目になった。
両者とも目的を果たせず。要するにマタドールも術者たちも間が悪かったのだ。
全ての術者を葬ると、マタドールは血に染まる女へと近付く。
マタドールの存在を感じ取り、半死半生の女は蒼ざめた唇を動かす。
「貴方は……死神……？」
マタドールは女の傍で足を止め、最期の言葉に耳を傾ける。
「実に絵になる光景ではないか。私に絵画の技術が無いことが惜しまれる。今すぐにでもこの光景を切り取って飾りたいぐらいだ」
その様子を見て揶揄う様な言葉を吐く人物もまたマタドールであった。マタドールがマタドールを見る珍妙な光景であるが、それを不自然に思う者はこの場にいない。
何故ならこれは、彼が見る過去の夢であるからだ。
「しかし、私も随分と追い詰められたものだ……流石はヴァーリ。その成長の早さには感動すら覚える」

過去の夢を見る。それは、マタドールが意識を途切れさせる程の重傷を負った時に見るものである。何故それを知っているのか、それはマタドールが以前に一度同じ様な体験をしたことがあるからであった。

その時の相手はサーゼクスであり、彼によって瀕死に近い状態まで追い詰められた時は、サーゼクスとの最初の邂逅の夢を見た。

「死がこれほど近くても貴方は笑うのですね……」

「おや？　これは初めてだな。また貴女と言葉を交わす日が来るとは思わなかったぞ、セニョーラ」

マタドールの隣に静かに立つのは、雪に横たわり静かに死を待っていた筈の女――朱璃。今も遺言を述べている朱璃とは違い、彼女の衣服には血の一滴も付いていない。

「あの時の死神は私であったが、今度は逆の立場らしい」

皮肉が利いた状況に、マタドールは顎を震わせて笑う。

「他人の死も、自分の死も貴方にとってはその程度のことなのですね」

死を笑うマタドールに向ける朱璃の眼差しは、嫌悪ではなく憐憫であった。そうとしか生きられない、その生き方しか出来ない哀れな魔人に対する憐み。

「くはははは。幾千、幾万の死を積み重ねてきた私が自分の死にだけ怯えるなど虫の良い話ではないか？　貴女も笑ったらどうだ、セニョーラ？　魔人が死に喰われようとす

る瞬間など滑稽であろう?」
　自虐、自嘲ではなく上等な冗句でも話しているかの様な雰囲気のマタドール。だが、それを聞いても朱璃の目から憐憫の色は消えない。
「話は変わるが、貴女は一体何なのだ？　ここは私の夢。となると貴女も夢の存在と言えるが、不思議とそうは思えない。それとも死に近付いたせいで死者の魂を感知出来るようになったのか?」
「それは貴方の解釈に任せます。私から言うことはありません」
　朱璃は自らの存在をはぐらかす。
「ほう……?」
　マタドールは朱璃の顎下を指に乗せて上げ、顔を上向きにする。マタドールの眼窩が朱璃の両眼を覗き込む。
「勿体ぶってくれる――そそられるな」
　剣の如き殺気を朱璃の全身に突き立てる。常人ならば気絶と発狂を繰り返してもおかしくはない。だが、朱璃の目は漣よりも静かで落ち着いていた。
「くっ」
　マタドールは小さく笑い、殺気を消して朱璃から手を離す。
「我ながら無意味なことをしたものだ」

夢の存在ならば己に向けて殺気を放つことを意味し、死者ならば死んだ相手に殺気を飛ばしていることになる。どちらも馬鹿馬鹿しい程に意味のないことであり、マタドールは失笑してしまった。

「――そろそろ終わりますね」

朱璃が目を向けるのは過去の映像。マタドールが朱璃の最期の言葉を聞き届けた後、マタドールが彼女の遺体を丁寧に葬っている様子が流れていた。

「貴方も死を憐れむ心をお持ちだったのですか?」

「美しく散ったものが雪に埋もれて隠されるのも忍びないと思ったのでね。死の間際まで妻であり母であった女性への私なりの敬意だ」

過去のマタドールが朱璃の遺体を横たわらせるとそのまま去っていく。まだ朱乃が近くで気絶しているが、マタドールは一瞥するだけで特に興味を示さず、足を止めることは無かった。

マタドールと朱璃の最初で最期の出会い。過去の記憶はここで終わる、と思われていた。

次の光景に今まで冷静を努めていた朱璃の表情に動揺が浮かぶ。

マタドールが消え、暫くしてやって来たのはバラキエルであった。焦った様子で戻って来たバラキエルは、絶命する術者たちを無視する。彼の目には既に絶命している朱璃

しか映っていなかった。
　バラキエルは朱璃の遺体を抱き上げ、抱き寄せて泣くが哀しみが強過ぎて声すら上げることも出来なかった。
「……貴方は酷い人ですね」
　この光景が映し出されているということは、マタドールもまたこの光景を見ていたことを意味する。
「あの人がここに現れ、悲しみに暮れる中、私の伝えて欲しかった言葉をわざと伝えなかったのですね」
「知らないなぁ。何処に私が認めた敵であるバラキエルがいる？　まさか、そこで女の死体に縋りついて首を落としてくれと言わんばかりに泣く男のことか？　知らん、知らん。そんな情けない男など私は知らない」
　バラキエルの背中を見てマタドールはせせら笑う。
「愛する者の為に涙を流すことは、貴方にとって弱さですか？」
「それを力に換えることが出来なければ弱さだ。逆に私から貴女に訊こう」
　マタドールは剣先をバラキエルに向ける。
「最愛の女を救うことが出来なかった自責の念と、娘を凶刃から守ろうとする父としての在り方。この時の彼の中で天秤はどちらに傾いていたと思う？」

「……貴方があの人のことをどう思うと、私は彼が朱乃の為に戦ってくれると信じています」

朱璃は迷うことなく言ってのける。

「――少しだけ妬けるな、バラキエル。こんなにも愛されていることに。そして、少しだけ同情する。失った者の大きさに」

マタドールは苦笑を思わせる小さな笑い声を零す。すると、周囲の光景が急速に色褪せ始めてきた。目覚めの兆候である。

「私の言葉、ちゃんと伝えてくださいね?」

全てが白く染め上げられる直前、朱璃のそんな声が聞こえた気がした。

◇

マタドールは目を覚ます。と言っても眼球を覆う瞼も眼も無い。沈んでいた意識が白骨の中へと戻って来た。

木々が生い茂っていた筈の場所は、木々が根こそぎ無くなり地面も深く凹んでいた。上空から見ると円形のミステリーサークルの様になっている。

真っ平らの場所以外でも木々が根本から消失していたり、幹が綺麗に抉られていたり

など影響を与えている。
ヴァーリのロンギヌススマッシャーとマタドールの血のアンダルシアの衝突は、二つの力を広範囲に拡散させており、ここが街などであったら多大な被害が生まれていただろう。
マタドールは立とうとするが上手く立てないことに気付く。マタドールはそこで右脚が消失していることに気が付いた。ならばと腕を使って上体を起こそうとするが、これも上手く行かない。
マタドールは左腕も失っていた。
仕方なく剣を地面に突き立てて体を起こすと、そのまま杖にして体を支える。
マタドールの視線が横を向く。向けられた先には仰向けになって倒れているヴァーリ。
フェンリルの牙による傷から流血し続けている。背中が微かに上下しているのを見ると、魔力と体力を極限まで消耗したことによる気絶と思われた。
放っておけばいずれは命が尽きるが、ヴァーリの生命力ならば一日、二日は持つだろうと考え、特に処置などはしない。
「長生きをしている分だけ私の方が早く目覚めたという訳か」
意識を失ったヴァーリの首を断つなど今のマタドールでも造作も無いこと。だが、マ

タドールの剣は下に向けられたままでヴァーリに向けられる気配が無い。
「――この勝負、引き分けだな」
生殺与奪の権利はマタドールに与えられた。だが、マタドールは片手片足を失い、ヴァーリは五体満足。傷の深さではマタドールの方が深刻である。それを鑑みて引き分けの判断を下した。
近距離での力と力の衝突は強い反発を生み出し、逆に盾の機能を果たして彼らを守った。ヴァーリに比べ、マタドールの方の傷が深いのを見ると、純粋な攻撃力の高さならばヴァーリに分があることを意味している。
「く、くくく……！　いいぞ！　素晴らしいぞヴァーリ！　恐るべき成長の早さ！　貴公の才能に肩を並べられる者などほんの一握りだ！　認めよう！　貴公の才は私をも超える！」
『覇龍』の状態で放たれたロンギヌススマッシャー八発同時発射を受けて形が残っていることでも十分化物と言えるが、魔人マタドールが畏怖されるのはその精神性。自分を超えるであろう強敵の誕生を祝福し、歓喜し、それが更なる力を自分に与えてくれると貪欲な確信をする。
勝利を得ることが出来なかったが、とても価値のある引き分けであった。
「えらく上機嫌じゃねぇか」

笑うマタドールに茶化す様な声が掛けられる。
「貴公も生きていたか」
マタドールから少し離れた場所で木に背をもたれさせたマダが瓢箪の酒を煽っている。
「お前も一杯やるかい？」
「結構。酒にも戦いにも随分と酔わせてもらった」
瓢箪を掲げるマダに、マタドールはきっぱりと拒否する。マダの力の影響とはいえ、酔った勢いでかなり無茶なことをしてしまった。無茶をすること自体マタドールは否定しないが、酔いに若干呑まれていたことは自省する。当分の間は酒に類するものは断つつもりであった。
酒を断られたマダは肩を竦めた後、また瓢箪に口を付ける。その様子はマタドールが眺めている。
「おいおい。こんな無様な格好をジロジロと見るんじゃねぇよ」
声を押し殺して笑うマダ。その姿はマタドールより遥かに重傷である。四本あった腕は右腕一本しかなく、左腕など左半身ごと消滅していた。両脚も膝辺りから無くなっており、生きていることが不思議にしか思えない惨状。
そんな重傷でもマダは酒を飲むが、マダの胸部にある硬貨サイズの穴から飲んだ酒が

零れ出る。拡散したヴァーリ、マタドールのどちらかの力が貫いた痕であった。
「んだよ、一気に飲むと出ちまう。勿体ねぇ。おい、ちょっと押さえてくんねぇか？」
「これでもいいかな？」
マタドールは剣を見せつける。
「おいおい。俺は敏感なんだよ。指までなら許可してやる」
互いに趣味の悪い冗談を言い合うと、意外にツボに入ったのか二人は小さく笑った。第三者が居れば全く笑える内容ではない。
笑うマタドールの視線に横たわるフェンリルの巨体が入る。舌をダラリと垂らして動かないフェンリル。体の一部が抉れていたり、毛皮が剥がれている箇所もあるが、まだ生きている様子であった。
マダによって押さえつけられたことで必然的に身を低くすることができ、マタドールとヴァーリの衝突の被害を、すぐ近くにいたマダを見るに最小限で済ませた模様。一方的に巻き込まれたフェンリルにとって不幸中の幸いと言える。
力と力の最前線にいたヴァーリとマタドールは負傷を軽く済ませることができ、それを眺めている者が大きな被害を受けるという皮肉な結果である。
「アレも貴公の差し金かね？」
マタドールが指したのは周囲に巡らされている結界である。多重に張られた結界に

よって力を内部に押し留められた。もし、結界が無ければ半径数十キロは爆撃でも受けた様な有り様になっていただろう。
「お前らと違って、こっちはちゃーんと周りのことの考えてんだよ。ここの中身があるからな」
　マダは自分のこめかみを叩いて小馬鹿にする。
「気遣い感謝する。そうだ、これから戦う時は貴公たちへ事前に連絡を入れるとしよう。必死になって場を整えてくれるからな。それも無償で」
　そんなマダの挑発も、マタドールの皮肉によって返される。
「――本当に不思議なものだ。神に匹敵すると言われた怪物が周りの為に動くなど。その挙句にそんな様になって貴公は何も思わないのか？」
「おいおい。勘違いしてるなぁ。俺は別に愛と平和に目覚めたなんて手垢の付いた設定の化物じゃねぇよ。善悪なんてどうだっていいんだよ。俺が面白い、楽しい、興味深いと思ったらそれが全てだ。頭空っぽにして暴れるよりも、頭空っぽにして暴れている奴を馬鹿にした方が楽しいからなぁ」
「成程。その結果、こうなろうともか？」
　マタドールはマダの喉元に剣を突き付ける。片足立ちになるが、微動だにしない。
「まあ、成る様に成るしかねぇよ」

「潔い。後悔は無いのか？」
「あるに決まってんだろう、馬鹿かお前は？　食いたいもんもあるし、飲みたい酒もあるし、抱きたい女もいるし、やりたい賭けもある。そして、何よりぶっ殺したい奴がいる」
「節操が無い……強欲だな」
　マダの尽きない欲望にマタドールは呆れた声を出す。
「それともそれが命乞いかな？」
「馬鹿が。そんなのこの世で一番俺に似合わねぇ」
「それは良かった。私にとってこの世で一番耳障りなのは命乞いだ」
　マタドールはマダの返答を気に入ったかと思えば、突き付けていた剣をあっさり引いてしまう。
「やんねぇのかよ？」
「貴公が強欲な様に、私も強欲なのだよ。負傷した貴公に勝っても私に後悔が残るだけだ。勝つならやはり万全な方が良い」
「へっ。お優しいことで」
　見逃されたことに感謝などせず、寧ろ不愉快そうに吐き捨てるマダ。マタドールは、その姿に気を良くし声無く笑う。
「さて、私は行くとしよう。赤龍帝、ロキ、人修羅、どれかは生き残っているだろう」

「まだ戦い足りねぇのかよ」
「足りる足りないの問題では無い。私は戦いたい。それだけだ。――それに窮地な程技や感覚が研ぎ澄まされ、一つ上の段階に上がれる。経験上の話だ」
修行目的で挑もうとしているマタドールを心底理解出来ないマダ。これ以上関わりたくもなかった。
「分かった分かった。さっさと行け。そんで殺されて来い」
手で払い、とっとと行く様促す。
「ああ、そうだ。ヴァーリのことを見ておいてくれ。万が一のことがあるかもしれないのでな。彼は私の大事な好敵手の一人だ」
マタドールは後のことをマダに任せると片足を軽く曲げたかと思えば、一気に跳ね、数十メートルの距離を移動する。
それを数度繰り返し結界近くまで来ると、剣を結界に向けて一閃。マタドールとヴァーリの衝突による限界近くまで消耗していた結界はあっさりと斬られて裂け目ができ、マタドールはそれが閉じる前に素早く結界外へ出てしまう。
マタドールが結界の外に出たことを感じ取ったマダだが、出来ることはもう無いので大人しくヴァーリを見ながら独り酒を続ける。
「どうなるかねぇ」

空を見上げながら呟くマダ。酒を飲もうとして、その手が止める。
「……ああん？」
遠く彼方の雲の中を何かが駆け抜けていく。

◇

ぼんやりと霞が掛かる思考の中、悲痛な声が耳に飛び込んで来る。
『――アーシア！　早く神器で！』
『分かっています！　分かっているんです！　でも、でも……効かないんです！　イッセーさんに私の神器がっ！』
『生命力がどんどん弱っていく……！　イッセー先輩、ダメです！』
『そんな、こんなのって、嫌！　嫌よ！　イッセー君！』
涙に濡れた少女たちの声。どれもが知っている声である。リアス、アーシア、小猫、朱乃、それらの声だと認識すると鈍っていた思考が元の早さを取り戻し、シンは起き上がる。
「にゃっ！」
シンが急に起き上がったので傍にいた黒歌が短い悲鳴を上げた。

体の正面に薄い氷が張り付いていることに気が付いたシンはそれを払い落とす。
「な、何でもう動けるにゃん……？　冷凍マグロみたいになってたのに……仙術で回復させたけど最低限のことしかまだしてないんだけど……？」
最低限の治療で動けるレベルまで回復してみせたシン。凍死してもおかしくない症状から後遺症も無く復活してみせた。
「何かもう怖いというか、気持ち悪いにゃん……」
「――礼は言っておく。助かった」
酷い評価をされているが、それを聞き流して助けてくれたことに礼の言葉を送る。
そして、状況がどうなっているかを確かめる。
「木場」
「あ……間薙君！」
一点を見て呆けていた木場に声を掛けると輝きが失せていた目に光が灯る。
「良かった……！　君も無事だったんだね……！」
木場は早足でシンに接近するとシンの両肩に手を置いて俯く。
「他はどうなっている？」
シンはあくまで冷静に状況を確認する。
「君と同じく氷漬けになっていたケルベロス君とジャックランタン君は無事だ。タン

ニーン様も重傷だけど命に別条は無い」
アーシアの神器に加え、木場たちが所有していたフェニックスの涙を与えることで彼らの命を何とか繋げることが出来た。
ケルベロスもタンニーンも体に付いていた氷が剥がれ落ちている。タンニーンは切断された翼と腕に布や包帯で止血されている状態であった。完全に傷口を塞いでいないのを見ると、繋げることを前提とした治療である。
ギャスパーはジャックランタンを抱き締めながら泣いていた。復活したばかりのジャックランタンはそれを嫌がりもせずにさせたいようにしている。
「間薙」
声の方を見るとゼノヴィアが立っていた。その目に力は無く、焦点も合っていない様に見える。
「彼女を……」
ゼノヴィアは両手の中にいるピクシーをシンに差し出した。
「命に別条は無い。消耗して眠っているだけだ……」
「そうか」
シンはゼノヴィアからピクシーを手渡される。
「――あいつも消耗して眠っているだけか？」

シンが指す方向にはリアスたちに囲まれた状態で仰向けになっている一誠の姿。
「イッセーは――」
ゼノヴィアはそこで言葉を詰まらせたので、代わりに木場が言葉を継ぐ。
「……イッセー君は気絶したロキをここまで運んできたんだ。そして、神器を解除したら急に……」
糸が切れた様に崩れ落ち、そのまま動かなくなり急速に衰弱しているのだと言う。
「ロキはどうした？」
「――ッ、匙君とロスヴァイセさんがヴリトラの力と魔法で何重にも拘束して監視しているよ」
一誠の容態よりもロキのことを先に聞いたシンに一瞬だけ咎める様な視線を向けた木場だが、すぐに筋違いと思い視線を伏せながらロキの現状を教える。
「ほら。あそこで」
木場が指差した方向を見ると、魔法陣の上で横になっているロキ。その体は黒い炎の鎖によって何重にも拘束され、地面に磔にされていた。
魔法陣の傍ではロスヴァイセが監視し、匙が苛々した態度でロキを睨みつけている。匙は一誠のことで気持ちが落ち着いていない様子であったが、ロキから目を離すことは無かった。友人が命懸けで成し遂げたことを台無しにさせない為に心配する気持ちを

押し殺している。

「――そうか」

短くその一言だけ返しながら、シンの目は匙たちから離れ一誠へと向けられる。

「……イッセー君は僕たちの為に『覇龍』を使ったんだ。それだけじゃない。見たこともない雷の力までも……ロスヴァイセさんはトール様の気配を強く感じたって言っていた……『覇龍』に『雷神』の力まで同時に使用して無事で済む筈が無かったんだ……」

木場の声には後悔と悲しみしかなかった。力が足りず全てを一誠に任せてしまったこと。その一誠が死の瀬戸際にいること。木場にとって過去にあった出来事のせいで友人を失ってしまうということは耐え難い苦痛と恐怖なのである。

木場の両脚は今にも崩れ落ちそうな程震えていた。

「私たちは勝った。勝ったんだ……それなのに、何故、こんな……」

ゼノヴィアは耐え切れなくなったのか地面に座り込み俯いてしまう。ゼノヴィアの言う通りロキには勝った。だが、その勝利に歓喜は無かった。

「ゼノヴィア……」

イリナは座り込むゼノヴィアの傍に座り、彼女の頭を抱き締めた。

リアスたちは必死になって一誠を蘇生させようとしている。泣き崩れている朱乃をバラキエルが痛ましげに見ていた。

「……女を泣かせるにしても、こんな形は望まないだろう？」
空気に溶け込む吐息の様に小さなシンの声。
「――戻って来い」

◇

白い空間の中で傷だらけの一誠が横たわっている。その傍で無言で見下ろすのは、歴代赤龍帝の残留思念。魔人への復讐に燃えていた筈のその残留思念は、憎悪が消えた穏やかな顔付きで一誠を見ている。
その残留思念に近付く別の気配。
「――エルシャか」
残留思念から魔人への憎しみ以外の言葉が出される。
残留思念の後ろに立つのは若い女性であった。ウェーブのかかった長い金髪にスリットが入ったドレスを着ている。美麗という言葉以外思い付かない程の美女であった。
エルシャと呼ばれた女性は、端整な顔を驚きの色に染めていた。
「貴方、正気を取り戻したの？」

エルシャもまた、目の前の存在と同じ歴代赤龍帝の残留思念であった。ただし、他の歴代赤龍帝が虚ろで言語など発しない中、彼女は一、二を争う程強い赤龍帝であった為、残留思念になっても自我を失うことは無い例外である。彼女以外にもう一人存在するが、今は神器の奥に引っ込んでいる。

この残留思念は他のと違い言語を話すことが出来たが、魔人への憎悪に染まり切っており、魔人への憎しみの言葉しか吐かなかったが、今の言葉にはちゃんとした理性があった。

「少しだけ」

「……貴方は魔人への憎悪が強すぎて心配だったわ。案の定、今の赤龍帝君に干渉して魔人と戦うなんて無茶をするんだから。途中で止めなきゃ私かベルザードが殴ってでも止めたわ」

「面目ない……今の赤龍帝にも随分と迷惑を掛けた」

「全くね。『覇龍』の詠唱も勝手に教えちゃうし」

「本当にすまない……」

エルシャに頭を下げる。

「――いいのよ。貴方が教えていなければ今の赤龍帝君が危なかったしね。でも……」

ロキへの勝利の代償は大きく、一誠の肉体は今にも死に掛けている。そして、精神の

方にも深いダメージを負っている。この精神世界で一誠が目を覚まさない理由がそれであった。
「この子はもう……」
「大丈夫だ」
「大丈夫？」
「死なせはしない」
　眠る一誠に残留思念が触れる。すると、残留思念の体から粒子の様な光が飛び、一誠と同化していくが、それに反して残留思念の体は薄まっていく。
「貴方……自分を……！」
「せめてもの罪滅ぼしだ。残り滓の様な魂だが、命を繋ぎ止めることぐらいは出来る」
　消え行く筈なのに浮かべるのは穏やかな笑み。
「私の中には二つの怒りがあった。一つは魔人への怒り。もう一つは、私自身への怒りだ」
「貴方自身って、貴方は立派に戦ったわ……」
「君も神器から見ていたな、私の最期を。無様なものだ。大切な者を傷付けられ、命を賭して戦ったというのに、私は魔人に傷一つ付けることが出来なかった。……滑稽な話だ」

「私たちの中で貴方を嘲笑う者なんて誰一人居ないわ」
「――それでも、私は私を許せなかった……！」
笑みが消え、自身への憤怒で歪む。どんな言い訳を並べようと無力だった事実は消し去ることは出来ない。
「だからこそ『覇龍』となって仲間を救う彼を見て、少しだけ救われた気になった……私が出来なかったことを代わりに彼が成し遂げてくれて……まあ、私の一方的な思いだがね」
憤怒は消え、自嘲する。
「そんな彼を絶対に死なせちゃいけない。彼は生きるべきだ」
「……魔人のことはいいの？」
「両方を選べる程、私は大した赤龍帝では無いよ」
一誠を生かす為に死して尚残っていた筈の恨みを捨てる。苦笑する残留思念に、エルシャは微笑む。
「――やっぱり、貴方も赤龍帝を名乗るのに相応しい人だったわ」
エルシャに続いて二人にしか聞こえない声無き声が届く。ここには居ないベルザードの声であった。
「……光栄だ。君たちにそう言われて」

残留思念の体が殆ど透明になり、一誠の体から殆ど傷が消える。
『逝くのか？』
白い空間に響くドライグの声。
「ああ。長い間、恨み言ばかりですまなかった、ドライグ」
『気にするな。……相棒を助けてくれたことに礼を言う』
「……君から礼を言われる日が来るとは思っていなかった」
目を丸くして驚くと、ドライグが苦笑を感じた。
『俺もそう思う』
「今の赤龍帝のおかげだな。大事にしてやってくれ。彼に君が必要な様に、君にも彼が必要だ」
『そうかもな……』
存在が完全に消えそうになる前にドライグは言う。
『俺が変わったのは今の相棒のおかげかもしれない。だが、その相棒に繋げたのは過去の赤龍帝たち、つまりはお前のおかげでもある。――さらばだ、嘗ての戦友(とも)よ』
ドライグの別れの言葉に驚き、そして晴れやかな笑みを見せる。
「その言葉を聞けただけでもこの世にしがみついていた甲斐があった。さようなら、戦友(とも)よ」

そして、消える間際過去の赤龍帝は今の赤龍帝に言葉を残す。
「ドライグと今の仲間を大事にしてくれ。それが私の最期の願いだ」
その言葉の後、完全に消えてしまう。最早、思い残すことは無いと言わんばかりに。

◇

『――安心しろ』
「え？」
一誠の手の甲に丸い緑色の光が灯るとドライグの声が涙を流すリアスたちに届く。
『相棒は戻って来る』
その言葉の後、閉ざされていた一誠の瞼が動き、ゆっくりと開けられる。
「……あれ？」
自分が仰向けになっていることを疑問に思い、そんな自分を涙で濡れた瞳で覗き込むリアスたちに驚き、慌てて体を起こす。
「部長？　どうしたんですか？　アーシアに朱乃さん、小猫ちゃんも？　というか俺、寝てたんですか？」
『覇龍』を解除した後の記憶が無いらしく、何で皆が泣いているのか全く分からない一

誠。死に掛けていたというのに間の抜けた反応をする一誠に、リアスたちは脱力した後、一斉に抱き着いた。
「バカっ！　本当にバカっ！　死んだかと思ったじゃない！」
「そうです！　バカです！　イッセーさんはバカです！」
「イッセー君のバカ！　もう、本当に……バカっ！」
「……イッセー先輩。バカ……！」
「な、何で急にバカバカって、アーシアまで！　いだだだだだ！　締まる！　締まる！　止めてぇ！　ロキにやられた傷がっ！　あああああああっ！」
響き渡る一誠の悲鳴。湿っぽくシリアスだった雰囲気が一転して乾いた笑いが起きそうなコメディチックな空気に変わる。
「はあっ……ははははは」
木場は脱力した様に俯き、誰にも顔を見せずに笑う。安堵の拍子で涙腺が緩んでいるのを誤魔化す為である。
イリナとゼノヴィアは急いで立ち上がり、一誠を中心とした塊に向かって突撃。一誠の悲鳴が再び上がる。
「はぁー。喜んでいいのかどうか分かんねぇぜぃ」
「まさか死の淵から生還するとは。赤龍帝の生命力は侮れませんね」

「にゃー。ヴァーリは嬉しがるけど、これから敵になる身としては複雑だにゃん」
一誠の生還を素直に喜べないと言っているが、美候たちは微笑を浮かべている。
「おーい。人修羅ー」
美候が小声でシンに呼び掛ける。シンは目線だけ美候たちに向けた。
「ロキも倒したし、これで共闘も終わりだぜぃ。何か俺たちは場違いだし、このままヴァーリを拾っておさらばさせてもらうぜぃ」
美候たちなりに今の空気を壊さないように気を遣っており、アーサーは音も無く抜刀して空間に裂け目を作り出す。
「んじゃな」
「次はお互いどういう立場になるか分かりませんが、お元気で」
「バイバイ。白音によろしく言っておいてにゃん」
そして、空間の裂け目は閉じてしまう。
美候たちが静かに去り、シンも目線を戻そうとするが――
「……うん？」
――滑る視線が一点で止まる。そこには仰向けになって寝ているジャックフロスト――の隣でうつ伏せになって寝ているジャアクフロスト。
最初は口の悪いジャアクフロストを懲らしめる為の軽い悪戯かと思った。だが、時間

が経過していく毎にその考えも薄れていく。美候たちが戻って来る気配が全く無い。
そして確信してしまった。ジャアクフロストは美候たちに忘れられ、置き去りにされてしまったのだと。
色々なことが連続して起こってしまったせいで、ジャアクフロストのことまで気が回らなかったのだろう。いずれは気付いて戻って来ると信じ、今は見なかったことにした。
視線を動かし、一誠たちの方を見る。一誠は集団抱擁からようやく解放されていたところであった。
「いや、ホント、全然覚えていないけど心配をお掛けました」
リアスたちに頭を下げて謝罪し顔を上げると、リアスたちは驚いた表情になり、その後オロオロと動揺し始める。
「ご、ごめんなさい！　本当に痛かったのね！」
「大丈夫ですか！　どこが痛いんですか！」
急に体のことを心配し出すリアスたちに、一誠は困惑する。ふと、頬にむず痒い感触を覚え、指で擦る様にして掻く。頬に触れた指先は何故か濡れていた。
「あれ？」
反対側も同じ様に触れるとやはり濡れている。一誠は自分が涙を流していることに

気付いた。
悲しいことなど無く、寧ろロキに勝ち皆の許へ生還出来たことで嬉しい筈なのに、拭っても拭っても涙がとめどなく出て来る。
自分ではない何かが一誠に涙を流させていた。
『悪いな、相棒』
一誠の脳内にのみドライグの声が聞こえた。
『そのままにしてやってくれ。今のあいつらは弔う術は無い。だが、消えていった同胞に何かをしてやりたかったんだ』
神器を通じ、一誠の体を使って別れの涙を流させる過去の赤龍帝。何か一つでも消えていった者に送りたかったのだ。
「消えていったって……」
『ドライグと今の仲間を大事にしてくれ。それが私の最期の願いだ』
「あっ……」
聞き覚えのある声が頭の中にこだまする。その言葉で気付いてしまった。その声の主は最早何処にも居ないのだと。
決して良好とは呼べない関係ではあった。魔人を憎み、一誠の体を使って暴走しようともしていた。しかし、ロキの戦いの中で『覇龍』への祝詞を教えてくれ、ロキに勝つ

きっかけを作ってくれた。最後に少しだけ歩み寄れた気がしてならない。
名を聞くことすら出来なかった過去の赤龍帝。そのことを思うと、流れ出る涙に一誠自身の涙が自然に混じる。
「女を泣かせた後に今度は自分が泣くのか？」
そんな彼を揶揄う様な声。一誠の近くにいつの間にかシンが来ていた。
「う、うるせぇなぁ。色々とこみ上げてくるものがあるんだよ！」
照れ隠しの様に大声で返すが、一誠は涙を拭おうとはしない。ドライグの頼みを律儀に守っていた。
その行為に何かしらの思いを感じ取ったシンは、『そうか』と短く言ってそれ以上の言うことは無かった。
やがて、一誠の涙も自然に止まる。神器内の過去の赤龍帝による弔いは済んだ。
「何かまた死にかけちまった」
「お互いにな」
「お前、よくあんなカッチンコチンになっても生きてたなぁ？」
「そうだな。不思議なものだ」
「他人事みたいに言いやがって……」
「今、生きているなら問題無い」

何でもない様に言うシンに一誠は呆れた表情をする。話を聞いていたリアスたちも似たような表情をしていた。もっと自分を労われと顔に書いてある。

唐突にキン、キン、キンという金属を叩く音が聞こえて来た。連続して聞こえるそれはまるで拍手でもしているかのよう。

不自然な音に皆が訝しみながら音の方に目を向け、全員凍り付く。

いつの間に現れたのか分からない。

「祝福しよう。よく生き延びた」

気配も音も無く不意打ちで現れたマタドールが、手に持つ剣を左腕の骨で叩き、拍手代わりにしていた。既に戦闘を行っていたのか手足を消失させており、衣服も破け、ほつれている。

だというのにみすぼらしいという感覚にはならなかった。全身から放つ殺気と闘志がその感覚を麻痺させる。

「良いタイミングだ。互いに条件は五分。――さあ、始めようか？」

さっきまでの戦勝ムードが一気に吹き飛び、殺意の冷たさと闘気の熱を帯びた戦いの空気となる。

事態の急展開に殆どの者が付いて行けない中、バラキエルは朱乃を守る為に彼女の前に出て、シンは静かに拳を握り締め、今の自分がどれほど戦えるのかを確認し、一誠は

いつでも神器を発動出来る様に気持ちを切り替える。
「では――」
マタドールが一歩踏み出そうとした時、音を超えた何かが彼を貫く。
「――くっ！」
腹部から突き出す光で出来た鏃。彼を貫いたのは矢であった。矢は一本で終わらず、胴体を貫いた直後に、足と両肩にも突き刺さる。
両足を負傷して立っていられなくなり、マタドールはバランスを崩し前のめりになるが、剣を突き立て、意地でも倒れることを拒む。
しかし――
「ふんっ！　カスがっ！　往生際の悪いっ！」
容赦無き罵声と共に空から白い影が飛来し、唯一己を支えるマタドールの腕に落下。
その後に嘶くのは体中に目を付けた異形の白馬。白馬の蹄によってマタドールの腕は踏み砕かれる。
異形の白馬に跨るのは弓を持ち、黒衣を纏い、黄金の冠を被る白骨。
眼球無き黒穴が、事態について行けなくて呆けてしまう一誠らを睨み付け、釘を刺す。
「お前らっ一言も喋るなっ！　一歩たりとも動くなっ！　路傍の石に徹していろっ！　そうすればすぐに済むっ！　出来なければ殺すっ！」

黙示録の四騎士の一人――ホワイトライダーはその言葉を以ってこの場を支配する。

終幕、弁当

何だ、これは？

完全に消し飛んだ戦勝ムードの中で全員に共通の思いが宿っていた。

日常へ戻ろうとしていた空気はマタドールの登場で罅割れ、次に現れたホワイトライダーが粉微塵に吹き飛ばす。

魔人ホワイトライダー

その姿を直接見た者はマタドール以外居ない。ロキですら名を知っているだけの存在である。だが、跨る異形の白馬。黒い衣に白骨の顔。そして、頭部に輝く金の王冠という特徴だけは広く知れ渡っている。

最も目撃数が少ない魔人もとい魔人集団。四騎士と呼ばれる魔人の一人が隠そうとしない殺気と共にマタドールを文字通り蹂躙している。

魔人の放つ死の気配。それとは別にシンたちは不思議な感覚に陥っていた。

ホワイトライダーを目にした瞬間、戦い方というものが一切浮かばなくなる。少なくとも、今まではどんな攻撃でどう攻めるか頭の中に浮かび上がるものであったが、まるでそれが全て無駄だと言わんばかり微塵も描かれない。

要は『勝てる気がしない』のだ。
ホワイトライダーはシンたちの視線を無視し、跨る異形の白馬の足場で転がっているマタドールに視線を下ろす。眼球など無いのにその目が憤怒で彩られているのが分かる。
「戦うことしか頭に無いイカレがっ！　その挙句が今の様に芋虫が如く四肢を奪われて地面を這うかっ！　無様だなっ！　だが、お似合いとも言えるっ！」
マタドールに浴びせられる容赦の無い罵倒。底気味悪く、騎士という仰々しい肩書きに反してホワイトライダーの口調は粗野なもの。そんな荒々しい口調でマタドールを侮蔑し、軽蔑する。
だが、死者と見紛う体から放たれる殺気は死そのもの。五感のどれかに触れただけで己の急所に凶器を突き付けられている感覚に襲われる。直接向けられていないただの傍観者と成り下がったシンたちがその様な感覚を味わうということは、マタドール自身はそれの比ではない、精神に死を直に浴びせられている状況の筈。
しかし、同じ魔人であるマタドールにとって死など良く知る隣人にしか過ぎない。ホワイトライダーの殺気に対し、小馬鹿にする様な笑いを見せる。
「くくく……今更現れて残飯でも漁りに来たのか？　実に狗らしい。貴公にお似合いだな」

ホワイトライダーの罵倒を、彼の言った言葉を借りて投げ返すマタドール。
「お前は残飯ではなく塵だがなっ！」
ホワイトライダーが吐き捨てると、異形の白馬はマタドールの顔面を蹄で蹴り上げた。
浮き上がるマタドール。ホワイトライダーはマタドールの首を掴み、宙吊りにする。
四肢を完全に破壊されたマタドールに抗う術は無かったが、首が軋む程絞められてもマタドールの口は止まらない。
「狗というのは認めるか……大した忠犬っぷりだ……にしては躾がなっていないが」
「舌も無いのによく回る口だっ！　お前を見ていると欠片も残さずに消し去りたくなるっ！」
生ある者ならその恐怖から逃れる為に自死を選ぶであろう殺意に染まった怒気をマタドールにこれでもかと浴びせるが、マタドールの笑い声を断つことは出来なかった。
「くくく……消し去りたくなる、か。どうやら、貴公は私の命を奪うことは禁じられているらしいな。そうでなければ、そんな言葉を吐く前に殺っている」
ホワイトライダーの言動からその目的の断片を読み取ったマタドール。
「そして、現れた目的も使命から来るものでも無いか……となると貴公が現れた理由は」
ホワイトライダーはマタドールが最後まで言う前にその首を強く締め、喋れなくす

る。
「本当に無駄口の多い奴だっ！」
　ホワイトライダーは吐き捨てると、マタドールの足元にある地面が歪み、赤黒い光の円が生まれ、円の中に光一つ無い黒い穴が出来る。
「お前の言う通りだっ！　お前は殺さんっ！　まだなっ！　だが、死ななければ何をしてもいいっ！」
　何処へ繋がるか分からない黒い穴の中にマタドールを投棄しようとする。
「く、くく、そうか……なら、最後に一つ、言い残したことが、ある」
　マタドールは首を締め上げられながらも顎を動かし、途切れ途切れに喋る。
「聞かんっ！　失せろっ！」
　当然ながらホワイトライダーは聞く耳を持たない。
「私の言葉では無い……姫島朱璃が最期に残した、言葉だ……」
　マタドールが出した名にバラキエルと朱乃は、今の状況など忘れて声を発してしまっていた。
「何だと！」
「母様の！」
「黙れっ！　喧しいぞっ！」

二人の反応にホワイトライダーが怒鳴りつけるが、今の二人はその程度で怯む筈が無い。ホワイトライダーに対する恐れよりも、最愛の妻であり母である朱璃の言葉を知りたいという切望の方が強かった。

「一応は、人を守護する立場に、あるのだろう？　死者とはいえ、人を第一に考えるのが、貴公らの筈だった、と思うが？」

「……俺たちの目的はあくまで人々の守護っ！　たかが遺言程度で……」

「ならば、このまま、私をこの奈落へ、落とせばいい」

マタドールはそう言って口を閉ざす。マタドールを掴んだまま真っ直ぐと伸ばされるホワイトライダーの腕。たった五本の指を離せば、瞬く間にマタドールの姿は黒い穴の中へと消える。

しかし、ホワイトライダーの指は中々マタドールの首から離れない。恐怖を煽っている――という訳では無い。

少ししてギリギリと堅い物を擦れ合わす音が鳴り始める。鳥肌を立たせる高音。その音はホワイトライダーから発生していた。

真一文字に結ばれるホワイトライダーの？き出しの歯。音はその口腔内から響いている。

音の正体はホワイトライダーの軋り合わせる歯の音。

今すぐにでもマタドールを穴の中に沈めたい。だが、ホワイトライダーの意志に反して指は動かなかった。

四騎士に科せられた何かしらの誓約が、ホワイトライダーにそれの実行を強制制止する。

「……とっとと言えっ！　俺の理性が擦り切れる前にっ！」

心の底から屈辱だと言わんばかりの憤怒に満ちた言葉。

「なあに、すぐ済む」

それを愉しむ様にマタドールは笑うが、その笑いもすぐに消えた。

『貴方と出会ったあの日から、最期の今日まで何一つ後悔は無く、幸せでした。私の大切な朱乃を私の分まで愛して下さい』

魔人の言葉を鵜？みにすることは間違ったことかもしれない。しかし、この状況でマタドールが出まかせを言うとは思えなかった。何よりマタドールによって伝えられる朱璃の最期の言葉は、バラキエルと朱乃の耳には朱璃の声となって届くのだ。

双眸の奥が熱くなっていくのを感じ、バラキエルは顔を上げる。そうしなければその熱いものが目から流れ出そうになる。彼の脳裏には朱璃と共に過ごした時の思い出が駆け巡る。

心の何処かで朱璃は自分のことを恨んでいるかもしれない。そんな女性では無いこ

とは知っていた。だが、朱璃の死の原因にバラキエルは間接的に関わっている。その罪悪感がありもしない可能性を生み出していた。或いはそのありもしないこともバラキエルにとっての自罰であったのかもしれない。妻を死なせ、娘の心に深い傷を与えてしまって尚おめおめと生きている自分への償うことも許されない罰。

しかし、バラキエルは許された。最愛の女性の遺言によって。バラキエルの心の隅に引っ掛かっていた小さな棘が消え去った気がした。

涙を堪えるバラキエル。人前で見せるのを恥じたのではない、強い父である為に朱乃の前で滂沱するのを耐えているのだ。

朱乃はそんなバラキエルの姿を見ると、バラキエルの肩に顔を押し当て、涙を流さない父の代わりに自身が涙を流す。

「しかと伝えたぞ」

マタドールは何処か満足気に言う。

「なら消えろっ！」

そんな余韻を消し去るホワイトライダーの煮詰められた怒りの声。

「待って！　あの時、私を助けたのは――」

「――ふっ」

朱乃の問いに答える代わりに、マタドールは一笑。すると、マタドールは砕けた腕で

ホワイトライダーの腕を跳ね除ける。その拍子にホワイトライダーは手を離し、マタドールは抗うことなく地面に生まれた奈落の穴へ落ちていく。
「貴公に落とされるのではない。私自身の意志で行くのだ」
何もせずに落とされるくらいなら、抵抗して自ら落ちる。マタドールは最後の瞬間まで自分のプライドを貫き通す。
マタドールが穴の中に消えると穴も消滅し、マタドールはこの世界から完全に姿を消してしまった。
「――そのままでいい、聞け」
ロスヴァイセと匙は、魔人に極限まで警戒しているところへ不意に掛けられた言葉により跳ね上がりそうになる体を懸命に抑える。
声の主は二人が拘束しているロキ。『覇龍』と雷神の力で打ちのめされたというのにもう意識を取り戻していた。
「これから何があろうとそこから一歩も動くな。死にたくなければな」
耳元で囁かれているかの様に聞こえるロキの声。何かしらの魔法を使っている様子だが、魔法封じの魔法陣を何重にも重ね掛けされた上にヴリトラの黒炎で死なないギリギリまで消耗させ続けているというのに、まだ使用出来ることに二人は表情には出さず内心で驚く。

「ロキ様、どういう意味ですか？」
　ロスヴァイセの、殆ど唇を動かさず羽虫の羽音の様な声量を絞り切った極小の声。それでもロキにはキチンと届き、返事が返って来る。
「何かしらの接触があると踏んでいた。――大当たりだったなぁ。ひゃははは」
「まさか……全ては貴方の予定通りだと言うのですか！」
　ロスヴァイセは声を震わせる。匙もまた戦慄していた。登場からここまでの流れが全てロキの掌の上だというのなら、途方も無い策謀家である。
　が、予想に反してロキは不機嫌そうな声が返ってきた。
「……俺が我々が敗北することを前提に計画を立てる間抜けに見えるのか？　ヴァルキリー？　我々の計画が全て上手く行っていたら地面に這っていたのはお前たちで、今頃オーディンの首を獲って全ての神々に見せつけていたところだ」
　その段階で何かしらの接触があると予測していたロキであったが、折角の計画も一誠たちによって邪魔され最初の一歩で躓く形となってしまった。
「魔法も中々だが嫌味も中々だな、ヴァルキリー」
「い、いえ、そういうつもりで言った訳では……」
「――けっ。そういう配慮が無いから行き遅れるんだよぉ」
「な、なあっ！　ひ、酷い……酷過ぎます！　もう一人のロキ様っ！」

もう一人のロキによる容赦無い罵倒でロスヴァイセは涙目になる。
「取り敢えず、そういうのは後にしてくれ！　一歩でも動いたら死ぬってどういう意味だよ！」
視線はホワイトライダーに固定したまま、匙は肝心の話に戻す。
「決まっている。奴の狙いは我々だ」
「我々って……」
「こんな状態である以上、ここから先は、気に喰わないが賭けだな」
何が賭けなのか匙が問おうとした時、全身に悪寒が駆け抜ける。見られていると理解した匙とロスヴァイセは、弾かれた様に悪寒の元の方を見る。
ホワイトライダーが弓を構え、弦を引いている。矢は番えていないというのにその姿を目に入れた途端、体が竦んで動けなくなる。
一誠とリアスが恐怖を押し殺して逃げろと叫んでいるのが聞こえたが、その必死な叫びが鼓膜を震わせても匙たちは微動だに出来ない。
ホワイトライダーが弦から指を離す。張られた弦が戻ると共に弦音を鳴らす。その時、番えていない筈の矢が出現。彗星の様に尾を残すそれは、光そのものを射っているかの様に見えた。
極限までの緊張状態は、二人に最大限の集中力を与え、匙たちの目には射られた光矢

の軌跡がコマ送りの様に映っていた。ただし、見えているだけであり、体の方は一向に動かない。

馬上から射られた為、上から斜め下へ向かって飛んで行く光矢。自然とその動きを目で追ってしまう匙とロスヴァイセ。

やがて、光矢は拘束されているロキへ接近していき――命中を見届ける前に強い閃光が走り、強烈な風が匙たちを煽ぐ。

「くうっ！　ヴリトラ！」

『不味いぞ。今ので奴とのラインが切断された』

「くそっ！」

「気を付けて下さい！　私の魔法陣が破壊されました！」

ヴリトラの黒炎が吹き飛ばされたのを内なるヴリトラは感じ取り、ロスヴァイセも展開していた魔法陣が破壊されたのを感じた。

ホワイトライダーの矢が着弾した地点には砂煙が立ち昇っており、ロキが今どうなっているのか確認出来ない。

匙とロスヴァイセは急いでロキの安否を確認しようとする。ここでロキが死ぬ様なことが起これば、一誠たちの戦いが無駄に終わる。命懸けで戦った挙句が理不尽な横槍による決着など認められない。

「――動くなと言った筈だっ！」
しかし、それを許すホワイトライダーでは無かった。弓を構え、弦を引き、離す。その動作を一纏めにしたかの様なあまりに速過ぎる動きに、匙たちは反応することが出来ず、結果として視認するよりも早く光矢が匙たちを射抜こうとしていた。
が、その光矢が二人に届くことは無かった。射抜く筈であった光矢は横から伸びたロキの手によって空中で掴み取られる。
ロキはホワイトライダーに見せつける様に手の中の光矢を握り折る。折られた光矢は粒子となって溶ける様に消えた。
「ロキ様、何故……？」
ロスヴァイセはロキに助けられたことに困惑する。匙もまた同様であった。つい先程まで戦っていた間柄。助ける義理など無い筈である。
二人の表情を見て、ロキは鼻を鳴らす。
「我々を倒した者たちが、名ばかり騎士に癇癪で倒されようものなら、我々の名にも傷が付く。――要は気に入らねぇんだよ、勝った奴が負けるのがなぁ」
突き放す様に言うと、ロキはホワイトライダーと向き合う。
「好きにしろ。抵抗はしない」
「――その潔さだけは褒めてやるっ！」

ロキの足元にマタドールの時と同じく別空間へ繋がる穴が出現し、ロキはその中に落ちていく。
あれだけ苦労して倒したロキをあっさりと連れ去られてしまい、この場に居る全員は唖然とするしかなかった。
ホワイトライダーはやることはやったと言わんばかりに愛馬の手綱を引き、ここから去ろうとする。
あまりに一方的で身勝手なホワイトライダーの行動。それを黙っていられない者がいた。
「ちょ、ちょっと待ってくれ！」
ホワイトライダーは馬を止め、眼球無き眼光を光らせる。
「――赤龍帝かっ！」
一誠は声に出した瞬間に自分でも『しまった』という表情をする。ここで呼び止めるなど無謀もいいとこだが、それでもこんな一方的で理不尽な展開があの戦いの幕引きだと認めたくなかった。
「あ、あんた！　一体何が目的なんだよ！」
声を震わせながらも問い質す。相手がどんな危険な存在だろうと、それを知らなければ納得出来ない。

「ドライグっ！……未熟者の手綱ぐらい握っておけっ！」
『生憎、誰かの手綱を握るなど俺の性分ではない。握られるのも、な』
吐き捨てるホワイトライダーにドライグは一誠を窘めることはせず、寧ろその行動を肯定する。
「未熟故の無知と赤龍帝の名に免じて今のは聞かなかったことにしてやるっ！　もう口を開くなっ！」
高圧的であるが一度は見逃すと言うホワイトライダー。
「でも」
その言葉が出たのは反射的なものであった。つい無意識に食い下がろうとし飛び出してしまった一言。
「二度目は無いっ！　死ねっ！」
ホワイトライダーによる死刑宣告と彼が弓の弦を引き絞り、無数の光矢を周囲に射るのはほぼ同時であった。殺意と行動までの間など無いに等しく、あまりにも流れる様な動きのせいで光矢が射られたことを認識する以前に全員ホワイトライダーの言葉が耳に入っている途中であった。
一誠の行動は不注意だったかもしれない。だからといって、ホワイトライダーがここまで短気――もとい殺意と行動が裏表の様に密着しているとは誰もが思ってもいな

かった。
　ホワイトライダーの『死ね』という言葉が耳奥に入り、脳がその意味を理解した時には放たれた光矢は全員の眼前にまで迫っている。
　矢の光が目に飛び込んできた瞬間、シンの右腕が考えるよりも先に動いていた。最小最短最速の動きを以って死を強く匂い立たせる光矢を掴み掛る――直前になって唐突に消え失せられてしまう。
　見えたかと思えばすぐに消えた。一誠たちは白昼夢でも見させられているかの様な気分になる。
『ヒッヒッヒ。阿呆か、おぬしは?』
　姿は見えず声のみ聞こえる。老人を思わせる低い声。聞く者に鮮血を彷彿とさせる隠し切れない残虐性を感じさせる。そんな声がホワイトライダーを小馬鹿にする。
『そなたの……枯れぬ怒気には……羨望すら覚えるが……時と場合を選べなければ……渇いていた方が……ましに思える……』
　男女の区別がつかない今にも消えて無くなりそうな声。乾いた声には水気の代わりにホワイトライダーへの呆れが含まれていた。
『お前が真面目なのは十分理解している。だからこそ、敢えて言おう。役目よりも使命を果たせ』

最後に聞こえた声は感情が見えない機械の様な平坦な声。怒りも呆れも嘆きも無く、ただホワイトライダーを窘める。
「ちっ……」
ホワイトライダーは皆に聞こえる程大きな舌打ちをし、構えていた弓を下ろす。
『四騎士が勢揃いか……』
ホワイトライダーと違い姿を現さない三人の騎士。しかし、姿を見せなくともホワイトライダーと遜色無い死の恐怖を纏った重圧に圧せられる。
その時アーシアの膝から力が抜け、体が崩れ落ちる。
「アーシア!」
傍にいたリアスが咄嗟にアーシアの体を支える。アーシアの顔から血の気が失せ、蒼白になっている。ホワイトライダーへの恐怖でもギリギリ耐えていたアーシアの精神が、残りの騎士たちの登場により限界を迎え、極度の緊張状態を強いられた結果気絶してしまった。
アーシアだけでない。ギャスパーも精神が限界を超えてしまい、うつ伏せになって静かになってしまっている。
二人の心が軟弱だとは言えない。寧ろ、意識を保つよりも今すぐ断ってしまった方が心に傷を負わせない為の最善の行動にすら思えてくる。

ホワイトライダーは忌々し気に一誠たちを眺める。咎められなければ今すぐにでも滅ぼしたいというのが嫌でも伝わり、寿命が縮まりそうになる。

動かしていたホワイトライダーの視線が一点で止まる。そこに立つのはシン。

怒り、懐古、憐憫。向けられた視線から複雑な感情が伝わってくる。怒り以外向けられる覚えの無い感情に、シンは内心戸惑いを覚える。

「――はっ」

ホワイトライダー自身も裡にある感情を鼻で嘲りながら手綱を操る。白馬は嘶き、地面を蹴る。

空中に足場でもあるかの様に白馬は走りながら上昇し、そこから加速して流星の如き速さとなって雲を突き破り、彼方へ消えてしまった。

ホワイトライダーが去ると残りの騎士たちの気配も消失。正真正銘、今度こそ戦いは終わった。終わったが、あまり後味の良い結末では無い。最後の最後で全て台無しにされた。

「あー……何だったんだよ、チクショウ……」

極限の緊張状態から解放された一誠は思わず嘆く。

ロキに勝ったらマタドールが現れ、そのマタドールはホワイトライダーにボロボロにされ、マタドールは朱乃の母の遺言を伝えて何処かに転送され、折角捕まえたロキも何

処かに連れ去られてしまい、最後には四騎士勢揃い。
たった数分間の出来事だが、密度が濃すぎて何倍にも感じてしまう。
「なあ……間薙。俺たちって勝ったんだよな……？」
何も実感を得ることが出来ない結末への不安から、シンに問い掛けてしまう。
「生きているから勝ち、という訳でも無いな。だが、負けという訳でもない」
返ってきたのは曖昧な答え。だが、心の内のモヤモヤしたものを表現するとしたらそれが近いのかもしれない。
「スッキリしないなぁ……」
「ああ。だから、次に会った時はそれを晴らす為に全員殴り飛ばすぞ」
思いもよらないバイオレンスな返しに一誠は目を丸くする。あれだけ強大なマタドールと四騎士に折れずに挑もうと考えているのだ。
無謀だが勇ましいシンの宣言に、一誠は曇らせていた顔を笑い顔で晴らす。
「――だな！　それが出来るだけ強くなんなきゃな！」
「ああ」
苦い思いをさせられた戦いが終わった。しかし、それは必ず糧となるもの。まだ新芽の若人たちをいつか咲き誇らせる為に。

◇

　果ての見えない奈落へ堕ち続けるマタドール。彼は至って平常であった。自らの置かれている状況に絶望して諦めの境地に入ったからではない。彼にとってこの奈落はその程度の状況であるのだ。
「約束は果たしたぞ」
　落ち続けながらマタドールは独り零す。天へと昇った朱璃とは違い、深淵へと落下していくこの声が届くかは分からない。しかし、マタドールにはそんなことなど無視して語り続ける。
「思えば安易な約束をしたものだ。叶えるのに随分と掛かってしまった。美女との約束を断れないのは私の悪い癖だな」
　肩を竦めながら自嘲するマタドールだが、その声に悔いの様なものは無い。
「だが、何にせよ伝えることが出来て良かった。あまり知られていないが、私は約束を反故にするのは嫌いだ」
　誰にも伝わらないと分かっているのにマタドールは喋り続ける。こうなった状況は全て自分が招いたものだと説明している様にも見えた。
「さて、久しぶりにゆっくりと休むとしようか。あの走狗が折角寝床を用意してくれた

からな」
ホワイトライダーへの皮肉を言いながら、マタドールは脱力する。今まで休むことなく戦い続けてきたマタドールが初めて警戒心ゼロの無防備を晒す。
「戦士に戦いは不可欠だが、休養も必要ということだな。さっさとこの手足を治すとしよう。バランスが悪いのは気分が悪い」
瞼など無いがマタドールは目を閉じる。
この奈落への穴の数少ない美点を上げるとすれば、余計な雑音が無いことだろう。
今のマタドールは光も映さず、音も拾わない。自他共に考えられないぐらい隙だらけになる。
あとは意識を絶つのみ。深い眠りにつくまえにマタドールは願う。
（叶うならば、目覚めた世界に平穏は無く、強敵と闘争で満ち溢れていてほしい）
そう願い、マタドールは久方ぶりの眠りへと入っていった。

◇

「あー、疲れたー……」
オカルト研究部部室で一誠はソファーにだらりと凭れ掛かる。

ロキとの戦いの後、一誠たちは事件の後始末に追われていた。
無事に会談を終えたオーディンとアザゼルにロキが拉致されたことを告げると、二人とも目をこれでもかと丸くして驚いた顔をしていたのが印象的だった。
そこから一誠たちは何があったのかを事情聴取され、ロキのことを何度も何度も説明することになった。
それが非常に面倒くさく大変であったが、何せ北欧神話の悪神が姿を消してしまったのだ。一誠たちがその拉致に関わっていないことをきちんと説明して疑いを晴らしておかないと、この件に関わった者たち全員が北欧神話の勢力から敵視されかねない。
幸い、北欧の主神であるオーディンが口添えしてくれたので大事にはならなかった。尤も、騒いでいるのは表向きのことで本気で責め立てるつもりは無い、というのがオーディンとアザゼルの見解である。
何せ北欧の神々の中でオーディンのやり方に面と向かって非難しているのはロキぐらいであり、同じく反感を抱いている他の神々もいるが、表立って非難することはせずロキを陰ながら応援している程度。行方不明のロキ、ヴァーリたちによって連れていかれたフェンリル、全滅した量産ミドガルズオルムなどの最大勢力も失ってしまった現状では大きく出ることはまず無い。
ただ、この忙しさを過ぎれば、修学旅行という学生にとっての一大イベントが待って

いる。
「やることが多くて疲れが抜けないなー、なあ？」
一誠は天井を仰ぎながらソファーの近くに立つシンへ声を掛ける。いつも通りの無表情で何一つ変わらないシンの様子に一誠は内心羨ましく感じる。
「お前、体は大丈夫なのかよ？」
「問題無い」
「問題無いって、お前……」
シンの素っ気ない返答に、一誠は呆れる。ロキによって全身完全凍結された人間が吐く台詞ではない。
ケルベロスとジャックランタンはロキの凍結魔法によってかなり苦しめられており、戦後にアーシアの神器とフェニックスの涙による治療を施されても完全復帰までかなりの時間を要しており、今も自宅で療養している。
本人たちはもう回復したと言っているが、念の為でもある。
そして、ピクシーの方も同じくシンの家で療養している。外傷は無いが、力を激しく消耗しており一日の大半を眠って過ごし、力の回復に当てている。時折起きてシンと軽い会話をするが数分で眠りについてしまう。
「お前とタンニーンのおっさんは本当に化け物みたいな生命力をしてんなー」

二人と同様に全身凍結された挙句に片腕と片翼を奪われたタンニーンだが、冥界の医療が総力を挙げて治療を施し、その甲斐もあって腕と翼は無事に接合出来たという。聞くところによるとリハビリがてらにもう空を飛んでいるらしい。流石は龍王に名を連ねていたドラゴンと言うしかなかった。

「うううう……」

「うっさいホ！　メソメソするんじゃないホ！」

会話するシンたちの耳に入り込んで来る女のさめざめと泣く声と、それを容赦無く叱咤する幼い声。

今回の戦いで残された問題その一とその二である。

「だって……だって、私、オーディン様に置いて行かれたんですよぉ！　酷い！　あんまりです！　あれだけ甲斐甲斐しく尽くしたのに……！　そりゃあ、神らしく威厳のある振る舞いをするように口を酸っぱくして注意しましたが……はっ！　もしかして、それが原因で！」

「だから、うるさいホ！　何一人で喚いて一人で納得しているホ！」

「そんなにきつく言わなくてもいいじゃないですかー！　置いて行かれた者同士、仲良くしましょうよー！」

「一緒にするんじゃないホ！　女としても行き遅れている奴と！」

「ひ、酷い！　酷過ぎる！　可愛い顔をして何て残酷なことが言えるんですかっ！　う、うわあああああああん！」

さめざめ泣いていたのが、容赦の無い罵倒で号泣と化す。騒いでいるのは残された問題その一であるジャアクフロストと問題その二のロスヴァイセであった。

ジャアクフロストは自分が置いて行かれたと知った瞬間に激怒し、散々ヴァーリたちをボロカスに言った挙句、彼らが迎えに来て謝るまで戻らないことを決意し、こちらへと留まった。

一応は『禍の団』所属ということもあり、組織についての情報を顔馴染みであるアザゼルが直々に問おうとしたが、余程腹が立っていたらしく何もせずとも自分の方からベラベラと喋っていたらしい。

とは言ってもジャアクフロスト自身は『禍の団』について一切興味が無く、『禍の団』に入ったのもヴァーリに付いて行ったに過ぎないので大した情報は持っていなかった。アザゼル曰く、話の大半は仲間の秘密の暴露だったと言う。

そして、ジャアクフロストの身柄はシンたちが預かることとなった。これは、アザゼルの計らいである。顔馴染みのジャアクフロストを預けるに最も信頼出来る人選を考えた結果であった。

しかし、ジャアクフロストをそのまま預ける訳にもいかないのである処置を施してあ

る。
　ロスヴァイセにガミガミと言うジャアクフロストの揺れる帽子の先端に、金の輪のアクセサリーが付けられている。これは、ジャアクフロストの能力を抑制するものであり、これを付けている限りジャアクフロストは氷、呪殺の能力は使用出来ず、力の方もジャックフロスト並みに弱体化している。
　アザゼルはそれを付ける前にジャアクフロストに一応の確認をした。今まで積み重ねてきた力を失い、また命を脅かされる日々が来るかもしれない、と。
　しかし、ジャアクフロストはあっさり言い放ったという。
『さっさと付けるホ。俺様ならそれを付けても元の力が使えるまで強くなるホ！　寧ろ、強くなってヴァーリたちをぶん殴ってやるホ！』
　それを聞いて、アザゼルは『ヴァーリに似てきたなー』としみじみと思ったとのこと。
「ヒホ！　悪口なんてダメホ！」
「ヒーホー！　悪口じゃないホ！　事実を言ったまでホ！　ヒホホホホホ！」
「うわあああああ！」
　ジャックフロストが咎め、ジャアクフロストは笑い、ロスヴァイセは更に泣く。そして、ジャアクフロストを成敗する為にジャックフロストが挑みかかる。
　以前はジャアクフロストの方が強かったが、下手に互角になってしまったせいで、

ジャックフロストと決着を付けることも出来ずお互いが疲れ果てるまで不毛な争いを続けることになる。

その後ろでわんわんと泣くロスヴァイセ。リアスが見兼ねたのか、彼女を慰める。

ロスヴァイセもジャアクフロストと同じくオーディンに置いて行かれていた。ロキ戦の後のごたごたに巻き込まれていたロスヴァイセはそれに気付かず、いつの間にか居なくなっており途方に暮れていた。護衛対象しかも主神であるオーディンに置いて行かれたとはいえ護衛の任を疎かにしてしまったので国に帰ることも出来ず、オーディンも連れ戻しに来る気配も無くロスヴァイセ本人は解雇されたと思い、自らの境遇を嘆く。

「てか、オーディンの爺さんも置いて行くかね、普通」

「もうボケていたんじゃないのか？」

「お、お前、仮に事実だったとしてもとんでもないことを言うな……」

まさに神をも恐れぬシンの発言に、一誠は顔を引き攣らせる。

実は、一誠たちにもロスヴァイセにも内緒にしていることだが、シンは自分の国に帰る前のオーディンと会っていた。

シンはその時のことを思い出す。あれは、ロキの件についての事情聴取を終えた後のこと――

◇

何度目か数えるのを止めたロキとの戦いについての事情聴取。同じ言葉を繰り返し繰り返し喋り続けていたせいで、舌に内容が浮かんでいるのではないかと思ってしまう。

しかし、理解出来ない訳では無い。神が居なくなったことや各勢力を悩ませている魔人マタドールの出現。追い打ちを掛ける様に出現頻度の少ない四騎士も同じく場所に現れたとあっては、悪魔も天使も堕天使も神経質にならざるを得なかった。

三勢力の方もこちらに対して一応の配慮はしてくれており、事情聴取の場所を見知らぬ場所ではなくわざわざ駒王学園内部にし、適度の休憩や好きな食事などの手厚いサービスもしてくれている。

だが、事情聴取は基本的に三勢力から選ばれた者たちと、口裏合わせが無い様にこちらは一人という多対一という形式なので少々気疲れをする。

シンは本日の事情聴取を終え、帰宅しようとしていた。明日も事情聴取があると思うとウンザリする。

「ほっほっほっ。ウンザリ、という顔じゃのう」

オーディンに声を掛けられ、シンは足を止める。シンはいつも通りの無表情であったが、オーディンは細かな表情の変化でシンの内心を正確に見抜いていた。
「どうも」
北欧の主神相手に素っ気ない態度で軽く頭を下げるシン。北欧神話の勢力が見れば無礼と怒りそうだが、オーディン当人は全く気にしていない。
「何か用でしたか？」
「いやあ、大したことではない。そろそろ国に帰ろうと思ってのう。アザゼルには言っておいたが、このまま帰ろうとした時に偶々お前さんを見つけただけでな」
「そうですか……」
シンは視線をオーディンの周囲に向ける。護衛のロスヴァイセの姿は見当たらない。気配も感じない辺り、近くにも居ない様子。
「ロスヴァイセなら居らんぞ。このまま置いて行く」
「――何故？」
オーディンの薄情と言える行動に問う声は少しだけ鋭くなる。
「まあ、経験の為じゃのう。あやつの才能や素質を生かすにはワシらの国では狭すぎるし、あやつも頭が固過ぎる。今回の会談で交流の幅が広がったのだ、世界の広さと柔軟な思考を身に付ける為にも北欧から出んとな。それに、ロキが居なくなってもワシらの

国の内情はまだごたごたしておる。古い者たちのいがみ合いに若い世代を巻き込むのものう……？」
　オーディンは白い髭を撫でながら隻眼をシンに向ける。底知れない知性で満ちた瞳から本気か嘘かを判断出来る程シンは老成してない。
「……そうですか」
　故にオーディンの言葉を自らの直感で信じる。一度は共闘した関係、それで全てを信じられる訳では無いが、少なくとも信用に足らない人物ではない。
「うちの部長が悪魔にスカウトするかもしれませんよ？」
「それも良し。本人が選んだのならワシが口出しする権利なんぞない。それに交流の幅は広がったと言ったじゃろ？　そういうヴァルキリーが現れるのも面白い」
　これから起こる変化に対し、好意的な態度のオーディン。老神の目にはこの先起こるであろう変化も見通しているのかもしれない。
「それにもしも赤龍帝と良い仲となったら、将来的に赤龍帝の血を引く者がワシらの勢力に加わるかもしれんしのー」
　本気か冗談か分からない打算的な考え。
「何ならお主でも構わんが？」
「……」

オーディンの提案に、シンは無言で見つめる。
『何を言っているんだ？　このボケ爺は？』と言わんばかりの顔じゃのう」
「惜しい。正確には『くたばれ、クソ爺』です」
「惜しいのか、それは？　想像以上に辛辣なのじゃが……」
シンの方も本気か冗談か分からない返しをする。
「――まあ、色々と思うところがあるじゃろうが、ロスヴァイセのことをよろしく頼むぞ。普段は真面目じゃが、所々が抜けておるので」
「出来る限りのことはしておきますよ」
「頼むぞい」
言いたいことを言い終えたのかオーディンは背を向ける――かと思いきや、その動きを中断してシンへ向き直った。
「今の話は内緒じゃぞ。何も知らない方が伸び伸びと羽ばたける」
「恨まれますよ？」
「ほっほっほっ。ワシがどれくらいの輩に恨まれていると思っておる？」
年季の差と言うべきか、今更ロスヴァイセの恨みぐらい苦でもない様子。
「――分かりました。黙っておきます。もし訊かれたら、『もうボケていたんじゃないのか？』と言っておきます。……その方が説得力がありますし」

「一言余計じゃわい」

◇

少し前のことをぼんやりと思い出しているシンの視線の先では、リアスがロスヴァイセを慰めるついでにロスヴァイセの衣食住の保障をしていた。リアスが言うにロスヴァイセは近いうちにこの駒王学園の女性教諭として働くとのこと。

そして、自らの眷属にもスカウトしていた。他のメンバーは初耳だったらしく、リアスがロスヴァイセを勧誘した瞬間、手を止めて二人に視線を集中させている。

「因みに、今眷属になるとこんなプランが」

リアスがロスヴァイセに書類を見せるとロスヴァイセの目の色が変わり、書類を穴が開きそうな程凝視する。

「す、凄い！　こ、こんな好条件があるなんて！　それにこんなサービスも！」

「仮に私の眷属にならないとしても、グレモリーの人材として貴方を勧誘するわ。その場合はこちら」

別の書類をロスヴァイセに見せる。

「こっちも凄い！　魔王輩出の名門であることを知っていましたが、これ程とは……！

で、でも悪魔でなくヴァルキリーとしてグレモリー家に仕えてもいいんのですか？」
「グレモリーはいつでもより良い人材を募集しているのよ」
「も、もし、私が眷属になったら、もしかして両方とも……？」
「勿論よ」
「何ていう好条件！　ヴァルハラとは全然違う！」
哀しみや嘆きが全て吹き飛び、歓喜で震えるロスヴァイセ。
「なあ、ヴァルキリーってどんだけブラックな仕事だったんだろうな？」
「想像するのも止めておけ。俺たちには縁の無い世界だ」
一誠がひそひそと話しかけてくる。社会経験の無い二人にしてみれば未知の領域だが、ロスヴァイセのリアクションを見ていると、自分たちが随分と恵まれた環境に居ることを自覚させられる。
「もし、貴女が私の眷属になるなら私は貴女にこの『戦車』の駒を渡すわ。貴女の魔術に加えて『戦車』の頑丈さ、火力と防御力を合わせたまさに要塞が誕生するわ。――ただし」
リアスは最後の『悪魔の駒』を真剣な目で見つめる。
「貴女の能力を考えると駒一つでは足りないかもしれない。そうなると私の主としての器が試されるわ」

「どういう事ですか？」
「未使用の『悪魔の駒』は主の成長に反応して性質を変えるの」
「えっ、そんな仕組みがあったんですか？」
「まあ、私も最近知ったのだけど……」
『悪魔の駒』を制作したアジュカ・ベルゼブブによる意図的に隠した要素であり、最近になって発表された事だと言う。
　かなり重要なことだと思われるが、冥界はそれを良しとしている。悪影響を及ぼさない限りはその程度のイレギュラーは許容の範囲内のこととして軽く流している様子。
「どうする？　もし、駒一つ消費で眷属に成れなくてもちゃんとグレモリーの仕事は紹介するわ」
「――いえ、きっと成れると思います」
　ロスヴァイセはリアスに手を伸ばす。それが意味することは一つ。
「今、こういう状況になったことにどこか運命を感じます。私の勝手な妄想ですけど、貴女たちのレーティングゲームを初めて見た時からこうなることが決まっていたのかもしれません」
　差し出されたロスヴァイセの手の中に『悪魔の駒』が置かれると、紅色の光が部室内を覆った後、悪魔の翼を背に生やしたロスヴァイセが立っていた。

リアスは駒一つで転生出来たことに安堵の息を洩らす。
転生し終えたロスヴァイセは、全員に向けてお手本の様なお辞儀をする。
すると、パチパチと拍手の音が聞こえてきた。
ドアの方を見るとアザゼルが手を叩いている。その傍にはバラキエルも立っていた。
「おめでとよ。これで眷属全て揃ったな。良いメンツじゃねぇか」
「そうね。上等過ぎるぐらいだわ」
「ま、それに見合うだけの成長をしろよ、リアス」
「言われるまでもないわ」
堂々と言い放つリアスに、アザゼルは微笑を見せる。
「んじゃあ、俺はこれからバラキエルを送ってくる。部活動は好きにやってくれ」
「そうなんですか？　じゃあ、俺たちも見送りを――」
ソファーから立ち上がろうとした一誠を手で制する。
「俺だけで十分だ」
アザゼルにそう言われると一誠たちも言われた通りにするしかない。
朱乃はチラチラとバラキエルの方を見ており、何か言いたげな表情をしている。バラキエルも視線だけ朱乃に向けており、気にしていた。
「あ、あの！」

朱乃が声を上げる。
「どうした？」
「アザゼル先生！　頼みたいことが！」
朱乃はそう言うと素早くアザゼルのスーツの袖を掴み、部室外へ出ていく。残されたバラキエルは少しだけ寂しそうな表情をしている。声を掛けられたのが自分だと思っていたせいでもあった。
ある程度のわだかまりは解けたが、それでもまだ親子間でのギクシャクは続いている。
「乳、いや、兵藤一誠」
いきなり名を呼ばれた一誠は驚きながらもソファーから立ち上がり、すぐにバラキエルの前まで移動する。
「いや、まあ、呼びやすいなら乳龍帝でもいいですよ。好きなのは間違いないですし……あ、でも、食べる程ではありませんよ？」
『俺は嫌だぞ！』
「う、うむ。どうやら、色々と誤解をしていたみたいだ……」
申し訳なさそうに加え照れているバラキエル。ドライグが脳内で抗議しているが、一誠はそれをスルー。

「き、君は娘が――朱乃のことが好きか？」
「はい。大好きですよ。頼りになって、優しい女性だと思います」
一誠の即答に周囲の女性は何とも複雑な表情をする。個人として朱乃が好きなのと女としてのライバル視が合わさって表情がコロコロと変わる。
「モテる男は大変だな」
その光景を眺めながら他人事の様に言うシン。
「いやあ、あれがイッセー君の魅力の一つだと思うよ？」
「は、はいぃぃ。あの率直さは見習いたいですぅ」
シンの小さな声を拾う木場とギャスパー。いつの間にか避難する様に傍に来ていた。
「お前たちもあいつのことが大好きだな」
「そうだね。でも間薙君のことも同じくらい好きだよ」
「は、はいぃぃ。僕も一緒ですぅぅ！」
「――それはどうも」
誰だってストレートに好意を示されれば言葉を詰まらせるし、言葉を選ぶ。
「おーい。そろそろ行くぞー」
部室外からアザゼルがバラキエルを呼び掛ける。朱乃の頼み事が終わったらしい。
「娘のことを頼んだ」

バラキエルはそう言い残し、部室の外へ出ていった。

「はい！」

一誠の快活な声を背に受けて。

◇

とあるデパート内。そこでアザゼルとバラキエルは土産が入った買い物袋を手一杯に持ってベンチに座っていた。

バラキエルがグリゴリの同僚たちから帰って来るついでに頼まれた買い物にアザゼルが付き合っていた。武骨で武人気質なバラキエルはこういったことに疎く、しかし責任感は人一倍ある為に素直にアザゼルの力を借りて遂行した。

おかげで十分な買い物が出来たが、慣れないことをしたせいでバラキエルは少し疲れ気味である。

アザゼルはチラリと時計を見る。

「丁度いい時間だな。ほれ、これ」

アザゼルは手荷物の中から巾着袋を取り出す。明らかにアザゼルの趣味ではない物を見て、バラキエルは訝しむ。

「何だこれは？」
「いいから開けてみろ」
手渡された巾着袋を開けると中には弁当箱が入っており、中を開くと和で彩られた料理が入っている。
「これは……！」
バラキエルが声を震わす。彼にとってそれは既知のもの。もう二度と見ることは無いと思ったもの。
「朱乃からだ。どうも直接渡すのが照れくさかったらしい。そういう所はお前と似てるよなぁ」
バラキエルは弁当とアザゼルを交互に見やる。その様子にアザゼルは苦笑し、早く食べるよう促した。
バラキエルは添えてあった箸を取り、慣れた手付きで肉じゃがを一つ摘み、食べる。
一口食べると目を見開き、もう一つもう一つと無言で食べ続けた後、急に俯き弁当箱をアザゼルの方に差し出す。
「……お前も、食べろ」
「おいおい。いいのか？　娘の愛情弁当だろ？」
「今、食べたら、……折角の、味が、変わってしまう……」

区切る様に喋るバラキエルの膝には点々と濡れた染みが出来上がっていた。
「……そうかい。じゃあ、お言葉に甘えて」
アザゼルは肉じゃがを摘み、口へと放る。
「美味い。良い味じゃねぇか」
「ああ、そうだろ？　俺が、愛した味だ……朱璃の味だ……」
バラキエルは目元を覆い、静かに泣き続ける。
「なあに、時間は有るんだ。お前たちの溝なんてすぐに埋まる」
「彼が……それまで、朱乃を大事に守ってくれると、信じたい……」
「任せとけよ。良い女ってのは仲間や男に恵まれるもんだ」
「マタドールにも、借りが出来た……」
「次会った時には全力で殴ってやれ。それで喜ぶ変態だ、奴は」
感極まったバラキエルの涙は中々止まらない。今まで堪えてきたものが一気に解放されているかのようである。
「ほれほれ。早く泣き止め。でないと俺が全部喰っちまうぞ？」
そういいつつ、アザゼルはバラキエルの涙が止まるまで朱乃の弁当に手を伸ばすことはしなかった。

◇

ロキによる騒動はこれにて終幕する。だが、何かが終わることは何かが始まることを意味する。
「ここに連れて来られたということは、我らが貴殿のお眼鏡に適ったということでいいのかな？　――随分と物騒な使いを寄越してくれるじゃねぇか」
「手荒な真似はしないでくれと言った筈なんだけどね。まあ、その跳ねっ返りも可愛いものさ」
「あれを可愛いと評するとは……」
「それよりもこれからの話をしよう。君が本当に僕らの仲間になるのかは、僕の話を聞いた後でも遅くはない」
「果たして拒否権があるのかどうかが疑問だ。――気に入らなければサクッと殺れるだろしなぁ？」
「そんな物騒なことはしないさ」
「……まあいい、その甘言に敢えて乗ろう。ところで貴殿らをどう呼んだらいい？」
「そういえば自己紹介がまだだったね。僕のことはベル、そして彼はルイと呼んでくれ」

幕間　少女、求友（前編）

雑踏賑わうとある?華街。そこで頭まで覆うローブを纏った怪しげな集団が、怪しげなチラシを配っている。

差し出されたチラシをスルーするのが大半だが、中にはそれを見て見ぬふりすることを悪いと思うお人好しな人たちや、差し出されたチラシを反射的に受け取ってしまう人たちもいた。

そうやってチラシを受け取った者たちはチラシを見て書かれた内容に首を傾げる。

『あなたの願いを叶えます!』

という謳い文句と奇妙な図形が描かれているだけで具体的な内容は一切書かれていない。怪しい宗教団体なら、その宗教の名、拠点、目的や教え等が書かれているだろうがそういうのは全く無くその一文のみ。

怪しいことは怪しいが何が目的なのかサッパリ分からない為、受け取った人たちはチラシをポケットや鞄の中に捻じ込んでしまう。

この怪しい集団こそリアスたちの使い魔が人の姿へ変化した者であり、彼女たちが配っているのはリアスたち悪魔を召喚する為の簡易魔法陣であり、悪魔としての仕事を

為す為の地道な活動である。
ここでのチラシ配りも殆ど終わり、場所を変えようとした時――
「それ、一枚くれる？」
――不意に声を掛けられ、リアスの使い魔は驚いて体を硬直させた。誰もいないと思っていた筈なのに突然、目の前に両手を後ろに組んで立っている少女が現れたのだ。
ダークブルーのワンピース着た外国人の少女。セミロングの金髪に吸い込まれそうな程綺麗な金色の瞳が透き通る様な白い肌とよく合う。
長い人生で一度会えるか会えないか、そう思うことが大袈裟ではない完成された容姿の少女。
視線を下げるぐらいに小柄な少女な為、見逃してしまったのかと思いつつ、リアスの使い魔はチラシを少女に差し出す。これ程までに目を惹く存在なのに、と内心で首を傾げながら。
「どうもありがとう」
人形の様に整った顔立ちの少女が微笑む。木漏れ日の中で咲く花を思わせる可憐な微笑であった。見ている者全てに幸福感と至福を与え、その微笑を見たリアスの使い魔もつられて微笑んでしまう程。
少女はそのチラシを無くさない様に大事そうに両手で抱えて去って行く。

その去り際に――

「バイバイ。蝙蝠さん」

――リアスの使い魔の正体を見抜いているセリフを残して。

リアスの使い魔は驚き、改めて少女を見ようとするが、さっきまでそこに居た筈の少女が居ない。現れた時とは真逆にいつの間にか消えてしまった。

しかし、空耳で無ければリアスの使い魔の耳に微かに届く少女の声。

「うふふ……」

無邪気な、それでいて背筋が凍り付く様な楽しそうな笑い声であった。

◇

「こんにちは。ロスヴァイセ先生」

「ひゃい！　ひょ、ひょんにちは！　間薙、君……！」

放課後、オカルト研究部へと足を運んで途中、ロスヴァイセの後ろ姿を見つけたシンは彼女に後ろから挨拶をする。不意打ちだったらしく、ロスヴァイセは声を裏返らせ、噛みながら挨拶を返してきた。

言い終えた後に思いっ切り返事を失敗してしまったのが恥ずかしかったのか赤面す

るロスヴァイセ。
駒王学園に教諭として就任してから、その容姿と真面目な態度。そして、今の様に抜けている面を見せることからすぐに学生の間で人気となった。
シンも時折廊下で男女問わず学生に囲まれて勉強についての質問をされている姿を見かけていた。
肩を並べて二人は歩き出す。
「こ、これから部活動ですか？」
「はい。ロスヴァイセ先生もですか？」
「い、いえ。私はまだ少し仕事があるので」
そこで会話が終わり、沈黙が訪れる。
（か、会話が終わってしまった……！）
ロスヴァイセは内心で叫ぶ。
（ど、どうすれば……！　何かこの年頃の男の子に合った話題を……！　でも、間薙君は普通の年頃の男の子とは違うし……！）
ロスヴァイセはシンのことが少々苦手であった。嫌っている訳では無いが、シンの素性を知っているせいで嫌でも緊張してしまうのだ。そんな状態でこの沈黙は、彼女の精神を紙やすりの様に小さく削っていく。

一方でシンの方は沈黙を苦痛としていないので特に気にしていない。そして、ロスヴァイセがどういう性格かも把握していないので、この沈黙を自ら破ろうともしない。

ロスヴァイセはこの沈黙を恐れる。年齢はロスヴァイセの方が上だが、グレモリー眷属としてまだまだ新米。先輩であるシン相手に黙っているのは新米としてあってはならないこと。

と、ここでロスヴァイセは自分が勘違いをしていることに気が付いていない。シンはリアスたちの協力者という立場であり、眷属ではないのだ。リアスとソーナのレーティングゲームの際にシンがソーナ側で出ているのを見ていた筈だが、そのことをすっかり忘れてしまっていた。尤も、それだけシンがリアスの眷属たちと馴染んでいるということだが。

「そ、そう言えば、あの子たちを見ませんね！」

必死に話題を探した結果、絞り出せたのはシンの仲魔たちの不在である。それを皮切りにして話を膨らませようと考えたが――

「ピクシーとジャックランタン、ケルベロスはまだ万全では無いので家で寝かせています。ジャックフロストとジャアクフロストは顔を合わせると喧嘩しかしないので、ジャックフロストは生徒会室に預けています」

「そ、そうですか……」

事務報告の様に淡々と返され、ロスヴァイセはそれしか返せなかった。
（また会話が終わっちゃった！）
再び訪れる沈黙。ロスヴァイセはポーカーフェイスで表向きは凛とした表情をしているが、内心では頭を抱えて悶えていた。
（ああー！　教諭という立場として何か会話のリードをしないと！　でも、ぜんぜん話題が思い付かないー！）
ロスヴァイセの女性としての経験値不足がここで嫌でも露呈する。何を話せばいいのか分からず、軽くパニックになってしまう。とはいえ、仮にロスヴァイセが経験豊富な女性であったとしてもシンの態度や反応が特に変化することは無い。
ロスヴァイセは横目でシンを見る。鉄仮面を思わせる無表情からは何も情報を読み取れない。
（何だかんだ言ってオーディン様の護衛は楽だったのかなー）
オーディンが好き勝手動き、神らしくない振る舞いをすればロスヴァイセが小言を言う。それだけで、両者のコミュニケーションは完了していた。好意的に考えれば、あれがオーディンなりの下の者たちへの距離の詰め方だったのかもしれない。
（オーディン様。色々と振り回されてきましたが、今思えば気不味さとは無縁の仕事でした。――でも、置いて行かれたことは許しませんけど！）

置き去りにされた恨みだけは忘れない。

（――って！　そんなことは今はどうでもいいんです！　何か、何か話を！　何でもいいから！　ああ！　この沈黙が痛いっ！　怖いっ！）

話題、話題と頭をこれでもかと働かせ、絞り出したロスヴァイセの話題は――

「きょ、今日は！　い、いい天気ですねっ！」

――天気の話題というあまりにしょうもないもの。

因みに本日の天気は快晴ではなく、灰色の雲が太陽を覆い隠す曇りである。

言った本人も直後に今の天気を思い出し、ポーカーフェイスを崩して『しまったぁぁ！』という心の叫びが顔に書いてあった。

（……変に気を遣い過ぎたか）

盛大に空回るロスヴァイセを見て、シンは内心で少し反省する。

学園内、そして生徒と教諭という立場から可能な限り消極的に接していた。また、ロスヴァイセはリアスの眷属内で数少ないシンが魔人であると知っている人物である。魔人という存在と積極的に関わらない方が良いと独断したが、返って裏目に出てしまった。なお、当のロスヴァイセはシンが魔人であることを、このとき完全に忘れていた。

このままロスヴァイセが空回り続けるのも見ていられないので、話題に乗ることにする。

「そういえば――」
今まで聞き手であったシンから話を振られ、ロスヴァイセは一瞬硬直する。
「日の光には慣れましたか？　今日ぐらいの天気なら大丈夫そうですが、間もない内は朝日が大分キツイらしいので」
これはシンが一誠から聞いた話である。
「あ、はい！　今は大丈夫です。確かに間薙君の言う通り最初に二、三日はちょっと大変でしたね。完全な夜型に切り替わってしまったので。悪魔に転生して初めての夜は、かなり高揚してしまって、お酒の力に……いえ！　何でも無いです！」
思わず口を滑らせてしまうロスヴァイセ。シンは聞かなかったことにして、悪魔関連のことで話を膨らませていこうとする。
「じゃあ、今はもう大丈夫ということですか？」
「はい。ワルキューレの時には無かった力で戸惑いもありましたが、少しでも早く順応出来る様に色々と試してみました。悪魔の翼というのは不思議ですね。今までに無かったもの、それこそ新しい手が生えて来る様なものなのに、まるで最初からあったかの様に使えるのですから」
悪魔に転生し、魔力を得たロスヴァイセは自主的に悪魔としての性能試しを行い。自分の現状をほぼ完璧に把握している。

その話を聞いてロスヴァイセはやはり生真面目な性格であるとシンは再認識する。真面目過ぎて若干空回る部分もあるが。

この会話でロスヴァイセも少し緊張が解け、シンとの会話も弾み出す。

他愛の無い内容の会話であったが、オカルト研究部部室まで着くまで途切れることは無かった。

部室のドア前に立つと中から悲鳴と怒号が聞こえてくる。

「ヒホ！　いい加減出て来るホ！」

「ヒィィ！　止めてくださいいいい！」

怒号はジャアクフロスト、悲鳴はギャスパーのもの。

「ジャアクフロスト君がまた喧嘩を！」

止めるべくロスヴァイセが慌てて部室の中へ入っていき、シンも続く。

オカルト研究部部室内ではジャアクフロストが段ボール箱を何度も蹴り付けている。他にメンバーが居ないのを見ると、一番乗りはギャスパーであった様子。

「この引きこもりホ！　隠れてないで姿を見せるホ！　そして、殴らせろホ！」

「嫌ですぅぅぅ！　殴られると分かっていて出ていかないですぅぅ！　間違えたのは謝るから許してくださいいいいい！」

「だから、殴らせたら許してやるって言っているんだホ！」

「誰かぁぁ！　誰か助けて下さいいいい！」
段ボール箱内のギャスパーが悲痛な叫びで助けを求める。
「ジャアクフロスト君！　暴力はダメです！」
ゲシゲシと蹴飛ばし続けているジャアクフロストをロスヴァイセが後ろから持ち上げて段ボール箱から引き離す。
「大丈夫か？」
「そ、その声は！　間薙先輩とロスヴァイセさんですかぁ！」
ギャスパーが段ボール箱から飛び出し、シンへしがみつく。
「一体何があった？」
「そ、それが、ぼ、僕が部室に入った時に、ひ、一人で暇そうにしているジャアクフロスト君を見て、こ、声を掛けたんです！　そ、そしたら言い間違えて、『ジャックフロスト君』って……」
あまりに下らない理由にシンは黙り、ロスヴァイセも呆れた表情になってしまう。
「今のあいつなら、ギャスパーでも倒せるが……」
「ご、ごめんなさいいいい！　ぼ、僕にはそんな暴力的なことは……！」
「なら、魔眼で停止させたらいいんじゃないのか？」
ギャスパーの向きを変え、ジャアクフロストの方を向けさせる。

「あ゛あ゛んホ！」
　目を向けた途端ドスの効いた声とガンを飛ばしてきたジャアクフロストに、ギャスパーは魔眼を発動させる前に目を逸らしてしまった。
「……ギャスパー」
「す、すす、すみませぇぇん！　練習で使っている訓練用のロボットなら出来るんですぅぅ！　でも、ロボットは睨んで来ないんですぅぅぅ！」
　泣きべそをかきながらまたシンへしがみつくギャスパー。最初に会った時よりも臆病さは多少マシになったが、ジャアクフロストの様な分り易い乱暴者にはまだ腰が引けている。
　シンは小さく溜息を吐いた後、暴れるジャアクフロストを抱き抱えるのに苦戦しているロスヴァイセへジャアクフロストを下ろす様に頼む。
「そいつを離してもらえますか？」
「ですが……」
「お願いします」
「ヒホー！　ヒホー！　言われた通りに離すホ！　……だったらこうしてやるホ！」
　ジャアクフロストはロスヴァイセの胸に後頭部を押し当てたかと思えば、頭を勢い良く左右に振るう。当然のことながらロスヴァイセの胸もその動きに合わせて揺れる。

「きゃあああああ！」
　辱しめられたロスヴァイセは堪らずジャアクフロストから手を離してしまい、ジャアクフロストは自由となる。年頃の男性――片方は女装しているが――がいる環境下で生娘のロスヴァイセが耐えられる筈が無かった。
「ジャアクフロスト君！　セクハラですよ！」
「知るかホ！　そもそも俺様はお前の体なんてどうでもいいんだホ！　使う予定も無いのに無駄に肉なんて付けているんじゃないホ！」
「今は無いだけです！　いずれ使う時が来るんです！　……って何を言わせるんですかっ！」
　ジャアクフロストと言い争ったせいで変なことを口走ってしまったロスヴァイセは、赤面していた顔を更に赤くする。
「ジャアクフロスト」
「……何だホ？」
　ジャアクフロストの傍若無人を見兼ね、シンはジャアクフロストを呼ぶ。声に反応したジャアクフロストが見たのは、貫く様なシンの眼光。
「自分が今どういう立場なのか理解をしているか？」
　威圧を込めた声でシンはジャアクフロストを窘めるのではなく脅す。

「大人しくしていろ」
死を匂わせる気配がシンの体から漂う。シン本人はこのやり方を好まないが、ジャアクフロストがこれ以上暴れるのならやむを得ない。
しかし、そんな眼光を浴びせられてもジャアクフロストは震え一つ見せず鼻で笑う。
「やりたければやればいいホ。お前たちとの根性の違いを見せつけてやるホ！」
したければ暴力でも拷問でも何でもしろとジャアクフロストは言い切ってみせる。？せ我慢には見えないし、現実を見ていない様にも思えない。
ジャアクフロストの気概を見た気がした。
シンはそれを見て威圧感を消す。脅し程度ではジャアクフロストは屈しない。元々何かをするつもりも無かったが。そして何よりジャアクフロストの様な性格は嫌いではない。
「何だホ？　結局やらないのかホ？」
ジャアクフロストがシンを挑発する様に短い両手でシャドーボクシングをする。
「ヒーホー！　口先だけの奴ホ！」
「生憎、弱い者イジメはしない主義だ」
「弱っ――――！」
何気ないシンの一言に、ジャアクフロストの吊り上がった眼が更に吊り上がる。

「誰が弱いホ！」
弱い、という言葉自体がジャアクフロストの地雷であるらしく、ジャアクフロストは怒りに任せてシンへ飛び掛かった。
跳躍と同時に拳を振り上げるジャアクフロストだったが――
「ヒ？」
――その拳が届くよりも先にシンの掌がジャアクフロストの額に押し当てられる。
シンが素早く掌を突き出すと、ジャアクフロストの体が勢い良く縦回転し始めた。
「ホオオオオオオオオオオ！」
赤、黒、紫の色が混じり合った丸と化すジャアクフロスト。回転したまま床へと落下していく。
「ギャスパー」
「は、はい！」
名を呼ばれて察したギャスパーは邪眼の力を発動させ、ジャアクフロストが床に衝突する十数センチ手前でジャアクフロストを時間停止させ、空中に固定する。
その間にシンはソファーへと移動しクッションを一つ取るとジャアクフロストと床との間に置く。
「ヒホ！　……ヒホ？」

時間停止が解除されて床に落ちたジャアクフロストは落下の衝撃を覚悟していたが、いつの間にか置かれたクッションによってそれが防がれ、疑問符を浮かべる。

戸惑った様に周囲を確認していたが、シンの姿が目に映るとまた飛び掛かって来る。

「ヒホオオオオオ！」

そして、シンはその拳が届く前にジャアクフロストへと触れ、回転。

「ギャスパー。次は逆さ状態で」

「えっ！」

止め方をリクエストするシン。ギャスパーは一瞬だけ驚いたが、すぐに意識を集中させ、邪眼を発動。シンのリクエスト通りジャアクフロストは頭を真下に向けた体勢で空中に停止させられる。

前までは出来なかった邪眼の精密な操作。アザゼルとの訓練の成果がきちんと出ている。

「ヒホッ！」

またもや頭からクッションに落ちたジャアクフロスト。しかし、二度目は困惑ではなく怒りに染まっていた。

「またやったなホ！」

飛び掛かるジャアクフロスト。それを軽くいなすシン。そして、シンのリクエスト通

りの体勢でジャアクフロストを止めるギャスパー。ロスヴァイセは止めるべきかどうか分からず、迷いと良い様に翻弄されるジャアクフロストを可愛く思ってしまうのを半々に混ぜた何とも言い難い表情をして眺めている。

因みに、その光景はリアスたちが来るまで延々と繰り返されていた。

◇

「初仕事、頑張ってねロスヴァイセ」

「は、はい！　頑張ってきます！」

夜。悪魔として活動する時間となる。オカルト研究部部室中央では転送用の魔法陣が仄かに光を帯びている。

ロスヴァイセが転生悪魔となって初めて仕事へ向かう。何もかもが初めてのロスヴァイセは顔に緊張の色を浮かばせていた。

「大丈夫よ。サポーターとしてシンも同行するから」

そして、シンもロスヴァイセの初仕事に同行することとなっていた。色々なメンバーと共に仕事を熟してきたシンが居れば、まず失敗は無いというリアスの判断である。

「よ、よろしくお願いいたします！　間薙君！」

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ」
　一応、緊張を解く様に言葉を掛けるが無難過ぎる言葉であった為、ロスヴァイセの緊張をあまり解せなかった。
「そうなんですけど……失敗したらどうしようかと思うと……」
　真面目過ぎるせいか最悪のケースも想定している様子。ヴァルキリーの時や北欧にいた時と勝手が違うのも彼女を不安にさせる要因になっている。
「まあ、前代未聞の大失敗をしている奴がいますしただの失敗ぐらい無いに等しいです」
「……おい。その前代未聞の大失敗って俺のことを言ってるのか？」
　近くで会話を聞いていた一誠が口を挟んでくる。
「その通りだ。自転車通勤」
「止めろぉぉ！　俺に思い出させないでくれぇぇぇ！」
　魔力が全く足りなかったせいで魔法陣で転送されず涙を流しながら自転車で依頼人の許へ向かった時のことを思い出し、一誠は頭を抱える。未だに苦い記憶として彼の中に刻み込まれていた。
　そんな一誠を朱乃やアーシア、小猫が慰めている。ジャアクフロストから守る為に小猫に抱き抱えられているジャックフロストも一誠を励ます様に頭をポンポンと叩いていた。

ふと、無事なジャックフロストの姿を見てシンはジャアクフロストを探す。ジャックフロストの顔を見る度に喧嘩を仕掛けているジャアクフロストが今夜は大人しい。
視線を動かしてジャアクフロストを探すと、部屋の隅で一人睨む様にこちらを見ているジャアクフロストを見つけた。
シンはその様子に嫌な予感を覚える。だが、注意するよりも先にロスヴァイセから声が掛かる。
「じゃあ、行きますよ」
表情を引き締めたロスヴァイセが転送魔法陣に移動する。シンもジャアクフロストが気になったが、後に続いて魔法陣の中に入った。
いざ転送――となった瞬間。
「あっ」
と声を出したのは誰であったのだろうか。それを確認する間もなくシンは迫り来る怒気を肌で感じ取り、視線をその方向へ向ける。
部屋の隅で息を潜めていたジャアクフロストが、シンに向かって飛び掛かっていた。シンに軽くあしらわれたことを根に持ち、油断する時を待って転送される直前に仕掛けてきた。
ジャアクフロストの奇襲はある意味では成功であった。シンもまさかこのタイミン

グで殴り掛かってくるとは思っておらず、少し反応が遅れてしまう。
ジャアクフロストの小さな拳をシンの掌が簡単に受け止める。その結果、ジャアクフロストを転送用魔法陣の外に追い返すことが出来ず、三人とも転送されることとなってしまった。
三人が転送し終えた魔法陣を見て、リアスは溜息を吐きながら天を仰いだ。

◇

「もう！　何を考えているんですか！　ジャアクフロスト君！」
転送直後のロスヴァイセの口から出て来たのはジャアクフロストへの説教であった。
「ちっ！　失敗したホ！」
ジャアクフロストはロスヴァイセの説教に耳を貸さず、舌打ちをする。因みに、今のジャアクフロストはシンに後頭部を鷲掴みにされて持ち上げられている状態である。
「折角、依頼人の方に良い印象を……」
そこでロスヴァイセは言葉を止め、周囲を見る。
枯れかけた木々が生えた舗装されていない地面。殺風景過ぎて数分で記憶から消えて無くなりそうな場所に三人は立っていた。
「えーと……」

ロスヴァイセは困った様子でシンを見る。
「聞いていたのと大分違うのですが……」
転送魔法陣で飛ばされる先は簡易魔法陣が描かれた依頼人の許と決まっている。大概が自宅内のケースである。
「……おかしなことになっていますね」
「いきなりですか！　私、初仕事なんですが！」
慣れたシンの口から異常事態が起きていると教えられ、ロスヴァイセはショックを受ける。流石に最初の仕事から異変が起これば仕方がない反応であった。
とは言え、シンの方は以前に似た様な状況に遭ったことがある。あの時は、ピクシーと初めて会った時であった。
（まさか、それと同じことが起こっているのか？）
「ヒホ。何だアレホ？」
ジャアクフロストが何かに気付いて指差す。ジャアクフロストが指した方に二人が目を向けるとアンティークの木の扉のみがそこに立っている。
「間薙君……私の記憶が間違いでなければ、さっきまであんなのは無かった筈ですが……？」
「――そうですね」

ロスヴァイセに同意する。周囲を見回した時、確かに木の扉など無かった。あればすぐに気付いている。

「……実はこれはリアスさんたちが用意したサプライズで。扉の向こうでリアスさんたちが歓迎会の準備をして待っている、ということがあったりしませんか……？」

「仮にそうだとしても、露骨過ぎると思います」

「そう、ですね……」

シンが否定すると、少しガッカリした表情をするロスヴァイセ。

「……されたかったですか？　歓迎会？」

「そ、そんなことないですよ！　新入りの分際でそんな烏滸がましい！」

されたかったらしい。今度それとなくリアスに言ってみるかとシンは思った。

「……それでどうするんだホ？　入るのかホ？　入らないのかホ？」

足をぶらつかせたまま冷めた言葉でジャアクフロストが二人に訊く。

流石にあれだけ怪しい扉に入る気がしない。

「一度ここは戻った方がいいでしょうか……？」

「近くに依頼人もいないみたいですしね。あれだけ怪しいと罠にしか見えません」

扉の方からそこはかとない嫌な気配を感じるシンたち。折角のロスヴァイセの初仕事であるが、初仕事故に慎重に進める必要がある。

ここが何処か確認する為に一旦振り返るシン。そこで足が止まる。
背後にある筈の木の扉が目の前にあった。
シンは振り返る。やはり、そこにも木の扉があった。
今度は掴んでいるジャアクフロストだけに背後を見せる。
「あるか？」
「あるホ」
ジャアクフロストの真っ赤な目には木の扉が映り込んでいる。
「これは、まさか『禍の団』の罠では？」
ロスヴァイセは木の扉を凝視したまま、最も高い可能性を出す。
「かもしれませんが可能性は低いかと……」
誘い込んで一人一人狩る、という方法も無くは無いかもしれないが、あのチラシの魔法陣は呼び出す者の強い願いに反応する仕組みになっている。もし、仮に『禍の団』が使用したら、その強い願いの中に込められた殺意などを魔法陣が読み取り、逆にリアスたちに報せる仕掛けになっている。
悪魔に対する殺意を押さえながら強く願う者が『禍の団』に居れば話は別だが、そんなピンポイントな人物などそうそう無い。
「じゃあ、別の勢力が……えっ？」

ロスヴァイセが呆けた声を出す。彼女が一回だけ瞬きをした間に木の扉が消えていた。
「間薙君！　扉が！」
「無くなりましたね」
シンも見ていたが、消える瞬間を切り取られたかの様に前触れも無く扉が消えてしまった。
「ヒホ……。俺様たちで遊んでないかホ？」
ジャアクフロストは、木の扉の出現と消失に虚仮にされていると感じた。
「今のうちにここから離れましょう！」
「……いや、少し遅かったみたいです」
「遅かった……？」
シンの視線が下に向けられていることに気付き、ロスヴァイセも足元を見る。
「なぁっ！」
シンたちの足元はいつの間にか大地ではなく木の扉へと置き換わっていた。
「ま、間薙君！　ここは落ち着きましょう！　一歩も動かない方がいいです！」
「お前が落ち付けホ」
徐々に焦り出してきたロスヴァイセに、ジャアクフロストが冷めた言葉を掛ける。

「取り敢えず、扉さえ開けなければ――！」
ロスヴァイセの喋るのを中断せざるを得なかった。扉部分が消失し、足場が無くなる。扉の向こうにあるのは真っ暗な世界。
「きゃあああああ！」
「――ご丁寧にどうも」
「ヒーホー！　ワクワクしてきたホー！」
ロスヴァイセは悲鳴を上げ、シンは木の扉の主に皮肉を吐き、ジャアクフロストは扉の向こう側にある未知に興奮しながら全員落下していく。
暗闇の世界へと落ちていく三人。加速しながら暗闇の果てを目指す。
「間薙君！　手を！」
ロスヴァイセがシンに手を伸ばす。悪魔の翼でこの穴を抜けるつもりであった。
突如、落下する速度が緩まり、緩やかに降下し出したかと思えば、辺りの暗闇が幕を上げたかの様に消え去り、果ての無い闇の底に地面が現れた。
三人は緩やかな速度のまま地面に降り立つ。
「ここは……？」
暗闇の幕が上がった世界は、幻想的なものであった。
遠くには西洋の城が幾つも並び、その隣には観覧車が建ててある。大きな湖の側には

コテージが置かれており、そのコテージの近くにはサーカスのハウスが設定されている。

木々が疎らに並んでいるが、中には逆さに生えた木もある。大きな岩も並んでいるが、真球の様に綺麗に整えられた不自然な岩も転がっていた。

青々とした空には雲が漂い、太陽が輝く――と同時に爛々と輝く月も出ており、満月から新月に至る月の満ち欠けを頻?に繰り返している。

おとぎ話の様な幻想的な世界であると同時に何もかもが滅茶苦茶で気色悪さを覚える世界でもある。

「うへぇ。悪趣味だホ」

ジャアクフロストは気に入らないのか、舌を出して嫌がる表情をしていた。

「不気味な空間ですね」

「早く脱出するべきです」

シンとロスヴァイセは警戒しながら周囲を探る。少なくとも生命が存在する気配が無い。

うふふふ。来てくれた。

鈴を振る様な少女の声が虚空から聞こえた。

何も無い筈の空間が扉の様に開き、中から人形の様な少女が出て来る。

人形の様な、と評したのは精緻に整った容姿もあるが、少女からは生気を感じ取れない為でもある。
少女は三人を見ると、ダークブルーのワンピースの裾を摘み、左右に広げながらお辞儀をする。カチューシャの様に頭部に付けられた白いリボンが少女のお辞儀に合わせて揺れた。
「いらっしゃいませ。アリスの世界へ」
見た目は可憐な少女。だが、シンたちは警戒を最大まで上げる。この世界を創り出した存在であると同時に、アリスと名乗った少女からは既知感を覚える気配があった。
「間薙君……彼女は……」
「……近いものを感じます。俺と」
アリスから漂う死の気配。それは魔人と限りなく似たものであった。
「ヒホ……嫌な感じだホ……」
ジャアクフロストもアリスから魔人に似た気配を察知し、顔を顰める。挑発の様な悪口をすぐに言わないのは彼なりの警戒の現れであった。
「やっと来てくれたお客様。ワタシ、とっても嬉しい。だってだってずっと退屈していたの」
アリスが微笑む。少女の笑みは凡人ならば見惚れ、特殊な趣味のある者ならより人格

を狂わせる無邪気さと魔性を兼ね揃えたもの。しかし、シンたちはその笑みを向けられて背中が粟立つ気分であった。
「かっこいいお兄ちゃんに」
　いつの間にかアリスがシンの顔を覗き込んでいる。
「綺麗なお姉さんと」
　今度はロスヴァイセの目の前に移動しており、急なことでロスヴァイセも固まる。
「可愛らしい雪だるまさん」
　最後にジャアクフロストの帽子を指先で突く。
「気安く触るんじゃないホ！」
　その手を乱暴に払い除けるが、その前にアリスは元の位置に戻っていた。
「うふふ。乱暴さんね」
　アリスは邪険にされても愉し気に笑っている。
「あの、アリスさん――」
「アリスって呼んで。そんな他人行儀な呼び方は嫌よ」
「では、アリス。貴女に聞きたいことがあります」
「何何？　何でも聞いて」
　アリスは後ろに手を組み、小首を傾げて可愛いらしい態度を見せる。

「……出口は何処でしょうか？」
ロスヴァイセが至極当然の質問をした。何が待ち受けているのか分からない得体の知れない世界である。一刻も早く脱出したいのは当たり前のことである。
「ええー」
すると、アリスはあからさまに表情を曇らせると、姿を消す。
「どこに――」
「ワタシ、退屈なの」
アリスはシンの背中に乗り、彼の首に腕を回していた。
温度も体重も感じない。幽霊でも背負っている様な気持ちになる。
「ワタシと遊んでよー。ねえねえ」
シンの背にしがみついたまま足をバタバタと動かす。
「その……貴女と遊んだら出口を教えてくれるのでしょうか？」
話を聞くのはあまり得策ではないが、どうすればいいのか分からない以上アリスの話を聞くしかない。
「うん！　ワタシと遊んでオトモダチになったら教えてあげる」
シンの背中から離れ、ロスヴァイセを下から見上げるアリス。ほんの少しでも目を離すと別の場所に移動してしまう。

「じゃあ、遊びましょう！　そうしたらワタシとオトモダチになれるわ！」

その言葉と共に周囲が黒く塗り潰される。自分以外が見えなくなる闇が全てを覆った。

幕間　少女、求友（後編）

ふふ。遊びましょう。遊びましょう。

暗闇の中でアリスの声だけが聞こえてくる。

「ロスヴァイセさん。ジャアクフロスト」

名を呼んでも近くにいる二人の反応が返って来ない。分断されたか、この闇は視界だけでなく音すらも遮断するのか。

闇が消える。すると目の前に誰かが立っているのでシンは咄嗟に拳を突き出し――止めた。向こうの人物もまた拳を突き出して止めている。見覚えのある顔。それはまさしくシンの顔である。

シンが拳を引くと、目の前のシンも拳を引く。もう一人のシンは鏡に映った鏡像であった。

真正面だけではない。左右後ろにも映るシンの鏡像。シンはいつの間にかミラーハウスの中へ閉じ込められていた。

ロスヴァイセとジャアクフロストの姿は見当たらない。同じミラーハウス内にいるのか、それとも隔離をされているのか。

いつまでも同じ場所に立っている訳にもいかず、シンは仕方なく歩き始める。
あるく度に常に映り込む自分の姿。ナルシストならばそれに酔い痴れることも出来ただろうが、あらゆる角度に自分しかいないというのは存外不気味である。その感覚的な不気味さが鏡にまつわる怪談や都市伝説を生み出しているのかもしれない。
周囲を警戒しながらも出口を求めてシンは歩く。絶えず視線を動かしながら、何十枚目か分からない鏡の前を通過し――足を止めた。
二歩程戻り、通過した鏡の前に立つ。その鏡には何故かシンの姿が映っていない。
鏡を見ていた視線を横にずらす。そこにも当然シンの鏡像がある。
「――悪趣味だな」
その鏡像を見てシンは吐き捨てた。鏡像はシンに向かって歩き始めているのだ。シン本人は立っているだけだというのに。鏡に映る筈のシンが鏡から抜け出て実体を持っていた。
歩きはやがて走りに変わり、シンに向かって実体化した鏡像が殴り掛かってくる。
顔面を打ち抜こうとする真っ直ぐな拳。シンは頬に拳圧が触れる程の最小限の動きで頭を動かして避けながら前に踏み込み、腕を交差させながら逆に鏡像の顔面を打ち抜く。
（手応え無し、か）

殴った拳からは肉が潰れる感触も骨が砕ける感触も伝わってこない。鏡像が空いた手でシンの胴体を攻撃しようとしてきたので、すぐに後ろに飛び退く。

顔面中央を殴られた鏡像は凹むどころか、傷一つ無く能面の表情でシンを見つめていた。

すると、クスクスと笑うアリスの声がミラーハウス内に響き渡る。

無駄だよ。お兄ちゃん。鏡のお兄ちゃんはそれじゃ壊れないよ？

無邪気な声というのは時と場合によっては癇に障る。特にアリスからは魔人に似た気配もするせいもあって容姿関係無く敵意を抱いてしまう。

でも、いいの。壊れなかったらお兄ちゃんはワタシのオトモダチになるから。他の場所にいるお姉さんと雪だるまさんもワタシのオトモダチに――

「そうか。二人はここに居ないのか」

確証が無かったので控えていたが、アリスの口から二人が別の場所に居ると知ったのなら話は早い。

寂しい？　でも大丈夫。ワタシが賑やかにしてあげる！

指を鳴らす音と共にシンが映っている鏡の中から鏡像のシンたちが抜け出てくる。

どいつもこいつも無表情であり、わらわらと群れる光景は不気味であった。

自分の無表情を相手側の視線で見たらこんな気持ちになるのかと自虐的な評価をす

る。

お兄ちゃんとワタシのお兄ちゃんで遊びましょう？

シンは最初からアリスの用意した遊びに付き合うつもりは無かった。

左手に魔力剣が握られる。衣服越しに輝く体に張り巡らされた紋様。右足に集中する力のせいで履いていたスポーツシューズが弾け飛ぶ。

あら？　何をするの？

好奇心に満ちたアリスの声に、シンはただ一言返す。

「こうする」

左手に握る魔力剣を振ると内包された力が解放され、魔力の波となって広がっていく。狙いは鏡像の群――ではなくそれらが出て来た鏡であり一斉に破壊。

と同時に右足を振り抜く。右足から放たれた魔力が幾本の線の様に伸び、破壊し切れていない鏡をまとめて貫いていく。

まあ！

アリスの驚く声が聞こえるが無視し、今度は両手に炎を灯す。燃え盛る炎を宿した左右の手を一つに纏めることで、炎は閃光の様な輝きに変化。その両手を前に突き出すと超高熱の熱線となり、ミラーハウス内を溶かしながら前進。射程限界まで到達すると、シンはその場で一回転をして周囲を焼き切る。

砕け散った鏡が足元に広がる。シンの鏡像らに亀裂が入ったかと思えば砕け散り、他の鏡片に混ざってしまう。本体である鏡自体が破壊されたせいと思われる。

全ての鏡が破壊され、広々とした空間となる。ロスヴァイセたちがいないと分かったので徹底的に破壊して脱出口を見つけようとしたのだ。

もう！　乱暴ね！　折角の遊びが台無しなっちゃった！

少しだけ怒ったアリスの声が聞こえるが無視する。

そんな乱暴な人は、えい！

亀裂音が頭上から聞こえる。見上げたシンが見たのは崩壊する天井と落ちてくる瓦礫。

驚くに値しない。シンは出口が見つからなければ、このミラーハウスを完全に破壊するつもりであった。故に既に準備は出来ている。

体から放つ光がより輝きを増すと、シンの背中から放出される魔力が無数の魔槍となり全方位へ撃ち出される。

◇

「も、もう、ダメ……！」

ロスヴァイセが蒼褪めた顔で膝を突く。

暗転した後に連れて来られた場所は巨大なメリーゴーランドであった。ロスヴァイセの周りでは馬の遊具や馬車が回転する床に合わせて上下している。

ロスヴァイセも最初は遊具を避けてメリーゴーランドの外へ出ようとしていた。しかし、どういう仕組みかメリーゴーランドを囲う柵の向こうに行くと元の位置に戻されてしまうのだ。

それを何十回も繰り返し、何とかメリーゴーランドの外に出ようと頑張るも上手く行かない。北欧魔術を使って脱出しようとしたが、このメリーゴーランドと北欧魔術が根本的に違う力で成り立っているせいか、上手く解析することが出来なかった。

頑張り続けるロスヴァイセであったが、やがて異変が起こる。

視界左右に揺れ始め、頭痛が起こり、胃液が喉元まで上がってくる。毒や魔術の影響――などではなく回転する床のせいでロスヴァイセは目を回して酔い始めていたのだ。

（こ、このままでは……吐くっ！）

醜態を晒す前に何とかしようと考えた結果、このメリーゴーランド自体を停止させるという考えに至る。

だが、肝心の停止方法が分からない。吐き気を堪えて考え、数秒後に出た答えは――

「このメリーゴーランドを破壊します……！」

力尽くメリーゴーランドを壊すという結論を出し、ややふらつく足どりでメリーゴーランド中央へと向かっていく。
「お姉さん、綺麗なのに怖いことを考えるのね」
アリスの声。ロスヴァイセが急いで振り向くと彼女は馬の遊具に腰を下ろしていた。
「折角ならお姉さんもワタシみたいに遊べばいいのに」
「……もうそれを楽しむような年ではありません」
「そんなの関係無いわ。メリーゴーランドを楽しむのに。それに、お姉さんはとっても綺麗だから似合うと思うの」
「そ、それはありがとうございます……」
容姿を純粋に褒められ、少し照れながらつい礼を言ってしまう。
「ねえねえ。壊すなんて言わずにここでワタシと遊びましょう？　きっとワタシとお姉さんはオトモダチになれるわ」
星でも宿しているかの様にキラキラと輝く目に、世俗の穢れなど一切知らない無垢なる笑顔。恐れるべき相手だというのにその目と笑顔を向けられると首を縦に振ってしまいそうになる。
暴力や恐怖とは異なる心の屈服にロスヴァイセは必死に抗う。
「それは……できません。私は間薙君とジャアクフロスト君と共に戻らなければならな

い」
「そう……」
　星の様に輝いていた瞳は雲が覆った様に光を無くし、無垢なる笑顔は初めて裏切りを知ったかの様な哀しみで染まる。
　今すぐ言葉を撤回したくなる様な強烈な罪悪感がロスヴァイセの心を襲う。オーディンに置き去りにされた時、密かに『クソジジイ』と悪口を言ってしまった時以上の罪の意識。
「なら仕方ないわね……でも、お姉さん分かってる？」
「何をですか？」
「壊すなんて言ったら、この子たちが怒るわ」
「この子たち……？」
　何を指しているのか一瞬理解出来なかったロスヴァイセだが、アリスが座っている遊具を撫でているのを見て一つの予感を覚える。
　直後にその予感が間違っていないことを告げる無数の嘶きがメリーゴーランド内に響き渡った。
　メリーゴーランドの回転に合わせて上下している馬の遊具らに生命が吹き込まれ前脚を高々と掲げ、メリーゴーランドとの繋がりであり楔でもある棒を自らの意志でへし

折り、自由となる。
「馬が！」
無機質な見た目なのに生物の馬と同様の動きをする遊具らに矛盾を感じながらも、次の時には生物の馬ではあり得ない速度で突進してくることに矛盾など消し飛ぶ程の驚きを覚える。
白い馬が走り出せば、白い影となり、黒い馬が駆け出せば黒い影となる。その速度で繰り出される突進は凶器そのもの。
ロスヴァイセはすぐにスーツ姿からヴァルキリーの正装へ変え、防御力を高める。『戦車』としての特性もあるが、それでも心許ないと思えた。
最初の二頭の突進を辛うじて避けるロスヴァイセ。すぐに別の馬が仕掛けてくるのが目に入る。
その馬に対しロスヴァイセは魔法陣を展開。魔法力が込められると共に魔法陣から業火が噴き出し、馬は全身を呑み込まれる。
炎の中で前進しながら炭化していく馬。頭が焼失し、胴体も無くなり始めていく。次の瞬間、炭化していく馬を砕き散らしながら馬車が突っ込んで来た。
「うそっ！」
馬を炎避けにすると同時に目晦ましにしての攻撃。魔法陣の展開が間に合わないと

思ったロスヴァイセは横っ飛びでそれを回避。
しかし、その代償としてロスヴァイセは回転する床の上でうつ伏せの状態となってしまう。
頭上から感じる殺気に横へ転がるロスヴァイセ。コンマの差も無くロスヴァイセの頭部があった場所に蹄鉄が振り下ろされた。蹄鉄が叩き込まれた箇所は、くっきりとした形で凹んでいる。
うつ伏せから仰向けになったロスヴァイセが見たのは、地面に向けて前脚を振り下ろそうとする馬たち。
「ああ、もう！」
情け容赦無く振り下ろされる殺意しかない攻撃を、ロスヴァイセは転がり、這い、跳んでギリギリで避けて行く。正直、他人には見せられない無様な動きであり、この時だけは独りで良かったとロスヴァイセは思った。
馬たちの攻撃は苛烈であったが、『戦車』としての防御力を考えれば耐えられない攻撃ではない。しかし、ロスヴァイセは『戦車』の特性がどれ程のものか正確に把握していなかった。同じ『戦車』の小猫ならば同じ状況でも馬の攻撃を『戦車』の頑丈さで受け、力で反撃をしていたであろう。回避を選択してしまったのはロスヴァイセの悪魔としての日の浅さが原因であり、それによって思わぬ苦戦を強いることになってしまった。

馬たちの踏み下ろしを抜け切ったロスヴァイセ。しかし、彼女を待ち受けたのは先程轢き殺そうしてきた馬車。馬に引かれていない状態でも馬たち以上の速度で動いている。

そのまま地面に横たわっているロスヴァイセを轢き殺す――かと思いきや、馬車が通過しようとしていた床に魔法陣が浮かび上がり、そこから射る様にして放たれた雷が馬車を下から貫き、真っ二つにして破壊する。

「……よーく分かりました」

ゆらりと立ち上がるロスヴァイセが低い声で零す。

「貴女は、本気の遊びをしたいのですね、アリス」

既に姿を消しているアリスに向けられた言葉。ここまでされて何も思わない程ロスヴァイセはお人好しでは無い。

「なら、私も本気で行きます……！」

全方位に展開される魔法陣。力を注ぎ込むと魔法陣から炎、雷、光、氷が乱れ撃ちされる。

高熱の炎に焼かれた馬らは炭と化して消え、雷に貫かれた馬はバラバラに裂けてしまう。魔法陣から連射される氷の礫を浴びせられた馬は当たった箇所から凍り付き始め、最後には氷の中へと閉じ込められる。魔法陣から閃光が放たれると数体の馬の首が飛

ぶか体に綺麗な穴が開く。
魔法の火力によって蹂躙されていく遊具ら。やがて、全滅するとロスヴァイセはメリーゴーランドの中央に狙いを定めて火力を集中させた。

◇

「ヒホ？」
暗闇が明け、ジャアクフロストは自分が別の場所に居ることを知る。左右を見ると高い壁。前後を見ると何も無い通路が伸びている。
仕方なく前進するジャアクフロスト。暫く歩くと左右に分岐する道に辿り着く。
適当に右を選んで進んで行くジャアクフロスト。すると、今度は左右に加えて真ん中にも道がある分岐点に着いた。
これを見てジャアクフロストは理解する。自分は巨大な迷路の中に閉じ込められているのだと。
「ヒホー！　ふざけんじゃないホ！　俺様はお前の遊びになんて付き合うつもりはないホ！」
勝手に遊び相手にされたことを怒り、空に向かって怒鳴るジャアクフロスト。

「まあ！　口の悪い雪だるまさんね」
　その声が届いたのか壁の上にアリスが腰掛けている。
「ヒホ！　出たなホ！　この悪ガキ！」
「本当に口の悪い雪だるまさんね」
「うるさいホ！　とっととここから俺様を出すホ！」
　喚くジャアクフロスト。アリスはクスクスと笑う。
「それなら簡単。この迷路から脱出すればいいだけ」
「だから、俺様はお前の遊びに付き合うつもりは無いホ！」
「ワタシはあるんだもーん」
　アリスがパチンと両手を鳴らす。
「うん？」
　気配を感じてジャアクフロストは振り返る。そこにはアリスが立っていた。ジャアクフロストが壁の上を見上げるとそこにアリスは居ない。
　もう一度後ろを振り返る。アリスは数え切れない程の数に増えていた。
「ヒホっ！」
　いきなり増えたアリスに驚かされるジャアクフロスト。その驚く姿が愉快だったのか、アリスの笑い声が空から響いてくる。

あははは。さあさあ、始めましょう！　迷路で鬼ごっこ！　捕まったら貴方はワタシのオトモダチよ、雪だるまさん！

すると、アリスたちの顔が豹変する。口は耳まで裂け、眼球が無くなり黒い穴がぽっかりと開く。可愛らしい人形の様な姿から悍ましい呪われた人形と化すと、ジャアクフロスト目掛けて殺到する。

「やっぱり悪趣味な奴だホ！」

伸びて来る手、手、手。掴まればどうなるか分からないので、ジャアクフロストは一目散に走り出した。

「付き合ってられないホー！」

短い足をシャカシャカと動かし、迷路の中を走るジャアクフロスト。このまま出口まで逃げ延びたいところだが、そんな余裕は彼には無かった。

「あー、もう！　最悪だホ！」

思っている以上に力を発揮出来ない現状に苛立った声を上げるジャアクフロスト。全ては帽子に付いている金の輪のせいである。本来のジャアクフロストならばもっと早く走ることが出来る。それどころか、氷の力で纏めてアリスの人形たちを氷漬けにすることだって出来た。

しかし、その力を封じられている今は逃げるしかない。逃げるしかないのだが、ジャ

アクフロストが走っても走っても後ろの人形たちを引き離せない。
うふふ。必死になって走っている姿は可愛いわね。
何処からともなくアリスの声が聞こえて来る。
「ヒホー！　ヴァーリの鍛錬にいつも喰らい付いてきた俺様の足を舐めるなホー！」
足を倍の速さで動かすジャアクフロスト。ライバル視するヴァーリの鍛錬を真似し続けてきたジャアクフロストは持久力にも自信があった。
「ヒーホー！」
低身長からは想像も付かない速度で駆け出す。その足の速さに人形たちも徐々に離されていく。
チョコチョコと走る姿、とても可愛いわ。まるで子ネズミみたいね。ああ、そういえば色も似ているわね。うふふふふ。
「誰がネズミホー！　最悪な例えをするんじゃないホー！　この????!」
愛らしい見た目に反したかなり卑猥な罵声を浴びせるジャアクフロスト。
?????って、なあに？
しかし、アリスが幼過ぎるせいか意味は通じない。
「今度、周りの奴らに訊けばいいホー！」
とんでもない時限爆弾をアリスに残しながら、ジャアクフロストは走り続ける。

しかし――

雪だるまさんなのに、本当に足が速いわね。でーもー。

ジャアクフロストは急停止をし、立ち止まる。進む筈であった前方の壁から二本の腕が飛び出していた。やがて、壁をすり抜けてアリスの人形たちが現れる。

ただ逃げているだけじゃつまんなーい。鬼ごっこはもっともっとスリルがあった方が楽しいわ！

「こっちは楽しくないホ！」

急いで引き返すジャアクフロスト。すると、来た道の壁からも人形たちが出てきている。

「やり方が汚いホー！」

前後の道を封じられたジャアクフロストは、仕方なく横道へ走っていく。どう考えても誘い込まれているが、今のジャアクフロストはひたすら走って逃げるしかなかった。

走って走って先回りをされたら道を変え、を繰り返した結果ジャアクフロストはとうとう逃げ場の無い行き止まりに辿り着いてしまった。

「ヒーホー……やられたホー」

薄々分かっていたが、やはり行き止まりに誘導されていた。

あははは。雪だるまさんも頑張ったけど、もうお終いね。鬼ごっこはワタシたちの勝

ち！

勝ち誇ったアリスの声。ジャアクフロストは悔しそうにギリギリと歯を鳴らす。

アリスの人形たちが冥府に誘う様に手を伸ばしていき、ジャアクフロストの前には手の壁が出来上がる。

タッチをしたら、貴方も鬼。そしたら、ワタシたちのオトモダチよ。

人形たちの手がジャアクフロストを一斉に掴み掛る。

あはははは……あら？

人形たちがジャアクフロストに群がる光景を楽しげに見ていたが、何か可笑しいことに気付いて笑うのを中断する。

その途端、人形たちの体が氷で覆われ、バラバラに砕け散ってしまう。

「ヒーホー！」

その下から出て来る拳を突き上げたジャアクフロスト。

完全凍結を免れた人形たちも居たが、その手は氷で覆われておりグローブでも填めているかのように倍の大きさになっている。

「直接触られていないから、まだ俺様は鬼じゃないホー！」

姿の見えないアリスへ見せつける様に舌を出して挑発するジャアクフロスト。

ジャアクフロストが人形たちを指差すと、そこから冷気が放たれ人形たちは一瞬にし

て固まってしまう。

「全く！　こんなギリギリまで掛かるなんてノロマな奴だホ！」

ジャアクフロストの愚痴は、ここに居ないシンに向けてのもの。

ジャアクフロストの力を制限する金の輪。当然ながらそれを解除してジャアクフロストに本来の力を取り戻すことも出来る。これは、ジャアクフロストが危機的状況に陥った時に自衛出来る様にする為のもの。ジャアクフロストへの認識が捕虜というよりも預かっているという感じに近い為である。

その解除の権限を持っているのは二人。製作者であるアザゼルとジャアクフロストのお目付け役になっているシンであった。因みに一誠も候補に挙がったが、ヴァーリをライバルとしているジャアクフロストが、そのヴァーリがライバルと認めている一誠に嫉妬し、嫌がったことで無しになった。

ジャアクフロストが今までひたすら走り回っていたので出口を探すのも理由だが、シンの能力制限解除までの時間稼ぎも兼ねていたのだ。

「ヒィィィホォォォォォォ！」

今まで抑えられてきた力の解放。我慢の多かった故にそれは強烈なカタルシスをジャアクフロストに与え、その興奮と解放感に突き動かされたジャアクフロストは全身から絶対零度に等しい冷気を放出する。

きゃっ。寒い、寒い。ここにいたら凍えてしまうわ。
冷気を嫌がるアリスの声が聞こえる。その後にアリスの気配が無くなったのをジャアクフロストは感じ取った。
「遊びはお終いホー！」
グルグルと腕を回し、勢いを付けると拳を迷路の壁に叩き付ける。冷気の影響を受けていた壁はあっさりと亀裂が生じ二、三発程ジャアクフロストが殴ると彼が通れる程の大きさの穴が出来上がる。
「このまま脱出してやるホ！」
馬鹿正直に迷路の攻略をするつもりは無く、ただひたすらに壁を壊して外へと脱出に向かうジャアクフロスト。
途端、世界は暗い闇に覆われた。

◇

暗闇が晴れると三人は元の場所へと戻っていた。シンはミラーハウスを破壊した後に暗闇に覆われ、ロスヴァイセはメリーゴーランドを破壊した直後に。
「ヒホ？」

「ジャアクフロスト君に間薙――きゃあっ！」

ジャアクフロストは拳を突き出した姿で周囲を確認してシンとロスヴァイセを見つけ、ロスヴァイセはジャアクフロストを見つけた後、シンに目を向け小さな悲鳴を上げて両目を手で覆う。

シンは上半身が露わになっており、ズボンも右膝から下が千切れ靴も履いていない。体に浮かび上がる紋様が淡い輝きを放っている状態にある。

こういう時に自分の力を不便に思ってしまう。炎や氷の吐息や魔力剣はまだいいが、足や体から放つ魔槍は上着やズボンが破けてしまいその度に買い直す必要がある。それなら予め脱げばいいのかもしれないが戦う前に衣服など脱ぐ暇は無いし、脱ぎ始めたらそれはそれで頭のおかしい奴だと思われる。一誠の『赤龍帝の籠手』や木場の『魔剣創造』などの装備系の神器が羨ましくも感じる――

「ヒホ。何でお前、上半身が裸なんだホ？　そういう趣味なのかホ？」

「……」

――こうやって分かっていてニヤつきながら訊いてくる奴が来なくなるので。

ロスヴァイセは深呼吸を繰り返した後、目を見開いてシンの方を見る。大丈夫であるというアピールなのかもしれないが目が血走っている。

「も、もう大丈夫です！　慣れました！」

「顔が変ホ。盛っているんじゃ無いホ」
「違います！　そこまで私は飢えていません！」
茶々を入れてきたジャアクフロストに抗議するロスヴァイセ。すると、可愛らしい笑い声が頭上から聞こえてくる。
「本当に楽しくて面白いお兄ちゃんたちね。ちょっと乱暴で強引だけど」
空中に置かれたキングチェアに座っているアリスがこちらを見下ろしている。
「うん！　やっぱりお兄ちゃんたちをワタシのオトモダチにするね！」
何処までも無邪気な笑顔。だというのに強い悪寒と共に死の気配がより濃くなる。
「勝手に決めるなホー！」
ジャアクフロストの抗議を無視してアリスは話を進める。
「でもね、ワタシとお兄ちゃんたちがオトモダチになるには一つしなきゃならないことがあるの」
アリスはキングチェアの上に立ち、恥ずかしがる様に背を向ける。
「ねえ、お兄ちゃんたち……」
死　ん　で　く　れ　る　？
振り返り微笑を向けるアリス。臓腑どころか魂まで凍てつく様な微笑みに本能が最大級の警鐘を鳴らす。

アリスに従う様にして並ぶ胴体がトランプの兵隊たち。いつの間にかアリスを守護する様に現れる。ハートのクイーンを除く1から13まであり、恐らくハートのクイーンはアリスを意味しているのであろう。

見た瞬間、ロスヴァイセは吐き気を覚えた。視覚にも伝わる程の濃密な死をトランプ兵たちが纏っている。相手を呪い殺す呪殺の力が桁外れのレベルで施されているのだ。

見ただけで分かる。あのトランプ兵に傷一つ付けられたら即死級の呪殺を流し込まれるのを。

それは、同じく見ていたシンも同様の考えであった。今の自分では耐えることが出来ない。

ならば選択肢など一つしかない。攻められる前に攻める。

右足に魔力を集中。内側から弾け飛ぶのを覚悟で限界寸前まで溜め込むと、上空目掛けて後ろ回し蹴りの動きに乗せて魔力を解き放つ。

放たれた力は無数の魔槍と化してトランプ兵へ向かっていく。しかし、シンが攻撃をするタイミングでトランプ兵たちも急降下してきていた。

魔槍がトランプ兵の胴体を貫いて真っ二つに裂くが、仕留められたのは半数にも満たない。トランプ兵が動いたせいで大分外れてしまった。

残ったトランプ兵たちはハルバードをシンたちに向けながら落ちて来る。

「させません！」
ロスヴァイセが防御用の魔法陣を展開。その魔法陣にトランプ兵のハルバードが突き刺さる――が、あっさりと魔法陣を突破されてしまった。物理的な防御力はあってもトランプ兵たちの呪殺の力には弱く、それによって簡単に破られたのだ。
（ああ――！　こんなことならもっと防御の為の魔法を覚えておけばよかった――！）
攻撃用の魔法は得意で、それ以外の魔法は平凡なロスヴァイセは今更ながら後悔してしまう。
死の斧槍がシンたちを貫くかと思った時――
「ヒホォォォォ！」
ジャアクフロストがトランプ兵たちに向かって跳び上がり、体ごとぶつかる。密集していたトランプ兵たちがその体当たりによって軌道が変えられ、シンたちから逸れていく。
シンたちを助けるつもりなどジャアクフロストには毛頭無い。だからといって、アリスという小生意気な少女に好き勝手させる方がジャアクフロストにとって腹立たしい。だからこそアリスの思惑通りになどさせない。
「ジャアクフロスト君！　――あっ」
ジャアクフロストの活躍に喜ぶロスヴァイセであったが、すぐに息を呑んだ。トラン

プ兵のハルバードの槍先がジャアクフロストの腹部に刺さっている。
「ヒ、ホォォォォ！」
ハルバードを抜き取りながらジャアクフロストが落下。シンがそれを受け止める。
「大丈夫ですか！」
ロスヴァイセがジャアクフロストに声を掛ける。異常な密度の呪を注ぎ込まれのだ、死は免れない――そう思っていた。
「ヒ、ヒホ。やかましいホ……」
ジャアクフロストはあれだけの呪殺の力を流し込まれても生きていた。彼自身が呪殺の力を使え、強い耐性があることが生還の理由に繋がった。
「俺様は……サイコーのジャアクフロスト……」
強がろうとするジャアクフロストであったが、目を回して気絶してしまう。強い耐性を持っていてもアリスの力はそれ以上のものであったのだ。寧ろ、気絶程度で済んだことの方が驚くべきことである。
「やっぱりお兄ちゃんたち強いのね。ワタシが思った通りよ」
「何故、こんなことを！」
「ワタシ、オトモダチにはみーんな死んでもらうの」
「なっ！」

アリスの発言にロスヴァイセは絶句する。
「だって死んだらずっと一緒にいられるのよ？」
空中から椅子ごと降りたアリスが肘掛けに持たれながら足を組んでいる。
無邪気に残酷に自分の考えに何一つ疑問を持つことなく言い切る。シンたちはアリスとこれ以上の会話は無駄だと悟った。考え方の根本から違う。
「ワタシはお兄ちゃんたちを気に入ったの。絶対にオトモダチにしてあげる。だから、今度こそ――死　ん　で　く　れ　る　？」
シンたちの頭上に現れるトランプ兵。今度はハートからクラブまでのスートが刻まれたトランプも揃えてある。そして、そのどれもが先程と変わらない呪殺の力が込められていた。
「こんな……！」
苦も無く同じ以上の攻撃を行えるアリスに戦慄する。先程は辛うじて防ぐことが出来たが、ジャアクフロストが戦闘不能状態になっている以上二度目は無い。
シンもどうするべきかギリギリまで思考を巡らせる。
「うふふ。これでお兄ちゃんたちとワタシはオトモダチ――」
ヒュン、という風切り音が聞こえる。音がしたのはアリスの背後。
「え？」

後ろを振り向くアリス。すると、空間に刀らしき先端が突き出しており、それが素早く振るわれると空間が裂かれて剥がれ落ち、その向こう側から強い光が発せられる。
「きゃあああ！」
椅子から転げ落ちるアリス。光の方に顔を向けて小さく声を上げる。
「あ、あら？　おじ様方が来ると思っていたけど、お兄ちゃんが来たの？」
現れた人物と顔見知りらしいアリス。一方でシンたちは強い光のせいで姿がハッキリと見えない。輪郭のみ見えるが、片方は外套を纏い帽子を被っており、アリスの言葉から察するに男性。刀を振るったのはこの男の様子。もう片方の影は小さく、明らかに猫である。
『見つけたぞ、アリス。ここに彷徨っていたのか』
低い男性の声。外套の男――ではなく明らかに猫の方から聞こえる。
『あの二人はこの時空を恐れ、我らに依頼を頼んだ。ここは意図的に結び付けられた世界。うぬは誘い込まれたのだ』
「むー……つまんなーい」
男の影は刀を鞘に戻し、アリスに手を差し伸べる。不満そうにしていたアリスであったが、反抗することはせずに大人しくその手を掴んだ。少なくとも影の男はアリスが逆らうべきではないと考える程の実力があるのだろう。

「バイバイ。お兄ちゃん、お姉さん、雪だるまさん――またね」
不穏な言葉を残しながらアリスが光の奥へ消えて行く。そして、影の男が去る間際、その目は確かにシンへと向けられた。
『行くぞ。――』
猫に名を呼ばれると影の男も光の中に消える。その瞬間、全ての光景が崩れ落ち、気付けば最初に転送された場所に三人は居た。
「何だったんでしょうか……今までのことは……？」
夢でも見ていた様に呟くロスヴァイセ。すると、すぐにハッとした表情となる。
「こ、これってどうすればいいのでしょうか？　お仕事失敗なんですか？　というか初っ端から特殊ケース過ぎませんか！」
リアスたちにどう説明するべきか頭を悩ませるロスヴァイセ。その苦悶を余所にジャアクフロストは寝息を立てている。
シンの方もどうリアスたち説明するか考えながら、影の男のことについても考えていた。
去り際に呼ばれた名が耳に残って仕方がない。
「ライドウ、か……」

◇

「うぇへへへへ。間薙くんわぁー、いい体をしてまふねー」
「……そうですか」
アリスとの邂逅については下手な言い訳もせずにあるがままを伝えることにした。幸い、リアスも怒ることはなく寧ろロスヴァイセの薄幸っぷりに同情する程であった。
その際にシンが折角眷属が全員揃ったのだからお祝いか記念でもしないか、と何気無く言った所リアスたちは乗り気になり、後日リアス・グレモリーの眷属が揃ったことを記念したパーティーをオカルト研究部で行った。
そこでアザゼルが酒も持ち込んできており、ロスヴァイセに勧めた結果、見事に酔っ払ってしまい、飲み過ぎ気持ち悪いということでシンが運ぶこととなり冒頭へと繋がる。
シンはロスヴァイセを背負いながらセクハラまがいの言葉を掛けられつつ、トイレへロスヴァイセを運んでいた。
「もう少しなので我慢をしてくださいね」
「らいじょーぶらいじょうぶです。うぇへへへへ」
大丈夫には聞こえない。

「――ロスヴァイセさん」
「なんれすか？」
「俺は一度部長の眷属代理としてレーティングゲームに出たことがあります」
「そういえば、そんこと、聞いたことありまふ……」
「その時の役割が『戦車』でした」
「わらひと、同じれすねー」
「部長の眷属が揃った今、俺がリアス・グレモリーのレーティングゲームに参加することはもう無いです」
揃っていない時は何かしらの言い訳をすれば出ることが出来たかもしれない。しかし、揃い切った今はその言い訳も出来ない。リアス・グレモリーと一緒に戦ったレーティングゲームはあのライザーとの戦いが最初で最後なのだ。
「たった一度『戦車』の代理をやった奴が言うのはおかしいかもしれませんが……後は頼みますね、ロスヴァイセさん」
「間薙君……」
シンの真摯な願いにロスヴァイセの酔いも一気に醒める。
「はい……！　私はもっと勉強や修行をします！　苦手だった防御魔法もいっぱい覚えます……！　『戦車』として頑張ります！」

ロスヴァイセの決意を背中で聞きながら、シンは微かに笑った。

修学旅行はパンデモニウム編

決闘、隠形

悪神ロキとの激戦。シンたちは様々な助力を得て辛うじて勝利することが出来た。しかし、その戦いは多くの爪痕を残す。

例えばタンニーンはロキの凍結魔法によって片腕と片翼をもぎ取られるという重傷を負った。幸い処置が早かったので無事接合が出来たが、完全に元に戻るにはそれなりの日数が必要となる。

また、同じくロキの凍結魔法で凍らせられたジャックランタンとケルベロスは元々冷気に弱い体質であり、凍結状態から復帰しても体調不良の日々が続いていた。

ピクシーもロキ戦以降一日の大半を寝て過ごす生活が続いている。外傷は無いがロキとの戦いで自分の器量以上の魔法を使用し、力が枯渇するまで使用した影響である。

そして、ロキとの戦いで最も体を張った男である一誠もまた強い後遺症が残っていた。

「……どうですか？」

「うん。気持ち良いよ」

一誠宅にて二人きりの室内で言葉を交わす一誠と小猫。小猫は薄布地の白装束一枚という姿で上半身の衣服を脱いでいる一誠に抱きついている。

二人の行為は決して卑猥が目的のものではない。一誠が必死に理性を保とうとして時折保てずにだらしない表情になっていても、小猫が顔を赤面させていても、だ。

今行われているのはれっきとした治癒行為。そうは見えないかもしれないが仙術を使用した紛れも無い治療。それを示す様に小猫の頭部には仙術使用の際に生える猫耳がある。

表面的に見れば一誠が小猫とじゃれ合っている光景だが、実際のところは一誠の将来を大きく左右するものである。

一誠がロキとの戦いで使用した『覇龍』。それに加えて雷神トールの力も使用した。『覇龍』の消耗を賄う程のトールの力であったが、それを使用した一誠の体は反動で生命エネルギー、平たく言えば寿命を削ることとなったのだ。

悪魔の寿命は普通に生きれば数千年という長いもの。だが、大量に消耗した一誠の寿命は百年以下。人並みの寿命にまで落ちてしまっていた。

これはロキ戦後、ドライグから相談を受けたアザゼルが一誠の体を調べたことで発覚した。ドライグもアザゼルも『覇龍』とトールの組み合わせに不安感を抱いていたせいである。

一誠はその宣言をアザゼルから聞かされた時には、普段明るい一誠もショックで言葉を失う程であった。そして、この事実は主であるリアスも聞かされており、彼女もまた言葉を失い落涙した。

だが、全く希望が無い訳では無い。その希望というのが、今一誠が小猫に施されている仙術による治療なのである。

仙術の考えでは生命力には源泉というべき核というものが存在する。今の一誠の体内はその核が限界寸前まで酷使された状態であった。だが、この核は枯れ果てなければ元の状態に戻ろうとする作用がある。それを小猫の仙術によって活性化させ、徐々に一誠の失われた生命力を元に戻そうとしているのだ。

しかし、小猫の仙術はまだ熟練の域には達していない為、かなり長い期間が必要な治療と言える。だが、治療を繰り返せば小猫の腕も上達していくので一誠の寿命が先に尽きるということは無い。

とはいえこの治療が終了するまで『覇龍』は禁止というのは中々痛い。ヴァーリとの決着が残っているし、『禍の団』の存在もある。最近では『禍の団』の神器使いの中にも禁手を使用出来る者が現れてきていた。まだ『赤龍帝の鎧』で対抗出来るが、いずれはそれのみでは厳しい状況が来るかもしれない。

「……不安、ですか？」

「え？」
「……そういう顔をしていました」
　知らず知らずのうちに表情に出てしまっていたらしい。一誠は慌てて笑ってみせるが、このタイミングでは逆効果であった。
　小猫は少しの間黙った後、ただでさえ赤かった顔をもっと赤くし、意を決した表情となる。
「……先輩。この治療にはもっと効率的な方法があります」
「へえ、どういうの？」
　少しでも早める方法があるのなら是非とも知りたい。
「……」
　いつも喋る時に間を置く小猫だが、この時の間はいつも以上に長かった。
「……ぼ、房中術です」
「ぼーちゅーじゅつ？　何それ？」
　聞き覚えの無い言葉だったので聞き返す。
「……気の使いに長けた女性が男性に気を分け与えることで生命力の活性化を大きく促す術です」
「はー、そんな術があるんだー。仙術ってのは便利だなー。それなら今度小猫ちゃんに

やってもらおうかな」
「……わ、私でいいんですか？」
「え？　小猫ちゃんなら出来るんでしょ？」
「……で、出来ることは出来ますが、初めてなので……」
何気無く頼んだことなのだが、小猫の反応を見ていた段々とおかしいことに気付き始める。
「……因みになんだけど、房中術っていうのはどういう風にするの？」
「……男女が一つになることで、その……仙術使いの女性の気を直接男性の体に送る術のことです……」
説明し終えた小猫の顔は、今にも湯気が噴き出しそうであった。
「そ、それって、エ――」
一誠が何かを言う前に小猫が一誠の口を押えてしまう。
「……こ、声が大きいです」
もう大きな声を出さないと何度も頷いて一誠は小猫の手から解放される。
「い、いや、でも、それは……」
「……わ、私は覚悟は出来ています！　……そ、それに猫又は古くから異種族と交わって繁栄してきた種族ですから！」

猫又という種族は基本的に男性が少ない。その為に猫又は子孫を残す為に他の種族と交わることが当たり前だと言う。その相手は主に人間が多い。

子供も出来る覚悟で言っている小猫に対し、一誠は葛藤する。『はい！　お願いします！』と即答出来れば楽なのだが、その脳裏に同じ屋根の下にいるリアス、朱乃、アーシアの顔が交代する様に浮かんできて事を運ぶ気にはなれない。

だからといって、小猫の覚悟を無下にするのは気が引ける。真摯に言っている小猫を悲しませるのも同じくらい気が引ける。

（お、俺は一体どうすれば……！）

葛藤が苦悩へと変わり始めたその時、一誠は誰かの視線を感じる。

向けられている視線を辿ると一誠の目は自然と下に向けられる。そこには一誠たちをじっと見つめているジャアクフロストが立っていた。

ジャアクフロストを預かることになってから決めたことだが、ジャックフロストとジャアクフロストを同じ空間に居させると喧嘩が始まるので二人を引き離して生活することになっており、ローテーションでジャアクフロストは各眷属の家に預かることになっていた。シンもそのローテーションに入っており、シンがジャアクフロストを預かる場合、ジャックフロストが他眷属の家に泊まることになっている。

そして、今日は一誠らがジャアクフロストを泊めさせる番であった。

「……いつの間に」
「い、いつからそこに居たんだよ」
　すると、ジャアクフロストは口を窄めて――
「どうですかー？　うんきもちいいよー」
　――とさっきまでの一誠と小猫のやりとりを真似する。妙な誇張を入れた明らかに相手を虚仮にしたモノマネであった。
「お前なぁー」
　ジャアクフロストの悪ガキっぷりに少し怒りながら、すぐに部屋から追い出そうとジャアクフロストを捕まえようとする。
「ヒホ」
　ジャアクフロストが急に天井を指差した。それに釣られて一誠と小猫は天井を見上げる。しかし、そこには照明器具があるだけ。
「隙有りホォォ！」
「きょわっ！」
「イッセー先輩！」
　何を思ったのかジャアクフロストが跳び上がりながら拳を突き上げた。一誠の股間目掛けて。

意識は集中せず別のものが集中していたそこへの攻撃は、力の制限をされた非力なジャアクフロストの拳でも強烈なダメージを与え、一誠を崩れ落ちさせる。
「……突然何をするんですかっ！」
「ヒーホッホッホッホッ！　馬鹿みたいに油断していたから一発入れてやっただけホー。そんなじゃヴァーリになんて勝てないホ！　やっぱり、ヴァーリのライバルは俺様だホー！」
ヴァーリが一誠のことを高く買っていることを気に入らないジャアクフロストは一誠を敵視していた。いつかは一撃を与えてやろうと密かに企ていたことを今日実行したのだ。
おかげで一誠は隙間風の様な呼吸をしている。
「一体どうしたの！　さっきの声は何！　イッセー！　小猫！」
「何があったんですか、イッセー君！」
「イッセーさん！　小猫さん！　どうかしたんですか！」
一誠の絞められた雄鶏の様な声を聞き付けてリアスたちが部屋へ飛び込んで来る。そこで見たものは、悶絶している一誠と彼の傍に付き添う小猫と何故か居るジャアクフロスト。
「これは一体――」

「あいつがあいつを襲っていたホ」
『えっ！』
一誠を指差し後に小猫を指差すジャアクフロスト。事態を把握していないリアスたちはいきなり告げられたジャアクフロストの堂々たる嘘に驚かされる。
「……ち、違います！　私がイッセー先輩を襲ったんです！　……はっ！」
『えっ！』
ジャアクフロストの言っていることは嘘だと弁解しようとしていた小猫だったが、慌てていた為にとんでもないことを口走ってしまい、リアスたちを逆に混乱させる。
「ちょ、ちょっと待ちなさい！　えーと、一誠と小猫はここで治療を――」
「あいつが発情していたから俺様が止めたんだホー」
「イ、▪イッセーさんが急にそんなことは！」
「……アーシア先輩、騙されないで下さい！　……その性悪雪だるまが言っていることは出鱈目です！」
混沌とする空間。小猫は必死になって何があったのかを伝えようとするが、その度にジャアクフロストが嘘を並べていくので、どれが本当なのかリアスたちも分からなくなっていく。
この不毛な言い争いは、悶絶している一誠が回復するまで続いた。

◇

修学旅行も間近に迫っていた今日、リアスたちは冥界のグレモリー邸に集まっていた。眷属が全員揃ったことをリアスの父母に紹介する為である。
「初めまして。この度リアス・グレモリー様から『戦車』の役目を拝命したロスヴァイセと申します」
背筋を伸ばし凛とした表情でリアスの父母に挨拶するロスヴァイセ。彼女だけではなく、もう一人自己紹介する者がいた。
「初めまして！　紫藤イリナといいます！　ミカエル様の下で『御使い』をさせて頂いています！　天使の私が上級悪魔のお屋敷にお邪魔出来るなんて光栄の限りです！」
目をキラキラさせながら感激するイリナ。彼女もまたリアスたちの大事な仲間としてリアスの父と母に会わせることにしたのだ。
そこからお茶会を楽しみながらの会話が始める。ロスヴァイセは将来的にはグレモリー領内にて北欧魔術の学舎を設立したりなど、今までの冥界には無かった新しい事業をしたいと語る。
それはリアスの父には好感触であり、将来を期待すると共に助力を惜しまないことを

約束してくれた。
各眷属たちも現状を日常会話と共に報告し、和やかな雰囲気のままお茶会は終わる。
このままお開きになり、リアスたちが帰還しようとした時、サーゼクスがグレモリー邸に帰って来たという報せが入り、皆で挨拶をしようという事になった。
「僕も一緒に行きます！」
サーゼクスの子息であるミリキャスも父であるサーゼクスを出迎えたいということで同行することになった。ミリキャスが行くとなると彼の子守りをしているセタンタも当然付いて行くことになる。
そして、一行はサーゼクスの許へ向かう。サーゼクスが戻る際に使っている移住区の通路にてサーゼクスとグレイフィアを見つける。彼ら以外にもう一人おり何かを話していた。
「お邪魔をしている。元気そうだな、リアス。お前の眷属も勢揃いだな。何人か初めて見る顔もいるが」
サーゼクスと一緒に居たのはサイラオーグであった。以前は動きやすい軽装であったが、今は貴族が着る様な質の良い生地に金紐、銀紐で装飾された服を着ている。軽装では野性味と精悍さが際立ち、貴族服ならば凛々しさと高潔が際立つ。どちらの姿でもサイラオーグの魅力が陰ることが無い。

「来ているのなら一声掛けてくれたらいいのに。ええ、貴方も元気そうね。き――っと挨拶が遅れました。お兄さま、ご機嫌よう。こちらへ帰っているとうかがったのでご挨拶だけでもと思いまして」
　サーゼクスはミリキャスを抱き上げながらリアスたちに微笑む。
「わざわざすまないね、ありがとう。ミリキャスも出迎えてくれてありがとう」
「はい！　お帰りなさい父様！　母様！　サイラオーグさんもお久しぶりです！」
「少し見ない間にまた凛々しくなったな、ミリキャス」
　ミリキャスが無邪気に微笑むと、サイラオーグは普段は闘志で鋭い輝きを宿している紫の双眸を優し気に細める。
　サイラオーグがグレモリー領にきたのは、今度のレーティングゲームについてのいくつかの相談があったからだ。
　ディオドラ・アスタロトの件で若手悪魔のレーティングゲームの大きな見直しが検討されることになったが、その前に冥界の住人たちや他勢力からリアス・グレモリーとサイラオーグ・バアルの一戦、ソーナ・シトリー対シーグヴァイラ・アガレスの戦いを熱望されていた。まだ確定はされていないが、サイラオーグの動きを見るにほぼ決まっていると見た方がいい。
「リアス、今度のゲームについて彼といくつか話をしていてね。彼はフィールドを用い

たルールはともかく、バトルに関しての複雑なルールを一切排除してほしいとのことだ」

その言葉にリアスと眷属一同は驚く。つまりはリアス側は能力の制限無しに戦っていいという事である。一誠の『洋服破壊』や『乳語翻訳』といった使用禁止能力も使用可能に。それどころか、使用禁止にされてもおかしくはない木場の聖魔剣、ギャスパーの邪眼、ゼノヴィアのデュランダル、朱乃の雷光すらも許容するを意味している。

「サイラオーグ、貴方がそういう人では無いということは重々承知で言うけど、私たちのことを過小評価している訳では無いのよね？」

リアスの真剣な眼差しをサイラオーグは覇気ある笑みで受け止める。

「まさか、だ。寧ろ俺はお前たちに対して微塵も油断していない。だが、その上で全てを許容する。たとえそれが不確定要素から来る強大な力であっても俺はお前たちの全力が見たいんだ。それを受け止めることが出来なければ、大王家の次期当主など名乗れる筈も無い」

その宣言に誰もが息を呑んだ。気迫と覚悟だけで圧倒されそうになる。そして、敢えて苦難の道を歩もうとする姿に一誠と木場は男として尊敬の念を覚えた。一方でギャスパーの方はガタガタと身を震わせながらもその目をサイラオーグから離すことが出来なかった。

自分ですら忌み嫌う『停止世界の邪眼』をこうも前向きに受け止めてくれる人物は居なかった。そのことに逆に恐怖を覚えると同時に、男としてこれぐらい堂々と雄々しくありたいという敬意という矛盾した思いを抱く。
「何なら間薙シンも――うん？」
サイラオーグが視線を動かしシンの姿を探す。彼もまたリアスたちと一緒に居ると思っていた。代わりに居たのは――
「ヒホー！」
――彼の仲魔のジャックフロストである。冥界にジャアクフロストは連れて来ていない。一誠宅での件もあるが、ジャアクフロストがリアスの父母の前でどんな暴走をするか分かったものではないし、『禍の団』に一応籍を置いていた彼を会わせる訳にもいかず冥界に行く前にジャックフロストと交代していた。
「お前は間薙シンの……」
「彼なら居ないわよ。それと、貴方にとって良い報せか悪い報せかは分からないけど、シンが今後レーティングゲームに出ることは無いわ。少なくとも私側ではね」
「何、そうなのか？」
「彼が出る理由が無くなったからよ。私の眷属が全員揃ったから」
「そういうことか……」

サイラオーグが複雑そうな表情をする。
「すまんな、リアス。素直にここは全員揃ったことにおめでとうと言うべきだな」
「いいのよ、気にしないで。貴方の性格はよく知っているから」
試練として戦いに挑むという純粋な戦意の持ち主である。目を付けていた相手ともう戦えないと知れば気を落とすもの仕方がないこと。
「――ふむ。そう言えば、サイラオーグ。君は赤龍帝――イッセー君と少し拳を交えたいと言っていたね」
少し湿っぽくなった空気を察してかサーゼクスが過去のサイラオーグの発言を持ち出す。
「――ええ。以前、そう申し上げましたが……」
「丁度いい機会じゃないかな？　ここで軽くやってみたらいい。天龍の拳がどれ程のものか確かめるいい機会だと思うが？」
サーゼクスの提案にリアスを除き眷属たちは驚く。サイラオーグは驚くことはせず微かに口の端を緩め、リアスは何となくそう言うだろうと先読みしていたので内心で『やっぱり』と思いながらも、前のレーティングゲームでサイラオーグが不戦勝をしていてデータが無いので彼の戦いを直接観察出来る良い機会だと判断した。
そして、現状サイラオーグと近接戦が出来るメンバーは限られている。その内の一人

である一誠がサイラオーグとの戦いを経験しておくのは悪くはない。
「お兄様が――魔王様がそうおっしゃるのであればお断りする理由などありません。イッセー――」
「はい！　俺ならいつでも出来ます！」
出来るわね、というよりも早く一誠が声を上げた。必要以上に声を張り上げて無意識に自らを鼓舞している。
遅かれ早かれ戦う相手。ここで一戦交えて攻略方を見い出すのも悪くない、と主従似たような考えに至る。
気迫に満ちたサイラオーグの双眸は紫炎が宿っているかの様に輝き、圧のある眼光を一誠に向ける。その圧に屈することなく真っ向から受け止める一誠。両者の交わした視線は、互いの戦意を昂らせる。
「では決まりだね。私の前で若手悪魔ナンバーワンの拳と赤龍帝の拳を見せてくれ」
「この様な機会を与えて下さり心より感謝します……！　そのご期待に沿えるよう我が拳を存分にお見せしましょう……！」
高揚からかサイラオーグの箍が一つ外れ、獅子を彷彿とさせる笑みと共に覇気と戦意が溢れ出す。ただ純粋に喜んでいるというのにそれに触れたものは暴力に等しい圧迫感を覚える。

戦いに慣れていないミリキャスは顔を蒼褪めさせて震えるとすかさずグレイフィアが頭を撫でて落ち着かせる。

サイラオーグの気迫を受けたセタンタはマフラーの下でサイラオーグと似た様な笑みを浮かべていた。この若さでこれだけの力、それもまだ完成に至っていない。血が騒めき是非とも一手願いたくなるが立場からそれを押し込める。少しだけ一誠を羨みながら戦いの場所へ赴くサーゼクスの後を付いていく。

◇

戦いの場所に選ばれたのはグレモリー邸の地下にあるトレーニングルーム。駒王学園のグラウンドが収まる程の広さがあった。

その中央で一誠とサイラオーグは向かい合うと、サイラオーグは徐に貴族服の上着を脱ぐ。その下は灰色のアンダーウェアであり、首や肩、腕が露出するが一誠はその鍛え抜かれた筋肉に目を丸くする。

どういう鍛え方をすればそこまで引き絞ることが出来るのかと尋ねたくなる程一切の無駄をそぎ落とされた肉体。それなりに体を鍛えてきたと自負する一誠だが、サイラオーグと比べると細く、薄く感じてしまう。

男であるのならば一度は描く肉体の理想像。それを体現しているがサイラオーグの体であった。
「ドライグ、行くぞ」
『任せろ』
一誠は『赤龍帝の籠手』を顕現させて構える。しかし、サイラオーグの方は構えをとらない。そのことを訝しむ一誠。
「俺は赤龍帝の全力を求めている。遠慮することは無い。使え、禁手を。俺はそれまで手を出さない」
サイラオーグが禁手を使えと言ったのは余裕からではない。言葉の通りに一誠の禁手が見たいのだ。
余計なことはしたくないという心遣いなのだろうが、リアスの代表として戦う一誠はそれを素直に受け取ることが出来ない。
「サイラオーグさんこそ遠慮することなんて無いです」
一誠は『赤龍帝の籠手』の甲をサイラオーグの方に向ける。甲に埋まる宝玉には数字が浮かんでいた。
「この数字がゼロになれば禁手になれますが、待つ必要なんて無いです。俺はサイラオーグさんと戦いに来たんですよ！」

若手悪魔ナンバーワンを前にして無謀で生意気な発言なのは分かっていた。だからといって全力を出すまで態々待ってもらうなどリアスの眷属として相応しくないと思ったのだ。

サイラオーグは一誠の発言に一瞬目を丸くしたが、すぐに嬉しそうに目を細める。

「――そうだったな。失言だった、謝罪しよう。……リアスは良い眷属を得た」

一誠の宣言を讃え、サイラオーグは構える。特別な構えには見えないのにサイラオーグが構えた途端に全身の汗腺が開き冷や汗が流れ出る。サイラオーグの放つ重圧により体が一誠の決意を無視して反応していた。

「開始の合図はお前が出せ、赤龍帝」

「……はい！」

開始は今から十秒後。最初の倍加の音声が鳴った時が合図と告げると場が一気に静まる。

長いようで短い十秒。この十秒の間に一誠はサイラオーグの重圧を跳ね除け、気を引き締める。

『Ｂｏｏｓｔ！』

最初の倍加。同時に禁手のカウントダウンが始まる。

開始直後にサイラオーグは一気に距離を詰めてきた。左右に移動することなく小細

工無しで最短距離の直線を突き進む。
（速っ！）
　控えめに見ても木場と同等。禁手化した自分よりも速いかもしれない速度。木場とのトレーニング、マタドールのイジメの様なしごきを経験していなかったら確実に反応出来なかった。そう、今の一誠ならばサイラオーグの速度に反応が出来る。
「うおりゃっ！」
　左拳をサイラオーグの顔面目掛けて繰り出す。吸い込まれる様にサイラオーグの顔面に入る。倍化した力にサイラオーグ自身の速度も合わさって十分な威力を出す――
（いったっ！）
　――筈であったが、一誠が感じたのは殴った感触が掻き消される痛み。殴られたサイラオーグの顔に傷一つ無く、殴った一誠の方が逆に拳を痛める。
（やべえっ！）
　顔面に拳を打ち込まれた状態でも前進してくるサイラオーグ。このままでは手首が折れ曲がるので一誠が素早く拳を引いた。途端、左頬辺りがひりつく気配を感じ、その感覚を信じて右に一歩――とまではいかないが半歩動く。
　耳の傍を大砲が通り過ぎたかと思った。風を切る音が暴力の様に鼓膜を叩き、通過する風が頬の肉を後ろに持っていく。それがサイラオーグの拳によるものだと理解した

時には既にサイラオーグの二撃目が突き出されている。
認識した瞬間に一誠は左腕を動かす。何処を狙っているのかは分からずただ動かすことだけを考えて。二撃目の軌道に左腕を偶然持ってこられたのは幸運であった。
しかし、サイラオーグの拳が『赤龍帝の籠手』に触れると、その幸運も儚いものであると思い知らされる。
籠手にサイラオーグの拳が叩き込まれると装甲部分に亀裂が出来る。完全に受け止めると籠手が破壊されると直感で理解した一誠は腕を転の様に回すとサイラオーグの拳が回転の向きに沿って外側に外れる。
一誠の腕には衝撃による強い痺れが残る。痛みもあるが骨にまで達していない。判断が遅ければ籠手ごと腕まで砕かれていた。
一誠は掌をサイラオーグに向けるとそこから魔力の塊を発射。ドラゴンショットに至る程では無い軽いものであった。
サイラオーグは当たり前の様に避けることはせず、一誠の魔力がサイラオーグに命中し赤く強い光が生じるが、サイラオーグが拳を突き出すと全て消し飛んでしまう。
「――良い判断だ。神器だけでなく己自身も鍛えているのが良く分かる」
魔力の向こうにいる一誠を狙って放った拳だが、空を切るだけで終わった。一誠はサイラオーグの拳の届かない場所へ既に移動していた。

魔力の塊を放ったのは攻撃の為では無く、サイラオーグへの目晦ましと発射時の反動で距離を取る為のものだったのだ。
「サイラオーグさんに……そう言われて……光栄です。俺は、サイラオーグさんが強過ぎて……滅茶苦茶ビビッてます……！」
たった数秒間の攻防だったが、一誠の顔は冷や汗に塗れていた。サイラオーグの重圧と恐怖は体力ではなく精神力が削られる。それでも一誠は笑ってみせる。ダラダラと汗を流し顔も引き攣っているが精一杯の？せ我慢を見せる。
「そう言う強がり……俺は好ましく思う」
サイラオーグが踏み込む。その直後に一誠の目の前に立っていた。
やはり速いと思いながら一誠はサイラオーグの拳に最大の警戒をするが、そこで気付く。
サイラオーグは左右どちらも拳を握っていない。
嫌でも強く印象に残る拳が来ると想定していた一誠は、それに意表を突かれた。ならば何が来るのかと考える前にドライグの鋭い声が脳内に響く。
『拳じゃない！　蹴りだ！』
一誠の死角から跳ね上がるサイラオーグの脚。真横から一誠の頭部目掛けて迫る。
一誠にはその蹴りがまだ見えない。しかし、サイラオーグの蹴りに込められたものが

先行して一誠に伝わり、それが本能を刺激する。
頭が粉微塵になるイメージが浮かび上がった瞬間、一誠は縮こまる様にしゃがんでいた。
頭上を通過する蹴り。聞き間違いでなければ空気の壁を突き破った音が聞こえた。
普通の状態なら防御する間も無く直撃していた。しかし、サイラオーグの蹴りがあまりに強過ぎたせいで当たる前に一誠の本能が働いたこと。ドライグの警告が聞こえると同時に『騎士』にプロモーションし、本能と反射に対応出来る速度を得られたことがこの回避に繋がった。
（っんでどうする！　ここからどうする！）
サイラオーグの前でしゃがみ込んだ状態の一誠。このままでは次の攻撃は当てられてしまう。
どうするどうする、と考えた時、ドライグの声が飛ぶ。
『多少の怪我と痛みは駄賃だと思え、相棒』
その言葉が何を意味しているのか。サイラオーグが下から拳を突き上げる体勢に入っているのを見て、一誠は理解する。
本音を言えば物凄い嫌であるが、何もしなければもっと嫌な目に遭う。
「う、おおおおっ！」

一誠は飛び出した。サイラオーグの拳に向かって。
「むっ！」
一誠の行動にサイラオーグは驚くが、攻撃を中断するには至らない。飛び込んで来る一誠に拳を突き上げようとし――一誠の方から先に拳に体を当てた。
「良い判断だっ！」
拳に一誠の体を突くサイラオーグ。突くというよりも一誠を拳に乗せて飛ばした様なものであった。サイラオーグの拳に自分から間合いを詰めることで最大威力が発揮するまでの溜めと距離を潰し威力を大幅に削ぎ、本来の威力の二、三割程度にまで抑えた。
矛盾して聞こえるかもしれないが一誠の行動はまさに捨て身の防御と言えた。
サイラオーグの拳で十数メートル空を飛んだ後上手く着地する一誠。拳が当たった箇所を触れる。そこには肉の感触があった。
（あ、穴が開いたかと思った……）
サイラオーグの拳が当たると衝撃が全身を駆け巡り、内臓全てを揺さぶられる。息がするのも苦痛。吐き気を覚えると共に着地した両脚がガクガクと震える。
『かなり威力を殺した筈なのにこれだけのダメージを与えてくるとは驚きだ。あのバアル家の男、純粋に力のみを伸ばし続けたのだな。速さも頑丈さも極端に力を伸ばした副

産物といった所か……興味深いな』

「凄いなぁ、本当に……」

痛みあるし恐怖もある。だが、それでも尊敬せずにはいられない。

本来ならばリアスと同じ滅びの魔力を持つ筈の血筋だというのに運命の悪戯か、それを持たずに生まれてきた持たざる者。悪魔としての素質が無かった一誠はその境遇に親近感を覚える。

無いなら無いで体一つを鍛えに鍛え抜いたサイラオーグを素直にカッコいいと思ってしまう。

サイラオーグの実力は一誠だけでなくそれを見守っているリアスたちにも伝わっていた。

同世代のサイラオーグの力を目の当たりにしてリアスは強く拳を握り締める。いずれは超えなければならない大きな壁としてその戦いを目に焼き付ける。

朱乃、アーシアは吹っ飛ばされた一誠の姿を見て表情を蒼くする。今すぐにでも飛び出したい衝動に駆られるが、一誠を信じて堪える。

木場、ゼノヴィア、小猫、ギャスパー、ロスヴァイセ、イリナもまた顔色を悪くしている。一誠の身を案じての意味もあるが、戦闘者として自分を一誠の立場に置き換えてサイラオーグとの戦いをイメージした結果、現時点で勝つ方法が見えないからだ。

木場は聖魔剣でサイラオーグの蹴りを防ぐ場面を想像する。刃筋を立てているのにサイラオーグは躊躇い無く蹴り抜き、聖魔剣ごと体を折られる想像が浮かぶ。

ゼノヴィアはデュランダルがサイラオーグの拳に打ち負ける光景、イリナは『擬態の聖剣』が断たれる光景を幻視。

ギャスパーは邪眼でサイラオーグの動きを止める前に死角に回られるのを想像し、小猫とロスヴァイセは『戦車』の能力を以ってしてもサイラオーグの拳に防御を貫かれる光景が見えた。

傍から見ていてもこれだけの脅威。直にぶつけられている一誠の心境はどんなものか想像も付かない。

「ヒーホー！　負けるなホー！」

ジャックフロストはただ声援を送る。友達が負ける姿など見たくは無い。

「俺の拳はどうだった？　赤龍帝」

「物凄く痛いですよ……でも」

「でも？」

「もっと痛いパンチを打つ奴を知っています……」

脳裏に浮かぶはシンの姿。単純な力ならサイラオーグの方が上だろう。だが、受けたくないと思うのはシンの方であった。どういう理屈かは知らないが、シンの拳はとにか

く痛い。

「それは間薙シンのことか？　ふっ、なら是非とも殴り合ってみたいものだ。それと――」

サイラオーグの目が『赤龍帝の籠手』に向けられる。

「そろそろ時間だな」

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｏｖｅｒ　Ｂｏｏｓｔｅｒ』

サイラオーグに応じる様にカウントダウンが終わり、一誠の体が赤色のオーラに覆われ、閃光が放たれるとオーラは鎧と化す。

禁手『赤龍帝の鎧』を纏う一誠を見て、サイラオーグは不敵な笑みを浮かべる。

「先程までの戦いも悪くはなかった。しかし、その姿を見るとやはり滾って来るな……！」

サイラオーグの威圧感が更に増す。体中の筋肉が隆起していくのが分かる。

一誠も禁手に至り、確信したことがある。

（やべえ……勝てる気がしねぇー……）

『赤龍帝の鎧』を纏い、力を得たからこそ分かるサイラオーグとの差。禁手になっても埋まっている気がしない。

しかし、だからといって一誠はネガティブにはならない。

目の前の敬意を払うべき男が自分に対して期待をしてくれている。リアスたち以外でここまで自分を評価してくれた人は初めてかもしれない。
ならば失望させない為に勝っても負けても全力で挑むだけ。

◇

某日某所。
凄まじい爆発と共に剣が豪雨の様に降り注ぐ。放つのは『禍の団』の英雄派である巨漢の男と金髪の女性。その二人が相手にしているのは巨大な怪物でも魔物の大群でもない。
彼らの相手はたった一人であった。
「はっはー！　いいねー！　退屈な仕事だと思っていたらとんでもねぇ奴が紛れていたぜぇぇ！」
「お姉さんとしてはもっと楽だったらいいんだけどねー」
軽口を言いながらも姿を消した敵と探す二人。
「――っそこかぁぁ！」
「ちょっ！」

巨漢の男が金髪の女性の影を殴りつける。途端、爆発が起こり、爆炎の中から二人が飛び出す。
「もう！　殆ど自爆じゃない！」
「そうでもしなきゃ勝てねぇよ！」
「だからって――お見通しよ！」
すると、虚空から無数の剣が生み出され、近くの木に目掛けて発射される。木の幹に突き立てられる剣ら。木の向こう側から姿を現したのは二メートルを超える巨体。全身を黒一色の衣を纏い、影の中から這い出て来た様な姿をしている。
文字通り仮面の様な顔をしており、くり抜かれた様な両目と口の部分は赤く染色され、額から二本の角が生えている。
黒い鬼は両端に三日月型の刃を付けた両剣という変わった武器を握っていた。
金髪の女性が再び剣を投擲する。黒い鬼が両剣の先で地面を突くと畳状に圧縮された土が隆起して剣を防ぎ、その土が砕けると黒い鬼が口から炎を吹き出す。
「多芸だなぁぁ！」
巨漢の男が拳を突き出すと炎と衝突。炎が爆発によって掻き消される。
「……何の為に御大将を狙う？」
黒い鬼が初めて口を開く。

「それは内緒」
「俺らに勝ったら教えてやるよ！」
「――なら吐かせるまで」
　黒い鬼が冷たい殺気を発する。
「ちょっと待ってもらおうかな」
　そこに待ったを掛けるのは腰に何本もの剣を差した白髪の青年。
「ここは僕が預からせもらうよ」
「おいおい！　そりゃねえだろ！」
「ジー君、お姉さんたちから美味しいとこ持ってちゃうの？」
「曹操からの指示だよ。僕に色々と試せってさ」
　不満を出していた二人だが、曹操の名前を出されると渋々といった様子で引いてしまう。
「――さて。ここからは僕が相手をさせてもらうよ。いいかな？」
「……問い質す口が一つあれば十分」
「言うね。でも、そう言うのも仕方ないね。君は僕よりも強そうだ。いや、強いね」
　実力差を感じながらも白髪の青年は微笑む。
「――だから丁度良いんだ」

黒い鬼が左手の人差し指と親指で輪を作り、右手でそれを覆った後木の影に触れる。黒い鬼の体が影の中に入り込んで消えてしまう。

虫の声と木々の葉が擦れる音。黒い鬼は完璧に気配を消していた。

「凄いね。確か隠形っていう術だよね、それ」

答えは返って来ない。

「君ってもしかして忍者っていう奴かい？　それなら嬉しいなぁ。本物を見るのは初めてだ」

その瞬間、黒い鬼は白髪の青年の影から飛び出し、その首に刃を引っ掛けると一気に引く――が。

「強いから試し甲斐があるよ。このちょっとした無敵の体と――」

刃を当てられた白髪の青年の首の一部が鱗の様に変化し刃を止めている。

「――新しいエクスカリバーの試し斬りの相手に」

京都、強襲

『赤龍帝の鎧』の背部にあるブースターを動かし、そこから魔力を噴射することで一誠は急加速。加速した状態から拳を振り上げた。

今までとは比べ物にならない速度で動き出す一誠であったが、サイラオーグの目はしっかりと一誠を捉えている。一誠とサイラオーグの目は一瞬たりとも互いから逸れていない。

だというのにサイラオーグはその場から一歩も動くことはしなかった。一誠はサイラオーグが初っ端から勝負を挑んで来ているのを理解する。

その気概に一誠も強く引っ張られ、ブースターの出力を限界まで上げる。一誠自身も自分の速度に感覚が追い付かなくなりそうになるが、体ごとぶつかるつもりでサイラオーグに挑む。

一誠の気概もサイラオーグに伝わり、サイラオーグは嬉しそうに、それでいて野性味ある笑みを浮かべると急接近してくる一誠に向けて拳を繰り出す。

激突する拳と拳。先に衝撃が巻き起こり、トレーニングルームの床が蜘蛛の巣に罅割れ、天井にも無数の亀裂が生じる。少し遅れて音が発生し、激突音と破砕音が重なって

大音量となった。

「ははっ」

一誠は兜の下で笑った。というよりも笑うしか無かった。

全力且つ全速力で放った一撃をサイラオーグは拳一つで止めてしまった。そして何よりも恐ろしいのは――一誠は右腕を見る――殴った籠手の方に罅が入っていることだった。

それを認識すると右腕に痺れが起こる。拳を一度強く握ってみる。軽い痛みを感じるが幸い骨に影響は及んでいない様子。

サイラオーグは拳を引く。すると引いた拳が消えた。何をするのか分からず、一誠は勘でその場から一歩下がる。

目の前を突風が通過していく。風が通り過ぎた後、一誠は腹部の装甲に真一文字の亀裂が生じていること、サイラオーグが消えた拳を振り抜いていることに気付く。

今までストレートのみであったサイラオーグが恐らくはフックを放ったのだ。直撃せず掠っただけで『赤龍帝の鎧』に罅を入れる程の破壊力。下がるという判断をしていなければ上半身と下半身で別れていたのでは、と思えてしまう程の切れ味。

サイラオーグの肩が微かに動いたのを見て、ブースターを逆向きに噴射させて距離を置く。

「流石は噂に名高い神滅具だ。何かに打ち込んで痛みを覚えたのは久しぶりだ」
サイラオーグは拳を開き、手首を軽く振るう。拳頭部分に擦り傷の様なものが出来ていた。見ている者たちにしてみればその程度で済んでいるサイラオーグに戦慄する。
「本当に色々と凄すぎますね、サイラオーグさん。……どうすればそこまで強くなれるんですか？」
「――何時如何なる時も己の体を信じてきた。それだけだ」
言葉で言うのは簡単だろうが、実際は容易い事では無い。自分の力が何時開花するのかも分からず努力することはどれ程の苦難か。ましてや、サイラオーグは先天的に備わる筈であった魔力が無い。他の悪魔よりもマイナスの地点からスタートしている。
劣等感。周りの悪意。鍛えることを止める理由など幾らでもある。もしかしたら、心折れそうな日があったかもしれない。だが、それでも折れずに己の体を鍛え続けてきた。そして、それは今も続いている。
一誠の右腕を痺れさせる痛みが熱へ変わる。その熱は腕を伝って一誠に体へと注がれた。右腕と腹部が赤いオーラに覆われ、破損した箇所を修復する。
サイラオーグの熱が拳を通して一誠に伝わり、それが一誠の中で戦意を燃やす燃料となる。
「サイラオーグさんは凄い悪魔です」

自然とサイラオーグへの敬意が口から出てしまう。
サイラオーグは遥かに高い壁。だが、いつかは乗り越えなければならない壁でもある。ならば今はどれだけその壁を登ることが出来るのかを試す。
「俺はサイラオーグさんに比べればまだまだですが、とことんやってみます！」
「遠慮など不要！　さあ、来い！」
サイラオーグが男らしく言い切ると、一誠は『騎士』から――
『戦車』にプロモーション！」
――『戦車』にプロモーションをする。
「『戦車』、か」
総合的に優れた『女王』ではなく『戦車』をプロモーションに選んだことを意外に思うサイラオーグ。しかし、意表を突かれたという程のものではない。
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』
繰り返される倍化により一誠の力が一気に跳ね上がる。
「行きます！」
ブースターを噴射。最初よりも数段上の速度で一誠は動き出す。しかし、左右に動くなどのフェイントなどはせずにサイラオーグへ真っ直ぐ飛ぶ。

「見えているぞ！」
一誠を迎え撃つサイラオーグの拳。手加減無しのそれが一誠の顔面に叩き込まれ、兜に亀裂が生まれる――だが、それだけであった。
『戦車』の特性によって防御力が上がっていること、倍化で高まった力を兜の部分に集中させることで一撃を耐え切ってみせた。
もし、サイラオーグが別の箇所に打ち込んでいたらその時点でお終いであっただろう。
そして防御を固めても痛みはある。と言ってもサイラオーグの拳が痛いのは分かっていること。我慢をすれば何とかなる。
「うおりゃあああ！」
一誠は顔面を殴られたままサイラオーグの顔を殴り返す。サイラオーグの頬に拳がめり込むが、サイラオーグの太い首はそれにも耐える。
「まだまだぁぁぁぁ！」
籠手部分が変形し、噴射孔が生まれるとそこから噴き出す魔力でサイラオーグの顔面を殴り抜ける。
「ぐっ！」
床目掛けて殴り飛ばされたサイラオーグ。その体が硬い床を砕きながら跳ね、三メー

トル程の高さまで跳ね上がった。
追撃しようかと考えた一誠であったが、次の光景を見た時に即座にその考えを取り消す。
サイラオーグは宙に浮いた状態で右足を突き出す。爆ぜる音と共にサイラオーグは壁でも蹴り付けた様な動きで後転し、地面に着地する。
当然空中に足場など無い。サイラオーグは、音の壁を突き破る反動を使って空中を移動したのだ。しかも、不安定な体勢のままで。
一誠がサイラオーグに追撃を試みていたら、間違いなくあの右足を貰っていた。
着地して構えるサイラオーグ。その口の端からは血が垂れている。戦いが始まってから初めて付けた傷らしい傷であり、捨て身の一撃はサイラオーグに確かに届いていた。
サイラオーグは垂れる血を指で拭い嬉しそうに笑う。尤も、一誠の視点から見ると肉食獣が牙を?き出しにしている様なイメージである。
「最初から俺の一撃を貰うつもりだったな？　その為の『戦車』か……。見事に反撃を喰らわされた。俺の拳を敢えて受けるその覚悟は賞賛しかない。お前と戦えて良かったと心の底から思う」
「ありがとう、ございます……！」

下に見られ続けていた一誠へ送られるサイラオーグの賞賛。一誠はそれに感動しているのか声と体を震わせていた――だが、サイラオーグは一誠の体から放つ気配により、その心情を凡そ把握していた。それを口に出すのは野暮だと思い、見て見ぬふりをするが。

（いってぇぇぇ！　いってぇぇぇ！　いてててててて！　顔痛い！　手痛い！　何なら殴った反動で全身がいたぁぁぁぁぁい！）

全ては覚悟の上であった。そして、殴られ殴り返した。我慢もした。でも、痛いものは痛いからしょうがない。

殴られ頬はズキズキし、頭もクラクラし、サイラオーグを殴った手は恐らく真っ赤に晴れている。

一誠が体を震わせているのは、サイラオーグに受けたダメージを必死になって我慢し、隠しているのが本当の理由であった。

『落ち着け相棒……と言いたいところだが、よく我慢していると褒めておこう』

（攻撃全部がこっちにとっちゃ即死級だからこえーよ！　実際に痛いし！　殴ったら殴ったで山を動かそうとしているのかと思った！）

兜を被っていて良かったと心底思う。兜の下では叫ぶのを我慢する代わりに苦痛の百面相が行われていた。それでも痛みは和らぐことが無いので、心の中で絶叫してい

る。効果は劇的では無いが多少は気が紛れた。
本当ならばのたうち回りたい気分だがリアスたちの前、そしてサイラオーグの前であるからこそ精神力でねじ伏せることが出来る。
特にサイラオーグは他意なく純粋に自分のことを評価してくれた相手。男気あるサイラオーグの前では少しでも格好を付けたい。
「赤龍帝――いや、兵藤一誠。お前が次に何をしてくるのか俺は楽しみで仕方がない。まだ色々と秘めている筈だ。それを俺に見せてみろ！」
飛ばされる声に鎧が震える。不思議なことにサイラオーグのその声で痛みをあまり感じなくなった。痛みが和らいだのではなく、一誠の意識が痛みからサイラオーグとの戦いに集中している為である。
「ええ！　出し惜しみなくいきますよ！」
一誠は左手を突き出す。高められた魔力が左腕を通じて撃ち出される。
サイラオーグの身長よりも遥かに大きなドラゴンショット。だが、サイラオーグは臆することなくそれに向かって駆けだし、ドラゴンショットを拳で迎撃する。
巨大なドラゴンショットがサイラオーグの拳一撃で弾ける。見ていたリアスたちはサイラオーグの一撃の破壊力に戦慄するが、当の本人は困惑していた。
（軽い……？）

予想を上回る手応えの無さ。魔力を高める『僧侶』ではなく『戦車』の為、一誠の魔力弾の威力が低い、かと考えたがそれでも技の見た目と威力が合っていない。

サイラオーグはハッとし撃ち出された方を見る。そこに一誠の姿は無い。

（目晦ましか！）

敢えて張りぼての様な魔力弾を放ったことに気付いたサイラオーグ。一誠の気配を探るとすぐ横から彼の気配を感じ取る。

視線を動かすと、右手の五指を限界まで広げた一誠が飛び掛かってきている。指先に魔力が集中しているのが見て分かる。

退くか、防ぐか。否、サイラオーグは選ぶ選択は攻めるのみ。

拳を突き出した体勢のまま、床を削り取る勢いで体の向きを変え、上半身の捻りに合わせて突き出されていた拳を横薙ぎの拳打として繰り出す。

一誠が振り下ろすドラゴンの爪とサイラオーグの拳が衝突。五指先端に溜め込まれた魔力がサイラオーグの腕に傷を付けるが鍛え抜かれた筋肉までは突破出来ず皮膚のみ裂く。腕を負傷しながらサイラオーグの拳は一誠の掌に叩き込む。

衝撃が貫通して手の甲側の装甲は弾け飛び、同時に亀裂が肘辺りまで生じて一誠の腕から籠手だったものが破片としてバラバラと落ちていった。

痛みが一瞬走ったかと思ったがすぐに消え去る。しかし、それはいい意味では無い。

手の機能が麻痺する程の衝撃であるという悪い意味でのこと。現に手首から先の感覚が無くなっていた。
（来るっ！）
片腕がまともに機能しなくなった所にサイラオーグの三連撃目の拳が放たれた。狙いは的の大きな胴体。今の一誠にそれを回避する余裕は無い。
（回避出来ないならっ！）
一誠はまだ無事な左手に魔力を込めると、サイラオーグの拳の前に左手を翳す。直撃すれば左手も使用不可能になるが一誠は敢えて賭けに出た。
（成功させてやる！）
サイラオーグは一誠が何かを狙っていることに気が付いていたがその狙いに興味を持ち、拳を引かずに突き進む。
一誠の左掌にサイラオーグの拳が打ち込まれた瞬間、サイラオーグは不思議な感覚を覚える。まるで力が一誠の手の中へと吸い込まれていき、自分の手が自分のものでは無くなる感覚。
「行け！」
一誠が左手を動かすとサイラオーグの拳もまたそれに連動して動く。マタドールの虐待の様な実戦訓練で見様見真似で覚えた捌き技。

雷神トールにも通用したこの技は、サイラオーグに通用する――とこの時までは思っていた。

「――あれ？」

行けると思った瞬間に力の流れの感覚に狂いが生まれる。一誠にとってこの技は殆ど試行回数の無いもの。一度でも力の操作に失敗すれば修正が効かなくなる。

結果、力の流れが乱れてサイラオーグの腕に逆流。事前に傷を付けていたせいか、そこから一気にサイラオーグの腕の皮が捲れ上がり、手首から肘に掛けての皮膚が剥がされ、筋組織が剥き出しとなった。

「ひっ！」

という声が観戦側から聞こえて来る。一誠も目の前のことに情報処理が追い付かずに唖然としていた。

剥き出しになった筋肉にポツポツと赤い点が生じ始め、それが次第に大きくなり、繋がり、？かれた皮の先から滴る血になってようやく思考が追い付き、一誠は慌てて左手を離す。

「あ、あの！　その！」

舌が回らず上手く言葉を発せない。戦っている時は負けてもサイラオーグの両腕をへし折ってやる、という意気込みであったが、不本意な形で惨い攻撃をしてしまったこ

とに戦意よりも罪悪感が上回ってしまう。
「――ふむ」
サイラオーグは皮を剥がれた自らの腕を見る。痛がる様子も無く掠り傷の様な反応であった。
「今の技は誰かに教わった技か？　赤龍帝ではない別の誰かの影を感じた」
「えーと、その、それよりも！」
怒る様子も無く真面目に尋ねてくるサイラオーグに一誠は困った様子。質問よりも先に腕の怪我をどうにかしたいのだ。
「兵藤一誠自身も戸惑っている。この戦いは一旦ここまで、ということで構いませんか？」
「ええ。それを言う為に来ましたので」
「うおっ！　いつの間に！」
音も無くすぐ傍に立っているセタンタに驚かされる一誠。
一誠がサイラオーグの腕の皮を剥いだ時点でサーゼクスの指示でセタンタは動いていた。サイラオーグは兎も角、一誠の方は傍から見ても分かる程の戦意が萎えていたのだ。それにまだ幼いミリキャスにはこれ以上の戦いを見せるのは刺激的過ぎるという思いもあった。幸い皮剥ぎの瞬間はグレイフィアがミリキャスに目隠しをした御陰で

直視を妨げられた。
「すぐに傷の手当てを」
「あ、それなら、アーシアの神器が」
「気遣い感謝する。だが、自前の物がある」
　すると、サイラオーグは衣服からガラス瓶を取り出し、中身の液体を腕に掛ける。腕の傷は瞬く間に治ってしまった。
「フェニックスの涙……ですか？」
「ああ。ライザーとはとある縁で交流をする仲になった。彼とその眷属とは何度か実戦形式トレーニングをしたりしてお互いに良い刺激になっている。このフェニックスの涙も彼からの贈り物だ」
「あのライザーと……」
　サイラオーグとはタイプが真逆だというのに、呼び捨てや口振りからしてそれなりに仲が良いことに一誠は驚く。
「ライザーは赤龍帝への再戦を果たす為に己を鍛え直している。無論、間薙シンとの決着もな」
「何でそこで間薙の名が？」
「以前冥界に来た時に一戦交えたという話だが……聞いていないのか？」

シンがライザーと戦っていたなど初耳で一誠は目を丸くする。深く聞きたい所だったが、すぐに怪我のことを思い出してサイラオーグに謝る。
「す、すみませんでした！　折角の対戦を台無しにすることをして！」
「気にすることは無い。それに中断を願い出たのは俺だ。お前が謝ることは無い」
「で、ですけど……」
一誠はそれでも食い下がろうとするが、セタンタがそれを止める。
「兵藤様。練習とはいえこれは戦い。傷付けたことを謝罪するのは美徳ですが、過ぎれば侮辱になりえます」
この戦いは互いに傷付け合うことを同意として行っている。一誠もサイラオーグに何発も殴られているが、そのことでサイラオーグを恨む気持ちなど微塵も無い。自分が同じ立場になってサイラオーグが殴ったことを謝られ続けたらと思うと、セタンタの言葉がすんなりと入ってくる。
「分かりました……」
「いや、寧ろこれで良い。お前もまだまだ戦えるが俺もまだまだ戦える。――だが、これ以上戦うと歯止めが効かなくなる、俺自身のな。きっと最後まで戦い続けることになると思うが、それでは勿体無い」
笑みを見せるサイラオーグ。その笑みには相手を惹き付ける強い魅力があった。そ

の男らしさに引き込まれそうになる。
「さっきの技は未完成なのだろう？　それにしても意表を衝かれた。真っ直ぐ攻め込む剛の技が全てかと思いきや、まさかあの様な柔の技も持っているとはな。本当に誰に学んだんだ？」
「いや、まあ、その……」
魔人マタドールです、などとは口が裂けても言えない。赤龍帝と魔人の中でも特に危険人物が知り合いなどスキャンダルでしかない。
それとは別にサイラオーグにはマタドールへの関心を持って欲しくは無かった。関心を持つことはその内関わりを持つことに繋がる危険があったからだ。特にサイラオーグはマタドールが好む強さと性格をしている。目を付けられたらサイラオーグも無事では済まない。
一誠の曖昧な態度で言いたくないのが伝わったサイラオーグは、それ以上の追求はせずに話を変える。
「お前の中には目覚めていない可能性が多く眠っている。戦った俺が断言しよう。ならばこそ、その可能性を目覚めさせろ赤龍帝。俺とのレーティングゲームの日までに。上役の方々や大衆の前で拳を交える。これこそが俺たちにとっての最高の舞台だ」
不本意な攻撃を受けても一誠に期待してくれるサイラオーグの器の大きさに圧倒さ

れそうになる。男であるが、リアスと出会う前に勧誘されていたら心が傾いていたかもしれないとさえ思ってしまった。
「そうね。そこでお互いの夢を懸けて戦いましょう、サイラオーグ」
いつの間にかリアスたちやサーゼクスたちも近くまで来ていた。一誠は鎧を解除する。
「そうだな、リアス。それまでにしっかりと赤龍帝を鍛え抜いてやってくれ」
「それは――」
「だ、だ、大丈夫です！　イ、イッセーさんには、と、ととと。とっておきのパワーアップ方法がありますから！」
普段は大人しいアーシアが大声を出すので全員の視線がアーシアに集中した。
「ほう？　そんなものがあるのか？」
サイラオーグが興味深そうに訊く。
「は、ははは い！　イッセーさんは、おおおお、おお、おっぱいを触ればもっと強くなれるんです！」
沈黙。サイラオーグの表情が訊いた時のまま固まり、リアスは『何故それを今ここで！』という表情となり、サーゼクスは吹き出しそうになるが横目でセタンタが睨み付けていることに気付いて我慢しそのせいで体が細かく震えている。グレイフィアは何と

なく嫌な予感がしていたのかミリキャスの耳を塞いでいた。
「そ、そうか！　その手があったか！　イッセーはおっぱいドラゴンだ！　私たちの胸に触れれば力が増す！　禁手の時もそうだったと聞く！」
アーシアの発言に同調するのはゼノヴィア。この二人が絡み出すと色々と暴走が始まる。
「リアスお姉様！　私でも構いません！　ど、どうかイッセーさんにおっぱいの力を！」
一誠がサイラオーグに今のままでは勝てないということをアーシアも感じ取ったのか、一誠に負けて欲しくないという気持ちからかアーシアなりの精一杯のサポート。言っていることは卑猥な内容だが込められた想いは何処までも純真そのもの。
「そうですぅぅぅ！　イッセー先輩は触ったら強くなるんですぅぅぅ！」
ギャスパーもまたこれに同調。尊敬する先輩が負けそうになったのが我が事の様に我慢出来ず、もっともっと強いということを涙ながらに叫ぶ。
「そうね！　イッセー君の力の源はそれだわ！」
イリナもまたこれに納得。
ハチャメチャなことになってきているが、皆が一誠の負ける姿など見たくは無い為に発言している。
一誠は皆が心配してくれる様子に感動するが、言っていることが言っていることなだ

けに若干複雑な思い。リアスは顔を真っ赤にしているし、朱乃はクスクスと笑い、小猫は無表情だが若干呆れが浮かび、木場は苦笑している。

もしもここにシンが居れば一誠に『どうするんだ？　この空気を？』という意味を込めた冷たい目を一誠に向けていただろう。

「毎度こういうノリなんですか？　ここは？」

さっきまでの緊迫した空気が一気に吹き飛び、その温度差に付いて行けなかったロスヴァイセが小声でジャックフロストに尋ねている。

「だいたいこんな感じだホ！　大丈夫だホ！　ロスヴァイセも多分同類だホ！」

「ど、同類ってどういうことですか！　私ってこんな感じに見えるんですか！」

「ヒホ」

ジャックフロストが首を縦に振ると、ロスヴァイセはショックを受け立ち尽くしてしまう。

「ふむ……噂ではなく赤龍帝は女の乳を触ると本当に強くなるのか？」

「……本当です」

真面目な顔で訊いてくるサイラオーグに小猫も真面目な顔で答える。

『……相棒。このバアル家の男に改まって訊かれると心が死にそうになるんだが、何でだろうな……』

一誠の脳内にドライグの乾いた声が響く。強さを認めた相手だからこそ乳龍帝としての面を知られるのが嫌な様子。
「ふ、ふはははははははは！」
小猫の答えを聞いたサイラオーグが豪快に笑う。茶化していると思われても仕方ないのに心底愉快そうに笑っている。
「な、成程、くくく。リアスや他の女たちの胸でも強くなれるのか。ふふふ、覚えておこう」
笑いを噛み殺そうとして噛み殺しきれないサイラオーグ。余程ツボに入っている模様。
一通り笑った後サイラオーグは一誠たちから視線を離そうとし、動きを途中で止める。
「どうぞ」
戦い前にサイラオーグが脱ぎ捨てた貴族服をサイラオーグに手渡すセタンタ。きちんと折り畳まれている。
「申し訳ない」
サイラオーグはそれを羽織る。その動作も一々格好が良い。
「では、俺はこれで」

「ああ。良いものを見せてもらった」
サーゼクスに別れの挨拶を済ませ、サイラオーグはこの場を去って行く。
一誠はその背を悔しさと憧憬が混じった瞳で見えなくなるまでずっと見続けていた。

◇

「ってことがあったんだよ」
京都へ向かう新幹線内部で隣の席に座るシンに一誠は冥界であったことを語っていた。
座席前に松田と元浜が座っているが、松田は初めて乗る新幹線にテンションを上げており、元浜もそれに触発された状態で二人仲良くお喋りをしているので、シンと一誠の会話が耳に入っていない。
いつもなら騒がしいピクシーとジャックフロストも今回の修学旅行には連れて来ていない。リアスたちに世話を任せて仲魔全員を置いて来ている。連れて行かないことも文句を言っていたが、お土産を買って来ることといざという時には呼び出すことを条件として取り敢えずは納得してもらった。
「成功すれば回避、失敗しても相手の皮剥ぎ。いい技だな」

「それ嫌味で言ってねぇか？」
　サイラオーグ戦の時の失敗技の評価を一誠は皮肉と捉える。
「嫌味じゃない、素直な感想だ。ドラゴン・ピーラーとでも名付けるか？」
「やっぱ馬鹿にしてるだろ！」
　皮むき器などという名前など付けたくもない。
「女は服を剥いで、男は皮を剥ぐか……」
「いや、何処の鬼畜ゲー主人公だよ！」
「目の前に居るな」
「止めろ！　前者は否定できないが、後者は否定するぞ！」
　揶揄う言葉を強く拒絶する一誠。
「とーにーかーく！　そういうのはいいんだよ！　重要なのはサイラオーグさんだよサイラオーグさん！　近い内に戦うかもしれないんだ！　もっと強くならないと！　お前も前にサイラオーグさんと会ったんだろ」
「ああ」
「どんな感じだった」
「少し喋っただけだ。参考にはならない」
　本当は密かに試されていたが、互いに牽制し合っただけなのでシンの言う通り参考に

もならない。
「そうか……本当にどうしようかな……俺と戦っていた時ですら手足に負荷が掛かる封印を施してある状態だっていうし……」
戦闘後にサーゼクスから聞かされたことである。
「随分な相手に目を付けられたな」
「他人事みたいに言うけどな、お前も興味持たれているからな？　いつか決闘の申し込みでもされるかもよ？」
「そうか」
一誠は脅す様に言うが、シンは興味無い様に軽く流す。
「――ところでよ。部長が卒業してからも部長を部長って言うのはおかしいか？」
「……急に何だ？」
いきなり意味の分からない質問をしてくる一誠をシンは半眼で見る。
「ミリキャス様から言われたんだよ……リアス部長が高校を卒業しても部長って言い続けるのか、って」
一誠は指摘され改めて考えることとなった。リアスが卒業した後のことを。本音を言えば名前で呼びたい。しかし、同時にそれを恐れ多く思う自分がいる。
「どうだろう……？」

「好きに呼べばいい」
身も蓋も無い答え。それがどうした、と言わんばかりの冷たい対応であった。
「冷てぇなー」
「俺がどうこう言って解決する問題じゃない。それとも俺がずっと部長と呼び続ければいい、と言えば納得するのか？」
答えているのも同然な言葉に、あからさまに不服そうな表情となる一誠。
「どうせその内答えを出す」
いつまでも引っ張ることなく自力で解決出来ると遠回しに告げ、これ以上は何も言うことは無いと言わんばかり腕を組んで座席にもたれ掛かる。
一誠は頬杖を突いて新幹線の外で流れていく景色を見始める。シンの言わんとしていることは分かっているらしく、窓ガラスに映る彼の顔は何かに悩む表情をしていた。
「ちょっといいか？」
二人の会話が終わったタイミングでゼノヴィアがやって来る。
「一応報告しておきたいことがあるんだ」
「何だよ？」
窓からゼノヴィアの方へ顔を向ける一誠。シンも目だけ向けている。
「実は私は今、デュランダルを持っていないんだ。つまり丸腰だ」

ゼノヴィア曰く、正教会に属している錬金術師がデュランダルのオーラを効率良く制御する方法を見つけたので天界経由でそちらに送ったと言う。
三勢力が協力態勢になったことで正教会も今のゼノヴィアに協力的になっているという。
「――信じていい話なんだな？」
聖剣中でも二つと無いデュランダルを正教会へ送り出すことに懐疑的に見てしまうシン。
「大丈夫だ。ミカエル様を始め、セラフの方々も協力してくれている。正教会もミカエル様たちを裏切る様な真似はしない」
「それならいい。邪推だったな」
「気にするな。君はそれぐらい捻くれている方が丁度良い」
褒め言葉には聞こえなかったが、凛々しい笑みで言い切るゼノヴィアを見て嫌味や皮肉で言っている訳ではないのが分かる。
「了解。いざという時はアスカロンを貸せってことだな？」
「ああ。そのいざという時が来ないのが一番なのだが」
「まあな。あと木場にも言っておいた方がいいと思うぞ？　場合によっちゃ木場の神器で聖剣を創ってもらうことになるかもしれないし」

「そうだな。言っておこう」
ゼノヴィアの目線が横を向く。
「丁度いい。話しておこう」
ゼノヴィアの視線を辿ると木場がこちらに向かっていることに気付く。わざわざ別車両から移動である。
木場の存在に気付いた女子たちが黄色い声でざわめき始める。
「やあ」
「お前もこちらに来たのだな」
「うん。イッセー君たちに少し話があってね」
「そうか。私も実はお前に話がある」
そう言って木場とゼノヴィアは数言会話する。内容は一誠たちに言った時とほぼ変わらない。木場が了承しながら頷くと、ゼノヴィアは自分の座席に戻っていく。
「何か用か？」
「あちらに着いた時の行動を聞きたくてね。一応、有事の際を想定してさ」
別クラスで班ごとにスケジュールも違う為、ここで互いのスケジュールを交換し、万が一の場合にスムーズに連絡が出来る様にしておくつもりらしい。
木場が行く先のスケジュールを話し、一誠も京都巡りのスケジュールを木場に教え

る。予定通りだと三日目に同じ場所を巡ることになる様子。
「――ところで、間薙君はイッセー君とサイラオーグ・バアルの模擬戦闘の話は聞いたかい？」
「ああ」
　すると、木場がいきなりシンの方に顔を寄せて来る。部外者には聞かさせたくない悪魔関連の話なので顔を近付けて小声で話し掛けているのだろうが、木場の話に注目している女子たちからは別の視点で見られていた。
「き、木場きゅんと間薙君が……！」
「た、滚る！　滚ってくるわ！」
「やだ！　目的地に着いていないのにテンション上がっちゃう！」
　色々と妄想を捗らせている一部の女子。幸い会話に集中しているシンと木場の耳には届いていない。因みに会話に入っていない一誠の耳にはしっかりと届いており、苦虫を噛み潰した様な表情になっていた。
「率直な感想として、彼は脅威だね。素手でイッセー君の鎧を壊せる存在なんて限られている。いや、同じ神滅具所持者や神という例外を除けば、上級悪魔では彼ぐらいしか出来ないだろうね」
　サイラオーグと一誠との戦いを見ていた木場は、自分ではサイラオーグに及ばないと

語る。
「まず僕は真っ向から戦えないね。唯一の取り柄のスピードも僕と同等――あの時、制限を掛けていたと考えると僕以上だね。同じ速度で紙みたいな防御力の僕じゃ一発受けただけで致命傷だよ」
　弱気な発言とも取れるが、冷静にそして客観的に見た事実がそれなのであろう。だが、木場もその現実を甘んじて受け入れている訳でもなく、表情に悔しさが滲み出ている。
「今の所、一番勝つ可能が高いのはイッセー君だろうね。もし、他に可能性がある人物が居るとしたら――」
　木場は無言でシンを見詰めるが、すぐにそれを笑って誤魔化す。ないものねだりというのが分かっているのだろう。
「修学旅行が終わったら、対サイラオーグ・バアルのトレーニングに付き合って欲しいんだ。勿論、イッセー君も」
「おお、いいぞ」
「分かった」
　二人から快諾を貰うと木場は満足そうな様子で座席へ帰っていく。来る時と同じ様に帰る時もその背に女子らの黄色い声を受けて。

「チクショウ……相変わらずモテてんなー、イケメンめぇぇ」
一誠が嫉妬に塗れた言葉を洩らす。大事な友人で仲間だと思っているが、それはそれこれはこれである。
「そんなに羨ましいなら整形でもしたらどうだ？」
「……お前も容赦の無いこと言うなぁ……」
「――失言だったな。医療や技術でも限界はある」
「本当に容赦無いなお前っ！」

◇

新幹線が京都に着くと班行動となり周囲を軽く観光しながら目的のホテルを目指す。
用意されたのは、学生が泊まるには不釣り合いな程の豪華なホテル。その名も『京都サーゼクスホテル』。一目見ただけでグレモリーが裏で関わっているホテルだというのが分かる。しかし、そのお陰で学生全員良い修学旅行の思い出が出来るのなら有難く使わせて貰うだけのこと。
駒王学園二年生全員がホテルに到着したのが確認されると、先生方から注意事項があった。引率の先生の中には当然アザゼルとロスヴァイセの姿が見られた。

午後からは班ごとで自由行動だが、行ける範囲は京都駅周辺。午後五時半までには自室へ戻っている様にとのこと。
早速荷物を部屋に運んで行くのだが、割り当てられた部屋は想像以上に豪華なものだった。
「すっげぇぇぇ！」
「駒王学園に入って良かったと心底思うな」
京都の街並みを一望出来る窓。清潔感溢れる洋室にこの部屋に泊まる元浜と松田は感動する。
二人が荷物を置くと、今度は一誠とシンが泊まる部屋へと向かうが、アザゼルから渡された鍵は彼らの部屋は男子が泊まる階層よりも数階上の部屋番号を示している。
取り敢えず部屋がある階層へ向かう四人。エレベーターを出た瞬間から明らかに違うのが分かった。
「え？　何この豪華なカーペットは？」
「何かあらゆる物がキラキラしているんだけど……？」
他の階層とは豪華さが段違いとなっていることに元浜たちは顔を引き攣らせる。
そして、シンと一誠が割り当てられた部屋に入ると二人揃って絶叫する。
「何じゃこりゃあああああ！」

「別次元じゃねぇか！」
広さも内装も桁違いになっている洋室。素人目でも分かる程の格の差があった。
「何でお前らだけこんなに豪華なんだよ！」
「どう見ても最上級の部屋じゃねぇか！」
不満を口に出す二人。シンと一誠もこんな桁違いの部屋を用意されて反応に困っていた。
その時、部屋を誰かがノックする。
「イッセー君？　間薙君？　もうここに来ていますか？」
尋ねて来たのはジャージ姿のロスヴァイセであった。
「ロスヴァイセちゃん！　抗議します！　何でイッセーと間薙はこんなに良い部屋なんですか！」
「同じく抗議します！　ロスヴァイセちゃん！　納得がいく説明を！」
「もう、先生のことをちゃん付けしないで下さい」
軽く窘めるがそれ以上怒ることは無かった。生徒からの親しみの証として、一応受け入れているみたいである。
「実はホテル側でトラブルがありまして、生徒数の数え間違いが起こっていたみたいです。二人部屋を急遽用意しようとして、トラブルに対するお詫びも兼ねてこの部屋に

なったという訳です」
　ロスヴァイセからの説明に二人は不満気な表情ながらも取り敢えず納得する。
「ぐぬぬ……何て運の良い奴らだ……」
「こんな良い目に会ってたら罰が当たるぞ……」
「……何なら変わるか？　その代わり夜は間薙と部屋でずっと一緒だぞ？」
『う、うーん……』
　そう言われて元浜たちは眉間に皺を寄せて悩む仕草を見せた後――
「うん。やっぱりあの部屋でいいや」
「そうだな。つう訳で準備したらホテルの玄関に集合な」
　――あっさりと退き、部屋へ戻っていった。
「全く失礼な奴らだよな、なあ、間薙？」
「お前もな」
「ぶふっ！」
　シンと一誠のやり取りにロスヴァイセは思わず吹き出してしまう。見た目も性格も全く異なる両者だが、妙に噛み合う部分が可笑しくてしょうがない。
　二人の視線が向けられていることに気付き、ロスヴァイセは咳払いをした後にこの部屋にした本当の理由を話す。

「ここは私たちが話し合う為にリアスさんが用意された部屋なんです」
「ここで話し合い？　あー、悪魔的な？」
「まあ、そういうことですね。京都で何かしらのことが会った時に話し合いが出来る所を確保しておいて損は無いです」
　実はもう一つ部屋の候補があったが、そちらは一人用の狭い和室であった為、シンとの同室が無理ということになり、この部屋となった。
「という訳でこれから教師の会合がありますので、急いでアザゼル教諭を探さないと……」
「アザゼル先生がどうかしたんですか？」
「ホールでの確認が済んだらいつの間にか居なくなっていたんですよ！　生徒よりも先に羽目を外すなんて……！」
「アザゼル先生、何処に行ったんだ……？」
「酒か女のどっちかだろうな」
　京都へ旅行に行く前から舞妓と京料理に興味津々だったことを思い出す。
「もう！　こんな時間から不埒なことを！」
　ブツブツとアザゼルへの文句を言いながらロスヴァイセが部屋を後にしようとする。
「――流されて一緒に飲まないで下さいね」

「飲みませんから！」
　シンの忠告に声を大にして否定し、去って行く。
「どっちだと思う？」
「うーん……勧められてもギリギリで断って飲まない、の方に」
「なら、俺は勧められた挙句断り切れずに飲む、の方だ」
　ロスヴァイセのこの後を予想し合いながら外出の為の準備を勧めた。

◇

　午後の自由時間。折角だから観光に行こうということとなり近場にある伏見稲荷へ行くこととなった。有名な場所であり一駅分しか移動しないので、予定時刻にも戻って来ることも出来る。
　稲荷駅に着くと早速店頭に置かれた物に興味を示すアーシアたち。その様子を松田がカメラに収めている。
　修学旅行らしい光景だが、少し離れた場所でそれを眺めているシンと一誠は小声で会話をしている。
「――見られてねぇか？」

「そうだな」
駅に着いた時目線を感じる。それも四方からのものであり、明らかに一人二人では済まない。
京都に住む超常側の存在にしてみれば悪魔や天使は余所者。監視の目を光らせていてもおかしくはない。しかし、それでもやや鋭すぎる気がする。
「妙に殺気立っているな」
「ああ、チクチク刺さって気になってしょうがねぇ」
京都側とトラブルを起こさない為にリアスからフリーパス券と呼ばれるカードを渡されている。このフリーパス券というのは前以って京都を牛耳る存在に話を通し、発行してもらうことで自分たちがきちんと手順や通達を済ませていることを証明する為のもの。
「……大丈夫だよな？」
「取り敢えず人目が有る所では襲って来ないだろう」
元浜たちに急かされて一誠とシンも最初の鳥居を抜ける。その向こうには大きな門があり、両脇には魔除けの狐の像が置かれている。
一誠にはその狐の像が睨んでいる様に見えてしょうがなかった。
周囲を気にしつつも本殿へ進み、観光しながら稲荷山へ登っていく。ここまでは順調

と誰もが思っていた。
数十分歩いた後、一誠らは稲荷山の休憩所に着いていた。頂上まではまだ遠い。
そこから見える山風景をアーシアたちは楽しむ。
一方で一誠は山で何度も修行してきたせいか、山の頂を見たくなり皆に断りを入れてから頂を目指そうとする。
「うおっと！　すみません！」
走り出した直後に肩がぶつかり合い、一誠は反射的に謝る。
「ああ、大丈夫。気にしないでくれ。兵藤一誠君」
「へ？」
名前を呼ばれて驚くがすぐに納得した。肩をぶつけた相手は自分と同じ駒王学園の制服を着ていた。
「あ、駒王の」
「そう。クラスは違うがね」
黒髪の青年がクスクスと笑う。整った容姿のせいかもしれないが、何故か目を惹かれる。これだけ存在感があると覚えていそうだが、一誠の中では記憶に無い。
（こんだけイケメンだと覚えていそうなんだけどなー）
「まさか、ここで有名人に会えるとは思ってもいなかった」

「有名人？　俺が？」
「そう」
　きっと碌でもない意味で有名なんだろうなと苦笑いしてしまう。
「これから山頂に向かうのかい？　引き留めて悪かったね」
「いや、こっちこそ」
「それじゃあ、気を付けて」
　爽やかな笑みで別れの挨拶を送りながら青年は去って行く。
「んじゃ行くか」
　気を取り直して山の頂を目指し駆け登って行く一誠。周囲に多くの観光客がいるせいで彼は気付かなかった。
　監視の目が急に殺気立ち始めたことに。
　そして、同じタイミングで班のメンバーがあることに気付く。
「ねえ」
　桐生の呼び掛けにアーシアたちは観光を止め、そちらを見る。
「間薙君は？」
　いつの間にかシンの姿が消えていた。

◇

普段から鍛えていたおかげで一誠はあっという間に山頂へ辿り着いた。頂上、と思われるが適当に走って来たせいで断言は出来ないが。

木々が生い茂っているせいで日が出ているのに薄暗く、空気が冷たい。一応古ぼけた社があるので観光する場所なのだろうが、雰囲気のせいで観光客は一切見当たらない。

一誠は折角来た記念に社でお参りをすることにする。

手を叩き、頭の中で願う。正直、願いの中身は煩悩塗れであったが。

「お主……」

幼い声の後、周囲の木々がざわめき始める。一誠は周りを囲まれているのに気付く。かなりの数が潜んでおり、強そうな気配も感じる。

「母上のニオイがするぞ……！」

「女の子？」

警戒する一誠の前に現れたのは巫女装束を着た小学校低学年程の少女。頭髪は眩い金髪であり、その頭髪からは獣の耳が生え、腰あたりからも大きく膨らんだ尻尾が見えている。

狐を連想させる姿をした明らかに超常側の存在。

「余所者め……！　母上を何処にやった！」
「は、母上？　何のことを――」
「惚けるでない！　そのニオイこそが証拠！」
狐の少女は聞く耳を持たずに怒鳴り付ける。
「いや、本当に――」
「なら力尽くで聞くまでのこと！　行け！　キンキ！　スイキ！　フウキ！」
木々の影から先程感じた強い気配の持ち主たちが現れる。
「オ前ガ獲物カ」
全身が金色。金属の様な質感の体。額が尾鰭の様に広がった形をしている。鎧そのものの様な上半身には何も着けず、下半身に赤い猿股のみ着用。右手には身の丈程ある薙刀を持っている。
鮫の様な鋭い牙を見せ、赤い目で一誠を獲物として捉える。
「おひい様が言うんじゃ仕方ねえ。ちょっと半殺しになってくれや」
紫色の体に赤紫色の縞が入り、灰色の衣を上下に着ている。頭頂部に横向きに生える白い角が左右に四本ずつ並び、その下から長い黒髪が生えていた。口にあたる部分には半円状に無数の黒い線が入っており、そこから言葉を発している。
へら状になった鈍器を左右に付けた武器を構え、一誠を小馬鹿にした態度をとる。

「あーあー暴力反対。何て言うと思うかアホめ。お嬢の言う通りにくたばれや」
白い衣が覆う水色の体には年輪の様な紋様が描かれていた。頭頂部には四本の角が生えているがそれよりも目を引くのが顔。顔の中央部分が鍵穴形にくり抜かれており、目も鼻も口も無く、辛うじて残っているのは下顎から生える牙のみ。
一誠に対しふざけた態度をとりながら、その手に持つ両端に片刃の剣を付けた武器を振り回す。
「な、何だこりゃあ……！」
二メートルを超える巨体が一誠を取り囲む。タンニーンやグレートレッドの様な現実離れした大きさではないが、凄まじい威圧感があった。
どんな存在かは分からないが、狐の少女が呼んだ名からして鬼と思われる。
「かかれっ！」
狐の少女の号令により三匹の鬼が一誠へ襲い掛かった。

◇

「……やられた」
鳥居が並ぶ石階段に腰を下ろしてシンは呟く。観光客の迷惑になる行為だが誰も咎

める者は居ない。何故ならばこの空間には彼一人しか存在しないのだ。
何か違和感があった訳では無い。先を行く一誠らについていき、何気なく瞬きをした瞬間に世界がガラリと変わった。
先を歩いていた一誠たちは居なくなり、周囲の観光客も消えてしまった。
石階段を登っても登っても頂上に着くことが出来ず、同じ場所を何度も通ってしまう。
気付かない内に仕込んでいた、或いは気付けない程早く展開した結界の中に閉じ込められていた。
暫くの間調べていたが、やがてシンは調べるのを止めて、堂々と石階段ど真ん中で休憩することにした。
一誠たちから隔離することが目的ならば、いずれ首謀者の方からやって来ると考え、無駄に体力を消耗するのを止めたのだ。
そして、その考えは的中する。
カツカツと聞こえてくる足音。それは辿り着けない筈の上階段から聞こえてきた。
シンは立ち上がり、階段の上を見る。駒王学園の制服を着た青年がこちらへ下りて来ている。その最中に漢服を羽織りながら。
「一度はやってみたかったんだ。スパイの真似事を」

漢服の青年は敵意なくシンに微笑む。
「似合っているかい？　人修羅？」
答える代わりにシンは手加減無しの魔力波を放った。結界内の偽物の鳥居は吹き飛ばされていく。
「ははは。早いな」
漢服の青年が手を突き出す。そこに光が発し、光は槍の形となる。そこに魔力波が衝突するが、魔力波は槍型の光に触れると四散してしまった。
槍の形をした光。だが、シンの目には光が強過ぎて槍の形をしているのが分からない。直視しようとすると光で目が潰れそうになる。
漢服の青年が発した力には既視感がある。一誠やヴァーリの神滅具と同じ気配を感じた。この漢服の青年もまた神滅具所持者であり、神滅具の発動の余波だけで魔力波を消し去ったのだ。
警戒するシンだが、予想に反して漢服の青年は槍を光に還して霧散させてしまう。
「そんなに警戒しないでくれ。一応、俺は話し合いに来たんだ」
「話し合い？」
「ああ。俺は英雄派を仕切らせてもらっている、曹操という者だ」
『禍の団』の英雄派。しかも、その中心人物の方から接触してきた。

「あれこれと言うつもりは無い。内容は簡単だ。俺たちの仲間にならないか？」
まさかのスカウトにシンはやや目を細める。
「君のご同類の魔人にも俺たちの協力者がいる。君にも興味があったし、声を掛けてみようと思ってね」
「断る」
「ははは。本当に早いな、君は」
即答で断ったシンに対し、曹操は気分を害した様子は無い。予想出来ていたことらしい。
「じゃあ、こっちも手早く行こうか。ヘラクレス！」
「おうよ！」
シンの頭上の巨漢の男が出現し、シンの脳天目掛けて拳を振り下ろす。
数歩移動しそれを避けると、空振ったヘラクレスの拳が石階段を叩き壊す。
「ジャンヌ！」
「はいはーい」
シンが移動した先に金髪で鎧を着た女性――ジャンヌが現れ、剣を振るう。剣が纏う気配は紛れもなく聖剣のもの。
聖剣の間合い外まで一気に跳び、初撃を躱すシン。背中に軽い衝撃が当たる。いつの

間にか鳥居を背にしていた。
「ジークフリート!」
シンは悪寒を感じてしゃがみ込む。直後に鳥居から剣先が飛び出し、シンの喉があった場所を通過。素早く鳥居から離れると剣先が一閃され、鳥居が斬り倒されるとその影から白髪の青年――ジークフリートが現れる。
「今のを全て躱すか……やるね」
曹操は石階段に腰を下ろし、観戦に入っている。
「でも、これからだ」
曹操が笑う。英雄の名を持つ三人がシンを相手に己の力を振るう。

忍者、英雄

前三方を塞いで立つ巨体。迫力あるその体つきと形相に、一誠は静かに唾を呑み込む。

『用心しろ、相棒。こいつらは鬼だ』

（鬼ってあの鬼かよ！）

一誠の頭の中で虎の腰巻きを付け、金棒を持ち、癖毛の中から二本の角を出す赤い鬼の姿が思い描かれる。が、目の前の鬼と言われた者たちからはその絵と全く異なる。

確かに角らしきものが見えるが、それ以外の共通点が見当たらない。絵本の中に存在する鬼の様な愛嬌は皆無であり、金棒よりも物騒な得物を持っている。

『鬼の中でもかなりの上位だ。気を抜くとすぐにやられるぞ』

（それは……分かる）

体格や顔以上に、百戦錬磨の戦士が放つ研ぎ澄まされた威圧感に、体の産毛が逆立つ。

「サッサト首ヲ捩ジ切ッテシマウカ」

片言で喋る金色の鬼――キンキ。

「馬鹿が。おひい様は殺せとは言ってねぇだろうが」

キンキの発言に口を出すのは紫色の鬼――スイキ。
「やれやれ。殺るんなら八坂様の居場所を吐かせてからにしろや」
水色の鬼――フウキもそれに同意する。
「一々茶々ヲ入レルナ。鬱陶シイ」
「茶々も入れたくなるわ。お前の馬鹿な発言には」
「あーあー。止めろ止めろ、お前ら」
一誠が見ている前で口喧嘩を始める。キンキとスイキ。それをフウキが仲裁しようとする。
木々や社に隠れている者たちが鬼らの諍いにざわめき出す。
「ええーい！　揉めとらんでさっさと母上の居場所を吐かせるんじゃ！」
業を煮やして狐の少女が怒声を飛ばす。
「オ嬢様。コノ陰険鬼ガ！」
「おひい様。この石頭に言って下され！」
「お主らはー！」
喧嘩を始める鬼たちに、一誠は先程までの緊張は何だったのかと脱力してしまう。
「ほーれみろ。ドアホウが釣れた」
瞬間、フウキが両剣を振るう。一誠は両剣に吹き飛ばされ、木の幹に背中から叩き付

けられる。
「馬鹿が。構えを緩めてんじゃねーよ」
「腸グライハ出タカ？　ソノママ引ッ張リ出シテ木ニ打チ付ケロ。ソノ程度ジャ悪魔ハ死ナン」
「見ましたかーお嬢。やってやりましたよー」
全ては一誠の油断を誘う為の演技。味方すらも騙してみせる。この鬼たちは尋常ではない力を持つが、この様な卑怯な手も躊躇無くやれる。
「そ、そうじゃな……」
やり方の汚さに、さっきまでの怒りもすっかり消沈し引いてしまった狐の少女。
（ゆ、油断した……！）
鬼たちのコミカルなやり取りにすっかりと気を緩めてしまった一誠。未熟な己を情けなく思う。しかし、一誠は確かに気を緩ませたが、完全に戦闘解除した訳では無い。
「あん？」
三鬼の内の誰かが少し驚いた声を上げる。木の幹に背を預けながら立ち上がろうとする一誠。その左腕には『赤龍帝の籠手』が顕現しており、フウキの両剣による一撃が生む摩擦で白煙を上げていた。
フウキの攻撃の刹那の間に戦闘態勢に入ることで籠手を纏い、それによりフウキの不

意打ちの防御に間に合わせた。尤も、威力を殺すことは出来ず吹き飛ばされてしまった。

　三鬼たちは一誠が立ち上がるのを黙って見ていた。彼らの目は一誠の『赤龍帝の籠手』に釘付けになっている。

「こりゃあいい。つまらん小物だと思っていたがとんだ大物じゃねぇか」

「ソノ籠手、オ前『赤龍帝』ダナ」

「ほーお。見掛けによらんもんだ」

　口調自体は？気なものであったが、三鬼が放つ気が爆発的に膨れ上がっていく。『赤龍帝の籠手』を見て、彼らは初めてやる気になってきたのだ。

「お前らぁぁぁぁぁぁ！」

　雷鳴の如きスイキの大声量。お前らという言葉から一誠に向けられたものではないが、近くにいた一誠は思わず仰け反り、狐の少女も突然の大声に『ふぎゃっ！』と驚いて跳びはねていた。

「誰も手ぇ出すなよ？」

　楽し気ながらも寒気立つ戦意に満ちた声。

『お前ら』、『誰も』という言葉を確認する為に一誠は周囲を見回す。林や木の陰から山伏の姿で黒い翼を生やし、頭部が鳥となっている異形ら。社の裏から神主の格好をし、狐

の面を被った者たちがこちらを覗き見ていた。
「今からこいつは俺ら『四鬼』の獲物だからよー」
「邪魔シタラ潰ス」
　フウキ、キンキが手を出させない様に味方に釘を刺す。殺すとまで言わない辺りが彼らなりの仲間意識を感じさせる。それでも物騒だが。
『四鬼』という名からして四体の鬼が属する集団なのだろうが、肝心の四体目の姿は見えない。何かしらの理由で不在なのかもしれない。
　異形らは困った様に顔を見合わせて小声で喋っていたが、スイキたちに言われた通りその場から動こうとはしなかった。
「赤龍帝の首を獲れば俺たちの名も上がる」
「俺たちの名が上がれば大将の名も上がるというもんよ」
「ソノ通リ」
　数の有利をあっさりと捨ててしまう三鬼。誰も文句を言わない――と思いきや、狐の少女だけが顔を真っ赤にしている。
「お主ら勝手に……！」
　自分のことを差し置いて勝手に決められたことに怒っていた。
「怒んないで下さいや、お嬢。後で甘いものを買ってあげますんで」

「そんなもの要らん！」
「だったら玩具を買ってあげますよ、おひい様」
「だから要らんと言うとるじゃろ！」
軽んじている訳では無いし親しみも持っているが、この三鬼の手綱を完全に握るには狐の少女は色々な意味で幼過ぎた。
地響きの様な足音が響く。キンキが石畳を踏み砕いた音であった。次なる一歩を踏み進めると思いきや、少し間が置かれる。
それが力を溜め込む動作であることに一誠が気付いた時、キンキが飛び出す様に前進する。
「おい。抜け駆けすんなよ」
スイキがその背に咎める声を飛ばすが、キンキの足は止まらない。
『Ｂｏｏｓｔ！』
『赤龍帝の籠手』による倍化は既に始まっている。向上した力で一誠は籠手を握り締め、前進してくるキンキに対して迎え撃つのではなく突進する。
「フン！」
間合いに入った一誠に薙刀を振るうキンキ。首を切り落とすつもりで放たれた一撃。
「おりゃあ！」

一誠は籠手から魔力を噴射。それにより一誠は急加速し薙刀が首に届く前にキンキの懐に飛び込み、加速の勢いのまま鳩尾に拳を打ち込んだ。
「ぐっ！」
呻いたのは一誠の方であった。硬そうな見た目通りキンキの体は頑丈であり、籠手で覆われていても素手で金属を叩いた様な痛みが拳に伝わって来る。
だが、キンキも一誠の攻撃が直撃して無傷という訳でも無かった。打ち込まれたキンキはその場から数歩後退させられてしまう。瞬間的だがキンキの力を一誠が上回ったことを意味する。
「ほー。キンキを殴り飛ばすか。おたく、見た目よりも力があるねー」
「はっ。格好わりぃな！　返り討ちに遭うなんてよ！」
キンキを心配する素振りを見せない。逆に言えばあの程度ではびくともしないという信頼の裏返しとも言える。
二体の鬼がキンキを揶揄っている内に一誠は接近を試みるが――
「あめぇよ」
スイキは一笑し、菊割れの様な口から息を吹き出す。白い靄となっている息が一誠に触れると、痛みを伴う冷たさと共に氷が張り出す。
「間薙と同じ技……！」

シンと同じ氷の息により一誠の半身に薄い氷の膜が張って行く。氷の息が掛かった場所が運悪く目の近くであり、一誠が反射的に目を瞑ると瞼の上に氷が覆われ、片目が開けられなくなってしまう。
「はっ」
フウキが刃を地面に突き立てる。一誠の周囲に三つの竜巻が生じ、それが一誠に向かって集まり出す。
逃げ場を潰された一誠に風の力が唸りを上げて彼を呑み込む――かと思われた時、銀色に輝く無数の線が一誠の周囲を囲み、一誠を呑み込む筈であった竜巻を斬り裂いてしまう。
一誠はその輝きに見覚えがある。見ただけで鳥肌と悪寒が走る聖なる気の輝き、間違いなく聖剣のもの。
「間一髪ってところ？　というかどういう状況？　妖怪さんよね？」
「大丈夫か？　イッセー」
一誠を守る様に左右を固めるのはゼノヴィアとイリナ。イリナの手には細い刃が付いた柄が握られている。先程一誠を守ったのはイリナの『擬態の聖剣』によるものだった。
体を少し震わせ、体に張り付いた薄い氷の膜を剥がすと開いた目に映るのは――

「ぶ、無事ですか！」

――少し遅れて到着するアーシアだった。近接戦闘要員である二人と後方支援担当のアーシアの足を比べたら到着に差が出ても仕方ない。しかし、かなりの距離を走ったと思われるアーシアは息一つ乱しておらず、すぐにでも戦いに参加出来る様子であった。

「そうか……お前たちが母上を……最早許すことなど出来ん！」

「だからお前の母ちゃんのことは知らないって！」

母親のニオイがすると言われても本当に心当たりが無い。それらしき人物に接触したことも見た記憶も無い。

「黙れ！　不浄なる魔の存在め！　神聖な場所を穢し――」

「うーん？　悪魔は三匹居るが、もう一匹は悪魔じゃねえな。気配が違う」

「うへぇ。聖剣を持っているぜ、あの女。大将の傷に残ってたいやーな感じがそっくりだ。ってか何で悪魔と天使が一緒にいる？」

「悪魔、天使、堕天使ハ協定ヲ結ンダ。ソレグライ知ッテオケ」

意気込む狐の少女の話に割り込む様に雑談を始める三鬼。折角決めようとしている所を台無しにされた狐の少女は全身を震わせた後、怒鳴る。

「今は私が喋っているじゃろうが！」

「おいおい。おひい様を怒らせるなよ」
「お前のせいじゃねえのか？　お嬢が怒っているのは？」
「オ前ラ黙レ。オ嬢様ニ無礼ダ」
　全く反省することなく責任の擦り付け合いをする三鬼。狐の少女の二度目の怒りが爆発するのはすぐのことであった。周りの妖怪たちもどうするべきかとオロオロしている。
　その間に一誠はアーシアたちと戦況を整える。なるべく目立たない様にこっそりと。
「アーシア。部長から受け取ったアレを出してもらえるか？」
「はい！」
　アーシアはスカートのポケットからグレモリーの紋章が入ったカードを取り出す。
　このカードは、京都に居ないリアスの代わりに一誠のプロモーションを承認することが出来る代理認証カードである。これで好きな駒にプロモーションが出来る。
「イッセー。アスカロンを借りるぞ」
「ああ」
　これでゼノヴィアもアスカロンを使用出来るが、一誠は前以って注意をしておく。
「でも、気を付けろよ？　よく分からない理不尽なことに巻き込まれているけどここは京都、よそ様の縄張りだ。相手や周辺を傷付けるのはまずい。出来るだけ追い返す程度

に留めよう――難しいかもしれないけど」

事前にリアスからも『色々な方面に迷惑を掛けるから京都では暴れるな』と言われているので、可能な限り被害を抑える様には努力するつもりである。しかし、最後に付け加えた様に三鬼相手にそれが出来るかどうかが難題であった。

すぐにでもプロモーションが出来る準備はしておく。キンキの硬さを考慮して『戦車』にするか、まだ目立った動きを見せていないスイキとフウキに対応する為に『騎士』にするか、或いは特化せずに『女王』で全能力を上げて三鬼に対してある程度対応出来る様にしておくべきか。因みに『僧侶』は選択から排除しておく。こんな場所で威力が高まったドラゴンショットを撃てば伏見稲荷が消滅する。

迷った末にプロモーションする駒を選び、『赤龍帝の籠手』にも十分力が溜まった。

「行くぜ！　プロモーション」

「何をやっている。お前たちは」

知らない声と共に一誠は頸部を圧迫され、足が地面を離れて爪先立ちになる。

「ぐっ！」

背後に立つ何者かが一誠の首に棒を押し当て、それを持ち上げて吊るしている。何の前触れも無く、気配も無く、攻撃されるまで感知出来なかった。

息が辛うじて出来る状態で見上げさせられた一誠の顔を覗き込むのは、真っ黒な顔の

鬼の赤い双眼。
「イッセー！」
「イッセー君！」
一誠を襲う謎の鬼の登場に一瞬呆気にとられたゼノヴィアとイリナであったが、即座にアスカロンと『擬態の聖剣』を振り上げて一誠を助け出そうとする。
「動くな」
二人が踏み出す前にその首筋に三日月の刃が突き付けられる。気付けば二人の間で全く同じ黒装束の黒い鬼がしゃがんだ姿勢で得物を構えていた。
「う、嘘……！」
「いつの間に……！」
またも気配も無く接近を許してしまったことに驚くゼノヴィアとイリナ。
「イッセーさん！　ゼノヴィアさんにイリナさんも……！」
三人が黒い鬼相手に身動きがとれなくなる。何かするべきと考えるアーシアだったが――
「下手な真似はするな」
――得物を持ったまま腕を組む三体目の黒い鬼が傍に立って警告する。
一誠たちは謎の鬼の登場で身動きがとれなくなってしまう。

一方で妖怪たちの反応は違っていた。
「鬼の大将……！」
「もう動けるのか！」
「これであの悪鬼共が静かになる……」
黒い鬼を知っているらしく登場に安堵していた。
妖怪たちが安堵する一方で三鬼たちは真逆の反応を示す。
「た、大将！　何でここに！」
「やべー、やべー……どうするんだ」
「……モウ無理ダ」
余裕と傲岸不遜の自信に満ちていた三鬼が一気に焦り出す。
「――見ていたぞ、お前たち」
絶対零度の冷たさを含んだ言葉が三鬼たちの背後から掛けられる。そこには四体目の黒い鬼が立っている。
（忍者かよあいつ！）
分身する黒い鬼に、一誠は絞められながらもそんな感想を抱いてしまう。
「み、見ていたというと？」
声を震わすスイキ。表情が分からないが、誤魔化す様な笑みを浮かべているのが伝

わって来る。
「お前らが童の様に騒ぎ、我儘を言って九重様の手を煩わせている時からだ」
次の瞬間、スイキが真上に飛び上がり、フウキは真横に飛び、キンキが地面に頭を叩き付けられる。目にも止まらぬ黒い鬼の仕置きを兼ねた暴力が、三鬼をあっという間に叩き伏せた。
「たわけ共が」
そして、黒い鬼は狐の少女の前で跪く。
「九重様。申し訳ございません。日々、無礼の無いよう躾ておりましたが、我が目が届く所では行儀良く振る舞っていましたが、目を離した途端にこれです。全ては私の監督不行き届き。罰を与えるのであれば私に」
深々と頭を下げる黒い鬼。
「そ、そんなことはいい！　オンギョウキ！　お主の傷の具合は大丈夫なのか！」
謝罪よりも先に黒い鬼――オンギョウキの体を心配する九重と呼ばれた狐の少女。
黒い鬼は何かしらの傷を負っている模様。
「九重様自らがご出陣したというのに寝てなどいられません」
「そ、そうか！」
何とも複雑そうな表情をする九重。来てくれたことを嬉しく思う反面、無理をさせて

しまっている負い目を感じさせる表情であった。
「だが、お主が来てくれれば百人！　いや千人力じゃ！　あやつらを捕らえるのじゃ！　奴らからは母上のニオイがする！」
「八坂様の……？」
オンギョウキの赤い目が一誠たちに向けられる。既に身動きが出来ない一誠らは、向けられたその目に心臓が止まる思いであった。
「――僭越ながら申し上げます」
「何じゃ？」
「ここは退くべきかと」
「何じゃと！」
考えてもいなかった発言なのか、九重は目を剥く。
「あそこにいるのは赤龍帝でございます。赤龍帝の実力は未知数。もし、禁手に至っているのであれば被害は免れません。或いは今も禁手の為の準備を進めている可能性も」
実際のところ、オンギョウキの指摘は間違っている。一誠は首を絞められている状態であっても稲荷大社を破壊しない為に禁手の為のカウントダウンを始めていなかった。禁手はあくまで最後の最後にとっておく手段であり無暗に使うものではない。尤も、オンギョウキのこちらへの対応次第では使用も辞さないつもりであった。

オンギョウキが勘ぐってくれたのを利用し、一誠は籠手に填め込まれた宝玉を輝かせてみせる。
「むう……！」
九重は驚き、妖怪たちもざわめく。
ただのハッタリであるが、禁手を知らない彼女らからすれば、禁手発動の前兆に見えなくも無い。
「ぐぬぬ……！」
「九重様。ご決断を」
悔しそうに拳を握り締めた後、九重は決断する。
「……撤退、撤退じゃ！　無駄に犠牲を払う必要は無い！」
九重の号令により妖怪たちは身を隠し、気配も遠のいて行く。
「――行くぞ、お前たち」
今だに吹っ飛ばされた姿勢のまま固まっている三鬼たちに厳しい声を掛けるとオンギョウキは地面に掌を押し当てた。
周囲の枯葉が重力に逆らって浮き上がり、一誠たちの視界を塞ぐ様に動き回る。
「うおっ！」
その最中に締め上げていたオンギョウキが消え、一誠は尻餅を突く。アーシアたちを

牽制していたオンギョウキの分身も消えていた。
大量の枯葉が擦れ合い耳障りな音を奏でる中、耳元で直接囁かれた様な声が入り込んで来る。
「迷惑を掛けた」
その声の後、九重もオンギョウキも三鬼も消え去っていた。
構えと共に緊張感も解ける。修学旅行初日から理不尽且つ意味不明な襲撃を受けるとは思ってもみなかった。
この京都に於いて起こって欲しくないことが起こることを予感させるには十分な出来事に、一誠は堪らずぼやく。
「……無事に済むかなー」

◇

白髪の青年――ジークフリートが振るう剣がシンの首元を狙う。薄っすらと浮かべる笑みはまごうことなき美丈夫のそれであるが、シンはジークフリートの顔立ちに既視感を覚えつつ、一歩下がり紙一重の回避で剣を避けた後に大きく後ろに跳び退いた。
間合いを広げ、視界内にジークフリート、ジャンヌ、ヘラクレスを収める為である。

幸いジークフリートたちは追撃はせず、ジークフリートの斬撃を避けてみせたシンに少し驚いていた。
「やるじゃねぇか！　そう来なくちゃ面白くねぇ！」
「凄いね。お姉さんびっくり！」
ヘラクレスとジャンヌが褒めてくる。しかし、その言葉は逆にヘラクレスたちの余裕を感じさせた。
「感心するよ。あれを避けたことに」
ジークフリートもまた余裕を感じさせる笑みを浮かべている。
「――でも、ちょっとだけ遅かったかな」
シンは首元に熱いものを感じ指先で触れる。指には血が付着しており、首元には小さな切り傷があった。ジークフリートの言う通りほんの少しだが避けるのが遅かったらしい。
ジークフリートの握る剣は鍔部分に華美な装飾がされており、剣身からは一目でまともな剣では無いのが分かる妖しいオーラが放たれている。
剣自体は避けることが出来たが、あのオーラまでは避け切ることが出来ずに首元に切り傷が出来てしまったらしい。
シンは傷口を指先で拭う。それだけの行為で傷口は塞がっていた。

「へぇ。掠った程度とはいえ魔剣の傷をそんなに簡単に治せるんだね。大したものだね」
「……魔剣？」
敵と会話する趣味は無いが、後の戦いの為に少しでも情報を得ることを目的として敢えて聞き返す。
「そうだよ。魔帝剣グラム――それがこの魔剣の名さ」
グラム――北欧神話の英雄シグルドの愛剣の名。英雄派はその名の通り過去の英雄の血を受け継いだ者で構成されているという。この男もまた英雄シグルドの血を受け継いでいるのだろう。
「随分と有名な剣に斬られたもんだ。――傷を消したのは勿体無かったかもな」
「ふふふふ。そういう冗談は結構好きだよ」
皮肉を混ぜた冗談を笑って受け止めるジークフリート。
「それにしても、グラムを使うのに名はジークフリートなんだな」
「あはははは。ジークフリートは皆が呼ぶあだ名さ。本名はジークっていうんだけどね」
彼と似た容姿をしたイカれたはぐれエクソシストのフリード。二人の名を繋げるとジークフリードとなるが果たして偶然なのであろうか。

「ただ安心してくれ――」
ジークフリートは鞘に収めている剣の内、青い宝玉が柄に埋め込まれた一本を少し抜き、シンに剣身を見せる。
「――ちゃんと持っているよ。魔剣バルムンクも」
過去の英雄ジークフリートが愛用していたと言われる剣――バルムンク。青い宝玉を埋め込まれた柄がグラムとは異なったよからぬ気を剣身から漂わせている。
魔剣が二本。単純に考えれば腰に収まっている残りの剣もまた魔剣の類なのだろう。それも叙情詩や物語に出て来る名の有るもの。
「二本も見せたのは少しサービスが過ぎたかな？」
ジークフリートは特に後悔した様子も無くバルムンクを鞘に戻す。最初からグラム一本で戦うつもりらしい。
「でも、土産話にするんだったら二本でも十分だろう？　まあ、出来たらの話だけど」
当然ながらジークフリートはシンの意図を察していた。この情報を持ち帰ることが出来るかどうか煽って来る。
「もっと見たかったが残念だ」
「そう思うなら僕に抜かせればいいだけさ。君の実力でね」
ジークフリートは両手を広げ、五本の魔剣を見せつける。

「先に言っておくと、どれも自慢の剣だ。君の仲間の木場君が創造出来る聖魔剣にも引けを取らない。いや、場合によっては上回っているかもね」
手首を返し、シンにグラムの剣の腹を向ける。剣身に光が反射し、シンはその光を見て目を細める。
「さて、じゃあ――」
ジークフリートが斬り込もうとする前に、後ろに立っていたヘラクレスが彼の肩を掴んで強引に後ろに下げてしまう。
「お前らお喋りし過ぎだ。交代だ、交代」
戦い前の会話が気に入らなかった様子。
「ここは僕の番じゃないかい？」
「うるせぇ。ペチャクチャと口で語るもんじゃねぇ」
ジークフリートは不満を口に出すが、ヘラクレスを止める気は無い模様。
ヘラクレスは拳を固めながら大股でシンへと近付き、己の拳を威圧する様に見せつける。
「語るならこれだよなぁ？」
ヘラクレスが拳を振り上げる。シンはその場から動かない。
「怖かったら逃げてもいいんだぜ？」

ヘラクレスの挑発。それに対し、シンは無言で指招きし挑発し返すことで応じる。
「ハッハー！　良い度胸じゃねぇか！」
振り下ろしの右がシンの頬に命中。シンの顔が強制的に横を向くが、一歩も動かず膝も曲げない。衝撃が足元まで突き抜け、石階段が砕ける。
首の骨が折れるを通り越して粉砕するかもしれない一撃を顔面に受けたまま、今度はシンの拳がヘラクレスの脇腹へ叩き込まれる。
岩の様な見た目の鍛え上げられたヘラクレスの筋肉の鎧を突き破り、沈み込むシンの拳。
「――っぐぅ！」
拳が振り抜かれる前に、ヘラクレスの方が後ろに下がってしまう。
「こいつ……！」
奥歯を強く噛み締める音。ヘラクレスの額から一筋の汗が流れ落ちる。ヘラクレスの脇腹にはくっきりと拳の跡が残っていた。
「自分から挑んでおいて退くなんてカッコ悪ーい、って言おうと思ったけど貴方が自分から退くなんてよっぽどのことなのねー」
ジャンヌは？気な口調でありながらその目を刀剣の様に鋭くさせる。仲間の有り得ない行動だからこそ警戒が強まる。

シンはその視線を無視して口の端から垂れ血を拭い取り、ついでに顎をさする。歯も骨も折れていない。

「細い体の割には随分なもん持ってんじゃねーか……！」

体の奥深くまで染み込む様な一撃。魂まで食い込む様な衝撃と言わんばかりの、言葉では表現し切れない痛み。顔色を悪くさせながらもヘラクレスは豪気な笑みをシンに向けて見せた。

「あんまし舐めたつもりは無かったが、そんななりでもやっぱ魔人ってこったな！」

再び拳を握り締めるヘラクレス。だが、何か雰囲気が変わったのをシンは敏感に感じ取った。見た目は変化していないが間違いなく神器を発動させたものと思われる。

「はいはい。一人でテンション上げてないでね？　私もやるんだから」

ジャンヌが微笑むと足元から無数の剣が生えてきた。その剣を一目見ると目の奥に痛みを感じる。身に覚えのある痛み。生えてきた剣全てが聖剣であった。

剣が創造される様子が木場の『魔剣創造』と似ている。恐らくは『魔剣創造』と対成す神器である『聖剣創造』に違いない。

ジャンヌは生えてきた聖剣の内の一本を引き抜く。残りは後の攻撃の為に取っておく――と思っていたが、残りの聖剣が地面から飛び出し、重なり合い、纏め合って一つの物体と化す。

　その体を支えるのは脚に見立てた二本の聖剣。左右から突き出る腕に見立てた聖剣。柄と鍔と刃で作り上げられた頭部らしきもの。ジャンヌは聖剣を束ねて人型にした。
「どうどう？　お姉さんのお人形さんは？　初めて見るでしょ？　禁手化一歩手前の神器って」
　相手の戦力が増えた。また、シンが不利になっていく。
「四対一になっちゃったけど、ごめんなさいね。でも、これが戦いだから」
「気にするな。別に間違ったことはしていない」
「あら、優しい」
「その代わりに一つ許して欲しいことがある」
「許して欲しいこと？」
　意図が分からない台詞に三人は訝しむ。
「それって何だい？」
「不意打ち」
　次の瞬間、ヘラクレスが地面に叩き伏せられる。
「何っ！　何っ！」
　倒れ伏せたヘラクレスの背中に乗るのは白銀の体毛を持つ巨大な犬。
「アオォォォン！」

ジークフリートに振り向き様に振るわれる前足。獣爪から放たれる斬撃を咄嗟にグラムでガードするが、衝撃で吹き飛ばされる。
体勢を変え、ジャンヌへと顔を向けて大口を開くとそこから炎が吐かれ、聖剣人形ごとジャンヌを炎で包み込む。
「流石」
「グルルルル。次ハモウ少シタイミングヲ選ベ」
口の端にドックフードの食べかすを付けたケルベロスが少し恨めしそうに言った。
「……いつまで人の上に乗っかってんだ」
ケルベロスに踏まれているヘラクレスの唸る様な声。
「犬っころ！」
光が生じると同時に轟音、爆発が発生。爆炎の中にケルベロスが包まれる。だが、すぐにそれを突き破って脱出するのと、ケルベロスはシンの隣に着地する。
体から煙が立ち昇っているが体毛に目立った汚れも無い。ヘラクレスに直に触れていた足も――そこでシンは気付く。ケルベロスの爪の一本が根本から切断されて欠けていることに。
斬られたタイミングなど一つしか思い浮かばない。
「少し驚いたよ。中々良い攻撃をするね、君のペットは」

斬った当人であるジークフリート。不意打ちを受けても無傷どころか、密かに反撃すら行っていた。
「もう。火は止めてよー。汗かいちゃうじゃない」
聖剣人形が四肢の剣を振り回してケルベロスの炎を全て払ってしまう。それに守られていたジャンヌは火傷一つ無かった。
「おい、お前ら。人修羅はくれてやる。代わりにあの犬っころは俺にやらせろ……！」
額に青筋を浮かべて怒りを露わにするヘラクレス。腕や脚の筋肉も隆起しており、不意打ちで足蹴にされたことが余程屈辱的だったのだろう。ケルベロスを吹き飛ばす際に爆発を起こしたが、至近距離でそれに巻き込まれていたヘラクレスの体は無傷であった。恐らくはそういう能力の神器なのだろう。
仲間の答えなど聞く気の無い態度のヘラクレスに、ジークフリートは苦笑しジャンヌは溜息を吐くだけで終わる。それは彼に譲るという意味でもあった。
「おい、犬っころ」
「犬ッコロト言ウナ。オレハケルベロスダ」
「ケルベロスだと……？」
その名を聞くとヘラクレスは一瞬ポカンとした表情になるがすぐに爆笑し出す。
「ハッハッハッハ！　何つう偶然だよ！　ヘラクレスの俺の前にケルベロスが現れるな

んてなぁ！」
「……ヘラクレス？」
　ケルベロスの方はヘラクレスの知識が無いらしく、シンの方に『誰ダ？』と言わんばかりの目を向ける。
「知らねぇんだったら覚えておきな！　てめえを殺す奴の名をよぉ！」
「グルルル。ヨク吼エル」
「――にしても」
　ヘラクレスは不躾な態度でケルベロスの全身を眺める。
「残りの頭二つはどうした？　生えてないのか？　お前、実はまだ子犬か？」
　ケルベロスにとってのコンプレックスを踏み抜くヘラクレスの無遠慮な発言。更には既に成犬である身を――悪気無しだが――子犬と侮辱した。
　普段は大人しいケルベロスを激怒させるには十分であった。
「オ前ハ、丸カジリニシタ後デ吐キ捨テテヤルッ！」
「上等だ！　てめえの毛皮で服作ってやるよ！
　互いにこれでもかと殺気を衝突させた後、怒りを露にしながら同時に飛び掛かり、巨体と巨体で組み合いを始める。
　因縁の戦いが勝手に始まってしまった一方で、特に因縁の無いシンとジークフリー

ド、ジャンヌが睨み合う。
「ふふ、僕たちも行こうか」
「お姉さんたちはスマートに行きましょう？　あっちみたいに暑苦しいのは嫌だし」
ジークフリードがグラムを妖しく輝かせ、ジャンヌが聖剣を指揮棒の様に振るうと人形が動き出す。
シンは軽口に応じることなく静かに拳を握り締めた。

◇

「ふふっ。面白い展開になってきたな」
シンたちの戦いを見学していた曹操は楽しげに零す。曹操は気付かない内に少し離れた場所に移動し、そこで観戦していた。もう少し近くで見たかったが、隣に立つ人物がそれを許さない。
「あまりはしゃいでいる余裕も無いぞ、曹操。――正直、俺は今回の接触にメリットを感じない」
ローブを纏い眼鏡を掛けた青年――ゲオルクは不機嫌そうな表情のまま言う。ゲオルクの隣には英雄派最年少であるレオナルドも居た。

「メリット？　もし上手く行っていたら彼も仲間に出来ていたかもしれないじゃないか」
「もしもの話など意味が無い。現にジークフリートたちと戦っている。それにお前も成功するとは微塵も思っていなかったんじゃないのか？」
　ゲオルクの問いに曹操は含みのある笑みを浮かべる。それを見てゲオルクは溜息を吐いた。
「順調に進んでいるとはいえ、自分からイレギュラーを招く行為は感心しないな」
「まあ、そう怒らないでくれ。これでも俺なりの考えがあってやっているんだ。是非ともあの三人には魔人との戦いを一度経験させたくてね」
　曹操の言葉にゲオルクだけでなく無表情で虚空を見ていたレオナルドも反応する。
「丁度いいんだよ、彼は。弱くは無いが隔絶した強さは無く、恐怖を覚えるが絶望する程じゃない。魔人として成長段階の彼は本当に丁度いい相手だ」
　三人に魔人との戦闘を経験させようとする曹操。
「――魔人もいずれ戦うべき相手と想定しているということか」
「何体かは戦うな。マタドールはまず間違いない。四騎士は微妙かな？　俺たちは人間だが危険な存在かどうか判断するのは彼らだし。天界とコキュートスに封印されている彼らも追い込まれたら猟犬として解き放たれるかも」

「……だいそうじょうとマザーハーロットはどうする？」
マザーハーロットの名が出た瞬間、無気力であったレオナルドの双眸に生気が宿り、仲間に向けるべきではない殺気立った色を宿す。仲間から殺気を突き刺されても曹操は笑い、宥める様にレオナルドの頭を撫でる。
「彼らは味方だ。――今の所はね」
まだ敵対する意志は無いと告げる。だが、含みを持たせた言葉であり場合によっては、という意味も込められていた。
「……そう言えば、だいそうじょうを『禍の団』に連れて来たのはお前だったな」
「連れて来た訳じゃない。彼は俺の行く末を見届けに来ただけだ」
「行く末？」
「それを見て判断するのさ。俺に死を与えるか否か、を」
曹操とだいそうじょうとの間に彼らにしかない約束事があるらしい。気にならないと言えば嘘になるが、ゲオルクはそれ以上の追究はしなかった。
「ふう……まあいいさ。だが、後には赤龍帝たちも控えているのを忘れないでくれ。――ただし」
「あー、分かっているよ。アーシア・アルジェントは君が倒す、だったな」
アーシアの名前が出た途端、ゲオルクの眼鏡の奥にある目が鋭さを帯びる。

「珍しく執着しているな。この間のことが原因なのか？　もしかして、一目惚れでもしたか？」
「……笑えない冗談だな、曹操」
「くくく、そんなに睨まないでくれ。君の普段見られない面が見られてつい面白くなってね」
「――正確に言えばアーシア・アルジェントたち、だ。あの忌々しい魔象ごとアーシア・アルジェントを倒して初めてあの時の屈辱は払拭される……！」
　冥界でのアーシアとギリメカラに最後まで翻弄され、虚仮にされたことを今でも鮮明に覚えている。
「いいね、その感じ。それぐらい感情が？き出しだと好印象だ」
「……俺としてはただの未熟の表れに過ぎない。感情はもっとコントロールするべきだ」
「そんな必要は無いと思うな、俺は。俺たちは英雄派だ。古今東西、英雄ってのは自分の感情に素直だ。俺たちもそうするべきだと思う。人々が考える英雄ってのは寝物語で聞かされる人間らしさを全てそぎ落として、理想と正しさで表面を固めただけのものだ」
　英雄の血と名を継ごうとも人は人。最初に会った時から曹操が常々言っていること

である。
曹操は人間を強いとは思っていないが、弱いとも思っていない。人間を醜いと思っていないが、素晴らしいとも思っていない。
それが色々な人間を見て来た曹操なりの答え。
故に曹操は半人半魔の存在である人修羅ことシンに興味を持っているのかもしれない。境界に立つ者が今まで見た事の無い人の姿を見せることに期待して。
「――楽しそうだな、曹操」
「ああ、俺は楽しいよ。とてもワクワクしている」
曹操はシンから目を離さない。彼を見つめたまま、無意識に腕に巻かれている数珠に触れていた。
「だからといってこれ以上グダグダと時間を掛けることは無意味だ。俺たちにはやるべき事がまだ多くある。お前の為に今も働いている者たちだっているんだぞ？」
ゲオルクに咎められ曹操は肩を竦める。
「――それに赤龍帝たちの戦いも今終わった。早くしないと気付いて合流するかもしれない」
「分かった、分かったよ。確かに少し遊び過ぎたみたいだ」
曹操はこちらに視線を向けているジークフリートに気付く。軽く手を振って指示を

送ると数珠に触れながら腰を上げた。

◇

ケルベロスとヘラクレスの戦い。それは野生と野生のぶつけ合いであった。

「おらぁぁぁ！」

「アオォォォン！」

ヘラクレスの拳がケルベロスの胴体に打ち込まれると爆発が起こる。しかし、ケルベロスは爆破されながらもヘラクレスの肩に爪を突き立てた。

炎と物理に対して強い耐性を持つケルベロスにヘラクレスの爆発は効果が薄い。一方でケルベロスの爪はヘラクレスの筋肉に阻まれ深く食い込まない。

組み合った体勢から連続して繰り出される拳打爆撃。ケルベロスは爪だけでなく牙も使い、ヘラクレスの鎖骨付近に噛み付く。

お互い本気で相手を殺る為の戦いをしている。

そこから少し離れた場所では――

グラムによる一閃。木場と同等以上の速度で繰り出されるそれを、シンは最小限の動きで躱そうとする。

眼前を通り過ぎて行こうとするグラムの刃先。が、途中で止まる。
躱されるのが分かったと同時にジークフリートは振り抜くのを止め、その状態から突きを放つ。常人には不可能な反射神経と筋力が為せる技である。
顔面中央を貫こうとする刃を頭を低くして避けるが、すぐに悪寒が首筋を粟立たせる。
突きも中断され、手首を返して振り下ろしの斬撃へ軌道修正されていた。
何が来るのか分からないままシンは地面を蹴って横へ移動。間合いに入っている限りグラムが追従してくるのが分かっていたので、必要以上の距離を置く。
しかし、その動きは読まれておりシンが移動した先には聖剣人形が待ち構えており、シンの首を上段蹴りで狙って来る。
シンの拳が脚となっている聖剣を下から突き上げ、軌道を無理矢理変える。大股を開いて頭上を超える蹴りとなったところに、胴体目掛けての拳が打ち込まれた。
聖剣の集合体である為、それなりの重量はあったが殴り抜けられない重さでは無く、錐揉みしながら聖剣人形が吹っ飛んで行き、木の幹に衝突する。
聖剣人形の胴体を構築している聖剣に亀裂が生じていた。一方でシンの拳も無傷ではなく、聖剣に触れたことで白煙が上がっている。
死角からジャンヌが聖剣を突き出す。聖剣人形に意識が向いている内の攻撃。シン

は反射的に手の甲で聖剣を叩く。叩かれた衝撃で軌道がずれ、狙いを外されるジャンヌ。

そこにシンの方が踏み込んで拳を放とうとするが、いつの間にかジャンヌの背後に移動していたジークフリートが彼女の肩を掴んで後ろに飛び、拳の届かない位置に移動してしまったのでシンは攻撃を中断する。

「ありがと、ジーくん。お姉さん助かっちゃった」

「どういたしまして。それにしてもやっぱり手強いね。三対一でやって、あの程度か」

ジャンヌの聖剣を叩いたことで手の甲に赤い筋が出来ておりそこから血が垂れ、白煙も上がっていた。聖剣による負傷はグラムの時の様にすぐには治すことが出来ず、暫く煙が上がり続けている。

「どうしたものかな……」

ジークフリートはいつでも応戦出来る様にしながらさり気なく曹操の方を見る。それは、何処まで手の内を晒していいのかという確認であった。

魔剣の一本や二本を晒しても特に問題は無いが、ジークフリートが持つ神器と新たに得た人工神器、そしてバルパーから実用試験という形で渡されたあの聖剣を使用するのは少し躊躇ってしまう。

曹操から手で合図を送られる。すると、ジークフリートはグラムを鞘に納めてしまっ

た。
「ちょっと！　ちょっと！　ジーくん何してるの？」
「終了だよ。撤退だ」
「えー、これから面白くなるのにー」
ジャンヌは不完全燃焼故に不満を示す。
「ヘラクレス。君もだよ」
「待て！　こいつだけはやらせろ！」
ケルベロスの首を絞めながら腕を噛み付かれているヘラクレス。すぐにジークフリートの言葉には従わない。
「ヘラクレス」
もう一度名を呼ぶ。
「――チッ」
ヘラクレスは舌打ちをするとケルベロスの首を抱えて、シンに向けて投げ放った。
「グルル」
ケルベロスは空中で姿勢を立て直し、シンの隣に着地する。
「ということで」
靴が石を叩く音。曹操らが石階段を下りてジークフリートたちと並ぶ。

「この辺りでお開きにしようか」
「……勝手だな」
「そう。俺たちは自分勝手で我儘なのさ」
否定せず肯定する曹操。これ以上嫌味を言っても何一つ通じないのが分かるので、シンは口を閉じる。
「今日のはちょっとしたお遊びだ。次に会う時はもう少しだけ本気で行こう」
曹操は手首に巻いてある数珠から珠を一つ外す。
「――こんな風に」
指先で弾き、珠をシン目掛けて飛ばす。それが何の為のものか見極める為に注視するシン。
珠が光を放つ。その瞬間、悪寒が走る。それは天使や堕天使が放つ光に酷似している。
シンはこの時初めて破魔の光を目にした。
石階段を思い切り蹴り飛ばし、可能な限り珠から離れる。ケルベロスもシンと同じ行動をとっていた。
珠を中心として光の柱が広範囲に展開される。もし、内部に閉じ込められていたらどうなっていたか。

空間が震え出す。ゲオルクが結界を解除したと思われる。周りの景色が横長に伸びていく程激しく震えた後、唐突に現実の稲荷山へと戻された。
当然ながら曹操たちの姿は無い。在るのは――
「うおっ！　何だっ！」
「熊！　狼！　何っ！」
「誰か！　警察！　警察！」
「そこの君！　早く逃げろ！」
――急に現れたケルベロスの姿を見てパニックを起こす観光客ら。
「グルルル……」
ケルベロスがどうするべきかとシンを見て来る。取り敢えず、後で呼び出すから山の中へ逃げろと頭の中で伝えておき、ケルベロスはその指示に従い山の中へと逃げていった。
（……無事に済むか？）
キャーキャーと騒ぐ観光客たちの声を聞きながら、幸先の悪い修学旅行のこれからを不安に思うのであった。
なお後日、稲荷山にて妖怪が現れたという噂話が、暫くの間京都を騒がすことになる。

歴代、話合

「おーい、間薙ー」
シンを見つけた松田、元浜、桐生が声を掛ける。
「ここで何してんだ？」
何故か一人遅れてきたシンを疑問に思う三人。同じペースで歩いてきた筈だが、体力の無い元浜よりも遅いのを不思議に思っても仕方がない。
「ちょっと、な。――他の皆は？」
曖昧に誤魔化した後に一誠たちの姿が無いことに気付き、質問を返す。
「イッセーの奴、稲荷山の頂上目指して走っていっちまった」
「あいつ、最近体力余り過ぎだろ……」
「んで、少し後にアーシアたちも兵藤のこと追い掛けて行っちゃった。頂上で一緒に記念写真をとるとか言ってたけど、なーんか慌ててたよねー」
桐生の話に嫌な予感を覚えるシン。シンが英雄派に襲われたことを考えると、一誠たちも同じ様な状況に陥っていてもおかしくはない。
シンもまた頂上を目指そうかと思った時、一誠たちが山から下りて来るのが見えた。

「あ、いた。おーい」
　桐生が一誠たちに手を振る。それに気付いて一誠たちは小走りで近づいてきた。
「良い写真撮れた？　アーシア」
「え、は、はい！」
　慌てて頷くアーシア。
　シンは一誠たちが緊張状態にあることに気付き、一誠にさり気なく近付いて事情を尋ねる。
「――何かあったのか？」
「ああ。京都の妖怪や鬼に襲われた」
　てっきり英雄派の襲撃を受けたかと思っていたシンは、出された名に意表を衝かれる。
「京都の妖怪や鬼？　どういうことだ？」
「俺も良く分かんねーよ。でも、リーダーっぽい狐の女の子が、俺に『母上を返せー』って」
　シンが聞いても全く身に覚えの無い話である。今日に至るまで京都と一切関わりが無い。稲荷大社に来た時に、確かに妖怪や鬼らしき視線を感じたが、襲って来るのは少々予想外のことであった。せいぜいちょっかいを掛けて来る程度だと思っていた。

その少女の攫われた母上の容疑も濡れ衣である。となるとその濡れ衣をどうやって着せられたか。英雄派の連中の顔がチラつき出す。

他に何か気になることは無かったかと一誠に再び訊く。

「そういえば、母上のニオイがするって言ってたな……」

ニオイとなると何らかの形で一誠にそれを付けたことになる。つまり、接触している可能性が高い。

「襲われる前に何かなかったか？」

「襲われる前……？」

眉間に皺を寄せて襲われる前の記憶を掘り返し始める。暫くの間沈黙した後、あることを思い出した。

「そうだ……稲荷山の頂上を目指す前に誰かにぶつかったな」

「どんな奴だった？」

「えーと、同じ駒王学園の制服を着てたし……同じ高校の奴だぞ」

駒王学園の制服。一誠からすれば特に珍しいものではないが、シンからすれば否が応でもとある人物と結び付く。

「黒髪に俺ぐらいの身長で、目を惹く容姿の男か？」

「ああ、そんな感じの奴だった。――知っているのか？」

「英雄派の曹操という奴だ。お前、そいつに何か付けられたな」
英雄派という名を聞き、一誠は目を丸くする。
「英雄派って……『禍の団』かよ！　それを知っているってことは、お前そいつに襲われたのか！　大丈夫なのか！」
修学旅行先でも『禍の団』の魔の手が伸びていることを知り、一誠はシンに怪我は無いかを訊く。
「殆ど怪我はしていない。していないが……少し厄介なことになっている」
シンの歯切れの悪い言い方に一誠は首を傾げる。その時、元浜たちの会話が耳に入ってきた。
「おい。何かさっきから騒がしくないか？」
「何か聞こえてきた話だと、稲荷大社に妖怪が出たんだとさ。何でもでっかい熊か狼みたいな妖怪だったって」
「妖怪？　いや、確かに京都なら出てもおかしくはないけどさー」
「まあ、こんな観光客で一杯な場所でねぇ？」
小耳に挟んだ胡散臭い話を全く信じておらず、半笑いの表情となる元浜と松田。
「妖怪って……」
噂話を聞き、一誠の方は京都の妖怪たちとの戦いを誰かに見られていたのではないか

と背中に冷や汗を流す。すると、一誠の傍にいるシンが軽く手を振り、違うというジェスチャーをする。
シンは無言で指差す。その方向へ視線を向けるとシベリアンハスキーが人目の付かない場所で座ってこちらを見ていた。一誠には見覚えしかない。
「あいつはもしかしてケルベロスか？　……ってことは今の妖怪騒ぎは！」
「仕方が無かった。多勢に無勢だったからな」
「他の英雄派の奴らとも戦ったのかよ……本当に良く無事だったな、お前」
何度も死地を切り抜けているシンの生命力の強さに感心してしまう。全く羨ましいとは思わないが。
「元の場所に戻せないのか？」
「生憎、一方通行だ」
遠くから喚ぶことは出来るが、帰還させることはシンにまだ出来ない。
京都の妖怪のことや英雄派のことなど積もる話はあるが、取り敢えずはケルベロスのことをどうにかするべきと考え、何か案は無いかと二人で暫し考えた後、アザゼルに頼もうという結論に達する。
アザゼルに相談するべく、シンは携帯電話を操作してアザゼルの番号に繋げる。携帯電話のコール音。数度鳴るが繋がらない。

稲荷大社に行く間際にアザゼルが京料理を満喫しに行った、というのをロスヴァイセが言っていたことを思い出す。アザゼルが既に出来上がっているのではないかという不安を覚えた時、電話が繋がった。

『もしもしぃ……？』

電話に出たのはアザゼルではなく何故かロスヴァイセであった。気のせいか普段よりも気の抜けた喋り方をしている様に思える。

「ロスヴァイセさんですか……？」

『えっ？　あっ！　間薙君ですか……！』

電話向こうのロスヴァイセは、シンの声を聞いた瞬間に動揺する。

「アザゼル先生はどうしたんですか？　近くにいるんですか？」

『え、えーと、その、アザゼル教諭は、あの、電話に出られない状況でして……』

「何かあったんですか？」

『あ、あの……じょ、女性の方達と盛り上がっていまして……』

女遊びのせいで出られないという呆れる理由に力が抜ける。そもそも、ロスヴァイセはアザゼルのそういった行為をさせない為に探しに行った筈なのだが、何故一緒にいるのだろうか――理由を凡そ察せてしまうが。

「緊急の用件なのですぐに代わって下さい。今すぐに」

少しだけ語気を強めて言う。ロスヴァイセは若干押しに弱いところがあるので効果は覿面であった。
『わ、分かりました！　すぐに――』
「それと」
『はい？』
「アザゼル先生から強く勧められたからと言って、仕事中の酒の量は控えて下さい」
『ど、どどど、どうして、それを！　もしかして見ていたんですか！』
シンの鎌掛けにロスヴァイセは清々しい程に引っ掛かるのであった。

◇

アザゼルに起こったこと全てを話し途中で合流。事情を知らない桐生、元浜、松田に不審に思われない様に偶然という形で。
そのまま一旦ホテルに帰ることとなったが、問題となるのはケルベロスの存在である。見た目は首輪の効果で普通のシベリアンハスキーにしか見えないが、問題は見た目ではなくシンたちが泊まっているホテルはペット禁止となっているのだ。
それに関してもアザゼルが簡単に問題解決してくれた。ケルベロスの付けている首

輪をほんの少し調整することで、常人には不可視の状態になるよう設定にしてくれた。
試しに松田たちの前でケルベロスを横切らせてみたが、三人共気付くことは無かった。
そしてそのままホテルへと帰り、話し合う為に一誠とシンの部屋にリアスの眷属たちが全員集合する。
事情が事情なだけにソーナの眷属である匙、巡、由良、花戒、草下も集められていた。
「まさか、初日から襲撃を受けるなんて……」
「英雄派の連中も不粋だな……にしても京都側からも襲撃されるとは……」
アザゼルとロスヴァイセは眉間に皺を寄せている。
「初日から襲撃って……お前らとことんついてねぇな。京都に来たんだ、折角だしお祓いでもしてきたらどうだ？」
匙が呆れ半分心配半分の態度で厄払いを勧めて来る。その厄払いをする神社で襲われたのだからどうしようもない。
「京都の妖怪たちは多分誤解だと思うんですよ、俺から母上のニオイがするって言ってたし……」
「ドレ」
ケルベロスが一誠に鼻を寄せ、ニオイを嗅ぎ出す。

『グルル……確カニ雌狐ノニオイガスル……コノ辺リカラダ』
一誠の肩辺りから狐の少女が言っていた母上のニオイがすると指摘するケルベロス。
「やっぱり付けられていたな」
「くっそ……きっと俺たちと間薙を分断させる為にしたんだな……！」
まんまと策に嵌っていたことに怒りながら一誠は肩を手で擦り、少しでもニオイを落とそうとしていた。
「んで？　お前を襲ってきた英雄派の連中はどんな奴らだった？」
「ご丁寧に名乗ってくれましたよ」
「ほう？　そりゃあ大層な自信だな」
「曹操、ジークフリート、ヘラクレス、ジャンヌ。あと名前を知らないですけど眼鏡を掛けた男と子供が一人」
シンが上げた名を聞き、アザゼルは顔を顰める。同様の顔をゼノヴィアとイリナもしていた。
「曹操っていや英雄派を仕切っている奴じゃねぇか。それに他の面子も曹操の側近と言われている連中だ。……厄介な奴らに目を付けられたなー」
雰囲気からして大物だとは思っていたが、英雄派のリーダー自らが出向いてきたのは意外と言えば意外であった。

「多分、神滅具を持ってますよ」
　シンの発言に全員どよめく。アザゼルを除いて。
「まあそうなるな。神滅具の形は見たか？」
「すみません。神滅具の光が強過ぎて見えませんでした」
「気にすんな。神滅具を所有しているって分かっただけでも十分な情報だ。本当によく無事だったな」
　アザゼルは無事に生還したシンを寧ろ褒める。
「あの、間薙君。ちょっと聞いていい？」
　イリナが真剣な顔で尋ねてくる。
「貴方が言っていたジークフリートという人だけど、もう少し特徴を教えてくれない？」
「特徴……髪は白髪で腰に何本か帯剣していた。グラムという名の魔剣を使って来たな。バルムンクという魔剣も持っているらしい」
　ジークフリートの特徴を聞き、ゼノヴィアとイリナは顔を見合わせる。
「やはりそうか……」
「まさか、彼が教会を裏切っていたなんて……」
　二人にとってジークフリートは既知の存在らしい。
「二人はジークフリートを知っているのかい？」

木場が問うと二人は揃って頷く。

「その男は悪魔祓い――私とイリナの元同胞だ。『魔帝ジーク』と呼ばれカトリック、プロテスタント、正教会を含めてトップクラスの戦士だ。白髪なのは恐らくフリードと同じ育成機関の出だからだろう。あそこ出身の戦士は皆白髪だ。何かの実験の副作用と噂されているが……」

同じ育成機関出身故に名にも繋がりがあるのだろうかとシンは推測するが、白髪だけでなく容姿にも共通点が見られた。それだけの繋がりだけでは無い様な気がする。

「ジークさんが教会と天界を裏切っていたなんて……！　しかもよりにもよって『禍の団』に身を置くなんて万死に値しちゃう！」

御冠なイリナ。それに対してゼノヴィアは複雑そうな表情をしている。ジークフリートと似た様な立場な為、彼女にとっては耳の痛い話であった。

「グラムと言ったら魔帝剣グラムか……聖魔剣よりも凶悪な武器を持ってきてやがるな」

聖魔剣よりも、という言葉に木場の眉が僅かに動く。彼にとって聖魔剣はかつての仲間との絆を昇華させて生み出した禁手。それよりも強いというのは聞き捨てならない。また、『禍の団』には死んだと思っていたバルパーも関与している。木場は自覚しないまま鋭い雰囲気を纏い始めていた。

「間薙君」
剣？さを感じさせる表情で木場は間薙に問う。
「グラムの使い手は――ジークフリートは僕よりも強かったかい？」
真剣に問う姿に自然と室内は沈黙する。
「お前よりも強かった――」
シンの発言に皆がドキリとする。
「――と言ったら妬くか？」
と思いきや冗談へと切り替えるシン。シンの発言に一瞬キョトンとする木場だが、自分が肩に力が入り過ぎていることに気付いて苦笑する。
「君がそう言ったら妬いちゃうかもね」
通常の視点から見れば友人同士の軽口。だが、別視点から見ると――
「ほほう……？」
「おやおやぁ？」
「これはこれは……」
「副会長にも是非教えておかないと」
――ソーナの眷属たちが妙に愉し気な様子で二人のやり取りを見ていた。
「色んな意味で青春していないで話を戻すぞー」

アザゼルが手を叩いて皆の意識を向けさせる。
「んでだ一誠、京都の妖怪の中で『四鬼』と名乗っていた鬼たちが居たんだな」
「はい。最初に居た鬼三体なら多分禁手で行けるとは思うんですけど……最後に現れたオンギョウキっていう忍者みたいな鬼がとんでもなくて」
「忍者、みたいじゃねえな。そいつは忍者だ」
「へ？　知っているんですか？」
アザゼルの訂正に一誠は聞き返す。
「『四鬼』のオンギョウキって言ったらかなり有名だな、裏でだが。他勢力が京都に手を出さない理由の一つでもある」
「何者なんですか？」
鬼というのは見た目で分かるが、オンギョウキという個人名までは知らない。
「言っただろう？　忍者だよ忍者、本物のな。そんでもってとある仕事のプロフェッショナルだ」
「とある仕事？」
「――『暗殺』」
アザゼルが発した物騒な二文字に、室内の気温が一気に下がった様な気がした。
「あ、暗殺ですか？」

一誠は言い終えた後、人生で初めて暗殺という単語を言葉として使ったことに気が付いた。意味も知っているし、然程難しい言葉でも無い。使う機会が全く無い自分の人生に縁遠い言葉だとは思っていた――今日までは。
「諜報、潜入、そして暗殺がオンギョウキの仕事だ。――まあ、暗殺に関しては上が許可を出さないと流石にやれないみたいだがな」
「詳しいですね……」
「本人に直接聞いたからな」
『えっ！』
アザゼルの返答に何人かが口を揃えて驚いた。
「自分の処の恥を喋ることになるが……昔な、ウチの若い奴らが何を勘違いしたのか京都の奴らに喧嘩を売ったことがあってな……」
アザゼルは苦い表情をする。勝手な真似をするなと何度も言い聞かせてはいるものの、堕天使の中にはアザゼルたちの考えを取り違えて他勢力を襲うものが度々現れていた。質が悪いことに、野心があるというよりもアザゼルたちへの純粋な忠誠心から来る暴走であり、例を挙げるとすればレイナーレたちの様な者たちである。
「それでどうなったんですか？」
「事が大きくなる前にどうにかしようとはした。ただ、問題が大きくならないように京

都側に知られる前に終わらせようとしたんだが……それが不味かった」
京都側の協力を得ずに内密で進めようとした結果、堕天使たちの暴走を食い止めることが出来ず京都側の妖怪に犠牲者を出すという事態に発展。
事態を重く見たグリゴリは幹部を派遣して堕天使たちを全員拘束しようとしたが、その幹部が到着した時には、その堕天使たちは見計らった様に全員晒し首にされて幹部の前に並べられていたという。
「うへぇ……」
一誠は話を聞いて自分の首筋を触っていた。オンギョウキに首を絞められていた時の記憶が蘇る。思っていた以上にギリギリの状態であったのかもしれない。
「それでどうなったんですか?」
「この騒ぎは表向きには無かったことになっている。だけど、ちゃんと京都のお偉いさんとは話し合ったさ」
京都の犠牲者が一に対して堕天使側の犠牲者は四名。数的には堕天使の方が被害を被っているが、発端となったのは堕天使側で非はこちらにある。表向きは知らぬ存ぜぬという厚顔な態度を取りながら、裏ではアザゼル自ら出向いてきちんと詫びを入れていた。
「俺一人で京都に行って、京都を統べる連中と話し合って何とか穏便に済ませた、という

訳だ」
「一人で行ったんですか！　何て無茶な……」
「他の奴らもそんなこと言ってたなー。まあ、こっちの覚悟と誠意を見せておかなきゃ争いに発展するかもしれなかったしな。今思うとお前さんが言う通り無茶したもんだ。はっはっはっは」
　他人事の様に笑うアザゼルに、一誠他何名かが呆れた眼差しを向けていた。
「良く無事で済みましたね」
「向こうも争いごとは御免だったからな。話し合いで解決することが出来た。オンギョウキもその時に会った。流石に堕天使たちを殺した下手人が自分だって名乗った時は驚かされたがな」
「何でそんなことを……」
「今回の様なことは初めてじゃなかったらしい。以前にもはぐれ悪魔祓いやはぐれ悪魔が縄張りに入って来て好き勝手していたから裏で処分するってことが度々あったと言っていたな。だが今回やっちまったのは、はぐれじゃなく組織に属している堕天使だ。――まあ、堕天使も見方によればはぐれ天使みたいなもんだがな！」
　アザゼルの自虐的な発言に皆が『笑えない』という表情をする。滑ったことに気付いたが、特に気にする様子も無く話を続ける。

「だけど俺が出て来るってことになったから京都の方も事態を重く見ちまったのかもしれねえ。俺と京都側の思惑のすれ違いだな。場合によっちゃオンギョウキが自分の首を差し出して手打ちにするつもりだったのかもな」

物騒なことにも慣れつつある一誠らではあるが、理解するには難しい世界の話である。

「まあ、こんな経緯だが俺と京都側は顔見知りだ。もう一度きちんと確認を取っておく」

「あのー、部長にこのことを報告するべきでしょうか……？」

一誠がおずおずとアザゼルに訊く。

「まだ何が起こっているのか分からない。余計な心配を与えるな」

アザゼルがそう言って待つように言う。

「お前たちも巻き込んでおいて何だが、まだソーナには言うなよ？」

ソーナの眷属の匙たちにも口止めする。

「それは……」

匙はそれに対し不満――というよりも恐れている表情をしている。もしも、ソーナにばれた時に与えられるお仕置きのことを考えている様子であった。

「責任はちゃんと俺が持つから安心しておけ。事情を把握したらきちんと俺の方から話は通しておく」

　アザゼルにそう言われて匙は取り敢えず納得した。
「んで、そっちの問題だが……」
　アザゼルの目がケルベロスへ向けられる。彼を呼び出してしまった以上ピクシーたちも何かが京都で起こっているのは気付いている筈。ピクシー経由でリアスたちに告げられる危険があった。
「ケルベロスは家に居たから問題無いです。呼び出した後にピクシーとジャックフロストがガンガン呼び掛けて来ましたが……」
『ねえねえ、何があったの？』『ヒホ！　急にケルベロスが消えたんだホ！』『何かあったか教えてよー』『ヒホ！　言うんだホ！』『ねえねえ！　ねえねえ！』『ヒーホー！　ヒーホー！』という内容の声が頭の中で響き続けた時は流石のシンも頭を抱えそうになった。
「取り敢えず京都の土産を買って来ると伝えたら黙ってくれると言っていました」
「安いな、おい」
　アザゼルが簡単な口止めに半笑いになる。しかし、そちらの方でバレる心配は無くなった。どれだけの信頼性があるかは謎だが。
「さーて、話し合いはここまで。お前らーこの後は飯だ飯。豪勢で豪華な京料理が待ってるぞー」

空気を切り替え、あっという間に学校の先生の振る舞いに戻るアザゼル。緊張感を持つのも大事だが、ホテル内はせめてリラックスが出来る様にという考えからであった。

「――ああ、そうだ」

アザゼルが何かを思い出す。

「飯食った後、お前のことだから女湯覗きに行こうとするだろうけど鉄壁の防御陣形になっているから今回は諦めておけ」

一誠の顔を見て、さも当たり前の様に言う。

「……え？　い、いきなり何言ってんですか！」

「でも行くつもりだったんだろ？」

「そ、それは……！」

即答出来ないのが図星と言っている様なものである。当然のことながら女性らの視線が一誠に突き刺さる。

「女風呂への通路途中ではロスヴァイセが陣取っているし、それを突破しても途中で匙が見回りをしているし、ソーナのとこの女たちが女風呂前で見張っている。そして、お前にとっての最難関は――」

一誠の隣にいるシンへ目を向けられた。

「そいつの目を掻い潜って部屋を抜け出すことだな」

一誠は横目でシンを見る。シンも生徒会役員側の存在であり、いつも通りの感情を見抜けない目が一誠を見ていた。その目から逃れる術を思い付かず、一誠はこの場で断念してしまう。

「大人しくしています……」

そんな一誠を慰める様に木場が肩に手を置く。

「まあまあ。いつかの合宿の時みたいに僕と裸の付き合いをしよう。今度こそ背中を流すよ」

「止めろ！　何の慰めにもならねぇー！」

冗談を言う木場とそれを本気にして返す一誠を――

「ほうほう……」

「これはこれで……」

「悪くないわ……」

「副会長へのお土産話が増えるわー」

――生徒会のメンバーが生暖かい目で見ていた。

◇

食事を終え、友人との談笑と遊びを終え、風呂も入り終えた一誠は特にすることもなくベッドの上で仰向けになっていた。同室のシンはまだ部屋に戻っていない。

就寝時間までにはまだ時間はある。一誠は最早日課となっている歴代赤龍帝の残留思念との対話を行う為、目を閉じて意識を神器の中へと送り込んだ。

瞼を閉じて見える闇。すると、段々と瞼越しに白い光が見え始める。

一誠は瞼を開ける。ベッドの上で仰向けになっていた筈の一誠はいつの間にか立ち上がっており、ホテルの部屋ではなくテーブル席が置かれた白い空間に居た。

テーブル席には虚ろな表情をした老若男女が座っている。彼らこそ歴代赤龍帝の残留思念である。

「どーもー。俺でーす。今日も話を聞く為に来ましたー」

いつもの挨拶をする。全員ビクリとも反応しなかった。

ならば全員ではなく一人一人に話し掛けようと考え、誰に話すべきか座っている歴代赤龍帝の顔を見ていく。

その中で自分と近い歳の赤龍帝を見つけたので挨拶をしてみた。

「どうも、先輩！　後輩の赤龍帝です！」

やはり無反応であった。

『そいつは歴代の赤龍帝の中でお前と同じくらいの歳の赤龍帝だった。才能の方も恵ま

れていた。上から数えた方が早いぐらいだったな。禁手もそうだが覇龍に目覚めるのも早かった』

上からドライグの声が聞こえて来る。

「そりゃあ羨ましい……」

一誠は素質が無いと自覚しているので素直に羨望を抱く。

『――が、それ故に力に溺れた。早熟から来る油断のせいで他の神滅具所有者に簡単に葬られた』

「白龍皇じゃなくてか？」

一誠のイメージからして『覇龍』は対白龍皇の為のものだと思っていた。

『力に溺れれば白龍皇でなくとも『覇龍』で暴れる。『覇龍』の力は実際に破格のものだ。しかし、それは一時の力に過ぎない。歴代赤龍帝たちの何人かはそれで自滅していった』

その時の相棒である赤龍帝で自らの力によって破滅していく姿を間近で見ていたドライグはどんな気持ちであったのか、と一誠は考えてしまう。自業自得と割り切るのか、或いは惜別の感情を抱くのか。

『――昔は何とも思っていなかったが、今になってあいつらにはああいう良い所があったな、と思い出すことがある。今更感傷を抱くというのが我ながらおかしな話だ』

白い龍以外に興味を持てなかった自分がこの様な台詞を言う日が来たことにドライグは密かに自嘲する。長い間を掛けて少しずつ少しずつ丸くなり、一誠との出会いでそれがようやく表面化したのだろう。かつては唯我独尊で天使、堕天使、悪魔を振り回した自分が一誠という存在に色々と振り回されているのは中々笑える話であった。

『――いや、それでもやはり乳龍帝は笑えない……』

「急にどうした？」

センチメンタルな発言をしていたら突然の乳龍帝発言。聞いている一誠もドライグの心境に何が起こったのか心配になってしまう。

『……今言ったことは忘れてくれ』

「そう言うならそうするけど……それにしても『覇龍』か……」

ロキ戦で使用した時、その力は確かに絶大であった。才能の無い自分が悪神ロキに一矢報いる程である。ただ、そこにあの雷神トールの力も加わったことで、心身が燃え尽きてしまいそうになる代わりにロキを圧倒する力を得られたが。

「今思うと俺って凄いギリギリで戦ってたんだなー。『覇龍』だけじゃなく雷神様の力も使ってたんだし」

本人は知らないが実はギリギリではなく完全にアウトの状態であった。今は消滅してしまった歴代赤龍帝の残留思念の一つが自らを使い、辛うじて一誠をこちら側に踏み

止まらせたのだ。
「我、目覚めるは覇の理を神より奪いし二天龍なり、か」
　現状を考えれば当分唱えることの無い『覇龍』の詠唱を一節を読み上げる。
「どういう目的で『覇龍』なんてものが在るんだろうな？　それに無限と夢幻ってどういうことだ？　正直、さっぱり分からん」
　詠唱の意味について少し考えるが、一誠の頭では僅かな思考で理解不能という答えしか導き出しされなかった。
「無限はオーフィス。夢幻はグレートレッドを意味するのよ」
　白い空間内に一誠とドライグ以外の声が響く。声のする方を見ると波打つ金色の長髪にスリットの入ったドレスを着た若い女性が立っている。
「はーい。初めまして。ようやく顔を合わせることが出来たわね、ボク」
　他の歴代赤龍帝とは違い、女性は見て分かる通り感情と自我があった。
『相棒。彼女の名はエルシャ。歴代の中でも一、二を争うほど強かった赤龍帝だ。女性の赤龍帝では最強だな』
　最強という言葉に思わず目を丸くする一誠。目の前の美女とその言葉が中々結び付かない。
『まさか、お前の方から出て来るとはな』

「まあ、あの人のこともあったしね……。それとドライグ、勘違いしないで欲しいけど私とベルザードはその前から密かにこの子のこと応援していたんだから」
「ベルザード……？」
　知らない名が出て来る。
『エルシャと共に歴代最強の赤龍帝だ。掛け値なしに強かった。白龍皇を二度も倒した男だからな』
「二度も！　そりゃすげぇ……」
　一度きりの人生の中で二度も白龍皇と遭遇するというある種の不運。だが、それを撃破という形で突破したのだから尊敬の念を抱く。
「そのベルザードさんは……？」
「神器の奥に今も引っ込んでいるわ。段々と意識を失いつつあるしね……」
　エルシャが寂しそうに笑う。
「そんな彼でも今の赤龍帝君に興味を持ったんだから大したものね。勿論、私も興味深々だけどね」
「そ、そうですか？」
　最強二人に興味を持たれて照れる一誠。ふと、あることを思い出す。
「あの、さっき言っていたあの人って……もしかして消えたあの歴代赤龍帝の人のこと

ですか？」
　一誠はどうしても気になることがあった。
「もしかして、あの人が消えた原因って俺が『覇龍』を――」
「大丈夫」
　一誠を安心させる様にエルシャは微笑む。
「貴方が『覇龍』を使ったことは何一つ間違っていないわ。あの人が消えたのはあの人が望んだこと。それにね、あの人は救われたの」
「救われた？」
「貴方の行動によってあの人は救われた。この世にしがみつく未練を自分で断つ決心が出来たの。あの人は感謝していたわ、貴方に。そして、私やベルザードからも礼を言うわ。あの人の魂を解き放ってくれてありがとう」
「いや、そんな、俺は自分がするべきだって思ったことをやっただけです……」
　自覚が無いので謙遜してしまう。同時に寂寥感を覚える。魔人への怨念に満ちていたあの残留思念が本当に消えてしまったと分かったからだ。ちゃんと会話もせずに別れてしまったことに後悔を覚える。だが、最後は後悔無く消滅したと聞かされたのが一誠にとっての慰めになった。
「あ、そうだ。大事なことを言い忘れていた」

「大事なこと？」
「赤龍帝君。貴方、雷神トールの力を借りたでしょ？」
「借りましたね……」
「凄い神気の影響で赤龍帝のデリケートな部分というかまだ未知の部分とかがちょっと危ないぐらい緩まっている状態なの」
「え？　えええええっ！」
　あっけらかんと言われてしまったせいで言葉の意識を理解するのに少し遅れてしまう。
「だ、大丈夫なんですかそれ！」
「さあ？」
「さあって……」
「ごめんなさいね。私にとっても未知の部分だし、それに貴方って『悪魔の駒』も入れてあるじゃない？　そういう要素が重なって起こったことだから私もベルザードも把握出来ないの」
　歴代赤龍帝、それも最強の二人から助言を貰えないことに不安を覚える一誠。そんな彼を元気付ける様にエルシャは快活な笑みを見せる。
「大丈夫、大丈夫。おっぱいドラゴンの貴方なら大丈夫だって」

『ぶうううっ！』

ドライグの吹き出す声が聞こえた。エルシャはそれを聞いて笑い出す。

「ふふふふふ。おっぱいドラゴンに乳龍帝！　面白い名前が増えたわねー！　勿論、テレビも見てたわよ！　私もベルザードも一緒に見て大笑いしたわ！」

「えーと……お恥ずかしい……」

『止めろ……その名を出さないでくれぇ……』

一誠は恥ずかしがり、ドライグは落ち込んで死にそうな声を出している。

「恥ずかしがらないで。ドライグも落ち込まない！　私たちは心から楽しんだわ！　だから、ドライグも楽しみなさい！」

『いやあ、それは……』

素直に受け止めることが出来ずドライグの歯切れが悪い。

「いいじゃない。皆に愛されるドラゴンなんて。私たちじゃ貴方をそんな存在にすることなんて出来なかった。だからこそ、今の赤龍帝君を面白いと思っているの」

『むう……』

笑いながらもそう言われるとドライグも反応に困ってしまう。

「頑張ってね、ボク。不安はあるだろうけど一歩一歩進んで行きなさい。まあ、まともな最期じゃなかった私たちがアドバイスをしても不安だろうし、私たちのことはせいぜい

反面教師にしておきなさい。もう赤龍帝と白龍皇がバチバチとやり合う時代じゃないしね」

エルシャの言葉を聞いていると白い空間が薄れていく。一誠の意識が浮上している表れである。

「あ、そうだ。何か神器の中に変な力も溜まっているって言うの忘れてた」

覚醒間際にエルシャがとんでもないことを言い出す。

「このタイミングで！　変な力って何ですかー！」

「悪い力じゃないんだけどー。何というかいやらしい感じの――」

その瞬間、一誠の意識が完全に覚醒する。

「いやらしい力って何ですかっ！」

現実と神器内のことが混迷してしまい、叫びながら起き上がる一誠。

「……いきなり何を言い出すんだ？」

「グルル……ツイニイカレタカ？」

いつの間にか部屋に戻っていたシンとケルベロスが起き掛けの一誠に白い目で見ている。

「いや、変な意味では――」

どう説明するべきか考えながら取り敢えず話し出す一誠だったが、ドアをノックする

音でそれも中断される。
「おーい。いるかー」
　ノックの主はアザゼルであった。
「鍵は開いていますよ」
「不用心だなぁ。夜這いでも期待してんのか？」
　アザゼルが冗談を言いながら入って来る。
「アザゼル先生、何かあったんですか？」
「ああ。俺とお前たちに呼び出しが掛かった。近くの料亭に来ているそうだ」
「誰がですか？」
「魔王少女様だよ」
　セラフォルー・レヴィアタンの名前が出された瞬間、ケルベロスが『ゲッ』と思っているのが犬の表情でも分かる程顔を顰める。
「オレハ関係ナイ」
「すまんなー。お前も居るって言うのを伝えたら是非来いとよ」
　ケルベロスは一言も発しなかったが、尻尾の方は力無く丸まっていた。心底苦手意識を持っているのが伝わってくる。
「グルル……」

お決まりの唸り声がこの時ばかりは子犬の様に聞こえた。

◇

本来ならば外出禁止時間なので、アザゼル案内の下密かにホテルを抜け出すリアス眷属にイリナとシン、ケルベロス。

着いた場所は『大楽』という料亭。そこの個室に案内されると着物姿のセラフォルーとソーナの眷属たちが既に座っていた。

「ハーロー！　リアスちゃんの眷属の皆、久しぶりね☆」

出会った時から何一つ変わっていないテンションの高さ。それのせいで久しぶりに会うが久しぶりの様な気がしない。

既に机の上には一誠たちの分の料理が置かれているが、彼らを持て成す為にセラフォルーは追加で人生一度言うかどうかも分からない長々とした名の料理を次々と注文していく。ついでに一誠や匙は注文された品の横に書かれている値段に驚愕していた。

「ここのお料理、とっても美味しいの。特に鶏料理は絶品なのよ☆　赤龍帝ちゃんたちも匙君たちも一杯食べてね。それと――」

セラフォルーはケルベロスを見つけてニッコリと笑う。

「ケル君！　こっちおいでー！」
ケルベロスはここに来た時点で腹を括っていたらしく、セラフォルーに言われるがまま彼女の傍に移動し、近付いた途端捕食生物の如くセラフォルーの両腕で抱き締められる。
「相変わらずふかふかー！」
ケルベロスの体毛に頬擦りをするセラフォルー。ケルベロスはされるがままであった。
セラフォルーとケルベロスの戯れを見ながら取り敢えず皆食事を始める。夕飯が近かったが料理の味と悪魔の体質故、全員箸を止めることなく食していく。
アザゼルは京都側とコンタクトを取ると同時に悪魔側にも今回の件について報告していた。そして、悪魔側は外交担当であるセラフォルーが出向くこととなった。
京都の妖怪たちと『禍の団』に襲われて数時間しか経っていない。アザゼルも悪魔側も行動が早い。
セラフォルーが箸を置き、少し真剣な表情となる。
「『禍の団』のこともあるから京都の妖怪さんたちと協力体勢を結びたいんだけど、どうにも向こうも大変なことになっているみたいなの」
「大変なこと？」

「聞いた話じゃ、この地を束ねていた九尾の御大将が先日から行方不明なんだと。十中八九『禍の団』の仕業だな」
セラフォルーの代わりにアザゼルが説明する。
「じゃあ、あの子は九尾の娘さんなのか……」
母親を拉致されたのだ、道理で必死な訳である。
「赤龍帝ちゃんが言っていた子が暫定的に今の妖怪さんたちのトップなんだけど、まだ若い子だから色々と苦労しているみたいなの」
セラフォルーが言うに今の京都の妖怪たちは上手く統率が取れておらず、現状を静観する者や疑わしい存在を襲おうとしている者たちがいるらしい。
九尾の娘自体が後者な為、上手く接触する方法を探している。
「本当にどうしようか悩んでいるのよねー」
「案外簡単かもしれねぇぞ」
簡単そうに言うアザゼルをセラフォルーは半眼で見る。
「もう、アザゼルちゃんたら無責任なこと言うー」
「いやいや、マジで言っているんだって。考えてみろよ？　堕天使と悪魔のトップが二人もここに居るんだぜ？　京都の妖怪連中も気になって気になって仕方ねぇ筈だ。自分たちの今後に関わるからな」

気付けば全員箸を止めてアザゼルの話を聞いている。
「俺だったら探りを入れるな。何せ京都の妖怪の中には本物の忍者もいる」
「え！　忍者！　本物の！」
魔法少女に憧れる魔王少女が目を輝かせる。
「もしかしたら、今も何処かで見張っているかもな。おーい、オンギョウキー……何てな」
アザゼルは冗談の後――
「呼んだか？」
聞こえる筈の無い声が聞こえた。全員の視線が天井に向けられる。
いつ間にそこに居たのだろうか。天井にはオンギョウキが張り付いている。
驚きのあまり誰一人声を発することが出来ない中、もう一度オンギョウキは言う。
「呼んだか？」
「えーと、あー、うん……取り敢えずそこから下りてくれ」
不意打ち過ぎるオンギョウキの登場に、アザゼルはそう言うしかなかった。

挑戦、相談

「待て！　待ってくれ！　曹操！」

これからのことで準備を進めていた曹操は急に呼び止められて足を止める。その隣に居たジークフリートも止まり、呼び止めた相手を訝しげに見ていた。

「君は――」

「頼む！　今度の！　今度の赤龍帝の戦いに俺も参加させてくれ！」

二人が止まると同時にその人物は地に伏せ、二人を見上げる。

嘗て駒王町を襲撃した『禍の団』の刺客であるサングラスの男。神器『闇夜の大盾（ナイト・リフレクション）』の所有者であり唯一生き残った者でもある。

「無理や無礼であることは承知している！　だが、どうしても俺は赤龍帝と戦いたいんだ！」

そう言って額を地面に叩き付ける勢いで頭を下げた。

英雄派内部には明確な上下関係は存在しない。曹操がリーダーであることは間違い無い。ジークフリートたちも幹部として扱われているが、それは周りの者たちが勝手に祭り上げているに等しい。なので他の英雄派は曹操たちに敬称を付けたり、敬語で接し

たりするのかまちまちであった。
　ただ唯一分かっているのは曹操と彼が連れているメンバーは他の英雄派と比べて一線を画す実力者であること。そして、英雄派の中で一、二の実力を持つ曹操とジークフリートに直談判することは命知らずの行為に等しい。場合によっては追放、もしくは殺されても文句は言えないとサングラスの男は考えていた。
　しかし、だからこそサングラスの男は命懸けで頼む。
「君には別の任務があった筈だが？」
　今、曹操がどんな顔をしているのかサングラスの男には見えない。だが、その声を聴くだけで全身が冷や汗で濡れ、ガタガタと震えそうになる。
「分かっている！　それは分かっている！　けど、俺はどうしても赤龍帝と戦いたいんだ！」
　震える口で舌を噛まずに言い切れたのが奇跡に思えた。そして、言い切ってしまった。リーダーである曹操の指示を拒否して、我儘を言ってしまった。
　最早、後戻りは出来ない。
「頼む……！」
　暫く続く沈黙。このままジークフリートの魔剣で首を落とされてもおかしくはない。
「――顔を上げなよ」

サングラスの男は下げていた頭を上げる。極度の緊張のせいで筋肉が強張り、上げるのにも一苦労であった。

見上げた先、曹操とジークフリートの顔。気分を害した様子は無く、寧ろ微笑すら浮かべている。

「まずは立つんだ。これじゃ話しにくい」

曹操はサングラスの男の肩を叩いて立つように促す。サングラスの男は恐る恐る立ち上がるが膝が震えている。

二人の目線が同じ高さになった時、曹操は話の続きを問う。

「どうしてそこまで赤龍帝に拘るんだ?」

曹操が理由を訊いてくる。

「お、俺にとってあいつは、超えるべき存在、いや超えなければならない存在なんだ……!」

彼の人生は負け犬の様な人生であった。望まぬ神器のせいで疎まれ、迫害され自分がこの世のカスであると信じ込まされた人生。

その中でそれを払拭してくれる光と出会い、負け犬の人生からやっと人の人生を得られた。その絶頂を砕いたのが赤龍帝であった。

「俺は奴に負けた……言い訳出来ないぐらいにボコボコにだ。今でも俺の中に悔しさ

と、そ、それ以上の恐怖が残っている……だからこそ、戦わなきゃならないんだ！　ここで戦わなければ俺はずっと負け犬のままなんだ！」

心に負った傷を消し去るにはその原因を取り除くこと。サングラスの男にとってそれは赤龍帝と戦い、勝つという困難を極めるものであった。

傍から聞けばただの無謀。自殺願望、死にたがりと思われても仕方がない。しかし、サングラスの男の覚悟を聞いた曹操は笑みを深くしていた。

「いいな、その想い。人間、そうでなくちゃ。ましてや神器使いとなればそのぐらいの心意気がある方が良い！」

サングラスの男を讃える曹操。その表情に？偽りは無く、心の底から称賛の言葉を送っていた。しかし、称賛し終えた後『ただし――』という言葉を付け加える。

「俺の記憶が確かならば、君はまだ禁手に至っていない筈だ。赤龍帝と戦うなら最低でもそこに至っていないと話にならない」

「――それについては問題無い」

「へえ」

サングラスの男の言葉を理解し、曹操は感心の声を上げ、ジークフリートも軽く驚いている。

「赤龍帝への屈辱が俺を次の領域に至らせてくれた」

サングラスの男もまた禁手の領域へ足を踏み入れていた。英雄派は多数の神器使いが所属しているが、禁手に至っている者は少ない。この情報は曹操らにとっては嬉しい誤算と言える。
「成程。直談判してくるだけのことはある。だけど、禁手に至ってもやっとスタートラインだ。赤龍帝は強いぞ？」
「百も承知だ。勝てる勝算は少ない……！　だが、ただでは負けない……！　負けるにしても手足の一本は貰っていく！　俺が勝てなくとも、曹操お前が――」
「待った」
サングラスの男の言葉を曹操は遮る。
「言っておくが自分が負けても俺に夢を託せる、や俺の野望の踏み台になれるなら本望、とか言わないでくれよ？　言った瞬間俺は君を見限る」
まさに言おうとしていたことを咎められ、サングラスの男は焦った表情に変わる。その顔を見て曹操は苦笑する。
「その気持ち自体は素直に嬉しいとは思う。だが、よく考えてみてくれ。俺の夢や野望は本当に君の夢と野望なのか？　例え、俺の夢が叶ったとしてそこから見える景色は君が望む光景なのか？」
曹操が見る夢とサングラスの男が見る夢は違う。曹操に救われた彼は曹操の為に己

を捧げようとしていたが、曹操本人から止められ戸惑う。
「お、俺はどう足掻いても曹操やジークフリートたちの様にはなれない……。お前に英雄派へ導かれた時から俺はお前の為なら死ねると思った……。俺みたいな地面を這いつくばるだけの奴の夢なんて……」
「ダメだなー、それじゃあダメだ。高尚な夢だろうと卑小な夢だろうと関係無い。必要なのは本気で叶えようと本人が想うことだ。君も神器使いなら分かるだろう？　神器の強さと本人の想いの強さは繋がっていることに」
　サングラスの男はおずおずと首を縦に振る。
「ここで散っても託したあいつが自分の夢を叶えてくれる？　確かにそれはそれで美談だ。だが、見方を変えればその時点で心が折れた、諦めたと同じだ。俺が英雄派の仲間たちに望むことは強さじゃない。最後の最後まで諦めないことだ。心折れた神器は弱くなる。しかし、心を強く持ち続ける限り神器は強くなる。俺はそれを人の可能性だと思っている」
　曹操の言葉を聞き入っていたサングラスの男。すると、曹操は少しだけ照れ臭そうな表情をする。
「――と長々と語ったが、実際のところはもっとシンプルな話さ。……俺は仲間に死んで欲しくない、それだけだ」

サングラスの男は呆けた表情をした後、何かを堪える様に強く拳を握る。
「……俺は必ず赤龍帝を倒す……！」
「いい決意だ。分かった。赤龍帝は君に任せた。準備が出来たら連絡を入れる」
「ああ……！」
サングラスの男は足早にこの場を去って行く。残された時間全てを神器の扱いに費やす為であった。
「相変わらず人をやる気にさせるのが上手だね、曹操は」
「本心を言っただけさ」
揶揄う様に言うジークフリートに曹操は心外だと言わんばかりに返す。
「だが、さっきの彼のことは羨ましくも思うし眩しくも思える。僕にはそこまで命懸けになれる目標が無いからね」
ジークフリートは自嘲する。
「教会を抜けた時点で僕の人生の目的はほぼ達成されたものだからね。新しい目標を見つけるとなると中々難しい」
「そういうものだ。焦る必要は無いさ、ジーク」
曹操はジークフリートを敢えて本名で呼ぶ。英雄の血を引く者ではなくジークという個人に話し掛けている意味を示していた。

「取り敢えずはそれで納得しておくよ。――なら、ここは彼を見倣って僕も少し我儘を言ってみようかな？」
「興味深い。聞かせて貰えるか？」
「聖魔剣の木場祐斗、デュランダルのゼノヴィア、天使長ミカエルのA紫藤イリナ。この三人と戦ってみたい」
「三人か……中々強欲だな」
「こういう風に我儘を言うのは初めてなんだ。加減が分からない。これでも遠慮はしているんだよ？　途中で止めたオンギョウキや人修羅の間薙シンを入れてないんだから」
ジークフリートは肩を竦めながら小さく笑う。
「でも、三対一となると流石に――」
「問題ないさ。僕が勝つよ」
言い切ってみせるジークフリートに曹操は不敵な笑みを浮かべる。
「それでこそだ」

◇

料亭『大楽』のとある個室。そこでは重苦しい沈黙が流れ続けていた。部屋の隅で全

員が視界に入る様にして立つ漆黒の鬼――オンギョウキ。二メートルを超える長身が見下ろしてくる圧迫感は尋常ではなく、また事前にオンギョウキが暗殺のプロフェッショナルと聞かされているせいで気を抜くことすら出来ない。

事実、この部屋に居る全員に気付かれることなく天井に張り付いていたのだから。

「……座ったらどうだ？」

天井から下りたのはいいが、立ったまま部屋の隅にいるオンギョウキを見かねてアザゼルが声を掛ける。

「結構。私は食事をしに来た訳では無い」

「でも。話す事はあるんだろう？　でなきゃ馬鹿正直に返事して姿を見せる筈がねぇ」

「そうそう☆　ここは一緒に食事でもしながら会話でもしましょ☆　ここの鶏料理は絶品なのよ☆」

アザゼルに続いてセラフォルーも勧めてくる。

「誠に申し訳ない。貴方方が今回の八坂様の誘拐に関わっていないことは間違いないであろう。気を使ってくれているのだろうが、私は他人からの飲食物を受け付けない習性なのだ」

「お、おお……何か忍者っぽい……」

オンギョウキの断り方に一誠はそんな感想を洩らす。

「凄い！　本物のジャパニーズニンジャに出会えるなんて☆　後でサインをしてくれる☆」

セラフォルーが興奮で目を輝かせ、オンギョウキにサインを頼む。予想とは違う反応なのかオンギョウキは表向き動揺していないが黙ったままというのが内心を露わにしていた。

「しかし、これが本物の忍者か……！　忍者といえば日本一強い戦士の称号なのだろう、木場！」

「え、ええ……？」

ゼノヴィアの発言に木場は困惑し――

「違うわよ、ゼノヴィア。忍者は日本の陰の歴史を支配していた人たちのことよ！」

それをイリナが間違った知識で否定し――

「忍者というと各国の裏社会で暗躍している人たちのことを指すと聞きましたが……」

アーシアが偏った知識を引っ張り出し――

「北欧に居た頃に聞きました。忍者の使う忍術は魔法を超える代物だと」

ロスヴァイセは、ことオンギョウキに於いてはあながち的外れではないことを言う。

「……」

各々の忍者に対する偏った、間違った知識にオンギョウキは否定するよりも先に閉口

してしまう。
「……まあ、用心深いのは結構だが、うちはこういう感じな所もあるからそう肩に力を入れなくてもいいぞ？」
アザゼルの言葉にオンギョウキは軽く溜息を吐く。呆れているという訳では無く、無駄に張っていた力を抜けさせている様に見える。
「――かもしれないな」
オンギョウキの方がほんの少しだけ歩み寄ってくれたのを感じられた。
「今回の件、間違いなく『禍の団』が関わっているだろうが、何があったのか教えてくれねぇか？」
「――ああ。勘違いとはいえ我らはお前たちを襲撃してしまった。お前たちには知る権利がある」
事の発端は数日前のこと。九尾の狐であり京都の妖怪たちを取り仕切るボス――八坂が須弥山の帝釈天から遣わされた使者との会談の時に起こった。
八坂とオンギョウキを含む護衛の妖怪たちが使者を待っていた時、突如として襲撃された。
襲撃者の数はたったの三人だが、三人とも手練れであり他の者たちでは犠牲が出ると判断したオンギョウキが自ら襲撃者たちの相手を買って出て足止めをしようとしたと

言う。
「……だがそれがそもそもの間違いだった。足止めをされたのは……私の方だ」
　三人の襲撃者をたった一人で相手にしていたが、その時に傷だらけの姿で戻ってきた警護の烏天狗によって八坂が攫われたことを知ると、それに合わせて三人の襲撃者は退いたのを見て自分の方が嵌められたことを理解した。
「警護の者が言うに全ては一瞬のことだったらしい。突然霧が満ちると八坂様の姿が消え、霧の中から放たれた術によって警護の者たちはやられてしまった」
　不可思議な霧となると思い付くのは一つしかない。
「その霧は『絶霧』だな。――ったく英雄派ってのは人材だけは豊富だな」
　アザゼルは頭を掻きながら皮肉を言う。
「『絶霧』というとあの『絶霧』か？」
「そうだ。神滅具の中でも上位クラスに入っている神滅具だ」
『絶霧』という神滅具は一誠たちにとっても縁のある神滅具である。三勢力の会談の時に周囲の空間から切り離され謎の怪物を送られたり、最近ではアーシアとギリメカラが『絶霧』の所有者であるゲオルクと必死の逃走劇を行っていた。
「……どうりで京都中を駆けずり回っても奴らの根城や痕跡を見つけられない筈だ」
「『絶霧』の能力は結界や転送能力だけじゃない。禁手になれば所有者の想像通りの結界

を生み出すことが出来る」
『絶霧』の禁手を使えばオンギョウキですら探知出来ない結界による拠点を自由自在に創造することが出来る。こっちが必死になって探し回っている間に英雄派の者たちは悠々自適に準備を進めることが出来るという訳である。
シンも現実と結界の区別がつかない内に英雄派によって隔離された。英雄派との戦いでは間違いなく『絶霧』のゲオルクが出て来ると考えられる。
神滅具所有者が一人でも居るだけで頭が痛くなってくるが、事前に知っておいただけ今のうちに覚悟が出来ると割り切りオンギョウキから他の情報も訊く。
襲撃してきた三人はオンギョウキの話とシンの話を合わせてヘラクレス、ジャンヌ、ジークフリートであるのは間違いない。
ヘラクレスは爆発を生じさせる神器。ジャンヌは神器『聖剣創造』。そして、ジークフリートは多数の魔剣を所持しているのが分かっている。
だが、オンギョウキはジークフリートに関して更なる情報を齎す。
「――奴の体は尋常では無かった。奴の体は我が刃を通さぬ程であった」
「ああ？　何だそりゃあ？　ジークフリートの名前通りにドラゴンみたいな皮膚になる神器でも持ってんのか？　お前ら何か知っているか？」
教会時代のジークフリートを知っているゼノヴィアとイリナに尋ねてみるが二人は

揃って首を横に振った。
「悪いが聞いたことが無いな」
「そもそもジークさんが任務で神器を使ったとか怪我を負ったっていう話すら無いのよね」
　二人の話を聞く限り悪魔祓いの時から逸脱した存在であるらしい。
「なら『禍の団』に寝返った時にその力を手に入れたのか？　……まあ、考えるのは後にするか」
　情報が足りない状況であれこれ考えても所詮は憶測に過ぎない。一先ず置いておいて話の続きを聞く。
「確かにそのジークフリートは強敵であった。ヘラクレスとジャンヌと比べても頭一つ抜けている実力者だ。かく言う私も奴に手傷を負わされてしまった」
「傷を？　大丈夫なのかよ」
「傷自体はそう深くは無い。しかし、斬られた武器が聖剣――エクスカリバーだったせいで治りが非常に遅い」
　エクスカリバー。その名を聞いた瞬間に全員が目を剥くが特に木場、ゼノヴィア、イリナの反応は顕著であった。
「馬鹿な！　エクスカリバーだって！」

「そんな筈は無い！　イリナとアーサーが所持しているエクスカリバー以外は教会が保管している！」
「そうよ！　そうよ！　絶対に偽物よ！」
ゼノヴィアが言う様に現状所持されているエクスカリバーはイリナの『擬態の聖剣』とアーサーの『支配の聖剣』のみ。残りの五本は教会と天界の監視の下、厳重に保管されている。八本目のエクスカリバーなどあってはならない・
「本当にエクスカリバーだったんですか！　見間違いか勘違いだったんじゃないんですか！」
「おい、木場！」
身を乗り出してオンギョウキに詰問しようとしているので一誠が思わず窘める。一誠に注意されて正気に戻った木場は、未熟さから我を忘れてしまった己に羞恥を感じて顔を赤く染めた後、気不味そうにオンギョウキの方を見る。
「すみません……失礼なことを言ってしまって」
「構わない。誰にでも我を忘れてしまうモノが在る。お前にとってそれがエクスカリバーであった、というに過ぎない」
暗殺のプロフェッショナルと称された人物もとい鬼とは思えない程の人格者。古風な雰囲気に見合ったいぶし銀である。

「奴が持っていたエクスカリバーが本物か偽物かは私にも分からん。が、少なくとも聖剣であることは間違いない。傷の具合からしてな。腹立たしい話ではあるが新しいエクスカリバーの試し斬りにされた」
　新しいエクスカリバー。その言葉を聞いて嫌でもとある人物を思い出す。『禍の団』でエクスカリバーを生み出せる程の知識と技術を持つ人物は一人しか該当しない。
「バルパー・ガリレイ……！」
「間違いなく奴が絡んでいるな。まさか、独自にエクスカリバーを創り上げるとは……」
　木場は怨敵の名を拳を握り締めながら吐き捨て、ゼノヴィアも不愉快そうに眉間に皺を寄せている。
「オンギョウキさん。聞いてもいいかしら？　そのエクスカリバーにはどんな能力があったの？」
　七本のエクスカリバーはそれぞれ固有の能力を有している。ジークフリートの持つ新たなエクスカリバーにも同じ様に固有能力が在るかもしれないと考え、イリナは質問した。
「……能力かどうかは分からんが、不可思議なことがあった」
「それってどんなことですか？」
「ジークフリートとの戦いの最中、私は確かにその新しいエクスカリバーを折った」

『えっ！』

思いも寄らない情報に皆が口を揃えて驚く。

「しかし、次の瞬間には何事もなかったかの様に折られる前のエクスカリバーが握られており、それに不覚をとってしまった……情けない話だ」

「自動修復する能力なのか……？　いや、わざわざエクスカリバーを創っておいて折れる前提の能力を与えるものか？」

アザゼルは技術者目線で新たなエクスカリバーに疑問を抱く。そのままブツブツと小声で独自の考察を呟いていたが、ハッとした表情になって呟くのを止める。没頭しそうになる前に踏み止まった様子であった。

オンギョウキの襲撃時の話も終わり、英雄派に関しての情報も現段階で得られる分は得た。

そして、本題はここからである。

「お前んとこの今の大将と俺らが話し合うことは出来るのか？　っていうかそれをする為に来たんだろ？」

「如何にも」

「でも大丈夫？　京都の妖怪さんたちすっごい怒っているみたいだし？」

「九重様の心は非常に不安定な状態なのだ。慕う母を奪われ、大将という肩書きの重圧

を乗せられ」
「その九重ってのは八坂の娘なんだよな？」
「そうだ」
　オンギョウキの赤い目が細まる。
「お前さんでも止められなかったのか？　京都の妖怪の中じゃかなりの実力者だろ？　お前は」
「腕を買ってくれることは有り難いが見込み違いだ。私を含む『四鬼』は全員流れ者。八坂様の温情によって京に住まわせて貰っている立場。影に生きることが我々の定めよ」
　古来から京に住む鬼ではなく外から来て居付いた鬼の集団が『四鬼』である。その事に感謝し居候という立場を弁えて影から支えることを徹している。
「――その割にはお前以外の鬼は積極的にイッセーたちと戦っているじゃねぇか。聞く限りじゃお前以外の三鬼は忍者っぽくねぇし」
「……言うな。あれでもましになった方だ」
　オンギョウキの方もスイキ、キンキ、フウキに手を焼いている様子。
　最初に京都の妖怪らに召し抱えられたのはオンギョウキであり、残りの三鬼はオンギョウキと同じく仕える為――ではなく力で京都を牛耳る為に来たのだ。
　物事を力で押し切ろうとする乱暴者。相手が誰であろうと逆らう跳ねっかえり。強

いくせに平然と媚びた態度で油断させ不意を衝く卑怯者という連中であり、当然のことながら京都の妖怪たちも手を焼くこととなった。

そこで出て来たのがオンギョウキであり、逆らう気が失せる程徹底的に叩きのめした結果、三鬼はオンギョウキの強さに惚れ込んで彼の部下となり今日まで呼ばれることとなる『四鬼』となったのだ。

「でも、あの場で九重って子を退かせたのはオンギョウキ――さんの判断ですよね？あのまま戦っていたら交渉の余地がなくなるかもしれないって思ったんじゃないですか？」

一誠はオンギョウキが乱入して来たことを思い出す。絶体絶命的な状況かと思いきやオンギョウキの言葉で九重を動かし全員を退却させた。

「……今でも出過ぎた真似だとは思っている。影に徹するべき私が九重様に進言するなど身分違いだ。そもそも私は九重様にそんなことが出来る様な資格など無いというのに」

オンギョウキは変わらず能面の様な顔をしているが、その顔に暗い陰が射した様に見えた。

「私は八坂様を守れなかった。九重様から母親を奪ってしまった無能者だというのに……」

皆がオンギョウキの負い目を強く感じた。九重も妖怪であるからして見た目通りの年齢では無いかもしれないが言動からして親離れはまだ早く感じた。
ある日突然親がいなくなる。それがどれほどの不安かは全く分からない訳では無い。ただ、今回の場合はその不安を紛らわせる方法が良からぬ方に作用してしまった。
「――しかし、今は一刻も早く八坂様を探さなければならない。その為には京都の妖怪たちの意思を統一させ、敵を『禍の団』と定め、悪魔とも協力するべきなのだ」
立場は重んじるべきだがそれに固執して真に大事なことをないがしろにするなど言語道断。
「九重様との会合の場は私が責任を以って設ける。先ずはレヴィアタン殿に九重様と会ってもらい今回の件について誤解を解いてもらいたい」
「ま、妥当だな。いくら悪魔を敵と勘違いしていても四大魔王のセラフォルーが出て来るのなら向こうも耳を貸すだろう」
「うん☆　頑張っちゃうわ☆」
セラフォルーはいつも通りの笑顔で応じる。
「んじゃ、俺も話し合いが終わるまで独自で動いてみるか。もしかしたら英雄派の連中が釣れるかもしれねぇしな」
アザゼルもやる事を決め、注がれていた酒を呷る。

「あ、あの、俺たちは……？」
アザゼル、セラフォルーのするべきことが決まったのなら、自然と自分たちも何かをするべきだと思いアザゼルに尋ねる。
「お前たちがすることは決まっている……旅行を楽しめ」
あっさりと言われた言葉に全員拍子抜けした表情となる。
「何かあったら、その時は呼ぶ。でも、それまでは修学旅行を楽しんで来い。お前らガキにとっちゃ二度とない貴重なもんだ。面倒くさいことや詰まらんことは俺たち大人に任せておけ」
「そうよ。皆は今は修学旅行を楽しんじゃってね☆　私もお仕事終わったら楽しんじゃうから☆」
「あー、早く終わらせないとな。酒と舞妓が恋しいぜ」
年長者にそう言われてしまうと一誠たちもどうしようもない。何かせねばとは思ってしまうが、現状の一誠たちは京都に於いて伝手も何も無い世間知らずの学生たちに過ぎない。下手に行動すれば逆に迷惑を掛けてしまうかもしれない。
「……ちゃんと呼んでくださいね？」
「分かってる、分かってるって。お前もそれで――」
いいか？　とオンギョウキに声を掛けるアザゼルであったが、肝心のオンギョウキの

姿は既に消えていた。
「っていねぇ。色々と早過ぎだろ……」
音も気配も無く現れたかと思えば、今度は逆に消えてみせた。アザゼルは行動の早さに呆れた様な表情をしていた。何も言わずに去ったということは、アザゼルたちのやり方にオンギョウキは文句無しであると判断する。
「まあ、いいか。ほれ、お前ら食べろ食べろ。まだ料理は残ってるぞ」
「そうそう☆　美味しい料理を食べて明日も頑張っちゃいましょう☆」
アザゼルとセラフォルーに勧められて料理に箸を伸ばす。まだ料理は冷めていない。長い時間が経った様な感覚だったが、実際は僅かな時間の出来事だったのが分かる。
アザゼルたちの言葉に取り敢えずは納得してみるものの内心ではいつでも戦える様に心構えておく。
リアスは京都の町並みや文化を好んでいる。好きな女性の好きなものを守る為に一誠は静かに決意を抱いていた。

◇

早朝。暗い空が白け始める頃、ホテル屋上にて風を切る音が響いていた。

風切り音を鳴らすのは一誠の突き出した拳。突き出された拳の先にはシンが立っている。

そのまま一誠の拳がシンへと命中――する寸前に拳が寸止めされ、シンの前髪を僅かに揺らす。

「ああ！　くそっ！　全敗かよ！」

拳を離して一誠は悔しそうに叫んだ。そんな彼の様子を少し離れた場所でアーシアがオロオロと見ている。

一誠とシンがやっているのはゲーム形式でやる反射神経のトレーニングであった。

ルールは簡単。相手の顔に拳を繰り出してそれが寸止めか、そうじゃないかを判断するもの。十発放つ内あらかじめ何発本気で打つかを第三者――この場合はアーシア――に伝え、それを見極める。

このルールでシンと勝負した一誠は、見事にシンに全部見切られてしまった。

「次はこちらの番だな」

涼しい顔で宣言するシンに一誠は唾を呑み込む。シンの拳の痛みは身を以って知っているので是が非でも全て回避しなければならない。

（ああ、やだなぁ……）

自分から言い出した特訓であるがいざ自分の番に回って来ると憂鬱な気持ちになる。

何故なら一誠はこの特訓でシンに勝ったことが無い。
どれもこれも全部本気で殴るどころか殺ろうとしている様に見えて生きた心地がしない。
やるからには勝つ、という気持ちは勿論あるがどうせ負けてしまうという気持ちがそれと同等以上あった。アーシアが見ている前で負けるのは嫌だが、それでも根付いたものは中々払拭出来ない。
「一つ訊いていいか？」
シンは一誠ではなくアーシアの方を見ていた。
「は、はい！　何でしょうか？」
「アーシアの神器は骨折を治すのにどれぐらい掛かるんだ？」
「そんなに時間は掛からないと思いますが……」
「朝食までには間に合うということか」
「そ、それって……」
アーシアが表情を蒼褪めさせる。一誠も似た様な顔色になり冷汗を流していた。
『耳を貸すな相棒。奴の策略だ。呑まれるぞ』
（そう言うけど、間薙なら本気でやりそうだし……）
『……』

ドライグは否定しなかった。
「仮にだが下顎が無くなっても骨折と同じ時間で付くか？」
「え、ええっ！」
シンの残酷な質問にアーシアは声を裏返して驚く。一誠も裏返った悲鳴が出そうになる。
「止めろぉぉ！　盤外戦術仕掛けてくんじゃねぇぇ！」
シンの恐ろしい発言に対して一誠が抗議する。シンの方はいつも通りの無表情であったが、一誠の恐れ具合にやや呆れた雰囲気を纏っていた。
「こんな言葉一つで一々怖がるな。特訓で怖がっていると本番でどうする気だ？」
「そう言ってもなぁ……」
「俺が本気でやると思っているのか？」
一誠は無言で頷く。アーシアは首を縦に振ることは無かったが、横に振ることも無かった。
「――分かった。なら望み通りにしてやる」
シンが拳を一際強く固める。今まさに拳を繰り出そうとする。
「朝から頑張っているね」
そのタイミングで掛けられる声。声を掛けたのは木場であり、隣にはゼノヴィアとイ

リナがいた。
「木場か」
　シンが固めていた拳を解き、木場たちの方へ振り返る。シンからの重圧が消えて一誠が内心ホッとした瞬間、シンが振り返り様に腕を振るって一誠の顎に鞭の如く振るわれた指を当てた。
　シンが木場たちの方を見るのと一誠が崩れ落ちるタイミングは丁度同じであった。
「気を抜くなよ」
　屋上の地面でうつ伏せになっている一誠へ背中越しに言う。
「相変わらず容赦が無いね、間薙君は」
「そうか？　折れても千切れてもいない」
「やっぱり容赦無いね……」
　平然と言うシンに木場は苦笑する。
「お、お前たちも来たのか？」
　倒れていた一誠が起き上がる。綺麗に顎に入ったせいでまだ足がガクガクと震えているが、傍に立って心配しているアーシアにつかまり立ちすることせずに自力で立ってみせた。
「大分慣れてきたな」

「慣れたかねぇーよ、こんなの」
顎を擦りながら一誠は顔を顰めていた。
「セラフォルー様やアザゼル先生は任せろと言っていたけど、やっぱりじっとはしていられないよね。いつ襲撃が来ても良い様に仕上げておかないと」
「そうだな。特訓を一日でも怠れば感覚も微かに鈍る。例え微かな変化でも相手がそこへ付け入ることもある。私たちの戦いとは常にそういうものだ」
「主への祈りを欠かさない様に特訓も欠かさない様にしないとね！」
そう言ってゼノヴィアとイリナは木刀を構える。どちらも修学旅行の土産として買ったものであった。
「さて、間薙。イッセーが回復するまでの間、私の相手をしてもらおうか？」
ゼノヴィアは木刀の切っ先をシンに突き付けて挑戦してくる。因みにゼノヴィアもこのゲーム形式での特訓はシンに全敗している。理由は至ってシンプル。ゼノヴィアが直情的なせいで見切る以前に読み易いからだ。
「今日こそは勝つぞ？」
好戦的な笑みを見せるゼノヴィアに、シンは涼しい顔で答える。
「無理だな」
特訓は朝食の時間ギリギリまで続けられた。

◇

曹操により英雄派の主力メンバーが一か所に集められていた。
「で？　話って何だよ？」
ヘラクレスが集められた理由を曹操に問う。
「報告が二つある」
曹操が指を二本立て、その内の一本を折る。
「一つ目はヴァーリの所に送っていた監視がバレた」
曹操があっけらかんと言い放つが、他のメンバーは呆れた様に溜息を吐いた。
「もう、だからお姉さんはもっと出来の良い子を送れって言ったのに……必死に頼まれたからって甘過ぎ！」
「いやぁー、あれだけ意気込んでたのにこれだけあっさりと見つかるとは思っていなかった」
曹操は困った様に頭を掻く。
「アーサーとルフェイの勧誘も難しくなったな……」
「じゃあ、ヴァーリの野郎が来るのか？」

「無理じゃないかな？　本人は来たがるだろうけど周りが止める筈だ。まだマタドールとの戦いによる消耗も回復していないからね」
　ゲオルクは溜息を吐き、ヘラクレスはヴァーリ参戦を予想して高揚するがジークフリートによってやんわりと否定される。
「まあ、代理で誰かを寄越すだろうね。赤龍帝の味方でもさせるかな？　何せ今の赤龍帝と白龍皇は仲良しだからね」
　曹操が皮肉る様に言う。
「それで二つ目は？」
「ああ。実はそっちの方が本題だ。――来てくれ」
　曹操に呼ばれて姿を見せたのはサングラスの男。曹操とジークフリートを除くメンバーは、サングラスの男を『誰だ？』という目で見ていた。
「彼に今度の戦いで赤龍帝の相手をしてもらう」
　曹操の宣言にメンバーは一気に騒めく。
「おいおい！　どこの馬の骨とも分からない奴に赤龍帝の相手を任せるのかよ！」
「だーかーら！　そういうのは止めよってさっきお姉さん言ったじゃない！」
「また勝手に……」
　メンバーが不満を露わにするが、曹操は全部それを笑顔で受け流す。

「不満はごもっともだ。だが、彼の話を聞いて俺も一つ思いついたんだ。――今度の戦いは俺たちも希望の相手と戦う様にしよう、って」
　曹操の提案に騒ぐ声が止む。
「これって重要なことだと思うんだ。俺たちの神器は良くも悪くも持ち主の精神状態に作用される。なら、戦いたいと思う相手と戦えば今まで以上の力が出せるんじゃないかってね」
「今まで以上ね……でも、震えているじゃねぇか、そいつ」
　ヘラクレスが言う通りサングラスの男は体を震わせていた。赤龍帝の相手という大役を任された重圧によるもの。
「恐怖を覚えるのも悪くない。少なくとも油断や慢心はしないからな」
　曹操は恐怖に震えることを否定せず、サングラスの男の肩に手を置く。
「その震えから解放される手段は二つだ。恐怖に屈して折れるか、それとも恐怖を乗り越えて成長するか、だ」
　出された道は二つ。彼に逃げ道など無い。だが、曹操に直談判をした時から自らの逃げ道など塞いでいた。
「赤龍帝は……俺に任せてくれ……！」
　歯を食い縛りながら宣言。その言葉に少しだけ彼を見る目が変わる。

「そして、俺の仲間たちは全員が後者であることを知っている。是非とも今回の戦いで成長して欲しい。人間らしく、ね」
　そう言ってサングラスの男から手を離す。
「それは良いが望めばちゃんと希望した相手に割り当てられるのかよ？」
「そこは大丈夫だ。ちゃんとやってくれる――ゲオルクが」
「お前なぁ……」
　曹操の丸投げにゲオルクは苦虫を噛み潰した様な表情となる。
「――上手くいけばお前がアーシアとギリメカラの戦いに誰も横槍を入れないぞ」
　曹操の言葉にゲオルクの表情が僅かに緩むがそれでもしかめっ面であった。不満を言わない辺り納得した様子。
「なら、あの犬っころだ！　今度こそあの毛皮を剥いでやるぜ！」
「うーん。お姉さんは特に居ないかなー。強いて挙げるとすれば可愛い子がいいなー。それで曹操は？」
「俺は余りもので結構だ。皆の希望が第一優先だからな。それで――」
　曹操の視線が動く。向けられた先にはレオナルド。この会議が始まってから一言も発しておらず存在感を消していた。
「君は誰がいい？」

曹操の質問に誰もがレオナルドは答えないと思っていた。
「――」
だが、予想に反してレオナルドは戦いたい相手の名を出す。それにも驚いたが、出された名にも驚いた。彼とその人物との間には因縁というものが無いと思っていたからだ。
「――ああ、そういうことか。分かった。君に任せるよ」
曹操の方はその理由を察して納得。レオナルドに全て任せることに決めた。
「さーて、じゃあ祭りの準備を進めようとか。悪魔に天使、堕天使や妖怪も夢中にさせてやろう」

不穏、有名

今日から本格的な京都での観光が始まる。だが、アザゼルやセラフォルー、京都の妖怪たち英雄派などの存在が気になって折角の修学旅行に集中出来ない――などという軟で繊細な神経の持ち主など少なくともシンの知っている中にはいなかった。

「見ろ、アーシア！　清水寺だ！　異文化と異教徒の文化の粋が集まった寺だ！」

「は、はい！　文化の歴史を感じます！」

「異教徒万歳ね！」

引っ掛かる言葉を言いながらも感動してはしゃいでいる異教徒三人娘。もしかしたら、妖怪や『禍の団』が襲って来るかもしれない、という恐れを抱いている様子は無い。

日頃、襲撃を受けているせいで良くも悪くもその辺りを上手く切り替える術を覚えていた。

裏で何が起こっているのか全く知らない松田、元浜、桐生も学生らしく修学旅行を満喫している。尚、この観光にケルベロスは同行していない。一応付いてくるか確認をしたが『興味ナイ』と一蹴されてしまった。今頃は高級なベッドの上で丸まって寝ている頃であろう。

松田は絵になる三人娘を写真で撮っていると、桐生が不満そうに松田を突く。
「ちょっと、私は撮らないの？」
「お前だけ撮ってもなー」
半眼で文句を言う桐生に対して松田も気が乗らないという態度をとる。とは言ってもどちらも本気では無い。悪友同士のじゃれ合いみたいなものである。
「じゃあ、追加で」
桐生は一誠とシンの腕を引っ張って松田の前に立つ。
「桐生と野郎二人かよ」
松田は不満を言っていたが表情は半笑いであった。
「ほれほれ。アーシアとばっか撮られていないで兵藤も偶には私と写りなさい」
「へいへい」
「間薙君もね。ほれ、ピースピース」
桐生に促されてシンが仕方なくピースサインをした途端、カメラを構えていた松田が噴き出した。
「ブホッ！　お、お前……すっげぇピースが似合わねぇな……！　ぷ、くくく！　ビックリしたわ」
たかがピースサイン一つで松田が過剰に反応――している訳でなく、松田の隣にいた

元浜も笑っていた。何なら一誠とピースサインを進めた桐生も笑っている。言われたからしたというのに何とも酷い反応である。

シンがピースサインを止めると一誠と桐生がそれを止めようとする。

「悪い、悪い。そんな拗ねんなって」

「笑っちゃってごめんねー。何か凄い珍しいものを見たような気分になったから。という訳で気を取り直して、ほらピースピース」

色々と不満があるがここで揉め続けるのも仕様もないことだと思ったので、仕方なくまたピースサインをする。

そして、撮られる記念の一枚。被写体よりも写真を撮っている松田の方が最後まで笑い続けていたのである。

◇

観光は順調そのものであった。清水寺の次は銀閣寺へ向かった。そこでゼノヴィアが銀閣寺が銀色でないことに酷くショックを受けていた姿が銀閣寺よりも印象に残ったのがシンとしては何とも言えない。

銀閣寺が銀じゃないショックを引き摺ったまま今度は金閣寺へ着く。

「金だっ！　今度こそ金だぞっ！」
金閣寺を見たゼノヴィアの開口一番がそれであった。銀閣寺で期待を裏切られていた分、期待通りであった金閣寺に異様なテンションになる。
「金だぞぉぉ！」
子供の様にはしゃぐゼノヴィア。そんな無邪気な様子を松田が写真に撮っている。
「チョー喜んでいるな、ゼノヴィア」
「……ああ」
ゼノヴィアの喜び具合に圧倒されて苦笑している一誠がシンに話し掛けるが、シンの方はやや硬い声で返す。その微妙な声の変化に一誠はシンが何かに警戒していることを悟った。
シンは徐に携帯電話を取り出し、金閣寺を見ているゼノヴィアを写真に撮る。そして、写し出された画像を一誠に見せるが、写し出された画像はゼノヴィアを中心に撮っておらず、見知らぬ観光客らしき女性が中央に写っていた。
「――見ろ」
声量を抑え、一誠にしか聞こえない様にする。
「この人がどうかしたのか？」
一誠もそれを倣い小声で話す。

「銀閣寺からずっとこちらを監視している」
「マジかよ……英雄派か？　それとも京都の妖怪か？」
「直感だが……後者の感じがした。雰囲気からして人じゃない」
「金閣寺も妖怪さんの縄張りか……」
一誠は気付かれない様に写真に撮った女性を見る。一旦気付くと四方八方から似た様な視線を浴びせられていることにも気が付いた。
（ドライグ）
『ああ、間違いなく見られているな。安心しろ。相棒の自意識過剰では無いぞ？』
ドライグが冗談交じりで返しに小さく笑うが、現状は全く笑えるものではない。他に観光客が居る状況ならいきなり襲って来る可能性は低いと思われるが、こちらには事情を知らない一般人の松田、元浜、桐生が居る。
観光故にいつまでもこの場に留まっている訳にもいかず、ここから離れたら相手がどう動くか分かったものではない。彼らが巻き込まれることを危惧しておく必要がある。
「オンギョウキさん、説得に失敗したのか……？」
「分からない」
「もし、そうだとしたらアザゼル先生やレヴィアタン様は大丈夫なのか……？」
「それも分からないが、先生ならトラブルが起きたらすぐに俺たちに連絡を入れる筈だ」

アザゼルの抜け目無い性格は二人も良く知っている。
「――ああ、そうだな」
一誠もシンの言っていることに同意した。
「なら、アーシアたちには教えておかないと」
シンは少しだけ考えた後に自分の考えを言う。
「今は止めておけ。もしかしたら向こうに勘付かれるかもしれない」
シンの考えも一理あるとは思うが、このまま三人を無防備にすることへ難色を示す。
「……大丈夫か？」
「これだけ視線が向けられているんだ、今ははしゃいでいるがゼノヴィアとイリナなら気付く筈だ」
教会の戦士として鍛えられてきたゼノヴィアとイリナなら不自然な視線に気付くと判断する。
「それなら、まあ、そうかなぁ……」
歯切れが悪いが一応理解は示していた。
「こういう時に小猫ちゃんがいれば、誰が妖怪か分かるのに……」
ないものねだりをし、溜息を吐く一誠。
「正確性に欠けるが似た様なことはお前にも出来るだろ？」

シンにそんなことを言われ、頭にクエスチョンマークを浮かばせる一誠。
「ほら、あるだろう。女性限定で心の声を聞くアレが……」
わざわざ遠回しに言うのはシンがその名を口に出すのも嫌だと思っているからである。
「あ、そっか。『乳語翻訳』なら！」
当の本人がやっと気付く。少なくともそれを使えば女の妖怪の数を把握出来るし、相手がこちらに対して敵対心を持っているかどうかも分かる。
「バレずにやれよ」
「おう！　行くぞ！」
一誠は目を閉じ、脳内に魔力を集中させていく。これにより一誠を中心にして摩訶不思議な空間が広がっていく――筈だったのだが。
「――くっ！」
眉間に皺を寄せて苦悶に満ちた表情をする一誠。表情が段々と険しくなり、力を込めているせいで顔が真っ赤になっていく。
「駄目だ……！　出来ない……！」
一誠は悔しそうな表情で『乳語翻訳』の不発を告げる。
「どうかしたのか？」

「力が……力が足りない……乳の力が……！」
　頭の悪過ぎる言葉にシンはこの時点で真面目に会話する気が無くなるが、やれと言ったのは自分の方からなので一応続きを聞く。
「……どういう意味だ？」
「一日……たった一日、部長と朱乃さんと離れただけでここまで力が低下するなんて……！　くそ！　離れてから初めて気付くなんて！　どれだけ俺はあのおっぱいに支えられていたんだ……！」
　一人でシリアスに語っているが内容は変態過ぎて今度こそ会話する気が失せる。
　女性の胸関連で天井知らずに上がっていく一誠の魔力もリアスが居ない今は伸びが悪い。加えて他の女性たちの胸で補充しようにも同室にシンが居たせいでそれも叶わなかった。
　ならば自慢の妄想力でそれをカバーするしかないが、残念なことに今の一誠の現実は一誠が妄想で思い描いていたものよりも過激で素敵なものであった為、現実が妄想を超えてしまったことで妄想力もすっかりと落ちてしまった。
「突けば……突くことが出来たのなら……」
　上がらないモチベーションに一誠は嘆く様に言葉を零す。
「……お前の相棒は本当に馬鹿だな」

『……言わないでくれ』

シンの改まった感想に対し、ドライグは泣きそうな声で答えるも否定することはしなかった。

結局、乳語翻訳が不発に終わり、周りの視線を感じながら休憩所のお茶屋で一休みすることとなった。

抹茶と和菓子を楽しむ桐生たち。アーシアは慣れない抹茶をチビチビと舐める様に飲んでいる。

同じくゼノヴィアとイリナも食べ慣れていない抹茶と和菓子に手を付ける――ことはせず真剣な表情で目だけを動かして周囲の確認をしていた。

「そんなに怖い顔をするな……バレるぞ」

ゼノヴィアたちもまた監視されている状況に気付いたのが分かり、シンは抹茶を飲みながら日常会話の様に注意する。

一誠とシンがこの状況を分かっていることを知り、ゼノヴィアとイリナは不自然にならない様に和菓子と抹茶を食し出す――が相変わらず怖い顔付きをしていた。

「バレるバレる。取り敢えず笑っておけ」

一誠が仕方なくアドバイスを送る。それに従って笑顔を浮かべる二人だったが――

「どうだ？」

「どうって……何というか……」
「人を殺せそうな笑顔だな」
一誠の思っていることをシンが代弁する。
鋭い刀剣の様な眼差しのまま口を引き攣らせて笑うゼノヴィアは仕事で人を殺しそうな顔。一見すると笑顔だが目の奥が全く笑っていないイリナは趣味で人を殺しそうな顔、という印象であった。
シンの容赦の無い評価に二人は少なからずショックを受ける。
「そんなに酷かったか……？」
「私、そんな顔をしてたの？」
ペタペタと自分の顔を触る二人。その年相応の振る舞い方が返ってカモフラージュになる。
いつまでこんな状況が続くのかと考えていた矢先、何かが倒れる音がした。
桐生、松田、元浜がいつの間にか横たわって眠っている。先程まで軽口を言い合っていた三人が急に眠るなどあり得ない。
異常事態だが周りに心配する者はいなかった。お茶屋の中の他の観光客もまた桐生たちと同じ様に眠っている。
ならば外の観光客ならば異変に気付くのではないかと思われたが、外の観光客は何も

疑問に思わずにお茶屋の前を通り過ぎて行く。お茶屋の出入口で眠っている観光客が居るにも関わらず。

どうやらこのお茶屋全体に外と隔離する結界か術が施されているらしい。

シンは静かに女店員の方を見る。女店員の頭部からは獣耳が生え、大きな尻尾も出ている。もう姿を隠すつもりは無い様子。

桐生たちと店員の変化に驚いているアーシアを背後に隠し、ゼノヴィアとイリナが前に立っていつでも武器を取り出せる様に構える。

一誠も左拳を握り締めており、いつでも『赤龍帝の籠手』を顕現出来る状態となっていた。

「待ってください」

それに待ったを掛けたのはシンたちも良く知る声。

「ロスヴァイセさん！」

ロスヴァイセの登場。一誠らは店員たちを警戒しながらもロスヴァイセの方を見る。

「警戒を解いて下さい。私たちに対する誤解は解けました」

ロスヴァイセの言葉に一誠たちは安堵の息を吐く。最悪の状況を想定していたが、事態は上手く運び停戦となった。

「九尾のご息女が貴方たちに謝りたいと言うので、アザゼル先生の代わりに迎えに来ま

した」
　ロスヴァイセが告げると女店員が前に出て深々と頭を下げる。
「私たちは九尾の君に仕える狐の妖でございます。先日は申し訳ございませんでした。つきましては正式な謝罪の場を我らが姫君がご用意しておりますので、どうか私たちについてきて下さいませ」
　早く言ってくれれば無駄に気を張る必要も無かったと思ったが、襲撃を受けた昨日の今日の話である。京都側も悪魔側が素直に自分たちの話を受け入れるとは思っておらず話が拗れることを恐れてロスヴァイセの口から伝えられるのを待っていたのであろう。
「ついて来て欲しいって何処へ？」
「我らが京の妖怪が住む裏の都です。魔王様も堕天使の総督殿も先にそちらへいらっしゃっております」
　妖怪側の遣いに言われるがままお茶屋から出る。桐生たちは取り敢えずお茶屋で寝かせておいた。
　向かった先は金閣寺の外れにある人気の無い場所。そこには古びた鳥居が設置されていた。
　案内役の妖怪に先導されて鳥居を潜ると世界が一転して別世界へと繋がる。

今となって希少と言える古い家屋群。光源の少ない薄暗い空間にそれに合ったひんやりとした雰囲気の独特の空気が流れている。

人の住人は居らず、目に映るのは河童や立って歩く狸、一つ目の巨大な顔などの妖怪たちのみ。

本や話の中で登場する生物たちがこちらに好奇の目を向けてくる。

狐の女性に先導されて九重のいる場所へと向かうシンたち。光源が少ないが悪魔で夜目が利く一誠たちにとってはあまり不便ではない。

狐の女性が言うにこの空間は悪魔がレーティングゲームで使う専用空間を作り出す技法と同じ様な技術を使用しており裏街、裏京都と呼ばれて多くの妖怪が身を置いているとのこと。勿論、この裏京都以外にも住む妖怪が居ると説明する。

歩いているとシンの視界の端に提灯が映る。顔を向けると吊り下げる場所も無く浮いていた。

すると、提灯に目と口が現れて突然笑い出す。

「うきゃきゃきゃきゃきゃ」

提灯お化け、或いは化け提灯と呼ばれる妖怪であった。シンを驚かそうとする提灯お化けであったが――

「うきゃきゃきゃ」

「……」
「うきゃきゃきゃ」
「……」
「うきゃきゃ……」
何一つ反応を見せずに無言で見ていると提灯お化けの方が怖くなったのか、涙目になって逃げる様に何処かへ行ってしまう。
「お前、少しぐらい反応してやれよ……」
見ている方が居たたまれなく程のノーリアクションだったので一誠はシンを肘で小突きながら窘める。
「柄じゃない」
シンは素っ気無く返すだけであった。
家屋が建ち並ぶ場所を抜けると小さな川が見え、目的の場所はそこを通過した先の林の中にある。
林の中を進むと金閣寺で見た鳥居よりももっと巨大な鳥居が見え、その向こうには威厳と歴史を感じさせる屋敷が建っていた。
鳥居を潜った先にアザゼルとセラフォルーが待っている。
「お、来たか」

「やっほー、皆☆」

アザゼルはスーツ、セラフォルーは着物と柄は違うが同じ格好をしている。大丈夫なのは分かっていたが、実際に無事な姿を見ると一安心する。

そして、二人の奥には金髪狐耳の少女――九重が立っている。昨日の巫女装束ではなくお姫様を連想させる豪華な着物を纏っていた。

九重の姿が見え、一誠はギョッと目を剥く。九重に驚いたのではなく、彼女を守る様に三方向に立つスイキ、フウキ、キンキの姿に驚いたのだ。

周りをデカい鬼が囲っているせいで九重が余計に小さく見えてしまう。

三鬼は一誠の姿を見つけるとスイキは馴れ馴れしく手を振り、フウキはニタニタと笑い、キンキは眼中に無しと言わんばかりに無視する。

三鬼とも態度は異なっているが、共通していることは一誠を襲ったことに対して何一つ悪びれる様子が皆無な点である。

「九重様。皆様をお連れ致しました」

報告を済ますと狐の女性は炎と共に消えてしまう。

「私は表と裏の京都に住む妖怪たちを束ねる者――八坂の娘、九重と申す」

何度か名前を聞かされてきたが、本人の口から自己紹介という形で初めて聞く。九重は名乗った後に深々と頭を下げた。

「先日は申し訳無かった。お主たちを事情も知らずに襲ってしまった。魔王レヴィアタン殿、堕天使総督アザゼル殿、そして我が忠臣であるオンギョウキの執り成しが無ければ取り返しのつかないことをしてしまったかもしれぬ。どうか許して欲しい」

先日会った時の感情的な印象はすっかりと消え、今は意気消沈している様に見た。本人も間違いであったことを認め、大いに恥じている様子。

小さな身体が余計に縮こまって見える。

そして、小さな子供が頭を下げている傍で命令されたとはいえ、直接暴力を奮ってきたスイキたちは頭を下げることなく他人事の様に棒立ちしている。

自分たちの主が頭を下げているのにこの態度である。図太いと言うべきか、無神経と言うべきか。

（こいつら……）

礼儀に対してうるさい一誠では無いが、反省の色が皆無のスイキたちの姿を見ると文句の一つも言いたくなってくる。

刹那、風が吹き抜けたかと思えば突然スイキたちの顔面が地面へと叩き伏せられ、一誠たちに土下座をする格好となる。

「私からも謝罪致します。この度のこと誠に申し訳ございません」

いつの間にかオンギョウキが一誠たちの前に現れたかと思えば、その場で躊躇するこ

となく土下座して謝罪する。
　前に出会った時の堂々とした隙の無い立ち姿とは異なり、額を地面に擦り付けて謝罪するオンギョウキの様に優越感など覚えずに罪悪感の方を覚え、逆に申し訳ない気持ちになってしまう。
「や、止めよオンギョウキ！　お主までそんな真似をする必要なぞ無い！」
「いえ。主が頭を下げているのに臣下である私が頭を下げないなど道理ではございません。――そうだな？　お前たち」
　オンギョウキが念を押す様に問うと、スイキは地面に顔を付けたままくぐもった声を出す。
「その通りですー」
「申し訳ないー」
「スマナカッタ」
　一応は謝る三鬼。
　一誠たちもそれ以上は責める気もなかったので全員に頭を上げる様に言う。
「ほ、本当に良いのか？」
　九重はまだ気にしている様子であった。
　一誠は九重の目線を合わせる為に軽く屈む。

「まあ、色々と気にすることはあるだろうけどさ、九重は謝った！　俺達は許した！　それでこの話はお終いだ。な？」
笑顔で言い切る一誠に九重は顔を赤くしてもじもじしながら答える。
「……ありがとう」
お互い納得し、この話は終わる。
「流石はおっぱいドラゴン。子供の扱いが上手だな」
「ちゃ、茶化さないで下さいよ。当然のことを言っただけですから」
揶揄い半分感心半分で褒めるアザゼルに対し、一誠は謙遜しながら恥ずかしそうにする。
それでもアザゼルが褒めるのを止めないと、それに便乗してアーシア、イリナ、ゼノヴィアも褒め出す。終いには子供を慰める一誠の態度のロスヴァイセも見直す。
「だから止めてくれって……間薙も何か言ってやってくれ」
「安心しろ。俺の中ではお前はずっと破廉恥な奴だ」
「それはそれでどうなんだ……？」
極端過ぎる評価の差に一誠はどう反応していいのか困ってしまう。
一誠がおっぱいドラゴンらしさを見せる一方で焦燥を覚える者たちも居た。
「い、いけないわ！　こんなの絶対におっぱいドラゴンを好きになるじゃない！　魔

女っ子テレビ番組『ミラクル☆レヴィアたん』の主演として女の子のハートをガッチリ鷲掴みどころか引っこ抜くぐらいのことをしないといけないのに！　負けていられないわ……！　ピクシーちゃんたちという強力なマスコットキャラを仲間にしたから、その次は――」

セラフォルーは一誠に強烈なライバル意識を燃やし――

『あーそらがきれいだなー』

ドライグは定着しつつあるおっぱいドラゴンという名から全力で目を逸らしていた。

緊張していた空気も和み、九重は一誠たちを屋敷に招こうとする。

「九重様」

「何じゃ？」

「私は少し遅れて参ります――この者たちに少々説教があるので」

「あまり厳しくするのでは無いぞ？　こやつらは私の為に色々としてくれた」

「分かっております」

オンギョウキたちのことが気になりつつも九重は一誠たちと共に屋敷へと入って行く。

「全く、お前らは……」

九重に対して敬意の無い態度をとるスイキたちに苦言を呈する。スイキたち自身は

九重を疎んじている訳では無い。寧ろ、可愛がっていると言ってもいい。九重の方もスイキたちにちゃんと懐いている。

しかし、接し方が問題である。スイキたちが行っているのは上の者への接し方ではなく大人が近所の子供と遊ぶ様な接し方であった。それも良くない遊びを教える様な柄の悪い類の。

オンギョウキはスイキたちが九重を酔わせた時のことを思い出す。スイキたちが美味そうに飲んでいる酒に興味を持った九重に対し、スイキたちがそれを面白がって九重に自分たちの酒を舐めさせたのだ。鬼は酒精が強い酒を好むので、その一舐めで九重は酔ってしまい、オンギョウキが気付いた時には九重は顔を真っ赤にし、スイキたちはそれをゲラゲラと笑っていた。

その後オンギョウキは何度も八坂に謝罪し、スイキたちを別の意味で真っ赤に染めてやった。

顔に土を付けたまま不貞腐れた様子でオンギョウキの前に座る三鬼。

「全くお前らは……」

口を酸っぱくして何度も態度を改めさせようとしてきたが、三鬼は反抗する様に態度を変えることが無い。

数え切れない程した説教をまた言おうとした時、スイキの方から喋り出す。

「前から思ってたが、大将は何か勘違いをしていませんかぁ？」
「勘違いだと……？」
今までとは異なる展開にオンギョウキは内心でやや戸惑う。
「俺達が忠誠を誓ってんのは八坂様でもお嬢でもねー」
「確カニ御二方ニハ世話ニハナッテイルガ、ソレトコレトハ話ガ別」
「俺らが忠誠を誓ってんのは、俺達を倒した大将！　あんたにだ！　あんたがおひい様や八坂様の下に着いているから俺らもそうしているにすぎねぇんだ！」
鬼として今まで彼らなりに真面目に尽してきたが、それでもフラストレーションが溜まって来る。今回の件で溜まっていたものが噴き出し始めていた。
彼らからすれば鬼が礼儀正しく振る舞うことこそ滑稽なもの。普段の立ち振る舞いもオンギョウキのやり方を彼らなりに模倣しているに過ぎない。鬼としてはオンギョウキの在り方こそ異端であった。
「――答えはお前たちが言っているだろう。私は八坂様と九重様に忠誠を誓っている。その私の軍門に下ったからにはお前たちもあの御二方に忠誠を誓うのが道理だ」
「そりゃあそうですが、俺達が惚れ込んだのはあんたの強さなんだよ！　大将！」
「八坂様ハ強イ。ソノ血ヲ引クオ嬢様モ将来有望。シカシ、真ニ我ラガ強イト思ッテイル御方ハ違ウ！」

「俺達は大将を『鬼の大将』ってだけの小さな肩書きの御山の大将で終わらせたくないんですよぉ！　大将を本物の大将にのし上げたいと思っているんですよ！」
「黙れ」
　三鬼たちの叫びをその一言で切って捨てる。
「私はそんなものを望んではいない。私は影として己を捧げることをとうに決めている」
　しかし、オンギョウキのその言葉を三鬼は鼻で一笑する。
「宝の持ち腐れとはこのことですなぁ！　正直な話、大将が滅私奉公する程京都の妖怪たちに価値があるとは思えん！」
「ソノ通リ」
「おうおう。もっと言え言え」
　その瞬間、銀光が一条を走る。スイキたちの喉元には浅い切り傷が出来ていた。オンギョウキの手には振り抜かれた得物。スイキたちはそれを取り出す動きすら見えなかった。
　それ以上喋れば首を切り落とすという脅しである。だが、スイキたちはその脅しに屈することなど無かった。逆に上機嫌そうに笑い出す。
「良く分かっているじゃないですか、大将？　耳障りの良い言葉を吐こうが阿呆な戯言

を吐こうが耳の痛い正論かまそうが結局は力で黙らせればそれで終わりなんですよぉ！」

「死人ニ口無シ」

「どんなに文句を言おうが、力さえ見せ付ければそれで良いんですよー、大将。京都の妖怪であんたの力に逆らえるもんなんていねぇー」

三鬼がここまで反抗してきたのは初めてのことであった。今回の件で三鬼なりに色々と不満が見えてしまった結果とも言える。

「そもそも大将は今回のことをどう思っているんですかねぇ？」

「八坂様ノ穴ヲオ嬢様デ埋メヨウトシテ重責ヲ背負ワセルコトニ納得シテイルノデ？」

「正直な話、あんな幼児にまで責任を果たさせようとする京都の古妖怪共は見ていられませんでしたなぁ！」

フウキが吐き捨てる様に言う。オンギョウキは九重が京都の妖怪たちを率いることに何も思わなかったと言えば嘘になる。スイキたちの言っていることも一理あることも認める。ただ、八坂の血筋という分かり易い威光があったおかげで裏と表の妖怪たちがバラバラになることを最小限に治めることが出来たとも思っていた。

とは言え実力主義であるスイキたちはその血統というもののみを評価されるのが気に入らないのだろう。或いは、その程度の理由で親が行方不明になった九重を八坂の後

釜という重役に引っ張り出したのが気に食わないのかもしれない。
「魔王と堕天使の総督を上手いことおひい様と引き合わせたのも大将が裏で何かやったからでは？」
「俺らが赤龍帝たちと戦った後、大将は監視すると言って独りで動いていましたからなぁ！」
「十分ニ考エラレル」
　スイキたちが言っていることに何の証拠も無い。アザゼルやセラフォルーにはキチンと口止めもしている。オンギョウキの行動を疑っているのはスイキたちの勘に過ぎない。その勘が当たっているからこそ厄介であった。
「私は九重様が望まぬ限り動くことは無い。今回はレヴィアタン殿とアザゼル殿が京都の妖怪たちと争いを好まず説得と交渉に徹したまでのこと。そして、九重様も血が流れることを好まず、真に倒すべき相手を見極めたということだ」
「……そうですかぁ。まあ、そういうことにしておきますよ、今回は」
　明らかに納得していない様子。彼らからすれば悪魔や堕天使と肩を並べて戦うことも気が乗らないらしい。寧ろ、正面に向かい合って戦うことを望んでいる節がある。
「そして、今までの話も――」
　三鬼は息を呑み、それを吐くことは出来なかった。一ミリでも体を動かせば殺られる

と思わせる殺気がオンギョウキの視線に乗って三鬼を射抜く。
薄暗い裏京都のせいで爛々と赤く輝くオンギョウキの両眼。三鬼が望む通り力によって彼らを屈服させる。
「――聞かなかったことにしておく」
そう言い残しオンギョウキは歩き出す。途中、影の掛かる場所を通り過ぎるとオンギョウキは音も無く消え去っていた。
オンギョウキが居なくなり数秒経つが三鬼は固まったまま動かない。一分を過ぎた時にようやく三鬼は息を吐き出した。
「ふはぁー！　寿命が縮むかと思った！」
「だが、あれでこそ俺達の大将よ！」
「鬼神ノ如キ強サニ陰リナシ！」
オンギョウキが居なくなると今までの悪態が嘘の様にオンギョウキを褒め出す。オンギョウキに言ったように彼らが慕っているのは紛れもなく本音である。ただ、そんなオンギョウキが実力を発揮することなく自ら日陰者になろうとしているのが許せないのも三鬼の本心であった。
「さてさて。どうするものか？　ちょいとばかし怒らせ過ぎたかもしれねぇ」
「何だ？　後悔でもしたか？」

「今サラダナ」
「馬鹿を言え。後悔なんぞする筈もねぇ。言いたいことも言えたし寧ろ清々しているぐらいだ」
　下手をすればオンギョウキに粛清されてもおかしくない状況であったが、辛うじて命を繋ぐことが出来た。ただし、二度目があるとは思っていない。
「まあ、大将も目を光らせているだろうし、ちょっとの間は大人しくしていようや」
「ソウダナ」
「あーあ。その間にもっと楽しくて派手なことが起こればいいよなぁ？」
　平穏よりも騒乱を望む三鬼。かつてオンギョウキに倒されてもその気質が変わることは無い。
　彼らの力も上手く使えば世の為になるだろうが、不満が溜まりつつある今どちらに転ぶか分からない危うい力と化していた。

◇

　金閣寺にて色々とあったシンたちであったが無事にホテルまで帰って来ることは出来た。

裏京都では九重から八坂奪還の協力を求められ、九重と京都の妖怪たちに協力するという約束をした。

八坂は九尾の狐として京都という大規模な力場のバランスを保つ存在であり、九尾がこの地を離れるか、殺害される様なことが有れば異変が起こるという。幸い、異変が起きていないことから九尾と英雄派は京都から離れていなかった。逆に言えば彼らが京都で何かをするという意味でもあるが。

考えると今日一日はほぼ問題無く京都を観光出来た。英雄派が今も京都に潜伏しているのならいつ襲撃があってもおかしくない。それが無かったことから考えられるに英雄派にはそんなことをする暇が無く、別に進めることがあるのかもしれない。そこに九尾の狐である八坂が関わっているのは間違いないと思われる。

シンはホテルのラウンジに置かれてあるソファーに座って今日の観光の思い出と共にそれを思い返していた。

就寝まで時間があったので静かな所へ来て黙考する。ついでに部屋にずっと閉じ込めていたケルベロスを散歩目的で連れ出していたが今は傍に居ない。一般人には姿が見えないことを言い事にホテル全体を縦横無尽に駆け巡って運動不足を解消している。

「こんばんはー」

そんなシンに声を掛ける者がいた。声からして少女のものである。声の方に顔を向

け、シンは微かに表情を険しくした。
好奇心で輝く青い瞳。カールさせた金髪。一目で外国人だと分かる可愛らしい容姿をした中学生ぐらいの少女。これだけだったら特に不審を抱かないだろうが、問題なのは彼女の格好であった。
頭には鍔の広い三角帽子。それこそ魔女が被っている様な帽子である。ただし、少女の趣味か黒い布地ではなく青空の様な爽やかな水色に、星やリボンといったアクセサリーが帽子に付けてある。
どこかの学園の制服を着ているが、その上に魔女帽子と同じ色のマントを纏っており、マントには花弁の飾りが無数に散りばめられていた。
まさに魔法使いという出で立ちの少女。だが、ラウンジにはまだそれなりの人がいるというのに誰も注目しない。普通ならば目を惹く存在なのだが、まるでそこに居ないかの様な無関心さであった。
少女はシンの視線が向くとニッコリと微笑む。
「初めまして。私はルフェイ。ルフェイ・ペンドラゴンです。ヴァーリチームに属する魔法使いです。以後、お見知りおきを」
堂々とヴァーリの仲間と自己紹介する少女ことルフェイ。つまりは彼女もまた『禍の団』ということになる。

「あ、もう会っているかもしれませんが、アーサーは私の兄です。兄共々よろしくお願いしますね」

兄妹揃ってヴァーリの仲間だと聞いてもいないのに教えてくれる。シンはそれを聞いて『敵だ。殺れ』と戦闘態勢に移行することは無かった。まだ周りには一般人が何名かいる。それにわざわざ声を掛けてきたのは何かしらの意図があってのことだと思われる。

戦うのならそれを聞いてからでも遅くはない。

「間薙シン様でよろしいでしょうか？　ヴァーリ様のお友達の」

「……何の用で来たんだ？」

ヴァーリの友達発言は流して本題に進める。

「はい！　ヴァーリ様の命で曹操様たちへ罰を与えに来たんです！」

「罰？」

「曹操様ったらヴァーリ様が何度も邪魔をするなと警告していたのに、うちのチームに監視者を送っていたんですよー！」

少し怒った様に言うルフェイ。英雄派たちとヴァーリのチームは同じ『禍の団』であるが仲は良好では無い様子。現時点の戦力を考えるならば曹操たちがヴァーリたちを警戒するのもおかしくないと考えられた。ましてや、ヴァーリは良くも悪くも一誠を特

別視している。
それにしても曹操たちに罰を与えるという目的でルフェイ一人を送ってきたのだとしたら、彼女ならばそれが可能という自信があるのだろう。
見た目からは想像が出来ない実力、もしくは切り札を有している可能性があった。
「ヴァーリ様も最近少し不機嫌だったので、曹操様がしたことが余計に腹が立ったんです」
「不機嫌？」
「はい！　ヴァーリ様の御友人であるマタドール様が行方不明になってしまったので」
ヴァーリとマタドールの関係を友人と表す者など数少ないであろう。そして、行方不明になったマタドールの安否を心配しているのはこの世でヴァーリ唯一人だろう。大概の者は居なくなってくれることを望む。シンも勿論後者であるが、その内戻って来るだろうな、という不本意な予感があった。
「それでわざわざ俺に話し掛けた理由は何だ？」
「ヴァーリ様が言うに、場合によっては赤龍帝と人修羅に協力すればいいと仰っていたので、なら一言挨拶をしようと思いまして」
いずれあるだろう英雄派の襲撃に関して戦力が増えるのは良いことなのだが、それを簡単に信じていいのかという考えもある。

「あと個人的なことなんですが――」
笑顔を潜め、神妙な態度になったのでシンも話に集中する。
「私、『乳龍帝おっぱいドラゴン』のファンなんです！　出来ることなら握手を！　もっと望めるのならサインが欲しいんです！」
目を輝かせて興奮した様子で言い切った。
「……ああ、そうなのか」
警戒していた自分が馬鹿馬鹿しく思える程の正直さに、取り敢えずこちらを騙す気は無いと判断する。もしこれが全て?や演技だとしたら今後一生『おっぱいドラゴン』が好きと言う相手を信じることは無いだろう。
（……取り敢えず先にアザゼル先生と会わせるか）
危険を感じられない為いきなり一誠と会わせても良かったが、一応目の前少女もまた『禍の団』の所属している。アザゼルに報せておくのが無難な選択である。
シンはソファーから立ち上がってルフェイを見て――
「――待て」
「はい。分かりました。ここで待っていますね」
ルフェイは知る由も無いがシンの口から考えていたことと真逆の言葉が出ている。
「だから待て」

「えーと……私はここで待つつもりですが？」
　同じ言葉を繰り返され、ルフェイも少々困惑する。
「待てと言っている――この子はまだ敵じゃない」
「え？」
　ここでルフェイはシンが自分を見ているのではなく、別の誰かに視線を向けていることに気付いた。同時にルフェイの両肩に何かが乗せられ、動けなくなる。
「グルルルル。動クナ」
　ルフェイの背後で後ろ足で立ち上がったケルベロスが両前足をルフェイの肩に乗せて押さえつける。ルフェイのマントに軽く爪を突き立て、いつでも引き裂けると言わんばかりに警告する。
　ケルベロスが散歩から戻った直後にシンが知らない少女と話していた。それだけなら別に気にすることは無かったが、少女からヴァーリ、美候、黒歌、アーサーなどのニオイがしたので即座に敵と判断した。
　特にケルベロスが嫌っているフェンリルのニオイも混じっているので頭を噛み砕いてやろうとした。シンが止めなければ頭に噛みついていただろう。
「誰ダコイツハ？　何故止メル」
「説明するからちょっと待て」

ルフェイは首だけをゆっくりと後ろに向け、自分を見下ろしているケルベロスを見て体を震わす。

ケルベロスのことをどう説明すべきかとシンが考える前にルフェイは声を発していた。

「あ、あの！『ミラクル☆レヴィアたん』に出演なさっているケルベロス君ですよね！宜しければこのまま写真を一枚お願いします！」

どうやらケルベロスについて説明する必要も無い。ルフェイが体を震わせたのは恐怖ではなく歓喜からであった。

普通、巨体の獣に襲われそうになったら怖がるのが当たり前な筈だが、それよりも有名人――もとい有名犬と出会えた喜びの方が勝っていた。

「……お前も有名になったな」

「嫌味カ」

宣戦、布告（前編）

ルフェイを連れて取り敢えずアザゼルの所へ向かうことにしたシンとケルベロス。
ケルベロスの表情は一見すると普段と変わらない様に見えるが、毎日同じ家で過ごしていたシンにはケルベロスが疲れているのが分かった。
あの後、ルフェイの要望通りに写真を撮ることとなったが、要望された構図が問題であった。
「あの、頭を噛んでもらっていいですか？」
ルフェイの正気を疑う様な構図の要求に対し、ケルベロスは未知の生物でも見るかの様な眼差しをルフェイに向けた後、助けを求める様にシンの方を見てきた。
取り敢えず期待通りにすればすぐ終わる、という半ば突き放す様な答えを念話で送るとケルベロスは諦めた様な表情――獣の顔付きなのであまり変わらないが――をしてルフェイの頭を口内に収める様に大きく開いた。
（イッソノコト本気デ噛ンデヤロウカ）
というケルベロスのヤケクソ気味な思念が飛んで来る。
「あ、魔術で防御を固めているので本気で噛んでも大丈夫ですよ？」

そんなケルベロスの心の裡を読み切ったかの様なルフェイの気遣い。ケルベロスは、こんなことに本気を出すのも馬鹿らしく思い、ルフェイの頭を噛むことは噛んだが子犬を咥える様な甘噛みであった。

「モウイイカ？」

ケルベロスが疲れた様にルフェイから両前足を離す。見知らぬ敵かと思って押さえつけたのは良いが、結果を見れば藪蛇であった。

「もう一つだけ、もう一つだけお願いしてもいいですか？」

ルフェイは前屈みにになってケルベロスに視線を合わせながら懇願する。

「好キニシロ」

拒否することすら億劫になったのか、ルフェイのやりたい様にやらせる。

「じゃ、じゃあー」

そう言うとルフェイはケルベロスの首に両腕を回し、ケルベロスの豊かな鬣に顔を埋める。

「ふわぁ……こんな感触なんですね……」

ケルベロスの鬣が頬擦りをしながらルフェイはウットリとした声を出す。ルフェイに抱き締められているケルベロスは無言でシンを見詰めて来る。

『コイツヲ早クドウニカシテクレ』

目がそう訴えていた。今回のルフェイの場合もそうだが、セラフォルーの時といいケルベロスは魔法に関わる女性に振り回される星の下で生まれたのかもしれない。

これ以上ケルベロスが玩具にされるのも可哀想に思えたので、ルフェイに一先ずアザゼルに引き合わせることを告げると、ルフェイは慌ててケルベロスから離れた。我に返りシンの前で夢中になっていたことを気恥ずかしく思ったのか魔女帽子を少し下げて顔を隠しながらアザゼルへの案内をお願いしてきた。

そして、その道中へと話は戻り、アザゼルの部屋まで向かう途中にルフェイの方からシンへ話し掛けてくる。

「あの、ジャッ君は元気でしょうか？」

シンは一拍置いてその名がジャアクフロストのことを指しているのに気が付いた。シンの頭の中にいる小憎らしいジャアクフロストとジャッ君という名が結び付かなったので、ルフェイが誰のことを尋ねているのか一瞬分からなかった。あと非常にどうでもいい話ではあるがジャッという響きが耳に聴き慣れた音であった。

「元気だ。いや、元気過ぎるぐらいだ」

半ば皮肉を込めて言う。ジャアクフロストの口の悪さも常に誰かに噛み付いているのも未だ変わらず。ジャックフロストと一誠への当たりが特に強く、ジャックフロストに喧嘩を売って二人の戦いが始まり、一誠がそれを仲裁しようとして今度は一誠との喧

嘩を始め、それをシンが止めるという事態が何度もあったぐらいである。
捻くれている上で跳ねっ返り者のジャアクフロストを本気で心配している様子のルフェイに、ジャアクフロストをシンの家やリアス眷属の家で順番に面倒を見ていることを教えるとルフェイは安堵の溜息を吐く。
「間薙様。ジャッ君の面倒を見て下さってありがとうございます！　ジャッ君は素直じゃないですから大変ですよね？」
躊躇なく首を縦に振るとルフェイは苦笑する。
「それにしても――」
ルフェイは少し怒った表情をする。
「ジャッ君を置き去りにして帰ってしまうなんて、ヴァーリ様たちは本当に薄情です！」
ルフェイが言うにはヴァーリたちはロキ戦が終わり、拠点へ戻った時にそこでジャアクフロストを置き去りにしたことに気付いた。当然のことながら待機していたルフェイはジャアクフロストを連れ戻すことを主張したが、ヴァーリが言うに今迎えに行くとジャアクフロストが暴れる、とのこと。迎えに行くタイミングを今も機会を窺っているという。
ヴァーリが言っていることはあながち間違いではない。ジャアクフロストはヴァーリたちが土下座して詫びを入れるまで帰らない、とまだ言っているので絶対に話がこじ

れていただろう。
「ジャッ君も怒っていますよね？　私たちのこと何か言っていましたか？」
「全員が迎えに来て謝らないと帰らない、だそうだ。あと今のうちに強くなってヴァーリたちをぶん殴るとも言っていたな」
「そうなりますよね……ジャッ君がそうなると物凄く意固地になるんです」
ジャアクフロストをここに召喚して強制的に押し付けて帰らそうかとも考えたが、ルフェイが言う通りそんなことをしても意地でも帰らず、喚き続けるのが容易に想像出来る。
そんなことを話している内にアザゼルの部屋の前まで来ていた。かなりの距離があったと思ったが、会話していれば一瞬の距離に思えてしまう。
扉の前に立ち、ノックする直前に今更ながらそもそも部屋の中にアザゼルが居るのか、という疑念を持ってしまう。
八坂誘拐、セラフォルーと京都の妖怪たちとの連絡、英雄派の足取りの調査、そして教員としての仕事などアザゼルがやるべき仕事は山ほど有る。不在であってもおかしくない。
空振りしたら気まずい空気になるのだろうな、と思いつつも指の第二関節は扉を叩いていた。

『――誰だ？』

思いの外、鋭い声が返って来た。いつ襲撃があっても良い様に警戒しているのかもしれない。

扉の向こう側からアザゼルの声が聞こえてきて一先ず安堵する、空振りにならずに済んだ。

「アザゼル先生、俺です」

『シンか？』

少し驚きを混ぜた声の後、足音が聞こえて扉が開けられる。

「お前が来るとは……何か問題でも起きたのか？」

軽装ではなくスーツ姿のままのアザゼルが顔を出す。

「問題と言えば……問題なのかもしれません」

歯切れの悪いシンの言い方にアザゼルは怪訝な表情をする。その表情のまま視線が横に滑り、シンの隣に立っているルフェイへと向けられる。

アザゼルの視線に圧が込められる。

「初めまして、アザゼル様。私はヴァーリ様のチームでお世話になっているルフェイ・ペンドラゴンと申します」

アザゼルの眼光に臆することなくスラスラと自己紹介をするルフェイ。

ルフェイの名を聞き、アザゼルは顎に手をやりながら言う。
「ルフェイか。伝説の魔女、モーガン・ル・フェイに倣った名前か？　ペンドラゴンということはアーサーの妹か？　そういえば英雄アーサー・ペンドラゴンとモーガンには血縁関係にあったと言われていたかな……」
アーサー王の英雄譚の中に出て来る魔女の名。敵や悪女としての側面が強い存在である。そう言う知識が豊富ならルフェイには似合わない名と思うかもしれない。
「んで？　ヴァーリの所の奴が何をしに来たんだ？」
「はい。今回の件でお手伝いをするように言われました！」
それだけ聞くとアザゼルは顎を擦りながら喋り出す。
「大方、英雄派の奴らがヴァーリたちにちょっかいでもかけたんだろ？　それで、ヴァーリもいい加減お冠になった、ってな具合か」
一を聞いて十を知るとはこのことを言うのであろう。そのおかげで話が早く進む。
「ヴァーリが一人送り込んだってことは実力の方も申し分ないんだろうな――ところで、だ」
アザゼルは声を潜める。
「ここに来る途中、お前たちが一緒に歩いているのを誰かに見られたか？」
アザゼルの質問の意味はすぐに理解出来た。今は『禍の団』の英雄派を悪魔、堕天使、

そして京都の妖怪たちと一緒に追いかけている状態である。敵対関係にあるとはいえヴァーリチームのルフェイもまた『禍の団』の一員。そんな彼女と一緒に行動しているのを万が一京都の妖怪らに目撃されたら確実に揉める。

仮にルフェイの素性を知らなくとも突然詳細不明の魔女が現れたら当然警戒される。そして、この京都に於いてルフェイの素性を知っている者もいるかもしれない。もしかしたら、英雄派の連中がわざとルフェイの情報をばら撒いて仲違いを起こさせる可能性も考えられる。

考え過ぎ、慎重過ぎると言われればそれまでだが、なるべく迂闊な行動は避けたい。些細な事が大きな問題へ発展することも無きにしも非ず。アザゼルは責任ある立場故に、そういう事に誰よりも敏感でなければならないのだ。

「ホテルの従業員と何人かすれ違いはしましたが……」

「大丈夫です。魔術で存在感を可能な限り消しました。きっと誰も私のことなんて覚えていない筈です」

ルフェイは抜け目の無さを見せる。彼女のしている目立つ格好もその魔術によって注目されないのだろう。

「そいつは結構。わりぃな、今の状況が状況なだけに色々と周りの目が気になるんだよ」

「いえ。アザゼル様の御立場を考えれば当然のことかと」

「まあ、今は少しでも戦力が欲しい所だ。協力してくれるんなら有り難く手を借りるぜ。――内緒にだけどな」
アザゼルは思いの外簡単にルフェイの協力を得ることを承諾した。色々とあったがヴァーリのことを未だに信じているからこそなのかもしれない。
「この後、どうするんだ？」
「間薙様に兵藤一誠様と会わせてもらう約束をしているんです！」
「イッセーと？」
「はい！　私、おっぱいドラゴンのファンですから！」
先程よりも目を輝かせて言い切るルフェイにアザゼルは感心した態度となる。
「ほぉー。あいつの人気も幅広いなー。こりゃあ長寿番組になるぜぇ！」
おっぱいドラゴンの人気にアザゼルも上機嫌そうであった。
「――ということなら後は任せたぞ。ちゃんとエスコートしてやれよ」
アザゼルはシンの肩を軽く叩いた後、部屋の中へと帰って行く。
「それではおっぱいドラゴンの――兵藤一誠様の許へ行きましょう！」
心なしか鼻息が荒くなった気がする。よっぽど楽しみなのだろう。
「そうだな」
目的の一つは達したので一誠の所、もとい自分の部屋へ戻るシン。

部屋まで戻る間、ルフェイは興奮した様子で自分が如何にしておっぱいドラゴンに嵌ったのか、おっぱいドラゴンの魅力について熱心且つ早口で語っていた。
それにシンは相槌を打ちつつ気付かれない程度に歩く速度を上げて行く。ルフェイには悪いがシン自身は特に興味が無かったので長いこと聞いていられない。
そして、数分後には自室の扉前に着いていた。
部屋の鍵は持っているが、中で変なことが起こっていないか――一誠を一人にしているので――を確認する為に扉をノックする。
扉越しにドタドタと慌てた様子は聞こえない。特に何かがある様子は無い模様。
「はーい」
若干元気の無い返事の後に扉が開けられ、一誠が出て来る。特に変わった様子は無い――ということはなく、一誠の片方の鼻穴にはティッシュが突っ込まれていた。
「どうかしたのか？」
「何かあったのか？」
同じ様な質問がシンと一誠から同時に出る。
「初めまして！」
「うおっ！　誰っ！」
そこに割って入ってくるルフェイ。元気良く、そして不意打ちで挨拶をしてきたので

一誠は驚く。そして、ルフェイの一般人と思えない格好に目を瞬かせる。
「ルフェイ・ペンドラゴンと申します！　『赤龍帝おっぱいドラゴン』のファンです！　差し支えないようでしたら、あ、握手をしてください！」
初対面の少女に握手を求める手を差し出され、困惑した様子ながらも求められるがまま一誠は握手をする。
「ありがとう……」
取り敢えずファンの要望に応える一誠。ルフェイは感動で体を震わせ、『やった！』と跳ねる様に暫くの間喜んだ後――
「あ、あの……図々しいお願いですが……サインの方も……」
いつの間にか用意していた色紙とサインペンを一誠に出す。
「あ、はい……」
これもまた言われるがまま色紙にサインを書く一誠。
『ルフェイ・ペンドラゴンさんへ　赤龍帝おっぱいドラゴン兵藤一誠』
そうサインをして色紙をルフェイに返す。
「ありがとうございます！　一生の宝物にします！」
サインを胸に抱き、感謝の意を伝えるルフェイ。
「間薙様！　おっぱいドラゴンさん！　色々とありがとうございました！　それでは

！」

別れの言葉に興奮の余熱を含ませながらルフェイは去って行く。

「何？　何なの？　あの子、何しに来たの……？」

全てが唐突過ぎてついていけなかった一誠がシンに説明を求める。

「というか誰だったの？」

「ヴァーリの仲間だ。助っ人に来たとさ」

「はあっ！」

予想外の台詞に一誠は声を大きくして驚く。

「ちゃんと説明してくれ！」

シンは仕方なくルフェイについて説明する。ヴァーリのチームに所属していること。英雄派と揉めたのでヴァーリが罰として彼女を送り出したこと。アザゼルには既に紹介しており、内緒の助っ人として力を借りること、を。

説明を聞き終えた一誠は取り敢えず納得する。

「そういうことか……ってか英雄派もヴァーリたちも同じ『禍の団』だったよな……？」

「何処も一枚岩には成れない、ということだ。敵が居たとしてもな」

「何か嫌だよな、そういうの……」

内輪揉めということに対して顔を顰める。悪魔も現魔王と旧魔王が争って敵になっ

ているのを思い出し、そんなことをしている場合ではないのにと思ってしまう。
「それで敵が減るなら構わない」
「お前、ドライだよなぁ」
　シンの簡素な返事に一誠は苦笑する。
　すべきことも終わったのでシンは部屋の中に入ろうとし、その後にケルベロスが続くが――
「ウッ」
　――ケルベロスが息を詰まらせる声を上げた後、扉から後退する。
「どうかしたのか？」
「……発情シタ雄ト雌ノニオイガスル……血ノニオイモダ」
　シンは一誠を睨む様に見る。
「お前……この部屋は俺の部屋でもあるんだぞ……？」
「ちょっと待て！　ちょっと待て！　決めつけるな！」
　一誠が言い訳もとい説明をするに、シンが不在の間にアーシア、ゼノヴィア、イリナが訪ねてきたという。
　そして、部屋の中で――何があったのかは詳細に語ることは無かったが鼻の下を伸ばしてだらしない顔をしていることから容易に想像がつく。

「足りなかったものは十分補充出来た！　今の俺なら確実に『乳語翻訳』が出来る！」
自信に満ちた表情で言い切る一誠にシンは呆れた眼差しを向ける。取り敢えずシンが予想していた様なことは行っていないらしい。
「……それで？　その鼻血は何だ？」
シンが今も鼻の穴に詰まっているティッシュを指摘すると、一誠は言うかどうか迷っている表情をしていたが、やがて理由を話す。
「途中で興奮し過ぎて……それで気絶した」
「それはそれで情けない話だな」

◇

翌日、再び観光地へ向かうシンたち。本日は京都駅から嵐山方面へ行き、天龍寺を目指す。
電車に乗って最寄りの駅で降り、そこから天龍寺まで徒歩で行く。観光名所なのでそこらに案内する看板が設置されており迷うことは無かった。
天龍寺の大きな門を潜り、境内へ入る。自分たち以外の観光客の姿がまばらに見えた。

「おお、お主たち。来たようじゃな」
天龍寺でシンたちを迎えるのは巫女装束に金髪の少女――九重。誤って襲ってしまったことへの謝罪を兼ねて嵐山方面の観光案内を買って出てくれたのだ。
そんな余裕があるのかと思われるかもしれないが、現状英雄派が事を起こすまでは待機していなければならない状態であり、それが続けば九重の精神にも大きな負担が掛かると思い、気分転換も合わせて九重を一誠たちに同行させたのだ。
九重の周りの妖怪たちも今回の観光案内に賛成したのは多少なりとも下心がある。理由はどうあれ現魔王の妹の眷属を襲撃したのである。その点を突かれると後々悪魔との軋轢を生じさせると考えている者達もいた。ちゃんと純粋に九重のことを思う者たちも居るが、中には形式的にトップである九重に直接動いてもらうことでこちら側に叛意は無いことをアピールさせることを考えている者達もいる。
「九重か」
「うむ。約束通り、嵐山方面を観光案内してやろうと思うてな」
少し自慢げに胸を張る九重。その表情は心なしか明るく見える。母親への不安はまだあるが、この観光案内は気を紛らわせるには十分であった。
金髪、巫女装束とかなり目立つ姿だが異形の証である狐耳と尻尾はちゃんと隠してある。

「はー、随分と可愛い女の子だな。イッセー、お前がこんなちっこい子をナンパしたのか？　いつの間に趣味が変わった？　それとも間薙か？　お前ってこういう子が趣味なのか？」
「んな訳あるか！」
「お前の頭部と同じくらいに笑えない冗談だ」
「俺は禿げてねぇ！　丸めているだけだ！」
松田の軽口に反応する一誠とシン。シンの方は言い返して松田を怒らせているが。
「……ちっこくて可愛いな……」
元浜が荒い息を混ぜながら、粘り気を感じさせる様な感想を洩らす。元浜の怪しく輝く眼鏡に一誠は犯罪者でも見る様な目をした。
「お前……手を出したら犯罪だぞ？」
「まだ何も出してないっ！」
犯罪者予備軍扱いされ憤慨する元浜。シンはそもそも九重が見た目通りの年齢かどうか分からないので何も言わずにいた。それでもあの見た目に劣情を抱くなら一誠の言った通りになる。
「やーん！　可愛い！　何、兵藤、間薙君、何処で会ったの？」
桐生も可愛いらしい九重の容姿に心射抜かれたのか、九重に抱きついて頬擦りをす

る。

「は、離せ！　馴れ馴れしいぞ！　小娘め！」

それを嫌がり引き離そうとする九重。

「その上お姫様口調だなんて最高だわ！　どれだけキャラを詰め込んでいるのよ！　素敵！」

更に興奮して頬擦りの速度が増していく。このままでは埒が明かないと思った一誠は、シンに目線を送る。その視線に込められた意味を察して、シンは二人の間に割って入る。

「そこまでだ桐生」

「あーん。残念」

名残惜しそうに九重から離れる桐生。九重の方は慣れないスキンシップのせいで顔を赤く染めていた。

「うむ……礼を言、ひっ！」

気を取り直してシンにお礼を言おうとすると九重が引き攣った声を上げる。原因はシン――ではなく、そのすぐ傍に座っているケルベロスのせいであった。連続してホテルに閉じ籠っているのも飽き、今回はシンたちの観光に同行することとなった。当然、常人には見えないように細工してあるが九重にはバッチリと見えていた。

二メートル以上はある獅子の如き鬣を持つ大型犬に至近距離で目を合わせてしまい、我慢出来ずに声を上げてしまった九重。

しかし――

「おい！　間薙！　こんなちっちゃくて可愛い子を怯えさせるなよ！　お前の雰囲気は大人でもビビるんだぞ！」

「間薙ー。お前はもうちょっと自分がどう見られているか自覚した方がいいぞー」

「まあ、どんまいどんまい間薙君。こればかりは生まれつきだからしょうがないしょうがない」

九重がシンを怖がったと勘違いをして元浜、松田、桐生が好き勝手なことを口々に言う。

シンは相変わらず無表情で言い訳などしなかったが、眉間の皺が若干深くなっていた。

「こちらは九重。俺やアーシアたちのちょっとした知り合いなんだ」

また話が逸れるかもしれないと思った一誠が慌てて九重の紹介をする。ケルベロスにビックリしていた九重も一誠に紹介されると先程までの恐れていた表情を引っ込めて、皆に名乗る。

「九重じゃ。よろしく頼むぞ」

横目でチラチラとケルベロスのことを確認しつつも堂々とした態度を取ってみせる九重。妖怪たちの長代行を短い間だがしていたこともあり、それなりに虚勢も張れる様子である。

「あ、もしかしてグレモリー先輩経由の知り合いだった？　それなら納得。あのホテルも先輩の親御さんが経営しているし、そういう会社と関係している感じ？」

桐生の違っているが合ってもいる指摘に一誠の表情が少し引き攣った。図星を指されたに等しいので一誠は一瞬言葉を詰まらせる。

「ま、まあ、そんなところだ」

「だよねー。何て言うの？　キャラ付けのお姫様口調じゃないって感じ？　こう本物のお姫様感が溢れているんだよね。この子もきっと良いとこの御家でしょ？」

「お、おお。そうだな」

桐生が言っていることは殆ど正解なので一誠の方も動揺して声が震えている。色々な意味で桐生は人を見る目を持っている。

一応の紹介も済み、九重主導の名所巡りが始める。

九重の名所の案内は決して上手なものではなく、たどたどしい紹介をしつつ、時折説明の為の台詞を思い出そうとして黙ることもあった。だが、自分の住む京都の良さを知ってもらうとするその一生懸命さと、胸を張って自信満々に説明する様子は可愛らし

いものであり、その姿に一誠たちは癒されていた。
名所を回り、大方丈裏の庭園に案内される。世界遺産に登録される和の風景が見る者を圧倒する。
ふと、一誠は九重を見る。最初に会った時と別人に思える程愉し気な表情をしている。切羽詰まった様子は皆無であり、重圧から解放された無邪気さがそこにあった。
「九重ちゃん、本当に楽しそうですよね」
「ああ」
アーシアも九重の様子を見て、一誠にこっそりと話し掛ける。
「でも、少し不安でもある。あいつの母親の件もあるし、何処かに英雄派が――」
「その心配なら必要無い」
聞き覚えがある声がし、一誠とアーシアは同時にその方を見るが、そこに彼らが知っている者は居なかった。
「ここだ」
もう一度声がする。声の位置は正面。声を発していたのは二人の知らない男性であった。
年齢は二十代か三十代ぐらいに見え、中肉中背の体型。兎に角説明するのが難しい凡庸な顔立ちに背丈。特徴が無さ過ぎて十人が見たら十人異なる説明になり、その説明を

素にすると十通りの別人が生まれるだろう。それも男性を意識していたらの話。大抵の人はこの男性を見たら数十秒後には忘れ去っている。
「ええっと……もしかして、オンギョウキさん？」
「如何にも」
「人にも成れるんですね……」
「ただの変装だ」
　どこがただの変装だ、という言葉が喉から飛び出しかけるのを必死に押し込む。オンギョウキの身長は軽く見積っても二メートル以上はあった。それがどういう原理で日本人の平均身長サイズにまで押し込められるのが不思議でしょうがない。
「す、凄いです……！　忍者ってこんなことも出来るんですね！」
　オンギョウキの見事な変装にアーシアは目を輝かせて賞賛する。どう考えても忍者の技術の範囲を超えているが、アーシアの感動に水を差す訳にはいかない。
「あ、うん。凄いな忍者って。本当に凄い」
　アーシアに合わせて同意する一誠。一誠自身もそれで納得もとい己を誤魔化すことに決めた。深く考えたところで無駄である。
「オンギョウキさんが九重のことを護衛しているんですか？」
「ああ。他にも何人か潜んでいるが、ここまで近くで護衛しているのは私だけだ」

楽しんでいる九重になるべく気付かれないようにする配慮。九重にこの観光案内を心の底から楽しんでほしいというオンギョウキたちの想いを感じる。

オンギョウキは僅かの間、シンたちに説明をしている九重を見る。

「楽しそうですよね？」

「――そうだな。久方ぶりに見る御顔だ」

感情を感じさせない声であったが、オンギョウキが安堵しているのが分かった。本当に純粋にこの案内を楽しんでくれて幸いであるとオンギョウキは思う。

現時点の京都の妖怪のトップは九重であり、一誠たちはリアス・グレモリーという魔王の身内の眷属であるが、一介の悪魔に過ぎない。正直、格が違うと言っても良い。

だが、謝罪というものは格の有る者がすることによって初めて強い効果を持つ。しかし、この観光案内も見方を変えれば九重が悪魔に媚びを売っている様にも捉えられる。そういうことを気にしてグチグチと陰で文句を言う輩も居れば、ヘラヘラとした態度で九重にもっと取り入る様に心の中で願う輩も居る。オンギョウキはそういった輩に対して何も言わないし何も行動はしない。ただし、誰が何を言ったかは正確に覚えている。

そういった声が皆と楽しんでいる九重の耳に入らないように努めるのもオンギョウキにとっての役目であった。

「何をやっているのじゃ？　先へ行くぞ？」
立ち止まっている一誠とアーシアに九重が声を掛ける。変装しているとはいえオンギョウキと一緒にいるのを見られるのを不味いと思った一誠たちは、慌てて言い訳を考えようとするが――
「イッセー！　観光中に二人っきりで抜け駆けなんて出来ると思うなよー！」
松田が嫉妬混じりの野次を飛ばす。その野次に反応して一誠らがそちらに目を向ける。それは一瞬の出来事であった。
『あっ』
再び視線をオンギョウキへ戻した二人は小さく驚きの声を洩らす。さっきまでそこに居たオンギョウキの姿形が無くなっている。視線に入る範囲から完全に消えており、オンギョウキがそこに居たという名残すら綺麗に消えていた。
「流石忍者……」
オンギョウキの早業に感心する一誠に、もう一度九重の急かす声が届く。一誠たちはオンギョウキを見習い、何事も無かったかの様に合流した。

◇

「いやー、回った回った」
九重の主導による嵐山観光も大体見て回り、松田は一息つく。色々と歩き回ったが疲労感は無い。それよりも満足感の方が上回っていた。
そして、九重のオススメということで昼食に湯豆腐を皆で食べる。
京都でしか食べられないその味に舌鼓を打っていると――
「あ、皆」
――近くの席で木場の班が同じく湯豆腐を食べていることに気付いた。
「おお、木場か。今日はお前の所も嵐山見て回るんだったな」
「うん。天龍寺は行って来たかい？」
「ああ。天井に見事な龍があったぜ」
天龍寺の『雲龍図』を思い返す一誠。長い胴を持つ東洋のドラゴン。ドライグはそれを見て五大龍王の『玉龍』を思い出していた。ドライグやタンニーンなどの西洋のドラゴンは会ってきたが、いずれは東洋のドラゴンにも会うかもしれないと密かな期待を抱いた。
「間薙君も観光を楽しんでいるかい？」
「まあな」
「こいつ、何処行っても表情一つ変えないから本当かどうかすらも分からねぇ」

「ははは。間薙君らしいと言えばらしいね」
「言った通りに修学旅行を満喫してくれて、俺としては安心だ」
三人の会話に入って来る声。シンたちが視線を動かした先には同じく湯豆腐を食べているアザゼルとロスヴァイセが居た。
「よお」
手を上げて軽く挨拶するアザゼル。よく見るとテーブルの上に一升瓶と杯が置かれてある。昼間からアザゼルは酒を飲んでいた。
「先生も来てたんですか？　っていうか教師が昼間っから酒は不味いでしょ！」
「そうです！　もっと言ってください！　私も再三注意しているんですよ！　生徒の手前、そういう態度を見せるのは非常に教育に――」
「こんな程度じゃ酔わねぇし、ちゃんとアフターケアも万全。嵐山方面の調査した後でのちょっとした休憩だ。息抜きも必要だぜ？」
「そういう問題じゃないです！」
『禍の団』の調査をしていたと語るアザゼル。彼の言う通り、多少のアルコール程度では色々と鈍る様な体の作りにはなっていない。シンとしては、昨晩の疲れているアザゼルの姿を見ているので休める内に休んでおくことは否定しない。仮に世間一般的には不評を買う光景だろうと。

ロスヴァイセがあれこれと注意するがアザゼルはのらりくらりと躱していく。年季の差が分かる攻防であり、ロスヴァイセがムキになるほどアザゼルも楽しんでいた。

他愛のない雑談に花を咲かせる彼ら。本当にこの瞬間だけは学生らしく修学旅行を堪能していた。

この瞬間までは――

「え……？」

誰が出した声なのかは分からないが、少なくとも皆の心境を代弁した声であった。

観光客で賑わっていた筈の店内から突然客の姿が消える。シンたちを残して。松田、元浜、桐生の姿も無い。木場が同行している班のメンバーも居ない。残されているのは裏側に関わる者たちのみ。

「な、何じゃ！　何が起こったというのじゃ！」

「アザゼル先生！　これって……！」

「油断した覚えは無いんだがな……！　どうやら相当な使い手が居るみたいだぜ？」

アザゼルの表情には悔しさが滲み出ていた。

隔絶された異空間。シンには心当たりがある。

「『絶霧』か……」

シンが出したのは神滅具の名。つまりは近くに英雄派が潜んでおり、自分たちは襲撃

されていることを意味する。
「俺たちだけ別空間に強制転移させたみたいだな。ご丁寧にさっきまでいた店内までトレースして再現してやがる。前兆を感じさせないなんてやりやがるな」
一応褒めてはいるが、アザゼルの目は鋭いまま周囲を見回している。
「や、奴らが……母上を攫った者たちが来ているのじゃな……？」
九重は不安そうに一誠の制服の端を掴む。怯えるのも無理は無い。実戦経験が殆ど無い九重にとっては、この空間自体が恐怖そのものである。
「その通り」
「お前っ！」
いつの間にか一番離れた椅子に座る者が居た。アザゼルたちは初対面だが、シンはその人物を知っている。一誠が特に驚いていたのは、修学旅行初日で彼にぶつかったあの時の学生がまさに目の前の男だったからだ。薄々そんな気はしていたが、やはり英雄派の関係者であった。
「初めまして、アザゼル総督。君たちとはこの間振りだ、赤龍帝、人修羅」
「曹操……」

宣戦、布告（後編）

　無防備と言える様子で現れたこの男こそが英雄派を総ている男であり、今回の事件の首謀者。それを知った途端、一誠は『赤龍帝の籠手』を装着し、木場は魔聖剣、ゼノヴィアはアスカロン、イリナは『擬態の聖剣』を構える。
「ああ、先に言っておくが下手に攻撃しない方が良い。この空間はとても脆く作ってある。そして、君たちがさっきまでいた店内と重なる様に存在している。もし、攻撃でもすればすぐにこの空間は破壊され、元の世界に戻ることになる。そうなった時、どんな巻き添えが起こるかは保障しないよ？」
　その言葉で攻撃することを封じられてしまった一誠たち。
「流石に無関係な人間が傷付くのは心が痛む」
「自分で巻き込んで人質にしておいてよく言うぜ！」
「だからこそ人質には生きていて欲しいのさ。俺は穏便に済むことを願っているからね。少なくともこの場では。それにこれは君たちへの信用とも言える。悪戯に無辜の人々に害を与えない、という信用さ。――それとも俺の目は節穴だったかな？」
　一誠や他の者たちが悔しそうに唇を噛み締める。思惑通りに動かされることに不快

感を覚えるが、曹操が言った通り無関係の人達が傷付くのは一誠たちの望むことではない。

上手く言い返せず睨むしかない一誠らの代わりにアザゼルが問う。

「お前が噂の英雄派を仕切っている男か？」

「彼には自己紹介したが、もう一度しておこう。曹操と名乗っている。三国志で有名な曹操の子孫――一応ね」

ふてぶてしく名乗る曹操。周囲に仲間が潜んでいるかもしれないが、一人でこの多人数を相手に堂々としている。

「お前、ここに――」

「貴様！」

アザゼルの言葉を遮るのは九重の怒声。その表情は幼子に不似合いな憤怒が浮かび上がっている。

「おやおや。妖怪の小さな姫君。何の御用でしょうか？　私如きでよろしければ何なりとお答えしましょう」

慇懃無礼とはまさにこれと言わんばかりの態度。その丁寧さが逆に腹立たしさを感じさせる。

「ひとつ訊く！　貴様が命じて母上を攫わせたのか！」

「左様で」
「おのれぇ……！」
犬歯を剥き出しにして呪詛を込めた目で曹操を睨む九重。先程までの怯えも母を奪った怨敵を前にすれば吹き飛んでしまう。
「母上をどうするつもりじゃ！」
「そのことで今日は報せに参りました」
九重に相手に礼儀正しく接するが、返って九重の癪に障る。今にも飛び掛かりそうな九重の両肩に一誠がそっと手を乗せ、落ち着かせようとする。
「報せに？　随分と律儀じゃねえか。痕跡残さずに隠れていたくせによぉ。お陰で京都を楽しむ時間が減っちまったじゃねぇか――で？　わざわざ言いに来るんだから耳寄りな報せなんだろうな？」
二人の前にアザゼルが出て、曹操に嫌味を言う。本当ならもっと言いたかったが、それよりも報せの内容が気になっていた。
「ああ。我々は今夜、この京都という特殊な力場と九尾の御大将を使い、二条城で一つの大きな実験をする」
「実験だと……？　それを堂々と俺達に言いに来たのか？　随分と舐めたことをほざいてくれるじゃねぇか……若造が……！」

抑えていても抑えきれない怒りによりアザゼルの体から光の粒子が蛍火の如く立ち昇っていく。普段、教え子たちの前では見せない憤怒の表情が?き出し殺意と共に曹操へ向けられる。

苛烈な怒気と殺気を浴びせられて尚、曹操は涼風の中に立っているかと思わせる爽やか微笑を見せている。

「舐めているつもりは無いさ。やるべき事をやり、準備も完璧に終えたからこそ報せに来たという訳です」

「それが舐めているって言うんだよ。そんなことせずに勝手に始めていれば、要らない妨害も入らないってもんだろうが?」

「それじゃあ挑戦する意味が無い。苦難を超えてこそ人間として何処まで行けるか測れるってものですよ。その為の宣戦布告だ」

悪魔、堕天使、妖怪たちに妨害されることを望み、それを挑戦と言い切る曹操。一誠たちは真っ直ぐに言い切る彼に得体の知れなさを覚える。

「そ、その為に母上を……?　母上は、母上は何もしてないというのに……」

様々な感情で体を震わせる九重。そんな彼女を見て、曹操は顎に手を当てる。

「強いて言うなら……その存在自体が問題なのでしょうね」

情け容赦の無い一言に耐え切れず一誠がつい口を挟む。

「お前っ！」
「九尾の狐は絵物語で語られるなら誰もその存在を否定はしない。でも、実在するとしたのならこの世から居なくなることを望むだろうね――普通の人間なら」
そんなことは無い。とこの場で断じる者は居なかった。そもそも全員人間でも無いので言う資格すら無い。唯一、シンが人間という部類に入るがあくまで人間寄りなだけで体には魔人の力が流れている。そもそも思考が普通の人間から外れつつあった。
「そんな……そんなの……」
曹操の言葉のショックで九重は上手く言葉を紡ぐことが出来ず、双眸に涙を溜めていく。
「いやいや、申し訳ございません。幼い姫君、貴女を泣かすつもりは――」
曹操はそこで言葉を止めると、両手から光を放つ。黄昏の夕陽を彷彿とさせるその光は瞬く間に集束して一本の槍と化した。
そして、その槍を払った時、影から飛び出した漆黒の巨影が繰り出す刃と衝突する。
「これはこれは。噂のオンギョウキ殿ではございませんか」
「貴様が奴らの頭か……！」
オンギョウキの一撃を人の身で受け止めてみせた曹操。それだけではなくオンギョウキの奇襲にも真っ先に気付いていた。その時点で並外れた実力者なのが嫌でも分か

る。
「――ああ、成程。影を通じて移動することが可能なのか。この結界の中まで入ってこれるとは便利だ。戦いの前に知れて良かった」
「ならば駄賃としてその首、頂く！」
槍と刃が拮抗した瞬間、裂帛した音が空間内に響き渡り、無数の罅が生じ始める。
「これは……！」
「彼らには説明したけどこの空間は脆く出来ているんだ。こうやって俺達の鍔迫り合いで崩壊し出すぐらいに」
曹操はそう言っているが、実際は一誠のドラゴンショットやアザゼルの光の槍級の攻撃でもしなければ結界は崩れ出さない。つまり、曹操とオンギョウキの一瞬の拮抗にはそれだけの力が生み出されたということになる。
張り巡らされた結界がガラス片の様に落ち始め、結界内の光景が揺らぎ始める。結界から元の場所に戻り出す前兆であった。
「ちっ」
オンギョウキは起こっていることを正確に把握し、舌打ちをして曹操から離れる。
「色々と早くて助かる」
曹操は槍を一回転させ、肩に担ぐ構えになると柄で肩を叩く動作をする。

「では今夜。我らの祭りの参加を期待しているよ」
最後まで余裕ある態度を崩さない曹操。
「……覚えておけ。その首、私が貰う」
オンギョウキの宣戦布告に対し、曹操は――
「残念だが、俺の死は先約済みさ」
――謎の言葉を残し、突如発生した霧によって消えてしまった。
曹操が消えると結界の崩壊は早まり、一際大きな音が鳴り響くといつの間にか元の湯豆腐屋にシンたちは戻っていた。
「――にしてもこういう店で湯豆腐食ったの初めてだけど、いけるな。なあ？　……おい、イッセー？」
近くに座っている一誠に声を掛ける松田。
一誠たちは何事もなかったかのように着席しており、曹操を攻撃したオンギョウキも煙の様に消えていた。
「どうかしたか？　すっげー険しい顔になってんぞ？」
湯豆腐屋に不似合いな一誠の表情に松田は調子でも悪くなったのか心配そうに尋ねる。
「……いや、何でもない。この後、どんな観光しようか真剣に悩んでいただけだ」

松田に指摘され、慌てて険しさを緩める一誠。一誠の態度に少し疑問を持つも松田は深く聞くことはしなかった。

松田は一誠のことに気を取られていたが、他の何人かも似たような表情をしている。

「ねえ、間薙君」

表情筋を一ミリたりとも変化させていないシンに桐生が話し掛ける。

「どうかしたか？」

「何か嫌なことでもあった？」

「――そう見えるか？」

「ただ、なーんとなくそう思っただけ」

表情は消していてもシンの身から僅かに匂い立つ殺気を桐生は敏感に感じ取り、恐る恐るではあるが気に掛ける。

まだまだそういったコントロールが未熟であると再認識しながら、この感情を消すことは無いだろうと自覚する。

強い殺意は魔人の糧になるのだから。

◇

その日の夕食も終わり、シンたちはアザゼルに作戦会議のことを伝えられた。今夜行われる英雄派との戦いについての会議である。

場所はシンと一誠たちの部屋。シトリー眷属たちも加わるので一番大きな部屋で行うこととなる。

それでも十を超える人数が一室に集まるとかなり密集した状態であった。

アザゼルが全員集まったのを見ると、作戦会議を始める。

「今、二条城と京都駅を中心に非常警戒態勢を敷いてある。京都を中心に動いていた悪魔に堕天使、そして京都に住む妖怪たちにも協力してもらい二条城の観測を行ってもらっている」

「観測、ですか？」

匙がその言葉に疑問を浮かべる。かなりの人数がいるのは分かっているのでてっきり英雄派の者たちを探っていると思ったからだ。

「残念だが奴らが『絶霧』で身を隠している以上発見することは困難だ。それに俺達の方から監視に留める様に指示してある。下手に手を出せば多くの犠牲が出る。何せ曹操は最強の神滅具を持っているからな」

「最強って……うぇえ」

最強。強力な神滅具の中でも更に上位の神滅具。匙の方はその言葉にすっかりと怯

んでしまう。
「それってあの時に見せた槍のことですよね？」
「そうだ。『黄昏の聖槍（トゥルー・ロンギヌス）』。神をも貫く絶対の神器であり、神滅具の代名詞となった原物。……俺も見るのは久しぶりだ」
その名に劇的反応を示すのは、教会の教えが今も根付いているアーシア、イリナ、ゼノヴィアであった。
イリナ曰く天界の熾天使たちすら恐れる聖槍。ゼノヴィア曰く神の子を貫き、その血で濡れた絶対の槍。
アザゼルが言うに信仰がある者には絶大的な効果があり、槍を見つめてしまうと心を持っていかれるという。
「そんな由緒ある聖槍の使い手がよりにもよってテロリストとはな……」
「死んだ神が手招きしているのかもしれませんね」
アザゼルのぼやきにシンが皮肉を言うと部屋の中の視線がシンに集中する。その目が『こんな時に不謹慎なことを言うなよ』と非難していた。尤も、そんな非難の目を浴びせられてもシン本人は平然としている。
「はっ。そういう冗談は嫌いじゃねぇぜ。――にしても『黄昏の聖槍』と『絶霧』という上位クラスの神滅具が二つも揃っているってのはどういうことだ？　普通なら誕生と

共に分かる筈なのに……誰かが故意に隠した可能性が……？」

ふとした疑問に自問自答を始めるアザゼル。

「何かしらの因果関係が発生しているのか？　神滅具の自体が神器のバグ、エラーの類だと言われているのに……所有者も含めて因果律でも起こっているのか？　それともこうなる様に全てが集束している？　イッセーやヴァーリの予想外の成長もそれと関係が……？」

没頭すると話が長くなると思われたので、一誠が声を掛ける。

「あの、先生……」

「――おっと、悪いな。この話は後回しだ。先に話すことがあったな。でだ、観測している連中から二条城に不穏な気が流れて込んでいるという報告があった」

「不穏な気ですか？」

「そもそも京都は陰陽道や風水に基づいて創られた大規模な術式都市だ。それ故に各地に所謂、パワースポットというやつがある。有名な神社だったり地蔵だったりな。それこそ挙げればキリが無い程だ。そして、それらの気脈が現在乱されて二条城に全ての力が流れ込んでいる」

話を聞くだけで危険な予感しかしない。

「そこで九尾の狐を使っての実験とくれば。何をするかは分からんが碌でもないことは

間違い無い。今回の作戦の目的は八坂の姫を救出して奴らの実験を潰すことだ。その為の人選を今から発表する」

まず名を出されたのはシトリー眷属であった。

「まずシトリー眷属は京都駅周辺で待機。このホテルをお前たちに守ってもらう。一応、このホテルは強固な結界が張られているが、敵にはその結界のスペシャリストがいるから安心出来ん。外部から英雄派の援軍が来てこのホテルの生徒を人質にする可能性もある。最悪の結果だけは避けてくれ。匙以外のメンバーで」

「お、俺以外ですか？」

てっきり自分も守備を任せられると思っていたので匙は驚かされる。

「お前はグレモリー眷属と一緒に行動だ」

「龍王、ヴリトラの力が必要って訳ですね？」

「ああ。お前とヴリトラの相性は正直予想外のもんだ。はっきり言って今の段階で禁手、神滅具相手でも引けを取らない。だからこそお前の力が前線で必要だ」

匙はブルブルと体を震わす。戦いの最前線に送られる恐怖から来る震えではない。アザゼルにここまで言わせる程に自分たちの実力が高く評価されていることに感動してしまっていた。

抑えきれない喜びに打ち震えている匙の両肩に花戒と草下が手を置く。

「喜ぶのは良いけど無理しちゃ駄目よ、元ちゃん」
「そうそう。皆でお土産を買ってちゃんと会長に渡さないといけないんだから」
「分かっているよ、花戒、草下。俺もヴリトラもこんな所で死ぬ気なんてサラサラねぇ」
そんな彼の背中をパシリと叩く二つの手。
「元士郎、気合いは結構だが空回りはするんじゃないよ？」
「危なくなったらさっさと逃げなさい。大丈夫、私たちが誰にも文句なんて言わせないから」
「気持ちだけは受け取っておくぜ由良、巡」
仲間からの激励を受けて匙の精神は大きく昂る。
アザゼルとしてはその仲睦まじい様子を微笑ましく思うと同時に引き裂いて行動させることに罪悪感の一つも覚えるが、それを表に出すことなく作戦内容の続きを話す。
「そして、グレモリー眷属とイリナ、シンにケルベロスはいつも悪いがオフェンス担当だ。この後二条城に向かってもらう。シンのおかげで相手の戦力について最低限の情報はある。だが、それでも危険なことには変わらない。あくまで目的は八坂の姫を奪還することだ。それが出来たら速攻逃げろ。後のことは俺達に任せておけば良い」
「俺達、ですか？」
「ああ。今回の件で外部から助っ人に連絡を入れてある。各地で『禍の団』のテロを潰し

てきた実績のあるプロフェッショナルだ。魔人の封印にも携わったこともあるぞ」
それだけ実績があるのならかなり有名な実力者だと思われた。
「そんな助っ人が……誰ですか？」
木場が誰かと訊くが、アザゼルは何故か微妙な顔付きになる。
「後のお楽しみだ――と言いたいが実の所、連絡を入れてはいいがまだ返信が来ていない。……まあ、大丈夫だ多分」
不安が若干残る言い方だが、皆はアザゼルを信じることにした。敢えて助っ人の詳細を語らないのは、これから戦う一誠たちが浮足立たないようにする為である。誰かが助けてくれる、という考え方自体は悪くないが度も過ぎれば神器の性能が鈍る。
そこから大まかな指示を出した後、アザゼルは各自部屋に残って準備をした後にホテル前に集合することを告げ、解散となった。
あれだけ人が居た部屋も今はシン、一誠、ケルベロスだけになっている。
「なあ……」
「何だ？」
残された時間の間に一誠がシンに話し掛ける。
「今まで堕天使とか悪魔とかと戦って来たけど、今度の相手は英雄……何だよな？」
一誠が改まったそんなことを聞いてきた。

「いや、何というかさ、俺が人間だった頃って英雄といえば羨望の的じゃん？　特に俺みたいな凡人側からすれば。別に俺は悪魔でドラゴンになったことには後悔していないけど、英雄っていうかヒーローからすれば俺達って都合の良い悪役だよな？」

自分たちは正しいことをしているのだろうが、相手が歴史に名を残す英雄たちの子孫で人間であることのせいでモヤモヤとしたものを抱いてしまうのが伝わってくる。一誠の中では悪魔として人間と戦うことは自分でも軽く驚くぐらいに割り切れている。

実は正義は正義じゃなく、悪は悪ではないのかもしれないというハッキリ区別出来ずにぐちゃぐちゃに混ざっているこの状況に対しての悩みと言える。

「どうでもいいことだ」

「どうでもいいって、おい」

悩みをその一言切って捨てるシンに一誠は流石にムッとした表情となる。

「深く考える必要も無いだろ、今回の戦いは。連中の英雄（ヒーロー）ごっこに俺達が悪役で特別に付き合ってやる――ただそれだけのことだ」

英雄派の企みや陰謀を英雄ごっこという皮肉で片付けてしまうシンに、一誠は呆気に取られたがすぐに笑い声を出す。

「ははは。こういう時のお前って本当に頼りになるなー。よっしゃ！　じゃあ、いっちょ悪役らしく全部ぶっ壊してやるとするか！」

吹っ切れた様子でいつもの調子に戻る一誠。
「その意気で頑張れ。『邪悪な赤龍帝（ダークネス・ウェルシュ・ドラゴン）』」
いつぞやのレーティングゲームで出した名で呼ぶ。
「おい！　馬鹿にしてんだろ！」
大きな戦いに挑む前とは思えない様な年相応にはしゃぐ二人であった。

◇

シンたちが集合地点であるホテル前に向かう途中でゼノヴィア、イリナ、アーシアと合流する。ゼノヴィアの手には文字が記された布にくるまれた長い得物が持たれていた。文字の方は明らかに魔術関係のものである。
二人の視線に気付き、ゼノヴィアが説明する。
「ああ、これか。先程教会から届けられたばかりだ。――改良されたデュランダルだよ」
戦力が増強することは喜ばしく思える反面、いきなり実戦で新武器を扱うことに若干の不安を覚える。
「いきなり実戦投入かー。大丈夫なのか？」
「まあ、私とデュランダルらしいとも言えるがな。安心しろ、軽く握ってみたが感触は以

前のデュランダルとは変わらなかった。上手く扱ってみせるさ……と断言したい所だが、もしものこともある。またアスカロンを使わせてもらうかもしれない」
「分かった。遠慮なく使え。そういえば――」
一誠の視線がゼノヴィアとイリナを交互に見る。
「いつもの教会の戦闘服じゃないんだな」
体に張り付く程密着したボディスーツではなく制服姿なのを指摘する。決してそれを残念に思っているからではない。
「ああ、それか。大丈夫だ。きちんと下に着ている。いざという時は脱いで動き易くする」
ゼノヴィアが躊躇いもなく制服の上着の端を掴むと一気に捲り上げた。ゼノヴィアの言う通り、確かに下にボディスーツを着ていたが――
「はしたないから止めろ」
――シンがゼノヴィアの頭を軽く叩いて止めさせる。
「むうう……下着を見せている訳ではないぞ?」
「そのずれた発言をしている限り、何度も同じ目に合うと思っておけ」
不満そうにしているゼノヴィアにシンが無表情のまま告げる。
兄妹の様なやりとりに一誠たちは思わず吹き出し、そこへ合流してきた木場は皆が

笑っている光景に首を傾げていた。
「あれ？　何かおかしなことでもあったのかい？」
「いやな、さっき――」
緊張感とは無縁の雑談をしながらホテル前にまで来る。そこでは匙が他のシトリー眷属と言葉を交わしていた。
「全員集合か。なら行くとするか」
「皆さん、まだこのチームに入って間もない若輩者ですが、足手纏いにならないように頑張ります」
先に待機していたアザゼルが全員揃ったのを告げる。アザゼルと同じく待っていたロスヴァイセは、やや緊張した面持ちながら謙虚な態度で軽く頭を下げた。
準備は出来た。シトリー眷属たちを残して二条城へ向かう。
空を飛んで行けば楽だが、まだこの時間帯でも外出をしている人々の数は少なくない。人の目があるので怪しまれないようにバスで移動する。学生がこんな時間に外出するのは目立つかもしれないが、引率する教師が居れば授業の一環として通報されることは無いだろう。
戦う前の光景としてはシュールかもしれないが、一行はバス停の前でバスを待つ。
待っている最中、シンは視界の端で何かが駆けていくのが見えた。確認するよりも先

に反射的に手が伸び、捕まえる。
「ぐえっ！」
後襟を掴まれてカエルの様な声を上げたのは九重であった。敵では無かったので襟から手を離す。九重は咳込んだ後、シンに怒鳴った。
「な、何をするのじゃ貴様！　窒息させる気か！」
咳き込みと怒りで九重が顔を真っ赤にする。怒るのは当然かもしれないが、そんなことよりも訊くことがあった。
「おい、九重。どうしてここに？」
「赤龍帝！　私も行くぞ！　私も母上を救う！」
そう意気込む九重。健気な決意だがアザゼルが渋い顔をしていた。
「裏京都で待っている様に言っただろ？　お姫さん？」
「言われた……じゃが、母上の危機にじっとしてなどいられん！　頼む！　私も連れて行ってくれ！」
真剣な表情で頼み込む九重。本来ならばレヴィアタンを護衛として傍に置いておく予定であったが、こうなるとそれも意味が無くなってしまう。
アザゼルは暫しの間、黙考する。後のことを考えている様子であった。
「こうなったら仕方ねぇ。一緒に連れて行くしかねぇな」

アザゼルは九重の同行を認める。
「いいんですか？」
木場が小声でアザゼルに問う。場合によっては堕天使と妖怪の間でのトラブルに発展しかねない。
「妖怪連中呼んでまた勝手に動かれたら、それこそ問題だ。こんだけお転婆なら何度でもやりかねん。なら、なるべく目の届く所に置いておく方が良い。それにだ――」
アザゼルは静かに周囲を見回す。
「八坂の姫さんが誘拐されて間もないのに、九重一人で出歩かせるなんて不用心な真似をするとは思えない。気配は感じられないが、きっと護衛のオンギョウキが何処かに潜んでいる筈だ」
アザゼルに倣って木場や話を聞いていたシンも周りを見渡す。二人の感覚でもオンギョウキの気配は感じ取れない。
「まあ、確かにそうなんですが……でも、本当に居る――」
【居るから安心しろ】
「うわっ」
思わず声を上げてしまった木場は慌てて口を押える。姿形の見えないオンギョウキの声が突然耳元で囁やかれたのだから無理も無い。因みにアザゼルとシンにも同じ事

が起きており、声を上げることは無かったが顔を顰めていた。
「――ということだ。お姫さんの御守は凄腕忍者に任せておくぞ」
そして、停留所へバスが到着し、バスへ乗る一行。特にトラブルも無く、やがて二条城に着こうとした時――
「へ……？」
――バスの中に居た筈の一誠は駅の構内に立っていた。駅には『京都』のプレートが掛けられている。
あまりに自然過ぎる転送に一誠は夢を見ているのかと思ったが、昼間の湯豆腐屋のことを思い出してすぐに夢ではないことに気付く。
「くそったれ……またやられた……」
また『絶霧』によって転送させられたこと、理不尽過ぎる『絶霧』の能力に腹が立ってくる。折角立てたアザゼルの作戦も初っ端から台無しにされてしまった。
仲間たちともバラバラ。一誠も一人――ではなかった。
「こ、ここは地下のホームか？」
九重が不安そうに一誠のズボンを掴む。偶々近くにいたせいで、一誠の転送に巻き込まれていた。
「ああ、昼間の湯豆腐屋でのことをまたやられたらしい」

「で、では、ここは別空間に創られた疑似京都なのか？　うぬぅ……奴らを隈なく探しても見つからなかったのはここに潜伏していたのじゃな……恐ろしい技よ」
九重の感想に一誠も同感であった。流石は上位神滅具と呼ばれる程のことはある。
不意に鳴る音。その音に九重が驚いて一誠の足にしがみつく。鳴っていたのは携帯電話の着信音。こんな特殊な場所で携帯電話が通じることに驚くが、ミスではなく意図的に繋げられる様になっているのが分かる。
着信表示されているのは木場の名であった。
「もしもし、木場か？　今どこだ？」
『うん。こっちは京都御所にいる』
電話で互いの位置情報を交換する。この疑似空間がかなり広く作られているらしい。
「誰と一緒にいるんだ？」
『ゼノヴィアとイリナと一緒だよ。そっちは？』
「こっちは九重と一緒だ。不味いな……思っている以上にバラバラだ」
シンやアザゼルが一人でも大丈夫だろう、という信頼があったが、もしアーシアが誰かと一緒ではなく一人になっていたらと思うと途端に不安に思う。アーシアには今も護衛としてギリメカラが影の中に潜んでいる筈だが、確実に守ってくれる、と言い切れない程怠惰なので余計に不安が増す。

そもそもこの疑似空間に招いたのは『絶霧』の所持者。アーシアたちと『絶霧』の所持者との間にはそれなりの因縁があるので単独行動をさせられている可能性が高い。
「ここは――」
そこまで言い掛け続きの言葉を呑み込んだ。英雄派と思わしきサングラスの男が静かにそこに佇んでいる。
「木場、後で二条城で合流だ」
口早にそう告げ、携帯電話の電源を切る。そして、九重を守る為に一歩前に出た。
「九重。お前のお袋さんは絶対に救う。だから、俺の傍から離れちゃダメだぞ？　お前を守れなくなるからな」
「う、うむ！　分かった！」
これから始まる戦いへの緊張と、戦う男の顔付きになった一誠に九重は声を上擦らせる。
「相変わらずカッコイイな赤龍帝殿。俺のことは覚えているかな？」
皮肉ではなく素直に称賛した後、自分のことを聞いてくるサングラスの男。
「見覚えは……ある」
一誠の言う通り見覚えはあった。しかし、何処であったのかは思い出せない。
サングラスの男は正直な返答に特に不快感を見せず、寧ろ納得する素振りを見せる

「まあ、そんなところだろうな。いや、雑魚だったあの時の俺ですら記憶の欠片程度覚えてくれたことに逆に礼を言うべきかもな。――でも、それじゃあ公平じゃない」
サングラスの男がそう言うと男の足元から伸びる影が生物の様に蠢き、形を変える。その能力を見て、一誠はサングラスの男と何処であったのかを思い出した。
「思い出した……俺の町を襲撃してきた影使いの神器所有者……！」
「ご名答。ついでに神器の名は『闇夜の大盾（ナイト・リフレクション）』だ。覚えたか？　それとも覚えていたか？」
サングラスの男はペラペラと喋っているのだが、一誠は彼から余裕を感じなかった。笑みを浮かべているというのに、顔色は病人の様に蒼褪めている。よく見ると手足も震えていた。
サングラスの男もそれを自覚しており、細かく震える手を見て、強く握り締める。
「曹操に頼み込んで手に入れたチャンスだ……思い出せ、思い出せ！　あの時の悔しさ、怖さ、不甲斐なさを……！　やれる……俺はやれるんだ……！」
過去の敗北を糧に自らを奮い起こそうとしている。
一誠からすれば不思議な気分であった。同格、格上扱いをされたことは過去にあったが、畏怖の対象として見られているのは初めてであった。
「そうだ……！　俺はやれる……俺は赤龍帝に勝つ！　薄汚い野良犬がドラゴンの喉笛

を掻っ切る瞬間を見せてやる！」

◇

一方的に切られる一誠との通話。木場はそれを咎めることはしない。する余裕が無かった。

一誠の許にサングラスの男が現れた様に、木場たちの前にも英雄派の刺客が姿を現していた。

「グチグチと文句を言っていたけど、やっぱり良い仕事をするね、ゲオルクは。こんばんは。そして、初めまして木場裕斗君。そちらの二人とは久しぶりかな？」

「あれで小言が少なかったら、お姉さんもっと好きになってたのになー」

三人と対峙するのはジークフリートとジャンヌ。

「初めまして、だ。君のことについては色々と聞かせてもらったよ」

「やはり、お前だったのか……」

「ジークさん！　まさか貴方が『禍の団』に付くなんて……！」

三人の反応がジークフリートにのみ向けられているとジャンヌはわざとらしく涙を拭うジェスチャーをする。

「私も居るのに悲しいなぁ。お姉さん、泣いちゃうよ？　ジー君は相変わらずモテモテで妬いちゃいそう」
「ふふ。まあまあ。大丈夫、僕一人で独り占めはしないさ」
ジークフリートは複数帯刀している魔剣の中からグラムを引き抜く。
「お互いのことは既に知っていることだし、ここからは剣士同士剣で語ろうじゃないか。迅く、鋭く、激しく、ね」

◇

バラバラに飛ばされたロスヴァイセ。彼女もまた二条城を眺めて自分の場所を確認していた。その隣ではケルベロスが座っている。
「いきなり出鼻を挫かれてしまいましたね……ここはアザゼル教諭と一旦連絡を――」
「待テ」
連絡を取ろうとしているロスヴァイセを止めるケルベロス。彼はいつの間にか前傾になっており戦闘態勢に入っていた。それを見てロスヴァイセもスーツから鎧へ換装する。
破砕音と共に地面へ降り立ったのはヘラクレス。ケルベロスの姿を捉えるとボキボ

キと指を鳴らす。
「よおー、犬ッコロ。再戦に来てやったぜ」
「グルルルル。今度コソソノ頭、噛ミ砕イテヤル」
互いに威嚇する様に歯を剥き出しにしする。
ケルベロスに注目していたヘラクレスであったが、傍らにいるロスヴァイセに気付いた。
「何だおまけも付いているのかよ。まあいい。二人――じゃなく一人と一匹まとめて相手してやるか」
「あまり甘くみない方がいいですよ？　北欧の魔術がどれ程のものかその身で体感してみますか？」
おまけ扱いされたロスヴァイセ。戦乙女の誇りが傷付いたのか、普段よりも刺々しい口調で言葉を返す。
「よく見りゃいい女じゃねぇか。なら中身も良いかどうか確かめてやるぜ！　俺は外見も中身も拘る方だからなぁ！」
拳を握ると巨漢ヘラクレスが二人へ襲い掛かる。

◇

「ここは……？　イッセーさーん！」
孤立したアーシアは一誠の名を呼ぶが返事は無い。周囲には薄い霧が掛かっており、自分が『絶霧』の領域内に連れて来られたのを理解した。
「――久しぶりだな。アーシア・アルジェント」
霧の中から浮き上がる様に出現するはゲオルク。
「貴方は、ゲオルクさん……！」
「あの時の雪辱をここで果たさせてもらおう！　さあ、ギリメカラを呼べ！」
ゲオルクがそう言うが、アーシアの方は困った様子であった。
「どうした？　早くギリメカラを出せ」
「あ、あの……私、一度もギリメカラさんを呼び出したことが無くて……」
「な、何を言っている？　お前と契約をしているんじゃないのか？」
アーシアはギリメカラと契約して使役していると思っていたゲオルクは、違っていたことに動揺する。
「一応、私が預かっている形にはなっていますけど……」
「兎に角、ギリメカラを呼べばいいんだ！　お前たち二人を相手にしなければ意味が無い！」

若干必死な様子でゲオルクが言うので、アーシアも取り敢えずギリメカラを呼んでみる。
「ギ、ギリメカラさーん！」
自分の影に呼び掛けてみた。返事は無い。もう一度、アーシアが呼んでみる。やはり反応は無い。
「ギリメカラは……そこに居るのだろう？」
「えーと……多分？」
「多分では済まんぞ！　居なければ俺が困る！　何の為にここまでお膳立てをしたと思っているんだ！」
予定が大きく狂い始めていることにゲオルクは焦り出していた。仲間の要望をあれこれと細かい作業をしながら叶えたというのに、自分だけ上手くいかないなど納得出来る筈が無い。
もしかしたら、ここにはアーシアだけしかいないのでは。そんな不安をゲオルクが抱いた時、不意にアーシアの影から黒い煙がゲオルク目掛けて噴き出す。
瞬く間に黒い煙に包まれるゲオルク。すると、アーシアの影からギリメカラが這い出てきた。
「ギ、ギリメカラさん！　やっぱり居たんですね！」

ギリメカラの存在に一先ず安心するアーシア。ギリメカラは特に彼女へ興味を示さず欠伸をしていた。

「全く……相変わらずふざけた奴だ」

黒煙の中から聞こえるゲオルクの呆れとほんの少しの安堵が混じった声。黒煙――毒ガスが白い霧によって浸食されていき、最後には覆い尽くされる。

「だが、それで結構だ。その余裕を今から俺が剥ぎ取る……！」

◇

「俺って日頃の行いは良いと思うんだけどなぁ……」

途方に暮れた様に匙は独り言う。

「そりゃあ、グレていた時もあったけどさぁ。ちゃんと反省して真面目にやって来たとは思うんだよ」

『お前の過去も断片ながら我も知っている。まあ、それとこれとはあまり関係は無い。そういう時もある、それだけだ』

匙の裡に居るヴリトラが慰めの言葉を掛けた。

自らの境遇に嘆きながら空を見上げている匙。彼の視線の先には夜空に向かって吼

える、金色の獣――九尾の狐がいた。
十メートル近い大きさの九尾の狐。広げられた九本の尾でより大きく見える。
匙は特に何かをした訳では無い。転送された場所で偶然、八坂らしき人物を発見したので確認の為に声を掛けただけ。そうしたら、苦しみ出して女性の姿から狐の姿に変わってしまった。
どう見ても正気を感じず、操られている目をしている。そして、その操られた目は匙を敵として見ていた。
「何かさぁ！　最近の俺ってデカい敵とばっか戦ってねぇか！」
牙?く伝説上の妖怪に、匙は泣き言を言いながらも自分も伝説の龍の力を顕現させる。

◇

「残り物には福がある、ってことわざも存外馬鹿にしたものじゃないみたいだ」
二条城の本丸にて曹操は上機嫌そうに『黄昏の聖槍』を回しながら言う。
彼の前に立つのはアザゼル。そして、もう一人オンギョウキが居た。
九重の護衛として影に徹するつもりであったが、『絶霧』の転送によって引き摺り出さ

れた挙句に九重と引き離されてしまった。今更ながら曹操の前で一度姿を見せてしまったことを悔やむ。オンギョウキが影に潜むのが分かっていてきちんと対処をしていた。

　アザゼルとオンギョウキを前にしても曹操は至って平常である。

「やれやれ。随分と思い切ったことをしてくれるじゃねぇか」

　アザゼルはファーブニルの宝玉を取り出し、いつでも人工神器を発動出来る様にする。

「……この場所に八坂様が捕らわれているのか？」

「ええ、勿論。救いに来たのだからきちんと用意しているさ。実は居なかった、という意地悪なんてしない。ただし――」

「救いたければ自分を倒してからにしろ、という訳か」

「流石、話が早い」

『黄昏の聖槍』の穂先が金色のオーラに包まれ、力の一端を解放する。

「――おい、オンギョウキ。ここは協力して行くぞ。一人で勝てる様な生易しい相手じゃない」

「元よりそのつもりだ。あの聖槍の輝きを見て一人で勝てると思う程自惚れてはいない」

自然に手を組むこととなったアザゼルとオンギョウキ。その光景に曹操は不敵に笑う。

「これは光栄の極み！　聖書に記されし、かの堕天使総督と唯一無二と謳われる本物の忍が戦ってくれるとは！」

曹操の覇気に応じて聖槍の輝きは世界を染め上げる程に強くなっていく。

「この挑戦、受けよう！　人間として！」

あくまで自分が挑む側とし、曹操は槍を構えた。

◇

まんまと隔離されてしまったシンは周囲を確認する。二条城の近くなのは分かる。仲間たちと合流するのが優先すべきことだが、下手にうろついていると敵に見つかると思い、取り敢えず目立つ場所である二条城を目指すことにする。

だが、その足が先を進むことは無かった。誰かの向けられた視線を感じ取ったからである。そして、その視線には明確な殺気が込められていた。

小さな足音と共に姿を見せたのはその足音に見合った男の子であった。場違いな存在に思えるかもしれないが、その目から放つ殺気は間違いなく本物であり、シンに敵意

を覚えているのが伝わって来る。
男の子――レオナルドは足元の影を広げる。大きく広がった影は盛り上がり、姿形の統一されていない何十もの異形が形成されていく。
英雄派が持つ三つ目の神滅具『魔獣創造（アナイアレイション・メーカー）』。それが生み出す無数の牙と爪がシン一人へと向けられる。

亜種、弦奏

「ふあああ」
二条城を監視していたフウキは欠伸をする。顔自体に大穴が開いているので顔そのものを開いて欠伸している様に見えるかもしれない。
「暇だなぁ。敵もだんまりしていないでいっその事、二条城をド派手に爆破するぐらいしてみろや」
不謹慎極まりないことを言い放つフウキ。
「確かに。それぐらいしてくれりゃあ、俺たちも退屈せずに済みそうだ」
その不謹慎発言に同意するのはスイキ。彼は監視が目的だというのに片手に酒器を持っており堂々と飲酒をしている。
「喧シイ奴ラダ……ダガ、確カニ退屈ダ」
キンキは喚く二人に文句を言いつつも、スイキの手から酒器をひったくって口に酒を注いでいる。
アザゼル配下の堕天使、セラフォルー配下の悪魔は自分勝手に振る舞う三鬼に対して驚きと非難が混じった視線を向けていたが、三鬼の方はそんな視線に全く動じない上に

態度も改めない。

これに肩身の狭い思いをしているのが京都の妖怪たちである。自分たちの大将である八坂を救う為に堕天使と悪魔が協力してくれているというのに三鬼この態度、酔っ払ってここを宴会場か何かと勘違いしているのではないかとすら思えてしまう。

妖怪たちが何か言いたそうな素振りを見せているが、三鬼はそれを知ってか知らずか場違いな品の無い笑い声を上げながら、三鬼以外の空気を冷やし尽していた。

堕天使、悪魔らは自分たちの仕事をしていたが、『どうにかしろ』という圧を妖怪たちに飛ばす。

出来ればそうしている、と妖怪たちは内心で思っていた。三鬼はこの場にいる妖怪たちの言う事を素直に聞く様な性格はしていない。言う事を聞かせるのならば九重かオンギョウキを連れて来なければならないが、両方とも現在不在である。

戦力としては頼りになるが、それ以上に跳ねっ返りの三鬼の手綱を上手く握ることが出来ず、妖怪たちは板挟み状態であった。

そんな中で救世主が現れる。

「君たちー、ここはそんなことをする場所じゃないよ☆」

裏京都で待機している筈のセラフォルーが三鬼の前に現れる。彼女は着物や魔法少女の姿ではなく魔王としての正装に身を包んでいた。

「レ、レヴィアタン様……！」

前触れもないセラフォルーの登場に悪魔たちはどよめく。堕天使、妖怪たちも同じ反応であった。

「おんやぁ？　これはこれはレヴィアタン殿ではございませんか？　我々に何か御用で？」

今気が付いた、と言わんばかりのわざとらしい態度。四大魔王の一人が目の前に現れても三鬼は微塵も臆しない。

「頑張る我らに労いで酌でもしに来ましたか？」

フウキがおどけた態度で酒器をセラフォルーに向けて掲げる。声色だけで嫌らしい笑みを浮かべているのを連想させた。

その態度に、三鬼を除いた周りのものたちが絶句する。無礼などという言葉を通り越して魔王に死を乞いている様にしか見えなかった。

「ふふふ。ダーメ☆」

セラフォルーはただ微笑む。次の瞬間、フウキが持っていた酒器が凍結。超低温によって一気に凍て付かされた酒器は崩壊し、中身の酒と共に氷の塵となってフウキの手から消えてしまった。

「ほーう？」

掲げていた酒器が一瞬よりも尚早く消滅したことで、僅かに氷の塵が残る手を興味深そうに眺めるフウキ。スイキは感心した様に口笛を鳴らし、キンキも赤眼を好奇で輝かせていた。

セラフォルーを前にしてもふてぶてしい態度を崩さない三鬼。一方で悪魔、堕天使、妖怪らは心臓が止まる思いであった。

何せセラフォルーが今どんな心情なのか一切分からない。怒気や殺気などの圧を全く外に出さず、魔力による威圧もせず、外から分かる情報はセラフォルーが微笑んでいるということだけ。完璧なまでに外部への情報を遮断させていた。

「――流石は魔王殿。空気の締め方というのを心得てらっしゃる」

スイキはセラフォルーに対して尊大な態度を潜めて、幾分の敬意を込めた態度へ変わった。フウキ、キンキも同様に振る舞う。

妖怪たちの煮え切らない態度――そんなことになっていたのは三鬼たちのせいだが――に嫌気が差していたが、かつて敵対関係にあった悪魔と堕天使の妙に慣れ合った空気も気色悪いと思っていた。

三鬼としては、そんな生温い空気よりも、それこそ場合によって敵ごとこいつらも消してやる、というもっと殺伐とした空気が好みであった。

場のつまらなさに思わず掻き回してやろうと思い、好き勝手横暴に振る舞ったが誰も

何もしてこない。正直、呆れてしまい妖怪以外の外の連中もこの程度かと半ば失望していた所であった。

そこに現れたのがセラフォルー。最初見た時の三鬼の印象は『顔は良い』ぐらいの認識であったが、先程の力の一端を見せられて印象は変わった。何せ、酒器が砕け散るまでセラフォルーの動きを全く把握出来なかったからだ。

魔王の名を受け継ぐ者の実力を垣間見る。その気になれば自分たちを酒器の様に塵に変えることが可能であろうと三鬼たちは感じた。

三鬼は暴力に等しい強さが好きだ。自分たちが向けるのも、向けられるのも、それを気ままに振るうのを好んでいる。

平穏な世では受け入れられない存在であることは認識している。だが、変わるつもりは無い。その考え方のせいで平穏な世から更に弾かれることになろうともだ。

力ある者に媚びる訳ではないが、三鬼自身もそれに及ばなくとも力ある者の立場。それを得るに至るまでのことを想像すれば敬意の一つも抱かずにはいられない。

彼らの大将であるオンギョウキとまでは行かないが、それなりの態度で三鬼はセラフォルーに接する。

「うーん、一目で分かる困ったちゃんたちだね☆　でも、こういう時には君たちの様な子たちが必要なんだよねー☆」

三鬼の扱い難さと有用さを瞬時に理解するセラフォルー。きちんとした戦力として扱うには自分が直々に指示を出す必要があると思った。
「それで？　レヴィアタン殿は何故ここへ？」
「そうそう。裏京都で待機という話でしたが？」
「ソレニ、オ嬢様ト一緒ニ居ル筈デハ？」
「それなんだけど……」
九重が八坂救出に行きたいということで独断で一誠たちと合流に向かってしまったと告げる。一応、護衛として密かにオンギョウキも付いていったと説明した。
「流石はおひい様。中々のお転婆ぶりだぜ」
「最近は塞ぎ込んでいたことが多いから、それぐらい好き勝手してくれた方が良いなー」
「ソレグライ元気ナ方ガ、コチラモ見テイテ安心スル」
そのことについて特に気にする様子の無い三鬼。
「でも……九重ちゃんとオンギョウキさんと連絡が付かなくなっちゃったの」
九重だけでなくアザゼルたちとの連絡も取れなくなってしまった。九重が合流していることはアザゼルから聞いていたが、その後に行方不明になってしまったのだ。護衛に付いていたオンギョウキとも連絡が付かなくなっているので巻き込まれた可能性が高い。

「ふーん。なら、大将らも何処かへ連れ去られたということか」
「うちらの大将攫うなんて、相手もやるじゃねぇか」
「相手ニトッテ不足ナシ」
　このことに関しても三鬼が動揺することは無かった。妖怪たちの姫、自分たち大将が英雄派に拉致されたかもしれないというのに薄情にしか映らない薄い反応。しかし、セラフォルーには違って見えた。
「君たち、オンギョウキさんのこと本当に信頼しているのね☆」
　彼らの薄情な態度は、オンギョウキに対する信頼故のものであるとセラフォルーは感じ取っていた。オンギョウキならば九重を無事に連れて帰って来るだろうという絶対的な強さへの信頼。
「おうよ。俺達の大将だからな」
　スイキはさも当然と言わんばかり頷く。
「その内、戻って来るだろー」
「ソウダナ」
　フウキ、キンキも無事に戻って来ることを信じて疑わない。
「君たちって、色んな意味で素直だよねー☆」
　何処へ行っても問題を起こすだろうし、彼らを扱うにはかなり手を焼くのが簡単に想

像出来る。
彼らの手綱を握る役目のオンギョウキが居ない以上、セラフォルーは自分が彼らに目を光らせておく必要があると思い、なるべく手の届く範囲に置いておこうと考えていた時、唐突にセラフォルーの視線が三鬼から外された。
セラフォルーの視線が動くと同時に三鬼もまた同じ所へ視線を向けている。その手に得物を構えながら。
黒い影が大きく地面に広がり、そこから這い出て来る黒い肌のモンスターたち。太い四肢を持ち二足歩行をしている。手足は均等に揃っているが、目鼻口などのパーツが目隠しして付けたのかと思える程バラバラに配置されており、目が口の下にあったり、鼻が口の真横にあるなど意図的に崩された絵画の様な顔になっていた。
数はかなりのもので軽く見ても百は超えている。
突然出現した謎のモンスターたちに、三鬼は愉し気に笑っていた。
「鬼相手に百鬼夜行かぁ？　随分と味な真似をしてくれるじゃねぇか」
スイキがそんな冗談を飛ばした瞬間、モンスターの一体が口を開き、そこから一条の光が放たれる。
「ふん！」
スイキがその光に向けて武器を突き出す。光線がそれに接触すると四方に飛び散り、

飛び散った光は地面に触れると爆発を起こす。
「へっ。見た目の割には派手な攻撃をしてくれるじゃねぇか」
光を防いでいたスイキの武器は赤熱化しており、それを握っているスイキの手からも白煙が上がっているが、本人は気にすることなく武器を握ったままであった。
「普通の光じゃねぇなー」
「一度見タコトガアル堕天使ノ光ニ似テイタ」
「似てる、じゃないよ。あれは天使や堕天使が使う光そのものだよ」
セラフォルーは一目で相手の攻撃の分析を済ませていた。彼女が言う通り、黒いモンスターが放ったのは間違いなく光の攻撃。それが何故モンスターが行えるのか。
セラフォルーの脳裏に一つの情報が浮かび上がる。
『禍の団』が各陣営に刺客を送り込んだ際に、団員だけでなく正体不明のモンスターが混じっていたという報告があった。それらは倒した後に跡形も無く消え去ったという。
最初はそれが戦力不足を補う為に『禍の団』が人工的に創り出したキメラなどの異形の類だと思われていた。
もしそれが各陣営のデータを収集するのが目的に送り込まれたものであるとしたら。そして、そんなモンスターを大量に創り出し、更には光の攻撃を付加させる。
そんなことを可能にする神器をセラフォルーは一つ知っていた。

神滅具『魔獣創造』。
その所有者が英雄派のメンバーにいる可能性が高い。連絡が付かなく一誠たちもそれに襲われていることも考えられた。
心配だが今は目の前のモンスターたちを退治することを優先とする。
「君たち！　この辺り一帯には結界が張ってあるから思いっきり暴れていいよ！」
セラフォルーの言葉に三鬼は意気揚々とそれぞれの得物を振り回す。
「じゃあお言葉に甘えて暴れるとするかぁ！」
「退屈な時間は終わりだ終わり！」
「三鬼ヲ相手ニシタコトヲ後悔サセテヤル！」
なだれ込んで来るモンスターたちに三鬼は雄叫びを上げて突っ込んでいった。

◇

『絶霧』の領域外で時間稼ぎ為の対三勢力用のモンスター――アンチモンスターを解き放ったレオナルドは領域内でもそのアンチモンスターたちをシンに襲い掛からせていた。
レオナルドは『魔獣創造』の力に目覚めてそこまで経っている訳ではない。また精神

力も十分な成長を遂げていないので『魔獣創造』の力を完全に引き出していない成長段階にある。現時点で二百近い怪物を生み出しているが、それでも完全に覚醒した『魔獣創造』の能力を知る者がいれば『少ない』と思う事だろう。

完全覚醒した『魔獣創造』ならば二条城よりも大きい怪獣を群れにして各陣営に放つことすら可能である。

そういう意味では、まだ未熟な内に戦っているのは幸運と言える。だが、レオナルドもそれを自覚しており、自らの能力を過信していない上に驕ってもいない。

レオナルドがシンに差し向けたアンチモンスターの数は百。上級の悪魔であっても塵すら残らないだろう。

シンの頭部を噛み砕く為に大口を開けて飛び掛かってくるアンチモンスター。その牙が届く前にシンの拳が下顎を突き上げて粉砕。その隙を狙って別のアンチモンスターが光線を発射する。シンが光の攻撃に対して耐性が低いことを調査済みであった。

顎を粉砕したアンチモンスターの口に指を引っ掛け、その力だけで振り回して発射された光線への盾にする。

光線が触れると爆発を引き起こすが、盾にしたアンチモンスター自体にも光への耐性があるのか体の一部が抉れるだけで済んでいた。

シンはそのままアンチモンスターを掴んで突進。その間にも二発目の光線が放たれ

るが、それも盾にしているアンチモンスターで受け止める。
二発連続で受け続けると流石に瀕死状態になっており、三発目には耐えられない状態にもなっていた。だが、三発目は受ける必要は無い。もう十分に距離を詰めることが出来た。
盾のアンチモンスターの背に掌を押し当てる。掌に集束した力は蛍光色に輝き、光弾となって撃ち出された。
光弾は盾のアンチモンスターを貫き、三発目の光線を発射しようとしていたアンチモンスターの顔面に命中。上顎から上を吹き飛ばしながら更に後方にいた別のアンチモンスターの頭部を三分の二に吹き飛ばす。
体に人が通れそうな風穴を開けられたアンチモンスターを物の様に投げ放ち、別のアンチモンスターたちを巻き込んで転倒させると、シンはその間に接近して手を振り下ろす。五指先から放たれる線の様に圧縮された力によってアンチモンスターたちの体が一瞬でバラバラにされた。
本の僅かな間に十近いアンチモンスターを倒したシン。しかし、周りにはまだ何十ものアンチモンスターたちが控えている。すると、シンは大きく息を吸い込んで肺を限界まで膨らますと、体内で吸い込んだ空気を変換して今度は一気に吐き出す。
吐き出されるのは霧の息。魔力を含んだ霧が瞬時に広がっていき、シンの姿だけでな

くアンチモンスターたちも覆っていく。
視界を完全に閉ざされ、シンを見失ってしまうアンチモンスターたち。霧の外にいるレオナルドも中がどうなっているのか分からない程の濃霧であった。
次の瞬間、白い霧の中で何かが叩き潰された音がした。
音がすれば全員がその方向へ向き、アンチモンスターたちは光を一斉発射する。
放たれた光が何かに命中して爆発を起こす。爆発の際に生じる爆風でも漂う霧が吹き飛ばされない。本来ならば派手な閃光が起こるが霧で覆い隠されている為、霧越しに微かに光った程度であった。
攻撃の後、様子見をするアンチモンスターたち。霧の中で何かが落ちて転がる音がする。
転がったものがアンチモンスターの一体の足先に当たって止まる。そのアンチモンスターが視線を下ろすと、下から見上げる自分と似た顔をした別のアンチモンスターの首が見上げていた。
驚くことは無かったが、近くにシンがいるかもしれないと思い警戒を強めるアンチモンスター。その直後、頭上から降ってきた魔槍によって体を貫かれる。
魔槍によって貫かれたアンチモンスターは一体では済まなかった。十数体のアンチモンスターが霧で遮られた視界によって避ける暇も無く魔槍によって串刺しにされて

いく。
　正確性の乏しい攻撃ではあるが一度に放つ数は多く、またアンチモンスターたちの数も多いので放てば面白いぐらいに当たる。
　次々と標本の様に突き立てられていくアンチモンスター。しかし、見た目は生物であっても中身は神滅具で生み出された疑似生命体。恐怖で臆する、足を止めるという精神性は無く魔槍が降り注ぐ中でシンを探して駆け巡る。
　不明瞭な視界の中で数に物を言わせてシンを探し続けるアンチモンスターたち。その最中でも数は減っていく。だが、その甲斐あってアンチモンスターの一体が霧の中で移動するシンの姿を捉えた。
　その情報はすぐに近くのアンチモンスターへ飛んで行く。『魔獣創造』によって生み出されたモノ同士であるのもあって互いの存在を感知でき、尚且つ情報を直接相手に送ることも出来る。
　目撃情報を受け取ったアンチモンスターは、その情報に従いすぐに手を伸ばす。その手は移動していたシンの腕を掴み取った。
　シンを捕らえたという情報はすぐに他のアンチモンスターたちに伝播され、彼を八つ裂きにする為に集まっていく。
　霧の中で浮かび上がる多くの影。それが捕まえられているシンを取り囲み、今まさに

襲い掛かろうとする瞬間であった。
シンの体表に青白い電気が起こり、体から『放電』が起こる。地上にて雷鳴を彷彿とさせる音が響き渡ると同時にシンを掴んでいたアンチモンスターや囲んでいる他のアンチモンスターたちに電気が流れ込んでいく。
体を仰け反らせながら激しく痙攣するアンチモンスターたち。やがて、体から煙が上がり、その立ち昇る煙の数がすぐに増えて行く。そして、一定の数に達すると同時に発火し、アンチモンスターたちは嘔吐する様に口から炎を零す。
捕らえたつもりが、まんまと誘き寄せられる形となった。何処まで意図した動きかはアンチモンスターたちが知る由も無いが、少なくともこの様な状況になったとしてもシンにはそれを脱する手札があることを見せつけた。
シンの出した霧の外で待機しているレオナルドは、創造したアンチモンスターが減って行くのが分かっていた。それもかなりの速度で減少している。
先に述べた通り、アンチモンスター百体ならば上級悪魔なら跡形も残らない。つまり

霧が晴れる。そこに立っているのはシン一人。
――彼が上級悪魔以上であることをレオナルドが図らずも証明してしまった。
互いに感情を見せない表情のまま目を合わせる。視線を合わせて初めて相手の感情

に気付くこともある。
レオナルドはシンの目にただ純粋な敵意を感じた。
シンはレオナルドの目から明確な殺意を感じた。同時に強い使命感の様なものも感じ取った。
シンの右足が跳ねる様に上がり、左足を軸にして振り抜かれる。細く伸びる光。無数の光芒は突き進む大気によって研がれて魔槍と化し、全槍がレオナルドを狙う。
レオナルドの影から出現するアンチモンスター。それが壁となって魔槍からレオナルドを守る。
次々と貫かれて消滅していくアンチモンスターたちだが、消滅した端から補充されていきアンチモンスターの壁が薄まることは無い。
シンは引き裂く様に制服の上着を脱ぎ棄てる。その体には手の紋様と同じ紋様が浮かんで発光しており、全ての紋様が繋がっている。
体を屈めることで全身が紋様とは異なる光を発し、その輝きが最大に達すると光条となり、広がる無数の光の道筋が武器となって放たれた。
二重の攻撃を防ぎ切れないと即座に判断したレオナルドは、先に受けた攻撃のデータを基にしてシンの魔力に抵抗を持つアンチモンスターを『魔獣創造』によって創り出す。
見た目は先のアンチモンスターらと変わらないが、光の凶器を受けたアンチモンス

ターの体は一度目は貫かれることなく耐え、二度目の攻撃によって貫通された。
シンの攻撃によって受けるダメージを三分の二程度まで抑えることに成功する。本当ならば無傷で済ませるのが一番だが、時間が足りないので出来なかった。それでもほんの一瞬で僅かでも抵抗を持つアンチモンスターを創造するのは脅威でしかない。
魔槍と光の重撃をアンチモンスターたちの犠牲の壁で受け止めて行くレオナルド。その時、偶然にもアンチモンスターたちの隙間をくぐり抜けた光がレオナルドの側頭部を掠めていく。
頭髪が何本か千切れ、僅かに血が流れるがレオナルドの表情は全く変化しない。その僅かな傷がこの重撃による成果であった。
（どうしたものか……）
子供相手に戦うのは気が引ける――とは全く思わないが流石に命を奪うことには少々抵抗を覚えるので、戦いの中で手足の一本もダメにすれば決着がつくと思っていたが攻撃が届きすらしない。
数で攻めて来るのは厄介だが、一体ごとの力はそれ程でもないので苦戦はしない。しかし、どう見てもまだ本気を出している様子では無いので楽観視は出来ない状態であった。
そしてそれは、レオナルドの方も同じであった。容易く倒せる相手とは微塵も思って

いなかったが、戦ってみて理解出来ることがある。
シンという魔人の底がまだ見えない。人修羅という最も若い魔人であり未熟であることは知っていたが、それでも魔人と呼ばれることはあり勝利へのビジョンが未だに見えない。
だからこそ、レオナルドはここで人修羅を屠る必要があることを再認識した。
この強さはいずれ彼女へ届く。レオナルドにとって最愛の存在であるマザーハーロットに。
人修羅を一目見た時からレオナルドは危機感を覚えていた。この十番目の魔人がマザーハーロットに害を及ぼす危険を幼い直感で感じ取っていた。だからこそ、普段は何も主張しないレオナルドがあの場でシンを名指ししたのだ。
レオナルドにとってマザーハーロットは、その名の通り母に等しい存在である。認めらず、受け入れられなかった者たち全てを抱擁する最後の母。毒婦、大淫婦と誹られていようとそんなことは彼女に抱き締められた者たちには関係無い。
曹操が魔人であるだいそうじょうに気を許しているのと同じく、レオナルドはマザーハーロットを敬愛――否、信仰していた。
このまま人修羅を放置し続けていれば、いずれその魔手はマザーハーロットへ届く。その前にここで息の根を止める。

だが、この段階のレオナルドでは人修羅を倒すことは叶わない。しかし、それでも時と場合によっては例外も存在する。

レオナルドは曹操の言葉の意味をこの時になって理解した。倒すべき相手が目の前に居ることで心の内に想いの力が溢れ出てくる。

今ならば可能な気がした。段階に至っていないのであれば、この瞬間に自らをその位まで押し上げる。

シンの攻撃を阻んでいたアンチモンスターたちが一斉に崩れ出し、黒い液体に成った後に消滅する。

何か良からぬことが起きるのが嫌でも分かる。無表情のレオナルドの目からは今までに無い強い意思の輝きが放たれていた。

シンが妨害する間も無くレオナルドはその言葉を発する。

「禁手（バランス・ブレイク）、化……！」

◇

サングラスの男が放つ気配は不思議なものであった。一誠と戦うことに戦意を昂らせている一方で明確な恐れも抱いている。

一誠はその態度に既視感を覚えた。何処かで見た様な気がしたのだ。
「――あっ」
小さく声を上げてしまった。サングラスの男に一誠が覚えた既視感の正体は、嘗ての自分の姿であった。
『赤龍帝の籠手』を発動させて間もなく、体も鍛えていないヒョロヒョロでまだ自分に自信を持てなかった頃の自分に重なる。
何となくサングラスの男の心情が分かる。今の彼はダメだった頃の自分から脱却しようと足掻いている最中なのだ。だからこそ、この戦いは苦しいものになることが分かる。
出し惜しみなどしていられない。すればそこに付け込まれて負ける。
（最初から全開で行く！）
一誠は籠手を出現させ、禁手までのカウントダウンを開始する。その間、九重を守りながら戦わないといけない。
すると、サングラスの男が口の端を震わす。本人としては笑っているつもりなのかもしれないが、上手く笑うことが出来ずに引き攣った様に見える。
「禁手を始めたな？」
言い当てられて一誠は内心ドキリとしたが、サングラスの男は言うだけで攻撃を仕掛

けて来ない。
「俺もまだ成って間もないから時間が掛かるんだ……。安心しろよ、赤龍帝。何もしないさ。今は、な」
サングラスの男から重圧が放たれる。すると、周囲にある柱や自動販売機、ベンチの下などありとあらゆる場所にある影がサングラスの男へ地面を這って伸びて行く。
この重圧。そして、この現象。サングラスの男がしようとしていることは一つしかない。
集まる影がサングラスの男の男を包み込んだ時、籠手のカウントダウンがゼロとなる。そして、二人は偶然にも声を揃えてその言葉を言い放つ。
『禁手化……！』
一誠の体から赤色の光が発せられ、サングラスの男は包み込んでいた影が飛沫の様に飛び散る。
『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』
『赤龍帝の鎧』を纏った一誠と対峙するのは、こちらもまた影で作られた全身鎧。
頭から足先まで余すところ影が覆い尽くしており、サングラスの男の体型に合わせて密着しているので全身鎧でも細身に見える。影は常に生物の様に蠢いており、流動していた。

「この禁手、あんたの禁手をイメージしたもんなんだぜ？　あんたに負けた時、恐怖と同時に羨望も抱いた。あんな鎧が俺も欲しい！　あんな強さが欲しい！　ってな」

サングラスの男は禁手となった自分を見る。改めて自分がこの段階に至れたことに感動を覚えていた。そして、その感動は自信へと繋がり、自信は神器に力を与えてくれる。

「そして手に入れたんだ！　この力を！　感謝してるぞ、赤龍帝！　あの敗北が俺を変えてくれた！　さあ、赤龍帝、あの時の反撃をさせてもらうぞ！『闇夜の大盾』の禁手状態、『闇夜の獣皮』で！」

サングラスの男が叫ぶと流動していた影が隆起して毛を逆立たせている様な見た目になる。獣皮の名に相応しい姿であった。

『相棒。同じ禁手でもこっちの方が格上なのは間違いない。だが、油断はするなよ？相性次第では苦戦を強いられる。最悪の場合、負けることだってあるぞ？』

（分かっているよ）

頭の中のドライグが警告してくれたが、一誠は相手を舐めるつもりも無いし自身も油断するつもりも無い。確かに今の一誠には自信があった。コカビエル、ヴァーリ、ロキという面々と戦って生き抜いてきたことで得た自信と友人でありライバルでもある木場とシンと日頃行ってきた練習による自信。

アーシアが傍にいないのでプロモーションを使用することが出来ないが、それが返って程よい緊張感を一誠に与えてくれる。

（まずは動け！　じゃないと相手の禁手も分からない！）

禁手になったことで何かしらの能力が増えていると予想した一誠は、牽制として背部から魔力を噴射させ、急接近すると共に左拳をサングラスの男の顔面へ突き出す。

左拳はサングラスの男の顔にめり込む――どころかそのまま突き抜けてしまった。手応えを想像していた一誠は驚き、そのまま突っ込んでしまうが一誠の体は何事もなかったかのようにサングラスの男の体を通過してしまった。

当たった感触が一切無い。まるで煙を通ったかの様な気分になる。

噴射孔の向きを変え、急旋回して再び突撃する一誠。だが、その結果は同じ。全身で空を切り裂く感触だけが残った。

（物理攻撃は無効かよ！）

これにより直接攻撃が主体の一誠は一気に攻撃手段を制限される。

元の位置に戻り、九重を守る様に前に立つと残された限りある攻撃手段であるドラゴンショットを繰り出す。

片手から野球ボール程の大きさの魔力の塊が放たれる。サングラスの男はそれを見ても避ける素振りを全く見せない。この段階で一誠は嫌な予感を覚えた。

ドラゴンショットがサングラスの男の体に触れる。通常ならば凝縮された魔力が一気に広がるが、それが起こることなくドラゴンショットはサングラスの男の体の中に沈み込んで消えた。

「あっ」

自分の失敗に今更ながら気付き、その迂闊さに思わず言葉を零してしまう。すっかり頭から抜け落ちていた。この男の神器の元々の能力は――

一誠は九重を抱えて今いる場所から移動する。いきなり抱き抱えられた九重は何が何やら分からず驚きで固まってしまっている。

『闇夜の大盾』は影に取り込んだものを別の影から出すことが出来る。様々な影に囲まれている状況では何処から取り込まれたドラゴンショットが撃ち返されるのか分からないのでなるべく影の少ない場所へ移動しようとしていた。

「無駄だ」

その考えを見透かして嘲笑すると、一誠の足元からドラゴンショットが飛び出した。よりにもよって一誠の影を出口にしたのだ。

「おおおっ！」

一誠は咄嗟に手を出し、飛んで来たドラゴンショットを掴む。接触と同時にドラゴンショットの圧縮された魔力が解放される刹那――

『Ｄｉｖｉｄｅ』
『白龍皇の籠手』を連続して発動。ドラゴンショットの魔力は数度半減されたことで白くなった右手に握り潰される。
「あ、ぶねぇ……」
　様子見を兼ねてドラゴンショットの威力を調整しておいて正解であった。あれ以上の魔力を込めていたら『白龍皇の籠手』の力でも消し切れなかった。鎧を纏っている一誠なら問題は無いが、傍には九重が居る。守ると言った九重が一誠の魔力によって傷付いてもしたら笑い話にもならない。
「やるなぁ！　赤龍帝！　一々カッコ良くて腹が立ってくるぜ！　だからこそ超える価値があるんだがなっ！」
　サングラスの男が勢い良く地面を踏み付ける。この空間内にある、ありとあらゆる影が波打ち出し、触手の様に一誠たちへ伸びて行く。
　一誠たちの近くまで影が伸びると、地面から捲れ上がり、鋭い切っ先を作って一誠を斬り付けに来た。
　それを腕で防ぐ。『赤龍帝の鎧』の硬さの方が影の刃を上回っており刃を通さない。反対に刃に拳を打ち込んでへし折ってみせる。
　折れた影は霧散して元の影へと戻った。実体化させられた影は一定以上のダメージ

で元に戻るらしい。
　別の影から槍の様に形を変えて貫こうとしてくる。そして、一誠を逃がすまいと足に絡み付いてくる影もあった。
「うらぁ！」
　一誠は避けることをせずに槍の影を胸で受け止めた後、足元目掛けて腕を振り小さな魔力の塊を投げ放つ。その魔力によって拘束していた影を吹き飛ばし、足が自由になると槍の影を全て蹴り砕いてしまう。
「頑丈な鎧だな。俺の影が一切通らないとは。けど、そちらの攻撃もこっちには通らないのは同じだ。折角だから持久戦でもしてみるか？　そうなると勝っても負けても俺達にとっては都合が良いが！」
　サングラスの男がわざと挑発しているのは一誠は分かっていた。持久戦になった時点で一誠は大きく不利になる。禁手の時間は限られているし、消耗すれば維持する時間も減る。そして、勝ってもその後には曹操たちとの戦いも控えている。禁手無しでは勝てる相手には思えない。
　そこまで冷静に考えることは出来るが、考えれば考える程に焦りを覚えてしまう。離れ離れになった仲間たちのことが一番気になる。
　戦闘能力が高いシン、木場、ゼノヴィア、イリナ、ロスヴァイセは心配要らないが、自

衛手段が乏しいアーシアのことを思うと余計に焦りが加速する。ましてや、アーシアは稀少な治癒の神器を所持している。英雄派にとっては色々な意味で見過ごすことが出来ない存在。

一誠の内心を知ってか知らずかサングラスの男は言葉を重ねてくる。

「どうした？　焦っているのか？　天下に名高い天龍様がそんなのでどうした？　俺が羨望した赤龍帝は俺程度の言葉で動揺するのか？　失望させないでくれよ！」

挑発なのかもしれないが、幾分か本音も混じっている様にも聞こえる。敵でありながらもこうであって欲しい、こう振る舞って欲しいという心境が洩れている。恐怖と憧れが入り混じった複雑な想いを抱いているサングラスの男。しかし、その複雑さが神器に強い影響を与えているのも事実であった。

サングラスの男が指揮者の様に両腕を上げると周囲の影が一誠へ伸びて行く。

効かないと分かっていても同じ事を繰り返すのに、何か意図があるのかと思いつつ迫って来るそれらを弾く一誠。

一誠の気が影に向けられた一瞬の隙にサングラスの男が急接近してくる。

反応が遅れてしまった一誠に対し、サングラスの男が影を纏った掌を突き出してきた。

一誠の顔に掌の影が掛かる。触れることが出来ないので、一誠はすぐに九重を抱えて

後ろに下がる。サングラスの男はそれ以上追撃してくることはしなかった。
「何度も何度も急に動いてごめんな」
「いや、私のことは気にせずに――」
九重が言葉はそこで途切れる。
「どうした？」
「せ、赤龍帝、顔が……」
九重に言われて兜に触れる一誠。その指先が僅かな段差を感じ取る。一誠の視点からは分からなかったが、一誠の兜は掌の形に浅く削られていた。
「何だこりゃあ……！」
攻撃された記憶など無い一誠は戸惑うが、サングラスの男が直前にやった行動を思い出す。
サングラスの男は一誠の顔に掌で影を作った。
「やっぱり頑丈だな、その鎧は。その程度しか削り取れないとは」
サングラスの男は『赤龍帝の鎧』の硬さに舌を巻く。行ったことが単純な攻撃ではないので当人の驚きは一誠よりも大きい。
（な、何が起きたんだ？　分かるか、ドライグ？）
『やったことは影を使った転送の応用だ。自分で作った影に覆われた部分を無理矢理別

の影に移動させて俺達の鎧を削いだんだ。気を付けろ。この鎧だからこそ削がれた程度で済んだが、顔を晒していたら影に全て持っていかれていたぞ』

自分の顔が掌の形に穴が開く光景を思い浮かべ、一誠は兜の下で顔色を悪くする。

思いも寄らない攻撃を仕掛けてきたサングラスの男。元より持久戦に付き合うつもりは無いが、先程の攻撃のせいでますます早く倒す必要が出て来た。

今は浅く削られる程度だが、削り続ければいずれは生身に辿り着く。そうなったら今度は肉体を削り取られる羽目になる。

物理も効かず、魔力も利用されてしまう状況でどう仕掛けるべきか一誠が知恵を絞っていた時のことであった――

「あ？」

『ん？』

耳に入って来るとある音色。その音を認識すると同時に一誠は戦いを忘れて棒立ちになってしまった。敵を前に無防備を晒すがドライグはそれを咎めない。何故なら内に宿るドライグもまた一誠と同じ状態であった。

その音色をどう表現すべきか。一音一音が脳を震わす度に味わったことのない幸福感と陶酔感を覚えてしまう。戦うことなど馬鹿らしく感じ、ただこの音色を聞く為だけの存在に成り下がってしまう。

自然と瞼が落ち、音色に身を委ねて夢の中へ――

起　き　な　さ　い　！

「うわっ！」

『うおっ！』

神器を通じて脳内に響き渡るは歴代赤龍帝であるエルシャの声。その一喝によって一誠とドライグは正気に戻る。

「な、何が起きた？」

全身から冷や汗が滲み出て来た。自分のことだというのに、さっきまでやっていたことが信じられなかった。

戦いの最中に戦いを放棄し、あろうことか寝てしまいそうになるなど異常としか思えない。

「大丈夫か？　九――」

九重は一誠にもたれ掛かって寝息を立てている。一誠と全く同じことが起きていた。今度はサングラスの男の方を見る。サングラスの男もまた壁に寄りかかって眠っていた。

「何だこりゃあ……何が起こって」

再びあの音色が聞こえて来る。だが、今度は音を聞いた途端、全身に寒気が起こる。

それは一誠が嘗てとある存在から感じたものと一緒であった。

「まさか……！」

◇

『禁手化』。レオナルドがその一言を発した瞬間、見えざる圧が場を支配する。とても子供が放つものではない。

そして、同時に全身の体温を奪い尽す様な冷たく、恐ろしい気配。

シンはその気配に似たものを経験から知っていた。しかし、それは信じ難い事実であり本来ならばあり得ない事である。

レオナルドの傍の地面に黒く渦巻く穴が出現する。そこからある音が聞こえて来る。

奏でられるのはヴァイオリンの音。音楽への知識が乏しいシンですらその音色に一瞬心奪われてしまう程の至上のもの。

感動するというよりも音が直接心に突き立てられているかの様に呆然とさせられる。

我を忘れてヴァイオリンの音に聞き入ってしまったことに気付き、急いでレオナルドへ意識を向けるシン。

レオナルドの隣に、既にそれが居た。

上はピンクを主とした袖の短い服。下はピンクと白の縞のズボン、こちらも丈が短い。袖と裾は南瓜の様に膨らませた作りになっており、ヨーロッパの貴族の衣装を連想させる。

その袖と裾から伸びるのは白骨の手足。足には衣装に合わせた色の靴を履き、手には白い手袋を着けていた。

白い手袋が握り、構えるのはヴァイオリンと弓。ヴァイオリンの弦を弓が摩擦する度に鳴り響く歓喜を呼び起こす音色。

だが、それを奏でるのは紛れもなく魔人であった。

肉と頭髪を全て削ぎ落した頭蓋骨は、頭部にピンクの帽子を斜めにして被り、ヴァイオリンを弾くのに合わせて帽子中央に付けられた飾りの鳥の羽根が揺れ動く。

レオナルドの神滅具がこの場に魔人を創造してみせる。

レオナルド自身は、禁手がこの様な形になるとは思っていなかった。だが、納得はしている。

彼が禁手を発動する時に思い描いたイメージは『死』であった。マザーハーロットに傍に居れば嫌でも覚えてしまう死のイメージ。それを『魔獣創造』に叩き付けた結果、この魔人が創造された。

魔人と接触し続けた者が生み出した魔人。何の因果でヴァイオリンを奏でるこの姿

になったのかはレオナルドにも分からない。見えざる力が働いたとしか言えない。

これが魔人であって魔人ではないことは分かる。レオナルドの知っている魔人と違って、この魔人には心が無い。しかし、シンという魔人に死を齎すにはこれ程合った存在はいないだろう。

魔人はヴァイオリンを奏で続ける。聞く者を惑乱させ陶酔させ、やがて死への舞踏を舞わせる為に。

これがレオナルドの『魔獣創造』が禁手亜種によって創造したシンへのアンチモンスター。

『弦奏魔人（ディビット）』

演奏、強敵

レオナルドの『魔獣創造』で創り出された魔人デイビットを、シンは警戒と同時に観察をする。

姿形は魔人そのものだが、マタドールやマザーハーロットと比べるとその表情が見えない。――比喩的な意味であり、あくまでシン直感による印象である。表情を作る皮も肉も無いのはマタドールたちも同じなのは変わらない。しかし、デイビットはそれよりも無機質に見えた。

デイビットは小鹿の様にレオナルドを中心にして跳ね回りながらヴァイオリンを演奏しており、激しく動いていても音がブレることはなく常に最高の音を出し続けている。

剽軽な印象を与える動きだが、シンから視点では操演されている人形の様に見えた。

演奏をするデイビットにレオナルドが何か指示を出す。小声と演奏のせいでどんな命令を下したのかは分からなかったが、指示を聞き終えたデイビットはヴァイオリンの曲調を変える。

（これは……）

軽快な演奏が静かで深みのあるゆったりとした演奏へ変わる。ヴァイオリン一本でここまでガラリと変えることが出来るのかと驚かされる程の変化。

シンの耳にその音が飛び込んで来た瞬間、感じたのは心地良さであった。

音が鼓膜を震わす度に張り詰めていた緊張が解けていく。

緊張からの解放は、次に全身の弛緩を誘発する。微睡の様な心地良さが脳へと広がっていき、体が重力に逆らえなくなり沈んでいこうとする。

目の前に広がる固い地面ですら極上の眠りへと誘う最上のベッドの様に思えてきた。

今すぐ何もかも放棄し、抗うことの出来ない眠りの世界へ突入しようとして全身の力を抜く。

体が重力の糸に引かれて前のめりになって倒れて行く――寸前、シンは力強く地面を踏み付けて倒れ行く体を支えた。

力が入り過ぎて地面にくっきりと足形が残り、蜘蛛の巣の様な亀裂が生まれているがそんなことなど今は気にならない。

数舜前の自分の行動に信じ難い気持ちになる。戦いを完全放棄し、敵の前に何の考えも無しに眠ろうとしていたのが信じられない。

ほんの少しだけ意識の手綱を握り締めることが出来たので最悪の状況は避けることが出来た、しかし、気を緩めればすぐにでもその最悪はやって来る。

何故ならデイビットはまだ演奏を止めていないからだ。

思考が鈍化する。今すぐにでも眠ってしまいたい欲求が頭の中を占めていく。命のやり取りよりも優先され、思考がそれに上書きされそうになる。三大欲求とはよく言ったものだと痛感させられる。

意図せずに瞼が下がって来るのでその度に上げる。己の瞼にこれ程の重みを感じたのは初めてであった。

意識を強く保ち、前のめりになった体を起こしていく。すぐに体勢を立て直さないとデイビットが何をするか分からない。至って危機的状況だが、その行為を何処か他人事の様に感じている自分がいる。

本気を出しているつもりなのに出し切れておらず、その出し切れていない部分が自分のことを冷めた目で見ている不思議な感覚。まるで、魂の一部が外に出掛かっている様な気分である。

人は寝ている間に魂が抜け出し、その魂が見ている光景が夢という言い伝えも存在するが、夢と現の間を行ったり来たりしている今のシンはその言い伝えを本気で信じてしまいそうになる。

デイビットの奏でる旋律がより穏やかなものへ変化する。今まで以上の睡魔がシンの中に広がっていき、保っている意識を断とうとする

思考の中に刹那ではあるが空白が生まれ、それが一定の間隔で繰り返される。シンの意識がほんの一瞬だが眠気で飛んでいる証であり、段々とその間隔も短くなっていく。

このままでは寝ていることすら気付かずに眠ってしまうと思ったシンは、止むを得ず強制的に眠気を覚ますことにする。

意識がある内に親指の爪を小指の爪の下に差し込み。深く入り込んだのを確認すると、シンは躊躇なく親指を上向きに弾いた。

千切れる音と共に白色の爪が剥がれ飛ぶ。爪を失った小指。爪下にあるピンクの皮下組織が外気に晒されるが、瞬く間に滲み出てきた血で覆われる。

拷問などで用いられる生爪を剥ぐという行為を自主的にやってみせたシン。爪を剥がされた痛みが刺激となって微睡でいる脳へ直撃する。

重かった瞼が少し軽くなった。だが、まだ足りない。デイビットの演奏が起こす睡魔を跳ね除けるには痛みという刺激がもっと必要であった。

シンは爪を失った小指に迷うことなく親指の爪を突き立てた。柔い皮下組織を親指の爪で抉ることで、痛みが脳内でスパークを生じさせる。

「……ふぅ」

ようやく靄がかかった思考が晴れて来る。抗うのに必死であった睡魔が消えて行くのを感じた。今もデイビットはヴァイオリンを奏で続けているが、それによって引き起

こされる眠気も断続的に伝わってくる小指の痛みである程度中和出来る。
少なくとも戦いに集中出来る意識だけは取り戻せた。
デイビットは空の目でシンの方を見つめながらヴァイオリンを弾く。弦を押さえる指は止まることなく、それを弾く弓は踊る様に動き続ける。
引き摺り込む様な眠気が襲って来るが、その度に痛みで刺激を与えて無理矢理覚醒させる。
そして、思考がぼやけない内にシンは魔力剣を形成し熱波剣を放つ準備をする。一番慣れた技であり、最速で放てる為にこの技を選んだ。
時間にすれば一秒にも満たない。ヴァイオリンを奏でるデイビットへ放出される魔力の渦。並の相手ならば巻き込まれれば無事では済まないが、相手は魔人に酷似した存在。恐らくは大したダメージを与えられないだろう。
そのことはシンも分かっていた。ならば、何故分かっていて技を放ったのか。デイビットのすぐ傍にはレオナルドが居るからだ。
最速且つ広範囲の熱波剣がデイビットの本体であるレオナルドを呑み込もうとする。デイビットが強力であろうとも所詮は『魔獣創造』によって創り出された存在。使用者が戦闘不能状態になれば自然と解除される。
情け容赦の無いシンの攻撃。だが、レオナルドもそれを熟知している。『魔獣創造』を

使用する上で最も狙われ易いのは自分であると曹操たちからも指摘されていた。
普段は数に物を言わせて周囲をアンチモンスターで守らせているが、デイビットが創造している間はそちらに力を注いでいるので他のアンチモンスターを創り出せない。
それでもレオナルドは焦らない。理由は単純。すぐ傍には百のアンチモンスターを超えるデイビットが居るからだ。
レオナルドはただ念じればいい。守れ、と。
その念が伝わったデイビットの動きは迅速であった。弓が弦を一際強く擦り、弦を大きく震わせる。
音が鳴り響く間にデイビットはレオナルドを己が持つヴァイオリンの様に丁寧に抱き抱え、熱波剣が作り出す魔力の渦の範囲外へ一足で移動してしまう。
レオナルドを助ける為に一時的に中断されるヴァイオリン。しかし、まだ音の余韻が残っている。余韻が消える前にヴァイオリンを奏でて音を繋ぐデイビット。あまりに違和感の無い繋ぎ方なので、そういう曲であると勘違いしそうになる。
デイビットはヴァイオリンを休むことなく奏で続けながら一言も発せずに人修羅を見つめる。喋れるのか喋られないのか。意志があるのか、無いのか対峙していて分からなくなってくる。
絶えず来る睡魔に我慢しながらシンはどう攻めるべきか回転の鈍くなった頭で考え

る。向こうはまだこちらの動きを阻害する行動しかしていない。いつ攻撃的に攻めて来るのか分からず、油断出来ない。

取り敢えずこの鈍った思考をハッキリさせようとした時、音楽の曲調が変わり始めた。

例えるなら、今までの音楽は夜の静寂の中で時折聞こえて来る虫、鳥、獣の鳴き声を表現した心地良い安らぎを与えるものだったが、デイビットが今奏でている曲は噴出するマグマ、燃え立つ業火、全てを焼き尽くす大火をイメージさせる激しい音。

相変わらずヴァイオリン一挺で演奏しているとは思えない迫力である。

聞かされているシンも熱を感じてしまう程の曲調。

（熱い……？）

というよりも本当に熱を感じている。その熱の発生源は――

「いつの間に……」

シンは本当に炎上している己の右手を見て、思わず言葉を零した。

◇

ジークフリートが魔剣グラムを抜いたのに応じて木場もまた聖魔剣を取り出して剣

先をジークフリートへ向ける。
イリナも紐状にしていた『擬態の聖剣』を元に戻して、構えながらジャンヌと対峙。ジャンヌの方は武器を構えるどころか取り出す素振りすら見せず、勇ましい姿で聖剣を握るイリナを微笑ましく見ている。
ゼノヴィアも担いでいる得物から布を剥がす。呪文が書かれた布の下から群青色の鞘に納まった大剣が露わになる。
「へえ……」
「あらまぁ」
ゼノヴィアが取り出した大剣にジークフリートは幾分の好奇心を見せ、ジャンヌは物珍しそうな眼をする。
「それ、デュランダルかい？　少し見ない間に変わったね……」
「鞘なんか付いちゃって……暴れん坊で有名なデュランダルも大人しくなっちゃった？」
全体の形が変わっても変化の無い柄の形状と仄かに漂って来る聖なる気からデュランダルだと即座に理解する。そして、そのデュランダルが鞘に納まっていることを疑問視した。
そもそもデュランダルに鞘は不要。というよりもデュランダルが納まる鞘が存在し

ないのだ。

聖剣としての切れ味のせいで納めていた鞘が斬れるなど当然のこと。仮に切れ味の問題を解決しても今度はデュランダルが剣身から放つ攻撃的且つ膨大な聖なる気の問題が出て来る。無理矢理鞘に納めようなら聖なる気で鞘が吹き飛んでしまう。

切れ味と聖なる気への対策の両方をクリアする鞘はまず存在せず、ゼノヴィアを含めた歴代のデュランダル継承者はデュランダルを亜空間に仕舞っておく必要があった。

ゼノヴィアは鞘からデュランダルを抜く――と思いきや鞘に入ったままデュランダルをジークフリートへ向ける。

そのまま構えると鞘の各部がスライドしていき、変形を始めた。思ってもいなかった事なのかイリナ以外はその様子を目を丸くして見ている。

各部パーツが移動する度に激しい音が立ち、変形箇所からはジークフリートたちですら微かにしか感じなかった聖なる気が蒸気の如く噴出。

その勢いと大質量に気を感知する感覚を直接殴られたかの様な衝撃を覚えたジークフリートとジャンヌが顔を顰めた。

鞘の変形が終え、剣身が現れるデュランダル――だったが、デュランダルの剣身が纏って聖なる気の量と質が異常に高いせいで聖なる気に隠れて本来の剣身が見えない。

「実戦で使うのはこれが初めてだ。この剣の最初の一振り、食らっておけ！」

ゼノヴィアが新たなデュランダルを高く掲げると、纏っていた聖なる気が音を立てて膨れ上がった後、天高く伸びて行く。
「うっそー。ド派手過ぎ」
光の柱と化しているデュランダルに、余裕そうにしていたジャンヌも流石に冷や汗を流す。
「これはちょっと不味いね。失礼」
「きゃっ」
ジークフリートも見ただけでデュランダルの威力を把握し、グラムを納刀してジャンヌを抱き上げる。
そこへ振り下ろされる長さ十五メートル超の光の斬撃。地面に切っ先が触れると聖なる気が波動となって広がっていき、周囲の建物の公共物を纏めて消滅させながら地面も捲り上げていく。
光による大規模破壊は、使い手であるゼノヴィアや木場、イリナには被害を及ぼさなかったものの、破壊による衝撃は地面を大きく揺らし、体幹が鍛えられている木場とイリナが転倒してしまいそうになる程。
破壊されて尽くされた場所は、盛大に土煙が舞う。
「ふー」

ゼノヴィアが短く息を吐く。一仕事を終えたデュランダルの鞘が変形して元の形へ戻った。
「いやー……凄いね。凄いけど、『騎士』としては少し複雑な気持ちだなぁ……」
一瞬で更地を作り出してしまったゼノヴィアのパワーに、木場はその言葉の通りに複雑な表情をしている。
『騎士』は本来ならばスピードを重視した戦いをするが、ゼノヴィアは誰が見てもパワーを重視した戦い方になっており、『騎士』からかけ離れ始めている。
「安心してくれ。これでも制御をしている。威力を調整せずに本気で振れば、この周辺丸ごと薙ぎ払うことも可能だ。だが、そんなことをすればイッセーたちを巻き込んでしまうかもしれないからな」
パワー一辺倒ではなく、そのパワーを自らの意志で制御したことを心成しか得意気に語っている様に見える。言外に褒めてもいい、と言わんばかりであった。
「えーと、うん……初手としては最高だったよ」
「凄いわ、ゼノヴィア！　まるで神話の破壊神みたいね！」
木場は取り敢えず褒める。イリナも純粋に讃えるが、微妙な褒め言葉であった。
「ふふ。まだ私の理想には遠いがな」
行き着く先にどんな理想が待っているのか、木場は若干の不安を覚える。このままパ

ワー至上主義ではなく少しでもいいのでテクニックを学んで欲しいと心の中で願った。
「流石。その一言に尽きるね」
土煙の中から聞こえて来るジークフリートの声。倒し切れると思っていない木場たちは特に驚くことはせず、声に反応して反射的に剣を構えた。
舞う土煙に横一線の光が走る。大量に待っていた土煙はその光によって上下が分割され、更に光が走った方向へ吸い込まれる様に吹き飛んでいく。
消え去った土煙の向こう側でジークフリートとジャンヌが立っており、どちらも無傷。ジークフリートの手にはグラムではない別の魔剣が握られている。
恐らくは先程のゼノヴィアの斬撃を無傷で切り抜けたのは、その魔剣によるもの。その証拠にジークフリートたちの周囲のみ聖なる気の破壊を免れていた。
「多少なりともダメージを与えられると思っていたが、まさか無傷とは」
「僕は大丈夫なんだけど、ジャンヌがね……」
ジークフリートがジャンヌを横目で見ると、彼女は不機嫌そうな表情をしている。
「もう！　土汚れだらけ！　髪も埃っぽいし！　お姉さんカンカンよ！」
攻撃されたことよりも、その後の土煙で汚れてしまったことを怒っている。度肝を抜いてやろうと思っていたゼノヴィアからすれば少々プライドが傷付く。
「その新しいデュランダル……エクスカリバーの力を使っているね？　聖なる気にエク

スカリバー特有の気を感じたよ」
　一回攻撃を受けただけで新しいデュランダルの特性について見抜いたジークフリート。特に隠すつもりは無かったゼノヴィアは、その指摘に頷く。
「その通りだ。この新しいデュランダルは錬金術により、エクスカリバーと同化したものだ」
「そうよ！　デュランダルの剣身に教会が保有していたエクスカリバーを鞘の形で被せたのよ！」
　聖剣同士を合わせると相乗効果で聖なる気が高まることは既に実践されている。それを応用し、デュランダルとエクスカリバーの聖なる気を高め合わせながら鞘となっているエクスカリバーを受け皿にして力の制御を可能とし、限界まで高まればそれを解放して先程行った様に凶悪な破壊を齎す一撃を放つことも出来る。
『えっ』
　ゼノヴィアの言葉を継いでイリナが説明をしたら、その内容にジークフリート、ジャンヌだけでなく初耳であった木場も驚いてデュランダルの鞘を凝視し出す。
「ちょ、ちょっと待ってくれないか？　教会が保有しているエクスカリバーは六本だったよね？　その鞘には何本のエクスカリバーを――」
「全部だ」

「全部っ!?　六本のエクスカリバーを鞘に!?」
　イリナの『擬態の聖剣』を除いたエクスカリバーが鞘に変えられた事実に木場は卒倒しそうになる。確かに一時期エクスカリバーを憎んでいた時もあったが、だからといってこんな末路になるとは予想もしていなかった。
「うっそー！　豪華すぎじゃない？　デュランダルとエクスカリバーの合成なんてオンリーワンでしょ！　バルパーのおじいちゃんが見たら卒倒するか頭の血管切れちゃいそう！」
　限りある本数しかない聖剣を一本に纏めたことにジャンヌは目を丸くする。その横ではジークフリートが声を出さずに笑っていた。
「暫く離れていた間に、教会も随分と太っ腹になったね。僕が居た時には考えられなかったことだ。――因みにその聖剣にはもう名前が付いているのかな？」
　意外な興味を示しながら尋ねるジークフリートに、ゼノヴィアはデュランダルを翳して答える。
「エクス・デュランダル――この聖剣をそう名付けた」
　これ以上ないシンプルな名であったが、ジークフリートはその名自体には特に反応を示さない。
「――エクス・デュランダル。その聖剣がここにあるだけで君たち相手に選んで正解

だったと言えるね」
　意味深な笑みを浮かべるジークフリートに木場たちは訝しむ。すると、ジークフリートが構えている魔剣が震え始めた。
　何か仕掛けてくるのかと身構える木場たち。だが、よくよく見ると魔剣が震えているのはジークフリートが手を動かしているからではない。魔剣そのものが震えているのだ。
「魔剣というのは中々厄介な代物でね。この魔剣はノートゥングという名前なんだけど極度の潔癖症でね」
　ジークフリートが真横にノートゥングを振るう。すると、刃が触れることなく地面に深く、綺麗な断層が出来た。
「――と、こんな風に剣の癖に血とかで汚れるのが大っ嫌いなんだ」
　ゼノヴィアの一撃をどうやって避けたのか今のを見て理解した。ノートゥングの凄まじい切れ味により聖なる気すらも斬り裂いたのだ。
　グラムだけでも脅威なのにノートゥングの恐ろしさも理解して息を呑む。その反応に何故かノートゥングの震えが止まり、ジークフリートはノートゥングを鞘に戻す。
　すると、鞘に納まって魔剣たちもカタカタと鞘ごと震え始めた。異様な光景に木場たちの表情に緊張感が走る。ジークフリートはというと魔剣らの震えに苦笑していた。

「魔剣というのは本当に扱い辛くてね。どいつもこいつも我と癖が強いんだ。気を抜くと使い手である僕にも噛み付こうとしてくる」
ジークフリートは鞘を震わせている魔剣の内、グラムを引き抜く。それが一番手に馴染んでいるのかもしれない。
「全員反抗的で僕のことを嫌っている。勿論、僕もこの魔剣たちのことは好きじゃないけどね。それでも僕に使われている。その意味が分かるかい？」
グラムの剣身から攻撃的な気が発せられる。それは木場たちに、そしてジークフリートにも向けられていた。
「今のところ、僕以上の使い手がいないからさ」
自信というよりも事実として言い放つ。扱いが困難な魔剣ですら嫌々ながらも認めざるを得ないジークフリートの腕前。
「そして、もう一つ。この魔剣たちが僕に協力的になる状況がある」
ジークフリートの視線はエクス・デュランダルへ注がれる。
「自分たち以外で強そうな剣が現れた時、まさに今さ」
我が強い故に魔剣、聖剣問わず強い気を発する剣に挑もうとする魔剣たち。この時ばかりはジークフリートに助力を惜しまなくなる。
「噂の聖魔剣に未知のエクス・デュランダル。僕の魔剣と一つ勝負と行こうじゃないか

！」
「……その前に一つ質問してもいいかな？」
「このタイミングで？　……何だい？」
　出鼻を挫かれたジークフリートは少し不機嫌そうにしながらも一応質問を聞く。
「見たところ、君の腰に差してある剣は六本。その内、五本は魔剣なのは分かっている。その六本目は――」
「ああ、これ？」
　六本目の剣を鞘から少し抜く。剣身が光に覆われたそれは、フリードも使っていた教会の戦士が使っている対悪魔用の光の剣であった。フリードが使用していたのとは柄のデザインが異なっていたので木場は分からなかった。
　ガッカリと安堵。二つの感情を混ぜ合わせた木場の表情を見て、ジークフリートは笑う。
「もしかして、僕のエクスカリバーを見たかったのかい？」
　それは木場の求めていた回答。聖魔剣を握る木場の手に力が入る。
「やっぱり、持っているんだね？　バルパーのエクスカリバーを……！」
「見たいかい？　見たければ――」
　ジークフリートの姿が霞み、気付けば木場の眼前でグラムを振り翳している。『騎士』

の木場ですら驚くジークフリートのスピード。
「まずは君の強さを見せてくれ」
横振りの斬撃を木場は聖魔剣で咄嗟にガードするが、ジークフリートは構わずグラムを振り抜く。
木場はそれによって弾き飛ばされ、数秒間空中を飛んだ後、先に地面に触れた靴底が地面を数メートル滑る間に削られていく。
飛ばされた木場を追撃するジークフリート。ゼノヴィアとイリナが止める暇も無く前方へ跳躍する様に移動。
ゼノヴィアは木場を助ける為にすぐさま後を追い、イリナも追おうとするが――
「だーめ」
何十もの聖剣が地面から生え出し、イリナの進路を塞ぐ。
立ち止まらざるを得なくなったイリナは、聖剣群を発生させたジャンヌに戦意が込められた鋭い眼差しを向け、背中から純白の翼を広げる。
「あら、可愛い天使ちゃん。やっぱり、お姉さんイリナちゃんを選んで正解！」
イリナがジャンヌと状況的に戦うことになった一方で、ジークフリートの戦いは最初から全速力であった。
飛ばされた木場へ瞬時に追い付いたジークフリートは、腕の振りすら見えない一撃を

見舞う。
　木場は最初の攻撃を受けた後ずっとジークフリートから目を離さなかった。故にその攻撃は見えており、不意を衝かれて不十分な防御をさせられた先程とは違って完璧なタイミングで防御が出来る。
　グラムの刃を聖魔剣の腹で受け止めた木場。片手は柄に、もう一方の手は受け止めた剣の腹の裏に押し当てられていた。
　下手をすれば手を真っ二つに裂かれていたかもしれない危険な行為。それを恐れず実行出来たのは、自ら創造した聖魔剣に対する自信によるものであった。
　木場の聖魔剣がグラムを防いでいることに少し感心した様子のジークフリート。その間に背後から迫って来ていたゼノヴィアが、エクス・デュランダルを振るう。
　ジークフリートは振り向きもせずに帯剣している魔剣を抜くと、エクス・デュランダルが振り抜かれる前に剣身を叩き付けた。
「何っ！」
　両手で振るったゼノヴィアの斬撃を片手で容易く受けてみせたジークフリート。敢えて先にぶつけることでゼノヴィアの力が完全に発揮される前に分散させるという技術。
　タイミングが少しでもずれれば押し切られていたかもしれないというのに、ジークフ

リートはそのことに微塵も恐怖を見せない。
木場が聖魔剣に自信を持っている様に、ジークフリートは自分自身に絶対的な自信を持っている。
ジークフリートはエクス・デュランダルを押さえたまま剣身を滑らせ、地面に剣先を突き立てる。
「――バルムンク。北欧に伝わる伝説の魔剣の一振りだよ」
魔剣の紹介直後、木場たちの足元が螺旋状に捻じれる。
「くっ！」
「なっ！」
「見ての通りの捻くれ者さ」
冗談を飛ばすジークフリートだが、木場たちは笑える状況ではない。螺旋状に捻じれた地面には隆起する箇所、陥没する箇所が多数且つ不規則に出来上がっており、まともに歩ける状態では無い。即ち、『騎士』の強みである機動力が生かせない。
木場とゼノヴィアの視線が捻られた地面へ一瞬向けられ、その後にすぐ顔を上げるが、そこに居る筈のジークフリートの姿が無い。
二人の視線はジークフリートを探して彷徨うことなく弾かれる様に上へ向けられる。
頭上から殺気と剣気を感じれば嫌でも気付く。

上空へ跳躍しているジークフリート。その手にはバルムンクとは別の魔剣が握られている。
すぐに着地地点から離れようとする二人であったが、その動きを見越してジークフリートが新たな魔剣を振るう。
頭上から凄まじい重圧が発生し、移動しようとしていた二人はその重圧に捉えられ、咄嗟に動けなくなる。
「同じく北欧の魔剣ディルヴィングだ。男嫌いで苦労するよ」
木場とゼノヴィアの間に着地すると同時にディルヴィングが地面へ刺さる。地面にクレーターが生じる程の破壊が起こり、その衝撃波が二人を呑み込んだ。
このままクレーターとなっていく地面に同化して赤黒い染みになるのかと思いきや、そうなる前に二人は衝撃波を突き破り、範囲外へ逃れる。
不安定な地面と重圧によって上手く動けない木場たちであったが、脚を使って移動出来ないのであれば、それ以外の方法を使用すれば良いだけのこと。
木場は『魔剣創造』を足元で発動させ、地面から生えてきた魔剣の勢いと魔剣の柄を蹴る反動を利用して、ゼノヴィアはエクス・デュランダルの剣先を地面に刺し、そこから聖なる気を放出することで逃れた。
二人を仕留め損ねたジークフリートはクレーターの中心で素早く眼球を動かす。そ

の眼は木場とゼノヴィアの現状を映す。
木場は聖魔剣を構えながらジークフリートの方を見ている。ゼノヴィアの方は着地に失敗をして立ち上がっている最中であった。まだエクス・デュランダルの力に慣れていないせいで出力を見誤っての転倒。
どちらを狙うか。答えは明白であった。
ジークフリートはゼノヴィアの方へディルヴィングを構える。この魔剣を振り抜けば、地を圧し潰す衝撃がゼノヴィアを襲うだろう。
ジークフリートの意識がゼノヴィアへ傾いた刹那、離れた位置いた木場が聖魔剣を振り上げてジークフリートの背後へ移動していた。
ゼノヴィアへ攻撃させない為に木場はジークフリートの背中を斬り付ける――が、聖魔剣の刃はジークフリートの体に通らなかった。
オンギョウキが言っていた刃を通さないジークフリートの体。だが、聖魔剣すら通じないのは予想外のこと。
そして、もう一つ予想が外れていたことがあった。
「ダメだよ。木場裕斗」
ジークフリートは前を向いたまま後ろの木場に声を掛ける。
「こんな簡単な誘いに引っ掛かっちゃ」

ジークフリートの狙いはゼノヴィアでは無い。最初から木場が標的だったのだ。ゼノヴィアを攻撃すると見せかけて、まんまと釣られてしまった。
ジークフリートの上着を突き破ってグラムが木場へと伸びて行く。反応が遅れた木場は避け切ることが出来ず、魔剣の刃が木場の脇腹を貫いた。

◇

「オラッ！　オラッ！　オラッ！」
ヘラクレスが拳で何かを殴る度に殴られたものが木端微塵に爆ぜていく。拳の中に爆弾でも仕込んでいるかと思える様な荒々しく派手な攻撃。
「――ヤカマシイ」
ケルベロスはそう吐き捨て、大振りの拳を空振りさせたヘラクレスの胸部に爪による斬撃を与える。
「うおっ」
それに怯むヘラクレス。
「下がってください！」
間髪入れずにロスヴァイセが魔法陣を多重展開させ、そこから炎、雷、吹雪、光の魔法を一斉発射する。

前方から迫って来る様々な魔法。ヘラクレスは避ける素振りを見せないどころか、それらの魔法に突っ込んでいく。
「ハッハッハー！」
豪快に笑いながらその身一つで魔法を突き破っていく。流石に無傷とはいかず、体のあちこちに小さな火傷や裂傷などを負うが、魔法の規模に対して受けているダメージが小さ過ぎる。
「北欧魔術を受けてもモノともしないなんて……！」
体の頑丈さのみで誇りを持っている北欧魔術が通じない光景は、ロスヴァイセの自尊心を酷く傷付ける。
「なら！」
魔法陣の数を増やし、攻撃に更なる変化を加えようとするが――
「いいねぇ！　いい塩梅の魔法攻撃だが、ちょいとくすぐったいぜぇ！」
ヘラクレスが魔法に向けて拳を突き出す。すると、ヘラクレスに発射されていた魔法そのものが爆発し出し、その爆発の連鎖は逆流してロスヴァイセの方へ返って来た。
魔法陣の展開に集中していたロスヴァイセは、それを咄嗟に避けられない。
「しまっ――」
爆発に呑み込まれる直前、ロスヴァイセの体が真横に引っ張られる。ケルベロスがロ

スヴァイセの鎧の一部を咥え、爆発の範囲外へ助け出したのだ。
「あ、ありがとうございます」
「グルルルル。気ニスルナ」
「それと、もう大丈夫ですので……」
ケルベロスに腰辺りの鎧を咥えられているせいでへの字の体勢で吊られているロスヴァイセが少し恥ずかしそうに言う。
「ソウカ」
魔獣であるケルベロスは、ロスヴァイセの羞恥心に特に気付く事無くあっさりと口を離した。
「中々良い組み合わせじゃねぇーか！　その犬ツコロが標的だったがおまけの方も思わぬ当たりだったみたいだなぁ！」
ケルベロスとロスヴァイセのコンビを相手に意気揚々と話すヘラクレス。
「ウルサイ」
「そうかい！　そりゃすまねぇなぁ！」
冷たく吐き捨てるケルベロスにヘラクレスはわざと声のボリュームを上げる。互いに歯を?き出しにして睨み合っている。とことん反りが合わない様子であった。
「これが英雄派……現代のヘラクレスですか……」

小声で呟いたが、ヘラクレスの耳にはしっかりと届いていた。
「俺の事を知っているのなら、そこの犬ッコロをちゃんと守ってやらねぇとなぁ？　ヘラクレスの前じゃケルベロスは負け犬決定だ」
神話の英雄ヘラクレスの功業の中で冥界の番犬であるケルベロスを冥界から引き摺り出した話に因んだ挑発をしてくる。
「過去の英雄ヘラクレスはそれを為しましたが、現代では話は別です。それでもやれると思うならどうぞ。出来なければ、貴方の名もただの飾りですね」
ケルベロスとの仲は深い訳では無いが、この戦いでは助け助けられの関係。ケルベロスを侮辱する発言に対し、ロスヴァイセは痛烈な言葉で返す。
「はっ！　気の強い女は嫌いじゃねぇぜ。それが良い女なら尚更だ。なら、後で卑怯だ何だと言われるのも面白くないから教えてやる」
ヘラクレスは自身の大きな拳を見せつける。
「俺の神器は攻撃と同時に相手を爆破させる『巨人の悪戯（バリアント・デトネイション）』ッ！　シンプルだが派手な神器だろ？」
一誠などとは違い具現化しないタイプの神器。ヘラクレスの言う通り至って単純な能力だが、ヘラクレス自身の力と合わさって強力な神器に昇華されている。しかも、攻撃だけでなくロスヴァイセの魔法攻撃に使用した様に相手の遠距離攻撃も爆破して攻

撃兼防御という応用も出来る。
「理解したか？　知らなかった、はこの先通じないぜっ！」
ヘラクレスは下から上へと掬い上げ様に拳を振るう。その拳は地面を砕き、砕かれた破片がロスヴァイセたち目掛けて飛んで来る。
牽制にしては稚拙としか言いようがないただの礫。しかし、飛んで来る礫を見て疑問を覚える。
ヘラクレスは殴った相手を爆破させる神器と説明した。だが、殴られた地面は爆破せず、礫も――そこでハッと気付いたロスヴァイセが急いで防御用の魔法陣を展開する。
「ケルベロス君！　私の後ろにっ！」
途端、飛翔する礫は次々と爆発を発生させる。殴れば即爆破するのではない。ヘラクレスによってその爆破までの時間はある程度コントロール出来るのだ。
爆発と爆風が魔法陣を襲う。至近距離で聞かされているせいで耳鳴りがする。
爆発をコントロールを出来る。ヘラクレスの言う通りそれを卑怯とは言えない。ヘラクレスは神器の能力の応用について考えなかった時点でロスヴァイセとケルベロスの落ち度である。
ロスヴァイセは馬鹿正直に相手の言ったことを鵜？みにした自分の迂闊さを呪いたくなる。

連続して生じた爆発により煙が発生して視界が遮られる。相手が仕掛けるならこの瞬間しかない。

ただ先に述べた様に視界は煙によって塞がれ、耳は爆音によって麻痺し、最後に残されるはケルベロスの鼻でニオイを追う方法だが、それも焦げたニオイが充満しているこの場所では出来ない。

何処から来るのか。ロスヴァイセたちが警戒を強めた時、煙が二つに割け、そこからヘラクレスの巨体が突っ込んで来る。

（正面っ！）

周囲に意識を分散させてしまっていたせいで、逆に真正面から攻めて来たことに意表を衝かれてしまう。

ヘラクレスは片腕を横へ真っ直ぐ伸ばした状態でロスヴァイセの魔法陣に接触。その一撃によって魔法陣に綻びが生じる。ヘラクレスは片腕を当てた状態で踏み込み、腕に力を込めると魔法陣が砕ける。

防御の為の魔法陣を純粋な力のみで破壊してのけたヘラクレスは、咄嗟のことで動けなかったロスヴァイセの喉目掛けて叩き付ける。

俗に言うラリアットという技。しかし、ヘラクレスが使うのであれば破壊力が違って来る。

『巨人の悪戯』の効果により爆発が発生。拳だけでなく腕部でもその効果が発揮される。
零距離、しかも急所である喉で爆発を受けたロスヴァイセは、後ろで控えさせていたケルベロスの頭上を超えて吹っ飛ばされる。
ロスヴァイセが飛ばされていく様を反射的に目で追ってしまったケルベロス。これが致命的なミスを生む。
「余所見か犬ッコロ？」
「アオン！」
隙を見て近付いたヘラクレスが、ケルベロスの胴体に両腕を回す。そして、ケルベロスの体を持ち上げながらヘラクレス自身もジャンプした。
肩の高さまで持ち上げられたケルベロスは逆さま状態となり、ヘラクレスの落下に合わせて脳天から地面に落ちていく。
「吹っ飛べやぁぁぁ！」
ヘラクレスが両腕を振り下ろすタイミングでケルベロスの頭が地面に打ち込む様に叩き付ける。
それと同時にヘラクレスの神器も発動。文字通りのパワーボムによりケルベロスだけでなくヘラクレス自身も巻き込む大きな爆発が起きた。

難戦、参戦

「……見れば見るほど血がざわめくな」

曹操が構える『黄昏の聖槍』を前にして思わずオンギョウキの本音が零れる。

「天界の熾天使ですらビビっちまう代物だ。――俺だってさっきから鳥肌が収まらない」

イエスを貫いた槍であり、イエスの血で濡れた槍。神の子を刺し貫いたその槍は、この世で最も清められていると同時に最も罪深い槍であり、その相反する矛盾により神をも貫ける絶対性を手に入れていた。

オンギョウキのように魔に属するモノ。アザゼルのように堕天して神のルールから外れたモノには聖槍の輝きを見るだけで本能的な畏れを抱く。これがもっと下位の存在なら聖槍を一目見ただけで背を向け、聖槍の威光が届かない場所まで裸足で逃げるであろう。

逆に信仰心があるものが聖槍を見れば、信仰心や見る時間によって心を持っていかれ、聖槍の持ち主の意にままに操られる傀儡と化す。

故にあらゆる勢力から危険視されている神滅具である。

「おい」
　アザゼルはオンギョウキにのみ聞こえる様に声量を絞る。オンギョウキは聞こえていない様に曹操を注視していたが、アザゼルのみに伝わる小さな反応を示す。どんな些細なことだろうと相手に悟られることはしない。
「お前がどれだけのことを出来るかは知らない。連携しようとしても失敗するだけだ。前以って言っておく。俺が全力で曹操に仕掛けるからサポートは任せる」
　それぞれの役割を最初に決め、同士討ちなどを避けるようにする。
「好きに動け。こちらもそちらに合わせる」
「頼もしいこった。――なら！　初っ端から全力で行くぜ！」
　アザゼルは十二の黒翼を羽ばたかせて真上に飛翔。そこからファーブニルの宝玉を用いて人工神器を発動させる。
　黄金の輝きを放った後、アザゼルの体は『堕天龍の鎧』を纏う。
　オンギョウキは表面上は平静であったが、内心ではアザゼルの人工神器に驚いていた。
　アザゼルが率いる『神を見張る者』が神器の研究を進めていることは小耳に挟む噂程度は知っていたが、禁手もしくはそれに近い力を発揮させられるぐらい研究が進んでいるとは思ってもみなかった。

京都を守護する立場である為、京都から離れることが出来ないオンギョウキは、今更ながら京都の妖怪たちが外界と大きな技術の差が生まれ始めていることを痛感させられる。

アザゼルは片手に巨大な光の槍を携えて急降下。光速で接近すると共に光の槍を突き出す。

曹操はこの期に及んでも不敵な笑みを崩すことなく、絶対的な自信を以て光の槍に向けて己の聖槍を振るう。

異なる光の力が真っ向から衝突。光同士が反発し合い、そこから強大な波動が発せられ、地面や周囲のものが吹き飛ばされていく。

互いに力を押し付けあっていたが、やがて両者は弾き飛ばされた。ただし、アザゼルが振るった光の槍はアザゼルの手の中で崩壊してしまう。強過ぎる光の力に影響された結果であった。

吹き飛ばされた曹操は何事もなかったかの様に無事に着地。堕天使総督の、それも人工神器で強化されたアザゼルの一撃を受けても特にダメージが無い。

初撃の打ち合いは曹操に軍配が上がったと言える。

曹操の目が左右に動く。アザゼルの姿は見える範囲に居るが、オンギョウキがいつの間にか消えていた。

アザゼルだけに集中せずにオンギョウキも意識していたが、先程の打ち合いでどうしても意識が外れ、その隙に隠遁されてしまった。
敵ながら見事なまでの消えっぷりである。
「さて……何処から来るかな？」
影を伝って身を隠したり移動したりする技を持っているのは曹操も既に知っている。相手は凄腕の忍にして暗殺者。こちらの意識の隙間を狙って確実に仕留めようとしてくる。
曹操の耳に聞こえる風切り音。反射的に聖槍を振るえば、穂先が何処から飛翔してきたのか分からない手裏剣を弾く。
「これは見事なものだ！」
オンギョウキの気配が全く感じられない。見られているという感覚すらない。最初からオンギョウキはここに居なかったのではないかと己に問いてしまいそうになるぐらいの隠密の精度。
「そっちも大事だが、こっちも大事だろ？」
真上から光に照らされる曹操。彼の頭上には巨大な光の槍が出現している。
「こちらも見事！」
アザゼルが指を振るうと光の槍が曹操目掛けて落下する。大樹の如き光の槍を受け

るよりも避けることの方を選択し、後方へ大きく跳躍する。
受けて立ったとはいえ二対一の戦いである。消耗を抑えられるならなるべく抑えるべき、という曹操の判断であった。
そして何事も無く着地――するかと思いきや、曹操は足が着く前に聖槍を地面へ斜めに突き刺し、柄の上に降り立つ。
幅の狭い柄。しかも斜めの状態になっており、支えているのは地面に刺さっている穂先のみだというのに曹操は器用に乗っており、倒れる気配が無い。
何故急にこんな大道芸染みたことをしたのか。当然、身体能力を見せつける為などという幼稚な理由では無い。
「危ない危ない。――全く、油断が出来ないね」
曹操が降り立つ筈であった地面にばら撒かれている黒い鉄片。鉄片には鋭い棘が生えていた。
所謂、まきびしという忍具であり、本来ならば追手を妨害する為の物であるが、オンギョウキが使えばこの様な罠と化す。
咄嗟に気付き、踏むのを免れた。負ったとしても致命傷には程遠い怪我だが、この戦いに於いては少しの怪我による身体能力の阻害も馬鹿に出来ない。それに、忍の使うまきびしなのだから得体の知れない毒が塗られている可能性もあった。

逃げ道すら与えないような容赦の無い攻め方にも冷静に対処してみせた曹操。まきびし地帯から離れようとしたとき、僅かな砂埃が舞うのに気が付いた。
　些細な変化であったが、それに悪寒を感じ取った曹操はすぐさま動こうとするが、その動きを先読みしたかの如く、舞っていた砂埃がつむじ風と化す。
「くっ！」
　巻き上がる砂塵によって曹操の視界が潰される。下手に目を開けることすら許されない。
　それでも目を細めて可能な限り視界を確保しようとする曹操。ぼやけた視界の中で幾つもの発光を捉えた。
　そこからの曹操の動きは迅速であった。光が何なのかを確認するよりも先に地面に突き立てられている聖槍の穂先から光を放出。
　地面がその光によって爆破され、その反動で曹操は砂塵のつむじ風を突き破る。直後に同じくつむじ風を突き破って飛び込んで来る無数の光の槍。あの発光の正体はアザゼルが攻撃する前兆であった。
「本当に組むのは今日が初めてなのか？」
　そう疑いたくなる程にアザゼルとオンギョウキの連携は噛み合っていた。どちらも特に合図を出していないのに当たり前の様に合わせられることが恐ろしい。

長年生きてきた経験による無駄のない連携に、曹操も防戦一方となるがその口元からまだ笑みは消えていない。
「勿論」
「むっ！」
答えが背後から返って来る。曹操は振り返ろうとする前に後ろから三日月状の刃が付いた武器が伸ばされる。
黒塗りの刃が狙うのは曹操の首。刃が手前に引かれると同時に曹操は背後から押され、自らも刃へ飛び込む形となる。
曹操は咄嗟に聖槍を構え、柄で刃を防いだ。少しでも遅れていたら首が刎ねられていたところである。
身を隠して行動していたオンギョウキが、曹操が跳び上がったタイミングに合わせて姿を現し、奇襲を仕掛けてきた。
しかし、これも防いだ曹操であったが、オンギョウキにとっては予想通りの動きであった。
オンギョウキに背中を蹴り押され、武具の刃を押さえるのに精一杯のこの状況。ましてや今は空中。曹操に逃れる術は無い。
「今だ！」

自分も巻き込まれるかもしれないというのに、その指示に躊躇いなど微塵も無い。
「――あいよ」
そして、その覚悟を無下にする程アザゼルは不粋では無い。
アザゼルの手の中に光が集まって槍と成り、投擲の構えをとる。矛先を曹操へ固定する。
息つく暇も、容赦も無いアザゼルとオンギョウキの戦いに曹操は惚れ惚れしそうになる。しかも、その暴力が自分という個人にのみ向けられている現状に誇らしさすら覚える。
曹操は英雄の血を引く英雄の子孫。英雄の血が流れていると知っても、曹操はそれを別に誇らしいとは思っていない。
その血統を利用することはある。血統というのは言葉に出来ない説得力を生むこともあった。
しかし、それでも弱く、ちっぽけな人間であることは間違いない。人間が弱く、卑しく、どうしようもない面を持っているのを曹操は嫌という程知っている。
曹操は人間賛歌をしない。彼はまだ人間というのがどういうものなのかを知ろうとしている途中なのだ。そして、自分がどれ程のものなのか試している途中でもある。
だからこそ、人間よりも上位の存在に良くも悪くも特別扱いされてしまうと心が躍

る。場違いな感情だと自覚しているが、嬉しくなってしまうのだ。
少しだけ自分が特別であることを信じられるから。
「俺はまた先に進めそうだ。だいそうじょう」
曹操は聖槍の柄に手首を擦り当てる。手首には数珠が巻かれており、擦れた拍子で数珠から一個珠が外れる。
状況は絶体絶命。だが、命の危機など幼い頃から何度も経験しているし、何度も切り抜けてきた。今更、死に怯えることなど無い。
外れた珠が落ちていく。その瞬間、珠から光が漏れ出す。
「ッ！　離れろっ！」
投擲の最中であったアザゼルは、自らを止めることが出来ず光の槍を投げ放ちながらオンギョウキに逃げるよう叫ぶ。珠が発する光はアザゼルにとって見慣れたものであった。
アザゼルの余裕の無い声にオンギョウキは即座に判断して曹操から離れる。
オンギョウキが離れた直後に珠から閃光が放たれ、曹操を中心として球状の光が形勢された。
「これは……破魔か！」
まごう無き破魔の光にオンギョウキは内心肝を冷やす。鬼にとっても破魔の光は猛

毒である。
　アザゼルが投げ放った光の槍が破魔の光に阻まれる。同質の力とはいえ最上級の堕天使の光ですら破魔の光を破って中の曹操を貫くことが出来ない。
　見て分かる様に曹操が放った破魔の光は一級の僧ですら不可能な範囲と威力を持っており、逃げ遅れていたらオンギョウキも無事では済まない。
　オンギョウキは地面に降り立ちながら疑問を覚える。曹操が破魔の光を何故使用することが出来たのか、という疑問。
　確かに破魔の光は修業をすれば体得することが可能だが、誰でもという訳では無くましてや曹操が覚えるには若過ぎる。
　破魔の光の中から曹操が現われ、地面に着地する。
「ふぅー……危機一髪、という所だったかな?」
　口で言っている様に本当に危うい状況であったが、曹操の不敵な表情のせいでそうは見えない。実際、アザゼルとオンギョウキは曹操の言葉を皮肉として受け取っていた。
「その力……だいそうじょうから貰ったのか?」
　オンギョウキも知っている魔人の名前がアザゼルの口から出される。曹操が魔人とも繋がりがあることを知り、曹操の危険度が跳ね上がる。
「ああ、そうさ。この一つ一つにだいそうじょうの力が込められてある」

アザゼルたちに数珠を見せ、隠すことなく肯定する。
「護身用に貰ったんだ。有り難いもんさ」
どこが護身用だ、とアザゼルとオンギョウキは同時に内心毒吐く。そんな言葉で済ませられる様な代物ではない。あの数珠があればどれだけの悪魔が滅せられるか。
「随分と仲が良いことだな」
「それなりに長い付き合いだからね、俺と彼は。まあ、堕天使や悪魔からすれば極々短い時間だが」
曹操とだいそうじょうの出会いは、曹操が聖槍の力に目覚め、それに目が眩んだ両親に売られて間もない頃からである。
だいそうじょうが曹操を直接助ける様なことはしなかった。しかし、曹操が深手を負った際に遭った時は傷を治してくれた。
曹操が『禍の団』に入るまで共に行動することは殆ど無かったが、それでも悪い関係では無かったとは言える。
「どうも俺と彼の力は相性が良いみたいでね……」
曹操は数珠から珠を二つ外す。掌の上で転がすそれを不意に上と放り投げると、聖槍を一振りする。聖槍の一振りで珠をアザゼル、オンギョウキと、別々の方向へ飛ばすという器用さを披露する。

小さな珠がオンギョウキへと飛ばされる中、珠が発光し再び破魔の光が発動する。
急いで射程外へと逃れようとするオンギョウキ。しかし、珠が発する光は先程の時よりも強烈で範囲も広がっていく。
一方でアザゼルへと飛ばされた珠からはドス黒く、昏い光が放たれた。見るだけで悪寒が走るそれは間違いなく呪殺の力。
破魔だけでなく呪殺の力まで数珠に込められていることをこの時知る。破魔と呪殺という全く異なる力をこの世で唯一同時に操ることが出来る、だいそうじょうならば可能な芸当。
その上に加えられる『黄昏の聖槍』の力。神の子を刺し、その血によって聖なる力を得たと同時に神の子の血で濡れるという大罪を犯した槍でもあり、聖槍と呼ばれながらも正邪の力両方に作用する。
聖槍によって増幅された破魔と呪殺の力が、アザゼルとオンギョウキを滅ぼす為に広がり、二人を取り込もうとする。

◇

「落ち着けー俺！　落ち着け！」

『全く落ち着いていないぞ、我が分身よ』

十メートルはあるだろう九本の尾を持つ金色の狐を前に匙は自らにそう言い聞かせているが、内にいるヴリトラが言う様に全く効果は無かった。

「いや、だってよぉ！　うひょっ！」

金色の狐が炎を吐き出してきたので、匙は全力疾走で炎から逃げる。

「向こうは全力で殺しに掛かって来てるのに、こっちは殺しちゃダメなんだぞ！　倒せるかどうかすらも分からないのに！」

金色の狐こと八坂を救出するのが今回の作戦の目的であり、その命を奪ってしまったら本末転倒である。しかも、助ける筈の八坂はどう見ても洗脳されている状態であり、こちらに殺意に満ちた攻撃を仕掛けて来る。

炎に延々と追われると思いきや、急に八坂が苦しみ出し、炎を吐くのを止める。

「何だ……？」

『どうやら何かしらの術式の要に据えられているせいで不調をきたしているようだ。先程から力を無理矢理注ぎ込まれているみたいだからな』

ここに来る前のミーティングでアザゼルがパワースポットの気脈が乱されて二条城に集中していると説明していたのを思い出す。

「それって不味くないのか？」

『不味いな。あの狐が高位の妖怪だからこそまだ耐えられているが、いずれは器以上の力を満たされて――』

そこから説明されなくとも分かる。ここで匙がどうにかしなければ、八坂の身が危ないのだ。

「……力を貸してもらうぞ、ヴリトラ。相手があんだけデカくて力が有り余ってんだ。あの人には悪いが、動けなくなるまでとことんやるぞ」

『無論だ。――しかし、気迫が増したな我が分身よ。与えられた責任の大きさに身が引き締まったか？』

「グレモリー眷属と関わると死線ばかりなのは勘弁だが……ま、学園の皆とかダチのこともあるけどよ……」

脳裏に過るは九重の言葉。

『言われた……じゃが、母上の危機にじっとしてなどいられん！　頼む！　私も連れて行ってくれ！』

そして、今の八坂の状態を知ればやる気が出ない筈が無い。

「俺も結構母親想いなんだよ」

九重という狐の少女とは会って間もない。しかし、母親を想う気持ちならば共感出来る。

「狐のお袋さんよ、怪獣対決と行こうじゃねぇか！『龍王変化』ッ！」

　匙の体が内から噴き出した黒い炎によって覆われる。黒い炎は大きく広がり、膨れ上がっていき、人から別の姿へ変わっていく。

　漆黒の炎が形を成していき、匙は長い胴を持つドラゴン――ヴリトラの姿へ変貌した。

『先ずは小手調べだ』

　ヴリトラの人格が表に出ると、鋭い眼光を八坂へ飛ばす。途端に八坂の周囲に黒い炎が発生する。八坂ではなく別のものを燃やすのが目的に見える。

『――駄目か』

（何をするつもりだったんだ？）

『あの九尾と術式との繋がりを断とうと思ったが、術式自体に自らを守る結界術が施されているな。随分と複雑な術式にしたものだ』

　八坂にパワースポットの力が強制的に注がれるのを止めてみようとしたが、ヴリトラの言う通り無駄に終わってしまった。ヴリトラの力が上手く通じない程の術式など脅威的だが、ただ単純に強固な訳でもない様子。

『結界は気脈の力を利用して中々に頑丈だ。……そして、生意気なことに我が炎への対策も施されているな。どうやら、連中は我らが術式を破壊しようとするのを見越してい

たらしい』

行動を見透かされ、先手を打たれていたことを不愉快そうに語るヴリトラ。

（じゃあ、炎がダメなら蛇を使って弱らせるか？）

『九尾に流し込まれている力が多過ぎてすぐに破裂するのが目に見えている。兎にも角にも術式をどうにかするのが先だ』

最初からヴリトラとしての戦いをいくつか封じられていることにヴリトラ内の匙は渋い顔をする。どうにかするべきなのだろうが、悔しいことに今の匙に名案は無かった。

ヴリトラの出現に気付き、八坂は牙を？いてヴリトラを威嚇する。

未だに気脈の影響による不調は治っておらず呼吸が荒いが、正気を失った目を不気味に輝かせ、荒い呼気に炎を混ぜる姿には有名な妖怪らしい凄味があり、匙は思わず息を呑む。

『臆するな我が分身よ。恐れを抱くならば我を見よ。お前と並ぶは三界に名を轟かせた龍王よ』

（お、おう！　分かってる！）

ヴリトラに鼓舞され匙も気合いを入れ直す。ここまで言われてまだビビっているのなら、ヴリトラの相棒として相応しくない。

八坂は顔を上げ、喉を膨らませる。
『来るぞ！』
反らしていた顔を正面に向けると同時に八坂の口から猛火が吐き出される。
ヴリトラもそれに応じて黒い炎を吐き出し、真っ向から勝負を挑む。
猛火と黒炎が衝突し、凄まじい衝撃を生み出すかと思いきや軽い音を立てて二つの炎は呆気無く消え去る。
相手を燃やし尽くす猛火とヴリトラの力を奪う黒炎が絡み合った結果、相殺されてしまったのだ。
『互角か。獣の癖にやりおる！』
相手の力量を褒めながらヴリトラは体の一部を変化させる。嘴の様な形をした器官が胴体の左右に作ると、嘴部分が開き中から『黒い龍脈』と同じラインが無数伸び出す。
それらを一斉に伸ばし、炎の吐き出した直後の八坂に巻き付かせようとする。
左右から挟み込む様にして逃げ場を封じ、手足や胴体にラインを巻き付けて動けなくする。
その状態で力を吸い取ると――気の抜けた音と共に八坂の体は破裂して煙となった。
（何だこりゃ！）
『ちっ。化け狐の変化か！』

何かを媒体にした変化に化かされていたことに驚く匙と不覚を取ってしまったヴリトラ。
恐らくは炎を撃ち合った直後に入れ替わっていたのであろうが、変化が精巧過ぎるせいで気付くことが出来なかった。
ならば、本体の八坂は何処にいるのか。ヴリトラたちが注意深く周囲を見回した時、ヴリトラの視界に何かが横切って行く。
（……蝉？）
一匹の蝉が羽ばたいているだけのこと。大したことではない、と最初は思ったが、すぐに違和感を覚える。
（って！　もう秋だぞ！）
季節外れの蝉に嫌な予感を覚えた直後、蝉の体が炎に包まれ、変化を解いた八坂がヴリトラの胴体に噛み付く。
『ぐっ！　そこまで変幻自在か！』
十メートル程の巨体を虫の大きさにまで変えることの出来る八坂の変化に流石のヴリトラも騙されてしまった。
胴体を揺さぶり、八坂の牙から逃れようとするも中々外れない。
八坂はその状態から更なる追い打ちを仕掛ける。

喰らい付く牙の隙間からどす黒い気体が漏れ出し、その気体はヴリトラの中へ流し込まれていく。
『これは……！』
（うっ……！　げほ！　げほ！）
ヴリトラは異変に気付くと同時に中にいる匙が苦しみ出す。
『毒か……！』
ヴリトラにとっては即座に効くような毒ではなかったが、ヴリトラと違って一体化している匙には大きな効果を齎していた。
このままではヴリトラよりも先に匙の方が危うい。そうなればヴリトラも実体化を維持出来なくなる。
『やむを得ん！』
ヴリトラの体が一瞬震え、次の瞬間には無数の黒い蛇となってばらけた。それにより八坂の牙が外れるが、代償として本体である匙を八坂の前に晒してしまう。
八坂の正気の無い目がヴリトラの分身たちに紛れる匙の姿を捉えた。
咆哮を上げ、匙を噛み殺す為に大口を開いて突っ込んで来る。
「うおっ！」
空中にいるので避けることも出来ないので反射的に両腕を翳して身を守る体勢と

なった匙。しかし、その程度の防御など八坂の牙の前では紙切れ同然。
構わず匙を噛み砕こうとした時、ヴリトラの分身である黒い蛇たちが八坂の顔に飛び掛かった。
目の周りや鼻など重要な器官に噛み付く黒い蛇たち。それを嫌がり、八坂は匙への攻撃を中断して顔を左右に振るう。
黒い蛇たちは噛み付いた状態から八坂の力を吸収し出す。だが、すぐに黒い蛇たちの胴体が膨れ上がり、ツチノコを思わせる体型となると破裂し消滅してしまった。
ヴリトラが予想していた通り、パワースポットと繋がっているせいで八坂の力は無尽蔵にあり黒い蛇程度では吸収し終える前に過剰供給されて自滅してしまう。
それでも匙から注意を逸らす目的は果たせており、落下してきた匙を下で待機していた黒い蛇の群が呑み込み、再びヴリトラの姿となる。
『毒の影響は無いか？』
（大丈夫だ……ちょっと体が怠いけど）
ヴリトラの咄嗟の判断のおかげで匙への毒の影響を最小限に抑えられた。
黒い蛇らを全て振り落とした八坂は、ヴリトラが顕現していることに気付き、もう一度噛み付こうとするが、その牙が届く前にヴリトラの尾が八坂の横顔へ叩き付けられ、殴り飛ばされる。

（おいおい……加減してくれよぉ……敵意？き出しだけど洗脳されているだけなんだからな？　救出するのが目的なんだからもう少し優しくしてくれ……）

『あまり言いたくは無いが、龍王の中では我が一番非力だ。あの狐は気脈の影響で龍王と同等以上の力になっている。あの程度でどうにかなる程軟では無い』

（それならいいけど……え？　龍王以上なの？　マジで……？）

安心したのも束の間、ヴリトラから今の八坂が龍王以上だと教えられ、匙は顔色を悪くする。ますます抑え込むのが難題になってきた。

横っ面を引っ叩かれた八坂が恐ろしい眼差しをこちらへ向けて来る。大妖怪が放つ本気の殺気に匙は心臓を握り締められた様な苦しさを感じた。

オオオオオオオオオオオンッ！

八坂が空に向かって吠える。すると、ヴリトラは額に冷たい感触を覚えた。

『雨……？』

雲の無い空から急に雨が降り出してくる。天気雨、或いは古典などでは『狐の嫁入り』と言われている現象。

八坂の鳴き声の直後に降ってきたので八坂が行ったものなのだろうが、小降りの雨を降らした所で一体何になるというのか。

この時の匙とヴリトラはそう思っていた。

ピシリ、という音が鳴る。それはヴリトラの間近で聞こえた。音は一度で止まず、何度も繰り返し聞こえて来る。

（何の音だ……？）

内にいる匙と同じくヴリトラもその音が気になる。ふと、胴の一部に雨粒が落ちる。その直後にあの音が聞こえた。

雨に合わせて音が鳴ることに気付いたヴリトラは、雨粒に濡れている筈の己の胴体を見る。濡れている筈の箇所が鼠色に変色――だけではなく凹凸がある表面に硬質化していた。

『これは……！　しまった！』

自らの油断を悔い、すぐに頭上に向けて黒い炎の壁を張ろうとする。しかし、途端に雨足が速くなり、ヴリトラの全身を濡らしていく。そして、濡れた箇所が変質していく。

（何だこれ！　何が起こってんだ！）

『奴の変化だ！　雨粒を石に変えて我らを石化させようとしている！』

（そんなのありかよ！）

狐の変化は基本的には自分が対象である。しかし、例外として自分が出した力を媒体にした変化も可能である。八坂が身代わりを置いてヴリトラの目を欺いたが、あれは八坂が吐き出した火の粉を変化させたものである。

そして、ヴリトラに起こっている現象もまたそれの応用。相手を変化させることは出来ないが、八坂が起こした雨粒を石に変化させることで疑似的な石化を行っているのだ。無論、これは気脈で力を増しているからこそ出来る芸当である。

石化した部分に雨粒が落ちるとそれもまた石と化し、層の様に重ねられていきヴリトラの姿が岩に呑まれていく。

『ぐ、おおおおっ！』

全身から黒い炎を放つがそれすら呑み込み、ヴリトラは岩の中へと閉じ込まれる。

その姿に、八坂は勝ち誇る様に遠吠えをした。

◇

……ア。……シア。……アーシア。

「う、うーん……？」

誰かが名前を呼ぶ声が聞こえ、アーシアはベッドから体を起こす。

「あれ……？　私……」

ベッドで目を覚ますことに違和感を覚える。こんな事をしている場合では無かった気がした。

「起きたか？　アーシア」

声がする方を向けば、一誠がこちらを心配そうに見ている。
「イッセーさん……？」
また違和感を覚えた。何故、ここに一誠がいるのか、と。そして、見つめている一誠にも違って見える。彼女が知る一誠よりも落ち着いた雰囲気で大人びて見えた。
「イッセーさんって……また随分と懐かしい呼び方をするな」
「懐かしい……？」
「だって、それは俺達がまだ学園に通っていた時の呼び方だろ？」
「通っていた……？　いえ、私たちは今も……」
「何十年も前の話だよなぁ」
「何十年って……」
アーシアは言葉を失う。自分達はまだ学生であった筈だ。
「もしかして、寝ぼけいるのか？」
「いえ、そんなこと……」
無い、と言おうとした時、脳内に覚えの無い記憶が溢れ出て来る。一誠の言う何十年分の記憶が怒涛となって押し寄せ、アーシアの戸惑いを消し飛ばしてしまう。
「ごめんなさい……ちょっと寝ぼけていたみたいです」
アーシアは思い出す。一誠と自分は結婚して夫婦となったことを。最上級悪魔に

なったのをきっかけに冥界に移住し、日夜冥界の悪魔たちの為に働いていることを。
そして――
「お父さーん。お母さん、起きた？」
アーシアに良く似た容姿の少女が寝室へ入って来る。
「おー、今起きた所だぞ」
少女はアーシアのベッドの傍まで来ると呆然としているアーシアを、小首を傾げて不思議そうに見つめる。
「お母さん。どうかしたの？　私の顔に何か付いてる？」
アーシアは少女に手を伸ばし、そっと抱き寄せる。
「何でも無いわ。アイリ」
自然と少女の名を呼ぶ。否、呼べて当たり前なのだ。アイリという少女は一誠とアーシアの愛すべき大事な娘なのだから。
「急にどうしたの？」
「気にしないで。――ちょっとこうしたかったの」
いきなり抱き締められたことにアイリは最初は戸惑っていたが、すぐに満面の笑みを浮かべて小さな手でアーシアを抱き締め返す。
幼い力の抱擁。その感触と温もりを感じるだけで幸福感が溢れ出てくる。

一誠はそれを微笑ましく眺めていた。
最愛の夫。最愛の娘。それによって創り出される家族。これ以上の幸せが何処にあると言うのだろうか。
――オン。
「……今、何か聞こえませんでしたか？」
遠くで動物が鳴いた気がした。
「いや？　聞こえなかったけど？」
「何も聞こえないよー？」
一誠とアイリは揃って首を横に振る。
「そうですか……」
聞き間違いと思い、アーシアはアイリを抱いたままベッドから降りる。
――パオン。
また遠くで動物が嘶いた気がした。

◇

パオオオオオオオ！

『いい加減に目を覚ませ！』と怒気と共に大声量を発するギリメカラ。その対象となっているのは、ピラミッド型の結界の中心で眠っているアーシアであった。

ギリメカラの咆哮など、そよ風よりも耳朶を震わせないといった様子で幸せそうなだらしない寝顔を晒している。

それが余計にギリメカラを腹立たせた。だが、ギリメカラがアーシアを責めるのは少々理不尽なこと。何せ戦いが始まった途端にアーシアは結界の中に閉じ込められてしまったのだ。

どう考えても予め罠が仕掛けられていた。ギリメカラすら発動されるまで気付かなかったぐらい綿密に隠された罠である。それを戦闘力の無いアーシアが気付くのは尚更酷なことであった。

「怒るのは大変結構。俺の胸がすく思いだ。だが、怒りに任せたまま結界を破壊することはお勧めしない」

ギリメカラの怒りを更に煽るゲオルク。以前に屈辱を味わわされた立場もあって煽るゲオルクは、いつもの知的さを感じさせるクールな表情ではなく意地の悪さが見て取れる半笑いであった。

「その結界の強度は非常に脆い。お前が軽く小突けば簡単に破壊出来るだろう。今のアーシア・アルジェントの精神と結界は密接な状態にある。……結界を壊せばアーシ

ア・アルジェントの精神も壊れるぞ」

ゲオルクの説明を聞き、ギリメカラは心底面倒くさそうに単眼を細めた。

「そのまま眠らせてやってはどうかな？　今の彼女は幸福に満たされた夢の中にいる。全ての悪意と危険が無い文字通りの夢の世界だ。そんな夢から醒ますのは残酷では無いかな？」

夢の世界に強制的に閉じ込めた本人が慮る様な台詞を吐くのでギリメカラは吹き出す。これ以上無い程に白々しい台詞であった。

パオー。

『必死だなぁ？』と一応煽るギリメカラ。彼の指摘は間違ってはいない。

ゲオルクからすればギリメカラとアーシアの組み合わせは最悪の一言に尽きる。並大抵の攻撃ではびくともしないギリメカラの耐久力。仮に傷を負っても即座に治癒することが出来るアーシアの神器。

この二つが合わさってしまうとそれらを突き破る程の大火力を持っていない限り勝つことは不可能になってしまう。

だからこそギリメカラとアーシアを引き離し、力を合わせることを出来なくした。アーシアを『絶霧』の禁手『霧の中の理想郷』に閉じ込めることが、ゲオルクにとって最も神経を集中させた作業であった。

その甲斐あってギリメカラと一対一で戦える状況となっている。また、それとは別に『禍の団』の方針としてはアーシアを捕えたいという狙いもあった。

アーシアの神器『聖母の微笑み』は稀少な神器であり、各陣営が血眼になって所有者を探している。小規模、大規模な戦闘が行われる中で回復要員は必要不可欠な存在になっている。

押さえれば人員の消耗を減らすだけでなく逆に相手の人員消耗を加速させることになる。

その為、ゲオルクも曹操からはなるべくアーシアを無傷で捕える様に言われていた。

「今度は勝たせてもらうぞ」

ゲオルクは特に意味があって言った訳では無い。せいぜい意思表示程度ぐらいにしか意味を持たなかった。

だが、反応はゲオルクすら予想出来ない程に劇的であった。

パオオオ？（お前、生意気だな）

ゲオルクの体がビクリと一瞬だけ震える。常に怠惰な雰囲気を纏うギリメカラから本気の殺意を初めて向けられた気がした。

ギリメカラからすれば、たかが回復要員の小娘一人封じられた程度で神滅具を所持しているとはいえ人間の魔術師風情の頭に勝利の二文字が過る時点で舐められているの

も同然である。
適当に痛めつけてやろう程度に思っていたギリメカラだったが、気が変わった。命は取らない。代わりに身の程を徹底的に思い報せることにした。
ギリメカラは持っている片刃の剣を掲げ、そこに鼻を向ける。鼻から放出される黒い煙――毒ガスを剣に吹き付けた。
鈍色の剣身が化学反応を起こしたかの様にどす黒く染まっていく。
ギリメカラは黒く染まった片刃剣を水平に構える。ゲオルクはその光景に驚く。
あの力押ししかしなかったギリメカラが技らしい技を放とうとしているのだ。
嘶きと共に突き出される剣。瞬時に空気の壁を破るその突きは、地面が捲れ上がる程の衝撃波を生み出すと共に毒ガスによって猛毒を含まされているので、衝撃波が進む跡を毒によって汚染し、紫の色に染め直していく。
猛毒を宿した破壊がゲオルクの誇りを砕き、穢す為に迫り来る。

◇

「はい☆」
セラフォルーの冷気によってアンチモンスターたちが氷の塊の中へ纏めて閉じ込め

られる。
二条城周辺でのアンチモンスター掃討は思いの外上手く進んではいなかった。
アンチモンスターたちが強い、という訳では無い。セラフォルーや三鬼からすれば余裕を以て対処出来る程度の敵だが、厄介なことにアンチモンスター達には最低限の知能が宿っているらしく、強敵と判断されたセラフォルーや三鬼らと積極的に戦うことはせず、姿を見つけると一目散に逃げてセラフォルー達よりも弱い相手を見つけて攻撃するという狡い戦い方をしてくるのだ。
それを守る為にセラフォルーはあっちこっちに移動する羽目になり、そのせいで余計に時間が掛かってしまう。
「もー、キリがない」
鬱陶しいアンチモンスターも戦い方にセラフォルーも愚痴を零す。
すると、セラフォルーの耳に悲鳴が聞こえてきた。またアンチモンスターらが京都の妖怪らを襲っている様子。
「待っててね！」
悲鳴の許へ急ぐセラフォルー。十秒も掛からずにその場所へ着くが、そこでは今にも妖怪らがアンチモンスターの放つ光の力に消し飛ばされようとしている瞬間であった。
間に合わない、とセラフォルーが思った瞬間、アンチモンスターの頭上に巨大な何か

落ちてきたアンチモンスターを潰してしまう。
呆気に取られる妖怪たち。セラフォルーも同じ気持ちであった。
アンチモンスターを潰したもの、それは岩とも石とも分からない未知の素材で作られた巨大で太い足。
視線を上げていくとその太くて大きな足にあったこれまた太く巨大な手も見え、全体を見ると十メートルはある巨人がそこに立っていた。
その巨人の肩には三角帽子とマントを付けた少女――ルフェイが申し訳なさそうな表情で立っている。
セラフォルーを発見すると、ルフェイは恐る恐る訊ねた。
「もしかして……私、遅刻しちゃいました？」

心折、壊可

巨人と共に登場という鮮烈な参戦を果たしたルフェイであったが、当の本人は不安そうに辺りをキョロキョロと落ち着きなく見ていた。
京都の妖怪らは未知なる少女と巨人の登場に戦々恐々としており、助けられたことへの礼も言えない状況であった。
「大丈夫よ。この子たちは味方だから。貴方たちは安全な場所へ避難して」
セラフォルーに指示され、助かったと言わんばかりの表情で凄まじい速度で一礼した後に一目散に走り去ってしまった。
「あのー……やっぱり遅刻でしたか？」
アザゼルだけでなく一誠たちの姿も発見出来なかったルフェイは、普段は溌剌している表情を曇らせている。
「大丈夫大丈夫。こっちの予定がちょーっと狂っただけだから。貴女のせいじゃないわ☆」
ルフェイの不安を打ち消す様なセラフォルーの輝きに満ちた笑顔。
「そうなんですか？　あの、アザゼル様やおっぱいドラゴンさん達は何処に？」

「それがね、連絡が取れなくなっちゃったの。多分、ここに来る前にアザゼルちゃん達は敵に連れてかれたかも」
「きっとゲオルク様の仕業ですね。『絶霧』なら多人数を拉致するのにピッタリですから！」
　それについてはセラフォルーも同意見であった。
「あ、そうなると私がここで合流するのは不味かったですか？」
　セラフォルーもアザゼルから事前にルフェイが助っ人として来ることは聞かされていた。真っ先に事情を知っているセラフォルーが合流出来たのは不幸中の幸いと言える。
　今は味方とはいえ彼女もまた『禍の団』に籍を置く者。何かの拍子で彼女がそれを洩らせばややこしい事態になり兼ねない。ただでさえ、その事態を防ぐ為にルフェイのことは最小限にしか報せていないので尚更である。
「大丈夫☆　誤解が起きない様に私がきちんと説明しておくから☆」
「そうですか！　よかったー……私、安心しました！　そして光栄です！　『マジカル☆レヴィアたん』のレヴィアタン様にお会い出来て！」
「私の番組見てくれているんだー☆　ありがとー☆」
　興奮するルフェイにセラフォルーは手を振ってファンサービスをする。一瞬だけ空

気が緩んだ様に感じられたがそれは表向きのこと。セラフォルーは微塵も気を抜いていない。番組を見ている、という発言は素直に喜んでいるが。

「そのゴーレム……？　は貴女の使い魔なの？」

「ゴッくんは私の使い魔じゃなくて、私たちのチームメイトです。パワーキャラ担当なんですよ」

「ゴッくん？」

「はい。ゴグマゴグだからゴッくんです」

ゴグマゴグ。その名はセラフォルーにも聞き覚えがあった。

次元の狭間に於いて稀に機能停止状態で漂っている古の神が量産した破壊兵器――と言われているものらしい。

見た目通りの破壊力を秘めた存在だが、それに見合った問題点も多々あったらしく、それが原因で機能停止にさせられ次元の狭間に廃棄されたのではないかと推測されていた。

「動いている機体が存在するなんて……」

そう。今まで発見されたゴグマゴグは全機が完全に機能停止させられており、再起動も出来ない状態であった。

アザゼルがここに居たら目を子供の様に輝かせることだろう。神が創った古代兵器、

という言葉など完全にアザゼルの探究心へ突き刺さる。
「ヴァーリ様が発見したんですよ。オーフィス様が次元の狭間で動きそうな巨人を感知していたのを知っていたので、後日改めて探索したら見つけたんです！」
次元の狭間にはグレートレッドだけでなくゴグマゴグなどの扱いが難しくなったものを度々処分目的で送り込まれることがあった。グレートレッドは次元の狭間を好きに泳ぐだけで実害は無いが、こういったモノらは時折トラブルの原因になることもある。
セラフォルーとしてもヴァーリのチームの中に伝説的な巨人が存在するのは初めて知った情報であり、この先のトラブルの種になりそうだと思った。
「でもでも！　それだけじゃなくて！　ゴッくんよりももっと珍しい子が――」
ゴオオオオオオッ！
巨人が雄叫びを上げて何かを言い掛けていたルフェイの声を遮る。
「どうしたの？　ゴッくん？　もしかして感知したの？」
ルフェイはゴグマゴグの雄叫びの意味を理解し、ゴグマゴグの好きにさせる。
セラフォルーが見ている前でゴグマゴグは地響きを起こしながら移動し出し、敵も建物も無い所で立ち止まる。
「ここ？　ここなのゴッくん？」

ルフェイの言葉に応じる様にもう一度雄叫びを上げると、ゴグマゴグは徐に拳を振り上げ、何も無い場所へ放つ。
空を切る筈の拳であったが、突如として手から肘に掛けての部分が消失する。失ったのではなく不可視の何かに腕を突っ込んで見えなくなっていた。
「やっぱりゲオルク様の結界だ！」
ルフェイが確信すると、ゴグマゴグは腕を引き抜く。腕を抜き切るとそこに空間に穴が生じており、その向こう側に別の景色が広がっている。
ゲオルクの結界を外側から破壊したゴグマゴグ。だが、結界には自己修復機能が備わっているらしく穴が段々と小さくなっていく。
「ゴッくん！」
ゴグマゴグはその穴に両手の指を捻じ込み、左右に広げて結界の修復を妨害する。
そのまま穴を広げようとしているが、結界の修復速度は思いの外早く、また『絶霧』によって創られた結界なだけあって強度も強い。
ゴグマゴグの怪力を以てしても穴が閉じない様にするのが限界であった。
「流石はゲオルク様の結界ですね……ゴッくんのパワーでも開けないなんて」
ルフェイが難しい顔をして悩む仕草を見せる。結界の穴は子供が辛うじて通れる程の大きさであり、これ以上大きく広げられず手詰まりになってしまう。

その時、ルフェイの懐から音楽が鳴り出す。携帯電話の着信音。因みに着信音は『おっぱいドラゴンの歌』であった。
「はい！　もしもし！」
ルフェイが電話に出る。魔法使いの格好をしているルフェイに携帯電話はアンバランスであったが、二条城周辺は結界の影響で魔術による通信や念話が妨害されており、手軽な連絡手段が携帯電話しかないので仕方が無いという事情がある。
「ヴァーリ様！　ナイスタイミングです！」
電話を掛けて来たのがヴァーリと知り、セラフォルーは自然と緊張を帯びる。何かルフェイに指示を出す為に掛けてきたのか、それとも別の目的か。育ての親であるアザゼルとは違ってセラフォルーにはヴァーリの思考が読めない。
「実はですね――」
そんなセラフォルーの心情などお構いなしにルフェイは現状をヴァーリに報告する。
少しの間ルフェイとヴァーリが言葉を交わす。その後にルフェイは携帯電話を操作し出した。
『聞こえるかな？　セラフォルー・レヴィアタン？　ヴァーリ・ルシファーだ』
外部スピーカーに切り替えられ、ヴァーリの声がセラフォルーへ届く。
「聞こえているわ☆　何か手助けでもしれくれるのかしら？」

『ああ、その通りだ。俺も曹操にはちょっかいを掛けられているからな』
あっさりと認め、ヴァーリはルフェイに声を掛ける。
『少し体を借りるぞ、ルフェイ』
「はい！　どうぞー！」
すると、ルフェイの背部から翼の様に白い光が噴き出す。
『Ｄｉｖｉｄｅ！』
セラフォルーは我が目と耳を疑う。『白龍皇の光翼』が発動する半減の音声が電話越しに発せられたかと思えば、ゴグマゴグが結界の穴を広げ始めたのだ。
『どうだ？』
「はい！　バッチリです！」
ルフェイの背から白い光翼が消える。
「嘘……」
セラフォルーは唖然とさせられる。ゴグマゴグが結界を広げ出したということは、結界の力が弱まっているということ。つまり半減の効果が発揮されているということである。
他者を媒体とした遠距離での白龍皇の力の行使。前例のない白龍皇の能力にセラフォルーは驚き、そして当代の白龍皇であるヴァーリの才に戦慄する。

この能力は一誠の『赤龍帝からの贈り物』を参考にしてヴァーリが編み出したものである。実践してみせた様に半減の能力を他者を中継点として使用させるというシンプルなもの。その気になれば地球の反対側に居ようとも発動出来る。

ただし、能力を使用するには発動者となるヴァーリと中継点となる人物が互いに了承していることが条件である。また、半減した力は媒体者にもヴァーリにも吸収されないというデメリットもある。

そもそもヴァーリ自身が前線で戦うことを好むバトルマニアであるため、今回の様な手を離せない状況でない限りは使用しないという使用者の性格と能力が噛み合っていないという問題があった。

尤も、それはヴァーリとその仲間たちしか知らないことであり、見ている者にとってはヴァーリの底知れない戦いの才をまざまざと見せつけられていることとなる。

「じゃあ、行ってきまーす！」

ルフェイが開いた穴から結界の中へ入ろうとする。

「えっ！　ちょっと待って！　その子、置いていってもいいの？」

結界の穴にはどう見てもゴグマゴグは通れない。

「大丈夫です！　まだアーくんが居ますから！　レヴィアタン様！　ゴッくんを任せますね！　ゴッくん！　レヴィアタン様の言う事をちゃんと聞いてね？」

ルフェイが頼むとゴグマゴグは了承したかの様に短く鳴く。
「それではまた後で！」
今度は呼び止めることは出来ず、ルフェイは穴を通って結界の向こう側へ行ってしまった。
「アーくんって誰なの……？」
アーくんという謎の名とゴグマゴグを残して行ってしまったルフェイにセラフォルーは途方に暮れた様に小さく零す。
ゴグマゴグは結界の穴から手を離す。穴は修復され、これでルフェイは戻って来られなくなった。
「えーっと……」
セラフォルーがゴグマゴグを見上げる。ゴグマゴグはセラフォルーを見下ろしていた。ゴグマゴグの無機質な双眼はセラフォルーの指示を待っている。
取り敢えず周囲のアンチモンスターの排除をお願いしようかと思った時、トラブルの方がこちらへやって来る。
「おうおう。喧しいと思って来てみたら何だあのデカブツは？」
「よーく見ればお前に何となく似ているかぁー？　なあ？　キンキ？　もしかしてお前の親戚かぁ？　それとも隠し子でもいたかぁ？　ひゃはははは」

「下ラン冗談ダ。笑エン」
騒ぎを聞きつけて三鬼がこの場所へ来てしまった。ゴグマゴグを見つけた途端にこれでもかと敵意を放つ。ゴグマゴグの方も三鬼の危険な気配と敵意を察知して臨戦態勢に入ろうとしていた。
何とも予想通りの展開にセラフォルーは溜息を吐きたい気分になる。だが、それをはいている暇はない。
取り敢えず誤解を解く為に一触即発になっている三鬼とゴグマゴグに声を掛けるのであった。

◇

気を抜くと眠りに落ちてしまいそうな眠気と戦いながら、一誠は内なるドライグに呼び掛ける。
（なあ！　やっぱりこれって魔人の気配だよな！　やばいんじゃないか！）
マタドールなどの魔人特有の気配を知っている一誠は、睡魔を誘う旋律と共に感じた気配を強く警戒する。
『いや……魔人の気配ではあるが……何か違う……？』

ドライグの方は彼の知る魔人とは異なるものを感覚的に捉えていた。
（違うって……何が違うんだ？）
『言葉で説明するのは難しい……何というべきか……強調し過ぎているのが逆にわざとらしく感じる……』
（どういう意味……？）
ドライグの感覚は出現した魔人の気配が神滅具によって生み出されたものだというのをきちんと感じていた。
強調し過ぎるというのは、生み出された魔人デイビットにはレオナルドが内に持つ魔人へのイメージが強く反映されており、そのせいでデイビットの放つ気配の人工的な部分を敏感に感じ取っていた。一誠の方は経験が浅いのでその細かな所までは分からない。
その魔人擬きが誰かと戦っているのは間違いないが、問題は誰と戦っているのかである。すぐに助けに行くべきなのかもしれないが、一誠は何となくだが魔人擬きが誰と戦っているのか予想が付いていた。
（やっぱ、戦っているのは間薙なのかな……）
『恐らくな』
一誠の勘にドライグも同意する。今のメンバーの中で最も魔人と遭遇し易いのはシ

ンである。

（助けに行くべきなのかもしれないけど、間薙なら……）

死ぬような目に遭っても死なない、というイメージが一誠の中にあった。一種の信頼であるがそれで割り切ろうとすると後ろ髪を引かれる。

『――今は自分の戦いに集中しろ、相棒。お前が死んだら元も子もないんだぞ?』

一方でドライグは簡単に割り切る。冷たさを感じさせる選択だが、下手に迷えば今度は一誠の命が危うくなる。それだけではない。彼が守っている九重の命もまた危険に晒すこととなる。そして、ドライグが言うように一誠が死ねばシンの助っ人にも行けなくなる。

迷う前に目の前の問題を解決するのが何よりも優先される。感情的になることは決して悪い事では無いが、問題なのはそれで順序を誤る事である。

一誠はサングラスの男の撃破を最優先とし、意識をサングラスの男との戦いに向けるが、すぐにその決意が鈍ることとなる。

何せ相手は禁手を維持しているが壁に寄りかかって眠っているという状態。一誠に支えてもらって寝ている九重と変わらない無防備っぷりである。

『どうした相棒?』

（いや……寝ている奴を殴りつけるってのは何か気が乗らないっていうか……）

敵とはいえサングラスの男も真正面から正々堂々と挑んで来ている。それを自分が寝込みを襲うのは卑怯ではないかと思ってしまった。そのせいで『赤龍帝の鎧』の力も少し弱まる。一誠の想いがすぐに反映される。

『――女の服を？いたり、縮めたり、胸の声を聞くのが得意技の男の台詞には思えんな』

けっ、と言わんばかりにドライグが不満を垂らす。そんな真っ当な考えを持っているのに俺の力であんな真っ当じゃないことを思い付くな、と言外に表していた。

（それは……はい。ごめんなさい）

一誠もドライグのこの文句には素直に謝るしかない。

言い訳になるかもしれないが、そういう技を編み出した時は色々と滾っていた状態で平常時とは異なる精神状態であった。

色々な戦いや人物との出会いで一誠も精神的に成長し落ち着き出したのでこういった考えもする様になったのだ――時折、前よりも暴走することもあるが。

そんな小さな揉め事をしていたら不意に音が消えた。それと同時にサングラスの男と九重が目を覚ます。

九重は目覚めて暫く何が起こったのか分からずに辺りを見回しており、自分が一誠に引っ付いていたことを認識すると羞恥で顔を真っ赤にし、慌てて離れる。サングラスの

男の方は目覚めると同時に弾かれた様に壁から離れて構えをとっていた。
「……何かしたのか？」
薄々分かっていたことだが、睡魔を誘うあの音はサングラスの男も知らないものであった。仲間から知らされていなかったのか、もしくは魔人擬きを呼び出した人物が誰にも報せていなかったかは分からないが。
「何もしてねぇよ」
一誠の返答にサングラスの男もあの眠りは一誠の仕業ではないと察する。そうなると別の疑問が湧いて来る。
「なら何故攻撃してこなかった？　あんなチャンスを見す見す逃すなんて……」
「そういうやり方が好きじゃないだけだ」
サングラスの男の責める様な言い方に対し、一誠もぶっきらぼうに答えた。すると、サングラスの男は苛立ち、舌打ちをする。
「ちっ……そういうのが腹立たしいんだよ！　赤龍帝ぇぇぇ！」
嫉妬に満ちた叫びを上げてサングラスの男が突っ込んで来る。
一誠はすぐに九重を離れさせるが、その間にサングラスの男は距離を詰め終わっており、指先から生やした爪で一誠の顔面を切り裂こうとする。
爪が届く前にその手首を掴み、反射的にカウンターでサングラスの男の胴体に拳を打

ち込んでしまう。

「あっ」

気付いた時には遅く、一誠の拳はサングラスの男の胴体に沈み込み、一誠の足元の影から出てきてしまう。

引き抜こうとするがサングラスの男が一誠の拳を踏み付け、それを妨害する。

一誠の脳裏に影と影との繋がり断ったら腕が切断されるのではないか、という最悪の予測が流れる。

「ぐっ！」

しかし、その予測に反してサングラスの男が行ったのは頭突きという原始的な攻撃方法であった。

数度繰り返される頭突き。打ち込まれる度に兜内の一誠の頭が固い内部に打ち付けられ、痛みと共にクラクラと目眩もしてくる。

しかもそれだけではない。一誠の兜に影が掛かる度に薄くではあるが装甲が転移によって削られていく。ミリ単位の削りではあるが時間を掛ければいずれは兜の下に届く。

攻撃を受けながらもサングラスの男はやはり影の転移を解除しない。推測となるが影内部に何か取り込んでいる状態だと転移を解除出来ないのかもしれない。

だが、それが分かったとしても一誠は厄介な状態に追い込まれていた。
苦し紛れに膝蹴りを出してみたが、サングラスの男の脇腹に触れると今度は沈まずに通り抜けてしまい、膝に残るのは空を切る感触のみ。『闇夜の獣皮』のせいで物理攻撃が無効化されてしまい抜け出せなくなっていた。
このまま動きを止められたままだと燃費のことを考えて先に一誠の禁手が解除される。もしくは兜を完全に削り取られて内部をごっそりと抉られるのが先かもしれない。だが、その二つよりも仲間を助けに行かねばならない一誠にとってはここで何も出来ずにいる方が問題であった。
どうにかして拘束を解かねばと思っていた時――
「えいっー！」
九重が幼い掛け声と共に何かを放る。
「うっ！」
九重が小さな火球。狐火と呼ばれるそれがサングラスの男の顔に命中する。通常時ならば片手で握り潰せる程度の攻撃なのだが、この時のサングラスの男は一誠を拘束することに全力と全意識を集中していた為に防ぐことも避けることも出来なかった。
更に九重の放った火球はサングラスの男の眼付近に当たっており、眼球を炙る様な熱が急に来たことで驚いてしまい、そのせいで一誠への力と意識が緩まってしまう。

この好機を逃さず、一誠は背部の噴射孔から魔力を逆向きに噴射させて腕と膝を一気に引き抜いてサングラスの男から距離をとる。
「やってくれたな……！　狐の姫様……！」
顔を押さえていたサングラスの男は指の隙間越しに九重を睨み付ける。上手く行けば一誠を大きく消耗出来たかもしれないチャンスを戦力外と見做していた九重に邪魔をされたことにより、怒りが二重となる。
今まで生きてきた中で初めて浴びせられる憤怒の眼差しに九重は震え、豊かな尾も萎びた様に垂れ下がる。
サングラスの男は怒りのまま九重に掌を向ける。
「おい！　止めろ！」
一誠が止めようとするが間に合わず、九重の体は下から伸びてきた影によって巻き付けられた。
「大人しくしていれば何もしなかったものを……少々痛い目を見てもらおうか！」
「止せっ！」
サングラスの男が掌を閉じる。九重を螺旋状に拘束していた影が引き絞られ、九重の姿が見えなくなる。
「なっ！」

守ると約束した少女が影に呑み込まれ、一誠は言葉を失ってしまう。
「九重！」
「呼んだかのう？」
『なっ！』
普通に返事が返ってきたことに一誠だけでなくサングラスの男も驚く。その直後に一誠の背に圧し掛かってくる重み。影に閉じ込められた筈の九重がいつの間にか一誠の背に乗っていた。
「馬鹿な……！　どうやって脱出を……！」
すると、螺旋状になっている影の隙間から何が飛び出して来る。ひらひらと空中を左右に揺れながら地面に落ちたもの、それは木の葉であった。
「木の葉……そういうことか……！」
木の葉で九重が脱出した方法を見抜くサングラスの男。九重は一誠の背に乗ったまま数枚の木の葉を扇状に広げる。
「狐の変化を甘く見過ぎだのう。それだからまんまと化かされるのじゃ」
甘く見られていたことの意趣返しの様に九重は下瞼を引き下げ、舌を見せる。
九重を捕らえたつもりが、木の葉に化けた九重に引っ掛かりそれを絞めつけただけのサングラスの男。見事に騙された彼は悔しさからか一誠達にまで聞こえる程の音で食

い縛った歯を鳴らす。
「やるなぁ、九重」
「ふふん！　私とて足手纏いになるつもりで付いて来た訳じゃないぞ！」
九重を守るつもりであったが変化によって助けられた一誠に褒められ、嬉しそうに尻尾を振る九重。
「流石は狐の――」
ふと一誠の中で今まで得た情報が過って行く。
『闇夜の獣皮』は物理攻撃が無効。飛び道具も影から影に転送されて打ち返される。
ただし、影に対象物を取り込んでいる間は転送を中断出来ない。
九重の変化は精度が高く、サングラスの男も化かされる程。
この情報が結び付いていき、一誠の脳裏で一つの作戦を生み出す。
「――九重。ちょっと頼みたいことがある」
「何じゃ？」
「あのな――うおっと！」
「のわっ！」
地面から突き出てきた影の槍を間一髪で避ける一誠。すると、移動先を読んで今度は頭上から剣山の様に無数の棘となった影が落下してくる。

「ちぃ！　避けるなっ！」
理不尽なこと叫びながらサングラスの男は拒馬を思わせる影の杭を斜め上に向けて伸ばし、一誠を貫こうとする。
「よっと！」
素早く後方へ飛び、壁を足場にして向きを変えようとした一誠だが――
「赤龍帝！　後ろっ！」
「うん？　いいいっ！」
先読みしていたサングラスの男によって足場にしようとしていた壁には隙間無く影の針が生えている。
足から着地すれば足が穴だらけになると思い、咄嗟に魔力を噴射して壁から離れる。
ついでにサングラスの男へ小さな魔力の塊を投げ放つ。
「こんなもの！」
影の鎧を通して一誠に返すつもりであったが、魔力の塊の弾道はサングラスの男の手前で落ち、地面に命中して小規模の爆発を起こす。
巻き上がった粉塵でサングラスの男は一誠たちの姿を見失う。
僅かに出来たこの隙に一誠は九重に作戦の為にやって欲しいことを伝える。
「手短に言うぞ」

「うむ！」
数秒間で九重の役目を伝える一誠。練習など無いぶっつけ本番だがやるしかない。九重がやるべき事をやってくれたのなら一誠がそれに上手く合わせればいい。
漂う粉塵を掻き分けて振るわれる影の腕。通過した箇所から粉塵が抉られる様に消える。影間の転送を応用して素早く粉塵を消し去っていく。
粉塵を全て転移し終えるとサングラスの男は改めて一誠たちを睨み付けるが、それを待ち構えていたのは九重であった。
「はっ！」
九重の突き出した掌から火球が放たれる。サングラスの男は芸の無い攻撃に呆れを通り越して怒りを覚えながらその火球を手で消し飛ばそうとする。
（待て……）
サングラスの男は唐突に違和感を覚えた。攻撃の準備をする猶予があったにもかかわらず攻撃を仕掛けてきたのが九重というのにおかしさを覚える。攻撃をするのならば一誠の方が相応しい。
九重の攻撃に便乗して何かを仕掛けて来るのでは。そう考えた時、サングラスの男の中の怒りは冷め、油断と共に消える。
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏ

ｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』

小さな狐火が通路幅ギリギリまで広がる巨大な火球へと変化。更に煌々と輝く炎によって周囲の影が消え去り転移も出来なくなってしまう。

「やはり……！」

譲渡で強化された火球の熱量に若干の焦りを覚えるサングラスの男であったが、彼の予想を超えるものではなかった。

サングラスの男は放たれた狐火に対して臆せずに両手を突き出す。狐火の中へ呑まれるサングラスの男の両手。

「っあ！」

狐火の熱が影の鎧を通過して両手を焼くが、サングラスの男はそれでも両手を引き抜かない。すると、狐火が縮小していく。呑まれた筈の両手が逆に狐火を吸い込んでいく。

だが、吸い込んでも放出する為の出口になる影はサングラスの男の周りには無い。どうするのかと思いきや、サングラスの男の背後数メートル先で突然炎が噴き上がった。

出火した場所から地面を這って伸びる黒い線。それはサングラスの男の足元に繋がっていた。

サングラスの男は強化された狐火を見た時、密かに足元から影を伸ばして狐火の輝きの影響を受けていない影に繋げておいた。そして、その影のラインを通じて取り込んだ狐火を転移させたのだ。

（これで終わりじゃないよなぁ？）

狐火が消え、次に見えたのはドラゴンショットの構えをしている一誠であった。既に発射段階であり、撃ち出すのを中断出来ない状態にある。

恐らくは狐火を明かりにして周囲の影を消し去り、転移先を全て消している間にドラゴンショットを撃ち込むという算段だったのであろう。だが、サングラスの男が強化された狐火に手こずるであろうという読みを外してしまい、周囲の影が戻った状態でドラゴンショットを発射されることとなった。

一誠の表情は兜で見えないが、すぐ傍にいる九重が焦った表情をしている。

ドラゴンショットが最悪の状況の中で撃たれる。サングラスの男は『闇夜の獣皮』に触れた瞬間に即座に一誠の近くの影から撃ち返すことにし、待つことすら煩わしく思い自ら手を差し伸べる。

「自滅しろ！　赤龍帝！」

ドラゴンショットが影へ吸い込まれ、一誠の真横にあった影から撃ち返される。

巨大な魔力の塊が、一誠たちを呑み込み――ポン、という音を立てて消えた。

「――は？」
サングラスの男は目の前で起こったことに思考が追い付かない。
何故ドラゴンショットが消えたのか。何故ドラゴンショットに？み込まれ筈の一誠たちが無傷なのか。
何故ドラゴンショットを放った筈の一誠が、まだドラゴンショットを撃っていない状態にあるのか。
疑問が理解に至る前に一誠はドラゴンショットを真横の影に放つ。ドラゴンショットが影の中へ吸い込まれていく。
「こっちが出口ならまだ入口に繋がってるんだろ？」
「あ……ああ……！」
サングラスの男は全てを理解してしまった。
巨大な狐火を放ったのは影を消す為ではなく一誠たちの姿を隠す為。
消えたドラゴンショットとドラゴンショットを撃った筈なのに撃っていなかったのは全て九重の変化によるものであり、姿を隠したのはこの為であったこと。
ドラゴンショットを影に取り込んでしまった為、解除が不可能になっていること。
全ては回避も防御も不能な一撃を与える為。
「加減はしてやるよ」

「赤龍帝ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
入口となっている『闇夜の獣皮』から赤い光が漏れ出たかと思えば、内部でドラゴンショットは破裂した衝撃で影の鎧が数倍に膨張する。
「うぐはっ！」
影の鎧ですら納まり切らなかった衝撃がサングラスの男の全身を貫き、サングラスの男は影の鎧を解除しながら倒れ伏した。
「やり過ぎたか……？」
かなり威力を押さえておいたが、倒れているサングラスの男の右腕で左脚は歪に変形しており完全に骨折している。見た目では分からない部分も折れているか或いは罅が入っていると思われる。
これで終わりかと思いきや、サングラスの男は手足が折れている状態でも立ち上があろうとしていた。
「……強い。……やっぱり強いな天龍は。……禁手になっても、全く手が届かない……！」
足掻くサングラスの男に一誠は忠告する。
「……もう止めろ。それ以上動くとあんた死ぬぞ！」
「死ぬ……？　はっ！」

一誠の忠告を聞いてもサングラスの男は鼻で笑い、今度は折れた手足を使っても立ち上がろうとする。

その痛みが容易に想像でき一誠は顔を顰め、九重は蒼褪めていた。

「死ぬのなら……構わない……！　曹操の下で死ねるなら……本望だ……！」

心の底から本気で覚悟しているのが一誠には分かった。洗脳などで操られているのではなくサングラスの男は自分の意志で曹操に従っている。

「何でそこまで尽す？」

「……神器を持って生まれた人間は大抵碌な人生を送らない。一生目覚めなければそれで終わりだが、中には運悪く神器が覚醒する者も居る……」

自嘲するサングラスの男。一誠もアーシアのことを思い出す。彼女もまた神器によって人の世を追われ、今も稀少な神器使いということで狙われてもいる。

「今でも忘れられねーよ……あの目が……嫌悪と恐怖に満ちた排他の目だ……何処の誰かも分からない奴に向けられるのなら我慢は出来た……でも、それが血を分けた身内だったら――」

――その瞬間からこの世界に誰も味方が居ないって思い知らされるんだよ

サングラスの男が味わった孤独。そんな彼に手を差し伸べてくれたのは曹操であった。

「曹操は、生まれてきたことを否定された俺を才能を持つ貴重な存在と肯定してくれた……。居場所の無い俺に居場所を与えてくれた……。何一つ未来なんか無い俺に英雄に成れるという道を示してくれた……。俺に全てを与えくれたんだから……俺も全てを懸けて返すのはおかしいことか……？」

「おかしくは無い……おかしくは無いが……」

全く同情出来ないと言えば嘘になる。しかし、だからといってサングラスの男や曹操たちのやっていることは肯定出来ない。彼らのせいで傷付く者達がいる。泣いている九重が居るのだ。

「どんな理由があるにせよ俺はあんた達を殴り飛ばさなきゃならない。あんた達のせいで泣く奴がいる」

「……へっ。いつも泣いてばっかりだから、人を泣かせる方法しか知らないんでね……」

皮肉と卑屈を混ぜた言葉を吐きながらサングラスの男はフラフラと左右に揺れながらも立った。

「お前らだって……例外じゃないんだぜ？　悪魔……」

「何がだよ？」

「悪魔の存在が認知されれば……きっとお前たちも迫害される……自分を簡単に殺せると知れば仲良く出来るか……？」

一誠はそんな事は無いと反論はしなかった。鈍い一誠でもその可能性は容易く想像が出来る。

「その時は……悪魔らしく行くだけだ」

明確な答えではなく曖昧な一誠の返答にサングラスの男は血唾を吐き捨てる。

「なら……その悪魔らしさを俺に見せてみろぉぉぉぉ！」

最後の力を振り絞って殴り掛かって来るサングラスの男。

『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

瞬間的に掛けられる多重倍化。サングラスの男の腕が伸び切る前に一誠が前に歩を進め、音すら置き去りにする拳をサングラスの男の顔面に突き放つ。

（速い。避けられない。無理。死ぬ。終わる。駄目だ。死ぬ死ぬ死ぬ死死死死死）

拳圧でサングラスがへし折れ、クリアになった視界一杯に映り込む真っ赤な拳に男は死を幻視した。

顔面中央にめり込んだ衝撃で左眼球は破裂し、右眼球は外へ飛び出す。歯、鼻骨や頬骨など骨は一瞬で粉々になって混ざり合い、それらの破片は掠めた脳の一部と共に後頭部から飛び出し、残されたのは顔の代わりに空洞が作られた男の――

「っあ……ああ……」

顔に触れる直前、寸止めされた一誠の拳に男は呻く。

全ては幻。死に直面した男が視たあったかもしれない未来。

男は下半身から力が抜けて崩れ落ち、辛うじて動かすことが出来た腕で顔から地面に着くのを免れる。男は地面に転がっている割れたサングラスを見つめる様な俯いた姿勢になっていた。

男から雫が垂れ、赤い点を地面に付けていく。寸止めされてもそれなりの威力はあったのか男は鼻血を垂らしていた。

男の様子を見て、一誠は九重を連れてその隣を過ぎて行く。九重は何か言いたげな表情をしていたが、大人しく一誠に従っていた。

去っていく一誠に男は叫ぼうとする。待て、情けを掛けるつもりか、俺はまだ戦える、と。しかし、舌が動かない。声を発することが出来ない。

ならばと立とうとするが足に力も入らず立つことすら出来ずにいた。男は羞恥で真っ赤になる。腰が抜けていたのだ。

(何で……！　何でだよ……！)

男は何度も足を叩き、痛みで起こそうとするがどうしても力は抜けたままで動かない。神器を発動させ、体を起こそうとするが神器すらも発動出来なかった。

（覚悟していた筈だ！　とっくに！　あの言葉に嘘は無い！　なのに！　なのに！）
死んだと思い体の機能が全て停止。そのすぐ後に生きていることを知ってすぐに機能が回復するかと思いきや体は上手く動かない。パソコンを強制終了させた後再起動をすれば不具合が発生する様に男の体もおかしなことになっていた。
こうなってしまったのは、それもこれも死を幻視してしまった瞬間に男の心が、掲げた意思に反して折れてしまったからだ。
あまりの情けなさに涙が出て来る。
「せ、せせ、赤龍！　赤龍、帝！」
男は蹲ったまま何とか声を出すことが出来た。
「こ、このまま、じゃ、おおお、終わらない！　終わらない！」
呂律の回らない舌で必死に喋る。
「かかか、必ず！　必ずお前を……！　おおお、俺を！　俺達人間ををを、舐めるなよっ！　あああ、悪魔……！」
震える声で言っているせいで傍から聞けば滑稽に思われるかもしれない。だが、男の叫びに一誠は一旦足を止める。
「その時は……狙う相手は俺だけにしておけよ？」
敵に向けるにはあまりに優しい口調。男は実感した。もう自分は何の脅威でもなく

ただ地べたで丸まっていることしか出来ない負け犬であることに。

「こ、コンラだっ！　覚えて、おけ……！　いつか、いつか、お前を倒す、人間の名だ……！」

「……じゃあな」

止めていた足を先に進める。後ろを警戒する必要も無かった。コンラはもうこの戦いに参戦出来ない。それどころか当分まともに戦えないだろう。

もしも、コンラが全てに迫害されていた時の、自分をこの世で不要と思っていた時の精神だったのなら一誠の寸止めにもここまで恐れることは無かっただろう。今の恐怖はコンラにとって無意識に生にしがみついた結果であった。

その生の基となっているのは曹操の言葉。曹操によって肯定され、希望を抱いてしまったことでコンラは自覚すらしていない生への渇望も持ってしまった。

曹操が言う様に英雄になりたい。誰からも必要とされる存在になりたい。曹操が高みに昇る姿を見たい等々、意識していない欲求がコンラを死から遠ざける。

「うう……ううう……あああああああっ！」

去っていく一誠の背を見ることも出来ずコンラは赤子の様に無く。惨めで無様と分かっていても泣かずにはいられなかった。

九重はコンラの泣き叫ぶ声を聞き、複雑そうな表情になる。英雄派の連中には強い怒

りを覚えているが、それでもこんな声を聞いて喜ぶ気持ちにはなれない。
（これで良かった……のか？）
一誠は自分の出した決断に胸を張って正しかったとは言い辛かった。直前まで殴り飛ばすつもりであったが、コンラの言葉がフラッシュバックし気付けば寸止めになっていた。
『それは俺にも分からんさ』
一誠の疑問にドライグは肯定も否定もしない。
『一年後には間違ったと思うかもしれない。十年後にはやっぱり正しかったと思うかもしれない。時間が経てば答えが変わって来ることもある』
一誠の判断の正否が分かるには今はまだ早い。
『まあ、百年後には嫌でも分かる。――すぐだな』
結局のところはコンラの寿命が尽きるまで分かることでは無い。人間の百年は途方も無いが悪魔の百年はそう遠くない。
（つくづく悪魔だよなぁ、俺は）
その言葉に二つの意味を込め、一誠は内心で呟きつつこの戦いを終わらせに向かう。

◇

木場の背中から突き出すグラムの剣先。その光景にゼノヴィアは声を上げそうになるが、木場の表情に気付いてすぐに口を噤む。
木場は冷や汗を流しながらもその表情に苦痛の色は一切無い。何故なら脇腹に刺さったグラムを木場は紙一重で回避していたのだ。
グラムが貫いているのは身を捩った時に出来た制服の隙間である。反応が遅れたが、それを持ち前の速度で補ったこと、そして、ジークフリートが慣れていない背面への突きだったこともあって避けることが出来た。
「へえ」
当然のことながら貫いたジークフリートも手応えで躱されたことは分かっていた。ジークフリートはその場で体を半回転させ、その勢いで木場の胴体を斬り付け様としたが、ジークフリートの次なる動きを予測していた木場は聖魔剣をグラムに叩き付け、反動を利用して刃が届く前に制服を裂きながらジークフリートから離れる。
「木場！　大丈夫か！」
「大丈夫――とは言い切れないかな？」
エクス・デュランダルをジークフリートに突き付けながらゼノヴィアが木場の近くに立ち、具合を確かめると木場は苦笑しながら隠すことなく正直に言う。

チラリとゼノヴィアが制服の裂けた箇所を見る。無駄な肉をそぎ落とし、引き締まる木場の脇腹には十センチぐらいの切創が出来ていた。そこから血が垂れ、制服やズボンを汚していく。

見た目は深い傷ではないが、魔剣によって付けられた傷なので楽観視は出来ない。すぐにアーシアの神器かフェニックスの涙で治療すべきだが、それには立ち塞がるジークフリートをどうにかしなければならない。

ゼノヴィアはさりげなくイリナの様子を窺う。

イリナは『擬態の聖剣』を駆使して変幻自在に戦っているが、ジャンヌの方も『聖剣創造』を巧みに扱い、創り出した聖剣を組んで人形を生み出すというこちらも変幻自在に戦い、イリナを押している。

イリナとジャンヌの戦いは当分終わりそうにない。寧ろ、こちらが援護する必要があるくらいであった。

「――それにしても」

木場は負傷を気にする様子も無くジークフリートに微笑を向ける。

「服の下に何か着込んでいるのかい？　聖魔剣でも斬れないなんて少しショックだったよ」

気軽に話し始める木場。相手に探りを入れているというよりも傷の具合を確認する

為の時間稼ぎだとゼノヴィアには思えた。
「その台詞を聞いたらバルパーは喜ぶかな？」
木場の微笑が一瞬硬直する。バルパーが一枚噛んでいたのは予想外のこと。だが、ジークフリートは会話に乗ってきた。
「へえ……バルパーが……」
「ああ。何せこれを造ったのはバルパーだから」
ジークフリートは上着の首元を緩め、捲って鎖骨から胸部までを外気に晒す。晒されたジークフリートの肌に木場とゼノヴィアは瞠目する。人の皮膚ではなく黒い鱗の様な形状していた。
「何かと便利だよ、これは」
黒い鱗が変化し、人の皮膚の色へと戻っていく。
答えが返って来るとは思っていなかったが、聞かずにはいられない。
「それは……何だい？」
「これかい？　人工神器――みたいなものさ」
ジークフリートはあっさりとその正体を喋る。話しても何の不利にもならないと判断している様子。だが、いきなりそんな情報を聞かされた木場たちは驚くしかない。人工神器の研究を最も進めているのは『神の子を見張る者』でありアザゼルである。聖魔

剣に耐えうる防御力を持つ人工神器となると脅威でしかない。
「まあ、驚くだろうね。いきなりそんなことを言われたら。でも、安心してくれ。まだ着られるのは僕ぐらいだから」
「それは……嬉しい情報だね」
　量産はされていない様子。だが、台詞に反して木場は全く嬉しくは無い。防御に特化した人工神器をジークフリートが扱う。それこそ英雄譚に出て来る不死身のジークフリートの様だ。
「今回はこれの実験も兼ねているんだ。どれくらいの機能を発揮するかのね。この人工神器……正式な名前は無いけどバルパーはこう読んでたっけ……フリードと」
　その名に何度目か分からない驚愕を覚える。
「フリードって……」
「何を馬鹿なことを……」
　自分たちの知る名を出され、木場たちは動揺する。ジークフリートが言っていることが本当なら、目の前の男は何らかの方法で加工したフリードを着ているということを意味する。
　考えるだけでも冒涜的な行いであった。
「おや？　顔色が悪くなったね？　聞いていた話だとフリードと君たちは険悪な関係だ

と思っていたが？」

わざとらしくジークフリートが尋ねる。新たな情報が開示されているのに木場たちは精神的に追い詰められている様な気がしてきた。自分たちが途方も無い悪意と狂気に触れている気持ちになる。ジークフリートはこうなることを知って木場の会話に応じたに違いない。

「ここまで教えたからには、もう一つ教えてあげようかなぁ？　木場祐斗、君が一番知りたかったことをね」

ジークフリートはグラムを鞘に収め、素手となる。すると、右掌が輝きを帯びる。それは転送の為の魔術であった。

転送されたのは一本の直剣であった。それを一目見た時、木場とゼノヴィアはジークフリートが何を取り出したのか理解が遅れてしまった。それ程までに飾り気が一切無く、無個性で特徴の無い、一分で模写出来るぐらいのシンプル過ぎる直剣。

「一人の男が焦がれ、絶望し、狂った先に得た憎悪と狂愛の答え。とくと御照覧あれ」

これこそがバルパーが生涯を掛けて研究してきたエクスカリバーに対する愛憎の形。

その名は――

『折れる聖剣（エクスカリバー・ブレイカブル）』

不明、仮名

　折れる聖剣。ジークフリートは確かに新たなエクスカリバーをそう呼んだ。現存するエクスカリバーは、破片となった本物のエクスカリバーを錬金術師達が再構築したことで出来上がったもの。欠片も無くエクスカリバーと名乗るのは本来ならば烏滸がましい行為である。
　しかし、バルパーはエクスカリバーに対して異常な執着と昏い情熱を秘め、最悪なことにエクスカリバーの研究に関しては他を抜きん出ている知識と技術がある。そんな歪んだプライドを持つバルパーがただの紛い物にエクスカリバーの名を冠するとは思えない。
　見れば見るほどに特徴の無い形をしている『折れる聖剣』だが、本物由来の素材が無くとも本物に近い力を有している可能性は大いに有る。
（オンギョウキさんも気になることを言っていたしね）
　オンギョウキは戦いの中で『折れる聖剣』を文字通りへし折ったと言った。しかし、何故か折れても元の形に戻っていたと言う。実際に木場達の前に折れていない形で出されている。

何かしらの絡繰があるのは既に分かっていた。
未知のエクスカリバーに警戒するのは分かりきったことだが、もう一つの問題がある。ジークフリートが纏っている人工神器――フリードの事である。
聖魔剣と木場の力でも貫くことが出来なかった防御力。そうなると自然に選択肢は決まって来る。
木場は横目でゼノヴィアの方を見た。ゼノヴィアは木場の視線に気付いて微かに頷く。
この場に於いて最強の火力を持つのはゼノヴィアのエクス・デュランダルである。エクス・デュランダルが見せた一撃からジークフリートの人工神器を破る可能性が見えた。ゼノヴィアも木場と同じ事を考えている。
実際にエクス・デュランダルの初撃の際にジークフリートは防御では無く回避を選択している。人工神器の防御力を過信せずエクス・デュランダルの威力を警戒している。それにあれもまだエクス・デュランダルの全力では無い。
問題はどうやってエクス・デュランダルをジークフリートに叩き込むかである。ジークフリートは余裕を見せているが油断は全くしていない。如何なる攻撃も冷静に対処している。
全力になればどうしても動作が大きくなり大振りになる。そんな隙だらけの攻撃が

簡単に入る様な相手では無い。木場とゼノヴィアが上手く連携してジークフリートの隙をこじ開ける方法しか考えられなかった。
　木場は摺り足でゆっくりと前に出る。先ずは自分が動いてジークフリートのエクスカリバーの分析、あわよくば注意を惹き付けるつもりである。
「ふふ。そんなに恐い顔をしなくてもいい。エクスカリバーなんて大層な名前を付けているけど、こんなものは鈍以下さ」
『折れる聖剣』を酷評するジークフリート。少なくともジークフリート自体に『折れる聖剣』への愛着などは皆無の様子。
「大層じゃないエクスカリバーなんてあるのかな？」
「名付けたのはバルパーさ。――全く、良い趣味をしているよ、あのお爺さんは」
　バルパーのネーミングセンスに呆れた様子で皮肉る。
「なら、その大した事の無いエクスカリバーの切れ味、見せてもらうよ？」
　木場は踏み込み、瞬時に最高速度による詰めをみせる。一方でジークフリートはその動きが見えており、その場から動かないまま接近と同時に放たれる聖魔剣の斬撃に合わせ、自らも『折れる聖剣』を繰り出す。
　両者の間に起こる剣戟の音。木場は聖魔剣と『折れる聖剣』が衝突した時、聖剣特有の聖なる気が閃光の様に発せられるのを感じ、目を細める。同時に『折れる聖剣』と打

ち合った聖魔剣から強い衝撃を感じた。それはかつてゼノヴィアが愛用していた『破壊の聖剣』に似た衝撃であった。

（少なくとも破壊力は本物並みか！）

手に来る痺れから木場はそう分析する。ジークフリートは低く評価していたが、実際に受けた木場は名前負けとは思わなかった。

だが、その一撃を受けても聖魔剣に破損は見られない。まだ打ち込めると思っていた木場の目に信じられない光景が飛び込んで来る。

「えっ？」

戦闘中とは思えないぐらいに間の抜けた声が出てしまった。しかし、それも仕方のないことかもしれない。これからという時にジークフリートの持つ『折れる聖剣』は文字通り鍔から上が折れて無くなっていた。

（一回打ち合っただけで？　文字通りに折れる？　折れた剣身は何処に？　いや、もしかしたら剣身だけが再生を――）

想像していたのと違った光景に木場の思考は混乱しつつも状況を分析しようとしていたが、残された鍔や柄に罅が入って粉々に砕け散ったせいで、その混乱は加速してしまう。

あれだけ堂々と出したのにたった一回で完全に壊れてしまった『折れる聖剣』。バル

パーは一体何のつもりでこんなエクスカリバーを、と木場が思った時――

「木場！」

――ゼノヴィアの鋭い声と右半身に殺気、寒気を覚えたのはほぼ同時であった。

木場の体は己の感じた感覚に従い右方向へ聖魔剣を翳す。そこに打ち込まれる斬撃。それは先程と全く同じもの。

「それは！」

ジークフリートの左手には先程壊れた筈の『折れる聖剣』が握られている。

（二本目だって！）

完全破壊された直後に出された二本目の『折れる聖剣』。精神にも不意打ちを受けた気分の木場であったが、迫りくるエクスカリバーの恐怖が皮肉にも乱れる思考を一本に正し、木場は咄嗟に聖魔剣を振り抜いた。

破砕の金属音。ジークフリートの二本目の『折れる聖剣』がまたも砕け散るが、今度は木場の聖魔剣も無事では済まなかった。剣身に蜘蛛の巣の様な罅が入っており、次に攻撃を受ければ確実に折れてしまう状態になっている。

咄嗟に振ったせいで十分な力が聖魔剣に乗っていなかったのが理由の一つだが、もう一つ理由があった。木場の動体視力だからこそ見えたことだが、恐ろしいことにジークフリートは『折れる聖剣』を最初に打ち込んだ箇所に二撃目を入れていた。切っ先が消

える程の速度で振るわれた聖魔剣に合わせる正確無比な斬撃。
踏み止まっての打ち合いは危険と判断し、木場は即座に後退をして間合いをとる。半壊状態の聖魔剣を消し、新たな聖魔剣を創造する。
「やっぱり良い反応をするね、木場裕斗。そうこなければこれを出した甲斐が無い」
朗らかに笑うジークフリートの右手には三本目の『折れる聖剣』が既に握られていた。これも全く同じ形状であり、気色悪さを感じる程に差異が無い。
「大凡だけど、そのエクスカリバーの特色について分かったよ」
「本当か？　木場」
ゼノヴィアの方は次から次に出て来ては壊れていくエクスカリバーに困惑していたので、思わず聞いてしまう。
「へえ……君の推察、拝聴させてもらおうかな」
ジークフリートの方は木場の推察に興味を示していた。
「そのエクスカリバー――正直、エクスカリバーと呼称していいのか分からないけど――最初から使い捨てを前提としているね。使用回数は不明だけど、恐らく一度か二度全力で振るえば自壊するぐらいに脆い。だからこそその脆さを数で補っている」
木場の目が鋭くなる。エクスカリバーの為に我が身や仲間を犠牲にされ、心の底からエクスカリバーを憎悪していた時とは考えられない義憤が今の木場の裡に湧いてくる。

「バルパーによって量産されたエクスカリバー……それが今の君が持っている『折れる聖剣』だね？」
「正解。賢い相手は色々と説明が省けて楽だね」
隠すことなく肯定するジークフリート。
「エクスカリバーの量産だと……？」
ゼノヴィアは信じられない気持ちであった。長い年月の中でエクスカリバーの名を冠する聖剣はたった七本しか生み出されていない。それが絶対だと思われていたが、その領域に易々と踏み込んだばかりでなく、神秘性と名誉が地に落ちる行為がされているなど簡単に信じることなど出来ない。
「一本につき一振り。それがこのエクスカリバーの限界。――本当に救い難いよね？あのお爺さんは」
バルパーの執念にはジークフリートも理解出来ない範疇であった。
ただひたすらに求めてきた老人。求めても、求めても答えてくれない相手に対してのバルパーの答えは、その高みから引き摺り下ろすというもの。
地に堕ちれば地べたを這いずることしか出来ない自分も手にすることが出来ると本気で思っている様子であった。
バルパーの生涯を賭した研究と『禍の団』の資金等を合わせて創り出されたエクスカ

リバー。それはお世辞にも成功とは呼べない失敗作であった。
本物のエクスカリバーと同じ威力を出すことは出来るが、たった数度使用すると耐久力を超えて自壊してしまう。
これには他の研究者たちも悩み、どうすれば耐久力を伸ばせるのか模索したが、バルパーはここで逆転の発想をする。
『数回で壊れるならば、いっその事もっと脆くすればいい』
この考えによって生み出されのが『折れる聖剣』である。ジークフリートが言う様に一回で壊れてしまう程に脆いが、その代わりにコストを極限まで下げることができ、大量生産を可能とした。
そして、最初から一回で壊れるのが分かっているのであれば、いつ壊れるのかという警戒も必要無くなり予め次のエクスカリバーを用意すればいい、という考え方も出来る。尤も、そんなエクスカリバーを扱える技量を持つ者は『禍の団』に殆ど居らず、唯一ジークフリートの技量のみが基準を満たしており、結果的に彼しか扱うことが出来ず、彼専用の剣となってしまった。
ジークフリートによる『折れる聖剣』についての簡単な説明を聞き、木場とゼノヴィアは唖然とした表情になっていた。そこまでするのか、と顔に書いてある。
（まあ、この話で一番面白いのは、そこまでエクスカリバーを劣化させておいても本人は

全く使用出来ないってことなんだけどね）

極限まで劣化させたエクスカリバーですらバルパーには一切反応しない。表面上は平静だったらしいが、ジークフリートはその内面を想像すると憐みよりも滑稽に思えてしまう。

「個人的な感想としては悪くはないと思うけど……まあ、使い手のことなんて全く考えていないよね。これと同様に」

ジークフリートは自分の体を指差す。

「……彼のことかい？」

「そう。どうやって造ったか聞きたいかい？」

「いや、結構だよ」

「気分が悪くなると分かっていて聞く奴はいないぞ」

説明の拒否にジークフリートは笑う。聞かなくて正解だと彼も内心思っていた。何せ聞かされたジークフリートもフリードに多少同情した程である。

今纏っている人工神器フリードの製造方法など大したものではない。回収されたフリードの細胞を増やし、磨り潰し、薄く伸ばして衣状にしただけである。

恐るべきはこの状態でもまだ生体反応があり、適応していない者が纏うと捕食するという現象が起こる、とジークフリートは纏った後にバルパーから説明された。ついでに

材料がフリードであると知ったのもこの時である。
流石に説明された時は、反射的にバルパーを斬りそうになった
何の因果かジークフリートのみが人工神器フリードを御することが出来る。人工神器フリードは攻撃が迫ると防衛本能により柔剛の性質を持つ細胞変化を起こし、鉄壁の防御を発揮する。
ジークフリートは今でも嫌悪感を覚えるが、役に立つのは事実なので割り切って使用していた。
露骨に嫌悪感を露わにしている二人にフリードを纏った時、自分もあんな風な表情をしていたのだろうと苦笑しつつ、左手にも『折れる聖剣』を召喚する。
「――そういうことなら同じスタイルで行かせてもらうよ」
気を取り直した木場は追加の聖魔剣を創造し、二刀流になる。
「確かに。あの説明を聞いていたらその方が良いな」
ゼノヴィアはエクス・デュランダルの一部に触れる。するとその部分が変形して柄が現われ、それを引き抜くとエクス・デュランダルから取り外され、柄の部分から剣身が伸びて行く。
エクス・デュランダルの仕掛けにジークフリートは少し目を輝かせる。
図らずとも二刀流同士の対決となる。木場とゼノヴィアは両手に持つ剣を構えて、

ジークフリートの出方を窺う。
「ふふっ」
警戒する木場たちを嘲笑うかの様にジークフリートは堂々と歩いて間合いを詰めて来る。無謀としか言えない行為であるが、剣の天才であるジークフリートがやればそれだけでプレッシャーを生み出す。
二十歩詰めれば間合いに入る程の距離をジークフリートは五歩、十歩と大胆に歩いて行く。
ジークフリートが近づく度に木場とゼノヴィアの集中力が増していく。今更、重圧で剣が鈍る程繊細ではなく、伊達に修羅場を潜っていない。ジークフリートへの緊張感が寧ろ木場達の感覚を鋭敏にさせていく。
ジークフリートが間合いまであと一歩の所まで来た。ここまで来ると木場たちの集中力は最大まで研ぎ澄まされる。
刹那、ジークフリートが一気に踏み込み、木場へ初撃を打ち込む。
「っ！」
先手を取られてしまった木場は聖魔剣で初撃を受けざるを得なかった。ジークフリートは木場を攻撃する最中にゼノヴィアへもエクスカリバーを振るう。視線は木場に固定されているにも関わらず、正確な斬撃によりゼノヴィアの出鼻を挫く。

ジークフリートは大胆な様でいて極めて冷静に二人を観察していた。敢えて緊張を煽る動きを見せた後、二人の緊張感と集中力が最大に高まる寸前というほんの僅かな瞬間を狙って先制したのだ。

それにより折角高まっていた集中力が霧散され、二人は後手に回ってしまった。

二人に一撃ずつ打ち込んだことで『折れる聖剣』はジークフリートの説明通りに砕ける。だが、ジークフリートは空の手で腕を振るうとその間に次が補填され、攻撃へと繋がる。

ジークフリートの二撃目も木場たちは防がざるを得なかった。木場へは胴体への横薙ぎ、ゼノヴィアには上段からの振り下ろしと、相手の動きに対して斬撃の動きを最も効果的なものへ変えている。

「くっ！」

「ちぃっ！」

一振りすれば武器が壊れるというのに、ジークフリートの攻撃には隙が無い。補填されるエクスカリバーを高速で振り、三撃目、四撃目を繰り出す。

二刀流の対決だが、ジークフリートは個々を片手で相手している。しかも、相手に攻撃する暇を与えない。ジークフリートの速さが二人を上回っていることを認めるしかない。そして、ジークフリートは右腕と左腕で全く異なる斬撃を繰り出すことが出来

る。腕に脳みそが埋まっている様な器用さであった。
剣士としてのプライドを大いに傷付けられながらも木場とゼノヴィアはジークフリートの僅かな隙を見つけようと防御しながら動きを探る。少しでも隙を見つけたらそこへ即座に攻撃をねじ込む。
ジークフリートの攻撃は気付けば十を超えていた。木場とゼノヴィア、それぞれに十以上の攻撃をしているので『折れる聖剣』は既に二十本以上は壊れている。
壊しているジークフリートに消費を抑える様子は無い。少なくともこの戦いで尽きることが無いぐらい『折れる聖剣』は量産されているのが分かる。
一見全ての攻撃を防いでいる木場達であったが、その体の至る箇所には細かな切り傷が生じていた。これらは全て『折れる聖剣』の破片が散った際に出来たもの。破片は木場達の皮膚を容易に裂き、聖なる気という残留した毒により木場達の体を蝕み、消耗させる。
破片や聖なる気が小さな事から致命傷には程遠いが、時間が経てば木場達が不利になるのは目に見えていた。
木場は防戦の中でゼノヴィアにアイコンタクトを送る。それは次の攻撃の時に反撃を試みるというもの。木場とゼノヴィアの目もジークフリートの動きに慣れてきた。そろそろ一方的な場面を打開する必要がある。

ジークフリートが剣を振る直前、木場とゼノヴィアもまた剣を震わす。
「っと」
二刀流対決になってからの初めての反撃。ジークフリートの斬撃が最大の力を発揮する前に打ち込まれ、脆弱性しかないジークフリートのエクスカリバーは木場とゼノヴィアの一撃で呆気無く折れる。
二人はジークフリートがエクスカリバーの補填する前にもう一方の剣で追撃を行う。新たなエクスカリバーが召喚されるよりも木場達の刃が届く方が速い。
ジークフリートの体は人工神器によって守られているので、頭部を狙う。
「ふっ」
ジークフリートは一笑し、残った柄の部分を握り砕く。そして、その破片を二人の顔に向けて撒く。
折れたとしても破片には僅かな聖なる気が残っている。ましてや悪魔である彼らの目などに入れば失明は免れない。
だが、それに臆する事なく二人は踏み込んだ。木場は頬に、ゼノヴィアは額に小さな切り傷が出来る。
この動きにジークフリートは初めて目を見開く。聖なる気を恐れるのは悪魔としての本能であり、易々と克服出来るものではない。だというのに二人が前進するまで一切

の躊躇いが無かった。
ジークフリートに二人の刃が届く――刹那、白光が煌めき、二人は同時に剣ごと弾かれる。
今度は二人が目を見開く番であった。今までとは段違いの衝撃が両手に伝わって来る。
「困ったなぁ。使うつもりは無かったのに」
ジークフリートの眼前でパラパラと散っていく『折れる聖剣』の破片。だが、ジークフリートの左右の手は無手。
木場達の斬撃を弾いたのは、ジークフリートの背中から生える三本目の腕が持つエクスカリバーであった。
砂でも零すかの様に『折れる聖剣』の残骸を握った手から落としていくその腕は、銀色の鱗の様な装甲で包まれた人外のもの。その形に木場達は既視感を覚える。
ジークフリートが生やした第三の腕は、一誠の『赤龍帝の籠手』に似ていた。
「まさか、『龍の手』！」
「その通りさ。まあ、ありふれた神器の一つだから当然知っているだろうね。でも、僕の場合はちょいと特別でね。亜種に属するんだ。こうやってドラゴンの手が生えるんだからね」

本来ならば籠手の形をしている神器の『龍の手』を振る。木場達を揶揄っている様にしか映らない。
「君達が思っている以上に頑張るからついつい出しちゃったよ」
「格好を付けている所悪いけど、つまり君の目が節穴だった、ということじゃないかな？」
「意外と言うな、木場」
上から物を言うジークフリートに木場は薄っすら笑みを浮かべながら辛辣な台詞を吐く。隣人の悪い一面にゼノヴィアは少し感心していた。
「ふふふ。そう虐めないでくれ。何せ同年代で僕相手にここまで粘った相手は居ないんだ。そりゃあ、見る目も曇る訳さ」
大して堪えた様子も無いジークフリートは自然な動作で両手にエクスカリバーを握る。しかし、今回はそれだけではない。『龍の手』にもエクスカリバーが握られ、二刀流から三刀流となる。
「君達が頑張れば頑張る程、僕もやる気が出て来るってもんさ。さあ、もっと見せてくれ、君達の力を。僕はまだ全部を見せていないよ？　魔剣の全力も禁手もっ！」
ジークフリートは容赦無い現実を突き付けながらも、木場達に期待する笑みを浮かべた。

◇

巨大な爆発の後、地面に深いクレーターが出来上がる。その爆心地で無傷の状態で立っているヘラクレスは、クレーター中心で埋まっているそれを両手で掴んで持ち上げる。

「驚いたな。原形が残ってやがる」

『巨人の悪戯』の能力を付加させたパワーボムをケルベロスへとお見舞いしたが、ケルベロスの体毛の何箇所が焦げているだけで、見た目には大きなダメージが見受けられない。

「グルル……ヤカマシイダケダッタナ」

それどころか減らず口まで叩いてみせた。物理攻撃と炎熱に対して強いケルベロスだからこそ生身で耐え切ってのけたのだ。

「生意気な奴め……」

ヘラクレスは額に青筋を浮かび上がらせ、ケルベロスの体をもう一度持ち上げる。一度でダメなら二度、三度同じ事をすればいい、という考えであった。

「お前の体で地面を耕してやるよっ！」

ヘラクレスがケルベロスごと跳び上がろうとした瞬間、横から飛んで来た複合された魔法がヘラクレスの脇腹に直撃。
「ぐおっ」
油断していたことと比較的筋肉の厚みが薄い箇所に当たったことも相まってケルベロスを掴んでいた手が緩む。
「グルルッ！」
ケルベロスは身を捩り、ヘラクレスの顔面に尾を叩き付けた。
骨の様に節ばったケルベロスの尾がヘラクレスの顔、それも両目付近へと当たる。
「っう！」
流石に眼球まで鍛えることは出来なったヘラクレスは、両目を強く押し込まれる不快感と痛みに気を取られ、ケルベロスを掴む力が更に緩む。
「アオーン！」
前肢による横殴りがヘラクレスの頬へめり込む。視界が遮られているヘラクレスは完璧に入ったその一撃によって殴り飛ばされた。
ヘラクレスの巨体が地面を跳ねていく中で持ち上げられていたケルベロスは地面に着地。首の調子を確かめる様に首を左右に振る。
「ごほっ、ごほっ、大丈夫ですか？」

咳き込みながらロスヴァイセがケルベロスの傍に来る。ヘラクレスの爆発込みのラリアットを受けていたが、鎧の胸元の一部が破損している程度でそれ以外に目立った外傷は無い。
「ごほっ、念の為に体に防御用の魔術を施していたんです。ごほっ、げほっ！　ロキ様との戦いで他の魔術も勉強した方が良いと思ったので……こほっ！　それでもかなり効きました」
喉にダメージを負い、やや擦れた声で説明するロスヴァイセ。
『戦車』の特性に合わせ、防御力を上昇させる魔術を仕込んでいたのが結果として吉と出た。だが、鉄壁に近いロスヴァイセの防御力を突き破るヘラクレスの力と神器は侮れない。ケルベロスとロスヴァイセは自身の特性によって上手く切り抜けられたが、普通なら形すら残っていなくてもおかしくなかった。
「はっ！　気が合わねぇのは分かっていたが、相性まで最悪かよ！」
魔術で撃たれて赤くなった脇腹を撫でるヘラクレス。口だけ笑みを浮かべているが、額には太い血管が何本も浮き上がっており、内にある激情が今にも外に飛び出しそうであった。
「とことん敵だなぁ！　俺達はよぉ！」
喜んでいるのか怒っているのか分からない程の大声を出すヘラクレス。全身の筋肉

が膨張していく。
「直撃したのにあんなに元気ですか……少しショックですね」
攻撃魔法にはそれなりの自信があったロスヴァイセのプライドが少し傷付く。
「グルル……一回デダメナラ十回ヤレバイイ。最後ニ効ケバオマエノ勝チダ」
「――もしかして、慰めてくれてます？」
「アンナ奴ニ負ケタクナイカラナ」
その為なら慰めの言葉の一つぐらい吐く、とあくまで利己的であると主張するケルベロス。とはいえ、ロスヴァイセとしてはそんなケルベロスの存在は心強く感じられた。
「良い子なんですね。ケルベロス君は」
ケルベロスの鬣を撫でながらつい言ってしまう。
「グルル……ソウイウノハ後ニシロ――クルゾッ！」
ヘラクレスが両拳を地面に打ち込む。神器が発動し、打ち込まれた地面が爆発を起こす。ヘラクレスはその爆発を利用し、前方へ飛び出してきた。
巨体が砲弾の如く凄まじい速度で迫って来る。触れればヘラクレスの神器によって爆破される。
ケルベロスは炎を吐き、ロスヴァイセは魔法陣を展開して北欧魔術を発動。炎と魔法の合わせ技がヘラクレスを迎え撃つ

言葉交わさずとも息の合った攻撃を見せる二人だったが、ヘラクレスの方もただ単純に突っ込むだけではない。
炎と魔法の合成技がヘラクレスに命中しようとした瞬間、爆発が起こった。
熱や衝撃波によって顔を背けてしまう二人。急いでヘラクレスの方を見たが、そこに何も無い。
自分の攻撃で跡形も無く消え去った――などという楽観的な考えを抱くことはしなかった。戦い、肌で感じているからこそヘラクレスがこんな簡単に倒れないことを理解している。
その時、ケルベロスの鼻が動く。漂う微かなニオイでヘラクレスの位置を察知する。
「上ダッ！」
ケルベロスが叫び、ロスヴァイセも頭上を見上げる。巨体が豆粒に見える程の高度にヘラクレスは居た。ケルベロス達の技を爆破で防ぎながら、爆風を利用してそこまで一気に跳び上がったのだ。
「一気にぶっ飛ばさせてもらうぜ！　おりゃあああああああ！　禁手化ぅぅぅ！」
生半可な攻撃では無駄に時間が掛かると思ったのか、ヘラクレスが仕留めにかかる。
禁手化を合図にヘラクレスの全身が光り輝き、手、足、背中から突起の様なものが形成される。

「これが俺の禁手ッ！『超人による悪意の波動』だぁぁぁぁぁ！」
ケルベロスとロスヴァイセは実体化したヘラクレスの神器を見ても反応は薄かった。もし、ここに一誠やシンなどの現代に関する知識を有する者が居れば、ヘラクレスの生やした突起を見てある現代兵器を連想していただろう。しかし、残念なことにこの場に於いては、現代兵器の知識が極めて薄い者しか居なかった。
その時、ケルベロスとロスヴァイセは悪寒を覚える。何かに見られている様な感覚であった。
その感覚が正しかったことを直後に思い知ることとなる。
「消し飛べやぁぁぁぁぁ！」
ヘラクレスの咆哮を号令とし、全身の突起が撃ち出される。火を噴きながら飛んで行くそれはまごうことなきミサイルそのもの。数え切れない程のミサイルが一発一発独自に軌道を変えて正確にケルベロスとロスヴァイセへ飛んで行く。
二人が見られていると思った感覚は、照準を付けられたことを意味していた。
「くっ！」
ロスヴァイセが悪魔の羽を広げて飛び立つ。ミサイルを少しでも多く自分に引き付けるのが目的である。その意図が伝わったのかケルベロスもまた地面を駆け出していた。ミサイルから逃れつつ、狙いを外させる為に初速から全力を出す。

天と地に分かれてミサイルから逃れようとするケルベロス達。
「はっ！　二手に分かれて俺の禁手を分散させようってか！　中々仲間思いじゃねぇか！　だが、無駄だぜぇぇぇ！」
ヘラクロスの体から追加で発射されるミサイル。ロスヴァイセの視点からは視界一杯に映り込み、ケルベロスの視点からは雨の様に空を埋め尽くす。
「このままでは……！」
ロスヴァイセはミサイルの進路方向に魔法陣を無数に展開。ある程度の数を減らそうと考えたが、ミサイルは魔法陣の展開を感知し、旋回もしくは魔法陣同士の隙間へ入り込んで通過するという正確な動きをする。
「そんなっ！」
「一発一発が俺の神器なんだぜぇ！　見てりゃあ欠伸が出る程簡単に避けられるんだよおおおお！」
ロスヴァイセの行動を失策と笑う。
「逝けやぁぁぁぁ！」
ミサイルの弾速が増す。ヘラクレスが説明した様にミサイルの形をしているがこれは神器である。使い手によって威力も性能も変化させられる。
最早、避けることは叶わないと覚悟したロスヴァイセは、限られた時間の間に自身に

何重もの防御用の魔術を施す。自分の魔術と『戦車』の防御力を信じて耐える道を選んだ。

同時に地面でもケルベロスが広範囲に炎を吐き出していたが、何発か誘爆させた程度で大した成果を得られなかった。こちらも覚悟を決めた様子で、可能な限り身を縮まらせ防御に徹する。

天と地で巨大な爆発が起こり、爆風が周囲のものを吹き飛ばす。上空に生じた爆煙を突き破ってロスヴァイセが地面に落下していくが、意識はまだあり上手く着地をする。

銀髪は煤で汚れ、鎧も数箇所欠損している。腕や額から流血しており、かなりのダメージを負っていた。

一方で地面の煙が晴れると大きなクレーターの中心でケルベロスが横たわっていた体を起こしている。こちらもミサイルの衝撃によってすぐには動けない程のダメージを与えられていた。

「ははっー！　耐えるか！　だが、まだまだぁぁぁ！」

禁手による攻撃後のヘラクレスは不思議なことに滞空したまま落下する気配が無い。翼や羽は無いのに高度を維持し続けている。よく見ると背面にあるミサイルから炎が噴き出しており、その出力によって高度を維持している。

ヘラクレスは滞空の為の炎を噴射させて空中を駆け抜ける。通り過ぎた後に大量の

ミサイルを残して。
「危ないっ！」
「グルルル……！」
まだ動けない状態のケルベロスにロスヴァイセは駆け寄り、その周囲に魔法陣の結界を張り巡らせる。
ばら撒かれたミサイルが結界に命中。爆発が起こり、結界に亀裂が生じる。改めて学び直した防御魔法であったがヘラクレスの神器の前には付け焼き刃に等しくロスヴァイセは悔しさから唇を強く噛む。
結界がミサイルを耐えられるのは後一回か二回程度。ミサイルに対抗する為に全方位に張り巡らせたせいで脱出するのも難しい。仮に逃げ道があってもそもそも雨の様に降って来るミサイルを避けることの方が遥かに難易度が高い。
「すみません、ケルベロス君……もっと、もっと……私が強ければ……！」
自分の無力さを心の底から悔しがるロスヴァイセ。ケルベロスが何かを言おうとするが、それよりもヘラクレスの大声が響き渡る。
「呆気ねぇなぁ！　犬ッコロ！　ケルベロスって名の割にはこの程度かぁ？　頭一つのせいで実力も半人前以下なんて笑えねぇぞ！」
罵倒と共にミサイルが降り注ぐ。ケルベロス達を守る結界はミサイルによって破壊

され、身を守る術を失った彼らは集中砲火に晒された。
紅蓮の爆炎が天高く伸びて行くのを見て、ヘラクレスは地面へ降りる。
「――あーあ。曹操のとこでも行くか」
戦いの最中は昂っていたが、終わってしまえば呆気の無い結末。戦いの熱もすぐに冷めてしまい、ヘラクレスは禁手を解いて曹操の許へ行こうとした――
グルル
爆炎の中から聞こえる唸り声。何度も聞いたせいで聞こえる幻聴――ではない。明確な殺気を感じ、ヘラクレスの背を粟立たせる。
「何だぁ？」
仕留め損ねたことに寧ろ笑みすら浮かべるヘラクレス。退屈が楽しみに反転する。
ヘラクレスの見ている前で爆炎が急速に小さくなっていく。鎮火しているのではなく、まるで時間を逆回しにされているか、吸い込まれているかの様な不自然な縮小であった。
「――おいおい。どういう仕組みだ？」
縮小する炎の根本に立つケルベロス。あれだけの爆炎は全てケルベロスの体へと吸収されていた。
彼に守られる様に覆い被さられていたロスヴァイセもヘラクレスの禁手を全て取り

込んだケルベロスに驚いている。

「ケルベロス君、貴方――」

そこから先の言葉をロスヴァイセは呑み込んでしまった。牙を?き、喉を唸らせ、目を血走らせて怒気と殺気を無差別にばら撒くケルベロス。膨張し過ぎた怒りに何か一言でも刺激を与えればたちまち爆発して矛先が向けられるのではないかと思えたからだ。

ケルベロスは自分のことを丸くなったと客観的に思っていた。冥界でシンともう一人に敗れた後、シンに拾われて仲魔となって。すると、シンだけでなく小さな仲魔も付いてきた。

少々喧しく、我儘の多い連中であったが、不思議と不快感を覚えなかった。幼い頃に同族から追い出され、孤独と孤高を共として生きてきたケルベロスにとってはそこは初めての群れと言えた。

そこで芽生えたのか、それとも生まれ持ったものかは分からないがケルベロスはピクシーらへの庇護と責任感を覚え、彼女らを自然と守ろうとしていた。言えばピクシー達に反発されるかもしれないが、シン達の仲魔の中でケルベロスは自分をサブリーダーの位置にあると思っていた。

このまま暮らしていけば自分はもっと大人しくなるのではと思っていたケルベロス

であったが、結局のところ自分は何も変わっていない。ヘラクレスの強さと禁句に触発され、無意識に縛っていた獣性と魔性が表に出て来る。そのことに解放感すら覚える。

ヘラクレスが侮辱した。殺す。殺意と行動が直結した思考。最早、それ以外のことはどうでも良くなってくる。間近にいるロスヴァイセのことすら頭の片隅へと追いやられた。

「グルルルッ！」

「今更やる気が出て来たのか？　はっ！　おせぇよ！　頭が少ねぇとそういうのも鈍くなるのか？」

ヘラクレスの方も分かっていて侮辱に侮辱を重ねる。退屈と思っていた戦いがようやく面白くなってきたのだ。ケルベロスが何処まで怒るのか遊び半分で挑発する。

「頭が足りないのが力が足らねぇって訳無いよなぁ？」

ケルベロスは頭の中でブチブチと何かが切れる音を聞く。

足りない、足りないと喧しい。そんなに見たいのならば見せてくれる。

ケルベロスの鬣から炎が噴き出す。先程、取り込んだ爆炎が変換され、ケルベロスの力と化していた。

「ケ、ケルベロス君！」

至近距離に居たロスヴァイセの身の安全を一切考慮しない熱量。しかし、動けば炎に

巻き込まれる可能性の方が高かったので、ロスヴァイセは仕方なく耐熱、耐炎の魔術を自分に掛け、じっとしているしかなかった。

噴き出した炎は渦巻き、形を変えていく。

炎は犬の頭部の形となり鬣を挟んで左右に一つずつあった。炎を操り、存在しない二頭を作り出す。

ケルベロスの名に相応しい三つ首となった彼は咆哮を上げる。当然ながら聞こえる声は一つ。模倣された頭からは咆哮は聞こえず、動きだけを見せる。

「ほぉ……」

ヘラクレスは驚きで目を丸くし、次に獰猛な笑みを浮かべる。退屈するのはまだ早過ぎると分かった故に。

◇

燃える右腕を見ながら、シンは淡々と考えていた。肉の焦げるニオイや熱さなど気にする素振りすらない。

（やっぱり音が関係しているだろうな）

デイビットが直前に奏でた音楽。それを聞いたシンは頭の中で火や炎、熱などを強制

的にイメージさせられた。そのすぐ後に自分の右腕が燃えていることに気付いたとなれば、関係があるのは間違いない。

現実的に考えるなら非常識だが、相手はヴァイオリン一挺で聞く者を強制的に眠らせる演奏をする魔人である。聞かせた者を燃やすぐらい容易く思えた。

シンは右腕を振り払う。その一振りで右腕の炎は消し飛んだ。派手に燃えていた割にはシンの右腕には焦げた跡は無く、火傷も殆ど無い。炎に対して強い耐性を持っているので極めて軽傷で済んだ。

デイビットの後方で待機しているレオナルドは、それを見て微かに眉間へ皺を寄せる。思っていたよりも効果が無いことを不思議に、そして残念という二つの思いを混ぜた表情であった。

レオナルドがデイビットの背中に視線を送る。それだけで指示は伝わり、デイビットはヴァイオリンを構え直す。

奏でられる新たな音。シンは音が力だというのならそれを妨害する方法を試してみることにし、大きく息を吸い込む。そして、吸った息を全て雄叫びとして吐き出す。

デイビットの繊細な音楽とは真逆の粗野そのもの。大気を殴りつける様な大声。シンが発する声の大きさに無表情のレオナルドも体をビクリと震わせ、目を見開く。

デイビットは演奏を淀ませることなく奏で続けるが、シンの大声の前にはその音楽も

殆ど掻き消されてしまう。
だが、いつまでも息が続く筈が無いので雄叫びを継続させながらシンはデイビットに接近する。
デイビットと跳ねる様な動きでシンから距離を取ろうとするが、それよりも先にシンは足裏に集中させていた魔力を爆発。靴が片方完全に駄目になる代わりに前へ一気に押し出され、後ろに跳ねたデイビットの眼前にまで移動。
速度を乗せた拳がデイビットの顔面に命中し、その白骨の顔面に罅を入れる。
予想以上の手応え。能力も強力で身体能力も決して低くは無いが、今まで戦って来た相手と比べると動きは一段、二段劣る。もしもマタドールなら、軽々と回避するか当たる前に攻撃をしてくるかのどちらかであろう。
拳を一気に振り抜くと、デイビットの体が独楽の様に回りながら殴り飛ばされていく
デイビットは空中で体勢を整え、きちんと着地した。だが、枯れ木が折れる様な音の後にデイビットの足元に何かが落ちる。細かく砕けた白い物体。先程のシンの一撃によって砕かれた頬骨や歯の一部であった。
顔の一部を失ったデイビット。？がれ落ちた箇所は、中を塗り潰した様な黒しか見えず、空洞にも何処へ繋がっているか分からない異空間にも見えた。
シンは足底が無くなり、ボロボロに裂けている靴の片方を脱ぎ捨てながら制服の胸元

を指先で摘まみ、引っ張る。制服の表面から薄い氷が剥がれ落ちた。
デイビットの音を掻き消す前に僅かに耳に届いていた。背筋が凍る様な冷たい旋律をたった一小節聞いてしまっただけで体に薄い氷が張り、体温を下げられた。そのせいで体の動きが鈍く感じてしまう。
デイビットの音を妨害する以外に自身の聴力を封じるというアイディアもあったが、鼓膜をどうにかする程度でデイビットの音を完封出来るとは思えず、無駄に傷を負うだけと実行しなかった。
レオナルドはデイビットを傷付けられたことに不愉快そうな表情をする――と言ってもせいぜい眉と目が若干吊り上がった程度の変化だが、レオナルドの表情が無表情過ぎた為にその差で分かる。
レオナルドは吐息と区別が付かないぐらいに小さな声で呟く。デイビットの砕けた箇所が光り、元通りの顔になっていた。神器から派生した存在なのでレオナルドが望めば幾らでも修復出来る様子。
シンの会心の一撃をあっさりとリセットされ、戦況がゼロへ戻される。尤も、シンは負傷しているので厳密にはシンの方がマイナスとなっていた。
デイビットを簡単に治せるのなら、シンの戦い方の選択は限られてくる。
一番手っ取り早いのは使い手であるレオナルドを戦闘不能状態にすることだが、そう

なってくるとデイビットの存在が邪魔になってくる。もう一つはデイビットを修復出来ないレベルまでダメージを負わすことだが、先程の光景を見るとかなり時間の掛かる持久戦となる。現状、あまり時間を掛けたく無いのがシンの本音である。

危険を承知で最短を取るか、なるべく危険を避けて時間が掛かるのを覚悟して戦うのか。

極めて短い時間で選ばなければならない。

自分の状態、手札を考慮した上でシンが選んだのは――

「あっ！　見つけました！」

――張り詰めた空気など知るかと言わんばかりの喜々とした少女の声。目だけ動かせば、安堵した表情のルフェイがそこに立っていた。

「間薙様！　遅ればせながら手伝いに来ました！」

シン達が二条城へ向かう途中で転送されてしまったせいで合流し損ねたヴァーリ側の協力者であるルフェイが、やっとのことで一人目を見つける。

「――ああ」

レオナルドとデイビットとの戦いに集中していたせいで、今の今までルフェイの存在を完全に忘れていたシンは、返事するのに少し間が開いてしまった。

「はい！　キチンと遅れを……あっ、レオナルド君。それと……どちら様でしょうか？」

　既知の間柄であるレオナルド。その近くに居るデイビットにルフェイは首を傾げる。形だけなら魔人と変わらないというのに臆せずその反応。大した心臓の持ち主と言える。

「もしかして、だいそうじょう様やマザーハーロット様のお仲間でしょうか？」

　未知なる魔人に対して当然の反応と言えるが、この場に二人が居たら紛い物と一緒にされたことに怒りを露わにしていただろう。

　レオナルドの方は不味いものを見られた、と言いたげな表情をしている。初めて見せる『魔獣創造』の新たな側面である。英雄派のメンバーならまだ良いが、ヴァーリのチームであるルフェイに見られたのは失策と言えた。

　知られたからには誰にも話せない様にすればいい。レオナルドの視線に不穏なものが混じる。その意志に反応し、デイビットはゆっくりとルフェイの方を見る。

「ダメですよー。人をそんな目で見ちゃ」

　レオナルド達の不穏な感情をすぐに感じ取ったルフェイ。恐れることなく普段通りの態度のままでレオナルドを窘める。当然ながらそんな言葉でレオナルドの考えは変わらない。

「仕方ないねー。そちらがその気なら、こちらもそれ相応の対応をしますよ？」

　ルフェイの前方、足元に大きな光の円が出現する。円の中では光が渦巻いており、そ

れが中央へと集まって行くと、渦の中心から轟音と共に巨人が召喚される。
巨人は上半身しか地面から出ておらず、そもそも下半身があるのかすら分からない。しかし、その状態でも見上げる程の巨体であった。
その姿は人のシルエットの様な至ってシンプルなデザインであり、体色は出現前の円と同じ淡い金色。よく見る胴体に白い線の模様が入っており、顔にあたる部分には丸で目と口が描かれていた。
巨人の体は半透明で向こう側が透けて見える。ゼリーの様な柔らかさを想像させる見た目をしていた。
巨人は右手に上半身以上の長さを持つ棍棒を握っており、その棍棒は中央部分が稲妻の様にギザギザとした変わった形状をしている。
『#$%$!　＋．@．〃．?!』
呼び出された巨人が言語らしき音で咆哮するが、シンやレオナルドの耳には意味不明な音としてしか入らない。
この巨人はルフェイの護衛として就かされた存在。ゴグマゴグと同じ次元の狭間にて見つけられた。
その正体は謎に包まれており、分かっているのはゴグマゴグのよりも更に古い存在であること。発見され、動くこと自体が奇跡であるが、中に込められた情報が古過ぎるせ

いで誰にも解析が出来ず、未だに正体は判明していない。
正体不明。謎が多過ぎて危険な存在ではあるが、その性能は放置しておくにはあまりに惜しい程高い。
ヴァーリは危険を承知でこの巨人をチームに加え、ルフェイもゴグマゴグ同様にそれを気に入っていた。
この巨人の正式な名前は誰も知らない。ゴグマゴグと幾つか共通する部分が見受けられることから、ゴグマゴグの原型機（アーキタイプ）ではないかと推測されている。
だから、ルフェイがそれに与えた仮の名は――
「いっけー！　アーくん！」
『＃＃＃＃＃＃！　＆・@・？・・・！』

白亜、幻夢

アーくんと呼ばれた巨人はその場で棍棒を振り上げる。だが、巨体が持ち上げる自分の身長以上の棍棒でもデイビットまでの距離はまだあった。

それでも構うことなく棍棒を振り下ろそうとした時、巨人の上半身がゴムの様に伸びて足りない間合いを補う。

棍棒が発生させる風圧で帽子の飾りが激しく揺さぶられながら横へ跳んで避けるが、直前まで伸びるとは思っていなかったのか、デイビットの回避は紙一重のものであり、空振りした巨人の棍棒が地面を叩き、大きく深い凹みが生じた際に飛び散った破片で衣服の一部にも裂けた箇所が出来る。

一撃目を回避された巨人は、上半身を波打たせると腰部分を軸に体を大きく回し、準備運動の様に一回転させた後、二回転目から急加速させて体を伸ばしながらしならせ、そのしなりを利用した横振りでデイビットを吹っ飛ばそうとする。

巨人の体は柔軟な素材で出来ているらしく巨体には不似合いな変幻自在な攻撃を行う。だから動く必要が無いのか、と思った時、巨人は地面を音も無く滑って移動し、二撃目も避けたデイビットとの距離を詰めて、棍棒を振り下ろしている。

「……」

いきなり出て来て詳細の全く分からない未知の巨人。ルフェイは随分と可愛らしい名で呼んでいたが、棍棒を振る度に隕石が落下した様な跡を作る様は愛らしさの欠片も無かった。

しかし、不思議なことにその巨人もまた何処かで見た様な既視感があった。度々シンの中で起こる現象。単なる勘違い――と安易な考えには至れない。

「間薙様。大丈夫ですか?」

立ち尽くしているシンを心配してルフェイが声を掛ける。目立つ外傷は右腕に焼けた痕ぐらいだが、魔人に酷似した相手と戦っているのを考慮すれば外傷だけに留まらず、精神に何らかの影響を及ぼされている可能性もルフェイは考えていた。

「――大丈夫だ」

ルフェイの声に反応し、問題ないことを告げる。

巨人がデイビットの相手をしているので一息吐く間が出来る。レオナルドもデイビットを創造した反動で他のアンチモンスターを創り出すことが出来ず、鋭い目付きで巨人とデイビットの戦いを傍観していた。

シンは時間がある内に戦いで得た情報をルフェイと共有する。

「あの魔人擬きは、あの子供が呼び出した。武器は音だ。ヴァイオリンの音を聞くと強

制的に眠らされるか、燃やされるか、凍らされる。まだ他に攻撃手段があるかもしれないが実際に受けたのはその三つだ」
　早口で情報を伝えるシン。ルフェイは一字一句聞き逃さない様に真剣な表情で聞いていた。
「分かりました！　流石、間薙様！　ヴァーリ様が言っていた通りとても冷静な方です！」
　尊敬の眼差しを向けて来るが逆に居心地の悪さを覚える。意識してやっている訳では無いので褒められてもいまいちピンと来ない。
「そうと分かれば」
　ルフェイは虚空から杖を取り出し、ボソボソと聞いた事の無い言語を呟く。ルフェイの足元に魔法陣が浮かび上がり、少し経って消えた。
　目に見えた変化は無かったが、周囲の空気が変わったのをシンは感じ取った。心なしか耳や肌に伝わる感覚が鈍くなった気がする。例えるなら見えない膜を何重にも重ねられた感覚に近い。
「何か周りに張ったのか？」
「はい！　音を媒体とした魔術や魔法に近いと推測したので白魔術、黒魔術を併用した防御魔法を使用しました！」

無邪気に答えてくれるルフェイ。ルフェイは若くして白魔術、黒魔術、北欧魔術、精霊魔術を使用することが出来る。幅広い知識と技術から分かる通り非常に優秀な魔法使いである。

「あと、ちょっと声に出せない禁術も少々」

どれだけの効果を発揮するのは不明だが、ルフェイの態度を見ているとそれなりの自信が伺える。

それだけ技術があるなら、と思い訊いた。

「この結界もどうにか出来ないか？」

『絶霧』によって外部と隔離された空間。この空間をどうにか出来れば、外部からの増援も期待できるが――

「……申し訳ございません。流石に神滅具の結界までは……」

ルフェイは表情を一転させ、申し訳なさそうに表情を曇らせた。

「分かった。試しに聞いてみただけだ。気にするな」

そんな都合の良い話は無いと分かっていたので失望もしない。

少し長話をし過ぎたと思いながらもシンの目は会話が始まった時からデイビットと巨人から一時も離さずにいた。

相変わらずデイビットは巨人の猛攻を避け続けている。その動きは密かにレオナル

ドから距離を取るものであり、一撃で広範囲を破壊することが出来る巨人の攻撃を警戒しての動きであった。

レオナルドも変わらない無表情のままデイビットの戦いと時折シン達の動きを見ている。

「援護を頼む」

「はい！　お任せください！」

いつまでも巨人一体に任せきりにする訳にもいかないので、シンも前に出る。

「そうだ！　なら……アーくん！　あの子達を出してー！」

ルフェイの指示に攻撃し続けていた巨人が動きを止めた。

『＊・＋・＃・Ｘ！』

独自言語を叫ぶと、左手を伸ばし、指先で地面を軽く触れていく。巨人が触れた地面に巨人が登場した時と同じ光の円が発生する。ただし、大きさは半分以下程度で、巨人が四回地面に触ったので四つの円が出来ていた。

四つの円から出て来るのは、見た目は巨人によく似た、だが大きさと色が異なる四体の分身、或いは子機と呼べるものであった。

大きさは成人男性と変わらない程度。体に巨人と同じく線で模様が施されており、顔も三角と丸で目と口を表していたが、分身は丸一つで単眼であった。

それぞれ黒、緑、赤、黄で配色されており、棍棒を装備しておらずに素手のみ。

『2・&・%・V！』

巨人の掛け声で四体の分身は横並びで巨人の前に整列する。

「クロくーん！　ミドちゃーん！　アカくーん！　キイちゃーん！　頑張ってねー！」

当然のことながら巨人と同じく分身の正式な名前は判明していないので、ルフェイは分身を見たままの名前を付けて呼んでいた。名前を呼ばれた分身達は、ルフェイの声に応じる様に両腕をひらひらと波打たせる。

「さあ、これで準備完了です！　間薙様はお好きなタイミングで」

何をするのかとシンが考えた直後、黒の分身は冷気を、緑の分身は旋風を、赤の分身は猛火を、黄の分身は雷を発生させた。

異なる属性、しかもどれもが強力な力を秘めたそれが一斉発射される。

四重の属性が自分へ襲い掛かってきたのを見て、デイビットは地を蹴って避ける。無表情ながらもその動きには必死さが垣間見える。或いは、創造主であるレオナルドがその攻撃に危険を感じ、その焦りがデイビットに反映されているのかもしれない。

一斉発射を回避されると、分身達は今度はタイミングをずらして攻撃する。黒の分身と緑の分身が同時に攻撃することで広範囲に冷気をばら撒く合体攻撃となり、デイビットですら瞬時に範囲外から逃れられない様にする。

局地的に発生した猛吹雪を受け、デイビットの体は凍結し始め、自慢のヴァイオリンからも氷柱が垂れ下がっている。

その状態からデイビットは激しくヴァイオリンを奏でる。烈火の如き激しさの演奏。吹雪が吹き荒れる中でもデイビットの演奏は掻き消されることなく響き渡る。

しかし、シンの耳にはその音楽は届かなかった。デイビットが激しい演奏をしているのは見て分かるが、シンに聞こえているのは凡そ音楽とは言えないチグハグな音の羅列。高音、低音などの音階の異なる音を無理矢理繋げた様な不協和音としか届かず、どんな演奏をしているのか分からない。

間違いなくルフェイが張った結界の影響である。シンからの情報を基にして作った結界はデイビットの音楽を無効化、妨害する。

それとは別に巨人達は音楽の影響を受けてはいなかった。元からそういう機能が備わっているのか、もしくはシンが推察していた音を聞いてそのイメージが浮かび上がると攻撃が発生するか。

もし後者なら、人語は理解しているが音楽等とは無縁そうな巨人達はデイビットにとって相性が悪い敵と言える。

演奏が無効化されているにもかかわらずデイビットは演奏をし続ける。デイビットがムキになっているというよりは、操り手であるレオナルドがその辺りの判断が未熟な

せいで中断させるタイミングを逃していた。
そこに降り注ぐ黄の分身の雷光。最速の攻撃であったが、デイビット自身が危険と判断したのか、雷撃が降る前にそれの発生を音で聞き分け、演奏を一旦中断して既に落雷地点から移動しており、雷撃を回避していた。
跳ねる様に避けたデイビットが着地する、と同時に体勢が大きく崩れる。
よく見るとデイビットが降りた地面が光を反射している。デイビットが避けることを想定して逃げる先に黒の分身が冷気を浴びせて地面を凍結させていたのだ。それによりデイビットは足を滑らせてしまう。
攻撃が次なる攻撃の布石、もしくは目晦ましになる。連携という強みが発揮される。
体勢を立て直そうとするデイビットだが、相手がそんな格好の隙を逃すことはしなかった。
『&・%・$・#!』
巨人が棍棒を突き出す。回避する隙を与えない一直線という最短距離を最速で突き抜ける。
体勢が戻ったデイビット。その眼前には棍棒が迫っていた。コンマ数秒後にはデイビットの体を粉砕するであろう。
デイビットはそのコンマ数秒間に可能性限り体を動かす。逃げる方向など考えず、即

座に動ける分の最小の力を足に溜め、凍結して不安定な地面ながらもそれを蹴り付ける。

横滑りで移動するデイビット。コンマ数秒間とは思えない判断と動きで直撃は避けた。

そうあくまで直撃のみ。巨人の棍棒の先端がデイビットの胸部辺りを綺麗に貫くと、鋭く波打つ部分が綺麗に傷口をズタズタに引き裂き、露出したあばら骨を引っ掛けてまとめて砕く。

デイビットの楽士服の左側は引き千切られ、その下の骨も砕かれてしまったことでデイビットの左胸部分はほぼ無くなっていた。

大きな代償を払ったが、デイビットはまだ動け、身を呈したことでヴァイオリンも無傷である。

デイビットは反撃の一曲を奏でようとした時、横から飛んで来た拳により顔の半分を吹き飛ばされた。

拳を振り抜いたシンが、頭部が半壊したデイビットを無感情な瞳で見ている。

シン自身大したことはしていない。少し離れた場所からデイビットと巨人達の戦いを俯瞰的に見て、デイビットが移動しそうな先を予測して先回りしていただけのこと。

巨人達がデイビットを追い詰めた結果、デイビット自らがシンの拳の餌食になりに

いったのだ。

（思った以上に簡単だったな）

一対一の時は苦戦したデイビットだが、ルフェイが巨人達を引き連れて現れただけで一変した。

巨人の荒々しい棍棒捌きと子機である分身達の属性攻撃がデイビットの動きを制限させ、ルフェイが掛けた魔法のおかげでデイビットの攻撃も気にする必要も無くなった。

数と質が完全に上回っており、苦戦を強いられる理由が無い。

普段、強敵と戦うと大怪我や欠損が付き纏うシンにはこの戦いには物足りなさすら感じる――ことは無かった。怪我や欠損など無い方が良いに決まっている。それを自発的に求める様になったら精神が危険な領域に片足を突っ込んでいることになる。

体をほぼ真横に傾かせているデイビット。ゆっくりと体を起こし始め、砕かれた箇所を修復し出すが直る速度が遅い。

デイビットに注意しながらシンはレオナルドの方を見る。無表情のレオナルドであったが、その顔は汗で濡れており顔色も良くない。かなり消耗している様に見える。

シンの考えは正しい。レオナルドはかつてないほどの消耗を経験していた。初めて試みた禁手による魔人の創造。慣れていない力を長時間使用した為にまだ幼いレオナ

ルドは虚脱感や睡魔に襲われていた。
これ以上戦闘を継続すればシン達を倒す前にレオナルドの方が倒れてしまう。
しかし、レオナルドは退かなかった。シンを放っておけば必ずマザーハーロットを害する存在となる。ここで仕留めなければならない。
ムキになるという子供らしい部分が前面に出てしまい、レオナルドは完全に引き際を見誤ってしまう。
デイビットに力を注ぎ込み、もう一度戦わせようとした時、レオナルドは足から力が抜けて行くのを感じた。
視界が傾き、ゆっくり斜めに倒れて行く。それが自分が倒れているのが原因だと分かった時にはレオナルドは頭が地面に叩き付けられる寸前であった。
目を瞑り次に来る衝撃に覚悟するレオナルド。だが、数秒待っても衝撃が来ない。
閉じていた目を開く。視界の先には目を鋭くしているシンと目と口を丸くして驚いているルフェイ。
レオナルドは足が地面から離れていることに気付く。何かが倒れる筈であったレオナルドを掴んでいた。
レオナルドが見上げると十四の白い眼がレオナルドを見下ろしている。
一つの体に七つの頭を持つ黄金の冠を被った赤い獣。マザーハーロットに従う赤い

獣の一頭がレオナルドの服を咥えて彼を支えていた。
レオナルドは赤い獣の登場に分かり易く驚く。それはシンとルフェイも同じであった。
突如空間の一部が歪んだかと思えばいきなり姿を現したのである。幸いというべきか主であるマザーハーロットは赤い獣に座していない。
赤い獣を見ていると心がざわめくと同時に右足に疼きを覚える。右膝から下を食われた時の感触が鮮明に蘇ってきた。
ルフェイの方もまさかマザーハーロットの遣いが来るとは思っておらず戸惑っている。巨人達に指示を出すべきかどうか躊躇っていた。
ヴァーリのチームとマザーハーロットは仲が良い訳では無いが、悪くも無い中庸な関係である。赤い獣の行動かルフェイの行動次第でその中庸が崩れるかもしれない。それを考慮すると今の彼女には多大な重圧が圧し掛かっていることになる。
シンとルフェイとの心境とは裏腹に赤い獣の方は二人に全く関心を向けておらず、瞳はレオナルドに向けられていた。
鳴き声一つ上げずにジッとレオナルドを凝視する赤い獣。
「……分かった」
それだけのことでレオナルドには伝わったのか彼の口から了承の言葉が出る。赤い

獣はレオナルドを丁寧に立たせると、ぬいぐるみの様にレオナルドは赤い獣の一頭に抱き着く。
赤い獣の周囲に再び歪みが発生。このまま退却するつもりらしい。
それを黙って見過ごすシンでは無かったが、相手の方もそれが分かっており先手を打つ。
「お願い」
レオナルドの短い言葉に沈黙していたデイビットが堰を切った様にヴァイオリンを演奏し出す。
奏でるのは異なる曲調を繋げた狂詩曲。しかし、ルフェイが張った結界でその音楽もシン達には届かない。
半壊している体で無理に演奏しているせいでデイビットの体が崩壊し出し、体の一部が塵のようになり霧散していく。
それでも演奏を止めないデイビット。その鬼気迫る動きにシンは嫌なものを感じ出す。
（止めさせるか……だが、止めさせるか……だが、止めさせるか……だが、止めさせるか……だが）
不意にシンは自分がおかしなことを考えていたことに気付く。同じ事を延々と繰り

返し思っているだけで全く先に進まない。そして、それをおかしいと思ってすらいなかった。

異常が起こっていることに気付いたシンはルフェイの方を見る。彼女もまた微睡んだ表情で棒立ちになっている。

ルフェイがこんな状態である為か巨人達の挙動もおかしい。体を左右に捻ったり、腕を上下させるという意味不明な行動をしている。

シンが知る由も無いが、巨人達は自律行動も可能だが、ルフェイの護衛と彼女の指示を最優先する設定になっている。ルフェイの思考が現在混乱しているせいで、その指示が巨人達にも伝わり、それを優先した結果挙動不審になっていた。

シンはルフェイの肩を軽く叩く。ルフェイは体を一瞬震わせ、驚いた表情で周囲を見回す。ルフェイが正気に戻ると巨人達の挙動も落ち着く。

レオナルドと赤い獣の方に目を向けるが、当然ながら姿は無かった。シン達の意識を混乱させている間にさっさと退却していた。

その混乱の原因となったデイビットであるが、デイビットは地面に横たわった状態でヴァイオリンを弾こうとしていた。

両足が消滅し、片腕も無い状態でレオナルドの指示を全うして離れた場所で転がるヴァイオリンに弦を伸ばす。

デイビットが満足に演奏出来る状態でない為、浅い混乱で済んだが、もし完全な状態であの演奏が行われたらどうなるか。

ルフェイもそのことが分かっているのかシュンとした表情になっている。

「申し訳ございません……間薙様。あの方の力を見誤っていました。多重に張った結界を突破してくるなんて……」

「気にするな。これだけ助けられておいて文句を言う資格なんて無い」

シンが言う通り前半はかなり苦戦を強いられていたが、ルフェイが合流した途端にレオナルド達を退散させることが出来た。これに不満を垂らせる程シンは傲慢では無い。

誤算があるとすれば、マザーハーロットがレオナルドのことをかなり大切にしていること。そして、消滅し掛けていたデイビットの底力を見誤っていたことだろう。

「そうですか……？」

ルフェイがこちらを子犬の様な目で見上げて来る。慰めついでに笑顔の一つでも見せればルフェイも信じたかもしれないが、シンの鉄仮面の様な無表情から吐かれた台詞なのでいまいち信じ切れていない。

「ああ、本当だ」

だからといって会って間もない相手に笑みを見せる程シンはサービス精神に溢れていないので、乾いた素気の無い態度で念を押す。

「本当に、本当ですか？」
「……本当だ」
やはり信じ切れないルフェイ。少しの間、シンとルフェイの間で不毛な問答が続いた。

◇

朝の朝食を済ませ、アーシアは愛娘と一緒に一誠を見送る。上級悪魔として赤龍帝としてやる事が沢山ある一誠だが、朝晩の食事だけは必ず家族一緒に取ることになっていた。
見送りが済むとアーシアはアイリを学校へ送る。従者に任せても良い仕事であるが、アーシアはアイリを学校まで送って行くのを日課にしていた。
アイリが通っている学校はレーティングゲームや魔法の事について専門的に教えてくれる学校であった。
かつてソーナが夢として語っていた『誰でも通えるレーティングゲームの学校』である。ソーナ自身もその学校の理事長を務めており、魔法等の学科は彼女の眷属である駒王学園の元生徒会メンバー、そしてリアスの眷属であるロスヴァイセが講師をしてい

た。
　アイリはレーティングゲームの成績と魔法の成績が非常に優秀であり、ロスヴァイセからそのことを褒められたことがある。アーシアは娘を褒められ、表面上は謙虚に振る舞っていたが、内心では親バカ全開でアイリのことを褒め称えていた。
　アイリを学校へ送ると空いた時間は大切にしている花壇に水やりや手入れをする。一誠やアイリの為に縫い物をする。今晩の夕食は何にするのかを考えて時間を潰す。
「えーと、昨日は肉料理でしたから、今日は魚料理にしようかな……そうなるとスープは……」
　ただ献立を考える。それだけの事なのに心が幸福感に満ちて行く。愛する者達を想うだけで心に無限の幸せが湧いて来る気分であった。
　パオーン
「え？」
　また動物の、それも象の鳴き声が聞こえた気がした。思わず周囲を見回して声の主を探すが、当然象などという巨大な生物は居ない。そもそも冥界に普通の象など存在しない。
（空耳……？）
　それにしては鮮明に聞こえた気がした。

スッキリとしないものを感じながらもアーシアは意識を今晩の献立の方に向けるのであった。

◇

迫って来る光景は壮絶の一言に尽きた。

大地を割る程の衝撃が波となって襲い掛かって来るだけに済まず、そこに混ぜられたこの世に存在しない猛毒が割った大地を紫に染め直した挙句、毒の効果によってヘドロの様に溶かしてしまう。

ギリメカラの地獄を生み出すかの様な攻撃にゲオルクは頬が引き攣って行くのが分かった。

ゲオルクは『絶霧』が生み出す霧を、猛毒の衝撃波の前に集めて行く。霧による転移で衝撃波をギリメカラへ返そうと試したのだ。

衝撃波に霧が触れる。そこでゲオルクはこの試みがダメであったことを瞬時に悟った。

衝撃波が含む猛毒が霧と混じり合い転移を阻害してしまう。以前、ギリメカラが毒ガスを吹き出して『絶霧』の妨害を行っているのを覚えているが、あの時とは毒の密度が

違うので、もしかしたらと思っていたが儚い希望で終わった。
盾として集めた霧が毒の衝撃波によって呆気無く霧散する。仕方なくゲオルクは霧を自身に纏わせて転移し、衝撃波の範囲外へと逃れる。
ゲオルクがついさっきまで居た場所は毒の衝撃波によって破壊と溶解を同時に行われ、とても人が生きていける場所でなくなる。
逃げの手しか思いつかず屈辱を感じるゲオルクであったが、すぐにそれを感じる暇も無くなった。
パオオオ。
嘲りを含んだギリメカラの鳴き声がすぐ近くから聞こえる。ゲオルクがハッとし見上げると剣を振り上げたギリメカラがすぐ傍に立っていた。
何故、という疑問がゲオルクに湧く。ギリメカラの行動はゲオルクの予想よりもあまりに早く、まるで見通していたかの様であった。
実際、ギリメカラはゲオルクの動きをある程度予測していた。毒の衝撃波を放てばゲオルクは必ず『絶霧』によって転移する。
そうなると何処へ転移するかが問題になってくるが、ギリメカラはゲオルクがそう遠くない場所へ転移すると予想していた。
今回の戦いに対してリベンジする意気込みがあることから遠くへ逃げることはまず

ない。そうなると毒の衝撃波の範囲外へと移動するのは容易に分かる。
それでもかなり広い範囲にしか絞れなかったが、何処へ移動するかはギリメカラは驚くべき方法を使う。
それは自らの勘。それのみ。
この事実を知れば、ゲオルクは理不尽さに怒り狂うかもしれないが、同時に納得もするかもしれない。
長い年月を生きて来た魔象がその中で培ってきた経験から得た勘である。予知能力者や預言者よりも説得力がある。
血相を変え、ゲオルクはギリメカラと自分との間に霧を密集させる。そして、それを媒介にして防御魔法を発動。
気体でありながら鋼よりも硬い壁がゲオルクの前に何重にも張られた状態となる。
ギリメカラの斬撃が霧に触れる。刃が僅かに霧へ入り込んだ瞬間、ギリメカラは張られている防御魔法の硬さを理解した。
ギリメカラの腕が倍近くまで膨張する。ゲオルクも一瞬何をしたのか分からない程に極めて自然に行われた自己強化によるもの。
これによって瞬時に力を増したギリメカラは、霧の防御魔法を紙の如く易々と斬り裂いてしまう。

少しでも保てる、というゲオルクの考えを甘いと一蹴するギリメカラの容赦無い斬撃。

振り下ろされた刃が巻き起こす風が吹き抜け、ゲオルクに触れていく。

それ自体に何の殺傷力も無い。しかし、その風に顔を撫でられたゲオルクは、自らが真っ二つとなり鮮やか断面から体の内にあるものを全て溢す光景を幻視した。

ギリメカラの容赦の無い殺気が見せる幻覚。それなりの数の戦いを経験しているゲオルクですら全身が瞬時に冷や汗で濡れる。

まともな感覚の持ち主ならこの殺気だけで戦意喪失し、微動だにせず次なる攻撃を受けて幻覚を本物の光景に変えるだろう。だが、前述した様にゲオルクはそれなりの数の経験をしている。

経験が芯となり途切れそうなゲオルクの意思を繋ぎ止め、直感的に最も適した魔術を発動させる。

見えざる手で引っ張られるかの様に後ろへ飛ぶゲオルク。本来の魔術ならば鳥の様な軽やかな動きになる筈なのだが、あまりに突発的に使用したせいでかなり雑な魔術になっており、ガクンと首を前に振り、頸椎を痛めそうな勢いで移動する。

その甲斐あって二撃目の間合いから離れるゲオルク。

パオ。

ギリメカラはそんなゲオルクを『ノロマ』と罵った。
お世辞にも身軽と言えないギリメカラの巨体が、跳ねる様に移動する。その速度はゲオルクの魔術同等――否、それよりも速かった。
ゲオルクの動きが止まった時、ギリメカラはそれを待ち構える様にゲオルクの背面に立って剣を振り上げていた。そして、止まったゲオルクに容赦無く剣を振るう。
この時のゲオルクは、自分の生涯で最も機敏な動きをしたと思った。死の予感は彼に恐怖だけでなくそれから免れる為の集中力も与える。
魔術は間に合わない。『絶霧』も間に合わない。なら残された手段は一つ。
ゲオルクは地べたに這うぐらいに体を低くし、ギリメカラの斬撃を回避。他の英雄派のメンバーと比べて体を動かすことは得意では無い。研究を得意とするインドア派の彼だが、この時の動きは自画自賛出来る程に見事な反応であった。
間一髪のタイミングで避けたゲオルクは、恥も外聞も捨て前方へ転がる様にしてギリメカラから距離をとる。
ローブが地面で汚れようと構わない。傍から見れば無様と言われる体勢のままゲオルクは魔法陣を展開。何を出すか、どんな魔法にするかなど考える余裕は無く己の直感に任せたままの展開であった。
魔法を使うのにそれ相応の力や知識、技術が必要になるものだが、この時のゲオルク

はほぼ何も考えずに魔法陣を出す。しかし、瞬時に展開された魔法陣は数十はあり、どれもが不具合を起こさないまま正常に発動する。

ゲオルクとギリメカラの間で台風、落雷、大火、吹雪が発生。至近距離からそれを浴びせられたギリメカラは流石に足が止まった。

その間に『絶霧』で周囲を守りながら可能な限り離れるゲオルク。咄嗟の行動にしては上手くいった。普通ならここで安堵するだけで終わるのだが、慎重なゲオルクはこれを上手く行き過ぎたと思う。

落ち着き、視野を広げる。そして気付いた。ゲオルクが放った魔法の射線上には結界で閉じ込められていうアーシアが居たのだ。発動のみに重点を置いていたのでアーシアの存在が完全に頭から抜けていた。

一方でギリメカラは荒々しく戦いながらもそれを把握しており、盾となって魔法を全て受け切った。

アーシアは確保する、という決まりを自分から反故にしてしまいゲオルクとして恥すら覚える。それを未然に防いだギリメカラに感謝――する気は起きないが、助かったという気持ちだけは抱いておく。

「――俺を殺すのではなく痛めつけるのではなかったのか？」

自分がやったことを誤魔化す様にゲオルクは話し掛ける。どの攻撃も手加減無しで

殺す気で仕掛けてきたとしか思えなかった。

ギリメカラは魔法を至近距離で受け、少々焦げ付いた腹を掻きながら目を細め、それだけで嗤いを表す。

パオン？

『お前、あの程度で死ぬの？』という嘲りが返って来た。

パオー？

続けて『もっと加減して欲しいかー？』というねっとりとした嫌らしい言い方の後――

パオ

『なら頭を地面に擦り付けて懇願しろ』という悪辣な言葉で締める。

「こ、この……！」

その悪意に塗れた言葉はゲオルクの頭に一気に血を昇らせるには十分だった。馬鹿にされたり、悪意をぶつけられたことは多々あるが、それでもギリメカラの煽りは別格である。

神経を直接逆撫でするかの様に兎に角腹が立つ。ゲオルクは、ここまで怒れるものかと自分の新たな一面を発見するぐらいに。

ゲオルクの煮え滾る怒りに触発されて周りの霧が騒めき出す。ギリメカラはそれを

鼻で一笑しながらさり気なく捕らわれのアーシアを一瞥した。
アーシアは相変わらず幸せな夢を見ている最中である。顔を紅潮させてややだらしない顔つきになっている。
パオー。
誰にも聞こえない程絞った声量で、眠るアーシアに向け『とっとと起きろ馬鹿』とギリメカラは呼び掛けるのであった。

◇

パオー。
「ふえ……？」
最近、度々聞こえるようになってきた象の鳴き声の幻聴でアーシアは目を覚ます。正体不明の鳴き声に対し、不思議と恐怖を覚えなかったが何故か申し訳ない気持ちになる。
「アーシア、もう起きたのか……？」
隣で寝ていた一誠が起き上がり、体を伸ばすと同時に欠伸をする。一切布を纏っていない鍛え抜いた体をアーシアの前に晒す。

その体付きにアーシアは頬を赤く染めるが、アーシアもまた一誠と同じく一糸纏わず肌を全て晒している。
ここは夫婦の寝室。二人はベッドの上。何があったのか説明しなくとも察せられる。因みに結婚し、子供が出来てからも二人の営みの数も情熱も減少することは無く、いつまでも新婚の様な関係を保っている。
「ごめんなさい。起こしちゃいましたね」
「うーん……？　いや、別に。寧ろ良かったかも」
「え？　あっ」
一誠がアーシアの手を引き、自分の方へ引き寄せる。
「まだ時間に余裕があるから、出来るだろ？」
「あっ……」
アーシアから艶のある声が漏れ出た瞬間――
パオッ！
「は、はい！　ごめんなさい！」
アーシアは背筋を伸ばして急に立ち上がり、何処かへ向けて勢い良く頭を下げる。
「ア、▪アーシア？」
「あ、あれ……？」

一誠はアーシアの奇行に驚くが、当の本人も自分の行いに驚いている。
「どうしたんだ？　もしかして寝ぼけたのか？」
「え、えっと……」
アーシアは説明に困ってしまう。急に何かに叱られた気がしてつい反射的に謝ってしまったのだが、それをキチンと説明するとなると一誠は間違いなく困惑する。アーシアも意味が分からない。
「多分、そうだと思います……」
アーシアは仕方なく寝ぼけていた事にした。そう言うと一誠が笑ったのでアーシアは恥ずかしくなってしまう。
「ははは。ま、こういうこともあるか。よし、やっぱ起きるか」
「すみません……」
折角の良いムードを自分からぶち壊してしまい、アーシアは申し訳なさそうにする。
「いいっていいって。それに今晩はパーティーだし、早めに準備をしてた方が良いかもな」
「パーティーですか……？」
「忘れたのか？　今度、部長――じゃなくてリアスが主催するレーティングゲーム大会があるからそれを記念したパーティーだよ。俺も一選手として参加する予定だしな」

「リアスお姉様のパーティー……」
そんな予定など記憶に無かったのでアーシアは急に聞かされて戸惑う。戸惑うのだが、突如として一誠がパーティーの話をする記憶が湧き起こった。
「確かに……言っていました」
今度は何故忘れていたのかを疑問に思ってしまう。いくら何でも大事な人の晴れ舞台を忘れてしまうのはおかしい。
（あれ……？）
納得しようとして納得出来ない自分が居ることに気付くアーシア。頭の中で引っ掛かるものを感じた。今にも消えそうなその引っ掛かりを忘れまいと意識すると、途端に当たり前の様に享受していた幸福に違和感を覚える様になる。
「私は……」
「本当に大丈夫か？　起きてから変だぞ？」
一誠が心配してくる。気遣いの筈だが、今のアーシアには自分の考えを妨げる様な行為に映ってしまう。
「大丈夫、です……それよりもリアスお姉様のパーティーがあるならもう準備をしましょう」
そう言って一誠に微笑むアーシア。ちゃんと笑えているか本人には分からない。

「そうか？」
首を傾げながらも一誠は着替える為にベッドから降りる。
アーシアは深刻な表情をしながら黙考する。
パオ。
聞こえる幻聴。だが、それは今までになく鮮明に聞こえた。

◇

違和感を抱えたままパーティーの時間になる。
一誠はスーツに、アイリとアーシアもドレスに着替えて会場に到着していた。
一誠達が会場に到着した途端、招待されていた他の悪魔達が騒めき出す。
「おい、赤龍帝だ」
「おお……！　本物か！」
「凄い……！　兵藤一誠様よ！」
「サイン貰えるかしら……」
ひそひそと話ながら興奮した様子の悪魔達。注目され、人気な様子に誇らしい気持ちになる。

「奥方のアーシア様も居るぞ。珍しい」
「相変わらずの美貌だ」
「素敵なご夫婦ね」
注目がアーシアへと移る。一誠への注目は嬉しいことだが、自分のこととなると気恥ずかしさの方が上回る。
皆の視線を浴びながら会場へ入る。中は煌びやか造りになっており、立食形式の豪華な料理やお酒などが並んでいる。
アーシアは一誠達と暫くの間、時間を潰していると会場内が騒がしくなる。
「主役のお出ましか」
ワイングラスを片手に持ちながら一誠の視線が用意されていた舞台の方へ向けられる。アーシアもその視線を追うと舞台には髪と同じ色の真紅のドレスを完璧に着こなしたリアスが立っている。
『本日は私、リアス・グレモリーのパーティーにお越しいただき誠にありがとうございます。ご参加いただいた皆様にはスタッフ共々大きな感謝と、皆様とともに新たなレーティングゲームを開催できることに大きな喜びも感じております』
マイク代わりの魔術によりリアスの声が会場中に響き渡っていく。
大勢に注目される中で言い淀むことなくスピーチを続けるリアス。最初に会った時

も輝いて見えたが、今のリアスは出会った時以上の輝きを放っていた。
リアスのスピーチとレーティングゲームについての説明が終わると歓談の時間が設けられる。
一誠は色々な悪魔達に囲まれ、言葉を交わしていた。そして、アーシアとアイリもまたお近づきになろうとする悪魔達に囲まれ戸惑っていた。
四方から話し掛けられ軽いパニックになってしまうアーシア。誰にどう返すべきなのか考えていた時、囲んでいた悪魔達が急に分かれる。
「久しぶりね、アーシア」
分かれて出来た道を堂々と歩くのはリアス。そして、彼女の眷属である朱乃、木場、小猫、ギャスパー、ロスヴァイセも付いていた。
「お、お久しぶりです……！」
近しい間柄なのに緊張して声が裏返りそうになる。
「あらあら。少し見ない間にますます綺麗になりましたね、アーシアちゃん」
学生の時よりも艶が増し、全ての男性の視線を釘付けにする朱乃。
「やあ、アーシアさん。アイリちゃんも随分と大きくなったね」
その微笑み一つで会場内の女性の頬を赤く染め上げる木場。
「……とても可愛らしいです」

幼い体型から黄金比の肉体へと成熟した小猫。
「ふふ。子供の成長は早いですね」
泣き虫で女装が趣味であったギャスパーは、何処へ出しても恥ずかしくない紳士へと成長していた。
「ええ。イッセー君やアーシアさんの素質を受け継いだ慈悲深く逞しい子ですよ」
凛々しい佇まいと共にアイリを高く評価するロスヴァイセ。自慢の教え子の一人として褒めたくて仕方のない様子。
「本当に皆さんと会うのは久しぶりです……皆さん？」
アーシアは自分の言葉に疑問を持つ。本当に全員揃っているのだろうか、と。
「あの……もう一人居ませんでしたか？」
「もう一人……？」
アーシアの質問に全員が首を傾げる。その態度でこれが全員だと答えている。
「ほら、あの、とても無口ですけど、冷静で大人びてた……」
名前を出そうとしたが何故か出て来ない。知っているのにどうしても答えが出ない。
「あ、あれ……？」
胸の奥にあった違和感が増していく。何かがおかしい。何かが間違っている。
「私は……」

眩暈がしてアーシアは倒れそうになるが、膝を突いて堪える。周囲がアーシアの異変に騒めくがアーシアの耳にはそれが入って来ない。
「私は……私は……」
気付き始めた真実。しかし、何かしらの力がアーシアの中からそれを取り除こうとし、記憶を曖昧にしてくる。
「私は……あっ……！」
俯くアーシア。照らされた照明がアーシアの影を床に映す。
影の中心に現れる一つ目。その目はアーシアに対し呆れと怒りを半々にした眼差しを向けていた。
普通ならば異常事態なのだが、アーシアはその目に恐怖を抱かない。彼女はその目を知っていた。
「大丈夫か！　アーシア！」
一誠が心配そうに声を掛ける。アーシアの影にある目に誰も気付いていない。
「そうですか……そういうことだったんですね……」
胸の中にあったモヤモヤとした感情が急速に晴れていく。それと同時に会場内に亀裂が生じる。会場が壊れたのではなく空間そのものに出来た亀裂であった。
「すみません……ずっと私を呼び掛けていてくれたんですね……？」

頭の中の靄が消えて行く。忘れていた記憶が蘇ってくる。
パオ。
「はい……心配をお掛けしました」
『そんなことはいいからとっとと戻って来い』とぶっきらぼうな鳴き声がハッキリと聞こえる。それとは逆に周囲の声はノイズの様なもの混じり出し、言葉が崩れていく。
「ああ……」
アーシアは立ち上がる。既に周りが崩壊し始め、形がおかしくなっていく。
そんな世界の中でアーシアは一誠とアイリの姿を目に焼き付ける。
「残念ですけど……これはやっぱり夢なんですね」
今まで見ていたこと全てをアーシアは夢だと認める。その言葉を引き金にして、夢の世界の崩壊が加速する。
「私は元の世界に戻ります」
アーシアは一筋の涙を流しながら微笑み、壊れていく世界に頭を下げる。
「ありがとうございます。――良い夢でした」

◇

「何……だと……？」

ゲオルクは我が目を疑った。『絶霧』の禁手である『霧の中の理想郷』で創り上げた結界が粉々に砕け散ったのだ。

結界の中から囚われていたアーシアが出て来る。

「そんな、馬鹿な……」

信じられなくて声が震える。アーシアを捕えていた結界は、捕らえた本人の精神と強い結び付きがある壁を張る。壁を破壊することは捕えていた人物の精神の破壊を意味する。そして、結界内に閉じ込めた対象にその者にとって最も幸福な夢を見させて脱出不可能にするものであった。

結界を解除する方法はたった一つ。対象が夢の中でその幸福を否定する事である。簡単の様でいて非常に難しい。そもそも夢を見ている自覚が無く、幸福は誰にとっても抗えないもの。

それを、稀少な神器を持っているとはいえ少女に突破されてしまいゲオルクのプライドはズタズタになる。

顔色、表情が目まぐるしく変わる。蒼褪め、赤くなり、唇を震わせ、奥歯を砕けんばかりに噛み締めた後、重く長い溜息を吐く。

そして、何も言わずに『絶霧』を使って何処かへ消えてしまった。

台詞を言い残すこともしないあっさり過ぎる退場。これ以上アーシアとギリメカラを見ていたら二条城周辺に展開している結界にすら支障をきたす恐れがあった。

要はアーシアに禁手を解除されたせいでゲオルクは本気で凹んで落ち込んでしまったのであった。

去るゲオルクをギリメカラは見逃した。本当なら禁手関連のことで色々と言うつもりであったが、ゲオルクの世にも情けない面を見たのでそれで我慢する。

「あ、あの！　ご迷惑をお掛けしました！」

アーシアはギリメカラに勢い良く頭を下げて謝罪する。

実際のところ、アーシアが結界から脱出出来たのは二つの要素があったからだ。

一つはギリメカラ。ギリメカラはアーシアの使い魔的位置――力関係は逆だが――にあり、アーシアと精神的な繋がりを持っている。それにより、ギリメカラの精神力が逆流してアーシアの精神が結界に完全に囚われるのを阻害出来た。

これにより本来ならば夢の中で幸福な記憶で塗り潰されることは無く、逆に現実と夢との差に疑問を抱く隙を生ませた。また、ギリメカラの方も少しながらアーシアの夢に干渉することができ、何度も呼び掛けることが出来たのだ。

頭を下げ続けるアーシアだがギリメカラの反応が無い。長い鼻で頭をぺしぺしと叩かれることを予想していたが、何もしてこない。

アーシアは様子を窺う為に顔を上げる。すると、ギリメカラは目を三日月状に細め、目でニヤついた表現する。

パオ？　パオー！　パオオオオ！

「なっ！　ああ、ああああっ！」

ギリメカラの鳴き声でアーシアは顔を一瞬で真っ赤に染める。ギリメカラが何をしているのかと言えば、夢の中でのアーシアと一誠の情事の際に発したアーシアの声の物真似をしていた。

何せギリメカラも少しながら干渉出来ていたので、その辺りのシーンもバッチリと見ているし聞いている。

パオオオオ！

「止めて、止めて下さいっ！　お願いですからっ！」

ゲオルクへの鬱憤を、アーシアを揶揄うことで満たそうとするギリメカラであった。

ギリメカラのせいですっかり忘れてしまっていたアーシアだが、この忘れてしまったことが結界を抜け出せたもう一つの要素であった。

完全に術中へと入り切っていないことで、アーシアは夢の中の記憶の修正に対して違和感を抱く様になっていた。

その違和感を最大まで揺さぶったのが、あのパーティー会場でのとある人物の不在で

ある。

ゲオルクの見させた夢は完璧な幸福であった。完璧過ぎると言ってもいい。そのせいで夢の中とはいえ害を及ぼすと思われたその人物を完全に排除してしまったのが。

その完璧さが結果として大きな綻びを生むこととなる。

しかし、それも致し方無いことなのかもしれない。

幸福な世界に魔人は要らない。

不折、追加

局所的に降り注ぐ雨。その雨に濡れたヴリトラの全身は石化していた。九尾の狐である八坂による変化の力の応用により、全身が固められていた。

ヴリトラの石像が出来上がったのを見て雨は止み、八坂は勝ち誇ったかの様に咆哮を上げる。

そんな中、ヴリトラの石像の一部から破片が落ちる。八坂から死角になっている箇所なので気付かない。

パラパラと？がれ落ちていく破片であったが、やがて内側から強い力で突き破られた。破片が剥がれた箇所からは人の足が突き出している。

足場を求める様に足を上下に動かしていたが、少し地面から離れた箇所だったので届かず、やがて諦めたのか突き出した足を中に戻し再び突き出して周りを蹴り砕いて穴を広げていく。

それを数度繰り返して一回り以上大きな穴になると足だけでなく手が出てきて穴の縁を掴む。手の甲の血管が浮き上がる程に力を込めて引っ張ると中から無傷の匙が顔を出し、勢い良く引っ張り過ぎたせいで穴から転がり落ちる。

「いっ――」

頭から落ちたので思わず声を上げそうになったが、慌てて口を押さえてそれを押し留めた。隠れているヴリトラの石像のすぐ傍には今も八坂が正気を失っている瞳を輝かせながら勝利の遠吠えをしている。

（やっべ……これからどうする……？）

八坂の思わぬ能力によって匙とヴリトラはかなり追い詰められていた。

八坂が変化による石化を行った際、ヴリトラは黒炎を内側に溜め込むことで本体である匙を守ろうとした。

結果としてその判断は正しかった。八坂の石化は表面だけでなく内部まで侵攻してくる非常に凶悪なものであったが、黒炎の力によってその侵攻を遅らせることが出来た。

その間に匙は実体化していたヴリトラの体から先程の様に脱出する時間を稼ぐことが出来た。出来たのだが、かなり重い代償を支払うことになってしまった。

（おい、ヴリトラ。大丈夫か？）

『ああ……問題無い……我が分身よ』

（どう聞いても大丈夫そうじゃねぇ……）

ヴリトラのあまりに弱々しい声。石化から逃れる為に大半の力を犠牲にしてしまっ

た。匙には影響が少ないが、ヴリトラからすれば自分の身を削ぎ落すのに等しい行為である。

（くそっ！　俺を守る為に……！　すまねぇ、ヴリトラ……！）

ヴリトラが身を呈して守ってくれたことを嬉しく思うが、それ以上にこれ程まで消耗させてしまったことに不甲斐なさを覚える。

『お前が無事なら……我はいくら消耗してもいずれ回復する……謝る必要など無い……』

謝る匙を逆にヴリトラの方が気遣って来る。

『今は……ここを切り抜けることのみに集中しろ……』

（ッ！　……分かったよ。お前も今は休んでいてくれ）

その後、ヴリトラが喋ることは無かった。匙の言う通りに休眠状態に入った様子。

（さて……ああ言ったものの、どうする？　俺？）

正直なところ現在の匙は全くのノープラン状態。状況が緊迫しているせいで策も思いつかない。

（落ち着け……！　まずは今出来ることを把握しろ、俺！）

未だに石像前でうろついている八坂に震えながら匙は自分の状態を確認する。真っ先に試したのは神器が発動出来るか否か。

結果として神器は発動することは出来た。出来たが――

（やべぇ……）

発動出来たのは元々の匙の神器である『黒い龍脈』のみ。後付けされた他のヴリトラ神器は反応すらしない。

そして、『黒い龍脈』にも問題が起こっていた。

（弱体化してる……）

ヴリトラが消耗している影響か匙の手の甲に発動しているのはデフォルメされたトカゲの様な神器。これは『黒い龍脈』の初期状態である。

やれることがあるとすればラインを伸ばして相手の力を吸収すること。ヴリトラ覚醒状態ならラインを黒い蛇にして切り離し、遠隔操作も出来たが当然そんなことこの状態では無理である。

（このまま上手くやり過ごして、ラインを繋げたら……？）

すぐ近くには力の塊である八坂がいる。『黒い龍脈』のラインを繋げて力を吸収し、ヴリトラへ送れば復活する可能性もある。

匙は気付かれない様にこっそりと八坂の動向を窺う。石像を挟んで反対側には正気の代わりに殺気を宿した目を爛々と輝かせ、長い口吻から覗かせる牙の隙間から涎ではなく炎を垂らしている。

（うん。無理だ）

浮かんだ案が無謀であると即決した匙は、取り敢えず身を隠すことを最優先にする。ヴリトラの力があって互角に戦えたが、それも出来ない今はそれが一番の得策に思えた。

幸い八坂の方はヴリトラへの勝利で興奮状態にある。何処か隠れられる場所を探し、八坂の視野が狭まっている内に身を隠せば――と考えていた時、匙は空気の変化に気付く。

（あれ……暖かい……？　いや――）

異空間内では夜の様なひんやりとした空気が流れている筈だが、匙の頬に感じた空気は真昼の様な暖かさがあった。否、それどころでは無かった。

（熱いっ！　まさか！）

匙は慌てて石像の端から覗く。そこには勝利に昂る――どころではなく昂り過ぎている八坂が興奮状態のまま口を開いて今にも炎を吐き出そうとしている。

余韻に浸るどころか昂りに身を任せてヴリトラの石像を焼き払うとしているのだ。

（やば――）

八坂の口から激しい炎が吐き出される。炎はバーナーの様にヴリトラの石像を炙り、熱と炎の勢いで石像を崩していく。

立派なヴリトラの石像が炎によって変形していき、飴細工の様に柔らかくなっていき、最後には原型が分からない石の塊と化した。

相手の尊厳を徹底的に踏み躙る破壊に満足した様子で咆哮を上げる八坂。

オオオオオオオ――

大きく長く響く鳴き声であったが、唐突に中断される。

八坂の瞳が地面へと向けられていた。石像だったものから離れた箇所でうつ伏せに倒れているのは匙。

八坂が炎を吐く寸前に範囲外に逃れていたが、慌てて飛び出してしまったせいで思いっ切り転倒してしまっていた。このまま上手いこと気付かれずにやり過ごすことを願っていたが、現実は甘くなく厳しい様子。

圧だけで焦げ付きそうな視線を背中に受け、匙は内心『嫌だ嫌だ』と喚きながらもぎこちない動きで体を反転させる。焦げそうな視線を正面から受け、心臓が凄まじい勢いで鼓動を早めて逆に止まりそうになる。

「ははは……どうもー」

こんなどうしようもない状況に追い込まれると、自然と出て来るのは愛想笑いなのかと変に冷静な部分が客観的に自分を分析する。

当たり前のことだが、そんな愛想笑いなど八坂に通用することなく人体など軽く裂け

そうな鋭い牙を剥き出しにした威嚇を返される。
八坂の喉が膨らむ。それに同調し周囲の気温が上がる。そして、匙の血の気が引く。
九尾の狐からすれば匙など地面を這う蟻に等しい存在。だが、攻撃の手は一切緩めない。そもそも手加減するという理性を持ち合わせていない。正気を失っている彼女にとって目の前で動くものは全て全力で排除すべき敵なのだ。
「くそっ！　容赦ねぇぇぇ！」
匙は『黒い龍脈』からラインを伸ばし、最も離れている木の幹に巻き付ける。そして、伸ばしたラインを一気に縮める。大地に根付いている木の方へ引き寄せられる匙。
直後、八坂が豪快に炎を吐き出す。ラインに引っ張られて炎の直撃は避けられたが、広がる炎が匙を追って来る。
靴底が炎で炙られた瞬間、匙は全力でラインを巻く。
「うおおおおおおおおっ！」
そんなことをすればどうなるか分かっているが、後のことなど考えてなどいられない。黒焦げにされてしまったら考えることすら出来ないのだ。
その甲斐あって広がる炎の範囲からギリギリ逃れることが出来た匙。しかし、ここからが問題である。止まることを一切考慮していない全力の巻きである。そうなるとどうなるか。

間もなくして匙は全速力で木の幹に衝突することとなった。
「ごっへっ！」
胴体を強かに打ち付ける。木の幹に抱き着く様な格好になっていた匙。巻き付いていたラインが解かれるとそのまま仰向けに倒れた。
「げほっ！　げほっ！」
脱臼したのかと思える様な肩の激痛。胸の腹を強打したせいで咳き込むのを止められない。
危機一髪の状況を抜け出した代償として考えれば軽い――本当に危機を脱していたらの話だが。
匙はダメージを負いながらも必死に動こうとしている。彼自身まだ状況が変わっていないことを理解しているからだ。
匙に攻撃を避けられた八坂は敵意で滾った瞳を起き上がろうとしている匙に向けている。匙が体を張って避けたことなど八坂視点からすれば鬱陶しい羽虫が生意気に逃げたとしか映らない。
八坂の口から焔が零れ出る。二度目の猛火を放つ準備に入っている。相変わらずの手加減の無さで匙を灰すら残さずに焼き尽くそうとしていた。
八坂から向けられる殺気に、匙は冷や汗を流しながらもう一度同じ方法で逃げよう

とするが、衝突の際のダメージが匙の動きを阻害し鈍らせる。
匙が『黒い龍脈』を構えてラインを伸ばそうとした時には、既に八坂の口から炎が吐かれる寸前であった。
「ちくしょう……」
理不尽な現実に悪態が零れる。
叶えたい夢にまだ指先すら届いていない。まだ戦っている一誠達や戻って来るのを待っている生徒会メンバーが居る。
ここで終わる訳にはいかないというのに、冷酷な炎は今にもその匙の悔しさごと焼き尽くそうとしている。
「ちくしょう……！」
二度目の言葉に込められたのは怒り。そして、もっと力が欲しいという嘆き。
八坂はその叫びの余韻すら消し去る炎を吐き出す――
「おおおおおおおおっ！」
間際、横から飛翔してきた赤い光が八坂の頬に激突し、炎を明後日の方向に吐き出させる。
八坂の頬にしがみつくのは匙が良く知る姿。
「ひょ、兵藤ぉぉぉぉ！」

感極まって思わず叫んでしまった。こんなタイミングで来たら叫ばずにはいられない。

「無事か！　匙！」

「――ああ、当たり前よ！」

一誠の手前勢い良く言うが完全に虚勢であった。一誠が間一髪で助けてくれたと分かった時、少しだけ泣いてしまったのは匙だけの秘密である。

八坂は頬に張り付いた一誠を振り落とそうと激しく頭を揺さぶる。一誠はしっかりとしがみつきながら拳を固め、八坂の顔に放とうとするが――

「母上！」

――九重のその叫びに振り下ろすことを躊躇ってしまう。匙の危機に真っ先に飛んで行った一誠から遅れての到着であった。

その間に頭を上下左右に振り続ける八坂。このままでは一誠が振り落とされるのは時間の問題である。

「――なら！」

一誠は振り上げた拳に魔力を込める。赤いオーラが腕全体を覆う。その手を今度こそ振り下ろす一誠。しかし、拳という形ではなく八坂の足元にドラゴンショットを放つ形でであった。

クウオン！

八坂の間近でドラゴンショットが着弾する。直撃ではないが発生した衝撃波によって八坂の巨体が吹き飛ばされる。更に着弾によって地面が破壊され、その際に大量の粉塵が舞う。

即席の煙幕を張った一誠はすぐに八坂から離れ、魔力を噴射しながら飛び、近くに居た匙を回収。そして、九重も拾い上げる。

八坂が転倒し、粉塵によって一誠達を見失っている隙に八坂の視界外まで移動して身を隠そうとした。

八坂は起き上がり軽く頭を振るう。すぐに攻撃を受けたことへの怒りが湧き、唸り声が洩れる。正気を失っていても怒りの感情までは消えない。そもそもそれ以外湧かない様に洗脳されている。今の彼女にとって起こること全てが腸が煮えくり返る程の怒りに変わる。

すると、どういう訳か八坂の足元に一誠の姿があった。逃げることもせずに棒立ち状態になっている。八坂はそれを見てすぐに一誠を踏み付けた。

呆気無く踏み潰される一誠。それに満足して溜飲が下がる八坂――と思いきや少し離れた場所にさっき踏み潰した筈の一誠が立っていることに気付き、怒り再燃する。

すぐにその一誠も踏み潰すが、また少し離れた場所に一誠が居た。というよりも一定

の間隔で複数の一誠が置かれてある。
どう見ても異常な光景であるが、今の八坂にそれを気にする程の思考能力は無く、噛み付きや踏み付けなどで一誠を次々に消していく。
「行ったか……」
離れて行く八坂を見ながら一誠は安堵の息を吐いた。彼らは八坂が移動した方向とは真逆の位置に隠れている。八坂が追って行った一誠は九重が木の葉を媒介にして作り出した幻である。
「大丈夫か？　おい？」
「マジで死ぬかと思った……」
顔面蒼白になっている匙の様子に本当にギリギリであったことを一誠は知る。
「何故じゃ！　何故母上があの様な姿になっておる！　お主！　何か知らぬかっ！」
そんな彼の襟首を掴んで激しく揺さぶる九重。死に掛けていた匙に対して容赦の無い仕打ちであったが、その涙混じりの声に一誠も一瞬止めることを迷ってしまうが、このままにしておく訳にもいかず、九重へ手を伸ばす――が、匙本人がそれを手で制止し九重のしたいようにさせる。
「わりぃな……お前の母さん、何としたかったけどダメだった……」
その一言は激情に駆られていた九重の心を冷ますのに十分であった。自分のしてい

ることを恥じる様に手を離し、申し訳なさそうに目を伏せる。
「すまぬ……」
「いいって、いいって。母親が大事だって気持ちは俺にも分かるから」
生徒会メンバー以外知らないが、五年前に匙の両親はほぼ同時期に事故に遭い、父は死亡し母は障害の残る怪我を負った。生まれてからずっと知っている母の姿が病院で全身に包帯を巻かれた痛々しい姿になった時の記憶は今でも忘れられない。
九重もまたその時の自分と似たような気持ちになっていることを匙は理解しているので九重に対して同情してしまう。
「お前とヴリトラが負けるのかよ……」
信じられない気持ちであった。一誠は匙の強さも知っているし尊敬もしている。そんな彼らがここまで追い詰められていたことを事実であっても認めたくなかった。
「ヴリトラが言ってたよ。この子の母親には京都のパワースポットの力が全部流れていて龍王並の力になっているって」
「マジか……」
嬉しくない情報である。一誠も何とか無力化する方法を考えていたが、タンニーンやヴリトラ並の強さを持っているのだとしたら手加減など出来ない。下手をすればこちらがやられる可能性すらある。

『ヴリトラはどうした？　さっきから気配が感じられない』
　異変を感じ取り、ドライグが匙に訊く。
「ヴリトラは俺を助ける為に力を使い過ぎて眠ってる。だから、今の俺はこれしか使えない」
『黒い龍脈』を掲げる匙。二対一ならと考えていた一誠は、その考えが既に破綻していたことを知って頭を抱えそうになる。
「あ、じゃあ俺の神器の力を使えばどうだ？　匙、お前の神器で力を吸い取ってさ！」
　解決法を見つけ出し声を明るくする一誠であったが、匙とドライグの反応は思った様なものでは無かった。
「ヴリトラを起こすことは出来るかもしれないが……」
『龍王の力を完全に取り戻すとなると相当な力が必要になるぞ？　もしそんなことをすれば禁手の時間が殆ど無くなる』
「それは……」
　一誠の禁手はこの戦いに於いては重要な戦力である。ヴリトラを起こして戦力を確保するのは重要だが、それによって一誠の禁手が解除されてしまったら本末転倒である。
「悔しいが俺達よりもお前らの方が強い。やることがまだあんだろ？　――無駄な力を

使うな」
「匙……」
「今の俺じゃお前の足手纏いにしかならねぇ。悪いが俺の代わりに止めてくれないか？」
　一誠は匙がどれだけ自分のことを評価してくれているのか知っている。そして、匙が追い付く為に努力しているのも知っている。そんな匙が恥を忍んで一誠へ託そうとしている。
　これに応えない理由が無い。
「任せとけ！」
「――ああ、頼む」
　一誠には見えない角度で匙は強く手を握り締めた。頼むことしか出来ない自分の情けなさと悔しさで。
『了承するのはいいが策はあるのか？　無傷で押さえ付けるとなると骨が折れるぞ？』
「ええっと……ヴァーリの能力を上手く使えば……」
『白いのの力か……ふん、まあ仕方あるまい』
　アルビオンから奪った半減の力を活用すれば何とかなるのではないか、という一誠の考えにドライグは一応賛成する。現状、この方法しか思いつかない。

オオオオオオオン！

離れていた筈の八坂の声が段々と近付いて来る。九重が用意した幻を全て潰し、本物が居ないことに気付いて戻ってきた。

「匙、九重を頼む」

「ああ」

「九重、匙を頼めるか？」

「任せろ。……じゃが」

「分かってる。お前の母さんは俺が助ける」

一誠は魔力を噴射し、八坂の許へ向かう。

残された二人。九重の方は先程八つ当たりに近い真似をしてしまったので気不味そうにしている。

「なあ？」

「な、何じゃ？」

匙の方から声を掛けられ、九重は驚きで飛び跳ねそうになった。

「聞きたいことがある。お前ってさ――」

質問の内容に九重は訝しげな表情になる。

「それなら分かるが……お主は一体何をするつもりなのじゃ？」

その言葉に匙はニヤリと笑う。ヴリトラという大きな力を失ってしまった彼であるが、目は死んでいない。寧ろ、反撃の炎を瞳に宿している。
「このままじゃ終わらねぇ……連中に一泡吹かせてやる！」

◇

聖剣を組み合わせて人の形に仕上げた聖剣人形が剣で出来た腕を真っ直ぐ突き出す。
その突きは無慈悲にイリナの心臓を貫いた。
「あら？」
戸惑った声を出したのは刺されたイリナではなくそれを命じたジャンヌの方であった。ジャンヌは聖剣人形が刺した光景に違和感を覚える。
ジャンヌの違和感が正しかったと告げる様に刺されたイリナの姿がブレて消える。本物ではなく細く伸びた『擬態の聖剣』が生み出したイリナの偽者であった。
「はっ！」
本物は翼によって空へ移動しており、降下と共に『擬態の聖剣』と光の力を凝縮した光の剣を振るい聖剣人形をバラバラにする。
聖剣人形を破壊し、すぐさま二本の剣先をジャンヌへと向けるイリナ。ジャンヌは聖

剣人形を破壊されたことに顔色一つ変えず、それどころイリナへ拍手を送っていた。
「わあ、凄い！　天使ちゃん、素直そうに見えて意外とトリッキーなこと出来るのね！　お姉さんすっかり騙されちゃった！」
嬉しそうに笑うジャンヌ。そこには余裕しか感じられなかった。イリナからすれば褒められているというよりも馬鹿にされた様な気持ちになる。
「な、舐めないでね！　私は天使長ミカエル様のAなんだから！」
「へぇー、ミカエルさんの。その若さでなんて偉いねー」
目を丸くした後、子供を褒める様に言うジャンヌ。やはり、その笑みを消すことは出来ない。
「見くびってたら痛い目見るんだからね！」
「じゃあ、そんな天使ちゃんに少しサービス！」
ジャンヌがパチンと指を鳴らす。ジャンヌの足元から新たな聖剣が創造される。それらは一斉に放たれイリナの方へ飛んで行く。
イリナは驚き、慌てて後方に下がるが聖剣は突如軌道を変えて地面の方へ向かっていく。
「え？」
地面にはイリナが破壊した聖剣人形の残骸。その中でまだ無事であった聖剣と新た

に創られた聖剣が絡む様に合わさっていく。
「天使ちゃんに合わせて、はい、鳥――！」
聖剣人形の残骸から三羽の鳥が新たに誕生する。嘴、翼、尾羽に見立てられた聖剣が銀色の反射光を出す。
「行け、行け――！」
ジャンヌの号令で三羽の聖剣鳥が羽ばたき、イリナに向かって飛翔していく。
聖剣で出来た翼でイリナを切り裂こうとした時、イリナに触れる前に翼が根本から切断された。
「まあ」
イリナに触れることも出来ずに聖剣鳥らは逆に空中で斬り裂かれ、ただの破片となり地面に散らばった。
「言った筈よ！　舐めないでって！」
イリナがそう叫ぶとジャンヌは何かを察知し、その場から大きく後退する。
「見くびってたつもりは無いんだけどー、イリナちゃんって思っていたよりも結構『擬態の聖剣』を器用に使うねー。お姉さん、ちょっと反省」
肉眼ではほぼ確認することが出来ない程に極細となった『擬態の聖剣』の一部。それを操り、聖剣鳥を破壊し今もジャンヌを拘束する為に伸ばしていた。しかし、ジャンヌ

の方はそれを敏感に感じ取り、間合いの外へ逃げてしまった。
「今のちょーっとだけ危なかったかも。聖剣の気を感じ取れなかったら今頃お姉さんどうなっていたんだろうね？」
『擬態の聖剣』の妙技を目の当たりにしてもジャンヌの余裕は崩れない。否、ほんの少しだけその目が鋭さを増した。イリナに対する警戒レベルが一段階上げられた証明である。
「……聖ジャンヌ・ダルクの魂を引き継ぐ貴女に聞きたいことがあるわ」
「なぁに？」
「どうして貴女は『禍の団』に？　災禍を齎す様なテロリストになった貴女と戦うことに、天使として複雑な気持ちになるわ！」
「うーん……理由か……」
　ジャンヌは少しだけ考える素振りを見せる。
「……お姉さん自身が決めたことだからかなぁ？」
「……どういう意味？」
「色々とあったんだけど、神の声とか天使の声とかじゃなくて自分で決めたことがこれってことなの。お姉さんはお姉さんが決めた道を歩くことにした、それだけのこと。はい！　この話はこれでお終い！」

　口調は軽いが深く追求することを許さない圧がその言葉には含まれていた。イリナもそれが分かり、これ以上の問答は無駄だと悟る。
「なら私はミカエル様と皆の為に貴女と戦うわ！　平和が一番！」
「天界の望む平和と人間の平和って違うってお姉さんは思うけどねー」
　イリナの台詞に茶々を入れながらジャンヌは手を翳す。
　足元から生える聖剣。そして、空中にも次々と出現し出す。その数は今までとは比べ物にならない。
「でもまあ、天使ちゃんも思ったよりやるみたいだし好き勝手される前に早めに倒しちゃおう。ということで大サービス！」
　イリナへウィンクすると大量の聖剣が移動し出し、ジャンヌの背後に集まって行く。
「お姉さんの神器『聖剣創造（ブレード・ブラックスミス）』なんだけど、普通の『聖剣創造』とはちょっとだけ違うの」
　無数の聖剣が重なって行き巨大な何かを形作っていく。
「まさか、禁手化……！」
「せーかい！」
　全ての聖剣が収まるとそこには一対の翼を持ち、巨体を四肢で支える銀色のドラゴンが出来上がっていた。聖剣人形や聖剣鳥とは見た目から違う生物そのもの外見をして

いる。

「この子は私の禁手。『断罪の聖龍（ステイク・ビクティム・ドラグーン）』。ま、正式な禁手じゃなくて亜種だけどね」

記録に残っている『聖剣創造』の禁手とは異なるジャンヌのみが成せる亜種禁手。彼女の特性として聖剣を剣として扱うだけでなく、組み合わせて自在に操ることに長けていた。

彼女が見せた聖剣人形や聖剣鳥も禁手一歩手前のものであり、扱い易さから好んで使用していた。見た目からして精度の違う聖剣のドラゴンは、イリナの力を認めて出し惜しみをせずに全力で倒しに掛かることを決めた表れである。

「さあ、いっけー！」

聖龍が跳び上がり、ジャンヌの背後から前方へと移動。地面を叩き割りながら着地する。

イリナを無機質な瞳で睨むと喉を膨らませる。ブレスの予兆にイリナは翼を羽ばたかせて飛翔。直後に聖龍は口を広げてブレスを放つ。

聖龍が放つブレスは火球などではなく種類の異なる聖剣の束であった。聖剣の集合体であることを考えると妥当な攻撃である。

イリナが移動したことで吐かれることで勢いを付けた聖剣らが柄辺りまで地面へと突き刺さっていた。もし人体に刺さったのなら貫通どころか刺さった周辺ごと持って

いかれるだろう。木場が『魔剣創造』の使用時に見せる魔剣の発射。聖龍が行っているのはそれの強化版である。

飛ぶイリナに聖龍は首を動かしてブレスで撃墜しようとする。無数の風切り音が一つとなって鳥肌が立つ騒音となってイリナを追って来る。

しかし、飛翔するイリナの速度に聖龍のブレスは追い付かない。

聖龍の喉の膨らみが無くなり吐き出す聖剣も無くなる。一度にブレスとして吐き出せる聖剣の量には限りがある模様。

イリナはこの間に聖龍へと接近。自慢の翼の速度であっという間に聖龍の目の前まで近付く。

ジャンヌを倒すにはまず盾となっている聖龍を破壊しなければならない。そう考えたイリナは『擬態の聖剣』と光の剣を握り直し、聖龍の頭部目掛けて最大の力を込めて二刀を振り下ろす――ジャンヌの狙い通りに。

「――え？」

二刀が空を切る。そこにある筈の頭部が無くなっている。

聖龍は頭部から胴体に掛けて体を自ら真っ二つに割き、イリナの斬撃を空振りさせたのだ。

生物ならばあるまじき回避方法。だが、聖龍は聖剣の集合体であるので何の問題も無

い。しかし、こんな方法で回避するとはまず考えないだろう。
聖龍の見た目は限りなく生物に近い。そのせいで先入観を抱いてしまう。聖龍の動きを生物限定として考えてしまうのだ。
故に初見に於いてこの聖龍の回避行動は絶大的である。
「しまっ――」
己の迂闊さに気付くと同時に聖龍はその場から一歩移動する。イリナの位置が左右に分かれた聖龍の内部へと移る。
その瞬間、聖龍の銀色の断面から一斉に聖剣が生え出し、分かれた体を閉じ始める。
さながらそれは『鋼鉄の処女』。尤も拷問などでは済まず、閉じれば串刺しを通り越して原形を留めることも許さないだろう。
(ごめんなさい……!)
逃げるタイミングを完全に失ってしまったイリナは、不甲斐ない結末になってしまったことへの謝罪を心の中で上司、戦友、想い人へと送り固く目を閉じる。
その時、何かが叩き付けられる様な音がした。
イリナは閉ざしていた目を開ける。囲う様にして並ぶ無数の聖剣の切っ先が間近にまで迫っていたが、それ以上動こうとしない。
何が起こっているのか分からなかったが、二度と無い脱出のチャンスを逃す訳にもい

かず、ある程度の傷は覚悟で聖剣の隙間を通って真上から抜け出す。
手足などに浅い切り傷が出来たものの死に比べたら軽過ぎる代償である。そして、イリナは何故自分が脱出出来たのかを知る。
「な、何、あれ？」
白亜の巨人が棍棒と手で聖龍の開いた体を押えている。イリナが脱出出来たのはこの巨人の力であった。
「大丈夫ですかー？」
巨人から声を掛けられる。巨体に似合わない穏やかそうな少女の声――よく見ると巨人の肩に魔法使いの格好をした少女が立っている。
「え？　ど、どちら様？」
「話と自己紹介はあとでしますねー。今はこのドラゴンさんをどうにかしないと。アーくん！」
少女の声に従い巨人が手を離す。聖龍の割れていた体が元に戻ると、巨人はその横顔に棍棒を叩き込んだ。
聖龍の巨体が傾くが、踏み止まり転倒には至らなかった。
「あらあら。ルフェイちゃーん、お姉さんの邪魔をしに来ちゃった？」
「そうでーす。でも、最初にちょっかいかけて来たのはそっちですよ？」

「もう！　曹操が心配症だから、可愛いルフェイちゃんとも戦うことになっちゃたじゃない！」
ジャンヌが曹操への不満を洩らす。とは言え本気では無い様子。
イリナは少し離れた所で二人のやり取りを見ていた。助けてくれた魔法使いの少女――ルフェイとジャンヌは顔見知りなのは分かった。一応、間一髪の所を救ってくれた点を考えれば味方だが、ジャンヌとの会話のせいでハッキリと断言出来ない。
「何でしたら手加減しても良いですよ、ジャンヌ様」
「ルフェイちゃん生意気ー。それってこっちの台詞だと思うんだけど？」
美女に従うドラゴンと巨人が睨み合う。その圧だけで周囲の気温が下がった様に感じる。
「いっけー！　頭から丸齧りにしちゃいなさい！」
「アーくん！　ぼっこぼこにしちゃってー！」
聖龍と巨人による巨大同士の対決。
「え？　え？　私、どうしたら良いの？」
いきなり始まったそれにイリナは完全に置いてけぼりになってしまい、どうすればいいのか本気で迷ってしまうのであった。

◇

苛烈。神器を解放したジークフリートの動きを表すのはその一言に尽きる。
「遅いよ。遅い、遅い！」
一撃で木場を防御ごと払い飛ばしたかと思えば、そこから瞬時にゼノヴィアの懐へと飛び込み、ゼノヴィアを斬り付ける。間一髪の所でエクス・デュランダルで防ぐことが出来たが、その場で踏ん張ることが出来ず力負けして飛ばされる。
「くっ！」
「重い……！」
『龍の手』の能力は所有者の力を二倍にするという単純なものだが、ジークフリートはそれにより腕力だけでなく自らのスピードも倍以上のものとしていた。シンプルな能力故に持ち主の実力が露骨に反映されるが、ジークフリートぐらいのレベルとなると解放前よりも数段力が増している。
『騎士』である木場とゼノヴィアが辛うじて反応出来る程の速度から繰り出される『戦車』以上の重い斬撃。受けた木場達の腕は未だに痺れていた。
それに加えて厄介なのは彼が振るう『折れる聖剣』。一撃繰り出せば代償として壊れるが、その際に飛び散る細かな破片が木場、ゼノヴィアの体に食い込んでいた。流石に

破壊と同時に聖なる力は急速に失われるが、刺さる際に僅かに残った聖なる力が毒の様に木場達の体を蝕む。
「しまった……振り損ねた」
背中から生える第三の手『龍の手』を見せる様に振り回す。木場とゼノヴィアもそれが振るわれる前に飛ばされてしまった。ある意味では運が良かったのかもしれない。
しかし、それは裏を返せば二人がジークフリートの攻撃に全く耐えられなかったことを意味する。ジークフリートにとって想定外だったのは二人の非力さに対するものであった。
木場とゼノヴィアもそれが分かっており、表情には屈辱が滲み出ている。
「さて、次は――」
言い掛けたジークフリートが急に顔を顰める。そして、長い溜息を吐いた。
「あまりせっつかないで欲しいんだけどね」
ジークフリートは何を思ったのか『龍の手』が握る『折れる聖剣』を地面に突き立てた。代わりに鞘に納めていた魔剣を引き抜く。
「僕からすれば我儘を言わない聖剣の方が使い易いけどね」
ジークフリートは愚痴りながらも右手でグラム、左手でバルムンクを引き抜き、『龍の手』で三本目の魔剣ノートゥングを抜く。

「本当に困った奴らだよ。普段は言う事聞かない癖に、僕が他の剣を振るっていると嫌がらせしてくるんだから……信じられるかい？　僕が『龍の手』を使っているのにグラムは龍殺しの力を流し込んでくるんだよ？　この状態だと毒になるって分かっている筈なのに……」

心なしか口調が早い。感情が昂っている証拠と言える。ジークフリートの言っていることが嘘では無く本当のことなのが伝わってくる。

名の有る魔剣故にそれ相応の扱い辛さ。それともジークフリートと単純に相性が悪いのか。

「全く――」

ジークフリートはそこで言葉を中断し、木場とゼノヴィアが前方に居るというのに顔を後ろへ向ける。ある者の気配を鋭敏に感じ取っていた。

足音が近付いて来る。緊張感に満ちていた木場とゼノヴィアの表情が緩まる。ジークフリートが笑みを深くする。

「追加参戦は有りか？」

堂々と現れたシンに対し――

「大歓迎さ」

――ジークフリートは抱擁でも求める様に魔剣を広げた。

爆音、静寂

「流石だ。言葉にすれば陳腐だがそうとしか表現出来ない」

曹操は聖槍を肩に担ぎながら拍手を送る。その拍手を送られるのは百メートル以上も離れた位置に立つアザゼルとオンギョウキ。

彼らは曹操が放った破魔と呪殺の攻撃に対して無傷で切り抜けたのだ。

『黄昏の聖槍』によって効果が高められただいそうじょう由来の破魔と呪殺に対して二人が行った回避は至って単純なもの。

迫り来るそれらの力に対してオンギョウキは忍術、アザゼルは光の力と自らの力をぶつけ、拡散を遅らせることで効果範囲外にまで逃げ延びたのだ。

言葉にすれば簡単そうに聞こえるが、実際のところ神滅具最強と名高い『黄昏の聖槍』と悪名轟く魔人の力が合わさったそれを短時間ではあるが拮抗に等しい状態にするのは並外れたことである。そこら辺りの悪魔や堕天使がやった所で津波に対して水飛沫を掛ける様なもの。彼らが行ったことは単独で津波を止めたに匹敵する偉業である。

勿論彼らは自分達がそんなことが出来るなど知る由も無い。曹操がだいそうじょうから破魔と呪殺の力を借りているなど思ってもいなかった。だが、二人は何の保証も無

い実戦にて見事に偉業を為した。力もそうだが精神面に於いても並外れた事である。
曹操もそれが分かっており、敵ながらも賞賛の言葉と拍手を送ってしまった。
「いるかよ、そんなもん」
「耳障りだ。黙っていろ」
だが、曹操の賞賛もアザゼル、オンギョウキからすれば嬉しくも何ともない。寧ろ、不愉快さを露にして突き放す。
二人から冷たい言葉を浴びせられ、曹操は苦笑しながら肩を竦める。
「残念だ。心の底から思っているのに。感動や敬意はやっぱり言葉にして出すべきだ」
「そうやって本気で言っているのが嫌らしいんだよ、お前は」
アザゼルが腕を振るう。二メートル程の長さの光の槍がその一動作で百以上同時に投擲された。
「ふっ！」
曹操が聖槍を振り抜く。一閃した軌跡に残る聖槍の光が槍の群に向けて飛ばされる。
横一文字の光がアザゼルの投げ放った光の槍と接触。そのまま相殺されるのかと思いきや、聖槍の光がアザゼルの光を吸収する。
聖槍の光が進めば引力に引かれる様にして光の槍が軌道を変えて取り込まれていく。聖槍という唯一無二の奇跡に堕天使の光は従属するかの様に吸い込まれていき、その度

に聖槍の光は輝きを増していく。
そのままアザゼル達も光で斬り裂こうとした時、二人は動く。範囲外への回避――ではなく曹操と距離を詰める為に前進をしてきたのだ。
アザゼルは飛翔して聖槍の光の上に飛び上がって回避すると共に、新たな光の槍を作り出し、それらを周囲に展開し全ての穂先を曹操へ向ける。
アザゼルの派手な動きに曹操は思わず目で動きを追ってしまう。その直後に自分が軽率な行動をとってしまったことに気付き、奪われてしまった目線を無理矢理正面へと戻す。
聖槍の光が誰もいない空間を通過し、建物などを切り裂いて彼方へと飛んで行く。時すでに遅し、アザゼルの動きを目晦ましにしてオンギョウキは完璧に姿を消してしまった。
組んで間もない者達の動きでは無い、と曹操はつくづく思ってしまう。曹操が見る限り言葉の指示も無くアイコンタクトなどの合図も無い状態でどちらも最善としか言いようのない動きを見せている。
片や神に反逆して今日に至るまで生き延びてきた堕天使の長。片や本物の忍びの技を駆使し、己の存在を完璧に隠す隠遁を使う黒衣の鬼。年季が人とは桁外れ故にこちらの想像を絶する様なことを容易く行ってみせる。

（まあ、だからこそ挑む価値がある！）

表向きは冷静な表情ながらも内心では迫り来る難関に熱く滾る。この苦難を乗り越えれば自分は新たな成長を遂げることが出来ると確信していた。そう考えれば恐怖よりも喜びが勝る。

曹操の心を表すかの如く聖槍の輝きは強さを増した。

鼓動が早まる。体が緊張感に満ちる。しかし、嫌な感覚では無い。臓腑が爛れる様なストレスを感じさせる緊張感とは異なり、まるで告白の答えを待つ乙女の様な体に熱が籠るものであった。

伝説の武器を携え、悠久の時を生きた魔物と戦う。まるで絵物語の英雄そのもの。

真の意味で英雄に成れるのか、それともドン・キホーテの様に滑稽な存在としておわるのかどうかはこの状況を打破するかに掛かっている。

飛び上がっていたアザゼルが周囲に展開させていた光の槍を一斉発射する。曹操はすぐさま着弾点から離れるが、アザゼルはそれを見越して何本か残しており、曹操の動きを見て発射のタイミングを遅らせてから射る。

移動した直後の曹操を狙う数本の光の槍。だが、曹操にとってもそれは想定内のこと。腕に巻いてある数珠から石を一つ取り、光の槍に向けて指で弾く。

弾かれた石は光の槍に接触した途端寒気立つ黒い光を発し、光の槍を呑み込んでいっ

た。
石に込められた呪殺の力がアザゼルの光の力を食い潰したのだ。その光景を見てもアザゼルに特に焦った様な感情は無い。まるで予想通りと言わんばかりの表情をしている。
撃ち出した光の槍が全て無駄に終わった瞬間にアザゼル自身が光の槍を構えて曹操へと突撃を開始する。
（何処だ？　何処から仕掛けて来る？）
アザゼルも脅威ではあるが、曹操が今最も警戒しているのは消えたオンギョウキである。まず間違いなくアザゼルの攻撃に便乗して攻撃してくる。それもこちらの隙を確実に衝く致命的な攻撃を。
アザゼルの攻撃が届くまでの時間などたった数秒。その与えられた数秒間の中で曹操の集中力は極限にまで研ぎ澄まされた。
（刹那の瞬間まで思考を途切れさせるな！）
曹操が知るオンギョウキの情報は数少ない。不可視と思える様な完璧な気配遮断に影を通じての移動。
（焦りと恐れで視野を狭めるな！）
常人ならば耐え難い重圧の中でも曹操は視野を広げることを止めず、些細な変化を見

過ごさない。

（そして、諦めるな。最後の瞬間まで！）

如何なる状況下でも最後に物を言うのは諦めないこと、折れないこと。その瞬間に勝利の可能性は完全に潰える。

曹操の中に流れる英雄の血。そして、今まで積み重ねてきた経験が芯となり、窮地の状態でも曹操に冷静さを与える。

あと一秒も経たずにアザゼルと共に光の槍が降ってくる。そんな中でも曹操の眼球はせわしなく動き、あらゆることを見落とさない様にする。

光の槍とアザゼル自身が放つ眩い輝きがすぐそこまで感じる。強い光に応じて足元に映る影は色を濃くする。

（……影？）

曹操が注目したのは地面に映るアザゼルの影。それを見た瞬間、喉元に冷たいものが通り抜けて行くイメージが浮かぶ。

死の象徴と言うべき魔人と関わることで曹操に備わった、或いは発達した死をより敏感に感じ取る第六感。

（――成程）

曹操が全てを納得した瞬間、地面の影から刃が飛び出してくる。アザゼルの影に潜ん

でいたオンギョウキによる奇襲。
上下から迫る同時攻撃は曹操に逃げる隙を与えない――かに思われた。
次に取った曹操の行動は、アザゼルとオンギョウキを驚かせるのには十分であった。
喉元に迫るオンギョウキの刃に対し、曹操は全力で聖槍を叩き付ける。鬼の一撃を防ぐには人間である曹操がありったけの力を振り絞らなければならない。
それ故に後のことなど考えていない大振りの一撃となる。
辛うじてオンギョウキの一撃を防いだ曹操。その直後にアザゼルの光の槍が彼の肩を貫く。
「っ！」
絶叫を上げてもおかしくない傷なのに曹操は口を結んでそれを耐える。一方で刺し貫いたアザゼルと攻撃を防がれたオンギョウキは瞠目していた。
あろうことか曹操は最初からアザゼルの攻撃を回避することを捨てていた。それを覚悟してオンギョウキへ強打を繰り出したのだ。敢えて振りの大きい攻撃をすることで急所への狙いはずらしたが、それでも下手をすれば命を落としてもおかしくなかった。実際にアザゼルの狙いが頭部ではなく胴体狙いだったなら曹操のこの動きも無駄になっていた。
この土壇場で天運に身を任せ、賭け同然の真似をした曹操の胆力に二人は純粋に驚か

される。
だが、払った代償は決して軽いものではない。突き刺さったアザゼルの光の槍は曹操の背中側まで突き抜けている。肉も骨も神経も穿たれており、当然そんな状態で聖槍を握ることなど出来ず、聖槍を掴んでいた手は緩み出す。
オンギョウキの奇襲を辛うじて防げたが、片手が使用不能になった今いつまでもオンギョウキの武器を押さえておくことなど不可能。
武器を押さえる力が緩む。オンギョウキは力を込め、最初の狙い通りに曹操の喉を裂こうとした。
曹操の手が力無く垂れる。最早、満足に手を握ることも出来ない。その時、曹操の手から何かが落ちる。
常人ならばまず見通していてもおかしくない些細な事。しかし、常人とは遥かに異なる存在である二人だからこそそれを決して見逃すことは無かった。
曹操の手から落ちた物。それは一粒の石。
その石を見た途端、アザゼルとオンギョウキはすぐさまその場から離れた。破魔、呪殺どちらの力を込められているのか判断が付かないが、曹操が自分諸共二人を巻き込もうとしていたのは分かるので、範囲外へと逃れる。
石が曹操の手から離れた刹那の間にアザゼル達は急いで数メートル以上も距離を取

る。

二人が安全圏へ着くと同時に石が地面に着く。それをスイッチにして石に内包されていた力が解放され光が溢れるが、その光は破魔とも呪殺とも異なる光であった。

その光を見て二人は自分達の判断が早過ぎたことを察しアザゼルは顔を顰め、オンギョウキは小さく舌打ちをする。

曹操は光の中で見る見るうちに負わされた怪我を治癒させていた。だいそうじょうが石に込めたのは何も攻撃の為のものだけではない。いざという時の為の治癒の力も込めていたのだ。

アザゼルによって風穴を開けられた肩の穿たれた肉、骨、皮はアーシアの神器、フェニックスの涙と同等以上の治癒速度により負傷は無かった事になる。流石に衣服の修繕までは出来ないが、穴が開いた服から覗かせる傷一つ無い皮膚は絶望感を煽るには十分であった。

「いやいや、本当にだいそうじょうには頭が下がる」

見せつける様に傷を負っていた肩を回す曹操。何の支障も無いことをアピールする。

「嫌味な奴め」

アザゼルもそれが分かっており、ボソリと呟く。アザゼル達も危険は覚悟して攻めたがこうもあっさりと無意味にされると愚痴の一つも言いたくなってしまう。

曹操は演武の様に聖槍を両手で回し、肩に担ぐ。
「本当に危なかったのは間違いないさ。だいそうじょうの力が無ければこうも軽口も叩けない。アザゼル、貴方の槍の矛先がもう少し横にずれていたら結果は変わっていたかも」
「褒めてるつもりか？　そういうのは嫌味にしかならないんだよ」
あったかもしれない未来のことを言われても実際にはそうならなかったのだから無意味な仮定である。敢えてそんなＩＦを出す辺りに曹操の余裕が窺える。
「良く喋る。もう少し戦いに集中したらどうだ？」
お返しと言わんばかりにオンギョウキの方から嫌味が飛ぶ。
「あはははははっ！　それは分かっているんだが、自分でも思った様に制御出来ないんだ！　さっきも言った様に生死ギリギリの所を切り抜けたせいで少しハイになってる！　頭の中はアドレナリンとエンドルフィンで満杯だ！」
昂揚していることを認める曹操。オンギョウキはそれに反して負の感情を滾らせていく。主である八坂を誘拐した一味であり、そのことで九重を悲しませてもいる。オンギョウキからすれば存在そのものが不愉快の塊である。それが意気揚々としている様など目と耳を侵す猛毒を振り撒いているに等しい。
今すぐにでも飛び掛かりたい衝動に駆られる。その時、アザゼルから見えざる念の様

なものが飛ばされた。テレパシーなどの特別なことをしている訳では無い。ただ視線に『待て』という意志を込めてオンギョウキを見ただけである。
普通ならば感じ取ることなど出来ないが、オンギョウキはそれを正確に受け取り、理性を働かせてギリギリで踏み止まる。
「そういや曹操よぉ。一つ訊いてない事があったな？」
「何かな？」
「お前らはここで実験をするって言ってたよなぁ？　俺も研究者だから、そういう言葉が気になって仕方ないんだよ」
曹操が饒舌になっているのを利用し、彼らの目的――八坂を利用した実験が何なのかを聞き出そうとする。
「ああ、それかい」
曹操は躊躇することなくあっさりと内容をばらす。
「都市の力と九尾の狐を使って、この空間にグレートレッドを呼び寄せるのさ」
実験の内容に二人は揃って絶句し、声を荒げる。
「正気か、お前っ！」
「馬鹿げたことを……！　八坂様だけでなくこの京都を消滅させるつもりかっ！」
グレートレッドは基本的に温厚である。というよりも最強故にあらゆる事象、全くと

言っていい程関心が無い。グレートレッドが唯一愛するのは己の自由。
そのグレートレッドが自由を侵される様なことがあれば一気に牙を?･くことになり、京都など吐息一つで消し飛ぶことになるだろう。そこに住む人々ごと。
「まあ、打倒グレートレッドは他ならぬうちのボス――オーフィスの願いでもあるからね。正直な話、九尾の狐を使うよりも複数の龍王を使った方が確実だった。ただ、場所が散らばっている龍王を捕獲するのは至難の業だ。居場所も掴めていない龍王も居る。神仏だって難儀する」
都合よくヴリトラの器である匙が居たが、龍王一匹居た所で意味が無いので捕獲は見送られることとなった。
「……なら八坂様はただの代用目的で攫われたのか?･」
オンギョウキの怒気と殺気が一気に膨れ上がる。近くに居たアザゼルは鎧を纏っていてもその気で肌が炙られる様な気分であった。
忍びらしからぬ激しい気配を放つオンギョウキの様子を窺いながら、アザゼルは一つ気になったことを問う。
「わざわざグレートレッドを呼ぶってことは……勝つ算段でもあるって訳か?･」
アザゼルは曹操が対グレートレッド用に何かを用意していることに勘付いていた。でなければグレートレッドを呼ぶなどというリスクの大きなことはしない。

「それは――」

曹操は何かを言い掛けるがすぐに口を閉じ、ニヤリと笑う。

「――これ以上は止めておこう。大総督殿に情報の一欠けらでも洩らしたらたちまち真実まで辿り着くかもしれない。そんなことをしたら仲間から大目玉を喰らってしまうよ」

「ちっ。男は口の回る方がモテるぞ？」

「生憎、そこまで女性には困っていないので」

アザゼルとしてはもっと情報を引き出したかったが曹操がグレートレッドに対して何らかの攻略手段を用意していることは分かった。

「――話はここまでいいか？」

オンギョウキが静かに問う。ほんの少し前までは業火の様な殺気や怒気を纏っていたが、今は全くそれを感じられない。

アザゼルと曹操との会話の中で鎮火したのか？　否、そうではないことはアザゼルも曹操も分かっていた。

オンギョウキは自らの感情を極限まで集束させていた。それも外部の者達が感じ取れない程完璧に。それを解き放った時、如何なることが起こるのか想像も付かない。

（……胃がいてぇ）

今のオンギョウキを見ていると抜刀寸前の刀剣を彷彿とさせ、不自然過ぎる静けさに味方ながら何をするのか予想が出来ずストレスを感じ、胃がキリキリと痛んでくる。これなら先程みたいに分かり易く殺気を出してくれた方がマシであった。

オンギョウキの赤い眼光が曹操を射抜く。

「怖い怖い」

それを受けても腰を抜かすことなく軽口を言ってのける曹操の胆力は凄まじい。しかし、完全に受け流すことは出来なかったのか額から冷や汗を一筋流している。

オンギョウキが音も無く構える。曹操も合わせる様に聖槍をオンギョウキへ向けた。

さっきまでとは違い、今度はアザゼルの方がオンギョウキに合わせる立場となる。オンギョウキの動きを感じ取りながらも曹操から意識を離さない。

場の空気が締まって行き、静寂に満たされていく。小さな物音一つすら大音に聞こえそうな程の静けさ。

アザゼルはその静けさに嫌なものを感じ取り、オンギョウキから数歩程度離れる。その時、アザゼルは微かだが視線を感じた。視線の主はオンギョウキ――であったと思われる。

その視線は勝手に動いたアザゼルを咎めるものではなく、寧ろ感心を含んだものに感じられた。あくまで一瞬のことなどでアザゼルも自信は無かったが。

我慢し切れなくなったのかオンギョウキの押し留めていた殺気が外部へと漏れ出し始める。だが、オンギョウキはまだ動かない。

漏れ出した殺気が音の代わりに場を満たし出しそれが極限まで高まる。

この時、アザゼルと曹操はオンギョウキが動くと自然に思った。

次の瞬間――オンギョウキの体が内側から膨れ上がり、爆発する。

唐突な自爆に曹操は絶句する余裕も無かった。爆発と共に広がる熱波によりオンギョウキを凝視していた目が即座に乾き、痛みと共に眼球を潤す為に反射的に瞼が閉じる。

そして、オンギョウキが発する物音一つ聞き溢さない様にしていたので爆音が曹操の鼓膜を直撃し、大きな耳鳴りとなってそれ以外の音を全て消す。

アザゼルも似たような状態であったが、曹操に比べればまだ症状は軽い。目も見えているし、耳も耳鳴りはあるが聞こえている。纏っている人工神器のおかげもあるが、爆発寸前に離れていたことも理由の一つであった。

アザゼルはオンギョウキが感心を向けた理由が分かった。伝えてもいないのに偶然だが、オンギョウキにとって都合のいい動きをしたからである。同時にあの時動かなければ巻き込むつもりであったのも理解する。

尤もそのことに関してはアザゼルも怒りは湧かない。そういう可能性を考慮した上

でオンギョウキと共闘しているからだ。

（怒りに呑まれていたかと思えば、随分な搦め手を使って来るじゃないか！）

一方で曹操はやられた、と内心悔しがる。何処まで本気で何処まで演技か分からないが、分かり易く自分に注目を集めることで、いつ入れ替わったのか分からない変わり身を爆発させて意表を衝き、まんまと曹操の視力と聴力を封じてみせた。

忍びらしからぬ派手な欺き方。だが、オンギョウキは同時に暗殺者でもある。何が何でも曹操を殺すという強いメッセージがそこに込められていた。

（さあ、何処から来る！　来たのなら……）

堂々と正面か。暗殺らしく背後からか。それとも右か左か。

目や耳でオンギョウキは追えない。ならば、曹操がこの時取った手段は――

（後は天運に任せるとしよう！）

――自らの運を信じて山を張るというもの。思考停止も甚だしい行為に思えるかもしれないが、曹操は本気であった。

英雄というものは力や知の他に運という努力などでは決して手に入らないものに恵まれている。神器を宿した時点で運という条件を満たしているが、曹操はその先を求める。

それは窮地すらも切り抜く強運。

強運に恵まれていなければ、所詮自分はそこまでの存在だったということ。
一世一代の山勘に己の生命を賭し、ここだと心が叫んだ瞬間に曹操は聖槍を振るった。
甲高く響く金属音。腕に伝わる重い感触。曹操は閉じていた目を開けば、背後に向けて振るわれた聖槍が見事にオンギョウキの得物を受け止めていた。
止められたオンギョウキの動揺が伝わって来る。どう考えても止められる道理は無かったのに曹操は防いだ。まさか勘で止めたなど思い至る筈も無い。
「また一つ成長させてもらった！」
聖槍が聖なる気を発する。賭けに勝った曹操の昂りがそのまま聖槍の輝きとなり、破邪の光がオンギョウキに浴びせられる。
その威光は並程度の悪魔ならば何百、何千居ようとも即座に滅する程のものであり、間近で威光を受けたオンギョウキは無事では済まず、声を発することなく消滅する。
オンギョウキに勝った曹操。しかし、その表情に喜びは無く寧ろ動揺が浮かんでいた。
幾ら何でも簡単過ぎる。
（まさか……！）
先程あった昂ぶりが一瞬で冷める。眼光を可能な限り稼働させ、周囲を探る。

視界の端で空間が歪み、人型の何かが動く。
背後ではなくオンギョウキは最初から正面に潜んでいたのだ。
（やはり、あれは分身！）
背筋が粟立つ。客観的に見て絶好の機会であった。だというのにオンギョウキは本体ではなく分身を先行させた。そこに一切の驕りも油断も無い。万が一の可能性を想定しての臆病とすら取れる行動。
だが、結果として曹操の天運に任せた行動は空振りに終わってしまい、再びオンギョウキにチャンスを与えることとなる。
（間に合うか！）
聖なる輝きを放つ聖槍を振り回すと同時に正面へ向き直る。聖槍の放つ光がオンギョウキを隠す隠形法を剥ぎ取り、オンギョウキの姿を引き摺り出す。
全身の筋肉を稼働させ、オンギョウキの振り下ろしに合わせようとする曹操。彼の脳裏に『間に合った』という言葉が浮かび上がる。
しかし、曹操はそこで疑問を抱くべきであった。気付かれてから攻撃に移るまでのオンギョウキの動きが僅かに遅いことを。
まるでわざと曹操に合わせているかの様に。
曹操の聖槍とオンギョウキの得物が衝突する直前、オンギョウキの口から何かが吹き

出される。
吐き出されるのは細かな針。
「っ！」
得物を防ぐことで必死になっていた曹操にそれを防ぐ手段は無く、曹操の瞼、そして眼球部分へと突き刺さる。
死ね、という言葉をオンギョウキは吐かない。その言葉は振るわれた刃が曹操の首を刎ねた時に吐き捨てられるからだ。

◇

「――はっ。見栄えは少し良くなったか？」
ヘラクレスの神器の力を取り込み、爆炎で作り上げた実体の無い二頭によってようやく地獄の番犬らしい姿になったケルベロスに軽口を言う。
「グルルルル！」
ケルベロスはそんな話に付き合う義理など無く、ヘラクレスに向かって走り出す。まだ倒れているロスヴァイセに被害が及ばない様に直線ではなく彼女から離れる様に弧を描きながらの疾走であった。

「吹っ飛べ！」
『超人による悪意の波動』が生成するミサイルがケルベロスへ一斉発射される。ケルベロスの狙い通り、全てのミサイルはケルベロスに殺到する。
「ガアアアアッ！」
ケルベロスの三つの口が開く。中央の口からは炎が吐き出され、左右の口からは衝撃を伴った炎――爆炎が放たれる。
業火で焼かれたミサイルはケルベロスに着弾する前に爆発。その爆発は誘爆を引き起こして周囲のミサイルも巻き込む。神器の力を取り込んだことで吐かれた爆炎は、まず衝撃によってミサイルを変形させて弾道を狂わせ、後から来る炎によって爆発を起こさせる。
「ちぃっ！」
ヘラクレスは舌打ちをする。ケルベロスに全ての照準を向けたせいでミサイルが密集状態となり、誘爆が起こり易い状態になってしまっていた。そのせいでケルベロスの方は碌に狙い定めず容易にミサイルを打ち落としてしまう。
次弾をすぐに発射しようと考えるヘラクレスであったが、それよりもケルベロスが間合いを詰める方が早い。仮に発射しても神器の性質上ある程度の射程が無ければ意味が無い。元々大雑把な神器だが、禁手化によって更に大雑把になってしまっている。

その間にケルベロスは自らの間合いまで接近しており、ヘラクレスへ牙を?いて飛び掛かる。
「グルアアアッ!」
「させるかよぉぉ!」
ケルベロスは頭部を噛み砕こうとしていたが、腕を間に挟み込まれてしまったので代わりに腕へ噛み付く。
腕は手甲の様に神器に覆われていたが、ケルベロスの牙はそれを噛み砕き鍛え抜かれたヘラクレスの生身の腕まで牙を通す。
「くっ!　いてぇじゃねぇか!　犬ッコロ!」
筋肉を引き締め、牙が深く侵入するのを防ぐケルベロス。すると、真ん中の頭部だけでなく左右の爆炎の頭もまたヘラクレスの腕へ噛み付く。
「グルルルル!　モラッタモノヲ返スゾ!」
「何!」
爆音と共にヘラクレスの腕に衝撃が駆け抜ける。
「がはっ!」
腕を伝い、全身を駆け巡る強い衝撃。体の内部から揺さぶられる。痛みもあるがそれよりも経験したことのない不快感がヘラクレスを襲う。

ケルベロスが捨て身で取り込んだヘラクレスの禁手の力。それを言葉通りヘラクレスの体内へと送り込んでおり、ヘラクレス自身が自らの放ったミサイルの破壊力を体感することとなった。

桁外れに頑丈な肉体を持つヘラクレスでも染み渡る様に広がる神器の力には苦痛を覚える。そう何度も耐えられる様なものではない。

「調子に乗るんじゃねぇぞ！」

ヘラクレスはもう一方の腕に束にしたミサイルを生成する。これだけの至近距離だとヘラクロス自身にも被害が及ぶが彼は構わなかった。それよりも『超人による悪意の波動』のミサイルを直接ケルベロスへ叩き込むことを優先する。

「吹っ飛びやがれっ！」

弾帯の様になったミサイルをケルベロスの胴体へ撃ち込もうとした瞬間――

「させません！」

悪魔の翼を羽ばたかせたロスヴァイセが突っ込み、ヘラクレスの腕にしがみつく。

「てめえっ！」

ヘラクレスはロスヴァイセを振り解こうとするが、ヘラクレスの腕は真横に伸ばされたまま動かない。ヘラクレスの怪力がロスヴァイセの細腕の力に抑え込まれている。

「私は、『戦車』です！　力も、結構あるんですよ……！」

それでもロスヴァイセ一人だったのならヘラクレスを押さえつけるのは無理だっただろう。だが、片腕だけならロスヴァイセの力でも辛うじて止められる。
「この――ぐあっ！」
ヘラクレスの体内を爆発の衝撃が貫く。ヘラクレスの目が赤く充血し、鼻血が垂れ出す。体中の毛細血管が衝撃によって切れたことによるもの。直接噛まれている腕など既に内出血でどす黒く変色し出している。
ヘラクレスは穴という穴から血を噴き出して絶命することとなる――このまま行けばの話だが。
「く、くくく……はははははっ！」
ヘラクレスはこの逆境に於いて笑う。どうしようもなくなった諦観による笑いでは無い。声に覇気が満ちている。
「甘く見てたぜぇ。お前らのことを！　はははははは！」
自らを戒め、これから起こること全てを自分の甘さが招いたことと受け入れる。
ヘラクレスの笑いは自らを鼓舞する為のものであった。
その決意はケルベロスとロスヴァイセにも伝わって来る
「さあて……ド派手に行こうじゃねぇかっ！」
ヘラクレスの体からミサイルの弾頭が隆起する。しかし、それらは発射されることは

なく、ヘラクレスの体に付けたまま輝き始めた。
ケルベロスは喰らい付いたままロスヴァイセの方を見る。ロスヴァイセは覚悟を宿した瞳でケルベロスを見返す。それを答えと受け取り、ケルベロスもまた離れることなく攻撃を与え続ける。
「一緒に吹っ飛べぇぇぇぇ！」
最初は光。その後に音。そしてそれを追うかの様に衝撃波が発生し、巨大な爆発が生まれる。
ヘラクレスの覚悟を形にした盛大な自爆。周囲の木々や建物が余波で倒れていく。
大きなキノコ雲が空高く昇った後、爆心地では深く、広いクレーターが出来上がっており、その中心ではヘラクレスが片膝を突いていた。
「はあ……はあ……一つ、勉強させて、貰ったぜ……！」
ヘラクレス自身の頑丈さもあったが、『超人による悪意の波動』を発動した際に纏っていた神器はミサイルの威力をかなり軽減させられるのを身を以って知った。いくらヘラクレスでも試しで自分の禁手で自分を攻撃する様な真似はしなかった。だからこそ今に至るまで知らなかったのだ。代償として神器はほぼ壊れてしまい、残骸が体に張り付いているだけの状態になっている。
しかし、それでも自爆でのダメージはそれなりにあり、体の表皮が剥がれ落ちた箇所

や抉れていたり裂けていたりなどし全身から血が滴っている。ミサイルの爆発に巻き込まれて形が残っていることを考慮すれば軽過ぎるぐらいだが。

大量出血する中でヘラクレスは視線を動かす。数メートル離れた所でロスヴァイセが横たわっているのを発見する。ヘラクレスの自爆を至近距離から貰ったというのにこちらも形を留めている。悪魔の駒の『戦車』は力と耐久力を上げることを知っていたが、それでもダメージが少ない様に思えた。

ロスヴァイセを警戒するヘラクレス。しかし、視線の端に銀色のものが映り意識が反射的にそちらへと引っ張られてしまった。

首を動かし視界の中心にそれを映す。目当てのケルベロスは伏せの様な姿勢で動かずに居た。こちらもまた五体満足な状態である。

「ちっ……どいつもこいつも頑丈だな」

自分はまだしもケルベロスとロスヴァイセが四肢の一つも捥げていないのはヘラクレスからすれば少々プライドが傷付く結果であった。神滅具には敵わないかもしれないが、通常クラスの神器の中では上位の破壊力を有していると自負しているヘラクレスとしては面白くない結果である。

「――まあ、いいか。そんだけ歯応えがあったってことだ」

相手の実力を認める一方で自分を慰める様な独り言を零すとケルベロスの方へ向

かっていく。
宣言通りにケルベロスの毛皮を剥ぐつもりであった。その途中、何かに足を取られ、体がよろける。
「おっ……」
視線を下ろす。普段ならば絶対に引っ掛からないだろう小さな窪み。それにさえ見落としているということは、自分が思っている以上に消耗していることを思い報せる。
誰も見ていないが無様を晒したことに苛立ち舌打ちするヘラクレス。
下げていた視線を上げ――
「――ああっ？」
――飛び掛かって来ていたケルベロスの存在にようやく気付いた。
「があっ！」
咄嗟に後方へと下がるが、振り下ろされたケルベロスの爪先から集束された魔力が飛び、前脚の長さ以上の間合いを持っていたことからヘラクレスの肩から腹部に掛けて袈裟切りにされ、四本の深い傷が刻まれる。
「て、てめぇ……！」
鋼の肉体から足元を一瞬で血溜まりにする量の血が噴き出る。
「グ、グルルルル……！」

ケルベロスはヘラクレスを切り裂くと共に碌な着地も出来ず、地面へ側面から落ちて動かなくなる。
「まだ、意識があったのかよ……！」
よろよろと意思に反して後退するヘラクレスの足。うつ伏せになって気絶していたと思っていたが、あれは密かに四肢へ力を溜めていたのだと今更気付かされる。
「やるじゃねぇか……！」
ヘラクレスはふらつく足に力を入れて踏み止まると、神器を発動しようとする。だが、その瞬間、抉られた傷から勢い良く血が飛び出した。
「くっ……！」
大量の失血によりさしものヘラクレスも膝を突いてしまう。
神器が発動しない。神器は使い手の強い意思に反応する。意識が朦朧とし始め出したヘラクレスでは意思を強く保てない。
（血が足りねぇ……！）
鼓動の速さがおかしくなる。血流が弱まり、脳へ送る血液も減る。ヘラクレスの闘志はまだ尽きていないが、体はそれに付いてけない。
（まだ！　俺は……！）
弱る体を精神力で無理矢理動かそうとした時、ヘラクレスの足元に霧が発生する。

　自分の良く知るそれにヘラクレスは瞠目し、叫ぶ。
「止めろ！　ゲオルク……！　俺は――」
　最後まで言い切ることを許さず、ヘラクレスの意思を無視して霧は彼を包み込み、霧が消えるとヘラクレスも居なくなっていた。
　ゲオルクの『絶霧』による転送。仲間の命の危機を察しての回収だったのかもしれないが、結果としてこの戦いの決着は付かずに終わってしまった。
「グルルル……生キテ……イルカ……？」
「はい……何とかですが……」
　ケルベロスの擦れた声にロスヴァイセがか細い声で応える。
「礼ヲ言ウ……アノ時……オマエノ魔法ガナカッタラ……ヤラレテイタ……」
　ヘラクレスが自爆する直前、ロスヴァイセは自分とケルベロスに防御魔法を施していた。それにより爆発のダメージをある程度軽減することができ、ケルベロスも最後の一撃を与える為の余力を残せられた。
「そう言って……貰えると……勉強した甲斐が……あります……」
　ロスヴァイセは微かに微笑んだ。
「でも……残念です……イッセー君達の……所へ……行けそうに……ありません……」
「グルルル……ヤルダケノコトハヤッタ……」

「そう……ですね……」
ロスヴァイセは限界を迎え、目を閉じて意識を失う。
ケルベロスの方も瞼が重くなり、意識に闇が掛かって来ていた。ヘラクレスとの戦闘によるダメージや神器の力を吸収するという無茶のツケが回って来た。
「後ハ信ジルシカナイ……スマン……」
指一本動かすことの出来ないことを無念に思い、シンへの謝罪の言葉を残しながらケルベロスもまた気絶する。
先程までの激しい戦いが嘘の様な静寂。それが戦いの終わりを告げる音無き合図であった。

修羅、合流

レオナルドと彼が創造した魔人デイビットを倒した後に木場とゼノヴィアと合流することが出来たが、彼らもまた強敵に苦戦を強いられている最中であった。

相手はシンも一度だけ戦ったことがある英雄派のジークフリート。初戦の時と違い、背中から銀の鱗に覆われた第三の手が生えており、両手の魔剣と合わせて三刀流になっている。

ジークフリートの前方には木場とゼノヴィア。後方をシンに挟まれおいそれとは動けない状態となっている。

「こういう展開――僕は好きだよ」

好戦的というよりは女性を口説く時の様な甘い笑みを浮かべつつ、ゆっくりと足を動かして体の向きを変える。前後を挟まれる形から左右を挟まれる形にしたジークフリート。状況はあまり変わってない様に見えるが、シンに対して背中を向け続けることは危険というジークフリートの判断からの行動である。

少々とはいえジークフリートが不利であった状況を変えられるのをみすみす見逃してしまった三人。しかし、それも仕方のないこと。ジークフリートはおいそれとは動け

ないと前述したが、シン達もまた軽率な行動が取れない状態でもあったのだ。
範囲攻撃は仲間を巻き込むのでまず出来ない。そうなると今の彼らでは近接戦を選ばざるを得ない。だが、ジークフリートの剣の腕は比類なきもの。そこに『龍の手』の能力も加わり、余計厄介なものとなっている。
相手の隙を窺い、いつでも動ける様に肉体の緊張と弛緩の塩梅を整え、意識を集中させる。
すると、全員が同じ様な行動をしている為、場には沈黙が訪れる。離れた場所で戦っているジャンヌとルフェイの戦闘音が良く聞こえた。
このままでは埒が明かないと誰もが思ったが、拮抗している状況下でそれを崩す真似をするのは胆力が必要となる。分かっていても中々行動には移せない――と思っていた。
「その腕は何か能力があるのか？　木場？」
「えっ！」
沈黙を破ったのはシンがジークフリート越しに投げ掛けた木場への質問であった。
いつまでも黙って睨み合っているのも馬鹿馬鹿しいと感じたシンは、膠着状態を崩して狙われるかもしれないリスクを承知の上で、敵の前で堂々と情報交換を始めた。
いきなりの質問に木場だけでなく隣のゼノヴィアも目を丸くしている。

「え、えっと……あれは『龍の手』、らしいよ。通常とは異なる亜種みたいだけど……」
　木場の方は戸惑いながらもシンへの質問に答える。
「そういうことか」
『龍の手』の能力はシンも知っている。力を倍にするというシンプルな能力だが、ジークフリートはそこに文字通り手数を増やす能力も足されている。
「それだけじゃない。その男、フリードを着ているぞ！」
　ゼノヴィアからも新たな情報が齎されるが、内容が内容なだけにシンは『急に何を言い出すんだ？』と言わんばかり眉間に皺を寄せた。
「神器以外にも鎧代わりに特注の人工神器を纏っているんだ、彼は。……その材料はフリードらしい」
　木場がゼノヴィアの情報の補足を入れる。シンの眉間の皺は更に深くなった。
「悪趣味だな」
「ああ、僕もそう思うよ」
「一心同体になった気分はどうだ？」
「気色悪いから、そういうのはやめてくれないかな？」
　笑みを消して顔を不愉快そうに歪める。本気で嫌がっている様子。

纏っている人工神器が鎧代わりと言った事、前にオンギョウキがジークフリートと戦った際に刃が通らなかったと話していたので相当の防御力を持っている。
ドーナシークと融合したフリードが異常な耐久力があったことを思い出す。人工神器に加工することでその恩恵を受けているのだろう。
「そうだ。こっちからも質問は良いかい？」
ジークフリートの問いに対し、シンは無言であった。ジークフリートはその無言を肯定と解釈する。
「君の相手をした男の子――レオナルドっていう名なんだけど――彼はどうしたんだい？　倒したのかな？」
「殺した」
シンの何の感情も無い一言に木場とゼノヴィアはギョッとする。仲間の口から子供を殺したという発言を聞けば無理もない反応であった。
しかし、それとは対照的にジークフリートは肩を揺らして笑い出している。
「あははは。敵はともかく味方を動揺させるのは本末転倒じゃないのかい？」
シンの発言を余裕で流すジークフリート。そもそもシンが言っていることは嘘だと見抜いている様子であった。
「信じていないようだな？」

「ああ。そう簡単には死なないよ。彼は色んな意味で良い子だからね」
仲間の生存を心から信じている。敵も敵なりに信頼関係を結んでいる。
「――そうか。騙せなくて……」
シンは極めて自然な流れでジークフリートを左眼で凝視する。相手をただ睨んでいる様に見られるが――
「残念だ」
その言葉を引き金にしてシンの左眼から普通では反射出来ない速度で光線が放たれた。
視線をそのまま攻撃に転じさせる最速の攻撃。まず反射的に回避するのは不可能――の筈だった。
螺旋の魔力が蛇の様に絡まる光線の射線状、そこにはいつの間にか魔剣ノートゥングが置かれてあった。
エクス・デュランダルの大出量の聖なる気すらも切断することが可能な脅威の切れ味の前には射る筈であった光線が自ら真っ二つに割かれる。
割かれた光線は建物の壁や木の幹を綺麗に貫いた後に消えた。
当てるつもりで放った攻撃を予知されていたかの様に防がれたことにシンは僅かに瞠目するが、ジークフリートも似たような表情をしており何が起こったのか分からない

といった様子。木場とゼノヴィアも同様であった。
その表情を見て推測出来る。ジークフリートはシンの光線を分かっていて防いだのでは無い。自らの勘、虫の知らせに従いほぼ無意識の内に魔剣を動かしたのだ。
多くの修羅場を潜り抜けてきたからこそ許される予知染みた直感力。それがこの場において遺憾なく発揮されたのだ――シンにとって都合が悪いことに。
ノートゥングの剣身をまじまじと見た後、ジークフリートは驚いた表情からおどけた様な表情へと変える。
「普段の行いが良かったからかな？」
ジークフリートの下らない冗談に対し、シンは舌打ちをするとタイミングを計るのを止め、走り出す。
そうなると必然的にジークフリートの意識はシンの方へと傾く。それが分かったのか少しタイミングをずらして木場達も動き出した。
シンは走る最中に息を大きく吸い込む。そして、瞬間にそれを冷気に変換してジークフリートに向けて吐く。
視界一杯広がっていく白い靄。巻き込まれれば即座に全身が凍結するだろう。
ジークフリートは魔剣バルムンクを氷の息へと突き出す。バルムンクの剣身に螺旋状のオーラが発生し、吐き出された冷気が螺旋のオーラに全て絡め取られる。そして、

それを木場達に向けて振るう。
シンの力を利用した氷結の渦が木場達を凍結させ削り取る為に襲い掛かる。
だが、目の前の脅威に対して木場とゼノヴィアの走る速度は緩まない。
「聖剣よ！」
二本に変形しているエクス・デュランダルの刃を交差させ、聖なる気を合わせることで相乗効果により破壊力を高める。
剣身が聖なる気で発光すると同時に交差させたエクス・デュランダルを振り抜く。木場達を呑み込む筈であった氷の渦は？の字に斬り裂かれ霧散した。
（怯まないとは流石）
難無く攻撃を打ち消されたことに驚くことはせず、足を止めすらしなかったことを逆に賞賛する。
（こっちもね）
同じくシンの方も速度を緩めていない。自分の攻撃をまんまと利用されたことに多少なりとも動揺するかと思ったが、微塵も影響が無かった。他者に対してドライなのか、それともこれぐらい切り抜けられるという仲間への信頼なのかは分からないが、厄介なことには変わりなかった。
ジークフリートは一笑するとノートゥングを鞘に収め、別の魔剣を抜く。抜刀時の速

度も速いが納刀する時の速度も速く、一瞬で魔剣を交換している様な錯覚を起こす。
同時に攻めて来る三人に対し、ジークフリートが行ったのは新たに抜いた魔剣の剣先を地面に着け、その場で一回転すること。
ジークフリートを中心にして真円が地面に刻み込まれる。
「ダインスレイブ。人間嫌いでいつも苦労させられるよ」
刻まれた真円から白い煙が上がり始めたかと思えば、地面を下から突き破って氷の塊が発生する。
霜柱の様な現象だが、発生する氷はどれも氷柱の様に鋭い凶悪な形状をしており、シン達を貫く為に成長する様に大きくなっていく。
自らが突っ込む様な形になり、シンは即座に両手から炎を発して一つに重ね、熱線として繰り出そうとし、木場もまた対氷用の魔剣を一瞬で創造し、ゼノヴィアもエクス・デュランダルにまだ残っている聖なる気を飛ばそうとした。
だが、攻撃態勢に入った瞬間、冷気ではない悪寒が三人を襲う。その感覚を信じて三人はここで初めて速度を緩め、身を屈ませた。
音も無く無数に生えた氷柱が斬り飛ばされ、シン達の頭上を何かが通過していく。
ずれ落ちた氷柱の向こう側ではジークフリートがノートゥングを振り抜いていた。
「あれ？　残念。避けられたか」

ダインスレイブが作り出した氷柱を目隠しにしてノートゥングの固有能力である鋭すぎる斬撃を放つという合わせ技。もし、避けなければ上半身が氷柱と同じく斬り飛ばされている所であった。

だが、シン達もただ避けるだけでは無い。

ゼノヴィアは身を屈めると同時にエクス・デュランダルを地面に突き刺し、聖なる気を高めていた。

「お返しだ！」

ゼノヴィアは立ち上がりながらエクス・デュランダルを振り上げる。高められた聖なる気が放出され、地面を砕きながらジークフリートへと伸びて行く。

しかし、地面を掘りながら進んでいるせいで斬撃として放つ時よりも速度は落ちており、ジークフリートの速度があれば余裕を以て避けられてしまう。

「その程度――」

ジークフリートが聖なる気を避けようとした時、ジークフリートは体を仰け反らせて硬直する。

衝撃が体を突き抜け、筋肉を痺れさせ、ジークフリートの瞬間的な速さを奪う。今のジークフリートは感電をしていた。

電気がなければ感電などしない。その電気の発生源はシン。彼はジークフリートが

作り出した氷柱を利用し、それに触れた状態で放電し、氷柱の発生源に立つジークフリートに電気を流し込んだのだ。

電撃で動けない所に聖なる気が命中。周囲の氷柱を破砕する白光が生じる。

だが、すぐにジークフリートは白光を突き破って飛び出す。

衣服が裂けており肩や胸元が露出している。皮膚は人のものではなくドラゴンを彷彿させる鱗状になっている。電撃や聖なる気に反応し、纏っている人工神器がそれに耐える為の形態へ変えていた。

ジークフリートが降り立った所に木場が攻め込む。

「はああっ！」

聖魔剣二刀流で鱗に覆われていない首を挟み込む様にして振るう。態勢を立て直す前に狙った攻撃だが、同じくグラム、ノートゥングの二刀流でそれを防ぐと『龍の手』が握るバルムンクが剣身を螺旋の力で覆いながら振るわれる。

触れただけでも頭部が削り取られるであろうバルムンクの斬撃。しかし、それは木場には届かない。時間差で創造した聖魔剣が撃ち出され、『龍の手』の手首を貫く。

ジークフリートは微かに表情を歪めた。神器の手であるが感覚は繋がっている為、貫かれた痛みがジークフリートの脳を焼く。

本当なら激痛の筈がジークフリートは持ち前の精神力で痛みを捻じ伏せ、聖魔剣が刺

さったまま『龍の手』を振り下ろす。
ジークフリートの精神力は大したものと言える。だが、それでも痛覚がある以上痛みに対して肉体は反応してしまう。この時、ジークフリートはほんの一瞬だけ動きを止めてしまった。
その隙を彼は見逃さない。
「ごほっ！」
ジークフリートの胴体がくの字に折れ曲がる。脇腹部分には拳サイズの凹み、そして拳を振り抜いたシンの姿。
殴り飛ばされるジークフリートであったが、その途中でガクンと動きが止まる。シンがジークフリートの袖を掴み、引き寄せる。
ダメ押しと言わんばかりのもう一撃がジークフリートの鳩尾に刺さり、ジークフリートは目を見開く。
人工神器で覆われている肉体を貫く痛みに苦しみが重なる拳。脳が痛覚でショートし、冷や汗をダラダラと流しながらも思考だけは途切れさせなかった。
（かなりの威力を秘めているとは分かっていたけど、ここまでとは……！）
鋼の肉体を持つヘラクレスがシンの拳で苦しまされた光景はジークフリートも見ている。実際に体験してみて分かったが、シンの拳は単純な怪力だけでなく不可思議な力

を秘めている可能性があった。でなければ並大抵のことではビクともしない人工神器を貫いてここまでダメージを与えることなど出来ない。

口から内臓が零れ出そうな重さに耐えるジークフリート。シンはもう一撃与えようとするが、運悪く掴んでいた袖が千切れてしまう。

引き寄せることに失敗するシン。偶然だが運良く解放されたジークフリートはすかさずシン達から離れようとする。

「聖剣よ……！」

ジークフリートの耳に届くゼノヴィアの声。彼女はジークフリートの移動先を予想し、そこで待ち構えていた。

二刀流であったがエクス・デュランダルを一本に戻し、柄を両手で握り締めている。スピードからパワーへと切り替えたゼノヴィアの戦闘スタイルに見合った構え。

振りが遅くなり、手数も減るのでもしジークフリートに振れば回避と共にカウンターを入れられるだろうが、シンの拳を二度も受けてダメージを負っていること、離れることに専念し過ぎてゼノヴィアの存在を失念している今のジークフリートならば当てることが出来る。

ジークフリートは咄嗟に三本の魔剣を重ね合わせて防御しようとするが、その時点でゼノヴィアはエクス・デュランダルを振り抜いていた。

剣身から放出される膨大な量の聖なる気が伸び、ジークフリートを斬るというよりも？み込んでしまう。
そのまま聖なる気はジークフリートごと彼方まで飛んで行くかと思った矢先、無数の斬撃が聖なる気内側から飛んでいく。
柱の様になっていた聖なる気は、斬撃によってバラバラにされ、大小様々な塊となって落ちていく。その中に紛れてジークフリートも居た。
「流石に、効くね……！」
聖なる気を大量に浴びたせいか露出している人工神器部分が焼け爛れており硬質の鱗も簡単に？がれ落ちている。それに比べると生身の部分は軽傷であった。
人工神器を前面に出してエクス・デュランダルの斬撃を防いでいたが、デュランダルに加えて六本のエクスカリバーが生み出す相乗効果は絶大なものであり、絶大な防御力を誇るフリード素材の人工神器でも大きく損傷してしまった。
この人工神器は生きているので暫くすれば再生するが、それまでの間は防御力も格段に落ちる。
その間、相手が律儀に待っている――
「――筈なんてないよね」
視界全部に広がる聖魔剣の数を見て、ジークフリートは思わず苦笑してしまった。と

ことんやるという相手の意思がこれでもかと体現されている。
無数の聖魔剣が矢の如く撃ち出される。
「っ！」
少し動くだけで殴られた箇所が制限でも掛ける様な鋭い痛みを生み出し、ジークフリートの動きに枷を付けようとする。
身のこなしに比重を置いて聖魔剣を捌くことは出来ないと早々に理解したジークフリートは、逆にその場で踏み留まり、三刀流によって全て弾くことを決める。
聖魔剣がジークフリートの間合いに入った瞬間、けたたましい金属音と共に弾かれた聖魔剣が四方へと飛び散る。
「くっ！」
流石のジークフリートもこの逆境に笑顔を浮かべている余裕は無く、力を緩めない様に奥歯を噛み締め続ける。
桁外れの動体視力を持つジークフリートの両眼が一時も停止することなく左右上下と動き続けて聖魔剣の軌道を読み取り、両手と『龍の手』が残像が生じる程の速度で振るわれ続ける。
ただ弾くだけでは聖魔剣の数に押される。時折弾いた聖魔剣が別の聖魔剣にぶつかり、軌道を変える調整と計算をする妙技を混ぜて魔剣を振り回す。

時には取捨選択も必要であった。致命傷にならないと判断すれば最低限の回避で済ますなどをする。ジークフリートの手の甲や頬、太股や脇腹などに浅い裂傷が次々と出来る。人工神器が完全ならばある程度の聖魔剣は体で受け止めることも出来たが、エクス・デュランダルのせいでそれもまだ出来ない。

裂傷が出来る度に熱の様な痛みが情報として脳に送られるが、既に刻まれているシンの拳痕の痛みに比べれば蚊の刺す様なもの、集中していれば気にもならない。

横殴りの雨粒を全て斬り裂く様な神速の剣捌きを続けるジークフリート。聖魔剣の数は限られているので時間にすればほんの数秒程耐えれば凌ぎ切れるが、極限まで集中している彼にすればその数秒は何倍にも引き伸ばされた感覚になる。

いつ終わるのかと頭の中で考えた時、彼の耳にある音を捉えた。

風切り音。それも音が段々と近付いて来ている。その音に不穏なものを感じ、ジークフリートは余裕の無い状況下で眼球を動かし、頭上へ目を向ける。

「――ははは」

ジークフリートの口から思わず笑いが零れ出る。頭上から山なりの軌道を描きながら追加の聖魔剣が大量に降り注いで来る光景を見て、木場の容赦無さに笑うしかなかった。

聖魔剣による十字砲火。今でも限界に近いジークフリートへのダメ押し。温厚そう

に見えて実は徹底していることに好感すら覚えてしまう。
（アレを使うか？　いや、時間が足りない）
切り札を使うことを考えたが、今の状況でそれを使えば動きを止めることとなってしまい、使う前に聖魔剣で針鼠にされてしまう。
足を止めて捌くのも上からの攻撃で限界。多少のダメージは覚悟で動くしかない。
ジークフリートは決断と共に眼前に迫っていた聖魔剣を弾くと後方へ跳躍する。足に力を込め、それを解放する瞬間に殴られた部分から電気の様に痛みの信号が走った。
地面の上を滑る様な低空且つ速い跳躍。だが、それはジークフリートが想定していたよりも遅く、低いもの。痛みのせいで無意識にブレーキが掛かってしまっていた。
本来ならば一足で上空の聖魔剣の射程から離れられる筈が、そのせいでもう一度跳躍する必要が出来てしまう。
己の失態に内心で舌打ちをしながらも追撃してくる聖魔剣を弾く。ジークフリートが跳んで間も無くして上空の聖魔剣が地面へと降り注ぎ始めた。
ガガガガ、と凄まじい音を立てながら地面へとさっきまでジークフリートが立っていた地面へ突き刺さっていく聖魔剣。自由落下した聖魔剣はどれもが弾かれることなく地面に滑り込む様にして刺さっていき聖魔剣の切れ味の良さを分かり易く見せる。
地面に無数に突き立てられていく聖魔剣だったが、一箇所に集中するのではなくジー

クフリートを追う様に落下点が移動し出す。
ジークフリートが避けることも想定済みであり、徹底してジークフリートを追い詰めていく。
（目が足りない！　手も足りない！）
移動することで再び起こる痛みにより僅かの間だけだが反射的に体が硬直を起こす。コンマ数秒間だけの硬直だが、ジークフリートはそれが命取りになる世界に置かれているのだ。
弾き損ねた聖魔剣がジークフリートの肩を掠める。聖魔剣が通り過ぎた後に浮かぶ赤い線。次の時には開いて傷となり、赤い血が一気に流れる。人工神器の薄い箇所であった為に生身まで届いてしまっていた。しかし、もし人工神器の防御がなければ肉どころか骨まで斬られていてもおかしくない。
遂に受けてしまった大きな傷。それは確実にジークフリートの身体能力に悪影響を及ぼす。
肩の傷のせいで魔剣を振る速度が鈍り、理想の動きとの齟齬が生じる。
本当ならば振り抜いている筈であった魔剣が遅れたことで弾く方向が変わり、弾かれた聖魔剣が別の聖魔剣に接触することで予期せぬ軌道となり、ジークフリートの大腿部がそれによって抉られる。

腕の動きの次は足の動きを鈍らされた。傷は新たな傷を生み出す連鎖によってジークフリートは肉体だけでなく卓越した身体能力も削られていく。

赤に染まっていく体。しかし、ジークフリートは己のその姿を無様だとは思わない。敵だろうと自分だろうと血に染まるのが英雄というものである。ましてや、自分はジークフリートの子孫。血に染まるのはある意味で通るべき道でもあった。

（まだだ……！　このぐらい切り抜けられる！）

土壇場に於いてもジークフリートの心は折れることは無かった。耐え抜くことでその先にある勝機を掴み取ろうとしている。

そして、その時は来る。豪雨の如く降り注いでいた聖魔剣であったが、突如として空白が生じた。攻撃が止んだのである。

猛攻を凌ぎ切ったジークフリート。この時、彼の心には終わったという微かな安堵と超えたという喜びが生まれた――戦いの最中で抱いてはいけないと分かっていながらも。

止んだ聖魔剣の後、ジークフリートが見たのはこちらへと走り寄って来るシンと木場。木場が先頭でシンはその数メートル後ろに付いていた。

遠距離が駄目だったので接近戦に切り替えたのかと考えるジークフリート。だが、すぐに違和感に気付く。それなら居るはずのゼノヴィアの姿が見当たらない。

ゼノヴィアは走る二人とは違い、エクス・デュランダルを振り被った体勢で立ち止まっていた。
ゼノヴィアの前には宙に浮かんだ状態の聖魔剣。
「はあああああっ！」
気迫の籠った声と共にゼノヴィアはエクス・デュランダルを振るう。
柄頭をエクス・デュランダルが叩き、聖魔剣が閃光と共に打ち出される。
一般人が見たら一筆書きの光が伸びて行く光景であり、まず肉眼で捉えることは不可能。しかし、この場に於いてはその不可能を可能にする人物が揃っていく。
音よりも速く気配がシンの直感をくすぐる。背後から迫って来るそれに対してシンは右足に魔力を溜め込むと走る勢いのまま急旋回。シンの体勢で半身となると同時に聖魔剣が通過。少しでもタイミングが遅かったらシンの背中が貫かれていた。
シンは一切の恐怖や焦りを排した表情のまま淀みない動きで右足を振り上げると、聖魔剣の柄頭に魔力を込めた後ろ回し蹴りを打ち込み加速させる。
とんでもない脅威が迫っているにも関わらずジークフリートの意識は木場の方に向けられていた。
ゼノヴィア、シン、木場が一直線に並んでいた為にそれぞれが壁になって隠していたこと。そして、聖魔剣の雨を潜り抜けたことでジークフリートの緊張が緩んだこと。こ

の緊張感の緩みは意図して生ませたものであり、押して駄目ならば引いてみよという考えから。

最後に迫って来ているのが木場だということ。木場の実力は打ち合いによって把握しており、ジークフリートは今の自分の方が木場よりも上であると認識していた。つまりは木場のことを舐めているのである。

木場は二刀流の聖魔剣を構え、斬りかかろうとする。当然ながらジークフリートはそれを迎え撃とうとする。

「――油断したね」

木場の発した言葉がジークフリートの耳に届くのと意味を理解するのは少し後のことであった。

聖魔剣を振るうかと思った瞬間、木場は前のめりになり上体を可能な限り低くする。

攻撃ではなく意味不明な行動をとる木場にジークフリートは一瞬だけ混乱したが、すぐにその意味を身を以って知る。

光がジークフリートの目に映ると同時に光はジークフリートの肩に命中し、刺したジークフリートごと後方へ飛んで行く。阻む様に並ぶ建物や木々、壁など全て薙ぎ倒し速度を緩めることすらない。

木場の体を張った囮にジークフリートは回避する余裕さえなく音速で彼方へ飛ばさ

れていく。こうしてジークフリートは木場を舐めた代償を自ら払うこととなった。
「……ふう」
木場は額から流れる汗を拭う。その汗は重圧からの解放と疲労によるものであったが、爽快感もあった。
一連の連携の最大の功労者は木場であった。大量の聖魔剣を創造し、尚且つ操作することでこちらの連携を隠し、最後は下手をすれば自分が犠牲になっていたかもしれない状況で見事に囮の役目を果たした。最高速度に達した聖魔剣をギリギリまで引き付けて避ける芸当など『騎士』であり使い手である木場にしか出来ない。
一息入れる木場の傍に遅れてシンがやって来る。疲労している木場に何か一言掛けるのかと思いきや、シンの目はジークフリートが吹き飛ばされた方向に向けられていた。
木場は確かな手応えは感じていた。しかし、信頼出来る仲間のその眼差しを見ると嫌な予感を覚えてしまう。
とある台詞が喉まで出掛かっていたが、その台詞を言うと不安が現実になってしまいそうで敢えて言わずに――
「やったのか？」
最後方に居たゼノヴィアも現れ、ジークフリートを倒したかどうかを尋ねる。木場が

言いたくても言えなかった如何にもな台詞をあっさりと言うゼノヴィアを木場が無言で見つめる。シンの方もゼノヴィアを無言で見つめていた。同じ様な心境だったらしい。

「何故そんなに私を見つめる？　顔に何か付いているのか？」

当の本人は視線の意図に気付くことなく見当違いなことを言う始末。

尤も、あくまで不吉だから言わないだけのことなので実際にそうなるかは分からない。

『ッ！』

――急速に膨れ上がる大きな気配を感じ取るまでは。

足音が聞こえて来る。弱々しいものではなくしっかりとした足音が。

未だに倒壊による埃が舞う中でその埃の中に人の姿が浮かび上がる。しかし、それは先程のものとは大きく異なっていた。

「ここまで追い詰められたのは初めての経験だよ」

その声に弱った気配が感じられない。

「いい経験だ……と言いたい所だけど中々に苦い経験でもあるね。出来れば二度も味わいたくはない」

舞う埃の中で一瞬の煌めきが放たれかと思えば、内部から放たれる突風により埃は消

し飛ばされた。
　埃を剣圧で吹き飛ばしたジークフリート。そして、彼が構える六本の剣。腕三本なのに剣が六本だとおかしく思うかもしれないが間違っていない。
　ジークフリートは新たに銀色の腕を三本生やし六刀流となっているからだ。
「これが僕の『阿修羅と魔龍の宴（カオスエッジ・アスラレヴィッジ）』。『龍の手』の禁手さ。元が亜種だったせいで禁手も亜種になった訳だ。能力は至って単純――腕の分だけ倍化するだけさ」
　丁寧に能力を説明するジークフリート。能力がシンプル故にばれても何の支障にもならないからである。確かに非常に厄介な能力ではあるが、今の三人はジークフリートの六本腕ではなく別の方を注目していた。
　ジークフリートの肩を突き刺した筈の聖魔剣。だが、おかしなことにあれだけの加速を加えて貫き尚且つジークフリート自身も凄まじい勢いで吹き飛ばされたにも関わらず、刃先が数センチしか食い込んでいない。
　突き刺さった箇所を良く見る。大きな裂け目が出来ているがその割には流血していない。そして、傷周辺は白く変色している。
　その時、ギギギという擦れる音と共に変色した箇所が動いた。台形型の白い部分が幾つも連なるその形状。見間違いでなければ人の歯そのものであった。
　理解した途端、聖魔剣が裂け目と思われていた口から吐き出され、落ちてキィンとい

う音を鳴らす。木場やゼノヴィアは唖然としていたのでその音は良く響く。
完全に決まったと思われた連携は、歯で受け止められるという予想もしない形で不発に終わってしまった。
「そんな目で見ないでくれ。――僕も驚いているんだ」
ジークフリートも自分の体に出来た口を不気味、というよりも忌々しそうに見ている。
歯や口の素となっているのはジークフリートが纏っている人工神器で間違いない。強力な攻撃で機能不全に陥ったかと思っていたら、今までとは異なる形になって再動し出す。
ジークフリートの肩に出来た口が大きく開かれる。無駄に歯並びの良い口が全開になった時、その奥から覗かせるのは巨大な眼球。
ギョロギョロと動き、周囲を確認する眼。この変化には木場とゼノヴィアも絶句してしまった。
一方でシンの方は眼球の目を観察する様に見る。些細なことだが瞳の色がジークフリートと同じであった。
「丁度良いね。手と目が足りないと思っていた所だ」
冗談にも聞こえるし、この状況を受け止めているとも聞こえる。或いはジークフリー

トも投げやりになっているのかもしれない。
落ち着いた態度のジークフリートとは裏腹に眼球の方はさっきから忙しなく動き続ける。その落ち着きの無さが素材となった人物を彷彿させる。
すると、動き続けていた眼球が急に動きを止め一点を凝視する。大きな眼球が映し出すのはシン。
「生き足りないか？　それとも死に足りないのか？　フリード」
彼の中では既に死者となっている者への挨拶――もとい挑発。
そこにフリードの意思が宿っているかの様に眼球は一瞬で血走った。

◇

オンギョウキの振るう刃が曹操の首へと吸い込まれる。相手の死を約束させる様な冷徹なる一撃。見ていたアザゼルも曹操の死を確信させる程であった。
しかし、死を迎えようとしている曹操だけは果たされ様としている死に対し、屈することなく抗おうとする。
無限に突き付けられる死の現実。だが、曹操はその中で微かに漂う生存という一筋の可能性を探し続ける。

諦めが悪い、往生際が悪いと誹られ様とも探求することを止めない。
それによって高められる曹操の想い。やがてそれは極限まで達し――
「むっ！」
――オンギョウキの刃を留めさせる結果へと繋がる。
オンギョウキが思い留まった訳では無い。だが、振るうべき相手がそこに居なければ忠義の為の刃も無意味になる。
寸止めされた刃の先に居るのは曹操ではなくアザゼルであった。
「どういう事だ……？」
気付けばオンギョウキに刃を向けられていたアザゼルも混乱した言葉を洩らす。
「間一髪だった……本当に……心の底からそう思う……」
オンギョウキとアザゼルはすぐさま声の方へ構える。先程までアザゼルが立っていた場所に入れ替わる形で曹操が立っており、目に突き刺さった針を抜いていた。
「自分でも奇跡を起こしたと思うよ……流石に震えが止まらない」
聖槍を持つ手は曹操の言う通り震えていた。しかし、二人にとってはそんなことはどうでも良かった。それよりもどうやって入れ替わったのかが重要である。
その疑問に答える様に曹操の傍にボーリング程の大きさの球体が浮遊する。
「あの野郎……やりやがった」

「あれが分かるのか？」
「あれは禁手だ。しかも、能力の一部を限定的に引き出してやがる」
兜の下でアザゼルは苦虫を噛み潰した表情となる。
「ヴァーリは覇龍の力を限定的に解放することに成功したのは聞いている。なら、禁手で同じ事が出来るのも道理だ。――やるのは初めてだが」
「覇龍だろうが禁手だろうがひょいひょい出来るもんじゃねぇよ」
理屈は簡単だが現実は簡単ではない。能力が未完成でなっているのではなく自ら制御してなっているのでは雲泥の差であり、曹操の態度から後者にしか思えない。
「――あれが聖槍の禁手なのか？」
「いや、違う。あんな球体が付くなんて聞いたことが無い。気を付けろよ。ここから先は俺も知らない」
さっきの現象から能力の推察は既に済ませてあるが、それ一つとは限らない。オンギョウキとアザゼルはより気を引き締める。
その時、大きな咆哮と共に巨大な足音が聞こえて来た。しかもそれはどんどんと近寄って来ている。
「この声は……」
「盛り上がって来たな」

オンギョウキは信じ難い様に呟き、曹操は口角を吊り上げて笑う。
「うおおおおおおおおっ！」
オオオオオオオン！
絶叫と咆哮。遮るもの全てを破壊しながら九尾の狐とその頭にしがみついた一誠がこの場へ乱入する。

人間、成長

「イッセー！」
「八坂様！」
大口を開け、ずらりと並ぶ牙で一誠を噛み砕こうとする九尾の狐こと八坂。そうはさせまいと鼻先を両手で掴み下顎を両足で踏み付けることで抵抗する一誠。
八坂は頭を左右に激しく振り、一誠の抵抗を妨げる。
「こ、の……！」
上下左右お構いなく視界が揺さぶられ、頭の中身どころか体の中身すらシェイクされそうな気分になりながらも両手両足の力を片時も緩めない。
噛み潰すつもりであった八坂も一誠が顔に張り付いているのがいい加減鬱陶しくなってきたのか、閉じようとしていた口を逆に限界まで開く。
「げっ！」
八坂の喉の奥まで見通せる様になると、暗い喉奥から橙色の輝きと吐息に混じった熱風を感じ取る。
一誠は両手で八坂の鼻を突き飛ばし、その反動で八坂の顔から離れる。一誠が離れた

直後に八坂の口から炎が吐かれた。
空中に飛び出した一誠はすぐに背部の噴射孔の向きを調整し、孔の向きを真横に変える。噴射孔から魔力が噴射され一誠は横へスライド移動し、直進してきた炎を避けた。
八坂は首を動かし一誠を追う。舌の代わりに炎が動き、舐める様にして一誠を溶かそうとする。
「当たってたまるかぁぁぁ！」
不規則な動きに変わった炎に対し、一誠は噴射孔の角度を次々と変えるという荒技により急旋回、急停止、高速平行移動という動きを駆使して炎から逃れる。
無茶な動きを連発するので一誠は鎧の中で骨は軋む音を聞く。だが、止まれない。
何とか攻撃して相手の攻撃を阻止したいが、敵である八坂は英雄派によって操られているだけの被害者であり、九重の為にもなるべくダメージを抑えながらも無力化させないといけない。
こういう時に自分の火力の高さが恨めしくなる。そのせいで選択肢が大幅に減ってしまった。
ここに来る前にアルビオンの半減の力を試してみたが、半減させた途端に失った分の力をパワースポットから送られて無力化されてしまった。そのせいで隙を作ってしまい喰い掛けられた。

木場だったら多種多様な魔剣を創造して戦い方の幅があり、シンならば特に迷うことなく攻撃するだろう。最終的に助けられればそれで良し、という考えで。
だが、一誠は木場では無いしシンでも無い。二人の真似をせずに自分らしいやり方を模索しなければならない――この灼熱の炎を掻い潜りながら。
（どうする？　どうする？　何か方法は……あっ！）
『何か思いついたのか？』
一誠はふとある可能性を思い付く。
（あれだ！『洋服崩壊』！）
『何故その技を……』
出された一誠の技にドライグは困惑するが、少しの間を空けた後、一誠の意図に気付いた。
『成程……あの九尾が掛けられた洗脳を、魔術を纏っている状態即ち衣服の延長線上にあると拡大解釈するということか』
（その通り！　流石ドライグ！　良く分かったな！）
『ふふふ……はっ！』
褒められ上機嫌に笑っていたドライグだったが、何かに気付いて愕然とする。
（どうかしたのか？）

『当たり前の様に理解してしまった……どう考えても頭のおかしい発想なのに……俺は、俺は……すっかり染まってしまった……』

説明せずして意図を察するということは一誠との仲が深まった証であるが、『相手に掛けられた術を衣服に見立てて脱衣専用の技で脱がそう』という常人にはまず出来ない発想を理解出来てしまったドライグは心身共に一誠の相棒に相応しい存在になりつつあった。

（何かすまん！　でも、ショックを受けるのは後にしてくれ！　早く九重の母ちゃんを救わないと！）

『う、うう……そうだな……』

自爆したドライグを取り敢えず説得しつつ、一誠は『洋服崩壊』を当てる機会を探る。

炎を連続して吐き続けていた八坂は、息が続かなくなったのか炎を吐くのを一旦止めて大きく息を吸い込み出す。

この動作を一誠は好機と見た。一誠と八坂の間はそれなりに距離があったが、魔力を最大噴射すれば次に炎が吐くまでに間に合う。

「行くぞっ！」

『おう！』

背部の噴射孔から一気に魔力が放出されたことで爆発の様な光が生まれ、それを背に

受けた一誠は瞬時に最大速度に達する。
そして、一誠は八坂に触れ、能力を発動。
「『洋服崩壊』！」
何かが割れる音がし、八坂の目から狂気が失せる。
成功した、と思われた時、八坂の目は再び狂気によって覆われた。
「失敗した！」
『ちっ！　どうやら相当な数の術を仕込まれているみたいだなこの九尾は！　俺達が壊したのは薄皮一枚程度だったということだ！』
何重にも術を施されてせいで『洋服崩壊』の効果もせいぜいその内の一枚突破するのがやっと。だが、それでも一応の効果はある。ダメもとでもう一度やろうとした時のことであった。
「――え？」
『なっ！』
一瞬にして八坂の姿が遠ざかる。それだけではない。一誠は八坂が吐き出す炎の射線状にいつの間にかいた。
何が起こったのか分からず戸惑い、動きが止まってしまった一誠を炎が容赦なく呑み込む。

「あっ！」
だが、その様な事態にはならなかった。一誠の前に光の壁が出現し、壁が炎を防いでくれている。
「イッセー！　すぐに離れろ！　長くは持たん！」
「アザゼル先生！」
八坂との戦いに集中し過ぎていた一誠は、この時になってアザゼルの存在に気付く。
アザゼルの言われた通りに光の壁から離れ、アザゼルの許へ飛んで行く。光の壁は一誠が離れて間もなくして八坂の炎に消し飛ばされた。
「アザゼル先生！　――とオンギョウキ、さん？」
「合流出来てなによりだ……と言いたいとこだがあんまり余裕はねぇな。オンギョウキ！　一旦隠れるぞ！」
「――承知」
オンギョウキが掌を地面に叩き付ける。すると、地面を突き破って巨大な霜柱が無数に伸び出してきた。続いて地面が裂けて炎が噴き出し、高熱によって霜柱は一瞬で溶けて蒸発し大量の水蒸気と化す。
オンギョウキが大きく息を吸い込み、吐き出すと突風が生み出され、水蒸気を拡散して辺り一面を濃い霧で覆い隠した。

眼前に翳した手ですらハッキリと見えなくなる程の濃霧。すぐ近くにいる筈のアザゼル、オンギョウキの姿が見えなくなり、一誠が驚くも束の間急に腕を引っ張られて移動させられる。
「うおっ！」
「声を潜めろ。把握される」
囁く声がオンギョウキの声と気付き、慌てて口を閉じ引っ張られるまま移動する。一誠はせめて足音が聞こえない様に浮遊する。オンギョウキやアザゼルもすぐ傍に居る筈なのだが、足音も気配もしない。腕を引っ張られなければ存在すら認識出来なかっただろう。
暫くして比較的霧の薄い所まで連れて来られる。周囲は木々で覆われており三人はその陰に潜む。
一誠は自分が来た方向を見る。ある空間だけ濃霧が結界に広げられており、恐らく八坂はそこで足止めを受けている。
「いつまで保つ？」
「気配を辿り難くする隠遁術を施し、何人か分身を潜ませておいたがいつまでも欺く程奴と八坂様は甘い相手ではない。数分が限度だ」
「それでもあの短い時間でやったのなら完璧だ。――マジで『神の子を見張る者』に来な

いか？」
「世辞として受け取っておこう」
　アザゼル達と分かれてそんなに時間は経っていないが、両者の間に信頼感が生まれ始めているのを一誠は感じていた。二人共出来る大人なだけにシンパシーの様なものがあり、打ち解けるのも早いのかもしれない。
「赤龍帝、一つ尋ねる。……九重様の行方は知らぬか？」
「九重とはさっきまで一緒に居ました。ただ、八坂さんとの戦いで離れ離れになって……」
　この時、一誠とアザゼルはオンギョウキの顔が一瞬歪んだのが分かった。仮面の様な無機質な顔で表情など分からない筈なのだが、それでも伝わってしまう程に苦悩している。
　八坂の解放を優先すべきか九重の保護を優先すべきか、どちらにするのか即座に判断出来ないぐらいに迷っているのだ。元々、両者とも天秤に載せても傾くことが出来ない存在。秤に載せること自体が無礼であるとオンギョウキは思っている。
　強者であるオンギョウキですらこれに関しては即決即断は許されることでは無かった。
「あの、傍には匙の奴も居ますし……多分大丈夫かと……」

「信用出来るのか……？」
「龍王ヴリトラの器だ。今の段階でもかなりやるぜ？」
「ああ……でも……実は匙、八坂さんに負けて大分消耗しているんですよね……」
「マジかよ。今のヴリトラが負けるのか？　いや、まあ、生き延びているなら良かったが……」
　本来ならばオンギョウキを迷わせるだけの言うべきではない情報だが、真剣に悩むオンギョウキを見て隠しておくことは出来なかった。真剣に悩み、その為の決断を本気で考えることが出来る者なら全てを知っておくべきだと一誠は思ったのだ。
「――先ずは今有る情報を交換すべきだな。悠長に思えるかもしれないが、一気に状況が変わり過ぎた。今のまま戦ったら痛い目を見る」
　それを見兼ねてアザゼルが提案をする。言っていることは最もだが、どちらかと言えばオンギョウキが決断を下すまでの時間を与えている印象を受ける。
「そうですね……じゃあ、俺から――」
　一誠はここに来るまでの経緯を軽く説明した。九重と一緒に影を操るサングラスの男の禁手と戦ったこと。その後に八坂と戦っている匙と合流したこと。匙が八坂の術でかなり消耗してしまったので代わりに自分が八坂の相手を継ぎ、この場に乱入してきたこと。

「そういうことか……あんまり良い状況じゃねぇな。俺達はここで曹操と戦っていた。そこに九尾の狐も加わるとなると……」
「曹操が！」
八坂との戦いに集中し過ぎて曹操のことなどまるで気付かなかった一誠。一方でドライグの方は曹操というか聖槍の気配で居ることを感知していたが、丁度八坂との戦いの真っ只中であり、言っては悪いが強敵二人を前にして一誠が器用に立ち回れると思えない。
集中力を欠くと考え、伝えるのを後回しにしていた。結果として見れば八坂に対しあと一歩の所で邪魔が入るという良くも悪くも無いものであったが。
「彼奴も厄介なことになっている。一部だが禁手の力を引き出しやがった。お前が八坂の炎の前に転送させられたのはその能力のせいだ」
一誠は気付かなかったが、離れていたアザゼルとオンギョウキは一誠の傍に曹操が出現させた球体が接近している光景を見ていた。一定の距離に近付くと一誠の姿は消え、吐き出された炎の先に転移させられていた。
「能力は球体の範囲内に居る奴を曹操の思い通りの場所へ転移するものだろうな。俺も実際喰らったから間違いない――嫌な力だぜ」
危うく味方に首を刎ねられる所だったのを思い出し、首筋をさする。

「禁手の力を限定的に引き出すって、ヴァーリみたいなことを……」
「前例が在るってことは不可能じゃないってことだからな……あんまり居て欲しくないが」
「でも、今の所相手を転移させる能力だけなら……」
「あんまり甘く考えるなよ？　引き出せる能力が一つだけとは限らねぇ。まだ隠しているだけかもしれないからな。そもそも、あいつの禁手は記録に残っている聖槍の禁手とは異なる亜種だ。何を隠してるのか俺もさっぱり分からん」
　豊富な知識を持つアザゼルですらお手上げ状態と知り、一誠も言葉を失うしかなかった。
「……まずは曹操と八坂様を分断するのが先決だ。八坂様の傍に曹操が居るのは不味い」
　今まで黙っていたオンギョウキが口を開く。彼は既に決断していた。この場に留まり、八坂を救うことを優先したのだ。
「確かにな……俺達との戦いを後回しにして先に目的を果たしちまうかもしれねぇ」
「目的……？」
「曹操の野郎、八坂と京都の力を利用してこの空間にグレートレッドを呼び寄せるつもりだ」

「ええっ！」
『なっ！』
英雄派達の目的を初めて知り、一誠だけでなくドライグも愕然とする。
『何を考えているんだ連中は……』
英雄派の命知らずの行動にドライグは彼らの正気を疑った。好奇心云々で気軽に呼び寄せていい存在では無い。
「グレートレッドを呼び寄せたら……京都はどうなります？」
一誠は恐る恐る訊ねる。
「運が良ければ何も起こらない。――本当に運が良かったらな？　だけど考えてみろよ？　グレートレッドは次元の狭間で好き勝手にふらふら飛んでいるのが好きなこの世で一番自由な奴だぞ？」
「……それが何の了承も無く現世に引きずり出されたらどうなるか分かるな？　自由の対になる言葉は束縛だ」
つまりそんなことをすればグレートレッドの機嫌を大きく損ねることとなり、グレートレッドの気分次第では良くて京都全滅、悪ければ被害は日本全土に、否それを飛び越えて世界に及ぼすかもしれない。
「えーと……万が一の場合赤い龍繋がりでドライグが説得出来ない……？」

『俺はグレートレッドとまともに会話したことが無い』
「ダメそうだな……」
　最初は八坂を救出するのが目的だったが、いつの間にか京都の未来或いは日本の未来を背負う戦いに変わっていた。双肩に掛かる重みが増したが、その重圧に屈する様な程、一誠が潜り抜けてきた修羅場は生温くない。
「じゃあ、誰が誰の相手をします？」
　気持ちを切り替え、この後の作戦を尋ねる。
「もっと戦力が欲しいのが本音だが、この際他の奴らが合流することは無しで考えるぞ――曹操側に援軍が来た時は腹を括れ」
　戦況が分からない以上今の手札と状況で考えたことを前以って言う。楽観的に思われるかもしれないが、何も把握出来ていないので仕方のない判断であった。
「まず曹操は一誠、お前が行ってくれ。聖槍相手でかなりキツイのは分かっているが、神滅具は神滅具で対応するのが一番無難だ」
　悪魔として聖槍と戦うことは自殺行為に等しい。だが、現状で当てる相手は一誠が最も相応しい。
「はい！　分かりました！」
　アザゼルの指示に一誠は恐れることなく了承する。アザゼルからしてみれば恨まれ

てもおかしくはない内容であったが、一誠はアザゼルに対する不満を見せない。それは一誠からアザゼルに対する信頼の表れであった。
「安心しろ。サポートには一人付けるつもりだ。それは――」
「八坂様の相手は私がしよう」
アザゼルの言葉を遮り、自ら志願するオンギョウキ。
「……いいのか？」
アザゼルは一誠の補助役にはオンギョウキを付けるつもりであった。多種多様な術を持ち、技術も長けて初めて組む相手とも上手く連携することが出来るオンギョウキならばうってつけと言える。
同時にアザゼルなりの気遣いでもあった。八坂との戦うこととなれば大なり小なり迷いが生じる可能性が有る。そして、最悪の場合も想定される。そうなった場合の汚れ役をアザゼルは引き受けるつもりであった。
「心遣い感謝する、アザゼル殿。……しかし、京都の主を正すのは同じ京都に住まう者としての役目。ここは私に任せてくれないだろうか？」
真摯に頼み込んでいるが、双眸に宿る光はこちらに有無を言わせない威圧感があった。下手に出ている様で実際は脅迫している様なもの。鬼らしいやり方とも言える。尤もアザゼルからすれば媚びられるよりも分かり易い態度である。

「この戦いの中でいやぁ俺達は対等だ。お前さんがそこまで言うなら俺としても頼むしかない。――いいんだな？」
覚悟を問うアザゼルにオンギョウキは躊躇無く頷いた。
「じゃあ、話は終わりだ。すぐに行くぞ」
これ以上の確認は不粋と思い、戦いへ赴こうとするアザゼルとオンギョウキ。
「あの！　ちょっといいですか！」
それに一誠が一旦待ったを掛ける。
「どうした？　何か気になることでもあるのか？」
「アザゼル先生の言った事は特に気になったことは無いんですけど……」
一誠の目はオンギョウキの方へ向けられている。
「私がどうかしたのか？」
「――九重のお母さん、絶対に無事に助けましょう」
改めて言う事では無いので、オンギョウキの方も怪訝そうにする。
「無論、全力は尽すつもりだ」
「いや、それは、そうなんですけど、何というか……」
一誠の煮え切らない態度。伝えたいことはあるものの上手く言語化が出来ていない様子。

「何が言いたのだ、お前は」
「お前が最悪九尾の狐を殺っちまいそうな表情をしてたのが不安になったんだろ？」
一誠の言いたいことをアザゼルが継ぐ。
「気負い過ぎだぜ。鈍いイッセーですらお前の顔越しに心が見抜けるぐらいに思い詰めてんな」
「そんなことは――ない。それにそうなったとしても本当に最悪の場合のみだ」
「こいつからしたら、その選択自体がハナッからあるのが気に喰わないんじゃねえか？」
殺してでも止める、というネガティブな決意を一誠は何となくだが見抜いていた。
「八坂さんもそうですけど、オンギョウキさんにも何かあったら九重が哀しみます！」
そして、そうなった場合責任をとって自らの命を絶つことも見抜かれている。
「お前の言う、絶対に無事に助け出すということか」
「そうです！　それにオンギョウキさんは腹が立ちませんか！　英雄派達に好き勝手され続けることに！　俺だって皆と楽しい修学旅行をして良い思い出作りをしたいんです！　そんな奴らの為に台無しになんてさせません！　曹操や英雄派に勝って、その上で楽しい思い出も作る！　それで俺達勝ちなんです！」
英雄派の事件に巻き込まれ、それをただ解決するだけではマイナスである。その先にある日常と幸福を手にしてこそ初めてマイナスは消え、完全勝利したこととなる。

戦う前から勝ったことを考えるのは甘い、というのはオンギョウキの感想である。手を尽くしたとしても割に合わない結果など多々ある。

しかし――

「……思えばここ数日、九重様は泣いてばかりであったな」

八坂が誘拐された後、代行として京都の妖怪らを束ねようと気丈に振る舞っていたが、その陰で母恋しさに泣いていたことをオンギョウキは知っている。

「甘っちょろい考えに聞こえるかもしれねぇが、偶にはこういう若者に感化されるのも悪くはねぇと思うぞ？　じゃなきゃ色々錆びちまう」

アザゼルも一誠の考えに賛同し後押しをする。

「――ふっ。そうかもしれん。偶には若者の口車に乗るのも一興か」

「そうこなくっちゃな」

「ありがとうございます！」

目的を一つとした三人。合流前には考えられなかった程の明るさと戦意の高まり。

三人が放つ力強さは、暗雲に満ちた未来を切り拓く可能性を見させるものであった。

◇

濃霧が覆う空間内。曹操は八坂の足元で待機したままであった。
聖槍を肩に担ぎ、構えようともしない。その片目からは今も流血している。治そうと思えば治せるが、曹操は敢えて傷を放置していた。
脳髄の奥を錐で突く様な断続的な痛みが生じているが、痛みに関しては特に気にしていない。寧ろ、激痛が走る度に脳内物質が分泌される感覚がし、感覚が鋭くなってきている。
曹操は死角で何かが動いた気配を察する。八坂は唸り声を出すが、曹操は構えもしない。霧に紛れて動く影、姿は間違いなくオンギョウキなのだが曹操は感覚的にそれが分身であることを感知していた。
視界が半分になった代わりに得た今までにない鋭敏な察知能力。死に近付いたことで普段閉じていたものがこじ開けられた気分であった。
(こういうのも悪くない――ただ、少し興奮し過ぎかもしれないな)
脳内物質のせいで興奮状態になりつつある自分を客観視しながらある程度冷静さを保つ。
冷静になりながら自分が置かれている状況を整理する。
(コンラは負けたか……ゲオルクも退避したという連絡も入っている。声に覇気が無かったことを考えればよっぽど屈辱的な負け方をしたらしいな)

ゲオルクは戦線から離脱したが、別の場所からこちらのサポートを続けている。赤龍帝に敗れたコンラは既に回収され、ヘラクレスもまた大きなダメージを負い、ゲオルクの判断で回収されたとのこと。

ゲオルクを退けたアーシアとギリメカラはまだ仲間と合流出来ずに彷徨っているらしいが、ギリメカラの方は既に戦闘する意志は無くアーシアの影に引っ込んでしまっていた。

ヘラクレスに大ダメージを与えたケルベロスとロスヴァイセのペアもまた自身も大きなダメージを受け戦闘続行は不可能な状態。

レオナルドはシンとの戦いで敗北したが、間一髪の所でマザーハーロットの赤い獣によって救い出されたという。これは曹操にとっても意外であった。

（マザーハーロットが見ているとなると、貴方もこの戦いを何処かで見ているのかな？だいそうじょう？）

残っているのはジャンヌとジークフリートのみ。これだけ戦力が減ってしまったのならこの段階で計画を発動するべきなのだが――

「いや、まだだ。それには早い」

一人呟く。これが自らのエゴであることは理解している。しかし、この命懸けの戦いの中で力が覚醒していく感覚があった。

その証拠が自分の周りを浮かぶ球体である。これが禁手の一部が顕現したものであることは曹操も知っているが、ここまで精密に操れたのは初めての経験であった。

今もどうやってコントロールしているのか口では説明出来ない。本能が手綱を握っている状態であり曹操の思考一つで簡単に動かせた。

この感覚を出来れば手放したくない。もっと深く握るには先程以上の死線を潜り抜ける必要がある。

そうすれば、と曹操はそこで余計な考えを止めた。濃霧の中からひりつく様な殺気が漂い始めたのを肌で感じ取る。

時間稼ぎを止め、一誠達が攻めに入ってきたのだ。

（来るか……！）

興奮と重圧と期待で脳、というよりも心が熱を発する。

視界一杯に広がっていた濃霧が一気に消え失せ、曹操の視界がクリアとなる。オンギョウキが術を解除したことで一メートル先も見えない白い闇が払われた。

何百メートル先も見通せる様になったが曹操の視界の先には誰も居ない。てっきり誰かがいるものかと思っていた曹操はつい目で探してしまう。

背中を突き抜ける様な寒気を覚え、曹操はその感覚に従い空を見上げる。そこには埋め尽くす様に並ぶ数え切れない程の光の槍。一本一本が人間である曹操を絶命させる

のに十分な威力を秘めている。
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』
光の槍に混じる赤い魔力。一誠の『赤龍帝からの贈り物』による力の譲渡によって光の槍の威力は更に引き上げられる。
「容赦無い」
一本で数度死んでもお釣りが来る程の威力にまで高められ、苦笑いを浮かべる曹操。そんな時、頭上の脅威とは異なる悪寒を覚え、咄嗟に球体の能力を使用し自らを転送。
移動した距離は精々五メートル程。曹操はさっきまで自分が居た場所を見る。いつの間にか接近していたオンギョウキが影から姿を現している。
光の槍がそのままオンギョウキを貫くかと思ったが、届く前に霧散してしまう。
八坂は真下に現れたオンギョウキに反応し、前脚を叩き付ける。しかし、オンギョウキは振り下ろされる前に既に八坂の側面へ移動していた。
攻撃を空振りした八坂はすぐにオンギョウキを見つけ、今度は炎を吐こうとするがオンギョウキは素早く射線状から離れ、八坂の目を惹き続ける。
離れ間際にオンギョウキは口から空気の塊を吹く。空気の塊は八坂の目の下へと当たり、乾いた音を鳴らす。威力自体は無いに等しいが、八坂を挑発して怒らせるには十分であった。

八坂は口から炎を溢しながらオンギョウキを追い掛ける。

（成程。目的は俺と九尾の狐を引き離すことか）

相手の目的を察する曹操。やろうと思えば八坂の意思を操って相手の目論見を潰すことは出来る。だが、事は曹操の思った通りには進まない。

第二の光の槍が曹操へと投擲されていた。

曹操は慌てず球体の能力を発動し、射程外へ逃れる。聖槍で払うことも出来たが、転移の能力に慣れる為にそちらの方を使った。

転移した直後の曹操の耳に風を突き破る様な音が飛び込んで来る。視線だけそちらへ向ける。一誠が拳を突き出した体勢のまま猛スピードで突貫してきた。

最もシンプルでありながら十分な破壊力を秘めた攻撃。

それに対し曹操は拳が迫って来たタイミングで聖槍を器用に回し、聖槍の柄で一誠の腕を叩く。

その攻撃で一誠の進路が大きく横にズレ、曹操の隣を通り過ぎてしまう。

一誠はすぐに軌道を変えて反転し、曹操に再び突貫しようと試みが、反転した直後の一誠の眼前には聖槍が突き付けられていた。

「いっ！」

自ら串刺しになろうとするのを避ける為、一誠はすぐに逆噴射をしてその場に無理矢

理留まろうとする。
急制動により鼻先に触れる寸前で止まることが出来たが、曹操からすればささやかな抵抗に過ぎない。刺されに来ないならこちらから突き刺せばいいだけのこと。
腕を伸ばし、聖槍を突き出す。だが、一誠もそう来ることは分かっており、首を真横に倒す。聖槍の穂先は兜の側面を削る。紙一重が顔面を貫かれることは避けられた。
「へえ」
至近距離の突きを避けた一誠に曹操は意外と言った声を洩らす。決して手を抜いた訳では無いが、曹操は一誠には真正面の戦いはまだ経験不足だと思っていた。
曹操の読みは概ね当たりであり、曹操との技量の差を比べれば一誠は隙だらけと言っていい。しかし、命懸けの時の場合は並外れた集中力と反応を発揮出来る。
これは以前マタドールを師事した際に修行という名の嬲り殺しを経験した際に身に染み付いたものである。何せ一秒でも気を抜いたら本当に死にそうな目に合わせてくるのだ。死に掛けた経験が一誠に生へしがみつく本能を目覚めさせてくれた。
既に拳が届く所にいる曹操へ一誠は反撃の突きを繰り出す。赤い魔力で輝く拳が曹操を砕く――ことはなく虚しく空を切った。
「なっ！」
驚く一誠。すぐにそれが転移能力によるものだと気付き、曹操の姿を探す。

その時、一誠は首筋に悪寒を感じ取った。振り向かなくても分かる。曹操が今まさに自分の後頭部へ聖槍を放とうとしている。

先端が兜に触れる寸前、何故か曹操はその場から離れる。直後に曹操が居た場所へ光の槍が通過した。

「あぶねぇなー」

「ありがとうございます！　アザゼル先生！」

一誠は、窮地を救ってくれたアザゼルに礼を言う。

「残念。惜しかった。だが――」

ガシャ、という音を立てて一誠の頭部から兜が外れる。落下する兜は地面に落ちる前に砂の様に崩れて消滅してしまった。

「ちょっとした槍の攻撃だけでも『赤龍帝の鎧』は壊せるようだ」

聖槍が兜を少し傷付けたのは一誠も知っている。しかし、あの小さな傷だけで兜が容易く消滅してしまった。聖槍の前には鎧の防御力も無意味となる。

（ドライグ、悪いが兜を修復してくれ）

気休めにしかならないかもしれないが、ドライグに修復を頼む。

『……分かっている。だが、聖槍の効果だと思うが、少し手こずりそうだ』

ドライグから嬉しくない返事が来る。神滅具の最上位に位置するだけのことはあっ

て厄介な効果を秘めている。
修復まで待っていられず素顔を晒した状態で一誠は臆さず突貫。その行動に合わせてアザゼルが光の槍を投擲し一誠を援護する。
数本の光の槍を聖槍の一振りで払い除ける曹操。聖槍を振り抜いたタイミングで一誠が接近し、右拳を一閃させる。
膝を曲げるという最小限の動きで一誠の拳の下へ潜り込むと、そこから聖槍を喉元目掛けて突き上げる。
一誠は伸ばしていた右腕を動かし、聖槍の刃にぶつける。軌道が変わり、喉元を貫く筈であった穂先は左肩上部を通過していく。
一誠はすぐに右手で聖槍を掴み取り、左拳で曹操の顔面を打ち抜こうとした。だが、この時に右腕部の装甲が一気に剥がれ落ちる。軌道を逸らした時に生じた傷が原因であった。
赤龍帝の鎧越しではなく素手で聖槍に触れてしまった一誠。右手から水に入れられたドライアイスの様な白煙が上がる。
「いつ！　ぐううう……！」
それでも離そうとしない一誠であったが、強固な意思とは裏腹に聖なる気で焼け爛れた掌が捲れ上がってしまったせいで聖槍が一誠の手の中から滑り出る。

一誠は慌てて左拳を繰り出す。曹操の顔を打ち抜いた、と思ったが拳に感触は無くギリギリの所で転移をして範囲外へ移動してしまっていた。
（い、いてぇぇ……）
掌は重度の火傷を負った様に爛れ、皮が捲れた状態になっている。だが、ある意味では幸運だったかもしれない。あれ以上聖槍を掴んでいたら右手が消滅していた可能性があった。
一誠は急に体が重く感じる。素手で掴んだ際に少量ながら聖なる気が流れ込んでしまったらしく、それが肉体に悪影響を及ぼす。
咄嗟に動けない一誠を見て、曹操は球体に向けて聖槍を振る。すると球体の紋様と色が変化し、形も楕円形に変化。
聖槍の先で一誠を指すと楕円が視認出来ない速度で撃ち出された。
不味い、と思った瞬間、一誠の前にアザゼルが立ち塞がり楕円を光の槍で受け止める。次の瞬間、アザゼルが纏っていた『堕天龍の鎧』がアザゼルの体から剥がれ落ちて消滅する。
「――ぐっ」
「アザゼル先生っ！」
楕円が光の槍を砕き、アザゼルの脇腹を抉って曹操の許へ返って行く。咳き込んで血

を吐くアザゼルを一誠は慌てて支えた。
「しくった……あの珠、武器破壊に特化した能力か……イッセー、あれに触るんじゃねぇぞ」
「そんなことよりも自分の心配をして下さい！」
自分に起こったことを冷静に分析し、それを伝えてくるアザゼルに一誠は悲痛な声を上げる。
「どうやら今の俺では一つずつしか使えないみたいだ」
楕円から球体に戻し、周囲を巡らせながら自己分析をする。禁手の能力を併用することが出来ないことが分かったが、曹操にとっては特にマイナスではない。幾つも手段があるせいで混乱するよりも最初から割り切った方が使い易い。
「うん……？」
頬に違和感を覚えて触れる。指先に血液が付く。頬の皮膚が捲れ上がってそこから滲み出た血であった。一誠の拳を避けたと思ったが、微かに触れられていたらしい。
「ふふっ」
アザゼルの負傷からしてこれ以上の戦闘続行は不可能。ここから先は一誠との戦いとなる。そう思うと自然と笑いが込み上げてくる。
「イッセー……離れろ。俺が居ると足手纏いになる……」

アザゼルは大怪我を負っているにも関わらず、一誠を突き放して一人で立つ。大きく抉れた脇腹からは大量の血が流れ、今にも臓腑が飛び出してきそうであった。
「無茶しないで下さい！」
「俺じゃなくて奴を見ろ……。俺の事は気にするな……」
脇腹の傷を抑え、何とか出血を抑えるアザゼル。
一誠の表情が歪む。本当ならすぐにでもアザゼルを安全な場所へ連れて行くか、アーシアの神器による治療を受けさせたい。しかし、それは曹操が許さない。
アザゼルの命を救う最短の道は曹操を倒すことしかない。
「……アザゼル先生。もう少しだけ待っていて下さい」
「焦るな……お前のペースでやれ。こっちは気にするな……のんびり待ってるからよ」
激しい痛みが起こっている筈なのにアザゼルはいつもの様な不敵な笑みを浮かべる。
一誠はそれに笑い返すと、曹操目掛けて飛んで行く。
「曹操ぉぉぉ！」
「臆せず来るか！」
迎撃の為に突き出されて聖槍を紙一重で避け、胴体目掛けて突きを放つが曹操はひらりと己の身体能力で躱してしまう。
回避と同時に球体が弾丸の様に飛んで来る。触れれば禁手を解除されると分かって

いるので、事前に溜め込んでいた魔力によるドラゴンショットを片手から発射し、球体ごと彼方まで吹き飛ばす。

「あらら」

球体を遥か遠くまで飛ばされてしまった曹操は苦笑を浮かべるが、すぐにその顔目掛けて一誠の腕が振るわれた。

薙ぎ払う様な一撃を聖槍の柄が受け止める。

「聖槍の怖さは十分知っていると思うけど、案外ビビらないもんだね」

「怖いに決まってんだろ！　でもな！　ビビってらんねぇんだよ！　お前の顔に一発入れないと皆に怒られそうだからな！　きついが赤龍帝やってんならこんぐらい出来ないとなぁ！」

腕を振り抜いて曹操を弾き飛ばす。

空中で体勢を変え、聖槍で地面を突いてブレーキを掛け、勢いを弱めると何事もなかったかの様に着地した。

心がざわめくのを感じる。一誠の感情の昂ぶりが更なる力を引き出し、自分もまたそれに触発されている。

悪魔でありドラゴン。人間として実に挑戦し甲斐がある存在。この世には悪魔やドラゴンだけでなく天使、堕天使、神など多くの超常的存在がいる。

それに挑むのはいつだって人間だった。

「――そう。人間でなければならない」

独り言を洩らす曹操に一誠が突撃してくるが、曹操は見向きもせずに指を弾く。一誠に向かって何かが飛ばされた。高速で動きながらも一誠は反射的にそれを目で追う。

飛ばされたのは小さな珠。だいそうじょうの力が込められた珠である。

それが何か事前に知らされていた一誠は急停止。直後に珠から白光が溢れである。その輝きは破魔のものであった。

ギリギリ射程外に居て免れた一誠であったが――

「ごほっ」

光の中から伸びた聖槍が一誠の腹部を深々と刺し、一誠の口から大量の血が吐き出される。

破魔の光が消えるとその中から曹操が現われる。

「ここで散ってくれ、兵藤一誠。人間の成長（オレ）の為（エゴ）に」

聖痕、騎士

（これは……やばい……！）

聖槍によって刺された腹部からは傷の深さ以上の出血が起こり、聖槍が持つ聖なる気によって悪魔の体から白煙が上がっていた。焼かれる様な痛みと体の奥底から冷えていく様な喪失感。

流れ出る血と共に大事なものまで外に出て行く感覚。最上位の聖なる気が一誠という悪魔をこの世から消滅させようとする。

突き刺さっている聖槍を引き抜こうにも意識がどんどんと薄れていき、腕を動かすことが出来ない。

『相棒！　気をしっかりと保て！』

ドライグが薄れ行く一誠の意識を呼び戻そうと何度も呼び掛けるが、声を聞く度にその声は遠く離れていく。

このまま為す術もなく聖槍によって消滅するかと思われた時――

「イッセーさんっ！」

――その声だけは何故かハッキリと一誠の耳へ届き、沈み掛けていた一誠の意識が浮

上する。
そして、一誠は己の体が緑色のオーラに包まれていることに気付く。腹部の激痛は緑のオーラによって緩和されている。
暖かさを覚える緑のオーラが何なのか一誠は知っていた。何度も世話になっているからだ。
離れた場所でアーシアが手を組んで祈りを捧げるポーズをして集中している。彼女の持つ『聖母の微笑』の治癒の能力を一誠へ飛ばし、全力で回復させていた。
アーシアがここに来たのは偶然であり、真っ先に見たのは一誠が聖槍によって刺されている姿であった。
その光景にパニックならずすかさず神器を発動させたことは最良の判断と言える。後数秒遅かったなら間に合わなかった。
しかし、『聖母の微笑』の治癒力でも聖槍が生み出す破壊を完全には止められない。進行を遅らせるのがやっとである。
（問題、ねぇ……！）
『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』
『赤龍帝の贈り物』による譲渡が発動。アーシアの神器の能力が一気に引き上げられ、一誠の体から上がっていた白煙が消える。

「ふぬっ！」
聖槍を両手で掴み、腹から抜く。抜いた瞬間に全ての光景が点滅する様な激痛が生じたが、『聖母の微笑』のおかげで腹の傷が閉じると同時に消え去る。
聖槍を押さえつけたまま曹操にお返しの一撃を与えようと拳を突き出す。
「――がっ！」
だが、事が上手く進むとは限らない。アーシアが合流し、流れが向いて来ていると思いきや、一誠が放った反撃の拳は曹操に届くことはなく、逆に曹操の足が一誠の顎を蹴り上げていた。
真下からの蹴撃に反応出来ず、顎への強い衝撃と共に空を見上げており、脳が揺らされたせいで一瞬何をされたのか分からなかった。
蹴られた、と認識した時には曹操の姿が消え、数メートル先に移動している。ドラゴンショットで遠くまで飛ばした珠をいつの間にか戻し、一誠の間合いの外へ転移していた。
「聖槍で傷付けられた悪魔すら癒すか……しかも、これだけの距離があいているのに」
曹操の眼差しがアーシアへ向けられる。敵意とは異なる欲求に満ちた目にアーシアは体を震わせた。
「邪魔だと思う反面、欲しいとも思ってしまうな。悪魔すら癒す神器なんてとても公平

だが、他から見たら不公平そのものだ」
アーシアへの処置を一考する曹操。アーシアに危害を加えるかもしれない曹操に一誠は怒りを露にする。
「アーシアに指一本も触れるなよ！　もし、触れたら消し飛ばしてやる！」
「そういう台詞、出来たらカッコいいんだけどねぇ」
怒声に対し挑発が返って来る。
アーシアの神器で聖槍の傷は治ったが、表面上の傷だけである。まだ内部に残留している聖なる気が一誠の肉体を蝕み閉じた傷を開こうとしているが、一誠はそれに構わず動く。
「アーシア！　『女王』にプロモーションだ！」
アーシアがこの場にいるからこそ可能なことがある。アーシアに渡されてある代理認証カードがあれば一誠はプロモーションが出来る。
「はい！」
アーシアが同意したことでプロモーションが発動し、一誠は『女王』になることで能力が一気に上昇する。
上昇した能力を爆発させる様に放出し、曹操へ向けて最大速度で飛ぶ。赤い残像が尾の様に伸びていく。

「おっと」
今までよりも上回る速度で接近してきた一誠の渾身の突きに対し、曹操は最小限の動きで横に移動しただけで躱してみせた。
高まった能力は確かに驚異的ではあるが、所詮は直線的な攻撃である。きちんと見極めれば避けられない訳では無い――そう思っていた。
「ん？」
腕に熱の様なものを感じ、腕を見る。袖の一部がいつの間にか裂けており、その下の肉が僅かに抉れ、流血していた。
完璧に避けたと思った曹操だが、一誠の拳は彼に触れていた。
「むっ！」
圧を感じ、その場から素早く移動する曹操。そこへ赤い光が突き抜けていく。大量の魔力を噴射している一誠は攻撃が外れるのが分かると、無理矢理噴射の向きを変えて切り返してきた。
一瞬にして間合いを詰めてきた一誠。回避直後の不安定な姿勢では次の回避に間に合わないと悟った曹操は、珠の力によって転移。
一誠から数十メートル以上離れた位置に移動する。だが、一誠は止まることなく即座に曹操の位置を見つけると息を吐く暇も与えずに急接近した。

そのまま体ごとぶつかっていくが、またも転移によって回避されてしまう。
曹操の戦い方が先程よりも慎重になってきており、必要以上に一誠との距離を取ろうとするが、一誠の方は距離など関係ないと言わんばかり高速移動を続ける。
接近と離去を交互に繰り返す両者。段々とアーシアとも離れていく。
アーシアの神器は直接触れた時が最も効果を発揮し、逆に距離が遠くなればその分治癒効果も薄れていき最終的には範囲外となって治癒出来なくなる。
アーシアはこれ以上離れると一誠の治癒が出来ないと思い、二人の後を追おうとするが――
「近付くのはいいが……あんまり、近寄り過ぎるなよ……？」
――それに対し前以って注意する声が飛んで来た。
「アザゼル先生！」
アザゼルの存在に気付き、彼が重傷を負っていることにも気付きアーシアは二度驚く。
慌てて彼の傷を神器で治そうとするが、アザゼル本人がそれを止める。
「すぐに死ぬ訳じゃねぇ……俺よりもイッセーの方に、集中しな……」
「でも！」
脂汗を流し、顔も蒼白となっているアザゼルを見て、傷を放置することなど酷な話で

あった。
「いいから……イッセーを勝たせたいなら……割り切れ……」
躊躇うアーシアの優しさに苦笑しながらアザゼルは敢えて軽い口調で言う。
すると、アーシアの足元の影から今まで沈黙していたギリメカラが現われる。ギリメカラは単眼を細めた。深手を負っているアザゼルの姿を痛々しく思っている――
パオッ！　パオッ！　パオォォッ！
――など微塵も抱いていない。『神滅具所持者だからって人間のガキにそこまでやられてるなんでダサすぎだろ！　はははははは！』という内容の台詞を言った後に爆笑する始末。
パオ？　パオオ？
『どうした？　急に耄碌した？　大丈夫？　アザゼルおじいちゃん？』という追い討ちまで掛けて来る。
「ギリメカラさん！　いくら何でも言い過ぎです！」
温厚なアーシアもギリメカラの情け容赦の無い暴言に憤慨する。一生懸命戦ってくれたアザゼルを嘲笑することは色々と助けてくれたギリメカラでも許すことは出来ない。
「ああ。いい、いい。言わせておけ……つー訳で老人介護頼むわ。いざって時の為にな

るべくイッセーの近くまで連れて行ってくれ……」
アザゼルはギリメカラの暴言をさらりと流し、自分とアーシアの護衛をしながら一誠の後を追う様に頼む。
ギリメカラはアザゼルの反応が淡白だったことにつまらなそうに長い鼻を鳴らしながら、言われた通りにアザゼルとアーシアを持ち上げて自分の両肩に乗せ、アーシアの神器の効果が切れない様に且つ巻き込まれない様に適度な距離を保ったまま一誠と曹操を追い始める。
「あ、ありがとうございます！」
パオ
アーシアが礼を言うと、『そんなことはいいから集中しろ』と言われた。
目を固く閉じ、神器に力を込めるアーシア。一誠の無事を強く念じ始めると周りの雑音は消え、ギリメカラに運ばれていることも気にならなくなる。
「イッセーさん……！」
自分は戦うことは出来ない。だからこそ自分の代わりに戦い、傷付く一誠の為にアーシアは強く、深くその無事を祈り続けた。

◇

『断罪の聖龍』は聖剣の集合体であるが生物の動きをリアルに再現し、巨大な翼を動かして飛翔していた。
実際の重量なら同じ体格の本物のドラゴンよりも重い筈だというのにまるで猛禽類の様に自由に空を飛び続けている。
空を飛ぶことが出来ないルフェイの巨人達に向けて聖龍は口を開ける。大口から放たれるのはブレス代わりの多種多様な聖剣の束。
一撃の威力は本物のブレスよりも低いかもしれないが、聖剣一本一本にそれぞれ固有の能力が込められているので防ぐとなると困難を極める。
吐き出された大量の聖剣に巨人の子機である緑の分身が竜巻を吹く。
高速で回る風の渦が聖剣を吹き飛ばしていく。が、竜巻によって吹き飛ばされたのは全体の二、三割程度。無数の聖剣の中に混じる風を裂くことに特化した聖剣による影響であった。
竜巻を突き破った聖剣らを待ち受けているのは、空を焦がさんとして走る赤色の炎。緑に代わって赤の分身が炎による攻撃を開始する。
だが、それも他の聖剣の能力に中和される。しかし、竜巻の時と同じ数の聖剣が燃え落ちて使い物にならなくなった。

最初の数から半減した聖剣を猛吹雪が襲う。絶対零度に近い極低温で冷やされた聖剣に轟音と共に落雷が落ちる。
黒の分身と黄の分身の合わせ技によって砕かれ更に数を減らし、最初に吐き出された数の一、二割程度しか残されていない。
威力を殆ど削げられてしまったが、それでもやっと巨人に攻撃が届くかと思いきや、巨人が持っていた棍棒を一振りすると残された聖剣は全て木端微塵になって散ってしまった。
四体の分身による迎撃と巨人の怪力により聖龍のブレスを無傷で切り抜ける。
それを見ていたジャンヌは面白くない。
「そんな隠し玉があるなんてずるくない？　あーあ。ルフェイちゃんは隠し事の出来ない正直な子だと思っていたのになー。お姉さんショック」
「単純にジャンヌさんが私のことを良く知らないだけだと思いますよ？」
ジャンヌの嫌味にルフェイはニッコリと笑って返す。嫌味で返すというよりかは思ったことを言っているだけに見え、意図せずジャンヌの正直な子という部分を証明していた。
「まあ、他の派閥同士だからねー。これからお互いを知ってく？」
ジャンヌは微笑みかけながら周囲に聖剣を創造、それらをルフェイへ一斉発射する。

杖を構え、魔術を唱えようとするルフェイの前にイリナが降り立つと『擬態の聖剣』を鞭の様に振るい射られた聖剣を全て叩き落す。
「ありがとうございます！」
　助けてくれたイリナにルフェイは無邪気に礼を言う。一方でイリナの方は複雑そうな表情をしていた。
　現れたタイミングを考えればルフェイは味方なのかもしれないが、ジャンヌと顔見知りな所を見ると少し怪しく思えてしまう。しかし、完全に疑うにはルフェイが礼を言った時の笑顔は綺麗なものであり、それが余計にイリナを迷わす。
「大丈夫です！　私は皆さんのお手伝いに来ただけです！」
　未だに迷っているイリナを見て安心させる様にルフェイは言う。
「決して貴方に危害は加えません！　おっぱいドラゴンの名に誓って！」
「え？　おっぱいドラゴン？」
「はい！　私はおっぱいドラゴンの大ファンなんです！」
　おっぱいドラゴンはちびっ子の味方。子供を守ることは正義。正義のおっぱいドラゴンを信奉するということはルフェイも正義の味方。
「なら問題無し！　一緒に平和の為に戦いましょう！」
「はい！」

恐ろしく単純な図式がイリナの頭の中に浮かび、あっという間にルフェイを信じることとなった。
「もうずるーい！　可愛くて良い娘で素直だとすぐに仲良くなっちゃうの？　お姉さん嫉妬しちゃう！」
あっという間に共闘体勢になった二人にジャンヌは本気でヤキモチを焼いている様な反応をする。
「だったらお姉さん、もっと本気になっちゃおー」
ジャンヌが指を鳴らす。すると、聖龍の体が解れ出し構成している聖剣が飛び出したかと思えば、それらが高速で回転を始めて聖剣による竜巻を発生させた。
竜巻が進めば地面が深く抉れていき、竜巻に直接触れずともある程度の距離まで近付くとバラバラに斬り裂かれる。
「はっ！」
イリナは天使の力で生み出した光の槍を限界まで出現させ、それらを聖剣の竜巻目掛けて放つ。
一本でも人間や並の悪魔なら四散する威力を秘めているが、イリナの光の槍は竜巻を貫く前に聖剣の切れ味を持つ旋風によって全て裂かれてしまった。
「うう……全然ダメ」

イリナは悔しさで表情を歪める。今のがイリナの放てる最大火力。『擬態の聖剣』は応用が利くが『破壊の聖剣』などと比べると火力不足である。今のが通じないとなるとイリナに竜巻を防ぐ手立てはない。

「大丈夫です！　アーくん達が行きます！」

ルフェイの声に従い、あらゆるものを切り裂く聖剣の竜巻に巨人が向かっていく。恐れ知らずなのか、それとも恐れる心を持っていないか分身を引き連れて前進する巨人に一切の迷いは無かった。

棍棒を振り上げ、迫り来る竜巻に挑もうとする巨人。分身達もそれぞれ魔法を放つ為に力の充填を始める。

最大の一撃で打ち砕こうとした時――

「引っ掛かった」

巨人の足元から竜巻と化した筈の聖龍が飛び出し、頭部から伸ばした巨大な聖剣で巨人の胸を貫く。

「ああっ！」

「アーくん！」

聖龍は首を振り上げる。胸に刺さっていた刃が巨人の頭頂部まで滑っていき、振り上げた後には上半身が真っ二つになった巨人が残された。

巨大は棍棒を振り上げた体勢のままゆっくりと倒れて行き、地響きと共に仰向けになって動かなくなる。
「ざーんねん。大きなお友達、倒しちゃった」
竜巻による攻撃は目を逸らさせる為のフェイントに過ぎない。竜巻に使用した聖剣は聖龍を構成する聖剣の約半分。それを派手に動かすことで聖龍本体が地面を潜行しているのを隠していたのだ。
巨人を倒したことで竜巻は解除され、無数の聖剣が聖龍に戻って来る。聖剣を取り込み、半分ぐらいの大きさになっていた聖龍は元の大きさへ戻った。
聖龍と互角以上に戦える巨人を失ったことに焦るイリナ。現状では巨人が最も頼れる存在であった。
巨人の分身達が倒れている巨人を取り囲む。まるで親を失った子達の姿に見える。
しかし、イリナは心を折れない。こういう時だからこそ自分がしっかりしなければならないと自らを奮い立たせる。
分身達が哀しんでいる様にルフェイもまた共に戦っていた巨人を失い哀しんでいるだろうと思い、何か慰めの言葉を言おうとしてルフェイの方を見る。
「？」
ルフェイはキョトンとした顔をしてイリナの方を見返してきた。何でそんな悲しそ

うな表情をしているのだろう、と目が語っている。
ルフェイが何故そんな表情をするのか分からず、イリナの方も頭に疑問符が浮かぶ。
「アーくん。油断しちゃったね」
倒れた巨人に対し、特に哀しんでいる様子も無く平然と言う。無慈悲な言葉に思えるかもしれないが、ルフェイが平然としている理由はすぐに分かることとなる。
分身達が両手を天に掲げ、踊る様に腕を波打たせる。分身達の円陣が白い光を発し始め、光の柱となって天へ打ち上げられた時、そこには無傷の巨人が立っていた。
『ええっ！』
あっさりと巨人が復活したことにイリナとジャンヌは声を上げて驚く。特にジャンヌは策を弄して撃破したと思っていたので、その衝撃はイリナ以上であった。
「何で！　どうして！　何が起こったの！」
ジャンヌは余裕が顔から剥がれ、思わずルフェイを問い詰めてしまう。苦労と勝利が一瞬で水泡と化す理不尽を目の当たりにすれば当然の反応と言える。
「皆が居ればアーくんは大丈夫なんです！」
巨人のことを自慢するかの様に誇らしげに語るルフェイだが、ジャンヌからすれば絶望を齎す様な情報である。
「えーと、あの子達がいればあの巨人さんは死なないってこと？」

「はい！　逆にアーくんが居ればあの子達も復活出来るんです！」
イリナの疑問にルフェイがダメ押しの答え。
「ずるい！　ずるい！　そんなのインチキ！　お姉さん、そういうの良くないと思う！」
ジャンヌが抗議するがルフェイの代わりに、知ったこっちゃないと言わんばかり巨人と分身達は散らばってジャンヌと聖龍を囲む。
巨人を完全に倒すには分身達を倒す必要がある。分身達を完全に倒すには巨人を倒す必要がある。つまり、巨人と分身達を一遍に倒さなければならない。
巨人達が無機質な殺意を放つのに対し、ジャンヌの聖龍も唸って威嚇する。
「もう！　こうなったらお姉さんとことんやってやるんだから！　ルフェイちゃん！　天使ちゃん！　覚悟してよね！」
ジャンヌとしては折を見てジークフリートと合流し、そこから曹操と合流する予定であったが、この状況からして余力を残して戦うのは無理、というより無謀である。腹を括りこの戦いに全力で挑むことに切り替える。そうしなければ多分負ける。
聖龍が飛翔し、ジャンヌは聖剣を創造。イリナは『擬態の聖剣』と光の槍を構え、ルフェイは魔術を準備に入る。
決着をつける為の最終ラウンドを告げるゴング代わりに巨人は振り上げていた棍棒を振り下ろした。

◇

『龍の手』の亜種禁手。それに足されるフリードの細胞から造られた人工神器。ジークフリートの肉体を浸食するかの様に肩部から胸部に掛けて巨大な眼球を形成しており、血走った眼でキョロキョロと見回し続けている。

「気持ち悪いな」

ゼノヴィアが思ったことを素直に言葉に出す。ストレートな感想にジークフリートは苦笑し――

「だろうね」

――同意する。

「その内、お前もフリードの様になるんじゃないだろうな？」

ゼノヴィアの言葉に苦笑していたジークフリートが真顔になる。

「そんなことになるぐらいなら、自分で自分の首を斬り落とした方がましさ」

ジークフリートにとっても最悪の未来なのか冗談には聞こえず本気で言っている様だった。

「――まあ、万が一でもそうならないように」

ジークフリートが六本の剣を異なる角度で構える。
「負けてくれるかな？」
一歩踏み込んだ瞬間、ジークフリートは空気の壁を突き破りシン達の目の前まで移動する。
六本の腕から繰り出される剣技が三人へ同時に迫る。
ゼノヴィアは真っ向から来る魔剣をエクス・デュランダルで受け止める。その途端、突き抜ける衝撃が螺旋となり防御していたゼノヴィアは螺旋に呑み込まれて吹き飛ばされる。
木場は聖魔剣の二刀流でグラムの一撃を防いだが、そこにハンマーの様にディルヴィングがグラムに打ち込まれ、二本の聖魔剣が砕け、グラムの刃先が木場の肩から胸までを斬り裂く。
シンは初撃を紙一重で躱し、踏み込んでジークフリートを殴り付ける。だが、シンの拳が当たったのはジークフリートの体ではなく彼が間に差し込んだ『折れる聖剣』。強度がほぼ無いその聖剣は拳で容易く破壊されるが、破片がシンの拳に突き刺さり残留した聖なる気で焼く。
動きが読まれていた。恐らくは初撃を躱せたのはジークフリートが意図したもの。シンはジークフリートにまんまと動かされた。

聖なる気による影響を受けてしまったせいで拳の動きが鈍る。そこへすかさず魔剣を振るうジークフリート。防ごうとすれば切れ味に特化したそれが防御ごと斬り裂く。

シンの首へ吸い込まれていく魔剣。断ち切ろうとする寸前、ジークフリートの体が後方へと吹っ飛んで行く。

真っ直ぐに伸ばされたシンの右脚。拳を止められた時から既に次の攻撃を繰り出しており、寸での所で間に合いジークフリートを蹴り飛ばした。

数十メールもの距離を飛んで行くジークフリートであったが、両足を地面に着けて急停止する。ジークフリートの様子から見て大したダメージは無い。実際、蹴った本人も手応えの無さを感じていた。

「っつ……！　間薙君、大丈夫――」

自分も斬られているというのにシンの身を案じる木場だったが、言葉が途中で止まる。シンが自分の首筋に手を当てているのだが、指の隙間から血が零れ出ていた。切断は免れたが、刃は届いていたのだ。

「自分の心配をしろ」

シンは素っ気なく言うが、シンの視点からすれば木場の方が重傷である。袈裟切りにされた傷から今も流血しており木場の制服を赤く濡らしている。

「どっちも自分の心配をしろ」

そこに口を挟むのはジークフリートに吹き飛ばされたゼノヴィア。何かに叩き付けられたらしく、頭部から血を流していた。
先程の戦いはジークフリートに軍配が上がる。『阿修羅と魔龍の宴』によって更に上昇した身体能力に反応が追い付かなかった。
だが、同じミスは繰り返さない。ジークフリートの動きに細心の注意を払いながら三人は少しずつ離れていく。
密集すればさっきの二の舞になる。三者間の距離を空けることでジークフリートの狙いを拡散させ、一人を集中して狙う様な陣形となる。
言葉を交わして行った訳では無い。三人が自然と考えついた陣形である。要は一人を餌にして釣り、残りの二人で叩くという至ってシンプルな戦法であった。
しかし、この戦い方は必ず一人が集中的に狙われる。誰が狙われるのか分からない。三人は来るなら自分の所へ来い、と思いながらジークフリートの出方を待つ。
「何か有効な手段は有るか？」
相手を警戒しつつ、この状況を打破する方法を模索する。
「……無いことは無いかも」
木場の中にはジークフリートの禁手へ対抗する手段があるらしい。
「でも、確実とは言えない。時間も掛かる」

「なら時間を稼げばいい」
不安を残している木場にシンはあっさりと言う。
（さてさて。どうしようかな）
ジークフリートは慌てることはせず、『折れる聖剣』を補充する。禁手で強化された動きを見たシン達は、自分と相手との身体能力の差をまざまざと見せつけられている。力と速さならジークフリートが完全に上回っており、どうしても後手に回っている状態である。故に現在の主導権はジークフリートにある。焦る必要など無い。
ジークフリートは相手の傷の具合をじっくりと観察する。
木場の傷はそこまで深くはないが、範囲が広いせいでかなりの量を出血している。また肩に傷を負っているので剣の振りに影響が出ている可能性が高い。
シンは傷自体は小さいものの首という人体の急所の一つを負傷している。高い再生能力を有しているがノートゥングによって付けられた傷が中々閉じないらしく今も傷口を押さえてなるべく血が出ない様にしている。
ゼノヴィアは三人の中では最も軽傷であるが、ゼノヴィアが二人と合流しようとした際に足が一瞬もつれたのをジークフリートは見逃さなかった。頭部に衝撃を受けたことで脳震盪を起こしていると思われる。見た目に反して最も戦いに影響が出ているかもしれない。

やろうと思えば誰からでも殺れる。だが、だからといって考え無しの不細工な戦いをするつもりにはなれない。ここは冷静に見極めて――そこまで思考していたら頭を内側から殴られる様な頭痛がジークフリートを襲う。

は　や　く　や　れ

脳内で醜悪な声が響き渡り、脳をガンガン揺らす。誰の声なのか嫌でも理解してしまう。

「いい加減、鬱陶しいね……死人に口なしって言葉を、知らないのかい？」

人工神器に宿るフリードの残留思念、或いは怨念がシンを殺せ、木場を殺せ、ゼノヴィアを殺せと喚く。

細胞単位まで磨り潰されたというのにここまでこの世にしがみつくその生き汚さは脱帽ものかもしれないが、この戦いに於いては酷いノイズであった。

ジークフリートの禁手化、戦いの中での高揚による神器の活性化が人工神器にまで影響を及ぼし、フリードの怨念を引き出している。戦いが長引けば今は雑音で済んでいるが、いずれは肉体を乗っ取ろうとしてくる可能性がある。

心を鎮めるか禁手を解けばこの呪縛から解放されるかもしれないが、それはジークフリートにとっては無いに等しい選択であった。

「こんな心躍ること、止められる訳が無い……！　渡すつもりも……無いっ！」

そもそもフリードの怨念如きにこの楽しみを放棄することこそ有り得ないこと。
頭の中の怨念を騒がせながら、ジークフリートは踏み込み、最大加速して接近する。高速で移動した先に待つのはシン。
シンの両手に炎が灯る。来るか、来ないか関係無く既に力を溜めていた。後は相手が動けばすぐに攻撃へ移れる。
両手を合わせ、二つの炎が重なり大火と化す。両手をジークフリートへ突き出せば、大火は射線状のもの全てを焼き尽くす熱線となって放たれる。
熱線に向かって進路変更もせずに真っ直ぐと突き進むジークフリート。構えるのはグラムとダインスレイブ。
グラムの力を引き出した途端、ジークフリートの全身に激痛が走る。グラムに備わった龍殺しの特性が、ジークフリートの禁手に反応して彼に悪影響を及ぼしているのだ。別にグラムもジークフリートに嫌がらせをしている訳では無い。備わってしまった機能が自動的に発動しているだけであり生物の反射の様なもの。
ジークフリートも禁手を発動させた時からこうなることは覚悟していた。体内を駆け巡る龍殺しの力に抗い、更なる力を引き出す。
全身の血管が浮き出し、片眼から血の涙が零れ出る。その様な状態になっても尚ジークフリートは笑みを浮かべ、血が滴ると同時に二本の魔剣を振るう。

相乗効果によって高められる魔剣の力。振り抜かれたことで巻き起こる剣風は超低温となり、瞬時に氷塊を無数に創り出していく。

氷塊も積もれば氷山となり、熱線を阻む巨大な壁と化す。

氷山に熱線が触れた瞬間、氷山は即座に水蒸気となって辺り一帯を覆い尽くす。

シンが狙われていると分かった木場とゼノヴィアはすぐに援護をするつもりであったが、大量の水蒸気がそれを阻み、シンの位置を見失わせてしまう。

熱線は氷山を貫いていくのだが、ジークフリートに届くまでの時間を遅らせ、熱線が氷山を貫いた時にはジークフリートは自らが生み出した氷山の頂上に立っていた。

上から見下ろした先には白い水蒸気によってシンの姿が隠されている。しかし、ジークフリートにとっては標的が見えないことなど関係無い。

高い位置から振り下ろされるディルヴィング。一振りによって発生する文字通りの重圧が広範囲に起き、地面が陥没する音が響く。

間髪入れずに振り抜かれるのはノートゥング。ディルヴィングの攻撃によって動けなくしたところで空間をも裂く魔剣の斬撃が逃げ場を埋め尽くす様に飛んで行く。

漂う水蒸気がノートゥングの斬撃が通る度にカットされていき、細かく分割されていく。

ノートゥングを振る回数が二十を超えた辺りで一旦止めた。

殺す気で魔剣を振ったが、心の何処かでは生き延びていることを期待してしまう矛盾した思い。楽しい時間を終わらせない為にもっと抗ってくれて願ってしまう。

ジークフリートの背筋に氷山が生み出す冷気ではない悪寒が走ると同時に、それが何なのかを確かめるよりも早く氷山を蹴って跳び上がる。

水蒸気を穿つ光線らしきものが放たれ、氷山の頂上へ命中。光線は横へ滑り、レーザーカッターの如く頂上を綺麗に切断する。

空中にてそれを見ていたジークフリート。すると、また水蒸気を突き破って何かが飛び出してくる。

しかし、それはジークフリートから二メートル程離れており、わざわざ魔剣で防ぐ必要も無かった。

何かの誘導かと思いつつ、一応飛び出してきたものを確認しようとする。

そして、それを認識した瞬間、ジークフリートは瞠目し固まってしまった。

鮮血で円を描きながら回る人の腕。二の腕辺りから切断されたそれが物の様に投擲されている。誰の腕かなど蛍光色を放つ紋様を見れば一目瞭然である。

何故そんなことを、とジークフリートが思ってしまう程の精神的な不意打ち。だが、投擲された意味をこの後身を以って知る事となる。

ジークフリートに当たることなく通過していくかと思いきや、握られていた手が開

く。その手の中には既に溜められていた魔力の光弾があり、切断された腕がまるで意思を持っているかの様にジークフリート目掛けて光弾が発射される。

「――まともじゃないね」

思わずそう口走ってしまうぐらいに動揺していたジークフリートは回避が間に合わず、六本の剣を以って迎え撃つしか方法は残されていなかった。防御など選択に入らない。今のジークフリートにとって攻撃することは如何なる守りよりも確かなことだからだ。

切断された腕から放たれるのはジークフリートの背丈はある程の魔力の塊。ジークフリートは魔剣の固有能力ではなく純粋な力を引き出すと共にそれらを刃に乗せ、六本同時に振るった。

横薙ぎ、袈裟切り、逆袈裟、上段。複数の斬撃が光弾を分割。細かく裂かれた光弾は、避ける様にしてジークフリートを通り過ぎ、形を維持出来なくなり彼の背後で霧散する。

捨て身の不意打ちも彼の力と魔剣の前には無意味に終わる――かと思っていた。

「――っ！」

頭上が急に明るくなる。同時に感じる気配。元悪魔祓いとして良く知るそれは聖なる気が生み出す光によるもの。ジークフリートは頭上を見上げる。彼の眼前には光の

柱が迫っている。
空中という自由に動けないジークフリートにエクス・デュランダルが繰り出す極大の光の斬撃が振り下ろされた。
咄嗟に魔剣を交差させ、エクス・デュランダルの一撃を受け止める。しかし、空中という足場の無い状態では跳ね除けることが出来ず、ジークフリートは叩き落された。
「くっ！」
足元から着地すると衝撃で地面は割れる。両足を粉砕骨折してもおかしくない勢いの着地であったが、禁手によって身体能力が高まっていたのでそれは免れた。
その直後のことであった。白い蒸気の中を突き破って現れた拳がジークフリートの顎を下から突き上げる。
「っあ」
衝撃が脳にまで届き、ジークフリートの意識が一瞬だけ飛ぶ。飛ばされた意識は、鳩尾に突き刺さる爪先によって無理矢理引き戻された。
「ぐはっ！」
蹴り飛ばされ、自らが生み出した氷山に背中を打ち付ける。
揺れる視界。機能しない肺。今にも意識が絶たれそうになる中でジークフリートは殺気が迫って来るのを感じ取っていた。

そこから先の動きは身に染み付いていた反射行動に等しい。間近に来た殺気に向けて六本の魔剣を突き出す。

剣が肉を突き刺す感触が伝わると同時に胸骨を全て粉砕する勢いの拳打が入り、衝撃はジークフリートの体越しに氷山にも伝わり、巨大な氷山に真ん中を線引く様な大きな罅が生じた。

だが、シンの方も無事では済まなかった。

左腕は切断され、脇腹、脚、肩に魔剣に貫かれている。ただ、全て刺し貫かれている訳でも無く、ノートゥングの刃は左脇に挟んで受け止めていた。

「やるじゃないか……！」

血反吐を吐きながらジークフリートは賞賛する。激痛と衝撃を与えられながらも気絶せずに意識を保ち続ける。その間にも人工神器が宿主の体を無理矢理修復していく。ジークフリートが死ねば人工神器も死ぬ。運命共同体故に人工神器のフリードはジークフリートが死ぬことを許さない。

「思い切り振り抜け」

シンは刺されたまま呟く。否、それは譫言ではない。誰かへの指示。

晴れぬ水蒸気越しでも分かる圧倒的光量。エクス・デュランダルによる横薙ぎの一撃がシン、ジークフリートへと迫って来ている。

ゼノヴィアにはシンの状態は分からない。しかし、シンの言葉を信じて全力でエクス・デュランダルを振るう。

自分ごと斬らせようとするシンに狂気を感じながらも心中するつもりはなく、貫いていた魔剣を引き抜こうとする。

「うっ！」

脇に挟まれたノートゥング。そして、脇腹を刺しているダインスレイブが抜けない。ダインスレイブに至ってはいつの間にか剣身がシンの右手に掴まれている。

禁手で強化している筈なのに引き抜けない。時間を掛ければ抜けるだろうが、エクス・デュランダルのせいで時間が無い。このままでは共倒れとなる。

ジークフリートの表情が悔しさで歪んだ時、光の斬撃が氷山を一刀で斬り飛ばした後、その余波で漂う水蒸気をも払う。

残されたのは紙一重でエクス・デュランダルを避けたジークフリートと仰向けになって倒れているシン。ノートゥングとダインスレイブを奪った状態で。

剣を扱う者としてこの上ない屈辱をジークフリートは味わっていた。シンが持つ二本の魔剣は自らの意志で手放さざるを得ない状況に追い込まれた証拠である。

彼の人生の中でも一、二を争う程の恥を晒した瞬間とも言えた。

血塗れ、しかも片腕を切断されたシンを見てゼノヴィアは驚き、そして怒る。今にも

飛び掛かりそうなゼノヴィアを止めたのは、木場であった。

「木場！　何故――」

ゼノヴィアは続く言葉を呑み込む。怒りも哀しみも浮かべていない能面の様な木場の無表情、だが、そこから放たれる圧に気圧されてしまった。

木場は指揮者の様に指を振るう。空中で何十もの聖魔剣が創造され、地面に突き立てられる。

そして、木場の口から驚くべき言葉が囁かれた。

「禁手化（バランス・ブレイク）……」

聖魔剣の前に光球が出現し、光球から触手の様に無数の光が伸びて行く。それらは絡まり、人の形となっていく。

光が剥げ、その下から甲冑を纏った騎士達が現れる。全ての騎士から聖なる気と同じ気配が放たれていた。鎧と鎧は光によって繋がれており、時折隙間から光を零している。

顕現した騎士達は、突き立てられている聖魔剣を抜き、呼び出した木場へ忠誠を誓うかの様に聖魔剣を己の眼前で垂直に立てた。

「禁手の並行発動だと……！」

『魔剣創造』ではなく『聖剣創造』による禁手。不完全な形でありながらも発動させてみ

せた。
土壇場で見せた木場の切り札にジークフリートも驚愕するしかない。
木場自身もまた聖魔剣を構える。
「後は任せてくれ」
戦友の意思を継ぎ、戦友が作った轍を騎士達が走る。

聖輝、交換

向上心というものを木場が実感したのは、比較的最近のことであった。

今までやる気が無かったという訳では無い。ただ、少し前の木場はエクスカリバーに対する復讐を胸に秘めており、常にそれを果たすことだけを考えていた。

しかし、エクスカリバーに関わる事件が終わって以降、その復讐心はすっかりと消えてしまった。

復讐を終えた後に木場を待っていたのは虚無――などという虚しいものでは無かった。

前までは後ろに居た筈の戦友であり親友である二人がいつの間にか隣に並び立ち、それどころか自分を追い抜こうとしている。

肩を並べて戦えることを嬉しく思う反面、木場の中の剣士としての意地が、二人が先に行こうとすることを悔しがり、追い抜かれない様に自分もまた必死に前へ進める様に努力する。仲間と呼ばれる剣士として相応しくある為に。

追い、追われ。そこには不思議と焦りは無く爽やかな喜びがあった。

これが、木場が向上心を実感した切っ掛けと言える。

技を磨くことは勿論だが、自分の中の可能性を見出すことに木場は着目した。それが木場のもう一つの神器である『聖剣創造』である。

『魔剣創造』の禁手である聖魔剣に比べると木場の『聖剣創造』によって生み出された聖剣は貧弱であった。元々『聖剣創造』は後天的に得た神器なので熟練度に差が出てしまうのは仕方のないことだが、逆に言えば『聖剣創造』に関してはまだ伸びしろがあることを意味している。

だからこそ木場は『聖剣創造』についての知識を得つつ、扱いが上達する様に訓練をしていた。

禁手に関する知識はすぐに手に入った。何故ならば『聖剣創造』は比較的メジャーな神器であるからだ。現に英雄派のジャンヌの神器も同じ『聖剣創造』である。数が多いということは禁手に至る確率が高く、またそれが情報として残る確率も高くなる。

『聖剣創造』の禁手の名は『聖輝の騎士団』。聖剣を携えた甲冑騎士を複数創り出し、数で圧倒する神器である。複数の魔剣を創造して戦うのが木場のスタイルだが、そこに使い手も増やすとなれば今まで以上の戦闘力を期待できる。

だが、禁手がどんなものかと知ったとしてそこに至れるかどうかは別である。木場も『魔剣創造』が禁手に至れたのは亡き友達の後押しがあったからであった。

この戦いに至るまで木場は『聖剣創造』の禁手化を一度たりとも成功させていない。

ジークフリートの戦いに於いて出来もしない手段を選択として挙げたのは、自らを追い込める意味もあった。極限状態にならなければ禁手は成功しない。

しかし、結果として木場は自らの選択を後悔する。

木場の言葉を信じ、大事な友人が片腕を失った。それだけではない体の至る所を貫かれ、風穴も開けられた。だが、驚くべきことにそんな状態であっても相手の武器を奪うという偉業を成した。

木場はこの行動を心の底から敬服する。

そして、同時に仲間がここまでされたことに対し、全身の血液が沸騰しそうな程の怒りを覚えた。

しかし、ここで怒りに身を任せる訳にはいかない。シンが我が身を犠牲にしてまでジークフリートと戦ってくれたのは偏に木場のことを信じてくれたからであった。

感情の昂ぶりは大事だ。だが、生半可な昂ぶりではいけない。シンの自己犠牲に応える為にはもっと想いを昂ぶらせる必要がある。

ゼノヴィアはシンがやられたのを見て飛び出そうとするが、木場はそれを止める。素直に動けることを少し羨ましく思いながらも彼女を待機させておく。ゼノヴィアもジークフリートの戦いに於いて欠かせない存在。温存しておく必要がある。

それに、仲間の血を見るのはこれ以上沢山であった。

押し込めた感情が行き場を求めて沸き上がって来る。理性の鎖を引き千切ろうとしてくる。木場はその衝動を意思と集中力で抑えつける。高まった集中力はあらゆる雑音、雑念を遠ざけていく。ジークフリートに斬られた傷の痛みも最早感じない。

木場は最後の一押しに倒れたシンの姿を目に焼き付ける。血に染まり、動かない。放っておけば訪れるのは確実な死。

自分ではなく他人の、仲間の死を意識することで木場の神器は極限状態に至る。

木場は心の中で起こった変化で禁手に至ったのを確信する。そして、間髪入れずに禁手を発動した。

「禁手化……」

『聖剣創造』の禁手と同時に『魔剣創造』の禁手も発動。創造させた聖魔剣を次々と構える甲冑騎士が誕生していく。

我ながら不細工な禁手だと木場は思った。見た目は立派な甲冑を纏っているが、関節の隙間などから甲冑を動かす為の聖なる気が漏れ出しているという不完全な禁手。もしかしたら、木場の心の中にある抑え切れないジークフリートへの怒りの現れなのかもしれない。

しかし、寧ろ今は不完全な禁手の方が都合が良いのかもしれない。

現在の木場の実力では二つの禁手を同時に操る容量は無い。『聖剣創造』の禁手が完

全だった場合、聖魔剣を使用出来ず、聖剣を携えた甲冑騎士が並び立っていただろう。
だが、木場の聖剣ではジークフリートの魔剣には敵わない。対抗するにはどうしても聖魔剣が必要であった。
不完全な形で禁手を発動させたことで奇跡的なバランスで二つの禁手を並行発動することが出来たのだ。
後はこれを維持して戦うだけ。ジークフリートの手数に対抗してこちらも数の力で挑む。
「ゼノヴィア」
自らが創り出した騎士団を連れて駆け出す直前、ゼノヴィアにしか届かない声量で木場が話す。
「間薙君のことを頼んだよ？」
その時だけは木場は戦士ではなく、友を想ういつもの木場の顔で微笑を浮かべながらゼノヴィアにシンを託すと聖魔剣と構えた木場と騎士団は一斉にジークフリートへ掛かった。
ジークフリートは木場の禁手並行発動に驚かされるもすぐに切り替え、シンによって奪われた魔剣を『折れる聖剣』を装備することで補う。
（『聖剣創造』の禁手――『聖輝の騎士団（ブレード・ナイトマス）』。知っているよ、その禁手は）

木場が知っている様にジークフリートもまた『聖輝の騎士団』のことを知っていた。『聖輝の騎士団』は発動者本人の動きを模倣するというが、ジークフリートは甲冑騎士の動きを見て即座にあることに気付く。

甲冑騎士の一体が聖魔剣を振り下ろそうとしてくる。だが、振り下ろされる前にジークフリートの一閃が甲冑騎士の上半身と下半身を分ける。

「どうやらこの禁手、不完全みたいだね！」

木場本人の動きを模倣するにしては甲冑騎士の動きは鈍い。木場と比べてせいぜい八割程度の速さしかない。その動きでジークフリートはこの禁手が不完全であることを理解した。

「ん？」

甲冑騎士の分断された部分から聖なる気が伸び、上半身と下半身が結び付くと一気に引き寄せる。切断面が綺麗に繋ぎ合わさると甲冑騎士は何事も無かったかの様に聖魔剣を振り下ろした。

「そういうことか」

一歩後退して振り下ろしの斬撃を回避すると、ジークフリートが移動した先に別の甲冑騎士が聖魔剣を横薙ぎに払う。

振り抜かれる前に『折れる聖剣』で腕を斬り落とし、『折れる聖剣』が自壊すると共に

空を握るジェスチャーをする。すると、その手に新たな『折れる聖剣』が握られ、腕を斬り落とされた甲冑騎士の頭部を貫いた。
頭部を貫かれた甲冑騎士は、先程の甲冑騎士と同様に腕の断面から聖なる気を飛ばして地面に転がる腕と繋ぎ、元に戻すと頭に『折れる聖剣』を刺したまま聖魔剣を振るおうとする。
ジークフリートは『折れる聖剣』に力を流し込むと、聖剣が砕け散り内包していた力を甲冑騎士に流し込んで破壊する。首から上が完全に消し飛ぶが、首から聖なる気が溢れ出し、新たな頭部を作り直し出す。
切断部分を繋ぎ合わせる時と比べると修復する速度は遅い。
それを観察しながら四方から来る聖魔剣を避けるジークフリート。
不完全な禁手は動きも作り物も雑な部分が目立つが、それによって簡単に修復出来るというメリットを得ていた。
聖魔剣と並行して発動出来るのも禁手が不完全によるものと思われる。
木場の動きを劣化させたコピー程度ならジークフリートにとっては脅威ではない。
しかし――
「はあっ！」
「くっ!?」

そこに本体の木場が加わるとなると話は別である。騎士団に気を取られている隙に木場はジークフリートに接近しており、懐に飛び込むと同時に斬り付けていた。

グラムで切り結ぶと同時に『龍の手』が握るバルムンクで反撃を試みようとするが、それを察して別方向から甲冑騎士が突撃してくる。

甲冑騎士自体は恐れるに足りない。だが、装備する聖魔剣は無視することが出来ない特別な物。どうしても意識がそちらへ向けられてしまう。

完全に意識を向けさせる必要は無い。ジークフリートの集中力を僅かでも欠かすことが出来れば木場はその僅かな欠けの中から隙を見つける。

四本の『龍の手』が甲冑騎士をそれぞれ迎撃する。その直後、木場は刃を返して斬撃を繰り出す。

『龍の手』もまたジークフリートの腕。六本も腕があればどうしても脳では処理し切れない事態が起こる。

聖魔剣がジークフリートの肌に触れ、刃が肉を裂く――かと思いきや刃から伝わって来るのは硬いゴムを叩く様な感触であった。

ジークフリートを浸食している人工神器が、斬られた箇所を変質させ木場の斬撃に耐えたのだ。

結果、浅い切り傷が出来ただけでそれも瞬く間に治ってしまう。フリードの意識が表

層化した様な巨大な眼球が木場を嘲る様に細められる。それだけでフリードの憎たらしい表情を思い出す辺り、大した表現力と言えた。

フリードの助力は不本意だが、木場の斬撃を掠り傷以下に抑えたジークフリートは、木場目掛けてグラムを突き出す。

相手の動きを読んでいた木場は突きの速度と同じ速度で後退。眼前にグラムを突き付けられた状態から間合いの外まで移動し切る。

ジークフリートは続けて踏み込もうとするが、それを甲冑騎士によって阻まれた。ジークフリートは仕方なく木場へ放つ筈であったバルムンクと甲冑騎士の胴体へ突き刺し、バルムンクの固有の力である螺旋状のオーラを発動。

内側へ引き込まれる様に甲冑騎士の体は捻じれていき、最終的には耐え切れなくなって木っ端微塵となる。

流石にここまで破壊されると修復する力は働かず、聖なる気の残滓と共に甲冑の残骸は消滅した。

一体を完全に倒したが、所詮は数ある内の一体を倒したに過ぎない。騎士団はまだ木場を囲んで並んでいる。

個の力はジークフリートが上回っているが、それに対抗する数の力は中々に厄介である。自分か相手、どちらかが潰れるまでの忍耐の試し合いが予想された。

木場の方もジークフリートと似たような事を考えていた。甲冑騎士の一体が消滅したが、まだ戦いに支障を来すレベルでは無い。しかし、現状が木場にとっての精一杯なので破壊された甲冑騎士は修復出来ても新たな甲冑騎士を召喚する余裕は無かった。

だが、木場はこの戦いに於いては決して神器を解除するつもりはない。精神が削り取られようとも魂が磨り潰されようとも。

後ろにいるシン達を守る為、彼らが進む道を切り拓く為に『騎士』としての使命を全うする。

◇

木場がジークフリートと戦っている間にゼノヴィアは倒れているシンを急いで手当てしようとする。

「酷い傷だ……」

最も重傷なのは切断された左腕。他にも体には幾つも貫通痕がありそちらも傷が深い。挟んで奪い取ったノートゥングは問題無いが、まだ刺さっているダインスレイブの方は魔剣故に早く抜くべきであるが、下手に抜けば出血の量が増えて命に係わる。

「少し貰うぞ」

一言断ってからシンの右袖を引き千切り、絞ってひも状にして左腕の切断部分をきつく縛る。完全に血が止まった訳ではないが、大量の出血を防ぐことは出来る。
「――悪いな」
「意識が戻ったか！」
シンから声を掛けられゼノヴィアは喜ぶ反面、これだけの重傷を負っても会話が出来るシンの生命力に驚く。
「少し意識が飛んでいた……魔剣か聖剣のせいかは知らないが」
希少且つ強力な魔剣のダメージだけでなく『折れる聖剣』というエクスカリバー擬きの一撃、そこに加えて大量失血もあって命は辛うじて繋いでいたが意識の方を保つことは出来なかった。
「すまない。私では簡単な手当てしか出来ない。アーシアがここに居てくれたら……」
『聖母の微笑』、もしくはフェニックスの涙が有れば切断されていても再び元に戻せる。ただし、それには何処かへ行った左腕が必要である。『聖母の微笑』でもフェニックスの涙でも無いものを元には戻せない。
ゼノヴィアは視線を動かして無くなった左腕を探すが、残念ながら視界に収まる範囲では見つからなかった。
「ないものねだりをしてもしょうがない」

「他人事の様に……お前は左腕を失っているんだぞ！」
冷めた言い方をするシンに、ゼノヴィアはつい口調を荒げてしまう。
「――失ったものは仕方ない」
ゼノヴィアに怒鳴られても、やはりシンの言い方は他人事の様であった。
視界が全く効かない状況の中でノートゥングの斬撃の左腕一本の犠牲で切り抜けられたのは最小限の犠牲と言えた。ついでに光弾を放つ途中であったので、左腕が地面に落ちる前に蹴り上げてジークフリートの不意を突けた。
「簡単に割り切るな……！」
如何なる時も冷静さを崩さないシン。戦闘時ならば頼もしく感じられるが、こういう状況でも同じ態度だと自分の命に無頓着に思え、ゼノヴィアも怒りを覚えてしまう。
「そんなことより――」
「そんなことだと！」
「これを回収してくれ」
ゼノヴィアの怒りを無視して話を進めたシンは、視線でノートゥングを指す。
もっと言いたいことがあるが、いつまでも喋っている訳にもいかないので怒りを抑えて言われるがままノートゥングの柄を握る。
そのままノートゥングを持ち上げるゼノヴィアだったが――

「痛っ！」
掌に痛みを感じてノートゥングを離してしまう。宙に放りだされたノートゥングは、地面へと転がる、かと思いきや刃先が地面に触れた瞬間、吸い込まれる様に鍔元部分まで地面に沈み込んだ。
鋭過ぎる刃のせいで水に入る様な感覚で地面に突き刺さった。
ゼノヴィアは自分の掌を見る。赤い線が刻まれており、時間差でプツプツと血が滲み出してきた。潔癖症のノートゥングによる拒絶の証であり嫌がらせでもある。
「大丈夫か？」
「私より自分の心配をしろ」
自分の大怪我よりもゼノヴィアの掌の切傷に気を遣うことにゼノヴィアは思わず苛立った声を出してしまう。自分の生に対する鈍感さは逆に他者を敏感にさせる。
「ついでで悪いが、こいつも抜いてくれるか？」
シンは目でダインスレイブを指す。この頼みにはゼノヴィアも躊躇する。先程見た通り、ダインスレイブは腹部を貫いている。抜けば大量出血を引き起こす。
「自分でやれるならやりたいが、どうも体に力が入らない」
『折れる聖剣』の聖なる気の影響でシンは思った様に体を動かせない状態であった。もう少し時間が経てば自由を取り戻せるが、あまりのんびりとしていられない。

「これは……！」

ダインスレイブで刺された周辺の血が急速に固まり始めている。ダインスレイブの能力により凍り始めているのだ。止血にはなるかもしれないが、極めて低温なせいで体内組織も凍り出し、シンの体温を凄まじい勢いで下げていく。

ただでさえ失血で青白かった顔色が透き通る様な白へと変わり、吐く息も体温低下で白く染まる。そのせいか元々が綺麗な顔立ちであるので精巧な人形の様な無機質で儚く美麗な印象を強く受ける、とゼノヴィアは不謹慎だと分かっていても思ってしまった。

「時間が無い。早くしてくれ」

「くっ……！」

そこからの決断、行動の早さは流石と言える。ゼノヴィアは一瞬だけ躊躇する表情となるが、すぐに覚悟を決めると苦しみを与えない様にダインスレイブを一気に引き抜き、そのまま地面へ放り棄てる。

ゼノヴィアの行動の早さは結果として吉であった。ダインスレイブの柄を握った瞬間、冷たいを通り越して痛みとなった冷気を感じていた。あれ以上握っていたら柄に手が張り付き、良くて皮が剥がれ悪くて凍傷になっていたかもしれない。

ダインスレイブの影響でシンの傷からはそれほど出血しない。冷気で血が凍り、それ

が蓋となっている。
ひとまず安心するゼノヴィアであったが、シンの次なる行動に目を剥く。半死半生の体の筈なのに起き上がろうとしているからだ。
ゼノヴィアはシンを背後から抱き締めて止める。
「動くな！　死ぬぞ！」
「……まだ死ぬほどじゃない。ゼロには程遠い」
まるで自分の命の残量を正確に把握しているかの様な言い方である。もしかしたら、シンの目には命の数値が見えているのかもしれない。しかし、そんなことを言われてもゼノヴィアはシンを止める腕から力を抜かなかった。
「私は木場にお前を頼むと言われた！　お前を死なす様な真似をさせられない！」
強引に行けば負傷状態のシンでもゼノヴィアの腕を振り解くことは出来ただろう。だが、仲間を守る為の戦いで仲間を傷付ける様な本末転倒なことはしなかった。
「それに木場が戦っている」
今も響き続ける剣戟の打ち合う音。ジークフリートの手数に対して木場は物量で互角に戦っている。傍から見れば拮抗状態であり、どちらの集中力が切れるかを競う精神的な耐久戦となっている。
「木場は『騎士』だ。私達の為に敵を払い、道を切り拓く。私も『騎士』だ。仲間を守る

ことが使命。私達から『騎士』の本分を奪わないでくれ。頼む」
　そんなことを言われて腕を跳ね除ける程シンは薄情ではない。不本意ではあるが、今はゼノヴィアの言う通りに動かないことにする。
「何もするなと言っている訳じゃない。だが、今は待つ時なんだ。木場を信じてその時を待て」
　木場ならば必ず道を切り拓く。ゼノヴィアはそう信じてシンにも自分にも言い聞かす。
「お前は木場を信じられないか？」
　意地の悪い質問だと思いながらシンは体の力を抜く。ゼノヴィアが言う、その時に備えて力や体力の消費を抑える為である。
「――信じるさ」

◇

　交差する刃の音が常に鳴り続ける。甲冑騎士は左右、前後だけでなく足元、上空など攻める場所を選ばずに攻撃をし続ける。
　通常の相手ならばとっくにバラバラになって全身を地面に転がしているだろう数の

攻撃を、ジークフリートは六本の腕と剣を振るって全て対処していた。
しかも防ぐだけではない。甲冑騎士に少しでも隙を見つけたら、刃を返して反撃を試みており、逆に地面に転がされる甲冑騎士も居るぐらいであった。
『龍の手』が持つディルヴィングが甲冑騎士の脳天へ叩き込まれる。甲冑騎士は瞬時に縦に圧し潰され、足元に出来たクレーターと同化する程に完全に破壊され消えてしまう。
木場の騎士団は最初の時と比べて三分の一が再生不可能な状態にされて消滅している。
息つく暇も無い攻防。木場もジークフリートも全身を疲労の汗で濡らしている。だが、両者ともに目の輝きは失せてはおらず、寧ろ最初の時よりも輝きが増していた。
木場は『騎士』の使命感と誇りによる輝きを瞳に宿し、ジークフリートは剣士としての誇りと高揚感で瞳を輝かせる。
力を消耗する一方で二人の裡にある想いは消耗されることなく、どんどん高まっていく。
木場の騎士団の数が減っているといったが、それでもジークフリートと未だに互角なのは想いの昂ぶりによるもの。数の減少に反比例して甲冑騎士の動きのキレが増しており、徐々にだが木場に近い動きをする様になっていた。

甲冑騎士の中にはジークフリートの斬撃を援護無しで回避する個体も出て来ている。
甲冑騎士の精密性が向上することとは異なり、ジークフリートの方は『龍の手』による力の上昇が起こっており、連続して数撃与えなければ甲冑騎士を戦闘不能へ追い込めなかった所、命中すれば一撃で木っ端微塵になる程の威力まで引き上げられている。
命懸けの接戦のせいで歯止めが効かなくなるぐらいに高め合って行く両者。短時間で日常の訓練では得られない力が付く。
木場本体がジークフリートの懐へ入り込む。二刀流による聖魔剣がジークフリートの体に傷を付けるが人工神器の防御力のせいで浅い。ジークフリートは攻撃直後の隙を生み出す為に敢えて木場の攻撃を受けており、目論見通りにジークフリートの前に隙を晒す。
だが、その隙を埋める為に甲冑騎士達が吶喊し、木場への攻撃を妨害する。
ジークフリートを攻撃する前に既に甲冑騎士は動いていた。木場もこうなることを読んでおり、隙を晒すことを承知で全力の攻撃を仕掛けていたのだ。
今の動きに臨機応変に対応するだけでは遅い。相手の一手、二手先を読むことでやっと互角。肉体の酷使だけでなく脳の酷使まで必須であった。
ジークフリートは左右から来る甲冑騎士の内は一体はグラムによって斬り払い、斬り倒すとすかさずもう一体の甲冑騎士の方へ跳躍する。

甲冑騎士の胴体を蹴り付ける。『阿修羅と魔龍の宴』によって何十倍にも高められた身体能力から繰り出される蹴りは、胴体が腹と背の部分が付くぐらいに凹ませてしまう。

だが、ジークフリートはただ攻撃する為に甲冑騎士を蹴った訳では無い。ジークフリートはそれを足場にして甲冑騎士を蹴り飛ばす。甲冑騎士は吹っ飛び、ジークフリートも反動で飛ぶ。飛んだ先には木場が居た。

「くっ！」

聖魔剣で咄嗟に防御を固める。魔弾と化したジークフリートが放つ加速と自重を加えた斬撃。

六本の刃が二本の刃に触れた瞬間、木場の脳裏にはコンマ数秒後に上半身と下半身が分断される自身の姿が映し出された。

体を捻り、衝突の衝撃を受け流そうとする木場。片方の聖魔剣に亀裂が生じると共に肩から嫌な音が体内へ響く。

「ぐうぅぅ！」

重たい衝撃に巻き込まれになりながら木場は全身の力を込め、突っ込んで来たジークフリートの軌道を逸らし、側面を通り過ぎさせていく。

受け流されたジークフリートは、魔剣を突き立ててブレーキを掛ける。だが、すぐに

は止まることが出来ずそのまま十メートル以上地面に線を引くこととなった。
ジークフリートの渾身の斬撃を受け流すことに成功した木場。しかし、払った代償は決して安くはない。
「くっ……！」
木場の片腕がだらりと下がり、手から壊れかけた聖魔剣が滑り落ちる。力を完全に流すことが出来ず、肩の骨を破壊されてしまった。
落ちた聖魔剣を拾い上げようとするが指先に力が入らず、掴めない。シンは片腕を切断しても戦ったというのに、骨折ぐらいで動かなくなる自分の片腕を情けなく、恨めしく思ってしまう。
「貧弱なんて自嘲しない方が良い。普通なら受け止めきれずに死んでる」
歪む木場の表情を見て、ジークフリートから慰めの言葉が掛けられるが――
「戦いの最中の敵の慰めなんて侮辱にしか受け取られないよ？」
――木場はそれを突っ撥ねる。ジークフリートもそれは分かっているらしく小さく笑う。慰め半分挑発半分の意味で言った様子。
あくまでも強気な態度を崩さない木場であったが、それでも体は正直であった。木場は不意に片膝を突く。
度重なるダメージと積み重なった疲労が肉体に警鐘を鳴らし、精神力でカバーしきれ

なくなったのだ。
ジークフリートは木場に限界が来たのを『やっとか』と内心安堵する。三人相手でもきつく、禁手を使ったせいで魔剣の反動を喰らい肉体も悲鳴を上げている。それに加えて人工神器のフリードが精神に悪影響を及ぼしそうなぐらいに喚いていた。木場が禁手を二重で発動した際は表面上は出さなかったが、内心ではかなり焦らされた。
しかし、それもやっと終わる。
木場は片膝を震わせながらも立ち上がる。しかし、木場の不屈の闘志とは裏腹に召喚していた甲冑騎士が消え始めた。不完全だった『聖輝の騎士団』の時間切れを迎え、握っていた聖魔剣が地面に落下していき、キィンという音を鳴らす。
「君は強かったよ。木場祐斗」
せめてもの敬意でジークフリートの二つ名の由来となったグラムで木場を屠ろうとする。
「だが、君一人ではここまでが限界だ」
グラムの切っ先と共に現実を突きつける。すると、木場は小さく笑う。
「確かに今の僕は一人だ」
それを自嘲と受け取ったジークフリートはせめてもの情けで一太刀で片付けようとする。

「――でも独りじゃない」

木場の台詞がジークフリートの耳へ滑り込むと同時にジークフリートの体が一瞬だけ震えた。

自身に何かが起こったことを悟るが何が起こったのかほんの少しの間、理解出来なかった。体に異変を感じ、動こうとした時視界の隅で何かが落ちていく。

龍の鱗で覆われた銀色の腕――ジークフリートの『龍の手』で間違い無い。それが切断されて落下する様子をジークフリートはコマ送りの様に見ていた。

切断された痛みすら感じない。こんなことが出来るのはあの魔剣しか有り得ない。

目を動かし、それを見た。半死半生の重傷を負っている筈のシンが片腕で何かを投擲した後のポーズをとっている。

何を投げたのかは明白であった。シンがジークフリートから奪い取ったノートゥングである。比類なき切れ味を持ち、空間すら断つことも出来るノートゥングなら風切り音すら出さずにジークフリートの腕を斬り飛ばせられる。

「――っっ！」

少し遅れてジークフリートに『龍の手』を切断された痛みが襲い掛かる。自分の手の延長として繊細に扱えるため、それ相応の反動もあるのだ。

細い神経の中を膨大な痛みの情報が駆け抜け、脳に辿り着くとその情報で脳が焼き切

れそうな衝撃を与えた。
この痛みによりジークフリートの体は硬直してしまう。だが、それはほんの少しの時間だけであった。ジークフリートの精神力はすぐに痛みを乗り越え、体の自由を取り戻そうとする。
この短時間では負傷している木場ですら反撃に移れない。――そう、木場だったら。
「はあああああっ！」
それは神がかったタイミングであった。
ジークフリートの意識が逸れ、尚且つ硬直が解ける寸前でゼノヴィアが落下してくると共にエクス・デュランダルでジークフリートを袈裟切りにする。
「なっ！」
痛みよりも先に驚愕が来た。エクス・デュランダルの大振りの一撃をまんまと浴びせられてしまった自分への驚き。肩から胴体に掛けて斬られた傷から噴き出る血のニオイと暖かさと、それを失うことで感じる命の喪失感がジークフリートに幻ではないことを嫌でも教えてくれる。
痛みと共に後悔も怒涛の如く押し寄せて来る。
シンを見た時にゼノヴィアが居ないことに気付くべきであった。
木場との戦いでもシン達に注意を払うべきであった。

シン、ゼノヴィア、木場。この三人はそれぞれが存在感を発しているにも関わらず、その内の一人に注目してしまうと、途端にその人物が持つ存在感で他の二人を隠してしまう。

個別で戦えば問題無いが、チームとなるとこれ程厄介なチームは無い。

ゼノヴィアの渾身の一撃を受けてよろめくジークフリート。しかし、絶命には至っていない。人工神器が生命力と頑丈さを補ってくれたお陰で上半身と下半身はまだ付いている。

それどころか命の危機に反して人工神器が過剰な反応を示し、斬られた断面に繋げようと蠢いていた。

「――ごふっ」

ジークフリートは血塊を吐き出す。視線を下げると修復最中の傷口に両刃剣――聖魔剣の先端が突き刺さっている。

刺したのは勿論木場。ゼノヴィアと入れ替わる様にして前に出ていた。

木場の力ではジークフリートの人工神器の防御を突破することは出来なかった。だが、切れ目が生じた今、ジークフリートにダメージを与えることが出来る。

「木場、祐斗……！」

ジークフリートがグラムを振り上げた瞬間、神速という言葉が相応しい動きで木場は

態勢を変え、突き刺さっている聖魔剣の柄頭を蹴り付けた。
『騎士』の高速を生み出す脚力から繰り出される蹴りは聖魔剣を鍔元まで埋め込み、貫かれたジークフリートごと彼方へ蹴り飛ばす。
胴体を串刺しにされたまま飛ばされるジークフリートであったが、地面を踏み付けて無理矢理停止し、大怪我を負っているのに膝を折ることなく踏み止まる。
とはいえいくら精神力でカバーしていてもダメージを無かったことには出来ないのでジークフリートはその場から動くことが出来ずにいた。
然程離れていない距離で睨み合うジークフリートと木場。
睨み合いは唐突に終わる。両者の間にジャンヌの聖龍が割って入って来たからだ。
ルフェイとイリナと戦っていた筈のジャンヌの横槍に驚く木場とゼノヴィア。
聖龍は木場達を威嚇する様に睨んだが、攻撃することはせずに飛び立つ。飛び立った後にジークフリートの姿は無かった。
「もう無理もう無理！　お姉さん、帰らせてもらうから！」
聖龍の背に乗っているジャンヌ。ルフェイの巨人達を倒す術も見当たらず、ルフェイとイリナの攻撃も激しさを増してきたことから撤退を決めた。
「ジャンヌ……僕はまだやれるよ？」
ジャンヌに回収され、不本意な形で退却することとなったジークフリートはジャンヌ

に刺す様な眼光を向ける。
「そんな大怪我で無理しない。あとジーくん……顔付き、変わってるよ?」
ジークフリートはハッとした表情になって己の顔に手を当てる。本人視点では分からないが、ジャンヌからするとジークフリートが今まで見せた事の無い歪んだ表情をしている。
体力や精神を大分削られたせいで人工神器に残るフリードの怨念がジークフリートの体を侵食している。
ジークフリートは暫し沈黙した後、大きく溜息を吐く。現状を認め、切り替えたことでフリードの怨念を押え込み、表情がジークフリート本人のものへ戻った。
「ノートゥングとダインスレイブは諦めるか……」
今からではその二本の魔剣を回収することは不可能。だが、ジークフリートにとっては都合が良いとも言えた。
「木場祐斗!」
傷を押してジークフリートは叫ぶ。
「ノートゥングとダインスレイブは君に預けておくよ!　大事に使ってくれ!」
惜しくないと言えば嘘になるが、どうせ使われるなら実力を認めている剣士が使ってくれた方がマシであった。そして、同時にそれは再戦の誓いでもある。

聖龍の周囲に霧が発生する。結界の様子を監視していたゲオルクが二人の撤退に動いた。
霧によって転移される間際、ジークフリートは呟く。
「――代わりにこれを貰っておくよ」
ジークフリートは己の腹部に刺さった聖魔剣の柄を撫でる。
霧によってジークフリート達が消えると、木場は糸が切れた様にその場で倒れそうになるが、ゼノヴィアが支える。
「随分無茶をしたな、木場。私達が手助けしなかったら危なかったぞ？」
「無茶はしたけど、言うほど危ない状況じゃ無かったさ」
「何？」
「信じてたからね、ゼノヴィアや間薙君のことを」
木場は穏やかな表情で確信を持って言う。
「僕が仲間の危機を見過ごせない様に、君達も僕の危機を見過ごす筈が無いってね」
一点の曇りも無い信頼の言葉。ここまでハッキリと言われるとゼノヴィアも照れ、つい目線を逸らしてしまう。
「そう言われると嬉しいが……少し照れる」
「ふふっ」

いつもはクールなゼノヴィアの照れた様子に木場は小さく笑う。
「ゼノヴィアー！　木場くーん！　間薙くーん！」
「大丈夫ですかー？」
イリナとルフェイがこちらに向かって来るのが見えた。幸い二人は怪我をしていない。対するシン、木場、ゼノヴィアはかなり消耗している。
二人の手を借りようと思っていた矢先、こちらに向かって来ているルフェイが何かを蹴飛ばしてしまい足を止める。
ルフェイは随分と重い物だったので何かと思い、蹴った物を凝視した。それは切断されたシンの左腕であった。
あまりにショッキングだったせいかルフェイは脳が情報を処理し切れずに少しの間停止する。そして、脳の情報処理が追い付くと――
「きゃあああ！　腕ぇぇぇぇ！」
――悲鳴を上げる。
ルフェイの悲鳴にイリナが思わず足を止める。
「丁度良い。ついでに持ってきてくれ」
すると、シンの声が聞こえてきたのでイリナはシンを見ると――
「いやぁあああ！　腕ぇぇぇぇ！」

――イリナはルフェイと同じ様な悲鳴を上げるのであった。

意地、助人

オオオオオオオンッ！

天まで届く咆哮を上げ、八坂は口から炎を吐く。それは真正面から見れば津波を吐き出している様な光景であった。

炎の津波の正面に立つオンギョウキ一人を屠るには過剰過ぎる程の火力。

オンギョウキは光さえ吸い込む様な黒い装束を炎で赤く照らされながら臆することなく右手の人差し指と中指を二本立て、眼前で構える。

印、というものに近いがこの構え自体には深い意味は無い。オンギョウキの心を鎮め、即座に力を練り上げ、集中力を高める為のスイッチの様なもの。オンギョウキは構え一つでそうなる様に自らに刷り込んでおり、この構えも数ある内の一つであった。

腹の奥底で練り上げられた力がせり上がり、オンギョウキの口から突風として吹き出される。

ただの強い風ならば八坂の炎にあっという間に呑み込まれるだろう。オンギョウキの吹き出した風はつむじ風と変わり、勢いを強めてやがて竜巻へと派生する。

炎の津波が竜巻に触れると、竜巻は炎を巻き込み、取り込んだ熱や火を上空へ放出。

竜巻が炎を巻き込んだことで炎の津波の一部に裂け目ができ、オンギョウキはその裂け目を通ることで無傷で切り抜けてみせた。

しかし、炎を無事切り抜けたオンギョウキを待ち構えていたのは、八坂の巨大な前足。振り下ろされた前足はオンギョウキに逃げる暇も与えず、地面ごとオンギョウキを打ち砕く。

厚みすら無い程に地面と完全に同化してしまったのが容易に想像出来る。

最強の忍の呆気無い最期――かと思われた。

八坂は異変を感じ取る。圧殺したオンギョウキの姿を一目見ようと前足を上げようとしたが、何故か足裏が地面に張り付いて取れない。

もっと力を込めようとした時、パキパキという音が耳に入って来る。それは叩き割られた地面から聞こえてきた。

その瞬間、足裏に痛みに等しい冷たさを感じる。その冷たさは八坂の足を這い上がり、周囲の水分を凝固させ八坂の足を氷漬けにした。

氷は肩付近まで登り、片足を完全に動けなくさせる。

八坂は炎を吐いて氷を溶かそうとするが、目の前に白い靄が漂ったかと思うと口の周りを拘束具の様に氷が覆い、炎を吐けなくさせる。

更には四方から糸の様に氷が伸び、八坂の体を縛り付ける。その様子は宛ら蜘蛛の巣

に引っ掛かった獲物のようであった。
その様子を木の上から見ているのは先程潰された筈のオンギョウキ。
炎の津波が迫っていた瞬間に密かに分身と入れ替わっており、その上で分身には破壊されると冷気による術が発動するよう仕込んでいた。
オンギョウキは八坂を傷付けるつもりは無い。無傷で戦いを終わらせる為に拘束したのだ。しかし、術による拘束も一時的なもので長くは持たないことをオンギョウキは理解していた。
現に氷の術で縛られた八坂は力でその拘束を解こうとしている。四肢に力を込めており、氷がメキメキと音を立て、氷の一部が剥がれ落ち始めていた。
目に狂気を宿らせながら力に物を言わせる姿は理性無き獣。京都の妖怪の長として聡明な八坂の姿を知っているオンギョウキからすれば今との差に八坂を心底不憫に思う。
そして、オンギョウキには懸念していることがあった。理性無き獣なら暴れ狂いいずれは力の底が突くが、匙からの情報で八坂には特殊な術が施され、京都中の力が集められており、ほぼ無限に等しい力を得ている。しかし、それこそがオンギョウキにとっての不安であった。
いくら力が無限に供給されるとしてもそれを使用する器には耐久力というものがあ

る。仮に人が無尽蔵の体力を手に入れたとしても無限に走り続けるのは不可能。走る過程で足や膝にダメージが蓄積し、壊れてしまう。そうなれば無尽蔵の体力も意味を為さない。

それと同じ事が八坂の身に起こるかもしれない。常に全力を出し続けているからこそ、八坂の肉体の方が先に壊れる危険性があった。

（時間を掛けるべきではないが……）

時間を掛ければ八坂が壊れてしまう可能性は高まる。だからといって暴走する八坂を野放しには出来ない。

悔しいことだが今のオンギョウキに出来ることは二つ。信じる事と耐える事。

元凶である曹操を一誠が倒すことを信じ、八坂の体がそれまで持つことを信じ、耐え続けるしかない。

そんな事を考えている内に八坂は力任せに氷の拘束を破壊し、自由になる。

木の上に立つオンギョウキを睨むと口輪になっていた氷を砕いて炎を吐いた。

オンギョウキは重力を感じさせない軽やかな動きで跳躍して炎を躱す。宙を飛ぶオンギョウキに八坂は続けて炎を吐くが、オンギョウキは風に舞う木の葉の様な動きで空中に居ても炎を回避する。

木の葉の様なゆったりと舞う動きをしていたかと思えば、突如として空中を矢の様に

移動して着地。
オンギョウキが着地したのは八坂の前足付近。無謀な間合いへ自ら飛び込んできたオンギョウキに対し、八坂は前足を振り上げようとするが――
「――申し訳ございません」
一言詫びた後オンギョウキは前足が振り上げられる前に、得物の柄部分で人間で言えば脛に当たる部分を強打する。
オオオォオンッ！
八坂の口から苦鳴が上げられる。骨まで響く痛みを感じているのだから無理も無い。だが、オンギョウキの攻撃は痛みを与えるだけで倒すには程遠い。現に八坂はすぐに動いており、逆に痛みへの恨みを晴らす為に怒りで力を増す始末。
逆効果としか言えない結果であるが、オンギョウキは焦る様子は微塵も無い。
八坂は受けた痛みを返す為に口を大きく開き、炎を吐こうとする。オンギョウキはそれを正面から見ているだけ。
炎が吐かれる間際、何故か八坂の体は大きく傾き、正面に吐かれる筈であった炎は空に向かって測れる。
傾いた巨体はそのまま転倒。地響きと土煙を上げた。
「――不動剣」

オンギョウキは誰にも聞こえない声量で呟く。

横に倒れた八坂は立ち上がろうとするが何故か上手く立ち上がることが出来ない。体を支える為の前足が動かすことが出来ず、そのせいでバランスを崩してすぐに転倒してしまうからだ。

今の八坂は足が片方消失した様な感覚に囚われている。その片足は先程オンギョウキが武器の柄を叩き付けた方であった。

不動剣。それは文字通り相手を動けなくさせる技。オンギョウキの体内で練った気を相手の体内に流し込み、四肢の自由を奪って麻痺させるというもの。本来ならば斬撃と共に放つ技だが、相手が八坂であるので傷付けない為に柄の方を使った。

そのせいで大分効果は薄れてしまい、四肢の一部を麻痺させる程度の威力になっていた。

因みにではあるが、この技はオンギョウキが独占しているものではなく教えを請われれば京都の妖怪限定ではあるが教えている。その為オンギョウキ以外にも武芸の腕が立つ妖怪も覚えている。尚、オンギョウキの部下であるキンキ、スイキ、フウキにも教えたが似ても似つかない技として修得された。

片足の感覚が無くなっていることに悪戦苦闘している間にオンギョウキは黒い風となって八坂を通り抜けていくと、すれ違い様に残りの四肢に得物を打ち付けた。

痛そうな叫びを上げると八坂の巨体は四肢を大きく広げる形で大地に腹を着ける。これで暫くの間は身動きが取れなくなった。

ただし、これもまた氷で縛った時と同じく時間制限がある。先に述べた様に本来ならば斬り付けて相手の体内に気を打ち込み、毒の如く蝕む技である。打っただけでは効果時間は半減か三分の一程度まで短くなる。

（これで少しは時間を――）

そこまで考えた時、八坂の体が燃え上がる。

「むっ」

炎上する八坂に思わず駆け寄りそうになるが、オンギョウキは寸での所で自らを止めた。

八坂は炎上しているのではない。八坂自身が炎となっていることに気付いたからこそ止まったのだ。

輪郭が崩れ炎そのものと化した八坂。すると、炎は飛礫の如く周囲へ放たれる。

「変化か」

人の頭程の大きさの炎の飛礫が数多となって押し寄せてくるが、オンギョウキは俊敏な動きによって飛礫の隙間がある位置まで移動し、柔軟な動きにてその細い隙間を掻い潜る。

外れた飛礫は建物や木々、地面に大穴を開けていく。数発浴びれば殆ど形が残ることは無いだろう。

「お見事でございます」

避けながらもオンギョウキは八坂の変化の精度を讃える。見た目だけでなく、変化対象そのものと化しており、飛礫の傍を通る度に炎の熱が感じられる。

オンギョウキは八坂の変化を見た事が殆ど無い。あったとしても簡単なものであり、せいぜい衣装を変えるぐらいのもの。実のところ、八坂の九尾の狐となった姿も初めて見た。この様な状況でそれを目にし、オンギョウキの心中は複雑である。

長である八坂が戦いの場に出る機会は殆どなく、そうなる前の汚れ仕事は全てオンギョウキや他の三鬼達がやっていた。

オンギョウキはそれで良しと思っていたし、争いごとに八坂が出ないことが一番だと思っている。

いざ自分が戦うとなると難敵である。京都のパワースポットから力を貰っているが五大龍王と引けを取らない実力だろう。

オンギョウキは印を組んだ後、息を吹く。吐かれた息は小さな旋風となり、やがて砂利や木の葉などを取り込んで竜巻となって可視化される。

先程の炎の津波を割った様に風の力を借りて、炎となった八坂を引き寄せようとして

いた。
オンギョウキの目論見通り、炎の礫が竜巻に吸い込まれていく。だが、間もなくして竜巻が四散する。
四散した竜巻の後に飛び出してきたのは無数の刀剣。和洋中問わず様々な形の刀剣が竜巻を内側から切り裂いて周囲を無差別に斬り付けていく。
（流石に二度も同じ手は通じないか）
実物と変わらない八坂が変化した数多くの刀剣を避けながら自分の考えの甘さを反省する。自我を縛られているが、戦いの思考まで縛られてはおらず獣同然の行動をしながらも時折知識の片鱗が垣間見えた。
地面を滑る様に移動して刀剣を回避した後、木の枝へと飛び移るオンギョウキ。そこに刀剣が飛翔し、オンギョウキの背中に突き刺さって彼を幹に磔にする。
が、その直後に磔にされたオンギョウキから厚みが無くなり、幹に張り付く影となる。すると、刺さっていた刀剣は影の中へと沈み込み、それを入れ替わって影の中から本物のオンギョウキが出て来た。
最早、忍術というより魔術、奇術の類のような奇怪な光景。
「――どうしたものやら」
オンギョウキは思考を巡らせる。どうやって八坂を傷付けずに無力化させるか。現

状ほぼ不可能に近いことだが、それでも考えることを放棄しなかった。
飛び回っていた刀剣が一箇所に集まり、狐の顔を形作る。その目付きはオンギョウキに対して怒りが込められている。
操られているとはいえ八坂からそんな目を向けられるのは少々悲しく思う。同時に八坂をこんな目に合わせた英雄派への怒りが煮え滾って来る。
不思議なもので八坂を救う方法は中々導き出せないが、英雄派の面々を生き地獄に叩き込む方法なら幾らでも湧いて来る。自分にこんな陰惨部分があったことに驚くぐらいに。
狐の顔を作っていた刀剣がばらけ、再びオンギョウキを襲う。
オンギョウキはそれらを避けながらひたすら八坂を救う手段を模索する。
未だに解決の糸口は見えない。

◇

「こっちでいいんだな？」
「そうじゃ。あっちじゃ」
匙は走っていた。肩車している九重の指差す方角に全力疾走する。

九重は時々耳を動かして何かの音を拾い、鼻で何かを嗅ぎ分けながら匙が行くべき道を指し示す。
「ここじゃ！」
やがて二人は目的の場所へ辿り着いた。そこは殺風景な場所であり、周りにはこれといった物が置かれてもいない。見ても数秒後には記憶の中から抹消される様な寂しい場所である。
「本当にここなんだな？」
あまりに何も無い場所だったので匙は九重を下ろしながら念入りに確認する。
「間違いないここじゃ！　ここが力の流れが交わる地点じゃ！」
「そうか。ありがとよ」
戦いの場所である二条城は京都という都市に多く存在するパワースポットが生み出す気を意図的に乱して流入させている。
その気は二条城全体に張り巡らされた結界や八坂を操り、力を注ぐ為に利用されている。
匙は九重に頼み多くの気が流れる場所を探してもらった。九重は京都に長年住んでいること、また潜在能力が高いのでそういった気を読むことに優れていた。
気の流れを探す中で九重は多くの気が交わる地点を見つけ出し、そこに匙を案内した

のだが、九重は匙がここで何をするのかまでは知らない。
「お主、ここで一体何をする気なのじゃ？」
　すると、匙は口の端を吊り上げて笑うと『黒い龍脈』を装着する。
「ここに流れている気が英雄派の奴らにとっての要なんだ。これがあるからお前の母ちゃんもおかしくなっている。――だからここを滅茶苦茶にすんだよ」
『黒い龍脈』からラインが伸びる。
「今からラインとここを繋げる。そんでもって気の流れを吸収する」
「なっ！」
　九重は驚き、すぐにそれに待ったを掛けた。
「止めよ！　京都中から集めた気じゃぞ！　そんなものを大量に取り込んだらお主も持たん！」
「取り込むつもりはねぇよ。別のラインから片っ端から外に流していく」
　そう言ってもう一本のラインを見せるが、九重の意見は変わらない。
「そういう問題では無い！　そもそもお主の体を通す時点で無謀なのじゃ！　気が流れ込んだ瞬間にお主の体が耐え切れずに爆ぜるぞ！」
「……まだそう決まった訳じゃねぇ。俺だってヴリトラの器なんだ。乗り越えてみせるさ」

そう言ってまだ笑う匙に九重は激昂する。
「そんなものは自殺行為じゃ！　命を粗末にするだけじゃ！」
「死ぬつもりねぇっ！」
九重の怒声に対し、匙は更なる声量で返す。九重が思わずビクリと体を震え上がる程のものであった。
その反応を見て『悪い』と一言詫びてから、少し冷静になって匙は話す。
「勘違いしないでくれ。確かに俺は命懸けでやるつもりだが、死ぬつもりなんてさらさらない」
命懸け、死ぬ気でやる覚悟はあるが死ぬつもりないと矛盾したことを言う。
「死ぬ気でやるには未練があり過ぎんだよ、俺は。家族を置いて先に逝ける筈も無いし、認めさせたい奴らにカッコいい所も見せていない。……好きな人に告白だってしてねぇ。まだ数え切れないぐらいに生きる理由があるんだ」
この時になって九重は気付いた。匙がふてぶてしく笑っているのではないと。これからすることへのリスクを正確に理解し、その恐怖から顔を引き攣らせているだけなのだと。
「でも俺は弱いから……そんぐらいの覚悟しなきゃやれるもんもやれねぇんだよ」
生にしがみつく理由は数え切れないぐらいある。だが、匙自身が出来ることは限られ

ている。そこから一歩踏み出すには、恐怖を覚悟しながら背負っているものを零してしまうぐらい前のめりになって前進するしかないのが分かっていた。

一誠の様な愚直に突き進み壁を突き破る様な力も、シンの様な自分の命をギリギリまで消耗して壁をこじ開ける力も無いのだから。

「それなら、それならお主がやらなくとも良いではないか……。巻き込まれたお主がそこまでする義理など……」

「しょうがねぇだろ！　気付いちまったんだから！　これなら俺にも出来るかもしれないって！　そう思ったんなら……もう目を逸らせねぇ」

逃げるのは簡単である。あの時、何もせずに九重とじっとしていればいいだけだった。だが、匙はそうしなかった。すれば自分が惨めな思いをすることを理解していたからだ。

ここで逃げたら想い人にもライバルにも顔向け出来ない。

匙の強い意思が伝わり、九重は何かを言おうとしたが口を閉じてしまう。少しの間、黙った後、九重は表情を引き締め、こちらをまた覚悟を決めた表情となる。

「そこまで言うのなら、私はもう止めん！　如何なる結果になろうとも私はお主を見届けよう！」

堂々と九重は宣言する。匙の覚悟を聞いて、あれこれ言うのは最早無粋。目の前の男

の覚悟に九重も感化され腹を括る。
　九重は、どのような事態になったとしても匙のことを恨むつもりはなかった。
「――ありがとよ」
　礼を言った後、匙はラインを地面へ伸ばしていく。
「こんな時にだが」
「うん？」
　ラインを伸ばしている最中に九重が話し掛けて来る。
「お主の名、きちんと聞いていなかった」
「ああ……」
　一誠が二人の名前を言っていたので気にしなかったが、思い返すとちゃんとした自己紹介をしていなかった。
「匙元士郎だ。よろしくな、お嬢ちゃん」
「お嬢ちゃんではない。九重だ」
「ふっ。そうだったな。よろしく、九重」
「うむ。それで良い、匙」
　引き攣っていた匙の顔が僅かに緩み、微笑を見せる。九重の方も曇らせていた表情が微かに晴れた。

張り詰めた状況の中でほんの一時だけ出来た穏やかな時間。
だが、それも何かを感知した匙によって消し飛ばされる。
「来た……！」
伸ばしていたラインがパワースポットの力を嗅ぎつける。そして、ラインが気の溜まりに触れた。
「――ッ！」
匙は言葉にならない叫びを上げると同時に空に向けて伸ばしていたラインから膨大な量の気が放出される。ラインが気の流れに触れ、匙の体を通して外へと流され、匙の思い描いた通りになる。
しかし――
「匙！　匙！　気をしっかりと持て！」
九重が泣きそうな声を出す。
ラインで気を取り込んだ瞬間、匙の体は膨大なエネルギーによって満たされ、鼻孔が目から流血する。額や体中の血管が膨張し、場所によっては裂けて内出血を起こしたり、血が噴き出したりなどの肉体の破壊が起こる。
それだけでも大変な苦痛であるが、取り込んでいる気は純粋なエネルギーである為に破壊された箇所がそれによって再生され、治ると同時にまた破壊される。

再生と破壊が同時に起り、匙に無限地獄に等しい苦痛を与える。
（甘く、考えたか……？）
言葉に出来ない激痛を体感しながら自分の見通しが甘かったことを文字通り痛感させられていた。
ラインが吸収する量を調整しようにも怒涛の如く入り込んで来るので調整出来ず、逆に放出の方は取り込んだ量に反して少ない。気の影響のせいで『黒い龍脈』の操作が上手く行かない。
頑張れば、必死になれば、それ相応の成果を出せると思っていた。少なくとも匙の短い人生では上手く行っていた。
だが、いつかは失敗してしまう時が来る。そんな事をぼんやりと思ってしまう。
（ああ、やべぇ）
意識が薄れると共に過去の記憶が蘇って来る。走馬燈が頭の中で巡り出し始めた。
家族との思い出。ソーナとの出会い。生徒会メンバーとの出会い。一誠達との出会いが次々と思い浮かんでは消えていく中で、最後まで残る匙の中の思い出。
『こうやって戦ってみて改めて思った。お前は強いよ。だから挑みたい！　勝ちたい！　超えたい！　そう思うのはおかしいか？』
一誠と全力を尽くしたレーティングゲームの記憶。匙が初めて命懸けで戦った時の

記憶。

ソーナの為、そして自分の為にも何が何でも勝ちたかったライバルとの死闘。

『まだまだやれんだろ！　匙！』

一誠に言われた言葉が蘇って来る。

『――お前が強いからだよ』

ライバルが言ってくれた最高の賞賛。それが折れ掛けていた匙の心を奮い立たせる。

あの時と違って見守ってくれるソーナは居ない。超えたい一誠も居ない。それでも――

（いや、居るじゃねぇか）

――目の前に半泣きになって声を掛けてくれる九重が居た。耳がおかしくなっているので声は聞こえないが、自分の名を呼んでくれるのは伝わって来る。

（そんな顔すんなよ……もうかっこ悪い姿は見せねぇからよぉ！）

意地を張らなければならない。泣きそうな子供を前にして匙の気力が湧き上がる。

体への激しい負担に耐えながらも精神を落ち着かせ、強制的にラインへ入り込んで来る気の量を絞り込み、放出する気の量を増やす。

それだけで体への負担が大分減る。

気の遠くなる作業だが、足掛かりは出来た。ここから先は――

「おうおう。随分と活きの良いことしてんじゃねーの」
――年老いた男性の声が頭上から聞こえて来る。
匙は見上げる余裕は無く、代わりに九重が上を見上げた。
匙が放出させた気は周囲を覆っている結界に衝突していたが、その結界に裂け目ができており、そこから緑の鱗を輝かせ、細長い胴体を持つ東洋のドラゴンが出て来ている。
「な、なんじゃあれは!?」
一瞬唖然とした後、当然のリアクションをする九重。
「そうコンコン喚くなや、子狐。長候補なら、もっとどんと構えとれ」
頭上から聞こえて来た声が今度はすぐ傍で聞こえる。
九重が声の方を見ると、小柄な、本当に小柄な猿の様な老人、若しくは老人の様な猿が匙の肩に手を置いている。
金色に彩られた体毛。黒い肌。首回りには珠の大きな数珠を掛け、素朴な法衣を纏っているが、だが顔にはそれと相反する近未来的なサングラスを掛けていた。
「あ、あれ?」
匙は猿の老人が触れた途端に一切の苦痛が消えたことに驚く。
「若いからって無茶しやがってぇー。そういうのは嫌いじゃねぇーが、生き急ぐのは感心しねぇーな」

　匙の無茶に対し、口元で煙管を吹かしながら説教する猿の老人。
「あ、あの、何をしたんですか？」
　突然の乱入者に戸惑いながら敬語で尋ねる匙。あれ程体を苦しめていた気の行方を聞く。
「ちょいとばっかし儂が預かってる。一人で無茶してないでさっさとヴリトラを呼ばんか」
「嘘……」
　京都中から掻き集めた気を体の中に押し留めているとあっさりと言われ、思わず疑ってしまう。こんな小柄な体にあれだけの量が収まるとは到底思えなかった。
「と、というかお主は誰じゃ！」
「た、確かに！　誰！」
「何じゃ？　アザゼルから聞いとらんのか？　助っ人が来ると」
「助っ人！　じゃあ、貴方が……？」
　匙もそのことはアザゼルから聞いていた。想像とは大分違った助っ人である。アザゼルが言っていたので、てっきり堕天使関連だと勝手に思っていた。
「早くヴリトラにならんか。出来るのは聞いとるぞ？」
「いや、ヴリトラは俺は庇って今眠ってて……」

『ウソだろ！　あのヴリトラが？』
　凄まじくハイテンションな声が落雷の如く降って来た。
『あの陰気ドラゴンが自分の器だからって人を庇うようなことすんの！　マジ信じらんねー！』
　声の主は宙を舞うドラゴンである。荘厳な見た目の割には口調は俗っぽいというか若者の様な軽い口調。
「ぎゃあぎゃあ喚くな。ヴリトラも色々あって変わったということじゃろう。お前さんと違って」
『やかましいわ、クソジジイ！　オイラはいつだってありのままなんだよ！』
「はいはい、分かった。分かったからお前の龍の波動でヴリトラを起こしてやれ。流石の儂もいつまでもこうしてはおれん」
『だったら余計なこと言ってんじゃねぇ！　ファッキンジジイ！　ゥオラ！　陰険ヴリトラにオイラから直々に活入れてやんよぉぉ！』
　緑のドラゴンから光が匙へと降り注がれる。その光は匙の体へ溶け込む様に消えて行き、やがて匙の体から黒い炎が噴き上がる
　……気付けとしては最悪だな
「ヴリトラ！」

頭の中で響き渡るヴリトラの声に匙は歓喜するが、ヴリトラの声は二日酔いしている様に非常に気分が悪そうなものであった。

『イィヤッホー！　目ぇ覚ましたかぁ？　ヴリトラァァ！　お眠の時間は終了だぜぇ？』

お前か玉龍……どうりで騒がしい波動な訳だ。

『おいおい。先ずは言う事があるだろーう？』

そうだな。――喧しい。

『ファァック！　起こしてやったことへの礼の言葉だろうがよぉ！　陰気のヴリトラ！』

事実を言っただけで喚くな。隠居の玉龍（ウーロン）。

玉龍と呼ばれたドラゴンは怒りでますますテンションと声が高くなり、ヴリトラの方もますます不機嫌な声になっていく。

「玉龍……西海龍童（ミスチバス・ドラゴン）の玉龍か！」

あのドラゴンが五大龍王の一匹である玉龍だと知って匙は驚く。聞いた話では早々に隠居して外との関わりを断ち、表には出なくなったと聞いていた。

匙と九重の驚きを余所にヴリトラと玉龍の険悪さが増していく。どうにも馬、もとい龍が合わないのだろう。

相変わらず口の減らない若造だ。
『ジジイってのはどいつもこいつも口煩くて敵わないぜぇ！　オイラの耳にもタコが出来るなぁ！』
「ヴリトラ！　揉めるのは後にしてくれ！」
「そこまでにしておけ。これ以上喧嘩すらなら褒美の京料理を食べさせてやらんぞ？」
二人に仲裁され、二匹のドラゴンは渋々と言った態度で言い争うのを止める。
ちっ。まあ、奴のことはもういい。それよりも我が半身よ。やるならさっさとやるぞ。復活した我が力で荒らしてやる。
「うん？　俺が何をしようとしているのか分かってんのか？」
朧気ながらな。無謀、無茶の極みだ。お前と我が一心同体だということを忘れていないな？
「それは……ごめん」
ふっ。まあ、その結果こうやって話すことが出来たから良しとしよう、我が半身よ。
匙の行ったことは確かに無茶なことであったが、結果として見ればファインプレーとも言える。
吸い出した気を放出したことで玉龍達は匙を見つけ、また結界が放出された気を当てられることでその箇所だけ弱まっていたので玉龍も容易に侵入することができ、それが

匙の命を繋ぎ、ヴリトラ復活へも繋がった。
勿論、そのことを匙本人は知らない。そして、助っ人が遅れたらどうなっていた――まさに紙一重の幸運と言えよう。
「それじゃあやるか！」
いつでもいいぞ。
「爺さん！　預かっていたものを返してくれ！」
「あいよ」
猿の老人に溜め込まれた気が一気に匙へ流れて行く。先程までだったら匙は自壊していただろうが、今はヴリトラが居る。
「龍王変化（ヴリトラ・プロモーション）っ！」
匙の体から噴き出していた黒炎が激しさを増し、彼を包み込んでいく。猿の老人はそのタイミングで手を離す。
吸い上げた気の力を黒炎で燃焼させながら匙はヴリトラへと姿を変えた。
『ふんっ』
ヴリトラは、匙がラインを伸ばしていた地面目掛け自身の体から無数のラインを放つ。ヴリトラのラインが匙と同じく気の流れに到達すると、ヴリトラは匙とは違い吸収するのではなく自身の力を流し込んだ。

ヴリトラの力は気の流れの中で黒い蛇となり、周りの気を吸収する。限界まで気を取り込んだ黒い蛇は取り込んだ力を使って分裂。分裂して再び気を吸収。後はこれを無限に繰り返していき、気の流れを黒い蛇の群が喰らい尽くしていく。
「おお！」
「流石は五大龍王って所じゃな」
瞬く間に気が枯渇していくのを感じ取り、九重と猿の老人は感心する。
そこで九重は改めて猿の老人を見た。
「さっきも聞いたが、本当にお主は何者なのじゃ？」
玉龍を従え、匙の危機をあっさりと救い、アザゼルが助っ人として呼ぶほどの存在。それが只者である筈が無い。
すると、頭上の玉龍が爆笑し出す。
『うひゃはははははは！　そんな露骨な恰好してんのに誰だって！　やっぱそのグラサンか？　グラサンのせいか？　だっせぇもんな！　それ！　あひゃひゃひゃひゃ！』
「うるさいぞー。玉龍」
猿の老人を小馬鹿にした様に玉龍は笑っているが、猿の老人は大して腹を立てていない様子。それだけ器がでかいのか、それともそういう軽口を言い合える関係なのかもしれない。

「闘戦勝仏と言えば分かるか？」
それはとある存在が難行苦行の果てに釈迦から与えられた戒名である。
「誰じゃ？」
（誰？）
――が、馴染みの無い言葉だったせいで九重と匙にはピンと来なかった。
「……」
その反応には流石にショックだったのか猿の老人は閉口してしまう。その姿を見て、玉龍は長い腹が捩じ切れそうになるぐらいに笑っていた。
『孫悟空、と言えばお前達にも伝わるか？』
哀れに思ったのかヴリトラが助け舟を出す。猿の老人こと孫悟空とは面識があったらしい。実力者は実力者を知る。
『孫悟空っ!?』
その名は匙も九重も知っていたらしく同時に驚いた後、九重の方は顔を真っ青にしていた。格上の相手に対して自分がとんでもなく失礼なことをしてしまったと自覚したからだ。
「その、色々と失礼を……」
「まあ、気になさんな。名はそれなりに通っているが意外と儂の姿は知られとらんし

のー。ましてや若い者だしの」
孫悟空は特に怒った様子を見せなかったが、玉龍は相変わらず笑っている。
『知名度ばっかは伸びてんだけどなー！　このジジイは！　いっその事もっと分かり易い恰好したら？　ほれ！　あんだろ！　あの有名なの！　ドラグ・ソボールの空孫悟！　あの姿して持ちネタをドラゴン波したら完璧よー！』
「何で本家がパロディーの真似しなきゃならん！」
玉龍の茶化しに孫悟空も流石に少し怒った。

◇

「む？」
オンギョウキは八坂の細やかな変化を鋭敏に感じ取る。
（力が落ちている？）
常時満たされていた八坂の力に翳りを感じた。殆ど感覚的なものであったが、オンギョウキはそれを自らの都合の良い解釈とは思わなかった。
その証拠に刀剣に変化して動き回っていた八坂が刀剣を一箇所に集めて変化を解き、元の九尾の姿に戻っている。

本能的に力の消費を抑えようとしているのだ。
（誰かが術を壊したのか？）
その割には八坂の暴走は続いている。そうなると気の流れに何かしらの不具合が生じた可能性が出て来る。
自分の推測を確かめる為にオンギョウキは口から唾を飛ばす。
唾は飛ばされている最中に氷の礫となり、瞬く間に大きくなって人の頭程の大きさと化した。
それが数個八坂へと飛んで行くが、八坂は炎を吐いてすぐにそれを溶かし、蒸発させてしまう。
「やはりか」
八坂の力が弱まったのを感じた。さっきよりも確実にそれが分かる。
潮目が変わった。
だが、油断は出来ない。ここで、確実に八坂を抑える。
「もう暫くの辛抱です。八坂様」
オンギョウキが印を結ぶ。すると、周囲のありとあらゆる影が生き物の様に蠢き始める。蠢く影が平面から立体となり、オンギョウキの姿と化す。影が全てオンギョウキの分身となった。

「私も出し惜しみをしません」

夜の闇に溶け込もうともオンギョウキの眼光は赤く輝き、狙うべきものから目を離さない。

切羽、降臨

拳と槍。戦いに於いてどちらが有利なのかは子供でも分かる。古今東西、あらゆる戦場で用いられる槍相手に拳で挑むなど無謀の極み。しかし、それを分かっていながらもその無謀を貫く男がここに居た。

「うおりゃあああっ！」

高速で移動しつつ何度も立ち位置を変えながら連続して突き出される一誠の拳は、形を見せず赤い残像として何十本も曹操へ伸びて行く。掠るだけで肉は抉れ、直撃すれば抉れるどころか弾け、骨も砕け散るだろう。

拳一つで挑むなど無謀と笑う者の顔を恐怖で引き攣らせるには十分過ぎるパワーとスピードを秘めている。だが、それを兼ね揃えても目の前の曹操の微笑を消し去ることは出来ない。

彗星の様に走る一誠の拳を、体捌きのみで回避していく曹操。衣服の一部や体に触れ、服が破れたり、浅い裂傷が出来たりなど無傷では済まなかったが致命傷になる攻撃だけは決して当たらない。

「くっ！」

一誠もそれが分かっているのか攻撃の速度を速めるも曹操は軽々と避けてしまう。
（当たらねぇ！）
『赤龍帝の鎧』の倍化だけでなく『女王』にプロモーションしたことで基礎能力を底上げしているのに未だに直撃しない。
何度か隙を狙っているのだが、悉く躱されてしまう。
（何で当たらねぇ！　隙はある筈なのに！）
焦りが募っていく一誠。攻撃にも無駄な力みが入っていき、熱くなってしまう――筈なのだが、熱くならずにだんだんと頭の中がぼんやりとしてきた。
「うおりゃあああ！」
先程の刺突による出血のせいで頭の昇る血が足りず、聖槍のオーラが体を巡って猛毒となって悪魔の体を侵す。アーシアの神器では失ったものを埋められず、また毒も完全に排出出来ない。ただ気合だけが空回りする。
気合だけあっても無駄に思われるかもしれないが、神器を発動している以上精神が大きく関わってくる。心の昂ぶりや想いが弱まれば一気に勝敗は決する。
自分を鼓舞する意味も込めて気合だけは緩められない。
「うおりゃあああー！」
そこに戦闘による激しい運動と馬鹿馬鹿しい話ではあるが叫び過ぎて酸欠寸前に

なっている。それらの要因のせいで一誠は戦いの最中だというのに夢の中に片足を突っ込んでいる様な曖昧な意識になり始めていた。

自分の戦いなのに客観的に見ている様な状態の中で一誠に何かが話し掛けて来る。

『貴公の頭は空っぽなのか？　それならその目が節穴なのも納得だ。役に立たないものには同じくらい役に立たないものが付いているものだ』

体中が熱くなるどころか逆に冷えさせてくる罵倒。それが頭の中に直接聞こえて来る。

『相手の動きをよーく見ろ』

ドライグとは違う声。そしてあってはならない声。

『その目が飾りでなければな』

それは虚空へと消えた筈のマタドールの声。当然のことながら本物ではない。一誠にしか聞こえない幻聴の類である。

打倒トールの為に命懸けでマタドールに教えを乞いた一誠。情け容赦の欠片も無い嬲り殺しに等しい実戦式特訓は短い期間でありながら一誠に忘れられないトラウマを刻み込んだ。今も偶にマタドールに殺される寸前まで追い込まれる悪夢を見る程である。

実際の所はマタドールとの戦いで学んだことを思い出しているだけなのだが、意識が

曖昧になっているせいでその時のイメージを反映され、一誠の妄想力で形作られたイマジナリーマタドールというべき存在になって脳内に宿り、罵倒混じりで一誠に助言を与えて来る形になっていた。

イマジナリーマタドールに言われた通り拳を突き出しながら曹操の動きを観察する。すると、曹操は一誠の拳が動くと同時に回避動作に入っていることに気付く。

『理解したか？　貴公は隙を狙っているつもりだったかもしれないが、実のところは曹操によって誘導されていたに過ぎない。あれだけわざとらしい隙に釣られる辺り、貴公の間抜けさは相当だな？』

（ぐぬぬ……！）

助言はしてくれるが、心を刺す余計な罵倒まで残して来る。マタドールなら言いそうというイメージによるものなので仕方ない。

これでもまだ一誠のイメージが入っているのでまだ優しい方である。本物ならば見込みがないと判断すれば二つの意味で即座に切り捨てて来る。

『折角誘ってくれているのだ。せいぜい乗ってやればいい。――ただし、あくまでフリだがな。ギリギリまで悟られぬことだ』

イマジナリーマタドールのアドバイスに従い、一誠は曹操が罠として作った隙のある箇所に拳を突き出す。当然ながら曹操はそれを予測していたので、既に回避行動に移っ

ている。
だからこそ一誠は腕が完全に伸び切る前に拳を止める。寸止めをされ、曹操の顔に僅かな驚きが生じた。
曹操が動いた先を狙った一誠の右前蹴り。しかし、曹操は一誠のフェイントに対して最小限の動揺だけで済ますと、聖槍の両端を持って一誠の右足に柄を叩き付ける。それを軸にして曹操は跳び上がり、一誠の頭上を超える。
通過する間際、一誠の後頭部へ踵を打ち込んだ。
「ぐっ！」
場所が場所だけに目玉の奥で火花が散る。
『分かっていたのに上を行かれるか。本当に才能が無いな、貴公は』
（言われなくとも分かってるっーの！）
マタドールの呆れた声。才能が無いのは一誠も自覚している。
「くっ！　はあ！」
だからこそ自分の中にある手持ちを活かすしかないと思い、背部の噴射孔から魔力を噴出させると同時に孔の向きを変え、素早く反転すると共に背後に移動している曹操へ回し蹴りを繰り出す。
人間の体なら受けた箇所が千切れ飛ぶ威力を秘めているが、曹操は自らが脆い人間と

自覚しているので受けることはせず、蹴りの間合いの外まで移動し空振りさせる。
『さあ、良く見ろ』
　イマジナリーマタドールが囁く。
『今の曹操を見て、何か気付かないか？』
　言われるがまま一誠は曹操へ意識を集中させる。途端に全ての動きが引き延ばされたかの様にゆっくりとしたものとなる。
　今までにない集中力が意識的な時間の流れを緩慢にさせているのだ。
　空振りした足が空を切る。曹操の髪がその風圧でゆれる。曹操は聖槍を持ち替える。傍には珠が一つ。
（うん？）
　一誠は違和感を覚えた。曹操は禁手の力の一部を解放したことにより転移させる能力を持つ珠と問答無用で武器破壊をする珠を周囲に漂わせていた筈。その内の武器破壊の珠が無い。
『気付いたか？　さて、無くなった珠は何処へいった？　もし、貴公が曹操の立場だったら何処へ移動させる？』
　一誠を試すように問うマタドール。
（俺だったら――）

曹操は目を惹く存在である。普通なら無視することなど出来ない。
（俺だったら！）
瞬間、一誠は噴射孔から爆発させる様に魔力を噴射。その場から跳ね上がる。直後、一誠は真下を球が通過していくのを見た。無くなっていた武器破壊の珠である。
自分に意識を集中させ、背後から密かに武器破壊の珠で狙っていたのだ。曹操が聖槍を持ち替えていたのも珠が一誠の鎧を破壊するタイミングで聖槍を突き出すつもりだったのだろう。
しかし、それを読んでいた一誠の動きに曹操も驚きを隠せない様子。だが、ここでの攻撃は無理と即座に判断し、曹操は攻撃を中断して回避の体勢に移ろうとしていた。
『流石だ。判断が早い。あそこで無駄に攻撃をしようものなら反撃を受けていた。どこかの誰かと違って引き際を弁えている』
（すみませんねぇ！　そういうのが分からなくて！）
一々嫌味を言って来るマタドールに心の裡で声を荒げる。
『だが依然として好機なのは変わらない。さあ、攻めろ。あれこれと複雑なことは考えるな。その鎧は己の体の一部。手や足を動かすことに逐一考える者は居るか？　居ないであろう？　自分の体を動かすことに無駄な思考など不要！』
マタドールの声に押されるように一誠は跳び上がっている状態から魔力を噴射。

『速さとは緩急の差だ。静と動を組み合わせることで真価を発揮する』
と同時に別角度からも噴射し加速と急停止をほぼ同時に行って回避しようとしていた曹操の前に瞬間移動の如き速度で立つ。
一誠は不思議な感覚に陥っていた。マタドールが言うようにまるで自分の体の延長線として『赤龍帝の鎧』を操り、今までにない精密な動きをやってみせたのだ。
そのことに対し自分でもらしくないと思いながらも深くは考えない。今は優先すべきことを為すだけ。
回避、防御、反撃のどれもが間に合わないと察した曹操に残された手段は、転移による仕切り直し。
一誠が攻撃を行う前に珠の能力で姿を消した。
『間違った判断では無い――と言いたいところだが、正しい判断でも無い』
依然マタドールの声には余裕が含まれている。
『さあ、感覚を研ぎ澄ませ。今の貴公ならば感じ取れる筈だ』
言われるがまま一誠は精神を統一する。最早、肌と変わらない『赤龍帝の鎧』が一定の空間内に起こる異変を敏感に察知する。
（これは……）
ある地点から何かが来ている。言葉では上手く表現出来ないが、しいて言うならば肌

がざわつくような感覚であった。
一誠はそこへ何の躊躇いも無く突っ込んで行く。この時の一誠には、直感のみに従う大胆な行動に対する恐怖は全く無かった。
目指す先で消えていた曹操が姿を現す。曹操は一直線にこちらへ向かって来ている一誠に驚いている。
『どうやら転移中はこちらの動きを把握出来ないらしいな。くくくく。らしくない間の抜けた顔だぞ？　曹操！』
驚いている曹操の顔をそう評する。
曹操の頭には何故こちらの動きを読めたのかという疑問が湧き上がっていたが、それが脳内を満たす前に塞き止め、思考を即座に切り替える。
一誠の動きに急にキレが出て来たことを訝しみつつも曹操は先程と同様に一誠の動きを見極めようとする。
一誠が拳を作るのが見えた。どんなに勢いがあっても曹操は既に一誠の間合いを見切っている。
一誠が突きを繰り出す。曹操は間合いの外へと逃げる。
『甘いな』
一誠の脳内でマタドールが曹操の動きを嘲笑した。

空気の壁を突き破る一誠の拳。それが途中で形を変える。閉じていた指を開き、五指を真っ直ぐ伸ばした手刀の形へと変化。空気抵抗を最小限にすると共に微妙ながらも間合いが伸びる。

この微妙な間合いの変化こそが曹操の距離間を狂わせる。

曹操の目からすると一誠の腕が伸びたかような錯覚を見せていた。

手刀による突き。一誠は戦いの中で殆ど使ったことは無い。この時、一誠が手本としてイメージしたのはサーベルで突くマタドールの姿。

神速の突きを放つ戦いをこよなく愛する闘牛士の姿を投影し、己を重ね合わせる。

（底が知れ無いな！）

あの魔人の動きを不完全ながらも再現してみせた一誠に曹操が戦慄する一方で――

『醜い。醜過ぎる。まさに猿真似だな。赤子が見様見真似している方がまだマシだ。本物の私がそこに居たら貴公を殺す事を即決するな』

イマジナリーのマタドールは滅茶苦茶に酷評する。この評価自体は一誠がマタドールの真似を客観的に見て評価したものの表れだが、それが分かっていても涙が出そうになって来る。が、それを我慢して下手ながらも攻撃を続ける。

限界まで伸ばした一誠の指先が曹操の胸を突く。第三者から見れば軽く押すようなささやかな一撃。友人同士が戯れでやるようなスキンシップの延長に見えるかもしれ

ない。

しかし、受けた本人の印象は全く異なる。指先に込められた圧に、警鐘代わりに全身から冷や汗が吹き出す。

電光石火の反射神経が曹操の上体を仰け反らせる。直後にミシリという音が曹操の体内でなり、鋭い痛みが胸の中で起こる。

上体を仰け反らせている最中に曹操は聖槍を横薙ぎにする。苦し紛れと不安定な体勢で振るわれたその一撃は力が入っておらず、そこら若木の樹木ですら斬り払うことは出来ないだろう。だが、悪魔に対して特攻である故に、どんなに大層な肩書きがある物でも悪魔に関するならば、雑木すら払えぬ力でも必殺へと至る。

聖槍の刃が一誠の首筋に迫る。聖槍の放つ純度の高過ぎる聖なる気に一誠の体が反応し、指を押し込む前に後ろへ跳び退ってしまった。

『馬鹿め。臆せず続ければいいものを。最大のチャンスを自ら潰したか。この臆病者が』

マタドールが一誠の行動を下策と罵る。聖槍の痛みを知る一誠からすれば理不尽極まりない。

(いや、無理ですって！　聖槍ですよ！　ロンギヌスですよ！　避けなきゃ首刎ねられちゃってましたよ！)

『ふん。あんな棒振りでは切断までには至らぬ。せいぜい首半ばまで斬られるだけだ』
（死にますって！）
『私が死なぬと言ったら死なぬ』
傍若無人極まった言葉に一誠は反論出来なくなってしまう。頭の中で囁く自らが生み出した暴君に心が折れそうになる。
――おい。
『むっ。色々と言いたいことがあるが、時間切れだ』
（へ？）
――おい！
『せいぜい足掻け。貴公は才能は無いが、無駄に生き汚いからな』
マタドール以外の声が頭の中に聞こえ始める。それは彼の相棒であるドライグの声。
『おい！　相棒！　大丈夫か！』
マタドールの声が消え、ドライグの存在と声をハッキリと認識する。
「ドライグ……？」
『さっきから一人でブツブツと呟いてどうした！　聖槍の影響が残っているのか！』
意識がぼんやりとし、マタドールの声が聞こえ始めてから一誠はトランス状態に入っていた。意識が明確になり一誠は思わずゾッとする。

（うわぁ……普通に会話してた……）

頭の中で生み出した幻と何の疑問を抱かずに話していた。かなり危うい状態であったことを自覚してしまう。

しかし、あまりにリアル過ぎたのであれは本当に幻聴なのかと疑い始める。実はマタドールがこっそりと自分の力の一部を一誠に仕込ませていたのではないかと思い始めてしまった。

（気色悪っ！）

自分で想像して鳥肌が立ってしまう。頭の中にそんな同居人など要らない。

『本当に大丈夫か、相棒？』

「――うん。大丈夫大丈夫。今は正気だ」

『今は？』

引っ掛かる言い方だったが、取り敢えず普通に会話が出来るのでドライグはスルーすることにした。

一誠がまともに戻った一方で、曹操は聖槍を片手に持った状態で突き出し、相手に踏み込めさせないよう牽制する。そして、空いた手で先程指で突かれた箇所に触れていた。

（折れてはいないが、罅ぐらいは入ったかな？）

ズキズキと断続した痛みが生じている。呼吸をすれば一瞬だがその痛みも跳ね上がる。ただでさえ片眼が失明状態だというのにまたも無視出来ない負傷をしてしまった。

痛みは命の危機に対する警報だが、曹操はそれを奥底へ追いやる。一種の自己暗示であり痛みで思考が妨げられないようにする為であった。

「赤龍帝」

曹操は敢えて一誠に話し掛ける。

「何だよ？」

無視する選択肢もあったが、一誠は普通に応えてしまった。曹操は戦い方を考えるという時間稼ぎという打算があったが、一誠の方は打算無しの素の反応である。

「強い、強いな君は。正直に言うと君の実力はあまり高く評価していなかった。事前に仕入れていた情報を見ていた事もあったが、何せ君と比較するのが、あのヴァーリだったからね。どうしても君を過小評価してしまう」

「だからどうした？　今更評価を改めたってか？」

「その通り。反省は人を成長するのに必要だ。それにここまでされて君を評価しなかったら、俺の方がみっともない」

曹操は苦笑しながら罅の入った肋骨を指で軽く叩く。

「最後に見せたあの動きは特に凄かった。――どういう訳かある人物が思い浮かんだん

だが……もしかして師事でもしていたかい？」
「そ、そんな訳無いだろ……か、勘違いだ、勘違い！」
一誠の背後にいるマタドールに気付いていることを暗に示唆すると一誠は動揺して目を左右に動かす。露骨なぐらい分かり易い反応。
一誠としても認める訳にはいかない。悪名しかないマタドールに教えを受けていたなんて噂が広がったら、自分だけでなく周りの人たちも誹謗中傷されるかもしれない。尤も、その前にマタドールが変な噂を広めたことに怒って殺しに来る可能性の方が高いが。
「まあ、そういうことにしておくよ」
曹操は追究はせずにあっさりと引く。
「それにしても――」
そこまで言い掛けた時、曹操の表情が急に険しくなる。空に向かって放出される力の奔流が目に映ったからだ。そして、少し遅れたタイミングで一誠もある気配に感付く。
「ドラゴン……？　ヴリトラ――だけじゃない」
『この気配……玉龍か。あの若造が来たのか？』
ヴリトラともう一つのドラゴンの気配――ドライグが言うに玉龍のもの――が急に現れて驚く。

　ヴリトラの復活には驚いたが、五大龍王の玉龍がここに現れたことにも驚かされた。同時に何故ここに現れたのか疑問に思ったが、アザゼルが助っ人を呼んだという話を思い出した。
（五大龍王とも知り合いなのかー。しかも、助っ人で呼べるぐらいに親しいみたいだし。顔広いな、アザゼル先生）
　玉龍がその助っ人だと勘違いしてしまう。
「はぁ……」
　溜息。吐いたのは曹操。今まで不敵で不遜な態度であった曹操が困ったような表情をする。
「凄いな、君の仲間は」
「はぁ？」
「今、連絡が入ったよ。俺の仲間は殆ど撤退した。そして、君の仲間は死者無し。客観的に見てもそちらの方の勝ちだ」
　曹操はこめかみを指先で叩く。
「そして、折角二条城に集めた力がヴリトラのせいで食い荒らされている。このままじゃいずれは九尾の術も解けてしまう。そうなるとグレートレッドは呼べない。こっちの実験も失敗になる」

一誠の知らないところで仲間たちが英雄派を撃退していたことを知り、安堵すると共に誇らしい気持ちになってくる。
「そうなる前に九重の母ちゃんを解放したらどうだ？　そうすれば命までは取らない――逃がしゃしねぇけど」
「カッコいい台詞だ。人生で一度は言ってみたいな」
「おい！　ふざけてんじゃねぇぞ！」
真面目に言ったのに冗談で返して来る曹操に、一誠は怒声を上げる。
「今更命がどうこう言うのはナンセンスじゃないのかな？　赤龍帝。本気で殺りに来なきゃ少なくとも俺は倒せない。それとも、今まで戦いで手を抜いて勝てると思われたのかな？　それだったら失礼。そう思わないよう……本気にさせてやる」
曹操が息苦しさを覚えるぐらいのプレッシャーを放つ。心成しか聖槍の輝きも増した気がする。今まで以上に曹操はやる気になっていた。
『余計な事を言ったな』
（……俺も今後悔してる）
深い意味は無かった。仲間の無事と風向きがこちらに向いて来ているせいで、つい口が軽くなってしまっただけだ。そのせいで曹操のプライドを刺激し、やる気を引き出させてしまった。

口は禍の元というのはこういうことかと実感する。

カチ、と音が鳴る。曹操はいつの間にか腕に巻いていた数珠を掌に移動させていた。その状態で数珠を軽く握り、繋がれた珠を曲げた中指に乗せ親指の爪を押し当てる。

ポーズを見ただけで曹操が何をしようとしているのか理解する。一誠が見るマンガやアニメのキャラクターが使っているのを見た事があるからだ。

曹操の親指が跳ね上がった瞬間、一誠はブースターによって急加速で動いていた。そのすぐ後に一誠が居た場所球体状の眩い光が発生する。見るだけで寒気立ち、目の奥が痛くなってくる破魔の光。

指弾。指で弾を弾き飛ばして相手にぶつけるという技術。命を取るには貧弱な技であるが、それを破魔の力を込めた珠を使用すれば一転して必殺の攻撃と化す。

曹操は連続して指を弾く。一誠は必要以上に曹操から距離を取る。珠が小さいせいで破魔の力が解放されるまで視認出来ないからだ。

十数メートルもの距離を指の力だけで飛ばす曹操の技量は桁外れのものだが、射程範囲外まで移動すれば脅威では無い。

一誠を追う様にして破魔の光が立て続けに起こるが、どれも曹操から十数メートル以内で止まってしまう。

射程外まで移動したことに安堵の息を吐こうとする一誠。だが、すぐにその息を呑み

込むこととなる。
一誠が射程外まで移動した途端、曹操は転移の珠によって瞬間移動。すぐに一誠を射程距離へと収める。
「うおっ！」
指弾のインパクトでうっかりしていたが、曹操自身に間合いは存在しない。目視出来る範囲ならば容易く瞬間移動出来るし、逆に相手を転移させて引き寄せることも出来る。
射程に収めて即座に珠の連射。一誠も慌てて回避するが、数発放たれた内の一発がすぐ傍で破魔の力を解放し、驚きで体が硬直する。
あと二メートル、否、一メートルずれていたら体の半分が破魔に呑み込まれていた。戦いの最中であるが、体の半分が消し飛んでしまう嫌な光景が頭に浮かび上がる。
その時、背中に軽い衝撃が走る。痛みは一切無い。それこそ軽く叩かれた程度の威力。問題なのは何が当たったかである。
『相棒！　不味いぞ！』
ドライグの焦った声。何に焦っているのか一誠もすぐに知ることとなる。
ピシ、ピシと罅割れていく音。その音は一誠の纏う鎧から聞こえており、パラパラと赤い小さな破片が足元に落ちていくのも見える。

「まさかっ！」

一誠は己の鎧を見た。鎧には細かな亀裂が生じており、今も亀裂は伸び続け、他の亀裂と繋がると装甲は破片となって剥がれ落ちる。

一誠は慌てて背後を見る。一誠から離れた場所に浮かぶ武器破壊の能力を持った珠。破魔の珠を使用した指弾はこれを悟らせない為の目晦まし。まんまと曹操の思惑通りに動かされ、致命的な隙を晒してしまった。

「ドライグ！　修復を！」

『今やっている！　ちっ！　破壊の力が邪魔をする！』

『赤龍帝の鎧』を修復させているが、武器破壊の効果がそれを阻害して修復を遅らせており、ドライグは思い通りに進まず舌打ちする。

一誠が鎧に気を取られている間に曹操は一誠のすぐ近くまで来ていた。聖槍の間合いから逃れる為に噴射孔から魔力を噴射しようと考える――

『駄目だ！　使えん！』

――が、間髪入れずにドライグの言葉が頭の中に響く。噴射孔は背部に武器破壊の珠を受けたせいで損傷が酷く、使用不可能な状態であった。

曹操は聖槍を頭上に掲げるぐらいに振り上げる。全身全霊の一撃で一誠を両断する構え。

「イチかバチかだ！」

一誠は後退ではなく前身を選ぶ。曹操が聖槍を振り下ろす僅かな間に先に拳を打ち込もうとしたのだ。

ありったけの力を込めて拳を放つ。

「――あっ」

その声を洩らしたのは――一誠であった。渾身の拳が空を切る。そこに居る筈の曹操が消えた。

（しまった！　転移！）

珠の力で何処かへ移動したと思い、一誠の視線が左右に彷徨う。だが、次の瞬間、曹操が姿を現した。一誠の拳から少しだけ横にずれた位置に。

しまった、という言葉を心の中で吐いたのはこれで何度目だろうか。

転移により散々違う場所に移動していた曹操を見ていたせいで一誠の中にあった先入観。それを曹操はこの場面で的確に突いて来た。

転移の珠を利用した回避と時間差攻撃。それは見事に嵌り、聖槍の刃が鎧ごと一誠の体を斬るという結果を齎した。

鎧の裂け目から鮮血が噴き出す。

これだけでも致命となるが、曹操の攻撃の手はまだ緩まない。

肩から胸に掛けて出来た鎧の傷。曹操はそこに掌打を打ち込む。ひ弱な人間が放つ掌打では例え傷物の『赤龍帝の鎧』であってもビクともしない。しかし、その手にだいそうじょうの力が分け与えられた数珠が巻き付けてあるとしたら。

『相棒！　逃げろぉぉぉ！』

ドライグがいち早く気付いて叫ぶが、聖槍による傷を負った直後の一誠では咄嗟に反応することは出来なかった。

「――マジかよ」

至近距離で解放される破魔の力。傷物の鎧ではそれを防ぐ手立てはない。

一誠と曹操を中心にして破魔の光がドーム状に広がり、眩い光のせいで二人の姿が覆い隠される。

暫くして曹操が光の外へと転移してきた。

「ぐぅぅぅ……」

曹操は片腕を押さえながら呻く。掌打を放った手が火傷を負ったように爛れた状態となっている。破魔は人間にはそれ程効果は無いが、それでも質によっては悪魔が負うような傷が出来る。だいそうじょうの数珠の大半を消費すればこのような傷になることは曹操も分かっていた。

そよ風でも千の針を突き刺されるような激痛の中で曹操は懐から小瓶を取り出し、中

身の液体を傷に振り掛ける。

傷から煙が上がると何事もなかったかのように傷は消えて元通りになっていく。それにつれて曹操の強張った表情が和らいでいった。

この光景を見たら悪魔たちは驚くであろう。曹操の傷を癒したのはフェニックスの涙なのだから。

『禍の団』の活動によってただでさえ貴重品になっているというのに、そんな大切なものが敵対しているテロリストの手に渡っている。つまり、曹操たちが所持している分だけ苦しむ者たちが存在する。まるで悪夢のような話である。

勿論、曹操たちも単独ではフェニックスの涙を簡単に手に入れられる訳ではない。だが、彼らは組織に属している。『禍の団』がかねてより作り上げてきた裏のルートと十分な資金があれば手に入られるのだ。

フェニックス家の者が知れば数度憤死してもおかしくない。そして、必ず流出させている者を見つけ、不死鳥の憤怒の炎で灰すら残すことも許さないだろう。

曹操の傷が癒えたタイミングで破魔の光は消える。光の跡を見て、曹操の表情は怪訝なものに変わった。

光の跡でうつ伏せに倒れる『赤龍帝の鎧』。指一本動いていない状態だが、曹操は不自然さしか感じない。

破魔で一誠が消滅したのなら鎧が残っているのは不自然。使用者が絶命すれば神器も解除される筈である。

曹操の懸念は半分当たっていた。一誠は生きている。

死んでしまっていてもおかしくない状況であったが、一つの偶然が一誠の命を繋いだ。

そのきっかけとなったのは曹操が放った掌打。実は、一誠も万が一の場合に備えてフェニックスの涙を所持していた。懐にしまっておいたそれを曹操は曹操の掌打が割ってしまっていたのだ。皮肉にも『赤龍帝の鎧』をも通すことが出来るぐらい曹操の技が優れていた結果である。

破魔を使用すると同時に一誠は無意識に『赤龍帝の贈り物』により譲渡を行うことでフェニックスの涙の治癒効果を極限まで高め、重傷ではあるが消滅を免れた。

では、何故一誠は全く動けないのか。それが半分正解の訳である。肉体の傷は癒えても精神的なダメージまでは治せない。聖槍に加えて上級悪魔すら消滅可能なだいそうじょうの破魔を重ねられたら普通の悪魔なら魂が消し飛んでいる。

今の一誠は消滅しそうなぐらい弱まった魂で辛うじてしがみついている無防備な状態であった。曹操が一突きすれば容易く終わるぐらいに。

ここで確実に始末しようと考え、聖槍を握り直した時、曹操は気配が近付いて来るの

を感じ取った。
気配の方へ素早く構えると、そこにはギリメカラに乗ったアーシアとアザゼル。アーシアとアザゼルは倒れている一誠に気付き、瞠目する。
一誠と曹操が高速移動や転移を使用するせいでアーシアたちは大分離されてしまっていた。更に非戦闘員のアーシアと負傷者のアザゼルが戦闘に巻き込まれないようにある程度の距離を保っていたこともあって追い付くのに時間が掛かってしまった。
「あ、ああ……」
見開いた目から涙を流すアーシア。距離が開いてしまったせいで『聖母の微笑』の効果は微量になってしまったが、それでも絶えず力を送り続けていた。
最大限の効果を発揮する距離まで近付くことが出来たアーシアであったが、それ故に気付いてしまった。『聖母の微笑』の力を送っても全く手応えを感じないことに。
一誠の体は今まさに死に向かっている。それを真っ先に理解してしまい、アーシアの頭は真っ白に――
「ッつ！」
――乾いた音と頭頂部の痛みでアーシアは正気に返る。呆然としているアーシアの前で揺れるギリメカラの鼻。
それだけでアーシアはギリメカラが何を伝えようとしていたのか理解し、呆然として

いた表情を引き締めるとすぐに神器の力を一誠へ送る。
諦めるのはまだ早い。諦めるのは、全て終わった後でも遅くはない。今は絶望に沈む時間すら惜しい。
力を送る、送る、送る。手応えを全く感じなくとも送り続ける。もし、少しでも可能性があるのならば、例え指先だけでも引っ掛け、一心不乱で引っ張り込むぐらいの気概で神器による治癒を続ける。
「やってくれたなぁ、曹操……！」
普段は冷静なアザゼルが怒りを露わにして曹操に殺意を向ける。
「三勢力の貴重な神滅具所持者がやられてご立腹かい？」
「……俺はなぁ、今はこいつらの先生なんだよ」
「うん？」
殺気の代わりにアザゼルの体から光が溢れ出す。
「教え子をそんな目に遭わされて怒らねぇ教師はいないんだよ！」
アザゼルから溢れ出した光が変化し、複数の槍を造り上げる。曹操に付けられた傷がまだ完全に治っていないが臨戦態勢に入っている。
この時、曹操に迷いが生まれていた。アザゼルたちを相手にするか、一誠の始末を優先するかという選択への迷い。

迷いといっても極めて短い時間での思考。曹操は決断を下す。
アザゼルに対して迷うことなく背中を向けると、一直線に一誠を目指す。
「くそっ！」
曹操の冷静な対応に毒づく。こうなることを避ける為に自分に敵意を向けさせようとしたが、上手くは行かなかった。
ギリメカラはアーシアの護衛の為に動かせない。動くなら自分しかない。しかし、アザゼルの冷静な部分がここからでは間に合わないと囁いて来る。
「それでもやるしかねぇだろうが！」
その客観的な考えを振り切りアザゼルは光の槍を飛ばすが、曹操の転移の珠が立ち塞がり、光の槍を転移させる。丁度、アザゼルたちの方へ送り返すように。それにより光の槍同士が衝突し、相殺されてしまった。
アザゼルの足掻きすら曹操は嘲笑うかのように一蹴してしまう。
そして、その間にも曹操は一誠の傍に移動し、徐に聖槍を振り上げた。

◇

（体が動かねぇ……）

痛みを通り越して最早何も感じない。自分の体である筈なのに言う事を聞かず、指一本すら動かせなかった。

頭の中にあるのは今まで体験したことのない強烈な眠気。一度眠りについたら二度と目覚めることは無いと直感させる深淵に引き摺り込むものであった。

（これはやべぇ……）

抗おうとするが、どんなに絞り出しても抗う気力が僅かしか出て来ない。破魔と聖槍により一誠の魂は風前の灯火であった。

そんな一誠の魂を繋ぎ止めるものがあった。それがアーシアの『聖母の微笑』。正確に言えば神器を通じて送られてくるアーシアの想いである。

生きて欲しい、助かって欲しいという純粋な想い。それは万の言葉を凝縮させても届かない。

（アーシア……）

必死に祈り、願うアーシアの想いを受けて一誠は鎧の下で涙を流す。自らの不甲斐なさへの悔し涙を。

（これが俺の限界なのか……？　何で俺は……！）

自分を可愛がってくれた者たちへの申し訳なさ。自分を慕ってくれた者たちへの申し訳なさ。自分のことをライバルと言ってくれた者への申し訳なさ。肩を並べて共に

戦いたい、目指すべき強さを持つ者たちへの申し訳なさ。
（皆は一生懸命戦ったんだよ……！　俺が、俺だけが肝心な時に……！）
全力を出しても届かなかった曹操という壁。
（何が赤龍帝だ……！　おっぱいドラゴンだって囃し立てられ、ヒーローみたいに扱われていた癖に……！）
流れ落ちる涙を拭うことすら出来ず、己の弱さで顔が濡れる。
（全然ヒーローになれてねぇじゃねぇかっ！）
いいえ。貴方は立派なおっぱいドラゴンですよ？
（えっ？）
聞いた事の無い声が聞こえた時、一誠の意識は彼方へと飛ばされる。

◇

「……はっ！」
気付けば真っ白な空間に一誠は立っている。鎧は着ておらず、制服姿に戻っていた。
「どこだここ！　曹操は！　ってか何とも無くなってるし！」
当然ながら一誠はパニックになってしまう。ついさっきまで死に掛けていた筈なの

に気付けば誰も居ない見知らぬ場所。つい最悪なことを想像してしまう。
「お、俺、死んだのか……？」
『大丈夫です。まだ貴方は死んでいませんよ』
　意識を失う間際に聞いた声が再び聞こえる。慌てて探すが声の主は見つからない。
「誰だ！　何処にいる！」
『落ち着いて下さい。私は敵ではありません。そして、私の姿を探しても意味はありません。ここは貴方の無意識の奥底にある空間。私はそれを介して話し掛けているのです』
「俺の無意識？　ってそんなことよりも誰だよ、お前！」
『私は全てのおっぱいを司りし神――乳神様に仕える精霊です』
　声の主の自己紹介に一誠は言葉を失う。そして――
「ああ……部長や朱乃さんにちょっと会えなかっただけでも俺はこんなに欲求不満になるのか……まさか、ここまで来るとは……」
　性欲が強いことは自覚しているが、正気を蝕む程とは思っておらず、自分の頭がおかしくなったことに一誠は静かに涙を流す。
『大丈夫です。貴方は正気です。正気のまま貴方は頑ななまでのおっぱいへの渇望によって私を呼び出したのです。これは異常――もとい前例のない事態です』

「どっちにしろまともじゃねぇぇ！」
　自分の胸に対する想いが、訳の分からない神にコンタクトをとり、あまつさえ使者まで送ってきたとなると、ここまで極まっていたのかと思わず叫んでしまう。
「というか何処の神話体系の神様なの！　乳神様なんて聞いたことがないんだけど！」
「私も聞いた事無いなー」
　不意に第三の声が傍から聞こえた。
「エ、エルシャさん！」
「はーい、おっぱいドラゴン君」
　歴代赤龍帝の残留思念であるエルシャはにこやかに笑いながら手を振る。
「どうしてここに！」
「いやー、何か来れちゃった」
　エルシャ本人も何故ここに来れた分からない様子だったが、特に気にしていない。
「それにしても乳神かぁ。最近、不思議な力を感じてたけど、それって向こう側からアピールしてたってことかな？」
『ええ。そうです。乳房を求める者への乳神様の慈悲深い加護です』
「成程ねー」
　乳神だのそれに仕える精霊だの、どう考えても色々と飛んでいる存在を平然と受け入

れるエルシャ。
「あのー、何かそのー……すみません。意味不明なものを呼び寄せてしまって」
「うん？　まあ、別にそこまで怪しい存在じゃないんじゃない？　昔から女性の体と大地を結び付けた地母神ってのもあるし、男性のアレを神様に見立てた像もあるって聞いた事もある」
　エルシャなりの解釈で乳神の存在を肯定する。
「そういうもんですか？　でも、男のアレって――」
　そこまで言い掛け、一誠の脳裏にある悪神の姿が浮かび上がる。
　緑色で、伸びたり縮んだりしてどう見ても形が卑猥なあの――
「ぐわあああああっ！　消えろっ！　俺のトラウマァァ！」
　当時の感触がフラッシュバックし、頭を抱えて悶え苦しみながら叫ぶ。
「だ、大丈夫!?」
　一誠の悶絶っぷりに心配してエルシャが声を掛けると、一誠は真っ青な顔色で肩で息をしながら何とか忌々しい記憶を振り払う。
「ええ……大丈夫です……」
　ああいう神も居るんだから、乳神だって存在するだろうと納得した。言ったら不敬で神罰が下りそうな納得の仕方である。

「うぇっぷ……そういえば用事も無く呼び出しちゃったけど良いのか？」
　気を紛らわす意味も込めて一誠は精霊に問う。
『大丈夫です。貴方の想いは分かっています。だからこそ、我らが神は貴方に加護を与えようとしているのです！』
「加護？　パワーをくれるんだったら喜んで貰う！」
　曹操に勝ちたい一誠からすればこの上なく有り難い話。
『しかし、我らの神の加護を与えるにはもう一押し足りません。貴方の中の昂ぶり、『乳力（にゅうパワー）』がもっと必要です』
「にゅ、にゅうパワー……」
　何とも言えない単語に一誠も半信半疑になってしまう。
「あははは。何か凄いことになってるわね」
　エルシャの方は普通に笑っている。こんなとんでもない事態を受け止める器の大きさを表していた。
「貴方もそう思わない？　ベルザード？」
　その名は歴代赤龍帝の中でもエルシャと肩を並べる程の実力を持つ人物。一誠もまだ会ったことが無い。
　すると、空間内に口笛が響き渡る。口笛を吹いているのはダンディという言葉を体現

したかのような渋みのある壮年の男性。
　ベルザードの登場にも驚いたが、彼が奏でている口笛にも驚いた。
「こ、これは、おっぱいドラゴンの歌！」
　あんなダンディな見た目なのにおっぱいドラゴンの歌を口笛で、しかも無表情で吹いているので戸惑うしかない。
「ベルザードの最近のお気に入りなのよ」
「ええっ！」
　一誠も気に入っているが、まさか歴代赤龍帝の中でも気に入る人物が居るとは思ってもみなかった。
『相変わらず素晴らしい曲です。我らが乳神様もお気に召しています。いずれは乳神様を讃える讃美歌となるでしょう』
「そ、そうですか……」
　アザゼルとサーゼクスの歌が未知なる神の讃美歌になろうとしていることにそう返すことしか出来なかった。
「何か凄いことになってるな、ドライグ……ドライグ？」
　ドライグの名を呼んだが返事は無い。もう一度呼んでみたが結果は同じ。ドライグと会話することが出来なくなっている。

「どうした、ドライグ？　何かあったのか？」
『彼は現実世界にいます。この精神世界には来ていません』
「え？　何で？」
　元々が魂だけの存在であるドライグなら一誠と共にこの世界について来ていると思っていた。
『彼はどうやら『乳力』を信じていない――寧ろ恐れています。つまり『乳信』していないのです』
「にゅ、乳信……」
　次から次へと新しい言葉が出て来て、一誠は頭が痛くなりそうであった。
『ですが、貴方には高い『乳信力』があります。さあ、今こそその力で呼ぶのです！　貴方だけのおっぱいを！』
　一誠はエルシャとベルザードの方を見る。二人共期待の眼差しで一誠を見ていた。
　こうなると一誠もやるしかない。全ては曹操に勝ち、ハッピーエンドで修学旅行を終わらす為。
「召喚っ！　おっぱぁぁぁい！」
　訴えられそうな召喚の言葉を叫ぶと魔法陣が描かれる。誰が呼び出されるのか、一誠には分かっていた。思い描く人は一人しかいない。

召喚されたのはリアスであった。しかも、何故か全裸の。
一誠はリアスの裸を直視してしまい、鼻孔の奥が熱くなるのを感じる。
「――え？」
召喚されたリアスは少しの間呆けていたが、正気に戻ると自分の置かれている異常な状況を理解する。
「な、何でイッセーが！　ここは何処なの！　そこの二人は誰!?　誰なの!?」
一誠に驚き、何も無い空間に驚き、リアスに手を振っているエルシャとベルザードに驚く。
「ぶ、部長！　何で裸で！」
『彼女が裸なのは貴方のイメージが理由かと。実体ではなく彼女の精神をここへ呼び出したので』
「何、この声!?」
姿無き精霊の声にもリアスは驚いていた。
『さあ、準備は整いました。――つつきなさい』
「……へ？」
『一押し足りないと説明した筈です』
「一押しってそういう意味なの!?」

比喩ではなく言葉通りであった。

『彼女こそが貴方の可能性の扉を開く最後の決めてです。押しなさい』

頭のおかしい展開が続いているが、もうここまで来ると腹を括るしかない。エルシャとベルザードも何が起こるかワクワクした様子で見ている。

「部長」

「イッセー？」

一誠は真正面からリアスを見る。混乱していたリアスも一誠を見て落ち着きを取り戻す。

「色々と混乱しているのは分かっています。分かっている上でお願いします！　乳を突かせて下さい！」

自分で言うのも何だが、いざ口に出してみると爆弾でも吐き出したかのような衝撃的な発言だと一誠は思う。自分がリアスの立場だったら悲鳴か身の危険を感じて逃げ出してもおかしくない。

リアスは一誠の発言に絶句していたが、すぐに神妙な面持ちになる。

「本当に訳の分からないことばかりだけど……わかったわ！」

それは一誠を信頼しての了承であった。いきなり連れて来られて変な連中の前で変態的なことをされそうになっているというのに『わかった』と言い切ってくれる。

リアスの懐の深さに感涙する一誠。そして、突けると分かって鼻から血を垂れ流す。
「――いきます」
かしこまった一誠の声。場は静寂に満ち、まるで儀式のようにその行いを見守っている。
暫しの沈黙の後。
「……ぁふん……」
リアスの艶のある声が静寂を破った。

◇

「……今、何か変なことが起こらなかったか？」
切断されている片腕を治療されながらシンが言う。
「いや、僕は何も感じなかったけど……？」
「私もだ」
「私も――」
シンは言いようの無い悪寒を感じ取っていたが、他のメンバーは特に何も感じていない。

シンは何故だか嫌な予感を覚える。

一方で黙々と魔術でシンの治療を続けるルフェイだったが――

『うう、流石に腕を接ぐのは初めて……失敗したらどうしよう……大丈夫だよね……？』

「別に失敗しても恨みはしない、自業自得だ」

「え？」

ビクリとした様子でルフェイはシンを見る。シンの方もルフェイが弱音を零していると思ったのでフォローしたつもりだったのだが、反応がおかしい。

『しかし、間薙も無茶をする……斬られたことはあるが、片腕を失う程の大怪我はしたことがなかったな……どんな感覚なんだろうか？』

『ううう……とてもグロイけど、ここで目を逸らしたら失礼だよね……？』

「ゼノヴィア、知らないならそれに越したことはないよ。あと、間薙君ならそんなことは気にしないよ」

「……うん？」

「……へ？」

「……あれ？」

不安を洩らしているのかと思いきや、何故か木場の言葉にゼノヴィアとイリナは戸惑っている。

『何で私が考えていることが分かったんだ？』
『どうして分かったの？』
再び聞こえる声。だが、二人は口を閉ざしている。木場とシンはそれを確認し、同時に思った――
（何で分かったんだ？）
――と。
二人が知る由はないだろう。突いた感動で一誠が感極まり過ぎ、その力を周囲に無意識に拡散していることを。
半径数十キロメートルに及ぶ一誠の力。その範囲内に居る者は強制的に『乳語翻訳』の影響下へ置かれる。
この夜、男性限定で相手の女性の心の声――もとい胸の声が頭に響くという怪現象が京都で起こった。

三叉、三変

「――何だ？」

曹操は思わず動きを止めてしまった。頭の中、脳髄の奥底まで響いて来る真摯に願う少女の声。

『イッセーさん！　お願いです！　戻って来て下さい！　リアスお姉様、朱乃さん、小猫ちゃん、ギャスパー君！　皆がイッセーさんが帰って来るのを待っているんです！　私はもっとイッセーさんと色々な場所に遊びに行ったり、イッセーさんともっと一緒に居たいんです！』

聞く者によっては涙すら流させそうな純粋な願い。

「これは……アーシア・アルジェントの心の声か？」

突然起こった現象に、曹操はつい警戒をしてそちらの方へ注意を向けてしまう。異常事態故に状況を冷静に分析しようとしてしまう。

（神器同士が共鳴して心の声を届けているのか？）

最初に考えたのは神器使い間に於ける共鳴現象の一種。だが、アーシアの近くにいるアザゼルも曹操と同じくアーシアの声無き声が聞こえているらしく彼女の方へ視線を

向けていた。ギリメカラも同様にアーシアへ目を細めて訝し気に見ている。
　次に考えられるのは、アーシアに元々備わっているテレパシー能力。しかし、この可能性は薄い。一誠個人にテレパシーを送るのだったら分かるが、敵味方関係無くテレパシーを送る意味が分からない。考えを筒抜けにしてもメリットよりもデメリットしかない。そもそもアーシア当人が周囲に心の声が聞こえていることに気付いていない様子であった。
（なら考えられる可能性が最も高いのは――）
　曹操が倒れている一誠の方を見る。先程と全く変化は無く、一ミリたりとも動いていない。誰がどう見ても死に体。だが、今起こっている現象が皮肉にも一誠への疑いを抱かせる。
　同時に曹操の中では確信があった。この事態を引き起こしているのは一誠だと。
　もしかすると期待の裏返しなのかもしれない。同じ神滅具を持つ者同士。ここで終わってくれるなという期待。
「何かしているな！　赤龍帝！」
　曹操の聖槍が今度こそ一誠へと向けて突き出される。アーシアもアザゼルもギリメカラもそれを止めることは出来ない。
　それを止めることが出来るのは――

『Ｄｅｓｉｒｅ！』

――一誠本人のみ。

「何っ！」

音声が鳴り、一誠の体が赤い輝きを帯びたかと思えば、それは閃光となって解き放たれる。放たれた光には極大のオーラも含まれており、それが聖槍を阻む壁となり、広がっていくことで曹操ごと吹き飛ばしてしまう。

攻撃ではなく溢れ出たオーラだけで飛ばされたことに曹操は驚愕する。ついさっきまで死に掛けていた者とは思えないぐらいの力。しかも、明らかに倒す前よりも力の量が増している。

『Ｄｉａｂｏｌｏｓ！』

『Ｄｅｔｅｍｉｎａｔｉｏｎ』

『Ｄｒａｇｏｎ！』

『Ｄｉｓａｓｔｅｒ！』

『Ｄｅｓｅｃｒａｔｉｏ！』

『Ｄｉｓｃｈａｒｇｅ！』

鳴り響く音声。何かが起こっているのは分かっている。

『ＤＤＤ

狂ったようにDという言葉を繰り返しており、それだけで異常な事態になっているのも分かる。しかし、目を焼かれそうな程の赤い輝きと尋常ではない量のオーラのせいで曹操は妨害することすら出来ない。

赤い閃光に手を翳して目を守りながら、その耳で曹操にとって不吉を告げるDの音を聞くしかない。

世界と隔絶させる赤いオーラの中心で一誠はその二本の足で立っていた。

『相棒……？』

ドライグが恐る恐る訊ねる。魂が消え掛けていたかと思えば、突然復活し、それどころかこれ程までに強大な力を引き出した。一誠の精神に何かしらの異常が生じていないか一抹の不安があった。

「心配掛けてごめんな、ドライグ」

返って来た答えは変わらない一誠そのもの。いつもの彼の声であった。

『はぁ……色々と驚いたが、お前はお前のままなんだな？　安心した……』

ドライグは胸をなでおろす。そして、すぐにその声色は愉し気なものへと変わる。

『この力……俺は覚えているぞ。だが、懐かしさを感じるぐらいに久しぶりだ。これは、本来の俺のオーラ、俺がまだ肉体を持っていたときの頃の気質だ』

「ドライグ本来の力……」

一誠は自分の体から未だに溢れ続けるオーラを見る。これだけの量を放出しているのに全く枯れ果てる気配が無い。寧ろ、どんどん湧き出て来ており体内に留めておけないぐらいであった。

『覇龍』の時のような圧倒的な力。だが、『覇龍』のように力に呑み込まれる感覚は無く頭の芯が冷静でいられる。感覚としてはロキ戦の時にトールの力を借りた時に近い。

このような力がドライグの中に眠っていたことに驚かされる。『覇龍・雷神』の時と同等以上の力を感じられた。ドライグの数々の伝説は聞いてきたが、改めて神に等しいドラゴンであることを実感させられる。

『あの頃を思い出す。激情による『覇』に身を任せたものではない。呪いでも負の感情でもない。ただただ白いあいつに勝ちたかった頃の想いが蘇ってくる……！』

ドライグの魂が奮えているのが伝わってきた。

『どうして俺は忘れていた？　――そうか、神か。俺とアルビオンを封じたあの神が天龍本来の力を……』

力を取り戻すと同時に不自然に忘れていた理由をドライグの中で導き出されていく。そのまま考え込みそうだったが、ドライグは一旦考えるのを中断する。

『それは後にしよう。しかし、相棒、お前は一体何をしたんだ？　瀕死の状態からここまで持ち直すとは……』

あの精神世界でリアスの胸を突いた時に得た乳神の加護が恐らくドライグに嵌められていた箍を外したのだろうと一誠は思う。
今思えば夢のような出来事であったが、指先が覚えているあの感触が夢ではないことを教えてくれた。
「……おっ――そんなことよりもあいつに！　曹操にドライグの本当の力を見せつけてやろうぜ！」
真実を言い掛けるが止めた。折角、ドライグが嬉しそうなのに心を乱す情報を与えるべきではない。言ったら確実に泣く。
『そうだな！　久しぶりに俺の力を見せつけてやろうではないか！』
「行こうぜっ！　赤龍帝を！　俺たちを！　グレモリー眷属の底力をとくとぶっ放してやるぜぇぇぇ！」
滾る力は神器の新たな力を覚醒させる。それは、一誠の体内に取り込まれている『悪魔の駒』に干渉し、駒が記憶している特性を赤龍帝の力に組み込ませていく。
『悪魔の駒』に干渉している影響で『女王』のプロモーションが強制解除されるが、それは些細な事。今の一誠はプロモーション以上の時以上の力を持っている。
駒の特性を赤龍帝の中へと組み込まれると一誠の脳に使い方が流れ込んで来る。
「ははは。こりゃあすげぇ」

提示された自分の新たな可能性に一誠は思わず笑ってしまう。
「いくぜぇぇぇぇ！　ブーステッド・ギアァァァァ！」

◇

暴風の如き赤いオーラが内から響く一誠の声によって一変する。
逆回しのようにオーラは縮小していき、最後には一誠の体内へと全て納められた。
曹操はその光景に静かに冷や汗を流す。死の一歩手前どころか片足を突っ込んでいた筈の一誠が無傷の『赤龍帝の鎧』を纏い、しっかりと大地に根付くように立っているのだ。
しかも、局地的な台風の如きオーラは一瞬にして消え、後には少し前の光景が嘘であったかのような静寂。
これが示す事実は、今の一誠はあれだけの力を完璧にコントロールしているという事である。
「イッセーさん……？」
復活した一誠に呆然としたアーシアがか細い声を出す。その声はしっかりと一誠に届いており、アーシアの方を向いた。

「心配掛けたな、アーシア。待ってろ、すぐに終わらせるから」
「……はい！」
涙を流し感極まりながらもアーシアは頷く。
「すぐに終わらせる、か」
「ああ。終わらせてやるよ！」
一誠が吼え、抑え込んでいたオーラが噴き出す。
「モードチェンジ！　『龍牙の僧侶（ウェルシュ・ブラスター・ビショップ）』！」
噴き出したオーラは形を変えながら一誠の背中へ集まっていく。赤いオーラは実体となり、長い砲身を形成していき完成したのは両肩に装着される大口径のキャノン。『悪魔の駒』の『僧侶』の特性が発動し、一誠の中にある魔力が高まっていく。そこに覚醒した赤龍帝の力が合わさることで、その量は膨大なものとなる。
魔力が体を通じて砲身へと充填されていく。砲口から赤い光が漏れ始める。
「……あれは、不味いな」
見ただけで途方も無い魔力がチャージされているのが曹操にも分かった。
だが、曹操はここで退かず相手の実力を測る為に転移の珠を前方に飛ばす。通じるか通じないかは不明。通じればその程度の相手であっただけのこと。
だが、もしこの珠が通じなかったら――

『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

倍化も加わり、全てを吹き飛ばしかねない程の力が一誠の体に集束される。

一誠は足の爪を地面に突き立てる。体を固定させるアンカー代わりであった。

殺されかけたこと、仲間を危険な目に遭わせたこと、折角の修学旅行を台無しにしようとしていること、九重の母親を誘拐、洗脳したことなど、今まで溜まっていた鬱憤を晴らす為に全力でぶつける。

「吹っ飛べぇぇぇぇ！　ドラゴンブラスタァァァァァッ！」

肩のキャノンから発射された魔力が一つに合わさり、極大の魔力弾となって放出される。撃ち出す反動も凄まじく、爪で体を固定していた一誠だったが地面を削りながら押されていく。

強化されたドラゴンショット――ドラゴンブラスターが曹操へと向かって行くが、そこに前以って配置させていた転移の珠が立ち塞がる。

珠が能力を発動させ、ドラゴンブラスターと共に消えた――かと思えばすぐに同じ場所から珠が出現すると共に砕け散り、消えたドラゴンブラスターも何事もなかったかのように現れる。

「避けるしかないか……！」
転移失敗は曹操の予想の範疇であったのか、動揺することなく転移で消えていた僅かな時間を利用して射線上から退避する。しかし、予想はしていたとはいえ出来ることなら外れて欲しかったのか、避ける最中の曹操の顔は悔しさが滲み出ている。
「空間を歪めやがったのか。呆れるぐらいの魔力量だな」
何が起こったのかをアザゼルは瞬時に見抜く。空間に作用して相手、または自身を転移させる珠の能力を同じく空間に影響を及ぼすぐらいの魔力によって力尽くで突破してしまったのだ。これ以上無いぐらいの一誠らしい攻略の仕方と言える。
一誠の怒涛の復活劇と反撃のせいですっかりと傍観者となっていたアザゼルたち。アーシアも一誠が助かったことは嬉しいのだが、急に強くなったので目を丸くしている。
「アーシア。ここから離れるぞ」
「え？　でも……」
その時、地面と空間が震える。見ると彼方で大爆発が起こっており、赤い光が疑似空間の町を照らしている。
外れたドラゴンブラスターが着弾し、着弾した周囲のありとあらゆるものを広範囲で消滅させていた。

ドラゴンブラスターの影響はそれだけでは終わらず、疑似空間にもダメージを与えており、空間にノイズのような歪みを発生させる。この空間自体『絶霧』の禁手によって創り出されたものであり、神滅具の禁手を一発で不安定な状態まで追い込んだことになる。

アーシアはドラゴンブラスターの破壊力に息を呑む。

「見ただろ？　俺たちが近くに居たらイッセーの奴が巻き添えを恐れて手加減してしまう。俺らが出来ることはなるべく早く離れて、彼奴に全力を出させてやること。後は勝つのを信じて待つ、それだけだ」

アザゼルの言う事は正しい。だが、アーシアの心情的には一誠の傍で応援していたい。因みにまだ広範囲無差別『乳語翻訳』の影響が残っているのでアーシアの葛藤はアザゼルとギリメカラに筒抜けだった。

パオ。

「きゃっ！」

『グダグダ悩むな、小娘が』とギリメカラはアーシアの苦悩を無視して鼻で掴み上げ、さっさとこの場から去る。

「イッセーさーん！」

連れ去られながらアーシアは一誠の名を呼ぶ。一誠にもその声は届いており、サムズ

アップをして伝わっていること、心配するなということを教えた。
一誠はアザゼルたちの判断を心の中で感謝する。
（ありがとうございます、アザゼル先生。――正直、この姿でどこまで出来るのか俺にも分かりません）
ドラゴンブラスターの威力は一誠も内心冷や汗をかく程であった。幸い、無人の町を消し飛ばしただけだったが、仲間を巻き添えしてしまったらと考えると冷や汗以上の冷たい感覚が体内を駆け抜ける。
だが、その心配も最早無い。
（避難してくれたお陰で心置きなく戦える！）
曹操は未だに顕在。しかし、厄介な転移の珠はドラゴンブラスターで破壊した。ここからは一誠が翻弄する番である。
一誠は内で念じ、『悪魔の駒』のシステムを変更する。新たな力に覚醒したことで自らの意志で自由にプロモーションが出来る。
選んだ選択は『騎士』。強く欲するのは、誰にも止められない音すら置き去りにする速さ。一誠の中で速さの代名詞というべき存在である木場をイメージし、『騎士』の想像を膨らませていく。
「モードチェンジ！　『龍星（ウエルシュ・ソニックブースト・ナイト）の騎士』ッ！」

両肩のキャノンが外れると共に淡い光となり再変換される。今度の形は翼。通常時とは異なり倍近い大きさを持つドラゴンの翼となり、一誠に装着される。

翼が広げられると同時に魔力により急加速。背面の噴射孔の数が増えただけでなく翼にもブースターが付けられており、一瞬にして最高速度まで上がる。

空気の壁を裂いて飛ぶ姿は、一誠の中で想像された剣を振るう木場を投影させたもの。

だが、それでもまだ一誠は遅いと感じる。一誠の中の『騎士』である木場はもっと速く、もっと鋭い。

貪欲なまでに速さを求める。高速を超えたら音速を。音速を超えたら神速を。

そして、気付く。未知なる速さを手に入れるには今の自分には余計なものが付いていることに。

「装甲パージッ！」

頭部、胴体、手足から厚みのある装甲が外れていく。威圧感があった『赤龍帝の鎧』は、一誠の体にフィットした細身の形状へと変化した。

防御力を完全に捨て去り、速さに適応することを求めた姿。今、聖槍で突かれたら容易く屠られるだろうが、どのみち聖槍に対しての防御力など無いに等しい。段ボールが薄紙になった所で結果は変わらない。

「要は当たらなきゃ良いんだよっ！」
先のことを考えるのは止める。刺されそうになったら刺される寸前の自分に全て任せる。
今、最も優先すべきことは――
「てめえに一発お見舞いすることだぁぁぁ！」
――曹操に拳でも肘でも頭でも体当たりでもいい。一撃与えることが重要である。
空気抵抗を極限まで減らした姿で飛翔する一誠。味わったことのない重みが全身に掛かる。良く聞くGというものが一誠に内臓が口から飛び出しそうな吐き気を与えてくる。
それを堪えて一誠は曹操の正面から突っ込む。一誠が通過するだけで発生した衝撃波によって地面が捲れ上がっていく。
（速いっ！　だが、馬鹿正直に真っ直ぐでは！）
まだ一誠の動きを追える曹操は、突っ込んで来る一誠を迎え撃つ為に聖槍を構える。一誠の速度に合わせて突くのは至難の業だが、曹操の全く力みの無い構えを見ていると至難の業ですらも成功させてしまうだろう、という説得力があった。
音速の標的に対し、曹操は神業と言えるタイミングで突きを放つ。
聖槍が一誠を貫いた――が、すぐにその一誠は消える。曹操が突いたのは一誠の残像

だった。
本物は、突きが眼前まで迫った状態から翼と噴射孔の向きを急変化させ、半円を描きながら高速旋回し曹操の背後に回り込んでいた。
無防備な背中が一誠の前に晒される。
（やはり速い！　だがっ！）
一誠の頭上に浮かぶは武器破壊の珠。このような状況を想定して予め待機させていた。
一誠が曹操に集中しているタイミングで珠が上から降って来る。軽装になっているので触れれば鎧全てを破壊するだろう。
珠が一誠に命中――するかと思いきや、珠は何にも触れることなく地面へめり込んだ。
（何っ！）
曹操の前に一誠が立っている。
背後に回ってからの再度百八十度のターンを行うことで正面へと戻って来たのだ。
一誠もまた戦いの中で学んでいた。曹操という男は一ミリも油断のならない男だということを。勝利を確信した時こそ、その勝利を疑うことを。
「うらぁぁぁ！」

一誠の拳が曹操の腹部に叩き込まれる。
「ぐっ！」
息を詰まらせる曹操。だが、速度特化のせいで拳に威力が乗らず、曹操は殴られた状態から反撃を試みる。
「飛んでみるかぁ!?」
噴射孔から魔力を噴射させて急加速。曹操に拳を打ち込んだまま空を飛ぶ。
「が、あああああ……」
加速により一誠の拳がめり込んで行き、生々しい音を鳴らし出す。内側へと入り込んで来る拳のせいで曹操は胃の内容物を吐瀉する。
骨と臓腑が押し当てられる拳により圧潰されていく痛みと不快感。
このまま続けば一誠の拳は背中まで突き抜けていくだろう。
「だが！」
曹操はその状態で一誠の肩を左手で掴む。一誠が逃さないようにしていると同様に曹操もまた相手を逃さないという意志を爪を立てた左手に込める。
「その装甲の薄さで俺の槍は耐えられないだろう!?」
右手の中の柄を滑らせ、穂の根本部分を掴み直す。懐に入り込んでいるせいで刺し難いが、そうやって持ち直せば良いだけのこと。

曹操は聖槍を横振りにし、一誠の首筋を狙う。

「これで終わりだっ！」

追い詰められた一誠――では無かった。寧ろ逆。追い詰められて焦っているのは曹操の方である。

焦り故に短慮となっていた。このような状況になることを一誠が想定していない、などという都合のいい考えが前に出てしまっている。

一誠はこうなる事が分かっていた。

横から迫る聖槍に対し、腕を盾にする一誠。刺されば即消滅。聖槍を前に悪魔の盾はあまりに儚い。

今の段階では。

「モードチェンジッ！」

翼が赤い光となって消え、一誠の体を包み込む。

「『龍剛（ウェルシュ・ドラゴニック・ルーク）の戦車』ッ！」

一瞬にしてパージされた装甲が戻るが、変化はそれだけでは終わらない。

全身の装甲の厚みが増していく。特に籠手の強化が顕著で、厚みと太さが通常時の五、六倍になっている。覇龍と雷神の力を合わせた時と比べるとまだ細いが、バランスのとれた形になっていた。

一誠は聖槍を強化された籠手で受ける。今までの鎧だったのなら聖槍は貫通し、内部まで届いていただろう。しかし、『龍剛の戦車』の籠手は突き刺さるものの貫くには至らず、聖槍は途中で止まっていた。

単純に厚みが増したから止まった訳では無い。籠手内部には魔力が圧縮された状態であり、聖槍の聖なる気をそれによって押し留めているのだ。

自慢の聖槍で貫くことが出来なかったことに驚愕する曹操。その時、二人はガクンと地面に向かって落下し始める。『龍星の騎士』で飛翔していたが、『龍剛の戦車』に変わったせいで飛翔能力を失ったせいである。

揉み合った状態で落ちていく二人。至近距離ならば一誠の方に分があった。

『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

瞬時に高められた力。それを拳に乗せる。元々大きくなっていた拳が更に大きく見えるようになる。

「受け取れ！　クソ野郎ッ！」

罵声と共に振るわれた拳。曹操の顔面へ吸い込まれるように飛んで行くが、一誠が咄嗟の反応を見せたと同じく、曹操も刺さっていた聖槍を抜いて顔面と拳の間に割り込み

させる。
聖槍の穂先で一誠の拳が受け止められる。聖なる気の力により一誠の渾身の一撃は防がれてしまう。
「こんにゃろぉぉぉぉ！」
意地でも殴り飛ばす、という一誠の意志に反応し、肘部分に撃鉄の形をしたパーツが追加される。撃鉄が上がり、打ち込まれた瞬間、溜め込まれていたオーラが火薬のように炸裂し、止められていた拳が再加速する。
止まった状態から二度目の衝撃が起こり、曹操は地面目掛けて急降下。
だが、片手で聖槍を巧みに操り、足が地面に触れるよりも先に聖槍の先端を地面に突き刺す。
どういう技を使ったのか知る由も無いが、聖槍が落下の衝撃を肩代わりし、地面が割れて粉塵が巻き起こるが、その後に曹操は割れた大地へ無事に着地してみせた。
しかし、余裕の着地という訳では無い。曹操の片腕は力無く下げられている。一誠の拳を受けた代償として肩が脱臼していたのだ。
一誠はそれを見逃さない。一撃目は防がれたが、その肩では二撃目は防げない。
一誠もまた落下しながら再び肘部の撃鉄を起こす。今度のイメージは殴るのではなく徹すというイメージ。シンの拳のように衝撃が奥深くまで貫いて来るのを想像する。

イメージするのは一誠には簡単だった。身を以ってそれを知っているからだ。
力を絞り込み一点集中させたと感じた瞬間、撃鉄を叩く。
間合いの外から突き出された一誠の拳。空振りしているように見えたそれに対し、曹操は何かを感じ取ったのか、聖槍で地面を突いて素早く移動する。
破砕音と共に先程まで曹操が立っていた場所に拳大の穴が開く。それは道具でくり抜かれたような綺麗な穴であり、覗き込んでも底が見えない程に深い。そして、無駄なく一点集中させたことで穴周りには罅も入っていなかった。
地面ですらこれである。生身の曹操に当たっていたら、今頃は表現出来ないような姿になっていただろう。曹操もそれが分かっているらしく少しだけ頬を引き攣らせていた。
曹操の勘の良さで攻撃を避けられてしまった一誠は、三撃目を打つ暇もなく地面へ降り立つ。同時に『龍剛の戦車』が解除され、重厚な装甲は風に溶け込むように消え、元の『赤龍帝の鎧』へ戻った。
近くに立つ曹操を睨む一誠だが、突然膝から力が抜ける。
「あれ……？」
本人も予想外のことであり、慌てて踏み止まろうとするがそれも出来ずに片膝を突いてしまった。

すると、体が今思い出したかのように疲労感と息切れを起こす。
「はぁはぁ……」
新しい力を完全に把握出来なかったせいか今更ながら激しい消耗を感じる。
各能力に特化した形態へ次々と変身したのを考えると無理も無い。新たに覚醒した力により、『僧侶』、『騎士』『戦車』の三位一体の特性を極限まで特化させる能力を手に入れたが当然ながらデメリットも存在する。
『相棒。力の解放によって今までに比べれば段違いに禁手制御が出来るようになった。禁手に掛かる時間は短縮され、禁手状態を維持する時間は伸びた筈だ。だが、あの形態はエネルギーの消耗が激し過ぎる。姿を変えれば変えた分だけエネルギーを消費する』
燃費に問題があるというデメリット。禁手の時間は延長されたが、延長分も三位一体の能力を連続して使えばあっという間に無くなり禁手は解除されてしまう。まだ新しい力に慣れていないせいでその問題が顕著に出ていた。
『分かっていると思うが、この能力を使って『女王』にプロモーションするなよ？　今のお前だと力が暴発して体ごと拡散することになる』
「はぁはぁ……分かってるよ」
曹操は一誠がすぐに動けないのを見て、聖槍を首と肩で挟んで一旦手放すと脱臼している腕を掴む。一度深呼吸した後に曹操は外れた関節を填め込む。生々しい音が鳴り、

曹操の顔色が蒼白になる。
その痛みがどれほどのものか、叫び声にして誰かに伝えたい。そうでなくとも痛みに対して声を出すだけで意識が声の方に集中して多少は痛みを和らげる。
曹操は喉まで昇って来たそれを呑み込み、腹の奥底で押さえ付ける。痛みを反省と共に自らの糧にする為であった。
「……ふぅ」
全身を強張らせた後に曹操は小さく息を吐き、弛緩させる。
脱臼を治した腕を軽く動かし、手を握る。どちらも動くことを確認すると曹操は一誠に話し掛ける。
「驚くべき変化だ。一体どうすればそうなれるのか是非とも知りたい所だが、訊いても答えてはくれないだろうね。まさか、あの土壇場でそれだけの強さを得られるとは。槍で守らなければこうやって話すことも出来なかっただろうね」
「……くそっ。死んどけよっ」
曹操の賞賛に悪態で返す。
第三者から見れば曹操が悠長にお喋りをし、余裕があるように見えるだろうが。曹操の現状は膝を突いている一誠と変わらないぐらいに消耗している。
聖槍の力があっても人間の体では悪魔よりも早く限界を迎えてしまう。更に限定的

とはいえ禁手の力も使用しているので心身共に疲弊しているが表面には殆ど出さない。それは曹操の胆力の強さを表していた。

一誠の方も呼吸を整えながらゆっくりと立ち上がる。だが、すぐには曹操へ襲い掛からない。闇雲に戦っても曹操を倒し切れないのは実感している。静かに魔力を高めながら次に動く時に全力を出せられるようにする。

意図せず互いの思惑が一致し、戦場にて戦いの準備の為の会話が始める。話し合うが和解の余地は無い。会話が途切れた時が再戦の合図である。

「『悪魔の駒』のルールを逸脱した君だけの新たな特性か。まるでイリーガル・ムーブだ」

「イリーガル・ムーブ？」

「おや、知らないのかい？　チェスの用語さ。不正な手を意味する」

「反則だって言いたいのかよ？」

「あそこから逆転されたらそう言いたくもなるさ。それに、あの攻撃は明らかに『悪魔の駒』のシステムに不正するような手に見えたからね」

曹操の指摘に一誠の反論は無い、寧ろ納得していた。まず間違いなくレーティングゲームでは使用出来ない能力である。条件を無視して好きなようにプロモーションが出来るとなれば、ゲームのルールを侮辱した行為に捉えられる。このような実戦でしか使用出来ない能力だろう。

『俺としてはトリアイナを連想させたがな』
　頭の中でドライグの感想が聞こえた。初めて聞く言葉にどういう意味なのか、と聞く。
『ギリシャ神話のポセイドンが持つ三叉の矛のことだ。トライデントの方が聞き慣れているかもしれんな。先程の連続しての変身、攻撃がトリアイナのような鋭さと嵐や津波を引き起こすような怒涛を感じた』
　イリーガル・ムーブとトリアイナ。二つの響きは一誠にとって悪くはなかった。
（いいね、それ。じゃあ、こいつは『赤龍帝の三叉成騎（イリーガル・ムーブ・トリアイナ）』と名付けようかな）
　名前も無しだと不便だと思い、新たな力に命名する。
『悪くはない』
　ドライグも否定はしなかったので採用となる。
「本当に怖い怖い。今だったらヴァーリとも互角に戦えるんじゃないかな？」
「そこまで自惚れてねぇよ。まだ届いていねぇ。あいつ、マジもんの天才で化物だぞ？」
「それには賛同する。何せ類を見ない戦闘狂且つナルシストでエゴイストであるあのマタドールすらヴァーリの才能を手放しで褒めるぐらいだ。そう歳は変わらないというのに恐ろしい話だよ」
「恐ろしいって言っている割には楽しそうに見えるぞ？」

一誠の指摘に対し、曹操は端を吊り上げていた口を隠そうとはしない。
「正直、燃えるね。俺もヴァーリとは一戦交えているが、俺の中ではあの時の戦闘高揚が今でも燻っている。勿論、君との戦いもそうだ。伝説のドラゴンとの戦いはやはり楽しい」
「お前もそっちかよ。バトルマニアばかりで嫌になる」
「それは勘違いだ。俺だって無駄な戦いは嫌いだ。戦いが楽しくなるのはさっきも言ったように相手次第さ。周りにそういうタイプが多いのは、君自身が理由かもしれないぞ？」
思い付きもしなかった発想だったので一誠は目を丸くした後に思いっ切り顔を顰める。曹操の考えが正しいとするならば一誠が必死になって戦わなければ周りからそういう類は消えるかもしれないが、必死に戦わないと一誠の命が消えることとなる。
ハーレムと平和を築くのが生きる理由の一つである一誠には出来ないことであった。そうなると結局はこの先バトルマニアを惹きつけ続けるのであろう。
戦闘狂と闘争が待つ血生臭い未来に涙が出そうな気分になる一誠であった。
「さて、こうやって和気藹々と君と話すのも悪くは無いが……君も分かっているんだろう？」
曹操は脱臼していた腕を持ち上げ、聖槍を握る。

「初めて使う能力っていうのは簡単に使いこなせるものじゃない。予想だとスタミナとオーラの消耗が尋常じゃない筈だ。禁手はあとどれくらい持つのかな？　一時間？　三十分？　それとも――十分ぐらいかな？」

あくまで勘で言った数字なのだろうが、忌々しいことに正解であった。

（強い奴ってのはどうしてどいつもこいつも勘が良いんだよ！）

心の裡で愚痴る。或いは、そういった普通では手に入れられないものを有しているのも強者となる条件なのかもしれない、と才能無しの烙印を押されている一誠は思う。

「図星だったかな？」

「どうでもいい、残り時間なんて。だらだら長引かせるつもりはねぇ。分かっているだろってのはこっちの台詞だ。――次で決めてやるっ！」

残り時間を気にするぐらいなら目の前の相手に集中する。進む時計の針が気になるなら寧ろこっちから早回しにする。残された制限時間を消費して一誠は魔力を高める。

「モードチェンジ！　『龍牙の僧侶』！」

『僧侶』へのプロモーションにより一誠の魔力は爆発的に上昇。形成された二門のキャノンに魔力が充填されていくが――

『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！

Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』

――魔力の倍化を極限まで行ったことにより、初撃の際に二門で一発放っていたドラゴンブラスターを一門一発発射出来るぐらいに溜まっていた。

空間すら歪ませる極大の魔力弾が二発同時発射準備。

曹操は撃たずとも分かる破壊力に、顔には好戦的な笑みを浮かべているものの尋常ではない冷や汗を流していた。

言葉に出来ない重圧と高揚で心臓が今まで経験したことがない勢いで鼓動する。体が冷えていくと同時に腹の奥底にはマグマのような熱が溜まっていく不思議な感覚。

生と死の狭間立つことでしか味わえないものであった。

（二発……行けるか？　いや、やってみせる！）

一度目は様子見も兼ねて回避を優先したが、二発同時となると避けた先を狙われる可能性が高い。ならばこそ真っ正面から受けて立つ構えをとる。

今の昂ぶりを聖槍に乗せれば一誠の攻撃を受け止めきれると信じ、念じ、貫き通す。盲信と言えるぐらいに己を信じ切る。

聖槍の輝きが増す。曹操から気迫が嫌でも伝わって来る。もしかしたら、負けるので

は、と一瞬でも思いそうになる。
すぐにそんな弱気を吹き飛ばす。これは意地の戦いである。相手に勝つという意地をこれでもかと相手に見せつける必要があるのだ。
曹操の気迫を浴び、一誠は二門のキャノンが自壊する寸前まで魔力を注ぎ込む。だが、それで終わらなかった。
一誠は両手首を合わせ、腕を伸ばす。そこに溜められていく魔力。一誠は己の両腕を三門目のキャノンへと見立てたのだ。
ドラゴンブラスター三発同時発射。ドラゴンブラスターの単発の威力から『覇龍』のロンギヌススマッシャーに近い威力を出すことが可能だと曹操は推測する。
禁手の完全解放を一瞬考えるが、間に合わないことも一瞬で理解してしまう。まやかしの希望に縋れない己の判断力の良さもこの時ばかりは恨めしく思う。
「正念場か？　或いは――」
土壇場かもしれない。無論、転じた意味では無く言葉通りの。
「俺の全力だ。逃げんなよ？　英雄？」
三門から撃ち出される三発のドラゴンブラスター。圧縮されても尚巨大な魔力の塊は、着弾地点にて一つとなり、赤い光で世界を塗り潰す。
その瞬間、偽りの世界は崩壊した。

◇

「はぁ！　はぁ！　はぁ！」

乱れた呼吸を何とか整えようとするが、上手くいかない。どんなに酸素を取り込んでも足りなく、息苦しい。

酸欠で狭まった視界で左右を見る。目の前に広がるのは破壊された平野ではなく、二条城の敷地内であった。

『どうやら相棒の攻撃で疑似京都があった空間が完全に壊れたみたいだ。ここは現実だ』

「そ、そうか……なら、早く……皆と、合流しないと……」

途切れ途切れで話す一誠。プロモーションは解除され、基本形態の鎧に戻っていた。力をほぼ出し尽くしてしまった為、禁手を維持出来る時間は残り少ない。

「はぁ……はぁ……ッ!?」

吐き出す息すら思わず?み込んでしまう重圧。全身の細胞から熱が抜けていくような悪寒。一誠はそれが何によって齎されているのか過去の経験から知っていた。

『馬鹿な……このタイミングでだと……！』

ドライグも驚愕する。それだけ最悪のタイミングと呼べたからだ。
「――全く」
その声は曹操のもの。ドラゴンブラスター三連発を何らかの方法で切り抜けていたらしいが、何故か声は不貞腐れていた。
「レオナルドの件といい……何時からそんなに過保護になったんだい？」
問い掛けた人物は、曹操の隣に浮かんでいた。
「かかかか。同盟相手に手を貸すことが、そんなに不思議なことかのう？　曹操？」
黄衣を纏う高僧の骸骨――魔人だいそうじょうが死の気配と共にこの戦場へと現れた。

死闘、終了（前編）

四方八方から飛び掛かるオンギョウキの分身。八坂の体へと次々に張り付いていく。
「ご無礼を」
主である八坂の体に分身とはいえ抱き着くことに対し一言詫びるオンギョウキ。八坂はオンギョウキの分身を振り落とそうと水気を払う犬のように体を左右に震わすが、オンギョウキの分身は同化したように付いたままであった。
オンギョウキの分身の能力もあるが、八坂自身にも原因があった。
（やはり力が落ちている。誰かが術を破ったか。誰かは知らぬが感謝する）
術を破った誰か――匙に感謝の念を送りつつ、八坂の動きを止めようとしたとき――
『オ……ン……ギョ……ウ……キ……』
「むっ！」
頭の中に響く微かな声。聞き間違える筈が無い。それは確かに八坂の声である。
「八坂様！　正気を!?」
しかし、八坂は未だに暴れ続けており、その目にはまだ正気の色は宿っていない。
理由は不明だが何かしらの方法でオンギョウキに心の声を伝えている様子であった。

『苦、し、い……体が……言うことを……利かぬ……』
「暫しのご辛抱を！　このオンギョウキが必ずお救いします！」
　八坂の今の状態がオンギョウキの頭の中に直接伝わって来る。味わっている苦しみすらも理解出来そうな程に。
『わらわは……道具には……ならぬ……オン……ギョウキよ……まだ……間に合う……このままでは……おぬしを……そうなる前に……今すぐ……わらわの……命を断――』
「お断りします」
　八坂の頼みを最後まで聞く事無く断るオンギョウキ。
「主である八坂様の命に背くのは不忠であることは承知しています。ですが、申し訳ございません。このオンギョウキは既に決めているのです」
『――九重のお母さん、絶対に無事に助けましょう』
　八坂と戦う前に言った一誠の言葉。あのとき、一誠やアザゼルの前で宣言をしていなかったのなら、今の八坂の声を聞いて一誠が危惧していたように八坂の命を奪う方向へ考えが傾いていたかもしれない。
「八坂様。私はこれ以上九重様を泣かせまいと誓っております。故に必ず貴女を無事に九重様の許へ連れて帰ります」
『オン……ギョウキ……ううっ……！』

術は解けかけているが、まだ不安定な洗脳が残っており、苦しそうな八坂の声が獣の唸り声へと変わっていく。
「私は殺してしまうかもしれなとお考えになっているのでしょうがご心配なく。易々とやられるほど軟弱ではないことは、既にご存知かと」
八坂の抵抗が激しくなり、しがみついていたオンギョウキの分身も振り落とされるようになっていく。振り落ちたオンギョウキの分身は、地面に落ちると水が弾けるような音を立てて影へと戻る。八坂の足元では本体無き影が水溜りのように広がっていく。
「遠慮は無用。このオンギョウキを殺せるものなら殺してみてください」
実のところ、オンギョウキは少しだけ、ほんの少しだけ八坂の言葉に怒りを覚えていた。このまま戦い続ければ、殺してしまうと八坂に思われていることに対してである。
オンギョウキはこれを見くびられている、と捉えた。確かにオンギョウキにとって色々な枷がある戦いであり、苦しく思うことはあった。
だが、それでも主である八坂には思っていて欲しいのだ。
オンギョウキは殺しても死なない最強の家臣であると。
『うぅ……オォォォォォン！』
戻り掛けていた正気が獣性の方へと傾き、獣の咆哮を上げて八坂は炎を吐こうとする。

「失礼」

地面に広がる影が紐のように伸び、八坂の口に巻き付いて閉じさせる。強引に開こうとするが、伸びる影は一本ではなく無数であり、幾重にも巻き付いて完全に閉じさせてしまう。

「不安定ながらも術は解け出しています」

オンギョウキは立っていた木の枝を蹴って跳び、八坂の頭頂部へ飛び移る。

頭を振って落とそうとするが、巻き付いた影に固定されているので首が動かせない。

前脚で影をまとめて切り飛ばそうと八坂が動いた瞬間、彼女の体が大きく傾く。見れば八坂の片足が地面に広がる影の中へ沈み出していた。

引き抜こうとするが影は底なし沼のように藻掻くものを逆に引きずり込んでいく。そんな事をしているうちにもう片方、もう片方と脚が影の中へと沈み込み、遂には四肢が取り込まれて脱出も出来なくなる。

「暫しの間、我慢を。その時が来るまで私もお傍にいます」

八坂の巨体が影へと沈む。オンギョウキもまた八坂から離れることなく共に影の中へ。

時間にすれば十数秒程度のことであり、二人の姿は影へ消えてしまった。

◇

『おいおいおい！　何じゃこりゃぁぁぁ！　ドライグか！　ドライグなのか!?』

ヴリトラと匙が術と気の流れを断つ作業をしている中で空を漂う玉龍が喧しく騒ぎ出す。

「……騒がしいぞ、玉龍」

『……お前は少し慎みを持て』

孫悟空とヴリトラが鬱陶しそうに注意するが、玉龍の口は止まらない。

『黙ってられるかよ、爺共っ！　お前らだって気付いてんだろぉぉ!?　この波動をよぉ！　どう感じ取ったってドライグのものだろうがっ！　しかもよぉ、質が違うぜぇ！　封印される前のドライグみてぇだ！』

玉龍の言う通り孫悟空とヴリトラもドライグの波動を感じ取っていた。量はそうでもないが、質の方は全盛期のドライグを彷彿とさせる。

それから少しして強い揺れが匙たちを襲う。地面だけでなく空間すらも震わす程であった。

「な、何じゃ!?」

急な揺れに驚き、慌てる九重。思わず近くにいた孫悟空にしがみついてしまう。孫悟

空は九重を宥めるようにその頭を軽く叩く。
『フォォォオ！　派手にやるじぇねぇか！　テンション上がってくるねぇ！』
空中にいる玉龍には見えていた。巨大な魔力の塊がドーム状に広がっていく様が。
一目でドライグの仕業だと分かる。
（兵藤の奴……また強くなりやがったな）
ヴリトラを通じて匙にも一誠とドライグの覚醒が伝わっていた。目指す存在が高みに昇ったのを知り、嬉しいような悔しいような複雑な気持ちになる。
ヴリトラの力をかなり使えるようになり、手が届く所まで来たかと思えば、いつの間にかまた手の届かない場所に行ってしまった。だが、それを知っても腐るつもりは無い。匙にとって一誠が目標に値する存在と再認識出来た。
（待ってろ！　すぐに追いついてやるからなっ！）
一誠たちの覚醒は、匙が気合を入れるのに十分な出来事であった。
ヴリトラの力が増していき、このまま術が崩壊するのも時間の問題となる。
「こいつぁ……」
突如として孫悟空が殺気立つ。孫悟空だけではない、玉龍とヴリトラもまた強く警戒し始める。
『ファァァアクッ！　なんてこったい！』

『このタイミングでだと……?』

強者たちが動揺すると共に殺気を漲らせていくのが分かり、何が起こっているのか分かっていない九重は困惑するしかなかったが――

「あ、あれ?」

――九重は自分の尻尾の毛が逆立っていることに気付く。

「な、何じゃ?」

どういう訳か声が震える。体中に鳥肌が立ち、寒くない筈なのに体が震え出す。

「ど、どういうことじゃ? か、体が、い、言う事を……!」

経験は浅くとも妖狐としての本能が、招かれざる存在について察知してしまう。

こうなってしまうと彼女の精神は『とてつもなく恐ろしい』としか表現しようがない気配に押し潰され始めてしまう。

顔面は蒼白となって生気を失い、精神への過度のストレスにより呼吸が上手くできなくなっていき、心臓の鼓動すら乱れていく。

「こいつをお嬢ちゃんが知るにはまだ早い」

孫悟空は九重の眼前を手で覆い、手を下に振るうと九重の瞼が閉ざされゆっくりと仰向けに倒れていく。

孫悟空は九重を支え、丁寧に地面へ置く。九重は寝息を立てていた。孫悟空の術に

よって眠らされていた。
「まあ、知る価値なんぞ無いがな」
　気配の主に対し辛辣に吐き捨てる。
「ヴリトラ、この狐のお嬢ちゃんのことは任せた。傍に居てやれ。ただ、結界が壊れて外の連中と合流することが出来たのなら、お嬢ちゃんを預けてこっち来い」
『うむ……』
　ヴリトラの返事は歯切れが悪い。ヴリトラ自身は協力する気はあるが、あくまで最優先するべきなのは宿主である匙の気持ちである。この先で待っている相手は匙には荷が重過ぎる相手である。
（俺のことは気にすんな、ヴリトラ……！）
　ヴリトラの気遣いを感じ取り、匙は迷いを断ち切らせるようにハッキリと言った――つもりなのだろうが、声が震えている。あの気配はヴリトラ越しに匙にもしっかりと伝わっている。姿は見えないが先程の九重と似たような顔色をしていると思われた。
　とはいえ覚悟の方も本物であることはヴリトラも分かっている。匙が決めたのなら、半身であるヴリトラもそれに付き合う。
『――分かった。後程落ち合おう』
「おうよ。おい、玉龍。儂に付いて来い」

『ゲェェェェ！　オイラも行くのかよ！　気が乗らねぇぇぇ！』
玉龍は身を捩って『嫌だ』というアピールをするが、孫悟空には通じない。
「京料理だけでなく、他にも好きなものを好きなだけ食わせてやるから仕事せぃ」
『割に合わねぇぇ！　そういうのが嫌だから隠居しようと思ったのにー！』
「喧しいわ。龍王と呼ばれていたのが伊達でないところを見せんか」
文句を言う玉龍に対し、孫悟空が一喝する。
『ああ、もう！　はいはいっ！』
渋々といった態度で言うことを聞く玉龍。相変わらず『嫌だ、嫌だ』というオーラを全身から放っていた。
『絶対来いよ！　必ず来いよ！　ヴリトラ！』
懇願の台詞を言い残して玉龍は空を泳いでいく。気付くといつの間にか孫悟空も居なくなっていた。
『一難去ったと思えば更なる災難が来るとはな……』
ヴリトラも理不尽な展開に対し、玉龍程ではないが愚痴らずにはいられなかった。
（無事で居てくれよ、頼むから……）
匙は誰一人欠けることのない仲間との再会を今は祈るしか出来なかった。

◇

巨大な魔力の塊。それが三つ。今まで様々な困難を乗り越えてきた曹操ですらこれにはどう対処すべきかとっさに案が思い浮かばない。

しかし、この様な状況でも曹操の心は諦めるという境地には入らない。何故なら死に瀕した経験は一度や二度では済まないからだ。

曹操とて常勝無敗ではない。今に至るまで数え切れない試練を味わって来た。経験不足が目立つ幼かった頃など死は隣人に等しかった。

「ならばこのまま逝くか？」

前振りなど一切無い唐突に耳元で囁やかれるのは諦観を促す声。

驚く必要など無い。死は隣人。だからこそ、死の象徴である魔人――だいそうじょうがいつの間にか背後に居ることも何ら不思議ではないのだ。

曹操は自他も認める程に天運に恵まれている。この窮地に於いて最強の援軍が来た。これ即ち、この状況を打破せよという運命の導き――などという優し気なものではない。

だいそうじょうは曹操を救おうとしている。しかし、それは言葉通りの意味では無い。だいそうじょうにとっての救いとは死なのだ。

一切衆生の迷いを解くことを己の務めとしている彼にとって死に抗うことは迷いに等しい。

だいそうじょうは求めている。曹操の口から救いの言葉が出ることを。

要はだいそうじょうは見たいのだ。曹操という英雄を目指した者の死という末路を。心折れて救い(死)を求める様を。それも特等席で。

確かにここで死ねばあらゆることから解放されるだろう。苦しみも恐れも痛みも悩みも不安も死ねば終わる。

全て捨て去ることほど楽なことは無い。

だいそうじょうが囁く救済の誘惑に曹操は――

「冗談だろ?」

――だいそうじょうを見向きもせず、その一言で一蹴する。

だいそうじょうは短く息を吐く。苦難に満ちた迷い道を選んだことを憐れむような、望んだ答えでなかったのでつまらなそうな、色々ととれる反応であった。

曹操は迷いを選んだ。人を救うことを役目だと思っているだいそうじょうからすれば、ここで迷いを抱えたまま死ぬことは本当の意味で救いにはならない。

だからこそ、だいそうじょうは曹操へ力を貸す。いつの日か、その口から救いを乞う言葉を吐かせる為に。

だいそうじょうが数珠を持った手に念を込める。曹操の前方に破魔の力で描かれた梵字が並び円を作り上げる。円の中に新たな円ができ、破魔の円陣が出現した。

しかし、だいそうじょうが力を貸すのはそこまで。そこから先は曹操へ任せる。

曹操の実力を信頼してか、それとも迷いを解かせる為の苦難か。もしかしたら両方かもしれない。

こんな時にさえ自分を試してくるだいそうじょうに苦笑いを浮かべながら、曹操は破魔の円陣を聖槍で貫く。

円陣を穂先が通過した途端、聖槍の力により破魔の力が相乗され、穂先がその力を取り込むことにより巨大な刃となって突き出される。しかも、三発のドラゴンブラスターに合わせて光刃は三叉となってそれぞれ伸びていく。

増幅された力同士の衝突は天を衝き、脆くなっていた結界にトドメを刺すこととなった。

◇

肉体と精神を限界まで酷使したせいで夢でも見ているのかと思った。だが、夢だとするのならば質の悪過ぎる悪夢である。

大量の天使、堕天使を一瞬で消滅させただいそうじょうが目の前に現れるのだから。

「最悪だろ、これ……」

現実逃避をしたくなるが、それすら許さない魔人の死の気配。死の気配に触れるだけで嫌でも現実と認識してしまう。

一方でボロボロの一誠と同じくらいに曹操もまたボロボロであった。だいそうじょうとの合わせ技で繰り出した破魔の聖槍の反動により消耗していた体は限界寸前どころか突破しており、唯一無二の聖槍を杖代わりにして体を支えている。

罰当たり且つ情けない使い方であったが、そうしなければ地を舐めることとなる。そうならないのは偏に曹操の精神力が肉体を上回っているからであった。

「ほう？　これはこれは」

今にも気絶しそうな曹操のことを放ってだいそうじょうが前に出て来る。奈落を思わせる眼窩が捉えるのは『龍牙の僧侶』となっている一誠。

ほぼ力は使い切っているのでハリボテの状態だが、だいそうじょうへの牽制の意味を込めて気力で姿を維持し続けている。その甲斐あってか脅威は与えられなかったが、興味は惹かせられた。

その眼窩に晒されているだけで寒気が止まらず、命が削られていくような錯覚を覚える。

『相棒、逃げられるか？』

ドライグが真っ先に言ったのは逃走であった。誇り高き赤い龍とは思えない提案。それだけ一誠の身を案じているからであろう。

（悪い……無理そうだ）

一誠は兜の下で顔を引き攣らせながらも無理矢理笑みを作る。余力が残っていたら『龍星の騎士』でこの場から逃げられたかもしれないが、力は曹操相手にほぼ出し切ってしまった。

後悔は――していない。あのときはあれが正解だと思っている。力を残して勝てるような甘い相手では無い。だいそうじょうの参戦というのがイレギュラー過ぎたのだ。

『そうか』

ドライグの返答は短く簡素なものであった。不平不満はある筈なのに全てを受け入れる構えをとっている。

一誠も足掻きたいが、その足掻く力すらない。

「初めて見る姿をしているのう。是非とも拙僧にその力を見せてもらいたい」

一誠の状態を知ってか知らずか手合わせを求めてくる。もし、知っていて言っているのならとんでもなく性悪でサディストな性格をしている。

「……嫌だと言ったら？」

緊張と恐怖で乾いた口から挑発する言葉が出て来たのは奇跡だと思う。
一誠の返事に対し、だいそうじょうは肉無き顔で笑みを見せる。何故か笑っているのが分かる。それも満面の笑みで。だが、少なくともこちらを安堵させる類の笑みでは無い。実際、笑みを向けられた一誠は自分の体温が下がっていく気がした。
「無論、出させるのみ」
最初から一誠に拒否権など無かった。実力行使をする気しかない。しかし、それを誰も咎めない。咎めることも出来ない。道理など強者の前には戯言に落ちる。
「どれ」
このとき、一誠は無意識に瞬きをした。時間すれば刹那のこと。人が行う当たり前の現象であり、意識しても確実に止められるものではない。
だが、瞼が眼球を覆い、上げられたときだいそうじょうは一誠のすぐ目の前にまで来ていた。
速いという次元の動きではない。完全に先手を取られてしまった一誠は反撃も回避も許されず、そんな一誠にだいそうじょうは数珠を突き付け――
「キーホー!」
甲高い声が頭上から聞こえたかと思えば、目の前で爆発が起こる。
「うおっ!」

思わず仰け反る一誠。火や火薬による爆発ではない。大きな何かが落下してきたのだ。
一誠の前に立つのは地面に両刃剣を突き刺すフウキ。両刃剣はだいそうじょうに事前に気付かれたせいで躱されており、だいそうじょうは至近距離でフウキを見る。
「鬼か」
「見りゃ分かんだろ」
まるで唾でも吐くかのような仕草でフウキの顔面中央にある穴から突風が吹かれる。
不意を衝かれただいそうじょうは、突風に煽られて後退させられるがすぐに後退を止め、数珠を振るうと突風を掻き消してしまう。
そのタイミングで左右からスイキ、キンキが武器を振り上げて挟み撃ちを仕掛ける。
「その首寄越せっ！」
「ヌウゥウン！」
武器が交差するがその時にはだいそうじょうの姿は消え、スイキとキンキから十数メートル程離れた地点へ移動していた。
「ちっ。すばしっこいなあの化け物坊主は」
「おいおい。外してんじゃねーよ」
「ダマレ。オマエモヨケラレタ癖ニ」

ギャアギャアと言い合う三鬼。絶体絶命の危機に現れた思わぬ助っ人に一誠は感動すら覚える。
「あ、あの……」
「あん？　ああ、赤龍帝か。こんな所に居たのか。ってかお嬢はどこだ？　一緒に居ないのかよ？」
「ええっと……」
一誠の感動とは裏腹にフウキは一誠に全く感心が無い様子。乱入も偶然であったらしく一誠よりも九重の方を気にしていた。
そのせいで礼を言うタイミングを逃してしまい、何を言おうか迷ってしまう。
「敵が退いてつまらんと思っていたらとんだ大物が来たな！」
「コノ京ノ地ヲ踏ンデ無事ニ帰レルト思ウナ」
相手が魔人だと分かっていてもスイキ、キンキの戦意は萎えることはなく逆に高めていく。結界外でレオナルドの神器で創り出したアンチモンスター相手に暴れ回っていたが、それでもまだ暴れ足りないらしく、鬼らしい尽きぬ闘争心を剥き出しにする。
「鬼退治か。それも一興」
三鬼の殺気も柳の如く受け流し、退治することを告げる。だいそうじょうにとって鬼は救うべき対象ではなく祓うべき厄程度にしか認識されていない。

だいそうじょうが祈りの構えに移ろうとしたとき、音を裂く音と共に巨大な拳が火を噴きながら突っ込んできた。
「なななな、何だありゃあっ!?」
僧侶と鬼の戦いが始まるかと思いきや、横槍として世界観が全く異なるロケットパンチが飛んで来たのなら一誠のリアクションも当然と言える。
ロケットパンチがだいそうじょうを圧殺する前にだいそうじょうは瞬間移動をして別の場所へ転移。大質量の拳が地面を砕き、大地を揺るがす。
『ゴオオオオオオッ！』
威嚇の咆哮を上げながらゴグマゴグが参戦。
「派手な登場するじゃねぇか、デカブツ」
「目立チタガリ屋メ」
「真っ金々のお前が言うかぁ？」
外野で騒ぐ三鬼。一誠は十メートルもある巨人が現れたことに唖然としていた。
「ふむ……少々厄介な相手よ」
ゴグマゴグの登場にだいそうじょうは少しだけ億劫そうにする。だいそうじょうが得意とする破魔、呪殺は悪魔、天使に特効であるが、ゴグマゴグのような無機物に対しては効果は薄い。場合によっては力量差で上から潰すことも可能だがゴグマゴグはそ

れが出来るような容易い相手ではないことはだいそうじょうも分かっていた。
ゴグマゴグの目がだいそうじょうを捉える。元々、ルフェイがゴグマゴグに与えていた命令はセラフォルーらと協力してアンチモンスターを撃退することであったが、レオナルドが退散しアンチモンスターが消滅したことで命令が上書きされる。
ゴグマゴグにとって最上位の命令はルフェイを護衛すること。そして、ゴグマゴグにはある程度思考することが出来る。ゴグマゴグのセンサーとも言うべき感覚が魔人の気配という危険を察知。ルフェイの身の安全を守る為に魔人の排除に全力で取り掛かる。
ゴグマゴグの目が輝く。すると両眼から一対の光線が発射された。高い貫通性と高熱を持つそれは命中すれば灰すら残さずに対象を消滅させる。
だいそうじょうはゴグマゴグの光線が放たれる前に独鈷鈴を自分の目線の高さまで持ち上げていた。光線が発射されるタイミングに合わせて独鈷鈴を鳴らす。
清涼な音が響く。聞けば心安らぐ音ではあるが、音自体にだいそうじょうの力が込められている。
光線がだいそうじょうへ届く前に四散し、幾筋もの光に割かれて周囲へ飛び散る。独鈷鈴の音が障壁となって光線を防いでいるのだ。
「ヌウっ！」

「うおっ！」
無差別にばら撒かれる光線にスイキとキンキは慌てて逃げる。
曹操の方にも来ていたが、聖槍でそれを払い除けてしまう。
飛び散った光線は一誠の方にも飛んで来た。
「やべぇ！」
一誠も逃げようとするが、消耗し切った体が重くて咄嗟には動けない。
「しょうがねぇなー」
見兼ねてフウキが一誠を持ち上げ、その場から移動。着弾した光線は地面を赤く溶かす。
「あ、ありがとうございます……」
「重っ」
礼をした後に雑に地面へ投げ捨てられた。
ゴグマゴグは少しの間、光線を照射し続けていたが、効果があまりないからかそれとも周りに被害が及ぶことを理解したのか光線を中断させる。
ゴグマゴグの光線が止むと同時にだいそうじょうは反撃を試みようとするが、だいそうじょうを突如影に覆われた。
だいそうじょうが首だけ後ろへ向ければ、背後にはゴグマゴグに匹敵する半透明の白

い巨人が身の丈程もある棍棒を振り上げていた。
これがゴグマゴグが光線を中断した理由である。ゴグマゴグとゴグマゴグのアーキタイプである白い巨人には両者にしか伝わらない特殊な通信が備えられている。ゴグマゴグがだいそうじょうの存在を感知したときから白い巨人へ援軍を要請していたのだ。
落雷の如き速度で振り下ろされる棍棒。速過ぎて空気が爆ぜるような音が響き渡る。
不意を衝く攻撃のせいで転移による回避のタイミングを逃してしまっただいそうじょうは、己の頭上へ向けて数珠を握る左手を突き出す。
数珠から発せられる不可視の衝撃が棍棒へ衝突――が、その衝撃は人知を超えた怪力によって薄紙のように破られてしまう。
白い巨人による暴力の一撃がだいそうじょうの頭蓋を砕く、かと思われたが掲げられた数珠の力により数ミリの隙間を残して紙一重で防いでいた。
白い巨人はそこで攻撃を止めず、力に物を言わせて押し込もうとする。ゴグマゴグと同様に無機物であるので破魔や呪殺では倒せない。
白い巨人はだいそうじょうを圧殺しようとする。
「喝」
その一言で世界が静止する。正確に言えばこの場にいる者達全てがだいそうじょう

の放った声により意思に反して硬直してしまったのだ。それはゴグマゴグや白い巨人も例外ではなく兵器である彼らも一時的に動けなくなっていた。

まるで言霊。たった一言により盤面を覆してしまう。

唯一動くことが出来るだいそうじょうは、大きく口を開く。

「きいぁぁぁぁぁっ」

骨のみの喉から出される奇声。すると、白い巨人の体から人魂のような光が無数に抜け出していき、泳ぐように昇って行く。それは白い巨人の体から離れるとだいそうじょうの体へ吸収されていく。

途端に白い巨人の棍棒は怪力を失い、押し上げただいそうじょうの左手によりその場で倒れてしまう。

白い巨人が転倒した後に一誠らの硬直も解けるが、すぐには動くことが出来ずにいた。

だいそうじょうは明らかに白い巨人から力を吸い取っていた。破魔、呪殺だけでなく相手の動きを封じたり、吸収する能力も有している。下手に動くことは出来ない。

「かかかかっ。さて、汝らも――」

だいそうじょうが数珠を構えようとし、異変に気付く。白い骨を覆う白い何か。それが霜であると気付いたとき、だいそうじょうの左腕は急速に凍結し始める。

凍結を左手から腕へ這い、だいそうじょうの胴体まで浸食しようとする。
「南無」
だいそうじょうが一言唱えると氷の浸食は止まった。だが、代償としてだいそうじょうの左腕は粉々に砕け散る。絶対零度、或いはそれすらも超えた超常的極低温により体が持たなかったのだ。
「あんまりおいたはダメだよ☆　お爺ちゃん?」
愛らしい声が聞こえてきたのはだいそうじょうの頭上。いつの間にかゴグマゴグの肩にセラフォルーが立っていた。
目を細め、口元は笑みを浮かべているが、細めた目の奥にある瞳には敵に向ける冷たさに満ちている。
「おおぉ。セラフォルー殿か。あの会談の一件以来かのう。まさか、魔王がこの地に居たとは」
「あの時ぶりね、お爺ちゃん☆　サーゼクスちゃんが色々とお世話になったみたいだけど……」
「かかかか。あれは中々に愉しき一時であった。柄にも無く滾りを覚えるぐらいに」
声色だけ聞けば仲の良い会話。しかし、会話の裏ではいつでも攻撃を仕掛けられるように牽制をしている。僅かな隙を見せれば即座に死に繋がる力が飛ぶ状況。

見ている者は魔人と魔王が放つ圧迫感、緊張感によって多大な精神的苦痛を感じていた。一誠は兜の下で死人同然の顔色となり、あれだけ多弁であった三鬼も口を噤んでいる。

「レヴィアタン様……！」

四大魔王が来てくれたことは心強い。さっきからだいそうじょうの危険を感じて次々と援軍が来ている。だが、一誠はまだ状況が好転していないと思っていた。裡にいるドライグも同様である。

『一秒たりとも油断をするなよ？　きついだろうが。下手な動きを見せれば死に繋がると思っておけ』

心身共に疲労困憊している一誠には厳しい注文であった。ドライグも脅すつもりで言っていないのは分かっている。そこまでやって初めて魔人という存在の前に立てるのだ。

「ふむ」

だいそうじょうは失われた左腕を振るような動きを見せる。消滅した左腕が空を切った――かと思えばいつの間にか無くなっていた筈の左腕が戻っている。凍結と共に散った数珠も黄色の僧衣の袖も元通りであり、セラフォルーが与えたダメージを一瞬で無かったことにしてみせた。

「まあ☆　お爺ちゃん凄い☆　手品？」
「かかかか。祈ることしか能が無い拙僧には奇術師の真似事など出来はせぬ」
セラフォルーに一切の動揺は無い。少なくとも表面に全く出ておらずいつも通り魔王少女らしく振る舞っている。
いつも通りであることが、これ程までに頼もしいのか、と一誠は思った。今でも冷や汗をダラダラ流している一誠とは違い、冷や汗どころか顔色一つ変えていない。
これが悪魔を統括する魔王の実力なのだと感動すら覚えた。
だいそうじょうを囲む実力者たち。戦力差を見れば絶望的に思える。一誠がだいそうじょうの立場ならまずそう思う。
なのに中心に立つだいそうじょうは相変わらず恐ろしく、冷たい気配を放ち続けていた。
「いつもなら降参を勧めるけど……ごめんなさい。お爺ちゃんは例外――危険過ぎる」
好機があるならば絶対に倒さなければならない相手。それが魔人である。かの存在はこの世界のあらゆるバランスを崩す。
「かかかか。サーゼクス殿然り魔王という者は皆律義なことよ」
だいそうじょうの顎を震わす音がやけに響く。
「笑ってられんのも今の内だぜ！」

「直ニ笑エナクナル」
「こちとら七人掛かりだ！」
だいそうじょうの首がぐるんと回って三鬼を見る。
「七人？　かかかかかかっ！」
一際声を大きくして笑うだいそうじょう。不気味さだけが増していく。
「七人とは謙虚な……もっと多いであろう？」
何を、と思った瞬間、この場にいる全員が驚愕する。
足元に広がる眩い清浄なる光とそれによって描かれる文字。見間違いをする筈も無い破魔の力。
破魔の光は地面全体に広がっており、視界の範囲外まで伸びていっている。
「目が届かねば、そこに手が届かぬと思っておったか？」
破魔の力は既に二条城だけでなくその周辺にまで及んでいる。だいそうじょうが射程圏内全ての人外を浄化しようとしている。
二条城にはまだシンたちが残っている。また、周辺には生徒会メンバーや京都の妖怪たちも居る。それにも破魔の射程に入っているのなら――
「止めろ……」
懇願するような台詞が自然と口から出てしまう。自分だけではない、大切な人や仲間

の命に危機が迫ろうとしている。
実力者ならば生き残れるかもしれないが、それもほんの一握り。発動すればほぼ全滅するだろう。
「目も手も届かぬ所へ救いを与えてこそ真の救済よ」
一誠の言葉など耳にも入らずだいそうじょうは更なる力を送り込む。破魔の輝きが増す。セラフォルーや三鬼が妨害しようとするが破魔の力がそれを阻む。
白い巨人、ゴグマゴグも動くが巨体故に間に合わない。
「一切衆生悉有仏性。我が救いによって汝らの魂を迷いから解き放とうぞ」
「止めろぉぉぉぉ！」
あらゆる命を奪う清浄なる光が全てを覆い尽くそうとする。
その時であった。
小さな影が矢の様に降り注いだかと思えば、一誠が思わず体勢を崩しそうな程の揺れを起こす。
地面を踏み砕くと同時に張り巡らされていた破魔の光が消失する。
何が起こったのか分からないが、何かを起こしたのは紛れもなくこの小柄な猿のような老人であった。
「相変わらず自分勝手な説教垂れて好き勝手やってるのぅ。乾物坊主」

「馬の耳に念仏という言葉があるが、もう一つ動物を加えんといかんな。猿にも念仏は通じん」
「儂に説教垂れたきゃお釈迦様でも連れて来い」
登場早々に悪態を交わす両者。
『相棒、上にも居る』
ドライグに言われ、上を見上げる一誠。そこでは緑のオーラを纏ったドラゴンが夜空を舞っている。
『玉龍か!?』
ドライグの口から出て来たのは五大龍王の名。
「聖槍のボウズだけかと思っていたら、まさかお前さんが出っ張っているとはのぅ。あのクソボウズがそんなに可愛いか？」
懐から出した煙管を吹かしながら猿の老人――孫悟空は揶揄うように言う。
「かかかか。今死ぬには惜しいと思ったまでのこと」
「はっ！　愛されてるのぅ、聖槍の」
皮肉を言いながら話の矛先が曹操へ向けられる。
「……これはこれは闘戦勝仏殿。まさか、貴方がここに来られるとは」
「初めはお前さんに灸をすえるぐらいに思っていたが、余計な奴まで来たんで少し焦っ

たわ。あ、言い忘れていたわ。アザゼルの言っていた助っ人で儂らのことだから」
曹操と話すついでに一誠らに自分のことを説明する。
「後のことは儂と玉龍に任せぃ。こういう荒事には慣れておるからのぅ」
「あの怒れる狂人一人封じた程度で強気だのぅ」
「問題ないわぃ。あいつよりも容易ぃ」
事情を知らぬ者しか理解出来ない両者の会話。傍で聞いている者らは警戒しながらも耳を傾けるしかない。
当然ながらセラフォルーは孫悟空のことは知っている。一誠、三鬼は『誰だ？』と内心思っているが、只者では無いことは分かっていた。
こと魔人との戦いに於いては孫悟空と玉龍はこれ以上無いぐらいに相応しい存在であった。彼らは過去に於いて『獄天使』と呼ばれる魔人を封じたことのある経験者である。
より細かに言えばアザゼルを含む『神の子を見張る者』幹部全員とアザゼルと個人的な繋がりがあったマダ。そのマダと知り合いであった孫悟空、そしてそれに付き合わされることとなった玉龍である。
歴史上初めて魔人を封じたことにより――元から知名度はあったが――彼らの名は裏の世界では特別なものとなった。

『挑発すんなよ、ジジイ！　あー、マジで魔人だよっ！　ファァック！　チョーダリィ！　魔人との戦いなんて一回こっきりで十分だってぇの！』

シリアスな空気をぶち壊すような玉龍のハイテンションな喋りが頭上から降って来る。見た目に反して軽くてテンションの高い喋り方に玉龍を初めて見た一誠は困惑してしまう。

「相変わらず品の無い龍じゃのぅ」

既知の仲であるだいそうじょうが玉龍に苦言を呈す。

『救済云々言って殺し回っているようなイカレたミイラジジイにとやかく言われる筋合いはねぇ！　これがオイラなんだよ！　龍王玉龍様だっ！　だろ!?　ドライグ!?』

いきなり話を振られたドライグが、ため息を吐いたのが一誠にも伝わっていた・

『変わらずだな』

玉龍が全く変わっていないことに懐かしいような、呆れるような複雑な感情が入り混じった言葉を一言だけ洩らす。

「喚くのはその辺にしておけ、玉龍。そんな元気があるならこいつにぶつけろ」

『はいはい！　そうさせてもらいますよー！・』

乗り気でない玉龍も腹を括ったのかヤケクソ気味に吐き捨てた後、全身に纏っている緑のオーラを増やす。

その気になれば国の二つや三つを余裕で壊滅出来る面子がこの場に揃った。だいそうじょうを倒すには十分過ぎる戦力だろう。

それはだいそうじょうも理解している筈。だが、それでもだいそうじょうの態度が崩れることは無かった。

「数を揃えば拙僧に勝てると？　間違ってはおらぬ。それも真理。だが、拙僧の悟りと救いの道は未だ絶えず。阻むならばその業ごと我が呪にて滅すると思われよ」

だいそうじょうは独鈷鈴を虚空へ仕舞い、徐に合掌する。ただそれだけの動作の筈なのに、だいそうじょうから後光が差すような錯覚が見え、目を離すことが出来なくなる。

相手の本気に対し、だいそうじょうもまた本気で応える。しかし、それは不味い状況でもある。

これだけの戦力が暴れ出したのなら誰も止められなくなり、大規模な破壊と大量の死者を生み出すだろう。まず間違いなく京都は壊滅する。そうなれば人の守護者である四騎士も動き出し、より歯止めの効かない戦いになる。

頭の中ではそうなることは誰もが理解している。だが、こうなってしまった以上引くに引けない。強い力が強い力を引き寄せ、過剰な戦力が一点に集まってしまった。

場に満ちる静寂。下手な動きをすればそれだけで戦いの引き金となる。

誰がその引き金を最初に引くのか。

「そこまでにしてくれ」
　そう言ってだいそうじょうを止めようとするのは、曹操であった。
「これ以上やれば深手では済まない。きっと想像も付かないような被害が及ぶだろう。人間社会にもだ。――流石に世界遺産が消えるのは忍びない」
　禍の団も一枚岩ではないが基本的に標的と認識しているのは三勢力に属しているものである。人間社会に悪影響が出ないならそれに越したことはない。
「それは拙僧も望むこと。だがなぁ……」
　だいそうじょうの暗い眼窩が一誠らへと向けられる。彼らとの戦いを望んでいるようにも見えた。
「そんなに戦いたいのかい？　……まるでマタドールみたいだな」
　曹操の一言はまさに劇的であった。白骨の顔の筈なのにだいそうじょうの顔が嫌悪で歪んだように一瞬見えた。
　それ程までに同類扱いされるのが嫌なのだろう。マタドールがどれだけ嫌われているのもかを物語っている。
「――拙僧も修行が足りぬということか」
　だいそうじょうの殺気が薄れる。戦う気が萎えた様子であった。
「好き勝手やって帰る気か？　随分とふざけた真似をしてくれるのぅ」

「黙って見送るのが賢明よ。それとも敢えて戦いを望むか？」

孫悟空の答えは沈黙であった。戦えば確実に被害が出る。自分たちだけでなく何もしらない一般市民も巻き添えになるだろう。孫悟空もそれは望んでいない。彼だけでない。セラフォルーも同じであった。白い巨人、ゴグマゴグは敵の脅威度が薄れたせいで待機状態になっている。三鬼は不満そうであったが、一応は先のことも考えられるので自らを抑えていた。

だいそうじょうが曹操の傍に移動する。このままここを立ち去るつもりなのだろう。

孫悟空やセラフォルーたちは警戒しながらもそれを妨害するつもりはない様子。

そして、一誠は――

（分かっちゃいる分かっちゃいるけど……！）

理解は出来るが納得が出来ない。楽しい修学旅行になる筈だったのに散々荒らしてくれた挙句に九重の母親を操って好き勝手したこと。その主犯である曹操との決着を妨害されたこと。仲間を皆殺しにしようとしたこと。

最初にあった曹操への怒りが、横から掻っ攫ってきただいそうじょうへと移って行く。

「このままお咎め無しで帰れさせねぇ……！」

出来ることならこの手で一発入れてやりたい。しかし、ほんの少ししか力が残されて

いない一誠にはそれも叶わない。

（どうしようも……あっ）

ふと思った。しかし、それは自分でも馬鹿馬鹿しいと思い、確証すらない賭け。

だが、どうせ今の自分に出来ることなどこれぐらいしかない。たった一つの根拠の為に大博打を仕掛ける。

一誠は拳を前に突き出す。すると、一誠が纏っていた鎧が霞みのように消えていく。禁手を維持することが出来なくなったと思われたが――

『Ｔｒａｎｓｆｅｒ！』

――発動させたのは『赤龍帝からの贈り物』。一誠は鎧を維持する力を誰かに譲渡したのだ。

敵味方一同怪訝に思う。譲渡が発動したというに誰もその恩恵を受けていない。気不味さすら思えるような沈黙が起こる。

だいそうじょうは一誠の意味不明な奇行を相手にせず、何の関心も無い様子で曹操を連れて転移しようとする。

だいそうじょうがまさに跳ぼうとした刹那、足元に伸びていた影が飛び出す黒。

影を羽衣のように捲り上げながら現れたのはオンギョウキ。息を殺し、気配を殺し、相手を殺す為に今まで潜んでいた。

そして、影から現れたのはオンギョウキだけではない。彼の装束を掴んでいたことで影から引っ張り上げられるのはシン。

全てが奇跡のように噛み合っていた。

だいそうじょうが二人の急襲に気付き、顔をそちらへ向けたこと。

角度を変えただいそうじょうの顔面に譲渡によって強化されたシンの拳が突き刺さったこと。

同時に転移が発動し、だいそうじょうが殴られたまま曹操と共にこの場から消えたこと。

たった一瞬の間にとんでもないことが起こり、だいそうじょうたちが消えても暫くの間、皆が言葉を失っている。この間にだいそうじょうや曹操が戻って来る気配は無かった。

そんな中で最初に口を開いたのは一誠である。

「ナイスタイミング」

「お互いにな」

一誠はシンに拳を向ける。譲ったのは力だけではない。だいそうじょうを殴る権利も彼に譲っていた。

「……よく連携がとれたのぅ」

孫悟空が感心した様子で言う。オンギョウキの隠形法が完璧だった為に攻撃する寸前まで誰も気付くことが出来なかった。
「いつの間にか合図を送ったんじゃ？」
「合図？　送ってませんけど……」
「……はぁ？」
一誠の返答に孫悟空は呆気にとられた声を出してしまう。
「どういうことかのぉ？」
「えっと、多分こいつだったら魔人の気配に気付く筈だし、気付いたらきっと駆け付けて来ると思ったので……」
「つまりは――」
「はい……勘っす」
一誠の勘宣言に誰もが絶句した。あの土壇場でやるようなことではなく、正気を疑うような行動力である。
「おっそろしいことするのぅ……」
「まあ、あいつは期待を裏切らない奴なんで」
あっけらかんと言う一誠。その図太さを賞賛すべきか呆れるべきか一同迷ってしまう。

唖然とさせられている孫悟空らを見て、オンギョウキも似たような気持ちであった。
八坂を影の中で拘束していたが、結界が破壊されると共に八坂に施されていた術も解け、九尾の狐の姿から人の姿へと戻った。
だが、オンギョウキもまた魔人の気配に感じ取り、急いで八坂を安全な場所へ運ぼうとしていた。その時、偶然会ったのがシンたちであった。
八坂の事を預け、魔人の許へ向かおうとするオンギョウキであったが、そこにシンもまた付いて来た。治療中であり仲間が止めようとしていたが、シンはそれを振り払ってオンギョウキに連れていくよう頼んだ。
問答をする時間すら惜しかったので結局付いて来させてしまったが、その後はあの一連の流れである。
オンギョウキとシンが飛び出すタイミングと一誠が譲渡を使ったタイミング。全く示し合わせていないのに見事に重なったことにはオンギョウキも驚かざるを得なかった。
周りが自分たちに向けている視線を気にすることなく――実際は疲れ切っているので気付いていない――シンと一誠は話をしている。
「木場たちは大丈夫なのか？」
「木場もゼノヴィアも紫藤も無事だ。そっちは？」

「アザゼル先生が怪我したけどアーシアがいるから大丈夫な筈だ。それにあの象が護衛に付いているし。匙は九重と一緒にいる。ロスヴァイセさんはどうなっているか知っているか？」
「知らない」
「そうか、心配だな……ってかお前、何か腕おかしくないか？」
　左腕が不自然に垂れ下がっていることに気付く。よく見れば肌の色もおかしい。一誠が見ている前で血の気を失っていき、死人のような肌の色になっていく。
「付けたばっかりなのに無理をしたからな」
「付けた!?　腕を!?　何があったんだよ!?」
　衝撃的な発言に一誠も驚き、問い質してしまう。
「ほれほれ。騒いでないで見せてみろ」
　いつの間にか近付いていた孫悟空がシンの左腕を持ち上げる。気配を感じさせない動きに一誠は驚き、触れられるまで気付かなかったシンも僅かに目を見張る。だが、敵意は感じなかったので振り解くことはしなかった。
「若い癖に随分と無茶なことしたのぅ」
　左腕の具合に呆れながら腕をペシッと軽く叩く。それだけ肌に生気が戻って行く。
「で、誰なんだ？」

「俺も知らない。アザゼル先生の助っ人だって言ってたけど」
「お爺ちゃんの名前は孫悟空ってんだ。よろしくな、坊やたち」
有名過ぎる名に一誠は一瞬フリーズした後――
「孫悟空ぅぅぅぅ！　爺さん、孫悟空なの!?」
――心底仰天して叫ぶのであった

死闘、終了（後編）

翌日、修学旅行最終日。シンや一誠たちは最後の思い出を残す為に元気一杯でお土産屋巡り――など出来る筈がなかった。

英雄派との戦いが終わってすぐにホテルへと運ばれ、そこで待機していた救護班によって全員が治療を受けていた。

セラフォルーはすぐに冥界と連絡を繋げ、可能な限りフェニックスの涙を持って来るように指示を出し、アザゼルも腹に風穴を開けられたというのに治療を受けながらも救護スタッフに指示をしていた。

とにかく、戦闘に参加していた者たちは全員疲労困憊状態だったので治療や手当ての最中に全員気を失うように眠ってしまい、次の日の朝に疲労が抜け切っていない状態で目覚めることとなった。

いつもよりも重い足取りで移動するシン。彼は左腕をギプスで固定され吊られている状態であった。左腕切断という重傷だったが、フェニックスの涙やアーシアの神器と元々の再生力のおかげで一晩で動くまで回復しており、本当ならギプスは必要ない。

必要ないのだが、ジークフリート戦後の治療中にだいそうじょうの許へ向かったのが

不味かった。
あの後、木場、ゼノヴィア、イリナから本気で怒られた挙句に神器の治癒をしてくれたアーシアにまたも泣かれてしまった。因みに魔術で応急処置をしてくれたルフェイは戦いの後にいつの間にか護衛のゴグマゴグと白い巨人と一緒に消えていた。もし、顔を合わせていたら木場たち同様に文句の一つも言っていたかもしれない。
そんな訳でこのギプスは、いつぞやのヴァーリとの件と同じく戒めの為のギプスである。
松田、元浜、桐生には何でギプスを付けているのか訊かれたが、階段を踏み外したときに手を突いて痛めてしまったと嘘の説明をした。『間薙は意外とおっちょこちょい』と言われて笑われてたが、シンは甘んじてそれを受け入れる。
他のメンバーと離れ、丁度一誠とシンの二人になったとき、声を掛けられる。
「よぉ、赤龍帝の坊やと魔人の坊主」
呼び掛けたのは孫悟空。さも当然のように道の真ん中に立っている。とても目立つ姿をした小柄な猿の老人が煙管を吹かしながらそこに居るというのに通行人は誰も見向きもしない。何かしらの仙術を使っている模様。
「ちゃんと別れの挨拶をしたかったんだが、お前さんたちが疲れ切ってたからのぅ。何も言わずに帰るのも忍びないから待っていたぜぃ……それと、こいつとの約束もあった

しのう」
『おうおう！　まだオイラの腹は満たされてねぇぞ！　ジジイ！　京料理の次は京都ラーメンだ！　その後は酒だぜ！』
　頭の中に玉龍の声が響いてきた。姿は見えないが、もしかしたら意外と近くで身を隠しているのかもしれない。
『玉龍か。喧しいのは相変わらずだな』
『ヘイ！　ドライグ！　そっちは何だか変わったなっ！　少し丸くなり過ぎてねぇか？』
『――かもしれんな。そういえば言い忘れていたな。わざわざ助太刀に来てくれたことに礼を言う』
　何故か玉龍がそこで言葉を失う。
『……誰だお前？』
『――はぁ？』
『素直に礼を言うなんてオイラの知ってるドライグじゃねぇ！　ドライグはもっと横暴で容赦無くて頭空っぽを通り越した大馬鹿の筈だ！　じゃなきゃ戦争に首突っ込んで封印されるなんて間抜けな結末になんてならない！』
『――おい』

『返せよー！　オイラの知っているドライグを返せよー！　その顛末を知って早々に引退することを決心させたオイラの反面教師を返してくれよー！』
『この若造がっ！』
　好き勝手言う玉龍にドライグの頭に来て雷鳴を思わせるような怒声を放つ。
　ギャアギャアと思念で言い争うドラゴンたちを放っておいて孫悟空はまずは一誠に話し掛ける。
「『覇』とは違う面白い力を手に入れたようじゃな。良いこった。強大な力でもそれに振り回されるようじゃ話にならんからな。しっかりと手綱を握っておけ。お前さんにも大事なもんがあるじゃろ？」
「ええ、ははは、まあ、そうです」
　リアスや仲間たちの顔が浮かび上がる。
「じゃあ、泣かすような真似はしないことだ。赤龍帝って定めを与えられたとしても進む道まで決まった訳じゃない。自分の納得出来る道を行きゃいい」
「はい！」
　孫悟空から言葉を胸に刻む。次に孫悟空はシンの方を見る。
「最後の一発。見ててスカッとしたぜぃ。あの腐れを通り越した干物坊主が、今頃どんな面してんのか見れねぇのが残念だぁ」

「それはどうも」
「にしても見れば見るほどまだ坊やじゃねぇか……こんな事はあんまり言いたくないが、この先災難は続くぞ？」
　魔人としての業を背負った瞬間からあらゆるものから狙われる宿命。魔人と何度か戦いを経験したこともある孫悟空も若き魔人に同情の念を送る。
「まあ、その時はその時です」
　他人事のような返答。だが、孫悟空は見抜いていた。シンという少年が既に覚悟を決めていることを。或いはその在り方こそが彼にとっての自然体なのかもしれない。
「そうかい。なら、この老いぼれからはもう言う事はないなぁ」
　孫悟空は二人に背を向ける。
「達者でのう」
『あいよ、クソジジイ。ドライグ、久しぶりに話せて楽しかったぜっ！』
『さっさと行け！』
　玉龍の甲高い笑い声が響くと孫悟空は煙のように消えてしまった。
「どうしたんですか……こんな所で立ち尽くして……」
　覇気の無い声が後ろから聞こえ、振り返るとロスヴァイセが立っている。
「いや、さっきまで孫悟空の爺さんが――って、そんなことよりもロスヴァイセ先生の方

が大丈夫ですか？」

一目で元気がないと分かるぐらいにロスヴァイセからは生気を感じられない。

「大丈夫ですよ……」

心配させまいと笑みを浮かべようとしているらしいが、上手く出来ずに顔を痙攣させているようにしか見えない。

昨晩の戦いでシンと同じくらい負傷したのはロスヴァイセとケルベロスだと思われる。爆撃を操るヘラクレスの神器により救助されるまで動けない状態であった。

一晩の間に傷は治したが、それでも体の芯にダメージが残っておりフラフラとしている。ケルベロスの方は今もホテルで休んでいる。自宅に戻り次第召喚して呼び戻す予定である。

ロスヴァイセも横になっていればいいのに先生としての仕事があるという理由で無理をしてこうやって動いている。

無理をしているといえばアザゼルもまた当たり前のように動き回っている。昨夜から今に至るまで休み無しで色々な指示を飛ばしつつ教師の仕事も熟している。アザゼルも軽くでは済まない傷を負った筈なのにおくびにも出さず平然した顔で行っている。その辺り流石は年季が違うというべき所であった。

「無理をしないで下さいね」

「お気遣いありがとうございます……間薙君たちも体に気を付けてくださいね……」
そう言ってヘニャヘニャとした足取りで他の生徒の様子を窺いに行った。
「大丈夫か？　あれ？」
「さあ？」
ロスヴァイセを心配しつつも残された時間を無駄にしないように目的を果たす。
そんなことをしている内に時間も来て、京都を離れる時が来た。
京都駅の新幹線ホームに行くとそこには八坂と九重がいる。
「赤龍帝！」
一誠の顔を見るなり九重は表情を明るくし、近寄って来る。
「赤龍帝じゃなくてイッセーでいいよ」
堅苦しい二つ名よりも愛称で呼ばれる方が一誠も嬉しい。
「……イッセー」
「おうよ」
もじもじしながら呼ぶと一誠は快活な笑みを見せる。
「色々とありがとう。……匙はおらぬのか？」
キョロキョロと見回して匙の姿を探す。
「あー、何か無理したせいでちょっと体調崩しているみたいで、生徒会メンバーに看病さ

れているとか」
「そうか……匙にも世話になった。ぜひ、また京都に来て欲しい」
「ああ、また来るよ」
一誠は頷く。
「そなたも――」
九重がシンを見る。見返すとびくりと肩を震わせ、八坂の方へそそくさと戻り――
「……また京都へ」
――小声で言う。
「お前ってホント怖がられること多いよな」
「一々言うな。自覚はある」
ある意味感心すら覚える一誠に、シンはいつもの無表情で言い返すが心無しか不機嫌そうに見えた。
「おう、御大将。歩き回って大丈夫なのか？」
アザゼルが八坂たちに気付いてこちらへ来る。
「ええ、幸いにも。アザゼル殿やレヴィアタン殿、悪魔や堕天使の皆々には本当に迷惑を掛けた。礼を言う」
八坂の言う通り幸運にも術の悪影響や副作用は見られなかった。孫悟空が確認して

いるのでほぼ間違いない。
「今後はこのようなことが二度と起らぬよう、レヴィアタン殿や闘戦勝仏殿らと協力態勢を敷い、あのような輩が京都に踏み入れられないようするつもりじゃ」
「期待してるぜ、御大将。まあ、こっちも力を貸すつもりだがな」
　友好を示すように握手を交わす。悪魔、堕天使に孫悟空も協力するとあれば英雄派も今回のような騒ぎを起こすのは難しいだろう。
「力を貸すといえば、オンギョウキ」
『はっ』
　姿は見えないがどこからともなくオンギョウキの声が聞こえて来た。
「もし、『禍の団』との戦いがあるようならばオンギョウキの力をいつでも貸そう」
「おいおい。オンギョウキはあんたの懐刀だろ？　そんな有能な人材をほいほい貸していいのか？」
「オンギョウキも了承済みだ。それに力があるからこそ京都に留め、余らせておくのは勿体無い」
「まあ、それはそうだが……」
「『禍の団』の問題は既に悪魔や堕天使、天使だけのものではない。今回の件でハッキリとした。奴らは我らにとっても打破すべき敵よ」

三勢力だけでなく他にも被害が及ぶのであれば、京都の妖怪らも立ち上がる覚悟が出来ていた。

「はっ。英雄派の連中、虎の尾ならぬ狐の尾を踏んだか？」

対抗勢力を増やしたことへの皮肉を言ってアザゼルは笑う。

『八坂様のことで大きな借りが出来た。我が力が必要ならば何時でも呼べ』

姿は見えなくとも声だけで誠意が伝わって来る。

『今後ともよろしく頼む』

やがて新幹線へ乗車する時間となる。皆が新幹線に乗ると九重は大きな声を出しながら手を振る。

「ありがとう！　皆！　また会おう！」

手を振る九重に皆も手を振って返す。やがて、扉はしまり新幹線が発車した。

京都への修学旅行。短い日数ながらも中身は非常に濃密なもので決して忘れられないものとなる。良い意味でも悪い意味でも。

見送りが終わると指定された席へ向かう。シンと一誠は丁度隣同士であった。

「おーい」

席に座ると松田から声を掛けられ、そちらの方を向く。パシャリという音がして写真を撮られた。

「……何で撮った？」
カメラを構えている松田に一誠が怪訝な表情をしながら聞いた。
「旅の思い出を見返してたらイッセーが女子とばっかり写ってたのがムカついたから。あと間薙、お前全然写ってなかったぞ？」
一誠への単純な嫉妬とあまりにシンが写真に写っていないのを見兼ねて最後の一枚を撮ったと言う。
「修学旅行の締めの一枚がこいつとのツーショットかよ」
「不満か？」
「――まあ、偶にはそれも良いさ」
最後の最後に出来たささやかな思い出に一誠は笑い、シンもまた微かに笑う。
「修学旅行、終わったなー」
「ああ、終わった」
流れて行く景色。京都から離れていくそれを眺めながら思い出を振り返るように言った。

◇

「暇だ」
「暇ダナ」
「暇だぜー」
　見送りに行かなかった三鬼は顔を合わせながら呟く。彼らは異界の裏京都ではなく表の京都に出ている。異形そのものの彼らが人目に付けば大騒ぎを起こすだろう。彼ら自身は人間程度が騒いでも気にするようなことはしないが、後でオンギョウキから折檻を受けることを恐れ、一応人気の無い場所に居た。
「暴れ回れて悪くはなかったが、終わっちまうと一層暇に感じるな」
「同感ダ」
「あんなことは、そうそう起こらないよなぁ？」
　スイキ、キンキ、フウキは昨晩の英雄派やだいそうじょうとのひりつくような戦いを思い出し、戦いの余韻に浸ると共に当分はそんな戦いは起こらないという現実に嫌気が差していた。
　聞けば三勢力や孫悟空などの有名な存在らと手を組んで京都の街を守っていくという話が出て来ている。そうなれば、三鬼たちが戦いに出る機会はますます奪われていくだろう。
「平和は結構。だが、退屈は退屈だ」

「我々ニ平和ナド似合ワン」
「でも、そんなこと言やぁ大将にどやされるだろうなぁ」
　力を持て余している三鬼は、この先のことを考えて珍しく憂鬱になっている。
「あのー」
　不意に声を掛けられた。人に姿を見られるのは不味いと分かっている三鬼は慌てて身を隠そうとする。例え見つかったとしても発見者が一人で済ませれば周りに話を広めたとしても発見者の戯言として片付けられる。鬼や妖怪を見たなどという話は基本的に信じられないからだ。
　が、三鬼は途中で隠れるのを止めた。声を掛けた人物が見知った者だということに気付いたからだ。
「なーんだ。あの時の嬢ちゃんか」
「驚カセルナ」
「無駄にビビっちまった」
「すみませーん。驚かせちゃいましたね」
　現れたのはルフェイであった。何もしていなくとも威圧感のある三鬼を前にしても笑みを浮かべている。
「何の用だ？　あのでっかいお供はいないのか？」

「ゴッくんとアーくんは別空間で待機中です。呼んだらすぐに来ますよ」
　見えずともすぐ近くにいる。それは牽制なのかそれとも説明しているだけなのか分からないが、三鬼は別にルフェイに危害を与えるつもりはないのでどうでもよかった。
「実は皆さんをスカウトしようかと思って」
「スカウト？」
「ほお？」
　思いもよらない展開に三鬼の興味が惹かれる。
「御三方には説明していませんでしたが、実は私も『禍の団』に所属していまして――」
　その瞬間、友好的ですらあった三鬼の気配が消え、代わりに殺気へ置き換わる。
「お嬢ちゃん、随分と良い度胸をしてるじゃねぇか」
「ソンナコトヲ言ウ為ニノコノコト現レタノカ？」
「昨日の今日で来て、俺たちのことを舐めてんのか？」
　二メートル以上の背丈がある鬼が凶相で凄めば大抵の人間は腰を抜かすか失神するだろう。だが、ルフェイは一向に怯まない。殺気云々に慣れているという態度であった。
「言葉が足りなかったですね。私はあくまで所属している形になっていますが、実際はヴァーリ様のチームです。ヴァーリ様も『禍の団』のやり方には賛同していません。で

すから、今回の英雄派さんたちとの戦いにも参加させてもらいました！」
　ハキハキと説明するルフェイ。脅しを込めて殺気を出していたが、通用しないと分かると小娘一人に凄むのも馬鹿馬鹿しいと思ったのか、多少殺気が薄れる。
「ヴァーリ？　誰だ？」
「ヴァーリ・ルシファー様は私たちのリーダーで現白龍皇です！」
「白龍皇ガテロリストノオ仲間カ……」
「世も末だな」
「むっ。さっきも言いましたがヴァーリ様も私も『禍の団』のテロには興味ありません！」
　ヴァーリはあくまで闘争を好み、『禍の団』に属しているのもその舞台を整える為のもので、誰の命令にも従わずに自由にやっていることを告げる。
「ほほう？　そういう奴は嫌いじゃないな」
　スイキの感想にキンキ、フウキも同意する。彼らもまた戦いと自由を好む性格をしているので共感を覚えたのだ。
「はい！　きっと皆さんとヴァーリ様は気が合うと思うんですよ！　一目で分かりました！」
　ヴァーリを傍で見てきたせいか、相手がヴァーリと似た様な気質を持っているのが雰

囲気で分かってしまう。
「ソレデ我ラヲ誘ッタ訳カ」
「はい！」
「悪い話じゃねぇな」
ルフェイのスカウトにも乗り気な三鬼。彼らの忠誠心は京都ではなくオンギョウキに向けられているので京都の守護にあまり使命感を持っていない――八坂や九重という個人は好きだが――また、それとは別として偶には暴れたいという欲求もある。それはそれ、これはこれということである。
「しかし、そうなると大将の目をどう誤魔化すか……」
「大丈夫です！　魔術で対応します！」
「一応、京都ヲ守ル役目モアル」
「出られる日を相談しましょう！」
「暴れ回るだけが褒美なのもなぁ」
「褒賞なども今後の話し合いで決めましょう！」
既に協力する前提で話が進み始める三鬼とルフェイ。
鬼（オンギョウキ）の居ぬ間に何とやら。

◇

転移してきた曹操とだいそうじょうを見て待っていたゲオルクたちはギョッとして目を剥く。

片眼から血を流していてボロボロになっている曹操も気になったが、顔面に大きな亀裂が出来ているだいそうじょうの方に気を取られてしまう。

英雄の子孫である彼らから見ても超常的な存在であるだいそうじょうが傷を負っているなど今まで想像も付かないことであった。

「……大丈夫か？」

言葉を失っている皆を代表し、曹操がだいそうじょうに怪我の具合を尋ねる。

「く、くかかかかか……」

だいそうじょうは笑い、白骨の手で顔を覆う。すると、パキリという音を立てて亀裂が広がっていく。見た目では分からなかったが、自分の顔の傷を広げるぐらいに白い骨の手には力が込められている。

「痛みを感じるなど……いつぶりのことか……」

力が更に入り、だいそうじょうの顔の一部が剥がれ落ちる。

目の前で行われている自傷行為を誰も止めることが出来ない。普段は達観した態度

のだいそうじょうが静かながらも下手に触れれば絶命しかねない程の激情を放っているのだ。
死そのものを浴びせられるような重圧の前には静寂しか生まれない。
「痛みは即ち生の証。生きるは迷い。悟りを得た拙僧に迷いなど……」
ミシミシという音を立て己を鷲掴みにするだいそうじょうの手。それを掴んで止める手があった。
「止めてくれ。苦行なんて時代遅れだ」
だいそうじょうの自傷を止めたのは曹操であった。ただ窘めただけであったが、だいそうじょうの不穏な気配は嘘のように消える。
「……まだまだ拙僧も修行不足ということか。この痛み、しかと刻ませてもらったぞ」
何事もなかったかのように普段の態度へ戻ると、だいそうじょうは独鈷鈴を鳴らす。すると、この場にいる全員の大小様々な傷が瞬時に治る。当然、オンギョウキにやられた曹操の片目もだいそうじょうの顔にあった罅も綺麗に無くなり元通りとなる。
曹操は片目を何度か瞬きさせ具合を確かめた。だが、曹操の顔は何故か不満気である。
「別に俺の眼まで治すことはなかった」
「勲章とでも言うつもりか？　かかかか。そういう年頃だとは思わなかったぞ」

やられた屈辱を忘れないようにするため傷を残すつもりであった曹操だが、だいそうじょうはそれを青いと笑う。
「拙僧と同じで魂にでも刻み込んでおくがよい。形で残しておく程度の想いなぞいずれは薄れ、消えていく」
「有り難い御説教として覚えておくよ」
皮肉っぽく言いながら曹操は他のメンバーの方を見る。
「今回は失敗も失敗、大失敗だ。だが、誰一人として欠けていない。一度の失敗で折れるようなメンバーを俺は集めたつもりはない」
曹操の言葉に当然と言わんばかりに頷く。
「いい勉強になった。俺たちは生きてる。なら次に活かそう。――という訳で早速今すぐやるべき事が出来た」
「やるべき事？」
ゲオルクが聞き返す。
「ああ。今回のことで実感した。まだまだ力が足りない。『龍喰者』がいれば事足りると思っていたが、どうやらコキュートスからもう一つ力を借りる必要がある。……また交渉しないといけないな」
「……っ！　曹操、お前、まさか……！」

曹操が何を考えているのか気付き、ゲオルクの顔色が悪くなる。
「『獄天使』。……あの力が必要だ」

◇

一誠が自宅に帰って来た時、待ち構えていたのはリアス、朱乃、小猫の怒涛の質問攻めであった。アザゼルが事前に今回の事件をリアスたちへ報告したからである。
何で知らせてくれなかったのか、せめて相談ぐらいして欲しかったなどなど。
一誠は申し訳なく思いながらも心配してくれる皆の気持ちが嬉しかった。
一誠が京都で何があったのか報告した後、リアスからも二つ報告があった。
一つはライザー・フェニックスの妹であるレイヴェルが駒王学園へ転校してくること。
何でもリアスやソーナの刺激を受けて日本で学びたくなったという。学年は小猫と同学年とのこと。
二つ目はサイラオーグとのレーティングゲームの日付が決まったことである。
日付が決まればその日まで特訓の日々。また近いうちに駒王学園の文化祭もありそれに向けての準備も進めないといけない。

修学旅行以降もかなり密度の濃い日々が続きそうである。
一通り話し終えるとリアスは一誠の耳元で小さく囁く。
「イッセー。ちょっと確認したいことがあるのだけれど」
「確認したいこと？」
甘い吐息が耳にかかるのをゾクゾクしながら横目でリアスを見る。リアスは少し恥ずかしそうに顔を赤らめていた。
「実は……貴方が修学旅行へ行っている間に変な夢を見たのよ……いえ、夢というには妙に現実的だったけど……」
「あー、もしかしてアレのことですか？」
「やっぱり夢じゃなかったのね!?」
一誠の心当たりがある反応を見て、リアスは驚き少し安堵する。
「良かった……もし夢だったら私、どれだけ欲求不満――じゃなくて」
口走ってしまった言葉を慌てて訂正する。
『何だ？　何の話だ？』
全く心当たりが無かったドライグが、何があったのかを訊いてきた。
（……今はドライグも余裕が有りそうだし、言ってもいいのかな？）
エルシャとベルザードも『大丈夫、大丈夫』と言っている――ような気がした。

（実は――）

一誠は説明した。窮地に陥ったとき、何故力が溢れてきたのか。そして、どうやって『赤龍帝の三叉成駒』へと至ったのかを。

全てを説明した後――

『う……うおぉぉぉぉぉぉん！』

――聞く者の胸を締め付けるような哀しい慟哭をドライグは上げた。

◇

「お土産、お土産ー！」

「ヒーホー！　頂きホー！」

「ヒホッ！　それは俺様が目を付けたやつホ！」

自宅に帰って早々に騒がしい仲魔たちが出迎えもそこそこに京都の土産をシンから強奪し、意地汚く取り合っている。

この騒がしさが日常に戻って来た証とも言える。尤も、喧しいものは喧しいが。

色々と激しかった修学旅行も終わり、当分は普通の日常が続く。

そう思っていた。

チャイムの音が鳴る。誰かが来訪してきた様子。
一誠か他のメンバーが訪ねてきたのかと思いながら玄関の扉を開ける。
そこには予想外の人物が立っていた。
「やあ、間薙シン君。急な訪問を許して欲しい」
「ディハウザーさん？」
レーティングゲームの王者である皇帝ディハウザー・ベリアルがスーツ姿で立っている。
「――何か御用で？」
何故という言葉を呑み込んで用件を問う。
「君に折り入って頼みがあってきた。単刀直入に言おう……サイラオーグと戦ってくれないか？」
普通の日常を送るにはまだ早いらしい。

学園祭のライオンハート編

密約、著名

ディハウザー・ベリアル。予想外の来訪者と彼が発した台詞にシンは玄関で固まっていた。

「――唐突ですね」

出て来たのはディハウザーが訪れたことへの驚きを表したものだったが、言った直後にシンは『しまった』と思った。

「……すまない。気を害してしまったのなら謝罪しよう。本来ならこういうことはちゃんと手順を踏んでからするべきだった」

案の定、ディハウザーはシンの台詞をいきなり訪れたことへの不快感を示したものと受け取ってしまい申し訳なさそうな表情をする。

「全てがいきなり過ぎた。日を改めさせてもらおう」

「いえ、大丈夫です。別に怒っている訳ではなく少し驚いただけです」

帰ろうとするディハウザーをシンは呼び止め、誤解を解く。シンが不快に思っていないことが伝わり、ディハウザーは安堵の息を吐いた。

「誤解をさせてしまいました」
「いや、君の反応は当然のものだ。……しまった。こういうときは手土産の一つも用意すべきだった……」
　真剣な表情で悩み始めるディハウザーを見て、どういうべきかシンも迷ってしまう。
「取り敢えず立ち話はここまでにして――」
　自宅に招き入れようとすると――
「誰？　誰？　誰と話してるのー？」
「ヒホ？　お客様かホ？」
「ヒーホー！　俺様の縄張りに勝手に入れるなホ！　俺様の許可をとれホ！」
　騒がしい声が聞こえてきたのでシンは玄関から出て後ろ足で蹴って扉を勢いよく閉じる。『うきゃっ!?』『ヒホ!?』『ビホ!?』という悲鳴が聞こえたが無視。
「――散歩がてらに話の続きでもしませんか？」
「……そうしよう。私もこの町を少し歩き回ってみたいと思っていたんだ」
　二人は特に目的地を定めず、駒王町内を歩き始める。
「ディハウザーさんに頼んだのは、やっぱりサイラオーグさんなんですか？」
「いや、違う。こうやって直接頼みに来たのは私の独断に過ぎない。しかし――」
　ディハウザーの目線がシンの左腕に向けられる。シンの左腕は未だに戒めの為にギ

プスで固定され、吊るされている。
「タイミングが悪かったようだ。こちらとしては君が望めば魔術の腕に長けた者やフェニックスの涙を用意するつもりだが……」
ディハウザーは怪我をしていると誤解しているが、それでも怪我を治させて戦えるようにしようとしている。ディハウザーとしては多少強引にでもサイラオーグとの対戦を実現させたい様子。
「大丈夫です。勝手に無理をしたので、その罰の意味でこうしているだけです」
シンはアームホルダーから左腕を抜き、ディハウザーの前で左手を何度か開閉してみせ怪我が無いことをアピールした。
「それならば安心した。サイラオーグ卿の願いを成就させるつもりが、空振りの勇み足になるところだった」
軽く笑うディハウザー。ディハウザーはサイラオーグに随分と肩入れをしているように思えた。
「サイラオーグさんの為に随分と動くんですね。レーディングゲーム王者の貴方が？」
「肩入れし過ぎだと思うかい？　あくまでサイラオーグチームのアドバイザーである私が？　――私もそう思うよ」
自覚がある分質が悪い、とディハウザーは苦笑する。

「常に目の前に壁がそびえ立ちながらもそれを超えていく彼の生き方に共感――いや、それだと烏滸がましいな――感動したんだ。だからこそ、是非彼の手助けをしたいと思ったんだ」

サイラオーグが今までどんな生き方をしてきたのかシンは知らない。だが、出会ったときからサイラオーグには一本の芯が入った真っ直ぐな強さを感じていた。それは才能や普通に生きてきただけでは手に入れることが出来ない強さなのだろう。

「どちらかと言えば謙虚なサイラオーグ卿が魔王サーゼクス様に直訴してまで君との戦いを希望していることを聞いてね。リアス・グレモリー嬢とのレーティングゲームも近い。それまでに是が非でもサイラオーグ卿の願いを叶えたいと思ってね」

「……そんなこともありましたね」

「あまりいい返事は貰えなかったとも聞いた」

あのときはきちんとした返事はせず、保留するような形で返事を先送りにしてしまった。リアスとのレーティングゲームが近いということからサイラオーグではなくディハウザーの方が痺れを切らしたのかもしれない。

「……戦う理由が特にないので」

言い訳もせずに正直な気持ちを言う。シンとて理由も無く戦うことは億劫に感じる。戦いそのものに悦びを見い出すような人種ではないのだ。

「――成程。そうなると説得も難しい。君は物で釣られるようなタイプには見えないな」

ディハウザーがその気になれば相手の望む物を何でも用意することが出来るが、シンにはそれが通じないことは一目で分かっていた。

「どうすればいいのか悩んでしまうよ」

「時間はまだあります。散歩しながら考えましょう。――付き合いますよ？」

「ふふ。頼めるかな？」

会話はここで一旦終わり、無言で駒王町を散歩し始める。常人ならば気不味さを覚えるかもしれないが、元々口数が多い方ではないシンは特に苦にならない。ディハウザーの方も沈黙を気にすることなく駒王町の町並みを見回していた。

（それにしても……）

シンはとある違和感に気付いた。駒王町の住人が誰もこちらを気にしていない。

言葉だけ聞くと自惚れのように思われるかもしれないが、ディハウザーという人目を惹く存在がいれば納得するだろう。

スーツがよく似合うモデルのような八頭身。赤銅色の肌に映える銀髪。一生に一度出会えるかどうかの整った顔立ち。思い描いた空想を遥かに上回る異国の美丈夫が町を歩いているとなれば誰の視線も釘付けになるだろう。

それなのに誰も全く注視しない、不自然なぐらいに。まるで路傍の石ころのような価値の無いもののように。

恐らくはディハウザーが魔術か魔力によって何かしているとシンは推測する。同行するシンへの配慮やあまり会話の内容を他人に知られたくないのだろう。シンからするといつの間やったのか、という手際の良さに感心していた。

ディハウザーは駒王町の町並みに興味があるのかしきりに見ている。レーティングゲームの王者という多忙な立場である為、日本の文化が珍しいからとも考えられた。

「――平和な町だ」

「一時期は大変でしたが、駒王町の管理者としてリアス部長とソーナ会長が色々と手を尽くしてくれたお陰です」

「……そうかい。それは良かった」

（ん……？）

一瞬だが肌がざわつくのを感じた。怒り、敵意を感じたときに近い感覚である。誰かが発したとなるとそれは――

「歩き続けるのもいいが、あそこで少し喋らないかい？」

ディハウザーが指したのはテラス席のあるカフェ。特に断る理由が無かったのでシンは同意した。

店内に入る。が、店員が誰も反応しない。やはり、不自然な程の無関係さはディハウザーが何かしているようであった。
「すまない」
ディハウザーが店員に声を掛ける。二十代ぐらいの女性店員は一瞬呆けた表情をした後、顔を一気に赤く染め上げる。
「ひゅ、ひゃい！　な、何か御用でしょう」
声が裏返っている。ディハウザーの顔を見て動揺と興奮を同時に体感している。
「空いている席はあるかな？　出来ればテラス席が良いんだが」
「こ、こちらです！」
激しく動揺している女性店員に案内されテラス席へ座る二人。コーヒーを二つ注文すると女性店員は最後までディハウザーを目に焼き付けながら戻って行く。
恐らくは周囲が無関心になる術を解いたと思われる。そうしなければ来店すら気付かれず、席への案内もされない。
「君はこういう所へは来るのかい？」
「偶にですが、友人に誘われて」
「友人というとリアス・グレモリー嬢やその眷属たちとかい？　君はリアス嬢の協力者という立場だと聞いているが」

「……そういうときもありますね」
無難な返事をする。余計な事を喋らない為に。立場を考えればディハウザーはサイラオーグ側でシンはリアス側である。何かしらの探りを入れられる可能性も無いとは言い切れない。
ディハウザーも気付いたらしく苦笑を浮かべる。
「これでは君に探りを入れているようだ。不快に思わせてしまったかな？」
「お気になさらず」
ディハウザーに対し素っ気無い態度のシン。ディハウザーの肩書きを知る者からすれば卒倒ものなぐらいに失礼な態度だと思われるだろう。シンも愛想が無いことは自覚しているが、媚びるつもりも遜るつもりも無い。いつも通りの自分で接していた。
ディハウザーは気分を害した様子もなく『それは良かった』と言って視線をテラスの外へ向ける。
すぐ傍の歩道では夫婦や小さい子を連れた家族、同性の友人連れ、カップルなどが歩いている。
ディハウザーはそれを穏やかに見つめていたが、その雰囲気の中には微かな険が混じっているような気がした。
（やはり、さっきのは……）

肌がざわついた理由が分かったとき、先程の女性店員がコーヒー二つをトレーに乗せて運んできた。
「お、お待たせしましたっ！」
ディハウザーの魅力の影響がまだ残っており、凄まじく緊張している状態のせいでトレーに乗せてあるコーヒーが今にも零れそうな程波打っている。
震える手付きでコーヒーがテーブルの上に置かれる。まだ一滴も零れていないのはちょっとした奇跡であった。
「ありがとう」
火に油を注ぐようなディハウザーの微笑み。緊張と興奮が極限まで高まっている彼女にとっては致命的な一撃になり得る。
「……」
かと思いきや、女性店員の顔から一気に赤みが消え、首を傾げながら何も言わずに去って行った。
ディハウザーが一度解いたものをもう一度発動させていた。きっと女性店員は理由も分からなくなった動悸と興奮に戸惑っているのだろう。
砂糖もミルクも入れずにブラックのコーヒーを飲みながらディハウザーが何をしたのか考える。もしかしたら、リアスに聞けば分かるかもしれない。ベリアルはグレモ

リーと同じ元七十二柱。ベリアルがどんな特性の力を持つのか知っている可能性がある。

と、そんなことを考えている自分の思考に待ったを掛ける。頭の中でディハウザーと戦う為の方法云々を自然と考え始めていた。

「どうかしたのかい？」

「――いいえ」

自分の思考に嫌気を覚えたのが表面に出てしまったのかディハウザーが伺ってくる。シンは感情の色が見えない無表情で短く応えるだけであった。

特に示し合わせた訳では無いがシンとディハウザーは同時にコーヒーのカップを掴み上げる。

ディハウザーがゆっくりと飲む一方でシンは挽き立てのコーヒーを一気に飲み干す。香りを堪能することも熱さも無視した情緒の無い飲み方であった。

空になったカップをソーサーの上に戻し、シンは単刀直入に言う。

「人間の世界は苦手ですか？」

シンの問いにディハウザーはカップからゆっくりと口を話す。

「――ああ。色々と気を回し過ぎたせいで誤解されてしまったかな？」

シンの目が観察するようにディハウザーを見る。自然な笑み。離したカップに揺れ

は無く、中のコーヒーですらさざ波が立っていない。一切心の揺れを感じられない。
「私の容姿だと不必要に視線を集めてしまうと思ったので配慮させてもらった。こう言うと自惚れているように聞こえてしまうな。だが、それが返って君の不安を煽ってしまったみたいだ」
語られる言葉には淀みは無く、自然な語り口。寧ろ聞き心地が良いぐらいである。
「私もそれなりの肩書きがあるせいでね、中々人の世界に足を踏み入れることは少ないが、だからといって人間に対して悪意は持っていないし敵意も無い。見下しているつもりも無い旧魔王派のとは違うよ」
ディハウザーは、シンの疑問を『旧魔王派と同じような思想では？』と疑っているのではないかと捉えていた。
尚、シンは旧魔王派の名を出され『そういえばそんな連中もいたな』と思い出すぐらいに関心が無い。あまり関わっていないので仕方ないと言えるが。
「すみません。疑うようなことを言って」
「いや、気にしなくていい。こういうことはキチンと向き合い、話し合うべきだと私は考えている」
先程感じたものは思い違い――とシンは思わなかった。答えに掠ったような気がする。ディハウザーの笑みが深まり、態度がより穏やかになったのは逆に相手に踏み込ま

せない為のもの。
　シンは自分の感覚に従い――
「そうですね。きっとディハウザーさんは人間の世界に思う所は無いでしょうね」
　一歩引いたと思わせて――
「でも、駒王町は好きじゃないですよね？」
　――躊躇無く踏み込む。
「……どうしてそう思うんだい？」
「ディハウザーさんから時折ヒリつくような感じがしたので。後は勘です」
　ディハウザーから穏やかな気配が消失する。敵意は無い。悪意も無い。だが、王者の名に相応しい眼光でシンに向けていた。
　尋常ではない重圧感に周囲の無関心な人々にも伝わっており、説明しようがない不安にキョロキョロと忙しなく周囲を見ていたり、顔を青く染めたり、空調が効いているのに寒気を覚えたりなど反応は様々であった。
「……サイラオーグ卿が君に執着する理由が分かった気がする」
　ディハウザーは静かに語る。
「君は得体が知れない。底が見えないんだ。知らない、見えないということは恐怖に繋がる。サイラオーグ卿は君を倒すことで恐怖を圧倒する力を手にしたいのかもしれな

い」

シンはディハウザーを観察するように見ていたが、ディハウザーもシンの最奥を覗き込むように見つめていた。

空気が凍り付いたような沈黙が流れる。

「……ふっ」

暫くしてディハウザーは小さく笑い、放っていた重圧感を消す。

「場所を変えて話そう。我々がいたら営業妨害になってしまう」

落ち着かなくなったり気分が悪くなったりして帰る客やチラホラと見え始める。

「そうですね」

このまま長居すれば変な風評被害が起きかねないのでシンもそれに同意した。

カフェから出るとディハウザーが先導して歩き出す。シンも後を付いて行く。

歩いている間、会話は無かった。シンは目的地を聞くこともしない。

二人の間に流れるのは町行く人々の会話と雑踏。そして沈黙。

それでも言葉を発することなく二人は歩き続ける。アスファルトを歩き、坂を上り、土に足跡を残し、雑草を踏む。

やがて、ディハウザーの足が止まる。目的の場所へ着いた様子。

そこは駒王町を一望出来る丘であった。柵やベンチが置かれてあるが、経年劣化でボ

ロボロになっていたり色が剥げている。長い期間、人が立ち寄っていない証拠でもあった。

ディハウザーは駒王町を眺める。シンは彼の後ろになっており、ディハウザーがどんな表情で町を眺めているのか分からない。だが、その背中からは強い念のようなものが感じられた。

「……君の質問に答えよう」

ディハウザーは背を向けたまま喋る。

「私は確かにこの町に対して良い印象は持っていない。だが、だからといって何かしようなどとは思っていないよ」

ディハウザーの声から哀愁を感じた。

「この町は私にとって大切だった者が愛した町なんだ」

だった、という過去形。ディハウザーの大切だった人物がどうなったかは、それとディハウザーの態度で凡そ察せられる。

「……今の私に言えるのはここまでだ」

「もっと聞きたいと言ったら？」

「残念ながら、私と君はそこまで親しい間柄ではない。まあ、仮にそうだったとしても言えないこともある」

微笑を見せているがこれ以上の詮索はするな、という無言の圧があった。探ろうとすれば火傷では済まないだろう。

だが、シンは気になった。正直なところ、ディハウザーの過去に関わることを知ったとしてもシンにとって何の利益は無い。しかし、シンはディハウザーと駒王町、それに関わっていた人物に不穏なものを感じ取っていた。

いずれ巡り廻って災厄となって降り注いでくるのではないか、とシンの直感が囁く。杞憂であって欲しいが、当たって欲しくないこと程良く当たるものである。

いつか来るかもしれない。そう思っただけで行動するには十分である。

「……ディハウザーさん。サイラオーグさんとの戦い、受けますよ」

シンは今出せる最高の手札を切る。

「受けてくれるのかい？　それは良かった。……それで、話の流れからしてそれ相応の対価を貰おうと考えているのかな？　対価は……私の話の詳細かな？」

シンがこの場でサイラオーグとの対戦を受け入れたことで、ディハウザーは全てを察する。シンが言わずとも話が先へ進んだ。

「話が早いですね」

「それしか考えられなかったからね」

ディハウザーは苦笑する。サイラオーグの為に来たが、思わぬ藪蛇になってしまった

と言わんばかりに。
　だが、逆に言えばディハウザーが出て来たからこそ先程の言葉をシンから引っ張り出すことが出来た。シンは無表情だったが明らかにサイラオーグとの対戦に乗り気ではなかった。もし、サーゼクスやサイラオーグ本人が来たとしても交渉は難航していただろう。
「困ったな……」
　隠そうとはせず本当に困った表情をしている。
「正直に言おう。実は私はとある真実を探している段階であり、まだ確証を得ていない。この真実は先程の話と密接な関わりがある。……憶測で軽々と喋る訳にはいかない」
　一瞬だが、ディハウザーは苛立った表情を見せる。ディハウザーもまた何かに藻掻いている最中なのだ。
「時が来たら……私が真実を知ることが出来たのなら話の続きをしよう。今度は何一つ隠すことなく」
　今ではなくいつか話す。もしかしたら、その時が来たら手遅れになっているかもしれない。だが、シンにはそれ以上の譲歩を引き出すことは出来ない。
「――分かりました。それでいいです」
「そうか。なら、これは私と君との約束……いや、悪魔らしく契約としよう。対価は既に

貰った。君の願いは必ず叶えることをここに誓おう」

この日、シンとディハウザーの間で密かな契約が為された。

◇

駒王学園の廊下。シンと一誠は肩を並べて歩きながら雑談をしている。主に喋っているのは一誠であり、シンは時折相槌を打っていた。

一誠は冥界でおっぱいドラゴンが大人気である為、冥界でわざわざ本人実演のヒーローショーに出ている。

娯楽があまり多くない冥界では物珍しさと現実に一誠自身が活躍していることもあって冥界の子供たちに大ウケとのこと。

ヒーローショーには一誠だけでなく木場と小猫もそれぞれキャラクターに扮して出演しており、木場は年上の女性たち、小猫は大きなお友達に人気とのこと。

シンは一度だけ木場と小猫の衣裳姿を見たことがある。特に感想も思い浮かばず黙って凝視していたら、そんな目で見ないでくれと懇願され、それ以降シンの前でその衣裳を着ることは無くなった。

初めてサインと握手会をしたと一誠は嬉しそうに、楽しそうに語る。自分の手を満面

の笑顔で握ってくれる子供。下手くそな悪魔文字のサインで感激してくれる子供。そんな素直な反応がたまらなく嬉しくて仕方なかったと語った。

一誠は誰かに夢を与えられる存在になったことに感動していた。激戦だらけで痛い思いをし、自分や仲間の命を危険に晒されていたことへの癒しにもなる。

そして、この平和と仲間を守ろう、と気を引き締める思いであった。

冥界では立派にヒーローをやっている一方で人間での一誠の評価はというと――

「……あれ、二年のケダモノ先輩……？」

「……やだ、見られるだけで謎の催眠術にかかって好き放題されちゃうって噂の……？」

「それで学園のアイドルを皆手籠めにしたって……怖い……」

「聞いた話だと最早男女の見境も無くって、あの木場先輩も……」

「やだ、何それ……興奮する」

ひそひそ語られる根も葉も無い代わりに尾鰭が付けられた噂話。学生の間では一誠はとんでもないクリーチャーに成りつつある。冥界での扱いとは正反対であった。

そういう風に見られるのは今に始まったことではなく成長を見せた一誠は、甘んじて周りの視線と噂話を受け入れる――若干受け入れ切れずに目から流れ出てしまっているが。

「……それで、そっちは何かあったか？」

「いや、特にない。いつも通りだ」
ディハウザーやサイラオーグの件は黙っていることにした。ディハウザーとの契約はディハウザーから口止めされている。サイラオーグのことはリアスの協力者という立場上かなり黒に近いグレーと思っているのでトラブルを起こさない為に隠す。
「ねぇねぇ……ケダモノ先輩の隣にいるのって誰？」
「知らない……誰だろう？」
ひそひそ話の矛先が一誠からシンへ向けられる。ただ、リアスや朱乃、木場、一誠とは違ってシンの知名度は一年生の間では低いらしく顔も名も広まっていない。
一誠のような噂話が浸透するぐらいなら透明人間のように誰にも知られていない方がましである。
そう思っていたが――
「でも、ケダモノ先輩と話しているってことはアレよね？」
「きっとアレよアレ。アレに違いないわ……」
「仲良さそうだし……多分アレよ……」
――一誠と一緒にいるせいで良からぬ印象を持たれ始めている。
すると、そんな話が聞こえたのか一誠は暗い笑顔を浮かべ、馴れ馴れしくシンの肩に手を回す。

「へっへっへっ……一緒にこの学園で消えない汚名を残して行こうぜ……？　マァァイフレェェンド」

死なば諸共の精神。地獄の底へ引き摺り込む道ずれを求めている。

「結構だ。それにあだ名ならお前の方が数え切れないぐらいあるだろ？　子供に大人気の」

おっぱいドラゴン、乳龍帝。そんな名がこれから先もどんどん増えていく気がしてならない。

『がはっ！』

一誠ではなくドライグの方がダメージを受ける。乳神様やそれに仕える精霊の存在を知り、更にはそんな良く分からない存在から力を与えられて覚醒したことを教えられてから、この手の話題に対してドライグが過敏に反応するようになった。

ドライグの悲痛な声を聞き、小声でそれを宥める一誠。独りブツブツと呟く姿にまた囁く声が増える。

廊下を進む度に増えていく一年生の生徒たち。それもその筈シンと一誠はとある目的があって一年生のクラスに続く通路を歩いているからだ。

「あら貴方たちも様子見？」

一年生たちではない声。二人が振り返ればリアスが居る。

「部長もですか？」
「ええ。気になって」
目的のクラスへと着き、中を覗く。金髪の縦ロールの少女――レイヴェル・フェニックスが他生徒に囲まれて雑談をしている。
一年生のクラスに出向いたのはこれが目的である。今日はレイヴェル・フェニックスが転入してくる日だった。
レイヴェルの様子が気になった一誠に誘われてシンも付いて来たが、実は別の人物からもレイヴェルの様子を確認するよう言われていた。
言って来たのは彼女の兄であるライザー・フェニックスである。
昨晩、ライザーから連絡が入りレイヴェルの様子を確認しろと頼まれたのではなく、一方的に命令された。
もし、レイヴェルをいじめるような人間がいたら構わず殺せ、とも言ってきたので、少々苛烈な妹想いに、シンは生返事をして電話を切った。
一応頼まれたことなのでレイヴェルの様子を窺う。周りの女子生徒たちの様子は好意的なものであり、外国人の美少女であるレイヴェルに色々と質問していた。
レイヴェルの方はというと、質問攻めに対してしどろもどろになっている。高圧的で高飛車な様子は完全に潜めており、視線を彷徨わせて何を言うべきかどうか迷ってい

た。
ギャスパー程ではないが人見知りを発揮している。
同じクラスにはギャスパーと小猫も居る筈なので二人を探す。二人は教室の隅におり、会話をしているのが見えた。二人の視線は時折レイヴェルに向けられていることから会話内容もレイヴェルについてのものと予想される。
正直なところ、二人がレイヴェルに助け舟を出すのは難しい。ギャスパーは凄まじい人見知りであり小猫も親しい相手以外には積極的に接しない。
すると、レイヴェルがこちらに気が付いた。
リアスは軽く手招きをしながら一年生の教室から離れる。シンと一誠もそれに付いて行く。少しして席を立つ音とレイヴェルの『失礼しますわ』という声が聞こえた。
レイヴェルが後を付いて来るのが分かると、そのまま人気の少ない場所まで誘導する。
周りを確認するとリアスは足を止めた。
「ありがとうございます。リアス様」
レイヴェルは優雅にお辞儀をして礼を言う。
「慣れないことが多くて大変ね」
「は、はい……そうなんです。ど、どう接していいのか分からなくて……私、悪魔ですの

で、人間の方々が好む話題も見つからなくて……」
　恥ずかしそうに顔で頬を染めるレイヴェル。
「何か可愛らしい反応だな」
　一誠はシンに小声で話し掛けた。
「でも、貴女だって話したくない訳じゃないのでしょう？」
「も、勿論ですわ！　私だって成長する為にここへ来たのです！　貴族だけの世界に閉じ籠らずに平民の生活を知ることで何かを学ぶのも大切だと思っているんです！」
　向上心はある模様。だとするならば何かしらの切っ掛けが必要なのかもしれない。
「ああ、だったらあの二人に――」
「……呼びましたか？」
「は、はいぃぃ」
　一誠の声に応える小猫とギャスパー。レイヴェルが教室を出た後に追って来ていた。
「丁度良かった。二人にお願いがあるんだ」
「……何ですか？」
「は、はい。何でしょう？」
「レイヴェルの話し相手……というか学校生活のフォローをして欲しいんだ。同じ学年で同じクラスの二人にしか出来ない。頼むよ」

ギャスパーと小猫がレイヴェルの方を見る。
「ぼ、僕は構わないですけど……」
ギャスパーは消極的ながらも受け入れたが――
「……」
小猫の方は眉根を寄せ、口を尖らせている。普段が無表情のせいで分かり易いぐらいに不機嫌そうな表情である。
小猫自身がレイヴェルに対してあまり良い感情を持っていないことと、一誠がレイヴェルを気遣うのが気に入らないのが理由だろう。
少しの間、悩んだ後答えを出す。
「……分かりました」
不本意というのがありありと表情に出ているが、一応は協力してくれる。
「ということで、レイヴェル、小猫ちゃんとギャスパーがフォローをしてくれるから」
「……どうぞよろしくお願いいたしますわ」
レイヴェルがそう言うと――
「……イッセー先輩。……私やギャー君がフォローしてもこの人がヘタレだったらフォローしきれませんよ？」
纏まり掛けていた空気が凍る。

「い、今何とおっしゃいましたか……？　私の聞き間違えでしょうか……？」
「……貴女がヘタレ焼き鳥姫だったらフォローし切れないといったんです」
レイヴェルの額に青筋がくっきりと浮かび上がる。シンはそれを見て、怒る顔がライザーそっくりだな、と？気に思っていた。
「フェニックス家の子息たる私にそのような物言いなど……！」
「……大層な肩書きの割に小鳥みたいにオドオドしているからそう思っただけ。……人間界に来るには心構えが足りない」
レイヴェルの怒りは小猫の言葉で更に増し、全身からオーラが立ち昇り始める。それに同調し温度も上がり出す。小猫の方も気を漂わせ、レイヴェルを睨んでいた。
一触即発の状況。リアスは喧嘩を始めそうな雰囲気の二人に呆れた表情をし、一誠は止めようとするが二人の迫力に押されたギャスパーにしがみつかれて咄嗟に動けない。
「――そんなに喧嘩がしたいか？」
小猫とレイヴェルはビクリと体を震わす。
声の主であるシンは、誰かが来ないか見張っているので二人を見向きもしていない。掛けた声も至って平静。
「したいならすればいい。……俺の目の届く範囲で出来るなら」
生徒会メンバーであるシンは風紀を取り締まる義務がある。当然ながら生徒同士の

喧嘩は御法度。やろうものならばそれ相応の手段を用いて止める。
シンは怒っている訳ではなかったが、小猫とレイヴェルはシンの横顔を見て、すっかり萎縮してしまった。
「まあまあ。急に仲良くしろとまでは言わないからさ。どっちも出来る範囲で良いから、意識し合ってくれたら俺たちも安心出来る」
一誠がそう言うと二人は微妙に納得し切れていない表情をしていたが、頷いて了承する。
「ギャスパーも頼んだぞ？」
「は、はいぃぃ」
前途多難ではあるが、打ち解ける時間はある。
レイヴェルが良い学園生活を送れるかどうかはこれからである。

◇

その日、シンは仲魔を連れて冥界に訪れていた。サイラオーグとの対戦の為である。
ジャアクフロスト以外はレヴィアタン関連で度々訪れていたので慣れているが、ジャアクフロストの方は以前襲撃に現れたとき以来の冥界なのでキョロキョロと周りを見

ている。
不安というよりも好奇心で周りに目移りしている様子。その癖、プライドだけは高いのでキョロキョロと見回していることに気付かれると慌てて興味の無いフリをし出した。
シンたちが来ているのはグレモリー領。サイラオーグと対戦する話はサーゼクスの耳にも入っており、サーゼクスから直々に場所を指定された。
使いの者も寄越すと言っていたので探そうとしたらすぐに見つかった。
気配が明らかに違う男性が立っている。
日本人ならば殆ど知っているだろう有名な羽織を着た二十後半の男性。髪を後ろに結んでおり涼し気な顔立ちをしている。
シンたちのことに気付いており、柔らかな笑みと共にシンたちの方へ来る。
「お待ちしておりました」
その男は何故だか木場を思い浮かべる雰囲気を纏っていた。
「貴方がサーゼクスさんの？」
「はい。そうです」
男の腰には大小の刀が差し込まれている。
「貴方のことはサーゼクス様と祐斗から聞いています。間薙シン殿」

「木場からも？」

男の口から木場の名を出され、シンは聞き返す。

「申し遅れました。私はサーゼクス様の『騎士』であり、祐斗の剣の師を務めさせております、沖田総司と申します」

不意打ちのように歴史上の人物が目の前に現れ、シンはその顔を凝視するしかなかった。

闘気、終了？

「沖田総司……」
　日本人ならば大概の人間が知っているだろう幕末の世で治安の為に不穏分子である攘夷志士らを斬ってきた人斬り集団。その新選組で一番隊隊長を務めていた悲劇の天才剣士。
　病に冒され、志半ばで散った筈の歴史上の人物がシンたちの前に立っている。しかもそれが木場の剣の師匠というのだから、世の中良く分からないものである。
　ピクシーやジャックフロストは『誰？　誰？』と聞いてきたが今は無視する。ケルベロスとジャアクフロストに至っては興味すら抱いていない。
　シンは総司の顔をジッと見つめていると、総司の方から話し掛けてきた。
「どうかしましたか？　何か顔に付いていますか？」
「――いえ。貴方のファンが貴方を見たら喜びそうだと思って」
　実物など誰も知らないが専ら美形というイメージがある沖田総司。少なくとも目の前の総司は、ファンが想像した通りの天才剣士沖田総司であった。
「あはははは。そうですか？　それなら失望させないで済みそうです」

笑うと一段と幼く見える。
「予想図は当てにならないですね」
当時の証言や親戚やらの顔からイメージした沖田総司の顔とは似ても似つかない。
「あー、あれですか。あれについては仲間からも散々揶揄われましたね。私も勘弁して欲しいと思いましたよ。だからといって訂正出来ないですけど……」
総司は当時を振り返って苦笑する。その時の顔が木場とよく似ている。剣だけでなく色々と師から影響を受けているのかもしれない。
「と、まだ色々と話したい所ですが、サーゼクス様やサイラオーグ殿を待たせているので移動しましょう。付いて来て下さい」
総司に率いられてサーゼクスらが待つ場所へと向かう。
道中、総司の方から話し掛けてきたのでシンも会話に応じる。内容は他愛のないものであり、木場の普段の様子やシンから見たリアス、一誠などについてのこと。シンは思ったままのことを言うと総司はクスクスと笑っていた。
総司ばかり話題を振るわせるのも少し申し訳ないのでシンからも適当な話を振る。
「――グレイフィアさん以外のサーゼクスさんの眷属は初めて会いましたが、他の方々は？」
「グレイフィア殿以外は有事のとき以外には中々集まらないもので」

「サーゼクスさんの眷属は何人いるんですか？」
「『女王』、『戦車』と『兵士』が二。『騎士』と『僧侶』は一の合わせて七人です」
「『騎士』が一人ということは、沖田さんは――」
「はい。『騎士』の駒を二個消費して転生悪魔になりました」
『騎士』の駒は『兵士』の駒三個分に匹敵する。『赤龍帝の籠手』を宿した一誠が『兵士』の駒八個だと考えると、人間だった頃の総司の潜在能力は相当なものであったことが容易に想像出来る。
「あ、因みに今回の案内は私の方から立候補しました。是非とも貴方と会ってみたかったので」
　それはどういう意味で？　という言葉をシンは心の裡で吐く。木場の友人だから会いたかったのか。それとも人修羅という魔人に会ってみたかったのか。サーゼクスの眷属ならば当然シンが魔人であることは知っている筈。
「そう警戒しないで下さい。貴方の素性は知らされてはいますが、危害を加えるつもりは全くありません。純粋にあの子の師として心の許せる友人が出来たことを嬉しく思っています」
　シンからほんの少し滲み出た疑いの色を鋭敏に察知し、シンの内面を正確に見抜いてくる。魔王サーゼクス・ルシファーの眷属なだけあって微塵の隙も見せられない相手で

ある。

「……と、こんな事を喋っていたら逆に警戒されるだけですね。いやはや、刀ばかり振って来たせいで人と話すのが下手になってしまいました」

自分自身に呆れて困ったように笑う総司。その表情を見ていると、シンは疑いを抱いた自分が馬鹿馬鹿しく思えて来た。

これが演技だったのなら大したものだし、これで騙されたのなら仕方ないと開き直る。

「木場と知り合ってどれぐらいなんですか？」

空気を変える為にシンから話題を出す。

「――確か、あの子が十三か十四の時からですね」

「聞きたい。聞きたーい！　アタシ、その頃のゆーとの話、聞きたーい！」

「ヒホ！　オイラも聞きたいホ！　聞かせてくれホー！」

丁度良くピクシーとジャックフロストもその話題に食いつく。二人の脳天気さは場の空気を変えるのに最適であった。

「そう長い話は出来ませんが――」

総司は前置きしてから話し始める。

木場と総司の昔話を聞いている間も足は止まらない。グレモリー城へと入り、地下を

目指す。
グレモリー城の地下には広々としたトレーニングルームがあることをシンは知っていた。以前一誠から聞かされており、その地下トレーニングルームで一誠はサイラオーグと手合わせをしていた。
「話はここまでですね。そろそろ着きます」
地下へ下りている最中に総司は間もなく到着するという理由で話を切り上げる。ピクシーとジャックフロストは『えー』と声を上げて不満を露わにしていたが、シンから窘められて渋々引っ込んだ。
地下トレーニングに着く。一誠が言っていたように広々としており、天井も高い。禁手化した一誠とサイラオーグが十分戦えるだけのことはあった。
見上げていた視線を戻す。
「やあ」
シンの姿を見つけたサーゼクスがシンに向けて気さくな笑みを浮かべながら手を振っている。その隣にはグレイフィアが立っており、お辞儀をしていた。
そして、その傍にはサイラオーグ――と複数の男女がいる。
「よく来てくれた。俺の我儘に付き合ってくれたことを感謝する」
大声ではないが良く通る声で感謝を告げるサイラオーグ。

シンは彼らの許に歩み寄りながら初めて見る男女の姿を観察する。てっきりサイラオーグだけだと思っていたので、思いの外大人数で来ていたことに少し驚いた。

七名の男女は、サイラオーグから一歩引いた所に立って並ぶ様子からサイラオーグの眷属ではないかとシンは推測する。

頭から足先まで甲冑に覆われた、見るからに『騎士』という姿。体格からして男性と思われる。

重武装な隣とは違って軽鎧を着た金髪の優男。

三メートル以上の体格で、常識から外れた太い前腕を持つ怪物染みた風貌の男。

長い金髪を波打たせたスーツ姿の女性。

体全体が、長いという印象を受ける男。

杖を持った小柄で容姿の綺麗だが、少年か少女か良く分からない性別不明の子供。

金髪を結んで後ろで結んだ女性。

この六名もまたシンたちを興味深そうに眺めているが、一人だけ異なる視線をシンに向けている人物がいる。

仮面を付けた少年。彼だけはシンに対し、強い意思を込めた視線を浴びせていた。肌で感じるそれは幾度も向けられたもの――敵意である。

当然ながら仮面の少年とシンに面識など無い。敵視されるようなことをした覚えも

無い。もし、敵意を向けられるようなことがあるとすれば、それは間違いなく魔人関連だと思われる。
シンの脳裏に高らかに笑うマタドールとだいそうじょうが浮かび上がった。
とはいえ仮面の少年は事を起こすつもりはなく、ただシンに鋭い視線を向けているだけである。主であるサイラオーグが居る手前、勝手な真似は控えている様子であった。
サイラオーグの許に向かう短い間に様々なことを考えるシン。その足が止まり、彼はサイラオーグの前に立っていた。
「新顔がいるな」
サイラオーグはピクシーとジャックフロスト、ケルベロスとは初対面ではないが、ジャアクフロストとは初めて会う。
「何だホー!?」
初対面の相手なのに眼を飛ばすジャアクフロスト。可愛い顔をして態度が悪過ぎるのとサイラオーグに無礼を働いているせいで、サイラオーグの眷属たちは二重の驚きで思わず固まってしまう
「ほう?」
生意気な口を叩かれたサイラオーグは、気分を害した様子は無くジャアクフロストを珍しそうに眺めた後、ジャックフロストの方を見る。

「お前の兄弟か？」
『兄弟じゃないホー』
ジャックフロスト、ジャアクフロストが口を揃え、語気を強めて否定する。同じ扱いをされることが心外なのが伺えた。
「そうか。すまなかった」
サイラオーグにもそれが伝わり、あっさりと謝罪する。サイラオーグの大物な態度が気に入らないのか、ジャアクフロストは拳を振り上げて彼にいきなり飛び掛かった。
「すまんで済むかホー！」
状況、場の空気など知った事かと言わんばかりの蛮行。ジャアクフロストを止める間もなかった。
パシン、という音が鳴る。サイラオーグの掌がジャアクフロストの拳を受け止めていた。サイラオーグはジャアクフロストの拳を掴むことはせず、ジャアクフロストはサイラオーグの足元に着地して彼を睨みつける。
サイラオーグの眷属たちは、流石にジャアクフロストの蛮行を見過ごせず殺気立った様子で動き出そうとするが、サイラオーグはそうなる前に手で制する。
「悪くはないが……まだまだだな。その枷を外せばどうなるかは分からないが」
ジャアクフロストの帽子に付けてある金の輪がジャアクフロストの力を抑制してい

るのを瞬時に見抜く。サイラオーグ自身も両手両足に負荷がかかる封印を施しているので同種の力はすぐに分かる。

「それがどうしたホ！　こんなのトレーニングに丁度いいホ！」

それがどうしたと言わんばかりに吼えるジャアクフロスト。

「――ふっ。なら頑張るが良い」

その一言でジャアクフロストを許してしまう。ジャアクフロストの言葉にシンパシーを感じたのかもしれない。

ジャアクフロストは悔しそうに表情を歪める。器の大きさを見せつけられたこともあるが、サイラオーグから強者のオーラを感じ取っていた。それこそジャアクフロストがライバルと認めているヴァーリに匹敵する程の。

弱者から這い上がってきたジャアクフロストにとって強さは憧憬そのもの。表には出さないが憧れと敬意を抱いてしまう。

「すみません」

シンは謝りながらジャアクフロストの首根っこを掴んで引き離す。意外なことにジャアクフロストは抵抗しなかった。

サイラオーグの強さを本物と認めてしまったせいでジャアクフロストは尊敬、嫉妬、悔しさなどの感情がごちゃごちゃに混ざってフリーズしていた。

ジャアクフロストを後ろに向かって放り投げる。投げた先で待ち構えていたケルベロスが、背中で上手に受け止めた。

ぞんざいな扱いをされてもジャアクフロストは怒ることをせず、複雑な感情を混ぜた視線をサイラオーグに向けている。そんなジャアクフロストを変に思ったのか、ピクシーとジャックフロストは目の前を通過したり、手を振ったりして彼の様子を伺っている。

「さて」

思わぬトラブルがあったが、サイラオーグのその一言で場の空気が戻ると、サイラオーグの厳の如き手がシンへ差し出される。

「間薙シン。願いを聞き届けてくれたお前の温情に心から礼を」

差し出された手を握り、握手を交わす両者。二人にとって二度目の握手である。

サイラオーグの手は相変わらず見た目通り厚みがあり硬い。皮膚一枚の下にはマグマが流れているのではないかと思えるぐらいに熱い血潮が感じられた。

一度目とあまり変わらない感想を抱いているシン。一方でサイラオーグの方は逆の感想を抱く。

白く長い指。見ようによっては女性の手を間違いそうな手。握ればひんやりとした冷たい感触が伝わってくる。サイラオーグがその気になれば握り潰せそうに思えるぐ

らいやわそうな手に思える。だが、サイラオーグの直感が囁く。もし、そのようなことをすれば自分も痛い目では済まない反撃を与えられる、と。

初めて会ったときよりもシンが強くなっているのが分かった。そして、まだその強さの底が見えない。

この得体の知れなさがサイラオーグの求められているもの。一誠とは別種の魅かれる強さであった。

「この日を待ちわびていた。……互いに存分に力を揮おう」

（ん……？）

サイラオーグが戦えることを喜ぶ好戦的な笑みを見せるが、シンはその笑みに違和感を覚える。喜んでいるが何処か喜び切れていないような、陰のある笑み。

今回のことで何か不安、或いは不満を抱いている。シンはそんな気がした。

「そろそろいいかな？」

サーゼクスが声を掛けると二人は握手を止める。

「対戦となっているが、名目上はスパーリングという形になっている。そして私とグレイフィア、総司が立会い人且つ審判として立たせて貰う」

サーゼクスからのルール説明。紹介されたグレイフィアと総司が軽く頭を下げる。

「この対戦で禁止されていることはない。ただ、ここはレーティングゲームの会場とは

違って戦闘不能と判断して転移させる術は施されていない。したがって、我々審判三人がこれ以上の戦闘は不可能した時点で終了とする」

特に目立った決まりは無い。シンプル過ぎてあっという間に説明は終わる。最後にサーゼクスはシンやサイラオーグを見ながら――

「……頑張ってくれ」

――とのこと。サーゼクスは何か言いたそうな雰囲気があったが、結局言わずに無難な言葉で締める。シンはサーゼクスの態度にも違和感のようなものを覚えた。

対決を望んだのはサイラオーグであり、サーゼクスも場所を用意してくれたがどちらもいまいち乗り気では無い気ように感じられた。

疑問を拭えないままシンとサイラオーグはサーゼクスたちから離れ、トレーニングルーム中央へ向かう。

両者無言のまま中央に辿り着き、向き合う。

瞬間、サイラオーグの拳がシンへ放たれた。開始の合図もされていない不意を衝く一撃。

当たる、と思われたときサイラオーグの拳はシンの目の前で寸止めされる。拳圧によりシンの髪が靡く。

「避けないか」

「当てるつもりもないのに避ける必要がありますか？」
「くっ、ははははは。確かにその通りだ！」
シンが指摘した通りサイラオーグは拳を当てるつもりはなかった。シンの反応を探る為に仕掛けてみたが、シンはその場から一歩も動かず瞬きもしていない。
サイラオーグが様子見の為の攻撃をしてきたことを即座に見抜いたシンにサイラオーグの眷属たちも目の色が変わる。
彼らはサイラオーグが殆ど名を知られていないシンとの戦いを希望していることを密かに疑問に思っていた。リアスの協力者という立場だが、それならばリアスの眷属として有名な一誠や木場との戦いを望む方が理解出来る。
しかし、今のやりとりでシンの強さの片鱗を感じ取る。もし、仮にシンの立ち位置に自分たちが居たら、あのような無表情を保つことなど出来ない。冷や汗もかかず平静でいられる自信が無かった。
「聞いていた以上に冷静だな。――安心しろ。次からは様子見などしない」
サイラオーグはそう言い、着ていた貴族服を脱いで投げ捨て、グレーのアンダーウェア姿となる。胸や肩、腕全てが満遍なく鍛え抜かれ、男の理想を体現させたような肉体を晒す。
それに同調するようにシンも上着を脱いで上半身を晒す。サイラオーグと比べると

色白で貧相に映って見えた。
「ほう？　意外だ。あまりそういうタイプには見えなかったぞ」
気合を入れる為に脱いだとサイラオーグから誤解される。
「服を着たままだと戦い難いので。服の替えもそんなに無いんで」
右手の甲に紋様が浮かび上がったかと思えば、左手の甲にも同じ紋様が浮かぶ。黒い刺青のような紋様縁取る淡い緑の光。生きているように紋様は伸び始めていき、腕や肩、胸、背中、腹部、足へと根を張るようにシンの体を覆っていく。
やがて、首を辿って左眼まで浸食した後に紋様は広がっていくのを止めた。
少し前は人でありながらも微弱な魔を感じさせる程度であったが、今のシンからは完全な魔を放っており、それが人の気と混ざり合い表現し難い混沌とした気を放つ。
「面白いものを見せて貰った……と言うべきだろうか？」
「気色悪いもの、でも構いませんよ？」
言葉を選ぼうとしているサイラオーグにシンは笑えない冗談で返す。
その言葉を切っ掛けに二人の会話が途切れる。両者既に戦闘態勢。本来ならば審判であるサーゼクスが開始の合図を告げるべきなのだが、二人共戦闘への集中を始めており、声を掛けるのは不粋と判断し、戦闘開始を二人の意志に任せる。
踏み込めば手が届く位置で視線をぶつける両者。シンもサイラオーグも構えをとら

ず自然体のまま立っている。だが、それだけなのに見ている者の心が緊張感で震えそうになる。

シンの仲魔たちは、緊張が伝わったのかピクシーとジャックフロストは固唾を飲んで眺めているが、ジャアクフロストとケルベロスはこれから起こることを見逃さないように食い入るように見つめている。サイラオーグの眷属らは不動の姿勢のままサイラオーグを見守っているが、ある者は顔色を悪くし、ある者は冷や汗を流している。

無言で睨み合っている二人だが、少なくともサイラオーグは相手の出方や隙を窺っている訳では無い。静かに体内の力を溜め込み、最速最強の一撃を放つ為の準備をしているのだ。

やがて、サイラオーグの準備が整ったのか『行くぞ！』という言う意志を乗せた眼光を放つ。

宣言せずとも遠慮なくやればいいのに、とシンは思いながらサイラオーグの実直さに敬意を込め、涼やかな目で『どうぞ』と応じた。

刹那、風を切る――否、風を突き破る音が響く。

疾風迅雷を体現させたかのようなサイラオーグの拳から繰り出される突き。『赤龍帝の鎧』に罅が入る程の威力を秘めている。

生身のシンなら体の何処に当たっても罅では済まず、砕けるだろう。

だが、それは当たったらの話。

「うっ……」

小さく洩れるのは苦鳴の声。

サイラオーグの突きは最初に見せた様子見の一発目と同様にシンの顔面中央目掛けて放たれていた。だが、拳の先にシンの姿は無く、シンは右斜めへ一歩前進してサイラオーグの拳を紙一重で避けながら自らの拳をサイラオーグの鳩尾に打ち込んでいた。

サイラオーグの眷属たちは全員言葉を失った。目の前で起きたことが本当に現実なのか疑ってしまう。気付かない内に幻術を掛けられたのではないかと思う――否、願ってしまった。

サイラオーグの眷属らにとって二つの有り得ないことが起こっている。

一つはサイラオーグの拳を躱すどころか完璧なカウンターを入れていること。

もう一つはサイラオーグがシンのたった一発の拳で表情を歪めていること。

サイラオーグの眷属たちは当然ながらサイラオーグの力がどれ程のものか知っている。それこそ身を以って。

眷属たちは、サイラオーグと実戦方式の訓練を何度も行っている。だからこそ他の誰よりも知っているのだ。

サイラオーグの拳は空気の壁を容易く突き破りその拳圧だけで木々の葉を全て落し

てしまうことを、山のような岩すらも一撃で割るどころか粉砕してしまうことを。
如何なる攻撃すらも体一つで受け切ってみせ、その硬さは『赤龍帝の鎧』を纏った一誠ですら破れない。そして、どんなダメージを受けても眉一つ動かすことはない。鋼の肉体と精神の持ち主。
それが彼らが敬愛し、胸を張って若手悪魔最強と言えるサイラオーグ。
一抹の不安が眷属たちに芽生える。だが、そんな不安を刈り取るのもサイラオーグ自身。
浮かべていた苦痛の表情をすぐに戦士としての顔で覆い、シンの拳が打ち込まれたまま前進する。
サイラオーグが踏み込んだことでシンの拳は押され、後ろへ引いた形となった。
前へ進んだサイラオーグが次に放つのは、下から突き上げるアッパー。掠めただけで脳は揺さぶられ、当たれば下顎が上顎と一つに混ぜ合う程の威力を秘めている。
シンは相手の力に逆らうことはせず、拳を開いて掌でサイラオーグを押す。その程度ではサイラオーグは止まらないが、反作用の力によりシンは後方へ飛ぶ。
空振りする突き上げの拳。だが、離れていても拳によって巻き上げられる風がシンの顔を叩くように当たる。
距離が開いた瞬間、シンは一気に息を吸い込み、吐き出す。吐息は冷気となってサイ

ラオーグを凍らせる為に抱擁するように覆っていく。
「ふんっ！」
突き上げていた拳を手刀に変え一気に振り下ろせば、冷気はその一振りによって断たれ左右に散っていく。
サイラオーグは振り下ろした手刀を見る。触れたつもりはなかったが、表面が薄氷で覆われていた。拳に変えて強く握るとパラパラと氷が剥がれ落ちていく。
初撃を与えたのはシンだが先に退いたのもシンの方であった。臆せず果敢に攻めたサイラオーグの気迫勝ちとも言える。
サイラオーグはシンに殴られた箇所に触れる。さっきのような表情の変化は無かったが、僅かにだが眉が動いた。
「兵藤一誠が言っていた」
サイラオーグはシンの方を見ながら呟く。その表情は嬉しそうに見えた。
「俺の拳よりももっと痛い拳を打つ奴を知っている、と。間薙シン、話に違わぬ――いや、想像以上の拳だったぞ……！」
長い年月鍛え抜いて来たサイラオーグの体。鉄壁とも呼べるそれが、まるで薄紙を破るかのように貫かれた。純粋な拳による痛みが表皮を貫き、筋肉も貫き、骨を貫き、臓腑を貫き、最後は背中から抜けていく。兎に角、痛かったとしか表現出来ない。もしか

したら、サイラオーグの人生の中で一番の痛みだったかもしれない。
「お前の拳は冷たい。兵藤一誠の拳とは真逆だ。だが、分かるぞ。その冷たさは冷徹なまでに勝ちを狙っているからこそだ。本気で俺を倒そうとする意志の表れ……光栄だ！」
だが、サイラオーグはその痛みを受けても心が折れることはない。逆に奮え、燃え上がっていく。シンの本気に応じて心に情熱がくべられていく
「俺もまだまだ鍛錬不足だ！　それで良し！　俺はここで満足するべきではない！　俺は俺を信じ、今を超えていく！」
何処までも先へ突き進もうとするその姿にサイラオーグの眷属たちも心が震える。一瞬だけでも不安を抱いてしまった己を恥じる。サイラオーグの不屈不撓の姿は求心力を生み、そんな彼らに眷属たちも惹かれ、忠誠を誓った。
何も恐れることはない。サイラオーグの戦う姿を目に焼き付けるだけである。
「――詫びよう。この戦いにこんなものは不粋だ」
サイラオーグの四肢に紋様が浮かんだかと思えば、それが消失する。すると、サイラオーグの体から淡い光が漏れ出し、やがて全身を覆う白い光となる。
纏う白い光は魔力とは異なる。シンの感覚としては命のようなもの纏っているように感じられる。

閉じていたものが一気に噴き出したせいか、サイラオーグを中心にして地面に大きな亀裂が生じる。その罅はシンの足元に届く程であった。

サイラオーグが四肢に封印を施し、負荷を与える枷にしているのはシンも知っている。それを外したとなるとシン同様に本気で勝ちを取りに来たのだろう。

「あの若さであれだけの闘気を纏うことが出来るとは……見事と言うほかありません」

サイラオーグが発した白い光の正体にすぐに気付いた総司は、戦う者としてサイラオーグがどれだけの鍛錬をしてきたのか闘気の密度で理解し、感動する。

「出し惜しみは無しか。思い切りが良い。サイラオーグをすぐにそう切り替えさせた間薙君を褒めるべきかもしれないね。――グレイフィア、君はどう見る？」

サーゼクスに聞かれ、グレイフィアは少しの間考えた後に自分の意見を述べる。

「サイラオーグ様が封印を解く前であったのなら、間薙様にも勝機があったと思われます。しかし、封印を解いた今は間薙様の勝ち目は薄いかと。ですが、こうなってくると……」

グレイフィアは言葉を濁すが、サーゼクスは彼女が何を言いたいのか分かっている。

「――仕方のないことだ。サイラオーグも納得している。そうなった以上我々には口を挟めない」

彼らの間だけで通じる断片的なやりとり。

「……こうなってしまった以上、この戦いは長くはないだろうね」
サーゼクスは両者を視界に収めながら少しだけ悲しそうに呟いた。
サイラオーグから迸る闘気。それはシンの全身を突風のように煽る。
「流石だな。顔色一つ変えていない。そのポーカーフェイス、是非とも見習いたいな」
皮肉や嫌味に捉えられる台詞だが、サイラオーグが言えば途端に本心からの称賛にしか聞こえなくなる。言葉の説得力というのは発する者の人格に宿るのかもしれない。
力を完全解放したサイラオーグの実力がどれだけのものかは未知数。ならばこそ、それを測る為の一撃をシンは繰り出す。
シンの右手に集束される力が一瞬にして剣の形となる。最早、手足を動かすぐらいの感覚で魔力剣を形成することが出来る。
素手ではなく剣も使うのか、とサイラオーグが意外に思っているとシンはまだ間合いの外であるにも関わらず魔力剣を振り下ろす。
閉じ込められていた力が解放され、破壊の力を持った波によりサイラオーグの視界が陽炎の如く揺らぐ。
「そういう技か！」
面白い、と言わんばかりにサイラオーグは笑うとその場から一歩も動かずに構える。
そして、目の前の魔力の波目掛けて拳を突き出した。

空気が弾けるなどと生易しいものではなく、爆ぜるような凄まじい音が場に居る全ての者たちの鼓膜を震わす。

実体など無い魔力の波がサイラオーグの突きによって全て霧散した。歪めていくものを強引に正すような圧倒的力の前に消し飛ばされる。

驚愕の光景なのかもしれないが、技を放ったシンはそのことにショックを受けることなどせず、寧ろそれを目晦ましにしてサイラオーグに接近していた。

「流石だ！」

動揺一つ見せないシンを褒めながらサイラオーグは拳で迎え撃つ。シンもまたそれに応じるようにして右拳を繰り出した。

拳と拳が衝突する同時に空気が震え、遠くで見ていたサーゼクスの長髪を揺らす。

シンは拳を叩き付けた瞬間、腕全体に音が鳴る。外ではなく内に響くものであり、指の骨が折れて腕の骨に罅が入ったのを感じた。

サイラオーグが拳を打ち込んだとき、指先から肩まで衝撃が一気に駆け抜けていくのを感じた。闘気による防御すらもシンの拳の前では無力と化す。

打ち付け合っていた両者の拳がまるで萎れるかのようにだらりと垂れ下がる。

シンの意志に反して右腕に力を入れることが出来ない。骨折や罅だけでなくサイラオーグの拳の衝撃によって一時的に麻痺してしまった。

サイラオーグもまた同じようなことが起こっている。シンとは違って骨に異常は無いが、体験したことのない熱がサイラオーグの右腕全体に籠っており、腕そのものが錘と化したような異常なだるさと重さを感じ、上手く動かすことが出来なくなってしまった。

一度の打ち合いで二人の右腕は使い物にならなくなってしまう。そう判断した次の瞬間には二人は左拳を打ち付け合っていた。

右拳と同じような結果が起こる――と思いきや、打ち負けたのはシンの方であった。右と左の微妙な差もあるが、ほんの数日前にシンは左腕を切断する程の大怪我を負っている。見た目は完治しており、シンも完全に治ったと思っていたが気付かないレベルでのダメージが残っていたと思われる。それがこの場面で表面化してしまった。

だが、サイラオーグの左腕の具合も決して軽視出来る状態ではない。右腕と同じく異常なだるさを覚えていたが、それでもサイラオーグは気力で左腕を動かす。

両腕が下がった状態のシンにサイラオーグの渾身の左拳が放たれる。拳の狙う先は、シンの胴体。

シンの思考はこのとき冷静であった。サイラオーグの左拳。直撃すれば無事では済まない。意識が飛ぶ可能性が高い。客観的にそう判断する。

守りを固めるべきだが、シンの両腕は今は使い物にならない状態であり、どうやって

もその身でサイラオーグの拳を受けるしかない。
一撃、たった一撃を耐える程の防御力を欲する。一撃耐えた後、どうなるかは考えていないが気絶してしまったら意味が無い。
迫ってくる拳にシンは全身に力を込める。だが、これでは足らない。
硬く。もっと硬く。シンは詠唱するかのようにそう念じる。
すると、一瞬だがシンの体全体が青紫色の光柱に包まれた。サイラオーグは驚くも拳の速度は緩めない。
サイラオーグの拳がシンの右脇腹へ突き刺さる。その瞬間、サイラオーグは拳に違和感を覚えた。
今日に至るまでサイラオーグの拳はあらゆるものを突いてきた。岩や木、鉄板など。人体など数え切れないぐらいに叩いている。
だからこそ突く前に凡その感触というものを把握していた。だが、今突いたシンの体はサイラオーグが想像していたものと違う。
（硬い……！）
細身と言えるシンの体だが、内側に何か詰め込んだような硬い感触が伝わってきた。
拳を打ち込んだサイラオーグは、シンと目が合う。その目は殴られた者とは思えないぐらいに冷静であった。

危険を察知するが一歩遅かった。
シンは前屈みになり骨と腹筋でサイラオーグの拳を挟む。一瞬だがサイラオーグの拳を固定すると、打ち下ろした肘と突き上げた膝でサイラオーグの左手首を同時に攻撃した。
「くっ！」
生々しい音が響くと共にサイラオーグは今の攻撃により手首の骨が砕けたことを悟った。これにより自慢の拳も使えなくなる――
（それがどうした！）
――など浅慮。拳が砕けていても絶えず打ち続けた経験があるサイラオーグにとって、この程度のことは攻撃の手を緩める理由にならない。
サイラオーグは力強く地面を踏み付けながら腰の動き、肩の動き、腕の動き全てを連動させ、拳が密着した状態から更に突く。
シンは腹の上で爆弾でも爆発させられたかのような衝撃を覚えると共に鈍い音が体内を駆け抜けていったのを感じる。
サイラオーグの一撃により肋骨がへし折られた。
突かれたシンは後方へ飛ばされるが、十数メートル程移動させられた後着地する。
一方でサイラオーグの左手首は歪な形になっていた。折れた状態から全力で突いた

代償である。だが、サイラオーグは顔色一つ変えない。そして、シンもまた相変わらず無表情であった。

我慢強いというレベルではなくどちらも精神力が肉体を軽々と凌駕している。

このまま二人の戦いはより激しいものとなる。

「そこまでです。これ以上の戦闘は不可能と判断したので終了とします」

かと思った矢先、いつの間にか総司が間に入って試合終了を告げる。

（これで終わり……？）

いくら何でも早過ぎる判断にシンは内心驚く。人間の試合ならば骨折などすれば試合続行を不可能と判断されるだろうが、ここは冥界で戦っているのはどちらも人外の存在。良くも悪くも骨折ぐらいで試合を止める程常識的な存在ではない。

明らかに不完全燃焼な戦い。サイラオーグが抗議すると思ったが――

「どうやらここまでのようだ。間薙シン。俺と戦ってくれたことを感謝する」

――あっさりと了承してしまい、闘気を消してしまう。

何かがおかしい。試合を望んだサイラオーグがこんな中途半端な結果を受け入れるとは思えない。

そう思っているとサイラオーグは背を向けて去って行く。

そのとき、シンは見た。サイラオーグから陽炎のように揺らぐ有り余った闘気が立ち

昇っているのを。口では納得している様子であったが、内心では大いに不満を抱いているのを感じた。
しかし、それならばどうしてサイラオーグがこのような結果を受け入れたのか気になる。
すると、サーゼクスがシンの傍までやって来た。
「本気のサイラオーグ相手にあそこまでやるとは流石だね」
サーゼクスは称賛するが、シンはその言葉を素直に受け取れなかった。
「怪我の治療が必要だ。グレイフィア、場所を用意してくれ」
「かしこまりました」
グレイフィアは一礼して準備に向かう。
サーゼクスはシンの耳元に口を寄せ、静かに囁く。
「場所を変えよう。治療がてら君の疑問に答えるよ」
サーゼクスの言葉にシンは黙って頷いた。

大王、疑惑

戦い終えたサイラオーグが眷属たちに囲まれる。何か喋っているが離れているので会話の内容は分からない。だが、サイラオーグが真剣な表情のままシンに砕かれた左手首を擦っている様子を見るにサイラオーグの怪我の具合について確認しているのだろう。

眷属たちは心配して医者や設備をただちに準備するとでも言っているが、サイラオーグはそこまで慌てる必要はないと宥めていると思われる。

暫くの間、サイラオーグたちは会話していたが、やがてサイラオーグの治療の為に地下トレーニングルームから移動し始める。

サイラオーグはサーゼクスに一礼し、眷属らもそれに倣う。

シンはそれをぼんやりと眺めていたが、突如殺気の籠った鋭い視線を感じた。視線を辿ればその先にいたのは、あの仮面の少年。

去り際にシンに警告でもするかのように睨んできた。シンは既に紋様を消して戦闘状態を解除しているが、仮面の少年の方はそれでも警戒を緩めていない。

シンは仮面の少年に対し、既知感のようなものを覚える。会ったことがない筈なのに

会ったことがあるような、何故か知っているような存在感があった。
結局、その既知感の正体が分からないままサイラオーグと共に仮面の少年は行ってしまう。
シンはそれを何も言わずに眺める。
「――気になるかい？」
シンの様子に気付いてサーゼクスが話し掛けて来る。
「サイラオーグのあの眷属のことが」
シンが仮面の少年を気にしていることをサーゼクスは見抜いていた。
「……少しだけ」
「それについても説明しよう。サイラオーグの為の医療スタッフは手配済みだ。次は君の番だよ。――とその前に」
サーゼクスはシンの姿をジッと見る。その視線の意図をシンが考えたとき、気付いた。上着を脱ぎ捨てたままであったことに。認識してしまうとサーゼクス、グレイフィア、総司の視線がシンに何とも居心地の悪さを与える。
「どうぞ」
いつの間にかグレイフィアが傍に来ており、シンが脱ぎ捨てた上着を丁寧に折り畳んだ状態で差し出してくる。

「――ありがとうございます」
礼を言ってそれを受け取り、手早く羽織ろうとするが、サイラオーグとの戦闘で両腕に大きなダメージを負っているシンは両腕を持ち上げることが出来ない。
サーゼクスもそれに気が付き、グレイフィアに指示を出す。
「グレイフィア。彼に服を」
「はい。かしこまりました」
「いえ、流石にそれは……」
断って仲魔に頼もうとし彼らに目配せするが、ケルベロスはまず体の構造上無理なので選択肢に入っていない。次にジャアクフロストは人の頼みを聞くような性格ではなく、そもそもシンと目を合わせようともしない。
残る候補はピクシーとジャックフロストだが、この二人はニヤニヤ笑いながらわざわざ後ろ手に組んでアピールし手伝う素振りすら見せなかった。
仲魔になってそれなりの時間は経過している。信用、信頼も積み重なってきても根っこ部分は全く変わらず、シンが恥をかく姿を心待ちにしていた。
相手を慮るという言葉とは無縁な相変わらず我が道を行く仲魔たちである。
「……お願いします」
仲魔たちが頼りにならないので、結局諦めてグレイフィアに着せてもらうこととな

る。

「失礼します」

腕は動かないので肩を動かして上手く袖を通してもらう。上半身を晒していたのを見られていたときも居心地の悪さを覚えていたが、グレイフィアに上着を着せられている今の状況の方がもっと居心地が悪い。

何よりもサーゼクスの視線が気になって仕方がなかった。グレイフィアはサーゼクスの妻であり、妻が上半身を晒していた男に上着を着せている光景をどんな目で見ているのか、何を考えているのか、知りたくは無いが気になってしまう。

戦いで上着が破けないようにする為だったといえ魔王の前で脱いだり、着たり、おまけに着せているのがその妻だったり。字面にすると凄まじく図太い恥晒しのようである。

シンが着替え終わると、サーゼクスは何事も無かったかのように話を続ける。

「さて、今度こそ移動するとしよう」

地下トレーニングルームを出て向かった先はグレモリー領の城。その中にある一室。内部は客を招く為の華やかさは無いが、気分が落ち着く雰囲気と清潔感があった。

因みにだが、そこへ向かう途中でピクシーたちがグレモリー領を観光したいと言ったので別れた。ケルベロスはピクシーたちのお守りの為に付き、ジャアクフロストも口で

は面倒くさそうに言っていたが、本当は興味があったので付いて行く。案内役兼護衛ということで総司もピクシーたちと一緒に行動してくれた。
　室内にはシンとサーゼクスとグレイフィアの三人だけ。一気に同行者の数が減ったので室内がやたらと広く感じられた。
「治療しますので両腕をお見せください」
　グレイフィアに言われるがままシンは両腕を出す。痛みに慣れたのかさっきよりも動かし易く感じる。
　グレイフィアが魔法でシンの腕を治療している間にサーゼクスが話を始める。
「何処から話をするべきか……君はサイラオーグが私とリアスの従兄弟だというのは知っているかい？」
「はい」
　サイラオーグと初めて会ったときにサイラオーグ自身からそう聞かされた。
「私の母はバアル家の出でね。サイラオーグの父君でありバアル家現当主の姉なんだ。ただし、サイラオーグの父君は本妻の息子であり、私の母は第二夫人の娘。つまり腹違いの姉弟だ」
　第二夫人という聞きなれない言葉だが、シンは特に驚かない。悪魔が一夫多妻制なのは知っている。一誠もハーレムの為にそれを目指している。

「サイラオーグの母君――私の叔母であるミスラ・バアルは上級悪魔であり元七十二柱のウァプラ家の出であった」

元七十二柱同士の悪魔から生まれたのがサイラオーグ。血筋だけ見ればサラブレッドである。

「獅子を司る偉大な名家だ。……周りも生まれてくる子にさぞ期待したことだろう」

サーゼクスの口振りからして思い描いたようにはならなかったのが分かる。

「サイラオーグは強い。だが、彼は魔力を持たずに生まれてきた。バアルの特色であり、当主として受け継ぐ筈であった『消滅』の力を」

サーゼクスはそのせいで母子はバアル家に見捨てられ、バアル領の辺境の地に追いやられたという。サーゼクスはその間の詳細は省いた。恐らくは口に出したくもないのだろう。しかし、何があったのかは容易に想像が付く。差別、侮蔑、罵倒、あらゆる悪意が母子に降りかかったと思われる。

「グレモリーも、特に母上は二人に援助したかったがすげなく断られたよ。バアル家から離れて消滅の力を受け継いだ私たちの存在が癇に障ったようだ」

魔王を除けば家柄としてはトップであり大王という肩書を持つバアル家に口出しすることは難しいとサーゼクスは語る。しかも、強引に介入をすればサイラオーグやミスラがどんな目に遭うかも分からない。

その後にサイラオーグを待っていたのは飼い殺しの日々。欠陥品、一族の恥という扱いを受け、バアル領から出ることを許されず、母子と共に厳しい毎日を送った。

だが、それでもサイラオーグは逆境に折れることはせず、魔力が無いというハンデを覆す程に自分を鍛え上げ、遂には現当主と後妻との間に生まれた次期当主であった弟を下してその座を勝ち取ったとのこと。

話だけ聞けばサイラオーグの半生を語るものであったが、それが今回の中途半端な対決とどう結びつくのか分からない。

「サイラオーグさんのことを知れたのは良かったですが、それと今回の件とどう関係が？　話を聞く限りだとサイラオーグさんが自発的にやったようには思えないんですが？」

「君の指摘は正しい。本来ならば君とサイラオーグを全力で戦わせるつもりだったし、サイラオーグもそのつもりだった……横槍さえ入らなければね」

「横槍……もしかして、バアル家ですか？」

「正解だ」

魔王であるサーゼクスに口出し出来るとすれば、サーゼクスが説明していた最上位の家柄を持つバアル家しか思いつかない。

「今回の件はサイラオーグのほぼ個人的な私闘であり、外部にも殆ど洩らしていない。

知っているとすれば私とディハウザーぐらいだ。……だというのに直前になってバアル家から君との対戦についての物申しがあった」

ほぼ完璧に情報規制していたにもかかわらず、バアル家の耳に今回の対戦が届いていたことはサーゼクスにとっても予定外のことであった。

「流石に長いことトップに君臨しているだけのことはある。バアル家が張り巡らしている根は長く、深い。私が気付けない程に。今回のことは私の落ち度だ。君やサイラオーグには申し訳ないことをした」

「気にしないで下さい」

サーゼクスが謝るが、シンは言ったように特に気にしていない。元々、戦いに拘るような矜持は持ち合わせていない。

「君とサイラオーグとの対戦に関して色々と話し合った結果、妥協するような形になってしまった」

「あれを話し合いと言いますか？　いちいち回りくどい嫌味や皮肉をネチネチと言ってくるだけの現魔王への敬意が足りない無礼な行為だと認識していましたが？」

黙って治療をしていたグレイフィアが急に会話に入ってきた。サーゼクスは当時のことを気にしてない様子だが、グレイフィアは、魔王であり夫であるサーゼクスへの侮辱に未だに怒りを覚えている。裏を返せばそれだけサーゼクスへの愛情が深いことを

意味している。
「愛されていますね」
「はっはっは。君にそう言われるなら、あの話し合いにも価値があったということだな」
シンの素直な感想に対し、サーゼクスは上機嫌に笑う。
「勿論、私の彼女への愛情も深いがね！」
良い顔をしながら言い放つサーゼクス。すると、グレイフィアはシンから一旦離れてサーゼクスの傍へ行き、その頬をつねり上げる。
「人前でそのようなことを言うべきではありません」
グレイフィアは無表情だったが、シンからすればどう見ても照れ隠しにしか見えなかった。
「やっぱり愛されていますね」
「まあね！」
頬をつねられながらも笑うサーゼクス。
「ですから……もういいです」
冗談でも揶揄いでも無く二人が本気で言っていることを察し、これ以上何かを言っても無駄と理解してシンの治療へ戻る。グレイフィアは無表情であったが、耳が赤く染まっていた。

「話の脱線もそこまでにしておくべきでは？」
グレイフィアに上目遣いに睨まれるシン。話を横道に逸らしたのは彼の一言が原因なので仕方がない。
「そうだね、確かに。では、話を戻そう」
のろけていた表情を一変させ、真面目な顔付きに戻る。
「バアル家の要求は単純なものさ。サイラオーグはリアスとのレーティングゲームを控えている。なるべく怪我の無いように収めてくれ。もし、サイラオーグがレーティングゲームを辞退するようなことがあれば、それは私たち側の責任だとね」
言い分としては特におかしな点は無いし、間違ったことも言っていない。とはいえやや過保護気味ではないかという感想もある。ある程度の怪我ならば魔法でどうにでもなるし、最悪フェニックスの涙を使用すればいい。サイラオーグとライザーが交友関係にあることをシンも知っていた。
「この話を先にサイラオーグにして、彼が了承した時点で私たちからは何も言えないよ」
サーゼクスの言う通り、対戦を希望していたサイラオーグがその条件を呑んでしまった時点で外野が口を挟むことが出来なくなる。
「次期当主であるサイラオーグさんを守る為……というような話じゃないですね」
万が一の可能性を挙げてみたが、言っている途中にサーゼクスの表情を見て的外れで

あったことを察した。
「サイラオーグの立場は微妙なんだ。表向きは次期当主になっているが、バアル家の者やそれに属する派閥の悪魔――大王派は裏では彼のことを未だに蔑んでいるよ。だが、サイラオーグの個人の突出した実力は勿論のこと、サイラオーグに心酔する若い悪魔も多い。バアル家にとっては大事な広告塔だからね」
サイラオーグが気付いていないとは思えない。恐らくは清濁併せ?む覚悟でバアル家を後ろ盾にしているのだろう。
「分かっていてやっているんですね」
「ああ。サイラオーグが利用されているように、サイラオーグも彼らを利用している。バアル家の持つ他家へのパイプは馬鹿に出来るものではない。一つでも上を目指すというのなら必要になってくるだろう」
何とも関心の湧かない話である、というのがシンの思ったままの感想であった。全てがまどろっこしく感じる。既に作り上げられた仕組みだから仕方のないと言えば仕方が無い。
サイラオーグですらそうなのだから、目の前に立つサーゼクスもまた魔王という強者でありながら数え切れないしがらみに雁字搦めになっているのだろう。
そういったしがらみに縛り付けられることに憐れみを感じ――そうになるがすぐに

それを捨てた。
　しがらみを敢えて受け入れ、その中で足掻いている者を憐れむなど上からの目線に過ぎない。そんな安い同情など無価値に等しい。
「まあ、バアル家が言っていたこと自体におかしな点は無いし、逆に真っ当だったせいでサイラオーグも受け入れざるを得なかっただろうね。サイラオーグも君と全力で戦う理由を用意出来なかったのも痛い」
　レーティングゲームに二回しか出ていないほぼ無名の相手と真剣勝負を許可することの方が変なので仕方が無い事であった。
「リアス・グレモリーとのゲームを蔑ろにする気か、なんて言われたら真面目な彼のことだから、そんなことは無いと言うしかないさ。向こうはこれっぽっちも私たちに敬意なんて持っていないのにね？」
　サイラオーグが戦いに秀でていても、交渉などの分野では海千山千のバアル家の方に軍配が上がる。サイラオーグも苦渋の選択をするしかなかった。
「……ただ、バアル家とサイラオーグの関係のみが今回のことに繋がった訳じゃない」
「というと？」
「バアル家が過敏になっているのは……君にも関係あるんだ」
「俺が？　……もしかして」

物事をややこしくする理由があるとすれば一つしか思いつかない。
「バアル家は薄々だが君の正体について勘付いている可能性がある。と言ってもまだ確信を持っていない様子だ。半信半疑という感じだね」
シンが魔人であることはサーゼクスによって情報が遮断されているのでまだ知れ渡っていない。しかし、前に警告されたように魔人と邂逅した者ならばシンの正体も察せられる。
だが、そうなると別の疑問が生じる。
バアル家は最上位の悪魔であり、冥界のトップだと説明された。それならば確信を持っていない、半信半疑などと悠長でハッキリしない結果では無くすぐに分かるのではないか、と思ってしまう。
「まだ半信半疑なんですか……？」
「あー……嘗て冥界ではマタドールが何度か襲撃する事態があったが、バアル家の者たちはマタドール、というより魔人と一切関わろうとしなかったからね。そのせいで、知らないんだよ、魔人の気配というものを」
知らないから分からない。実に単純な答えである。
「まあ、彼自身も権力という強さには興味無かったからね」
懐かしむように言うサーゼクス。口振りだけなら古い友人の話をしているようだっ

た。

どうしてそんな風に語れるのか気になるが、同じくらい気になるのはグレイフィア。サーゼクスがマタドールの名を口に出した途端、露骨なまでに不機嫌になった。マタドールに対する怒りというよりも嫉妬に近い情念を感じる。

「今回のことは、そういった疑いもあったからバアル家は口を挟んだのさ。サイラオーグにもしものことがあったら困るのは彼らだしね。そして、サイラオーグはそんな彼らを無視出来ない。将来のことを見据えているなら尚更だ」

シンは理解した。過保護だと思っていたが実際は全く別。大事な広告塔にもしものことがあったら、自分たちの利益に関わるというもの。

くだらない、という言葉が口から出そうになったが何とか仕舞い込んだ。

ディハウザーの献身が無下にされた気分である。

「サイラオーグを責めないでやってくれ。きっと彼も自分を責めている筈だ」

サイラオーグからすれば自分から頼んでおいて自分の都合を優先したことに申し訳なさを覚えているのだろう。

「――分かっています」

シンからすれば特に気にすることではない。中途半端な結果だと思うが、サイラオーグがそれに納得し、シンがこれでいいと思えばそこで終了である。

「……そうかい。そう言ってくれるなら助かるよ」
会話が途切れ、沈黙が訪れる。
「終わりました」
沈黙は一瞬の間だけ。グレイフィアの治療終了の言葉ですぐに破られる。
シンは両手を握り締め、具合を確認する。痛みは無い。腕も持ち上がる。傷は完治していた。
「ありがとうございます」
「――いえ。礼を言われるようなことはしていません」
シンが礼を言うとグレイフィアは謙遜する。
「これからどうするんだい？」
「彼奴らを迎えに行きます。きっとあちこち彷徨っているでしょうけど」
召喚で呼び寄せることも可能だが、後々文句を言われそうなので最後の手段として取っておく。そして、ジャアクフロストは仲魔になっていないので呼び寄せられない。もし、一人取り残されでもしたら後が面倒である。
「そうか。君も遠慮なく観光したまえ。私が話を通しておくからグレモリー領内なら何でも無料にしてあげるよ」
サーゼクスの厚意にシンは軽く頭を下げる。そのままシンは部屋から出て行こうと

するが、一つ聞きそびれたことを思い出して足を止めた。
「一つ、聞き忘れていたことがあります」
「サイラオーグの眷属――仮面の少年のことだね？」
シンは頷く。あそこまでシンを警戒するとなると何かしらの理由がある筈。サーゼクスの説明でそれについてのヒントが見つかれば、と考える。
「実を言うと、その眷属についての情報はあまり無いんだ。分かっているのは、仮面の少年が『兵士』であること。どうもサイラオーグは意図的に彼をレーティングゲームで使うことを避けている。そのせいでどういう風に戦うのか悪魔なのかも分からない。……見学に来ていた眷属の中に彼が混じっていたことは少し驚いた。表舞台に出ることが滅多に無いからね」
サーゼクスから齎された情報を聞いて、仮面の少年について分かったことはゼロに等しい。これでは分からないままだと思ったとき、サーゼクスが『ただ』と話を続ける。
「確証は無い噂同然の情報だが、彼を眷属にする為に消費した『兵士』の駒は、六つか七つと言われている」
駒の消費量は実力もしくは潜在能力を表すに等しい。サーゼクスの眷属である沖田総司は『兵士』の駒に換算すれば六つ分、一誠は『兵士』の駒八つで悪魔に転生した。
そうなると魔王の眷属級の実力があるか、神滅具所持者の一誠に近い潜在能力を持っ

ているかのどちらかになる。
「噂も馬鹿には出来ない。事実、サイラオーグは彼以外の『兵士』は居ない。そうなると信憑性も高まる」
「ですね」
油断ならない相手と再認識し、聞きたいことを全て聞き終えたシンはサーゼクスたちに礼を言って部屋を出た。
部屋に残された二人は――
「グレイフィア」
「はい」
「治療、殆どやっていないね？」
「……はい」
サーゼクスの指摘にグレイフィアは少し動揺しながらも肯定する。
「私が間薙様の両手を診たときには殆ど治り掛けていました……」
シンは気付かなかったが、グレイフィアがやっていたのは治癒魔法のフリであった。グレイフィアが言うように魔法による治療をしなくてもシンの骨折は秒単位で治り続けていた。
「恐らく無意識にやっていたと思われます。――ですが、それでも異常な速度です。も

し、意識して傷を治せるようになったら……」

「どんな傷も一瞬で治せるようになるかもしれないね。何とも便利なものだ」

サーゼクスは普段通りの飄々とした態度であったが、グレイフィアの方は深刻な表情をしている。

会話し、その人柄を知っており、そんな筈は無いと分かっていても考えてしまう。

もし、間薙シンという魔人が敵になったらどうなってしまうのか、と。

共感を覚えたくないが、バアル家のやったことも全く理解出来ない訳では無い。成長途中の彼は未知数の存在であった。

そんなグレイフィアの内心が分かっているのか、サーゼクスは彼女の肩に手を置く。

「大丈夫。大丈夫さ」

不安を溶かすような優しい声。だが、愛すべき者だからこそ優しさの奥に潜むサーゼクスの断固とした覚悟も見抜いてしまう。

万が一、シンが魔人として敵になったら、そのときはサーゼクスが――

◇

城内を独り歩くシン。外への道順は覚えているので進む足に迷いは無い。このまま

何事も無く城の外へ――唐突に足が止まった。
順路を間違えた訳でも忘れた訳でもない。不意を衝くような再会に思わず足を止めてしまった。
「……」
シンの視線の先に立つのは敵意を露にする仮面の少年。
サイラオーグもまたこの城で治療を受けていた。そうなれば、その眷属とこうやって鉢合わせするのもおかしくない。
シンは一瞬、自分のことを探しに来たのかと思ったが、目を合わせたときに仮面の少年がほんの僅かの間だが硬直した様子からして偶々であり、向こうにとっても予期せぬ再会であったと思い直す。
シンは止めていた足を動かす。仮面の少年もまた歩き出す。向かい合う両者の距離はすぐに縮まった。
「確か、サイラオーグさんの『兵士』だったか？」
「……」
「聞いた話だとゲームに滅多に出ない切り札みたいな存在だとか？」
「……」
シンの方から話し掛けてみるが、仮面の少年は一切言葉を発しない。会話する気もな

い様子。シンはそんな態度に意を介さず一方的に喋る。
「そんな奴がどういう訳か俺に敵意を向けて来る。今日、初めて会ったにもかかわらず」
仮面のせいで反応が判り難いが、敵意が濃くなった気がする。それは仮面の少年の警戒が強まったことを意味する。
「でも、不思議だ」
視線を衝突させる二人。シンの方が仮面の少年よりもやや背が高いので見下ろす形になる。
「初めて会う筈なのに、妙な既視感を覚える。……同じような雰囲気を持つ奴と会ったことがあるからかもな」
探るようなシンの言葉。仮面の少年は黙ってそれを聞き続ける。
「赤龍帝と白龍皇。そして、曹操という男……この三人の共通点は何だろうな?」
殆ど答えを言っているようなものであったが、敢えて仮面の少年へ問う。挑発同然のシンの問いに対し、仮面の少年は――
「回りくどい言い方は止めろ」
――初めて声を出す。
「そうか。なら、単刀直入に言おう――神滅具所持者か?」
「だとしたら……どうする?」

「別にどうもしない……ただ、そうなると俺のことを敵視していたのも納得出来るだけだ……お前も俺のことに気付いているんだろう?」

神滅具の中にはドライグやアルビオンのように魂を封じ込められた物がある。仮面の少年もまたそういった類の神滅具であり、中に封じ込められた魂から過去の所持者が戦った魔人のことを知り、同じく魔人であるシンに強い警戒心と敵意を持ったのではないかと推測した。

「……お前は危険だ。お前のような魔人はきっとサイラオーグ様に災厄を齎す」

「……かもしれないな」

シンはその言葉を否定しなかった。死を齎す魔人の力が誰かを不幸にすることはあっても幸福にすることはない。少なくとも今まで戦って来た魔人たちを見れば、自ずとそんな答えになる。

「……サイラオーグ様は本当なら封印を解くつもりなど無かった。だが、サイラオーグ様は解いてしまった――いや、解かされてしまった。魔人に関わると全てが歪む。……こんなことならもっと強く反対すべきだった」

後悔を見せる仮面の少年。『もっと強く反対すべきだった』という台詞からサイラオーグとシンの対戦に反対だっただけでなく事前に警告をしていた様子。

もしかしたら、サイラオーグがバアル家の言う事を聞くのを後押ししたのは、この仮

面の少年ではないかと思い始める。
「眷属として主に意見するなど以ての外だが、それでも強く言うべきであった。そもそも、こんな戦いなどさせなければ、サイラオーグ様があんな想いを――」
「そこまでだ。レグルス」
感情を昂らせ始めた仮面の少年――レグルスを制したのはサイラオーグ。
「すまない。俺の眷属が迷惑をかけた」
謝罪するサイラオーグ。主に謝らせたことで居たたまれなくなったのか、レグルスは顔を俯かせてサイラオーグに道を譲った。
「怪我はいいのか？」
「大丈夫です」
「大したものだな。羨ましさすら感じる」
シンの両腕が無傷なのに対し、サイラオーグは指先から肘まで包帯を巻いていた。薬品のニオイが微かに漂ってくる。包帯の下には薬を染み込ませた湿布が貼られていた。
そこで会話が途切れてしまう。サイラオーグは何を言うべきか迷い、シンはサイラオーグが何かを言うのを待っている。サイラオーグにとっては、重苦しい沈黙が続く。
「今回のことは……全て俺に責任がある」
全てを背負おうとするサイラオーグ。サーゼクスも似たようなことを言っていた。

上に立つ者というのは何でもかんでも背負ってしまうものなのか、それとも背負える責任感があるからこそ上に立てられるのか、と考えてしまう。
「サーゼクスさんから全部聞きました」
「……そうか。なら、話は早い」
バアル家の横槍をシンが知っていたことにサイラオーグは一瞬目を見張るが、すぐに冷静な表情に戻す。
「横から口を挟まれたとしても、選択したのは俺だ。言い訳などしない。その結果、あのような半端な形となった。間薙シン、お前が折角俺の挑戦を受けてくれたのに台無しにしてしまった」
今回の罪の全てを被ろうとするサイラオーグに、シンが何かを言おうとしたとき――
「待って下さい！　サイラオーグ様！　貴方の判断を迷わせたのは私です！　貴方は私の出過ぎた真似に真摯に応じて下さっただけです！　咎があるとしたら私にこそあります！　ですから、全ての責任があるなどと仰らないで下さい！」
レグルスが堪らず声を上げた。そして、主の背負ったものを自分にも背負わせてくれと願う。
主従が良き関係を築いているのが良く分かる光景である。自分の仲魔だったらこうはならないだろう、とシンは確信してしまう。尤も仲魔とは主と眷属といった明確な上

下関係ではなく対等という形なので仕方がないが。
「誰の責任だとかはどうでもいいです」
シンは切り捨てるように言い放つ。
「またやりましょう」
その言葉にサイラオーグは瞠目した。
「俺に……また機会を与えてくれるというのか？」
「白黒付けないのは気持ち悪いでしょう？　それともサイラオーグさんはこの結果で満足ですか？」
「――いや、俺も納得していない」
「じゃあ、次の機会に」
言うべきことが済んだシンは出口の方へ歩いて行く。別にサイラオーグたちを気遣った訳では無い。シンもまたこの結果に納得していないだけのこと。白黒付けられるならばそれに越したことはない。
（とはいえどうするべきか？）
何か手を打たないと同じような結果になることは分かっている。サイラオーグがバアル家の指示を拒否すれば良いだけのことだが、そうなるとサイラオーグの将来に大なり小なり禍根を残すことになるかもしれない。

もしくは、バアル家がサイラオーグにシンと全力で戦うよう指示を下せば――そこまで考え、そんな都合の良いことなど起こらないと思った。

（あ……）

一つある方法を思い付く。ヒントはサーゼクスから聞いたバアル家の説明の中にあった。ただし、それはシンにとってリスクの大きな方法である。しかも、シンだけでなく周りの者たちにも飛び火する可能性もあった。

実行するとなると色々と話し合いをする必要がある。

独りであれこれと考えているとシンはいつの間にか城外まで出ており、グレモリー領内を考え事をしながら行く当てもなく無言で彷徨っていた。

「あ、シンだ」

声を掛けられたことで考えに没頭していたシンの意識がようやく外へ向く。

「何をやっているんだ？　お前らは……」

目を向けた途端、シンの視線に呆れが入った。

ピクシーは自分の背丈ぐらいある棒付きのキャンディーを抱えながら舐め、ジャックフロストは両手にソフトクリームを持って交互に舐め、ケルベロスは口に買い物袋を掛けられ、それだけでは済まず尾にも何個か満杯に詰められた袋を下げており、ジャアクフロストは指の間全部に肉やら野菜やらが刺さった串を握っていた。

これでもかというぐらいに観光を堪能している仲魔たちの姿。一人真剣に考え事をしていた自分が馬鹿らしくなってくる。
「もう、傷は治りましたか？」
付き添いの総司が話し掛けてくるが姿は見えない。何故なら総司は、姿が隠れてしまう程の大量の買い物を持たされているからであった。
「お前ら……」
魔王の眷属を荷物持ちにするという悪魔が見たら卒倒しそうな光景。現に、すれ違った悪魔の何人かが荷物持ちをしている総司に、二度見をしたり唖然としたりする様子があった。
「えー。だってアタシたちだと全然持てないしー」
「ケルベロスももう限界だホーー！」
「持ちたいっていうから持たせてやっているんだホ！」
「グルル……早ク帰リタイ……」
三人が観光を堪能する一方で荷物持ちをしているケルベロスは不満気。
「ちゃんとお土産買ってあるからー。もう少し、もう少し」
ピクシーがケルベロスの機嫌を直そうとする。
「すみません」

シンは急いで総司が持っていた荷物を預かる。半分くらい貰うとようやく総司の顔が見えた。
「そんなに気にすることはありませんよ。私から言い出したことですから」
総司の方は機嫌を悪くしておらず、最初に会ったときと変わらない微笑を浮かべていた。
「そうだ。間薙殿。君は、この後予定がありますか？」
「いいえ。特に無いですが……」
「なら、少しだけ私に時間をくれませんか？」
「時間を？」
「ええ。――実はサイラオーグ殿と君の戦いを見て、少し気になったことがあったので」
「気になること……？」
はい、と頷く総司。少なくとも口頭で済むようなことでは無い様子。その証拠というべきか、細められた総司の目には刀剣の如き光が宿っていた。

◇

次の日、駒王学園にて一人で歩いているシンを見つけて木場が近寄り、声を掛ける。

「やあ」
「――ああ」
シンの額や両頬に絆創膏が何枚もベタベタと貼ってあった。
「どうしたのそれ？」
「ちょっとな……」
心配そうに尋ねる木場にシンは曖昧な答えで返す。
「大丈夫ならいいけど……そうだ。間薙君にも頼みたいことがあるんだ」
「何だ？」
「今度のレーティングゲームの為の手合わせをお願いしたいんだ。イッセー君も付き合ってくれるし、間薙君にも――」
「パス」
「えっ！」
断られると思っていなかった木場は心底驚く。
「当分は刀とか剣とか見たい気分じゃない」
「ど、どういうこと？　まさか、その傷が原因!?　一体誰が!?」
詰め寄って来る木場に、シンはボソリと名を零す。
「……沖田総司」

「……ええっ！　師匠っ!?」

予想外の名を出されたせいで木場は本日二度目の驚きの声を上げた。

準備、不調

文化祭の開催日も徐々に近付き、毎日が少しずつ忙しくなっていく。

シンは生徒会役員とオカルト研究部の二足の草鞋を履いているのでその日はオカルト研究部を手伝い、次の日は生徒会を手伝い、忙しければ一日の内にオカルト研究部室と生徒会室を行ったり来たりすることになる。

生徒会の仕事自体はそれ程ハードなものではない。各クラスの出し物を確認し、それが風紀を乱さないものか、学園が定めた規則に違反していないかを判断する。また、文化祭当日のスケジュールの調整などがあるが、そちらは会長のソーナや副会長の椿姫が担当しており、シンがやるのは書類作成などの手伝いぐらいである。

それに比べるとオカルト研究部の催し物はかなり大変である。旧校舎全体を使用し、『オカルトの館』という名でお化け屋敷、占い部屋、喫茶店、オカルトの研究報告など部員が出した案を全て合わせた催しとなっている。

魔力を使えばすぐに準備は終わるが、リアスが手作りにこだわり、周りも反対しなかったので材料や工具を集めて自分たちの手で旧校舎を学園祭仕様に変えることとなった。

幸い、レイヴェルもオカルト研究部に所属することとなったし人手はそこまで困っていない。シンも仲魔たちをお菓子などで釣って手伝うよう頼んである。

因みにシンは『紫藤イリナの愛の救済クラブ』という名前だけ貸した三足目の草鞋を履いているが、まだ同好会レベルなので今回の文化祭には参加出来なかった。イリナ本人はやる気だったので非常に残念そうにしていた。

シンはイリナにどんな催し物をするのかと尋ねたところ、教室の一室を借りて教会やミカエルを始めとした四天使の素晴らしさを伝える布教をやろうとしていたとのこと。例え、参加出来たとしても却下されそうな内容であった。

仕方なくシンは、今回はオカルト研究部との共同の催し物にし、リアスに頼み売り上げの一部を寄付することで救済クラブの活動とし、今後の正式な活動の為のソーナへの説得材料にする、という助言をしてみた。この案をイリナは大喜びして採用し、やっぱりクラブ名に間薙シンの名を入れるべきだと勧められたが丁重に断った。

催し物の準備は男女に分かれて行われる。女子は主に衣装作りや模様替えの作業。男子の方は大工作業。補足としてギャスパーは女子の手伝いをしている。力作業よりも衣装作りの方が向いているからだ。

一定のリズムで、トンカチで叩く音が聞こえる。ノコギリが木材を切る音が聞こえる。

大工仕事に精を出す一誠と木場。その傍ではシンもまた作業を行っているが、釘だけ持っており大工道具を持っていない。

シンは釘の先端を木材に刺す。釘頭に親指を押し当てると、そのまま押し込んで木材を接合させてしまった。シンは次の釘を刺し、素手で押し込む。それを淡々と繰り返す。素手なのにトンカチよりも速く、静かに釘を刺していく。

「……何か見てるとシュールだな、それ」

「まさに手作りだね」

「うるさいぞ」

シンとて好きでやっている訳では無い。大工道具はどこのクラスも必要としており、十分な数を確保出来なかったので、仕方なく素手でやるしかなかった。普通なら無謀だが少し力を使えば出来てしまうからしょうがない。

トンカチが無くとも釘が打ち込め、ノコギリが無くとも指先で引っ掻けば木材は切断でき、釘抜きが無くとも爪で挟めば力業で抜き取れる。大工道具要らずである。

黙々とシンは作業を続けていたが、ふと仲魔たちがサボっていないかを確認する為に視線をそちらへ向ける。

ピクシーたちは一応約束を守って作業の手伝いをしていた。あのジャアクフロストも意外なことに真面目に手伝っている。自分の体よりも大きく、重そうな物を頑張って

運んでいる。どうやらトレーニングとして作業を手伝っているらしい。サイラオーグの姿に色々と触発されたのかもしれない。

仲魔たちがちゃんと作業を行っているのが分かり、シンは自分の作業に戻ろうとして途中で止まる。

リアスが衣装作りの手を止めて一誠を見つめていた。それだけなら特におかしいとは思わなかったが、リアスが一誠に向ける視線に違和感を覚えた。

いつもと変わらない好意はある。だが、それだけでなくじっとりとした重いものも含まれているような気がした。直感的に思い浮かんだのは焦燥である。

すると、視線に気付いたのか一誠が作業の手を止めて振り返ろうとする。リアスは慌てて作業を再開して誤魔化す。一誠は誰も見ていなかったと思い、勘違いだったのかと首を傾げながら作業を続ける。

それを一部始終目撃していたシンは、リアスが一誠に向ける感情に揺らぎが起こっていると感じた。何が原因かは分からない。一誠と暮らしているリアス以外のメンバーがギクシャクしていない所を見ると両者間で何かがあったらしい。

放っておいても良かったが、シンとてオカルト研究部の部員である。部員同士でいざこざがあれば放置しておく訳にはいかない。

とは言え、生徒会にも顔を出すことが多いのでシンが不在の間に何かが起きた可能性

がある。まずは、切っ掛けを知る為に不在だったときのことを聞く必要があった。
当人である一誠とリアスに聞くのはなるべく避ける。探られていると知ればいい気はしないので。代わりに周りの部員たちからそれとなく聞いてみることにした。
その1。朱乃に聞く。
「あら？　どうかしましたか？」
「進行状況の確認を。不在が多いので」
「間薙君は生徒会のお仕事も手伝っていますからね。働き者ですね」
「成り行きみたいなものです」
その会話をきっかけにして不在だったときのことを聞いてみたが、特に気になる情報は無かった。習慣となっている一誠のドラゴンの力を吸う作業が、小猫が仙術治療するようになって短くなったと少し愚痴られた。
「もっとイッセー君と触れ合いたいのに……」
不満気な表情の朱乃はいつもよりも幼く見える。最近こういった表情を見る機会が多くなったような気がする。
父親との蟠りが解消出来て、年相応の振る舞いが増えたからなのかもしれない。
その2。アーシア、ゼノヴィア、イリナに聞く。
「調子はどうだ？」

「あ、間薙さん」
「うーむ……中々慣れない。絵なら上手く行くと思うのだが……」
「ゼノヴィア。今は絵よりも衣装作りを頑張りましょう」
衣装作りに悪戦苦闘しているゼノヴィアをアーシアとイリナがフォローする。最初は、ゼノヴィアがこういった作業に慣れていないことと大雑把な性格なせいでかなり悲惨なできだったらしいが、少しずつ良くなっているとのこと。
結局二人についての有力な情報は手に入らなかったが、ゼノヴィアの成長を知れた。
その3。小猫、ギャスパー、レイヴェルに聞く。
「で！　す！　か！　ら！　ここはこの配色が良いと何度も言っていますわ！」
「……派手過ぎる。喫茶店に合ってない。……これだから焼き鳥姫は」
「あ、ああ……ああ、うう……」
小猫とレイヴェルが考え方の違いでいがみ合っている。そのまま掴み合いが始まりそうな程険悪な雰囲気だが、間にギャスパーが居るので辛うじて免れている。二人に挟まれているギャスパーは死にそうな顔色になっているが。
言い争う二人を止めようとして結局何も出来ずにオロオロしているギャスパー。二人の剣幕を恐れて傍にいたジャックランタンを持ち上げるとローブの下に頭を突っ込んで顔を隠してしまう。

「きゃあ～。セクハラ～」
棒読みでわざとらしい台詞を吐くジャックランタン。ギャスパーはローブの隙間から目だけ覗かせてオドオドと左右を見ている。流石に気の毒に思えてきたのでシンが声を掛ける。
「二人共」
シンが声を掛けると小猫とレイヴェルはびくりとし、言い合うのを止めた。
「熱が入るのはいいが、もう少し静かにしろ」
「はい……」
「……はい」
みっともない所を見られたと思った二人は、恥ずかしそうに視線を下に向ける。
「あ、ありがとうございますぅぅ。間薙先輩！」
ギャスパーが礼を言って来たので、そこから会話へ繋げていく。
先ずはギャスパーに何か特別なことが起こっていないか、という内容の話をそれとなくした。成果は特に無し。最近準備で忙しいのでジャックランタンと遊べる時間が無いので寂しいとのこと。
今度はレイヴェルに話し掛ける。内容は何でも良かったので近況について聞いてみた。

クラスメイトとはすっかりと打ち解けられたと語るレイヴェル。だが、まだ人間世界の文化に慣れていないのでどうすればいいのか分からないことがあるらしい。そのときは、ギャスパーと――非常に不服そうな顔をしながら――小猫に手助けをして貰っている、と言っていた。
「順調ならライザーにそう報せれば良いと思うが？」
「嫌ですわ。お兄様ったら根掘り葉掘り聞こうとして鬱陶し……しつこいですもの。しかも、にわか知識で人間世界のことをあーだこーだ言ってきてウンザリしますわ」
顔を顰めながら兄に対しての不満を洩らす。身内からこれだけ言われるとなると、相当鬱陶しかったのだろう。
「成程。それなら仕方が無い。だが、それでも偶には連絡を入れてやれ……妹と話が出来ないと愚痴ってたぞ」
「まあ!?　お兄様ったら間薙様にご迷惑を！　兄に代わって謝罪しますわ」
頭を下げようとするレイヴェルを止めるシン。小猫は二人の会話の中で聞き捨てならないことがあった。
「……間薙先輩。もしかして、ライザー・フェニックスと個人的に連絡を取っているんですか？」
そうあって欲しくない、と顔に書かれている小猫が訊いてくる。

小猫の中でのライザーの印象は未だに悪い。チャラチャラした軽薄そうな軟派男であり、敬愛するリアスを結婚という形で奪おうとした男である。それがシンと個人的な付き合いをしているのが信じられなかった。
「まあ、一応」
「……今すぐ絶交すべきだと思います」
「絶交するほど親しくはない」
「そんな！　お兄様の数少ない同性の御友人ではありませんか！」
「違う」
「ど、どっちなんですか？」
言っていることが食い違っているせいで聞いていたギャスパーも混乱してしまう。
結局、本命の話をすることが出来ないままシンとライザーは友人か、友人ではないかという話で終わってしまった。
その４。木場に聞く。
「今日は間薙君が手伝ってくれるから助かるよ」
いつもの爽やかな笑顔の木場。作業を進めながら最近の出来事について話を聞く。
「文化祭の準備はいいが、レーティングゲームの方はいいのか？」
「各種トレーニングはやってるよ。イッセー君の新しい能力の訓練を一緒にしたり、僕

も新しい技を試してたり。――出来れば、もっと接近戦の特訓もしたいんだけどねー」
　木場が遠回しに誘ってくる。この間、断ったことを根に持っているのかもしれない。
「……気が向いたらな」
「なら早めに気が向いてくれたら僕としては嬉しいな……ところで」
　木場が少しだけ表情を引き締める。
「この間ははぐらかされたけど、どうして僕の師匠と戦ったんだい？」
　いずれは聞かれると思っていた。つい口を滑らせてしまったが、今更ながら言うべきでは無かった。
　沖田総司と戦闘――もとい特訓をやったことを話すとなるとそうなった経緯を説明しなければならず、そうなるとサイラオーグとの対戦したことも話す必要が出て来る。ここで正直にサイラオーグと戦ったことを話せば、サイラオーグ陣営に肩入れしていると思われるかもしれない。もしかしたら、士気に影響を及ぼす可能性もある。
　考え過ぎかもしれないが、本当のことはリアスとサイラオーグのレーティングゲーム後にでも言えばいいと思い、この場は嘘の説明をすることにした。
「ピクシーたちが冥界のテレビに出ているのは知っているだろ？」
「ああ。レヴィアタン様の番組だね」
「この間、それの付き添いで冥界に行った。そのときにお前の師匠と偶然出会ったんだ」

我ながらペラペラと嘘を喋れるものだと思う。

「向こうはこっちのことを良く知っていた。――色々と師匠に話していたらしいじゃないか」

「ははは……ちょっとだけだよ」

木場が誤魔化すように笑う。これは本当のことなので話の信憑性が一気に増す。

「そしたら、木場が自慢していた俺の腕前を知りたいって流れになった」

「何やっているんだよ、師匠……」

嘘の流れだが、木場が強く否定しないところを見ると、総司ならあり得るかもしれない事なのかもしれない。話していて、今は傷は残っていないが皮膚一枚を滑っていく冷たい刃の感触を思い出す。

総司は生前病を治す為にあらゆる手段に試み、その中で魔に関する儀式を行っていたと戦う前に説明された。死を回避する為にそれを繰り返した結果、身体中が魔物の巣窟となったという。

シンとの戦いでは使用しなかったが、その気になれば一人で何十人分の働きが出来ると思われる。

そして、剣の腕はというとまさに本物の『人斬り』と称するに相応しいものであった。戦ったときはわざとらしく剣に殺気を乗せて振るい。これから何処を狙うかをシン

に丁寧に教えてくれた。
シンがそれを避け続けると、楽しくなってきたのか少し本気を出してきた。
そこで振るわれたのが一切の感情を排した無の剣。人を斬ろうとしているのに心を全く揺るがさない冷徹を極めた剣であった。
無情の剣は避けることが出来なかった。殺気という予備動作のようなものはなく、来ると思ったときには剣が振るわれた後であった。殺気などに敏感なシンもそのせいで回避動作が遅れ、一方的に何度も斬られる結果となってしまった。
とはいえ無駄な時間を過ごした訳では無い。総司との戦いの中で助言を貰い、それによりある閃きがあり、今はそれを形にしようとしている最中である。
「まあ、師匠が相手なら剣士の相手に嫌気が差すよね……」
シンの話に木場は納得する。木場もまた似たような経験をしていた。
「はあ……サイラオーグさんとのゲームも近いっていうのに……」
思うように事が進まず溜息を吐く木場。
「そういえば、サイラオーグさんで思い出したことがあったんだ」
「何だ？」
「間薙君が生徒会の手伝いに行っていたときのことなんだけど、僕とイッセー君が作業しているときに部長が来てね、サイラオーグさんの執事から個人的にお願いがあるって

イッセー君を連れて行ったんだ」
　これか、とシンは当たりを引いた感覚を得る。遠回りになってしまったが、求めていた情報への取っ掛かりに触れた。しかし、サイラオーグ関連で一誠らが呼ばれていたと知り、因縁のようなものを感じる。
「何があったんだ？」
「ごめん。僕も詳しくは聞いていないんだ。でも、気のせいかもしれないけど……」
　木場が表情を少し曇らせる。
「その後から部長の様子が少しおかしい気がするんだ。表情が暗くなったというか、思い悩んでいるというか……」
　何かあるとは思っていたが、木場の話からして大当たりだった様子。サイラオーグの執事のお願いのときにリアスの気持ちが沈むようなことがあったのだ。
「話は……聞いていないか」
「うん。ごめん」
　主であるリアスに一歩踏み込むことが出来ず、不甲斐なさそうにする木場。
「気にするな。時が来れば分かるかもしれない」
「そうだと良いんだけどね……あ、そうだ。落ち込んでいると言えばドライグもなんだけど」

「何か落ち込むようなことがあるのか？」
『赤龍帝の三叉成駒』という新しい能力を得たばかりで上機嫌そうにしていた記憶がある。ただ、木場の言う通り最近一誠と会話している所は見ていない。
「実は、京都の戦いのとき何だけどね。異世界の神様の乳神が、使いのおっぱいの精霊を通じてドライグに力を与えて覚醒を――」
「木場。あいつに影響を受けるのは良いが程々にしておけ……」
「ち、違うよ！　僕が考えた訳じゃないよ！」
シンの憐みの眼差しに、木場は慌てて説明する。
「本当にイッセー君から聞いたんだよ！　信じられない話かもしれないけど！　言っていたイッセー君も『決して頭がおかしくなった訳じゃない』って前置きしているぐらいだから信じ難い話かもしれないけど！」
そう言われても、はいそうですかと納得出来る筈も無い。悪魔も天使も神も実在するこの世界で否定するのはナンセンスかもしれないが、逆にそれをあっさりと信じようなら本来在るべき何かを失ってしまいそうになる。
「へぇ……」
「その目……きっとイッセー君から話を聞かされたときの僕もそんな目をしていたんだろうね……」

疑う、疑わない以前に相手の頭の中身を心配するような労わりの眼差し。
「……いる、いないはひとまず置いておくとして、信じるからにはそれなりの根拠があるんだな？」
「根拠という訳じゃないけど……心当たりはあったんだ」
「心当たり？」
「間薙君も覚えている筈だよ？　ジークフリートとの戦いが終わった後のこと」
木場に言われて思い返す。ジークフリートに腕を切断され、その治療をルフェイにされている最中に何故かゼノヴィアとイリナ、ルフェイの声無き声が聞こえて来るという超常現象が起きた。
「あのときは状況のせいで深く考えることは出来なかったけど、思い返してみると声が聞こえていたのって僕と間薙君だけだよね……？」
木場の言う通りであったが、嫌な予感を覚える。
「イッセー君が言った通り乳神の力で覚醒したとしてイッセー君以外にも影響を与えていたとしたら？　イッセー君は女性限定の読心術を使えたよね？　もしかして……もしかしてだけど、僕たちも知らない内に影響を受けていて、あのとき僕たちが聞いていたのは胸の――」
「木場。もう、この話はよそう」

結論を言う前にシンが遮る。
「仮にそれが真実だったとして、俺たちが幸せになる訳じゃない。分からないなら分からないままで良いこともある」
木場が何を言いたいのかは分かる。だが、それを知った所で誰も幸せになどならない。だからこそ、全力で目を逸らして無かったことにする。
「俺たちは何も知らない、分からない。それでいい」
「……うん。そうだね」
シンに倣って木場も見て見ぬふりをする。例え、頭の片隅では真実を理解してしまっていても、それを口に出さなければそれで終わりである。
「……作業を続けてるよ」
「……ああ」
気不味い空気になっていても、何故そうなったかは決して認めようとはしなかった。

◇

木場から重要な話も聞けたシンは、そろそろ深く探りを入れようする。
その5。一誠に聞く。

「調子はどうだ？」
「調子？　いつも通りだよ」
　他愛のない会話から始まる。当人に探りを入れるのはリスキーだが、そこに触れなければ得られない情報もある。リアスの方は今は不安定な感じがするので、普段通りの一誠の方を選んだ。
「お前じゃない。ドライグの方だ」
「ああ。お前も聞いたのか……」
　一誠は申し訳なさそうな表情をする。
「こうなったのは俺のせいだ……ああー、話さなきゃよかった……」
　乳神の件について説明したことを後悔する一誠。
「そこまで深刻なのか？」
「アザゼル先生に頼んでカウンセラーを探してたって。はぁ……俺、強くなったことばっか喜んで、ドライグの状態に全然気付けなかった……」
　カウンセリングが必要なほどドライグの心が病んでいるのに軽く驚く。そして、相棒の心労に気付けなかった己の不甲斐なさで一誠も凹んでいる。どちらも精神的によろしくない状態である。
「随分と追い込まれているな？」

一誠ではなくドライグへ話し掛ける。
『こんなことは初めてだから、俺にもどうしたらいいのか分からん……』
実に弱々しい声が聞こえて来た。最強のドラゴンとは思えない程に覇気が無く、死にかけのトカゲを連想させる。
『ふ、ふふ……笑いたければ笑え……乳だの胸だのに翻弄されている俺を……俺は他人の評価など気にしない性格だとずっと思っていた……だが、現実はこうだ。俺も人目を気にするぐらいの繊細さはあった訳だ……ははは……』
何とも痛々しい自嘲。唯一無二の力を持ったドラゴンとしてのプライドに満ちていたドライグが、そのプライド故にメンタルをズタズタにされている。
「そんな調子でサイラオーグ戦に挑めるのか？」
一誠もドライグも本調子とはかけ離れている。少し手合わせをしたシンからすれば、この状態では本気を出したサイラオーグに文字通り一蹴されるだろう。
『相棒のパワーを引き上げるぐらいなら問題ない……』
「なら負けるな」
シンの無慈悲な言葉に一誠は思わず『おい！』と強く言ってしまう。
「ドライグだって調子が悪いのに俺の為に頑張ろうとしてくれているのに、そんな言い方は――」

「万全じゃない状態で勝てる相手なのか？」
一誠は言葉を詰まらせた。手合わせのとき一誠が禁手でもサイラオーグは圧倒してきた。しかも、ハンデが付いている状態で。万全であっても勝てるかどうか分からない。シンが指摘したように今の状態では間違いなく負ける。
「それは……」
「……まあ、ゲームに参加しない俺が偉そうに言った所で何の意味も無いな」
このまま詰め寄るかと思えば、シンは簡単に引いてしまう。あれこれ口に出して発破をかけることも出来たが、シン自身が言っているように彼はゲームに参加しない外野に過ぎない。説教を垂れる程自分は偉いとも思っていないし、自分と一誠は上下が出来るような間柄だとも思っていない。
「思ったことがつい口に出た。悪いな」
「い、いや、別にこっちのことを思ってのことだし……」
あっさりと謝られてしまうと一誠も感情の矛先を失ってしまい、少々腑に落ちないと感じながらも許すしかなくなってしまう。
「それで実際どうするんだ？　ゲームまで時間はあまり無いぞ？」
ドライグの不調をどうカバーするのか一誠に訊く。
「うーん……やれるとしたら新しい能力をもっと洗練させるしか思い付かねぇ……持続

時間を延ばすとか特性の切り替えをスムーズにするとか技のチャージ時間を出来るだけ短縮させるとか……」

何だかんだ一誠も色々と考えているのが伝わって来る。同時に新しい能力を上手く使いこなせていないのを不安視しているのも伝わる。

一誠の中では新能力は強いがまだ付け焼き刃。サイラオーグに勝てるレベルには達していない。

良くも悪くも無難な方法である。だが、それも仕方のないこと。シンにも言えることだが、ある程度若しくは命の危機に瀕する状況でないと新たな力が目覚めない。

土壇場で覚醒するなど都合の良いと思われるかもしれないが、そこまで追い詰められないと入らないスイッチが存在するのだ。

シンや一誠とて手に入るならすんなりと新しい能力を手に入れたい。マゾヒズムに溢れる能力の獲得など二人共望んでおらず趣味でもない。だが、それは叶わぬ願いであり対価のように苦痛や苦難を体験しなければならないのだ。

「通用するとしても初見か極短い時間だな」

「そう、それ！　俺も思ってたんだよ……多分、一つでも特化能力を見せたら気付かれる」

レーティングゲームがどんな内容になるかはまだ分からないが、もし連戦があるとし

たら切り札の『赤龍帝の三叉成駒』を切れるタイミングは限られる。出来ることならサイラオーグとの戦いでの一発勝負、それが最も望ましい。それ以外で使用してしまえば初見ではないサイラオーグに通じる自信が無かった。

「サイラオーグさん、手合わせのときもそうだけど俺のことかなり評価していてくれたからなぁ。レーティングゲームまでの間に新しい能力が増えていることも予想しているかもしれない。京都で英雄派とドンパチやったことも耳に入っているだろうし」

慢心とは無縁の性格をしているサイラオーグ。隙を衝くにしても慎重に考えなければならない。

一誠の口からサイラオーグの名前が出たので、この流れで話を聞こうとする。

「――そういえば、お前と部長はサイラオーグさんの執事に呼び出されたという話を聞いたが？　大丈夫だったか？　不利になるような話はしていないよな？」

「いや、部長がいたからそんなヘマなんてしてねぇよ。それに、執事さんが俺たちを呼んだのはレーティングゲーム絡みじゃなくて、サイラオーグさんのお母さんが――」

「母親？」

一誠は口を滑らせたと思ったのか顔を顰める。あまりペラペラと表に出すような話でないことは分かる。だが、聞いてしまったからにはシンも追究しなければならない。

「ゲームの話では無くとサイラオーグさんの身内関連の話か……興味深いな」

話に喰い付いた様子を見せると、一誠は動揺して視線を左右に動かす。話すべきか話さないべきか迷いを表していた。

「他に言わないから安心しろ」

一誠は腕を組みながら眉間に皺が寄るぐらいに強く目を閉じながら首を傾ける。これでもかと言わんばかりの悩むポーズ。その状態のまま一誠は一分ぐらい黙り込んでいた。

やがて、ポーズを解きシンの方へ向き直る。

「あのな……」

シンの口の固さを信じて何があったのかを話し出す。

最初はサイラオーグの生い立ちと母親に関することであった。これはサーゼクスから聞いた内容とほぼ同じである。

次に聞かされたのは、そのサイラオーグの母が現在病に冒されており、シトリー領の医療機関で治療を受けているとのこと。シトリー領は自然が豊かで医療機関が充実していることで有名とのこと。シンもソーナのレーティングゲームに参加するということでシトリー領へ行ったことがある。あまり外を出歩かなかったが、一誠が言うように確かに自然が多かった。

サイラオーグの母が罹っている病は治療方法がまだ不明の難病であり、深い眠りに

陥ってしまい目を覚まさなくなり、やがて体が衰弱して生命維持装置無しで生きられなくなり、最後は死に至るというもの。

サイラオーグから生き急いでいるような雰囲気を感じ取ったのは、もしかしたら病の母親が理由の一つなのかもしれない、とシンは思う。

死んだように眠り続ける母が本当の死を迎える前に自分の夢や理想を達成させる。母が死ぬ日は分からない故になるべく無駄を省き、困難であろうが最も理想に近付く道、最も強くなれる道を模索している最中なのかもしれない。

そう考えるとバアル家の者たちとなるべく諍いを避けようとするのも納得である。限りある時間の無駄だ。

「サイラオーグさんの事情は分かった。それでサイラオーグさんの母親に何の為に会わせられたんだ？」

理由を聞くと一誠は気不味そうに口をもごもごと動かす。言い難い理由があるらしい。

「……してくれって」

「何？」

小声だったので聞き取れなかった。もう一度、声を大きくして言うように頼む。

「サイラオーグのお母さんに……『乳語翻訳』してくれって……」

「……どうやらその執事も看病で相当参っているらしいな」

トチ狂った理由にシンは同情を込めた感想を言う。辛辣とも言える台詞でもあったが。

「いやいやいや！　執事さんはちゃんとまともだったって！　本当に！　おかしいと思うのはしょうがないけど！　しょうがないけどもっ！」

一誠も正気の沙汰――もとい大胆な提案であると理解しているらしい。

一誠が説明するに、一誠が女性の胸関連で様々な奇跡を起こしているという噂が一人歩きし、更には『乳語翻訳』という技も持っているという話も広まっているとのこと。その話を聞いた執事は、その力が有れば深く眠っているサイラオーグの母の声無き声を拾えるのではないかと思い、リアスの母経由でリアスと一誠に頼んで来たという。

「俺も正直面食らったよ……だってあれは、その……エロを基にした技だし……しかも、相手はサイラオーグさんのお母さんだし……病人だし……」

あまり気乗りしなかったという当時の様子が伝わって来る。その辺りの線引きはきちんとある模様。そういったモラルがあるのに何で変な技を思い付くのか、とは言わない。個々で定めたルールや線引きは本人しか分からない独自のもの。シンとて他人には理解出来ないルールを持っている。

「やってはみたんだな？」

「まあな。頼まれたし」
一誠の眉間に微かに皺が寄る。その表情が結果を物語っていた。
「――ダメだったか」
「……ああ。禁手で出力を上げてやっても何も訊こえなかった。技は完璧に入っていたけど、どうやら病気で意識を失っていると訊こえないみたいだ」
禁手まで使用したことに少し驚く。だが、それを以てしても駄目であったとのこと。不発のパターンも知れて無駄ではなかった、という考えが頭を過ったが口には出さなかった。言えば薄情と怒りを買うことになると思ったからである。
何度か試してみた後にサイラオーグが病室に現れたのでそこで終わりになったと一誠は語った。
「何かさ……お前にサイラオーグさんとのこと話していて改めて思ったよ。やっぱ、このままじゃいけないって。同情とかを抱えて戦っても勝てると思えない相手だっていうのに……。間薙の言う通り俺たちの調子が不完全なら勝てない」
サイラオーグとの会話を思い出し、心身の強さを再認識して気持ちを引き締める一誠。
『確かにその通りだな……』
一誠の気持ちはドライグにも伝わっていた。

『俺も心を強く持たなければいけない……お、俺も克服すべきなんだ……！　お、恐れたり泣いたりしている場合じゃない……！』

ドライグも強い意思を見せる――が、声が思い切り震えていた。

『こ、怖くない！　怖くないぞ……！　乳や胸がどうした……！　俺は怖くなんてないもんっ！』

「おい。危うくなってきているぞ」

声は雄々しいのに言葉遣いが何故か幼稚になり出している。精神を守る為なのかしらないが傍から見れば危険信号であった。

『だ、大丈夫だ……！　俺は大丈夫！　これぐらい克服してみせるぞ……！』

「ドライグ！　取り敢えず一旦落ち着こう！　深呼吸しよう、深呼吸！」

危うさを感じさせるやる気を出すドライグを一誠は落ち着かせようとする。

二人のやりとりを傍から見ていたシンは、『不安』という言葉しか頭に浮かばなかった。

男女、結論

密度の濃い一日もようやく終わりを見せ、やるべき事をほぼやり尽くしたシンは自室の簡素なベッドに腰を下ろしていた。

仲魔は各々好きな事をしており、シン一人だけ。数少ない自由な時間と言える。

シンの視線がチラリと向けられる。ベッドの上に無造作に置かれた携帯電話。それを目にした途端、シンは無意識の内に頭の中でカウントダウンを始めていた。

先に述べたようにやるべき事はほぼやり尽くした。ほぼということは全部ではない。これから起こることは、その残された僅かな部分である。

６０から始まったカウントダウンがそろそろゼロを迎えようとする。

（5、4、3、2、1……）

脳内でゼロと呟くと同時に携帯電話が鳴り始めた。

誰が掛けているのかは分かっている。人間界へ留学している妹のことが心配で心配で堪らないライザーからの定期報告の催促である。

色々とだらしない印象を受けるライザーであるが、この電話だけはいつも決まった時間に正確に掛かってくる。予定通りというのは悪くないが、それをライザーという男が

やっていると思うと――

（気色悪いな）

そんな感想を心の中で思ってしまい、鳴っている携帯電話を手に取ると――

「気色悪いな」

『いきなり喧嘩を売っているのか！　お前っ！』

――開口一番で思っていたことを遠慮なく出す。当然ながらいきなりそんなことを言われたライザーは激怒した。

初撃をシンの方から行ったこともあり、そこからライザーの怒涛の罵声が放たれ続ける。

最初のうちは一言一言耳で拾って時折相槌を打っていたが、最近は最早慣れてしまいシンはライザーの罵声を完全に聞き流し、向こうが喋っている間は音一つ漏らさない沈黙に徹する。

気が済むまで勝手に喋らせ続けるシン。

『あの……そろそろ本題に入られては……？　ライザー様が怒鳴ってばかりいられても話は進みませんので』

ライザーの罵声に全く意識を向けていなかったことで、電話向こうのユーベルーナがおずおずとライザーを諌める声を拾った。

眷属の、しかも『女王』であるユーベルーナに宥められたことでライザーの溜飲も下がったのか溜息を吐いた後、声のトーンが下がる。
『ちっ。お前のせいで俺の貴重な時間を無駄にした』
「ああ、そうか」
シンの平然とした声が癪に障ったのかミシリという電話を握り潰さんとする音が聞こえてきた。
『電話越しでもムカつく野郎だ……！』
「それはどうも」
これが基本的な二人の会話の様子である。ライザーが不死鳥らしく熱の入った喋り方に対しシンは常に冷静で感情の揺らぎを全く見せないという対極。
どちらも相手に遠慮することなく喋る。別にこいつになら嫌われてもどうとも思わないという二人の考えがこの遠慮の無さとなっている。
ある意味では一誠やリアスたちよりも気安い関係と言えるが、それ以上に破綻し易い関係でもあった。何か間違えれば二人の関係はすぐに断ち切られる綱渡り状態。そんな状態でも繋がりを惜しむことなく思ったことを口に出す。
『……それで？　今日もレイヴェルは学校生活を楽しめていたのか？』
「少なくとも普段通りだったな」

一旦感情を押し込めて本題に入る。
『本当にそうか？　ちゃんと調べたか？　レイヴェルがもしもイジメにあっていたとしたらいじめっ子共々お前も燃やすぞ？』
「燃やすならいじめっ子だけにしておけ」
『連帯責任だ！』
どう考えても言葉の使いどころを間違っているが、それを指摘すると話が逸れてしまうので黙っておく。
「前にも言ったが、レイヴェルはクラスにすっかり馴染んでいる。それどころか中心的な存在になりつつあるみたいだ」
彼女をフォローしている小猫とギャスパーから聞いた。容姿もあるが性格の方も人を惹きつけるらしくレイヴェルの周りには常に人が居る状態とのこと。
『ほう……？　流石は我が妹。いや、フェニックスの血を継ぐ者だ』
レイヴェルを褒められると我がことのように喜ぶライザー。一気に機嫌が良くなる。
『それで？　他にはどんな感じだ？』
「……毎回言っているが、そんなに気になるなら妹と直接話せばいいんじゃないか？」
『それが出来たら苦労しない！』
レイヴェルも言っていたが、又聞きしたような偏見に満ちた人間界へのにわか知識を

晒したことでレイヴェルを不機嫌にさせて以降全く会話の無い状態だと言う。
『これが反抗期というやつか……』
妹とどう接していいのか分からなくなってしまったのか本気で困ったような声を洩らす。
「妹であると同時に眷属でもあるだろうが。兄としても主としてもしっかりしろ」
『眷属……？　ああ、そうか。お前はまだ知らないのか。レイヴェルは俺の『僧侶』をとっくに止めている』
「止めた？　眷属は止められるものなのか？」
主から独立するという話は聞いた記憶があるが、眷属を止められるというのは初耳であった。
『俺が不調だったときに母上と未使用の『僧侶』の駒とトレードした――というかレイヴェルの方から言ってきた。トレードというのは『王』同士が了承すれば同じ種類の駒と交換が出来るルールだ。母上はレーティングゲームをしないから実質フリーになっている』
「成程」
悪魔間での新たなルールを知れたが、あまりこちらには関係のない話である。リアスはトレードをまず行わない。

その後のシンとライザーの会話は特にこれといって重要なものではなかった。最近学園祭の準備を行っており、レイヴェルもそれを手伝っているという近況報告。
言うべきことは全て伝え、これで会話が終わるかと思ったとき、シンの方からライザーにある話題を振る。
「――一つ聞きたいが、フェニックスはバアルとは仲が良いのか？」
大王と称され、上級悪魔たちに強い影響力を持つバアル家。知り合いにもその影響が及んでいないのか確かめたくなった。
『何だ急に？　……バアル家相手に何かをやらかしたか？』
ライザーの声から緊張が伝わって来る。同じ上級悪魔という立場でもバアル家はやはり特別なのが分かる。
「やらかしてはいない。この間、サイラオーグさんと会ったときにその名が出て来たから気になっただけだ」
戦ったというのは黙っておく。言ったら話が脱線しそうに思えたので。
「やっぱり仲は良いのか？　同じ上級悪魔同士で」
『生憎、バアル家に媚を売る程フェニックス家は困ってはいないんだよ』
ライザーの口振りからしてあまりバアル家を良く思っていない様子。
『関わりはある。冥界で生きていく以上バアル家とはどうしても繋がりを持ってしまう

からな。だが、それでも最低限には留めてある』
「サイラオーグさんと付き合いがあるのは良いのか？」
『サイラオーグとは俺個人との付き合いだ。それに、あれだ……サイラオーグは――』
「色々と事情は聞いている」
『それなら話は早い。サイラオーグの身の上話はそれなりに有名だ。それを知っているからこそ父上も兄上たちも何も言って来ない』
　言い方は悪いが、サイラオーグは次期当主だが本家こと大王派から軽んじられているせいで、派閥に取り込むような真似はしてこないと思われているのだろう。
『……ただ、最近は少し目を付けられているようだ。バアル家からしたら俺とサイラオーグの繋がりが気に入らないのかもしれない』
　フェニックス家はフェニックスの涙により安定な収入を得ている。レーティングゲームや『禍の団』との諍いがある限り需要は伸びていく。それはつまりフェニックス家の繁栄に繋がる。
　三男とはいえ今後も？栄していくだろうフェニックス家がサイラオーグと交友があることで、後ろ盾の一人になるかもしれない可能性を危惧している、というライザーの推測を聞かされる。
　もしかしたら、サイラオーグに対する大王派の目が厳しくなった遠因の一つである可

能性があった。
『……バアル家は筋金入りの純血主義者だ。古くから続く上級悪魔以外は悪魔に非ず、を素で言えるぐらいの。あまり大きい声では言えないが悪魔至上主義の旧魔王派と思想の具合は変わらない。……正直、引く』
「お前も純血主義者じゃなかったか？」
　リアスとの結婚を望んでいた男とは思えない台詞である。
『ふん。俺はバアル家程頭が固くないんだよ。それにお前みたいな一般人には理解出来ないかもしれないが、受け継いだ伝統や血を跡に繋げていくのは貴族としての義務みたいなもんだ。あと――』
　そこで一旦喋るのを止める。無言の中に言うか、言わないかの葛藤があった。
『あと……転生悪魔にやられておいて、そいつを認めないなんてダサいだろうが……』
　言っていて恥ずかしかったのか、早口な上に段々と声が小さくなっていった。
「……」
『……』
「……」
『……』
「……」

『何か言えっ！』

気遣った沈黙が反って羞恥心を煽ることとなり、ライザーは堪らず怒鳴る。

「そうか」

『が、ぐっ……！　ぐぉ……！　ぐぅぅぅ！』

ライザーの悶える声。淡々とした答えに助かる反面、素っ気無さ過ぎるせいで折角恥を偲んで本音を喋った甲斐の無さ。相反する感情によりどう反応すべきか苦悶している。

「そんなことよりだ」

『そんなことだとこの野郎！　もう知らん！　切るぞ！』

へそを曲げたライザーが電話を切ろうとする直前に、シンは気になっていたことを訊く。

「ディハウザーさんもやはり大王派なのか？」

電話はまだ切られていない。その問い掛けにライザーの動きは止まっていた。

『……何でそこで皇帝ベリアルの名を出す？』

「サイラオーグさんのアドバイザーだろ？　ディハウザーさんは。……言い方は悪いが大王派とパイプを持つ為にしているのか、或いは大王派と繋がりがあるからアドバイザーとして選ばれたのか気になっただけだ」

　ディハウザーと話していてサイラオーグに親身になっているのは分かっている。それは純粋にサイラオーグを思ってのことか、それとも目的があってのことなのか少し気になる。裏表があるからといって嫌悪することはないが、ディハウザーの立ち位置が知りたかった。
『ディハウザー・ベリアルは千年に一人の逸材とまで称される魔王にも匹敵する実力者だ。彼の強さなら一々権力者にすり寄ってパイプを作る必要もない。向こうからやって来るからな』
「なら違うのか？」
『ディハウザー・ベリアルが大王派かどうかは知らないが、彼の父親が大王派寄りの派閥に入っているのは知っている』
　いまいち判断し難い何とも微妙な情報である。
「ディハウザーさんは例外で、ベリアル家自体はそこまで特別ではないということか」
『貧乏貴族というやつだ。領土は特別栄えておらず、特産品を売ろうにもそれを宣伝する金が無い。まあ、珍しくも無い話だ』
　成り上がることよりもそれを維持し続けることの方が困難とは良く聞く。
『ただ、領民からは慕われていたそうだ。金が無いからといって領民から搾り取るような真似はしなかったらしい。一族集まって領土や領民たちの生活を守っていたとか

……言っておくがフェニックス家も領民から慕われてるからな？　ちゃんと与えるものは与えているからな？』
「そんなことは聞いていない」
　変なところで対抗意識を見せるライザーにシンは呆れた反応をする。
『……そんな貧困に喘いでいたが、ディハウザー・ベリアルがレーティングゲームで頭角を現すようになって一変した。彼のおかげで領土の宣伝も出来たし、ゲームを通じて色々な貴族たちとの繋がりも出来た。……大王派とのパイプが出来たのもその頃だろうな』
　豊かではない領土を豊かにし、安定させる為に大王派に属したとしてもおかしくはない。思想まで共有しているかは分からない。大王派の権力が魅力的に見えても不思議ではない境遇でもあった。
　ディハウザーの情報が色々と手に入ったが、ディハウザーの隠し事に関する情報は無いし立ち位置もまだ判断出来ない。これ以上知るにはディハウザー本人か彼の身内に訊く必要がある。
「そうか分かった。情報、感謝する」
『……お前、本当は皇帝ベリアルと何かあったんじゃないか？』
　ライザーが疑ってくる。シン自身も不自然なタイミングだったかもしれないと思っ

ているので、疑問を抱かせるのは仕方のないことであった。
「何も」
感情の揺れ一つ無い完璧なまでに平坦な声。本当にも嘘にも聞こえてしまう、相手に迷いを与えるような返答であった。
『……まあいい。せいぜい皇帝ベリアルの不興を買って叩き潰されないようにでもしておけ』
ライザーは迷った結果、疑いを保留にして忠告のような嫌味のような言葉を送って電話を切った。
（さて、どうするか……）
自分が首を突っ込むような立場では無いことは自覚しているが、知ってしまったからには何かしら考えるべきだとは思う。
徒労に終わるかもしれないが、これからどうするべきか考えようとした矢先、手の中の携帯電話が震える。
ディスプレイを見ると掛けてきた相手は一誠であった。
考えるのは後回しにし、シンは電話に出る。
「もしもし――」

◇

翌日の夜。シンはグレモリー領の修行場こと地下トレーニングルームに居た。居るのはシンだけでなく当然リアスと眷属たちも揃っている。

ロスヴァイセとゼノヴィアは離れた場所で一緒にトレーニングをし、ギャスパーや小猫はシンの仲魔たちとそれぞれのサポートを行っている。アーシアはイリナと共に神聖の術式について勉強。リアスと朱乃は見守りながら時折アドバイスを行っていた。

そして、木場と一誠はシンのすぐ傍に居り、近くではレイヴェルが見学している。

「僕が誘ったときは断ったのに」

前回はダメで今回は参加してきたシンに木場は少し恨めし気に見る。

「前回は気が乗らなかった。今回は乗った。それだけだ」

木場にも言ったが、前日に散々総司に斬られていたので木場と一緒にトレーニングする気が起きなかった。日を置けば気分も変わる。

「恨みますよ、師匠……」

原因である総司に対し、木場は冗談っぽく恨み言を言う。

ふと、シンはあることに気付く。木場の両手に包帯が巻かれていた。今日の学校ではそんなものは巻いていなかった。

「ああ、これ？」
木場がシンの視線に気付き、苦笑を浮かべる。
「時間があったから、少しでも慣れさせようと頑張ってみたんだけど油断しちゃったよ」
ペットでも手懐けるような台詞を喋っているが、木場が指しているものはそんな可愛らしいものではない。
木場は亜空間から一振りの剣を取り出す。シンはその剣を知っている。ジークフリートから体を張って奪い取った二振りの魔剣の内の一本――ノートゥングである。
木場は取り出したノートゥングを握る。
「とんでもないじゃじゃ馬だよ、これは。使い手を認めない限りまともに振らせてもくれない」
「そう言って握ってるじゃん」
一誠の言う通り、実際に木場はノートゥングの柄を握っている。
「ああ、これはね――」
そのとき、ゾクリとする妖しい気をノートゥングが放つ。それに危険を感じたシンと一誠は木場にノートゥングを手放すように言おうとするが、その前に木場は柄から手を離していた。
木場の手から滑り落ちたノートゥング。地面に刺さると音も無く鍔本まで沈むよう

に突き刺さる。相変わらずの凄まじい切れ味であった。一誠もその危険過ぎる切れ味に目を?いている。

木場の手に巻かれていた包帯が切れて落ちる。掌には治り掛けの傷が幾つも刻まれていた。

「偶にこういうことをするから質が悪いよ……」

木場は刺さったノートゥングを抜くことはせず、そのまま亜空間へ戻した。

「……なあ?　もしかして、あのまま握ってたら……」

「まあ、指が飛んでいたかもね」

うへぇ、と一誠は顔を顰めた。魔剣の名に恥じない凶暴性である。

ジークフリートから魔剣を奪取したときから木場は魔剣の力を己のものにする為に魔剣に使い手として認めさせようとしたが、中々険しい道のりであった。

ノートゥングは容赦無く木場の指を斬り落とそうとし、もう一本のダインスレイブは木場の手を凍傷で壊死させようとしてくる。最初のうちは満足に握らせてもらうことすら出来なかった。

それでも木場が剣士として中々の実力があると魔剣が判断すると振るうことを許されたが、今度は振り方や扱い方が気に入られないと先程のように嫌がらせをしてくる。ノートゥングならば指や掌をざっくりと切り、ダインスレイブは超低温により柄に手を

張り付けさせてくる。
　木場の掌の傷はそれによって出来たもので、アーシアの神器で治療を受けるぐらい深い傷を負う場合もあった。
「敵ながら大したものさ、ジークフリートは。あれだけ使い難い魔剣を五本も同時に扱えるんだから」
　ジークフリートの実力を素直に認める木場だが表情は真剣そのもの。実力を認めるということは同時に自分との差を認めるということ。実際、ジークフリートはシン、木場、ゼノヴィア三人相手に互角以上の戦いをしていた。
「出来ることならレーティングゲームまでに使いこなせるようになっておきたいけど、まだまだ時間が掛かりそうだよ」
　性能は木場が神器で創造する聖剣、魔剣を上回っているが、使用するリスクは高い。戦闘中に魔剣に裏切られて敗北しようものなら死ぬまで恥として残る。
「じゃあ、今回の特訓は魔剣を使いこなす為のものか？」
「それも大事だけど、もう一つの方さ」
「ああ、新しい技の方ね」
「早く形にしたいとね」
　一誠は知っている様子だが、シンは木場がどんな技を編み出そうとしているのか知ら

ない。
「新しい技を編み出すのはいいが、俺に協力出来ることなのか？」
「大丈夫。簡単なことだよ」
　すると、木場が神器により剣を創造する。だが、その剣は木場が普段使っている魔剣ではなく聖剣であった。
「君とイッセー君で僕を徹底的に追い込むだけで良いんだ」
「そういうことか」
　シンプル過ぎる説明にシンは即座に納得する。同時に木場がどんな技を編み出そうとしているのか凡そ察する。
「合図はいるか？」
「イッセー君の禁手の発動が合図だよ」
　シンは一誠の方を見る。いつの間にか『赤龍帝の籠手』を装備しており、禁手までのカウントダウンも始まっていた。
　カウントダウンの最中三人の会話が途切れる。構えなどをとっていないが、戦いに向けての集中力を高めている。
　三人が実戦に近い模擬戦闘を行うのが周りも分かったのか自分たちの特訓を一旦止め、三人の戦いに注目する。

レイヴェルに至ってはファンとして一誠とシンがタッグで戦う様子を最前列で見ることが出来る垂涎もののシチュエーションに興奮し過ぎて顔を真っ赤に染めている。

カウントダウンがゼロへと近付く。そして――

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ！』

禁手と同時に一誠は真っ直ぐ木場へ飛び掛かる。魔力の噴射による加速を得て繰り出される先手の突き。

木場はギリギリまでそれを見極め、頭を傾けることで紙一重でそれを避けてみせた。

木場の見切りは称賛に値するものであったが、木場本人は全く余裕など無い。まるで暴風が耳元を突き抜けていったかのような暴力的な風切り音。掠めてもいないのに木場の精神をごっそりと削り取っていく。

突き出していた拳を素早く引き、一誠は次弾を繰り出そうとする。

木場は反射的に聖剣による防御を選ぼうとしてしまった。初撃によるプレッシャーが木場に比較的安全な方法を本能的に取らせようとしている。

一誠が拳を強く握る様子がスローモーションのように感じられた。集中力が増している証拠でもある。

固く握られた拳が放たれる――かと思ったとき、一誠は何故か拳を打たない。

完全に来るタイミングだと思っていた木場は虚を衝かれる。次の瞬間、足から脳天ま

で突き抜けていく痛みが木場を襲った。
膝から下が斬り飛ばされたのかと錯覚するような痛み。その正体は側面へ回り込んでいたシンの膝裏へのローキック。
良くも悪くも目立つ一誠をデコイにしてシンは密かに移動し、目も意識も離せない内に攻撃する。しかも、『騎士』にとって持ち味を活かす為に必要な足を狙った。
木場の顔に脂汗が浮かぶ。情け容赦の無いシンの蹴りは思考を乱す程の苦痛を生む。
痛みという雑念により働きが鈍る頭を動かしながら木場は一旦二人から離れようとするが、反射と速度が鈍っている今の木場をシンが捕えるのは容易いことであり、木場の肩を掴み、握る。
指先が筋肉の中へ沈み込んでいき、骨を圧迫する。
肉と骨を掴まれる激痛により木場の動きは一瞬だったが完全に止まってしまい、そこへすかさず一誠の拳が飛ぶ。
木場は気力を振り絞って聖剣で防御しようとするが、一誠の拳は木場の聖剣を易々と打ち砕き、木場の顔面を突く――手前で寸止めした。
一誠が寸止めしたのを見て、シンは木場の肩から手を離す。木場はその場で片膝を突いた。
木場の顔は冷や汗と脂汗で濡れ、血の気の失せた死人と見間違いそうな顔色をしてい

る。
「木場？　大丈夫か？」
やり過ぎたと思った一誠は木場を心配して声を掛ける。
「一瞬だけで本気で死ぬかと思ったよ……甘く見ていたつもりはなかったけど、イッセー君と間薙君二人掛かりだとここまで手も足も出ないなんて……」
二人の実力に敬意を持っている反面、木場は内心ショックであった。少しはやり合えると思っていたが、それが思い上がりだと思い知らされるような瞬殺。これが実戦でなかったことに心から安堵してしまう。
「やっぱり一人ずつ交代でやった方が良いか？」
一誠が無難な提案をしてきた。一誠の言っていることは実に正しい。一瞬で負けてしまうようなら特訓にもならないし、技を完成させる暇も無い。
「いや……このままでお願いするよ」
木場は立ち上がり、深呼吸を繰り返す。すると、悪かった顔色が徐々に戻っていく。
「これぐらい追い詰められないと意味が無いんだ。実際、頭の奥底で何かが開きそうな感覚もあったんだ。このまま続けてくれないか？」
シンと一誠は顔を見合わせる。本人が望んでいる以上、これ以上気遣うのは野暮である。

「――分かった。次はもっとマジでやる」
「……死んでも恨むな」
次からはもっと容赦無く攻めてくる二人に対し、木場は微笑を見せるが余裕は感じられない。
「お手柔らかに……とは言わないよ」

◇

明くる日の朝。シンは普段通りに登校する。だが、次に見えた光景に目を細めた。
一誠たちが登校しているのだが、一誠とリアスの間にやけに距離がある。一誠は情けない表情をしており、アーシアはオロオロとしている。
一誠とリアスの間にあった不穏な空気が悪化して表面化までしている。レーティングゲームも近い筈なのに主と眷属の間でトラブルが起こっているのは笑えない状況であった。
（どうしたものか）
事情を確認するべきかどうか迷う。両者の問題に対して、シンが首を突っ込むのは介入し過ぎだと思ったからだ。しかし、いつかは爆発するかもしれないと分かっていた不

発弾をみすみす放置していたことにも多少は責任を感じる。
時間があれば一誠かリアスに何があったのかを確認しようと決めた。
「お、おはようございますぅう」
「ヒ～ホ～。おはよう～」
最初の一言は元気良く、後半になるにつれて小声になっていく挨拶と間延びした挨拶。
「おはよう」
いつものギャスパーとジャックランタンの挨拶にシンは普段通りに返す。
「あ、あの……」
ギャスパーが何か言いたそうにしている。その視線は一誠とリアスの方を何度も往復していた。
「イ、・イッセー先輩と部長にな、何かあったんですか？」
ギャスパーにも二人の不和が分かり、心配そうに聞いてくる。
「トラブルがあったのは間違いなさそうだが理由は分からない」
ギャスパーの表情はやはり不安のままであった。
「だ、大丈夫でしょうか……？」
「二人も馬鹿じゃない。ゲームまでには解消する筈だ」

宥めるように言うと、ギャスパーは何故か今度は落ち込んだ表情になる。
「間薙先輩は、やっぱり冷静ですね」
「そうか？」
「そ、そうですよ……僕なんて見ただけで不安で不安で……イッセー先輩や部長にどれだけ寄り掛かっていたのか情けないくらい分かるんですぅぅ……」
二人の様子がおかしいのが分かったことで必要以上に動揺している自分の弱さに不甲斐なさを覚えているギャスパー。
「動揺することはおかしくない。そもそも俺はゲームに参加しない。俺とお前は立場が違う」
参加者ではない傍観者だからこそ平然としていられると説明するが、ギャスパーにはそれが謙遜にしか見えなかった。
「そ、それでも憧れます……。もし、僕が立派な男に成れるならイッセー先輩のような熱くなれる男か間薙先輩みたいなクールな男になりたいですぅぅ……」
随分と両極端な希望だな、と思ったが口には出さない。ギャスパーは至って真剣に言っている。
「――別に俺は冷静な訳じゃない」
「そ、そうとしか見えないです」

「感情表現が下手くそなだけだ」
自分を下げたように評する。だが、ギャスパーはその評に対して不満な顔付きとなる。
「そ、そんなこと決してありません……！　間薙先輩は素晴らしい先輩です！」
シンが自らを下げることに反発するようにギャスパーは上げてくる。
「ギャスパ～はシンのこと大好きだね～」
茶化すように口を挟んでくるジャックランタン。
「は、はい！　間薙先輩大好きです！」
釣られて言ってしまったギャスパーの言葉に周囲が瞬時に騒めいた。
「朝から告白!?」
「お、俺のギャスパー君が……」
「いや、僕のギャスパーだよ」
「違う。私のよ！」
勘違いが波紋のように広がっていき収拾がつかなくなっていく。
誤解を解こうとすれば泥沼になることは分かっていたので、シンは全てを放棄して足早に学園内へ入っていった。
こうしてシンに関する良からぬ噂が一つ増えるのであった。

◇

その日、シンは生徒会の仕事として職員室に資料を置きに来ていた。
「よお」
資料を置いたシンに声を掛けて来たのはアザゼル。片手には丸めた新聞紙が握られている。
「いつ見ても忙しく働いてんなー」
感心、感心と笑うアザゼル。
「そういう先生は――」
シンはチラリとアザゼルの机の上を見た。資料を思わしき書類の束。良く見れば何枚もの写真が添付されており、写真の人物には見覚えがあった。サイラオーグとの対戦のときにサイラオーグを見守っていた眷属の一人である。
「――働いていますね。次の対戦相手の資料ですか？」
「おっと」
アザゼルは資料の上に新聞を放って隠す。
「……皆には言うなよ？　こうやって地道にデータを纏めているのは俺のキャラじゃねぇ」

アドバイザーとしてちゃんと仕事を熟しているアザゼルは、陰でしている努力をあまり他人には知られたくない様子。
何気なく置かれた新聞の表紙を見る。
『おっぱいドラゴン、スイッチをぶちゅうううっと吸う!?』
酷い見出しからも分かることだが、人間界の新聞ではなく冥界の新聞であった。
「ははははっ。酷い見出しだろ？」
シンが呆れている様子を見てアザゼルは面白そうに笑う。
この前、ゲーム前のリアスとサイラオーグの合同記者会見があり、その際に記者からインタビューされたときにポロっと洩らした言葉が元となってこのような酷い見出しが出来上がったとのこと。
「真面目な雰囲気が一気にぶち壊されて笑い一色になったのは中々愉快だったな」
アザゼルは思い出し笑いをする。
「健全な生徒を捕まえて、何を吹き込むつもりですか？　アザゼル先生」
話している二人の姿が目に入ったロスヴァイセは話に入ってくる。
「人聞きの悪い……俺は悩み事を抱えているシンの相談相手になってやろうと思っただけだぜ？」
「悩み事って……普段通りの間薙君に見えますが？」

「はぁ……青いなぁ。良く見ろ。いつも以上に無表情だぞ、こいつ」
「ええ……そんなことを言われても……」
ロスヴァイセはジッとシンの顔を見る。見られているので臆せず見返す。
少しの間、見つめ合っていたが先にロスヴァイセの方が恥ずかしくなって目を逸らした。そして、そそくさとアザゼルの方へ行き、小声で話す。
「いつも通りに見えましたが……？」
「見る目ねぇなー。何年ヴァルキリーやってきたんだ？　もっと男と付き合え」
「そ、そんなこと関係ないじゃないですか！　セクハラですよセクハラ！」
ロスヴァイセが涙目になって反論してくるが、アザゼルはロスヴァイセを無視してシンと話す。
「原因はあれか？　イッセーとリアスのことか？」
「無視しないで下さい！」
「――色々と良く視ていますね」
「可愛い生徒の変化に目敏く気付くのが良い先生なんでな」
「成程」
「何で二人共無視するんですか!?」
ロスヴァイセが会話に入り込もうとするが、二人は入る隙間を与えずに話を続ける。

「理由は聞いたか？」
「いえ、何も。ただ、前から少しピリピリしていた感じはしました」
「だな。あーあ。来るべき時が来たって感じだな。タイミングは最悪だが」
　前以って知っているだけあって二人の会話は早い。ロスヴァイセは内容を理解出来ずに困惑している。
「あ、あの。リアスさんとイッセー君に何かあったんですか……？」
「男女の問題だ。それともお前が解決してくれるか？　ロスヴァイセ先生？」
「え、えーと……その……あの……」
　女性としての経験不足を自覚しているロスヴァイセは、アザゼルに何と言っていいのか分からず顔だけ赤くしながら二文字以上の言葉を喋らなくなってしまう。
「仲直りするに越したことはないですが、外野があれこれ言えば余計に拗れるだけじゃないですか？」
　見かねて助け舟を出すシン。シンがアザゼルに話し掛けたことでロスヴァイセはホッとした表情になっていた。
「まあ、その可能性は大いにあるわな。ただ、放っておくのもなぁ……今は燻っている状態だがそのまま鎮火すりゃあいいが、今以上に燃え上がる危険もある」
　見守るべきか口を出すべきか。デリケートな問題のせいで答えは中々出せない。

「取り敢えず放課後にミーティングがあるし、そこで様子見だ。あんまり酷いもんならリアスとイッセーに説教の一つでもしないとな。あんまり私情で周りを心配させんな、ってな感じの」
「一応期待しています」
「一言余計だ」

◇

放課後。生徒会の仕事を一段落させ、シンはソーナに許可を貰ってオカルト研究部部室へと向かう。
朝以上に酷くなっていないことを願いながら部室を目指すとすれ違う。泣きながら走り去るリアスと。
自分の願いは儚いものであったことを知り、シンはオカルト研究部の部室へ入った。
狼狽している一誠と彼に対して批判的な眼差しを向けている眷属たち。唯一レイヴェルだけが今にも泣き出しそうな表情でオロオロしている。
「あ、間薙……」
シンが部室に入ってきたことに気付き、一誠は情けない表情をシンへ向ける。

「取り敢えず、事情を聞かせてくれ」
何があったのか把握しなければ結論も判断も出せない。
「えーと……」
一誠はシンが不在の間に何があったのかを説明する。
それを踏まえてのシンの判断は――
「この馬鹿が」
「おおう……」
――一誠は馬鹿だという結論であった。

相談、夕飯

事の発端はシンが部室を訪れる数分前まで遡る。

ミーティングを終え、アザゼルとロスヴァイセが教師としての仕事が残っているので職員室へ戻った後、一誠たちはいつも通り文化祭に向けての準備を進めていた。

すると投写用の魔法陣が出現し、そこからフェニックス家の現当主の妻、つまりライザーとレイヴェルの母親が投影された。

目的としては今まで出来なかったリアスへの挨拶である。本人は直接するのが礼儀だと分かっていたが、今は情勢のせいでフェニックスの涙の需要が非常に高まっており、それの製造に手が離せない程忙しくなっており、投影という形で挨拶をするしかなかった。

リアスも事情が分かっているので微笑んで応じ、ここまでなら特に問題は無かった。

レイヴェルの母はここで一誠に話し掛ける。レイヴェルに悪い虫がつかないように、特によろしく頼む、と念を入れてお願いする。

含みを持たせた言い方に大概の者たちは、その言葉に込められた意味を察するが、一誠は特に深く考えず――

『分かりました。俺にどこまで出来るか分かりませんけど、娘さんは俺が守ります！』

――と快諾。この時点からリアスから只ならぬ気配が漂い出していた。

レイヴェルの母はその返答に快くし、ご丁寧にレイヴェルがフリーの『僧侶』であり、将来的に――という遠回しなお願いをした後に魔法陣を消滅させた。

リアスはその直後に一誠に訊いた。

私のこと、守ってくれる？　と。

一誠は当然のように答えた、勿論、と。

アーシアは守るのかと訊いた。

一誠は勿論と答える。

朱乃は、と訊かれ一誠は同じような答えを出す。

一誠にとっては皆等しく大切な存在。だが、訊いたリアスにとっては――

リアスは最後に訊く。一誠にとって自分は『何』で『誰』なのかを。

質問の意図を把握し切れていなかった一誠は正直に答えてしまう。

『俺にとっては部長は部長で――』

一誠にとっては特別な意味があったのかもしれない。しかし、受け取る側にとってはどこまで行っても『部長』という肩書きの存在。

耐え切れなくなったリアスは『バカ』という言葉を残し、泣きながら部室から去って

しまった。
そして、そのすぐ後にシンが現れる。

◇

「馬鹿が……」
同じ罵倒を繰り返す。事情は全て聞いた。馬鹿という言葉が一度言うだけでは全然足りない。
「本当に馬鹿が……」
三回目。流石に一誠が何かを言いそうになるが、喋る前に手で制して出鼻を挫く。
「黙っていろ。この場でお前に何かを言う権利は無い」
ゲーム前に面倒ごと起こしてくれた鈍感極まる対応をしてくれた筋金入りの無神経男。事情を上手く呑み込めていないこの男に対して、シンは容赦無く責め立てる。
三度言っても言い足りない。言う口も足りない。なのでシンは面白そうに眺めている仲魔たちをけしかけた。
「お前たちも言ってやれ」
「いいの？　じゃあ、バーカバーカ」

「ヒーホー！　おバカホー！」
「その情けない面は何だホ！　そんな面する奴はヴァーリのライバルに相応しくないホ！　バカ！　大バカ！　ドバカ！」
「ヒ～ホ～。バ～カ～」
「オレモ言ウノカ……バカ」
　仲魔たちによる一誠へのバカの合唱。聞かされている一誠は思いっ切り凹んでいるが、シンはまだ足りない。
　シンは朱乃の方を見る。シンの目を見て何を求めているのか朱乃はすぐに察してくれた。
「イッセー君……この際だからハッキリと言いますね――馬鹿」
　いつものおしとやかな表情を急変させ、氷のような眼差しと共に鋭利な刃物の如き罵倒を一言。言われた一誠は鋭過ぎる馬鹿の一言に悶絶する。
「はい。次はアーシアちゃん」
　朱乃はアーシアにバトンタッチをする。
「え、えっ！　私もですか!?」
「こういうときはキチンと言うべきですわ」
「じゃ、じゃあ……イッセーさんの馬鹿っ！」

ぐはっ、という声を上げ一誠は胸を押えて崩れ落ちる。大事にしているアーシアからの馬鹿発言は朱乃とは対極の破壊力を秘めていた。
「はい、アーシアちゃん良く言いました。次の人はアーシアちゃんが選んでね」
「それも私ですか!?　え、えーと……木場さん！」
「僕？　うん、分かった。君は僕にとって大切な友人だけどリアス部長も大切な人なんだ。それを泣かせた君には敢えて言わせてもらうよ。イッセー君、君は馬鹿だ」
真摯な想いを込めての言葉。鋭さは無いが重い。
「小猫ちゃん」
「……はい。遠慮なく言わせてもらいます。……イッセー先輩は馬鹿です」
半眼で睨みながらいつも以上に冷たく言い放つ。
「……ギャー君」
「ぼ、僕ですか!?　えーと……その……あの……イッセー先輩……ば……馬鹿……」
消え入りそうな声ながらも一誠に非があることは分かっているので誤魔化すことはせずに言う。
「ゼ、ゼノヴィア先輩いい！」
「ふむ。私か。今回ばかりはお前が悪いと私でも分かったぞ、馬鹿」
ズバリと言うゼノヴィア。俗世に疎い彼女でも今回の一誠の態度は間違っているの

は分かり、非難を込めて言う。
「イリナ」
「はーい！　イッセー君！　本当にダメダメよ！　あれは！　ダメダメっていうか馬鹿馬鹿よ！」
イリナはリアスに同情し、強い口調で一誠を叱る。
ほぼ全員が言い終えた。シンはレイヴェルの方を見ると彼女と目が合う。レイヴェルは目があった途端、凄い勢いで首を横に振った。
切っ掛けとなったことに責任を感じているレイヴェルに一誠を責めさせるのは酷な話であり、事情を説明されていたシンは最初からレイヴェルは除けて考えていた。
オカルト研究部一同から馬鹿と呼ばれた一誠は真っ白に燃え尽きている。相当応えているのが分かる。
「これからどうしますか？」
打ちひしがれた一誠を放ってシンは朱乃へ訊ねる。部長が不在の今、副部長の言葉を最優先とさせる。
「そうですね……ひとまずは――」
皆の顔を見回すと朱乃は普段の笑みを浮かべる。
「お茶にしましょう」

朱乃の発言に真っ先に戸惑った様子を見せたのはアーシアであった。
「あの……今すぐリアスお姉様を探しに行かなくていいんですか……？」
アーシアはリアスを探したくてソワソワとしている。
「ちゃんと探しに行きますわ。そのときはアーシアちゃんも一緒にね。でも、今すぐに探そうとするのは反って逆効果ですわ。リアスも一人になって冷静になる時間が必要よ」
付き合いが長いだけにリアスの心情を把握している朱乃は少し間を置く必要があるとアーシアを諭す。
「レイヴェルちゃんもお茶にしましょう」
「で、でも……」
「気にしなくていいのよ。誰が一番悪かったのかもう決まっているから」
レイヴェルを慰める意味も込めてのお茶の時間。皆がソファーに座り朱乃が淹れるお茶を待つ。
因みに一誠はお茶の時間が終わるまで真っ白になったままであった。

◇

お茶会が終わると朱乃の指示の下で学園祭に向けての準備を進める。
女性陣は出て行ったリアスを探しに。木場とギャスパーは外へと買い出し。一誠は悶々と苦悩しながら空き部屋で一人作業。
シンは一旦生徒会室へと戻っていた。残って学園祭の準備の手伝いをしても良かったが、朱乃からしばらくの間、一誠に一人で考える時間をあげて欲しいと頼まれたからである。
生徒会室では生徒会メンバーが相変わらず仕事をしている。もしかしてと思い、リアスの姿を探してみるが居ない。友人のソーナに悩みの相談でもしているかもしれないと思っていたが空振りであった。
「誰かを探しているのですか？」
ソーナが話し掛けてくる。シンの何気無い視線移動で人を探しているのを見抜いている。
「――リアス部長とは会っていませんか？」
「リアスですか？　いいえ、会っていません。彼女は今、部室に居ないのですか？」
「はい。タイミングが悪かったみたいです」
飛び出したというのはリアスの名誉の為に伏せておく。しかし、何か隠しているのを悟られたらしくソーナは怪訝な表情をしている。

「生徒会の仕事はいいですが、会長たちもゲームが近いですよね？」
話を逸らす為にレーティングゲームの話を出す。リアスとサイラオーグのレーティングゲームが大きな注目を集めているせいであまり話題になっていないが、同時期にソーナたちも若手悪魔の注目株の一人であるシーグヴァイラ・アガレスと試合を行うことになっている。
「心配はご無用です。スケジュールの管理は完璧なので」
ソーナがキラリと眼鏡を光らせながら断言する。そこには揺るぎない自信と共に自分たちが挑むレーディングゲームへの情熱が込められていた。
「余計な気遣いでしたね」
「いえ。心配してくれるのは悪いことじゃありません。生徒会のメンバーとして気遣ってくれるのは嬉しいことです」
微笑むソーナにシンは大したことじゃないです、と謙遜する。他のメンバーにはそれが照れ隠しのように見え、微笑ましく思えた。
仕事の続きをする為に自分の席に座ると匙が小声で話し掛けてくる。
「まあ、心配すんなって。アガレスとのレーディングゲームは俺たちが勝つ。俺とヴリトラが会長を勝たせてみせる」
自信に満ちた様子で宣言する匙。京都での一件以来ますますヴリトラとの絆が深ま

り、神器の能力を高めている。匙の状態を確認したアザゼル曰く――

『禁手に至っていないのに禁手級の力を扱えるようになってやがる。滅茶苦茶ロマンがあるな。神滅具でもないのにレアなことが起きてるな。面白れぇ、今すぐ俺の研究所に連れていって調べてぇ……！』

――と興奮した様子で目をキラキラさせながら話していた。

「絶好調だな」

「おうよ。特訓も良い感じだ。他の皆との連携も形になってきたしな」

嬉々として話す匙。絶不調のドライグと足並みが乱れているリアスたちとは対照的なのが皮肉に思えてくる。

「兵藤の方はどうなんだ？」

ライバル視している一誠の様子を窺う。

「絶不調だな」

「えっ！？　マジかよ！？」

隠さず言うと匙は目を丸くするが、すぐに納得した表情になる。

「あー、そういや兵藤の奴新しい能力を手に入れたって言ってたな。上手くコントロールするのに苦戦しているのか」

一人納得する匙。ある意味では正解かもしれないが、新しい能力への覚醒は不調の

切っ掛けに過ぎない。しかし、ここで乳神関連の話をすれば間違い無く喋っているシンの正気が疑われる。勘違いを訂正せずそのままにしておいた。
「まあ仕方ねぇか。俺だって色々と苦労したしな。何か手伝えることがあれば、やれる範囲で手伝ってやると兵藤に伝えておいてくれ」
自分も忙しい立場だというのにしれっとこういうことを言える匙は、やはり情に厚い男である。聖剣絡みの騒動のときといい京都のときといい、巻き込まれてかなり酷い目に遭っていたというのに。
「伝えておく」
そこでソーナの視線を感じたので会話を中断し、生徒会の仕事に掛かる。暫くデスクワークをしていたが、ソーナから声を掛けられた。
「すみません。これを届けておいてくれませんか？」
渡された学園祭に関する書類を、指定された部活動の代表に届けるよう指示されたので、シンは席を立つ。
放課後である為、部活動の代表も部室やグラウンドなどに居たので仕事自体はスムーズに進み、簡単に終わった。
そろそろオカルト研究部もメンバーが戻っているかもしれないと思い、一度生徒会に顔を出してからオカルト研究部部室へ戻ろうかとシンが考えていたとき――

「――あっ」
「……あっ」
思わず声を洩らしてしまう。向こうも同じ気持ちだったらしくシンと似た反応をしていた。
探し人であるリアスが目を丸くして立ち尽くしている。
近くに朱乃やアーシアたちの姿は見当たらない。リアスを探しに出ていたがまだ見つかっていない様子。もしかしたら、リアスの方が見つかりたくなくて彼女たちから逃げている可能性もある。
「奇遇ね……」
「――そうですね」
リアスの声に元気は無くいつもの凛々しさが無い。未だに落ち込んでいるのが伝わってくる。
「事情は……聞いているのかしら？」
「はい」
「そう……ごめんなさい。無様な姿を晒して」
力無く微笑むリアス。実に弱々しい。トレードマークの赤髪も今は色褪せて見える。
「一人になりたいのだったら、俺は止めませんよ」

偶然出会ったリアスにシンなりの気遣いをする。気持の整理がまだ出来ていないのなら無理に引き留めることはしない。
リアスは一瞬だけ迷った表情をする。だが、すぐに何かを決めた顔付きになった。
「シン。少し時間はあるかしら？」

◇

駒王学園屋上。本来なら生徒は立ち入り禁止で厳重に鍵がかけられているが、悪魔の力を使えば簡単に開錠出来る。
シンとリアスは手摺に寄りかかりながら夕暮れと夜の境目のような空を見ていた。
「あの後……イッセーはどうだった？」
「呆然としていましたよ。やったことがやったことなので全員で馬鹿って言っておきました」
「ふふ……でも、私も馬鹿よね……」
リアスは少し笑ったがすぐに表情を暗くする。
「姫島先輩やアーシアが部長のことを探していましたよ」
「知っているわ……だけど、会わす顔が無いの。主としても部長としてもみっともない

姿を見せてしまったから。それに……」
　リアスはそこから先は口を噤んだ。朱乃とアーシアが一誠に強い好意を持っていることを彼女は知っている。リアス自身も同じ立場故にどうしても彼女たちにどう向き合えばいいのか分からなくなっていた。
　日々男として成長していく一誠。それに惹かれる女性たちも増えていた。それを近くで見ていたリアスの中に生まれる焦燥と嫉妬。好意を向けたとしても一誠の鈍感さのせいか手応えが感じず、いつまで経っても『部長』という変わらぬ呼び方。その呼び方自体がリアスと一誠との距離間を表しているようで、今日この日溜まりに溜まっていた感情が遂に爆発してしまった。
　主として皆を率い、導く立場としては軽率な行動。実際、彼女も感情を爆発させた後に少し時間が経つと冷静になり自分のしたことを強く恥じた。だが、同時に彼女も年頃の女性である。理屈や理性では分かっていても制御し切れない感情もある。
「ねぇ、シン。誰かにとっての特別、一番になりたいと思うことって傲慢なことかしら？」
「……まだ冷静じゃないですね、部長」
「え？」
「俺なんかに恋愛相談する辺り冷静とは思えません。明らかに人選ミスです」

シンが真顔で言うのでリアスは思わず笑ってしまった。
「そこまで言うの？　貴方だって恋愛とかに興味は無いの？」
「残念ですが、全く。もしかしたら、この先も無いかもしれません」
「まあ」
シンの乾いた感情にリアスは目を丸くする。
「そんなことを言う割には由良って子と何度もデートしたって聞いていたけど？」
「デートじゃないです。一緒に食事をしたことが何回かあるだけです。――というか誰に聞いたんですか？　……会長ですね？」
リアスは答えず誤魔化すように笑う。
「今は俺のことよりも話すことがあるんじゃないですか？」
「ふふ。ごめんなさい」
シンが普段よりも若干眉間に皺を寄せて言う。リアスにはそれが不貞腐れた表情に見え、また笑ってしまう。ここだけ切り取れば男女の年相応のやり取りに見えるかもしれない。
会話に間が出来る。その間にリアスの微笑はゆっくりと消えていった。
「俺は助言は出来ません――でも、話だったら幾らでも聞きます」
「――そうね。今はそれがいいのかもしれない」

リアスは話す。今日に至るまでの一誠への気持ちの変化を。

最初はお馬鹿だが可愛らしく問題児な眷属ぐらいの認識だった。眷属にした段階で只者ではないとは分かっていたが、『赤龍帝の籠手』の所有者と知ったときは思わぬ当たりを引いたと思った。

初めてときめきを覚えたのは、ライザー・フェニックスとの戦いであった。あの戦いで一誠はリアスの為に命懸けで戦ってくれ、そして自由を与えてくれた。今まで経験したことがない程、胸が高鳴った。

コカビエル、ヴァーリといった強敵たちと戦う度に一誠の顔はより男らしいものへ変わっていくのをリアスは間近で見ていた。

上級悪魔を真っ直ぐと目指す眼にいつも胸が高鳴る。だからこそ、望んでしまった。その目で自分を見つめて欲しいと。

成長していく想い人。変わらぬ距離感。募る焦り。一誠にとって自分がどんな存在なのか分からなくなっていく日々。

大事なレーティングゲームが控えているときに自分からチームワークを乱してしまうのは間違っていることは自覚している。それでも抑え切ることは出来なかった。自分でも把握していない程に一誠への想いは強く、熱くなってしまっていたからだ。

リアスの思いの丈を打ち明けられている間、シンは黙ってそれを聞き続けていた。相

槌を打つようなことをせず、目を逸らすことなくリアスを見続けていた。
全てを話し終えたリアスは夕闇を見詰める。その瞳は潤んでいた。
「今が大事な時期なのは分かっているのよ……サイラオーグを失望させるような真似をしたくないのに……それでも私は耐えることが出来なかった……！」
自分の未熟さを恥じるリアスに対し、シンは口を開く。
「でも、これは必要なことだったと思います」
「えっ……？」
「あの鈍感な馬鹿に考えさせるには、これぐらいのことをした方が丁度良い」
シンはリアスを否定しなかった。
「鈍感馬鹿って……それに私、皆に迷惑を掛けたし……」
「俺は部長の眷属じゃないので正直何とも思っていませんし、貴方の眷属たちだって今回のことで部長を責めたりはしません。寧ろ、貴方を想ってあの馬鹿を怒っていましたし。まあ、今回は所謂、ガス抜きのようなものだったということで」
深刻に悩んでいたリアスにシンは今回の件は通過儀礼のようなものであったと軽く言う。重荷を取っ払おうとしている発言にリアスは戸惑う。
「……そんな軽く考えて良いのかしら？」
「俺が言っていることはあくまで俺の意見に過ぎません。正直、偉そうに意見が出せる

程自分のことを過大評価していません。こういう考え方もあるという参考程度にしておいて下さい。決めるのは部長ですから」

リアスの表情は未だ迷いに満ちている。シンはそれが当然だと思った。他人の意見に乗っかるのは楽かもしれないが、そうはしない。リアスの中に在るプライドがそれを許さないのだろう。例え、悩み苦しむことがあっても自分で自分が納得する答えを出す。それが、シンが知るリアスである。

「……もう少し考えてみるわ」

「それがいいと思います。それにきっとあいつも今頃、部長と同じように悩んでいる筈でしょうし」

「イッセーも？」

「はい」

シンは首を縦に振る。シンは生徒会へ戻る前に一度一誠の様子を確認しに行っている。

頼まれていた作業が手に着かないぐらいに一人頭を抱えながら苦しむように考えていた。

リアスの一件でリアスの気持ちにようやく気付き、同時に自分の気持ちにも気付いているのかもしれない。

だが、もしかしたらリアスからの好意に対して心から信じることが出来ないのかもしれない。シンから見て一誠は基本的には陽気な男であるが、時折自分を卑下している部分も見えた。どうせ自分なんかが好かれる筈が無い、というネガティブな考えに囚われている可能性もある。

傍から見れば一般家庭で生まれた悪魔としての才能が薄い転生悪魔の下僕と由緒正しい家柄と血統を持つ上級悪魔の主。釣り合うポイントを見つける方が難しい格差ある立場。

今までは一誠をリアスが可愛がり、リアスを一誠が慕うという関係。その関係が一線を超えてしまうことで崩れてしまうのを恐れているかもしれない。

それが分相応。それが安定。それが平穏。それが一番リスクの無い関係と考えるだろう。だが――

「でも、きっとあいつは答えを出すと思います。鈍い頭を必死にフル回転させて」

――シンは決して兵藤一誠が現状維持などという妥協した考えに至るとは思っていなかった。馬鹿で鈍感なのは知っているが、シンには無い熱を心に宿している。その熱がある限り詰まらない真似はしないと確信していた。

「――信じているのね、あの子のこと」

「それなりの付き合いですからね」

「……思えばイッセーと一番対等な関係を築いているのは貴方なのかもしれないわね、シン」

眷属の中で女性陣は皆、一誠に好意を持っている。男性陣もまた一誠に対して恩や尊敬の念を持っている。そんな中でシンと一誠は互いに歯に衣着せぬ言い合いをしていることが多々あった。下手をすれば仲違いしてもおかしくないのにそんなことはなく、だからといって唯一無二の親友というような厚い関係ではなく、でも互いのことを信頼している不思議な関係性。リアスでは築くことの出来ない特異な繋がりであった。

「色んな意味で一誠にとって貴方は特別なのかもしれないわね――嫉妬しちゃうわ」

「止めて下さい。気色悪い」

少し顔を顰めるシン。もし一誠に同じことを言ったら、シンと同じ反応をするのが容易に想像ができ、リアスは吹き出してしまった。

「ふふふ……やっぱり、最初に思ったときからずっと変わらずに貴方は面白い子ね」

「褒め言葉として受け取っておきます」

最初は胸の内に重く辛い錘のような御し切れない感情が渦巻いていた。だが、シンと会話をしている内に段々とそれが軽くなっていくのが感じられた。誰かに悩みを話したから気持ちが軽くなったのもあるが、話す相手がシンだったのも理由なのかもしれない。

未だにその内に未知を秘めた男。恐れもあるが、何故か安堵も覚える。底が見えないからこその計り知れない彼の器が、全てを受け止めてくれると信頼しているからかもしれない。

だからこそなのだろうか。リアスは時々思ってしまう。

（シンが悪魔の道を進んだら、どれだけの存在になるのかしら……）

人と悪魔の狭間を行ったり来たりしているのが今のシンであり、どっちつかずな在り方をしている。もし悪魔として道を選ぶのであれば、その将来は有望なものであろう。

（上級悪魔にはまず間違いなく成れる筈よ。最上級悪魔も不可能な話じゃない。もしかしたら、それ以上……）

悪魔としての頂点であり、兄のサーゼクスと同じ高みである魔王。飛躍し過ぎな考えかもしれないが、リアスはどうしてもそれが夢想とは思えなかった。

「部長？」

「な、何かしら？」

シンから声を掛けられ、リアスの意識が現実へと戻ってくる。将来のシンの想像は皮肉にもシン本人によって打ち消されてしまった。

「俺はそろそろ戻ろうと思います。部長はどうしますか？」

「私？　私は……もう少しここで考えてみるわ」

一誠が悩んでいるなら自分もまた悩もうとリアスは思った。
「そうですか」
「ええ。話を聞いてくれてありがとう、シン。おかげさまで少し心に余裕が出来たわ」
「それなら何よりです」
シンはそう言うとリアスを残して屋上から出ていく。
階段を下りながら多少なりともリアスの気が晴れたのを感じ、少しだけ安堵する。
気持の整理が完全についた訳ではなく、当分はギクシャクとした関係が続くかもしれないが、それでも今日のようなことが起こらないと思われる。
（……あいつはどんな様子だ？）
生徒会に顔を出してからオカルト研究部へ向かおうと考えていたが、予定を変更して先にオカルト研究部へ向かう。
一誠が一人作業をしている空き部屋の前まで来た。中からトンカチを叩く音が聞こえる。
扉を少し開けて中の様子を眺める。一誠が黙々と作業をしていたが、前に見たときとは様子が違った。
前は悩みに満ちた表情をしていたが、今は妙にスッキリとした表情をしている。悩みが晴れた、或いは決心がついた、そんな顔に見えた。

「……うん？　うおっ！　びっくりした！」
視線に気付いた一誠が扉の隙間から覗いているシンを見て仰天する。
「やめろよ、お前！　心臓に悪いだろうが！」
「悪かったな」
見つかったのなら仕方がないのでシンは空き部屋へ入る。一誠は心臓を押えながらやや大袈裟なリアクションをしていた。
「何だよ？　もう生徒会の仕事はいいのか？」
「まあな」
「もしかして、俺のことが心配で様子を見に来てくれたのか？」
「そうだと言ったら？」
「俺、そうされるぐらい酷い顔をしてたのか……」
「今はいつも通りだがな」
やはり、一誠の中で気持ちに整理がついたような気がした。リアスと話している間に一誠の中で決心が決まる出来事があったと思われる。
「あのよ……明日の夜、時間はあるか？」
「あるが、何か用か？」
「一緒にメシでも行かね？」

「……お前と二人でか？」
露骨に嫌そうに言うと一誠は少し怒った顔付きになった。
「何だその反応は！　俺だってお前と二人っきりなんてごめんだ！　お前だけじゃなくて木場やギャスパーも誘うよ！」
「男メンバーだけか？」
表情を引き締め、何かを覚悟したように一誠は言う。
「……ああ。皆に話したいことがあるんだ」

◇

翌日の夜。シンは待ち合わせ場所で一誠たちと合流する。一誠に折角だからと言われたので仲魔のジャックフロスト、ケルベロス、おまけでジャアクフロストも連れて来ていた。
「よお」
「やあ」
「こ、こんばんは！」
「ヒ～ホ～。待ってたよ～」

一誠に続いて木場とギャスパーも声を掛けてくる。ギャスパーの頭の上には相棒のジャックランタンが乗っかっていた。

色々と重要なイベントが重なって日々忙しいグレモリー眷属だが、先日のこともあって本日は文化祭の準備のみで特訓も悪魔の仕事も休みになっており、男子眷属全員問題なく一誠主導の晩御飯に参加している。

因みにピクシーは面子が面子なだけにリアスたちへ預けておいた。ピクシーは不満そうだったが朱乃が用意してくれた菓子を見てすぐに機嫌を直し、去っていくシンを見送ることもせず速攻で菓子に飛びついていた。

全員集まると一誠に先導されてある場所へ向かう。一誠曰く、アザゼルも晩御飯に誘ったら『丁度良い。お前ら全員に俺が奢ってやる』と言って、この場所へ来るようにと一誠に住所だけ教えられていた。

それに従い道を歩いて行くが、段々と人気の少ない場所へ向かっていく。どんどん建物も無くなっていくと自然と不安が高まってくる。

「あってるよなぁ……？」

道案内している一誠が不安そうに呟く。

「人気も建物も無い場所だね……食事が出来る場所があるのかな？」

「うぅぅ……何か怖くなってきました……」

目印になるものも見つからず、アザゼルのことを少し疑ってしまう。
「何か見えるな……」
「マジか？　……本当だ」
シンが見ている方へ一誠も目を凝らす。小さな灯りがポツンと見えた。
その灯りを目印にし、シンたちはそこへ向かう。
近付くにつれ灯りの正体が見えてくる。
灯りの正体は提灯。青い屋根からぶら下げられており、屋根の下は透明のビニールの幕で囲われている。ビニールの幕越しに見えるのは暖簾。その暖簾には『おでん』と描かれていた。
風に運ばれて漂ってくる出汁のニオイ。こんな人気の無い場所にあるおでんの屋台など怪しさしか感じられないが、その出汁のニオイはその怪しさを一旦忘れさせ、足を向かわせるには十分魅力的であった。
意を決して暖簾を潜る一誠たち。
「いらっしゃい」
「あっ！」
先頭で入った一誠は驚く。
「アザゼル先生!?」

煮えるおでん鍋の前で割烹着を着て頭に手拭いを巻いたアザゼルがそこに居た。
「何で？」
「何でって奢ってやるって言っただろう？　だから、こうやってお前たちの為に一から準備してやったんだ」
「一からって……」
「そりゃあ、仕込みから屋台まで全部よ」
その返答に唖然とする一誠。分かっていてもアザゼルの行動力の早さと大胆さには驚かされてしまう。
「まあ、俺も一度はやってみたいと思って密かにおでんの料理研究もしててなぁ。丁度良い機会だから、お前たちに振る舞ってやろうと思ってよ」
念願が叶ったからかアザゼルは上機嫌であった。
「お前も遠慮せずに食えよ」
その言葉は一誠たちではなく別の人物へ向けられていた。
アザゼルの視線を追うと、既に先客がいた。その人物に一誠はまたしても驚かされる。
「セ、セタンタさん!?」
「こんばんは、兵藤様」

グレモリーの番犬であるセタンタが蒟蒻を箸で挟みながら一誠に挨拶をした。

古傷、既知

「な、何でセタンタさんがここに……？」
一誠に続いて暖簾を潜った者たちも店主姿のアザゼルに目を剥き、席に座っているセタンタにギョッとする。
「前々からサーゼクスと飲む約束をしてたんだよ。イッセーが晩飯一緒にっていうから良い機会だし、俺が前から料理研究していたおでんを御馳走しながら飲もうと思っていたんだが……残念なことにサーゼクスが仕事で来られないってことになってな。でも、俺一人飲ませるのも申し訳ないって思ったのか代理を寄越してくれたんだよ」
「……それが私です」
アザゼルの言葉を継ぐセタンタ。あまり乗り気ではないのが声からでも分かる。
「よっぽど忙しいみたいだな、魔王は？」
「テロリストがあちこちで暴れ回っていますからね。仕事が積み重なっていく毎日ですよ。――時間に余裕があるアザゼル様が羨ましい」
チクリと皮肉を言うセタンタ。聞いている方がハラハラしてしまう。
セタンタからすれば多忙な魔王を遊びに誘うな、という不満があった。

「はっはっはっはっはっ。趣味の時間を増やすには効率良く仕事するしかねぇからな。おまけで良い右腕が居れば些細なトラブルが起きても俺無しでも解決出来る。サーゼクスもまだまだ経験不足だなぁ」

余裕で躱すどころかセタンタの発言のせいでサーゼクスの経験不足と人材不足が露呈したようになってしまった。ささやかな皮肉に対して強烈なカウンターを貰ってしまった。

「失言でした。ふふふ。堕天使総督には敵いません」

笑っているが目が笑っていない。マフラーで隠された顔が、今どんな凶相を浮かべているのか想像も付かない。

「まあ、急に誘ったのはこっちだし悪かったよ。次はちゃんと予定を立てて誘うからよ」

「結局誘うんですね……」

セタンタは嘆息する。言っても無駄だと悟ったせいか張り詰めていた空気は一気に霧散した。

「お前らもいつまでも立っていないでさっさと座ったらどうだ？」

「は、はい！」

アザゼルに促されて用意されていた椅子へ座っていく。ジャックフロスト、ジャアクフロスト、ジャックランタン、ケルベロスの椅子もちゃんと用意されていた。

「グルルル。オレハココデイイ」
ケルベロスは椅子を拒否して地面で横になる。
全員が座っても窮屈ではなく余裕がある程のスペースがある。
「さーて。全員座ったな？　何にする？　おでんは色々な種類を食べたが今日はシンプルな白だしだ。大根、こんにゃく、玉子に牛すじと王道な具だけじゃなくてちょっと変わり種でロールキャベツにトマトもある。まっ、俺が食いたいと思ったやつをぶち込んだだけだけどな」
琥珀色のおでん鍋の中で白い湯気の下で漂う具たち。本格的過ぎてとても素人が趣味で作ったようには見えない。
「じゃあ、大根とこんにゃくと牛すじで」
「僕は玉子とちくわとはんぺんをお願いします」
「ぼ、僕はじゃがいもとロールキャベツと……あ、あとトマトを下さい」
「先生のお任せで」
「ヒホ！　オイラは野菜なら何でも良いホ！」
「ヒーホー！　俺様にはとにかく美味いものを寄越すんだホ！」
「グルルル。肉」
「ヒ～ホ～。ギャスパーと同じものちょ～うだ～い」

一誠たちが一斉に注文するとアザゼルは、あいよ、と活きの良い返事と共に具を菜箸で素早く掴んで皿へ盛っていく。その動きは非常に素早く、注文して三分も経たずに全員に配り終えていた。

お任せで頼んだシンの皿には鶏つくね、がんもどき、巾着が盛られている。

「ほいよ」

セタンタの前にも皿が置かれる。こんにゃく、玉子、大根というポピュラーな具材。そして、傍にコップが置かれる。

アザゼルはそのコップの中に日本酒を注いでいく。

「あの、酒は……」

「下戸だったか？」

「いや、飲めますが私は仕事で来ましたので……」

「サーゼクスの代わりに飲むのが今回のお前の仕事だろ？　構わず飲め、飲め！」

そう言ってアザゼルは今度は自分のコップにも酒を注いでいく。いつの間にかアザゼルもタコやはんぺん、しらたきをよそった皿が手元に置かれてあった。

「アザゼル先生も食べるんすね」

「当ったり前だろ。元はと言えば俺が食いたいから作ったんだからな」

アザゼルは酒が入ったコップを掲げる。

「今日は野郎だけで色気は無いが、食い気だけはある。偶にはこういうのも悪くねぇ。オカルト研究部男子部員共、乾杯だ」

音頭を取った後、アザゼルはコップの酒を一気に飲み干す。セタンタも観念したのか同じく酒を飲み干した。

それを合図にして一誠たちは箸を取り、おでんの具に付ける。

シンもまた箸で具を挟む。最初に取ったのは中身の分からない巾着。熱々の湯気が立っているそれをまず一口。

出汁の染みた巾着の中から現れたのは白い餅。外の巾着よりも熱い餅を良く噛む。常人なら吐き出してしまうぐらいの熱さだが、口から炎を吐けるシンにとっては程よい温かさであった。

餅らしい柔らかいを通り越して溶けるような食感。中の餅にも出汁の味が良く染みており、飲み込む辺りで餅の微かな甘みが舌へ余韻として残る。その余韻が消えない内にもう一口餅巾着を齧り、三口目で全て平らげる。

「ほらよ。ケルベロスに渡してやりな」

アザゼルから渡される皿。シンの皿よりも大きく深めな作りになっており、注がれた出汁と一緒に様々な具が盛られてある。ケルベロスが好みそうな肉を中心にしており、手羽先に手羽元、鶏のつくね団子と牛すじはケルベロスが食べ易いように串が抜かれて

ある。
　大雑把なように見えて気を利かせたり、気配りが出来るのがアザゼルらしいとシンは思いながらケルベロスの前に皿を置く
「待たせたな」
　置かれた瞬間にケルベロスは喰らい付く。手羽先や手羽元を骨ごと貪るので、ゴリゴリバキバキと凄まじい咀嚼音が屋台内に広がる。
　ケルベロスも炎を吐くので高温のおでんを冷ますことなく頬張っていく。火に耐性があるという特性が変なところで発揮されていた。
　火耐性といえば――
「ヒホー！　ヒホー！　ヒホー！」
　ジャアクフロストがおでんをがっついている。箸など扱えないので両手掴みというマナーなど一切捨てた食べ方をしていた。
　雪だるまみたいな見た目をしている癖に溶けることはなく、火に対して耐性どころか全く効かないという異常な体質を持っているジャアクフロスト。真っ赤な口の中におでんの具を放り込むようにして入れていく。
　一方でジャックフロストは――
「ヒホー」

息を吹きかけ、具を冷凍してから食べていた。こちらは見た目通り熱に弱いのでいつも通りの食べ方である。
「気色悪い食べ方するんじゃないホ！」
「ヒホ⁉　これがオイラの食べ方だホ！」
ジャアクフロストが文句を言うとジャックフロストは反論。熱いおでんをカチコチに凍らせる食べ方が気に入らない様子。
「アザゼル！　いいのかホ⁉　こんな台無しにする食べ方！」
「あー、別に粗末にしなけりゃどんな食い方でもいいぞ」
作った本人にも訴えるが、アザゼルは最低限のルールを守ればあとは全て良しとした。
「ヒホホ……！」
「ヒーホー！　オイラの勝ちホー！」
文句が通らずギリギリと歯ぎしりをして不満を露わにするジャアクフロストに、いつもの仕返しと言わんばかりジャックフロストが挑発する。
「お前はこれでも食ってろホー！」
ジャックフロストの口の中に湯気立つ玉子が捻じ込まれる。
「ヒホオオオオオ！」

猫舌というレベルじゃない程に熱さに弱いジャックフロストは、口に入れられるとすぐに玉子を発射。

発射された玉子は捻じ込んだジャアクフロストの目に命中。しかも、その玉子には辛子が付けられており、因果応報と言わんばかりにジャアクフロストの目に辛子が塗られる。

「ヒホォォォォォ！」

跳ね返った玉子が宙を舞う。アザゼルが粗末にするなと言った傍から地面に落ちて食べられなくなる。

「アオン」

ケルベロスが地面に落ちる前に空中で玉子をキャッチし、そのまま食べてしまった。ケルベロスのファインプレーにより玉子が無駄にならずに済む。

『ヒホォォ！　ヒホォォ！』

ジャックフロストとジャアクフロストは椅子から転がり落ち、ジャックフロストは口を、ジャアクフロストは目を押えながら地面を転げ回っている。シンとケルベロスはそんな二人を、何をやっているんだ、と呆れた眼差しで見ていた。

ジャックフロストの小競り合いはいつものことだと放っておかれ、アザゼルと一誠たちは会話を交えながら食事を楽しんでいた。

「どうよ？　俺のおでんは？」
「最高っす！　今すぐにでも店を出せます！」
お世辞ではなく一誠の心からの本音であった。
出汁の色に染まった大根は中まで完全に染め上げられており、噛めば硬くも無く柔らかくもない丁度良い食感と大根と出汁の味が合わさった汁が口の中に溢れてくる。熱いがそれでも次をすぐに齧りたくなる。今までの人生の中で最上級の大根だと断言出来た。
「そいつは良かった」
アザゼルはそう言って自分も取っておいた大根を一齧り。
「うーん……七十五点といったところか？」
自作なのに思いの外厳しい採点をするアザゼル。一誠からすれば百点満点の出来であるというのに。
「厳しいですね」
「初めの頃だったら九十点以上と評価していたかもしれないがな。あれこれと知識やら技術やら覚えてくると自然と評価が厳しくなってくるんだよ、俺って研究者だし。何ていうか、これで良いだろって妥協出来なくなってどこまでも追求したくなってくるんだよなー」

アザゼルの言っていることは一誠にも共感出来た。
一誠が覚醒して得た力である『赤龍帝の三叉成駒』も使い始め頃はパワーアップした自分の力に高揚し酔いしれるような感覚があったが、使い慣れてくるにつれて各特化型の駒の長所と短所が見えてきて頭を悩ませてくる。
今まで『赤龍帝の鎧』でやって来たが、急にピーキーな性能をした手札が増えたせいで戦闘時での取捨選択が発生してしまう。迷う時間はそのまま相手への猶予と変わるので何とか迷う時間を無くしたいが、考えれば考える程思考の沼に嵌っていく。
「何か分かります……俺も新しい力は最初の頃は凄いと思っていましたけど、今は悩みの種になっていて、覚醒前の方が色々と戦い易かったんじゃないかと思っちゃいましたし……」
「ははは。客観的に見られるだけ成長しているぜ。まあ、シンプルな力を高めていくのも間違ったやり方じゃないしな。今までとは戦闘スタイルが変わるから悩むのも無理はない」
「確かに俺の頭だとパンクしそうで……ああ、でも、木場とかからアドバイスを貰ったりしてます。この間はレイヴェルからもアイディアを貰ったんですよ。俺の『僧侶』の砲身から砲撃じゃなくて譲渡の力を撃ち出してみたらどうだって」
「良いな、それ」

アザゼルの目がキラリと光った。食べ掛けていたタコを一気に口に入れ、酒で流し込む。食べるのを止めて話に集中する方へ切り替える。

「はい！　これなら初見だと攻撃に見せかけて相手が警戒している間に仲間への譲渡しサポートすることも出来ますし、二度目以降は攻撃か譲渡かの揺さぶりも出来ます」

「ああ。それに譲渡する相手は選べるんだろ？　仲間が戦っている最中に遠慮なくぶっ放すのも良いな。味方を巻き添えにして攻撃なんてされたら、敵なんかビビッて高確率で逃げることを選ぶ。その隙に譲渡で強くなった仲間が倒すってのも出来る」

「うおぉぉ……えげつないやり方……」

アザゼルらしい悪知恵が働いたアドバイスに一誠は少し引いてしまう。

こうなってくるとアザゼルも乗り気になり、一誠との会話にも熱が入る。

ヒートアップする二人の会話を放っておいてシンや木場、セタンタは平凡な会話をしていた。

「これは何から出来ているのですか？」

器用に箸で挟んだ蒟蒻をプルプルと揺らしながらセタンタが訊く。

「蒟蒻はコンニャク芋という芋を加工して作ったものです。主に食感を楽しむ為の食材です」

木場がセタンタの質問に答えた。

「成程」
　マフラーをずらし、口の中に蒟蒻を入れて咀嚼。
「確かに面白い食感ですね」
「セタンタ様は箸の使い方が上手ですね。こちらに何度か来たんですか？」
「君の師匠から教わりました。日本の文化についても少々」
「師匠が？　そうだったんですか……」
　初耳だったらしく木場は少し驚いた。
「教えてくれたのは良いですが……教えてくれたことに嘘を混ぜるのはいただけないですが」
　セタンタが顔を顰めたのが分かった。総司の嘘のせいで騙されたか赤っ恥をかかされた経験があるのかもしれない。
「あははは……」
　木場は苦笑している。木場も心当たりがあるのかもしれない。
「こ、これ、美味しいですよ、間薙先輩！」
　シンの隣にいたギャスパーがおすすめを教えてくれる。あまりおでんの具では見ないトマトであった。
　箸で挟まれたトマトが差し出される。このまま食べるべきなのか一瞬迷ったが、別に

意識する必要もないと思い、流れで食べてしまおうとしたら――

「う～ん。ジュ～シ～」

――間に割って入ってきたジャックランタンが食べてしまった。

「ランタン君!?　折角、間薙先輩に食べてもらおうと思ったのにいぃぃ！」

「ヒ～ホ～。ごめ～ん。美味しそうだったからつい我慢出来なかった～」

ギャスパーがビックリすると分かっててやったであろうジャックランタン。こうやってギャスパーを驚かせるのが彼のライフワークである。

ギャスパーが珍しく少し怒ってジャックランタンを責めるが、ジャックランタンはユラユラと揺れる姿のように全部聞き流していた。

各々が食べたり、喋ったりなどして盛り上がっていく中、アザゼルのある一言を放つ。

「――ところでよ。今日は何でお前の方からメシに誘ってきたんだ？　イッセー？」

アザゼルのおでん屋のせいで忘れてしまっていたが、今夜の男子一同の食事会は元々一誠から提案されたもの。何かしらの理由があって誘われたのは分かっている。というよりもその理由の方も凡そ察せた。

雑談が止み、全員の視線が一誠に集中する。注目を集めたことで少し気圧される一誠だったが、すぐに気合を入れ直して表情を引き締める。

「あの……皆は多分何で呼んだのか大体は察しているとは思うんだけど……」

一誠はそう言いながらアザゼルとセタンタをチラチラと見る。
「俺が情けなかったせいで、部長のことを傷付けて泣かせてしまったことに関係しているんだ」
改めて説明するのは事情を知らないアザゼルとセタンタに教える為である。
言ってしまった後に背中から凄まじい勢いで汗が滲み出て来る。アザゼルは大丈夫だとして、セタンタにこの事を言うのは並々ならぬ覚悟が必要であった。
セタンタが来ていたと知ったときには心臓が飛び出すかと思った。もしかしたら、サーゼクスの前で同じ事を言っていた可能性もあったのだ。だが、セタンタもまたリアスを幼少の頃から知っており、立場は違うが兄のような存在。そんな彼にリアスを泣かせましたと告白するのは、自分自身に引導を渡すような気持ちであった。
最初にアザゼルの方を見る。アザゼルは興味深そうに耳を傾けていた。
そして、次にセタンタの方を見る。無表情過ぎて何を考えているのか分からない。ただ、話を続けろ、という無言の圧力を感じた。
「部長は俺の為に色々としてくれて……俺も部長の為に色々とお返しをしたいと思ってて……けど、部長が俺の為に色々としてくれたのは主と下僕だからってだけじゃなくて部長は俺のことを……」
一誠はその後に続く言葉を口に出さず、心の中で言う。勝手に喋るのは野暮だと思っ

たからだ。シンたちは一誠が何を言おうとしているのか分かっていた。だが、それを口に出さない一誠の意思を尊重する。指摘するのも野暮だからだ。

「この間のことは、主と下僕の関係が俺にとって心地良くて見て見ぬふりをしていたツケだったんだ。……情けないけど俺は怖かったんだ……女の子と一歩踏み込んで仲良くなるのが……馬鹿やって笑われて、でも許してくれるような相手に甘えきっていたのが今までの俺だったんだ……」

悔恨と共に己の弱さを吐き出す一誠。顔に手を当てて表情を隠す。今の自分がとても情けない顔をしているから。

「俺……最初に出来た彼女が堕天使だったんですよ……いや、彼女じゃなかったかも。だって、俺を殺す為だけに近付いてきたから……」

堕天使レイナーレのことにアザゼルも責任を感じているのか一誠を見るアザゼルは少し複雑そうな表情に見えた。アザゼルが直接命じた訳ではなく、レイナーレの行き過ぎた忠誠心からの暴走であったが、部下の手綱を握れなかったことに責任を感じている。尤も、アザゼルとレイナーレの立場は天と地ほどの差があるので、末端の手綱を握れというのも

酷な話である。

「それでも俺は人生で一番舞い上がっちゃって……初めてのデートのときも寝ないでプ

ランを考えて……今思えばありもしないことなのに、デートが成功した後のことを色々と妄想したりして……思い返してもびっくりするぐらい……」

またそこで言葉を止める。一誠の中では事実だが、認めたくないことでもあった。

「でも、結局は全部嘘で芝居で悪い女だった……嫌でも忘れられないぐらい本当に悪い女だった……」

一誠の初恋はレイナーレに殺害されるという最悪な形で終わり、レイナーレは無様なぐらいにリアスに命乞いをして、今までの報いを受けて消滅させられた。彼女らしい最低の最期である。

「ははは……ハーレム王になるなんて最初に息巻いていたけど、後になってそんなことも出来ないヘタレって分かるんだから笑い話だ……」

自身のトラウマと中々向き合うことが出来なかったので気付くのも仕方ないとも言える。

自嘲する一誠を見て、セタンタは過去に一誠の鈍感さに腹を立てていたときの記憶を思い出していた。あのときはサーゼクスがモテた事が無いから女性からの好意に鈍いと言っていたが、事実は似て非なるものであった。

（……だからといって腹が立つものは腹が立つが）

それはそれ、これはこれとしてリアスを泣かせたのは事実なのでマイナスである。一

誠の結論次第では――と物騒なことを考えている。
「それを言うなら僕だって笑われても仕方のないことをしているよ。かつての仲間の復讐の為に勝手に突っ走って今の仲間を蔑ろにしたんだ」
「そ、そうです！　誰も笑いません！　ぼ、僕なんてずっと引きこもりだったし、い、今も段ボール箱がないと安心できないですし、きゅ、吸血鬼だけど血はあんまり好きじゃないですし……」
「多くな～い？」
「い、いいの！　こ、これが僕なんですぅぅぅ！」
茶化して来るジャックランタンにギャスパーが珍しく言い返している。
己の恥を晒し、自虐する一誠に木場とギャスパーが忘れることの出来ない過去を語り、それが恥でも何でもないと慰める。
木場とギャスパーだけではない。口に出すことはしなかったが、この場にいる全員が忘れることの出来ない記憶や傷を抱いている。一誠の語りに誰も何も言わなかったのがその証であった。
「木場……ギャスパー……ありがとな」
二人の心遣いに感謝する。
「お前は何か言ってくれないのかよー」

少し元気を取り戻し一誠は、シンを冗談っぽくねだる。
「振り返ると笑い話が多過ぎる。話していたら夜が明けそうになるから今度な」
「ははは。何だそりゃ？」
シンの冗談につい笑ってしまった一誠。笑いながら目の端から涙を流す。その涙にはさっきまでの哀しみだけでなく皆への感謝も混じっていた。
「……うん。改めて思う。俺は皆に救われているって」
自分のことを受け入れてくれる存在。その存在が一人でも居るだけで心が救われる。しかも、一誠の場合は一人じゃなく沢山いる。
「アーシア、朱乃さん、小猫ちゃん、ゼノヴィア、イリナにもこのことを話したんです。そしたら、言ってくれたんですよ、俺のことを大好きだって。滅茶苦茶嬉しかったです。涙が出るくらい。俺の中の嫌なものがどんどん消えてくれました」
眷属の女子たちの言葉で救われた。前に進む勇気が持てた。彼女たちの言葉があったからこそ、シンたちの前で覚悟を以って話すことが出来た。
「俺は俺を大好きだと言ってくれた皆の気持ちに報いたい。そして、俺は大好きな部長の――あっ」
そのときが来るまで言うまいと思っていた言葉を、口を滑らせてつい言ってしまった。

誰も知らない筈の気持ちをよりによって仲間に知られてしまったことを焦る一誠。
皆も驚いている筈だと思い、恐る恐る彼らを見る――何故か全員訝しむ表情で一誠の方を見ていた。リアスへの思いを口に出したことに戸惑っているというよりも焦っている一誠の様子を不審に思っているように見える。
「あの……聞いてたよな？」
「何が？」
全員偶然聞いていなかった、という有り得ないが万が一の可能性があるので、もう一度確認してみる。
「俺が部長のことを……」
『知ってた』
言い切る前にシンとアザゼルが声を揃えて先に言ってしまう。
その答えに唖然とする一誠。口を半開きにしたまま木場とギャスパーを見る。二人は苦笑いしながら頷いていた。
一誠は今までの涙の告白以上に猛烈に恥ずかしくなってきた。自分でも知らず知らずのうちにリアスへの好意を露わにしており、それが周知の事実になっていることに。
「いや、ほら、リアス部長が結婚させられそうになったとき、イッセー君は命懸けでそれを取り消しにしたし、そんなこと部長のことが好きじゃないと出来ないなって……」

「イ、イッセー先輩とリアス部長は、ひ、一つ屋根の下で暮らしていますし……同じベッドで寝ているって聞きましたから……そういうのはやっぱり両想いじゃないと出来ないと思いますし……」

薄々は気付いていた。当人が言うまで見て見ぬふりし仲間として見守るつもりであったからだ。

「俺ってそんなに分かり易い男か？」

「お前は自分が分かり難い男だと思っていたのか？」

自惚れるなと言わんばかりのシンの言葉に一誠がガックリと肩を落としてしまう。色々と勇気を振り絞って喋っていたが、最後の方でうっかり口を滑らせてしまったことで、何とも締まらない結果になってしまった。

「ははははは。まあ、いいじゃねぇか、これでも」

「何かカッコ悪いというか……」

「いいんだよ、男同士恥を晒していこうじゃねぇか。カッコ悪いところを見せた分、惚れた女の前でカッコイイ所を見せたやれ」

アザゼルの言葉を受け、一誠は少しだけ気持ちを持ち直す。

「お前も何か言ってやれ」

アザゼルがセタンタに話を振る。

「いえ、私は――」
「サーゼクスの代理で来たんだろう？　リアスの兄貴代行として未来の義弟に声の一つでもかけてやれよ」
　セタンタが顰めっ面をしている。その様子に一誠たちの方がハラハラしてしまう。
「……私はグレモリー家に奉仕する一従者にしか過ぎません」
「そんなこと言ってー。お前もリアスをガキの頃から面倒見てきたんだろ？　聞いたぜぇ？　お前、リアスがライザーと結婚するのは反対だったんだろ？　そんな奴が何も思わない訳がねぇ」
　セタンタは誰にも聞こえない声量で『あのお喋りが……』と毒吐く。誰がアザゼルに教えたのか既に予想出来ていた。
「それとも口の滑りを良くする為に一杯飲むか？」
　アザゼルが酒瓶の注ぎ口をセタンタの方へ向ける。すると、セタンタはアザゼルの手から酒瓶をひったくり、コップに注がずにラッパ飲みで一気に飲む。
　まだ一升近くあった日本酒が瞬く間に飲み干されていく。セタンタのことを落ち着いた人物だと思っていた者たちは、その光景に呆気にとられていた。
　数秒後、空になった酒瓶を机の上に置く。
「――俺が望むことはただ一つだ」

いつもの丁寧な口調ではなく荒々しさを感じさせる口調に変わり、一誠たちは驚いた。

「あの娘が幸せになればいい。それだけだ。お前にそれが出来るのか？　兵藤一誠」

セタンタに横目で見られた瞬間、心臓が跳ね上がった。喉元に刃物を突き付けられていた方がマシに思える程の重圧が、一誠のみに一点集中させられる。長年生きてきたアザゼルや剣の達人である木場や勘の鋭いシンにすら悟らせていない。

一誠はこれをセタンタなりの試練と考えた。この程度の重圧を跳ね除けられないような奴にリアスは任せられない、という意志をぶつけられている。

出来ます。たったその一言だけを言えば済むこと。だが、口の中が乾き、舌が鉛のように重くなり、心臓の鼓動が不規則になっていく。セタンタの放つ殺気の如き重圧が一誠に凄まじいストレスを与え、肉体の機能を狂わせていく。

凄い人なのは知っていたが、ここまで凄いとは思わなかった。セタンタが本気を出せば睨むだけで人を殺せるかもしれない。

一誠は蝕むような重圧の中で両手をあらん限りの力で握り締める。流れが途絶えそうになっている活力を全身に漲らせる。

言葉一つでも届けなければならない。自分の本気を知ってもらわねばならない。もう二度と退かないと誓った。

「で、き……」
喉と口に力を入れ、無理矢理言葉を絞り出す。あと少し。
四文字言うだけなのに酸欠になり掛ける。既に萎んでいる肺を更に絞り込み、喉に引っ掛かった言葉を吐き出した。
「ま……すっ！」
最後まで言い切ってみせる。
「――そうですか」
同時にセタンタからの重圧が全てが幻であったかのように呆気なく霧散する。セタンタの纏っていた雰囲気も元のものへと戻っている。
「大丈夫かい？　イッセー君。顔色が悪いよ？」
冷や汗を流し、顔を蒼褪めさせている一誠を木場は心配する。セタンタに見られていた時間は短時間であったが、それでも他の者が見て分かるぐらいに消耗していた。
「だ、大丈夫だ」
一誠は？せ我慢をしながらぎこちない笑みを見せ、心配をかけないようにする。
一方でシンとアザゼルはセタンタが何かをしたと察して無言で責めるような視線を向ける。セタンタには全く通用しなかったが。
一誠は皿に残っていたおでんの具を一気に頬張り、咀嚼し、呑み込む。そして、この

場で宣誓する。
「今度のサイラオーグさんとのゲームは絶対に勝ちます！　俺がリアス・グレモリーを勝たせてみせます！　勝って俺の気持ちを伝えます！」
　並々ならぬ覚悟で決意表明する一誠。敢えて言葉に出すことで自分にも皆からも逃げない意思を見せる。
「――うん。そうだね」
「は、はい！　ぜ、絶対に勝ちましょう！」
　一誠の意志に触発されて、木場とギャスパーの言葉にも熱が帯びる。
「ふっ。暑苦しいねぇ。同調するには俺も年を取り過ぎたなー。という訳でお節介な大人の立場として俺は応援させてもらうとするよ。ほれ、食え食え」
　一誠たちの皿に次々とおでんの具を盛っていく。
「ほれ、飲め飲め」
「俺たち未成年ですが……」
「酒の味も知らない奴らに飲ますか。ジュースで十分だ。代わりにお前さんが飲め」
「はぁ……分かりました。付き合いますよ」
　一誠が思いの丈をぶちまけたことで中断された宴が再開される。一誠の表情は心なしか晴れやかなものになっていると同時に引き締められた表情をしている。

言うべきことを信頼出来る仲間たちに言え、色々とスッキリしていた。
（蟠りが解消されたか……）
そう思ったとき、シンの頭を過るあのときの出来事。シンの中にもある蟠りが残っていることを知る。
（丁度良い機会かもしれない）
シンもまた一つの決断を下した。

◇

「正直、来てくれるとは思っていませんでした。レーティングゲームは明日ですよね？」
広々とした空間に立つシン。
「俺も思ってもみなかった。お前の方から誘いがあるとは」
シンと向かい合うのはサイラオーグ。
「納得いっていないので、あの結果は」
「……ああ、そうだな。同感だ」
「だからこそ、ここで白黒付けようかと」
「感謝する……お陰で最高の状態でリアスたちと戦えそうだ」

「もしかしたら、ゲームに出られないかもしれませんよ？」
「そのときはそのときだ。俺がその程度の男だったということだろう。――尤も、自分の身を心配するのはそっちかもしれないが」
　あのときとは違い、今度は二人の戦いを止める理由はない。限りなく殺し合いに近い戦いが始まろうとする。
「再戦といきましょうか？」
「この瞬間を与えてくれたお前に感謝し、全力で挑もう！」

疑心、再戦

サイラオーグとの再戦。それ自体は容易いだろう。シンが彼に頼めばそれだけで成立する。問題なのはそれだけだと前回と同じような展開にしかならないことである。

サーゼクスが秘密裏に進めてきてくれたことでさえ、バアル家の大王派に知られてしまっていた。シンがどう足掻こうとも情報を隠し切るのは難しい。

シンの現状は何処の馬の骨かも分からない悪魔と人間との間を彷徨う中途半端な存在であり、わざわざサイラオーグと真面目に戦わせるのも馬鹿らしく、そんな暇があるのならサイラオーグを使って有望な悪魔とパイプを繋げる方が有意義という認識である。

そうなると大王派の連中の認識を変える必要がある。上が口を挟まなければサイラオーグも自由に戦うことが出来る。

その認識を変える手札は、シンには今のところ一枚しかなかった。

オカルト研究部男子部員一同での夕食会が終わり、それぞれが帰路についたときシンは去り行くセタンタを呼び止めた。

「お話、いいですか？」

「何か御用で？」
　シンはサイラオーグとの再戦を望んでいることをセタンタに話す。
「それは構いませんが……サーゼクス様を通じてサイラオーグ殿に話を通すということですか？」
　若干戸惑いながら答えてくれるセタンタ。セタンタもシンが考えていたように、同じような横槍が入ることを考えている様子。
「それだけじゃないです」
「また、グレモリー領の地下空間を利用したいということでしょうか？」
「それもありますが――」
　シンは自分が今使える手札――大王派を釣る餌とも言うべきある考えをセタンタへ告げた。その途端、セタンタの表情は険しいものとなる。
「……それは本気で言っているのですか？」
「冗談では言わないです」
「寧ろ、冗談であって欲しいですね」
　セタンタの目付きが明らかに険？なものへと変わる。今までリアスの友人として接してきたシンを明らかに敵として見始めていた。
「全部聞かなかったことにします。では」

一方的に話を打ち切ろうとするセタンタ。シンは彼の前に回り込む。
「それで？　出来ますか？　出来ませんか？」
「話を聞いていなかったんですか？　私は聞かなかったことにすると言ったんですよ？」
「そっちも話を聞いていないじゃないですか。俺は出来るか、出来ないかを聞いているんですよ？」
場の空気が凍り付くような殺気が放たれる。主に放っているのはセタンタであり、シンはそれを真正面から受け止めていた。
「貴方はご自分の立場を理解していない。正直に言いましょう。貴方自身がどうなろうが私個人は興味ありません。リアス様が悲しむでしょうが、それも仕方のないことだと割り切ります。――ですが、貴方の我儘でサーゼクス様に迷惑が掛かるのは見過ごせない」
「それは本人に聞いてみないと分からないです」
殺してやろうか、この小僧。という言葉を寸での所で呑み込んだセタンタ。短気な自分が良くここまで耐えていると自分で自分を褒めたくなる。反面、激情を抑え込んだせいで血が逆流しそうになる。
図太い、無神経、傲慢にしか見えないシンの態度に我慢しながら、なるべく穏便且つ

丁寧な対応を試みようとするセタンタ。
「ですから――」
「まあ、かなり無理なお願いだとは自覚しています。そもそもサーゼクスさんにこの話をした所で出来るかどうか……」
別方向から仕掛けてきたのは分かった。申し訳なさそうな――表情は全くそう見えないが――口調でサーゼクスの能力を疑うようなことを言ってくる。
ここでヘラヘラと笑って誤魔化し、シンに同調すればこの馬鹿げた話を終わらせることも出来たであろう。しかし、セタンタはグレモリー家に忠誠を誓う者。ましてや、サーゼクスは彼にとって唯一無二の友である。サーゼクスが馬鹿をやったときには厳しい言葉で罵倒することもあるが、誰よりもサーゼクスに敬意を持っている。
そんなセタンタの口から例え嘘でもサーゼクスを信じない、とは口が裂けても言えない。
「――ッ。それは」
「出来るんですね？」
ほんの少しの間でセタンタはシンに内心を見抜かれてしまった。何て可愛くないガキだ、と心の中で吐き捨てる。
一瞬でも言葉を詰まらせてしまった時点でセタンタの負けであった。だが、どうして

も自らの忠誠心に嘘を吐けない。
「……サーゼクス様に聞けば、確かに何かしらの策を思い付くでしょうね」
「なら、お願いします」
強引なまでに話を通そうとするシン。
「ですから――」
「お願いします」
シンはセタンタの瞳を真っ直ぐ見つめ、同じ言葉をもう一度言う。
敵意を通り越して殺意すら覚える。夕食や酒で温まっていた体が激情によって煮え立つような熱を内包しているのも自覚している。
何かしらの切っ掛けがあれば、シンの眉間に槍を突き刺す――どころかくり抜いてやるという想像まで描いていた。
貫き殺すような視線を返すセタンタだったが、シンの目を凝視したとき不可思議な感覚に捉われる。
自分の奥底にある自分も知らない何かが浮き上がってくる――そんな生易しいものではなく掴み上げられていくような感覚。
吐き気を覚えるそれに耐え切れず、セタンタの口から出てくる。
「分かり、ました……」

全く言うつもりも無かった了承の言葉が絞り出されるように出てきた。それは殺意も激情も想像も全てを裏切る思惑とは真逆のもの。

（……はっ？）

自分で言っておいて信じられなかった。先程まであった感情は何だったのかと呆然としてしまう。

今も尚シンへの殺意が渦巻いている筈なのに何故頼みを引き受けてしまったのか。自分で自分が分からなくなる。

「ありがとうございます」

シンが礼を言うと、セタンタは愕然とした表情のまま別れの言葉も告げず、彼に背を向けて夢遊病者のような力の無い歩みで行ってしまった。

シンは小さくなっていくセタンタの背中をジッと見つめ続ける。

（これは嫌われたな……いや、それ以上か）

自分が無理を言っていることは百も承知していた。そして、その無理な願いを叶えるには冥界に精通しているサーゼクスの力がどうしても必要であった。

セタンタはシンの面倒事にサーゼクスが関わるのは心底嫌がっている。隠そうともしていない殺気からも分かる通り、最悪の場合あの場で刺されていてもおかしくなかった。

しかし、シンはそれが分かった上で我を通した。相手の心情が分かっていた上で無視して踏み躙るように己の考えを通した。

（彼奴より質が悪いな、俺は）

それが鈍感よりも邪悪であることをシンは自覚していた。目的を成就する為ならば手段を選ばないのが、もしかしたら己の本質なのかもしれない。

とはいえ、これで目的まで一歩前進した。場合によってはこれを切っ掛けにサーゼクスにも嫌われるかもしれないし、一歩の前進が大きな後退に変わるかもしれない。全てはサーゼクスの返答次第である。

セタンタへの目線を切り、シンもまた帰路へ着く。先に帰させておいたピクシーたちと合流する必要もある。

暗い道を一人歩くシン。彼は少しだけ気になっていたことがあった。

あれだけこちらに敵意を向けていたセタンタが、思いの外あっさりと頼みを引き受けてくれたことである。何か考えがあるのかもしれないが、どういう訳か了承後のセタンタが呆然としていたのが気になった。

ぼんやりとそのことを考えながら、シンは暗い闇の中へ溶け込むように消えていく。

シンとセタンタ。二人の知らない世界を飛び越えてもまだ残る見えざる繋がり、縁。まるで操られたかのようにセタンタがシンの頼みを聞いたのはその縁によるもの。無

意識の善意だったのだ。しかし、過去の記憶が無いセタンタからすれば何故こんなことをしたのか気付くことが出来ない。今ある彼のアイデンティティを酷く傷付けることとなった。

互いを結ぶ縁。シンとセタンタがそれを自覚するのはもう少し先のことであった。

◇

「……以上です」

冥界へと帰ったセタンタは、代理の役目を終えたこととシンから頼まれたことを報告していた。シンとの件はセタンタの中で握り潰せば良かったものの、どうしてもそれが出来ず馬鹿正直に報告をしてしまった。

「成程。再戦の為とはいえ彼も随分と危うい橋を渡ろうとするね」

苦笑混じりに言うサーゼクスだが、その苦笑には関心も秘められていた。

「まさか、魔人であることを餌にしようなんてね」

大王派はシンに興味がほぼ無い。ならば、無理矢理にでも興味を持たせる必要がある。そこでシンが考えたのはシンが魔人であるという情報を大王派にリークというものであった。

三界から忌み嫌われている魔人。興味を持たない筈が無い。同時にそれは相手へ大義名分を与えることを意味する。

魔人ならば仮に殺したとしても誰も責めはしない。

そして、大王派は今も権力を求めている。正確には自分たちの地位を盤石にする為の力を欲している。魔人討伐は現魔王ですら為していない偉業。その名誉を手に入れれば四大魔王すらも凌ぐ名声が得られる。

だが、相手に大義名分を与えたところで、それがどうサイラオーグとの再戦へ繋がるのか。

「彼は、悪魔というものを良く理解している」

もし、シン討伐に動き出すとしたら真っ先に捨て駒にされるのはサイラオーグである。

サイラオーグはバアル家の次期当主候補だが、バアル家の当主の資格を満たさない魔力がほぼ無しの欠陥品という扱い。

仮にサイラオーグがシンを殺せばそれで良し。サイラオーグの成果は全て大王派へ還元される。逆にサイラオーグが返り討ちにあって死んでも良し。認めていない次期当主候補を自分たちの手を汚さずに排除出来る。

大王派にとって最も望ましいのは相打ちによる共倒れであろう。邪魔者二人をまと

めて排除でき、名声を根こそぎ頂ける。サイラオーグの死をプロパガンダに利用する手もある。

どのような結果になったとしても大王派は特に損は無いのだ。

「大胆で面白いことを考えるね、彼は」

だが、と続き少しだけ真面目な表情になる。

「事はそう上手く運ばない」

サーゼクスはシンの大雑把な策――もしかしたら策ですらないかもしれないが――の成功率は限りなく低いものと考えていた。まず成功することはないだろう。

「しかし、それはそのままやった場合だ」

サーゼクスもシンから聞かされたままの方法を実行するつもりはない。話を聞いた時点でサーゼクスも可能な限りサポートをする気になっていた。

今後の冥界の為――というのは建前であり、サーゼクスもまた見たいのだ。未来を担う若き悪魔と混沌の可能性を秘めた成長途中の魔人との決着を。

至って個人的な理由であるが、逆に言えばサーゼクスにとってサイラオーグとシンは魔王のお眼鏡に適う魅力的な存在になっているということ。

「そうなると知恵と知識が必要になってくる。バアルの長老方の目や耳を欺く為に」

サーゼクスがどんどんやる気になっていく。グレイフィアはいつものことだと呆れ

ていたが、セタンタはサーゼクスがシン関連でやる気を見せるのが嫌だった。まるで、シンに動かされているようで。

「アジュカとファルビウムの力を借りるとしよう」

四大魔王の名前を出され、セタンタは天を仰ぎそうになる。

（どんどん話がでかくなる……）

その二つの頭脳があればシンが望んだ通りの展開になるだろうが、残り二人の魔王もシンと関わりを持つことをセタンタは嫌悪する。そして、シンの望み通りに事が運ばれていっていることにも不安を覚えた。

「早速準備に入ろう。楽しくなってきたな」

「……そうですか」

セタンタの素っ気無いというべきか、覇気の無い態度にサーゼクスは密かに眉根を寄せる。傍に立つグレイフィアも似たような反応を示している。

普段の彼ならば『どこが楽しいんだ？　馬鹿かお前は？』と素の口調で罵倒の一つでも浴びせてくるものだが、そんな気配は全く無かった。

「セタンタ。彼と何かあったのかい？」

「……ありました」

セタンタは素直に答える。

「一体何があったんだい？　君がそこまで元気が無いなんて普通じゃない」
「普通じゃない……かもしれません。彼、というよりも私が。……申し訳ございませんが、当分の間、私は彼と接触するのを止めます。……これ以上接触すると今までの私を否定されかねませんので」
シンに了承した瞬間、今までグレモリー家の為に尽くしてきた時間、積み上げてきた忠誠、振るってきた武勇、全てが最初から無かったかのようにシンの願いを受け入れてしまった。
セタンタからすれば自己否定に等しい。言い様の無い嫌悪感を自身に覚える。だからこそ、これ以上シンと関わりたくなかった。自分の中に在る忠誠心が確かなものであることを再認識するまで。
「……失礼します」
退出するセタンタをサーゼクス、グレイフィアは止めなかった。グレイフィアは不安そうな目でサーゼクスを見る。
「分かっているよ。私も心配だ。だが、どうも言葉や気遣いで今のセタンタを救える気がしない」
二人にとって親友であるセタンタが、あれだけ弱々しい姿を見せるのは初めてのこと。或いは親友だからこそセタンタは弱った姿を二人に晒したのかもしれない。

「やはり、彼に関わると変わってしまうのかもしれない。それが良い変化なのか悪い変化なのかはまだ分からないが」

去り行く友の背を見送りながらサーゼクスは静かに呟いた。

◇

セタンタからサーゼクスへのメッセージを頼んでそれなりの日数が経ったが、まだ返事は来ない。そろそろリアスとサイラオーグのレーティングゲームが迫ってきている。出来ることならその前に戦いたいが、シンが出張ってやれることはない。自らが投じた一石がどのような波紋を広げるのかを待つのみ。

おでん屋での食事会以降、一誠とリアスの間に流れる空気は少しだけ変わった。まだ、ギクシャクしているところはあるが会話をしている姿をチラホラと見掛ける。ただ、必要最低限の会話に留めており会話が弾むこともなく、まだお互いに吹っ切れていない。

それでも当初の空気と比べれば遥かにましである。

そんなことを考えているとシンの携帯電話が振動する。時刻を見るときっかりと午前零時。相変わらずこういうことだけは正確であった。

誰なのか分かっているので流れ作業のように電話に出る。
「お前も飽きないな。そんなに暇なのか？」
『いつも開口一番にムカつく台詞を吐く奴に言われたくない！』
皮肉と憎まれ口が電話越しに衝突。いつものライザーからのレイヴェルの様子確認の電話である。
「いい加減妹と直接会話したらどうだ？」
『それが出来たら苦労しないと言っているだろうが……！　お前が思っている以上に妹の中での俺の株は低いんだぞ……！』
何とも痛ましく情けない台詞であった。引き籠っていたときにウジウジと情けない姿を晒し続けていたことと、人間界の学校に通っていることを色々と口出しし過ぎて疎まれたことで底を舐めるぐらいにライザーの株は下がり切ってしまっていた。
『何とか……何とかレイヴェルに見直されるようなことをしなければ……何かアイディアはないのか？』
「お前の悩みを聞く為の電話じゃないぞ」
溺れる者は藁をもつかむ、という言葉があるが、ライザーがシンに相談してくる辺りそうとう思い悩んでいる様子。だからといってシンに起死回生のアイディアなど思い浮かばない。

電話越しでライザーがグチグチと愚痴り始める。昔のレイヴェルは俺を慕ってくれていただの、兄上たちよりも俺の方が仲が良かっただの、シンからすれば心底どうでもいい話を延々と垂れ流している。

聞きたくもない内容なので、そろそろ電話を切ろうかと考え始めたとき、玄関のチャイムが鳴らされる。

こんな時間に訪問者が現れることに疑問を覚える。もしかしたら、リアスか一誠たちが来たのかもしれない。

『おい、どうした？』

「誰かが来た」

『そんなものは後回しにしておけ』

愚痴しか吐かないライザーのこの言い草。もし、一誠だったら不意打ちで声を聞かせて慄かせてやろうと思い、電源を切らずに携帯電話をポケットに入れて玄関へ向かう。その間ポケットの中の電話から聞き取れないが、ライザーが騒々しい声を上げていた。

「はい」

玄関の扉を開けたとき、向こう側に立っていたのは意外な人物であった。

「夜分遅くに失礼いたします」

グレイフィアが丁寧に頭を下げる。

「こんな時間にどうかしたんですか？　グレイフィアさん」
　グレイフィアの名前を出した途端、喚いていたライザーの声がピタリと止まる。
「サーゼクス様より伝言をお預かりしましたので、間薙様へお伝えに参りました」
　サーゼクス、伝言と来れば思い浮かぶのは一つしかない。
「サイラオーグ様との件、全て準備が整いました」
　サイラオーグと再戦する為の道が開けたのだ。
「自分で頼んでおいて言うのもなんですが……もしかして、かなり無茶をしてもらいましたか？」
　シンの感覚からすれば自分が魔人であり人修羅と呼ばれているという情報を適当に流せば相手が食いつくと軽く考えていた。シンは策謀家ではないのでほぼノープランに等しい。
「サーゼクス様たちは楽しんでおられたので大丈夫かと」
　サーゼクス様たち、という言葉に引っ掛かりを覚える。他にも協力してくれた者がいる様子。正直な感想を言うと、物好きだと思ってしまった。
「色々とありがとうございます」
　礼を言い、グレイフィアを見つめる。てっきりセタンタが報告をしに来るのかと思っていたが、グレイフィアが来たのは意外であった。

「セタンタならこちらには来ません」
シンが考えていることを見抜いてグレイフィアは先に答えてくれた。
「用事でもありましたか？」
「セタンタ自身が貴方に会いたくないとのことです」
嫌われたと思っていたが、顔を合わせるのを拒絶されるぐらいに嫌われてしまったらしい。
「彼と――セタンタと何かトラブルがありましたか？」
グレイフィアは無表情であったが、その銀色の瞳に宿る光が強くなる。露骨な敵意を放っている訳ではないが、相手がこちらをどのように思っているのかは伝わってきた。
（色々と嫌われたかもな）
強引に物事を進めたツケかセタンタだけでなくグレイフィアからの評価も下がったと思われる。
シンは詳しく知らないが、セタンタとグレイフィアは友人である。セタンタを傷付けるようなことがあれば、当然ながらグレイフィアも黙ってはいない。
「強引に頼んだことは認めます。ですが、それ以上のことはしていません」
銀眼から放たれる圧に屈することもなく、シンは目を逸らさずに言った。
サーゼクスの『女王』であるグレイフィア。彼女が宿す力は並外れたもの。それこそ、

あの魔人たちにも後れを取らないかもしれない。
異変を感じ取り、ピクシーとジャックフロストが壁の陰から二人の様子を眺めていた。とてもじゃないが声を掛けることなど出来ない。
暫し沈黙が続いた後、グレイフィアはゆっくりと頭を下げた。
「そうですか。差し出がましい真似をして申し訳ございません」
疑ったことを素直に謝罪する。
「信じるんですか？」
「正直に申し上げますと、私では計り兼ねます。――間薙様御自身が持つ力が危険なものであることは周知の事実です」
同類である魔人がこれまで行ってきたことを考えれば危険視することは当たり前のこと。
「ですが、間薙様のこれまでのご活躍を無視することは出来ません」
魔人の力を以ってリアスたちと協力して様々な騒動や事件を切り抜け、解決してきた点も考慮する必要がある。
「私個人の感想となりますが、間薙様の先程の言葉は信じるに値すると思っております」
「――そうですか」
「それに失礼ですが、間薙様は御自分の力を全て把握していないのでは？」

「まあ、そうですね」
自分の力を完璧に把握していれば、今頃はマタドールやだいそうじょうとも互角に渡り合えていたであろう。
「……セタンタも自分の全てを把握しておりません。もしかしたら、間薙様とセタンタのお互い知らない何かが作用したのかもしれません……」
あくまで私の想像ですが、とグレイフィアは付け加える。
「――申し訳ございません。私の都合で無駄話をしてしまって。サーゼクス様の伝言は確かにお伝えました。あとは日にちを決めるだけですが……あまり猶予はございません」
「はい。分かりました。いつやるのかは決まり次第連絡します」
「では、失礼します」
グレイフィアが一礼すると開いていたドアが勝手に閉じられた。ドアを少し開け、隙間から覗く。グレイフィアは既にそこには居なかった。
サイラオーグと再戦出来る条件は整った。後はサイラオーグに伝えるだけである。
シンが直接伝えに行けば大王派に警戒されるかもしれないが、丁度いいことに代理の人物が居る。
シンは通話状態のままの携帯電話に耳を当てる。

『……おい。どういうことだ？　どうしてグレイフィア様がお前の元へやって来た？　それにサイラオーグという名も聞こえたぞ？』

グレイフィアとの会話の内容を断片的にしか聞き取れておらず、ライザーの混乱がよく伝わってくる。

「サイラオーグさんと練習試合をしようとしているだけだ」

簡潔に伝えるとライザーが息を呑む音が聞こえた。

『馬鹿な。もうじきリアスとのレーティングゲームだぞ？　このタイミングでやるというのか？　だとしても何故グレイフィア様がお前にそれを伝える？』

内容を知ってもますます混乱するだけのライザー。

「詳しいことはその内話をしてやる。……ところで、お前はサイラオーグさんと会う予定はあるか？」

『あ？　今日、ゲームへの調整を兼ねて俺の眷属たちと合同練習を……おい、お前まさか……』

ライザーとサイラオーグが良く顔を合わせているのは聞いている。レーティングゲームも近いので何かしら手伝っているのではないかと予想をしていたが、大当たりであった。

「一つ頼みたいことが――」

『お前！　このライザー・フェニックスを顎で使うつもりか!?』
伝言役を頼もうとしていることを先読みし、ライザーは怒声をシンに浴びせる。
「お願いをしたいだけだ」
『俺を使おうとしているのは変わらん！　言いたきゃ直接言いに行けっ！』
シンに使われることを非常に嫌がる。シンも快諾してくれるとは思っていなかった。
言うことを聞かせるには何かしらの条件が必要になってくる。
『大体……』
急に電話越しのライザーが黙った。その沈静具合にシンも訝しむ。
『……いいぞ。伝えておいてやる』
さっきまでとは百八十度違うことを言い始めた。
「……何か企んでいるな?」
『お互い様だろうが。別に大したことじゃない』
企んでいることを隠そうともしないライザー。とは言え、ライザーが言うように大事になるようなことは企てていない感じはした。
「……じゃあ、頼んだ」
『ああ、伝えておいてやる』
若干の不信感はあったが、ライザーに任せることにし、シンは伝える内容だけを教え

て電話を切った。
　その日のうちにライザーから電話を来る。内容は、サイラオーグが再戦を受けたというものであった。

◇

　以前と同じグレモリー領地下の広大なトレーニングルーム。
「正直、来てくれるとは思っていませんでした。レーティングゲームは明日ですよね？」
「俺も思ってもみなかった。お前の方から誘いがあるとは」
　シンと向かい合う既に戦闘準備を済ませたサイラオーグ。
「納得いっていないので、あの結果は」
「……ああ、そうだな。同感だ」
「だからこそ、ここで白黒付けようかと」
「感謝する……お陰で最高の状態でリアスたちと戦えそうだ」
「もしかしたら、ゲームに出られないかもしれませんよ？」
「そのときはそのときだ。俺がその程度の男だったということだろう。――尤も、自分の身を心配するのはそっちかもしれないが」

「再戦といきましょうか？」
「この瞬間を与えてくれたお前に感謝し、全力で挑もう！」
サイラオーグが構えることはせず、自然体のままであったが既に四肢の封印は解いており、白い闘気を纏っている。
今回の戦いでサイラオーグは眷属たちを連れて来なかった。シンを警戒していた『兵士』の仮面の少年もいない。万が一の場合、危機的状況になったとしても眷属たちが乱入してこないようにする為である。シンもまた仲魔たちを連れて来なかった。理由は空気を読まずに騒ぐのが目に見えていたからである。
この戦いに於いて客観的に見るならばサイラオーグに何の益も無い。前日にレーティングゲームを控えているのに実戦と変わらない試合を行うなどデメリットしかない。この戦いはサイラオーグ個人が望んだもの。彼にしか理解出来ない益がある。
だからこそ、サイラオーグは今回の件を自分の眷属たちに話さなかった。もしも、他の眷属たちが居れば彼は自分がブレてしまうと分かっていた。個人ではなく他の悪魔たちの夢や希望を背負い、彼らの未来を拓くサイラオーグ・バアルという存在として。
シンとの戦いはそんな彼らを裏切るに等しい行為だろう。シンが言っていたように下手をすれば大事なレーティングゲームを台無しにし、これまで積み上げてきたものを失う。

しかし、そのことが気にならない程にサイラオーグは昂っていた。一誠と戦ったときとはまた違う不思議な高揚。シンと初めて戦ったときは、しがらみがあったせいで集中し切れなかったが今は違う。

サイラオーグの本能がシンとの戦いを心から求めている。

既に準備が整ったサイラオーグを尻目にシンは自分のペースで準備をしていた。今回の戦いでは前回審判をしていたサーゼクスたちは居ない。二人が確認し合ったときに戦いは開始される。だから、無駄に焦る必要もない。

前の戦いのときと同じくシンは上着を脱ぐ。そして、そのまま投げ捨てる――

「お、お預かりしますわ！」

――ことはせずに顔を紅潮させているレイヴェルへ手渡す。

「……ありがとう」

「当然のことをしたまでです！」

嬉しそうな笑顔を浮かべ、シンの上着を大事そうに抱えながら壁際へと戻っていくレイヴェル。トレーニングルームの白い壁にはライザーが背を預けて立っていた。

ライザーがここに立ち会っている理由はまだ分かる。サイラオーグと戦う為の言伝を頼んだからだ。だが、何故かレイヴェルまで同行させていた。

（売ったな、あいつ……）

答えは至って簡単。落ち続けている兄としての株を上げる為にレイヴェルにシンとサイラオーグが戦うことを教えたのだ。頼みごとをしたときにやけにあっさり引き受けた理由が分かる。

レイヴェルからすれば一誠のファンであると同時にシンのファンでもある。しかし、シンはソーナのときのレーティングゲームを最後にレーティングゲームから身を引くことを決定していた。レイヴェルからすればファンになると同時に引退されたようなものであり、それをひどく残念に思った。だが、運命とは常に分からないものである。

兄から知らされた試合。それも若手悪魔最強と称されているサイラオーグとシンとの戦いである。非公式ではあるが、公式ではまず見ることは叶わない組み合わせにレイヴェルは気絶しそうになるぐらい興奮し、思わずライザーに抱き着いて感謝した程である。

審判などは用意されていないが、二人の間では暗黙の了解が交わされていた。それは、最悪の場合、死ぬかもしれないということ。それだけ本気で戦い合うという証明である。

レイヴェルはここから一秒たりとも瞬きをしないことを誓う。外に一切洩らすことを許されないこの戦いを全て網膜へ焼き付ける。それは、レイヴェルの隣に立つライザーも同様であった。真剣な表情で向かい合う二人を睨むように見る。

シンは両手の指をゆっくりと折り曲げ、五秒程の時間を掛けて拳を作った。強く握り締めると空気が張り詰める。

緊張や恐れなど一切感じさせない揺れぬ瞳でサイラオーグを見詰める。サイラオーグは逆に闘志や覇気で燃える瞳で見つめ返した。

静と動。そうとしか言い様がない両者。だが、共通する思いは同じ。目の前に立つ相手を倒す。それのみ。

今、二人が待っているのは開始の合図ではない。準備を済ませた時点で戦いは始まっている。二人が待っているのは相手の僅かな隙が生じる瞬間である。

物音一つ無い沈黙が場を支配した。衣服が擦れる音も聞こえず、呼吸音すらも最小へ抑えられている。

二人の戦いを第三者の位置で見ているライザーは、これがレーティングゲームでなかったことに感謝する。とてもじゃないが、ゲームを楽しみにして観戦しに来た悪魔たちを喜ばせられるような空気では無い。

息苦しく、精神に重く圧し掛かってくる場の空気。大概の悪魔はこの空気に耐え切れなくなって観客席から逃げ出してしまうだろう。或いは気圧されていることを誤魔化す為に雰囲気をぶち壊す野次を飛ばすかもしれない。

どれもこれもがこの戦いを穢す行為である。ただ向き合っているだけでこれだけの

空気を生み出せる二人にライザーは戦慄すると同時に嫉妬する。もし、シンかサイラオーグのどちらかの位置にライザーが立っていてもこの空気を生み出すことは出来ないのを自覚しているからだ。

嫉妬の炎を静かに燃やすライザーの傍らでレイヴェルは気圧されそうな空気に負けずに二人を凝視し続ける。レイヴェルの目は業火のような輝きに満ちていた。この他者を圧倒する雰囲気は、レイヴェルは嫌いではない、好きと言ってもいい。上に立つ者、もしくは立とうとする者が持つ覇気。レイヴェルの心が際限なく昂る。

その心の昂ぶりについ無意識で前のめりになっていき、靴裏が床を擦る。

音にすればほんの小さなものであったが、自分の心音すらも煩く聞こえるこの空間内では良く響いた。

限界まで張り詰められた空気の中で起こる僅かな変化。シンはその変化に耳に意識が割かれ、サイラオーグは目に意識が割かれる。

僅かな集中の欠け、微かな瞳の動き。それを相手から感じ取った瞬間、二人は動き出していた。

互いの顔面中心を狙って繰り出される拳。拳同士が交差するタイミングでシンは手首を返してサイラオーグの腕を掴み取る。

指先一点に力を集中させ、サイラオーグの腕を握り潰そうとするが側面から音を切り

裂くサイラオーグの蹴りが迫っていた。シンは掴むのを止め、サイラオーグの腕に指先を滑らせるようにしながら後退。サイラオーグの上段蹴りがシンの前髪を揺らす。

一瞬交戦し一瞬で離れた両者だったが、サイラオーグの腕からは血が滴っており、シンも右眉上から血を流していた。

サイラオーグの腕の傷は引っ掻き傷という生易しいレベルではなく抉られており、しかもそれが五本の分もある。シンの右眉上の傷も深く、かなりの量の血が顔を伝って顎先から雫となって落ちている。

闘争の空気に血のニオイが加わる。戦いを好む者ならばこの場に満ちる空気を、我を忘れて胸一杯に吸い込むことだろう。だが、当事者の二人は至って冷静であった。この場に於いては冷静さを欠いた時点で負けへと繋がる。戦いの中で否が応にも高揚し、熱を帯びてくる体を絶対零度の精神を以って鎮まらせる。

離れた両者が再び動く。血が伝うサイラオーグの拳が放つ突き。速過ぎて散った血が霧のようになる。

その突きを紙一重で躱すシン。一度避けてもサイラオーグは手を緩めることなく両の拳で連打する。当たれば重傷を免れない突き、しかも連打をどれもこれもギリギリで回避し続ける。流れ落ちる血がシンの回避の足跡を描くように飛び散っていく。

見ている方の精神が削られそうな攻防。しかし、決して目を離すことが出来ない。

両者の戦いを瞬き一つせずに見ていたライザーとレイヴェルは喜びと同時に哀しみを覚える。
この戦いの記録を独占出来ることを。この戦いが衆目の前で行われないことを。

◇

「素晴らしい――が勿体無い。この戦いがレーティングゲームであったのなら、さぞ盛り上がっただろうに」
今回の件の立役者の一人であるサーゼクスはモニターに映る二人の戦いを見ながら残念そうに言う。
「あの年でこれ程の戦いをするとは末恐ろしい二人だよ」
妖艶な顔付きをした異性だけでなく同性すらも虜にしてしまいそうな美青年――アジュカ・ベルゼブブは興味深そうにモニターを眺めている。
「いやいや頑張ってるねー……というか頑張り過ぎじゃない？　まぁ、珍しく働いた甲斐があったってことかな？　ふぁぁぁ……」
欠伸をしながら、だが決してモニターからは目を離さないスキンヘッドの男。巨躯に反して言動に全く覇気が無い。この男性もまたサーゼクスとアジュカと同じ魔王の

ファルビウム・アスモデウス。
アジュカは術式などの技術開発の最高顧問であり、ファルビウムは戦術を担当しており冥界の軍事を統括している。
大王派の息が掛かった者たちを炙り出し、泳がせながら重要な情報を握ったように思わせる為に色々と工作をした。戦い後のアフターケアも万全である。
大王派には気付かれていないだろう。そもそも一介の悪魔と人間を戦わせる為に魔王が三人も手を貸しているとは思うまい。大王派にも優秀な悪魔たちは居るが、その傲慢さが考え方の死角を作ってくれる。
この三人の魔王が協力してくれたことでこの戦いを用意することが出来たが、彼らはモニター室で離れて見学していた。理由は魔王三人が並んで見学をしていたら気が散るかもしれないと思ったからである。そんなことで動揺するようなシンとサイラオーグではないことをサーゼクスは知っているが、なるべく余計なものを見せないというサーゼクスたちなりの配慮であった。
「色々と面倒なことが多かったけど、ちゃんと割に合うよね？」
普段は重要な仕事以外は眷属に丸投げしているファルビウムだが、若手悪魔ナンバー1であるサイラオーグと魔人であるシンの戦いに珍しく喰い付き、働いてくれた。今の段階でもそれなりに興味を惹かれているが、まだ弱い。

「戦いが進めばいずれ答えは分かるさ。今度は彼らを止めるものは何一つ無い」
「今はじっくりと観察させてもらうよ。――今後の為にね」
冥界に何度も侵入してくるマタドールに対抗する為、対マタドール用の結界を冥界に張り巡らせて冥界に二度と踏み入れられないようにしたことがあるアジュカ。シンもまたその対象になるかもしれないと暗に告げる。
アジュカもファルビウムも魔人に対して好意的ではなく、シンも今の所は悪魔にとって無害ではあるが、他の魔人たちと同じような評価であることをサーゼクスは知っている。
彼らが協力してくれた理由もシンが敵となった場合に備え、少しでも情報を得る為だろう。サーゼクスもその考えが無いとは言えなかった。だが、同時にシンという魔人を見ていると疼くものを感じる。
嘗てサーゼクスはマタドールにより限りなく死に近付いた。魔人が放つ死の気配。長い生を持つ悪魔にとってそれは劇薬染みた刺激であった。
今、サーゼクスの中で疼くものは悪魔の業なのかもしれない。
「――君は、悪魔に何を見せてくれるんだい？」
その呟く声に込められたのは未知を齎してくれる期待か、或いは――

呼水、覚醒

間隔などほぼ無く放たれるサイラオーグの左の拳打。初見時よりも速い。恐らくは威力を抑えて速さに重きを置いている。

サイラオーグ自身はシンへの牽制を込めて放っているつもりだが、実際に向けられているシンからすればこの左も十分凶器であった。

瞬きすることすら自制し、兎に角左拳から目を離さないようにする。動くと思ったときには既に眼前まで迫って来ているので、サイラオーグの拳の先から発せられている僅かな殺気を肌で感じ取り、視覚と感覚そして直感を合わせて軌道を読み、そうやって初めて躱すことが出来る。しかし、ここまでやっても辛うじて、である。

情報を脳で処理し、体に動きを伝える僅かなラグのせいでどうしても紙一重の回避となってしまう。その上、シンの読みも百パーセント正確ではないので避け切れずに掠ることもある。

その実例を示すようにサイラオーグの左拳が顔面目掛けてくるのを予想してシンは頭部を傾けるが、途中でサイラオーグは拳の軌道を修正したのでシンの頬を掠る。それだけで頬に赤い筋が浮かび上がり、プツプツと血の玉が滲み出し、それらが連なって流

血となる。
額の傷と合わさってシンの顔の左半分は血だらけになっているが、それを拭うことも気にすることも出来ない。
掠れば刀剣を上回る切れ味を持ち、直撃すれば肉も骨も爆ぜる。拳の風切り音すらも暴力的であり精神を削ろうとしてくる始末。しかも、サイラオーグはこれ見よがしに右拳を溜めた状態で構えていた。牽制の左を超える本命の右。隙を伺いながらいつでも放てる様子は凄まじいプレッシャーを与える。
重機関銃の如き左拳でも脅威というのにミサイルのような右拳もある。そして、まだ蹴りも残しているので心底厄介であった。サイラオーグという悪魔は全身凶器という言葉を体現している。しかも、攻撃は馬鹿正直に正面から来るものだけではない。サイラオーグは巧みな足捌きで左右に移動し、別角度から攻撃することもあれば、距離を詰めて近距離から攻めてくることもある。シンもその都度足を動かしてサイラオーグに合わせる必要があった。
殺気染みた攻撃とプレッシャーを跳ね除けながら表情一つ変えることなく躱し続けるシン。その光景は見ている者たちに息をすることすら忘れさせる。
シンが攻撃と重圧を掻い潜る一方で攻めているサイラオーグもシンと似たようなプレッシャーに晒されていた。

（本当に底が見えん……！）

手数により相手の隙をこじ開けようとしているサイラオーグだが、全く攻撃が命中しないことに舌を巻く。

どの攻撃も僅かな差で躱されてしまう。相手の動きを見て、攻撃の軌道を修正するなどしているが、それでも皮一枚掠めるのがせいぜい。皮一枚の向こう側が遥かに遠い。

今までサイラオーグは多くの悪魔たちと戦ってきたが、その中でもシンの目の良さと反射神経は一線を画している。

（その涼し気な表情の下にどれだけの強さを秘めている……！）

畏れはある。だが、それ以上の興味がサイラオーグの中で湧き出てくる。湧き出る衝動は拳にも伝わり、サイラオーグの左拳はより速さとキレが増す。

サイラオーグの左が吸い込まれるようにシンの顔へ向かっていく。誰もが当たると思った。サイラオーグ自身も当たる光景を幻視した。だが、次の瞬間、乾いた音が響きサイラオーグの左拳が弾かれた。シンの裏拳がサイラオーグの左拳を叩いて防いだのだ。体捌きで全て避けていたシンだったが、遂に攻撃的な防御へと移る。

弾かれた左手に強い痛みが残る。しかし、サイラオーグは拳を解くことなくすぐに左拳で突いた。シンの守りが一層硬くなったが、同時にそうせざるを得なかったことを意味する。ギアを上げたサイラオーグの攻撃は決して無駄ではない。

最早、拳の形など見えず残像でしか追うことが出来なくなったサイラオーグの左。それすらも見て両手で防御していくシン。弾かれる音が耐えず鳴っていき、その度にサイラオーグは左手に痛みを覚える。だが、痛みを感じているのはサイラオーグだけではない。サイラオーグの拳を弾くこと自体がシンにとってもダメージを与えている。現に音が鳴る度にシンの両手には裂傷が出来ていた。

攻める方も守る方もダメージが蓄積していく。

しかし、段々とシンに攻撃が掠る頻度が増えてきた。顔や両手は勿論のことだが、胴体にも傷を負うようになっていた。サイラオーグの攻撃に押され始めていることを意味する。

この戦いが始まってからシンは攻撃らしい攻撃を出していない。サイラオーグに完封されていると見て取れる。初戦とは違い、サイラオーグはシンを上回る立ち回りをし、好きにさせないようにしていた。

このまま押し切られるのでは、という空気が漂い始める中、違う視点を持っている者がいた。

「押されているねー。でも、均衡している」

二人の戦いを観戦しているファルビウムはぼんやりと呟く。眠そうな顔であるが、彼を知る者ならばこの戦いに未だに興味を持っているのが分かる。そうでなければとっ

くに眠っている。
「君には均衡しているように見えるのかい？」
傍から見ればシンが防戦一方としか見えないが、稀代の戦術家であるファルビウムには違って見えた。
「状況としては６：４……７：３かな？　シンって子が押されているよ。でも、サイラオーグ攻めあぐねている。だから、あれで吊り合っているんだよ。必ずしも５：５である必要も無いし」
戦いに於いては現実の数字が絶対ではない。ファルビウムからすればシンは反撃の糸口を掴んでいないが、サイラオーグは攻め過ぎて知らず知らずのうちに前のめりな戦い方になっている。視点を変えれば危ういのはサイラオーグかもしれないのだ。
「成程。面白い考え方だ」
サーゼクスとアジュカにはファルビウムがどのように見えているのか分かっていない。だが、彼の言葉は信じられる。同じ魔王という立場、その能力の高さは良く知っている。
「でも、反撃するにはそれなりのリスクが必要なんだよねー。あの子にそれを超えるぐらいの度胸や覚悟はあるのかなー？」
潜在能力が高くても最終的に必要になるのは使い手の精神力である。脆弱な精神に

強い力は扱い切れず、ましてや困難など打破出来ない。
「――いや、大丈夫だろうね」
アジュカはファルビウムの懸念をやんわりと否定する。
「だね」
それにサーゼクスも同意した。彼らは感じていた。守りを固めているシンが静かに力を高めていることを。普通ならばモニター越しで分かる筈も無いことだが、この二人には分かっていた。何故ならば彼らは普通ではない。魔王という枠組みですら彼らには狭く、それを超越した存在だからだ。
「――そう。なら、そろそろ均衡が崩れるかも」
二人の言葉を疑わないファルビウムは、ここから先の予測を告げる。
そして、それは間もなく現実のものと化す。
サイラオーグの左拳が遂にシンへと届いた。閃光のような左の連射を両手を駆使して防いでいたシンであったが、度重なる攻撃により両腕にダメージが蓄積していき徐々に動きが鈍くなっていた。サイラオーグの無限にあるかと思わせる持久力による粘りがシンの守りをこじ開けたのだ。
胸部に命中し二歩、三歩後退させられるシン。胸にはしっかりとサイラオーグの拳の跡が残っており胸骨、肺に大きなダメージを与えている。

僅かに広がる間合い。サイラオーグは一歩踏み込んで詰めると今まで溜めに溜めてきた右拳を解放する。

だが、シンも黙ってそれを受けるつもりは無かった。シンの体は一瞬光の柱に包まれる。サイラオーグとの初戦時に見せた防御力を高める補助魔法である。

サイラオーグはその補助魔法を一度見ていた。恐らくは前のようにそれで一度耐え、サイラオーグへ反撃するつもりなのだろうが、サイラオーグの拳は既にその硬さを知っている。

左拳を上回る右拳が放たれ、シンが防御の為に交差させた両腕に命中し衝撃が炸裂する。

二撃目など一切考えず、その一撃に全てを込めるぐらいの思いで出された拳は補助魔法で高められたシンの防御を容易く打ち抜いた。

拳が触れるとその圧に押され、シンの両腕は胸に押し当てられる形となる。次の瞬間には両腕を通して胸に衝撃が貫いてきた。防御させていた両腕に罅が入ったのは分かる。そして、それが当てられている胸骨にも罅が入ったのが伝わってきた。サイラオーグの拳の破壊はそれだけで終わらず、両腕を上って肩にまでダメージを与える。

結果としてサイラオーグが右拳を引くとシンは両腕を力無く垂れ下げることとなった。

シン自身は痛みで戦意喪失している訳では無い。戦意は衰えてもいない。だが、意志とは裏腹にシンの両腕は麻痺状態となっており、シンとの感覚が断ち切られていた。

防御力を高めていてもこの惨状。シンはあろうことかサイラオーグの前でノーガードという無防備を晒す。

もし、これが普通の試合だったのならここでストップが掛けられていたかもしれない。だが、この試合に於いては止める審判は存在しない。故にサイラオーグの攻撃はここで止まらなかった。

影すらも置き去りにする速さでサイラオーグの右足が上がる。鍛えに鍛えた下半身から放たれる必殺の名に相応しい蹴り。その蹴りが死神の鎌の如くシンの首筋を狙って振るわれる。

間に合わないと分かっていても観戦していたライザーは『待てっ！』と叫んでいた。

サイラオーグの耳にはライザーの声が届いていたが、それでも止まらなかった。止められないのではなく自らの意志で止めない。

戦う前からサイラオーグは覚悟していた。シンと殺し合いになる覚悟を。そうでなければ勝てないと理解していたからだ。

このまま蹴りがシンの首に命中すれば死は免れない。運が良かったとしても首から下は一生使い物にならなくなるだろう。サイラオーグはそれが分かっていてもやる。

鋼の意思を以って実行する。強敵と認めた相手に半端な情など返って失礼だからだ。
命を断つサイラオーグの蹴りがシンの首を刈り取る――刹那、シンの体を青紫の光が連続して包む。直後、蹴りがシンの首へと命中する。
「何っ!?」
驚きの声を上げたのはサイラオーグであった。蹴りを首筋に打ち込まれて傾くシンの顔。シンの目とサイラオーグの目が合う。シンの目には確かな生気があった。
シンは首の力だけでサイラオーグの蹴りを耐え切ってみせたのだ。
反撃が来るのはサイラオーグも分かっていた。だが、上段蹴りという大振り且つ隙の大きな技を出してしまったせいで咄嗟に動けない。
シンは首で蹴りを受けた状態のまま肩を真上に突き出した。サイラオーグの脚は下からの突き上げを受けたせいで更に上向きになる。ただでさえ安定性の無い体勢であったが、その突き上げにより不安定さが増す。
サイラオーグのバランスが僅かに安定性を失ったタイミングでシンの前蹴りがサイラオーグの腹に叩き込まれた。
「っつ!」
サイラオーグの鍛え抜かれた大理石のような腹筋。生半可な攻撃ではビクともせず、その気になれば刃物すら通さない。しかし、シンの前蹴りはサイラオーグの長年の鍛錬

を嘲笑うかのように衝撃を貫通させる。
体内に広がる衝撃の波紋。内臓を揺さぶり、表現しようのない不快感をサイラオーグに与えた。
だが、この程度の苦しみだったのならサイラオーグは耐え切ることが出来た。問題なのは痛みなのではない。サイラオーグはシンの前蹴りのせいでバランスを崩し、仰向けに倒されてしまったのだ。
（不覚……！）
サイラオーグは床に背中や後頭部を打ち付けるがそれよりも己の失態を恥じていた。
補助魔法の重ね掛け。その発想を頭の片隅であっても想定しておくべきだった。防御を強化した両腕のガードを突き破った時点ですっかり上回ったと思ってしまったのがサイラオーグの油断に繋がった。
（まだ甘く見ていたのか俺は！　愚か者めっ！　そして、見事だ！　間薙シン！）
己を責めつつシンを称賛する。幾ら補助魔法を重ね掛けして防御力を強化したとしてもそれを超えられないという保証など無い。ましてや、防御を強化した守りを破られた直後である。死んでもおかしくない攻撃を前にして一か八かの博打染みた行動をとれるのは、偏にシンの精神力が為せるものであった。
そして、シンはそれに勝った。サイラオーグが優勢であった筈なのに一転してシンが

有利となる。
シンは仰向けになっているサイラオーグに容赦無く足を振り下ろした。
「ぐうぅぅっ！」
踏み付けという単純だが強力な攻撃。腹を足裏で押し込まれて内臓全てを吐き出してしまいそうな圧迫感に襲われる。それでも耐えるサイラオーグだが、シンは躊躇無く同じ箇所を全力で踏み付けた。
サイラオーグは咄嗟に両腕でそれを防ごうとするが、先程のお返しと言わんばかり両腕ごと踏み抜く。
サイラオーグの体を通して床まで衝撃が貫き、サイラオーグを中心にして床に亀裂が生じた。
「がはっ！」
サイラオーグは呼気とはっきりとした苦鳴と吐き出させられる。余波だけで床を砕く程の衝撃である。まともに受けたサイラオーグのダメージは計り知れない。
相手のダメージの大小関係無くシンは三度目の踏み付け体勢に入る。しかも、三度目は足に力を集中させており、足に浮かび上がっている紋様が光を発している。完全にサイラオーグを仕留める気であった。
ライザーとレイヴェルは鳥肌を立てていた。シンが発する気配だけで察してしまう。

後先のことなど一切考えずにサイラオーグを殺す気で攻撃しようとしていると。

だというのに目が離せられない。悪魔としての業なのかもしれないが、ひどく高揚してしまう。サイラオーグがシンを全力で殴り付けたときも、シンがサイラオーグを全力で仕留めようとする今も興奮が止まらない。

サイラオーグが無慈悲に敗北してしまう未来を想像してしまう反面、サイラオーグがここで終わる筈が無いという期待も生まれてしまう。兎に角、見たいのだ。この先を。終わりでも次に繋がる展開でも良い。戦う二人が見たい。

勝負を決するかもしれないシンの三度目の攻撃がサイラオーグへ振り下ろされる。

「ぬうっ！」

サイラオーグは全身を捻ることによりその勢いで地面を転がる。転がっていく姿は無様の一言であり、身体中の筋肉をゴムのようにしならせたせいでシンによって痛めつけられた筋肉、骨、内臓が悲鳴を上げた。

サイラオーグはそれでもシンの攻撃から逃げる。サイラオーグもまたここで終わらせたくなかった。全力は出しているが、まだ出し切っていない。尽き果てるまでこの戦いを何が何でも終わらせつもりはない。

まんまとサイラオーグに逃げられてしまったシン。足でも掴んでいればそれを阻止出来ただろうが、サイラオーグの強烈な右によりシンの両腕はまだ使用不可能である。

サイラオーグの攻撃の一つ一つが未来へ繋げた。
対象を失ったシンだが、攻撃を中断することはせず白色の床に足が叩き込まれる。トレーニングルームが一瞬震え、クレーターのような陥没が瞬時に出来上がった。破壊の跡がサイラオーグのあったかもしれない未来を容易に想像させる。
不発に終わった攻撃。シンはサイラオーグを追おうとしたが、あるものが目に入った。
地面に深くめり込んでいる己の足。陥没から生じる幾本もの亀裂。
ここから先の行動に関してシンは何か考えがあった訳では無い。思い付き、閃き、或いは天啓のようなもの。頭に過った瞬間には行動に移っていた。
足に込めていた力を地面へ流し込む。土に溢した水のように地面へ吸い込まれていくシンの力。力は亀裂の中へ張り込み、亀裂を一気に伸ばす。それはサイラオーグの逃げた先にまで達した。
シンの追撃が来る前に立ち上がろうとするサイラオーグ。そのとき、いつの間にか足元に亀裂が走っていたことに気付く。次の瞬間、裂け目の奥に光が見えたかと思えば、亀裂から一気に力が噴き出し、その上に立っていたサイラオーグは下から突き上げられ、地面から跳ね上がった。
シンは内心少し驚いていた。サイラオーグがまるで地面に殴り飛ばされたように跳

ねたからではなく、自分の思い描いていた光景と寸分違わなかったからである。殆ど思い付きでやったことなのに不思議なぐらいにしっくりとくる。初めてやったことなのに初めてではないような既視感。サイラオーグにダメージを与えられた反面、その既視感を気持ち悪く感じるが、戦いの中ではそれは不要な感覚なので心の奥底に押し込んだ。

「ぐっ！」

足裏から脳天まで突き抜けていく衝撃。一瞬、何故自分が宙に浮いているのか分からなくなる。不意を衝かれた攻撃により意識が混濁してしまうサイラオーグ。

（まだ……戦いの最中だっ！）

だが、いつまでもその状態は続かなかった。持ち前の精神力により意識を覚醒させ、自分の置かれている状況を把握し、何事もなかったかのように着地する。罅割れた地面に降り立ったサイラオーグだが、先程の攻撃が来ることは無かった。

（体が……！）

サイラオーグは自分の異変を感じ取っていた。しゃがんだ体勢から十数メートルも打ち上げられる程の衝撃を足から受けてしまったせいでサイラオーグは足に力が入らず、細かに震えさせていた。その場で立っているだけで精一杯であり、進むことも退がることも出来ない。サイラオーグの眷属たちが見ていたのなら色々な意味で有り得な

い姿なのである眷属は驚愕し、ある眷属は滂沱し、ある眷属は主の見てはいけない姿を見た自分を罰するように両目を固く閉ざすだろう。

シンとサイラオーグとの間には数メートルの距離が出来ている。魔力が使えないので近接格闘のみ磨き上げたサイラオーグにとっては絶望的なまでに遠い。

一方でシンの方は未だに両腕が痺れて使えないが、サイラオーグとは違って間合いの外の相手を攻撃する手段を豊富に持つ。

シンは息を吸い込む。それを見てサイラオーグは両手を構える。吐き出された息は炎となり、サイラオーグへ一直線に伸びていく。

「ふんっ！」

サイラオーグが拳を捻りながら突き出すと、眼前の炎は螺旋状に捻じれたかと思えばサイラオーグの拳圧により四散した。

拳一発で炎を消し飛ばしたサイラオーグだったが、炎の向こうに見える光景に息を呑む。

シンの全身が充填された力により発光しており、次なる攻撃の準備を済ませていた。炎の息は時間稼ぎと目晦ましであった。

シンは前屈みになり上半身を発条のように引き絞る。そして、大きく仰け反ることで体内に溜めていた力を解き放った。

サイラオーグに向け、数十の光線が一斉に伸びていく。

両眼が上下左右に動き、光線の軌道を読み取る。全てが直撃する軌道には入っていない。外れているのは避けた先を想定してのもの。それでも六割程は確実に命中する。

「ふぅぅぅ……」

サイラオーグはゆっくりと呼吸をする。動揺と焦りは皆無。それを表すかのように纏う闘気はさざ波よりも落ち着いている。ここまで追い込まれても恐怖は全く湧いてこない。逆に闘志によって昂っており、それを鎮める方が大変である。

闘志をコントロールしながら全身の緊張を一旦解き、脱力状態に入る。力むことも大事だが、本当に力を振り絞りたければ力を抜くことも重要。力の振れ幅の差が大きな力と速さを生む。

四方から来る光線に対し、サイラオーグは脱力していた筋肉を隆起させ、空を切り裂く勢いで左右の拳を繰り出した。

殴った後に殴る音が聞こえてくる程の拳速。ほぼ同時に迫っている光線を同じくほぼ同時に打ち落としてしまう。

このまま全て打ち落としてしまうかと思ったとき、目に見えて分かる程に片手の速度が落ちた。それにより、打ち洩らした光線がサイラオーグの肩に命中。そのまま貫くかと思われたが、鍛えられた分厚いサイラオーグの体に風穴を開けることは出来なかっ

た。

（くっ……見誤ったか……！）

相手の攻撃の特性を見抜くことが出来ず、痺れて動かせない片腕を見てサイラオーグは恥じるように言った。

シンのこの技には相手の体を麻痺させる効果がある。サイラオーグは闘気を纏わせていたおかげで影響が少なかったが、迎撃している間に麻痺の効果が蓄積して片腕の動きが鈍ってしまった。そのせいで一発貰ってしまうという不覚をとる。

初見の攻撃に対し、ここまで反応出来るサイラオーグは異常であり、見ている者たちからすれば称賛ものであったが、サイラオーグ自身が己に厳し過ぎるせいで今の攻防に及第点すら与えられない。

シンはそんなサイラオーグを更なる力で潰す為に追い打ちを掛ける。足を奪い、片腕を奪っても攻撃の手を緩めることは一切しない。

全身ではなく今度は左足に力を集束させる。それを後ろ回し蹴りの勢いに乗じさせて飛ばした。

左足から放たれるのは幾本の魔槍。先程の光線以上の破壊力を持っている。

手足の自由を奪われたサイラオーグに対するこの攻撃。傍から見れば今のシンはどう映っているのだろうか。悪魔よりも悪魔らしく見えるのだろうか。魔人という存在

を体現しているのだろうか。答えは各々の中にあるだろうが、少なくとも目を離すことが出来ない存在であることは共通している。

動けず、迎撃出来ずのサイラオーグ。彼がとって残された手段は一つ。片腕を真上に突き上げ、それを眼前に持ってくるという構え。最低限急所への守りをしながら己の肉体を信じて防御を固める。

サイラオーグが纏う闘気の量が倍以上となる。不思議なことにサイラオーグが傷付く度に闘気の量や質が増していく。闘気は生命の根本というべき力。サイラオーグの溢ればかりの活力と生命力によって可視化している。

迫り来る死に対し、サイラオーグの生きるという強靭な意思に反応し、今まで以上の闘気を引き出していた。

悪魔の中でも類を見ない――現状、これ程の闘気を出せるのはサイラオーグのみ。それが、シンという敵を前にして次なる段階にして新たな領域に入ろうとしている。

それが如何なるものかはこれから知ることとなる。

シンの魔槍がサイラオーグの闘気に触れた。濃密なる闘気の膜が魔槍を阻もうとするが、勢いを削ぐことは出来ても完全に防ぐことは出来ず、魔槍は闘気の中を突き進み、サイラオーグの脇腹、脚、腕などの箇所に刺さる。

だが、闘気の防御は決して無駄ではなかった。闘気により威力を殺すことでサイラ

オーグは己の肉体でそれを受け止め、貫くことを許さない。
サイラオーグは腕を振り、刺さっていた魔槍を振り払う。残りの魔槍も躊躇無く抜いた。
傷口からは多くの血が流れ、サイラオーグの足元に血溜まりを作る。失血により意識を失うのも時間の問題であった。
生命の源である血を大量に失いながらもサイラオーグは平常心を保ち続けている。不思議と恐れは湧いてこない。血が流れ落ちた分だけ体から無駄なものが削ぎ落されていく気分になる。
（体は――まだ動く）
瀕死に近い状態に反して集中力が極限まで高まっていく。度重なるダメージのせいで肉体を制御する箍が外れ掛けている。それに伴い視野が一気に広がる。
視界の端ではライザーとレイヴェルが瞬きもせずにこの戦いを見届けようとしている。レイヴェルは興奮している様子だが、ライザーの方は複雑な表情を浮かべていた。二人の戦いを見て、自分の実力がまだそこに届いていないことを痛感していた。
シンの方は次なる攻撃の為に五指を開き、指先のみに力を集中させていた。サイラオーグの腕に傷を残した引っ掻きの何倍もの威力を持つ攻撃の準備に入っている。
サイラオーグは前のめりに倒れ込む。見ている者たちはとうとうサイラオーグが限

界に達したと思ったが、それは違った。
前に倒れ込む勢いを利用し、サイラオーグは一気に前に跳んだ。シンの攻撃により力の入らない両足とは思えない瞬間移動かと錯覚するような踏み込み。
集中力が極まっている今のサイラオーグだからこそ自身の肉体を完全なコントロールができ、最小の動きで最大の効果を発揮することが出来た。
サイラオーグが生きてきた中で初めて感じる体の軽さ。筋肉や骨、神経、体を構築する全てのものを把握したような万能感。
気付けばシンの目の前まで来ていた。サイラオーグは無心で拳を作り、そして放つ。
シンからすればいきなり近距離までサイラオーグが移動してきたような状況。しかし、焦ることなく攻撃を切り替え、突き出された拳に掌打を返す。
サイラオーグの拳を掌打で受け、掴み、そこから光弾による反撃を行うというのがシンの算段であった。
サイラオーグの拳がシンの掌に触れる。瞬間、シンとサイラオーグは同時に未知なる感覚を体験した。
決して速さも無く、威力も感じられないと思った拳に触れたとき、掌を通じて腕の中に経験したことの無い痛みが走った。シンの腕は音を立ててひしゃげていき、折れた骨が肉を突き破って外に出る。

サイラオーグはあまりに軽い手応えに驚いた。殴ればそれなりの反動というものが拳に返ってくる。だが、それが無い。拳から発生する衝撃が余すことなく相手に流れ込んだような感触であった。

サイラオーグが拳を突き抜くとシンは後方へ飛ばされる。サイラオーグはそれを追うことはせず、自分の拳を見ていた。

それは神の死んだこの世界でどれ程の奇跡だったのだろうか。偶々、非才の悪魔が存在し、その悪魔は折れることも腐ることもせずに一心不乱に鍛錬を積み、類を見ない闘気をその身から発せられるようになった。

そんな悪魔が出会ったのは魔人。その魔人は如何なる守りも貫く拳を持っていた。

本来ならば存在しなかった概念。魔人がこの世界に生み落とされたことで新たに生まれた概念。過程は違えば突き進んだ先に用意された贈り物。

偶然に偶然を重ねた果てにサイラオーグは貫き通す拳を手に入れた。

思いもよらない力の発現に戦いの最中だというのに戦いを忘れて呆然としてしまうサイラオーグ。どうやって今の一撃を放てたのかサイラオーグも分からない。先程までその手にあった感触は消えていた。辿り着いたがまだ完璧に掴めていない。

隙を晒すサイラオーグ。だが、シンは攻撃出来ない。片腕がジグザグな形に変形した上に開放骨折までしているのも理由の一つだが、サイラオーグの貫く拳を受けたことで

彼を生半可に攻撃することを躊躇っていた。
半端な攻撃は出来ない。やるのならば一撃で葬るような攻撃をしなくてはならない。
脳裏に浮かぶのはあの技。沖田総司に指摘されたことを切っ掛けに生まれた技。

◇

「勿体無いですよ」
総司との手合わせが始まり、暫く経った後総司に熱波剣を放った後に言われた言葉であった。
「勿体無い、ですか？」
「はい。見させてもらうのは二度目ですが、折角良い技なのに色々と勿体無い部分があると思いました」
刀一本で熱波剣を斬り払った総司に言われると皮肉に思えてしまう。確かに熱波剣を多用しているが通用しない相手も増えてきた。使い方を工夫しているが、とどめを刺す技ではなく牽制ぐらいの技にまで落ちてきている。
「改良すべきということですか？」
「そうですね。と言っても簡単に出来ますよ」

総司は軽々と言う。
「君がとても器用で命知らずなのはその技を見ていたら分かります。だからこそ、もっと分担すべきです」
「分担……」
「片手で熟す必要なんてありません。君は両手で出来るんですから」
総司から言われ、シンは当然のようにやっていたことへの視野の狭さに気付かされた。
熱波剣は片手専用の技――ではない。当時のシンは右手しか魔人の力を発現することが出来なかったので、苦肉の策として片手で使えるようにしたのだ。後に左手でも魔人の力を発揮することが出来たが、片手で熱波剣を使うことが癖になっており、総司に指摘されるまで頭の片隅にもその考えが無かった。
自分はこんなにも頭の固い奴だったのかと軽くショックを受けてしまう。
当たり前のように同じことをやっていても発展性は無い。逆に今、それを知れたことは幸運と言える。
「――試してみたいことがあります」
「幾らでも付き合いますよ」
総司は微笑を浮かべながら頷いた。

◇

練習は重ねてきた。これが本番であったとしてもやることは変わらない――筈だが、サイラオーグにより片腕が使い物にならなくなっている。

形はどうであれある程度使えるようにしなければならない。

シンは徐に折れた方の手首を掴み、引っ張る。サイラオーグにより歪に変形させられ、縮んでしまった腕を強引に引っ張って元の長さに戻す。

「ひっ！」

その行為にレイヴェルが悲鳴を上げた。見ているだけでも痛みを想像してしまう。

シンは突きでている骨を元の位置に無理矢理押し戻す。レイヴェルがまたも悲鳴を上げる。

治しているというよりも自傷行為としか映らない。しかし、これにより歪だった腕はある程度元の形には戻った。だが、戻ったところでとても使えるようには見えない。これからどうするのかと思った、そのときであった。

「――えっ？」

レイヴェルは驚きの声を出してしまう。傍で見ていたライザーもレイヴェルのよう

に声を出さなかったが同じような表情をしている。
サイラオーグによって破壊された腕が音を立てて治り始めた。瞬きをすると歪さが残っていた腕が真っ直ぐになっていき、また瞬きをすると内出血による変色が元の血色へと戻り、三度目瞬きをすれば骨が突き破ったことで出来た傷が塞がれた。
手品のような光景にライザーとレイヴェルは我が目を疑う。
しかし、何となくではあるが納得してしまう思いもあった。シンによってサイラオーグは追い詰められた状況から拳一つで逆転してみせた。シンもまたサイラオーグに追い詰められたことで新たな段階へと進んだのだ。
互いに互いを高め合う関係。シンとサイラオーグは相性が良過ぎたのかもしれない。
会心の一撃によって与えた傷がすぐに治ってしまったが、サイラオーグはそのことを特に驚くことはなかった。それぐらいやってみせるだろう、という不思議な信頼があった。
サイラオーグは集中する。一度掴み、放してしまった先程の感覚を取り戻そうとしていた。
構えたまま微動だにしないサイラオーグ。一見すれば隙だらけに見えるが、その体からは触れることすら恐れる程の膨大な闘気が放たれており、あらゆる者を威圧する。
一方でシンもまた構えに入る。重傷であった片腕を瞬時に治したことに大した反応

を見せないまま、輪を作った右手を腰に当て、空を握る左手をそれに添えながら上半身を右に少し捻る。刀を鞘から抜く構えに良く似ていた。

この構えこそ総司との助言と実戦式の特訓の中で導き出した熱波剣の発展。

左手に力を集中させ、魔力の剣を創造する。このとき、熱波剣とは違い力のコントロールを一切せずに全ての力を注ぎ込む。

左手から伸び、右手の中に納められる炎のような魔力剣。今にも暴発しそうな魔力剣を抑えるのは右手。右手にも力を集中させ、魔力剣を包むように魔力で覆う。右手は構えの通り鞘の役目を果たしていた。

最初は燃えているような形の魔力剣が、右手の中で段々と研がれていくように無駄な部分が削げていく。また力を注がれ続け力の密度が変化したせいか蛍光色が青紫へ色を変えていく。

役割を分散することで今まで以上に力を集束することが可能となり、マグネシウムの燃焼反応のように不安定な形を魔力剣は、熱波剣時よりも膨大な力を注がれているというのに安定し、より刀剣らしい鋭利な形となっている。

対戦相手を前にしてどちらも悠長と言える溜めを作る二人。だが、この戦いを見ている者たちには分かっていた。二人とも次で決着をつけようとしているのだと。

示し合わせた訳では無いが、どちらかが動くときが相手の動くときなのが伝わってく

る。相手を待たずに攻撃するなど無粋なことはしない。これは試し合いである。相手の本気、全力を上回って勝つことに意味がある。
シンの剣が研ぎ終わり、サイラオーグの闘気が噴き出るのを止む。どちらも準備が完了した。
サイラオーグは踏み込み、シンは待ち構える。ライザーとレイヴェルはこれから起こることを瞬くことをせず目や脳に焼き付ける。
剣と拳。衝突する力。勝ったのは――

◇

「これで決着かー。というかどっちが勝ったのか分かんないや。どっちも死にそうだし」
ファルビウムは戦いの決着を少し惜しむようであった。
「早く処置しないと死んじゃうね。医療班は準備してある」
「大丈夫だ。あの場にはフェニックスの兄妹が居る。これ以上ない程適材だ」
「サーゼクスさぁ、もしかしてこうなることを想定して、あの兄妹の観戦を許したの？」
「まさか。私は、君程先を見通せないさ」

すると、アジュカはモニターに背を向けて去ろうとする。
「もう帰るのかい？」
「ああ。いいものを見せて貰った。おかげで色々と刺激を受けたよ。早速、研究を進めたい」
シンとサイラオーグの戦いにも興味を惹かれたが、アジュカが最も興味を持ったのはシンが戦闘中に使用した防御力を高める魔法であった。
「あれは、原理としては赤龍帝の倍加に近い。尤も、全てを倍にする倍加とは違って限定されているがね。逆にそちらの方が汎用性がある。何よりも興味深いのは既存の術式とは根幹が違うところだ」
あらゆる魔術の式を開発してきたアジュカだからこそ分かる特異性。
「見せてくれたのは防御力を高めるあれ一つだったが、研究を進めればもっと応用を利かせられる。例えば力や素早さ、反射神経を上げたり、逆にそれらを下げたりなんてね」
すぐに有効性と応用への目途を立たせる。
「必要ならこの戦いの録画を提供するが？」
「結構。もう覚えたよ」
数度見ただけでシンの魔法を完全に解析したと言うアジュカ。サーゼクスもファルビウムもそれが法螺だとは思っていない。アジュカが言うならば本当のことなのだろ

う。

殆どの者が知らないシンとサイラオーグの戦い。しかし、そこで生み出された波紋は、この世界に確かに広がっていく。

待機、黒犬

ゲーム当日。レーティングゲームの会場に選ばれたのは、空に浮かぶ島にある都市――アグレアス。都市を丸々収めた島が宙に浮かんでいる光景は、誰もが思い浮かべる幻想であり、ファンタジーという言葉がこれ程似合うシチュエーションは無いだろう。

旧魔王の時代から存在している島であり、それなりの歴史を持つ。島が宙に浮かんでいる原理、動力は殆ど知られておらず、一握りの悪魔――アジュカ・ベルゼブブとその眷属ぐらいしか分からない。

都市名のアグレアスから連想させる通り、この島はアガレス領である。何故、ここがレーティングゲームの会場に選ばれたかというと少々生臭い話となる。

レーティングゲームの会場として最初望まれていたのはグレモリー領、もしくは魔王領での開催であった。これは現魔王派の上役の意向である。それに待ったを掛けたのが大王派のバアルであった。

能力がある悪魔を上に置く現魔王の体制に対して大王派は筆頭のバアル家を含め、家柄や血統を重視している。そのバアルはバアル領でゲームの開催を譲らなかった。未だに貴族社会が幅を利かせている冥界に於いて、現魔王派と大王派が衝突するのは必然

であった。
そこから先は泥仕合同然の揉め合いである。現魔王派の方はどうにかしてバアルに退いてもらおうとしたが、バアルは頑として主張を譲らない。
能力重視と血統重視。かつての旧魔王らとも揉め事の再現。過去にそれで痛い目を見て来たが、染み付いてきたものは中々変えられない。
平行線の話し合いの後、アガレスが魔王とバアルの間を仲介し、妥協案としてアガレス領での開催となった。
この結果はバアルの目論見通りと言える。傍から見れば現政権である魔王がバアルの為に折れた形になったように見える。バアルの、大王の権力は未だに健在と主張出来る。
そのせいでこのレーティングゲームは、魔王ルシファーと大王バアルの代理戦争と捉える者たちもいた。純粋な力比べをしようとしていた一誠たちにとっては傍迷惑な話である。
そんな裏で政治の泥のような権力闘争が渦巻いている中、一誠たちはそんなこと関係無いと言わんばかりに空中都市への道中を楽しんでいた。
アグレアスへの入り方は三つ。一つは魔法陣による転移。これは一瞬だが、折角の景色を眺めることが出来ないので却下となった。

二つ目は飛行船での移動。真上から見下ろすアグレアスの光景は中々のものらしいが、一誠たちは満場一致で三つ目の移動手段となった。

下の乗り場からロープを辿って上を目指すゴンドラでの移動。アグレアスから滝のように落ちる水が快晴の光を反射させ虹を作る様子は、まさに夢で描いた空中都市そのもの。

これから激しい戦いが待っているが、一誠たちは暫しの間それを忘れてゴンドラから見える雄大な風景に見惚れていた。

ゴンドラの中で引率者であるアザゼルが待ち時間を利用して今回のレーティングゲームについての揉め事などを一誠らに説明する。説明している本人が面白くない話と前置きしながら、実につまらなそうに話していた方が印象的だったというのが一誠の感想である。

アザゼルとしては冥界の実情を知るのに良い機会だと思っての事。上を目指すということは否応なしにそういった輩と関わることを意味する。

表と裏から良い意味でも悪い意味でも注目をされているレーティングゲーム。自然と身が引き締まる気持ちになってくる。

そんな会話の中で一誠はある疑問が浮かんだ。

「今更ですが、このゲームはテロリスト――英雄派に狙われるなんてことは？」

以前、ディオドラの手引きで『禍の団』の旧魔王派が襲撃してきたのが記憶に新しい。そのことがあって警備は強化されている筈だが、つい心配になって訊いてしまう。
このレーティングゲームは台無しにしたくない。それは一誠だけでなくリアスたちも同じ気持ちである。
「あるだろうな。これだけ注目されているし、会場には業界の上役が多数揃う」
一誠の疑問をアザゼルはあっさりと肯定するので、一誠は目を見開いてしまう。
「敵から見れば大漁だからな。間違いなく狙うな」
不安を煽るように言うアザゼル。そんな彼にリアスの非難する視線が刺さる。
「――英雄派が神器使いたちを投入するってことですか？」
木場は目に鋭さを宿しながら訊く。彼の脳裏に浮かぶのは強敵のジークフリート。侮蔑する訳では無いが、警備レベルの悪魔ではまずジークフリートに勝つビジョンが見えない。
「いや、英雄派の連中が首を突っ込むことは無いな」
「ハッキリと言いますね」
断言するアザゼルに朱乃はその根拠を問う。
「英雄派の奴らは、前回の京都の件の失敗で『禍の団』の中で責任どうこう責められて大人しくしているらしい――まあ、それでも地位を追いやられる程では無いみたいだが

な。形だけのパフォーマンスだ。反省してまーすってな」
　曹操率いる英雄派が京都で目的を果たせなかったことで、組織内で幾らかの発言力を失ってしまった。これにより『禍の団』の手綱を握り切れなくなったとのこと。
「随分詳しいですね」
「……ヴァーリから個人的な連絡が昨日届いてな」
「ヴァーリ？　あいつからですか？」
「ああ。『禍の団』の今の実情をお節介にも教えてくれやがった」
「そうなんですか……」
「『あのバアル家のサイラオーグとグレモリー眷属の大事な試合だ。俺も注目している。兵藤一誠の邪魔はさせないさ』――だとさ、愛されてんな、イッセー」
　からかうアザゼルに一誠は体を震わす。
「や、やめて下さいよ！　気持ち悪い！」
　アザゼルは期待通りの一誠のリアクションに笑う。
「そうなると、白龍皇チームが曹操たちを牽制してくれているということですか？」
　木場の質問にアザゼルは頷く。
「そうなるな。曹操たちもヴァーリたちとやり合う訳にもいかんだろう。曹操らは禁手使いの英雄の子孫を集めまくったドリームチームだが、伝説級のバケモンを集めた

ヴァーリたち相手じゃ犠牲も大きい。何の得にもならねぇ……曹操たちは、な」

含みのある言い方に若干の不安が過る。

「何なのその含みは」

リアスが皆を代表して追究する。

「――さっきも言ったが、曹操たちの地位は少し下がっている。そのせいで、今まさに曹操たちが押さえ付けていた派閥が騒ぎ出し始めているらしくてな。これを機に一気に団の主導権を奪い返そうって肚らしい」

皮肉なことに曹操たちを撃退してしまったせいで、本来ならば纏めて抑え付けられる筈であった下位のテロリストたちが暴走し出してしまった。

「でも、曹操たち以外だったらどうにかなるんじゃ……」

「面倒くさいことにな、間接的にだが曹操たちも関わっている。何でも『魔獣創造』で創ったアンチモンスターの大群を提供したって話だ」

レーティングゲーム前に嫌な情報を聞かされた。『魔獣創造』で創ったモンスターは、持ち主のレオナルドが成長途中であることから巨大なモンスターなどはまだ生み出せないが、その代わりに相手の弱点をつくことに特化したアンチモンスターを創造することに長けている。この場合は、対悪魔用のアンチモンスターが大群で用意されており、そんなものが冥界に送り込まれたらどれ程の被害が出るだろうか。

「それ、大丈夫なんですか……」
「大丈夫だ」
皆が不安そうにしている中、アザゼルは大して心配した様子を見せない。
「そのことは既にサーゼクスたちに伝えてある。向こうがやる気満々だっていうなら、こっちも容赦無く連中を潰す」
歴戦の堕天使であるアザゼルから凍り付くような殺気が発せられる。同時に頼もしくも感じられた。これほどの気配を放つアザゼルが味方に居ることに。
「いい加減好き勝手されるのもウンザリしていた所だ。こっちから打って出ることになった」
「それは、何処に集まっているのか分かっているってことですか？」
「ああ。メンバーも編成済みだ。『禍の団』の連中に同情するぐらい奴らを用意した」
情報源についてはアザゼルは言わなかったが、話の流れからしてリークしたのはヴァーリと思われる。余程リアスたちとサイラオーグたちとの戦いを邪魔させたくないのだろう。
「俺の伝手で用意した戦力があるが、サーゼクスも良い奴を出してくれた。セタンタが参戦してくれる」
「えっ！　セタンタが？」

　セタンタの名を出され、リアスが一番驚いた。
「珍しい……セタンタが護衛以外でグレモリーやお兄様以外のことで冥界から離れるなんて……」
「何でもセタンタの方から立候補したって話だが？」
「何かあったのかしら……」
　セタンタの人柄を良く知っているリアスは、普段の彼が進んでしない行動に疑問と不安を感じる。
「んでだ、シンの奴にも参加してもらった」
『なっ!?』
　シンの名前を出され、全員が驚く。
「あいつ、そんなことになってたのか！　どうりで見送りに来ない訳だ……」
「アザゼル！　勝手な真似をして！　あの子をそんな危険な場所に送るなんて！」
「冗談半分で訊いたら二つ返事で『いいですよ』って言われてな……安心しろ。最強クラスの護衛を付けてある。万が一のことはならない」
　ハッキリと言うアザゼル。用意した護衛に余程の自信と信頼がある様子。
「大丈夫だ……片方は不安だが、もう片方はしっかりしている」
　黙っておけばいい話を正直に話してしまったアザゼルに皆は一抹の不安を覚えるの

であった。

◇

場所は変わり某時刻、某所。テロを企んでいる『禍の団』の拠点から感知されない場所で待機しているのは、テロの阻止及び『禍の団』の壊滅の為に選ばれた選りすぐりの面々。動きに気付かれないように少数精鋭となっているが、誰もが一騎当千の実力を持つ。その中にシンも居た。

前日にサイラオーグと激しい戦いの末、瀕死になったがフェニックスの兄妹の尽力で戦えるまでに回復している。それでも若干、顔色が悪く見える。

テントなどの拠点は無く結界で姿を隠しているだけの野晒しであり、シンは岩に腰を下していた。

シンは横目である人物を見る。今回の件でシンたちを束ねるリーダーであり、『神の子を見張る者』の副総督でもあり、朱乃の実父でもあるバラキエル。精悍な顔付きのバラキエルは目を閉じ、腕組みをして佇んでいる。

この地に到着してバラキエルが最初に出した指示はその時が来るまで待機することであった。

　サイラオーグとの戦いの後、偶々アザゼルと会って今回の件について話を聞かされた。リアスたちがレーティングゲーム中、特にする予定も無かったので二つ返事で了承をした。
　そして、現在シンはお供の仲魔たちを率いて静かに待っている。ピクシー、ジャックフロスト、ジャアクフロスト、ジャックランタンはギャアギャアと騒がしく喋っている。結界は防音も備わっているので外に声や音が洩れることは無いが、それでも場所を弁えて欲しいとはシンも思う。それとは対照的にケルベロスは体を丸めて眠っており、静かなものであった。
『怖いぐらいに戦力が集まったから、お前の出番は無いかもな』とアザゼルは言っていたが、バラキエルを始めとして確かに強力なメンバーがここに集まっている。
　一人はセタンタ。グレモリー家やサーゼクスを守護するのが主な務めとしている彼がここに来ていたのはシンにとっても驚きであり、見たときには少し目を見開いてしまった。それはセタンタも同じようであったらしく、顔を合わせたときにシンと同じような表情をしていた。
　サイラオーグとの再戦の件は今も尾を引いており、セタンタはシンから可能な限り離れた場所に陣取り、そこから一歩も動かず喋らず彫像のように不動を貫く。セタンタはここに来てから殆ど喋っておらず、言葉を発したのはバラキエルにした一、二言の挨拶

程度。

しかし、この場にはセタンタと同じ位不動と沈黙を続けている存在が居た。

岩場の影。そこに佇むのはオンギョウキ。京都での修学旅行の件で協力関係を結んだ本物の忍であり暗殺者。アザゼルが協力を願ったところ京都側もオンギョウキも快く了承してくれた。

京都の妖怪の大将である八坂を英雄派に拉致された一件以来、オンギョウキは『禍の団』、特に英雄派を敵視しており、『禍の団』の殲滅に協力を惜しまなかった。今回は英雄派は間接的にしか関わっていないことを内心残念に思いつつ、それに関わる者たちは容赦無く潰すことを決めている。

意識を集中させているオンギョウキは全くと言っていい程存在感が無く、意識しないとそこに居る筈なのに見えなくなってしまうような不可思議な感覚に捉われてしまう。

「ヒヒヒヒ。見事なぐらいに華がねぇなぁー。酌してくれる美人ぐらい用意しておいてくれよぉー、バラキエルー」

「……残念だが、ここではそれは不要だ。マダ殿」

バラキエルに鬱陶しい絡み方をするのはマダ。ロキ襲撃の際に白龍皇とマタドールの戦いの巻き添えを受けて大怪我を負っていたが、すっかり完治している。

「待つばっかりじゃ暇でつまんねぇよぉー。俺もアザゼルに引っ付いてレーティング

ゲームを見に行きゃ良かったなぁ」
「貴方は今、冥界への立ち入りを禁止されているだろう」
「入っちまえばこっちのもんよ。俺を追い出せる奴なんて冥界でも片手で数える程しかいねぇんだから」
「その為に魔王が駆り出されるとしたら、不憫で仕方ない」
　我儘で自分勝手なことを言いながら酒を呷るマダ。それに手を焼かせられているバラキエル。暇だ暇だと言ってバラキエルにちょっかいを掛けて相手の反応を窺って暇潰しをするという質の悪いことをしている。
「ってかいつまで待てばいいんだよ、マジで。これだけ揃えばテロリストの千や万ぐらい楽勝だろう?」
　バラキエルを揶揄いながら不意打ちのようにマダは本題に入る。尤も、マダの質問には正当性があった。待機するとバラキエルは言ったきりでどれくらい待つのかすら説明していない。
「もう少しだけ待ってくれるか?　まだ全員揃っていない」
「これ以上戦力が必要なのかよぉー」
　不満を洩らすマダであったが、不意に口を閉ざした。
　シンも同様にバラキエルとマダの会話から意識が離れ、別の方へ向けられる。この場

にいるセタンタとオンギョウキもまた同じようにある方向を見出していた。
張られていた結界が揺らぎ、そこから誰かが入って来る。
見た目は日本人、歳は二十歳前後と思われる。整った顔立ちをしており、十人が十人カッコいいと評するだろう。彼一人ならば警戒する必要のない雰囲気だが、それよりも注目すべきはその青年が連れている一匹の犬である。
サイズは大型犬。頭から尻尾の先まで影から抜き出したようなムラ一つ無い漆黒の毛色。金色の瞳からは獣にはない知性を感じさせると同時に普通ではない何かを感じさせる力が宿っていた。
「おやおやぁー？　アザゼルったら随分と豪勢な助っ人呼んでくれるじゃねぇか」
「バラキエル先生、マダさん。お久しぶりです」
バラキエル、マダと顔見知りらしく青年はマダを見て一礼する。
「紹介しよう。彼は刃狗（スラッシュ・ドッグ）――『黒刃の狗神（ケイニス・リュカオン）』の所有者だ」
「初めまして。幾瀬鳶雄といいます」
『黒刃の狗神』。それは『赤龍帝の籠手』と同じ神滅具。
「刃狗……グリゴリ所属の神滅具所持者ですか。名前は知っていましたが……思っていたよりも若い」
黙っていたセタンタが口を開く。無言を貫けない程度には鳶雄の参戦に驚いている

様子。
　オンギョウキも神滅具所持者である鳶雄と彼と連れ添っている黒犬を注意深く観察している。
　鳶雄はシンたちを見る。心なしか緊張した面持ちに見えた。
「アザゼルさんから話は伺っています。セタンタさん、オンギョウキさん、そして――」
　シンの顔を見て、鳶雄は何故か数度瞬きをした。
「――間薙シン君だね」
「――はい」
　シンを見て何か思うことがあったような反応をしたが、すぐに取り繕いシンに握手を求める。
「君がこの中で俺と一番歳が近い。出来ることなら仲良くして欲しい」
　他意も敵意も感じられない。シンはその握手に素直に応じる――筈だった。
　鳶雄とシンの手が触れそうになったとき、黒犬が牙を？いて唸ったかと思えば。影から鋭利な刃を伸ばし、シンの手首を狙う。
「ッ!?　刃（ジン）！」
　鳶雄が反応し、名を呼んで攻撃を止めさせようとするが、一度走った影の刃は止まらない。

シンの手首が切り離される――
「変わった握手ですね」
――ことはなく、シンは伸ばされた影の刃を素手で掴み取って皮肉を言う。
指の隙間から血が垂れるが、シンは構うことなく強く握り締め、遂には実体の無い筈の影の刃を握り砕いてしまう。砕かれた影の刃は霧散した。
「すまない。本当にすまない。普段の刃だったらこんなことはしないんだ」
「謝らなくても大丈夫です。――嫌われる心当たりがあるので」
ついこの間も同じ理由で敵視されたので怒る気も無かった。
刃と呼ばれた黒犬は、今もシンに敵意と牙を剥き出しにしている。
「止すんだ！　刃！」
鳶雄から強く叱られ、刃は子犬のように耳と尻尾を下げてしまう。
「せめて傷の手当てでも」
「それも大丈夫です」
シンはそう言い、掌を見せる。血が流れていた筈だが、掌には傷一つ無かった。とは言え、これから共闘する仲間だというのに仲間間で血が流れたせいで気不味い空気が流れ始める――訳でもなく、シンを心配するよりも刃の動きを興味深そうに見ていた。
薄情なのかそれともシンの実力を知ってか特に気にしている様子は無い。鳶雄が一

番心配しているぐらいである。
「ひゃはははは。お前もこいつに嫌われたかぁ！　俺と一緒だなぁ！」
　そんな中で良い見世物でも見たかのようにマダが上機嫌に笑いながらシンの背中をバシバシと叩いた。
「マダさんが嫌われたのは、刃を食べようとしたからでしょうが」
「未熟だった頃のあいつは、食べたくなるぐらい可愛かったからなぁ」
　本気か冗談なのか分からないマダに鳶雄は何とも言えない表情をする。これから戦いがあるというのに弛緩した空気が流れる。
「それはそうと、これで全員でいいんだよなぁ？　バラキエル」
「ああ。後は現地で待ち合わせることになっている――行こう」
「早く行った方が良いかもしれません。――今、ちょっと機嫌が悪いみたですし」
　まだ戦力が用意されているとのことだが、シンの見立てでは過剰戦力と言える。どうやら三勢力側の考えとしては反抗の意思すら持てない程徹底的に磨り潰すつもりらしい。そして、口振りからして現地集合の味方と鳶雄は顔見知りの関係にある。
　バラキエルの号令で全員が結界の外へ出ていく。その間際、鳶雄はシンに話し掛ける。
「間薙君。何度も言うがすまない」

随分と真面目な性格らしくシン本人が許しても納得出来ずに謝罪をしてくる。
「気にしなくてもいいですよ」
「だが――」
「そう言っても気になるのなら、全部終わった後で話しましょう」
「――ああ、そうだな。確かにその通りだ」
一先ず保留にし、目の前のことに集中するよう促す。
「ところで間薙君」
「はい？」
「……いや、やっぱり何でもない。呼び止めて悪かった」
歯切れの悪い鳶雄を訝しみながらシンは結界の外に出る。
（何だろう、この既視感は？　彼とは何処かで会ったことがなかったか？）

◇

空中都市アグレアス。そこは数多の娯楽施設が存在し、その規模に圧倒される。数ある施設の中でも一際大きな巨大ドーム。有名なアーティストの公演を主としたこのドーム会場――アグレアス・ドームこそが一誠たちの戦いの場となる。

そして現在、一誠たちはアグレアス・ドームの隣に建っているホテルに居た。豪勢という言葉でも足りないぐらい細部に至るまで手掛られた内部。今までの価値観が覆される程の煌びやか造りであった。

一生に一度泊まれるか否かの高級ホテルに専用の待機室を用意されており、まさに至れり尽くせりである。

「おっ」

「あっ」

案内されている最中、アザゼルとロスヴァイセが何かに気付いて声を上げる。二人の視線を辿るとオーディンが居り、こちらの視線に気付く。

「むっ」

不味いという表情をしたが一歩遅かった。ロスヴァイセは凄まじい勢いでオーディンに詰め寄り、礼節などかなぐり捨ててローブごと掴み上げる。

「オーディン様！　ここであったが百年目ぇぇ！」

「お、おお。ロスヴァイセよ。元気そうだのう」

「私のことを置き去りにしてぇぇぇ！　こんのクソジジイィィィ！」

北欧の最高神がヴァルキリーに掴まれ、激しく前後に揺さぶられる。

「一人ぼっちだと分かったとき、私がどれだけ心細かったか！」

「真面目で堅物なお主に世界の広さを教えたくてのー。随分と柔らかくなったようじゃ」
「言うにことかいて師匠面ですか！」
特に反省している様子の無いオーディンにロスヴァイセの怒りが更に燃え上がる。
オーディンが小娘にいいようにされている光景に周囲は騒めいているが、上位の神々たちは面白そうに眺めている。
「あ、あの、オーディン様への無礼はそこまでにしておくべきかと……」
オーディンが今回のお供にしていた新しいヴァルキリーが、ロスヴァイセの剣幕に圧倒されながらも勇気を振り絞って主神を助けようとする。
ギロリとヴァルキリーの方へ目を向けるロスヴァイセ。その眼光にヴァルキリーは完全に呑まれそうになる。
「貴女は大丈夫ですか!? オーディン様からセクハラされていませんか!? 油断も隙も無い我儘神のお世話は大変じゃないですか!? 何かされたら言って下さい！ 私がこのジジイに折檻を与えます！」
親身になって様子を尋ねて来るロスヴァイセにヴァルキリーは面食らった顔になる。
「いえ、大丈夫です、まだ。その……オーディン様をジジイ呼ばわりするのは……」
「でも、クソジジイなのは事実ですよね？」

「……」
「何故そこで無言になるのかのう」
オーディンへの怒りが収まらないロスヴァイセを見て、アザゼルは溜息は吐いた後にリアスたちに言う。
「ちょっと止めてくる。先行っててもいいぞー」
ロスヴァイセを止める為にアザゼルはリアスたちから離れていった。
「どうなされますか？」
案内役のボーイがリアスに確認してくる。
「ごめんなさい。ここで少し待つわ」
「分かりました」
ボーイは丁寧にお辞儀をし、壁際で直立不動となる。いつでも声を掛けられるようにリアスたちの視界に収まる位置だった。
アザゼルが呆れながらロスヴァイセをオーディンから離そうとしている様子を、リアスたちは眺めていたが、急に肌を刺すような冷たく不穏な気配を感じた。
リアスたちが気配の方へ目を向けたとき、その集団は既にリアスたちの目の前に立っていた。
全員が足元まで隠れる程の長いローブを纏っていたが、中央に立つ者だけが司祭のよ

うな祭服や帽子を纏い、杖を携えている。
その顔は皮も肉も無い剥き出しの骸骨。司祭姿の骸骨を見て、一誠の頭の中に『魔人』の二つの文字が過った。
『これはこれは紅髪のグレモリーではないか。赤い龍もいるな』
目玉の代わりに眼孔の奥を光らせながら話し掛けてきた骸骨司祭。敢えてこちらを委縮させるようなプレッシャーを放っている。
「……お初にお目にかかります。冥府の主にして死を司る偉大なる神ハーデス様」
そのプレッシャーに屈することなく澱みない口調で丁寧に挨拶を返すリアス。冥府の神であるハーデスは、リアスの態度を見て眼光を和らげる。適切な対応に感心したからではない。年の若いリアスが神の重圧を跳ね除けたことが面白くなかったからだ。
『それなりの礼儀は知っているようだ――毛色の違う蝙蝠にしては』
悪魔に対する蔑称を平然と使うハーデス。主を馬鹿にされたことでリアスの眷属たちから怒気が発せられるが、ハーデスの取り巻きたちから冷たい殺気が放たれる。
『ファファファ……あの赤い龍が蝙蝠に飼われる時代が来るとはな。白い龍と共に地獄の底で暴れ回っていた頃が遠い過去のようだ』
決して友好的ではない視線を一誠へ向けるハーデス。最初からこちらへの蔑みと恨みつらみを隠そうとしない。ロキ並みに非友好的な神であった。

「おいおい。骸骨ジジイ。勢力間の協定に否定的だからって若いもんに八つ当たりするもんじゃないぞ。ただでさえ低い世間からの好感度がマイナスになっちまう」
『アザゼル先生！』
　ロスヴァイセを宥めに行っていたアザゼルが不穏な気配を感じて戻って来てくれた。更には――
「同じ年寄りとして言わせてもらうが、いい年したもんが若い世代をいじめるのはちと見っともないぞ？」
　オーディンもリアスたちを庇うように加わってくる。因みにオーディンの台詞を聞いたロスヴァイセは小声で『貴方が言いますか？』と愚痴っていたが、幸い誰の耳にも入っていない。
『カラスに北欧のくたばり損ないか。肩を並べて仲の良いことだ。時代に迎合した者の成れの果ての姿だ』
「ただ単に新しいものが認められないだけだろうが、老害ジジイ」
「神は不滅だが、不変で在り続けるのは怠慢とどこが違うのかのう？」
　二対一の状況で口論する三人。
『――まあよいわ。今日は楽しむ為に招かれた。貴様たちの戦う様を高見から見物させて貰おう。それにだ』

一誠にはハーデスが笑ったように見えた。骸骨の表情など分からない筈なのに。マタドールが笑っている雰囲気と被っていたからかもしれない。嫌な判別能力を身に付けてしまった。

『今宵は少し忙しくなるかもしれないんでな。それまでの暇潰しにさせてもらう』

後を引く不気味さを残し、ハーデスはマントの集団を連れて行ってしまった。緊張状態から解放され、ゲーム前だというのに疲労感を覚えてしまう。

「相変わらず陰気な奴じゃのう」

「あれで俺より強いんだからたまったもんじゃないぜ」

アザゼルがハーデスを明確に格上に定めていることに皆は驚く。そして、一誠たちに釘を刺す。

「下手に喧嘩を売るなよ。強い上に執念深いからな。周りの死神どもも厄介で不気味な相手だ」

死神すらも付き人とするハーデス。改めて実力者だと感じる。

一誠は緊張から解放されたせいか、つい口が滑った。

「魔人より強いんですか?」

その瞬間、電光石火の早業でアザゼルが一誠の口を塞ぎ、誰にも聞かれていないか周りを確認する。反応からしてアザゼルたち以外に聞こえていないことが分かると一誠

の口を塞いだままアザゼルは語気を強めて言った。
「――いいか、イッセー。こういう場でそいつらの名前を出すな。連中は色んな勢力にちょっかいをかけてお前が想像している何百倍も嫌われている。余計なトラブルはお前も御免だろう？」
一誠がコクコクと首を縦に振るのを見て、押さえていた手を離す。
「悪かったな」
「いえ、俺も不注意でした」
詫びるアザゼルに一誠も反省した態度をとる。
「デハハハハ！　早速揉め事か？　アザゼルゥ！」
「ガハハハッ！　いつまでたってもやんちゃ坊主だなぁ！　アザゼル！」
体格のいい豊かな髭を生やした巨漢が豪快に笑いながらアザゼルにまとわりつくように絡んできた。片方は上半身が裸であり筋骨隆々の体を惜しげもなく披露し、もう片方は古代ローマの衣服であるトーガを纏い、王冠を被っている。アザゼルは顔見知りであり、それを振り解くことはせず嘆息する。
「そっちは相も変わらず騒々しいな。ゼウスのオヤジにポセイドンのオヤジ。その陽気さをハーデスの爺に分けてやってくれ」
「オーディンも久しぶりだな！　相変わらず腰が曲がっているな！」

「もっと鍛えた方が良いぞ！　筋肉をつけろ！　筋肉を！」
「生憎、体よりも頭を鍛える方が向いておるのでのう」
ゼウスにポセイドン。ギリシャ神話の主神で全知全能の存在とされる神と同じくギリシャ神話で海と地震を司るゼウスに次ぐ強さを持つ海洋の支配者。どちらも知名度ならば一、二を争う。
そんな神と極めて自然且つフレンドリーに会話をするアザゼル。アザゼルの交友関係の広さを思い知らされた気分であった。
試合目前のホテルで賑わう神などの上位者たち。その誰もが自分たちの戦いを期待していると思うとプレッシャーと同時にやる気が漲ってくる。
数ヶ月前まではこれといった特技の無い人間であったが自分が、神の注目を集めるようになるとは夢にも思わなかった。
それは光栄なことなのかもしれないが、一誠にはそれよりももっと重要な目的がある。
（俺はこのゲームに勝って、そして部長に……！）
一誠の中の決意は今も揺らぐことなく燃え続けていた。

◇

結界の外に出たシンたち。目的の地点まで移動を開始する。
「ここは私が」
斥候を買って出るオンギョウキ。バラキエルはオンギョウキの実力をアザゼルから聞かされている。話に聞いた通りか確かめる為にそれを許可する。
「では」
次の瞬間、オンギョウキは忽然と姿を消した。気配も音などの予備動作の一切無い名の通りの隠形。最初からそこに居なかったかのような隠れ方に誰もが感心した。
「これほどとは……」
「凄い。刃ですら追えないなんて」
「羨ましい。覗き放題だなぁ」
一人だけしょうもない感想を言うマダに全員の視線が刺さるが、全く気にしていなかった。
暫くしてオンギョウキが現れる。消えたときと同じく現れるときも全く気配を感じられなかった。
「敵の姿は見えん。索敵の術も無い。このまま進んでも問題無い」
短時間で十分過ぎる仕事をこなしてきたオンギョウキ。その言葉を信用し、シンたち

は先へと進んで行く。
「あそこです」
拠点の近くまで来たとき、鳶雄は声と共にある場所を指差した。拠点を見下ろせる高台。そこに最後のメンバーが居るとのこと。
「遅かったな」
不機嫌そうな声。男か女か判断し難い高さのある声であった。
「悪い。待たせた」
詫びる鳶雄。彼の視線の先に立つのは高学年ぐらいの銀髪の少年。容姿を見ると声と同じく少年か少女か分かり難い中性的な整った顔立ちをしている。
小学生らしい丈の短いパンツと青いジャケットを羽織り、首にはマフラーを巻き、右肩には何故か白い龍のぬいぐるみを置いてある。
年不相応な落ち着きと威圧感。そして、既視感。少年が誰なのかシンには分かった。
「……ヴァーリか？」
「……そうだ」
拗ねたように口を尖らせながら不本意そうに肯定する。
「うっわ。また懐かしい恰好してんなぁ。どうした？　新しい趣味に目覚めたか？」
「うるさい。そんな訳あるか」

「本当に懐かしいな……初めて会ったときのことを思い出す」
揶揄うマダと懐かしむ鳶雄をヴァーリは本気で睨むが、どうも可愛いらしさの方が前面に出てしまい、威圧も半減してしまう。
「おー怖い怖い。俺、ときめいちゃいそう」

いつまでも人を揶揄うのを止めないマダ。このままだと話が進まなくなるのかと思ったのかバラキエルが会話に入る。
「協力してくれるのは有り難いが、いいのか？」
『禍の団』に非協力的とはいえ一応は所属している形になっている。バレれば追われる立場になる。
「大事な試合を邪魔するなと釘を刺しておいたが、曹操はそれに従わなかった。詭弁で免れたつもりだろうが俺には通じない。やると言ったからやる。それだけだ」
今の立場に微塵も興味を示さないヴァーリ。今となっては『禍の団』などに大して未練など無いのだろう。
「その割には変装をすんだな？」
「俺は別にそのままで良かったが、抜けるにも色々と準備が必要だと皆に言われた。時間稼ぎの為だ」

不本意そうに言うヴァーリの表情は年相応に見え、やけに愛らしい。
「それでその恰好かよ？」
「知り合いの魔術師に頼んだら、こうなっただけだ」
ヴァーリの答えに鳶雄は苦笑いをしている。もしかしたら、知り合いの魔術師に心当たりがあるのかもしれない。
「ふーん……それはそれとして、お前の周りにいる奴らは誰だ？」
ヴァーリを囲うように立つ三体の異形についてまるで今気付いたかのようにマダは触れる。
頭から足先まで真っ赤な体ははち切れんばかりに鍛えられており、藍色と白色で染められた羽織を直に着ている。下も同色の和装を履いているが、腿までの丈しかなかった。
口にはズラリと牙が並び、特に下顎の犬歯は口に収まり切らない程に太く長い。瞳の無い薄水色の目。額からは一対の黒い角を生やし、頭頂部には黒い角よりも長い角が生えておりまるでモヒカンのようであった。
オニ。異形の姿はまさにそう表現するしかない。
「ルフェイがスカウトしてきた。腕試しも兼ねて連れて来た」
「へぇそう。お前の知り合いか？」

マダはオンギョウキに訊いてみる。
「いや。京では知らぬ顔だ。オニにも住処を持たない流れ者もいる。お前たちはどこのオニだ？」
オンギョウキが尋ねてみるが、オニらはオンギョウキの質問を無視してそっぽを向いてしまう。
「愛想が悪くてすまない」
「構わん。私の方が馴れ馴れしかった」
気分を害した様子の無いオンギョウキ。しかし、三人のオニがオンギョウキを無視したのにはちゃんとした理由がある。
（嘘だろ!?　何で大将がここに居るんだよ!?）
（マサカ、用事トハコノコトダッタノカ……！）
（やべぇ、やべぇ……！　バレたら殺される……！）
オニたちの正体は素性がバレないように魔術によって姿を変えたスイキ、キンキ、フウキの三鬼。オンギョウキが用事で京都を留守にするので、これ幸いにヴァーリからの呼び出しに応じたのだが、まさかオンギョウキも同じ目的で呼び出されていたとは思ってもいなかった。
戦いが始まる前から三鬼たちは死地にいるような気分になり、その赤ら顔をゆっくり

と蒼褪めさせていくのであった。

襲撃、待機

『禍の団』討伐に集えられた者たち。錚々たる面子と言っても過言ではない。

グリゴリの副総督にして『神の雷』と称されるバラキエルを筆頭に、グリゴリの所属の神滅具所持者であり裏方の特殊部隊に属する『刃狗』の幾瀬鳶雄。グレモリー家の番犬であり魔王サーゼクスの護衛も務めるセタンタ。大いなる酩酊者にして神をも超える怪物マダ。忍の起源にして頂点に立つ隠形の達人オンギョウキ。歴代最強と名高い白龍皇ヴァーリ。そして、最も新しく未知数の可能性を秘めた魔人人修羅ことシン。

テロリストを倒すどころかその気になれば他の神勢力へ戦いを挑める程の混合チームであった。

最後の戦力であるヴァーリたちとも合流し、このまま『禍の団』の拠点へ攻め込もうと皆が考えていたとき、一体の雪だるまが騒ぎ始める。

「ヴァーリ！」

「うん？　ああ、ジャアクフロストか。久しぶりだな」

騒ぎの主であるジャアクフロストがヴァーリを指差しながら怒声を上げるが、ヴァーリは至って平然としており友人にでも会ったような態度であった。

「ここで会ったが百年目だホ！」

声のボリュームが壊れたのかと思えるぐらいやかましい声を上げるジャアクフロスト。連れてきた手前、シンはジャアクフロストに声を抑えるよう窘める。ここで騒いでいたら『禍の団』に気付かれる。折角、ここまで隠密行動をとっていたのに台無しになってしまう。

ジャアクフロストは聞く耳を持つ様子は無い。ヴァーリと久々に会ったせいで雪だるまなのにヒートアップしている。

強引に口を塞げば今度は大声だけでは済まないのが目に見えているので、仕方なくシンはバラキエルに視線を送った。

シンが何を考えているのか察してくれたバラキエルは、嫌な顔一つ見せずに小規模ながら結界を張り、外界へ音を洩れるのを防いでくれた。

「そんなガキみたいな姿をしてもオレ様は許さないホ！」

ヴァーリが子供の姿になっていたことを当初理解出来ず、頭に大量のクエスチョンマークを浮かべていたが、周りが気付いたことで数拍置いてジャアクフロストも気付いた。

「よくもオレ様を置いていったなホ！」

ロキとの戦いで忘れられ、置いてけぼりにされたことをジャアクフロストは今も根に

持っており、心の中では昨日の出来事だったかのように鮮やかな怒りの炎が燃え盛っていた。

「あのときは俺も余裕が無かった。マタドールは余力を残して戦えるような相手じゃなかったからな」

ヴァーリの口からマタドールの名前が出され、この場に居る全員が一瞬だけ顔を顰めた。全員がマタドールと交戦経験があり、全員共通してマタドールのことが嫌いだからである。

ジャアクフロストもマタドールの実力と厄介さを知っているので、そのことについて追求することが出来ず歯噛みするだけに留まる。

「と、とにかく！　お前の永遠のライバルであるオレ様を忘れていったことは許さないホ！　謝れホ！」

ジャアクフロストはヴァーリに指を突き付ける。

「すまなかったな。余裕が無かったとはいえ仲間を置いてしまったのは俺の落ち度だ」

「ヒ、ヒホッ！」

ヴァーリに即謝られてしまったせいで振り上げた拳の落としどころを見失い、差していた指がワナワナと震える。

何とも居た堪れない空気が場に満ちる。ジャアクフロストはきっとヴァーリと同じ

ようなやりとりを数度繰り返した上で自分の条件を呑ませたかったのだろうが、ヴァーリがあっさりとそれを呑んでしまったせいでヴァーリの器の大きさを見せつけると同時にジャアクフロストは器が小さく、矮小な存在のようになってしまった。

ジャアクフロストも自覚しており掻く必要もない赤っ恥を掻く結果となってしまう。

一方でヴァーリの方は一切の他意無くやっているので質が悪い。

「間薙シン。今日までジャアクフロストの面倒を見てくれたことを感謝する。敵である立場のこいつを傷付けることなく保護してくれるなど中々出来ることじゃない」

「礼ならアザゼル先生に言ってくれ。色々と手を回してくれた」

「成程。いつまで経ってもアザゼルは世話焼きだな」

昔を思い出してかヴァーリは微笑を見せる。鳶雄も共通の思い出を持っているのかヴァーリと同じような笑みを浮かべていた。

「ヒ、ヒホォォォォ！」

ヴァーリという存在の前ですっかり小さくなってしまっていたジャアクフロストは、ヤケクソ気味に叫んでヴァーリへ殴り掛かる。

「おっと」

拳が届く前にヴァーリはジャアクフロストの胴体を両手で掴む。赤子をたかいたかいとあやすような形になった。二人の容姿もあって子供がぬいぐるみで遊んでいるよ

うにしか見えない。
「離せホー！」
「どうした？　力が弱くなっているし速さも衰えているぞ？　――ああ、力を制限されているのか」
ジャアクフロストの力が封印されていることに気付いたヴァーリは、ジャアクフロストの帽子に付けられた金のアクセサリーを見た。
「取ってもいいか？」
「帰るならいつまでも付けておく必要は無い」
「なら――」
ヴァーリは金のアクセサリーを握り一瞬だけ力を込めると、どのような原理が働いたのか不明だが金のアクセサリーは消えていた。
「これで元通りだ」
ジャアクフロストを安心させるように微笑む。色々と格の差を見せつけられたジャアクフロストは、行き場の無い感情が体の内で溜まり切っているらしく全身を震わせている。
「ヒホー！」
ジャアクフロストはじたばたと体を動かし、ヴァーリの手から離れようとする。

ヴァーリはジャアクフロストを気遣ってか掴んでいた手を離してしまった。
ジャアクフロストは地面に降りるとすかさずジャンプ。ヴァーリの頭を超え、その背中に張り付くようにしがみついた。
「口だけの謝罪なんて信用出来ないホ！　また置いてかれないようにここで見張っているホ！」
そう主張するジャアクフロスト。口調は怒っているようだが、どことなく嬉しさのようなものを感じる。もしかしたら、今までヴァーリと会えなかったことが寂しかったのかもしれない。
「これだと戦い辛いぞ？」
「それで負けるようなお前じゃないホ！」
肩に白い龍のぬいぐるみを置き、背中にはジャアクフロストを背負っている。ますますファンシーな見た目になり、とても戦場へ行く姿に見えない。
「――話は済んだか？　ならば急ごう。敵が先に動いたら全て台無しだ」
話の区切りをバラキエルが告げる。無駄話とはいかないまでも使える時間は限られている。仕事を与えられた以上、全うしなければならない。
一部を除いて基本的に真面目な性格のメンバーが集っているので、大人しくバラキエルの指示に従う。

少し歩いて『禍の団』の拠点が見下ろせるという場所へ着いた。しかし、見渡す限りそれらしきものは見つからず、平野が広がっている。だが、誰もヴァーリが誤情報を流したとは思っていなかった。

「隠れているな」

『禍の団』の古参は魔術師たちである。その気になれば大規模な幻影により拠点などを隠すことも容易い。

「じゃあ、炙り出してやるかぁ」

マダがニタリと笑い、瓢箪の酒を一気に飲み始める。バラキエルはマダが何かをしようとしているのを察し、広範囲に結界を張った。誰一人逃さない為に。

マダは天を仰ぎ見る。そして、喉を膨らませる。

「ウェエプッ！」

非常に耳障りな音を出しながら口から直径数百メートルはある巨大な炎の塊を吐き出した。一瞬地上に太陽が出現したのかと思えるような熱さと輝きを内包したそれは、空高く飛んで行く。そして、炎の塊は豆粒のように見える位置まで上がると破裂し、数百の火の玉となって地上へ降り注いでいく。

ある高さまで火の玉が落ちると、ガラスが砕けるようにして空間の一部が破砕。他者の目を欺く為に偽りの風景を映し出していた幻影が破壊され、その下から建物の一部が

露出する。火の玉は続け様に幻影を破壊していき、隠されていた敵の拠点を露にする。

出て来たのは年季を感じさせる洋風の建物――だと思われる。全体を確認するよりも先に火の玉が屋根を突き破って中へ入って行く。数十の火の玉が同じく屋根を破って拠点の中へ侵入。

暫くすると悲鳴を上げながら『禍の団』の魔術師たちが拠点の外へ飛び出してきた。

突然の奇襲に無事で済んだ者たちも居れば、全身を火だるまにして転がり出て来る者たちも居る。火に焼かれている者たちは地面で揉み消そうとしたり、仲間の魔術師に消火されていたりもしたが、いずれも火を消すことが出来ずにそのまま焼け死んだ。

拠点に侵入出来ずに外れた火の玉も拠点周囲に落下して地面に炎を広げる。逃げ出した者たちも拠点の外が火の海になっていることに驚き、急いで火を消そうとしていた。

「ヒヒヒヒヒヒ。文字通り炙り出してやったぜぇ。おーおー、虫みたいにワラワラ出て来やがる」

地獄のような光景を生み出した張本人は笑いながら言う。先制の一撃としてはこれ以上無い程の強烈なものであったが、反面非常に情け容赦の無いもの。常人ならばマダの方がテロリストたちよりも悪党に見えたであろう。

だが、この場に居るメンバーはそういった情に流されることはない。唯一、鳶雄はマ

ダのやり方に眉根を寄せていたが文句を言うことはしなかった。マダのやり方というよりも命を軽視する発言が気に入らなかった。

「――やるぞ」

バラキエルの合図は短く、そして冷徹だった。空気の爆ぜる音と共に雷の性質を持つ光を纏う。それを皮切りにして各自戦闘態勢へ入る。

マダは再び瓢箪の酒を呷り、満足するまで飲むと口を拭いながら酒精漂う気を放つ。

オンギョウキはいつの間にか武器を構えていた。誰にも悟られることなく静かに。

セタンタは愛用の槍の握り締め、その眼光を鋭くさせる。この瞬間、守る番犬から狩る猟犬に切り替わった。

ヴァーリは神器を発動させることなく代わりに白いオーラを纏う。彼にしがみついているジャアクフロストは、それと相反するような黒いオーラを放っていた。

鳶雄は影の一部を伸ばし、それを引き抜く。引き抜いた影は大鎌の形となった。彼の分身でもある刃は触れれば斬られそうな気配を漂わせ、鳶雄の傍らで命令を待つ。

漂ってくる死のニオイに滾ることも昂ることもなく、淡々と冷静過ぎるぐらいに落ち着いた態度で紋様を浮かび上がらせるシン。彼は仲魔たちを率い、戦いの場へと赴く。

◇

ホテルのフロアにて神々と邂逅した一誠たちは、専用の待機部屋へ案内されていた。室内は広々としており、本番前までの調整が行えるようにトレーニング器具が各種揃えられており、何か腹に入れられるように様々な軽食も用意されている。一から十まで揃ったいたせり尽くせりな仕様であった。

レーティングゲーム開始まで残り六時間。あと六時間も残っていると思うか、あと六時間しか残っていないか、と考えるかで今後の明暗が分かれるかもしれない。

リアスたちは当然後者であり、ゲーム開始まで出来るだけ万全な状態に出来るよう軽い食事を摂った後にジャージに着替えて疲労が残らない程度の運動をして調整を行う。時間の経過と共に自然と強まっていく緊張感を誤魔化す為という理由もある。

各々がそれぞれに合った調整を行っているときであった。

「邪魔をする」

「遅くなり申し訳ございません」

ライザーとレイヴェルが入室してきた。

「ライザー！」

ライザーの来訪に驚くリアス。レイヴェルは一足先にアグレアスに入り、リアスたちがスムーズにホテルまで行けるように移動手段などの準備をしてくれ、遅れて合流する

ことは知っていたが、そこに兄であるライザーが同伴するとは聞いていなかった。
「よー、来てやったぜ。愛すべき元婚約者の勇姿を見る為に」
婚約の件を嫌味というより冗談として話すライザー。既に彼の中では吹っ切れている証拠でもある。
「まさか、貴方が来るなんてね……」
「当然だろ？　今日のゲームはプロの好カードと遜色ない注目度だ。殆どプロのゲームと変わらない。今までは実戦に近い形式だったろうが、今回はかなりエンターテイメント性が強いゲームになる筈だ。気を付けろよ？　今までの比じゃないくらいの観客数だ。大舞台に呑まれて実力が発揮出来ないなんていう話は多々ある」
「でも、逆にそれを乗り越えられたら今まで以上の評価を得られる――正念場ということね」
ライザーが言いたいことをリアスが先に言う。
「……私はソーナのように戦の組み立て方が上手い訳じゃないわ。でも、眷属に恵まれていると胸を張って言える。この子たちを上手く導けるかどうか、それが私の課題」
「……リアス。例え、サイラオーグの対戦相手がソーナだとしてもシーグヴァイラだとしても結果は変わらない……今日、お前たちが選ばれたのは……運が悪かっただけだ」
「え？　どういう意味なの……？」

急に神妙な顔で不吉なことを言い出すライザーにリアスを始め一誠たちも戸惑いを覚える。
「俺はサイラオーグとは交流があるし、個人的に好きではない『努力』というのもサイラオーグの姿を見ていたらそれも有りかと思った。あの性格も素直に尊敬出来る。だが、決して贔屓目で言っている訳じゃない……若手悪魔たちが今のサイラオーグに勝てる想像が出来ない」
遠回しにリアスたちがサイラオーグには勝てないとライザーは告げていた。
「冷やかしで言っている訳じゃない。事実を言ったまでだ。リアス、俺はお前が思っている以上に評価しているし、眷属も同じように買っている。もしかしたら、プロでもあのサイラオーグには苦戦、いや勝てないかもしれない」
「……一体何がそこまで貴方に言わせるの？」
ライザーは腕を組み、虚空を見上げる。
「もし……昨日、何も無かったら俺はこんなことを言わなかった。激励してそれで終わりだっただろう。……サイラオーグの力は昨日、一段階上に上がった」
ライザーにここまで言わせる何がかが昨日あったらしい。隣では何故かレイヴェルが頬を上気させている。
「レイヴェル。お前も昨日何があったのか知っているのか？」

一誠が問うとレイヴェルは夢から覚めたような表情となり目を伏せる。
「申し訳ございません……昨日のことは口外してはならない決まりなので、例えイッセー様であってもお話する訳には……」
慕っている一誠にすら昨日あったことを話すのを拒む。内心葛藤しているらしく苦悶に満ちた表情を浮かべている。
「本当に申し訳ございません。私の口からは……あれは、あれは――」
何かを思い出しているレイヴェル。すると、興奮が一定値を超えてしまったのかレイヴェルは鼻から血を流し始めた。
「うおっ!?」
お嬢様のレイヴェルがまさかそんな風な反応をするとは思ってもみず、一誠は驚いてしまう。一誠のリアクションと周りの視線により自分が鼻血を流していることに気付いたレイヴェルは、興奮による紅潮が羞恥による紅潮へと変わる。
次の瞬間、レイヴェルの顔面が燃え上がった。顔から火を噴くという比喩では無く本当に顔面が炎上したのだ。火はすぐに消え、血一つ流していない状態へと戻る。フェニックスらしい豪快な応急手当であった。
「お見苦しいところを見せてしまいました……」
「本当に何があったんだよ……」

色々と突発過ぎてそれしか言えない。一誠以外も唖然としてしまう。
「男子三日会わざれば刮目して見よ、ってのは人間の言葉だったな。つまりそういうことだ。サイラオーグはお前たちが前に会ったときよりも強い」
この期に及んでライザーが惑わそうとしているとはリアスを含め誰も思わなかった。ライザーの顔は人を信じさせる程に真剣であり、同時にサイラオーグという悪魔がそれが出来ておかしくない、と信じさせる強さがあるからだ。
「……プレッシャーになったか？」
「十分過ぎる程にね。……でも、だからこそ私たちはサイラオーグたちと戦うべきなのよ」
頂点を目指す以上サイラオーグとの戦いは避けられない。いずれは戦う宿命にある。ならばこそ、ライザーの言う一段階上に上がったサイラオーグと真っ先に戦えることを幸福と思うべきなのだ。
「最高の相手だからこそ私の最高を以って挑むわ」
少し前まで弱気になっていたリアスだが、ライザーの忠告を聞いて逆に闘志を湧かせる。ネガティブな感情は全て吹っ切れ、宣言通り最高の状態で挑む為に腹を括った。
「ふふ。プロをやっている俺が保証してやるよ、リアス。その気概だけでも十分プロ級だ。やれやれ、俺も心機一転して強くなったつもりだったが、そんなに差を感じないな。

今期の若手は色々豊富だ」
　リアスの強い意思にライザーは苦笑を浮かべる。怠けていたらすぐにでも今の地位を蹴り落とされかねない。
「色々と嫌なことを言ったが、リアス、俺はお前も応援している――ゲームを楽しみにしている」
「ええ。最高のゲームを見せてあげる」
　リアスの返事にライザーは満足そうな笑みを浮かべると、視線をリアスから外した。
「赤龍帝」
　ライザーは一誠の名を呼び、真っ直ぐ彼を見つめる。彼の精神に大きな傷を残した赤龍帝への敗北。ショックが大き過ぎて領土に引きこもっていたが、荒療治で外に出られるようになった。まだ傷が完全に癒えていない状態で顔を合わせたときは、大量のアルコールの力を借りて何とか会話することが出来た。
　今のライザーはアルコールに頼っていない。あのときの敗北をきちんと受け止め、屈辱も敗北も恥辱も全てを己の糧にし、心の傷は今やライザーと同化して一つとなって消え去った。だからこそ、ライザーは目を逸らすことなく一誠と目を合わせる。
「もし……もし、サイラオーグに勝てる可能性があるとしたら、俺はそれを赤龍帝――お前だと思っている」

「お、俺が？」

ライザーの言葉に一誠は驚きを隠せない。

「今だから言ってやるよ。お前の拳の一撃で嘗ての俺の全てが壊された。最初は恨んださ。名誉も地位もプライドもズタズタにされたからな。だが、そうなって初めて得たものもある。……きっと以前の俺だったら得ることが絶対無かったものだ」

思い出すように語るライザー。過去の傷を自ら掘り返しても今のライザーに動揺は無い。

「俺に完敗した奴が経緯はどうあれ俺に勝ったんだ。お前には勝利を手繰り寄せる力がある。不思議なものだ。サイラオーグにも勝って欲しいが、赤龍帝――お前に負けて欲しくないとも思っている。前にも言ったと思うが、やっぱり俺に勝った男だからかな？」

矛盾した感情にライザーは苦笑する。

「もっと上を目指せよ、赤龍帝。お前との再戦は華々しいプロのレーティングゲームと決めているんだ。そのときは、成長した俺の強さと怖さを教えてやる」

空気が一瞬だけ熱を帯びた。なのに体からは冷たい汗が滲み出る。ライザーは確実にあのときのレーティングゲームから強くなっているのが肌で分かった。

「は、はい！　勿論っスよ！」

　最初は忌み嫌っていたライザー。それが今ではこうやって応援と激励を送ってくれる。そして、一誠はそれを受けて自分の戦意が高まっていくのを感じていた。きっと、少し前では想像も付かない光景であろう。
「ライバルとして絶対にあんたとはもう一度戦って正式に勝ちますから！」
　すると、ライザーはニヤリと笑う。
「ライバルか……生憎、一番目の席は埋まっているからお前は特別に二番目にしてやる」
「二番目？　もしかして、一番目って――」
　ライザーは一誠の話を最後まで聞かず、隣に立っているレイヴェルの頭に手を乗せた。
「レイヴェル。せいぜい、楽しんで来い。でも、最近刺激が強過ぎるものばかり見ているからな……また粗相をするなよ？」
「お、お兄様！　よ、余計なお世話ですわ……！」
　ついさっき失態をおかしてしまったレイヴェルは、反論しても説得力が無いことを自覚しているのか語尾が小さくなっていく。
「……色々と喋り過ぎたな」
　振り返って自分のキャラじゃないと思ったのか、ライザーは苦笑いを残しながら退室していった――かと思いきや、急に足を止めて振り向く。

「言い忘れていたことがあった。サーゼクス様がお呼びだ。時間があったらＶＩＰルームに顔を出してくれとさ。見せたいものがあるそうだ」

言付けを伝えるとライザーは今度こそ退室する。

サーゼクスが何の用件で自分を呼び出したのか。心当たりが無い一誠は首を傾げつつ、言われた通りにＶＩＰルームへと一人向かうのであった。

◇

突然の奇襲を受けた『禍の団』は蜘蛛の子を散らすように炎上する拠点から逃げ出していた。若い魔術師らは完全にパニックになっており、兎に角燃え盛る建物から離れようとする。そして、周囲が結界によって塞がれており逃げ場が無いことを知って絶望する。

一方でそれなりの経験を積んでいる古参の魔術師たちは、焦りはしているものの反撃の手段が手元にあることで冷静さを取り戻し、それらを魔術によって呼び出す。

魔法陣から次々と転送されてくるアンチモンスターたち。並み程度の悪魔、堕天使、天使ならば歯が立たない性能を有している。それらを何百も召喚し、反撃の準備を整えていく。

判断としては間違ってはいない。しかし、残念ながら今回の奇襲で選ばれた者たちはアンチモンスター程度では止めることの出来ない猛者しかいなかった。

構えるアンチモンスターの群の中を白い光が流星のように駆け抜けていく。

アンチモンスターの一体がその光に手を伸ばそうとするが、白い光はアンチモンスターの手を掻い潜って懐に入り込む。

「ふっ！」

ヴァーリの蹴りがアンチモンスターの胴体に命中。深々と捻じ込められ、命中箇所を中心にして亀裂が生じる。ヴァーリは蹴り付けたアンチモンスターを踏み台にして別のアンチモンスターへ跳ぶ。踏み台にされたアンチモンスターは上半身が粉砕された。

跳んだ先にいるアンチモンスターにヴァーリの拳が刺さる。痛みを感じないアンチモンスターは殴られた状態で反撃をしようとするが、反撃が来る前にヴァーリは十発程拳を打ち込んでアンチモンスターを動けなくした。

子供時代の姿になっても身体能力に変わりは無い。『白龍皇の光翼』の能力を使用せず、オーラだけを拳や足に込めているだけの状態だがアンチモンスター相手なら破壊力は十分過ぎる程であった。

それに加えて――

「ヒーホー！」

――ヴァーリにしがみついているジャアクフロストが強烈な冷気を放ち、周囲のアンチモンスターたちを氷漬けにしていく。久しぶりの全力にジャアクフロストも楽しんでいる。

「また強くなったか？」

「ヒーホー！　当たり前だホ！　オレ様は白龍皇のライバルホ！」

ジャアクフロストの変わらないライバル宣言にヴァーリは微笑を浮かべつつ、氷の彫像となったアンチモンスターらの傍を駆ける。

ヴァーリたちが通り過ぎた後、凍ったアンチモンスターたちは全て粉々に砕け散った。

頼みの綱であったアンチモンスターたちが次から次へ撃破されていくことに唖然とさせられる魔術師たち。アンチモンスターの性能が優れていることはきちんと把握済みである。なのに子供一人と雪だるま一体を倒せないのは悪夢そのものであった。

取り囲んでいたアンチモンスターを全て倒したヴァーリは、後方で待機していた魔術師たちへ接近する。

急いで魔術を発動させようとするが、ヴァーリの拳がそれよりも速く魔術師の腹部へ突き刺さり、一瞬で意識を奪う。同胞が倒れたことで動揺している間にヴァーリは跳び、蹴りによって意識を刈り取った。

アンチモンスターに比べれば瞬殺という速さでヴァーリは魔術師たちを鎮圧してしまう。
「ヒホ！　オレ様の分も残しておけホ！」
活躍を奪われたジャアクフロストがヴァーリの背中で暴れて抗議する。
「悪いな。思ったよりも手応えが無くて」
魔人や神滅具所持者との戦闘経験が豊富なヴァーリからすればアンチモンスターも魔術師たちも温い相手である。それこそ『白龍皇の光翼』の能力を使用しなくてもハンデにもならない。
『神滅具のお零れを貰って増長したか』
ヴァーリの肩に置かれてある白いドラゴンのぬいぐるが喋り出す。ご丁寧に口まで動いている。
『魔獣創造』のアンチモンスターを自分たちの力と錯覚したということか？　――やれやれ、情けない話だ」
ぬいぐるみと自然に会話をするヴァーリ。
「誰ホ？」
『――私だ。アルビオンだ』
「ヒホ！　ビックリするぐらい似合わない姿になっているから気付かなかったホ！」

『……相変わらず可愛げの無い雪だるまだ』

ぬいぐるみを介してのアルビオンとの会話はヴァーリがまだ未熟だった頃の再現である。体に負荷が掛かるという理由で付けられていたが、当然今のヴァーリには関係の無いこと。ヴァーリを子供の姿に変身させた者の拘りである。

『お前や赤龍帝などの神滅具所持者などで感覚が麻痺しているかもしれないが、身の丈に合わない力を持つということは増長となり破滅へと結びつくということだ。この魔術師たちもアンチモンスターなど与えられなければ、『禍の団』の隅で大人しくしていただろうに』

「……曹操はこうなることが分かっていて力を貸したのか？」

『それは分からない。奴は計画を立てる一方で天運に任せているところもある。どこまでが奴の考えの内かは計れない』

想定外の出来事ですら受け止め、それを糧にしようとする貪欲さがある曹操。その思想は他の英雄派の者たちにも伝播しており、中々に質の悪い集団と化している。ヴァーリ個人としては嫌いではないが。

「――さて」

他の魔術師たちが呼び出したアンチモンスターが集まって来ている。小休憩は終わりである。

「せめて、この戦いに何かしら得るものがあることを願っているよ」
儚い願いであることは分かっていながらもヴァーリは再び戦いを始める。戦いを避けるという選択肢などヴァーリには最初から無い。

◇

魔術師の一人は、今目の前で何が起こっているのか分からなかった。正確には現実の無情さが魔術師の器では収まり切らないせいで思考停止状態になっていた。
アンチモンスターの大群は全滅した。しかも、魔術師たちにその姿を一切見せずに、である。
瞬きをする度にアンチモンスターの数が減っていき、気付いたときには視界の中で立っているアンチモンスターは居なくなっていた。
「ど、どこだ……一体何処に――」
隣に居た魔術師が平常心を失い、唾を飛ばしながら喚き出したかと思えば急に言葉を詰まらせる。
それを不審に思って隣に視線を向けたとき、彼は言葉を失った。
隣の魔術師が顎を上向きにしてつま先立ちになっている。その顎下には三日月状の

両刃が引っ掛けられていた。人間よりも遥かに大きな影――オンギョウキが己の武器で吊り上げている。

吊り上げられている魔術師と目があった。喋れば深く食い込んでいる刃が喉を切り裂くので言葉を発することが出来ないが、目と僅かに動く唇が『たすけて』と救いを求めている。

だが、魔術師は同胞を救う為に動くことが出来なかった。今は向けられていないが、下手に動けばオンギョウキの刃が自分に向く可能性があったからだ。そのせいで逃げることすら出来ない。

このとき魔術師たちは一つ勘違いをしていた。救えず、動けず、逃げられず、という恐怖で縛ることがオンギョウキの狙い。そして、オンギョウキは相手を確実に屠る為ならばどれだけ残酷なことでも容易く行う。

不意に魔術師の顎に引っ掛けられていた刃が消えた。突然の解放に魔術師は驚きながらもつま先立ちだった両足を地に着ける。

途端ずれた。凡そ四分の一。仮面のように魔術師の顔は下に落ちていき、最後には離れる。

当人以外はその光景を見て頭が真っ白になった。そして、当人は地面に落ちた自分の顔と数秒見つめ合った後に崩れ落ちる。

現実に起こっていることだが、どうしても頭がそれを現実であると認識するのを拒んでしまう。そのせいで受け入れるまでに数秒の間を空けてしまった。

頭が現実と恐怖を同時に受け入れてしまったときに気付いた。背後に立っていた筈のオンギョウキの姿が無いことに。

成人男性の倍程の身長を持つオンギョウキを見失うなどあり得ないことだが、実際に見当たらない。

あれだけの凶行を行ったオンギョウキが消えたせいで魔術師たちはパニック状態になる。自分もまたあの魔術師のように惨たらしく殺害されるかもしれないという考えが、彼らから冷静さを奪う。

魔術師の何人かはすぐにでも魔術を発動出来るように準備をするが、恐怖に駆られたその表情は如何にも危うい。そして、オンギョウキはそれを見逃さない。

「次はお前だ」

耳元で囁かれるオンギョウキの宣告。脳髄を恐怖で震わされた魔術師は自己防衛の本能に従い、振り向き様に魔術を放った。

「うぎゃあああっ！」

絶叫が上がる。同胞である魔術師が魔術の炎に焼かれ、火だるまと化していた。

魔術を放った魔術師は予想外のことに呆然としてしまう。それは周りも同様で味方

の同士討ちのせいで動きが止まってしまった。
味方が見ている前で魔術師はやがて声を上げなくなり、動かなくなって静かに燃え続ける。
立て続けに恐ろしいことが起こっているせいで頭が上手く回らない。普段ならば滑らかに動く思考が錆び切った歯車のように停滞を起こす。
「っぁ」
短い悲鳴に声の方を見る。そこに居た筈の魔術師の姿が無い。
「っぅ」
視線が誘導された後に再び聞こえる小さな悲鳴。声の主はやはり消えていた。
迅速に、確実に魔術師たちが消えていく。周りで起こる小さな変化に過敏な程に反応してしまい、その度に人が消えていく。しかも、消える瞬間も犯人であるオンギョウキの姿も見えない。
気付けば魔術師は残り一人になっていた。震え過ぎて口が動かず、カチカチと歯が鳴る音だけが一人っきりの空間内に響く。
「……ぁ」
そして、最後の魔術師も何処かへと消えた。敵を全て葬ってもオンギョウキは姿を現さない。結果として彼は何一つ痕跡を残さずにこの場に居た魔術師たちを倒した。

役目を終えたオンギョウキは次なる戦いの場へ赴く。やはり、誰にも気付かれずに影に潜むように無音で。

◇

オニたちこと三鬼は戦いに神経を集中させていた。だが、それはアンチモンスターや魔術師たちが強敵だったからではない。

「尻尾を出すなよ？」

「ソッチコソ」

「来るなよー、大将来るなよー」

いつ現れるか分からないオンギョウキに神経を擦り減らしながら、なるべくボロを出さないように戦う。

声や動きを見られたらオンギョウキならば即座に疑いの眼差しを向けてくる。オンギョウキから出来るだけ離れた位置で戦ってはいるが、気が気ではない。

戦っているアンチモンスターや魔術師たちの実力を見るにオンギョウキの敵では無い。問題なのは一掃した後に他の戦いに介入してくる可能性が高いこと。

「あーあー。何でこんなことになったのやら」

スイキは対魔用の光を発射しようとしていたアンチモンスターの頭部を金棒で粉砕しながら愚痴る。

「運ガ悪カッタ。ソウトシカ言イ様ガナイ」

キンキは魔術を発動しようとしている魔術師の喉を金棒で突き、一撃で絶命させながら己の不運を嘆く。

「程度があるぜぇ！」

伸び伸びと戦えると思っていた矢先にこの世で最も恐れているオンギョウキと鉢合わせしてしまったことに理不尽を覚えながら、フウキはアンチモンスター、魔術師を纏めて金棒で殴り飛ばした。

何だかんだ言いながらも戦いの中では自制出来ない三鬼。いざというときにはルフェイに頼んで途中離脱しようと考えながら、それまでの間は戦いを楽しむ。

◇

最近、碌なことが起きないとセタンタは心中で溜息を吐いた。

シンと接触するようになってから、これまでの自分に疑いを持ってしまうようなことが起こり、言葉に出来ないストレスが溜まっていた。

いつまでも情けない顔のままでグレモリー家やサーゼクスを守る訳にもいかず、気分転換という訳では無いが実戦にて己を引き締めようとサーゼクス経由で今回の話を聞いたとき、迷いなく協力を申し出た。

しかし、失敗であったと現地に着いて思い知らされる。セタンタにとって悩みの種であるシンまでもが今回の件に参加していた。その場で知ったときは、正直に言うと逃げ出したい気持ちにさせられたが、自分で協力すると言った手前そのような真似を出来る筈もない。

『そもそもリアスたちがレーティングゲームやっているんだから、素直にそっちを応援しておけ！　この薄情者が！』

と、心の中でシンを罵倒するほかなかった。

結局、『禍の団』掃討が始まるまでシンとの接触は可能な限り避け、息を潜めて植物のように存在感を消していた。

戦いが始まり、各自がバラバラに動き出してセタンタはホッとしていた。シンと離れることが出来たこと、そして久々に守る以外の戦いが出来ることに。

しかし、思ったよりも手応えが無い。アンチモンスターはそれなりの攻撃力を持っているが動きが良い訳では無い。魔術師たちに至っては完全に腰が引けている。

（まるで弱い者イジメだな）

自らの行いを客観的に評価し、マフラーの下で苦笑を浮かべた。
やはり、多少は気分転換になっているらしい。苦笑ではあるが久々に笑えた。
視界の端で魔術師が魔術を発動しようとするのが見える。
「――あっ？」
その直後に魔術師は空気の抜けるような声を出した。魔術が発動する前にセタンタの槍が魔術師の心臓を貫いている。
間を置いて絶命する魔術師。崩れ落ちる前にセタンタは槍を抜く。抜くのも刺すのも速過ぎたせいか、穂先が血で濡れていない。
自らの行いを弱い者イジメと揶揄したセタンタであるが、だからといってこの場に居る『禍の団』の者たちを一人たりとも逃がすつもりはなかった。
そもそも『禍の団』のテロで悪魔や堕天使、天使に被害も出ている。今回の件は報復ではないが散っていった者たちへの弔いではあった。
情けを掛けて中途半端な真似をすれば、反逆の火種が残る。それはいずれ大火となって冥界を襲うかもしれない。ならばこそやるならば徹底的に叩く。
争いの火種を完全に消し去ることなど不可能であることはセタンタも承知の上。いずれは第二、第三の『禍の団』が現れるかもしれない。
セタンタが出来ることは、それが現れる日を遅らせること。せめて、ミリキャスやリ

アスの子が平穏な時代を送れるようにしたい。
その為ならば存分に槍を振るえる――尽くす相手はそれでいいのか？
頭の中にノイズが走る。自分の声が自分を疑う。
黙っていろと心の中で叫ぶ。ノイズは中々消えない。常にセタンタに問い続ける。
お前は何者なのかと。お前の忠義は誰へのものなのかと。お前の本当の姿はどれなのかと。
立ち尽くしてしまうセタンタ。魔術師たちは訝しむも絶好の機会と思い、アンチモンスターらに指示を飛ばす。
数十体のアンチモンスターは四方からセタンタを囲む。セタンタはまだ動こうとしない。
アンチモンスターたちは口を開き、一斉に光線を発射した。一発でもかなりの威力を持つそれが、セタンタという一点に集中することで相乗効果を得る。その結果、光は大爆発を起こし、セタンタは光によって掻き消された。
最上級の天使に匹敵する光。直撃を受けたセタンタは塵一つ残らない。少なくとも魔術師たちはそう思っていた。
何の前触れも無くアンチモンスターたちが微塵となって消滅した。
それに驚愕する暇も無く魔術師が一人また一人と血霞になって消し飛んでいく。

魔術師の中で最も後方へ待機していた彼のみが見た。
白い影が通り過ぎていく度に誰かが死ぬ。
やがて自分の番が回ってきたとき、その魔術師は気付かない内に心臓を貫かれていた。
あまりにも速過ぎたせいで僅かな時間だが、彼の意識はあった。だからこそ最期に見ることが出来た。
そこに立っているのは少年ではない。白い鎧を纏い、長い髪を垂らした青年。眉目秀麗、見目麗しい。あらゆる賛美は相応しい中性的な顔立ち。これから死ぬ魔術師もこれほどの美貌の持ち主ならば、それはそれで人生の最期に相応しいと納得してしまう。
魔術師の体に死が追い付き、絶命する。その顔に満足そうな表情を浮かべ。
青年は憂い帯びた表情で空を見上げる。それすらも著名な絵画に匹敵する。
青年――セタンタであった彼の胸中から未だに迷いは晴れず。

裁定、黒蠅

その時はやって来た。案内役の悪魔に先導され、待機していたホテルからドーム会場まで移動する。そして、入場ゲートまで案内されると先導していた悪魔は一礼して離れていった。

間も無くレーティングゲームが始まる。入場ゲートからは会場内の様子は確認出来ないが、観客の声と熱気が伝わってくる。それだけでどれほどの数の悪魔がこのゲームを楽しみにして集まったのかが分かった。

これから大勢の悪魔たちの前に姿を晒すと思うと、一誠は服装が乱れていないか確認してしまう。普段はしない行為だというのに。

因みにだが、一誠たちは駒王学園の制服を着用している。見た目は変わらないが、ゲームの為に用意した特別仕様であり、耐熱、耐寒は勿論のこと防弾、魔力防御などあらゆる防御面を高めている。尤もそれにも限度があり、普通よりは遥かにマシ程度である。ゼノヴィアは教会の戦闘服、ロスヴァイセは鎧、アーシアはシスター服と最も気持ちが昂る服装にしている。当然ながら制服と同じ仕様にしてある。

やがて、アナウンスの声が聞こえる。

『東口ゲートからサイラオーグ・バアルチームの入場ですっ！』

会場の声と熱気が一段階上がったのが分かった。歓声だけでビリビリとドームが揺れる。

「き、緊張しますぅぅぅ！」

「……大丈夫。ギャー君は成長してるし、やるときはやる子だから」

緊張して縦揺れを起こしているギャスパーを小猫が落ち着かせようとしている。段ボール箱に逃げない辺り小猫の言う通り成長しているのかもしれない。

「やっぱり緊張しますね、ゼノヴィアさん」

「ああ。これほどの大舞台となると流石に体が無意識に強張ってしまうな。だが。応援してくれるイリナの手前、無様を晒す訳にはいかない」

「イリナさんはグレモリー側の応援団長をやってくれているという話でしたね」

「ああ。それとおっぱいドラゴンのファンの子供たちと一緒に応援をするお姉さんをするとも言っていたな」

普段通りの会話をすることでアーシアとゼノヴィアは緊張を解していく。

「失敗しませんように失敗しませんように失敗しませんように失敗しませんように」

念仏のように同じ言葉を繰り返し言い続けているのはロスヴァイセ。彼女にとってこれがレーティングゲーム初戦である。初戦が大舞台、これにプレッシャーを感じない

訳が無い。加えてリアスの眷属の中で最年長でもある。色々と責任感を覚えている様子でもあった。
「そう硬くならないで下さい」
「ひゃっ！」
　朱乃が指で背中を突いたせいでロスヴァイセが可愛らしい声を上げた。
「あ、朱乃さん！」
「私たちはチームで戦うんですよ？　そんなに自分の世界に閉じ込もらないで下さい」
　緊張状態で視野が狭くなっていることをやんわりとした笑顔で言われ、ロスヴァイセはハッとした表情の後に申し訳なさそうにする。
「すみません……年長者なのにみっともない姿を見せて」
「いえいえ。こんなことを言っている私も凄く緊張していますわ。ほら」
　朱乃がロスヴァイセの手を握る。朱乃の手はひんやりとしていた。
「……ちょっとだけ手を握っていてくれませんか？」
「はい……私もお願いします」
　ゲーム前に気持ちを通わせる朱乃とロスヴァイセ。
「にしても薄情だよな。わざわざ危ない所なんか行かずに俺たちの応援をしてくれればいいのに」

「まあ、それが間薙君らしいというか……時々つれないところがあるからね、彼」
応援に顔を出さず『禍の団』討伐の方へ参加したシンに対し、愚痴る一誠と苦笑しながらも同意を示す木場。それは緊張感から来る不安の表れであり、何だかんだ言っているが頼りになる存在なので後ろにいるだけで心強いからであった。
「観戦しなかったことを後悔させてやるぐらいのゲームを見せてやろうぜ、木場」
「だね。頑張ろう、イッセー君」
シンの話題から互いに士気を上げる一誠と木場。
「これから始まるのは実戦ではないわ。レーティングゲームよ。でも、実戦とは違う重い空気が場に満ちている。数多の目が見ている中で私たちは戦うけど臆さないで。どんな勝負も退いたら負けよ」
リアスが皆に気持ちで負けないように言う。
『そしていよいよ！　西口ゲートからリアス・グレモリーチームの入場ですっ！』
ついにリアスたちを呼ぶアナウンスが流れる。
「大丈夫。ここまでこれたのは紛れもなく貴方たちの実力よ。私についてきてくれてありがとう。そして、これからも一緒にいきましょう。私の眷属たち」
慈しむようにリアスは自分の眷属たちを見渡した後、表情を引き締める。
「勝ちましょう！」

『はいっ！』

全員の気持ちが一つとなり、入場ゲートを潜り抜ける。

リアスたちの登場で対戦者たちが揃い、会場の熱気は最高潮に達した。

◇

シンの下から突き上げる拳がアンチモンスターの腹部にめり込む。痛覚の無いアンチモンスターだが、シンの拳から伝わる衝撃は剛柔兼ね合わせたアンチモンスターの体を貫き、体全体を駆け巡ることでその動きを一時的に止めてしまう。

シンは突き入れた拳を開き、広げた指先をアンチモンスターに引っ掛ける。腕を振り上げると指先に集中していた力が放たれ、アンチモンスターの上半身は縦に三分割される。

許容範囲以上のダメージを受けたアンチモンスターはそのまま消滅し、シンは次なるターゲットを探すが殆ど残ってはいない。

「刃。斬れ（スラッシュ）」

鳶雄が刃へ合図を送るとアンチモンスターの足元の影から刃が伸び、アンチモンスターを貫いたかと思えば刺さった影の刃が動いてアンチモンスターを微塵切りにする。

影があるなら自分、相手問わずに刃を生やせることが出来るという中々に反則的な能力。それに加えて刃と鳶雄自身の動きも速く、影の刃が一体倒している間にそれぞれ三対ずつアンチモンスターを倒している。

能力だけでなく本体も強いとなると最早為す術も無い。

本体から独立して動く神器を見るのはシンにとって初めてだが中々に強い。神器である刃だけでなく本体の鳶雄の動きも良いので本体が弱点ということも無い。鳶雄と刃はまだ余力を残している状態であり、奥の手の禁手も発動出来ると思われる。

「凄い！　凄ーい！」

「ヒーホー！　どんどん行くホー！」

「ヒ～ホ～爽快だね～」

そんな刃へ跨って電撃や凍気、炎を飛ばすピクシーとジャックフロスト、ジャックランタン。総合的な戦闘力を見れば集められたメンバーの中で最弱な為、護衛としてケルベロスだけでなく刃も付けられていた。最初はケルベロスに乗せておく予定であったが、ピクシーたちが駄々をこねて刃へ乗りたいと騒ぎ出した。

仕方なく鳶雄に頼んでみると快く受け入れてくれ、今の形となった。

ケルベロスは刃の傍で三人を守りながら刃の動きも気にしている。同じ犬同士、その強さを意識している様子であった。

シンは足に力を溜め、後ろ回し蹴りの勢いに乗せて放つ。放たれた力は無数の魔槍と化し、シンの正面に並んでいたアンチモンスターたちを次々と突き刺さっていく。

その間にも鳶雄は影の大鎌でシンの背後にいたアンチモンスターを斬り裂いて消滅させていた。

シンと鳶雄たちは苦も無くアンチモンスターらを撃破していく様子に魔術師たちは既に逃げ腰になっており、アンチモンスターを呼べるだけ呼んだ後に後方へと下がってしまう。

アンチモンスターを倒しながらシンは鳶雄の動きが気になっていた。皆がバラバラになって行動する中で鳶雄は最初からシンについて来ている。更にはシンが戦っている最中でもシンの背後や死角などにいる敵を倒していてくれた。こうなってくると意図的に動いているのが察せられる。

シンが目の前のアンチモンスターの顔面を拳で撃ち抜き、機能停止にさせると鳶雄へ声を掛けた。

「もしかして――俺のことを守ってくれているんですか?」

「あー……やっぱり気付いちゃうか……」

鳶雄は苦笑しながらアンチモンスターを斬り伏せた。

なるべく悟られないように自然に守るつもりであったが、シンの目を誤魔化すことは

出来ないと思い、認める。
それなりの年齢に達しているシンに対し、守るという行為自体プライドを傷付けるのではないかと考慮して問われるまで言わなかったが、誤解を招いたり不審に思われる前に話すことに決めた。
「アザゼル先生から頼まれましたか？」
「話が早いね」
初対面の鳶雄がこのような行いをするとなると誰かに頼まれたと想像が付く。そうなると共通した人物はアザゼルしか思い浮かばない。
シンの両腕に炎が灯ると二つの炎が重ね合わさり熱線となってアンチモンスターの腹部に命中する。膨大な熱が一点に集中したことで紙のように突き破られ、その後方に立っていたアンチモンスターも貫通した。
アンチモンスターの腹の周辺は焼け焦げていたが、そこから延焼を起こしアンチモンスターを火達磨にする。
人型の炎が灯りのように周囲を照らす。その光によって影が伸びる。
「刃（スラッシュ）。斬れ」
鳶雄が命令を下すと伸びた影から複数の刀が飛び出し、アンチモンスターを刺して針鼠のような姿へ返る。

「いい加減なようで過保護なところがありますから、アザゼル先生は」
「同意するよ」
　シンと考えが同じであることに鳶雄は微笑を見せる。戦いの中で会話を交えながらも一切集中力を途切れさせることはなく、アンチモンスターを会話のついでに撃破していく。
「アザゼルさんも心配しているんだよ」
「心配するぐらいなら、この件を持ち掛けなければ良かったのでは？」
「それはそうなんだけどね……君があっさり了承したから引けなくなったみたいなんだよね」
　アザゼルからすれば多少の期待はあってもリアスたちの応援の方を選ぶと思っていた。しかし、シンは『禍の団』討伐の方を選んでしまう。そっちの方を選んだシンにアザゼルは内心唖然としたが、選んだ以上シンにも考えがあると思ったらしく意思を尊重することにした。
　とはいえ送り出した側として責任を感じているらしく万が一の場合に備えて信頼出来る護衛と実力のある護衛をシンに付けることにした。
　その信頼出来る護衛が鳶雄である。鳶雄とアザゼルの付き合いはそこまで長くないが、鳶雄の人格についてはアザゼルも信頼している。その上で優秀な神滅具所持者なの

でこれ以上の適役はいない。
因みに実力のある護衛はマダのことであるが、早々にシンから離れて単独行動をしており護衛の役目を完全に放棄している。
「まあ、ちょっとだけ予想外のことが起こったけどね」
鳶雄はチラリと刃を見た。刃が牙を？いて威嚇している。それはアンチモンスターではなく鳶雄の傍にいるシンに向けてのものであった。初対面で護衛対象を傷付けようとしたときには、鳶雄も肝が冷えた。鳶雄に叱られたので威嚇以上のことはしなくはなったが。
独立具現型神器である刃には個別の自我が宿っている。刃の意志でシンを危険と判断して襲ったということ。シンには刃を強く警戒させる何かを発していた。恐らくはそれが魔人特有の気配と思われる。
鳶雄も薄々それを感じ取ってはいるが、アザゼルから頼まれた以上護衛の務めを果たす。
「それよりも、聞いた話じゃ仲間のレーティングゲームよりも優先したとか……？」
若干咎めるように聞こえたのはシンの心の裡にある一握りの後ろめたさのせいか。前日の戦いでシンはサイラオーグと戦い、本来ならば目覚めることのない可能性を開花させた。偶然、事故のようなものだがシンが原因なのは間違いない。その力がリアスや

一誠たちに振るわれるのを見る気がしなかったのだ。
「まあ……色々と」
理由は誤魔化す。鳶雄はシンの内心を探るように見つめてきたが、鉄仮面の如き無表情からは流石に読み取れなかった。
「きっと君なりの理由があるんだろうね」
鳶雄はそれだけ言い、これ以上の詮索は止める。
傍から見れば年上と年下の仲を深める為のぎこちない交流。その間にもシンと鳶雄たちは意識を逸らすことなくアンチモンスターらを片付けていた。
既にアンチモンスターの数は三分の一を下回っており、数え切れる程にまで減少している。
シン、鳶雄、刃の圧倒的な動きに恐れをなした魔術師たちは、残ったアンチモンスターたちを壁のように横一列に並べ、少しでも自分たちが逃げる為の時間を稼ぐ。
壁のように立ち塞がるアンチモンスターたち。だが、その並びはシンにとって返って都合が良かった。
シンは抜刀のような構えをとる。鳶雄はシンがこの戦いで初めて構えらしい構えをしたので注目する。
左手に集められた力が手の中で一本の剣を形成する。剣といってもまるで噴き出し

た炎のように形が安定しない。それの剣身に当たる部分を右手で覆うことにより急速に安定していき、不安定だった炎は誰が見ても剣と呼べる形に定まる。
充填された力が解放されたとき、シンは魔剣を振り抜いていた。いつの間にかシンの左手に握られていた剣が消えている。一連の動きは鳶雄でも目で追うことが出来ず抜いたかと思ったときには既に終わっていた。
そして、振り抜いた時点で攻撃も終わっている。
横並びになっているアンチモンスターの背後の地面にいつの間にか横一文字の亀裂が生じていた。その亀裂と重なるようにアンチモンスターの体に線が走る。
アンチモンスターたちの体が傾いた瞬間、先に刻まれていた地面の亀裂から膨大な力が噴き出し、アンチモンスターたちを消し飛ばしてしまう。
これがシンの熱波剣の新たな形。レーザーの如く集束された魔力を飛ばし、相手を切断するだけでなく攻撃後の魔力を爆ぜさせることで相手を吹き飛ばす二段攻撃。
実戦で使用したのはこれで二度目であるが成功したという手応えはあまり感じられない。思っていたよりもアンチモンスターたちが柔かったのが原因であると思われる。闘気を全開にしたサイラオーグの硬さと比べたら、アンチモンスターたちなど豆腐に等しい。
「凄いね！　こんな技も持っているなんて！」

アンチモンスターたちを纏めて屠ったシンの技を鳶雄は素直に称賛する。
「どうも」
相変わらず大して感情を感じさせない態度でそれを受け取るシン。
今ので呼び出されたアンチモンスターは全滅した。残るは逃げ始めている魔術師たちのみである。逃走をしようとしているが無駄である。周囲はバラキエルが張った結界によって囲われている。ここで逃げ出すような魔術師程度なら結界を破ることは出来ず、転送魔法陣で結界外に逃げようとしても結界自体が転送を阻害する力を働かせているので無意味。
魔術師たちは既に詰まれた状態にあった。
シンは下手な足掻きをされる前にさっさと倒してしまおうと思ったが、魔術師たちの方へ向かおうとした瞬間、その足が止まった。
鳶雄もまたシンと同じように硬直しており、刃と共に周囲を探っている。
見られている。しかし、何処にいるのか分からない。気配すら感じない。シンと鳶雄たちに位置を悟らせない時点で実力者なのは間違いない。
「……間薙君」
「――はい。見られていますね……場所は分かりませんが」
「ああ、こっちもだよ」

直感で不穏なものを感じ取りながら周りを警戒するシンたち。そのとき、こちらへ向かって来る足音が聞こえた。
すぐさま足音の方を見る二人。足音を出していたのは逃げた筈の魔術師の一人である。
魔術師は目や口を限界まで開いた状態でこちらを見ていたが、やがて糸が切れたように倒れる。
何か攻撃を受けた様子ではあるが、自分たちではなく魔術師が襲われたことを不審に思いつつ、倒れている魔術師へと近付く。
「刃。周りを見ていてくれ」
刃に周囲を警戒させながらシンと鳶雄は倒れている魔術師の状態を確認する。
息は既にしていない。目立った外傷は無く、だが何かしらの力によって死に至らしめられた様子。でなければ、これほどまでに苦悶に満ちた表情はしないだろう。
「何か分かりますか？」
「ごめん……魔術とかの知識はあるけど専門じゃないんだ……」
申し訳なさそうな表情をした後「ラヴィニアがいたらな……」と小声で呟く。
シンは魔術師の死体を注視する。何故なのか背筋が寒気立つ感覚がした。シンはそれと似たような感覚を知っている。

魔人が現れるときの恐ろしい気配に近い。
「このことをバラキエル先生たちにも報せた方がいい」
「そうですね」
不審に思ったことがあればすぐに情報を共有する。仮に杞憂で終わったとしても、それはそれで構わない。
バラキエルへ報告をしようとしたとき、バラキエルの声が思念となって飛ばされてきた。
『気を付けろ！　いつの間にか結界が破られていた！　何者かが侵入してきているぞ！』
緊迫したバラキエルの声が頭の中で響く。内部からではなく外部から破られた結界。しかも、バラキエルに発見を遅らせる程静かに。その情報だけで実力者が侵入してきたのが分かる。バラキエルもそれを理解しているので緊迫しているのであろう。
「バラキエル先生、実は俺たちも不自然な死体を――」
シンと鳶雄はバラキエルへの報告に意識を向けていたので気付くことが出来なかった。
死んだ魔術師の口から一匹の蠅が這い出てきた光景に。
蠅が首を動かし、複眼で周囲を見回す。そして、シンと鳶雄を捉えた。黒い蠅の赤い

複眼には昆虫にあるまじき確かな悪意が宿っていた。

◇

リアスとサイラオーグの両チームが入場したことで今回のレーティングゲームの特殊ルールが説明される。

今回のレーティングゲームは用意されたフィールドで両チームが駆け巡るような方式ではなく試合形式。そして、参加する選手は二つのダイスによって決定される。

一から六までの目が振られた普通のダイスを両陣営の代表が一つずつ振り、その出た合計値によって出す選手を決めるのだ。

悪魔の駒には価値基準が備わっており、『兵士』は1、『騎士』と『僧侶』は3、『戦車』は5、『女王』は9となっている。

例えばダイスが出した目の合計が8ならば駒価値の合計が8になるように選手を出せる。『兵士』を八人出したり、『騎士』と『戦車』の二人を出したりなど。因みに駒を複数消費している場合はその消費分が駒価値になる一誠の場合8が出なければ試合に出られない。

ライザーが事前に説明していたように今までのレーティングゲームとは違ってゲー

ム性に傾いた試合形式となっていた。
上手く行けばチームワークで戦えるが、逆に複数人相手に一人で戦わなければならない可能性もある。
そして、今までのレーティングゲームと同じく『王』が取られた時点でそのチームは敗北となる。戦いが進めば『王』が出ざるを得ない状況もやって来る。そして、その場合は必ずしも有利な条件で戦える訳では無い。
実況の悪魔が一通り説明し終えると、巨大なモニターにリアスとサイラオーグの顔が映し出され、その下に数字が表示される。リアスが８でサイラオーグは１２。これは事前にゲームの審査委員会が過去のゲーム内容などを参考にして算出した『王』の駒価値の評価である。やはりと言うべきかサイラオーグの評価はリアスよりも上であった。
ゲームとして考えればリアスの方が有利である。サイラオーグは６のゾロ目を出さない限り試合には出られない。サイラオーグより下に見られているということへの悔しいという気持ちは少なからずある。だが、同時にサイラオーグの数値が最大であることに安堵している自分もいた。
（サイラオーグ……ここ数日の間に貴方に何が起こったというの？）
サイラオーグの雰囲気は前の記者会見のときと比べると落ち着いている。肌で感じるような威圧感が感じられない。しかし、サイラオーグを間近で見てあることに気付

く。
本当にサイラオーグからは何も感じられないのだ。威圧感や覇気、闘志というものが一切無い。
これからレーティングゲームを行う者とは思えないぐらいに何も発していない。戦いを前にすれば滲み出てもおかしくない筈なのにサイラオーグにはそれが無い。
戦いを既に放棄していると感じさせるぐらいの無。だが、リアスは本能的に察してしまう。今のサイラオーグはそういった類を完全に制御していることに。サイラオーグという器に完全に封をされた全ての気。その内に何が宿っているのか把握出来ないという恐ろしさ。サイラオーグを見ているだけで無意識に汗が噴き出してくる。
ライザーが忠告してくれたことをリアスは心から感謝する。サイラオーグが一段階成長したということを知っていなければもっと動揺していた。
短期間の内に何があったのか本当に知りたくなる。
リアスがサイラオーグに気を取られている間にもルールは説明されていく。
同じ選手は連続しては出せない。後半になるにつれて出せる数値も変化していくので数値の条件を満たす選手がいなければ振り直しが行われる等々。
レーティングゲームの参加者と観客たちに混乱が起きないように丁寧に説明をする。
そして、両チームには各チームには一つずつフェニックスの涙が配られる。いざとい

うときの切り札になるが、使うタイミングは良く考えなければならない。
最強の戦力に使うのか、『王』が倒されそうになったときに使うのか。サイラオーグのチームの場合は彼自身が最大戦力の為、サイラオーグが使用することはまず間違いないと思われる。そうなるとサイラオーグを二度倒すという高い壁を超えなければならない。
『さあ、そろそろ運命のゲームがスタートとなります！　両陣営、準備はよろしいでしょうか？』
特殊ルールの説明も一通り終わり、今までルール説明をしていた実況者の声により熱が入る。
「それでは両『王』の選手、前へ」
審判に促されてリアスとサイラオーグは前に出る。そして、ダイスの置かれた台の前に立つ。
審判の掛け声の後、二人はダイスを振る。これにより第一試合の選手が決定される。
『一回戦目を決める運命の目は何だぁ!?』
実況の煽る中で二つのダイスは止まる。リアスは2、サイラオーグは1。合計値が3なのでそれに合わせた選手を出さなければならないが、二チームとも『兵士』が複数の駒を消費しているので必然的に出せるのは『騎士』と『僧侶』のどちらかである。

「作戦タイムは五分。その間に出場選手を選出して下さい」
審判が説明すると両陣営が結界に覆われる。
『この結界は完全防音となっております！　そして、モニターの方にも注目！』
実況が巨大モニターを指す。巨大モニターには両陣営が映っていたが、顔の辺りが加工されて特殊なマークが浮かんでいた。
『このように読唇術による情報の洩れも防いでいます！　両チームもそうですが、我々もどのような対戦カードになるか心待ちにしましょう！』
特殊ルール説明から今に至るまで殆ど声を途切れさせない実況者。目を惹く派手な恰好をしたこの男性悪魔は、元七十二柱のガミジン家のナウド・ガミジン。プロ仕様のゲームらしく実力のある実況者が付けられている。
そして、審判を務めているのは長い銀髪の美男子。名はリュディガー・ローゼンクロイツ。元人間の転生悪魔であり最上級悪魔にしてレーティングゲームの現役プロでありランキング七位のトップランカー。こちらも豪華な人材が使われている。
『やはり初戦は両チームともに落としたくはない大事な一戦です。ここは限られた値の中でも実力の高い選手が選別されそうですね！』
ナウドは隣に座っている人物に話し掛ける。
『グレモリーチームのアドバイザーとしてはどうお考えでしょうか？　アザゼル総督

？』

実況席に座っているのはアザゼルであった。彼を知る者ならばすぐに営業スマイルと分かる程わざとらしいぐらい爽やかな笑みを見せながら解説を行う。

『そうですね。私としても同じ考えです。そうなると選ばれる可能性が高いのは『騎士』でしょうね。サイラオーグチームもこれは予想出来ている筈です。ただ安易に選択をすると痛い目を見るのはサイラオーグチームかもしれませんね』

口調、声、表情ともに隙が無い。完璧過ぎる外面でアザゼルは解説をしている。

『ほうほう？　選択次第ではサイラオーグチームがピンチになると？　これはどういった意味でしょうか――』

ナウドの視線がアザゼルの隣に座る人物へ向けられた。

『王者ベリアル？』

レーティングゲームランキング第１位であり、皇帝の異名を持つ悪魔ディハウザー・ベリアル。今日はサイラオーグのアドバイザーという立場から解説に来ていた。

『そうですね。資料や今までのレーティングゲームの映像からグレモリーチームの『騎士』はタイプが異なっています。木場祐斗選出は『騎士』らしくスピードとテクニックで翻弄する選手です。しかも、『魔剣創造』により多彩な攻撃手段を持っています。一方でゼノヴィア選手はパワータイプであり、『騎士』ではあまり見ない一撃で相手を倒す手

段を持っています。そして、彼女を語る上で外せないのが『聖剣』です。悪魔にとってかなりプレッシャーになりますね』

ディハウザーは淀みなく解説する。ディハウザーの解説は的確らしく隣で聞いているアザゼルも時折同意して頷いていた。

ゲーム開始までの五分間。実況と解説が間を埋めることで観客の熱気を冷めさせないようにしている。

『――ではお二人に最後の質問をさせていただきます！　ズバリ！　このゲームで最も注目している選手は誰でしょうか!?』

『サイラオーグだ』

『サイラオーグ選手ですね』

質問に対し二人は一切の迷いなく即答した。

『おおっと！　まさかここで答えが一致するとは！　確かにサイラオーグ選手は若手悪魔では最強と謳われています！　ある意味で納得のいく答えですが……理由を訊いてもよろしいでしょうか!?』

ナウドはまずアザゼルに理由を問う。

『私としてはグレモリーチームの専属コーチという立場としてグレモリー眷属の誰かを挙げるつもりでした……今のサイラオーグ選手を見るまでは。正直、驚いています。模

擬戦を見たときとは明らかに纏っている空気が違う。短い期間の中で彼に何が起こったのか強い興味を持っています』

『私もアザゼル総督と同意見ですね』

　アザゼルの言葉を次いでディハウザーもサイラオーグの名を挙げた理由を話し始めた。

『サイラオーグ選手は『王』としても優秀だと思いますが、それ以上に選手としてチーム最強を誇っていました。故に今の段階でサイラオーグ選手の強さはほぼ完成したと思っていました。後は年月による経験により強さを伸ばしていくものだと考えていましたが、どうやら私は思い違いをしていました。サイラオーグ選手の強さは、未だに完成に至っていません。既に一つ殻を破り、新たな段階に来ています。アドバイザーとして嬉しく思う反面、そこに導けなかった己の未熟さを恥じる限りです』

　口調は穏やかだが、その瞳には覇気が宿っている。未来の好敵手が誕生したことに王者としての喜びと、対等に見ているからこその対抗心が合わさって生じた昂ぶりであった。

『おおっ！　確かに私としてもサイラオーグ選手からは目が離せません！　彼の身に一体何が起こったというのか!?　アドバイザーである王者ディハウザーはご存知でしょうか!?』

ナウドの質問にディハウザーは一度口を開きかけ、閉じ。少し間を置いた後にもう一度口を開く。

『――申し訳ないですが、私も心当たりが無くて……若い悪魔の成長は時として我々の予想を遥かに上回るのかもしれませんね』

アザゼルはディハウザーが言葉を選んでいたことに気付いた。それは僅かな間であったが、アザゼルは見逃さない。ディハウザーには、サイラオーグが強くなったことに何かしらの心当たりがあるのだ。

『そろそろ制限時間の五分になろうとしています。試合に出場する選手は魔法陣の方へ』

聞きたいのはやまやまだが、レーティングゲームの一試合目が始まろうとしていたので後回しにすることにした。解説の仕事を受けた手前、それを疎かにすることは出来ない。

それぞれ選んだ選手が魔法陣へ移動する。この時点では誰が選ばれたのかは分からない。判明するのは別空間に用意されたバトルフィールドに転送されたときである。

選手が転送されるとモニターにバトルフィールドの様子が映し出される。

遮蔽物の無い見渡す限り青々とした草原。それが初戦のバトルフィールド。

バトルフィールドに転送されたのはリアスチームからは木場。そして、サイラオーグ

チームからは青白い炎を纏う馬に跨った甲冑騎士――見た目通りバアルの『騎士』であるベルーガ・フールカス。

初戦は『騎士』対『騎士』の対決となる。

◇

『禍の団』の魔術師にとってそれは具現化した悪夢であった。彼女はそれが恐ろしく、岩陰に隠れ、体を限界まで丸めて縮こまっていることしか出来ない。

「やめてくれ！　やめて――」

同胞の絶叫が途切れる。あの怪物にやられてしまった。目を閉じて現実から目を背けても耳は閉ざすことは出来ず、鼓膜が同胞の悲鳴によって震わされ、その震えは彼女の震えとなる。

「ひーひっひっひっ！」

心底楽しそうな声が仲間たちの絶叫を掻き消す。どうしてそこまで楽しく笑えるのか、逆に悍ましさを感じさせるぐらいに腹の底から愉快に笑う。

仲間の悲鳴が上がる度にその笑い声によって消される。声だけでなく存在ごと。

炎上するアンチモンスターたちが灯篭に役割を果たし、地面に影が映される。

異形の四本の腕がそれぞれ一人ずつ魔術師を掴んでいる。逃れようと足をジタバタ動かしているが、その程度で抜け出せる筈も無い。

魔術師の影が異形の影へと重ねられていく。影が影を呑み込み、最終的には一つなって魔術師の影は消えてしまった。岩に隠れている魔術師はそれを影越しに見ているしかない。

四本腕の異形――マダは軽食でも済ますかのようにどんどん魔術師たちを己の中へ放り込んでいく。放り込まれた先に何があるのか、それはマダの口を潜っていった者しか分からない。

そうやってマダはあっという間にアンチモンスターたちを含む魔術師らを喰らい尽くした――隠れている魔術師を除いて。

「足りねぇなぁ」

それは戦い足りないのか、食べたりないのか、それとも両方なのか。呟いたマダにしか分からないが、声には退屈さが混じっていた。

ここでの戦いが終わったと思ったのか、マダの足音が離れて行く。魔術師は足音が聞こえなくなるまで息を殺し続けていた。

どれだけの時間が過ぎただろうか。魔術師は深く、だが、なるべく音を出さないように息を吐く。

強い志を持って『禍の団』へ入ったが、今のこの瞬間に彼女の心は完全にへし折れてしまった。もう二度と戦うことは出来ない。今までの自分も魔術も捨て、新たな場所で新たな人生を始めようと決心する。

そんなことを考えていると自然と涙が零れてしまう。そんな彼女を慰めるように頭にそっと手が置かれる。

「……え？」

この手は誰の手？　何の手？　いつの間に置かれた手？

気付いてしまった瞬間、全身の血が凍り付くような気分であった。恐怖で全身が震える。

「よお」

陽気な声。しかし、その陽気さは凍り付く恐怖を溶かす暖かさは無い。寧ろ、彼女の中の恐怖を煽る。別人かもしれないという万が一の可能性がこの瞬間に断たれた。

「こんなところで隠れて何をしてんだぁ？」

笑いを含んだ声。マダは最初から知っていた。一人隠れていることを。知っていてわざと気付いていないフリをしていた。

悪趣味としか言いようがない所業。だが、これがマダの性なのだ。殺生或いは狩猟という悪徳はマダにとって己の身そのもの。無論、それが褒められたものではないことは

自覚しているが、否定することも切り捨てることも出来ない。ただ、己に従った結果なのだ。

魔術師は諦めてしまった。最早、為す術は無いのだ。他の同胞と同じようにこの怪物に食われて終わる。

「――何だ？」

今まで笑っていた筈のマダの声が急に真剣なものへと変わる。

「この感じ……魔王級かぁ？　いつの間に現れやがった……？」

何かを感じ取り、ブツブツと呟くマダ。既に魔術師のことなど眼中に無い。

「匂うなぁ……腐ったニオイだ……いや、こりゃあ……死臭か？」

バッと首を動かし、何故かマダは魔術師を凝視する。その行動の意味を理解出来ないまま、魔術師はマダによって空高く放り投げられた。

「――ぁ」

魔術師の体が突如として膨張したかと思えば、内側を突き破り大量の蠅が群れとなって飛び出す。魔術師は既に死んでいた。本人の自覚の無いままに。そして、蠅を隠す為の隠れ蓑にされていた。

悍ましい数の蠅が騒音に等しい羽音を鳴らし、一つの塊となって空中を旋回する。群全体が一つの意志で統一されているかのような動きをしている。

「はっ」
マダは笑い、瓢箪の酒を呷る。
「楽な仕事が楽しい仕事になってきたじゃねぇか……！」

◇

彼には全てが見えていた。彼が放った己の分身たちの目は彼の目でもあり、この戦場に居る者たちを映す。
「白龍皇……バラキエル……神滅具所持者……魔人か……」
錚々たる面々。生まれ変わった自分の力を試すには申し分無い。
その男は嘗て血統に優れた悪魔であった。しかし、時の流れにより王の座を追われ、代わりに名前だけ受け継いだ偽りの王たちがその座に就いた。正統たる後継者がいるにも関わらず。
だが、今は寧ろそのことを感謝すらしている。そんな寛容さすらあった。奪われたことで本当の力と大いなる御方と出会うことが出来たからだ。
無間の地獄の中で髪は色を失い、白髪となった。死と再生を数え切れない程繰り返した結果、片眼は変異を起こし虫と同じ複眼となり今も赤く輝いている。

悪魔としての誇りである両翼は地獄の苦痛の中で腐り落ちた。だが、それを惜しくは思わない。今はそれにも勝る片翅を手に入れたからだ。

半透明の昆虫の翅。そこに描かれる黒い髑髏。彼は失ったことで、真の力を得てベルゼブブの名に相応しき存在へと昇華された。

「まずは貴公らに絶望を送ろう」

シャルバ・ベルゼブブは顔を歪め、嗤った。

死蠅、拳魔

『第一試合開始して下さいっ！』

　実況が叫ぶと同時にバトルフィールドに立つ審判が開始の合図を出す。次の瞬間、二人の『騎士』の姿は消え、閃光の如き剣戟が数度起こり爆発するように地面が砕けた後、消えた二人は最初の立ち位置を入れ替えた状態になっていた。

『おおっと！　初手から『騎士』らしい高速の応酬！　一体何度打ち合いが起こったのか分かりません！　王者ディハウザー！　今のが見えましたでしょうか!?』

『二人共『騎士』の名に恥じない素晴らしい動きです。あの一瞬で十の打ち合いが発生していましたね』

　さらりと回数を答えるディハウザー。アザゼルはニヤニヤと笑いながら解説をする。

『地獄の最下層のコキュートスに生息する『青ざめた馬』は高位の魔物だ。あのペイル――有名な悪魔や死神が跨るものとして語り継がれている。しかし、乗りこなすのは容易じゃない。死と破滅を呼ぶ馬と言われているとおり気性が荒く、場合によっては乗り手を蹴り殺すことも珍しくない』

『ですが、乗りこなすことが出来れば先程のような動きも可能となります。馬の性能も

ありますが、騎手であるベルーガ・フルーカスは馬を司る特色があるフルーカスの出。故に人馬一体となり俊敏且つ苛烈な攻撃も為せます。――ですが、武器の相性関係無く戦えている木場選手も流石と言えます』

木場は聖魔剣を握り、ベルーガは武器は円錐型のランス。

最初の交差のとき、リーチの長いランスでベルーガは先制攻撃をしていた。剣の間合いの外から繰り出される高速の突きに対し、木場は聖魔剣で防ぎながら距離を詰める。剣の間合いに入ると同時に馬は、正面に居る木場の頭を踏み砕く勢いで前脚を振り下ろした。

聖魔剣が聖なる属性を有しているのは周知の事実。悪魔のみならず魔物である『青ざめた馬』にも効果がある。しかし、馬は本能的な恐怖に屈することなく木場へ攻撃してきた。騎手に対して余程の信頼感が無ければ出来ない行動である。

木場は蹄が数センチまで迫る紙一重のタイミングで馬の側面へ移動。敢えて攻撃を引き付けることで残像を攻撃させ、相手に戸惑いを生じさせるのが狙いであった。

ベルーガの足であり武器でもある馬を聖魔剣で斬ろうとしたとき、今度はベルーガがランスで木場の斬撃を防いだ。擦れ違い様に振るわれた三度の斬撃全てをベルーガはランスを巧みに操って防御し、これにより二人の交差は終わって今へと至る。

比率で見ればベルーガの攻撃が7に対して木場の攻撃は3程度。最初の攻防はベ

ルーガの方に軍配が上がると見えるが、先の述べたように木場の剣は聖魔剣である。悪魔が一撃でも当たれば大ダメージは免れない。木場に攻撃の機会を与えてしまった時点でベルーガは不利なのだ。仮に一撃でも貰ってしまえば次の戦いでは満足に戦えない。サイラオーグの為にも『フェニックスの涙』も使えない。聖魔剣に絶対当たらない無傷の勝利。それがベルーガに与えられた過酷な勝利条件なのである。

『一見するとベルーガの方が有利だが、精神的なことを考えるとプレッシャーは半端ないだろうな。勝ってチームに弾みをつけたいが、木場の聖魔剣相手に一太刀も受けられない。並の精神じゃあ動きに支障が出てもおかしくない』

アザゼルはベルーガの内面を冷静に分析するが、ベルーガはその解説に反発するように自分から積極的に仕掛ける。

馬が嘶くとベルーガたちが目で追えない速度で動く。甲高い金属音が響く。観客には何が起こったのか分かっていないが、木場がその場から動かずにベルーガのランスの一撃を受け流した音であった。

音が鳴った直後、受け流した動きに身を任せて木場は反転し、こちらもまた高速で駆け出す。

姿は見えないのにフィールド内のあちこちで打ち合う音が鳴り響く。

『凄まじい攻防だぁぁ！　殆ど目で追うことが出来ません！　神速の貴公子と同じく神

速の甲冑騎士の戦い！　異次元の速さを持つ者同士のみに許された超高速バトル！　カメラ！　ちゃんと録画して後でスローモーション再生をお願いします！』

激しいが内容が分からない両者の戦い。どちらが勝っているのか、押しているのか全く見えない。

熱狂しながらも戸惑っている観客を余所に限られた強者たちはその戦いを楽しんでいた。

「我が愛馬アルトブラウの脚と互角とは！　恐るべしリアス姫の『騎士』！」

「貴方たちのコンビネーションには戦慄させられますよ！　人馬一体とはまさにそのことですね！」

互いの技量を讃えながら戦いは加熱していく。

ベルーガの突きを剣身で受けた木場は弾かれ、地面を抉りながら着地。距離が開くとベルーガは愛馬を最大加速させて突っ込んで来る。

ベルーガが突撃して来るのを見て、木場は体にオーラを纏う。そのオーラに悪寒を感じたベルーガは、僅かに愛馬の速度を緩めた。

木場のオーラは地面を伝わり、ベルーガの進路上に無数の聖魔剣が飛び出す。荊ならぬ剣の道と化す地面。このまま進めばベルーガはまだしも彼の馬は被害を免れない。

「何のっ！」

事前に速度を緩めていたことが功を奏し、ベルーガは剣の道へ突っ込む前に手綱を引くと馬は高く跳躍。そのまま落ちることなく宙を駆け始めた。

地面から生えていた聖魔剣がベルーガを追って放たれる。ミサイルのように撃ち出された聖魔剣は四方からベルーガを狙うが、宙にいても馬の駆ける速度は変わらず、聖魔剣が追いつけない速度で移動すると木場へのお返しに持っていたランスを投げ放った。

音を超える速度で投擲されたランスの軌道を正確に読み、着弾時の衝撃も想定して攻撃の範囲外へ移動する木場。

蹄の音が木場のすぐ傍から聞こえる。宙に居た筈のベルーガがいつの間にか木場の近くまで移動していた。

ランスによる投擲で木場の注意をランスの方へ向け、更に木場の移動先を読んで自らもそこへ移動していたのだ。

愛馬のたてがみに触れる。そこから抜き出される二本目のランス。アルトブラウのたてがみは違う次元に通じており、そこに武器が保管されている。

ベルーガのランスが木場を穿つ為に突き出される。剣による防御が間に合わない絶妙な角度からの攻撃。

木場はすぐに防御が間に合わないことを悟ると聖魔剣に力を込める。次の瞬間、つん

ざく音と共に閃光が走った。
「くっ!?」
音と光に危ういものを感じ取ったのか、アルトブラウが反射的に木場から遠ざかってしまい、ランスの間合いの外にまで移動してしまったことでベルーガは攻撃を中断せざるを得なくなってしまった。
「姑息だったかな?」
「いや、貴殿の手の内の多さには感服する」
木場がやったのは聖魔剣を媒体にした朱乃直伝の雷である。朱乃の雷の威力には及ばないものの相手を怯ませるには十分な効果があった。誰しも急に大きな音を出されたり、激しい光を浴びせたりすれば驚くものだ。
尤も、あと一歩踏み込んでいたら音と光だけでなく雷の痺れも体験させられたが、ベルーガの愛馬の咄嗟の反応を素直に褒めるしかない。ベルーガもそれを理解しており、馬の首筋を撫でていた。
「貴殿の才能は私とアルトブラウを上回っている。貴殿の剣を受け、確信した。だが、それでも負ける訳にはいかん! 後に続く者たちの為にも全てを尽くす」
刺し違える覚悟すらあるベルーガに木場は目付きを鋭くさせる。このまま戦えば手の内を晒し続けるだけでなく体力も削られ続ける。しかし、相手の覚悟は並のものでは

ない。出し惜しみをしていたら痛い目を見るのは木場の方である。
（とっておきの一つを使わざるを得ないか……）
対サイラオーグを想定して温存するつもりであった手札をここで切ることを木場は決断する。
今後の戦いを左右するかもしれない手札を切ることを選択した木場に対し、ベルーガもまた己の手札を切ってきた。
ベルーガが愛馬を走らせる。すると、ベルーガたちの体がブレたかと思えば幾重にも姿を増やした。
『貴殿の聖魔剣は悪魔にとって必殺の効果を持っていようと当たらなければ意味は無いっ！』
幾つも重なった声がフィールド内に反響する。
分身により本体を隠すベルーガ。更には――
「くっ！」
正面から突撃してきたベルーガのランスを聖魔剣で受け流す木場。そこへすかさず別のベルーガがランスを突き出してくる。それもまた聖魔剣で防ぐ。聖魔剣から伝わってくる感触と衝撃は本物。厄介なことに視覚を欺く為の幻影ではなく実体を持った分身であった。

感覚ではまず察知出来ない本物同然の分身。少なくとも本体を見抜いて斬るということは難しい。

（これと似たような状況があったね……）

フリードがエクスカリバーを使用して分身を生み出したことを思い出す。あのときフリードは複数のエクスカリバーを使用して出したが、ベルーガは自分の力のみで精度の高い分身を作り出している。そう考えるとベルーガの実力の高さを改めて思い知らされる。

どうせ手札を切るならベルーガのような実力者であり敬意を払える相手の方が気分が良いし、後悔も無い。

木場は聖魔剣を消し、虚空から一本の剣を取り出した。

ベルーガは新たな剣に兜の下で驚きの表情をする。今までのレーティングゲームの中で見せたことが無いこともそうだが、何より神器を発動させた気配が無い。つまりは『魔剣創造』によって創られた剣ではないのだが、ベルーガは剣自体から強い魔を感じていた。恐らくは高名な魔剣であると考えられる。それも聖魔剣と交換する価値がある程の。

「資料には無かった剣だな……」

「ええ。実戦では初めて使うので」

魔剣に対し強い警戒心を抱くが、それはベルーガとアルトブラウの脚を止める理由にはならない。手足を失おうとも後続に未知なる魔剣の情報を教えることが出来ると考えれば挑む価値が出て来る。

「その魔剣、如何なるものか試させてもらう！」

ベルーガは分身たちを率いて突撃を開始。騎馬隊となって木場を蹂躙しようとする。

木場は魔剣を構え、息を吸い、一瞬力を溜めると魔剣を振り抜く。

完全に間合いの外から振るわれた魔剣。だが、ベルーガの視点では一瞬世界がずれたように映った。その直後、ベルーガと並走していた分身らが消滅していく。

「何⁉」

分身が解除されたことにベルーガは驚愕した。解呪系の魔術を使われた形跡も無いのにベルーガの意志とは無関係に無効化されれば動揺も驚きもする。

分身を解除したのは木場の振り抜いた魔剣――ノートゥングの能力。とはいってもノートゥング自体は解呪の能力を持たない。ノートゥングは何処までいっても切れ味の良い剣に過ぎない。そう切れ味が良過ぎるのだ。

切れ味という一点に於いてノートゥングは突き抜けていた。恐らくは万物でノートゥングの切れ味を止める物は存在しないと思われる程に。そしてそれは、目に映らないものすらも断ち切る。

ノートゥングが断ち切ったのはベルーガと分身たちとの力の繋がり。ベルーガの意思などを伝える見えざる糸のようなもの。木場はそれを一振りで切った。それにより分身たちは実体を留められなくなったのだ。理不尽なまでの切れ味の良さ。それが生み出す副次効果である。

これを木場が見つけたのは偶然だった。ノートゥングを使いこなす練習の際、アーシアも神器の練習をしており『聖母の微笑』の効果を遠隔で発動させていた。そのときに木場がノートゥングを振ると遠隔で発動していた『聖母の微笑』が解除されたのだ。これが数度繰り返されたときに木場はその原因がノートゥングにあることを見抜き、同時に見えない繋がりを断つ力に気付いた。

木場はベルーガが動揺している間に最速を以て彼に接近。ベルーガは木場の接近に気付くが既に回避不能の間合いまで迫られていた。少しでも時間を稼ぐ為にベルーガはランスを突き出す。眼前に迫るランスに対し、木場は素早く斜め前に踏み出すと同時にノートゥングを水平に持ち上げる。

ランスの先端がノートゥングの刃に触れるとノートゥングはランスを先端から切り裂いていく。

ベルーガの前で紙の如く裂けていくランス。木場が前に出るとノートゥングは一切の抵抗も無くランスを真っ二つにしながら進んでいき、あわやベルーガの首を斬り飛ば

す――寸前で止められた。
「くっ……！」
　ノートゥングの恐るべき切れ味を知らなかった故に喉元に刃を突き付けられる結果となってしまい、ベルーガは悔しそうな声を洩らす。
「降参を」
　木場はベルーガに降参するよう促す。ここまでされればベルーガに選択肢など無かった。しかし――
（まだ終わる訳にはいかん！　我が身を犠牲にしてでも一矢報いる！）
　後の仲間の為、主君であるサイラオーグの為に下手をすれば首が落ちてしまうのを覚悟し、ベルーガは愛馬の手綱を強く握り締めた。
『ベルゥウゥガァァァァ！』
　サイラオーグの一喝。その声は、さながら雷鳴であった。直接掛けられた訳ではない木場は一瞬体を震わせてしまい、会場など水を打ったように静まり返る。
「サイラオーグ様……」
「お前の忠誠心は良く知っている。その上で言わせてもらう……俺はそれを望まない」
　ベルーガの心を理解しているからこそ出る短い答え。それが何を意味するのか殆どの者が察せないだろう。

ベルーガもまたサイラオーグの心情を理解し、強く握り締めていた手綱を緩める。
「……見事。私の負けだ」
ベルーガの口から降参の言葉が出る。
『サイラオーグ・バアル選手の『騎士』一名、リタイヤです！』
審判が告げると静まっていた観客たちが沸く。
初戦を制したのはグレモリーチーム。

◇

何者かの侵入と不自然な死体。この二つに繋がりが無いとは思えない。シンと鳶雄は取り敢えず他の仲間と合流することを考えていた。
「ウゥゥ！」
刃が唸り声を上げる。シンと鳶雄はゆっくりと振り返った。
視線の先では気を失っていた筈の魔術師が立ってこちらを見ている。しかし、その目は瞳孔が開いており、口も弛緩してぶら下がるように開いている。シンたちが発見した不自然な死体と全く同じ表情をしていた。
魔術師は背骨が折れそうなぐらいに――実際に生木がへし折れるような音がした――

―体を仰け反らせると全身を痙攣させる。
次の瞬間、口から巨大な黒い塊が空に向かって吐き出された。
神経を撫でるような耳障りで聞き覚えのある騒音。黒の中に点々とある無数の赤。
「虫……？」
「蠅、にしては凶暴過ぎだな！」
黒蠅の塊が空中で旋回し、シンたちの方へ向かって飛んで来る。だが、先にシンとケルベロスが迎撃に動いていた。
二人の口から吐かれる炎の息。二つが合わさり黒蠅の塊を呑み込む程の大きさになる。
炎の息が黒蠅らを包み込もうとしたとき、黒蠅たちは炎を正面から突き破った。
「ナニ!?」
自分の炎が蠅如きに通じなかったことにケルベロスは驚きを隠せない。シンも表情には出さなかったもののケルベロスと同じ心境であった。炎が虫に負けるなど普通では考えられないこと。
「刃！　斬れ（スラッシュ）！」
鳶雄が指示を飛ばすと周囲の影から数え切れない程の刃が形成され、それらが伸びて黒蠅の塊を四方八方から斬る。だが、すぐに鳶雄は苦い表情となる。

あれだけの斬撃を繰り返しても地に落ちていく蠅が見えない。斬っている筈なのに斬れていないのだ。

「あれは!?」

鳶雄は気付く。同時にシンもそれを見た。黒蠅の塊を斬り付けていた影の刃の至る箇所が虫食いのような穴や欠けが出来ていた。

「斬れ(スラッシュ)!」

それに注目した状態で刃にもう一度影の刃を振るうように指示を出す。

刃が吠えると再び影の刃が振り回される。黒蠅の一匹に影の刃が触れようとした瞬間、その箇所が消滅する。黒蠅は触れたものを食い荒らすように消滅させる力を持っていた。これが炎と影の刃が通じなかった理由である。

「そういうことか……!」

黒蠅の特性を理解する。この力があればバラキエルの結界に穴を開けることも可能であろう。

次に考えるのは黒蠅の塊をどう対処するかであるが、それを考える前に黒い塊が二人に襲い掛かる。

「くっ!」

速さ自体は驚異的なものではないのでシンたちは避けることは出来た。しかし、これ

によりシンと鳶雄は分断されてしまう。
シンの傍にはケルベロス。鳶雄の隣にはピクシーたちを乗せた刃。シンらが二手に分かれると黒蠅も塊を二つに分けて追尾してくる。
シンの頭の中が黒蠅をどう対処すべきなのか高速で動く。あれこれと方法が浮かび上がる中でシンの直感が選んだ方法は至ってシンプルなものであった。
シンの両手に炎が灯る。頭上に掲げられた二つの炎が重ね合わされ、至上の炎となる。
炎は熱線の如く黒蠅の塊に向けて放たれた。
黒蠅らは消滅させる力により炎を消していく。
考える中で最も効果的だと思われる方法を選択した。炎の息でダメならばそれ以上の火力で押し切る。傍から見ればゴリ押しとしか言いようがない戦法。これがダメだったらならさっさとこの場から離脱する。
黒蠅は最初のうちは炎に拮抗していた。しかし、段々と塊から火の粉のように燃えた黒蠅が落ちていく。消し切れない熱量を光線のように速い速度で当てていることで黒蠅が一度に処理出来る速度を上回ったのだ。
一匹、二匹と減ることにより消滅させる力は弱まっていき、やがては炎が黒蠅の塊を貫いて全てを焼き尽くす。

「――やるね」

鳶雄はシンのやり方を見て触発される。

鳶雄は影によって作られた大鎌を構える。すると大鎌の刃が赤黒い炎によって覆われる。

それを横目で見ていたシンは、赤黒い炎を見て背筋に悪寒が走る。禍々しい見た目の通り、呪いのような力が込められた炎と思われる。その炎を近くで見ているピクシーたちも顔色を悪くしていた。

呪いを込められた炎を宿した大鎌を振り被り、鳶雄は黒蠅の塊へ走っていく。

触れれば消滅する危険があるのを知っていても真正面から突っ込んでいく度胸。多くの戦いを経験した者が宿すことが出来る磨かれた精神力が為せる行動である。

黒蠅に取り込まれるかに見えた瞬間、ギリギリまで引き付けた鳶雄は横へ移動して回避すると同時に大鎌を塊へと刺し込み、振り抜く。

黒蠅の塊が真っ二つに裂け、斬り裂かれた大量の黒蠅の死骸が地面へ落ちていった。

鳶雄の刃は全てを斬ることが出来る。比喩ではなく文字通り全てを、である。この場合、黒蠅の消滅の力よりも鳶雄の斬る力の方が上回ったのだ。

だが、全てを斬るにしても強い想いが必要になってくる。未知に等しい黒蠅の消滅の力を見たとき、心の中で微かに通じないかもしれないという考えが頭の片隅に過ってし

まっていた。その状態で今のように斬ったのならば通じなかっただろう。だが、先にシンが黒蠅を焼いたことで気持ちが楽になった。

灰に出来るなら斬れる。

また年下が奮戦しているのに年上の自分が弱腰になどなっていられないという気持ちが微かにあった不安を払拭させ、黒蠅を斬るに至った。

「刃！」

刃に声を飛ばすと周囲の影から刃が伸びる。大鎌と同様に伸びた刃にも赤黒い炎が纏っている。鳶雄が出来るのなら分身である刃も同じことが出来るのは道理。

二つに裂かれた塊が四つ、八つと分割されると共に小さくなっていき最後には一匹の蠅しか残らなくなるが、それすらも真っ二つに斬り裂いた。

「ふう……」

鳶雄は息を吐く。怪我は無いがかなり集中力を必要としたので精神的な疲れが蓄積していた。シンの方も額から流れる汗を拭っている。こちらも出し惜しむ無しの全力攻撃を行ったので消耗していた。

謎の襲撃者による攻撃を一先ず切り抜ける。

「……ちっ」

「……はぁ」

シンは舌打ちをし、鳶雄は深い溜息を吐いた。彼らの視界に在るのは立ち上がった何人もの魔術師たち。誰も彼もが見開かれた目と大きく開けられた口をこちらへ向けている。

これから何が起こるのか嫌でも想像が付く。

襲撃者の攻撃が一度で終わるなど甘い考え。こちらを殺す気ならば徹底的に仕掛けてくる。

魔術師たちの体が膨れ上がり、裂けると中からさっき以上の黒蠅が飛び出す。

◇

「まさか、我々の方が襲撃を受けるとは……！」

群がろうとしてくる黒蠅を雷光によって撃ち落としながらバラキエルは苦い表情を浮かべていた。

仲間たちの安否が気になる。最初のうちは連絡が取れていたが、突然連絡が取れなくなってしまった。襲撃者が連絡を取り合っていることに気付いて妨害を入れてきたと思われる。

バラキエルの方で襲撃者を探していたが、度々黒蠅が襲ってきて上手く進まない。今

も倒した数以上の黒蠅の群がバラキエルへ向かって来ている。

「邪魔だ！」

轟音と共に放たれた雷光が黒蠅の群を貫いた。黒蠅は灰燼となって空中に溶けるようにして消えていく。

幸いというべきかバラキエルの雷光は黒蠅に対して相性が良い。だが、生半可な攻撃では通じず全力で攻撃しなければならない。様子見で放った雷光が黒蠅の群に接触し、掻き消されたときは目を剥いてしまった。光の力が通じる時点で黒蠅は悪魔由来の力なのは予想出来るが、これだけの力を使える悪魔――軽く見ても魔王級の悪魔などバラキエルは知らない。しかし、使役するのが蠅となると嫌でもある名が浮かび上がる。

完全に予想外の展開となってきている。戦いにイレギュラーは付き物であるが、ここまでのことはバラキエルにも、彼よりも数手先を見通せるアザゼルでも予測出来ない。

「全員無事でいてくれ……！」

バラキエルは彼らを率い、先導する立場。故に全員を無事に返す義務がある。誰もが帰りを待つ者たちが居る。その気持ちはバラキエルにも十分理解出来る。だからこそ、この状況を切り抜けて全員の無事を知る必要がある。そして、バラキエル自身も愛する娘の為にも生きて帰らねばならない。

別方向から黒蠅の群が来ているのを捉える。バラキエルは雷光を槍のように投擲す

る――前に地上から伸びてきた炎が黒蠅を焼き尽くす。
「マダ殿！」
炎を吐くマダ。バラキエルは空から降りて、彼に傍に移動した。
「無事だったか……」
仲間の一人の無事が確認でき、バラキエルは安堵する。
「へっへっへ。あの程度でやられる訳がねぇだろ？」
マダは余裕そうに笑いながら瓢箪の酒を飲む。そこでバラキエルは気付いた。
「腕が……!?」
マダの四本ある腕の内の一本が穴だらけに抉られた状態になっており、辛うじて千切れずに垂れ下がっている。
「ああ、これか？　試しに触れてみたらこうなった。お前も気を付けろよ？　触ったらこうなる」
玩具のように半壊した腕を揺らすマダ。
「おまけにかなり呪いが込められていやがる。簡単には治らねぇぞ？」
体を張って黒蠅の危険性を教えてくれたのは有り難い。だが、他人事のように言うマダにバラキエルは顔を顰めてしまう。
価値観や死生観等が全く異なるせいでハッキリ言ってマダとバラキエルは相性が良

くない。そもそも、グリゴリのメンバーの中でマダと対等に付き合っているのはアザゼルぐらいである。そのアザゼルですらマダには手を焼いているのでバラキエルでは上手く付き合いようもなかった。
「……もう少し自愛した方がいい」
「考えとくよ」
一ミリたりとも考慮していない台詞が返ってきたが、今はそのことをとやかく言っている暇はない。
「他の者たちと連絡は？」
「ぜーんぜん。俺はお前がピカピカしてたから来たんだよ」
黒蠅を蹴散らしながらバラキエルの目立つ雷光の輝きを見て、それが消えないうちにマダはここへ駆け付けたのだ。
「なあ」
「何だ？」
「別に帰ってもいいぜぇ？」
「こんなときに冗談は――」
「冗談じゃねぇよ」
マダの声色に本気を感じ、バラキエルはマダの方を見る。

「おかしな話じゃねぇだろ？　俺たちも目的は殆ど終わってんだよぉ。『禍の団』の拠点も魔術師も全部ぶっ潰して大成功じゃねぇか。今起こってんのは予想外の出来事にしか過ぎねぇ。だったらよぉ、誰か一人帰して謎の蠅共のことを教えるのが賢明だろぉ？」

普段の言動は質の悪い酔っ払いの癖にこういうときに一理あることを言うので非常に困る。

「帰りを待つ可愛い娘も居るんだから、大人しく帰った方がお利口だろ？　無事に戻らないと娘が泣くぜぇ？」

もしかしたら、マダなりにこちらを気遣ってくれているのでは、とバラキエルは思ったがそれでも彼は自らの考えを言う。

「確かにこのまま帰れば娘――朱乃は泣くことは無い」

泣くことは無い。泣くことは無いが――

「だが、きっと私の行いに少なからず失望をするだろう。私は娘を泣かすことも失望させることも二度としないと誓っている」

だからこそ全員無事に帰還させることを目標に掲げていた。

「かーたーぶーつー」

バラキエルの宣言にマダは呆れながら揶揄する。

「そう思われて結構」
「へっ。まあ、今回のリーダーはお前さんだ。言うことはちゃんと聞きますかねぇ」
二人の耳にざわめく羽音が聞こえてくる。かなりの数を倒したが、まだまだで残っている。
「で？　これからどうすんだ？」
「先ずはここを切り抜ける。そして、皆と合流する」
「はいよ」
迫る黒蠅の群に雷光と業火が貫いた。

◇

サイラオーグとリアスのレーティングゲーム。初戦を制したリアスたちは順調に勝ち星を重ねていた。
二回戦目合計数字は１０でありロスヴァイセと小猫が参戦して勝利。
三回戦目の数字は８で一誠が選ばれてこれも勝利。
四回戦目も８だがルール上同じ選手は連続して出られないのでゼノヴィアとギャスパーが選ばれ、勝利した。

結果だけ見れば三連勝。だが、勝利に伴う代償も支払うことにもなった。小猫、ギャスパーは負傷しリタイヤしている。

そして、五戦目。数字は9。リアス側は『女王』である朱乃が選ばれ、サイラオーグ側も『女王』を出した。その結果は朱乃の敗北であった。リアスたちはこのゲームで初めて土をつけられた。

ここまでの戦いでリアスは残り六名、サイラオーグは三名となる。数としてはリアスの方が有利ではあるが、まだ油断は出来ない。何故なら最強の相手が残っているからだ。

そして、その時はやって来た。

六戦目、出されたダイスの目は――

『出ましたっ！　ついに12が出ました！　この数字が意味することは、サイラオーグ選手が出場出来るということです！』

実況の声に負けない程の歓声が観客席から上げられる。誰もが待ちに待った瞬間。そして、リアスたちにしてみれば遂に来てしまった瞬間でもあった。

答えは決まっていると言わんばかりにサイラオーグは既に上着を脱いでいた。動きの妨げにならない為の体へ密着した戦闘服。鍛え抜かれた上半身が威圧するように浮き彫りになる。

戦闘準備に入っただけで言葉にできないプレッシャーをリアスたちは感じていた。
リアスは悩んでいた。今の彼女には二つの選択があった。ゲームの流れを考えれば実質一択であったが、それを選ぶのにリアスの性格が待ったをかけてしまう。
「部長」
悩めるリアスに木場が声を掛ける。
「次の戦い、僕とゼノヴィアとロスヴァイセさんでサイラオーグさんと戦わせて下さい」
『騎士』二人と『戦車』一人で値は11。それは正しくリアスが悩んでいた選択であった。
「裕斗……それがどういう意味か分かって言っているの……？」
「はい。僕だけではサイラオーグさんには勝てません。恐らくイッセー君一人でも厳しいと思われます。でも、サイラオーグさんの戦力を削ぐだけなら、この身を投げ捨てる覚悟があれば出来るかもしれません……それが今の僕の役目だと思っています」
既に木場は覚悟を決めていた。ゼノヴィアとロスヴァイセも木場に同意するように頷いている。
「なに、イッセーと部長が後に控えている分気が楽だ。ましてや、相手は若手悪魔ナンバー1、そんな相手と戦えることに喜びすら感じている」
「役目がハッキリとしている分、分かりやすくていいですね。『戦車』として可能な限り相手を疲弊させるつもりです」

それは既に覚悟した者の台詞であった。木場たちは次に繋ぐ為に自らを犠牲にしようとしている。リアスとしては異を唱えたい。だが、『王』としての考えは木場たちを戦わせることは正しいと判断してしまう。

イッセーを木場とゼノヴィアと組ませて戦わせるという選択もあるが、客観的に見てサイラオーグに勝てる確率は低い。ここでサイラオーグを倒せればそれで良いのだが、万が一敗北したとき、リアス側は攻撃の札を二枚も落としてしまうことになる。

その場合残るは『騎士』と『僧侶』、『戦車』と『王』。向こうは『女王』『兵士』『王』の三つ。数としては有利だが、『僧侶』のアーシアは戦う術を持たない。一方で向こうの『女王』は相性の差もあったが朱乃を無傷で倒しており、詳細不明の『兵士』は駒七つ分という一誠に迫る潜在能力の持ち主。そして、最後に控えるのは最強の『王』。数値だけ見るとリアスに勝ち目は無い。

後の戦いの為に木場たち三人に戦わせるか。一縷の望みを懸けて最大戦力をぶつけるか。どちらを選んでも望むような結果が訪れないことをリアスは感じていた。

リアスは黙考する。考える時間は五分しか与えられていない。限られた時間の中でどれを選ぶのかリアスは考え続ける。

眷属たちはリアスが口を開くのを黙ってまっていた。

リアスが口を閉じて二分が過ぎようとしたとき、遂にリアスは口を開く。

「裕斗、ゼノヴィア、ロスヴァイセ、貴方たち三人をサイラオーグにぶつけるわ。サイラオーグに少しでもダメージを与えてちょうだい」
　リアスは木場たちの提案を自らの考えとして言う。それはこの選択に対し、自分が責任を負う為である。
「ありがとうございます」
「どうせなら勝って来いと言ってくれ」
「そうだね。やるならそれぐらいの気概があった方が良い」
「はい。やるならとことんやりましょう」
　彼らに悲愴感は無かった。寧ろ、仲間の為に全力を尽くせることに喜びすら感じている。
「ごめんなさい……優柔不断で甘さを捨てられなくて……」
　リアスの自嘲に木場は首を横に振り、恐らくは身内と認めた者にしか見せないだろう柔らかな笑みを浮かべる。
「それがあったからこそ、僕たちはここに居るんですよ、部長」
　木場はそう言い残すとゼノヴィアとロスヴァイセを連れて魔法陣へ歩いて行く。
　一誠の横を通り過ぎようとしたとき、一誠は木場の肩に手を置いた。
「後は任せろ――何て言わねぇ。勝って来い！」

「そんなこと言われたら……精一杯頑張りたくなっちゃうよ」
リアスに向けていた笑みを一誠にも見せる木場。
「行って来い、ダチ公」
木場の背を叩き、想いを伝える。木場は最後まで笑顔のまま魔法陣へ向かっていった。

◇

今回用意されたバトルフィールドは湖の湖畔であった。サイラオーグは既に来ており、目を閉じ腕を組み瞑想しているかのように佇んでいる。
サイラオーグは木場たちが転送されると目を開く。三人の姿を見ても特に驚いた様子は無く予想済みという表情であった。
「お前たちの希望か？　それともリアスの案か？」
思惑を全て見抜いた上での発言。
「どっちもさ」
「そうか。リアスは恵まれているな。眷属にも試練にも」
リアスの成長を喜び、その眷属たちの献身に感心するサイラオーグ。そして、ゆっく

りと組んでいた腕を解く。
「――だからこそ申し訳なくも思う。そんなリアスの眷属を殺めてしまうかもしれないことに」
発言だけ聞くと上から物を言っているようにしか取れない。しかし、言っている本人は何故か少し恥じるような表情をしている。
「死ぬつもりはありません……戦うなら勝つつもりで行きます！」
「良い台詞だ……だからこそ危ういのだ……今の俺は……！」
昂る闘志を自制するサイラオーグに木場たちは違和感を覚える。戦いの中では彼はもっと自分の感情に素直だった気がした。
「如何なる戦いに於いても俺は十全の準備をしていた……今回が初めてだ。不十分で戦いに挑むのは……」
サイラオーグは万全ではないと告白するが、木場たちにはそんな風には見えなかった。寧ろ彼から放たれるプレッシャーで精神が消耗しそうになる。
「戦う前に言っておく……死ぬなよ」
サイラオーグからそんなことを言われ、木場たちは目を丸くするがサイラオーグは本気で言っている。その事実が嫌な予感を覚えさせる。
『両選手！　準備はよろしいでしょうか？』

審判が確認をしてくる。間もなく戦いが始まる。
木場たちは陣形を整える。中央にロスヴァイセを配置し、左右に木場とゼノヴィア。ロスヴァイセが魔法陣を展開し、そこから魔法を一斉発射することで牽制。左右から木場が聖魔剣、ゼノヴィアはエクス・デュランダルで攻める為の陣形である。
『第六試合、開始して下さい！』
審判からの合図。そこから先の光景は『騎士』である二人しか認識出来なかった。
正面に立つサイラオーグを凝視していた木場とゼノヴィアは、本能に引っ張られるように視線を横へ向けてしまう。
そこにサイラオーグは居た。電光石火、疾風迅雷という言葉すら生温い踏み込みによる移動。そして、既に攻撃も終えていた。ロスヴァイセの胸に当てるようにして置かれた拳。ロスヴァイセ自身も攻撃されたという自覚は無い。
次の瞬間、ロスヴァイセはその場で膝から崩れ落ちる。同時にサイラオーグは動く。
横に立っているゼノヴィアへ繰り出される横蹴り。ゼノヴィアは身に染み付いた反射によりエクス・デュランダルで受け止める。ゼノヴィアは体内に鳴る鈍い音を聞きながら爆風でも浴びたかのように蹴り飛ばされた。
一瞬にして仲間二人が攻撃を受けたが、木場はそれを心配している余裕など無い。サイラオーグはゼノヴィアを蹴った反動を利用して木場との距離を詰め、尚且つ既に攻撃

態勢に入っている。動き全てが次へと繋がっている完璧な動さにより木場に逃げる隙を与えない。

サイラオーグの拳が突き出されるが、木場はそれを聖魔剣で受けると同時に持てる力を脚部に込めて全力で後ろへ飛ぶ。

（軽い……？）

サイラオーグの拳を防いだ木場の感想がそれであった。絶大な威力を秘めている筈なのだが、異様に軽く感じたのだ。

木場は数メートル程飛んだ後に着地して構える。サイラオーグの追撃は無い。サイラオーグは何かを確かめるように拳を開閉していた。

『リ、リアス・グレモリー選手の『戦車』、リタイヤです』

一拍遅れて告げられるロスヴァイセのリタイヤ。防御に優れた『戦車』であるロスヴァイセがたった一撃で倒されたことに木場だけでなくこの会場にいる全てのものが騒然となる。しかも、添えるような拳の一撃で。ロスヴァイセの鎧には傷一つ入っていないにもかかわらず。

そして、追い打ちをかけるようにピシリ、という音が鳴り木場の聖魔剣が粉々になって砕けた。

何故サイラオーグの拳を軽く感じたのか木場は思い知らされた。木場の聖魔剣では

サイラオーグの拳に対抗出来ない。軽かったのはサイラオーグの剣では無い。木場の聖魔剣の方であった。

「ぐっ……！」

ゼノヴィアは呻く。サイラオーグに蹴られた後、水切りのように地面を何度も跳ねることになった。立ち上がったものの肩に激痛が走る。サイラオーグのたった一発の蹴りで肩が完全にいかれてしまい、垂れ下げることしか出来ない。

始まって数秒も経たずに実力差を見せつけたサイラオーグ。だが、その表情は心なしか不満そうにも見える。

普段は施してある四肢の枷を今のサイラオーグは解除していた。シンとの戦いの後、そのときの感覚を忘れない為である。

これまでのサイラオーグは己の力を完全に把握している。しかし、今のサイラオーグは自分の力を若干持て余していた。イメージと実際の結果にズレが生じている。

相手が覚悟して挑んでいる以上本気で返して殺めてしまった場合は仕方が無いと割り切れるが、今のように制御し切れていない力で誤って死なせてしまったら目覚めが悪い。

傲慢、不遜ととられてしまうような考え。だが、サイラオーグには許される。

何故ならばこの場に於いてサイラオーグは強者だからだ。

魔拳、闘気

誰もが息を呑んだ。サイラオーグは若手悪魔の中でナンバー1。それは共通認識ではあった。だが、その強さは予想の遥か上を行っていた。

堅強な『戦車』を拳一発で沈め、俊敏な『騎士』たちが遅れをとるような速度で動く。ここまで圧倒的だと誰が予想出来るだろうか。

観客もリアスたちも思わず身震いする中、サイラオーグと対峙している木場とゼノヴィアはどれ程の恐怖を感じているだろうか。

「木場っ！」

ゼノヴィアは負傷した片腕を垂らしながら、まだ動くもう片方の腕で担ぐようにしてエクス・デュランダルを持つ。ゼノヴィアからは迸る程のオーラが放たれており、エクス・デュランダルもそれに呼応して輝いている。

「ヤバいと思っていたがこれは想像以上だっ！　全力でも足りない……！　死力を尽くさなければ勝てないぞっ！」

サイラオーグの力を目の当たりにしても折れることなく持てる全てを注ぎ込もうとするゼノヴィア。

「分かっているよ、ゼノヴィア！　元から後先なんて考えるつもりはなかったけど余力なんて言葉を考えた時点で負ける！　今まで会ったことがない程の相手だっ！」

木場もまた全身からオーラを放ち、数え切れない程の聖魔剣を一気に展開して攻撃と防御を同時に展開する。木場が一度に出せる限界の聖魔剣だが、これだけ出しても心許ない。聖魔剣を容易く砕かれたときの光景を幻視してしまう。

サイラオーグの体から薄っすらと立ち昇る白いオーラ――闘気。本来ならば眩いぐらいに発光し、大地を割り、嵐の如く吹き荒れて湖面を波打たせる程の量と質を秘めているが、今は目を凝らさないとハッキリと見えないぐらいであった。

サイラオーグが繰り出す万物を打ち貫く拳には非常に集中を要する。その集中が欠ければ貫く拳にはならない。故に彼は常に平静を保たなければならなかった。欠点を挙げたらキリが無い。

しかし、逆に言えばそれ程の闘気を体の裡に秘めてコントロールしていることになる。それらが全て攻撃に転じたとき、どれだけの破壊力になるのか想像も付かない。

緊迫しながらも決して諦めない二人の姿にサイラオーグは高揚を覚えるが、それも鎮める。だが、いけないと分かっていても口角は自然と上がってしまう。

「それでいい。俺の拳を止めてみせろっ！」

地を蹴ったサイラオーグが向う先は木場。最も軽傷な木場を叩き、この戦いに王手を

かけようとしている。ゼノヴィアもサイラオーグが木場を狙っていることに気付いて急いで合流しようとするが、距離があるのとサイラオーグが速いせいで到底間に合わない。

木場は無数の聖魔剣を前方に並べ、馬防柵のように鋭い切っ先が突き出された壁を作る。当たれば致命傷になりかねない聖魔剣の壁。普通なら躊躇い足が止まる。しかし、サイラオーグの走りに躊躇など無く速度を緩めることなく全速力で突っ込んでいく。

そして、躊躇無いのは突き出す拳も同じ。聖魔剣の刃先に目掛けて迷い無い真っ直ぐな拳で殴り掛かる。

サイラオーグの拳が聖魔剣に触れた瞬間、サイラオーグの皮膚に刺さることなく一瞬にして破壊されていく。聖魔剣の聖なる気もサイラオーグの内に溜め込まれている闘気には通じない。

身を守る壁が破壊されたことで木場は近距離は危険と感じ、その場から駆け出す――

とサイラオーグは考えていたが、木場の動きはサイラオーグの予測とは真逆であった。

砕けた聖魔剣の破片を掻い潜って木場は剣を構えながら突っ込んで来ている。

意表を衝かれたサイラオーグに木場は己の剣を横薙ぎに払う。サイラオーグもまた必殺の拳を放つ。

聖魔剣とサイラオーグの拳。どちらが上かは今までの流れを見ていたら分かってし

まう。だが、それでも木場は迷うことなく剣を振るった。
サイラオーグは拳で聖魔剣ごと木場を打ち抜く――かと思いきや、直前になって閉じていた拳を広げる。木場の剣は触れることなくサイラオーグの掌の下を通過しようとした瞬間、下から伸びてきたもう一方の掌によって剣が挟まれた。
「っ!?」
驚愕の表情をする木場。剣を白刃取りされたこともあるが、理由はもう一つある。
「流石に俺でもこの切れ味を我が身で試す気にはならんな」
サイラオーグが挟んでいるのは聖魔剣ではなく魔剣ノートゥング。聖魔剣で攻撃してくるという先入観を利用して密かに持ち替えていたのだが、サイラオーグには見抜かれてしまった。
(何て冷静な判断力なんだ……!)
あのまま拳で突いていたら五指を切り飛ばすことが出来ていた。木場はサイラオーグの的確な判断と対応に慄く。
「これはベルーガの手柄だな」
サイラオーグの言葉に木場は歯噛みする。サイラオーグの言う通り、ベルーガ戦で木場がノートゥングの切れ味を見せていなければサイラオーグの拳を負傷させていたであろう。大事な手札を早々に切ってしまったことのツケをここで払うことになってし

まった。
　木場はノートゥングを引き抜こうとする。だが、ノートゥングは空中で固定されたかのように抜けない。
　サイラオーグは手首を返しつつノートゥングの刃を指で挟む。親指と人差し指の二本で挟んでいるだけなのに木場の全力を上回っていた。そして、空いた腕を振り上げて拳を作る。
　圧縮されても尚巨大に見えるサイラオーグの拳。そして、何故だろうか。拳を振り翳す様が木場の知る人物と重なる。その瞬間、木場の全身の汗腺が開いた。経験した痛みを脳が勝手に再生する。サイラオーグの拳の痛みを知らない筈なのに。
　サイラオーグはそのまま拳を突き出すかと思いきや、何かに気付いて視線を後方へ向ける。そこには片手でエクス・デュランダルを掲げ、刀身から大出量の聖なる気を噴き出させているゼノヴィア。
「木場ッ！」
「構うなゼノヴィア！」
　呼び掛け、答え、そして行動までの流れはほぼ一瞬であった。木場の覚悟を聞くと同時にゼノヴィアはエクス・デュランダルを振り下ろし、聖なる気の波動をサイラオーグへ飛ばす。

サイラオーグはノートゥングの刃から指を離すと同時に木場を軽く蹴飛ばす――木場側からすれば今まで味わったことの無い重い蹴りだったが――背後から木場に斬りかかられない為である。そして振り返り、エクス・デュランダルの波動を正面から迎える。

「聖剣の波動と俺の闘気！　どちらが上か勝負っ！」

サイラオーグは今まで制御していた闘気を解放し、全身から放出させた。それだけで大地と湖面が揺れ、ちょっとした自然災害が生じる。

聖なる波動と闘気が衝突した瞬間、バトルフィールドは光に包まれ、全体が揺さぶられる。見ている観客たちもバトルフィールドを囲っている結界が破壊されるのではと恐れを抱く程の揺れであった。

暫くして光が収まる。サイラオーグ周辺の大地は深々と抉られているもののサイラオーグが立っている場所だけは無事であった。当然のことながらそこに立つサイラオーグも無傷。放出した闘気が層となり聖なる波動を届かせなかった。しかも、あれだけの闘気を出しても質と量ともに薄れる気配が無い。

「真っ正面から受けた攻撃でも無傷……化け物だよ、君は」

消耗して大量の汗を流し、震えるゼノヴィアはそれしか言えなかった。

サイラオーグは汗一つ流すことなく深く息を吸い込み、吐く。全身から発せられてい

た闘気が戻っていき、再び体表を覆う程度にまで収められる。
「良い波動だったが、俺には届かせるには足りない」
ゼノヴィアはその事実に悔しさで表情を歪めることしか出来なかった。
『これは何という……何という圧倒的な差……！　サイラオーグ選手の実力がここまでのものだと誰が予想出来たでしょうか！　それにしてもサイラオーグ選手が纏っているあの白いものは一体？　オーラとも魔力とも違うように見えますが？』
ナウドは興奮した様子でアザゼルに意見を聞く。アザゼルの方はサイラオーグを凝視したままであった。
『何て奴だ……闘気を纏ってやがる。しかもあれだけの質と量をほぼ完璧にコントロールしてたっていうのか……』
戦慄したように呟いたアザゼルの言葉が、そのまま質問への答えとなっていた。
『闘気とは……？　小猫選手が戦っていた際も同じようなものを纏っていましたが、もしかしたらサイラオーグ選手も同じような術を扱えるのでしょうか？』
実況の疑問に答えるのはディハウザー。彼もまたサイラオーグから視線を離さない。
『彼は仙術などは習得していませんよ。彼は常に己の身体を、その中でも拳を最も信じていますから。あれは体術を鍛え抜いた先に目覚めた魔力とは異なる力です。生命の根本というべきものが可視化されているのです』

闘気の説明を聞き、会場内がざわめく。鍛えた先にある力、どれだけ鍛えればいいかも分からない力。魔力よりも圧倒的に感じる闘気の存在は、彼らの知る常識が覆されたと言っても過言ではない。

『だが、それだけじゃあ納得出来ないこともある』

『というと？』

『ロスヴァイセを倒したときのことだ』

アザゼルもそうだが、ディハウザーにとっても驚愕に値する衝撃であった。

『『戦車』の特性は伊達じゃないんだ。しかも、ロスヴァイセは北欧魔法に長けている。しかも、最近は防御系の魔法にも力を入れていた。並の攻撃なんか通用しない要塞みたいになっていた――あいつの身持ちぐらいのな』

本人が聞いたら激怒しそうな冗談を混ぜるが、語っているアザゼルの表情は真面目そのもの。

『なのに一発だ。防御魔法も貫いたどころか鎧に傷一つ付けずに中身だけ綺麗にダメージを通して、はい終わり、だ。……どうなってやがる』

アザゼルは当然ながらサイラオーグの過去の戦闘記録に目を通している。破壊を伴うサイラオーグの拳が、あれだけ綺麗に一撃を与えられるのを今日初めて知った。

『……戦いの中で得たのかもしれませんね』

『何？』
『サイラオーグ選手がより高みに上れる戦いがあった。そういうことです』
『……お前、やっぱり何か知っているんじゃないか？』
疑うアザゼルに対し、ディハウザーは微笑むだけ。それだけで簡単には突破出来ない面の厚さであることをアザゼルに伝える。
実況席が熱を帯びる中でバトルフィールド内もまた熱気を放ち続けていた。
前後或いは左右から挟んで高速の剣戟を繰り返す木場とゼノヴィア。隙も無い息の合ったコンビネーションを見せるが、その狭間に立つサイラオーグに未だに一太刀も入れることは叶わなかった。
ゼノヴィアが片腕を負傷し、大剣であるエクス・デュランダルをいつもの速度で振るうことが出来ないが、それを補う為に木場はノートゥングを懸命に振るう。
本当ならば聖魔剣との二刀流で、倍の手数で仕掛けたいところであったが、二刀流になるとノートゥングが不満を露わにして木場へ嫌がらせをしてくるので仕方なくノートゥング一本で戦うしかなかった。だが、聖魔剣が容易く砕かれてしまう以上ノートゥングのみで攻めるのは正解なのかもしれない。サイラオーグもノートゥングの切れ味には警戒している。
だが、どんなに優れた切れ味を持っていようと当たらなければ話にならない。サイラ

オーグは最小の動きで二人の斬撃の隙間を縫うようにして躱す。ゼノヴィアの振りの遅れを利用されており、ゼノヴィアもそれが分かっているので唇を噛み締めながらエクス・デュランダルを振り続けている。

サイラオーグの全身を膜のようにして覆う闘気。木場やゼノヴィアの剣がそれに触れるとサイラオーグが斬撃のコースから外れる。この際、サイラオーグは剣の軌跡を目で一切追っていない。攻防一体の闘気を新たな感覚として使いこなしている。

サイラオーグは一撃必殺足り得る拳を持っている。木場とゼノヴィアはそれが解き放たれないように全身全霊を以って剣を振り続ける。しかし、サイラオーグが軽やかに避ければ避ける程、二人に焦りと疲労が重く圧し掛かってきていた。

そして、それが積もれば綻びが生じる。

木場の横薙ぎを一歩下がることでサイラオーグは紙一重で躱す。すかさず背後からゼノヴィアがエクス・デュランダルを振り下ろそうとするが、このとき木場の目からでも分かるぐらいに振りの速度が遅くなっていた。

重量のあるエクス・デュランダルを片手で振り回していたツケが遂に来てしまった。

その瞬間、サイラオーグは更に後ろへと下がった。そして、ゼノヴィアへもたれ掛かるように背を押し当てる。

虚を衝かれてあっさりと懐へ入り込まれてしまった。近過ぎるせいでエクス・デュラ

ンダルも振り下ろせない。
刹那、サイラオーグの肘が真後ろへ放たれ、ゼノヴィアの脇腹を突く。
命中したとき、ゼノヴィアは脳裏に巨大な杭で撃ち抜かれるイメージが流れ、それに匹敵する痛みと衝撃が脳を焼く。
一拍置いてゼノヴィアは後方へと飛んでいった。
「飛んだか……集中が足りんな」
サイラオーグは小声で肘打ちの不完全さを反省するが、それを聞く余裕はゼノヴィアにも木場にも無かった。
「ゼノヴィア！」
見ている方も寒気立つ一撃を受けたゼノヴィアを見て、木場は駆け出そうとしていた。しかし、木場の体はその意志に反して体を急停止させる。木場は見た。僅かに浮き上がっているサイラオーグの片足を。このまま踏み込んでいたら上半身が千切れ飛びそうな回し蹴りが繰り出されていただろう。
ゼノヴィアの危機に木場が焦って動くことを予想していたサイラオーグは、土壇場での木場の冷静な対応に内心褒め称える。そして、仲間を救いたくても救えない自身に激しい怒りを向け、憤怒の表情を浮かべている木場の仲間を想う強さを『騎士』の鑑だと思った。

サイラオーグが木場と対峙している間にゼノヴィアは数度地面を跳ねた後、立ち上がろうとする。しかし、すぐに膝を突いてその場で嘔吐してしまった。
「がはっ……げほっ……！」
激しく咳き込む。吐き出すのは胃液だけでなく赤い血も混じっている。明らかに臓腑にも深いダメージが入っている。
「ゼノヴィア！　大丈夫かい!?」
声を掛けるがゼノヴィアは蹲って咳き込み続けるだけ。木場の声に応じることが出来ない程深刻な状況だということは伝わった。本当に辛うじてリタイアしていない状態である。
サイラオーグの方はというとゼノヴィアに背を向けたまま木場の動向のみに注目しており、今すぐにでもゼノヴィアを倒そうという様子は無い。
下手に動けば些細であろうが隙を晒す可能性がある。敵はそこを見逃さずに突いてくる、という木場への最大限の警戒をしている。
木場からすればこれ以上無い程に戦い難い。肉体的にも精神的にも全く隙が見えないし、見せるとも思えなかった。
（ゼノヴィアが動けない以上僕がやるしかない……！　出せられる手段はここで出し尽くすっ！）

木場はノートゥングを仕舞い、代わりに聖剣を創造する。サイラオーグはその行動に訝しむ。最も攻撃力の高いノートゥングではなくレーティングゲームで殆ど使用していない聖剣にわざわざ切り替えたことは、決して意味の無い行動には思えなかった。
「これから貴方に見せるのは、僕が至ったもう一つの可能性だ」
「ほう？」
そんなことを言われればサイラオーグも興味を抱いてしまう。構えながらも木場がこれからすることへの妨害はしなかった。
「――禁手化（バランス・ブレイク）」
木場の体から清浄なる気が溢れ出し、それが周囲へと広がっていく。すると、地面から多種多様な無数の聖剣が出現する。同時に聖剣の前にオーラが紐のように絡んでいき、甲冑を纏った異形を創り上げる。その甲冑騎士の頭部はドラゴンを模したものであり、甲冑には紋様のようなラインが刻まれており、発光している。
甲冑騎士たちは聖剣を手に取り、木場の周囲に集まっていく。
木場を中心とした騎士団が創造された。
「ほう……！　『魔剣創造』の禁手化だけでなく既に『聖剣創造』の禁手にも至っていたか……！　貴公の器と才は計り知れないなっ！」
木場の奥の手――『聖剣創造』の禁手を即座に理解、感心するサイラオーグ。

「――『聖覇の龍騎士団(グローリイ・ドラグ・トルーパー)』、『聖剣創造』の禁手にして亜種です」

木場も隠すことなく自らの禁手の名を明かす。

『聖剣創造』の禁手自体はジークフリートの戦いで『聖輝の騎士団』を不完全ながらも発動させていた。これはそれを完全な形で発動させたものである。幽鬼のような甲冑騎士ではなく重量感のある本物と遜色ない騎士たち。不完全故に聖魔剣と同時発動が出来たが、こちらは完成形なのでそれは出来ない。その代わりに各甲冑騎士は木場に近い動きを再現することが可能であった。

禁手に至るまでの道のりは想像以上に険しかった。一度は発動したので習得するのは然程難しくないと考えていたが甘かった。ジークフリートという自分を上回る存在と対峙したときに経験した死の予感と神経が擦り切れるような緊張感、それは生半可なことでは再現出来ない。故に木場は聖剣一本でシンと一誠に頼んで二対一、手加減無しの実戦同然の訓練に挑んだ。

一誠は禁手だけでなく新能力のトリアイナも使用し、シンも持てる技全てを使って木場を追い詰めた。血反吐どころか口から臓腑を吐き出すような経験を何度も何度もした後に木場は己の禁手を手に入れることが出来た。

『これは思わぬ展開だぁぁぁ！　木場選手！　まさかまさかの第二の禁手化！　禁手自体が稀だというのに一人で二つの禁手を可能とは何という奇跡っ！』

『本来、『聖剣創造』の禁手は聖剣を携えた甲冑騎士を複数創り出す『聖輝の騎士団』というものだが、あれは木場の影響で亜種として発現したようだ。っていうか龍とその紋様って……木場、お前どんだけあいつらのことが好きなんだよ』

アザゼルも感心しながら茶化す。木場もこういった形で発動するのは予想外であったが、完成した禁手の姿を見ての感想は『良い』というもの。双方共に特異な存在であるシンと一誠が関わったことへの影響と思われるが、今のところそれがマイナスに働いていないので問題視はしていない。

「この場でお前の新たな禁手と戦えることを光栄に思う。だからこそ――」

サイラオーグの四肢に力が込められ、筋肉が隆起する。

「全力で迎え撃つっ！」

その言葉を合図にして騎士団が一斉にサイラオーグへと挑みかかった。

未完成のときは違い、木場の動きを九割以上再現した騎士団の一斉攻撃だったが――

「ふんっ！」

――突き出されたサイラオーグの拳が甲冑騎士の頭部を一撃で粉砕。首元を狙ってきた刃をしゃがんで回避すると同時に肘で甲冑騎士の胴体を薙ぐ。甲冑騎士の胸から上が切断されて地面に落ちる。サイラオーグの肘が並の刀剣を上回る程の切れ味を発揮していた。

だが、甲冑騎士たちも押されているだけではない。二体目がやられた僅かな隙に捻じ込むように聖剣を突き出す。

薄皮のような闘気を僅かに裂いたがサイラオーグ本体には届かず、反撃の中段蹴りにより上半身と下半身が断たれた――が、その背後から再び別の甲冑騎士による突きが放たれた。

先に倒した甲冑騎士が目晦ましとなって僅かに反応が遅れたサイラオーグ。咄嗟に頭を傾けて聖剣を回避するが、こめかみに刃が微かに触れた。

禁手を使用し、数の力で攻めてやっと掠り傷程度のダメージ。だが、木場はその事実に絶望を見ない。寧ろ逆に希望を見い出す。相手は無敵ではない。傷も負うし血も流す。

少なくとも木場が足掻き続ける限りは勝てる見込みはゼロにはならない。

ゼノヴィアが動けない間は木場がそれを補い続ける。

サイラオーグは傷を付けた甲冑騎士を掌打により粉砕すると自分から距離をとる。

こめかみから流れる血を拭う。火傷のようなヒリヒリとした痛みが続き、血も止まらない。聖剣によって出来た傷だが、サイラオーグの動きに影響を与える程の効果は無い。触れたのがほんの一瞬だったので聖なる気がサイラオーグの体内に入らなかった。

「ふむ……」

サイラオーグは反省する。木場の第二の禁手を見て、高揚した。それがこめかみを傷付けられる要因となった。

荒ぶる戦意のせいで集中力が欠けていた。貫く拳を放つには自分の肉体と精神を完璧にコントロールする必要がある。戦意の昂ぶりが技の精細さを欠けさせることに、改めて戦いとはままならないものだとサイラオーグは思う。尤も、昨日の今日で目覚めた力を実戦で使える段階にしているのは十分に異常だと言えるが。

サイラオーグは木場に注意しつつもゼノヴィアの様子も確認する。まだ蹲って動けない状態だが、いずれは回復して挑んでくるのはサイラオーグも分かっていた。痛みで折れて戦意喪失するようなやわな相手ではないと理解しているからだ。

いつでも対処出来るようにその存在を常に思考の片隅に入れつつサイラオーグは木場と甲冑騎士たちを壊滅させる為に集中力を高めていく。

木場は後手に回らないように注意しながらどう動くべきか頭の中でシミュレートを繰り返していた。だが、何度行ってもサイラオーグの拳によって撃破される未来しか見えてこない。

禁手を習得したことで甲冑騎士の防御力や動きの精度が上がった筈だが、サイラオーグを倒すにはどちらも足りていない。死ぬ気で覚えた禁手がサイラオーグ相手には時間稼ぎぐらいの効果しか発揮出来ていない事実に情けない気分になる。

木場は牽制の意味を込めて甲冑騎士たちの隊列を僅かに変えてみる。サイラオーグは微動だにしない。不動の構えのまま全てを撃破出来るという自信に満ちているのが伝わってくる。それは決して驕りではなく木場すらも認めざるを得ない事実であった。

攻め手が足りない。木場はそう思ってはいけないと分かっていても思ってしまう。

鬼神にして力の権化ともいうべきサイラオーグを前には全てを差し出しても尚足りないのだ。

「っ！」

木場は息を呑んだ。一瞬だけ向けられた視線。それは蹲っているゼノヴィアが向けたもの。僅かに木場を視界に入れただけですぐに伏せてしまったが、木場はそれが助けを求めるものだとは思わなかった。

（仕掛ける気か！　ゼノヴィア……！）

木場にはその視線の意図が伝わっていた。ゼノヴィアがサイラオーグに対して決死の、そして最後の攻撃を仕掛けようとしていることを。

勘の鋭いサイラオーグにバレないようにほんの僅かな時間で送った木場へのメッセージ。下手をすれば伝わらなかったかもしれないそれを、木場はきちんと、そして正確に受け取る。

（……僕もこれが最後の攻撃になるかもしれないね）

ゼノヴィアが覚悟を決めたように木場も腹を括る。結果がどうなるかは分からない。しかし、確実に言えることは自分たちの攻撃に次は無いということ。

木場は異空間から新たな剣を取り出す。ノートゥングと同じく『魔剣創造』では創り出すことが出来ない唯一無二の魔剣。

サイラオーグはその魔剣が出現すると同時に肌寒さを感じる。

新たな魔剣の登場にサイラオーグの好奇心が鎌首をもたげる。それが集中力の妨げになることは分かっているが、湧き上がってくるものは仕方がない。戦いを楽しむ気質が自分にあることは既に認識している。それを未熟と思いながら、いずれは楽しむことを忘れず、集中力も途切れさせないようになりたいと考える。サイラオーグの拳は未だに成長途中である。

サイラオーグの意識が明確に向けられているのを木場は感じていた。攻めるならばここだと木場が強く思ったとき、その内心を汲み取るかのように今まで動かなかったゼノヴィアがエクス・デュランダルを振り上げながら地を蹴った。

（――来たか！）

木場に意識を取られていたサイラオーグは、コンマ数秒だが反応に遅れてしまった。『騎士』の速度ならば一太刀入れられてもおかしくはない隙である。だが、サイラオーグの反応から迎撃の構えまでが間に合ってしまっていた。サイラオーグの拳によるダ

メージは、ゼノヴィアから速さを奪っていた。
離れた距離からエクス・デュランダルの聖なる気を放ってもサイラオーグの闘気に防がれるのは経験済みである。サイラオーグにダメージを与えるなら聖なる気を纏わせたエクス・デュランダルで直接斬り付けるしかない。それが分かっての接近だが、ゼノヴィアの動きは全てが遅く、エクス・デュランダルを振り下ろすよりもサイラオーグの拳が届く方が速い。
サイラオーグの拳がゼノヴィアの胸を貫く。
「これは……!?」
驚愕したのはサイラオーグであった。ゼノヴィアの体に拳が沈みこんだ瞬間、ゼノヴィアの体が光となって消滅した。倒したのではない。飛び込んできたゼノヴィアは偽者だったのだ。
ならば本物は、とサイラオーグが視線を動かしたとき、その死角に入り込むようにゼノヴィアが姿を現す。
エクス・デュランダルの鞘にしてあるエクスカリバーの能力。『擬態の聖剣』と『透明の聖剣』の能力を発動させていた。サイラオーグの意識が逸れると同時に聖なる気を『擬態の聖剣』によって自分の姿に変え、『透明の聖剣』により本体を隠す。ゼノヴィアの力そのものに形と姿を与えたことによりサイラオーグですら破壊するまで気付けな

かった。
渾身の一振りがサイラオーグの肩口へ打ち込まれる。闘気の膜を聖なる気により相殺し、鋼の如きサイラオーグの肉体にエクス・デュランダルの刃が食い込む。
だが、そこまでであった。聖なる気はサイラオーグの闘気によって剥がされており効果を発揮せず、片手ではサイラオーグの肉体にこれ以上刃を通せず止まってしまう。
ゼノヴィアも今まで経験したことのない硬さに驚愕する。そして、二つのエクスカリバーを併用しても通じなかったことを悔しがる。二度も同じ手がサイラオーグに通じるとは思えない。もしかしたら、両腕であったのならもう少しだけダメージを与えられたのではないかと思ってしまい、サイラオーグに片腕を負傷させられたことを悔やむ。
「今のは驚かされたぞ！」
エクス・デュランダルを受けたままサイラオーグは拳を握る。既に覚悟を決めているゼノヴィアはそれを避けるつもりはない。今の彼女に出来ることは食い込んでいるエクス・デュランダルを1ミリでも深く押し込むこと。
ゼノヴィアは負傷した腕を無理矢理動かす。聞いたことが無い音が体内に響き、脳を焼くような痛みが起こるが精神力で捻じ伏せる。
そして、まともに使えない腕を身体を使って動かし、ハンマーのようにエクス・デュランダルの柄へ叩き付けた。

嫌な音と激痛がゼノヴィアを襲うが、彼女は声一つ洩らさない。
サイラオーグは拳を握り締めながら不屈の精神を見せるゼノヴィアを称賛する。
「見事だ」
敬意を表し、一撃で沈めようと溜めた力を解放しようとしたとき、下から伸びてきた巨大な氷柱がサイラオーグの拳を閉じ込める。
「これは!?」
氷の中へ封じ込められた自分の拳を見てサイラオーグは目を見開く。誰がやったのかはすぐに分かった。新たに取り出した魔剣――ダインスレイブを地面に突き刺した木場によるもの。
氷柱を自在に生成出来るダインスレイブの能力によりサイラオーグの右拳を捕らえることが出来たが、それ相応の代償も払うこととなった。
ダインスレイブの柄を握る木場の手は変色し始めている。冷気による凍傷が起こっていた。ただでさえじゃじゃ馬な魔剣を禁手と同時に使用したことにより魔剣の反撃を許してしまう。辛うじて能力の一部を発動させることが出来たが、維持できるのも限られている。その前に手が使い物にならなくなるが。
しかし、これが残された最後のチャンス。木場は戦う前に誓った通り出し惜しむつもりはない。

「行けっ！」
騎士団がサイラオーグを囲み、全員が聖剣を構えると突きの体勢のまま一斉に突進する。
全方位から聖剣の刃がサイラオーグに迫る中でゼノヴィアもまた残された力を振り絞り、エクス・デュランダルをサイラオーグへと打ち込み続け、そして数多の聖剣がサイラオーグへと突き立てられる。
木場とゼノヴィアの正真正銘最後の反撃。これにより状況は塗り替えられる――
「――感謝する」
「そんな……」
「ここまで……差があるのか……！」
――儚い希望を一切許さない絶望一色によって。
甲冑騎士たちの聖剣がサイラオーグを貫くことはなかった。あらゆる角度から突き出された聖剣の刃先はサイラオーグの皮膚一枚で止まっている。サイラオーグが全力で身を固めれば如何なる刃も通さない。
「はあっ！」
溜め込んでいた闘気を全方向へ解き放つ。サイラオーグからすれば気合を入れるに等しい行為だが、周囲にいる者たちは違う。爆風でも浴びたかのように闘気によって全

員が吹き飛ばされる。
全員が吹き飛ばされた中でサイラオーグは構える。その目が捉えているのはゼノヴィア。空中にいるせいで咄嗟に構えることも出来ない。
（今ならば……！）
サイラオーグの精神は最高の状態に達していた。木場とゼノヴィアの見事な戦いっぷりに感動し、それに応えようとしている。熱のような戦意と氷のような冷静さ。相反する二つの感情が奇跡的なバランスを保ち、サイラオーグを更なる高みへ押し上げる。
未だに氷柱に捕えられている拳に闘気を送り込む。内側からの圧により巨大な氷柱は瞬く間に粉砕された。
「ふんっ！」
サイラオーグはその場で自由になった拳を突き出す。その拳には闘気が乗せられており、それが放たれる。
ゼノヴィアは闘気が自分に迫っていることに気付き、咄嗟にエクス・デュランダルを構えた。エクス・デュランダルに闘気が触れたとき、それを貫き、ゼノヴィアに通る。
「がっ!?」
体を貫く闘気に理解をする前にゼノヴィアの意識は断たれた。闘気はそのままバトルフィールド端まで飛んで行き、結界へ衝突。闘気により結界全体が揺さぶられる。

「出来た……が」
　先程の一撃で結界が不安定な状態になってしまっており、点滅や揺らぎなどが生じている。
「二発目は耐えられんな。致し方ない」
　サイラオーグは消えるような速度で走り出し、木場を追う。まだ地面に足が着いていない木場。身を守ろうにも甲冑騎士たちは闘気の衝撃波により散り散りになっており集合出来ない。尤も、近くに居たとしても今のサイラオーグの速度に追い付けなかったであろう。
　木場の腕を掴み、そのまま上空へ投げ上げる。
「くっ！」
　全身で風を切りながら凄まじい速度で上昇していく木場。結界の天辺真下の位置にまで移動させられてしまう。
　地上を見下ろす木場の視界に入るのは、こちらに対し拳を構えるサイラオーグ。木場は最早ここまでであることを悟る。
「すみません……僕は何も為せなかった……部長！　イッセー君！　後は頼むっ！」
　しかし、彼は何もしないまま果てるつもりはない。最後の抵抗にダインスレイブを振り抜く。無数の氷柱がサイラオーグへと放たれた。

「お前たちと戦えたことで、俺はまた強くなれた」

解き放たれるサイラオーグの拳。撃ち出された闘気はダインスレイブの氷柱を全て粉砕し、木場へ直撃。

（これは……!?）

意識が断たれる間際、全身を貫く衝撃に木場は既視感を覚える。それは彼が特訓の中で何度も経験したことがあるものに近い。

（まさか……サイラオーグは……間薙君と同じ……）

ある事実を知ると同時に木場は意識を失う。

木場を貫いた衝撃波は不安定状態の結界まで達し、これすらも貫いてドームの天井を破壊する。

観客たちから悲鳴が上がった。堅牢な筈の結界が壊されることなく破られ、建物を破壊するなど前代未聞である。

『リアス・グレモリー選手の『騎士』二名、リタイヤです』

混乱する会場内で審判は仕事を全うする。これによりこの戦いの勝者は決まった。

バトルフィールド内で拳を突き上げるサイラオーグ。その勇ましくも神々しい姿を見たとき、誰もが思ってしまった。

このレーティングゲーム、勝つのはサイラオーグだと。

大群、投擲

「退屈な戦いだと思っていたが、中々どうして。一味違った展開になってきたじゃないか」

迫り来る黒蠅の群を相手にしながらヴァーリはニヤリと好戦的な笑みを浮かべる。『禍の団』の魔術師たちを無力化したと思ったら、魔術師たちから黒蠅たちが湧き出し、全てを貪り始めた。

「うぇーだホ」

マスコットのようにヴァーリに肩車をされているジャアクフロストは、黒蠅の悍ましさに舌を出して気味悪がっていた。

ヴァーリは試しに白龍皇のオーラを光弾として黒蠅に撃ち込んでみたが、倒し切れたのは数匹程度でそれ以上は倒す前にオーラを消滅させられてしまった。

「ヒホっ！」

ジャアクフロストが冷気を操り、瞬時に氷の壁を作り出す。行く手を遮られた黒蠅の群はそのまま壁へ激突するが、それで止まることはせず分厚い氷の壁をくり抜きながら前進し続けている。

「俺は初めて見るが、アルビオン、お前はアレのことを何か知らないか？」

肩に乗せてある白いドラゴンのぬいぐるみに話し掛けると、ぬいぐるみの口が動いて声を発する。

『私も初めて見る。だが、あれに込められた悪意と呪いは並のものではない。使役するとなると魔王クラスの力が必要だ』

少年だった頃のヴァーリは天性の才能を持っていたが、器である体がそれに追い付いていなかったので、アルビオンの声を淀みなく外に伝えるのに今のぬいぐるみのデバイスを使用していた。これを使うことで体への負担を減らしていた。しかし、当然のことながらそれは嘗ての話であり、今のヴァーリには不要である。単純にヴァーリを子供姿へ変身させたものが昔を懐かしんで付けた再現であった。

触手のように無数に枝分かれして襲ってくる黒蠅の群に、ヴァーリは光翼を翻しながら触手の隙間を縫うようにして抜けていく。触れれば消滅するのを知っているにも関わらず、平然と紙一重で避ける様は命のやりとりを愉しんでいるような恐ろしさと危うさを感じられる。ジャアクフロストを背負っているというハンデもヴァーリからすれば難易度を少し上げる程度に過ぎなかった。

黒蠅の猛攻を切り抜けると置き土産に圧縮したオーラを放つ。先程よりも力を込めていたのでかなりの数を葬ることは出来たが、群の数を見ると微々たるものに感じてし

まう。
　更にはヴァーリの耳には新たに来ている黒蠅らの羽音が聞こえていた。他の者たちが倒した魔術師か、或いは逃亡して身を隠していた魔術師らを餌にして増えた黒蠅が合流しに来る。
　気付けば減らした数よりも増えた数の方が多く、ヴァーリが最初に戦っていたときと比べて倍の量と密度になっている。
「やれやれ。最初は少し面白いと思ったが、こうなってくると鬱陶しくて五月蠅いだけだな」
『虫など皆そうだ。蠅ならば尚更だ』
「ヒーホー！　あんな虫けら俺様が絶滅させてやるホ！」
『こいつの喧しさだけなら負けんな……』
　愚痴り出すヴァーリと騒ぐジャアクフロストにアルビオンは苦笑を混じりの言葉を返す。
「……蠅相手に使うのは少々気が引けるが、これ以上纏わりつくのも御免だ」
『やるのか？』
「ああ。幸い、もう目撃者は存在しない」
「ヒホ！　やるのかホ!?　やっちゃうのかホ!?」

ジャアクフロストがはしゃぐ中でヴァーリの全身から今までの比ではない白いオーラが放出される。それはヴァーリを包み込み、具現化し出す。
「禁手化っ！」
『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　ｂｒｅａｋｅｒ！』
白い閃光が放たれる。あらゆるものを消滅させる黒蠅たちを塗り潰す程の鮮烈な白。それが消えるとヴァーリの全身は鎧で覆われていた。
禁手『白龍皇の鎧』を顕現させたヴァーリ。身長が伸びており、禁手の発動により変化の魔法が引き？がされていた。
「ようやく戻ったか……」
元の身長に戻ったことを少し安堵する。子供特有の高い声も年相応の声に戻っていた。昔は身長が低かったことを知り合いに揶揄われていた嫌な記憶を思い出す。尤も、身長が低いことがコンプレックスではなくそれを理由に麺を取り上げられそうになるのが嫌だったからだ。昔のヴァーリはカレーでもシチューでも何にでも麺をぶち込む偏食家であり、栄養バランスを考えろと何度か注意されていた。ヴァーリの数少ない血生臭くない昔の思い出である。
「ヒホ！　『白龍皇の鎧』だホ！」
相変わらず肩車状態のジャアクフロストが、ヴァーリの禁手に珍しく子供のような反

応を示している。ジャアクフロストは隠しているつもりだが、彼がヴァーリの禁手が好きなのは周知の事実。戦いが始まるといつの間にかヴァーリは禁手化しているので、今のようにヴァーリの禁手の発動を見るのは久々であった為、ジャアクフロストのテンションは上がっていた。

はしゃぐジャアクフロストをヴァーリは窘めることはしなかった。何だかんだでライバル宣言をしているジャアクフロストのことは気に入っているし、ヴァーリなりに可愛がってもいるからだ。

置いて来てしまったことへの謝罪も込めてジャアクフロストに好きなようにさせる――ところへ黒蠅の群が突撃してくる。

「――無粋だな」

仲直りをしている時間を邪魔されたヴァーリはその場で拳を振るう。白い線にしか見えない程の高速のパンチ。空を切る音が後から聞こえてくる。

向かって来ていた黒蠅の群に大穴が開く。それも五つも。あの一瞬で五回も拳を放ち、飛ばしたオーラで黒蠅を粉砕したのだ。

今度はヴァーリの両腕が消える。音よりも先に黒蠅の群に巨大な風穴が穿たれる。先程の倍近い数があり、そのせいで群は四散し大小バラバラの塊になる。

このままヴァーリへ突っ込むのは危険だと判断したのか各塊は方向転換をし、再び集

まって群を為そうとする。
「こっちの思った通りの動きだ」
『所詮は虫だ』
「そうだホ！　所詮一寸の虫には五分の魂しかないホ！」
間違った諺の使い方をしているジャアクフロストは置いておいて、ヴァーリたちの予想通りに一箇所へと集まっている黒蠅。群になっていたときは変幻自在に動いていたが、このときは集まっているせいで動きが止まっている。
ヴァーリは両手を突き出して構える。両手の中に白色の球体が形勢される。そして
――
『Ｈａｌｆ　Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎ！』
――圧縮した半減の力を黒蠅へと放つ。
ヴァーリ版ドラゴンショットは黒蠅らに触れると数十倍の大きさに展開。全ての黒蠅が球体内に閉じ込められた。
球体内の黒蠅らが縮小し始める。球体内では如何なる物体も空間も半減させられる。それに加えてヴァーリは半減の力を何重にも圧縮して放っているので、球体内では延々と半減が繰り返され黒蠅らは肉眼では捕捉出来ないサイズにまで縮む。最終的には自身の存在を保つことが出来なくなるレベルにまで縮小された挙句、完全消滅させられ

た。
　あらゆるものを消滅させる力を持つ黒蠅が、ヴァーリにより消滅させられるのは皮肉な結末と言える。
「さて――」
　一息ついたと思いきや、再び無数の羽音が聞こえてきた。ヴァーリは思わず溜息を吐く。
「……虫の駆除なんて白龍皇のやることじゃないな」
『同感だ。その為に私たちの力を使うと思うと腹立たしさしか感じない』
「しつこい奴らだホ！」
　戦いを愉しむヴァーリにとっては最早手応えも感じず数だけが多いだけ。プライドの高いアルビオンからすればドラゴンの力が害虫駆除に使われているだけで気分が悪い。ジャアクフロストは短気故に怒る。
　空に黒い靄が見えてくる。あれらが全て黒蠅である。並の者たちならば絶望しか感じない光景だが、ヴァーリたちからすれば面倒事がやって来ただけに過ぎない。
「はぁ……仕方ないか」
　もう一度溜息を吐いて戦う姿勢だけには入る。全く気分が乗らないので折角の神滅具もいまいち活性化しない。想いの強さがそのまま神滅具の強さに繋がり、バトルマニ

アであるヴァーリは戦うだけで強くなっていくのだが、偶にはこのように気分が萎えてしまうこともある。

黒蠅らはヴァーリを捉え、群がる為に空から一斉に降下してくる。

それを迎え撃とうするとヴァーリ。すると、突如として突風が巻き起こった。

風により土煙が巻き上がる。それにより色を付けられた風は、風向きを生物のように変えていきヴァーリの前で巨大な竜巻となって黒蠅の群を閉じ込めてしまう。

「これは……」

ヴァーリが視線を動かす。その先にはいつの間にかオンギョウキが居た。

オンギョウキは立てた人差し指と中指を顎に当て、赤い口から風を吹き、それを竜巻へ転じさせている。

（いつの間に……）

戦いとなれば日常生活のときに比べ気配に対して敏感になる。特にヴァーリのような戦いを好む者ならば顕著になる。そんな彼がオンギョウキが攻撃するまでオンギョウキの存在を感知することが出来なかった。

アザゼルが集めた者ならば只者ではないことは分かっていたが、それでも予想以上の実力である。

（気配の殺し方ならマタドール以上かもしれないな）

ヴァーリの興味はすっかりオンギョウキへ移っており、最早黒蠅の存在は眼中に無かった。
オンギョウキはヴァーリのぎらついた視線を浴びながら胸を膨らませてより強い風を吹く。檻と化した竜巻の中で黒蠅らは風そのものをどうにかしようとするが、どんどんと風は強まっていき強風の中で無様に流されるだけしか出来ない。
「ん？」
ヴァーリは気付く。竜巻を挟んだ反対側にもう一人オンギョウキが立っていることに。分身であるもう一人のオンギョウキもまたオリジナルと同じ構えをしている。だが、その口から吹かれたのは風では無く灼熱の火炎であった。
火炎が加わったことで竜巻は炎の竜巻と化し、閉じ込めている黒蠅を一気に燃やす。風が送り込まれ続けているので炎の勢いと温度は上がり続け全てを焼き尽くす。
炎の竜巻が消えたときには黒蠅は灰すら残されていなかった。
「無事か？　白龍皇殿」
「――ああ。問題無い」
分身を消し、一人に戻ったオンギョウキがヴァーリへ声を掛ける。
仲間と合流した――しかし、両者の間に流れる空気は穏やかとは程遠いもの。
（これだけの強者が今まで名を広めずに潜んでいたとは驚きだ）

（二十にも満たないというのにこの覇気……歴代の中でも最強と謳われているだけのことはある）

強者故にお互いの持っている力に敏感に反応してしまう。今は目標を同じとしているが、もしかしたらこの先戦い合うかもしれない。そう思うと自然と身構えてしまう。

相手が何を考えているのか構えから分かり、二人は黙っていた。しかし、言葉の代わりにその身から放たれる殺気染みた気配が言葉以上に語っている。ヴァーリにくっついているジャアクフロストはそれに気圧されるが、震えるなどの恐れを見せることは意地でもしなかった。

不意にヴァーリとオンギョウキの視線が互いから外れ、揃って同じ方向に向けられる。

「……ジャアクフロスト。降りてくれ」

今までジャアクフロストの好きにさせていたヴァーリがジャアクフロストに離れるように言う。

「――ヒホ」

ジャアクフロストは大人しく従い、ヴァーリから降りた。我儘や文句の一つを言うのが普段の彼だが、ヴァーリの真剣な様子から何を言っても変わらないことを悟ったからだ。同時にヴァーリのことが好きだからこそ足手纏いになりたくないという思いもあ

る。
　二人が何かを察したようにジャアクフロストもまた感じ取っていた。ここへ向かってくる悪意の塊のような存在を。そして、それが間違いなく自分よりも強いことを。
　間もなくしてそれは音も無く降り立った。
「シャルバ・ベルゼブブ……なのか？」
　疑問符が付いてしまったのには無理も無い。ヴァーリの知るシャルバとは何もかもが異なっている。
　老人のように真っ白な髪。死人を彷彿させる青白い肌。背中から生える髑髏の紋様が浮かぶ虫の片翅。多方面を映し出す複眼となった片眼。そして、その身から放たれる魔王級のオーラ。全てが記憶にあるシャルバと違った。
　ディオドラ・アスタロトを利用し、レーティングゲームの最中にリアスたちを襲撃して失敗。それ以降何処へ行方不明になったことはヴァーリも知っている。
「あの蠅はお前の仕業か？」
「如何にも。小手調べ程度だが楽しんで貰えたかね？」
　たった数ヶ月の間に別人と思える程に力が増している。理由があるとすればシャルバの背中から生えた片翅。それは記録の中に存在するベルゼブブの翅と酷似している。
「シャルバ・ベルゼブブ……話に聞く旧ベルゼブブか」

何処から仕入れたのか分からないが、オンギョウキは旧魔王派のことを知っており、彼らが嫌う旧という言葉を付ける。

だが、シャルバはそう呼ばれても微笑を浮かべて受け流す。

「旧ベルゼブブか……ふふふ……最早懐かしさすら感じる呼び名だ。だが、もう二度とそう呼ばれることは無いだろう」

ヴァーリは違和感を覚える。以前のシャルバは名と血統に対して尋常ではない誇りを持っていた。旧魔王派の者たちに共通することだが、旧を付けられて呼ばれることを心底嫌う。表情の一つでも変えてもおかしくはないのだが、今のシャルバは余裕そのもの。

「好きなように言うが良い。私にとってはその名は戯言も同然。偽りの魔王らが何をほざこうとも。あの御方に選ばれた私は、私こそが名実共にベルゼブブを継承とするに相応しい真の後継者なのだ！」

興奮と心酔が混じり合い恍惚とした表情を浮かべるシャルバ。話から推測するに、シャルバが強くなったのはその『御方』という存在によるもので余裕そうなのはそれが精神的な支柱となっているからだと思われる。

魔王としても悪魔としてもプライドが高いシャルバをこうまで言わせる『御方』は何者なのか。少なくともヴァーリとオンギョウキは心当たりは無い。

「それで？　わざわざ自慢する為に俺たちの前に現れたのか？」
　ヴァーリは興味が無いという態度で接する。
「力ついでに慢心と傲慢も手に入れたということか……」
　それに乗じて煽るオンギョウキ。感情を揺さぶり、シャルバからもっと情報を聞き出そうとしている。しかし、シャルバはそれを一笑に付し、オンギョウキを無視してヴァーリとのみ会話を続ける。
「私がお前の前に現れたのは温情だ」
「温情だと？」
「半分とはいえお前の体には正統たるルシファーの血が流れている。『禍の団』など私にとってもお前にとっても踏み台にしか過ぎないだろう？　いつまでも留まっている理由も無い。今すぐ私に手を貸せ。そうすればお前をあの御方に紹介しよう。私と共に偉大なる魔王への道を進もうではないか！」
　未だにサーゼクスたち現魔王を排除し、自分たちが返り咲こうとする野望を捨てていない。懲りていないシャルバにヴァーリだけでなくオンギョウキも呆れたように溜息を吐く。
「お前たち旧魔王が冥界の片隅に追いやられた理由が良く分かる。諦めが悪い上に話も一方的。おまけにみみっちい」

「成程。名も地位も奪われたのも良く分かる。当時の冥界の悪魔たちは賢明だったな」
シャルバを拒絶の意味を込めて小馬鹿にする。
温情を以って下手に――あくまでシャルバの基準で――出たら無下にされた挙句小馬鹿にもされ、シャルバは少し表情を歪めた。
「この力を齎してくれたあの御方に興味が無いというのか……？」
「興味はあるさ。でも、何を齎してくれるかじゃない。どんな力を持っていて、戦ったらどうなるかという興味さ」
紛れもない本心を語るヴァーリ。眼中にすら無かったシャルバが短い期間で目を見張る程の力を得た。それの要因となった存在に会ってみたいと思うが、それは力を乞う為ではない。如何ほどの力なのかを試す為にである。
ひりつくような空気を生み出すヴァーリ。闘志の昂ぶりが外へと漏れ出ている。
オンギョウキはヴァーリの好戦的な性格に『こいつはこいつで危険だな』と内心思ってしまった。
「……最高の器と力を持って生まれたが、思考は獣だな。所詮は人間との混じりものだな。何故、貴様のような存在が生まれたのだ」
ヴァーリというよりも人間という種を見下しての発言。
「ヒホッ」

ジャアクフロストは息を呑んだ。フルフェイスの兜でもヴァーリが今どんな表情をしているのかが分かる。

ヴァーリは激しく怒っている。

「人間の血を――母の血を侮辱したか？」

空気が更に変わる。圧迫感のある重苦しさを感じさせるもの。闘志に置き換わって敵意が場を満たしている。

ヴァーリは自分に流れるルシファーの血をそこまで重視していない。流れているのだからしょうがないと割り切っている。そもそもルシファーの血統である父に対して良い思い出が無い。

一方で母の方は自分が無力であることを嘆き、父に虐げられていたヴァーリを救うことが出来ずにいつも泣いていた。記憶を振り返っても殆ど泣いている顔しか思い出せない。だが、母が自分の為に料理を作ってくれたことは今でも覚えている。父の目を盗んで質素だが思い出に残る料理。碌でもない子供時代の数少ない暖かな記憶である。

「だとしたらどうした？　――ルシファーの者は戯れが過ぎる」

戯れ。幼年期にあった忌々しい記憶。母に刻み込まれた深い悲しみ。そんな一言では片付けられない。

沸き上がった怒りは瞬時に冷やされ、冷徹な殺意へと変わる。

「ならこれも戯れだ。来い、遊んでやる」
指招きをして挑発するヴァーリ。シャルバは口が裂けたように歪ませる。嘲笑っているようにも怒っているようにも見える。
「正統なる血統を断たすのは心痛む」
「嘘を吐け。微塵も思っていないだろう？」
シャルバは翅を震わす。不愉快な羽音が鳴り響き、シャルバの足元の小石などが粉々になっていく。
「混ざりものならば致し方なし！」
髑髏の紋様が蠢くとそこから大量の黒蠅が解き放たれた。
「ふん！」
ヴァーリは拳にオーラを圧縮し、突き出すことで塊として発射する。白いオーラの塊が、黒蠅らに命中。白い光が爆発して黒蠅を吹き飛ばす――かと思いきや、爆発そのものが黒蠅の大群に呑み込まれていき逆に消されてしまう。
「へぇ」
少し関心した様子を見せながら光翼で空中へと飛翔。黒蠅の大群は三つの塊に分かれて、その内の一つは空に上がったヴァーリを追って来る。
「どうしようもない性格は全く変わらないが、実力は本物だな」

『ドラゴンのオーラすらも喰い尽くすか』
　単独で動いていた黒蠅ならば先程の攻撃で殆ど消し飛ばされていただろうが、シャルバ本体が近くに居るせいか黒蠅の性能も向上していた。
「直接触れるか……？　いや、止めておくか」
　シャルバに触れて半減の力を発動させ、シャルバから永続的に力を吸収することも考えたが、すぐに却下する。正体不明で得体の知れない力を取り込んだら自分もアルビオンもどんな悪影響を与えられるか分からない。
『賛成だ……あの力は不気味だ』
　アルビオンもヴァーリに同意する。シャルバの言う『あの御方』が与えた力にアルビオンは強い拒否感を覚えていた。まるで異物でも見ているかのような感覚。あの力は何かが違っているように思えてならない。
「――色々と考えることはあるが、後回しだ。先ずはシャルバを叩きのめす。その後にシャルバからじっくりと話を聞こう」
　何ともシンプルな答えを出すヴァーリ。しかし、この場に於いては最適と言える。
『そうだな。そうするとしよう』
　今覚えている感覚をひとまず忘れ、ヴァーリの言う通りシャルバを倒すことのみに集中する。

追い掛けてくる黒蠅に対し、ヴァーリが先程のように半減させて存在を消滅しようと構える。すると、今まで突っ込んでくることしかしなかった黒蠅らに変化が起こる。

黒蠅らは真上に向かって飛んで行き、一定の高さまで上昇すると広がり始める。黒雲のようになるとその中で互いに擦り合わせるように動き出す。

不可解な動きにヴァーリが訝しんだ瞬間、黒蠅らの中心が一瞬光ったように見えたかと思えば轟音と共に衝撃がヴァーリを貫いた。

ヴァーリの体は跳ね、光翼が消えて落下していく。このまま頭から地面に落ちるかと思われたとき――

『ヴァーリ！』

――アルビオンの声によりヴァーリは消えた光翼を再展開することによって上昇する。

「驚いた……雷か？」

黒蠅らが起こしたのは間違いなく雷であった。動き回っていたのは力を充填させる為のものであり、まさか雷を生み出すことが出来ると思っていなかったヴァーリは落雷を受けてしまった。

流石のヴァーリも初見で雷を回避することは難しい。しかも、かなりの威力もあり、雷撃を受けた『白龍皇の鎧』は短時間だが不具合が発生し、光翼が収納されてしまった。

電流や衝撃は鎧に防がれ、中のヴァーリも無傷であるが何発も受ければ無傷では済まなくなる。
やはり、シャルバが近くにいることで黒蠅の質が上がっている。今までになかった攻撃をしてくるようになった。
シャルバは指揮者のように黒蠅の大群を動かして再び雷撃を放つ準備をしている。
充填が完了し、雷鳴が轟くと共に閃光が起こる。だが、光の後にヴァーリの姿が黒蠅らの前から消える。
「そう何度も貫わないさ」
一瞬にして接近していたヴァーリは半減の力を黒蠅の塊に直接叩き込む。球体に閉じ込められた黒蠅はすぐに繰り返される半減によって縮小。ヴァーリの掌の上で数万の蠅の集合体がビー玉程度の大きさにまで圧縮される。
ヴァーリが手を握り締め、開くと黒蠅の集合体は前のときと同様に原子レベルにまで縮小された後に消滅した。
初見では回避は難しいが、二度目ならば対処も出来る。他の相手ならまだしもヴァーリ相手に同じ手を続けて使うのは愚策。
ヴァーリがシャルバの攻撃を対処している中でジャアクフロストは黒蠅の追撃から逃げていた。

「ヒホ！」
背後からの危険を察知し、右へ移動するジャアクフロスト。そのすぐ後にジャアクフロストの隣を黒蠅が通過していく。
避けられた黒蠅らは反り返るようにして方向転換をし、今度は正面からジャアクフロストへ襲い掛かった。
「ヒッホッ！」
ジャアクフロストが両手を突き出すと地面から巨大な霜柱が発生。しかも、先端部分が鋭利になっており斜め上に伸びていくそれは黒蠅の群に突き刺さる――が、所詮は物理的な攻撃に過ぎないので群体である黒蠅らに効果はほぼ無かった。
だが、そんなことはジャアクフロストも分かっている。本当の狙いは攻撃ではない。
「間抜けホ！」
自らが作った霜柱の上に乗り、それを足場にして黒蠅の上を飛び越えていく。
着地したジャアクフロストはすぐに走り、黒蠅らから離れて行く。
してやったり――とは思っていなかった。寧ろ、今のジャアクフロストの胸中は悔しさで一杯である。
ヴァーリやオンギョウキのように黒蠅を確実に屠れる程の力はジャアクフロストには無い。氷や冷気を使って足止めが精々。呪殺も呪いの塊のような黒蠅に通じるとは

思えない。
「ヒホ!?」
別の黒蠅がジャアクフロストの進路上に壁のように立ち塞がる。反射的に急停止してしまったジャアクフロストだったが、すぐに自分が過ちを犯してしまったことに気付いた。
その場で立ち止まってしまったことで後方にいた黒蠅らが追い付く時間を与えてしまい、ジャアクフロストは四方を囲まれて逃げ道を防がれてしまう。
「来るなホ!」
ジャアクフロストは全方向を氷の壁で覆い、身を守る。しかし、これは一時しのぎにしか過ぎない。
黒蠅が氷の壁に張り付くと分厚い氷は見る見ると削られるように消滅させられていく。時間を稼ぐことは出来るが自らの逃げ道を塞いでしまい、身を守る筈の氷の壁はそのまま棺へ成ろうとしていた。
「ど、どうするホ?」
氷の削れる音を聞きながらジャアクフロストは焦る。普段の気性の荒さは潜まって、オドオドとした態度になっていた。
本音を言えばヴァーリに助けを求めたいが、彼のライバルを自称するプライドが邪魔

をして叫ぶに叫べない。そんな間にも黒蠅が眼前にまで来ている。
必死になって生きてきた自分がこんなところでこんな奴らに食われて死ぬのか、と人生の無情さを涙と共に噛み締めていたとき、ジャアクフロストの足元の影が波打つ。
氷の壁が突き破られ、中に黒蠅が殺到する。しかし、その中には餌食となる筈のジャアクフロストは居なかった。
そこから少し離れた場所にある影が波打つと中からオンギョウキが現れる。その腕にはジャアクフロストが抱えられていた。
「間一髪だったな」
自分も攻撃されていながらもジャアクフロストの危機に気付いたオンギョウキは、影を通じてジャアクフロストを救出していた。
助けられたジャアクフロストは、オンギョウキを見上げながら助かったことに安堵する表情を見せず悔しさで一杯の表情をしている。自力で脱出が出来なかった挙句に助け出されたことへの不甲斐なさがジャアクフロストのプライドを大きく傷付け、言葉を発することが出来ないぐらいに悔しがらせている。
礼の一つもないことをオンギョウキは特に気にすることなく黒蠅の動向を伺っている。その態度もまたジャアクフロストの悔しさが増す要因であった。
黒蠅は目標を見失い、氷の壁付近を飛び回っていた。だが、間もなくしてオンギョウ

キたちを発見する。一匹でも気付けば全体にその情報が共有される。群体でありながら個の特性も持っている。

黒蠅たちが群体を分け、数個の輪の形になる。輪は回転し出すと輪の中央から強烈な衝撃波が撃ち出された。

オンギョウキとジャアクフロストの視点からでは空間の歪みが迫って来ているような光景。当たれば良くて内部破壊、悪ければ木っ端微塵になる威力が秘められている。

オンギョウキはジャアクフロストを抱えて後ろへ飛ぶ。衝撃波が先程立っていた場所へ着弾した。大地は深く削られ、土煙が巻き起こされる。

舞い上がった土煙を突き破ってオンギョウキは走る。凄まじい速度が出ているが全く音がしない。

オンギョウキを狙って黒蠅たちは衝撃波を連射するが、どれもこれもオンギョウキの走った後に着弾しており、掠りもしない。

「不甲斐ない……！」

命中率の低さに憤慨したシャルバが指揮者のように指を振るう。すると、黒蠅の輪はオンギョウキの動きを先読みするかのように動き、すぐには発射せずに溜める。

「そこだ！」

シャルバが指を振り下ろすと撃ち出される衝撃波。それは走るオンギョウキの衣服

を僅かに掠めた。
今まで自動的に動かしていた黒蠅をシャルバが直々に操作することで攻撃の精度が一気に上がる。威力や新たな技の追加だけではなく、自動手動の切り替えにより黒蠅の攻撃手段がますます増す。
一度目で把握したシャルバは、完璧な狙いを定めて二発目を発射。シャルバが思い描いた通りの軌道を描いた衝撃波は、交差するようにオンギョウキとジャアクフロストを纏めて粉砕する。
「他愛もない……」
当然の結果という態度だが、その口元は吊り上がって笑みを浮かべていた。すると、頭上から拍手が聞こえて来る。
「お見事」
拍手を鳴らしていたのはヴァーリ。いつの間にか空中に黒蠅を全て蹴散らしていた。
「今更媚にでも来たか？」
「うん？　誰が誰に媚に来たんだ？」
ヴァーリはわざとらしく首を傾げる。その反応はシャルバを苛立たせる。
「私の話を蹴った時点で遅い。今のがお前の未来だ」
その言葉にヴァーリは声を押し殺して笑う。

「アルビオン。姿は変わってもシャルバ・ベルゼブブ自身は何も変わっていないな」
『確かに。それだけ目があっても節穴だ』
　馬鹿にした発言に怒りが湧くが、すぐにそれを冷ますような言葉を掛けられる。
「俺が拍手を送ったのはお前ではない――彼にだ」
　ヴァーリが視線を横へ向けるので、シャルバもそちらを見る。倒した筈のオンギョウキがジャアクフロストを抱えて立っている。
「なっ!?」
「当たったが大外れだったな」
　ヴァーリが皮肉を込めて言う。土煙に入った時点でオンギョウキは分身を入れ替わっていた。シャルバはそれを気付かずに執拗に攻撃をしていたのだ。
「私を虚仮にするか……!」
「別に馬鹿にはしていないさ。そんなの……可哀想だろ?」
　シャルバの複眼が輝き、翅が大きく震える。シャルバの中の憎悪に強く反応していた。
　シャルバの憎悪は彼の糧となり、翅の紋様から新たな黒蠅を生み出す。憎しみの力が強ければ強い程黒蠅の数は増えていく。
　生み出された黒蠅。生き残っている黒蠅が合流し、シャルバの頭上へと飛んで行く。

大量の黒蠅は三つの塊に分かれたかと思えば、塊の中心に魔力を集め始める。
小さな球体のような魔力がくっつき始め、大きくなり、また別の球体と合体して大きくなる。それを繰り返すことで膨大な魔力となっていく。
「これはまた……」
『ちっ。過ぎた力を与えられたものだ』
ヴァーリとアルビオンは白色と化していく魔力の輝きを見て、表情を険しくする。鎧を纏っている状態でも直撃すれば命が危ういと分かる程の力が集まっていた。
今の状態では相殺することは難しい。それこそ『覇龍』のロンギヌススマッシャーを放たねばならないぐらいである。
「全てよ塵と化せっ！」
周囲一帯を消滅させることに躊躇のないシャルバは集めた魔力を降り注がせようとする。
ヴァーリは限定的な『覇龍』を行い、今にも落ちて来そうな魔力の塊をロンギヌススマッシャーで貫こうとする。
解除の詠唱を始めようしたとき、未知なる気配を感じてその口を閉じた。
その瞬間、空を白銀色の光が一条流れて行く。それは魔力の塊を貫き、落ちる前に誘爆させてしまう。

盛大な光により空は白色に染まり、彼方まで爆音が響き渡り、衝撃が地面に達して大地を震わす。しかし、高度で爆発したのでヴァーリたちには一切被害は無い。

「何だと……！」

突然のことに驚きながら空を見上げるシャルバ。すると、シャルバは体を一瞬震わす。

「な、に……」

シャルバの胴体には子供が通れそうな程の風穴が開けられていた。

それを為したのはシャルバの背後に突き刺さった一本の槍。飾り気の無い穂先から柄頭まで白銀色であった。

その槍が地面から引き抜かれる。いつの間に現れたのかこの場に居る者たちですら正確には分からない。

槍の主は白銀の鎧を纏い、艶やかな長髪を垂らした美丈夫。

「な、何者だ……!?」

シャルバは後ろを振り返りながら悪鬼の形相で問う。美丈夫は冷めた横目でシャルバを見ていた。

「私の名など何の意味も無い」

耳朶が蕩けるような男らしい声であった。

「我が槍で引導を渡してくれる。シャルバ・ベルゼブブ」

歴史から名を消された英雄が、この戦場にて再び槍を振るう。

魔槍、威圧

白銀の青年の登場にシャルバは驚きと困惑を覚えていた。いつ現れたのか、いつ攻撃されたのか分からない。まるで幻覚でも見せられているような気分であったが、風が通る度に痛む胴体の風穴が紛れもない現実であることを突き付けて来る。

魔王を超える程の力を手にした自分を上回っているかもしれない存在がすぐ傍に居る。その可能性をシャルバは許すことが出来ない。

「貴様ぁぁぁ！」

シャルバの翅が震え、不可視の衝撃がシャルバを中心に全方向へ放たれる。衝撃波により大地は砕け、細かな砂と化し乾いた大地が砂漠となっていく。

大地が砂漠と化していく現象はヴァーリやオンギョウキたちにも届こうとしていたが、衝撃波の範囲が可視化されているので避けるのは簡単であり、ヴァーリたちはすぐに範囲外まで離脱する。

砂漠化した大地の中心でシャルバは荒い息を吐きながら立っていた。向こう側が見える程の重傷を負った状態で翅を使用したせいかかなり消耗している。

「ぬ、ぐぅぅぅ！」

シャルバは両手を広げながら上半身を反らし、傷を空へと向ける。すると、空中を飛び回っていた黒蠅らがシャルバの傷に殺到する。

「う、ぐ、おお……」

黒蠅は傷を通り抜けることはせず、その中で留まる。大量の黒蠅が何処へ収まっているのか、入った黒蠅は一匹たりとも外へ出てくることは無かった。

千、もしくは万の黒蠅が全て傷の中へと入るとシャルバは上半身を元の位置へと戻す。そこにあった筈の大穴は消え、傷一つ見当たらない綺麗な肌に戻っていた。

黒蠅はシャルバが生み出したもの。シャルバにとって武器であると同時に体の一部に等しい。故に今のようにシャルバの血肉へと変えて傷を癒すことも出来る。

「ふう……」

思わぬ消耗を強いられたシャルバは、原因となった白銀の青年を探す。赤い複眼はすぐに白銀の青年を見つけた。当然のことのように青年は無傷であり、これ見よがしに大地と砂漠の境目に立っている。シャルバの攻撃など既に見切ったと言わんばかりに。

不意打ちに続いて神経を逆撫でる青年の行動にシャルバの複眼が怒りでますます輝く。

「そこかぁぁぁ！」

翅から新たに産み落とされる黒蠅が怒涛の如く青年へと押し寄せる。青年はそれを

一瞥すると持っていた槍の穂先で自分を中心にした円を描き、地面を軽く突く。そして、その場から動こうとしない。

諦観とは真逆の余裕の態度。シャルバの怒りは加速し、ヴァーリたちは青年の実力を測るのを兼ねて何をするのか期待して見に徹する。

円の溝が淡い光で満たされる。そこに黒蠅が殺到――するかと思えば、何故か二つに分かれ青年を避けて左右を通り過ぎていく。

「何だと……!?」

青年が自らに施したのは敵を避けさせる呪い。対象者の力を要にして対象者よりも弱い敵を近付けなくさせるというもの。本来ならば余計な戦いを避ける為に使用するものだが、青年ぐらいの実力者がこの呪いを使えば、先程の黒蠅のように本能的に青年を避けて動いてしまう。

黒蠅の大群の中、青年はその場から一歩も動かない。黒蠅の方が青年を勝手に避けていく光景は、大海を割った預言者のようであった。

数秒後、青年は黒蠅を無傷で微動だにしないまま切り抜けてしまう。

「ははっ。大したものだ!」

ヴァーリは掛け値なしに白銀の青年を称賛する。強くなったシャルバには多少興味を惹かれたが、今の彼の興味は突然乱入してきた白銀の青年の方にしか向けられていな

い。

そうなると青年が何処から現れたのか気になってくる。周囲はバラキエルの結界によって封じられている。シャルバのように結界に穴を開けて外から入って来たというのなら話はそこまでだが、バラキエルからはシャルバ以外の侵入者の連絡は無い。

そして、ヴァーリは青年に対して気になることがある。ヴァーリは青年に既視感を覚えていた。初対面の筈なのに会ったことがあるように思えてくる。これ程の実力者ならば忘れる筈が無い。

この既視感が何なのかを確かめる為にヴァーリは青年を注意深く観察し続ける。

「虚仮脅しを……！」

シャルバは業を煮やして黒蠅を自動から手動へと切り替える。今までは黒蠅らが最初から仕込まれてある動作、所謂本能的な動きをさせていたがこれにより黒蠅はシャルバの完全な支配下へと置かれた。放っておいても勝手に攻撃する自動のときと比べて全ての黒蠅を意識して動かすので精神力や集中力を必要とする。

「喰らい尽くせっ！」

黒蠅らは空中で反転して青年を消し尽そうとする。今度は青年を避けようとしない。シャルバの意識が投影されているので青年の呪いの対象外となっているからだ。

青年は槍を持ち上げ、逆手に持ち替えると水平のまま後ろへ引いて投擲の構えをと

る。構えから力を引き絞るまでの間隔は短く、傍から見ている者からすれば構えた瞬間に投げ放って見えた。

白銀の槍が空中に線を描きながら飛ぶ。次の瞬間、槍が分裂した。

数え切れない程に細かく分けられ、鏃のような形となると黒蠅の群に突入。消滅する力を持っている筈の黒蠅を次々と射抜く。

「あれは神器か？　アルビオン」

『近い力は感じる』

鏃となって敵を貫く槍を見て、ヴァーリは神器かと疑うがアルビオンからの返答は曖昧なもの。聖書の神が与えた神器ではなく、別の力ある存在が創り出した物である可能性もある。ジークフリートの持つ魔剣のような武器なのかもしれない。

黒蠅は数で圧倒しようとする。それに対して青年が力を送れば鏃は数を増し、黒蠅と同じく数で対抗。結果として黒蠅の数がどんどん減っていく。

「くっ……！」

このままでは殲滅させられると思ったシャルバは、黒蠅を退かせた。

黒蠅が退くと鏃は一箇所に集まって槍へと戻り、その槍も飛んで青年の手の中へと戻っていく。

青年の姿が消える。凄まじい踏み込みにより瞬間移動に等しい速度でシャルバの前

にまで移動していた。
突然目の前に現れた青年に驚くシャルバ。すかさず突き出された槍がシャルバの心臓を貫く。
シャルバは呻くが、今の彼は心臓を貫かれた程度では致命傷にならない。退かせた黒蠅がシャルバの許へ集い、触手のようになって青年を消滅させようとする。
青年の黒髪が揺れたかと思えば旋風が吹き荒れ、黒蠅たちの動きを風によってかき乱す。これにより黒蠅らは青年に接触することが出来ない。
貫いていた槍を引き抜いたかと思えば、シャルバの体に新たな大穴が幾つも開く。まるで結果のみを残すような過程の見えない刺突であった。
「ごふっ……」
シャルバの口から大量の血が吐き出される。辛うじて体が繋がっているような状態となれば無理もないこと。
青年は再び突きを繰り出そうとして止まる。シャルバの足元に広がる吐血の跡。鮮やかな赤であったそれが一瞬にしてどす黒く染まると、そこから黒蠅が湧き出す。
血肉と化すことも出来るのなら逆に血肉から生み出すことも出来る。シャルバの血から生まれた黒蠅が青年を取り囲むようにして襲い掛かった。
が、その直後に不可思議な現象が起こる。

青年に襲い掛かった黒蠅が縮小し始め、青年に届く前に原子サイズにまで縮まって消えてしまう。この現象はシャルバにも覚えがあった。
「ヴァーリィィィ！」
文字通り血を吐きながら怨嗟を込めてその名を叫ぶ。
「何か気に障ったかな？」
しれっとした態度をとるヴァーリ。半減の力で青年を守ったのは誰が見ても明白であった。
一瞬にして身を守る術を失ったシャルバに青年は槍を一閃させる。横薙ぎに払われた一撃によりシャルバの上半身と下半身は断たれ、上半身が地面へと落ちていく。
そのとき、断面から大量の血が噴き出す。明らかに体格にあっていない程の量の血は、生物のように伸びて上半身と下半身を繋ぎ、一気に引き寄せる。
断面同士が接着すると瞬く間に繋ぎ合わされ、元の状態に戻った。その再生能力はヴァーリたちからしても目を見張るものであり、当の本人も自分の再生能力の高さに驚いている始末であった。
「ふ、ははは、ははははっ！　これこそベルゼブブの名に相応しい！」
古来より蠅は死と再生の象徴とされていた。死骸に集り、卵を産み付け、卵は蛆となって死骸を喰らい尽し、蛆は羽化して蠅となって飛び立つ。古き人々はこれに死と再

生を見出した。
シャルバもまたそれを知っているが、シャルバにはそれを為す能力は無かった。だが、翅を頂戴したことにより自らがそれを体現する。血統に誇りを持つシャルバにとって祖の伝説を再現する、これ以上喜ばしく誇らしいことは無い。
「偉大なる祖ベルゼブブよ！　貴方の全ては私が引き継ごう！　今ここに宣言する！　私こそが真のベルゼブブだ！」
歓喜が最大まで達したときシャルバの体に異変が生じる。背中の一部が蠢いたかと思えば肉を突き破り、翅の下にもう一枚の翅が生えた。これにより前翅、後翅の二枚となる。
「ははははははっ！」
興奮しながら笑うシャルバ。二枚の翅が震えると局地的な竜巻が生じ、全てを吹き飛ばそうとする。
「させん！」
オンギョウキは四体に分身し、口から突風を吹いてシャルバの起こした竜巻にぶつける。
「ふはははははは！　まるでそよ風だ！」
興奮し切っているシャルバが叫ぶと風が勢いを増す。竜巻と台風が一箇所に集めら

れたかのような暴風が起こっていた。
「色々と騒々しいな」
建物ですら吹き飛ばす勢いの風の中でヴァーリは両足に力を込め、意地でもその場から動かない。オンギョウキもジャアクフロストが飛ばされないように注意しながら自らも風を起こして暴風の勢いを殺していた。
そして、シャルバに最も近い位置に立っている青年は魔術によって周囲の風を操り、飛ばされないようにしている。しかし、完全には殺し切れておらず鎧の中に収まっていた長髪が風によって引っ張り出され、逆立つように靡く。
表情を険しくする青年。険しい理由はシャルバが起こす風のせいではない。戦い始めてから青年の頭の中では雑音のようにある光景がずっと流れていた。
為す術も無く倒れ伏している青年にそれは優しさすら感じさせる口調――
これは――想外だった。君の記憶は完全には――
だが、無謀だった。――に挑むとは。
さて、どうするべきか――するのは惜しい。
残念だ。この世界――から英雄が一人消えるのは。
――年後にまた会おう。さようなら、クランの猛犬。
そう言ったのは子供だったか、青年だったか、老人だったか、女であったかどうして

も思い出せない。思い出すのは金色の輝き。闇の中で妖しい輝きを放っている光景。
ただ言えるのは青年は記憶を奪われ、名を奪われ、過去を奪われたのだ。
再び記憶が繰り返されるようとするが、耳に入ってくる風の音が青年の意識を現実へと向けさせる。非常に不快な気配が混じった風だが、穴だらけの記憶を繰り返し思い出すよりかはましだった。
青年はシャルバを射抜くように睨むと、その場でしゃがみ込み両足に力を溜め込む。
「はっ!」
青年はその場で跳躍。すると、風に乗り青年は高く、速く上昇していく。不規則な軌道を描く筈の風も青年の力の前では自らを押し上げる為の力へと変わる。
青年は左手を添え、右腕を限界まで後方へ引く。シャルバに狙いを定めた投擲の構え。青年の意志に呼応し、槍が白色のオーラに包まれていく。
シャルバは穂先を向けられた瞬間、興奮していた頭が一気に冷えていくのが分かった。青年が今から最大の一撃を放とうとしているのを槍から発せられるオーラから察したのだ。
シャルバという悪魔は傲慢であり、不寛容である。しかし、祖であるベルゼブブに対する敬意は本物であり、自らに流れる血に対する彼のプライドの高さと執着に比肩するものは少ない。

故に彼は絶対に負けられない。与えられた翅に誓ってベルゼブブの名に泥を塗ることは許されない。

シャルバは片翅を羽ばたかせて飛翔する。シャルバが動くと暴風も彼へと付いて行く。空中で対峙する両者。大気が荒れ狂う。

青年は槍を投げ放つ直前、限界寸前まで脱力させていた腕に一気に力を流し込む。ゼロから百までの振り幅を瞬時に振り切ることで放たれる最大最速の投擲。

青年が槍を放った瞬間、反動で肩鎧が千切れ飛んだ。

彗星。投擲された槍を表現するのならまさにそれであった。宇宙では地上を駆け抜ける白い尾を引く一条の光。音の壁を軽々と破り、荒れ狂っていた大気が通過の際の衝撃波で消し飛ばされる。

魔術も魔力もこの投擲を防ぐのは無理だと瞬時に判断出来た。シャルバに残された手段は一つしかない。

「お、おおおおっ！」

翅を折り曲げ、槍を防ぐ為の盾とする。今シャルバが最も信じられるのはこの翅のみ。

槍と翅が衝突した瞬間、衝撃の余波が全方位へと広がる。

空に掛かっていた雲は一瞬にして千切れ飛び、大地は衝撃波によって捲り上げられて

いく。ヴァーリ、オンギョウキ、ジャアクフロストは壁のように迫り来る衝撃波から身を守る。

空中では青年の槍とシャルバの翅が拮抗している。

透けた薄羽であるシャルバの翅だが、その内に秘められた力は膨大なものであり、彗星の衝突に等しい青年の槍を通さない。

青年の槍もまたシャルバの翅からこの世の全ての人々を呪い尽しても余りある呪詛が放たれているが、呪詛によって朽ちることなく翅ごとシャルバを射抜く為に勢いそのままに前進し続けている。

規格外同士の力が反発し続けるせいでこの地一帯を囲っている結界は完全に機能しなくなり維持も困難になって破壊されてしまった。

ほぼ無人の荒野なので被害は少ないが、このまま互角の状態が続けば影響は人々の住む場所に及ぶだけでなくこの星そのものに悪影響を及ぼしかねない。

「私が身に宿る血をっ！　ベルゼブブを舐めるなっ！」

互角という状況を許せないと叫ぶシャルバ。逸脱したプライドの高さが僅かでも誇りを穢すようなことを受け入れることが出来ない。狭量とも呼べる寛容の無さが何度目か分からない感情の爆発をシャルバの内で起こさせた。

それが後押しとなり、均衡が崩れる。

シャルバの翅は細かく振動し、槍の突進力を削る。やがて、槍の勢いが失われていく。シャルバの翅の守りが槍の攻撃を上回った瞬間――

「はあっ！」

――折り曲げられていた翅が大きく開かれ、槍を弾き飛ばした。

勝った、とシャルバは内心歓喜する。驚愕に値する青年の投擲であったが、結果を見ればシャルバのベルゼブブとしての力と執念の方が勝った。

（これが私の力だ！　魔王ベルゼブブの力だ！）

青年の悔しがる顔を一目見ようと視線をそちらへ向ける。そこに青年の姿は無い。

何処へ行ったのかと思ったとき、シャルバは背筋に悪寒が走るのを感じ、本能に従い弾かれた槍の行方を追う。

地上目掛けて縦に回転しながら円を描いていく槍。その飛んで行く先に青年は待ち構えていた。まるでこうなることを予見していたかのように。

青年の先読みにシャルバは一瞬驚くが、すぐに気を取り直す。青年の最強の一撃は防いだ。これ以上何をしようとしても恐れるに足りない――そう考えていた。

青年は飛んで来る愛槍に向けて手を伸ばす――ことはせず、徐に右足を大きく後ろへ引っ張る。

この世界では失伝された話だが、それはある槍の名であった。投げ放てば無数の鏃と

なり敵を貫く。
「我が敵を貫け――」
それはある特殊な投擲の名という話もあった。手ではなく足を用いた独特な投擲。
ならば武と技が揃ったこれこそが真の――
「――ゲイボルグ！」
返ってきたゲイボルグの柄頭を足の甲で受け、振り抜き、蹴り飛ばす。あらゆるものを置き去りとする神速の投擲が放たれた。
槍を跳ね返した直後のシャルバにもう一度防ぐ余裕など無い。仮にあったとしても今の彼は下から飛んできたゲイボルグに反応出来なかった。
シャルバの鎖骨辺りにゲイボルグの穂先が刺さる。命中した箇所の周囲ごと消し飛ばして貫く。シャルバが当たったと気付いたときには肩から胴体に掛けて大きく裂け、腹の肉と皮により半身が辛うじて繋がっている状態となっていた。
「あ、あああああああっ！」
流石のシャルバも激痛により絶叫を上げてしまう。シャルバの叫びで裂けた側の腕がぶらぶらと揺れる。
青年が頭上に手を掲げると飛んで行ったゲイボルグが戻って来る。シャルバに致命傷を与えた青年だが、その表情は険しい。

「外した……」
不満を小声で洩らす。本当ならばシャルバの正面を狙ったつもりだったが、少しずれて命中した。半身を裂くのではなく胴体を消し飛ばすつもりだった青年からすれば不甲斐ない結果である。
腕が鈍ったのか、或いはシャルバ本人も気付かれない内に動いたのか。どちらにせよ青年はシャルバを殺すことに失敗した。
シャルバは呻く。半ば意識が飛んでいる状態であり、見た目も合わさって生死の境を彷徨っている様子であった。
だが、シャルバの意思など無視するかのように傷の断面から血が噴き出し、再度断面を繋ぎ合わせようとする。しかし、噴き出す血の色は黒く、血と断面が繋がれても中々くっつこうとはしない。再生の遅さが彼が負っている傷の深さを表している。
「わ、私は……！」
薄れていく意識が戻り始める。シャルバの執念が負けを認めさせない。
「私はぁぁぁ！」
執念に押されて遅れていた再生が早まる。裂けていた半身は繋がり、流血が止まる。
再びやり直しかと思われた。
そのときであった。

「がっ!?」
シャルバの複眼が突如として爆ぜた。複眼は完全に潰され、顔に大穴が開く。
「が、ぐ、ああ……」
繋がっていたと思われた傷が再び開き、半身が血の糸を伸ばしながら離れていく。
重傷の上に重傷が重ねられ、遂にシャルバにも限界が来てしまった。
「忘れ、んぞ……！　この痛み、憎しみ、恨み、屈辱を……！」
ありったけの怨嗟を残すとシャルバは転送用の魔法陣を発動させ、何処かへ消えてしまった。
シャルバが消えると青年は溜息を吐く。すると、青年の体が光に包まれた。光が消えるとそこにはセタンタが立っている。
青年の正体はセタンタだった。その事実にヴァーリたちは――特に驚かなかった。ヴァーリは青年の戦い方に何となくだがセタンタの影を感じていた。オンギョウキの方は姿形が変わるのは特に珍しいことだと思っておらず、寧ろその正体に納得すらしている。
セタンタはヴァーリたちの視線に気付くと口元に巻いてあるマフラーを正す。
「聞きたいことがあればお答えしますよ?」
若干の諦観が混ざったような口調であった。

色々とトラブルが生じたが目的の『禍の団』討伐は完了した。出来ることなら情報収集の為に何人か捕まえておきたかったが、シャルバのせいで生存者は絶望的と思われる。

戦闘終了により若干弛緩した空気の中、ふとこの場に居る者たちは思った。最後にシャルバの複眼を潰した攻撃、あれは誰が放ったものだったのか、と。

その答えを知る者は、そこから離れた場所に居る。

「今、何かしたね？」

遠くを見つめている彼に鳶雄は聞いた。遠くを眺め出した直後に戦場の空気が変わったのでそう思ってしまう。

「目が合ったので」

シンは一言で答えた。

◇

レーティングゲーム会場の空気はサイラオーグの勝利によって一変していた。サイラオーグの圧倒的な戦いっぷりに誰もが魅了され、同時に彼とまだ戦わなければならないリアスたちに同情の視線が送られる。

バトルフィールドから陣地に戻るサイラオーグであったが、勝利の余韻に浸っている様子は皆無であった。寧ろ、今の空気を好ましく思っていない様子すらある。

ゲーム内容としてはサイラオーグの圧倒だったが、決して木場とゼノヴィアも弱かった訳では無い。サイラオーグからすれば敬意に持つに相応しい相手であった。だが、会場の拍手と称賛はサイラオーグにしか送られない。不本意ながらもそれが現実であった。

分かっているが勝負の世界とは非情なもの。観客の目には勝者しか映らない。

サイラオーグは陣地で待つ眷属たちを見る。皆が尊敬の眼差しを以ってサイラオーグを迎えてくれた。

サイラオーグの理想としては自分だけでなく眷属たちもまた評価されることが一番であったが、今のような戦いをすれば良くも悪くもサイラオーグだけが目立ってしまう。サイラオーグだけのワンマンチームと思われるのは眷属を大事にしているサイラオーグとしても嬉しくはない。サイラオーグの眷属たちは断絶した家の末裔など複雑な事情を持つ者が多い。自分を支えてくれる者たちを出来ることなら引っ張り上げたいと思っている。

しかし、一度戦いとなると手を抜くことも出来ない。それがサイラオーグが目立つことに繋がってしまい、そのことにジレンマを覚えてしまう。

眷属たちは寧ろそのことを望んでいることは言葉にせずとも態度から伝わってくる。
先ずはサイラオーグが出世すること。それが眷属たちの共通した望みであり、その為には日陰者になる覚悟もあった。
様々な想いが重圧のようにサイラオーグの肩へ乗っかっていくが、サイラオーグはそれを苦としない。逆にやる気が出て来るというもの。誰かの期待はサイラオーグの強さへと変わる。
（お前たちはどうだ？　リアス、赤龍帝？）
姿が見えないリアスたちの陣地へサイラオーグが問うような眼差しを向ける。
リアスたちの陣地は重苦しい沈黙に満ちていた。誇るべき仲間が一方的に、そして一矢報いることも出来ずに敗北したことが理由の一つではあった。
だが、決してリアスたちが心折れている訳では無い。あれだけ必死になって戦った木場とゼノヴィアに対して憐憫を向けるのは侮辱に等しい。
リアスはこの戦いが一気に苦しくなったと冷静に考えている自分に驚く。情や愛が薄れた訳では無い。毅然とし続けるのはリアスだけでなく彼女の眷属たちも望んでいる。それを叶えるようにリアスは強く在り続けようとした為である。
実際にリアスの真剣な態度は伝播しており、泣きそうな表情をしていたアーシアもリアスの態度を見て涙を懸命に堪えている。それが？せ我慢であったとしてもそう続け

ることが重要であった。
一誠は目を瞑ったまま黙り続けていた。瞼の裏に浮かぶのはゲームで敗北していった仲間たちの姿。皆、必死になって戦い、そして敗れた。残された一誠は敗れた者たちの想いを背負って戦う義務がある。
やがて、実況がダイスを振ることを促す。
リアスとサイラオーグが台の上でダイスを転がす。出た目は9。
サイラオーグ陣営は恐らくは『女王』を出すとリアスは考えていた。『兵士』の可能性も無いことはないが、今までのレーティングゲームの傾向からしてサイラオーグは『兵士』を最後の最後まで温存している。そうなると多少だが消耗をしている『女王』から先に出す確率の方が高い。
一方でリアス側の選択は一択しかない。リアスが自分の陣地に目を向けたとき、彼女は息を呑んだ。
一誠が今まで見たことがないような無表情で、だが眼光だけは圧倒するように鋭い。普段は一誠の傍に居るアーシアも一誠の雰囲気に気圧されて無意識に距離を置いてしまっている。
「……イッセー、頼むわ」
一誠は無言で頷き、前へ出る。

魔法陣まで足を運び、転移する間際二人に言葉を残す。
「部長、アーシア、行ってきます」
感情豊かな一誠とは思えない程に無感情な声。思わず身震いしてしまい、行ってらっしゃいの言葉を送ることも出来なかった。

◇

転移されたバトルフィールドは石造りのコロシアムであった。
一誠の前に対戦相手であるサイラオーグの『女王』が現れる。
金髪のポニーテールを揺らすのはクイーシャ・アバドン。七十二柱に属さない『番外の悪魔（エキストラ・デーモン）』と呼ばれるアバドン家出身である。レーティングゲームの現役トップランカーの三位もアバドン家の出であり強力な悪魔の一族であることが証明されている。事実、クイーシャは朱乃に完勝していた。
悪魔の特性として『穴』という文字通り空間に円形の穴を開ける能力を持ち、それによってあらゆるものを吸収、逆に吸い込んだものを放つことが出来る。クイーシャはこれで朱乃の雷光を吸い込み、吸い込んだ雷光を放つカウンターで勝利を収めた。
相手の攻撃を誘ってのカウンター。クイーシャが狙うのはそれしかない。

『第七試合、開始して下さい』
ゲーム開始と同時にクイーシャは告げる。
「赤龍帝、禁手となりなさい。『女王』として貴方の本気を望みます」
わざわざ禁手の為の時間を与えるクイーシャ。この時点でクイーシャは自ら捨て駒になる覚悟を決めているのが分かる。目的は少しでも一誠の体力を削ること。そして、まだ見せていない能力があればそれを引き出すこと。木場とゼノヴィアと同じ覚悟であった。
一誠は一瞬だけ目を丸くし、眉間に皺を寄せ、若干俯きながら禁手のカウントダウンを始める。
少し経ってカウントダウンが済み、一誠は鎧を纏った。
「一瞬で終わらせます……出来ることならリタイヤして下さい」
「言ってくれるわね。そう簡単にリタイヤするとは思わないで」
「――警告はしました」
『赤龍帝の鎧』から赤い光が発せられる。それを見たクイーシャは『穴』を展開しようとして――赤い閃光に目が眩む。
「――え？」
肩に掛かる硬い感触。既に一誠はクイーシャの眼前に立っており、彼女が逃げられな

いように肩を掴んでいた。
赤光を放つ手がクイーシャの前で握り拳を作る。放たれていた光が拳の中に閉ざされ、漏れ出る光は臨界寸前のように見えた。
一誠の拳が突き出される同時に赤いオーラが放たれ、爆音と共に拳の先にあるものを全て粉砕していく。最後にはバトルフィールドを覆う結界に命中し、結界が壊れそうな程揺らす。
全ては一瞬のことであり観客たちは呆けてしまう。先程まであったサイラオーグ一色の空気は一誠の拳一つで塗り替えられてしまった。
『サイラオーグ・バアル選手の『女王』、リタイヤです』
静まり返った空気の中で審判が一誠の勝利を告げる。
すると、モニターにサイラオーグの姿が映し出される。傍らには無傷のクイーシャが立っているが、顔は蒼褪めており、体も震えサイラオーグが支えていないと立っていられない状態になっている。
一誠の拳が放たれる寸前に危険と判断したサイラオーグによって強制的にリタイヤさせられていたのだ。
モニター越しに一誠とサイラオーグの目が合う。
『あのままではクイーシャが殺されると思い、リタイヤさせた。赤龍帝、クイーシャを殺

すつもりだったのか？』
「まさか」
兜を収納し、素顔を晒す。一誠は相変わらずの無表情である。
「サイラオーグさんがきっとリタイヤさせると信じていました」
『……もし、俺がしなかったら――』
「一試合目を見たら、サイラオーグさんが眷属を大事にしているのは分かりましたから」
『むぅ……』
そう指摘されるとサイラオーグも返す言葉が思いつかない。
『つまり俺はまんまとお前に動かされた訳だな。その殺気と迫力によって』
一拍間を置いた後、サイラオーグは声を上げて笑い出す。
『はっはっはっはっ！　流石だっ！　バトルフィールドに降り立ったお前を見たとき、クイーシャが殺されるとしか思えなかったぞ！　その冷静さに感服した！』
「俺が何て全然。もっとクールな奴を知っていますし」
一誠は謙遜する。サイラオーグは冷静と評したが、一誠自身は全くそう思っていない。今でもマグマのような感情が体の裡で暴れ続けている。
「……こんなことを言ったら失礼ですけど、『女王』相手じゃ俺が全力でぶつかるには足りないんです」

託されたもの。燃え上がる感情。『女王』相手にそれを一欠けらでも向けるのは勿体無い。それを向けるに相応しい相手は――一誠の目にはサイラオーグしか映っていなかった。

「俺の全部をぶつけられる相手は貴方しかいないんです。サイラオーグさん」

獅子、戦斧

一誠から叩き付けられた挑戦状にサイラオーグは心底嬉しそうに笑う。
『くくく……赤龍帝は男の口説き方も心得ているな……！　そう言われて熱くならない男は居らんぞ……！』
すると、サイラオーグの視線が一誠から離れ、観客、実況席、自分を見るあらゆる者たちの方へ向けられる。
『この会場に居る者たちに問いたい！　皆は観たくはないだろうか!?　赤龍帝と俺が拳を交える瞬間を！』
会場は一瞬静まり返った後、すぐにざわめき出す。若干の戸惑いと期待が込められた肯定的なざわめきであった。
『俺の本音を言わせてもらうと俺は戦いたい！　そのときが来るのを夢に見ていたからだ！　だからこそ委員会に提案する！　最早戦いの流れは分かり切っている！　その上でルールに従い凡庸な戦いを見せるのは愚の骨頂！　次の試合で全て決着をつけよう！　俺の全部とあちらの全部をぶつけ合う団体戦を希望する！』
サイラオーグの提案に観客は凄まじい歓声が上がった。サイラオーグの熱に中てら

れ、観客の期待が爆発したかのようであった。
『おおっと！　ここでサイラオーグ選手からのまさかの提案！　全てをベットさせた団体戦とは!?』
　実況席のディハウザーはゲームが始まってから一度たりとも変わっていない笑みのまま言う。
『確かにこの後の流れではバアルの『兵士』、グレモリーの『僧侶』の戦いの後、サイラオーグ選手と赤龍帝の戦いとなるでしょう。それが事実上の決定戦となるでしょうが、一戦を挟むのは不粋と判断したのでしょうね』
　仮にルール通りの戦いになったとしてもリアスはまず間違いなくアーシアをリタイヤさせる。目によってはリアスが出るという選択肢もあるが、リアスが戦いに出るのは考え難い。慎重だからというよりも、これまで眷属たちはリアスを勝たせる為に我が身を犠牲にしてきた。ここでリアスが戦いの場に出るということはそれを無下にするに等しい。
　アザゼルは腕を組みながら自らの意見を述べる。
『ゲームの熱を維持するのならそれしかないよなぁ。ましてや――』
　バアル！　バアル！　バアル！　バアル！　バアル！
　グレモリー！　グレモリー！　グレモリー！　グレモリー！

会場全体で行われるコール。既に決まったかのような一体感であった。
『このテンションだ。委員会の上役がこの状態でルールをとるのは厳しいぜ。そうなるように仕向けたのなら、サイラオーグも中々食わせ者だな』
会場はリアスとサイラオーグの団体戦を求めている。これを却下すれば暴動が起こってもおかしくはない。
『これがプロのレーティングゲームならばサイラオーグ選手の提案は却下されたでしょうね。選手の意見でルールが変えられるようならばゲームにはならない。――ですが、このレーティングゲームはあくまでプロの形式でやるだけであって、プロのゲームではありません』
直接は言わないもののプロのレーティングゲームではないので多少の融通は利かせるべきでは、と暗に告げるディハウザー。ディハウザーのこの発言はサイラオーグの提案を後押しするようなもの。ディハウザー自身も団体戦が見たいのでは、とアザゼルは思った。
(まあ、俺も見たいしな)
アザゼルも同じ思いであったのでディハウザーの発言に乗っかる。
『確かにな。締めるべきところはきちんと締めるべきなのは当然だが、何事も厳粛にすべきっていうのもなぁ。多少のアドリブやサプライズがあってもいいんじゃねぇか?』

委員会がどのような話し合いをしているのかディハウザーもアザゼルも知らないが、二人のこの発言はサイラオーグへの追い風となる。現に二人の発言に同意した観客たちが二人を讃える熱い歓声を上げていた。

尋常じゃない熱気とテンションを維持し続けたまま数分の時が流れた。そして、委員会の決定が実況席へと伝えられる。内容を傍で聞いていたディハウザーとアザゼルはニヤリと笑った。

『――はい。そうですか。分かりました。……今、委員会から報告を受けました！　認めるそうです！　次の試合、事実上の決定戦となる団体戦です！　両陣営の残りメンバーの総力戦となります！』

会場が何度目か分からない興奮の最高潮を迎える。

『――だそうだ』

団体戦が認められたサイラオーグは歯を覗かせた笑みを一誠へと向ける。向けられた当人は間近で肉食獣に威嚇をされているような心境となるが、燃え上がっている一誠の闘争心は湧き上がった恐怖心を一瞬で燃やし尽くし、サイラオーグへ同質の笑みを返す。

『死んでも恨むなとは言わん。だが、覚悟だけはしてくれ。俺とお前が本気を出して戦えば死人が出てもおかしくない』

『最初から殺す気で行きます。じゃないと俺の拳は貴方には届かないし勝てない。リタイヤしていった仲間に顔向け出来ないような戦いはしませんよ』

見守っていたリアスとアーシアが疎外感を覚えてしまうぐらいに一誠とサイラオーグはお互いのことしか見ていない。戦い合う者同士だからこそ踏み込められる領域がそこにはあった。

思わず嫉妬を覚えそうになる。だが、どう足掻いてもリアスたちはそこへ入ることは出来ない。性差ではなく一誠とサイラオーグが共鳴し合っている者たちだからだ。

◇

団体戦が決まってから即ゲーム開始とはならなかった。バトルフィールドはすぐに用意されたが、それを囲う結界を強化する為の時間が必要となったからだ。本来のレーティングゲームならばそんな時間など発生しないが、サイラオーグは結界を貫いて会場の一部も破壊し、一誠は拳一つで結界を震わせた。この両者がぶつかったらどうなるか。委員会は最悪のケースを想定して念入りに術を施していた。

それが完了するまでの間、両陣営の最後のミーティングが行われる。

「……泣いても笑ってもこれが最後よ」

リアスは一誠とアーシアを見ながら言う。リタイヤによりすっかり広くなってしまった待機場にリアスの声は良く響いた。
「はい」
「は、はい！」
一誠は既に覚悟が決まった表情をしており、纏っている鎧も一誠の覚悟に反応してかいつもよりも鮮やかに見える。アーシアの方は緊張した面持ちであったが、それでも彼女なりの覚悟を決めていた。
「――正直、策らしい策は思い付かないわ。サイラオーグならどんな策も真っ向から捻じ伏せてくるでしょうから」
サイラオーグの強さは嫌という程見せつけられた。策を弄して勝てるレベルの相手では無い。
「今の段階でサイラオーグに勝てる可能性があるのは……イッセー、貴方だけよ」
「はい。そのつもりです」
異常な破壊力の拳を持つサイラオーグに一誠をぶつける。現状、これしか可能性を見出せない。
「そうなってくるとサイラオーグの『兵士』が懸念材料ね。私がどうにかしないと」
実力未知数であり、サイラオーグの切り札と噂されている『兵士』。駒七つ消費してい

ることから一誠に近い潜在能力を持っていることだけは分かっている。是が非でもリアスがこの『兵士』を食い止めなければならない。

「そして、アーシアだけど……」

リアスの眼差しを見た瞬間、アーシアは声を出していた。

「私も出ます！」

リアスが何を言おうとしているのか察して確固たる意志を見せる。

「アーシア……」

「私には戦う力はありません！　でも、お二人の傷を癒せる力はあります！」

アーシアの神器があれば経戦能力は高まる。しかし、アーシア自身が言っているようにアーシアには戦闘能力は皆無。戦いとなれば真っ先に狙われてもおかしくはない。だから、アーシアは陣地に待機させてサイラオーグと二対二の対決をしようと考えていた。

戦う術を持たないアーシアが無残にも攻撃されたとしたらリアスも一誠も平常心を保てないと思い、渋い表情をする。

「あ、そうだ。ギリメカラなら――」

今もアーシアの影に住んでいるギリメカラが護衛として動いてくれたのなら心強い。そう思ってアーシアの影を見ると半目の単眼がこちらを見上げていた。

『パオ』
　そっちの問題にこっちを巻き込むなバーカ、という暴言の後に目は閉ざされてしまった。
『……』
　もしかしたら、という淡い希望を抱いていたが、それを粉微塵にするような現実に三人は絶句してしまう。
「あ、あの、すみません！」
「いや、アーシアが謝ることじゃないから」
「そうよ。まあ、下手な期待を抱いた私たちが悪いのよ……」
　戦う前から何とも微妙な空気にされてしまった。
「アーシア」
　その空気を払拭するようにリアスを真っ直ぐ見詰める。
「――いいのね？」
「はい。私も皆さんのようにリアス部長の為に戦いたいんです」
　最後の確認に対し、アーシアは迷うことなく答えた。そこまでの覚悟があるのならリアスも一誠もアーシアを陣地に置いておくことはしない。同じ仲間としてアーシアの意思を尊重する。リスクは大きい。しかし、守るべき者が居てこそ発揮される力もあ

る。
「アーシア」
一誠はアーシアの肩に手を置く。
「頼りにしている」
「はい！」

◇

団体戦の為に用意されたフィールド、それは広大な平野であった。空間を操作しているので端まで見えない。
そこに降り立つ五人。たった五人には広過ぎるフィールド――ではない。委員会はなるべく外に被害が及ばないように準備をしたがそれでも心許ない。そんな不安を抱かせるぐらいにサイラオーグと一誠の激突を恐れている。
『さあ！　バアルＶＳグレモリーの若手頂上決戦もついに最終局面となりました！』
実況の声で大気が震える。応じる観客の声で会場が震える。
『サイラオーグ選手の提案により団体戦となった最終試合！　バアル側は『王』サイラオーグ選手と謎多き仮面の『兵士』レグルス選手！　対するグレモリー側はスイッチ姫

こと『王』リアス選手！　もしかしたら第二のスイッチ姫になるかもしれない『僧侶』アーシア選手！　そして皆の味方おっぱいドラゴンこと『兵士』の赤龍帝、一誠選手！』

きっと実況は真面目に選手紹介をしているのだろうが、グレモリー側がかなりアレな紹介になってしまっており、リアスとアーシアは若干恥ずかしそうな表情をしている。

『ずむずむいやーん！』

『おっぱいドラゴン！』

一誠の登場に子供たちが観客席から応援してくれた。その中に混じってイリナもこちらへ大きく手を振ってくれている。

頭に血が昇っていて気が回らなかったが、あんな子供たちも自分の戦いを見ていることを今更ながら思い出した。サイラオーグの『女王』のクイーシャ相手に殺意に満ち満ちた攻撃を出してしまったが、子供たちを怖がらせていないようで安心した。

手を振り、声援を送ってくれる子供たちを見ながら一誠はサーゼクスが戦いの前に見せてくれたある映像を思い出す。

◇

ライザーに言われてサーゼクスが待つＶＩＰルームに行くと、一誠はそこでサーゼク

スからあるビデオレターを見せられた。
映像機器によりモニターへ映し出されたのは禁手化した一誠を模した人形を手にした男の子。
『こんにちは！　ぼくはおっぱいドラゴンがだいすきで――』
恥ずかしそうに、それでいて嬉しそうに応援のメッセージを送る男の子。映像が切り替わり、次に映ったのは歌って踊る幼い兄妹。
映像が変わる度に小さな子たちがおっぱいドラゴンへ向けてメッセージを送る。子供たちから一誠への応援ビデオレターであった。
「これはほんの一部さ。君を応援してくれている子供たちはまだまだ沢山いる」
サーゼクスが指を動かすと部屋の隅に置かれてあった箱が一誠の前に移動する。中身を見ると拙い文字で書かれた手紙――ファンレターや下手ながらも一生懸命に描かれた似顔絵などが大量に入っている。
一誠の体は無意識に震えていた。喜びや嬉しさが体の芯に染み渡る。
「この子たちは冥界の未来だ……」
サーゼクスの言葉は文字通りのもの。悪魔は長命である為、出生率は低い。先の大戦で多くの悪魔の命が失われたことを考えると、幼い悪魔たちの存在は今後の冥界の未来を左右するものである。

「悪魔にとって今の時代は慌ただしいものだ。今日の試合とて大人の政治の部分が嫌でも絡んでくる。だが、君やリアスたちにはそんなことを気にせずに自分の思うがままに戦って欲しい。君も自分の夢の為に戦うだろう……だが、勝手な願いだとは思っているが、願わくば少しでもいい、この子供たちの為にも戦ってくれないか？」

一誠は子供たちの夢や希望を背負った存在となりつつあった。その夢を背負って戦うということはとても難しいことなのかもしれない。

「――重荷を背負わせてしまったかい？」

気遣うサーゼクスに対し、一誠は子供っぽく歯を見せて笑う。

「いえ。これぐらい背負っていた方がやる気がでますよ。今の俺は、おっぱいドラゴンですから」

課せられたものを重いとは思わない。口に出した言葉は決して虚勢ではなく本心である。皆の期待に対してあれこれと考えて潰れる程やわではない。

一誠の答えにサーゼクスは微笑を浮かべる。その微笑には若い悪魔に多大な期待を背負わせてしまったことへの申し訳なさが少々、そして思っていた通りの答えが返ってきたことへの安堵が混じっていた。

◇

一誠は手を振ってくる子供たちに応え、観客席に手を振り返す。それだけで子供たちは喜びが爆発したかのようにはしゃいだ。

その様子を見ているとさっきまであった熱が別の熱へと置き換わっていくのを感じる。

「相変わらず子供には人気だな」

サイラオーグは子供たちにファンサービスをしている一誠に感心している。戦いの前に現を抜かすな、と怒られてもおかしくないがサイラオーグは寧ろ微笑ましそうにしている。

「俺のような無愛想な男には真似できん」

「そうですか？　サイラオーグさんなら子供に人気が出そうだと思いますけど？」

本心から思っていることを言う。仲間が倒されたことに怒りは覚えたが、別にサイラオーグのことは憎んではいない。カッコいい悪魔だと今でも思っている。確かに取っ付きにくそうに思えるが、サイラオーグという人物をよく知ればその魅力にすぐ気付くことだろう。

「世辞として受け取っておこう」

サイラオーグは苦笑しながら言う。謙遜ではなく自分がそうでないと本気で思って

いる様子であった。
　サイラオーグは感慨深そうにリアスたちを眺める。
「遂に決着のときが来たな……長いようで短いような……それだけ良いゲームだったからと言えるが」
「泣いても笑ってもこれが最後よ……泣く準備はあるかしら？」
「ふっ。最後に笑うのは俺たちだ、と言っておこう」
　軽口を言い合うリアスとサイラオーグ。大事な眷属たちを傷付けた相手だが、そこに恨みの感情は無い。お互い様ということもあるが、相手がどれだけ本気か知っているので負の感情が湧いて来ないのだ。
「兵藤一誠。ついに、だ。あのときの続きが出来る」
　サイラオーグと同じように一誠の脳裏にもグレモリーの地下施設で模擬戦をやったときの記憶が流れる。
「色々と想うことがありますが言葉にはしません。ゲームで全部貴方にぶつけますから」
「良い台詞だ……！　戦う前から背負うものもあっただろう。この戦いで背負うことになったものもあるだろう。全てを爆発させろ。それでこそこの戦いの決着に相応しいっ！」

覇気を伴った言葉。それだけでバトルフィールドが揺さぶられるように感じられる。
『さて、最終試合を始めようと思います』
審判の声が両者の間に入る。戦いの前の語らいはこれで終わる。ここから先は戦いの中で力と共に語られる。
『……では、開始して下さい！』
開始の合図と同時に一誠は背部のブースターを全開にして一直線でサイラオーグへと突っ込む。サイラオーグもそれを待っていたと言わんばかりに全身から闘気を迸らせながら正面から挑んで来た。
互いの拳が交差し、お互いの顔面を狙う。サイラオーグの拳は一誠の兜を掠め、一誠の拳もサイラオーグの頬を掠める。
真っ向勝負であるが、そう簡単には直撃を許さない両者。だが、一誠の兜はサイラオーグの拳が掠めただけで破壊され、一誠の顔半分が露出。サイラオーグの頬も皮だけでなく肉も削がれており、頬から下が血に染まる。
相手の拳の威力に寒気立つものを感じながらも昂ぶりを覚える両者。
「ドライグ！」
『応っ！』
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏ

ｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！

Ｂｏｏｓｔ！』

一誠は突き出していた拳を引くと同時に一歩下がり、そこから反対の拳をオーバースローのように繰り出す。

倍化により振りの速度と威力が高められた拳がサイラオーグの顔面へ命中。サイラオーグは一歩後退。よろけて更にもう一歩――ということはなく、一誠の全力の拳を顔面に受けてもたった一歩しか下がらなかった。

「ふむ」

サイラオーグの鼻と唇から血が流れる。流石に無傷とはいかない様子であったが、垂れる血をサイラオーグが拭うとすぐに止まってしまった。

「いいぞ……！　気迫の込められた良い拳だ……！」

「仲間が届かなかった分、俺が貴方にぶつける必要があるんで」

「奴の拳とは違う感じで揺さぶられるぞ！」

誰かの拳を比べているサイラオーグ。一誠は何故かとある人物の顔が頭を過った。

「もっとお前の力を見せてみろ！」

サイラオーグの気迫の叫びを合図に近距離戦が始める。

サイラオーグの拳は掠るだけで禁手の鎧をも破壊する。それに最大限の注意を払い

ながらサイラオーグが繰り出す暴力の嵐に突っ込む。
初っ端から放たれるサイラオーグの拳を避け、サイラオーグの胴体に反撃を打ち込む。だが、それはサイラオーグが敢えて狙わせたものであり、命中した箇所に予め力を込めていた。闘気と筋肉の二重の防御により攻撃を逆に弾かれてしまう。
そこに入れられるサイラオーグの蹴り。事前にドライグが鎧の防御力を高めて堅牢にしてくれたが、それでも脇腹に入った蹴りは肉を潰し、骨を軋ませる。
喉の奥に迫り上がって来るものを感じながらサイラオーグの足を腕で挟んで固定し、動けなくなった所へ開いた五指を下から上へ掬い上げる。
指先にオーラを集中させることで生み出される引き裂く力。ドラゴンの爪がサイラオーグの鍛え上げられた胸板に裂傷を刻み込む。
「ふん!」
しかし、サイラオーグは負傷直後に拳を突き出してきた。多少のダメージを気になどしない自分の耐久力を理解しているからこその反撃。
木場とゼノヴィアのゲームで見た一撃必殺の拳。空間が歪むような圧を放つそれが迫って来るのを見て、一誠は背筋に冷たいものを感じる。
『退くぞ!』
直撃は不味いと判断したドライグがブースターを逆噴射させ、後方へ離脱。ドライグ

の咄嗟の判断が速かったので、サイラオーグの拳の間合いの外へ逃げるのが間に合った。

サイラオーグは離れて行く一誠を見て自分の拳が届かないことを察する。数え切れない程突いてきたので拳の速度も間合いも誰よりも知っている。しかし、それを黙って見逃すことはしない。

サイラオーグは腕が伸び切った瞬間、曲げていた人差し指を弾くようにして伸ばすと一誠の胸を軽く突く。

一誠は一瞬だが息が詰まるような感覚を覚えた。そして、十分に離れることが出来るとブースターを止め、突かれた箇所に視線を下ろす。

「はは……バケモンだな……」

鎧の胸には凹みが出来ていた。サイラオーグが人差し指で突いた痕である。伝説のドラゴンの鎧を指一本で傷付けたサイラオーグの凄さに乾いた笑いが出てしまう。

もし、拳だったとしたら。破壊力が想像も付かず、鳥肌が立ってくる。

一方でサイラオーグは追撃をする様子は無い。戦いはまだ始まったばかりなので焦る必要が無いからと思われる。

「ふうう……」

サイラオーグは深く息を吸い込む。すると、胸から流れていた血が止まった。筋肉の

膨張により傷を閉じ、闘気を膜のようにして覆うことで簡易的な止血を行う。もう少し傷が深かったらこの方法では止血出来なかった。逆に言えばサイラオーグの肉体だからこそ一誠の爪をこの程度の傷で済ませたと言える。

一誠とサイラオーグが挨拶代わりの攻防を行っていた裏で、リアスとアーシアはサイラオーグの『兵士』レグルスと対峙している。

「……リアス・グレモリーの『僧侶』。もう少し離れていろ」

レグルスに声を掛けられ、アーシアは驚く。

「その方が巻き込まれず、リアス・グレモリーも戦いに専念出来る」

「余裕のつもりかしら？」

「事実を言ったまでだ。私の役目はお前たちに勝つことではない。サイラオーグ様と赤龍帝の戦いに邪魔が入らないようにすることだ」

目的を果たすことのみを最優先しており、『王』であるリアスを倒せばそこでサイラオーグの勝ちだというのにリアスを倒すことを重要視していない。サイラオーグが一誠に勝ち、そしてリアスにも勝つという信頼の表れなのかもしれないが、リアスからすれば虚仮にされているのと変わらない。

「甘くみないでちょうだい……！」

リアスの怒りに呼応して紅髪が揺れる。球体状になった滅びの魔力がリアスの周囲

に展開された。
「滅びの魔力か……」
　サイラオーグが得ることが出来なかった力を前にレグルスは小さく呟く。その力があれば自分の主が苦難の道を歩むことは無かったという想いと無かったからこそ今のサイラオーグが在り、自分がここに居るという想い。忠誠心故に複雑な感情を抱いてしまう。
　レグルスは右手を軽く上げる。その手の中に金色の光が集まっていく。右手を真横に振り下ろした瞬間、バトルフィールドの大地が揺れた。
「何、それは……？」
　レグルスの右手には自分の背丈程ある長大な戦斧が握られていた。ただ振り下ろすだけの動作でバトルフィールドの大地が割られている。
　刃から柄まで金で構成された眩い片刃の戦斧。一歩間違えれば悪趣味な装飾に成りかねないが、見事な調和で芸術まで昇華されている。戦斧の側面には獅子の横顔が刻まれており、それを見た実況席のアザゼルは興奮から立ち上がってしまう。
『まさか『獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）』かっ!?　ここで見られるとは!?』
　何か知っているアザゼルに実況者もすぐに質問する。
『『獅子王の戦斧』とは？』

『ギリシャ神話のヘラクレスの試練の相手にネメアの獅子という獣がいるんだが、聖書の神がその獅子の魂を神器に封じた。それはいつしか十三ある神滅具に名を連ねる程になった。それが『獅子王の戦斧』だ。所有者がここ数年行方不明になっていると報告を受けていたが、まさかバアル眷属の『兵士』になっていたとは……！』

サイラオーグの奥の手が神滅具所持者だった。その衝撃的な事実に観客はざわめきを止められない。

「……私の相手は神滅具ということね」

アザゼルの解説を聞いたリアスだが、神滅具相手にも臆した様子は少なくとも表面上には見せない。

「ネメアの獅子……これもおば様の血筋が為す縁なのかしら？」

サイラオーグの母の実家ウァプラは獅子を司る。それが『獅子王の戦斧』と引き合わせたとしてもおかしくはない。

「――かもしれないな」

レグルスは戦斧を弧を描くように地面を抉りながら自分の正面へ移動させる。その間も地響きかと思うような音が鳴っている。戦斧が正面へ移動すると片手で持ち上げて肩で担ぐ。レグルス自身が怪力なのか、それとも神滅具に選ばれたからなのか理由は分からないが重い筈の戦斧を軽々と扱っている。

神滅具、それも戦斧相手に接近戦は不利と判断したリアスは、先手必勝と言わんばかりに滅びの魔力を弾として撃ち出す。
「無駄だ」
レグルスは戦斧を構え、側面の獅子の顔がリアスに見えるようにする。すると、紋章の獅子が光を放ったかと思えば獅子の咆哮が上げられる。
リアスの放った滅びの魔力は全てレグルスから逸れてしまった。
「うそっ!?」
コントロールしていた筈の魔力が突然操作出来なくなり、レグルスを避けるように外れてしまったことにリアスは驚く。
何が起こったのかと戸惑うリアスの耳へ疑問を答えるようにアザゼルの解説が入り込んでいる。
『『獅子王の戦斧』は極めれば一撃で大地を割る程の威力を放つ。それとは別に敵の放った飛び道具から所有者を守る力も持っている。だから、遠距離戦で『獅子王の戦斧』の所有者と戦うのは厳しい』
アザゼルの有難い解説のおかげでリアスは自分が圧倒的不利な状況に置かれていることを知る。
「まずは小手調べ。これで終わるな」

レグルスが浮遊したのかと思えるような重さを感じられない羽毛の如き跳躍をする。戦斧を担いだまま。

「アーシア！」

リアスの鋭い声を受け、離れた場所に立っていたアーシアはすぐにそこから移動する。

レグルスは跳躍が頂点に達すると、戦斧を振り上げリアスを目掛けて落下する。リアスは滅びの魔力を弾丸にして放つが、やはりレグルスに当たる前に軌道がおかしくなって明後日の方向へ飛んで行ってしまう。

「例え、それがサーゼクス・ルシファー様が放った滅びの魔力であったとしても私には当たらない！」

力の強弱ではなく飛び道具という時点で『獅子王の戦斧』を持つレグルスには当たらない。これは最早、この世界に刻まれたルールのようなもの。

レグルスは戦斧をリアスへと振り下ろす。大振りから繰り出される斬撃は、リアスが回避するには十分な猶予があった。

リアスを倒すつもりはない。レグルスが戦いを始める前に言っていた言葉を思い出しながら、リアスは唇を噛み締めてその場から離脱。

大地に叩き付けられた戦斧。砕かれた大地は隆起し、より細かく砕かれたものは砂塵

となって舞う。
あくまで力を見せつける為の一撃であり、レグルスがサイラオーグの戦いを優先する方針は変わっていない。だが――
「ふむ」
舞い上がった砂塵を突き破ってあらゆる角度から球体状の滅びの魔力が迫ってきた。レグルスは倒す気はなくともリアスの方はレグルスを倒す気でいる。
周囲三百六十度からの攻撃。飛び道具が効かない『獅子王の戦斧』だが、視界外の攻撃が通じるかどうかを試しているのをレグルスは察する。悪くはない足掻きではあるが、無駄である。視界に捉えなくともレグルスにとって問題ない。
全方位から飛んで来た滅びの魔力は、レグルスだけを器用に避ける。認識外の攻撃というのは悪くはない発想であったが、残念ながらレグルスは滅びの魔力の気配を感じ取っていた。良くも悪くも滅びの魔力などという稀少な力は目立つ。それを感知出来ないレグルスではない。認識した時点で外れる運命となる。
稀少で強い魔力だったからこそ避けるのは容易い。尤も、感知出来ないくらい弱い魔力だったらレグルスに通じないが。
戦斧を横薙ぎに払うと生じた風で砂塵は全て消し飛ぶ。無傷のレグルスを見てリアスは表情を変えない。ある程度予測していたと思われる。

一方でレグルスの方は怪訝そうに周囲を見回す。レグルスを覆うようにしていつの間にかドーム状の結界が張られていたからだ。滅びの魔力による全方位攻撃はレグルスを仕留める為のものではなくレグルスを足止めさせる為のものであった。

しかし、だからといってレグルスは焦ることはしなかった。囲っている結界程度なら戦斧の一振りでどうにでもなる。

「捕らえたつもりか？　リアス・グレモリー」

「――いいえ。これから貴方を倒すつもりよ！」

結界の頂点付近で滅びの魔力の塊が幾つも生じる。そのまま落ちて来るかと思いきや、滅びの魔力同士が混ざり合うように動きをしていた。

「嫌な奴が使っていたからあまり真似はしたくなかったけど……！」

顔を顰めながらも背に腹は代えられないといった様子のリアス。リアスが何をしようとしているのか、リアスの眷属たちならば気付いて驚いたことであろう。

「これは……！」

複数ある滅びの魔力の塊が一つになっていくと同時に力が膨張していく。

紅の魔力が一際強く輝き始めたのを見たとき、レグルスは何かを察して仮面へ手を伸ばす。

複合された滅びの魔力が弾けた。内包していた力が文字通り爆発的に拡散され、結界

内に閉じ込めたレグルスを呑み込もうとする。回避することも出来ない広範囲攻撃。飛び道具を無力化させる『獅子王の戦斧』でもこれを逸らすことは出来ない。
　そのとき、大地を震わす獅子の咆哮が結界内で上げられた。それは全てを滅する筈のリアスの魔力を掻き消し、ついでに囲っていた結界も破壊する。
「――成程。リアス・グレモリー、お前の力を見誤っていた」
　付けていた仮面を手にし、素顔を晒すレグルス。その顔はリアスたちとほぼ年齢が変わらない少年のものであった。あどけなさすら感じる顔からあのような咆哮が発せられるとは誰も思うまい。
「……想像通り生意気そうな顔ね」
　滅びの魔力を消されても動揺は見せず、レグルスの顔に対して憎まれ口を叩くリアス。そんな彼女にレグルスは苦笑する。
「そういう気丈なところは我が主と似ているな」
　リアスとサイラオーグを重ね合わせるレグルス。別の場所で突如として膨れ上がった力に意識がそちらの方へ向けられる。
『龍星の騎士ッ！』
『Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｔａｒ　Ｓｏｎｉｃ！』
　一誠が遂に切り札である『赤龍帝の三叉成駒』の一つ『龍星の騎士』を切る。

鎧がパージされ、身軽な姿へと変わった一誠は神速を以って間合いを詰めた。初めて見る『龍星の騎士』のスピードに、あのサイラオーグも初見では反応し切れず、構える前に間合いに入り込まれてしまう。

『龍剛の戦車ッ！』

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ！』

間合いに入ると同時に今度は『龍剛の戦車』へと切り替える。戦車の特性を得た一誠の拳がサイラオーグの顔面へ命中。続いて限界まで高められた赤いオーラが肘にある撃鉄へと集束し、撃鉄が打ち込まれることで二度目の衝撃が炸裂する。

派手な爆発音と共にサイラオーグが吹っ飛ばされる。

「ぬおぉぉぉぉ！」

刹那、サイラオーグは殴られながらも一誠の胸部へ拳を打ち込む。その後に殴られた勢いで後方へと飛んで行った。

赤龍帝の変幻自在の能力でサイラオーグに鮮烈な一撃――しかし、次なる光景は観客を騒めかせるのに十分であった。

「がはっ！　げほっ！　ごほっ！」

攻撃した筈の一誠が膝を突いて苦しそうに咳き込み続ける。吐き出されたものの中には赤い血も混じっていた。一方で殴り飛ばされたサイラオーグは、倒れることを良し

とせず強く地面を踏み付けていたので地面が轍のように抉れている。膝を折ることもなく口から流れる血を拭っていた。
攻撃したのは一誠。サイラオーグがしたのは苦し紛れの反撃の一発。だというのに両者の構図は逆であった。
血を拭い終えたサイラオーグは、一誠に笑みを向ける。
「強い……！　まだそれ程の力を隠していたとは……！　だが、一つ言っておく……俺を倒すにはまだ足りんぞ！」
サイラオーグの瞳は、満足そうにも飢えているようにも見える輝きを放っていた。

光明、暗雲

「はぁ……！　はぁ……！　はぁ……！」

呼吸する度に肺が痛む。周りの筋肉の収縮に合わせて胸が万力で締め付けられたように苦しい。

最も防御力が高い『龍剛の戦車』。しかも、ドライグのサポートによるオーラで防御を極限まで高めていた。それなのにサイラオーグのたった一発の拳は全て無駄だと嘲笑うかのように一誠の鎧を貫いて肉体に重いダメージを与えてきた。

貫った瞬間、頭から足の先まで電流のように衝撃が駆け抜けていき、許容量を一瞬超えてしまったせいで頭の中が真っ白になり、すぐさま感覚が追い付いて目が覚めるような痛みと苦しみを一誠は味わうこととなった。

『何だ……あいつの拳は……！』

ドライグすらもサイラオーグの拳に戦慄する。禁手の鎧の防御を、こうも容易く貫くなどドライグの長い経験の中でも初めてのことであった。

「いってぇ……」

正直な感想が我慢出来ずに一誠の口から零れ出る。しかし、ドライグにもその気持ち

は良く分かる。守りを無視して入ってくる拳の痛さは言葉にして吐き出さなければ延々と体内に残ってしまうような感覚に捉われる。
『紙一重だったな……俺たちは運が良い』
「ほんと……それな……」
『龍星の騎士』で急接近して『龍剛の戦車』でサイラオーグに先に攻撃を入れていたことで、サイラオーグは後方へ下げられたことで完璧な拳を入れることが出来ず一誠のダメージはこの程度で済ますことが出来た。もし、タイミングが同時であったのなら一誠はその場でリタイアをしていたかもしれない。
体の中に今も残り続けるサイラオーグの拳の残留に一誠は納得してしまう。木場もゼノヴィアもロスヴァイセが、ああも容易く破れてしまったことに。
「痛かったよな……怖かったよな……きっと……」
ほんの少しでもそれを知ることが出来た。膝を突いていた一誠は仰け反るようにして立ち上がる。体の内側を引き裂くような痛みが生じるが気付け代わりに丁度良いとすら思えてしまう。
「俺が全部返してやる……！」
木場たちの痛みを知ったことで闘志が燃え上がってくる。
「あの強い人に……！」

超えるべき壁――サイラオーグの強さを思い知り、気合が湧き上がってくる。
「くくく……良い気迫だ。それでこそこの戦いに相応しいっ！」
サイラオーグはそう言いながら一歩踏み出す。すると、サイラオーグの体が僅かに傾いた。
「むっ」
サイラオーグ自身もそれに少し驚く。見ると踏み出した脚の膝が微かに震えている。一誠の拳を受けて全くダメージが無かった訳では無い。あの鍛え上げられた肉体と闘気による二重の防御をぶち抜いていた。
自分のやっていたことは無駄ではなかったと知る一誠。一方でサイラオーグは――
「ふふふ……はははははっ！」
大声で笑いながら震える大腿部に拳で叩く。自らに喝を入れる行為で脚の震えが一瞬で消えた。
「自惚れが過ぎたな……！　赤龍帝の！　俺が心から戦いを待ち望んだ男の拳が通じぬ訳がないっ！」
己を叱咤し、一誠を讃えるサイラオーグ。僅かでも生じそうな油断や慢心が即座に修正されていく。そして、その度にサイラオーグの戦意が高まり、闘気の輝きが増しているように見えた。

（こえーよ、あの人……）

『ここまで生真面目過ぎる悪魔は俺も初めてだ……』

何処までも自分に厳しいサイラオーグに一誠とドライグは軽く恐怖を覚え、圧倒されそうになる。ここまでストイックな人物とは会ったことがなく、この先も会える気がしない。

サイラオーグが積み重ねてきた生き方が、そのまま他者を圧する存在感へ変換されていた。

「――でも、戦って勝たなきゃな……」

サイラオーグを前にして放つこの言葉。自分は何て無謀なのだろうか、と言った一誠本人も自分の正気を疑いそうになる。

『戦えるのか？　勝てるのか？』

ドライグの問いは疑う為のものではなく、一誠の答えが分かった上でその背を押す為の問い。

「やれる」

サイラオーグは恐ろしい。サイラオーグの拳はとても痛い。だが、それを理由に逃げる気には全くならない。

敗北した木場、ゼノヴィア、小猫、ロスヴァイセ、朱乃、ギャスパーたち。そして、今

も戦っているリアスとアーシア。背負っている無念と期待を思えば前に突き進む闘志しかない。

「滅茶苦茶キツイと思うけど、付き合ってくれるよな？　ドライグ」

『ふん。愚問だぞ、相棒？』

内に宿る頼もしい存在の答えを聞き、一誠は口元を綻ばせる。

「そんじゃ行こうか……『龍星の騎士』っ！」

『Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｔａｒ　Ｓｏｎｉｃ！』

『龍星の騎士』形態へと変わると、赤い残像だけを残して一誠は常人の目に捉えられない速度で動き出す。

「それか！　『騎士』や『戦車』を特化させた姿にあるとは驚いたぞ！」

『赤龍帝の三叉成駒』の能力を讃えながらサイラオーグの動体視力は接近してくる高速の一誠を目で追い、先手を入れられる前に先に仕掛けた。

「はあっ！」

最小の動きから直線で放たれる速度重視の拳。ボクシングのジャブに近いものだが、サイラオーグがやれば牽制どころか一撃必殺に至る可能性すらある。

音を超える拳に対し、一誠は倍に増えた背部のバーニアの角度を変え、ほぼ真横へスライドして躱す。

がら空きになっている脇腹に一誠の拳が入る。
（やっぱ硬ぇ！）
『龍星の騎士』は速度特化の形態。『龍剛の戦車』と比べてパワーが落ち、限界まで鎧をパージさせているので体重も落ちている。打ち込んだ拳の威力も当然ながら低下しており、サイラオーグに与えたダメージは微々たるもの。しかし、『龍星の騎士』だからこそ出来ることもある。
攻撃を躱されたサイラオーグが突き出した拳を裏拳にして放つ。砲弾のような圧を体の側面から感じる。
今すぐにでも離れたい衝動を捻じ伏せ、一誠は腕部からバーニアを展開。赤いオーラが火のように噴くと最速の拳が連続で繰り出される。
「うおらぁぁぁぁぁ！」
『Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！　Ｂｏｏｓｔ！』
反動で体が壊れる寸前まで倍化を行うことで可能な限り『騎士』としての速さを高める。それによって繰り出される両腕が消失したかのような連打。それが最初に打ち込んだ箇所という一点のみに集中される。『騎士』である木場がやっていたように一発一

発が軽いのであれば、それを数で補う。サイラオーグも攻撃の最中に回避することは出来ない。だから、裏拳が届く限界ギリギリまで打ち込み続ける。

ゼロと一の秒数間に行われる高速一点集中連打。やがて、サイラオーグの裏拳が危険域に達しようとしたとき、一誠はバーニアを噴かせてサイラオーグの背後へ移動。そこで再び一点集中攻撃を行う。

攻撃を引き付けてがら空きになっている箇所を一点集中攻撃。攻撃が届きそうになったら移動してまた同じことを繰り返す。当然、サイラオーグの周りをずっとグルグルと回っている訳では無い。時折、反転してサイラオーグの意表を衝く。

動いては攻撃、動いては攻撃。これを『騎士』の速度で連続して行う。傍から見るとサイラオーグの周りに赤い残像が円を描いているように映る。

『これは目にも止まらぬ早業だぁぁぁ！　サイラオーグ選手を中心にして赤龍帝による赤い旋風が巻き起こる！　このスピードにはサイラオーグ選手も手も足も出ないかぁぁ!?』

実況が興奮したように捲し立てる。サイラオーグは確かに手も足も出ていない――今は。

当事者である一誠は気付いていた。紙一重の攻防を繰り返す自分に突き刺さる寒気立つ気配に。その気配を辿った先にあるのはサイラオーグの目。サイラオーグの目は

静かに、それでいて確実に一誠の動きを追っていた。
一誠は圧される感覚に耐える。怯めば負ける。退いても負ける。勝つには恐れを乗り越えて攻撃し続けるしかない。
一誠は背後へ回り込み拳を打ち込もうした瞬間、視界からサイラオーグの上半身が消えた。同時に下から殺気を感じて攻撃を中断させて仰け反る。
耳が痛くなりそうな風切り音と鋭い何かが眼前を通過する。
それは振り上げられたサイラオーグの足。サイラオーグは前傾姿勢になりながら足を振り上げ、背後に立っていた一誠を踵で攻撃したのだ。
サイラオーグの踵。想像もしたくもない威力が秘められているに違いない。そして、その踵の切れは――
「ッ!?」
ピシリ、という音を立てて半壊していた兜に切れ目が入る。次のときには一誠の頭部から兜が剥がれるように落ちていった。
完全に避け切れなく踵は掠めていた。蹴りの切れ味を身を以って思い知らされる。
（反応された……！）
いつかは追い付かれるとは思っていたが、想像以上の速さで対応された。或いは動きのパターンを見抜かれたのかもしれない。それなりの戦闘を経験してきた一誠だが、サ

イラオーグと比べればそれも劣る。戦闘経験の差がこの場で出てしまう。
（どうする!? 『龍星の騎士』を止めて他の――）
『相棒っ！』
ドライグの声が頭の中に響いたとき、一誠は『しまった』と思った。一瞬とはいえ戦いの中で迷ってしまった。コンマ数秒の迷いであってもサイラオーグが相手ならばそれは棒立ちに等しい。
その代償を身を以って知ることとなる。
外気が吸い込まれそうな勢いで回るサイラオーグの体。半回転により生じたエネルギーが足に乗せて放たれる。
（やばいっ！）
回避は間に合わない。やれることは守りを固めること。
『Ｃｈａｎｇｅ　Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ！』
『騎士』から『戦車』への切り替え。更にオーラにより防御力を増大させる。特性の切り替えと防御力の増大などを繰り返す度に一誠の体力は消耗されていくが、最後の戦いで出し惜しみをする理由は無い。
しかし、これだけ守りを固めても一誠は冷や汗を流す。フラッシュバックする拳を受けたときの記憶。『龍剛の戦車』の頑丈さでも薄紙のように衝撃を通してきた。

間もなく来る衝撃と痛みに備えて一誠は大きく息を吸い込む。直後、サイラオーグの蹴りが腹に突き刺さる。

（……あれ？）

蹴りを受けた一誠は困惑した。確かに衝撃はあった。痛いことは痛い。しかし、あのときのような細胞の一つ一つに染み渡ってくるような暴力的な力の流入が感じられない。奥では無く表面で押し止められた、一誠の鎧が鎧としての機能を発揮しているということ。

拍子抜けというよりも困惑が勝る。サイラオーグの攻撃を鎧で受け切ることが出来たのか。この差の意味が分からない。

（どういうことだ……？）

『相棒、考えろ。これには何か理由がある』

手加減をしている、などとは考えられない。サイラオーグは常に圧倒するような気迫を放っている。

（じゃあ、別の理由？）

そこまで考えたとき、思考を中断させるサイラオーグの突きが繰り出される。本来ならば避ける選択しかないのだが――

（悪い、ドライグ。無茶をする！）

――心の中でドライグに謝ると、一誠は構えながら左肘にある撃鉄を起こす。
「うおらぁぁ！」
「ふんっ！」
左拳と右拳が衝突。そこに撃ち込まれた撃鉄による時間差の衝撃が生じ、両者は弾かれた。
二人共両足で地面を踏み付けて急ブレーキを掛ける。飛ばされる力に逆らうことに特に意味など無い。無駄に力を消耗するだけである。ただ相手に無様な姿を晒せないという意地のみある行為であった。
何百メートルも離れてもおかしくない衝突であったが、互いに意地を張ったことで数十メートル離れただけに抑えられる。
サイラオーグは自分の拳を見た。長い間研鑽し続け、この世で最も信頼出来る己の武器。だが、握られた拳頭の皮膚が捲れ上がり血が滴っている。鉄塊すら無傷で砕くことが出来るサイラオーグの拳が傷を負っていた。
動揺は無い――と言えば嘘になる。ただし、一誠が期待以上の相手だったと切り替えれば動揺は即座に高揚へと転じる。
サイラオーグと同じく拳を打ち付けあった一誠の方は、サイラオーグと比べると深刻な状態である。左手がだらりと垂れ下がり、籠手が肘の辺りまで亀裂が生じている。亀

裂の方はオーラを流し込めば修復出来るが、問題は籠手の中身であった。
（いってぇぇぇぇ！）
今すぐにでも声を大にして叫びたい。誰でもいいからこの痛みについて知ってもらいたい。これまでの人生で経験してきた痛みとは何だったのか、と問い質したくなるような痛みという情報で脳がショートしそうになる。涙は出ない。それよりも全身から冷や汗が噴出しているので目の方に水分が回らない。
指先から肩に掛けて骨と肉と神経がぐちゃぐちゃに混ぜられたのではないかと錯覚してしまう。肘から下が痺れ過ぎて指を曲げるだけで数千の針が刺されたような痛みが伝わって来る。打ち合いによりある程度威力を相殺してもこれである。『龍剛の戦車』のパワーがなければ拳が潰れて肩辺りまで折り畳まれていたかもしれない。
（滅茶苦茶いてぇ！　いてぇけど……！）
サイラオーグと拳を打ち付けあって一つ分かったことがある。
（拳だけだ！　サイラオーグさんの拳だけが特別なんだ……！）
防御の一切を無視して衝撃を通してくる必殺に等しい魔拳。だが、それは拳限定でしか発揮出来ないと一誠は推測する。蹴りなどでは同様の効果が得られないのを身体を張って検証してみせた。もし、蹴りにまで同じ効果を乗せられるのだとしたら、今頃一誠は倒れ伏していた。

思い返してみればサイラオーグが木場たちと戦っている際、何度か拳の握り具合を確認する動作を行っていた。考えられるのは、サイラオーグはその力に目覚めて日が浅いのかもしれないということ。

『奴の力もまだ完全ではないということか……』

ドライグも一誠と同じ考えである。もし、この推測が正しいのではあれば戦い様もあるかもしれない。

微かな勝機が見えてきたかもしれないと思う、一誠の眼前にサイラオーグが立っていた。思考している間にサイラオーグは容赦無く詰めてくる。

来る、と思ったときには一誠の手が反射的に伸びていた。サイラオーグの右手首を掴み、動きを止める。一誠の行動に眉根を寄せるサイラオーグ。すると、反対側の腕が動き出したので先程と同じく今度は左手首を掴む。これによりサイラオーグの両手は一誠によって封じられた。

これで一先ず拳は使えない。そう思った矢先、サイラオーグは両腕を後ろへ引く。両手首を掴んでいた一誠が前のめりになるタイミングに合わせ、サイラオーグは膝を一誠の鳩尾に突き刺した。

視界が白黒に点滅する。甘い考えであったことを文字通り痛感させられた。サイラオーグの拳は一撃必殺を可能とする拳ではある。だが、それを封じたからとしてもサイ

ラオーグは一つ武器を失うだけ。全身が武器そのもののサイラオーグにとっては些細なことであった。

一誠の鳩尾にある装甲は円形に凹み、凹みを中心にして亀裂が伸びている。『龍剛の戦車』の防御すらも破壊するサイラオーグの四肢。『赤龍帝の三叉成駒』に目覚めていなかったら一誠は数度死んでいた。そして、今から本当に死ぬかもしれない。

膝蹴りにより呼吸が出来なくなった一誠。両手首を掴む力が若干緩まる。それを待っていたサイラオーグは、両腕に闘気を一気に流し込んだ。両腕部から噴出した闘気が一誠の指を跳ね除ける。

万歳でもするかのように両腕を開けて大きな隙を晒してしまう一誠。サイラオーグは流れるような動作で構えていた。

勝機を掴みに行くつもりが勝機は一誠の手から離れ、逆にサイラオーグが勝機を得る。

このとき、一誠は時間が引き伸ばされたようにゆっくりと見えた。極限状態に追い込まれたことで脳の枷が無意識に外れ、普段以上の速度で頭が情報を処理している。

走馬燈の一種ではあるが、一誠は過去を思い出すのではなく目の前のことにその集中力を生かす。

急いでこの場から離れる――ということ出来ない。速くなっているのはあくまで一

誠の頭の中だけのことであり、体の方は現実の時間に置き去りにされている。
（どうする!?　どうする!?）
得られた刹那の猶予の中で何か打開する策を考えるが、頭に力を入れて良いアイディアが浮かんでくる程一誠の頭は上等に出来ていない。限られた時間を消費しながら同じ言葉を繰り返すだけ。このときばかりは自分の頭の出来を恨めしく思ってしまう。
時間が引き伸ばされていても事は進んで行く。サイラオーグの握られた拳が真っ直ぐと突き出され始めた。亀の歩みのような速度の突きなのに、空間が歪んで見える圧を放つ。
現実時間にすれば一秒の何百、何千分の一後にそれが一誠の体をぶち抜く。
折角得られた最後のチャンスをものにすることが出来ず、一誠の頭の中では打開の為の考えではなく、走馬燈らしく過去の思い出が流れ始め出していた。一誠が心の片隅ではあるが敗北を意識してしまった為である。
思い起こされるのは戦いの記憶。数ヶ月前までは普通の学生だったのに、気付けば悪魔で赤龍帝。堕天使と戦い、不死鳥と戦い、白龍皇のヴァーリと――
走馬燈が途中で止まる。過去の記憶の中で答えを得た。この状況を打開する方法を。半ば賭けであるが何もしないよりは遥かにましである。
答えが出ると同時に一誠は前に出る。未だに時間は引き伸ばされている。全身が鎖

で巻かれたように重く、鈍い。しかし、それでも前に出る。サイラオーグの拳へ向かうという恐怖を乗り越えて。

与えられた猶予がいよいよゼロとなる。極限状態を脱すると覚悟したことで外れていた枷が戻ろうとしているのだ。

一誠は次に起ることを覚悟して奥歯を強く噛み締めた。

世界が元のように動き出したとき、一誠はサイラオーグの拳に自分の方から衝突すると同時にあの能力を発動。

『Ｄｉｖｉｄｅ』

『白龍皇の籠手』。これこそがこの窮地を切り抜けるたった一つの手段。

「むっ!?」

サイラオーグは一誠が何をしたのかすぐに理解した。拳が伸び切る前に自分の方からぶつかることで最大威力を出せないようにする。そして、その状態で『白龍皇の籠手』の能力を使用し、自分の体に入って来る衝撃を半減。二重に威力を削ぐことで辛うじて耐え切れるまで抑える。

血反吐を吐き出しそうになるのを我慢し、一誠は下から突き上げた拳でサイラオーグの腹部を突く。右拳が入ると同時に撃鉄を打ち込み、サイラオーグの足が地面から離れた。

「まだだぁぁぁ！」

間髪入れずに叩き込まれる左拳。殴った瞬間に反動が痛みとして一誠の神経を焼くが、堪えて撃鉄を炸裂させた。

サイラオーグの体が宙高く打ち上げられる。一誠の捨て身の策が次なる一手へと繋げる。

『龍牙の僧侶』ッ！」

『Ｃｈａｎｇｅ！　Ｆａｎｇ　Ｂｌａｓｔ！』

駒を変化させ『僧侶』となることでオーラが増大する。両肩に形成された二つのキャノンの砲口に高まったオーラが充填されていく。

地上ではサイラオーグの速さの前では充填することが出来なかったが、サイラオーグが空中にいる今、充填するまでの時間が稼げられる。

サイラオーグも翼を展開して体勢を立て直そうとするが動きがややぎこちない。直前に受けた二連撃のダメージが響いている様子。

この絶好の機会を逃す訳にはいかない。

『ドラゴンブラスタァァァァ！』

ドラゴンショットの強化版であるドラゴンブラスターがキャノンから発射された。飛び出した二つのオーラの砲弾は、一つに合わさって直径十数メートルまで大きくな

る。限界まで圧縮されてこの大きさ。込められたオーラの量は尋常ではない。
「おおっ！」
それが自らに放たれていると分かっていてもサイラオーグは感嘆の声を上げずにはいられなかった。悪魔としても、神滅具所持者としても日が浅い一誠がここまでの力を得たことに思わず感動してしまう。
ズルいとは思わない。少なくとも一誠の戦い方からはあまり才能というものは感じられない泥臭いものであり、自分と似たようなものを感じたからだ。恐らくは日頃から鍛錬を重ね、更には一歩間違えていれば死を免れない戦いを経験してきたからこそのもの。
経験と成長を糧に得た力から逃れるのは失礼。サイラオーグは翼を動かし、射線から逃げるのではなく空中で体勢を安定させる。
「はあっ！」
右拳に集中された闘気が放たれる。それは一誠のドラゴンブラスターに匹敵する大きさ。一誠とは違い十分な溜めもない状態からのこの一撃である。
ドラゴンブラスターと闘気が空中で衝突。前回の戦いを踏まえてより強固にしたバトルフィールドの結界が壊れそうになるぐらい震わせられる。
二つの力のぶつかり合いはドラゴンブラスターがやや押している。しかし、だからと

いって一誠が押し勝つことが決まった訳ではない。サイラオーグは押されている状況を理解して奮起。闘気の大元は生命力。追い込まれることで生き抜こうとする意志が強まり、闘気の質が上がる。それにより徐々に押し返し始め、やがて拮抗状態になる。

だが、この事態は一誠にとって想定外のことではない。サイラオーグならばそれが出来る、と戦いを通じて確信していた。

だからこそ、この状態を待っていた。一誠は重ね合わせた両手を上へ向ける。

「ドラゴンショットオオオオ！」

一誠の両手から魔力の塊が発射される。ドラゴンブラスターではチャージに時間が掛かる。故に威力は低くなるが、すぐに放つことが出来るドラゴンショットを選んだ。

先に発射されていたドラゴンブラスターにドラゴンショットが追突する。これによって拮抗状態は崩れ、サイラオーグの闘気は押し戻され出した。

「ぬぅぅぅ！」

何とか押し返そうとするが、ドラゴンブラスターとドラゴンショットが突き進む方が速い。巨大な力にサイラオーグは呑まれ、空中で赤い光が爆発のように広がった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

『大丈夫……じゃないな。悪いが、今のような無茶はもう出来んぞ』

『赤龍帝の三叉成駒』による連続変身。不慣れな『白龍皇の籠手』の使用。そこに加えて

ドラゴンブラスターとドラゴンショットの連射。最後の戦いということもあってオーラと体力を消耗し過ぎてしまった。

花火のように輝いた赤い光が消える。やはり、というべきかサイラオーグは健在であった。翼を羽ばたかせ降下してくる。

地に降り立ったサイラオーグは無傷ではなかった。体の何箇所は表皮が捲れ上がり、流血している。逆に言えばそれだけであった。ドラゴンブラスターとドラゴンショットの重ね撃ちが命中したと考えれば軽傷。恐らくは直前まで放出していた闘気が膜のようになり、サイラオーグの身を守ったと考えられる。

「今のは流石にひやりとしたぞ」

そう言うサイラオーグは笑っている。纏っている闘気は未だに翳りも減りも見えず、それどころか輝きが増しているように感じられた。ヴァーリと同様に戦いを愉しんでいる。もしかしたら、相手が一誠だからこそ愉しんでいるのかもしれない。

（どう攻めりゃあいいんだか……）

◇

サイラオーグに一誠の攻撃が命中する度にレグルスの体が一瞬硬直する。それに嫌

でも気付いてしまうリアスは少し呆れた表情をする。
「貴方、無表情の割には分かり易いわね」
「……」
指摘されたレグルスは眉間に皺を寄せ、表情を険しくする。威嚇しているように思われるが、リアスからすると恥ずかしがっているように見えた。
一誠が『赤龍帝の三叉成駒』を使い出したときからレグルスの集中力が欠け出した。踏み止まってはいるものの今すぐにでもサイラオーグの許へ駆け付けたい、というオーラを出しながらも自らの使命を全うしなければ、という使命感で葛藤しているのが伝わって来る。
「貴方ね……もう少し集中しなさい」
リアスは思わず苦言を呈してしまった。集中していない方が戦っているリアスからすれば隙が生まれるというものだが、度を過ぎれば舐められているようにも思えてくる。
「こんなこと敵の貴方に言うのはおかしいけれど、サイラオーグはそんなに心配するほどやわじゃないわ」
リアスは自分でも何を言っているんだろうか、と思いつつもサイラオーグが苦難の道を歩んできたことを知るリアスからすれば、レグルスは過保護過ぎてサイラオーグを甘

く見ているように感じられた。
すると、レグルスは急に肩を落とした。その姿は落ち込んでいるように見える。
「私は……出しゃばり過ぎる……」
演技かと思ったが、レグルスの態度を見ていると到底演技には思えない。本気で落ち込んでいるのが伝わってきてしまう。
事実、レグルスのモチベーションは最悪に近いものであった。シンを危険視する余り、出しゃばった真似をした挙句に主であるサイラオーグに謝らせるという眷属としてあるまじき失態に落ち込み、その後にレーティングゲーム前日、サイラオーグは誰にも告げずに姿を消し、一段階上になって戻って来た。レグルスはサイラオーグからシンの気配を感じ取り、出しゃばったことで置いて行かれたこと、サイラオーグから成長の機会を奪おうとしていたことでまた落ち込んだ。
恩人であり、主でもあるサイラオーグに何か一つでも返したいとは思っているが、裏目に出てしまっていることにやや弱気になっている。今もサイラオーグの一対一の戦いを邪魔させない為にリアスたちを足止めしているが、すぐにでもサイラオーグに力を貸したいと思っており、それが出しゃばりなのだと自己嫌悪を繰り返していた。
「何で急にそんなことを言うのよ……」
戦いの最中に悩みを言われてリアスも困ってしまう。サイラオーグも真面目だと

思っていたが、輪をかけて真面目過ぎる。
リアスはアーシアの方を見る。アーシアも今のリアスと同じ表情をしていた。
「……そんなこと悩んでも仕方ないでしょう。貴方の好きなようにやりなさい」
「しかし、そうなるとサイラオーグ様に――」
「舐めたこと言わないでくれる？　サイラオーグがそれを受け止める器が無いとでも？　それに私なら全て受け止めてあげるわ。私が選んだ可愛い眷属なんだから」
もし、自分の眷属が同じことで悩んでいたら、リアスは今言ったことを言う。眷属の全てを受け止め、抱き締めてこその主である。
「……私は相手を見くびる悪癖があるらしい。リアス・グレモリー、お前の言葉に感謝する」
「どういたしまして」
「流石はサイラオーグ様と同じ血が流れる悪魔だ」
「……その言い方、少し癪に障るわ」
サイラオーグを絶対とするレグルスに呆れつつ、リアスは全身から滅びの魔力を迸らせる。
「だが、勝ちは譲らない」
「生憎、最初からそんなことは期待していないわ。それに勝ちは譲られるものではなく

て、奪うものじゃなくて？」
「確かに」
無表情であったレグルスは微かに笑った後、徐に『獅子王の戦斧』を持ち上げる。
来る、とリアスが思うと同時に『獅子王の戦斧』が投擲された。
「ええ!?」
自ら武器を手放す行為。振り翳して迫ってくると思っていたリアスは意表を衝かれた。しかも、『獅子王の戦斧』はその大きさや重量感と裏腹にフリスビーのように軽々と飛んでくる。だが、速くともリアスが見切れない程ではない。加えて直線的な攻撃であり、射線状から離れれば容易く回避出来る。
リアスは『獅子王の戦斧』の動きをきちんと見てから横に跳んで回避した。飛び道具を無効化させる『獅子王の戦斧』を手放した今こそがチャンスであり、リアスは掌をレグルスの方へ向ける。
レグルスが見当たらない。
「後ろです！」
アーシアの声が聞こえた瞬間、リアスは反射的に前へ飛び込む。背中に何かが掠め、背中に熱が広がっていく。
リアスは狙いを定めずに背後へ滅びの魔力を撃ち出す。『獅子王の戦斧』を振り抜い

たレグルスに命中することなく逸れていってしまった。
リアスは顔を顰める。熱はいつの間にか痛みに変わっている。浅くではあるが、背中を斬られた。だが、今のリアスは傷よりも優先すべきことがある。
「何が起こったの……？」
『獅子王の戦斧』を注視して一瞬だがレグルスへの意識が薄くなっていたとはいえ、魔法などが発動した気配は無い。どうやって投擲した『獅子王の戦斧』に追い付いたというのか。
そのとき、リアスの体が暖かな光に包まれる。アーシアが遠距離から『聖母の微笑』を発動させてリアスの傷を治癒していた。
「――アーシア、貴女には見えていたの？」
通信機に向けて小声で話す。離れた位置に避難をしていたアーシアならば何が起こったのか見えている筈である。
『あの、レグルスさんが斧を投げて、リアスお姉様が避けたら、レグルスさんが急に消えて斧の所に現れて……』
アーシアは何が起こったのかを必死に伝える。それだけ知れば十分である。レグルスはもしかしたら、戦斧を目印にして転移出来る能力を持っている可能性がある。
「そう。分かったわ。ありがとう」

通信を終え、レグルスをどう攻略しようかと考えたとき――
『あ、あの！』
アーシアの方から通信の続きが入る。
『私に考えがありますっ！』
アーシアから提案を出され、リアスは目を丸くするも続きを促す。
『私が――』
自分の考えをリアスへ手短に伝える。
「ダメ。危険よ」
リアスはアーシアの提案を却下しようとした。
『私も！』
普段のアーシアとは違う強い声。
『私もリアスお姉様の眷属です！』
リアスに守られる存在ではなくリアスを守りたり、勝たせたいという意志がその言葉には込められていた。レグルスの事を笑えないとリアスは自嘲する。自分もまた笑ってしまうぐらいに過保護だ。
眷属の意思は尊重する。先程言った言葉を嘘には出来ない。
「お願い――いえ、違うわね。やりなさい、アーシア」

『はい！』

頼むのではなく命令として下す。主として全ての責を背負う覚悟で。

レグルスは戦斧を担ぎながらリアスの顔をジッと見ていた。顔付きが変わった。覚悟ある者がする表情。サイラオーグがよくする表情であり、レグルスはその表情が嫌いではない。

「お前を見せてみろ、リアス・グレモリー」

レグルスがその場で跳躍。真っ直ぐ高く上がると頂点から戦斧を投げ飛ばす。

縦回転しながら飛んで来る戦斧を先程と同じく横へ移動して回避するリアス。外れた戦斧は大地を粉砕。巻き上がる土煙。直後に土煙を突き破って現れたレグルスが戦斧を振り上げてリアスとの距離を詰める。リアスの予想通り、戦斧の位置まで転移する能力を有していた。

リアスは手に滅びの魔力を纏わせているが、放つには相手が近過ぎる。そして、近距離ならばレグルスが戦斧を振る速度の方が速い。

レグルスの戦斧が振るわれようとしたまさにその瞬間、バチリという音がレグルスの背中から鳴り響く。

「な、に？」

ダメージは殆ど無い。それこそ静電気に触れた程度ぐらいのもの。しかし、レグルス

は思わず硬直をしてしまう。飛び道具が当たらない筈の自分に攻撃が当たったのだから。

レグルスはつい後ろを見てしまった。そこには極度の緊張で顔を蒼褪めさせているアーシア。

レグルスはアーシアのことなど言い方は悪いが眼中になど無かった。『聖母の微笑』は厄介かもしれないが、時間稼ぎを目的としているレグルスにとっては都合が良い。リアスが治癒されればそれだけ長く戦える。

だからこそ攻撃をしてこないと最初から決めて掛かっていた。事実、アーシアは今までのレーティングゲームで攻撃に参加したことがない。

そんな彼女が初めて魔力で他者を攻撃した。しかし、良くも悪くもアーシアは優しい。攻撃に殺気も敵意も込められない。本人としては一生懸命攻撃をしたのかもしれないが、『僧侶』という潤沢な魔力を持つ彼女が放てたのは静電気程度の雷。

しかし、今回は逆にそれが良かった。アーシア自身もこうなるとは思ってもいなかっただろう。彼女がリアスに言ったのは自分が気を惹くということのみ。だが、殺気も敵意も全く無いあまりに弱々し過ぎる魔力をレグルスの持つ『獅子王の戦斧』はそれを飛び道具による攻撃と認識することが出来なかった。

それが思いもよらない驚きをレグルスへと与える。

「はあっ！」
偶然とはいえアーシアが作り出してくれたチャンスをリアスは逃さない。リアスの方からレグルスへと接近する。レグルスがリアスが近付いていると気付いたときには既にリアスの攻撃が実行されていた。
「っ！」
滅びの魔力を纏わせた拳がレグルスの胸を貫く。飛び道具が効かないのであれば直接叩き込めばいい。普段は近接戦を行わないリアスであるが、一誠たちと比べれば数段劣りはするものの出来ないという訳ではない。ましてや、ここで動かなければアーシアたちを率いる『王』として相応しくない。
様々な要素が重なり合い、逆転の一撃を与えたリアス。レグルスが受けた傷は下手をすれば命に係わる致命傷である。
「――恐ろしいな」
レグルスは小声を洩らす。その呟きを聞いたリアスの全身は総毛立つ。まだ終わっていない、リアスの直感がそう告げる。
「ここまで晒すつもりはなかったが……仕方ない」
レグルスは戦斧を地面に突き立てた。無手となるとレグルスの体が音を立てて膨れ上がる。リアスは急いで突き刺していた腕を抜く。そこで気付いた。胸に開いた穴か

ら血の一滴も流れ出ていないことに。
リアスが驚いている間にもレグルスの体は作り変えられていく。膨れるのは胴体だけでなく腕や脚も太くなる。肥大化しているのではない。逞しい手足に変わっていく。
口が裂け、歯が牙となる。全身から金色の体毛が生え、尻尾も生え、首回りには豊かな鬣が出来ている。
額に宝玉を持つ、リアスの三倍の大きさを持つ獅子へとレグルスは変身していた。
「まさか、貴方……!?」
リアスはレグルスの変身を見て自分が思い違いをしていたことを知る。レグルスの正体は――
『ネメアの獅子か!?』
解説のアザゼルがレグルスの姿を言い当てた。
『『獅子王の戦斧』の所持者がサイラオーグの『兵士』になっていたかと思ったが、どうやら違うみたいだな……。神滅具自体を悪魔に転生させたな！』
アザゼルの目と顔が好奇心で輝く。教え子のリアスたちのピンチだと分かっているが、極めてレアな現象に好奇心の方が勝ってしまっていた。
「そういうこと……最初から貴方を攻撃しても無駄だった訳ね……」
本体は戦斧の方であり、レグルス自体は『兵士』の駒が生み出した仮初めの体に過ぎ

ない。戦斧を手足のように使えたのは神滅具自体が振るっていたから。戦斧の場所に転移出来たのは仮初めの体を消して、再召喚していたからである。

獅子に変化したレグルスの声は子供ではなく大人の低い声で話す。

『本来の我が所持者は既に死んでいる』

ある日、『獅子王の戦斧』は怪しげな集団の手により呆気無く命を落とした。本来であればその時点で『獅子王の戦斧』は次なる所持者の許へ移る筈であった。だが、例外が起こる。主の復讐により強い意思を持った『獅子王の戦斧』は、獅子へと姿を変えて襲撃者たちを皆殺しにした。

その後は消滅を待つ身であったが、偶然サイラオーグと出会い、『兵士』の駒を与えられたことにより悪魔へと転生して眷属となった。

神器の中には意思を持つ独立具現化型という神器も存在するが、『獅子王の戦斧』は度重なる偶然により後天的にその特性を得た。

『サイラオーグ様には感謝してもし尽せない』

レグルスは牙の連なる口を開き、突き立てていた『獅子王の戦斧』の柄を咥えると、戦斧を持ち上げる。

『今まで振るわれてきた私が、主を守る為に自らを振るうことが出来るのだからな！』

◇

「おーおー。盛り上がってんじゃねぇか」

映像機器によって映し出されたリアスとサイラオーグのレーティングゲームを見ながらマダは愉快そうに笑って酒を呷る。

マダと並んで最前列で見ているのはピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタン。少し離れた位置でシン、鳶雄、バラキエル、ケルベロスも映像を見ていた。

標的の『禍の団』を壊滅させ、シャルバも撃退した一行。後は後始末が残っていたが――

『俺たちはきちんと仕事をしたんだから、後は下っ端にやらせておけ』

――とマダが駄々をこね始めたので、バラキエルは仕方なく連絡を取り、堕天使たちに後始末を頼んだ。

その間にマダはどこからか映像機器を取り出し、リアスとサイラオーグのレーティングゲームを観戦しようと言い出す。

オンギョウキとセタンタは仕事は終わった、と言ってあっさりと帰ってしまった。ヴァーリが呼んだ三匹のオニもいつの間にか居なくなっている。まるで逃げるように。

そして、意外なことにヴァーリも観戦を断った。

ヴァーリ曰く――

『見ていたらきっと滾ってしまう。……それとも鎮める為に俺の相手をしてくれるか？』

――とのこと。シンを見ながら誘うように言ってきたが、シンの方は――

『さようなら』

――相手にもせず、シッシッと手で払うドライな対応。ヴァーリは特に気にすることなく微笑を浮かべ、ジャアクフロストを連れて帰ってしまった。去り際、ジャアクフロストがシンたちの方を見て何か言いたそうに口をもごもごとさせていたが、結局何も言わずに元の居場所へと帰る。

そう長い付き合いではないが、別れにしては少々あっさりとしたものであった。尤も、ヴァーリの傍に居る限りそう遠くない内に会える気がするが。

「なあ、お前ら」

マダは映像を見ながらシンたちに話し掛ける。

「どっちが勝つか賭けねぇか？」

マダの好きな賭博の誘い。

「――賭けが成立するんですか？」

シンが問うとマダはゲラゲラと愉快そうに笑い声を上げた。

心傷、克服

映し出された映像の中でリアスと彼女よりも数倍大きい獅子が対峙をしている。アザゼルの解説によると神滅具である『獅子王の戦斧』が『兵士』の駒により疑似的な肉体を得た姿であるとのこと。

宿しているネメアの獅子の魂が『兵士』の駒に干渉して獅子となり、尚且つ『獅子王の戦斧』を咥えて装備している。リアスにとってかなり厳しい状況であった。

「へぇー。便利なもんだ。『悪魔の駒』ってのはああいうことも出来るんだなぁ」

前例のない現象にマダの興味を示している。

「何だかお前みたいだな、刃」

傍らでうつ伏せになっている刃の頭を撫でながら鳶雄もまた所有者無しで独自に動く『獅子王の戦斧』を見ていた。神滅具というのも興味を惹かれる要素の一つでもある。

鑑賞している皆の前でレグルスは動く。巨体が軽々とした動きで前方に跳び、俊敏な動きでリアスに前肢による爪撃を繰り出す。

リアスは足元を狙ってきた爪撃をジャンプして躱す。すると、レグルスは事前に捻ることで力を溜めていた首を動かし、空中にいるリアスに戦斧を振るう。

相手の動きを読んでの二段攻撃。だが、リアスは冷静に対応した。背中から翼を広げ、更に一段高い位置に移動したのだ。

リアスの靴底を戦斧が掠めていく。下手をすれば足一本持っていかれたかもしれない紙一重のタイミングであった。

躱されたレグルスは勢い余って一回転する――そのときであった。

リアスの体が横へ折れ曲がり、弾かれたように空中を飛んで行った後に落ちる。

「尻尾か……」

シンは小さく呟く。レグルスは三段目までの攻撃を用意していた。戦斧を振り抜いて一回転した際にリアスに尾を叩き付けたのだ。

リアスの胴体ぐらいありそうな太い尾を脇腹へ叩き付けられたリアスは、地面の上で横たわる。リタイア判定が出ていないので意識はまだあるが、ダメージですぐには動けない状態である。

シンはその光景を顔色を変えず、眉一つ動かさずに見ている。薄情な反応だが、喚いたところでどうしようもないことが分かっているからだ。その代わりにピクシーたちがワーワー、ギャアギャアと素直な反応をしてくれている。

アーシアはすぐさま神器による治癒を試みた。リアスの体が淡い光に包まれて治癒が始める。

レグルスの前でリアスとアーシアが無防備を晒す恰好となるが、何故かレグルスは攻撃をせず治癒が終わるまで待っている。
実力差による余裕故の待機。そう映るかもしれない。
「へっへっへっ。あの獣の中々えぐいことを考えるじゃねぇか」
マダはレグルスに意図があることを察し、愉快そうに酒を飲む。
「何か意味がある行動なのか？　あれが？」
「見てりゃあ分かる」
マダは答えを言わず、映像を見るように言う。
アーシアの神器により治癒されたリアスは立ち上がり、レグルスへ滅びの魔力を弾にして放っていた。
獅子の姿となっても『獅子王の戦斧』の効果は持続しており、リアスの放った攻撃はことごとく逸れていく。
「許された攻撃手段は直接攻撃のみか……厳しいな」
鳶雄はリアスの置かれている状況を思い眉間に皺を寄せる。或いは自分がリアスの状況に陥ったらどうやって攻略するのかを考えているのかもしれない。
リアスは翼を羽ばたかせ、レグルスへと接近。覚悟を決めてレグルスに接近戦を挑む模様。

飛翔しながら滅びの魔力を込めた掌打を繰り出す。レグルスは巨体からは想像も付かな
い身軽さで跳躍をしてそれを回避。リアスが下を潜り抜けると降り立ち、振り向き様にリアスの背中目掛けて戦斧を振るう。
背後から迫るプレッシャーを感じ取り、リアスは後ろを確認する前に後方へ宙返りをした。
空中で逆立ちするような体勢となったリアスの頭の下を戦斧が通過する。その直後にレグルスの前肢がリアスへ打ち付けられる。
華奢なリアスにレグルスの豪腕が叩き付けられる様に観客席から悲鳴が上がる。
一方でレーティングゲームに精通している者たちからは厳しい視線が向けられる。先程と変わらない攻防。しかも、今度はレグルスの三段攻撃ではなくその手前の二段目の攻撃を当てられている。早くもリアスは万策尽きたのではないか、という見方をされていた。
レグルスに殴られたリアスは地面を何度も跳ねながら転がっていく。転がる勢いが弱まり、地面へと横たわる。制服も誰もが憧れる紅髪も土埃で薄汚れていた。
（――成程）
シンが心の裡で零した言葉は感心を含まれていた。

「そういうことか……」
「やるじゃねぇの」
　鳶雄とマダもまた何かに気付いた様子で感心していた。バラキエルは言葉にしないものの驚きと納得、そして心配を混ぜ合わせた複雑な表情をしている。
　薄汚れたリアスが立ち上がる。咳き込んだ彼女は喀血する。内臓を痛めているらしいが、レグルスの攻撃を受けた直後と考えると思ったよりもダメージが軽く感じられた。
　何故そうなったのか。答えはレグルス自身が示している。
『むぅ……』
　レグルスが唸る。レグルスの前肢は消失していた。観客たちもそのことに気付いてどよめく。リアスに厳しい目を向けていた者たちも一転して驚きへと変わっていた。
　飛び道具は効かない。直接ぶつけるにもリアスの近接戦能力は高くない。どうやればレグルスに滅びの魔力を当てられるのか。ここで発想を変える。当たらないのなら向こうから当たりに来ればいいだけのこと。
　リアスはレグルスが攻撃した際に全身に滅びの魔力を纏い、相打ち覚悟のカウンターを行ったのだ。
　攻撃が来るギリギリまでそれを悟らせず、刹那のタイミングで滅びの魔力を纏う。リ

アスも攻撃を受けてしまったが、それと引き換えにレグルスの前肢を一本貰った。
滅びの魔力を纏っていたことで獅子の爪で切り裂かれるのは免れたが、接触した際に受けた衝撃が残っておりリアスはまた咳き込む。攻撃の最中に消滅させたので威力は軽減していたが、細身のリアスの体には十分重い一撃であった。
「無茶をする……」
シンたちがリアスの捨て身の行動を褒めていたのに反し、バラキエルは咎めるような言葉を洩らす。もしかしたら、傷付いたリアスの姿に娘の朱乃を重ね合わせて心を痛めているのかもしれない。
「何だよ、羨ましいのかよ」
そんなバラキエルを茶化すマダ。バラキエルはマダを睨む。
「嫁に殴られるのがお前の趣味だもんなぁ。今も他のパートナーとやってんのか？」
シンと鳶雄は映像を見ていたのでマダの発言に特に意識を向けていた訳では無い。しかし、入って来た言葉を脳が処理して内容を理解した途端、シンと鳶雄の視線は自然とバラキエルの方へ向けられる。
「あまりふざけたことを言うな……！　マダ……！」
バラキエルから怒気が溢れる。どうやら、今言ったことはマダお得意の挑発――
「この体は朱璃にしか許していない！」

――では無かった。バラキエルも認めてしまっている。本人としては亡き妻に操を立てていると主張したかったのであろう。そんな彼をシンと鳶雄は『この人、そんな趣味があったのか……』という目で見てしまっているが。

「まあ、そんなどうでもいい話はいいとして、どうすんだかねぇ、このお嬢ちゃんは」

自分から振った話題を一方的に打ち切ったマダ。既に興味は映像の方に戻っている。

「……確かに厳しい状況だが、神器によるサポートがある。なら勝機は――」

「そっちじゃねぇよ。こっちの方だ」

マダが指差したのはリアスではなくアーシアである。アーシアは先程のようにリアスの傷を癒すが――

『あと何回リアス・グレモリーは苦しむことになるだろうな』

不意に呟いたレグルスの言葉にアーシアは硬直する。

「っ！　耳を貸してはダメよ！」

リアスはレグルスが何をしようとしているのかを察し、アーシアに声を掛けるが既にアーシアの顔色は変わっていた。

薄々理解していた。戦いの中で癒すということは、その者が再び戦場へ立つということ。治した故に再び傷を負うという矛盾。そして、自分はそれを見送るだけ。

リアスが傷付き、治し、再び戦う。自分はそれを見て、守られるだけ。心優しい故に

それを卑しいと感じてしまう自分。戦いの熱気に充てられて目を背けていたが、レグルスの冷水のような言葉を浴びせられたことで嫌でも向き合わせられる。

アーシアとてレグルスの言葉が動揺を誘う為のものだと理解している。しかし、レグルスの強さ。彼が神滅具であること。傷を負うリアスの姿。それらの要因が重なり合うことでアーシアの中に迷いを生じさせてしまう。

迷いは想いに影を差し、神器の力を弱める。それを表すかのようにリアスの傷が治る速度が遅くなっていた。

アーシアもそれが見えてしまっているので必死になって祈りを捧げるように集中するが、どうにも空回りしてしまい、治癒速度に変化が生じない。

「ッ！　レグルス！」

アーシアの心に傷をつけたレグルスにリアスは怒りのまま叫ぶ。眷属の痛みは自分の痛み。グレモリーの愛情は深い。傷付けた者に対してその愛情は反転して苛烈な憤怒となる。

「面白くなってきたなぁ！」

アーシアが葛藤し、リアスが怒る様を肴にして酒の飲むスピードを上げていくマダ。マダは楽しんでいるが、少なくともこの場で楽しんでいるのはマダだけである。

「……お前もあの獅子と同じ立場だったのなら、同じことをするのか？」

「やるねぇ。戦いの場に於いちゃあ戯言同然だが、ああも気持ち良く決まるなら幾らでも言うなぁ」

マダの言う通り戦いの最中ならばレグルスの言葉など聞くに値しないが、相手がアーシアであった為にクリティカルヒットをしてしまった。アーシアは良くも悪くも戦いに向いている性格ではない。

「まぁ、誰が悪いかって言えばグレモリーのお嬢ちゃんだよな。素直に待機させておいた方が良かったんじゃねぇか？」

数としては二対一で一見すればリアスたちの方が有利に思えるかもしれない。しかし、戦いになれば必ずしも味方の存在がプラスに働くとは限らない。要所で活躍をしていたアーシアだったが、この状況ではリアスの枷になりかねない。

「そう決まった訳じゃないですよ」

マダの態度があれだったので鳶雄がリアスたちの肩を持つ発言をする。マダはへっ、と笑いシンの方を見た。

「お前も同じ意見かぁ？」

シンの瞳が揺れ、一瞬だけマダへ向けられる。だが、すぐに元の位置に戻り、何一つ語ることはなかった。

「おい、無視すんなよ」

マダが言ってくるがシンの口は閉ざされたまま微動だにしない。
「バラキエルー。こいつ無視してくるー」
「甘えた声を出すな！　気色悪い！」
マダが悪ふざけをしている中でも映像の中では戦いは進行していた。

◇

怒りに燃えるリアスは翼を羽ばたかせ、レグルスへ接近する。『王』自らが近接戦に挑むことに観客は騒めいた。
レグルスは戦斧でリアスを迎え撃とうとするが、振り回す直前に動きが止まる。
レグルスの目的は一誠とサイラオーグを一対一で戦わせること。ここでリアスをリタイアすることになればそこでレーティングゲームは終了してしまう。高い忠誠心を持つ故にその考えがレグルスの動きを縛る。
リアスはレグルスの内心などお構い無しに渾身の拳をレグルスの顔面に叩き込む。『戦車』の力には及ばないものの勢いで感情をありったけ込めた全力の一撃は、レグルスの巨体をよろめかせる程の威力を出す。
「私を見なさい！　アーシア！」

荒々しい一撃を放ったリアスは、雄々しく叫ぶ。
「戦うことは確かに恐ろしいことかもしれないわ！」
よろめいているレグルスに、リアスの追撃のキックが命中。前足を失っていることもあってレグルスの巨体が横転する。
「傷を負えば痛い。それは間違っていないわ。でもねっ！」
リアスは手を掲げる。掌に滅びの魔力が集まり、圧縮された球体となる。
「私は戦うことを恐れない！」
レグルス目掛けて滅びの魔力の球体を投げる。飛び道具ならば戦斧の効果によって外れてしまうが、滅びの魔力が一定の距離まで近付いた瞬間、リアスの意志によって爆発を起こし、広範囲に滅びの魔力を拡散させた。逸らしても無駄なぐらいに広範囲攻撃することで『獅子王の戦斧』の効果を無理矢理突破しようとしたのだ。
紅色の爆発に煽られながらリアスはアーシアに呼び掛け続ける。
「誰も戦うことを怖がったりしないわ。そんなことよりも何も為せないまま終わる方がずっと怖い。私も貴方たちの期待に応えられないまま負けるのが一番怖いわ。でも、貴女の力で戦い続けることが出来るの」
一瞬でも抱いてしまった不安を消すかのようにリアスはアーシアに優しく微笑む。
「リアス、お姉様……！」

「大丈夫よ、アーシア。貴女のやることは何も間違っていない。それを咎めるような奴がいれば、私がぶっ飛ばしてあげるわ――こんな風に」

紅の魔力が生み出す破壊を背に同じ色の髪を靡かせるリアス。アーシアの迷いごと抱き締めてくれるリアスの包容力にアーシアは涙を流すと共にレグルスの言葉を受け止め、それでも尚リアスの為に己の力を尽くすことを固く誓う。

すると、紅の爆発が切り裂かれる。その中から現れるレグルス。滅びの魔力の爆風を受けて無傷では済まず、鬣の一部や尻尾の先の欠損が見られた。だが、獅子から放たれる戦意に翳りは見られない。

『――小細工は通用しないか』

アーシアの目に再び強い光が宿ったのを見て、言葉で惑わせるのは二度と通じないと察する。

このやり方はサイラオーグが褒めるようなものではないことはレグルスも分かっていた。しかし、我が身を捧げる程の忠誠心が少しでもサイラオーグの役に立てられるなら、と汚いやり方すらも躊躇せずに行わせる。

出来ることなら『フェニックスの涙』を使用させたかった。そうすればサイラオーグは大きく有利になる。

しかし、それも最早叶わないこと。慣れていない謀略はリアスの前に消し飛ばされ

た。
（流石はサイラオーグ様と同じ血が流れる者）
どうしてもサイラオーグを絡めながら讃えてしまう。レグルスにとって全ての基準はサイラオーグなので仕方ない。
互いに傷を負いながら睨み合うリアスとレグルス。
（獅子の体なら私の魔力でも滅することが出来る。でも、あの神滅具で攻撃されたら……）
（本体がある限りこの体がどれだけ傷を負っても問題は無い。しかし、リアス・グレモリーの滅びの魔力に対抗するには我が本体でなければ……）
相手の戦い方を見て、自然と選択肢が限られてくる。
リアスは限られた選択肢に従い、両手に滅びの魔力を纏わせる。『獅子王の戦斧』の能力を封じるには接近戦しかない。
レグルスもまた咥えている柄に力が込められる。リアスは戦う相手として申し分ない。しかし、同時にある欲求も心の隅で出て来る。
（このような戦いが出来るのは恐らくは一度限り。ならばこそサイラオーグ様には悔いの無いように全力で戦って欲しい。あの力を全ての者たちに見せつけて欲しい……！）
今のサイラオーグは本気であるが、本気では無い。矛盾しているように思われるが、

それが本当のことである。
真の力の解放。それをレグルスは望んでいるが、自分の口からそれを進言することが出来なかった。或いはそれを言う余裕が無いのかもしれない。
燃えるような真紅の魔力を纏うリアスを前にしてレグルスは己を押し殺して忠義を全うしようとする。

◇

変幻自在は正にこのことか、とサイラオーグは舌を巻く。一誠はサイラオーグとの戦いに合わせて鎧の形状を目まぐるしく変化させ、同時に能力も変化させる。
スピードで撹乱し、パワーで押さえ込み、隙あらばオーラで砲撃。サイラオーグに喰らい付いていこうと必死に頭を働かせながら動き続ける。
これ程の相手と戦えることを誇らしく思いながらサイラオーグは拳を突き出す。
一誠はサイラオーグの拳を最も警戒しており、あの手この手で直撃を避けていく。その度にサイラオーグの心は昂っていき、これならどう避ける、と難問のように変化を入れた拳を突きつけた。
昂ぶりと喜びにより心が満ちていく――筈なのに、サイラオーグの心にはどうしても

満たすことの出来ない箇所があり、そこが飢えたように叫ぶ――これで満足なのか？と。

（満足だ。これ以上無い程に俺は満たされているっ！）

それを消し飛ばそうとサイラオーグは心の中で叫ぶ。一誠との戦いを続けている内にある思いが、否、そんな上品なものではない。欲というべきものが鎌首をもたげる。

（俺はこの男とこの体一つで戦うのだっ！）

邪念を振り払うようにサイラオーグは拳で一誠を突く。が、サイラオーグの拳は『龍剛の戦車』の分厚い装甲により受け止められた。

次の瞬間、サイラオーグの顎が跳ね上がる。一誠のアッパーがまともに入っていた。

一誠はそのまま肘の撃鉄を打ち込もうとするが、サイラオーグは仰け反った体を更に仰け反らせることで一誠の拳から顎を離れさせる。そのすぐ後に撃鉄が打ち込まれ、拳から放たれた衝撃波はサイラオーグの眼前を通り過ぎていく。

サイラオーグは倒れそうになるが、そのままバク転に繋ぎ、後方へ跳んで一誠との間合いを広げる。

サイラオーグは顎に手をやり、噛み合わせを確認する。口の中に鉄の味が広がり、関節部分に多少の痛みを感じるが問題になる程では無い。あのまま顎に衝撃波を貰っていたら危うかったかもしれないが。

観客席からは驚きが混じった歓声が上がっている。近接戦最強と言っても過言ではないサイラオーグがこの試合で初めて打ち負けた光景を見れば誰もがそうなるだろう。だが、皆の反応とは裏腹に打ち勝った一誠の方は特に喜んではいなかった。

「……サイラオーグさん」

「何だ？」

「何か迷っていますか？」

「むっ……」

一誠に内心を見抜かれたサイラオーグは言葉を詰まらせる。

「図星みたいですね」

「……良く分かったな」

「そりゃあ分かりますよ。さっきの拳……全然効きませんでしたから」

何度も殴られたせいで自然と分かってしまう。先程の拳は今まで受けてきた中で一番腑抜けた拳であった。

「拳一つで伝わる。これを喜ばしいと思うか厄介と思うか、悩むところだな」

サイラオーグは隠し事が出来なかったことを自嘲する。

「……まだ出し惜しみしていることがあるんですよね？」

サイラオーグは答えない。しかし、一誠は自分が正解を辿っているという自信があっ

た。
「今以上の力……サイラオーグさんはまだ本気を出していないんですか?」
　もしそうだとしたら一誠はその事実に悲しみを覚える。あれだけ必死に足掻き、がむしゃらになってもサイラオーグの本気を引き出すことが出来ていなかったのだから。
「いや、間違いなく俺は本気で戦っている。それは間違い無い」
「なら……何かをすればサイラオーグさんはもっと強くなれるってことですか?」
　サイラオーグは口を真一文字に結ぶ。自分の口からは言えない、といった様子。制限されているのか、もしくは自ら枷を課しているのかもしれないと一誠は感じた。
「……そんな力があるのなら使って下さい」
　一誠の言葉にサイラオーグは目を丸くした。
「それを使ったサイラオーグさんに勝たなければ意味がないんです……今日、この日まで培ってきた意味がないんです!」
　自分自身でも馬鹿なことを言っているのは分かっていた。しかし、一度吐き出した感情を止めることは出来ない。
「今日、俺は貴方を倒しに来た!　俺たちの夢の為に!　最高じゃない、本気を出していない相手を倒して掴んだ勝利が何になるんだよ!　サイラオーグ・バアルっ!」
　言った。言ってしまった。と一誠は自分の後先の考え無さに呆れる。観客席は一誠

の叫びに唖然とする中でイリナは変わらずに子供たちと一緒に声援を送り続ける。実況のアザゼルはしょうがない奴だと呆れを混ぜた笑みを浮かべ、傍にいるディハウザーは微笑を浮かべると共に一誠に対してどんな反応をするのか、とサイラオーグへ期待の眼差しを向ける。

ＶＩＰルームで観戦しているサーゼクスはここから先の戦いを期待し、ライザーは一笑するがそれは馬鹿にした笑いではなく、隣のレイヴェルはこれでもかと瞳を煌めかせていた。

レーティングゲームのフィールド内は時間が止まったように誰も動かなくなっていた。レグルスは一誠の発言に思わず棒立ちになる。

彼と戦っていたリアスはつい苦笑を浮かべてしまう。だが、同時にこうも思ってしまう。『それでこそイッセー』であると。

サイラオーグは視線を動かし、自分の陣地へ向ける。ベルーガとクイーシャはサイラオーグと目が合うと力強く頷く。それは何があろうともサイラオーグに付いて行くという強い意志が込められていた。

今度はレグルスを見る。レグルスは期待を込めた眼差しで見返してきた。サイラオーグの一言を待ちわびている。

サイラオーグは天を仰ぎ、深く息を吐く。

「冥界の危機にのみあの力を使う……そのつもりであった」
サイラオーグはポツリと洩らす。自分の為でなく冥界に生きとし生ける者たちに捧げる力。誰が為の力として自分を戒めてきた。
「……だが、お前がそれを望むのなら、お前の為に力を使うのはやぶさかではない」
サイラオーグは笑う。普段見せるような男らしい笑みとも不敵な笑みとも違う爽やかな笑み。サイラオーグ自身も全ての力を使い切ることを心の奥底で喜んでいるのかもしれない。
「お前のような男を前に、俺は行儀が良過ぎたな」
二度と無いかもしれない戦いに不要なものを抱え過ぎていた、とサイラオーグは自分の愚かさを反省する。
サイラオーグは右手を掲げる。その手にはフェニックスの涙が入った小瓶が握られており、それを握り潰してフェニックスの涙を浴びる。これによりサイラオーグは完全回復した。
「イッセー」
リアスが名を呼んできたので一誠はそちらを見る。彼女は一誠にフェニックスの涙が入った小瓶を投げ渡し、一誠が受け取ると無言で頷く。それを見て一誠もまたフェニックスの涙を取り出して、浴びる。全ての傷が癒え、サイラオーグと同じ条件となる。

「……後は俺に任せて下さい」
それは遠回しに手出し無用であることを頼むものであった。サイラオーグと対等に戦う為にリアスの援護もアーシアの治癒すらも拒んだのだ。
リアスは一瞬呆れた表情をし、溜息を吐くと「勝ちなさい」という言葉で背中を押す。アーシアは何も言わず、一誠の勝利を信じて祈る。
これで場は全て整った。
「レグルスっ！」
『ハッ！』
その言葉を待ち兼ねていたと言わんばかりにレグルスは跳び上がり、体を金色に輝かせると幾千の光となってサイラオーグへ降り注ぐ。
「ここから先は死戦となる！　命を懸けろ！　一切の悔いなく全てを出し尽くせ！　兵藤一誠っ！」
全身に金色の光を浴びる中でサイラオーグは高らかに叫ぶ。
「我が獅子よっ！　ネメアの王よっ！　獅子王と呼ばれた汝よっ！　我が猛りに応じて衣と化せぇぇぇぇ！」
大地が揺れ、それにより亀裂が生じていく。強化された結界が余波で壊れそうになるぐらい震える。

「禁手化っ！」
『禁手化っ！』
　サイラオーグとレグルスは声を重ねながら最後の鍵を開く。金色の光が閃光のようにフィールドに広がっていく。
　誰もがその眩さに目を閉じてしまう。一秒、二秒が過ぎて光が収まる。フィールドを揺らしていた余波は嘘のように消えていた。
　一誠は見た。獅子を模した金色の全身鎧を纏うサイラオーグを。
　頭部には獅子の鬣を思わせる豊かな金毛が靡き、胸には獅子の顔が付けられている、そこに意思があるように両眼が輝く。
　一誠の『赤龍帝の鎧』と同じく全身に纏うタイプの禁手。拳で戦うサイラオーグにこれ以上相応しい禁手は無い。
　サイラオーグの禁手に観客席から一斉に歓声が上がる――
『わあぁぁぁぁ――』
「うおおおおおおおおおお！」
　――が、サイラオーグの咆哮により掻き消されてしまった。その咆哮はサイラオーグのものか、それとも力を解放されたレグルスのものかは分からない。しかし、誰もが黙ってしまう程の威圧が込められた王者の一声であった。

「『獅子王の戦斧』の禁手『獅子王の剛皮（レグルス・レイ・レザー・レックス）』！　今更だから言わせて貰おう！　兵藤一誠！　お前の禁手を見たときから、俺たちの禁手とどちらが強いか試してみたかった！」

隠していた本音を晒しながら構えるサイラオーグ。元からあった存在感が禁手により数段上がって目の前に巨人でも立っているかのような錯覚を覚える。

（俺と戦う奴の禁手って皆鎧とか纏っているな！）

『直接攻撃を重視する者にとってはあれが究極に近い形なのだろう。攻防一体の鎧が最もバランスが良い』

自分も同じタイプなのでドライグの推測に納得してしまう一誠。

サイラオーグは構えたままその場から動こうとしない。サイラオーグが見せる不敵な笑み。一誠はそれを攻撃して来い、という挑発と捉えた。

全力で来いと言外に伝えてきているのならば、その挑発に全力で乗る。

『Ｃｈａｎｇｅ！　Ｆａｎｇ　Ｂｌａｓｔ！』

トリアイナの『僧侶』により鎧が砲撃形態へと変わる。砲口にオーラを充填すると同時に突き出した両手にもオーラを溜める。

ドラゴンブラスターとドラゴンショットの同時発射。サイラオーグはその構えを見ても微動だにしない。

『敢えて直撃は避けろ。『獅子王の戦斧』のように飛び道具を逸らす能力を持っているかもしれん』
「了解っ！」
ドライグの助言に従い、一誠は照準を微調整。サイラオーグの手前に着弾するようにする。
「いっけぇぇぇ！」
充填完了と同時に砲口と両手から圧縮されたオーラが発射される。大小二つの弾が一直線に並らぶと接触して一つに合わさり、ドラゴンブラスター時よりも一回り以上大きくなる。
オーラの塊は一直線に飛んでいるように見せかけて下斜めに向かって飛んでおり、一誠の狙い通りサイラオーグから一メートル手前で地面に着弾。内包されていたオーラが爆発してドーム状に広がっていく。
サイラオーグは一歩も退かず、寧ろ待っていたかのように歯を？いて笑う。
「勝負っ！」
サイラオーグは目の前に迫る赤いオーラ目掛けて拳を繰り出した。
「――えっ？」
そこから先の光景を見た一誠は呆けた声を出してしまう。だが、それはこの会場にい

る者たちの総意でもあった。
拳が赤いオーラに触れた瞬間、広がっていく筈の爆発が押し留められる。実体の無い膨大な量のオーラがサイラオーグの拳で殴られて大きく凹み出した。
「おおおおおおおっ！」
気迫の叫びと共にサイラオーグは拳を前に押し出す。オーラの変形はどんどん酷くなっていき――
「はあああああっ！」
――更なる力が加えられるとサイラオーグを呑み込む筈であったオーラが押し戻される。あろうことかサイラオーグは拳一つで一誠のドラゴンブラスターを殴り返したのだ。
「嘘だろっ!?」
『馬鹿なっ!?』
跳ね返されたオーラの爆発が迫っている状況に一誠とドライグは揃って驚愕する。だが、どんなに信じられない光景であっても現実は迫って来ている。
避け切れないと判断した一誠は即座に形態を変えた。
『Ｃｈａｎｇｅ！　Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ！』
戦車の形態となり可能な限り全身を縮こめながら防御に全ての力を注ぐ。その直後

に一誠は爆発を受けた。初めて経験する自分自身の攻撃。全身に掛かる圧に体がバラバラにされそうになる。

我ながらよくこんな強力な攻撃を放てるものだ、と思いつつ、これを拳で殴り返したサイラオーグはまさに鬼神、力の権化と称すべき存在である。

爆発が消える。ドラゴンブラスターに耐え切ってみせた一誠であったが、その目が限界まで見開かれた。一誠の眼前にはサイラオーグが居る。

「さあ、打ってみろ」

この状況でサイラオーグは一誠に先手を許した。相手を舐めている――のではない。撃たれても勝つという絶対的自信の表れである。

例え与えられたものであっても全力の一撃を放つチャンス。一誠は上半身を大きく捻る。殆どサイラオーグに背中を向ける無防備な体勢であったが、サイラオーグは攻撃してこないという信頼がある故の守りを放棄した捨て身の攻撃態勢。

一誠の体勢に合わせて鎧が変形する。腰回りの装甲が凹凸のある円形――歯車のような形になり、力を溜めやすくまた放てやすくなるようにサポートする。

背部の噴射孔も位置が微調整され、更に腕周りに新たな噴射孔が追加される。一誠の攻撃の意志に鎧が応じ、対サイラオーグの為の攻撃準備を整えてくれる。

肘にある撃鉄が起き上がる。それが準備完了の合図となり、噴射孔からオーラが噴き

出し、それによって得た加速で捻っていた腰がスムーズに回り、溜め込んでいた力が解き放たれる。

サイラオーグへと突き出される一誠の左拳。サイラオーグがそれに向けて手を伸ばす。

一誠の拳がサイラオーグの掌に触れた。その瞬間、力も速さも掌に吸い込まれたかと思うぐらいに左拳の動きが止まった。

伝わってくる感触に冷や汗を流しながら肘の撃鉄を打ち鳴らす。勢いは拳に伝達され。拳の威力を上げる――筈だった。

「嘘だろ……」

サイラオーグの掌は微動だにせず。真っ直ぐ伸びた腕を押し返すことも出来ていない。完全に力負けをしていた。

攻防高めた『戦車』の全力が通じなかったことにショックを受ける一誠。この僅かな思考の空白をサイラオーグは見逃さない。

サイラオーグのもう片方の手が一誠に向けて放たれる。一誠は我に返ってすぐに撃鉄を撃とうとするが、サイラオーグの方が速かった。

サイラオーグの掌打が一誠の胴体に打ち込まれる。

その様子をモニターで見ていた観客たちは後にこう語る。

『あの瞬間、赤龍帝の体が波打った』、と。
サイラオーグの掌打から発生した衝撃は、相手を貫くのではなく相手に浸み込む。掌が押し当てられた『龍剛の戦車』の鎧が本来あり得ないことだが確かに波打った。現時点で最強の硬度を持つ筈の装甲に水面のような波紋が広がっていく。波紋は鎧を通じて本体である一誠の体へ浸み込む。
肉が、骨が、血が、血管が、神経が、臓腑が、細胞が浸み込んできた衝撃により波打つ。
「……ごふっ」
一誠の口から零れ出る血。流血はそれだけに収まらず鼻孔や目、耳からも流れ、体の至る箇所が内出血により赤黒く変色する。突き出していた左拳が力無く下ろされた。
『相棒っ！』
全身から出血する一誠だが、まだ意識は失っていない。ドライグは鎧を操作し、噴射孔を噴かせて離脱を試みる。
『なっ!?』
先程打ち込まれた掌が鎧を掴み、一誠たちの離脱を許さない。吸盤のように吸い付く掌。握力と腕力で噴射の勢いを捻じ伏せる。
サイラオーグは一誠を掴んだ状態で拳を握る。

それを見てドライグは戦慄した。さっきの掌打は次なる攻撃に繋げるものに過ぎないことに。本命の一撃はこの後放たれる。

サイラオーグの黄金の拳が真っ直ぐ放たれる。狙う先にあるのは、あろうことか一誠を掴んでいる手。拳が手に打ち込まれる。本来ならばサイラオーグの手は粉々に砕けてもおかしくはない。

だが、今のサイラオーグの拳は万物を貫く。

衝撃はサイラオーグの手を無傷で貫通し、一誠の体内に衝撃を通す。

「――終わりだ」

掌打と拳による二重攻撃。手ごたえを感じたサイラオーグは、若干の名残惜しさを含まれせた幕引きの言葉を送る。

刹那、一誠は体が破壊される音を聞いた。

◇

「――え？」

意識を失ったかと思ったら、すぐに目覚めた。鎧も着ていない。痛みも無い。一誠にはこの現象を良く知っている。

「また来たのか……」
一誠の心の中にある謎のベッドルーム。目を覚ます度に忘れてしまうが、ここに来ると何があったのかを思い出せる。
しかし、違和感があった。記憶の中でのこの部屋はもっと暗かった印象があったが、今は部屋の中が大分明るくなり、妙に殺風景に感じられる。
「貴方にとって、ここが必要じゃなくなっている証よ」
いつの間にかベッドに腰を下ろしていたのは、一誠にとって色々な意味で忘れられない女性――夕麻。
「それって、どういう意味だ……？」
「鈍感なイッセー君でも言わなくても分かるでしょ？　それとも私の口から言わせる気？」
夕麻が悪戯っぽく笑う。一瞬、その姿が薄れて見えた。
「夕麻ちゃん……!?」
一誠は驚くが、夕麻は変わらず笑っている。自身の存在が薄れていくことに何の恐れも抱いていない。
「それも……そうか……」
一誠は独り納得して夕麻の隣に座る。指を組み、そこに額を当てて俯く。

「君は俺のトラウマが形になったみたいなもんだったな……」
「そういうこと」
消えかかる夕麻。それは一誠がトラウマを克服しようとしていることを視覚化しているのだ。
「何その顔？　イッセー君は私が居なくなるのが寂しい？」
「はっ！　まさか」
「だよねー」
夕麻はクスクスと笑う。一誠もそれにつられて小さく笑った。以前だったなら考えもしなかったこと。一誠は今、自分の心の傷と向き合っているのだ。
「私が消えるってことはさ、イッセー君がようやく新しい一歩を踏み出せるってこと。良かったじゃない。女の子とちゃんとした恋が出来るようになったんだよ？」
夕麻の口からそんなことを言われ、一誠は内心複雑であった。そうなった原因は夕麻ことレイナーレのせいである。
「そう言われてもねー。私って単なるイメージだし。本物はきちんと始末したでしょ？」
自分の事を他人事のように言う。夕麻の言う通り、この夕麻は一誠のイメージが作り出したものだから間違ってはいない。

「そん時に割り切れたらどんだけ楽だったか……」
怨敵であり初めて心の底から殺してやりたいと思った女性は後にも先にもレイナーレしかいない。最期の瞬間は無様なものであり、レイナーレが一誠の前に現れることは二度と無いが、彼女のそんな姿を見ても一誠の溜飲はあまり下がらなかった。元より死に様を見て笑うようなタイプではない。
「イッセー君って繊細ね」
「馬鹿にしてんのか？」
「違うわ。知っているから。私と初デートするとき、これでもかってぐらい念入りにデートのプランを考えてくれたでしょ？」
「……絶対に良いデートにしようと思っていたんだ」
あのときの思い出が蘇って来る。古傷を抉るような行為の筈だが、不思議と心が痛みを感じることはなかった。
「本屋行っておすすめスポットとか店とかの本を買えるだけ買ったなー……エロ本以外で本で金使うの初めてだった。あとめっちゃくちゃ恥ずかしかった……」
「えー、エッチな本を買うのは平気なのに？」
「慣れていないとそういうもんなの」
すらすらと当時の思い出が言葉となって出て来た。一誠が悪魔に転生して以降誰に

も話した事が無い内容である。
「柄にも無くデート場所の下調べもしたな。色んな場所を歩き回ってメモしたり」
「予行練習を一杯した割には当日は緊張でガチガチだったじゃない」
「練習は練習、本番とは違うんだよ」
　当時のことを思い出しただけでも恥ずかしくなってくると同時に今ならもっとましなデートが出来るのでは、という思いも出て来る。
「根拠の無い自信ねー」
「うるせぇ」
　夕麻に時折茶化されながら過去を振り返る一誠。忘れたい過去の筈なのに今でも鮮明に思い出せる。それがどうしてなのか、一誠も気付いている。
　ウィンドウショッピングをしたり、部屋に飾る小物を買ったり、今思い返せば一誠を揶揄う為に起こした夕麻のハプニングを対処したりなど思っていた以上に語れる。
「そして、俺は……夕日が見えるあの公園で……君に……君に殺されて悪魔に転生したんだ……」
「……良く最後まで言えたね」
　人生の絶頂であった初デートの日は同時に人間・兵藤一誠の命日。苦く辛い思い出を最後まで語った一誠に夕麻は優しく褒める。

「夕麻ちゃん……」
　夕麻の体は殆ど消えていた。足は無くなり、片腕も無く、体も虫食いのように穴だらけになっている。一誠が思い出を振り返る度に夕麻の体は削られるようにして消えていっていた。
「お、俺……俺は……」
「なぁに？」
　何度も言葉を詰まらせながら何かを言おうとする一誠を夕麻は急かすことなく待つ。
「俺は……！」
　一誠は気付けば双眸から涙を流していた。
「俺は楽しかったんだ……！　あのとき、本当に、心の底から……！　君とのデートが楽しかった……！　全部……嘘だったとしても……あの日、あの瞬間の思いだけは消えないんだ……！」
　全てはレイナーレが一誠を抹殺する為の演技に過ぎない。しかし、それが分かっていてもデートの為に一生懸命に考えたこと、夕麻とデートしたことが楽しかったと心に刻まれてしまっていた。その思いは一誠にとって罪悪感に等しい。
「女の子が怖くなった……そして、同時に思った……こんな節穴の俺が女性と付き合う資格があるのかって……」

騙されていたとはいえ外道を好きになってしまった負い目。そんな自分を嫌う一誠。
「でも……俺のことを好きだって言ってくれる人たちがいたんだ……俺のことを……！」
こんな俺を、とは口が裂けても言わない。自分を下げることは彼女たちを下げることにも繋がる。だから、それに見合うだろう立派な男になろうと思った。
「冥界の子供たちも、おっぱいドラゴン、おっぱいドラゴンって言って慕ってくれる……俺は――」
「自分のことが好きになれたんだね」
過去に負った二つの傷が癒されだし、一誠はようやく前へ進み出せる。
「夕麻ちゃん……俺、好きな人が出来た」
「そう。じゃあ、想いを伝えないとね」
一誠は涙を拭い、頷く。夕麻から色と輪郭が失われていく。
「あーあ。こうやってイッセー君と会えるのは最後かー。最後くらいお別れのハグくらいする？」
「俺と君はそんな関係じゃないでしょ？」
一誠は苦笑し、抱擁の代わりに手を差し出す。夕麻はその手を見て一誠に告白したときのような可愛らしい笑みと共にその手を掴んで握手を交わした。

「……さよなら、夕麻ちゃん」
「さよなら、イッセー君」
夕麻の姿が見えなくなる。消えたのではない一誠の心の中に還ったのだ。一誠にとって忘れることのない出来ないトラウマであると同時に青春の記憶。一誠はそれを完全に受け入れた。
一誠を中心にして周りの空間がテクスチャー剥がれるように消えていく。中核となっていた夕麻が居なくなったことでこのベッドルームも必要無くなったのだ。
ベッドルームの外は白い世界。神器の内部にある歴代赤龍帝の残留思念が宿る場所。
見れば歴代の赤龍帝たちが座って一誠を無言で見つめている。
「――お願いがあります」
一誠は歴代の赤龍帝たちに頭を下げた。
「俺に力を貸して下さい！」
サイラオーグは強い。今のままでは勝てない。勝てる方法があるとしたら歴代の赤龍帝たちの力を借りることしか思いつかなかった。
『……覇龍』
「え？」
『覇龍だ……』

『覇龍を使え……』

呪詛めいた言葉を吐きながら歴代の赤龍帝たちの体から黒いオーラが立ち昇り、それが一誠へ伸びていく。

黒いオーラから感じられるのは負の思念。恨み、憎しみや力を欲する哀叫。志半ばで倒れていった積み重なった無念。

どす黒い感情の塊が一誠を侵す為に彼を呑み込む――

「そんなのでサイラオーグさんに勝てる訳ないでしょ」

――ことなく弾かれてしまう。あまりに簡単に弾かれたことに歴代の赤龍帝たちは不気味な笑みを一転させ、驚きに変えた。

「えーと……新参者の俺が生意気を言うかもしれませんが、俺が欲しいのはこんな力じゃないんです。こんな過去に囚われたもの要りません」

歴代の赤龍帝たちが殺気を膨らませるが、一誠は怯まず、歴代の赤龍帝たちに向けて左手を差し伸べる。

「俺と一緒に未来へ進みませんか？」

赫龍、再現

一誠の言葉を受けて、歴代の赤龍帝たちの残留思念が見せた反応は二通り。動揺と反発である。

中立寄りの考えを持っている残留思念たちは、共に歩もうと手を差し伸べてきた一誠を見てざわめき、どうするべきか互いを見合っている。

一方で過激な思考を持つ残留思念たちは負の感情を昂らせ、黒いオーラを燃やすように立ち昇らせている。

『覇龍だ。覇龍しかない』

『覇龍による破壊。それこそが唯一の道』

『覇道の力、それ以外があるものか』

一誠に是が非でも『覇龍』を使わせようと黒いオーラを飛ばし、再度一誠を取り込もうとする。

どす黒い感情の塊に身構える一誠であったが、何処からか飛んで来た三つの光――赤が二つ、白が一つ――が一誠をどす黒いオーラから守る。

「これは……！」

赤い二つの光が人の姿へと変わる。一誠はその人物らを知っていた。
「エルシャさん！　ベルザードさん！」
「来たよ、おっぱいドラゴン君」
歴代でも最強と名高い元赤龍帝の二人、エルシャとベルザード。エルシャは親しみやすい笑顔を一誠に向け、手を振る。ベルザードは無表情のまま口笛を吹く。吹いているのは前と変わらずにおっぱいドラゴンの歌であった。
「どうしてここに……？」
「そりゃあ、来るでしょう？　君がまた凄いことをやろうとしているんだから。私たち、貴方のことを気に入っているの。先代らしく最後くらいは後代のお手伝いしないとね」
「最後……？」
エルシャの最後という言葉が気になり、その意味を問う。
「最後ってどういうことですか？　エルシャさん」
「そのままの意味よ。私とベルザードは逝こうと思っているの」
エルシャの言葉にベルザードが頷いて同意を示す。
「逝くって……居なくなっちゃうってことですか……？」
「そういうこと。私たちは未練を残して死んだ残留思念。その未練で自分たちを神器の中に縛り付けていたけど、そろそろ自分を解放するときね」

突然別れを告げられ、一誠はどうしていいのか困ってしまう。そんな一誠の表情を見てエルシャはクスリと笑った。
「そんな顔をしないで。私たちは元々死んでいるのよ。ここに居る私たちは、私たちだった者の記憶の断片に過ぎない。魂ですらない存在よ。不自然なものが在るべき場所へ還るだけのこと」
そこに悲壮感は無く、解放されることを当然ように受け止めており、その表情には爽やかさを感じる。
「そう。来るべき時が来ただけのこと。貴方に自分を託して先に逝った彼のように。寧ろ、私たちは驚いているのよ。未練だった私たちがこんな気持ちで逝けることを」
神器にしがみつくような未練はあった。だが、所詮は本体から零れ落ちた想いの残滓。幾ら未練を晴らしたとしてもそれが死した自分に届くことなど決してない。しかし、そんなときに現れたのだ。歴代でも特に変わり者の赤龍帝が。
資質は今まで見た中でも最低と言うべきだった。『赤龍帝の籠手』に宿る残留思念たちは、一誠などすぐに死んで別の持ち主に移ると思っていた。だが、思いの外一誠はしぶとかった。
人間としての命を奪った堕天使にリベンジし、制約有りだが禁手によりフェニックスを倒し、名を広く知られているコカビエルを倒し、歴代最強と謳われ、奇跡を体現した

かのような白龍皇ヴァーリを撃退した。
神器の中でそれらを見ていた残留思念の中に一誠に強い興味を持つ者が現れ始める。それがエルシャとベルザードであった。
彼女たちの一誠に期待をしていた。そして、一誠は彼女たちの期待に応えた。そして、気付けば『赤龍帝の三叉成駒』などという未知なる力すら『赤龍帝の籠手』から引き出してみせた。
そんな彼に『覇龍』などという覇道の力は不要。一誠は誰とも違う道を辿っている赤龍帝。
「こんな頼もしくも面白くて、何をするか全く分からない赤龍帝がどんな道を進んでいくのか見たくない？　私は見たい！」
エルシャの言葉に残留思念の何体かがフラフラと一誠たちの方へ歩み寄って来る。彼らもまた一誠の活躍に心惹かれていた者たち。エルシャの言葉に決心がつき、一誠の力になる為に来てくれた。
一誠の周りが少し賑やかになる。
『否、否。天龍とは覇王。それが在るべき道程。それ以外は有り得ない』
『覇王、覇龍こそがこの神器に組み込まれた本来の姿』
それでも頑なに一誠のことを認めようとしない残留思念も存在する。

「俺は覇王になんかなりません！」
『成るのだ、覇王に！　覇龍に！』
『覇龍による破壊を！　破壊を！』
「だから！」
呪詛、呪怨を撒き散らす残留思念につられて一誠もヒートアップしていく。語気が強まり、このまま怒声が飛ぶかと思ったとき――
「まあまあ、落ち着いてくれ」
――柔らかな声と共に一誠の肩に手が置かれた。
「あ、貴方は……？」
感情が昂った一誠を宥めたのは白い光を纏った男性。エルシャとベルザードと共に一誠をどす黒い情念から守ってくれた白い光が人の姿となったもの。
白い光の男性を見たとき、残留思念の一人が突如として激昂する。
『貴様っ！』
並々ならぬ感情の昂ぶり。因縁のある間柄なのがすぐに分かる。
「初めまして赤龍帝。僕は歴代白龍皇の一人だ」
思いもよらない存在の登場に一誠は驚く。
「何で歴代白龍皇がここに……あっ」

「気付いたようだね」
敵対関係にある筈の白龍皇の残留思念がここに居る理由は一つしかない。
『君がヴァーリと戦ったときに彼から奪った宝玉を『赤龍帝の籠手』に填め込んだ。そのときの宝玉に僕の残留思念の一部が入っていたんだ。本来の僕はまだ『白龍皇の光翼』の方にいるだろうけどね』
残留思念の分霊とも言うべき存在。それが今ここに居る白龍皇の正体。
『馬鹿な……！　今まで気付かなかったとは……！』
赤龍帝の神器の中に宿敵である白龍皇が混じっていたことに驚くと同時に今までその存在を察知出来なかったことに戸惑う赤龍帝の残留思念。
「それは、私たちが隠してたから。そうよね？　ベルザード」
あっさりと種明かしをするエルシャ。ベルザードも首を縦に振る。
『なっ!?』
赤龍帝が白龍皇を隠していたことに驚愕する。
「正直、僕も驚いた。ここに来て間もない頃に二人に見つけられ、神器のより深い所へ匿われたのだから。歴代でも最強と名高い二人だ。会った瞬間に消滅させられていてもおかしくはなかった」
そして、今日まで他の残留思念たちに見つかることなく隠し続けられた。

「戦うことはあっても恨みを持ったことは無かったから」
　エルシャが言うとベルザードも頷く。ライバルであったことは間違いないが、それでも敬意を払うべき宿敵。時と場合によっては手を貸してもおかしくはなかった。
『白龍皇オオオオ！』
　敗れた記憶がある残留思念たちの怨念が魔手となって一誠たちに襲い掛かろうとする。しかし、歴代白龍皇が淡い白銀の光を空間に広げていく。途端に怨念のオーラは縮小して勢いを失った。
「赤龍帝。僕の半減の力で彼らに渦巻くものを抑えよう。その間に君がすべきことをするんだ」
　援護してくれることに一誠は驚きと戸惑いを隠せない。
「いいのか？　俺は赤龍帝であんたは白龍皇。それにヴァーリでもないし……」
「僕の立場としてこんなことを言っても良いか分からないが、僕は貴方を気に入っているんだ――面白いしね」
「お、面白い？」
「ああ。君の熱意と可笑しさは他の赤龍帝たちには無い。君の中で見ていて、こう思ったよ。君なら二天龍を新たな可能性に導けるかもしれない、と」
　歴代白龍皇が光を強める。黒い怨念が押されていく。だが、それに反して歴代白龍皇

の体が薄くなっていく。彼は残留思念の欠片。力を使用すればその分存在が消費される。
「体が……」
「是非とも見たいものだね。ヴァーリ・ルシファーと君が成る新たなドラゴンを」
そう言い残し、歴代白龍皇の残留思念は白銀の光そのものと化す。空間全体に光が行き届くことで負の力が完全に抑えつけられた。
『我らの憎しみ、恨みを封じるかっ！』
『天龍は哀しみへの道！　それ以外に道は無しっ！』
頑なに抵抗をする過去の残留思念。一誠はそれを疎ましくは思わなかった。彼らもまた彼らの信念を全うし、心半ばで挫折し未練を残した先輩たち。一誠はまだ運良くそうなってはいない。自分と彼らの差は紙一重のものだと理解していた。
「――それでも、だ」
先代たちの無念や悲しみを理解しても、否、理解しているからこそ同じ道を歩むことはしない。
「俺は俺が歩く道がもう見えているんです」
宣言する一誠。そのとき、白い空間に声がこだまする。それも一つではなく無数の、小さな子供たちの声であった。

『おっぱいドラゴーン！』
『やだよー！　立ってよー！　おっぱいドラゴン！』
『負けちゃやだよー！』
サイラオーグの一撃により動かなくなった一誠を見て悲痛な声を上げる冥界の子供たち。
『皆、こういうときは泣いちゃダメよ』
そんな子供たちを宥めるのは落ち着いた声――イリナの声であった。
『大丈夫。イッセー君――おっぱいドラゴンはきっと立ち上がってくれるから。そして、どんな強敵も倒してくれる。だから、応援しよう！　信じよう！　おっぱいドラゴンを！　皆のヒーローなんだから！』
イリナの声は微かに震えていた。顔が見えなくとも分かる。子供たちを安心させる為に涙を押し込んで子供たちに笑顔を見せている姿が。
誰かが応援を送る。一人が送ると連鎖して別の誰かが応援する。それが繰り返され、やがて子供の泣き声は無くなり、盛大な応援へと変わっていた。
『おっぱい！　おっぱい！　おっぱい！』
その声は確かに一誠へ届いていた。
「あはははは！」

子供たちの応援にエルシャは声を上げて笑い、ベルザードも微笑を見せる。
「こんな風に応援される日がくるとはね……まあ、掛け声は私が思っていたものとはちょっと違うけど、でもまあ、これが今の君には相応しいんでしょうね」
おっぱいドラゴンのコールに心底愉快そうに笑う。すると、エルシャの体が歴代白龍皇と同じく薄れていることに気付いた。隣にいるベルザードも同じ事が起こっている。
「エルシャさん！　ベルザードさんも！」
「ああ、気にしないで。来るべき時が来たってだけ。新しい赤龍帝の可能性が見られて私たちは満足しているわ」
何一つ未練を感じさせない表情。出会いと別れまでの間を時間にすれば短いものだろう。しかし、彼女たちから与えられたものは時間など関係無く大きい。
「じゃあね、変わり者の赤龍帝君」
エルシャはそう言うと人の姿ではなくなり、赤い光となって一誠の体へ吸い込まれる。
「エルシャさん……」
偉大なる先輩との別れに寂しさを感じる一誠。
「赤龍帝」
名を呼ばれて声の方を見る。そこにはベルザード。初めて彼の声を聞いた。

「――ポチっと、ポチっと、ずむずむいやーん」
人差し指を突き出しながらそんなことを言う。
「へっ？」
それがおっぱいドラゴンの歌の歌詞の一部だと理解したとき、一誠は思わず吹き出してしまった。真面目な顔をしていきなりそんなことを言われたら無理も無い。
すると、ベルザードは笑う一誠の顔を見て満足そうに頷くとエルシャと同じく赤い光となり一誠の体に飛び込んだ。
「ベルザードさん……」
最初で最後の会話、にしては破天荒なものであったがベルザードなりに一誠との別れを湿っぽくしない為の気遣いだったのかもしれない。或いは最期の言葉にするぐらいおっぱいドラゴンの歌を気に入っていた可能性もある。ずっと口笛を吹いていたので。
二人が取り込まれるのを見て、一誠の味方になってくれた残留思念もまたその形を崩して一誠へ自らを吸収させる。
歴代の中でも最強と誉れ高い二人、そして先代たちの想いを取り込んだことで空間内の黒いオーラは残留思念共々捻じ伏せられようとしていた。
『認めん……！　このようなこと決して認めん……！』
空間内での支配者は実質一誠だが、それを認めずに歴代赤龍帝の残留思念は最後の抵

抗と言わんばかりに覇龍の呪文を口にし出す。
『我、目覚めるは覇の理を奪いし、二天龍なり――』
一誠はそれを止めることはしない。先代の無念を受け止める覚悟で好きにさせる。
『無限を嗤い、夢幻を憂う――』
ありったけの想いが込められた呪文を聞きながら一誠は白い空間内の天を見上げた。白一色に染まった空間の筈だが、彼方に点のようにして見える紅の光が見える。
『我、赤き龍の覇王と成りて――』
その色が誰の色なのか知っている。鮮やかな紅。一誠が好きな、愛した紅。光を見た一誠は大好きな彼女の――リアス・グレモリーの温もりが体を包んでいることに気付く。現実世界で今にも意識が完全に断たれそうになっている自分を抱き締めてくれているのが見えなくとも分かった。この温もりと紅の色が一誠の意識が断たれるのを引き留めていてくれる。
『汝を紅蓮の煉獄に沈めよう――ッ！』
覇龍の呪文が紡がれたが、変化は起きない。
『何故だ！　何故覇龍にならん！』
『どうしてだ！　何故なんだ！』
覇龍に至らない一誠を信じられない様子の残留思念たち。

起る筈が無い。至る筈が無い。
「俺はリアス・グレモリーの前で無様を晒す訳にはいかないんだよっ！」
一誠の一喝は漂っていたどす黒いオーラを全て吹き飛ばす。執念の象徴とも言うべき負のオーラを消し飛ばされた残留思念たちは認めざるを得なかった。現赤龍帝である一誠は最早自分たちの意に沿うことはないと。
一誠は覇を唱えていた残留思念たちの許へ行く。このまま消されることを覚悟していた彼らであったが、一誠はまたも彼らにとって予想外のことをする。
あと一歩という距離で足を止め、一誠は彼らに向けて手を差し出したのだ。
『何の……つもりだ……？』
「俺は、あんたたち先輩方のような生き方はしない。というか出来ない。おっぱいドラゴンとか乳龍帝とか呼ばれて、子供たちのヒーローになりたいのが俺なんだ」
一誠は彼らが望んだ道を歩むつもりはない。だが――
「あんたたちは、恨みや憎しみや悲しみで深く傷付いた果てに覇龍に手を出したんだと思う。それを理解出来るなんて分かったようなことを言うつもりもない。でも、一つだけ言えることがある！」
一誠は残留思念の一体の手を掴んだ。
「先輩たちのおかげで今に繋がっているんだ！　先輩たちが色んなものを背負ってくれ

たから今の俺がここに居るんだ！　あんたたちだって未来を創ることが出来るんだっ！」

両手で残留思念の手を覆い、感謝の気持ちを言葉にする。今言った言葉に何一つ嘘はない。それは残留思念たちにも伝わっており、一誠の感謝に戸惑いを覚えている。

『私たちのおかげ……？』

『未来を創る……』

残留思念たちの体から負の感情が消えていき、清廉なオーラが湧き立ち始める。

「そうだ！　俺と共に新しい未来を創って一緒に見よう！　そんで皆に見せてやろうぜ！　仲間に！　友に！　好きな女に！　子供たちに！」

一誠の熱意が伝播していく。黒かったオーラは赤へと変わり、赤龍帝としてあるべきものへ戻っていく。

「行こうぜ一緒に！　俺が！　兵藤一誠がっ！　全部背負って連れて行ってやる！」

空間内全てに響くような一誠の声。

残留思念たちは、その言葉を信じ、赤い光となって残された力を一誠に委ねる。これにより歴代赤龍帝の残留思念たちは全て一誠に力を貸すこととなった。

一人となった一誠は、誓いを果たす為に新たなる呪文を唱える。

「我、目覚めるは覇の理を捨て去りし赤龍帝なり！」

覇龍ではなく赤龍帝として戦う覚悟。
「無限の希望と夢を胸に抱え、王道を往く！」
悲しみや憎しみではなく希望と夢の為に覇道ではなく王道を進む。
「我、紅き龍の王者と成りて――」
惚れた女性の色である紅。それを掲げるのに相応しい男になりたいという想い。
「汝らに誓おうっ！　真紅の光輝く未来を見せると！」
先人たちの為に見たこともない未来を見せることを宣言する。
頭上に輝く紅の光が一際強く輝き、その下に立つ一誠を照らすと――

◇

誰もが終わったと確信させるサイラオーグの一撃が、一誠に打ち込まれた瞬間、リアスは走り出していた。
攻撃を終えたサイラオーグは掴んでいた手を離し、一誠から離れる。一秒、二秒と変化は起こらなかったが、三秒が過ぎた時点で一誠の口から血塊が吐き出され、その体が崩れ落ちる。
リアスは倒れそうになる一誠の体を後ろから抱き締めて支えた。

冥界の子供たちは倒れそうになる一誠の姿に泣きそうになるが、すぐにイリナの励ましにより泣き声を声援に変える。

サイラオーグは拳を握ったままリアスと一誠を見ている。無防備なリアスを倒せばこのレーティングゲームはサイラオーグの勝利で終わる。しかし、サイラオーグは限界まで待っていた。

まだ一誠の『リタイヤ』は宣言されていない。一誠がリタイヤし、このバトルフィールドから消える瞬間まで彼が立ち上がってくることを願う。

「兵藤一誠。ここで終わりか？　このまま終わるのか？　それがお前の限界だというのならそれも良いだろう……だが、もし、この戦いに於いて僅かでも悔いが残っているのなら立ち上がってみせろっ！　お前の想いを全て出し切れ！　俺はまだ全力を出し尽してはいないぞっ！」

サイラオーグからの檄が飛ぶ。本来ならあるまじき行為ではあるが、それを咎める者はいない。何故ならばこの場にいる誰もが一誠が立ち上がることを望んでいるからだ。

そして、それは遠く離れた地でも同じ。

「けっ。つまんねぇもん見せてんじゃねぇぞ」

映像に映る一誠を見て、マダは不機嫌そうに言う。

「師匠の前で弟子が恥晒すな。とっとと立って、とっととやっちまえ」

厳しいながらもマダなりの情を込めた言葉。
「……仮にも朱乃の想い人ならばその程度で倒れるな。それでは娘はやれん」
渋々という態度でありながらも一誠を信じるバラキエル。
「君は応援しないのかい？」
鳶雄は隣にいるシンへ話し掛ける。ほぼ無言で映像を見ているシンに対し、画面に映っている一誠に何か言うことはないのか訊ねる。二人の関係の詳細を知らないが、鳶雄は何となくではあるがシンと一誠が友人関係であると思っていた。映像を見るシンの顔は無表情だが、向けている目には確かに感情の色が宿っているからだ。
「……ここで言っても届かないですよ」
シンはあくまでも現実的な態度であった。シンの言う通りここであれこれ言ったとして何かが起こるとは限らない。
「どうかな？　神滅具なら意外と何とかなるかもしれないよ？」
超常的な力を持つ神滅具ならば常識を打ち壊す現象を起こしてもおかしくはない。神滅具所持者である鳶雄が言うと説得力が生まれる。
「――騒ぐのは柄じゃないので」
それでも冷めた態度を崩さないシン。薄情なのかと鳶雄は思ってしまう。
「心配じゃないのかい？」

ほぼ意識を失っている一誠のことは心配ではないのか訊くと、シンは首を横に振る。
「別に」
次に続く言葉を聞いたとき、鳶雄は思い違いをしていたことを知る。シンは薄情なのではなく――
「――ここからあいつはしつこいですから」
――最初から友人のことを信じているのだと。
鳶雄は現赤龍帝である一誠のことを殆ど知らない。アザゼルから名前のみ聞かされている程度である。だから、どんな相手であるかこの映像を通じて少しでも知ろうと思った。
距離など関係無く皆から想われている一誠。その中で一際強く想うのは未だに目を閉じる彼を抱き締めているリアス。
目覚めて欲しいと思いながらも同時にこれ以上傷ついてほしくないとも思っていた。だが、リアスは分かっていた。一誠は最後まで諦めないことを。サイラオーグとの戦いを最後までやり切ることを。
そんな彼女に残されたことは一つしかない。
「大丈夫よ、イッセー……私が貴方を守るから」
一誠が再び立ち上がるそのときまで彼を守ること。主としてではなく彼を愛する女

として。

「――いいえ、俺が貴女を守ります」

抱き締めているリアスの手に暖かな感触が重なる。意識を取り戻した一誠の手がリアスの手に重ねられていた。

すると、リアスの体が紅の光が放たれる。意識せずにそれが出ているのかリアスは自分の変化に驚いていた。紅の光はリアスを通じて一誠へ伝わっていく。

一誠の全身が紅の光に包まれると鎧の形状が通常時とは異なる作りになり、鎧の色も赤からより濃い色――鮮やかな紅に変わる。

「イッセー……その姿は……」

色と形を変えた一誠の鎧にリアスは目を丸くする。鎧が変質すると同時に破損していた箇所も修復されており、一誠も復活した兜の下でリアスと同じような表情をしている。

『おおっと！　赤龍帝が奇跡の復活を遂げたと思えば、紅いオーラに包まれて鎧を変質させたぁぁぁ！　このダブル奇跡！　スイッチ姫の胸の加護が為すものなのかぁぁぁぁ！』

実況がテンションを上げて一誠の復活を讃える。

『赤いオーラ……いや、紅のオーラか？　何とまあ『紅髪の魔王』の色を纏っちまってや

がる。うん、というか十中八九リアスをイメージした色だな、あれは』

アザゼルは一誠の変化に呆れと感心を混ぜ合わせた表情をしていた。一方で隣に座るディハウザーは少々複雑な表情をしている。九十九パーセント、サイラオーグの勝利で終わるかと思われたレーティングゲームが土壇場で奇跡を起こされ、予断を許されない状況までひっくり返された。サイラオーグのアドバイザーを務めているディハウザーからすれば、このような奇跡などたまったものではないだろう。しかし、同時に新たな力に目覚めた一誠と禁手と本気を出したサイラオーグとの全力の戦いを見たいと思っている。このような戦いはレーティングゲーム史で唯一無二の戦いなのは間違いなかった。

『相棒！』

今まで聞こえなかったドライグの声が聞こえる。

『俺の声が届かなくなったときは、流石に終わったかと思ったぞ。しかし、一体何があった？　お前が意識を失い掛け、復活したときに神器の内部にある残留思念たちの執念が殆ど消失したぞ？』

ドライグは一誠の意識が神器の内部に入り込んでいたことまでは分かったが、歴代赤龍帝の怨念によりドライグは意識を内部に送ることが出来なかった。それ故に怨念を浄化させたであろう一誠の行動に驚く。

「詳しいことはサイラオーグさんとの戦いの後で話す」
『確かに悠長に話している場合ではないな。――相棒、気付いているか？　お前は赤龍帝の力を解放した状態で『女王』に昇格しているぞ』
ドライグに言われて一誠は気付く。いつの間にかプロモーションして『女王』に昇格していることに。しかも、『赤龍帝の三叉成駒』と同じく『女王』と融合して特化された形態になっている。今まで不可能であったが、歴代赤龍帝たちの残留思念が一誠を押し上げてくれたことで成れた。
「――『真紅（カーディナル）の赫龍帝（クリムゾン・プロポーション）』と言ったところか」
サイラオーグは一誠の新たな姿に名を与える。
「良いですね、その名前。使わせて貰います」
一誠は与えられた名を気に入り、今後はそう称することを決めた。何よりも尊敬すべきサイラオーグが付けてくれたことが嬉しかった。
「――よく耐えた。そして、より強くなって俺の前に立ってお前は尊敬に値する」
「……敵に送る言葉じゃないですね」
「そうだな。だが、遂本音がな……」
復活して強くなった一誠のことを純粋に喜ぶサイラオーグ。一誠もサイラオーグに禁手を使うよう促したので人のことを言えない。

サイラオーグは改めて一誠の鎧を見る。
「赤ではなく紅。それはサーゼクス様と全く同じもの。お前の場合はリアスの髪の色の方が馴染み深いか」
すると、一誠は何故か兜を収納し素顔を晒す。
「惚れた女のイメージカラーだ」
リアスは一誠が何を言ったのか一瞬理解が出来ず固まってしまうが、言葉の意味が脳に染み込むと顔を真っ赤に染める。サイラオーグも一誠の突然の告白に目を丸くしていた。
言った。言ってしまった。後悔も後戻りもしない。一度箍が外れてしまえば、今まで溜め込んできた想いを伝えるのみ。
「……部長、リアス・グレモリーは俺が惚れた女だ。だからこそ、守りたいし勝たせたいし、彼女の為に戦いたい！　俺は――俺はっ！」
気付けば誰もが聞き入っており、次に続く言葉を固唾を呑んで待っている。
「俺は、俺を求める冥界の子供たちと惚れた女に恥じない男になる！　俺の夢！　子供たちの夢！　リアス・グレモリーの夢の為にこれからも戦い続ける！　リアス・グレモリー！　俺は貴女が大好きだぁぁぁぁ！」
ありったけの想いを込めた一世一代の告白が会場に響き渡る。観客の反応は様々な

もので、大勢の前で告白した一誠に拍手を送る者。まるで自分が告白されたかのように顔を真っ赤にする者。琴線に触れ、かつての恋を思い出して遠くを見つめる者等々。
　アザゼルは一誠の告白に苦笑し、サーゼクスは微笑を浮かべていた。
　そして、サイラオーグは――
「ははははははは」
　――一誠の告白を聞いて豪快に笑う。馬鹿にしている様子は無く、感心しているようであった。
「本当におっぱいドラゴンとスイッチ姫は切っても切れない仲のようだ。羨望を覚える。俺もそれぐらいの恋をしてみたいと思えるぐらいにな」
「サイラオーグさんなら絶対に良い人が見つかります」
「そう褒めてくれるな。照れて手加減してしまいそうになる」
「サイラオーグさんも冗談を言うんですね」
「ふっ」
　軽口を言い合いながら一誠は収納していた兜を展開する。
「リアスの夢、お前の夢を叶えるにはまずやるべきことがあるな」
「ええ。貴方を倒す。そうじゃなきゃ先には進めない」
「そうだ、それでいい。俺もまたお前たちを打ち倒し、我が夢の糧とするっ！」

刹那、一誠は莫大な紅いオーラを纏い、神速の踏み込みで前へ出る。トリアイナの『騎士』にも勝るとも劣らない速度。だが、サイラオーグは既にその動きを知っている。一誠の速さはサイラオーグにとって捉えられる範囲のものであった。

突っ込んでくる一誠にサイラオーグは拳で迎え撃つ。『獅子王の剛皮』を纏わせた突きは、自身が放つ輝きすらも置いて行きそうな拳速であった。

一誠の速さを上回るサイラオーグの突きが迫るが――

『Ｓｔａｒ　Ｓｏｎｉｃ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』

一誠の速度がそこからもう一段階上がり、サイラオーグの突きを紙一重で躱すと懐に入り込む。

『Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』

音すら追い付けない拳打の嵐がサイラオーグの胴体に炸裂した。

『戦車』と同格以上の力を、『騎士』と同格以上の速度に乗せて繰り出す。兎に角がむしゃらに打ち込み、サイラオーグが一動作する間に数十発の拳を叩き込む。

サイラオーグは拳打の豪雨を浴びながらも拳を繰り出す体勢に入っていく。生身だったなら怯んでいただろうが、鎧を纏っていることで耐久性が格段に上昇している。

サイラオーグが拳を打つと分かった瞬間、一誠はサイラオーグの右肩辺りに拳を先に打ち込んだ。直後にそれを跳ね除けるようにしてサイラオーグが反撃の拳を打ち出す。

一誠はこれをダッキングのような動作で躱した。通常時ならば反応出来なかったかもしれないが、事前に肩を打ったことでサイラオーグの拳のキレを若干だが鈍らせたので躱せられた。

サイラオーグがすかさず二撃目を放とうとしたので一誠は両手でサイラオーグの胴体に触れる。

『Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』

密着状態で予備動作無しの衝撃がサイラオーグを突き飛ばした。双掌打のような形の一誠の攻撃だったが、サイラオーグは百メートル近く飛ばされたが普通に着地をする。ダメージの方は薄いが、一誠の方も距離を取る為の攻撃だったので動揺はしない。

（やっぱすげぇな……）

『女王』にプロポーションしてやっと互角に戦えている。改めてサイラオーグの力を実感させられた。

『いや、まだ俺たちの状態も安定していない。脱皮直後の蟹みたいなものだ。無理をすると本体に膨大なダメージが伝わるぞ』

一見すると強くはなっているが、実際は不安定な土台の上で成り立っていることを告げる。目覚めたばかりの力を完全に使いこなす、という美味い話は無い。

『それに、相棒の体も万全じゃない……今でも結構きているだろ？』

ドライグの指摘は正しい。サイラオーグの一撃で瀕死になり、神器の中の歴代赤龍帝の残留思念たちに力を借りて復活することは出来たが、一誠の負ったダメージが完全回復した訳ではない。今もサイラオーグの拳の衝撃が体の芯で痛みとなって残っている。

サイラオーグの一撃を受けたら一誠に次は無い。故に初っ端から最大速度で動き、サイラオーグの攻撃が当たらないようにしていた。

『ここは無理や無茶はせず、戦い方を――』

（いや、無理も無茶をしなきゃ勝てない！）

『おい！』

言うことを聞かない一誠にドライグは声を荒げるが、一誠の考えは既に決まっていた。

（後ろに惚れた女が居て、前には尊敬すべき敵が居る……そんな状況で無様なことなんて出来ない！）

見守っていてくれているリアスに。真正面から戦ってくれるサイラオーグに恥じない姿を見せたい。その為ならば無理も無茶もする。それが一誠の答え。

『力が……』

紅のオーラの量が増える。一誠の想いに神滅具が反応し、力を引き出している。皮肉なことに退くという選択をしなかったことで強さが増す。仮に退いて戦うことを選ん

でいたらこうはならなかったであろう。
『――全く、お前は本当に放っておけない奴だよ、相棒』
（ごめんな、ドライグ）
『おかげで退屈とは無縁だ』
　呆れながら言った言葉には皮肉と本音を混ぜられているように聞こえた。
『だが、無茶や無理をするにしてもどうする？　生半可な攻撃は効かんぞ？』
　ドライグの言う通りであった。サイラオーグは自身が纏う闘気と神器の鎧という二重の守りで固めている。『戦車』と『騎士』の合わせ技による連打も装甲を凹ませる程度でしかない。しかも、装甲の方は時間経過で修復されている。
『攻撃するにもさっき以上の攻撃じゃないと意味が無い。そんな手段はあるのか？』
　ドライグの問いに一誠はすぐには答えられなかった。
（『戦車』級でもあの鎧を通すには力が足りない……それこそサイラオーグさんぐらいのパワーがなきゃ。俺にはそんな力は――）
　その時であった。一誠の頭の中で雷鳴が鳴り響く。
（ある……！　あった！）
　それは今までの一誠だったなら不可能だった。しかし、覚醒し新たな力を手に入れた今の一誠ならば可能。

あのときの感覚を思い出しながら全身のオーラを左腕にのみ集中。膨大なオーラが限定された箇所に集められることで許容範囲を超えてしまい、左腕が沸騰するような苦痛に襲われる。

「ぐっ、ぐぅぅぅ!」

だが、それで良かった。力を託されたときと同じ痛み。思い描いたイメージが再現され、鎧の中で眠るあの力が呼び起こされている証。

オーラの過剰供給により一誠の左腕が一回り以上太く、大きくなっていく。それに伴いバチバチと音を立てながら紅い雷が放電され始める。

一誠が異常なことをしているのはサイラオーグも分かっていた。何をするのか見たいという思いもあるが、これは戦い。大きな隙を晒している一誠に向かってサイラオーグは踏み込み、弾丸の如き跳躍で距離を詰める。

痛みが最高潮に達する。頭の中で雷の音が鳴り響き続ける。視界の端でサイラオーグが来ているのが見えたとき、一誠はその力を解き放った。

「――なっ!?」

サイラオーグの視界から一誠が消えたかと思えば、轟音と紅雷と共にサイラオーグの懐へ入っていた。さっきよりも圧倒的に速い。まさに雷の如き速さ。

再現するのは雷神の剛力。ロキ打倒の為に託されたトールの力。鎧に刻まれた雷神

の力を復活させる。
「うおりゃあああああっ！」
一誠の左腕が雷の速度で突き出される。サイラオーグはその突きに反応出来ず、胴体に拳を受けてしまう。
直撃と同時に鳴る雷鳴。サイラオーグが受けた剛腕の一撃は、今までの経験の中で味わったことのないものであった。

紅拳、王拳

打ち込まれた衝撃は、文字通り言葉にすることが出来ないものであった。サイラオーグはその場で膝を突き、口から血塊を吐き出して地面を赤く染める。

観客席からどよめきや中には悲鳴を上げる者も居た。若手悪魔ナンバー1のサイラオーグが両膝を突いて血を吐き続ける光景はそれ程までに衝撃的なものであったからだ。

観客が深刻なダメージかと心配する中――

（この程度で……済んだのか……日頃の……鍛錬の成果が……出たな……！）

サイラオーグは、血を吐く程度で済んだと寧ろ真逆のことを思っていた。

一誠が繰り出した強化された左腕の一撃は、サイラオーグが生きてきた中でも最も強烈で、最も重い一撃であった。衝撃で体の中の血が血管内で逆流を起こし、骨の芯まで響き、内臓が潰れるような感覚。血を吐く程度と思ったのは、口から内臓を吐き出してもおかくしない拳であったからだ。

サイラオーグもまさか先程の一撃が雷神トールの剛力を瞬間的だが再現したものとは夢にも思わないだろう。

ダメージを軽減出来たのはサイラオーグが纏う闘気と鎧、そして鍛えられた肉体のおかげ。今日ほど鍛錬を積み重ねて良かったと思った日はない。

サイラオーグが雷神の剛撃に苦しむ中で彼と同じ痛みを経験している者も居た。

『ぐ、おおお……何という……力だ……！』

サイラオーグが纏う『獅子王の剛皮』ことレグルスである。拳を受けた箇所は深く凹み、そこを中心にして鎧全体に罅が伸びている。軽い罅程度ならば自己修復出来るが、未だにそれが行われていない。それが受けたダメージの深さを物語っている。

とはいえ、ここまでレグルスのダメージが深刻なのはレグルス自身が少しでもサイラオーグのダメージを減らす為に身を呈してダメージを引き受けたという理由もある。だが、誤算だったのは一誠の一撃がレグルスの想像を遥かに上回る威力だったこと。

レグルスは神滅具にして転生悪魔である。故に肉体というものを持っており、今は『獅子王の剛皮』が彼にとっての肉体。転生悪魔になることで自立可動が可能となったが、それに伴い弱点も出来た。

肉体を持ったことで痛みやダメージを感じるようになり、それが許容範囲を超えると肉体を維持出来なくある。もし、それがレーティングゲーム中に起こればレグルスはリタイヤ扱いとなり、サイラオーグの禁手は強制的に解除されてしまう。

それはレグルスにとって最も恐れている事態である。主であるサイラオーグが戦っ

ている中で自分だけ外野に置かれるなど考えたくもない。

『サイラオーグ様の……闘気が無ければ……危うかった……！』

サイラオーグが発していた闘気が僅かながら一誠の拳の威力を削いでくれた。結果的に見ればサイラオーグとレグルスが互いに庇い合ったことでダメージを最小にすることが出来たのだ。

意図せずに最も効果的な防御を行ったサイラオーグだが、状況はサイラオーグが圧倒的不利に変わりない。今すぐにでも立ち上がって構えるべきなのだが、下半身が言うことを聞かない。まるで神経を遮断されたかのように力が入らないのだ。

「どうした、足よ！　俺を今まで支えてきたのにこの大事な場面で動かんのか！」

サイラオーグは太腿に拳で叩く。足の爪先まで鋭い痛みが駆け抜ける。感覚はまだある。時間が経てば回復するだろうが、悠長なことを言っていられない。すぐ傍には一誠が居る。

しかし、サイラオーグの焦燥とは裏腹に一誠からの追撃は来ない。サイラオーグが膝を突いた時点で攻撃されてもおかしくはないのに、それなりの時間が経過してもまだ来ない。

一誠が追撃しないのは理由がある。

「ぐ、おお……いってぇ……！」

殴った一誠もまた悶え苦しんでいた。左腕を押さえて前屈みの体勢になっている。やはり、トールの剛力を一瞬でも再現するのは相応の反動が伴う。一誠の左籠手は半壊状態になっており、装甲が何箇所か剥がれ落ちている。また、鎧全体に細かい罅が入っていた。これら全て殴ったときの反動によるもの。

雷神トールの力は一誠の身の丈に余るものであり、殴った当人にもダメージを与えていた。尤も『真紅の赫龍帝』を纏っていたからこそこの程度で済んだ。仮に『赤龍帝の鎧』状態で同じ事をしていたら、一誠の体は内外問わず壊れていただろう。

会心の一撃を与えたと思ったが、その代償は大きい。一誠は左腕を垂れ下げながら体勢を戻す。その間にドライグの尽力により鎧の罅は修復されていく。ただ、左手の損傷は他に比べると修復が遅れている。

体勢を整えている一誠が見たのは、気力を振り絞って立ち上がるサイラオーグの姿。歯を食い縛り、鬼のような形相になっている。

サイラオーグが必死になっているのを見て、一誠もまた一層気合を入れ、激痛を押し込めながら構える。サイラオーグもまた一誠に触発されて絞り切れる程の気力を両足に送り込んで無理矢理立つ。

負けたくない。共通した想いが互いを高め合い、自分を引っ張り上げる。

両者が構えたタイミングはほぼ同時。振り出しに戻ったようにも見えるが、一誠の鎧

は徐々にだが修復されている中、サイラオーグの鎧には胴体を中心にして深い傷が残っている。レグルスが消耗していることが如実に表れている。

先に動いたのは一誠であった。サイラオーグの鎧の亀裂目掛けて拳を放つ。サイラオーグは避けるような動きを見せたが、その考えとは裏腹に足が動いていない。立ち上がることは出来たが、まだダメージが抜けておらず思うように動かせないのだ。

黄金の鎧に突き刺さる真紅の拳。半壊状態の鎧に音を立てて罅が入る。一誠の攻撃はそれでは終わらない。

『Ｓｏｌｉｄ　Ｉｍｐａｃｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』

トリアイナの『戦車』と同様に肘に形成された撃鉄が、真紅のオーラを火薬代わりにして炸裂。同じ箇所に二度目の衝撃を打ち込む。

「ぐっ！」

壊れかけている鎧ではその衝撃を防ぎ切ることは出来ず、サイラオーグの生身まで届く。呻くサイラオーグの口からは再び血が漏れ出るが――

「まだだっ！」

その瞬間、動かない筈のサイラオーグの足が動き、一誠目掛けて上段蹴りを繰り出す。一誠は咄嗟の判断で膝から力を抜き、重力に身を任せて体を下げる。しかし、それでも間に合わないと感じたので可動域限界まで首を横に倒した。

チッという掠める音が兜の中に響き渡ると一誠の足元に紅色の破片が落ちていく。掠ったサイラオーグの蹴りで兜の一部が破壊されたのだ。

ダメージが抜け切っていない足でここまで鋭くキレのある蹴りが出せるサイラオーグ。しかし、彼を支えるもう片方の足は今もダメージで震えている。通常ならば蹴りを出すことさえも困難な筈だが、サイラオーグは追い詰められた状態になって新たな境地に立った。

それを可能とするのが彼が纏っている闘気。今は大きなダメージを受けてしまったせいで若干質量が下がっているが、これがサイラオーグに新技を授ける。

質量が減ったことで闘気のコントロールの精密さが上がった。そこでサイラオーグは、纏わせている闘気を操ることで外部から体を動かして見せたのだ。

今のような追い詰められた状況でしか使えないハッタリに近い技だが、サイラオーグは未だに健在と相手に見せつけるには十分である。何よりも土壇場でこのような技を思い付くその勝利への執念に見せつけてくる。

「うらぁぁー」

身を屈めていた一誠はそこから跳び上がり、サイラオーグの顎を狙ってアッパーを出す。

サイラオーグは最小限の動きで首を動かし、一誠のアッパーを避けた。だが、完全に

回避することは出来ず、僅かに触れた兜の一部が砕けて剥がれる。
跳躍して隙だらけな姿を相手に晒してしまう一誠だが、今の一誠はそれすらも次へ繋げる。
『Ｓｔａｒ　Ｓｏｎｉｃ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』
背部から噴射されたオーラにより前方へ膝を突き出しながら突撃。サイラオーグの顔面に膝が入った――と思われるが、ギリギリのタイミングでサイラオーグは間に手を挟んでいた。
膝を掴まれ、片腕一本の力で一誠は減速させられる。しかし、再度オーラを噴射させて強引に押し込む。
押さえていた手ごとサイラオーグの顔面に一誠の膝が突き刺さるが――
（浅いっ！）
一度減速させられたせいで膝蹴りの威力は半減以下にまでされていた。この程度でのダメージではサイラオーグを倒すに至らない。
「ぬおおおおっ！」
サイラオーグは両手で一誠の足を掴むと、その状態から背負い投げような形で一誠を投げようとする。三メートル以上の高さから、サイラオーグの渾身の力で地面目掛けて振り下ろされようとする。叩き付けられれば今の一誠には致命傷になりかねない。

急いで足を引き抜こうとするが、サイラオーグの握力は一誠の力を上回る。一瞬の抵抗を後に一誠は全身に凄まじい風圧を感じた。

地面に叩き付けられる前にまず空気の壁に叩き付けられる。人の体をこうも速く振るうことが出来るのかと戦慄してしまう。

時間にすれば刹那の間。猶予など無いに等しいが、何かをしなければ一誠は敗北する。

この戦いはコンマ数秒でも戦うことを考えなかった者が負ける。

（硬い地面に叩き付けられる……なら！）

そこから先はほぼ反射に近い行動であった。

『Ｄｉｖｉｄｅ！』

地面に叩き付けられる寸前に発動するのは『白龍皇の籠手』の能力。だが、一度だけでは終わらない。

『Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！　Ｄｉｖｉｄｅ！』

以前なら不可能であった『白龍皇の籠手』の連続発動。歴代白龍皇の思念が最期に残してくれた置き土産。

一誠の背中が地面に接触。本来ならば隕石が落ちたようなクレーターが出来上がる

程の衝撃が発生していたであろう。しかし、『白龍皇の籠手』の半減の能力により発生する筈であった衝撃は繰り返し半減され、最終的には一誠は地面へ羽毛のように柔らかな着地をする。

サイラオーグもこれには驚く。相手を砕かん勢いで地面に叩き付けた筈が、丁寧に置いたかのように一誠は無傷。イメージと現実の差に驚くと同時にいつの間にか白龍皇の能力をここまで使いこなせるようになっていた一誠にも驚く。

危機の直後には好機がやってくる。一誠はうつ伏せの体勢のままもう一方の足を掴んでいる足を揃える。サイラオーグは一誠の行動に反応して両手を離そうとしたが、左手を離すのが間に合わず、一誠の両足に挟まれる形となった。

一誠は両手を伸ばして腕立て伏せの姿勢になると両手で地面を突いて浮き上がる。そして、そこから全身を捻る。

引き抜くことが間に合わなかったサイラオーグの左腕がこの捻りに巻き込まれ、肘が可動限界まで捩じられた。しかし、一誠はここで終わらない。背部の噴射孔からオーラを噴射させ、更に捩じる。

太い紐が千切れるような音がサイラオーグの左腕から鳴る。このままもう一周しようとするが、一誠はサイラオーグの右拳が握られていることに気付いて両足を離した。

噴射の勢いに任せて離れる一誠。サイラオーグの左腕は破壊されており、肘の部分が

内側に向くまで捩じられている。
サイラオーグの最大の武器を一つ奪った――となる程サイラオーグの覚悟は甘くない。
「――ふんっ！」
サイラオーグは捩じれた左腕を掴んで一息で元の位置に戻す。そして、闘気を動かして破壊された左腕を外部から操作し、構えさせる。この間、サイラオーグは顔色一つ変えていない。
「流石……」
それを見て一誠はそう賞賛し、冷や汗を流すしかなかった。ダメージを与えたのは一誠の方だというのに。戦況的には一誠の方が有利に見えるかもしれない。だが、精神の方ではサイラオーグが勝っているように映る。
「まだまだこれからだ……！」
確実に消耗している筈なのだが、サイラオーグの気力に翳りが見えない。本当にこの戦いを心の底から楽しんでいる。
「そうですね！　これからです！」
その期待に応えて対等。上回って初めて勝利を掴める。
一誠はオーラの噴射により神速の詰めを行うと、スピードに乗ったまま拳を繰り出

す。だが、サイラオーグはそれを見切り、首を傾けることで躱すと反撃の拳を放った。
交差する両者の腕。一誠の顔面にサイラオーグの貫く拳が入る――間際、一誠もまた首を動かして紙一重で回避。互いの兜の一部が拳に触れたことで破損する。
クロスカウンターの不発を合図にして始まるのは壮絶な攻防。
一誠が蹴りを出せば、サイラオーグは最小限の動きで躱し、懐に入り込んで拳で突こうとする。そうなる前に一誠は体当たりをし、サイラオーグを間合いの外へ突き飛ばそうとするが、サイラオーグは地を蹴って体当たりの勢いを相殺し、もう一度地面を蹴って接近すると負傷している左拳で一誠を突く。
一誠は迫る拳を両手で掴んで止める。負傷していることと外部から無理矢理操っているので拳に普段の速さが無いので掴むことが出来た。
だが、それと同時にサイラオーグは右拳を握り締める。それを見て一誠は釣られたと思った。サイラオーグの拳の脅威を知っているからこそ、その拳が弱々しく映ったからこそ恐れと慢心を突かれて掴むという行為に出てしまった。
サイラオーグの右拳が放たれようとしたとき、不意に頭の中でこの光景が過去の記憶と重なる。
あれは日々のトレーニングの中で毎日やっていた実戦式のトレーニング。
そのトレーニングでシンに腕を掴まれ、それを振り払う為にした悪足掻きのような攻

撃。
体が自然に動いていた。サイラオーグの太腿にローキックが入る。
太腿を覆う鎧すらも砕く一誠のローキックにサイラオーグの表情が歪み、体がぐらつく。通常時のサイラオーグの体幹ならばこの程度では揺らがなかっただろうが、大きなダメージを受けて足に力が入らない今の彼には効果的であった。
一誠は間髪入れずにサイラオーグを引き寄せ、その額に己の額を叩き付ける。一誠とサイラオーグの兜が同時に割れるが、サイラオーグは額から血を流しながら仰け反る。どちらにより大きなダメージが入ったのか一目瞭然であった。
（トレーニングしていて良かった……！）
あのローキックは個人的にも練習していたもの。切っ掛けなど些細なこと。シンに入れたとき、彼が言った言葉が頭の中に残ったからという単純なもの。
『悪くないな』
それが妙に嬉しくてその日からローキックの練習もトレーニングの中に入れ、ひたすら繰り返し練習していた。
（無駄じゃない！　無駄じゃないぞ！）
この大舞台で決まったことに一誠は昂る。
『相棒！　畳み掛けろ！』

ドライグが追撃の指示を出す。良く見ればサイラオーグの目の焦点が合っていない。今の頭突きのせいで脳が揺さぶられている。

この機を逃す筈も無く、一誠は渾身の力でサイラオーグの顔を殴った。

生身の顔に一誠の鋭い拳がまともに入り、後方へ吹き飛ばされていく。

一誠は両翼に収納されていた二門のキャノンを展開した。追撃の本命がこのキャノンである。

キャノンの中にオーラが充填されていく。瞬く間にチャージが完了される。トリアイナの『僧侶』よりもチャージ時間が遥かに速い。

『相棒、分かっているな？　直接狙わずに巻き添えにする感じで攻撃をしろ！　禁手は深手を負っているが、まだ飛び道具に対する無効化は残っているかもしれん！』

焦って攻撃して失敗しないように砲撃前にドライグが声を掛ける。

「分かっているさ！」

トリアイナの『僧侶』のときは敢えて手前に命中させ、爆発に巻き込む形で攻撃した。万全の状態のサイラオーグに拳一つで跳ね返されるという驚愕の方法で防がれたが、一誠はあれを踏まえて別方法を思い付いていた。

「クリムゾンブラスタァァァァ！」

『Ｆａｎｇ　Ｂｌａｓｔ　Ｂｏｏｓｔｅｒ！』

紅色のオーラがサイラオーグ目掛けて発射される。
サイラオーグは迫る紅のオーラの塊に対し、迎撃する構えをとっていた。避けることなど最初から考えていない。空中という不安定な体勢からの突きでは跳ね返すことは困難かもしれないが、それでも真っ向から挑むつもりであった。
紅のオーラが眼前まで来た。サイラオーグは拳を突き出そうとするが――
『サイラオーグ様っ！』
レグルスが何かに気付いて叫ぶ。その直後にサイラオーグも気付いた。だが、放たれた拳は止まらない。
紅のオーラの球体の後ろに隠れるもう一発の球体。一誠は発射する量を調整して、敢えて二発連続で発射していた。
それは何故か。
突き出した拳がオーラの塊に触れ、それを歪めさせる。このとき、一瞬の均衡が生まれた。その直後に後続の二発目のクリムゾンブラスターが前へ追い付き、二つが一つのオーラとなったとき、サイラオーグの至近距離でクリムゾンブラスターは強大な爆発を生み出した。
爆発と煙が消えた後、大きなクレーターが出来ていた。その中央では倒れ伏したサイラオーグが見える。

勝った、と思う余裕は一誠には無かった。半分ずつで発射したとはいえ、クリムゾンブラスターの連射は心身を大きく消耗させていた。

遂に決着がついたことで会場が沸く。

『――リタイヤ』

騒々しい歓声の中で脱落を宣言するアナウンスが聞こえた。

それが聞こえたとき、一誠はようやく勝てたのだと実感が出来た。

◇

（体が動かん……）

意識はある。だが蓄積されたダメージにより思うように体を動かせないことにサイラオーグは歯噛みする。

薄れていく意識の中でサイラオーグの脳裏に浮かぶのは眷属たちとの思い出。もしかしたら、走馬灯なのかもしれない。

『我が剣とアルトブラウの力、貴方に捧げましょう』

『騎士』ベルーガ・フールカスの誓い。愛馬のアルトブラウは力強く嘶いた。

『……』

『戦車』ガンドマ・バラムは無言のまま膝を突き、寡黙な彼らしい忠誠の意を示す。
『貴方の夢、俺も見させてもらってもよろしいかな?』
『騎士』リーバン・クロセルはサイラオーグの夢に自分の進むべき道を見出した。
『サイラオーグ様の為なら一肌脱ごうかしら』
『僧侶』コリアナ・アンドレアルフスは妖艶に微笑みながら眷属になることを受け入れた。
『この身に流れる血を欲しいと言ってくれるのですか?』
『戦車』ラードラ・ブネは蔑まれた混血だと知られて尚求められたことに涙を流す。
『貴方の夢の為に僕を傍に置いて下さい。それが僕の夢になります』
『僧侶』ミスティータ・サブノックはサイラオーグの夢に自分の夢を重ねた。
『サイラオーグ様。貴方を支えさせて下さい』
『女王』クイーシャ・アバドンはサイラオーグに尽くすことを生涯の目的とした。
『サイラオーグ様……どうか、どうか、私に主を守る役目をもう一度与えて下さい……』
『兵士』レグルスはかつての主を守れなかった悔恨を魂に刻み込み、サイラオーグに忠誠を誓った。二度と主を失わない為に。
　眷属たちの想いが薄れていたサイラオーグの意識を繋ぎ止める。
『ごめんなさい……ごめんなさい……』

女性の泣く声が聞こえて来た。久しく聞いていない懐かしい声。

『ごめんなさい……滅びの力を持たさずに産んでごめんなさい……』

長い眠りについている母の声。本来ならば受け継ぐ筈であった力を与えることが出来なかったことを謝り続けている。

幼いサイラオーグの前では母は常に気高い人であった。だが、彼は知っていた。サイラオーグが寝ている横で母が涙を流しながら何度も何度も謝っていることを。

母の涙が嫌だった。謝ることが嫌だった。泣くよりも笑っていて欲しい。謝るよりも褒めて欲しい。そう思ったとき、サイラオーグは強くなろうと決意した。魔力が無くとも、滅びの力が無くとも母が自慢出来る息子になる為に。

（母上……私は確かに悪魔としての才には恵まれませんでした……ですが）

呼び起こされた記憶が、力が入らなかった体に再び戦う為の力を与えてくれる。過去が力を湧き上がらせる。

（私は出会いに恵まれました……！）

そして、未来へ進む為の一歩を与えてくれる。

◇

歓声がどよめきに変わった。両膝に手を当て、俯いて荒い呼吸をしていた一誠は、その変化に気付いて顔を上げる。

クレーターの中心に立つサイラオーグ。纏っていた禁手が砂のように崩れて消え、生身を晒す。額や腕から流血しているが、至近距離でクリムゾンブラスターを受けたと考えると軽傷過ぎる。

「助かったぞ……レグルス」

その一言で何があったのかドライグは察する。

『獅子王め……主の盾になったか……！』

宣言されたリタイヤ。あれはサイラオーグではなくレグルスのものであったのだ。

クリムゾンブラスターが炸裂する刹那、レグルスが取った選択は可能な限り発生するダメージを引き受けることであった。禁手が解除されたが、それでもサイラオーグを守ることを優先したのだ。

サイラオーグは目に見えて弱ってはいる。纏っていた闘気は微々たるものへ変わり、体は負傷だらけ。一誠に破壊された左腕は力なく垂れ下がり、使えるのは右手だけ。

「こんなことを言うのは変かもしれませんが……」

一誠の表情は複雑なものであった。まだ立てるサイラオーグに戦慄し、恐怖していると同時に高揚し、興奮もしており、蒼褪めながらも顔を引き攣らせながらも笑っている。

「サイラオーグさんとまだ戦えるのが嬉しいです……！」
　すると、サイラオーグは右拳を一誠に突き付ける。
「拳が握れる限り俺は戦い続ける！　そして、全力を尽くすのみ！」
　サイラオーグの右腕に黄金に光が宿る。それに合わせて闘気が右腕に限定されて放出をされた。全身の闘気を右腕のみに集中させ、防御を完全に捨てる。その甲斐あって右腕から最高潮時の闘気を纏っている状態となる。
「あの金色の光って……」
『禁手の残滓だな。本来ならばすぐに消える筈なのだが……ふん、リタイヤしても主の力になりたいという訳か。敵ながら見事だ』
　レグルスが残した光とサイラオーグの闘気が混じり合う。白と金の光が混ざることで輝きを強める。一誠は放たれる光の中に獅子の顔が浮かび上がるのが見えた。
『気圧されるなよ』
「――まさか。あっちに金色の獅子王が居るなら、こっちには頼れる赤い龍の帝王がついているんだ」
『――ふっ』
　ドライグは小さく笑うと黙った。後は全て一誠に任せるという信頼の表れ。勝とうが負けようが最後まで共に戦うという意志の表示。一誠もドライグからの無言の信頼

を感じていた。
「最後の勝負、付き合ってもらうぞ?」
「ええ。喜んで」
　二人は向き合い、互いに歩を進めていく。これまでの戦いを見ているとひどくゆっくりに見える。しかし、今の彼らはこれが限界であった。度重なるダメージを受け、更に全ての力を右腕に込めているサイラオーグは、走る余力すら残っていない。一誠の方もオーラを殆ど消費してしまい鎧の維持も限界が近い。膝も笑っており、歩く度に体が大袈裟に上下してしまう。
　しかし、その様子を笑う者はこの会場にはいない。先程まであった歓声は、水を打ったような静けさに変わっていた。小さな物音すら喧しく聞こえる静寂の中で二人の足音だけが響く。
　やがて、二人の足が止まる。そこは二人の間合いが重なる地点。目の前に立つ自分の夢の前に立ちはだかる壁。しかし、向き合う二人に負の感情は無い。あるのは相手に対しての深い尊敬だけ。
「兵藤一誠。俺は勝つ」
「いいえ。俺が勝ちます」
　最後の意思表示。言葉を先に交わし、二人は爽やかな笑みを見せ合う。だが、次の瞬

間にはそれは消え、戦士としての顔となる。

先に動いたのはサイラオーグ。右拳にレグルスの意思とありったけの闘気を乗せて拳を握る。一誠の目には自分を噛み砕きにきた黄金の獅子の幻影が見えた。

このとき、一誠の脳がこのレーティングゲームの中で最も高速に回る。コンマを何百等分するような経験したことがないぐらいに頭が働き、一誠に一秒先の未来を幻視させる。

そして、導き出される答えは――

（……打ち負ける）

――打ち合ったら自分が敗れるという非情な現実。どんな可能性を考慮してもサイラオーグとの拳の衝突では勝てないという答えしか出ない。それは百回考えても千回考えても同じであった。

打ち合いで負けるなら防御――という選択肢もあったが、それに用意された答えは防御ごと貫かれるというもの。サイラオーグの貫く拳に対して今の一誠に守る術は無い。

頭の中で浮かび上がる選択肢が刹那で消えていく。浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返した後に残されたのは――一つの答え。

それが思い付いた瞬間、一誠は運命のようなものを感じた。この場、この時。そして、サイラオーグが居るという積み重ねられた偶然をそんな風に感じてしまう。

成功する確率は限りなく低い。ましてや、サイラオーグが相手となれば更に成功率は低くなる。

（やれない、やらないじゃない！　やるんだっ！）

そんな迷いはこの戦いには不要。迷った時点で負ける。少ない可能性に己の全てを懸ける。それが出来なければサイラオーグとの戦いに踏み込むことすら許されない。

覚悟はした。後は実行するのみ。

拳を握り締めたサイラオーグに対し、一誠もまた構える。目線の高さまで上げた左手を前に突き出し、指先を軽く曲げる。何かを握っているかのようなジェスチャーにも見えた。

大半の観客たちはサイラオーグと同じような構えをすると思っていた。だが、その予想に反して一誠はこのゲームで初めて見せる構えをとる。

期待と不安に固唾を呑む観客。一方で極限られた者のみが一誠の構えに既視感を覚えた。実況席に座っているアザゼル、そしてＶＩＰルームで観戦しているサーゼクスと数名の神たち。一誠の構えを見て無意識に眉間に皺が寄っている。

サイラオーグは冷静に一誠の構えを見ている。何かを仕掛けて来るというのは当たり前のこと。それが何なのかは分からない。しかし、一誠の全く余裕の無い表情を見て、それが一誠にとっての最後の切り札なのは分かった。

駆け引きなど今更することもない。サイラオーグが出来るのは、真っ向からそれを破ることのみ。

サイラオーグの足元から地面を踏み締める音が聞こえる。それは動くという前兆。互いの緊張感が極限まで高まる。

そして、その時はやって来た。

「おおおおっ！」

腹の底から吐き出される雄叫びと共にサイラオーグが白金の拳を解き放つ。空気の壁を容易く突き破りながら何も無い空間に線を引くように一誠の顔面へ真っ直ぐ伸びていく。

一誠は構えたまま微動だにせず、影すら残さないようなサイラオーグの拳から視線を逸らすことなく――

そこから先の光景は誰もが予想出来なかったものであり、誰もが理解出来ないものであった。

サイラオーグが一誠の後ろに立っている。一誠はその場から動いていない。動いたのはサイラオーグの方である。

サイラオーグが拳を突き出したかと思った次の瞬間には、サイラオーグが移動していた。まるで一誠をすり抜けたように。観客たちは幻でも見せられているかのような気

持ちになる。解説もどう説明していいのか分からず言葉を詰まらせている。
不可思議な光景に最も反応したのはサーゼクスであった。彼は思わず席から立ち上がり、既視感の正体に気付く。
「マタドール……」
混乱しているのは観客たちだけでない。サイラオーグ自身も何が起こったのか理解が追い付いておらず、拳を振り抜いた体勢のまま固まっている。
（俺は……何をされた……!?）
拳を突き出す。何万回を超える程繰り返してきた動作。体に染み付いたその動きを自然に行ったつもりであった。
一誠に拳が当たる直前、サイラオーグは一誠の左手に紅色の布のような物が一瞬現れたように見えた。それに拳が触れたとき、体が定められた流れに乗るように軌道を変え、気付いたら一誠を通り越して背後に立っていたのだ。
あまりに体が違和感無く動いたせいで軌道修正を行うことも出来なかった。あの瞬間、サイラオーグの意思を残したまま一誠によって体の動きを支配されていた。
「これが――」
一誠の言葉に唖然としていたサイラオーグが我に返る。
「あのときにちゃんと見せられなかったものです」

急いで振り返るが、彼の目に映るのは一誠の姿ではなく眼前一杯に迫る紅の拳。
一誠の言葉で思い返されるのは初めて模擬戦をしたときの記憶。あのとき失敗した一誠の技が、この土壇場で披露されたことにサイラオーグはまたしても意表を衝かれた。
（学ばんな、俺は）
サイラオーグが内心で苦笑した直後、一誠の全てを賭した拳が突き刺さる。
サイラオーグ自身も認める程の完璧な入り。体の芯まで届き、響く。
一誠は全ての想いを乗せてサイラオーグに打ち込んだ。打ち込んだ筈なのだが――
「ッ!?」
――言葉を失う。サイラオーグは一誠の拳を受けても倒れなかったのだ。
そして、拳を握り締める。一誠は次に来るだろう衝撃に備える。歯を食い縛るその表情は悔し気に見えた。
だが、一誠の覚悟とは裏腹にいつまで経ってもサイラオーグの拳は来なかった。
「サイラオーグさん……」
いや、サイラオーグの拳は放たれていた。それは、彼の拳を知る者からすればあまりに遅い突きであった。空気の壁にすら押し返されるような弱々しく、震える拳。
サイラオーグは既に限界を迎えていたのだ。それなのにまるで振り絞るかのように

己の拳を一誠に届けさせようとする。
それが若手悪魔ナンバー1としての最後の意地なのか。この拳の意味を誰よりも真っ先に理解したのは今まで戦っていた一誠であった。
「本当だったんですね……」
一誠の目から涙がとめどなく流れ落ちる。
「全力を尽くす……俺の為に本当に最後まで出し切ってくれるんですね……」
サイラオーグは文字通り全ての力を尽くそうとしているのだ。一誠に敬意を込めて。
一誠はこんなにも心を奮わせられるのは初めての経験であった。尊敬すべき相手からの全力。これ程誇らしく、嬉しいことはない。
「カッコいいです……サイラオーグさん……！」
サイラオーグの拳が一誠に到達しようとする。一誠はサイラオーグの拳を両手で受け止め、しっかりと握り締めた。
「ありがとう……ございましたっ！」
サイラオーグの全てに感謝する言葉を叫ぶ。その言葉を切っ掛けにしてサイラオーグの体から力が抜け、ゆっくりと仰向けに倒れていく。
それを見ると同時に一誠もまた今まで張り詰めていたものが切れるのを感じた。
「あぁ……」

こうなることは何となく分かっていた。一誠が今まで戦ってこられたのは、後ろで見守ってくれているリアスの存在。そして、勝ちたかったサイラオーグの存在の御陰。どちらかが欠けてしまえば、早々に限界が来てしまう。

鎧を維持することが出来なくなり、禁手が解かれる。霞のように消えていく鎧の感触を肌で感じながら一誠は倒れる。

告白した手前、最後までリアスの前に立っていたかったがそれも無理だった。最後の最後で締まらないなぁ、と呆れつつもリアスへ勝利を捧げられたことを満足しながら一誠は意識を手放す。

『王』と『兵士』が気絶したことにより、今度こそ本当にゲームに決着がつく。

『サイラオーグ・バアル選手、リタイヤです。並びに兵藤一誠選手もリタイヤ。ルールにより『王』が敗北したのでゲーム終了です。これによりリアス・グレモリーチームの勝利となります！』

学祭、日々

最初に見えたのは真っ暗な闇。その闇をぼんやりと見つめていると段々と意識がはっきりとしていき、自分が瞼の裏を見ていることに気付く。

閉じていた瞼を開くと見覚えの無い天井があった。

「ここは……」

まだ覚醒し切れていない頭で自分の現状を確認する一誠。背中と後頭部に伝わる柔らかな感触はシーツと枕のもの。清潔感あるベッドの上で寝かされていることを認識する。

そこまで分かると記憶が明確になってきた。サイラオーグとの激闘の後、燃え尽きて気絶したのだ。

上体を起こす。体の至る箇所にガーゼや包帯が巻かれている。少し体を動かしただけでも酷い筋肉痛が発生して体が硬直する。特に左腕が酷く、力が入らない。

「起きたか」

聞き覚えのある声。痛みを我慢しながらぎこちない動きで首を動かして隣を見る。隣に置かれたベッドには一誠と同じように包帯姿のサイラオーグが居たのだが――

「え？　何をしているんですか……？」
「暇潰しだ」
　――片手、しかも人差し指一本による指立て伏せを行っているサイラオーグに、一誠は引いてしまう。
「あの……怪我は痛くないんですか……？」
「この程度の痛みなら慣れている。軽く動いていないと落ち着かんのだ」
　サイラオーグにとっては指立て伏せなど激しい運動には入らないのだろう。もしかしたら、ストレッチ程度の認識なのかもしれない。
　サイラオーグの強さの根源を見たような気がする。とにかく生命力が強い。タフ、強靭なのだ。これだけ生命力に溢れているのなら、神器や聖剣を防ぐ程の闘気を纏うのも納得である。
（俺、よくこんな人と真正面から戦ったな……）
　改めてどれだけ自分が恐ろしいことをやっていたのか思い知らされる。
「えーと……」
　戦っていたときは饒舌に語り合っていたのに、戦い終えた後に二人きりになると何を話していいのか分からなくなる。この間にもサイラオーグは指立て伏せを続けている。顎が付きそうになるぐらい体を低くし、そこから腕を真っ直ぐ伸ばすという一切の妥協

が無い。それを汗一つかかずにやっている。
「サ、サイラオーグさんが隣のベッドだったなんて凄い偶然ですね……！」
「確かにな。いや、もしかしたらサーゼクス様かアザゼル総督が気を利かせてマッチングしてくれたのかもしれないな。戦いあった者同士、拳以外でも語ることがあるかもしれないと思って」
そう言われるとそうなのかもしれないと一誠は思った。互いの陣営で先に療養している眷属たちも居る。同じ主に仕える眷属同士で固めるのが無難の筈。レーティングゲームの対戦相手を隣同士にするのは、トラブルを起こさないと信頼しているのかもしれない。
不意に会話が途切れ、沈黙が両者の間に流れる。沈黙から数拍置いた後にサイラオーグは指立て伏せを止めて呟く。
「……俺の負けだな」
それは自らの敗北を認めるものであった。
「待ってください。俺だってあの後に気絶したんですよ？　サイラオーグさんの負けじゃなくて引き分けな筈です！」
一誠はそれを否定し、引き分けだったと主張する。相手の負けを勝った側が物言いするというやや変わった状況であった。

「先に倒れたのは俺の方だ。それに俺は『王』だ。『王』が倒れた時点で敗北だ」
壮絶な戦いを繰り広げた挙句に共に倒れたが、サイラオーグと一誠では文字通り立場が違う。サイラオーグは『王』で一誠は『兵士』。『王』であるサイラオーグは、どんな理由があろうとも決して取られてはいけない。
「そうですけど……そうかもしれないですけど！」
まだ不服そうにしている一誠であったが、サイラオーグはそれを制止する。
「負けたが俺は充実している。悪くない気分なんだ。生まれて初めて全てを出し尽くした。最後の一瞬まで俺は俺を出し切れた。勝利とは違う清々しい気持ちだ。こういう負けならば、俺は受け入れ覚えておきたい」
この敗北はサイラオーグの人生の中で傷になる。だが、一生に一度あるかないか分からない納得できる敗北。残しておきたい傷というものもある。
一誠は改めてサイラオーグの器の大きさを思い知らされた気がした。ここで食い下がるのも無粋である。
「――なら、俺は一生誇りますよ、サイラオーグさんに勝ったこと。孫どころか玄孫の代まで語り継ぎます」
「ああ、そうしてくれ。最高の戦いだったと」
互いを見合って笑う。

「それにしても最後のあの技にはしてやられた。まさか、お前があのような巧みな捌きを持っているとは思ってもいなかった」

あの技とは一誠が見せたマタドールの赤のカポーテの模倣のことを言っている。

一誠自身も良く再現出来たな、と今更ながら思っていた。今だったら百回どころか万回やっても一度でも成功させる自信が無い。あのときの精神状態、追い詰められた状態、相手がサイラオーグ、リアスに勝利を捧げるという意思、全ての要素が噛み合ったからこそ出来た奇跡のような成功である。

「以前は失敗したが今度は成功させたな。師にもう一度学んだのか？　良ければ誰なのか教えてくれないか？」

「えー……あのー……」

前にも同じような事を質問された気がする。あのときはサイラオーグが負傷していたので、それの治療を優先するという形で誤魔化したが一対一のこの状況では難しい。

何と説明すべきか一誠は頭を悩ませる。すると、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「起きているかい？」

若い男性の声。サーゼクスのものである。一誠にとっては何とも丁度良いタイミングだった。

「ど、どうぞ！」
慌てて返事をすると、サーゼクスが『失礼するよ』と言いながら入室してくる。
「サーゼクス様」
「ご足労いただき感謝します」
一誠は背筋を伸ばし、サイラオーグは頭を下げる。
「そんなに畏まらなくていい。楽にしてくれ、二人共。怪我人なのだからね」
サーゼクスは置いてある椅子に腰を下ろす。
「さて、イッセー君にサイラオーグ。二人の試合は本当に良い試合だった。私は強くそう思うし、上役も全員満足していたよ。二人の将来が実に楽しみになる一戦だった。こんな若者たちが居るのなら冥界の未来は明るい」
褒められ、期待され一誠は照れ臭くなってしまう。
「さて、そんなイッセー君に話がある」
「席を外しましょうか？」
サイラオーグが気遣って退室を提案するが、サーゼクスは首を横に振る。
「いや、構わないよ。最初に言ったが怪我人なのだから安静にしていてくれ。それに、サイラオーグ、君も聞いておいて損の無い話だ」
サーゼクスは表情を引き締めながら、それでいて少しだけ喜びを滲ませながら言う。

「イッセー君、君に昇格の話が来ているんだ」
サーゼクスが言った言葉を理解出来ず、一誠は間の抜けた顔をしながら言葉を失う。昇格の意味を上手く消化出来ず、一誠の頭の中ではチェスの駒がカツンカツンと衝突するイメージ映像が流れていた。
阿保面を晒す一誠を放置しながらサーゼクスは話を続ける。
「正確に言うと君と木場君と朱乃君……そして、特例として間薙君もだ。ここまで君たちはテロリストの攻撃を防いでくれた。三大勢力の会談テロ、旧魔王派のテロ、悪神ロキの撃退、あの魔人をも退けたという記録もある。そして、先の京都での一件と今回の見事な試合で完全に決定がされた」
実は他にも聖剣事件の解決とコカビエルの撃破やテロに加担したディオドラの退治などの功績も含まれているのだが、内容が内容なだけに不信感を招きかねないので昇格理由として表記はされていない。
「――近いうちに君たちの階級が上がることは正式に発表されるだろう。おめでとう。これは異例であり、昨今稀な昇格だ」
サーゼクスの笑顔と祝福を受け、ようやく一誠は事態を呑み込む。
「お、お、俺が昇格!? プロモーション的な意味じゃなくて悪魔として昇格なんですか!?」

「ああ。まずは中級、そう間を置かずに上級への昇格の話も来るだろうね」
一気に未来が拓けていくような感覚。ついこの間まで悪魔としての才能が無いと思っていた自分が悪魔としての位を一気に駆け上ろうとしている。
「まだ足りない部分はあるだろうし、君自身にもまだ自覚はないだろうね。それを踏まえて君の将来を見込んでのことだよ」
いきなり用意された輝かしい将来に、一誠は困惑したまま助けでも求めるようにサイラオーグの方を見る。
「俺から言えるのは受けろということぐらいだ、兵藤一誠。お前やお前の仲間たちがやってきたことが正当に評価されたのだ。出自など関係無い。この冥界で英雄になってみせろ」
まだ上手く整理出来ない一誠。ふと、サーゼクスの言っていたことが気になった点があったのでそれについて訊くことにした。冷静になるまでの時間稼ぎの意味も込めて。
「話は少し変わりますが、俺と木場と朱乃さんは悪魔だから分かるとして、間薙の奴も昇格させるっていうのはどういうことですか？　あいつは……人間ですし」
昇格というのは悪魔の中での話だと思っていたので、シンの名も挙がったことに違和感があった。
「まあ、そう思うのは無理も無い。ただ、彼もまた君たちと同様に大きな功績を上げてい

る。そのことをいつまでも無視していいのだろうかという話が出てね……」
　サーゼクスとしてはシンの心情に配慮して放っておく方が良いとは分かってはいるが、今言ったように一誠たちと同等の成果を上げている。悪魔の中にはその功績を讃えないのは不義理という意見が上がっていた。何分、悪意ではなく純粋な善意からの提案なのでサーゼクスとしても却下し難い。
「彼に中級悪魔以上の位をあげ、それに見合った権利等を送ろうという話だ」
「悪い話ではないですが……」
「異例中の異例だな」
　人間に中級悪魔以上の階級を与えるなど前代未聞であり、もしそうなった場合、どのような反応が起こるのか分かったものではない。反対する者や嫉妬する者などが声を上げてもおかしくはなかった。
「……そうだろうね。でも、間薙君の功績に対して何も触れないというのもね……」
　放置しておくのが無難なのは理解している。だが、心情的にもサーゼクスも礼の一つはしたいとも思っている。
「まあ、受け取るかどうかの最終的な判断は間薙君に委ねることに――」
「謹んで辞退します」
　サーゼクスの言葉を遮るお断りの言葉。いつの間にか病室のドアを開いたシンが

立っていた。
シンは感情が見え難い瞳でサーゼクスを見る。
「お気持ちだけ受け取っておきます」
「そうか。それなら仕方ない。私の方から断っておくよ」
丁寧には言っているが、取り付く島もないと判断したサーゼクスは、苦笑しながら先程を無かったことにすると決めた。問題に発展する前に無くなってホッとしたようにも見える。
「ようやく来たか、薄情者ー」
「ああ。暇になったから来た」
「暇なら最初から来いよ」
「暇人も暇人なりに忙しい」
「この野郎……」
ジトっとした目で応援に来なかったシンに一誠はチクチクと文句を言うが、シンの方は表情筋一つも動かさずにのらりくらりとした態度。とは言っても一誠の方も本気で責めている様子は無い。いつも通りの軽口の言い合いであった。
一誠が何か言いたそうに口を開こうとするが、それよりも先にシンはサイラオーグへ話し掛ける。

「同じ病室だったか、サイラオーグ」
「ふっ。みっともない姿を見せてしまったな」
二人の短いやりとりを聞いた一誠は『はっ？』と思ってしまった。一誠の記憶では二人は一回ぐらいしか顔を合わせていない筈なのだが、シンはサイラオーグにタメ口をきいただけでなく呼び捨てにまでした。
「お、おい！　それは流石に――」
思わず咎めようとするが、他でもないサイラオーグ自身がそれを止める。
「構わない。俺が間薙シンにそう願ったからだ」
「そうなんですか……？」
この打ち解け様。自分たちの知らない間に二人の間で何か大きなことがあったのだと容易に想像が付く。
「俺と彼は対等。そして、戦友だ」
サイラオーグが誇るように言う。サイラオーグの口からそんな言葉が出て来たことに一誠は若干の嫉妬を覚えた。
一誠もサイラオーグのことを最高にカッコいい男と尊敬している。勝負では勝ったが、それでも一誠はサイラオーグより上になったと自惚れていない。総合的に見てもサイラオーグの方が格上だと今も思っている。

そんなサイラオーグがいつの間にかシンのことを対等な存在と認めていると言っても、『そうですか』の一言で片付けられる程一誠は単純ではなかった。

色々な感情が渦巻いている一誠の表情を見て、サイラオーグは苦笑する。

「今日もまた新たな戦友が出来た――兵藤一誠」

「……え？　は、はい！」

「お前が望むなら間薙シンのような話し方でも俺は構わんぞ？」

いきなりそんなことを言われたので、一誠の顔は引き攣る。

「あの……恐れ多いというか、心の準備が……」

許可されたとはいえ、タメ口や呼び捨てにする度胸は今の一誠には無かった。

「そうか。それなら気長に待つとしよう」

しどろもどろになっている一誠を見てサイラオーグは小さく笑う。

「――さて、伝えることは君たちにも伝えたし、間薙君からも正式に辞退をするという言葉を貰った。私はそろそろ失礼するとしよう。先程の話の詳細については後日改めてそちらへ通知しよう。昇格にはきちんとした儀礼を済ませなければいけないのでね」

では、と言い残してサーゼクスは颯爽と退室していく。サーゼクスは居なくなったのだが、存在感が在り過ぎたせいかまだ室内に残っているような錯覚を感じる。サーゼクスが座っていた椅子に紅い残像が見える気すらした。

「俺も行くとする」
　シンもまた退室しようとする。
「もう行くのか？」
「無事な様子は見れた。木場たちの様子もまだ見ていないしな」
　情はある筈なのに相変わらずあっさりとした態度なので薄情に見えてしまう。
　去ろうとするシンを一誠が呼び止める。
「……なあ。俺、悪魔としての素質ゼロだと思っていたのに昇格出来るっぽい」
「聞いた」
「……返事はまだ貰っていないけど、俺……部長に告白した」
「見た」
　背中越しにそれを聞いていたシンだったが、振り返って一誠の目を見る。
「おめでとう」
　飾り気の無い一言。しかし、どういう訳か言われた一誠は涙腺が緩み、視界が滲む。たった一言なのに心に染み込む。きっとそれはシンが本心から言っていることが伝わったからなのかもしれない。
　目が潤みながらも決して涙は溢さず、やせ我慢をしながら一誠は言う。
「――色々とありがとう！」

返した言葉もまたシンプルなもの。だが、言葉を多く付ければ良いという訳では無い。今のシンに送るにはこの言葉が最も適していると言える。
シンは一瞬だけ無表情を崩した。笑っているのか、笑っていないのか判断が難しい微妙な表情の変化。恐らくは彼と親しい者ぐらいしか伝わらない微笑。
一誠はニッと笑う。シンはそれを見ると病室から退室していった。
「仲が良いな。親友という訳か」
「え!?　そういうんじゃないですよ！　ダチなのはそうですが……」
照れ隠しのように否定する。傍から見るとそうなのかもしれないが、誰かに言われると照れ臭くなってしまう。
「似たようなものだと俺は思うが？」
「認めたり、口に出すとなると恥ずかしいというか……」
「ふっ。大衆の面前でリアスが好きだとあれだけ叫んだ男にしては繊細だな」
「うっ！」
会場の勢いとノリで告白した一誠だが、冷静になると自分がとんでもないことをしたのだと理解してしまう。麻痺していた部分が急激に解け、色々な感情が濁流のように頭の中へ流れ込んで一誠の表情は見事なまでに赤くなった。
「やれやれ、俺に勝った男とは思えんぐらい初心な反応だな。――だが、告白したこと自

体は後悔していないのだろう？」
「……ええ」
「リアスのことが好きなのだろう？」
「――はい。大好きです」
「それなら良し」
　サイラオーグは満足そうに頷く。
「このまま返事を待つのか？」
「……どうしましょうか？」
　思わず質問を返してしまう。大衆の前で告白したこと自体は後悔していないが、やるならもっとムードや場所を大事にしておけば良かったのでは、と思ってしまう。場の勢いとノリで告白する様は自分らしいと思う反面、相手であるリアスの気持ちは、と考えてしまうのだ。
　そのことを正直にサイラオーグへ話すと――
「なら、もう一度想いを伝えてみたらどうだ？　今度は真正面で二人っきりでだ」
　――サイラオーグの提案に一誠の表情は数秒の間に七回変化する。やがて、俯いて顔を伏せたかと思えば決意に満ちた目をサイラオーグへ向けた。
「……やります」

「それで良い。……近いうちに俺のところへ遊びに来い。結果も聞きたいからな。コーヒーでも飲みながら話しでもしよう」
ほんの少し前まで互いの夢を懸けて本気の殴り合いをし、勝った相手の背中まで押してくれる。さっぱりした良いヒトっぷりに泣けてきそうになる。
（最近男に泣かされてばっかだな、俺）
そんなことを考えながらも、この目頭に籠る熱も悪くないと思うのであった。

◇

シンが木場たちの病室へ向かう途中、知っている人物を見つけた。
その人物は苦悩に満ちた表情をしながらブツブツと小声で何かを呟きながら、数歩前へ進んだかと思うと、同じ歩数分後ろへ下がるを何度も繰り返している。
「どうかしたんですか？　部長？」
「ひゃうっ！　シ、シン!?　来てたの!?」
リアスの口から聞いたことがない声が出た。声を掛けられるまでシンの存在に全く気付いていなかった様子。それ程までに自分の世界に没頭していたのであろう。
「ええ。お見舞いに」

「……そう。そっちの方向から来たということは、もうイッセーのお見舞いは済んだのね？」
「はい」
シンが肯定するとリアスは黙ってしまう。リアスの次の言葉を待っているのでシンも黙ったまま。両者の間に沈黙が生じる。
時間にすれば一分にも満たないものであったが、黙り続けることに耐え切れなくなったのかリアスの方から話し出す。
「そ、それで？　イッセーは大丈夫だったのかしら？」
「虫の息でした。今日一日持たないですね、あいつは」
「ええっ!?　嘘よねっ!?」
「嘘です」
息するように嘘を吐き、あっさりと嘘を認めたシンにリアスは呆けた後に怒気の籠った目でシンを睨む。
「何でそんな悪趣味な嘘を……!?」
「大丈夫ですと言ったら、部長はあいつの所に行かなかったですよね？」
図星だったのかリアスは言葉を詰まらせた後、視線を逸らす。
「気不味いのは分かります」

「……貴方も知っているのね」
視線を逸らしているリアスの顔は見事に真っ赤であった。
「別に無理に見舞いに行かなくてもいいのでは？」
「――ダメよ。朱乃たちの様子は見に行ったのに、イッセーだけ私の都合で行かないなんて主として許されないわ」
生真面目なことで、とシンは内心思ったが、こういった所もまた一誠が惹かれた理由の一つなのかもしれない。
「でも、迷っていましたよね？」
「言わないで……自覚はあるのよ……」
どんな顔をして会えばいいのか分からないといった様子。サイラオーグが同室なので二人っきりになるということは無いのだが、それを言ったところでリアスの足取りが軽くなるとは思えなかった。
「私だってイッセーのことを褒めてあげたいのよ？　あのサイラオーグと真っ向から挑んで、そして勝利を齎してくれた。でも……」
また顔を真っ赤にして俯くリアス。普段は大人びた彼女ではあるが、今はとても幼く見える。色々な感情がリアスの中で渦巻いているのが見ていて伝わってくる。少なくとも告白に対しての答えを言う心の準備がまだ出来ていない。

「顔を合わせたところでいつも通りで良いと思います」
「それが難しいのよ……」
「すぐに返事をする必要も無いですし」
「……それって良いのかしら？」
「散々やきもきさせられたのだから、今度は部長が待たせてみたらどうです？」
シンの言っていることにリアスは呆けた表情をしたが、クスリと笑った。
「それもいいかもしれないけど、そんなに待たせるつもりはないわ……取り敢えず今日はイッセーに待ってもらおうかしら？」
リアスも少し落ち着いたのか、一先ず今日の所は割り切って告白の件について触れずに後日改めてと決めたらしい。一誠の方も心の準備が出来ていないように見えたので、多少の間を置かれた方が有難いと思っているかもしれない。
「そうですか。では、どうぞ」
普通の見舞いをすることに決めたリアスに、シンは通路の端によって道を譲る。そのまま行くかと思いきや、リアスは一歩踏み出した後に硬直してしまった。
気持ちの整理がついたように見えて、そうではなかった様子。頭でいくらシミュレーションをしても実際行動するとなると色々と勝手が違うのは仕方がない。
シンが軽く手を振る。すると、室内で青紫に輝く光が落雷のように発生し、その後に

ピクシー、ジャックフロスト、ケルベロスが現れた。
「え？　何？　どうしたの？」
「ヒホ？　急に喚び出して何か用かホ？」
「グルル……イキナリダナ」
シンに突然喚び出された三人は、若干戸惑っている。
「部長と一緒に見舞い行ってくれ」
リアスはシンの言葉に驚き、そしてすぐに察する。気不味い自分をサポートする為にピクシーたちを喚んでくれた気遣いに。騒がしく、賑やかし要員である彼女たちが居てくれれば、一誠との間に微妙な空気が流れようともそれを打ち壊してくれるだろうと考えて同行させようとしていることに。
シンの急な頼みにたいしてピクシーたちは快く――
「何それー！　アタシたちに『騒がしくなりそうだから外で待っていろ』って言ったくせにー！」
「ヒホー！　いい様に使うつもりホ！　オイラたちは抗議するホ！　ストライキするホ！」
――受け入れてはくれなかった。当然のことである。ピクシーが言ったよう、ほんの少し前に言ったことと真逆の頼みをしようとしているのだから不満が出ても仕方ない。

ギャアギャアと喚き出す二人。こうなることを予想していたが、原因が自分にあるためシンもあまり強く言えない。唯一黙っているケルベロスの方を見てみる。
『面倒ナコトヲ……』
呆れと不満を込めた目でシンを見ていた。因みに、ジャックランタンはメンバーの中に居ない。彼は勝手にギャスパーが居る病室へ行っていた。
「……どうするの？　これ？」
リアスが訊いてみると、シン一瞬黙った後に答える。
「……取り敢えず説得してみます」
リアスが一誠たちの病室に向かったのは、それから一時間後のことであった。

◇

学園祭当日。オカルト研究部の旧校舎を丸ごと使った出し物は大盛況であった。
リアスや朱乃、アーシア、ゼノヴィア、イリナといった美人たちが普段とは違うウェイトレス姿をしていることで男性客だけでなく女性客も来てくれる。
学園内だけでなく学園外の客も多く見られる。占い館に喫茶店、お化け屋敷と色々と忙しそうである。

それを遠目から眺めているシン。彼もオカルト研究部所属であるが、今は生徒会の仕事を行っており、手伝うのはそれが終わってからである。

仲魔たちの方はそれぞれ独自に動いている。ピクシーとジャックフロストは出し物巡りに。ジャックランタンはギャスパーと一緒でオカルト研究部のお化け屋敷の手伝い。ケルベロスは静かな所を探して丸くなって寝ている。

「おいおい。皆が青春してんのにお前だけ見学なのか？」

そう言ってシンの肩に肘を乗せて話し掛けてきたのはアザゼルであった。

「仕事なので」

「堅いこと言いやがって。学生なら学生らしく楽しめば良いのによぉ」

「その楽しみに水が差されないように目を光らせておくのも大事なことです」

人が多く出入りするということは、それだけ良からぬ輩が出入りするということを意味する。人ごみに紛れて不埒な行いをする者も少なくないそれを前以って排除するのも生徒会のメンバーとしての仕事である。

シンも実際に二人ほど見つけていたので丁重にご帰宅してもらった。二度と駒王学園に近寄ろうとはしないだろう。

「まあ、そういうのも大事か。ほれ」

アザゼルはストローが差された容器をシンに手渡す。学園祭で売られている飲み物

であった。
「俺の奢りだ」
渡された物を手に取り、一口飲む。中身はアイスコーヒー、しかも無糖。シンが良く飲む飲み物。チャランポランに見えて良く人を見ている。
「ありがとうございます」
「いつまでも立ち話も何だしちょっと歩こうぜ。お前も色々と見て回る必要があるだろ？」
シンは頷き、肩を並べて歩き出す。
アザゼルは歩きながら冥界の情勢について語る。サイラオーグとリアスのレーティングゲームの結果、サイラオーグを支援していた上層部の何人かは支援を止めたとのこと。理由は言わずもがなサイラオーグが負けたという一点のみ。
「合理的判断ってやつだ。結果が全て。利用価値が無くなればそれまでさ」
アザゼルは冷めた態度で言う。そういった悪魔の体質に対する諦観が見えた。
「浅慮ですね」
上層部の悪魔たちの判断をシンはその一言で表す。
「だな」
アザゼルはニヤリと笑いながら同意した。

「負けたから即価値が無しなんて馬鹿な連中だよ。長生きなんだからもっと先を見ろって話だ。サイラオーグはあの戦いで禁手所持者であることを明かした。それだけでもかなりの価値がある。今後もっと伸びてくぜぇ、あいつは」

実際、この戦いでサイラオーグの元からあった知名度は更に上がった。冥界の民衆でも彼を支持する声は大きい。それ故に上層部の中でも手を引くことを保留にしている者も居り、将来を見据えて新たな支持者も名乗りを上げている。

総合的に見ればサイラオーグにとってプラスと言える結果となった。

「サイラオーグで思い出したんだがよぉ」

アザゼルは横目でシンを見る。

「何かあいつ妙にパワーアップしてなかったか？　木場たちが言うにとんでもなく重くて痛い拳だったらしいが……どっかの誰かさんと重なって見えたんだと」

疑いの眼差し。シンがサイラオーグに何かしたのではないかと勘繰っている。アザゼルの考えは正解だが、あのときのことは口外しないと約束しており、また言えば面倒なことになると思っているのでシンも言うつもりは無い。

「そうですか」

持っているアイスコーヒーに波紋一つ起きない程の平静さ且つ一切の感情が読めないポーカーフェイスをするシン。長生きしているアザゼルも簡単に読み取れないぐら

いの徹底した感情のコントロールであった。
「……まあいい。お前には裏で色々と動いて貰ったしな。危険なこともあったらしいし、あれこれと訊くのは野暮だ」
シンの今回の貢献を考慮してアザゼルは追究をするのを止める。
「じゃあ、俺は行くわ。お前もいつまでも真面目に仕事していないで学園祭を楽しめよー」
先生が生徒に向ける台詞として如何なものかと思える言葉を残してアザゼルは雑踏の中へ消えていく。もしかしたら、生徒以上に学園祭を楽しんでいるのかもしれない。
アザゼルの言う通り青春の代名詞である学園祭で見回りをし続けるのは灰色の青春と言うべきものかもしれないが、だからといって途中で投げ出すのはシンの信条に反する。
一人になったシンは見回りを再開する。アザゼルから貰ったアイスコーヒーで喉を潤しながら。行儀が悪いかもしれないが、これで少しだけ学園祭を楽しんで雰囲気は出るだろうと思いながら。
一通りの見回りが終わり、丁度交代の時間となったのでシンは生徒会室に行く。中に入ると匙が報告用の書類を書いていた。
「よお。交代の時間か？」

「ああ」
シンもまた報告書の作成に入る。その作業をしながら匙が話し掛けてきた。
「兵藤の奴、あのサイラオーグ・バアルに勝ったんだってな」
「ああ」
「やるなぁ」
嬉しさと悔しさを混ぜ合わせた表情を浮かべる匙。ライバルの勝利を喜んでいるが、また差が出来たことへの焦燥もある。
「――そっちはどうだった？」
シトリーたちの結果を訊くと、匙の表情は全て喜びによって塗り潰された。
「勿論勝ったぜ！」
胸を張ってアガレスに勝利したことを告げる。
匙が言うにアガレスとのレーティングゲームは旗取り合戦であり、フィールド内の旗を取り合うというゲームとのこと。
「お前にも見せてやりたかったぜー。会長の冷静で的確な指示とそれを正確に実行する俺の勇姿を」
自慢げに語る匙であったが、シンはその話に若干の嘘のようなものを感じた。
「それは残念だ……それで？　実際はどうだったんだ？」

「うっ」
シンが追究すると匙は視線を明後日の方向へ向け、何とも情けない表情になる。
「……会長の指示は的確だったけど、俺が上手くこなせなかったんで結局ヴリトラの力でごり押しした……」
素直に白状する匙。五大龍王の力を用いれば大抵の相手には勝ててもおかしくはない。
「勝てたならそれで良い筈だ」
「それじゃダメなんだよー。ヴリトラは特別だ、龍王だしな。それを宿している俺もそういう意味じゃ特別だ――自慢じゃないぞ？　凄い奴が凄い力で凄いことをしてもある意味当然だろ？　俺は特別じゃない奴が凄いことを出来るようにしたいんだよ……レーティングゲームの教師を目指すには」
匙が反省しているのはその点である。ソーナの指示や戦術の凄さを証明し、特質な才を持たない者でも戦い方によっては格上を倒すこと皆に見せてやりたかった。
途中までは順調であったが、匙と戦った相手は戦い方という点では格上であり、ソーナと互角以上の戦術を披露してきた。
このままでは勝てないと思ってしまった匙は止むを得ずにヴリトラの力を全解放し、勝利を収めたのだが――

「会長の勝利にケチを付けちまったよ、俺は……」

――若くして龍王の力を使いこなす匙は高く評価された。それこそレーティングゲームで勝利したソーナよりも。

複雑な心境なのだろう。誰よりもソーナのことを敬愛している匙だが、ソーナに貢献するつもりが意図せず名誉や評価を奪うような形になってしまった。

ソーナは匙のことを責めることなどしなかった。『まずは勝利すること』。それを前提としているので夢へ一歩前進したぐらいの認識である。

「勝ちは勝ちだ。無駄にはならない筈だ」

「はぁ……勝ち方に拘ろうとしている俺は傲慢なのかなぁ……」

力を持っているがそれでも理想通りとはいかない現実を歯痒く思っている。

「……なぁ、誰よりも強い力を手に入れたとしたらお前は何をしたい？」

匙は作業をしながら何気なくシンに問う。

シンは報告書の手を止め、暫しの間動かなくなった。

「いや、そんな真剣に考えなくてもいいぞ？」

思っていたよりも真面目に答えを考えてくれているシンに、匙は軽い気持ちで答えるよう促す。

シンはその後に数秒間沈黙を続けた後、こう答えた。

「……世界でも変えてみるか」

◇

どんなに長い一日に思えてもやがて終わりはやって来る。学園祭も終盤となり、校庭でキャンプファイヤーが焚かれて周りでは男女が音楽に合わせて踊っている。

それをシンは歩きながら遠巻きに眺めていた。

散り散りになっていた仲魔たちも十分楽しんだ後シンの許へ集まっている。

生徒会の仕事やオカルト研究部の手伝いなど行ったり来たりを繰り返し、ようやく生徒会の仕事が全て終わったのでオカルト研究部の手伝いに戻っている最中である。

旧校舎の中に入ると騒がしい声が聞こえてきた。

「もう！　貴方たち！　私の貴重で大切な一シーンだったのに！」

怒っているリアスの声とそれを宥めようとする他のオカルト研究部員の声。聞こえて来る内容から察するに、どうやら一誠がリアスに改めて正式に告白した様子。

リアスも待った甲斐があったかもしれないが、野次馬たちに決定的な瞬間を見られて台無しになってしまったらしい。

何とも締まらない結末ではあるが、らしいと言えばらしい。

シンの足は喧騒の方へ向かっていく。ピクシーとジャックフロストは混じる為、足早に向かう。

互いの想いが通じ合った二人に送る最初の言葉は祝福の言葉か或いは揶揄いの言葉か。

どちらにするか決めなければならない。皆が集まっている場所へ着く前に。

◇

シトリー領にある病院。サイラオーグは母の見舞いに来ていた。

ベッドの上で眠る母の傍でサイラオーグは語る。

「良き好敵手と巡り合うことが出来ました」

サイラオーグは一誠とのレーティングゲームの話を母へ聞かせる。

「――しかし、負けてしまいました……母上が目を覚ますときまで負けるつもりはなかったのですが……」

素晴らしい戦いだったと今も思っている。だが、やはり敗北の味は苦い。サイラオーグはその苦味に耐えるようにきつく目を閉ざす。

そのとき、柔らかな感触がサイラオーグの手に重ねられる。その感触をサイラオーグ

は知っていた。
　閉ざしてした目を開く。サイラオーグの手に重ねられる小さく細い手。それはベッドから伸びている。
「母上……！」
　ベッドの上でサイラオーグの母ミスラはもう二度と開かれないと思われていた瞼を開け、サイラオーグを優しく見つめている。
「不思議ですね……貴方の顔を見るのは……久しい筈なのに……ずっと知っていたような気がします……サイラオーグ」
　ミスラはサイラオーグが幼い頃に病に倒れた。幼いサイラオーグしか知らない筈なのに彼女は目の前の青年をサイラオーグだというのが分かっていた。
「きっと……私が願っていたように……強く逞しく成長したからですね……」
「――ええ。母上の言葉があったからこそ私は強く生きて来られました……！」
　強い。逞しい。その言葉を何度掛けられたか分からない。それぐらいサイラオーグにとって常に与えられるものであった。だが、数え切れない程のその言葉が、母から掛けられたとき、強く心の中へと染み込み、目から涙が零れ落ちる。
「立派になりましたね……」
　きっとその言葉をずっと待っていたのだろう。だからこそ、返す言葉も自然と出すこ

とが出来た。

「はい……！　母上を守れるぐらいに……！　その為にずっと鍛えてきました……！」

サイラオーグは両膝を着いてミスラの手を両手で包み込む。話したいことがある。伝えたいこともある。医師たちや執事も呼ぶ必要がある。だが、ミスラの手がサイラオーグの頭を撫でると何も出て来ない。

一時で良い。失われた親子として時間を埋めたかった。

実直に生きてきたサイラオーグの初めての我儘。それは二人きりの時間が欲しいというものであった。

◇

「申し訳……ございません……！」

膝を着いて首を垂れる。シャルバのプライドの高さを知る者からすれば有り得ない姿である。だが、彼は実際に行っていた。自らの意思で。そうするに値する存在が彼の前に居るのだ。

シャルバの前に居るのは椅子に座る金髪の青年――ベル。彼と同じテーブルにはルイとオーフィスも同席しており、淹れられた茶を楽しんでいる。

「――何を謝る必要があるのかな？」
ベルはカップを置き、シャルバに問う。シャルバはそれを追及と捉えた。
「我が祖から偉大なる力を分け与えられたにも関わらず、下賤な者たちを誅伐することが叶わず醜態を晒してしまいました！」
己の罪を白状するその姿は、魔王というよりも親の仕置きに震える子のようであった。
「僕が君に対して何かを言うつもりは無い。そもそも罰する気なんて最初から無いさ」
シャルバはこの台詞を聞いて死人よりも顔色を悪くさせる。『見放された』、彼はそう捉えてしまっていた。
「勘違いをしないで欲しい。僕は君に切っ掛けを与えるだけの存在だ。君が何をしようとも責めるつもりは一切無い」
顔を伏せていたシャルバが顔を上げる。
「取り込み、使えるようになった時点であれは君の力だ。君の力に私が口出しするつもりは無い。君が望むまま使えば良い。僕はそれを見守るだけだ」
シャルバは感動に打ち震えたような表情となる。その様は啓示を授かった信者そのもの。
「必ず……必ずこの御力で偽りの魔王たちを王座から下ろし、我々が真の後継者である

ことを知らしめてご覧に入れます！」
シャルバはベルに誓うと五月蠅なす己の分身を呼び出し、黒蠅の渦の中に消えていった。
シャルバが居なくなるとルイが独り言のように小声で何かを言う。
「本気で思っているよ。彼の成長次第では僕の役目を彼に譲ってもいい」
ベルはシャルバに翅を与えたが、元々期待を込めて贈った訳では無い。与えたらどうなるかという実験に近い感覚であった。だが、ベルの予想に反してシャルバは翅の力を取り込むことが出来た。ならば次は期待するというもの。
「シャルバ、調子に乗る」
オーフィスが無感情で呟く。
「可愛いものさ、あれぐらいなら。――僕はもっと傲慢で我儘な存在を知っている」
端正な顔付きのベルの表情に一瞬だけ険が浮かぶ。
オーフィスが誰のことか訊ねる前にいつもの顔付きに戻ってしまった。

幕間　続・魔法、少女?（前編）

　その夜、シンの携帯電話に見知らぬ電話番号から着信が入る。いつもなら無視するのだが、何故だか着信中の携帯電話から異様な圧を感じ取る。明らかに一般人からのものではないと察したシンは、気乗りはしなかったが電話に出ることにした。
「はい」
　通話ボタンを押してすぐに謎の番号の主が話し掛けてくる。
『はぁい☆　シン君☆　セラフォルー・レヴィアタンだよ☆』
　セラフォルーがいつものように高いテンションで甘く可愛らしい声を発する。
「……何かありましたか?　ピクシーたちの撮影は来週だった筈ですが?」
　シンの仲魔たちはセラフォルーが主役とする『マジカル☆レヴィアたん』の準レギュラーである。彼女たちが頑張ってくれているおかげでシンの預金通帳には一瞬では数え切れない桁の数字が刻まれている。
『今日はー、シン君たちにお願いがあるのー☆』
　いつ聞いても甘ったるい声。女性に免疫の無い男が聞いたら鼓膜は痙攣し、三半規管は震え、脳髄は蕩けることであろう。尤も、シンはそんな男を堕落させる声を聞いても

眉一つ動くことはない。
「お願いですか？」
『そう☆　シン君に紹介して欲しい人がいるの☆』
「俺が貴女に、ですか……？」
　意外な内容だったのでシンの眉が僅かに動く。人脈の広さでいったらシンよりもセラフォルーの方が遥かに大きい。それなのにセラフォルーの方が紹介して欲しいとなると余程特殊な人物ということになる。
　このときシンは頭の中で無意識に候補を選ぶ。結果としてセラフォルーが興味を持ちそうな人物が一人該当する。出来ることならば当たって欲しくはないが。
　そして、セラフォルーは紹介して欲しい人物の名を告げた。
『シン君ってミルたんって子と友達なんだよね☆』
（当たりか……）
　魔法少女というカテゴリー。色んな意味で目を惹く存在感。該当するのは彼？　彼女？　しか居らず、見事に的中する。
「俺というかピクシーとジャックフロストと仲が良いだけです」
『でも、当然シン君だって顔を覚えられているでしょ？』
　あくまで知り合いの知り合いという立場であると主張するが、セラフォルーは逃げ道

を与えてくれない。
「……そうです」
『じゃあ良かったー☆』
セラフォルーの声が安堵と喜びでより弾んだものに変わる。
「……それで、何で紹介して欲しいんですか?」
本題に入る。魔王という立場のセラフォルーが、特殊であるとはいえ人間であるミルたんにコンタクトを取りたいのだろうか。
『うふふ☆　あの子には是非『マジカル☆レヴィアたん』の映画に出て欲しいの☆』
想像以上に関わりたくない案件であった。
セラフォルーが主演の映画のことはシンも知っている。まだ冥界で『おっぱいドラゴン』が撮られていない頃に一誠、アーシア、小猫、ゼノヴィア、ギャスパーの五名がセラフォルーからの依頼で映画に出ていた。
シンも声を掛けられていたが『お断りします』と映画出演の話を蹴っている。後にセラフォルーの番組に仲魔たちが準レギュラーになっていることを考えると世の中良く分からないものである。
後日、シンもその映画を見てみたが、色々あって最終的に段ボール箱に入って飛び回るギャスパーとセラフォルーが激戦を繰り広げるという深く考える方が悪いという印

象の映画であった。

『劇場版『マジカル☆レヴィアたん　段ボールヴァンパイア神襲来!』は大好評だったから早くも続編を撮りたいの☆』

「……どうして出て欲しいんですか?」

『今の『マジカル☆レヴィアたん』には強力なライバルが居るの!　そう!　冥界の子供たちに大人気の『おっぱいドラゴン』よ!　『おっぱいドラゴン』の人気を超えるには前作以上のインパクトが必要なの!』

熱く語るセラフォルーだが、シンとしては早く電話を切りたい気分である。余談だが、セラフォルーの映画に『おっぱいドラゴン』になる前の一誠が出演していたことが話題となり再上映が行われ、冥界の子供たちが殺到したことがある。それもまたセラフォルーの対抗心を燃やす理由の一つとなった。

打倒『おっぱいドラゴン』。そこで白羽の矢が立ったのがミルたんの存在である。

『あの子のこととっても気に入ったの☆　私の眷属にしたいぐらいに☆』

セラフォルーがミルたんを知ったのは、実写映画版『魔法少女ミルキー』のオーディション。魔法少女に憧れているセラフォルーは、特に『魔法少女ミルキー』のアニメシリーズに夢中であり、実写映画化すると聞いてわざわざ人間界までオーディションを受けに来たことがあった。

しかも、オーディションを受けたのはセラフォルーだけではない。ソーナと彼女の眷属。そして、リアスとリアスの眷属たちも参加となった。セラフォルーの警護という理由でソーナもオーディションに参加。自分だけでは恥ずかしく耐えられないという理由でリアスたちも参加することとなった――セラフォルーが用意した魔法少女の衣装を着て。

リアスとソーナがまずこの先着ないであろう魔法少女姿になったときは一誠も匙も喜んでいたが、このとき二人の姿を見たシンは終始無言で真顔で無反応。

『せめて何か言ってちょうだいっ！』

『少しでもリアクションをしてくれた方がましですっ！』

――と羞恥で赤面したリアスとソーナに叱られたのを覚えている。これが原因かは知らないが、シンはオーディションに付いて行かずに待機を命じられた。

結局、そのオーディションも途中で『禍の団』の魔法使いたちの襲撃を受け、うやむやになってしまった。

『どうにかしてミルたんのことを見つけられないかなーと思って手当たり次第に聞き回っていたら、何と赤龍帝君がシン君とミルたんがお友達だって教えてくれたの☆』

口の軽い奴め、とシンは内心毒吐く。おかげで厄介な事に巻き込まれそうになっている。

『ピクシーちゃん、ジャック君、ランタン君、ケル君の銀幕デビューにミルたん！　これってもう運命ね☆』

最早逃れることが出来ないと悟ったシンは、潔く観念してセラフォルーの頼み事を引き受けることにした。

「……分かりました。話してみます。ですが、あくまで話すだけです。もし断った場合は説得などはしませんよ」

『それだけで十分☆　ありがとう☆　シン君☆』

セラフォルーは上機嫌で了承する。彼女はミルたんがこの話を断らないという絶対的な自信に満ちていた。同じ魔法少女を目指す者。そういった者たちにしか通じないシンパシーのようなものがあるのかもしれない――かなり限定的な人種間のものだが。

『ちゃんと監督と脚本にもミルたんのことを言ってあるから、良い配役を用意してあるって伝えておいてね☆　じゃあねー、シン君☆　ピクシーちゃんたちにもこのこと言っておいてねー☆』

セラフォルーからの通話が切れる。シンは小さく溜息を吐く。しかし、引き受けてしまった以上考えても仕方がない。シンは迅速に次なる行動へ移っていた。

ミルたんに連絡を入れる。二、三回コール音が鳴った後に繋がった。

『もしもしにょ』

相変わらずの野太い声と相反する語尾。初めて聞く者は脳が混乱することだろう。
「もしもし、俺です」
『にょ、悪魔さんにょ。珍しいにょ。てっきり妖精さんからだと思っていたにょ』
ミルたんが言っているように一番やり取りをしているのはピクシーである。シンの方から連絡したことは一度くらいである。
「今日は折り入って頼みたいことがあります」
『何かにょ?』
「……映画に出てみませんか?」
電話の向こうのミルたんは沈黙する。そして――
『出るにょっ!』
鼓膜を突き抜けていくような大声量が携帯電話から聞こえてくる。生身で会話していたら鼓膜が破けていたかもしれないと思えるぐらいの爆音であった。
『ミルたんは何役なのかにょ!?』
「……詳しくは知りませんが、かなり良い役なのは間違いないです……魔法少女関連なのは間違いないです」
耳鳴りのする鼓膜に追い打ちを掛けるミルたんの覇気に満ちた歓喜の咆哮。携帯電話を少し離して会話をする。

『それってやっぱり悪魔さんのお仲間さんが撮ってくれるのかにょ?』
「そうです」
なので人間世界では公開されず、悪魔の間のみで見られる映画であることを教えておく。
『それでも構わないにょおおおお!』
出演する気しかないミルたんの返事。薄々分かっていたがあっさりと交渉は終わった。
「それじゃあ出演出来るということを向こうに伝えておきます。また後日詳しい説明をしますので」
『悪魔さん!　待っているのにょ!』
最後まで大声量に鼓膜を揺さぶられながらシンは通話を切る。この後、ミルたんが出演を了承したことをセラフォルーに伝えなければならないし、ピクシーたちにも映画出演の話が来ていることを教えなければならない。
なし崩し的にマネージャーのようなポジションに置かれている自分に気付き、シンは溜息を吐いた。

◇

某日、冥界某所にて劇場版『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』の撮影が行われていた。

機材を持ったスタッフたちが慌ただしく走り回っている中でシンは渡されていた台本を片手にその光景を眺めている。傍にはピクシーたちも居り、騒がしい様子を楽しんでいる。

そして、もう一人シンの傍に立つ者が居た。

「……今更ながら俺は何でここに居るんだろうな」

「本当に今更だな」

台本を読みながら愚痴るのは匙。彼もまたセラフォルーから映画出演を頼まれた一人である。

「安請け合いするんじゃなかった……」

天を仰ぎ、匙は後悔する。

シンがセラフォルーからミルたんのことで連絡を入ったほぼ同時期にセラフォルーはソーナにも連絡を取っていた。内容は眷属の中で誰か映画に協力して欲しいというもの。

前はリアスの眷属たちに頼んだが、今の彼らは『おっぱいドラゴン』のキャラクター

であり、商売敵なので頼むことが出来ず、誰か良い人材は居ないか妹を頼った。
それを聞かされたソーナは悩んだ。姉の我儘に自分の眷属が振り回されるのはもう勘弁して欲しいからだ。無理矢理魔法少女の恰好をさせられたトラウマが蘇るが、いっその事自分が立候補するべきかと思い悩んでいたとき、ソーナの心情を見抜いて匙が申し出た。
『俺が出ます！』
ソーナに良い所を見せたい。また彼女の姉であるセラフォルーにも存在をアピールしたいと思い自ら買って出た。そして現在に至る。
「はぁ……」
匙は何度目かになる溜息を吐く。彼は少し後悔していた。この映画に出ることに。何故ならば――
「何で俺、ボス役なの？」
嘆く匙は、黒く刺々しい鎧の衣装を着ており如何にも悪役という風体であった。
匙に与えられた役はこの映画での黒幕でラスボス。匙の予想ではモブ役か最初にやられる一敵怪人程度だと思っていたのだが、予想を遥かに上回る重要なポジションを与えられてしまった。そのせいでプレッシャーから弱気な発言が目立つ。
「お前の神器とヴリトラが今回のボス役のイメージと合ったからしい」

シンはセラフォルーと監督からそう聞かされている。
「……吐きそう」
「吐くなら向こうだ」
青白い顔をしている匙にシンは御手洗いの場所を指差す。
「兵藤たちも悪役で出ていたのは知っているけど……俺もそうなるとは……演技なんて小学校の頃の学芸会以来なんだぜ……?」
ちゃんとした演技をするのは今回が初めてであり、しかも大役を与えられたこともあって匙は重圧で縮こまってしまっている。
「初演技はお前だけじゃない」
視線を別方向へ向ける。匙も同じ方を見た。そこにはある意味で本日の主役と言ってもいいミルたんが椅子に座ってスタッフにメイクをされている。
「相変わらず強烈だな……」
オーディション会場に続いて二度目のミルたんだが、強烈な存在感は薄れていない。その存在感は冥界でも通じており、初めてミルたんを見た悪魔たちは誰もが二度見を超えて三度見をする。
今も大人しくメイクをされているが、椅子に座っている筈なのにメイクをしているスタッフよりも頭の位置が高い。スタッフにメイクされる前に『よろしくお願いいたしま

すにょ』と厳の如き笑みを向けたら『ひぃ！　よ、よろしくお願いします！』とスタッフ数名が気圧されていた。
「にしても……」
匙はミルたんの恰好を何とも言えない表情で見ている。魔法少女姿なのは変わらないが、いつもと衣装が違う。『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』と同じ衣装で髪型も同じであった。
同じ衣装なのは理由がある。今回の映画でミルたんに与えられた役はセラフォルーのライバル兼メインの敵役。しかも、セラフォルーの遺伝子情報から生み出されたクローンという設定であった。
「……全く似てないのに無理がないか？」
「戦闘用に強化されたという設定がある。ちゃんと作中で映像として説明するらしい」
「いやいやいや。強化なんて生易しいもんじゃないだろ！　改造だ改造！　改造人間だよ！」
骨格レベルで違うので匙が納得出来ないのも仕方がない。シンとて設定だからといって全てに納得している訳ではない。
「俺たちがどうこう言っても無駄だ。この映画ではそうなっている。それが全てだ」
「……自分を誤魔化す自信が無いぞ、俺」

割り切れない様子の匙。無理矢理と分かっていても呑み込まなければならない設定に苦悩している。

「俺、自信が無くなってきた……」

「今更逃げられないぞ」

「分かってんだけどさぁ……」

匙の視線がまた別の方に向けられる。今回の映画でのもう一人の大物キャストがそこに座っていた。

「ぷはぁ……」

本番前だというのに堂々と飲酒をする巨大な異形――マダである。彼もまたセラフォルーが敵役としてオファーされていた。正確には、セラフォルーが良い敵役はいないか探していたときにアザゼルに頼み、彼の伝手で紹介されたのがマダである。

見るからに悪役そのものに見た目を気に入り、今回の映画の出演が決定した。マダは以前冥界でインドラと揉めたせいで冥界を出禁になってしまっていたが、冥界に対する奉仕活動ということで特別に冥界へ入ることを許されていた。

マダに与えられた役は黒幕が使役するゴーレム。つまりは匙の手下である。レヴィアたんのクローンを生み出し、強化したのも黒幕。彼女もまた匙の手下。設定とはいえ匙は濃過ぎる二人の上に立っているのだ。

「あんな二人に挟まれたら、俺の存在感薄くね？」
「負けないように存在感を出すんだな」
「無理そう……」
演じる前から弱腰の匙。そのとき、ミルたんのメイクが終わったというスタッフの声が聞こえた。すると、先程まで腰を下ろしていたマダが徐に立ち上がり、ミルたんの方へ歩いて行く。
「お、おい。大丈夫か？　あれ」
マダの行動を不安視する匙。他のスタッフも同様であり、騒めている。
ミルたんはマダが近付いて来ていることに気付いて椅子から立ち上がった。マダとミルたんが向かい合う。流石にマダの背丈の方が高いが、それでも二人が並ぶと世界が縮小したかのように見えてしまう。
皆の注目が集まる中でマダは口を開いた。
「――良い体してるねぇ。俺と楽しいことしない？」
まさかのナンパの常套句。
「いやぁん。セクハラだにょ」
ミルたんは照れながらマダの胸を小突く。ただし、常人には目で追えない速度で。空気が爆ぜるような音と共に胸を突かれたマダ。

「うへへへへ。やっぱ良い筋肉してるじゃねぇか」
　微動だにせず下卑た笑い声を出している。
「おい、見ろよ……怪物が怪物にセクハラしてんぞ……」
「良かったな。きっと一生ものだ。目に焼き付けておけ」
「やめろ！　今夜にも夢で見そうだ！」
　匙は頭を振って今見た光景を追い出そうする。
「みんなー！　今日もよろしくねー！」
　どよめいていた撮影現場に響き渡る可愛らしい声。セラフォルーの現場入り。ミルたんとマダの存在感に圧倒されていたスタッフたちは安堵の息を洩らす。
「凄い……凄い普通だ……！」
　現れたセラフォルーを見て匙が感動したように言う。魔王が魔法少女の恰好をしているという点で考えれば普通ではないが、二人と比べたらまともにしか見えないだろう。
「シンくーん！　サジくーん！　来てくれてありがとう☆」
　二人に気付いてセラフォルーが近付いてきた。
「レ、レヴィアタン様！　今日は精一杯やらせていただきます！」
　匙は緊張で体を固くしながら挨拶をする。ソーナの姉であっても相手は魔王。向か

い合って話すとなると嫌でも緊張してしまう。
「シン君☆　ミルたんを連れて来てくれて本当にありがとう☆　これで良い映画が撮れるわ☆」
　礼を言うセラフォルーにシンは軽く頭を下げ、『大したことはしていないので』と謙遜する。実際、言ったら即ＯＫを貰ったので苦労もしていない。
　シンと匙への挨拶もそこそこにセラフォルーは今回の映画の準主役であるミルたんの方へ行く。
「今日はよろしくね☆」
「にょ！」
　声を掛けて来たセラフォルーにミルたんは驚き、自前のバッグをゴソゴソと漁って何かを探し、見つけるとそれをセラフォルーへ差し出す。
「サイン下さいにょ！」
　ミルたんは色紙を取り出し、セラフォルーにサインを頼む。
『魔法少女マジカル☆レヴィアたん』を全話見たにょ！　面白かったにょ！　是非ともレヴィアたんのサインが欲しいにょ！」
「まぁ！　ミルたんったら良い子ね☆」
　セラフォルーは嬉しそうにミルたん宛てのサインを書く。

撮影数日前にミルたんから連絡が入り、役作りの為にも『マジカル☆レヴィアたん』を見たいと言われた。シンはその頼みを聞いてすぐにセラフォルーにそのことを話すとすぐに『マジカル☆レヴィアたん』全話が入ったＤＶＤが転送されてきた。

それを持ってミルたんの許へ向かい、手渡す。ここまでは良かったのだがミルたんが同行していたピクシーに一緒に鑑賞しないかと誘ってきたのだ。

ピクシーはすぐに了承。そして、シンもまた付き合うように頼んで来た。乗り気ではなかったが、ミルたんの方が契約として頼んで来たので付き合わざるを得なくなり、それから毎晩ミルたん宅で『マジカル☆レヴィアたん』を一緒に鑑賞することとなった。

最初は演技目的であったが、後半では純粋に作品を楽しんでいるようだった。

「やあやあ。今日もよろしくねー、間薙君」

サングラスに帽子の中年男性が親し気に声を掛けて来る。この男性は『マジカル☆レヴィアたん』の監督である。間薙とも何度も会っており、面識があった。

「今日も迷惑を掛けるかもしれませんが、よろしくお願いします」

「いやいやー。間薙君とこのピクシーちゃんとジャックフロスト君とジャックランタン君、それにケルベロス君はいつも良い仕事してくれるよー。皆、天性の役者だよ。演技指導も要らないくらいの。彼らが出演して以降ずっと評判良いよ?」

上機嫌に笑う監督。別に悪い悪魔ではないが、自分のことを完全にマネージャーとし

て見ているのはシンとしては勘弁して欲しかった。そんなつもりは微塵もない筈なのに知らない内にそういうポジションとして定着してしまっている。

そのピクシーたちは、今控え室でスタッフが用意してくれた菓子を食べてくつろいでいる。毎度毎度スタッフが、ピクシーたちが好みそうな菓子を準備してくれているので、ピクシーたちもそれを楽しみにしていた。

ピクシーたちはスタッフたちに可愛がられており、映像でも現場でもマスコットキャラ扱いである。

「サジ君にも期待してるよー。あの龍王ヴリトラを宿しているんだかね。レーティングゲームの映像も見させてもらったよ。君なら今回の役のイメージにピッタリだ！」

「せ、精一杯頑張ります！」

監督から期待を寄せられ、匙は元気の良い返事をする。

「それじゃあ、台本チェックの後に撮影開始と行こうか」

◇

シーンA『レヴィアたんとクローンレヴィアたんの邂逅』

撮影が始まる。破壊され、炎上する家々のセットの中心で対峙するセラフォルーとミ

ルたん。
「あ、貴女は何者なの……?」
「……私は貴女」
倍近い身長差がある二人。セラフォルーはシリアスに、ミルたんはクールにセリフを喋る。野太い声でクールに喋っているせいでミルたんからハードボイルドの気配を感じるが、恰好が魔法少女姿なのでギャップで脳が誤作動を起こしそうになる。
セラフォルーが煌めくステッキを構える。それに合わせてミルたんも同じ形のステッキを構えた。衣装以外真逆の体型をしている筈なのに何故か似ている、と錯覚してしまうミルたんの構えた姿。穴が開きそうな程『マジカル☆レヴィアたん』を見ていた成果か、ミルたんはセラフォルーの構えを完璧にコピーしている。
「お、俺、目がおかしくなったのか……?　何か似ているように見えるぞ……?」
何度も目を擦り、自分の目が正常か確かめる匙。彼だけでなくこの現場に居る誰もが同じ感想を抱いている。
「い、言っている意味が分からないわ!」
「戦えば分かる」
台詞の応酬の次は戦いのシーンへ移る。
「レヴィアビーム!」

ステッキから放たれる魔力のビーム。『マジカル☆レヴィアたん』は基本ＣＧ無しで出来るだけ本物の魔力で演出を行っている。
「ふぅぅぅぅん！」
ミルたんは荒々しい声と共に正面から魔力のビームへ突っ込んで行き鉄板よりも固く、分厚い胸板でビームを受け止めながら前進していく。
「嘘っ!?」
「嘘っ!?」
セラフォルーの作中の台詞と見ている匙の思わず出してしまった声がシンクロする。
「何で魔王の魔力を真正面から受けられるんだよ!?」
「流石に加減はしている筈だ」
驚愕している匙に演出用に手加減していると宥めるシン。
ミルたんから弾かれた魔力がセットの建物を掠める。掠めた部分は綺麗に消失していた。
『……』
シンと匙がその部分を無言で見つめてしまう。
「に、人間じゃねぇ……」
匙の感想にシンも否定することは出来なかった。

セラフォルーのビームに逆らっていき、遂には自身の間合いまで詰め寄るミルたん。ステッキを徐に振り上げ――

「レヴィィアァァ・スウィィィングッ!」

――音を置き去りにするステッキによる一撃でセラフォルーは吹っ飛び、セットの建物に衝突するとそのまま何棟も貫いていく。

「レヴィアタン様っ!?」

魔王が洒落にならない速度で殴り飛ばされる光景に、匙は悲鳴のような声を上げる。

不敬罪では済まないような状況に対し、監督はというと――

「良いぞ……！　私の描いていた絵よりも遥かに迫力がある！　凄い逸材だ……！」

――ミルたんを絶賛していた。今は魔王の身の安全よりも映像の方が大事な様子。

すると、瓦礫を押し退けてセラフォルーが出て来る。腕を押さえて顔を苦痛で歪めているが、見た所大した怪我をしている様子は無く演技を続行している。あの一撃を受けてもほぼ無傷なのは流石である。

「何て力なの……!?」

「戦うだけ無駄。私は貴女を全てに於いて上回っている」

「そんなことっ!?」

セラフォルーは再びステッキからビームを放つ。しかし、ミルたんはステッキの一振

りでビームを真っ二つに裂いてしまった。
「え、怖っ」
ミルたんの人間離れした芸当に一々リアクションする匙。驚きの上に更なる驚きを重ねられたせいで大袈裟なリアクションも心底畏怖したせいで消極的なものへ変わっている。
「そんな!?」
自慢の技を容易く破れたことにショックを受けた演技をするセラフォルー。そこから先はミルたんの独壇場であった。
セラフォルーが三度目のビームを放つ前に後ろへ回り込み、セラフォルーが気付いて距離を取ると一足で追い付き、ステッキで空を切ると風圧でセラフォルーが飛んで地面に倒れる。
戦いの内容はアドリブがやや多いものの話の展開は脚本通り。次はミルたんが倒れているセラフォルーのツインテールの片方を掴んで持ち上げるシーンなのだが、ミルたんは片手を伸ばした状態で硬直してしまい――
「やっぱりミルたんは女の子の髪を引っ張り上げるなんて乱暴なこと出来ないにょおぉぉ!」
――顔を覆って泣き始めてしまった。

慌てて監督が撮影を中断させ、泣くミルたんをセラフォルーが宥める。
「大丈夫大丈夫☆　魔法で体を浮かせるから引っ張り上げても私は痛くないから☆」
クスン、クスンと気分が下がっているミルたんを何とか励ましてモチベーションを上げさせようとしている。
「何だあの絵面……」
泣く巨漢を慰める少女の図に違和感しか覚えない匙。
「しかし、あんなに泣かなくてもいいんじゃね?」
「好きなジャンルがジャンルなだけに悪役は色々とストレスが掛かるんだろう」
愛、夢、希望、友情などの魔法少女に成りたいミルたんからすれば、演技とはいえそれと真逆の振舞いがかなりのストレスになっていることをシンは察して、ピンと来ていない匙に説明をする。
「あー……そういうことか」
匙は気不味そうな表情をして後頭部を掻く。先程の発言がやや無神経であったと反省している。
すると、ミルたんの許へ待機していたピクシーがパタパタと飛んで行く。
「無理しなくても良いんだよー」
「妖精さん……でも」

「いざというときは替わってもいいし。ほら、シンとかやってくれるかも」
とんでもない提案をするピクシー。
「今日まで妖精さんや悪魔さんが手伝ってくれたにょ！　それを無駄にしたくないにょ！」
ミルたんはこれまでのことを振り返って自らを奮い立たせ、セラフォルーと監督たちに頭を下げる。
「撮影を中断させてごめんなさいにょ。次はちゃんとやるにょ！」
「初めての撮影なんだから気にしない気にしない。それよりも良かったよー！　君の演技！　もっと見たいと思ったよ！」
監督が演技を褒めるとミルたんは顔を赤らめて照れる。
「今からプレッシャーだ……俺、あれ以上の演技出来るのか……？」
ミルたんの演技力の高さは、匙も同意する程のものであり同じ初演技の素人という立場から自分の番が回ってきたときのことを想像し、プレッシャーで身を震わせている。
撮影は再開され、NGを出した場面の撮影が始める。ミルたんは倒れているセラフォルーの髪を掴み上げて持ち上げた。さっきは出来ないと泣きべそをかいていたが、気持ちを切り替えて演技をすれば表情筋が全く動かない。無慈悲なライバルという演技が出来ていた。

「うう……」
「これで終わり」
　ミルたんがステッキを振り上げる――そこへ電撃と氷柱が飛んできた。ミルたんは一振りでそれらを払う。すると、掴んでいた筈のセラフォルーの姿が消えており、離れた場所でピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンに守られるような形で囲まれている。
「アタシたちが相手だ!」
「ヒーホー!　レヴィアたんはオイラたちが守るホ!」
「ヒ～ホ～」
　ここでピクシーたちの登場となる。元々ピクシーたちはセラフォルーに召喚されて戦う助っ人的なポジションであったが、人気が上がるにつれて召喚という設定は薄れていき、最終的にはセラフォルーと共に行動する仲間というポジションに落ち着いた。
　ピクシーたちはセラフォルーを守る為に電撃、氷、炎を飛ばす。一応見た目は派手だが威力は極力抑えて演技用のある意味見かけ倒しの攻撃である。
「無駄」
　ミルたんはステッキを振り抜くことでそれらの攻撃を掻き消してしまう。先程の振り払いのときもそうだが、見かけ倒しとはいえ物理で消し飛ばせるような攻撃ではない

筈なのだが。
助っ人のピクシーたちが参戦しても事態は好転せず、セラフォルーたちが追い込まれた所で――
「グルルル……」
唸り声が聞こえ、倒壊した建物にカメラが向けられる。そこに雄々しく立つケルベロス。
「ケル君！」
セラフォルーが嬉しそうな声を上げてケルベロスの名を呼んだ。
『マジカル☆レヴィアたん』の作中ではケルベロスも仲間だが、少し特殊なポジションに付いている。仲間との馴れ合いを好まない一匹狼であり常に単独行動をしているという設定。クールに見えるこの設定のおかげで男の子や女の子にカッコイイと評判とのこと。
ケルベロスが参戦したことでミルたん有利であった戦いは互角となる。すると、突然ミルたんは苦しみ出し、逃走したところでこのシーンの撮影は完了する。
シーンB『クローンレヴィアたんと黒幕の登場』
薄緑色の液体に満たされた円筒状のカプセルの中で膝を抱えた状態で浮くミルたん。それを眺めながら匙は台詞を言う。

「ふん。調整はまだ不十分か」
この時点では匙はシルエットのみであり、姿を隠している。その背後にはマダも立っており、匙同様にシルエットのみである。
「だが、まあいい。初戦にしては上々だ」
感情の籠っていない声の演技――というか匙が緊張し過ぎているせいで棒読みになっており、それが上手く役と噛み合って冷酷な演技になっている。
「レヴィアたんよ。己の血から生み出された分身によって滅ぶがいい……」
ここでミルたんがセラフォルーの血から生み出されたクローンであることを視ている人たちに伝え、更には戦闘用に強化されていることも教える。ついでに無理な強化によってデメリットが生じているという前振りもする。
監督からの合図が掛かり、このシーンは撮り終える。
「ど、どうだった……?」
初演技、初撮影の緊張のせいですっかり顔色が変わってしまっている匙がシンに演技の出来を聞いてくる。
「……まあ、良かったんじゃないか?」
「何だその間!?」
言外でも言わんとしていることが分かってしまう

「……俺に演技のことを聞くな。素人同然だぞ？」
「他の人に聞けるかよ！　相手はプロだぞ！　怖い！」
　色々と言われるかもしれないと思い、一人震える。
「あー！　今すぐやり直したい！　撮り直してほしい！」
「下手くそが生意気にプロ意識出しても下手くそは変わらねぇよ」
　身悶えする匙に掛けられる冷水の如き言葉。匙を一瞬で固まらせた言葉を放ったのはマダである。
「そ、そんなストレートに言わなくても……」
「下手くそに下手くそって言って何が悪いんだぁ下手くそ。そんなに下手くそって言われるのが嫌か？　下手くそ。悪いな下手くそ。本当のこと言ってごめんな下手くそ。落ち込むなよ下手くそ。頑張れ下手くそ――下手くそ」
　罵倒の洪水に匙は言葉を失い半泣きになっている。
「もうどっかへ行ってくれ」
　トラブルメーカーのマダにシンはシッシッと手を払って追い払おうとする。心底鬱陶しいと思っているのを露骨に態度に出す。
「あんまり甘やかすなよー、惚れられるぞ？」
「……」

シンは会話をする気すら最早無いと手を払い続ける。ぞんざいな扱いをされてもマダは余裕がある態度で品の無い笑いを残しながら去って行った。
「酔っ払いの戯言なんか気にするな」
ショックを受けているであろう匙にシンは気にする必要はないと言うが――
「く、悔しい……！」
――ギリギリと噛み合わせた歯を鳴らす匙の顔は、先程のような半べそをかいたものではない。屈辱を晴らす為に燃えるやる気に満ち満ちた顔付きであった。
「次の演技は絶対下手くそなんて言わせねぇ……！　ハリウッド級の演技を見せてやらぁ！」
マダから受けた侮辱と屈辱をバネにして闘志を見せる匙。初演技に対する不安は既に払拭されていた。
「お前も見てろよ！　冥界の映像世界に俺の名前を刻む瞬間を！」
やる気が出過ぎているせいで大層なことを言い出し始めるが、理由はどうあれ折角のやる気に水を差す訳にもいかない。
「分かった」
シンが頷くと匙は台本を持って何処かへ行ってしまう。次の自分の番までリハーサルをする様子。

匙もこの映画に対する思い入れが強くなったのは良いことだが、シンはどうにも胸騒ぎがしていた。マダと会ったときから薄っすら感じていたが、撮影が進むにつれてそれが強くなってきているような気がする。

どこぞのトラブルメーカーが良からぬことを企んでいるような気がしてならなかった。

幕間　続・魔法、少女?（後編）

マダに言いたい放題されて逆に闘志を燃やし、台本に齧り付きになっている匙。凄まじい集中力を発揮しているので出番が来るまで声を掛けるのを止めた。

セラフォルーがピクシーたちと別のシーンを撮影している。因みに内容はミルたんに一方的にやられて落ち込んでしまったレヴィアたんを仲間のピクシーたちが励まし、奮起するというシーンである。

「悪魔さぁぁぁぁん!」

野太い声と共に地面を揺さぶるような勢いでミルたんがシンの方へ駆け寄って来る。シンの視点からすると重戦車が突っ込んで来るような光景であった。

鍛え抜かれた横隔膜から発せられる大声量での呼び声。その声は遠くまで木霊していき、木々に止まっていた鳥たちが一斉に羽ばたく程。

シンの五メートル手前で急ブレーキを掛けるが、勢いが強かったせいで地面を深く抉りながら一メートル前でようやく止まる。ミルたんが急ブレーキを掛けた痕は、黒く焦げており何かが焼けるようなニオイを放っていた。

相変わらずの人の理から外れた力を目の当たりにしながら、シンはミルたんに何故声

を掛けて来たのかを問う。
「悪魔さんに改めてお礼がしたかったにょ！」
「お礼？」
「そうにょ！　こんな素敵な撮影に参加出来てミルたんは嬉しいにょ！　感激だにょ！」
　飛び跳ねて全身で喜びを表現するミルたん。跳ぶ度にツインテールの髪が揺れる。跳ぶ度に巨体が地面を踏み付け、陥没する。
「ん？　なんか揺れてないか？」
「ホントだ。地震かな？」
　そんなスタッフの声が遠くから聞こえて来る。スタッフたちもまさか震源がここにあるとは夢にも思わないだろう。
「魔法少女になるためにオーディションに行ったにょ。それがダメになったときは悲しかったにょ。でも、それが切っ掛けになって映画に出られて嬉しいにょ！　魔法少女にまた一歩近づいたにょ！」
　純粋に感謝の気持ちを伝えてくる。見た目は奇抜で異常だがこういった素直な部分は好感が持てる。流石、ピクシーたちと仲良くなれるだけのことはある。
「憧れ続けて良かったですね。それが今に繋がりました」

夢としては少々というかかなり特殊な部類ではあるが、それを貫き通したことで映画にまで出演している。そのことは讃えるべきだとシンは思った。

「あ、悪魔さんっ！」

ミルたんは感極まった表情になる。途端にシンは背中に悪寒が走ったのでその場から一歩後退した。ミルたんは踏み込んでハグをするが、シンは下がっていたので空振りする。ハグし損ねた両腕は、ミルたんの分厚過ぎる体に叩き付けられ、とても人体から発せられたとは思えない音を鳴らす。

「うん？　誰か花火でもやったか？」

「いや？　何も打ち上げられてないけど？」

またもスタッフの声が聞こえてきたが、訂正する気にはなれない。言っても信じて貰えないだろう。

ハグを空振りしたミルたん。ハッとした表情になると両手で顔を覆う。

「興奮してやってしまったにょ！　ミルたんったらはしたないにょ！」

衝動に駆られて抱き締めようとしたことを恥じ、照れている様子。仮にそのまま抱き締められていたら、常人なら骨が砕けて口から内臓を吐き出していたかもしれない。シンなら耐えられるだろうが、その分熱烈な抱擁を長時間受けていたであろう。

「……お気持ちだけで十分です」

「うぅ……悪魔さんはホントに謙虚だによ」
指の隙間からこちらを覗くミルたん。心なしか顔が赤いような気がするが、見なかったことにする。
そのとき、カコンという軽い音が鳴ってシンの爪先に転がって来た空き缶が当たる。シンがそれを拾い上げると両手に空き缶を抱えたスタッフが歩いてきた。
「あ、すみませーん。拾ってもらってありがとうございます」
若いスタッフはギリギリ抱えられる量の空き缶を抱いたままシンに軽く頭を下げる。
「いやー。ゴミ箱が近くに見当たらなくて探し回っている最中でして……」
聞けば休憩中に出た空き缶の捨て場所を探しており、困った表情をしながら近くにゴミ箱がないかキョロキョロと辺りを見回している。
拾い上げた空き缶をこのまま渡してしまえば再び落としてしまいそうだ、とシンが考えていたときに横から伸びてきた大木の如きミルたんの腕が、シンの持っていた空き缶を取る。
「ミルたんの魔法力で持ち運び便利にしてあげるによ」
「へ？」
言っている意味が分からずスタッフは間の抜けた声を出す。
「マジカァァァル」

困惑するスタッフの前でミルたんの右腕の筋肉が隆起していく。ミルたんの大きな手の中に空き缶が隠れてしまう。
「プレスッ！」
「ひぃ！」
気迫の叫び。スタッフはその叫びに圧倒されて悲鳴を上げてしまう。メキメキという金属のひしゃげる音がミルたんの太い血管が浮き出ている右手から聞こえ、数秒後に閉じていた右手が開かれる。
ミルたんの右手の中で空き缶は極限まで圧縮されてビー玉サイズにまでなっていた。
「空き缶を小さくする魔法にょ」
あまりの力技に呆然とするスタッフ。同時に生物としての格の違いを見せつけられ、カタカタと全身を震えさせている。
「他のにも魔法をかけてあげるにょ」
親切心から言っているミルたんに対し、スタッフは震えを継続させながら無言で抱えていた空き缶を差し出し。逆らうという選択肢など最初から無く、機械のように従順に行動している。
「マジカァァァル……フルプレスッ！」
差し出された空き缶を両腕で抱き締め、潰す。激しい音を立てて複数の空き缶は圧縮

されていき、最終的には野球ボールぐらいのサイズになった。
人智を超えた膂力。シンはこの力で先程ハグされようとしていたのだ。
「はいによ」
空き缶だったものをミルたんから手渡され、スタッフは震える手でそれを受け取る。
首振り人形のように何度も首を縦に振って礼を言うと逃げるように去って行った。
「今日も魔法で良いことしたによ」
深い彫りの顔で爽やかに言うミルたん。
「――良かったですね」
話を合わせながらも、やはりこの人物は人間の域からはみ出ているな、と思うのであった。

◇

シーンC『レヴィアたんたちとクローンレヴィアたんの再戦』
「やっと来た」
「あ、貴女は……!?」
「決着をつける」

対峙するセラフォルー一行とミルたん。
先制攻撃を仕掛けたのはミルたんの方であり、ミルたんは近くに生えていた木を根本から引き抜き、槍のようにして構える。
「あれ？　いつの間にあんな仕掛け作ったの？」
「え？　知りませんけど」
ミルたんが雑草のように木を引っこ抜いたのを見て監督とスタッフが喋っていた。
「レヴィア・スピアァァァァ！」
気合の一声。技名そのままに木を槍の如く投擲する。
「もう魔法少女の技じゃねぇな……」
「非現実的という意味では魔法だ」
「そうか……そうか？」
一理ありそうでなさそうな考え方に匙は腑に落ちない表情をする。
一直線に飛んで行く木。ご丁寧に錐揉み回転をして殺傷力と破壊力が増しており、回転が凄まじいので枝の葉や根の土をまき散らしていく。
見るからに必殺に等しい攻撃。セラフォルーがステッキを構えるが、それを振るう前にケルベロスが一歩前に出た。
「ガウ！」

前肢を一閃。爪先から斬撃が放たれ、木を真っ二つに裂く。裂かれた木は左右に広がって飛んで行き、セラフォルーの後方に突き刺さった。
「おおー。ケルベロス君はやっぱり画になるねー」
「普段は素っ気ないですけどちゃんとこっちの要望に応じてくれますよね」
ケルベロスの演技を称賛する監督とスタッフ。
「――あれ？　木を投げるの知らなかったんだから、今のってアドリブじゃないのか？」
「……アドリブに寛容なんだろう」
匙が真っ当な疑問を挙げるがシンは適当な返事をする。撮影現場というものがどういうものなのか詳しく知らないので、これが良いのか悪いのか分からない。
セラフォルーたちとミルたんの戦いは、仲間のピクシーたちの援護もあって今度は互角であった。
ピクシーたちが牽制の電撃や氷、炎を出してミルたんにそれを防がせた隙にセラフォルーがビームを放つ。前はビームを受けても前進してみせたミルたんだが、フルパワーで放たれたビームはそうもいかず防御の姿勢のまま耐える。だが、フルパワーのビームを受けても不動を貫いたのは流石と言えた。
長いビームの照射であったが、フルパワー故にセラフォルーが息切れを起こして出力が弱まる。その隙にミルたんは射線状から移動してセラフォルーへ急接近をする。

ミルたんはステッキを全力でフルスイングをする。当たれば大木どころか鉄骨すらも折れさせるような一撃。しかし、それを防ぐケルベロスの前肢。ケルベロスがセラフォルーの矛であると同時に盾の役目も担っていた。

両者の力が拮抗して動きが止まった瞬間にセラフォルーの一撃がミルたんに入り、巨体を殴り飛ばす。

地面を何度もバウンドしながら岩壁に叩き付けられた挙句、崩れた岩がミルたんの上に落ちて来た。

ここで監督がカットを入れる。

「お、おい。あれやばいんじゃないのか……?」

セラフォルーに殴られた上に岩に潰されてしまったミルたんの命を心配する匙。その直後に岩をどけて平然とした様子のミルたんが出て来たので匙は真顔になっていた。

セラフォルーたちが近寄ってミルたんに大丈夫か聞いている。ミルたんは真っ白で綺麗に並んだ歯を見せて大丈夫と笑っていた。

因みにだがここまで一連の流れは脚本に書かれた通りのものである。ミルたんの最初の攻撃は若干アドリブが入っていたものの先制攻撃を仕掛けるという筋書きに沿ったもの。決してセラフォルーも本気で攻撃をしていない――そう見えるかもしれないが。

次の撮影の間にミルたんに特殊メイクが入る。衣服の一部をボロボロにし、顔を土や炭などでわざと汚す。セラフォルーたちの先程の攻撃でミルたんに多少のダメージが入ったという設定の為である。

待機の間にセラフォルーは監督たちと殺陣の話し合いをしていた。ピクシーたちはスタッフから差し入れられた菓子をパクパク食べている。

「なあ、俺の演技をちょっと見ててくれ」

シンも匙に頼まれて彼の演技を見る。演技指導は出来ないが、気になった点は指摘した。匙の場合は冷酷な黒幕なのだが、お人好しそうな雰囲気が出ている点である。アドバイスを求めてきたので、何か役に近い人物をイメージしてみたらどうだと素人という立場ながら助言を送る。

ミルたんへの特殊メイクも終わり次のシーンの撮影に入る。岩に埋もれている所から撮影は開始され、登場を派手にする為に軽い素材で作った偽物の岩に代わっている。

岩を派手に撒き散らしながら現れるミルたん。今まで無表情で戦っていたが、肩で息をしている演技をする。特殊メイクと合わさってダメージが入っているのが見て分かるようになっている。

ここからはセラフォルーとミルたんによる殺陣が始める。同じステッキを振り回しながら剣戟を行う二人。レヴィアたんのクローンという設定の為二人の動きは良く似

ており、自然と互いの動きを先読み出来てしまうのでこのステッキの打ち合いではなく相手の攻撃を紙一重で躱していくスリリングな殺陣となっている。

殺陣の最中には台詞は無いものの台本では後付けでセラフォルーの心の声が入る場面であり、セラフォルーは相手の動きが読めること読まれることに戸惑いを覚え、ミルたんが最初に言った台詞を思い出してミルたんの正体に薄々勘付くシーンである。

殺陣もクライマックスに入り、殆ど見えないステッキの応酬が両者の間で繰り返される。そして、その時は訪れる。拮抗を崩したのはミルたんの方。

「うっ……」

ミルたんは呻きながら動きを止める。クローンレヴィアたんである彼女は戦闘に特化した改造を施されたがその代償として長時間の戦闘が出来ない。最初の戦闘で苦しみ出したことと途中のシーンで挟まれた液体のカプセルに入れられていた前振りがここで回収される。

動きが止まったミルたんにセラフォルーのステッキが振り下ろされるが、額に触れる寸前で寸止めをされる。

「何故……止めた……?」

「貴女と戦って思ったの……貴女と話してみたいって。だって……貴女は私だから……」

戦いを通じてセラフォルーはミルたんの正体を察し、仲間意識を持つようになる。戦うのではなく会話をしたいと言われて動揺する演技をするミルたん。

「教えて？　貴女のことを」

セラフォルーはステッキを引き、微笑みながらミルたんに訊ねる。ミルたんは絶好の機会を自ら棒に振ったセラフォルーを信じ難いものを見るかのように見つめた後、ポツポツと自分の素性を語り出す。

自分が義父というべき存在によりセラフォルーの数滴の血を培養して生まれたクローンであること。オリジナルに勝つ為に戦闘力を向上させる改造を受けていること。無理な改造が祟って戦闘時間が限られていること。義父によって命じられたのは自分のオリジナルを倒せということ。

ミルたんの話を聞かされたセラフォルーは絶句。そして、自分のクローンを生み出し、戦わせた顔も知らない黒幕に義憤を燃やす。

ここでミルたんはセラフォルーを不思議そうに眺める演技をする。誕生して間もないクローンにとって誰かの為に怒る、ましてや自分の為に怒ってくれているというのは初めての経験であった。

義父の言葉しかしらない彼女にとってセラフォルーの怒りの言葉は新鮮であり、すんなりと自分の中へと入ってくる。

セラフォルーがミルたんに手を差し伸べる。
「私と友達になりましょう」
友達、という言葉にミルたんは激しく動揺する。初めて触れる友情というものに心が揺さぶられているのだ。
差し出されたセラフォルーの手に、ミルたんは震わせた手を伸ばしていく。
「い、良いシーンじゃねぇか……」
若干瞳を潤ませて匙は感動していた。敵対していた者たちが心を通わせ始める。魔法少女という題材ながらも少年漫画を思わせる友情が芽生えるシーン。王道故に刺さる者には深く刺さる。
しかし、そんな感動シーンも次の時には粉々に粉砕される。
空から降ってくる巨影。大地を踏み砕きながら着地をする。
派手で騒々しい登場をしたのはマダ。マダは登場と同時に吼える。
グルァァァァァァァ!
理性無き獣の叫び。マダに与えられた役は黒幕が創造した与えられた命令のみに従う自我無きゴーレム。その役の為にセリフの類は一切無いが代わりに咆哮のみで見事に自分の役を表現してみせる。
「くぅ……!」

匙が悔しそうに表情を歪めた。匙のことを下手くそと連呼するだけはある演技力を見せつけてくる。匙も文句を言えないマダの演技を見て悔しがることしか出来なかった。

マダは大きく息を吸い込んだ後、炎をセラフォルーたちへ吐く。全員が丸焼きになりそうな所でジャックランタンが間に入り、そのランタンで吐かれた炎を全て吸い取る。

しかし、マダの吐いた炎は目晦ましにしか過ぎず、セラフォルーたちが炎に怯んだ隙にマダはミルたんを抱え上げ、尚且つ四本の腕で拘束する。

「え、絵面が……絵面がキツイ……！」

魔法少女のコスプレをした巨漢を更にでかい怪物が四本腕が拘束するという人に説明をしたらまず正気を疑われる光景。四本腕がどのようにミルたんを拘束しているのかはシンには分からない。見たくないので視線を逸らしている。

マダは改造のデメリットで動けないミルたんを連れて何処かへ行ってしまう。

セラフォルーは天に向けて手を伸ばすが時すでに遅し。ミルたんは連れて行かれてしまった。

ここでセラフォルーにこの戦いの目的が出来る。それは自分のクローンであるミルたんを取り戻して彼女と友達になること。連れ去られたミルたんにそれを誓ったこのシーンは撮影完了となる。

「へっへっへっ。どうよ?」
撮影を終えたマダがこちらを煽りに来た。先程まで理性の無い怪物を演じたとは思えないぐらいの俗っぽさを出して。
わざわざ匙に感想を求めてくる辺りに性格の悪さが際立つ。聞かれた匙はぐぬぬ、と表情を歪めながら――
「――した」
――虫の鳴き声のような小声で感想を言う。
「はぁ?　聞こえねぇよ」
「――た」
もう一度聞かれるが匙は先程よりも小さい虫の羽音のような小声で言う。
「だから聞こえねぇって」
「――」
どんどん小さくなっていく匙の声。最終的には虫の足音程度になっており、マダへの露骨な反抗心を見せる。
匙に聞くのを諦めて今度はシンに聞いてくる。
「どうだったよ」
「――」

シンは匙に倣って虫の心音のような小声で感想を言った
「……もういいや」
マダは呆れた様子を見せた後、離れて行ってしまった。
「見てろよぉ、アル中セクハラ大巨人めぇ……。二度と下手くそなんて言わせねぇからなぁ」
マダへの逆襲に燃える匙。次のシーンは匙がメインとなる場面であった。

◇

シーンD『黒幕登場』
マダに拘束されてとある場所へ連れて来られるミルたん。そこは様々な機器や培養槽などが置かれた如何にもマッドサイエンティストな雰囲気がある内装であった。
「……戻って来たか」
二人に背を向けて立つ匙。前の棒読み気味な演技ではなく、声から情という温度を抜いた冷酷なものとなっていた。数時間の間にここまで仕上がるのは驚きである。
「――失敗作が」
ミルたんを失敗作と謗りながら匙は振り返り、ここでようやく素顔が晒される。髪型

はオールバックになっており、右目の周りに長い胴体の黒龍の紋様が描かれている。この紋様は魔術が施された特殊メイクになっており、紋様が生物のように動き今も匙の顔を泳いで鼻筋と頬の間に移動する。

「お、お義父様……」

ミルたんは震える声で匙を義父と呼ぶが、匙の目はミルたんを見ているようで見ていない。人ではなく物を見るかのような無感情な目を向けるのみ。

匙に与えられた役名はドクター・ヴリトラ。そのまんまのネーミングである。研究者、技術者であり演じている匙とは色々な意味で真逆の存在である。

嘗て所属していた組織をレヴィアたんによって壊滅させられたという過去を持ち、その復讐の為にレヴィアたんを狙う――という訳ではなく、組織をたった一人で壊滅させたレヴィアたんの強さに魅せられ、そこから最強を求めて様々な研究を行っている、という少し捻った設定を持つ。

マダが演じるゴーレムもミルたん演じるクローンレヴィアたんも最強に至る為の研究過程で生み出された副産物であり、ドクター・ヴリトラにとって自身の踏み台に過ぎない、という冷酷な悪役である。

「お前の強さはあの程度なのか……？　私はお前をそのように調整した覚えは無い」

「わ、私は……」

「どうして出来なかった？　何故出来なかった？　言われた通りに出来なかった？　本気で出来なかった？」

言葉でネチネチと陰湿にミルたんを責めていく。聞いている者たちが思わず匙を一発殴ってしまいそうになるぐらい腹の立つ演技である。ミルたんは屈強な体を震わせて恐怖に耐える演技をしている。巨体が一回り縮こまったように見えるぐらいの名演である。

「そ、その……」

「……そういえば何か会話をしていたな？　言え。奴と何を話していた」

「そ、それは……」

「言え」

同じ言葉を繰り返すとミルたんは口をガクガクと震わせながら話し始める。ドクター・ヴリトラに絶対服従するように洗脳されているので、彼が強く命じれば意思に反して体が勝手に反応する、という設定がなされている。

「レ、レヴィアたんは……私と友達になりたいと……」

「友達だと……？」

匙は口を閉ざし、次の瞬間には感情が爆発したかのように笑い出す。

「はははははははははははっ！」

感情をゼロから一気に百まで駆け上らせる。匙の練習を何度も見ていたシンだが、本番で練習以上の演技を披露している。

笑い続けていた匙だったが不意に笑うのを止め、ミルたんの頬を手の甲で打つ。ぶたれたミルたんは床に横たわり、そんな彼女を匙は冷たく見下ろした。

「お前には罰と修正が必要だな……連れて行け」

マダに命じてミルたんを何処かへ運ばせた所でこのシーンは撮影完了となる。

「いっ、てぇぇぇ！」

カットが入ると同時に匙はミルたんを叩いた手を振りながら悶える。

「大丈夫かによ?」

殴られたミルたんは平然としていた。匙がミルたんを殴る演技は本気で殴っている。最初はフリの予定だったが、ミルたんからの熱望により実際に殴ることとなった。その結果がこれである。

「い、岩山を殴ったかと思った……」

演技でミルたんが倒れてくれていなかったら手首が折れていたかもしれない。

「お、俺は大丈夫です……あ、あの、殴られた所は大丈夫でしたか……?」

ミルたんの圧を恐れ、腰が引けた状態で話す匙。おまけに敬語にもなっている。

「大丈夫によ。全く痛くなかったによ」

「そ、そうですか……」
ミルたんは自分の頬を指差す。赤い痕すら残っていない。痕に残っていないことを喜べばいいのか、それとも赤みすら与えられなかった己の非力さを思い知らされたことを嘆けばいいのか、匙は複雑な表情をしていた。
「サジ君。ちょっといい？」
「は、はい。今行きます」
監督に手招きをされたので、監督の許へ小走りで行く。
監督とスタッフ、脚本家を交えて何かを話す匙であったが――
「ええっ!?」
――数分後に悲鳴に近い声を上げた。
シンが次のシーンまで待機している匙の様子を見に行く、匙は隅で体育座りをして縮こまっていた。
「どうした？」
見兼ねてシンは声を掛けると、匙は死人かと見間違う程に生気を失った顔を向けて来る。
「……どうしよう」
返事になっていない答えが返って来る。その声にも生気が無い。心成しか少し見な

い間に痩せた、もしくは枯れたように見える。
「……さっき監督が言ってきたんだ……この後のシーンを少し変更したいって……」
「それで?」
「俺が……ミルたんにお仕置きの意味を込めて再調整をするって場面なんだけど……」
セラフォルーへの情が芽生え始めたミルたんを洗脳し、今度は戦うだけの戦闘兵器へと変えてしまうというドクター・ヴリトラの非道さを強調するシーンである。
「何が変わるんだ?」
「……本来なら機械とかを使うんだけど……監督が俺の神器でそれをやれないかって……」
本来のシーンなら機械で四肢を拘束し、物騒な機械であれこれとする見方によってはアダルトな雰囲気が出る――かもしれないシーン。機械ではなく『黒い龍脈』のラインを使うということは――
「つ、つまり、お、俺はきゃ、客観的に見てミルたんに触手プレ――うぼぇ!」
言葉にするのも悍ましいのか匙は口を押さえてえづきそうになっている。マダとミルたんのとき以上に酷い絵面になることが保証されているから無理も無い。
「だ、ダメだ……やる前から気力が萎えてしまう……」
既にやる気が底辺に達している匙。頭の中で描いてしまった最悪のイメージのせい

でこの間にも顔色が悪化している。
最低となったモチベーションを上げるにはどうするべきか。プロフェッショナルならば自らを奮い立たせる方法を知っているだろうが、素人である匙にそれを望むのは酷である。
何か良い方法はないかと視線を匙から離したとき、セラフォルーがピクシーたちと一緒にミルたんと談笑している姿が目に入った。
シンはセラフォルーを見てある説得を思い付く。
「――それで？　お前はどうするつもりだ？」
「……直談判して展開を変えられねぇかな？」
「折角のチャンスを自分から棒に振るのか？」
「チャンス……？　一体何のチャンスだっていうんだよ……？」
顔を顰めながら質問を返す。
「匙。お前の夢は何だった？」
「え？　冥界でレーティングゲーム専門の先生になることと……あと、会長とできちゃった婚すること」
「前者はまあいいとして後者の最大の壁が何か分かっているか？」
シンに問われ、数秒後匙は顔を赤めながら言った。

「お、俺が勇気を持って会長に告白すること……か?」
「どうでもいい、そんなのこと」
「どうでも良くないだろ!」
「どう考えても最大の壁はあれだろうが」
シンはさり気なく指差す。指した先にはセラフォルー。
「――あっ」
セラフォルーがソーナをどれだけ溺愛しているのか匙も良く知っている。もしもの話だが、セラフォルーにソーナが出来たという話をしたら――
「――」
余程恐ろしい想像をしたのか、匙は生きているのが不思議に思える顔色になっている。
「殺される――ことはないだろうが、それよりも酷い目には遭うな」
匙の想像を肯定するシン。
「そうなる前にお前は少しでも好感度を上げておくべきだ」
その言葉に匙は目を見開く。
「……はっきり言ってお前に対する彼女の中の知名度はあまり高くない。大事な妹の眷属の一人として名前を覚えられているぐらいだ」

「それは……そうかも」
顔を合わせた回数は多いかもしれないが、立場が大分違うので匙はセラフォルーと会話したことはそんなに多くない。ヴリトラの神器の所有者、五大龍王の力を操れるなどのことは知られているかもしれないが、本人の詳細についてはあまり知られていないだろうと匙は思っている。
「だからこそのチャンスだ。この映画に貢献すれば覚えもめでたくなる」
将を射んとする者はまず馬を射よ、という言葉もある。外堀を埋めることは遠回りに思えるかもしれないが、結果的にそれが目的の道へ繋がることになる。
ソーナもセラフォルーの奇行に振り回されているが、それに付き合っているのはソーナもまたセラフォルーのことを敬愛しているから。シスコンまでは行かないがかなり度合いは深いと思われる。
セラフォルーに認められれば、その分ソーナとの距離が縮まるのだ。
「確かに……いや、それでも……だが」
今一つ踏み込めない匙。だが、確実に傾いている。
「チャンスというのはそう何度も来るものじゃない。それをものにするかどうかで今後が大きく変わる……あいつはそれを逃さなかったぞ?」
あいつとは一誠のことを指す。彼に尊敬と同時にライバル心を抱いている匙はその

言葉を聞き、立ち上がった。

匙は佇んだまま表情をころころ変える。苦悩に満ちた表情の後、哀しみを背負ったような表情になり、最後は全てを悟ったかのような穏やかな表情になる。

「間薙……俺、行ってくるよ」

あらゆる感情を超越したかのような落ち着いた声。シンは頷いてそれを見送る。

シンは別に匙のことを思って説得した訳では無い。尤もらしい言葉を並べて匙に活を入れたのは、単純に撮影を長引かせたくなかったから。

アドリブに寛容な監督である。このまま撮影が長引けばもしかしたら自分に飛び火してくるかもしれないと思ったからだ。

故に撮影の滞りを無くす為にシンは匙の背中を押す――この場合は奈落へ向けて蹴り落としたという表現の方が正しいのかもしれない。

あれだけ気力に満ちた匙ならば成し遂げることだろう。どうなるか見守るつもりはシンには無いが。

シンとて一生記憶に刻まれるようなものを好んで見るような趣味は無い。暫くの間は撮影場所から離れる。

一時間程経った頃にシンは戻って来た。匙が同じ場所、同じ体勢でそこに居た。一体彼は何を見て、何を体験したというのだろうか。

「お母さぁん……お母さぁん……」

極限状態で人が発すると言われている言葉を何度も繰り返しながら虚ろな目をし、灰の如く燃え尽きて魂が抜けた匙の残骸がそこにあった。

◇

シーンE『レヴィアたんと洗脳されたクローンレヴィアたんと死闘』

セラフォルーとミルたんとの三度目の戦いとなるシーン。事前にマダの襲撃によりピクシーたちと分断されており、セラフォルーとミルたんのタイマンとなる。

一度は友達になれるかもしれないと思っていたが、洗脳されたことにより心を失ってしまったという設定のミルたんと激闘。

セラフォルーは何度も説得を試みるが、ミルたんには届かない。

最早、戦う為だけの存在へ成り果ててしまったミルたん。獣の如き咆哮を上げながら、一撃一撃が必殺かと思わせるような攻撃を繰り出す。

それらを紙一重で避けながらセラフォルーは尚も説得を続け、ミルたんに呼び掛け続ける。

「こんな……こんな戦い……悲しいだけよっ！」

涙を流して叫ぶセラフォルー。このときの演技は真に迫っており、聞く者の胸を締め付ける。

それでも攻撃を続けるミルたん。だが、そのときセラフォルーは見た。ミルたんが涙を流していることを。こちらの演技も見事であり、無表情のまま涙を出し続けている。

その涙を見たセラフォルーは決心する。

「そう……やっぱり貴女も私だね……私と一緒で泣いているから……」

意思とは無関係に戦わされ続けるミルたん。その声無き哀哭はセラフォルーに届いており、セラフォルーはミルたんを止める為に戦う。

セラフォルーの連続魔法。ミルたんはそれを回避、防御。距離を詰めると必殺のステッキを振るう。セラフォルーもそれに応戦してステッキを振るう。

互いにステッキを振り抜いたとき破砕音が鳴り、ステッキの上半分がへし折れて地面に落ちた。

両者共武器を失った。互いの次なる一手は。

セラフォルーもミルたんも後退をせず、足止め、そして力の限り殴り合いを始める。

凄まじいとしか言いようがない拳の応酬。互いに一歩も退かず、想いの全てを拳に乗せての肉体言語。

一応互いに殴り合っているフリをしている筈なのだが、上手過ぎるせいで本気で殴り

合っているようにしか見えない――というか殴り合っていないだろうか。
作品名を忘れてしまうような泥臭い殴り合いを続ける二人。監督は興奮した様子で撮影を続けている。
「ま、魔法少女の戦い方じゃねぇ……」
ふと気付く。いつの間にか傍に匙が立っており、唖然とした様子で二人の殴り合いを見ていた。
廃人に見間違いそうになるぐらい真っ白になっていたのに早い立ち直りである。
「立ち直るのが早いな」
「立ち直る？　何のことだ？」
「何って……」
「何かここ一時間程の記憶が無いんだけど、何かあったのか？」
立ち直りが早い理由が分かった。
（こいつ……自分の記憶を……）
心にこれ以上の負担を掛けない為の自己防衛。辛かった記憶を自ら封じてしまったのだ。
「……いや、何も」
「そうか？」

何があったのか教えないのでせめてもの気遣い。再び傷付く必要は無い。とは言っても試写会に出れば嫌でもそのときの映像と記憶を思い出すことになるだろう。精神崩壊が起こらないことをシンは今から祈っておく。

「にしても豪快な……」

二人の魔法少女が殴り合う姿は、正に匙が言い表した言葉そのもの。体格的に倍ぐらい差があるが互角に打ち合っている。

ここで一旦監督がカットを入れ、二人の殴り合いが止まる。あれだけ激しい動きをしていたのに二人共息を切らしていない。それどころか二人共笑顔で楽し気に喋っている。

二人は衣装を変え、メイクを入れる。可愛らしい魔法少女の服は薄汚れてボロボロになった状態の物と変わり、顔には特殊メイクで傷を描かれる。

長時間の殴り合いをした後という場面から撮影を再開。二人共息を切らして体力も限界寸前という演技をする。

ミルたんが拳を振り上げる。セラフォルーも同じく構えようとするが、先に体力の限界を迎えてしまって腕が上がらない。

攻撃も防御も出来ないセラフォルーに、ミルたんの拳が振り下ろされる――が、ミルたんの体が突然糸が切れたかのように脱力し、前のめりになって倒れていく。

セラフォルーは握っていた拳を解き、倒れてきたミルたんを受け止めた。
長時間の戦闘が出来ない体のミルたん。洗脳により制限時間を超えてまで戦闘を続けてしまったことでミルたんの体は限界に達し、命の炎が消えようとしている。
今際の際、正気に戻ったミルたんは弱々しく、そして自嘲するように呟く。
「結局……私は……貴女と……友達になれなかった……」
だが、セラフォルーはそれを優しく否定した。
「ううん……なれたよ、私たち。私と貴女がなりたいって思ったときから友達だよ」
「そう……それなら……嬉しい……」
ミルたんの全身から力が抜ける。最後の最後で二人は友達になれた。
「うっ……」
呻く声が聞こえたのでシンは視線を横へ向ける。匙が上を向いて涙を堪えていた。
今のシーンは匙の涙腺にクリティカルヒットしていたのだ。
「……ハンカチ居るか？」
「……足りなそうだからティッシュ持ってきてくれ」

◇

シーンF『レヴィアたんの友達とゴーレムの激戦』

今回の映画の山場の一つが撮影終了し、残る重要なシーンも数少なくなってきた。

次に撮るのはセラフォルーとミルたんが戦っている裏側で行われていたもう一つの戦い。事前に分断されたピクシーたちとマダとの戦いのパートである。

あくまで準レギュラーと中ボスとの戦いなので先程のような戦いにはならないと思われる。

戦いの中心に置かれるのはケルベロス。ピクシー。ジャックフロスト、ジャックランタンだとマダの巨体と吊り合わない為である。三人は援護という形で戦闘に参加する。

「出番かぁ」

傍で聞こえるマダの声。わざわざシンの近くにやって来たことに何か意図を感じる。

「派手に行くとするかぁ。あの監督はアドリブ好きだしなぁ」

不穏な独り言。明らかにシンに聞かせる為に喋っている。まるで犯行予告のようであった。

シンはマダを睨むが、マダの方は一瞥もせず行ってしまう。言動全てに不安しか感じさせない。

シンがそんな不安を抱えたまま撮影が開始される。

「アタシたちだってやれるんだから！」
「ヒーホー！　やってやるホ！」
「ヒ～ホ～。負けないよ～」
　各々が与えられた台詞を言った後、それぞれの得意な技でマダを攻撃する。マダはケルベロスと組み合っており、その隙にピクシーたちに次々と攻撃を与えられ、苦しそうな声を上げている。勿論、マダの演技である。
　シンはそれをなるべく近くで見ていた。マダのあの不穏な独り言が気になってしまい、離れた所で見学をしていたが、今回だけは可能な限りピクシーたちの傍に居て、何かがあったらいつでも動けるようにする。
「うーん……悪くないんだけどねぇ」
　撮影している監督は納得し切れていない様子で見ている。セラフォルーとミルたんのシーンが想像以上に良過ぎたので、このシーンももっと良いものに出来ないかと欲してしまっていた。
「迫力はある。緊張感もある。だけど、何て言うか、こう……サプライズ感が足りないような……さっきのセラフォルー様たちの殴り合いや前の映画の段ボール君ぐらいのサプライズが欲しいんだよ」
　段ボール君というのはギャスパーのことである。本来ならば序盤に倒されるような

敵その一ぐらいの立場だったが、色々なハプニングの末に最終的にセラフォルーと戦うラスボスポジションにまで昇格した。

監督の求めるものが見えないまま展開は終盤に入って行く。ピクシーたちの一斉攻撃で大きな隙が出来た所へケルベロスの強烈な一撃がマダに入り、マダが倒れるというシーンである。

脚本通りピクシーたちの攻撃が入り、マダが苦しそうな咆哮を上げる。そして、そこにケルベロスの一撃が――

「ガウッ!?」

――入らず、マダの四本腕がケルベロスを持ち上げる。

「あれ?　こんな展開だったっけ?」

監督とスタッフたちは?気そうに言っているが、シンの方は嫌な予感が的中したと内心で顔を顰める。

ケルベロスはマダの手の中で藻掻くが、ケルベロスの力を上回っているマダの手はしっかりとケルベロスを掴んだまま離さない。

グオオオオオオ!

マダはわざとらしく演技を続行しながらケルベロスを放り投げた。様子を伺っていたシンに目掛けて。

このときになってシンは気付いてしまった。あの不穏な言動の意味を。

投げられたケルベロスをシンは両腕で受け止めるが、重さと勢いを完全に削ぐことは出来なかったので後ろに置いてあった衣装や撮影道具の山にケルベロスごと突っ込んでいき、山は崩れて粉塵が舞う。

マダの暴走に誰もが唖然としてしまい、動けない。この中で真っ先に動いたのは他ならぬマダ自身。

何を思ったのかそのまま崩れた道具の山目掛けて拳を振り下ろす。

しかし、道具の山を突き破って現れた手がマダの拳を受け止めた。そのまま積み重なった山を押し退けてシンが現れる。

紋様を浮かび上がらせているシンを見てマダは口の端を厭らしく歪める。目論見通り、と無言で語っていた。

マダは傍観者であったシンをこの映画に巻き込むつもりだったのだ。それが最初からの狙いなのか突然思い付いたのかは定かではない。どちらにしてもシンにとって迷惑なのは変わりない。

「……どういうつもりだ?」

シンの問いにマダの答えは――

グオオオオオオ!

――演技の続行という形で解答を返す。

最早こうなってしまってはどうにもならない。監督やスタッフが止めてくれることを願うのみ。

シンは吼えるマダの顔面に一切の手加減無しで拳を叩き込み、そのまま殴り飛ばす。マダと違ってシンは演技などしない。台本を貰っていないので。最初から最後まで全部アドリブである。

シンとマダが台本から外れた殴り合いを開始してしまった。それを見ている匙は戸惑うしかない。

「ど、どうなってんだ?」

完全にシナリオには無い展開。こうなってしまっては監督も止めるしかないが――

「これだよ！　これ！　こういうサプライズが必要だったんだよ！」

「でも、いきなり新しいキャラが出て来たことになるんですけど大丈夫ですか?」

「整合性なんて後でどうにでもなる！　撮れ撮れ！　良いシーンを取り逃すな！」

監督の方は怒るどころか嬉々として撮影を続行させている。良くも悪くも柔軟性が有り過ぎる撮影現場である。

「ダ、ダメだこの人たち……」

監督とスタッフらは頼りにならない。良い映像を撮ることに憑りつかれている。

こうなると頼れるのはセラフォルーなのだが――
「わー！　見て見て☆　シン君が頑張ってるよー☆」
「ホントによ。悪魔さーん、頑張るにょー！」
――ミルたんと一緒に観戦モードに入ってしまっている。
「……すまん。俺にはどうすることも出来ん」
匙は自らの無力さを謝り、事態が自然に収拾するまで見守ることを選んだ。
周りの考えとは関係なくシンとマダの戦いは着々とヒートアップしていく。
ガアアアアア！
マダが口から炎を吐けば、シンは自分の火耐性を利用して炎を片手で受け止め、手を払うことで炎の軌道を変えてしまう。
シンが前進し、マダの正面まで行くとすかさず前蹴りでマダの膝を蹴り飛ばす。マダが片膝を着けると更に踏み込んで相手の側面へ移動。大振りの腕を顔面に叩き付けたかと思えば、指先をマダの口の端に引っ掛け、引っ張ってマダの後頭部を地面へ落とす。
右足を上げ、そこに力を集中させるとマダの顔面目掛けて容赦無く踏み付ける。だが、それが届く前にマダの四本の手がシンの足を掴み、倒れた状態でシンを軽々と投げ飛ばす。
投げられながらも空中で落下地点を把握すると、体勢を変えて難無く着地。ほぼ間も

なく地面を蹴って走り、立ち上がる途中のマダの顔に膝蹴りを打ち込む。
マダはそれを耐え、四本腕でシンの片足、胴体、片腕を掴むと近くの岩山目掛けて投げ飛ばそうとする。振り被った瞬間、シンは自由に動く手の指先をマダの顔面に押し当て、力の限り引っ掻いた。
金属が削れるような音が鳴り、マダの手が緩んでシンが解放される。シンの引っ掻きでマダの顔に傷が――無かった。
（こいつ……）
シンはマダが本気では無く演技の延長線上程度の力しか出していないのが分かった。手を緩めたのも勿論わざと。じゃなければ傷一つ負わない攻撃で怯む筈がない。
「ひりつく空気だ……！　これぞ死闘だ！　これを撮らないと勿体無いぞ！」
「はい！　……でも、魔法少女ものでこの絵面ってありですか？」
「知らん！　観客が喜べば正解だ！　いや、正解にしてみせる！」
一層気合を入れて撮影し続ける監督たち。
「どうすんだよ、これ……」
どうすれば終わりになるのか分からず、匙は天を仰ぐしかなかった。

◇

「で？　結局どうなったんだ？」
「万が一の場合が起きたら呼ぶようにってアザゼル先生が言っていたことをセラフォルー様が思い出して、アザゼル先生を呼んで治めてもらった。……アザゼル先生、見たことがないぐらい滅茶苦茶怒ってたなぁ……」
　後日、匙は当時のことを思い出しながら身震いをする。それを聞いていた一誠は彼に同情する。
　映画は無事に撮影終了し、本日はプレミアム試写会である。ソーナたちは勿論のことリアスたちも招待されていた。
「……あれ？　間薙の奴は来ていないのか？」
「断られた。先約があるんだと。代わりにピクシーたちを連れて来たけどな」
　アーシアと小猫の膝の上に座るピクシーとジャックフロスト。ジャックランタンは定位置のようにギャスパーに抱き締められており、犬の姿へ擬態しているケルベロスも招待席で体を丸めている。
「何だよ勿体ねぇ」
「気が乗らないんじゃないか？」
「まぁ……それもそうか」

匙が一人で納得している様子に一誠は首を傾げる。
「見れば分かる」
「そうなのか……？　っていうか噂のミルたんの姿も見えないが……？」
準主役と言っても過言ではない役を与えられたミルたんが上映会場に見当たらない。あれだけ目立つ姿なら嫌でも目に入る筈なのだが。
「あの人も上映会には出ないってさ。映画に出られただけでも満足で、後は冥界の皆に楽しんで貰えたら十分なんだと」
「滅茶苦茶謙虚だ……」
「まあ、感謝の印としてセラフォルー様がこの映画のＤＶＤをプレゼントしたみたいだしな。メイキング映像も入ったスペシャル仕様だぜ」
セラフォルーが言うにはそのときに互いの連絡先も交換したとのこと。これからは魔王少女と漢の娘魔法少女の交流が自由に行われる。
会場のライトが徐々に暗くなっていく。
「そろそろだな」
「ああ、楽しみだ」
そして、映画が始まる。
始まりは、とある組織があった場所から。既に瓦礫と化していた場所に降り立つ黒い

影。彼は瓦礫に付着した血を採取し、ニヤリと笑う。
「あれお前？」
「どうかなぁ？」
ネタバレを避けて濁した言い方をする匙。
話は進み、レヴィアたんとクローンレヴィアたんの邂逅。そして始まる戦い。
「う、うぉ……なんつう迫力だ……」
「あれ一切ＣＧ使ってないからな」
「えぇ……セラフォルー様は分かるけどミルたんはどういうことだよ……」
ミルたんの常人離れした戦闘シーンに一誠は驚きを超えて恐怖を覚える。
終始凄まじい戦闘の後、次なるシーンへと移る。再び黒幕である匙がシルエットのまま登場し、培養槽に入ったミルたんを眺めている。
「お前もボス役か……俺も前のセラフォルー様の映画でボス役だったな……ギャスパーに後から取られたけど」
「悪人の演技は難しいよなぁ……」
両者とも悪役が初めての演技だったので相手の苦労が分かってしまう。
物語は進んで行き、セラフォルーとミルたんの再戦。ここでもまた激しいバトルが繰り広げられるが、同時に二人の間で絆が芽生えようとする。

「普通に良い展開だ……」
「絵面に戸惑うかもしれねぇけど、話は結構熱血寄りの王道なんだよなぁ」
少年漫画を好む一誠は、予想以上に話に引き込まれてしまっていた。
芽生えそうになる友情を阻むマダの登場。そして、黒幕である匙がいよいよ顔を露わにする。
「……ガラが悪いですね、サジ」
「へぇ！　元ちゃんカッコイイじゃん」
匙のドクター・ヴリトラとしての姿に対し、真面目なソーナの反応は若干悪く、ソーナの眷属たちからは割と好評であった。クールな悪役というのが普段とのギャップがあって受けている。
冷徹な悪役であるドクター・ヴリトラによるミルたんへの仕置きと洗脳。その衝撃的過ぎるシーンを見た一誠は――
「お、おお……お、お前、よくあんなシーンを――」
匙を見る。彼は白目を剥いて気絶していた。封じていた記憶が蘇ったので自己防衛の為に自ら意識を断ったのだ。
「……お疲れ様」
匙の心の傷に一誠はひっそりと同情の涙を流す。

匙が気絶しても話は先へ先へと進んで行き、セラフォルーとミルたんの三度目の戦いとなる。

魔法少女らしくない拳による真っ向勝負。しかし、その先に待つのは悲しき決着。

限界を超えて肉体を酷使したミルたんがセラフォルーに抱き締められながら光の粒となって消滅するシーンは、会場内の至る所からすすり泣く声が聞こえて来る程であった。一誠も不覚にも目頭が熱くなってしまう。

「何て……何て悲劇なの……！」

「やっと友達になれたのに、悲し過ぎます……！」

「う、うぅ……！　な、涙が止まりませんぅぅぅ！」

イリナ、アーシア、ギャスパーなど号泣しながらスクリーンを見ている。

ミルたんの悲劇を背負い、セラフォルーが最終決戦に挑むところで場面が変わり、マダとピクシーたちの戦いが映し出される。圧倒的な耐久力とパワーでピクシーたちを追い込むマダ。遂にはケルベロスもマダの怪力により投げ飛ばされてしまう。

『レヴィアたんのお友達であるピクシーちゃんたち最大の危機！　だが、この危機にケルベロス君が今まで隠していた能力が発動する！』

何故か挟まるナレーション。急な展開を訝しむ一誠たち。投げ飛ばしたケルベロスを追撃するマダであったが、その追撃の拳を受け止めたのはシンであった。

『何故っ!?』

シンを知る者たちが声を揃えて驚く。サプライズ過ぎるシンの登場に度肝を抜かれてしまった。ケルベロスが戦っていると思っていたら急にシンと入れ替わったのだから無理もない。見ている子供たちも自分たちが知っているケルベロスではなく全く知らないシンが登場したせいで戸惑っていた。

『これこそがケルベロス君の隠された能力！　ケルベロス君は数年に一度人の姿へ変身することが出来るのです！　変身したケルベロス君の力は十倍だ！』

ナレーションが何が起こったのかを説明してくれた。これが監督たちが用意した辻褄合わせ。事前にケルベロスが戦っていたので、シンをケルベロスの変身した姿と設定したのだ。

「劇場版限定フォームかよ……ちびっ子が喜びそうな設定付けられたな」

演技しているというか、どう見ても本気で戦っているようにしか見えないシンとマダの迫力が有り過ぎる戦闘シーン。シンが映画に出るような性格に思えないので、一誠は誰かに嵌められたのではないかと推測する。

シンとマダの戦いは、最終的にマダの顔面にシンの拳が打ち込まれ、その状態で地面に叩き付けられるという結果に終わる。普通なら死んでいてもおかしくないが、マダなら大丈夫だろうと一誠は特に心配はしなかった。

（……あれ？　もしかして間薙が試写会に来なかったのって自分が出ているシーンを一緒に見たくなかったからか？）

シンがマダを倒した後に発光の演出が入り、再びケルベロスになる。ナレーションが言うに力を使い果たしたからとのこと。

もし、シンが居たら間違いなく登場シーンの後にシンを凝視していただろう。それを嫌がって先約があると嘘を吐いて断ったのではないかという疑惑が生まれる。

そんなことを考えながら映画を鑑賞。映画は遂にクライマックスを迎えようとしている。

クローンレヴィアたんとレヴィアたんの戦闘データを解析し、そこから自己強化する為の細胞を生成。自らがこの世界の最強として君臨すると宣言し、ドクター・ヴリトラはその細胞を自らに注入する。

ドクター・ヴリトラの体が膨れ上がり、強化されていく。その状態に恍惚とするドクター・ヴリトラであったが、ここで異変が起きる。膨張が止まらず、ドクター・ヴリトラの体が別のものへと造り替えられていく。ドクター・ヴリトラの最後の実験は失敗してしまったのだ。

結果として生まれたのは自我無き黒い龍であった。

「映画の為に龍王変化も使ったのか……」

見せ場の為にヴリトラへ変身した匙に驚きと呆れを覚えてしまう。その匙は未だに気絶をしている。

異形となったドクター・ヴリトラ。暴走しているがその力は本物であり、セラフォルーと途中で合流したピクシーたちを追い詰めていく。

ヴリトラの黒い炎がセラフォルーを呑み込もうとする。セラフォルーは折れたステッキから放つビームで対抗するが、徐々に黒い炎が押していく。

セラフォルーが絶体絶命に追い込まれたとき、光がセラフォルーの体から溢れ出た。

『こ、これって……』

光はミルたんの幻影となりステッキを持つセラフォルーの手にミルたんの手が重ねられる。ステッキが光を放ち元の形に――元よりも豪華絢爛な形となって復活する。

『力を貸してくれるの?』

ミルたんが頷き、共にステッキを握る。

『いっけぇぇぇぇ!』

七色に輝くビームが黒い炎を押し返していき、最後にはドクター・ヴリトラを貫く。

断末魔の叫びを上げ、ドクター・ヴリトラは消滅。

セラフォルーは勝利を喜び、隣を見るがそこにミルたんの姿は無かった。光の粒子が風に乗って遠くへと運ばれて行く。

『……ありがとう。私のお友達』

セラフォルーは涙を浮かべながら、しかし笑顔で友達になれたもう一人の自分を見送った。

これで話は終わり、エンディングへと入る。

会場は泣きながらスタンディングオベーション。拍手が鳴りやまない。

「中々……よ、良く出来ているじゃないの……」

「リアス、泣いているのですか？」

「ソーナこそ目が真っ赤じゃない」

リアスとソーナも思っていた以上に良作であった為に涙を堪えている。

セラフォルーはステージ上で喝采を受け、笑顔で手を振っていた。

誰もが大絶賛する中で匙は相変わらず白目のまま気絶をしていたのであった。

◇

『……ありがとう。私のお友達』

「うう……名シーンだによ……！」

目から滝のような涙を流しながら感動するミルたん。その隣にはシンも座って再生

された映像を見ていた。
　これがシンの言っていた先約である。ミルたんの方から『鑑賞会がしたい』という連絡があったのだ。
　大スクリーンで自分が登場するシーンを見たくもなかったし、その後に衆目に晒されることが嫌だったのでシンはこちらを選んだ。
　シンとしては自分が登場したシーンを全カットして欲しかったのだが、周りの者たちから説得された。その中にはミルたんも居り、是非とも残して欲しいと願われた。自分で誘った手前、ミルたんの願いを無下にすることは出来ず仕方なく劇場版のみの登場という条件として映像に残すこととなった
「じゃあ、もう一回にょ」
　ＤＶＤを頭から再生するミルたん。
「ここのシーン、ミルたん初めての演技だったから緊張したにょ！」
「その割には自然な演技だったと思いますよ」
「台本をいっぱい読んで練習した甲斐があったにょ！」
　一回目は黙って鑑賞していたが、二回目からは場面ごとにミルたんが感想を言い、シンがそれに言葉を返していく。
　それを繰り返しながらシンが登場する場面まで来る。

「悪魔さんカッコイイにょ！　劇場版限定フォームが付くと更にカッコイイにょ！」
「そんな大層なものじゃ……あっ」
シンはあることに気が付いた。劇場版のみなら良いと了承してしまったが、この先セラフォルーが三作目、四作目と映画を製作しないとは限らない。前例を作ってしまった以上、シンにも声が掛けられる筈。
「しまった……」
重要なことを見落としていたことに今更気付き、シンは珍しく人前で頭を抱えてしまった。

進級試験とウロボロス編

自主、朝練

どうしてこうなったのだろうか。心の中でその言葉を何度も反芻する。
どうしてこうなったのだろうか。俺たちはやるべきことをやっていただけであった。間違えたという選択も後悔も無かった筈なのに。
最初から掌の上で踊らされていたのだろうか。それとも何もかも利用された挙句が今なのだろうか。
どうしてこうなったのだろうか。短い人生の中だが、これ程戦意が湧かない戦いは後にも先にも無いだろうと確信出来る。戦いそのものに嫌気が差してしまうというのに、俺は絶対に負けてはならない。
――負けてはならない、この言葉は正しくない。
これから挑む戦いに勝者はいない。俺もあいつもこうなってしまった時点で負けている。勝っても負けても敗北者であり、真の勝者はあの高笑いの声の主なのだ。
「……きっとお前は後悔する」
自分にも相手にも向けた言葉。最悪の未来を阻止する為に、最善の選択であると自ら

に言い聞かせて為に。
「そうなる前に俺がお前を殺してやる――イッセー」
これから俺は戦友と殺し合う。

◇

「よーよー。随分と出世したみたいじゃねぇか、曹操よー」
五分刈りの頭にアロハシャツ、丸レンズのサングラスに首には数珠というどう言い繕ってもチンピラにしか見えない男が曹操へ気さくに声を掛ける。
曹操はその男を見て一瞬硬直したが、すぐに不敵な笑みを浮かべた。
「これはこれは帝釈天様。『禍の団』の支部へようこそ」
丁寧な作法でチンピラ風な男――帝釈天を迎え入れる。
「いらっしゃるのなら迎えの者を寄越しますのに」
「はっ。世間を賑わすテロリスト様と仲良くしている姿を誰かに見られたら事だＺＥ」
（乗り込んで来ておいて良く言う）
上辺は笑っているが、内心では帝釈天の突飛な行動に強い警戒心を抱いている。
「それと警備はもうちょっと厳重にしておいた方がいいぜぇ～？　俺様みたいに散歩が

てらに入れちまうんだからなぁ～ＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

（ゲオルクの霧とレオナルドの探知用モンスターで何重にも警備していたんだけどね……）

神滅具二つでも捕捉することが出来なかった帝釈天。改めて人と神との間にある格の差を見せつけられているような気分になる。

「――それで？　俺に何か話でもあるんですか？」

「昔のよしみで少し忠告を、な。……曹操」

空気の圧が一瞬で変わる。空間そのものが帝釈天という神により塗り替えられたような錯覚を覚える。

「裏でコソコソと動いているな」

「……それがお気に障りましたか？」

刹那、曹操は全身を穿たれる――幻覚を視た。何てことは無い。曹操が恐れることなく平然と返したことに帝釈天が少しだけ生意気と思っただけのこと。その僅かな怒気が曹操に死を錯覚させたのだ。

喉元に刃物を突き付けられている比ではない重圧。舌を噛み切って自害した方が楽とさえ考えてしまう。しかし、曹操はそれでも笑みを崩さない。全身から冷や汗が滲み出ていようとふてぶてしさを消さない。

それが英雄の子孫だから。それが聖槍を持つ者だから。曹操が『曹操』という生き方を選んだときから『曹操』という在り方を貫き通す。正直、賭けのようなもの。帝釈天の気分次第では曹操はこの世から跡形も無く消し去られる。

「はぁー。可愛くねぇ」

張り詰めていたものが一気に霧散する。神を前にして人間らしくない態度を貫いた曹操に、帝釈天は興醒めをしたという表情になっている。

「神様からのありがたーい小言を一つ言った所で、お前が生き方を変えるような信心深い奴だとは微塵も思ってねぇーＹＯ！　この不敬者が」

賭けに勝った。尤も、曹操は分の悪い賭けだとは最初から思っていない。帝釈天は『禍の団』のことを目障りだと思っているのは間違いない。それと同じ位に他の神話勢力も目障りに思っている。どんなに表面上は協力的であったとしても、腹の中では自分たちこそが最高であり最強だと自負している。特に帝釈天に至ってはそれを隠そうとしていない。彼の中では『禍の団』や曹操たちがまだ利用出来ると考えているのだ。

「まあ、今の所は見逃してやるよ。オーフィスが邪魔だし目障りだが、まだ俺様たちに噛み付いてないからなぁ」

「それを言いに？　わざわざありがとうございます」

慇懃無礼に映るかもしれないが、曹操にとっては有り難い情報ではある。帝釈天たち

が介入して来ないとなれば他に戦力を回せれる。帝釈天の言うことを鵜呑みにするのは浅慮だと思われるかもしれないが、曹操が言うようにわざわざ言いに来たということはそれなりに信用していい。

「さくっと悪魔や天使、堕天使どもを滅ぼしちまえよ。ついでに二天龍もな。神滅具同士の戦いは良い見物だ」

軽く言ってくれる、と曹操は心の中で愚痴る。やろうと思ってやれるなら既に終わっている。

「三勢力に関してはまだ時間が掛かりますが、二天龍に関しては近いうちに期待に添えるかと」

「へぇー？　何か策があるのかーい？」

「内緒です。その時が来たらお披露目します」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡ！　人間が神を焦らすのか？　いいＺＥ。楽しみに待っておいてやるよー！」

帝釈天は余裕しか感じない笑い声を出す。三勢力や二天龍を倒せば次に狙われるのは自分たちかもしれないのにこの態度。尊大と傲慢に満ちた自信。だが、帝釈天はそれが許される実力を持っている。

「――にしてもだ」

帝釈天がサングラスをずらす。
「いつからそんなに過保護になったんだ？　お前らは？」
曹操を指した言葉では無い。帝釈天の視線は曹操ではなくその背後へと向けられている。曹操が後ろを向くと宙に浮かぶ魔人だいそうじょうと赤い獣に腰を下ろす魔人マザーハーロットがいつの間にか居た。さっきまで何も感じなかったのに二人を認識した瞬間に魔人特有の死の気配が感じる。帝釈天と同じくこの二体もまた規格外。
「かかかか。良からぬ輩が忍び込んでいる、ましてや同盟を結んでいる曹操の許へ現れたとなれば出向くのが道理。さて、神仏はいつから盗人紛いのことをするようになったのかのう？　帝釈天殿？」
「ホォーホッホッホッホッ。神の気を感じて来てみれば、そなたであったか。神仏の気配は不快で堪らぬ。今すぐ去るか、死んでくれるかえ？」
犬猿の仲という言葉ですら生温く感じるぐらいに互いを忌み嫌っているだいそうじょうとマザーハーロットが肩を並べている。この二人でも帝釈天相手では不仲を一旦忘れて警戒する程であった。
「クソ坊主が神仏に説教か？　偉そうに。よー、淫売。相変わらず体だけは良いな、体だけは。一回ぐらいなら抱いてやってもいいＺＥ」
神から魔人への侮蔑と挑発。

「かかっ。神仏に念仏を唱えても無意味よ――馬や猿と同じじゃのう」
「戯言を。そなたには妾の肌に指一本触れる資格もないぞよ」
挑発には挑発を以って返すのが魔人の流儀。互いに言葉だけで人を殺せそうな程の悪意と敵意が渦巻く。その間に挟まれている曹操。顔色を変えずその場に留まり続けるのは流石としか言いようが無い。
「――全く。曹操は小生意気だが、お前ら魔人共はそういうレベルじゃねぇなー、ホント。天に向かって唾吐くなんざ……魂ごと消されても文句は言えねぇよなぁ？」
「いつまで上から見下していられると思っているのかのう……その驕りの代償は痛みだけでは済まぬぞ？」
「やってみるといいぞ。その前にそなたの魂が穢れ尽すだろうて」
「言うねぇ……何なら三対一でも俺様は構わないぜぇ？」
だいそうじょうが握る数珠が擦れた音を出し、赤い獣は主に代わってその七頭で牙？き威嚇する。帝釈天は魔人二人を前にしても臆する様子は無く、纏めてかかって来いと尊大さを崩さない。
（やるのか……ここで……!?）
曹操もまたいつでも聖槍を顕現させる準備をしているが、心の内では焦燥している。『禍の団』の総戦力を用いても帝釈天に勝てる保証は無い。そもそも、事前の策や準備無

しで戦うような相手ではないのだ。
空気そのものが重みを増したかと錯覚する重圧感。戦いが始まればこの周囲は人も土地も消滅することはまず間違いない。
曹操がこの状況をどう変えようか必死になって頭を働かせていたところ、突如前触れもなく戦闘前の緊迫感が消失した。
「阿保らし。俗なテロリスト共と違って俺様は色々とやることがあるんだよ。お前らと違って世の為人の為に、なぁ？」
「どの口がほざくか……」
「笑えぬ冗談よ」
互いを小馬鹿にした発言。敵意は健在だが殺意の方はすっかりと消えており、急な展開に曹操は話についていけない。
「んじゃ、言いたいことも言ったし俺様は帰るわー。暴れるなら俺様の知らない所で暴れろよー。じゃないと消すぞ？」
朗らかに物騒なことを言い残す。勝手に来て勝手に去ろうとしている帝釈天の行動に曹操は目を瞬かせた。すると、その瞬きの間に帝釈天は姿を消してしまう。文句の一つを言う前に居なくなってしまった。
今の時間は何だったのだろうかと曹操には珍しく呆けてしまう。それぐらいの緊張

感を強いられていたので無理もないことではあるが。
「曹操よ。こちらは進んでおるが、そちらは何か変化はあったのかのう？」
「……ヴァーリが何か行動を起こそうとしている。アザゼルと接触した形跡を見つけた」
「ほう？　飼い慣らせんと思っていたがいよいよ牙を？くときが来たか」
何事もなかったかのように話し掛けて来ただいそうじょう。曹操は半ば自動的にそれに応じる。
「ホォーホッホッ。何やら企んでいるようだが、妾は好きに動かせてもらうぞえ」
あまり自主的に行動しないマザーハーロットだが、彼女も何か企んでいる様子。
「女狐め。今度は誰を食い潰す気じゃ？」
「最近、活きが良くなって戻ってきた奴がおる。きっと妾を愉しませてくれるぞよ」
「……シャルバか」
マザーハーロットが注目している人物はすぐに見当が付いた。
シャルバ・ベルゼブブ。冥界でのレーティングゲームに乱入して以降姿を消した旧魔王派の悪魔。ある日突然『禍の団』に異常なまでの魔力と風貌を変えて帰還してきた。
旧魔王派の残党はシャルバの帰還を快く歓迎し、長期間何処へ行っていたのかの詳細も訊ねていない。度重なる撃退で弱体化している旧魔王派にとっては理由はどうあれ

強くなったシャルバの存在は有り難いもの故、丁重に扱っているのだ。シャルバも我が物顔で旧魔王派の連中を仕切っている。

理由はどうあれ失踪していたことに対し、少なくとも同じ旧魔王の血を引き、旧魔王派の代表とも言えるあの男が何かしら行動をとっても可笑しくないのだが、何故か今回に限って沈黙をしている。普段は不快な程に騒がしいというのに。

曹操は『禍の団』の勢力図が再び変わろうとしていることに懸念を抱いているが、マザーハーロットが絡んでくるとなると今後の予想は更に難しくなる。マザーハーロットは孤独な者、見捨てられた者に対しては聖母のような存在だが、それに当てはまらない者には地獄以上の地獄を見せる。天国か地獄、マザーハーロットに目を付けられということはそういうことなのだ。

「……好きにしてくれ。尤も、貴女を止めることなど出来はしないが」

「ホホホホ。流石は曹操。良く理解をしておる」

「あまり甘やかすな、こ奴を」

実質曹操の許可を得たに等しいのでマザーハーロットは上機嫌に笑うが、だいそうじょうの方は苦々しい様子で苦言を呈する。

魔人二人を御することなど出来ないと曹操は自覚している。魔人たちの行動を上手く自分たちの利にする。それが最も適切な立ち振る舞いだと理解していた。

「はぁ……」
　会話の区切りが出来ると曹操は重い溜息を吐く。先程積もったストレスを吐き出しているかのようであった。
「疲れているのか？」
「始まってもいないのに既にそれとは頼りないこと」
　ストレスの原因たちがいけしゃあしゃあと言ってくる。
「目の前であんなことをされたら誰だってこうなりはするさ……」
　曹操が嫌味っぽく言うと二人は何故か少し戸惑った様子になる。
「あんなものはただの戯れだが……？」
「帝釈天が悪ふざけをするので乗ってみただけぞよ？」
「はぁ……？」
　帝釈天も魔人たちもあんな空気感を出して於いて実際のところは本気では無く互いに冗談を言っただけとのこと。上位の者たちのみが許される最高に質の悪い戯れ。
　まるで自分だけが空気を読めなかったかのような雰囲気になり、曹操は今まで以上の疲れを覚えてしまう。
　神も魔人も人智の及ばない遠い存在なのは知っている。しかし、今日一つだけ分かったことがある。

「神と魔人の冗談は笑えない……」

◇

ある日の早朝、シンは動きやすい服装である人物の前に立っていた。

「きょ、今日はありがとうございますぅぅぅ！」

向かい合うのは緊張した面持ちのギャスパー。

ギャスパーはサイラオーグとのレーティングゲーム以降早朝から自主練習を行っていた。主に行っているのは体力作りの為の走り込みと筋トレである。これはリアスにもちゃんと相談してから始めたものであり、ハードワークにならないようにちゃんとメニュー内容も事前に報せてある。

ギャスパーが鍛えるようになった切っ掛けは、やはりサイラオーグとのレーティングゲームである。ギャスパーはゼノヴィアと組んでサイラオーグの『戦車』と『僧侶』と戦い、奮戦し、最後はゼノヴィアに全てを託してリタイヤした。リタイヤ寸前まで足掻き、ゼノヴィアにエクス・デュランダルを解き放つチャンスを作った立派な成果を上げている。しかし、ギャスパー本人はそれで満足していない様子。

「あ、あの！　お、お、お願いしますぅぅぅ！」

ある日、ギャスパーはシンに朝練に付き合って欲しいと願って来た。
ギャスパーが早朝から自主練していることをシンはこのとき初めて知ったので、何故自主練を始めたのかギャスパーに訊いた。
『ぼ、僕！　強くなりたいんですぅぅぅ！』
ギャスパーはあのときのレーティングゲームで自分の力不足を思い知った。結果だけ見ればちゃんと勝利に貢献しているが、ギャスパーはそれに納得していない。
『ぼ、僕はグレモリー眷属の男子です！　グ、グレモリー眷属男子訓戒その一！　だ、男は女の子をま、守るべし！　グレモリー眷属男子訓戒その二！　男はどんなときも立ち上がること！　グレモリー眷属男子訓戒その三！　何が起きても決して諦めるな！』
それはシンが初めて聞くものであった。グレモリー眷属男子訓戒なので協力者という立場のシンが知らないだけなのかもしれないので、誰に教えられたのか確認をしてみた。
一誠との合同特訓の際に教えられたものであり、ギャスパーはそれを胸に刻んで生きているとのこと。
暑苦しいが実に一誠らしい、というのがシンの感想であった。
ギャスパーがレーティングゲームの結果に納得出来なかった理由はこの訓戒である。最後に立ち上がれずに負けたことが悔しいと思うと同時に、ギャスパーはゼノヴィアを

勝たせたかったのではなくゼノヴィアと共に勝ちたかったのだ。

これが自主練を始めた理由の一つ。もう一つの理由は、レーティングゲーム後に見た一誠とサイラオーグの一騎打ちの映像である。

ギャスパーはこの映像を穴が開くほど凝視し、何度も何度も繰り返し再生を行っていた。映像の中には彼にとっての理想と憧れが映っていたのだ。

ギャスパーに教えた訓戒通りに立ち上がり、諦めることなく戦い続けた一誠。そして、それに勝るとも劣らない漢らしさを見せてくれたサイラオーグ。自分の力不足を痛感していたギャスパーにとって眩しい程に尊く映った。

あの領域に近付きたい。ギャスパーはその為に一から体を作り直すことを決心したのだ。

慣れない体力作りに苦戦しながらも少しずつ体力を伸ばしていくギャスパーであったが、ある種の不安があった。

『この程度の練習で良いのだろうか……？』

一誠とサイラオーグの戦いはギャスパーに憧憬を抱かせたが、同時に焦燥も与えた。このままの歩みでは一誠たちに追い付けないのではないか、という不安をギャスパーは覚えてしまっていた。

そこで自らに試練を課した。それがシンとの特訓なのだ。

「あのさ～止めるなら今のうちだよ～？」
ギャスパーを心配しつつもその無謀な行動に呆れているのは唯一の外野であるジャックランタン。彼はギャスパーが過激な方へ進んで行くのを何度も止めたが、ギャスパーが意外と頑固だったのでそれも叶わず、今日という日を迎えてしまった。尚、ピクシーたちは早朝の特訓に全く興味を示さなかったので今もシンの家で寝ている。
「や、止めないよ！　こ、これは、ぼ、僕が強くなるのに必要なことなんだっ！」
腰が引け、膝は笑い、顔は蒼褪めているが断固とした意志を示すギャスパーに、ジャックランタンはこれ以上言っても無駄だと悟って溜息を吐く。
「ねぇ～。ギャスパーが変な風に火が点いちゃっているからさ～。ボコボコにして頭を冷やしてくれる～」
説得を諦めたジャックランタンはシンに物騒なことを頼む。
「場合によっては、な」
シンが指を鳴らすとギャスパーは体を硬直させる。威圧の意は無かったが、ギャスパーからすればシンの言動全てが圧そのものにしか感じられない。
「……もう一度確認するが、最初の条件を変えるつもりはないか？」
「か、変えません！　こ、こ、このまままままやりますぅぅぅ！」
虚勢を張り続けるギャスパーだが、体は素直に反応しており舌が回っていない。

体力作りのランニングと筋トレが終わった後に始まるのはシンとギャスパーによる模擬戦。ただし、ギャスパーは神器の魔眼は使用しない。吸血鬼の能力は使用可能である。シンの方も技は使用禁止であり素手のみ。最大の強みである『停止世界の邪眼』を自ら封じたことにギャスパーのこの特訓に懸ける意思の強さが窺える。

「こ、この眼に頼ってばかりじゃダメなんですぅ！　き、きっと今後は相手も対策をしてくると思います！　通じないとなった時点で手遅れなんです！」

ギャスパーの言うことは一理ある。ギャスパーの魔眼は良くも悪くも知れ渡っている。見られたら体を停止させられる能力は厄介だが、事前に知っていれば幾らでも対策を講じられる。アザゼルの特訓では邪眼を鍛えることを主としているが、ギャスパーなりに先のことを考えてこの特訓をやろうと思ったのだろう。

「……そうか。ならもう何も言わない」

シンはただ佇む。構えと言えない構えであるが、両手にはしっかりと紋様が浮かび上がっている。

ギャスパーはシンの静かな圧に一瞬身震いする。今からこの人と戦う、そう考えただけで体から血の気が引いていく。しかし、既に決めたこと。後には退けない。

シンに、自分に失望したくないから。

「ラ、ランタン君！　スタートの――」

「じゃあ、始め～」
「合図を！　……ってええ!?」
ギャスパーの言葉の先を読んでジャックランタンはフライングで開始の合図を出してしまう。これにはギャスパーも出鼻を挫かれてしまう。
思わずジャックランタンの方を見てしまうギャスパー。これが悪手であった。
「――あっ」
突如として暗くなる視界。何が起こっているのか理解する前に頭蓋が圧迫される痛みが襲って来る。
（こ、これって!?）
締め付けられる痛みに悶えながら自分の身に何が起こっているのか少し遅れて理解した。
ギャスパーが余所見をした瞬間にシンはギャスパーへ接近。視界に収まる前にギャスパーの顔面を鷲掴みにしたのだ。しかも、掌でギャスパーの瞼を押さえつけているので目を開くことも出来ない。事前に邪眼は使わないと伝えていたが、こういう攻略法もあるということをギャスパーに身を以って教えている。
（に、逃げ……いだだだだっ！）
体を蝙蝠にし分裂して脱出しようとするが、シンはその前兆が分かるのかギャスパー

が変身する前に一段階締める力を上げた。指先が頭蓋骨に突き刺さっているのかと思ってしまう激痛によりギャスパーの集中力は妨げられ、蝙蝠に変身が出来ない。
(ぼ、僕のミスだ……!)
ジャックランタンの合図が想定していないタイミングであったとはいえ、戦いが始まった瞬間にシンから目を逸らしてしまった。シンはキチンと合図に従って行動したに過ぎない。全てはギャスパーの油断が招いたこと。
こうなることは予測出来た筈であった。ギャスパーは先輩である三人を尊敬している。一番凄いと思っている一誠、一番速いと思っている木場、そして一番怖いと思っているのがシン。唯一畏怖しているがそれと同じ位に敬っているのも本当である。
後悔するギャスパー。不意に頭部の圧迫が消え、暗かった視界が光を取り戻す。
ギャスパーが見たのはこちらへ腕を伸ばすシン。
「最初はこれぐらいだな」
そう呟いた後、バチンという音がギャスパーの額で鳴った。
シンがやったことはギャスパーの額を人差し指で弾いただけ。拳に比べたら遥かに軽い。しかし、手加減無しな上にギャスパーが今のシンの攻撃を受けたのはこれが初であった。
額から入り右脳と左脳の間を貫き、後頭部から抜けていく衝撃。今までの人生の中で

経験したことが無い痛みが情報となってギャスパーの神経を灼く。大の大人ですら仰け反って倒れる程の威力が一切の無駄なく綺麗に貫いていく。

結果、ギャスパーは立ったまま白目を剥き、ゆっくりと後ろへ倒れ込んでいくのであった。

「う、うう……」

暗闇に沈んでいたギャスパーの意識が少しずつ浮上していく。何故、自分が寝ているのか最初は分からなかったが、額から伝わる断続的な痛みが意識を失う前の記憶を蘇らせてくれる。

（ああ、そうだ……僕は……）

意気込んでシンに特訓を頼んだのは良いが、指一本で情けなく気絶させられてしまった。指で額を弾かれただけであの衝撃と痛み。シンが全力で殴っているシーンを何度か見たことがあるが、痛そう、怖いと思うだけでどんな威力かは想像出来なかった、というよりもしたくなかった。今なら百分の一ぐらいならリアルにイメージが出来る。

（うう……情けない……）

醜態を晒してしまったことに自己嫌悪する。シンも呆れているに違いないと思ったとき、シンが誰かと話していることに気付いた。ジャックランタンかと思ったが、声は

明らかに女性のもの。
ギャスパーは目を開ける。意識が完全に覚醒し、背中の硬い感触で自分がベンチに横たわっていることが分かった。
起き上がって周囲を見ると隣のベンチでシンが黙々とおにぎりを食べている。その隣ではレイヴェルが満面の笑顔でそれを眺めていた。
「レ、レイヴェルさん？」
「あら？　起きられましたか？　ギャスパー君」
レイヴェルはギャスパーが起きたことに気付くと立ち上がり、ギャスパーの隣へ移動する。
「どうぞ。差し入れです」
そう言ってレイヴェルが差し出したのは弁当箱。
「皆さんの手作りです」
蓋を開けられた弁当箱の中には卵焼きや焼き鮭などが入っている。レイヴェルの言う皆さんとは一誠宅のキッチンを任せられている四人を指し、一誠の母、リアス、アーシア、朱乃のことである。残りのメンバーはこの四人と比べると料理の腕が落ちるので主に食べる係であった。
「ギャスパー君が御一人で朝練をしていると思っていたのですが、まさか間薙様もい

らっしゃるとは思いませんでしたわ。念の為に少し多めに持って来て正解でした！」
　ギャスパーだけでなくシンにも差し入れが出来たことにレイヴェルは嬉しそうに興奮している。
「ギャスパー様が熱心に自主メニューを行っているのは聞きましたが、間薙様までお誘いになるとは……ですが、よろしいのでしょうか？　このことはリアス様に御報せしているのですか？」
「そ、それは……」
「言っている訳ないじゃ～ん」
　フワフワと寄って来たジャックランタンが言葉を詰まらせていたギャスパーの頭の上に降りる。
「むむむ……それは少しいただけませんわ、ギャスパー君」
「そうだね～。言ってやってよ～。頑張り過ぎだって～」
　ジャックランタンとレイヴェルに責めるように見られ、ギャスパーは項垂れる。意気消沈した途端に額がズキズキと痛みを発していることに気付く。その痛みすらもギャスパーには自分自身が責めているように感じられた。
「あ、焦っているつもりはないんですぅ……ただ、やれることがあるんだったら、やるべきだって思って……このままじゃずっと僕は守られているだけなんです……」

一誠や木場、シンのように戦えない自分を情けなく思っているギャスパー。出来ることならば彼らのように戦いたい。しかし、それは今のギャスパーにとって叶わぬ望み。少しだけ近付きたいと思い、やや空回りしてしまっている。

半泣きのギャスパーを見てレイヴェルもジャックランタンもそれ以上彼を責めることが出来ず、助けを求めてシンの方を見た。

シンは今までの話を聞いていなかったかのように淡々とおにぎりを食べ続けていたが、最後の一個が無くなるとベンチから立ってギャスパーの前に立つ。

「あ、あの……やっぱり迷惑だったでしょうか……？」

ギャスパーは上目遣いで恐る恐る訊ねる。特訓にも成らないうちに気絶してしまった。ギャスパーはシンから失望されることを酷く恐れている。

シンは無言で手を翳す。翳した箇所はギャスパーの額の位置。先程指で弾いた箇所であり、ギャスパーが色白なことも相まって目立つぐらい赤く腫れている。

シンの掌から光が放たれる。掌の紋様とは異なる輝きの光であり、その光を浴びるとギャスパーの額から赤みと腫れが引く。

「あ、あれ？」

額の状態はギャスパー自身には見えないが、先程まであった痛みが和らいだことにギャスパーは驚いた。

「まあ！　それは――」

何かを言い掛けてレイヴェルは口を慌てて閉ざす。サイラオーグとの戦いで見せた重傷からの回復のことを思わず言ってしまいそうになった。あれはごく限られた者しか知らないことであり、口外することも禁じられている。

「す、凄い！　アーシア先輩と似たようなことが出来るなんて……！」

いつの間にか出来るようになっていたシンの治癒魔法にギャスパーは素直に賞賛するが――

シンは自分の掌を見た後、もう一度ギャスパーの額に手を翳して治癒の光は放つ。

「あ、あの……？」

何故シンが同じことを繰り返したのか分からなかったのでギャスパーは戸惑っている。

「……いまいちだな」

ギャスパーは賞賛したが、シン自身の評価はそれであった。

自分の体なら複雑骨折していても短時間で完全に治すことが出来るが、他人に同じことをすると途端に効果が激減する。ギャスパーに二度治癒を施したのは一回目では赤みと腫れが完全に引いておらず、二回目でやっと完治した。仲魔のピクシーの治癒よりも大分劣る。

練度が低いことが原因の一つと思われるが、今までどちらかといえば壊すことばかりやっていたので精神的な意味でも治癒に関する意識が低いのも原因かもしれない、とシンは考える。
折角使えるようになれたのだから、放置はせずに鍛えた方が良い。ギャスパーのように出来ることは一つでも増やすべきである。
なら、どうやって鍛錬するのか。答えは一つしかない。そういう意味ではギャスパーとの特訓はシンにとって丁度良かった。
「お前との特訓は迷惑じゃない。寧ろ、今の俺には必要だ」
「え？　それは……どういう意味でしょうか……？」
「治癒の力を伸ばすには……やっぱり練習しかない」
しかし、傷を負っていない者には効果は無い。効果を見るには怪我人が必要。
「練習ですか……練習？　……はっ!?」
ギャスパーはシンの言葉に気付き、蒼褪める。ジャックランタンとレイヴェルも察して憐れむような眼差しをギャスパーへ向けていた。
「俺もお前も鍛えられる……一石二鳥だな、ギャスパー？」
ギャスパーの肩に手が置かれた。最早、逃げる術は無い。
「や、や、優しくして下さい……」

ギャスパーは蚊の鳴くような声を出し、数分後の未来の自分を想像して静かに涙を流すのであった。

片鱗、首領

シンとギャスパーは早朝の特訓を終えた後、一旦帰宅して身支度を整えてから登校する。

学園へ向かうシンは特に疲れた様子を見せなかった。シンは登校中にギャスパーの姿を発見する。シンとは対照的に、ギャスパーはフラフラと左右によろけながら歩いていた。

「ギャスパー君！　危ないですよ！」

「もう～。しっかり～」

「あ、ありがとうございますぅぅ……」

レイヴェルはギャスパーの帰宅も手伝っていたが、そのまま登校にも同行しており、傍に付いてギャスパーの手を掴み、ジャックランタンはギャスパーの背中をそのかぼちゃ頭で押して介助しながら学園へ誘導していく。

「何か死にそう」

「ヒホ……見ていて冷や冷やするホ」

シンに付いているピクシーとジャックフロストが疲労困憊のギャスパーを見て率直

な感想を言う。周囲の学生たちもヘロヘロなギャスパーをピクシーたちと同じような目で見ている。

「――大丈夫か？」

こうなった責任はシンにもあるのでギャスパーを気遣い、彼に声を掛ける。

「お、おはようございますぅぅ……こ、これぐらい大丈夫ですぅぅ……」

弱々しくか細く周囲の喧騒に掻き消されてしまいそうな声。聞き逃さない為に聴力に意識を集中させる必要がある程であった。

「ま、まだ特訓に体が慣れていないだけですから……すぐに慣れます……それに、少しずつですが疲れも抜けていますし……」

自分の疲れ切った姿にシンが特訓を止めると言い出すかもしれないと思ったのか、ギャスパーは先回りをして虚勢を張る。尤も、ギャスパーが言うようにこれでもましにはなっていた。以前に一誠から貰ったドラゴンの血を飲んで吸血鬼としての力を底上げしており、回復力も高まっている。それでも疲労状態が続いているのは単純にギャスパーの基礎体力が低いせいである。

シンは少しの間ギャスパーを見ていたが、やがて視線を外して先を行く。

「分かった。明日も同じ時間でいいな？」

普通ならもっと言うべきことがあったかもしれない。だが、これ以上の言葉はギャス

パーのプライドを傷付けるだけである。冷たさを感じるかもしれないが、今最も言うべき言葉は明日も続ける、という言葉。

「は、はい……！」

ギャスパーの返事を背中で聞くと、シンはそれ以上喋ることなく学園へ向かう。すると、一誠たちが先を歩いているのが見えた。一誠、リアス、アーシア、朱乃、小猫、ゼノヴィア、イリナのいつものメンバー。先日、一誠がリアスに告白して見事に両想いの恋人となったが、二人っきりでいる様子をシンは中々見ていない。プライベートではどうなっているのか分からないが、似たような状況なのは容易に想像が出来る。

とは言ってもリアスに焦りの様子は無い。恋人という立場の余裕からか寛容であった。

恋人となって以降、一誠はプライベートのときにリアスを名で呼ぶ。まだ慣れていないのか一瞬溜めてから赤面しながら言う様子をシンは何度か目撃していた。

二人は恋人になったことを周囲にまだ公表していないので他の生徒たちは知らず、リアスに黄色い声を送り、一誠には拒絶の悲鳴を送っている。事実が公表されれば学園は阿鼻叫喚となるだろう。

もし、そんなことになったら――

「よお、間薙」

いつの間にか一誠たちに追い付いていたシンは一誠から声を掛けられた。
「――お前、刺されるかもな……」
「朝っぱらから何だよ!?」

◇

時間は過ぎ、その日の放課後となる。
シンは一先ず生徒会へ顔を出す為に生徒会室へ向かおうとしていた。すると、オカルト研究部室へ行こうとしている小猫と会う。
「……」
小猫はぼんやりとした様子で歩いており、顔色もいつもと違って熱でもあるかのように赤かった。しかも、いつもなら気付いていてもおかしくない距離にシンが立っているのに全く気付いていない。
そのことに違和感を覚えて暫くの間その場で佇む。数秒経過してもやはり小猫はシンの存在に気が付いていない。何か別のことに意識を囚われているように思えた。
「――塔城」
名を呼ばれた小猫は驚きで一瞬全身を硬直させた。そして、一拍置いてから声の方を

見てシンの存在を認識する。
「……っ、間薙先輩」
シンを見て少し言葉を詰まらせた小猫。その表情は、普段の無表情のものではなく何かに耐える苦し気なものに見えながらも妙に艶がある。
「今から部活か？」
声を掛けた手前何か喋る必要があり、シンは無難な話題を振る。
「……はい」
小猫の返事は普段以上に素っ気無い。早く会話を止めてこの場から立ち去りたい、と言わんばかりに。
何か不調が出ているのではないかと疑ってしまう。前に無茶な特訓をし続けた結果、倒れたときのことを思い出す。ただ、そういった傾向があるとはリアスたちから聞いていない。何かしらの無茶をやっているのなら同居している一誠たちが真っ先に気付く筈。
シンも観察するように小猫をジッと見てみるが、そういった様子は見当たらない。何か別の要因が体調不良の理由だと感じられた。
「……」
いつの間にか小猫の目付きが半眼になり、眠たそうな、夢心地に居るような蕩けたも

のとなっている。ここまで来るとあからさまに様子がおかしい。
「大丈夫か？」
「……」
小猫はシンを見詰めているだけで返事が無い。
このまま放って置けないので先にオカルト研究部部室まで行き、誰かを呼んで来ようとする。
シンが小猫に背中を向けたとき、制服の裾が引っ張られた。シンが足を止めて後ろを見る。小猫の指先がシンの制服を掴んでいる。しかも、小猫は何故か普段隠している猫耳を人目に付くかもしれない学園で出している。
「……せ、先輩」
熱に浮かされた声で呼び、潤んだ瞳で見詰めてくる小猫。何かを求めているような表情をしている。
「……何か用か？」
正気が危うい小猫に対し、シンは優し気な声――とは真逆の冷たい声。普段の小猫からすればあるまじき行動なのだが、それに対してシンは感情も声も一切揺れることは無く、そのせいで突き放しているかのようであった。実際は言葉通りに何かあったのか訊いているだけだというのに。

その声色は冷水の如く小猫の理性に浴びせられ、小猫はハッとした表情になった後、掴んでいた手を離しながら下がり猫耳も隠す。
小猫の顔色が色味を濃くする。先程の艶のある赤ではなく羞恥による赤で塗り替えられていた。
「……ごめんなさい。今のは忘れて下さい」
赤くなった顔を俯かせて隠す。この場に一秒でも居たくないのか小猫は勢い良く走り去ってしまった。ああも全力疾走だと止める暇無く、様子の違いが気にはなっていたが見送るしかなかった。
ギャスパーとは違い、あまり歓迎出来ない小猫の変化。オカルト研究部に顔を出したときにそれとなく一誠たちにこのことを話そうと決める。
「お？　廊下で立ち止まってどうした？　何かあったか？」
良いタイミングで話し掛けてきたのはアザゼル。オカルト研究部の顧問であり、リアスたちのコーチとしての立場の彼ならば信頼して先程のことを話すことが出来る。
「少しお時間いいですか？　アザゼル先生」
「おう、いいぜ」
シンの頼みにアザゼルは快諾。周りに他の生徒が居ないことを確認した後に先程あったことを話す。

「ほう？　そりゃあ気になるな……俺の方でも調べておく」
「……猫又関連の症状でしょうか？」
「お前はそう思うのか？」
「勘ですが」
　何となくだが小猫の異変は人の世に関わるものではなく、人外の領域のような気がしていた。
「小猫は猫又の中でもレアな猫？だからな。そっち方面は俺も詳しくない……あいつの姉と連絡が取れたら早いんだがな……」
「先生からヴァーリ経由で連絡を取れませんか？」
「生憎だがいつもヴァーリからの一方通行だ。流石にこっちから連絡を入れたことはねぇ」
「そうですか。てっきり陰で連絡を入れ合っていたと勝手に思っていました」
「何でだよ」
「アザゼル先生は、何だかんだ言ってヴァーリに甘そうなので」
　シンの発言にアザゼルは顔を顰める。しかし、反論はして来ない。アザゼル自身も認めざるを得ないことだからだ。
「……それでも最低限の線引きはしている。総督って立場だからな」

「そうですか。連絡待ちなのは残念です」
小猫に関しては問題が悪化する前に手を打ちたかったが、手っ取り早い解決策が出来ない以上は地道に調べていくしかない。
「はぁ……一誠たちも色々とやることがあるっていうのに。問題ってのは重なっていくもんだな」
アザゼルが溜息と愚痴を零す。
「やること？」
「お前も知っているかもしれないが、イッセー、木場、朱乃の三人が中級悪魔昇格の試験を受ける」
その話はシンも良く知っている。シンにも中級悪魔相当の権利を与えるという話をサーゼクスからされていた。関心が無かったので既にその話は蹴っているが。
「昇格試験に中間テストもあるからな。イッセーの奴、頭が爆発するかもしれねぇ。実技はともかく筆記試験は覚えることが一杯だ」
「……筆記試験なんてあるんですね」
悪魔は実力主義だと思っていたので、頭の出来を計る試験があることに少々失礼かもしれないが意外に思ってしまう。
「力があっても頭の中身が空っぽじゃ危なっかしくて資格なんて与えられん。何処へ出

しても恥ずかしい奴なんかに高い位なんてやったら悪魔の沽券に関わるからな」
「そういうものですか」
シンは受ける立場ではないのでそれ以上の興味が惹かれることは無かった。
「……そういえば、お前もギャスパーと一緒に朝練始めたんだってな？」
今日始めたばかりのことが既にアザゼルの耳に入っていた。
「耳が早いですね」
「当ったり前だっつーの。コーチとして逐一お前たちの状態を把握しておくのは常識だ」
頼りになる台詞である。
「コーチの立場からして俺とギャスパーが一緒に特訓するのは賛成ですか？　それとも反対ですか？　加減はしていますが……朝のギャスパーの様子はご存知だと思いますが？」
「……オーバーワーク気味だな。本音を言えばもう少し落ち着け、と言いたいところだ。だがな、引きこもりで臆病だったあいつがここまで自主的に動いている。その意志は尊重したい」
アザゼルの眉間には皺が寄っている。身を案じることは大切だが、成長の機会を奪ってしまうことに繋がるかもしれないことを悩んでいる様子。

「……実を言うとな、俺もギャスパーから相談を受けている」
「アザゼル先生に？　……神器関連の相談ですか？」
「正解。サイラオーグ戦が終わってすぐにな。泣きながら俺のところへ来たよ」
ギャスパーは泣いてアザゼルに懇願した、強くなりたいと。守られるような情けない眷属じゃなく皆を守れるような眷属になりたいと。
「俺としてはサイラオーグ戦のあいつは情けないとは思わなかった。リタイヤしたがちゃんと自分の出来ることをした。だが、どうやらギャスパーにとっての理想はお前やイッセーみたいだ」
アザゼルは溜息を吐く。必死になって頑張ることと切羽詰まるのは紙一重。上手く行けば更なる成長に繋がるが、失敗をするならより深く沈む。
「悩んだが俺はあいつの決断を尊重した。お前を特訓相手に選ぶぐらいなんだから生半可な決断じゃないだろう。機会を見てギャスパーをグリゴリの神器研究機関へ行かせる。そこで指導を受けて己の神器と向き合わせる予定だ」
ギャスパーが肉体だけでなく神器の方もどうにかしようとしていることは、シンにとって初耳であった。
「――上手く行きそうですか？」
「分からんとだけ言っておく。神器を十二分に使いこなすようにはなれるかもしれない

が、その先の禁手に至るとなると話は別だ。あれは使用者によって切っ掛けが異なるからな」

安易に成功するとは言わず、正直に思っていることを言う。どちらにしても全てはギャスパーの頑張り次第。神器研究機関はあくまでサポートに過ぎないのだ。

「そういう訳で暫くの間、ギャスパーは離れる予定だ。……ああ、そうだ。ついでに言っておくがロスヴァイセも近々離れる」

「理由は？」

「一旦故郷の北欧へ帰るんだと。ヴァルハラで先輩から防御魔法を教えて貰うそうだ」

サイラオーグ戦が尾を引いているのはギャスパーだけではない。ロスヴァイセもまたサイラオーグ戦で自らの力不足を痛感していた。今まで独学で防御魔法を鍛えていたが、それも限界を感じ、ヴァルハラでより高度な技術を学ぼうとしている。

「デビュー戦で何も出来なかったのが堪えたみたいだ。本人は力不足だとか『戦車』の特性をまだまだ極められていないとか落ち込んでいたが、誰がどう見ても相手が悪い。あのときのサイラオーグは別格だ」

見た者全員が口を揃えて言うが、あれはロスヴァイセが脆弱なのではなくサイラオーグが圧倒的過ぎた。『戦車』の耐久を一撃で突き破るなど誰にとっても予想外過ぎる。

「俺の予想だと防御魔法と『戦車』の耐久性を合わせたロスヴァイセならサイラオーグの

攻撃を何発かは耐えられる筈だった。……何かよう、サイラオーグの拳を受けた奴らが言うには、防御を無視して衝撃が貫いてくるような感覚だったらしいぜ？」
アザゼルからすれば既視感を覚える情報。半眼で疑うようにシンを見る。
「――お前、サイラオーグに事前に何か教えたか？」
責めるつもりはアザゼルには無かったが、せめて事情と理由は話せと目で訴える。
「別に教えていませんよ」
シンは一切揺れない瞳で真っ直ぐアザゼルの目を見ながら答えた。シンは嘘を言っていない。何故ならばシンはサイラオーグと模擬戦をしただけであり、その中でサイラオーグが独自に導き出したからだ。
シンの完璧なポーカーフェイスにアザゼルは表情から読み取ることを早々に諦め、溜息を吐く。
「ったく、裏で色々と動きやがって……何かあってもすぐに助けられねぇぞ？」
「それはすみません。近くに良いお手本があるもので」
「こいつ……」
シンが皮肉を言うとアザゼルは渋い顔をする。自覚があるせいなのか反論はして来ない。
「色々と聞いていますが、アザゼル先生の方はどうなんですか？　実は今も裏で何か

やっているんじゃないですか？」
　同じことをアザゼルへ問う。すると、アザゼルは露骨に視線を逸らした。図星を指されたらしい。
「……何かやっているんですね？」
「正確には俺じゃないがな」
　何かを知っている様子だが、あくまで自分の指図ではなくその情報を知っているだけと答えた。あっさりと白状したのは、些細な変化もシンは見逃さないと分かっているからだ。
「アザゼル先生じゃない……？　もしかして、ヴァーリが何かやろうとしているんですか？」
「――お前、本当に話が早いな。あと、勘が良過ぎる」
　短い会話と察しの良さで正解を導き出したシンに、アザゼルは感心を通り越して呆れてしまう。話が早いせいで、話が盛り上がる前に終わってしまう。その辺り、将来的に苦労しそうだと思ってしまった。
「何をしようとしているんですか？」
「――さあな？」
「アザゼル先生」

「何だ？」
「親バカですね」
「……言うな」

◇

いつも通りの日常――から少し変化した日々。
朝起きたらギャスパーと合流し、軽い運動をした後に一対一の特訓を行う。
「あうっ！」
ノックするようにギャスパーは額を小突かれ、痛みで声を上げた。しかし、仰け反りはするもののプルプルと足を踏ん張らせながら決して倒れることはせず、反っていた上体を強引に起こす。
「ま、まだまだですぅぅぅ！」
初日は指一本で気絶させられたが、それ以降は意識が飛び掛けても意地でも気絶せず、臆せずシンに喰らい付く回数が増えた。シンも段々と攻撃を強くしていき今では軽く握っただけだがギャスパーに拳で打ち込むようになった。
攻撃の痛さが増したのだが、ギャスパーとしてシンに認められていっている証であ

り、特訓の際に初めて拳で殴られたときには泣くのではなく喜んだ。

『今日、初めて間薙先輩に殴られたんですぅぅ……！』

と、オカルト研究部部室で嬉しそうにギャスパーが語ったときの部室内の戦慄はシンの記憶に新しい。

蝙蝠の分身による回避や影から無数の影を伸ばして相手の動きを妨害するなど吸血鬼の能力の基礎を少しずつ向上しており、地道ながらも力を付けていっている。

「ふぐぇ！」

とはいえ、やはり近接戦の経験と技量はまだまだ未熟なので欲を出してシンの攻撃を捌こうとし脳天に拳を落とされて悶絶する。

「――今日はこれぐらいにしておくか」

ギャスパーとの特訓が終わると今度はシンの訓練が始まる。

ギャスパーが押さえている脳天に手を翳す。回復の光が放たれて腫れたギャスパーの頭を治していく。

特訓し、負った怪我をシンが治す。何ともマッチポンプな話ではあるが、これ以上ないぐらいに効率が良いのでしょうがない。

暫くの間、ギャスパーの傷を治していると――

「い、痛みが消えました」

――ギャスパーから報告が入る。シンは回復を始めてから心の中で時間を計っており、ギャスパーからの報告で掛かった時間を計測する。

時間自体は前回とは変わらないが、ギャスパーとの特訓は激しさを増しており、受けるダメージも増えていることから最初の頃よりかは回復速度は増えていると思われる。あまり劇的な変化は無いので分かり難いが。

あれこれ効率を考えてやってみているが、手応えはあまり感じられない。同じく回復が出来るピクシーや治癒の神器を持つアーシアの意見を聞いてみたが――

『どうやってやるかって？　アタシ分かんなーい。息するみたいなもんだしー』

『えーと、えーと、何と説明すればいいんでしょうか……皆さんを治したい、力になりたいと祈っているので……そうだ！　これから間薙さんも私と一緒に主へ祈りましょう！』

――あまり参考にならなかった。片や感覚派であり、片や神器による治癒と根本から違う。ダメもと聞いてみたが結果は予想通りであった。

自分の体であったのなら重傷もすぐに完治出来るので若干のもどかしさを感じるものの、手探り状態で鍛えているので効率的な能力の伸ばし方も分からない。今はただただ回数を重ねるしかなかった。

ギャスパーの目立った外傷が無くなると、ギャスパーはシンに頭を下げる。

「あ、ありがとうございますぅぅ」
「礼を言う必要は無いと前に言ったぞ？」
傷を付けたのはシンであり、それを治したに過ぎない。マッチポンプに礼を言う必要など無いと言うが、ギャスパーは律義に感謝している。
「ぼ、僕がしたいからするだけなんですぅぅぅ！」
ギャスパーはこれを譲らず頑固な面を見せる。シンはこれ以上言っても揉めるだけなので何も言わず、ギャスパーの好きなようにさせた。
「ぼ、僕、だ、段々と動きが良くなって来たと思うんですぅ！　こ、この間、イッセー先輩のパンチを避けられたんですよ！　イッセー先輩驚いていましたっ！」
シンがギャスパーの特訓に付き合っているのはオカルト研究部のメンバーも既に知っている。ギャスパーの身を案じて大丈夫なのかとギャスパーに聞いていたが――
『最初は痛かったけど、後で優しくしてくれますから……』
――非常に誤解を招く言い方で説明をしてくれたので、おかげで部室内のシンに向けられる視線と空気が凄まじいことになった。
ちょっとずつだが成果は出ていることに喜ぶギャスパーだったが、急に表情を暗くする。
「あ、あの……間薙先輩に謝らないといけないことがあるんです……」

「何だ？」
「ち、近いうちにぼ、僕、グリゴリの神器研究機関へ行きます……そ、そうなると暫くの間、特訓が出来なくなるので……ぼ、僕から頼んでおいてすみませんっ！」
そのことについてはアザゼルから事前に聞いていた。例え、聞いていなかったとしても別に怒るようなことではない。
「そうか」
その一言で終わるだけである。
「お、怒ってないんですか……？」
恐る恐る訊ねる。ギャスパーの中では不義理を働き、怒られても仕方のないことだという認識の様子。ギャスパーがどちらを望んでいるかは知らないが、この程度ではシンの感情は動かない。
「神器をもっと上手く扱えるようになりたいだけだろう？　怒る理由なんて無い」
ギャスパーの意思を尊重することを伝えると、ギャスパーは瞳を輝かせる。
「は、はい！　もっと、もっと、ちゃんと神器を使えるようになりたいんですぅう！　い、いざというときに皆を守れるように！」
ギャスパーのモチベーションが上がっていく。ただ会話しているだけだが、尊敬しているシンに背中を押されて嬉しそうであった。

興奮して鼻息が荒くなるギャスパー。危うさも感じられるが、将来的に頼もしくなるように思える。

だからなのだろうか。シンは何気なしに言ってしまった。

「その意気なら俺とイッセーに万が一のことがあっても大丈夫だろうな」

ギャスパーから返って来る声が無かった。少しの間沈黙が続く。何も言わないギャスパーを不審に思い、彼の方を見る。ギャスパーは瞬きもせず、見開いた目から妖しい輝きを放ちシンを凝視していた。

「何で……何でそんなことを言うんですか？」

予想していたよりも数段重い反応が返ってきてしまった。シンはこの時点でさっきの台詞が失言になってしまったと察する。

「――あくまでもしもの話だ」

「もしもでもそんなことを言わないで下さい」

いつも感情的に喋っているギャスパーが、このときだけは無感情で喋る。或いは激情が一周回って冷静になっているのかもしれない。

「そんなこと……そんなことがあったら僕は……！」

そのもしもが起こってしまったことを想像したのかギャスパーは体を震わす。

シンは何かに気付き、視線を一旦ギャスパーから外した。近くにある木。注目したの

は朝日を浴びて伸びる影。木の影が揺れている。木自体は全く揺れていないのに、影だけが本体から切り離されて独りでに動いている。その揺れはどんどん強まっていき、やがて平面の筈の影が液体のように波打ち出す。

影が二次元から三次元になっていく現象は木だけでなく周囲の影全てに起こっており、シンの足元から伸びる影にも同様の現象が起こっている。

「間薙先輩たちを傷付けた奴を……殺します」

ギャスパーの口から普段の彼ならば決して出ない言葉が出ると周囲が徐々に暗くなり始める。太陽は昇っており、雲一つ無いというのに陽の光が失われていき世界が暗闇になっていく。

随分と重く、暗い感情を宿しているな、と思いながら周囲の変化に動じることなくシンは再びギャスパーの方を見た。暗闇に覆われていく世界の中でギャスパーの瞳だけは光を失うことなく輝き続けている。

ギャスパーにはまだ暗闇の制御が出来ないのか影や暗闇がシンへと迫って来た。しかし、シンはその場から動こうとしない。

ここで動揺を見せるようならばギャスパーの先輩は務まらない。彼が思い描く尊敬している先輩らしく構える。尤も、シンの場合は虚勢ではなく今の現象に対して一切の恐れを抱いていない。

「――頼もしいことを言うな」
シンが一言と発すると影や暗闇の浸食が止まる。シンに触れることを恐れているかのように見えた。
「それが出来るかどうか……俺で試してみるか？」
シンの眼光がギャスパーを射抜く。ギャスパーが全身を震わせた瞬間、波打つ影はただの影へ戻り、光を喰らう暗闇は霧散し朝日が戻る。
「あ、あれ……？」
さっきまで自分が何をやっていたのか覚えていないのかギャスパーは首を傾げている。
「ぼ、僕、何かしましたか？」
記憶が抜けている間に何か失礼なことをしたのではないかと不安になり、怯えながらシンに尋ねた。
「――何もなかった」
シンは吐息のように違和感無く嘘を言ってこの場を誤魔化す。
ギャスパーの能力の片鱗に触れたシン。あれが神器によるものか、はたまたヴァンパイアによるものか不明だが、開花すれば強力な武器になるだろう。
神器研究機関が切っ掛けになれば良いと思う。

（本当に居なくなっても大丈夫かもしれないな……）
冗談として言ったが、何故かぼんやりとだがそんな日が来るかもしれないと思ってしまう。
無表情なまま虚空を見上げるシン。シンが何を考えているのか分からず、ギャスパーは時間が来るまでその横顔を見ていることしか出来なかった。

◇

ある晩、アザゼルから連絡が入ってきた。
『明日、大事な用がある。イッセーの家に来てくれ』
「唐突ですね」
『お前たちに会わせたい訪問者がいる』
「誰なんですか？」
聞いてみたが答えは返って来ない。
『会ってから説明する』
「名前も出せないような相手なんですね」
『好きに解釈しろ』

「……また手本にさせてもらいますよ」
『嫌味な奴め……』
向こう側のアザゼルが顔を顰めているのが見ないでも分かる。
『……会ったら多分敵意を抱くかもしれないが、攻撃はするな。まず話だけでも聞いてくれ』
随分と慎重というべきか名を出さない相手を強く警戒、恐れているような気がした。
「……分かりました」
『そうか。なら――』
集合時間を教え、アザゼルの連絡は切れる。平穏な日常を送っていたが、そろそろ波乱が起こるかもしれない、とシンは予感する。

◇

翌日、シンは時間通りに一誠の家に着いた。勿論、仲魔も連れている。来訪を報せる為に一誠宅のチャイムを鳴らそうとする。
そのとき、ドアが開く。
到着に気付いてドアを開けたのかと思ったが、ドアの向こうに立っているのはシンが

知らない人物であった。
黒いゴスロリ衣装を着た十代の少女。感情が見えない瞳でシンを見詰めている。
不思議なことにドアが開くまで一切存在感を感じなかった。だが、見てしまった瞬間に果ての見えない無限に等しい力を少女から感じる。
「シン、来た」
向こうはシンのことを知っている様子。だが、シンは少女を全く知らない。
「――誰だ？」
「我、オーフィス」
『禍の団』のトップと同じ名。出任せではないだろう。隠し切れない圧倒的強者のオーラがその証拠である。
何故『禍の団』のトップが一誠宅に居り、自分を出迎えているのかは分からない。事前の連絡からしてアザゼルが噛んでいることは間違い無い。
「そうか……」
話は聞いた。一呼吸置く。
次の瞬間、シンの拳がオーフィスへ放たれる。

脱走、追走

シンとオーフィスの邂逅より少し時間を遡る。
アザゼルが趣味と実益を兼ねた実験に精を出しているとき、それは突然訪れた。
「うん？」
アザゼルの眼前を横切っていく一匹の蝶。何処からか迷い込んできたのか――と思う以前にあり得ないことであった。
アザゼルのプライベート用研究室は神器に関する膨大な実験データや人工神器に関する機密、色々な意味で表に出せない彼だけの極秘など研究者にとって垂涎ものの情報の宝が保管されている。だからこそ、警備は厳重であり虫一匹入れないようにしている筈なのだ。
それなのにさも当然のように蝶が飛んでいるのはおかしい。
アザゼルが密かに掌に光の力を溜めるが、蝶は警戒などしていないかのようにひらひらと飛びながらアザゼルの傍へ行き、手の甲の上に止まる。
「誰の差し金だぁ？」
蝶へ問い掛けると蝶から色味が抜けていき、蝶は折り紙となる。

「式神か……」
紙に疑似的な生命を与え、本物のように動かす。この折り紙はそれだけではなくアザゼルが見たところ、黒魔術や白魔術も施されており東洋、西洋のハイブリッドであった。
アザゼルが見ている前で蝶の折り紙は独りでに開いていき、正方形の紙に戻ると紙の中央に通信用の小型魔法陣が描かれる。
この時点で誰からの通信かアザゼルには分かっていた。
通信が繋がると同時にアザゼルは開口一番に向こう側に居る人物の名を呼んだ。
「ヴァーリ、何の用だ？」
小型魔法陣を介してヴァーリの顔が見える。その顔はいつ見ても自信、覇気、生気に満ちていた。
『やあ、アザゼル』
ヴァーリは気さくな挨拶をするが、アザゼルはしかめっ面であった。
「……あんまし気軽に連絡入れてくるんじゃねぇよ」
普通ならアザゼルと直接連絡を取ることすら困難な筈だが美候、黒歌の仙術、ルフェイの魔術ですんなりと警戒を抜け、いとも簡単にアザゼルとコンタクトを取る始末。末恐ろしい才能を存分に発揮してくる。
『ふふふ。ちゃんと外部には洩れないようにしているさ。俺だってあんたの立場をそれ

なりに考えているつもりさ』
「どこぞの誰かさんのせいで信用が地に堕ち掛けたこともあったがな」
『普段から裏で色々と動いているせいで『何か企んでいるのでは？』と思われているせいもあると思うが？』
心当たりが多数あるのか顔を顰めた次は口を真一文字に結んでしまう。
アザゼル自身お節介な面があり、そのせいで余計なお世話をしてしまうことが多々ある。堕天使の総督という立場や裏であれこれと動いているせいで、何かを企んでいるのではと勘繰られてしまう。アザゼルに世界をどうこうする野心など無いのに。尤も、アザゼルが逆の立場ならどれだけ自分が胡散臭いのか客観視出来ていた。全ては積もりに積もった身から出た錆。
これ以上突かれても嫌なので話を変える。
「……お前が俺たちと露骨に敵対していないのは分かっているが、それでも微妙な扱いだ」
ヴァーリ、彼と共に行動する者たちは『禍の団』でも浮いているというのが三勢力共通の見解である。場合によっては以前の奇襲のように一時的に協力することも黙認していた。
敵の敵として利用出来るということ。そして、現白龍皇を敵に回したくないという思

惑から泳がせていた状態だが、それでも切っ掛けがあれば曹操たちと同様に三勢力はヴァーリたち殲滅に動いてもおかしくない。
『三勢力全てが敵に回るのかい？　それはそれで面白そうだが――』
「面白くねぇよ、クソガキ」
　静かな怒気を込めたアザゼルの声。すると、ヴァーリは苦笑する。
『冗談だよ。すまない、アザゼル』
　アザゼルが怒ったのはヴァーリの身を案じてのこと。アザゼルはそれを言葉にすることはないが、ヴァーリのことを敵と割り切っているのなら怒る必要など無い。育ての親であるアザゼルの気遣いをヴァーリはちゃんと気付いており、素直に謝罪した。
「……で？　いい加減用件は何だ？　俺とお喋りするのが目的じゃないだろう？」
『オーフィスが兵藤一誠とドライグに会いたがっている』
　単刀直入に言われ、アザゼルは言葉を失う。
『だから、そちらにオーフィスを引き渡す』
　次に言われた内容を理解するのに少し時間が掛かってしまった。
「……そいつは本気なのか、ヴァーリ？」
『ああ、彼――今は彼女か。まあ、性別なんてオーフィスにとっては些細なことだが。彼女はそれを望んでいてね。俺としても興味があるので便宜を図りたい』

　ヴァーリの提案は途轍もないことであった。上手く行けば三勢力が抱えている問題を解決出来るかもしれない。しかし、同時にとんでもない爆弾を抱え込むことを意味する。下手をすれば三勢力の協力関係が崩壊する危険があった。
　ヴァーリの提案を聞いたときからアザゼルの頭脳は高速で動いていた。如何なる方法をとれば成功するのか、様々な案を導き出そうとする。この時点で不可能だと判断すればアザゼルはこの提案を蹴っていた。しかし、聡明なアザゼルの頭脳は可能という答えを弾き出してしまった。
　感情に任せて否定する方がよっぽど楽だと思う。こういうときでも正しく働く自分の頭脳を少し恨めしい。出来るという答えが冷静さをくれてしまい、喚くことすら出来ない。
「……お前のことだ、それだけじゃないだろう？」
　話を進める時点でヴァーリはアザゼルの返答を受け取ったも同然である。
『彼女を狙う者が居てね』
「そりゃあ、当然だろう。そんな奴、星の数ほど居る」
『だが、本気で滅ぼそうとしている者は居ないだろう？』
「……居たら大馬鹿だな」
『その大馬鹿が敵さ。そろそろ仕掛ける為に動こうとしている。しかも内から』

最強、無敵に等しい存在であるオーフィスを本気で葬ろうとするなど夢物語に等しいが、動くとなると何かしらの策があるとしか思えない。
ヴァーリの説明を聞き、アザゼルの脳裏に浮かぶのは聖槍を持つ漢服の青年。
「大馬鹿な上にイカレているな、そいつは」
『俺は好ましいがね。大事を成そうとするには無謀さと狂気が必要なのさ』
評するヴァーリもまたアザゼル視点からすればその二つを持っている。今の状況が楽しくてしょうがないと顔に書いてある。
『だからこそ、オーフィスで突いて出方を見る。俺の敵かどうかを見極める為に』
「……オーフィスですら囮に使うのか？　お前の趣味の為に」
『人聞きが悪いなー。もしかしたら、俺の味方になってくれるかもしれないだろう？』
「白々しいんだよ。答えなんて分かり切っている癖に」
アザゼルが呆れながら指摘すると、ヴァーリは歯を見せて笑い、内にある獰猛さが露わにする。
『まあ、そういうことだ。オーフィスを預けた後のことは任せた』
そう言い、通信を切ろうとするヴァーリにアザゼルは待ったを掛ける。
「――待て。その前に一つ確認したい」
『何だ？』

「お前……ルイとベルを知っているか？」
『ルイとベル？　……知らない名だな』
「オーフィスのお友達だとさ」
　オーフィスの友達という言葉にヴァーリは目を見開く。オーフィスにそんな対等な存在が居るなど思いもしなかったという顔であった。
『……オーフィスとは何度か会話をしたことがあるが、その名が出て来たことは無かったな。ついでに彼女の周りにそんな人物が居たのも見たことがない』
「原理は知らんが奴らは神出鬼没だ。気付いたらそこに居る。オーフィスを連れ出す際に現れるかもしれないから注意しろ。……お前が俺の言うことを聞くかどうかは知らんが、戦うなんて考えは捨てろよ？」
　得体も知れない二人のことを警告し戦うなと忠告もするが、ヴァーリはアザゼルの話を聞いた途端にその目を輝かせた。
『――忠告感謝するよ。気を付ける』
「この野郎……」
　その目を見ただけで忠告を聞く気が無いと分かってしまう。骨の髄までバトルマニア気質なヴァーリにアザゼルは苦虫を噛み潰したような表情となった。
　そして、アザゼルとは対照的にヴァーリは最高に楽しそうな笑みを見せる。

老若男女問わず魅了するような笑顔のままヴァーリとの連絡が切れた。通信用の魔法陣が描かれていた紙が一瞬燃え上がる。灰も焦げた匂いも残さず完全消滅し、一切の痕跡を残さない。

一昔前のスパイ映画のような徹底した証拠隠滅にアザゼルは呆れつつ、ここから先のことを考え始める。

趣味と気晴らしにやる筈だった実験と研究は完全に止まってしまう。頭の中がヴァーリとオーフィスのことで一杯になっているので仕方がない。

アザゼルは目を瞑り、腕を組み、黙考する。長い間同じ姿勢を保ち続け、時折指が苛立ったように腕を叩く。

優れた頭脳を持つ故にヴァーリの引き渡しが上手くいかなかった場合の可能性と何が原因となるのかすぐに導き出し、それについての対抗策を考える。

その辺りはヴァーリ側が為すべきことなのだが、アザゼルは我が事のように考えていた。とどのつまり、親心としてヴァーリのことが心配で仕方がないのだ。

すぐに何をすべきか答えを出すが、それはそれで別の憂鬱が出て来る。こういうときに便利だが、同時に何かしらの不安要素もある。

アザゼルは深く溜息を吐いた後、プライベート用の通信魔法陣を展開した。

◇

決行日。ヴァーリは仲間たちを率いてオーフィスの許へやって来た。オーフィスはこれから『禍の団』を出て一誠たちの所へ行こうとしているのだが、？気にお茶を飲んでいる。

「オーフィス、そろそろ時間だ」

ルフェイの魔術で視覚や気配など感知するあらゆるものを誤魔化しているが、ルフェイと互角以上の魔術師が存在するので見破られるのも時間の問題。あまり悠長なことはしていられない。

オーフィスは今ヴァーリたちに気付いたかのようなマイペースでカップから唇を離し、感情の読めない目でヴァーリたちを見る

「よく来た」

見られているだけなのに全身に圧し掛かる重圧。その気になれば蠟燭でも消すかのようにこちらの命の火を消せる次元の違う強さ故にそう感じてしまう。オーフィスはただ見詰めているだけだというのに。

美候を始めとした強者たちが冷や汗を流す中でヴァーリだけはオーフィスの無意識の重圧を涼風のように受け流していた。

「ご期待通り兵藤一誠とドライグの所までエスコートさせてもらう」
オーフィスはこくりと頷くと椅子から降りた。そのまま行くかと思いきや、何を思ったのか虚勢を張ってオーフィスを睨んでいるジャアクフロストの前で足を止める。
「な、何だホー　やるのかホー!」
ファイティングポーズをとるジャアクフロストだが、流石に力量の差が分かっているので声が震えている。すると、オーフィスは無言のままジャアクフロストを持ち上げ、そのまま抱きかかえた。
「行く」
ジャアクフロストの何を気に入ったのか不明だが、抱いたまま出発を告げる。オーフィスの腕に抱かれたジャアクフロストは、完全に固まっていた。相手が相手だけに虚勢すら張れなくなっている。
「……暫くオーフィスの相手をしてくれ」
取り上げる訳にもいかないので、ジャアクフロストはそのままにしておくことにする。
そして、テーブルから数歩離れた後で唐突に振り返って言った。
「ルイ、ベル、行って来る」
一体誰に別れの挨拶をしているのかと一同疑問に思った瞬間、彼らは戦慄した。

先程までオーフィス一人しか座っていなかったテーブルに金髪の少年――ルイと同じ髪色の青年――ベルが座り、お茶を飲んでいたからだ。

見落とす筈など無い。周囲を常に警戒していた。ルフェイの魔術、そのルフェイの傍に座る灰色の狼の嗅覚、美候と黒歌の気による探知、そしてヴァーリとアーサーの戦士としての直感。それらを全て通過して今目の前に居る。まるで別の世界から浮き上がってきたかのように。

「行って来るといい。僕らはいつでも君の帰りを待っている」

ベルが微笑と共にオーフィスを見送ろうする。ルイの方は無言でオーフィスを見詰めているだけ。会話と光景だけ切り取ると妹を送り出すかのようシーンだが、至るまでが超常的過ぎた。

二人の突然の出現に誰も戦闘態勢に入ることが出来ない――ヴァーリを除いて。

誰もが硬直している中でヴァーリのみが二人へ一歩近付く。

「初めまして。アザゼルから話は聞いている。ちなみにどっちがルイでベルかな？」

異質な相手に対し、ヴァーリは臆せず笑みを浮かべて質問する。その鋼の精神力は仲間の美候たちですら正気の沙汰ではないと思うほどであった。

「僕がベル。そっちがルイだよ」

ヴァーリの問いに気分を害した様子は見せず、淡々と答える。

「成程。答えてくれて感謝する。――聞いたところによると二人はオーフィスの友人だとか？」

「そう。我と、ルイ、ベルは友人」

今度はオーフィスが二人に代わって答えた。

「そんな存在が居るのか半信半疑だったが……会ってみて理解したよ。確かにオーフィスの隣に立てる存在だ」

ヴァーリは多くの戦闘経験から大抵の相手の強さが分かる。中には一誠のような一見すると弱いが爆発的な潜在能力を持つ者が居り、完璧に見抜くことは出来ないがそれでもかなりの精度を誇る。

そんなヴァーリがルイとベルを見た印象は『全く分からない』であった。強いのか弱いのかすら判別出来ない。異常な存在を持つことから強いと思われるが、力が強い、オーラが強い、魔力が強いといったような強みが伝わって来ない。

もしかしたら今のヴァーリでは量ることすら無謀と言える、次元の違う高みにいる存在なのかもしれない。

そんな相手を前にしてしまったら、ヴァーリは――

「――堪らないな」

――ますます口角が上がってしまう。

「良くないことを考えているね」
　心を読むまでもなくヴァーリの顔に描いてある。
「考えちゃ悪いかな？」
「……」
　ベルは顎に指を添え、首を傾げて考えるような素振りを見せる。無表情で分かりづらいが、迷っている、悩んでいるようである。
「……君の期待に応えたいとも思ったが、僕と君とでは強さの形が違う。好みも違う。比べ合いをすること自体が不毛だと思っているんだ、ヴァーリ・ルシファー」
　自分の方が強いと言っている訳では無く、曖昧な表現をするベルにヴァーリは首を横に振り、その考えを否定する。
「確かに俺はこの拳で戦うことを好む。だが、タイプが違おうとも強いということに変わりはない。寧ろ、俺としては知りたいぐらいだ。俺の知らない未知の強さを。俺は如何なる強さも等しく尊敬する」
　すると、ベルは微笑を浮かべた。傍に座るルイも先程まで興味無さそうにしていたのに、ヴァーリを凝視している。
「分かっていたことだが、君は混沌側だ」
「こちら側？　『禍の団』のことを言っているのか？」

「考え方の話さ」
ベルは笑みを消し、オーフィスの方を見る。
「そろそろ行った方が良い。気付かれたみたいだ」
ベルのみがそれに気付き、立ち去るように促す。
「分かった。ヴァーリ、行く」
オーフィスもまたヴァーリに催促する。ヴァーリはルイとベルの視線が既に外されているのを見て、振られたことを察した。
「……誘うにはまだ早かったと思うことにする」
「僕も彼も逃げも隠れもしないよ。その時が来れば、君の望みは叶うさ」
慰めるようにベルが言うと、ヴァーリは後ろ髪を引かれる思いを抱えるが――
『ヴァーリ』
今まで沈黙していたアルビオンが声を出す。
『……あまり寿命が縮むような真似はするな』
「分かったよ、すまない」
アルビオンに本気で窘められたので未練を断ち、オーフィスを連れて仲間と共にこの場から離脱する。
「――さて、暫くの間は少し退屈になるかもしれない」

残された二人。ベルは一人言葉を零す。
「だから、話を聞く時間は沢山ある」
誰もいない空間に向けて話し掛けたとき、空間が歪み、銀髪の中年男性が現われる。
「あっれぇー？　普通気付くぅ？　おじさんビックリなんだけどぉ？　折角、サプライズ！　って感じで登場しようとしたつもりなのにお見通しってやつー？　うわおっ！　恥ずかし！　おじさん恥ずかし！　うひゃひゃひゃひゃ！」
開口一番軽薄な台詞を放つのは旧魔王派のリーダーでありルシファーの血を継ぐ悪魔――リゼヴィム。
「そう言う君は薄々僕らのことに気が付いていたようだね？」
「その、とーり！　オーフィスちゃんの機嫌を損ねるのが怖かったから深くは聞けなかったけどねー！　で、もー！　何かがいるような、いないような、やっぱりいるような、曖昧で不思議な言葉に出来ない感覚だったから、おじさん誰にも相談出来なかったよう！　言ったらボケたって思われるからさぁ！　ボケてんのは他の奴らなのに理不尽じゃない!?」
今まで話し掛けられなかった鬱憤を晴らすかのように捲し立てるリゼヴィム。年齢に不釣り合いなふざけた喋り方は、聞いた者たちの大半は眉をひそめることだろう。しかし、ルイとベルは表情一つ変化させることなく真摯と言えるぐらいにリゼヴィムの話

に耳を傾けている。
「いやー、めでたい！　こうやって堂々と声を掛けてくれたってことはー……おじさんと話す気になってくれたってことだよねぇ？」
抑え切れない好奇心。相手の全てを見逃さない狂気を帯びた瞳。老獪さと童心が悪夢のように混合し、不気味な気配を放っている。
「さっきも言ったようにオーフィスが出掛けたから時間が空いた。君と会話する余裕は十分にあるよ」
ルイは相手の全てを受け止めるような微笑を浮かべる。
「うっひょい！　やったね！　話したいこと山程あるからたっのしみー！　今夜は寝かせないぜー！」
道化染みた態度をとるリゼヴィム。剽軽を気取っているようにも相手を小馬鹿にしているようにもとれる。
そして、ベルが言う前に遠慮なくテーブルへ座る。しかも、ルイのすぐ傍に。怖いもの知らずの行動であるが、同時に二人の出方を窺い、量ろうとする狡猾さも見え隠れする。
尊大且つ自己中心的な真似であったが、ルイの方はお茶を飲む方に意識を向けており、リゼヴィムに探らせない。リゼヴィムの方もこの程度で何かが掴めるとは微塵も

思っていないのでニヤニヤと笑っているだけであった。

「あのさぁ、最近うちのシャルバ君が戻って来たのよー。こっちに何も言わずに消えたかと思ったら、唐突に帰ってきたわけ。温厚のおじさんもこれは流石に見過ごせないってなって、見せしめに殺そっかなぁ、殺っちゃおうかなぁって考えながらシャルバ君に会ったらもうビックリ！　何か行ったときよりもパワーアップしてんの！　何か髪も真っ白になってイメチェンしてたから驚いたのなんのって……だってすっごい似合わないんだもーん！」

うひゃひゃひゃひゃひゃ、とシャルバを盛大に馬鹿にして笑う。魔王以上の力をシャルバは手にしているが、リゼヴィムにとっては驚く程度で済ますことであり、まだ警戒をするに値しないのが態度から伝わってくる。

「思春期真っ只中みたいっ！　おっそいよー！　いったいよー！」

ベラベラとハイテンションでよく喋るリゼヴィムと口数が少なく感情の変化も少ないベル。ルイに至ってはどちらも無である。両極端なので両者間に凄まじい感情の温度差が生じているが、一つだけ共通していることがある。

それは、どちらも相手のペースに全く乗らないこと。リゼヴィムは反応が薄い二人に対して一切テンションを緩めることをせず、ルイとベルはリゼヴィムに影響を受けることなく淡々と在り続ける。両者ともマイペースであり、我を通していた。

ベルはリゼヴィムの話を聞きながらいつの間にかリゼヴィムの前に置かれてあるカップにお茶を注ぐ。
「そういうのを含めてお茶でも飲みながらじっくりと話そう……砂糖は入れるかい？」

◇

オーフィスを抱きかかえたヴァーリを先頭にしてヴァーリチームは事前に下調べをしていた人気も人目も無い脱出ルートを疾走していた。
ヴァーリは己の足で走り、黒歌とアーサーは美候の乗る筋斗雲に同乗。ルフェイは箒に跨って並走。誰もが自動車を軽く超える速度を出している。
ある程度安全な場所まで移動した後、ルフェイの転送魔法陣によりアザゼルが指定した場所へ転移する。拠点近くだと魔法陣の発動を察知されて妨害される恐れがあった。
このまま順調に行くかと思いきや――
「黒歌！」
――ヴァーリが急に黒歌の名を呼んだかと思えば、オーフィスを黒歌へ投げ渡す。
「にゃっ!?」
黒歌は尻尾の毛が逆立つ程驚きながらも筋斗雲から飛び降りてオーフィスを受け取

る。オーフィスがジャアクフロストも抱えていたので二人分の重さで思い切り仰け反ってしまい、背骨が悲鳴を上げる。

ヴァーリの行動に抗議しようとしたが、ヴァーリの獣の如き笑みにその言葉は喉の奥へ引っ込む。

ヴァーリは急停止し、反転。背後に振り返る一瞬で禁手を発動させ、『白龍皇の鎧』を纏う。瞬きよりも速い禁手化に仲間たちは驚く。少し見ない間に更に禁手の精度が上がっていた。

振り返ったヴァーリの手は白色のオーラを纏っており、後方へその手を突き出す。オーラは球体となって放たれ、ヴァーリたちが来た道を逆走。何かに着弾すると夜の世界に太陽が落ちて来たかのような閃光と一拍置いて破壊が生じた。

振り返る間に禁手と攻撃の両方を完了させたヴァーリ。誰もがその行動を問うことも咎めることも出来ない。そんな間など一瞬たりとも存在しなかった。

「黒歌、ルフェイ。オーフィスたちを連れて先に行け。美候、アーサーは俺とここで足止めだ」

呆気に取られているメンバーにヴァーリは冷静に指示を出す。その内容だけで何があったのかを察し、それぞれが言われた通りに行動を開始する。

黒歌は急いでルフェイの箒に乗り換える。ルフェイは黒歌たちが乗ったことを確認

すると、最大速度でこの場から離脱。あっという間に小さくなり、やがて視界外へ消えた。

それから数秒も経たずに変化が起こる。ヴァーリたちの周囲に霧が立ち込め始めたのだ。無論、それがただの霧ではないのはヴァーリたちも分かっている。この霧はゲオルグの『絶霧』であり、後数秒遅かったら黒歌たちも霧の結界内に閉じ込められていた。

「ヴァーリよぉー、迅速な対応は結構なんだが速過ぎるってのもどうかと思うぜぃ？」

「せめて一言ぐらい忠告して欲しかったですね」

美候は如意棒を両肩で担ぎながら小言を言い、アーサーは先程のオーラの着弾の衝撃によってずれた眼鏡を直しながら美候と同じ不満を言う。

「そう言わないでくれ。その忠告の時間すら惜しいぐらいにギリギリだったんだ。――流石はゲオルグだな。結界の展開の速さと範囲が桁違いだ」

相手の力量を褒めるヴァーリに二人は溜息を吐く。しかし、内心ではヴァーリの判断力と行動力に感心していた。誰よりも先に気付き、誰よりも先に動く。改めてヴァーリのリーダーとしての器を思い知らされる。だが、決して口に出して褒めない。褒めたら調子に乗るし、これからも一人で突っ走るようになってしまうからだ。ある程度は仲間でヴァーリの手綱を握っておく必要がある。

軽口を交わす彼らであったが、不意にその表情が引き締まる。ヴァーリたちに接近し

てくる複数の足音。間もなくして足音の主たちが三人の前に現れた。
「やあ、ヴァーリ。いきなり攻撃して来るなんてどういうつもりだい？」
　気さくな言葉を掛けるのは曹操。彼の後ろでは英雄派の仲間たちも居る――どういう訳かゲオルグが心底不機嫌そうな表情をしているが。
「殺気を感じたから敵だと思ってしまった。まさか、曹操たちだったとは。すまなかったな」
　白々しい態度で謝るヴァーリ。あれだけの規模の攻撃をその言葉で済まそうとしていることに曹操は苦笑する。
「……まあそれはいい。それよりも本題だ……オーフィスは何処へやった？」
「オーフィス？　何のことやら？」
「ヴァーリ、慣れない演技なんてするもんじゃない。君たちがオーフィスを連れ出したのは知っている」
「話が見えないなー」
　あくまで白を切るヴァーリに控えている英雄派のメンバーの表情も徐々に険？なものとなっていく。
「主義主張は異なるが、『禍の団』に所属する同士。内輪揉めはなるべく控えたい。だから、もう一度言う。オーフィスは何処だ？」

「どうやら俺たちの間には誤解が生じているみたいだ。知らないものは答えられない」
こうなると話は平行線となる。曹操が幾ら追究してもヴァーリははぐらし続けるだけ。
『……』
やがて、二人の間で会話が途切れた。最早、話し合いの余地はない。そうなることは分かっていたが。
「哀しいな。仲間同士争うことになるとは」
「そうか？　俺は楽しいな。肩を並べていた相手と本気で戦えるなんて」
正負に分かれたことを言っているが、互いに浮かべているのは笑み。全ては茶番。最初から決まっていた答えに辿り着いたに過ぎない。
「……二人で盛り上がっているところ悪いが、俺から一つ質問させてもらってもいいか？」
ゲオルグが二人の会話に入る。あまり前に出ないゲオルグにしては珍しい行動である。
「ヴァーリ、何故俺が『絶霧』を発動させようとしたのが分かった？」
かなり離れた距離で『絶霧』を発動させようとしたら、いきなり先制攻撃をされた。曹操の聖槍で守られたが、あのときはゲオルグも冷や汗をかくと同時に何故分かったのか

という疑問が生まれる。もしかしたら、『絶霧』にはゲオルグ本人も気付いていない発動予兆のようなものがあるかもしれないと思ったのだ。

「勘」

　ゲオルグは少しの間言葉を失った後、苦虫を噛み潰したような表情になる。

「アーシア・アルジェントといいギリメカラといい、どうしてこうも俺の前には理不尽な奴が現れるんだ……！　こっちは真面目にやっているというのに……！」

　ここ最近立て続けに自分の常識を覆す相手と戦う機会が多いので愚痴るゲオルグ。

「まあまあ」

　曹操がグチグチと小言で文句を言うゲオルグを宥めようとするものの――

「……お前もその理不尽の内の一人だからな？」

　横目でゲオルグに睨まれる。曹操は困ったような表情をし、宥める為に伸ばした手を引っ込める。

「――さて、本題に戻ろう。オーフィスの居場所を吐かないなら少々強引に聞き出させてもらう」

「こちらは少々でなくても構わないぞ？　本気で来い」

　目的を果たす上で邪魔となる障害物。こうなることは最初から定められていたのかもしれない。

◇

「――ヒホ！　ヒホ！　ヒホ！」
今までオーフィスに抱かれっぱなしであったジャアクフロストが、急に腕の中で暴れ出す。
「離すホ！」
「何故？　どうした？」
首を傾げながらオーフィスが問う。
「俺様も戦うんだホ！　ヴァーリが戦うときは俺様も一緒に戦うんだホ！」
「また我儘言い始めたにゃー」
「ジャッ君、落ち着いて」
黒歌は呆れ、ルフェイは宥めようとする。
「行くんだホ！　行くんだホ！」
それでも言うこと聞かないジャアクフロスト。
「行けば、死ぬ。それでも、行く？」
オーフィスは暴れるジャアクフロストの顔を両手で挟み、顔を覗き込んで念を押すよ

うに訊く。それだけでジャアクフロストの動きは止まった。
「そ、それでも行くんホ……」
声が震えている。しかし、最強に近い存在を前にしても意思を折ることはしなかった。
オーフィスはジャアクフロストの顔をジッと見つめ続ける。何かを考えているようで何も考えていないようなぼんやりとした表情。
「――分かった。なら、我が少し力を貸す」
「ヒホ?」
どういう意味かと聞くよりも前にジャアクフロストの真っ赤な口にオーフィスの唇が重なる――ことは物理的に無理だったので、オーフィスは唇を近付けるとジャアクフロストの口の中に舌を伸ばす。オーフィスの赤い舌を這う小さな黒い蛇が、オーフィスの舌から這い出てジャアクフロストの口の中へ飛び込む。
ジャアクフロストの喉が動き、口の中の蛇を呑み込むのを誰も止めることなど出来なかった。

◇

外界から隔絶されたゲオルグの『絶霧』の結界内にてヴァーリチームと英雄派は熾烈な戦いを繰り広げていた。

「おらぁぁぁ！」

跳び上がったヘラクレスが落下と共に巨拳を振り下ろす。拳の向かう先に立つのは美候。大振りの攻撃なので避けるには十分な時間があり、美候は落下地点から素早く離れるのだが――

「うおっ!?」

――外れたヘラクレスの拳が地面に叩き付けられた瞬間に爆発が起こる。爆風と衝撃に煽られるせいで反撃が出来ない。しかも、ヘラクレスの攻撃はそれだけでは済まない。ヘラクレスを中心にして周囲の木々などが爆発と共に破壊されていく。美候も眼前に迫ってくる何かに気付き、反射的に如意棒を振り抜く。途端、小さな爆発が発生し如意棒を通じてビリビリとした衝撃が美候の手に伝わって来た。

「図体がでかい割には意外と小技も出来るじゃねぇか」

小さな爆発の正体はヘラクレスの攻撃で周囲に飛び散った石や土の塊である。ヘラクレスの神器の効果により即席の爆弾と化したのだ。幸い、飛ばしたものが小さかったので威力自体はそこまでではないが、厄介な上に鬱陶しいことに変わりはない。

凡庸な者ならばここで終わっていただろうが、美候は凡庸に非ず。炸裂する礫を全て

見極めて如意棒で弾き飛ばす。
細かな礫が一斉に爆発し、美候の姿が爆煙に覆い隠される。だが、すぐに美候は煙を突き破って現れる。一人ではなく複数人になって。
美候の仙術による分身はヘラクレスを四方から囲み、逃げ道を塞ぐと如意棒を伸ばす。
直撃すれば人体など容易く貫くが――
「ふんっ！」
――ヘラクレスの巨体が一瞬膨張する。全身の筋肉に力が込められ鋼と化す。そこに次々と打ち込まれる如意棒。しかし、ヘラクレスの筋肉の鎧を貫くことが出来ない。
「かってぇ!?　頑丈過ぎだぜぃ!?」
打ち込んだ美候の手が痛みを覚えるぐらいにヘラクレスの肉体は硬い。だが、ヘラクレスの方も険しい表情をし、額から一筋の汗を流す。
如意棒を打ち込まれた箇所が赤黒く変色している。本気で身を固めれば魔法すら通さない肉体が痛みを訴えていた。
「……やるじゃねぇか」
互いの実力は人聞きでしか知らないが、対峙して初めて脅威として認識する。
美候とヘラクレスとは別の場所でも激しい戦いが繰り広げられている。

正面から斬り合うアーサーとジークフリート。聖王剣コールブランドと魔帝剣グラムが斬り結ぶ。聖剣の頂点と魔剣の頂点。もし、衆目に晒されたのならば大金を支払うのも惜しくはない頂点同士の決戦。
「君とは一度こうしてみたかった」
「そうですか。最初で最後の願いが叶って良かったですね」
聖と魔が反するように二人の温度差も反しており、ジークフリートが血を滾らせているがアーサーは至って冷静に剣を振るう。
「ついでにもう一つ俺の願いを叶えてくれないかな？」
ジークフリートは両手に持っていたグラムを片手に持ち替える。空いた手に転送魔法陣が浮かぶと中から一本の剣が飛び出し、ジークフリートはそれを握ると共にアーサーへ振り下ろす。
コールブランドで受け止めたアーサーは、ジークフリートの握る剣の正体に気付いて瞠目する。
「木場裕斗の聖魔剣か！」
「その通り。本人と同じく優等生だよ、この子は」
二刀流となり手数を増やしたことでアーサーを守り一辺倒にさせる。
「僕の魔剣が如何に問題児だったのかが嫌でも分かるよ」

「心中お察ししますよ」
　激しくなるジークフリートの攻撃だが、守りを固めたアーサーを崩せない。このまま持久戦に入るかと思いきや、横から新たな攻撃がアーサーに迫る。
　咄嗟に跳んで回避すると、標的を失った聖剣の群が地面に突き刺さっていく。
「ジー君、お姉さんも居ること忘れてないー？」
　横槍ならぬ横剣を入れたジャンヌが不満そうに言う。
「――相手が相手だけに個人的な感情を優先してしまったよ、すまない」
　謝罪はするものの若干の不満が表情に出ている。しかし、個人的な感情は後回しにして英雄派のメンバーとしての仕事は為す様子。
　二対一になるが、アーサーは眼鏡を掛け直すだけで動揺は見せない。これでもまだ勝算がある、仕草から伝わってきた。
　メンバー同士が熾烈な戦いを行う中でリーダーであるヴァーリと曹操は対峙したまま動かない。
「正直に言う。こういう展開を望んでいた」
「生粋のバトルマニアだな……ヴァーリ。あのマタドールと馴れ合うだけのことはある」
「魔人といえば、あの二人はどうしたんだ？」

「二人ともやるべきことをやっているさ。同盟を結んではいるが、協力の強制は出来ない」
魔人二人が何処かに潜んでいるのならば脅威であるが、曹操の様子を見る限りはこの場に居ない。尤も、ヴァーリを騙す為の嘘という可能性も捨てきれなかった。
「まあ、仮に協力出来たとしてもヴァーリ、君を倒す役目は譲れないな。ヴァーリ・ルシファーという壁を超えれば俺は更に成長出来る」
「いいな。互いに糧とし合おう。俺とお前、どちらが高みに昇ることが出来るか喰らい合おう」
白色のオーラが増すヴァーリ。まだ底の見えないヴァーリに曹操は微笑を浮かべながらも額からは冷や汗を流している。
ヴァーリが相手ならば曹操も切り札を切らざるを得ない。
曹操は聖槍を眼前に掲げ、穂先に額を当てながら解放の言葉を唱える。
「禁――」
「曹操！」
しかし、その続きはゲオルグの声により遮られる。
戦いの場から離れて結界の維持といざというときの為のサポートとしてゲオルグとレオナルドは控えていた。

だからこそ、ゲオルグは結界に起きた異常をいち早く察知する。
「何かが外部から無理矢理侵入してきた！」
焦るゲオルグと驚く曹操。神滅具による結界を無理矢理こじ開けて侵入してくることなど少なくとも魔王級でないと不可能である。
『ヒホヒホヒホヒホ！』
愛嬌と間抜けさを感じさせる聞き覚えのある声。同時に結界内の気温が急速に下がっていき、すぐに真冬並みの気温となる。
「この声は……」
周囲の木々から音が鳴り出す。急激な温度変化により中の水分が凍結して割れているのだ。
『ヒホホホホ！』
周囲を凍り尽くしながら現れたのはやはりジャアクフロスト――なのだが。
「ジャアクフロスト……？」
ヴァーリの視線が何故か上向きになっている。彼の知っているジャアクフロストは自分の身長の半分以下、だが目の前に現れたジャアクフロストは自分よりも大きく、三メートルはある。
『ヒホー！　ヒホー！　ヒヒホホッ！』

さっきから言語が言語になっておらず、鳴き声のように喚いている。
「まさか……呑んだのか？　オーフィスの蛇を……」
力の急上昇の理由を曹操はすぐに見抜いた。そして、もう一つ見抜いたことがある。
それはヴァーリも気付いていた。
ジャアクフロストの真っ赤な両目の中で黒い蛇がグルグルと泳いでいる。正気を感じさせない言動、身の丈以上の力。
ジャアクフロストは今――
『暴走している……』

乱戦、四巴

「――少し見ない間に随分と成長したな」
「こんなときにそんなつまらない冗談を言える君に感心するよ、ヴァーリ」
思ったことをつい口に出してしまったヴァーリに、曹操の皮肉が飛ぶ。
『ヒホヒホヒホオオオオ！』
赤い目に渦巻く黒い蛇を宿すジャアクフロストは、腕をグルグルと振り回しながらヴァーリと曹操へ駆け寄る。
動きは単調。しかし、オーフィスの蛇で能力が爆発的に上昇していることで瞬間移動染みた速度で二人の前へ現れる。この動きにはヴァーリたちも流石に目を丸くした。
『ヒィィィィホオオオオオオオ！』
振り回していたジャアクフロストの拳が突き出される。動きが大振りなこととジャアクフロストの腕が短いこともあって避けることは然程難しくなく、ヴァーリと曹操は意図せず同じ方向へ回避する。
外れたジャアクフロストの拳。全身を投げ出すように繰り出しているので途中で止めることも出来きず、二人の背後にあった巨木へ打ち込まれる。

瞬間、根本から全ての葉先までが瞬時に凍結。同時に粉微塵になり、細かな氷の破片となって周りに飛び散る。
「へぇ！　元から強かった冷気が更に強くなっているな。殴った物を瞬間凍結させながら衝撃で粉砕するか……悪くない攻撃だ」
「……褒めている場合かい？　君の鎧ですらあれを受けたら危ないと思うが？」
「だろうな。大したものだ」
「……そういうところだけはやっぱり合わないなぁ」
戦うことに喜びを見い出すヴァーリと戦いという試練を乗り越えた先の成長に喜びを感じる曹操は微妙に感性が合わない。
『ヒホ！　ヒホ！　ヒホ！』
ジャアクフロストの巨体が跳ねている。自分よりも遥かに大きい巨木を粉砕したことを喜んでいる様子。力は飛躍したが、その代償として知性の方はかなり下がっており、子供か動物ぐらいになっている。目の前のことに意識が向いており、ヴァーリたちのことを完全に忘れてはしゃいでいる。
強いが本能に忠実ならば恐れるに足りず。ジャアクフロストの意識が別に向いている間に曹操は聖槍の穂先でジャアクフロストを指す。
穂先から放たれる聖なる輝き。『黄昏の聖槍』が発する聖光が集束され、ジャアクフロ

ストを貫く――

「待て」

――刹那、聖槍の下に差し込まれたヴァーリの腕が、聖槍を下から持ち上げて穂先を上空へ向け指す。集束された聖光は空へと放たれ、彼方へ消えて行った。

「邪魔するのかい？　ヴァーリ」

「当たり前だ。黙って仲間がやられる所を見ている筈が無い」

「意外だ。彼のことを疎ましく感じていると思っていたよ」

「まさか。強くなろうとしている奴は大好きだ」

曹操は聖槍を半回転させ、石突きでヴァーリの胴体を打つ。ヴァーリの鎧には全く効果が無いが、当てた曹操本人もそれは理解しており、その行動は次に繋げる為のものに過ぎない。

胴体を打たれたヴァーリは即座に拳で反撃を繰り出す。だが、曹操はその展開を読んでおり拳を聖槍の柄で防ぐ。同時に両足をわざと地面から離してヴァーリの力を受け流しつつ突き飛ばされることで間合いをとる。

凄まじい勢いで飛ばされる曹操。何か遮蔽物があれば一瞬で原型を留めずに潰れる速度。すぐに聖槍の刃を地面に突き立ててブレーキを掛ける。

間もなくして飛ぶ勢いは弱まり、曹操の両足が地面に着く。曹操は聖槍を構えようと

し、その表情を微かに強張らせる。
肩に生じる痛み。ヴァーリの攻撃を受け流したと思っていたが完全ではなかった。
最強の神滅具である『黄昏の聖槍』の所持者であり英雄の血を受け継ぐ曹操だが、自分でも理解しているように超人ではなく生身の人間である。一部例外は居るが、刃物で刺そうとすれば刺さるし、力強く殴れば骨も折れる。
今のヴァーリの一発でいとも簡単に肩を負傷してしまった。改めて、人間と悪魔のハーフであり両者の長所を受け継いだヴァーリを反則に思うと同時に少し羨ましくも思う。
割り切っている筈なのにどうしても抱いてしまう羨望に似た感情。それが捨てきれない辺り、やはり自分は人間なんだと内心で自嘲する。
痛みは異常に対する警告。しかし、曹操はそれを無視して構えをとる。多少の負傷があっても戦える技術は身に付けている。
曹操が構えをとったときにはヴァーリは既に戦闘態勢に入っていた。素質、実力共に抜き出たものがあるのに微塵も油断をしていない。
(何とも可愛げのないことだ)
曹操がヴァーリの隙の無さに頭を悩ませている中、ヴァーリ本人は曹操のことを警戒しながらもジャアクフロストのことも考えていた。

（ああなった原因は間違いなくオーフィスだな……全く、無邪気に場をかき乱してくれる）

　経緯は不明だが、良かれと思ってジャアクフロストに自らの蛇を与えたのだろう。結果としてジャアクフロストはパワーアップをしたが、扱い切れない力に翻弄されて暴走をしてしまった。尤も、ジャアクフロストがこの場に混沌を起こしたことで結果的に曹操たちの足止めには成功している。

（どうするべきか……）

『方法が無い訳ではない』

（アルビオン？）

『だが、リスクもある』

　悩むヴァーリにアルビオンが助言をする。

『今の奴は身の丈以上の力を得てしまったことで暴走している。ならば、溢れ出る力を削いでやればいい』

（ということは……）

『半減の力を奴に打ち込み、余剰した力を我々が吸収、放出すればいい。だが――』

（下手にオーフィスの力を取り込むせいで俺の『覇龍』が暴走する危険がある、ということだな？）

『――その通りだ』

アルビオンはヴァーリの才と実力に絶大な信頼を置いている。胸を張って歴代最強と評するだろう。しかし、それでもオーフィスは別格である。無限の名を持つドラゴンの力がヴァーリにどんな悪影響を及ぼすか想像も付かない。

奇跡とも言える才覚を持つヴァーリに何かがあれば、相棒としてアルビオンは永遠に消えることのない後悔をすることとなるだろう。

「よし、やろう」

だが、そんなアルビオンの心配とは裏腹にヴァーリは即決した。何も考えていない訳ではない。それはアルビオンにも分かっている。色々なリスクを想定した上でヴァーリは揺るぎない意志で決断をしていた。

『……いいんだな？』

「俺が無限に屈すると少しでも思っているのか？　アルビオン？」

『……ふっ。杞憂だったな』

アルビオンはそれを過信とは思わない。困難を前にしてより強く燃える魂。その輝きは本物であった。

「方法が決まったなら早く助けるとしよう。何せ俺のライバルだ」

『自称だがな』

ヴァーリは仮面下で笑いながらまずは半減を発動させる為にジャアクフロストに一撃入れるつもりであったが――

「うん？」

――足元から小さな揺れを感じ、立ち止まる。

『ヒホ！　ヒホ！　ヒホ！』

相変わらず興奮した様子で跳ね続けているジャアクフロスト。だが、揺れの原因は彼が跳ねているものとは違う。

様子を窺っていた曹操もまた小さな揺れを感じていた。それと同時に口から漏れる息が白くなっていることに気付く。ジャアクフロストが現れてから気温が凄まじい勢いで下がり続けており、気付けば真冬並みの気温にまでなっている。

『ヒィィィィホォォォォォォ！』

ジャアクフロストが一際大きく跳び上がり、大地を踏み締めるように着地したとき、地面の揺れは最高潮となり地面を突き破って何かが出現する。

「むっ」

反射的に下がって隆起したものを回避するヴァーリ。間近で見たそれは幾つもの氷が束となり柱状になった、所謂霜柱というものだがサイズは可愛らしいものではなく文字通りの柱であり、ヴァーリの背丈を超えている。

揺れは収まらず、次々と地面から巨大霜柱が突き出てきた。
『あの動き、これの仕込みだったか』
「やるじゃないか」
予知するように生えてくる霜柱を紙一重で回避しながら一見無意味に見えたジャアクフロストの行動が次なる攻撃の下準備だったことを称賛する。
「やれやれだ……！」
曹操もまた下から強襲してくる霜柱を避け、間に合わないと察したのなら地面に聖槍を突き刺して消し飛ばすなどし、直撃を回避していた。
霜柱の攻撃範囲はかなり広く、離れた場所で戦っている他のメンバーもまた射程内に入っている。
「ゲオルグ！　レオナルドと一緒に離れろ！」
「言われなくとも！」
ゲオルグに指示を飛ばすが、ゲオルグの方は指示される前に既に行動を開始していた。レオナルドを傍に寄せ、周囲を『絶霧』の結界で守りながら危険地帯と化したこの場から離脱をする。
戦えるが直接戦闘向きではないゲオルグと非戦闘員のレオナルド。どちらの神滅具も貴重である為、万が一を避ける必要がありゲオルグたちもそれを十分自覚している。

戦闘に混乱を齎すジャアクフロスト。その影響は他の者たちの戦いにも強く影響していた。
「うおらっ！」
目の前に現れた巨大な霜柱に拳を叩き込むヘラクレス。途端に爆発が起こり、霜柱が粉々に砕け散る。
「ぐぅ！」
その直後、ヘラクレスの口から苦鳴が発せられた。ヘラクレスの脇腹にめり込む如意棒の先端。美候は如意棒を突き出した構えのまま好戦的に笑う。
「油断大敵だぜぃ？」
ヘラクレスの気が目の前の霜柱に向けられると同時に美候はヘラクレスの死角に回り込み、霜柱を破壊して一瞬だが気と体が緩んだ瞬間を見極め、渾身の力で如意棒を最も防御の薄い箇所を狙って突いた。
「せこいことしやがって……！」
怒りでヘラクレスの筋肉が膨張する。脇腹にめり込んでいる如意棒が筋肉の膨張により抜け難くなる。しかし、美候は冷静であった。
「おっと」
手首を捻り、如意棒を捩じる。固くなった筋肉が捩れ、発生する痛みによりヘラクレ

スの体が反射的に力を緩めてしまう。その間に抜けなかった如意棒を引き抜く美候。
「てめぇ！」
まんまと美候の狙い通りに動かされたヘラクレスは、怒りのまま拳を振り下ろそうとした。だが、脇腹の痛みが残っているせいで動きのキレが一段、二段下がっている。キレが損なわれた動きならば美候の方が速い。
美候は如意棒で地面を突き、その反動で後ろへ下がる。ヘラクレスはすぐに追おうとするが生えてきた霜柱により視界と道を遮られて踏み止まってしまう。
「邪魔くせぇ！」
苛立ちながら霜柱を粉砕するヘラクレス。砕いた霜柱の陰に居た美候は消えていた。
「そうカッカするなよ。体に毒だぜぃ？」
声のする方向は頭上。ヘラクレスが顔を上げれば新たな霜柱の上に美候がしゃがみ込んでおり、ニヤニヤと挑発染みた笑みでヘラクレスを見下ろしている。
「このエテ公が……！」
「煽りセンスは貧弱なんだな、脳筋。ウケるぜぃ」
途端、ヘラクレスの剛腕の一撃が炸裂し、周囲の霜柱が粉砕されていく。しかし、美候は軽業師のような身のこなしで既に爆破地帯から逃れていた。
地の利がどちらにあるのか。明白となっている戦いである。

ヘラクレスが血管が千切れそうなぐらいに熱くなって戦っているとは真逆にジークフリートとジャンヌは冷静にアーサーと戦っている。

前衛でジークフリートが戦い、ジャンヌは後衛でジークフリートの援護。決して二人同時には挑まない。それはアーサーのコールブランドの能力が理由であった。

アーサーがコールブランドを横薙ぎに払う。命中すればジークフリートの顔の上半分が斬り飛ばされる。ジークフリートは光の尾しか見えない高速の斬撃に対し、足を着けていた地面が爆ぜる程の勢いで後退。

アーサーの斬撃はジークフリートの頭部を斬り飛ばすことなくジークフリートの残像を通り過ぎていく。ジークフリートにはアーサーの斬撃が見えていた。

素早く後退したジークフリートは下がったとき以上の速度で前へ跳び出し反撃の聖魔剣でアーサーを狙うが、アーサーは下がろうとはせず逆に前進する。

自殺行為に等しいアーサーの行動。しかし、次の瞬間アーサーの前方に空間の裂け目が生じ、アーサーはその裂け目の中へ入っていく。ジークフリートが聖魔剣を振り抜いたときには既にアーサーは裂け目ごと消えていた。

これがコールブランドの能力である。空間を斬り、生じた裂け目の中を移動することが出来るのだ。例え、空振りをしても空間を斬っていることに変わりはなく、アーサーは先程の一振りで攻撃と逃げ道の確保を同時に行ったのだ。

空間の内側に入ったアーサーを探知する方法はジークフリートとジャンヌは持っていない。なので二人は非常に単純な方法でアーサーを撃退しなければならない。
ジークフリートの頭上。何もない空間から飛び出す刃。未だに気付かないジークフリートの脳天へ刃が落ちていく。
「ジー君！」
ジャンヌは叫び、聖剣を飛ばす。聖剣が刃の側面に命中して金属音を鳴らすと共に振りの速度を鈍らせる。
ジャンヌの声に反応し、ジークフリートは真上に剣を振り上げる。空間を滑るように落ちて来た刃が聖魔剣に衝突し、火花を散らす。
「そう簡単には行きませんか」
刃が飛び出している空間が開き、中からアーサーの上半身が出てくる。
「それでも冷や汗ものさ」
本気とも冗談とも取れる言葉を返すジークフリート。実際、ジャンヌの声と援護が無ければ少し危うかった。
空間の裏側に完全に隠れられるアーサーに対し、二人がやれる対策は周りの変化に常に目を光らせることしかない。二人居ることでどちらかが気付けば対処が可能。
ジークフリートは聖魔剣でコールブランドを押さえながらグラムでアーサーを斬り

付けようとするが――

「ちっ」

――異変に気付き、舌打ちをしながらその場から離れる。すると、ジークフリートが立っていた所へジャアクフロストの霜柱が隆起してきた。

「また一段と騒がしくなりましたね」

ジャアクフロストの異変に気付き、アーサーは少しだけ心配そうな表情をすると生えてきた霜柱の上に飛び移った。

「そこ！」

ジャンヌはそのタイミングで『聖剣創造』により大量に創り出した聖剣の群をアーサーへ一斉発射する。

「待て！　ジャンヌ！」

ジークフリートが声で制止するが、間に合わなかった。

数多の聖剣がアーサーへ飛んで行く。直撃すれば原型も留めない挽肉になる攻撃に対し、アーサーは逃げる素振りすら見せなかった。

彼が行ったことはただ一つ。腰に差してあるもう一本の剣を引き抜き、その刀身を僅かに晒したこと。

次の瞬間にはアーサーを狙っていた筈の聖剣の群が方向転換をし、ジークフリートへ

群がっていく。
「ジー君！」
ジャンヌは急いで神器を解除しようとしたが、聖剣はジャンヌの指令を弾き、制御出来ない。別の意思によって支配されたかのように。
ジークフリートは聖魔剣とグラムを交差させた斬撃を繰り出し、飛んできた聖剣の殆どを破壊する。しかし、全てを破壊することは出来ず残った聖剣がジークフリートに突き刺さった――かと思えば、ジークフリートが体を軽く動かすと刺さった筈の聖剣が地面に落ちていく。その切っ先には血の一滴も付いてはいない。
「ジャンヌ。今のは流石に不用意だ」
「ごめん。お姉さん、反省」
ジークフリートに注意され、ジャンヌは素直に謝る。
「まあ、相手が悪かったとも言える。流石は最強と謳われた七本目のエクスカリバー。使っている所は初めて見たが、まさかジャンヌの神器も支配出来るとは……」
刀身を晒すだけで神器のコントロールを奪ってみせたアーサー。その気になれば魔法や法則、意思なども意のままに操ることも出来る。最強という名に相応しい『支配の聖剣（エクスカリバー・ルーラー）』。しかし、アーサーは最強のエクスカリバーを持っていても積極的には使用しない。

「出し惜しみしているそれをやっと使わせられたよ」
「出し惜しみをしている訳ではないです。コールブランドの方を気に入っているだけです」
「最強のエクスカリバーを持っているのにかい？」
「最強だからといってそれが最高だとは限られません。同じ剣士として私の気持ちが分かりませんか？」
　アーサーの問いにジークフリートは頷く。
「良く分かる。グラムや他の魔剣よりも聖魔剣を振っている方が楽しいからね」
　明け透けな感想を言った瞬間、グラムを持っている腕から爆ぜるような音がした。袖が破け、肌が露出。鱗のような質感を持つ肌の内側から血が滲み出ていた。
「ほらね？」
　子供に悪戯されたかのような軽さで肩を竦めるジークフリート。アーサーはそれよりもジークフリートの人外の肌の方が気になった。それが聖剣が突き刺さらなかった理由としか考えられない。アーサーが見ている間に鱗が人の皮膚へと戻り、グラムの対抗心によって付けられた傷も治っていた。
「危ないものを着込んでいるという話を耳にしましたが、どうやら噂以上に危険なものを着ているようですね……」

「そんな目で見ないでくれよ。傷付くだろ？」
どちらもまだ余力を残しており、相手の出方を窺っている。
「ジャンヌ。次は同じ失敗は無いようにね」
「分かってますよー。お姉さんは同じ失敗は繰り返さない出来る女だから」
ジャンヌがタクトのように持っていた聖剣を振るう。地面に散らばっていた聖剣がジャンヌの許へ集まっていき束ねられ、形を変え、ワイバーンを模した姿となった。
「今度は簡単には操られないようにたーっぷりとお姉さんの力を注いであるからね。ジー君、こっからが本番よ」
「了解。それじゃあギアを上げて行こうか」
ジークフリートの背中から生える第三の手。ジークフリートの神器である『龍の手』の解放。手数だけでなく身体能力もこれで倍になる。
「どうぞ。こちらは迎え撃つだけです」

◇

各々が戦いの火花を散らしていく。ヴァーリもジャアクフロストに近付き、正気に戻そうとするが、曹操が大人しく見守っている筈も無い。

自慢の聖槍を構え、いつでも最上級の聖なる気を放てる準備が出来ている。ヴァーリであっても直撃すれば危うい。オーフィスの蛇で強化されたジャアクフロストも溶けるのを超えて蒸発してしまう。
『ヒホヒホヒホ！』
そんな危機的状況なのも知らずにジャアクフロストは高々に笑っている。力に溺れた笑いというよりも目一杯遊べていることが楽しくて仕方がない上機嫌の笑い。いつもは虚勢込みで大人ぶっているジャアクフロストが、今は子供同然の思考となって無邪気に暴れ回っている。
その場で跳び続けることが飽きたのか跳ねるのを止め、周囲を見回し出した。新しい玩具や楽しいことがないか模索している。
『ヒホ！』
ジャアクフロストの目がヴァーリと曹操に止まる。黒い蛇が螺旋を描く赤い目が一段と輝きを増したように見えた。
「ようやくこっちに気付いたか」
眼中に入れることなく好き勝手やっていたジャアクフロストが、今になって自分たちを視界に入れたことにヴァーリは苦笑する。
『ヒーホー！』

ジャアクフロストは両腕をグルグルと回しながらヴァーリ目掛けて突撃してきた。
「遊んで欲しいのか？」
曹操を警戒しながら構えるヴァーリ。ジャアクフロストが近付いて来ると鎧の表面に霜が降り始める。
接近するだけでもこれ程の冷気。直接ぶつけられでもしたら、一体どうなってしまうのか。ヴァーリは恐れよりも期待を抱いてしまう。
助けたいが戦ってもみたいという矛盾した感情。仲間相手に向けるこの感情、つくづく自分は戦いが好きなのだと実感してしまう。
ジャアクフロストは本能の赴くままに突進し――
『ヒホ？』
――何故か足を滑らせてバランスを崩し、顔面から地面へ突っ込んでしまった。
『……』
この展開にはヴァーリも曹操も言葉を失ってしまう。だが、すぐにそんな暇もなくなる。
「これは……!?」
「何だと……？」
曹操、ヴァーリは戸惑いの声を出す。細かな震動と共に視界が何故か斜めになってい

く。足が地面を滑り出し、足に力を込めて踏ん張らないと体が倒れそうになる。
「……何時からここは坂道になったんだ?」
水平であった地面が段々と斜面になっていく。視界が傾いていく原因がそれであった。恐らくジャアクフロストが転んだのも傾いた地面に足を取られたのが原因と思われる。
傾きはどんどん酷くなっていき、真っ直ぐに立てなくなる程であった。
ヴァーリと曹操が一瞬視線を交わす。この事態を引き起こしているのは目の前の相手ではないかと互いに思ったからだ。しかし、互いに戸惑っているのが伝わり、これを引き起こしているのはヴァーリたちでも曹操たちでもなく第三者によるものだと察する。
坂というよりも壁になりつつある地面。遠くに見える景色が徐々に下になってきており、ヴァーリたちは高い位置に移動させられていた。
ヴァーリたちが立っている地面が何者かによって持ち上げられている。しかも、一部ではなく広範囲の地面を。そんなことが出来るなど人外の所業。それを可能とする者は極限られていた。
リーダーである二人の行動は迅速であった。
「ここから離れるぞ!」

「急げ！　戦いは一旦中断だ！」
仲間たちに指示を出し、即座に離脱するよう促す。
戦いに夢中になっていたヴァーリチームと英雄派だったが、リーダーの指示が聞こえた瞬間、すぐに指示通りに動き出す。
垂直になりつつある地面を駆け、持ち上げられている範囲外を目指す。
曹操を含めた英雄派たちはすぐに持ち上げられている地面の端まで移動し、飛び降りる。
美候は筋斗雲に乗り、アーサーを拾い上げるとヴァーリに声を掛けた。
「ヴァーリ！」
「先に行ってくれ。俺は彼を連れて行く」
ヴァーリの視線の先には事態を把握し切れておらず、地面にしがみつきながらキョロキョロと周りを見ているジャアクフロスト。
「――遅れんなよぉ！」
美候はヴァーリを信じ、アーサーと共に先に離脱する。
「さて」
残ったヴァーリはジャアクフロストの方へ顔を向ける。兜を収納し、素顔を晒す。
「追いかけっこでもしようか、ジャアクフロスト？　鬼は君だ」

『ヒホ？』
ジャアクフロストは首を傾げる。その状態でヴァーリを凝視していたが、やがて嬉しそうな声を上げる。
『ヒホヒホヒホ！』
足を凍らせることで地面に張り付くという器用な方法で斜めになった地面に立つと、両手を伸ばしてヴァーリ目掛けて駆け出す。
『暴走していても、お前の顔は覚えているみたいだな』
「光栄だ」
ヴァーリはジャアクフロストを引き付けながら飛翔し、脱出を開始。ジャアクフロストはそれにしっかりと付いて行く。
間もなくして斜面の端に到着。大地が遥か下に見えた。
「さあ、こっちだ」
ヴァーリが飛び降りる。ジャアクフロストもまた躊躇なく飛んだ。
かなりの高度から落ちていく二人。ヴァーリは飛べるので問題無いが、ジャアクフロストはそうもいかない。
『ヒホ！　ヒホ！　ヒホ！』
空中で藻掻いているジャアクフロストにヴァーリが手を伸ばす。救助と同時に予定

通り力を半減させ暴走を治めようとしていた。
ジャアクフロストに触れる瞬間、ヴァーリの腕が肩部まで一気に凍結する。
『ぬぅ！　触れるな、ヴァーリ！　砕け散るぞ！』
ドラゴンの鎧すらも芯まで凍らせるジャアクフロストの凍結能力。オーフィスの力で底上げされているが、逆を言えばここまで出来る伸びしろがあるということ。
「ははは！　凄いな！」
片腕を凍結されたにも関わらず、ヴァーリは嬉しそうに笑う。ヴァーリはジャアクフロストを弱いとは思っていなかったが、ここまで出来るとも思っていなかった。仲間の秘めた可能性につい喜んでしまう。
が、その喜ぶに浸る間もなく地面に着地。ヴァーリは何事もなかったかのように両足から地面に着いたが、ジャアクフロストは大の字のまま地面に叩き付けられ、そのまま地面に埋まる。
「あー……」
助けが間に合わなかったことにヴァーリは気まずそうにする。
『ヒ、ヒ、ホ……』
しかし、ジャアクフロストは無事であった。だが、少し痛かったのか顔を擦りながら自分の形に凹んだ地面から這い出て来る。

「良かった、無事か……」
『しぶとさも増したか……』
ヴァーリは安堵し、アルビオンは呆れた声を出す。
その直後、垂直からゆっくりと傾き始める大地の巨塊。ヴァーリたちに掛かっていた影が晴れ、量り切れない質量の土塊が倒れていく。
十秒後、数十キロ先まで届く轟音と震動を起こしながら大地の上に裏返しになった大地が重なる。凄まじい風圧が生じ周囲の木々が薙ぎ倒されそうになり、視界がゼロになる程の土煙が巻き起こる。
土煙の中でヴァーリは腕を一振りし、曹操は聖槍を払い、他のメンバーたちも各々の方法で土煙を消し飛ばす。放っておけば何日も舞っていてもおかしくない土煙が超人たちにより瞬時に払われた。
土煙が晴れるとこれといって特徴が無かった場所に大きな谷ができ、その隣には山ができている。一夜にして谷と山が出来た異常現象に翌日の新聞やニュースはさぞや騒がしいこととなるだろう。
「……で？　そろそろ出て来たらどうだ？」
「近くに居るんだろう？」
騒動を起こした犯人に呼び掛けるヴァーリと曹操。すると、品の無い笑い声が返って

来る。
「へっへっへっ。楽しかったかぁ？　俺からのサプラーイズ？」
現れたのは四本腕の阿修羅マダ。瓢箪の酒を煽りながらヴァーリたちの許へ歩いてくる。
「あんたか……横槍を入れたのは……」
マダの姿を見た途端、ヴァーリは不機嫌そうな表情をする。曹操との戦いを邪魔されたことに気分を害していた。
「……アザゼルに頼まれたのか？」
「さぁて、何のことやら……？　急に変なことを言い出すなよ、ヴァーリ」
マダが現れたことに対し、心当たりが一つしかないヴァーリ。マダは半笑いで惚けている。
「俺はなぁ、散歩してたら偶然お前たちを見つけたんだよ。何か楽しそうにしてたから、混ぜてもらおうと思ってなぁ。横槍を入れるつもりなんて全く無いんだぜぇ？　楽しいことに混ざりたいっていう純粋な想いだ」
「白々しいな」
曹操はマダの態度に呆れ果てていた。ここまで嘘をつらつらと並べ立てる相手と話すのは稀な経験である。

「あーん？」
　マダの視線がジャアクフロストに向けられる。自分と変わらないぐらいの身長になっているジャアクフロストを興味深く見ていた。
「何だー？　成長期か？　見ない間に大きくなって……」
　大きくなったジャアクフロストを揶揄う。途端、ヴァーリが苦虫を噛み潰したような表情となった。似た冗談を言ったことを思い出したからだ。曹操も思い出したらしく、つい失笑してしまう。
『ヒホ！　ヒホォォォ！』
　マダを警戒してファイティングポーズをとるジャアクフロスト。この時点でマダを敵と認識してしまっている。
「お？　やるか？　ってか何か入れられたな、お前？」
　ジャアクフロストの暴走を即座に見抜く。ついでに元凶が誰なのかも予想がついていた。
「――まあ、いいか。お前も遊んでくれよ」
　四本の腕を広げるマダ。それだけで存在感と威圧感が何倍にも膨れ上がる。
「色々と言いたいことがあるが……取り敢えずは戦ろうか？」
　ヴァーリは構え、収納していた兜を装着する。

「大事になってきたな……」
予想していた以上の規模になっていることを嘆息しながらも曹操は聖槍をヴァーリたちに突きつける。
『ヒホー　ヒホー　ヒホォォォォ！』
ジャアクフロストは戦いの空気に興奮し、獣のように鳴く。
アザゼルが想定していた展開とは大きく異なる四つ巴の戦い。しかし、一応は狙い通りに曹操たち英雄派の大きく足止めすることに成功するのであった。

◇

そして、時間は現在へと戻り、シンの拳がオーフィスの顔面に迫っていた。
オーフィスの顔面にシンの拳が命中した瞬間、拳から伝わってくる感触は『無』の一言。殴ったのに何も殴っていないような相反する感触。大海に、大気に拳を沈めたらこのような感覚に陥るのかもしれない。
シンはオーフィスに拳を打ち込んでも何も分からなかった。そこに在る筈なのに一切不明なのだ。
「成程、我は知った。これが『痛み』」

シンの拳は間に入ったオーフィスの小さな掌により受け止められている。押し込もうとしても微動だにしない。

オーフィスの中に小さな驚きが生まれていた。拳を受け止めただけ。無限に届く筈の無いそれに触れた瞬間、痛みが生じた。小さな針に刺された程度の痛みだが、それでも痛みは痛み。届くとは思わなかったものが届いたことにオーフィスの驚きは興味に変わる。

「――流石、ベルとルイのお気に入り」

オーフィスの微かな言葉にシンの眉間に僅かに皺が寄る。知らない二つの名前。こちらは知らないのに向こうは知っている。それに不快感を覚える。

その二人について詳しく尋ねようとしたとき――

「うおい！　何やってんだお前っ！」

――焦っているアザゼルの声が耳に飛び込んで来た。

「おはようございます、先生」

「よくそんな状況で挨拶出来るなぁ！　離れろ！　取り敢えず二人共離れろ！」

アザゼルに言われた通り、シンはその場から三歩後退。オーフィスの方もアザゼルが抱き上げて引き離す。

「……昨日言ったよな？　攻撃はするな、まずは話を聞けって？」

「話はしましたよ……一言だけですが」
「話を聞いたら攻撃して良し、って意味じゃねぇよ！
「すみませんかんがえがおよびませんでした」
「白々しいんだよ！　分かっててやっただろう！」
普段以上に無感情なシンの謝罪の言葉。アザゼルは自分が迷惑を掛けている側だと理解しつつも、今日の為に色々と危うい橋を渡って来ていた。それが玄関を開けたら五秒で台無しにされそうになったので、つい頭に来てしまった。
オーフィスとアザゼルが玄関に行き、中々戻って来ないことを心配して一誠たちが様子を見に来た。
玄関先ではアザゼルに本気で怒られているシンが居り、その光景に困惑してしまうのであった。

対話、対談

アザゼルからのお叱りが終わり、兵藤家の玄関から居間へと移動するシンとその仲魔たち。移動する間、ピクシーやジャックフロストがニマニマしながらシンを見続けている。普段は叱る立場のシンが逆に叱られているレアな光景を目の当たりにしてご満悦の様子。

オーフィスも何故かシンを凝視しており、アザゼルに引っ張られて連れられている間もシンから視線を外さない。

好奇の視線を浴びせ続けられるシンは非常に居心地が悪かった。

居間へ着くと一誠たちが待っていた。一誠はシンの顔を見ると気不味そうに視線を逸らす。シンが先程アザゼルに怒られている現場を目撃してしまっており、どんな言葉を掛ければ良いのか迷っているのだ。

だが、一誠たちとは違い、視線を向けて来る者たちも居る。シンも知っている人物らだった。

「おひさー人修羅ちん」

「お久しぶりです、間薙さん」

小猫の姉の黒歌と京都で協力してくれたルフェイ・ペンドラゴン。

ルフェイの隣には灰色の大型犬、ではなく狼が座っており、その狼にも見覚えがあった。狼と目が合う。途端に狼は牙を?いてシンを威嚇し出す。

「こら！　フェンリルちゃん！　ダメだよ！　威嚇しちゃ！」

ルフェイが狼の名を呼んで叱る。聞き間違いでなければ狼をフェンリルと呼んだ。ロキとの戦いで呼び出されたその牙で神をも喰い殺すことが出来る神狼。ヴァーリとの戦いの最中にヴァーリごと転移させられ、その後はヴァーリたちに連れて行かれたことまでは聞いていたが、ヴァーリチームの軍門に下っていたのを初めて知った。

嫌われるような事をした記憶が無いが、シンはフェンリルから随分警戒されている。

「ねえねえ。放っておいてもいいの？」

？気に欠伸をしているケルベロスにピクシーがひそひそと話し掛ける。以前、フェンリルに対しケルベロスが対抗心や敵意を剥き出しにしていたが、今は見向きもしていない。

「グルル……アンナモノハ虚仮脅シダ。恐レヲ見セナイ為ノ」

ケルベロスは鼻を鳴らし、フェンリルの威嚇が表面的なものに過ぎないと看破する。ピクシーはケルベロスの言っていることを参考にして今も牙を?いているフェンリルをよく観察してみた。すると、威勢とは裏腹に尻尾が丸まっていることに気付く。どん

なに虚勢を張っても体は正直に反応していた。加えてケルベロスの鼻はフェンリルから放つあるニオイを敏感に察知していた。

恐れというニオイを。

「奴ノ牙ハトックニ折レテイル」

ケルベロスの指摘は、フェンリルの内心を正確に見抜いていた。

ロキとの戦いを終えた後、消耗し切ったフェンリルをヴァーリが連れ帰り、『支配の聖剣』の能力でヴァーリチームの支配下に置かれたが、実はそんなことをしなくともフェンリルの心と牙はとっくに折られていた。

フェンリルはヴァーリによって倒された、とヴァーリは仲間に説明をしたが、正確には違う。フェンリルはヴァーリとマタドールの戦いの余波に巻き込まれ、直接戦闘をせぬまま敗北していた。ヴァーリが倒したというのはフェンリルの名誉を守る為のヴァーリなりの気遣いであったが、その気遣いによりフェンリルの自尊心は完璧にへし折られた。

今のフェンリルにとってトラウマが三つある。一つ目はドラゴン。原因はヴァーリであり、それが理由で一誠にも恐怖から出会い頭に威嚇してしまった。

二つ目は魔人。マタドールのせいで心に深い傷が出来ており、魔人特有の気配を感じるシンにも先程のように強く警戒してしまった。

三つ目はマダ。マダに押さえ付けられ間近で見せられたロンギヌススマッシャーと血のアンダルシアの衝突は、今でも悪夢に見る。そして、その時のマダの愉快そうな笑い声は耳の奥にこびりついている。

フェンリルからすればヴァーリ、マタドール、マダは理解不可能な狂人であり恐怖とトラウマの対象。折角離れることが出来たのに、それと似たニオイがする一誠とシンが近くにいるのでフェンリルは若干情緒不安定になっていた。

「落ち着いて下さい、フェンリルちゃん。ここには貴方の敵はいませんよ?」

ルフェイがフェンリルを撫でて宥めようとする。

人畜無害な気配とニオイを纏うルフェイの傍にいるお陰で不安定な精神を辛うじて正常に保つことが出来ている。ルフェイを守るように傍に付いているが、実際に守られているのはフェンリルの方であった。

妙に喧嘩腰なフェンリルを無視し、シンは周りのリアスたちの様子を確認する。

一誠は緊張しており表情が固まっている視線をあちこちに向けており、頭の中で色々と考えているように見えた。

木場とゼノヴィアも表情が硬いが、いつでも飛び出せるように準備を済ませていた。

リアスは非常に不機嫌そうで表情が険しい。彼女にとって気分が害することが起こった様子。何が原因かは探らなくても分かる。

朱乃はシンたちの為にお茶を用意している。いつも通りのように見えるが、動きがややぎこちない。彼女もまたオーフィスという存在に緊張していた。

部屋内に小猫の姿は見当たらない。最近様子がおかしかったので席を外している可能性がある。或いは不仲の黒歌と顔を合わせたくないという理由も考えられる。またギャスパーの姿も見られなかった。一年生同士なので小猫を心配して付き添っているのかもしれない。

イリナは複雑そうな表情をして悩んでいる。

アーシアとレイヴェルは既に答えが決まっているのか、この中で一番落ち着いていた。

オーフィスの登場は一誠たちに多種多様な反応をさせている。

「もー。挨拶しているのに返さないなんて失礼なんじゃないかにゃー？」

無反応なシンに黒歌が少し怒ったように文句を言ってくる。黒歌の言葉でようやく反応するシンであったが、挨拶を返すことなく無感情な目で黒歌たちを無言で見るだけであった。

「な、何か少し見ない間に迫力増してないかにゃ？」

「あ、あの……何か気に障ることでもありましたか？」

オーフィスと一緒に一誠宅にやって来た黒歌とルフェイ。怒られたり、慌てたり、驚

かれたりしたが、その中でもシンの反応が最も冷たい。こちらを見ているようで見ていないような何を考えているのか全く読めない目を向けられると心臓が締め付けられる気持ちになる。

「……このセッティングはやっぱりヴァーリから頼まれたんですか？」

シンの無感情な目が今度はアザゼルに向けられた。ヴァーリチームの二人がいることと、この前のアザゼルとの会話から導き出される答えはそれしかない。

「ちょっと違うな。オーフィス自身も話したかったんだとよ。ヴァーリたちはそれに協力したんだ」

オーフィスが何を話したかったのか少々興味が湧く。

「それでアザゼル先生は手を貸したんですか？」

「……まあな」

「事後承諾で？」

「その通りよっ！」

不機嫌であったリアスが立ち上がりながらシンの一言で怒りを爆発させる。

「やっぱり非常識でしょう、これは！　貴方もそう思うわよね!?　シン！　長い時間を掛けて出来た協定を破棄されかねない行為よ！　ああ、もう！　やっぱり頭に来る！」

アザゼルがオーフィスを連れてきた時点で一度爆発したリアスの怒り。今も各勢力

を脅かしているテロリスト集団の親玉を招き入れる。バレたら悪魔や天使から堕天使サイドが糾弾、或いはそれ以上のことをされても文句を言えない協定違反である。

しかし、三勢力が協力体制を結ぶことを強く説いていたアザゼルがそんなことを分からない筈が無い。分かっていて何か考えがあってやったことだと冷静になった。

冷静になって考え、考えた結果やっぱりアザゼルのやったことは腹が立つので二度目の怒りが再燃、爆発する。

リアスの再炎上に誰もが言葉を失ってしまう。

「きっと貴方のことだから、私たちが想像も出来ないような危ない橋を渡ったり、口に出せないような手段をとったんでしょ！　一人で！　勝手に！」

リアスの詰問に対し、アザゼルも口を閉ざすしかなかった。普段だったらリアスなど年季の違いで小娘としてあしらうのは簡単であったが、リアスの目が潤んでいることに気付いて何も言えなくなっていた。

「他の勢力が貴方に騙されていることに気付いたら、何をされるか分かっているでしょう！」

「まあ……責任をとって俺の首が飛ぶな。本当の意味で」

「責任どうこうの問題ではないでしょうがっ！」

そこで一旦リアスの言葉が途切れた。喋りながらもヒートアップし続けていたリア

スの激昂。遂に限界点を突破してしまったのだ。

その結果――

「貴方が……そんな責任をとると言って……私たちが……安心すると本当に思っているの……」

――誰にも表情を見せないように俯き、声を震わせるリアス。感情的になり過ぎて普段は言わない本音を零してしまった。最初はアザゼルのことを忌み嫌い警戒をしていたが、オカルト研究部の顧問としてそれなりに交流するようになり考えも変わった。ただでさえグレモリーは身内や眷属に対して情愛が深い。既にアザゼルに対して情が移っている。

グレモリー眷属たちの非難する視線がアザゼルに刺さる。

「何だよー……そんな目で見るなよー……」

そう言っても眷属たちが目を逸らすことはなかった。アザゼルから聞きたいのはそのような言葉ではない。

アザゼルは溜息を吐き、アザゼルはリアスへ頭を下げた。

「……すまん。言い訳をするつもりはないが、俺の考えとしてはこれが一番無駄な血を流さずに今の騒動を治める方法だと判断したんだ。――だが、今回ばかりは自分勝手が過ぎた。反省している。次からは何でもかんでも一人で進めずにちゃんとお前たちに

相談する。だから機嫌を直してくれよ、な？」
　素直に謝罪をし、反省していることを言葉と態度で伝える。
「約束よ？」
「ああ、約束だ」
　リアスが顔を上げた。目が充血しているが泣いた跡は無い。
「いいわ。今回のことはこれ以上何も言わないわ」
「そう言ってくれて助かるよ」
　リアスがそう告げると眷属たちも息を吐き、緊張を解く。眷属である故にリアス側だが、アザゼルにも色々と世話になっている。出来ることなら二人の対立をこれ以上見たくなかったので安堵していた。
　リアスがソファーに腰を下ろした。先程までの騒々しさが消え、すっかり静かになる。全員が完全に会話をするタイミングを逃してしまったので気まずい沈黙が続く。
　誰でも良いので何か切っ掛けを出すことを願ったとき、朱乃が口を開く。
「お茶、冷めちゃいましたね。淹れ直してきます」
　話題では無かったが、少なくとも朱乃が茶を淹れ直すまでの間、猶予が生まれる。この間にそれぞれが気持ちを切り替えていく。
　リアスはまだ少し不機嫌そうであったが、隣に座っている一誠が彼女を慰めている。

恋人同士の甘過ぎる空間が出来ており、見ている方が恥ずかしくなってくる。アーシア、ゼノヴィア、レイヴェル、イリナが羨ましそうにしているが、リアスの手前眺めるだけで我慢をしている。

シンもソファーに座り、ピクシーとジャックフロストも各々の好きな場所に座る。そして、ピクシーたちは遠慮なくテーブルに置かれてある菓子に早速手をつけていた。

シンはさりげなく黒歌とルフェイの様子を確認する。ルフェイはフェンリルを撫でて時間を潰し、黒歌はピクシーたちと同じくお茶請けの菓子を食べている。

緊張感が無い、というよりも平常心であった。敵地のど真ん中にいると分かっているのにそれを保ち続けられるのはそれ相応の精神力と実力を有していることの表れである。

だが、完全にリラックスしている訳ではない。

「欲しいのかにゃー？」

黒歌はシンの視線に一瞬で気付き、悪戯っぽく笑いながら食べ掛けの菓子をこちらへ差し出してきた。

シンは顔を逸らして態度で拒否。すると――

「なら、アタシが貰うー」

――代わりにピクシーがその菓子に齧り付いた。こちらのマイペースっぷりも大し

たものである。黒歌はピクシーの行動に楽しそうに笑っている。
ソファーが沈む。シンの隣にアザゼルが座った。
「……ったく、あんだけ怒られたのは何時以来だ……？」
リアスに本気で怒られたアザゼルは、少しだけ凹んでいた。常に大人として振る舞っていた彼であるが、先程のことでその威厳が若干揺らいでいる。
「俺も大人に怒られたのは久しぶりでしたけどね」
「誰だって怒るだろう、あれは。……オーフィスに殴り掛かりやがって」
アザゼルの一言にその場が騒然となる。シンがアザゼルに怒られたのは周知の事実だが、何をして怒られたのか今知ったからである。
誰もがシンの正気を疑うような眼差しを向けてくる。
「お前だけだぞ？　オーフィスに仕掛けたのは……」
オーフィスが現れたとき一触即発の雰囲気にまでなったが、ギリギリの所で踏み止まっていた。オーフィスに攻撃した怖いもの知らずはシンだけである。
「状況が状況だったので」
「何だそりゃあ……」
「最悪の事態を想定したんです。俺はオーフィスの性格を知りません。アザゼル先生がオーフィスをこの家に招いた結果、オーフィスの気まぐれで全滅してしまった。手を出

すなと言われましたが、あの状況で俺はその可能性を考え、攻撃しました」
スラスラと言い訳を並べ立てるシン。
「それっぽいこと言いやがって……そんな言い訳いつ考えたんだ?」
「……」
今である。しかし、反省も後悔も微塵も感じさせないシンの表情。あまりに堂々としているせいか言っていることも一理あるのではないかと錯覚させる。
「こいつ……」
肚が座っていると言うべきか、それとも図太過ぎると言うべきか。全く臆しないシンの態度にアザゼルは頬をひくつかせる。
「事前にちゃんと説明してくれていれば起こらなかったすれ違いですね――反省はします――報告と連絡と相談は大事だということです」
「おまっ……そこに繋げる方向へ持っていくのかよ……」
言われたことを破った自分を棚上げして全ての責任をアザゼルへとなすりつける。アザゼルは嘆息した後、手を気だるげに振る。
「分かった、分かった。もう俺が悪いでいいさ。だが、誤解があったとはいえ殴り掛かったのは事実なんだからオーフィスに一言詫びとけよ」
アザゼルは投げやり気味に責任を被る。発端の責任はアザゼルが背負ったが、アザゼ

ルが言うように攻撃したのは事実なので一応は謝罪をしようとし、シンは目でオーフィスを探す。

「いい、我は気にしない」

声はシンの傍から聞こえた。いつの間にかシンの隣に座っているオーフィス。彼女が声を発するまでシンはその存在に全く気付かなかった。それどころか、この場にいる全員がソファーに彼女が座るのを見ていない。

オーフィスの底知れなさに戦慄し皆の背中に冷たい汗が流れるが、オーフィスは決して自らの力を示す為にそれを行った訳ではない。オーフィス自身の認識では、ただソファーに座ったに過ぎない。その何気ない動作ですら埋めることが出来ない絶対的な差を見せつけるのに十分だっただけなのである。

皆が静まり返る中でシンはオーフィスと向き合う。その瞳にはシンへの興味が多少あるように見えた。

「すまない。悪かった」

詫びはいいと言われたが、けじめの為にシンは頭を下げて謝った。オーフィスはそれを不思議そうに眺めている。

すると、オーフィスは自分の掌を見つめた後、その掌をシンに見せる。見守っている面々はその行為が何を指すのか分からずに訝しんでいた。

「我、不思議に思う。人修羅の拳は特別？」
受けたときに痛みを覚えたことをオーフィスは今でも不思議に思っていた。グレートレッドに遠く及ばない存在だというのに無限に届かせることが出来る拳。そのアンバランスさは普段は波一つ無い彼女の心を大いに刺激する。
刺激するといえば彼女の興味を強く惹く存在がもう一人居る。
オーフィスの視線がシンから一誠へと向けられ、一誠はギョッとした後に冷や汗をだらだら流し、顔を引き攣らせて下手くそなスマイルを浮かべる。
「オ、オ、オーフィス、お、俺たちと、は、話がしたいらしいけど……」
言葉は詰まり、声は震え、喋りは最後尻すぼみになっている。オーフィスという強大な存在を前に一誠は怖がっていた。
そもそもオーフィスがここへやって来たのは一誠、ドライグと話がしたいというもの。それが始まる前にシンがやって来ていざこざを起こしてしまい、後回しになってしまったが、落ち着いたのでいよいよ本題に入ったのだ。
「淹れ直してきました」
そのタイミングで朱乃が新たに淹れたお茶を皆の前に置いていく。折角淹れ直してくれたお茶だが、殆どの者がオーフィスに気を取られて手を出せない。そんな中で真っ先にお茶に手を伸ばしたのは、渦中の人物であるオーフィスだった。

皆の視線など一切気にすることなくティーカップの茶を飲み、口を離して一言。
「ドライグ、天龍をやめる？」
脈絡の無い内容だったので問われた一誠――正確にはその内にいるドライグだが――訳が分からないという混乱と敵意の無いことを示す笑顔を半々に出した変な表情になっていた。
「あの……言っている意味が……その……俺には分からないというか……」
なるべく言葉を選びながら全く伝わっていないことを説明する。
オーフィスは虚空を見詰めて暫くの間固まる。その空間だけ一時停止したかのような完璧な静止であった。
やがて、オーフィスは口を開く。
「宿主の人間、今までとは違う成長をしている。人から悪魔となった転生悪魔だとしても、説明がつかない。我、不思議。才能や素質ならヴァーリが今まで見た中で一番。でも、この所有者は歴代でも才能と素質は最低」
オーフィスから面と向かって才能無しと評価され、一誠もショックを受ける。分かっていることなのだが、悪意無く言われると心に来るものがあった。
「ヴァーリは『覇』を我が物にした。それについては、我は不思議ではない。器がある。でも、ドライグの所有者は『覇』を超えようとしている。曹操との戦いで知らない進化、

バアルとの戦いを経て、ドライグ、更に違う進化をした。鎧、紅になった。初めて。我、知っている限りは初めてのこと」
『赤龍帝の三叉成駒』も興味を惹かれたが、覇龍とは異なりながらも覇龍に匹敵する『真紅の赫龍帝』はもっと強く興味を持った。
だからこそ、オーフィスは自分の知らない道を歩んでいる一誠たちに問いたい。
「だから、訊きたい。ドライグ、何になる？」
すると、一誠の左腕に籠手が顕現し宝玉が光って一誠に変わってドライグが答えた。
『わからんよ、オーフィス。俺にとっても初めてのことだからな。俺の相棒がこの先どうなっていくのか予想もつかん。何せ俺の思考の範疇には収まらん男だからな』
「ドライグが分からないなら、我も分からない。ドライグの所有者、もっと強くなる？」
『強くなるかどうかは知らんが、面白い成長をしていくのは確かだ』
一誠が口をもごもごと動かしている。ドライグの言葉に照れている様子。
「ドライグ、もう『覇』の力は要らない？　我の無限とグレートレッドの夢幻は不要？　もう覇王にはならない？」
『不要――の一言で切り捨てるのなら流石に不義理だな、今までの所持者たちへの。『覇』は俺が力を求めた結果だ。そして、それ故に俺は滅びた。それ以外で力を高める術を知らなかったからな。俺はその宿業をこれまでの所持者たちに引き継がせてしまっ

た。だが、それらの果てに俺は赤が紅になることを知れた……それが『覇』で散った者たちへの慰めになるか分からんがな』

ドライグの言葉に哀愁が帯びる。

「後悔、している？」

『後悔か……この気持ちを言葉にする術を俺は知らん。少なくとも後悔とは違うな。きっと相棒が所持者にならなかったら、こんな考えを持つことすら無かった筈だ』

オーフィスはドライグの気持ちが理解出来ないのか首を傾ける。

「我、『覇』、分からない。だが、誰もが『覇』、求める。『禍の団』、ドライグ、アルビオン、それ以外の者たちも。分からない、我もグレートレッドも『覇』ではないから」

オーフィスの言っていることは抽象的で彼女のペースで話すので理解するのが難しい。だが、少なくともドライグには伝わっている。

『最初から強い存在に『覇』の理なぞ理解出来る筈もない。無限とされる『無』から生じたお前と夢幻の幻想から生じたグレートレッドは別次元のものだ』

ドライグの説明通りならば、目の前に居る筈のオーフィスは、『無』という概念が形を持った存在ということになる。無なのにそこに在る。言葉だけ聞くと矛盾した存在。しかし、そういった矛盾が矛盾でなくなる世界が定めたルールを超えた存在だからこそドライグは別次元と評したのだろう。

『その別次元の存在であるお前はこの世界でどうする？　何かを得ようと思っているのか？　ただ帰りたいだけか？　それ以外の考えを持っているのか？』

「ドライグ、質問。『覇』ではなく紅になったドライグは何になる？　先に何を見ている？」

ドライグの質問を無視してオーフィスは自分の疑問を投げ掛ける。会話をしているようでオーフィスが一方的な部分がそこそこある。超越した存在が自分の感覚で話しているせいなのかもしれない。

シンが思い返せば、マタドールなどの魔人も言いたいことを言って好き勝手していたような気がする。強い存在程、それを咎める者が少なくなるので我儘になるのかもしれない。

ドラゴンなどもオーフィスのような一面を持っているのかもしれない。因みに、シンが今まで会って来たドラゴンの中で一番まともだと思っているのはタンニーンである。次点で匙と仲の良いヴリトラ。ドライグは三番目である、暫定だが。

「それともドライグ、乳龍帝になる？　乳を揉んで天龍を超える？　ドライグ、二天龍の名を捨てて乳を司る龍になる？」

オーフィスの無邪気な質問がドライグの心を突き刺す。

『ごはっ!?　こ、こいつまでそんなことを……！　う、うぐぅ……い、意識が……意識が

途絶えそうになる……！』
「ドライグ、乳になる？　龍じゃなくて乳になる？」
『や、やめろ！　無邪気に俺を傷付けるな……！　や、やめてくれ……』
ドライグが消え入りそうな声を出した後、籠手の宝玉から光が消える。
「ドライグ？　おい、ドライグ？」
一誠が呼び掛けてみるが返事は無い。完全に自分の殻の中に閉じ籠ってしまっていた。
「あぁ……貴重な龍神と天龍の会話だったのに……」
このような形で二人の会話が強制終了されてしまったことにアザゼルが残念そうにする。
「それでオーフィス？　お前はこれからどうする？」
「我、見ていたい。ドライグ、この所有者、もっと見たい」
オーフィスは感情が薄いながらも一誠への興味を示す。
「ルイとベルのお気に入りも、もっと見ていたい」
ぐるりと首を回し、シンにも興味があることを告げる。オーフィスから出された知らない名前に他のメンバーは『誰だ？』という反応だったが、二人を知るアザゼルの表情は険しいものとなる。

「……やっぱりそいつらはシンのこと知っているんだな」
アザゼルの問いにオーフィスは首を縦に振る。
「どういう関係なんだ？」
「我、知らない。でも、ずっと気に掛けていた」
詳細は知らないとするオーフィスに、アザゼルは眉間に皺を寄せる。
「……なあ、そのルイとベルって誰だ？」
気になり、一誠が代表してオーフィスに質問する。
「我の友人。そして、グレートレッドの友人」
オーフィスの発言に誰もが衝撃を受ける。この世で最強の存在の共通の友人。オーフィスとグレートレッドの名は知れ渡っているが、その友人の存在など誰も知らない。
もしかしたら、とんでもないことを知ってしまったのではないかという緊張が一誠たちに走る。そして、同時にそのような存在から認知されているシンへの疑問が深まった。
「貴方は知っているの？」
リアスがシンに二人のことを知っているの訊くが、シンは首を横に振りながら「知らないです」と告げた。
「もしかして、貴方の力の――いえ、何でもないわ。ごめんなさい」

シンの力の根源は未だに謎。それに関わる人物なのかもしれないとリアスは推測するが、この場での追究は避けた。規模からして易々と聞いていいものではない。どちらにしてもシンは知らないと言ったので深く掘り下げることも出来ない。知らないというのが嘘か本当かは置いておいて。

一方でシンが魔人であることを知っている一誠は背中に冷たいものを感じていた。もし、シンに深く関わる存在なのだとしたら、魔人とも強い繋がりがあるのかもしれない。もしかしたら、そのルイとベルが魔人の親玉である可能性が頭の中に浮かんだ。

「オーフィスやグレートレッドの友人ってのも興味はあるが、また今度話してくれ。これ以上負担を掛けるようなことをしたら、責任も取れやしない」

既に二人と接触済みであるアザゼルはそれを隠し、この場では話を広げないようにする。アザゼル自身、リアスと一誠の推測に達しているが確証は得ていないのでまだ誰にも話してはいない。それだけルイとベルという存在は未知であるのだ。

「――まあ、話す機会はそのうちやって来るだろうさ。てなわけで数日だけこいつらを置いてくれないか？　オーフィスはこの通りお前たちに興味津々だ。何かする訳でもなく、見るぐらいならいいだろう？」

アザゼルはこの場の『王』であるリアスに最終確認をする。リアスはアザゼルを見て、その後にオーフィスへ視線を移し、一誠へ顔を向ける。

「イッセーとシンが良いと言うなら構わないわ」
「えっ!?　俺と間薙がＯＫならリアスもＯＫなのか？」
てっきりリアスの一存で決まると思っていたので一誠は聞き返してしまう。
「オーフィスの興味は貴方とシンよ。貴方たちの意思を尊重するわ。貴方たちが嫌だというのならこの話は断らせてもらうわ」
あくまで眷属と友人の意思を尊重すると言うリアス。
このとき、一誠は考えてしまう。オーフィスをどうにかすれば『禍の団』は瓦解させる糸口が見つかるかもしれない。『禍の団』の首領と話し合いだけでテロリスト組織を止めることが出来ればそれに越したことはない。既に多くの血が流れている現状、これ以上血が流れることを防ぎ、無血で終わらせられればそちらの方が平和的である。
勿論リスクはある。『禍の団』は血眼になってオーフィスを探している。それを先導するのは英雄派のリーダーである曹操。黒歌たちが言うにヴァーリらが足止めをし、追跡出来ないように痕跡を消してくれていると言っていたが、そう簡単に曹操が諦めるとは思えない。
緊張状態が続く時勢、オーフィスの動向がそのまま世界の動向へ繋がると言っても決して大袈裟ではない。
その重要な選択を選ぶ片割れとして選ばれた一誠は、考え過ぎて頭が痛くなりそうで

あった。
助けを求めるようにもう一方の片割れを見る。シンは相変わらず何を考えているのか読めない無表情であった。
「――そんなに深く考えるな」
急に口を開いてそんなことを言うので一誠は心を読まれたのかと思い、心臓が跳ねる。
「選んだ責任の半分は持ってやる」
一誠は決して高望みはしていない。皆と仲良く暮らせて、恋人であるリアスと楽しい日々を過ごせたらそれで良かった。それを脅かすトラブルやイベントは御免被りたいが、何となくというこれといった根拠は無いが、こいつがいれば何とかなる、たぶん大丈夫だろうという気持ちになった。
「……俺はＯＫですよ。ただ、試験とか色々とやることが多いんで、そっちの邪魔をしなければ……」
快諾、とはいかず迷いを抱えながらもＯＫを出す一誠。
「俺も別に構いません」
表情を全く動かさずに了承するシン。
二人の了承が出たことにアザゼルは頭を下げる。

「悪いな、本当に。迷惑も負担も掛けていることは分かっている。――だが、これはチャンスなんだ。上手く行けば各勢力を襲う脅威が緩和されるかもしれん。そうなればこれ以上死人が出ることもない」

普段飄々としているだけにアザゼルがこれにどれだけ懸けているのかが伝わってくる。色々な形で世話になっている者が多いので、アザゼルに頭を下げられるとそれだけで多少あった不満も消えてしまった。

「それでだ」

アザゼルは、オーフィス、黒歌、ルフェイを見る。

「こいつらは中級悪魔昇格試験前だ。時間が大事なんで邪魔はしないでくれ。……俺の言えた義理じゃないが」

「そういうこと。でも、念の為に問題を起こさないよう色々と契約をしてもらうから」

アザゼルの言葉をリアスが継ぐ。問題行動を起こさないと言っているが、立場が立場なのでいざというときの為に契約などを結んでおく。破ったときにそれ相応のペナルティが発生するように。尤も、オーフィス相手には気休め程度の効果しかないが。龍神を罰する方法などこの世にほぼ存在しない。

「分かった」

「問題ないにゃん。私は適当にくつろぐだけにゃん」

　オーフィスと黒歌はあっさりと受け入れるが、何故かルフェイは了解する前に一誠へ何かを突き出す。
「あ、あの！　サインを下さい！」
「……え？」
　ルフェイが出したサイン色紙に一誠は困惑する。
「この間のバアル戦！　感動しました！」
　何故敵対関係にある筈の彼女がサイラオーグとのレーティングゲーム内容を知っているのか一先ず置いておくとして、サインについて一誠はあることを思い出す。
「前にも書かなかったか？」
「あれはおっぱいドラゴンとして書いたものですから！　今度は赤龍帝としてのサインを下さい！」
「どんな違いが？」と声に出しそうになったが、それを飲み込む。言えばドライグがまた泣きそうな気がしたので。
　立場的には敵対しているのにマイペースで緊張感が無いルフェイと黒歌に苦笑しながら希望通りのサインを書く。
「……あっ、そうだ。言い忘れていたがシン、お前もオーフィスの興味対象だから暫くの間、イッセーたちの家に泊まれ」

アザゼルのその言葉に――

『えぇ……』

――シンと一誠は口を揃えて嫌がった。

日々、下宿

目が覚める。寝起きの半分ぼやけた視界に見慣れない天井が見えた。緩やかであった血流が覚醒と共に全身を駆け巡り、ぼやけた思考と視界を瞬時に正常な状態にする。

ここは一誠たちの家であり、シンは使用していない一室を与えられ、そこでピクシーたちと寝泊まりすることとなった。

何故寝泊まりすることになったのかは――

「起きた」

――シンの上に乗って彼を見下ろしているゴスロリの少女オーフィスが原因である。

「……何をしている？」

「我、見ている」

一誠共々オーフィスの興味の対象となっており、理解する為に見ていたいと言われ、オーフィスの目が届く範囲に居る為に一誠たちの家に暫く泊まることとなったが、昨日の今日で積極的に観察してくる。

オーフィスが声を発するまでシンはオーフィスが乗っていることにすら気付かなかった。存在感も無ければ体重も感じない。向こうから行動を起こすまでまるで虚無

のような存在であり、こちらが認識した瞬間に虚無から浮かび上がってきたかのようであった。
「我、魔人を、良く見る」
オーフィスがその言葉を発すると同時に上に乗っているのも構わずシンは上体を起こす。オーフィスはシンの上から転がり落ちていった――と思ったら、いつの間にかシンの隣に座っている。
「その言葉、部長たちの前では出すな」
「魔人？　何故？　人修羅は魔人」
「言えば問題が発生する。俺を観察することも出来なくなる」
いつかは分かることだろうが、どのタイミングで知らせるのかはせめて自分の都合でやりたい。その内、事故のように判明する可能性もあるが、事前に防げるのならそれに越したことはない。
「見ていたい。我、分かった」
オーフィスは素直に頷く。こうして話していると純粋というべきか自我が薄いというべきか。『禍の団』に象徴として祀り上げられ、良い様に使われていたのもこういった性格が原因と思われる。
寝起きから少し疲れた気分になりながら、今も？気に眠っているピクシーたちをシン

は起こすのであった。

◇

シンが洗面所で顔を洗っていると誰かの足音が聞こえて来る。
「よぉ……おはよ――うおっ!?」
やって来たのは寝ぼけまなこの一誠であったが、シンの姿を見た瞬間に一気に眠気が飛んで目を見開く。
シンはリュックサックのようにオーフィスをぶら下げていた。
「おはよう」
何事もないかのように挨拶を返すシン。一誠は驚きを張り付けたままオーフィスを指差す。
「……何で背負ってんだ?」
「知らん」
シンは簡潔に答えると洗面所の方へ向き直る。実際、オーフィスが何のつもりで背中に張り付いているのかシンも分からない。部屋を出るときには既に乗っかっており、重さも感じないので気に掛けることなくそのまま行動していた。

感情が読めない四つの目が一誠へと向けられる。こうして見るとどことなく兄妹のようだ、と一誠は思った。顔は似ていないがどちらも無表情で底知れない感じがし、雰囲気が似ているのかもしれない。

「しかし、まあ……」

一誠はシンを半眼で見る。

「同級生の、しかも男が家に居ると何か変な感じだ……」

「そうか。すまないな」

シンは全く申し訳なさそうに言う。一誠は眉間に皺を寄せて何とも言い難い表情をしている。

自分の縄張りに侵入されたような違和感。同性のしかも同級生が自宅に泊っている事実にどうしても居心地の悪さを覚えてしまうのは思春期故の心の機微なのかもしれない。

それは一誠だけでなくこの家に住む女性たちにも影響を与えていた。

いつもなら一誠が起床すると寝床でリアスや朱乃、アーシア、ゼノヴィア、イリナ、レイヴェル、小猫が入って来て、一誠にとって嬉し恥ずかしなことをしてくれるのだが、今日はそれが無い。特に恋人であるリアスからの目覚めのキスが無かったことは一誠にとって少なからずショックであった。

一人加わるだけでこうも自重するのか、と思ったが一誠の方もあまり見られたくなかったので安堵と残念が半分半分の気持ちであった。
とはいえほぼ日課となっている甘い時間が無かったことに対し、恨めしそうな目でシンを見ていると――
「何か言いたそうだな」
洗面所の鏡越しに一誠の視線に気付いていたシンが振り向くことなく訊く。気付かれことに内心焦りながらも表面上は惚ける。
「べ、別に」
「憩いの時間を邪魔した奴を見るような目をしていたぞ？」
「そ、そ、そんなことないぞ……？」
心を読めるのか、と思わず叫びそうなぐらいに正確に内面を読んできたことに、あからさまな動揺を見せてしまう。正解と言っているようなものであった。
「――学園では生徒会の仕事として取り締まるが、プライベートまでは介入しない。好きにすればいい」
「そう言われて、『はい！　そうします！』なんて言えないし出来るかっ！　お前が家に居るだけで、何かこう……大人しくなっちゃうんだよ！」
色々な意味を含めて言う。

「恨むならアザゼル先生を恨め」
シンは自宅から持って来たタオルで洗った顔を拭いながら、一誠とは対照的に冷めた感じで言う。
「うぅ……行き場の無い感情が俺の中で渦巻く……」
溜まった不満を自ら消化することを選び、一人悶える。そんなどうでもいい姿もオーフィスは監視していた。
「空いたぞ」
顔を洗い終えたシンは一誠と交代する。一誠も顔を洗おうとするが――
「あ、そうだ。忘れてた」
――何かを思い出すとポケットの中から瓶を出す。そして、何故か『赤龍帝の籠手』を装着すると、瓶を開けて中の液体を『赤龍帝の籠手』の宝玉に振りかける。
「ドライグ。薬の時間だぞ」
『お、おお……待っていたぞ……この薬、き、効くなぁ……』
宝玉の中に吸い込まれていく液体。恍惚としたドライグの声。傍から見ると危うい光景であった。
「……何をしているんだ?」
「いやぁ、ドライグの心が疲弊しているから、それを和らげる為の薬をな」

一誠が言うに色々とアレなパワーアップをしてきたことで、ドライグの今まで積み重ねてきたプライドなどがボロボロになっており、心が病む寸前にまでなってしまったので、アザゼルが紹介した専門のカウンセラーに診てもらい、特別に調合した薬を処方しているとのこと。

（脆いもんだ……）

と思ったが口には出さない。なけなしのプライドがズタズタに引き裂かれることになる。

『ククク……笑ったらどうだ？　薬漬けの天龍など滑稽だろう？』

何とも痛々しい自嘲をするドライグ。いっそのこと冗談で笑ってみようか、という考えが過る。やったら恐らくドライグの自我が崩壊すると思われるが。

何か言っても傷付くだけなのでシンは無言で通り過ぎようとするのだが、背中に張り付いているオーフィスが悪意無く問う。

「ドライグ、乳よりも薬が好き？　乳を司るのは止める？　乳と薬どっちが良い？」

『がはぁ!?』

無邪気な言葉の刃が防御力ほぼゼロのドライグの心に突き刺さる。

『あ、相棒！　く、薬を……！　もっと薬を……！』

「いや！　適量じゃないと毒になるから！」

『俺にこの痛みを忘れさせてくれぇぇぇ！』

精神のバランスが崩れてしまい、ドライグが泣き叫ぶ。

「間薙！　ドライグを落ち着かせるからオーフィスを連れて離れてくれ！」

これ以上オーフィスがここに居たら、何を言うのか分かったものではないので離れさせる。

シンもドライグがここまで追い詰められていたとは思っていなかったので、彼を気遣いオーフィスと共に足早に去る。

「我、ドライグと所有者、もっと見たい」

「後で幾らでも見られるから、今は俺で我慢をしてくれ」

◇

どたばたと落ち着かない早朝も過ぎ、朝食の時間となる。食卓にはシンの知る顔馴染みが座っており、ドライグを宥めることに成功したのか――やや疲れた表情をしている――一誠も椅子に座っている。

台所では一誠の母が筆頭となりリアス、アーシアと朱乃がテキパキと動いて料理を作っている。イリナ、ゼノヴィアはそこまで料理が得意でないのか簡単な手伝いに留め

ている。レイヴェルはまだ人間世界の料理が詳しくないので見て学んでいた。
「いやぁ、年甲斐もない話だが、食事を用意してくれるこの時間が一番の楽しみなんだよ」
　隣に座っている一誠の父がシンへ話し掛けてくる。
「『胃袋を掴まれる』っていうのはまさにこのことなんだと実感するよ」
　頷きながら満面の笑みを浮かべる一誠父。笑う顔は一誠とそっくりである。
「あの娘の誰かがイッセーの嫁になってくれると思うと……くぅ」
　感極まって目頭を押さえている。女っ気の無かった息子がここまでモテるようになったことに感涙していた。何故、モテているのかは知らないだろうし一誠も言うつもりはないだろう。
「先が楽しみですね」
「そうなんだよー！　今から孫の顔が楽しみで楽しみで」
「ちょっと父さん！　気が早いって！　あとそんな話を間薙にしないでくれ！」
　一誠は照れて話を中断させようとするが、一誠父とシンの話は止まらない。
「未来の義娘の手料理を今から食べられるなんて義父親冥利に尽きるってもんだよ。しかも、皆料理上手だからね！」
「確かに。何度かご馳走になっています」

「美味しいよねー。しかも、和洋中と得意分野が違うからローテーションで楽しめるんだから凄いよ」
と気軽に話してくれる一誠父。暫くの間、居候する身のシンはなるべく愛想の良い態度で接する――傍から見れば普段と誤差程度だが――向こうも息子の同級生だからといって変に気遣ったりはしてこず自然で接してくれている。
家の中で小火が起こり、修繕と改築の為に少しの間暮らせる場所を探しており、そこで一誠が自分の家に来るよう言った、という嘘で居候させてもらっている。
「どうぞー」
一誠母がテーブルに料理を置いて行く。今日は焼き魚にお浸し、煮物といった和食がメインの朝食であった。
「はーい。パスカルちゃんもねー」
一誠母が置いた銀の器には、鶏肉と野菜を混ぜて煮た手製の犬用朝食が入っている。
ピクシーとジャックフロストは一般人の目には見えないが、ケルベロスは見える。今はシベリアンハスキーに擬態した状態である。
「わざわざありがとうございます」
「いいのよ。一度犬を飼ってみたいと思っていたし」
一誠母はパスカルことケルベロスの頭を撫でる。

「これはフェンリルちゃんの分ね」
ケルベロスの隣に座っているフェンリルにも同じ手製のドッグフードを置き、嬉しそうに顎下を撫でる。撫でる感触が心地良いのか一誠母は暫くの間、二匹を撫で回しており二匹はされるがままであった。
「お腹減ったにゃー」
「黒歌さん。はしたないですよ」
テーブルに伏せる黒歌をルフェイが窘めている。
「……」
オーフィスは椅子に座って一誠を凝視。一誠ばかり見ているのか思いきや、シンの方にも視線を向ける。それを機械のように一定の間隔で繰り返している。
シンたちだけでなく、オーフィス、黒歌、ルフェイが泊まることを快諾してくれた一誠の両親はかなり懐の深い人物である。因みにオーフィスたちはリアスや小猫の親戚と説明している。
ほぼ全員集合しているが、来ていない人物もいた。昨日から姿を見せていない小猫である。体調不良が原因だが、何がどう不調なのか詳細をシンは知らない。昨晩、小猫を看病していたギャスパーにも聞いてみたが、彼も事情を知らされていないとのこと。
後でリアスか朱乃に聞いてみようかとシンが考えていたとき、ズボンの裾が引っ張ら

れる感触があった。
テーブル下に視線を向けるとピクシーとジャックフロストが不満そうな顔で居る。
「ごはんまだー？」
「お腹減ったホーー！」
空腹を訴える二人。もう少し待っていろと小声で伝える。
やがて全員分の料理が配られる。良く見るとシンの皿に盛られた料理の量が多い。ピクシーたちに分け与えることを見越して多めにされていた。
『いただきます』
声を揃えて言うと各々食べ始める。
「……」
オーフィスは勝手が分からないのか、或いは食欲という概念が無いのか目の前に置かれた朝食をジッと見ている。
「あ、あの……」
それを見兼ねたのかアーシアが勇気を持って声を掛ける。本当ならば全員停止してもおかしくない行動であったが、一誠の両親の目がある手前不自然な行動をすることは出来なかったので食事を装いながら目はアーシアとオーフィスの動向を見守っていた。
「オーフィスさん。これはこうやって――」

オーフィスに箸の使い方や器の持ち方、食べ方などの見本を見せる。
「我、理解した」
一通り見た後にそう発言すると、オーフィスは一瞬で箸の使い方をマスターし、アーシアが見せた動きを完璧に模倣して朝食を摂り出す。
「お上手です！」
オーフィスを褒めるアーシア。そこに龍神への畏怖は微塵も無かった。
「美味しいですか？」
パクパク食べるオーフィスにアーシアは味の感想を尋ねてみる。
「……我、良く分からない」
このような食事は初めてなのかオーフィスは首を傾げながら思ったことを話す。美味い、不味いは一旦置いておいて、少なく食事という行為自体はオーフィスにとって不愉快なものではないのだろう。思い返せば昨日淹れたお茶や菓子を飲み食いしていた。
無限を生きる龍神に空腹という感覚はあるのかは分からない。飢えることがなければ食事という行為は不要なのだが、オーフィスは食べている。もしかしたら、オーフィスなりに食事という行為に楽しみを見出しているのかもしれない。
やや機械的だが黙々と食事を続けるオーフィスの姿に、一誠たちは当初抱いていた畏怖が少しだけ薄れた。

◇

いつも通り学校へ行き、家へ帰る。ただし、シンの帰る家は一誠の家。

玄関を開けるとまるで予知していたかのようにオーフィスが待ち構えている。

「我、観察を再開する」

出迎え早々にそんなことを言われた。

オーフィス、黒歌、ルフェイは一誠宅から一歩も外に出ていない。見つかったら事なので当然である。三人をこの家で匿うときに決めた絶対条件であった。

「――ただいま」

一応オーフィスに挨拶をする。オーフィスは何も言わずにこちらを凝視しているだけであった。

そのままオーフィスの隣を抜けて廊下を歩く。すると、レイヴェルが向かい側からやって来た。レイヴェルは視線を落として何かブツブツと呟いており、シンの存在に気付いていない。

「ただいま」

「ひゃっ!?　間薙様!?」

衝突する前にシンが声を掛けるとレイヴェルは可愛らしい声を上げて驚き、赤面した後咳払いをして落ち着き淑女として振る舞う。
「おかえりなさいませ、間薙様」
改めて挨拶を返すレイヴェル。一瞬で立て直したのは流石の一言であった。
「あの……」
そこでレイヴェルの言葉は途切れ、視線がシンの肩辺りに何故か向けられる。シンが視線を辿るといつの間にかオーフィスを背負っており、顎を肩に乗せていた。相変わらず存在感を自由に操っている。
「……仲がよろしいのですね」
「そう見えるのか？」
レイヴェルは若干表情を引き攣らせながら言う。オーフィスにまだ恐れを抱いているので色々と慎重に接している。
「えーと……その……」
何か言いたげな様子のレイヴェル。オーフィスに話すタイミングを狂わされたのでどう切り出そうか迷っているらしい。
「遠慮しないで言ってくれ」
シンの方から言うように促す。

「あの、間薙様に協力して欲しいのです！」
「協力？」
「はい！　イッセー様、祐斗さん、朱乃さんの中級悪魔試験の件です！」
　試験が近いことはシンも知っている。だが、協力するにしても何をするのかピンと来ない。
「筆記試験の方は私の過去の問題や資料の方を集めています。間薙様に協力して欲しいのは実技試験の方なのです」
　何をするのかそれだけで察する。
「実戦式で三人と模擬戦闘をやればいいということか？」
「はい、そうです！　間薙様が訓練相手ならば実技試験も合格同然です！」
　レイヴェルは随分とシンのことを評価している。以前見学したシンとサイラオーグの非公式戦に余程脳を焼かれたのであろう。
「普段やっていることとあまり変わらないと思うが？」
「それでもです！　間薙様が発する殺気染みた威圧感は、実技試験の本番のような緊張感を与えてくれる筈です！　練習で慣れさせれば本番でも実力を発揮出来ます！」
　熱を込めていうレイヴェル。一誠たちを合格させたいという気持ちは本当だが、同時にレーティングゲームに出場しないと公言しているシンに、疑似的なレーティングゲー

ムをさせたいという下心もあった。
しかし、レイヴェルの熱量は尋常ではない。一誠たちを中級悪魔試験に合格させることに使命感のようなものが感じられる。
「手厚いサポートだな」
シンがそう言った瞬間、レイヴェルは待っていましたと言わんばかりに表情を輝かせる。
「これぐらい当然です！　それがイッセー様のマネージャー！　――としての務めですから！」
「マネージャー？」
レイヴェルが一誠のマネージメントをしているのは初耳であった。
「はい！　サーゼクス様直々に推薦されました！　イッセー様はこれから忙しくなる方です。人間界では学業、冥界では興行、これからイッセー様の需要はどんどん高まっていきます。今のうちにきちんとしたスケジュールの調整や管理が必要なのです！」
冥界の事情に精通し、人間界に留学して勉強をしているレイヴェルにその役目が与えられた。
「イッセー様の昇格はその第一歩なのです！」
使命感に燃えている理由を理解した。魔王に任命された大役であり、ファンでもある

一誠のマネージャー。まだ若いレイヴェルには大層な重圧の筈だが、それをものともせず寧ろ喜んでいる。流石は名立たる悪魔の貴族。器の大きさが普通とは違う。

背景に炎が見えそうなぐらいにやる気を見せるレイヴェル。その熱意をシンとオーフィスは間近で浴びせられていた。

「あのー、ちょっといい？」

そこへイリナが声を掛けてきた。

「話の最中だったら後で話すけど……」

「あら？　イリナさん。何か御用ですか？」

話は一区切りついていたのでイリナの話を聞く。

「そっちのドラゴンさんとお話があるんだけど」

シンは腕を回してオーフィスの体を掴み、イリナの前へ突き出す。オーフィスはイリナの顔を見ながら首を傾げた。

「オーフィスさん……トランプやらない！」

イリナはそう言い、トランプを見せる。

レイヴェルはイリナがオーフィスを遊びに誘ったことに唖然としていた。最強のドラゴン相手にとんでもない行動力である。

「トランプ……」

オーフィスはイリナの言葉をオウム返しをし、何故か首を回してシンの方を見て来た。まるでシンの許可を確認するかのように。
「……何故、俺を見る？」
「トランプ」
同じ言葉を繰り返すオーフィス。そこでシンは察する。求めているのは許可ではなく同行。オーフィスはシンもトランプに誘っているのだ。
イリナもオーフィスの意図を察し、レイヴェルに確認をする。
「もしかして、間薙君ってこの後用事があるの？」
「い、いえ。間薙様にはイッセー様たちの実技試験の為の特訓をお願いしましたが、その前に筆記試験の為の勉強がありますので、夜までは大丈夫ですが……」
「そう！　分かったわ！　間薙君も一緒にトランプしましょう！」
天真爛漫という言葉を体現するイリナの誘いに、断る理由も言葉も特に思いつかなかった。

◇

兵藤家の一室。三方向から向き合うシン、オーフィス、イリナ。三人の中央で重ねら

れたトランプの山。シンの手にはカードが二枚、イリナの手には一枚。イリナの指先はシンの持つ二枚のカードの間を彷徨う。
オーフィスはそんな彼らの様子を無言で見続けていた。
イリナはやがて答えを決め、左のカードを抜き取る。裏返しにされたカードに描かれていたのは、イリナの葛藤を嘲笑う道化師。
ショックで固まるイリナを余所にシンはイリナの手にあったカードをあっさりと抜き、数字を揃えて上がってしまった。
「もう！　二人共ババ抜き強過ぎよー！」
敗北したイリナが悔しそうに叫ぶ。今ので五回連続最下位であった。
「楽しいけど悔しいぃぃ！　全然表情が読めないぃぃぃ！」
イリナは素直に悔しさを表して頭を抱える。
イリナの言う通りシンとオーフィスの表情からは全く手札を読めない。剣士として優れた動体視力を持つイリナは、その気になれば黒目の動きで誰の手にジョーカーがあるのか見抜くことが出来るが、シンとオーフィスはポーカーフェイスというレベルでは収まらないぐらいに感情と表情が無い。
「もう一回！　もう一回しましょう！」
この台詞も四度目となる。時間はあるので再び三人でのババ抜きが始めった。

シンとオーフィスは変わらずポーカーフェイス。二人の表情の変化が乏しい分イリナは一喜一憂しながらカードを抜いている。
中盤に差し掛かって今まで黙っていたシンが口を開く。
「――紫藤としては今回の件はいいのか？」
「へぇ!?」
話題を急に振られたイリナは声を裏返して驚く。
「いいのかって……どういうこと？」
「天界側として見過ごしていいのかという意味だ」
秩序を重んじる天使としては、今回のアザゼルの件は規約違反である。速攻でアザゼルを問い質し、それ相応の天罰を与えることになるだろう。ましてや、イリナは四大天使のミカエルに属する立場。見過ごしたとあればイリナ自身も重い罰を受けるかもしれない。
「……正直に言うと複雑な気分。ミカエル様に問われたら私は全部喋っちゃう。でも、聞かれない限りは黙っているわ」
下手をすれば堕天してもおかしくないギリギリの所だが、イリナはそう心の中で割り切ることで辛うじて堕天を免れていた。彼女としてもそれが妥協としての限界であった。

「はぁ……堕天しちゃったらどうしよう……」
「そのときは、アザゼル先生に責任をとってもらえ。グリゴリに幹部待遇で入れてもらえばいい」
「安泰かもしれないけど、そんなのやだー！」
　幼い頃から教会に仕えている身としてはアイデンティティに関わることなのかもしれない。
「無理をさせられたんだから、今度は先生に無理なお願いをしてみたらどうだ？」
「例えば？」
「同好会が部に昇格するまでの手伝いとか、部になったときに顧問になってもらうとか」
　イリナは数度瞬きした後に思案顔になる。シンの提案を悪くないと思っている様子である。しかし、すぐに頭を横に振る。
「ダメよダメよ！　相手の弱みにつけ込むようなことはしちゃ！　私はミカエル様のＡなんだから！」
　邪念を振り払おうとしているイリナ。それぐらい許されるのではないか、とシンは思ったが真面目なイリナにとってはＮＧだったらしい。
「我、終わった」
　そんなことをしている間にオーフィスの手札は無くなっていた。

「俺も終わりだ」
　続いてシンも無くなる。
「またぁ!?　もう一回!　ねぇもう一回!」

◇

　夜になりそろそろレイヴェルに頼まれた実戦式の特訓の時間が近付いてきた。特訓といってもやることは普段と変わらない。
　訓練場所はいつも通りグレモリー領地下にある広大な空間。転移魔法陣を使えば一瞬で行けるので今のうち軽く準備を済ませとく。
　ずっとあったオーフィスの観察は今は無い。『我、ドライグを見る』と言って一誠たちの方へ行っている。自由気まま、無軌道、或いは何も考えていない行動なのかもしれない。
　心身ともに軽くなっている内にやるべき事を済ませておく――そう考えていたとき、床が軋む音が鳴った。
　誰かが廊下を歩いている。シンの視線は軋み音が鳴った方を向く。
「……あっ」

数日ぶりに会う小猫。白装束を着ており、普段隠している猫の耳と尻尾を出している。その顔は熱に浮かされているように赤い。

「久しぶりだな」

「……あ、あの」

小猫はシンの顔を見た途端、紅潮していた小猫の顔が更に赤くなる。心なしか息遣いも荒くなっているように見えた。その反応は何時ぞやの小猫を思い出させる。それどころかあのよりも悪化している。

「……わ、私」

何かを言い掛けるが、耐え切れなくなり小猫はシンに背を向けて走り去ってしまった。

（……アザゼル先生に聞いておくか）

数日経っても変わらない小猫の症状。調べると言ったアザゼルに詳細を尋ねる必要がある。

時間が空いている内にアザゼルと連絡を取ろうと考えていたとき――

「ふむふむ。意外な反応だにゃー」

――黒歌が音も無く現れて壁に寄りかかっている。

シンは黒歌を一瞥したが、すぐに見なかったことにして去ろうとする。

「ちょっと待つにゃん！　こういうときは普通『どういう意味だ？』って聞くところだにゃん！」
露骨に無視された黒歌が抗議の声を上げる。しかし、シンの足は止まらない。
「ちょ!?　本当に待ってってば！　そこまで無視することないでしょ!?」
いつもの語尾が無くなり、本当に慌てた様子であった。ここまで蔑ろにされたので意地でもシンを引き留めようとする。
だが、それでもシンは聞く耳を持たず、そのまま廊下の角に姿を消そうとする。
「白音に何が起こっているのか教えてあげるから！」
シンの足がその言葉でようやく止まる。Uターンをして黒歌の前に立つ。
「塔城に何が起きている」
「あの……もう少し仲良く――」
「敵と馴れ合うのは趣味じゃない」
「……ここまで私に興味無いのは流石に傷付く……にゃん」
「そうか。戦うときが来たらこちらが少し有利になるな」
「え、こわっ……」
ナチュラルにこちらを倒すことを考えているシンに黒歌は引いてしまうと同時に恐怖も感じてしまう。

黒歌とてすぐに馴染めるとは思っていない。しかし、招いたアザゼルの顔を立てて一誠たちは多少警戒しているものの黒歌やルフェイにある程度受け入れている。

しかし、シンという男は何を考えているのか分からない無表情の内で常に黒歌たちが敵になったときのことを考えている。ある意味、バトルマニアのヴァーリに通じるものがあるが、ヴァーリからはここまでの冷たさを感じたことはない。

「……分かっていると思うけど、この家に居る間はお互い不戦状態だからね？」

「何もしなければ、こちら側からは何もしない」

裏を返せば何かをしたら即座に戦闘が始まることを意味する。

「もう少し歩み寄っても良いと思う……にゃ」

「それは行動次第だ。信じさせてみせろ」

シンからヴァーリチームに対する信頼度は、敵対したことや共に戦ったことを考慮して良い意味でも悪い意味でもゼロである。シンが言う通り今後の行動によってはプラスの方に傾き手を貸しても良いと考えることもあれば、マイナスに傾き敵としか認識しないこともある。

全ては今後による。

「これはその第一歩だ。塔城にどんな異変が起きている？」

言われるがまま黒歌は小猫の身に何が起こっているのか説明する。その間、シンは瞬

きもせずに黒歌を見続けていた。ただそれだけの行為に異様なプレッシャーを感じ、説明し終えた後黒歌は一戦闘終えたような疲労感を覚える。
「分かった」
それだけ言うとシンは用は済んだと言わんばかりに去っていく。残された黒歌は唖然としてしまった。
自分の容姿に自信を持っている黒歌であるが、ここまで眼中に無いのは――
「……いや、待つにゃん」
――思い返してみるとヴァーリチームの男たちの中で黒歌の容姿を褒める者が居た記憶が無い。ヴァーリは戦闘大好きなので興味無し。美候は黒歌に友人のように接してくるだけ。アーサーは紳士だが紳士過ぎて逆に何も言って来ない。ジャアクフロストに至っては論外。
そして、先程のシンの塩対応で女としての自信の根本が揺らいだような気がした。
ショックを受けた様子でフラフラと歩いて行く黒歌。
「おい。どうかしたのか?」
丁度勉強に一区切りついた一誠と会い、一誠は覇気の無い様子の黒歌に声を掛ける。
「赤龍帝……」
黒歌は唐突に扇情的なポーズを取る。

「なっ!?」

一誠は驚くも、その艶めかしさに赤面しながら生唾を飲み込む。

一誠の素直な反応に失い掛けた自信が戻って来る。

「――ありがとう」

「え!?」

何故か涙ぐみながら礼を言ってきた黒歌に一誠はただただ困惑するしかなかった。

特訓、特訓

広大な空間。あらゆる特訓を想定して造られたグレモリー領地下のトレーニングルーム。その広過ぎる空間にシンは一人佇む。ここで行う特訓の為にシンは先に来て待機をしている。

仲魔たちは付いてきていない。纏めてイリナに預けてきた。オーフィスとトランプをしているのを目撃されており、ピクシーたちもオーフィスに興味を持ったのだ。

龍神相手に怖くはないのかと尋ねてみると、ピクシー曰く――

『もう怖いとか怖くないとかそういう次元じゃないよねー。アタシたちが何をやったところで気紛れで消し飛ばすことが出来るんだから、びくびく隠れていても仕方がないでしょ？』

――差があり過ぎるせいで逆に開き直っていた。

暫くの間、オーフィスも退屈はしないだろうと思いながら、シンは先程黒歌から聞いた小猫の異変について考えていた。

小猫の異変、それは『発情期』、とのこと。

猫又の女の体は子を宿せるようになると一定周期で発情期に入る。これは猫又の本

能によるもので、猫又の中でも更に稀少な猫?でも例外ではない。猫の妖怪故に猫と同じことが起こっている。猫又の女の特性として求める相手は気に入っている異種族の男であり、その相手と交わり子を成す。

ただし、小猫の場合少し問題がある。小猫は発情期に入るには体がまだ未成熟なのだ。未熟な体での出産が危険なのは猫又も人間と変わらない。

小猫は通常よりも早く発情期に入ったとのことだが、そうなった詳細な理由を黒歌はシンに話さなかったが、周りの環境によるものとだけ説明された。

今は処方された薬である程度症状は抑えられているが、改善した訳ではない。完全に落ち着くまで待つしかないのだ。

小猫が発情期に入って恐らく間もない頃のことを思い出す。小猫の急な行動に少々驚いた記憶があるが、発情期が理由だとしたらその心情は如何なるものだったのだろうか。

先輩、もしくは兄分のように慕っていた相手を性的な目、行動をとったことに対して自己嫌悪で満ちていたかもしれない。

その辺りの欲が薄く、殆ど無いシンにとっては正確に測れないことではあるが、心身共に負担が掛かる状態が続いている。

(解決出来るとしたら……)

同じ猫？であり、先達である黒歌が最も相応しい。しかし、小猫と黒歌は不仲。黒歌がどう思っているかは知らないが、小猫は色々と複雑な心境を抱えており、中々素直にはなれない。どちらかが歩み寄らなければ事は上手く運ばないだろう。

「早いなー、お前」

一誠の声が聞こえ、シンは一先ず小猫の件について考えるのを中断した。

シンも使用した魔法陣の上に一誠、木場、朱乃、そしてレイヴェルが居る。四人を代表してレイヴェルが前に出て来る。

「間薙様。今回の特訓に協力して頂け、改めてお礼を申し上げます。ありがとうございます」

レイヴェルは完璧という言葉を体現したかのような礼を見せる。

「私、イッセー様のマネージャーとして今回同行させてもらいました。私なりに特訓のプランを考えてきました。こちらをお目通し下さい」

レイヴェルから一枚の紙を渡される。

シンが紙に目をやると若干幼さを感じさせる文字で特訓の内容が書かれていた。

「こっちの文字もちゃんと練習したんだな」

「え、ええ！　勿論です！　それぐらい当然のことですから！」

内容よりも先に文字の方を褒められたのでレイヴェルは少し動揺しながらも、それで

いて少しだけ嬉しそうな反応を示す。
当たり前のことだが、人間界で使用する文字と冥界で使用する文字は異なる。この紙の文字はレイヴェルが書いたものであり、文字に幼さを感じるのはまだ慣れていないからであった。しかし、事前に勉強していたとしても期間を考えるとちゃんと読めるレベルにまで達しているので大した学習能力である。
「そ、そんなことよりも内容の方です！　ちゃんとご確認して下さい！」
誤魔化すように語気が強まる。
シンが再び紙に目を向けると、見ている中で紙に書かれた文字が変わる。特殊な魔術を仕込んであるらしく、一枚で何十枚分の内容が圧縮されていた。
シンはそれぞれの項目に目を通し、内容を覚える。それが終わるとレイヴェルにその紙を返す。
「分かった」
内容を把握したことを告げると、レイヴェルは一誠たちの方へ向き直る。
「アザゼル様から皆様に伝言を預かっています」
ここには来ていないアザゼルに代わってレイヴェルが告げる。
「今度の試験では皆様に制限を掛けさせる、とのことです」
「制限？」

「はい。朱乃さんは『雷光』の使用を禁止。当日は雷の魔力のみで実戦試験に受けてもらいます」
　雷と堕天使の光の複合である『雷光』を使用禁止と言われ、朱乃は『まあ』と言っていたが特に不服そうではなかった。
「祐斗さんとイッセー様は『禁手』の禁止です」
『聖魔剣』と『赤龍帝の鎧』の当日使用禁止。木場は表情を変えないことから妥当な判断と思っているらしいが、一誠の方は一気に不安気な表情となる。
「大事な試験なのに、そんな手を抜いた真似をしていいのかよ……」
「アザゼル先生曰く、万が一のことが起こるかもしれないから、とのことです」
「万が一って……尚更――」
「『尚更禁手を使った方が良いんじゃ、とイッセーが言うかもしれないが、だからこその特訓だろうが』とのことです」
　レイヴェル経由でアザゼルに台詞を先読みされた一誠は、それ以上何も言うことが出来なかった。
「他に疑問などはございませんか？」
　レイヴェルの問いに他のメンバーは首を横に振る。
「では始めましょう」

◇

シンとの特訓。最初の相手は朱乃。シンが事前に伝えられていた特訓の内容は、朱乃に対して接近戦を仕掛けるというものである。

リアスの『女王』であり強い雷の魔力を持つ朱乃だが、主な攻撃方法は遠距離攻撃である。チームとして戦うのなら前に出て戦う一誠、木場、ゼノヴィアがおり、守りの方も小猫とロスヴァイセがいるので問題無い。しかし、試験は一対一で行われる。同じレンジで戦うのなら朱乃に分があるが、相手が近接戦を得意とするなら噛み合わないこともある。

その為に今のうちに近接戦の相手に慣らしておく。

シンは朱乃と向き合う。思い返すとこうやって実戦形式で朱乃と戦うのは初めてのことであった。シンの主な特訓相手はアタッカーである一誠、木場、ゼノヴィア、小猫の四人である。

「では始めてください」

レイヴェルが開始の合図を出す。

「行きます」

「お手柔らかにお願いします」

言葉を交わした瞬間にシンは前に出た。朱乃はその踏み込みの速さに驚く。しかし、心は驚いても体は適切な行動を起こしており、羽によって後方へ飛ぶと同時に雷の魔力を撃ち出す。

轟音と閃光。シンに雷の魔力が直撃する。一直線に迫って来ていたシンに対して真っ直ぐ飛ぶ雷。

朱乃はある程度加減はしたもののシンに普通に直撃したことは少し予想外のことであった。シンの勘の良さや反応の良さからしてこちらが何かしらの行動をとればすぐに回避行動に移ると思ったからだ。

だが、すぐにシンが回避しなかった理由を知る。シンは朱乃の雷を受けながら直進し続けている。

朱乃の雷は正確に言えばシンに当たっていない。シン自身が体から放電を行い、命中する筈であった雷の魔力と相殺させ、周囲に散らしているのだ。

雷に対する耐性を見せながらシンは拳を振り上げながら朱乃との距離を詰め、力を解放して一気に振り下ろす。

鳥肌が立つような風切り音が鳴る。しかし、それだけであった。拳の先から朱乃の姿がなくなっている。

朱乃は拳が振り下ろされる前に空中へ飛び上がっていた。
羽を動かしてシンから離れる朱乃。それを追おうと踏み込んだタイミングで朱乃は指を鳴らす。シンの周囲に紫電を放つ複数の球体が出現。球体から槍のように雷が飛び出したのでシンはその場で踏み止まった。
球体から発生した雷はシンの前方と後方を通過していく。前に出たら雷に貫かれ、かと言って咄嗟に避けようとして後ろに下がったら同じく雷に貫かれていた。
「えげつねぇ……」
朱乃の用意したトラップに一誠は蒼褪める。可愛らしい部分を良く知っているだけに戦いのときのサディスティックな部分に戦慄する。
「でも、避けた間薙君も流石だね。判断が早い」
その場に留まるという常人ならばまず出来ない行動を取ったシンを木場は称賛する。
観戦しているだけだが、普段は戦わない二人が戦っているのが新鮮であり、見ているだけでも色々と為になる。
「あらあら、やっぱり間薙君は凄いですね。顔色一つ変えずに今のを見切るなんて」
「姫島先輩が手加減をしてくれたので」
「間薙君も手を抜いてくれていますよね？」
シンは朱乃が展開する雷の魔力に普段のキレが無いことに気付いていた。朱乃は拳

を振るうシンから威圧感が無いことが分かっていた。しかし、同時に温さも感じてしまう。あくまでもこれは特訓であり、相手を傷付けるのが目的ではない。全力が出せないフラストレーションを自らにそう言い聞かせて抑える。

朱乃はいつでも雷の魔力を発動させる準備をしながらシンの顔を見つめる。相変わらず感情が見えてこない無表情。朱乃が好きな一誠は喜怒哀楽を素直でころころと表情を変えるので、その差で余計に強く感じてしまう。

（綺麗な顔をしているのですけどね……）

表情が乏しいので折角の顔立ちが無駄になっていることを惜しみながらも、無表情だからこそシンの顔立ちが綺麗に感じるとも思っていた。人間としての魅力を代償に一種の神秘性を放っている。

シンの顔を見ていると朱乃の中に久しぶりの衝動が湧き上がってくる。

あの無表情をどんなことをしても変えたい。朱乃のサディスティックな部分がシンの無表情を前にして対抗心のように燃え上がり始める。

「……朱乃さん、何か顔赤くね？」

「だね。……うーん、朱乃さんの癖が出てきちゃったかな……」

仲間に対しては慈母の如き優しさと包容力を見せ、敵に対しては内なる衝動に従い、興奮が冷めるまで痛めつける彼女だが、このときは珍しく仲間に対して普段は向けない

筈のS心を向けていた。
「――愉しそうですね」
「ええ。間薙君とこんな風に戦うのは新鮮ですから」
「それは良かったです」
勘の良いシンは朱乃の内心に既に気付いていたが見て見ぬふりをする。朱乃の趣味に付き合う気は無いが、咎める気も無い。朱乃の好きなように戦えば良いし、シンも自分の好きなように戦う。相手に振り回されるようなことがあれば、それは相手よりも弱かったというだけのこと。
朱乃の目が妖しく輝く。何かを企んでいると感じさせる眼差し。
「――間薙君相手ならアレを使ってもいいですね」
小声で呟くと、朱乃は掌に魔力で雷を発生させる。そして、それをシン目掛けて投げ放つ。
雷鳴と共に飛ぶ雷。シンは朱乃が腕を振り抜く前に既に回避行動に移っていた。一直線に飛ぶ雷が、虚空を通り過ぎていく――かと思いきや、突如として生物のようにうねり、シンの動きを追尾してきた。
シンの目は迫る雷の違いに気付いていた。それは自然に発生する雷のような形をしておらず、生物に近い姿をしている。それは、まさに――次の瞬間シンの顔面付近で雷

が弾けた。
「うお?!」
「間薙君!?」
特訓とはいえ顔面に雷が直撃したことに一誠と木場は焦った声を出してしまう。
「大丈夫ですよ」
しかし、朱乃は落ち着いた口調で二人を宥めた。
「流石ですね」
賞賛の言葉の先にはシン。翳された左掌。その掌には焦げ跡が付いている。
顔面に命中する直前に左手を割り込ませ、朱乃の雷を防御していた。ただ、流石に放電での相殺は間に合わなかった。だが、それでも平気そうにしている。シンの体は炎のときと同じく電撃を操れるようになってから耐性が出来ていた。
初見の攻撃だったのでなるべく威力を抑え、当たっても痺れて暫くの間動けなくなるぐらいの威力で放ったのだが、シンは初めて見る攻撃に対して反応してみせた。しかも、素手で受けたのに感電している様子も無い。いつの間にか電撃に対しての耐性を身に付けていたことに朱乃は内心驚いていた。
観戦していた一誠と木場も朱乃と同じように驚く。一誠は自分だったら直撃していたと思い、その光景を想像して身を震わせ、木場は初見だったのなら回避出来るかどう

か五分五分であったと予想する。
『そこまでだ』
ここから更に特訓がヒートアップするかと思った矢先、この場に居ない人物の声が終了を告げる。
「アザゼル先生？」
声の方を見るとそこに居るのはレイヴェル。彼女の両手から浮かび上がる小型魔法陣を介してアザゼルの顔が映して出されている。
『よお』
魔法陣の向こう側のアザゼルが手を挙げる。
『出来る事なら立会いたかったが、色々とグリゴリの仕事もあってな。悪いがこんな形でやらせてもらう』
オーフィスの件で色々と過敏になっているが、堕天使総督としての仕事も疎かに出来ない。寧ろ、こういうときだからこそ普段通りにアザゼルは振る舞う必要がある。常人だったら壊れてしまいそうな仕事量だが、アザゼルは至って平然とこなしている。それでも体は一つなので、今のようにグリゴリ本部にいながら一誠たちの特訓の様子を監督している。
「あらあら。私としてはまだまだ出来るのですが……」

『特訓と言っても本番に向けての最終確認だ。朱乃、お前の場合は接近戦相手にどうやって捌くかを確認したかった。シン相手にそれだけ出来れば十分だ』

アザゼルは及第点を与えるが、朱乃は不完全燃焼といった様子で少し不満気な様子。

「もう少し戦いたかったですわ」

『不満か？　悪いがここまでだ。どっちも大怪我させたくないからな。欲求不満なら後でイッセーに解消でもしてもらえ』

アザゼルがそう言うと、朱乃は横目で一誠を見る。戦い後のせいか普段よりも艶があり、且つサディスティックさを感じさせる眼差しであった。

「うふふ。それもいいかもしれませんね」

意味深な発言をする朱乃に一誠は背筋を震わす。それは決して寒気だけによるものではない。

「お手柔らかに……」

「顔が気持ち悪いぞ」

「うるせぇ！」

一誠の締まりのない表情にシンがストレートな感想を言ってきたので一誠は怒声で返す。木場は二人のやりとりを苦笑していた。

パン、と手を叩く音。音の方へ注目するとレイヴェルが半眼でシンたちを見ている。

「仲がよろしいのは結構ですが、まだ特訓は終わっていませんよ？」
　マネージャーとして厳しく律する、表面上は。内心ではシンたちの短いやりとりで仲の深さが伝わって来たので、レイヴェルは疎外感を覚えてしまい少々きつめの態度が出てしまった。
『おーし、次は木場だな。木場が『騎士』なのは広く知られているし、お前の『聖魔剣』も有名だ。お前が敵の立場ならどうする？』
「そうですね……」
　木場は少し考えた後、自分で自分の攻略法を提示する。
「さっきの朱乃さんのときとは逆に遠距離攻撃をメインにして戦います。後は『騎士』の足を殺す為に足場を崩したりして動きに制限を掛けてもいいですね」
『分かってんじゃねぇか。……っていうかここまで理解しているのなら特訓する意味があるのか？　普段からそういうのを想定して訓練している感じもするが……』
「必要です！」
　木場が真面目さは良く知っているので改めて特訓することに対し疑問を抱き始めるアザゼルであったが、そこに待ったを掛けたのはレイヴェルであった。
「特訓は特訓に過ぎませんが、それでも必要です！　本番で普段通りの実力を発揮させるには常日頃から本番を想定した特訓が必要なのです！　特訓を重ねた回数が本番で

どれ程の実力を発揮出来るかに繋がります！　０．１パーセントでも実力を発揮させる為に特訓は必要なのです！　っと私はこの前言った筈です！　アザゼル様！」

『お、おう。そうだったな……』

レイヴェルの気迫に呑み込まれるアザゼル。魔法陣越しでもレイヴェルの異様な熱が伝わってくる。

流れでレイヴェルが言ったように今回の特訓はレイヴェルが発端で、彼女がアザゼルに監督を求め、彼が了承したことで実現した。普段から特訓などを行っている一誠たちが特別という名目でシンと戦うことに少々の疑問を抱いたが、今のようなレイヴェルの熱意に押されて結局受けてしまった。

受けてしまった以上、一誠たちに課題を与えて本番に向けての実力の方を再確認するつもりであったが、アザゼルの予想よりも一誠たちはしっかりと実力を身に付けていた。

「何かレイヴェルの方が俺たちよりもやる気じゃないか？」

「サーゼクス様にイッセー君のマネージャーを頼まれているからじゃない？」

「それはそうなんだけど……何というかそれだけではない熱意のようなものが……」

レイヴェルの熱意にやや不純な気配を感じた一誠。しかし、レイヴェルが一誠たちの中級悪魔昇級試験の為に色々とサポートしてくれているのは良く知っている。一誠は

レイヴェルのサポートを非常に感謝していた。彼女のサポートが無かったら、今以上に頭を抱える毎日を送っていたに違いない。

これまでの日々を思い返し、そんな献身的なレイヴェルが不純な動機を抱えているかもしれない、と疑ってしまったことを内心反省する。

「――いや、やっぱ気のせいだわ」

先程感じたものを気のせいと判断し、今回の特訓は素直にレイヴェルが自分たちの為に用意したものであると納得する。

（……危なかったですわ）

特訓を中断させようとしていたアザゼルを説得でき、レイヴェルは心の中で安堵の息を吐く。

（間薙様と祐斗さんとの対戦！　こんな好カードを中断させる訳にはいきません！）

一誠に対し好意を持っているレイヴェルだが、同時にシンのファンでもある。レーティングゲームなどに参加しないと公言している以上こういった機会が無ければシンの戦いを見学することは出来ない。

シンと木場との戦いは決して見逃すことは出来ない。彼女にとってこの二人の対戦は、彼女がシンのファンになるきっかけとなった対戦カードであった。

一誠の泥臭い戦いに惹かれる一方でシンの血と暴力のニオイがする戦いにも惹かれ

てしまう。悪魔としての性なのか、レイヴェル個人の趣味趣向なのか判断は付かないが、レイヴェルの脳はシンの戦いがしっかりと刻まれていた。

「では、準備の方をお願いします」

内なる興奮を押さえ、レイヴェルは表面上冷静に指示を出す。

シンは木場に背を向け、事前に与えられていた特訓内容に従って歩き出す。

五メートル、十メートルと離れて行き、最終的には木場と十五メートル程離れた位置に立った。

『準備出来たかー？　木場、さっきも言ったようにお前は遠距離相手にどんな風に対応するかの特訓だ。今からシンにお前に対して攻撃をさせる。どんな方法でもいいから五分間シンの攻撃に耐えろ』

朱乃の特訓とは違い、木場に対して課題と縛りを与えた特訓。

「防御と回避に専念すればいいということですね？」

『そうだ。近接戦ならもう言うこと無し、だからな。その反面、持久力や耐久力を見させてもらう』

一誠としては例え五分間だとしても反撃もせずシンの攻撃を受け続けることは御免被りたい。攻撃している方が性分に合っている。

アザゼルからの課題を貰っても木場はいつも通り爽やかな――否、少しだけ好戦さを

混ぜた笑みであった。
「いいですね、それ。敵陣地に斬り込んで行くのも『騎士』ですが、味方陣地を守るのも『騎士』の務めですから」
顔に見合ったカッコいい台詞を言うので一誠は顔を顰める。自分では同じ台詞を言っても決まらないのが客観的に見て分かる。
「カッコつけやがって……」
「別にそんなつもりじゃないだけどね……ほら、今ってゼノヴィアが居るじゃないか？ゼノヴィアは何て言うか……一直線だし」
言葉を濁した評価をする。
「お前程器用じゃなし、大雑把だからな」
「そう言わないであげてよ……」
折角言葉を濁したのにシンが身も蓋も無い事を言う。
「――兎に角、そういうのをサポートする意味でも守りに重点を置いた戦い方をするべきだと思うんだよね。――ということでさあ、やろう！」
これ以上喋っていると愚痴に変わりそうになるので、強引に話を打ち切り、特訓へ移る。
『それじゃあ……始め』

アザゼルが合図を出し特訓が始める。尤も、木場は守りと回避に専念するだけなのでシンの出方を伺うだけ。

シンは開始の合図が出されると同時に息を吸い込む。一瞬で大量の空気を体内に取り込み、それを一気に吐き出す。吐き出された空気はシンの体内で変換され火炎となる。

シンの吐く火の息。元々はそこまで射程距離がある技ではなかったが、シンの成長により距離と威力は初期よりも遥かに強くなっており、十五メートル離れた木場にも届く。ただし、そこまで届かせるとなると加減が効かず、全力の攻撃になる。

木場の視点から見れば火の壁が迫る迫力ある光景。

だが、木場に全力で攻撃しても大丈夫だと確信していた。それを証明するように木場は『魔剣創造』により氷の剣を創造する。

『炎凍剣』と名付けられている魔剣が火の息の前に立ち塞がると、一本だと思われていたが、実は複数重なった状態になっており、それが扇状に展開。数本の『炎凍剣』がシンの火の息を止める。

火炎に対抗する為に創られた魔剣なので見た目は氷でも溶けることはせず、触れている火炎を打ち消していき、火の粉すら木場に届かせない。

（流石！）

創造された魔剣で火の息を防ぐ木場を称賛。一方で火の息を吐くシンに対しては――

（俺も赤龍帝って呼ばれるからには炎ぐらい吐いた方がいいのかな……間薙に聞いたらやり方教えてくれるか？）

――ずれた関心を抱いていた。

『炎凍剣』によりシンの火の息は完全に防がれた。通常の戦いならば、複数の『炎凍剣』を火の息の中を逆流させてシン自身を狙うところだが、これは特訓なので守りに徹する。

暫くして火の息が止まった。文字通り息切れを起こしたのかと『炎凍剣』の防御の隙間から様子を確認する。

火を吐くのを止めたシン。代わりにその両手に炎が灯る。業火が宿る両手を頭上に掲げ、二つの炎が一つに合わされ、炎は高熱のエネルギーと化す。

「あっ」

シンが何をしようとしているのか察し、木場は即座に『炎凍剣』の防御から離れる。

シンが両手を突き出すと、エネルギーは熱線となり一直線に伸びていく。『炎凍剣』が熱線を受けるが、『炎凍剣』は融解を通り越して蒸発し、熱線は遥か後方の壁に突き刺さり、命中箇所周辺をドロドロに溶かして壁の中に消えていった。

「危ないなぁ」
　木場はシンの容赦無さと強引さに苦笑する。
『炎凍剣』は火を消すことに特化した魔剣である。そこでシンは熱そのものをぶつけて無理矢理突破してのけた。『炎凍剣』にも熱への耐性がある筈なのだが、シンが放った熱線の温度が耐性を易々と破る程高いということなのだろう。
　熱線を放ち終えたシンは再び息を吸い込む。木場は魔剣創造により新たな魔剣を創り出そうとする。
　木場は創造するより先にシンは息を吐き出す。火の息とは真逆の氷の息が吐かれ、白い靄が木場に迫る。
　それに対抗して木場は燃える炎の魔剣を創造し、『炎凍剣』と同じくその魔剣で氷の息を防御する。事前に何が来るのか分かっていないと創造出来ないピンポイントの魔剣であったが、木場は何となくではあったがシンが何をしようとするのか読めていた。尤も、これが特訓であり、シンがわざと分かり易い行動をとったからであるが。
「間薙君って器用ですわねー」
　氷の息を吐くシンを見ながら朱乃は感心したように言う。最初は素手で殴るだけであったが、いつの間にか氷の息を吐き、火の息を吐き、電撃を放ち、熱線を放ち、魔力剣で薙ぎ払うなど多彩な技が増えた。

「――知ってます？　朱乃さん。あいつ目からビームも出せるんですよ？」
「本当に凄いですわね……イッセー君も出せません？　ビーム？」
「え!?　……見たいですか？　俺がビーム出すの？」
「はい！」
「……ドライグ。赤龍帝なら目からビームぐらい出せるか？」
『お前、ドラゴンを何だと思っているんだ……』
真剣な顔をして馬鹿なことを訊いてくる一誠に、ドライグは頭痛を覚える。
？気に観戦している一誠たち。彼らが見ている前で不意にシンは攻撃を中断する。
次の攻撃に移るのかと思ったとき、シンの眼前を何かが通り過ぎ、床に突き刺さる。
床に真っ直ぐ突き刺さるのは木場が創造した炎の魔剣。シンの攻撃を防いでいるどさくさ紛れ、一本空中へ投げ放っていたのだ。
「おーい！　攻撃するのは反則じゃなかったのかよー！」
見ていた一誠が抗議の声を上げる。
「いやぁ、今のは攻撃じゃなくて――」
『挑発だな』
木場の言葉を継いでアザゼルが説明する。
『その気になればいつでも当てられる、とアピールする為にわざとシンの目の前に落と

したんだ』
「何でそんなことを……」
『特訓とはいえ、やられっぱなしも癪だったんだろ？　特訓だけど気を抜いたらこうなるぞーって言いたかったんだろうな』
「はぁ……祐斗君も男の子ですね」
「でも、急にそんなことしたら間薙も怒る――」
『――わけないだろ、気付いてたんだから』
　アザゼルの指摘は正しかった。シンは落ちて来る前から魔剣の存在を感じ取っていた。だからこそ、目の前に降ってきても仰け反ることもせず、瞬きもしない。
「ふひゅっ」
　空気が抜けるような、可愛らしいようなそれでいて不純な感じがする変な音が聞こえ、一誠と朱乃は音の方を反射的に見る。
「何か？」
　視線の先にいたレイヴェルが二人の視線に対し、小首を傾げてキョトンとした表情を返す。
「いや、何でもない」
　気のせいか或いは聞き間違えたのか。一誠たちは『何だったんだろう？』と思いなが

らシンと木場の方へ向き直る。
（――今のは少し気を抜き過ぎていましたわ）
やはりというべきか音源はレイヴェルであった。
涼しい顔をして男の子の面を出す木場と、木場の挑発に対して瞬きもせずクールな対応をしてのけたシン。そのシチュエーションについつい興奮が抑え切れず、はしたない声を出してしまった。一誠と朱乃に気付かれたときは内心ドキリとしたが、何事もなかったかのような振る舞いをすることで何とか切り抜けられた。
『……興奮するのも程々にしておけよ』
ただ、すぐ近くにいたアザゼルにはバッチリと聞かれていたので勘違いで済ますことは出来ない。レイヴェルは反論せず、動揺もせず淑女らしい笑みを浮かべて誤魔化す。
その面の皮の厚さにアザゼルはレイヴェルが将来大物になる予感がした。
炎、氷と来て次は朱乃のときのように電撃でも放つのかと予想し、いつでも耐電用の魔剣を創造する準備をしていた木場だが、そんな思惑とは裏腹にシンの方は構えをとらず、木場の方をじっと見ているだけ。
その状態で数秒経過する。特訓の最中でのシンの棒立ち。それが何を意味するのか木場は最初分からなかったが――
（あれ？　もしかして……）

――シンを観察するように見ていてふと思い至った。
「何か躊躇しているのかい？」
木場はシンの行動からその内心を推測した。
「躊躇!?　間薙と一番縁が無い言葉だろ、それ！　その気になれば死に掛けの爺さん、婆さんくらい殴り飛ばせそうな奴だぞ！」
「イッセー君、もう少し間薙君のことを信じてみてはいかがかしら？」
一誠からシンへのあんまりな評価に朱乃もつい窘めてしまう。尤も、一誠の言う通りやろうと思えば出来るので一誠の評価もあながち間違いではなかった。
「これは特訓だ。でも、もう少し難易度が上がっても僕は構わないよ」
躊躇しているそれを使うよう催促してくる。シンの方も相手が許可を出しているのなら、使わざるを得ない。
シンは左手に魔力を集めて剣の形にする。ここまでは木場たちも良く知っている。シンは、作り出した魔力剣を鞘のように右手に収めながら、そこから体を九十度捻りながら前へ一歩踏み出し、抜刀の構えとなる。
その構えを見た瞬間、木場は背筋が震えるのを止めることが出来なかった。燃焼反応のように激しく揺らいでいた魔力剣が、右手に収められるとその揺らぎを無くし、研磨されたかのような一本の剣と化している。

恐ろしいレベルでの力の圧縮と安定。それだけでも凄いのだが、木場が戦慄したのはシンのとった構え。木場の良く知る人物と何故か重なる。

（師匠……!?）

木場の剣の師であり、サーゼクスの『騎士』である沖田総司。剣に関しては素人の筈のシンだが、その構えだけは様になっていた。

木場の直感は正解である。シンの今の技が完成したのは木場の師匠のおかげである。総司も弟子にこの技が向けられる日が来るとは思ってもいない――とは言い切れない。もしかしたら、その日が来ることを予想し、木場がどう対処するのか試す試練として先を見越して用意したかもしれない。

シンは木場の指摘に何も言わなかったが、間違いではない。編み出して日が浅い技なので今のシンには手加減という器用な真似は出来ない。しようとすればシンの方が自爆する危険性がある。

技の体勢に入ったからには手加減無しの全力で放たなければならない。

「……死ぬなよ」

特訓にあるまじき台詞だが、これはシンから木場への気遣い。逆に言えばどうにかしないと木場は死ぬ。

「……あれ？　これって不味いんじゃ……」

観戦していた一誠も明らかに特訓の域から超えた技を使おうとしているのに気付き、顔色を変える。
「ですが、下手に介入したら逆に被害が大きくなってしまいます」
朱乃も顔色を悪くしていたが、状況を冷静に見ていた。朱乃が言う通り、どうにかする段階はとっくに通り過ぎている。
『何で特訓でこんな事になってんだよ……』
こうならない為に色々と制限を与えたつもりだったが、そんなの知ったことかと言わんばかりに二人共勝手な行動をし、いつの間にか命のやり取りにまで発展してしまった。
シンと戦うのが余程テンションが上がるのか、木場はシンに本気を出せと言い、シンはそれにすぐに応じている。優等生に見えて利かん坊の木場と物静かなように見えて人の言うことを平然と無視するシン。二人の組み合わせが悪い方向へ働いてしまっている。
「――アザゼル様」
どうにかして二人を止めようと頭を働かせているアザゼルの思考を止めさせるレイヴェルの声。
「ここは御二人を信じましょう」

誰よりも冷静でありながら、内心ではこのシチュエーションに血液が沸騰しそうな興奮を覚えているレイヴェル。隠し切れない紅潮した頬のまま事の成り行きを見守る。

シンが動く。魔力剣が抜刀され――

（はっ――）

――気付けば抜き放たれていた。

（――やっ!?）

一誠が感想を抱いたときには既に攻撃は終えていた。

「はぁ……」

緊張から解き放たれた木場の吐息。しかし、木場の姿は見えない。何故ならば、木場は長大な魔剣の壁によって姿を隠されているからだ。

「危なかった……」

木場がやったことは最初のときと変わらず魔剣による防御。今回使用したのは、木場の魔剣の中でも禁手である聖魔剣を除けば最も攻撃力の高い魔剣。嘗て、ゼノヴィアと戦った際に使用したものである。

威力は申し分ないが、破壊力重視である為に重く、長い。そのせいで『騎士』の強みを殺してしまう。聖魔剣が切れ味で斬るのならこの魔剣は重さで潰し斬る。

ゼノヴィアに全く通じなかった以降、木場が使用することはなくなったが、今回はそ

の重量を生かしてシンの攻撃への壁として使った。
木場の前に刃をシンの方へ向けた巨大魔剣が隙間なく並んでおり、しかもそれが五層となって過剰過ぎる程に守りを固めていた。
しかし、そんな強固な守りを作っても木場は冷や汗を流している。
シンの放った極限まで圧縮した魔力による横一文字。それは木場の巨大魔剣の壁を四層まで斬り飛ばし、五層の壁も三分の二程削った所でシンの斬撃は消失した。威力を高めた分持続力が乏しいのだ。
金属がへし折れる音がする。切れ目が入った五層目の巨大魔剣の壁が自重に耐え切れずに折れた音であった。
巨大魔剣の向こうの木場が心なしか勝ち誇ったような顔をしている。
「丁度五分だね」
「お前の勝ちでいい」
初見で先程の攻撃を防ぎ切った木場にシンは勝利を譲る。特訓なので本来ならば勝ち負けなど無いのだが。
そんなことなど些細な問題と言わんばかりに、木場は照れくさそうに笑い、シンは視線を下げ見ようによっては悔しそうにしているように見える。
まるで青春の一ページのような光景だったが――

『誰が本気でやり合えって言った！　特訓だっつってんだろうがっ！』
――アザゼルの怒号が響く。二人は納得しているようだが、本来の目的から大きく逸れているのでアザゼルは怒るのも無理はない。
『ちょっと来いお前ら！』
アザゼルが映る魔法陣前に呼び出され、そこからアザゼルの正論に次ぐ正論のお叱りを受ける。
木場は戦いの熱がすっかり冷め、頭も冷静になったのか今までのことを振り返って『やってしまった……』という表情で反省しながらアザゼルに叱られているが、シンの方はいつもの無表情で反省しているのかすら分からない。
「何かシュールな光景ですね」
「うふふ。私は新鮮な感じがしますけどね」
魔法陣はレイヴェルが展開しているので、彼女の前で説教をされているシンと木場の姿は一誠の言うようにシュールであり、普段は優等生な二人が怒られていることは朱乃の言う通り新鮮でもあった。
『――反省しておけよ？　お前ら……？』
「はい」
「はい……」

　アザゼルの説教は回りくどいことや嫌味っぽいことを言わない合理的なものであったので短く済んだ。ただし、内容はきついものだったので木場は精神的に疲れた表情をしている。
「――それでこの後どうするのですか？　間薙様が信用出来ないので特訓をお止めになるのですか？」
『まあ、それは――』
「アザゼル様がご立腹になるお気持ちは良く分かります。ですが、私はイッセー様のマネージャーです。ここでイッセー様だけ特訓を受けずに中断されるのは賛成しかねます」
　雰囲気的に中断しそうな流れであったが、ここでレイヴェルが待ったを掛けた。
「先程のこともあって信用出来ないという気持ちがあるでしょうが、ここは敢えてイッセー様との特訓を行い、間薙様の名誉挽回を」
　反省を言葉ではなく行動を見させるというレイヴェルの提案に、アザゼルは顔を顰める。
『それっぽいことを言っているが、単にイッセーとシンが戦っているのを見たいだけじゃないのか？』
「――まさか」

図星であった。先程のシンと木場の戦い。悪くはなかった。寧ろ良いとレイヴェルは思っている。だが――

（物足りない……）

――と感じている自分も居た。どうにもバイオレンスな戦いで興味を持ち、もっとバイオレンスな戦いで興奮を覚えてしまったせいでレイヴェルの趣味趣向はやや偏ってしまっている。

『……まあ、お前さんの言っていることは別に間違っちゃいねぇ。ここで中断するのも締まりが悪い。とはいえ俺たちが勝手に決めても当の本人にやる気が無いとなぁ』

アザゼルの視線が一誠へ向けられた。

「朱乃さんと木場がやったのに、俺だけやらないというのも……」

自分だけ免除されるというのも疎外感を覚える。苦しいことや痛いことを積極的に求めてはいないが、それでもやれるのならやりたいというのが一誠の意思である。

「――ということですが？」

『分かったよ。そう言うのなら続ければいい。ただし、また同じようなことになれば、俺は今すぐ仕事を放ってお前たちを殴りに行くからな……？』

圧を込めて釘を刺す。

「俺はそんなことしませんって。それで俺の特訓内容はどんなのですか？」

朱乃も木場も何かしらの枷があったので、一誠にも何かを課せられると思っていた。
『お前はそんなに器用じゃないし、やれることが決まっているから、やることは簡単だ……シンと殴り合え』
「……キャンセルって出来ます？」

問題、製造

「念の為にもう一度確認させて下さい。俺、これから何をすればいいんですか？　アザゼル先生」
『シンと殴り合い』
「何でそうなるんですか!?」
　再確認してみたが内容は変わらない。一誠は頭を抱える。
「朱乃さんと木場は如何にも特訓っぽい感じだったのに、どうして俺だけそんな野蛮な感じなんですか!?　理不尽だ！　差別だ！　依怙贔屓だ！」
『やかましいぞ。お前はほら、あれだ……』
「あれって何ですか!?」
『殴り合い以外の才能あんまり無いし……そこ以外伸ばそうとすると何百年も掛かる』
　自覚していることだが、改めて言われると一誠はショックであった。
「お、俺だって色々な技とか開発していますよ！」
『『洋服崩壊』や『乳語翻訳』のことか？　エロ方面の才能に関しては太鼓判を押してやるよ。でも、そこ伸ばしてどうすんだ？　放っておいても勝手に伸びていくだろ？　と

いうか中級悪魔試験には関係ないだろうが。試験官にセクハラすんのか？　アウトどころか出禁になるぞ』

悔しくて反論してみたが、ぐうの音も出ない程の正論による強烈なカウンターを浴びせられてしまい、完膚なきまで叩きのめされてしまった。

最早、反論の余地など無く特訓を行う前から死んだ目になりながら、今ある現実を一誠は受け止めるしかない。

「……因みに条件ってありますか？」

『禁手は当然禁止だ。ドラゴンショットもダメだ、それに関連する技もな。『赤龍帝の籠手』は使っても良い。これは今度の中級悪魔試験での制限でもある』

禁手使用禁止は聞かされていたが、ドラゴンショットなどの技も使用不可なのは今初めて知った。

「俺だけ厳し過ぎませんか!?」

『これぐらい枷付けた方が丁度良いんだよ、お前は』

「死んじゃうよぉぉ！　本番前に特訓で死んじゃうよぉぉぉ！」

『特訓で死ぬかよ』

「相手、間薙なんですよ！」

『……特訓で死ぬかよ』

若干語気が弱まったのは一誠の聞き間違いではない筈。
『ちゃんとシンも対等な条件でやらせるから安心しろ。向こうも素手オンリーだ』
「尚更嫌ですよ！　あいつの拳って滅茶苦茶痛いんですよ！　まだ火を吹き掛けられる方がましだ！」
往生際悪く駄々を捏ねる一誠。粘って出来ることならば自分の条件を一つ緩めるか、シンの方に条件を足すかをして欲しい。
「イッセー様」
「レイヴェル……」
助けを求めるように一誠はレイヴェルの方を見た。レイヴェルは慈母の如き笑みで一誠の方を見返している。もしかしたら何か手助けを、と思ったがすぐに違和感を覚えた。微笑んでいるが、何処か張り付けたような印象を受ける。
「頑張って下さい」
「レ、レイヴェル？」
「マネージャーとして応援しています」
「レイヴェル!?」
「さあ、間薙様とファイトです！」
「レイヴェェェルッ！」

期待と敬愛で一誠の退路を断つ。

一誠は木場と朱乃の方も見たが、二人は同情しながらも首を横に振る。

『気が済んだか？　なら準備をしろ』

これ以上足掻いても無駄なのを思い知らされ、一誠は泣く泣く『赤龍帝の籠手』を出して戦闘準備をする。

「ドライグ……色々と痛いかもしれないが、我慢してくれよ？」

『ふ、ふふ……どうせなら強烈なのが欲しいな。記憶が飛ぶくらいの……』

「ド、ドライグ!?」

薬で持ち直しているとはいえ、メンタルが安定しないドライグが不穏なことを零す。頼りになる相棒が若干自棄になっていることに一誠も不安を覚えてしまう。

『大丈夫だ……戦いが始まればちゃんとやる……というか早く戦ってくれ……戦いの中では俺は俺であると確信出来る……』

存在意義が揺らいでいるので危うい域に足を踏み入れかけているドライグ。一誠は後でちゃんと薬を与えようと心の中で固く誓った。

「開始の合図はまたアザゼル先生が出すんですか？」

今まで黙っていたシンが口を開く。

『いや、イッセーの『赤龍帝の籠手』が最初の倍化を告げたら、それを開始の合図にする。

制限を掛けたんだイッセーの好きなタイミングで始めろ』

アザゼルの方を見ながら一誠は少しだけ安堵する。シン相手にゼロからのスタートは厳しいが、一段階だけでも倍化が入っているのなら時間稼ぎくらいは出来る。そこから十秒耐えれば次の倍化が起こり、また時間稼ぎが容易になる。『赤龍帝の鎧』が使用出来ない以上、地道に倍化を繰り返さなければシンとは真っ向から戦えない。

深呼吸をし、精神を落ち着ける。

「……よし！」

『赤龍帝の籠手』の填め込まれた宝玉が輝き、倍化がスタートする。これで十秒経てば一回目の倍化が発動し、特訓が始める。

十秒という限られた時間の中で一誠なりに戦いのプランを組み立てようとし――

「……へ？」

――思考が停止する。

離れていた筈のシンがいつの間にか一誠の目の前にまで移動している。アザゼルに注目している間に距離を詰められていたのだ。

「お、おい！」

一誠が一歩下がる。シンは一歩距離を詰める。

『あー……移動するなとは言っていなかったからな……』

シンの行動にアザゼルは一言足りなかったことに気が付いた。
（こ、こいつ……!?）
無表情で前に立つシンを一誠は信じ難い気持ちで見てしまう。倍化が起こると同時に即一誠を殴れる間合いをキープしている。分かっていたことだが、特訓であってもシンは容赦も遠慮もなかった。
（ど、どうする!?）
何かを考えるべきなのだが、シンが目の前に居るというプレッシャーのせいで考えが上手く纏まらない。それも計算して距離を詰めたのだとしたら大成功と言える。
焦っても時間は過ぎていくだけ。一誠の体内時計が間もなく十秒に達し最初の倍化が起こることを告げている。
焦る。迷う。だが、こうなってしまった以上一誠がやれることは一つしか残されていない。
「――やるしかねぇか」
『Ｂｏｏｓｔ！』
現状を受け入れる、もとい開き直った瞬間に倍化が発動して一誠の力が二倍になる。そのタイミングでシンは一誠の顔面目掛けて拳を繰り出す。
一誠は頭を下げ、シンの拳の下に潜り込んで紙一重でそれを躱す。だが、シンは一誠

のその動きを予測していたのか俯いた顔に膝を突き上げてきた。
「うおっ!?」
背骨の可動域限界まで上半身を逸らし、これもまた回避。突き上げられた膝を巻き起こす風圧が顎に触れただけで冷や汗が噴き出す。
シンの二撃を辛うじて回避した一誠だったが、無理な体勢が躱したせいで体が仰向けに倒れていく。シンの前で倒れたのであれば、立ち上がる前にそのままボコボコにされかねない。
「こ、のっ!」
地面と上半身が平行になるまで傾き、足裏が地面から離れそうになる。そうなる前に一誠は自分の方から足を地面から離す。ただし、強く踏みつけることによって。
不格好な後方宙返りをし、一誠はシンから離れる。距離にすれば五メートル程。あって無いような間合いだが、立て直すには十分。
「ととっ!」
ふらつきながらも一誠は両足から着地出来た。初めての宙返りを成功させたのは自分でも奇跡だと思ってしまう。同じことをしろと言われたら出来る気がしない。
体勢を直しながらも一誠の視線はシンに固定されている。シンは一誠が後ろへ跳んだのを見てすぐに走り出していた。

奇跡のような宙返りを披露しても稼げた時間は二、三秒程度。しかし、シン有利の流れを断ち切れたことは大きい。

シンが踏み込み、大振りの拳を繰り出す。一誠は左腕を盾のように前へ掲げ、右手を後ろに当てて支える。

シンの拳が左腕の『赤龍帝の籠手』に打ち込まれる。素手を躊躇無く金属に打ち込み、たわんだ音が鳴る。

一誠は目を見開きながら両腕を通り抜けていく衝撃と痛みに耐える。声をだしそうになるのを息を止めて無理矢理我慢する。

両腕でシンの拳を防いだ一誠だったが、何かおかしいことに気が付いた。

（あれ？）

シンは拳で叩いたと最初思っていたが、打ち付けられたシンの手が拳の形をしていないことに気が付く。指を曲げず逆に伸ばした掌打の形。

一誠の背筋に悪寒が走る。接近戦に於いて理屈じゃ分からない痛みを与える拳だけがシンの怖さではない。引っ掻く、掴む。この単純な行為ですらシンがやれば結界を引き裂き、ドラゴン由来の装甲すら罅割れる、という脅威に変わる。

押し当てられていたシンの手が籠手を掴む。その指先が籠手に文字通り食い込む。

（やっべぇ！）

何かしないとシンはすぐに次の行動に移ってしまう。何をするべきなのか、と自問したときにシンは腕を振り上げようとする。

このまま地面へ叩き付け、止めを刺して来る数秒先の光景が一誠の頭の中で鮮明に描かれる。

（このまま終わってたまるか！）

シンと戦うのを嫌だ、嫌だとごねていた一誠だが、だからといって何も良い所を見せずに終わりたくない。朱乃も木場もカッコいい所を見せてくれた。一人だけカッコ悪いまま終われる筈が無い。

そして、何よりも――

（こいつの前でダサいままで終われるかっ！）

――戦友でありライバルとも思っているシンに良い所をまだ見せていない。

シンは腕を振り抜こうとし、感じていた重さが急に無くなる。すっぽ抜けたことは分かったが、納得は出来ない。そうならないように指先が突き刺さるぐらい強く握っていた筈である。

シンが一誠の左腕を見る。そして、納得がいった。

「――やるな」

つい褒めてしまう。一誠の左腕は『赤龍帝の籠手』ではなく生身の腕に戻っていた。

一誠がやったことは至って単純である。神器を解除することにより神器の厚み分の隙間が生じ、その隙間がある内にシンの手から腕を引き抜いたのだ。

一誠の狙い通り左腕を解放することが出来たが、その分大きなリスクが発生する。一誠はすかさず『赤龍帝の籠手』を再装着する。そして、倍化を始めた。『赤龍帝の籠手』を一旦解除してしまったので、倍化もゼロから再スタート。

一誠はこれから十秒間、無強化状態でシンと対峙しなければならない。ただ決着を先延ばしにしただけか、それとも逆転の布石となるか。それはここからの行動によって決まる。

（早く早く早く早くっ！）

十秒が異常に長く感じる。当然ながらシンは悠長に待ってなどくれない。

（来るっ！）

シンの拳が放たれる。強化無しの一誠の視点だと、空気の中に拳が溶け込むような捉えられない速度であった。

（くそっ！）

咄嗟に左腕を盾にする。さっきと同じような行動であったが特に考えがあって行ったことではない。無意識の内に最も頼れるものを使ったに過ぎない。

しかし、行動は同じであっても結果も同じとは限らない。

無強化の一誠の行動はシンの動きに比べれば遅い。だが、それ故にギリギリまで引き付けるような形になった。そのタイミングで盾にする筈であった左腕が、シンの腕の側面に当たる。横から押されたことでシンの拳の軌道が逸れ、一誠の顔横を通り抜ける。鼓膜を打つような風切り音を間近で聞きつつ、偶然にもシンの攻撃を捌くことが出来た一誠。

（まだかっ！）

十秒が、たった十秒が果てしなく長い。今の偶然で稼げた時間は三秒にも満たない。すぐにシンは次の手を打ってくる。

頭を働かせては間に合わない。一誠はイチかバチに賭ける。

思いもよらず攻撃を外されてしまったシンだが、焦ることはなかった。一歩分踏み込んだので既に拳の間合いとしては近過ぎる。シンが取った行動は、杭打ちのような膝で一誠の腹を突き上げること。

まともに入れば腹と背中が張り付く威力。だが、ここでも一誠は魅せる。

膝の軌道に左腕を挟み、尚且つ先に左腕を膝に当てることで最大威力を発揮する前に勢いを殺す。結果、一誠は膝で突き上げられるのではなく後ろへ押される程度で済んだ。

しかし――

（いってええ！）

今すぐにでも左腕を振って痛みを紛らわせたくなる衝動に駆られる。骨まで響く痛み。拳だけでなく脚からもダメージ以上の痛みを受ける。

（どうなってんだこいつの手足は⁉　本当に全身凶器だな！）

目や体からビーム出すし、口からは火や氷の息を吐き、おまけに手足は防御を貫いてくる。一誠の思っている通り体そのものが凶器と変わらない。

そんな生きた凶器が接近し、殴り掛かってきている。

プレッシャーはある。だが、一誠は落ち着いていた。不格好とはいえシンの攻撃を二度も防ぐことが出来た。一回目は偶然だったかもしれないが、二度目は自分の直感を信じて防げた。二度続けば偶然は薄れ、僅かな自信が芽生える。

（いける！　……かもしれない！）

今までシンとは何度も手合わせをしていた。そんな中で得た経験が一誠にシンの次なる行動を予測させる。一誠には何となくだが見えていた。シンの拳が狙う先を。

頬の辺りにヒリヒリとする感覚が生じる。自分の直感を信じるのならばシンの拳はここを狙っている。

シンが拳を突き出す前に一誠は腰を落とす。動いた直後に風圧が真横を通り過ぎ、耳の縁に灼熱感が生じる。シンの拳が掠めていったことによるもの。先に動いたつもり

であったが実際は紙一重の判断であった。

（これは……!?）

この回避はシンですら予想外のことであっただろう。その証拠に一誠の目の前にはがら空きとなったシンの無防備な脇腹が見えている。もう少し倍化の時間に到達する。それこそ今から攻撃を繰り出し、脇腹を打つぐらいのタイミングで。

（やるか！）

最高の反撃の好機。一誠の中で闘志が燃え上がる。目の前にある一矢報いるチャンスに一誠は全力を注ぎ込もうとする。

その瞬間、燃え上がった闘志が一瞬で鎮火する悪寒が一誠の背筋に走った。

見ている。攻撃を躱されたシンの目は一誠を捉えている。感情を映さない瞳が揺らぐことなく一誠を凝視している。

（やったらやられる！）

その目を見て一誠は確信する。当てることは出来るだろうが、その瞬間に特訓終了となる痛過ぎる反撃が来る。冴えている一誠の直感が痛々しい未来を幻視させ、高揚感を抑えると同時に一誠には冷静な判断力を与える。

突き出されたシンの拳がそこから裏拳に派生し、側面からハンマーのように振るわれる。一誠は仰け反って裏拳を回避。直感に従い、動きを止めたことが功を奏した。

（やれてる！）

回避に関しては絶好調の一誠。日頃の努力が今のような形で実るとやはりテンションが上がってくる。

『Ｂｏｏｓｔ！』

そのテンションを後押しするように倍化の時間に到達。ゼロからのスタートで倍化まで繋げることが出来た。

接近戦に於いてはシンや木場の方が格上だと自覚している一誠にとってその事実は自信となる。想いの力で神器は力を増す。テンションが上がり続けている今の一誠だと最初の倍化であっても二、三回倍化を行ったぐらいまで『赤龍帝の籠手』の力が増していた。

今度こそ反撃を行う一誠。左腕が唸り、シン目掛けて放たれようとする。

「ぐっ!?」

しかし、そうなる前に一誠は呻く。攻撃をする直前、シンが伸ばした足が一誠の左拳に打ち込まれていた。シンの足裏が一誠の左拳を押し込む。

「こ、のっ！」

そんなこと知ったことかと言わんばかりに『赤龍帝の籠手』から赤い魔力が噴き出し、それをブースターにして一気に加速。シンの足を押し返す。

が、シンは『赤龍帝の籠手』から魔力が噴射された段階でそうなることを読んでおり、拳が振り抜かれる前に後方へ飛んで空振りさせた。

アッパーカットの姿勢となりシンに対して無防備を晒してしまうが、一誠の予想に反してシンは追撃してこない。三、四メートル離れた位置で一誠を観察するようにジッと見ているだけであった。

（来ないのか？）

疑問に思いつつも体勢を立て直す一誠。構える時間を貰えたことは有り難かったが、相手の意図が読めないのは気持ちが悪い。

（もしかして……警戒しているのか？）

運や偶然も絡んでいたがシンの攻撃を三度防ぎ、その上で反撃もされようとしていた。禁手抜きとはいえ、まだ一段階しか倍化が入っていない一誠からの予想を上回る行動に戦い方を考え直している可能性が出てくる。

（そのまま警戒し続けてくれ）

時間が経過すれば次の倍化が起こる。そうなればまた一誠の力が倍になる。シンもそのリスクを承知で時間を消費し戦い方を考えていると思われる。

『相棒。恐らく次の倍化が起きたら仕掛けてくるぞ』

シンと一誠の戦いを黙って見守っていたドライグが一誠に助言を送る。

（俺もそんな気がしてた）

何となくシンならばそのタイミングで来るだろう、と考えていたが同意見のドライグの後押しによりほぼ確信する。

『Ｂｏｏｓｔ！』

二回目の倍化。それが次のラウンド開始の合図。

（来る！）

一誠の予想通りシンは素早く前へ踏み込み、右拳を大きく振り上げる。一誠は前頭部にヒリヒリとした感覚が起きているのか感じ取った。

シンが拳を振り下ろす寸前に一誠はバックステップ。空振りをした瞬間に反撃の一撃を叩き込む。

「――え？」

つもりであったが、一誠は思わず声を出していた。予想とは全く異なる光景を前にした戸惑いが出てしまったのだ。

シンは拳を振り下ろしてはいなかった。振り上げたままの一誠との距離を詰めている。一誠の目と感覚は確かにシンが攻撃するのを感じ取っていた。しかし、一誠がそれを分かっているということは、同時にシン自身もそれが分かっている。シンもまた一誠と何度も手合わせをしている。どう動くかある程度予想は付いていた。

二度攻撃を躱された時点でシンは一誠が直感的に攻撃を回避しているのを悟った。それが分かってしまえばやることは簡単である。

シンが一誠に見せたのはフェイント。一誠はまだ感覚でシンの攻撃を避けているので、本当の攻撃と間違い体が勝手に反応してしまったのだ。

シンのフェイントに騙された一誠が固まっている内に、距離を詰めたシンは折り曲げた脚を持ち上げ、呆気にとられている一誠の胴体に横蹴りを入れる。脚が伸び切る前に入ったので威力はそれ程でもない。しかし、威力以上の痛みを感じる。

その痛みに息が止まる。息が止まると体の動きも止まってしまう。その瞬間、シンは足を捻りながら畳んでいた脚を一気に伸ばす。

「ごはっ!?」

二度目の衝撃が捩じり込まれる。貫いていく衝撃は腹の中身が捩れてしまったのではないかと思ってしまう。

二段式の蹴りで蹴飛ばされた一誠。そのまま倒れるのかと思いきや、膝を曲げながらも耐える。

ここへ来る前に何かを食べていなくて良かった、と脇腹を押さえながら一誠は心底そう思った。もし、腹に何かを入れていたら確実に吐いており、皆の前で醜態を晒していた。

「この、野郎……!」

シンにまんまと乗せられた一誠は頬を歪める。無意識のうちに調子に乗っていたことを反省する。一度、二度通じたかもしれないが三度目が通じるような相手ではない。普段出来なかったことが出来たことで、その辺りの視野が狭くなっていた。

「まだまだ……!」

曲げていた膝を真っ直ぐに戻し、脇腹から手を離す。顔は引き攣り、ぎこちなかったが笑みらしきものを浮かべている。誰が見ても?せ我慢だが、一誠の気力は萎えていない。

『Ｂｏｏｓｔ!』

三度目の倍化。初期よりも戦えるようになったが、それでもシン相手では心許ない。倍化は可能な限り続ける。

無理矢理呼吸を整え、痛みで引き攣る体で構える。冷や汗を流しながら下手くそな笑みを浮かべる姿は客観的に見てもカッコ悪い。しかし、それよりももっとカッコ悪い姿を知っている。

皆の前で戦うことを諦めた姿。一誠はそれだけは決して皆の前では晒さない。

「行くぞぉぉぉ!」

一誠は左腕を振り被り、シンの顔面へ拳を突き出す。シンはそれを紙一重で躱すと同

時にカウンターのショートアッパーが一誠の顎に打ち込まれる。
貫く衝撃が脳を揺らし、視界が狭まりながら火花が散る。
「っこの！」
殴られながらも根性の反撃で仰け反っていた体勢を利用し頭突きを放つ。泥臭い一誠の反撃に対して、シンは同じく頭突きにより応じる。
骨と骨がぶつかる音が鳴り響き、観戦していた木場は思わず身震いをするが、何故か女性陣の方は逆に興奮の吐息を洩らす。
「いってぇな……この野郎……！」
額を突き合わせながら至近距離でシンを見る一誠。額から熱いものが流れ出るのを感じる。だというのにシンの方は流血していない。拳も硬ければ頭も石頭の様子。
間近でシンの顔を見たとき一誠は見つけた。シンの頬に僅かだが擦過傷が出来ている。原因は一つしか考えられない。躱されたと思っていた先程の拳はほんの少しだがシンに触れていたのだ。
積み重ねてきたことは無駄ではない。それが今の戦いを通じて何度も実感出来た。負ける気はしない。それならば――
「勝てる見込みもあるよなぁ！」
再び繰り出される一誠の頭突き。シンは逃げることはせず同じように頭突きで迎え

撃つ。二度目の激突。加減無しの衝突で流石の二人も脳を揺さぶられ、自然と足が後退する。

数歩後ろへ下がった後、二人は立ち止まる。シンは頬に滲む血を拭い、一誠もまた額から流れ落ちる血を拭い捨てた。

『おいおい……特訓であって喧嘩じゃねぇぞ』

戦い方が徐々になりふり構わない形になって行くのを見て、アザゼルは不安視する。

『一旦中断して頭を冷やす――』

「いえ！　ここからです！」

これ以上ヒートアップしないようアザゼルが中断を考えるが、それに待ったを掛けるのはやはりレイヴェルであった。

「戦いで熱が入るのは当然のこと！　問題なのは如何にして自分をコントロールするかですわ！　特訓とはそういうものです！　外野が一々止めて冷静さを促すのは違うかと思われます！」

折角熱くなれる展開になってきたのに邪魔されたくないレイヴェルが声を大にして異議を唱える。

反応と態度から薄々勘付いてはいたが、レイヴェルが少しアブノーマルな趣味の持ち主だと木場と朱乃は理解し、木場は複雑な心境になり朱乃は親近感を覚える。

レイヴェルが抗議したことで中断するタイミングを逃してしまったアザゼル。その間にシンと一誠は距離を詰めて接近戦を開始。

仕掛けたのは一誠。

「うおらぁぁぁぁ！」

気迫の叫びと共に左右の拳を連打。シンはそれを巧みに躱していくが、それだけ。反撃の手は出ない。そうなったのは一誠の迫真の連撃のせい。隙を潰す程の手数によるゴリ押しでシンに反撃をさせないようにしていた。

兎に角、一発が痛くて重いシンに攻撃も反撃もさせない為に一誠が考え出した力技の戦い。体力が尽きる前に良い一発を入れなければ一誠の方が敗北する捨て身の戦法である。

配分などの後先を捨て、今に全力を注いだ連打。単純だが決して無駄ではない。現に近距離でシンは反撃出来なくなっている。

一誠の体力が尽きるまで回避に専念しているのかもしれないが、今の一誠の戦い方には一つメリットがある。

『Ｂｏｏｓｔ！』

倍化が入り一誠の手数が更に増す。攻撃の最中にも倍化は続いているので時間を掛けるとその分一誠も強くなる。

拳のキレが増し、砲弾のような拳打が一呼吸する間に数え切れない程放たれる。だが、シンはそれすらも最小の動きで回避し続ける。

絶えず攻撃し続ける一誠に対しシンは回避を繰り返すが見ている内にシンが全く手を出さないことに違和感を覚える。回避に専念していると言えばそれまでだが、見ている木場たちからするとシンの回避には一種の攻撃性のようなものが感じられた。

「……容赦ないなぁ、間薙君」

木場はシンの冷徹な表情を見て意図に気付く。シンは敢えて一誠の戦い方に付き合い、持久戦を始めたのだ。一誠のスタミナが尽きるその瞬間まで回避し続ける。手を出さない代わりに当たらないというプレッシャーで一誠の精神を殴り付けている。

木場たちの前で戦いは加速していく。倍化により一誠の力は上昇し、拳の速度は影を追い抜きそうなぐらいに高まる。それですら避けるシンだが、数発に一発だけ体を掠るようになっていた。

僅かな前進。このまま更に突き進むかと思われたが、そこから先が果てしなく遠い。掠るだけに留まり、クリーンヒットは無い。目の前に居る筈なのに先が見えなくなりそうな程遠いシンへの一撃。それによる精神的な重圧が一誠の体力の消耗を激しくさせる。

遠いのか近いのか分からなくなる差。だが、そんな苦難に反して一誠の口角は自然と

上がる。
友人との戦い――というより競い合うこと。勝てば嬉しい、負ければ悔しい勝負。相手と自分の差。今までと比べての自分の成長。刻一刻と変化する勝負の過程。それらを纏めて一誠は楽しんでいた。
その様子は見ている者たちにも伝わっている。
「……赤龍帝、楽しそう。何故？　不思議」
『まあ、そういう心情があるんだよ。やり合っている当人たちにしか分からないがな』
特訓という枠からは少し外れているが、これはこれで成長に繋がると思い大目に見る。
『……うん？』
自然に答えてしまったが、あり得ない、あってはならない声が聞こえた。他のメンバーも最初は自然と聞き流してしまったが、少し経つとアザゼルと同じ心境になる。
全てが勘違いであって欲しいと願いながら全員の視線が一点に集中。そこにはしゃがんで二人の戦いを見ているオーフィスの姿。
全員が絶句してしまう。時が止まったような感覚すらある。
『何で居るんだよ……』
ここは二つの意味で簡単には来てはいけない場所である。

瞬間的な衝撃とストレスが強過ぎてアザゼルは蚊の鳴くように小さく、重病人のような震えた声を発した。
「我、赤龍帝とドライグを見ると言った」
『……吐きそう』
ストレスで胃が溶け、そのまま口から吐き出しそうな気分になる。
「ど、どうするのですか？　アザゼル様？」
レイヴェルもこの事態に焦り、アザゼルに判断を問う。
『……て』
「て？」
『撤収ぅぅぅぅ！』
アザゼルの絶叫のような撤収宣言。
『木場！　朱乃！　今すぐシンとイッセーの二人を止めろ！　雷光使っても聖魔剣を使っても構わん！　レイヴェル！　すぐに転移の準備をしろ！　一分以内にここから逃げるぞ！』
焦りながらも指示は的確。木場たちはアザゼルの指示に従い、迅速に行動を開始。
「うおっ!?」
シンと一誠はいきなり間に割って入って来た雷と魔剣により動きを止める。

「朱乃さん、木場、急に何を――」
文句を言い掛けた一誠だったが、そこでオーフィスの存在に気付いた。
「何でいんの!?　ここグレモリー領だぞ!?」
他勢力に気付かれてはいけないオーフィスが絶対に来てはいけない場所である。バレたらと考えるだけで恐ろしい。
「時間がありませんわ！」
「レイヴェルさんが帰還の準備をしてくれているから早く！」
焦る木場と朱乃。シンも一誠も非常事態に即座に動く。
「我、ちゃんと気配を消している」
慌てふためく一同に対して彼女なりに考えて行動をしていると説明をするが――
『馬鹿野郎！　グレモリー領というか、グレモリーにはなぁ！　とんでもなく優秀で怖い番犬が居るんだよ！　小さな違和感でも見逃すと思うな！』
――楽観的な考えにアザゼルが遂にキレて喝を入れた。
「準備出来ましたわ！」
『急げ！』
すぐにレイヴェルの傍に集まり、転移魔法陣が起動。全員地下トレーニングルームから消える。

無人となったトレーニングルームの扉を開ける者がいた。
アザゼルが言うとんでもなく優秀で恐ろしい番犬――
「……誰もいないな」
――セタンタが槍を握り締めながら人を殺せそうな程の鋭い眼で中を確認する。一誠たちが撤収して一分も経たない出来事であった。

◇

兵藤宅へと帰還した一行。そこへリアスが慌ててやって来る。
「皆！　オーフィスが急に居なくなったの！」
「……ここに居ます」
「……何で居るのよ」
焦燥の表情が一瞬で呆然となり、アザゼルと似たようなことを言っている。
『ああ、くそ……ただの特訓で終わる筈だったのに何でこんなトラブルが……お前ら、どっちかそういうのを引き寄せる体質なんじゃねぇか？』
アザゼルが一誠とシンを暗にトラブルメーカーと呼ぶ。
「そう言うアザゼル先生も同じ体質では？」

『はっ、何を言うかと思えば……くそっ！　反論出来ん！』
シンの言い返しに心当たりが多過ぎるせいで認めざるを得ないアザゼル。そもそもオーフィスに関して発端はアザゼルなので尚のこと何も言えない。
『取り敢えず話は後だ。何かしらの言及をされるかもしれないから、今のうちに口裏合わせをしておくぞ』
「どうしてそんなことになるのよ……」
リアスは呆れた様子で顔を手で覆っていた。

◇

「……おはようございます」
翌日、朝から挨拶してきたのは小猫。頬に赤みがなくいつも通りの無表情。
「……ご心配をおかけしました、間薙先輩」
「体調は良いのか？」
そう言うと小猫は少しだけ恥じらう表情となる。発情期で体調不良だったことは彼女にとってすぐにでも消したい記憶である。
「……はい。その……」

小猫が口ごもる。

「……多分ですが、姉様が助けてくれました」

小猫が言うには、昨晩の深夜黒歌が小猫の許に訪れていた。そこに偶然二人の会話を聞きつけた一誠がやって来て、発情期で弱っている小猫の前で一誠を誘惑する挑発をして来た。小猫はそんな黒歌に食って掛かったが、その際に首筋に触れられた。倒れ込んでしまったが、その後に不安定であった体調が治ったとのこと。

「そうか。礼は言ったのか？」

「……いえ」

「言わないのか？」

小猫は複雑そうな表情をする。色々と思うところがある姉故に素直になれない様子。

「……朝食の準備の手伝いがあるので」

小猫は言い訳をして逃げるように去っていく。結局、シンの問いに答えることはなかった。

「んふふふ。小猫は相変わらず頑固だにゃん」

二人のやりとりを見ていた黒歌が廊下の陰から音も無く現れる。

「心配する子が沢山居たんだから、せめて迷惑を掛けたことぐらい詫びたらいいのに。フェニックス家のお嬢さんだったり貴方だったり」

黒歌の大きめな独り言。シンは警戒しているので最初から返答を期待していない。
不甲斐ない妹への愚痴を零し、一人満足した黒歌は朝食へ向かおうとするのだが――
「ありがとう」
「……にゃん？」
――すれ違い様に言われたシンの礼の言葉に黒歌は足を止め、驚きに満ちた表情となる。
「きゅ、急に何を……」
「感謝しているから言っただけだ」
シンは固まっている黒歌を余所に歩き出す。相変わらず態度は素っ気無い。
「何処かの素直になれない似た者姉妹とは違って言うべきことは言う」
背中越しにそれだけ言うとシンはさっさと行ってしまう。
シンの言葉を聞いた黒歌は、恥ずかしそうな、悔しそうな、嬉しそうな、色々な感情を混ぜ合わせた彼女らしくない複雑な表情をしてその背を見送るのであった。

受験、試験

中級悪魔への昇格試験が明日に迫っていた。木場と朱乃は普段通りであったが、一誠の方はレイヴェルが用意してくれた資料を片手に頭を掻き毟りながら暗記に勤しむ。

事前に行った模擬テストは十分合格の範囲内だったが、元々、試験という言葉に苦手意識を持っている一誠はそれでもまだ不安であったらしくギリギリまで頭に詰め込めるだけ詰め込む。

珍しく勉強熱心な一誠をリアス、アーシアは微笑ましく眺める一方で構ってくれないことが寂しいのか、邪魔にならないよう一誠の集中が途切れたタイミングでやや過激なスキンシップを行い一誠の気力を高める。やり過ぎないようにレイヴェルが目を光らせているのでちゃんとメリハリをつけていた。

試験を受ける当人たちは頑張っているが、だからといって試験を受けない者たちが何もしてないという訳では無い。彼らも彼らで自主練習などをしてその日を過ごしている。

その中の一人であるシンは、昇格試験に専念している一誠たちの代わりにギャスパーと体調不良から復帰した小猫との訓練に付き合っていた。

対峙する小猫とギャスパー。体型が近い二人なので同じ目線で互いの一挙手一投足を凝視している。

「……」

先に動いたのは小猫。足音を立てないように全身の筋肉をしなやかに動かした歩法により地面を滑っているのかと錯覚する動きでギャスパーに接近する。

縮小されていたものが急に拡大されたかのように移動した小猫にギャスパーは驚き、後ろへ仰け反りながら後退。だが、退がり切る前にギャスパーの体は急停止する。

距離を開けようとするギャスパーを逃がすまいと小猫はギャスパーの腕を掴んでいた。そのまま前へ引っ張る――が、ギャスパーの腕が根元から千切れた。

無表情の小猫もこれには目を丸くする。しかし、すぐに違和感に気付く。千切れた腕や肩部分からの出血は無く、断面から覗くのは血や骨ではなく影のような黒。

気付いた途端、小猫が掴んでいるギャスパーの腕が蠢き、大小様々な蝙蝠となって小猫の手から逃れる。

ヴァンパイアらしい体を蝙蝠化させる能力で小猫に一杯喰わせたギャスパー。これでも小猫の目からして驚きの成長だが、成長にはまだ続きがある。

小猫の手から離れた蝙蝠たちは、小猫の顔に飛び掛かり彼女の視界を奪う。群がってくる蝙蝠をすぐに手で払い除ける。遮られていた視界が広がるとさっきまで居たギャ

スパーの姿が見当たらなかった。
蝙蝠化による回避から相手に自分を見失わせるまでのスムーズな繋がり。『僧侶』という特性上接近戦は苦手な筈のギャスパーが『戦車』の小猫を出し抜く。
ギャスパーを見失ってしまった小猫。そのとき、彼女の聴覚が微かな音を捉える。靴が擦れる小さな音。それは力を入れる為に地面を踏み締めた為に発せられたもので、その音から相手は攻撃態勢に入ったことが予測出来た。
小猫は音を頼りに背後へ腕を揮う。相手を牽制する為に放ったものだったが――
「ふぎゃっ!?」
――丁度そのタイミングでギャスパーが突っ込んできており、顔面中央にその拳が入った。自分から小猫の拳に殴られに行くという何とも器用な自爆を見せながらギャスパーは仰向けに倒れていく。
「……」
小猫は困惑した様子でトレーニングを見守っているシンの方を見た。シンは呆れたように小さく息を吐く。同じく観戦していたピクシー、ジャックフロスト、ジャックランタンはケルベロスの上でケタケタ笑っていた。
「休憩だな」
シンのその言葉でトレーニングは一旦中断され、休憩に入る。

「あうぅぅ……」
ギャスパーの顔にシンの手が翳され、その手から放たれる治癒の光によりギャスパーの鼻の赤みが薄れていく。治療中ギャスパーは情けない声を洩らしていた。
「回避は良かったが、攻撃はまだダメだな」
「はいぃぃ……全然ダメでした」
近接戦でもある程度戦えるようになるのがギャスパーの目標なのだが、回避の方はシンが言うようにヴァンパイアの能力を使うことでいい線をいっているが、攻撃の方はまだ腰が引けていた。
さっきも小猫の背後に回り込んだまでは良かったのだが、一瞬攻撃を躊躇してしまったことで自爆という残念な結果に終わってしまった。
「まあ、塔城に一杯食わせただけでも上等だ」
「で、でも、あ、あれは偶々ですぅ。小猫ちゃんの体調もまだ良くなかったみたいですし……」
シンが褒めるとギャスパーは謙遜しつつ、小猫の体調が万全でなかった為だと小猫をフォローする。すると、小猫は何故かギャスパーの頬を摘まんだ。
「こ、小猫ちゃん?」
痛みは無いが急な行動に驚くギャスパー。小猫を見ると彼女は少しだけ頬を膨らま

せていた。
「……ギャー君、良く見えている。……生意気」
小猫が膨れっ面になっている理由が分からずギャスパーは困惑してしまう。
「確かに動きにキレがなかった。鈍ったな、塔城」
シンも小猫が病み上がりで動きに精細さを欠いているのが分かっていた。だが、それは小猫の動きが良く見えているからこそ分かること。以前のギャスパーならば気付かなかったことであり、ギャスパーが戦う者としてレベルアップしていることが良く分かる。
小猫がギャスパーの頬を摘まんだのは、ギャスパーが成長していることへの喜びと若干の嫉妬が混ざった故の行動である。
「……すぐに取り戻します」
ギャスパーの頬を引っ張るのを止め、真剣な表情でシンに決意を伝える。
小猫は少し焦りを覚えていた。肉体が未成熟な段階で発情期に入ったのは、一誠の周りに女性が増えそれに焦燥感を覚えたからであったが、その間の不調の間にシンとギャスパーがそれぞれ新しい段階に入っていることにまた焦燥感を覚える。
ギャスパーは先程のトレーニングで分かるように接近戦の技術が確実に上がっている。シンと早朝特訓している成果が出ており、小猫との差を徐々に縮めてきている。

シンの方は今まで見せたことがない治癒能力を使っている。戦闘だけでなく補助まで出来るとなるとこれからの戦いで更に重宝されるだろう。

小猫の長所は腕力と耐久力だが、それは『戦車』の特性によるもの。猫?として気の扱いや仙術などの特長があるが、小猫自身はまだ未熟と思っている。

迷惑を掛けた分役に立って汚名返上をしたい所だが、それを行うにはまだ力が足りない。

もっと特訓の量を増やして自分を追い込まないといけない、と考えたとき小猫は視線を感じた。

ギャスパーの治癒を終えたシンが無言で小猫を見ている。そして、無言のまま人差し指と親指を開閉させるジェスチャーを見せた。

そのとき、小猫の頬に過去の痛みが走り反射的に頬を押さえてしまう。

焦りのあまり一人で無理をした挙句に倒れてしまったときの記憶とそのときに受けたシンのお仕置きの痛みが鮮明に蘇ってくる。

シンは小猫が何を考えているのかを読んで牽制をしてきた。

「……一人で突っ走ったりはしません」

あのときのことはちゃんと反省していることを伝えると、シンはジェスチャーを止める。

二人のやり取りを見ていたギャスパーは首を傾げる。現場を見ていた訳ではないのでシンのジェスチャーが何を意味するのか分からずにいた。
「……でも、これ以上迷惑を掛けたくないんです」
周りは気遣ってくれる。しかし、その気遣いの分小猫は申し訳ない気持ちになる。恩に報いるにはどうしたらいいのかと考えると、やはり鈍った分以上の力を付けて皆を助けたいという答えしか出なかった。だが、生憎小猫の気、仙術などはリアスたちやアザゼルにとって専門外であり、技術と知識を深めるのは困難だと思われた。
「……少しでも早く強くなりたい」
「ぼ、僕も手伝いたいけど……小猫ちゃんの役に立つにはもっと専門的な知識が必要だよね……」
「……専門的？」
そこで小猫は気付き、渋面となる。
「ご、ごめんなさいいいい！」
小猫の表情が変わったのを見て、ギャスパーは自分の発言が彼女の気分を害したと思い即座に謝る。しかし、それはギャスパーの早とちりである。
「……大丈夫。寧ろ、ありがとう」
「へ？」

小猫から逆に礼を言われてギャスパーは困惑した。
ギャスパーの言葉からヒントを得た小猫。しかし、彼女は渋面のまま動かなくなってしまう。何か迷っている様子。
「ど、どうしちゃったんでしょう？」
「さあな」
シンは何となく察していたが、何か言うつもりは無い。
「ほらほら～。もう休憩はいいでしょ～」
ジャックランタンがトレーニングの再開を急かす。
「ヒホ！　次はオイラたちとだホ！」
「やっちゃうよー」
ケルベロスに跨った状態でやる気を見せるピクシーたち。乗り物にされているケルベロスは何とも言えない表情をしている。
「ピ、ピクシーちゃんたちとですか？　一体どんな？」
「追いかけっこ」
「追いかけっこ？」
遊びの延長線上でやるトレーニングかと思ったが、次の瞬間牙を剥き出しにしたケルベロスの顔を見てその甘い考えはすぐに吹き飛んだ。

「走レ。噛ミ砕カレタクナケレバ」
「ひ、ひいいいいい！」
　その言葉に走り出すギャスパー。一秒程間を置いてからケルベロスが後を追い掛ける。
「グルルルル！　ノロマガ。丸カジリニナリタイノカ？」
　ガチガチと牙を鳴らしながらギャスパーを追い詰め、ギャスパーも迫る恐怖に叫びながら全力で逃げ続ける。
　体力が尽きる寸前まで終わらない地獄の体力作りトレーニングが始まった。
「速い速ーい！」
「ヒッホー！」
「頑張れ～」
　ケルベロスの背に乗っているピクシーたちがはしゃぐ。ギャスパーにとっては地獄だが、ピクシーたちからすれば遊びの延長線らしい。
「……先輩。私、行きます」
「そうか」
　決断した小猫にシンは、何を決断したのか追及することはせずその一言で済ませる。
「……ギャー君のことは任せました」

「死ぬことはないから安心しろ」
それに近いことにはなるのか、という疑問が生じたが小猫はシンを信頼してこの場を去る。
「ひぃぃぃぃぃ！　死んじゃいますぅぅぅ！」
ギャスパーの悲鳴を背中で聞きながら。

◇

「にゃ？」
一誠宅のリビングでくつろいでいた黒歌は、ジッと自分を見ている小猫に気付き、ソファーから体を起こす。
「白音の方から来るなんて珍しいにゃん」
黒歌は小猫を揶揄うように笑うが、小猫の方は渋い顔をしたまま何かを言い掛け、口を閉じ、また口を開くという動作を繰り返す。
黒歌は小猫の奇行に首を傾げる。
「あの……お邪魔なら席を外しましょうか？」
フェンリルを傍に従えているルフェイが空気を読んで二人きりにしようとする。

「……大丈夫です。すぐに済みます」
「そ、そうですか……」
本当は場違い感があったので逃げようとしていたのだが、小猫自身に逃げ道を塞がれてしまった。
「さっきから何がしたいんだにゃん？　言いたいことがあればさっさと言うにゃん」
痺れを切らした黒歌が急かす。小猫は眉間に深く、深く皺を刻んだ後、覚悟を決める。
「……い」
「え？　何て言ったにゃん？」
黒歌の猫耳ですら拾えない小さな声。思わず聞き返してしまう。
「私に……」
「私に？」
「……仙術を教えて下さい」
「……はい？」
小猫から仙術の教えを乞われるという予想出来なかった事態に黒歌は固まった。自分でも今の姉妹仲は最悪だと分かっているのに、小猫の方から歩み寄ってくるような発言に黒歌は動揺してしまう。
「きゅ、急に何を言い出すのよ……」

語尾をつける余裕もなく動揺を隠せないまま小猫の真意を問う。
「……」
「……」
互いを見合うが言葉が出て来ない。言いたいことがある筈なのに素直になれずもじもじしている。離れるタイミングを完全に失ってしまっていたルフェイは実に気不味そうに二人の様子を見ていた。
その傍で座っているフェンリルは、沈黙している一同を『何をやっているんだ、こいつらは……』という呆れを含んだ眼差しで静観していた。

◇

試験当日。一誠たちは駒王学園の制服に身を包み、兵藤家の地下に集まっていた。最早、制服がユニフォームと化しており、レーティングゲームなど気合が必要な場面で着ていると気持ちが引き締まるとのこと。
試験会場となる昇格試験センターには一誠、木場、朱乃、レイヴェルの四人が向かう。リアスとアザゼル、数名の部員もまた冥界まで付きそうとのこと。
居残りとなるのはシンとその仲魔たち。外出が出来ないオーフィス、黒歌、ルフェイ、

そして事情により不在のギャスパーである。
「お前は付いて来ないのかよー、薄情だなー」
　居残ることを告げたシンに一誠は不満を言う。
「俺に応援されたかったのか？　そんなに心細いのか？」
「そこまで言ってねぇよ」
「ならさっさと行け。寂しがり屋」
　シンに軽くあしらわれ、一誠は悔しそうに表情を強張らせる。
「こっちのことは任せたぞ。オーフィスから目を離すな」
　アザゼルが来て、オーフィスのことを頼む。
　前回の乱入はオーフィスの興味対象である一誠とシンが同じ場所に居たことが原因だと判断したアザゼルは、今回シンの方をオーフィスの傍に置いておくことにした。
「何かあったらすぐに連絡しろ」
「――対処出来るんですか？」
「……全力は尽す」
　アザゼルの何とも頼もしい発言。眉間に皺が寄らず、目が逸らされていなければもっと頼もしかったであろう。
「あれ？　そういえばギャスパーはどうしたんですか？」

キョロキョロと見回し、一誠はギャスパーの不在に気付く。尊敬している先輩たちの出発に姿を見せないのは、ギャスパーの性格からして不自然なので当然の疑問であった。

「あいつなら一足早くここで転移して、グリゴリの神器研機関に行ったよ」

ギャスパーが一人でそんな場所へ向かったことに一誠は驚く。シンは昨日の時点でギャスパーから話を聞いていた。

「お前、知ってたのか？」

「ああ、直接聞いた」

シンがギャスパーと昨日トレーニングをしていたのを一誠は知っている。

「言えよー」

「ギャスパーなりにカッコつけたかったんだ――汲んでやれ」

ギャスパーが一誠と顔を合わせず一人でグリゴリの研究機関へ向かったのは、次に会うときに一回り大きくなった自分を見せたいという思いなのかもしれない。

「お前は知ってんのになー」

自分とシンとの差に少し不満を見せる。可愛がっている後輩なだけにシンの方に心を開いている感じを若干嫉妬している。

「礼儀みたいなものだ。あまり気にするな」

トレーニングに付き合ってもらっているシンに対して何も言わずに行くのは失礼と思ったのか、昨日のトレーニングの終わりに研究機関に向かうことを教えられた。
『待っていてください！　グレモリー眷属として恥じない男子になってきます！　リアス部長やイッセー先輩たちを守れるぐらいに強くなってきます！』
あのときは普段の気弱なギャスパーではなく決意に満ち、男らしい表情と意気込みを見せていた。
「――まあいいや。ギャスパーも頑張っているんだから、俺も頑張らないとな。せめて昇格試験に合格しないと格好がつかない」
後輩の頑張りに触発され、一誠もまた試験に対して気合が入る。
「合格したら夕飯ぐらいは奢ってやる」
「その言葉、忘れるなよー」
素っ気無いがシンらしい応援を貰い、一誠はニヤリと笑いながら転移魔法陣へ向かう。
「待って」
そんな一誠をリアスは引き留め、傍に寄ると一誠の頬にキスをする。
「おまじないよ。貴方なら必ず合格するわ」
恋人らしい激励を送ると、一誠のテンションは即座に最高潮へ達する。

「はい！　必ず合格します！　そ、そしたら……デートしましょう！」
勢いに任せてデートの申し出までする。
リアスは急なデートの誘いに一瞬目を丸くしていたが、すぐに満面の笑みになって頷いた。
「ええ。しましょう、デート。約束よ」
一誠は仰け反りながらガッツポーズをしている。最高潮かと思われたテンションにはもう一段階上があり、既に合格したかのようなはしゃぎっぷりである。
「おうおう。人前でイチャイチャしやがって。あれ、どう思うよ？」
「未だに二人でデートに行っていないことに驚きました」
「だよなぁ？　スケベな癖に奥手って何狙いって話だよ」
「そこ！　うるさいぞ！」
シンとアザゼルに茶化され、一誠は顔を赤くしながら怒鳴る。リアスと恋人関係になりそれなりの日数が経つのにまだデートへ行っていないことを指摘されての羞恥から。
周りはそんな彼らのやりとりに苦笑していた。
「ほら。さっさと行って、さっさと合格して来い。デートプランを考える時間を確保する為にな」
「はいはい！　分かりましたよ！」

照れを誤魔化すように大声を出し、木場たちが待っている魔法陣に入る。転移の光に包まれて一誠たちは昇格試験センターへ送られた。

魔法陣が空くと今度はリアスたちが魔法陣へ移動。冥界に付いてくが会場までは行かず、センター近くのホテルで試験終了まで待機する予定である。

これは他の受験者に配慮してのこと。

名門のグレモリー家であり魔王の妹であるリアスの知名度は勿論のこと、一誠もおっぱいドラゴンとして知名度は爆発的に広がっている。二人が恋愛関係なのは、衆目の前で告白したので周知の事実。その為、二人の熱愛報道を巡ってマスコミ関係が常に動向を探っている。

今回の試験も既に大勢のマスコミがセンターに待機しているという事前情報が入っている。未来を左右する大事な昇格試験で騒ぎを起こしたくない為の行動である。

「――さてと。そろそろ行きますか」

「何処へ？」

「……もう驚かなくなってきたな。……嫌な慣れだ」

何の予兆も無く現れたオーフィスに、アザゼルは達観したような、全てを諦めたような表情をしていた。

「オーフィス。お前は留守番だ。遊び相手はシンや黒歌たちがしてくれる」

「分かった」
「この前みたいに急に来るなよ？」
「分かった」
「……本当に分かってんだろうな？」
「我、契約は守る」
アザゼルはオーフィスの目を見る。深淵やブラックホールを彷彿とさせる底の見えない瞳。アザゼルのような若造如きではオーフィスのポーカーフェイスから嘘か誠かなど読み取れる筈がなかった。
「因みに何かやりたいことはあるか？」
「トランプ」
オーフィスは手に持っているトランプを見せる。
「そうかい。ババ抜きでもポーカーでも七並べでも好きなだけやりな。遊び相手もちゃんといるしな」
「そうする」
オーフィスはシンの許へ行き、トランプをシンに差し出す。
「我、トランプで遊ぶことを所望する」
シンはそれを受け取り、オーフィスの望み通りにする。

「ああ。分かった」
すると、彼女は音もなく跳び上がり、シンの背に飛び乗る。背負って連れて行けとのこと。
一見すると微笑ましい。しかし、オーフィスの正体を知っている者たちからすれば、自分がもし同じ立場になったとしたらと想像するだけで胃が痛くなる光景である。大量破壊兵器を背負っているのと変わらない。眉一つ動かさないシンを見て、他の者たちは改めてシンの胆力の強さを知る。
定位置のように乗っかってきたオーフィスに溜息を吐き、背中にぶら下げたままシンはオーフィスを連れて行くのであった。

◇

光が消えると一誠たちは既に昇格試験センター内部に立っていた。
「ようこそお出で下さいました。リアス・グレモリー様の御眷属の方々ですね？　話は伺っております」
転移直後の四人を待ち構えていた正装の悪魔。昇格試験センターのスタッフである。
「確認致しますので身分を証明出来るものを御呈示下さい」

ここで呈示するものは二つ。推薦状とグレモリー眷属の印である。一誠は出発前に渡されていた推薦状と印を見せる。印はある魔物の骨を手の平に収まるぐらいにカットし、円形に薄く削り、紅色でグレモリーの紋様が描かれている。グレモリーの魔力が込められているので偽装不可の代物である。

スタッフはその二つを確認すると三人を奥へ案内する。

昇格試験センターはグラシャラボラス領にあるもので、魔王の一人であるファルビウム・アスモデウスを輩出した家である。

冥界各地にも昇格試験センターがあるが、その中でも最も権威があったのはアジュカ・ベルゼブブの御家であるアスタロト家の昇格試験センターであった。

だが、アスタロト家はディオドラの件で失墜。アジュカのおかげで辛うじて最悪の事態は免れたが周りの目は依然として厳しい。今回のグラシャラボラス領の試験センターが選ばれたのもそれが大きく影響している。

魔王を輩出した名門の名も堕ち、今後魔王候補を出す権利も失ってしまったので地道に汚名を返上するしか名誉を回復する方法しかない。

ディオドラが人前に現れることは今後永遠に無いが、その名が風化するその時までアスタロトはじっと耐えるしかないのだ。

シンプルだが丁寧な内装の通路を抜けた先、受付の窓口に到着する。広い空間だが、

それに反して受験者と思われる悪魔の数は少ない。広い場所なので余計にガランとした印象が強まる。

スタッフの説明で窓口にて必要書類事項の記入と受験票の受け取りを行う。それが終わると上階にある受験会場へ向かうこととなる。試験は第一部が筆記で第二部が実技が行われる。

一通りの説明を終えるとスタッフは去って行く。

「何か思ったよりも受験者の数は少ないな」

来る前は受験会場には他の悪魔がひしめき合い、それぞれが牽制して火花を散らしている、というマンガで見たようなイメージがあった。実際はそれぞれ受験対策に忙しく目すら合わせていない。

「そりゃね。昇格試験に挑める悪魔なんて今の冥界では少ない方だよ」

「きっと上級悪魔の試験会場はもっと閑散としていると思いますわ」

「近年は大きな戦争もありませんので、悪魔稼業の契約で大きな契約をとるか大量の契約をとるか、レーティングゲームで大きな活躍をしない限りは推薦されません」

昔みたい戦いで手柄を上げること出来なくなり、その代わりがレーティングゲームになるのは自然の流れ。そんな中で『禍の団』のテロを何度も防いだ功績で昇格試験に推薦された一誠たちは異例である。

「ふーん。そう考えると俺たちって結構特別なのか？」
「その通りですわ！」
一誠の呟きでレイヴェルのギアが何故か一段階上がる。
「特別故に是非とも間薙様にも受けて欲しかったです！　異例は何度も起きないというのに……！　勿体無い！」
昇格試験を蹴ったシンへの不満をレイヴェルがここでぶちまける。今更ここで言っても仕方がないことは承知しているが、それでも折角、魔王からも特例を認められているのに辞退したことは、レイヴェルにとっては不満しかなかった。
「まあ、落ち着けって……」
レイヴェルを宥める一誠。レイヴェルはハッとした表情になり、すぐに赤面する。
「……私、記入する書類を取ってきます」
取り乱してしまったことを恥じ、逃げるように受付の窓口へ行ってしまった。
（うーむ……いまいち性格が分からん）
レイヴェルがマネージャーになってからそこそこの日付が経つが、今でもレイヴェルの性格を把握出来ない。最初のときは如何にも嫌味なお嬢様であったが、次に会ったときには大分しおらしくなり、会う度に態度が軟化しているどころか、こちらに対してかなり敬意を払ってくれる。だが、時折今のように爆発するので面喰ってしまう。マネー

ジャーとしては非常に優秀なのだが。
「そうだ。試験前に君に言っておきたいことがあるんだ」
「なんだよ、改まって」
「君に出会えて良かった」
　木場のストレートな言葉に一誠は固まり、朱乃は「あらあら」と言って微笑を浮べている。
「……お前ってそういうこと平気で言うよな」
「誰にでもではないさ。特別な人だけだよ？」
「いひぃ！　やめろって！」
　嫌そうな表情をしながらわざとらしく身震いする一誠。木場は一誠の反応に普段は見せない子供のような笑みを見せる。
「ははは。でも、紛れもない本音だよ。君や間薙君が居なかったら、きっと僕はここに居なかった」
「そうか？　十分な強さは持っていただろう？　遅かれ早かれ昇格していたと思うぞ？」
「いや、きっとそんなモチベーションなんか無かっただろうね。尊敬する友達に恥じないように、肩を並べていられるように、ってなれたのは君たちの戦い――生き様を見た

からさ」
　木場はかつての自分を振り返り、心からそう思う。打倒エクスカリバーに暗く燃えていた木場は一誠程に熱く生きることは出来ず、シンのように冷静沈着に生きていなかった。中途半端な自分にとっては対極に生きる一誠とシンが眩しく見えた。
　？偽りの無い木場からのストレートな好意に一誠は視線を置き所に困り、挙句明後日の方を見ながら答える。
「そう言われても良く分かんねぇよ。まあ、その……俺も一緒に合格したいと思っている。……ダチだしな」
　友達は居るが、木場のようなタイプの友達は初めてなのでどうしても照れの方が先に来てしまい最後の方は若干小声になっていた。しかし、それでも今の一誠が出来る最大の誠意は伝えた。
「勿論。どうせなら最上級悪魔まで目指そう。君が『兵士』最強になるなら、僕は最強の『騎士』になる。……間薙君も一緒だったら最高だね」
「あいつ、悪魔じゃないけど何を目標にするんだ？」
「うーん……人間最強とか？」
「いいねぇ。間薙も巻き込んで冥界に俺たちの名を轟かせてやろうぜ」
　大きな目標を掲げ、友情を深める二人。自然と互いに手を差し出し、握手を交わして

いた。
そこに朱乃の手も重ねられる。
「うふふ。熱い友情ですわね。でも、仲間外れは無しですよ？」
「ええ！　皆で合格しましょう！」
中級悪魔になることを誓い合う三人。その様子を少し離れた場所で眺めているレイヴェル。既に書類を受け取っているのだが、グレモリー眷属たちの熱い友情を目撃して頬がだらしなく緩んでしまい、暫くの間ニマニマしてしまう顔を元に戻そうと頬を捏ねていた。

◇

受付を済ませ、二階の筆記試験会場へ向かう一誠たち。レイヴェルは一階でそれが終わるまで待機している。
長机が並ぶ大学の教室のような筆記試験会場に着くと早速受験票に割り当てられた番号の席に座る。一誠は「０１２」、木場は「０１１」、朱乃は「０１０」なので三人並んでいる。
一誠たちが着席すると周囲の受験者たちがざわめき出す。

「あれってグレモリー眷属だよな？」
「聖魔剣の木場に雷光の巫女の姫島……赤龍帝の兵藤か！」
「いや、おっぱいドラゴンの兵藤だろ」
「ああ、そうだった」
『がはっ!?』
赤龍帝ではなくおっぱいドラゴンに訂正され、尚且つそちらの方が正しかったという反応をされ、ドライグが一誠の脳内で喀血したような声を上げる。
フォローをしたいところだが、一誠も筆記試験を前にその余裕が無く、ドライグには悪いが耐えてもらうしかなかった。
レーティングゲームで冥界を騒がせたり、おっぱいドラゴンとしてテレビに出たりなど有名になっているので、周りの視線も嫌でも惹きつけてしまう。
注目されているということは、一挙手一投足を観察される。リアス・グレモリーの眷属として恥じないよう振る舞うべきだと一誠は思い、表情と心を引き締める。
「あんまり肩肘を張らない方が良いと思うよ？」
「普段通りが一番ですわ」
気を張る一誠に木場と朱乃がアドバイスを送る。二人は平常運転だが、その状態でも見るからに凛としている。

「こういう所ではそれが一番難しいんだよなぁ」
試験の空気に若干呑まれていることを一誠は自覚する。気負っているのは自分でも分かるが、一度引き締めたものを中々緩めることは出来ない。
筆記試験開始までの間に無駄な緊張感を取り払おうと気分転換で周囲を見回す。受験者の大半は元人間と思われる転生悪魔。だが、獣人や妖怪、魔物といった人外の転生悪魔も少数ながら居る。合計数は四十人前後とそれ程多くはなく、教室が広く感じる。それだけ狭き門という証明でもあるが。
多種多様な面子だが誰もが筆記試験対策をしている。ここから数分後には全員が筆記用具を握り締めて試験に挑む姿を想像すると思いの外シュールな光景が浮かび上がってくる。
そんなことを考えていると試験官が入室してきた。
「では、まずはレポートの提出からお願いします」
来た、と一誠は心の中で叫ぶ。試験対策の中で一誠が最も苦戦したのがレポート作成である。
予め与えられたテーマについて自分なりの見解を書き示すのだが、悪魔文字が苦手な一誠は辞書片手に悪戦苦闘。読書感想文すら真剣に書いたことがないこともあり、二重の苦しみであった。

出来上がったレポートは、レイヴェルに渡して添削してもらうのだが、初めて書いたレポートが文章の頭から文末まで赤い修正線で書き直されていたのを見たときは唖然とし、レイヴェルに笑顔で「書き直してください」と言われて止めを刺されたのを覚えている。

そこから何度も練習をし、書き直す度に赤い修正線の本数を減らしていった。そして、最終的には修正されなくなった。

今の一誠の手元にあるのは一誠の努力が最も形になったもの。一誠は少し誇らしげにレポートを提出する。

「時間です。開始してください」

レポート提出後、予定時間となり試験官が開始の合図を出す。受験者は渡されていた試験用紙を表に返し、テストが始まる。

一誠は猛勉強の甲斐もありスラスラと止まることなく回答出来ていく。自分でも勉強の成果が出ていることに内心驚きと喜びを感じながら書き進めていくのだが、その動きが突然止まった。

基本問題を解いた先にある社会学の問題。それは最近冥界で起こった出来事などが問題となっている。

『禍の団』に関する問題があり、そこではクーデターに関わった悪魔の名が問題になって

いた。一誠は苦虫を噛み潰したような表情をしながらディオドラ・アスタロトの名を書く。

その次は『乳龍帝おっぱいドラゴン』の問題。当事者なので一誠にとってはサービス問題であった。

難問だったのは『マジカル☆レヴィアたん』の問題。第一クールに登場した敵幹部の名前を答えよ、というファンしか知らないようなマニアックな問題であった。殆ど見たことがない一誠に答えられる筈もなく、空白になってしまう。

続いても『マジカル☆レヴィアたん』に関わる問題であり、一誠は頭を抱えたが問題を読み進めていくうちに表情が明るくなっていく。

問『マジカル☆レヴィアたん』に登場したことがある著名な人物の名を挙げよ。

一誠は迷う仕草を見せた後、回答に『間薙シン』と書いておいた。

◇

筆記試験が終わればいよいよ実技試験となる。場所も体育館のような会場へと変わる。

制服から動きやすいジャージに着替えた一誠たち。他の受験者も各々が動きやすい

服装に変わっていた。
会場で軽く運動をして体を解していると試験官が現れて時間を告げる。
全員が集まると実技試験についての説明を行った。
試験は総合的な戦闘力を見るものであり、負けても即失格にはならない。
武器の使用は許可されているが、対戦相手を死亡させた場合は失格。事故による死亡の場合は試験官の是非によって決まる。
色々と説明をされているが、ようは中級悪魔に相応しい戦い方を見せるということ。
説明を終え、対戦相手の組み合わせ抽選が始まる中、一誠は木場に小声で訊ねる。
「なぁ……良い試合を見せろって言ってたけど具体的に何を見せればいいんだ……？」
「うーん……改めて聞かれると難しいね。まあ、いつも通りのイッセー君を見せたらいいんじゃないかな？」
「俺、ゴリ押しとか殴り合いばっかで魅せる戦い方とかしたことないんだが……？」
「それも突き抜けてしまえば魅せる戦いになりますよ？」
「本当ですか……？」
今までがむしゃらに戦って来た一誠には第三者から評価される戦い方というものがどんなものなのかはっきりと分からないので二人のアドバイスも半信半疑。心の準備が出来ないまま抽選の順番が回ってくる。

抽選用の箱から引き抜いた玉には『４』という数字。木場は『２６』、朱乃は『３２』。番号がそのまま試験の順番なので同じ眷属同士で戦うことはなく、ひとまず安堵する。

そんな安堵も束の間、一誠の番号を呼ばれた。

「は、はい！」

試験官に言われるがまま魔力で描かれたバトルフィールドへ向かう。

「頑張って」

「イッセー君なら大丈夫ですわ」

「おう！」

仲間からの応援を受け、一誠はバトルフィールドに入る。

一誠の相手は中肉中背の見た目は普通の男性。特にこれといったものは感じない。だが、同じ中級悪魔を目指す者同士、油断は出来ない。

「どちらも準備は大丈夫ですか？」

試験官の最終確認に一誠と対戦者は頷く。

「それでは始めてください！」

開始の合図と同時に一誠は『赤龍帝の籠手』を装着。いつもの流れならばここで禁手化のカウントダウンを始めるが、アザゼルから使用禁止を言い渡されているのでやらない。

神滅具を装備した一誠がまず真っ先に行ったのは相手を見ること。対戦相手の表情は強張っており、過度な緊張をしている。一誠も緊張はしているが、動きを制限する程ではない。寧ろ、普段よりも早い鼓動のせいで四肢の末端まで血が巡り、体が温まっている感じがしていた。

対戦相手が緊張を振り解くように先制攻撃。手から大きな火球を放つ。

（相手は『僧侶』か『女王』か？）

魔力による攻撃を見て相手の駒を予測する一誠。攻撃が迫っていても思考に乱れがなく、如何に実戦に対する慣れを見せていた。

（ここはなるべく引き付けて……）

すぐに回避するのではなくギリギリまで待つ。最初の倍化までの時間を稼ぎつつ、相手に一誠の次の行動を見せない為でもある。

火球があと一メートルまで来た所で地面を蹴り、横へ滑るようにして回避。

対戦相手は一誠の動きを見てギョッとしたように目を剥く。対戦者の視点では命中したかと思ったいつの間にか躱されていた。

一誠の動きを見て対戦者は出し惜しみを捨て、その体から冷気を発する。冷気は宙で一箇所に集まり、氷の巨鳥と化す。

「『凍結なる霊鳥（フリージング・アーキオプテリクス）』っ！」

相手も切り札である神器を発動。それに加えて魔力の火球による攻撃も行う。
対戦者が全力で来た。一誠もまたギアを上げる。
「『女王』にプロモーション！」
この試験では『兵士』は『王』の許可が無くともプロモーションを特例として認められている。『悪魔の駒』の作成者であるアジュカ・ベルゼブブでなければ再現出来ない技術。
『女王』にプロモーションしたことで一誠の力が底上げされ、先程よりも鮮明に相手の攻撃が見え、迫っている火球の揺らぎすらも一誠の目は捉えている。
一誠は先程とは違い、火球を避けつつ前へ前進。間髪入れずに氷の巨鳥が来ているが一誠は速度を緩めることなく直進する。
前へ突き進む一誠に対戦者は目を剥く。だが、この後対戦者はもっと驚くこととなる。
一誠は氷の巨鳥から目を離さない。そして、氷の巨鳥と地面の間に人一人通れる程の隙間がまだあることに気付いた。
このまま氷の巨鳥が高度を下げればその隙間は無くなる。
そこから一誠の判断は迅速だった。
脚に力を込め、速度を上げて自分から氷の巨鳥へ突っ込む。氷の巨鳥と接触する間

際、速度を維持したまま体を低くし隙間に滑り込む。頭上を巨鳥が通過すると同時に低くしていた体勢を戻す。
「す、すり抜けた！」
一連の流れをスムーズ且つ素早く行ったことで対戦者にはそのように見えていた。
（うわっ、つべて！）
一誠はジャージ越しに伝わってくる冷たさに身震いする。避けはしたが、巨鳥と一瞬触れてしまっておりジャージの背中には薄い氷が張っていた。
（間薙や木場だったらもっと上手く避けるんだろうなー）
そんなことを頭の片隅で考えながら一誠は対戦者に接近する。
「くっ！」
対戦者は距離を詰められるのを嫌がり、離れようとしていた。一誠はこの時点で対戦者は『僧侶』だと確信する。
（外れたらそのときはそのときだ！）
一誠らしく割り切った後、『赤龍帝の籠手』が告げる。
『Ｂｏｏｓｔ！』
一回目の倍化。一誠の能力が倍になり、距離を詰める速度も上がる。
「速い!?」

一誠の速度に驚愕しながら対戦者は二匹めの氷の巨鳥を創り出そうとする。
（させるか！）
地面を強く踏み付け、割れる勢いで後ろへ蹴る。低く速い跳躍により一誠は対戦者の目の前まで移動する。
「くっ！」
踏み込みの速さに驚きつつも対戦者も慌てることなく火球を生成。このような状況でも冷静に行動出来る辺り中級悪魔に推薦されるだけのことはある。
一誠は火球の射線から離れる為に横へ移動。すると、対戦者の目が一誠を追う。
（ここだ！）
『ＪＥＴ！』
籠手から噴射される魔力による高速の切り返し。対戦者の視線を引き剥がす。対戦者はそこに居る筈の一誠が消えたようにしか見えなかった。
対戦者の視線が追い付く前に一誠は側面へ回り込み、拳を振り上げる。そして、そのまま全力で殴り掛かるのだが――
（あ、あれ？）
――対戦者の反応が予想以上に遅い。あと一秒も満たずに届きそうなのにまだ一誠の攻撃に気付いていない。このままでは無防備な彼に全力の拳を叩き込むことになる。

（だ、大丈夫だよな？）

一誠の心に生じる迷い。このまま殴ったら対戦者が死んでしまわないか、という不安。

実戦でも特訓でも基本的に自分と同等以上の相手としか戦わないので一誠の中の基準は無意識に高くなってしまっている。その辺りを不安に思い、アザゼルは敢えて試験の制約を設けたのだが、それでもまだ足りなかった。

一誠の脳裏に浮かぶのは試験官の説明。事故でない限り相手を死なせたら失格。

（やっぱダメだ！）

不安が勝り、一誠は殴り抜ける筈であったが急ブレーキを掛ける。しかし、勢いがついた拳は簡単には止まらない。

拳の威圧感にやっと気付いたのか対戦者が振り返る。そのときには既に拳は顎に触れていた。

（止まれっ！）

腕の筋肉を隆起させて無理矢理止める。結果、寸止めには至らず、衝撃のみが綺麗に対戦者の顎を打ち抜いた。

対戦者は糸の切れた人形のように崩れ落ち、そのまま動かなくなる。

「ッ！　４番、兵藤一誠選手の勝利です！」

一拍置いて試験官が一誠の勝利を告げた。

◇

黙々とトランプをするシンとオーフィス。オーフィスは左右の肩にピクシーとジャックランタンを乗せ、膝の上にはジャックフロスト、うつ伏せになっているケルベロスを背もたれにしていた。その姿だけ見るとファンシーな趣味の少女にしか見えない。

「あの……」

怖ず怖ずとした様子で尋ねてくるのはルフェイ。彼女もまたゲームの参加者であり手にトランプを持っている。

シンとオーフィスの視線が彼女へ向けられる。敵意は無いのだが、その眼光だけでルフェイの中に緊張感が生まれた。

「黒歌さんを知らないでしょうか？　誘ったのですが何故か来てなくて……」

不在の黒歌の所在を尋ねて来る。外出が禁止されているので一誠宅に居ることは間違いない。

「我、知らない」

オーフィスは首を横に振る。ルフェイはシンの方を見た。
「――さあな」
シンは素っ気なく答え、トランプの札の方へ視線を戻してしまう。
「そうですか……」
ルフェイは残念そうな表情をする。黒歌への心配は勿論あるが、純粋に一緒に遊べないことを残念がっている様子。
実のところシンは黒歌の居場所に心当たりがあった。その答えとなるのはもう一人の不在者の存在。
シンの予想通り二人は一緒に居た。
小猫と黒歌。若干気不味そうに向かい合っている。
場所は兵藤家地下にあるトレーニングルーム。本当ならばグレモリー領地下の訓練場が望ましいが、黒歌は外出禁止なのでここしかやれる場所はない。
「……仙術の基本は覚えているかにゃ？」
「……はい。……姉様にしっかりと教えられたので」
二人の間に微妙な空気が流れる。だが、気不味そうによるものではなく、照れによるものであった。
「じゃあ、本当に覚えているかどうか確かめてあげる。来なさい、白音」

「……行きます、姉様」

ＳＬＡＳＨＤ・Ｇ編

ＳＬＡＳＨＤ・Ｇ―彷徨えるマネカタたち―

「どうした！　一体何が起こっている！」
ある施設内で鳴り響く警報に驚き、そこに務める男の一人が声を荒げる。
「そ、それが……」
異常事態を報せる為にきた別の者は、これから言うことが恐ろしいのか口に出す前に一旦口を閉ざしてしまう。その態度が男を苛立たせる。
「とっとと言え！」
「せ、成功体二名が脱走しました！」
「何だと！　精神操作は完璧な筈だっただろうが！」
「じ、自力で解いたのか、あ、あるいは最初から効いていなかったのか……」
「もういい！　すぐに術士たちを成功体の下に向かわせろ！　可能ならばあの魔女たちもだ！」
責任者という立場なのか、感情は荒立たせているものの指示自体は冷静なものであった。

「通路も順次閉鎖していけ！『あの二体は絶対にここから出すな！』――なっ！」
途中で言葉が重なったことに驚く。すると男の前で報せに来た者がその場で一瞬体を震わせた後に崩れ落ちる。見れば背中にねじ切られた鉄の棒が突き立てられていた。
「ずーと考えてたんだよ」
ペタペタと聞こえる素足の足音。男は引き攣った表情のまま、その足音の方を恐る恐る見た。
白い検査衣を着た十代の少年。形の整った眉。染みも黒子も無い白い肌。細い絹糸の様な髪を後ろで一房に束ねている。中性的且つ美麗な容姿をしている少年だが、その手に持つ血塗れの鉄棒と歪められた口元が形作る笑みのせいで全てが反転し、悍ましいものに見えた。
「あんた達にどんなことをしてやろうかってさ」
『ま、待て』
男が息を呑む。再び男が言った言葉に少年の声が重なったからだ。
『わ、私が何を言おうとしているのか分かるのか！』
重なる声。男の表情が蒼褪める。男の動揺に少年の笑みが深まった。精神的に男を痛ぶることに暗い喜びを感じている。
「くっ！」

男はその精神的重圧を跳ね除ける様に両手を動かし始める。一見すれば滅茶苦茶な動きであったが、よく観察すれば一定の法則を以って動いており、何らかの印を結んでいる様子であった。

その印が完成しようとしたとき、男の肩に鉄棒が突き刺さり完成を中断させる。

「あぐあっ！」

激痛に転げ回る男のさまを少年は喉の奥で笑いながら接近する。

「何かするって分かっていて黙って見ている訳ないでしょ？　ましてやこの部屋焼こうとしているなんてさ」

何をするかを把握していた少年に、男は確信する。

「こんな、ことが……何かしらの、能力を、開花させたというのか！　『アレ』を顕現させただけじゃ、ないのか！」

「まあ、俺だけじゃないけどね」

少年は手を伸ばして男に突き刺さっている鉄棒を掴むと、わざと手首を回しながら引き抜いた。傷は抉られ、鉄棒が抜けると同時に血が噴出する。

「あああああああああ！」

悶え苦しむ男に少年は引き抜いた鉄棒を振り下ろす。――が、頭を砕く寸前に鉄棒の動きは止まった。

少年は自分が来た方角を見ている。
「あー。あいつも早いなぁ」
何かを察知し、少年は詰まらそうな表情をしていたが、すぐにそれを喜色満面の笑みに一変させた。
「今から十分後にこわーい人がやってくるよ。逃げないと今よりもっと酷い目に遭うだろうね」
警告を促している様に思えたが、すぐにそれが違うということを少年は行動で示す。
寸止めした鉄棒を男の両足に振り下ろし、足の骨を砕いた。
「その足で逃げられるんだったらね。はははははは！」
再び上げられる男の絶叫を背中に受けながら、少年は楽しそうな笑い声と共に歩き去って行った。
「あぐ、うあああ……」
男は痛みに耐えながらも少年の言葉に従う様に匍匐で逃げ出し始める。足は動かず、負傷しているせいで片腕の力のみで体を運ばなければならない。
部屋の出口までが遠くに感じる。しかし、それでも逃げ延びなければならない。
呻きながら、冷や汗を垂らしながら必死に逃げる男。肩の流血が這った後に血の筆跡を残していく。

早く逃げなければ死が待っている。どちらにせよこのことを外に知らさなければ、彼の命は誰が手を下さずとも消え失せる。

ようやく出口まで辿り着く。あともう一息でこの部屋から出られる。時間はまだ十分ある。

ピチャン。

滴り落ちる音。何故かその音が鼓膜を震わせたとき、男の全身は震えた。

ピチャン。ピチャン。

まだ少年が言った時間にまで猶予がある筈だというのに。

ピチャン。ピチャン。ピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャンピチャン。

迫る恐怖を前にして人が出来ることなど二つしかない。一つはその恐怖から必死になって逃げること。だが、負傷している男にその選択肢は最初から無い。

そしてもう一つは、突き付けられて恐怖に目を向けそれを受け入れることだけ。

男は極寒の中に身を置いている様に体を震わせながら音へと目を向け――

「うあああああああああああああああ――」

その恐怖に絶叫を上げるが、すぐにその声は途切れるのであった。

施設を脱出している少年は、微かに聞こえた絶叫を聞き噴き出す。
「十分って言ってたけど本当は三分以内に、だったんだ。ごめんなぁ」
悪びれた態度は一切無く、少年は哄笑し続けた。

◇

幾瀬鳶雄（いくせとびお）は逃げていた。背後から迫りくる大きな蜥蜴の化け物から。
謎の事故により二百名ものクラスメイトと幼馴染を失うという不幸を経験した鳶雄。その傷が癒えないまま日々を空しく生きていたが、ある日偶然死んだと思われた幼馴染――東城紗枝（とうじょうさえ）の姿を見つけ、彼女を追った先に彼女と同じく行方不明になったクラスメイト佐々木弘太（ささきこうた）を発見する。現在、鳶雄を追いかけている蜥蜴の化け物と共に。
「みつ、けた。みつ、けた」
蜥蜴の化け物を使役する佐々木は虚ろな表情のまま、壊れたレコードの様に同じ言葉を繰り返す。言われている鳶雄はその言葉を問う暇も余裕も無かった。
資材があちこちに置かれているマンション建設中の現場では身を守る物や場所も多くあるが、蜥蜴の化け物相手にはひどく頼りなく見える。
意を決し近くにあった木の角材を握ると蜥蜴の化け物に向けて突き付ける。それに

対し蜥蜴は口から舌を垂らし、蠢かせる。
攻撃というよりも身を守る為に持った角材だが、構えてみせた鳶雄もこれからどうするべきか焦っていた。思考しようにも目の前に居る怪物のせいで頭が上手く働かない。
蜥蜴の舌が伸びる。咄嗟に角材を突き出し体は後ろに仰け反らせた。角材に舌が巻き付き、そのままへし折る。人の腕ほどの太さがある角材をまるで小枝の様に簡単に折ってしまった。
殺される。このまま訳も分からない化け物に訳の分からないまま殺される。
後退りしようとするが急に足から力が抜けその場で転んでしまう。死という恐怖に体が言うことを聞かなくなる。
（死ぬ、のか？　俺？）
遠く先のことだと思われた死が眼前に現れ、鳶雄の視界は暗く狭まっていく。
「あーあ。騒がしいなぁ」
緊迫した場に不似合いな気の抜けた声。
声の方に鳶雄の、そして佐々木と蜥蜴の目が向く。
建設中のマンションの中から鳶雄とそう歳の変わらない少年が目を擦りながら現れる。
少年は不機嫌そうな表情で何度か目を瞬かせると最初に鳶雄を見て、次に佐々木たち

を見た。
「何？　お前の友達とペット？」
　三メートルを超える蜥蜴の化け物を前にしてあまりに緊張感の無い台詞に、鳶雄は慌てて叫ぶ。
「あ、危ないからすぐに逃げろ！」
　だが少年は鳶雄の必死な叫びを鼻で笑う。
「こんな時に自分よりも他人を優先か？」
「いいから早く逃げろ！　何でか知らないけどあいつらは俺を狙っているんだ！」
「へぇー……」
　少年は口の端を歪めて笑いながら逃げるのではなく鳶雄に近寄って来る。その笑みに何故か鳶雄は得体の知れない気持ち悪さを覚えた。
「じゃあ、こうすれば確実に逃げられるな」
　鳶雄の側まできた途端その背を蹴りつけ、蜥蜴に向かって蹴り飛ばす。
「うあっ！」
「ほーら。餌だぞー」
　少年の暴挙に考えが追い付かない鳶雄であったが、転がった先に大口開けた蜥蜴の姿を見上げたとき、自分はこれから死ぬのだと確信した。

連なって並ぶ細かくも鋭い蜥蜴の牙。吐息すら感じられる程にそれが近付いたとき――貫く音と共に蜥蜴の顔が弾かれる。

「馬鹿みたいに隙だらけ。『視る』必要もないな」

いつの間にか蜥蜴に接近していた少年。蜥蜴の不注意を嘲笑いながら手を伸ばす。

鳶雄は気付く。蜥蜴の片目に何かが生えていることに。よく見れば生えているのではない柄らしきものが飛び出ているのだ。

少年はその柄を掴み引っ張る。ゾロリと眼球ごと引き抜かれ、眼窩と視神経が繋がったままであったが、少年はそれを引き千切る。

「図体がでかいと目玉もでかいな」

そんな感想を洩らしながら眼球から柄を抜く。柄の先には体液で濡れた刃が鈍色の光を放っていた。

少年は引き抜いた目玉をわざと鳶雄の側に落とす。転がる蜥蜴の目と目が合い鳶雄は嘔吐感を覚える。

眼球を失った蜥蜴は狙いを鳶雄から少年に変えて飛び掛かろうとする。

しかし、少年は蜥蜴の動きに意を介さない。

蜥蜴の牙が少年の頭を噛み砕くかと思われたとき、突然蜥蜴が吹き飛ばされた。

三メートルもの巨体が軽々と飛び、置かれた資材にぶつかって止まる。

目の錯覚でなければ鳶雄は見た。少年の体から手の様なものが飛び出し、それが蜥蜴の腹を打った。
少年は、蜥蜴の体液塗れのナイフに何を思ったのか舌を這わせそれを舐め取る。口の中で味を確かめる様に転がした後、唾と一緒に吐き捨てた。
「不味い。生き物の味じゃないな」
それだけ言うともう興味が無くなったのか、この場から立ち去ろうとする。
「お、おい！」
「もう終わってるから気にするな」
鳶雄の声を無視し少年は夕闇の中に姿を消してしまう。
その直後、資材が飛ばされ埋もれていた蜥蜴が動き出す。
「何が終わっただよ！　普通に動いているじゃないか！」
今度こそ殺られる。と鳶雄が思ったとき――風を斬る音が鳴り、蜥蜴の頭が地面に落ちる。
「間に合ったようね」
振り向くとそこには自分と同じくらいの少女。その腕に鷹の様な鳥を止まらせている。
「大丈夫？」

鳶雄の安否を確認する少女。
「ほ」
「ほ？」
「本当に終わった……」
鳶雄の言葉の意味が分からず少女は困惑した表情を浮かべるのであった。

◇

黒い子犬がその額から飛び出した刃で異形の怪物を切り刻む。
子犬の動きに鳶雄は呆然と眺めるしか無かった。
謎の怪物から襲撃を受けた鳶雄は、彼を助けた少女――同じ生き残りである皆川夏梅（みながわなつめ）から襲ってきた化け物とそれを使役する者を合わせて『ウツセミ』と呼ばれることを教えられ、それが生き残りである自分たちを狙っていること、それらから身を守る為という理由で『タマゴ』を渡された。
そして、自宅マンションでウツセミたちの襲撃を受け、渡されたタマゴからではなく自分の影から現れた子犬に現在進行形で守られている。
三体いたウツセミの内の二体は子犬によって倒され、残るは一体となったが羽を生や

した化け物が子犬を掴んで外に出て行ってしまう。
慌ててベランダに出る。鳶雄が住んでいるのはマンション上階。ここで落とされたのなら子犬はどうなるか。
月明かりの下。化け物が子犬を落とそうとしたとき、化け物の翼が燃え上がる。
その拍子で子犬が落とされるが飛翔して来た見覚えのある鷹が子犬を空中で掴まえた。
炎は翼から本体へと燃え移り、宙にいる間に化け物は炭どころか灰へと変えてしまう。
「あー。間に合ったー」
後ろから聞き覚えのある声。そこには夏梅が立っていた。急いできたのか肩で息をしており、制服もやや乱れている。
「ごめんね、遅れちゃって。ここに来たらいきなり襲われちゃって。しかも三体。サカハギさんが居なかったらもっと遅れていたかも」
「サカハギ？」
初めて聞く名に疑問符を浮かべる鳶雄。そこで気付いた。夏梅の後ろにもう一人居ることに。
上から下まで隙一つ無いキッチリとした身だしなみをした壮年の男性。鳶雄の視線

に気付くと優し気な表情で笑う。
「初めまして、幾瀬鳶雄君。サカハギと申します」
紳士的態度で名乗った。

◇

鳶雄は調理場に立ち、手際よく野菜を切っていく。その隣りでサカハギもまた慣れた手付きで料理を作っていた。
昨晩、夏梅ともう一人やって来た自称魔法少女ことラヴィニア・レーニと手を組むこととなり、このマンションを拠点として行動することになった。それはいいのだがこの少女二人、壊滅的に料理が出来ず、朝からカップ麺を出す始末。見兼ねて鳶雄が適当な材料で料理を作ることとなり、それをサカハギが手伝うこととなった。
（それにしても――）
横目で料理を作るサカハギを見る。彼もラヴィニアと同じ『総督』という人物から送られてきた助っ人である。その一切淀み無い動きから只者でない雰囲気を出していた。
「切り終えたよ」
「は、はい！」

カットされた野菜を受け取る。年が倍ほど離れているせいか妙に緊張していた。助けてくれたのに失礼ではないかと思ってしまう。

「昨日今日会った人間と急に馴れ合うことなんて出来はしないさ。君の反応は正しい」

こっちの内心を正確に読み取ったかのようなサカハギの台詞に鳶雄は驚く。

「いや、そんなつもりは……」

「まあ、時間を掛けていこう」

笑うサカハギに鳶雄は第一印象であった『良い人そう』という感想を『良い人』へと昇格させた。

◇

同じ生き残りであり鳶雄や夏梅と同じ生物――セイクリッド・ギアを操る青年鮫島綱（さめじまこう）生（き）を探す為に廃業したデパート内を探す一行であったが、途中夏梅、ラヴィニア、サカハギはウツセミの襲撃を受けて対応せざるを得ない状況となってしまい、鳶雄もまた鮫島を見つけたのはいいが、ウツセミたちを操る男、童門計久（どうもんかずひさ）に捕らえられてしまっていた。

童門が生み出した土人形に取り押さえられる二人。

「どうやら現時点では、私の人形の方が君たちを上回っているようだね」
「くそったれ……！」
「……くっ！」
　手も足も出ない状況に悔しさと屈辱が募っていく。
「こんな場所でそんなモノ使って青少年を嬲っているのか？　ちょっと特殊過ぎないか？」
　飄々とした声。鳶雄はその声の人物を知っていた。
「誰だ！」
「お前……！」
　鳶雄を囮にして結果的に助けた少年が、ナイフをヒラヒラと振り回しながら現れる。
「こんな所で何してんだ！　さっさと逃げろ！」
「また人の心配かよ」
　あの時は違い、周囲には何十ものウツセミたち。更には土人形を操る童門も居る。段違いの危機的状況だというのに少年はヘラヘラと危機感の無い笑いを浮かべていた。
「どうやって入った。ここには結界が張ってあった筈だ。そもそもここに来るまでウツセミたちを配置していた筈だ」
「ウツセミ？　あの化け物たち？　全部床にばら撒かれて混じっているよ」

さも平然と答える少年に童門の顔色が変わる。
「まさかお前もセイクリッド・ギアを！」
「セイクリッド・ギア？　何それ？」
童門の言葉を否定し、少年は少し考えた後にこう答える。
「強いて言うなら、俺は『マネカタ』だ」

◇

「『真似形計画』？」
部屋に備えられたスピーカーから伝わって来た『総督』の声に鳶雄は思わず聞き返した。
《そう。今回の事件を引き起こした『虚蝉機関』が『四凶計画』の前身として進めていた計画だ。ウツセミ同様に人工セイクリッド・ギアの実験としてな》
あの少年が言った『マネカタ』の意味を尋ね、その答えがそれだった。
《結果としては大失敗に終わった。マネカタっていうのは人工セイクリッド・ギアに使役者の魂の一部を混ぜ合わせることでより強い力を発揮させるというものだったが、被験者の九割は記憶障害を起こし廃人化。マネカタを生み出してもそれを見ちまった

せいで発狂し、力を暴走させて死亡が殆どだ》
「マネカタを見て発狂ですか？」
《魂を切り離して混ぜるってのはな、至難の業なんだよ。だから敢えて切り離し易い部分を探してそこを混ぜ合わせるんだが、その切り離したい部分っていうのがその人間が自分の中で最も嫌悪する部分。最も見たくない本性と呼ぶべきものだ。マネカタにそれを入れるということは、目を背けていたものが表層化することに等しい》
思わず息を呑んだ。誰しも見せたくない自分というものがある。もし、それが曝け出されたとき、人は果たしてまともでいられるのだろうか。
《お前たちがあったその少年は記録上残っている成功体の二人内の一人なんだろうな》
「二人？　じゃあもう一人は？」
《それは……》
「私ですよ」
「え？」
その声に全員の視線がサカハギに向けられる。
「私が残る一人です」
サカハギは臆することなく告げた。

◇

鳶雄とラヴィニアが『虚蝉機関』に攫われ、鮫島と夏梅もまた敵に追われている。その情報を知らされたサカハギは、普段の冷静さを捨てて走り続けていた。

サカハギには過去の記憶が少ししか残っていない。力を得た代償として、家族の思い出と自分の本名を失った。

彼に残ったのは妻と娘がいたというぼんやりとした記憶と、何故か心の中に残っていた『サカハギ』という名だけである。

彼が鳶雄たちに対し父性愛を以って接するのはその無くしたものを埋める為の代替行為だったのかもしれない。だが、それを抜きにしても彼は真っ直ぐな鳶雄たちのことを気に入っていた。

だからこそ許せる訳が無い。

血溜まりの中で倒れる鮫島の姿を見て。自分のセイクリッド・ギア――グリフォンを潰され泣いている夏梅を見て、許せる筈など無かった。

「お前もこいつたちの仲間か？」

加虐的な喜びに塗れた声。しかし、サカハギにはその声は獣の鳴き声に聞こえた。

何がおかしい。何が嬉しい。子供を傷付けて何が面白い。

悪だ。悪だ。悪だ。悪悪悪

爆発する怒りを殺意に変え、サカハギは吼えた。

◇

『虚蝉機関』に連れられてきた鳶雄は、そこで組織を束ねる者、機関長姫島唐棣（ひめじまはねず）からその目的を聞かされ、自らの願いの為に鳶雄にウツセミと化した紗枝をけしかけた。

結果として勝負は鳶雄が勝った。鳶雄のセイクリッド・ギア――刃のブレードを自我を戻した紗枝が自ら受けることによって。

助けたかった者を目の前で失い絶望の底へ誘われとき、幾瀬鳶雄の中の『狗』が目覚める。

唱えられる言葉は祝詞か呪詛か。その全てを唱え終えた時、二頭の『狗』がこの世に顕現する。

「……素晴らしい」

神をも殺す者の出現に唐棣は恐怖よりも先に感動を覚えた。

『狗』は赤い目を輝かせ、鋭い牙を震わせ唸る。

――こいつを斬れるのであれば俺は『人間（バケモノ）』でいい。

「へえ。だったらそのお前を殺せば俺は『人間（えいゆう）』か？」

第三者の声。
「誰だ？」
「俺？　名前は忘れた。フトミミとでも呼んでくれ」
「フトミミ？　布帝耳神だと？　神を名乗るか、狂人め」
「神様なんて人から見たら全部イカれて見えるさ。そういう意味じゃ神なんて全員狂人だ」
ケタケタと笑いながら少年――フトミミは変異した鳶雄の前に立つ。
「俺の視た未来通りだ。こうなるのは、な」
『斬る伐る切るｋｉｌｌ切る斬る斬るｋｉｌｌ斬る伐る切るｋｉｌｌ切る斬る斬るｋｉｌｌ！』
鳶雄から吐かれる言葉に正気の欠片も無い。
「あはははははは！　今ならお前と友達になれそうだ！」
少年は笑いながら、その身から何かを顕現させる。
襤褸の様な衣服を纏いながらもまるで聖人の如き穏やかな表情を浮かべる人型。そこにいるだけであらゆる負が浄化されそうな気すら感じさせる。フトミミという狂人から現れるには不似合いなものであった。
「殺し合おうぜ！　なあ！　人間（バケモノ）！」

ナイフを構え、高らかに笑いながらフトミミは鳶雄へ挑む。

「あー……」

廃墟同然と化した『虚蝉機関』本部でフトミミは呻きながら体を起こす。その全身に裂傷が刻まれており、傷の深さや出血量を見れば今すぐ死んでもおかしくは無かった。

死闘の末フトミミは鳶雄に負けた。フトミミは腑に落ちなかった。彼が視た未来では、フトミミが鳶雄に勝っていた筈なのである。だが、それが覆された。初めての経験である。

フトミミの手にはへし折られたブレードが握り締められていた。鳶雄の刃が額から生やしていたものを折って奪った物である。

これからどうするべきか。そんなことを考えているフトミミの側に複数の存在が現れる。全員ローブに身を包んだ女性であった。

「『虚蝉機関』の生き残りか？」

「どちらさん？」

「我々は『オズ』だ」
　虚蝉機関と協力関係にある魔術師の一団が、倒れているフトミミを機関の生き残りと誤解している様子であった。
「ちょうど良かった」
　フトミミは笑い、よろよろとした動きで立ち上がると魔術師の一人に接近する。
「試し斬りしたかったんだ」
「何をっ！」
　魔術師の胸にブレードを突き立て、素早く抜く。
「貴様っ！」
　魔術師たちを挑発する様に血で濡れたブレードを舐め上げ、口内に溜まった血を吐き捨てた。
「スッキリしないなー」
　激昂する魔術師たちを無視し、一人喋り出す。
「今まで外したことなんて無かったんだ。未来をさ。ああ、スッキリしないスッキリしない」
　フトミミの言葉が徐々に熱を帯びていく。
「この苛つきはさぁ。あいつを殺らなきゃ治まらないだろうなぁ！　待ってろよ！

『狗』共っ！」

何処かにいる標的に向け、フトミミは生まれて初めて心の底から殺したい相手を見つけるのであった。

ＳＬＡＳＨＤ・Ｇ―四凶と四騎士たち―

大小二つの影が、夕焼けに照らされ石畳の上を長く伸びる。
大の方の影は老婆のものであった。老いを感じさせないその品の良い姿は、若かりし頃さぞ美人であったことを容易く想像させる。
小の影は、その老婆に手を引かれている少年のものであった。
祖母と孫。それが両者の関係であり、孫は心の底から祖母のことが好きであるらしく、手を繋いでいることに安堵と幸福の笑みを浮かべている。
手を繋ぎ、繋がる影が向かう先はとある神社であった。
人気が無く、神主も居ない神社。参拝目的ではなく、二人は本殿の中へと入っていく。
普段入れない所に入り、孫は子供らしく好奇心で目を輝かせる。
祖母は、そんな孫に向き合い目線を合わせた。
「いいかい、鳶雄」
祖母は孫――鳶雄の額に指を当て、その指で文字を描く。幼い鳶雄は、それにこそばゆさを感じたが、普段見たことが無い祖母の真剣な表情を見て、金縛りにあった様に動けなかった。

「もし、本当にどうしようもなくなったとき、貴方を救ってくれる『呪文』を教えてあげるわ」

他人が聞けば他愛のないおまじないの話かと思うかもしれない。しかし、その『呪文』を教えようとする祖母の顔は、憂いに満ちたものであった。

本当にどうしようもなくなったとき、そんな日が来ることを望まぬことを願い、同時にそれが儚い願いであると悟っていた。

気付くと鳶雄の側には赤い目の黒い大型犬が座っていた。大型犬に驚き祖母を見るが、祖母は大型犬に気が付いていない。鳶雄にしか見えていなかった。

祖母は鳶雄を抱き寄せ、囁く様に『呪文』を教える。

全てを教え終えた祖母は鳶雄から離れる。鳶雄には、その顔が泣き顔に見えた。いつの間にか傍らにいた黒い大型犬も居ない

「その『呪文』は、鳶雄から全てを奪うからね。――人を終えなきゃいけなくなるのよ」

悲し気な表情をする祖母に、鳶雄もまた悲しくなってきた。大好きな祖母にはいつだって笑顔でいてもらいたいから。

「大丈夫？　ばあちゃん？　どこか痛いの？　苦しいの？」

心配して尋ねる鳶雄の頭を、祖母は優しく撫でる。

「ありがとう、鳶雄。鳶雄は本当に良い子ね」

祖母の手の感触と暖かさが心地良く、暫くそれに浸る鳶雄。すると、鳶雄の足から力が抜け、崩れ落ちそうになる。
祖母は全て分かっていた様に鳶雄を抱き止めた。
「ごめんね、鳶雄。しばらくの間眠っていてね」
「遂に教えたか……」
二人しかいない筈の本殿の中に響く声。一切の感情を読み取れず、聞く者の臓腑を凍り付かせる。まるで死そのものを音へと変えた様であった。
祖母の周囲を四つの影が囲む。黒衣を纏い、異形の馬に跨る死の騎士たち。
「愚か者がっ！　とっとと始末しておけばいいものをっ！」
「ヒーヒッヒッ。流れるのぉー、血が、赤い血が。その子供と、その子供がもたらすものによって」
「その子の行く先に……平穏は無い……あっても仮初のもの……いずれは失う……悪意ある者の手によってか……あるいは……その子の手によってか……」
激昂する声。嘲笑う声。乾いた声。そのどれもが魂を底冷えさせる死を孕んでいた。
しかし、圧倒的且つ絶対的な死を前にしても祖母は顔色一つ変えない。
「私は忠告した。その子供が人である内に命を絶っておけ、と。その身に宿る力は、人が扱える範疇を超えている。人であるならば、その時が来るまで我々が守護しよう。だ

が、人で無くなり、人を仇なすモノへと成ったときは――」
「貴方方が始末する――そう言っていましたね」
祖母は鳶雄を横たわせ、四人の騎士の長を見る。
「私は鳶雄が人を仇なす存在になるとは微塵も思ってはいません。この子は誰よりも優しく、思いやりのある子です」
「それ故に異形へと堕ちることもある」
「人で無くなっても人の心を失わない。そんな子に私は育てていきます」
冷たい死を相手にしても、断固とした意思を見せる。
「ならば試そう」
長の言葉に他三人の騎士の目の無い目が向けられる。
「本気かっ！」
「ヒッヒッヒ。物好きだのぉー」
「それが……そなたの決断ならば……従うまで……」
不満を露わにする者。楽しむ者。従う者とそれぞれの反応は異なっていたが、長の決断を反対する者はいない。
「そのときが来たら、我々はその子に試練を与える。お前が言う人の心を失わずにいられるかどうかの」

「そうですか」
「簡単に受け入れるのだな」
「私は、この子が乗り越えられると信じているので」
「そうか」
　黒い影が一つ、また一つと消えていく。残されるのは長の影のみ。
「会うのはこれが最期だ」
「そうですか。私は、死ぬのですね……。貴方が私の死、ですか？」
「私たちの死は、黙示録の時の人間のもの。お前は、ただ寿命で果てるだけだ」
「分かりました。教えてくれて、ありがとうございます」
「礼を言われる様なことではない」
　最後まで感情を感じさせず、騎士たちの長は消える。その直後に、鳶雄は目を覚ました。
「あれ？　どうしたの？　ばあちゃん」
「何でもないよ、鳶雄」

◇

虚蝉機関との戦いとウツセミに関わるから鳶雄の生活は一変した。神器という力に目覚め、同じ力を持つ仲間と出会い、そして、失ったと思った幼馴染とも再会出来た。

事件を終え彼らは日常に戻った――という訳にもいかなかった。

世界の裏側を知ってしまったことで元の生活を送れなくなり、堕天使の組織である『神の子を見張る者』の庇護に入ることとなった。

それによって元の高校は退学せざるを得なくなり、『神の子を見張る者』の長アザゼルが用意した学び舎へと通う予定となっている。

なっているが、それまでの間、マンションで自主勉強をしながらの待機であり、そんな生活も二か月が過ぎようとしていた。

そんなとある日の朝食。

朝とは思えない重苦しい空気が場に圧し掛かっている。

肩身が狭そうにしながら赤面している幾瀬鳶雄。彼と同じく赤面している皆川夏梅。

その様子を、パンを齧りながら見る鮫島綱生。マイペースに目の前の食事を楽しむラヴィニア・レーニとヴァーリ・ルシファー。平然としている様で動揺からか焼けたトーストに醤油を垂らしている東城沙枝。

沙枝を除く全員が神器所有者であり、沙枝もまた虚蝉機関のせいで内に神器に近い力を宿している。詳細に言えば、鳶雄、ラヴィニア、ヴァーリは、神器の更に上の神器で

ある神滅具を宿している。
彼らは現在とあるマンションに住んでおり、共に生死を懸けた戦いを生き抜いた為に戦友という間柄であった。が、それも若干気不味い仲となっている。
ことの発端は朝、夏梅が寝ぼけて鳶雄の部屋に侵入してしまい、その現場をこの場にいる皆が目撃してしまったせいである。
何も間違いは起きていなかったが、夏梅は紗枝が鳶雄に好意を持っていることを知っている為に申し訳なさを覚え、紗枝に何度も謝罪をしていた。
「あまり謝り過ぎると、逆に紗枝さんを困らせるだけだよ、夏梅さん」
声を掛けたのはエプロン姿の男性。その容貌は、鳶雄たちよりも一回り以上年が離れている。
彼もまた鳶雄の仲間であり『マネカタ』という特殊な力を宿している。
「でも、サカハギさん……」
「夏梅さんが謝って、紗枝さんが怒っていなければこの話は終わりだよ。それに、紗枝さんは、小さい頃から鳶雄君のことを知っているだ。知っていて、そんなことをする人じゃないって知っている。二人ともちゃんと分かっているよ」
穏やかな声に自然と耳を傾けてしまう。声も雰囲気も全て紳士であり、あらゆることを何でも完璧に熟すのがこのサカハギという人物である。今食べている朝食も鳶雄と

サカハギによって作られたものであった。
「うう、でも……」
「そんなことより、今日から君たちも学校だろう？　ならしっかりと朝食を食べて行きなさい。何事も最初が肝心だからね」
「――分かりました」
サカハギの言う通り、これ以上続けても場の空気を更に悪くするだけと思い、夏梅も朝食を食べ始める。
「すみません。ありがとうございます」
隣を通っていくサカハギに、鳶雄は小声で礼を言う。
「君が真面目なのは知っているからね。誤解で嫌な空気のまま学校に行かせて訳にも行かないよ。ああ、それと、別に私は君たちの中でそういう事が起こっても止めるつもりは無いよ。そういうのは個人の自由だからね」
「……からかわないで下さいよー」
サカハギは微笑し、後片付けの為にキッチンに向かう。
紳士、大人という言葉を体現した様な人物、それが鳶雄の抱いているサカハギへの印象であった。
しかし、彼にはもう一つ苛烈な面が存在する。

悪に対して尋常では無い程の怒りと殺意を見せるのだ。
鳶雄は現場を見ていないが、鮫島と夏梅はそれを見ていた。
二人が堂門という虚蝉機関の人間に襲われ傷付いた際に激怒し、その怒りごと内に宿るマネカタを発露させた。
結果は凄惨なものであり、堂門は命こそ助かったがサカハギによって顔の皮を剥ぎ取られた。鮫島たちが止めなければ命も奪っていたということ。
あの紳士的な人物が、そんな残酷なことを行えることを鳶雄は信じられなかった。しかし、顔を蒼褪めさせた鮫島と夏梅が嘘を言っている様には到底思えない。
サカハギの内にどんな黒いものが眠っているのか。そう遠く無い未来に、目の当たりにする。鳶雄はそんな気がした。

◇

鳶雄たちが通うのは、『ネフィリム』と名付けられたグリゴリの教育施設であり、そこで神器の扱い方や異形についての知識など、普通の日常では得られない経験をする。
彼らを教えるのは、グリゴリの幹部であるバラキエルであり、彼の下で授業を受ける。
半月ほどその生活を送ったとき、変化が起きた。

虚蝉機関が造られた原因とも呼べる日本で最も力を持つ五つの一族、『五大宗家』である櫛橋青龍という青年と、鳶雄にとって『はとこ』にあたる人物姫島朱雀という女性と接触した。

彼女たちの情報によって夏梅と鮫島と同じ『四凶』を宿す人物の居場所。そして、彼らを追っている者たちについて知らされる。

敵は、虚蝉機関の残党と協力関係にある『オズ』と呼ばれる魔法使いの組織。

更にグリゴリを裏切ったサタナエルという堕天使が、去り際に引き連れていった部隊『ネフィリム・アビス』と呼ばれる者たち。全員が神器所有者である。

五大宗家は虚蝉機関の残党を捕縛したいという思惑と、残りの四凶を助けたいという鳶雄たちの思惑が合致し、共同戦線を張ることとなった。

そこに思わぬ乱入者が来るとは知らずに。

◇

四凶たちが追われ、身を潜めているというとある県境の山間の村に向かう一行。その道中で四凶の一人であり『饕餮』を操る七滝詩求子（ななたるシグネ）を見つける。

幸先よく一人目を見つけた鳶雄たち。だが――

鳶雄の相棒であり神器である『刃』が唸り声を上げる。闇夜に向けて威嚇をしていた。
「ここから離れた方がいいわ！　変な技を使う人たちと――」
詩求子の言葉を遮る様に草を踏み締める音。闇の中から誰かこちらに向かって歩いてくる。
「よお。こんばんは。幾瀬鳶雄君」
「お、お前……！」
闇から出て来たのは、鳶雄の知る人物であった。虚蝉機関本部で戦い、神器を超えた力、禁手によって斬った相手。死んだと思っていた人物が目の前に現れる。その隣に怯え切ったサングラスを掛けた少年を伴って。
「フトミミ……！」
「覚えててくれたか。嬉しいねぇ。流石、殺し合った仲だ」
「フトミミ……まさか『真似形計画』のもう一人の生き残りか！」
「その通り」
バラキエルの言葉を薄気味悪い笑顔で肯定する。
「何をしにここに来た！　どうやって俺たちの動きを！　それにそいつは誰だ！」
「質問するなら一個ずつにしろよ、幾瀬鳶雄」
強い剣幕で言う鳶雄を、フトミミは小馬鹿にする様に笑う。

「でも、俺は優しいから特別に全部答えてやるよ」
喉の奥で笑うフトミミ。その態度は鳶雄たちを挑発するものであったが、本能が警戒しているのか体を動かす気になれない。
「何をしに？　遊びに。どうやって？　俺は未来が視えるのは知っているだろ？　そいつは誰？　ああこいつのこと？」
馴れ馴れしく肩に腕を回しているフトミミが、話し始めると気の毒に思えるぐらいサングラスの少年は震える。
「こいつ、っていうかこいつらちょっと声を掛けたらいきなり襲ってきたんだぜ？　酷い話だよなぁ？　でも、殺りにきたら殺り返すのは当たり前のことだよな？」
宵闇の暗さで分かりづらかったが、光を当てるとフトミミの衣服に返り血が大量に付いていることに気付く。
「お前……！」
「殺しにきた奴を殺して何が悪いんだ？」
平然と言い放つフトミミに、他の者たちは怪物でも見るかの様な目となる。形は人なのに、中身は人じゃない。理解が出来ない。
「ああ、そうそう。こいつも酷い奴なんだよ。視力を奪う呪いの像なんか使って、俺の目を奪おうとしたんだ。それもゲラゲラ笑ってよぉ……」

フトミミの手にいつの間にか短刀が握られていた。それを見て鳶雄は驚く。それは前の戦いでフトミミによって折られた『刃』の剣であった。刀身に適当に布だけを巻いた粗雑で即席の短刀。それがサングラスの上に押し当てられる。

「や、め……！　やめ、て……！」

サングラスの少年は、恐怖で舌が回らず、言葉が途切れる。

「自分がされて嫌なことは他人するな、ってよく言うだろ？　身を以って知りな」

「やめろぉぉぉ！」

鳶雄は叫ぶが、短刀はサングラスの上を滑る。上下で真っ二つにされたサングラスが地面に落ちたとき、少年は顔を押えながら絶叫する。

「おめでとう。これで一つ御利口になったな」

目の前の残酷な行為に、紗枝、夏梅、ラヴィニア、詩求子は蒼褪め、鮫島とヴァーリ、バラキエルは不快感を露わにする。そして、鳶雄は怒りを見せ、フトミミに――襲い掛かるよりも早く動く者が居た。

炎が走り、風がうねり、氷雪が吹き、雷が轟く。一瞬で四つの魔術が同時に放たれ、フトミミを正確に狙う。

「よっと」

事前に分かっていた様に容易く回避するフトミミ。

「危ないなぁ」
「おま、えは……！」
　この場で誰よりも怒り狂って見せたのはサカハギであった。怒りで形相が変わり、別人にしか見えない。
　サカハギの二面性を聞かされていた鳶雄だが、ここまで変わるのかと驚く。
「あんた、見た事あるなぁ……？」
「俺も、お前を、知っている！」
　記憶には無い。だが、サカハギはフトミミを見るだけで強烈な殺意が湧いてくる。殺したくて、殺したくて、堪らない程に。
　フトミミもサカハギを見ると心が騒めく。湧いてくるのは劣等感と嫉妬。見ているだけでその存在を消し去りたくなる。
「殺してやる……！　この悪党がっ！」
「奇遇だな！　俺もあんたを殺してやりたいと思ったところだ！」
　互いのマネカタが顕現し、殺意と力を衝突し合う。

◇

サカハギとフトミミの戦いの余波によって手出し出来ない状態となった鳶雄たち。サカハギが残された精一杯の理性で当初の目的を優先するよう叫ぶと、後ろ髪を引かれながらも鳶雄たちはサカハギにフトミミのことを任せる。

四凶の最後の一人『渾沌』の古閑雹介（こがひょうすけ）を、追手が死屍累々となった場所で見つける。

同時に、虚蝉機関の本拠地で会った『オズ』の魔法使いであり、東の魔女と呼ばれ、鳶雄と同じ神滅具を持つ紫炎のアウグスタと会い、戦闘となる。

紫炎のアウグスタ。更に弟子のヴァルブルガという少女に『オズ』に属する魔法使いたちとの激しい戦いが行われると、そこに敵味方の区別が付かない程に暴れ狂うフトミミとサカハギが乱入。

これによってメンバーは散り散りとなってしまった。

仲間を探し求める鳶雄。そこで彼はグリゴリの裏切り者であるサタナエルと会う。

そしてそこで、鳶雄は自分の神器にギリシャ神話の『リュカオン』と日本神話に出てくる『天之尾羽張』という異なる神話の神が混ぜられた神器であることを教えられた。

更に何かを言おうとしたところに姫島朱雀が現れ、二人の会話を強制的に終了させる。

鳶雄が自分の神器の特異性について知った一方で、ラヴィニアがアウグスタの術によって肉体を乗っ取られるという事態が起こる。

全員で戦うが、二つの神滅具を操るアウグスタに防戦一方。しかし、古閑の禁手、ラヴィニアを助けたい一心で至ったヴァーリの禁手、鳶雄の禁手によって憑依しているアウグスタのみを斬り裂く。

これにより、ラヴィニアも無傷で助けることが出来た。

苦しいことや嫌なこともあったが、誰も欠けることなく目的の四凶の二人を無事保護することが出来た。

任務は無事に完了したと誰もが思った。この時までは。

「さあ、試練の時だ」

「ヒッヒッヒ。四凶共はどうするかのぉ？」

「連れて行くぞっ！　四凶を扱える器かどうか知る為にっ！　ダメなら殺してしまえっ！」

「見定めるか……凶つ力を持つに……相応しいか……」

「――え？」

意識を取り戻したラヴィニアが見たのは、力を使い果たした気絶しているヴァーリ。

それだけ。

『おい、大丈夫か？』

ヴァーリに付けてある通信機から安否を確認するアザゼルの声が聞こえる。

「――です」
『ラヴィニか？　どうした？』
「トビーたちが、居ないのです……」
『何っ！』

◇

　草木生えない赤土の荒野。赤と黄が混じる雲は激しく流れ、その流れで生じる雷が荒野を焼く。
「そんなものかっ！　窮奇っ！　もっと俺に力を見せてみろっ！　小娘っ！」
「いきなりこんな所に連れてきて、うるさいっつーの！」
　黄金の冠を被り、弓を持つ黒衣の骸骨が、至る所に目が付けられた馬の上で夏梅を恫喝する。
　真の姿となった窮奇が羽ばたき突風を起こす。しかし、骸骨が矢を番えていない弓の弦を鳴らすと、その突風は消え去った。弦の音だけで窮奇の力を掻き消してしまった。
「嘘っ！」
「こんなものかっ！」

驚く夏梅に怒声を浴びせる骸骨。
「一体何なのよぉ！　あんたは！」
「俺は魔人ホワイトライダーっ！　四騎士の一人だっ！」
「よ、四騎士？」
「おしゃべりはここまでだっ！　必死で抗えっ！　でなければ殺すっ！」
殺意が矢の様に夏梅を貫く。心臓が鼓動を止めたがる。全身の血が凍る様に冷たくなっていく。
そして何より、『絶対に勝てない』という言葉が絶えず夏梅の頭の中で反芻される。
彼女の感じていることは間違いではない。
四騎士の魔人は、いずれ世界を滅ぼすとき、世界の四分の一を殺す権利を与えられている。
そして、彼らは自らの象徴によって死を齎す。その死は絶対であり、王権であり、権能である。
魔人ホワイトライダーの象徴である死は『勝利』。ホワイトライダーと戦う者は、絶対にホワイトライダーに勝てない。万の武器、億の兵を以てしてもホワイトライダーより力が無ければ如何なる状況でも勝つことは出来なず、運命はホワイトライダーへ微笑む。

故に相手は、ホワイトライダーの勝利によって死を与えられる。これに逆らえるのは、ホワイトライダーを上回る力を持つ者だけ。
「もっとだっ！　もっとお前の力を俺に見せろっ！」

◇

「おらっ！」
いつもの小猫からサーベルタイガー程の大きさとなった檮兀が、鮫島の合図に合わせて電撃を放つ。それを赤い馬に跨る黒衣の骸骨が大剣で弾く。
「ヒッヒッヒ！　生きがいいのぉ。戦はこうでなくては」
老人の様に笑うのは魔人レッドライダー。連続して放たれる電撃を剣一本で全て捌く。
「まだまだぁぁぁ！」
吼える様に叫ぶ鮫島。どれだけ戦いに熱中しているか分かる。分かるが、もし第三者が見たら鮫島の異変に気付いただろう。明らかに興奮し過ぎていると。
魔人レッドライダーの象徴は『戦争』。本人も分からぬうちに戦いに駆り立て、そこで流れる血、積み重ねる屍によってレッドライダーの力は増していく。

鮫島は既にレッドライダーの術中に嵌っていた。
「さて、おぬしが流す血は、どんな味かのぉー。ヒッヒッヒッヒッ」

◇

渾沌を禁手化し、鎧として纏う古閑。四凶の饕餮をぬいぐるみの様に抱き締める詩求子。
「ポ、ポッくん！　凄いお腹の音だよ！」
饕餮をポッくんと呼ぶ詩求子は、騒音同然の饕餮の腹の音に驚く。
「その腹の音は、まあ、間違っちゃいないね」
兜のせいで分からないが、古閑の顔は苦痛に歪んでいた。全身の脱力、空腹、喉の渇きが一斉に襲って来る。今も体から力が抜けていくのが分かる。
原因は、明らかに目の前にいる存在であった。
黒い馬に跨り、天秤を下げる骸骨。魔人ブラックライダー。その存在が全てを奪っていく。
魔人ブラックライダーの象徴は『飢饉』。彼が存在するだけであらゆる生命は飢え、渇いていく。そして、どんなに食べようと飲もうと満たされることは無い。

「全てが……飢える……全てが……渇く……枯れ果てる前に……我を満たすことが出来るか……」

◇

「ぐっ……あっ……！」

『夜天光の乱刃狗神』へと至っている鳶雄は、謎の高熱と悪寒、呼吸する度に起こる激痛によってまともに動けない。隣にいる『刃』もまた同様に動くことが出来ない。

そんな二人を見下ろす様に立つ蒼ざめた馬に跨り大鎌を垂らす魔人ペイルライダー。

彼の象徴は『病』であり、彼に近付く者は呪いに等しい病に襲われる。病はまた別の病となり、その肉体を壊していく。

「ここまでか？」

「何、を……！」

見下ろすペイルライダーの言葉に失望などの感情は無い。事実の確認をする様な機械的なもの。

「鳶雄っ！」

何故か鳶雄と一緒に引き摺り込まれた紗枝が、鳶雄の苦しむ姿を見て悲痛な声を上げ

る。
「――どうやら、お前は器では無かったようだ」
大鎌の先が鳶雄の喉に当てられる。
「契約に反するかもしれんが、後の災厄を断てるならば、その罰、潔く受けよう」
ペイルライダーの大鎌が、鳶雄の首を刎ねる――直前、ペイルライダーが炎に包まれた。
誰かの手が素早く鳶雄をペイルライダーから引き離す。『刃』も一緒に。
「お前……！」
「よお。幾瀬鳶雄君。元気？」
鳶雄を掴んでいるのはフトミミであった。
「大丈夫かい？」
「サカハギ、さん……！」
いつもの様子に戻ったサカハギが鳶雄を心配そうに見る。
「どうして……？」
「色々あるが一時休戦だ。大事な鳶雄君の一大事みたいだからなぁ」
「……本当なら今すぐにでも決着を付けたいですが、今は貴方達が優先だ」
「そこの骸骨。幾瀬鳶雄の命は先約済みだ。誰にも殺らせはしねぇ。俺以外はな」

「彼の命は誰のものでも無い。お前のでもコレのでも無い」
「コレ扱いは酷くないか？」
「言っていろ。せいぜい背中に気を付けろ。場合によっては纏めてやる」
「ははは！　それはスリルがあるなっ！」
　鳶雄の左右に並びながらフトミミとサカハギは憎まれ口を叩き合う。
「で？　まだ戦えるよな？」
　フトミミが鳶雄の顔を覗き込む。
「当たり、前だ……！」
　歯を食いしばって鳶雄は立ち上がる。その意思に反応し、『刃』もまた立ち上がった。
「訳も、分からないまま、死んで、たまるかっ！」

ＳＬＡＳＨＤ・Ｇ―クロスオーバーＳＤ・ー

幾瀬鳶雄の青春は、ほぼ戦いの青春と呼んでも差し支えなかった。

『神を見張る者（グリゴリ）』から袂を分かった堕天使サタナエルが従えるセイクリッド・ギアを所有する異能チーム『深淵に堕ちた者たち（ネフィリム・アビス）』と日夜戦い、排除及び捕縛を繰り返していた。

神滅具である『黒刃の狗神（ケイニス・リュカオン）』を持つ鳶雄。同じく『永遠の氷姫（アブソリュート・ディアーヌ）』を持つラヴィニア・レーニと『白龍皇の光翼（デイバイン・デイバイディング）』を所持するヴァーリ・ルシファー。更に四凶の名を持つ神器を持つ皆川夏梅、鮫島綱生、七滝詩求子（シグネ）。十代の少年少女たちに混じった、唯一の成人した男性である人工神器『マネカタ』のサカハギ。

神器の名を知るだけで心がへし折れる程の錚々たる戦力であり、サタナエルのエージェント如きでは手も足も出ない。

現に今まさに『深淵に堕ちた者たち』の構成員を神器ごとあっさりと無力化させてしまっていた。

日々特訓を行っている彼らからすれば、苦戦する道理など無い。何せ全く怖くないのだから。

戦いの中での緊張感は常に持っているが、その緊張感が恐怖に至ることはまず無かっ

た。

四騎士との戦いを経て、その辺りが鈍くなったとも図太くなったとも言える。

出来ることなら思い出したくも無い記憶。それが四騎士との戦いの感想であった。

全員が死の瀬戸際まで追い込まれた挙句、必死になって反撃を試み、お情けで見逃された。屈辱よりも生き延びたという安堵が先に来て、少し経った後にそんな思いを抱いた自分たちに気付き一生ものの屈辱へと昇華するという封じたい記憶。

彼らの責任者であるアザゼル曰く、四騎士が個人を襲うなど前例が無く、また四騎士自体が黙示録の日が来るまで人類の守護者としての役目を担っているので、人間を襲うことなどしないらしい。互いの取り分が減るので。

初めから殺めるつもりは無く、狗神と四凶を試していたのかもしれない、とアザゼルは言っていたが、鳶雄とサカハギは三日三晩意識不明状態となり、夏梅も重傷、綱生は大量出血で死にかけ、シグネは極度の脱水及び栄養失調状態にまで追い込まれ、本当に危ういところであった。

勝手に試されたことに腹が立つものの二度と会いたくない。それが、鳶雄たちが四騎士への共通の感想であった。

構成員たちを倒し、しばらくすると後方支援をしていたシグネから別地点で行われていた戦闘が終わったことが告げられた。

鳶雄と夏梅。綱生とラヴィニア。ヴァーリにサカハギと組み分けられており、それぞれが別の構成員を相手にしていた。

「目標ベータの捕獲に成功。どうぞ」

鳶雄は相棒であり神器である黒い狗――刃の頭を撫でながら耳に付けたインカムに報告する。もう一人の後方支援役であり、鳶雄の幼馴染である東城紗枝と連絡を取ろうとする。

しかし、返事が無い。

「……紗枝？」

もう一度問い掛ける。鳶雄の中に小さな不安が生まれる。

『きゃあああああああああ！』

インカムから応じる声は、絹を裂く少女の悲鳴。間違いなく紗枝のもの。小さな不安は一気に焦燥と化し、鳶雄は刃を連れて走り出していた。

「鳶雄!?」

夏梅の声が聞こえたが、鳶雄の足は止まらない。

（まさかまだ構成員が残っていたのか!?　それとも、フトミミが……！）

サカハギと同じ実験を受け、人工神器使いとなった青年――フトミミ。その性格は凶悪の一言に尽きる。日常動作の様に自然と人を刺し、殺めることが出来る外道。鳶雄た

ちは、そのフトミミに目を付けられており、今までに何度も戦ってきた。だが、いずれも倒せず、逃している。

紗枝もまたとある機関と魔術師たちによって創られた獣をその身に宿しているが、現在は使用不可能となっている。もし、フトミミに狙われたら――最悪な想像によって鳶雄の足は速さを増す。

◇

鳶雄が戦闘終了の報告をする数分前。紗枝は一人で鳶雄たちの報告を心待ちにしていた。

鳶雄たちとの距離は、それ程離れていないが、夜の闇のせいでどうしても心細さと恐怖を覚えてしまう。

「早く声が聞きたいよ……鳶雄」

その願いが届いたのか、インカムから鳶雄の報告が入って来る。返事をしようとすると――

「それは君のボーイフレンドの名前かい？」

孤独の中で高まっていた緊張が想い人の声で解れた瞬間に突然の知らぬ声。不意打

ちの様に叩かれる肩。その二つによって一気に弾け、紗枝の口から悲鳴という形で飛び出す。

「きゃあああああああああ！」

インカムの向こうの鳶雄が何かを言っているが今の紗枝に、それに応じる余裕は無かった。

「わおっ！」

紗枝に悲鳴を上げられ、肩を叩いた人物も驚く。紗枝の背後に立っていたのは、ブロンドの髪の三十代の外国人男性。場に不似合いな皺の無いスーツを着ている。

「いやいや待ってくれ！　その反応は無いんじゃないかな？　ボクは怪しい者じゃない！　考えてもみてくれ！　こんな時間にこんな場所で女の子が一人で立っていたら心配になって声を掛けるだろ！　家出少女かもしれないし、幽霊かもしれない！　ボク的には幽霊を期待していたが違ったみたいだ！　残念！　君は家出少女かい？　家出する場所は選ぼう！　人気の無い所で誰かに襲われるかもしれないよ！　っというかよくよく考えたらこんな場所に居る僕も怪しいな！　うん！　家出少女の君！　その反応は正しい！　」

「えっ、えっと……は、はい……」

男の夜の闇を吹き飛ばしそうな程のテンションの高さと早口に呑まれて、紗枝はつい

普通に答えてしまった。
「しかし、本当に危ない場所だよここは！　どんな理由があるかは分からないがさっさと帰った方がいい！　ボーイフレンドが近くに居るんだろ!?　さっさと迎えに来て貰い給え！　それとも実はボーイフレンドとここで口には出せない様なことをする為に居るんなら先に謝っておこう！　申し訳ない！　ボクが色々と雰囲気を壊してしまった！」
「ち、違いますから！」
　変な誤解が生まれそうだったので、紗枝は顔を真っ赤にしながら否定する。
「そうなのかね？　なら――」
「紗枝ぇぇぇぇ！」
　刃と一緒に駆け付ける鳶雄。不審な男を見て即座に臨戦態勢に入る。
「誰だ！」
「ボクは怪しい者だっ！」
「おっ、おお……そうなんだ……」
　男の突然の宣言に、沸き立っていた怒りが一気に引っ込んでしまう。
「怪しい者ではないと言って怪しまれたから、今度は逆に怪しい者と宣言してみたが、君の反応を見て分かった！　失敗だなこれは！　ちゃんと自己紹介をさせてもらおう！

ボクはマニー・カター、ここに現れた理由は一言で言えば『趣味』だ！　じゃあ、今度はこちらから質問しよう！　君たちは何者だ!?　ここで何をしているんだ!?　っていうか何だその犬はぁぁぁぁ!?」

話の流れを自ら断ち切って刃に飛び掛かる様に近付くマニー。

刃はいきなり近付いて来たマニーに威嚇の唸り声を上げる。

「これはあれだね！　もしかして、もしかしてだけど！　ボクも初めて見るが！　セイクリッド・ギアってやつかね！『独立具現型』の！　凄いなー！　いいなー！　ボクも欲しいなー！　っていうか君らはそっち側の人間か！　ここで何か揉め事でもあったかい!?」

セイクリッド・ギア、独立具現型、その言葉だけでマニーという男がこの世の裏に関わっている人間なのが分かる。雰囲気に呑まれて掛けたが、マニーという男はやはり怪しい――言動は既に怪しいが。

「撫でていい？　撫でていいかい？　こんな機会など滅多に無いからね！　というか撫でさせてくれ！」

マニーが刃に手を伸ばす。すると、刃は額から日本刀に似た突起を出してマニーに触れるなら刺す、と威嚇する。

「えい」

一瞬の躊躇も無くマニーはその突起に掌を突き刺した。
「いったぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
掌から血を流しながら大きく仰け反り、そのまま倒れる。
「冒険し過ぎたぁ！　せめて指先にしとけばよかったぁぁぁ！　いたたたたた！」
ゴロゴロと左右に転がりながら、異常なテンションで叫び続ける。
マニーの奇行に鳶雄は言葉を失ってしまう。刃など尻尾を丸めている。独立具現型の神器ですら、マニーの行動には恐怖を覚えるのだろう。
「だ、大丈夫ですか……？」
そんなマニーに怖れを抱きながらも紗枝は声を掛ける。幼馴染の底知れぬ優しさに感動する一方で、お人好し過ぎて心配になる鳶雄。
「いたた！　ふはははははは！　痛いなぁー！　はっはっはっはっは！」
悶絶する声に笑いが混じり、鳶雄はいよいよマニーを狂人と認識し始める。
左右に転がっていたマニーであったが、急に跳ね起きて鳶雄と紗枝を見て、実に無邪気な笑みを見せた。正直、整った顔の部類であるマニーのその笑顔は、ギャップで女性をときめかせることも出来るだろうが、マニーの狂行を見ている鳶雄たちの視点では狂気染みた笑みに見えていた。
「いやー！　好奇心で首を突っ込んでみたが、いい経験が出来たよ！　ありがとう！

サンキュー！　二人ともありがとう！」
　マニーは二人と無理矢理握手をする。
「紗枝！　鳶雄！　今日のこの日の経験は、ボクの記憶の中に永遠に残るだろう！　実にグッドだ！」
「な、何で俺たちの名前を……！」
「え？　紗枝は鳶雄の、鳶雄は紗枝の名前を言っていたじゃないか？　片や心細さに思わず！　片や必死な様子で！　甘酸っぱい青春のニオイを感じるなー！　ボクの青春なんて薬品と本のニオイしか覚えていないっていうのに！　あはははは！」
　思わず赤面する鳶雄と紗枝。そういう関係に見られたことに気恥ずかしさを覚える。
　マニーは晴れやかな笑みを二人に見せながら、ポケットに手を入れ、厚みのある正方形の紙を取り出す。
　その紙は折り畳まれており、開くと顔を隠せるぐらいの大きさになった。
　紙を足元に置き、マニーは手を振る。
「この思い出が色褪せない内に、ボクの実験に生かさせて貰うよ。グッバイ、お二人とも！」
　ヒョイッと軽く跳び上がって紙の上に着地。すると、紙に複雑な記号が浮かび上がり光を放つ。紙に描かれていたのは間違いなく魔法陣であった。

マニーの体が薄っぺらい紙の中へ沈んでいく。足、胴体、そして頭部まで入っていく。最後まで残っていたのは伸ばされた手。ずっと鳶雄たちに振られていた。

その手も紙の中に消え、残った紙も独りでに燃え始め、すぐに灰になってしまった。

マニーが消えた途端、夜本来の静けさが戻る。あまりにマニーが騒がしかったせいで、夜とはこんなに静かなものだったのかと実感してしまう。

「一体何だったんだ……」

突拍子も無く現れ、嵐の喋って騒ぎ、最後は幻の様に消えてしまった。刃も困惑した様に鳴いている。

「紗枝、何もなかったよな……？」

「う、うん。凄い一方的喋られたけど……」

幼馴染もマニーには困惑しか覚えていなかった。通りすがりにしては、色々と強烈な個性の持ち主であった。

実は、紗枝は一つだけ鳶雄に隠してしまったことがあった。マニーに握手をされた際にコッソリと手渡しされた折り畳まれた紙。つい言いそびれてしまっていた。

鳶雄が他のメンバーと通信している内に密かに紙を開く。しかし、紙には何も描かれていない白紙だった。

渡された時に小声で『驚かせてしまったお詫びに。もしもの時にどーぞ』と言われた

が、変な感じなどはしなかった。親切心から渡されたものだが、白紙を少し不気味に思ってしまう。

（やっぱり捨てようかな……）

そんな事を考えると――

「捨てないでね」

――マニーの声が聞こえ、ビクリと体を震わせた後、急いで振り返る。だが、誰もいなかった。そもそも鳶雄も刃も反応していない。印象が強過ぎるマニーのお喋りが耳の中で残響しているのではないか、と考えてしまう。

「おーい」

遠くから夏梅の声が聞こえてくる。

鳶雄はその声に応えている間に、紗枝はその紙をポケットの中に仕舞うのであった。

◇

ネフィリムに入り、初めての正月を過ごした鳶雄たち。休み明けはひたすら特訓の日々であった。

グリゴリの幹部であるアルマロスの指導の下、同じネフィリムのセイクリッド・ギア

の使い手や夏梅や鮫島と模擬戦闘をしたり、バラキエルの下で模擬戦闘の反省会をし、互いにディスカッションをするなどしていた。

勿論サカハギもこれに参加しているが、殆どが十代の中で一人だけ倍以上年を取っているので存在自体かなり浮いている。だが、持ち前の社交的で紳士な性格のおかげで鳶雄たち以外の生徒にも慕われていた。

セイクリッド・ギアの操作や術を覚える日々を送る鳶雄たち。

大きな変化はアザゼルによって齎される。

ラヴィニアが所属する魔法使いの組織『灰色の魔術師（グラウ・ツァオベラー）』の理事であるメフィスト・フェレスが来日した。

目的は日本の五大宗家との会談。鳶雄たちはその護衛の任務を頼まれた。

ラヴィニアは当然これに了承。一人では不安だというラヴィニアの頼みを聞き夏梅たちも了承。

鳶雄も自分のルーツである五大宗家の姫島に興味があり、姫島の当主でありはとこである姫島朱雀と会いたいと思い、皆と同じく護衛の任に着く。

それから二日後、鳶雄たちは空港にてメフィスト・フェレスと会う。

スーツ、ステッキにシルクハットという目立つ格好。ただ、理事という肩書の割には固さの無い気さくな人柄をしていた。

鳶雄たちはメフィスト・フェレスと共に五大宗家とゆかりのある神社を目指す。そこが待ち合わせ場所であった。

しかし、そこで鳶雄たちにとって予想外のことが待っていた。

◇

戦闘。一対一なのではなく異なる人種、年齢、性別の者たちが本気の殺し合いをしていた。中には見覚えのある者も居る。

「邪魔をするな。この聖剣は人間を斬る為にあるのではない。特に貴様の様な狂人などな」

「ははははは。頭おかしそうな奴に狂人呼ばわりされる筋合いは無いなぁ！」

黄金に輝く長剣を振るう無精髭を生やした三十代ぐらいの男性が、青年――フトミミのナイフと斬り合う。

「わーお、わーお！　何このイレギュラー！　センセ、センセ！　混ぜて混ぜてー！」

十代前半の銀髪の美少年は、銃から容赦無く光で固められた弾丸を撃ち出す。フトミミはマネカタの力で数秒先の未来を予知していた為、光の弾丸を見ることなく回避してみせた。

「引っ込めガキー。弱い者いじめは暇な時にしかしないんだよ、俺はー」
「フリード、下がっていろ。これはお前の手に余る」
ナイフと聖剣と称される剣が交差――するかと思いきや、二つの刃は触れる前に停まり、両者は同時に離れる。
その間に降って来たのは坊主頭の屈強な体格の男性。白く発光した体から振り下ろされた拳が地面を叩き割る。
「おいおい。なに二人で盛り上がってんだよ?」
「何だ?　混ぜて欲しいのか?　来い来い、遊んでやる」
「上等だこらぁ!」
フトミミの挑発に敢えて乗って坊主頭の男も二人の戦いに加わり、三つ巴となる。
「びゃ、白虎さん!　無茶しないで下さい!　それに戦闘は私たちの仕事じゃありません!」
小学校高学年ぐらいの小柄な少女が小さいながらも頑張って大声を出す。雨が降っていないのに黄色のレインコートを着て、甲羅の様な背嚢を背負っている。足元には亀が寄り添っているが、尾が蛇になっており、普通の亀とは違っていた。
「迎えるには、どっちにしろこいつらをどうにかしないといけないだろうが、玄武!　キリスト教の戦士と噂の殺人鬼。戦うのは初めてだが、まあ、なんとかなんだろう」

玄武と呼ばれた少女の言葉を聞かず、白虎と呼ばれた男は戦いを続ける。
「ああもう！　どうしてこんなことに！」
玄武は嘆きながらも背嚢から符を何枚も取り出して構える。
真羅白虎、童門玄武。二人とも五大宗家の次期当主であり、五大宗家が司る霊獣と契約した者たちである。
二人の役目は神社に来る筈のメフィスト・フェレスと鳶雄たちを迎えることであった。
しかし、メフィスト・フェレスが五大宗家と接触する為に来日したという情報は外部に洩れており、教会の対異形用のエージェント――エクソシストと呼ばれる者たちがメフィスト・フェレス及び鳶雄たちを狩る為に待ち潜んでいた。
聖剣ガラティーンの所有者ダヴァード・サッロとその教え子であるフリード・セルゼン。彼らはメフィスト・フェレスたちが来るのを待っていたのだが、そこへフトミミがふらりとやってきた。
出会った瞬間、両者はお互いを敵と認識。五秒も待たずに殺し合いが始まる。その騒動を聞き、白虎たちも現れ、戦闘に巻き込まれてしまった。
後は互いの手札を探りながら、隙あらば喉元に刃を突き刺そうとする命の取り合いである。

やる気を見せる白虎とは対照的に玄武の方は早く戦闘を終わらせたかった。でなければ、メフィスト・フェレスや鳶雄たちも戦いに――

「おやおや」

「なっ！　フトミミ！」

――玄武の動きが止まる。ダヴァードたちやフトミミ、白虎も止まっていた。恐る恐る声の方を見れば、立ち尽くすメフィスト・フェレスと鳶雄たち一行。

「間に合わなかったー！　白虎さん！　来ちゃいましたよー！」

「見りゃ分かる」

慌てる玄武とは反対に、白虎の方は落ち着いていたが、面倒くさそうな表情をしている。

「エクソシストに五大宗家の方々、そして噂の殺人鬼君とは……何とも珍しい組み合わせだね」

どう見ても戦っていたであろう状況で呑気な感想を言うメフィスト・フェレス。

「やあ。鳶雄君とそのお仲間さんたち。俺たちやっぱり縁があるね」

友達の様に気さくに声を掛けるが、鳶雄たちは警戒し、刃は唸る。そんな中で無言で前に出る人物が居た。

「サカハギさん！」

　鳶雄が止めようとするが、その手が途中で止まる。サカハギから発せられる怒気と殺意に体が一瞬硬直してしまった。
「あんれぇ？　センセ？　何か物凄く親近感というかー、こっち側のニオイがする方が出てきましたがぁ？」
「ほう？　あれが資料にあったサカハギか。フリード、その直感は正しい。殺しの数ならお前を遥かに上回っているぞ」
「わーお」
　フリードは楽し気に笑う。
　殺意や狂気が入り乱れ、戦場は更なる混沌へ導かれていく。

◇

　エクソシストたちやフトミミを切り抜けた鳶雄たちは、五大宗家の屋敷『奥の院』に招かれる。
　そこで以前会った姫島朱雀と櫛橋青龍と再会する。
　四神の霊獣使いたちに案内され、奥の院にて五大宗家筆頭百鬼家の中核であり現当主百鬼中神黄龍と顔合わせをする。

霊獣使いの長であり自らも霊獣『黄龍』と契約を結ぶ若くして才のある男であった。
その後、メフィスト・フェレスと五大宗家のトップとの会談が行われ、姫島から離れ、神滅具の力を宿した鳶雄の実力を見せる為に、四神と四凶との模擬戦が行われた。
互いに並々ならぬ実力を見せ合い、評価し合う四神と四凶。
メフィスト・フェレス護衛の任務も一先ず終了したかと思った矢先、五大宗家本拠地が襲撃を受ける。
敵は四国の大妖怪、化け狸の長隠神刑部とその一派。そして、おとぎ話の桃太郎のモデルとなった鬼、温羅とその配下の鬼たち。オズの魔法使いの者たちに焚き付けられ、五大宗家と『黒刃の狗神』を狙って動いた。
妖怪たちにより奥の院を守る結界が破壊しながら進行していた。
四神の霊獣使いたちと鳶雄たちは協力し、撃退に当たる。
奥の院へと攻め入ってくる化け狸や鬼たちを、四神や四凶がその力で次々と返り討ちにしていく。
優勢に進めていたと思いきや、妖怪側はオズの魔法使いから与えられた人工妖怪『空亡』によって力と再生能力を得て、押し返し始める。
追い詰められていく鳶雄たち。そこで考えられたのは、『黒刃の狗神』が宿す『天之尾羽張』に儀式によって火之迦具土神の炎を宿すというもの。

皆が防衛戦で時間を稼ぐ中で、鳶雄は朱雀により儀式が施される。
その水面下で、静かに悪意が動いていた。

◇

紗枝は鳶雄が儀式に行くのを見送り、車によって安全な所まで運ばれる筈であった。
突如、その車が何者かに襲われ、転倒する車の中で紗枝の視界が何度も入れ替わる。
「うう……」
車から這い出る紗枝が見たものは、周囲を囲む化け狸と鬼たち。
「おう。この娘でいいのか？」
「ああ、間違いねえ。西洋の術者どもが言っていた女だ」
妖怪たちの狙いは間違いなく紗枝。
「な、何で……」
思わず言葉が洩れる。彼女には妖怪たちや術者に狙われる心当たりが無かった。
「お前、狗神のつがいだろ？」
「お前が死ねば、狗神の奴は暴走するらしいじゃねえか」
「ちょっくら暴れさせて五大宗家の奴らを皆殺しにしようと思ってな」

「っていう訳で死んでくれや」

あまりにあっさりと告げられた死の宣告。だが、紗枝が恐れたのは自分の死ではない。自分の死によって鳶雄の禁手が暴走し、鳶雄や皆を苦しめることを恐れた。

（何か、何か……！　あっ）

触れたのはマニー渡された例の白紙。もしもの時、そう言って手渡されたこれがこの絶体絶命の状況で役立つかは分からない。しかし、紗枝に残された手段はこれしかなかった。

紙を取り出し、広げる。妖怪たちは白紙を見せられ、少し困惑する。

広げた所で何も起きなかった。虚仮脅しと思い、妖怪たちの手が紗枝と伸ばされていく。

（助けて！　誰か！　死にたくない！　私は鳶雄や皆と一緒に居たい！）

強く願った瞬間、白紙に浮かび上がる紋様。魔術に精通している者ならそれが召喚の為の魔法陣に似ていることに気付く。そして、見たことも無いアレンジが加えられていることにも。

マニーが紗枝に渡したものは、彼の独自の研究によって作り出されたオリジナル転送魔法陣。マニーの理論上、時と場所を選ばずに悪魔を呼び出せ、何か持っていそうだから渡してみよう、という完全な思い付きで紗枝の手に渡った代物である。

光が輝き、何かがこの場に現れようとする。妖怪たちは只事ではないと察し、召喚される前に紗枝の命を奪おうとする。

光の中から突き出された拳が妖怪の一体の顔面に打ち込まれ、そのまま粉砕。

更に魔力の波が妖怪たちを呑み込み、荒れ狂い、渦巻く魔力によって妖怪たちを原型を留めない程破壊する。

光が収まり、中から出て来たものを見て紗枝は目を瞠った。

◇

四神と四凶。隠神刑部と温羅。禁手に至り天之尾羽張に火之迦具土神の炎を宿す鳶雄。

空に浮かんでいた空亡はシグネの饕餮が喰い尽した。妖怪たちが強化されることは無い。

全ての決着を付ける最終局面。

『ガハハハ！　やるじゃねぇか！　どれ最後に……ん？』

『……ああ？』

隠神刑部と温羅が同時にある方へ目を向ける。彼らだけでは無い。朱雀たちの四神

もまた同じ方を見つめていた。
「あ……ポッくんが起きた……」
変化は四凶たちにも起きている。空亡を食べて寝ていた筈の饕餮が目を覚まし、やはり同じ方角を見つめる。夏梅と鮫島の四凶もまた同様であった。
「これは……」
刃と一体化している鳶雄は寒気立つ感覚に襲われていた。火之迦具土神の炎ですらその寒気を消すことが出来ない。
以前にも感じたことのある感覚。そして、刃を通じて鳶雄の中に強烈な意思が流れ込んでくる。
斬れ。切れ。伐れ。斬れ。
まるでそれが使命の様に頭の中に叩き付けてくる。
過熱していた戦場が、嘘の様に静まり、それが来るのを待つ。
そして、来た。
その姿に誰もが戸惑う。
学校の制服を纏い、鳶雄たちとそう年齢が変わらない青年がごく自然な動きで歩いて来た。
警戒する要素など何も無い――筈なのに目を離すことが出来ない。特に、その右手に

輝く紋様から。
「誰、だ……？」
「――間薙シン。行ってくれと頼まれて来た」
偶然に偶然が重なる奇跡によって、刃狗は人修羅と時を超えた邂逅を為す。

ハイスクールD・　EX

「――ん？」

魔法陣から出て来たシンは違和感から周囲を見回す。

何の運命の悪戯なのか。いつも通りに悪魔としての仕事で呼び出されたかと思えば、何故か数年前の過去に転送され、そこで呼び出した少女と契約という形で協力して鬼や妖怪と戦う羽目になった。

それで終われば良かったものの、何故かそこから五大宗家の四神や独立具現型のセイクリッド・ギアである四凶と誤解から戦うことになってしまった。

終いには神滅具所持者である刃狗とも本気で戦い合うこととなり、人生で何度目かになる死の予感を覚えた。

結局最後は誤解が解け、互いに自分たちの過ちを謝罪して一件落着となり、シンは魔法陣で現代へ戻る――筈であった。

戻ってきた場所は何故かオカルト研究部部室ではなくそこら辺りにある変哲もない寂れた公園であった。

場所が違うのは不正規の召喚をされた影響によるものだと思うが、真っ先におかしい

と思ったのは肌に伝わる外気である。
最近少し寒くなってきたと思っていた程度であったが、この時の外気は真冬そのものであり吐く息もハッキリと白くなっている。
シン自身鈍くないので自分が置かれている状況を察し始めていた。だが、察しの良さなど要らなかった。鈍いままでいれば頭を抱えずに済む。
そう思いながらいつまでも公園で立っている訳にもいかず、公園を出て歩き始めた。
時刻は深夜。周囲に見覚えが無い。携帯電話で連絡を入れようとしたが過去に転移した影響のせいか故障して電源が入らない。何処までも優しくない状況に途方に暮れそうになる。
だが途方に暮れても何の意味も無いと分かっているので兎に角歩いた。暫く歩いた後、何気なく視線を動かした先に電光掲示板があることに気付く。そこに流れている日付を見て、シンは天を仰いだ。
途方に暮れても意味が無い。だが、この様な状況ならば仕方ない。
「過去の次は未来か……」
電光掲示板に流れる文字には数か月先の日付が流れていた。
今度こそどうしたものかと悩む。沈黙のまま悩んだ後、取り敢えず何処かで野宿をして明るくなったら何とかオカルト研究部のメンバーに連絡を入れることに決めた。

その際にこの時間の自分はどうなっているのだろうか、という疑問が生じたが無視する。何か起きたらその時はその時と割り切るしかない。

やることが決まれば寒さを凌げる場所を探す。真冬の気温に対してシンの服装はやや薄手であった。

適当に歩いて探そうとした時――

「うん？」

――シンは奇妙な感覚を捉える。悪魔でも天使でも堕天使でも魔人でも無い今まで経験したことの無い感覚であり、頭の中で金属の板がたわむ様な音が響く。

どう考えても普通のことでは無いが、シンの足はその感覚がする方へ向かっていた。

気配を辿って歩き続けた先にそれらはいた。

第一印象は昆虫であった。

銀色の外骨格の様な見た目に角張った箇所も無く丸みのある全体。一応人間と同じ様な四肢があり、頭部もある。頭部には鼻や口など無く複眼を思わせる目が付けられているだけであった。

数は二体。シンの存在に気付いてそれらは一斉にシンを見る。無機質な視線を浴びせられながらシンは、見る角度が変われば宇宙人のようだ、と場違いな感想を抱いていた。

「何だこれは……？」
見た事も無く生物か機械かも判断出来ない存在。
シンは取り敢えず一番近い場所に立っているそれに接近してみる。
それとの距離が二メートルまで縮まった時、頭を小刻みに震わせながら青い色の複眼が赤へと変わる。
全身に赤い紋様が浮かび上がり、目から赤い光線が――
「機械なのか？」
――発射される前にシンの指先がそれの喉を斬り裂き、左手で頭部を胴体から引き千切る。
首を千切られても体液は流れず、断面には触手の様なものが蠢いていた。
頭部の方もまだ赤い目を輝かせていたので頭頂部に拳を打ち込む。金属ではなく分厚いゴムを思わせる感触が拳に伝わってきた。
剛柔の性質を兼ね合わせた体を持っているが、万物を貫通してしまうシンの拳の前には意味が無く、突き抜けた衝撃が頭部に内蔵されている重要な装着を破壊したらしく目から輝きが失せた。
シンが一体に構っている間に別の個体が目から光線を発射する。視界に収めずとも攻撃の気配を感じ取ったシンは横に滑る様にしてそれを回避。すると、外れた光線が折

れ曲がる様に軌跡を変え、再びシンを狙って来た。
追尾する光線に対しシンは引き千切った頭部を盾にする。頭部に光線が命中し溶け始める。光線を受け切ると手に伝う前に投げ捨てた。
目に赤い輝きが発するのが見える。撃ち出される前にシンは氷の息を頭部目掛けて吐き出す。
顔面だけでなく全身が氷の息によって凍結し出し動きが鈍ると、その間に接近して複眼に拳を打ち込んだ。
レンズの様な複眼が割れ、シンの拳が内部に入り込む。それでも痛覚が無いらしく目を一つ潰されても構わずに攻撃しようとしてきた。
シンが軽く息を吸う。空気の爆ぜる音と共にシンは魔力を電気に変換して放電。内部から相手を焼く。
電気を流し込まれた謎の物体は激しく痙攣するが、それでも動いて反撃しようとしてくのが分かったので、放電を止めて拳に炎を灯す。
頭を内側から融解させられると流石に限界が来たらしく動かなくなった。
「やっぱり機械か？」
引き抜いた手を振りながら機能停止した謎の物体を観察する。戦った感想としては有機物と思える要素が強いが、それだけでない生物的な何かも感じられた。もしかした

ら両方の要素を持った新生物なのかもしれないが、そんな新種は天界、冥界に関わっているシンは見た事も聞いた事も無い。
そもそも何故こんな場所にいるのかさえ意味が分からなかった。
もう少し調べてみようと思った時、上から殺気と重圧を感じ取る。すぐにその場から離れると真上から巨大な物体が落下し、調べようとしていた謎の物体を押し潰してしまった。
【嫌な気配がすると思って来てみたら、面白そうな奴がいるじゃねぇか！】
ガラの悪い声を発するのは機械で創り上げられたドラゴンであった。
大きさは約十五メートル。緑色の光沢を放つ機械の体からは蒸気が噴き出し、両腕の前腕部分は一回り以上太く設計されており重厚感のある形をしている。背中に両翼は無いが腰部にはロケットエンジンに似た装置を付けおり、噴射孔から発せられる熱で陽炎が見える。
【へっ、赤い奴のガキ共以外に歯応えの――】
機械のドラゴンはそこで喋るのを止め、シンの顔を凝視する。或いは解析しているのかもしれない。
【て、てめぇぇぇ！】
突如として怒号を上げる機械のドラゴン。金属の口が生物の様に変形して牙を?く。

【人修羅かっ！　何故てめぇがここにいるっ!?】
機械のドラゴンはどういう訳かシンのことを知っていた。
「……何で俺を知っている？　誰だ？」
【ふざけんじゃねぇぇぇ！　我が主レッズォ・ロアド様が受けた屈辱！　そして、このガルヴァルダンに一生雪げない恥を掻かせてくれたことを忘れたとは言わせねぇぇ！】
レッズォ・ロアドとガルヴァルダン。どちらも全く聞き覚えが無い名前。だというのにガルヴァルダンの方はシンに強烈な殺意を抱いている。体内の機関がガルヴァルダンの怒りに合わせてエンジンの様な轟音を出していた。
二つの名前を聞いてもこれといった反応を示さないシンにガルヴァルダンは更なる怒りを募らせるが、不意に何かに気付いた。
【――ちょっと待て。てめぇ、顔の紋様はどうした？　というかその恰好……】
一転して急に冷静になるガルヴァルダン。というよりも困惑している様子。
【ああ、そうか。そういうことかよっ！　てめぇはこの時代の人修羅かっ！】
一人で納得したかと思えば急に笑い始める。
【我らが神に感謝するぜぇぇ！　未熟とはいえてめぇを殺せる機会を与えて下さったことに！】
腰部のロケットエンジンが火を噴き、巨体が急加速して突撃してくる。

突進を受ける前にシンは横へ移動して躱すが、ガルヴァルダンは即座にロケットエンジンの向きを変えて急旋回する。
【逃がすかよぉぉ！】
ガルヴァルダンの前腕部が左右に展開し、中から砲身が伸びる。
【吹っ飛べやぁぁぁ！】
砲口からシンの体よりも大きな光弾が発射された。相手の動きを見ていたシンは足を止めずに移動していたことで狙いを外し、光弾は数十の木々を消滅させた後に地面へ着弾。瞬時に地面を蒸発させて数十メートルの穴を作り上げる。
単発ではシンに当てられないと判断したガルヴァルダンは、両腕の砲身を向けと共に口部を開き、そこに光線の光を灯しながら更に背部のバックパックを展開。バックパック内部はミサイルで埋め尽くされていた。
周囲一帯全てを焦土と化してでもシンを倒すべくガルヴァルダンは一斉発射する。
【消えて無くなれやぁぁぁぁ！】
夜の世界が一瞬朝に逆転したのかと錯覚する程の閃光の後、その音だけで死人が出るのでは無いかと思える程の爆音が鳴り響く。
一斉発射後のガルヴァルダンは油断することなく両眼のセンサーでシンを探す。地形が変わる程の砲撃、爆撃であったがシンの遺体もしくは一部を発見するまで安心する

ことなど出来ない。
爆風で巻き起こった煙をも透過するセンサーや熱探知、魔力による探知などを駆使してシンの今の状態を探るガルヴァルダン。
やがてセンサーがシンの場所を特定。そこは――ガルヴァルダンのすぐ傍。
【ごっは!?】
感知と同時に体に障壁を纏うガルヴァルダンであったが、シンの拳はそれを貫通してガルヴァルダンの装甲に拳を捻じ込んでいた。
機械のドラゴンの巨体が体格で遥かに下回るシンの一撃によって数歩後退させられていく。
振り抜いた拳を戻すシン。嵐の様な攻撃を受けて無傷とは行かず、制服の何箇所焦げ付き、血が滲んでいる。しかし、致命傷には至っていない。
【ごほ！　ごほ！　覚えがあるぜこの痛み……！　嫌という程になぁ……！】
拳が打ち込まれた箇所は凹んでいたが、すぐに凹みが元に戻る。同時にガルヴァルダンの殺気が一段階上がる。
鋭さと荒々しさを増したガルヴァルダンの視線を受けてもシンはいつも通りの無表情で見返す。
【だが、やっぱりこの世界のてめぇはまだまだ未熟だなぁ！　俺の知っているてめぇ

だったら俺の下半身が一撃でおしゃかになってたぜぇ！】

痛みを覚えながらも勝機があることを確信して笑うガルヴァルダン。

【てめえもあいつらもここで殺すっ！　我が主レッズォ・ロアド様の名誉に掛けてなっ！】

ガルヴァルダンは武装を展開する。シンは片手に炎を灯し、もう片方には魔力剣を握る。

大地を揺るがす衝突が再び起こる。

◇

とある？華街の喫茶店でアザゼルは時間を潰していた。ただし一人でではない。相席するもう一人の少年がいた。

鮮やかな紅髪の少年。その髪の色にも目を惹かれるが少年の容姿もまた整っており、二重で注目を集める存在感を放っている。

少年の名はイクス・グレモリー。グレモリーの姓からしてリアスの関係者であることは間違い無いが、その関係性を正確に見抜くことは不可能であろう。

何故ならばこの少年は三十年後の未来からやって来た一誠とリアスの息子なのだ。

赤龍帝と純血の悪魔を親に持ち、剣の師匠として木場に鍛えられ、戦いを白龍皇であるヴァーリに教えられたサラブレッドという言葉すら霞む途方も無い逸材である。

そして、未来から来た一誠の子供は一人だけでなく複数人来ている。アザゼルは既にアーシア、朱乃、ゼノヴィア、イリナ、小猫、黒歌との間に出来た子とも会っていた。

彼が未来から来たのはこの時代に現れた異世界の生物『ＵＬ（ウル）』を追ってのこと。『ＵＬ』とは『Ｕｎｄｅｒ　ｗｏｒｌｄ’ｓ　Ｌｉｆｅ　ｆｒｏｍ』の略称であり、異世界の邪神とそれが創り出した機械と生物を融合させた兵隊たちの総称である。

尚、この時代に『ＵＬ』が現れた理由は何十年も姿を消していたロキが突如として出現し、『ＵＬ』と結託して過去へ跳び歴史改変を行おうとしているとのこと。

過去へ時間跳躍する前、ロキは三十年後のアーシアに呪いをかけており、その呪いを解くことも彼らが未来から来た理由の一つである。

他の一誠との子たちと協力して『ＵＬ』とロキの撃退が目的なのだが、少々イレギュラーなことも起きている。

未来から来た『ＵＬ』の中で邪神の直属の眷属である『羅⊠七曜』という凶悪無比な存在がいるのだが、その七曜は『四　将（インヴェイド・ファナティック）』という強力な僕を有している。

その七曜であるレッズォ・ロアドの四将であるルマ・イドゥラとガルヴァルダンがこの時代に来ているのだが、ガルヴァルダンが一誠の子たち以外の何者かと戦闘を行った

形跡が見つかったのだ。
　この事態にアザゼルと一誠の子たちは困惑する。未来への影響を最小限に抑える為に一誠たちに正体を隠して戦うなどの措置などを行っていたが、ガルヴァルダンと戦闘した何者かによって未来からの侵略が明かされてしまう恐れがあった。
　ガルヴァルダンは龍王と同等以上の力の持ち主。戦闘の形跡にはガルヴァルダンの体の一部が破片として残っていたが、ガルヴァルダンと戦った者の死体どころか痕跡も残っていなかった。状況を見るにかなりの実力者であることは間違い無い。
　その事も含めて一誠の子たちの上官と相談することなり、その時が来るまでイクスの一誠の子としての悩み相談を受けていた。
「アザゼル初代総督。上官の命でお迎えに参りました」
　アザゼルに声を掛けるのは黒髪の細身の少年。男にしては妙に色気のある顔立ちをしており、男女問わず喫茶店の客の視線を独り占めにする。
　青年の名は姫島紅。朱乃と一誠との子であり長男でもある。
　準備が出来たので彼らの上官の下へ行こうと席を立ち上がったとき――
「アザゼル先生」
　名を呼ばれて思わずアザゼルは硬直する。その声の主はアザゼルにとってよく知る人物のものであった。

「……何でお前がここに居るんだ？」
今回の件について知られたくない人物にあっさりと知られてしまい、流石のアザゼルもどうしたものかと悩んでしまう。
「ちょっと面倒なことが起きて……」
シンがアザゼルを見つけたのはただの偶然であった。駒王町に何とか戻り、これからどうするべきかと考えていた時に喫茶店に居るアザゼルを発見して思わず声を掛けてしまった。
浅慮だったかもしろないが現状最も頼りになるのはアザゼルしか思いつかない。
シンはアザゼルにどう説明するべきか言葉を選んでいる最中、二人の少年の視線に気付く。どちらもシンを呆然とした様子で見つめていた。
歳はそう変わらない黒髪と紅髪の少年たち。何故なのか初対面の筈なのに既視感を覚える。
「面倒なことって……いや、俺の方も面倒なことが起こっているんだが……」
アザゼルはイクスたちの反応を窺う。唖然としている二人だが、シンにバレたことに驚いている割には反応が過剰と言えた。
「ア、アザゼル初代総督。確認しますが……彼の名は？」
紅の態度がおかしい。イクスの方もシンに対して警戒している。

「あ？　間薙シンだが……？」
二人が息を？むのが分かった。
「間薙シン……本物の人修羅だ……」
「『混沌王』……実在したんだ……」
未来に於いて『ＵＬ』と戦う魔人。圧倒的な強さ故に『ＵＬ』だけでなく他の勢力からも恐れられた存在。
彼が戦った後はあらゆるものが区別付かず入り混じったものと化すことから何時しか付けられた『混沌王』という異名。
彼が現れた戦場はまず全滅を免れないことからイクスたちにとっては名前しか知られていない存在であり、数少ない目撃者である彼らの父や師、上司の証言が無ければ実在したのかすら危ぶまれていた。
『混沌王』。聞いた事も無い筈の名を呼ばれ、シンは微かに顔を顰めた。

◇

「ご機嫌よう。先生」
駒王町の地下にある広々とした空間でアザゼルに挨拶するのは精悍な顔付きに黒い

ローブの上からでも鍛えているのが分かる体格をした金髪をオールバックにした男性。
アザゼルですら気圧されそうになるプレッシャーを放ちながらも気品に満ちており赤い双眸には懐かしむ色を宿していた。
この男性こそがイクスたちの上司であり、アザゼルには男性の容姿にある少年の面影を見た。
「そうか。ギャスパーか」
「はい。大分変わってしまいましたが、私はギャスパー・ヴラディです」
三十年後のギャスパー。今の女装男子のギャスパーからは想像も付かない雄々しい姿となっている。
ギャスパーが語るに『ＵＬ』は各神話大系の歴史すらも改変して自分たちの都合の良い歴史を創るのを目的としている。その過程で未来の仇敵となる一誠たちの存在も無かったことにしたかったと言う。
その為にレッズォ・ロアドは全ての『四将』とそれが率いる軍勢を未来に送る予定であったが、未来のギャスパーたちの妨害によって敵戦力の大半が時間転移に失敗した。
「問題は七曜のレッズォ・ロアドもこちらに転移しようとしている点でしょうか。流石に七曜クラスがこの世界に来てしまったら各神話大系に大きな影響を与えるでしょう。それは避けなければなりません」

現状でもかなりの戦力があるが時間との争いになっている。
「それなんだが……向こうにとっても俺たちにとってもとんでもないイレギュラーが起きてな……まあ、俺たちにとっては都合が良いんだが……」
「それはどういう意味ですか？」
「おーい」
アザゼルに呼ばれ、この空間へと入ってきたのはシンであった。
シンを見た途端、ギャスパーは双眸を見開く。
「間薙……先輩……」
信じられない様子でその名を呟くギャスパー。その様子にイクスたちも信じ難い気持ちであった。
彼らにとって上司であるギャスパーは、常に冷静沈着で威圧感があり、怖くて、どうやっても勝てる想像が出来ない絶対的な存在であった。
「久しぶり――というのは変か？」
未来でどういう関係になっているのかは分からない。しかし、無言近づいてきてシンの両肩に手を置いたギャスパーの顔を見て何となく察してしまう。
ギャスパーは再会を喜ぶと同時に後悔を含ませた複雑な表情をしていた。
「いえ……お久しぶりです」

◇

シンが何故ここに居るのかの説明をした時、皆が揃って特異な経緯に目を丸くしていた。

アザゼルが推測するに『ＵＬ』の過去改変の影響で引き寄せられたのではないかとのこと。取り敢えずこの時間のシンに絶対に会うなと念を押された。

シンの事情を説明した後は、一誠の子たちの自己紹介が待っていた。未来から来た一誠の子たちは全員で十人。悪魔同士の出生率の低さを考えると驚異的な数と言える。実際に一誠の子たちが十人も居ると知った時、シンも内心ではかなり驚いた。

（いつぞやの種龍という言葉が本当になるとはな……）

一誠の子たちの反応は二分されていた。シンの名を知って興味を持つ者と警戒心を抱く者の二つである。

「初めまして。僕の名前は姫島紅と言います」

最初に自己紹介したのは一誠と朱乃との間の子で長男である紅。その容姿は母の血が濃く出ている。

（長男は姫島先輩との子か……）

リアスはさぞかし複雑な心境になったと思われる。とはいえ仲がギクシャクする様な深刻な状況には発展しなかったとも思えた。
「次は私の番ですね」
紅に続いて自己紹介するのは金色の長髪に緑の瞳の少女。顔を見れば誰との間に出来た子なのかすぐに分かった。それ程までに母親に良く似ている。
「私は兵藤愛理と言います。母は兵藤――じゃなくてアーシア・アルジェント。兵藤一誠の長女です」
（容姿は母親。性格は父親譲りか）
控え目なアーシアとは違い、元気で溌剌とした挨拶に一誠の姿が重なる。
「――漸・クァルタだ」
簡素な自己紹介するのはゼノヴィアの息子で一誠の次男の漸。凛々しい顔立ちが母親に似ている。態度が素っ気無いのはシンに対して警戒をしている為である。
「こら！　初対面の人にそんな挨拶はダメでしょ！　ごめんなさい、間薙さん！　普段はもっと礼儀正しい子なんです！」
「や、止めてくれよ、姉さん！」
漸に変わって愛理が詫びると漸はいたたまれない表情となる。姉弟間の力関係が完全に決まっているのが見て分かる。

「赤龍帝兵藤一誠と紫藤イリナの息子――三男の紫藤真と言います。ふふ、同じ名前ですね」
「――そうだな」
未来の友人の子に自分と同じ名が付いていることに気恥ずかしさを覚える。
「父と母は共通の友人の名前から僕の名を貰ったと前に聞いた事があります。それってやっぱり……？」
「――さあ？　どうなんだろうな」
シンははぐらかす。シンなりの照れ隠しの様なものであった。
次に名乗ったのは長い銀髪を一本の三つ編みに束ねた少女。ヴァルキリーの鎧を着ているが装飾の何箇所かが『赤龍帝の鎧』に似せてあった。
「私はヘルムヴィーゲ。赤龍帝の父と元ヴァルキリーの母との間に生まれました。漸君と真君と同年生まれです」
一目でロスヴァイセの娘だと分かる。
「ロスヴァイセの娘か……はあ、同僚が結婚したり子供が出来たりすると何とも言えない気分になるな」
アザゼルがしみじみと言う。
「先生とは無縁な世界ですからね」

「違うわ。俺は出来ないんじゃない。しないだけだ」
　独り身の苦しい言い訳の様なことを言うが、女に縁が無いどころか寧ろモテる方なので強がりでは無い、一応。立場的には色々と難しいのかもしれない。
「先生は未来でも独身なのか？」
「聞くなそんなこと！」
「……未来の話をするのは禁止されているので」
　ヘルムヴィーゲの母親譲りの生真面目さが滲み出てしまった結果、反応で分かってしまった。
　シンは無言でアザゼルを見詰める。
「何だその目は？　言いたいことがあるなら口で言え。そんな程度で俺は傷付かん！」
「――いえ、別に」
「気遣う様な態度を止めろ！」
　シンとアザゼルとのやり取りにシンに警戒心を持っていた者たちは何とも言えない気持ちになる。噂に聞く混沌王と目の前の人物が同一には見えなかった。
　そんな中でイクスに自己紹介の順番が回って来るが、どういう訳かイクスは一言も発しない。周りが急かすが態度は変わらなかった。
　仕方なく彼を飛ばして次の子が名乗る。

金髪を四つの縦ロールにした西洋人形のような少女。
「ご機嫌よう、初代総督様、間薙様。無愛想なイクス君に代わりに私が挨拶をさせていただきます。私はロベルティナ・ヒョウドウといいます」
スカートの裾を軽く持ち上げ、優雅に挨拶をする。
その身から感じるのはフェニックスとドラゴンの力。レイヴェルと一誠との間に生まれた子なのを肌で感じる。
ロベルティナはシンの方を見て、微笑を浮かべる。
「お父様とライザー伯父様の親友と呼ばれる方と会えて嬉しい限りです」
親友ではない、と言おうとしたがロベルティナの心底嬉しそうな顔を見て無粋だと思い、黙る。
「私が白雪で――」
「私が黒茨だにゃん」
この中で最年少の少女たちの自己紹介。どちらも名に合った着物を着て、頭頂部に名前通りの白と黒の猫の耳を生やしている。
誰と誰の娘なのか即座に理解する。
(あいつ、姉妹に手を出したのか……)
業が深いと言うべきか、欲が深いと言うべきか。一誠の三十年後の姿に逆に興味が湧

いて来る。
あと二人、一誠の子たちが居るらしいがやる事がある為、片や未来に残り、片やとある役目の為に席を外していて不在であった。
イクスを除いて一通り自己紹介が済むと今まで沈黙を続けていたイクスが口を開く。
「イクス・グレモリー。父は兵藤一誠、母はリアス・グレモリー」
突然の名乗りに兄弟たちも困惑する。
「剣を木場祐斗に戦いをヴァーリ・ルシファーに教えられました」
イクスはかつて一度だけ父、師匠たちに同じ質問をした事があった。
『混沌王は強いのか？』
その時は実在するかも怪しいと言われており、彼らの証言で語られるだけの存在であった。
その質問の答えは三人とも同じであった。
『強い』
迷いの無い断言に面食らった覚えがある。だが、それよりも印象に残ったのは三人とも先程のギャスパーの様に悔恨の表情を浮かべていたのが最も強く残っていた。
尊敬し最強だと思っている三人が強いと語る存在。それが目の前に実在する。
こんなことを言う場合では無いのは分かっている。しかし、内に宿るドラゴンと悪魔

の衝動がイクスを突き動かす。
「お願いがあります――俺と一勝負してくれませんか？」

◇

ひと悶着が有りつつも協力関係を気付き、いざロキと『四将』との決戦に挑む。
ロキと『四将』は過去改変の為に現代の一誠たちを襲撃しようとしたが、紅によって『ＵＬ』の兵隊ごと人気の無い場所へ転送された。
イクスたちが駆け付けるとそこにはロキとこの時代に来たもう一体の『四将』が待ち構えていた。
メタリックブルーの全身。頭部には三本の角。バイザー型の目の奥から機械的な輝きを放つ。
背部右側には三枚の翼の様な機構。左側には長い砲身を装備している。
ガルヴァルダンと同じくドラゴンと人の中間の様な姿をしたこの機械生命体の名はルマ・イドゥラ。
【さあ、ロキ殿。積年の恨み、晴らされるといい】
「そうだな」

ルマ・イドゥラに言われ、ロキはその手に絶対零度の冷気を宿す。触れれば万物すら凍て付かせる氷結魔法。静寂を生み出す暴力がイクスたちに――ではなく『ＵＬ』の兵士たちに放たれ、全てを凍らせる。

ロキの凶行にルマ・イドゥラだけではなくイクスたちも驚く。

【な、何のつもりだ！　ロキ殿！】

「何のつもり？　――見りゃ分かるだろ！　邪魔者消してんだよ！」

ロキが豹変し、顔半分に粗野な笑みを浮かべる。

【貴様！　裏切るつもりか！】

「そうだが、それがどうした？　まさかここまで馬鹿正直にお前たちの技術を教えてくれるとは思わなかったぞ？　――それだけ俺たちの演技が上手かったってことかぁ？　狡知の神なんて止めて演技の神にでも転向するか？　ひゃはははは！」

全てを嘲るロキの哄笑に誰もが絶句する。

【三十年も雌伏の時を過ごした貴様に我々が力を貸した恩を仇で返すとは……！】

「勘違いをするな。お前たちの情報が欲しかっただけで力など不要！　そもそも奴に言われて役目を果たしたに過ぎん――あと、一つ勘違いしていることがあるぜぇ？」

ロキは手品の種を明かす様に意気揚々と言う。

「我々は三十年後のロキではない――俺たちも時を跳んだって訳さ！　人の縄張りを荒

らすお前らの為になぁ！　カンカンだぜぇ、あいつ！」

◇

三十年後の未来。百メートルを超える真紅のドラゴンが機械生命体の軍勢とたった一頭で互角に――否、圧倒していた。

機械生命体の奥に控えるのは『羅⊠七曜』のレッズォ・ロアド。

真紅のドラゴンは兵士たちを蹴散らし、レッズォ・ロアドにその牙を届かせる――前に突然止まった。

真紅のドラゴンが視線を下ろすとそこには金髪の青年と少年、そして車椅子に座る老人が並んでいる。

戦場に不似合いなその三人であったが、真紅のドラゴンは彼らを強く警戒する。その三人から感じる力、それはレッズォ・ロアドよりも――

「手を貸そう、赤龍帝」

金髪の青年が真紅のドラゴン――赤龍帝に話し掛けた。

「君たちの侵攻は否定しない。寧ろそれが君たちの自由であり、あらゆる神を滅ぼそうする気概は称賛に値する」

今度はレッズォ・ロアドたちへ話し掛ける。褒めてはいるが、その声は冷たい。
「でも、仕掛けてくるということはやり返されることも当然の道理だね？」
青年、少年、老人の足元にある影が伸び始める。
「ましてや他人の領域に土足で踏み込もうとするのなら、それ相応の罰が待っているのも分かりきっていることだ」
三本の影が交わり、一つとなっていく。
「その覚悟をしているのなら君たちは大したものだ。……だけど」
一つとなった影から現れるのは大いなる意思が生み出した最高の闇。
「生意気だ」